命改変プログラム

上松

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命改変プログラム

【Ｎコード】
Ｎ６０３９Ｊ

【作者名】
上松

【あらすじ】
ついに完全なバーチャルリアリティが実現したゲーム『ライフリヴァルオンライン』が発売されて一年が経過していた。過酷なバイトの末にやっとの思いでゲーム世界へ飛び込んだ初心者プレイヤーである僕を待っていたのは剣と魔法が飛び交う世界。
感動も束の間にリアルでも友達の古参プレイヤーの「アギト」に案内してもらい最初のクエストへ。難なくクエストをこなし意気揚々とダンジョン脱出を試みるも何故か外に出れなくなった。
初級ダンジョンである筈の無い迷い……奥に進み見つけたのは眠

り姫の如し少女だった。少女と事故でキスをしてしまった僕のせいで多分少女は目覚めてしまい、目の前の光景に処理オチしてしまったアギトは退場。

薄暗い洞窟の中で少女と二人。早まる鼓動を押さえつけていると少女は信じられないことを言った。

「勇者様？」

そして少女の目覚めと共に全プレイヤーに通知された謎のクエスト。この時から僕たちのゲームはリアルと交差し始めた。

始まりは夢の中

「アカウント取得完了。キャラクターメイキングに移ります……（三時間後）完了です。十秒後よりゲームを開始します。――――――

蹴り全身の筋肉をバネの様に使い飛び上っ――ズルッ

「うぎゃ！」

最後の詰めの部分でヌルヌルした岩肌で滑って転んだ。その音でモンスターは僕を気付き襲ってくる。

でも、大丈夫だ。トラップでもないかぎりこんな事でＨＰは減ったりしない。立ち上がって反撃だ！　ガチャリ……うん？　どうしたんだ何故か立ち上がれないぞ？

光コケの明かりで照らされた腰を見てみると装備の鞘が岩と岩の透き間に見事に挟まっているじゃないか！

「うわ！　なんだこりゃ？」

押しても引いてもスライドしても外れない。僕は不格好にも腰を下ろしたまま剣を闇雲に振るう羽目になった。当然当たるわけもなく雑魚の筈のコウモリモンスターにフルボッコだ。

「くはははははは！　何やってんだよお前」

「おいアギト！　笑ってないで助けろよ！」

涙が溜まる目でアギトを捉えるとあの野郎腹を押さえてゲラゲラ笑ってやがった。確かに間抜けだったとは思うけどこっちは初心者なんだよ！

「あ～あ、悪い悪い。ほらよっと」

大きな槍に赤い光が帯びると目に見えないスピードでコウモリを突き刺した。そして一瞬でＨＰは０に。コウモリは青い光を放って砕け散る。

ちょっとの間その光景を呆然と見送っていた僕に、アギトは手を差し出す。男らしい熱血漢みたいな笑顔だ。その手を取りようやく立ち上がるとアギトは再び笑いを押し殺すようにしながら言った。

「初の戦闘お前にしちゃ……クク、良くやったよ」

「うるせえ！」

とうとう限界が来たのか今度は洞窟に反響するように大声でアギトは笑いだした。こいつの背中をいつか刺す！　僕はそう心に誓った。

奥に進むとアギトの言ったとおり大きな川が流れていた。勢いも結構ある。

「これって落ちたらどうなるの？」

何となく思った疑問を口にした。

「泳ぎスキルの高い奴なら向こう岸に行けたりもするぞ。まあだけどセオリーじゃないよな。水の中にだってモンスターはいるんだし。余程の事がないかぎり水には入らない方がいい。お前だとまぁ間違いなく溺れるさ」

キリッとした目を閉じて皮肉を言う所は、リアルもゲームも変わらない奴だなと思う。僕をこのゲームに誘った友人アギト本名『世田谷　秋途』は学校の同級生で親友と呼べる奴だ。

友達はそれなりだけど浅く広くしか付き合わない僕にとっては、アギトはたった一人と言っていい親友だった。まあ、不思議な関係の奴なら、他にもう一人居るんだけど……でも、それは関係ないか。話をアギトの方へ戻して、こいつがしつこく一緒にこのゲームをや

ろうと言い出したときはめんどいと思いながらも嫌々頷いたよ。

だけど新型のゲーム機なんて買う余裕なかったからバイトを始めたら、アギトも一緒に来て自分の分の給料も渡してきた時には流石にこれは一日でも早く買わなければと思ったものだ。

そういうわけで何とか数ヶ月のバイトで僕はこのゲームの中に来れたという訳だ。普段ゲームはたまにしかしない僕にとっては初めてこの地に降り立った時、ここまで人類は来たのかと思った。

いつまでも四角い箱の前でコントローラーを握ってピコピコするのがゲームと思っていたから、目の前に広がる光景はまさに衝撃、晴天の霹靂、カルチャーショックだったよ。

空から降り注ぐ太陽にも熱があり、そよぐ風は肌に優しい。西洋の建物と機械的な建物が混在してる町並みは美しかったし、町行く人はプレイヤーかＮＰＣか見分けがまるで付かない。そして何より僕が驚いたのは匂いだった。

この街独特の匂い。自分が十数年住んでいる町とは全く違う。昔からここに普通にあって普通に歴史を積み重ねたみたいな匂いがここにはあった。僕は待ち合わせも忘れて二時間ぐらい街を走り回ってしまったほどだ。それでも半分位しか見れなかったけど……現実の一つの町並みにちゃんと広いんだ。

この仮想空間はちゃんと息をして生きてる。そんな矛盾した感動があった。

アギトと合流しても自分の鼓動は収まらなかった。だからもっと知りたくてアギトに「早く何かやらせろ」と言って連れてこられたのが街の近くの初心者用の洞窟ダンジョンだ。ついでに最初のクエストの場所でもあるらしい。だから誰でも一度は来るダンジョンと言うことで、ここのモンスターは最低値の筈だけどさっきの自分の体たらくに今更恥ずかしさが募る。

今日はまだ時間も早いと言うこともあって僕らの他に誰も居なくて助かった。だけどアギトが言うに誰もが最初の戦闘は苦戦するそうだ。誰だって武器なんて使ったことないし目の前に異形のモンスターが立つと恐怖で足が震える。それは何回も戦闘をこなして慣れるしかないと言う。

だからさっきみたいに自分からモンスターに向かっていくのは結構珍しい事だそうだ。まあ暗かったし殆どコウモリだったからね。それにアギトがいた。こいつは発売当日に始めたこのゲーム内に置いてはもう古株の部類らしい熟練プレイヤーだ。

まあ、それを抜いても親友が隣にいれば大抵はなんとかなると思って突っ込めるぜ僕は。それを聞いたアギトは

「あっはっは。性格はそのまんまだなお前」

と言ってまた笑われた。アギトが言うに仮想では現実と全然違う自分を演じている人達が結構な数居るらしい。それの一番の例が男なのに女性キャラにしたりその逆しかりだ。

まあ違う自分を演じるのも楽しそうと思うけど……知り合いが同じ場所に居るんじゃその限りじゃないよね。そんな願望があるのかと思われてしまう。

こいつ広めそうだし。てかキャラ作る前に

「お前女キャラで来いよ。その方がチヤホヤされるしパーテーも組みやすいし何より隣を歩くのなら美少女がいい！」

とか力説された。なら自分を女キャラで作ればいいだろうと言ったら「自分の隣に美少女がちょこんと居るのが良いんだよ！」と言われた。もうわかんねーよ。

そんな事を川の流れを見ながらぼんやり思い出していたら、遠くに掛かった橋の上からアギトが呼んでいる。どうやらクエストの場所はあそこらしい。

アギトと合流して橋の中央から川を眺める。

「見えるか？　川の中に何か光ってるだろ？　あそこに向けて初期装備の片手剣を投げ入れるんだ」

僕は頷いてウインドウを呼び出し装備を解除。それを道具として再び実体化させて鞘ごと光に向かって投げた。

ポチャン……という音が鳴り少しして水面が光り、水がせり上がって来て人の様な形になった。

ここで説明しておくとこのゲームは最初は全部片手剣を装備してるらしい。それを最初のクエストで自分に一番合った武器に変えて来るのが、このクエストの目的でクエスト名『聖霊の祝福』なんだそうだ。

お金も無い初期にいろんな武器に触れて欲しいというメーカー側の願望と、早くいろんな武器を手にしたいプレイヤーの願望の一致で生まれたクエストと言われているが、同じプレイヤーが違うキャラでこのクエストをやっても同じ武器しか出ないと言う噂もあって、もしかしたら自分の本能の部分を探っているんじゃないかと言われている。真相は分かんないけどね。

なのでこのイベントは初期のクエストで結構重要だ。これからの相棒がなんなのかが決まる訳だからね。もちろん違う種類の武器を使う事だって可能なんだけど、今の名だたるプレイヤーはやっぱりこのクエストで選ばれた武器を相棒にしてるらしい。そう思うとドキドキする。

人の形になった川の水はゆっくりと僕に手を差し伸べて来る。そ

して両の腕から強い光が放たれた。いよいよだ。
僕が祝福を受けた武器それは二本のロングソードだった。銀色の輝きを放つ二対の剣。何の装飾も無い安物の剣だけどこれが僕に合った武器の系統と言うことだ。

「へぇ～二刀流か。珍しいな」

アギトが言うには二刀流を使うプレイヤーはごく少数で高次元帯ではまずいないそうだ。多分祝福はもっと沢山受けてる筈だけど二刀流は扱いが難しい。昇華出来る奴が今まで居なかったんだろうと言うことだ。
僕は二対の剣を受け取ってその両腕に掛かる重さを実感していた。そしてポツリと言う。

「なら僕が最初に昇華してやるよ。うん、気に入った。二刀流なんて格好いいじゃん」
「誰だって最初はそう言うんだよ」

僕たちは笑い合って最初のクエスト達成した。まあ厳密には街に戻って報告しなきゃ達成した事にはならないけど今の気分にそんな戯れ言はいらないよね。
さて、帰ろうとしたときアギトが来た道で戻ってもつまんないだろと言い出したので僕たちは別ルートから帰ることにした。最近鉱山開発が進んで道が繋がったらしい。恐るべきフルダイブＭＭＯＲＰＧだ。街の開発もプレイヤー次第とは書いてあったっけどここまでやれるなんてびっくりだよ。

僕は早速二刀流を装備してアギトの後ろを付いていく。途中であったモンスター達に二刀流を振り回しながら何とか進んだ。
ここで更に追加説明しておくとこのゲームにレベルはない。いわ

ゆるスキル制のＲＰＧだ。だからしょぼい装備でも腕さえあれば強敵に勝つことだって出来るけど腕がなければどんなに良い装備をしたってある程度から上には行けないらしい。雑魚ぐらいは振り回すだけで勝てるけど、街から離れる度に強さが上がるらしいから、こんな戦い方じゃきっと直ぐにジ・エンドなんだろう。

でもスキル制も悪い事ばかりじゃない。こうやって始めた時期が違う友達とも、気兼ね無くパーテー組めるんだからね。どんな雑魚でも０、０００１位はスキルアップするらしい。まあ強敵ならその千倍位違うんだろうけど。

アギトは完璧にサポートに回ってくれてるから、ここでスキルをあげる気は無いんだろうけど僕は二刀流が０、１位は上がっているだろうか？

そんな事を考えながら走っていると不意にアギトが止まった。どうしたんだ？

「いや……あれ？　おかしいな。迷ったかも」

「はあ、地図持ってないのかよ？」

首を振るアギト。ここら辺は開発されたばかりだからまだ地図は発行されてないらしい。なんとこのゲームでは測量もプレイヤーがするらしい。

「そういうギルドがあるんだよ」

いろんな人達がホントにいるなあと思った。それから僕たちはしばらくまたひた走った。だけど一向に出口は姿を現さない。

「おかしいな」

ポツリとアギトは呟いた。流石に僕もそう思っていた。

「何がだよ？　もしかして誰かの罠とか？」

このゲームは基本ＰＫありだ。プレイヤーキラーの罠ならこの不自然な迷宮に迷い込んだ様な感覚も説明できるけど……それにはアギトが首を振った。

「こんな街に近い、しかも初級ダンジョンでそんな事する奴いない。まあＰＫを生き甲斐にしてる快楽殺人者なら無くもないけど……こっち方面ではまだ聞かないな」

「聞かないっているのかよ？」

僕が恐々と聞いたら今度はアギトが苦虫を潰したような顔になって首を縦に振った。

「認めたくは無いがいるな。こっちは普通に殺人出来るから……そういう人を殺してみたいって奴は少なからず居るよ」

ゾクッとした。今までフルダイブＭＭＯＲＰＧの表の部分だけを見ていたけど、裏には人の歪んだ感情の掃き溜めにもここは成っているのか。確かにニュースでその手の事を問題にする所を何度か見ている。教育上良くないとか専門家が言ってたな。

でもそれはゲームのせいじゃ絶対に無いんだよな。大多数の人はこのゲームに感動して純粋に楽しんでる筈だ。だからこそ一部の腐った感情をここまで持ち込んで他人に迷惑を掛ける様な奴が最低なんだ。

でも罠じゃないならこれはなんだよ。

「さぁ、わかんないな」

このゲームのボリュームはスゴくて発売から一年が経っているのにメーカーから発表された攻略率は三十パーセントだったらしい。その事に古株の人達は落胆したとか。

それに最近は重要なクエストの出が悪く足踏み状態だとか。何せ広大なこのゲーム。どこかで何かを見落としてるとしても、それを拾い上げるのは奇跡でも起きなければ無理な話だ。

そしてそんな奇跡が自分の身に起きるなんて思っても無かった。まだ初めて一日も経ってない僕の目の前にこのゲームの謎は叩き出されたんだ。

僕たちはまだ走っていた。ゲームの中とは言え体を動かす感覚はあるから疲れる。薄暗い洞窟は僕たちを飲み込んだ様にどこまでも続いている。

疲れた所に滑りやすい岩を踏みつけて見事に転倒。だけどそのおかげで小さな穴を見つけた。穴というか亀裂かな。壁にビリッとヒビの様に縦に亀裂が入っていてそこからは微かに風が流れてる。

「アギト！」

僕はアギトを呼び止めて亀裂の存在を教えた。

「確かに風が流れてるな……だけどこれってダンジョンの壁だよな？　壊せないだろ」

プレイヤーは基本決められた物しか壊せない。地面に衝撃で穴が空いたりするけどダンジョンでは基本ズル出来ない様に壁は壊せない。街では何も壊せない。

だからこれも無理だろうとアギトは言っているけど初心者プレイヤーの僕はやるだけやってみようと言った。もう走るのは疲れたよ。

その言葉にアギトは槍を壁に突き立ててくれた。そして赤いエフェクトが爆発する。洞窟に煙が舞いガララと何かが崩れる音……どうやらそれは、亀裂が広がった音だった。

「……マジ？」

「ほらな、何でもやって見るもんだ」

広がった亀裂に足を踏み入れる。こちらもかなり奥まで続いているみたいだ。僕たちは進み開けた場所に出る。するとそこには湖畔が広がっていた。緑色に光る不思議な湖……その側には紫色の光花が咲き誇っていてその花が包むように守っているのは天蓋付きのベット？

明らかに不自然な組み合わせだ。なんであんな人工物がこんな所に……と思いながら近づいて更に驚いた。

淡く光る花の周りのベットで一人の女の子が眠っていたからだ。

「なんだこりゃ？」

「いや、なんだって言われても……ん？　この子どこかで……」

隣で思案顔するアギトを横目にマジマジとその姿を見つめてしまう。流れるような栗色の髪に雪をまぶしたような白い肌、桜色の唇は湿っていて艶やかだ。真っ白なドレスの様な寝間着を来て彼女はベットの上で堅く瞼を閉じている。生きてるのか死んでるのかさえわからない。微かに上下する胸を確認するとやっぱりこの子もプレイヤーなんだろうか？

「なんだと思う？」

「さぁな、この状況だけなら眠り姫って感じだよな。悪い魔王に浚われた。だけどボス級のモンスターはいないし、何よりここは初級

ダンジョンだ。見落としていた何か……なのかも知れないけど明らかに異常だろこれは」
「GMにコールする？」
「ううん……何かが出てきそうなんだよなぁ。だけど出てこない。この子なんだか見たことある気がするんだけどな？」
「なら起こしてみるとか？　何かわかるかも知れないし」

その提案に「よし乗った」とアギトは答えた。

「じゃあよろしく」
「はあ、お前が見つけんだからお前がやれよ」
「いやほら、アギトが好きな美少女だから」
「こんな桁外れな美少女に気軽に触れるか！」

なんだかんだ言っても口だけな奴だ。そういう僕も（普通の？）女の子に触れるのは小学校以来なんだからここは引けない。こんな美人に触れれるか！　押し問答を繰り広げる僕達。だけどスキルも経験もずっと上のアギトに初心者の僕が叶うわけも無く押し飛ばされてしまう。
そしてバランスを崩してベットで眠る彼女に一直線。

「うわぁぁぁ！」

バスン！……と鳴ってベットが唸った。舞い上がる白いシーツが元に戻ると僕の目の前には彼女の堅く閉じられた瞳が超至近距離にある。そして口一杯に広がる彼女の香り。

「ん……」

唇と唇が重なった僅かな隙間からそんな声が漏れて僕は飛び退い

た。訳わかんない……一体何が起きたんだ？　助けを求めるようにアギトに目を向けると立ったまま失神している。奴はバグったみたいだ。警報アラームと共に姿が消えていく。

強制ログアウト……よっぽどの事が無いとそんなことされないのに、それだけさっきの僕達の行為はアギトに精神的な負荷を与えてしまったんだろ。

そう考えて……思い出して唇が震える。『キス』したよな？　彼女の顔を再び見て湯気が出るかと思った。あの小さな唇と重なった……。

「ぐあぁぁぁぁ！　落ち着け僕。アギトの二の舞だよこれじゃ！　そもそもこれってゲームじゃん。リアルじゃ無いんだしキスの一回や二回……」

唇に残る彼女の体温と香りにとてもそんな風に思えない！！　これが十六年間（普通の）女の子と付き合ったことも無く耐性もない人間の末路か！　と意識がアギトと同じように飛びそうに成ったとき柔らかく……耳に自然と入ってくる様な声が聞こえた。それは周りで光っている花の様に優しい。

「お兄ちゃん……」

瞳を虚空にさまよわせながら彼女はそう確かに言った。目が覚めたのだ！　そして僕の姿を見つけて少し寂しそうな声で

「お兄ちゃん……じゃない？」

と言った。僕はどう反応すればいいのか分からない。寝込みを襲ったようなキスで罪悪感一杯だ。事故なんだけども……あんな純粋そうな瞳で見つめられたら死にそうだ。

「えっと……僕は……」

僕が必死に言葉を探していると彼女は何かを思い出したようにピクンと頭を揺らしてベットに両手を付いて近づいてきた。あわわ、危ないよその態勢は。とっても際どく胸が……谷間が……更にはその奥がヤバイ！！

「貴方……王子様？　私を助けてくれる王子様」

「はっ？　……え？　いや、僕はスオウって言って……」

真っ直ぐ顔を見つめられて言われた台詞は、とても信じられないものだった。僕にもっと教養があったら、粋な切り替えしを返して格好良く決められたのに、あいにく僕は間抜けな顔で間抜けな声を出すしか出来なかった。何とか名前は伝えた筈だけど。

するといきなり彼女の瞳からは大粒の涙が溢れだしてきた。僕はその涙をただ綺麗だなと思って見ていた。もう頭はパンクしていて正常な判断なんてできなかったんだ。だけど次の言葉は僕にも分かった。鳴き声の中に彼女の心が有ったから。

「お願いします……私は……いいから……王子様……お兄ちゃんを助けてあげて」

名前はちゃんと伝わって無かったようだ。そしてその瞬間、全プレイヤーに向けての緊急放送が入った。『アンフェリティクエスト』と題されたそれが全ての始まり。このゲームに参加するプレイヤー全てを巻き込んだ最大級のクエスト。リアルもゲームも関係無く走り回る事になった出来事の始まりだ。

その時落ちたアギトは意識を取り戻してネットである記事を見つけていた。三年前の事故の記事。彼女は今も病院のベットで眠り続

けている。「続く」

始まりは夢の中（後書き）

毎日書いてる三題話ついでに書いた話なんでどうなのかわからないけど批評してくださると嬉しいです。厳しい事をバシバシ言ってください。

少しでもワクワク出来た。これからが気になるなんて人もいたら嬉しいです。

提示されたもの（前書き）

僕たちが出会った少女は何者か？　謎のクエストの意味は何なのか？　少しでも事態を知るために僕はリアルを走る。だけどそこで見た光景は愕然とするもので更にどうすればいいのか分からなくなるものだった。

提示されたもの

僕は彼女のベットに腰を下ろしたまま固まっている。「助けて欲しい」と言われたけど僕に出来る事なんてほぼ無い。傍らで再び目を閉じた彼女の体重を肩に感じながらドギマギしている。

しょうがないから全プレイヤーに通知されたクエストの詳細を見て再び疑問符が浮かぶ。

『この世界でさまようお姫様と出会ったプレイヤーの目的はただ一つ。彼女を無事リアルに帰還させること』

リアルに帰還？　どう言うことだ？　ふつう誰もがワンタッチでログアウトが出来る筈だ。謎だけが僕の中で募っていく。隣で寝息を立てている彼女を見やる・・・その寝顔は安らかに閉じられている。

そうこうしてる内にアギトが戻ってきた。彼も通知されたクエストを見たのだろう血相変えている。殆どのプレイヤーはこのクエストの意味なんて分からないだろうけど僕とアギトだけはこの「お姫様」が彼女だと気づいている。

てかこの子しか居ない。

「おい、なんだよこのクエス……ト……てあれ？　スオウその顔……」

ん？　なんだ？　顔がどうしたんだ？　僕は彼女をベットに寝かして川辺に自身の顔を映した。そこには僕が必死に作り上げた凛々しい眉に力強い目、サラサラの黒髪が整った顔立ちに栄える美少年が映る……はずなのに何故かいつも鏡で見てる癖毛が残る髪に女の子に間違われる中性的な顔があった。

「て、これリアルの顔じゃんか！」

「何があったんだよお前？」

知らない。分かる分けない。てか今気づいた。なんで苦労したキ

ャラがリアルの顔に成ってんだよ。……そして全身を見て気づいた。なんだか身長もリアルのままの様な気がする。まだ始めたばかりでキャラの時の方が違和感あったから慣れただけだと思ったけどこれは……元に戻っただけか？

急いでGMにコールして今の自分の状況を伝えた。さっさとこのエラーをどうにかして！

だけど帰ってきた返事に愕然とした。

「今の貴方の状態はアンフェリティクエストの仕様であってエラーではありません」

「クエスト仕様？」

「訳わかんないな……」

二人で考え込む。それでも何か分かる訳も無いけど。だけどここで思い出したようにアギトが声を上げた。

「そうだ！　これ見て見ろよスオウ」

そういって表示させたのはメールに添付した新聞の記事だ。それを拡大表示してみる。

「三年前の記事？　仮想空間、フルダイブ実験中の事故？

一人の少女が意識不明のまま戻らない。少女の名前は『桜矢　摂理』……写真もあるのか」

「ああ、見つけるのに苦労したよ」

「！！　おい！　これって」

思わず食いついた。添付ファイルに入っていた写真はベットの上で静かに眠る一人の少女の姿。頭には自分達がつけているものよりももう少しゴツゴツした物が頭部を覆っている。

何よりも驚いたのは瓜二つだからだ。今、花に包まれたベットで眠る彼女と病院で眠る彼女は全く同じ顔をしてる。こんな事ってあり得るのか？

だけどこれが事実ならクエストの内容も頷ける。お姫様を無事リアルに戻す――戻して欲しいって事か。

「俺も驚いたよ。それにこの桜矢摂理って子はこのフルダイブシス

テムを開発した技術者の妹らしい。元々体が弱くて……フルダイブシステムは医療方面で開発されてた技術だからな。足を無くした人に走ることを、光を無くした人に再び光を・・・寝たきりの人でも仮想の中でフルダイブすれば自由に体を動かせる。それは夢の様な事だったんだ」

つまり元々このフルダイブという仮想空間はたった一人の妹の為に作られた場所ってことか？　だけど妹は自分が作った幻に幽閉されてしまった。

だけどなんでこのゲームの中に？

「分からないけどこのゲームの開発にもその人は関わってるんだ。ならもしかしてこのゲームの開発目的が妹を仮想空間から連れ戻す事なんじゃないか？　勿論こんな個人的な目的で何百万ていうプレイヤーを動かせないから別の最終目的の課程で絶対クリアしなきゃクエストとして組み込んだ」

「いや待てよアギト。それならその人はここにあの子が居ることを知っているんだろ？　それならこんな物作らなくったって助けられるんじゃないのか？　それにこのクエストってどう考えても達成出来るかなんてメーカー側でも保証出来ない物じゃないか？」

僕の疑問にアギトは「わかんね」と笑った。その声に反応したのか彼女が目を覚ます。そうだまだ彼女が桜矢摂理と決まった訳じゃない。

僕はそれを確認するために口を開こうとして固まった。それは彼女の口から出た言葉に衝撃が走ったからだ。

「誰ですか？　貴方達？　ここはどこですか？」

「えっと、覚えてないの？　あの……王子様だよ」

その言葉に後ろでアギトが吹いた。しょうがないだろ、彼女が言ったんだから。

「王子様？……違う！　私の王子様はお兄ちゃんだけだもん！」

バフバフと枕でたたかれた。本当にさっきの事は忘れてしまったようだ。どういう事なんだ？　なんだかがっかりした自分が居る。

「ええと、ゴメン……僕はスオウって言うんだ。後ろの奴はアギト。君はもしかしてその……桜矢摂理さん？」
おそるおそる聞いた。その瞬間彼女の手が止まった。
「違うよ……私はセツリだもん」
その言葉にちょっとホッとした。けど続いた言葉で崩れさる。
「桜矢摂理はリアルの私だもん。ベットから動けない生きてない私……」
心に何かが突き刺さった様に痛む。心なんて物まで再現してるとは思えないけどこの痛みが幻覚なんて思えなかった。
「えっと……ごめん」
「いいよ、だってお兄ちゃんのおかげで私はこんなにおもいっきり動けるように成ったもん」
そう言ってベットの上でクルクル回る彼女。白い太股が際どい所まで見えてるよ！
「ねえ、お兄ちゃんはどこかな？　貴方達もどこか悪いんだよね？　凄いよね、私のお兄ちゃん」
「え……」
彼女はもしかして気づいてない？　自分が三年間もダイブし続けていて現実では意識不明状態であることを。それにここを今でも実験で作られた医療用の空間だと思っている。
だけどそれは全部もう変わってる。ここは彼女がいた穏やかな空間じゃない。モンスターがうごめき人の欲望を具現化したゲーム空間。でもそれを一体どうやって伝える？
そもそも親族でもない僕らが勝手にそんな事を言っていいのか……。
「あれ？　貴方達なんだか随分立派なもの着てるね。私知ってるよそう言うの。ゲームとかの勇者が着たりするよね。お兄ちゃんが作ってくれたのかな？　ここは何でも出来るから。ふふ、やっぱり男の子なんだね」
僕は腹を括って話すことにした。だって彼女を置いていく訳にも

いかないし外に出れば隠して置ける事じゃない。町に行けば何百と言うプレイヤーがばっこしてるんだ。
僕は口を開く。伝えなくちゃいけない……それが最初に彼女を見つけた僕の役目だと思った。
「あのさ……桜矢さん……」
「セツリってよんで！　桜矢なんてこっちでは呼ばないで！」
もの凄い剣幕で粋なり言われた。僕は首を縦に何回も降る。
「ごめん、セツリさん。あのさ言いにくんだけどここは君の知ってる場所じゃない……ライフリヴァルオンラインっていうゲームの中なんだ」
僕の言葉を聞いてストンと目の前に膝を付いた。そして膝を動かして僕の目の前に来て綺麗な顔を斜めにする。
「ちょっと君！　そんな冗談笑えないよ。このシステムは医療用に開発されてるんだからゲームな訳無いじゃない」
怒られた。だけどここで下がるわけには行かない。
「いや、ほんと何だってば。僕達のこの格好だって冗談じゃないよ。敵の牙から身を守るために防具を着て倒すために剣を持っているんだ。そんな人たちが外には何千万と居るんだよ」
「じゃあなんで私はこんなゲームの中に居るの？　お兄ちゃんはなんで何も言ってくれないの？」
それは答えるべき答えがない。こっちが教えて欲しい位だ。
「それは僕達にも分からないけどさ・・・君のお兄さんがこのゲームを作った一人らしいから……もしかしたら君にゲームを楽しんで欲しくて作ったんじゃないのかな？」
僕は一番重要な事を言えずに嘘を付いた。その時後ろからアギトが
「バカ、何言ってんだよ！」
と小突いたけど言える分けないだろ。三年間君は眠っていてこの中に囚われているなんてさ。
するとセツリは少し考えてニコリと笑った。
「そっかお兄ちゃんが作ったのならあり得るかも。お兄ちゃんはね

いろんなビックリすること私にするんだよ。このフルダイブだってそうだよ。よ～し、これはきっとお兄ちゃんからの挑戦状だね。ゲームならクリアしてみせろって事だね」
元気に笑う彼女を見てるとてもリアルで意識不明とは思えない。これでいいんだと自分に言い聞かせる。
取りあえず僕達は街に戻ることになった。早く外に行きたいとセツリが言うからそうするしかない。
ん？　でも待てよ……セツリってどんな扱いなんだろ？　プレイヤー扱いなのか？　クエストの鍵みたいな扱いだし道具？
「あのさ、セツリはウインドウ開けるか？」
同じ疑問を持ったアギトが先に聞いた。てか今なんて言った？セツリって呼び捨てかよ！
僕の憤慨を余所にアギトは指を二本突き出して上から下にサッと動かす。するとアギトの目の前に四角いウインドウが浮かび上がる。装備やスキルの取り外しやいろんな設定、ログアウトもこの画面で行うんだ。
アギトの真似をしてセツリも腕を動かす。だけど何も出ない。やっぱりプレイヤー扱いじゃないのか？　だけど諦めきれないセツリは何度も試して続いて左手でやった。すると
「出た！」
確かに彼女の目に光るウインドウが出てる。僕は自分のウインドウを可視モードにして彼女に同じかどうか確かめてもらう。さすがに女の子のウインドウを可視モードにしてもらうのは気が引けるからね。
「う～んちょっと違うかも。私じゃ分かんないよ。君見てよ」
そう言われてセツリは肩が触れ合う位置に……心臓がドクンと大きく成った。だけどこのままじゃ真っ白なだけだ。彼女に指示をだして可視モードにしてもらう。
「装備欄はあるな……あれ？　でも武器は装備出来ないのか……！！」

「どうした？」
横からアギトが顔を出す。僕はアギトに震える指でウインドウの左下を指さした。そしてそこを見つめてアギトも凍る。だってそこには有るはずのボタンが無いんだ。
仮想と現実を繋ぐ唯一のボタン……「ログアウト」が彼女のウインドウには無かった。
「どういう事だよこれ？」
僕とアギトは彼女のウインドウを目一杯開いてログアウトを探した。だけど簡素な彼女のウインドウで操作出来る事なんて殆どなく、当然ログアウトはやっぱりどこにもなかった。
アギトはＧＭにコールした。彼女のウインドウにはＧＭコールさえ無かったからだ。だけど返答は僕の時と同じだった。これはクエスト仕様。
僕は壁を殴った。こんなクエスト仕様が有る分けない。ログアウトがないなんて彼女がリアルで眠り続けている事に関係有るんだろうか？　それしか理由も思いつかないけど。
「どうしたんですか？」
そう無邪気に聞く彼女に僕らは言った。
「君の画面にログアウトがない。どうやらお兄さんは君にこのゲームをとことん楽しんで欲しいみたいだ」
「もーそんなことしなくてもちゃんとクリアしてあげるのに。お兄ちゃんはお茶目だから」
照れながらそんなことを言う彼女に僕はまた嘘を重ねた。他になんて言える？
僕たちは取りあえず街を目指す事にした。だけどどう行けば街に帰れるか分からない。僕たちは迷っていたんだから。
だけどそれは彼女が示した横穴に入る事で解決した。直ぐにフィールドに出られたからだ。彼女は初めて見る景色の中を走り回っている。モンスターが居るから注意しようと思ったら案の定アクティブされた。

「きゃーきゃー君どうにかしてよ！」
僕の後ろに隠れる彼女。どうせならアギトの後ろの方が安全だと思うけど……僕は仕方なく剣を抜く。現れたのは茶色い鱗に二本の足をした爬虫類系のモンスター。ここら辺に良くいる雑魚モンスターだ。
だけど雑魚と分かっていても凶暴なモンスターが目の前に居ると思うと足が竦む。敵はグルグル唸って僕を牽制している。僕は一歩たじろぐ。すると彼女の足を踏んでしまった。
そうだ……格好悪い所なんて見せられない。彼女はもう覚えて無いみたいだけど僕は彼女に勇者だと言ったんだ。手を出す気がないアギトを見て深く深呼吸。決意を決めて剣を振り上げた。

街に入りアギトが古株のプレイヤーの経験を生かして情報収集してる間に僕たちは宿屋にいた。飲み物と食い物を持って彼女に渡す。
彼女はお茶を啜りながら庭に舞う蝶を眺めていた。
「えっと……何も覚えてないの？　そのここにいる理由とかさ」
恐る恐る聞いてみる。
「ごめんなさい。解らないの……何も覚えてない」
予想してた事だけど手詰まりにも程がある。どうやって彼女をリアルに返せばいいんだ？　長い沈黙が流れる。しばらくするとアギトが部屋に入ってきた。情報は皆無らしい。
「俺一回落ちてみる。これ作った会社に行って見ればなんか解るかもだし、セツリの兄ちゃんにも会えるかもだからな」
「それなら僕も行く！」
「おいおいセツリを一人にする気かよ？」
そう言われて振り向くとセツリは不安な顔で僕を見ていた。気丈に振る舞って居たけど実は不安だったんだ。当然だよな。そんなことにも気づかないなんて……だけど。
「ならアギトが残ってくれ。僕が行くよ。会社に行ってセツリ……さんの兄貴には僕が会う！」

僕の言葉に少ししてアギトは頷いた。するとグッと引っ張られる感覚……彼女が僕の服の裾を握っていた。
「大丈夫……直ぐに戻ってくるよ。君のお兄さんに会ってちょっとアドバイスを貰うだけ」
おどけた調子で精一杯声を出した。するとゆっくりと離してくれた。
「わかった……お兄ちゃんとあえる様に秘密のおまじない教えて上げるね」
そう言って彼女は僕の耳に囁きかけた。そして離れて手を振ってくれる。僕も手を振りながらログアウトした。

現実に戻ってきた僕はベットから起きあがり頭に着けていた機械を外す。そしてパソコンを立ち上げ会社を調べた。ついでにネットのゲームコミュニティを覗いてみるとやっぱり謎のクエストの話題で持ちきりだ。
僕は会社の場所を確認すると部屋を飛び出した。階段を下りると何か香しい香りがする。足音を聞いてキッチンから顔を出した女の子が呼びかける。
「ちょっとスオウどこ行くのよ！　もうお昼出きるんだよ！」
幼なじみの女の子「朝顔　日鞠」だ。
「ゴメン、ちょっと出かける。急用で一大事なんだ！」
それだけ言い残して自転車を漕ぎだした。
電車を乗り継いでたどり着いた大きなビル街に僕は来ていた。そびえるビル達は天を突こうとしている様だ。
僕は緊張気味に受付のお姉さんに聞いてみた。
「あの桜矢　当夜さんに会いたいんですけど……」
その言葉に受付のお姉さん二人は顔を青ざめた。そして発した言葉に僕は絶句した。
「桜矢当夜さんは一年前・・・自殺をして……今は妹さんと同じ病院に」

なんだって？　自殺？　なんで？　足下がふらついた。だけど必死に現実に食いついて病院を教えて貰った。僕は再び駆けだした。一体何があの姉弟に起こったんだ！？

二人が収容されている病院は都内でも一・二を誇る大病院だった。僕は受付の人に頼み込んで病室を教えて貰おうとしたけど面会謝絶だと言われた。

だけどそんな僕を見ていた医師の人が僕の話を聞いてくれた。ゲームの中で起こっている事を話したけどやっぱりそれだけじゃ信憑性が足りない。こんな事なら彼女のスクリーンショットでも撮って置くんだった。

そこで僕はハッとした。別れる間際彼女が教えてくれたおまじない……僕はそれをやっていた。

「それは……本当の事なんだね」

医師の人は二人がこれをやっているのを何度も見たことが有るらしい。二人仲良く「おまじないだよ」と言っていたと教えてくれた。

そして通された部屋に二人は並んで眠っていた。彼女は記事で見たまま……今日会ったあの顔でそこにいた。頭には拘束具の様な機械がランプを点灯させている。その隣には彼女の兄が同じように拘束具の様な機械をつけて眠っている。

「あれ？　お兄さんはなんでアレをかぶってるんですか？」

医師に思わず聞いてみる。

「知らないのかい？　彼はたった一人の妹の所に行こうとしたんだよ」

そう言う医師の瞳は悲しそうだった。自殺だとは聞いたけどどうやって自殺したのかは聞いていなかった。そうかこの人は妹の側に……あれ？　それだとまた解らない事が一杯一杯だ。

そう思ったとき僕の携帯が振動した。廊下に出てメールを確認するとそれはゲーム中のアギトからだ。親しい友人にはゲーム内からも外に連絡出来る様になっている。

僕はアギトからのメールを開いてその簡素な一文が最初理解出来なかった。僕たちを置いて世界は止めどなく動いている。それは残酷なまでに勝手にだ……。

メールの内容はたった一行

「セツリがさらわれた！！」

「続く」

提示されたもの（後書き）

行き当たりバッタリだけどまだまだ続きます。誰か読んでいてくれる人がいたら嬉しいです。毎日更新を目指します。

風を超えて（前書き）

ゲーム内に戻った僕を待っていたのは憔悴したアギトだった。セツリを連れ去ったのはたちの悪い犯罪ギルドの一つ？　そんな奴らにセツリを利用されてたまるかと僕たちは再び走りだす。

広大なフールドを駆けなんとか追いついた僕たちを迎えたのは犯罪者ギルドの一団ではなく異形の悪魔！？　そのあまりの強さに初めて感じたゲーム内での死。だけど逃げる事なんて出来ない。

セツリの死は何を意味するか分からない！　僕はＨＰ０の瞬間を駆ける！

風を超えて

「何が起こったんだ？」
ゲーム内に戻った僕がアギトと合流して事の顛末を聞いたのはあのメールから二時間以上経ってからの事だ。
自宅に戻って幼なじみに無闇に付き合わされたのは痛い。でも逆らえないんだよねアイツには。流されやすい僕にとって日鞠の強引差は鬼門だよ。両親もそれを解ってアイツに僕を任せてる訳だし……親と組みやがって！
そんなわけで再びゲームに入った時には既に日が傾いていた。街には夕の帳が降りて黄昏に染まっている。一発アギトを殴ってやろうかと思ったけどその姿を見てその気は失せた。
いつもは無駄に元気を振りまく奴が壁を背にうなだれているんだ。そんな姿見せられちゃ何も出来ない。
「くっそ油断してた。セツリがこのクエストのキーだって知ってるのは俺達だけと思ってたからな……イヤこれは言い訳だ。取りあえず簡潔に言うと街を見たいと言うセツリと外に出たのが不味かった。
このクエストが始まった時から多分、全プレイヤーにはそれを確認する方法が有ったんだ。見落としてたウインドウポップにはそれがあったよ。後は達成報酬狙いのゴロツキプレイヤーの襲撃の嵐だ。町中であんな露骨に犯罪めいた事をするって事はきっとそっち方面にばかり熱を入れてるギルドの奴らだったんだ」
話を全部聞いてこみ上げてくる感情は何とも言い表せない物だ。もしかしたら僕は少し安心してるのかも知れない。
だって彼女のあの真っ直ぐな目に見据えられたら僕は全部を話してしまいそうだったから……彼女の兄は君を救おうとして眠っている。そんな辛いことをまた一つ彼女に背負わせたくなんかなかった。
「なるほどね。セツリの兄ちゃん……そっか。だけどきっとあの子はお前を待ってるぞスオウ。何度もお前の名前呼んでたからな。辛

いんなら一緒に背負ってやろうぜ。それが仲間ってもんだろ。連れ去った奴らはセツリを道具としか見てないぞ」
アギトの言葉に歯を喰い締める。犯罪者ギルド――そいつ等はＰＫを無意味にやり、圧倒的多数で一人を襲う。誰かが苦労してとったアイテムを横から奪う腐ったやつら。
このゲーム内にはおもいっきり犯罪をやりたくて入る奴も少なからず居るんだ。ただただＰＫ＝人殺しを楽しむ奴だってマジで居るらしい。
そんな奴らに彼女は連れ去られた。そうだ、ほっとくなんて出来ない。助けなきゃ行けない。初心者でまともな装備なんて持っていない自分に何が出来るかは分からないけど動かない訳には行かなかった。
「連れ去った奴らの事分かってるのか？」
「そこら辺はぬかりない。奴ら揃いの蜘蛛の入れ墨を入れてやがった。蜘蛛を象徴にしてる犯罪者ギルド『ノムディラス』だ。拠点はここから南西の街『セイムタウン』犯罪者ギルドでも中間ぐらいのギルドだ」
「セイムタウンか……僕の装備で行けるか？」
「行くしかないだろ？　もたもたしててもっと上位の犯罪者ギルドが横やり入れてきたら面倒だ。知り合いに声も掛けてるし急ぐぞ！」
僕たちは再び走り出す。一応今買える最高の武器と防具に回復薬は高価だからアギトから貰う。最高の武器と防具と言っても鍋の蓋が革の盾になったぐらいで超心もとないけど贅沢は言えない。
だってクエスト一個しかやってないからね。普通は最初の街の周りで有る程度まで装備を整えて別の街に向かうらしいけどそんな悠長な事はやってられない。
もう殆ど僕の中ではこのゲーム、走り続けなきゃ行けないような感じだ。
街の南に広がった森に入って日はすっかり落ちてしまった。ぎら

つく複数の目に囲まれながらもアギトの強さのおかげで結構難なく進めている。だけどいきなりこんな広い森って……おかしいだろと言いたくなる。この森を抜けるのが初心者プレイヤーの最初の関門らしい。

だけど経験豊富なアギトのおかげで僕は反則的に進めている。後でいろいろ苦労しそうだけどそんな事考えてられない。

森を抜けると平原だった。沢山の風車が回る牧草地。なんだか羊に似たモンスターが沢山居る。羊は攻撃しないと襲ってこないらしいから安心だ。

ここは余裕で抜けれると安心していた所でアギトが制止を促した。

「どうした？」

「何か聞こえないか？」

そう言われて耳を澄ます。確かに何か悲鳴めいた物と地面を抉る様な音が徐々に近づいているような気がする。すると直ぐに視界に移った。二人組のパーテーがとてつもなく大きな羊に襲われてこちらに後退してきていた。

「なんじゃありゃ！？」

「羊のグレートモンスターだ。たまに不意に現れて森を抜けれたプレイヤーに絶望を味わわせるイヤな奴」

アギトのその口調はなんだか酸っぱい感じ。自分もアイツに襲われたんだろうか？　だけどエルフは始まる街が違った様な気がするけど。

そんな事を考えてる間にもデカ羊は迫ってきてる。隠れてやり過ごす手も有るけどこちらは既に向こうのプレイヤーに知られていた。

「助けて～～イヤだ～～死にたくない～！」

「ヘルプミーヘルプミー　お助けアレ～」

なんだか間抜けな二人組ぽいなアレ。二等身の体のモブリと言う所属と僕と同じ普通の人型の少女……それが何故か彼女と重なった。急がなきゃ行けない・・・だけど見捨てる事も出来ない。

二対の剣を抜き取って駆け出す。だけど僕の剣が届くより速くア

ギトの槍がデカ羊を貫いた。でもさすがに今度は一撃では倒れない。しかしアギトは今まで拾得してきたスキルを華麗に使い波打つ様な連続攻撃を放つ。
赤い軌跡が幾重にも重なり弾けたと思うとデカ羊は消え去った。スゴい……これがライフリヴァルオンラインの醍醐味。素直にアギトを誉めれる日が来るなんて想像もしなかったよ。
逃げていた二人からも拍手を貰いアギトは大仰に礼をしていた。
「ありがとうございました。助かりました。お強いんですね」
「ふん、まぁまぁだったよ。エルフにしてはだけどね」
少女は礼儀正しいけどモブリの方はなんだか鼻に突く言い方だな。するとポカッと少女に小突かれるモブリ。
「ダメだよエイル。助けて貰ったんだからちゃんとお礼言わなきゃメッ！」
「なんでエルフなんかに！　リルレットだって僕たちモブリとエルフが仲悪いのしってるだろ！」
男モブリはどうやらエイルと言うらしい。少女はリルレット。なるほど種族間の対立もこのゲームにはあるのか。だけど少女は大きく言った。
「そんなの関係ありません！　助けて貰ったらお礼を言うのは当然です！」
その迫力に押されてエイルは渋々頭を下げる。リルレット達は同じ日にこのゲームを始めた友達同士らしい。なるほど、どうりで仲が良い訳だ。二人は初めて話す熟練プレイヤーのアギトに興味津々。僕の存在は無かったことにされてる。
いやいいよ。分かってるし……きっと僕はこのゲーム中最弱だよ。
「落ち込むなよスオウ。今日始めたばっかりなんだから最弱当然だろ」
「ええ！　今日始めたばかりでもう別の街に行くんですか？　なんで？」
「リルレット……愚かな奴は自分の愚かさに気づかないから愚かな

んだよ」
おい、なんだその納得したような頷きは。
「おい雑魚」
雑魚？　僕の事かそれ？　僕の事だよな当然？
「僕はスオウだ！　それに別の街に行く理由はとてつもなく重い理由が有るんだよ！」
僕の言葉に興味を持ったようにリルレットが顔を近づけて聞いてくる。
「理由って何ですか？　助けて貰ったお礼に手伝える事なら手伝います！」
「面倒だよリルレット」
「エイル恩は返すものだよ」
ブツブツふてくされるエイルを余所にリルレットは詰め寄ってくる。長いポニーテールが元気一杯に跳ねている様だ。だけどどうだろう。話して良いものか迷う。
だって今の僕たちの状況は明らかに異常事態だ。関係ない人達をあんまり巻き込みたくは無い。だけどここでエイルがぽつりととんでもないことを言った。
「どうせ今日の謎クエストがらみなんじゃ無いの？　さっきも柄悪そうな奴らが女の子抱えて通って行ったしね。まあ僕らの様な初心者には関係ないけどね」
巷では既に僕達が発生させたクエストは謎クエと呼ばれているらしい。だけど今なんて言ったこの小動物！
「謎クエがらみなんですか？　アギトさんはそれを追うのは分かりますけど……」
何その目？　お門違いだって言いたいのか！　そんなこと自分でも分かってるよ！　だけど行かなきゃ行けないんだ！
「それじゃやっぱりあの人達を追ってるんですね？　それならあの人達セイムタウンの方には行かなかった様ですよ」
「「え？」」

二人同時に間抜けな声を出した。どういう事だ。拠点に戻らずどこに？
「確証は無いですけど『マビラタウン』の方に向かったんじゃ無いでしょうか？」
「マビラだって！？」
いきなりアギトが大声をだした。なんだマビラタウンって？
「マビラタウンってのは犯罪者ギルドの巣窟になってる街だよ。もしかしたらノムディラスはただの運び役なのかも知れないな」
「ただのパシリって事か？」
その問いにアギトは頷く。ルート変更だ。
「セイムに集まって貰ったみんなマビラも向かって貰おう。スオウ言いにくいけどマビラのルートはセイムの三倍は過酷だぞ。お前の装備じゃ一撃でも直撃すれば即あの世行きだ」
なんてこった。どんどん状況は悪くなる一方だ。どうにかしてマビラにたどり着く前に追いつけないのか？
「それなら最近実装された船使えば良いんじゃ無いの？」
今まで黙って話を聞いていたエイムが唐突に口を開いた。それに併せてアギトはマップを開く。
「ああ、そうか！　確かにそれなら追いつけるかも知れない」
「本当か？」
「上手く行けばだけど、このままじゃ確実にマビラに入られるのは確実だ。そうなったら手が出せない。それよりこっちに賭けようぜ」
アギトの力強い声につられて頷く。確かにこれしかなさそうだしやるしかない！
僕達はリルレットとエイムにお礼を行って走り出した。目指すは再び森だ。あの森の別ルートに川が流れていてそこから船が出ている。
左右の腰には再びグレードアップした剣が刺さっている。彼らは餞別代わりに剣をそれぞれくれた。
「これ、私使わないから使ってください。きっとお姫様を助けてね。

それは勇者の役目だからね」
リルレットは優しい微笑みをくれて言った。
「ふん、そんな枝と変わらない剣よりは大分マシな代物だから大事に使えよ雑魚」
エイムは渋々と言う感じで細身の剣をくれた。殆どリルレットに押し切られてだった。
二人の剣の重さを確かめて目の前に出てきたモンスターを切り伏せる！

船――というには余りにも簡素などちからと言うとイカダに乗り込み僕達は川を渡っている。船頭さんは無駄に美男子だった。なんで？　誰の趣味だよ一体。こういうのは船頭は年いったお爺さんが相場だろう。
笑顔がカワイイ美男子は似合ってないよ！　船の旅は安全と思いきやイカダの上にいきなりモンスターが飛び出して来て結構危ない。森の敵より数段強いし苦戦した。だけど武器を変えて攻撃力があがった僕は何とか倒すことが出来る。
毎回ギリギリの戦闘をこなして居るうちに目が良くなったのか敵の攻撃がちゃんと見えるんだ。一回でもやられて街になんて戻ってられないからな。自然と受け流すような剣技になって極力ダメージを避ける。
たどり着いた深い森は街の近くと違って明らかに幹の太さが違う。空気もひんやりとしてピリピリしてる感じだ。美男子の船頭が手を振って別れの挨拶をしてくれる間にも僕達は既に走り出していた。ここからは極力戦闘を避ける様に行動しなければ行けない。
僕はただ経験豊富なアギトの後ろに付いていくしか出来ない。だけどどうしても避けられない戦闘ってのがある。その時僕は初めて死の恐怖を感じた。圧力っていうのか、それをここのモンスター達からは感じる。
闇にうごめく全ての生き物が僕の命を食らおうと狙っているかの

様に思う。
なんて堅いんだ。亀が二足歩行してるような二メートル位の獣人モンスターは魔法まで使うのか！　手に持っている斧だけに注意していては感覚が違う魔法にやられそうになった。
それでもなんとかアギトが止めを刺して勝つことが出来た。まさに僕達は冒険をしていた。

そして森を抜けたら高低差があるフィールドにでた。随分入り組んだ道だ。マビラはあと二つフィールドを越えた先らしい。自然の城塞――そうアギトは言っていたけどここからそうって事か？
迷路の様に入り組んだ道。これで奴らに追いつけるのか？
「大丈夫だよ。言ったろ、プレイヤーにはセツリの場所が分かるシステムが配給されてるってな」
「あ、なるほどね」
つまりは今度はこっちがそれを上手く利用するわけだな。
「近いぞ」
そう言われて耳を澄ますとゲスな笑い声が下の方から聞こえて来た。目を凝らすと視界補正が入って浚った奴らの顔が見える。そして自衛隊の人達が持っている様な縦長のバックがモゾモゾと動いている。きっとあの中にセツリはいる。
「どうするんだ？　やつら十人はいるぞ。二人じゃ勝てないだろ？」
「そうだな。ここが絶好の襲撃ポイントなんだけど仲間は間に合いそうもない」
僕はいても立っても入られなくて飛び出そうする。だけどそれをアギトは必死に止めた。
「バカ！　今入ったって返り討ちだ！」
「今行かなきゃチャンスはないんだろ！　なら僕が真っ正面から奴らの前に立つからその隙に担いでる奴を吹っ飛ばしてアギトは逃げてくれ。それでなんとかなるだろ」
「おまえはどうすんだよ！　やられるぞ！」

「それでも！　彼女は助けれる。他に方法があるのかよ！」
僕はアギトの腕をふりほどき駆けだした。ここで使わない命なんていらない！　観念したようにアギトも後ろから付いてくる。
「上手く行く保証なんてないぞ！」
「はっ、そんなもの自分の中だけでやるものだろアギト」
僕達はその会話を最後に前方と後方に分かれた。そして今まさに飛び出そうとしたとき不意にフィールドに絶叫が轟いた。
ノムディラスのメンバーは何かを見つめておののいている。そして一斉に武器を構えた。
「何だ？　一体何がそこにいるんだ？」
僕は身を乗り出して彼らの視線の先を追った。すると不意に肺が凍り付く感覚と共に手足が痺れてきた。それは簡単なまでに分かりやすい恐怖だった。後方の草むらに待機してるアギトも顔を出して固まっている。
彼らの目の前に行るのは一言で言うなら悪魔だ。黒い陰を落とす大きな悪魔。山羊の顔に巨大な角を生やし筋骨隆々の体に馬の下半身をした悪魔。その手には巨大なメイス。全長は三メートルを超える巨体だ。
武器を構えたノムディラスの奴らは震えている。そして次の瞬間一瞬で前にいた前衛の三人が消え去った。
グチャ……という不気味な音を響かせて更に二人消え去る。まさに圧倒的な恐怖がそこにはあった。
一気に半分になってしまった彼らは恐怖に支配されていた。闇雲に武器を振り回す者や逃げだそうとする者様々だ。だけど悪魔は一匹も逃がす気は無いらしく次々とプレイヤーをほふっていく。
そして最後の彼女の袋を背負っていた奴を潰して動きを止めた。獲物を探しているのか左右に三つずつある目をひきりに動かしている。
僕は動くなと祈っていた。だけど状況がわからない彼女は地面に落ちた袋から顔を出してしまった。間違いない、彼女の栗色の髪が

月明かりに照らされて美しい程にその存在を主張していた。
そして当然悪魔は彼女に気付いた。巨大なメイスを頭上に掲げる。もう何も考えられなかった。僕はその最悪の光景が頭をよぎった瞬間・・・絶叫と共に剣を抜いて駆けだしていたんだ。
赤い閃光が飛び散った。両腕の剣がただの破片となる様が目にはっきりと写っていた。たった一撃――一撃で僕の剣は砕け散った。ほんの少しだけ軌道をズラすだけで破片となった。デタラメだこんなの……剣と一緒に魂まで折られた様な感覚が走り立ち尽くす僕に後ろから声が聞こえた。
「スオウ！　危ない！」
グイッと後ろに引っ張られて尻餅を付いてその鼻先を悪魔のメイスがかすめていった。振り向くと彼女が顔が至近距離にある。その顔には涙があふれている。
「来てくれた……もうダメかと思ったよ」
その言葉で魂がもう一度形作られて行くみたいだ。彼女の言葉一つ一つが僕を救ってくれる。僕は彼女の涙を一度拭い言った。
「何度だって助けにくるよ。そして何度だって助けて見せる。頼りないかも知れないけど精一杯……命を懸けて。それが勇者の役目だろ」
僕は彼女の手を引いて悪魔の攻撃を交わす。もうそれしか出来ない。デカい癖に異様に早いからやばい、かするだけで目に見えてHPが減る。
だけど悪魔の攻撃手段はメイスだけじゃなかった。奴は口から火を噴いた。更にメイスでの多重攻撃……これはやばい。そしてとうとうメイスに追いつかれる。重心移動してるとき――これは避けられない！
その時飛び出してきた影が赤いエフェクトを帯びた槍でメイスを弾いた。響く爆音と飛び散った火花が目の前を染め上げる。
「無事かスオウ！？」
「アギト！！」

それは見馴れた顔のアギトだ。ここ一番で魅せてくれる奴だ。
「遅くなって悪い・・・・さすがにこのクラスの敵を前にしたらな、腰が引ける」
どうやらアギトでも厳しいらしい。当然か。この悪魔は今まで僕が見てきたモンスターとは格というか次元が違う。逃げるなんて選択しはない。逃げきれるとも思えないし……なら戦うしかない。僕は更に弱い武器を装備し直した。
彼女を草むらに押しやってアギトに加勢する。最近覚えた戦闘技法スイッチで押し切る！　二人で交互にスキルを発動していく技法で技の硬直時間を片方で埋めるんだ。だけど明らかにスキルの数に差がある。それはスキルを連続させるのには致命的だ。僕は通常攻撃を織り交ぜて後は気合で武器を振った。
だけど効いているのか分からない。攻撃は通っているけど減っているのか？　それはアギトも感じているようで。無限に倒れないじゃないかという絶望が背筋を這う。そしてそんな一瞬の迷いが二人のスイッチに穴を開けた。
空気が弾ける感覚と共に僕達は宙を舞う。そして地面に叩きつけられて肺の中の空気が一気に吐き出される。
動けない……骨が全部折られたみたいな感じだ。軟体動物はこんな感じなのかと遠のく意識で考えていた。近くには同じ様に地面に伏しているアギトの姿。彼のＨＰもレッドゾーンだ。本当に死が間近にある。
でも街に戻るだけ……結局僕に勇者なんて、と思っていると草むらから飛び出す白い陰が見えた。そして暖かい温もりに包まれた。なんでこんな事……頬に落ちる涙はとてつもなく優しい光だ。
このまま目を閉じれば天国に行ける気がした。だけど彼女の顔の横から見えたのは悪魔がメイスを降りかぶる光景。その時思った。
（彼女は一体どうなるんだ？　ログアウト出来ない彼女がゲーム内で死ぬって事、それは……まさか）
最悪の想像をした僕は目を見開いて再び両手に力を込めた。あん

な攻撃を受けても武器をはなさなかった自分を誉めたい。
「うおぉぉぉぉぉ！」
雄叫びを上げて僕は交差させた剣で今度こそゲームバランスを壊す攻撃を受け止めた。その瞬間にＨＰは０になった。だけど構わず奴の剣を押し戻し左右の剣でラッシュを駆ける。二刀を変速的に使い僕は自分の体が消え去るその時まで全霊を込めて剣を振る。
視界は白に染め上げられて僕の目は姿じゃなく存在を映していた。その一番巨大な物に向かって無我夢中で剣を振り続ける。身体のいたるところから青白い光がドット化して宙に消えていく。
その時、悪魔が一際大きな悲鳴を上げた。その瞬間全ての力が抜けていく。これは自分の攻撃じゃないと分かっていた。振り替えると複数の存在が悪魔に立ち向かっているのが分かるんだ。きっとそれはアギトが呼んでいた救援だろう。
これで大丈夫……システムの光が僕の身体を分解していく。
「君！　ひぐっ……スオウ！　……スッ……オウ！　スオ……ウゥウゥウゥ！」
嗚咽交じりの涙声。視線の先には確かに見える彼女の姿。綺麗な顔を涙でグシャグシャにしながら必死に僕に向かってその細い腕を伸ばしている。だけど何か引かれるように彼女の姿は少しづつ離れていく。それは多分アギトの仲間が彼女を守ろうとしてくれているんだろう。だから……
「あんまり迷惑かけんなよ」
そう言ったはずだけど既に声は出なかった。そして思わず遠のく彼女に向かって腕を伸ばそうとしている自分がいた。だけど気付いてそれは止めた。だってすぐにまた会える……本当に死ぬわけじゃないんだから。
だからそんなに泣く事なんかないんだよ。そう伝えたかった……だけどその手段はない。だから心配させない為に精一杯の笑顔を作った。これで一体何が伝わるんだろう？　言葉を紡げないもどかしさを知った。その時胸を刺した痛みは自分でも分からない。

もしもこの時喋れたらなんて自分は言うのだろう。そう思い彼女の言葉で気付いた。
（ああ……なら良かったのかも。くだらない）
そう感じながらも僕は声にならない口を動かした。伝わらなくていい……だけど今、言いたいこと。
「初めて、名前呼んでくれた」
その瞬間、僕の身体は飛散してシステムにデータとして引っ張られる。暗点した意識はどこまでも深く落ちていく気がした。

風を超えて（後書き）

三話目です。ＰＯＭＥＲＡで一ファイル分なんで中途半端だけどそれは毎日更新で埋めます。誰かが読んでくれているの事を願ってまだまだ続けたいです。

夢と現実の狭間（前書き）

気がついた僕はリアルの匂いを感じた。何故かログアウトしていて再びログインも出来ない。そんな僕のもとに届いたのは仮想空間を作った会社からの招待状。そこで告げられた内容に僕は愕然とした。

「君はあの世界から戻れなくなるかもしれない」

夢と現実の狭間

目が覚めたら僕は自室の天井を見た。
「あれ？」
おかしい……僕はそう思いベットから体を起こし自身の感触を確かめる。そして頭に着けているゲーム機を外して側面のランプを確かめた。
そこには青い光が灯っている。
「壊れたわけじゃないか」
青いランプはこのゲーム機が正常に作動している事を示す。ゲームにログインしている状態だとランプは点滅を繰り返す。どこかに異常が出たらランプは赤になる。
「異常も無いのに強制ログアウトされた……どういう事だよ」
手元の頭を包むような形状をしたゲーム機を見やり呟いた。おかしな事だらけで今更強制ログアウトで驚く事もないけどね。もう一回入れば良いだけの事だ。
そう思いゲーム機を再び頭に着けて「ログイン」と発する。これで再びゲームの中へ。死んだわけだから最初の街になるんだろうけどそこはしょうがない。
アギトやセツリは無事なのか？　後から来た人達と逃げたかそれとも倒せたのか気になる。みんな熟練プレイヤーばかりだろうから大丈夫だとは思うけど、ゲーム内でちゃんと安否を確かめたい……と、思ったんだけど何故か意味不明な言葉が頭の中に響くだけでログイン出来ない。
【あなたのログインは現在認める事は出来ません】
そんなメッセージが脳内で響き不愉快な甲高い音が鳴り響いた。
僕は思わず頭のゲーム機を外してベットの上に落とす。
ログインが認められない？　どう言うことだ。やっぱり彼女に関

係あるのだろうか？
何度やっても同じ……頭に響く音のせいで頭痛を併発した。苦情出すぞこの会社！
取りあえずパソコンに向かいゲーム内に居るであろうアギトに今の状況を伝えようとメールを打つ。だけどメールもダメだった。何だ一体どうして？
ログインもメールの送受信も止められてる・・・そんな事、システム管理している会社か企業でもないと出来ないんじゃあ。するとその時メールが届いた。ピロリンという音と共に受信箱に一通のメールが入っている。そのタイトルは『アンフィリニティクエストについて』そして送り主はギーガスクエア・・・ライフリヴァルオンラインの製作会社だ。
僕は震える手でメールを開いた。そして開いたメールの内容は簡潔な物だった。書かれていたのは僅かなお詫びの言葉と面会を希望する時間と場所の指定。
なんだって一プレイヤーでしかない僕に企業側がコンタクトを取りたがるか分からないけど会わない訳にも行かないだろう。だって内容が内容だ。製作会社ならこちらよりも沢山の情報を持っている筈だ。
アンフェリニティクエストの事……彼女の事……聞きたい事は山ほどある。それにどうして僕のログインが止められてるのか。
場所は今日行ったビルだから分かりやすくていい。時間は正午頃……それまでゲームに入れないのはもどかしいけど仕方ない。僕はメールに了承の返事をして時計を見た。すると既に午後十一時を回ってそろそろ日付が変わろうとしていた。
今日はなんだか長い一日だった。キャラ作りは実は昨日の真夜中からやっていたから寝てないんだよね。結局そのキャラ作りに費やした労力は全部無駄になった訳だけど。
初めて直ぐおかしな事が起きて仮想もリアルも動きまくったからヘトヘトだ。ＬＲＯは呼気まで再現してるからなんだか疲労が残る

らしいからだろう。
やることも出来る事も今はない。アギトがログアウトして電話でも掛けてくれなきゃ連絡手段もないよ。僕は腰を上げてパソコンから離れ再びベットに倒れ込んだ。すると今日の張りつめた緊張が切れたみたいに自然と意識が遠のく。
なんだか全部が夢だった気がしてくる。実際にゲームの中での出来事なんだ……それでこんなに何頑張ってるんだろう？　沈む意識の中で浮かんで来たのは最後に見たセツリの顔。大粒の涙が次々に落ちる頬――揺れる栗色の髪――伸ばされた華奢な腕――僕の名前を叫ぶ小さな口――そのどれもが鮮明で僕の心に焼き付いていて自然と口が僅かに動く。
「夢じゃない」
そして意識は暗い闇を求めて沈んで行った。

ここはどこだろう？　真っ暗な部屋の中で光るのは一つの液晶画面だけ。画面は無数の数字とプログラミング言語を組み合わせたコードを延々と組み上げていた。
そして僕はその画面を凝視する人物に気付く。線の細い体にボサボサの髪、慎重は高そうだけど決して強そうには見えないタイプの人物だ。くたびれたシャツに皺だらけのズボンは膝までめくり上げられている。
なんだろう、僕はこの人を知っている気がする。暗く落ち込む部屋の中ではその人のタイピングの音が異様に大きく響いている。ゾッとするほどの没頭ぶりだ。一体に何がこの人をここまで動かすんだろうか。
「どうして……」
僕の口はいつの間にか音を発していた。言葉とも言えない音の固まり。不意にタッピングの音が止まり世界の音は無機質な機械の駆動音だけになった。
そんな沈黙がずっと続いたような気がする。十分……二十分……

それとも一時間。もしかしたらたった十秒位だったのかもしれない。
だけど体感的に長い時間の果てに背中を向けた人物はたった一言呟いた。それは僕に向けて行ったのか自分に言い聞かせているのか分からないけど確かに聞こえた。
「妹の為に……」

音の固まりに殴られた様な衝撃で僕の安眠は終わった。音に殴られるなんてライブハウスとかで直にバンドの演奏でも聴かないと得られない体験を家の中で出来るなんて貴重と思う君は変わってくれ。
毎朝音に殴られてたら地味に耳にくるし内蔵の調子が悪くなる。僕が朝から冷たい物を飲むと必ずお腹を壊す体質に成った原因はきっとそのせいだ。
だから毎日毎日やりきったみたいな顔で鍋とお玉を抱えた目の前の幼なじみを恨みがましく見つめる。だけど日鞠はそんな事全然気にした風もなく元気に言うんだ。
「スオウ朝だよ！　良い天気だね。きっと神様が今日も私たちを見守って居るよって証だね」
じゃあ曇りや雨の日はどうなるんだと思った諸君、そこはいずれ分かるさ。日鞠のバリエーションは全天候を網羅しているんだ。
笑顔全快の日鞠にグイグイ引っ張られて朝食を済ました僕は昨日風呂に入らなかった事を思い出しシャワーを浴びた。浴室から出てきた時には既に朝食の片づけを終えた日鞠とはち会った。
最初僕は洗濯に来たんだろうと思ったけどそれは確か昨日済ましていた。基本両親が共働きで殆ど一人暮らし状態のこの家は洗濯なんて一週間に一・二回でいいんだ。つまり昨日したら今日洗う物なんて無いはずだ。
そして日鞠の手にある一眼レフのやけに黒光りする豪華なカメラを見つけた。
「おい、それなんだ？」
聞くまでもないけど一応聞いてみる。

「えへ、スオウの成長の記録をね」
「えへ、じゃねーよ！　普通逆だろ！　取りあえずカメラ渡せ！」
「イヤだよ。今からモザイク処理してお母様達に『今日はこんな爽やかな朝を迎える事が出来ました』って知らせるんだから」
「何のねつ造だよ！」
　僕は強引にでもカメラを奪う権利があるはずだ。睨みを聞かせて両手両足を開き中腰状態に。バスケで鍛えたフットワークを見せてやる。
　タオル一枚で少女に詰め寄る変態の図の完成であった。いや、実際には変態は逆なのだけどもしも誰かがこの状況を見たら勘違いするのは確実だ。
　すると僕の本気度が伝わったのかカメラを胸に抱えていた日鞠が大きく観念したように息を吐いた。ほ、やっとアホな考えは改めてカメラを渡す気になったかと思ったらもっとヤバいことをさらりと言った。
「わかったよ～。しょうがないからこの写真は今日のブログにアップするだけにしとくよ」
「僕の貞操が大ピンチだろそれ！」
　きって落とされた第二ラウンドは熾烈を極めた。

　なんとかカメラから自分の裸の写真を消去した僕は既にゲンナリしていた。朝から変態の相手は辛いよ。でもここからは気を引き締めないと行けない。
　僕の目の前には上った太陽の光を反射する昨日もみたビルがある。指定された時間の十分前……丁度いいだろうと僕は自動ドアを潜り受け付けへ。だけど昨日と同じお姉さんに話しかける前に呼び止められた。
「君がスオウ君だよね？」
「え？　あ、はあ」
「そうかよかったよ本人で。人違いだったらどうしようかとヒヤヒ

ヤしてた」
その人は無理して着たようなスーツ姿でメガネを掛けた冴えなさそう人だった。首から下げた社員証か何かに「山田　石丸」といかにも冴えない名前が書いてある。
山田さんは僕にお礼とお詫びを言って受付から通行パスみたいなのを受け取って着て渡してくれた。そしてエレベーターに乗り込み会社内へ。
よくよく考えたらここってギーガスクエアじゃなくてハードの方の会社の筈だった。どういう事だろうか？

僕が通された場所は会社内の先端技術開発部と言うところの会議場だった。長机が長方形に並べられてそこには何十人かの人達がいた。
ここはフルダイブの研究施設みたいな物なんだろうか？中に居るのはみんな技術者や研究者を思わせる格好だ。
「みなさんスオウ君を連れてきましたよ」
そんな山田さんの言葉でみんなの視線が僕に集中する。そしてちょっとしたざわめき。なんだ？　一体何なんだ？
僕は一番近くの席、長方形の長い方じゃ無く短い所に座らせれた。全員の視線が注がれるしなにより対面の人が怖いんですけど……。僕のそんな心の叫びは届かず全員が席に着いてなんだか緊張感が出てきた。
一体今から何が始まるんだろう。
「まずは自己紹介から始めようかな？　スオウ君は誰が誰だかわかんないだろうからね」
そういって山田さんが全員を簡単に紹介してくれた。どうやらハードの開発者が六人ぐらいで後の四人がギーガスクエアのゲーム開発者と言うことだ。それはわかったんだけど……。
「えっと……どうして僕がこの中に？」
ずっと出したかった疑問を口にした。するとその問いには対面の

一番怖い人が答えてくれた。
「それは君がアンフェリニティクエストの発見者で今現在唯一の達成可能者だと我々が結論したからだ」
「ええ？　唯一って、あのクエストは全プレイヤーに発生してるんですよね？　なら全プレイヤーに可能性はあるんじゃないですか？」
僕の当然の質問に答えたのは今度は右隣のゲーム開発者の人だ。
「いや、そうでも無いことが解ったんだ。確かにあのクエストは全プレイヤーに発生したけど達成者は既に決まっている。それが君なんだよ」
なんだって？　達成者が既に決まっている？　そんなことあり得ないだろう。
「意味が分かりません」
僕は素直な感想言った。順を追って説明しろよ。
「う～んそうだね。説明は極めて難しい。説明と言う物はその事象を全て理解している物に与えられる役目だからね。ここに居る全員はその区分に当てはまらない。それに該当する者はただ一人桜矢当夜だけだろう」
その言葉に全員が反応したような気がした。態度に出す人は居ないけどその名前が出た瞬間に空気が震えたとでもいうのかな。
つまりはあのクエストや今のゲームの状況はここにいるゲームを支えるべきである人達も知らなかった事って事か。
「でもじゃあ、どうやって僕がそのクエストの達成者に成りうるだなんて解ったんですか？」
「それは簡単。君の名前がクエストの達成欄にはあるんだ。こっちの本体にはね。もしかしたら彼女桜矢摂理を見つけた者にその資格があるのかもね」
なるほど……彼女を見つけた者だけに達成券が与えられるってわけか。でも待てよ。
「あの時僕の他にもう一人プレイヤーがいたんです。そいつはどうなるんですか？」

確かに僕はアギトと共にセツリを見つけた。
「発見……だけじゃ無い他にキーがあったんじゃないのかい？　何か彼女にしたとか？」
その時僕の脳裏にあの感触が蘇る。柔らかいセツリの唇の感触。
まさか……あれで？
「ええと……キスを」
「なんと！　眠っている少女の唇を奪ったのかい？　やるね君」
「事故です。事故！　そんな……やるんならちゃんと許可取ってやりますよ！」
なんだか訳解らないこと言ってる気がする。
「そういえばその後僕のキャラ忠実に自分になったんですけどアレはなんですか？」
「それは解らないな。強いて仮説を立てるなら・・・彼女にとって君だけは真実でいて欲しかった？　とか」
なんだそれ？　自身が作ったキャラを被る事は嘘って事か？
すると山田さんが口を開く。
「実を言うとね今あの仮想現実空間は一人歩きをしている状態なんだ。いいや、誰かの意志によって動かされていると言った方がいいのかな？」
「誰かの意志？　それが桜矢当夜の意志って事ですか？　でもあの人は……」
あの人は病院のベットの上だ。そんなこと・・・。
「そうだけど予めそういう仕掛けをしていたのかも知れない。それにあの空間は世界最高峰のコンピュウーターで形作られている。それを作ったのが彼なのだから彼の意志と言っても変わらないだろう」
確かにそうかも知れない。僕も最初セツリからお兄さんの事を聞いたときあの空間はそもそも彼女の為に作られた様な気がした。
「ん？　じゃあ僕がログイン出来なかったのも当夜さんの意志ですか？　でも当夜さんは妹であるセツリさんを助けたい筈ですよね？
達成条件も彼女をリアルに帰還させる事だったし……それなら矛

盾しますよ」
　確かにその通りなんだ。クリア出来るのが僕だけなら出さない様にするならまだしも出してしまっては意味がない。だけどその謎は簡単だった。
「それは僕達がやったんだよ。君がゲーム内で死亡して街に転送される間に割り込みを掛けて強制的にログアウトさせた」
　そういったのはゲーム会社の人たちだ。
「なんでそこまで？　確実に今日来て欲しかったからって入れ無くすること無いでしょう。　ゲーム内でもメールしてくれれば来ますよ」
　だけど何故かここに来て周りの大人達の顔が変わった。なんだか言いにくそうに。そして対面の怖い印象のおじさんが口を開いた。
「実はそうも行かなかった。君は昨日ログアウトして何か違和感を感じなかったかい？」
「ん～別にそれとは……ただ疲れがフィードバックしてる気はしました。少しだけだるかったし直ぐに寝ちゃう程に。だけどＬＲＯはそういう事が有るって聞いてましたけど」
　僕の言葉にまた少しだけ声のトーンを落として対面の人は言った。
「今はまだそれくらいか……今から言うことを落ち着いて聞いてくれ」
「え？　はあ」
　なんだ妙に真剣な面もちに緊張が増すぞ。
「このままログインを繰り返したり向こうでの活動を続けて行くと君は……こちらに戻れなくなるかも知れない」
「は！！」
　なんて言った今？　戻れなくなる？　それってつまりセツリと同じようにログアウト出来なくなってこっちでは意識不明って事か？
「あくまで可能性の話だが、君の向こうへの意識浸透率は異常な程に高い。限界値を越えればシステムで引っ張り戻せなく成るかも知れない」

「その限界値って幾らなんですか？」
「三百五十～四百だ。これは桜矢摂理のデータを元にしている。そして今の君が百を越えた辺り。普通は八十位で落ち着いている筈なんだがね」
まず彼らが嘘を付いていると疑った。だけどそんな理由なんて見当たらない。仮想空間から戻れなくなるかも知れない？　そんなのリスク高すぎだろ！　そもそもゲームなんて命懸けてやるものじゃない。
信じられないそんな事って……この人達はそれを伝えて僕にもうゲームに入るなって事を言いたいのか。
「どうしたい？　君はこのまま入り続けたら意識浸透率は上昇していきいずれ意識と体は引き破がされるかも知れない。その原因はきっと彼女だろう。
彼女を見捨てて、もうログインしなければそんなことも起こり得ない。ただその時は彼女はずっとあの世界の中ということに成るが……いや、一定時間が経てば他のプレイヤーにクエスト達成の権利が移るのかも知れない。それは解らないが決めるのは君だ」
重い声が会議室に響いた。なんでこいつらは意地でも止めさせないんだ？　こんな事になったら普通適当な理由でも付け、謝礼でも払ってゲームを止めさせるのが普通なんじゃないか？
それを理由まで教えてわざわざ忠告まで……て忠告？
決めるのは自分って言うのにも引っかかる。精神が持って行かれるってのは命を亡くすと同義だろ。そんな事態になったら企業ならそんな最悪な事態は避けたいはず。なのに選択の権利まで与えて……。
「貴方達は実はクエストを達成して欲しいんですか？」
今あのゲームは一人歩きしてるといった。それは企業からしたら嫌な事だろう。今はイベントとしてるけどこんな状態が続いてはいずれ運営は出来なくなる。
その損失は痛いのでは？　今ＬＲＯに登録しているユーザーは何百万だ。それを失うのは大きな損失。

「大人の黒い考えはお見通しか……」
対面の怖い人は言った。意外にあっさりだな。
「君が思っている通りに実はこのクエストはさっさとどうにかしてもらいたい。今のＬＲＯは非常に不安定なんだ。このままサービスをし続けるのはパラシュートの代わりにゴミ袋でスカイダイビングしてるような物だよ」
いや、それは今すぐ止めろよ。それ程までにこＬＲＯ市場……指してはフルダイブゲームの市場は手放せないってことか。
「僕にこんなに懇切丁寧に状況を教えてくれたのは最悪の事態……つまり僕が危険を冒してまでゲーム内に戻りそして戻ってこれなくなったときの保険。言い訳作りって事ですか？　自分達は危険を教えていたってね」
山田さん達は苦い顔をする。
「その通りだ。あっぱれだねスオウ君」
拍手が何故か巻き起こる。なんだそれ、おかしいだろ。
「見透かされたのなら仕方ないよ。これでＬＲＯは終わりだろうけど……それも仕方ない。たった一日前に出会った少女の為に命を懸ける理由なんて君にはないだろう？」
たった一日前……確かにそうだ。だけどなんだかそんな気しないな。命を懸ける理由か……確かにそんなものないかも知れない。
だけど心がなんだか痛い……誰も居なくなった世界でセツリはどうなるんだろう。僕は立ち上がり目の前の大人達に向かって言った。
「確かめたい事があるんだ。それから決めたい。だからもう一度ログインさせてくれ！」
全てはそれから……後一回のログインで僕は何かに確信を持ちたかった。

結果的に僕の要求は通った。一回位なら大丈夫だと判断してくれた。その変わり体調管理とかを徹底する事を条件に。やっぱり最悪の事態は避けたいらしい。血液検査とか色々やった。

そして彼らが侵入させていた僅かなシステムでアギト達の位置を特定してもらいその場所に復帰させて貰えることもした。ズルだけどこの位仕方ないよね。もしかしたら命懸けるかも知れないんだから。

僕は会社のハードを使ってログインする事になった。家に帰る時間がもったいないし、何か起きたときの為だ。

僕は手の中のハードを見つめる。あんな話を聞いた後じゃ今までの様に気楽に頭に着けるなんて出来なかった。だけど大きく深呼吸をしてハードをはめてリクライニングみたいなイスに腰掛ける。特性で座り心地抜群だ。

そして僕は目を閉じて魔法の言葉を紡ぐ。

「ログイン」

「続く」

夢と現実の狭間（後書き）

第四話です。交錯するリアルとゲームが上手く書けていたら幸いです。

心ある所（前書き）

ＬＲＯ内に戻った僕は不安だった。自分を犠牲にするだけの理由……そんな物実際分からなかったから。だけど合流したアギトとの会話で一つだけ大切な事に気づく事が出来た。

そんなたった一つの大切な事で彼女に会う決心をした僕は磯氏で彼女の元へ向かった。だけど知らされたのは姿が消えたという知らせ。行先は分かっていたからアギトの仲間達と共にあの場所へ。

そして僕達を迎えたのは絶望と言う二文字だった。

心ある所

暗転した世界が白に変わり大量の情報と共に僕というキャラクターが形作られた。目の前には大きな石造りの扉がありこの向こうにＬＲＯの世界が広がっているはずだ。

僕は軽装の心許ない装備に目をやり両腰に主を無くした鞘があることを確かめる。現実か仮想か、そんなことは実は問題じゃ無いのかも知れない。

僕は実は何を確かめたいか自分でもよくわかってない。ただもう一度……どうするにせよ、セツリに会いたかったんだ。

なんて言おう？　彼女は自分を見てどう言う反応をするだろう？

また泣かせてしまうかも知れない。でもこのまま居なくなるなんてしたくなかった。

僕にとってＬＲＯはゲームに成りうる前に彼女との出会いで変わったのかも……。

頭を振って答えが出ない問いを考えるのは止めた。百聞は一見にしかずだよ結局。両手で扉を押し開き差し込む光源に瞼を閉じて再び開いた一瞬でそこはＬＲＯ内へとなっていた。

「おお～いスオウ！」

声をした方をみるとそこにはアギトがいた。入る前に知らせておいたから迎えに来てくれていたんだろう。僕は級友に手を挙げて答えた。するとガバッとアギトは僕を羽交い締めにする。

「イテテテテ！　何すんだよ」

「うるせぇ！　こんな時間まで何やってたんだよ。セツリをなだめるのにどれだけ苦労したか……お前街にも戻って無くて何故かログアウトしてるしメールは届かないしで交代でセツリを閉じこめて置くことにしたんだぞ！」

「閉じこめるって何で？」

僕の問いにアギトは呆れた様なため息とともに言った。
「そんなの決まってるだろ！　あいつほっといたらあの場所まで戻るって聞かないんだ。だけどあの化け物は倒した訳じゃないからそんな事出来る訳もないだろ。だから不本意だけど閉じこめるしか出来なくて」
そうか……セツリは戻ってこない僕を心配してくれたのか。幾ら直ぐに蘇るとアギト達に聞いてもずっとここに居る彼女にとってはこの世界での出来事は本物なんだ。
だからあの時、僕は本当に死んだと思ったのかも知れない。アギト達は心配ないと言っただろうけどそれだけじゃ不安は消えなかったんだろう。彼女にとってはここが本物だから……。
僕は直ぐに彼女の場所に向かうことにした。直ぐにでも安心させてやりたい。僕は生きてるよ、そう言いたかった。
だけどその時ハタと足が止まる。本当に安易に会っていいのかと僕の中の悪魔が告げる。このまま死んだことにすれば何の未練も無くこの世界の事を忘れられるかも知れない。
そしたら自分の命を懸ける危険なんて侵さなくてよくなるんだ。僕が付いて来てない事に気づいたアギトは振り返りいぶかしげに顔をのぞき込んできた。
「どうしたんだよスオウ？　なんか変だぞお前。まあ、昨日の戦闘からおかしかったけどな。普通ＨＰ０で動けるわけないのにな。蘇生魔法かアイテム使わない限り」
アギトのそんな言葉を頭の端で聞いていて思い出した。そういえばそんな回復手段があったんだっけ。ＨＰが尽きたプレイヤーは消滅するけどその場には小さなクリスタルが残ってそれに誰かがアイテムか魔法を使えばその場で復活出来る。
あの時はそんな事考えもしなかった。目の前の事はゲームであってもリアルだった。僕はただ必死で、セツリを守りたかっ……あっ。
そこまで思考して僕はようやく気付く事が出来た。簡単だった。簡単だけどとても大切な事だ。

僕は友の顔を見て笑った。
「ありがとうアギト」
「は？　なんだよキモいな」
遠ざかる親友を横目に僕は歩き出す。早く彼女に会いたい。今はそう思うことが出来た。悪魔の声はもうしない。

アギト達が宿を取っている場所に付いて最初に聞いた言葉はなんだか昨日とデジャブってた。
「ごめんアギト。あの子居なくなっちゃった！」
「はあ！　何やってたんだよお前等！」
「だからごめんだよ～」
ぞろぞろと宿屋から出てきた一団がそろって頭を下げる。みんな熟練プレイヤーなんだろう。僕とは身につけている装備が違う。カッコいい。ってんな場合じゃない！
僕は身を乗り出して同じぐらいの身長のエルフの人に詰め寄った。最初に謝った人だ。緑の髪は後ろでポニーテールにして重くはなさそうだけど豪華な彩色がされた防具というよりローブを来ている人。
「えっとどういう事ですか？　なんで彼女……監禁みたいな事してたんでしょ？」
するとその人はエへへと笑い。
「いやさ、あの子可愛いじゃん。あんな目で懇願されちゃあ男としてね……でも少し外を散歩したいって言っただけなんだよ」
だめだこいつら。全員アホか！　揃って顔赤らめてるなよな。
「今直ぐ追えば大丈夫だよ。もう街の中には居なかったからフィールドに出ちゃったんだね」
「このアホ！　先にそれを言え！　全員今直ぐ後を追うぞ」
アギトの号令で一斉にみんなが走り出す。まだぜんぜん知らない街が直ぐに遠くなる感覚。ああやっぱりこうなんるんだなと僕は思っていた。
高低差を生かして作られた町並みは段々になっていておもしろい

と思っていたけどゆっくりしている時間なんてそもそもないんだ。
僕達は大急ぎで昨日あの悪魔と対峙した場所まで来た。だけどいない……最悪の想像が駆け巡る。その時思い出した。そういえば彼女を特定する為のシステムが全プレイヤーにはある！
僕はウインドウを開いて彼女探した。そして見つけた場所に猛然と走り出す。そしてそんな僕の行動を見ていたみんなも慌てて付いてきた。
このフィールドは入り組んでるから迷ったんだろう。僕は途中であったモンスター共を後ろのみんなに任せて走り続けた。
「遠くでお前一人でどうすんだぁー」
てアギトの声が聞こえたけどそんな事考えて無かった。ただ無我夢中で最後に見た彼女の姿を僕は追っていたんだ。
そしてフィールドの端の端……そこに白い影が見えた。だけど周りをモンスターに囲まれていてよく見えない。
「セツリーーー！！」
僕は心の限り叫んだ。すると返事は直ぐに帰ってきた。
「スオウ？　スオウ！　スオウーー！！」
それは聴き間違いようの無い彼女のセツリの声だった。僕はモンスターに突撃しようとして気付いた。武器が無い。そうだ昨日の戦闘で僕の剣は折れていた。剣がなければ突撃してもモンスターを押し退ける事も出来ない。だけど彼女はそこにいるんだ。
どうにかしてセツリの元へ……そしてこのフィールドの特性に気付いた。来た道を戻り駆けあがる。そして一気に飛び降りた。
そして今にもセツリを食べようとするモンスター集団の中に降り立つ。衝撃でＨＰがかなり減った。だけど気にしない、僕は来れたんだ彼女の元に。一日ぶり？　位に見たセツリの顔はまだ涙が溜まっていた。一体どれだけ泣けるんだ？　ゲームだからそこら辺は無限なのかも知れないな。
そんな事を考えながら座り込むセツリに手を伸ばす。少しは王子

様に見えるだろうか？
「大丈夫ですかお姫様？」
冗談混じりで言ってみた言葉で彼女は決壊したように泣き出した。
そして僕の胸に飛び込んできた。
「ばか……ばか……ばかばか！　遅いよ！　すっごくすっごく心配したんだからぁ！」
そんな彼女に僕は小さな声で「ごめん」と言うことしか出来ない。本当にごめん……何度謝っても足りない気がする。この宝石みたいな涙に代わる物なんて無いんじゃないだろうか。
その時処理できない事態に戸惑っていたモンスターの一匹が雄叫びをあげて襲いかかってきた。そしてそれに吊られて他の奴らももっともシンプルな命令を実行に移す。
それはプレイヤーを倒す事だ。
僕達に武器は無く逃げ場もない。最悪の状況だ。だけど不思議と怖いとは思わなかった。それはゲームだからとかじゃ無い。いくらゲームでもこのフルダイブＬＲＯはプレイヤーに恐怖を掻き立てる。
凶悪なモンスターに出くわしたとき、戦闘不能に成る瞬間……それは仮想とわかってても怖い物は怖いんだ。
だけど今、僕の胸にある小さな背中を抱きしめてると心に不安や恐怖なんて入り込む隙間はないんだ。だから僕は彼女の手を握って力強く言った。
「生きよう。二人で」
「うん！」
僕は走り出す。彼女の手を握ってモンスターの集団へ向う。七体のオークと呼ばれる半獣人は斧や剣と言った様々な武器を所持して時には魔法も使うやっかいなやつ。
今の自分じゃどうやったって勝てるわけ無い。だから避ける事に徹底した。危ない時は無理にでも体で受けた。防御には残った鞘を使った。
それでも突破口は開けない。こいつら意外にＡＩが高い。少しず

つＨＰは減って黄色からとうとう赤へ突入する。
「スオウ！」
セツリの不安な声が耳に届く。僕は気丈に笑って見せた。
「大丈夫。絶対……なにが何でもセツリだけは逃がすよ」
そういった瞬間頬に攻撃を受けた。しまったＨＰが！　と思ったけどモンスターの攻撃じゃない？　だけど頬は熱くヒリヒリする。セツリを見ると怒っているような顔でその手は震えていた。……あっ。
「そんなの意味ないよ！　さっきの言葉は嘘なの？　私にだけは嘘は付かないで！　君だけは……スオウだけは私信じるから！」
また泣かせてしまった。本当に僕はだめだめだ。いつも口だけで安い言葉を並べて……いざとなったら全部押しつけていなくなればいいとか思っているのか。
そんな分けない！　それじゃダメなんだ。彼女がいるこの場所も僕にとってはもう一つのリアルなんだ！　一度だってもう彼女の目の前で死ぬことは許されない。
諦めない屈しない……そんな強い心が欲しい。今は錯覚でもいつか本当にそんな強さを手にする為に僕は口に出し続けよう。
「ごめん……僕……弱くてさ。だけどセツリが信じてくれるなら何度だって立ち上がる。諦めない事しか弱い僕には出来ないんだよね」
その時彼女は何か言ったような気がしたけど、その声は小さすぎて僕には聞こえなかった。その時きらめく剣が降りおろされる。僕はセツリを抱えて横っ飛びでそれを交わした。
もう後一撃でも食らえば僕は再び死ぬことに成るだろう。だけど……だからこそ彼女とモンスターの間に立つ。弱い僕には諦めない事しか出来ないから……諦めない強さを僕は既に知っているから……もう片方の鞘も抜いた。
あの時……昨日の悪魔との戦闘でＨＰが０に成ったとき、僕は諦めなかった。無我夢中で剣を振り続けた。だから僕達はもう一度出会えたんだ。

日は既に落ちていた。僕達の天井には月がある。その月光を浴びて前を見据えて僕は吠える。

「うおおおお！！」

視界が一瞬ぶれて僕は一番近くのオークの懐に居た。何が起きたかわからない。だけど考えてる暇も無い。両手に握った鞘をおもいっきり突き立ててそのオークの胸を叩く。その時、鞘だから当然突き刺さったりはしないけどだけど何故か赤いエフェクトが弾けオークは後方に吹き飛んだ。

その瞬間行けると思った。吹き飛んだオークの巻き添えに成っている奴らモロとも追撃する。なんだか嘘の様に頭が鮮明だった。

ＨＰがレッドゾーンなら体はダルくて一歩踏み出すのも辛い筈なのに今の僕の体は赤い湯気が立ち昇り普段より力強く、素早く動ける。

僕の体は霞んでいた。左右の鞘は動かす度に鋭さを増している。オーク共が振り切るより早く僕は動ける。だけどそれは剣技なんて呼べる美しい物じゃない。僕はただガムシャラに二つの鞘を振るっていた。

でもそれだけで事足りた。あまりの速さで左右の鞘で振りかぶる……その度にその場の気流は乱れ風を生み出す。その風は僕の鞘の動きを追う様に流れ次第にその場に小さな嵐が起きた状態に成っていた。

するともうオーク共は動く事も出来なく成っていた。そして次第に風は鋭さを増していき奴等の四肢を切り刻む。僕の鞘には白い風の唸りが長い尾を引いていた。

辺りを暴風の叫びが埋め尽くす。

「あああぁぁっぁ！」

力を振り絞り風の刃を叩き付ける。右手の鞘を左斜め上方へ、振り付いてきた白い風がオークを三体切り捨てた。それに合わせるように左腕の鞘を体の回転に合わせて地面を滑らせる様に滑空させて振り上げた。波打った白い風の刃は続けざまに四体のオークを切断

する。
僕の動きが止まると同時に嵐は過ぎ去った。舞い上がっていた草や木々の葉が地面に舞い戻ってくる。そんな草や葉は月光を受けて煌めいていた。
そしてその草の一本が地面に付いたと同時にシステムが気付いたように地面に倒れていたオーク七体の死体が青いオブジェクトと化し飛散した。
パリーン、と言う音が次々と響いた。その音を聞きながら自分に何が起こったのかを考えていた。だけど頭の中に答えはなかった。だからウインドウを開いて行く。あれはシステムのバグとも思えなかったからだ。
そして案の定見つけた。僕の空欄だらけのスキル欄に色違いで表示されているその名『乱舞』を。二刀流の固有スキルで発動条件はＨＰがレッドゾーンであること。
どうして乱舞が発現したのかは解らない。確かに言えることはこの戦闘の前までは僕のスキルにこんな物はなかったって事だ。だけど……僕は壁際で涙を流しているセツリに歩み寄った。そして手を伸ばす。
その手に重なった華奢な腕を掴めた。それだけで、目の前の彼女を守れたと言う事実だけで僕には十分だったんだ。
「どっちにしろ泣くんだな」
立ち上がったセツリの涙をすくいながら言った。指に伝わる頬の感触は柔らかく涙は次から次へと落ちてくる。セツリは僕のその腕を取ってポスン・・・と胸にオデコを付けるようにしてきて言った。
「君は……いつも危なっかしいんだよ！」
僕はそんな彼女の綺麗な頭を撫でながら笑った。また呼び方が「君」に戻った事を残念に思いながら。
アギト達が現れたのはそれから五分後の事だ。かなりモンスターが沸いたらしく激しくみんな消耗していた。こっちも同じ様な物だ

けど随分と迷惑をかけてしまったみたいだ。押しつけちゃったからね。
だけどみんな良い人で笑って許してくれた。それどころかちゃんとセツリが居ることを確認すると「いや～良かったよ」「よくやった」とそれぞれ言ってくれた。だけどアギトだけは
「突っ走るなよなこのバカが。パーテーじゃチームワークが大切なんだ。独断専行は御法度だ」
と言って小突かれた。だけどその後に「ま、セツリは無事みたいだしお前にしちゃ良くやったじゃん」と直ぐにいつものノリになった。
「本当に皆さんごめんなさい！」
そう言ってセツリが頭を下げるとなんだかみんな照れ笑い。みんながそれぞれの無事を確認して笑えた。これが仲間って物なんだと僕は思った。
取り合えずここは危ないから元の街に戻ることになった。仲間の一人が魔法を唱える。最初に宿屋の前で報告してきたエルフの人だ。どうやら彼はヒーラーらしい。回復や補助の魔法を使ってパーテーを支える役目を担う重要なポジションだ。
その人はかなり高位なヒーラーらしく全員を一気に転送できる呪文を今唱えてくれている。このＬＲＯの世界では魔法発動には連動した呪文の詠唱が必須だ。だから結構面倒。強力な魔法になるとそれだけ詠唱も長くなるから覚えるのも大変らしい。
だけどこの人はそんな長い呪文をスラスラと言っている。スゲ～。詠唱が終わると大きな魔法陣が僕達を包み込んだ。これでようやく安心だ。そう思った時だった。
「あれ？」
魔法を唱えたエルフの人の疑問符。それに全員が首を傾げた。それは今にも発動する筈だった転移魔法が突然キャンセルされたからだ。口々に上がる疑問の声。そんな状況の中、僕の背筋に悪寒が走った。

まるで背中にゴキブリでも落とされた様な嫌悪感と恐怖……これを僕は知っている。このフィールド……この時間帯……それに重なる物が一つある！

その時、闇から何かが飛び出して来た。そしてそれはセツリを掴み引き戻される。僕達の視線はセツリを追って背後へ。その時、僕達は恐怖で声一つ出せなかった。

闇に浮かんでいるのは羊の頭に大きな角、下半身は馬で片手には身の丈を越える巨大なメイス……それは紛れもなく昨日の悪魔だ！

悪魔に捕まれたセツリは悲痛な叫びを上げている。

「かっ……はぁ、あああああ！」

「セツリ！」

奴の手の中のセツリが黒い影に飲まれていく。何なんだ？　何なんだよあれは！　僕は走り出した。勝てない……勝てるはずはない。だけどもう諦めないと約束したんだ！

「返せよ！　そいつを離せ、クソ野郎ーーー！」

僕に続いて駆けて来る足跡が聞こえる。みんな戦おうとしてくれている。だけどそれをあざ笑うかの様に悪魔はメイス地面に突き刺した。その瞬間広がる魔法陣。

だけどそんな事無視して僕は走った。奴の手のセツリを救う……それだけしか考えてなかった。しかしなんだか異様に静かだ。後ろから聞こえていた筈のみんなの足音が一つ……また一つと少なくなっている？　その時アギトの声が響いた。

「しまった！　強制転移魔法だスオウ！」

その言葉を理解したときには抜いた鞘が奴に触れる寸前だった。だけどそれよりも早く僕の視界は消え去った。目の前に悪魔も居なければセツリの姿も見失った。

転送先は空の中だった。僕は今絶賛スカイダイビング中である。あんの悪魔め、次ぎ合ったら叩ききる。そう吠えながらもグングン地上は近づいて来る。だけど下は湖が広がってる。どうにかなるだ

ろうと僕はもうこの位の恐怖には動じなくなっていた。いや感覚がきっと麻痺していたんだ。
だから大音響を響かせて着水した後に湖で見た裸の女の子はきっと妖精さんだ。なんだか見覚えある顔だけどそういう事にして僕の意識は落ちていった。

たき火がはぜる音で気が付くと目の前には小さな二等身の生き物がうごめいていた。そして僕と目が合うと振り返り向こう側に居る誰かにそれを知らせている。
「お～いリルレット。こいつ目覚ましたよ」
そして向こうから「ホント？　良かったぁ」と言う声と共に駆け寄って来る十二・三歳ぐらいの少女の姿。なんだかさっき見た妖精に似てるな・・・うん？　リルレット？
焦点があって二人の顔を見て思い出した。昨日少しだけ知り合った二人組か。確かモブリの方はエイルといったはずだ。てか、じゃあさっき見たのは……僕はガバッと起き上がりすぐさま頭を下げた。
「ゴメン！」
その行為の意味を察したのかリルレットは顔を赤らめて「止めてください」と言った。だけどエイルは「殺そう」とか物騒な事を言っている。
だけどどうして二人がここに・・てかここはどこだ？　それは向こうも同じで情報交換をした。
「なるほど……スオウさん達はあのクエストを……そしてまた彼女さんを助けなくちゃ行けないんですね」
「まあそうだね」
「でも、武器もなしじゃ無理ですよ」
ごもっともです。僕はリルレットが箱から出したパンをカジりながら言った。
「だけどどうやって武器を調達しよう？　お店のは質が悪いってアギトが言ってたし。だけど鍛冶職人頼む程金なんてないし」

するとリルレットが指を立てて得意げに言った。
「ならまずは競売、オークションの品を見て回りましょう」
「お節介……」
ため息を付いたエイルの目は僕に明らかな敵意を向けていた。

心ある所（後書き）

五話目です。読んでくださった方はありがとうございます。お気軽に批評してください。

宣戦の儀（前書き）

僕は再開した二人組「エイル」と「リルレット」と共に行動を開始する。まずは無くした武器の調達だ。そうしないとセツリを助ける事なんて出来ない。初めて使う競売所で目に付いた武器は超高額！？

諦めかけた時、リルレット達の助言で職人との交渉へ。そして出された条件は好都合だった。

僕達は再びアギト達に合流して大パーテーを編成してあの悪魔に挑む。三度目の決戦の火蓋があがる。

宣戦の儀

僕とリルレットとエイルの三人は近くのエドッホ村と言う所に来ていた。長閑な田園風景が続く昔の日本その物だ。プレイヤーもそんなに居なくて僕達を入れても十数人位だ。ほとんどはＮＰＣで農業やってる。

そんな村唯一の雑貨店に入るとそこに並列して競売所が設置されてあった。競売所はこのＬＲＯの全部と共有されてるからどんなに離れた位置にいるプレイヤーが出品したものでも買える。ここは職人スキルを上げて居る人たちの収入源らしい。

「てかこんな事も知らずに何やってたんだよお前。死ねば」

なんて口の悪いモブリだ。外見の可愛らしさがなかったら踏みつぶしてるぞ。

「もうそんな事言っちゃだめだよ。エイルは本当に口が悪いよね。そんな口はこうしちゃうぞ。えいっ」

リルレットに口を引っ張られるエイル。

「いでででで、痛いよリルレット。だってこんなの常識じゃんか」

ごめんね常識知らずで。取り合えず画面をスクロールして金額と合った武器を探す。二刀流だから単純に武器の費用が二倍になるのかと思ったらちゃんと二刀用の武器も出品されていた。

「だけど、別に片手剣を両手に持ったっていいんですよ。それなら武器に付いたスキルが一気に二つもとれる訳だし。だけど二刀流専用武器にしか無いスキルもあると思いますけど」

そう改めて言われると悩むな。このＬＲＯは最初にスキル制だと言ったけどそれからさっぱりだったのでここらで補足説明を入れよう。

基本ＬＲＯの世界で技を発動したり自信を補助したり魔法を会得したりはレベルが上がって自然と覚える……なんて訳じゃなく、こ

の世界に無数にある武器や防具にいろんな技や魔法がスキルとして付いてるんだ。
それらは装備する事で使えるように成り、ある一定回数使い続け熟練度を上げるとマスターした事になり武器や防具を変えてもそのスキルは自在にスキルスロットに組み込んで使えるようになる。
要はそのスキルの多さが強さの証でもあるわけだ。アギト達はきっと数百に及ぶスキルをマスターしてるだろう。そしてそのスキルの組み合わせは無限大と言われている。
繋がり易い技があったり反発する物も合ったりしてそれは人それぞれでそれを追求していく事に多くのプレイヤーは魅了されてるんだ。
自身にしか出来ない技の連携……それを突き詰めるともう一歩先のエフェクトが発生して必殺技に出来るとか。だから熟練プレイヤーはみんな決めの一撃を持っているらしい。
僕のスキルはまだったった三つ。一つは乱舞で多分希少なレアスキルなんだろうけど使いどころがね……これって火事場のバカ力だし。こうやって見ると僕がアギト達と一緒にあんな悪魔を相手にしたことが信じられない。
こんなの素人の中の素人だよ。最初の街を出るときには最低でもスキルは十に達しているらしいからね。まあそれでも始めた期間が違う友達とも一緒に楽しめるのがレベルを無くしたスキル制の良いところ。
おかげで僕でもセツリを救える可能性があるんだからね。レベル制だったらレベル一の僕にお姫様を助ける役目なんて絶対に回ってこないだろうし。
「さっさと選べよ……てか死ねよ」
横から暴言を吐くちっちゃな影に言われて脳を再び画面に戻す。
値段とスキルの関連制が重要だ。
「これなんか良いんじゃないかな？」
そう言ってリルレットが指さしたのは値が張るけど二刀流に使え

そうなスキルが四つも付いている武器。名前は『シルフィング』青い刀身をした綺麗な剣だった。
「いやいや高過ぎだよ」
「う～ん、でもその悪魔ってかなり強いんだよね？　熟練プレイヤー十数人で行って手も足も出なかったんなら相当だよ。半端な武器なんて棒と同じだよ。折角このゲーム装備制限がないんだから最高の物にしようよ」
　それは確かにリルレットの言うとおりだけど……目の前に表示されている額は桁が違う。こんな額、おいそれと貯まる金額じゃ無い。悠長にやっている暇は無いんだ。
　確認したけどセツリは今もあの場所に居る。まさにとらわれのお姫様なんだ。なんであの悪魔がセツリを狙ってそして殺さずに居るのかは解らないけど彼女はきっと待っている。だから一刻も早くアギト達に合流して助け出したい。
　それには武器は絶対に必要だけど……ジレンマだ。
「だから死ねよ」
「なんだよさっきから死ね死ねウルサいな！　何かしたか僕？」
　流石にこれだけ言われたら切れるよ僕だって。すると二人の間にリルレットが入ってきた。
「まぁまぁまぁ、二人が仲良いのは分かったから。良し、じゃあ交渉しようよ！」
「交渉？」
　疑問符を浮かべる僕の横でリルレットは競売画面に乗り込んで来て何かを操作した。するとウインドウにキーボードが表示される。それをタイピングする。
　てかこの子近いよ。どっかリルレットも抜けてるよね。
後ろから突き刺さるエイルの視線が痛い。
【初めましてこんにちは。貴方の武器を購入したいのですが交渉の余地はありますでしょうか？】
　これはリルレットが打ちこんだ文章だ。すると直ぐに返信が来た。

【ない】
簡素だった。だけどこの程度でめげるリルレットではない。
【そこをなんとか！　貴方の剣に一人の少女の命が関わってるんです！】
【これはゲームだろう。しかし俺の作る武器は名級品だがな】
なんだ？　武器作りの腕をひけらかしたい奴なのか？　まあ他の大多数のプレイヤーにとってはここは仮想だってわかってるけど……。
僕はリルレットの横から手を伸ばしタイピングした。
【あんただってアンフェリティクエストの事は知ってるだろ！　全プレイヤーが協力して助けなきゃ行けない奴が居るんだよ！】
【そんなの攻略を目指す奴だけがやればいいことだ。ここは自由の世界だろう】
歯噛みする自分が居る。確かにこいつの言うことも尤もだ。このＬＲＯには攻略を目的としないプレイヤーだって多く居ると聞いていた。そんな人たちはここで「活きる」事を楽しんでいるんだ。
そんな人たちに取ってはクエストはさほど重要ではない。むしろ生活に影響するような強性的なクエストは嫌うだろう。
だけど……それじゃ……。
【それじゃああんたはなんで武器を作ってるんだよ！　その武器で何を示したいんだ！　ただ作るだけに満足するんならあんたは職人なんかじゃねぇしそんなの武器じゃなくてアンティークだろ！　示してやるって言ってんだ！　あんたの武器を武器として！】
直ぐに来ていた返信が止まった。やばい……思わず訳の分からないことを書いて送ってしまったぞ。だけどしばらく画面を見てると返信が来た。
【別に出品してるんだからあんたじゃ無くても誰かが武器として使うだろ】
あ……確かにそうだね。これは交渉失敗だ。そう思ったとき
【だけど、あんた面白いな。職人じゃない？　そんなこと言われた

のは初めてだよ。そこまで言うって事は俺の武器を華麗に使ってくれるんだよな？】
む……どうする？　ここで実は僕はまだ三つしかスキルを拾得してないド素人なんて事がばれたらやばい。
【勿論だ！　あんたの剣が華麗に舞う様を見せてやるよ】
思わずそう書いてしまった僕。
【なら、その証拠を見せて貰おうか】
当然そうなるよね。
【俺の武器を使ってどっかのハイクラスモンスターと戦闘でもして貰おうか】
ん？　それって使えるぞ。僕の脳裏に次々と道筋が出来る。近くで不安げにしていたリルレットに耳打ちして作戦を知らせる。上手く行けば今日中にセツリを助けられるかも知れない。
【分かった。ハイクラスモンスターの心当たりはあるから場所はこっちで指定するけど良いよな？】
【オーケーだ。お前の顔拝みたいし、自分の武器をどう使うのか見せて貰おうか】
【腰抜かせてやるよ】
違う意味で。よし奴は乗った。僕はリルレットの方を見る。すると満面の笑みで親指を立てる。良し！　鍛冶屋に落ち合う場所を教えて僕たちは競売所を後にした。
「どういう事だよ」
外に出るとエイルが不満顔で聞いてきた。僕は簡単に作戦をはなした。
「つまりあの鍛冶屋は一回自分の武器を使った戦闘を見たいと言ったからその一回の戦闘をセツリ救出に使う事にした」
ほら簡単。なんて単純明快。だけどそれを聞いたエイルは呆れたような顔している。
「お前最低だな。それって詐欺だろ。お前の目的だけ果たしてるじゃん。死ねよ」

死ねよはこいつの口癖なんだろうか？　直した方がいいよ。まあ確かに卑怯なやり方だ。だけど手をこまねいてる訳にも行かないんだ。だって彼女の命は僕たちとは違う。あのライフポイントはそのまま彼女の命その物。

悪魔が気が変わってあの腕で今にも潰さないとも分からない。そうなったら後は後悔しか残らない。自己中な考え方かも知れないけど……後で一杯謝るから、今は彼女の元に急ぎたかった。

「よし、飛ぼうか。エイル！」

リルレットのかけ声にヤレヤレとエイルが杖を構えて詠唱に入る。彼もヒーラーなのかと思ったらソーサラーと言う攻撃徳化型の魔法使いだそうだ。だけど広い割に移動手段が乏しいＬＲＯ内において便利な魔法は拾得するようにしているとか。良い心がけだ。

おかげでフィールドを何時間もかけて走らなくてすむんだからね。

エイルが指定する街はあのフィールドに近い僕とアギト達が合流した街だ。だけどエイル達は行ったこと無かったから僕の情報を移す事でそれを解決。パーテーにすればそれぞれの情報が共有できる。勿論ある程度だけど。

詠唱が終わり地面に浮かぶ魔法陣が僕達を包む。その様にちょっとだけあの時の事を思い出してゾクリとするけど今度はちゃんと発動して僕達はエドッホ村から飛んだ。

ここも街と言うには少し小さいけどエドッホと比べると比に成らない。街の名前は『トマート』旅の行商人が通り発展した街と言うことだ。

今更だけど二人はなんであんな田舎の村にいたんだろう？　てか一緒に付いてきたけど良かったのか？

「ああ、うん良いよ。もう用事は済んでたし。クエストのアイテム取りに行ってたんだ」

成る程ね。クエストなんて最初の奴しかやってないよ。そういえばクエストでしか手に入らないスキルもあるらしいから蔑ろには出

来ないんだけど・・・今はより重要な事がある。
　そういえばさっきから目の前をちょこちょこ歩いてるエイルは一言も発しない。タクシー代わりにしたこと怒っているのだろうか？
「なんだよ。ジロジロ見るな。死ねよ」
　こいつは……本当にムカつくな。
「あはは、エイルが進んで言葉を発するなんて珍しいんだよ。やっぱり仲良しなんだね」
　隣のリルレットがそんな事を言うとエイルはもの凄い形相で反論してた。なんだ、その毒舌は照れ隠しなのか？
　だけどもうちょっと言葉は選んだ方がいいよ。
「うるせぇ！」
　おわ、矛先がこっちにきた。
　そんな感じでやかましく歩いてると待ち合わせの場所に付いていた。そこはこの街の中央広場で中心には荷台を押した行商人の銅像がある。根っからの商業の街なんだろう。
　そしてそこには二十人位の人がたむろっていた。その中には見慣れた赤毛に長い耳のアギトの姿がある。
「お～い！」
　その声に気付いたアギトが人垣をかき分けてこっちにきた。
「ようスオウ、無事だったか……ってあれ？　君たちって確か……」
「はい、リルレットです。あの時は大きな羊から守ってくださってありがとうございます」
　リルレットはなんて良い子何だろう。それに比べてエイルは今度はアギトにガン飛ばしてる。だけどそんな事気にした風も無くアギトは手を一回叩いて大きく笑った。
「ああ！　いやいやそんなの当たり前だよ。君達がスオウを助けてくれたんだからおあいこだよ」
　そういって爽やかに手を握るアギト。こいつやることが無駄にかっこいいな。そんなアギトを見てエイルは自身の髪を逆立ててワナワナ震えている。

ＬＲＯが感情表現豊かで良かった。面白い絵図等だ。
「所であの人達は？　協力者？」
僕の質問にアギトは頷いた。
「ああ、みんな仲間だよ。一緒に激戦を戦い抜いて来た戦友だ。流石にあの悪魔にはこれくらいの人数は必要だろう」
熟練プレイヤーのアギトがそう判断したんならそうだろう。てかどれだけ顔広いんだこいつ。友達ながらこの人数を集められるアギトの事をすごいと思う。僕には無理だなきっと。
その時広場の出口に人影が見えた。
「うお！　なんだこれ！？」
黒ずくめの服装がいかにも怪しい奴だ。だけど彼は集まっている人達の武器を目にするなり飛びついて行った。
「こここれは、アイセリム！　こっちのはブリュフィン・スクライムじゃないか！　なんだここは宝の山か！」
明らかな異常者だった。すると横にいたリルレットがささやいた。
「あの人が鍛冶屋の人じゃないんですか？」
「まさか……あんな変人とは関わりたくないよ。きっと彼はコレクターなんだよ。武器の収集が趣味だな」
首を捻る彼女はトコトコと黒ずくめの人物に近づいて聞いた。
「あの、貴方がシルフィングの鍛冶屋さんですか？」
「いかにも」
にっこり手を振るリルレットには悪いけど行きたくないよ。そう思っていたらこっちに来た。
「貴様が暴言を吐いた犯人か。周りの人達に比べたら随分弱そうだな」
グサグサトと刺さる事を言うじゃないか。近くで見て分かったけどこの黒ずくめ「スレイプル」と言う種族か。顔に刻んだ模様が特徴的な種族で特有のスキルを使い物作りが得意なんだ。
だけどその代わりに戦闘はきつく成るから全体でかなりこの種族は少ないと聞いた。座ったような目で人を見る奴だ。試し切りとい

って近くの人を切りそうな感じ。だけど顔は美声年風なのはまあゲームだからね。
「別にいいだろ。これはスキル制のゲームなんだから実力は腕次第」
大きくはったりをかます僕。ここで武器を受け取らないと僕は戦力外になってしまう。
「それならお前のスキルを確認させろ。腕次第は同感だが、ただの初心者に俺の武器は貸さない」
うう……結構マトモなこと言うじゃないか。スキルを見たら一発で僕がド素人だと分かる。まあ防具とかでも分かるけど。だけどここで見せない訳にも行かない。
僕は自分のウインドウを開けて可視モードにして鍛冶屋に向けた。そこにはたった三つのスキルしかない。武器も無い、惨めなウインドウだけがある。
「プッ」
そんな声が聞こえた。それはエイルの笑い声。自重しろよオイ！
そしてそのウインドウを見てた鍛冶屋もため息混じりの声を出す。
「本当に……これじゃ素人以下じゃないか」
だけどその時顔を覗かせたアギトが言った。
「おい、この乱舞ってなんだよスオウ」
「ああ、それはなんだか知らない間にあった」
僕の言葉を聞いた後にアギトはポツリといった。
「これって『エンシャントスキル』じゃないか？」
その言葉に周りの熟練プレイヤーの人達が目を輝かせて僕のウインドウをのぞき込む。そして次々に「ほほー」とか「これがあの……」とか言っている。
「何なんだよ一体それは？」
「エンシャントスキルってのは特別なスキルなんだ。発現条件も解らないし武器から得られる物じゃない。このＬＲＯ内にいるプレイヤーの中でも片手で数える位しかいないんだよ」
そんなものが何で初心者の僕に？　と言っても誰も答える事は出

来ないんだろう。
「噂では一つの武器の系統で一人にランダムでエンシャントスキルが与えられるって言われてたけど……それはちょっとあり得ないと思うし」
確かにそれだけ重要なスキルを運だけで与えるのはおかしいだろう。でも他に僕にこのスキルが与えられた理由なんて思いつかないけど。
すると黙って乱舞を見ていた鍛冶屋が言った。
「面白い。ただのー初心者では無い様だな。エンシャントスキル……それは一度拝んで見たかった」
僕は目の前の黒ずくめの男を見やる。
「それじゃ！？」
ウインドウを開き操作して剣を実体化。そしてそれは僕の手の中に。鍛冶屋は片目を瞑って言った。
「ああ、俺の剣でエンシャントスキルを爆発させろ」
僕は青光する二対の剣を受け取り早速装備欄につける。腰にその重さが伝わってきた。これが『シルフィング』の重さ・・・柄に手を置いて刀身を抜く。太陽に晒されて輝くその姿に誰もが見とれた。
「ありがとう」
素直なお礼の言葉だ。
「貸すだけだからな。折るなよ」
「わかってるって」
武器を手にした僕は今すぐにでも駆け出したい気分だ。だってこれで戦える。だけどそれはグッと我慢。アギトには作戦とか色々あるんだ。
それに二十人位の大部隊だ。作戦は必須だろう。そしてここに着て鍛冶屋が疑問を口にした。
「所でこれだけの大部隊で何倒しに行くんだ？」
その言葉にアレを知っている人達は一瞬口を噤む。思い出すだけで鳥肌が立つんだ。だけど僕は気軽に言ってやった。だって僕には

助け出したセツリの姿しか見えないから。鍛冶屋を見て軽く口を動かした。
「悪魔だよ」
僕達は再びあの場所に来た。昨日何も出来なかったあの場所だ。その中央にはセツリが黒い影に縛られて十字架の様に掲げられていた。
悪魔の姿は見えないけどあからさまだ。近づいたらきっと奴はでてくる。僕達は日が暮れるのを待つ。夜にしか奴の目撃情報はないんだ。だから倒すなら夜しかない。
黄昏色の光がセツリを照らす。それも次第に斜めに消えていき空は黒ずんで行く。
そして完全に太陽が隠れ空には星が瞬く時になった。今夜は新月で空に月はなかった。それが暗闇の濃さを増しているように感じる。
みんなが息を潜めている。みんなが既に見えない緊張感を感じていた。その時、隣のアギトが手を挙げた。それは宣戦布告の合図。
後ろで魔法組の詠唱が始まった。その中にはエイルの姿もある。そして僕の後ろにはリルレットの姿も……二人には街にいてもらおうと思ったけどどうしても参加させてくれと頭を下げられたんだ。
そしてリルレットが行くならとエイルも当然という風に参加が決まった。鍛冶屋も特殊なスキルで参加している。
なんだかいろんな人達を巻き込んでしまった。協力してくれるみんなの為にも負けるわけには行かない。
「開戦の狼煙を上げる看板は僕の役目だーー！」
そう叫んでエイルの前方から炎の玉が放たれた。その砲撃はセツリを避けて壁に当たり石を焼く。そして目覚めたようにお出ましだ。
黒い影からあの悪魔の赤い四つの目が煌めく。僕達は一斉に武器を握りしめ駆けだした。冷たい空気が死を感じさせる気がした。
だけどそんな感じを振り切るように僕は地面を更に強く蹴る。
三度目の決戦……夜の闇に無数の声が響いていた。

「続く」

宣戦の儀（後書き）

どうも読んでくださっている方々ありがとうございます。そろそろ毎日更新はきつい事に気付いてるけど頑張ります。それだけが取り柄だから！

決戦　～流星の夜～（前書き）

僕達は悪魔に対峙する。準備は万全。人数も十分なはずだ。だけどそれでも、悪魔は反則的に強い。僕達の心に恐怖を植え付ける奴の強さは圧倒的だった。

だけどそれでも僕達はそれぞれに勇気を宿し剣を振るう。その思いは繋がり僕達は最高のチェーンを紡ぎだす。けれどこの時僕達は気付いてなかくて見抜けなった。目の前の事を余りにリアルに捉えていたから……。

決戦　～流星の夜～

新月の夜、黒い悪魔が叫んだ。その凄まじい声に僕らの足は止まり続いて誰かが言った。

「不味い！　今の叫びただの牽制じゃない。付加した補助魔法を打ち消してる！」

その声を聞いて僕達はウインドウを開く。確かにＨＰバーの横に表示されていた筈の赤と青と緑の玉が消えている。それはそれぞれ攻撃力・防御力・素早さを魔法によって底上げしていた印だ。

開戦前にヒーラーの人達が掛けてくれたのに一線を入れる前に無駄になった。このＬＲＯのゲームにマジックポイントは無いからＭＰが無駄になることは無いけど掛け直すのは難しい。

魔法スキルにはそれぞれ有効範囲が設定されている。一番射程が長いのが基本攻撃魔法、その次に回復、そしてプレイヤーをサポートする補助魔法となっている。

だけど攻撃魔法や回復魔法は対象との距離でその効果に補正が入るから離れすぎるのは良くないって事もある。だけど基本この二つは敵の攻撃が届かない場所から役割をこなせる。

あんまり連続で回復や強力な魔法を連発してると敵のターゲットがそっちに向いたりするからそこには注意が必要だ。

だけど補助魔法は一回掛ければ術者とどれだけ距離が離れても一定時間までは絶えずプレイヤーを支えてくれる。その代わりに掛けるときはかなり近くに行かなきゃいけない。ＰＴ全員に掛け直すならみんながその人の周りに集まらなきゃ一度に掛け直す事は無理だ。

それに補助魔法は意外と詠唱が長いのも難点だ。前衛が一カ所に集まってたらいい的になる。詠唱が終わるまでモンスターが待ってくれる訳はないんだから。

みんな戸惑っていた。高位の補助魔法の効果はかなり高い……そ

れを無くしてあの悪魔に挑むのは自殺行為ではないか？　そんな顔をして近くの人と不安な顔を見合わせている。
後方のヒーラー組もどうしようか戸惑っているみたいだ。だけどそんな混乱を余所に悪魔はその巨大なメイス振り上げた。
「ヒッ！」
誰かのそんな声がした。不味い……このままじゃ何も出来ずに総崩れするかも知れない。人の恐怖は伝染する。それは多ければ多いほどだ！
僕は前衛陣から飛び出した。その時隣に全く同じタイミングで出てきた奴と目があった。それだけで互いの考えはを理解した。それだけ僕達の仲は深い。
二人は互いに上方へ武器を凪ぐ。そこへ振り卸された悪魔のメイスがぶつかり激しい音と火花が散った。凄まじい衝撃が腕を走る。
「「うおおおおお！」」
だけど競り勝ったのは僕達だった。完全にシンクロしていた剣劇は悪魔のメイスを弾き返している。一人ではきっと潰されていただろう……でも、二人なら……僕は親友に目をやった。
アギトは二カッと爽やかに笑う。本当にこいつは最高の親友だと思った。

悪魔は武器を弾かれてよろめいている。今が体勢を立て直すチャンス。そう感じたアギトは素早く指示を飛ばす。「よし、前衛の半分はヒーラーの元で補助魔法を掛け直してきてくれ。それまで残りの半分で奴を足止めしておく！　取り合えず全員が補助を受けれるまでは死なない様に戦えよ。アタックは最小限に、ただしターゲットを後ろに移すなよ！」
その言葉でみんなが息を吹き返したように動き出す。
「了解」「はい」「よっしゃ～！」などの声が次々に耳に届く。
さて、戦いはここからだ。僕は気を取り直して目の前の悪魔に向き直る。もう殆体勢を整えている悪魔は後少しで第二撃を放つだろ

う。
僕はゴクリと唾を飲み、柄を強く握りしめた。その時後ろから襟首を捕まれて後方に引き戻された。
「なにすんだよ！」
それは当然アギトの仕業だ。
「お前は前半組だ。武器は良くなったって装備はショボいんだからな。だからさっさと掛け直してこい。お姫様を助け出しても王子様が居ないんじゃお姫様は幸せには成れないだろ？」
そういって前方のセツリを見やるアギト。僕も視線を追って黒い影に縛られた彼女の姿を見つめた。
「大丈夫だよ。信じろ、俺達はお前の百倍強い。必ずお前達が戻るまで支えるさ」
アギトの差し出して来た拳に僕は自分の拳を当てた。そしてその余裕ぶった顔に言ってやる。
「当然だ」
僕は武器を鞘に納めヒーラーの元へ駆けだした。

後方へ戻ると既に詠唱は始まっていた。僕は急いで輪の仲に加わる。五人居るヒーラーの三人で一気に外された補助魔法を掛けてその間に残りの二人は前線の人達の回復役をやっている。
その更に後方には攻撃魔法を唱えるソーサラーの人達四人。その仲のちっこいモブリと目があった。エイルだ。エイルは詠唱を破棄してトコトコ僕の元へ。おい、いいのかよ。
「別に大丈夫さ。今はあんまり強力なの打てないし。チマチマするなら同じだよ」
まあ確かに今の状況で強力な魔法で悪魔を釣ってしまう危険は犯せない。だからみんな派手じゃない魔法を打っているのか。
ん？　いつもの毒舌は？　口癖の「死ねば」が出ない事に驚愕だ。
「うるさい！　この状況でそんな事言えるか、縁起でもない。それに僕はお前に……お礼をだな」

なんだって？　最後の方は良く聞き取れなかったぞ小声過ぎて。
「なんだよハッキリしないな。エイルらしくないぞ」
そんな僕の言葉にエイルは不本意極まり無いという感じで言った。
「ああ、もう！　そもそも巻き込んだのはお前何だからリルレットの事ちゃんと守れよ！　リルレットが殺されたら承知しないからな！」
エイルはプンスカと怒りながら元の場所の戻っていく。
リルレットか……僕は周りを見回した。彼女も今集まってる中では強いとは言えない。だからきっと前半組の筈だけど。
その時一際小さな背中を少し前の方に見つけた。ウナジの所で二カ所小さく結んでいる髪型はリルレットだ。僕は声を掛け様として気づいた。リルレットの肩はふるえている。彼女にはあの一瞬で悪魔に対する恐怖が植え付けられたのかも知れない。
両腕を前で組んで震えを抑え様としてるのだろう。そのせいでただでさえ小さな背中は更に小さく見える。
僕は迷ったあげくリルレットの肩に手をおいた。その瞬間ビクッと震えて彼女は振り返る。その顔はビックリする位青ざめていた。
「スオウさん……私……怖かった。今までだって……何回か戦闘不能になったけど……笑いながら『やっちゃった』位だったのに……さっきのは全然ちがくて……本当に……死んじゃうって……思った。なんでかな？　頭ではゲームって……解ってるのに」
彼女の弱々しい声を聞く度に後悔がこみ上げる。リルレットには早かったんだ。幾らゲームだからって本能の恐怖は抑えられない。
目の前に圧倒的に強い敵が居て、それは異形の化け物なんだ。誰だって怖がる。怖がらない訳がない。そこら辺にいる雑魚にだって最初は恐怖を覚えるんだ。
それがボスクラスのモンスターともなれば受ける恐怖は計り知れない。本当は徐々にクエストをクリアしていく内にそれにも慣れるのだろうけどリルレットはまだそれだけのクエストをこなしてない。
それに彼女は女の子だ。実際は解らないけど、今までの印象では

正真正銘の女の子だと感じてる。それも年もみた目通り位だろう。
そんな子には刺激が強すぎたんだ。
「怖いのなら戦闘に参加することない。元々僕が付き合わせたみたいなもんだしさ。ここに居れば安全だから」
僕は彼女の肩を強く抱いて優しく言った。彼女が少しでも安心出きるように。
「でも・・言い出したの私です。怖いけど……こんな所で投げ出したくありません」
少しだけ彼女の目に光が戻った気がした。
「だけど、無理する事なんて……」
僕はそれでも彼女の参戦はやっぱり止めて欲しい。怯えた女の子を戦場に戻らせるなんて……。
「スオウさんも……戻るんですよね？」
「それは……勿論だよ。僕がみんなを巻き込んでるんだ」
そうだ。僕には戦場に戻る責任がある。だけど君にはそんなものないんだ、と伝えたい。だから止めたからって誰も責めたりしない。
「でも、スオウさん私より弱いじゃないですか！」
あれ？　なにかが心に刺さったぞ。新手のスキル攻撃か？
「それなのに全然逃げない。さっきだって折れ掛けた私の心、支えてくれました」
さっき？　メイスを弾いた事かな？　でもあれはアギトが居て力を合わせたから出来た事だ。
「この中で絶対に最弱なスオウさんが何かしてくれる気がするんです。そしてそれなら私にだって何かが出来るんじゃないかって思えるんです。
でも今逃げちゃったらこんな気持ちと二度と出会えない気がします。私の腰の剣だって飾りじゃないんです！」
彼女は腰に掛かる刀身が極端に細い剣に手を伸ばす。そして思いを伝えるみたいにその柄を握りしめた。
「ごめんなさい……偉そうな事言っちゃいました。だけどスオウさ

んと話してる内に心が整理出来て感情が出て来ちゃいました」
そう言って笑ったリルレットの顔はまだ少し強ばっていたけど生気は戻っていつもの彼女雰囲気が出ていた。
強い子だなと僕は思った。こんな彼女に隅で震えていろと言った自分が恥ずかしい。
僕は肩に置いていた手を彼女の頭に持っていきクシャクシャした。
「分かったよ。頼りにしてるよ先輩」
リルレットは頬を染めて照れる様に言った。
「分かったのならよろしい。先輩をこれかも頼りにしなさい後輩君」
それは僕に小さな先輩が出来た瞬間だった。

メイスの風圧で前衛の一人が壁に叩きつけられる。その衝撃でHPが尽きその人はオブジェクト化し飛散した。
「これで四人目……くそ！」
全員に補助魔法を掛け終わり、万全の体勢で戦闘する事十分位で既に四人のプレイヤーが戦闘不能になっていた。幾ら高位の補助魔法と言ってもそれだけで大幅に敵の攻撃を防げる訳じゃない。
アギト達なら七回はその攻撃に耐えられるけど僕の場合はそれが二回。直撃なら一撃でやられそうなのは結局変わってない。
それでも僕が他の熟練プレイヤーを押し退けて生き残る事が出来ているのはシルフィングについていたスキルのお陰だ。四つ付いていたスキルの中の三つは二刀流の攻撃スキルだったけど後一つが違った。
それは「残影」といって一度だけ確実に攻撃回避が約束されていた。自身の残った影を切らせるスキル。分身してるみたいな物だ。
お陰で絶対に回避出来ない防御も間に合わない時に重宝する。再使用に一分掛かるのは長いけど。このスキルは貴重だった。
でもこのままじゃじり貧は見えていた。ヒーラーの一人を蘇生専用に回したけど全然回ってない。三人では複数受けるダメージに対処出来なんだ。

せめて奴の攻撃を受けるか弾ける奴をその専用にして攻撃を一手に引き受けて貰わないと追いつかない。一人か二人ならコマメに回復出来る筈だ。

だけどそれはとてもリスクが高い。その役目を負う人は自分の命を削られていく恐怖を味わいそれとも戦わなくちゃいけないだろう。それにみんなの命を背負う事にもなる。

そんな風に考えていると続いて二人が消えていく。その時一人が蘇生したけどこれじゃマイナス一だ。それに蘇生魔法はターゲットを集めやすい。ほら悪魔がヒーラーの人に歩み寄る。

「うわあぁぁぁ！」

そんな悲鳴を上げるヒーラーに僕は駆け寄る。一人でもヒーラーが欠ければ途端に瓦解する。それだけ重要なんだ。みんながヒーラーを守ろうと駆け寄ってきた。でも間に合いそうなのは僕と……反対から来ているアギトだけ。

僕たちは互いを見て下ろされたメイスとヒーラーの間に体を滑り込ませた。

赤い火花と青い火花が同時にはぜ轟く金属の衝突音。だけど今度は弾けない。二人ともかなりの疲労が溜まっている。だけど押し切らせる訳にも行かない。

ヒーラーの人は腰が抜けたように悪魔を見上げていて動けそうもない。ギチギチと音を立てて僕たちの武器は体に近づいてくる。

もう少し……後少しなんだ。僕は同じようにメイスを受け止めているアギトに言った。

「少しの間頼む！」

「は？　おいって――ぐおぉぉぉ！」

情けない声を上げているアギトには悪いけど今は絶好のアタックチャンスだ。僕は復活したスキル残影を発動して自分から奴の武器に突撃した。

だけど残影の効果で攻撃無効化を果たした僕はそのまますり抜ける様にメイスの上に立つ。奴の巨体はそこに無防備に晒されていた。

僕はメイスを蹴り奴の腕づたいに駆け上がる。そして奴の鼻面に二本の斬撃を可能な限り叩き込んだ。初めて響いた奴の悲鳴に聞こえる叫び。悪魔は後方へ倒れた。

これ以上無いチャンスだった。この場の全員がこのチャンスを望んでいた。誰もが武器を構え悪魔に迫り怒濤のラッシュを駆ける。

次々と弾けるアタックエフェクトが闇を次第に照らして行く。それは留まることを知らないかの様に次々とスピードを増していく。

そしてそのエフェクトは次第に統一性を持って数を刻んでいた。これはチェーンアタックだ。スキルを連続して決めることで発動するボーナスアタック。これは数を増す度にその破壊力は増していくし貰えるアイテムやお金に影響するんだ。

だから敵を倒す時はなるべく狙って行きたい技術。基本は十を越えるのも難しいと言われているけど今は有に二十を越えていた。エフェクトもそれに合わせて派手になっている。時折挟まる魔法も相まってその威力はスゴい事になっていく。

悪魔の断末魔の叫びが夜空に響く。だけど五十を越えたあたりからおかしいと気づいていた。何故なら悪魔のＨＰバーは減っていない。ある一定のラインから幾ら攻撃を入れても減らないんだ。

ここに来て無敵設定の敵とか言う気か？　みんなの不安は次第にチェーンに現れる。このままじゃ不味いと僕は伝家の宝刀「乱舞」を発動した。

一気にチェーンの回数を一人で稼ぐ。風を生み出しての斬撃は直ぐに百の壁に到達した。凄まじい光と共に悪魔の体は爆散する。それはきっとチェーンボーナスの一種だろう。

誰もが勝利を確信した。だって弾け飛んだんだから。だけどその時名残の煙から黒い腕が飛び出してプレイヤーの一人を掴みあげた。

「うあぁぁぁぁ」

悲鳴と共にその人は奴の手の中でつぶされた。そして表すその巨体にみんなが絶望した。やはりＨＰは途中で止まったまま減ってない。

絶望のままに僕らは再び悪魔と退治する。どうやったら倒せるのか、そもそも倒すことは可能なのかも分からない敵の攻撃を凌ぐのはただただ苦痛でしかなかった。

また一人……また一人と、退場していく。

「もうダメだ」「撤退しよう」そんな声が次々に上がる。それは抑えようも無い事だった。

だけど僕は……僕だけはそんなこと言えない。言えるはずが無い。僕はもう諦めないと彼女に誓った。必ずあるはずだ。何か見落としてる物が。奴の体じゃ無いとしたらこのフィールドのどこかにその仕掛けかあるのかも知れない。

だけど見回しても怪しい物なんて無い。草木に石ころとかだ。その時また誰かの悲鳴が上がった。もう何人死んだかも分からない。僕達は壊滅寸前だった。

それでも辺りに目を這わせて探して探して探しまくった。だけど何も変わらない。強いて言えばセツリのＨＰが減ってるくらい……ん？

僕はカーソルを黒い影に縛られたセツリに合わせた。そしてウインドウで彼女を確認して愕然とした。

「なっ……これって……」

それはフルダイブゲームならではの盲点だ。目の前の事をリアルと同じように全てに捕らえていた。だけどそれが大きな間違いだったんだ。

僕のウインドウに表示されている彼女の名前は『アンノウン』つまり正体不明。彼女を知っている僕に限って有り得ない事だ。そして悪魔と同じだけ減ったＨＰバー……全てが繋がった気がした。

「アギト！」

僕は前線で奮闘しているアギトの元に急ぐ。事情を全部話してる暇はない。だけど僕達ならこれだけで伝わる筈だ。

「話しかけるな！　今は少しでも時間を・・・」

「今直ぐ奴を突破したい！　奴の向こう側に行きたいんだ！」

よく考えれば悪魔は必ず一番セツリの近くに居た奴を狙っていた。大きく振り被る奴の攻撃もなるべく彼女から戦場を離すためだったんだ。
だけどそこに普通のターゲット指定が加わってカモフラージュされて解りにくくなっていた。
アギトは僕の目を見て直ぐに笑った。
「よっしゃぁ！　上手くやれよスオウ！」
そう言って二人で距離を取り平行して並ぶ。本当にこいつは最高の親友だ。こいつと出会えた事に今は本当に感謝する。
その時後ろから可愛い声がした。
「何かやるんですよね？　私も手伝います。何も言わなくて良いんです。上手く使ってください」
それはリルレットだった。戦闘の開始当初は震えて居たのになんだか凄く成長している。そしてその足下にも人影がある。
「リルレットは僕が守る。　だけどついでに魔法で補助位はしてやるよ。……死ぬなよな」
エイルの口からまさかそんな言葉が出るとは・・・これはどうあっても成功させるしかない。そして聞こえてくる多数の足音。僕達の後ろにはＰＴメンバーが集結していた。
その表情はさっきまでの怯えた様子は無い。彼らは僕達がやろうとしてる事なんて知らないのに、それでも戻ってきてくれた。彼らの心が力に変わって伝わるような気がする。
「最高の仲間だな」
僕はぽつりと呟いた。それが聞こえて居たのかアギトが続いて
「最高のダチだ」
といった。それに更に続いてリルレットがエイルを見ながら
「最高のパートナーだよ」
と言い更に続いてエイルが
「最高の気持ち……」
と言ったので全員で突っ込んだ。そして戦場を忘れる様な笑いが

響いて収まると同時に前を向いて走り出す。ある一定距離まで近づくと奴はメイスを横に凪いで来た。
やっぱりこいつはセツリを守る様に設定されている。実際はセツリじゃないけど。
僕はそのメイスを避けようとはしない。ただ真っ直ぐ彼女への最短距離を進む。その時出てきたリルレットと数人でメイスを上へはじき返した。だけど続いて悪魔は拳を突き出して来た。だけどそれはエイル含めたソーサラーの魔法で弾かれる。
だけど悪魔は彼女に近づく僕に標的を固定したままだ。確定だ。今度は悪魔の叫びが轟いた。補助魔法を打ち消した悪魔の叫びはどうやら硬直効果もあるらしい。道理で最初の勢いが削がれた訳だ。
だけど悪魔の叫びは途中で止まった。何故なら奴の口にアギトの武器が刺さったからだ。アギトは装備を変えて耳栓をしていたのだ。それも高級耳栓はボスクラスの効果も受け付けない。
そして僕は遂に悪魔の足下に潜り込んだ。悪魔は前方にみんなの力で固定されてる。後ろ足を抜けたとき最後の砦として残っていたのは尻尾だった。だけどそれを僕は無駄な動きで交わさず武器で受ける事を選ぶ。
そして狙い道理に僕のある程度回復されていたＨＰを削ってくれた。レッドゾーンに届く程に。僕は「乱舞」を発動して一気に加速する。悪魔がやっとで方向を変えてメイスを振るけどもう遅い。
乱舞を発動した僕に追いつける者は居ない！　そして僕は助けるべき存在に剣を向けた。二対の剣と無数の風が彼女を切り刻む。その時、悪魔の姿が崩れた。分かりやすい変化だ！
風を帯びた青い剣は流星の如く輝いて彼女のＨＰを削り去った。それと同時に悪魔は燃え尽き、僕達は今度こそ勝利を掴んだ。

決戦　～流星の夜～（後書き）

ここでなんとかこのクエストは半分位まで来たと思います。多分だけど。毎日キーワードを三つ上げてそれを入れながら書いてるのでどうなるかはキーワード次第ですね。

読んでくださっている方はありがとうございます。頑張ります。着地点目指して。

見つめる今（前書き）

あの悪魔との一戦から既に三日が経っていた。僕達は試合に勝って勝負に負けたんだ。そんな気持ちで束の間の日常に身を委ねていた僕はこれも大切な事だと感じていた。

だけどいつまでも負けたままではいられない。僕は再び彼女の眠る病院へ。そこで居合わせたＬＲＯの開発者の人とギーガスクエアへ。そこで見せて貰った当夜さんのパソコン。そこで見つけた隠しファイル。刻まれたファイル名は『命改変プログラム』

それはもしかしたら最大級のキーワードなのかもしれない。

見つめる今

僕は走る。走って走ってようやく沢山の人達の力を借りて僕は彼女の腕を掴むことが出来た。そう……出来たと思った。だけど彼女は僕の腕に捕まる事は無かった。

掴んだと思った瞬間、彼女の細い腕は欠片となり消えていく。僕はその様子をただ見つめている事しか出来なかった。空に消えた彼女を捜したけどもうその姿を捉えることも出来ず僕は膝を付き地面を見つめた。

その時、後ろから声がした。

「何をそんなに落ち込んでいるんだい？」

僕はその声の主に振り返る事無く答える。

「自分が……情けないんですよ。沢山の人に助けて貰ったのに……僕は結局、助けたい人を助けられなくて……見失って……もうどうしていいのか分からない」

空気を吐き出す機械の音と、キーボードを叩く様な音だけが響いている。僕はなんだか振り返らなくちゃいけない気がしたけど何故か首が回らない。

その時、再びその人の言葉が続く。

「なら、諦めればいい。誰も君を責めたりしない」

僕は真っ白な地面を見つめる。それは一番言われたく無いことだ。

「そんなこと……」

僕はなんて続けようとしたのかな？　次のその人の言葉が衝撃的で僕の言葉は続かなかったんだ。

「それにあの子は……救われたいだなんて実は思ってないんだよ」

「あれ？」

目覚めるとそこに写るのは十六年間僕の上に広がる天井だ。いつの間に寝ていたのだろうか……僕は頭に着けたままのゲーム機を取

り外す。
そう言えばアギト達からのメールを確認していたんだ。するとなんだか眠くなってあの変な夢を見たのか。最近ゲーム機をしたまま眠ると変な夢を僕は見ている。
その夢に出てくるのは二人で僕といつもキーボードを叩いている人だ。その人は時には背中で、時には後ろから僕に話しかけてくる。だから声でけで顔は見たこと無い。
だけど何となく……その正体に僕は感づいている。あれはきっと……そう考えていると家にチャイムの音がビクッとするくらい響いた。もうちょと優しい音にしてほしい。
僕はゲーム機をベットに置いて部屋を後にする。静かな家の中を通り過ぎ玄関へ。ドアを開くとそこにいたのは長身でそれなりにガタイもいい秋徒＝アギトだった。
もちろんリアルでは赤髪に耳長なわけじゃない。普通の高校生だ。だけどコイツが赤く染めたらそれなりにアギトと同じように見えるかも知れないとは思っている。
「よ、スオウ」
「戻ってたんだ秋徒。何か用？」
いつもと同じく気軽な挨拶する秋徒は僕の質問にあからさまに怒ったような口調になる。
「お前……メール見てないのかよ」
メール？　ああ確か見てたんだけど寝たから内容は殆ど頭に入って無かった。だってあの夢はいつも印象が強いんだよ。
「たく、取りあえず上がるぞ」
そう言って他人の家にドカドカ上がる秋徒。コイツといい日鞠といい、なんだか僕の家はそんなに侵入しやすいか。まあ、日鞠の場合は普通に合い鍵持ってる訳だけど。そう言えば今日はまだ見てない。珍しい。
それを秋徒も思ったのかこんな事言いやがった。
「お前、奥さんは？　実家にでも帰られたか？」

「奥さん言うな！　それに実家は隣だろ！」
毎日アイツは実家に帰ってるよ。奥さんとか外で言ってないよなコイツ？　秋徒は日鞠に懐柔されてるからな。なるべく家に近づかせたくない。友達なのに。
「殆ど夫婦のくせに何照れてんだよ。それにアイツいないと生きてけないだろお前」
なんて失礼な事を言う奴だ。確かに炊事洗濯家事全般アイツがやってるけど別に出来ない訳じゃない。僕がやる前に日鞠がやっちゃうから僕がアイツに依存してる様に見えるだけだ。
「ハイハイ、良いご身分だな。ミジンコ位の存在価値なのは認めてやるよ」
「そんなこと言って無いだろ！」
何がミジンコだ。こいつ本当に友達か？　ゲームの中での信頼を返せ。
「まあさ、俺が言いたいのはちゃんと日鞠の事も考えてやれって事だ」
なんだその意味深な発言は？
「どういう事だよ」
「お前、ＬＲＯで起きてる事言ってないだろ？　自分に起きてる事も」
リビングに入るドアの前。廊下で僕たちは向かい合う。
「言うわけ無いだろ。言ってどうなるんだよ。それこそ心配掛けるだけだし……下手すればアイツ取り上げるぞ」
日鞠は僕の事には過剰なんだ。だけどそれでも辞める訳には行かない事だ。
「だから、これ以上面倒掛けるなって事だよ」
そんな事言われるまでも無いことだ。これ以上世話されたら困る。色々と。プライヴァシーって大事なんだ。最近日鞠の行動がエスカレートしてるし。
今日も実はいないと見せかけてカメラとか仕込んでる可能性だっ

て……いや考え過ぎか。アイツだって一線はわきまえてるだろ。
ドアを開けてリビングに入る。そしてソファに向かう途中で秋徒が置かれて居たヌイグルミを倒した。
ガシャン……随分と重たそうな音がするヌイグルミだ。僕はそのヌイグルミを拾い上げて気づいた。目がボタンとかじゃ無い。これってカメラじゃんか！
「もう……遅かったか」
そんな事を呟いてる場合じゃねーよ秋徒。これは家中を捜索しないと安心できない。
駆け出そうとした僕をだけど秋徒が制す。
「まあまあ、そんなのそうそう見つかるわけないだろ。後から本人に聞けよ。それよりも本題だ」
そう言った秋徒の表情は真剣だった。

結果的な答えは収穫は余り無いとの事だった。あの悪魔との決戦から既に三日が経ち、だけど僕達はセツリを救えていなかった。
悪魔を倒しても彼女の姿は無くて……それと同時に全プレイヤーに支給されていた彼女の位置を知る事の出来るシステムは使えなくなっていた。
だけどみんなは探そうと言ってくれた。それはとても嬉しい事だった。そしてセツリの捜索に乗り出したんだけどその矢先僕は二回目の強制ログアウトを受けた。
それは開発者の人達の仕業だった。どうやら僕の仮想空間への意識浸透率がもうすぐ二百に達するとらしかった。だから答えを聞くために呼び戻した。
「僕は入り続けます。たとえ戻れなくなったとしても、このまま彼女を見捨てて忘れる事なんて出来ないから」
それが僕の答えだった。沢山の人達も協力してくれてる。今更僕だけが危険だからと降りれない。それにやっぱり彼女を求める僕が居る。

そして許可を得て再びログインしたときに怪しんでいたアギトに聞かれた。アギトも一回ログアウトして僕がどこから入ってるか調べたみたいだった。
だから隠す事は出来なかった。僕は全部を話した。自分がゲームから戻れなくなるかも知れないこと。
「お前バカか！」
と言われた。それは友達の事を本気で心配する顔だった。そんなアギトに僕は聞いた。
「アギトにとってＬＲＯって何？」
それにアギトは「ゲームだよ。何度だってやり直しが効いて仲間とワイワイやって楽しく過ごす為のただのゲームだ！」と言った。それが普通で、そうであるはずなんだけどね。
「僕にはもうただのゲームじゃないよ。ＬＲＯと言うゲームの中で僕は生きてる……そう感じるんだ。だから同じ様な彼女をほおっておけない」
もしかしたらもっと早くに初めて、普通に楽しめたのなら僕にもＬＲＯは最高のゲームになったのかも知れない。
だけど……僕はその時自身の腕を捲って見せた。それを見てアギトは何かをみんなに話して僕はなるべくログインしないようにしてくれた。
だから今はみんなの情報待ちの状態だ。そして秋徒からの話だとめぼしい物は無い。だけど一つだけ。あの悪魔を倒してから一気にクエストが溢れだしたらしい。だからこの中のどれかにアンフェリティクエストに関連したのがないか今検証中と言うことだ。
「気長な話だな」
「お前は入るなよ。俺たちが必ず見つけてやる。その時はお前の出番だ」
そう言ってアギトは立ち上がる。そして目線は僕の腕に。僕は服を捲って腕をヒラヒラ見せてやる。
「分かってるって。それに大丈夫だからさ。入らないよ信じてるか

らな。だからお前も僕を信じろ。もどかしくて溜まんないけどね」
「急ぐさ」
そう言って秋徒は僕の家を後にした。今はただ仲間を信じるしかない。ずっと心にある気持ち……もしかして彼女は……そんな不安を押し殺して。

正午過ぎ、結局日鞠は料理も作りにこなかったので外食ついでに病院に来ていた。都内でも有数の大病院。僕は前に来た道を通り慌ただしい病棟から離された部屋に入る。
そこにはあの日救えなかった彼女が初めて出会った時の寝顔のままに眠っている。その顔を見ると胸が痛い。どうして僕は助けられ無かったんだろう。
僕は近くの椅子を引き寄せて彼女の傍らに座った。そしてただ呆然と綺麗なその顔を見つめる。「生きてない私」最初に彼女に会った時そう自分の事を言っていた。
そして不意に彼女の隣に眠る人に目が行った。僕は誰に言って居るのかも分からない声を出す。
「救われる事を望んでいない……じゃあなんで……」
その時、ドアがスライドする音が聞こえて振り返る。そこにはどこかで見た顔があった。
「ああ、君も来ていたのかスオウ君」
ん？　向こうが知ってるって事は面識はあるんだろうけど名前が思い出せない。だけどなんだか聞きづらいしそこは触れないでおいた。
「ええ、だけどもう帰ります。彼女を見てると自分が情けなくなるんで」
そう言った僕を入ってきた人は追い越してセツリのお兄さん桜矢当夜さんのベットの前に行って伏せた瞳でこう言った。
「その台詞……良くコイツが言っていたよ。いつも丁度君と同じ位置に座っていたな。君たちはなんだか似てる」

その言葉になんだか惹かれた。だから僕もその人の隣に並んで当夜さんの顔を見る。この人は妹の所に行こうとしてこうなっている。その思いは届いたのだろうか？

「あの……どうして、当夜さんは……」

良く考えれば僕はこの人の事を知らない。彼女の兄で天才的な才能を持っていてフルダイブシステムとＬＲＯの基盤を作ったって事ぐらいしか。

どうしてこの人はこんな事をしたのだろうか？　どうしたかったんだろう。

隣の人からの答えは簡単だった。

「分からないんだ。発売日の前日だった。朝一に会社に来た同僚がこうなった彼を見つけた。パソコンに遺書めいた文章を残してね。『妹の所に行ってくる。プログラムの実行を祈る』そう書いてあったよ」

「プログラム？」

僕は一番引っかかった単語を口ずさんだ。

「それはきっとＬＲＯの実行プログラムじゃないかと思っているよ。あの事件で発売できるか危うい時があったんだ。」

そう言えばＬＲＯは半年位発売を延期している。だけどあの時はかなりフルダイブのゲームって事が話題で発売が中止なんて事はあり得なかったと思うけど……じゃあ一体に何のプログラムか。

思い当たるのはアンフェリティクエスト位だ。ＬＲＯ自体じゃなく一部のプログラムの実行。このプログラムの実行こそが当夜さんの望みだったのかしれない。

今、目の前で眠っている人が妹を助け出す為に作ったプログラムなんじゃないか？

「あの……お願いがあるんですけど」

僕は頭を下げて隣の人に頼み込んだ。

連れてこられた会社はギーガスクエア。ＬＲＯの開発会社だ。そ

このＬＲＯの担当部署はとても忙しそうだった。そうそうちゃんと名前思い出した。あの人は「佐々木」さんだ。ハードの方の会社に行ったときに会議室に居たここの人だ。
あの日は衝撃的な告白の連続で名前なんて入ってなかったんだ。
佐々木さんは僕を同僚の人達に紹介してくれた。みんな忙しそうなのになんだか随分親しげだ。
「君がクエストを達成してくれないと路頭に迷うよ僕達は。それかその前に過労死かな」
そう言うことか。なんだか大人な事情で僕を応援してくれてるらしい。今は大量発生したクエストの対応に追われてるとか。
システムは一人歩きを始めたとか言ってたから出来る事はあんまりないそうだけど……苦情とか疑問の対応とかに忙しいみたいだ。
僕はみなさんに一礼して当夜さんの机へ。そこは変わらずに残して置いてあった。簡素なディスク、パソコンが一台に写真が一枚あるだけの机。引き出しにはペン一本入ってない。
僕にはあの椅子に座ってキーボードを叩く当夜さんの背中が見える気がする。そして時々写真を見つめる。そこには無邪気に笑うセツリの笑顔がある。
リアルで笑った最後の顔だそうだ。ベットの上で白いシーツにくるまって舌を出した可愛い写真。
僕は当夜さんの椅子に座りパソコンを立ち上げた。そしていきなり現れたのはメモ帳の画面一杯に書かれたプログラム言語だった。理解できない言葉の数々に頭が痛くなる。
てかなんだかメニューとかが立ち上がらないだけど。これしかやってなかったのかあの人。
ダメだ。もしもこの中にそのヒントがあっても同じ位の天才じゃなきゃ読み溶けない。
プログラム言語って意外とメモ帳とかに書くんだ～とか思いながら無駄にスクロールさせて居ると不意に何かが見える気がした。
「ん？」

何だろうゆっくりスクロールしても何も見えないけど早くスクロールするとそこには何かが見える。僕は意識を集中する。あの戦闘の時の様に乱舞中は高速のスピードの中に居るから自然と周りが遅く見えるんだ。

それがリアルでも出来るか解らないけど脳が覚えていてリアルの目に反映してくれる事を願った。

そして僕の目は徐々にそれを捉えていく。人間には慣れという学習機能が有るのだ。まあだけどやっぱりゲームの体験も少しは影響してるだろう。スクロールの早さは字が線に成るほどだ。

それを捉えることが出来たんだから乱舞中の体験が間違いなく反映していた。

そしてそれは矢印？　向かう先は画面の右斜め上……そこにマウスのカーソルを持っていきポチッとクリックすると画面が変わり出てきたのは研究書？

いや違う……これはそんな大層な物じゃない。物語？

小説か？　それは剣や魔法がある世界で大冒険を繰り広げる少女のお話だった。

僕は周りの人達を呼んで見てもらった。

「これってＬＲＯの概念か？」

確かにそんな感じだ。当夜さんはこれの通りにＬＲＯを作ったとしか思えない。だけど小説は途中で終わっていた。書き欠けのままあの事故がおきたのだろう。

だからこそ当夜さんは妹が夢描いた世界を送った。そう言うことか？　だけどそれじゃ逆にＬＲＯに縛り続ける事にも成りそうだけど……アンフェリニティクエストの目的はセツリのリアルへの帰還だ。矛盾する。

やっぱりまだ足りないピースが一杯ある。きっとそれをかき集めないとクエストクリアは不可能だ。何となく僕はそう感じていた。彼女たちを知ることがクエストのキーなんだ。

目の前にある拙い字で書かれた見知った世界での物語はなんだか

僕を悲しくさせて涙を抑える事が出来なかった。
救いたいのに救えない。解りたいのに解らない。いろんな事が子供の僕には重すぎるのかも知れないと思った。
だけどそんな心が弱くなった時……決まって僕を動かす奴がいた。そしてこの時も当然僕の携帯を揺らしたのアギトだった。僕はメールを開きその文面を飲み込んだ。
【クエスト精霊琥珀の山海城の城でそれらしき人物を観たって目撃情報があった。送られて来た写真も貼付したから確認して観ろ！】
僕は震える手で添付されたファイルを開く。そこには水の中に生える巨大な木。そしてその木の枝に守られる様にして中央で泡に包まれ眠るセツリの姿があった。
僕は携帯を額に当てて目を閉じた。良かった……彼女は生きていてくれたんだ。あの世界からまだ消えて居なかった。それは僕の中で安心から勇気に変わる。
行かなくちゃいけない。僕は画面を閉じようとして気づいた。あの小説のタイトルだ。始まりには何も書いて無かったからタイトルは未定なのかと思ったらファイル名の所に書いてあった。
そしてそのタイトルは『命改変プログラム』。僕の心が氷柱を刺された様な痛みと冷たさを感じた題名だった。

家に付いた時には既に日が落ち欠けていた。鍵を開けようとして掛かってない事に気付き中へ、すると美味しそうな匂いが漂っていた。
僕はキッチンで跳ねるように料理を作っている三つ編みした後ろ姿に声かける。
「どこ言ってたんだよ」
「う～んおしえな～い。あれだよスオウ。押してもダメなら引いてみろ作戦だよ」
つまりは自分が居なくて寂しいと思って欲しかったって事か？
何故に今更そんなメンドい事をカメラ仕掛けてまで……って、思い

出したぞ！
「日鞠、お前が隠して設置したカメラ全部だせ！」
「そんなのありません」
もの凄くハッキリと嘘付かれた。僕は証拠は有るんだと近づいた時あることに気付いた。なんだかやけに手足に絆創膏を貼ってる。それにシャンプーの香りもする。この時間にシャワー浴びるなんて今まで無かったのに。
何か汗かく様な事でもしたのだろうか？　僕は訝しげに日鞠を見つめる。するとわざとらしく鍋の中の料理をお玉で僕の顔に少量ぶつけた。
「殺す気かぁ！」
めっちゃ熱いんだけど。
「手が滑ったんだよ～テヘ」
可愛く決めたけどおかしな手の滑り方だったぞ。
「もう、スオウ早く手を洗ってくる！　晩ご飯もう出来るよ」
自分の犯罪を棚に上げての母親面か。
「ちょっと急いでるから今日は」
「じゃあ今度は鍋全部を――」
「食べます！　食べさせて頂きます！」
「うん、よろしい。早く手洗いうがいをしてくるのじゃ！」
トボトボと僕はキッチンを後にする。なんて危ない奴だ。あんな脅迫ないよ。食べ物は粗末にするなっての。このまま部屋に戻ろうか？　鍵もかけられるし……だけどその時昼間の秋徒との会話が脳裏をよぎる。
心配なんて掛けたい訳じゃない。面倒だって別に見てくれなくったっていい。最初はそうやって突っ張ってた筈なんだけど……日鞠はいつでも満開に笑顔を咲かせてやってきた。
だからいつの間にか今の状態が普通になって……こんなのおかしいのにお互いに触れてこなかった。きっと僕も壊したくなかったんだ。アイツがいると家の中が暖かかったから。

僕はカタンとならして椅子についた。そして両手を合わせて二人で「頂きます」を言った。それはいつもの光景で、変わらない日常。こんないつもの日々が失われるかも知れない。同時に箸を伸ばし取り合いするおかずの先にある笑顔がもしかしたら見れなくなるかも知れない。

そしたらきっと泣くんだろうな……そう思って心の中で呟いた。

「ごめん」

見つめる今（後書き）

ものすごく大変でした。今日はもう更新は無理かなって思うくらいに。それは一昨日書いていたこのファイルが何故か半分以上ぶっ壊れていたからです。何故かテンテンしか表示しなくて落ち込みました。

なんとか間にあって良かったです。元のはそのまま使ってるからおかしな所もあるかも……でも何回も読み返したからなんとかいけるはずです。

湖畔の事（前書き）

ＬＲＯ内に入った僕は三日ぶりの空気に浸っていた。そして待ち合わせの場所に現れたのは鍛冶屋だ。僕は正式にシルフェングを手に入れ次にアギト達と例のクエストの場所に向かった。

だけどそこで僕達が受注するのは別口のクエスト。それは袴姿の巫女さんを護衛する「護衛クエスト」だった。しかしこのクエストを受ける時から色々とおかしな事が起こりクエストを達成したと思った時、僕達が見たのは壊れたＮＰＣの姿。

何をどうすればいいのかも分からない僕達は絶体絶命のピンチを迎える。

湖畔の事

僕がＬＲＯに三日振りに入ってまず行った所は鍛冶屋の所だ。鍛冶屋というのはＮＰＣじゃなくて僕達がそう呼んでいる鍛冶職人のあだ名である。

あの悪魔との決戦の時に『シルフィング』を貸してくれて、あの後かなり疲労したその武器は研ぐ必要が有るともっていかれた。

元々あの一回の約束だったし、それは当然で諦めてたんだけど少し前に連絡が来ていた。だから僕はトマートの街のこっちは本当の鍛冶屋もとい鍛冶工房の前で鍛冶屋を待っていた。ああもう、ややこしいな。

目の前を数多くのプレイヤーが慌ただしく通り過ぎていく。クエストが大量発生したらしいからみんな大変なんだろう。

日差しの香り、緑を乗せる風、金属を叩く鎚の音、大きな荷台を押している人達……久しぶりのＬＲＯの空気を全身で感じている。

その時視界に入ったのは黒ずくめの人物の姿。浮きまくりだよあの人……周りの人達の武器を物色してるのか首が異様に動いてる。

だけどそこまで興味をそそる武器は無かったのか直ぐに僕の所まで来た。

「三日振りだな。仲間は慌ただしく動いてるのに重役だな貴様」

「う……」

それは言われるときつい。アギトは何て言ってみんなを説得したのだろう？

「まあそれも仕方ない事か……ママは大事にしないとな」

「何言ったんだアイツ！」

何かスゴい誤解が生まれてる気がする。だけどマイペースな鍛冶屋は僕の質問に答えることなく本題へ。

「それよりも、また戦場に行くのだろう？」

「戦場に成るかはまだ解らないけどな」
「まあ、どちらにせよ武器はこの世界では必須だ。いざという時はいつくるか解らないからな」
そう言ってウインドウを操作して取り出したのは見慣れた青い刀身の二対の剣『シルフィング』だ。
「これ……いいのかよ。僕、金無いぞ」
「出世払いだ。貴様は大物に成る気がする。それに乱舞を持つ貴様が使うのが一番だ。武器にとってもな」
そう言って押し出されたシルフィングを受け取り、僕は頭を下げた。
「ありがとう」
すると模様が刻まれた顔を大きく崩して笑う鍛冶屋。
「気にするな。貴様がアンフェリティクエストを達成すれば良い宣伝になる」
「僕は宣伝カーかよ！」
まあだからと言って押し返す事もしないけどね。利害の一致って奴だ。シルフィングは心強い武器で僕のもう一人の相棒。あの時の乱舞の感じは最高だった。
僕はシルフィングを武器に指定して腰に差した。戻ってきた重さを噛みしめて今日の目的を見据える。今度こそセツリを助け出す！

僕は鍛冶屋と別れた後、アギト達と合流して別の街に飛んだ。その街は大きな山の下降に作られた水と緑が豊かな場所だった。
『センラルト』と名付けられた街が例のクエストの発生場所。この街の上の山の火口に水が溜まり大きな湖なっている。その場所に城があってそこがクエストの場所らしい。
アギトの話では例のクエストでたまたまその湖に落ちたプレイヤーが撮った写真がアレだそうだ。そして話題に上りそのクエストに挑戦する人達が最近増えてるらしい。
だけどこのクエストの目的は別にあって達成はそんな難しくない

らしい。それじゃあどうやって彼女を助ければいいんだろう？
「それも検証済みだぜスオウ」
なんとアギト達は何かを掴んでいるらしい。さすが熟練プレイヤー達が集まってるだけある。
「それで、どうするんだ？」
僕の言葉に得意気に答えたアギトの話はこんな感じだ。
どうやら護衛クエストと言うのが発生しているらしくて、それは特定のＮＰＣを目的の場所まで守ると言うクエストだ。そしてこの街での護衛対象は獣を操る事の出来る巫女らしく、目的の場所が頂上の湖。
そしてアギト達の聞き込みに寄って巫女を連れて行くと湖の精霊を呼び起こしそこで別のイベントが起こる……らしい。事実は分からないけどこれは無視できない情報だ。
「なんでやらなかったんだ？」
いつものアギトなら僕を呼ぶ前にその事実を確かめる為にクエストをこなしていそうな物だけど。するとアギトは苦い顔をして言った。
「ああ～やったぞ。うん……三回ぐらいな。だけど全滅だ」
「はっ？」
信じられん。アギトが三回もやって全滅って……。
「いや俺じゃない。このクエスト一人に付き一回しか出来ない。それ自体が護衛クエストじゃ珍しいんだけど……だからみんなにやってもらったんだ。だけどモンスターがおかしいみたいなんだ」
ん？　アギトの言葉がおかしいぞ。なんだよおかしいって？
「みんなの話を総合するとつまりこのクエストの間の敵は見えない……らしい」
「はっ？　見えないってそのままの意味か？」
「そのままの意味だよ。見えないんだ。大量の足音と荒い息遣いがそこら中から聞こえるけど全く見えない。後このクエストを難しくしてるのが人数制限だ。定員は四人でワンパーテー以下だ」

普通の護衛クエストならそれでも行けるらしいけどこれは難易度の設定が明らかにおかしいとアギトは愚痴った。
四人は確かに厳しい。ヒーラーは一人は必要だし、前衛なら二人……後は攻撃力重視でソーサラーかもう一人前衛を入れてもいい。それか策適能力が高い人に入って貰うとか。
でもそんなのアギト達がやってるだろう。策適スキルに引っかからない適応外のモンスター。
「やっかいだな」
僕は考え込む。これはある意味あの悪魔より手強い。幾ら居るか解らない敵に護衛キャラの通る道は決まっているんだ。つまりはその通り道に大量に敵が配置されてるって事じゃないか。悪意を感じる。
「でもやるしかない。これだけ情報が揃ってるんだからなんとかなるだろ」
楽観的にアギトが言った。おいおいさっきまで愚痴ってた奴がそう言うと開き直ってる様にしか見えないぞ。
「実際開き直らなきゃこんなクエストやってられるかよ。どうせやるんだ。ゲームを楽しもうぜ」
アギトはいつもの笑顔を作り笑った。まあ確かに今までの行き当たりバッタリじゃないだけいいのかもしれない。楽しむというのは今の自分にはなかなか難しいけど、あんまり難しく考えても仕方ない。
僕達は決心を決めて動き出した。

パーテーは元から一緒に来てた二人だった。まあそうだよね。なんの為だって感じだし。一人はヒーラーの女の子。もう一人は策適系のスキルが豊富らしい短剣プレイヤーだ。女の子は「シルク」という名前で肩に掛からない位に揃えられた髪にローブの様な体を包む服が綺麗な子だ。
もう一人はエイルと同じモブリという種族で緑のタマネギみたい

な頭した奴だ。男だと多分思う。名前は「テッケン」二人はアギトとは何度もパーテー組んでいるらしく結構強いらしい。
僕は二人に挨拶してパーテーを組んだ。するとなんだか二人ともチラチラ僕を観ている事に気付いた。何なんだろう一体？
「あの！　お話は常々アギトさんから伺ってました。お会いできて光栄です」
そんな事を言ったのはシルクさん……いや、ちゃんだ。僕は照れながらも「どうも」と言った。僕はそんな有名じゃ無いと思うけど。
「そんなこと無いですよ。あの悪魔を倒したのは語りぐさですし、二刀流に乱舞を使うアンフェリティクエストに挑むスオウさんは結構有名ですよ」
なんてこった。そんな話初めて聞いた。それに悪魔を倒せたのはみんなのおかげだし、乱舞だってなんであるのか分からない。アンフェリティクエストにいたっては謎だよ。
「でも君は今も進んでいる。感服するよ」
そういったのは小さな後ろ姿のテッケンさんだった。うう、なんだかムズガユい。僕一人じゃ実際何も出来ていないんだけどね。特にアギトがいなかったら僕はここまでこれなかったらだろう。
「ふふ、不遜するより謙遜する奴の方が僕は好きだよ」
なんだか僕が知ってるもう一人のモブリと全然違う。カッコイイ。
そうこうしてる内に目的の場所に着いた。護衛クエストの発生場所の街の南端に位置する神社の様な場所にそのＮＰＣはいた。
赤い袴姿の若い巫女さんだ。額に模様が入った布を巻いていて黒く長い髪が映えている。彼女の周りには白いフクロウが楽しそうに舞っている。彼女はフクロウと楽しく遊んでいる感じだった。
そして僕が境内に足を踏み入れるといきなりフクロウが突撃してきた。
「むが！」
顔面に頭突きを食らって後ろに倒れる僕。何するんだあのフクロウ。するとサッサッサと言う音と共に風鈴の様な声が響いた。

「大丈夫ですか？　すみません、この子ったらいつもはこんな事しないんですけど……」
僕は一瞬目の前の巫女さんがプレイヤーじゃないかと思った。だってこんな対応を取れるか？　ＮＰＣが。取れるとしたら境内に入る人たち全員に今のをやってる事になるけど……。
「えっと……アギト？」
アギトは首を振る。どうやらこんな事は初めてらしい。どういう事だ？　一体何がきっかけでこんな事を？
目の前のＮＰＣの巫女さんはひたすらに頭を下げている。流石に気が悪くなる。
「大丈夫ですから。気にしないでください」
「本当にすみません」
そういって彼女は再びフクロウと遊び出す。ここら辺はＮＰＣらしいけど……取りあえずアギトが歩み寄りクエストの発動に必要なアイテムを見せる。だけど何も始まらない。と言うかクエストへ続く言葉が出ない。
ＮＰＣらしく何度話しかけても同じ言葉が返ってくるだけだ。アギトがお手上げのポーズをして戻ってくる。
「ダメだな。今まではこれで良かったんだ。なのに今日はおかしい。さっきのアレも報告は無かったし……他の条件があるのか？　それとも何かが発動してる？」
アギトは僕を見てそのアイテムを渡してきた。
「お前におかしな事が起きたんだからお前が責任とれよな」
そんな事言われても知らん。僕のせいじゃないのに。だけど後ろの二人は何かを期待しているようだ。
「がんばってください」
「君なら出来るよ」
僕はそれを無責任と呼びたい。何をどう頑張れば出来るの？　だけど取りあえずやるしかない。
僕は巫女さんに近づいて受け取ったアイテムを見せてみる。する

と飛び回っていたフクロウがそれを取って飛び去ってしまう。
「ああ！」
なんて事してくれんだあのフクロウ！　僕はアギトを振り返る。もしかしたらこれがクエスト発生したって事かもしれない。だけどアギトは飛んでいくフクロウをただ呆然と見ていた。想定外らしい。
すると巫女さんがフクロウを追いかけて境内の外へ。僕達はハッとして取りあえず彼女を追いかける事にした。
「どうなってんだ？」
そんなアギトの呟きが聞こえていた。

たどり着いたのは街の東出口だ。このクエストの通常は神社の近くの南出口だとアギトは言った。だけどそこで待っていた巫女さんに話しかけるとクエストが発生した。
「すみません。あの子は山の上の方に行ってしまいました。私の責任ですけど一人ではどうにも出来ません。不出来な私を助けてください」
そういって彼女もパーテーに加わった。これも話に聞いていない。もしかしてこの為にプレイヤー制限が四人なんじゃなかったのだろうか。普通のパーテーは五人が定番だ。
「どういう事なんでしょう？」
「良いじゃないか。これが達成条件なのかもしれない」
確かに二人の言うとおりだ。巫女さんをワンパーテーの中に入れるのが条件だったのかもしれない。
僕達は腑に落ちない事を飲み込んでフィールドに繰り出した。久々の太陽が昇ったフィールドだった。

フィールドは山なだけに森だった。大きな木が適度に空白をあけて光を満たせてくれている。人工的に人の手が入った森という印象だ。でもだからこそちゃんと回っている。
足下には小さな小川が何本もある。きっと頂上の湖から漏れてい

るのだろう。そんな小川に導かれる様に巫女さんを先行に僕達は森を駆ける。
モンスターがどこにいるか分からないからあまり広がりすぎない様に木をつけながら進む。
その時前にいたテッケンさんが吠える。
「来るぞみんな！」
彼は姿を確認してるんじゃなく音で位置を確認してるようだ。音は消せないと事前の情報で分かっていたからそうしたのだろう。
無防備な巫女さんが斬られる前に僕は二刀を振るった。姿は見えないけど確かな感触が伝わる。だけどその時横から攻撃が入った。僕はよろける。カバーにアギトが入ってくれる。
そしてすぐさまシルクちゃんが回復。僕は気を取り直してテッケンさんの指示通りに動く事を徹底する。
「スオウ君、三時の方向から三体だ。アギトはそのまま右斜め前に突進をかましてくれ！」
彼の指示は的確だった。僕達は苦しみながらもなんとか上手く回しながら山の中腹ぐらいまで来た。
途中から何となく奴らの攻撃パターンを掴んできた僕とアギトは見えなくても一・二回は攻撃を避けれる様になっていた。それに集中すると風を切るような音が聞こえる気もする。
途中で木の隙間からフクロウの姿を確認するのか巫女さんは何度も止まる。そのたびにフクロウは真上をクルクル飛んでいてまるで僕達を導いているようだった。
「なんとかいけそうだね」
僕達は顔を見合わせて頷きあった。全員息が上がっている。そしてようやく頂上が見えて来たときテッケンさんが叫ぶ。
「来るぞ！　今までのモンスターじゃない。かなり多い！」
その言葉に一気に緊張感が広がった。地響きが近づいて来る感覚。これはスキルが無くったって分かる。だって森に煙が立っている。あれはきっとモンスターが立てている。

「アギト！」
「分かってる！　行くぞテツ！」
そう言って僕達は巫女さんの前に走り出て一列になる。僕達は一点突破を狙っていた。まずはアギトが大威力のスキルを連続して発動する。貫通力がある槍のスキルは突破力が抜群だ。その次にテッケンさんが細い剣を見えないほどの早さで繰り出して更にダメージを募る。
最後に僕が乱舞を使って道を造った。風の膜が通り道を開く。
そして一気に通り抜け僕達はついに頂上にたどり着いた。そこには対岸が見えないほどの大きな湖畔が広がっていた。その中央に向かうように石造りの橋が架けられていて橋の先には水の上に立つ古城があった。
「やりましたね」
シルクは感動してるようだ。何となく瞳が潤っている。確かに苦労した甲斐がある光景だ。傾きかけた陽光が湖畔を反射してキラキラしている。ほとんど揺れていない水面は鏡の様に空を映している。
「ああ、やったんだ」
僕達は巫女さんの後に続き橋を渡る。かなり大きな橋で五人が居ても全然狭く感じない。そして巫女さんは城の手前の少し丸まった部分で立ち止まり手を伸ばす。するとそこへフクロウが降りた。
巫女さんはフクロウを愛おしそうに撫でている。それはプログラムなんだろうけど目の前で人の形をしているそれをただのプログラムとも思えなくなってくる。
「ありがとうございます。これで私は役目を果たせます」
そう言って巫女さんはそのアイテムを胸に抱き祈り出す。するとアイテムは輝きをましてその光に呼応するように湖畔も光出す。
だけどその時アギトが言った。
「おかしいな。このクエストの難易度はこんな物じゃないはずだ」
確かに最初のアギトの話とは色々と食い違う所があった。それは確かに気になるけど何かのきっかけでクリア条件が満たされただけ

かも知れない。
「お前楽観的だな。お前にとって今までＬＲＯはそんな優しかったか？」
そう言われると自信がない。今まで何度も僕はこのゲームには絶望を見せられてきた。
その時目の前に何かが飛んできた。だけど寸前で僕はそれを交わす。何かは上空に舞い戻って巫女さんの上へ。
湖畔の光に照らされて大きく見えるそれは……実際にさっきの倍は大きい。
フクロウはもうフクロウじゃない。湖の水をその身に纏った様に水色の翼が輝いている。それは鳳凰とでも言うべき姿だ。
さすがの異常事態に全員が身構える。
「なんの真似だよ。どういうことだ？」
僕の質問に巫女さんは雰囲気を変えて答えた。
「良く避けました。最初あまりにも間抜けに当たるから駄目かと思ったら……やっぱり駄目です貴方じゃ。簡単な事です。これはクエストなんだから・・・あの子を救える人物か試すクエスト……だけどあの子は――あああ！」
僕達はギョットした。なんだ一体？　明らかにおかしい。巫女さんは清廉な顔を見るも無惨な形相に変えている。そしてブツブツと
「駄目なのよ……救わなきゃ……違う……あの子は……約束」
意味不明な事を呟いている。どう転んでも優しそうな展開は望めない。僕は剣を抜く。あの子を救えるか試す……確かにそう言った。それならこれは確実に当たりな筈だ。
だけどそんな僕を見て狂った巫女さんは言い放つ。
「私を斬る……救えるかな？　あの子を切り刻んだその剣で」
一気に僕の背筋に悪寒が走る。だけど歯を食いしばって言い放つ。
「試して見ろよ。そのために居るんだろ」
その一言が開戦の合図だった。湖畔に走る波紋は僕達の衝突が生み出した振動。

「勝手な事しながって！」
隣に立つアギトがそんな文句を垂れる。
「だけどあれはこうなる展開だった。彼を責めるべきではないよアギト」
そう言ってフォローしてくれるテッケンさん。
「ええと、あのＮＰＣの人大丈夫かな？　バグってるよね」
なんだか変なことを気にするシルクちゃん。確かに変な事は確かだ。アギトが持ってきた情報にはこんなバトルなかったし。あの巫女さんはどこかオカシい。
だけどそんな事を気にしてる暇なんてない状態だ。向かってきた元フクロウは反則的だ。飛んでるから剣なんて届きにくくて仕方ない。これならソーサラーが必要だった。
だけど詠唱の暇さえ与えられない。高速で四方から突撃する元フクロウに僕達は固まって対処せざるえない。それに周りの光と同化するから近づくまで視認できない。
これじゃまるであの山の続きだ。いや……あれがあったから今凌げてる様な気もする。
だけど運良く切れてもフクロウのＨＰは減らない。水だから直ぐに再生するんだ。どうやら攻撃判定は二撃目からの様だ。傷が塞がる前に入れれば奴のＨＰを削れる。だけどそれは途方もなく無理なことだった。
そして前方の巫女さんは何かを呟いている。あれは詠唱？　不味い！　こんな固まった状態で強力な魔法を入れられたら一気に崩れる。
僕は輪から飛び出し駆け出した。だけどその時真横からフクロウが僕に突撃した。
「がっ！　はっ……」
凄まじい衝撃と共に僕は宙を舞って湖に向かっていく。
「スオウ！」

そんな声が聞こえて落ちていた勢いが止まったのでアギトが腕を掴んでくれたのかと思った。だけど僕が顔を上げるとそれはＮＰＣの巫女さんだった。

「何で……」

その言葉しか出てこない。殺そうとしたり助けたり、これじゃ何がしたいのか全然わからない。

そしてそれは彼女も同じ様で葛藤を繰り返す表情が目まぐるしく移り変わる。そして一言……「わからない……」

そして頬に落ちてきた物に僕は驚いた。それは涙。ＮＰＣが涙を流すなんて聞いたことがない。そしてこぼれた嗚咽はこう聞こえた。

「助けて」

その瞬間、絡まった腕は放されて僕は輝く湖の中に落ちていった。気泡が水面に昇るのを眺めながら僕はそれを見た。それは僕の掌に落ちて来る。巾着に入ったそれは真珠。

『思い出の結晶』

湖畔の事（後書き）

読んでくださってくれてる方々、ありがとうございます。これからも更新出来るように頑張ります。

あの子の想い（前書き）

僕は湖に落ちて絶体絶命の中、夢を見た。それは知りたい子と、今日出会った子の過去？　何か分からないけどそこには幸せが溢れていた。

夢から覚めると僕は城の中だった。どうやらアギト達に助けられたみたいだ。そして城から見たのは求め続けた彼女の姿。それはあの写真のままだった。でも今の自分には彼女を救う術がない。それはあに問題は山積みだった。僕達は取りあえず目の前の事を精一杯やる事に……そしてたどり着いた場所で僕は自身の深刻差を知ることになる。

あの子の想い

「ねえねえ、サクヤは私の考えた物語聞いてくれる？」
晴天の空の下、御花畑の庭で彼女は私に柔らかな笑みを向けて聞いて来る。
「ええ、いつでも。私はアナタの為に作られた存在ですから」
そういう私に、決まって彼女は怒るんだ。
「違うよ。サクヤはサクヤ！　私の友達でお姉さんで……そしてお母さん、なんだよ。作られたなんて言わないで！」
栗色の長い髪を陽光に揺らして純白のドレスが翻る。彼女は怒って背を向けて御花畑に座り込んでしまった。彼女の頭からはプンプンみたいな擬音が聞こえるみたいだ。
私はここのシステムから作られてるから彼女の感情を直に感じることが出来る。今は怒っている……だけど本当は寂しくて後ろからギュッとされて誰かの優しさが欲しいんだ。
私は彼女の後ろに膝を立てる。そして後ろから彼女のか弱い体を抱きしめた。
「ごめんなさい。そうですね、私はアナタの友達でお姉ちゃんで母親です」
彼女の花の様な香りが私は好きだった。柔らかく暖かな肌の温もりも私には本当はないものだ。彼女はだけどまだ機嫌を直してくれなくて花びらの様な唇を尖らせて言う。
「アナタなんてヤだよサクヤ。友達や家族はそんな呼び方しないの」
私は彼女の頭に顔を埋めるようにして答える。
「はい、ごめんなさいセツリ」
するとようやく彼女は機嫌を直してくれて大きな瞳を優しく閉じて私の方へ体を向けて抱きしめ返してくれた。
「ふふふ、サクヤは素直だね。それじゃあ私の冒険探を聞かせてあ

げる」
　そう言って彼女は私の手を引いて湖畔のテラスに連れていく。二人してテーブルを囲い椅子に腰掛け、彼女はウインドウから大量の原稿用紙をそこに出した。
「なんですかそれ？」
「私が考えた物語。ドキドキワクワクハラハラキュンキュンの冒険活劇ね。もちろん主役は私だよ」
　キラキラと顔を輝かせて百面相する彼女はとても可愛い。言ってる事は良く解らないけど。
　「コホン」と前置きをしていよいよ読み始めようとしたときだった。一際強い風が湖を滑るように駆け抜けて大量の原稿用紙を舞上げる。
「ああーー！」
　彼女は悲鳴と共に落胆する。原稿用紙は湖の上に落ちていた。
「うう～最高傑作だったのに～」
　瞳から溢れる涙は大粒だ。目を覆うぐらい。この空間はちょっと過度な表現のしすぎな気もするけどそれが彼女は似合っている。
　私は歩み寄りそっと彼女の肩を抱いた。
「大切な物だったのですか？」
「そうだよ。サクヤや……お兄ちゃんに聞かせる筈だったのに」
　私は彼女の為に必死に考える。
「もう一度書くことは無理なのですか？　私も多少なりにはお手伝いします」
「ほんと？」
「はい。そうセツリが望んでくれるなら」
　私達は二人であれこれ言いながら原稿用紙に綴られていた物語を再び紙に納めていく。だけど元のままじゃ支離滅裂。
　ほとんど一方的に話し続ける彼女の話を私は時々意見しながら綴っていった。
「そう言えば、このお話のタイトルはなんですか？」

私は何となく聞いてみた。彼女の綴る物語のタイトルが気になったんだ。すると彼女はぽつりと言う。
「ねえサクヤ、こんな冒険ができたらいいよね。体を目一杯動かして、自分の運命を切り開くの。でも実際の私にはそんなの無理なんだよね」
湖畔を見つめる彼女の横顔がなんだか儚げに見えた。風に揺れる柔らかな髪はとても綺麗なのになんだか涙が線を引いて飛んでるよう。
だけど次の瞬間には私の方を向いて元気な顔を咲かせて彼女は教えてくれた。
「タイトルは『命改変プログラム』だよ」
「いのちかいへんプログラム？　ですか？」
私の疑問符に彼女は両手を一杯に広げて陽光を受け止める。
「うん！　私の夢を綴ってるんだ。体を一杯動かして、沢山の仲間に出会って、自分の運命を切り開くの。そんな自分に、私はなりたいから。この場所なら……私の命の改変をしてくれた場所での物語だから『命改変プログラム』」
私は彼女を見つめる。愛おしい彼女を。それはとても幸せな日々でした。

「今のは……」
僕の腕の中のアイテム『思い出の結晶』が光を失っていく。僕は掌のアイテムを見つめて次第にその腕が重くなって行くのに気付いた。
水の中では自身の防具すら重い。というかＬＲＯでは泳ぐ系のスキルを拾得しとかないと泳ぐのは不可能だ。
なので僕は為す術なく湖の底に沈んでいた。水中で泳げなかったらＨＰが少しづつ減って行く。このままじゃ僕は確実に終わりだ。
落ちるに連れて意識も朦朧としてくる。僕の手の中からアイテムがこぼれ落ちて行った。力が全然入らない。

諦めたくない……諦めきれないのに僕には為す術がない。少しだけあの巫女さんの事が解ったのに……。聞きたいことも一杯有るのに、視界が周りの明るさとは反比例して暗くなる。
その時、何かが弾けるような音がした。そして支えられる僕。何とか顔を動かすとそこには僕の手を引く小さな姿があった。
「テッケン……さん？」

目を覚ますとぼんやりとした視界の中に心配そうな顔した女の子が移った。
「セツリ……」
不意に口から出た言葉に女の子はプルプル首を振る。ああそっか……この子はシルクちゃんだ。てかセツリな訳無いのに、何言ってるんだろう僕は。
そして次に聞きなれた男の声。
「おう、やっと起きたかスオウ」
アギトは呆けている僕の体を起こしバンバン背中を叩く。やめろよな痛いだろ。
「あんまり心配掛けるなよな。まあ、結果的には良かったけど」
そう言ってアギトはあの後の事を教えてくれた。
僕がフクロウに攻撃を受けて湖に落ちた後、巫女さんはその場にへたり込んで動かなくなったらしい。だから三人はフクロウの攻撃を凌ぎつつ湖へダイブして僕を救出。その場からの撤退に成功して今に至るというわけだ。
僕は周りを見回して見当たらない彼の事を聞く。
「テッケンさんは？」
するとシルクちゃんが優しく教えてくれた。
「周囲を見て回って貰ってます。彼は策敵スキルが豊富ですから警戒中と言うわけです。後はこの城の探索です」
「城？」
僕はそこで初めて自分のいる場所に気付いた。辺りは石造り。荘

厳な感じがする調度品が所々に飾られてると思ったらここは湖の中心にあった城の中なのか。
「はい。運良く入れたんですよ。ここがなかったら私達は全滅でした」
どうやら泳ぎスキルは泳げるだけでＨＰが水中で減るのに変わりは無いということだ。
良く生き残れたよホント。
「本当だな。やってみなくちゃ解らないって事は良くあるけど、ここまで事前の情報と違うのは初めてだ」
アギトも今の状況に混乱してるみたいだ。それはきっと後の二人も同じだろう。
シルクちゃんは努めて明るく振る舞ってる感じだし。僕は二人に水の中で見たことを伝えた。あれがこのクエスト攻略には重要な気がしたんだ。
「あのＮＰＣは元は医療用空間時にセツリの為に作られた奴って事か？」
いぶかしむアギトが顎に手を当てて聞いて来る。こいつ考え込むと何故に耳が動くんだ？　ＬＲＯの無駄な感情表現の結果の癖か？
緊張感が削がれるな、気を引き締めないと。
「多分そうだと思う」
「でもどうしてそんな全く別の存在の筈の彼女がＬＲＯにＮＰＣとして居るんですか？　おかしいですよ」
シルクちゃんの意見は尤もだ。だけど既に謎は多すぎる。セツリもそうなんだ。
だけどおかしい事には意味がある。彼女がここに居る理由はアンフェリティクエストに関係が有るはずだ。
「じゃあ、どうするんだ？　倒す事もままならないんだぞ。それにそれじゃ倒していいのかも解らない」
確かにアギトの言うとおりだ。あの巫女さんをこのまま倒していいとは思えない。彼女は何かおかしかった。あれも気になるんだ。

するとそこにテッケンさんが走ってやってきた。
「みんな来てくれ！　見せたい物がある」
いつも冷静なテッケンさんらしくないまくし立てる様な言い方だった。僕が起きた事に気付くと親指を立ててくれた。僕はお礼をしてテッケンさんの後に続き走り出す。
「何が有るんだよ？」
「見れば解る」
アギトの質問をテッケンさんは下に切り捨る。それだけ急いでるんだろう。あるいは言葉じゃ説明しにくいとか？
僕たちが長い通路を走ってたどり着いたのは城から少し突き出したベランダ部分。そこで要約気付いたけどここはまだ水中だった。
「この城には不思議な膜が張っている様で水は入ってこないんですよ」
そうシルクちゃんが教えてくれる。いやそれもびっくりだけど湖畔に出てた部分は一部だったのか。
「ここは元は火口に広がった大きな昔の国って設定なんだよ。この城はその名残。町は湖に沈んだけど突き出した城の部分に橋を架けたんだってさ」
なるほどね。何のために？　だけどのそんな疑問は目の前の光景にかき消された。
「あれだ」
そう言ってテッケンさんが指した場所には大きな木が君臨していた。多分、城の中庭の様な場所。そこに聳える巨木の枝は周りには伸びずに中の物を守る様に、捕らえるように円を作っていた。
そしてその中心に透明な膜が見える。その中には栗色の髪が揺れていて探し続けた少女が眠っている。
「セツリ！」
思わず声を出す。だけど彼女の瞳は堅く閉じられたままだ。僕はウインドウで彼女を確認する。前は騙されたからね。そこに表示されるのは彼女の名前……大丈夫、あそこで眠っているのは本人だ。

それだけで安心できた。でも直ぐに早く解放させたいと思う。だけど一体どうやれば？　僕は水の中では動くことも出来ない。
「無理矢理助けられるとは思えないけどな」
そう言ったのはアギト。確かに誰かが泳いで行ってあの枝を剥がすなんて事で助けられるとは思えない。
「どうしましょう」
手詰まりだった。目の前に助けたくて求め続けた彼女が居るのに僕達にはその方法が解らない。可能性が有るのはあの巫女さんを倒すこと位か……でも。
「取り合えず僕の意見を言わせてくれないかな」
そう言ったテッケンさんの言葉に僕らは顔を見合わせる。一体なんだと言うのだろう。
「率直に言うとこの上、つまり湖に出る階段がないんだ。下には行けるけど上へはいけない。ここもダンジョン指定なのかも」
「だけどモンスターはいませんよ」
確かにシルクちゃんの言うとおり今までモンスターに出くわしてはいない。だけど上に行けないなんて。
「どこか見落としてないないのかテッ？」
「隠し通路でも無い限りそれは無いけど……そうだね、これは僕の力不足だよ。君が僕に求める物を提供出来なくて済まない」
そんな、テッケンさんは十分過ぎるほど良くやっている。それにこの人の策的スキルの高さは今までの戦闘で実証済み。それで見つけられなかったのだから無いのだろう。
隠し通路は確かに有りそうだけどそう言うのは一種のイベントで現れたりするものだ。僕達は湖に閉じこめられた状態だった。なんて、もどかしいんだ。

僕達は部屋中を見て回った。確かに上へ続く階段は無くてとにかく隠し通路を探したんだ。だけど城内三階には何も無い。
「どうなってるんだ？」

「解らないな。俺達は元々三階に入ったんだし、下に行ってみよう」
そのアギトの提案で僕達は発想の転換の元、階下に降りる階段へ。だけどその時テッケンさんが吠える。
「居るぞ！　モンスターだ！」
僕達は一斉に武器を構えた。だけどその姿は見えない。
「まさか……あの山と同じ！？」
「透明仕様ってことか」
僕とアギトの言葉が続く。そしてベチャリと何かが床を蹴った音が響いた。そして視界が霞む。
「目潰し！？」
なんて卑怯な攻撃する奴だ。既に見えないのに更に目を潰すなんて。だけど姿が見えないのと視界が無いのでは恐怖の度合いが違った。
状況が見えないだけで人は混乱する。だけど直ぐにシルクちゃんが回復魔法を唱えてくれた。おかげで目に光が戻る。だけどその時顔面に何かが入った。
それは言うまでも無くモンスターの攻撃だ。
グシャリ……という音が頭で響く。そして血が飛散する。だけど僕は後ろによろめきながらも耐えて踏ん張った。
すぐさま僕は鼻や口の切れやすい部分を手で確認する。だけど何も出てはいなかった。だけど……今……
「血が――見えた？」
それはＬＲＯではあり得ない事なんだ。このゲームは血は表現しない。それはいろんな配慮の元に組まれたルール。血は命そのもので、それが見えることで戦闘中にパニックに成る人だっているかもしれないからだ。後は血が流れると生々し過ぎる事も理由かもしれない。
だから取り合えずこのゲームで体のどこかを切り裂かれたからって血が吹き出る事は無い……筈なんだけど。
僕にはさっき自身の血が見えていた。気のせい……だったのかな？

僕は自身に起こり始めた変化を考えないように剣を振るった。
そして断末魔の叫びと共にモンスターは倒れた。落としたアイテムは『思いでの印』と言うアイテムだ。なんだか関連する様な名前に僕達はそのアイテムを確認する。
ウインドウを開きアイテム『思いでの印』を押して見る。それは花を散らした様なデザインの栞で説明には
【このアイテムは特定条件化で仕様出来ます】
そう書いてあるのみ。なんて不親切な説明だ。だけど僕達はこのアイテムに大きな希望を抱いた。。それに階下に続く階段で唯一のモンスターが配置されていた事を考えるとアギトの選択は正しかったのだろう。

二階もさほど代わり映えはしないけど靴が水没するぐらいには水があった。どうやら完全に膜で守られてるのは三階部分だけということか？
だけどやっぱり敵はいない。僕達は取り合えず全ての部屋を見て回った。部屋の外に見える木を僕は何度も振り仰ぐ。時々不安になるんだ僕は近づけているのだろうか。
結局僕達は早々に一階を目指す事に決めた。思いでの印の使用条件も解らないからとにかく進むしかない。
そして案の定階段にはさっきと同じだろう透明なモンスターが居た。さっきの戦闘でこいつの攻撃は解ってるからそう手こずる事もない……と思っていたら、なんだかさっきより強い？　そう感じる。
「なんだかやりにくいです」
そう言ったのはシルクちゃんで、多分全員が感じていることだ。
「確かにさっきの奴より速い気がする。油断するな」
テッケンさんが注意を呼びかける。彼は小さいモブリと言う種族だから既に腰位まで水がある。それを見てふと感じた事を口に出す。
「もしかして……この水じゃないか？」
水の抵抗は靴を水没させるだけでもかなりある。もしかしたら相

手が速くなったんじゃなくて自分達が気付いてないだけで遅くなったんじゃ？
「なるほど……確かにそうかもな。俺達が遅くなってるのか。それに前の戦闘で消える瞬間に見た敵は大きな蛙人みたいな奴だった」
なるほど。水は敵のテリトリーと言うわけだ。アギトは舌打ちして気を引き締め直す。僕達も油断は捨てて戦闘に臨んだ。
そして再び下品な悲鳴が城中に轟く。だけど今回は結構苦戦した。そして再びアイテムが出る。今回は『思いでの欠片』黒ずんだ汚い紙だった。そして説明は前回と一緒だ。

一階は暗くジメジメした空気が溜まっていた。そして水位は腰位まで来ている。テッケンさんは既に頭まで埋まるからシルクちゃんに人形の様に抱えられている。なんて羨ましい体制だ。
だけど、そんな気持ちとは裏腹にこれは不味いと僕達は思っていた。
だってこれじゃ、まともに動けない。かなり遅くなる。もしもあのモンスターと戦う事になったら今回はマジでやばそうだ。
それに疲れるから口数も減っていく。城内には僕達が水をかき分ける音だけが響いていた。
一階も別に代わり映えはしない。ただ水圧の関係か閉じた扉は開かなくて開いてる扉の部屋だけで回るのは楽だった。
「何もない？」
「うん……」
「そうだな」
「同じく」
結果はこの通り行き止まりだ。モンスターは居なかったけど、これじゃあ居てくれて道を示してくれた方が助かった。
こうなったら閉じた扉は壊してでも調べて見ようかと出来ない事を考えているとシルクちゃんが何かに躓いて盛大にこけた。水しぶきが大きくあがる。

「うう～」
びしょ濡れの少女の猫なで声はなんだかドキドキする。ていうかこんな波もない水で転けるなんて、と思っていると彼女のお尻に潰されたテッケンさんの空気が空しく消えていく。
「テッケンさぁぁん！！」
ガバッと水中から引きずり出すとテッケンさんは何度も深呼吸を繰り返す。
「あの、ごめんなさい」
「ははは……いいよ。おかげで道が見えたんだ」
そういう彼は僕の腕から飛び出すと再び水中へ。一体に何を見つけたのだろうか。何か水中でテッケンさんは武器を振って床を攻撃してる様にみえるけど・・・そういう物は壊せない筈何じゃなかったっけ？
だけどそこで「あれ？」とシルクちゃんが言った。良くて見ると何か出っ張りの様な物が見える。あれで彼女は転んだのか。
そして何度目かの攻撃でその出っ張りが壊れた。そしてゴゴゴ……と言う音がして床には亀裂が走る。いやな予感しかしない。
そしてその予感は的中した。床は崩れて僕達は水流に呑まれて穴に吸い込まれて行った。

たどりついたのは最下層だろう場所だ。僕達はかなり流されたようでもう城内かもわからないけど天井を見ると五メートル位ある距離を木の根が複雑に覆っていた。
地下にしてはかなり広い円上の空間で周囲も結構ある。三メートル位の高さからは常に水が滝の様に流れているからここは街の地下水路とかだったんじゃないだろうか。
その一つから僕達は落ちてきたみたいだ。周囲に出口らしい物はない。だけど水が溜まった空間に台座の様なオブジェクトがあるのは見えていた。
「ここが最終ポイントかな？」

「だろうなあの台座は怪しすぎる」
確かにアギトの言う通りあの台座は怪しい。僕達は腰まで覆う水をかき分けて台座に向かい手を掛けた。その時だった。
大音量の爆発音と雨のように降り注ぐ水しぶきで僕達はよろめいた。
「なんだ一体？」
「テツ！」
アギトの声にテッケンさんがシルクちゃんの腕の中から答える。
「間違いない無い、敵だ！おそらく今までと同タイプだが大きさが違うぞ！」
詰まるところはボス級モンスターか？　多分今までは壁か天井にでも張り付いていたんだろう。僕達は一斉に武器を抜くけど、いかんせん足場が悪い。
その時、水の中を大きな何かが波を立てて近づいてきた。あれなら居場所は分かる。けどこちらの動きが鈍くて対処が追いつかない。
僕は前方で武器を交差させて敵の攻撃を受ける。それは細くしなやかな何かだった。蛙だというならきっと舌だろう。獲物を捕らえるしなやかで強靭な刃は僕の武器を甲高く響かせて吹き飛ばした。
そして刹那――僕の胸はその舌に貫かれた。そして同時に吹き出した血が気のせいだとは思えない。何かが落ちる気がする……だけど無意識に僕は奴の舌を掴んでいた。
「アギト……」
僕の声は曇っていた。口にも血の味が広がる。声を受け取ったアギトは二人と共にラッシュを掛けた。熟練プレイヤー同士の切れないスキルの連続。
断末魔の叫び、歓喜に沸く声。だけど、僕にはもう何も見えて無かった。

あの子の想い（後書き）

読んでくださってる方々ありがとうございます。そろそろ限界が近いかも知れないです。なんだか段々書く時間が長くなって行って大変です。

でも出来るだけ頑張るので見捨てないでください。

思い出を未来へ（前書き）

僕は深い闇に落ちていってた。だけど誰かがそんな僕を引っ張り上げてくれた。

気がつくとそこには頼れる仲間の姿。僕は彼らに感謝して今自分の身に起きている事を話した。そして最後のモンスターから出ていた最後の思いでアイテムで僕らは彼女の過去を見る。

そして全てを知った時、僕達は再び彼女の前に立つ。

思い出を未来へ

僕の体からたった一つの命が流れ出した。それは取り戻す事が不可能な物で、セーブやロードやコンテニューは適応外。

無力な僕は、自分ではそれを救いあげる事も出来なくて。糸が切れた操り人形の如く僕は水に沈んでいく。ここの水は、とても暗く冷たくて恐ろしい。

せめて逝くなら……彼女がいるとても綺麗なあの場所で……僕がそんな事を考えて暗い底の底辺を見た時、僕の体が浮き上がった。

振り返るとそこには僕を掴む腕が有る。白く輝く腕だ。暖かなその腕は力強く僕を引っ張った。引き戻される、あの場所へ。まだ……僕は生きられる。

「ふざけんなよスオウ！　こんな所で……まだ何もやり遂げて無いのに退場なんてゆるさねぇ！　戻って来るまで殴り続けてやるよ！」

気がついた僕の耳に届いたのはそんな物騒なアギトの声だった。

「止めたまえアギト！　これ以上の暴力は認められん！」

ボヤケた視界に浮かぶのはちっちゃな姿のテッケンさん。

「うえ～んうえ～ん……ヒック……あぁぁ～ん」

彼のタマネギ頭に落ちているのはシルクちゃんの涙なんだろう。

みんなが僕を引き戻してくれたんだ。僕はまだ上手く動かせない声帯を使って戻ってきた事を伝えよう。

「……あり……が……とう」

その声にみんながこっちを見た。そして更に大きくなったシルクちゃんの泣き声。テッケンさんはヤレヤレみたいな感じで自分を抱く彼女を慰める。

一方アギトはそんな僕に一発入れた。そして僕を台座に投げ飛ば

し背を向けた。
「気が付いたんならさっさと起きろ！　お前は昔からトロいだよ。心配ばっかかけんじゃねぇ！」
そう言ったアギトの声はなんだか鼻声混じりだった。僕は台座に背中を預けて水に浸る。胸に傷は……無い。僕は背中を向けたアギトの腕を見つめる。
リアルもゲームも変わらない。いつだってあの腕は僕を引き上げてくれた。あの時見た、白く輝く腕はこいつしか考えられない。
「ごめん……アギト。いつも迷惑掛けちゃってさ」
するとアギトの周りの水が波紋を作っているのが分かった。泣いているのだろうか？　背中ごしだけど多分そうなんだろう。
「言っておくけど泣いて無いからな！」
そんな言い訳は今更遅いよアギト。だけど僕は突っ込む気には成れなくて、二人分の波紋を見つめた。いろんな人に、僕はきっと恵まれている。
だからこそ……やり遂げなくちゃいけないんだ。

「所で、実際どういう事なんだい？」
その言葉で火蓋を切ったのは一番冷静なテッケンさんだ。今は台座の上にちょこんとたっている。僕とアギトはギクッとしてしまう。だけどそんな事情よりも僕の回復魔法を優先させてくれているシルクちゃんの顔にはハテナが浮かんでいる。
「どういう事って、どういう事なんですか？」
「さっき意識が無いときシルクの魔法を受け付けなかった理由とか、あの時の見えた気がする血とかだよ」
その言葉で思い出したのかちょっとシルクちゃんの肩が反応する。やっぱりみんなにも見えてたんだ。じゃあ、あれはやっぱり幻じゃ無かったのかもしれない。
「あんなの気のせいですよ。ＬＲＯでは血の表現はないんですから。ですよね？」

シルクちゃんが僕らを見る。その目には自分の言葉を肯定して欲しいという願いが見えた。だけど僕達はなかなか切り出せない。だってこれは話して良いことか？

二人にとってただのゲームで有るはずのＬＲＯ。それを受け止め方次第では壊すことになるかも知れない。知ったからって気にする事は無いし自分達がそうなる訳じゃない。

だけど二人は良い人だから……だからこそ重く受け止めてしまいそうで不安だ。ゲームのままであれるのならその方が良いに決まってるんだから。

だけどそんな僕達にテッケンさんは強い眼差しで言う。

「僕らは仲間だよ。だからこそ言いたく無いのならそれでもいいさ。だけどあんな事が今からも続くのなら僕達は君を守る為に付いていく。それは僕達の勝手だから」

この小さい人はなんだかカッコ良すぎだよ。そんなことを言われたら何を隠せと？　僕は近くのアギトを見やる。

「こういう奴なんだよ」

そんなことを言うアギトは半ば呆れてる感じ。だけどそこには誇らしさが有る感じ。こいつは自分の仲間を信じてるからな。

僕はそれからシルクちゃんを見た。彼女の不安な顔は変わらない。

「大丈夫だよ。彼女は見かけよりしっかりしてるから」

「な、なんですかそれは！　テッケンさんはいつも突っ走り過ぎなんですよ」

おお、初めて言い返す所をみた。二人は親しげだ。そして僕の方をシルクちゃんは見る。

「もう、いいですよ。怖いけど……私だって古参プレイヤーで、仲間なんですからね」

そう言うシルクちゃんの手はちょっとふるえている。やっぱり怖いんだ。あんなに飛び散る血しぶきなんてそうそうリアルでも見れないからな。

それでも聞いてくれるのなら……話してみよう。

僕とアギトは今の自分達の状況とアンフェリティクエストの事を話した。それを聞き終わると二人は同時に声をだした。
「「そんなことって……」」
確かに簡単に信じられる事じゃない。二人は僕よりも一年は長くゲームをやっているんだから。僕よりもこのＬＲＯと言うゲームを知ってるはずだ。
だけど僕にとってはこれがＬＲＯなんだ。今や命を懸けて臨む、本当の戦い。本当の冒険。そこには今の所後悔しかないけど、全部が終わった時にそれこそ後悔しない為に進み続けるしか出来ない。
「にわかには信じられないが、その話が本当ならスオウ君がああなった事も納得だ」
「痛かったんですか？」
二人が言ってるのは胸を貫かれた時の事。あの時は衝撃的過ぎて痛みなんて分からなかった。でも言われて見れば胸の辺りが熱い様な気がする。けど……
「良く覚えてない」
それが正直な所だった。あの時、僕のＨＰは尽きては無かった。だけど僕は確かに……多分死に掛けた。人にとっての急所の心臓を貫かれたからＨＰと関係無しに、その衝撃のフィードバックか何かだったのかも。
でも、あの状態から戻って来れたのはきっとＨＰが残っていたから……そしてみんなが引っ張りあげてくれたから。そんな偶然の様な奇跡に僕は救われ続けてる気がする。
「スオウ君、君はどうしてそこまでする？　命を懸けた時点でこれはもうゲームじゃない。さっき本当に感じたんじゃないのか……自分の死を」
「そうですよ。こんなのゲームじゃない！　止めた方がいいですよ。今度あんな事があったらどうするんですか？　今度こそ……本当に死んじゃうかも知れない……」

二人の言うことは尤もだ。だけどそれの答えは自分の中でもう出てるんだ。
「ありがとうございます。だけど、もう決めたんです。これは僕の責任で……僕の役目で……宝くじに当たったような巡り会わせなんだって思うことにしました。
それに僕が止めたら彼女は救われない」
僕のそんな言葉にシルクちゃんは食いかかる。水が少しだけ弾けた。
「それは！　みんなに通知されたクエストじゃないですか！　スオウさんが辞めても他の人がきっと……」
「ダメなんだ。みんなにこのクエストは通知されたけどクリア出来るのは僕だけらしい。その理由は分からないけど何故かそうなんだ。だから僕の役目だよ。それに今は、譲る気ないよ」
僕は実は自分に言い聞かせてるのかも知れない。死に直面して実はちょっと弱気なんだ。僕は二人に話すことで自分の気持ちを再確認している。
死を本当にみじかに感じた僕は決意の決意が必要なのかも知れない。
「でも……死んじゃうなんて……」
そう言うシルクちゃんをテッケンさんが制す。
「もう分かったろシルク。これ以上の言葉に意味なんてないよ。彼は教えてくれたんだよ。全部を」
そして台座の上で胸を張って彼は手を伸ばす。
「天晴れな心意気だ。僕も微力ながら出来る限り力になろう」
僕はその小さな……でも頼りになる手を握った。
「ありがとうございます。僕はまだ弱いから……一人じゃ何も出来ないんです」
するとそこからもう一つ手が伸びて来て重なった。その手はシルクちゃんだった。
「それはみんな同じですよ。助け合うのがこのゲームです。だから

一杯助けます。スオウさんは心配ですもん。みんなより装備が薄いのに無茶し過ぎです。ヒーラーの私から見たらすっごい心配なんですからね」
うう、怒られた。彼女の気持ちはとても暖かい。僕は涙が流れそうなのを必死に堪える。ＬＲＯを初めてなんだか感受性が増した気がする。自分はこんなに涙を流す奴じゃなかった。
密かにここ数年涙を流した事がないのを自慢にしてたのにその記録は見事に砕かれた。
だけど昔に戻りたいとは思わない。ここでの出会いがどれも大切な物になってるからだ。そしてその最初の出会いが彼女なんだ。
あれから僕のＬＲＯは始まった。
「さぁ～て、そろそろやろうぜ」
アギトのその言葉で僕達は動き出す。まずはテッケンさんをシルクちゃんが抱き抱えて台座から離す。そして僕は台座の前に立ちウインドウから三つの思いでアイテムを取り出した。
それぞれ『思いでの印』『思いでの欠片』『思いでの落日』――それを台座の同じ形をした所にはめ込む。すると台座には何本も光の線が走りそれは周りに駆け巡っていった。
そして次第に光は円柱状の空間を満たしていく。それから何かが僕達には聞こえだした。
「ザザ……ザザザ……ツリ……セツリ待ってください！」
僕は思わず振り返る。するとその時、真っ正面にはブラジャー片手にタオル一枚で走り回るセツリの姿があった。
「やだよー。サクヤの胸が私より大きいのがいけないぃぃ！」
「うわっ！？」
僕は思わず目を閉じて身を固めた。避けられないし、目のやり場が！　って思ったけど彼女は僕の体をすり抜けて行った。
「これって……」
「立体映像だな」
スゴい……この空間全てを使って完全な状況を映し出しての立体

映像。僕達は今まさに『思い出』の中にいる。
少しだけ今より幼く見えるセツリ……その後ろには大きな胸を揺らして追いかける巫女さんの姿……ってこっちの方がやばいよ！
あの人何にも隠してないよ！
場所はどこかの脱衣所。いっぱいの籠があるし銭湯みたいだ。幼く見える彼女は少なくても三年前だから？　だけどそれじゃあセツリはこの中でも成長してた事になる。
そんな事ってあり得るだろうか？
僕は幸せそうな彼女達を眺めた。するとその時、捕まった衝撃でセツリのタオルがハラリと落ちる。色々な所が丸見えだ。慌ててシルクちゃんが僕達三人を武器のスキルで打ったたいて僕達の記憶をぶっ飛ばす。
やるときにはやる子だこの子。躊躇が無かった。気づいた時には入浴シーンは終わっていた。三人同時にため息を付くとカシャンと言うシルクちゃんの武器を構える音。
思わず背筋が伸びちゃうよ。演技でもキリリとしとかないと。それもおかしいけど。
それから続いたのは二人の幸せな生活だった。どこにも影なんて落ちない優しい毎日。
そしてしばらくすると『思いでの印』の栞が光を失った。きっとこれに込められていた思い出を写し終わったって事だろう。
それから僕達は目の前で繰り広げられる思い出に浸った。そして終わる頃には僕達は同じ考えを抱いていた。
あの人を……巫女さんを……サクヤを……救ってあげよう。
サクヤの矛盾した行動の意味、おかしくなった事情、その全てがこの中にはあった。
僕は三つのアイテムをその手に握る。そして三人を見やり頷きあった。
湖畔の光は今も続いていた。溢れる光の橋の端でサクヤはうずく

まりその頭に元に戻ったフクロウが乗っている。僕達は先刻、サクヤが祈った橋の丸くなった部分に現れていた。そこにあの場所からの転送魔法が設置されてあったんだ。ただし人数は三人。抜けているのはテッケンさんだ。

彼は今はきっと湖の底だろう。彼が戻るまではこの人数で持ちこたえ無くちゃいけない。

僕達の存在に気づいたのかフクロウが飛び立ち、再び形を変えた。そしてサクヤもゆっくりと立ち上がる。まるで夢遊病患者みたいにフラフラしている。

「ねえ……私は……どうすればいいの……約束が……願いが……あああああ」

彼女は震えている。最初にこの様子を見たときは恐怖しかなかったけど今は悲しみが募る。あれからずっと彼女は囚われ続けている・・・彼女も同じこの世界に囚われた者。

「サクヤ……今日、その答えを出そう。僕達が協力するよ」

その言葉を聞いた途端、フクロウは突進してきた。僕とアギトは同時に武器を構えてフクロウをはじき返す。

サクヤは僕の言葉に震えている様だった。彼女はきっと全てを忘れていた。自分の意思か誰かの思惑かは分からないけどきっと今まではそうだった。

だけどアンフェリティクエストの発生でその楔は次第に解れていった。彼女の本来の目的を思い出させる為に。

僕は一気に距離を積める。同じ鉄は踏まないようにフクロウは完全にアギトが止める。かなり無茶して貰うけど必ずこのアイテムをサクヤに！

僕は思いでの印を彼女の額の帯に当てた。すると帯の模様が光りアイテムを吸収した。

「あああああああああ！」

それと同時にサクヤがほえる。思った通り。あの帯の模様は特殊な物だ。これはシルクちゃんの意見で解った事。

アギトの声に振り返るとフクロウの攻撃が迫っていた。僕はとっさに横っ飛びで交わす。視認出来るのは直撃数メートルだけだけど僕達は度重なる見えない敵との戦闘でそれを学習してた。
特にこの鳥の場合は風切り音もスゴいし直撃の瞬間には姿が見えるのが大きい。今の自分達なら余程の事が無い限り直撃はしない。
「私のセツリ……愛してた……あの子……は」
サクヤは自分の思い出を四つのアイテムに分けられていた。思い出を記すそのアイテムは彼女の記憶。クエスト発生から少しづつ戻った記憶はそれでも彼女を壊す程じゃなかったけどその四つのアイテムは例外だ。
思い出の印はその中でも一番優しい記憶。サクヤのセツリへの愛が溢れてる。
「セツリを閉じこめてるのはサクヤだろ。誰の指図だよ」
「私が……あの子を……そんな……でも……あの人が……」
まだダメだ。やっぱり全部の記憶を戻してそれからなのか？　いや……サクヤの本心は今じゃなきゃ聞けない。彼女の記憶が全部戻るって事はあの当時に戻るって事だ。あの当時にサクヤは既にＡＩの域を越えていた。だからこそ、こんなに苦しむんだ。
僕は羽を飛ばす攻撃を交わしてアギトと入れ替わり再びサクヤに近づく。そして今度は思い出の欠片を額に押しつける。彼女の断末魔の叫びが再び湖畔に広がる。それに反応するようにフクロウは怒り出す。
更に早く……更に鋭く空を切る。巻き起こる風の鎧は僕が乱舞を発動していた時に似ている。僕らはフクロウの風に寄って押し戻される。
「あの子は……私の言う事……聞いてくれないの。それに……私は気づきました……あの子の願い。愛しい愛しい……あの子の頼み」
欠片はちゃんと入ったようだ。微かに聞こえる言葉には僕達が見た内容がある。欠片は悲しみの始まり。でもこれともう一つは完全な形じゃ無かったんだ。

でも出来事は解った。サクヤはセツリの願いに気づく。それで二人はやってしまう。彼女は逆らえない、セツリの為の存在だから。
「サクヤは、どうしてあんな事……どう思ったんだあの時！」
「私は……嬉しかった……だけど……それが！」
そこしづつだけど会話になってきた。答えを出す為にも一杯今のうちに吐き出せ！
僕とアギトは体に無数の傷を刻む。シルクちゃんが直してくれるけど追いつかない。フクロウは僕達がサクヤに近づかない様に風を起こし続けている。だけどただそれだけで無数の刃が僕達を襲うんだ。これじゃあいつまで経っても近づけない。
手元にある最後のアイテムがサクヤに届かない。僕はアギトとシルクちゃんに目配せする。ここで乱舞を使うしかない。だけどそれをシルクちゃんは止める。
「乱舞じゃ確実じゃ無いですよ。同じ風だし。どうなるかわかりません。私に任せてください。最大の一撃を決めます。一分ください！」
そういうと彼女は早速詠唱に入る。僕とアギトはシルクちゃんを守るようにカマイタチを打ち落とし続ける。強引に前に立ち避けることもせずに武器を振り続ける。風の勢いもシルクちゃんになるべく届かない様に……。
長い長い一分だった。僕とアギトのＨＰは互いにレッドゾーンに入っていた。だけどその時シルクちゃんの声がする。
「サンシャイン！！」
天井から降り注ぐ光の柱がフクロウを直撃した。その瞬間湖畔が爆発。そして風が止んで自由に動ける様になる。
僕は走り出した。この瞬間を無駄には出来ない。だけど僕たちはほぼ城の所まで押されていた。サクヤまでまだ百メートルはある。
その時不意にサクヤは立ち上がり反応した。フクロウを焼く柱に手を翳し何か凄い早さで口を動かした。そして次の瞬間、数枚のお札が飛来してフクロウの少し上にバリアを張って助け出した。

自分の今の限界の魔法がこうも簡単に防がれるなんてって感じでシルクちゃんは愕然。だけど僕は走り続ける。よそ見してる暇はない。フクロウは解放されてしまったんだから。

フクロウは一気に僕の横に居た。僕達は互いにお互いの目を見た。それは同じ感じがする瞳だった。だけど僕にぶつかる寸前にアギトがスキルをたたき込む。そして猛然とラッシュ。

僕はこの間に更に加速した。肺から空気を絞り出して全身へ！その瞬間、サクヤは再び何かを口ずさむ。だけどそれは捉えられる早さの言葉じゃない！

そして発生する魔法スキル。これじゃあまるで高速詠唱だ。そんなスキルあるのか分からないけど目の前のはそうとしか思えない。

発生した魔法は僕を越えてアギトに向かう。

「傷つけないで……クーは友達！」

大量のお札がアギトを囲み炎が包む。

「アギト！」

その光景に思わず足が止まる。その瞬間にフクロウが僕に来た。凄まじい衝撃……どうやらサクヤはこのフクロウをとても大切にしていてこいつを攻撃する奴を狙う様だ。だから今攻撃したら僕には二つの攻撃が来る。

だけど僕は歯を食い締め二刀を振るう。後少しなのにこんな所で押し戻される訳には行かない！

「乱舞！」

僕は高速の剣技でフクロウを押し戻す。その瞬間サクヤの攻撃対象は僕へ。高速詠唱で魔法が来る！　だけどここだ。僕は一際強くフクロウを叩き少しの空間を開けた。そして僕を包む札の束……これはさっきアギトを焼いたのと同じ。

僕はこの瞬間少ないスキルの一つを発動する。それは「残影」一分間に一度だけの絶対回避のスキルだ！　僕は影を残して燃え盛る魔法から抜け出した。そして一気に詰め寄り思い出の落日をサクヤに当てる。

サクヤの叫び。これで後一つ！　その時、フクロウが一際大きくなった。そして山をも揺らす叫び。それは「これ以上サクヤを傷つけるな！」と聞こえた気がした。

その時、反対側の湖から橋に何かが飛び出した。振り返るとそこに居たのはテッケンさん。彼は掌のアイテムを掲げて見せた。それは僕が落とした最後の思い出アイテム。『思い出の結晶』だ。

思い出を未来へ（後書き）

意外にこの話は長くなってしまいしました。思った通りには納められない物です。頭の中ではこんな複雑じゃ無かったんだけど、それだけじゃ駄目なんですね。

でももう佳境です。次と次ぐらいでこのパートは終われる筈だから、付き合ってくださると嬉しいです。

頑張るので今後ともよろしくお願いします。

クライシス・クライアス（前書き）

僕は最後の思いでアイテムをテッケンさんから受け取った。これをサクヤに……だけどその時大きくなたフクロウに道を阻まれる。隔てられた僕達はそれでも目指す。

沢山の思いを尽くして、僕は空を滑空してサクヤに迫る。シルフィングの青い刀身が空に軌跡を描いた時、僕達は遂にサクヤに届く。

クライシス・クライアス

「スオウ君！」

テッケンさんの声が橋の上に響いた。僕の手の中に吸い込まれたのはアイテム『思いでの結晶』。僕はそれを握りしめサクヤを見る。だけどまだ、さっき打ち込んだ思いでの落日を受け入れてる最中みたいだ。

流石にあんな苦しむサクヤに続けては打ち込めない。僕達は少しの――だけど長く感じる時間を生き延びなくちゃいけない。

「私の……役目は……あの子を……向こうに……」

震える唇からこぼれる言葉はもう殆どを思い出した事を指している。

サクヤの役目。それは最初から何も変わってなんかないんだ。ただ彼女は進化し過ぎた。彼女は心を得ることで自身のプログラムが絶対じゃない事があることに気づいたんだ。

更に大きくなったフクロウは僕達に向かってその羽を叩きつけて来た。僕達はその攻撃をなんとか避ける。だけどその攻撃で僕達とサクヤは完全に隔てられる。

奴の羽は橋を叩き割ったんだ。砕けた石が、破片が宙に飛ぶ。これじゃぁダメだ！　このままじゃあたどり着けなくなる。

でも今なら……宙の瓦礫を伝えば行けるかも知れない。僕は駆け出す……出そうとした。だけどそれは対の羽に阻まれた。更に僕らの距離は開く。

瓦礫が次々と湖畔に波紋を作り、一回羽ばたくだけでフクロウの起こした風は僕らを飛ばす。輝く羽と長い尾は湖の光全てを集めてるみたい。

神々しいその姿が向かってくる。シルフィングを叩き付けるけど効いてない？

僕はフクロウの攻撃をギリギリで防ぎつつ大声を上げた。まだ全

部じゃない。だけど……それでも、既にサクヤは自分を知った筈だ！
「サクヤァ！　お前は本当はどうしたかったんだよ！　お前の本心はなんだなんだぁ！」
僕のその言葉が届いたのかは解らない。だけど頭を押さえつつサクヤが立ち上がったのは見えた。フクロウの攻撃は更に激しさを増す。輝く羽から放たれる無数の刃は完全にかわすことも防ぐ事も不可能な物量だ。
それでも僕は腕を振り続ける。乱舞の起こす風の隙間を縫って攻撃が届いてもこの腕を止める訳には行かない。
何故なら後ろには瀕死のアギトと回復してるシルクちゃんが居る。
風と風のぶつかり合いで乱れた気流が湖畔に幾つものトルネードを作り出す。それは輝く湖畔の水を吸い上げて黄金の柱と降り注ぐ雨になっていた。
「サク……ヤァァァァァ！」
僕は唸る。助けたいんだ、救いたいんだ……だからお前の声を聞かせてくれ！
「私は……あの子に……幸せに……なってほしかった！
私は……幻でも……この……世界が……現実じゃなくても……けど……あの子は……こっちがリアル……」
うあぁぁぁぁぁ……と湖畔にサクヤの悲鳴が轟く。
サクヤは元々、セツリの世話係として生み出された存在。だけどサクヤはセツリと触れ合う内に少しずつ個性を生み出していってそれは心だったんだ。
そして彼女達はお互いを本当の家族の様に思っていた。だけどその頃から、セツリはリアルに戻る時間がだんだん減っていったんだ。
サクヤは世話係でその対象はセツリだけどもう一人マスターが居た。それはサクヤを作った存在……つまりは当夜さんだ。彼はそんな妹の事が心配でサクヤにある事を命じた。
それはセツリをちゃんとリアルに帰すことだ。一日に一回必ず。
サクヤもそれは解っていた。サクヤは自分の世界は幻だと知ってい

たから……セツリにはちゃんとリアルが有ることも解っていた。
だから次第に帰るのを嫌がるセツリの事が心配だった。だけど産みでた心にはそれとは逆の思いもサクヤには有ったんだ。
「私は……心配だった……心配だったのあの子が。でも……それなのに……嬉しくて……あの子が私の名前を呼ぶのが……抱きついて来るのが……あの子と……居る時間はいつだって輝いていて……私はだから、あの約束を……」
そう、だからあの約束をサクヤはした。セツリとサクヤのその証とも言える事だ。セツリが仮想空間に閉じこめられた三年前のあの日の事故……いや、そもそもあれは事故なんかじゃなかったんだ。

乱舞の限界時間。僕の体から発せられてた赤い蒸気はなくなり風も掴めなくなる。その瞬間、風がまるで巨大な岩の様に僕の体に当たった。
このままの勢いで壁にぶつかったら確実にＨＰが尽きる。だけど体は縛られた様に動かない。
「スオウ！」
アギトの腕が僕を掴む。なんとか回復は間に合った様だ。アギトは自分の武器を突き刺して勢いを止めてくれた。そして次にアギトの背で風を凌いでいたシルクちゃんが武器を掲げて魔法を発動する。
「ホーリーフェンス！」
光の壁が僕達とフクロウ間に現れて風を防いだ。だけどその壁には直ぐにヒビが入る。長くは持ちそうに無い。するとアギトが大量の回復訳を僕に押しつける。
「こんな所でくたばる訳には行かないだろ？　選手交代だ。少し休め」
「だけどアギト、やれるのか？」
そう言った僕の頭を小突く。
「お前な〜、もしかして乱舞があるから俺より強いと思ってるのか？　見てろ。まだまだ追いつかせねーよ」

アギトはそう言って前に歩み出す。そして壁が破られた。僕達に向かって風が襲いかかる。嵐の様な風のうねりの中、アギトはウインドウを出している。そして武器を……「はっ？」　その瞬間、あまりの暴風に晒された橋が崩れ出す。僕達は一瞬アギトを見失った。

「アギト！」

そして崩れだした橋に慌てている僕達をチャンスだと思ったのかフクロウは突進してきた。一回の羽ばたきでトップスピードに乗ったフクロウは一直線にその巨体を僕達に向けて来る。

崩れかける橋の上で僕達には殆ど逃げ場なんてない。僕は力が入りきらない腕を無視して前に立とうとした……だけどその時、横から割ってきた奴が巨大な盾でフクロウを受け止めた。

「はっ、さっさと回復しろよ――な！」

「アギト？」

あの赤髪は間違いなくアギトだ。だけど装備が違う。戦闘中に取り替えたのか。最後の一声で大きく力を込めたアギトは右手に持った身の丈を越える大剣をフクロウに突き立てる。左手には真紅の大きな盾とこれじゃぁまるで。

「スキル『ナイト・オブ・ウォカー』俺の隠し玉だ」

そうアギトは言った。確かに今のアギトはナイトみたいだ。重戦士みたい。だけどその企画外の大きさの盾と剣を上手く使いフクロウにラッシュをかける。盾もただ盾としてじゃなく武器にも使えるみたい。

だけどなんであんな凄いの隠しといたんだ？

「切り札ってもんはそうそう見せるもんじゃないだろ！」

そう言ってフクロウを弾き飛ばすアギト。そうそうは一杯これまでにあったぞオイ。まあアギトにも理由が有るんだろう。だけどフクロウを攻撃するとサクヤの魔法が来るぞ！

そして案の定、既にアギトはお札に囲まれている。また同じ魔法か。

「やめろサクヤ！」

だけど止める訳はなかった。サクヤはフクロウを傷つける奴に厳しい。そしてアギトが再び炎上した。あれ？　だけどアギトのＨＰは減ったけどそれほどでも無い。
すると炎を弾き返してアギトは生還した。その手に携わった盾は不思議な光を帯びている。どうやら特別性の盾らしい。そしてこちらをチラリと見ると言った。
「任せとけスオウ。お前はあのＮＰＣを助けるんだろ？」
僕はそのアギトの言葉に頷いた。そうだ……これならアギトは大丈夫だろう。ただし
「倒さないでくれ……そいつは多分、ただ守りたいだけなんだ」
そんな僕の言葉にアギトは呆れた様に言った。
「しのぐだけならともかく、倒すなんて出来るかよ。買いかぶるな。お前は自分が助けたい奴だけ見てろ」
「ああ、そうするよ」
ありがたい言葉だった。そうだな……僕には目の前の事しか見えない。他を見る余裕なんて初心者な僕には早いよね。
だから……目の前の……今は遠いサクヤの場所に行かないと。

遠くで風がはぜる音が聞こえた。頭にはまだ穴があってズキズキするけど私はもう自分の事を殆ど思い出した。私は「サクヤ」。この名前はあの子が付けてくれました。
「初めましてサクヤ、私はセツリ。サクヤって言うのはサクヤの名前ね。あなたがサクヤだよ。気に入った？　実はずっと前から考えてたの。可愛いでしょ？　可愛いよね」
初めて見たあの子はその時から表情がコロコロ変わる子で私はこれが人間か……なんて思いました。
私はあの子の為にお兄さんが作ったのです。広い世界を与えたらあの子は「一人じゃつまんないよ。友達がほしい」と言ったから私は作られました。
初めはただの子守役……だけど私たちは仲良くなって次第に一緒

に居る時間が長くなると私にはもう一つの役割が与えられました。
それは「監視」と「観察」です。私たちが最初に出会った空間はもともと実験設備だったのだから当然でしょう。だけどお兄さんはこの頃から危惧していたのかも知れません。
仮想で全ての夢を叶えてしまったらあの子はお兄さんの居る世界に戻ってこなくなるのでは無いのかと。だからこその監視と観察でした。
そして私もこの頃からあの子の幸せはどこに有るのだろうと考え初めていました。
そんなある日、あの子は自分が作ったお話を私に聴かせたくて持ってきました。そして私は気付きます。あの子の想いと願いに。
『命改変プログラム』と題されたそのお話はあの子の夢の結晶でした。もしかしたらあの時、一緒に作ろうなんて言わなければ良かったのかも知れません。
だけど落ち込むあの子の顔を見たくなんて無くて、華やかなあの子の笑顔が好きで、私はあの子に求められる事を願っていてそれが喜びでした。
それからあの子は更に仮想の空間に入り浸りました。二日に一度も帰らなくなり私は不安と共に嬉しくも有りました。
「ねぇサクヤ。一緒にお風呂入ろうね。一緒に寝ようね」
もうこの頃から私が一人はイヤだと思っていたのかも知れません。共に過ごす時間の分だけ、いやそれ以上に私はあの子を愛していました。
でもだからこそ……私はあの子の幸せを願っても居たのです。私はお兄さんの命令で心は痛んだけど必ずあの子が寝たらリアルに戻す様にしました。
私にはその機能が付けられたのです。これはあの子の為と想い、一人の夜を何日も過ごしました。
私という存在はリアルでは何の価値も無いのです。だからこそ向こうで価値有る生を生きれるのならそれが良いと私は思っていまし

た。
「サクヤのバカァ！　バカバカバカだよサクヤ！　価値なんて私が決める！　私にとって大切な物は私が決める！　大丈夫だよ、サクヤは私の大事だよ」
何日間かずっと怒っていたあの子が私に言った最上の言葉でした。私はその時初めて涙を流しました。悲しい時に出るはずの物なのに……私は必死に堪えても止めどなくそれは流れていきました。
悲しい訳じゃないというとあの子は「うん」と優しい微笑みをくれました。真っ赤な鼻を鳴らしていた私はさぞやみっとも無かったでしょうに。
それから私は聴きました。「幸せ」は何ですかと。するとあの子はこう言いました。
「ずっとここにいたい。ここなら私は走れるしなんだって自由だよ。それに家族も入るし……お兄ちゃんだって来ようと思えば来れるしね。見たくなんてないもん……現実の私なんて……」
そしてあの子は私に約束を持ちかけました。二人だけの秘密の約束。
「ねえサクヤ。サクヤは私と一緒にいたい？」
私はただ頷きます。
「じゃあね、私がずっとここに居たいって言ったらどうする？」
「それは駄目です。リアルの体がどうなるか……それにお兄さんはどうするんですか？　会えないのは辛いですよ」
「あんなのただの入れ物よ。お兄ちゃんは私に会いに来てくれる。ねえサクヤ……私のリアルをここにして」
それはもっとも重大なアラート発言でした。私はこの時お兄さんに知らせるべきだったのかも知れません。だけどこの時の私はそれがあの子の望む幸せで……そして私もそれを望んでしまいました。
そして次の日にあの子はそれをお兄さんに言ったみたいでした。すると当然ここに居る時間に制限が付けられました。その事にあの子はいたくご立腹です。私も会えない時間が増えてとても寂しく感

じていました。
　ある日の事です。あの子はあの物語をお兄さんにしたようでした。その日は珍しく機嫌が良くてその時の事を饒舌に話してくれました。
「王子様はお兄ちゃんなんだよって言ったら顔が真っ赤になってね。サクヤにも見せたかったな～」
　あの子の顔からはお花がこぼれそうでした。だけどこの一週間後です。
　あの子は涙を流してここに現れ言いました。
「サクヤ……プログラムを実行して」
「でも……あれは」
「いいからしてよ！　サクヤも私を捨てるの！……約束でしょう。お願い」
　私はあの子の意識を表層から真理へと導きます。システムの手が届かない所へ。そこで新しい日々が始まる筈でした。
　だけどその時、この空間が崩れ始めたのです。原因は分かりませんでした。だけど私はあの子の手を引いて戻るように促します。このままじゃどうなるか分からなかったから。
　だけどあの子はそれを拒みました。涙を伝う頬には悲しみが溢れ、星を散りばめた様な瞳は黒く陰っていました。
「ホラね……邪魔な子なんだよ私」
　その言葉にどんな意味が込められていたのか私には分かりませんでした。ただ最後に
「サクヤ……ありがとう……忘れて」
　そう言ったあの子の顔だけが心に焼き付いてしまいました。そしてあの子は私に背中を向けます。あの子は自ら奥深くに進んだんです。
　その後の事は……まだ頭に有りません。それはきっと今、目の前に飛んできたあの子の王子様の手の中に有るのでしょう。でも私はそれを受け入れていいのでしょうか？

僕とシルクちゃんは城の頂上部分に来ていた。遙か下方ではアギトがフクロウを止めている。どうしても距離が必要だったんだ。サクヤの元に行くために。
「この高さから落ちたら死んじゃいますよ」
「落ちるんじゃない。飛ぶんだよ」
「一緒です。羽が生えるのは少しの間で、操作も私なんだから確実に落ちます！」
「大丈夫だよ。どうせ一直線だし。なんとかなるよ」
「どうして、そう楽天的なんですか」
シルクちゃんの溜息。だけどこれしか方法がないんだ。それに楽天的じゃなく信じてるだけだ。仲間を。
「もうー！　やるしかないですね」
彼女は意気揚々と杖を振る。すると僕の背中に二対の七色に光る翼がついた。簡素で透明なその羽は蜂みたいだ。　このスキルは一時期人の夢を叶える魔法としてスゴく流行ったらしい。だけどその操作性の問題から事故が相次ぎ今では使用する人はいないと言う。
だけど一度覚えたスキルは忘れないから助かった。これで僕は届く事が出来るんだから。
「失敗はあの世で後悔してくださいね。恨み妬みは受け付けません」
「今言うことそれ？」
ヒドいよ、シルクちゃん！
「だから……絶対に帰って来てくださいって事です！」
なるほど。ありがとうシルクちゃん。僕は城の物見台（？）から飛び出した。
その瞬間シルクちゃんの操作で羽が震えて僕の体は上下左右に振られる。
「うわぁぁわぁぁわわぁ！」
「なんでこうなるの？　ええ～～い、行っちゃえーー！」
なんかやけくそ気味のシルクちゃんの声。マジで死ぬかもと思った僕の体は羽に引っ張られる様に進んだ。

輝く湖畔の上空を僕は滑空する。その時目の前に立ちふさがったフクロウ。どうやら僕の姿に気付いたらしい。
だけど止まること何てあり得ない。
僕はシルフィングを構えて輝く鳥と激突した。青い刀身が奴に食い込む……だけどそれでも奴は止まらない。こいつにも守り抜きたい物があるから。だけど……
「おまえの大好きなあの子の為なんだ！　だから道を、空けてくれぇぇぇ！」
その瞬間、フッと勢いが弱まった気がした。僕は一気に二刀を振り下げフクロウを叩き落とす。あの位で落ちる訳無いのにフクロウは何故か飛ぼうとしない。
僕はその姿に言った。
「必ず助ける！　お前のご主人様を！」
僕は最初から感じていた。あのフクロウはただサクヤを守りたかっただけなんだって。だから僕達はぶつかった。だけど今……僕達の想いは伝わったんだ。
アギト達はそんな事無いと笑うかも知れない。だけど僕はあのフクロウの思いも受け取った。その時大量のお札が飛散する。やっぱり攻撃されるのか。
だけど僕は突き進む。僕の居た場所に刹那遅れて炎が舞う。それは空に炎の柱を描き出している。でも進む。真っ直ぐに……ただ一直線にあの子にむかって。
最後の防衛線をサクヤが大量のお札で作る。だけど僕はそれを二刀で打った斬る。もの凄い爆発で全身が痛いけど気にしない。ただ後一枚……この壁の向こうにサクヤが居るんだから！
僕は二刀に力を込めてクロスさせる。バツ印が付いた壁は一際激しい爆発を起こした。湖畔一杯に響く爆音。衝撃で揺らぐ水面。
これで僕のＨＰは尽きてもおかしくは無かった。だけど僕はそんな爆炎の中から飛び出した。そこには乱舞で作った風の道が通っている。

「うおおおおお！」
届く！　もうすぐだ！　僕は雄叫びと共にサクヤに迫った。だけど彼女の高速詠唱は凄まじい。魔法が次々に発動しだす。流石に次食らえば僕のＨＰは尽きてしまう。
だけどその時、発動直前の魔法が誰かの攻撃に寄って叩かれた。それはなんだか小さい影……テッケンさんだ！
今までどこに行ったのかと思っていたら得意のスキルで透明になってサクヤ側の橋にいたらしい。彼は叫ぶ。
「この時を待ってたよ！　準備は万端だ。さあ来い、スオウ君！」
テッケンさんはなんと僕に向かってタックルした。きっと勢いを止めるためだろう。味方同士の衝突でＨＰは減らない。あのまま橋に激突したら僕のＨＰはどうなったか分からない。
だけど完全には止まらない僕達はそのままサクヤに衝突する。
橋に噴煙が上がった。そして丁度良いことにマウントポジションに僕はいた。サクヤの瞳は揺れている。
「どうして……どうしたらいいの？　私は……私のせいで」
「その答えは自分で出すべきだよ。これを返す前に聴かせてくれ」
僕が見せたのは思い出の結晶だ。
「分からない……でも私は知っていた。あの子の幸せはここじゃ駄目なんだって……でも私には約束があって……助けたい……助けたいのに……どっちなのか分からない」
サクヤはずっと揺れていた。自分の心とセツリとの約束で。それが毒みたいになって彼女を壊してたんだ。
「そのどっちかは君が選ぶべきなんだ！」
そうサクヤは本当はもう答えを出してる筈なんだから。
「……私は間違ってた。それでも……自分の為にあの子に理由を付けて……約束を……だけど違うから。私は……セツリを……出してあげたい。謝りたいの」
僕は涙が落ちるサクヤの額にそっと巾着袋を当てた。そして吸い込まれていく。完全に消えた時、彼女の額の帯は切れて飛んでいっ

た。

「私は……あの子を……救いたいんです」

光の中であの人の前でそう願った。

「分かったよ。じゃあ僕の『命改変プログラム』を受け取って……これは契約。必ず妹を……摂理を救い出せる人に……」

そこで思い出の結晶の記憶は散った。このあと私はＮＰＣとしてＬＲＯに行ったのです。

クライシス・クライアス（後書き）

遅くなりました。すみません。サクヤ編、クライマックスなので上手く書けてたら幸いです。これからも頑張ります。

閉じかけた勇気（前書き）

僕達は護衛クエストをやり遂げた。彼女のＮＰＣとしての役目は湖に住む精霊を遊ばせるのが本来の役目だった様だ。そのイベントで湖の水を空に移し、僕達は遂にセツリを助け出した。

だけどセツリは目覚めない。僕には巨大な虚無感が到来して……足が止まりそうになった。だけどそんな僕を押してくれるのはいつだって仲間だった。

閉じかけた勇気

何が自分に出来たのか、それは分からない。だけど目の前の女の子は笑ってくれた。それだけで何かが許された様な気になる。これで良かったのだと思える。

自分にも誰かを救える……そんな夢を見た。

「ありがとう……ございます」

全ての記憶が戻ったサクヤがそういった。彼女の肩には元の姿に戻ったフクロウが鎮座している。

「クーもごめんね。ありがとう」

そう言ってフクロウを撫でるサクヤ。『クー』と言うのはフクロウの名前のようだ。

「それで……もう大丈夫なんだよね？」

僕の質問にサクヤはコクリと頷いた。

「大丈夫です。私はもう迷いません。私はあの子を・・・セツリを帰したい」

長い黒髪が湖の光を吸い込むように存在感を表す。これまでとは違う。もう彼女はただのＮＰＣじゃ無なくなっている。

「それじゃあ早速彼女を解放して貰おう。聴きたいことも沢山あるんだしね。全てはクエストを達成してからだよ」

そう言ったのは小さなモブリのテッケンさんだ。確かにそうだね。もうサクヤは僕達の味方だ。何も焦る事なんかない。

セツリを助けて街に戻ってからでもゆっくり事情を聞こう。

「そうですね。でも一つだけ私も聴きたい事があります」

そう言ってサクヤは僕に強い眼差しを向けてくる。なんだろうドキドキしちゃうよ。

「貴方は……セツリをどこまで背負う覚悟がありますか？」

その言葉に僕はなんて返したらいいのだろう。背負う？　それはどういう事だ。
「命掛けでセツリを救う覚悟をしてくれたみたいですけど私が言いたいのはその後です」
「その後？」
それはセツリを無事にリアルに戻せた時の事か？　そんなこと考えた事もない……と言うか余裕がなかった。でもなんで今そんな話を？
「セツリは向こうでは一人ぼっちです。お兄さんも居ないんじゃ誰がセツリを向こうで迎えるんですか？　支えるんですか？　私は何も出来ません！」
確かにそうだ。サクヤはこの世界でだけその存在があるプログラム。リアルでセツリは孤独なんだ。だからこそセツリは戻りたがってない。確かに独りぼっちで体も自由に動かないんじゃそうかも知れない。
だからこそサクヤは向こうで彼女を支える存在で有って欲しいと僕に願っているのか。でも……それって、どうなればいいの？
そんな僕の疑問にサクヤは当たり前の様に答える。
「だから貴方は……セツリと結婚してください！」
「はぁ！」
何言ってんのこの子。話が飛躍しすぎだろ！
「何もおかしくなんてありません。命を懸けれるぐらいにセツリを思ってくれてるんじゃないのですか！？」
そう言ってズカズカ詰め寄るサクヤ。この子、セツリの事に成ると性格変わるのか？　僕はたじろぎまくる。
「ええっと……そりゃぁ思ってるけど。いきなり結婚って……それは……」
「セツリには……向こうに戻りたく成るための存在が必要なんです！　セツリにはちゃんと向こうをリアルとして生きてほしい。そのためにはあの子を愛してくれる人が向こうにも必要です！」

サクヤの顔は真剣だった。その話も分かるけど……その存在は僕なのだろうか？
「これはアンフェリティクエストを達成する為には絶対に必要な思いの一つです」
沢山の思いがこのＬＲＯにはある。だけどその中でセツリはたった一人……孤独なのかも知れない。
「僕は……セツリを救い出したいし、それが出来たらリアルでも勿論交流したいと思ってる。だけど今はそれよりもただもっと一緒にいて仲良くなりたいだけなんだ」
僕の答えにサクヤは腕組みして考え込む。そして僕の顔をのぞきこんできて「それだけですか？」と聞いた。僕は自分でもそれだけかな？　とか思った。そして考えてこう答えた。
「ただ絶対に無くしたくない。放したくない……繋がっていたいから僕は命を懸けてでも追いかけてるんだと思う」
「……そうですか」
それで今はいいです。サクヤはそう言って離れた。テッケンさんはなんだかニヤニヤしてる。よかったここにアギトが居なくて。あいつはきっとからかうからね。
僕は橋の崩れた方を見る。そこは空白・・・クーの攻撃で破壊されている。そして向こう側にシルクちゃんとアギトの姿。やっぱりかなり遠い。合流したいけどどうすれば……そう思っているとサクヤが歩みでた。
「クー、お願い」
その言葉と同時にフクロウは大きくなった。僕達と戦った時の神々しい姿だ。そしてサクヤはクーの背へ。僕達も後へ続こうとしたらサクヤは腕を出してそれを制す。
「なんだよ」
「二人は尾に捕まってください。クーは一人乗りなんです」
僕とテッケンさんは渋々枝の様に分かれている尻尾を適当に握る。そして次の瞬間、僕達は音を置き去りにした。クーの余りのスピー

ドは音速を初速で越えたんだ。あり得ない。
一瞬だけ聞こえた爆音は既に遠く、僕達は限りなく静かな場所にいた。そして一気に反対側……つまりアギトとシルクちゃんのいる方まで来ていた。
僕の足が地面に付く。するとそこから大きな安心が伝わってきた。隣を見ると同じ様な表情のテッケンさんと目が合う。
僕達はプルプル震えながら手を合わせて地面の素晴らしさを感じていた。大地は雄大だ。
「何やってんだお前等？」
僕達の感動に水を差す声はアギトだった。その後ろではシルクちゃんがクーを見てビクビクしている。僕とテッケンさんは同時にアギトに向かって言った。
「「大地の素晴らしさをかみしてるんだ！」」
見事なシンクロ率。アギトは頭を抱えている。そしてサクヤが降りてきてクーは元の小さな姿へと戻る。するとシルクちゃんは安心したのか前に出てきた。
サクヤは僕達を見てクスクス笑っている。なんだか異様に恥ずかしい。
「なんだかやっぱり頼りないですね」
そんな事を言われてしまった！　僕が落胆してると小さな手が僕の肩に置かれる。顔を上げるとテッケンさんが親指を立てて決めていた。
うう……なんて優しいんだ。僕が女なら惚れてるよ。
そんな僕らのやり取りを余所にサクヤはアギト達に自分の非礼を詫びていた。それに対してシルクちゃんは涙目に成りながら両手を胸の前でブンブン振っている。アギトはお詫びの後にただ一回笑顔を見せただけ。
こいつも女の子の前だと無駄にカッコつける。ＮＰＣまで守備範囲だったのか、恐ろしい。僕達はこの戦闘の前と後じゃきっと繋がりが違う。

立ちはだかる困難を乗り越えた先に有る絆をこのＬＲＯと言うゲームは感じさせてくれる。それこそ、沢山の人を魅了する要因なのかも・・・。

「良いですね。人と言うのは。セツリももっといろんな人達と触れ合えれば何かが変わるのでしょうか？」

そんな事を羨ましそうに僕らを見ていたサクヤが言う。だから僕は力強く言ってあげよう。

「変わるさ。価値観はいつだってどんな時でも変わってく。だから僕達は諦めずにセツリの前に立とうサクヤ。アイツを帰すその日まで」

するとサクヤの瞳から一筋の涙が落ちる。そして何度も「はい……はい」と言って首を縦に振る。そのたびにサクヤの瞳からは涙が飛んでいた。

湖畔の輝きは増し、どこからともなく何かが歌う声が聞こえてきた。僕達はこのクエストの最後のイベントを見ている。

巫女服姿のサクヤはゆっくりと湖に立ち前に進んだ。そして無数のお札を風に舞わせ湖に散りばめる。よく見ると彼女はずっと何かを呟いていて、その周りには透明な何かがいる。

小さいそれは上下にゆらゆら飛んで時々足を着けて湖に波紋を広げていた。そしてその波紋は次第に多くなっていく。周りを見回すと大きな湖に沢山のそれが円になって踊っているようだ。

この歌はきっと彼らの合唱。優しく心に波紋を落とす様な歌だった。そして次第に彼らの円から水が大量に吹き上がる。彼らは面白がる様に愉快な声と共にその水を駆け上がっている。次々に彼らは空に駆けだし、湖の水を引っ張り上げる。

すると湖畔には幾つもの水のアーチが出来上がった。ああそうか。精霊を呼び出すとか最初にアギトが言っていた。彼らがその精霊なのだろう。

精霊達はこの湖を遊び場にしてるみたい。優しい歌と愉快な声が

湖畔中に響いていた。そして最後に精霊達は湖の中の水を全部引っ張り上げる。空中で彼らは縦横無尽に遊んでいる。
なんだか彼らを遊ばせるのが目的みたいだな。そんな事を考えてると水の無くなった底にいるサクヤが言った。
「そうですよ。私のＮＰＣとしての役目はここまでたどり着いてあの精霊達を遊ばせる事です。これで本当はクリアの簡単なクエストの筈でした。だけどいろんな事が重なって私のその役目もこのクエスト事態も壊れてしまいましたけど」
そういうサクヤは僕らを手招きして歩き出す。そして着いたのは僕達が城の中から見た場所。大きな大樹がある場所だった。この枝の中でセツリは眠っている。
「どうすればいいんだ？」
「簡単です。精霊の力が通っていた水は消えたから叩き切ればセツリは解放されます」
そう言ってサクヤは僕を促す。僕は愛刀を抜いて一線した。すると大樹に僕が切った切り傷が刻まれそこから亀裂が入り全身へと広がった。
そして甲高い音を響かせて砕け散った。粉雪の様に舞う大樹の欠片は天上からの光を受けて輝いている。そんな中をゆっくりと降りてくる影。僕は彼女を静かに……だけど力強く抱きしめた。
なんども願った彼女を今、僕達は取り戻した。魂が彼女の温もりを感じて僕の目からは押さえきれない物が流れていた。
その時、僕達にはもう一つ贈り物があった。天上から降ってきた四つのアイテムはこの壊れたクエストの成功報酬か粋な精霊達からの贈り物だったのかはわからない。
僕達は『センラルト』の街に戻ってきて宿屋の休憩所を囲んでいた。一つ取った部屋にはセツリを寝かせている。宿屋はこのＬＲＯの世界では絶対に安全な場所だ。攻撃は勿論、他人の部屋に勝手に入ることは出来ない。

僕達はここで束の間の休息を取るはずだったけど事態はそう軽くは無いようだった。何故ならセツリは目覚めないんだ。
あの場からここに来るまで……そしてこの宿屋に着いてから何度も彼女を起こそうとしたけどダメだった。
「どうなってんだよ」」
僕の呟きにみんなが黙り込む。さっきからただ沈黙が訪れているだけ……そして何か発する度に空気は重くなってる感じだ。
外の喧噪とは裏腹に僕達の気持ちは落ちていた。あんなに苦労して、やっとで掴めたのに……その結果がこれなんてあんまりだ。
彼女はリアルでも眠ったままで……そしてこの中でもそうしてしまったのか？　なんで……どうしてなんだ。ここはセツリの夢見た世界の筈なのに。
もしかしたら僕はセツリに拒絶されたって事なのか、とも考える。こうなったら悪い方へばかり思考は落ちていく。まるで底なし沼で……深く暗く冷たい。イヤになる。僕はいつだって遅い。
もっと早く……いや、あの時……なんて意味はない。あの時僕はセツリを守れなかった。
僕はセツリが起きないって事が信じられないんだ。だってあの堅く閉じた瞳は最初に出会った頃と同じで……また僕が呼びかけると起きてくれるとどこかでそう信じてた。
僕の声にいつも笑顔を返してくれたセツリだから直ぐに目覚めて「遅いよ、ばか」とか言われる事を少なからず期待していた。
だけど彼女の瞼は何度呼びかけても堅く閉じたままだった。一度も動くことも無かった瞼を見たら僕はもう忘れられたのかも知れないとさえ思った。
考えてみればセツリとはほんの少しの間しか一緒に居なかったんだ。出会って……別れて……追いかけて……離れての繰り返しで積み重ねた物なんてない。
それでも僕は追いかけてきてセツリを捕まえたけどそれは彼女に取って迷惑だったのかな？　するとその時、誰かがテーブルを大音

量で叩いた。僕達は一斉にそちらを見る。それはサクヤだった。
「ふざけないでください。スオウさん、貴方はたとえセツリに嫌われてもやり遂げて貰います。それが覚悟や決意という物です」
厳しい事を言ってくれる。嫌われたまま助けるなんて心折れそうだよ。
「本当にそんな事思ってるんですか？　あの子が……セツリが本気で……」
ワナワナ震えたサクヤには怒りが見える。だけど何故か今日の僕は止まらなかった。
「本気で言ってる分けないだろ！　その位、分かれよ！　本気でそんな事、少しでも考えたら僕はこんな所で命懸けるかよ！」
肺の空気を全て吐き出してしまった。なんで僕はこんなにイライラしてるんだ。女の子にこんな風に突っかかった事なんて一度もないのに。
だけどサクヤも止まらない。外見からはこんな風に怒るとは思えないのに彼女は僕に食いかかる。
「どうせ私は分かりません！　私は人じゃ無いですから一から十まで応えてくれなきゃわかんないプログラムです！だけどそれでも貴方なんかの様な根暗な回路は持ってませんけどね！」
「なぁ！　こっちだってな、プログラム風情に言われる筋合いなんかない！　０と１を永遠に繰り返してろ！」
僕達は互いに掴み掛かろうとした。だけどそれはアギトによって制された。
「いい加減にしろ二人とも！　そんなバカな事やってる場合じゃ無いだろ！」
そう言って僕は殴られ、サクヤは強引にイスに戻された。僕は床に倒れたまま立ち上がろうとしなかった。なんだかそんな気力が無い。
だけど不意にやっぱりセツリの顔が見たくなって立ち上がる。もしかしたら今度こそ……僕は一人彼女の眠る部屋に向かう。後ろか

アギトの呼ぶ声が聞こえたけど無視した。
痛かったよおまえの拳。
僕はずっとセツリの横顔を見つめた。これじゃあ何も変わらない。リアルの無力な自分と同じだった。僕は向こうでもこうしていた。こうするしか出来なかった。だけどこっちではそうじゃないと思っていた。
けれど結局……こうなった。セツリの側には無力な僕が居るだけだ。
「なんで……なんで……僕だったんだよ」
思わずそんな言葉が出てきた。もっと他の誰かならスムーズにセツリを助け出せたかもしれない。僕の様な初心者じゃなく例えばアギトの様な奴なら……きっと僕よりずっと上手くやったはずだ。
ＬＲＯには何百万というプレイヤーが居るのに、なんで寄りによって僕なんだよ。
僕はセツリの僅かに開いた唇に目がいく。花の蕾の様な可愛い唇。僕はベットに手を突き自分の顔を近づけていく。あの時はこれで……その時廊下から何かが割れるような音が聞こえて僕は動きを止めた。
何やってるんだろう……最低だ。僕は再びイスに腰を下ろす。完全に脱力したように体重を椅子に預けた。消えて無くなりたいと思った。それだけの事を僕はしようとしたんだ。
もうここにいるのも辛くなってきた。これもリアルで感じた事だ。何も出来ない自分はここにいてはいけない気がする。それをＬＲＯ内でも感じるなんて……。
僕は椅子から立ち上がる。だけどどうにも力が上手く伝わらなくてフラツいた。そしてドスンと床に尻餅を着く。その時、僕の腕はベットで眠るセツリの手に触れた。細くか弱い手だ。
誰かが守ってやらないと今にも崩れて無くなってしまいそうなそんな感じがする。僕はそんなセツリの手を少しだけ自分の手で包ん

だ。
　さっき逃げだそうとした僕にそんな資格あるわけも無いけど、今この瞬間だけ……少しだけセツリの温もりを貰って置きたい。
　そんな事を考えると何故か僕の視界が滲んでボヤケてしまう。それでも構わず僕はただじっとセツリの手を優しく包む。その時、何かが僕の指に当たった感覚。
　僕は身を乗り出しセツリを確認する。
「セツリ！？」
　だけど彼女の瞳は堅く閉ざされたままだ。僕はさっきまで触れていた手を見る。何も無い。勘違いかも知れない。　だけどなんだかそうとも思えなかった。
「諦めないで」
　彼女は僕にそう言って、諦めない事を僕は彼女に誓った筈だ。だけど一人では僕は直ぐに揺らぐ。不安が次々に襲ってきて、やり遂げた後に結果はついて来なかった。
　そして今度こそと戻ってきた筈の彼女は目覚めなくて……その姿を目の当たりにしたとき、自分は最初の頃と何も変わってないと思った。
「そんなことは無いだろ？」
　その時、後ろから声がした。見知った声だ。振り向かなくても誰だか分かる。
「そうかな……僕は沢山の人に助けて貰ったけど結局、全部空振りだ。結果がないよ」
「俺は、お前が強くなってると思うけどな。だって俺には真似できない……ここで、ＬＲＯで命を懸けるなんてさ。そんな枷を背負ったら……逃げ出す。間違いなく。だから俺はお前を強いと思う」
　ハッキリとした強い口調。僕は思わず涙を堪える。
「俺達はさ、結局野次馬と変わらないんだよ。とんでもない物を背負ったお前とは違う。だけどその中に入りたくてウズウズしてる奴がお前に付いてくる。協力してくれる。言い方は悪いけどな。

俺達は気が楽だよ。ゲームだからな。どこまで行っても俺達にはＬＲＯはゲームでしかない。だからこそ見たいんだ。ゲーム野郎達が望むのは本物の勇者なんだぜ」
僕はもう嗚咽も堪える事が出来ない。さっき殴られた頬が熱くて堪らない。簡素なベットだけの板張りの部屋に僕の涙は落ちて水を称える。
そして次々と声が届いた。
「僕はスオウ君を尊敬してる！　声を掛けてくれれば例え世界の裏側からでも駆けつけよう！　仲間として友として、幾らでも迷惑を掛けてくれ！　一人の友人を失う事は僕の人生の最大の損失だ」
ドアの前に立つ小さい影はテッケンさんだ。
「私も……出来る事ならなんでも協力します！　私はＬＲＯをゲームとしか見れないし……やっぱり野次馬だけど、二人が幸せに成るのを見たいんだ！」
テッケンさんの後ろで体を縮めてそれでも精一杯声を出してくれたのはシルクちゃんだ。
「私に道をくれたのは貴方です。迷路から私を導いた光は貴方です。どうしてもセツリには貴方が必要なんですよ！
私じゃダメなんです！　ごめんなさい……私は押しつける事しか出来ません」
震えて頭を下げるのはサクヤ。そしてその肩に止まっていたクーが僕に突進してきた。いつかの様に僕は倒れる。だけど痛くなかった。僕はセツリのベットの上……結構やばい位置に居るかも。
その時、何かが涙で濡れた目に映った。あれはホクロ？　いやなんか赤い点が耳の裏の部分に浮かんでる。
僕はセツリの髪をかきあげて確認する。その行為にみんなも近寄ってきた。そしてその赤い点を見て一番に可能性を指したのはサクヤだ。
「この部分には本機のリンク機能があったはずです」
リンク？　確か二台のゲーム機を繋げて意識をネットを介さず共

有出来たりなんかした機能だった筈だ。
「この機能を使えばセツリを連れ戻せるかも知れません！」
「本当か？」
希望が僕達の胸に沸く。
「はい、ただしセツリはきっと深い所に潜ってます。だから起きれない、迷ってる。普通の人ではそこまで意識を仮想に浸透できません。……でも」
そこでサクヤの言葉が詰まる。
「でも、僕なら行ける！」
その先を強引に引き継いだ。サクヤは頷く。小さな刻印が僕達の光を生み出した。
「ログアウト」
僕は再びリアルに向かう。

閉じかけた勇気（後書き）

十三話です。次は久々リアルの話です。これからも頑張るのでよろしくです。何故か書く度に時間が掛かる様になっている事に嫌になるけど続けます。

二人の関係（前書き）

目覚めた僕を待っていたのは衝撃的な事実だった。目をあけるとそこは自室ではなくて病院？　そして日鞠は僕の腕を握って泣いていた。ＬＲＯの関係者の人達も居て聞かされた言葉は僕の身体を震わせた。

「心臓発作？」

だけどそれでも僕は行かなきゃいけない。心配する日鞠は僕からゲーム機を取り上げて逃げ出した。そして僕達はようやく向き会う事が出来たのかも知れない。

二人の関係

ささやかな勇気が右手に残った。小さな希望が左手に灯った。それだけでもう一度、歩き出せる。やるべき事が分かれば自然と足は動くものだ。

迷った分だけ……立ち止まった分だけ、先に進もうとする。まだ間に合うだろうか。分からないけどもう一度走り出そう。

「行ってこいよスオウ。今度こそ俺達は何も出来ないけど、信じてる。お前ならセツリを連れて帰って来るってな」

アギトの言葉にその場のみんなが頷いてくれた。僕は再び溢れて来る物を押さえてウインドウを呼び出す。そしてみんなに向きなおり言った。

「行ってくる……眠り過ぎだからね。叩き起こして来るよ」

「ああ、頼んだぜスオウ」

「君ならやれる」

「信じてます」

「セツリを頼みます」

僕は彼らの声援を受け取りログアウトを押した。視界が徐々に狭まり暗転する。そして僕の意識は肉体へと戻っていった。

「ん……ぅん」

カーテンの隙間から差し込む光。鼻に突く薬品の臭い。瞼の隙間から覗く天井は何故かいつもと違っていた。その時

「スオウ！」

と激しく名前を呼ばれて僕の肌に暖かく柔らかい物が当たった。目を開いてその姿を確認するとそれは日鞠だった。何故か日鞠は僕の手を両手で握りしめ自身の胸に当てて泣いている。

「一体……どうしたんだよ」

僕の疑問は尤もだった。今の状況が分からない。どこだろうここは。僕の部屋より随分広い。見回すとテレビや生活用品が一通り揃った一人暮らしでも始めれそうな部屋だ。
だけどこのベットの白さと言いその周りの機器は不似合い。部屋に染み着いた薬品の臭いはここをある場所だと想像させるには十分だった。
僕は再び日鞠を見て聞いた。
「ここって病院か？」
日鞠は首を縦に振る。やっぱりそうなんだ。でもなんで病院なんかに自分は居るんだろう。確か僕は部屋のベットで横になりログインしたはずだ。
僕は涙を流す日鞠にその事を聞こうとしたけど、なかなか言葉が出てこない。僕は今最悪の想像をしていた。そしてもしもその通りだとしたら……その時ドアが開く様な音と共に複数の足音が聞こえてきた。
そして現れたのは佐々木さんや吉田さんを初めとする僕に忠告をしたＬＲＯ関係者の面々だ。彼らは僕が目を覚ましてる事に気づくと、持って来ていた見舞いの品だろうをぼとぼと落とした。
「良かった……スオウ君、目を覚ましたんだね」
そう言ってみなさんが僕のベットの周りに集まってきた。この人達がここに居るって事は多分僕の想像はあっていたのだろう。
そして泣いている日鞠を見る限り彼女もそれを知ってしまった。やっぱり僕は彼女を泣かせてしまった。僕は佐々木さん達を見て呟く。一応確認しておきたい。
「みなさんがここに居るって事はあれですよね。僕がＬＲＯの中に居る間に何かあったんですよね？　僕の体に」
誰もが神妙な面もちになる。そして聞こえてきたのは日鞠の涙混じりの声だった。
「スオウは……ヒック……心臓が激しく揺れて……うぅ……心臓発

作みたいな状態……に、なったんだよ」
僕は思わず自分の胸に空いている方の手を当てた。心臓発作……それってまさか止まったりしてないよな？
すると神妙な声で佐々木さんが後を引き継いだ。
「止まったんだよ。君の心臓は少しの間だったけど確実にその動きを止めた。これは僕達の考えが甘かったんだ」
ゾクリとした悪寒が僕の背筋を這った。心臓が止まった？　それは一瞬でも僕は死んでしまったと言うことか。あの時……胸を貫かれた時……僕は本当に死んでいた？
僕は自分の頭に着いているゲーム機に震える腕を伸ばして触れた。ゴツゴツした機械の感触。ずっと入ってたから少し暖かい。この機械が僕を殺そうとしたのかと思うと怖くなる。冷水を浴びせられたように体が震えだした。
あれは幻覚や夢じゃ無かったんだ。リアルでも僕はあれを体験してたのか。
頭ではわかっているつもりだった。忠告もしてくれたし、それでも僕は何度もゲームの中に戻った。そしてゲームの中で確かに僕は死を体感した。
だけど僕はそれでもその時はやっぱりゲームの中だと思っていたのか知れない。現実の自分がまさかこんな事に成ってるだなんて思いもしなかった。
そして今のこの状況だ。僕は今、本当にこのゲームに恐怖を感じている。リアルの恐怖を。それが僕の体を震わせているんだ。
「スオウ……大丈夫だよ」
僕の耳に届いた優しい声。それはスゴく暖かくて心に染みた。
「大丈夫……生きてるよ。私の事、わかるでしょ？」
そう言って日鞠はベットに乗り上げて僕を抱きしめた。震えていた体が徐々に収まっていく。安心が包んでくれているような感じだった。
僕は何度も頷いた。日鞠の体はとても柔らかく暖かい。

「わかるよ……日鞠の胸のささやかさが感じれる」
精一杯の元気の証を見せてやろうと当たっている部分の感想を言ってやった。
「それはスオウが小さいのが好きだからだよ」
どんな理屈だオイ。なんだかいつもの会話で一気に緊張感が溶けていく。恐怖も冷水から温泉位まで変わったかもしれない。
僕達の会話に周りのみなさんもなんだか笑っていた。そんな立場じゃないだろうに。ずっと僕を心配してくれていたみたいだしその笑いには安堵もあったのだろう。みんなの緊張が切れたんだ。

落ち着いた所で僕は話を聞いた。どうやら僕が胸を貫かれたとき、僕の異常をリアルで日々ゲーム機の動作状況をチェックしてる人が気づいたらしい。
僕の異常は優先的に拾う様にしてあったから直ぐに分かったと言うことだ。そしてＬＲＯの制作側にゲーム内での異常事態を伝えみんなして僕の家に向かった。だけど家には鍵がしてあって入れない。その時帰ってきた日鞠に事情を話したと言う。
余計な事だ。ここは上手く誤魔化せばいいものを。
そして家に入り僕の部屋に、だけどここにも鍵があった。けどそれは日鞠の合い鍵でとっぱ――ってオイ。
「なんで僕の部屋の合い鍵を持ってるんだ？」
「家族ですから」
あの家に僕のプライベート空間は無かった様だ。僕が落胆しつつ話は進み。部屋に入ると体が痙攣してる僕が居たという。想像したくない話だ。
その状態にみんなが慌てて日鞠は僕に飛びついて泣いてたらしい。なんとか救急車を呼んでそれから電源を落としてここまで運んだと言うことだ。
だけどそれは賭だった。電源を落としても大丈夫か散々悩んだ挙げ句にとった方法はどうやら正解だったらしい。その証拠に僕は今

ここに居る。
その時、少しだけ心臓は止まったらしいけどそれはほんの少しの時間。病院に着き電源を再び入れて完全に落ち着いた。それはきっとアギトが引っ張り上げてくれたからだ。
それと実感は無かったけどきっと日鞠もずっと僕の名前を呼んでくれていたんだろう。
全ての話を聞き終えて今度はこっちが話をした。何があったのかを詳しく。
「そうか……ゲーム内で血が見えたか」
僕の話に困惑する大人達。
「ＬＲＯ内でそんな事が……多分君が貫かれたときだろうね。間違いない」
いろんな推論を飛ばす大人達を尻目に僕は頭から外したゲーム機を見ていた。その側面には「リンク」と掛かれた差し込み口がある。
すると突然横から伸びてきた腕が僕のゲーム機を取り上げた。それは言うまでも無く日鞠だ。
「もしかしてスオウ……また行く気じゃないよね？　こんな危ないゲームは私が許しません！」
日鞠は絶対そういうだろうと思っていた。だからこそ知られたくなかったんだ。でも僕は行かないわけには行かないんだ。
「許してくれなくていい……だけど僕は何度だって行くよ。仲間が居るんだ。今も信じてくれている。それに助けたい奴が今迷子になってるから迎えに行かないといけない」
日鞠の目にブワッと涙が貯まる。泣かせてしまう。だけどこれだけは譲れない。
「スオウがなんでそこまでする必要があるの？　今度こそ本当に死んじゃうかもしれないんだよ。……そんなの私イヤだよ！」
そう言って日鞠はゲーム機を抱えたまま病室から飛び出してしまった。佐々木さん達は呆然と立ち尽くしている。僕はベットから立ち上がり日鞠を追いかけることに。

「すまないね。僕達のせいでこんな事になってしまって」
大の大人が揃って情けない顔をしている。だから僕は病室を出るとき言ってやった。
「別に大人の事情の為にやってる訳じゃ無いですから気にする事ないですよ。僕はただ助けたいからやってるんです」

僕は病院内を探し回った。だけどどこにも見当たらない。とても広い病院だ。一人で見つけるのは至難の業かも知れないと思っていたらあることに気づいた。
「ここって、あの病院？」
そうここはセツリ達が入院してる病院だ。多分彼らの会社と繋がって居るんだ。他の病院に運ばれて今の事態を知られたく無かったんだろう。
僕の足は自然とある方向に進んでいた。そしてたどり着いた病室は一際静かな場所……その前に僕は立つ。いつも来た時にこの静けさがなんだかプレッシャーを与える場所だ。
僕は覚悟を決めて扉をスライドさせて病室に入った。するとそこには日鞠の姿があった。やっぱり……全部彼女は知っている。
「問いただしたの……スオウの事、あの人達に。最初は渋ってたけど私がこの事をマスコミに売るって言ったら話してくれた」
さすが日鞠だ。他人に容赦がない。それは効果覿面だったろう。
「そしたらこの子の事もね……教えてくれた。スオウはこの子の為に命懸けて戦ってたんだね」
病室内に響く日鞠の声。なんだか少しの陰を感じる。
「ごめん」
なんだかそう言うしかない気がした。
「それは何に対してのごめん？　浮気してたこと？　他の女のために私に心配かけたこと？」
浮気じゃない……とは言えなかった。そもそもまだ付き合っても居ないはずだけど口に出せるはずがない。異様に日鞠の背中が怖い

んだ。
「それは……」
「私、怒ってるよ。それと同時に凄く怖い。スオウは結局この子の為に行くって分かってるもん。だけど……不安だよ。死んじゃったらイヤだよ」
心細く震え出す日鞠の背中。僕は後ろから近づいて肩に手を置いた。
「抱きしめてよバカ」
女の子からそんな要求されるとはなんて僕は情けないんだろうか。何回か躊躇ったけど僕は後ろから日鞠の背中を優しく包んだ。小さくてか弱い女の子の背中だった。
「僕は死なない。約束するよ日鞠。それでも安心出来ないのは分かるけど信じてほしい。助けられるのは僕だけなんだ」
「それも聞いた。でも……なんでって……なんでスオウなの？って思うよ。お世辞にもスオウ逞しくないし、優柔不断だし普段は良くボーとしてるのになんでスオウなのって」
あれ？　なんだろう。途中から悪口に聞こえたのは気のせいか？
「だけどそれでもスオウを選んだこの子が嫌い。お姫様の様に眠って……王子様の助けを待つなんてズルいよ！　私なんて駄目な王子様をずっと助けて来たのに」
だから後半悪口になってるっての。誰が駄目だって？　てか主旨がおかしくなってないか？
「何言ってんだよ日鞠？」
僕は呆れて腕を解こうとして日鞠に捕まれた。
「まだ良いって言ってない。充電率八十位だもん！」
何だよ充電率って？　僕は油断してる日鞠の腕から強引に取ろうかとも考えたけど何となくそれは気が引けた。
「僕は絶対に戻って来る。だって僕の居場所にいつでも居るのは日鞠なんだからさ。」
僕のそんな言葉に日鞠は一瞬肩を上げた。だけどそれから首を捻

って僕を睨む。
「スオウって……ホント馬鹿だよね」
「なんだよそれ」
人の恥ずかしい言葉をそんな風に返すなよな。日鞠はそっぽ向いて「そんな事じゃ……心配は」とか言ってるけど聞き取れない。
僕は次になんて言おうかと考えてると日鞠は不意に頭を僕にぶつけてきた。思わず後ろに下がる。何するんだコイツ！
「スオウが馬鹿だから」
そう言って舌をだす日鞠はいつものコイツに見えた。だけどどういう事なのかさっぱり分からん。充電は完了したのか？
「うん、私の方が全然近くにいるもん」
「なんだそれ？　それより早く返せよな。急いでるんだよこっちは」
僕は日鞠に詰め寄る。するとゲーム機を掴んだとき、ジッと強い眼差しで見つめられた。
「死なない？」
「死なないよ」
「戻ってきてくれる？」
「戻ってくる」
「この子の事好き？」
日鞠の言葉でその背後のセツリの顔を見る。きれいな顔だ。
「好きだよ」
ピクンと反応する日鞠。
「私の事大好き？」
僕は少し赤くなった日鞠を見やる。
「好きだよ――ぶっ！」
殴られた。何でだよ！
「大好きって言ってよ」
何という横暴だ。これじゃどっちがお姫様だ。僕は遂に力を入れてゲーム機をひったくる。だけどその時バランスを崩した日鞠が一緒に付いてきた。僕達はぶつかって床に倒れ込む。

マウントポジションを取られた僕。怒りの鉄拳が来ると思って目を瞑ったけど何もこない。見てみると日鞠は僕のお腹の上で俯いている。
そしてゆっくりと振り上げられる拳。今度こそ来ると思ったらポテポテと僕の胸を叩くばかり。
「どうしたんだよ」
「スオウが最低だから……」
バカから最低になりました。早い格下げだ。
「ならもっと強く叩けば？　もう覚悟は出来てる。幾ら殴られても耐えて行くから」
「……耐えてイクなんてスオウMなんだね」
おい、なんだそのイヤラシイ方面への解釈。物足りないと思われた？　最低の称号にMが付く。変態だ。
だけど日鞠の力は変わらない。なんだか声に張りも無かったし冗談か？
「日鞠？　おかしいぞお前」
「うるさい、Mス」
Mス？　もしかしてMスオウを短縮した形かな？　斬新だなおい。
するとぽつりぽつりと日鞠の言葉が聞こえてきた。
「私も最低だよ。三年間も意識不明の子を助けられるかも知れないのに……どうしてもやっぱり行って欲しくないもん」
日鞠の声は暗い。お腹に伝わってくる彼女の暖かさが今はなんだか遠のいて行くようだ。
「それにね。私が怖いのはスオウが死んじゃう事じゃない。だって死んじゃったら誰の物にもならないけど生きて横取りされたらどうなるの？　私が殺しちゃうよ」
とんでもない発言をしてるよこの子。ポテポテだった音が刃物を突き刺すブスブスに変わった気がする。相変わらずゆっくりなのが怖い。予行練習？　微妙に位置をズラしてるのは内蔵の位置を確認してる訳じゃないよね？

「あっ、勿論スオウが死んじゃうのも怖いよ」
後から付け足されたその言葉に重みを感じない！
「ねえ、スオウにとって私ってなんなの？　家政婦さんか何かかな？」
流石にその質問にはムッと来るぞ。恐怖に縛られてた体に力を込めて言った。
「ふざけるな。そんな訳ないだろ！　日鞠は幼なじみで、友達で、僕にとって居なくちゃ困る大切な存在だ！」
するとその瞬間粋なり息が止まった。何かに遮られるようにして。僕の眼前には日鞠の顔がある。閉じられた幼なじみの瞳……髪をかきあげる白い手……胸に当たる柔らかい感触……そして僕たちの唇は重なっていた。
何秒ぐらいそうしてただろうか。僕には途方もなく長く感じれた。日鞠がようやく離れたときこう言った。
「あの子とはキス……したって聞いたから」
唇に自身の指を当てるその仕草に鼓動が速まる気がした。てか、何から何まで喋ってるんじゃないよあの人達！
「あれは事故で！　――って、バーチャルでの事で……ああもう」
僕はまだ温もりが残る唇を必死に動かした。だけど上手く言いたいことが言えないし考えがまとまらない。
「嫌だった？」
狼狽える僕の耳に届いた言葉になんて返せば？
「嫌じゃない……けど……」
「けど？」
日鞠は僕の目を見つめる。ドキドキが加速するとはこういう状態なんだ。僕は悟らなきゃいけないんだよね。
「けど……これってそう言う事？」
日鞠は顔をカリブ海の夕日みたいに赤く染まって頷いた。キスの方が恥ずかしい様な気もするけど女心は分からない。でも……そうなんだ。けどなんで今？

「だってスオウは止めても行くから……死んじゃうかも知れない所。私はね後悔なんてしたくない。だから今、知って欲しかったの」
そんなことを恥ずかしがりながら言う日鞠は今までで一番可愛く見えた。そしてそんな事を思う自分がいることに気付いたりで大変だ。えっと……これからどう接すればいいのかな？　いや、まずは返事を……と思ったら日鞠は立ち上がり唐突に沢山の事を喋り出す。
「これからは炊事洗濯火事は分担制にしようかな？　月火水木金土はスオウね」
「殆ど僕じゃん！　平等に分けろよそこは！」
はっ！　いつもの癖で突っ込んでしまった。てかこれは恥ずかしいから極力会いたくないとかの意志の現れだったのでは？
「いいの……それで？」
日鞠の顔は僕へ向けて涙の準備をしてそうだ。やっぱりなんだか気まずさがあるけど、ここで放すなんて出来なかった。
「あ、当たり前だろ。もう何年もやってないんだから一人で家事なんて出来るかよ。お前が居なきゃトイレットペーパーの位置すらわかんないだぞ！」
言ってて情けなくなる台詞だ。だけど日鞠は涙をポロポロこぼす。そして何故か僕たちは病院……しかも他人の病室でこれからの家庭内の分担を決めていった。なんだかおかしな光景だと思いながらも僕達は互いにそんな事には触れない。やっと訪れた僕達の関係の変化なんだから。
次第に僕達はいつもの会話が出来ていた。そしてそんな頃に日鞠は言う。
「返事はいつでも良いからね。でも取り合えずその子を助けるまでは……ね」
日鞠はセツリに視線を向ける。僕もそれを追ってセツリをみた。いつもと変わらない寝顔がそこにはある。そして変わらないからこそ僕はそこに痛みを感じる。
「この子、セツリちゃんだっけ。何が好きなのかな？　三年間何も

食べてないんだよね」
日鞠もまた目覚めた時の事を言うんだなと思った。でも殺すとか言ってなかったっけ？　まあいいか。
「好物は知らないけど、普通の食事は最初は取れないんじゃないか？　なんか柔らかいものとか？」
僕の言葉に日鞠は頭を捻る。
「じゃあプリンだね。スオウが作ってくれたの美味しかったよ」
プリン？　そう言えばそんな事あった。確か日鞠が手伝いに来るようになってまだ日が浅かった頃、僕は良く日鞠に対抗してたからその時作ったんだ。良く覚えてるな。
「プリンが嫌いな女の子はいません！」
確かにそうかも知れないけど……なんだかいろんな約束ごとが増えて言ってる気がする。それは意図的にそうしてるのかな？　僕は日鞠を見た。
「約束だよ」
そう言って僕達は指切りをした。この指切りにはきっと沢山の気持ちが詰まってる筈だ。
僕はこれからする事を日鞠に説明した。すると日鞠は手を握ってここに居ると言った。止めたけど譲らない雰囲気。僕は仕方なく日鞠と共にセツリの傍らに座ってゲーム機に内蔵されているコードを後ろから出してセツリに繋ぐ。
僕と日鞠は目を合わせて頷きあった。握りしめる手に力が入る。そして僕は唇を動かした。今までとは違う魔法の言葉……
「リンク・イン」
僕の意識という名の亡霊はセツリの中に入っていく。今度こそ僕は君を助けてみせる！

二人の関係（後書き）

読んでくださってる方々ありがとうございます。これからも頑張るので見捨てないでください。

夢の町を見つめて（前書き）

僕はセツリを迎えに彼女の精神とリンクした。仮想空間の奥深くに閉じこもった彼女を連れ戻せるのは僕しか居ない。そして辿り着いた場所はツギハギの町。誰も居ない淋しい町。ここにいるのは君だけだった。

そして僕はこの場所でセツリの心に触れる。

夢の町を見つめて

「今日こそ世界を我が物にしてくれる！　貴様達の命運もこれまでよ！」

黒いフードに大きな鍵の様な杖を持ち飛び出しそうな目をした悪い魔女が沢山の魔法を発動する。

「そんな事はさせないわ！　私たちは諦めない。愛と勇気が有る限り、世界は私達が守ってみせる！」

ピンクを基調としたフリフリの服と見えないことが不思議な位のミニスカートの女の子が啖呵を切った。手には綺麗な魔法のステッキがある。

二人の魔法が激突する。辺りには噴煙が舞い散り木々が吹っ飛んでいく。

「きゃあぁぁぁぁ」

そして粉塵の中からあの女の子が飛んできて地面を何回も転がった。ステッキが手から放れて甲高い音を立てながらはぜている。

悪い魔女は空に浮かびそんな女の子を見下して言う。

「それが愛と勇気の限界よ。闇こそが世界の本質。人の本音。尽きることの無い心の叫び！」

一際強い紫色の光を放つ魔法陣が魔女の上に現れた。きっとあれはとどめの一撃だろう。

「そんなことはない！」

だけど少女は立ち上がった。ボロボロの体を奮わせながら地面に立つ。だけど魔法のステッキも無い少女に攻撃手段は無い。でも少女は毅然と魔女に言い放つ。

「世界の誰もがそんな事願ってる訳ない！　闇を照らす愛と勇気を誰もがその心に持ってるわ！」

「ふん！　ならそんなありもしない物にすがってあの世に行けえぇ

ええ！」
少女の眼前に迫る闇の塊。絶体絶命の魔法少女の運命は如何に！？　派手なテロップと共にエンディングに入った所で私は立ち上がってテレビから離れた。
「あ～あ、良いところだったのに来週までお預けかぁ」
そんな声を出して時計を確認すると既に時計の針は八時に迫っていた。
「わわ、遅刻しちゃうよ！」
急いで朝食のパンをトースターにかけ、その間に身だしなみを整える。髪の毛ボサボサで外に出るなんて出来ない。女子ですから。
紺を基調としたセーラー服に着替えて鞄の中身を確認。その時、カシャンとトースターからパンが上がった音が聞こえた。
私は鞄を持ち自室を後にする。リビングに戻り併設されてるキッチンカウンターの上にあるトースターから熱々の食パンを取り出してマーガリンを塗る。
既に八時五分……もうぎりぎりだ。私はマーガリンを冷蔵庫にしまい玄関へ。黒い革靴に足を通して、そして片方をトントンと地面に叩いて履いていく。
そして家を出る前に振り返り私は叫ぶ。
「お兄ちゃん、私もう学校行くからね！　ちゃんとご飯食べなきゃダメだよ！」
シンとした家の中に私の声だけが空しく空気に溶けていく。
「もう、またコンピューターいじくってるんだね。ああなったらお兄ちゃん止まらないんだよね」
私はため息を付いて「いってきま～す」と大声で言ってドアを開く。陽光の光の中に私は飛び出すと朝の少しヒンヤリとした空気が肺一杯に満ちてきた。
私はパンをくわえて通学路を走り出す。これが私の日常……です。そうこれが……。

「ここは？」
僕は辺りを見回して困惑する。確かセツリとリンクしてる筈だけど彼女の姿はどこにも無く広がっているのはどこかも分からない町並みだ。
だけどそれもおかしくてどこかツギハギな感じがする。下町の様な家々の中に唐突に大きな高層ビルがあったり遠くに見える電車は遊園地のアトラクションの様に一回転する仕様だ。
それに明らかに時代錯誤な家とかも混じっている。あれはＬＲＯで見たことある感じもするけど、ここはまるでセツリの記憶で作られた町と言う感じだ。
彼女はずっと病院のベットの上で過ごしていて情報源はテレビとかだけだったろうからこんなチグハグな町になっているのかも……電車なんて生で見たことも無いのだろう。遊園地のジェットコースターとごっちゃになってる。
それに一番そう思えるのは、この町には誰も居ないんだ。人っ子一人……影も形もない。まるでゴーストタウン。それは彼女のこれまでの孤独な生を表しているのかな。
それだと……寂しすぎる。確かにこんな世界には戻りたくないかも知れない。
僕にとってはリアルはいつだって人に溢れていた。確かに両親とは殆ど一緒に居ないから寂しいと小さいときは思っていたけど、それでもいつも日鞠はいたし。
ひとたび外に出れば沢山の人が溢れかえっている。そんなリアルに息が詰まりそうな事は有っても最近は寂しいなんて感じた事もなかった。
だけどここは……寂しい。本当に寂しい世界だ。
そんなことを考えながら僕は誰も居ない町を歩いていると曲がり角に差し掛かった。そして次の瞬間角から小さな影が飛び出してきてぶつかった。
「うあぁ！」

「きゃぁ！」
二人の声が重なって静かな町に響く。お尻には地面にぶつけた衝撃で鈍い痛みが走っている。何なんだいったい、と思い気付いた。ここで他に人が居るとしたらそれはセツリしかあり得ない。僕は視線を前方に向けた。
するとそこには同じようにお尻を打ちつけたセツリがいた。セーラー服を着た彼女の姿はなんだか新鮮だ。だけど目のやり場に困るな・・・彼女の白い太股の先にある物が見えてるから。
イタ～イとか言ってないで隠して欲しい……いや、そのままでも勿論いいけど。って何考えてるんだ僕は！　自分で自分を殴りつけていると声が聞こえた。
「君……スオウ？」
それはなんだか凄く懐かしい声。彼女の唇が確かに僕の名前を発した。セツリは立ち上がらずにハイハイで近づいてきて僕の顔をマジマジと見つめる。
その顔は何回も願った生気がある彼女の顔だった。やっとで助けた思ったけどそれでも見ることは叶わなかったその顔が今目の前にある。
僕はこみ上げてくる物を隠すように顔を伏せて答えた。「うん……久しぶりセツリ」
その瞬間、頭にセツリの腕が降ってきた。コツンとぶつかるけど別に痛くは無い。顔を上げるとなんだか怒ってる感じだ。やっぱり来るのが遅かったから……とか思っていたら全然違うこと言われた。
「もう！　どうしてくれるの？　朝食落ちちゃったよ！」
そう言うセツリの背後を見ると確かに地面に落ちた食パンの姿がある。え～と……
「知ってるセツリ？　三秒ルールってのがあって落としても三秒以内に拾えば全然平気なんだよ」
「ホント！？」
華やいだ彼女の笑顔。そしてホントに道路に落ちた食パンを拾っ

て口に運ぼうとする。
「うあああ！　待った！　嘘だから食べちゃダメだ！」
僕は慌ててその腕を掴んで止めた。マジで常識ないな。
「う～、嘘教えるなんて君最低だよ！」
頬を膨らませて怒っているセツリをなだか直視出来ない。可愛いんだ。それでも何故かセツリはパンを放そうとしない。どうしたんだ？
「まだ半分以上あるのにもったいないよね」
「まだ食う気かよ！」
こんな食い意地が張った奴だったのか。意外だな。するとなんだか僕の方を鋭くした目で見ている。イヤな予感がした。
「君にあげるよ――エイッ」
「ムガァ！」
落としたパン口に押し込みやがった。何するんだコイツ。
「アハハ、面白い顔してるよ君」
プチッと来た。僕がどんな思いでここまで来たと思ってるんだ。走り去ろうとするセツリを追いかける。意地でも捕まえて連れ帰ってやる！
「まちやがれー！」
僕達は早朝の町を楽しく駆け抜けた。

「ハァハァハァ……捕まえた」
新しい事実が分かった。セツリは足が速い。結局立ち止まるまで捕まえられなかった。そしてその時チャイムの音が静かな町に響いた。
「セーフ。よかった間に合って。楽しかったね」
そう言って歩き出すセツリ。僕は慌ててその後を追いかける。彼女が向かってるのは白い校舎の建物、学校だ。まあ制服だしそうなんだろうとは思ったけどここにもきっと誰も居ない。
「何するんだ学校で？」

「学校が何するところなのか君は知らないの？　しょうがないな私が教えて上げるよ。学校は勉強する場所です！」
自信満々、胸張って言われた。そんな事知ってるんだけどね。セツリはいっぱいあるげた箱の一つに靴を入れ上履きにはきかえる。どうやら自分で決めた場所を使ってるようだ。
「あ、君は私の隣ね。土足で上がっちゃダメだよ」
そう言って隣のげた箱を開く。そこには青いカラーの上履きがあった。僕はなんだか断りきれないでそれを履く。するとニコニコした顔で言われた。
「お揃いだね」
「それなら一学年全員お揃いだけどな」
僕の言葉に何故かセツリは顔を輝かせた。なんで？　皮肉の筈だったんだけど。
「だってそれならみんなとお揃いだよ。素敵だね」
もしかしたらセツリは集団という物に強い憧れが有るのかも知れない。彼女はパタパタと音を響かせて廊下を進んでいく。
やっぱり校舎にも誰も居なくて、異様に広いこの空間に僕達の足音だけが響くのはなんだか寂しかった。窓からはいっぱいの陽光が照らしてるのに一向に暖まる感じがしない。
そしてセツリは一年二組の教室に入っていく。奇遇だね。僕も現実じゃ一年二組だよ。教室に入ったセツリは教卓の真ん前の席に腰掛ける。そして鞄から教科書とかを取り出して机にしまっている。
僕はなんだかその様子をただ見ていた。入っていいのかよく分かんないし……それに何をするんだろう。てか何でそこ？　一番不人気な席だよそこ。だけど僕の視線は違う意味で捕らえられた。
「何ですか？　言っときますけどこのベストポジションは譲りませんよ」
やっぱり……セツリは誰もが意欲的に勉強を習いに来る場所が学校だと思っている。だからあの席は先生の真ん前でとても良いはずと判断したんだろう……だけど

「教えとくけどそこ、一番不人気な席だぞ」
「ええ！？　君おかしいんじゃない。こんな勉強しやすい席が不人気なわけ無いじゃない！」
　思った通りの答えが返ってきた。
「あのね、誰もが勉強するために学校に通ってる訳じゃないよ。そりゃあ有名進学校ならそうだろうけど普通の学校じゃ大体そこは一番不人気だと思う」
「えっえ、それじゃあ何しに学校に来てるの？」
　セツリの顔には一杯のハテナが浮かんでいる。僕は当然と言うように答えてやった。
「それは、あれだよ。友達と会うのが大きいかな。取り合えず学校に来れば友達は絶対いるんだし。後は恋愛とか？　部活とかの奴もいると思う」
　するとセツリはちょっと怒ったように言ってきた。
「私だってそれくらい知ってますよ。と当然です。私、部活にだってちゃんと入ってます」
　意外に負けず嫌いな一面も有るみたい。そっぽを向いたセツリに僕は聞いてみる。
「ふ～ん、何部？」
　すると視線が教室中に動く。手もなんだか所在なさげ。
そして何か思いついたのか桜色した唇が動く。
「え～と、それはね……帰宅部」
　それは部活じゃない。もっとあり得る部活思いついたろうに何でそれをチョイスしたんだ？　嘘が付けないのか？　その時、再びチャイムが鳴った。
「あっ、ほら君。早く席に着かないと先生来ちゃうよ」
　先生？　誰か他に居るのかなと思い僕は廊下の先を見据えた。だけど何の足音もしない。その時、セツリが再び廊下に出てきて僕の頭を小突いた。
「こら、スオウ君早く教室に入りなさい！」

「ん？　え？　何？」
なんだか呼び方が変わった？　何スオウ君って……びっくりだよ。するとセツリは腰に手を当てて指を指す。
「何じゃありません。先生に向かってそんな言い方したらダメですよ。目上の人には敬語を使いなさい」
目上？　敬語？　先生？……て先生！？　もしかして一人二役？
僕はおそるおそる聞いてみる。
「えっと先生のお名前は何でしょうか？」
「まったくもう、スオウ君は担任の名前も忘れちゃうんですか。でも安心してください、幾ら君の頭が猿より劣化していても先生は見捨てません。ちゃんとホモサピエンスになるまで付き合います」
「悪口だよなソレ！」
上目線で何言ってんだ。僕は既に人間だ！
「あれ？　でも猿から人には絶対にならないんでした。ごめんなさい」
「何に対しての謝罪だ！　いいから名前は何なんですか！」
「私は金八先生ですよ」
三年B組に行ってください。頭抱えるしかない。それに本当に設定上彼女は金八先生らしい。教卓から取り出した学級日誌にそう書いてあった。きっと憧れてるんだね。
僕はしょうがなく一番前の窓際、校庭が見える方に座った。一体今から何が始まるんだろうと思っていたらHRが始まった。セツリは先生として自分の名前を呼んで、席に着いてその返事をする。一人学校ごっことでも呼べばいいのだろうか？　僕は開いた口が塞がらない状態だ。
「スオウ君」
教卓に居るセツリからの声。僕も含まれていたのか。でもなんだか素直に返事をしたくない気分。すると
「スオウ君……もとい、猿以下の彼は欠席みたいですね」
「先生失格だアンタ！」

そんな暴言吐く先生居ないよ！　どこから仕入れた情報だ。僕の突っ込みにセツリはクスクス笑っている。なんだかとても楽しそうだ。
やってることは間抜けだけど……だけどこんな彼女は初めて見たからしょうがなく付き合ってやろうと思った。
だけどずっと見てるとなんだか笑いがこみ上げてきて僕は何度も金八先生に注意された。

午後を過ぎて最後の授業の終了を告げる鐘がなり僕達は学校を後にした。
「今日はとっても楽しい学校だったね」
そんな事を笑顔で聞いてきたセツリに僕は首を振る。
「怒られてばっかりだし、笑いすぎて腹筋が痛い」
「それは君が悪いんだよ」
そういって思い出し笑いでも始めたセツリ。僕の前を数歩進んでクルクル回る。
本当にこんな風に一緒に帰れればいいのにとなんだか思った。そしたらいろんな物を正しく教えてやれるのに。
こんなツギハギの世界じゃなくちゃんとした現実でそれが出来たらどれだけ良いだろう。それは夢みたいな事なんだろうけど、僕はその夢を叶える為にここに来たんだ。
「セツリ……一緒に帰ろう」
僕は足を止め、回っていたセツリにそう言った。
「何いってるの？　帰ってるよ私達」
笑顔のままのセツリの声。この笑顔を壊す事になるかも知れない。だけど僕は言わなきゃいけない。
「違う……僕の言ってる帰る場所はリアルだよ」
セツリの顔から笑顔が消えた。そして俯く。
「まずはＬＲＯに戻って……助けたんだセツリを。そして次にリアルへ。必ずやり遂げる」

セツリからの返事はない。二人だけの町に冷たい風が吹き抜けた。そしてやっとで聞こえたセツリの声はとても小さかった。
「リアルに戻って……私に何があるの？　何も無い……見たくない自分が居るだけ。醜いアヒルの私が居るの」
それは分かってた答え。彼女はリアルに戻る事を望んでいない。だけどそれでもこのままじゃダメなんだ。
「醜いアヒルは最後に白鳥になったよ」
そう、最後は白鳥になってみんなに羨ましがれた。それなら君だって……と僕は言いたかった。だけどセツリの返事はそんな考えを切り捨てさせた。
「私の醜い所はね……姿じゃないの。私には飛び立つ羽が無いの……だから白鳥になっても笑われるわ」
暗く湿った声。そしてさっきまでサンサンと晴れていた空に雲が掛かりだした。それはセツリの感情の変化を表しているのかも知れない。
一体どういえば彼女の心に届くのだろう。
「僕は笑わない」
「ッ！！」
セツリは顔を上げてその顔を赤らめた。
「僕は絶対に君を助けるよ。こんな孤独な所で一生を過ごさせたりしない。それに僕だけじゃないんだ。みんながセツリを助けてくれる」
僕は一歩セツリに近づく。だけどセツリは一歩僕から遠ざかる。
「やめてよ……そんなの私は望んでない！　救いなんていらない！」
そう言ってセツリは走り出す。僕は慌てて追いかけるけど見失ってしまった。
「はぁはぁ……くそ、どんだけ足早いんだよ」
せめて家の場所くらい教えて貰っとくべきだった。そしたら見失ってもどうにかなったのに。
いつの間にか空は真っ黒になっていた。そして嵐の様な風がゴウ

ゴウと吹き付けてくる。やっぱりこの空間の天気はセツリとリンクしてるみたいだ。最後の言葉を言ったとき……セツリは泣いていた。

でも……セツリは帰りたくないと思ってるけど、きっと一人はイヤな筈なんだ。それはそうだ。ずっと眠り続けてやっと起きたのにまたこんな所に一人閉じこめられて寂しくない訳がない。

セツリにとって自由な体がここにはあるけど、それだけじゃアイツはダメなんだ。セツリが欲しがるもう一つは一人じゃ絶対に得られないもの。

だから僕は追いかけなくちゃいけないんだ。諦めるな。走り続けろ。それがたった一つの冴えたやり方。

私は家に駆け込み、慌ただしく自室へ入って膝を抱えた。本当は逃げたくなんかなかった。だけどダメなの。私はリアルには絶対に戻りたくない。

空は暗雲。電気も付けずに膝を抱えて丸まった私は真っ暗だった。静かな家の中……何の音一つしない静寂が私を包む。すると自然に思ってしまう。

「さみしいよ」

思わず口に出た言葉で涙が溢れて膝小僧を濡らしていく。嬉しかった……彼がここに来てくれたことが。そんなことあり得ないと思っていたから、最初見たとき信じられ無かった。

リアルや仮想を越えてまで誰かが私を追いかけてくるなんて信じられない事。私は濡れた膝を見つめて思い浮かべてしまった。彼の……顔を。

私を助けると言ってくれた彼の事を……なんだか胸にトクンと暖かい何かが置かれた気がした。でもそれでもやっぱりリアルには戻りたくない。自分の人生の主役は自分だと言うけど私はそんなの降りたかった。その座は誰かにあげるから……どうか私を助けてください。

私は立ち上がりリビングに降りていく。泣いたからお腹が空いち

ゃった。私はお菓子を探してクッキーを見つけた。そしてそれをポリポリ食べながら窓際に近づいて空を見る。
やっぱり空は曇ったままだ。さっきよりは泣いた分だけすっきりしたはずだけど……そんなに変わらないって事かな？
その時何かが聞こえた。それは私を呼ぶ声？
「セツリィィ！」
彼だ！　彼はまだ私を捜してくれている。その瞬間胸が弾けそうな気がした。そして弾けない私の胸の変わりに空が大きく光った。それは雷だ。私は思わず尻餅を付いてしまう。胸の鼓動はきっと雷に驚いたせいだ。だけど何故か収まらない。
私は気付いて欲しくて叫びそうになる。だけど背後に気配を感じて振り返る。
「お兄ちゃん？」
「ダメだよセツリ。彼を求めたりしたらいけない。セツリはお兄ちゃんよりあんな奴を選ぶのかい？」
痩せこけた手が私の頬を撫でる。その動作に何故か恐怖を私は感じた。なんで？　だってお兄ちゃんだよ。
「ずっとここにいよう。それがセツリにとって一番幸せな事なんだ」
「おにい……ちゃん……どうしたの？」
寒い……唇が上手く動かない。お兄ちゃんの手が私の唇を撫でそして下に向かって流れる。その瞬間、本当に悪寒が走って私は叫んだ。
「いや……いやっ……助けて！　スオウォォ！」
何かが割れる甲高い音。目の前のお兄ちゃんに長い棒が突き刺さって飛んでいく。
「誰だアンタ？　セツリに何してんだ！」
私は振り返ってその姿を見た。いつだって、何度だって私のピンチに駆けつけてくれる存在。
「……スオウ！」
私の人生の主役は貴方だよ。

夢の町を見つめて（後書き）

もう大ピンチです。ここら辺は迷走してるかも。どうなのかな？
自分じゃ分かりません。でも取りあえず頑張って行きます。また、
明日〜。

泡沫話（前書き）

僕が見たのは当夜さんじゃない。それは君のお兄さんじゃないんだ。僕はセツリの手を引いて走り出す。だけど町には黒い影のモンスターが跋扈しだしていた。

おかしな町に僕らは囚われている。そんな疑問を抱きつつ、必死に逃げるも僕達は彼に追いつかれた。だけどそこで聞かされた真実は彼女自身の起こしたシステム。

それを破るのは彼女しか出来ない。そして彼女は変身した魔法少女へと。

泡沫話

「セツリィィ！」

僕は誰も居ない町中を走っていた。それはセツリを探すのは勿論だけどそれよりも今は奴らから逃げるのが先決だ。

セツリと分かれてしばらくしてからだった。奴らは一際強く陰が落ちている場所から出てきたんだ。それは僕がこれまでに戦って来たモンスターの形をしていた。だけど色は無く黒く塗りつぶされた輪郭に赤い目が光るだけ。

今見えるのは普通にフィールドにいる奴らだけだけど、もしかしたあの悪魔とかも出てくるのかもしれない。

今でさえ武器がないから何も出来ないのに、あんなボス級の奴が出てきたら万事休すだ。でもなんでいきなりこんな……やっぱりセツリの心は乱れているって事なのか？

僕は影の眼を盗んでセツリの家を探す。よくよく考えたらセツリの家ってなんだ？　セツリにはリアルでも家があるのかな？　セツリはいつからベットの上で過ごしてるんだろう。それかそこから出たことはあるんだろうか。

それならセツリにとっての家って一体……何かがおかしい。ここはセツリの思いの世界だと思ったけど、それじゅあやっぱり矛盾する。

僕はこの世界に疑問を抱く。そうだ、ここはセツリの願いを叶えてるようで叶えてない。それっておかしい事じゃないか！　何が……一体何が彼女の願いを邪魔してるんだ？　それを知らなくちゃいけない。

一際大きな光が空から落ちてきた。それと同時に響いた轟音が空気を弾き飛ばすように僕の耳に響いてくる。そして僕は何かを感じ

た。頭に変な映像が一瞬流れた様な・・それは僕とセツリがリンクしてるから起きた現象かも知れない。
見えたのはきっとセツリのここでの家。そして彼女の視点からの映像には知らない人物の姿。この世界で僕とセツリ以外の人物なんて怪しすぎる。
それに確かに感じたあの人物の空気は敵と呼べる物だったと思う。ＬＲＯでの経験で僕はそういうのに敏感になっているみたいだ。
「くっそ」
急がなきゃいけない。イヤな予感がする。幸いさっきの映像には俯瞰からの映像もあったから場所も大体分かる。ここからそう遠くはない！　僕は地面を蹴る足に力を込めた。

たどり着いた家は駄菓子屋とお餅屋とケーキ屋が近くにある一軒家だった。ここにはセツリの願いが顕著にでてる感じだな。二階建ての木造の家。僕はドアに飛びついたけど開かない。周りを見回して庭の方へ駆ける。
その時だった。
「いや……いやっ……助けて！　スオウォォ！」
セツリの声。いや悲鳴に僕の鼓動は嫌でも早くなる。そして見た窓硝子の向こうにはセツリに迫る謎の男の姿。僕はとっさに洗濯物を掛ける物干し竿を掴み取り投げつけた。
透明な窓硝子が砕け散り物干し竿はセツリに詰め寄っていた人物に当たって遠ざける事に成功する。
「誰だアンタ？　セツリに何してんだ！」
「……スオウ！」
セツリは硝子の破片が飛び散った床を関係無しに窓を開けて僕に飛びついてきた。まあスリッパ履いてるから大丈夫だろう。それも片方脱げちゃったけど、セツリは気にすることなく僕の首にその腕を絡めて震えている。
「スオウ……スオウ……スオウ……スオウ」

何度も僕の名前を呼ぶセツリ。
「大丈夫だよセツリ。僕はここにいる。それより怪我してないか？」
僕の質問にセツリは小さく「大丈夫」と答えた。僕はセツリを後ろに回して前に立った。手にはもう一本あった物干し竿を握る。
「アイツ誰だ？　知り合いか？」
「え？　誰ってあれはお兄ちゃんだよ・・・」
後ろに居るセツリの言葉に衝撃を感じた。僕は思わず前の立ち上がり掛けている人物を見つめた。あれがセツリのお兄さん……つまり当夜さん？
くたびれたシャツに破れ掛けたズボンという格好は確かに夢であった当夜さんに重なる……だけどあれは、目の前の人物は当夜さんじゃない！
僕は前を見据えたままセツリに呟く。
「違う……あれは違うよセツリ」
「違うって……何が？」
セツリは僕の服を強く握りしめている。そこから不安が伝わってくる様だ。だけど言わなきゃいけない。
「あれは君のお兄さんじゃ……当夜さんじゃ無いよ」
僕の言葉でセツリは家の中に視線を向けた。何度も何度も確認するように眼を瞬かせている。
「嘘……あれはお兄ちゃんだよ！」
「違う！　僕は何度もリアルで当夜さんを見たよ。あれは違うんだ！」
僕の言葉に動揺するセツリ。顔を両手で押さえて震えている。
「え……あれ？　じゃあ……え？　解んない……あれはお兄ちゃんじゃないの……そんな嘘よ……だって」
「よく思い出せ！　当夜さんはお前にあんな事するのか？　セツリが嫌がる事をするのかよ！」
僕はセツリの肩を掴んで訴える。セツリの知ってるお兄ちゃんはそんな奴かよ？

「違う……お兄ちゃんはそんなことしない！　お兄ちゃんはいつだって私に優しかった」
セツリの震える唇がその言葉を紡ぎ出す。セツリの感情にリンクする空模様は心の揺れ動きと共に風が台風の如く唸って来ていた。
「ヒドいよセツリ。僕にこんな物刺した奴の言うことを信じるのかい。僕は君のお兄ちゃんだよ」
ドアの方で立ち上がった奴が物差し竿を持ってそんなことを言う。部屋には電気も付いてなくて暗いから不気味さが演出されている。
「おにい……ちゃ」
「ふざけるな！　お前は当夜さんじゃ無い！　だまされるなセツリ！」
心が揺らぐセツリ。その証拠に空は何度も放電していた。落ちることはない雷が落ちたときセツリはどっちを選ぶんだ。それが怖い。
「うるさないね。家族の話に入ってこないでくれよ。本当に君は目障りだ。何も出来ない癖に」
奴の言葉が心に刺さる。確かに僕は何も出来ないかも知れない。だけど目障りでも何でもお前にセツリは渡せない！　僕は一際強く物干し竿を握りしめる。殴ろうと思ったんだ。それしかないと……だけど、僕がそうする前に後ろのセツリから声が聞こえた。
「何も……何も出来無くなんかない！　スオウは私を助けてくれる。いつだって私の声に答えてくれるの！」
僕はその瞬間セツリの手を取って走り出した。これ以上セツリの心に負担を掛けたくなかったし、アイツとこれ以上話したくなかった。
だけど道路に飛び出すと、黒いモンスターとはち合わせた。なんて最悪なタイミングだ。
「え？　わっ、何か変なの居るよスオウ！」
「解ってる！」
僕はそれだけ返すと目の前の甲羅をしょったみたいな亀の二足歩行してるモンスターに物干し竿を振りかぶった。

だけど影の体に当たった瞬間、物干し竿は無惨にも砕け散る。やっぱり物干し竿は武器になんてならないか。
その時、影の腕が僕を捕らえた。大きな拳が僕に入り僕は垣根に突っ込んだ。
「スオウ！」
セツリの声に答える為に垣根から身をだす。
「大……丈夫」
その声に少し安心した様に息を付くセツリ。だけど実際はかなり痛かった。ここはＬＲＯと違い、直に痛みがあるみたいだ。もしも垣根じゃなく塀にでもぶつかってたらやばかった。
僕は再びセツリの手を取って走り出す。わき腹の痛みも気合いで堪える。幸い飛ばされた時に影と距離が出来たのが良かった。セツリは直ぐに駆けてきたしね。
僕は喉から血が逆流してくる感じを必死に堪えた。

走っているときに何度も影のモンスターに遭遇した。でもその全てを全力で逃げに徹した。今の僕じゃ倒せない。武器も無い状態では無力な一人の人間なんだ。スキルも無いし一体どうすれば……この痛みからしてもしかしたらリアルの体は大変な事になっているのかも知れない。
まさに絶対絶命だった。

僕たちは見つけたコンビニに入った。イレブンローソンというあり得ない組み合わせだ。ようやく腰を下ろして息を整えたときセツリが僕の顔を見て慌てて言った。
「スオウ、口から血が出てるよ！」
僕は驚いて口元を拭ってみると確かにそこには血が付いた。まさか血まで出てるなんていよいよ浸透率がヤバイ感じになってきたのかと思った。二人ともここから出られるのか不安が募る。
だけどそれは一瞬で吹き飛んだ。いつの間に調達して来たのか包

帯やテーピングを持ったセツリが僕の隣で真剣な眼をしてこっちを見てたからだ。思考がなんだか真面目な事を考えられなくなる。何なの一体？
「スオウ……脱いで！」
「は？」
僕は呆けた。この状況で何を……って包帯やテーピングだ。勿論手当だよね。僕はわき腹を押さえてる訳だし。ましてや服の上から巻くわけない。
でもちょっと顔を赤く染めてそんな事を言われたら勘違いするものだ。
「ほら、早く。大丈夫。私だって包帯巻く位出来るよ」
そう言って僕の服を強引に捲りにかかるセツリを止めて僕は上着を脱ぐ。
「うわ……赤くなってるよ」
確かに僕のわき腹は異様に赤くなってた。てか青紫がかって内出血とかしてそうだ。セツリの柔らかい筈の手がそっと触れても痛かった。もしかして骨とか折れてたりするのかも知れない。
僕はそれからセツリに包帯を巻かれた。やり方が分からないからグルグル巻きで大量に使った。それでもなんだか僕は嬉しかった訳だけど。いいよね、女の子に手当してもらうなんてシチュエーション。
僕達はそれから乾いた喉を潤わせつつ裏の従業員スペースで休んでいた。ここなら防犯カメラもあっていい。バレたときは裏口からも逃げられし、裏なら姿を見られて見つかることもない。
チューチューとストローでジュースを吸っているとセツリがポツリと呟いた。
「ねえ、スオウ。あれって本当にお兄ちゃんじゃ無いの？」
やっぱりまだ信じられなかったんだ。ここに来るまでずっと空には放電する光があったからそれは分かっていた。
「あれは違うよ。間違いない。セツリのお兄さんじゃない」

「……そうなんだ。スオウがそう言うなら信じるよ私」
ここは空だけは見えないから本当に気持ちに区切りをつけたのかは僕には分からなかった。だけど信じると言ってくれたその事だけで僕は良いと思えた。
「そっか、ありがとう」
僕は一気に残っていたジュースを吸い尽くした。いつまでもここで隠れてるわけにもいかないし、脱出の術を考えなくちゃいけない。
でも武器も無いし、一体何をどうすればいいのかも分からない。お先真っ暗とはこの事だ。
コンビニに包丁あったかな？　とか考えてると後ろのセツリの視線に気付いた。
「何？」
するとセツリは顔を勢いよく反らして首を振る。
「ううん、何でもないの。気にしないで」
少し染まった頬が可愛らしいセツリを今度は僕が見ながら考えた。どうしてセツリはアイツを兄と思っていたんだろう？　記憶を変えられてるとか？　いや、それよりもアレが何者なのかが重要か。
「あのさセツリ。あの当夜さんを名乗ってた奴の事、聞かせて欲しい。セツリはアイツがお兄さんであるって疑った事とか無いのか？」
僕の質問にセツリは顔を曇らせて答えてくれた。
「お兄ちゃん……じゃないんだよね。あの人の事・・正直分からない。お兄ちゃんとして私の中にはあるの。あの人の姿が。これが違うって事は私記憶をどうにかされちゃったのかな……」
結局はセツリもその考えに至ってしまう。あれは何なんだろう。本物の当夜さんで無いことは間違いない。だけど目的が見えないよ。
セツリと一緒にこの世界にいたいのなら、全部をセツリの理想の世界にすれば良かったんだ。だけどそれをしなかったアイツの目的はなんだろう？　今の僕に出せる答えはない。
「分からない。分からないけど……その可能性は高いよ。僕の知ってる当夜さんの顔とは全然違うんだ」

するとセツリは僕の顔を覗いて「どんな？」と問う。
「えっとね。一言でいうならもっとかっこ良かったよ。ビジュアルで」
「アハハ、そうなんだ。それはちょっと嬉しいな」
そう言って笑うセツリの笑顔にいやされる。
「性格の事は良く知らないけど、パソコンを四六時中いじってそうなイメージはあるよ」
すると地面を見つめて
「そこは一緒だったかも」
とセツリは言った。
アイツがここにセツリを誘ったのだろうか？　お兄ちゃんのフリをして。
「そう言えば……」
ん？　なんだろう。セツリは何かを思い出したみたいだ。
「システムを急いで作らなきゃって言ってた」
システム？　システムってなんだ？
「そこまでは分からないよ。とにかくおにい……あの人はそう言って四六時中部屋に引きこもってたの」
気になる。一体どんなシステムなんだろう。そう思ったとき店の防犯カメラにアイツの姿が映った。
僕とセツリは二人して息を止め通り過ぎます様にと祈った。だけど次の瞬間戦慄した。奴はカメラ越しに僕を睨んできた。間違いなく眼があった。
「セツリ逃げよう！」
僕達は裏口から外に駆けだした。空は相変わらず曇っていたけどもう雷光は見えない。ちゃんと信じてくれたってことだろう。
だけど直ぐにモンスターの一団にでくわした。本当に今日は付いてない日だ。複数のモンスターの叫び。なんだこれ？　まるで……
「仲間を呼んでるみたい」
まさにそう感じていた。そして案の定、モンスターが次々と集ま

ってくる。逃げ場なんてどこにも無かった。
僕はコンビニで手に入れておいたカッターナイフを取り出す。武器に出来そうな物はこれくらいだったんだ。だけどそんな物を向けたからって怯む奴らじゃない。
奴らは威嚇しながら僕達を囲んでいく。
「どうしようスオウ」
そんな不安がるセツリの声。どうしようか。さすがに完全に囲まれたら逃げきれない。その時モンスターの向こうに奴の姿が見えた。ヤバイ……そう思いつつも僕達はもうどこにも動けない。
そして奴はモンスターをかき分けて姿を現した。
「やっと見つけたよ。さあ、もう帰ろうセツリ」
「いや、貴方はお兄ちゃんじゃないんでしょう。なら私は帰らない」
きっぱりとセツリは言ってのけた。だけど僕の服を握る腕は震えている。
「だからそれはそいつの嘘だよ。僕は君のお兄ちゃんだ」
「違う！　スオウは嘘なんか付かない。スオウは私、信じれる」
僕とセツリはじわじわ迫ってくる奴に向き合って後退していく。だけどそれも長くは持たない。だって後ろにもモンスターはいる。近づき過ぎるとモンスターどもはあの大きな口でセツリを食べてしまいそうだ。
だからどうにかしないと・・・取り合えず今は口を動かす事しか出来ない。
「ふれられたんだからもう止めろよ。それよりお前は何者だ？」
その瞬間僕のカッターナイフは手から飛んでいった。どうやら見えないスピードで腕を弾かれたようだ。
「何者かだと……図々しいことを言うなカスが。何も知らずにセツリを僕の元から離そうとする鬼畜め。お前は知らないんだ。僕の傍がセツリにとって一番安全だと言うことを」
「なんだそれ？」
訳が分からないことだ。それにどうして奴は今の一撃で僕を殺さ

なかったんだ？　出来た筈だ。セツリを連れ出した僕が憎いんじゃ無いのか？
　そしてその疑問はそのままセツリも感じてたようでまさに僕が言いたいことを彼女は言った。
「どう言うこと？　教えて！」
　セツリの言葉で奴は背筋が伸びる。ここはセツリの空間だから一応一番偉いのはセツリって事なのだろうか？　そして奴の口から漏れた言葉はなんだか信じられない物だった。
「これをセツリが知りたいと言うのであれば聞かせてくれ。お前は表層に戻りたいのか？」
　その言葉に僕達は眼と眼を合わせる。表層……それはつまりＬＲＯってことか？
「私は……」
　だけど何故かセツリの口はなかなか動かない。それにちらちら僕の方を見てる。なんだ、僕に何か期待してるのだろうか？
「セツリはＬＲＯに戻りたくないの？」
　僕は思わず聞いてしまう。だって今更そんなこと……。
「あそこに私の何があるのか分からないよ。私はだってみんなと違うもん！」
　セツリの悲痛な叫び。そうだ、セツリはみんなと共に冒険したいはずなんだ。あの物語の様に。だけど今はアンフェリティクエストのその対象で戦う事なんて出来ない存在だ。
「私が戻ってもあそこのみんなに迷惑掛けるだけよ。私はだってリアルになんて戻りたくない。だけどあのクエストのせいで一杯の人が迷惑するんでしょう。
　私は望んでも居ないことで、これ以上誰かに迷惑掛けたくない」
　それはきっとずっと誰かに迷惑を掛け続けてきたセツリの精一杯の罪滅ぼしなのかも知れない。だけど……それは違うよセツリ。
「あるよ……ＬＲＯにはセツリが夢見る物が全部ある。だって当夜さんはセツリの夢を叶える為にＬＲＯを作ったんだ。だからセツリ

がそこで楽しんでくれないときっとＬＲＯは完成しない。
確かに今は一緒に戦うことが出来ないけど。僕が必ずクエスト達成するよ。そしたら今度は一緒にＬＲＯを楽しもう。今はそんな余裕無いけど……いつか絶対、そうなれる」
セツリの瞳に涙が浮かぶ。雲の切れ間から光りが覗く。
「でも……それじゃあ、スオウに一杯迷惑……それに私一人の為にＬＲＯ全体が滅茶苦茶になってるんだよ」
確かにそうかも知れない。今のＬＲＯはおかしくなってる。けどそれを今までセツリのせいとして責めた奴なんて一人も居ない。だから
「大丈夫……みんな笑って許してくれる。迷惑だなんて思って無くて楽しんでる人たちも一杯だし。それには勿論僕も入ってるよ」
大きな涙が遂にコボレた。セツリの栗色の髪が揺れている。
「嘘……だよ。スオウ、私のせいで・・・ゲーム楽しめてないよ」
僕はセツリの頭に手をおいた。
「楽しいよ。僕はある意味ＬＲＯを一番楽しめてるんじゃないかな？　幸運だと思ったてるよ。最初にセツリに出会えたこと。だから一緒に帰ろう。仲間がいっぱい出来たんだ。セツリのおかげでな。みんなが待ってる……もうあそこじゃ一人じゃ居られないよ」
次々と涙が地面に落ちていく。俯いて泣いているセツリの頭を撫でる。
「私……一人じゃない？」
「ああ、一人じゃない」
「スオウは居る？」
「勿論、一番傍に居る」
「じゃあ……帰りたい。ＬＲＯの暖かい場所に戻りたい」
その言葉を聞いて謎の人物は納得したように頷いた。
「では話そう。僕はここの管理者だ。兄を演じてたのはそれが最も確実にみじかに居られる方法だったから。この世界のバクとも呼べる存在からセツリを守る為だ」

「バグ？」
「セツリがここで目覚めたときに発生したシステム変更で生み出された存在だ。もしかしたらそう言う事を強く望んだ結果かも知れないが・・・僕は取り合えずシステムを直そうと必死だったがそれはセツリの意志によって阻まれていた」
そう言ってセツリを見る管理者。
「私のせいなんだ……また。そのバグってなに？　私はどうすればいいの？」
その言葉に管理者は何かを実態化させた。それは魔法のステッキの様なアイテムだ。そしてそれをみて何故かセツリは震えている。
「これって……まさか……」
「セツリは本当にあのアニメが好きなんだね。ほら来るよ」
日が落ちた空にはフードを被った人物の姿。それを見た瞬間、セツリは涙を拭きステッキを掲げて何かを叫んだ。
神聖な光がセツリを包む。そして目の前に現れた人物の背中を僕は見る。そして紡がれる台詞。
「愛と勇気を力に変えて、魔法少女『プリティックアロマ』見参！！」
僕の目の前に魔法少女が現れた。

泡沫話（後書き）

なんだか意外に長くなってしまってます。でもここが終われば多分最終局面に入れるのかな？　役者は大体揃ったと思うし行けるはずです。だから頑張ります。読んでくださった方々ありがとうございます。

それぞれの役割（前書き）

僕達は彼の正体を知った。それはこの世界の管理者？　彼が最後にやったのは僕達を助ける事。破格の強さのフードの人物には変身したセツリでも手も足も出なかった。

僕達は強制的に学校に飛ばされてた。ここがこの世界での最終決戦地だ。

それぞれの役割

二つの光球がぶつかり合った。一つは黒いフードを被った人物の鍵の様な形をした杖から出た紫色の球。そしてもう一つはプリティックアロマのステッキから飛び出したピンク色の光の球だ。

二つの球は空で互いを飲み込みながら膨張し拡散した。それと共に二人とも動き出す。プリティックアロマは空気を蹴るように空に飛び出す。フードの人物は両手を広げ更に無数の球が出現した。

そしてその球は沢山の軌道からプリティックアロマに襲いかかる。だけどそれをステッキで叩き壊しながら彼女は徐々に近づいていく。そして

「食らいなさい！　愛と勇気の力を！」

ステッキが振り下ろされる。だけどその攻撃はフードの人物まで届いてはいなかった。

「その程度か？　愛と勇気とやらは……」

紫の光がプリティックアロマにぶつかってはぜた。その拍子に彼女は悲鳴と共に落ちて来る。僕は慌ててその場所に駆け込もうとしたけど僕よりも先にその場にたどり着いた奴がいた。管理者だ。

「きゃあぁぁぁぁぁ！　はぷぅ！」

奴がプリティックアロマを受け止めた。僕はなんだか負けた気分だよ。てか今更だけどなんだプリティックアロマって？

よく日曜の朝にやってる少女向けアニメに似ているけどそれかな？　プリティックアロマの格好はピンクを基調としたなんとも女の子らい格好で今にも見えそうな位のミニスカート――って下はスパッツかよ！　なんだか異様にがっかり。

二つに分かれた髪は栗毛から鮮やかなピンク色になっている。本当に変身ヒーローみたい。この場合はヒロインか。

「大丈夫かセツリ？」

「……」
どうしたんだろう返事がない。既に管理者の腕から離れて居るのになんだよ。てかこの状況がなんだよって感じだけど。そろそろ説明を求めたい。
「今の私はプリティックアロマなんだからアロマと呼んでよ！」
「痛い奴だなお前って……」
そんな願望があったのか。
「今の私はスオウを守れる。だから痛くてもいいもん」
その言葉はなんだか僕にとっては情けないものだ。今の僕は普段と逆の立場なんだな。
その時フードの人物が杖をかざす。すると紫の光が町に満ちていく。そしてその光は黒い影だったモンスターに色を与えていくんだ。
「しまった。僕の管理を離される！」
そんな管理者の声を聞き終わる前にモンスター共は動き出していた。色を取り戻した奴らはその闘争本能も取り戻した様だ。管理から切り離された化け物は今度こそ本当に牙をむく。
「スオウ！　私の後ろに！」
「セツ……アロマ！」
ああ、なんだか恥ずかしい。けどそう言わなきゃ彼女は怒りそうだし。てかどうしたんだよ一体。
「僕の管理者権限に干渉されたようだ。奴はその力を持つ。もう一人のセツリ……彼女の思いの写し身。この空間から出るには奴を倒すしかない」
ようはあのフードの奴が全ての元凶か。管理者が何やってんだって感じだけど……元凶が出てきたのなら分かりやすい。で……セツリのあの格好はなんだ？
「この世界を脱出するためにセツリが選んだ方法だ。彼女はずっと守られるだけが嫌だった。そんな彼女が自分の世界で選んだ方法」
アロマのステッキが光を放つ。そうやって僕たちは彼女に守られている。

「選んだ方法……」
それがセツリの選んだ枷みたいなものなんだろうか。自身だ望んだリアルとの隔絶。だけど少しでもそれが揺らいでまたリアルに近づく為に自分の思いを確認する手段。
周りのモンスターを廃して彼女は再び空に飛ぶ。そして大きくステッキを振ってその動きにあわせて光の筋が魔法陣を作り上げた。そして必殺技を叫ぶ声。
大きな光の奔流がフードの人物に襲いかかる。だけどその中心を貫くように紫の光が走った。
「え？　……そんな」
光の奔流は拡散して消えていく。その紫の光はアロマを貫いていた。
「これが愛と勇気の限界ね」
そう言って掲げられた杖の光から黒い大きな何かが姿を現していく。僕は今度こそアロマを受け止めその怪物に目を向けた。それは忘れようもないあの悪魔の姿だ。
「ごめんね……私じゃ……ヒーローは役不足だったよ」
僕の腕の中でそんなことを言うアロマもといセツリ。その胸からは赤い液体が滴り落ちている。
「おい！　しっかりしろ。守るんだろ？　戻るんだろ？　ヒーローになりたいならそんな簡単に諦めるな！　お前が言った言葉だぞ！」
悪魔が大きなメイスを振りかぶる。僕はアロマを包むようにするけどこんな肉の壁一枚で防げるほど優しくは無さそうな一撃だ。
だけどその一撃は直前で僕達の前で止まった。何かがぶつかる音と僅かな衝撃を伝えるだけに止まったんだ。そしてそれをしてくれたのは
「お兄ちゃん！」
アロマが結局そう呼ぶアイツは管理者だ。素手でメイスを受け止めた体は次第にブレだしていた。
「まだ……貴女は……僕をそう呼んでくれるんだね」

「お兄ちゃん！」
「おい！　お前……」
粒となっていく管理者は僕を見つめる。
「信じろ……ここはセツリの世界でありお前の世界だ。それを忘れるな」
その瞬間僕達の足下に魔法陣が現れた。これを僕は知っている。転移魔法だ。
消えていくこの世界の管理者を見つめながら僕達の体はその光に吸い込まれて行く。僕が最後にみたのはボサボサの頭にあの巨大なメイスが降りる瞬間だった。

僕の手は空を切って床に落ちる。周りには無数の机と椅子が綺麗に並んだ場所。前方には黒板と放送の為のスピーカーに学級目標を掲げた壁。ここは……
「学校？」
その時、腕の中のアロマの体が光り変身が解けた。教室に響いた甲高い音はステッキが手から落ちた音。
「セツリ？　おい！　セツリ！」
僕はセツリを抱えて保健室に走った。学校で手当するならそこしかない。保健室に入りセツリをベットに寝かしたけど困った。胸が貫かれてるんだ。血を拭くにしても包帯を巻くにしても服を脱がさないといけない。
でも脱がせても僕に何が出来るんだろう。手当なんて意味があるのか？　今もセツリの胸からは止めどなく血が流れている。これは手当なんてレベルでどうにか出来るのか？
「スオウ……」
か弱いセツリの声。今にも消えてしまいそうだ。そうだ、胸なんだよ……貫かれたのは。僕もそれで死に掛けたじゃないか！　僕にセツリは引っ張れるか？　引っ張りあげられるのか？
「私……死んじゃうのかな？」

「そんなこと無い！」
僕は勢いよく言って手を握った。小さく細い手だ。たった二人の世界で今彼女は消えようとしている。そんな事させたくない。どうあってもつなぎ止めたい。死なせたくない、こんな場所で……。
もしも自分の命を分けれるのなら躊躇わずに分け与えるのに。無力な僕にはただ手を握る事しか出来ない。それでも強く……彼女の存在を離さないように僕は握りしめていた。
真っ暗な保健室に横たわるセツリの呼吸音だけが嫌に大きく聞こえる。その時、僕達の掌が輝きだした。小さな光は次第に大きくなり僕達の握りあった腕を包む。そしてその光は二人の体に優しく広がった。
すると次第にセツリの呼吸が静かになっていく事に気付いた。激しかった胸の動きが深くなでらかに落ち着いていく。そしてにじみ出ていた血もそれ以上は広がらず、まさに目の前で奇跡が起きた。
「セツリ！」
呼吸が整ったセツリは僕に向かって柔らかな笑顔を向けてくれる。
「何……したのスオウ？　今の光、暖かかったよ」
セツリの質問に対する答えを僕は持っていない。だけどセツリの傷は完全に消えていた。一体何が回復アイテムの変わりになったんだろう。
「何したのか自分でも分からないよ」
それは正直な自分の気持ちだ。僕にセツリの傷を治す力なんて無かったはずなのに何故かセツリは手を繋いで回復した。どういう事なんだろう……まるで本当に繋ぎ合った者の命を吸ったとか？
僕は確かにそれを出来るのなら望んだ……その結果が今目の前で起きた事なのかも知れない。
「それでも私は感じたよ。自分の中に入ってくる暖かな物……あれはきっとスオウの魂だったんだよ」
僕はセツリの言葉に素直に頷いた。そうだ、きっとそうなんだ。難しく考える事なんか無い。目の前のセツリは助かったんだから素

直に今は喜ぼう。それできっと良いんだよ。
僕はそう自分に言い聞かせてセツリに向かってこう言った。
「僕の魂を受け取ってくれてありがとう」
そんな僕の言葉にセツリは弾ける様な笑顔を見せて答える。
「変なの。助けて貰ったのは私だよ」
そう言えばそうだ。僕とセツリは互いに笑った。それはおかしな事だった。モンスターの大群に出られるかも分からない空間で僕らは笑い有っている。
でもそれは諦めとか……絶望を感じての苦し紛れって訳じゃない。ただ……そうだな。言えるのは僕達は一人じゃ無かったからこの時笑えたんだ。
そして僕はこの空間にある可能性をセツリが助かった事で見いだしていた。最後に管理者はなんて言っていた？
【ここはセツリの世界であり、お前の世界だ】
そう言った。僕の仮定はこうだ。セツリが願って変身出来たように、僕達はここでは願う事でそれを実現する事が出来るんじゃないかってこと。
それはきっと脳を提供してる僕達にだけ許された特権。だってここはシステムが僕達の脳を繋いで作り上げた世界なんだから。
僕はきっと本当に自身の命をセツリに分け与えたんだろう。ＨＰバーは見えないけどそれはきっと半分位は減ったかも知れない。多分、そう言うことなんだ。
僕もセツリにリンクした世界の一部なら……きっと力に慣れるはず。その思いをシステムに乗せれば僕はここでも戦える筈だ。
一頻り笑い終えると僕達は窓の外を見た。すると暗闇にはこの学校をグルッと囲むよう赤い目がいくつも見えた。完全に僕達の位置はバレてる様だ。だけど中には入れないみたいで、ただ外でこちらを伺う様にしてる。
セツリの心も落ち着いたのか空には少しの月明かりも戻ってきて

いる。
「本当にウジャウジャとしつこいね。まるでスオウみたい」
「おい、それは僕が追いかけるのは迷惑だって言いたいのか？」
結構ショックだぞそれ。セツリは綺麗な横顔に笑顔を覗かしてからかうように言う。
「それでも……スオウなら嬉しいんだよ」
栗色の髪がふわりと揺れる。音が静かに流れていく。
「なら最初からそう言えよ。紛らわしい」
自分のやってることは親切の押し売りでもストーカーでもないと思いたいからな。
「私は女の子だから本心はたまに胸に隠すの。察してよ」
無理だろそれ。どこに女子が関係してるのかも分からないし。僕は沢山だして行きたい方なんだよ。誰かを知るにはブツカるのが一番だと思ってる。
「それはスオウが男の子だからだよ。女はね、男よりも口が災いの元になりやすいの」
それは……そういう物なんだろうか？　女子の世界なんて縁遠いから分からない……って、セツリだってそう言うの分からない筈じゃないのか？
「むぅ、私にだって女友達いるよ」
「それってサクヤだろ？」
それ以外考えられない。するとその名前を聞いた瞬間にセツリの顔が華やいだ。
「何で知ってるの？　スオウに話して無いよね？　サクヤの事」
「知り合ったんだよ。セツリを助ける途中でさ。今はＬＲＯに居るよ。セツリの側でお前が目覚めるの多分今も待ってる」
するとセツリはなんだかいろんな表情を一気に作った。なんだ？
悩んでるのか。　感情が直ぐに顔に出る奴だ。
「そっか……サクヤすっごいいい子だからね。一緒に居るとなんだか私が悪女になっちゃうんだよね」

いや……どういう事だよそれ。僕は二人が一緒に居た頃を知っている。でもそこには仲睦まじい二人の姿があったと記憶してるけど……

「それで有ってるよ。私たち仲良かったもん。ただね……私は酷い女だなぁ～って思うだけ」

それはあの約束の事を言ってるのだろうか？　聞きたいような……でもセツリの横顔にはさっきの台詞が見えた気がした。「察してよ」　だから僕は「ふ～ん」と言うだけに止まった。きっと正解だったろう。

「でも、仲良かったって、今はそう出来ないみたいな言い方だな」

僕の言葉にうなだれるセツリ。ミスった。地雷踏んだようだ。

「そんなの無理だよ。私はサクヤを置いてった。見限ったの。なんだか帰りたく無くなってきたかも」

少しずつだけどセツリという人間が分かってきたかも。基本、傍若無人に見えるけどその実本当はとても臆病なのかも知れない。あと逃げ癖付いてるな。僕はセツリの手を握った。

「ふざけるな。放さないからな僕は。絶対に戻るんだ」

するとセツリは僕から顔を背けた。だけど逃げようとはしない。いや、してるのかも知れないけど僕には分からない。

そして影に入ってよく見えないセツリの顔から声がした。

「なんで……なんでスオウはそこまでしてくれるの？　それって同情とか……仲間の信頼に応える為とかだけなの？」

いつの間にか出ていたまん丸満月は何故か秋に昇る月の様に赤かった。その光の中……僕は答える。唇の動き一つ一つを確認するように僕は動かしていた。

「それは……」

影になっていた部分からセツリの大きな瞳が覗いた。星を散りばめた様な綺麗な瞳。僕は必死に言葉を紡ぐ。

だけどその時、校舎全体が激しく揺れた。

「うあ！」

「きゃあ！」
地震と思うほどの大きな揺れは二度・三度と続く。これは……地震じゃない。
僕は外を見て唖然とした。黒い悪魔がその巨大なメイスを校舎に突き立てている！　バリアの様な物で守られている校舎は今はまだ無事だけど、この衝撃はいつまでも耐えられる物じゃない様な気がする。
それについには赤い月を背にして杖を掲げる奴の姿を見てしまった。そして何故か届く奴の声。
「今宵は良い夜だ。赤い月が私の血を沸騰させてる様じゃないか。世界を消すのには絶好の夜だとは思わないかプリティックアロマ」
なんだろう。最初から思っていた事だけど何だか芝居臭くないかその言葉。すると隣のセツリがワナワナ震えて何かを呟いている。
「そ、その台詞は……第五十話の……あの名台詞」
セツリはいきなり駆け出す。手にはあの魔法のステッキを握りしめて。一体どうしたんだ？
「負けられないの！　私は絶対これだけは！」
その瞬間、大音量と共に校舎の天井から何かが振ってきた。飛び散る噴煙の中、見てみると隕石の様な物が空から次々に落ちて来くる。さっきのもきっとこれだ！
「マジかよ……」
あんなのに当たったらひとたまりもない。流石バランスを考えてない誰かさんの頭が作った世界だ。これをやってるのは多分さっきの奴だろうからもう最悪。倒せるのかな？
次々と落ちてくる隕石を無視してセツリは走る。僕もその後に付くけど状況はかなり不味かった。さっきの一撃でどうやら学校に張ってあったバリアは消えたようでモンスター共が次々と校舎に押し寄せて来るのが見えていたんだ。
僕達は階段を上ってるからまだ大丈夫だけど逃げ場が無くなることは見えていた。逃げ続ける訳にはどっち道出来ないんだけど。

セツリは屋上に飛び出して叫ぶ。
「そんな事させない！　絶対に貴女を止めて見せる！」
ステッキを掲げたセツリを光が包む。そして現れたのはプリティックアロマ！　ピンクがもう目に痛いよ。
「さあ、第二戦と行こう！！」
フードの人物の張りの聞いた声に挑発される様にアロマは足に力を込める。だけど飛ぶ前に僕はその肩を捕まえた。
「ちょっと待て！」
僕の言葉に膝が折れる格好になるアロマ。
「お前分かってるのか？　ついさっき、コテンパにやられたんだぞ！」
僕の言葉に顔を弾けさせて答えるアロマ。
「大丈夫！　愛と勇気の力は無限大だから！」
頭が痛くなってくる。コスプレしたら性格変わるっていうけどこれもその類だろうか。アロマになったセツリは超ポジティブだった。愛と勇気の力に影響されてるんだろう。
「だからその無限大の力で負けてたって言ってんだ！　分かってるのか？　今度こそ死ぬかも知れないんだぞ！　もうちょっと慎重に行けよ！」
僕はつい口調をあらげてしまった。でも仕方ないだろう。だって直ぐに突っ込むんだコイツ。どっかの誰かを見てるようで危なっかし……え？　それは自分じゃないかと気付く僕。
「慎重なんて待ってられない。冷静なんて置いて行くもん。それで恐怖を忘れられて突っ込むの。バカかも知れないね。それでも私は守りたい人が居るから突っ込むことしか出来ないの！」
そのセツリの言葉はかつての自分と一緒だった。ただただ最初は守りたい……助けたいの一心で僕も突っ込んではガムシャラに剣を振ったんだ。それはこんなに周りに迷惑を掛けるし心配を掛けるとも何となくは知ってたけど実感は無かった。だけど今僕はそれを知る。

初めて僕は今、アギト達の立場に居るのかも知れない。どうして僕はあの時走れたのか。どうして僕はここまで来れたのか……僕の後ろでいつも見守ってくれたアイツが居たからだと気付いた。
すべての迷いを捨てて一直線に僕がセツリに向かって突っ込む事が出来たのは後ろを任せられる奴が居たからなんだ。
僕はかつて……と言うか今現在もそうだけどこうやって客観的に見た自分の行いをホントバカだなと思う。だけどみんながそんなバカに付き合う気持ちも何となく分かる気もする事を今知った。
僕はアロマの肩から手を離す。
「スオウ……ごめんなさい。今ならね、分かるよ。あの時のスオウの気持ち。貴方だけでも……って奴」
その言葉にいつかの時を思い出す。それを言ったとき確か僕は叩かれたっけ。
「同じ事言うなら僕も叩くよ。二人でＬＲＯに戻るんだ。そうだろ？」
「うん、だからスオウはどこかに隠れて……うぐ」
僕はアロマの唇に指を立てて制した。だって僕の役目はそんな事じゃない。
「お前は前だけ見てろ。アイツをぶっ飛ばす事だけ考えてろ。後ろは……その後全部は僕が片付けるからさ。それが僕の役目だよ」
そう、この世界での主役は僕じゃない。それはやぱっりセツリなんだ。僕はアイツの気が余計な事に散らされないようにするんだ。いつもアギト達がやってくれてるように。きっと大変だろうけど……言い勉強だ。
「でも、スオウ武器は？」
「大丈夫」
そんな心配杞憂だよ。その時屋上に大きな悪魔が顔を見せた。やっとお出ましだ。僕はいつものように左右の腰に手を伸ばす。その時、悪魔が僕めがけてメイスを付いて来る。
アロマの叫ぶ声も聞こえた。だけど大丈夫。僕は宙を握り締めそ

して振った。
金属同士のブツカる激しい音と飛び散る火花。拍子にメイスは空に戻っていた。そして僕の手の先には青く輝く二対の剣が月光を帯びて怪しく光っている。その剣の名は『シルフィング』僕の相棒だ。
地面に転落した悪魔は沢山のモンスターを巻き込んでくれたようだ。僕は惚けているアロマに剣を掲げて言う。
「本当にあるかもな。愛と勇気の力って奴」
その言葉を聞いて微笑んだアロマの顔は最高級のカメラでもきっとフレームに収まりきれない程魅力的だった。
そして彼女は前を見据えて空に飛んだ。そこには彼女の倒すべき敵が悠々と待ちかまえている。

それぞれの役割（後書き）

遅くなりました。ごめんなさい。明日続きが更新できるように頑張ります。

掌に愛と勇気を（前書き）

私は何度だって前を見る事が出来る。彼と一緒なら……その勇気が出るんだ。私はプリティックアロマとしてフードの人物に立ち向かう。だけど私の攻撃はいくらやっても通らない。

そして初めて知った本当の恐怖に私の心は囚われる。再びへたり込みそうになった時、私の前には彼の背中があった。その姿に……その行動に……その言葉に、私はきっといっぱい支えられている。彼の伸ばされた手を取った時、私のステッキには新たな光が灯る。

掌に愛と勇気を

モンスターの侵攻を食い止める二対の剣の輝きを私は見た。その姿はいつか見た時よりも数段力強く、大きく見えた。そんな背中に心の何かが反応した気がする。

だけどそんな彼の姿を見た時、私は寂しくもあったんだ。彼は私が見ていないたった数日か数週間で最初見たときの頼りなさが消えていた。それはきっと成長と呼べる物なんだと思う。

彼は私の為にこんな大きな背中を用意してくれた。だけどそれに比べて私は何も変わらない。三年前のあの日から仮想に引きこもった私に成長なんて言葉は無くなった。

彼と私は違うんだ。この中で得て来た物の絶対的な質量というか質の違い。もしかしたら私も最初はそんな物を得ていたのかも知れないけど私が見つめたここと彼の見てきたここはきっと違うんだろうなと思った。

でも……それでも……そんな私でも、まだ彼に追いつくことが出来るのなら私はその場所に行きたいと思った。全ての私という存在を魔法のベールで変えて、小さな心を大きく変えて私は初めて前を向くことが出来る。

ほら……地面を蹴れば私の体は宙を駆けることだって出来るんだよ。

胸のリボンは愛の証。ステッキの光は勇気の大きさ。負けられないの。地上で戦う彼に追いつく為にも私はこんな所で負けられない。

初めて自分から近づきたいと思う存在の出現。それはきっとどんな女の子も体験する事で、それは自分を少しずつ変えてくれる事の始まり。

私は大きくした心のままにその行動を実現する。指を指した先のフードの人物に強い目を向けて言い放つ。

「私は絶対にお前を倒す！」
私のステッキと奴の鍵の様な杖がぶつかり合う。ギチギチと音を出して攻め気合う二つの武器。私は必死に力を込めているのにフードの人物は片手だけで杖を操り後ろに引く気配もない。
常に宙に漂っている杖は私を徐々に押し戻し始める。
「くっ……」
でもここで私は止めたりしない。
「通って！」
私は更に力を込める。少しずつ押し戻し始めた私にやっとでフードの人物は反応した。
「愛と勇気……それだけか？」
フードの人物は空いていた方の腕を一度杖に重ねて真横に動かす。すると一瞬杖がブレて動かした腕に付いていく杖がもう一本……
「え？　――きゃあ！」
分裂した杖が私に側面から攻撃をしてきた。私は一気に飛ばされて数メートル落ちてしまう。だけど靴に生えた羽が私を支えてくれる。
上を見ると二つの杖が伸ばした腕の先端で不規則に回っているフードの人物の姿がある。そして二つの杖を今度は片方に移動させて再び腕を振ると更に杖が増え、奴の体の周囲に四つの杖が展開した。
不吉な予感が私の頭をざわつかせた。そしてフードの人物が私に腕を向けると周りで回っていた鍵達は回転運動を止めて一斉に私に向かってきた。
四つの鍵の高速飛来だ。私は宙を蹴って逃げ出した。戦略的逃走だよ。決して怖くなったわけじゃない。だけど鍵達は速かった。後ろから次々に迫る鍵を私はステッキでどうにか受け流す事しかできない。
四つの鍵が波打つように私の周りから縦横無尽にその無機質な体を向けて襲い抱る。
辺りに響くヒュヒュッと言う音は鍵が空気を切る音かな。プリテ

ィックアロマ史上最大のピンチかも知れない。
「どうした？　見せないのか？　愛と勇気の力は」
そんな声が聞こえて私はステッキを前に出した。あんなに速く動く鍵を捉えて攻撃を当てるのは至難の業だから方針変更。肉を切らせて骨を絶つ戦法に切り替えだ。
だけどその時私に鍵の一つがぶつかった。回転を加えて私の体は月夜の空に転がる。そして続け様に迫る鍵達の姿を一瞬だけど捉えた私は痛みも傷もお構いなしにステッキに思いを込めた。
「お願い、守って！」
今は交わすことも出来ない状態。すると光の球体が私の体を包み込んだ。その瞬間目にも止まらぬ早さで鍵達がぶつかってきた。だけど表面で滑るようにしてその攻撃は私まで届かない。
だけど、鍵達の攻撃はそれで止まらない。旋回を繰り返し再び攻撃を繰り返す。その衝撃はステッキを支えている私の腕に伝わってきて徐々に痛みへと変わる。
「くぅ…このままじゃ」
「情けない。貴様は私に一撃すらも入れる事は出来ない。その程度の思いで外に出たい？　勘違いじゃないのか」
かなり離れているのにその言葉は掠れる事もなく私の耳に届く。違う！　勘違いなんかじゃない。私は本当に……
「それならどうしてお前は私に届かない？　貴様は信じてなんかいないんだ。彼の事も……」
「そんなこと――きゃぁぁ！」
光の膜は破られ私は今度こそ地上に落ちていく。重力に逆らえず、地に足を付く度に座り込むのはもしかしたらどこでも変わらないのかも知れない。
リアルの私の足は役立たずで・・・一度も私を支えてくれた事なんかなかった。でもこの中なら私は立ち上がる事も歩く事も走る事も出来たんだ。でも……それは結局、夢なんだ。リアルでは何も変わらない私がいることを知っている。

私は迫る地面に腕を伸ばす。ここで私が死ぬことは幻？　それとも……現実なのかな？　それでしか私のこことリアルは繋がらないのかも知れない。
私は本当に上に……表層に戻りたい？
「アロマァァ！」
その瞬間、私は目を見開いた。伸ばした腕に繋がった手の温もりは先刻の疑問に答えをくれる。戻りたいよ……私はこの人と。
「スオウ！　ごめんね……私……ごめんね」
私の言葉に彼は困惑の顔をする。そうだよね、分からなくていいよ。
「何言ってんだ？　まだ行けるのかよアロマ」
私は彼の質問に元気よく答える。
「勿論だよ。全然へっちゃら。二人で……戻るんだからね」
私は再び前を見つめた。彼が居てくれると私は何度だって前を見れる気がする。遙か上空には四つの鍵を従えた奴の姿。
「それも幻だと何故に気付かん……」
奴の声はなんだか震えていた。だけど少し上に居る彼には聞こえていないみたい。下を見据えている。そこには大きく口を開けた悪魔の姿。
彼は私の腕を取るために空にジャンプしてくれたんだ。私と彼がリンクしてるみたいに奴とも私は繋がってる。
私は握り合った手を確認するように強く握る。
「アロマ？」
私のそんな行為に彼はこっちを見てくれた。今見えている彼の顔は本物だと聞いた事がある。黒い髪は所々癖っ毛がありその下に意志の強い光を宿す瞳。線は細くどこか年寄りも幼く見えてしまいそうな顔だ。
だけどやっぱり男の子な手は私の手を包んでくれている。感じる温もり……どんどん大きくなる感情。これは仮想じゃない……幻なんかじゃないんだ。

「スオウ、私もう一度行ってくる！」
再び私は奴の前に立つ。ステッキを奴に向けて言い放つ。
「私は行くよ。もう邪魔しないで！」
「それならその意志を貫いてみせることだ。お前が言う愛と勇気の力でな」
鍵が一斉に輝きだし大きな光が収束する。私はとっさに横に飛んでそれを交わした。空に一筋の光が放たれたんだ。私がさっきまでいた場所は光に包まれている。
私は無防備に立っている奴に迫る。だけど振り上げたステッキは再び鍵に阻まれた。だけど私は位置を素早く変え再三に渡ってステッキを振りかぶる。
だけど全ての攻撃が届く事はなかった。
フードの人物の腕がこちらに伸ばされる。その瞬間何かに弾かれるように私の体は後方に飛ばされた。だけどまだまだ、諦めない。私は飛ばされながらもステッキを奴に向けた。
「いっけぇぇぇ！」
光が奴に向かって飛んでいく。そして直撃。空に白煙があがった。やっとで一撃入れれた？　白煙が風に流されていくとそこには何事も無かったかの様に佇む奴の姿があった。
それはある意味予想通りともいえる。あれで倒れるのならこんなに苦戦なんてしてないんだ。私は気を引き締め直してステッキを何度も振った。
すると周りには何個もの魔法陣が展開する。そしてそれを続けながら奴を囲む様に一周した。こうなれば質より量で勝負。下手な鉄砲、数打ちゃ当たる作戦だ。
「無駄な事を」
それでも動じない奴を私は一斉射撃。夜空に太陽の代わりの様な光が満ちた。だけどその途中で走った紫の光に次々に魔法陣は破壊されて行く。そしてやっぱり変わらずに奴はそこにいた。
私はそして初めて恐怖した。今まで漠然としかその強さを感じて

なかったけど目の前の強さが越えられないものと知ったとき……そこに恐怖が生まれた。
「お前は分かってない。量に意味があるのは当たったときに確実に倒せるから。お前の攻撃じゃ意味の無いこと」
そんな言葉聞きたくない。やっとで前を向いたのにそんな言葉いらない。
「なんで邪魔するのよ！　行かせてよ！　帰してよ！」
私は恐怖でただガムシャラに魔法を放つ。だけど幾ら当たっても効果はない。それに避けることもしなければ動じる事もない奴に私は気が動転しそうになる。
そして私の腕は奴に捕まれる。もう体を強ばらせて目を閉じるしか出来なかった。
「哀れで可哀想な造花の花であれば良かった物を。それならば散ることを知ることは無かったのに。今一度聞こう。お前は外を目指すのか？」
私は震える唇を動かす。激しく体を揺らして腕を解こうとしながら。
「行く……行くよ！　私はそう決めたんだから！　だから邪魔しないで！」
私の声に反応して初めてフードの中の瞳が見える。それはなんだか同じような瞳。そういえばお兄ちゃんが言っていた。もう一人の私……もしかして貴方は私なの？
「散らせる花に何が必要だ？　ここを望んだのはお前なのに……それを捨てる奴に用はない」
私の体にリアルな衝撃が入った。それはパンチだ。顔面に食い込んだ衝撃は初めての体験だった。目の前がぱちぱちする。
そしてこの一発は奴の憂さ晴らしだったのか次からは普通に魔法を入れてきた。放された体は一気に鍵の攻撃を受けて落ちていく。その上から更に大きな魔法攻撃。なんとか私は防御の魔法を発動したけどその上から押しつぶされる様な感覚。

なんとかして最後の力で私は勢いを弱めたけどグラウンドを何度も跳ねる。
そして地面に土埃を上げて止まる。掠れた瞳に映るのは空に浮かんだ大きな球体。紫の光を発したそれは奴が私をしとめる一撃。
「あの世こそ、本当にお前が求める場所だ。愛と勇気の終着点にこれ以上ふさわしい場所はないだろう。後悔を胸に恐怖を身に刻んでいけ」
大きな光が迫ってくる。私の体は動かない。ここまでなの？　私は結局、ここにも囚われただけだったのかな？　全部を捨ててここまで来てしまった私には結局戻る事なんか許されないの。
この状況……なんだか今朝見たアニメとデジャブだよ。あれってどうなったんだっけ？　強大な敵に勇敢に向かっていった女の子は私と同じように地に伏せていた。
ああ、そうだ。続きは来週だったんだよね。助かったのならいいな……そんな事を考えながら私はその光に飲まれていく。
「ふざけるな！」
大きな声。前を向くと私を守るように魔法を受け止めた彼の背中があった。
「こんな所で死なせるかぁぁ！！」
そして二対の剣が奴の魔法を切り裂いた。そして彼は私に近づいて手を差し伸べる。
「立ち上がれアロマ。今度は一緒に行ってやる！」
私の瞳からは大粒の涙がこぼれていく。そっかそうなんだ……私はもう一人じゃない。その手を掴んだとき、私のステッキはこれまでとは違う輝きを発していた。

どれだけの苦渋をお前に飲まされたか分からない。今ここには僕しかいないんだから絶対に負けられない。助かったのはＬＲＯでの強さを映してる訳じゃなかった事。そしてどうやらここは一撃必中のクリティカルシステムでバトルが決まることだ。つまりはどんな

強大な敵も真に入れば一撃で倒すことが出来る。
目の前の悪魔は消えていく。ついさきほど渾身の一撃を胴体に決めてやったからだ。だけどその時、背中に光が当たった。上を見上げるとフードの人物が今まさに止めの一撃を放った所だった。
視線を動かしてアロマを探すとグラウンドの中央で倒れている。僕は息が整うのを待たずに走り出す。消えかけている悪魔の体を使い、一気に地面に降り立った。そしてアロマを目指す。
ここは願う分だけそれを力に変換できる。もっと速く、更に速くを僕は願う。そして届いた光に僕は剣を突き立てた。
自分が誰かを守れるなんて思うのはおこがましいのかも知れないけど、今だけは守れると信じないといけない。ここには僕しか彼女を守る人はいないんだから。
光の球体を切り裂いて、僕は彼女に手を差し出す。その手を握った彼女は泣いていた。どうしてこう僕は女の子を泣かせてしまうのだろう。
「光が……」
僕は彼女の手のステッキの光に気付いた。そしてアロマもその光を見つめた。そして泣きはらした顔に笑顔を浮かべて言う。
「なんだか元気が沸いてくるね。一人じゃないとこんなに強い光なんだ。愛と勇気の覚醒だよ！」
アロマは立ち上がり魔法を放つ。それは今までのどの魔法よりも輝いていた。四重の鍵の盾を突き破って魔法はフードの奴に突き刺さる。それはきっと初めての有効打。
そして吹き飛ばしたフードの中を僕たちは見た。それは黒いセツリ？　瞳だけは実態化してるけどそれ以外は前の黒いモンスターの様な感じだ。
奴はふらついて地面に降りてきた。見れば見るほど不気味な姿。何なんだ一体？
「何なのあなた？」
思いが重なったのかアロマが同じ事を言った。

「私は……お前の成れの果て。システムが作り出した仮想と一体化した姿だよ。これこそがお前の望みなんだ！」
なんだって？　あれがセツリが望んだ姿？　どう言うことだよ。成れの果て……あれがセツリの未来とでも言うのか？
「どういう事？　そんな姿、私望んでない！」
「望むと望まないと仮想に居続ければいずれはこうなる。肉体が滅び魂だけとなれば魂はそのより所をシステムに変えてな。私はそのシュミレーターだよ」
信じられない話。目の前のこいつは何話してるんだ？
「何よそれ……じゃあなんで私の姿をしてるの！？」
「私は……いいやこのシステムはお前の願いから生まれたからだと言っておこう。リアルを投げ出したいのだろう？　いやここをリアルにしたいのか。それを実現する為のシステムだよ。だからお前は幾ら逃げても我々を求め続ける」
「そんな事ない！　――そんなこと……ない」
人の願いから生まれたシステムなんてあり得るのか？　首を必死に振るアロマは混乱している。僕だってそうだ。ここは一体何なんだ？　僕達はなんだかとんでもない所に迷い込んだんじゃないのだろうか。
僕は迷いを振り切る為にも奴を切った。
「うるさい。これ以上アイツに変な事吹き込むなよな！」
だけど奴は笑っている。
「貴様もいずれ知ることだ。システムに呑まれている一人なのだから」
僕はその言葉に悪寒を感じた。システムに呑まれている？　それは仮想に浸透しているって事か？　そして奴は言い放つ。
「お前に彼女は救えない。いいや、お前だからこそ救えない」
僕は剣を振り上げた。だけど消えたはずの鍵にそれは阻まれる。だけど攻撃スピードは僕の方が圧倒的だった。けれど僕の剣は奴の影の様な体には一向に効果がない。

管理者が言っていたっけ奴を倒すのはセツリだと。てかあの管理者は何なんだ？　こいつらの仲間じゃないのか。
「あれはその女の為の存在だった奴だ。小賢しい奴の防衛線。だけどそれも同化した」
あれはセツリの為？　奴とは一体……だけどそれを聞いたセツリのステッキが光った。
「よくも……お兄ちゃんを……許さない！」
「あれはお前の兄ではない。そんなこともわからなくなったか？」
確かにそれはこいつの言うとおりだ。だけど今のセツリはそれを分かってない訳じゃない。
「違うもん！　あの人も確かな私のお兄ちゃんだった！　そんなことも分からない貴方達を私は求めたりしない！」
「そういうことだ！」
僕達は互いを見て奴に迫る。今の僕達には分からない事が多すぎる。だけどやるべき事ははっきりしていた。それは目の前の敵を倒してここから出ることだ！
「私を倒せると？　貴様の愛と勇気では幾らやっても無駄だったろう」
奴の黒い体が広がってマントみたいになった。そこからは無数の鍵が出てくる。そしてそれぞれが魔法を放つ。
「スオウ！」
その掛け声を聞いて僕はとっさにアロマに近づいた。そして全てを彼女の魔法が防ぐ。それには少なからず奴も動揺してるみたいだ。
「貴方は分かってない。愛と勇気に限界なんて無いって事を！　今の私は一人じゃない事を知ったの！　大切な人が居る……それだけで無限大に愛と勇気は溢れて来るんだから！」
恥ずかしい事を恥ずかしがらずにアロマは言う。僕がなんだか恥ずかしい。だけど言葉通りに彼女の光はどんどん強くなっている感じだ。
「アロマ……」

「言ったでしょ。私がここでは守ってあげるって。だけどやっぱりどっちかが後ろに居るのってなんだか変な感じだね。二人で倒そう。そしたら私……もっともっと頑張れる」
僕は頷いた。するとアロマの光が僕にも移ってきた。包んだ光は傷を癒し、体を羽の様に軽くする。これはきっと僕の命綱だな。これが無くちゃ攻撃は意味をなさいのだろうから。
地面を蹴り僕は一瞬で奴の懐に飛び剣を振る。そして今度こそ確かな手応えあった。包んだ光が奴の影を引きちぎる。
「なっ！」
驚いた奴は横に飛んだ。だけどそこにアロマがステッキを振りかぶる。それは直撃して奴は後方に飛ぶ。ここに来て初めて感じた手応えに二人でいけると思い怒濤のラッシュかける。
僕達は二人で戦うのは初めてなのに何故か息がぴったり合った。それは二人がリンク状態だからだろうか。たまらず奴は空中に逃げた。そこで最後で最大の一撃を打つつもりだ。
「なかなか興味深い現象だ。相乗効果かなんであれ、おもしろい……面白いぞ！　でもこれが貴様達に防げるか？」
奴は夜の闇までも飲み込み空から黒が剥がれ落ちた。おかしな空間での最後の衝突だった。僕とアロマは向かって来る闇の奔流に突っ込み飲み込まれた。
だけどその中には光の筋が小さく光出す。それは徐々に昇り奴の手前まで道を造った。そしてその中から飛び出すのは当然アロマだ。光は僕が造った道だった。乱舞の時の風と同じように扱えたんだ。
斬り裂かれた闇は光の中に消えていく。
「これが俺達だ！　防ぐなんてしない、道は自分で斬り裂いてでも造って見せる！　アロマァァ！」
飛び出したアロマは奴の上。
「受け取りなさい！　これが愛と勇気の力なんだから！」
神々しいまでの光が奴を包み込んで消し去った。
「無意味だよ……君に未来なんて」

それが奴が言った最後の言葉。そして町は消え去っていく。光の粒が弾ける様に町は消滅して行きその波に僕達も呑まれる。
「愛と勇気の力の勝利だね」
光の中で彼女は言った。僕は少し笑ってしまう。
「分かってる？　私の愛と勇気はス……」
赤い顔で何か言い掛けたセツリは言い終わる前に消えてしまった。きっと戻ったんだろう。後で聞けばいい。僕の体も光に消えていっている。その時だった。
「気を付けろ、奴は消えて無い。妹を……セツリを頼む」
振り返ったけど誰もいない。僕の心に不安を残し、夢の様な世界は消え去った。

掌に愛と勇気を（後書き）

第十八話です。なんだか長くなっちゃいました。最初はもっと簡単な話の筈で、とっくに終わっていた筈の命改変プログラムも何故か複雑に。だけどもう自分を苦しめるだけと分かっていても止められない。

挫けそうになるけど頑張れるのは読んでいてくれる人達のおかげです。なのでもう少し続きます。ありがとうございました。

子守唄の目覚め（前書き）

僕はリアルに戻ってきた。真っ先に目に入ったのは日鞠の顔だ。そしてセツリの病室はいつになく慌ただしかった。やっぱり彼女の身にはリアルでも何かが起きたようだ。

だけどみんなは僕に真実を教えてくれない。佐々木さん達も揃って病室にいるし何かあったのは間違いないのに……。

子守唄の目覚め

目を開けると丁度真上に日鞠の顔があった。後頭部には柔らかく暖かな感触がある。どうやら僕は膝枕されているようだ。

周りからは何やらガチャガチャとした慌ただしい音が聞こえている。時折見える白衣の影はセツリのベットを覗いている様だ。やっぱり何か影響があったのだろうか？

「スオウ……大丈夫？」

上から日鞠の声が僕に投げかけられる。僕は体を起こして周りを確認しながら取り合えずその疑問に答えて自分の疑問を投げかけた。

「大丈夫だよ。それよりさ、そのカメラどこから出したんだ？」

日鞠は一眼レフの立派なデジタルカメラをその両手で抱えている。確か入る直前はそんな物持ってなかった筈だけど……取り合えずやることあるな。

「これはね私の鞄から持ってきて貰ったの。私は常にカメラは手放さないんだよ。趣味は写真だからね」

「あっそ、取り合えずそのカメラ貸せ」

「あ、ちょ！　……うう」

日鞠の手から強引にカメラを取り上げると画面に画像データを表示させる。すると現れたのは僕の寝顔の写真の山だ。一体何枚撮ったんだって感じ。ここまでやられたらさすがに引くぞ。

僕は画面を操作して全部を選択。そして消……

「わわわわぁぁぁ！　怒るよスオウ！」

こっちの台詞だ。こんな写真そのままにしてたら何に使われるか分かったもんじゃない。全世界にウェブ配信されたらイヤだし。

だけどなんか声がやけに近かった気がする。キンキンするよ耳が。振り仰ぐと目の前に日鞠の顔があった。思わず僕は少し仰け反る。だけどそれに合わせるように日鞠は付いてくる。

「なんだよ一体。お前近すぎるぞ」
「違うよ。スオウが引っ張ってるの！」
カメラを見ると紐が付いていてそれは日鞠の首に……あ、なるほどね。
「消したら……押し倒すから」
「それは女の子の台詞じゃねーぞ」
なんてアグレッシブな奴だ。日鞠に日本は狭いんじゃ無いかと思う。そんな風に僕達がいつものやりとりをしていると上の方からクスクスという笑い声が聞こえた。
視線を二人で動かすとそこにはセツリのベットから上半身を覗かせた女医さんの姿があった。
「貴方達、ここは病院だから静にね」
色っぽい大人な声の女医さんに注意されてしまった。僕達は二人で頭を下げる。てかこんな事してる場合じゃ無いんだ！
「それでセツリに何かあったんですか？」
僕はその女医さんを見つめて聞いた。周りを良く見ると看護婦さんも数名いるし、よく分からない機械もある。それに佐々木さん達もいつのまにか居たし全員集合してるじゃないか。
これで何も無い訳がない。だけど女医さんはにっこり笑って僕の頭をぽんぽんする。
「大丈夫よ。もう何ともないわ。君が彼女を助けてくれたんでしょう。偉い偉い」
完全に子供扱いされている。だけどなんか払うことは出来無かった。これが大人の女の技か！　てなアホな事を考えてると横から痛い視線が絡み付いて来た。
「何だよ」
「日鞠はスオウのだらしない顔に呆れ返って一言。最低」
「なんだその小説の一文を抜き取った様な文は！　それに最後の最低にだけ心を込めるなよ！」
すっごい棒読みだったんだその前は。僕は女医さんの手から離れ

てセツリを見た。そこにはいつもと変わらないセツリの姿がある。
確かにもう大丈夫なんだろう。
「大丈夫そうですけど……でも何かあったんですよね？」
「まあ、ちょっと不整脈を起こしただけよ。植物状態の患者には良くある事よ」
不整脈……それはやっぱり心臓が不規則に動いちゃう訳だから原因は心臓。あの時、心臓を貫かれたからなのか？　でも不整脈って……随分僕の時と違って軽い。
それに不整脈程度であんな大きな機械が必要なのだろうか？　医者じゃないし分からないけど周りの空気もなんだか変だし……僕は真相を知ろうと女医さんに向かって口を開き掛けた時、先を越された。
「はいはい、それじゃあ皆さん。もう面会時間は終わってますから速やかにお引き取りください」
なんて見事に出鼻を挫くんだ。恐ろしき大人の女。僕の周りに居ないタイプだから対応が分からない。苦手なタイプなのかな？　いや、こっちが絶対まともに見える。
変質者が入ってる幼なじみとか仮想に引きこもって一人学校ごっこやってる奴よりも確実に。憧れだなこれは。
僕は自分とセツリを繋ぐコードを抜いて病室から出た。日鞠が僕の腕を引っ張るのを無視して閉まった扉の前でしばらく立ち止まっていると何かポツポツと聞こえてきた。
それはきっと中に残っている佐々木さん達と女医さんの会話。子供に聞かせたくない大人な会話だろう。僕は必死に耳を傾けるけど、その時痺れを切らした日鞠に耳を引っ張られた。
「もう、何してるの。早く帰ろう。聞き耳だって立派な盗聴です」
おまえに言われたくない。
「盗聴って犯罪だもんな」
「そうだね。犯罪だからやっちゃだめだよスオウ」
おお、自覚してるのかこいつ。ここは更に認識を深めて日頃の行

いを悔い改めさせないと！
「だから――」
「だから、バレないようにしなくちゃね。スオウは堂々過ぎるよ。これだから素人は」
僕は自分の常識が崩れそうになる。どうやればこの変態を正しい道に戻せるんだ。やっぱり一度警察に突き出すか。取り返しが付く内に。
だってこれは自分は玄人です、みたいな発言だ。自分の技術に自信を持ち始めてる。こいつはスパイでも目指してるのか？　いやいやここは平和の国日本だぞ。目を覚ませ！　そんな求人はハローワークにも無いぞ。
幼なじみを本気で厚生させる道を探していると、不意に耳に入って来た言葉があった。それは確かに病室の中からだ。何故か鮮明に聞こえたそれはこんな言葉。
「ピースメーカー」
それだけだったけど、それだけで心配が募る言葉だ。だってそれは……ピースメーカーって人工心臓の事じゃなかったか？　やっぱりセツリの心臓には何かが起きたんだ。不整脈よりずっと悪い何かが。
もしかしたら心臓の機能も弱くなっているのかも知れない。三年も眠り続けているんだ。あんなベットで上で栄養は管だけで……そう何年も生き続けられるものなのか僕は初めて考えた。
そしてそれはやっぱり僕には分からない。今の医療技術ならもしかしたら幾らでも命を維持する事は出来るのかも知れない。だけどそうじゃなかったら……セツリを助け出すためのタイムリミットがあるって事だ。
どこにも表示されない命のカウント……その針が今まさに刻まれている音が聞こえる気がした。
「なあ日鞠……セツリは大丈夫なんだよな？」
僕の言葉に日鞠は足を止めて耳から手も離してくれた。蛍光灯の

光が僕達を照らしている。大きな病院だけど……だからこそなのか夜はなんだか異常に静に感じる。違ったかな。こっちは確かいつもこんな感じだ。

セツリと当夜さんが眠っているあの病室は一般病棟から離れた位置にあるから。蛍光灯は等感覚で廊下に灯りを与えている。

「大丈夫だよ。セツリさんはスオウが助けるんでしょ？　それならやれる事だけやればいいんだよ」

日鞠のそんな言葉は僕にはこう聞こえた。ここではスオウのやれることはないんだよ。だから前だけ見つめなさい。

確かにその通りだ。僕は結局ここでは無力なただの高校生なんだ。それ以上でも以下でもなく、ただの高校生。大半の高校生がきっと自分の無力さを知っているであろう高校生。

幼稚園の時の様にただ生きる事が出来なくなって、小学校の時の様に純粋に笑うことが出来なくなって、中学校の時のように明日に夢や希望があると信じれなくなった年頃だ。そんな高校生時なんだ。

きっと大人になったらこう思う。高校の時の様にまだ無知で居られなくなった……とか。そんな言い訳が出来ないのが僕の中での大人な世界な訳だけど……こうやって考えると僕のお先は真っ暗だ。

だけど最近はそうでもないと思えて来てるとは思う。ＬＲＯは僕にいろんな刺激を与えてくれる。大人でも、だけどもう子供でもない僕に何が出来るのかを試させてくれている。

僕は自分の為にもセツリを助けたいんだきっと。ＬＲＯは僕をただの高校生から解放してくれる。あの中でこそ出来る事があるのなら……今はそれでいいかと納得できる。

「まあ、そうだな。やれる事だけで僕はいっぱいいっぱいだったんだ」

そうだ。リアルでは頼りになる大人な人達に任せておけるけどＬＲＯの中ではそうは行かない。僕にしか出来ない事なんだ。なら……こっちでの事は信じて向こうで出来ることをやるしかない。

僕達は今度こそ静かな廊下に二人分の足音を響かせて歩いた。

「スオウは器用じゃないからね」
そんな日鞠の悪口も、今は「まったくだ」としか返せない。
「でもね。そこが良い所だよスオウ」
何が言いたいのか良く分からん。不器用より器用の方がいいだろうに。
「不器用だから一つの事に一生懸命になるしかないでしょ」
日鞠はカメラを向けてそんなことを言う。カシャっとシャッター音が廊下に響いた。なるほどね。確かにその通りだ。僕には他をみる事なんて今は出来ない。ただ真っ直ぐにセツリを見ることだけ。
「ほんと、その通りだ。不器用も悪くないかもな」
「うん」
そういって前を進む日鞠はなんだか肩が小刻みに震えている。なんだ？　いきなり泣いたとか？　僕がそんな心配をして近づくとなんだか変な声が聞こえる。
「うへへへ、一緒……寝顔」
その日鞠の言葉で思い出した。そうだあのカメラには僕の尊厳を壊す画像があったんだ！　僕は後ろからそっと手を伸ばす。だけど今度は交わされてしまった。
「ダメだねスオウ。私が同じ愚考を犯すとでも？　物を手にした私の周辺策適能力は普段の三倍だからね」
お前はどっかのニュータイプか。だけど例えそれが化け物と知っていても諦める訳には行かない。人類の尊厳の為……殆ど僕一人を指しての人類だけど今なら僕は赤い彗星の気持ちが分かる！
「渡せそのカメラぁぁぁ！」
「十万八千五百円」
現金要求しやがった！　それに何が十万だ！　幾ら一眼レフでもデジタルじゃそこまで高く無いだろ！
「秘匿の為の料金です」
脅迫か！　絶対こいつとは示談は成立しないな。僕と日鞠の足音は病院中に響きわたり後でたっぷり病院の人達に怒られた。それに

余りに夢中だったから僕は気づいて無かった。携帯を震わせていた重要なメールの到着に。

こってりと三十分位絞られてエントランスの椅子に脱力して僕と日鞠は座っていた。なんとかカメラの画像は消せたけどこれは納得できない損害だ。

僕が怒られる筋合いは無いのに……全ての現況は隣でうなだれてる奴の方なのに。僕が追いかけていたせいでこっちが犯人ぽく思われた。

こういう時には思ってしまう。女ってズルい。

すると病院の奥、から声がした。

「ああ、良かったスオウ君まだいたんだね」

それは佐々木さん達ＬＲＯ関係者だ。何の用だろうと思って思い当たる。僕はまだリンクした先で起こっていた事を話してない。気になる事も沢山あるのに最初に日鞠といつものやりとりしたせいですっかり忘れていた。

「すまないね。でも少しでも早く聞きたいんだ。何が起こっていたのかを」

「僕もそのつもりです。皆さんの意見を聞きたいし……正直信じられない部分もあると思いますけど先に言っておきます。僕が今から話す事は全部真実です」

周りの空気が重くなったような感じだ。いやこの場合は張りつめたと言った方がいいのかも知れない。そんな中佐々木さんは言った。

「今更君の言うことを信じない分けないよ。みんな君を信じてるからね」

その言葉に周りの人達が頷く。僕は「ありがとうございます」と感謝を示して話し始めた。リンク先で起こった奇妙な事の数々に、当夜さんを名乗った謎の管理者。そして一番の不安要素のセツリが生んだという謎のシステム。

全部向こうではただ受けるだけでその正体に迫れなかった。きっ

と今思う以上に混乱していたんだろう。
そして全部を話し終えるとしばらく誰も声を出さなかった。今度こそ重たい空気が場に満ちる。セツリのイメージや名誉を守るためにプリティックアロマの事は話してないけどそこは後から考えてみても別に重要じゃ無かった。
「なんでしょう、あのセツリを閉じこめてた奴は？　システムって一体……」
僕の言葉は誰も拾わずに落ちるかなと思った。だけど大人は僕が知るほど無知では無かった。
「システムか……集合の意識と言うのを聞いたことがあるな」
誰かなの言葉に更に大人達が続いてく。
「そんな事本気で言ってるのか？　あり得ないだろ」
「だけど仮想空間に集う意識の集合体は……」
「あれを認めたらフルダイブ出来なくなるよ」
「逆にそれはノーベル賞ものじゃないのか？」
僕たちには全然分からない話でインプンカンプンだ。
「あの、どういうことなんですか？」
僕の言葉にみんなが苦い顔をする。
「仮説だよ。そう言われているだけだから何とも言えないけど……仮想空間に自我が目覚めたかもなんて夢のある話だよ」
一瞬耳を疑った。なにいってんのこの人達。
「『存在は意識に寄って証明される』そんな事を言ったお偉い人の論文に仮想空間に集まった人達の大量の意識が一つの大きな意識を生むって奴なんだ。それは集団でも個でもない自我である、そんなことが書いてあったよ確か」
もうなんだか良く分からない。ここはリアルだよね？　それなのにこんなファンタジーな事が起こり得るの？　だけどそこで横で黙って聞いていた日鞠が僕の肩を叩いて言った。
「スオウ、リアルとは小説より奇なりだよ」
うるせぇ、僕の中の一番みじかな奇が何言ってんだ。僕はセツリ

を無視して佐々木さん達を見る。
「そんなことが本当に起きるものなんですか？　てか僕が出会ったのはセツリの中でＬＲＯじゃ無いですよ」
確かリンクは当人同士だけの回線でのやり取り立ったはずだ。ネットワークに繋いだ訳じゃないのにそんな大量の意識なんてあるわけ……
「厳密に言えばリンクもネットは介してるよ。ただ小さい物だけどね。それにスオウ君達が使っているゲーム機は繋がってる様な物だからね。だからこそそれを再現できたんだ」
僕は自分の手にあるゲーム機を見つめた。これの中であの奇妙な存在が生まれたのか？　そう思うとオゾマシい。
「そう言えばＬＲＯは一人歩きしてるって……もしかしてそれも……」
「そうかも知れないし。そうじゃないかも知れない。確かにＬＲＯは僕達の管理を離れて行っているよ。だけどそれが集合の意識の仕業とは言えない。本当にこれは夢の様な話なんだよ」
確かに実際見た僕でさえその集合のなんたらを感じることは出来ない。だってそうだろ。漠然とし過ぎてるよ。他に考えられる可能性でも探した方が実感できる気がする。
第三者の介入とか……実は当夜さんの自作自演とか。ずっと気になってたんだ。当夜さんも同じゲーム機を装着して、そして意識不明になってるのになんでどこにも居ないんだ？
仮想にいけなかったのか？　だけどいろんな場所で僕は当夜さんの意思みたいなのを感じた気がするんだ。セツリと僕が出会ったのも集合のなんたらより当夜さんの仕業の方がしっくりくる。
「ごめん……僕達にもこればっかりは分からない。素直な言葉だね。大人として情けないけどスオウ君にまた不安を与える事しか出来ない」
僕は頭を下げる皆さんを見てるとなんだか居心地が悪い。端から見るとなんだあの高校生は？　みたいな感じだよ。大の大人数人に

頭を下げさせてる高校生・・イヤだ。
「そんな、別にいいですよ。やめてください。やることは変わらない訳だし。一回倒せてますし問題無いですよ」
僕は精一杯の強がりな言葉を紡ぐ。本心はとても不安だ。だってあいつは余りにも不気味で発した言葉も不吉だった。大人達はそんな僕の不安は見抜いてるんだろうけどそれ以上は言わないでいてくれた。
「僕達は君を信じてるよ。こっちでも出来る限り調査をしとくから」
「はい、お願いします」
暗くなった病院内で僕達は互いの健闘を祈った。それがそれぞれやるべき事だから。そして解散の雰囲気。佐々木さん達が僕と日鞠の為にタクシーを呼んでくれた。
その間もずっと皆さんは何か話し合っていた。僕は日鞠の話を半分位もらしながらずっと考えていた。早くＬＲＯに入りたいと。
だって本当にセツリは目覚めのか気になる。戻ったときまだ眠ったままなんて想像もしたくない事なんだ。でもそんな光景が頭の周りでグルグル回る。だからこの目で確認したかった。一刻も早く。
そしてタクシーが到着した。広い病院の大きな道に止まった黒いタクシー。僕と日鞠が乗り込んだとき見送りに付いてきてくれた筈の吉田さんから意外な事を言われた。
「すまないけどスオウ君、本体を預からせてくれないかな？」
「え？」
もしかしてずっと話してたのはこれの事？
「君のを調査したいんだ。あのリンクを体験した当人の本体には記録が残っているかも知れない。それは重要な事なんだよ」
確かにそれはそうだろう。もしかしたら何か分かるかも知れない。でも……どれくらい？　僕は今直ぐにでもＬＲＯに入りたいのに。
「今晩だけでいいんだ。中のデータを移してから調べる事にするから明朝には必ず返す。ダメかな？」
ダメかなと言われても僕は断る事は出来ない。だって情報は僕も

ほしい。それの手がかりがここにあるなら取り出して調べて貰うべきだろう。
だけど何故かな……腕が動かないんだ。頭ではそれを受け入れてるのに心が反発してる。その時横から腕が伸びてきて僕の腕からゲーム機を取り上げた。それはやっぱり日鞠だ。
「今夜はゲームをやることは許しません。一緒にお夕飯食べる約束だよ」
そんな約束した覚えないけど。だけどそんなこと言ったらまた怒りそうだから僕は諦めて頷いた。
「そうだった。約束だったね。そういう訳でどうぞ。絶対に情報を見つけてください」
「ありがとう。必ず有意義な物を見つけてみせるよ」
そう言って僕はゲーム機を吉田さんに渡した。自分でも驚くほど素直にそれが出来た事に驚く。横を見ると日鞠と目があった。きっとこいつのおかげ何だろうけど素直に言葉には出来ない。
それは幼なじみだけど今日で少しだけ変化しだした僕達の関係のせいかも知れない。
タクシーはゆっくりと振動を起こして滑り出した。夜の街の光が後ろへと次々流れていく。僕と日鞠はまたささいもない事で言い合って、いつも通りに関係を見せかけて車内を過ごす。
都内から離れて行き次第に空の星に少しは気付ける位になった。タクシーは既に僕達の住み慣れた街に入ったようだ。静かな住宅街を進むとブロック塀が今の僕とＬＲＯを隔てる壁の様に感じた。さっきから手が妙にソワソワするんだ。
そこにはさっきまであった重さがないから。僕はゲーム機がないとこのリアルと仮想を隔てるブロック塀は越えられない。ぽっかりと穴が空いた様な感じだ。
この心の穴はゲーム機が原因だろうから明日までの辛抱。だけどその時何となく開いた携帯にメールを発見。それはアギトからの連絡。たった一言「目覚めた！」と書かれた文面と写真が付いていた。

そこにはみんなに囲まれてベットの上でピースを作ったセツリの姿。僕の心の穴にコトリと抜けていた物がはまった音がした。

子守唄の目覚め（後書き）

遅くなりました。明日載せる分がまだ出来てなくて大変です。やっぱり中途半端はだめですね。やるときにはやらなきゃ駄目です。なので今日は寝ないで頑張ります。

明日の分と今日のノルマを書きあげなきゃ眠る事は出来ません。

日差しの暖かな日（前書き）

僕は気分の良い朝を迎えた。良い朝にふさわしく日鞠の対応をしてたけどあいつは僕の上を行き、さわやかな朝には儚い終わりが……。そして掃除を終えてテレビを見るとそこからは余り良くない事が報道されていた。

佐々木さんがゲーム機を返してくれて僕はＬＲＯに入ろうとしする。だけどその時、アギトからのメールが携帯を震わせた。そこには意味不明な文章があって……だけどＬＲＯでセツリと対面した時、僕はあのメールの意味を知る。

日差しの暖かな日

明朝。僕はいつになくスッキリと目覚めることが出来た。これはきっとセツリが無事にＬＲＯで目覚めたからだろう。僕の心の穴は埋まって、何か大きな事を一つやり遂げた感覚だったんだ。

今まではいつも空振りな事が多かったからこの達成感はとても気持ちが良いものだった。僕に自信をくれたんだ。

だから昨日はずっと日鞠の話しに耳を預ける余裕もあったし、いつも旨い晩ご飯を作ってくれる事を素直に感謝したりした。それに初めて長期休暇中の課題に手を着けたし、色々と良い気分な夜だった訳だ。

だから今朝はとっても気持ち良い朝だった。澄んだ空気を感じて、爽やかな朝日を体に当てる。すると眠っていた僕の体の細胞が活性化していくかの様だ。

僕はブルッと体を震わせた。ヒンヤリとした廊下に出て階段を下りると、包丁が小気味良い音をリズミカルに立てていた。

僕は少し開いたドアの隙間からその音の正体を見る。鍋やフライパンを行き来し世話しなく動いてる人物は楽しそうに何かの歌を口ずさんでる。

一体何想像しながら作ってるのか……でもそんなアイツをこうやって見るのはなんだか好きなんだ。僕の親は殆ど家に居ないから、いつの間にか僕の家のキッチンに立つのはアイツが当たり前になっていた。

お袋の味はきっと僕にとってはアイツの味だよ。小皿に少しだけ味噌汁を取って味見している。味わって……そして満足したように頷いた。どうやら出来は上々の様だ。

長い黒髪を今日はポニーテール風に後ろで纏めて、膝下位のパン

ツに赤いTシャツを着てエプロンは中学の時に家庭科の実習で僕が作った奴だ。
そう言えば、僕達はそれぞれで作ったエプロンを交換したっけ。みんな自分の奴を作ってるのに女物を作るのはとっても恥ずかしかった記憶がある。
それでも作ったのはやっぱり僕はアイツに感謝してたからだと思う。僕が作ったエプロンを嬉しそうに付けてあそこで回っていた日鞠の姿は今でも目を閉じれば頭に浮かぶ。
僕は取り合えず顔でも洗おうと洗面所へ。そして今度こそキッチンへ入る。四人掛けのテーブルには既に僕と日鞠の分の朝食が並べてあって僕が入ってきた事に気付くといつもの挨拶が飛び出す。

「うーすスオウ、おっはー」
「お前、僕の爽やかな描写を返せ！　なんで心の語りを読んでんだよ！」

まったくいつも道理の日鞠だ。期待を裏切らない奴だな。

「えへへー、それにもしても珍しいね。スオウが一人で起きるなんて」

日鞠はエプロンを外して畳みながらそんなことを言う。そこまで珍しい事かな？　僕はそこまでだらしない奴じゃないぞ。

「私の朝の楽しみの一つを奪わないでよね。設置し直す暇がないよ」

何をだよ。カメラか？　前、取り外させたカメラを再設置し直す気だったのか？

「はぁ、お前って悉く爽やかな朝を壊すのな。もういいよ。取り合

えずご飯食わせろ」

僕は今は気分が良いからあえて突っ込まないでやろう。変態はいつか突然直ったりしないだろうからね。まあ、だからこそ飽きもせずに突っ込まなくちゃいけないのかもだけど……今日は変態で居ることを許してやろう。

こんな良い朝にはあんまり大声を出したくない。

「む……スオウつまんないね。それに食わせろだなんて私にあ～んして欲しいのかな？」

日鞠はそんな事良いながら向かいの席に着く。我慢だ我慢。今日はこんな気分がいいんだから。そうだ、食いつかずに話題を逸らすんだ。

僕は「いただきます」を意に介さず先に言う。「あっ」と言って急いで僕に続いて両手を合わせる日鞠。ここら辺はマナーを守れるのになんで常識というマナーは守れないんだろう。まあ取り合えず話題逸らしだ。

「日鞠ってまだそのエプロン使ってたんだ。小さく無いわけ？」

僕の言葉で日鞠はテーブルの端に畳んで置いたエプロンを見る。そして何かを思い出す様に目を閉じて言った。

「覚えてるスオウ？　あれって初めてのスオウからも贈り物なんだよ」

そうだったっけ？　それまで何も贈らなかったか？　誕生日会とかやってたような気がするけど……。

「スオウは全部言葉だったよ。口約束を贈るの。本当に小さいときからジゴロだったんだから」
「ジゴロは言い過ぎだろ。別にそんな気があった訳じゃ無いんだし。なんて言ったっけ？」

正直あんまり覚えてない。今までずっと同じ場所にいて初めてのプレゼントがエプロンなんてジゴロどころか甲斐性無しっぽいけど。
それで日鞠は納得してくれてたのか。一体どんな恥ずかしい約束をしたんだろう。やっぱりここはベタに

「大きくなったら結婚しようとか？」
「ううん、お前は俺の物だからなって言ってたよ」

手に持ったお椀を落としそうになる。なんて酷い奴だ。いいや酷いジゴロだ。自分が恥ずかしい。もしかして日鞠が道を踏み外した要因は僕にあるのでは？　と一瞬でも思ってしまうじゃないか。

「お前、ねつ造してるんじゃないだろうな」
「そんな事しないよ。過去も今もその言葉通り私はスオウの物だよ」

そんな事を言って笑う日鞠になんだか僕の鼓動が早くなる。なんでこいつはこんな……

「だからスオウも私の物だよ」
「は？」

不意の言葉に思わず声が漏れた。そして日鞠は食事中なのに携帯をポチポチいじり出す。普段は絶対そんな事しないのによっぽど何か在るのだろう。
そして僕の方にその画面が向けられた。

「ほら、こんな事をしたってそれは合意の元なんだよ」

画面は日鞠のブログだ。そこには選び抜かれたであろう僕の寝顔の写真と、膝枕の写真がなんともかわいらしく載せてあった。

「バックアップがあったのかよ！」

それは紛れもなく昨日消したはずの写真。コメントは「お父様、お母様。私たちのゴールインの日は日々近づいてます」だ。

日鞠が元々ブログを始めたのは僕の様子を両親に知らせる為だったけどなんだか暴走しだしてるな。両親だけが見てるわけじゃないって事を知れよ。なんて事全世界にウェブ配信してるんだこいつ！

「スオウは甘いよね。最近のデジカメは取った写真を直ぐに本体と他にパソコンにも自動で送って保存するんだよ。リンクしてるの」

「ふざけんなぁー！」

この瞬間僕の爽やかだった朝は崩壊した。僕は日鞠の手から携帯を取り返そうとした。けれどその手は空を切る。燦々としていた心には何か黒くドロドロした物が生まれた気がする。

だけどこれがやっぱりいつもの僕達の日常だった。僕が怒って日鞠は笑う。それはいつも通り過ぎる位の光景で昨日の変化が嘘の様に感じれた。

だけど僕達はやっぱりこのままじゃ居られない。ただ近くに居続けるだけの不自然な関係のままを止めようと決めたんだ。

朝食の終わりと共に日鞠は手早く後片づけを済まして、持ってきていたバックから紙を取り出した。

「ほら、スオウの為に作ってきたんだ」

「うん？　掃除のやり方と予定表？」

受け取った紙にはそんな事が書かれていて綺麗にカラーペンなんかで色分けされてるのを見ると日鞠も女の子何だなと改めて思う。

「二人のお家は二人で綺麗にしようね」

「なんだかその言い方いやだな」

「むー何でよスオウ！」

頬を膨らませる日鞠。だけどここで僕は思う。いつもの日鞠なら予定表はともかく掃除のやり方なんて手取り足取り教えるよ～とか言いそうなのに何かあるのだろうか？

「取り合えず今日はその通りにお掃除してね」

そう言って日鞠は自分のバックを肩に掛けて外に出る準備をしてる。それはやっぱり今日はもう出ていくと言う事か。

「そう言えば最近何やってんの？」

リビングから出ていく所の日鞠に声をかける。居なくても別に良いけど、少しは気になるからね。すると振り返った日鞠はなんだかニヤニヤしてた。

「あれれ、心配？　でもねスオウ、今は奥さんを家に閉じこめる風潮はないよ」

うるせえよ。誰が奥さんだ。気にした自分が恥ずかしい。さっさと行けばいいんだ日鞠なんて！

「大丈夫、浮気なんてしてないから心配しないでいいよ」
「そんな心配誰がするか！　だけどな、今度ここに来たときには既に僕の家事スキルが上がっていて日鞠の居場所は無いかも知れないけどな！」

そんなわけ無いけど何か言い返さなくちゃいけないだろうさっきのは。日鞠は面白そうに笑って「いってきます」を残して家を後にした。
本当に何やってんだろあいつ。今まではこれから掃除とかしてたし、何も無くても無駄にここに居座っていたのに……ってなんだかそんなことを考えてると僕が寂しがってるみたいだ。そんな訳無いのに。
だけどなんだか静まった部屋がイヤでテレビを付けた。聞こえてくるのはアイドルアナウンサーの声だ。僕は取り合えず日鞠が作ってくれた予定表と掃除のやり方を参考に部屋の掃除を始めた。
啖呵を切ったしやらない訳には行かない。約束だし。

部屋は元々綺麗だったのかそんなに苦労する程じゃなかった。多分それは毎日日鞠が掃除をこまめにやってくれていたおかげだろう。
日々の積み重ねって大事だね。僕だけじゃゴミ屋敷になりそうだ。流石にそこまで放置しないと思うけど……そこは自分を信じたい。
掃除機を片づけてリビングに戻るとなんだか堅苦しいニュースの話が耳に入ってきた。経済がどうとか、昨今の教育がどうとか、政治家の汚職がどうとか……リアルでやることなんか今も昔も別に代わり映えなんてしない。
子供の僕から見れば同じ事を繰り返してる様にしか思えないよ。代わり映えしないニュースの連続にチャンネルを変えようとした時、僕にとって聞き逃せない事をアナウンサーは言った。
「続いてのニュースです。今世間で話題のフルダイブ型仮想シュミ

レーションゲームですが、昨今その安全性が問題視されています。特にＬＲＯことライフリヴァルオンラインはユーザー数三百万人を突破し、その仮想空間は一つの世界を作りつつあるといえます。
ですがそれにのめり込む人々も増えつつあり、政府は仮想空間での問題の対応を取る機関を近く組織するとの事です。これによって問題が認められたフルダイブ型のゲームはサービスの停止もあり得るとの事でこれからの影響が――――」

なんだって？　今のニュースマジ？　だって今のＬＲＯは問題だらけだ。特にゲームの製作会社がゲームを管理出来てないって大問題だろ。
それにＬＲＯは既に一つの問題を抱えてる。制作者の一人が意識不明なんだから同じ事が起きないかそういう組織は調べに来るんじゃないのか？
最悪の結果のサービス停止……それは永遠にセツリを向こうから連れ戻せないって事だ。
テレビの中の知的ぶる学者やコメンテイターや有名人はそれぞれ適当な事を言っている。「しょうがない」やら「仕方ない」やら「残念ですけど、危ないなら」やら、それだけで済む話しじゃない。それは僕にとってなんだろうけど……それでもあそこには助けを待ってる奴がいるんだ。
その時、部屋に響きわたったチャイムの音に体が震えた。僕は重い足取りで玄関に行き扉を開ける。そこで顔を覗かせたのは佐々木さんだ。佐々木さんの腕には紙袋が下げられてる。
そこにはきっと待ちにまった僕のゲーム機があるんだろう。

「や、待たせて悪かったねスオウ君」

気さくに挨拶してくれた佐々木さんだけど目の下にはクマが出来ていた。やっぱり色々大変なんだろう。

「いえ、全然大丈夫ですけど……佐々木さん達こそ大丈夫ですか？
クマが酷いですよ」
「ははは、スゴいデータ量でね。正直解析の目途が立たないよ。君と出会って驚くことの連続だ」

それは誉め言葉なのか皮肉なのか……どちらに捉えればいいのか分からない。まあ、大変な話を楽しそうにしてるからいいのかな多分。

「それは一緒ですよ。僕だってＬＲＯに入って驚いてばっかりです」
「そうだね……でもきっと君の方がずっと大変だ。だからこそ大人な僕たちが根をあげる訳にはいかないよ」

それは頼もしい言葉だ。信じれる大人の人がいるってのは心強いものだよね。子供としては。そして僕は紙袋を受け取った。

「そういえば……ニュースで言ってたことは……」

紙袋の中のゲーム機を見つめて僕は呟いた。あれは本当に起こり得る事なのだろうか。

「そうか……もう耳に入っちゃってるよね。……でも大丈夫だよ。視察なんて乗り越えるよ。今ＬＲＯを停止させる訳には行かないからね」

そう言った佐々木さんだけど僕にはなんだか不安が見て取れる様な気がした。直感だけど。クマをつけた顔だったからかも知れない。もしかしたら本当に大丈夫なのかも。
そこらへんは僕には分からないし、心配するだけ無駄なのかな？

そんなことを気にするより、一刻も早くセツリをリアルに連れ戻す努力を僕はするしかない。

「分かりました。信じてます。僕も出来ることをやりに行きますよ」

そう言って僕はゲーム機を掲げて見せる。

「ああ、頼んだよ」

佐々木さんはそう言って僕の家を後にした。車で来てたのか轟いたエンジン音が次第に遠ざかって消えていく。僕は扉を閉め、部屋へ急いだ。

電源を入れ、頭に装着。ベットに横たわりいよいよあの言葉を呟こうとした時、充電器にセットしていた携帯が甲高い音を鳴らした。

無視しようとも思ったけどリアルの事はちゃんとしなさいと日鞠に言われてるから携帯を取って画面を確認する。どうやらメールを受信したようだ。差出人はアギト。

僕のメール相手はアギトしかいないのかと思うほどこいつからしかメールが来ないな。少し悲しくなるよ。てか、アギトは昨日から入りっぱなしなのだろうか？　流石に親に怒られそうだけど……アイツの家はちゃんと家族勢揃いしてるからね。

僕はメールの内容を確認する。昨日もそうだったけど、アギトのメールは異様に短い。昨日はそれでも伝わったけど今日のはなんだこれ？　ちゃんと中身を書いてほしい。だって意味が分からない。

アギトからのメールにはこう書かれていた。

【覚悟しといた方がいい。すまん】

全く持って理解不能だ。僕は返信しようか迷ったけど止めてベットに再び寝転がる。だって別に直ぐに会えるんだし、別にいいだろ

うと思ったんだ。
僕は目を閉じて言葉を紡ぐ。
「ダイブ・オン」
つい二日前ぐらいぶりなのになんだか懐かしく感じるＬＲＯの中に僕は戻ってきた。街の名前は『センラルト』サクヤと出会ったあの街だ。
僕が落ちたのはその街の一軒の宿屋の中だったから当然そこに僕は現れた。小さく簡素な部屋にはベットがあり小さな燭台があるだけだ。
「スオウ？」
僕は声が聞こえた窓辺を見る。自分の鼓動が早くなるのが分かる。昨日アギトからの写真でそれは分かっていた事だけどやっぱり目の当たりにするまではどこか完全には安心しきって居なかったのかも知れない。
「セツリ」
窓辺に立って陽光をその体に受ける姿は紛れもなくセツリだった。白いドレスが光を受けて浮かんだように見えて、栗色の髪は柔らかく垂れている。精気を取り戻した顔には星を散りばめた様な輝きを持つ大きな瞳が開かれていた。
「良かった……」
僕はそう呟いてセツリの存在を確かめたくて手を伸ばした。そして肩に後少しで触れるという所で、セツリの肩は僕の手をかわした。
ん？　イヤだったのかな？　僕はもう一度チャレンジしてみる。

だけど僕の手は何度も宙に落ちた。流石にちょっとへこむんだけど……

「何なんだよ一体！　逃げること無いだろ！」

僕は思わず心の叫びを直に出す。すると今度はフンってな感じで顔を背けるセツリ。何？　顔も見たくないって訳か？

「どうしたんだよ。何怒ってるんだ？　言わなきゃわかんねーよ」

流石にちょっとカチンと来るぞ。すると僕の声にセツリの方が早く頭に来たような台詞を吐いた。

「あぁ～もう！　うるさいなぁ。ちょっとそこどいてよ！」

そう言って僕を押し退けてセツリは扉を開けて出ていこうとする。なんだか僕は気圧されて怒りは消えていた。てか混乱していて怒りという感情に繋がらないんだ。

本当になんでそんなにも怒ってるのかが分からない。するとセツリは出ていく前に立ち止まり。いきおいよく振り返り握った両手を下に振って罵声を飛ばす。

「スオウのバカ！　甲斐性無し！　君なんて君なんて君なんて君なんて、死んじゃえ！」

バダン！！　と宿屋が揺れたかと思うほどの大音量で扉を閉めたセツリ。そして駆け足で階段を下りる音が聞こえた。僕はただ呆然としていて動くことが出来ない。

女の子のおかしな行動は日鞠の件でかなり免疫がついて来ていたと思っていたけど……お手上げだった。そして思い当ったのはアギ

トのあのメールだ。
もしかしてアイツが謝っていたのはこうなる事を分かっていたからか？　覚悟もセツリのあんな行動を覚悟しておけと言うことか……すまんって何吹き込んだ？
今の情報じゃ何も決めつける事は出来ないけど、僕にはあんな態度取られる覚えはない。少なくともリンクしてた世界から分かれる時はもっと良い雰囲気だった筈だ。
それがたった一日で何あの態度の豹変。これは直ぐにでもアギトを捕まえなくてはならない。一体何に怒ってるのか全然想像出来ないんだ。
このままじゃクエストクリアに影響しちゃうよ。ギスギスしたままやっていきたくない。早急に関係の修復をしなくちゃ。
僕は扉を開けて階下に降りた。するとそこにはシルクちゃんが慌てていた。

「あ、スオウ君。何したの？　セツリちゃんが出ていったよ！」

僕に気づいたシルクちゃんはまくし立てる様に状況の報告をしてくれた。また飛び出したのかセツリの奴。サクヤ達は後を追ったのだろうか？　全員が居なくなったら戻ってきた時困るからその役目がシルクちゃんなんだろう。

「アギトは？　アイツはセツリを追いかけているんだよね？」
「うん、そうです。後はサクヤさん。テッケンさんはまだ入って居ないですから」
なるほどね。そこまで聞ければ十分だ。だけど僕も外に出ようとしたらシルクちゃんが呼び止めた。
「何？」

「あの……彼女を無事に連れ戻せたことお疲れさまでした」

ああ、そのことか。別にシルクちゃんが言わなくてもいいと思うけどなんだか素直にうれしい。やっとで連れ帰った奴にあんな態度取られたから余計に心に染みる。

「うん、ありがとうシルクちゃん。必ず見つけて来るよ」

「はい」

彼女の弾けた笑顔が眩しかった。僕は赤くなる顔を見られたく無かったから急いで外に飛び出した。人が溢れる街の中、太陽が昇った青空の下を僕は走り出す。

まずはアギトと合流して、その後にセツリを探そう。そう思って腕を振り、ウインドウを表す。そしてフレンドリストからアギトを選択。僕は路地に入ってメールを打つ。

『ちょっと面貸せやアギト！』

このくらいの口調が今の自分にはふさわしかった。そしてメールを送信。洗いざらい吐かせてやる。僕は黒い決意を胸に抱いてアギトからの返信をまった。

空はいつになく穏やかで、街の喧噪に呑まれる今はなんだか普通だと僕は感じていた。

日差しの暖かな日（後書き）

第二十話です。いつのまにか二十って……なんだか前に半分は終わった筈とか言ってたのが嘘になりました（笑）　クエスト的にはあれで半分なんですけどね。

読んでくれる人が居る限り頑張って続けます。ありがとうございます。

行動と目的の法則（前書き）

僕とアギトは町の公園で向かい合う。さあ洗いざらい吐いて貰おうか。だけど聞けば聞くほどなんだか僕は劣勢だ。

その時町に上がる花火と音楽。そして何か冷たい物が全身に掛けられた。困惑する僕を余所に町は賑やかさを増していた。

行動と目的の法則

僕とアギトは小さな公園の左右の出入り口で向かい合っていた。あの後、アギトからの返信で僕はここに来たんだ。すると丁度アギトもここに到着する所だったというわけ。

僕が怒りをぶつけようと一歩踏み出して言葉を出そうとしたとき、だけども見事に出鼻を挫かれた。

「ようスオウ。よくやったじゃん。でもあのメールは友達でも結構酷いぞ」

笑顔混じりの顔でそんなことを言うもんだから僕の飛びかけた勢いがヘロヘロってな感じになったじゃないか！

「酷いのはお前だろアギト！　セツリに何吹き込みやがった！　おかげでバカバカ言われたじゃねーか！」

そんな僕の言葉を聞いてアギトは自分の頭をポリポリ掻いている。こいつのこの態度……知った事じゃ無いって事か？　だけど次に発せられた言葉は僕に取って予想外の物だった。

「うう～ん、スオウお前さ……俺がお前の悪口でもセツリに吹き込んだとでも思ってるのか？」

「当然だろ。他にあんな態度取られる心当たりなんかないよ」

セツリは世間を知らなくて常識に疎そうだからきっとアギトの嘘八百をそのまま信じたに違いない。こいつの口から出るのは七割方嘘なのに、そんなの真面目に聞いたらいけにないんだ！

「言っとくけど俺は別にお前の悪口なんか言ってないぞ。よく考えて見ろ。怒られる原因はお前にだってあるだろ」

何言ってるんだこいつ。自分の事を棚に上げて僕の揚げ足取りか！　その手には乗らないぞ。僕はここＬＲＯで成長したんだ。

「そんな口車に乗るわけ無いだろアギト。責任転嫁なんて見苦しいぞ。おとなしく吐いちまえよ」

思わず口調が刑事風に。これは吐いちゃうだろ。だけどなんだかアギトは嘆息してる。観念では無く呆れたような感じの奴だ。

「お前は本当に……思い出せよな。お前が中に居た俺達に入れなくなったってメールした時刻をな。かなり遅かったぞ。俺達がセツリが目覚めたってメールしてから数時間経ってた」

「うっ！」

まさかそれで？　いや、それは気付かなかったのは悪かったけど、色々あったんだ。

「目覚めた時最初にセツリは『スオウはどこ』って言ったんだぞ。そしてお前がなかなかメール返さないからずっと入ってきてくれるって信じて待ってたんだよ。そしてようやく届いたメールはそれを裏切る内容だったし……これでも怒られる事に心当たり無いかスオウ？」

なんてこった。言い返せない。それじゃあまるで全面的に僕のせいじゃないか。全ては僕の甲斐性無しが原因なのか……気配りが足りなかったって事だ。

やっぱり僕はバカだ。日鞠にも言われたけど続いてセツリにまで同じ事を言われるなんてホント真正のバカだよ僕は。ここは素直に謝るしかない。

「心当たり有りまくったよ。ごめんアギト」

意気消沈な僕。さっきのセツリの顔が頭から離れない。僕を突き放す様なあの目は痛すぎる。

「まあ俺に当たった事は気にするな。折角リンクして絆を深めたのにアレだったから傷ついたんだろ。俺は気にしてないからさ」

太陽の様に笑うアギトが眩しい。なんだこいつ神様か？　こんな聖人君子みたいな懐の大きい奴だったとは脱帽だ。僕はお前の様な親友を持てて幸せです。

「取り合えず、セツリを探そう。前みたいにヤバいプレイヤーに捕まったらやっかいだ」

「わかった」

僕たちは再び町中に走り出そうとする。だけどそこで僕は思いだした。あのメールの内容……アギトからの。確か「すまない」って有ったはずだ。

何故そんな言葉を付けたんだ？　今のアギトの話通りでセツリがあんなに怒ってるとしたら、あの僕への謝罪はいらない筈だ。おかしい……アギトの奴、何か隠してるんじゃないのか？

「おいアギト」

僕は公園を出ようとしてたアギトを呼び止めた。だってわだかま

りが出てきたんだ。モヤモヤしたままはイヤだし、やっぱりアギトを聖人君子なんて思いたくない。
アギトは面倒そうにこちらを見ている。僕は詰め寄りながら聞いた。

「お前、なんで昨日のメールにすまないって書いたんだ？おかしいだろ。何隠してる？」

僕の言葉を聞いた瞬間、アギトの顔があからさまに「やっべー」みたいな顔になった。ＬＲＯの感情表現は大げさで敏感だったのが命取りだ。僕はここぞとばかりに更に詰め寄った。

「アギト……一体何に対しての謝罪だったか聞かせて貰おうか」

すると遂に観念したように

「分かったよ。言う言う。言うからあんまり近づくな」

と言った。やっぱりアギトは聖人君子じゃなかったか。親友の僕の目は誤魔化せないぜ。こいつはそんな奴じゃない！

「少しは親友を信じろよ！」
「良いからさっさと白状しろ。何吹き込んだんだ」

アギトの奴、何言ってるんだか……僕は親友を信じてたからこそこの矛盾に気付いたんだ。
公園ではＮＰＣの子供達が決まった遊びをしている。この子達は基本全部の行動を前もって決められているから同じ事を永遠に繰り返すだけなんだ。
普通のＲＰＧの街の人が同じ言葉しか喋らないのと同じだよ。だ

けどここはＬＲＯだからぱっと見じゃそんな感じは全然しない。普通に普通の子供達が遊んでる様にしか見えない。
それは頭ではプログラムだと分かっていても実際に見てみるとそう割り切れる物じゃ無いんだ。
子供達の無邪気な声に混じってアギトはため息を付いた。今度は諦めな感じの奴だ。

「言っとくけどな、別にお前の悪口を言った訳じゃないぞ。ただお前が昨日は入れないってメールを入れた後、セツリが言ったんだよ」
「なんて？」

どんな事を聞いたのか興味がある。それであんな不機嫌になってるとしたら例えば……あれ？　思いつかないぞ。きっと僕の事を聞いたと思うんだけど、別にセツリの気を損なう情報がある気がしない。
十六年間彼女も居なくて、両親には忘れられてる僕の事を聞いても同情こそすれ怒るなんて気が知れない。そしてやっぱり続いてアギトの口から出てきた言葉は予想通りだった。

「お前の事、教えてくれってさ」
「それで何言ったんだよ。僕の人生でセツリを不機嫌にする要素なんて無いはずだぞ」

全く持って涙がちょちょぎれる位だよ。

「俺だってそう思ってたさ。ただ単純にお前だけがセツリの事を知ってて自分が何も知らないのがイヤなだけと思ったんだけど……」

なんだか言い淀むアギト。デカい図体のくせして何縮んでるんだ？

「なんだよ？」

僕はアギトの言葉を促す。

「お前の十六年を語る上で外せない奴が居るだろ？」

んん？　僕のこれまでの人生で外せない奴……親か？

「違う。今じゃ有る意味親より近いところに居るだろうが。身近な異性が」

身近な異性？　それって日鞠の事か？

「そうだよ。セツリは特にそこに食いついていた」

なんてこった。一体あの脳天気な変態女のどこに引かれたんだ？

いや、でも日鞠は学校じゃ人気者だったな……それに中学時代は下級生に絶大な人気を誇っていた。

それを考えれば、同じ女のセツリが日鞠に興味を抱いたのも頷ける。女の感でそこら辺を見抜いたのかも知れない。

「日鞠って人気だからな。あんな奴でも以外と」

「はあ？　何言ってんだスオウ？　セツリはお前の身近に居る異性として日鞠を気にしてるんだよ」

逆に言えば僕の身近には日鞠しかいないよ！　別に他に欲しいとも思わなかったけど……

「どうしてそんなこと……」

するとアギトの三度目のため息。今度は呆れた様な感じ。
「じゃあ、お前にとって日鞠ってどういう存在だ？」
なんだいきなりその質問。僕はアギトに言われて、腕組みしつつ考える。う～ん。
「幼なじみ……てだけじゃしっくり来ないし……かと言って家族な訳じゃ無いよな。ああもう、一言で表せるか！　アイツは特別なんだよ！」
うん？　なんだか胸の辺りがムズムズする。変な事を言ったせいで顔も心なしか赤いような。てか特別って何だよ自分。それは変な意味に取られるだろ。
アギトはヤレヤレみたいな感じで肩を竦めている。
「それだよ。特別な関係って所を俺の話から感じたんだろセツリは。アイツもお前の特別になりたいんじゃないか？」
特別……僕の？　でも日鞠の場所は日鞠だけの場所なんだよな。それに特別って意味ならセツリはもう十分僕にとって特別だ。
セツリに出会ってここまでの出来事や経験全部が特別だった。絶対に二度と出来ないような事の連続……奇跡の様な出会いや巡り合わせ。だからもう十分特別なんだ。
「セツリも僕にとっては特別だ」
「それならセツリにそう言ってやれよ」
ニヤニヤと笑うアギトはなんかムカつくな。だけどそう言わなき

ゃセツリの機嫌は直らないんだろう。なら腹を決めて……少し恥ずかしいけど仕方ない。これからの為だ。

「わかった。それじゃあまずはセツリを見つけよう」

「そうだな」

僕達は互いの拳を当てて和解した。男は楽でいいよね。話がダメなら次は拳にいけるんだし。今日はそこまで行かなかったけど。それに比べて女の子は大変だ。

自分の思いを言葉にして吐き出すのって恥ずかしいし勇気も居る。それにちょっと間違うと言葉はナイフより鋭くなるんだ。その点、拳はナイフになることは無いからおもいっきりいける。

拳は拳以上でも以下でもないからね。それに言葉の様な選択や駆け引きはいらない。だた思いをそこに込めるだけでいい。

だけどセツリは女の子だ。思いを込めた拳を突き刺す訳には行かない。言葉を紡ぐ作業が必要だ。ちゃんと解ってくれるだろうか。ちゃんと怒りを収めてくれるだろうか。不安で一杯だ。

その時センラルトの街にラッパの様な音が響き渡った。そして続いてパンパンパンと小さな花火が空に弾いた。

「え？　え？　何だ一体？」

僕は突然の事に混乱する。

「ああ、そう言えば今日だっけ」

落ち着いてそんな事を呟くアギト。一人で悟ってないで教えろよ。

「お前もたまには公式ページ覗けよな。さっきのはイベント開始の合図だよ。

「イベント？」
「ああ、確かここは定期的に水――」
アギトの声が途中で聞こえなくなった。それに視界も一瞬奪われた。え？　一体何が怒ったんだ？
「きゃきゃきゃきゃ」
そんな声が聞こえて振り返るとそこにはさっきまで公園の遊具で遊んでいたＮＰＣの子供達が居た。なんだろう、ＮＰＣからプレイヤーに近づくなんて希なことだ。もしかしてこれもアンフェリティクエストでおかしくなった障害か？
僕はそう思って身構える。だけど子供達は笑顔を絶やさない。そしておもむろに後ろ手に隠していたバケツを振りかぶる。大量の水が僕の全身に襲いかかった。
「ぶべらぁぁぁ！」
僕はまたも視界を奪われた。なるほどさっきもこの水を食らったのか。このクソガキ共なにするんだ！　この水なんだか色が付いて全身がオレンジ色になったじゃないか！
報復してやろうと思って腕まくりすると子供達は逃げて行き今度はまた違う人に水を掛けて掛けられてた。周りをみるとなんだかとっても騒がしい。至る所から色とりどりの水がまき散らされているのが見える。
「これがイベント？」
「そう言うこった」
声がした方を振り向くと全身に青い水を掛けられたアギトがいた。

「うわ……なんなんだよこれ」

さっき聞き掛けた事をもう一度聞く。

「この街限定のイベント『水掛け祭り』さ。なんでもこの色の付いた水は悪い物を追い払うとかで、町中の人達が有り難がって他人に掛けるんだよ」

へぇー、一体なんの意味が有るイベントだ？　水を掛けられた理由は解ったけどそれだけじゃプレイヤーはいい迷惑だ。イベントなら何か目的とかがあってイベント限定のアイテムとか有るんじゃ無いのだろうか？

そうしないと誰も参加しないだろう。いつのまに人が随分増えたと思ったらそれはきっとこのイベント目当てだろう。ならそれなりのアイテムが貰える筈だ。

「まあその通りだな。ただ水を掛け合う祭りになんか誰も参加するわけない。お前の察した通り、このイベントには限定アイテムがある」

「どんなアイテムなんだよ？　これだけ人が集まってるなら貴重な物なんだろ？」

だけどアギトは首を振る。

「さあね、発表されてなかったんだよ。だけど噂は数有る。一番有力なのはこの街の伝承をなぞらえたアイテムだな」

なんだコイツ。勿体ぶってないで教えろよ。

「俺達はセンラルトの街の上に有る湖に言ったろ。あの湖は巫女が祈ると精霊の力で未来が見えるって言い伝えられてるんだよ」
「て事は、未来が見えるアイテムって事か？」

確かにあの湖は光ったし、スゴく綺麗で空を映してたりしたけど未来って……流石にアイテムに出来ないよな？　アギトも僕の質問を否定するように首を振る。

「まさか、流石にそんな物無理だろ？　いくら仮想のゲーム世界だからって限度はある。未来なんて誰にも分かる物じゃない」

まさにその通りだ。幾ら仮想でもそんな物が出来たらノーベル賞取れるんじゃないかな。でも未来じゃなければ何だろう？　過去とか？　それならアイテムに出来そうだ。　実用性は低そうだけど。それならフォトグラファーでいいしね。僕の視線にアギトは指を一本立ててなんだか気取ってる。だけど全身青いブルーマンだから全然決まってない。

僕はそんな事を微塵も気にしてないアギトの言葉を待つ。さっさと言えよな。笑いを堪えてるからそろそろ腹筋が痛いぞ。

「未来は無理、過去に魅力はない。だから噂のアイテムは心らしい。心を読むアイテムだ」
「心？　それこそ可能か？」

大いに疑問だ。未来よりは確かに可能性の範囲では近づいたかも知れない。だけどそれだけで心を読むことを可能に出来る訳じゃない。確かに相手の心が読めれば、対人戦では有利だろうし、他人の心を知れるってなんだかワクワクするから魅力的では有るけどね。

「システム的には可能だって言われてる。だって俺達は脳全部をこ

っちに持ってきてる様なもんだろ。心で生まれた信号を捉えてゲーム機がそのアイテム所有者にネットワークを介して伝える事が出来る……可能性はある」

マジでそうなのか？　いや、それなりに信用出来ないとここまで人は集まらないか。この人の数がそのアイテムの可能性を高めているって事かもしれない。

「ふーん、そう言われると期待するな。所で、何すればそのアイテムが手にはいるんだ？」

「ああ、それは簡単だ。この水かけが無駄にならないように考えられてるからな」

アギトの言葉に感心する。この色とりどりの水掛けにも意味はあったのか。

「まず取りあえずイベント中は街の出入りは出来ない。イベントは街の中のみで建物にも入れない。そしてこの街のＮＰＣの一体がコアクリスタルを所有してるらしい」

コアクリスタルはアイテム引換券みたいな物でイベント終了後にそれがアイテムに変わるんだ。町中のみは当然だろう。そして建物にも入れないのは隠れたり出来ない様に？　それでもまだまだ広いけど。

「そのＮＰＣはどうやって見つけるんだよ？」

その言葉を待ってましたと、アギトは自分の青まみれの防具を指す。でもなんだかさっきよりはまともになっている。水が落ちてきたのかな？

「そこでこの水掛けなんだよ。この色とりどりの水を掛けるとそのコアクリスタルが光るらしい。だけどこの水は時間が経つと落ちていくし、その場所にちゃんと掛かってないと光は消える。だからこうやって全身に掛けるんだよ。それに色に寄って水の落ち方が違うとか」

なるほど。水掛け祭りと伝承を掛けた上手いイベントだ。でも今の自分にはイベントに参加してる余裕はない。一刻も早くセツリを見つけないと。

「意外とセツリも報酬狙って参加してるんじゃないか？」

隣でぼそっとアギトがそんなことを言った。

「なんでだよ。アイツがこんな事に興味ある……かも知れないけど」

よく考えたらセツリはお祭りとか好きそうだ。一番にはしゃいでそう。寂しがり屋だからな。でもアイテムはどうだろう。

「セツリは欲しいと思うけどな。その存在を知ればさ。きっと喉から手が出るほど」

アギトが僕を見ながらそんなことを言う。どうしてそんな事が分かるんだよ。

「スオウだって欲しいんじゃないか？　相手の心が分かれば謝るとき便利だろ？」

「う……それは」

そうかも知れない。なんだか心がちょっと動いたぞ。更にアギトは僕を押す。

「だから同じ様な事をセツリだって思ってるって事だよ。セツリはお前の弁解を嘘か本当か知りたいと思うはずだろ。ならこのアイテムは必須だ」

むむむむ……成る程。このイベントに参加することで同じ目的を持って鉢合う可能性があるって事か。確かにこの広い街を闇雲に走り回るよりは良いかも知れない。

弾ける水の音と飛び交う笑い声の中、僕は決めた。

「よし、やろうアギト！　一石二鳥作戦だ」

「セツリもアイテムもゲットするってか？　欲張りだなお前」

「はあぁ！　ななな何言ってんだアギト」

なんだかいやらしく聞こえるぞ。そんなんじゃない。僕はただセツリとは良好な関係をだな……

「さっさと行くぞアギト！　モタモタするなよな！　他の奴に捕られたらどうすんだ！」

僕は動揺を隠すように走り出す。

「たく、言っとくけどもしもアイテムを一回手にしても気を抜くなよ。これは時間性のイベントだ。タイムアップになるまで終わらない。ＮＰＣからアイテムを奪ったプレイヤーはＰＫ対象だ。だからアイテム回収は俺がやる」

後ろからのアギトの声。確かに僕がアイテムを持って他のプレイ

ヤーにタコ殴りにされるのはイヤだな。万が一ＨＰが尽きたらどうなるか分からないし。
ここは素直にアギトの言葉に従うか。
「分かったよ。最後の詰めはアギトに任せるよ」
「それでいい。もしもプレイヤーがお前を倒して死んだら、その人に悪いからな」
「僕の心配してたんだじゃないのか！」
なんて酷い親友だ。そりゃただのゲームで人殺しにされたら相手も迷惑だろうけど。そんな事微塵も思ってない訳だしね他の人は。
僕とアギトはそれぞれ指定のポイントでバケツをゲットして飛び交う祭りの喧噪に加わった。そしてまずは
「お前じゃアギトォォォォ！」
「食らえ、スオウォォォォ！」
それぞれの色の水が僕達を濡らす音が響いた。男ってこういうもんだよね。
町外れの河川敷で私はこの祭りの洗礼を浴びた。体一杯に次々と掛けられる大量の水はイジメとしか思えない。やっとで終わったと思ったら自慢の白のドレス風のワンピースが紫色になっていた。
するとなんだか悲しくなってきて私はその場に女の子座りして大泣きし始めた。
「うえぇぇぇん、ごめんなさ……い……ヒック……ごめんね……スオウ……あぁぁ～ん」

天罰だと思った。あんな意地悪な事言ったせいだ。私を助けてくれた人なのに……自分だけが特別じゃなかったと知って焼き餅焼いた罰。どうやって謝ろう。許してくれるかな？　嫌われたかも知れない。

そう思うと泣かずには入られない。涙が止まらない。

「セツリ！」

聞きなれた声が私を包んでくれた。それは久しぶりにあったサクヤだ。私は自分の罪をサクヤに話した。イジメの事も。だけどサクヤが言うにこれはイジメじゃないみたい。イベント？　心が分かるアイテム？

それは私の気持ちを強く惹いた。だから涙を拭いて立ち上がり私は言い放つ。

「サクヤ、私そのアイテム欲しい！」

行動と目的の法則（後書き）

読んでくださっている方々ありがとうございます。感想とか評価とか貰えると嬉しです。励みにしたり、参考にしたいです。何書かれてもかまいません。

へこたれない事を誓います。ではまた明日です。

イベントランディブー（前書き）

僕とアギトはコアクリスタルを求めてバケツを振りかぶっていた。だけどなかなか見つからない。どこからもそれを見つけたという情報もない。

きっと途方にくれたプレイヤーは僕達だけじゃないだろう。だけど僕達は諦めずにコアクリスタルを探した。そして僕達はこのイベントの裏の仕様に気付いたんだ。その時、コアクリスタルの輝きは放たれる。

イベントランディブー

センラルトの街に色とりどりの水が舞っている。人々の笑い声と共に弾け飛ぶ水の音が愉快な音楽の様だ。人々はプレイヤーやＮＰＣ関係なく赤や青や黄色などの色まみれ。

それは異様な光景なんだけど今更そんなことを気にする奴はない。リアルにだってよく分かんない祭りは乱雑してるからね。

だけど僕達はただ無闇に人に水をぶっかけるのを楽しんでる訳じゃないんだ。笑顔の裏では僕達の目は世話しなく動き光る物が無いか探している。

それこそが僕達プレイヤーがこの祭りに参加している理由。町中のＮＰＣのたった一人が隠し持ってる筈のコアクリスタルを手に入れる事が僕らの目的だ。

支給されたバケツには使用して三秒経つと再び色の付いた水が供給される。その再ランダムで水の色が変更される仕様でやっぱりアギトの言ったとおり、色に寄って落ちる時間が違うみたいだ。

一番早く落ちるのは白の水で、今まで確認した中で一番落ちるのが遅いのは紫だな。白は三十秒も持たないけど紫は五分は持つ。

「スオウ！　この地区のＮＰＣには掛け終わったぞ。外れだ。移動するぞ！」

アギトのそんな声が飛び交う喧噪の中から聞こえた。だけど周りを見ても確認できない。先に行ったのかアイツ？

「おい、移動するって言ってんだろうが！」

「うわぁ！　誰だお前！」

隣に現れたのは緑と黄色、そして二つの色が混ざって黄緑まで加わった不気味な生物……そんな知り合い僕にはいないぞ！

「アギトだよ！　ふざけんな！　お前も似たようなもんだぞ！」

ああ、アギトか。不気味過ぎて分かんなかったよ。でもその指摘

を受けて自分の姿を確認してみる。赤に青に緑にとビビットカラーが目に痛い。なんで僕のはこんな派手な色なんだよ。
まあそれも時間が経つと綺麗に消えるから良いけどね。洗濯要らずのここら辺はやっぱりゲームの快適さだよ。リアルだとこの後に自分で後悔とかしそうだもん。

僕とアギトは取りあえず場所を移動する。ウインドウを出して街の地図を広げて場所を決める。ＬＲＯの街はリアルの町並みに広いからコアクリスタルを持つＮＰＣを見つけるのは大変だ。
取りあえず地区ごとに回ってるけどこれじゃ絶対時間切れになる事間違いなし。二時間位の制限時間で町中を探すのは不可能なんだ。
それにコアクリスタルを持ったＮＰＣが止まってるとはあんまり思えない。でもそれでもやっぱり確証はないし、そこら辺にいるＮＰＣを無視するわけにも行かないんだよね。
「絶対に運の要素強いぞこのイベント。それにこんなに街の広さを呪ったのも初めてだよ」
「確かにな。せめて水が消えなければ除外出来る奴が分かるんだけどな～」
僕達二人は路地裏に入ってボヤく。このままじゃコアクリスタルを見つけるなんて無理だ。ウインドウの時間を確認すると後一時間しかない。
イベント開始から半分経ってるし、もしかしたら既に誰かの手に渡っている可能性もある。てか、一時間経って見つかっていない方がオカシいような……
「だけど誰かが発見したら人づてにでも伝わって来るはずだ。それに伝わらなくてもそこに向かって人は流れる。それなら分かる筈なんだよスオウ。よっぽど上手い奴が先行して見つけていない限りな」
確かにみんな躍起になってるし、人が流れるのは解るけどそうなったら混戦だ。どうにかして一番に見つけないとコアクリスタルを手にするのは難しい。

それに……
「よっぽど上手い奴ってなんだよ？　そんな奴居るのか？」
僕の質問にアギトは首を縦に振って肯定する。
「お前はさ、まだまだ初心者だしアンフェリティクエストでＬＲＯの内情なんかに目を向けてないから知らないんだよな。ＬＲＯのトッププレイヤー達はスゴいもんだぞ」
アギトのそんな言葉に僕はここでの自分を振り返ってみた。確かに僕は目の前の事以外ＬＲＯを知らない気がする。始めた初日から分け解らない事になったし、普通にこなしていくクエストもやってない。
最初の街はそうそうに出ちゃったし、それからやったクエストはアンフェリティクエスト絡みでマトモじゃなかったんだ。ＬＲＯの内情って何だっけ？　トッププレイヤーって――
「お前も何だろアギト？」
確かこいつもそのトッププレイヤーだと聞いたぞ。確かテッケンさんから。
「俺は全然成り立てなんだよ。このＬＲＯで最強って言われてる奴知ってるか？」
なんだかアギトはテンションが上がっている。何をそんなに興奮してるんだか。僕は取り合えず首を横に振った。
「だろうな。スオウが知ってる分けない。とにかくスッゲェー人なんだよ。滅茶苦茶強いしな」
なんだかアギトの目が輝いている。こうなるとこいつウザイから話題を戻さないと。
「まあ、凄い人が居るってのは伝わったよ。そんな事よりとにかく今はどうやってコアクリスタルを見つけるかだろ」
僕の声に征されてアギトはトリップした状態から戻ってきた。
「ああ……そだな」
なんだか急にやる気が無くなったな。どれだけ憧れてるんだよ。町の喧噪を傍目に僕らは地図を見て作戦会議だ。

「取り合えず町の出入り口には人が集まってるから除外だな。大通りも既に散々掛けられたろうから除外して……そうなると中央付近かな？」
「中央で大通りは繋がってるんだぞ。この街には三つの出入り口があって無いのは南だけなんだからそこを探すしかないだろ」
成る程ね。さすがアギト。伊達に長くやってる訳じゃない。街の南の方は山から流れてきた水が何本も細かく分かれてる部分だ。あんまり店も無いからそっちには人は行かないんだよね。
確かマイルームって言うプレイヤーが買うことが出来る家が沢山ある地域だ。仮想で家？　と思うけどそれを買うことを目的にする人も居るそうだ。
買った家は自由に出来るらしいし。店にしたりね。でもかなり高額だから空き家が目立つらしい。それなら人目にも付かずにＮＰＣがうろつけるのかも知れない。
「よし、じゃあ急ごうアギト！」
アギトは脱力しながらも僕の後に付いていく。そんなに聞いてほしかったのか？
「あのさアギト……なんだか僕もその最強の人を知りたくなったよ」
「おお！　本当かスオウ！」
再びテンション上昇のアギト。まあせめて目的達成まではやる気にしておかないとね。それに気になるのは本当だ。これからもアンフェリティクエストは何が起きるか分からないし強い人は一人でも必要だ。

僕は道を駆けながら隣のアギトの話を聞いている。だけどアギトの話は興奮しててよく分からない。なんか全部聞いた話みたいだし……他人の他人の自慢話程ツマラナイものはないよね。
走る間に何回も僕らは水を被った。そして到達した南側だけどそこにも既にプレイヤーは一杯だった。
「な……」

一体どれだけの人数がこの街に集まってるんだ？　人工密度がやばいぞ。
「やっぱりだな。誰だって考えることは同じだ」
「分かってたんならそういえよ！」
無駄な時間じゃ無いか。
「お前自分で見なきゃ気が済まない質じゃん」
う……確かにそうだけど。でもこれじゃ一体どこにコアクリスタルを持ったＮＰＣが居るっていうんだ？　既に時間は後四十分……街にはどこにも溢れんばかりのプレイヤーがいて見つけられないなんてあり得ないだろ。
「確かにな……何か見落としてるのかも」
見落とし……僕達は次々に掛けられる水を無視して考えた。ああもう、ザバンザバンうるせえな！
「ん？」
次々掛けられる水のカーテンの向こうに何か見える。光何かが！
「アギト！　あれ！」
僕は水をかき分けて飛び出した。だけどそこには水を掛け合っているＮＰＣとかの姿しかない。
「どうしたんだよスオウ」
振り向くとなんだかドスグロい色になったアギトがいた。こいつは本当に色が変わると不気味だな。
「一瞬さ、あそこに光る物が見えた気がしたんだよ」
僕は前で水を掛け合っているＮＰＣを指さす。
「はあ？　光ってないぞ」
確かにあのＮＰＣは光ってない。だけど……
「なあアギト。ＮＰＣのバケツの水は僕達と同じ仕様なのかな？」
「多分……いや……まさか！」
アギトも僕の疑問に気付いた。むしろその可能性は十分にある。同じ色の水が出るからって同じ効果を持っているとは限らない。だってＮＰＣはプレイヤーにも掛けるけどＮＰＣ同士でだって掛けて

る。
　そこに意味があったのかも知れない。だって目の前のＮＰＣ達はプレイヤーにも定期的に水を掛けて、掛けられたら近くのＮＰＣが掛けられた相手に水を掛けている。
　それはまるで何かを隠すようだ。
「アギト、近くのＮＰＣの水を顔に被ってみろ！　いや、目に入れろ！」
　僕の言葉でアギトは後ろでバケツを構えていたＮＰＣのバケツに顔を突っ込んだ。
「あそこだアギト！」
　僕が指を指す方を緑に染まったアギトが見つめた。
「見えたぞスオウ！　真ん中の太ったおっさんだ！」
「よし！」
　僕は勢い良く駆け出す。その時アギトが「使え！」と自分のバケツを渡してきた。僕はそれをありがたく受け取りバケツを両手に携えて水路の脇の集団に突っ込んだ。
　ジャンプして空中からまずは右手のバケツの水を集団に被せた。その瞬間オッサンの周りの何人かが自分のバケツの水を掛けた。
　やっぱり思った通り、ＮＰＣのバケツの水は仕様が違う。きっと僕達プレイヤーの水を無効化出来るんだ。でもそれだけじゃ誰も見つけられないからもう一つの機能がプレイヤーの目にコアクリスタルを見せる機能がある。多分そんなところだろう。
　でも基本的な部分は僕らのバケツと機能は同じ。なら、今こそ最大のチャンスだ！
「くらえええぇぇぇ！」
　僕は左腕に持ったバケツを降り被る。だってそうだろ？　僕達とバケツの機能が変わらないならＮＰＣの奴らに水が戻るまで数秒掛かる。前の一撃を隠す為に使った水はまだ戻ってないんだ！
　赤い水がオッサンに襲いかかった。僕は集団の向こう側に降り立つ。その時、まだ昼間なのに僕の体に出来た陰を見て背中に光を感

じた。
　その場にいた誰もが止まって僕の後ろに目を奪われている。振り返るとそこにはオッサンの頭から神々しいまでの光が放たれていたんだ。コアクリスタルは間違いなくあそこだ！　オッサンの頭の……カツラの中だ！
　なんだか微妙に赤面してるオッサンに笑える。そんな場合じゃないけど……妙に芸が細かいな。
　必死に腹筋を押さえつけて僕は手を伸ばした。
「待てスオウ！」
　アギトの声。僕がコアクリスタルを取ったら不味いと言ったアギト。だけど今はそんな悠長な事言ってられない！
　周りには数十人のプレイヤーが既に居るんだ！　ここで確保しなくちゃ不味い。もうバレたんだ。これからは混戦になる。取り合えず物は手に入れて守りきる方を僕は選ぶよ。
　僕は手を伸ばす。コアクリスタルは直ぐそこだ。後数センチで手が届く……その時、大量の水を一斉にＮＰＣから掛けられた。
「ぶがぁぁ！」
　目に入ったよ目に。視界が奪われる。
「くっそ……アギト！」
「分かってる！」
　ぼやけた視界で捉えたのは輝く頭の赤いオッサンの逃げる姿。そしてそれに続くプレイヤー達だ。きっとあの中にアギトも居るはずだ。
　僕も水を拭い走りだす。ここで逃がす訳には行かない。だけどどうして周りのＮＰＣはコアクリスタルの輝きを止めるじゃなく、僕の動きの阻止に水を使ったのだろう？
　もしかしてあの機能はコアクリスタルが輝いた瞬間に失われたのかも知れない。だからこその攻撃。ＮＰＣ達の優先順位の切り替えかな？
　僕達は家々の隙間を走る。その時何かが空に放たれた。それはプ

レイヤー同士の合図だと思う。次々に上がるそれはきっと目的の物の在処を教えてるんだ。直ぐに大量のプレイヤーが詰めかけそうだ。
急がないとやばい。まだ捕まえられないのかアギト。きっと先頭はあいつの筈だ。赤色は確か二分半位しか持たなかった筈だ。流石に光が消えて人混みに紛れ込まれたら逃げられる可能性が高い。
だって奴を見てるのは今追いかけてる僕らだけ……他のプレイヤーは光で判断して初めてあのオッサンと認識するだろう。
光がなければ大多数のプレイヤーは気付かない。色を付けようにもアギトは今、バケツを持ってない。
その時上空から僕らの上を何かが滑空した。青白く輝く鳥は見覚えがあった。
「クー？」
そして鳥は前方に体当たりをして奮迅をまき散らす。民家の軒先で大惨事だ。奮迅が晴れると鳥にまたがった二人の姿が見えた。
「サクヤ、セツリ！」
見知った二人の顔。セツリも一緒で安心したけどこれはどういう事だよ。前方を走っていたアギト達を吹き飛ばしてクーはオッサンをその大きな脚で捉えている。
「ご苦労様です二人とも。おかげで助かりました。このイベントの報酬は私達が頂きます」
淡々としゃべるサクヤの言葉が呑み込めない。もしかしたらが現実になったって事か？　二人もあのアイテムを狙ってる。
「セツリ……」
僕が目をサクヤからセツリに移すと彼女はサクヤの後ろに隠れる様に動いた。やっぱりまだ怒っているのかな。
「ごめんね……スオウ……」
そんな言葉がぽつりと聞こえた。え？　それは何に対する？　てか謝るのは僕の方だと思ってたのに先に言われちゃったぞ。
「ダメですよセツリ。それはまだ早いです。追いこんで追い込んで……嘘も本心も見抜ける様になってからにしましょう」

サクヤの言葉に悪寒が走った。なんだ？　アイツ異様に怖い。なんだか自分が大ピンチになる気がするぞ。このままじゃいけない気がするけどやりようが……そう思ったとき誰かの魔法がクーに入って炎がその身を包む。
「セツリ！　サクヤ！」
二人の苦渋の表情にクーの甲高い悲鳴。もしかしてオッサンを捕まえてるからＰＫ対象になってるのか？
「クー！　オッサンを離して飛び上がれ！」
僕の言葉に反応してクーは空へ飛翔する。すると炎は消えた。二人と一羽のＨＰは微妙に減っている。それでもあれぐらいなら全然大丈夫だ。よかった。
そう思って胸をなで下ろすとアギトの声が飛んできた。
「スオウ！　オッサンを」
ああ、そうだ！　奴を確保しないと行けない。
「おおっと！　全員動くなよ！　丸焼けにしちまうぞ」
その場の全員の動きがピタリと止まる。オッサンの側には一人のプレイヤーが僕達に赤い刀身の剣を向けていた。その剣の刀身からは鉄が溶けた様な物が落ちて地面を焼いている。
アイツがさっき迷いもせずにクーを炎で包んだ奴か？　多分そうだと思う。ムカつく顔つきしてるよ。ＰＫを何とも思ってない寧ろ楽しんでそうな顔だ。
それはゲームとしては正しいのかも知れないけど、あの二人を巻き込む事なんか無かったんだ。それなのにこの野郎・・・胸の奥から沸沸と怒りが沸いてくる。
僕は腰の二本の剣に手を伸ばす。
「へへ、運が良かったぜ。まさか本当に見つけてくれるとはな」
「ん？」
なんだその言葉？　まるで僕達を付けてたみたいな発言だ。僕のいぶかしむ顔に気付いたのかゲスがその鶏冠みたいな髪を揺さぶった。

「何言ってんだ？　って顔だな。親切に教えてくれた奴が居るんだよ。お前を付ければこれの所持者を見つけてくれるってな」
そういってゲスはオッサンを蹴った。震えるＮＰＣを見て僕は何かが切れた。そして剣を抜き去った。
「何やってんだ！　どういう事か斬り裂いてから答えてもらう！」
「やめろ、スオウ！」
アギトの制止の声を僕は無視する。その代わりに
「アイツの攻撃から周りの奴らを守れよアギト！」
と言って駆けだした。奴の攻撃が何であれ、僕は絶対に当たらない。さっきオッサンを蹴って踏みつけてるお前はＰＫ対象だ！
「来いよ！　俺の剣の餌食にしてやる！　さっきの鳥の様にな！」
ゲスは赤い刀身の剣を振った。するとマグマの固まりの様な火球が出現して僕に向かって来る。これがさっきクーを焼いた攻撃か。
「避けて、スオウーーー！」
空からセツリの叫びが聞こえた。だけど僕は笑ってる。避けようとしない僕に流石のゲスも少し訝しげだ。僕はそのまま火球に突っ込んだ。
「スオウーーー！」
「はっ、ハハハハ。バカだ。バカが居るぞ！　わざわざ飛び込みやがった。大ダメージは避けられねえぞ！」
ゲスの笑い声が響く。さっさと閉じろよ。晴天の空にそんな笑い声は不快だ。僕は火球の中から飛び出した。勿論ダメージなんか微塵も無い。僕には相手の攻撃を一分間に一度、絶対的にかわせるスキルがある。
ゲスの顔が強ばった。
「なっ！」
「よお、お前の炎、涼しかったよ」
青い刀身のシルフィングを僕は振るう。奴の体に幾つもの筋が刻まれて行く。そして後方に吹っ飛んだ。後ろを見るとアギトが奴が放った火球を武器で斬り裂いていた。そして火球は紙吹雪の様に散

って消えた。
「おい、どういう事か吐けよ」
僕はゲスに詰め寄った。僕達を付けてた？　それにそうするように仕向けた奴が居る。それは無視できない事だ。
「ふへへへ……知らねえよ。ただこのイベントアイテムが欲しいならそうするのが良いってメールが届いてたんだよ。差出人不明でな」
「何？」
ゲーム内で差出人不明なんてあり得ない。何故ならメールのやり取りはフレンド登録しないと出来ないからだ。他人から誰かへ一方的にメールは送れないんだ。
「疑って良いぜ。だけどなこれは本当だ。俺の他にもいるんじゃないか……そんなメールを受け取った・・」
ゲスの声が不意に途切れた。そして不気味な笑みを讃えた顔を上げて言い放つ。
「奴らがな！」
目の前に衝撃が走り僕は後ろに吹き飛んだ。信じられねぇ、あのゲスさっきの攻撃を煙幕代わりに使いやがった。既にＰＫ対象じゃ無くなってたから奴の攻撃は通らなかったけど驚いた。
爆発に乗じてゲスは逃げた。僕は奴の言葉の意味を考えながら立ち上がりアギトの後方にいるプレイヤー達を見る。するとみんな一斉に首を振った。まあ悪い奴らには見えない。
「どう思うアギ――」
その時ガサっという音が聞こえた。一斉にその方向を見るとオッサンが逃げようとしてる。忘れてた！
「逃がすかオッサン！」
僕はオッサンを捕まえる為に腕を伸ばした。そして今度こそ捕まえたと思った時、信じられない事が起こった。
「「「「「はぁ！？」」」」」
その場の全員が発した「はぁ！？」だ。それだけ僕達は驚愕した。だって僕が捕まえたと思ったその時、オッサンは二人になった。僕

の手から逃げるように正中線で分裂したんだ！
「え？　何？　何が起こったの？」
「しっかりしろスオウ！　オッサンが逃げるぞ！　二人のオッサンが！」
　僕はその場で動転した。腕を伸ばしたままの格好から戻れない。それだけオッサンの分裂は衝撃だった。アギトの言葉が遠くに聞こえるよ。
　その時上空から凄い勢いの風が地上の僕らを襲った。それはクーがオッサンの一人を追いかけるために羽ばたいた余波だ。そしてサクヤが言い放つ。
「そっちは二人に任せるから、どっちが当たっても恨みっこ無しですからぁ！」
　オッサンの光は消えている。捕まえるかもう一度水を掛けるかまで確かにどっちのオッサンがコアクリスタルを持ってるか分からない。
　僕はアギトと共に走り出した。その時、町中に響くアラーム音。そして空に文字とタイマーが浮かび上がった。

【イベント終了まで残り二十分を切りました】

　僕達はそれぞれの思いを胸に最後の争奪戦を始める。

イベントランディブー（後書き）

読んでくださっている方々ありがとうございます。いきなりでなんですが嬉しい事がありました。ここにきてなんと感想が貰えたのです。

感謝の極みです。勿論、普通に読んでくださる方々にも当然感謝してますよ。それを励みにここまで頑張って来た訳ですから。まあ、だから感想をやっとで貰えたのが嬉しかっただけです。

実感が湧く感じです。これからも頑張るので良かったら感想とか書いてみてください。感謝の返信をいたします。当然面倒だしやらなくても結構ですけどね。

気が向いたらお願いします。

走りすぎた幻想（前書き）

町には分裂を繰り返したオッサンが溢れている。幾ら掴んでも分裂して逃げ続けるオッサンにみんな疲弊していた。だけどなんとかそれを乗り越え僕達はコアクリスタルに迫った。

そしてコアクリスタルを手にしたプレイヤーとの戦闘で僕はあるものを見てしまう。信じられない事を……その時、僕の手にはコアクリスタルが輝いていた。

走りすぎた幻想

「行ったぞ、スオウ！」
アギトの声に僕は身構える。路地に入ったオッサンを僕らは地図を確認して挟み撃ちにする作戦だ。土を蹴る音が迫る。そして揺れるお腹が見えた！
「捕ったぁぁぁ！」
オッサンに僕の腕が迫る。今度こそ僕はオッサンを掴んだ。だけどその瞬間、手に伝わる感触に異変を感じた。
肉が豆腐……ゼリーを通り越してスライムの様に溶けてオッサンの体は割れたんだ。僕は腕の支えを失い、前に突っ伏す格好に。
「なっ！」
体勢を崩した僕の横を更に分裂したオッサンが抜けていく。そして再び二手に分かれやがった。
「おいおい、何度分裂するんだよあのオッサン」
全くその通りだ。オッサンの後ろから走ってきてたアギトがそんなことをボヤいて僕の横を走り抜ける。僕も止まったままじゃいられない。直ぐにアギトの後ろに続く。
「どうする？」
僕は前を走るアギトに尋ねる。
「二手に分かれるしか――」
アギトの声が途切れた。路地を出て広くなった道の左右にオッサンは走っていった筈だ。だからその方向を確認して唖然としたんだ。
だってそこには溢れるプレイヤーの群に次々に増殖するオッサンの姿があったから……
「マジかよ」
これはどういう事なんだ。アイテムやらない気マンマンじゃないか！　こっちがこんな感じになってるって事はきっとセツリの方も

こんな感じになってるんだろう。
掴んだ側から分裂されたら捕まえようがない。制限は無いのか？
「もう一度聞くけど……どうする」
ここは古参プレイヤーの知恵と知識を見せて貰おう。なんだかあそこに飛び込むのが億劫だよ。増えていくオッサンの図は気味悪い。
いつの間にか情報が広まってあのオッサンがコアクリスタルの所持者とみんな分かってるからバケツを放り投げて捕まえるのに躍起だよ。
「捕まえるしかないだろ」
アギトの根も葉もないつまらない解答に僕は嘆息する。それをどうやるか聞いてんだよ。まったく、古参プレイヤーが聞いて呆れるな。
「うるせぇな。何かある筈なんだよ。オッサンを捕まえる方法がさ」
目を細めて苦々しく呟くアギト。確かに今の状況じゃ絶対にオッサンは捕まえられない。それなら捕まえる為の方法が有る筈だ。
大量に増えたオッサンは次々と分散していく。みんな戸惑いながらもそれを追いかけるしか出来ない。僕とアギトも取り合えず一番近くのオッサンを追いかける。
方法は分からないけど見失う訳にも行かないんだ。目の前のオッサンがコアクリスタルを持ってる確証はないけど僕達にもそうする事しか出来ない。

石造りの家々が視界を過ぎて行き、どんどん街の中央部分に近づいていく。目の前のオッサンは既に三回ほど分裂してた。どこからともなく人の波は押し寄せるんだ。
僕とアギトは追いかけるだけでオッサンには触れては居なかった。無闇に増えても困るだけだからだ。目の前のオッサンを追っていた人数も減り今は僕らだけ。
それほど街にオッサンが溢れていると言う事だろう。視線を動かせば必ずプレイヤーに追いかけられているオッサンの姿が目に入っ

た。
　既に諦めモードで地面に座り込んでる人達の姿も走っていると目にとまる。確かに今の状況じゃコアクリスタルを手にするのは無理と思えて当然だった。
「スオウ、どうするんだよ？　時間が迫ってる！」
　アギトのそんな声に空のタイマーを見ると時間は後十分に迫っていた。
「分かんないよ！　初心者に求めるな。お前の方がプレイ時間圧倒的に長いだろ。そのキャリアを見せろよ！」
　僕は思わずアギトにあたる。だって走り続けて疲労困憊だよまったくさ。ＨＰは減らないにしても倦怠感が襲ってくる。元々マラソンは好きじゃないんだ。
「お前なぁ、俺だって考えてるんだよ。こういうイベント系はキャリアなんて関係ない。元々誰でも参加出来るようになってるんだからな！」
　アギトも流石に走り続けて疲れていたんだろう。切れかけてた。だけどそう言われるとこっちだって、なんだこの野郎的になるわけで……僕達はお互いのバケツの水を走りながら器用に掛け合った。
「ふざけんなよ役立たず！」
「うるせえ！　なんでもかんでも頼るなよな！」
　それぞれ黄色と紫に染まった僕達である。何やってるんだろ……無駄に疲れた。街の中央の東西南北へ伸びる大通りの合流地点に僕達は出た。
　そこは中央に大きな木があって円形状の空間にその木を元に紐でこの街の紋章みたいな旗が広がって飾られている。運動会でそれぞれの国の国旗を張り巡らせる様な感じでね。
　そして当然ここも人で溢れていた。だけどプレイヤーは疲労困憊なのかＮＰＣ達の水かけに無抵抗だ。側にはオッサンも居るのにどうせ分裂すると分かっているから手も伸ばさない。
　よく見るとここだけで十人位のオッサンの姿が有った。僕とアギ

トも思わず足を止めてしまう。だって別に前の奴を追いかけなくてもここには溢れたオッサンが居るんだ。
もしかして既に街の至る所で同じ様な光景が広がって居るのかも知れない。なんだかアイツ等、集まってコソコソ話し出してるし……チラチラこっちを見るのもなんだかムカつくな。
「なあアギト。アイツ等斬れないかな」
僕は物騒な発想をしていた。なんだかコアクリスタル云々より今までの労力分位あのオッサンに返したい。
「無理に決まってるだろ。オッサンまで届くかよ。あれはあくまでＮＰＣだぞ。ＰＫ対象のプレイヤーじゃないんだ」
「聞いてみただけだよ。んな事分かってる」
ＮＰＣには基本攻撃は届かない。それは常識だ。あれ？　だけどあのゲスのキックは何故か入ってなかったっけ？
「あれは微妙だったからな。プレイヤーがＮＰＣに触れる範囲って判断されたんだろう」
なるほどね。でもあからさまな蹴りだったけど……武器じゃ無かったからかな？　ならブン殴る位出来るって事か？
「やろうと思えば出来るぞ。だけど特定のＮＰＣには友好度とかあるからな。後は街に対する信頼度とか貢献度。それはクエストにも影響するから止めた方がいいぞ」
「へ～そうだったんだ」
初めて知った。そんな数値もあったのか。まぁ殆どクエストやってない僕には縁遠い数値だよね。でもそれならその数値を上げたら貴重な情報とかクエストが出たりするわけだよな？　今ＮＰＣに話しかければ状況打破の方法を教えてくれる奴も居るのでは？
僕は淡い期待を胸にアギトを見る。だけどアギトは簡単に首を振った。
「無理だな。イベント中はＮＰＣは何も答えてくれない」
それは絶望的だ。確かにＮＰＣの人達は楽しそうに水の掛け合いっこし続けてるだけだ。

「水……バケツ……コアクリスタル……オッサン」
僕はブツブツと考える。アギトが言うとおり何か条件がある筈なんだ。僕が最初にコアクリスタル見つけた時の様に――あれ？
僕は何かが引っかかった。
「アギト……お前さ、僕がオッサンのカツラの下にコアクリスタルが有るのを見つけて捕ろうとした時、見てたよな？」
「ああ、そりゃまあ」
隣のアギトは訝しげに頷く。だってそれは聞くまでも無い事の筈だからだ。僕達は二人で共に行動してたんだから間違いなく見てる事は分かっている。
だけど僕は自分の記憶を確かめる様にアギトに聞いたんだ。
「あの時、オッサン逃げたよな？」
「今だってきっと大量に逃げてると思うぞ」
アギトの声は素っ気ない。そんな事、聞くなよなって感じだ。だけど見てたんなら良く思い出せよな。
「なら、あの時オッサンはどうやって逃げた？」
僕の再三の言葉にアギトは目を閉じてその場を思い出そうとしてる。そしてゆっくりとその時の事を語りだした。
「確か、お前がオッサンに触れる直前に周りのＮＰＣがスオウに水を掛けて逃がした……」
そこでアギトも気づいた様だ。目を開いて集まってるオッサンを見て僕を見る。僕はアギトの視線に頷いた。
「それがおかしいんだ。分裂出来るのなら周りのＮＰＣの助けなんて入らないだろ？　だけどあの時はそれをせずに周りの助力で逃げたんだ。
なあアギト、お前が一番にあの後追いかけたんだ。触れたりしなかったのか？」
「確かに何度か髪の毛を掠った感触はあったけど……オッサンは分裂なんてしなかったぞ」
僕とアギトは二人でバケツの中の水を見つめた。

「あの時と今で違う事はこれだ。もうとっくに水は落ちてコアクリスタルは輝いてない」
僕はバケツの青い水に映る自分の顔が笑っているのに気づいた。それはそうだろ。やっとで見つけた攻略法だ。
「そうだな。オッサンが初めて分裂したのも水が全部落ちた後だった。その前はそんな素振り一回もしなかったのにだ」
つまり、僕達の推測はこうだ。オッサンは水を掛けられるかコアクリスタルが光ってる間は分裂出来ない！　これで決まりだ！
「だけどスオウ。目の前のオッサンがコアクリスタルを持ってる本体とは限らないぞ」
確かにそうだ。このオッサン達がコアクリスタル持っている本体という可能性は低いだろう。だけど今や何体になっているかも分からないんだ。
「だからこのイベントはもう無理だろ・・・捕らせる気なんてないんだよ。幾らいるかも分からないオッサン達全員に水を掛けるなんて不可能だ」
「そうだな……でも、方法はあるぞ」
諦めたらそこで試合終了だよアギト君。この街に集まっているプレイヤーはオッサンが急速に分裂してもたかが十分程度で追い越せる人数じゃないだろう。
それならリスクを承知の上でとれる方法がある！
「何する気だよスオウ？」
「まあ見てなって」
僕はアギトを制してウインドウを表示。オプションを出して声のボリュームを町中での最高に設定。これでよし。
ここＬＲＯではゲームらしく音量の調節が出来る。それはパーティーメンバー探したり、自分を売り込む時に大きな声を出せるようにだ。女性とかだとどうしてもリアルの声量のままじゃ心許ないからね。
だけど最大にすることはまず無いだろう。それは重大なマナー違

反だからだ。だって最大にして叫ぶと街の端から端まで届く程の音になるから……僕は大きく息を吸ってそして叫んだ。

「全てのイベント参加プレイヤー！　手を伸ばす前にバケツを捕れ！　そして近くのオッサンにぶっかけろ！　それがイベントアイテム入手の方法だぁぁぁぁ！」

僕の叫びでそびえ立つ大きな木が揺れた。アギトや周りのプレイヤー達はその爆音に吹っ飛び掛けて腰が抜けていた。事実僕もびっくりだよ。

ゲームじゃなかったら確実に鼓膜は破れていただろう。それだけの大音量だった。これなら町中に届いた筈だ。確かに普段の状態の街でやったら怒られる行為だね。

すると腰砕けだったアギトがゆっくり立ち上がってなにやら肩を震わせている。

「お……お前バカか！　何、盛大に公開してんだよ！」

まあアギトが怒るのも無理ないね。だけど僕はそんなアギトを余所に周りを見回した。さっきまでやる気無くして座り込んでいた連中が殺気だってバケツを構えだしている。

僕はその様子に満足してアギトに言った。

「だってさ、このまま二人でやっても絶対にコアクリスタルは手には入らないじゃん。何も出来ずタイムアップだよ。それよりも全員に知らせてみんなで探せば確実に見つかるよ。

多分直ぐにね。それならずっとやりようがある。タイムアップまで可能性が広がるんだ」

僕はアギトのバケツを自分のバケツで叩く。するとガシャンと音がして中の水が跳ねた。波紋が広がりそして消えていく。

アギトはそんな水を見つめて頭を掻いた。

「あ～もう、本当にお前って無茶苦茶だな。アイテム狙いの奴がこんな事するなんて考えられない」

「可能性の問題だろ。そこで諦めるか、リスクの先の何パーセントかに賭けるかだよ。
それにこれはイベントだしね。最後まで楽しみたいじゃん」
僕の言葉にアギトはバケツをぶつけ返して来た。そして僕の顔を見てこう言った。
「お前らしいな。しょうがないから最後の一秒まで付き合ってやるよ！」
「当然だろ。誰が途中棄権なんか認めたよ！」
僕とアギトは中央に固まっているオッサン達に向かって走り出した。そして周りにいた人達も一斉に動き出して輪のようになった。これで逃げ場はない！
「うらぁぁぁ！」
僕達はバケツを振りかぶる。多分丁度町中でその行為がシンクロしたんだろう。その声が地鳴りの様に響いたんだ。
そしてオッサン達は色とりどりの水を被る。その瞬間、目の前のオッサン達は消え去った。それはハズレって事だろう。
「くっそ！」
「おいスオウ、あれだ！」
アギトが指さす方には光が見えた。きっとあれはコアクリスタルの光だろう。だけど遠い……今居る場所は中央で見える光は東出口の方向だ。だけど取り合えず走る他無い。移動手段は他には今は無いからね。
イベント中でゲートクリスタルは使用不可なんだ。このゲートクリスタルってのはどの街にもあって基本はそれぞれの出入り口にある。大きな街には中央広場にも一個はある。
これはその街の中をワープで移動できる優れものだ。ＬＲＯの街は基本どこも広い割に車とかないからこのゲートクリスタルは必須なんだね。
ゲートクリスタル間を一瞬で移動できるから今使えれば便利だったんだけど……悔しがっても仕方ない、今はみんな条件は同じだ。

「うわ！」
何かいきなりの突風で転びそうになった。前を見ると前方には大きな鳥が空を飛んでいた。条件同じじゃねーよ。
「おい！　サクヤにセツリ、お前等今更だけどズルいぞそれ！」
僕は見知ったその姿に呼びかける。すると気付いたのか二人がこっちを振り返って何やらこそこそ話してる。
するとスピードを緩めて僕らの上空でサクヤが顔を覗かせて言う。
「うるさいですね。なら乗りますか？」
え？　マジで？　意外な提案だな。きな臭いけどクーの早さは捨てがたい。僕とアギトは目を見合って頷いた。
「頼む！」
「分かりました」
サクヤの声と共にクーが迫って来る。僕らはスピード落として上を向いてふと思った。そう言えばクーに僕らが乗っていいのか？セツリはまあ分かるんだ。だけどサクヤが僕らまで乗せるかな？
そう思っているとクーは直ぐ上まで来てた。本当に乗せてくれそうだ……そう思った時、クーの大きくなった足が僕とアギトの顔面をそれぞれ鷲掴みにした。
「イテテテ、イテェヨおい！」
鳥の爪って鋭いんだぞ！　首が切断されそうな恐怖が襲いかかってきた。だけど直ぐにそれより怖い恐怖が僕とアギトを襲う。
「うそ……ちょっと、待てサクヤ！　地面が……地面が離れていく〜〜！」
僕達は顔面を捕まれたまま空に連れ出されたんだ。顔は上を向いて捕まれているから何も見えなくて怖さ倍増。一体何の恨みがあるんだサクヤの奴め。
「恨みなんてそんな……私はただ親切心でやっている事なのに」
「こんな親切心無いね！　あってたまるか！」
ここにも嘘を堂々と言う女がいたよ。がんばって反論したけどサクヤには見えても居ないんだよね。悲しすぎる。

「あ～も～人の親切心にケチをつけるだなんて、なんて傲慢な方達でしょう。返して貰います。私の親切心」
「は？　え？　ちょ……待ったサクヤ！」
「俺は失礼な事言ってないぞ。だから止めてサクヤ様！」
なんだサクヤ様って。だけど僕達はサクヤがやろうとしてる事にとっさに気付いて慌てふためいていた。サクヤ様もしょうが無いのかも知れない。てか僕だけ売ったなアギトの野郎。
「大丈夫ですよ。私は慈悲深いですからね」
おおそれじゃあ考え直して……
「ちゃんと目的地の上ですから」
「「ふざけんなぁぁ！」」
僕とアギトの声が重なった。この大和撫子風で性悪なんて質悪いんだよ！
だけど本当にサクヤはやった。僕とアギトは上空で捨てられたんだ。晴天の空に二人の叫びが響いてた。だけど下には光ものが確かに見える。
「おい、アギト！」
「ああ、俺が貫いてやるよ！」
僕達はそれぞれに武器を構えた。どうやらコアクリスタルを手に入れたパーティーが大量のプレイヤーを凌いでいる様だ。隔てる光の壁が見える。あのままタイムアップを狙ってるんだろう。
だけどそうはさせない！　隣のアギトは落ちながら自慢の槍を握り締めて振り被る。放たれた槍は赤い光を放ち彼らの防壁とぶつかった。その瞬間に大爆発を起こして周りは爆煙に包まれた。
「槍スキルのボラテイルだ。着弾と同時に見たとおりになる。かっこいいだろ？」
アギトの攻撃で邪魔な周りのプレイヤーも吹き飛んで壁際まで行ったから助かった。コアクリスタルを手に入れても周りを囲まれてたら逃げれない。
「うおぉぉぉ！」

僕はシルフィングを爆煙の中の陰に向けてまずは左を振った。煙を切り裂いて現れたのは紛れもなくさっきのパーティーの一人だ。アギトの攻撃の影響でようやく立ち上がった所。これなら行ける！

僕は右腕を続いて動かした。かわせる筈もない態勢だ。

「うあああああ！」

断末魔の叫びが周囲に響く。痛みはないけどそれなりの衝撃は来るんだ。僕は続けざまに連続攻撃を放って彼のＨＰを削る。だけどＨＰがレッドゾーンに入った時、自分の中から声が聞こえた気がした。

『それは命の残量……』

背筋を悪寒が貫いた。まさか……そんな筈はないのに、後一撃の所で手が止まる。これはゲームだと分かってるのに、自分の体験が脳裏を掠める。

だけどその時、反撃を食らった。攻撃が止まった隙に目の前の彼は剣を突き立ててたんだ。その顔は形相に近くて、人が放つリアルな怒気みたいなのに当てられた様な気がした。

剣と剣のぶつかり合いで押される。二刀がおぼつかない。そして僕は剣を弾かれて一瞬の硬直状態へ……そこへ彼の剣が一直線に向かってくる。

「スオウ！」

その時、アギトの槍が彼を貫いた。この瞬間、彼のＨＰはゼロになりその場に倒れた。動かないけど、死んだ訳じゃない。五分の間に誰かが蘇生魔法を掛ければ彼は蘇る。

だけど・・・なんだかその姿が異様に怖い。何だろう、初めて見るわけじゃ無いのに地面に倒れた彼が何かに見える。

視界がブレていく……昔のテレビの様な映像の波が起きて思わず目を閉じた。そして開いた瞬間、そこには僕が倒れていた。

辺りがセピア色に変わり、音も無い。沢山いたプレイヤーの姿は消えていて代わりにここに居ないはずの知り合いが僕の周りにいた。

みんながその場で泣いている。テッケンさんもシルクちゃんもリ

ルレットやエイル……鍛冶屋まで。そしてアギト……拳を何度も地面に打ちつけて何度も僕の名前を呼んでいるんだろう。
なんで……いや……これは一体何なんだ？　頭が混乱する。それだけじゃ済まなくてパニックに陥りそうだ。僕の体からは黒い血が流れ出て地面に溢れている。これはまさに死だ。
その時、誰かが僕の体をすり抜けた。思わず身を引いたその先にはサクヤの姿。だけど彼女は泣いていない。冷たい目で僕を見下ろしている。
「ごめんなさいスオウ……」
この世界で唯一聞こえた音に僕は前を見た。そこには土下座して頭を下げるセツリの姿があった。そんなセツリにみんなが武器を構える。
何する気だ？　やめろ！　僕はみんなを止めようと前へ出た。
「スオウ！！」
アギトの声。その瞬間、僕は元の風景の中にいた。そして手には光るコアクリスタルが……
「まさか……今のは未来？」

走りすぎた幻想（後書き）

遅くなりました。ごめんなさい。楽しんでいただけてたら幸いです。

願い求めて（前書き）

僕とアギトは大量のプレイヤーに囲まれる。そしてその波が僕の手の中のコアクリスタルを狙って容赦なく襲いかかろうとした時、空から救いの声が聞こえた。

僕らは間一髪その状況をサクヤの機転で凌いだけど、彼女達もコアクリスタルを狙っていた。そしてまだ、最も性質の悪い奴等が僕達の前に現れて牙を向く。

願い求めて

爆煙の余波か、煙たい臭いが周りに立ちこめていた。戻ってきた意識だけど僕の頭は真っ暗な水の中で溺れるみたいに混乱してる。

いつの間にか僕の手に握られたコアクリスタル……それを僕は沈痛な面もちで見つめていた。妖しく輝くその光がさっきの映像を見せたのかな？

何だったんだろう……さっき見たものは？　あれは本当に未来なのか？　だけどそんな事……それに、このイベントで手には入るアイテムは心を読むアイテムの筈じゃないのか。

「スオウ、来るぞ！」

僕の考えを遮るようなアギトの声に顔を上げた。周りには武器を構えたプレイヤーの山が迫ってきている。みんなが僕の手の中のコアクリスタルを狙っているんだ。

「「「うおぉぉぉぉ！！」」」

後方では魔法を発動する為に詠唱をしてる人たちも見えた。だけどこの物量なら魔法なんて必要ないだろう。

詠唱し終わるまでに僕達はこの人の波に押しつぶされてしまうからだ。それだけ圧倒的な物量差。二人で凌げる数じゃない。前も後ろも埋め尽くされて絶対絶命とはこの事だ。

僕とアギトは互いに背中を向けて迫り来るプレイヤーを見やった。

彼らは僕のＨＰを尽きさせる事をしようとしてる。その場合、僕は自分がどうなるか分からない。もしかしたらそれは最悪の事態が起きるかも知れない事……目の前のプレイヤーに罪は無いけど、何かを背負わせてしまうかも知れない事。

それに当然、そんなこと自分がイヤだ。こんな所でそんな最悪の結果を招くわけに行かない。絶望的だけど、僕とアギトは強く己の武器を握りしめた。

だけどその時、空から声が聞こえた。
「スオウ！　アギト！　飛びなさい！」
僕達はその声に従ってとっさに真上にジャンプした。その瞬間、大き羽がその場に広がり巻き起こった風がプレイヤーの足を止める。僕とアギトの場所は真下で風の影響は殆ど無かった。
だからありがたく降りてきてくれたクーの脚を掴む。そして僕達は大空へと飛翔して脱出に成功する。町が眼下に広がる中、僕達はプレイヤーが殺到してた場所の反対側まで楽々移動できた。
なんて楽なんだ。クー最高。どうせならその背に乗せてくれたら言うことないんだけどね。

クーは西側の出入り口辺りに降り立った。流石にＮＰＣ以外いない。殆どのプレイヤーが向こうに集ってたんだろう。それか向かっていた人達もいたはずだ。
ここはもっとも遠い場所。いわゆる安全地帯だな。僕とアギトはクーを撫で撫でしてあげる。
「助かったよクー、ありがとう」
「ああ、ほんとにな。よくやってくれたよ」
僕達の感謝の言葉にクーは鳴いて答えてくれた。甲高い声が空に響く。だけどそれも束の間の安堵だった。
クーを撫でている僕達の体の周りには複数のお札が回っていた。この魔法は知っている。これは……
「サクヤ、なんのつもりだよ」
僕はクーの背に居る二人の内の一人に視線を向ける。巫女服で黒の長いストレート髪が風に揺れている女性サクヤだ。こいつの高速詠唱ははっきり言って敵の時は驚異だった。
その魔法が今、再び僕達に向けられている。どうしてなんだよ。
「スオウ、貴方には感謝もしてるし期待もしてます。だけど今はセ

ツリの意志が優先です。コアクリスタルを渡してください」
綺麗な腕がこちらに伸ばされる。僕は隣のセツリに視線を動かした。フワフワの栗色の髪にドレスの様な白のワンピースが青空に映えている。僕と目が合うとセツリはまたサクヤの後ろに隠れる様に体を小さくしてる。
「サクヤ、言わないでって言ったのに……」
そんな声が少しだけ聞こえたけど、それ以上は何も分からない。やっぱりまだ怒っているのか？　さっきは僕の為に叫んでくれたのに、空耳だったのかな？
「さぁ！　早く出してください。殺しはしませんけど痛い目にはあわせますよ」
なんて物騒な奴だ。そういう奴だって事は知ってたけどなんだかこの光景がさっき見たセピア色の世界に重なる気がした。
あの世界で見たサクヤの目は酷く冷たかった。まるで心をなくしたただのプログラムみたいに……。二人がもしかして僕を……と思ってしまう。
最後にみんなが武器を取ったのもそれなら辻褄が合うんだ。だけど……そんな事考えたくない。目の前に居る二人は今は対立してるけど、あんな目はしてないよ。
サクヤの目は……まあ見下ろす感じだからか怖いけどさ。セツリはかわいらしく顔を赤らめてそっぽを向いている。だから……あり得ない、あんな事。
「どうするスオウ？」
小声で隣のアギトが訪ねてきた。僕はどうすればいいんだろうか。別に渡したって構わない気はする。いや、僕はまだ許されてないんだっけ。
それならこのアイテムはまだ必要って事だ。でも既に、心を読むアイテムってのは疑いの余地がある。そもそも噂何だよな。
それにこのアイテムが心を読むにせよ、未来を見せるにしても、それなら確かめたい。前者ならセツリの心を、後者ならさっき見た

謎の光景をだ。だから僕は
「無理だよサクヤ。これは渡せない」
こう言うしかない。その瞬間、周りのお札が僕達に張り付いてきた。そして炎の固まりが僕とアギトを包み込む。
「「ぐあああ」」
二人の悲鳴が木霊する。
「スオウ！　サクヤやりすぎだよ」
セツリの心配する声。だけどその声にサクヤは素っ気なく応える。
「大丈夫ですよセツリ。二人ともそれなりの修羅場を潜ってきてるんですから……ね」
その瞬間、炎をかいくぐってサクヤに迫っていた僕達に視線が当たる。気付いてやがったかコイツ。僕はスキルで、アギトは自慢の装甲で炎を打ち破ってたんだ。
「クー」
その一言でクーが空へ飛翔する。僕達はクーの起こした風に寄って後方に押し戻された。
「しまった！」
「やばいぞスオウ」
サクヤ達は遙か上空に行ってしまった。僕達は状況の悪さに舌打ちするしかない。だって僕達に攻撃の手段はないんだ。魔法が使えれば別だけど僕に至っては魔法系のスキルは一つも持ってないし……アギトは――
「長い呪文は苦手なんだよ」
だそうだ。この肉体派め！　僕達はソーサラーやヒーラー系にはなれないな。

もともとＬＲＯはそういう職業が設定されてる訳じゃないんだ。
自分がなりたいようにスキルを自由に求める事が出来るから自然に役割的に分類が出来てしまっただけだ。
それぞれが見つける楽しみが違うから、戦闘系のスキルを多く求

めて大層な武器を振るってやる人達を前衛なんかと呼ぶ。リアルには無い、魔法と言う楽しみに求める人は自然とそれ系が多くなって後衛、特に攻撃系魔法を多く持つ人を『ソーサラー』、回復補助系を多く持つ人を『ヒーラー』と誰かが呼んだ。でも中には魔法と剣を上手く使う人だっているかも知れないわけだよね。

そして他にも生産系スキルとかを伸ばす人を『職人』とか呼ぶ。他にも様々あるここＬＲＯで基本、前衛と呼ばれる僕とアギト、後衛の筈であるサクヤなら常識的に言えば僕らに分がある筈……なんだけど、あれは反則だ。

僕とアギトは地上でサクヤの魔法を避けるので精一杯だ。大量に現れるお札は斬っても斬ってもきりがない。安全地帯からのサクヤの高速詠唱は予想以上にやっかいだ。

高速詠唱はプレイヤーではないサクヤに与えられた特権のスキル。これはさっきの前提を覆す程の危険な物だよ。だって基本、魔法は強力だ。パーティープレイでは大きく敵のＨＰを削るのは魔法の役目。締めの一撃と言ってもいい。

たった一撃の強力な魔法に対抗するために前衛である僕らは技を工夫するんだ。それか連携を複数人で繰り出す。

だけどそれだけ強力な魔法には詠唱時間というリスクがある。それこそが前衛の方が分があると言われる理由だ。強力な魔法ほど詠唱は長くなりそれは隙だ。その間に幾らでも僕達は攻撃を打ち込んで詠唱を中断させることが出来る。

けれど今の状況にそれは通用しない。いや、たとえサクヤが空に居なくても彼女の高速詠唱はその常識を打ち破る。多分サクヤは同じ後衛の人が一つの魔法を発動する時には既に三つくらいは出せる。それくらいデタラメに早いんだ。

「アギト！　さっきの技使えよ！」

僕はサクヤの魔法を交い潜りながら声を上げる。さっきの技ってのは僕達がコアクリスタルを手にするために空から奇襲を掛けたと

きアギトが放った『ボラテイル』というスキルだ。
「ふざけるな！　クーは初速で音速超えるんだぞ！　当たるか！」
ああ、そうだった。あのコンビはデタラメなスペックを有してた。どうすればいいんだ？　僕らには手がない。
「そろそろ観念しなさい！」
空のサクヤがそう叫んだ。その時、地面が揺れだした。地面を見るとこの西出入り口一面にお札が敷き詰められていた。
普段の火の魔法の間に仕込まれたみたいだ。元々こっちが狙いか。地面から火柱が吹き出す。これまでの魔法とは規模や性質が違うな。
「範囲魔法だぞ！　避けるのは無理だ！」
アギトの声が飛んできた。範囲魔法は周囲を埋め尽くす様に発動するらしいから確かに避けるのは無理かも知れない。
実際、周囲を火柱で囲まれてそこから吐き出される大量のマグマの粒は今までの様になんとか避けられる物じゃない。例えれば雨と同じだ。あれを避けられないのと同じように、だけどずっと雨よりも強力な雨が降っていた。
「ちっ……」
僕のＨＰが瞬く間に減っていく。僕の装甲は薄いからホントにあっと言う間だよ。アイツ本当は僕を殺す気なんじゃないのかな？
僕とアギトは一直線に火柱の外を目指すけどこのままじゃ間に合わない。アギトはともかく僕は攻撃範囲から抜け出す前にＨＰが尽きるだろう。
「スオウ捕まれ！」
そう言ってアギトは武器の槍を僕に向けた。その瞬間、何をするか悟った僕はその柄を取った。
「うおおおおー！　いっけぇぇぇ！」
アギトは武器を僕ごと振るった。そして投擲の状態に成るとおもいっきりブン投げた。赤い光を纏った槍はスキルが発動してとてつもない早さでマグマの雨を突き抜ける。

そして周りにあった建物にぶつかり大爆発を起こした。
「うばぁぁ！」
僕は衝撃で槍から手を離し転がった。パーティーじゃなかったら死んでる所だよ。キンキンする耳を叩いて立ち上がっているとアギトの姿が火柱の内側から見えた。
「スオウ、無事か？」
「なんとかっ――づあ！！」
僕の視界が急速にブレた。そしてアギトが小さくなって行く。腕を巻き込んで僕の胴には青白く発光する物が巻き付いていた。これはクーの尻尾か？　僕は拉致されたみたいだ。
「よく持ちこたえたけどこれまでですよスオウ」
後ろから聞こえる声に首を動かすとサクヤとセツリの姿。これは万事休すか。
「スオウ、私欲しいのソレ。渡して！」
セツリは両手を出して胸を張って言い放つ。凄い尊大な態度だな。実際もう勝敗は決した様な物だけど最後の砦として僕にはコアクリスタルを渡さない選択支がある。
二人は僕を倒せないだろうし、それならこのまま時間が過ぎるのを待っていればアイテムは僕の物だ。だけどそんな事を考えてるとセツリの後ろに居るサクヤが不敵に笑って言い放つ。
「セツリがこんなに頼んでるのにタイムアップを狙うなんて事、考えてないですよね？　甘いですよスオウ。私たちはそんなに甘くありません」
ギクッと思った。だけど何？　私たちって？　サクヤはわかるけどセツリまでそうなのか？
「ダメなのスオウ？」
大きな瞳が僕を見つめる。罪悪感ってどこから沸いてくるんだろう？　何も悪い事してない筈なのに、女の子にそんな目されたら妙に悪い事した気がしてくるよ。
だけどその気持ちを押し込めてでも僕は知りたいことがある。だ

から
「ごめんセツリ。僕にもこのアイテムが必要なんだ」
僕はセツリの目を真っ直ぐに見返して言った。なんだって思いが大事なんだ。だから自分の思いをその瞳に乗せて言ったつもりだけど……思いとは時にぶつかるもの。
互いに譲れない事ならなおのこと。
「そっか、サクヤお願い」
うん？　なんだかセツリの声のトーンが変わった気がする。やけにさっぱり引いたし何する気だ？　「そっか」の時の笑顔がなんだか冷たく見えたぞ。
「了解ですセツリ。覚悟してくださいねスオウ」
怖い……怖いよこの二人！　まさか本当にヤル気か？
「そんなことしないよスオウ。覚えてる？　サクヤはここのＮＰＣだった事」
「あぁ、まあそうだったね」
サクヤとはこの町で初めて会ったんだ。僕達を導いたＮＰＣだった。だけどそれがなんだって言うんだ？
サクヤはクーの背に立ち、尾に縛られている僕に迫る。
「このイベントはこの町のＮＰＣが持つコアクリスタルを奪う事です。思わないですか？　奪われたコアクリスタルを取り戻そうとＮＰＣはしないのかと。更に奪おうとするプレイヤーだけが敵だとでも？」
何言ってるんだ？　それじゃまるでこの町のＮＰＣだって敵だとでも言う気か。だけど西口に来たときＮＰＣは誰も襲って来なかったぞ。
「それはそうですよ。普通のＮＰＣにプレイヤーを倒して奪い返すなんて出来ません。だからこそ私たちは……触るだけでいいんです」
サクヤは胸元からリボンを取り出してそれを左手に持ち腕を伸ばす。すると彼女の腕が僕の体に入ってきた。サクヤの腕と僕の胸の隙間から光が漏れる。

「うあぁぁあぁ！」
痛みはない……けど、何かが入ってくる感触は確かにあった。
「少し仕様は違いますけど……まだ私もここのＮＰＣとして認識されてるんです。だからこうやってコアクリスタルを取り出すことが出来ます」
サクヤの腕が僕の中をかき回す。すると腕を振ってないのにウインドウが出てきた。そして勝手にアイテム欄へ移り画面がスクロールしていく。止まった場所は勿論コアクリスタルの場所だ。
「リボンを置いていくから許してください」
「入らねえよ！」
なんだそれ。ただ単にＮＰＣがそういう仕様になってるだけだろ。ようは何かのアイテムと交換してコアクリスタルを取り出せるって事だ。
「その通り、では遠慮なく頂かせて貰います」
そう言ってサクヤは僕の胸から腕を引き抜いた。その手にはコアクリスタルが輝いている。僕の胸に空いた光の穴が閉じて行く。
「サクヤ、お前……」
僕は歯噛みする。まさかそんな裏技が有るなんて想定外だ。サクヤはセツリにコアクリスタルを渡して振り返る。
「これで私達の完全勝利ですね」
「ありがとうスオウ」
二人とも良い笑顔しやがる。でもまだ終わってない。取り返すチャンスは有るはずだ。そう思う僕はなんとか動こうとするけどその瞬間クーの尾が開いた。
「は？」
僕は重力に従って落下していく。用済みになったからゴミは捨てられたって事か？
「それじゃあイベント終わりに宿で会いましょう。負け犬スオウ君」
そう言ってサクヤはセツリに腕を絡めて抱き寄せる。何を見せつけてんだアイツ！　僕は結局いらないとでも言いたいのか？

「ふざけんなぁサクヤァァァ！」
最後の遠吠えだ。もう僕にはこれ位しか出来ない。確かにこれで僕たちの負けは確定だよ。最後の砦だったコアクリスタルも奪われて、もう僕達の手はサクヤ達の所までは届かない。
「スオウ！」
声とともに僕を受け止めてくれたアギト。何だかんだ言っても頼りになる奴だな。どうしようかと思ってたんだ。あんな高い所から放り投げるからさ。
「コアクリスタルは？」
「取られたよ。ごめん」
僕の言葉にうなだれるアギト。頑張っただけに最後にこれじゃあね。完全にサクヤとセツリにしてやられた。
「ああ～、女の子に負けるなんて情けねぇな俺ら」
「うるせぇよ」
分かってる事をわざわざ言うなよな。追い打ちになっちゃうじゃないか。
その時、丁度空の数字が後五分を示した。その数字の周りをクーは優雅に回っている。もう僕達は眺める事しか出来ない。ここまでかな……確かめたかったけど仕方ない。サクヤとセツリになら……まあ許せるよ。
僕とアギトは刻まれる数字をぼんやりと眺めていた。
後五分だけど、されど五分。終わったと思っていたのは僕達だけでここには様々なプレイヤーが今集っていたんだ。

その時、空に何かが飛んできた。まるでキャッチボールの様な気軽さとゆっくり差でスローモーションに見えてしまったその何か。
僕とアギト、そしてセツリとサクヤはただそれを眺めていただけだったんだ。僕達は一重に気が抜けてた。それしかもう言えない。
ゆっくりとクーの飛ぶ高さ位までそれが行ったときだ。心臓が跳ねる様な爆音と一瞬だけ空に何かが走った。本当にほんの一瞬……

だけど世界を多い尽くしてしまったんじゃないかとその一瞬で思えた程の強烈な閃光だった。
「なんだ今の？」
僕は目をこすりながら再び空をみる。するとだんだん近づいてくるクーが見えた。
「ん？」
いや違う……良く見るとクーの体はあちこち焼けた様にくすぶっていて煙も出ていた。そしてどんどん地上に近づいているのに一向に羽を広げようとしない。
向かって来てるんじゃない……クーは落ちてるんだ！
そして背に居る二人もどうやら気絶してる。あれは……さっきのボールみたいなのは攻撃だったんだ。
このままじゃセツリ達は確実に地面と激突してしまう。敵からの攻撃によっての二次被害ではダメージとして加算される。最悪、ＨＰが尽きることだって考えられるんだ。
そんな事起こさせる訳には行かない！　僕とアギトは同時に動いていた。武器を構えて、クーと二人分の体重を受け止める。
「「がっ……あああぁぁぁぁ！」」
僕達は唸った。そうしなければ押しつぶされそうだったからだ。きっと二人と一匹分の重さなんて支えられる物じゃない。だけどそこに僕達が武器を構えた訳がある。
僕達のＨＰはクー達を受け止めた時に大きく減っていた。それは今が戦闘状態になっているからだ。武器を構えた事でＰＫ対象のセツリ達と戦闘が成り立った。
そしてＨＰを犠牲にする事で衝撃をシステム的に分散させた訳だ。これは強力なモンスターの攻撃を防ぐときと同じ事。奴らの攻撃を受け止める事が出来るのはＨＰと自身の肉体にその衝撃を分けてるからだ。
だからこそ強力な攻撃は完璧に受けきらない限りＨＰは少しは減る。

僕とアギトはなんとかセツリ達を地面におろした。その時、大勢の笑い声がその場にこだました。そしてその中の一つは聞き覚えがあった。

「ははははは、ああ～残念だったな～。レアアイテムだったから威力は良かったけどさぁ、落としてくれなきゃなさぁ……面白くねえよ！」

それは鶏冠付きのゲスだった。周りには同じ様な腐った目をした奴多数。こんなに囲まれていて気付かないなんて僕も未熟者だね。

所でなんでこいつらはここに揃っているんだ？

「マーキングされたな。アイツ『魔眼』のスキル持ちか」

『魔眼』？　僕の聞きなれない言葉を余所に二人はにらみ合っている。ゲス共のニヤけた面が張り付くようにそこかしこに合った。

最後の五分。このイベントで一番激しい戦いの幕開けだ。

願い求めて（後書き）

遅くなりました。まだ明日の分が出来てない……大ピンチです。本当なら今日は明後日のを書いてる予定だったのに……なんだか筆が遅くなる一方で困ります。

なんで？　毎日書いてるのに普通なら早くなって欲しいものです。だけどそれはまだまだって事だろうから頑張って精進します。

明日に間に合う様に今日も寝ないで頑張ります。

私の一コマ――振り下ろされる刃（前書き）

なんだか今日は町が騒がしい。色とりどりの色の水が舞っている。そんな中、私はみんなを待って今日も裁縫の日々です。ＬＲＯという大好きな世界での私の暇つぶし。あ、メールが届いた誰からかな～。

僕はどうしても気になったんだ。魔眼の事……そして聞かされたゲスの魔眼のカラクリに耐えつつ僕等はゲス共の攻撃を凌ぐ。だけどそれも限界が来ていた。迫られる選択の時。その時、屈しかけた僕の心を救ってくれたのはあの人だった。

私の一コマ――振り下ろされる刃

センラルトの街、西側の大通りに面するそれなりの宿屋の一階、憩いの場で私は裁縫をやっていた。モダンな作りのこの宿屋で一番のお気に入りの場所だ。

風情がある木目調のテーブルとイスが三セット位並んだこぢんまりとした空間だけど私はそれが好きだった。観葉植物が緑の葉を日差しに照らしてたり、用意されてるリアルの小説の上巻だけ何故か抜け落ちてたりするちょっと間抜けなＬＲＯが私は好きです。

データなんだから数に限りがあるなんておかしいのにね。私達がこの街のこの宿を取って既に二日位だけど一向に上巻の場所は埋まらない。

いつもはカウンターで決まった動きだけを繰り返してるちょっと渋めのおじさん風宿屋の主人ＮＰＣを見るのも好きです。ずっと見てるとＮＰＣと言ってもそれぞれ個性が見えて来たりします。

このゲームの作り手達の愛を感じる瞬間ですね。私はそんな一面を見つける度に心の中でクスクスしてます。

「あっ……やっちゃった」

裁縫スキル『セーター編』に入った私だけどこれはなかなか難しい。『マフラー編四十面化』を極めた私がこんな所で躓くとはなかなか持ってやってくれるよＬＲＯ。

私は最近裁縫のスキル収集に凝ってる。裁縫はＬＲＯにある生産系の中で唯一、「オート」と「マニュアル」が有るんだ。それも限定的だけど……リアル系の服や装飾ならまさに手作りが出来る。

それを面倒と言う人も勿論いるだろう。けど少し最初に裏技の「セミオート」に設定してあげるとやり方が自然と頭と体に染み着く

から楽で楽しくなれる。
「オート」は素材の選択の後、少しチクチクすると直ぐに完成して出来はランダム。これじゃあ私は満足出来ない。「マニュアル」はまさにリアルと同じ行程をなぞる事が出来る。だけどリアルよりも楽に出来る工夫が一杯なのです。
まずは糸の解れは一瞬で解除！　同じ縫い方の場所ならコピーでどこまででも伸ばせます。これを使えばマフラーなんて一日で完成だよ。それにマニュアルは自己流が出せるんだ。凄い人はＬＲＯで自分の店を出してたりしてる。
それはブランドだよ。私はそんな大層な物を心ざしてる訳じゃないけど趣味でチクチクしてると楽しいのです。

「セミオート」はオートとマニュアルの中間で自分の手の動きをシステムがサポートしてくれる状態です。勝手に手がマフラーとか手袋とか編んでくれます。

だからその状態を思い出しながらやっていくと誰でもきっと出来るようになる筈です。
私は失敗した箇所を一瞬で元の状態に戻して再スタート……と思ったらメールが届いた音が頭に響いた。ウインドウを開きメールを確認。それはテッケンさんからだ。何々。

【なんて事だい！　今日はあのイベントの日じゃないか！　今直ぐ戻るから楽しみをとって置いてくれ！　緊急事項だよこれは】

私は頭をコテンと傾ける。肩に掛からない程度の揃えられた銀髪が日の光を優しく返す。私はそんな髪を指でクルクルと巻きながら思案した。

（楽しみを取っておくってどうするんだろう？）

私はイスの背に背筋を伸ばして寄りかかり窓の外を見た。綺麗な石造りの町並みの上では何故か誰もが色とりどりの水を掛けて掛けられしてる。でも見えるのはＮＰＣばかりだな。

プレイヤーの人たちはどこに行っちゃったのだろうか。なんだかさっきから騒がしいと思ったらイベントやってたんだ。なんだか楽しそうなイベントだ。そう言えばアギトやテッケンさんがここの所、話してた気がする。

私は窓の向こう側の楽しそうな光景を見てクスクス笑った。だってみんなおかしな色に染まってるもの。そして笑顔なの。普段は決まった表情しか取らないＮＰＣの人たちが笑ってる。

それがとっても自然に見えて……本当にこの街は息づいてる気がしたんです。

私は視線を戻してテッケンさんへ返信した。内容は簡単だ。

【無理そうなので、早く戻ってきてください】

彼の少しでも早い帰路を祈りつつ、私は再び裁縫に戻る。今度こそセーターの壁を私は越える！　イベントに参加したい気もするけどみんながここに戻ってきた時に迎えなきゃね。

セツリちゃんは寂しがり屋らしいから帰ってくる所に居てあげるよ。実を言うとこのセーターも……ね。

だけど不意に止まった手、そして吐き出される息。ポツリと呟いてしまったこれは私の寂しがりの顔が出たのかも……

「はぁ～、みんな遅いなぁ」

そんな私の声が誰も居ない憩いの場に溶けて行った。

汚い空気が鼻につく。いつものこの場所じゃないみたい……いや、目の前のこいつらにとってはこれがこの場所の空気なのかも知れない。

ただ、僕が知ってるＬＲＯという世界は絶対にこんな臭いを漂わせていない。腐った土と灰と、そして擦れたゴムの様な嫌な臭い。

そんな表現はＬＲＯのシステムは絶対にしてないだろうけど奴らの面を見てたら自然と浮かぶ。とにかく一刻も早く消し去りたい。

だけどその前に……

「アギト、『魔眼』ってなんだよ？」

なんだか周りが知ってて当然と言う体で話すから僕の声は自然と小声だ。なんだよ僕が恥ずかしい奴みたいじゃないか。初心者なんです。僕はまだ初めて一ヶ月も経ってないんだ！

「魔眼ってのは透視、策適系の極みのスキルの一つだ。まぁ、でも魔眼なんて呼ばれるんだからちょっとタチ悪いんだよ」

アギトの返答に困惑が募る。そこにゲスの声が被さってきた。

「タチ悪いなんて酷いなぁ。ははは、スッゲー楽しい力だぜ。なんせ狙った獲物は逃がさないんで済むんだからな」

くそムカつく声だ。だから何なんだよ。具体的に話せ。

ようはこのゲス共は魔眼っていうスキルで僕達の行動を全部どこかで見てたとか言うことなのだろうか？

「大体はそんな感じだけどさ。でもそれだけなら『千里眼』と言うスキルがあるんだよ。わざわざ魔眼なんて物を好きでとる奴は大抵犯罪者野郎だ」

そこに魔眼の「魔」の部分があるとアギトは言った。犯罪者か…

…確かにいつかセツリを浚った奴らとこいつらは同じ空気出してるよ。

「何しやがったお前！」

僕は前で飄々としながら武器を地面に当てて不規則な音を鳴らしてるゲスに問いただす。魔眼の正体とはなんだ！？

「くくくくくくく。魔眼の対象は人じゃないんだよ。物だよ物。今日の場合はそこの女が握ってるコアクリスタルっつ～わけ。

あの時、お前に斬られた時にはもう魔眼でマーキングしてたんだよ。魔眼の特性はアイテムの強制実体化にアイテム欄への収納不可へのオマケ付きだ。

まあ、離れてちゃしまわれちまうけどな。でもマーキングしたアイテムはアイテム欄から強制的に出すことが可能なんだよ」

「なに！？」

なんてこった。それじゃぁまさにアイテム狙いのドロボーの片棒を担ぐスキルじゃないか。

そしてアギトが言うには『千里眼』と『魔眼』は二重習得が出来ないらしい。だから普通にテッケンさん辺りの策適系を伸ばした人は純粋に千里眼の方を選ぶ。千里眼の対象は人やモンスター、はたまたフィールドやダンジョンでたまに見かける宝箱なんかだ。

これはとっても役に立つスキル。フィールドに一歩出れば不意討ちされても仕方ないＬＲＯでは周辺探査は出来るならしたほうがいい。

狩りの時だって獲物を見つけるとかいろんな方面に使える策適スキルの大御所なんだ。

それに比べて魔眼の対象はアイテムなんて……アイテムの強制実態化とか奪うためにあるシステムとしか思えないよ。

「ま、当初の予定ではこんな事になるなんて開発側も思ってなかったんじゃないか？　それに別にな、魔眼って言うスキルが悪い訳じゃない。全ては俺たちプレイヤーの使いようだ」

アギトは怖い顔でそんな事を言った。こいつもＬＲＯが大好きだからこういう犯罪者プレイヤーは許しておけないんだろう。前に一回不覚とったしね。

あの時は悪魔の介入で結局アギトはあの犯罪者ギルドの奴らに借りを返せてない。ここでその恨みを晴らす気満々になってきてる。

「なんだよそれさぁ。俺は正しく使ってるぜ。魔眼の正しい使い方は強奪なんだよ。その為のスキル以外に何立ってんだよ！　たまんねーぜ、苦労して取ったアイテムを強者に持って行かれた時の顔がさぁ！　最高なんだよ！」

腐った言葉の数々に周りを囲んでる奴らは思いだしたかのように笑っている。こいつらはレアアイテム狙いの犯罪者チーム？　ギルドなのか？

不快な笑いの不協和音がその場に響く。凍り付いた様に冷たい空気が漂っていた。

「くはははは、お前等もさぁ……見せてくれよ。あの顔をさ！」

ゲスが言葉と同時にあの火球が飛ばしてくる。それは開戦の合図だった。一気に取り囲んでいた奴らが動く。その数十数人……二人で凌ぐにはきつい数だ。

アギトが火球を叩き割るとその中から鶏冠野郎が飛び出してきた。だけどさっきの攻撃はアギト凌いでこっちに来るためだった。

「ヒャァハァー！」

目の前に下ろされる赤い刀身を僕は受け止めた。鶏冠野郎は僕狙いか。

「カスの装備の癖してあの時はよくもやってくれたよな！」

「お前がそのカスに負けるほどに弱かっただけだろ！」

僕とアギトはそれぞれ背中をセツリ達に向けてその周囲をグルッと守るしかない。これは大変だ。一人で五人以上の攻撃を凌がなくちゃいけい。

鶏冠の攻撃を受け止めて居ると他のゲスがセツリに迫る。僕は体を回転させて二人の寝そべる空間に沿って移動する。そして二つの剣を両手一杯に広げて権勢した。

「これ以上先へは行かせない！」

武器のぶつかり合いは幾度となく続く。だけど双方ＨＰが減ることはなかった。だって僕らはＰＫ対象者じゃない。セツリと同じパーティーなら僕とアギトにもダメージが入っただろうけど今はまだ違う。

それに町中はＰＫ禁止区域だしその制限も高い。イベントでここでのＰＫが対象となってるのはセツリとサクヤだけだ。後、クーもかな。

だから僕達にはダメージは蓄積しない。既に半分を下回ってたＨＰ残量で僕らがこうも強気で居られるのはその辺だ。

ここではやられる事はない。だけど倒すことも出来ない。でもそれでも後五分も切ったのならこのままで十分に耐え切れた。ＨＰが減らないなら怖いものはないからね。

「くは、お前バカか。ここには直接攻撃の他にも攻撃手段がある事を忘れてるのかぁ！」

鶏冠の言葉に僕はセツリ達をみた。そしてその上に何かが落ちてきてる風切り音が聞こえた。上を見るとそれは数本の大きな針が起こしていた。銀光するその細長いダイヤの形をした針達は一直線にセツリ達へ迫っている！

「させるかぁ！」

僕は針がセツリ達を貫く直前に剣でその針を弾き飛ばした。その瞬間は僕は隙だらけでそこを狙わない奴らじゃない。背中に迫る剣の気配を感じてとっさに体を僕は捻る。

「つっ……」

腕に鋭い痛みが走る。ＨＰも減らない筈なのに痛みだなんて僕の浸透率は確実に上がってるようだ。

「スオウ！」

横からのアギトの救援。槍は素早い三段付きを放って敵を吹き飛ばす。だけどその時、再びセツリ達に迫る針の姿が見えた。僕はその針を切り捨てる。

当てるわけには行かない。セツリ達は今、ＰＫ対象としてその身の出来事はダメージにつながる。一本たりともこの防衛線を抜かせる訳には行かない！

だけど次々に魔法の針は振ってくる。離れた場所に居る後衛組が流れる様に魔法を詠唱してるのか。あれを止めなとじり貧だ。

それには今の状態じゃ無理だ。死なないけど倒せない。それじゃ

あこの状況を打破できないんだ！
僕はもう針を防ぐ事だけをしていた。後他は全てアギトだよりだ。そうしないと防ぎきれない。全神経を集中してないとたちまち串刺しになりそうだ。

（重い……腕が……感覚無くなってきた。このままじゃ）

その瞬間、横から伸びてきた剣に右手のシルフィングが飛ばされた。

「ははは、串刺しの刑〜」

動作が緩慢になった所を狙われた。鶏冠の野郎が本当に嬉しそうにそう言って巻き込まれないように離れる。そして奴に気を取られた瞬間に左手のシルフィングも甲高い音を響かせてこぼれていった。

「しまっ！！」

その後の言葉は続かなかった。何故なら続けざまに飛来した大きな針（全長一メートル半）が僕の体を貫いたからだ。三個飛来して二個が僕の体に刺さって消えていく。左肩と右太股だ。
僕はその場に膝を付く。そして僕は感じていた生温い物が流れ落ちてる感覚を……。

「ぐっ！」

脇からクーにもたれ掛かってきたのはアギトだ。ＨＰに代わりはないけど見た目はそうとうボロボロだ。それもそうだろう、倒すことも出来ない相手十人位と戦ってたんだ。
流石のアギトでも倒せない相手に勝つことは出来ない。普通にや

れればアギトならそれでも二・三人は倒しただろうに、まさか倒せない事が枷になるなんて……。

「すまねえスオウ……流石にきついぞ」

「……だな」

僕は頼りない返事を返すことしか出来ない。それをいぶかしんだアギトは僕の服から落ちてる物に気付いたようだ。

「スオウ！　お前……やられたのか？」

「二カ所ほど風通し良くなっただけだよ。大丈夫……急所は避けたさ」

前に胸を貫かれて大変な事になった。同じ過ちはもうしないさ。だけどアギトはそんな僕の言葉では安心出来ないらしい。

「バカ言うな！　今この瞬間にもリアルでどうなってるか分からないんだぞ！　ぐっ……」

「あんまり興奮するなよな。お前も怪我してんだろ」

ホント人の事ばっかり言ってるなよな。

「俺のは幻だろ。だけどお前のは……そうじゃないかもしれないんだぞ」

はは……確かに……でも、あの時の様な沈んでいく感覚はまだ無いよ。だからきっと大丈夫。

腐った面した奴らが僕らの直ぐ周りを取り囲む。空には無数の針が展開していて僕らにその先端を向けていた。握られた命がここにはある。

「もう野暮だからさ。渡せなんていわねーよ。だってそうだろ？殺しちまえば煩わしい事もしなくて済むんだしさぁ。なあどう思う」

鶏冠をつけたゲスが僕を見下ろしながらそんな事を言う。ニヤニヤと口の端をつり上げて笑うその笑い方に吐き気を催しそうだ。

「おいおい、わかんねー訳じゃないだろ。やれよ。ゲスに頭を下げて止めてくださいってお願いしろよ！」

ゲスは空に片手をあげる。それはきっと合図だろう。

「十秒待ってやるよ。ほら、じゅう～きゅう～はぁぁぁち――」

楽しそうにカウントを取り出すゲス共の声が不協和音を奏でて町に反射する様に聞こえる。変な効果でもあるのか僕の目は霞んでいた。

「スオウ！　おい、どうするんだ？」

「ほらほら～早くしないと全員串刺しだぜ。後ろのかわい子ちゃんまで穴だらけだぞ～」

耳にへばりつく様な笑い声が周りで起こった。僕は後ろを振り返り目を瞑る二人に視線を向ける。そこには二人の美少女がいるはずだ。だけど僕にはその顔が良く見えない。けれど想像する事は出来る。

ここで自分に出来る事は安いプライドを守る事じゃない。このままじゃセツリに取り返しのつかない事が起きる。あれだけの数の攻撃を受けてセツリのＨＰが残るとは思えない。

僕はセツリの手からコアクリスタルを取った。これをセツリがア

イテム欄に入れずに持ってた訳は奴の魔眼の効果。この輝きが何度僕を迷わせるんだ。

「これを渡して、僕が謝ればいいんだよな……」

「ああ、ほら後三秒だぞ。さっさとしろよ。はい、にぃ～い！」

空の針が僕達を狙っている。奴の手一つであれが降り注ぐんだ。交わした言葉をこいつらが守るとは思えない。だけど他にどんな方法がある？

僕は諦めないと誓った。君を守る事を守ることを諦めないと……だから僕の小さなプライドなんて捨ててしまえる。

「い～ち、ぜぇ～……ああ、それでいい」

僕は奴にコアクリスタルをゲスの前の地面に置いた。ゲスは目の前にある物を見て目を輝かせてる。ゲスな奴らの不適な笑みが僕に向けられる。

「ほら、まだやることあるだろうが！」

「っ！！」

「スオウ！」

奴は僕の頭を踏みつけて地面に擦りつける。敗北と屈辱がこんなにも悔しい物だと初めて気付いた。それがこいつらだから尚の事だ。だけど僕は歯を悔い締めて耐える。耐える事が出来た。

「ほらほら、言えないのかな～？」

奴の手が僅かに動く。それに反応するように頭上の針が僅かに動いた。言わなきゃダメだ。セツリを守る事は出来ない。口を動かせ

僕！

「……す」

「んん？」

ゲス共があからさまに全員で耳に手を当てて僕の声を聞くポーズを取る。それでも僕は何も言えない。アギトの沈痛な顔が目に映った。んな顔するなよ……止めろ情けない。

「……すみ……ま……」

「うんうん」

土の味とはこういう物かと思った。確かにイヤな味だな。僕は覚悟を決めて息を吸った。一気に言った方が気が楽だ。

「すみませんで――」

「止めろスオウ君！　君は間違っている！」

突如として響きわたった声に僕の言葉は最後まで紡がれる事はなかった。凛とした強さを持った声だった。その場の誰もがその声の主を捜した。

「君はそんな奴か？　本当に彼女達を救う方法が君がプライドを捨て土の味を噛み締める事なのか！　君は本当は逃げてるだけじゃないのか！」

周りのゲスが声の主を必死で探し吠えている。だけど直ぐ近くの筈のゲスの声はとても遠くに聞こえた。だってあの声はなんて言った？

僕が逃げてるだけだと……そう言ったか？

「どう言う事だよ」

僕は地面を見つめて小さく呟いた。するとその声が聞こえた様に続きが来た。

「方法ならまだあるじゃないか！　君は恐れているんだよ。いいや信じきれないのだろう。だけどねスオウ君。君だって分かってる筈だ。目の前のその男は……周りにいるそいつ等は……君が土の味を知った所で、必ずセツリちゃんを殺す！　そう言う奴らだ！」

僕は目を見開いた。土を撫でて来た風に突如高原の風が混じったみたいなすっきりさが脳の回路を骨組みから組み直す。

そうだ……それは僕も疑ってた事だ。いや、この声の言う通りに分かっていた事なのかも知れない。ただ僕は……

「君ならそんな奴等に屈しなくても彼女を守れる！　いいや、今の君だからこそセツリちゃんを守り通せるんだ！　痛みを恐れないでくれ。スオウ君、君が下を向いてしまったら一体誰がセツリちゃんを助けるんだい！　それは君の役目だろう！　王子様は土下座なんかしないぞ！　颯爽と立ってなくてはいけないんだ！」

ただ僕は逃げてただけだ。怖がっていただけだ。そんなんで丸まった背中をセツリに見せようとした。なんてこったよ本当に。

僕は両腕に力を込めて踏みつけられた頭を持ち上げる。

「うあああぁぁぁ！」

僕は奴の足ごと体を持ち上げて形勢逆転だ。ゲスは尻餅をついている。立ち上がった僕の視線の先には小さな陰が見える。

家の屋根に立ちこちらに笑顔を向けてる人物。それはテッケンさんだ。僕は彼に向かってコアクリスタルを投げた。

「何しやがるてめぇぇ！　死んでろよ！」

ゲスのそんな声と共に針が豪雨の如く降り注ぐ。だけど何を恐れる事がある。

僕のＨＰは尽きる事はない。その身から力が沸くようだ。僕の体は今、闘気を帯びている。

私の一コマ――振り下ろされる刃（後書き）

第二十五話です。気力でなんとか今までのスケジュールに戻せるいかな？　どうだろ？　分かんないけど頑張ります。ああ、ネタなんて元から無かったけどこの話の後どうしよう。

アンフィリティクエスト最終段階への積木が足りない……様な気がする。いつもの通り、三個のお題に期待します。そろそろ家にある小説だけじゃきついですけどね。どうにかします。こうご期待！

とは言えないかもです。いやそもそも期待なんてされて……（笑）

また明日です。

無欲の勝利（前書き）

僕は針の雨を凌ぎきった。だけどピンチは終わらない。攫われたセツリの救出に初めてのパーティー同士でのＰＫ戦。そこで僕は自分の初心者加減を思い知る。

それでも僕らはセツリを救い出し、コアクリスタルを巡って奴等に最後の一太刀を浴びせる。そしてイベント終了の時、コアクリスタルを手にしてたのは……

無欲の勝利

カンッ――と一つの針が地面に落ちた音が合図だった。その瞬間、無数の針が雨のカーテンの様に降り注ぐ。

だけど思いを新たにした僕に恐れは無くて……主を亡くした鞘を腰から抜き去った。大量過ぎる針の数はこの身を晒すだけじゃ一人も守れないだろう。

それじゃあ駄目なんだ。僕が立ち上がった意味は守ることだ。絶対に守って見せる為に僕は藁にも縋る気持ちだよ。その目に映る僕は、颯爽と立ってなくちゃ行けないと言われたから……ここで逃げる選択肢はもう無い。

体から沸き上がるこの感覚は何だろう。今なら乱舞を使わなくてもあの針の雨を全部叩き落とせる自信がある。神様の祝福を受けた様だ。テッケンさんの言葉に乗せられただけかも知れないけど、いい気分だ。

無数の針の雨の中、僕は避ける事なんてしない。一つも後ろにやる気はない。二本の鞘を駆使して僕は針を打ち落とす。だけど圧倒的な物量差は二本の腕でどうにか出来る物じゃない。

腕にも足にも胴にも次々と針が突き刺さっていく。だけど痛みに顔を歪めてる暇も、ましてやそれによって腕を止めるなんて事があったらいけない。

そんな事をしたら僕の後ろで気絶してるセツリ達に穴が空くんだ。それも今の僕の様な仮初めな傷じゃ済まない。ＨＰと命が繋がった正真正銘な傷だ。

だからただの一つも通さない！　鞘が間に合わないのなら体で受けた。肉を抉る感触も、内蔵に届いた痛みも、飛び散る鮮血だって、今は全てを無視して振り続けろ。

「うおぉぉぉあぁぁぁぁぁ！」

雄叫びと共に僕は更に加速する。守りきる……絶対に！　この時更に針の雨の密度が増した。これで決めるつもりだ。だけど裏を返せばこれを凌ぎきればまだ勝機はある！

そこら中に針が地面に刺さる音と、針をはじき返す音が響いていた。その時、酷使を続けて来た鞘に幾つもの針が立て続けに刺さる。

すると鞘は先端から消えていく。不味い！　そう思った瞬間、密度を増した針の雨がダムの放水の様な圧力と迫力を持ち地面に到達する。

一際大きなドドドドドドドと言う音が響いてしまった。それは大量の針が地面に突き立ったと容易に想像出来る音だった。

そんな針で埋め尽くされた場所の中心に僕はいる。両腕を伸ばし胸を張って僕は無数の針の餌食に成っていた。全身に刺さった針を数えるなんておぞましくて出来ない。

だけど針の雨の向こうに僕は輝く太陽を見た。黒く光って襲いかかってきた針はもう空に一つもない。するとその青さが良くわかった。

「はぁはぁはぁはぁ……」

耐えきったけど僕の腕にはもう何も残ってなかった。鞘も失ってしまったよ。突き刺さっていた針が次第に消えていくと思い出したように全身から血が溢れ出てきた。

流石に耐えきれず膝から力が抜けて地面に付いた。倒れかけた僕の体を支えてくれたのはアギトだ。こいつも実はかなりがんばってくれていた。

「お前、漏らし過ぎなんだよ」

「うるせぇよ。あの数で穴が空かない訳ないだろうが」

実は僕が討ち漏らして体にも刺せなかった針はアギトが処理してくれていた。僕の二刀の様に手数は多くないけど、それでも積み重ねた経験で限られた隙間から忍び込んで来る位の針の迎撃は出来た。

さすがは熟練だ。ＨＰは減ってないけど流石に体が重い。町中のバトル制限でのバリアを貫通して来た魔法攻撃は滅茶苦茶だ。イベントで規制が緩くなってたから起こったのだろうか。

僕と奴等はコアクリスタルを持ってた訳じゃないから互いにＰＫ対象ではなかったのにこのダメージ。ＨＰは減ってないけど確実にダメージは受けていた。

そうだテッケンさんは大丈夫だろうか？　奴等の魔法を凌いだのにあのゲス共が何の報復もしないのはおかしい。

「おい、スオウあれを見ろ！」

アギトの声に僕はその視線を追った。地面に無数に刺さった針がオブジェクト化し消えていく様子の中で僕は彼を見つけた。テッケンさんはゲス共に囲まれてしまっている。その手にはコアクリスタル……鶏冠野郎のスキル魔眼でアイテム欄に収納出来ないんだ。

「助けないと……」

僕は立ち上がろうとするけど足に力が入らない。剣も鞘も無い今は普段より軽い筈なのに足は地面と癒着してる様だった。

「無茶するな！　お前はやりすぎだ」

アギトにそんな事を言われてしまった。やりすぎなのは解ってる……でも助けないとこのままじゃテッケンさんが奴等に殺される！

「分かれよスオウ！　俺もテツも、お前とセツリとは違うんだ！　いいや、このＬＲＯの大多数はいいか！？　戦闘不能は＝死なんかじゃない！　だから」
「だから仲間を見捨ててもいいってのかよアギト！　僕はそうは思えない。確かに僕は人一倍戦闘不能を気にしてるけど、そうじゃなくても仲間のピンチには駆け出すよ！」

僕は重たい体を無理矢理、動かして駆けようとする。だけど気持ちとは裏腹に体はなかなか言うことを聞いてくれない。そんな僕を見てアギトは僕の肩を押して無理矢理座らせる。

「俺が言いたいのはもっと自分を大事にしろって事だよ。そりゃ幾らホントに死ぬ訳じゃないからって俺だって仲間は見捨てない！　でもなそれだって時と場合、状況ってのがあるんだよ。お前はたった一つの命で戦ってるのに無謀過ぎなんだよバカが！」

いきなりまくし立てるアギトにびっくりだ。そして何かゼリー状の物を口に押し込まれた。喉を通ると僕のＨＰが回復して傷が塞がっていく。これは回復薬か？

「ハイポーションゼリー版だ。ありがたく飲め。テツは俺が助け――ぐわぁ！」

アギトの声が途中で途切れた。テッケンさんがこちらに飛んで来てアギトの背中に激突したからだ。テッケンさんが飛んできた方を見るとコアクリスタルの輝きがそこにはあった。

「くはははは！　とうとう手に入れたぞコアクリスタル！　これで例のアイテムは俺たちの物だ！」

高らかに勝利宣言してるゲスども。これで奴等はＰＫ対象か。やれるか？　僕は地面に転がった二つの剣の場所を確認する。一つは直ぐ近くだ。五メートル先の地面に転がっている。
そしてもう一つは見覚えがある宿屋の扉の前にあった。武器の場所を確認して視線を奴等に戻すと鶏冠がコアクリスタルを自身のアイテム欄へ収納しやがった。
これじゃあ手出しが出来ない……いや待てよ。

「うわぁぁぁ！」

なんだどうした？　アギトとテッケンさんが赤面してる。そしてその視線はサクヤの二つの膨らみと自身の掌を行き来してた。こいつら触ったな。

「「てへ」」

二人同時に何やってんだ！　可愛くねーよ。寧ろムカつく。

「んん……あれ、何があったんですか？　確か目の前で閃光が……」

周りで騒いでたからかサクヤが目を覚ました。そしてセツリとクーも要約目を覚ま――

「よお、楽しそうじゃねーか。かわい子ちゃんは目覚めたのかよ？」

耳に響いた声に僕達は戦慄した。いつの間にこの鶏冠野郎は近づいてたんだ？　奴は剣を振り火球を出す。
僕は武器に手を――って腰にはない！　地面に落ちた火球が熱気と爆発で僕らを吹き飛ばした。

「くっそ……てめぇ」

地面に倒れた僕達は起きあがるのにやっとだ。今回はきちんとダメージがＨＰを数値分減らしてる。もうあいつ等はＰＫ対象なんだ。

「スオウ？」

不意に耳に流れ込んできた声に僕は前を向く。するとセツリが鶏冠野郎の腕の中にいるじゃないか！

「うん？　なんだい？　キスでもして欲しいのかな。ンチュパチュパチュパー！」

あのゲス野郎。セツリの顔の近くで唇を尖らせてだんだん近づいて行きやがる。セツリは理解できない状況に一瞬呆けてそして目の前の奴が僕じゃないと気付いた。

「きゃぁぁ！　いや！　違う！　スオウじゃない！　やめてよ！」

暴れ出したセツリ。その様子をウザいと思う鶏冠の表情が一瞬見えて、そして次の瞬間信じられない事をやりやがった。

バンッ！　……と激しい音が響いた。それは鶏冠がセツリを殴った事と理解するのが一瞬僕の中で遅れた程だ。だってそれは余りにも加減が無かった。

セツリはまだ何をされたか解らない感じで固まっている。

「たくさ～、ＬＲＯの中の女なんて偽物って解ってんだよ。調子こくなよなぁ。どうせ男誘うためにそんな美人にしてんだろ？　なら大人しくしてろ」

鶏冠の手はセツリの顎を握って顔を正面に向かせた。その瞬間、

僕は何かが切れた。本気で人を殺したいと初めて思った。それほど……鼻血が出てて、怯えた瞳のセツリが焼き付いた。

「うあ、なんで鼻血なんか出してんだよコイツ。ＬＲＯに血の表現は無いはずだろ。きったね～」

鶏冠の汚い声が脳内に響く度に『殺』の文字が浮かんでくる。今の僕はきっと何度生まれ変わってもアイツを殺す事だけは覚えていて実行出来るだろう。それだけ抑えられない感情が渦巻いていた。

痛みも疲れも吹き飛んで僕は立ち上がった。システムは今も必死に僕に倦怠感とかを届けてるだろうけど、こっちでシャットダウンだ。

システムに飲まれてばかりだった僕がシステムを飲み込んでやる。

「放せよ……」

「ああ？　なんだって？」

僕の堪忍袋の尾は限界超えじゃぁぁぁ！

「セツリを離せって言ってんだよ！」

「セツリを離せと言ってるんです！」

いつの間にか重なってた声。それはサクヤだ。彼女も僕と同じ気持ちらしい。

「クー！！」

サクヤの一声で神々しい輝きを放ったクーが奴らに迫る。僕は武器も持たずに突っ込んでいた。そしてサクヤの高速詠唱が文字通りゲス共に火を噴いた。

僕の前の敵はクーが吹き飛ばしてくれる。僕は一直線に鶏冠に迫る。

「ふっはははは！　丸腰だって？　今度こそボイルしてやるよ！」

奴のマグマの剣が振られて火球が放たれる。ここは仕方ないけど避けるしかない。武器もないし、今のＨＰで直撃は不味いんだ。だけどその時声がした。

「真っ直ぐ走れ！　スオウ！」

僕の横を何かが掠めて行ったと思ったら火球にぶつかり炎とマグマの大爆発が起きた。これで真っ直ぐ走れだと？　上等だアギト！

爆風を交い潜り、煙の向こうへ。すると今度は一個じゃない複数の火球が僕の居る所に既に投げられてる。

「ヤバい！　逃げ場がない」

目の前に迫る火球。熱を発して触れてもいない地面を溶かしている。それでも引くなんて選択肢はないぞ自分。どうにかしてセツリの所まで行かなきゃ行けない。

「そうだ、立ち止まるなスオウ君！」

それは後ろから飛び出して来たテッケンさんだ。彼は豊富なスキル技で自身の短剣に水を纏わせて水系スキルの連発だ。白い水蒸気が周りに立ちこめてそして再び爆発だ。辺りは真っ白な煙に包まれた。

「行け！　彼女を救い出すんだ！」

そんな声がどこからか聞こえてきた。ありがとうございますテッケンさん。だけどこう白くちゃどこにあのゲスがいるか解らない。取り合えず、真っ直ぐに行くしかない。

「スオウー！」

「セツリ？」

白い煙の中僕はセツリの声を目印に進む。そして前に影が見えた。

「はっ、ふざけんなよてめーら。うるせぇんだよ。さっきからスオウスオウな！　黙らせるぞこのアマァ！」

それは聞き間違える筈もない声。耳にへばりついて、まるでヘドロの様に嫌な声。間違いない、鶏冠野郎だ。

シルエットで奴の腕がセツリに延びるのが見える。これ以上、セツリに触るんじゃない！　僕は拳を握りしめて煙の向こうへ突進した。

「うおおおおおおお！」

その時、強い風が吹いた。それが煙を流して僕の体は煙を飛び出す。それが丁度不意打ちに良い状態になった。

「テエェメェェ！」

鶏冠の武器が至近距離で突き出される。マグマを帯びたその刀身は常に熱を放っているのかその周囲の空気が揺らいでる。

でもそれでもただの突きだった。なんの変哲もないただの突き。それなら恐れる事なんて何一つない！

僕はその突きを最小限の動きで流して、そのまま拳を打ち放つ。

「吹っ飛べぇぇぇ！」

拳に肉の感触とその後堅い骨にぶつかった。その骨を打ち砕く様に願いを込めて僕は更に踏み込んだ。

「うらぁぁぁ！」

肘と健が伸びきったとき鶏冠は吹き飛んでいた。リアルではあり得ない人が飛ぶ行為。それが殴る事で実現した。

「スオウ！」

セツリは僕の胸に顔を埋める。何とも言えない良い匂いと暖かく柔らかな感触が伝わってくる。普段から思ってたけどセツリは体温が平均的に高いのかな？

「大丈夫かセツリ？」

「うん、うん……助けに来てくれてありがとう。もう来てくれないかと思ってた」

はあ、何言ってんだセツリの奴は。肩を震わせながら言う事じゃないぞ。僕はそんな薄情な奴じゃない。

「だって……朝、喧嘩しちゃったし。意地悪な事言ったもん」

ああ……セツリは朝の事を気にしてるのか。僕は自分が悪いと思ってたんだけど……こうなったら僕も謝って仲直りをしよう。それが一番だ。

僕はセツリの肩を掴んでその吸い込まれそうな瞳を見つめる。
「あのさセツリ……」
「うん？」
戦場の中の異常な空間だ。僕達は互いになんだか目を離せない。動機が激しくなって危険だから早く終わらせないと。
「僕も今朝のこおっと！」
「きゃあ！」
おかしくなったのは奴の火球が乱入してきたからだ。僕はセツリを引っ張ってそれを避けた。火球が触れた地面は円形状に溶けていた。
謝るのはやっぱり後がいいらしい。そうだなコイツからコアクリスタルを奪い返さないといけない。ウインドウ欄に入れられたけど僕達には幸いにもそれでもアイテムを取り出せる奴が居る。
「本当にムカつくガキだなおい。あぁ、ぶっ殺すぞテメー！」
なんだってこんなに僕が当たられなきゃ行けないんだ？寧ろこっちが切れたい。
奴は連続して火球を放つ。武器の無い僕には火球を防ぐ事は出来ないとしての判断だろう。
「セツリごめん。この話の続きは後でしよう！　今はアイツを倒してコアクリスタルを奪い返そう」
「ええ？　あの人がコアクリスタル持ってるの？」
気付いてなかったのか。セツリは大きく腕を振って驚いている。

感情表現の豊かな奴だ。僕はこくりと頷く。そして火球の隙間を縫うように走って回避。まずは一本、地面に落ちていたシルフィングを取る。

よし、これでなんとかなる。続けざまに放たれた火球を僕は調子を確かめる様に振ったシルフィングで切り裂いた。ここからは僕達の反撃の時間だ！

残りは後一分を切っている。その間に鶏冠を倒すかサクヤにアイテムを取り出させるかしないと負けだ。厳密にはこのイベントに負けなんて無いけどコイツ等にはコアクリスタルを渡したくない。

「セツリも協力してくれる？」

僕はセツリの顔を見て訪ねてみた。

「私も何か出来るの？」

当然の疑問だ。彼女はＬＲＯでは武器を装備できない特殊な存在。だから戦闘に関しては役に立つことなんてあり得ないけど、そんなのは気持ちの問題だよ。

「出来るよ。願ってさえ、祈ってさえくれたら僕達が必ずやり遂げてみせる！」

「うん、なら祈ってる。一生懸命お祈りしとくよ」

セツリは両手を合わせて後ろに引いてくれた。鶏冠の周りに分散してた仲間達が集まって来て、一気にこちらに駆けだしてくる。血の気の多い奴らだ。

だけど数が減っている。十数人いたのが一桁になってるんだ。向こうのダメージも相当だ。向かってくる二人が大きな斧と槍を僕に向けて来た。刀身にはエフェクト帯びてるから技だろう。

僕は受けずに二つの武器の攻撃を交わすモーションに入った。まずは槍がその長いリーチを生かして突進してくる。僕は体を横にしてそれを避けようとしたら後ろから別の槍がその敵の槍を止めた。

「スオウ、チーム戦で厄介なのは協力なんだよ。基本複数人に一人で挑むなバカ！」

なんと本日二回目位だバカを言われたのは。アギトは武器を離してもう一度行く。武器と武器の激しいぶつかり合いだ。そしてよろめいた相手を見逃さずにいつのまに接近してたテッケンさんが怒濤の連続攻撃で止めを刺した。

「逡巡するな躊躇うな！　それが戦闘の基本だよスオウ君。来てる！　後ろだ！」

僕はその言葉でとっさに武器を後ろにやった。すると衝撃が伝わり前へ飛ぶ。危ない危ない。

僕は振り返って走り出した。そうだよ。戦闘中に迷ってどうする。こいつ等は僕とは違う。普通にゲームをやってるだけの軽い奴らなんだ。それにみんなが楽しんでいるＬＲＯを汚す奴ら。

僕の剣が横へ凪いだ。しかし浅い。なんだか一本じゃ感覚が違うな。もっと深く、踏み込もう。その時横からの魔法攻撃をもらった。風が僕の体の自由を奪う。

「わっわ……なんだこれ？」

斧が僕の頭上に降り卸される。万事休すか！？　僕が目を瞑った瞬間に何か大きな爆発音が響き斧の奴を倒した。上を見るとそれはサクヤがやったみたいだ。クーの上は絶対領域だな。そして一直線に鶏冠めがけて高速詠唱で互いの魔法をぶつけ合う。

鶏冠の周りには後四人の仲間がいる。そいつらの魔法だろう。だけど圧倒的にサクヤは早い。

「セツリに犯した罪を悔いて死になさい！」

僕達も後を追い互いの武器をぶつけ合った。それぞれの武器が火花を散らし、攻撃が交錯する度に複雑に相手が変わりやがる。

これはスイッチか？　上手く回されてる。どうみてもタイアップ狙い……ここは強引にでもねじ込まなきゃダメだ！　僕は数少ない技を使用する。青い光が刀身に帯びる。

「ダメだスオウ君！　その状態では……」

テッケンさんの声を受け取る前に僕は動いてしまった。するとなんとぎこちない事か……上手く動けない。二刀流の状態じゃないからか？

そこに鶏冠の攻撃が来た。赤い刀身が幾重にも見えてはぜた。

「ぐあああ！」

僕はその衝撃で吹っ飛ぶ。そして近くの建物にぶつかって止まる。まさか自分がＰＫ戦ではこんなに役立たずとは思わなかった。足手まといも良いところだ。

このままここで邪魔しない方がいいかなと思ったけどやっぱり火力というか爆発力が足りない。押し切れない。しびれを切らしたサクヤがクーから飛び降り奇襲を仕掛けるけど奴らの連携は上を行った。

サクヤの長い黒髪が舞う。それを見たとき離れた場所で祈っていたセツリが駆けだした。ヤバい！　セツリが彼処に行っちゃだめだ。僕は一歩を踏み出した時何かを踏んだ。

それはもう一本のシルフィング。ここはそうだあの宿の前……僕は小さく呟いた。

「乱舞」

セツリが僕の乱舞範囲に入る前に風の壁を作った。僕達は風の空間の中にいる。

「なんだ、その姿……いや……さしずめあの話の……夜の王か。くはははは」

「夜の王？」

なんだそれ？　僕の風をまとった姿がその夜の王なる姿に重なるのか？　一体……それは……だけどそれを聞く前に鶏冠は小さく笑って全員で向かってきた。だけど僕は他を無視して鶏冠を切り上げた。風の尾が鶏冠を空に舞いあげる。

「今だサクヤ！」

僕の声でサクヤが奴の胸に手を突っ込んで引っこ抜く。そして手にしたコアクリスタル。これで僕達の勝……その時、鶏冠が僅かな力で武器を投げコアクリスタルに当てた。《五》

カン！　――――地面に落ち転がり続けやっとで止まった場所は宿屋の扉前。《四》僕とサクヤとセツリは必死に手を伸ばす。《三》だけどその時、宿屋の扉が開いて中からでてきたのはシルクちゃん。《二》

「あ、みんな遅いよ！　もう何やってたの……って、わぁ綺麗！」

「「「あっ・・」」」《一》

シルクちゃんが拾う、僕達の重なった声、そしてタイムアップを知らせるアナウンス。《零》

【只今をもってイベント『水掛け祭り』を終了致します】

僕達は無邪気な彼女に何も言えない。それは無欲の勝利だった。

無欲の勝利（後書き）

第二十六話です。やっとで終わった水かけ祭りです。長かった。どうしてこんな長くなったのか分かりません。いやいや、後五分でこれだけの攻防無理でしょ……て思われた方、僕もそう思いました。ごめんなさい。

時間配分がいい加減でしたね。ちなみに次の話は話的には進展しません。いや、進展する筈だったのが途中で変なノリになってしまってそのノリのまま終わったからイベントの後日談ですよ。

でもいつもと違う感じでキャラクターたちがとんでもない事に……良かったら感想、評価お待ちしてます。ではでは、明日の二十七話目も読んでくださる事を願ってます。ありがとうございました。

男のロマン（前書き）

イベント終わり、僕達は宿屋に居た。燃え尽きた僕達と申し訳なさそうなシルクちゃん、そしてコアクリスタルがテーブルの上で輝いている。なんだか根に持つ言葉を吐くセツリの言葉が僕の所にまで飛んできて……そういえば僕達はまだ仲直りしてなかったんだ。

一生懸命に言葉を繋いで関係を直した僕達。そして遂にコアクリスタルをアイテムへと帰る時だ。だけどその時現れた文章に僕は首をかしげる。

『変換と叫びお好きな決めポーズでアイテムをお受け取りください』

決めポーズってなんだよ。僕はそしてＬＲＯの不思議な常識を知ることになり、自分の身近な奴のもう一面の顔も知ってしまった。

男のロマン

宿屋『ブリュクの宿』はセンラルトの町の西出入り口付近にあるモダンでシックな落ち着いた雰囲気の宿だ。かれこれ部屋を借りたのが二日前位だったかな？

サクヤとの一件があってその後にこの宿を借りてそして僕はリンクを利用してセツリの世界へ行った。セツリをあの世界から連れ出して、次にＬＲＯに入ったのが翌朝だったからあれ？　一日前位か？　まあどっちでもいいか。

僕達はこの宿の憩いの場のテーブル一つを囲んでいた。なんだか異様に疲れたから一人を除いて僕らは椅子に深く腰掛けて真っ白になってる。

「あ、あ、ああのね、ごめんなさい！　そんなつもり……全然無かったんだよ。だけどね……綺麗だったから……その……つい手にとって……本当にごめんなさい！」

泣き出しそうな顔で必死に頭を下げるのはシルクちゃんである。あのイベントは町にいる全プレイヤーが対象だったけど参加はあくまで自由だった。

だけど対象であるんだからたった一瞬であろうともイベント参加者、コアクリスタルを獲得する権利がある。ってなわけで僕達の努力は全てシルクちゃんの手の中に収まったんだ。

小さくなっているシルクちゃんはなんだか可哀想。別にシルクちゃんが悪い訳じゃないのに……てか二時間も待たせたこっちが悪いよ。怒っていいのに、自分を責めるなんて良い子だね。

大丈夫だと、君は悪くないと言ってあげよう。

「サクヤ……こんな事をなんて言うんだっけ？」

ん？　窓際で頬杖ついて遠くの空を見てる姿が絵画と思えるほどに様になってるセツリの呟きが聞こえた。何が言いたいんだセツリは。

するとセツリの後ろに控えるサクヤがクーを肩に置いたまま答える。

「棚からぼた餅ですか？」

「そうそれよ！」

「ごめんなさ～い」

それか！　言いたかった事。止めろおまえ等。これ以上追い込むなよな。たく、そんなに欲しかったのかあのアイテム？　でももうどうしようも無いことなんだ。

物にも寄るけど貴重なイベントアイテムはトレードや売買が出来ない物もあると聞いた。それが今回のアイテムには噂通りなら当てはまるだろう。

「シルクちゃん、セツリの言うことなんか気にしなくていいよ。別に僕達はシルクちゃんを責めたりしないし。てか出来ないよ。二時間も待たせてごめん」

やっとで言えた謝罪の言葉だ。アギトとテッケンさんも顔を上げてシルクちゃんに向けてゴメンのポーズ。

「ホント待たせて悪かった。それはもうシルクのもんだよ」

「まあ、離れてた僕が悪い。ここは無念だが譲ろう」

アギトもテッケンさんもこれでさっぱりしただろう。頭を下げた

僕達に対しシルクちゃんはまだ申し訳なさそうだ。そして僕は気づく。視線がチラチラとセツリに向いている。
気を使う性格らしいシルクちゃんはセツリの機嫌を気に掛けてるんだろう。

「おい、セツリ。もういいだろ？　シルクちゃんが可哀想じゃないか。別に何も悪くなんかないのにさ。わかってるだろ？」

僕はセツリにそう言った。するとセツリは僕の方を向いて言い放つ。

「わかってる！　だけど何も分かってないスオウが言わないでよ」

眉をつり上げたセツリの顔が見える。どういう事だよ一体？　そう言えばまだ僕達は仲直りしてないんだっけ？　それで怒ってるのかな。

「あのさセツリ」
「何よ？」

う～ん、なんて言えばいいかな。元々セツリを追いかけてここから出たのに途中からイベントが入ったせいでおかしくなったんだ。
でもまあ、とりあえずは先に謝る事が大事だね。

「今朝の事なんだけどさ。ゴメン、前の日にメールもしなくてさ。聞いたよアギトから色々と」
「――！！」

するとセツリは椅子を揺らして身を引いてアギトに視線を向ける。アギトはとにかく素知らぬ顔だ。顔を赤く染めたセツリは椅子から

立ち上がり部屋へ行こうとする。だけどその時控えていたサクヤが声を出す。

「それでいいんですかセツリ？　言いたい事があった筈でしょう。逃げ出しても何も変わらない事を知ってるし痛感したんじゃないのですか」

するとセツリの足が階段に差し掛かった辺りで止まる。そしてぎこちない足取りで戻ってきて僕の前で止まった。肩は微かに震えていて、下だけを見つめる様に頭を伏せている。

「何聞いたの？」

下に発射された言葉が地面に当たって伝わってきた。実際そんな過程は無いだろうけど、何となくそんな感じがした。弱々しい声が必死に耳まで上がってきたよってさ。

「僕の怒られる要素の数々とか……後はリアルの事を喋ったって」

「うん……」

なんだろう、確かここら辺でアギトは重要な事を言ってた気がすけど……なんだっけ？

「いっとくけどね。私そんなに怒ってないよ。起きた後、ずっと待ってたのに入ってくれなかったことも残念だけど、それはしょうがないって思えるよ。

でもね……確かめたい事が合ったんだ。だから……それで……ね。するとモヤモヤ～って……」

なんだか途中から曖昧すぎてよくわからなかった。もしかしたら

セツリも良くわかってないのかな？
「だから……だから、欲しかったんだよあれが。あのアイテムが……そしたら確かめる事が出来る。私がスオウの……と……とく……べしゅ……って」
ん？　とくべしゅ？　ああ、そっか。思い出したよ。アギトに言われたこと。そうだ、これをいってやれって言われてた。
それを確かめる為にあのアイテムが欲しかったって事なのか。でもなら、アイテムが無くてももう大丈夫だから。
「当たり前じゃん。そんなのアイテムなんかいらないよ。ちゃんと言える、自分の口からさ。セツリは僕にとって……特別だ」
言った。言ったな僕。爽やかに決めたけど内心結構赤くなってるから。するとセツリはパっと顔を上げた。フワフワの栗色の髪が広がって魅せる。
「私……特別？」
「ああ、そうじゃなかったら命なんて掛けられないよ。セツリと出会った事やそれから起きたこと全部普通じゃない特別だったよ」
セツリは僕の肩に額を置いて小さく「怒ってゴメンね」と呟いた。僕はやっぱり「こっちこそゴメン」と言うしかない。
なんだかおかしな態勢だ。幾ら知り合いしか今はいないからって恥ずかしい状態だよ。セツリの髪が僕の首を柔らかく包んでいる様な感じにゾワゾワする。手持ちぶさたな手は自然とセツリの頭に置いた。
周りに目をやるとアギトがヤレヤレみたいにやってて、テッケンさんは親指を立てている。シルクちゃんは赤らめた頬に両手を当てて僕らを見てた。

そして何故か背後から殺気が迫る感覚。これはひたすらに無視した。だって怖いもん。でもこれでセツリは僕を許してくれたみたいだし良かった良かったよ。

「ごめんねシルク。でも私、もうそれに未練無いからあげるわ」

もの凄い手のひら返し。あのあとセツリはさっぱりした顔でそう言った。まあ良かったんだけどね。機嫌も直ったみたいだし。

これで正式にあのアイテムはシルクちゃんの物だよ。セツリから何故か貰った事になったシルクちゃんだけど

「はい、ありがとうございます」

と笑顔で返す事が出来る事に感心した。本当に良く出来た子だ。実は二十歳超えてたりするのかな？　ＬＲＯの外見は同じ位なんだけど、そこは謎だ。

なんだか自分の中で女性に年齢を聞くのは失礼な事とインプットされてるから聞けないし。基本、マナーとしてあんまりここＬＲＯにリアルは持ち込まない。仮想は仮想として楽しくあればいいって事なんだ。

不意にリアルでの宿題なんて思い出すだけで嫌気が刺すよ。

「所でさ、結局イベントアイテムって何だったの？」

僕の一言で全員がシルクちゃんに視線を向ける。実はずっと気になっていたんだ。本当に心覗くアイテムか？　それとも未来を見せたりなんかしちゃう奴？

「そ、それじゃあ早速コアクリスタル変換してみますね」

シルクちゃんはウインドウからコアクリスタル取り出してテーブルの中心に置いた。僕達は椅子から立ち上がりその周りへ。イベントアイテムはコアクリスタルを獲得者が変換する事でその姿を現すんだって。

それが出来るのは勝者だけ……なんだか憧れる瞬間だ。

シルクちゃんがコアクリスタルに触れると小さなウインドウが出てきた。

【変換と叫びお好きな決めポーズでアイテムをお受け取りください】

……おかしいだろおい。こんなお茶目なゲームだったかＬＲＯってさ。

「ふふふ、時々ありますよ。変なクエストとか、遊び心満点ですね」

シルクちゃんは馴れてるのか余裕だ。もしかして決めポーズまであるのか？　ないよね？

「ありますよ、普通です」

「普通なの！？」

ＬＲＯの衝撃事実が発覚だ。なんで決めポーズなんて持ってるの？　戦闘の後とかやってなかったじゃん。

「戦闘の後は疲れてるからやりません」

意味ないじゃん！　普通使い所はそこじゃないの？　僕は肩の上げ下げが大変だよ。けれどそこで別の声が入ってきた。

「いやいやスオウ君、一番の使い所はクエスト達成した直後だよ。二番目は宝箱開けた時」

ああ、成る程ねって思っちゃう自分がいたよ！　もしかしてあるの？　貴方も持っちゃってるんですかテッケンさん！

「当然だよ。紳士の嗜みとしてね」

決めポーズに一体どんな紳士的な意味が込められてるんだ！？小さな体を椅子の上で目一杯反らすテッケンさんは誇らしげだ。

「淑女もですよ」

「なら紳士・淑女の嗜みに」

ああ、もう訳が分からない。決めポーズ談義は理解出来そうもないので早々に切り上げて変換に移って貰おう。そう思ったとき、やっかいな奴にその熱が移っていた。

「はいはいはい！　決めポーズ見てみたい！　私にも出来ますか！？」

それは爪先立ちまでして腕を高く上げたセツリだった。僕は思わず頭を押さえた。そう言えば、こんなのセツリは好きそうだ。なんたってリンクした世界では愛と勇気の魔法少女に変身した位だからね。

するとセツリの参戦でアイツも加わりやがった。

「セツリ、私ので良かったら決めポーズ見せる事が出来ますよ」

なんで元ＮＰＣだった奴が決めポーズなんて持ってるんだサクヤ

！　そこは絶対におかしいだろ。何、顔を赤らめて主張してんだ。

「フン！　決めポーズ一つ持ってない雑魚は引っ込んでないさい。私がセツリと話してるの」

歪んだ顔に鋭い眼光……それが僕に突き刺さった。超怖いよあの人。それに何、あの勝ち誇った笑い声。僕はいつかサクヤに刺される気がするよ。

「では行きます」

そんな声と共に肩からクーが飛び出した。クーの羽からはアラレの様な星の粒が輝いて出てる。そしてクーがサクヤの周りを回るのに合わせて腕を動かしターンを決める。合わせてサクヤの掌の上を滑る様に飛ぶクーも息はピッタリ。最後にタ・トンとたたらを踏んで、腕を回り込ませて正面でクーと向かい合い両手で優しくクーを包み込む。

そして唇とくちばしがチョンっと触れてカメラ目線でフィニッシュだった。妙に高い完成具合だ。それにあのクーの羽はエフェクトか？　決めポーズ用？　なんだか思わず見取れてしまったじゃないか！　サクヤの癖に……僕を刺す女なのに……決まってないけど。

「スゴい！　スゴいよサクヤ！　本当に可愛かった！」

興奮したセツリがサクヤに抱きついた。するとサクヤの顔は溶けそうな程にデレデレしてる。こいついつかセツリも襲いそうで心配だ。

周りのシルクちゃんとテッケンさんは拍手を送っている。まあ、確かに可愛かったけどああいうのを人前でやっちゃうわけなのか？

恐ろしいなＬＲＯ。

「今のは八十五点はやれるな」
「ん？　なんか言ったかアギト？」
隣で達観してたアギトの方から何か八十……とか聞こえた様な気がした。でもまさかこいつが決めポーズなんて考えられないな。今もこの通りノってないし。
「べ……別に、何でもねーよ」
ほらね。何でもないってさ。
「しかし呆れるよね。なんかＬＲＯは変だと思ってたけどまさか決めポーズなんてのが要求されるとは思わなかったよ。僕は流石に恥ずかしくて出来ないな」
「何が恥ずかしいんだよ……」
ん？　またどこかから呪いの呪詛めいた低く籠もった声が耳に届いたような？　でもこんな昼下がりに霊もないか。てかここはＬＲＯだっつうの。霊なんてリアルよりも存在しえないさ。
前を見ると今度はテッケンさんの決めポーズの披露の番の様だ。小さな体を勇ましく使い武器を手に取り、光のカーテンが出来る。そこからまずは武器が飛び出して来て、カーテンと共にテッケンさんが飛び上がった。
空中で華麗に武器を手にとった後に煌めく武器の技でカーテンが一輪の花を催した。それは芸術。そしてその花びらの中、彼は尊大に地に降りて武器を掲げてフィニッシュだった。
うん、なかなかカッコカワイイ系だった。まあモブリのビジュアルはズルいよね。あれならなんとか僕でも出来ると思うもん。
それって結構あると思うんだ。みんなリアルとは違う自分だから

出来るんだよ。そう考えたら僕には絶対に無理だ。だってリアルの姿そのままだもん。

「流石テツ……またレベルをあげたな」

「何か言ったアギト？」

「別に～なんでもね～し～」

なんであのゲスみたいな口調なんだよ。ん～流石に三度も聞こえると不気味だな。僕って何かに取り付かれてるのかな？　考えたくないし隣のアギトに話しでも振っとこう。

「テッケンさんも良くやるよね。でもさ、ああ出来るのはモブリのビジュアルの恩恵でもあると思うんだよ。だって僕たちがやったら引きそうだろ？」

「……うるせえカス……引っこ抜くぞ……」

んん？　僕は周囲を見回すけどやっぱり僕たち以外居ない。なんだ？　さっきより怨念というか憎悪というか殺意みたいなのを感じた気がする。

一体何を引っこ抜くんだ？　魂とか？　超怖い。なんだか僕のみじかにそいつは来てる気がするんだ。

「なあ、アギト。この宿、実は霊が出る噂とかないか？　さっきから物騒な声が聞こえるんだよ」

「そんな訳あるわけないだろ。何言ってんだ？　ここはＬＲＯだぞ。そんなのリアル程も存在できねーよ」

やっぱりか……て、その後半の台詞さっき言ったよ。たく、レパートリー増やせよな。だけどこうなるのとあの声は何なんだろう……空耳で片づけるかな無理矢理にでも。

「物騒な声って何が聞こえるんだよ？」
「う～ん確か……八十個のパンをテツに詰めてスカッと引っこ抜くぞって言ってたな」

うん、確かそんな感じだった。すると横のアギトがだんだんプルプル震えている。なんだ？　取り付かれたか？
だけど次の瞬間、襟首捕まれて持ち上げられた。

「誰もんな事言ってねぇぇぇぇぇ！」
「なに……すんだ……アギト」

やっぱり取り付かれたか？　正気に戻るんだアギト！　お前は霊に負けるほど弱くはない。

「スオウ……決めポーズはな……決めポーズはな……」
「アギト？」

そうか決めポーズの恥ずかしさに耐えきれなくて無念な思いをしたプレイヤー達の残留思念なんだな。なんて可哀想な……だけど僕に任せておけ。あんなおかしな物はリアルに戻って佐々木さん達に抗議して消して貰うから。
だから君たちももう消えていいんだよ。安心して逝きなさい。
その時、遠くで四人の話し声が聞こえた。こんな状況になっているのに誰も気付かないなんて凄い熱狂ぶりだな。どうやらセツリの決めポーズを談義してるみたいだ。
そんな会話がちらほら聞こえる。

「だからやっぱり女の子はキュートが最強だよ。セツリちゃんは外見が凄く可愛らしいから派手なエフェクト使ってもきっと映えるよ」

「そうでしょうか？　私はシンプルイズベストだと思います。これ以上セツリに何がいりますか？　過度な装飾、派手な演出、全て埋もれるだけですよ。

甘い声で囁いてください『愛してると』それだけで、ウヘヘ……」

「ふふ、サクヤさん願望が出すぎです。そうですね、派手過ぎるのも良くないけど何もしないのもどうかと思いますよ。そこで私は中間をとってみようと思います。

このペンダントを使うのはどうでしょう？　セツリさんは武器が装備出来ないからこれをファーストアタックに使うんです」

「「おお～」」

そんな感じの会話が耳に入る。これだけでどれほど盛り上がってるか伝わるだろう。シルクちゃんは得意そうなのが解るよ。サクヤは壊れてるけど……何あれ？　流行ってるのか決めポーズ。

するとアギトの方からも声が聞こえてきた。

「シルク……なかなかのハイセンスだ。だけど俺なら……」

そんなアギトの声に僕は悲しくなるよ。そんな事、言いたくも無いだろうに……残留思念が口を勝手に突いて出てくるんだな。

「アギト！　正気に戻れ！　お前はそんな決めポーズなんかに揺らぐ奴じゃないだろ！」

「なんか……だと……決めポーズはなぁぁぁ――」

何か不味い事を言ったか。残留思念に取り付かれたアギトが興奮を募らせて遂に爆発しそうだ！　苦しい……。四人で決めポーズ談義してる奴ら……気付よ。

「だからこんなのはどうだろうか。『愛と勇気を力に変えて』を入

れたいのなら……」
「私の愛は全てセツリに向いています！」
「めっです。サクヤさん崩壊してますよ。どこのネジを無くしたんです？　あ、ネジと言えば良い使い方が思いつきました。このペンダントの……」

おかしい……僕たちは見えてないみたいだ。

「みんな凄い……どんどん可愛くなってる！　私も頑張ります！
後はフィニッシュ部分だね」
「う～ん、そこが問題だね」
「セツリに問題なんて無いわよ！」
「サクヤさん、そろそろ戻って来ないと永眠させますよ。
ここまでが素晴らしい出来だからフィニッシュがしっくり来ないんですよね。台詞に合わせるのも難しいですし」

お、とうとう煮詰まった様だ。これはチャンス！　今なら流石にみんな気付くはずだ。

「お～――」
「スオウ聞け！　決めポーズってのはなぁぁぁ――」

体がブンブン揺らされる。お前のその台詞すでに三回目だよ。そして不穏なワードが耳に入った。それは『神』。

「ここはもう『神』に頼むか」
「『神』！？　まさかそんな……でも……そうなのですか？」
「戻ってきてくれて嬉しいよサクヤさん。うん、実はそうなんです。
私たちにはここまでが限界……でも『神』ならきっとサクヤさんがトリップしちゃうほどに仕上げてくれる筈です。セツリちゃんの未

知の領域が開かれます」
「……だ……誰……何なの、その……『神』って人は……」
彼らの緊張がこっちにまで伝わる様だ。揺らされながらでも思う。誰だよ『神』って……。
「スオウォォ！　決めポーズはなぁぁぁ――」
サクヤより先にアギトがトリップしてるよ。誰かこいつを止めてくれ。殴って良いから。
「ふふ、『神』の正体はね……お～いアッギト～君の力が必要だぁぁ！」
「「え！？」」
僕とセツリの声が重なった。今なんて言ったテッケンさん。目の前のコイツが決めポーズ界の『神』？　残留思念じゃなくて？
「決めポーズはなぁぁ男のロ・マ・ンなんだよぉぉぉ！」
「うるせぇぇ！！」
これが僕が本気の本気で親友を殴った瞬間だ。アギトは後頭部を打って気絶した。
「「「かぁみぃぃぃ！！」」」
信者の悲痛な叫びがブリュクの宿に空しく響いていた。後で分かる事だけど『神』の自慢はとある王室でとある方に決めポーズを披露した事だったとさ。

男のロマン（後書き）

遅くなりました。読んでくださる方々ありがとうございます。また明日です。

桜色の小竜と目的の証明（前書き）

僕達は鍛冶屋の登場でなんとか落ち着く事が出来た。そして今度こそ変換を実行。そして現れたのは噂とは全然違った物だった。物ともいえない代物だ。

それから僕達はこれからを話し合う。僕達の目的はアンフェリティクエストの達成でセツリのリアルへの解放。それで良い筈だけど当のセツリはそこに大きな不安を抱えていた。

でも僕達はみんなでその不安を振り払う言葉を紡ぐ。そしてその不安が取り払われた時、僕達の元に新たな事件の香りが飛んできた。

桜色の小竜と目的の証明

僕達は一回落ち着くことが必要だった。てか、さっさと変換を実行しろよな。その時、カランコロンと宿屋の扉が開いた。

「何やってんだお前等？」

その人物の呆れた声はしょうがないと言えるだろう。きっと開けた扉をもう一度閉めたいと思える光景だよ。彼の眼前には倒れて延びてる赤毛のエルフにその周りに集まって『神』と呼びまくってる奴ら三人。

そして謎のポーズを取っている栗毛の美少女に、拳を突き出して荒い息を吐く僕の姿。ここには変態しか居ないのか！

「鍛冶屋……」

僕はその人物を見て呟いた。鍛冶屋はシルフィングを作った鍛冶屋なのだ。シルフィングの鞘が無くなったからそういえば呼んでいたな。遠路はるばるご苦労様。

「「「ええ～コホン」」」

第三者の登場で周りの空気が鎮静化していく。僕的には助かった。なんだか変な空気だけどね。

「そ、それじゃあ変換しましょうか」

「それが今回のコアクリスタルか？」

アギトをほっといて僕らは今度こそイベントアイテムを手にする。

「変換！」

シルクちゃんの叫びと可愛らしい演出の決めポーズの後にそのアイテムは現れた。コアクリスタルが砕け散りシルクちゃんの腕の中に現れたそのアイテムは果たしてアイテムと呼んでいいのか論争を呼びそうな物だった。

何故ならそのアイテムは生きていたからだ。ゲームの中で生きていたなんて言うのもおかしいけど少なくとも無機物では無かった。

「クピ～」

（（（か……可愛すぎる！！！））））

その場にいた全員がそう思った。これはそう、ペットと呼ぶにふさわしい可愛さだ。

透明感が有る桜色の鱗で体を覆い、二対の羽には白と先端には淡い朱色が見えた。長い尻尾を優雅に揺らし、その生き物はシルクちゃんの手の上から自身の主を見つめている。

深い海の青を称えた瞳は生まれたてのヒナの様にどこまでも真っ直ぐに見えた。その生き物は何かを待ってる様だ。

シルクちゃんもそれを感じ取ったのか、額をその生き物に近づけていく。すると近くまでくるとその生き物は首を伸ばしてシルクちゃんの額にキスをする。

その瞬間、ファンファーレが鳴り響く。出現した頭上の文字には【契約の完了を祝います。その子に名前をどうぞ】と示してあった。直ぐ下に小さな文字入力のバーとキーボードも出現してる。

「わっ、ええっと名前……どうしよう」

そう言ってシルクちゃんは僕達をみる。だけどそれは自分で決めた方がいいのでは？　と思う。だってソイツはこれからシルクちゃんのパートナーになるんじゃないかな？

「シルクちゃんが思いついたのでいいんじゃない？　ソイツもそれだけで満足するよきっと」

僕の言葉の後に理解したかの様にその生き物は「クピー」と鳴いた。するとシルクちゃんとその生き物は見つめ合う。

「うん……そうですね」

そう言ってシルクちゃんはキーボードに指を走らせた。そして決定をしてその画面は消えた。

「クピィィィ」

その時一際大きく首を持ち上げて生き物は鳴いた。そしてシルクちゃんの腕から飛び立ち宿屋を旋回する。日差しに照らされたその体がとても綺麗に見えた。

生き物は今度はシルクちゃんの肩に降り立った。そしてシルクちゃんもその顎を優しく撫でながらその子の名前を呼んだ。

「よろしくね、『ピク』」

「クピー」

『ピク』がその子の名前らしい。いや、まさかと思うけどクピクピ鳴いてるからピクな訳ないよね？　もっと深く実は昔リアルで飼ってたペットの名前とかだよね？

「いえ、クピクピ鳴いてたからですよ」

なんてこった。確かに僕が思いついたのにすれば？　とか言ったけどさ……それって――

「とっても可愛いよシルク！　ピク、触ってもいい？」

「うん、どうぞセツリ」

あれ？　なんだか意外に好評だな。まあ、当人同士が良ければいいのか。まあ確かにピクって可愛いよ。

「この子ってドラゴンだよね。竜だよ竜。大きくなったら背中とかに乗れるのかな？」

セツリがピクを撫でながらそんなことを言った。そこで思っていた事を僕は口にしてみる。

「てかさ、なんで生き物なんだよ。イベントのアイテムは心を読む物じゃ無かったのか？」

それを求めてどれだけのプレイヤーが凌ぎを削ったと思ってるんだ。ピクもスッゴく貴重そうだけど、目的の物じゃなかったって事で少しガッカリだよ。

「元々あれは噂だったからね。しょうがない事だよ。誰かがあのイベントにこの町の伝承を重ねて言ったことが広まってしまっただけじゃないかな？」

テッケンさんの言葉に納得するしかないね。そうだ、あれはあくまで噂だったんだよ。僕達は踊らされたって訳だね。でもそれじゃ、

あの時僕が見た光景はなんだったんだ？
あの時、僕の手にはコアクリスタルが有ったんだ。そのせいで僕はあんな物を見てしまったと考えたけどそうじゃ無いって事か？じゃあ、一体何で……あんな……

「どうしたのスオウ？」

僕の視線に気付いたセツリがピクに指を優しく噛まれながらこっちを見た。

「いや……別に」

僕は思わず顔を逸らした。今、目の前にある光景がいつか壊れる。そんな暗示をしてたようなあの光景。そしてそれの中心はきっと、あの無邪気な顔をした奴だったと思う。
信じられないし、信じる要素なんて無いけど、どこかで僕にあの光景を忘れさせない奴がいる。僕自身の中に。

「ほら、スオウもピク触ってみてよ。綺麗だよ。フワフワだよ」

目の前に突如セツリに抱き抱えられたピクが入った。横から笑顔で顔を出してるセツリはとても幸せそうだ。そんな顔を見て僕は自分に言い聞かせる。
あんな事、起きる筈無い。僕はそう信じる事にした。そして僕もピクの綺麗な体を撫でて一緒に笑顔になる。

「ホントカワイイ奴だな」
「どっちが可愛い？」

――なんて答えればいいんだよ。変な冗談を突然言うなよな。僕

の笑顔が一瞬ヒキツっただろうが。

「どっちも素晴らしく可愛いよねスオウ君」

恥ずかし気も無くそんな事が言えるのは貴方だけですテッケンさん。次に僕の言葉を期待するなセツリ。僕は言えないよ。

「所で、ピクってどういう扱いなんでしょう？　今まで、こんな事無かったですよね。ペットを持つなんて……サクヤさんのクーちゃんみたいな扱いなんでしょうか？」

シルクちゃんの疑問の声。丁度いい。ここは乗ってセツリの視線から逃げるんだ。

「そ……そもそも、今のサクヤってどういう状態なんだって感じじゃない？　クーも含めてだけどさ」

まだ痛いよセツリの視線。じっとりとした視線が張り付いてるよ。誰か助けて。その時鍛冶屋が肩に白フクロウのクーを乗せた巫女服姿のサクヤを見ていった。

「サクヤってそこのフクロウ乗せた子だろ？　扱いってどういう事だ？」

「ああ、そう言えば鍛冶屋は知らなかったね」

普通に見てるだけだとサクヤはプレイヤーにしか見えない。普通のＮＰＣと違ってサクヤは表情も雰囲気も生き生きとしてるから事情を知らない人はサクヤがプレイヤーじゃないなんて思わないだろう。

僕らだって時々忘れるよ。驚異のＡＩを搭載してるそれがサクヤ

なんだ。

「実はサクヤはさ――」

「私は自己自立型ＡＩのＮＰＣでプレイヤーではありません。スオウの質問に答えるなら、今の私の扱いはＬＲＯ内でのプレイヤースキッターです」

僕の説明を遮ってサクヤは自分で自分の立場を説明してくれた。でも最後の方は僕らでも良く分からないぞ。なんだよ『プレイヤースキッター』って。

「聞いたことあります。ＮＰＣの中にはプレイヤーの不正を監視する役目のＮＰＣがいるって。確かＧＭだけじゃどうしても見落としが出来るからとかで……」

「ええ、基本その通りです」

シルクちゃんの補足にセツリは頷いた。なるほどね。プレイヤーの監視役としてセツリの側にいるわけだ。立場を利用してるわけだ。職権乱用みたいな感じだな。じゃあクーはなんなんだ？

「クーは私の友達です」

「なんじゃそりゃ」

説明になってねーよ。クーってモンスター……だよな？　でもあんなモンスターはアギト達も知らないって言ってたんだよな。だからサクヤと言うＮＰＣに付けられたオプションみたいなのと思ってたけど……それじゃあ、許容を越えたあの戦闘スペックは説明できない。

姿形が変わるしね。

「おい、プレイヤースキッターってのは分かったけど、どうしてそんなＮＰＣとお前等は行動してるんだ？　一から十までちゃんと説明しろ」

たく、鍛冶屋はせっかちだな。僕はあの湖畔の事を話してやった。すると鍛冶屋は頭を抱えた。

「またか……お前達は本当に一回では信じられない事ばかり話すな」

そんな事言われても困る。確かにサクヤが元々ＬＲＯの外から来た存在なんてそうそう信じれないけど、僕達はその映像を見てるからね。

それにサクヤの事を考えると一つの仮説が成り立つ。それは全ての仮想世界は繋がっているかも知れないって仮説が。それはもしかしたらとても重大な事かも知れないな。今はまだよくわからないけど。

「スオウ……いつまで無視しちゃうつもりかな」

「っ！！」

僕の体に戦慄が走った。ダメだ……怖すぎて声の主を見れない。てか、まだ待ってたんだ。セツリは一途なんだね。

こうなったら言うしか収まらないのか？　その時、セツリの手からピクを自身に戻したシルクちゃんが何か耳打ちしてる。

「スオウ君は……だから……ね。……だよ」

何を言ってるのか良く聞こえない。火に油を注ぐ事じゃなければいいけど。するとセツリは僕の方をチラチラ見て頬を赤らめてる。何なんだろう。

「そっか……それじゃあ仕方ないね。それならそうと言ってくれればよいのに」

何？　何なの？　一体シルクちゃんは何吹き込んだんだ。訳が分からない僕にシルクちゃんはウインクしてくれた。助けてくれたって事でいいのかな？

なんだか変な誤解が生まれてる気がするけど。するといきなり大人しかったテッケンさんがいきなり声を上げた。

「そうか！　分かったぞ。ピクは近々実装それると言われてたサポートモンスターだよ」

「サポートモンスター？」

なんだっけそれ？　周りの熟練の部類のシルクちゃんや鍛冶屋、ＮＰＣであるサクヤなんかは「ああ～」とか唸ってる。

でも僕やセツリはさっぱりだよ。するとテッケンさんは説明してくれる。

「ほら、このＬＲＯって広大な割に移動手段が乏しいじゃないか。一度行ったことがある街とかなら転移出来るけど基本足で開拓だよ。目的のダンジョンにも飛ぶことは出来ないしね。

取り合えず移動手段が乏しすぎたんだ。ＮＰＣが使ってる乗り物は運賃を払う以外使えないし……そこでプレイヤーの強い要望で近々実装されると噂に成ってたのが、普通のモンスターの飼い慣らしか、サポートモンスターの導入だよ」

なるほど、それはなかなか魅力的な事だ。つまりここに居るピクがそのサポートモンスター第一号と言うわけだ。でも移動手段って事はこの小さな体でマスターを運んでくれるって事だろうか？

「多分、まだ運ぶ事は出来ないんじゃないかな？　サポートモンスターは成長するんだよ。マスターと共に戦えるしそのたびに経験を蓄積して成長していく。
　最終的にどうなるのかはわからないけどね。多分ピクの実装は実験的な物じゃないのかな？」
「私が上手くピクを育てられたら実装されるって事ですか？」
　シルクちゃんに全部一任はしないだろうと思うけどね。
「そう言う訳じゃないよ。上手くシステムとして機能するかを見るんだろう。それで良好なら実装される筈だよ。堅く成らずにピクを育てればいいよ」
　テッケンさんの言う通りだと僕も思った。実装前にそのモンスターを得られるボーナスみたいな物だよね。イベントで得たんだから実験に使われちゃイヤだよ。
　殆どシルクちゃんは何もやってないけど……今更そんな事蒸し返しもしないよ。
「そうですね。ピクと一緒にこれからがんばります！」
　シルクちゃんの言葉に反応してピクが大きく鳴いた。本当に良く出来てるな。実装されたら肩にピクを乗せた人達が街に溢れる事に成るのだろうか。
　すると僕の考えをサクヤが否定した。
「それは有りませんね。実装される予定のサポートモンスターの中にピクと同種のドラゴンは居ません。文字通りイベント限定先行の特別仕様と言う所でしょう」

そうなんだ。確かにピクは綺麗すぎると言えるもんね。こんなスペックで大量生産は流石のＬＲＯでも無理なのか。

「それにサポートモンスターの取得の条件はそう簡単には成らないと思います。よって実装後もそう見るものでは無いと思われますね」

結構な難易度なんだ。確かにピクじゃないにしても色々と便利で助かるだろうサポートモンスターの取得はそう簡単には出来ないだろう。

激レアだねシルクちゃんは。するとその事実を知って再び申し訳なさそうなシルクちゃんが目に入った。

「そ、そそんな貴重な物を……ごめんなさい！」

「はは、もういいって」

本当に律儀な子だ。誰も気にしないのに。それにシルクちゃんの肩に乗るピクはとってもお似合いだ。様になってると言って良い。

街を普通に歩くだけで注目されそうだ。どっかの白フクロウとは雲泥の差だな。するとそう思った瞬間何かが後頭部に刺さる感触がした。なま暖かい物がうなじを伝う。

「いってぇぇ！　何するんだクー！」

おかしいだろ。心が読めるのかお前等！　なんて優秀なＡＩ達だ。すると僕を助けるためかピクが飛んできてクーに襲いかかった。

「ピク！」

「クー！」

二人のマスターが同時に叫んだ。二匹の攻防は僕の顔の周りで激しさを増していく。クーの声が超音波みたいに頭に響く。そしてピクは炎を吐いて僕の顔を焼くんだ。

「や、止めさせて……」

ＨＰは減らないけど怖いよ。それにどうやらピクは僕を助けに来た訳じゃ無いみたいだ。二匹の間にはマスコットを掛けたライバル意識が目覚めたのかも知れない。

なんだか同じ立ち位置だしね。

「ダメだよピク！」

「止めなさいクー」

そう言って二人のマスターがそれぞれ二匹を抱き抱えて止めるまで攻防は続いた。冗談だったのになんて災難に発展したんだ。僕ってそもそも運が悪いのかな？

そもそもあの両親の元に生まれたのが運の尽きだったのかも知れない。そんな事を考えてるとなんだか変な臭いが漂ってくるような。そうだな、まるで髪の毛が燃えてるような……

「スオウ！　頭が大変に成ってる！」

僕の髪の毛は度重なるピクの炎でシステムの壁を打ち破って炎の花を咲かせていた。なんてこったぁぁぁ！

その場に満ちた笑い声を僕は一生忘れない。助けろよ！

事の収まりと、頭の鎮火が済んだら僕たちは再びテーブルを囲み今後の事を話す事にした。これからどうするのか、どうすればいい

のかは重要な事だ。
僕たちの目的はアンフィリティクエストの達成。そしてセツリを現実へ戻す事だ。それもなるべく早く。イベントなんかに参加してる場合じゃ無いのに何やってんだ自分と言いたい。
まああれは不可抗力。仕方ないことだった。それに殺伐とした空気の中にずっと居たくはないしね。楽しめる時には楽しまなきゃ損だから。それが楽しく人生とい労苦を生きるコツ。
これ、僕のモットーね。
はてさて、僕は目的を提示してみんなの様子を伺う。シルクちゃんもテッケンさんもサクヤも頷くけど後の二人はどうだろう。
鍛冶屋はまあそこまで深く付き合ってる訳でもないし、仕方ないとして……なんでセツリが乗り気じゃないんだよ。

「私はやっぱり怖いよ。あの時スオウに言った帰るってのはここであってリアルじゃないもん」

セツリの言葉に場が静まる。それはそうだろう。僕達は助けたいと思ってるけど、本人はそれを求めてない。望んでない。それじゃあ僕達はただの親切の押し売りなんだ。それは迷惑って事……そんなことを言われるとどうしてもやる気がね。
でも引く訳には行かない。必ず現実に戻さないときっとセツリは……。その時、向かいのセツリの隣に座るサクヤの視線とぶつかった。なんでこっち睨んでるんだよ。分かってるからそんな目向けるなよな。
僕は身を乗り出してセツリに詰め寄る。

「僕があの時言った場所はここじゃないよ。この先だ。これ以上こっちに居るのはダメなんだ」

僕の言葉にセツリは顔を背ける。そして続いてシルクちゃんが続

いた。

「そうだよセツリちゃん。一回出た方がいいよ。私達も協力する。もう友達だし、リアルでも会いに行くよ」

シルクちゃんの優しい言葉。セツリはポツリと言った。

「私は向こうの自分がイヤなの。見たくない……見せたくない。だから帰りたくも無いもの」

セツリは現実の自分が嫌いだ。それは分かっていた事なんだ。ここＬＲＯはセツリの描いた世界。彼女の好きなものが沢山ある。

当夜さんは一体なんでこんな世界を造ったのだろう。セツリを助けたいのか助けたく無いのか分からなく成るよ。セツリの言葉に今度はテッケンさんが思いを込めた言葉を繋ぐ。

「セツリちゃんはもう昔の君とは違うと思うな。ここで出会った僕達を本物だと思ってくれているのなら、リアルでもそうあれるよ。君はもう、どこにも一人じゃないんだよ」

セツリの肩が一瞬震えあがった。言葉は確実にセツリの心に届いてる。だけどまだ足りない。

「でも……私の生活は何も変わらない。白いベットの上で四角い空を眺めるだけ。一人じゃ何も出来ないの……そんなの……ヤだよ」

セツリの頬を涙が伝う。リアルにはセツリが恋しく思える物はないのか？　辛い事しか本当に無かったのか？　僕には分からない。僕はそこまでセツリの過去を知らない。

その時、震えるセツリの体をサクヤが包んだ。

「だからセツリはもう一人じゃ無いでしょう。いいえ元から一人では無かったではないですか。大切な人に、一番セツリを思ってくれてる人にもうずっと会えなくて良いんですか？
それにこれまで出来なかった事はこれから出来るように成れば良いんですよ。私も三年前とはセツリは違うと思います。大丈夫、それにリアルでの味方は一人増えてますよ」

そう言ってサクヤは僕を見る。でも僕はサクヤを見返してしまった。何言ってんだこいつ……だって当夜さんは、その時サクヤは指を唇に当てた。
その意味は万国共通だろう。まさか、セツリはそのことを知らないのか？　いや、考えてみればそうだ。当夜さんはセツリが仮想の深部に行った後に二年を掛けてＬＲＯを作りそして同じように……。
その事実を僕達が言ってないんだから、三年も眠っていたセツリが知るはずがない。嘘を付く事になるけど、それで少しでもリアルに戻る気になるのなら。

「帰ろうセツリ。必ず僕が……いいや、僕達が当夜さんの所まで連れて行くよ。その時は二人で当夜さんに冒険探を聞かせてあげよう。きっと喜んでくれる。セツリが望む幸せはきっと向こうにもあるんだよ」

僕の言葉にセツリはサクヤの腕で顔を上げた。

「本当に……スオウも居る？」
「勿論だ。二人でって言ったろ。いつでも、どこでも居てやるよ」

セツリは涙を流す顔に笑顔を浮かべ僕の方に掌を上に差し出した。
僕は自分の手をその手に乗せて二人で握り合った。

「私……帰る」

小さく紡がれた言葉は僕らに希望の火をつけた。その時宿屋のドアが勢い良く開かれた。

そして現れたのはメイド姿のハイテンションガールだった。

桜色の小竜と目的の証明（後書き）

第二十八話です。ここら辺はちょっとスローペースな感じになってしまいました。でもこの後は怒涛の展開が……起きるかも。とにかく次まではまだセンラルトです。

アンフィリティクエストが終わるまではＬＲＯの世界を余り広げたく無かったけど、そろそろ治まり切らなくなりました。では次の展開に願いを込めてサヨナラです。

メイドスパン！（前書き）

僕達が水かけ祭りに興じる数時間前。ある場所で一人のプレイヤーが遭遇したのは信じられない光景だった。目の前で崩壊していく物はあり得ない筈だったんだ。

宿屋に入って来たのはメイド姿のエルフの女の子。その子はどうやらアギトに用事あるようで……だけど何故かバトル的展開へ！？

しかし無用な争いでは何も得られる事なんて無くて……代わりに僕は大切な物を失う。

そして馬鹿げた戦いを止めた後に彼女の口から告げられたのは衝撃の事実。僕達はそれを確かめるためにもエルフの国に行く事にした。

メイドスパン！

ここＬＲＯはおかしくなってる。とある一人のプレイヤーはそう思い、必死にその場から逃げるために駆けていた。　辺りは闇に包まれた森の中。でもそこかしこから赤い瞳の煌めきが自分を追っていると確信していた。彼は必死に救援コールを辺りに巻きながら助けが来るのに淡い期待をしながらも自身で生きる努力もやっていた。

救援コールと言うのは戦闘で自分が倒されそうに成った時や、自分より強力なモンスターにアクティブされた時なんかに近くのプレイヤーに助けを求めている事を知らせる行為だ。

基本戦闘中のモンスターは自分自身かパーティーメンバー以外は攻撃出来なくなる。だけどこの救援コールを発したときはその場に居合わせた誰もが例外無くそのモンスターに攻撃出来る様になるんだ。

勿論そうしたらその戦闘で得られてた筈のスキルの熟練度とかはリセットされる訳だけど戦闘不能時のデスリスクに比べれば一回の戦闘分を犠牲にする方がいいんだ。

だけどいかんせん、その場には運悪く彼しか居なかったようで救援が来る気配はなかった。いや、元々が彼しか居なかった訳ではあるまい。この森は職人系のスキルを上げる人達が良く出入りしてたんだ。

かく言う彼もそのスキルを上げる為にこの森に足を運んだ訳だった。近くの村からそう離れて無く、広大な森にモンスターの分布はまばらで、自然の恵み溢れたこの森はとても魅力的な素材調達の場と知られていた。

それにここには最近見つかった泉に、それと連動してある噂が流

れている。その泉の水を使えば『神酒ネクタル』というクエストアイテムが作れるという噂だ。
だからここに一人なんてあり得ない。けど救援コールに反応する声は一つもなく、森を埋め尽くす程の赤い瞳は今も彼を追っている。
「何なんだよ一体……どうなっちゃったんだよＬＲＯ！」
彼のそんな叫びは夜の森に空しく欠き消えていく。考えられることはあった。ここ数週間の間でＬＲＯに異変が起きてるのはＢＢＳで散々言われてた事なんだ。
出詰まってたクエストがいきなり大量に放出されたのもその異変の一部とも言われている。
絶対に達成できないクエストや倒せない敵の出現の情報も見ていた。そしてここ最近で言われてたのはモンスターの異常発生の噂だった。
通常、一つのフィールドに出現するモンスターはある程度決まっている。一度も目撃例も無いモンスターがたまに見つかったりもするけど、それはとてもレアなモンスターで今まで存在が知られなかっただけ。
だけど今噂に成ってるのはそう言うレアじゃなくモブなんだ。噂ではそこらにいる普通のモンスター。特に『知能』を持つとされる獣人系のモンスターがそこかしこのフィールドに突如大量に流れ込んで来るというものだった。
だけどそれを読んだときはそんなの噂だよとあしらった。そんなことが管理されたＬＲＯで起きる訳がない。起きたとしても何らかのイベントの一種で事前に告知される筈なんだ。
だけど彼は今日その噂に遭遇した。ＬＲＯに入る前にキチンとイベント情報は確認したけど、今日あるのはセンラルトの水かけ祭りだけだった。
そのアイテムも噂通りなら興味あるけど、競争率の高さからイベ

ント参加しないで今日は空いた狩り場でのスキル上げを選んだわけだ。
そしてここでスキル上げをすること小一時間。夜の帳も深まり、順調にスキルを上げていたときの事だ。

「ウアァァァァ！」

突如森の中に響いた悲鳴に彼は辺りを見回した。そして届いたのは今彼が絶賛発散中の緊急コールだった。彼は迷わず武器を手に取り走り出した。
このＬＲＯだけのマナーじゃない。オンラインＲＰＧの原則は助け合いだ。だから余程の冷たい奴でも無い限り、そのフィールドにいる誰もが緊急コールには応えてくれる。それが当然で、当たり前の行為なんだ。
だから彼は走った。そして見た光景に戦慄した。
草木を揺らすほどの激しい息の吐く音と唸りの不協和音がそこには木霊していた。森の深い闇に浮かぶ幾つのも赤は最早数え切れない程だった。
よく見るとその中に一人のプレイヤーが沈んでいた。だけど彼は動く事が出来なかった。これだけ大量のモンスター相手に彼一人ではどうする事も出来ないと分かっているんだ。
明らかにおかしな状況だった。そもそもこの森に獣人系のモンスターは居ない筈だ。それがどういう訳か大群でそこに存在している。まさに噂通りの事が起こっている。

「た……たすけ……て」

不意に頭に響いた声に反応して前を見ると、その場に倒れていたプレイヤーが彼に気付いて腕を伸ばしていた。だけどその瞬間、一斉に赤い瞳が彼を捕らえた様に振り返った。

恐怖と戦慄が彼の身と心に襲いかかった。そして逃げずには居られなかった。緊急コールに応じる事が出来るのは自分がやられない前提の元でもある。
そこにリスクが大きくあれば逃げることだってやむなしだ。誰かを助けに入ってやられたんじゃ助けるべき相手にも無駄に気を掛けることになるし、それは誰もが承知してる事でもある。

緊急コールに応えたプレイヤーはモンスターを倒した後は颯爽と何も語らず助けた相手が無事なのを確認して去っていくのが常なのだ。
そしてその背中に助けられた相手は感謝の言葉と礼を一言いうくらいだ。それ以上はどっちも求めてなんかいない。

だからそれは仕方ない……相手もこの状況なら一人ではどうする事も出来ないと分かってる筈なのに……後ろから聞こえる悲痛な叫びはいつまでも耳にへばりつくように聞こえていた。
そして彼もこんな事は初めてじゃ無いはずなのに罪悪感で胸が押しつぶされそうだった。それなりにスキルを身につけるまで誰かを助けるなんて行為はＬＲＯでは命取りだ。
だからここまで自分を育てて普通に誰かを助ける事が出来る様になった彼には、久しく忘れていた感情が蘇った様な感覚だった。
罪悪感……それは普通のゲームでは絶対に味わわない事なのにフルダイブと言うゲームはそれを簡単に伝えてくる。なぜなら目の前には生きたプレイヤーが居るからだ。　助けなかったとき、守れなかったとき、あまたの感情はフルダイブでダイレクトに伝わる。彼らプレイヤーはここで生きてるんだから。
何かが大きく地面に叩かれる音と共に叫びは消えた。もう歯を食い締めて走るしかない。だけど直ぐに無数の足音が彼に迫っていた。

森を出て草原を進み、目指すべき村はもう直ぐそこだった。逃げきれる……そう思い少し安堵の気持ちが上がってきた。何故なら幾ら多いモンスターの群でも村や町まで入る事は決して出来ない。プレイヤーにとっての絶対安全な場所でモンスターにとって不可侵な場所なんだ。

ようやく見えた木で作られた外壁に更に彼は安堵した。恐怖は体の外に溶けていき、重かった足取りも軽く感じれた。そして彼はそのままの勢いで村に駆け込もうとした。

だけどその時、本当の本当の本当に信じられない事が起こったんだ。幾多の叫びが村から聞こえてきた。そして村を囲むように作られていた木の外壁が壊され出てきたのはモンスターの群だった。

外壁はそこかしこから崩壊して地面に土埃を巻き上げる。そして現れた村の光景は旅立つときのそれとは明らかに異なっていた。

彼の思考は目まぐるしく回り、そして停止した。おかしな夢を見てる感じだった。迫り来るモンスター達もどこか遠くに感じれた。

一体のモンスターがその巨大な口を開ける。そこには鋭い牙と汚らしく落ちていく涎が見えた。間違いなく彼は食べられようとしてる。

だけどその牙が届く前に通った声がその動きを制した。モンスターの動きにどこか統制が見れる……そんな事あるわけがないのにそんな考えを否定するようにモンスター達は声の主に道を開ける。

崩壊した村を優雅に歩くその姿が彼の目に映った。その瞬間これは夢だと確信した。だって目の前から歩いてくる女性は余りにも美しすぎる……あまたの美女がここＬＲＯには居るけどその女性は別格だった。

その身に纏う気品や品格と言ったものが歩く所作だけで息が詰まりそうになるほど感じれた。まるで女神……彼はそう思った。

彼は夢の中、幸せな気分に包まれて自身の体が消え去るのにも気付かなかった。彼のＨＰはいつの間にかゼロになっていたんだ。

その姿をあざ笑うかの様に目の前の女神が口元に笑みを浮かべた。

そして女神は彼に向かって言い放つ。

「伝えるがいい人間。この世界に、既に貴様等の安寧の地は無いと言うことを」

幸せな気分のまま彼はその言葉に頷く。そして女神が満足気に浮かべた笑顔はとても神々しく、消え去るその瞬間まで彼はその女神に魅了されていた。

「しっつれいしっま～す！　ここにアギト様はいらっしゃいますか？」

突如宿屋に元気ハツラツな少女が入ってきた。メイド服姿でショートの髪にカチャーシェをつけた耳長の女の子。エルフ族だね。てか・・ああ、アギトね。忘れてた。

「そこで伸びてるのが様をつける程の奴かは疑問だけど、アギトなら君の足下だよ」

「ふにゃぁぁ！」

僕の親切な言葉に奇声を上げてその子はアギトから飛び降りた。その瞬間「げう」と聞こえたけど彼女の元気過ぎる運動の不可抗力だろう。気にすることはない。

「なんておいたわしやアギト様～」

そういってメイドの少女はアギトの顔を自身の控えめな胸元に持っていき抱きしめている。なんだか変な光景だな。僕たちが呆気に取られてると鋭い眼光が飛んできた。

「ふん！　ヒューマにモブリにスレイプルですか。我らエルフにはにべも立たない弱小種族なんかといるから……」

なんだか失礼な事言われてるけど、僕にはどういう事なのかいまいち分からない。するとテッケンさんが説明してくれた。

「ＬＲＯには領土を巡る戦いがあるんだよ。種族間でね。そこで今一番広くこの世界を納めてるのがエルフなんだ。だから彼らの中には自分達が優秀な選ばれた種族なんだと思うのも少なからず居るわけだよ。

幅を利かせてるって奴だね。そいつらはああやって他の種族をバカにする。意味も無いことだよ」

「何を！　その小振りな肢体を切り刻んじゃうぞぉぉ！」

メイドさんはテッケンさんの言葉にカチンと来たのかスカートの中に隠し持っていた暗器に手を伸ばす。めくれたスカートから見えたんだ。彼女の白い太股に巻かれた黒いベルトには銀色の掌に収まる位の武器が数本等感覚で刺してあったのが。

あんな武器もあるのかと僕は思った。別に少女の長いスカートの中に隠された真っ白な太股に興味があったわけじゃないよ。断じて。だから後ろで殺気を放つセツリをどうにかしてくれ誰か。

さっきまで涙まで流して感動してたのにその涙は今や怒りに変換されている。切り返しが早いよね女の子って。

「う……あ～、あれ？　決めポーズ談義はどうなったんだ？」

その時今更になってそんな事を言うアホが目を覚ました。するとメイドの少女は途端に晴れやかな顔を作ってアギトを見つめる。

「ご無事で何よりですアギト様。さぁ、こんな弱小種族どもとは縁を切って我らがホームタウンに帰りましょう。ええ今直ぐに！」

途中まで穏やかに喋っていたメイドの少女は途中から鬼の首でも取ったように激しくなりアギトの襟首掴んで扉の方に引きずり始めた。

びっくりする行動力だねこの子。

「いててててーーってなんでお前が居るんだよ『セラ』！　俺は自由になったんだ。誰が戻るかぁぁ！」

なんだか目の前で無様な戦いが繰り広げられてる。セラと呼ばれたメイド服の少女はやっぱり知り合いなんだね。

「達観してないで助けろスオウ！」

「え～その子滅茶苦茶怖いんだけど」

だってその言葉の直後に躊躇いもなく武器を抜いたよあの子。僕を射殺す気マンマンだよ！

「ふざけるな！　町中じゃどうせＨＰは減らないだろ！　早く動かないとお前の恥ずかしい過去をボリューム最大で叫ぶぞ！」

「僕の親友に何しやがんだぁぁぁ！」

僕はシルフィングを手にとって走り出した。女の子に手を挙げるのは信念に反するけどこれも掛け替えの無い親友の為だ！　それに運良く後ろの殺気からも逃げれた。

「ふふ、私達の間を邪魔するなら例えアギト様の親友でも、いいえ！　親友だからこそここで消えてもらいましょう！」

なんて奴だ。自分とアギトを認める奴らだけで周りを埋める気だなこいつ！　なんて策士なんだ。アギトが戦々恐々してるのが分かる！

「そんなことさせるか！　親友の貞操は僕が守ってみせる！」

僕達は互いに激しく攻防を繰り返した。無益な攻防だ。決着なんて付かないんだからね。だけど無益な割に損害は出た。

何回目かのつばぜり合いの時だった。不意にシルフィングからイヤな音が聞こえたんだ。そしてセラが距離を取り、武器にエフェクトを纏わせて放った一撃で甲高い音を立ててシルフィングが根本から折れた。

「なっ！」

僕は信じられなかった。いいや信じたくなかった。今まで数々の戦線を潜り抜けてきた頼もしい相棒がこんな所で居なくなる訳がない！　だけど折れた刃は僕の頬を掠めてみんなが居るテーブルに突き刺さった。

「終わりじゃないですか？　これで一つ席が空きます！」

セラの攻撃が僕に迫る。僕にはもう、攻撃も防御も出来ない。その時、アギトの槍が横からセラの攻撃を叩き落とした。

「そこまでだセラ。これ以上は怒るぞ」

「うぅ……ごめんなさい」

アギトに睨まれて小さくなるセラ。これで一応のケリは付いたけ

ど僕は既にそんな事どうでもよかった。そしてそれはどうやら鍛冶屋も同じらしい。

「ななななシルフィングゥゥゥ！！！！」

鍛冶屋はテーブルに突き刺さった刀身を震える手で抜いた。その動作は我が子を抱く母親の様だ。僕も自身の手に残った柄を見やった。

「シルフィング……どうして……」

半身を失った様な気持ちだ。こんな事想像もしてなかった。と言うか今まで何とも無かったのに突然どうして？

「鞘だ。お前が鞘を無くしたせいだろ！」

鍛冶屋の怒気は僕に向かった。鞘って……あれは入れ物じゃないのかよ。

「鞘は只の剣の収納物じゃない。特にシルフィングクラスの剣は鞘も入れて完成形なんだ。それが無くなったから耐久値がリセットされずに蓄積し続けてお前の無闇な扱いで折れたんだ！」

なんてこった……全て僕の責任か。ごめん、シルフィング。今更言っても遅いけど、これしか言えないよ。

「どうにか出来ないのか？　なぁ鍛冶屋。僕が言える事じゃないけど頼む！」

僕は頭を下げる。礼の限りを込めて頭を下げ続ける。こうなった

ら良い返事が貰えるまで上げない。何か方法はないのか？　折れた剣を打ち直す事は出来ないのかよ！

今、武器を失う訳には行かないんだ。これからだって戦いは続く。武器が……シルフィングが無くちゃ僕は何も出来ないんだ。

「鞘を戻すだけなら用意もしてきたし簡単だった。だけどな……折れた剣自体を打ち直すスキルはないんだよ」

「そんな……」

それじゃあシルフィングとはここでお別れなのか？　普通に考えればこんな事当然なんだろうけど、僕にとってシルフィングは特別な相棒だったんだ。

シルフィングを握る度に勇気が沸いて来た気さえした。それなのに……元々僕には早すぎた分不相応な剣だったのに……こいつはいつでも僕に応えてくれた。

ＬＲＯでも無いセツリの世界でも僕の思いに力を貸してくれたんだ。それなのに……まだまだ全然早すぎるよ。このままお別れじゃありがとうも言えないじゃないか。

流石にこんな僕らを見て違う武器を使ってスキルを稼いで行くのがＬＲＯだよ、なんて無粋な事を言う奴はここにはいない……筈だった。

「そんなにその武器が良かったなら同じ武器買えばいいじゃん」

それは初対面で僕の相棒をへし折った奴の言葉……許せない。僕のせいも大いにあるけど無駄にシルフィングを使わせたこいつにも多少は責任あると思うんだ。

「こいつは相棒だったんだよ。初めてＬＲＯで僕が手にした掛け替えのない武器なんだよ。同じ形してるからってな、それはこいつじ

ゃないんだよ！」

僕は声を荒げてセラを見た。メイド姿の少女は僕の言葉を聞いて「ふ～ん」とか呟いている。てっきり罵声でも返されるかと思ったけどそれは無いようだ。

するとセラに捕まれたアギトが僕との間に入ってきてセラを覆い隠す。僕を落ち着かせる為の行為かはたまたセラを庇ったのか謎だ。

「酷な様だけどさスオウ。これから強く成って行くには他の武器を使わなきゃ行けないのは当然なんだ。ＬＲＯの強さはスキルに依存してるんだからな。

感情に流されて目的を見失うな。お前のやるべき事はなんなんだ！」

アギトの言葉が僕の心に突き刺さる。確かにお前の言うことは正しいよ。僕はセツリを助けなくちゃいけない。それには強く成らなきゃいけない。

それは沢山の武器のスキルを集めるのが一番なんだろう。それを考えると一つの武器に依存するのは愚かな事なのかも知れない。シルフィングのスキルは既に全部会得してるしそしたら武器を変えるのがＬＲＯで成長していくって事だ。

アギトの後ろではセラがメイド服を揺らして

「きゃーアギト様カッコいい」

とか言ってるのが無駄に聞こえてくる。僕は席に着いてるセツリを見た。するとセツリは僕に笑顔を向けて言ってくれた。

「スオウにはあの青い輝きが合ってると私は思うな」

それは優しく心に響く。だけど

「セツリそうは言っても元に戻す方法は無いのですよ。諦める以外にありません」

サクヤがそんな事を言う。妙に声を張り上げてバカにしてるのかあいつ。だけどその時、意外な声が希望を告げた。

「あっるよ～。実を言っちゃうとその武器を直す方法あっちゃうのだ！」

その声はアギトの後ろ……見えたのは頭に着いたカチェーシェ。給仕なんて出来なさそうなメイド、それはセラだ。今なんて言った？

「どういう事だよセラ」

アギトが後ろのメイドに問いかける。

「アギト様は最近戻ってないから知らないでしょうけど最近ある森で『復活の泉』と呼ばれる物が発見されちゃいました。そこでなら――」

「シルフィングを元に戻せるって事か！？」

僕はセラの言葉を強引に奪った。それに気を悪くしたのかセラは何も言わない。

「そう言うことなんだなセラ」

だからアギトが引き継いだ。すると

「さっすがアギト様、天才！」

超ノリノリで応えた。なんなのこの子。でも次の言葉はいつになく真剣な声でセラは言った。

「だけど問題があるんです。その森に一番近かった我らエルフ領の村『タゼホ』が今朝、襲撃されました」

その言葉にその場のみんながセラを見た。

「襲撃って……どこの種族にだよ？　いや、でもそんな動きどこも……」

動揺するアギト。僕達も同じだけど続いた言葉は更に衝撃的だった。

「他種族ではないんです。『タゼホ』を襲ったのは……モンスターなんです」

腰の前で両手を組み、初めてメイドとしての気品を見せたセラの言葉が嘘だとは思え無かった。

「ホームで緊急対策会議が行われます。そのためにアギト様を連れてこいとの事です。来てくれますよね？　アギト様の親友を語るバカは行く来マンマンみたいですけど」

バカって僕の事か。だけど聞き捨て成らない事だ。僕はアギトと目を合わせる。

「分かったよ。戻ろう、エルフの国『アルテミナス』へ」

これで僕達の次の戦いの場が決まった。

メイドスパン！（後書き）

遅くなりました。明日の分がまだ書きあがって無いから今日はこの位で失礼します！

輝きの国『アルテミナス』（前書き）

僕達はアルテミナスに降り立った。そこは今までとは違う景観、違う匂いで僕はこのＬＲＯというゲームの広さを感じた。

すると周りに出来る人だかり……目当てはやはりピクだ。プレイヤーの稀有の目線は想像以上だ。そこに突如響く声。現れたのは赤い甲冑に身を包んだ一人のエルフ。

そしてそのエルフに連れられて僕等はアルテミナス城の中へ。そこで見た一人のプレイヤーはとてもこの国で重要な位置に居る存在だった。

輝きの国『アルテミナス』

光の柱が収束していく。僕達はシルクちゃんの転移魔法でエルフの国『アルテミナス』へ降り立った。今まで行っていた所はやっぱり人の国の方なんだ……そう思えるほどアルテミナスは景観が違った。

「エルフの国アルテミナスの首都アルテミナスは一番エルフの色が出てる街だからな。他はそうでも無いんだぞ。別段、今までの町や村と変わりはしない。ただここは首都だからな」

そう言ってアギトは自分の故郷を懐かしむ様に息を吸い、周りを見渡していた。

今までの石造りの西洋風とは全く違う。これはもしかして大理石という奴だろうか？　地面に満遍なく白い石があってそれに当たった光はそこかしこに点在してるクリスタルに当たり、七色の光を内包して輝いていた。

建物はその光とは対照的に落ち着いた色の煉瓦作りが主流な様でどれも大きくて豪奢な物だ。どこもかしこもちゃんと整備された街作りが印象的に映るのにたった二箇所だけは異質な感じ。

それは二つともエルフの国アルテミナスを象徴する建物らしい。

「目の前のあれがアルテミナス城で右向こうに見えるのが光明の塔と呼ばれる巨大クリスタルだよ。どうだい？」

何故かアギトに変わり得意気に話すのはテッケンさん。この人は特に人の世話を焼くのが好きなようだ。いや、話すのが好きと言う

こともありそうだけど。

「スッ――――――ゴく綺麗！」

「だな」

僕とセツリは素直に今の気持ちを言った。言葉が突いて出るとはこう言うのを言うのかな。目の前のアルテミナス城は左右の造りが違う……いや、素材が違うのかな？　二対の異なる先端部分が空に伸びて色は白と黒って……なんでそんな風になってるのか謎だ。

それから光明の塔と呼ばれる巨大なクリスタルには圧巻の一言だ。結構まだ遠いけどその輝きはこの距離でも感じれた。だけど光を受けて光ってる訳じゃなく内側から淡い光を発していて、鼓動の様に強くなったり弱くなったりしてる。光の凝縮された形って感じ。

不思議な感覚だ。地続きの筈なのにこんなにも変わる物なんだ。それはきっとリアルでもそうなんだろうけど。勿論ここまで外観は変わらないだろうけど文化とか風習なんてのは世界で本当に千差万別なんだ。

僕とセツリは初めてのエルフの国に興奮しっぱなしだ。サクヤとかも初めてだろうにクールなもんだ。ＡＩだからそこら辺はまだ抜けてるのかも知れないな。

それとも僕達がただガキなだけとか？

「俺だって最初は興奮したぞ。新しい街に入る時も前はいつだってお前達にみたいに……」

僕達の行動を見て呟いていたアギトの声が不意に途切れた。どうしたんだ？

「別に……ただそういう感動っていつの間にか無くしていくんだなって思っただけだ」

アギトの言葉に僕は首を傾げる。そういう物なのだろうか？　でも、そういうものかも知れないな。それが当たり前って奴なんだろう。

それが悲しい事なのか……嬉しいことなのかはわからないけどね。

「それでもさ、ここ最近は新鮮だったんだよな。お前がＬＲＯを初めて、セツリに会って、また俺の中の色褪せた部分に新鮮な染料が落ちてきたみたいなさ……」

なんだ？　キモいぞアギト。故郷に戻ってセンチメンタルにでもなってるのか？

「どうしたんだよアギト。お前なんかおかしいぞ」

僕の言葉にアギトは喉を鳴らして笑った。

「ククク、まあやっちゃったな～て思ってるって事だよ」

訳分からん。それはここに戻ってきた事を後悔してるって事か？

よく考えたら僕が始めるまでのアギトのＬＲＯでの一年間を僕は知らない。

ここにはいろんな人達がいるからいざこざだって当然起きるだろう。でも、もしそんな事があったとしても僕はその時ここにはいなかったし、いたとしても何かが出来たのだろうか？

アギトはここでの僕も良く知ってくれてるけど、僕はここでのアギトの事を実はまったく知らないんだと感じた。それはこいつが話さないってのもあるんだけど……調べようと思えばそれも出来るんだろう。

どういう風にアギトがＬＲＯを生きてきたか興味はある。だけど

それは墓を暴くように知ることじゃ無いと思うんだ。

「ん？」

なんだか周りがザワザワしてる。行き来してた人達が立ち止まり僕達の周りを囲んでいた。

「なんだこれ？」

「あっれでしょー。私も気になってたもん」

テンション高い声で僕の声に応えたのはセラだ。そしてセラが指さした方を見るとそこにはシルクちゃんの姿がある。ああ、成る程ね。

要するにみんなシルクちゃんの肩に乗っているピクに驚いたり興味を示したりしてる訳だ。ピクの珍しさは半端じゃないもんね。

今現在、サポートモンスターとしての存在はピクが唯一何だから注目されないわけがない。みんなそれは分かってないだろうけどピクを肩に乗せたシルクちゃんを見る度に歩いてた人は立ち止まる。

だからいつの間にか凄い人垣が出来ていた。シルクちゃんは多数のプレイヤーからの質問責めにあっている。

「そのドラゴンなんなんですか？」「一体、どうやって……」「ああ！　もしかしてもうサポートモンスターって導入されてんの？」

次から次へと降りかかる言葉の雨にシルクちゃんは首をいろんな方向に向けるしか出来ない。もともと大人しい子なんだ。勘弁してあげてほしい。同情しちゃう光景だね。

「静まりたまえ君達！」

その時シルクちゃんに救世主が現れた。僅か五十センチ位の小さな勇者。それはテッケンさんだ。

「君達が興奮するのも分かるがレディに対していささか強引だよ。彼女は見た目通りのか弱い女の子なのだからね。見たまえ、テンパってしまってるじゃないか！」

「わわわわ、あああの、このこのこの子は……」

まさしくテッケンさんの言うとおりシルクちゃんはテンパっていた。だから代わりに胸を張って彼は叫んだ。

「だから僕が彼女とその肩に止まるドラゴンに付いて説明しようじゃないか。さぁさぁさぁさぁ！　一見一聞の価値有りだよー」

なんだかショウを始めたぞあの人。本当に喋るのが好きな人なんだな。あれだけの人数の前で、あれほど堂々と喋れると言うのも一種の才能だよね。

既にシルクちゃんはマネキンと化している。いや、この場合はピクの止まり木なのかも。なんであれ可哀想だ。

「な～にやってんだかテツの奴」

「ほんとどこでも楽しそうにしてる人だよね。あれ？　所でセツリとサクヤは？」

アギトの言葉に相槌を打っているとそんな事に気づいたよ。シルクちゃんの方を向いてた間にセツリ達が周りにいない。

「おい、あそこ」

辺りを見回してるとアギトが二人を見つけた様だった。セツリと

サクヤは地面に刺さったようなクリスタルに目を向けている。
「ほんっとーに落ち着きがないんだから。困っちゃうわ」
セラのそんな言葉が聞こえてきた。人を田舎もんみたいに言うなよな。
「ここではエルフが一番なんだから、アンタ達は田舎者よ！」
なんて奴だ。種族なんて有ってない様な物でいいと思うんだけど。これまではそうだったよ。セラみたいに種族で優劣なんて誰もつけて無かったのにさ。
「フン！　愛が足りないのよ！　その分私は国と～そしてアギト様に全部ささ……きゃぁぁ、何言ってるんだろぅ」
なんだかその場でクネクネし始めたセラ。何なのこの子。言動が突飛過ぎて時々あっけにとられるよ。
「大丈夫か？　ココ」
僕は指で頭をコツコツ叩きながら指摘してやった。するとその瞬間僕の頬を何かが掠めた。後ろの方でカンッて甲高い音が聞こえた。
頬に水滴が流れる感覚がする。僕はそれを拭ってみた。それは赤い液体だった。
「あっれ～？　なんで血なんか出ちゃうわけ？　おっもしろ～い！」
そんな事を楽しげに言うセラに何かがプツンと切れる音が僕の中

で聞こえた。なんて危ないことしやがんだ！

「ふざけんなぁ！　死ぬかと思ったわ！　死ぬかと思った。いいやお前殺す気だろ！」

「今更、気づいちゃった訳？」

ダメだ。僕が生き残る術はヤられる前にヤるしかない。でも今、僕は武器を持ち合わせてない。このままではこっちがヤられる事確定だ。

「血が出ちゃうなんて、もしかしてちゃんと死んでくれるの？　試しちゃおっか」

くそ……万事休すなのか？　結局ゲームと思ってそんな事が本当に起こり得ると思ってないからやる気満々だなセラの奴。でもこっちはそんな脳天気になってられない。

武器さえ有れば……ん、武器？　僕の頭にセラに対してだけの最強の武器が思い浮かんだ。ふふ、やれるもんならやってみやがれ！

「これでもその武器を投げられるって言うんならな！」

「なっ……この卑怯者！」

僕がとった行動はとても簡単だ。アギトの後ろに隠れた。セラは気持ち悪い位にアギトを慕ってるからこれこそ奴にとっての最強の盾で矛だ！

「スオウ、お前まで何やってんだよ。それにセラもさ、止めろそういうの」

二人の間に挟まれたアギトが呆れ声でそんな事を言った。

「「だってこいつが！！」」

僕達はそれぞれ自分の正当性を訴えるように互いを指さす。人に罪を擦り付けようだなんてみっともない奴だ。僕達の言い合いは巻き込まれたアギトはさぞ、迷惑そうだった。

「何をやってるんだ貴様等は！」

その時、一際大きな声がその場に響いて空気が凍り付いた。

テッケンさんの演説はいつの間にか情報収集に変わっていたらしく様々なプレイヤーから『幻獣』やら『神酒』やら耳慣れないワードが出ていた所を断絶された。

そして現れたのは蒼い鎧に身を包んだ長身のエルフ。腰には立派な装飾が施された剣が輝いてた。

僕達の周りは一気に閑散とした。取り巻きみたいな横に控えた二人が集まってた人達を半ば強制的にバラしたみたいだな。で……誰？

「まったく、誇り高い我らエルフが余所者如きに何をやってるんだか。なあ、そう思うだろアギト」

いきなり知ってる名前を言ったアイツに僕はびっくりした。なんだ二人は知り合いか？

「ガイエン様、この通りアギト様をお連れいたしました」

さっきまで僕と言い合いしてた奴とは思えない程の切り替えの早さでセラが報告した。ガイエンが目の前のエルフの名前か。

「セラ良くやった。約束の物は後日でいいか？」
「いえいえ、今この場でないと困りますなぁ」
「ふふ、貴様も悪よな」
「いえいえ、ガイエン様程では……」
「「ふはははははは」」

なんだあの二人は？　おい！　そこで裏取引が行われてるぞ。だって国民的時代劇で良く見るよあのシーン。まあワザとだろうけど何かを受け渡ししたのはマジっぽかった。一体何をセラは受け取ったんだ？　「ピ……ピンナップ。はわぁぁ」とか言ってる。
誰の？　誰のピンナップなんだ？　もしかしてアギトのじゃないよな？

「ガイエン……」

その時、横のアギトが苦虫でも潰した様な声でそう呟いた。

「久しいなアギト」

二人の間になんだか奇妙な空気が流れてる感じがする。すると、横の取り巻きが何かを耳打ちしてガイエンなる人物は頷いている。

「そうだな、懐かしい友との再会に立ち話もなんだ。皆も待ってるし、では行くかアギト」

そう言って振り返り歩き出すガイエン。でもアギトは歩かない。拳を握りしめて何かに耐えてるみたいな……。

「どうした？　ついて来いアギト」

付いてきてないアギトに気付いたガイエンは振り返りそう言う。なんだろう、別に威圧的な訳じゃないけど……その口調には迷いがない。
それが当然みたいな。すると横のアギトが突然声を荒げた。
「俺は元々お前の下に付いてない！　その言い方止めろ！」
「「なっ！　貴様」」
横の取り巻き（きっと護衛）がそのアギトの言葉でいきりたち武器に手を伸ばす。だけどそれをガイエンが手で制した。
「やめろお前達。……ふ、そうだな。悪い、ついつい前のままで接してしまった。じゃあ、そうだな付いて来てくれるか？　そうそう、周りのお仲間の人達と共にな」
なんだろう……普通に見てるだけなら別にそんな悪い人には決して見えない。だけどこれだけアギトが警戒してるのを感じると、僕の中でもそれが生まれる。
僕達はそれぞれ信頼しあってるから、そういうのは共通だよ。
てか、ガイエンとか言う奴。今初めて僕達に気付いた様に言いやがった感じだな。見えてないのか？　弱小種族は？
「ほらほら、アギト様いきましょー。皆さんお待ちかねですよ」
アギトの手を取りセラが引っ張る。そしてようやくアギトも一歩を踏み出した。僕達もそれに続く。緊急対策会議はアルテミナス城の中で行われる様だ。
豪華な装飾品と調度品が惜しげも無く飾られた城の中を進み僕達

は一つの扉の前に付いた。扉も一つ取ってにしても、もの凄いこだわりで作ってある事がわかる代物だ。

「皆、喜ぶ。お前が戻ってきてくれた事にな。目に浮かぶ様だ」

扉の前に立ちそんな事を言うガイエンにアギトは睨みを効かせている。

「そんなことはいいからさっさと開けろよ」

アギトの暴言にイチイチ二人の取り巻きが反応する様は面白いけど、やっぱりアギトはさっきからおかしいな。

「たく、そんなに睨むなよ」

そう言ってガイエンは取り巻きが開けた扉の奥に進み行く。それに続いて僕達も入ろうとした時、制された。

「ここから先はエルフの国のエルフの問題だ。あなた方は別の部屋でくつろいでいなさい」

丁寧な言葉……なのに僕達に反論する余地はなかった。ガイエンはこっちを見ることもしなかった。この瞬間アイツは嫌な奴だと僕の中で認識された。

「おい！　アイツ等は関係無いって事か？　エルフとかなんとか言ってる場合か！　これは一大事なんだぞ！」

アギトの言葉にその場の椅子に腰掛けてる人々と、そしてようやくガイエンが振り返る。

「分かっている。だからこそまずは世界の中心の我らがその方針とやり方を明確に決めるんだ。それでこそ城下のさしては世界の不安は振り払われる」

やっぱり、ガイエンもエルフこそが上に立つ種族と思っているらしい。そんなに誰かの上に立ちたい物なのか？

「お前は……何も変わってないな。あの時のままだ」

アギトの言葉は相変わらず苦そうだ。一体何が二人の間で有ったのだろうか。その時反対側の扉が開かれて、沢山の甲冑が仰々しく現れた。

その中には一際目を引く女性が居る。外見は僕達とそうかわらなそうで、だけど身につけているそれは高いと一目で分かる。

それだけ彼女は輝いていた。装飾が……と言う意味だけど。パッと見た感じ彼女自身は暗そうに目を伏せていたしどこか喪失感を漂わせてたから完全に周りの宝石に負けてる感じ。

でも美人じゃない訳じゃない。凄く綺麗だし、胸を張って自信をつければ宝石なんかに彼女は負けないだろう。

「アイリ……」

不意にそんな言葉をアギトが口にした。その瞬間甲冑に取り囲まれた彼女は目を見開いた。そして僕達の……いやアギトを見た。

アイリと呼ばれた彼女は両手で顔を覆い、直ぐに涙を流した。そして甲冑の群から飛び出し、ドレスをめくり上げアギトに向かって駆ける。

だけどそれはガイエンに寄って阻まれた。何するんだコイツ。どうみてもさっきのシーンは感動の再会の場面。部外者が立ち入るな

よな。

「姫、お立場をわきまえてください。ここには下賤の物が居るのですよ」

そう言ってチラリと視線をこちらに向けるガイエン。ほっほ～下賤とは僕らの事か。てか、さっき『姫』と呼ばなかったかあの野郎。

「あの方は『アイリ・アルテミナス』特定の条件を満たしこの国の王侯貴族に直列した唯一のプレイヤーです」

僕は開いた口が塞がらない状況に陥っていた。何、ＬＲＯって王族に入れちゃうんだ。てか流石にこの場ではセラの奴ちゃんとメイド仕様になっててて二度びっくりだよ。

僕に対してあり得ない丁寧な答えをくれた。

「じゃあ、あの子はここでは本物のお姫様って事？」

セツリの疑問府にセラは首を縦に振って肯定する。でも、それならあの二人の関係が今度は気になるな。アギトとアイリ……それにガイエンも絡んでそうだけど一体どういう痴情のもつれだ。

「どきなさいガイエン！」

アイリの声がその場に響く。さっきまでの弱々しい印象を吹っ飛ばす様な力強さだ。だけど少女の言葉で目の前の奴は動くような奴じゃないみたい。姫なんだけどね。

「姫、アギトはもうここに戻ってきたのです。焦る必要は有りません。この後にでも……」

後に何をさせる気だ。その時、ぽつりとアイリの口から言葉がコボレた。

「そう言って……また」

また……なんだろうか。僕には察しようもないけどセラなら何か知ってるのだろうか？

「我が国の問題ですよ。他民に教える事じゃありません」

そう言われた。きっぱりした奴だ。もしかしたらこれはこれでメイドとして優秀なのかも。

「アギト……」

その時、アイリの拙い声が聞こえて前を見た。彼女は何かを期待してる様にアギトを見てる。この時アギトはどんな顔をしてたのだろうか？

僕はアギトの後ろにいたからそれを知ることは出来なかった。だけど二人がまた次第に離れて行くのは分かった。なんだかアギトは彼女に触れないように必死にしてる感じだ。

それはおかしな事だ。コイツは困った奴をほっとけない質で、一人で居る奴に初対面でも臆することなく話しかける奴だ。それも泣いた女の子なんて男が守るべき最優先事項だとか言いそうなのに……どうしたんだよ。

ついにはアギトは顔を逸らした。そして彼女の瞳は再び影を帯びた。落とされる腕……それを取ったのはガイエンだった。

「では、席に着きましょう姫。エスコートいたしますよ」

アイリはゆっくりとアギトから離れていく。今度は本当の距離だ。そしてアイリは一番前の一段高い席に付きその傍らにガイエンが立った。

「では、タゼホの件の緊急対策会議を始めよう。そこの部外者は早々に立ち去りたまえ」

部外者部外者ウルサい奴だ。お前の顔なんか見たくないから行くさ。けど、その前に――

「おいアギト。僕は別にお前に何も言えないけど……さっきのはお前らしくないぞ。無理には聞かないけど、話したくなったら言えよな。親友だろ」

僕はアギトの背中をど突いてそう言った。照れ隠しもあるけどね。するとアギトは少しだけ晴れやかに「ああ」と言った。そして僕達はこの場を後にす――

「あの！　貴方達は……アギトのお仲間ですか？」

――突如掛けられた声に振り返るとお姫様が頑張って立ち上がっていた。何かを……アギトとの何かを必死に繋ぎとめておきたいのだろう。

僕はその質問を肯定した。すると何か考えて言葉を出す。

「風の噂で、アギトは今アンフィリティクエストの攻略組だと聞きました。それでは貴方達の中にリアルへ返すべき人が居るのですか？」

その言葉にセツリは名乗り出た。周りはザワメいて、そんなのデタラメだ、みたいな言葉が飛び交う。だけど決意を決めた顔をしたアイリは全員に言い放つ。

「私、アイリ・アルテミナスの名において申しあげます。我らエルフはアンフィリティクエストの
攻略組にこの事態の解決の為の助力を求めます！」

彼女の視線と僕はぶつかった。僕はその願いに気付いたよ。だから大きくこう言った。

「その要請、乗ったぁ！」

そうして僕らは様々な思惑が飛び交う国という枠組みに飛び込んだ。それは自分の目的の為でもあるけど、親友の為だ。僕は知っている。アイリの指に輝くその指輪をさ。

輝きの国『アルテミナス』（後書き）

第三十話です。気が付いたらこんな所まで来てしまいました。どうか見捨てられないように頑張りたいと思います。ではまた明日です。

あの頃の情景（前書き）

高校に上がって何カ月か経った時の事だ。世間ではＬＲＯが話題を攫っていた時期。僕の親友の秋徒もＬＲＯに魅せられた一人だった。

ある日、秋徒は僕達にＬＲＯの事を話してくれた。普段は滅多に向こうの事をリアルに持ち込まない秋徒にしては珍しい事だ。僕と日鞠は勿論快く相談に乗ってあげるさ。それが親友って物だ。

秋徒の相談はいたって簡単だった。それは気になる子に指輪をプレゼントしたいというものだ。

あの頃の情景

その日は空に沢山の羊の大群が押し寄せ、澄みだした空気に季節の変わり目を感じるそんな日だった。白い校舎から照り返される日差しも柔らかくなり、緑から赤や黄色が目立ち出す季節。

そんな風に僕が日本の風情に思いを馳せている時、後ろからなにやら情緒をぶち壊す声が聞こえてきた。

「ぐお〜……がが……むにゃむにゃ……ごあ〜」

ここ最近毎日である。迷惑極まりない。僕は一般的な学生より勉強をする方と言う訳じゃないけど、決してまったくしないわけでもない。

テスト前とかにまとめて勉強をするタイプだ。そして今はテスト前な訳で僕は唯一の勉強促進期間をこの声に潰されてるというわけ。

どう責任とるんだ。僕が遂に赤点の大台に乗ったらさ。そしたら補修という刑罰が待ってるんだ。ついでに教師陣の小言がよく降り注ぐようになるというオプション付きだ。

この学校の教師達は今時珍しく熱血指導がモットーで誰かを見捨てるなんてしない。出来ない子には更に課題を、が当たり前だ。

だから一回でも落ちたらしつこい。目が厳しくなるからね。良いことだとは思うけど我が身に降り掛かると思うと遠慮したい。

「ぐあ〜……ががが、くが〜……うううう……」

ああ、もううるさいな。僕は後ろを振り返り、その頭に手を伸ばし髪の毛をおもいっきり引っ張ってやった。

「ぐが～がが……ががが！　いってぇぇ！」

奇声と共にそいつは目を覚ました。よしよし、これで僕の勉学を邪魔する奴は消え去った。ワックスで手がべたべたするしもう放すか。僕は髪の毛を掴んでいた手を放した。その瞬間に堅い物がぶつかった音が教室中に響く。

「ぶべ！！」

「秋徒君、何やってるんだね君は。頭突きを鍛えたいのなら我が空手部に入りなさい」

そんな教師からの注意で教室中で笑いが起こった。僕も笑わずにはいられないよ。だってまさか重力に従って勢い良く落ちるんだからね。起きたんじゃ無かったのかよ。

「スオウ……てめえ……」

恨みがましい声が聞こえるけど気にしない。だって悪いのは秋徒で今のは不可抗力だよ。僕はこれっぽちもあんな事が起きるとは期待してなかったし、考えても無かったんだからね。

目も覚めたみたいな秋徒だけどなんだか落ち着きがないな。今度は妙に椅子をガタガタしやがるんだ。コイツは僕に嫌がらせしかしないのか？　寝ても覚めてもさ。

「アギト、うるせぇよ」

僕は顔を少しだけ秋徒に向けて文句を言う。少しは落ち着けよ。すると秋徒はボケーとした顔を僕に向けて失礼な事を言う。

「今更、必死にノート取ったって何もかわらねーよ。ふぁぁぁ……」

なんて事を……それは今の僕に言っちゃ行けないワード、ワーストワンだ。必死に言い聞かせてる『やれば出来る子』が消えちゃうじゃないか！

盲目した親か、言い訳しかしなかった奴らがあの時を思って吐く都合のいい言葉。でもさ、そう信じたいんだ。『やれば出来る子』良い言葉だよね。夢を見せてあげられるし、自分も夢を見続ける事が出来る。残酷で優しい言葉。誰もが一度は言われたことあると思う。

「そんなのやってみなくちゃわかんないだろ。少しでも加算されればいいんだよ」

それで僕は赤点を免れる筈だ。いや、まあそこまで悪いわけじゃないけどさ、保険ってのは必要。

「……すぴー……」

秋徒の野郎、再び眠ってやがる。僕は諦めのため息を吐いてノートを閉じた。意味ないよこんなもん。誰にも勝る事も望まずに安全線を引くだけの行為なんて何も向上するわけない。

僕は空を走る羊達を見やることにした。

授業合間の昼休み。日鞠も加わった三人で弁当を摘んでいる時にアギトは雑誌をめくりながら言ったんだ。

「なあ、指輪ってどんな意味があるかな？」

んん？　唐突なその言葉に僕と日鞠は顔を見合わせた。秋徒は雑誌を見つめて独り言の様に呟いたから、それに応答していいのか一瞬分からなかったよ。

「指輪の意味？　なんだっけ？」
「それは繋がりとか、輪廻とかじゃないかな？　後はやっぱり指輪は『好き』や『愛』を込めて贈るものよ」
なんだか日鞠の視線が間近に迫ってるんだけど……何を想像してるんだよ。
「私はいつでもスオウの繋がりの一番前にいるからね」
やめろ、僕の一番前に卵焼きを持ってくるな！　そんな繋がりいらないよ。僕達のいつものそんなやりとりを傍目に秋徒は寝ぼけ眼を擦りながら雑誌を眺めている。
「どうしたんだよ。てか、指輪なんてどうするんだ？」
僕の質問に秋徒は雑誌をこちら側に向けてくる。
「ＬＲＯ……ライフリヴァルオンラインでさ、楽しい奴とあったんだ。そいつにちょっとな……」
「プレゼントね！　そうでしょ秋徒？」
秋徒の机に乗り出す日鞠。女子って恋バナが大好きだよね。だけど秋徒は頬を赤らめながらもそれを否定する。
「ち……違うぞ。別にそんなんじゃない。そんなんじゃあないんだよ」
じゃあ、何なんだよと言いたくなる挙動の秋徒。コイツがＬＲＯと言う完全なバーチャルシュミレーションゲームを始めてそろそろ

二ヶ月くらい経ったかな？
世界中で話題をさらっているＬＲＯの優先権を取れたコイツは本当に幸運な奴だ。余りの嬉しさに日々オーバープレイで学校ではほぼ寝る事が日課になっていた。
それもここ最近になって更に拍車が掛かったと思っていたけど、原因は女か。秋徒は普段プレイボーイ風に振る舞ってるし一人の女の子に……なんてあり得ないと思ってたけどそういう事か。

「おいスオウ！　お前までニヤニヤするな！　何想像してるんだ！」

秋徒の照れ隠しの怒声が飛んでくる。だけどそんなの気にしない。だって秋徒がね～へ～。

「それで、良い指輪があったのか？　うん？　親友のよしみだから是非協力するぞ」
「勿論私も、秋徒を応援しちゃう！」

僕達二人は秋徒を応援する事に決めた。実は最近ちょっと心配だったんだ。こいつが余りにもＬＲＯに入り浸るからさ。向こうの事は全然話さないし……でも今ようやく親友の口から聞けたのは恋の悩みって訳だ。
僕は殆ど分からないけど、指輪選び位手伝えるさ。僕と日鞠はアギトが見てた雑誌を二人で眺める。ジュエリーが一杯乗った、いわゆるファンシー雑誌って奴？
見てるだけで目がチカチカするよ。プフゥ、これなんかアギトの彼女には持ってこいじゃないか？

「結構可愛いけど幼すぎるかな。イルカで作ったリングなんて水族館のお土産だよ」
「じゃあこっちはどうだ？　おっかなさが良く出てると思うんだ」

僕と日鞠はそれぞれ思い思いの指輪を探す。だって一体どんな子か……僕達は重大な事に気付いてしまった。

「お前等、なんだか異様に楽しんでないか？」

「そんな事よりお前の片恋相手はどんな子だよ？　情報なくちゃ、どれが似合うかも判断できないぞ」

それは根本的な問題だった。とっても大切なこと。だけど秋徒はその彼女の情報を出そうとはしない。頑なにそれがナニだと認めたくないみたいだ。

たく、往生際が悪いんだから。誰の目から見たってそう見える事間違いなしだよ。

「お前にだけは言われたくないなスオウ」

なんだその台詞。さっさと白状しやがれ。逃がしはしないぞ。

「秋徒、その感情は恥ずかしい物じゃないんだよ」

「俺はお前を見てると自信が持てないぞ！」

日鞠の言葉に秋徒は激しく言葉を返した。たく、贅沢な奴だ。ここまで親身になってくれる親友が二人も居るのに話せないのかよ。

確かに日鞠の行動は犯罪めいてるから秋徒が自信を持てないのは仕方ないとわかるんだけどさ。犯罪者をもう一人増やしたくないし。

日鞠はもう少し恥ずかしいと思った方が良い感じだな。いつか警察のお世話になりそうで怖いよ。

窓の隙間から流れ込む風が雑誌をめくる。草木の青い匂いもそろそろなくなりそうだ。これは僕達の当たり前の優しい時間。

その時、めくれた頁に僕らは目を引かれた。ちいさい写真だ。メ

インのジュエリーの端に控えめに乗っているその指輪が「良い」と僕らは思った。

「どうかなこれ？」

「うん、なかなかだ」

僕と日鞠は同時に秋徒を見る。最後に選ぶのはやっぱり自分自身でないとな。他人に選ばせたプレゼントなんて価値半減だよ。

それに秋徒には自信が必要みたいだし……僕達は秋徒の返事を息を整えて待つ。そして――

「良いなこれ。アイツに良く似合いそうだ」

と言ってくれた。秋徒の目にはきっとこの指輪をはめた彼女が浮かんでるに違いない。そう言えばさっきの日鞠の発言を否定しなかったな。

片思いをとうとう実感したか？

「違う、そんなんじゃないって言ってるだろ。たださ……喜ぶ顔がみたいだけだ」

赤らめて視線をハズす秋徒はそれでも気付いてないと言い張るか。ふざけるな。それだけで十分じゃないか。

でも所でずっと気になってたんだけどリアルの指輪をどうするんだ？　仮想空間には持っていけないよな？　オフ会とかでその人に渡すのだろうか。

「手に入れたイベントアイテムがあるんだよ。貴重な奴。それを使えば完全なオーダーメイドの指輪が作れるんだ。だからその参考にな」

なるほどね。そんな事も出来るのか。もう出来ない事なんてないんじゃないのかＬＲＯは。秋徒は何度も確かめるようにその写真を指でなぞっている。

「よかったね。きっと喜んでくれるよ」

「ああ、そうだといいな」

秋徒の染み入るような声が静かに響いた。こいつのこんな表情は初めて見た気がする。でも一抹の不安もあるよな。こいつがこんな顔するほど好いてるであろう彼女はＬＲＯの中の人って事だ。だってそれって……

「なあ、秋徒。ＬＲＯ……向こうで見えてることは幻なんだぞ。分かってるよな」

そう、ＬＲＯは仮想だ。その秋徒が思いを募らせてる相手だってその姿形は作り物なんだ。こいつ最初に入ってたよな。「リアルとゲームの境界線ははっきりしてる」って。

だけどそれは本当にそんなにはっきりとしてる物だろうか？　僕は知らないけどＬＲＯのフルダイブシステムと言うのは凄いらしい。

その仮想世界はこちらとなんら遜色なんて無く、むしろリアルではおきえない幻想的な現象に魅せられてしまう人は少なくないと聞いた。

『フルダイブ』の危険性はＬＲＯが発売されて日夜、テレビのニュースでいろんな人達が言っている。人々の誰もが思う『ｉｆ』を叶えた世界……それがＬＲＯ（ライフリヴァルオンライン）だ。

「そんなの分かってるさ。でも、ＬＲＯを体験してないお前には分からない。伸ばした腕が、誰かと向

こうの世界では繋がる奇跡……みたいなものがさ」
「なんだそれ？」
なんて臭い事を言いやがるんだ。確かにリアルは科学の進歩と共に人間の関係性は希薄に成っていると昨今叫ばれてるけど、それが今の最先端のバーチャルリアリティシステムでは反対の事が起こってるって事か？
それは確かに僕には理解しようがないけどさ。
「お前にとってＬＲＯは幻なんかじゃ無いってか」
「少なくとも、見かけとかじゃない物はそうだな」
この時の僕にはそれがどういう事なのかいまいち分からなかった。結局、現実とはここ意外あり得ないのにそんな所に求める物がある なんて現実逃避だろ。みたいなネガティブな感情だって抱いてた。
だけど同時にこいつがここまで言う、ＬＲＯてのに興味を持ったのもこの時かも知れない。この時の秋徒は本当に真っ直ぐな恋する男子だったからな。
こいつが見てる世界を見てみたいと思ったのかも知れない。
「スオウは見た目とか気にしす気だよ。私は分かるかな。きっと世界平和の礎になれる考え方だよ」
なんだか日鞠が粋なり世界平和を語りだしたぞ。何考えてるんだこいつ。
「何言ってんだよ日鞠？」
「みんなが繋がれて誰かが誰かに手を伸ばしていけば世界平和は完成すると思うんだよね。だからまずは私たちが晒しあおうよスオウ。お風呂と言う夢の場所で！」

「世界平和の前に変態の国が成りそうだ！」

結局日鞠は混浴狙ってるだけか。高校生なんだからそこら辺は弁えろよな。僕だって男で日鞠は女なんだからさ。

「だから私はもっともっとそれを感じてほしいだけだよ」

「だから見せたいのか？　どんだけ自信あるんだ。露出狂かよお前は」

「見せるのはスオウだけにだから安心してね」

ああ～もう、頭が痛い。女の子に免疫が無い僕がこいつの相手をするのは荷が重いよ。誰か引き取ってくれないかなマジで。

「本当にそんな事思ってるのかよスオウ」

唐突に秋徒がそんな事言った。どう言うことだよ。

「お前は本当に指輪でも買ってやれって事だよ」

「ええ～スオウ、私に指輪買ってくれるの？　婚約？　結婚？　どっち？」

ふざけるな。秋徒が変な事言うから日鞠がトリップしてるじゃないか。こいつにこれ以上機能障害を併発させるなよな。指輪なんて贈った日には両親にまで報告されて三日後には結納だよ。

僕は結婚風景を思い浮かべてトロケるような表情に成っている日鞠を必死に説得する。どうにかして別の物に最悪しなくては。

結局、放課後を使って僕は日鞠のプレゼントを贈ることになった。指輪はなんとしてもここで回避しなくちゃいけない。

「それじゃあ踏ん張れよスオウ」

そう言って校門前で僕達に背を向ける秋徒。協力してやったのになんて奴だ。一刻も早くＬＲＯに入りたいって感じだな。

「じゃ～ね～秋徒。大事なのは気持ちだよ」

「おう！　そっちも良いもん買わせろよ」

なんて事言いやがるんだアイツ。折角ＵＦＯキャッチャーのヌイグルミで済ませようと考えてたのにそれじゃ許されなく成るじゃないか！

本当に楽しそうに人に迷惑かけやがって……

「フられろ！　お前なんてなぁ！」

僕の精一杯の罵声に秋徒は腕を上げるだけだった。その背中は直ぐに小さくなり道を曲がって消えていった。

「じゃあ行こうかスオウ」

日鞠がおもむろに僕の手を取ってくる。やばい、胸がドキドキだ。でも従っては行けない。これは破滅への誘いなんだ。

「あ～そう言えば今日は部活のミーティングが」

「テスト期間一週間前は部活全面禁止だよ。心起きなくデートが出来るね」

ダメだ。瞳をこれ以上無いくらい輝かせた日鞠には何を言っても通じないだろう。ああ、もうしょうがないな。今回のテストは赤点

覚悟するか。
くそ、これじゃ秋徒の思惑通りだな。でも結局の所、僕は日鞠に弱い。いつも世話されてるし……この後はきっとスーパーで夕食の買い出しだな。
僕がまだＬＲＯという世界を知らない時の日常は毎日こんな物だった。別にＬＲＯを知ったからって何が変わった訳でも無いけど僕の世界は広がっただろう。

だけど次の日から三日ぐらい秋徒は学校に来なかった。中間テストも初日は受けず補修確定したんだ。その原因はＬＲＯだったと何となく僕達は分かっていた。
だってそれからアギトはＬＲＯに行くのを抑えたみたいで授業中に寝る回数は減った。それでもＬＲＯはしてるみたいだし考え過ぎかなとも思ったけどこの質問に秋徒は言葉を濁らせるだけだった。

「あれからどうなったんだよ？　指輪渡したんだろ」
「ああ……まあ、もういいんだよそれはさ。結局俺はヒーローには慣れないって分かった」

僕と日鞠は首を傾げた。日鞠が言うには上手く行かなかったらしいからこの話はこれ以上突っ込むなとの事だ。僕もそれくらい分かるけど……少しは何か言ってもいいだろ秋徒。向こうを知らない僕達に言っても何も出来ないって思ってるって事か。
これからしばらくして秋徒は僕を前より強引にＬＲＯに誘う様になった。そして僕は拒み続けていたそれを受け入れた。これはもしかしたら秋徒からのメッセージじゃないかと思ったんだ。
それに向こうを知ることでこいつは何かを話してくれるかも知れないとも思った。あの時の……指輪を見つめるお前は本当に輝いていたからさ。

校舎に紛れ込んだ猫に楽しそうに餌をやっている秋徒の顔がいつからか仮面に見えるようになった僕はそれを親友として外したいと思った。
あの後でもＬＲＯをやめないのは何か理由があるからだと感じてたんだ。もしかしたら秋徒は何か違うキッカケを求めて僕を誘ったのかも知れない。
でもそれでもいいんだ。僕だってこの頃にはＬＲＯに入る日を待ち遠しく思っていたんだから。

「あのアイリって子に指輪やったんだな」

会議は騒然としたなかで取り合えずやることを決めて終わった。そして通された部屋で一時休憩中に僕はアギトを連れ立って城のテラス部分で話してる。

「なんでそう思うんだよ」
「あの時のお前の態度見てたら誰だって分かるだろ」

当然だ。何かあったのは直ぐにわかるよ。するとアギトは顔を逸らして呟く。

「スオウの癖に……覚えてたとはな」

とかなんとか。失礼な奴だな。僕だってそのくらいの機微を感じる感性は持ち合わせてるし、そこまで頭緩くないよ。

「まあ、何があったか知らないけどさ。大丈夫かこの国？」

さっきの会議でもエルフ以外の種族の僕らに対してあからさまに

イヤな感じを放っていた。自分達は神に一番近い種族……そう思っているとシルクちゃんが教えてくれた。
ＬＲＯの設定としても一番古くから繁栄してたのはエルフとなってるらしいからね。でもそんなのは設定の一部でしか無いはずなのに……ここの一部の狂信者ってのかな？　その人達は本気でそう思ってそうだ。
体は心を表すって奴か。違う体に僕達の心は少なからず影響を受けてるのかも知れない。

「大丈夫……だとは思うけど。まさかアイリの周りがあんな面子で囲まれてるとはな」

アギトは頭を抱える様にしてる。まあ、その気持ちは分かるな。アイツ等は気に入らなかったよ。心配になって当然だ。

「どうするんだよアギト。お前このままでいいのか？」

これはキッカケだろ。望むも望まないにしても訪れた二人の邂逅じゃないのか？　アギトは口を紡ぐ。ヒーローには成れないとあの時こいつは言ったな。でも僕は思うんだ。

「好きな人を助ける為にヒーローになんて成る必要が有るのかよアギト。お前の思いは変わってないんだろ。なら這いつくばってでもその場に居てやれよ」

どんなに蔑まれても、どんなに罵倒されたって、どんなに格好悪くたって……離しちゃ行けない物がある。それをお前なら分かってる筈だし、知ってるだろう。
僕の知ってるアギトなら、確実にこれを実行する奴だ。

「あの頃と言ってる事違うだろスオウ。幻だって知ったんだよ。この思いもさ。ここを現実として本当に感じてるのはお前とセツリだけなんだよ。だから許されるのはお前達だけだ」

アギトの言葉は僕の心を落とすのに十分だった。なんだってこいつ……

「幻なんて、お前が言うかアギト！　もう僕は知ってるぞここを！　だからお前があの頃に感じてた思いもわかる。言ってやろうか！　ここは幻でも、気持ちや思いはお前の物だ！あの頃お前はそう言った。そう信じてただろうが！　分かってる癖に格好付けるなよなアギト！」

アギトは明後日の方向を向いて拳を握りしめている。今にも飛んできそうだ。だけどそれが行われる前に僕達は遠ざかる足音に気付いた。

僕はその足音を少しだけ追ったけど影も見えなかった。でも誰かは分かる。柱の裏には溜まった滴があったからだ。

「アイリ……」

小さく呟くそんな声が僕には聞こえた。

あの頃の情景（後書き）

第三十一話です。
三人の学校での事は書きたい事でした。日常って奴も見せれたらキャラとして深みでも出るかなと……どうだろ？　見せ方次第かストーリー次第ですよね。上手く三人のリアル感なんて物が出せてたら幸いです。
それにようやくアギトの話で気合入りますね。この話はなんだか長くなりそうです。見捨てないで優しく見守ってくださると幸いです。久々のリアルはなんだか書くの大変でした。
次は絶対バトルの筈です。想像の通りなら。また遅れ気味なので頑張ります。
感想とか評価とか随時受け付けてます。感想なら絶対に返信するのでよろしくです。ではまた明日。

月光を染める闇（前書き）

僕達は例の森の前に立っていた。ここにある復活の泉が僕達の目指す場所だ。だけどそれは熾烈を極める事必死だった。異常なまでのモンスターの多さ、それが僕達の足を幾度も止める。

だけどここで活躍したのは小さなピク。僕達はピクのおかげで何とかその手前まで辿り着く。でもここで僕達には辛い選択が待ち受けていた。一人分のタルンカッペが主を失って地面に落ちている。

月光を染める闇

空に大きな、まして落ちてきそうな程の満月が昇り、風は周りの草木を揺らして不気味さを演出していた。僕達……いいや、僕とテッケンさんとシルクちゃんと鍛冶屋とセラは普段のルートを大きく迂回して例の森の前に立っている。

「ああ～もう～なんで私がアンタ達なんかを案内しなくちゃ行けないのよ！　本当にもう、最低最悪。地獄に堕ちてくんない！？」

なんて口が悪いメイドだ。暗器使いってのも裏付けるなこの性格の悪さ。セラはそんな事言いながら表示させたウインドウに何か印を付けていた。

「しょうがないだろ。僕達でその泉の位置を知ってる奴いなんだからさ。お姫様の命令なんだから文句言わずに働け」

そう、セラが僕達に付いて来てるのはアイリの言いつけだ。僕達はただいま作戦行動中でこの役目は結構重要なんだ。今回の戦いの行方を左右するかも知れない。

だけどあのガイエンを初めとするエルフのお偉いさん共は明らかに僕達が自国の問題に首を突っ込むのを嫌がっていた。エルフは誇りが高いから、助力を仰ぐなんて行為その物が嫌らしい。

でもこれはハッキリ言ってエルフの国で起きただけでＬＲＯ全体の問題だ。あり得ない筈のモンスターの村への進行。これはどうもアンフィリティクエスト絡みなんじゃないかと思えて成らない。

異常事態はとにかくそっちに繋がるんだよね。

「私も嫌われたもんだよね～。アイリ様ったらそんなにアギト様の事隠してのが気に障っちゃったんだ。もう、本当に純情ウブウブなんだから切り刻みたくなっちゃうな」

なんて危険な発言してるんだこいつ。自国のお姫様を切り刻みたいだなんて、とんでもない背信行為だ。でもセラを見てると思うよ。

こいつは自分が不利になったり得する為なら、仲間を後ろからその暗器で躊躇わずに刺すだろうと。まあ、パーティーなら仲間にそんな事しても意味はないからあくまで例えなんだけど。

「嫌われてるって、どっちかって言うとお前がお姫様の事嫌ってるんじゃないのか？」

僕の言葉にセラは動かしていた手を止めた。どうやら泉までのルートを何通りも確認してるみたいだったけど、どうやら聞き捨て成らない言葉だったらしい。

「どうしてそう思っちゃうのかな？　私がアイリ様を？　バッカみたい。あの人はね、尊敬に値する人よ」

セラは笑顔だ。笑顔だけどどうしても素直に受け入れられないぞ。

「尊敬と嫉妬は違うだろ。アギトは今でもお姫様を好きみたいだし」

それが気に入らないんじゃないの？　あのアギトに対するセラの態度が演技とかじゃないんだったらの話だけど。

「何よそれ？　ううんそれこそ何よって感じ。私がアギト様の事でアイリ様をどうかするとでも思ってるわけ？　あの二人に何があったのかも知らない癖に、そんな事言わないでよ！」

いつになく真剣な眼差しでセラに言われてしまった。からかう様に言ったのが悪かったか。セラは一体何を知ってるって言うんだ？
てか教えないのに、それを持ち出すのは反則だろ。

「じゃあ、別にアギトの事はどう思ってる訳でもないんだ」
「ゲームの世界で、何をどう思えって言うのよ。バッカみたい。楽しめれば私は何でもいいの」

セラはそう言って再びルート確認に移る。メイド服を翻すこいつはゲームをゲームとしてちゃんと楽しんでるって事か。リアルを侵す事無く、ここの間に一線を引いている。
それは本当に正しいＬＲＯのやり方なのかも知れない。浸りすぎないのがこのＬＲＯを心から楽しむ秘訣かもなんてね。僕にはもう絶対に出来ないことだ。

「くぴぴ！」
「どうしたのピク？」

その時、シルクちゃんの肩に乗るピクが小さく小刻みに喉を鳴らした。なんだ？　まるで何かを知らせるような警戒音。首を伸ばしてある方向を見つめている……まさか！

「テッケンさん、策適を！　方向はピクの見つめてる方だ」
「よし、分かった。スキル『千里眼』で確認しよう」

テッケンさんが千里眼を発動して暗闇の彼方に目を向ける。すると直ぐにテッケンさんの顔が曇った。

「不味いよ！　モンスターだ。数十体……こっちに向かってる！」

僕達は一斉にその方向をみやった。だけど肉眼では何も見えない。それは当然の事だ。僕達は千里眼というスキルを持ち合わせてない。

「どういう事ですか？　ピクが見てる方からモンスターの群がやってくるって？」

「多分、ピクは高い危機察知能力を持ち合わせてるんじゃないのかな。それはきっと動物レベルでの感性なんだ」

きっとテッケンさんの言うとおりだろう。ピクはとても高い危機察知能力を持ち合わせてる。シルクちゃんはとことん幸運だよ。モンスターの接近を予め知れる事のメリットはここＬＲＯではとても大きい。

知らずに出会うか知ってて出会うかの違い。選ぶ選択の権利が知ってれば出来るんだ。それに不意打ちにも会わないしね。

「ピク凄いね」

そう言ってシルクちゃんはピクの頭を撫で撫でする。

「そんな事やってる場合じゃないでしょ！　敵が来てるのなら隠れるの！　ほら、渡したもの被って草むらに！」

セラの声が僕達を促した。ウインドウから出発前に渡されたアイテム『タルンカッペ』を出して僕達は草むらへと身を隠す。

タルンカッペというのは被ると姿を消すことが出来るアイテムだ。結構レアな物だけど、この作戦に当たり僕達にそれが貸し与えられた。基本この森では隠密行動だからね。

尋常じゃないほどのモンスターがここら辺には発生してる。それは一回の戦闘でも命取りな程だ。だから僕達はモンスターに遭遇し

ないように、遭遇してもアクティブされないで泉を目指す事が出来る準備を整えてやってきた。
戦闘中にモンスターが来たらそのモンスターも戦闘に加わる。それに上限なんかないから、次々に加わるモンスターを全部倒せるなんてあり得ない。
そうなったら作戦は失敗なんだ。
僕達は草むらの影で息を潜める。すると次第にドスドスという重量感のある音が複数近づいて来るのが分かった。見えないだけで大丈夫だろうか？　モンスターの中には嗅覚や、聴覚でもプレイヤーを見つける事が出来る奴がいると聞いたことが有る。

「問題はない。獣人系は目に頼る」

そう言ったのは僕の後ろの方に潜む鍛冶屋だ。どこに行ってたのかと思ったら作戦前に帰ってきて僕に代わりの剣を渡してくれた。どうやら知り合いの工房で新しく打ってくれたらしい。
今、僕の腰に差してあるのは銀の装飾が美しい『双剣ニーベル』だ。シルフィングより若干軽く、貴重性もそれほど高くないけど全体的に高仕上がりのマルチスペックを有した良い剣なんだと鍛冶屋は言った。
僕は代わりのこの剣を快く鍛冶屋から受け取ったよ。後ろで大丈夫と鍛冶屋は言ったけど僕は念のためにニーベルの塚に手を添えておく。
だけどそれは杞憂だったらしく、モンスターは立ち止まる事もせずにその場を去っていった。

「何なんだあれ？」

なんだかおかしくないかな？　僕は草むらからでてモンスター達の消えた方をみやる。あのモンスター達、森の外周をなぞって進ん

でる様な……

「確かに、まるで森を監視してる様な動きだね」

同じく草むらから出てきたテッケンさんが発動した千里眼を暗闇の向こうに向けて言った。きっとあの目には今もモンスター達が写ってるんだろう。

でもテッケンさんの言うとおり、まるで奴らは森を監視でもしてるかのようだ。モンスターがあんな行動取るなんて聞いたことない。元から配置された自分達にとって重要な場所ならいざ知らず、こんな元はいなかった場所でそれをやるなんて考えられない。

ますますもってきな臭さを感じる僕だ。やっぱりセツリを残して来た事は正解だったかも知れない。向こうもその内、危険をやりに行くんだけどアルテミナスからは離れるしセツリはそこに同伴しないように念を押していた。

当然セツリはそれを拒否したけど後は残った二人に任せるしかない。アギトもサクヤも向こうに居るし、きな臭いのはあそこの上層部も同じだけどモンスターに倒される心配はないから幾分ましだ。

「監視してるのならこの広い森を一組なんて考えられない。他にも回ってくるかもだし、さっさと入るわよ」

そう言ってセラが森に入っていった。確かにグズグズしてる間も無いわけだし急いだ方がいいようだ。僕たちもその背中を追って暗く不気味な夜の森へ足を踏み入れた。

森の中はやけに静かだった。それに異様に暗い。空には満月が輝いているというのにこの暗さは何なんだ？　普段からこんな森なのだろうか？　だけど事前に聞いた話ではここはモンスターも少なく

生産系プレイヤーの素材集めの場と聞いた。
それならそう難易度は高くないはず……森は見上げれば真上には星空が見えるし月光だってもっと沢山入ってきて良いはずだ。
なのに暗い……数メートル先が見えないくらいに。どういう事だ。上は見えるのに前は見えないなんて事があるのか？

「まるで僕らの視界に直接干渉してるみたいだよ。システムが見せない様にしてるとか……」
「まさか……」

テッケンさんが怖いことを言うからみんなの肩が一瞬震えたよ。やめてほしいよそんな冗談。冗談に聞こえないから。

「くぴぴ」

その時またピクが小さく鳴いた。僕たちはまたかと思いつつ、方向を確認して身を潜める。実を言うと森に入って既に五回目だ。数メートル進む度にモンスターの一団と遭遇する。どれだけ集まってるんだよって感じだ。
ピクが居なければ森に入って直ぐ、モンスターとはち合わせてたよ。タルンカッペは被ってるけど、奴らはどうも目だけで獲物を確認してるだけじゃ無いようなんだ。
多分大部分は目なんだろうけど、近くでは臭いや音でも反応するらしい。だからやっぱり至近距離を通り過ぎる奴らの横を走ったりは出来ない。
それに異常に暗いせいで粋なりヌワって感じで現れる。ピクの知らせで知っててその方向に目を凝らしててもそんな感じだから驚くよ。この変な闇のせいでテッケンさんの千里眼は使い物にならない様で本当にピク様々だった。
ピクの示した方向からモンスターが五体……ワンパーティーとし

て現れる。さっきからこいつら絶対にパーティーを組んでいる。こんな事ってあり得るのか？　獣人は普通に肉弾戦をする奴もいれば魔法を使う奴だっている。普段はそいつ等がバランス良く固まってることなんか殆ど無いから気にすることも余りないけど、今は違う。

明らかにバランス良く奴らは編成されていた。僕達がパーティーを募るとき前衛は最低でも二人、後衛はヒーラーとソーサラーを一人ずつ、そして最後の一人は狙う狩場やとかを考慮して考える。まさにその通りだった。

「これって厄介過ぎるわね……タゼホへの侵攻組は不味いかも知れない」

そんな事を小声で呟くセラの声が聞こえる。五回目ともなるともう疑う余地は無い。きっとタゼホを壊滅させた奴らも同じように編成されてるんだろう。それはまるで軍隊だ。

この情報をセラは持って帰りたいのだろう。こんな情報は襲われたプレイヤーからは聞けなかったんだ。でもセラには役目がある。それこそが先に先行して僕達がこの森に来た理由だ。

まあ僕にとってはそっちはついでで、シルフィングを元に戻すのが本音なんだけどセラはそっちが本題だ。

あの時、あの会議の場で僕達はそれぞれの目的の為に手を取った。

「それでは、勇士を集い軍を編成してタゼホの解放に皆の尽力を期待する」

片手を力強く掲げてガイエンがそう宣言した。その言葉に誰も反論なんて無くてパチパチと小さな拍手が起こりみんなが席を立とうとした。

だけどそれだけで大丈夫だろうか？　という不安が僕達にはあっ

た。僕達、アンフィリティクエストを知っている面々には軍を率いて数だけで勝負を決めようとするその作戦は余りにも安直過ぎる……様な気がした。
だって今までも、特にあの悪魔との戦いは度肝を抜かれた。助けるべき相手がそこには居なかったんだからね。今回も何かとんでもない事がまだ隠れてるんじゃ無いのだろうか？
特に会議中に話された被害者が見たという奴等を統率する存在が謎だらけだ。女神の様なって……どれだけ抽象的なんだよ。
ただ絶対に敵だと分かるのはその女神が被害者に言った一言だ。

【この世界に貴様等の安寧の地はない】

それはまさに宣戦布告の言葉と言っていい。モンスター共から再び牙を向く時が来た、みたいな。でも確かＬＲＯの設定にはそういうのがあったんだ。
元々この世界のモンスターと種族の戦いはずっと行われてきた。だから町とか村……大きな所で国を奴等から守り、そしてモンスターを滅ぼすのが目的みたいな前提だった。
それを考えると今の状況はある一定のラインに到達したから起きた事前のイベントなのかも知れない。ここから不可侵の領域も解除されて本格的な物語始動とかね。
それかやっぱりアンフィリティクエストでおかしくなったシステムのバグなのか……どっちにしてもこの目で確かめるしかない。
「おい、待てよお前等。それだけか？　もう二・三策は無いのかよ？」
僕は出ていこうとするエルフの面々に声を掛けた。するといかにも嫌そうに顔をしかめて笑われた。そしてガイエンが僕を見下ろしながら言う。

「お前は何を言っている？　我らエルフは世界で一番の種族だ。すなわち最も強い軍を持ってるのだよ。モンスターがただ集まった烏合の衆など軽くけちらせる。
アイリ様が貴様等を参加させると言ったからその目に焼き付けるがいい。我らの勇士をな」

ガイエン達は自信満々だった。自分達が負けるなんて微塵も思っていないしそんな発想はＬＲＯで最大の勢力になってから捨てたみたいだ。
別に僕だって負けて欲しいと思ってる訳じゃないし自信は戦いには必要だ。自惚れじゃなければだけど。僕はガイエンを見上げて食い続ける。

「別に軍を編成してタゼホ解放に向かうのはいいんだよ！　でもそれだけで確実かって聞いてんだ。お前達は力を誇示するために行くのか？　違うだろ。国を背負ってるんなら安直に動くなよ。万全で望めって言ってるんだ！」

すると僕の言葉に今度はみんながヤレヤレと肩を竦める。

「これだから……弱気なヒューマらしい考え方だ」
「我らの強さ、を知らんのかね……」
「ヒューマに我らの豪気さはわからんよ」
「劣化種族なのだからね」

バカにする様な言葉の数々……いや実際してるけど。こいつらにはこれ以上何を言っても無駄か。折角、国と言う絶大な力が有るのにそれを万全にしないだなんて愚の骨頂だ。
今回は今までに無い人数が協力してくれる。それならもっと安全

に、ずっと安心できる様にするのがあんたらの役目だろ！　最強をという名に酔ってるなよ！　でもこいつらは何言っても聞きはしない。

こういうアホは一回痛い目に遭わせたいけど、それでこの国の人達に迷惑が掛かるのもどうかと思う。でも不安は募るばかりだ。このままじゃいけない……確信にも似たそんな気持ちが僕の中には沸いていた。

「いいじゃないですか、策を一個増やすくらい。保険はいつだって掛けとくものですよ皆さん」

唐突に会議の場に響いた声はセラだった。驚きだ。アイツが僕の意見に賛同するなんてさ。それは同じエルフも同じらしかった。

「メイド風情が何を言い出すか。お前は確かそいつ等と共に来たな。エルフの誇りを浚われたか？」

セラはそんな罵倒は意に返さず淡々と告げる。

「メイド風情で申し訳ありませんけど、私はそこのバカに誇りを浚われてなんか居ません。むしろ逆です。私はこの国の為に一パーセントでも成功の確率を上げたいだけですよ。貴方達がもしも万が一つでも負けて窮地に立たされるのは誰と思いですか？　それはアイリ様ですよ。アイリ様の為に打てる策は全て打っとくのが我らの役目でしょう」

その場のエルフ達が固まる。どうやらアイリという単語には弱いようだ。思案顔のエルフの面々の横から声を出したのはガイエンだった。

「そこまで言うのならセラ。お前にはこの他に策があるのか？　そこの者共も？」

ガイエンの視線が僕にも向けられる。え？　具体的なのはそっちお任せしようと……誰が助けて！　周りを見やるとみんなの顔が不自然に逆を向いている。

簡単に仲間を見捨てるんだね。

「勿論ですよ」

僕が四苦八苦してる時、セラは薄ら笑いを浮かべてガイエンに近づく。あのメイド、大した奴だ。

「一応聞いてやろう。だが事と次第によってはお前でも罰が下るぞセラ。これは侮辱と変わらぬからな」

「どうぞご自由にガイエン様」

ガイエンの威圧的な態度にまったく動じないセラ。とことん謎なメイドだ。セラは何やらガイエンの後ろのアイリに礼をして話し出す。それは作法なのだろう。王族を前にした。

「皆さんも知ってると思いますけど、最近あるクエストの攻略キーアイテムの精製方が判明しました。そのアイテムの名は『神酒ネクタル』。精製材料の一つが復活の泉の輝きの水です。

そしてそのクエスト報酬は王族の第三の鍵と言われてます。ここまで言えば分かるでしょう？　私達にはアイリ様がいるのですよ」

周りがなんだかざわめいている。でも僕達は何か分からないよ。

「王族の第三の鍵とアイリ様……セラ、お前はあの兵器が実現出来ると言う気か？」
「ええ。その為に皆さん必死で外堀を埋めていたじゃないですか。クエスト大量発生と同時に」

なんだか物騒な会話が始まった事は分かる。けど、理解まで行かない。そんな僕達にアギトが説明をくれる。

「この城のおかしさにはお前も気付いただろスオウ。それには理由があるんだよ。この城には王族の血とそれぞれ隠された鍵に寄って解放されていく秘密がある。
その中には信じられない戦略魔導兵器があると言われてた。どうやらガイエン達はそれを見つけたらしいな」

なる程、アギトが言うとおりならそれは凄い物だ。心強いなんてもんじゃない。けどなんだろうアギトの顔はあんまり浮かない。ここに来て大体そうだけど、ここで浮かないのはガイエンもなんだ。これは異常。

「だが、あれは今で無くても……それに国力がだな……アイリ様の事も……」

言い淀むガイエン。国力？　兵器発動の代償とかに関係あるのだろうか？　アイリの事は建前だろ。その時後ろのアイリ様が腰を上げた。

「私の事はいいんです。それよりそんな事が可能なら今直ぐにでもクエストをクリアしましょう。セラ、行ってくれますか？」
「ええ！？　私ですか？」

当然だろ。お前が言い出した事だ。でもこれはチャンスじゃないか？　泉に先に行けるのならシルフィングを直せる。慈愛に満ちたアイリの顔にはセラも頷くしかなかった。

でも今度はガイエンが快く無い。僕達の同行が嫌みたいだ。だけどそれを耳打ちしてもアイリにはきっぱりと断られたみたいだけど。ざまあみろだな。あの悔しそうな顔は傑作だった。

そして僕達はシルフィングを、セラは神酒ネクタルの為に森へと向かう事になったんだ。

森に響くモンスターの叫びが共鳴して広がっていく。無数の足音と幾重にも重なる赤い瞳が蒸気を放っていた。だけどその音が僕達に向かって来ることはない。

遠ざかるモンスターの群……そして静寂は訪れた。僕は一つだけ空いたタルンカッペを拾い上げ呟く。

「テッケンさん……ありがとうございます」

僕達は進む。満月を映すその泉へ。

月光を染める闇（後書き）

みなさんこんにちは。やっとで本格始動してきました。バトルになると思いきやなりませんでしたごめんなさい。でも次こそは打って変わって大ピンチ。泉に無事辿り着いた四人を待っているのは！？　てな感じで幕引きです。

ではではまた明日です。

仲間と勇気の関係性（前書き）

あの時、テッケンさんは僕達の為に走って行った。それしか方法が無くて……彼が僕等の仲間だったからだ。その覚悟の重さを受け取り、残った僕等は泉へ進む。

泉からは綺麗な泉の精が出てきて僕らの望みを聞いてくれた。だけどそこでちょっとした一悶着があった。そしてようやくシルフィングを直して貰おうと取り出すと折れ目からは何かが上っていた。

そしてそれを見て泉の精は謎の言葉を呟く。『ウエポンアライアス』その瞬間、僕の身に試練が降り掛かる。

仲間と勇気の関係性

「僕が行こう。それしか手は無いよ」

テッケンさんの言葉を僕らは素直に呑むことは出来ない。ようやくたどり着いた泉の場所。だけどそこはモンスターの巣窟だった。

まるでその泉に誰も近づかせないようにしてるみたいだ。あそこが僕達の目的地なのに……どうにかしないといけない。

そこで名乗りを上げたのがテッケンさんだった。

「囮しかない。それにそれは僕が適任さ」

「でも……そんなのみすみす殺されに行くような物ですよ。僕なら最後の瞬間は乱舞で逃げれるかも知れない」

乱舞は凄く素早く動ける様になる。それを上手く使えば奴等の相手をしながら逃げる事だって――

「それはダメだよスオウ君。君のＨＰは有限なんだ。危険過ぎる。万が一に懸ける場面じゃまだないよ」

「テッケンさん……」

僕の意見は即座に却下された。確かにここで死ぬわけには行かない。囮役を引き受ける人は実際は生き残るのは絶望的だ。

この森の現状を知るなら、誰もがそう悟る。囮役の人はこの場からモンスターを連れ出す為にアクティブされて反対方向に走ることになる。

そしたらきっと次々とモンスターに出会ってしまうだろう。モンスターの大行列『トレイン』と言う現象の完成だ。フィールドの切

り替えが無いＬＲＯでは逃げきるなんて不可能でそれを覚悟しないといけない。
デスペナルティもあるし、何より大量のモンスターに追われる恐怖なんて誰も体験はしたくない事なんだ。モンスターには慣れても命を奪われる瞬間には誰も慣れはしないだろう。
その奪う相手が人外の化け物なら尚更だ。恐怖が沸いてこない訳がない。それなのに……

「大丈夫だよスオウ君。僕は君より経験豊富だ。それに逃走用のスキルも充実してるしね。それに何より、僕の命は有限ではない」

小さな体で胸を張るテッケンさん。本当にこの人は格好良すぎだよ。その小さな体に溢れんばかりの勇気を僕も少し分けて貰えた気がする。
その言葉に、覚悟に、応えなくちゃいけない。

「わかりました。信じます、テッケンさんの事」
「ああ、それでいいよ。覚えておいてくれたまえ。君の乱舞は逃げるために使うものじゃない。その力は仲間を守り、誰かを救える力だよ。前に向かって使って欲しい」

テッケンさんの言葉が心に染みる。そうだ……乱舞は逃げるための力じゃない。全てを守り抜くために……アイツを救いたいと願った時に貰った力だ。
どうして僕に乱舞が発現したのかは今でも謎だけど、前を切り開くためにこの力が僕にあるのなら、後ろに向かっては使えない。そうしてしまうと泡の様なこの力が弾けて消えてしまいそうな気さえする。
そんな事は有るわけないのかも知れないけど、確かめる方法なんて無い。せめてセツリを救い出すまでは、僕は乱舞を手放す事なん

て出来ない。
だからここはやっぱりテッケンさんしかいない。様々なスキルを拾得しているこの人しかここは任せられない。ほんの数パーセントでもあの大群を手玉に取って生き延びられるかも……なんて思える人物を僕はこの人しか知らないよ。
僕とテッケンさんはそれぞれの武器を抜き刃を合わせた。これは契約や約束みたいなものだ。

「「幸運を」」

それだけで十分だった。それだけで仲間とは思いを共有出来る。テッケンさんはみんなをそれぞれ見て頷き、そして体を翻してタルンカッペを舞い上げた。
空に浮かぶ月と舞ったタルンカッペが重なるとき、前に飛び出したテッケンさんは近くのモンスターに一撃をたたき込む。

「ぐむもぉぉぉぉ！！」

テッケンさんの短剣が青い光を帯びてモンスターに深く食い込んだ。小さな体からは想像も出来ない程の強力な一撃。
断末魔の叫びと共に戦闘態勢に入るモンスターは、怒りをその顔に浮かべ背にいるテッケンさんに向かいガムシャラに武器を振るう。
だけどその時にはテッケンさんは更なる連続攻撃の為に宙にいた。今度は緑のエフェクトがその短剣には纏っている。
体を捻りクネり、変速的に上から下へテッケンさんは獣人系のモンスターを切り刻んだ。敵のＨＰが急速に減り、そして決まった……と思った。格好良く地に降り立ったテッケンさんもそう思っただろう。
だけどモンスターは倒れない。その周りには白いエフェクトが体を包み傷を治していた。それは敵の回復系魔法だ。ここもやはりパ

ーティーの様にバランス良く配置されている。

「テッケンさん！」

「ダメだシルクちゃん！」

僕は飛び出そうとしたシルクちゃんの肩を掴み押し留める。ダメなんだ……今、幾らテッケンさんがピンチでも僕らが出ていったら彼の覚悟や努力が全て水の泡になってしまう。歯を食いしばって耐えなくちゃいけない。

どうして彼がわざわざ戦闘までやってるのか……一人じゃ勝てる訳もないのに。それは周りのモンスター全部を余す事なく引きつける為だ。

全員がテッケンさんにアクティブするのを確認してるんだ。そうしないと後から出てくる僕達が危険に陥るかも知れないから……彼は全てをその身で受けている。

「ぬう！」

テッケンさんの武器が敵の武器に弾かれる。倒し損ねた敵は爛々と目を狂気に染めて追い打ちを懸けるように武器をないだ。だけどそれをテッケンさんは体の小ささを生かし上手く交わした。

目的の物を切れなかった武器は周りの草木を無闇に傷つけてようやく止まる。その時、僕達は隠れてる草むらの横を無数のモンスターが通り過ぎる光景を見た。

奴らは全員テッケンさんに狙いを定めている。フラグ立て過ぎじゃないかテッケンさん？　大丈夫なのだろうか。既に大量のモンスターの群に彼は取り囲まれてる。流石にやりすぎだ。これじゃあどこにも引っ張って行けないよ。

「あの人、大丈夫なの？　逃げ場なんてないわよ」

セラの言うとおり、テッケンさんには逃げ場がない。不安はわかるよ。僕も不安だ。だけどここはテッケンさんを信じるって決めたんだ。彼ならきっと何とか出来る。
その時、テッケンさんは不意に武器を納めた。

「「「「「なっ！！」」」」」

身を隠す僕らは全員で声を押し殺して驚いた。この場で武器を納めるなんて自殺行為にしか思えない。一体何する気なんだテッケンさん。
武器を納めて畏怖を抱く物が無くなったからモンスター達は一斉にテッケンさんに襲いかかった。もう我慢できない。これはダメだろ！
思わず動き出そうと僕らはした。だけどそれすらも遅くて……テッケンさんが居た場所はモンスターに埋め尽くされて土埃が舞い上がる。

「あれじゃあ終わりね」
「縁起でもない事言うなよセラ！」

なんて事を平淡な声で言うんだ。でも確かにあれじゃあ生きているなんて思えない。赤い目を輝かせたモンスターが我先にと腕や口を突き刺していた。
僕達は一体どうしたら良いんだ……そんな絶望に捕らわれかけた時、何かが土埃の中から飛び出してきた。それは丁度五十センチ位の見慣れた影をしてる。

「ふあっはっは！　こっちだウスノロ共！」

紛れも無いテッケンさんの声が暗い森の中に重なって聞こえる。その理由は簡単、飛び出してきたテッケンさんは一人じゃ無かったんだ。

まるで分身の術でも使ったのかの様に複数人のテッケンさんがその場を走り回っている。そして少しの間、僕達もモンスター達も呆気に取られたように呆然としてた。

すると土埃も晴れた頃、テッケンさんは笑い声を止めてこう言った。

「では諸君、さらばだ」

スタコラサッサと言う擬音が一番あってると思うその逃げ様、天晴れだ。ようやく目の前の出来事を理解したモンスター共がその後を追っていく。複数のテッケンさんは僕達と反対方向にそれぞれ散っていった。

なるほど、これならプレッシャーも分散されるというわけだね。その場にはいつの間にか静寂が訪れていた。僕達も本当に騙されちゃったよ。やってくれるねあの人は。

「本当にヒヤヒヤしちゃったわ。もっとシンプルに出来なかったの？」

「僕に言われても困るんだけど」

セラは何かあると僕に突っかかって来るよね。いつの間にこんなに嫌われたんだろうか。

「それより今の内に泉へ行くぞ。彼の犠牲を無駄にはしたくないだろう」

「「犠牲って言うな！」」

僕とシルクちゃんは同時に鍛冶屋の発言に言葉を返していた。たく、どいつもこいつも言葉がぞんざいだよ。
僕は地面に虚しく落ちているタルンカッペを拾い上げて呟いた。
「テッケンさん……ありがとうございます」
彼のタルンカッペをアイテム欄に納め、僕達は満月を映す泉へと足を向けた。静寂が包む森の中……僕達は遂に復活の泉に辿りついたんだ。

復活の泉の前に付くとセラが何かを投げ入れた。それは何かの葉だろうか？　すると泉に波紋が広がり、美しい泉の精が姿を現した。成る程、そっきのアイテムはこの精霊を呼び出すために必要な物なのか。
【そなた等は我に何を望む？】
泉の精にふさわしい、柔らかく清らかな声が森に響いた。セラは持ってきていた殻の装飾瓶を差し出して望みを伝える。
「ここの水を頂戴。私はそれだけで良いわ」
【……千ルークマになります】
「お金取るの！？」
僕達全員びっくりだよ。そんなの聞いていない。それに千ルークマって野水にしては高いぞ。一ルークマは一円と考えてくれ。そしたら千ルークマは千円だ。高いよね？
【市場価格でございます】

嘘付け。その価格変動しないだろう。でもなんだかおかしいな。NPCであるはずの泉の精がこんな風に対応するのか？
でもここで疑ってもどうしようも無いから、セラは渋々千ルークマ支払って水を瓶いっぱいに貰った。すると泉の精は一旦消えてしまった。
願いを叶えたから戻ったのだろうか？　あの葉一枚で一回分って事か。どうしようあんなの持ってないよ。

「あの～セラ様」
「私の奴隷になると誓いなさい」
「話、早すぎないか！？」

どんだけ理解力良いんだよ。僕の一言でセラは僕の思惑を掴んだみたいだ。墓穴を掘ったかも知れない。今は仲間なんだし素直に言えば一枚位くれるよね。

「さっきの葉っぱをくだいさいな」
「契約書と朱肉よ。判子の代わりに指紋で許してあげる」
「なんでそんな物があるんだぁぁ！」

駄目だこいつ。タダでくれる気が微塵も無い。てか無駄にアイテム欄を使ってるなよな。

「この世にタダより高い物なんてないんだから」

おっしょる通りです。

「あの～スオウ君。ちょっといい？」

その時控えめなシルクちゃんの声が聞こえた。だけどちょっと待って欲しい。僕は今とても大変なんだ。

「ごめん、後にしてシルクちゃん。僕は今、目の前のメイドと拳を交えないバトルをしてるんだ」

そう、これは交渉というバトルだ。神経をすり減らしながら相手の一挙手一投足に目を配り、自分の言葉を通す隙を探す。とても高度なバトル。

シルクちゃんは「あう～」とか唸ってそれでも僕に何か言いたそうだった。だけど僕の背中はそれを拒否した。ゴメンシルクちゃん。

……考えた方を変えよう。元々タダで貰おうとした僕が意地汚かったんだ。そうだよ。僕達はまだ知り合って間もない。

そんな相手に誰もタダで貴重だろうアイテムをくれる訳無いじゃないか。それを僕はずうずうしくも友人面して、女の子の私物を狙ってたんだ・・それって変態じゃないか！

「何一人で悶えてるの？　遊んでる場合じゃないの、分かってる？」

「そんなこと分かってるよ。お前のせいで僕の思考が変な方向に捻れたんだ」

まったく、冷静に考えたら僕は変態じゃないよ。別に下着やらを狙った訳じゃないっつーの。くっそ……目の前で変な契約書揺らすなよ。

なに、これ見よがしに見せつけてんだ。これしか方法が無いみたいに錯覚しそうじゃないか。ならないぞ。僕はお前の奴隷には成らない！

「全財産で勘弁して貰えないっすか！」

もう面子なんて捨ててやる。物事には何だって優先順位ってのがあるんだ。今の僕の一番はシルフィング復活だ。

「お金でなんでも解決しようとするなんて……いつからそんなのがここＬＲＯでも成り立つように成ったのやら」

なんだかまるで僕が汚く染まったかの様な言い方だな。頬に片手を当てて、溜息付く姿が妙に様に成ってる。いや、言ってる事は正しいんだろうけど……どうすれと？何なら納得するんだよ。

「やっぱり今の時代、武器になるのは情報でしょ？」

唇に指を添えて艶やかに微笑むセラはなんだか不気味だ。こいつの性格を知らずにその仕草で微笑むこいつを普通に見たらきっと見とれるぐらいするんだろうけどね。

メイド服って破壊力がね……案外そのために着てるのかも知れない。迷わず女の武器を使いそうだもん。

「情報って何の情報だよ？」

問題はそこだな。セラは一体何を求めてるんだ？　僕達がまだ全部は話してないそれぞれの事情を詳しくとか？　でもセツリや僕やサクヤの事はそんなに広めたく無いんだよね。

だけどそんな僕の心配は杞憂だった。

「それはもちろん、アギト様の恥ずかしい過去とか～。知られたくない秘密とか～。親友だって言うのなら一つくらい知ってるでしょ？　話しなさいよ」

なんて安い注文だ。いいや、僕にはそんな親友を売るみたいな事

出来るわけが無い。それじゃあ僕は紛れもなく汚れてる事にな――――

「私もオマケで秘密の情報を提供するよ。きっとアンタは喜ぶ物だと思うけど……もちろんあの葉もね」

「実はアギトってさ――――――」

はっ！？　気付いたときには僕の口が親友を売っていた。なんて親友概の無い奴だ……僕ってちょっと自己嫌悪に陥りつつも実は心の奥ではもう一人の僕が何かを囁いていたりする。

『いいじゃないか。どうせアギトなんだからよ』

「……」

くそう、反論できない。流石は僕の心の中の悪魔。良いこと言うじゃないか。そうだな、別にアギトだから心痛める事なんかないや。リアルでは日々迷惑を被ってる訳だし、ここら辺でおあいこにしておこう。親友を売って晴れやかな気持ちで居ると（この発言は問題か？）ある疑問が浮かんだ。

「セラさ、アギトの事どうでもいいとか言ってなかったか？　それなのにどうしてアギトの情報が欲しいんだよ？」

「ああ、実はそれはね――」

実はやっぱりアギトの事を思ってる訳なんだろう。乙女の心は複雑怪奇と言うからね。あれ？　秋の空だっけ？

「――アギト様ってからかうと面白いの。ぞくぞくしちゃう」

複雑怪奇で決定だ。それ以外に表せない。秋の空なんて綺麗な物

じゃないよ。ドロドロだ。
その発言をしたときのセラの顔は大好物のスイーツを食べ放題的な顔だった。甘くてとろけて、でもちょっと口直しにはビターも必要……みたいな。悪寒が走ったよ。
ちょっとだけアギトに悪いことしたかな、と思ってきちゃった。て、ちょっと待て。なんで僕の中の天使は出てこないだよ。
普通はワンセットだろ。天使と悪魔・善意と悪意みたいなさ。一方しか居ないんじゃ僕はまるで天使であるべき物が欠けてるみたいじゃないか。人として大切な物を持ち合わせてないってか。
少なくとも目の前で悶えてるセラよりは持ち合わせてる自信がある。大事なもの、こいつ自分から捨ててそうだもん。

「そんなことより、情報やったんだからお前も葉っぱくれよ。それとそっちの情報もな」
「はいはい、私は契約は守るわよ。でも情報はここでは何だからアルテミナス戻ってからでいいよね？」
「……まあ、別に」

何となく情報は貰えないような気がしたけど、まあいいさ。元々目的の物は別の物だ。生け贄はアギトだし僕に損は無い。

「じゃあ、早速……んしょ」
「ん？」

セラは地面に落ちた葉っぱを選び出した。あれ？　ウインドウからあの特別な葉っぱを取り出さないのか？　やっぱり契約不履行にするつもりだな。
だけど僕のそんな疑いを払いのけるような晴れやかな笑顔でセラは一枚の葉っぱを選び出し僕の目の前に掲げる。

「はい、取り合えず一番これが綺麗よ」
「意味がわからん！」

それをどうしろと！　そんな落ち葉求めてないよ！　すると僕の怒りを無視してセラはその葉っぱを泉に投げ込む。

「全く、一番綺麗だって言ってるのに贅沢言わないでよね」

呆れた様に声を出すセラ。僕は沸々と怒りが沸いてくるけどその時、宙を舞っていた葉っぱが泉に落ちた。すると前と同じように波紋が広がり、泉の精が姿を現した。

【ご無沙汰しております。さあ、あなた方の望みはなんですか？】
「え？」

僕は呆気に取られる。なんで出てくるの？　その葉っぱはなんの変哲もない落ち葉だぞ。その時、後ろからやっとで意を決したシルクちゃんの声が届いた。

「えっとねスオウ君。その泉に入れて精霊を呼び出すその葉っぱ……特別な物なんかじゃないんだよ。ここに来る途中でセラちゃん拾ってたもん！」
「あらら、シルク様。ネタバレは私がしたかったのに」

あざ笑うセラの声がとっても不愉快。じゃあ何か……セラの奴はなんでも無いタダの落ち葉をわざわざアイテム欄にしまって特別な物に見せかけていたって事か！

「この悪魔！　ふざけんな！」
「大原則。私があの葉を特別なアイテムなんて言った？」

なんてこった……全ては僕の早とちりか。そんなんで危うくタダの落ち葉の為に僕はセラの奴隷に成るところだったのか。恐ろしい奴……結局、得しかしてないよこいつ。

もっと早くにシルクちゃんの声に耳を傾けていれば、こんなに笑われる事もなくて、自分の愚かさに打ちのめされる事も無かった。

ごめんシルクちゃん……僕は道化師です。全然違うところでセラと渡り合えてるなんて思って、夢中になってました。その時からセラはきっと心で笑っていたことでしょう。

僕はピエロ……哀れな道化師。だからどうか貴方の言葉を聞かなかったバカな僕を叱ってください。

「そ、そんなことないよ。私がもっとはっきり言えばよかったの」

優しいシルクちゃんの言葉が今は痛い。なんて僕は愚かなんだ。こんな良い子を無視して悪魔の相手なんかしたからこんなに心をズタボロにされてしまった。

「お前等、遊びも程々にしろ。たく、緊張感が無い奴らだな。どうやったら今の状況でそんな漫才みたいな事ができるんだ？」

それはずっと黙っていた鍛冶屋の声。別に漫才してた訳じゃねーよ。僕らはいつだってこうなんだ。微妙にメンバー変わってもそこら辺は何故か変わらないな。

【もういいですか？】

退屈そうな声は泉の精。こいつ本当にＮＰＣか？

「ちょっと待って、これをお願いします！」

僕は慌てて折れたシルフィングを差し出した。するとシルフィングの折れ目から青い物が昇っている。何だこれ？

【これはウエポンアライアスですね。分かりました。試練の帷を卸しましょう】

聞き馴れない言葉に僕らは呆けた。そして次にシルフィングを泉の精は膜で覆って手元へ引き寄せた。それから一段低い声で言い放つ。

【武器の望みと所有者の望み、望みの集いは更なる力を生み出す時。……ほら、よそ見をしてていいのですか？】

その瞬間、何かが僕の横を抜けた。それは白い輝きを放つ何か。何だ……何をくわえている？　そしてそれを悟った時、僕は自身の肘から潰れたトマトの様に流れ出る血を見た。

「うっ……がぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

僕の絶叫が薄明かりを讃えだした森の中にこだました。叫ばずにはいられない。何故なら僕の左腕の肘から先が無くなっていたからだ。

仲間と勇気の関係性（後書き）

第三十三話です。
いつでも感想、評価お待ちしてます。お気軽にお願いします。読んでくださってる方々ありがとうございます。頑張って次も書くので良かったら読んでください。ではまた明日です。

白銀の試練（前書き）

僕の腕が無くなった。大切な左腕が……白銀の角を携えたあのモンスターに持って行かれた。開始早々、ピンチに陥った僕達。大量の血液に動揺したのは僕だけじゃなかった。

総崩れするパーティーを尻目に奴は僕を執拗に狙う。片手を失い、二刀流を封じられた僕に成す術はなくて……だけど諦めかけた時に希望をくれたのはやはり仲間だった。

目を開いて前をもう一度見据えた時、応えてくれたのは……。

白銀の試練

気付けば僕は両膝で地面を叩き、そのまま前のめりに倒れそうに成っていた。

「きゃあああぁぁぁぁぁ！」

それは一体どちらの悲鳴か……でも、セラがあんな女らしい悲鳴を上げるのも気持ち悪いからこれはシルクちゃんだろう。

もしかしたら二人の悲鳴なのかもしれないけど、そこまで頭は回らない。流れ出る血は僕の思考力を奪い去るかの様だ。

残った右手を地面に付き、なんとか体を支えたけど近づいた消えた左手がイヤに視界に入ってくる。血が地面に染み込んだり、頬に付いたり……それだけで悪夢みたいだ。

「おい……スオウ……」

震える声を絞り出した鍛冶屋の顔は蒼白だった。目の前で起きてることが信じられない……そんな感じ。そう言えばこんな常識外れな事に直面するのは初めてだったかな？

悪魔戦の時はまだ血なんて出なかったから……。

「大丈夫……大丈夫だ」

励ましの声は周りにあてた物じゃない。僕はきっと自分に言い聞かせてる。気が動転しそうに成るのをこの言葉で必死に押さえつけた。

（大丈夫……大丈夫……僕はまだ……大丈夫だ）

何度も何度も心の中で繰り返し続ける。これ以上落ちないようにしなくちゃいけない。変な汗が出て、痛みを完璧に再現しないはずのＬＲＯで何故か異様にその場所が痛かった。
だからか、その痛みを和らげようと頭が茹だったみたいに機能を遅らせてボオッとしてしまう。でもそれじゃいけない。さっきからずっと頭に響くんだ……僕の腕をちぎった奴が奏でる足音が。

「ちょっと……アンタ本当におかしい！　その血……やっぱりどう考えたってあり――死ぬんじゃない！」

パンッ！　――と乾いた音が辺りに響く。僕の体に新たな痛みが増えた。

「あぁ……セラ……サンキューな」

僕は自分を殴った相手に礼を述べた。だって危なかったんだ。必死に頭を動かそうとしても、暗い泉に引きずり込まれる様な感覚から逃げれない。
気付いたときには目を閉じてたみたいだ。目の前のセラの顔も複雑な表情に成っている。こいつのこんな顔は珍しいからシャターチャンスなんだけど、生憎と今はスクリーンショット取る元気もない。
ここＬＲＯはゲームだから別にカメラが無くても写真が撮れる。スクリーンショットって言う機能なんだけど……この話は別の機会にしよう。
今はそれ所じゃない。謎の生物の登場で何故か周りには小さな淡い光の玉が地面から浮いては消えていく。だからかさっきよりも森の中を照らしていた。

「スオウ君……腕……取り合えず魔法で……」

流れ出る血を見て青ざめた顔したシルクちゃんが、それでも近づいて来てそう言ってくれた。ありがたい……けど、ピンポイントで腕を元に戻す魔法なんてあるのかな。

「それは……でも血を止める位なら……出来る筈です」

苦しい顔でそんな言葉を紡ぐシルクちゃん。意地悪な事を言ってしまった。これは全て敵地で油断した僕の責任なのに。どうしても辛気臭くなってしまう。

体を持ち上げて傷口をシルクちゃんの方へ向ける。せめて血ぐらい止めないと気が滅入りそうだ。

だけどその時……シルクちゃんが恐る恐る傷口に手を翳して魔法を発動しようとしたまさにその時、僕の血はあり得ない方へと流れた。そして僕はそれを見逃さなかった。

それはシルクちゃんとセラの間。今まで規則的に聞こえていた足音が弾けた瞬間でもあった。

「ごめん！」

「あっ――――――――きゃあぁ！」

僕はシルクちゃんの魔法を避けて二人の間に割って入った。それと同時に残った右手で片側だけのニーベルを抜き去る。

突き刺さる重量は紛れもない敵の姿を映し出す。白光を讃えたその姿……額には白銀の一角……黄色い瞳は雷を宿した様に感じた。

形は馬……だけどもっとシャープで、その体を覆うように透けた純白の布が長く宙に浮いていた。

「ぐっ……くっそ」

片手じゃどうしても押し返す事が出来ない。みんなはその神々しいとも言える姿に動くことを忘れてる。僕もこんな傷を負ってなければその姿に魅了されてたかも知れない。
だけど左腕から伝わる痛みがそれを許してはくれない。もう既に血は流れ落ちていなくて奴の口元を汚す僕のちぎられた手へと求める様に伝っていた。そうまるで求める様にだ。

「幻獣……」

角に押されながらぽつりと聞こえたその言葉が気になった。それはセラの口から出た言葉……何か知ってるのか？

「なんだよ……その……幻獣って……」
「幻獣『麒麟』この森で一度だけ目撃されたって聞いた事があった幻のモンスターよ。でもそれから何度も麒麟目当てのプレイヤーがこの森に張り込んだけどとうとう見つけられなかったって。
だから幻の獣、幻獣って呼ばれる様に……まさかあのウエポンアライアスが出現条件？」

麒麟と呼ばれるモンスターの光に当てられてるのか、言い終わったセラはとんでもない事をしようとした。それはそのモンスターに手を伸ばすこと……つまりは触れようとした。
普段のモンスターならそんな事絶対にあり得ないけど、麒麟の美しさはそんな概念を吹き飛ばしたんだろう。元からセラは大胆な奴と言うこともあるかも知れないけど。
とにかくセラの手が麒麟に触れ欠けたとき、辺りに麒麟の雄叫びが響いた。それは明確な拒絶の表れか、その瞬間体中から電撃が周囲に放たれた。

「「うああ！」」

「「きゃあ！」」

それぞれの声が木霊して僕達は吹き飛ばされる。自身の周りを球体状で囲む電撃……それはセラだけじゃなく全員が対象だった。

痺れが残る体を強引に動かして僕はせめて受け身をとろうとする。だけどその時、僕の視界に微かに白い何かが写り、体を鞭の様な感じで叩かれ、更に吹き飛んだ。

「がっ……はっ……」

「スオ……ウ！」

僕は木の幹に叩きつけられてようやく止まった。そしてそのまま地面に落ちる。たった三回の攻撃で僕のＨＰは既に半分のラインを過ぎて黄色を示していた。

遠くなった声の主は鍛冶屋……その周りにはシルクちゃんもセラも居るけど三人とも何故か起きあがれないで居る。多分それはさっきから手先に少し残る痺れが原因何だろう。

さっきの攻撃には『麻痺』の効果があったんだ。こんな場面で麻痺なんて……みんなからの救援は期待できないって事か。とことん絶望的な状況になっていく。

「なんなんだよ……お前……一体どうすれば……良いって言うんだ！」

僕はニーベルを地面に突き立て、なんとか立ち上がる。僕は麻痺の効果に掛かってなかったんだ。ああいう付加効果は基本発生はランダムだから僕は免れたらしい。

だけどそれを喜ぶべきなのかどうかはわからない。だってここで立っても勝てる可能性なんて万に一つもない。片手を失い、既に二刀流を失った僕はただの初心者プレイヤーだ。

あれこそが僕のアドバンテージだった。それに二刀流が出来てもこのクラスは一人で勝てる相手じゃないだろう。でもそれでも諦めない事は出来たのかも知れないけど。

僕の言葉に麒麟が応える筈もなくゆっくりと満身創痍の僕に足を向けてくる。普通の地面なのに何故か麒麟はひずめの音を響かせて……その音が言いしれない恐怖をかき立てながら。

頭に響くその音は僕の命を刻んでる様な気さえしてくる。

「くそったれが……」

物言わぬその顔が……光輝くその姿が……腹立たしい。それに何より、こんな情けない自分が一番腹立たしい。いつだって何度だって、僕は情けないままなんだ。それすらも変わらないか。

その時、麒麟の体を包む布が僕に巻き付いてきた。そして浴びせられるのは電流だ。

「ぐがぁっがががが！」

僕の体までもその電流で光ってるんじゃないかと思うほどの苦痛だ。昔のアニメで良くある、体が透けて骨が見えてるよきっと。

「うがぁぁぁ！」

「スオウォーー！」

「……スオウ……君」

生きる気力が削がれ落ちて行ってるみたいだ。電気に乗せて地面に流れて溶けていく。絶対に離さない様に持っていたニーベルまでもが手から滑り落ちそうだ。

きっとこれを離したら終わりだろう。そう感じながらもあらがえない……棺桶に招かれてると分かってるのに、弱さが先行してしまう。

守るべき相手がここにはいない……そしていつも僕を引っ張りあげてくれる奴もここにはいない。だから僕はどんどん弱く成っていく。

心を強くつなぎ止める為に……何が必要なんだろう。幾ら考えても分からない。答えにたどり着く前に流れる電流が僕の思考を焼き切るんだ。

ＨＰは遂に赤く染まって警告を発する。体は更に重くなり残った腕に伝える力は最早微弱だ。

（乱舞を使えばまだ……生きれるかな？　だけど……二刀じゃない今、上手く発動するか？）

心に浮かんだ唯一の脱出方だ。だけど思った通りに一抹の不安もある。乱舞は二刀流のスキルなんだ。二刀流の装備状態で無い今、果たして発動するのか？

心に蔓延する黒い陰が次第に深く成っていく。もう本当にダメなのか？　その時、僕の目には麒麟の後ろで動かない体を必死に動かそうとしてる二人の姿が見えた。

「だめ……だよスオウ君。今……助けるから……もう少し……頑張って……」

「貴様……ふざけるなよ。まだニーベルが……一度も、輝いて……いない。振りあげろ……そして良く見ろ……ニーベルの光は・・そんな幻獣などに負けてはない！」

二人の声が僕の耳に届いた。あらがえる筈もないシステムという壁に対抗しながら二人は体を起こそうとしてる。何度も何度も崩れ

ては震える体に再び力を込めている。
その姿を捉えた瞬間、電流に邪魔されていた心を強くつなぎ止める方法が浮かび上がった。それはとっても簡単なことだ。
僕はまだ残った手にある一本のニーベルを見た。それは本当に綺麗な銀の剣……確かに負けてなんていない。
あの時、僕は自分が麻痺しなかった事を良かった事か分からないと言った。だけどそんなの良かったに決まってる。あの時、僕まで麻痺になったら何も出来ずに殺されていただろう。
だけどそう成らなかったおかげで僕には万に一つの可能性が残ったはずだ。小さいけどそれは燃えだした火と変わらない可能性。
消すか、たぎらせるかは自分次第。小さいのなら頑張って頑張って大きくするだけだ。それは今までと変わらない事だと気づいた。
小さな可能性にしがみついて今までやってきたんだ。腕が一本無いくらいで残った可能性を捨てるわけにはいかない。
これで二刀流が出来ないと考えるんじゃない。腕が一本残ってる……だから僕はまだ戦えると考えるんだ！

「二人とも良くやるね。どうせシステムには勝てないんだから後三分位はこのままよ。大人しく見守って居ましょうよ。疲れるだけなんだし」

いきなり興が削がれる事を言ったのは勿論セラだ。踏み出しかけた一歩を止めること言うなよな。

「そんな……セラちゃんヒドいよ！　スオウ君は……スオウ君はね……本当に死んじゃうかも知れないんだよ！」

シルクちゃんはとうとう言ってしまった。でもあれはしょうがない。優しい彼女の事だからね。それに少し心に暖かな物がやってきたような気がしたよ。

「ふ～ん、やっぱりそれがアンフィリティクエストを進める代償なんだ」
「ふえ？　驚かないの？」
確かにシルクちゃんの反応が正しいよ。普通は信じられないだろ。やっぱりなんて出て来る言葉じゃない。
「だってさっきからそれっぽいこと言ってたわよ。特にあの小さい人とかね。だから予想はしてたの」
ああ、そう言うことか。確かに僕らはそれっぽい事言ってたな。それにしてもテッケンさんはセラの中じゃ小さい人なのかよ。モブリ全般どう区別してるんだ？
「じゃあ、それが分かってるなら……何かしないとって思うでしょ？」
「思わないわ」
はっきりと言いやがった。ゴメン、誰かそいつをまずは退場させてくれ。僕の心が再び闇にのまれそうだ。シルクちゃんはセラの言葉が信じられないというように声を震え出す。
「何でですか？　どうして？　私たちは――」
「仲間なんかじゃないわ。少なくとも私は違う。アレ、実は邪魔だし」
アレ呼ばわりか……やっぱり僕は死ねない。アイツにこの刃を突き返すまでは！　言葉の暴力を知れ！　僕は力を振り絞り柄を握り

しめる。
もう殆ど力なんて残って無いと思ってたけど、柄を握った僕の手は驚くほど堅かった。
シルクちゃんはそんな事を言ったセラを睨みつけている。彼女にとっては僕は大切な仲間のようだ。良かった。だけどセラはそんな事気にする訳でもなく比較的に自由に動かせるらしい首を回して僕の方を見た。

「だけどね。何もやれない事は仕方無い事よ。今生きようとするのはアレの役目でしょ？　貴方達は、貴方達がやれるときにアレがまだ生きてたら全力で動けばいいのよ。助けられる事を待つのはプリンセスだけの特権なんだから」

何なんだあの目。少しだけ憂いを帯びた様に見えたけど。でも確かに……今を生きようとしない奴に何かをする事はないって事は賛成だ。さっきまでの僕は助ける価値が無いって事だったのか。
それに僕はそれじゃいけないとセラは遠回しに言ったのかもしれない。僕はセツリを助けなくちゃいけないんだから。

「それに――――」

んん？　まだあるのか？　セラの瞳は電撃を受け続ける僕の顔をジッと見つめている。それは熱い視線ともいえた。血迷った発言をするんじゃないだろうな。

「――――アレ、がアギトの様の親友を語るのなら虚言癖のあるバカでも無い限り……こんな所で死ぬわけなぁぁぁぁぁぁい！　ですから」

は……ははは……言ってくれるなセラの奴。きっとそれはアギ

トの名誉の為とか何だろうけど……僕がセラを見る目が少し変わったよ。それに今度こそ一歩を踏み出せる。アイツは本当に優秀なメイドだ。
ここで言っておこう。心を強く繋ぐための秘訣は、仲間を忘れない事。その場に居合わせた、居てくれた仲間が勇気や希望という心を分けてくれている。
一番や二番とか、時間やきっかけなんか関係無い。僕達はパーティーを組んだその瞬間から大切な仲間なんだ。
「……うん、スオウ君！　がんばれ～～！」
シルクちゃんのそんな声が聞こえる。セラの言葉を聞いて嬉しそうだ。

残りＨＰはもう僅か、僕はようやく動く事が出来る……出来る……筈だよね？
ヤバい……ガッチガッチに縛られて腕を全然動かせない。このままじゃ地味に終わってしまう。それだけはイヤだ。すると不意に電流が止まった。僕のＨＰは後ほんの一撃でもまともに喰らえば尽きてしまう程しか残っていない。
助かったのか？　だけどそれはほんの僅かな幻想。奴は最後の一撃を入れる準備をしてるんだ。どうやら麒麟は、あの自慢の角で僕の命を絶つつもりらしい。
わざわざ助走距離を取って足で地面を削ってる。僕は必死に残った力でこの布からの脱出を試みるも、命を削られた僕の力じゃとても無理だった。
もう、アレに賭けるしかない。僕は紡ぐ、あの言葉を。
「乱舞！」

だけどいつもの様に体の内側から溢れてくるような力を感じない。それに赤いエフェクトが体から立ちのぼらない。

「乱舞！　乱舞！　乱舞！　乱舞！　乱舞！」

僕は何度も何度も繰り返した。だけどやはり僕の体に変化はない。今までいつだって僕の最終奥義として、ピンチを救ってきた乱舞が使えない。

予想してた事とは言え、そのショックは大きい。何より、乱舞が使えないんじゃ僕はこの布から抜け出す事は無理だ。

目の前には白銀の角を更にまばゆい光で包んだ麒麟の姿がある。アレはエフェクト……自身の最高の技で決めるつもりなのかも知れない。

そこまでしなくても少し小突けば僕はきっと倒せるだろうに。スキルなら受け止めても今の僕のＨＰじゃ尽きてしまう。完全回避がここでの絶対条件だ。

だけどそれは体を縛り付けられた僕には不可能な事で、脱出の術も絶たれてしまっている。奴がもぎ取った左手さえあれば……もしかして乱舞を使えなくする為に、最初に僕の腕を狙ったのか？

どうしてそんな情報が……と思っても仕方ない事だ。向こうはＬＲＯと言うシステムに直結した存在なんだから情報は筒抜けだろう。それを意図的に使うのは反則っぽいけど……試練だから仕方ないのか？

「ん？　試練？」

僕はその言葉に疑問を感じた。そういえば泉の精は試練と言った。試練と言うことはこの二刀流封じにも意味があるのかも知れない。

クリア条件はやっぱり目の前の幻獣麒麟を倒す事だろうか？　そ

ういえばこの麒麟、ボスクラスのモンスターにしては攻撃力があまり高くないんでは無いだろうか？
いや直接攻撃は強力だった。だけどその後は何故に、チマチマ削る電撃なんかにしたのかが分からない。直接攻撃ならもっと早くに・・・僕が前を向く前に終わらせる事が出来たのに。
疑問は尽きない。だけど時間は止まりもしない。ここＬＲＯにはタイムなんて都合のいいシステムは無いんだ。

「ヒヒ～～ン！」

準備が完了した麒麟は一際大きく鳴いて地面を蹴った。その衝撃は凄まじく、地面が数メートル抉れて吹っ飛ぶほどだ。助走距離といってもたかが数十メートル。
今の麒麟なら数秒で僕にその角を突き刺すだろう。それだけ速く、僕には既に光の線と成った麒麟しか見えてなかった。
これで終わりなのか。もうどうすることも出来ないのか？　何かを叫ぶシルクちゃん達が最後に目に入ったけど、その音は麒麟の生み出す轟音にかき消されて届かない。
麒麟の白銀の角が星を散らす如く輝きを放って僕を貫く寸前、真横から炎の塊が麒麟に打ち当たった。
巻き起こる爆発。吹き飛ぶ麒麟。ついでに吹き飛ぶ僕。

「うあぁぁぁ！」

何が一体起こったんだ。麒麟にぶつかった炎の影響で周りには爆煙が広がる。余りに寸前だったから僕まで余波で吹き飛ばされたじゃないか！　おかげで麒麟の布の呪縛は解けたけど。
あんな嫌がらせみたいな助け方をするのはセラしかいない。だけど爆煙の向こうの三人はまだ麻痺の影響で立ち上がる事も出来ない状態のままだった。

じゃあ、あの攻撃は一体誰が？　この森には僕達以外、誰も居ないはずだ。その時、僕の前に何かが舞い降りた。
それは白の先端に朱が混じる羽。僕はこの羽を知っている。
「クピ～！」
そう鳴いて目の前に現れたのは桜色の小竜だった。桜色の鱗を輝かせて僕を助けてくれたのはピクだったんだ。そう言えばシルクちゃんの肩に居なかったな。忘れてたよ。

「ありがとうピク」
「クピピー」

僕のお礼の言葉に喜ぶように声を上げて周りを旋回する。するとその旋回の軌跡が光を放ち出した。なんだか柔らかく暖かな光が僕に染み込んでいく。
確かめて見ると僕のＨＰが少量だけど回復してる。ゼロ寸前の赤だったのがギリギリ黄色位まで。なんとピクは体力回復まで出来るのか。
ここではピクに助けられてばかりだ。愛らしいピクを見てると元気も戻ってくる感じがするし、これで僕はもう一度、今度こそ立ち上がれる。

その時、重い物を押し込む様な振動が周囲に伝わり草木を揺らした。そしてどこからか吹いてきた風に爆煙も流される。
風が流れて来た方には、紛れも無い怒りを放った麒麟の姿があった。長い布がクジャクの様に広がり、青白く周囲に放電してる。
だけど僕は臆さない。腕一本でも戦い抜いて見せよう。大丈夫、僕には心強い味方が隣にいる。
だから勇気はここにある。

白銀の試練（後書き）

第三十四話です。
今日は早い時間に投稿です。いやぁ～余裕余裕で書けちゃうぜ☆
キャッホ～！
……なんてのは勿論嘘で冗談です。テンション上げないとやってられなかったんです。許してください。
だってもういつもギリギリです。前は投降した二話先を今頃書いてたけど今は明日の分ですよ。戻したいけど、戻せない。全ては書く時間が延びてる自分が悪いのです。
なんでだよ！　毎日書き続けてなんで時間が延びるんだ！　僕には成長という言葉はあり得ないという事か。これは前にも言った様な気がしますけどごめんなさい。
そんな事を思う今日この頃だったのです。日々に成長が無いのならそれは……まあなんでもいいや。取りあえず楽しんで貰えてると信じて投稿する事しか出来ないから明日も頑張ります。それではです～。

泡の様な私（前書き）

私は信じてる？　信じてない？　帰りたいの？　帰りたくないの？

自分でも分からないハテナが一杯で良く分からなくなる。だけどきっと本当は助けられたくなんて……けれど二人は裏切りたくない。私に今、一番近くに居てくれる二人。

そんな二人を思ってベランダで浸っていると眼下には集められた軍が見えた。そしてその陰ではアギトとアギトに関係ある人物が居た。それを見てたら遊び心が沸いてきて、恥ずかしい事をしてる所をサクヤに見られてしまった。

だけど今度はサクヤも加わって対決に……そんな訳の分からない事の後に私は一つの事を決める。けれどその時、私の頭に突如、全てを否定する様な声が響いた。

泡の様な私

「私は本当に助けられたいの？」

幾らサクヤやスオウに言われて心を決めたフリをしても、一人で居るとどうしても心の奥ではそんな事を言う自分が居る。

やっぱり私は怖いんだ。あそこに戻るのが怖い。

でも……サクヤを……スオウを裏切りたくない気持ちもやっぱりあるし、信じたい。ううん、二人の言葉なら信じれる。

そう思って私は決めた。二人は本気で私の事を思ってくれてる。

サクヤはいつまで経っても……あんなに酷い事をしたのに、私を思ってくれていた。

いつの間にか眠っていた三年間でも、サクヤは私をずっと待って居てくれた。そして今度もまた、あの頃と変わらず接してくれる。家族で居てくれる。

スオウは私に居場所をくれる。私が辛いとき……望んだとき……願ったとき……いつだって一番傍に居てくれた。駆けて来てくれた。向こうでもそれは変わらないと言ってくれた。

私は知らないけど、向こうでも何回もお見舞いに私に会いに行ってるっ言っていた。それは凄く嬉しいことで……同時に凄く恥ずかしい事だった。

だって私は向こうの自分を三年も知らない。スオウが言うには変わらないらしいけどもっとほら、女の子の部分が心配だよ。

ムダ毛の処理とかちゃんとされてないでスオウに見られてたら私死んじゃう。ちゃんと毎日、髪はブラッシングされてる？　私の髪は直ぐに横に広がっちゃうの。

ここじゃあ忘れちゃうけど、昔は良くそんな髪をお兄ちゃんに櫛で解かして貰ってた。お兄ちゃんは今でも私の髪を解いてくれてい

るのだろうか？
お仕事が忙しいのは知ってる。だけどせめてスオウが来るとき位はお願いしたい。ここじゃあそんな方法も私には無いけど。
今度スオウにお願いしておこうかな？　――ってそれじゃあ意味ないよ！　どう言うつもりよ私。

「私、向こうでスオウに会う時の身だしなみが気になるからお兄ちゃんにちゃんとしててって言っておいて」

とでも言う気？　ダメだよそんなの！　そんなこと言ったら……私の気持ち……（ブンブン）↑首を振る音。　とととと取り合えず、スオウは私に向こうに行く勇気をくれる。彼が居るなら大丈夫……怖くない訳ないけど、それでも何度も見たスオウの背中が私に怖さに負けない勇気をくれる。
いつだって私を守ってくれたあの背中……思い出すだけで、胸がキュンってなる。暖かい物が胸を押し上げて全身に春の木漏れ日の様な暖かさを届けてくれる。
今なら分かるよ。どうして春がウララなのか。この感情がウララを表してるんだよ。春＝恋い＝ウララの法則が成り立つよね。
ベットの上で過ぎて行く季節を眺めるだけじゃ分からなかったこと。私は初めてこの感情のおかげで春を春として認知出来た気がする。
そして今もスオウは戦っている筈だ。今回は私の為かは微妙だけど、やっぱりああいう彼は素敵だと思う。

「ついて行きたかったなぁ……」

私はアルテミナス城で貸し与えられた部屋のベランダ部分でため息を付く。今回は危険だと私はお留守番。確かに今の私は戦えない。あの場所……スオウが言うには私の精神世界って場所で私はスオウ

と二人戦った。
あの力がここでも使えたら良かったのに……どうしてお兄ちゃんは私をプリンセスに設定したのかな。私は冒険者でありたい。自身の足で世界中を旅する事が出来る冒険者。
仲間と共に幾多の困難と障害を乗り越えて、苦労を分かち合いたい。笑顔でハイッタッチなんてのもしてみたい。
やっぱり戦えないとどこか蚊帳の外な感じを否め無い。今もこうやって外だしね。私は輪の中ってのに憧れてるんだ。それは一人では絶対に感じ得ない事。
でもいつか……それはきっと実現できる。そう今は思う事にしてる。向こうに戻って、そしてもう一度ちゃんとしたルートでここＬＲＯに入るの。
待ってくれてるのは今のスオウの仲間達。そしてもう一度冒険し直すの。今度は私もちゃんと仲間の数に数えて貰って。お兄ちゃんが作ってくれた私の夢の世界を自分の足で歩んでみせる。
するときっと楽しいよ。今の百倍、ううん千倍は楽しくなると思う。隣にはスオウがいて、サクヤがいて、アギトとかも加えちゃってあげよう。
楽しい想像がどんどん膨らんでいく。これは全部、スオウが見せてくれる夢。彼と出会って……見て感じて……集った仲間……その経験？　出会いと言うのが私にこんな夢を見せてくれるんだよ。

「うん、よし。大丈夫……私は信じてみせる！」

思い浮かべた想像を一つ一つ大切に包む様に私は胸の中に納める。いつか叶ったら一つずつ出して丸をつけてあげるんだ。
私はクスクス微笑みながら下を見る。街にはこの国の軍と呼ばれる集団が揃いつつあった。なんだか笑いも引っ込んで緊張感が襲ってくる。

厳か……じゃないか。厳格な雰囲気を軍は醸し出している。統制が取れた動き。一指乱れぬ列の並びは壮観だ。

「あれ？　あれってアギトかな？」

すると城の広場の物陰辺りに二人の人影を見つけた。上手く隠れたつもりかも知れないけどここからなら丸見えだよ。

物陰にいるのはアギトとこの国のお姫様……確かアイリって言ったかな。何か言い合いをしてるみたいだけど何て言ってるかな？

「何よ！　アギトのバカ！　ヘタレ！　根性なし！　少しはスオウを見習いなさいよね！」

「はっ、言っとくけどなぁ。バカって言う奴がバカなんだ。この理屈を当てはめるとヘタレも根性なしもお前だバカ！」

「ああ～バカって三回も言ったよアギト。酷いよアギト！三回繋げて大バカって事だね……私の事大バカ者って思ってるんだ。許してあげないからね。もう絶好よ。絶好絶好絶好だからね！！」

「ああ、せいせいするよ。絶好でも何でも好きにしろ。どうせ後から俺の魅力に戻ってくるんだからお前って簡単な女なんだよ」

「そんな事無いもん！　絶好は縁切るってことだから、アギトの事なんか忘れちゃう。そしたらアギトなんかより格好いいスオウの所に行くわ。優しくて強くて暖かくて大きくて私を包んでくれる王子様みたいな――――」

「誰に対してアテレコやってるんですかセツリ？」

「きゃっ」

唐突に聞こえた声に思わず短い悲鳴を上げてしまった。振り返るとベランダに出てくる巫女服姿の女性、サクヤの姿があった。

ヤバい、聞かれちゃった？　――って別にサクヤになら聞かれても困らないか。だって家族で姉妹だしね。でも一応フォローは入れ

ておきたい。
　サクヤは私の全てを受け入れてくれるだろうけど、そこはね……プライドやら羞恥心の問題だよ。

「あのねサクヤ、今のはね」
「なるほど、あの二人の会話にアテレコしてた訳ですか」

　サクヤは私の隣に来て同じように城下を見つめて二人を見つけた様だ。視線の先にはやっぱり何か話してるアギトとアイリの姿がある。あっ・・アイリが泣いて走って行ったように見える。
　その後ろ姿に手を伸ばして何かを言おうとしてるアギト。

「スオウって実はウ〇コなんだぜーーー」
「あああぁ……何するのよサクヤ！　折角私が繋げてきたアテレコが台無しじゃない！　それに絶対あってないよ。いくら何でもあの場面でそんなの叫ばない。
　私の努力を壊すだけじゃない！」

　なんて棒読みで下品な事を叫ぶのよ。心がこもってないにも程があった。いや、あれに心を込めて叫ばれても困るんだけど……そんな子じゃ無かったのに一体この三年で何があったの？
　ウ〇コなんて……ウ〇コなんて……

「勿論、セツリのアテレコを壊すのが目的です。セツリはちょっと彼に幻想入りすぎですよ」
「そんなこと無い！　やっぱりサクヤ、意地悪になったよ！」

　昔は私の言うことを笑顔で聞いて頷いてくれてたのに。あまつさえスオウの事悪く言うなんて、幾らサクヤでも許さないよ。

「そうですか？　すみませんセツリ。気分直しに二人で彼らにアテレコしませんか？」
「う……下品な事叫ばない？」
「叫びません」

異様にニコニコ晴れやかな笑顔が何やら怖いけど、ここは乗っておいていいかな。そろそろ私の思いの強さをサクヤに知って貰って協力を仰ごうと思ってた。
スオウの事になると直ぐにサクヤは機嫌を悪くするからね。
だけどそう言えば、さっきアイリはあの場を離れたから二人でアテレコなんて無理なんじゃ……人数足りないよ。

「大丈夫ですよ。ほら、新たな贄が既にいます」
「あ、本当だ」

下を見ると同じ場所に今度はアギトともう一人、ガイエンとか言う感じ悪いエルフの姿があった。二人の雰囲気は遠くからでもはっきり分かる位の敬遠色だ。
少なくともガイエンはアギトを元の鞘に戻したいのかと思ってたけどそうでもないのかな？

「ではどうぞ。どちらでもいいですから」

余裕の笑みを浮かべたサクヤ。何なのその余裕？　このゲームは主導権を先行が絶対的に握りやすいというのに。あ、怪しい……だけどここで引くわけには行かない。

「良いよ。その笑みがどこまで持つか見てあげる。三年前とは違うからね」
「それはこちらとて同じです。ボキャブラリーが最新版広辞苑ほか

諸々にアップロードされた私は文字通り最新版サクヤですよ。返り討ちにして更に打ち返してあげます」

む……時々ボーとしてると思ったらそんな事やってたのかサクヤめ。私たちはにらみ合い、そして火蓋は切られた。

こちらのターン。背を向けたアギトが見える。私はアギトで行こう。

「俺はアイツを追わなきゃいけないんだ！　お前の相手なんてやってられるか！　俺はアイツの事……」

「まあ待てよアギト。久々に会ったんだから、コレでもやらないか？」

眼下のガイエンは確かに腕を動かしたけど何コレって？もしかしてサクヤは私を誘ってるのかも知れない。ここは慎重に……アギトは振り返り腕を横に払っている。

「ふざけるな！　アイツは今だってきっと俺を待ってるんだ！　だから今度こそ……この気持ちのままに……」

「俺だってお前を待っていたさ」

んん？　何その危険な発言。そこだけ切り取らないでよ。でも何故かガイエンの動きとシンクロしてる……怖い。

今のアギトの様子は……動揺してるみたい。こっちもシンクロしてる。ペースにはまっちゃったか。ウムム――

「な、何が待っていただ。お前が……俺たちを……」

「そうしなければ、いけなかった。いいや耐えられなかったんだ！」

あれれ、サクヤは一体どこのボキャブラリーを身につけたのかな

？　やめてよガイエン。アギトに一歩近づかないで！　私と同じようにたじろぐアギトの姿が見える。

「来るな！　変な事言うなよな。おかし……ぞ、お前……」

「変？　おかしい？　それがなんだ。その程度の常識に俺のこの気持ちは負けたりしない！」

言っちゃったよ！　って……え？　何？　その手がそんな所に延びちゃあダメ……だよ。それは禁断！！　横取りなんてダメ～～～！

「大丈夫ですかセツリ？　戻ってきなさい」

「あれ？　……サクヤ？」

いつの間にか自分の中で想像が膨らんでいたらしい。ガイエンとアギトが……あんな事に……って、それはサクヤの変なアテレコのせいだよ。

下品な言葉より質が悪い。

「ごめんね。セツリが余りにも可愛い反応をするから、からかっちゃいました」

「むぅ～」

サクヤに一本取られた。昔は私がいつも取ってた物なのに。てか、延びてきた手はサクヤので対象は私じゃん。余りにもリアルに想像できてると思った。

眼下の二人はそんな展開に勿論発展してる事無くて、近づき様に武器を絡めて権勢しあってるみたい。ふう、ある意味安心だよ。

ベランダを吹き抜ける夜の風に火照った体を冷やして貰う。何やってるんだろ私達。暢気なものだよね。

クスクスと笑っていたサクヤが不意に笑みを私に向けて来る。

「所で、セツリはどういう風に持っていく気だったんですか？　まあ大体想像は付きますけど。アイツとはどっちを指してたんでしょう？」
「それは……」
ううう、今更分かりきった事を……お姉ちゃんモードに入ったサクヤは本当に意地悪だよ。だけど夜風に長い黒髪を揺らして遠くを……具体的には会議の後にスオウ達が目指した場所の方を見ながら優しく言葉を紡いだ。
「ちゃんと言ってくれれば、不本意ですけど……私も応援します。それなりに私もスオウの事は認めてますから」
「サクヤ……」
サクヤの頬はちょっと赤い。言いたく無かった事なんだろうか。だけど私は嬉しいよ。やっぱり私達は家族だね。サクヤはやっぱり私の事分かってくれてる。
「ありがとう！」
「わっ……ちょっ……セセセツリ」
私はサクヤに抱きついた。サラサラの黒髪、暖かな体温、ほのかに香る優しい香り……大好きな私のサクヤ。私の初めての友達。実はサクヤがここだけの存在って実感が私にはない。
だってそうでしょ？　サクヤはここにいるもん。私の前にちゃんとこうして存在してる。確かに向こうで会うことは出来ないけど、私にとって二番目に近くに居た。心に居てくれた。
「本当に甘えん坊ですね」

「うん……ずっと甘えられたらいいのにね」

サクヤが私の頭に顔を埋めるのが分かる。こんな時間がいつまでも続けばいいのにと思う。でもそれは頑張ってくれているみんなには絶対に言っちゃダメなんだよね。

私は望まないと行けない。帰ることを。きっと今度は、こんな時間を望む時間を向こうでも過ごせると思って。

きっと過ごせるよ。もう私も甘えるだけの女の子は卒業しなきゃいけない。

だから私は頑張ってみんなを信じぬくよ。甘えてばかりは程々にして頑張る。ブレない、揺れない、心がほしいから。だって心は向こうでも変わりはしない物。

ここから持ち帰れる唯一の物じゃないのかな？　だからここで育てた心であの体を強くしたい。もしかしたらこれも一つの夢に出来るかも知れない。

ううん、してみせる。そしたらきっと、今より素直に向こうに帰りたいと思えるよ。

「そろそろ中に戻りましょう。なんだか冷えてきました」

「そうだね」

確かに夜風は次第に冷たくなっていく感じがした。だけどそれは普通の事？　日光が無いんだし……夜は冷えるのが当然だと私は気にしない。

二人で中に戻る直前、私は振り返りサクヤが見つめた彼方を望んだ。その向こうにはスオウ達が居るはずだ。彼は大丈夫だろうか？

シルフィングは元に戻せたかな？　いつも通り無茶してなければ良いけど。私は満点の星空に祈りを捧げる。

『どうかスオウが無事に帰ってくれますように』

私に出来ることはこれだけだ。ここエルフの国には『星の宅配人』という話がある。願いを届けてくれる宅配人。星にまたがり叶えるではなく届けるんだ。

流れ星はそんな宅配人の交通手段。願いを当人に届けてくれる宅配人。どうか私の願いも届けてください。すると一筋の光が夜空に流れた。

貸し与えられた部屋に置いてあった一つの絵本の他愛もないお話。だけどその願いを聞いた人々はきっともう一度頑張れると思うんだ。

だから無茶してたら私の願いを聞いて絶対に戻ってきてほしい。どんなことがあっても絶対に。届くはずもない声だろう……けれど私達ならなんて思ってやってみた。届け、届け、と今度は祈ろうかな。

「セツリ？」

その時聞こえたのはサクヤの不思議がる声。私はおかしくなってそれを結局やめた。彼ならそんなことしなくても帰って来るもん。ちゃんとまた私の元に……約束してくれたから。

不安が襲うのは私がやっぱり信じきれてないから。さっき信じることを頑張ると誓ったばかりなのにね。

「何でもないよサクヤ。ねぇ、サクヤはスオウの事信じてる？」

「何ですかいきなり？」

サクヤは部屋とベランダの間で私の言葉に首を傾ける。確かに私は何を確認したいのかな。何に確信を持ちたいのか……ダメだな私は。

「ううん。やっぱりいいや」

私は首を振ってさっきの言葉を無かったことにした。だってこれは私がやり通さなくちゃ行けないことだ。誰かの言葉に左右される様じゃまだまだだからね。
私はサクヤの横を通って部屋に入ろうとする。するとポツリと聞こえた言葉に頬がほころぶ。

「信じれますよ。彼なら」

嬉しかった。ただ単純に嬉しい。この気持ちをどうにかして保管しておきたいくらい。自分の選んだ選択は間違ってなんかいない。

そう思えて、そう確信できた。私は上機嫌に、だけどそれを悟られないように部屋の暖かさに浸る。きっと喜んでるのがサクヤにはバレバレだろうけど、私の興を削がないようにサクヤは後ろで黙って私を見つめるだけなの。
しかしその時、おかしな言葉が頭に響いた。それは本当におかしな言葉。

【信じるの？　信じていいのかしら……本当に？　あなたは二人の嘘に踊らされてるだけなのに……】

私は思わず後ろを振り返ってサクヤを見た。だけどそこには優しい顔を称えたサクヤの姿があるだけ。それに今の声はサクヤの声じゃ無かった。
私は部屋の中をぐるりと見回す。けれど私達二人以外の姿なんてない。

（何、今の？　私の中の声でもないよ……誰か居る？　見えないけ

ど……誰か居るの？）
【あなたの曇った目じゃ私は見えない。真実を見ることも出来ず、安い嘘に騙されて……あげくにはそれが希望ですって。笑っちゃうわ】

頭の中に深いな笑い声が響く。後ろから不振がるサクヤが近づいて来て私の名前を連呼する。ダメ……やめて……頭の中で二つが混ざりあってグチャグチャになるよ。
サクヤにはこの声が聞こえないの？

（何なのよ……嘘って……）

私はその場に耳を塞いでしゃがみ込む。これ以上聞きたくない。折角、強くなろうとした心が乱される。だけど頭に響く声は耳を塞いだところで消えることはない。

【あなたが信じる物は向こうには無いと言う事よ。それが二人の嘘。あなたは騙されてるの】
（そんなことない！　それこそ嘘に決まってる！）

スオウが……サクヤが……私に嘘を付くはずない。これもきっと私の弱い心が原因なんだ。強く、強く心を保とう。

【私はあなたの中の幻なんかじゃない。ふふ……信じられない？信じたくない？　だけど私が言った事が本当だといずれあなたは最も残酷な形で知ることになる】
（やめてよ！　何よ、何なのよそれ。私が信じてるのはあんたなんかじゃない！　あんたの言うことなんか絶対に信じないぃぃぃ！）

惑わされちゃ行けない。これはきっと敵の仕業だ。どうやってか

知らないけど私の頭に直接声を届けて、私を陥れる気なんだ。
幾ら耳を塞いでも無理なら……元を絶たなくちゃ。これ以上、聞きたくない。ねっとりと頬を舌で転がす様なこんな声……胸を突き刺す様な言葉の刃……全てが不快だ。

「サクヤ！　お願い……敵がいるよ。私の頭に声がするの。見つけて……サクヤなら出来るよね？」
「！！　……分かりました」

サクヤは私の言葉を信じてくれた。そもそも私を疑う子じゃない。信頼をそれ以上の信頼で返してくれる。そんな子だ。
だからこんな言葉は嘘に決まってる。見つけてシバいてやるんだから。サクヤにはそれが出来る。システムを覗けるサクヤなら、このセキュリティの穴を付いてる奴を見つけれる。

「捕まえました！」

その言葉と同時に私達は走り出す。大丈夫。この不安は自分自身で取り除く！

泡の様な私（後書き）

第三十五話です。
遅くなりましたごめんなさい。取りあえず時間がないから今日はこれだけで、また明日です。

二つの檻（前書き）

俺は憂鬱だった。この国に戻って何度溜息をついただろうか。少しはふっ切ったつもりの記憶はそうでもなくて……突き付けられた罪に頭を抱えずにはいられない。

そんな折にアイリと二人きりになる機会が訪れる。だけど僕はただ一心に逃げたかった。向き会えないよ彼女とは。泣いて去ったアイリを俺は追う事もしなくて、ただ灌漑にふけるだけ。

そこにやって来たのはガイエンだ。上機嫌な奴が語るのはこの国の未来？　アイリの事？　ガイエンは言う。

「ここで結ばれるのに愛などいらない」

俺のとる行動は一体……

二つの檻

「はぁ～」

気持ちが落ち込む。ここに来ると決めたとき、自分はもう色々な事を吹っ切れてると思っていたのに――全然そんな事は無かったようだ。

セラに上手く乗せられたというか何というか……俺はアイツ……スオウにまだ頼りになる自分でも見せたかったのかも知れない。

ＬＲＯに入って日も浅い筈のスオウが俺でも信じられないような事を次々やっていくのを一番近くで見て来て、怖くなったのかもしれないな。

自分はまた……なんて。アイツはそんな奴じゃないと知ってるし分かってる。もう何年の付き合いだと自分に言い聞かせたい。

アンフィリティクエストなんて言う訳の分からない物に巻き込まれて、命を削ってそれでもまだここで笑おうとするんだから天晴れな奴だよホント。

まあただバカなんだろうけど……あのバカは結局どこでも変わらなくて、それだから俺もここで自分でいれる。

誰だって違う自分を演じるこの場所で、実は素の自分で居ることが一番難しいのかも知れないと思う。俺だって最初は無様なヒーロー演じてたよ。きっと浮かれて、俺もバカになってたんだな。

それは薄過ぎた殻で……追い込まれると直ぐに崩れる物だったからきっと無理してるってアイリにはバレてたんだ。

だから俺を思って……背負って……行ってしまった。残ったのは自分のふがいなさと安っぽいヒーローの仮面と無駄な地位って奴だ。

それはきっと精一杯のアイリの俺に対する配慮だったんだろうけど……それがどんどん縛るんだ。いらないしがらみや責任なんてのが次々にのし掛かってきてさ。

そしてついには全部を投げる事になる。それを今更ガイエンのせいなんて言う気もないけど、顔を合わせるだけで胃の辺りがムカムカするのは押さえられない。

あの時だって……アイリの横に当然と言わんばかりに立つガイエンに俺はいい気はやっぱりしなかった。でも俺に何が言えるのか。あそこで・・あの立派すぎる椅子に小さく座るしか出来ないアイリを放ったのは俺だ。

見ることも出来ない癖に……逃げることもスオウの居る手前出来なかった。情けない姿を晒して、その少し前に言われてしまったんだ。

【お前らしくないぞアギト】

真っ直ぐな目だった。いつもあのバカは真っ直ぐな目をして人を見る。それが誰かを傷つけるなんて全く思ってない顔でさ。それがスオウの良いところ何だけど……たまにイラッとするよな。

でもそれをぶつけられるか？　出来る分けがない。何も知らないからと言ってスオウが悪い訳じゃないんだ。全てはぞんざいなヒーローの仮面を被った自分のせい。自分が巻いた種。

憧れだけで心が伴わない結果だった。

「はあ～」

再三のため息がこぼれでる。一体アルテミナスに戻って何回目だよ。俺は城の外の広場の端っこでふてていた。垣根に隔てられた、これも弱すぎる外界との壁みたいな物だ。

俺はとことんこういう所が好きらしい。てか落ち着く。だけど自

分の小ささに気づいてやっぱり肺から空気が出る。
空を見上げると満点の星空が俺に降り懸かりそうだった。すると何かが目に止まった。いや……こっちを見つめてる？　黄色い目が俺を見下ろしてるんだ。城の先端部分に止まる白い生き物……あれはクーか？

あんな所で一体何やってるんだろうか？　そういえばスオウも言ってたけどクーもおかしな存在だ。モンスターって訳でも無いし……ピクと同じサポートモンスターの実験体でもないだろう。
そこで俺が思いつくのは、ＬＲＯの無意識……そんな噂が流行っていた時期があった。それはスオウが入るずっと前でアイツが知る由も無いことの筈だ。
あのバカは目の前の事で一杯一杯だから情報がそこら中に溢れるこのご時世でも予めなるべく情報を集めようとしない。
それはいわゆる愚の骨頂でもあるけど、だからこそ目の前で起きる全てに新鮮さを感じる事が出来て、素直に驚くことが出来るのかも知れない。

古参プレイヤーなんて呼ばれる俺にはどうやったっても無理な事だな。新しい情報は常に掲示板で確認してるし、付き合いの長い情報屋もいる。それに友達からだって噂や色々はメールとして届く。
それは一年もの間ＬＲＯをやってきた上で身につけた他人より先に進むための術。スキルと言えるのかも知れない習慣だ。勿論努力もしたけど、努力だけじゃ絶対に看破出来ない範囲ってのがあるんだ。
何しろＬＲＯは広大だからさ。そして学生である以上、ここに入れる時間には絶対的な制限がある。それでも俺が他の人達より前を走れてるのは集まる情報の差と、やはりあの事件。

「……」

なんてこった。思い出す度にもれなく付いてくるんだなアレが。

「……はあ」

頑張ったけど、ほら、また出た。

ＬＲＯの無意識。それは単純に俺らプレイヤーからモンスターを守る存在。俺達はＬＲＯに元々配された者にとっては侵略者なんだ。

だからある時期からモンスターを守るモンスターが現れた。それをＬＲＯの無意識と俺達は呼んだんだ。そしてその時現れたのが、青白い光を纏い枝葉の用に分かれた尻尾が特徴的なフィニックス。

だからクーの変身後の姿を初めて見たときに感じた懐かしさはこれだな。

あの存在がクーと言う事になってるとしても今の俺ならそこまで驚かない。ここ数週間で驚く事が有りすぎた。でもそれはあの頃に戻ったみたいでやっぱりとても楽しい時間だった。

右も左もわからなかった頃、入る度に発見があって戦闘の楽しみを知って、そして初めて他の人を助けたあの頃。あんなにほのぼのとはしてないけど、それでもさ……スオウといると奮い立つ物がある。

沸き立つそれを押さえられなくなった時あのスキルを見せてしまったわけだしね。相手がクーってのもなんだか運命的だ。

俺は再び城の先端に止まるクーをみる。横では何やら大量の金属が鳴る音が聞こえていた。きっと軍が集い始めたのだろう。やっかいな事に成ったものだ。

その時、城の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

「では出発は九時頃になると思いますので。一声兵達に掛けてくださいアイリ様」
「わかりました。あの……ガイエン。セラ達の帰りを待たないのですか？」

二人は何故かこちらに寄ってきて垣根の向こう側で足を止める。人が少ないからか？　なんだか予期せずに盗み聞きみたいに成ってしまっている。
アイリとガイエン。その関係はお姫様と親衛隊隊長で軍の総指令官なんだから二人でいる事に疑問はない。だけど何故だろうか……やはり何か言いしれぬ物が浮かんで来る。

「待ってるではありませんか。でもあれはあくまで保険。心配いりません。我らでタゼホは解放して見せましょう」

やっぱりガイエンはスオウ達に何かをさせる気は無いようだ。と、言うかあてになんかしていない。ともすればこのまま戻らなくてもいいと思ってるのだろう。
それか戻ってもそれは逃げ帰りを予想してるとか？　そしたらアイリの期待を裏切ったとかで刑罰にでも処する気だろう。

「でも……」
「アイリ様。これ以上のワガママは聞き入れません。貴方はただ玉座に座っていてくだされば結構です。国の問題は全て我らが解決しますゆえに」

ガイエンに押されてアイリは口を噤んでしまった。やっぱりガイエン達はアイリをただの人形……飾りとしか思ってない。
「では私は、軍を見てくるので目の届く範囲にいてください。街中

で何が出来る訳もないですが、心配ですから。それとあの件も……そろそろ国民は嬉しいニュースを臨んでる筈です。
最近は不安を煽る事だけが続いているので、それを取り払う物が必要でしょう。不安がる国民の姿なぞ見たくないでしょう……貴女はこの国のお姫様なのですから」

ガイエンのその言葉に息を詰まらせる様なアイリを感じた。なんだあの件って？　二人の間に何があるんだ？　長くここを離れていた俺にはわからない。
ただアイリの不安だけは垣根を隔ててもハッキリと伝わって来るようだった。

気まずい時間だ。俺はアイリに気付いてるけど向こうは気付いてない。てか気付かせたくない。だからこの場を離れたいけど、生憎出る方向は垣根側しかなかった。反対は城の城壁だ。
なら俺は息を殺して気配を絶って、この場を凌ぐしかない。アイリが演説をするために軍の前に上がるその時まで。我ながら情けない事この上ないけど俺はもうアイリを泣かせたくない。
今日、会議の前に目の前で泣かれて……俺はどうする事も出来なかった。多分それは今も変わらない。きっとスオウはこんな俺を見たら笑うか罵倒しそうだけど、しょうがないだろ。苦手な物は苦手だ。

「はぁ～私ってダメだな。どうしてハッキリ嫌だと言えないのかな。折角……アギトも戻って来てくれたのに。どうしてあの時は怖くなかっただろう。
あの会議の場でガイエン達に逆らう事言えたのかな？」

アイリの口からコボレる言葉が心許ない壁を通して聞こえてくる。

これはもう盗み聞きの何者でもない。しかも女の子の独り言……最低だ。
アイリが言ってるのはスオウ達に協力を仰いだ時の事だろう。確かに今思えば、あれはアイリを知る面々からすれば驚きの事だった。
だからこそあの場の連中はやけにざわついたんだ。もしかしたらあれがアイリの初めての抵抗だったのかも知れない。
周りに見せる王族としての姿と普段のアイリはギャップがある。こいつはいつだって無理してるんだ。頼まれると断れなくて……押しに弱い。
だから心配で心配で……でも俺は、既にそんな権利もない。垣根一つ超えることだって許されない。

「あ、そっか……」

ん？　何か答えを見つけたのだろうか？

「アギトが居てくれたから……だよね。――ふふ」

顔が赤ペンキで塗りたくられたかと思った。何言ってるんだアイリの奴。どうしよう、もの凄く嬉しい。

「それにあの……スオウ君かな？　会ったばかりのアギトに似ててドキドキしちゃった」

何故か一気に熱が引く感じがする。あのバカと俺が似てた？　マジでやめてほしい。と言うか、その名前がアイリの口から出たことにショックを受けてる自分が居る。
今でも俺はアイリの何だと思ってるんだろうか。自分から捨てた逃げた癖にだ。

「ほんと……何ショック受けてんだろ俺」
「え？」

しまったーー！　思わず口を突いて出た言葉をアイリに拾われた。周りがそれなりにうるさいのにどうしてこういう時は届いてしまうんだろうか。
それだけ薄い壁だって事かも知れない。
するとガサゴサと垣根が揺れる。やばい、もしかしてこっちに来る気じゃ！？

「アギト……」

そして案の定俺達は再び向かい合ってしまった。思わず飛び退いて城壁にぴったり体をつけている俺。そして顔だけ垣根から出したアイリの目には再び涙が貯まって――――

「泣くな、バカ！」

俺は思わず近くに行ってアイリの目を隠す様に手で覆った。何やってるんだ俺は。意味がないにも程が有る。目だけを覆ってるから頬を流れる涙は丸見えなんだ。

「バカって……言った方がバカってアギトが言った。だからバカはアギトでしょ」
「なんだって？　俺は自分がバカだなんて絶対に認めないぞ。だからバカを連呼するなバカ」
「自分だって……連呼してるのぅ～にぃ～ズルいよ」

なんだか昔を思い出す会話だった。てか、意外と普通に話せるも

のだ。今は二人きりだからだろうか。俺はしょうがないからアイリを引っ張り出す。
いつまでも尻だけ垣根の外に晒してる訳には行かないだろう。だってお姫様なんだし。
でもアイリの涙も止まり落ち着いたら流れるのは気まずい雰囲気。それほど広くはない空間で開いた微妙な距離もそれに拍車をかけてる感じだった。位置が悪い。
耐えきれない――――俺はそう判断した。

「じゃあ、ごゆっくり……」

俺はそそくさと退散する事を選んだ。だけどこれは失敗。だって垣根に顔を突っ込んだ時に聞こえた言葉で足が止まった。

「なんで逃げるの！？」

それは奇しくもあの時と同じ台詞だった。「何で逃げるの」か……それは俺も知りたいよ。もっと素直に……強く成れればいいんだろうけどね。
でも俺はどこまでも不器用で、素直になんて成れない奴なんだ。

「お前と一緒に居たくないから……」

こうやって最低な言葉を口に出してしまう。それも垣根に頭突っ込んだまま――――もう引っこ抜く気もないけど。ある意味、楽だよコレは……間抜けで居れば話をはぐらかせる。逃げ出せる。

「嘘……だよねアギト？　私の事まだ怒ってるんだ……いっぱいいっぱい謝るから……行かないで」
「違う……そうじゃない……ん……だ。そうじゃ……」

アイリは俺を責めない。こんな俺を今でも信じてくれてるのだろうか。でも……それは、だからこそ……アイリが謝る事じゃない。俺は……

「違うって……わかんないよ。隠し事は無しって……約束……したよ」

「ごめん……」

僕は許せないんだ。自分自身に対して。でもそれを言ったらアイリはまた謝るだろう。そしてそうさせた自分がまた嫌になる。

それは永遠に続きそうな悪循環。僕達はあの時から笑顔で居られなく成ったんだよ。だから……ごめん。

垣根に頭を突っ込んだ間抜けなエルフは再び足を動かそうとする。今度こそこの場を去ろう。そう決めた時だった。

「ア……ア……アギトの……大バカ者ー！！」

アイリの聞いたこともない大きな声に続いたのはわき腹への衝撃だった。女の子のタックルなんて生優しい物じゃない。あれは爆発の衝撃だった。

垣根から吹き飛んで城壁に叩きつけられる。ダメージには成らないけどそれなりに痛い。目を向けるとアイリは小さな小さな短剣を翳していた。刃も無いそれは玩具にしか見えない。

せめて三十センチ有るか無いか位の物。だけどあれは紛れもなく武器。それも最上級の稀少度を誇る国宝だ。あれを本気で使われたらアルテミナス領土でアイリに勝てるプレイヤーは居ないだろう。

それだけ桁外れな物だ。ごく一部の武器がこう呼ばれる『バランス崩し』その一本『王剣カーテナ』それが俺に向いていた。

「アイリ……お前……そんなもん持ち出すんじゃねーよ！」
危ないだろ！　ここはいくら何でも怒らずには居られない。
「だったら逃げないでよ！　アギトがバカでヘタレでバカみたいな事、ずっとやるから！」
「おい、今バカ二回言ったぞ！　ワザと繰り返しただろ！」
てかそんな物持ち出されて逃げない奴なんて居ない。いや、まあアイリの言葉の意味は分かるけど俺は……
「それが何？　アギトなんてバカトで充分よ！　ずっとずっとずっとずっとずっと――」
「おい！　待てアアイリ！　カーテナから何か出てるぞ」
それは黒く深く尖った鏃の様な物体……空間を蝕んでる。だけどあんなのはカーテナの能力の末席だろう。
「――待ってたのにぃぃぃぃ！　バカァァァァ！」
「ぬあ！」
カーテナから飛び出した鏃は俺の顔面数センチを掠めて空に消えていった。
「はぁはぁはぁはぁはぁはぁはぁはぁ……」
アイリの息が荒い。あれだけ叫べば……とも思うけどそれだけじゃない。カーテナの副作用だ。強大な力にはリスクが有る。それはここＬＲＯの大前提だ。
俺は畏れおののいていた。さっきの攻撃は洒落に成らない。文句

でも言ってやりたいけど、あの顔をみたら自分の非が猛烈に襲ってきて口を金魚みたいにパクつかせるしか出来なかった。
アイリは泣いていた。だけどその涙は今まで何度も見た涙の中で一番濃く感じた。いろんな感情が沢山混じり会った濃い涙。俺はあれと向き合わなくちゃ行けないんだろうか。
多分……きっとそうなんだろう。だけど俺はやっぱり逃げる事を考えてしまう。あの涙を自分が止める資格は無いから。だけど荒い息を吐きつつ言ったアイリの言葉は俺のふがいない部分に突き刺さる。

「はぁ……はぁ……アギト、私遠くに行っちゃうよ。捕まえてよ！助けてよ！　イヤな事っ……ぜんっぶ……言ったよね。すくってあげるって！」
「――！！」

思い出す情景は一つの冒険の後。共に歩んだ道のりを振り返り、手の中に収まった小さなリングを噛みしめた。そして俺達は互いにそのリングを……
俺は顔を背けた。輝き過ぎたあの瞬間を俺は見れない。だけどそれが合図だったのかも知れない。アイリの中で何かが崩れる合図。
アイリは何かを投げた。そして走り去る。俺はアイリが捨てた物を見てアイリの去った方へ手を伸ばした。だけど大きく口を開いても言葉は出ない。
出せるはずがない……これで良かったんだと思う自分には。震える腕が何を伝えようとしてる……だけどそんなの、知りたくも無かった。

「やはりお前かアギト」

垣根から顔を出したのはオールバックの渋いオジサンガイエンだ。見たくも無い顔だから背を向けよう。

「アイリ様がさっき走り去った。どうするんだ？　もうすぐ軍の召集も完了すると言うのに」

ガイエンの言葉を俺は無視。話したくも無い、さっさと消えろ。

「まあ、だが……丁度良かったな。お前へのシコリは消し去ったみたいだから助かったと言っておこう」

ん？　なんだそれ？　いや、そもそも何でこいつらが今になって俺を呼んだのかわからない。国を抜けた俺に助けを求めるなんて事しないだろ。

けど……それを気にしてどうするんだ。俺はもう捨てられたんだ。このリングと同じようにやっとでさ。それにガイエンの声は明らかに誘ってる。乗るな俺。

「……だから何だよ。それだけならもう行くぞ。俺には関係ない」

「ああ、関係無い。無くなるさ。ようやくだ……ようやく私がこの国を手に入れる時が来た。このリングが彼女の指にはまる時がな」

そう言ってガイエンは腕を動かして何かを取り出した。それは大きな青い宝石……中で泡の様に光が灯っては消えていく。そうあれは指輪だ！

俺は振り返り腕を横に振って叫んだ。

「ふざけるな！　そんなものアイツがはめる訳……それにお前、国だと！？」

「彼女ははめるさ。この国の声に負けて。そしてこの国の為に私と

結ばれる。愛なんて物はここでは必要ない。そうだろう負け犬？」
コイツが狙ってるのはアイリじゃない。ただ国という大きな枠組み。その頂点の椅子だ。その為だけに王族と直結したアイリを……俺は動揺を隠せない。
負け犬だと！？
「お前みたいな奴にアイリは……！」
「今更何をしても遅いぞ。アイリ様は切り捨てたんだ。お前をな。後は簡単だ貴様には少しの間席を外して貰えばいいだけだ。私達の式の間な。
邪魔はいかんだろ？　幸せな二人を祝福出来ないのなら退場は免れまい」
奴はゆっくりと近づいてくる。垣根の向こうには奴の犬が待ちかまえているんだろう。それは軍と言う名のふざけた犬だ。
俺に逃げ場はない。だけどたじろぐ足は止まらない。覚悟も決まらないのか。
「どうする？　牙を抜かれた元犬よ。それとも最後に足掻いてみるか？　我が国の『ナイトオブウォーカー』！」
「くっ！」
互いの武器が音を立てて絡み合った。だけどその時、異変が起きる。風は冷たさを称え光明の塔の光が萎む。あの塔の光は連なる王族の輝きを示す。
兵の一人が何かを告げる。だけど俺はそれより早く動き出す。
明暗するは光のつぶて。木霊するは犬の叫び。
何を俺はやってんだ？　だけどこの足は止まらない！

二つの檻（後書き）

第三十六話です。

今日は寝ないでそのまま投稿です。だから眠い！　目がチカチカする！　日光は自分には恐れ多い！　とか思っちゃう今現在。

今回はアギト視点のお話です。複数展開する話は大変です。最後にちゃんと合流できるかな？　頑張りますので優し眼でどうか見守ってください。評価・感想、随時受付ております。

良かったらくださいな。ではまた明日にて、何か良い事あったらいいね。

培う心、まやかしの勝利（前書き）

僕とピクは協力して麒麟に立ち向かう。僕等はそれぞれの弱点を補い、後は心で押し切った。そこにはきっと多大な運が有ったんだろう。

でもそれすらも幻でまやかし……ＬＲＯは僕達にそんな優しい訳がない。

培う心、まやかしの勝利

勇気とは生まれるもので、掴むもの。自分の苦悩が晴れた時に……誰かの言葉に感化された時に……その行動の意味を理解できた時に……誰かと思いを繋げた時に……心が前を向いたその瞬間、自分の胸に灯るよう、その場に沸き上がるよう、勇気という光が見える。

すると不思議と恐怖や不安がなくなったり、小さくなったりする。出来ない事なんてない気がする。開ける事が出来なかった扉が開いた感覚。

進み出よう……その先に。迷わず、畏れず、止まらずに。

暗い森を照らす淡い光の玉が弾けゆく。雷撃を纏った布が僕達を隔てた木々を物ともせずに切り刻む様は戦慄を感じる光景だ。僕とピクは意気揚々と駆けだしたけど、その布の壁に阻まれて刃が届く事はなかった。

結局ピンチなのは何も変わらない状況。まるで第二形態にでもなったかの様な麒麟に未だ手も足もでない。僕の手数は腕一本分少なくなっているのに対して、向こうは舞う布の数だけ攻撃出来る。

それは絶対的な差だった。追いつくわけが無い。

「スオウ君！」

頭に届いたシルクちゃんの声で僕は身を隠してた木からとっさに横っ飛びで飛び出した。その瞬間青白い光を放電した布が、まるでカードキーを差し込む気軽さで、樹齢何十年を誇りそうな幹を貫く様が見えた。

這い上がってくる悪寒を押さえつけて、転がり様に地面を無理に

蹴って方向転換。すると方向転換する前の地面に布が刺さる音が聞こえる。
でもまだまだ安心なんて出来ない。放電の音が前方から聞こえる。これで攻撃が来る方向がわかるけど、それはとっさの判断と言うよりも危険を回避する防衛本能。
反射の賜で動くから、なかなか次に繋げにくい。ここは無理してでもあの布を弾いて距離を詰めたい所だ。今の距離間は最悪過ぎる。
どうやったって間合いの外で僕の剣が届く事が出来ない距離。前を向く事を諦める気もないから、どうにかして反撃のチャンスを掴みたい。

「ピク！」

僕の呼びかけで嬉しそうに飛んできたのは桜色の小竜。

「ブレストファイヤ！」

僕の指さした方向に向かってピクは炎の固まりを吐く。痺れる程の衝撃が辺りに伝わった。あれで何枚かは落とせただろう。
僕はニーベルを構えて走り出す。爆煙の中から数本の布が迫るけど今度は逃げない。紙一重で布をかわし側面から切りつける。
一枚・二枚……三枚！　爆煙が晴れた先には麒麟の姿が見える。このまま一気に接近だ。次、離されたら時間的にヤバい。テッケンさんがモンスター共を引きつけてそろそろ二十分は経つだろう。
根性で三十分は行くとか言ってたけど麒麟はここまでＨＰを減らしてない。ボスクラスのＨＰなら後十分で削りきれるか分からない……けどやるしかない！
だからここで意地でも食いつかないとダメなんだ。あの大群が戻って来たら最後。怪物達に僕らは押しつぶされてしまう。

一向に直る兆しが無いシルクちゃん達の麻痺。もしかしてあの麻痺は邪魔させ無いため？　僕が麻痺に掛からなかったのは偶然じゃ無く必然だったのか知れない。

これがウエポンアライアスと言う試練なら望はタイマンなのか。それならみんなの回復は期待出来ない。絶望的な状況……だけど救いもあった。それはピクの存在だ。

どうしてピクは動けるのかは分からない。まだ一回も攻撃を受けてないからか、それともプレイヤーじゃない存在だからなのかとにかく謎だ。

だけど力強い味方が残ったこと、これこそを救いと呼ばずになんて言おうか。一人で出来ない事が出来るんだ。一人でいけなかった場所に行けるんだ！

「ウオオオオオ！！」

僕はピクが開いてくれた道を伝って麒麟に剣を振るう。渾身の一撃はようやく麒麟のＨＰを僅かに減らした。だけどここで止まる訳には行かない。

続けざまにニーベルを振るい、奴が向かわせて来た布を根本付近から切り捨てる。幾ら四方八方から襲いかかる雷撃を纏った布でも伸ばし過ぎたのが逆に仇になった。

僕に届くまでに麒麟の体から切り離す。それは僕の方が早かったんだ。切られた布は空中でほつれて消えていく。このまま、丸裸にしてやろう。それでずっと戦い安くなる。

「来てるぞスオウ！」

鍛冶屋の声に反応して左右を確認すると百八十度横、丁度左右から二枚の布が迫っていた。全部落としたしたと思ったけど、それはどうやら反対側の死角から延びてるみたいだ。

そして簡単に切ることも出来る木を使ってあり得ない位直角に布を曲げての奇襲攻撃。さっきから麒麟が動かないと思ってたのは全てはこの為か？

ヤバい！　片方は防げるけど、もう片方はどうすればいい？　自分の失った腕が憎たらしい。左右に剣を持ってたなら対処できた筈なのに……。

放電音のバリッと言う音が耳に後数センチと迫ったときに僕は決断した。逃げる事も守ることもせずに、ただ目の前の白いわき腹に剣を突き立てることを。

「ヒヒ～～～ン！！」

それはただの突きだった筈だ。スキルも無い僕の、ありふれたただの突き。でもその選択は間違っていなかった。思いを込めて放ったその一撃は、激しく麒麟の体をズラした。

そのおかげで木を経由していた布は僕に届く事無く止まったんだ。そしてそれは麒麟が縛られた状態と同じだった。引き絞られた布は麒麟の自由を奪っている……こんな好機はもう二度と無いかも知れない！

「ピク！　行くぞ！」

「くぴ～～」

号令と共にピクは次々とブレストファイヤを放つ。伝わる熱気を気にせずに僕もニーベルを振るう。スキルなんて物は持ち合わせてないからひたすらガムシャラに……ただ精一杯にニーベルを振るった。

銀の軌跡は爆煙の中に次々に吸い込まれていく。絶えず打ち続け

られるブレストファイアに周囲は煙に包まれて視界なんて無くなっていた。
でも、そこに居るはずの麒麟に向かって進む手に迷いはない。ニーベルを伝って届くその感触は信じれる物だ。居る、間違いない。効いている……そうであってほしい。
だけど不意にニーベルが宙を切っただけの感覚があった。そして今まで直ぐ近くで爆発してたピクの攻撃が遠くに聞こえる。
確信して……そして理解したその瞬間、煙の中から青白い獣が僕に向かって鋭く光った角を向けて姿を現した。

「くっそっ！」

迫る白銀の角に一本だけじゃ心許ないニーベルを向ける。ぶつかり合う白銀と銀。その瞬間「ピキ」っと何かにヒビでも入る様な音が聞こえた。
それはもしかしてニーベルの……だけど油断したらやられて仕舞う中、それを確認なんてする余裕はない。だけどその時、再び火球が麒麟の背面にぶつかり一瞬の余裕が出来た。
僕は鍔迫り合いから解放されて、バランスを崩した麒麟の頭にもう一度ニーベルを叩き込む。今度はクリーンヒット。だけど再び「ピキ」という音が聞こえた。
ニーベルは大丈夫なのか？　ピクのナイスアシストで窮地を打開できたけど武器に何かあるんじゃ不安が尽きない。

「耐えてくれよ……」

そう願いつつ僕は再び奴の脳天にめがけてニーベルを降ろす。効いているのかは分からないけど、麒麟は頭が弱いのかも……。
今までどこを斬っても顔色一つ変えなかった奴がもたついてるんだ。これは弱点と考えてもいいのかも知れない。だから僕はまたこ

うやって同じ部分を狙う！
ガッキィィィン！　激しい音を立ててニーベルが脳天に直撃する。そして今度こそ麒麟の膝が折れた。奴の倒れ行く様が視界に映る……もしかして僕は勝ったのか？
そんな淡い期待が膨らんだ。
ドサッ……と言う音を響かせて麒麟は地面に倒れ伏した。

「やったのか？」

そんな声が遠くで聞こえた。それは僕の声だったのか知れないし、麻痺で動けない誰かだったのかも知れない。けれどそこには紛れもなく横たわる麒麟の姿がある。
それが事実……だったら手を掲げずには居られなかった。

「よっしゃあぁぁぁぁぁ！」

僕は大きく声を張り上げた。ピクも一緒に喜びを分かち合うように空中でバク転してる。いいね、元から空中飛んでるから楽々だ。

「シッ！」「うん！」「ふ～ん……」

向こうの麻痺組のみんなは三者三様のリアクション。ちなみに最初のは鍛冶屋だ。多分心で拳を握り締めたんだろう。次のはシルクちゃん。彼女らしい謙虚で可愛らしい同調だ。
そして勿論、最後のどうでも良さそうな声を上げたのがセラだ。少しは喜べ！　てか、負けなかったんだ～みたいな顔ヤメレ！
私はその一点に賭けてましたよ、みたいなその顔がムカつく。僕がどれだけ頑張ったと思ってるんだ！　隻腕で！　少しは誉めろよな。普段ツンツンしてるキャラはこういう所でデレを見せなきゃ需要がねーぞ。

「私はそんな安っぽく無いわよ。媚びへつらうなんて大ッキライ。腹の中ではいつかみてなさいよって思ってるから」
「危ない！　すっげー危ないメイドがここにいるぞ！　いや、そもそもそれはメイドじゃない。メイドの服着た暗殺者じゃねーか！」

スゴく黒過ぎて逆に関心してしまう。度を過ぎる物は何でもそういう物なんだ……とか思っちゃう人間心理が働くね。
度を過ぎたバカとかが可愛く見えたり、あり得ないほどのダメ人間が何故か母性本能擽りまくりでめちゃモテたりなんかしてしまうアレだ。

有名どころでは、天才が書いた絵画なんかだろう。あの特異な絵画。教科書なんかで見ても「え？　これがそうなの？　自分の方が上手く書けるんじゃね？」とか思ってしまうあの画家の作品だ。
でもあれはあ絵画として度を越しすぎてたのが良いと思われた要因なんじゃないかと僕は思う。つまりあの画家は度を越した天才だったと言うわけだ。

てか、話が脱線したけど幾ら度を越しても向こうで無様に這い蹲ってる凶悪メイドを認める事は出来ない。何故ならあいつが今へつらってる中には僕の親友が含まれてるからだ。
さっきの話が本当なら、アギトはいつかセラにどうにかされてしまうのだろう。あり得ない話ではない。セラはメイドという仮面を被ってるに過ぎないんだから。
あの服の内側には暗器がそれはもう、と言う位仕込まれてて掌を返す準備は万全とかでも驚かない。いや、実際その程度セラはやるだろ。
僕はセラの暗器は一つしか見てないけど、そもそも暗器は一つじゃ成り立たないだろう。次に何を取り出すか……どこまで隠し持っ

てるかと疑心暗鬼させて戦いでの心理を常に取っていく。そういう感じだ。
動けない今の内に脅して誓約書でも書かせた方がいいのかもな……犠牲者がまだいない内に。本当にまだ犠牲者がいないのかは定かでは無いけど。

「あ、動けるよ」

僕がセラの蛮行を予め防ぐ算段を練っていると不意に聞こえたその言葉。顔を上げて見てみると銀髪少女のシルクちゃんが見事に地面に立っていた。

「うぬ、確かに」
「はあ、良かった。あの痺れる感じも不快なのよね。誰かさんの様に」

同様に立ち上がった二人。だけど何故か片方の視線が痛い。僕か？　僕はおまえにとって不快だったのか。その目はアンタも消えてよ、みたいな目なのかな。

「まさか、そこまで……ぷぷ」
「なんだそのププって！　思ってた！　確実におまえは僕の事を不快でバカで死ねば良かったのに、って思ってた！」

もう最悪だよ。この腹グロメイド。勝利の美酒位味合わせろってんだ。

「まぁまぁスオウ君、落ち着いて。後半から確実に被害妄想が強くなってたよ」
「そうだぞ。幾ら何でもそこまで彼女も思ってた訳がない。ちなみ

に俺はお前がバカとは思ってがな」

ウルサい……バカなのはお互い様だろう。この職人バカめ。どうやら僕が思ってた仲間はシルクちゃんしかいないらしい。後はピク。

ピクは飼い主が良いからきっとあんなに良い子なんだろう。他の二人は仲間から除名しておくか。

「僕の心は深く傷ついたからな！　二人は仲間から除名だ！」

「そうなんだ。なら復讐……」

「末永い付き合いを申し込みたいです！」

なんださっきの復讐……って。思わずひれ伏したじゃないか。後ろから刺されたくなんかないんだ僕は。百歩譲ってアギトは良いよ。諦めつくから。

だけど自分はダメだね。自分自身を僕は諦められない。でも勢いでつい変な事を言ってしまったぞ。

『末永い付き合いを申し込みたいです』だよ。捉え方によっては告白に聞こえてしまいそうな一文だ。なんて恐ろしい。ミスったけど発した言葉を今更回収できる訳もなくて……これはからかわれる事必死だ。

他意は無く、純粋に友達続けさせてください宣言だったんだけど……全力で変な方向に持っていくのがセラだ。

「そう、それじゃあ末永い付き合いを受けるためにこれにサイン頂戴」

「なんだそれ？」

「読めばわかるから」

僕は渋々、翻された紙の文面を読む。え～と、何々――

「奴隷契約書――私は一生を貴女様の為に尽くし、苛められる事を快感・はては無償の喜びと出来る事をここに誓います。貴女の犬に、私は成りたい」
「「……」」

え？　何その空気。ちょっと待てよ。鍛冶屋は良いよ。だけどシルクちゃん！　君は離れないで！　僕の唯一の清涼剤の君が居なくなったら落ちちゃうよ。この訳の分からない世界に僕は落ちてしまう。

つなぎ止める為にもそれ以上離れないで。

「はい、入力画面出してあげたから、ね」
「誰が書くか！　僕を変な世界に引き込むな！」

偶に見せる可愛い顔をここで使うんじゃねーよ。一瞬、それも良いかな……なんて思う自分が出てきそうに成ったじゃないか！

「大体、僕を見てるのは不快なんだろ？　そんな奴を奴隷としても側に置こうとするなよ」
「別に不快なんて私は言ってないけど……それってアンタの想像よ」

うん？　なんでここで照れくさそうに顔を背ける。それは奴隷契約書を翳す奴の仕草じゃないだろう。確かに僕が勝手に頭の中で想像を膨らませたに過ぎない事だけど……あながち間違ってるとも思えないんだよ。

「アンタはどれだけ私が黒いと思ってるの？」
「ん？　そんなの決まってるだろう」

セラはこの上なんか無いといつも僕を驚かすよ。だから当然――

「世界で一番――ブボァ！」

殴られた。それもグーで。女の子に拳で殴られるなんて最低の男の証じゃないか。いや、それこそこっちの筋合いじゃ無いはず何だけど。

どうしてセラは躊躇いもなく、死闘を終えたばかりの僕を殴れるのかが謎だ。普通の神経してたらまず出来ない事だよね。どうしても遠慮という気持ちや、僕の体の有様を見て直接攻撃は勘弁しようと思うはずだ。

なのにセラは殴った。躊躇い無くその白魚の様な腕を高速で突き刺した。鬼だこいつ……こんな事してくれるからセラより上が想像出来ないんだろうが！

僕は地面に倒れ伏した。まさに麒麟と同じ状態だ。丁度自分の引きちぎられた腕が見える。まだくわえてやがったのか。いい加減に放せよな。

「ピキ……」

またそんな音が聞こえた。僕は残った手にまだ持っていたニーベルをみやるけどヒビなんか入ってなかった。じゃあこの音は一体・・・目に映ったのは麒麟の額にある白銀の角だ。

「まさか……アレか？」

「大丈夫？　どうしたのスオウ君」

倒れた僕をのぞき込む様にして心配してくれるシルクちゃんが天使に見える。銀髪に白を貴重とした修導服の様な格好はまさに神の使い。この子以上に似合う子は良ないだろう。

その肩にはピクが今し方降りてきた。なんて絵に成る光景だ。思

わず見とれちゃうよ。一筋の光が見えちゃいそうだ。
僕はそんなシルクちゃんに言ってみた。
「いやさ、麒麟の角が折れそうだなって思って」
「角？　――ひっ！」
シルクちゃんは短い悲鳴を上げて顔を背けた。多分僕の腕を見たからだろう。あれは自分でも思うよ。グロいって。
するとそんなシルクちゃんを見てからか。セラがトコトコ麒麟に近づき――
ガッ　（セラが僕の腕をぞんざいに掴む音）
ブシャァ　（セラが豪快に麒麟の口から僕の腕を引っこ抜く音）
ポイ　（僕の腕を軽く捨てた音）
「シルク様。グロい物体は排除しましたから安心ですよ」
メッチャ爽やかな笑顔だった。
「――て、なにしてくれんだ！　僕の腕どうして捨てた！？」
「だって生ゴミでしょ？」
可愛らしく首を傾けるセラ。こいつはとうとう他人の腕を生ゴミ言いやがったよ。
「くっそぅ……」
僕はこぼれ落ちそうな涙を必死に堪えて腕の捜索を始めた。もうイヤだ。あの悪魔に関わってたら心を殺されそうだよ。

僕たちは安心していた。麒麟は倒れ、そして麻痺が解除された事でウエポンアライアスは一応の終わりを迎えたと思っていた。後は多分泉の精にでも報告すれば達成だろう。
麒麟のＨＰがまだ大分残ってるのに動かなく成ったのはおかしいけど、そういう仕様なんだろうと思えば納得出来た。だってそもそもあのクラスのモンスターを一人で……いや、一人と一匹で倒せと言うのが無茶な話だ。
だから何かしらの条件があったのだろう。僕達は運良くその条件をクリアしたと言う事だと思う。
だけどそんなにＬＲＯというゲームは優しくないと僕は散々知っていた筈何だけどね……。

僕は半べそかきながら腕を捜索してた。後ろでは麒麟の元に集まって何やら話してる三人の声が聞こえる。そんなに力を入れて投げて無いはずだからここら辺の筈なんだけど……何故か見つからない。
だけどその時、草むらに突っ込んだ僕の腕が見えた。やったようやく見つけたぞ。腕があれば元通りに成るかもしれないからね。
元々腕がちぎれるなんて事事態がおかしいけど、それはきっと僕がおかしいせいなんだ。浸透率……それは確実に上がっていて、その檻の扉は徐々に狭まって行っている。今、この瞬間も。
だからこれは僕にだけ起きた不幸な事だ。それでもこれからを戦い抜くために隻腕じゃどうしても心もとない。僕はみんなを・・強いてはセツリを助け出す為に両腕は必須なんだと、さっきの麒麟戦で実感してた。
だからこの腕を無くす訳には行かない。僕は腕に手を伸ばす。だけど横から伸びた手が僕より先に腕を取る。

「あっ……」

僕の間抜けな声が漏れた。だけど瞬間、その声を出した喉がひきつる。何故なら……横から延びた手の主は、紛れも無くテッケンさんが引き連れた筈のモンスターだったからだ。
僕は驚きながらもゆっくりとした動作でこの場を離れようと試みる。だけど次の瞬間、後の事も考えずにニーベルを振るった。
だって……だってあの獣人、僕の腕をパクリと口に入れやがったんだ。僕は思わずニーベルを振るって奴の首を飛ばしていた。これもシルクちゃんには見せられない光景だ。
だけど普通は一撃で首が飛ぶ……なんて事は無いはずだけど僕の無意識はそれを凌駕したらしい。クリティカルヒットでもあったのかも知れないな。

だけど僕はこの時、最悪の事態が迫っている事に気づいた。腕を奴が消えた後から拾い上げて、急いでみんなの元へ。伝えなくちゃいけない。
そうしないと僕達は圧倒的な闇に押しつぶされてしまう事は必死だったからだ。だけどみんなの元に戻った僕を待っていた光景もまた闇の一つだった。

そこには完全に雷化した麒麟と泉の精の姿が立っていたんだ。この瞬間、走馬燈が人生のアルバムを流してもおかしくはない状態だった。
「ピキ……ピキキ」
だけどまだそんな音が僕の耳には届いていた。それは僅かな希望の音。

培う心、まやかしの勝利（後書き）

第三十七話です。
取りあえずごめんなさい。もう本当にごめんなさい。どんな事を言っても言い訳にしかならないのでごめんなさいとしか言いません。僕は宣言した一日一話を守れませんでした。
自己嫌悪です。でもそれでもまだ皆さんが寛容に見守ってくださるのなら僕は頑張ります！　許してくれとは言いません。それはこれからの作品の出来で判断していただきたいです。
だから僕は許される様に頑張って行きます。なので今日は連続二話投稿します。続いて第三十八話もよろしくお願いします。
本当にごめんなさい。

混乱の只中の私（前書き）

私たちに迫ったのはアルテミナス軍！？　どうしてなんで？　私たちは協力関係の筈なのに……だけどそれはアギトのせい？　一体どういう事なのか分からない。

私たちは取りあえず軍への投降を拒否して、強行突破を選択。だって私は自分で何が出来るかを知りたかった。それに気になる事がありすぎるしね。

城を抜けて広場に出た時、そこで私たちを待ってたのは最悪の敵。そこで私たちはこの国渦巻く陰謀を知ることになった。

混乱の只中の私

「クー！　セツリは下がってください！」

アルテミナス城の廊下にサクヤの声が響きわたる。クーは開いた窓からどこからともなくサクヤの言葉を聞きつけて現れた。

そして戦闘態勢に入ったクーはその姿を変えていく。私たちは一刻も早くあの声の主の所まで行きたいのに、立ち塞がったのはアルテミナス軍だった。

「どうして？　何でこんな事するんですか？　武器を引いてください！」

私は声を張り上げる。だってこれは信じられない事だ。何でこんな所で私達が争わなきゃいけないの？　今から協力してタゼホを解放するんじゃ無かったの？　貴女達のお姫様がそう決めた筈だよ！

「我らが姫様は現在行方不明……それと同時にアギトが我らにその刃を向けた。それならば奴の仲間である君達をここで拘束するは当然だ。

おとなしく捕まれば、法の下君達には弁解の権利がある」

「そんな……」

前を塞ぐように立ちふさがる黒い鎧の群。それの一番前に立った者がそう告げた。隊長クラスの人なんだろうか。

だけどそれよりも何て言った？　お姫様……つまりアイリが行方不明？　そしてアギトが軍に武器を向けたなんて……何やってるの一体？

ううん、彼が無闇にそんな事するとは思えないから、何かが有ったって事なのかも。それかもしくは……駆け落ちとか？　久しぶりの再会が二人を大胆にしたのかも知れないよね。

私達は何も知らない。あの二人の事。だけど最初の邂逅を見ただけで分かる。何かがあったんだねって。同じ女だもん、察せれるよ。

彼女の顔の変化……涙の意味……ああ、この子はアギトが好きなんだ。そう思った。そして顔を背けたアギト。その瞬間二人の間に何かが有ったのは確定だよ。

随分興味が出たんだけど……アギトはここに来てから一人でいようとしてたから聞く機会は無かった。それにスオウにも言われたしね。

「アイツが自分から話してくれるまで詮索するなよ。必要な事ならその内言うだろうし、別に聞かなくても僕達は動けるからな」

それは会議終わり、スオウ達が例の森に向かう直前の事だ。私の興味津々な思いがばれちゃっていたんだろうか。

「アギトの事、頼むな」

そう言って頭に置かれた手に誰が逆らるだろうか。女の子ならそんなの無理だよ。ふにゃ～って成っちゃうよ。そしてそのままコクンと頷いた。だから私は今は正式なアギトのお守り役なのだ。

そう考え出したらアギトの事も放って置けなくなってきたかも。スオウに頼まれた手前、無視も出来ないしね。

「どうしますかセツリ？」

廊下に響くはクーを使って牽制中のサクヤの声だ。どうしますか？　それは私の意志に全て任せるって事だね。サクヤらしいけど、

今のサクヤらしくないよ。
意見が欲しい所だ。私はここでは何も出来ない存在なんだから。
「どうするって？」
取り合えずサクヤの後ろに隠れながら聞いてみる。
「やり方は二つほど。強行突破するか大人しく捕まるか」
その言葉を聞いた瞬間、軍の連中が構えた武器を僅かに鳴らした。
明らかに警戒色が強くなったよ。
「強行突破の可能性はこの状況では苦しいですけど、セツリ一人を城外に逃がす事くらいは出来ます。その場合後は一人で進んで行かなければいけませんが……その覚悟がセツリに有りますか？　行きたい場所が有るのでしょう？
それに大人しく捕まる場合、私達はスオウやアギト達にとっての人質とされるでしょう。それにセツリが今追いたい敵へは絶対につけなくなります。私はどちらでもいいですよ。セツリの選択に従います」
サクヤのその言葉はなんだか私を試す様に聞こえた。やっぱりこのサクヤは今のサクヤだよ。私が知ってるだけじゃないサクヤ。
昔と変わった今。逆に変わらないなんて事は無いんだろうけど……そこで三年前と何一つ変わってない私は何なんだろうと思ってしまう。
（私は変わりたいと思ってる？）
私は少しでもそうありたいと思うのだろうか。そうしなければい

けなのは分かるし、理解できる。でも私は心の底からそう有りたいと願った試しがない。
私はいつも諦めてたのかも知れない。だけどようやく目覚めて……守られて……見続けた背中。それが映ったとき、私は今のままじゃ行けないと思った。
それならば私がここで選ぶ道は決まっていた。それは至極当然の事で……自分がどこまでやれるのかを確かめるには絶好の機会。
今、私を守る盾は一つしかないんだから。私はこれから直面するであろう困難を思うと手が震えた。変な汗が出てくる。でも、それでも確かめたい事なんだ。

「サクヤ……お願い。突っ切って！」
「分かりました。セツリ……頑張ってね」
「うん」

私は覚悟を決めてサクヤに伝えた。彼女はそんな言葉を受け止めてクーと口を動かし出した。軍の連中は迫るクーに刃を向ける。
だけどそれをかわして前に居た隊長もろとも数人をタックルで吹き飛ばす。壁に叩きつけられても、衝撃はあるがダメージはない。
ここは町中、ダメージ計算はされない。両者ともやられる事が無い戦いだ。だけど動きを封じ、拘束する手なら有るわけで……私達は彼ら軍の接近を許すことは出来ない訳だ。
つまりは倒せない敵が大量にいるわけで、それを考えると圧倒的に私達は不利だった。そこが私だけなら……と言ったサクヤの言葉の意味。

「行きますよセツリ！」
「お願いサクヤ、道を開いて！」

多勢な軍に私達は向かって走る。前衛が吹き飛ばされて一瞬呆け

てた後衛陣が詠唱を進めてるけど、それじゃあ遅い。サクヤの高速詠唱は一気に火を噴くように放たれて火を噴いた。
幾らダメージも無く、ゲームと分かっていても火という物に心理的恐怖を抱くのは動物の性。それが自身から上がるなら尚更だった。気持ちをもっとしっかり保っていればそんなに取り乱す事も無いのだろうけど……運悪い事に魔法を知っている者だからこその動揺でも有ったはず。
サクヤの高速詠唱を……そうとは気づかなくてもあり得ない発動の早さにどうしても驚いちゃう。そして乱れた軍の横を私達は駆け抜けた。
今はごめんとしか言えない。こんな事したくは無いけど、今捕まる訳にも行かないんだ。

階段を下り、エントランスに降り立つまで幾度と無く軍の小隊にぶつかった。だけど実際は向こうもよく状況が分かってないらしく、命令だから私達を捕らえようとする。
だけど気持ちが入ってないからサクヤとクーに簡単にしてやられる……みたいな事が続いた。やっぱりエルフと言っても彼らは一人のプレイヤー。
考え方もそれぞれで軍という組織も一応な感じらしい。多分一枚岩に成るのはアイリの声で……位なんだろう。みんながみんな、エルフ至上主義を謳ってる訳じゃないしね。

それを考えれば私一人でももしかしたら渡り合えるかも知れない。私には剣を振るう事も魔法を使う事も出来ないけど、みんなと同じように言葉を紡ぐ事は出来る。
言ってみればそれだけが私の武器だ。軍隊なんて考えずに一人一人プレイヤーなんだと思って自分の気持ちや考えを話せば分かってくれる人もいるかも知れない。

多分この軍と言う組織はそんな強い制約で纏まってる訳でも無いみたいだしね。基本ＬＲＯはゲーム。軍も自分たちの種族を有利にするための駒。
雄志を募って作られた感じのそこはあくまで遊び。わざわざゲームの中でまで上下関係に悩まされたくは無いだろうし、自由に伸び伸びしたいはずだもん。それでも一応は様に成ってるけどね。

「セツリ、手を」

そう言われて私はサクヤと手を絡めてクーの背に跨った。城のエントランス吹き抜けの様に成っているから、十分クーも飛べる。下の扉付近には中隊クラスの部隊が待ちかまえてるし、わざわざ正面から行く必要も無いだろうというサクヤの判断だ。
だから私達は自分達の持つアドバンテージを存分に発揮する。それはいつか見せた絶対領域からの高速詠唱での魔法の連発。
だけどあの時と違って今度の相手はただ近づいて武器を振るだけが脳の二人じゃない。階下にいるは軍と呼ばれる組織だった奴らで当然魔法も使える後衛はいる。

「行けるのサクヤ？」
「魔法の詠唱は率先して潰します。かなり激しく動くので振り落とされないようにしてください！」

その言葉の終わりと共に詠唱を開始……そして直ぐに発動。現れたお札が一斉に軍に降り懸かる。エントランスが火の海に成るのに時間はかからなかった。並のプレイヤー達じゃサクヤの高速詠唱の前に手も足も出ないみたい。
それだけ考えるとやっぱりスオウとアギトはスゴかった事になる。なんだかちょっと誇らしげに鼻を鳴らしてみたり。
だけど油断すると、クーの背から落ちそうに成るから危険だ。サ

クヤの腰にしっかりと腕を回して力を込めて無いとね。

有る程度動きを封じられた所で扉の前に降り立つ。町中の物は基本破壊できないから窓を突き破るなんて出来ない。開いた窓から飛び出すのは出来るんだけどね。

それなら自分達の部屋から窓を開けてクーを使って飛び出すのが最善だったのでは……なんて思っても言っては行けない。サクヤもクーも頑張ってくれてるんだから。

私は荘厳な作りの扉に手をかける。後はここを抜けて城門前の広場を抜ければ、なんとか人混みに紛れる事が出来る。そしたら比較的自由に動けるだろう。

これなら私一人と言わずに、サクヤもクーも無事に脱出出来そうだけど……思ってたほど城内に兵は少なかったんだよね。

「逃がすなぁ！　必ず捕らえるんだ！」

そんな声が聞こえた。後ろからはどうやら剣やらから弓に持ち変えたらしい軍の攻撃が降り注いでいる。大抵その矢はクーの起こした風に寄って阻まれて私達にまで届くことはない。

地面に降りた今更って気もするしね。それなら一斉に向かってくる方がまだプレッシャーになる。だけど長居する理由も無いわけで、さっさと通り過ぎるのが最善。彼らの頭が冷えない内に行こう。

玄関の扉が厳かな音を立てて開いて行く。それぞれサクヤと私で左右一つずつの扉を押し開いて駆け出す。そこにクーも続く。私達は一気に城壁までの道を進んでいく。

優雅に飾られ城の庭に目を向ける事もせず、ただ目指すは城の外。だけど城壁を一歩抜けたその時、目に映った光景に私達は驚愕した。

そこには一死乱れぬ様を示していた軍のなれの果てが有ったからだ。

「なにこれ？　一体なにがあったらこうなるの？」
「話を聞き及ぶにこれはアギトがやったんじゃ無いのですか？」
「そんな！　なんでアギトがこんな事……」

それは凄惨な光景だった。激しすぎた攻撃がシステムの保護を破壊したのか倒れ伏した軍には傷が見え、広場の白い床には陥没した様な跡がある。
アギトの実際の実力は計り知れないと思ってたけど……まさかここまでとは思ってなかった。なんだか鬼気を感じる光景が脳裏に浮かぶ。
一体どんな事を思って彼はこんな事をしたのだろうか。ここに来てからずっと思い詰めてる様子だったから心配だ。何かを発散したようなこの光景が彼の心の乱れを表してるみたいに感じたから……余計にね。

「それは分かりません。だけど私達には――」
「お二方……困るではないすか。勝手に城内から出られては」

惨状となった広場で無傷の声が響いた。そしてその姿を確認したとき、サクヤの表情が険しくなる。穏やかな声とは裏腹にその手にロングソードを掲げる人物、それはガイエンだ。
広場の中心で佇んでいたらしい彼にどうして私達は気付かなかったんだろう。いや、気付けなかったんだろう。だけど気付いてしまえば嫌でも伝わってくるその殺気。
戦いなんて殆ど知らない私でもそれが分かる。肌に突き刺さる様な悪寒に震えずにはいられない。

「私……達は……」

それでもなんとか言葉を繋ごうとするけど上手く口が回らない。

だって誤解を解かないと……私達はお姫様なんて浚ってない。それにアギトがこんな事したのだって……そうだ、ここに敵が居るって伝えれば……。
　だけどそんな私の思考を断ち切るようにサクヤが強い口調で言う。
「目を覚ましなさいセツリ。あの目の前に居る奴が私達への拘束命令を出したのよ。全ては承知の事よ」
「全て……というのは語弊があるがな。アイリ様が本当に浚われたのは予想外だ。それ以外はアギトを追い込む為に私がやったことだがな」
　なっ……んて事を。ガイエン思いだし笑いでも堪えてるのか口の端を歪めて「クック」言っている。あんなに思い悩んでいた事もガイエンのせいって事だ。
　なんでそんなことを……私達になら分かるよ。最初から煙たがってたしね。それを強引にねじ込んだのはこの国のお姫様だったから渋々受け入れた。
　隙あらば追い出そうとしてたのは明白だったし、それならしょうがないとも思えた。だけどアギトは貴方と同じエルフなのに……そんな事って無いよ。
「なんで……そんな事？」
　私はやっとで絞り出した言葉を紡いだ。聞かずには居られない。何よりも大事にしてたのはエルフとしての繋がりや誇りじゃ無かったの？
「何で……そんなの決まっている。私がこの国の王に成るためだ！　弱い姫になど任せてられるか？　否！　国を一度捨てた降り者に王の資格があるか？　それも否！

なら私しか居ないではないか！　それがこの国『アルテミナス』の為の最善なのは明白だ。
だが、二人の思いは厄介だった。だから呼び寄せてきっぱりと諦めさせてやったのだ。それぞれにな！」
「ヒドい……そんな事の為に二人の思いを……砕くなんて！」

悔しかっただろうなアギト。でもここで私が殴ってあげるよ！
昔から言うんだ。人の恋路を邪魔する奴は、豆腐の角に頭をぶつけて死んじまえって！
今まさに私はそう思う。目の前のガイエンを一人の女として許せない。許しておける筈がない！

「ふん、許せないか。私にしてみればこちらこそ許せないがな。そんな恋愛ごっこなどここに持ち込んで欲しくない。
まやかしの姿を映した奴をどうして好きだと言える？　そんな事あるわけ無いだろう！　ここＬＲＯで本物の恋や愛など芽生える筈もない。
それもこのシステムに見せられた幻想と何故に気付かん！　そんな物に惑わされて……我らが姫君は腐ったのだ。腐ったもの捨てなければ、だがそうも行かんから私が上手く立ち替わってやるという話だ。
だから邪魔なのだよ。アギトも……奴の仲間である貴様等も……そして残りの奴ら、スオウとか行った奴らが戻ってきたとき、開く扉はこの国には無い！」

ガイエンの言葉からコボレたのはＬＲＯの捉え方。確かにここでの姿や性格は私やスオウ以外はまやかし……幻想と言ってもいいのかも知れない。
けどだからって……それが何？　リアルとＬＲＯを分けて生きてるだけかも知れ無いじゃない。私は二人の方がガイエンより真っ直

ぐにこのＬＲＯに向き合ってると思う。
素敵な事だよ。こんな幻想の中でも人は誰かを好きに成れるってさ。それはとっても素敵な事。ガイエンとは違ってそれを知ったアギトやアイリはここでちゃんと生きてるんだ！　だから……

「許せないよ。否定するのは自由だけど……それはアンタの胸の中だけでやっときなさいよ！　アンタなんか……アンタなんかに……この国は絶対に手に入らない！
入る筈がないわ！　利用するだけで、自己満足としかＬＲＯを見れないアンタなんかに、誰も上に立って欲しい訳がない！　彼女で良いの……ううん、彼女じゃなきゃダメなのよ！」

私は怒りで殺気なんか忘れてた。きっとこれで私もバカに成っちゃったよ。スオウに当てられ過ぎたかな？　でも言い終わったらスッキリした。
思う事をハッキリと言うのは勇気や度胸が居るけど、とても清々しい物だね。気持ちが決まったよ。今はアギトを捜そう。そしてアイリを助ける。
ついでに二人の思いを叶えてあげて……それでガイエンの思惑は総崩れ。二人も幸せになってのハッピーエンドが私には見えた！
あの時の声の主は気になるけど、二人を放っては置けない。アイリを浚ったのは敵と呼べる物なら私に届いた声と同じ奴かも知れないし。まだまだ諦めた訳じゃない。
だからまずはここを……どうしよう。

「行ってくださいセツリ。何かを決めたんでしょう？　ここは私達が引き受けますよ」
「サクヤ……クー」

二人は私の気持ちをどんどん察しちゃうな。隠し事なんか出来な

いよ。元々こうなることが分かってたサクヤ？　最初に言ってたもん……ここを出るときは私一人だって。

「何が貴様に分かる……貴様等人間に我らエルフの謀に口出せされたくも無いわ！　邪魔者は廃す。その力が既に私にはある！」

「来ます！　セツリはや――」

サクヤの言葉が最後まで紡がれる事が無かった。それは言葉が終わるより早く、奴が私に迫っていたからだ。長身のエルフにロングソード……長い腕を生かしての間合いは想像よりもずっと広かった。

それに何より速い！

「まずは貴様にエルフの洗礼を浴びせよう」

「――っ！！」

私は動けない。武器も防具も無い私に何が出来る？　何も出来ないよ。言葉を途中で切ってでも詠唱に入ったサクヤだけど詠唱→発動までの僅かなタイムラグが命取りだった。

間に合わない……そう確信出来る程の僅か刹那の世界。私は身を固めて目を閉じた。動けもしないのならそれしか出来ない。

でもそんな行為に意味が無い事は私にだって分かってる。何かしたい……このまま切られるなんて嫌。悔しいよ。

だけどガイエンの剣が私を切り裂くその瞬間。青白い光が目の前に現れた。

「ピィィィィィィ！」

断末魔の叫び声が耳に届く。青白い羽が無惨にも辺りに舞い落ちる。薄れ行く光……その体を持つはクーだった。

あの瞬間、クーが私とガイエンの間に飛び込んで剣をその身に受

けて守ってくれたんだ。
「クー！」
「ちっ……」
私は地面に倒れ伏したクーに手を伸ばす。どうして……そんなに苦しそうなの？　だってここは街の中だよ。ＨＰにダメージは無いはずだよ。
ガイエンは一度サクヤの魔法を避けるために後ろへ飛んだ。だけどそれが判断ミスだ。サクヤの高速詠唱は最早止まらない。クーを傷つけられたサクヤは鬼と化す。
「だが、耐え切れぬ物ではない！」
私達に戦慄が走った。だってガイエンはその身に絶えず魔法を受けながらもサクヤに迫り剣を浴びせた。そんな事出来る人は今まで居なかったのに……それを易々と……どうして？
それにサクヤのＨＰは掠った程度に減っていた。ダメージが計算されてる……じゃあクーが元の姿に戻ったのもその為なの？
そして奴は高らかに笑い信じられない事を言った。
「街の中で負ける事は無いと思ったか？　恥を知れ人間共。ここはエルフの国で、私は軍事や治安を守る者……そんな私にはあるのだよ。
この国で問題を起こすクズ共を刈るための権限がな！」
それは衝撃の事実だ。だけれどサクヤは眉一つ動かさずに言った。
「クーを頼みますセツリ。早くこの場から逃げて！」
「……でも」

そんな事したらサクヤはどうなるの？　勝てないよ。クー無しじゃ。

「いいから、行きなさい！」

サクヤの強い言葉に私はクーを胸に抱いて走り出す。その刹那二人のぶつかる音が再び聞こえた。振り返っちゃダメ。涙を噛んででも私は走らなくちゃ行けない。希望を繋げる、その為に。

混乱の只中の私（後書き）

第三十八話です。
続いての投稿です。実はちょっと後悔もしてるけど覚悟を決めて投降します。元々これが今日の分ですしね。もう遅れないように頑張ります。
では皆さんありがとうございます。また、明日。

自立しだした夢（前書き）

僕は見た。麒麟の変わった姿と泉の精であるＮＰＣを。これもウエポンアライアスなのか？　でもそうは思えない。だってＮＰＣは……泉の精の様な特定の場所のＮＰＣが自由に動くなんてありえないからだ。

でも彼女はそれを成して自分の意思を言う。それは一体何を意味するのか。そして僕達には選択が迫られていた。

逃げるか……逃げないか。モンスターの大群も迫ってきてる。目的の物は既に手にある。それなら……。だけど僕は諦められない。僕の相棒『シルフィング』の復活を。

それにこのクエスト『ウエポンアライアス』の条件を知っては尚更だった。

自立しだした夢

森に一陣の風が凪いだ。それはその場の空気が変わった事を示していたのかも知れない。みんなが……この森自体が恐々と震えていた。麒麟のあの姿・・・そして自立行動を取った泉の精に……。一体何が起こったんだ？　いや、それはもしかしたら始まる前から起こっていた事なのかも知れない。

僕がその場に戻ってきたとき、確かな恐怖や絶望を称えてそこには再び立った麒麟がいた。白かった体さえ今は輪郭がハッキリしない。

更に強烈な光を放ちながらもそこに存在を表す電気の固まり……プラズマみたく麒麟はなっていた。希薄な様で強烈なその姿に僕は目が離せなくなりそうだ。

そしてその傍らに立つ泉の精。自身の背丈よりも長い緑の髪の毛を垂らして身に纏うは背中と胸元が大胆に空いたタイプのロングドレス。

どうしてＮＰＣであるはずの彼女がこんな場所に？　ＮＰＣは決められた範囲しか移動できないはずだ。それに泉の精みたいなタイプのＮＰＣはその出現場所だけが存在領域であって、そこから出るなんて事……聞いたことも無い。

泉の精の場合はあの小さな泉だけがその存在を持たせられる範囲でこうやって地面に立つ事事態おかしい。それは何度もみてきた『異常』に僕の中で分類される。

「ふふふ……ふふふふふ」

黒い霧と淡い光が混じり合う様なこの森の中にそんな声が響いた。発信源は勿論、目の前の泉の精だ。不気味な声……奇妙な声だと思

った。
まるで音が重なり合ってるような……いや、誰かが同じように笑ってるみたいな？　辺りを見回しても誰もおらずやっぱりその声は泉の精だけからしか出てはいないようだ。

「何が……そんなにおかしいんだよ」

誰も口を開かなかったから一番遠くの僕が口を開いた。それで一斉にみんなは僕に気付く。雷化とでも言うのか？　取り合えずそんな状態になった麒麟に対してみんなは膠着状態だったんだ。
特にセラと鍛冶屋は目の前の状況に処置落ちしかけてたと思う。シルクちゃんはサクヤの時からで耐性も少しは出来てたみたいだ。
それに彼女の肩にはピクがいるしね。誰もが動かなかったからそうしてただけだ。

「スオウ君……」

その証拠に一番に僕の名前を呼んだよ。か細い声だったけど、その目には確かな炎も見えた。こんな異常な事は自分達の出番だよね、みたいな。
シルクちゃんは真面目だから変な責任感みたいな物もアンフィリティクエストに協力すると誓った時にしてたのかも知れない。

「ふふっふふふふ……おかしい……ふふふ」

泉の精は僕の質問に答える気配はない。何故か狂った様に笑い続けるだけだ。すると麒麟が一歩を踏み出した。その瞬間、電気が地面を伝った様な光が流れ周囲で弾ける様な音が聞こえた。
だけどその音のおかげでみんなは動く事が出来る様になる。一斉に武器を構えて背中を向けずに後退する。みんな分かってる。この

状況で背中を敵に晒すことは愚の骨頂だと。
だけどそんな僕らを見て、ようやく泉の精はまともな言葉を発した。だけどそれは絶望を促す言葉。

「ふふ、あ～れ～？　腕拾ったんだ。どうだった？　モンスター達戻ってきてたでしょ？」
「「「！！」」」

みんなの視線が再び僕に向く。まあ、元々それを伝えに来たんだけど……こんな状況でそれを伝えたら心が落ち込む他はない。
だから黙ってた……と言う事にしておきたいけど、実はただ単にタイミングを逃しただけだ。だってこんな事になってるなんて思わなかったんだもん。

「それ……本当なの？」

セラの声に僕は頷く。

「確かにモンスターは戻ってきてた。でもまだ数体だ。コイツ等を倒して脱出する時間が無い……訳じゃない……と思う」
「脱出する」

セラは僕の言葉の途中から既にウインドウを操作して何かを取り出していた。それは黄色い手のひらサイズのクリスタル。なんだっけこれ？

「転移結晶……こんな高級なものまで用意してくれてたんですか？」
「アイリ様がね。これは国を賭けてるんだからこの位は普通でしょ」

セラの言葉に二人は感嘆する。え？　何？　そんなに凄い物なの

か？

「移動系のアイテムと言うのは特に高い。取り合えず高いんだ。別に移動が不便だからと言っても走れば良いだけだし、目的地にパパッと飛べるアイテムは無いしな。

だからそのアイテムは保険だ。別に無くてもいいがあったらいざという時に助かる。その程度の物だ。戦闘に行くなら持ってはいたいが必ずしもそうでなくてもいい。

だから需要もそれなりで、だが供給は困難を極めるアイテム。だから高くなる。普通は大規模なパーティーを組んだ時に全員でお金を出し合って買う位だな。

それをわざわざ一個持たせてくれたのなら太っ腹だ。さすが国を納めるお姫様と言ったところか」

なるほどね。鍛冶屋がこんなに喋るだなんて珍しいからそれにもびっくりだけど、要するにこのアイテムはこの森から脱出出来るアイテムって訳か。って、ちょっと待てよ。

「それじゃあシルフィングはどうなる？　まだ元に戻してないぞ。それにあの異常な奴らは放置かよ？」

「異常だなんて失礼しちゃうわ……どうして、貴方達人間はそうやって私達を縛ろうとするのかしら……」

僕の声が聞こえてたらしい泉の精が会話に割り込んで来やがった。それに縛ろうとする？　それはＮＰＣとしての役目とかいう事だろうか。

再び一歩近づく麒麟に対して僕らは一歩後退する。牽制してるのかコイツ等？

「後がないわ、ここは一端引くべきよ。これの発動にだって数秒は

掛かる。大群が押し寄せてからじゃ遅いのよ！」

今までよりも小声で喋るセラ。確かにここは引くべき場面かも知れない。それは分かる……分かるけど、ＮＰＣとして自我が目覚めたらしい泉の精が次来たときまでシルフィングを取っておくのか疑問だし。

それにこのウエポンアライアス事態がどうなっているか分からない。今、ここが最後のチャンスなんじゃないかと思えるんだ。そう考えると逃げるなんて……出来な――

「ふざけないで！　私達はアンタのワガママに付き合ってる訳じゃないのよ！　そんなに戦って死にたいなら一人で死になさい……こんな場所で死にたいのならだけど！」

セラが僕の胸倉掴んで言った言葉は確かに正論だ。ここに残って戦いたいのも、シルフィングを直したいのもすべて僕のワガママだ。必要な物は手に入れた。もしもここで戦闘不能になってそれまで失ったら元も子もない。そうセラは言っている。自分の国の問題なんだ。セラも必死なんだろう。

いつもはフザケた態度しか取らないけど、セラはいつでもやることはブーブー文句言いながらもやっていた。メイドのプライドかどうかは知らないけど……仕事に関しては徹底したやつだ。

「セラちゃん……それは言い過ぎだよ」

「そうですか？　シルク様は甘すぎます。こんなバトルホリック（戦闘中毒者）に付き合ってたら損するだけですよ」

バトルホリックって……仕事以外に興味が無く家庭崩壊を招くワーカーホリックな父親みたいに言うなよな。そんなに年くってねーよ。

それにバトルホリックって危ない奴みたいでイヤだ。てか今更だけどなんでシルクちゃんの事をそんなに敬ってんだよこいつ。僕やテッケンさんや鍛冶屋と態度が随分違うぞ。
それに僕は別段戦闘が好きな訳じゃないんだけど……それを言う前にセラは僕を突き飛ばす。うっ。

「ほんっと～に！　こっちでも自分の命が有限だって言ったのはアンタでしょ！？　それ分かってんの？　アンタは自分の命をどうしようと勝手と思ってるんでしょうけどね。
それを見てる私や、アンタの仲間をもっと思いなさいよ！」
「もしかしてセラ……心配してくれてる？」

それはあり得ないことだとずっと否定してたけど、さっきの言い様はそうとしか――――

「うっさい、バカ、死ね。あんたの枕元に三文置いといて上げるからさっさといきなさいよ」
「通行料か！？　三途の川の渡し船の通行料だな三文って！　いるかそんなもん！」

心配なんて幻想だ。こいつは僕が死ぬこと前提で話してやがる。三文なんてＬＲＯじゃ無いし、既にリアルにもそんな通貨ねーよ。
それに蹴られた。ゲシって感じで前に蹴り出された。

「いって～な、何すんだよ！」
「残るんでしょ？　どうぞご勝手にスオウ様。貴方の武勇伝は忘れません。きっと語り草になることでしょう。良かったですね」

スッゴい冷たい目立った。それに今までの雑な言葉が暖かく感じれる程の突き放した口調。やめて……マジで……心が抉られるよう

に痛い。
メイドが使うには正しい言葉の筈なんだけど……それが自分に向けられた瞬間、妙にセラが遠くに行った感じがした。それほど近くでも無かった筈なんだけど……不思議な感覚だ。
それに武勇伝って……やっぱり僕はここで死ぬの決まりなんだ。

「ダメだよセラちゃん。みんな一緒に行こう。ほら、スオウ君！手を取って」

そう言って伸ばされるシルクちゃんの綺麗な手。この手を取ることが今出来ること。次がないなんて分からないし、ここで出来る事はもう無いのかも知れない。

「急げスオウ！　もう奴らそんなに待ってはくれないぞ！」

鍛冶屋の声で前を見ると泉の精が首を傾げてた。爛々に輝いていた目に陰が入る。

「どこ行くの？　もっと遊びましょうよ……そっかこの剣、どうなってもいいんだ」

そう言って現れたのは刃が折れたシルフィング。こいつ、シルフィングをどうする気だ？

「惑わされないで！　幾ら大事でもあれは物よ！　アンタは命と物を天秤に掛ける気！？　あれは存在なんてしないのよ！」

セラの怒鳴り声が後ろから聞こえた。確かにあれはあそこには本当は無いのかもしれない。この世界は元々存在なんてしない。でもこんな事言う人だっている。

『認識出来ない世界は存在しない物でも、認識できたその瞬間からそれは世界であり、世界の一部である』

僕達はここＬＲＯを認識して、そして存在してる。それならここは全部本当の世界とも言える。僕達は異世界人としてここを旅してるんだ。そう考える事だって出来る。

データだから、システムだから……そう言って区切れないほどここＬＲＯは濃い。僕の魂を引っ張る程に。だからとらわれのシルフィングは存在してる。

僕の中に……魂や心……脳にだってちゃんと焼き付いてる。僕にとってそれじゃ、リアルってなんだ？　そんな頭が痛く成ることを考えてた。

「そうね……存在なんてしない。私達は貴方達からしてみればただの夢で幻想。仮想の中のただの玩具……何でしょう。

だけど……貴方はそうなのかしら？　ウエポンアライアスに次はない。そしてウエポンアライアスの発動条件はその武器が使用者の願いに応えたいと願うこと……戦いの中で生まれた絆と言うところかしらね。

貴方はシステムに呑まれてる……けどだから私達をキチンと見てる……だからそれにこの子も応えたいと願ったのでしょうにね」

「なっ……に？」

泉の精の言葉が理解出来なかったぞ。なんて言った？　それに口調が……なんだか落ち着いてきてる。武器がそれを望んだ・・願った？　そんな事が……あるのか？　シルフィング……僕は奴の手にあるその剣を見た。青い刀身が無惨に折られた二対の剣。

ずっと僕の無茶を叶え続けてくれた相棒。一言も喋らなくても互いに通じあってた気はするよ。僕のバカな行動で折れてしまった。

幾ら謝っても、責める事も出来ない相棒。もうこんなヘッポコは嫌なんじゃないかと思ってた。でもそうじゃ無いって事か？　まだ僕に……その力を貸してくれるのかシルフィング。
だけど物言えぬ剣が喋るはずもない。ただ向かい合うだけだ。でも……

「フザケないで！　剣の願いが発動条件なんてあるわけない！　適当な事言って惑わすつもりよ！　アンタも呆けてない！」
「スオウ君！」

女の子二人の叫びが耳に届くけど……僕は既に逃げる気はなくなっていたのかも知れない。握り締める拳に力を込めた。
そして忘れてた物に気づく。握っていたのは僕の腕だ。あの麒麟に引きちぎられた僕の片腕。傷は塞がらないし固まらないのか、まだ血が循環してる。
これってアイテム欄に収納出来るのかな？　ウインドウを呼び出してやってみる。……出来た。アイテム欄には『スオウの片腕』と成っている。なんてこった。
僕は向き直る……その方向はシルフィングを目指す。

「八百万……と言う神々の考え方を当てはめてください。それが日本でしょう。それならどんな物にでも神様……つまり魂があります。とても素敵な考え方」
「そんなの屁理屈でしょう。存在もしてない物に魂も神様も宿る訳がない！」

泉の精の言葉をセラは打った切る。だけど向こうも引かない。それは自分の存在が掛かっているからか。自我を持ったシステムやプログラムは存在の証明を求めてるみたいだ。

「では貴女は自身が使う武器に気持ちを込めたりしませんか？　手入れをするときにありがとうと声を掛けた事は無いですか？　そんなことでいいんです。
そんなとき……誰もが私達を知ってくれています。それは貴女達が私達を存在として認識してるからしてしまう無意識なんですよ。そしてそんな思いは伝わるものです」

人の無意識……僕達は自然とこの世界を肯定してるって事か。セラもその言葉を聞いた時、自身の武器を見つめただろう。
シルクちゃんも自身の杖を……鍛冶屋ならこれまで作ってきたあらゆる物を思ったはずだ。そう……ここに存在してない物なんてない。
思いを込めずに使える物なんてないんだ。だって僕達はこの地に降りたって歩いてるんだから。触れた感触も、重みも、質感も……臭いだって感じれる。
モンスターに対するとき、自分の武器を信じない奴はいないだろう。それに武器が応えてくれて勝利に繋がる。だけど普通は一つの武器に込める思いはそんなに長くない。
だってＬＲＯは様々な武器を使える所がいいことで、そうしないとスキルは蓄積しない。スキルが少ないのは圧倒的に戦闘では不利だしね。
だからこのウエポンアライアスの存在が知られなかったのは当然といえる。一つの武器を長く使うなんて人は、既にトッププレイヤーだろうし。その武器が折れるなんて事はそうそう無いのだろう。
それにこの泉の存在は知られたのは最近らしいしね。

「もしも……あのＮＰＣが言ってる事が全部真実でも！　今は逃げるの！　そうしよう……ううん、そうして！」

結局セラは全員で戻る事を諦めないわけだ。こいつらしくも無いけど……嬉しいことだ。初めて僕に対して頭げたしね。

セラの嘆願は聞き入れたいよ……でも……

「ごめん……シルフィングは相棒なんだ」

「そうだな。鍛冶屋としてあんな話聞いてひきさがれん」

僕の言葉の後に鍛冶屋まで続いてきた。確かに武器に対する思い入れは僕よりあるだろう。あの話は嬉しい物だったろうしね。

僕らは歩みでる。互いに武器を取り前を見据え。

「嬉しいな。やっぱり貴方は聞いてた通り楽しい子。もっともっと楽しませて……そして証明してね」

麒麟が重心を前に傾けた――――来る！

「このっ……バカ！　シルク様そっち頼みます！」

「――うん！　任せて！」

苛立ちを乗せたセラの声。その瞬間、僕らの背中に同時に柔らかい物が当たった。てか後ろから抱きつかれた状態だ。僕にはセラが、鍛冶屋にはシルクちゃんが抱きつき僕らの動きを止めていた。

そしてその場に固まった僕らを包むように地面に魔法陣が展開する。それはセラが手に持った転移結晶の陣だ。

「お前！」

「逃げるのよ！　でないと死ぬわよアンタ！　腕だけじゃ済まないんだから！　誰ももう……私の前で消えないでよ！」

光が僕らを包んでいく。泣いている様なセラにこれ以上何が言える？　言えないよ。今なら分かる。今までの残酷なまでの言葉も……時に言う励ましの言葉も全部、僕の為か。

僕を死なせない為に……時には逃がすために、心を折るような事言ってたのか？　もう完全に転移結晶は発動してる。ここまでだ。

（ごめん……シルフィング。もう一度、お前と共に進みたかったんだけどな。でも……ここで出て行くなんて僕には出来ないよ）

背中に伝わる短い息づかいの音とか震える体の感触とかがセラの思いで……それを振り解こうとは思えない。なんだかこれでここでの戦いが終わったかと思うと力が急に抜けていく。

張りつめていた糸が切れたみたいにさ。だけどその時、シルフィングを掲げていた腕を泉の精が下ろしたのが見えた。そして聞こえた言葉で僕は意識無理矢理引っ張り上げた。

「……逃がさない。麒麟、お願い」

目の前……と言うか腰の辺りがバチッとなった。それは放電？そこにあるのは僕の腰に回したセラの腕で手の中には転移結晶が輝きを放っている。

まさかさっきのは誘導放電……やばい！

「セラ！　転移結晶を放せ！」

「え？　何よ今さ――きゃあ！」

それは間一髪だった。雷にでも成ったかの様な麒麟が僕らの居た場所を焦がすのは本当に一瞬の出来事。あと刹那でも遅れてたら転移結晶もろとも僕らも消し炭に成っていただろう。

凄まじい余波でシルクちゃん達まで吹き飛ばされていた。麒麟の巻いていた布が今は長い雷の様に尾を引いている。それも一本じゃない……体も実体化出来てるのか無いのか・・雷だからかブレている様な感じだ。

「つうぅ～、何なのよあれ。あれじゃあもう……精霊じゃない。それも雷の最上級クラス……」

まさしくセラが言ったとおりだと思った。あれはもう精霊だ。生き物と言う定義に当てはまらないんだからな。雷の塊……マジで化け物だ。前も相当だったけどこうなったら普通の攻撃が効くかも分からない。

それに唯一の脱出法も潰された。これでもう奴等と対峙するしか無いわけだ。

「大丈夫かみんな？」

「こほっこほっ……大丈夫だよ」

「俺も傷はない」

良かったみんな無事みたいだ。さっきの攻撃は転移結晶を狙った物だったからだろう。でもあの早さで動き回られちゃ攻撃の当てようも無い。

雷の早さは銃弾とかとは比較にも成らないんだ。

「わ、私も大丈夫だから早く退いてよ！」

「ああ、ごめん」

勢いでセラを押し倒した様な格好に成っていた。なんて危ないことを僕はしてるんだ。それにしても一体何度のピンチを越えたら安心して笑えるんだよ。

「ねえ……周りもしかして……」

「ああ気づいた？」

セラの声が震えている。当然だろう。僕達に逃げ場は無くなっていた。何故なら既に大量の獣人に囲まれてたからだ。奴等は獲物を見つけて興奮してる。その数は……数得るのも億劫になるほど。

奴等は大群で行進してくる。地鳴りの様な音が響く中、動いたのは麒麟だった。目にも止まらぬ速さで麒麟は駆けた。摘まれるのは奴等の頭。周囲に大量の首なしの死体の山が一瞬で築かれる。

その凄惨な光景にシルクちゃんは口を押さえて目を反す。

ある程度の距離まで開けたら麒麟が吠えた。すると雷の柱が僕らと麒麟達のフィールドを包み込んだ。つまりこの中が邪魔者無しの戦いの場。本当に試練みたいだな。

「始めましょう。ウエポンアライアスの最後の戦いを」

響きわたった声。僕達は覚悟を決める。これがきっとこの森での最後の戦いだ。雷の光は激しすぎる。僕はこの後、優しいランプの明かりでも眺めて帰ろうと誓った。

自立しだした夢（後書き）

第三十九話です。
頑張って続けていきますので良かったら感想とか評価とかしてくださると嬉しいです。待ってます。ではまた明日です。

言葉の力（前書き）

私は逃げて逃げて逃げて逃げて一回撒いたけど、次には遂につかまってしまった。それも異常な奴等に。そいつらはガイエンの側近？　奴が率いる部隊『親衛隊』のメンバーだった。

私が首を絞められて絶対絶命の時現れたのはガイエンの息がそれほどかかって無い黒甲冑の軍の小隊。私は僅かな望みにすがり、言葉という見えない力に活路を見出す。

言葉の力

「はぁはぁはぁ……」

後ろからは金属音を響かせた足音が迫ってる。少しだけ振り返って確認すると、黒い甲冑に身を包んだアルテミナス軍の姿。

やっぱりサクヤの相手はきっとガイエンだけがやってるんだ。だから後ろから追いかけてた人達がそのまま私を追いかけてる。

サクヤは大丈夫かな？　考えないようにしてたけど無理だよ。だってガイエンの攻撃はＨＰを削る。もしもＨＰがゼロになったらサクヤはどうなるの？　消えてなんか欲しくない。

必ずサクヤを救うためにも私はアギトを見つけて、アイリを一刻も早く助けないといけない。待っててねサクヤ。必ず戻るから。

それにはまずアギト、そして後ろの軍を振り切らなきゃ……きついけどね。だって絶対的な地の利は向こうにある。私はまだこの街に来たばかりで全然わからない。城の中から見たけどそれも景観位だよ。地図がないとどこが行き止まりでどう走るのがいいのかもわからない。

上から見るのと目線で感じるのでは全然違うんだもん。

「ああ、もう！」

余計な事は考え得ないでいいや。元々私、直感派だし。向こうでは行動がそもそも出来なかったから一杯考える事をしてたけど、今は走る事が出来るからそっちに集中。

大丈夫……私はまだまだ走れる。初めて自分で風を感じた時の事を思い出そう。肌を撫でる空気の流れは優しくて、植物の臭いが肺

一杯に広がってね。
その空気が全身に巡って力になる感じがわかるの。ここは植物と言うよりも街の臭いが入ってくる感じだけど。石とそれを伝う光明の臭い。
それは意志の強さと培った歴史……堅く纏まった思いの香り。私達を追っているのはそんなもの。歴史はまやかしだけどね。

とにかく今は、アギトを見つけるまでは捕まるわけには行かない。サクヤは私に託してくれたんだ。それに信じてくれた。
私にも出来る事があるって私も思いたい。だから絶対絶対絶対……捕まらない！　腕の中でぐったりしてるクーも少しだけ喉を鳴らして応援してくれた。
私はキュッとクーを抱きしめる腕に力を込める。プレイヤーの波をかき分けて私は走ろう。木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中ってね。
一人のアドバンテージを使わなきゃ逃げる切れる筈もなく、逃げるだけじゃまたダメなの。私には目的があるから。
取り合えず目指すは一番目立つ光明の塔にした。
全然知らないんだし、アギトの行方も分からないから取り合えず目立つ場所だよ。そしてそれまでに後ろの人達を撒く。これも目標。

（よ～し、がんばろう！）

私は不安を押し隠す様に心で宣言。サクヤが信じてくれた私を私が信じるために。そう思うとちょっとだけワクワクがわいてくる。これは私の、初めての冒険。

人混みの流れに逆らって俺は走る。やってしまった……そう思うも後悔は先には立たないんだ。自分の今の行動はきっと誰かに迷惑

掛けてる。
　具体的には多分城に居た、セツリとサクヤだろう。どんな理由であれ俺はこの国の正規軍を攻撃したんだ。ガイエンなら理由なんて適当に付けて二人を拘束したはずだ。
　だってアイツ、前からエルフ至上主義だからな。考え方が偏り過ぎなんだよ。自分がエルフだからエルフ中心の世界を……エルフの国は自分が王でなくては許せない。

　アイツのＬＲＯへの熱の入れ様は異常だ。まあ、ここに来ておかしくならない奴が少ない訳じゃないけど……かく言う俺も始めたばかりの時は入り浸ってた。
　学生だから学校から帰ってきて、また学校に行くまで。昼夜が完全に逆転した生活をやっていて、それを苦に思わせないほどここＬＲＯは魅力的だったんだ。
　一部の人にはそう……麻薬的な程に。それか現実逃避か……
　俺はそこに行く事は無かった。それは自分をリアルに向けさせる出来事があったから……ＬＲＯから遠ざかりたくなる事があったからだ。
　皮肉な事だな。あれがなければ俺もおかしく成っていたのかも知れないと思うとさ。ＬＲＯにセツリやスオウと違う意味で囚われてしまったんだろうか。
　でも……そのせいで傷つけてしまった人がいる。守れなかった約束がある。今更それを取り戻そうとか、許しを請おうとか思ってる訳じゃない。
　訳じゃない……のに……俺はやってしまったんだ。どうせこれもガイエンの策略かも知れない。もしも違ってたとしてもこの国のみんなはアイリの為に立ち上がってくれるだろう。それだけ愛されてる奴だ。

　だから今更、俺なんて必要ない。こんな負け犬……それなのに足

は止まらないんだ。全部壊れてしまった。その筈だ。
最後まで俺たちを繋いでいてくれた物をアイリは手放した。それで本当に終わって吹っ切れる……と思っていたのに。
「なんでだよ……なんでこんなに苦しいんだボケェェェェ！」
周りの人達の奇異の視線が刺さる。いきなり大声を出して周りには大迷惑だろう。だけど今の俺にはさ……周りをおもいばかる余裕なんて無かった。
自分でも……よく分からないんだ。だけど……だから走ってる気もする。
（もう一度……もう一度向かい合えたら・・分かるかな。俺は一体どうしたいのか……それが）
その時開けた場所に出た。そして頭に降り注ぐのは弱々しく光る光明の塔。既に光明なんていえない光だけど。いつの間にかここに来てしまった。
俺達の集合場所はいつもここだったから。そう、ついついって奴だ。浚った奴がそんな気を使ってくれる訳も無いのに……何やってんだ俺は。
俺は周りを見回した。円形状に開けた場所に周りには沢山のクリスタルが石碑として佇んでいる。クリスタルは光明の塔からの光を受けてそれぞれ違う色を醸し出すんだ。
俺達は決まってそう……あの一番片隅……緑の光を放つクリスタルの前で待ち合わせをしていた。アイリが緑を好きなのもあったし……あのクリスタルに刻まれた言葉が二人で好きだったってのもある。
まだ始めたばかりで息詰まった時とかによく見てたな。
俺の足は自然とその方向へ。その場に立つと、なんだか感慨深か

った。そして視線はクリスタルへ――――刻まれた言葉はたった一文。

【強くなりたい】

意味不明だ。こうやって改めてみると本当に意味不明だよ。でも……ここに入る度に思っていた事でもあった。だから俺達は、このクリスタルと同じようにこの言葉を胸に刻む為に見てたんだと思う。

相手が何を思ってたのかは分からないけど……少なくとも俺はあの頃、アイリの為にそう思っていた……と自分で勘違いしてた。

何も変わらないクリスタルが静かに俺にその文を突きつけてるみたいだ。強くなりたい……そう願った結果は何だったのだろうか。

「くだらないな」

俺はだから言っている。別に許されたい訳じゃない。でも、今は沸き上がる衝動で動いてる。矛盾してるけどやっぱりアイリを探そうと思った。

結局俺もあのリングを捨てられずにいるんだから。

俺はきびすを返す。ここにアイリが居るわけがない。だからもっと別の場所を……いいや隅々まで探してやろうかと考えた。

けど、その考えは杞憂に終わった。何故なら振り返った俺が見つけたのはそのアイリの姿だったから。

ただし黒いローブに身を包んだいかにも怪しい奴に抱えられたアイリだけど……光明の塔を背にしてる奴が逆光で染まる。

その時俺は確かに見た。口元が綻んで歓喜に満ちた様な笑みを浮かべた奴を。

これが俺達の間に因縁を付けてきた奴との初めての邂逅。手が届きそうな距離であざ笑う奴に俺は瞬時に武器を向けた。

「うう～ちょっと不味いかも」

私はなんとか最初の軍の追撃をかわした。だけどどうだろう……あの巨大なクリスタルに近づくに連れて軍の連中をよく見る。おかげでなかなか進めないよ。

私は戦う事なんか出来ないから、出来ればこのまま隠密行動でアギトを見つけたい所だけど……よく考えたら軍だってアギトを追ってる筈だよね。

ううん、アイリなのかな目的は？　どっちにしてもそれなら鉢合わせは免れない。というか、こうやって軍が多く居る方にアギト、またアイリが居る可能性が高いんだよね。困ったもんだ。

「どうしようかクー」

「ピー」

弱々しい声が帰ってきた。いつまでも人の家の庭に身を潜めてる訳にはいかないよね。クーはきっとサクヤが心配な筈だよ。それは私だってそうだし……でも、このまま戻ってもガイエンは倒せない。

取り合えず今分かってる事は、目指すべき場所は間違って無かったって事くらい。多分この方向……光明の塔の方に軍はどんどん集結してる。

でも強引に突破……なんて手が使えない私はどうすればいいのかな？　クーが万全なら飛んで楽々だったけど、こんな弱ったクーをそんな酷使出来ない。

それにこれは私の試練でもあるから……自分で道を切り開きたい。でなきゃ私はずっと足手まとい……そんなのイヤなの。

サクヤは私を逃がしてくれたんじゃない……賭けてくれたんだから。私は震えてる場合じゃないの。息も整ったしそろそろまた動こう。

「行くよクー。私に勇気を分けてね」

怖い……とっても怖いよ。誰にも頼れない状況がとっても怖い。それに肩にのし掛かる物もある。それは責任という物なのかな？

それは今までの私が背負うこと無かったもの。ううん、背負った事はあるかもだけど実感なんか無かった。私はいつだって誰かに寄生して生きてきたから。

前はお兄ちゃんに……そして今はスオウに。昔はそれでいいと思ってた。だって私は一人じゃ何も出来ないから。

でもそれはリアルの私。見たくもない向こうの私のこと。ここでも自分がそうだなんてありたくない。だってここの私はベットの上に居るだけしか出来ない私な訳じゃない。

今の私は両の足で立つことが出来るんだから。今の私は責任だってなんだって自分で背負える筈だから。託された物を繋げる役目が出来る事が恐怖を越える。

ここで私はやらなきゃどこでだって同じだよ。

遠くに見える軍の目をかいくぐって私はまた走り出す。白い石を蹴って風を切る。私は実は足が速いらしいんだ。スオウがそう言ってくれたもん。

「一気に行くね」

私は自分にそう言い聞かせる。何度も止まると追いつかれそうなの。不安や恐怖という黒い物に。やっとで振り切るのにそんな直ぐに追いつかれたらたまった物じゃない。

「どこに行くと？」

「――――っ！！」

頭に降った冷たい声。影が私に重なる。ぬぐい去った不安や恐怖は新たな試練を私の元に引き連れてきたようだ。早すぎるよ！

「かはっ……」

「セツリだな。ガイエン様の邪魔に成る物達はここで排除しておくか」

首を捕まれてそのまま片手で私は持ち上げられた。信じられない……なんでいきなりこんな事……さっきまでの対応と違いすぎだよ。

拘束なんて生優しい物じゃない……この人の攻撃で私のＨＰは削られてる。どう言うことなの？　ガイエンと同じ権限がこの人達にもあるのかな。

そういえば黒甲冑の軍の格好とはちょっと違う。握られた命の向こうで私は必死に視線を動かす。甲冑はそう変わらないけど、面はしてないしそれぞれ武器が違うみたい。

いままで見てきた軍は顔は分からなかったし、武器も全部同じ支給品みたいなのだったのに……今、私を囲む人達はそうじゃない。

カン――カン――――カンとその場に響く乾いた音。それは私が必死に抵抗をして目の前の敵に足をぶつけた音だ。勿論堅い鎧で守られたその人に効くはずなんてない。

だけどこのまま殺されるなんてイヤだ。でも……何が出来るの私に？　武器も無い、スキルも無い私にこの状況の打開策なんて見いだせない。

私に唯一みんなと変わらずあるのは……言葉を紡げるこの口だけ。それで生き残る事は出来るかな？　分からない……分からないけど……絶対に無理とは言えないよね。

諦めないで……それは私がスオウに言ったこと。そして彼は私のそんな言葉を胸に刻んで困難を何度も乗り越えてきた。だから私も

……諦めないよ。

「なん……で？　拘束……でしょ」

「するさ。貴様が死んで街のゲートクリスタルに戻った所でな。だから今はこの細首を捻るんだ。俺達は何度だって殺せるぞ」

腐ってる……こんなのただの快楽殺人者じゃない。ゲームだからって死を楽しむなんて。底冷えするような不快感が募る。

「ふざけんな……アンタ達の主はアイリ……でしょう。こんな……ことしたら……」

「アイリ様なんてただの飾り。だがそれももう不要になる。我らの真の主が立つときが来たのだから」

ガイエンか……こいつらはきっとガイエンに深く繋がった奴らなんだ。我ながらなんて運が悪いんだろうと泣けてくる。

沢山居る軍の中でなんでこんな最悪なカードを引いてしまうんだろう。きっとガイエン派だけじゃ無いだろうし、まともな人は一杯いるはずなのにだよ。

「首を絞めてるのに生意気にも良く喋るな。うるさい、そろそろ黙れよ」

「かっ……はっ……」

腕に力が更に込められた。ダメ……これじゃあ言葉も紡げないよ。意識が遠のく……ＨＰが黄色に入ったのが見えた。死という感覚が本当に迫ってる。

軍の行動に意見する人なんていない……私は本当にここまでなのかな。暴れていた体から徐々に力が抜けていく。まるで魂も一緒に――――

漠然としていたＬＲＯに自分が浸透してる事実がここにある。幾ら言われてもそれまで半信半疑だったこと。それはここでの死が本当の死に繋がるという事だ。
スオウやサクヤに聞いた私の状態は、だけどポンポン信じれる事じゃなかった。確かめる方法もないし……あの時は「気を付けるね」と言った。
それが精一杯の理解の証。漠然と思ったその程度……だけどそれは事実なんだろう。だってサクヤやスオウが嘘つく分けないしこんなに怖いわけ無い……戻れなく成る恐怖を体は知ってるみたいなんだ。
だけどその時、大きな声がその場に響いた。
「何をやってるんですか貴方は！？　命令はアギト様の仲間の方々の拘束の筈で処刑ではないですよ！」
それは黒甲冑を身に纏った一際大きな姿。エルフにしては横に大きい感じだ。でも太ってる訳じゃなく、筋骨隆々なんだろう。醸し出す雰囲気がそんな感じ。
その人は小隊長みたいで、横には数人の同じ格好の兵がいる。
「ちっ……こいつらはアイリ様誘拐の容疑者だ。そんな甘い事を言っていいのか？」
なんて事をこいつは言うんだろう。さっき言っていたのと違うじゃん。どうやらあの一面は隠さなきゃいけない事らしい。それはまだ、アイリは飾りなんかじゃ無いって事じゃないかな。
そうだよ……まだ間に合う。私はここに現れてくれたこの軍の人達に賭けるしかない。敵であるはずのこの人に。
「ですが……アイリ様は……」

「うるさい！　我らはガイエン様直属の親衛隊だぞ。どちらが上か分かった上で言ってるのか貴様は？」

その言葉で現れた軍の人達は黙ってしまう。やっぱりこいつらはガイエンの刺客。親衛隊って……こんなのがアイリの側に居るなんて・・なんておぞましいんだろう。

それはいつも背中を狙われてたのと変わらない状況だよ。そんなのおかしい。軍の人達が本当に国やアイリを思ってるならここで引き下がっちゃいけないよ！

私はそれを伝えるために再び力を込める。どこに力を込めたか……それは心だよ。体のどこに込めても意味がないから。ただ唯一の例外は口。心を伝えるために必要な道具。私は途切れ途切れでも心を繋ぐ。これしかできないから。

「ちが……う。私……達は……アイリを……浚ってなんか……ない。私達は……アイリを……助けたいの」

「まだ喋れたか。本当にしぶといな。流石は負け犬の仲間だ。しぶとさだけは一級品だな。戯れ言をぬかすな！」

私の声は届いてる？　目の前のこいつがうるさくて迷惑極まり無い。でも、まだまだ口を止めちゃだめ。伝えなくちゃ、伝わるまで喋らなくちゃ、諦めたら私は終わりだ。

「貴方達は……本当にアギト……がそんな事……すると思うの？　私……なんかより……知ってるんでしょう。それに……こいつらが……アイリの事……どう思ってるか……知ってる？　こいつらはね――」

「このクソアマ。それ以上薄汚い口を開くな。貴様等もこんな犯罪者の言葉に惑わされるな！　それでも誇り高いエルフの民か！」

遂に目の前の奴は片手で腰に差してあった武器を抜いた。それは私の言葉が効いた証拠だよ。鉄の輝きが私の胸に狙いを定めている。
軍の人達の表情はわからない。けど、少しは響いた筈だと信じたい。これだけ危ない奴らなんだよ。危険で怪しい噂の一つや二つは軍の人達の耳にも届いてる筈だよ。
そんな不信が募れば……私の言葉に信憑性が出てくる。それにこいつは武器も持たない私に武器を向けてる。それでもう十分騎士道精神から外れてるよ。
私は、視線を動かして軍の人達を見る。その中で一番大きな人の兜の中の瞳とあわせるようにする。見えないけど……きっとそこにある目は合ってる筈だ。

「――――飾りと……言った！　アイリを・・貴方達のお姫様を侮辱してるのはこいつらぁ――――」
「きっさまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

私の精一杯の言葉が奴の叫びにかき消された。迫る鉄が私の胸を貫くのは寸前だ。だけどその時、重い音が地面を蹴った。
横から飛び出てきた剣が私の胸に刺さる筈だった鉄を弾く。辺りに響く金属同士の甲高い音。誰もがその異様な光景に足を止めだした。
そして太い腕が奴に入り、私は解放された。

「けはっ――こほっ……はぁはぁ」
「本当か？　本当に奴らは……アイリ様を……侮辱したか！？」

私の声は届いていたようだ。黒甲冑に身を包んだ男の背がそこにはある。その背は怒りが見て取れる様に震えていた。
「本当です。それにガイエンはアイリを使ってこの国を乗っ取る気

です！」
「まさか……ガイエン様。あの噂は本当だったということか……」
男の嘆きの様な声が伝わってくる。噂……やっぱり黒い物が流れてたんだ。隠しようもなさそうだったもん。アイツの腹黒さ。
「アギト様も……それを知ってるのか？」
「多分……そうだと思うけど……だから追いかけてる。貴方達をケチらしてでも、アイリの側に行こうとしてる」
それを聞いた男は笑った？　様に見えた。そしてようやく気づいたけど、周りでは親衛隊と男の部下の戦いが始まろうとしてる。
「隊長～やばくないっすかこれ？　その子の言うことが嘘だったら俺ら全員きっと追放っすよ～」
軍の一人から情けない声が聞こえる。吹き出しそうだ。一気にこの黒甲冑に暖かさを感じたよ。その時男の拳を受けて後退していた親衛隊の一人が叫ぶ。
「下っ端共が。貴様等何やってるかわかってるんだろうな！　容疑者の肩入れしてるんだぞ。これは立派な反逆行為、我らには貴様達を粛正する権利がある」
一斉に親衛隊は武器を抜く。その光景に思わずたじろぐ軍の面々。だけどその時、隊長が兜を脱ぎ去り言い放った。
「怯むな！　臆すな！　目の前の敵を見据えろ！　奴らこそ我らが姫を狙う蛇！　この国を手にせんとする逆族だ！
大儀は我らにある！　アイリ様の涙を拭うときは今しかない……

賭けてみようじゃないか！　我が国の最初の騎士に！」

力強い声に促されて英気があがる。私はこの時知った。言葉という計り知れない力とその威力を。

言葉の力（後書き）

第四十話です。

ごめんです。また今日もこんな遅くになりました。書き始めた時はすらすら行ってたのに途中からウヌヌ……って感じで結局ここまでかかってしまいました。本当ならアギト目線がもう一度入る予定だったんですけど……ごめんなさいそれも持ち越しです。

本当に、なんとか早く書ければいいんですけど……良い方法があったら教えてください。これからも遅くなる事が多々あるかも知れないですけど完結までは頑張ります。では次の話で。

無くしたヒーロー（前書き）

俺は奴に刃を向けた。その黒ローブに顔も覆った奴は明らかに異常。だけど戦う理由も曖昧なままの俺の槍に奴は怯えなど抱かなかった。それよりもむしろ俺にその恐怖は襲いかかる事になる。

奴は集まりだした軍にアイリの腕を使ってカーテナを振るう。それは反則的な事だ。そしてこちらにも向けられたその力が容赦なく俺の心を追っていく。俺はだから分からないんだ。どうしてここに自分が来たのか。

だけどそんな時俺の背中にあのクリスタルがあった。あの言葉を刻んだクリスタル「Ｉ'ｄ　ｓｔｒｏｎｇｌｙ」強くなりたいのその文字が俺の心に突き刺さる。それは弱く情けないままの自分だからだと分かってる。

けど俺には仮面を無くしたひー炉には強い心は宿らないんだ。

無くしたヒーロー

俺は目の前の奴に槍を向けた。迸る赤いエフェクトは怒気の証。隠すこともせずに俺はそれを向けている。だけど目の前の奴は怯える事も、怒る事も、臆す事もなく、その口元を綻ばせている。

それがとても不愉快で……奇妙で……気味が悪い。確かに今の俺じゃ、ここでＨＰを削る事は出来ない。怯えて怖がる要素なんかないかも知れない……だけど、そうじゃないんだ。

そうじゃない……そういう既存な感覚じゃない。目の前に奴はいるのに――何故だろう、そこに居る事に疑問を感じる。そこら中に何かを感じる。俺は一体何と向かい合ってる？

「ワタシの」

不意に響いた声に俺の体が強ばる。力みすぎか……もしかして俺の方が怯えてるんじゃないか？　そんな事を思ってしまう。

「何に怯えているの？」

「――――っ！？」

見透かされてる。その事実に俺の不安が掻き立てられる。その瞬間俺の側でローブが揺らめいた。一切目を離してなかったのに見えなかった。気づかなかった。

いや、どれも違うかも知れない。例えるなら、初めからここにいた……そんな風に感じた。

異常・異常・異常……その二文字が頭の中で響きわたる。これまでスオウとセツリ絡みで何回か体験した事が脳裏を掠めた。でもそれはアイツ等専門の筈だろ。

どうして俺の目の前にそれが現れる？　どうして……この異常な

奴（？）がアイリを浚う必要がある？　それに何より……どうして逃げない？　相変わらず訳が分からない事だらけだ。
でも、取り合えず目の前に居るんなら言わなきゃいけない事があるな。出てきたんだ返す気あるんだろう。

「俺が怯える？　ふざけるなよ。所でソイツ……返せよ」
「うん？　あ～あコレ？」

俺の指の先を追って奴はアイリを翳す。そして再び奴は口元を綻ばせて愉快に笑うんだ。

「あはっはっは、ダメよまだね。まだまだぜんぜ～んだめ。ちょっと待ってなさい」
「まだだと？　どう言うことだよ！　なんでアイリを浚った？　お前の目的は何だ？　アイリじゃないのか？」

奴の真意がわからない。アイリが目的じゃないのか？
こいつはアイリを傷つける気はないみたいだしな。だけど目的……こいつが何を待ってるのかは知りたい。それ次第ではやっぱり俺はこの槍を引くことは出来ない。

「コレになんか興味はないわ。だけど……面白そうだったからね。なんだかとっても面白そうだったの貴方達。だからつい手が出ちゃったわ」

奴は翳すアイリを左右にユラユラ揺らしてひけらかす。面白そう……こいつは俺たちを見てたって事だろうか？　一体どこからだ。
周りでは重そうな金属の音が響きだしていた。どうやら軍の奴らがここに集まりだしてる。目の前のこいつはそんな事微塵も気にしてない様だけど何でだよ。

軍の連中は眼中にないって事で、囲まれた位コイツにとっては何でもないのか。だけど俺にとって逃げないで居てくれるのは助かる。
見えないより、見えてる方が安心するものだから。それに目の前に居るのならどうやったって少しは手がある。いざとなれば強引にでも……

「ふさけてるなお前」
「それでもいいわ。ううん、何でもいいのよ。楽しめればね。ここもうるさくなって来たわ」

そう言ってようやく奴は周りを気にしだす。でもやっぱりそれは切羽詰まった感じじゃない。本当にただ単にうるさくなって興が削がれるみたいな程度。
黒いローブをなびかせて奴は言う。

「ねえ、遊びましょうよ。そうしましょう。あの子が来るまでの暇つぶし。うるさい蠅のお掃除しましょ」
「なに言ってんだお前？　遊びだと？　この状況わかってるのか。お前に逃げ場なんてないんだよ！」

既に軍はこの周りを固めている。幾ら異常な奴だからって圧倒的な数の差は乗り越えられないだろう。何を待ってるのか知らないけど貴様はそれまで居られない。
遊びなんて悠長な事を言ってられる状況じゃないと知れ！

「ふふ……あはははは！　君の王子様は的外れな事ばっかりね～。だから愛想尽かしちゃったってのに……まだ間に合うとでも思ったのかしら？
別に道なんか入らないわ。なければ作れば良いだけだもの……こうやって」

「――――！！　お前、まさか！」

奴の高笑いが夜の空に響いた。そしてタンっと音を立てて俺から離れるとアイリを自分の体と重ねる様に抱いた。そしてアイリの腕を絡めて前に突き出したそれをゆっくりと横に向ける。

そこに入るのは押し寄せてきた軍……向けられたアイリの腕に握られてるのは『王剣カーテナ』まさかまさかと思うもそれが出来る事を考えずに入られない。奴はフードで隠された顔の中、唯一見える口元を引き上げて笑っている。

そして何かを呟く様に口が動いた。それはきっと音を発してなかった。音として空気に波を起こしてな……なのに俺には奴が発した言葉がわかった。

そもそもこの世界は振動なんて物で音を伝えてない。だからそれは起こり得るのかも知れないけど……俺にはそんなシステムの誤差動とは思えない。これはもっと人の感覚的な部分の事だ。

奴は絡めたアイリの腕を肘部分から上に少し上げた。それはまさに発射態勢。そして――――

【あ～そび～ましょ～】

奴の言葉が脳内にさんさんと反響していた。頭蓋骨の様々な部分に当たって軌道を変え角度を変え満たしていく。

――――奴の絡み合った腕に従ってアイリの腕が降り卸される。

「やめろーー！！」

その瞬間、腕の動きと併せて何か大きな物がきっと落ちた。いや、確かに落ちた衝撃があった。同時にあがった幾つもの小さな叫びも幻聴なんかじゃない。

地面に敷かれてた石は弾け飛んで無惨な形を残すだけ。それこそ

が何よりの証拠か……その上には潰されたように沈む沢山の黒い甲冑が見える。
それはカーテナによる力の傷跡。視線を奴に戻すと、腕の先のカーテナから黒い光の尾が垂れていた。
「ふふ……あはははは！　簡単ね、とっても簡単」
「お前……」
奴の甲高く愉快な声が響いている。本当に楽しくてしょうが無いと言った感じの声に俺は沸々と怒りがこみ上げてきた。なんて事やってんだコイツ！
俺は握った槍に力を込める。その時だ。
「ほら、ド～ン」
更に奴はカーテナを横に凪いだ。それによって今度は空に大きく軍の連中は舞う。数なんて物ともしない……あれがカーテナの力。
「うおおおおお！」
俺は力強く地面を蹴る。今は良い距離に奴はいる。一足で側に寄り、槍をフードで覆われた顔面へと突き立てる。だけどそれと同時にカーテナが俺に向けられた。
けれど俺の方が早い！　その苛つく笑みを作る顔を拝んでやる。しかし奴の笑みは崩れない。むしろ更に口元は裂ける様に歪んでいる。
そして何かが持ち上げられる。奴の顔に重なるそれは――
「アイリ！」

ダメだ！　勢いが尽きすぎて止まれない。どこまで愉快に卑劣な事をする奴なんだ！　槍の切っ先がアイリに迫る。俺はまた……君を傷つけるのか？

見たくない衝動が俺の瞳を伏せさせた。それでも俺の槍がアイリを貫く事実は変わらないのに……俺はまた逃げる事しか出来ない。

何度も何度も……俺は逃げ出してる。だけど伸びきった腕には何も伝わっては来なかった。それはただ空を切っただけだ。

おそるおそる目を開けて見ると、そこには誰も居ない。

「え？」

信じられない。あれをかわせるなんて……一体どうやって？　てかどこに？　いや……そんな事いいか。俺は彼女を傷つけずに済んだんだ。

力が抜けていく。その事実だけの安心感で俺は満足できそうだ。だけど……やっぱりそんな事は幻想でしか無い。だってそれは、何の問題も解決してないんだからだ。

そしてやっぱり、その声は響きわたった。

「あはははは、あっはははは～！　面白かったよさっきのはね。とっても満足。でも……それで終わり？　お姫様はワタシの元にあるのよ？」

声の方に首を向けるとそこには愉快に回る黒ローブの姿がある。酔ってる訳じゃないだろうけど抱き寄せられてるアイリはなんだか苦しそうだ。

あれは多分、カーテナの影響……強すぎる力の代償。それは倦怠感を催すＨＰ犠牲。命を削る事でカーテナは国を守る力をくれる。

けれどスオウやセツリじゃ無いんだからそれは本当に死ぬ訳じゃない。俺たちと同じように復活できる。ならそれはそんなに大した

代償じゃ無いように感じるかも知れない。
けどそれは大きな間違いなんだ。アイリには失うＨＰ分襲う疲労がある。それが倦怠感だ。それはかなり辛い物の様で彼女曰く、体の節々の痛みにのし掛かる重力過多がその効果らしい。
自分の体が動かなくなって行く痛みは怖くて、沈んでいく感覚に怯える事と戦うんだ。だからアイリはカーテナを振るう度に顔に苦痛を浮かべる。
唯一の救いは攻撃の威力を自分で調整出来る事。だからものスゴく少量にＨＰ犠牲を調整する事であの城壁での時みたいに連発だって出来る。
けど……今は違う。その威力調整を握ってるのがきっとアイリじゃなく奴なんだ。そしてさっきの二撃は明らかにアイリが俺に向けた攻撃とは威力も範囲も違っていた。

「黙ってたらつまんないわよ。コレ……また使ったら興味示してくれるかな？」

そう言って再びカーテナが俺の方へ向けられる。その時、アイリの苦しむ顔の隣で口元をつり上げる奴を見ておれは気づいた。
それは奴は分かってるって事だ。俺の悔しがる顔も、アイリの苦しむ顔もその意味を知っている。

「お前……カーテナを振る度にソイツがどうなるか分かってるだろ？」
「ああ、この子がＨＰを削って苦しむんでしょう。でもね、私は苦しまないの。ここが大事なのよ。　私は苦しまないでこんなに楽しめるって事がね。
それってとっても素敵なオモチャでしょ？　君は削って消えていく消しゴムの心配をするの？　それと同じよ」

奴にとってはアイリは遊び道具以外の何でもないって事か。でも消しゴムはオモチャとは言えないだろう。あれは文房具。
それとアイリもお前のオモチャなんかじゃ決してない。これ以上奴に好き勝手やられたら益々アイリは苦しむ事になる。自分の意志でも何でもなく……カーテナに振り回される事になるんだろう。
そんな事……許しておけるか？　許せるはずがない。これ以上カーテナを使わせる訳には行かない……だけどどうやって奴を倒せばいいんだ？
俺が武器を構えて向かっていったら再び奴はカーテナを使うかも知れない。でもだからと言って武器を放り投げて奴に迫った所でその後どうすればいいんだ？
どうせダメージは受けないんだし、どっちも変わらないのかも知れないけど……俺にはどうしても敵を前に武器を捨てるなんて出来ない。
これも逃げてるって事なのかも知れない。俺は結局、自分が一番大事なのかも……

「どうしたの？　やっぱりこれを使わなきゃ遊べないか」

その瞬間俺に厚い空気の壁がぶつかった感覚があった。それは奴がもう一度振るったカーテナの力。これでまた、アイリの体には苦痛がのし掛かる。

「ぐあああぁぁぁ！」

俺は一気に後方へ吹き飛ばされる。そして一つのクリスタルにぶつかり止まった。

「つっうぅーー！！」

それは黄色い光を放つあのクリスタル。刻まれた一言は【強くなりたい】――それが俺の心に刺さるようだった。

《ねえアギト、一緒に強くなろう。ううん、まだ私が全然だから貴方と一緒なら強くなれる気がするの。ダメかな？》

そう言って頬を赤らめながらも手を差し伸ばしてくれたアイリ。俺は自分が頼られてるんだと思って……それが嬉しくて安易にその手を握った。

《まあ別にいいけど。俺はアンタを待ってる気はないぜ》
《うん、いいよそれで。ずっと前に居てね。そしたらずっと私が追いかけるよ》

アイリの笑顔は眩しくて、輝いてた。俺にはそれが出来ると思ってた。疑いもせずに自分にはそれだけの力があると過信してた。だけどそれはそうだったけど……そんな過信はいつか絶対に砕かれる物だったんだ。

【強くなりたい】

その重さを俺は計り違えてた。

そして今こうして自分の沢山の間違いを突きつけられて俺はまたこの言葉の前に居る。いや、連れてこられた感じだな。今度はこの言葉をちゃんと胸に刻めるのだろうか。その資格があるか？
前を見ると更にアイリは辛そうに成っていた。肌には汗が浮かび、息が荒い。ＨＰが黄色く成っている。どうしたら……どうしたらい

いんだ！

「君はさぁ～ホントはどうしたいの？　コレを助けたいの？　そうじゃないの？　君にその気がないんじゃ面白く無いからもう捨てよっかな。

見てみる？　使い捨ての末路」

奴はそう言って続けざまにカーテナを振るう。人形みたいにアイリの腕を無造作に振るってだ。そしてその矛先は軍の連中に向いていた。

百を越えてそうなその数が足蹴にされた様に潰されて行く。響きわたる断末魔の悲鳴が夜の空間にこだまし続ける。

見る見る内にアイリのＨＰが減っていく。使い捨て……その言葉の意味を俺は悟った。奴は本気でアイリの全部を絞り出して捨てる気だ。

「やめろ……やめてくれ」

アイリの苦痛に歪む顔が、滴る汗が、俺に何かを求めてる様な気がする。何か……なんて分かり切ってる事なのに、俺はそれを理解する事を拒否してる。

まだ逃げる気だコイツ……自分に対してそう思った。さっき奴に言われた「どうしたいの？」その言葉はずっと俺が知りたい事なんだ。俺は一体どうしたいんだ。

昔に戻りたくないなんて嘘なのか・・・本当はいろんな事全部清算したいんじゃないのか？　でも……俺は自分が強くなんか無いと知ったんだ。

仮面がとれたヒーローはただの人だった。だから迫る物が普通に怖くて、逃げ出したいと思う。だからこれからも逃げていくのか？

それでいいのか？

そう思うもアイリの事を考えると動けない。だけどこれも体の良い言い訳だ。
「やめてほしかったら止めて見せてよ。コレの電池……切れる前にやってみな」
奴はあらかた片づけた軍から再び俺に向き直った。そして高く掲げられるアイリの腕……その先のカーテナ。そして俺に向かってその腕は振り下ろされる。
だけど俺は動かない……動けない。クリスタルに背を預けてうなだれるだけだ。俺は結局……いつまで経っても守りきる強さなんて手に入れられないんだ。
もう直ぐカーテナの攻撃が降り注ぐ。俺はこの場から退場出来る。そう思った……けどカーテナのけた外れな攻撃はいつまで経っても来ない。
「あは……ちょっと面白いかも」
そのおかしな言葉を確かめる為に俺は顔を上げた。するとそこには苦痛に顔を歪めながらも自身の腕を支えるアイリの姿があった。アイリの視線が俺に向かってる。
「逃げて……」
そして出てきた信じられない言葉。なんで……どうしてこの状況でアイリはそれを言うんだ。
「逃げなさいよ……このヘタレ！」
その言葉が出たと同時に奴は大笑いしだした。そして俺はポカンと呆ける。アイリの言葉は最もで俺には呆けるか頷くかしか出来ない事だったんだ。

「あははは、面白いわアナタ。コレなんて言ってごめんね。でもまだ待って。今度の相手はアナタだけど今はあのヘタレなの。
面白く無いけど、ここで終わらせて直ぐに遊んであげる」

そう言って奴はアイリの首筋に吸い付いた？　するとアイリの瞼が再び重さを増すように閉じていく。奴は何をやっている？　催眠か？　この距離ではよく分からない。
最後に見えたのは絡まってない腕をこちらに必死に上げようとしてる様子と一粒の涙。そして僅かに動いた口だった。
どうしてこういう重要な事は分からないんだろう。奴が言ったくだらない言葉は分かったのに、アイリの最後の言葉が分からないなんて……気になってしょうがない。
やっぱりそれは「逃げて」かも知れないし案外「助けて」だったかも知れない。それかもっと別の何かだったかも知れない。
結局今の俺にはそれを知る資格が無かったのかも。受け取った筈の言葉を頭が閉め出したのかな。本当にここで逃げ出せば全ては終わるだろう。
出会いから始まった俺たちの関係は最悪の形でジ・エンドなんだ。物語風に言ったら最後の戦いの前に勇者は逃げ出しましたって感じだ。
ブーイングも当然だな。そんな物語誰も読まないし、耳も傾けない。それに勇者が逃げたパーティーは勇者を除いたまま最終決戦に望み全滅しましたなんだ。
俺はそんな勇者にもなれなかったけど……あの時、勇者が最終決戦に加われば勝てたのかな？　そんな気持ちが芽生えそうに成っていた。

「じゃあバイバイ。今度はこの子と遊ぶわ」

そんな言葉の後に今度はちゃんとカーテナは振り下ろされた。俺は殆ど考えず武器を頭上に掲げて両手で支えた。その瞬間凄まじい衝撃が武器から腕、肩を通って内蔵を震えさせ、足を地面にめり込ませる。

「がっ……はっ！」

「へぇ～もういいのよ頑張らなくて。辛いんでしょう。逃げ出したいんでしょう。逃げてもいいって言ってくれたんだから遠慮せずに逝きなさい！」

奴のつまらなそうな声が届く。興味は俺からアイリに移ったようだ。カーテナに黒い物が巻き付いていてそれは次第にアイリの腕を飲み込んでいく。

それに伴い、体に掛かる重圧も増していく。俺はどうしてこんなに抵抗してるんだ？　さっきまでもういいと、繋がりを終わらせようとしてたのに……アイリに逃げて良いと言われて、だけど逃げたくないと思った。

自分の心が滅茶苦茶すぎて自分でも分からない。今の俺は心と体が繋がってないんだ。だから今にも切れそうで負けそうだ。力が出詰まって……押さえられてる。

それが出てくるまでの回路が直結してない感じだ。その時後ろで何かの音が聞こえてきた。ピキ……パキ……とヒビが入る様な音。俺は地面に膝を付く。いよいよここまでか……遅すぎたのか？

今更勇者が来たところでゲームオーバーは変わらないのかも知れない。一人じゃ何も出来ないんだ、勇者も人も。変わりはしない目の前の事。

だけど立ち上がった事に意味は無いのかな。勇気を振り絞る事だけだとしても、そこには何も残らないのかな。俺のそんな考えに応える様に後ろで何かが砕けた様な音がした。

それはあのクリスタルの砕けた音だった。俺にも破片が降り注ぐ。

その中の一つが俺の前に飛んできた。それは丁度掘られた一言の部分。何度も考えたあの一言。
それを見た瞬間に、だけど俺には違う言葉が流れた。それはさっき聞き取れなかったアイリの言葉。

【もういいよ……忘れて】

その瞬間、俺は大きく叫んだ。一瞬で沸き上がったそれがきっとずっと悩み続けていた事の答え。

「いやだぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は強くなりたい！　降り懸かる重圧を切り裂いて立ち上がる。回路は繋がったんだ。それは余りに簡単すぎた事。当たり前すぎた事だった。
俺は駆け出す。奴に向かって。答えを見つけた事で迷いは消え槍には力強い輝きが見えた。その輝きが俺の勇気を映してくれているみたいだ。

「俺は助けて見せる！　今度こそ！　そして貴様は許さない！」
「はは……あはははは！　いいわ、さあ来なさい。君をもう一度沈めて上げる！　知りなさい！　カーテナ――その国を支える王の力を！」

小さな剣が黒い輝きに満たされる。けれど俺は真っ向から槍を放った。その瞬間二つの衝撃が光明の塔を傾かせる。

無くしたヒーロー（後書き）

第四十一話です。
またまた遅くなりました。ごめんなさい。なんだかもう早く書くのは無理かもと思う今日この頃です。昼か夕方には更新したいんだけど……全然書きあがらないのです。
複雑になりすぎて自分の頭の中で破裂しそうです。それでもなんとか書き続けて行くと宣言します。諦めたらそこで終わりなんです。セツリも言ってたしスオウも言ってたよ。
二人が幸せになるかは分からないけど思い描いてる完結まで突っ走ります！　その先に屍が待っていようとも！　応援してくださる方々の感想待ってます！　ではまた明日か、出来れば今日！　上げる予定の第四十二話でお会いしましょう。
ありがとうございます！

雷の咆哮（前書き）

僕達はウエポンアライアス最後の戦いを始めた。だけどまずは問題の解決……と思ったんだけどそれは上手くいかなかった。シルクちゃんの魔法でも腕は戻らなかった。

そのまま麒麟と僕は対峙する。セラも鍛冶屋も居る。ピクだって……きっと心配なんかないんだ。僕達は圧倒的な麒麟の力に真っ向から戦いを挑んだ。

雷の咆哮

「やっぱり無理な様です。何で……治せないのかな」
シルクちゃんの落胆する声が明るく切り取られた森の一空間に小さく響く。僕は取り出していた自分の腕をもう一度アイテム欄に戻した。
元々この変なフィールドが形成された時に僕たちの蓄積していたダメージは回復してたんだ。だけど腕が治ることは無かった。
だからきっと無理だろうとは薄々感じつつも一応試して見たわけだけど……シルクちゃんの強力な回復魔法でもやっぱり僕の腕が元の肘部分に戻る事は無かった。
シルクちゃんは諦めきれずにもう一度、今度は違う魔法を詠唱に入るけど僕はそれを止めた。

「もう良いよシルクちゃん。ありがとう。元々自分の不注意だったわけだし、それにこれはこれで良いハンデになるだろ？」
「本当にハンデに成ると思ってる？」
「……」

むしろこっちが貰いたい位ですハイ。ごめんなさい、精一杯の強がりでした。シルクちゃんの真っ直ぐな瞳には嘘は通じない。

「空元気なんて見せるくらいなら不安を漏らしていいんだよ。私はヒーラーなんだからパーティーみんなのどんな傷も癒せないといけないの。抱えなきゃダメなの。
私は敵のＨＰを削ることは得意じゃないけど、みんなを守って、支える事が、私の大事な役目なんですよ！」

シルクちゃんは武器である杖を力強く握ってそう言った。だけどその武器は僕たちの様に何かを傷つける為に向けられる物じゃないんだな。

羨ましい……とかでは無いけど、それはなんだかとっても良いと思える。

それに何時になく気合いの入ったシルクちゃんはなんだかかわいらしくて心が安らぐしね。てか、充電される感じだ。

「分かった、肝に銘じておくよ。なら少し……僕の不安を預けたい。これはきっと邪魔だから。いいかな？」

僕はそう言って胸に手を当てて何かを掴む動作をして前に差し出す。するとシルクちゃんは自分の体に杖を預けて両手でその何かを受け入れる体勢を作ってくれた。

「勿論ですよ。言ったじゃないですか。私はそのために居るんです。不安は全部私が預かるから思いっきり戦って、そして敵を倒すのがスオウ君達の役目です」

「ああ……その通りだね」

シルクちゃんの笑顔は優しくて暖かい。僕はその暖かな手のひらに自分で掴んだ何かを置いた。そしてそれを受け取って自身の口に持っていく。するとシルクちゃんは――――ゴクン、と食べた。

「食べるんだ……」

結構キテレツな事するんだね。シルクちゃんも偶におかしな事する。それがこの場面じゃ無くても良いと思うけど。これも不安を取り除く為の行為だったのかな？

「食べるって行為はなんだか分かり安いと思うの。大丈夫、これでスオウ君の不安は私のお腹の中だよ」

そう言ってシルクちゃんは自分のお腹を両手でサスサス撫でている。確かに分かり安かったかも……そこに収まった自分の不安が見えるようだよ。

それに俺は貰ってもいた。シルクちゃんの腕に不安を渡した時、同時に少し彼女の元気や光と言う物を勝手に頂いた。だって必要だろ？　不安分の空白に埋める物がさ。そうしないと新たな不安が出てくる事になって意味がない。

摘んだ元気の光は何気に真似して口へポイッと入れた。うん、シルクちゃんの味がする。甘く暖かなホットミルクの様な感じだね。

首を捻って右前方に視線を向けるとそこでは僕達のやりとりと打って変わって激しい攻防が繰り広げられていた。セラも鍛冶屋も結構強いんだこれが。勿論相手は麒麟だ。

それも完全雷化精霊バージョンだから僕が戦った時よりも更に強く成っているんだろう。それをたった二人で持たせるなんて二人ともデタラメだな。

鍛冶屋の種族のスレイプルは生産の特殊スキルを覚えられる代償に普通のスキルには枷が付いてるって聞いたけど、普通以上に強い。

そしてやっぱりセラはメイドじゃない。戦闘メイドってのがあるんならそれに分類してもいいけどそれは百歩譲ってだ。だけどこうやってみるとアイツは本物だよ。

戦闘開始直前に特攻掛けたのもセラだった。無数の暗記を麒麟が動き出す前に暴風雨の様に降り注いで一気に大爆発が起こった。けれどそれでも追随の手をゆるめる事が無かったアイツこそ間違い無くバトルホリックだろう。

ただ単に切れてる様にも見えたけど、まさかな。あのクラスの戦闘で怒りだけではあそこまでいけるなんてあり得ない。

怒りは力をくれるけど冷静ではいられないんだ。麒麟の速さに対応するには冷静差が必要だ。それも反射の域の。認識してからじゃ今の奴には遅い。何てったって、奴は今雷その物と言っていいんだから。

拮抗してる様に見える戦闘も、だけどよく見ればやっぱりセラと鍛冶屋は押されてる。二人のＨＰは既に半分に成ろうとしてるのに麒麟のＨＰは満タンから微量減っただけだ。それはきっとセラの最初の奇襲分。

二人の攻撃は実は全てかすりもしていない。それでもちゃんと戦えているように見えるのは防御に力を入れてるからだろう。二人は実は互いのスキルで補助サポートをやっているんだ。

まさに時間稼ぎ。セラ達は僕らの為の時間稼ぎをやってくれているんだ。腕を治して万全に成れるのならそれがよかったからね。

だけどそれは叶わなかった。今の自分があそこで何が出来るか分からないけど、これ以上待たせる訳にはいかない。

このフィールドの周りにたむろしてるモンスター共が変な感じに盛り上がってるのもムカつくな。

まるでそれは僕達の負けを歌ってる様なんだ。だから見せてやろうと思う。こいつらにも僕達プレイヤーの力って奴をさ

「さあ行こう。サポート頼むよシルクちゃん」

「うん！　そっちも頑張ってスオウ君」

僕とシルクちゃんは前線へ急ぐために駆けだした。大丈夫、四人でならきっと勝てる。

後少しで戦闘体勢に……そんな事を考えた時、連携が乱れたのかセラがこちら側に吹き飛ばされてくる。大きな悲鳴と大幅に減ったＨＰ……大ピンチだ！

そして直線上にたった鍛冶屋を麒麟は一蹴して放電と共に消えた。

だけど僕は見たんだ。奴の体が消える寸前にセラの着地点だと予想出来る場所に誘導放電があったのを。
僕は覚悟を決めて更に地面を強く蹴り加速した。そして腰にあるニーベルの一本を抜き去る。宙に舞うセラがどんどん近づいて……そして僕と交差した！　その瞬間、僕はニーベルを斜め上に凪ぐ。

「うおおおおおおお！」

気合いの入った雄叫びの直後、それを途切れさせる衝撃が僕の腕に響く。それは肉を通り、骨を伝って来る衝撃。目の前には電撃と化した麒麟の姿が有った。僕の剣と麒麟の角が重なりあって拮抗してる。

「パキ……ピキ……」

なんだこの音？　僕の耳には少し前から同じ様な音が聞こえていた。それを前はニーベルの耐久度の限界が来てると思ったけどそうじゃ無かったんだっけか？
ならこの音は一体……僕は必死に音の正体を探るために視線を這わす。だけどその時、後ろから体勢を立て直したんだろう、セラの声が届いてそれどころじゃなくなった。

「上出来よ、アンタにしてはね！　そのままよ！　そのまま！　ぶったぎってあげる！」

すると小太刀を握ったセラが青いエフェクトを武器に纏わせて飛び込んだ。そして左足から一気に胴を斬り裂く気合いの一太刀が炸裂した。
そしてスキル効果か、麒麟の体その物の電気に氷が張り出してそれは見る見る広がっていく。それは下から斜め上へ飛んだセラが地

面に再び足を付く頃には全身に広がり、麒麟の活動は止まっていた。
でもこれはまだ攻撃の途中だった。
地面に降り立ったセラが小太刀に付いた水滴を振るう様に凪いだと同時に呟いたその技名。

「アイガ・ストライク」

その瞬間、氷は弾け飛び麒麟を大きく吹き飛ばした。なんて綺麗なスキルだ。飛び散った氷に麒麟の電撃が反射して虹色に輝いて見える。
だけど体を半分に斬り裂き、氷で覆ったにも関わらず、そのＨＰは僅かばかりしか減っていない。

「こんなもんかよ……」
「文句言ってないでアンタも繋げる！」

セラは既に次の攻撃の為に動き出していた。僕も急いでそれに続く。そうだ、前衛の一撃なんてあんな物なんだ。僕達の攻撃は攻撃を絶え間無く続けていってスキルチェーンとかして初めて大きなダメージに繋がるんだ。
一回の攻撃に期待するんじゃなくみんなで大きな一撃を、だ！
体勢を立て直しきれてない麒麟に迫り、セラは続けざまのスキル攻撃を打ち込んだ。麒麟は今度は何とか踏ん張るも技をまともに食らって隙が出来てる。

（行ける！）

僕はそう思ってニーベルを握る手に力を込めた。ここで押し切れるかも知れない。いや、押し切らなくちゃ行けない！
このチャンスは奴が戦闘に参加してなかった僕を見落としてたか

ら得られた物だ。それまでかすりもしなかった攻撃が連続で決まってる。ここで勝負をかけないと次の保証なんてどこにも無い！

「うらぁぁ！」

僕は思いの限りを刃に乗せてニーベルを振る。銀色の切っ先は確実に麒麟の首を取っていた……だけど――

スカ　（ニーベルがただ単に麒麟の体を通過した音）

「はっ！？」

僕の攻撃は確かに当たった筈なのに、かすりもしなかった。矛盾してるけどそうなんだ。確かにニーベルは麒麟の体に届いていたし、その体を通ったのは間違いないんだ。

だけどニーベルは何の抵抗も無く麒麟をすり抜けた……当然ダメージなんて微塵も無い。僕は勢いをつけて振りかぶったせいで体勢が崩れてしまっている。

そこに麒麟の雷激と化した布が迫る。早い！　けど……

「くっ！」

僕は何とかその攻撃の盾に成るようにニーベルを動かす事が出来た。これで直撃は避けられる――――筈――――っ！！

「ぐあああ！」

「スオウ！」

まただ……完璧……とまでは行かなくてもニーベルがかすりもしないなんて。どういう事だよ……さっきと同じ現象だ。まるでニーベルには攻撃判定がないみたいに透過される。

麒麟の雷激に縛られた僕。絶え間なく続く拷問みたいな攻撃に僕のＨＰは急激に持って行かれる。その時横から数本のクナイが飛んできて爆発――――僕を縛っていた雷激を吹き飛ばしてくれた。

「アンタ、何やってんのよ！　死ぬ気！？」

「はぁはぁ、うるせえよ。こっちだってわかるか……まるでニーベルじゃ――――っ！！」

爆煙の中、横から麒麟が飛び出してきた。雷の通過で一気に周りの煙が拡散して晴れ渡る。僕は再びニーベルを強く握りしめる。

「くっ……」

当たるか？　当たらないか？　疑いや二度の攻撃で芽生えた新たな不安が迷いを生んだ。そして麒麟にはその一瞬で攻撃には十分だ。

全てが軌跡と思える程の速さ――――音が届く頃には奴の攻撃は終わっている。奴の体はどうやらニーベルだけじゃなく人の体も透過するらしい。

それが雷化した麒麟の特徴なのかも知れない。しかし奴の体も透過するからってニーベルと同じく、ダメージを与えられない訳じゃない。

奴の体が通過する度に僕には落雷の様な衝撃が全身を襲った。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

自身の体の焼け焦げた部分から煙が上がってるのが見える。セラは僕を守る様に前に立ってくれたけど、一人じゃ麒麟の速さに付いていけない。

意識が遠のきそうだ。雷クラスの衝撃は桁が違う。ゲームじゃなかったら死んでるぞ。

いや、僕の場合ゲームでも死にそうなんだけど……麒麟は追随を止めない。まずは弱い所から攻める――それは戦闘の常識か。
その時、僕の焼け焦げた体を何か暖かい物が包み込んだ。これは……セラか？

「何やって……んだよ、お前」

このままじゃ二人一緒にやられる。それにセラにこんな事されるのは嬉しいというより怖いぞ。何企んでる。それでも僕は寄りかかるしか出来ないのが悔しい所だけど。
さっきの麒麟の透過は三回位続けざまにやられた。だからかなりＨＰをもって行かれたんだ。電撃の痺れが節々に残っていて正直、セラが支えてくれてないと倒れる。

「雑魚は黙ってなさい。今更アンタだけ死なれちゃ、後味悪いのよ」
「雑魚って……相変わらず口わりぃメイドだな」

本当にいつもいつも……だけど今は、少し違うような気もするけどね。前はただ気に入らない感じだったけど、今は……少しは仲間として見てくれてる感じがする。
何か手があるのか――セラはふざけるようでかなり出来る奴だ。だからこの行動にもきっと意味があるんだろう。
その時流れてきた誘導放電の音――来る。幾ら来る場所が分かっていても完全にかわすのは難しい。それに二人分――――どうやる？

「今！　凪いで！」

唐突に聞こえたセラの叫びに驚いてとっさに指示通り腕が動く。すると良いタイミングだったのかニーベルが麒麟の首に衝突して互いに飛ばされた。

――――て、え？　当たった？　確かに今ニーベルは麒麟の体に触れた。

「どういう――」

「やっぱりね。アンタがバカだから気付けたかも。だって奴が速すぎて一撃に賭けるから私達はスキルでしか攻撃してなかった。だけど二刀流だけで他の攻撃スキルを持ってないアンタは武器だけで行った。

ここが違うのよ。通らない攻撃はどっち？　どうやらあの麒麟ってモンスターのあの状態は『スキル攻撃』以外無効化出来る！」

セラは確信を得た顔で言い切った。なるほど、だからただの通常攻撃しか出来ない僕の攻撃は悉く透過したわけだ。だけどそれなら何で今のは――

「アンタの武器をよく見なさいよ」

そう言われて僕はニーベルに視線を落とした。なんだかニーベルから紫のエフェクトが上がっているな。これって

「付加スキルって奴よ。どうやらスキルが発動してるなら当てる事は出来るみたいね。それで戦えるでしょ」

「――――ああ、助かる！」

僕はニーベルを握り締めて前を見据えた。これでまともに戦える。スキル攻撃ってスキルを纏ってるなら何でも良いらしい。要するにセラは付加スキル――――武器や身体強化系のスキルを掛けてくれたようだ。

これで攻撃が通ると思うと自然と体に力が戻る感じがする。出来る事とやれる事が見えれば人はもう一度ゼロからでも前を向くだろ

う。その心意気で踏ん張った。
　こんな所で僕が真っ先に倒れる訳には行かない。だってこれは僕のワガママに付き合わせてるんだから。
　攻撃が通ると確信があるなら迷うことはない。僕とセラは一気に麒麟に攻撃を仕掛ける。ＨＰがなんだ。今度こそラッシュを掛ける時だ！　セラが見つけてくれた活路とくれた力、無駄には出来ない。
　だけど麒麟は一歩早く動く。僕達が迫ったときその場から消えた。そして周りを駆け回ってるんだろう電気が放電する音が聞こえる。でもその音も既に数瞬遅いんだ。完全に僕らは出遅れた。これじゃあ後手に回るしか出来ない。
　だけどその時二つの声がフィールド内に轟いた。

「フル・キャンバス！」

　凛としたシルクちゃんの声と同時にフィールド全体に色とりどりの小さな玉が無数に出現した。そしてその玉は色を対象物につけて弾けていく。
　すると一つの足跡が浮かび出す。あれは麒麟の軌跡――――奴の通った道筋が見える。そして今も弾ける場所を見れば位置を予測出来る。

「メタル・コンソール！」

　続いたのは鍛冶屋の言葉。同時に今度は地面から何かが沸き上がり麒麟の予測位置に立ちふさがった。それは壁？
　そしてその壁がしなるように震え、何かの衝突音が響いた。それは紛れもなく麒麟だった。スキルで作られた壁は透過出来ない。
　麒麟は自身の衝撃をモロに受けて空中でしなっていた。

「「今だ！」」

僕と鍛冶屋の声が重なった。瞬時にセラと共に駆け出す。役目を終えた壁は砂の用に消えて行っていた。きっとあれはスレイプル特有のスキルだろう。多分『鉱石操作』と言う奴だ。

生産を生き甲斐にする彼らが独自に持つスキル。それは様々種類があるらしいけど、鍛冶屋は武器を専門にしてるから鉱石操作なんだろう。

その鍛冶屋も武器を構えてこちらに向かう。シルクちゃんは既に別の魔法の詠唱に入っていた。そして一番に麒麟に攻撃を届かせたのはピクだった。今までどこに行ってたんだと思うけど、いつも妙にタイミングいいな。

好機って奴を知ってるよピクは。

真上から急降――そして炎を麒麟に浴びせる。僕たちはその炎の海に飛び込んで無数の刃を麒麟に浴びせだした。派手なエフェクトは殆どセラと鍛冶屋。

僕はチェーンのつなぎ目をチマチマ通常攻撃で保ってた。動きを止められた麒麟は他のモンスターと変わりない。今度こそ行けると僕達は疑わなかった。

だけどある程度、攻撃を続けていると麒麟の白銀の角が光を帯びていく。

「ピキピキ……パキパキ……」

いつもの音が僕の耳には届いていたけどそれを気にするよりもチェーンを繋ぐ事が大事だった。けれど次の瞬間、角から全方位への落雷が炸裂した。

「「「うあああああああ！」」」

全員の悲鳴がフィールドに響いた。それは完全に勢いを止められた事を意味してる。そして無くした勝機を確率させようと麒麟はしていた。

後少し……後少しだったのに……僕達は地面に落ちた体を必死に持ち上げる。だけどその時、シルクちゃんがある事に気付いた。

「あれ？　麒麟のＨＰ……無いよ。無くなってる！」

僕達は一斉に麒麟を見つめた。すると本当に頭上のＨＰバーに残量は無かった。だけど……麒麟はそこに居る。消える気配はない。これはどう言うことだ？

次の瞬間、鍛冶屋が凄まじい勢いで吹き飛ばされた。そして空中で更に弾かれて地面にめり込む。ＨＰがやばい！　僕とセラは同時に駆け出す。だけど麒麟はその場から消えて横に移動、そして目の前に現れる。雷だから直線的にしか動けない様だけど反則だろこれは！

「ぐあああ！」

今度は僕が後方に弾き飛ばされた。目前で爆発的な雷の放出――かわす事も防御も関係なんて無かった。追撃は無い？　セラが直ぐに奴に向かったようだ。

「大丈夫ですか？」

頭上に振り注ぐ声に顔を向けるとそこには泉の精が居た。どうやら達観してるこいつの側まで飛ばされたみたいだ。丁度良い。

「あれはどう言うことだよ！　麒麟のＨＰはどう見ても尽きてるぞ！　なんで消えない、終わらない！」

僕は文句を言った。言わざる得ないよ。ＨＰが尽きてもピンピンしてるモンスターなんてあり得ないんだから。やっぱり麒麟もおか

しくなったって事か？

「ふふふ、おかしくなんてないです。消えないのも、終わらないのも当たり前。だってこれは『ウエポンアライアス』なのですから。貴方達はその意味をよく考えてください。ＨＰなんて飾りなんですよ」

飾り……その言葉に心がおれそうだ。あんなに苦労して一つになって削りきったＨＰはただの飾りだなんて。

『ウエポンアライアス』の意味って何だよ。その時、僕の瞳に入ったのは球体に入ったシルフィング……そう言えば、武器が願ったと言っていた。

何を願ったんだシルフィング？　いや、お前なら何を願う……もしそれが僕と同じなら……『元』なんかじゃない。

「ピキ……パキ……キ」

頭に響くあの音、飾られたＨＰ、シルフィングの願い。ウエポンアライアスと言うのはもしかして……

「何かに気付きました？」

「ああ……それに僕は言ってた」

「？」

彼女の視線を背中に感じたまま、僕は立ち上がる。そう、言ってたんだ……僕はあの時……

「角が折れそうだ」ってさ。

雷の咆哮（後書き）

第四十二話です。
またまたまたおそくなりました。ごめんなさい。最近謝ってばかりですね。でも見捨てないでくださる方々の為に頑張ります。では、また明日です。

昇る落雷、銀の剣と共に（前書き）

私は何をやってるんだろう。どうしても戦うしかなくて、それしかここを出られない。ならやるしかないけど……やっぱり面倒だし、だけど目の前に奴はムカつく。そしてさっき吹っ飛んだ奴もムカつく。

あいつバカなのよ。無茶な事ばかりする……だけど、何だろうこの気持ち。分からない分からない分からない……だからムカつく。

僕達は駆けだした。最後の作戦の開始だ。みんなの力を合わせてウエポンアライアスの完結だ。

昇る落雷、銀の剣と共に

一体何がどうなってるのか分からない……これまで沢山のモンスターを相手にしてきた私だけどＨＰが尽きてまで生きていたモンスターなんて居なかった。

「あ～ホント……ムカつく」

思わずこぼれるいつもの悪態。本当にそう思う。なんで私がこんな必死に戦ってるのよ。まあ、それはさ転移結晶壊されたし……やるしかないんだけど……ブツブツ。

元々私は盾なんて役目は大嫌いなの。ＬＲＯはそれなりに衝撃を再現するし、結構痛いから――だから私は剣や槍をみたいな物を持っての重装備なんて絶対イヤ。

まず可愛くないし。こっちで位、可憐で女の子らしい格好してみた～い。だからメイドって、おかしいのかも知れないけど……今はそんなことといいよね。

私は誰かが前で戦っている間に横や後ろから安全確実に敵を討つのが好きなの。何が起こったか分からず崩れさる敵の姿……そして敵が倒れたらその後ろに現れる私の姿。

きゃーチョ～痺れる！　てなわけで、そう言う戦闘は好き……だけど今はそんな余裕がこれっぽっちも無いから嫌い！

私をこんな疲れさせる、状況に追い込んだ麒麟が憎い。

そしてついさっき吹っ飛ばされた奴も憎い。だって本当に、弱っこいのに無茶なことばかしようとする。

すこしは自重しなさいよね。ううん、もっと自分をあのバカは知るべき。愚かなバカな奴って見てるだけで苛つくんだけど……

「なんで動くかな自分。　やってらんないのに！」

目の前から消えた麒麟。またいつもの雷の速さ。雷速電飛がうざくてこれまたイライラするのよ！　麒麟の姿が左方向から飛んでくる。スキルを帯びた小さな鏃二個で防げる筈もなく私の体は麒麟の一撃に吹き飛ばされる。

「きゃぁぁ――っく！」

私は元々防御なんかする気なかった。元々防御は得意じゃない。この鏃だって抜いたのは攻撃の為。私は二つの鏃を吹き飛ばされながらも麒麟に投げつける。

何の攻撃力も持たせて無い鏃。それを見抜いたのか麒麟は避けようともしない。そもそも麒麟に無くなるＨＰは無いか。でも攻撃力は無くてもスキルはスキルなのよ。鏃の一つが上手く奴に印を付けた。

「オート・フォーミング！」

私は更に暗器を取り出して真上へ投げた。青い光が暗器を包み――次の瞬間、麒麟へ向かって飛来する。だけどそれは意図もたやすくかわされた。だけどこれで終わりじゃない！

青い光を帯びた暗器達は自身の体を地面から抜いて、更に走り出す。逃げられる筈はないわよ。どこまでも追いかけてあげる。

逃げられないと判断した麒麟は私に向かってくる。私は周囲に更に暗器を展開させる。

「蜂の巣にしてあげる」

ＨＰが尽きてる状況で効きはしないんだろうけど、吹き飛ばす位

はしてみせる。私は負けた相手に背は向けない。そもそも負ける前に逃げる女だから。その事実を作らない。
作った相手は後ろから刺す……それが信条。タイマンなんてガラじゃないんだけど、今は逃げ場も無くてやり場もない。
はは……これだけ必死に成るなんていつぶりだろう。ううん、なんで私は必死にやってるんだろう。負けず嫌いはあるんだけど……あのバカが、あのバカが、あのバカが、あのバカが、あのバカが……あれ？
大量の暗器と麒麟の衝突で周囲に衝撃と爆煙が広がった。だけど意にも介さず奴の放電が見て取れた。ダメなんだ……ＨＰが尽きるのっていつ以来かな。そもそもＨＰが尽きたのに消えない奴と真面目に向かうのがバカすぎたのかも。
理不尽な戦いに無理に付き合う事なんかない。でも……なんでだろう。私が諦めようとすると決まって同じ声がする。
麒麟が迫る……私の暗器は出尽くした。これ以上何も出来ない。

「セラァァ！」

叫びと共に麒麟側面から特攻を掛けたのはスオウだった。腕一本になった哀れな成りで何してるのよこのバカは。そんな攻撃効くわけもなくて意味もない。
自分だけでも逃げる算段を立ててればいいのに、意気揚々と出て来ちゃって本物のバカなのあんた？　死んじゃうって事分かってないのかしら。
私もコイツの手の状態や流れる血……そして周りの反応を見なければ信じられなかったけど、今は分かる。アンタの命がそのＨＰ分だって。
なら誰よりも先に逃げ出す権利がある。そうしたって誰も責めたりは絶対にしない。だから逃げなさいよ！　逃げようって……言ったのに。

どうしてここまで出来るのか私には分からない。だって私にとってＬＲＯはあくまでゲームだもん。まだ自分が倒せない敵にあったりしたら諦めなきゃ行けないときもある。
リベンジ誓って次に賭ける選択肢が絶対にある。でも、アンタにはないんだよね。だから必死に成るの？　それは危うい事だよ。ううん、危なすぎる。
震える事は無いの？　足が竦まないの？　片足棺桶に突っ込んでるのよアンタは！

「大丈夫か？」

麒麟に一太刀浴びせたスオウが私の方を向いて焦った顔で言った。そんな顔するな。苛つく顔を見せないで。そんな言葉いらないわよ。
ああ、やっぱりイライラする。こみ上げてくる何かが私の足を支えた。

「何で……」
「うん？」

私は顔を伏せて小さく声を出した。スオウはそんな私を心配してか覗きこもうとする。だけど私は丁度近づいたムカつき癇癪の原因に固く握った拳を突っ込んだ。

「何でこんな事に成ってんのよバカ！」
「ぶがぁぁぁ！」

スオウは情けない声を出して吹っ飛んだ。まあ、パーティーならＨＰ減らないから。てか、ずっとこの理不尽な状況を誰かにぶつけたかった。
なんで私があんな雷の化け物に倒されなくちゃいけないのよ。そ

れもこれも全部、目の前の奴のせいなんだからこの仕打ちは当然でしょう。

「つっぅ〜、何すんだセラ！」

文句言いながら立ち上がるスオウ。私は何も言う気ない。フン！　だよフン！　本当に人の気も知らないで。なんだか私の価値観を妙な方向にズラしてくれて……わかんなく成るじゃない！

その時、再び麒麟が迫る。やっぱりあの程度、足止めにも成らない。というかＨＰが無い時点で奴にダメージという概念は消えたみたいだ。

スオウのＨＰは微々たる物……この攻撃が通れば彼は――死――私はやっぱり動き出す。だってもう、見える所で死んでほしく無いのも確かだもの。あの死は、スオウの意味する死とは違うけど……消えるという事では変わらない。

そしてスオウの方はずっとずっと重い事だ。知ってしまって無視できる程、私はそこまで冷たい人間じゃない！　それに何より――――

「丁度良い……」

――――え？　今度はスオウの口から小さな言葉が漏れた。　それはおかしな言葉。この状況で丁度良いなんて言葉が出てくる訳が無い。

何が丁度いいのよ！　確かめる前に麒麟はスオウにその体をぶつける。

「がぁぁ！　――っく」

だけどスオウはニーベルを盾にして透過されるのを防いで居た。

それでも麒麟は大量の電撃を放っているからスオウにダメージを与え続けている。このままじゃ直ぐにアンタの命は無くなる。
そこまで分からないバカじゃ無いでしょう？　何する気なのよ。
するとスオウはダメージを食らいながら、なんと武器を手放した。

「ばっ！」

――か、だったんだ。そう確信した。どうしようも無いバカ。間違いない。アイツあの状況で少しだけ笑ってた。そして何をするかと思えば、手放した右手を麒麟に伸ばして飛んでいる。
そして掴んだのは麒麟の額に輝く白銀の角。って、え？　掴めるのアレ？　確か今の麒麟は物体を透過出来る筈だけど。あの角だけ対象外って事？　そしてそれをスオウは知っていた？　いや、確かめたのかな？
スオウが奴の角を掴んだ瞬間、麒麟は前足を高く掲げて大きく吠えた。嫌がってるの？　麒麟はスオウをふりほどこうと首を激しく動かす。
だけどスオウも離すまいと必死に食いついている。どういう事？
ちょっと愉快な光景過ぎて思考が上手く働かない。その時、そんなスオウの声が私に届いた。

「セラ！　角を狙え！」

訳が分からないけど……私はその指示従った。残りの暗器は太股に付けた左右の鏃十発だけ。それの二つを、スオウが踏ん張った一瞬に投げつけた。青いエフェクトを纏、鏃は角へ向かう。
だけど鏃は何にもぶつからずその先の木に刺さった。

「え？　外した？」

いや、そんなこと無い。自慢じゃないけど私の命中率は常に九十を越える。勿論、システムの補助があるんだけど……外れるのは当てる気が無いときだけ。それに今はそんなに離れてない。この距離を外す事はあり得ない。じゃあ、あれは……

「なるほど――なっ！」

そう言ってスオウは麒麟の角に蹴りを入れて距離を取った。その時私には聞こえた。

「ピキ……パキ」

と言う音が。それは麒麟の角から出てる音？　でも蹴りなんて殆どＬＲＯじゃ攻撃力なんか無いのに。ううん、蹴られれば普通に痛いけど、モンスターをそれで破壊出来るかと言ったらそんな訳ない。

でも確かにそんな音が聞こえていた。それに麒麟は今までで初めて苦しんでる様に見える。これはもしかして、活路？

「どう言うことか説明！　早く！」

「なんでそんな命令口調？　――まあいいけど」

私は解放されたスオウに駆け寄り、足早に言った。だって、ここを抜ける希望があるとしか考えられない行動だ。じゃなければ本当のバカ確定だけど……そこは信じて良いはず。

これまでの見てきた事を鑑みればスオウはここ一番で頼りに見えるんだ。それを裏付ける事を何度もやってきた。最初なんてこの状態じゃ無いけど麒麟を一人で倒したんだから。

それに聞いてきた今までのアンフィリティクエストの噂。どれもかしこも噂の域を出ないガセだと思ってたけど、自分が置かれたこの状況……真実味が俄然出てきたよ。

それらを考えると、今のスオウはバカじゃない……筈だ。

「そもそもこのバトルはなんだか思い出せ」

そうスオウに言われて頭の中を探って見ると出てくるのは一つの事だ。

「ウエポンアライアスでしょ？」

「だな。でも僕達はそれを考えて無かった様だ」

肯定はされた、だけど謎は残る言い方。それを考えてなかった？　それが麒麟が死なない事と関係あるの？　そして角を掴める事とも。

「どういう事？　ハッキリ言って！」

いちいち注釈つけないでよね。また直ぐに麒麟はくるんだから。私には結論だけで良かった。それだけ分かれば良い。元々ここにこれ以上用なんか無いんだから……それに疲れたし。

これ以上はもういらない。つまりはどうなのよ！

「つまり……ウエポンアライアスの目的と合致して今の僕達に必要な物……武器の願い……全ての鍵は多分、奴の額に輝く白銀の角だ！」

私はスオウの視線を追って麒麟をみた。そこに確かに輝く白銀の角がある。確かにあれだけ異常だとはさっきのスオウの行動で分かった。

だけど今の私達にはそれだけでもきつい事。動きを殆ど捕らえる事も出来ない麒麟の、まして一部分だけに攻撃を当てるなんて不可

能に近い。それに今はみんな満身創痍だ。
今からあの角を折るなんて事が私達に出来るだろうか？

「出来る」

隣のスオウは力強くそう言い切った。私は言い返そうと思った。だけど何故か言葉が出てこない。なんでだろう……いつもはあんなに楽しく罵倒出来るのに。

「出来るよ、僕達なら……」

それは余りにも夢物語な事だと分かってた。なんの根拠も無い綺麗事だ。だけど……彼にはそれを魅せる力が有る様に感じれた。
少しだけ……出会ってまだほんの少しだけだけど……私はその片鱗を見ていると思う。感じてると思う。もしかしたら私が今こうして隣に立ってるのも……そんなスオウの力に感化されたからかも知れない。
年を重ねる毎に人は夢物語を忘れていく。理想は現実という重くて絶対的な物に潰される。でもそんな理想を詰め込んだのがここＬＲＯじゃなかったの？
私達はそれに憧れて……取り戻す為にきっとここに来たのに、現実と言う壁を勝手に持ってきてるのかも知れない。
それじゃあどこに行ったって同じだ。現実が立ちふさがる。これ以上をここまでにしてしまう。それじゃあ絶対に夢に……理想に届く筈ない。

「私にも？」

私は思わず聞き返した口を手で塞いだ。なんて事、スオウに訪ねてるんだろう。普通に何気になったことがなんだか無性に恥ずかし

い。

「当然だろ。入ってるよセラも」

スオウはそう言うとウインドウを開いて何か操作しだした。この状況でよくそんな無駄な事が出来ると思う。そして次の瞬間、麒麟の叫びと同時に落雷が降り注いだ。

私たちは思わず身を屈める。落雷は森の木を引き裂き燃やしている。そして何故か麒麟自身にも落雷は落ちていた。だけど苦しがってる様子は無い。ただじっとしていてまるで充電をしてるみたいだ。

落雷の衝撃は凄まじく奴は動いてないのに攻撃が出来ないという状況。だけどそれも数回の落雷の後に終わりを告げる。

奏でわたった麒麟の叫びはまるで、終局への合図の様に聞こえた。だけど丁度、スオウはウインドウを閉じる。と、同時に私だけに聞こえる音が鳴った。これはメールの受信？

「終わらせようセラ。ウエポンアライアスの終局だ！」

スオウが駆け出す。だから私も駆けだした。そしてずっと誰かが続いてく……きっとそうだと思える……そんな背中を私は見ていた。

「ピク！」

そう叫ぶと桜色の小竜が僕とセラを包んで回ってくれた。これである程度ＨＰを回復出来た僕達は一気に麒麟に迫る。

だけど次の瞬間には凄まじい衝撃波とも呼べる風が僕とセラの間に吹き付けて飛ばされる。気付けば僕達が通っていた道の下には焼け焦げた後があった。

気付かない間に麒麟は僕達を通り過ぎてたんだ。そしてその余波

が僕達を吹き飛ばした。滅茶苦茶だ。回復してなかったら今のでやられてたかも知れない。
余裕なんて無い……全員が疲労してるんだ。一気に決めないと全滅……それが目に見えている。

「シルクちゃん！」
「うん！」

僕の声に呼応して魔法が発動される。それはさっきも使った『フル・キャンバス』だ。それによって麒麟の動きが何とかわかる様になる。だけど今度の麒麟は動き回って一気に色の粒を消していく。
それに負けじとシルクちゃんは出来る限り早く魔法を発動し続ける。おかげで何とか防御出来る。残った体力も気力も残しておきたい、最後の一撃の為に。

「鍛冶屋！」
「良し！」

大ダメージを食らった鍛冶屋だけどシルクちゃんの魔法で何とか回復できた様だ。いや、そもそも回復してくれなきゃ困るから助かった。この作戦の要は鍛冶屋だ。
さっき僕はメールでこの作戦を伝えていた。この戦いを終わらせる……決着を付ける為の作戦だ。そしてそれは勿論セラにも……倒す必要は無いんだ。
ただ奴の角を折ればいいだけ。出来るよ……絶対に出来る。
鍛冶屋はフル・キャンバスが弾ける動きを捕らえて『鉱石操作』であの時の壁を作る。黒い鋼の壁だ。だけど一枚じゃない。弾け飛ぶ色……つまりは麒麟の道筋を読んで通路の様に連続した壁を作ってもらう。
フィールドに黒い壁が立ちふさがり麒麟はそれに沿って

移動する事になる。これが狙いだ。幾ら速く動けても、その決まった道筋にそうだけならやりようはある！
そして遂に僕の立つ所にまで幾重にも曲がりくねって居た道が最後に直線と成って出来上がった。

（ありがとう鍛冶屋。お前が居なければ無理だった）

きっとアイツは倒れてるだろうからね。そして前方からは放電の音が聞こえてくる。狭く細い通路だ。フル・キャンバスも必要ない。辿る道は決まってる。
後は確実に奴の角を狙う為に――――

「セラ！」
「見せてあげる。私の切り札！　スキル『エンサーバー』発動！」

残りの鏃八つが宙に舞う。そしてその形が変わった。只の鏃から顔くらいの機械的なフォルムにだ。最後まであれを取ってたのは切り札だったから。
三角推みたいな形に成った鏃はセラの翳した腕の周りで大きく回り、何かを中心で収束させている。そして前に翳していた手の二本の指を突き出す。それが照射合図。
大気を震わす凄まじい音と、麒麟にも負けない光量を発して放れた光。麒麟に逃げ場は無く、それを突き進むしかない。死なないのなら必ずそうするだろう。そしてそれが出来る。
僕は思わず口元が綻んだ。だってまさかあんな隠し玉を持ってたなんて……セラに届けたメールはこうだ。

【最後に麒麟の動きを少しでも遅くしてほしい】

他二人と違って具体的には言ってない。それはセラなら……と思

ったからだし、自分では思いつかなかったら。でも本当にやってくれた。十分すぎる程にさ。
ほら……奴の蹄の音が聞こえる。雷が剥がれ落ちてるみたいだ。奴はセラを飛び越えてこっちに向かってる。僕もニーベルを抜いて駆けだした。
奴の体は再び雷に成ろうとしてる。そうはさせるか！　だけど向かう僕に奴の雷とも布とも知れぬ攻撃が降り注ぐ。僕はそれを全部かわすしか無い。
なぜなら今のニーベルはスキルを纏ってないんだ。只のニーベル。それじゃあ麒麟の攻撃は弾けないし防げない。だけど勿論それには意味がある。

僕は確かめてたんだ。あの時、角を素手で掴んだあの時にどういう仕様なのか。そして判断した。あの角は身体とは逆だと。要はスキルの類を纏った攻撃は角には当たらない。
だからこそ角は未だ折れてない。僕達の無数のスキル攻撃は全部当たってなんか無かったんだから。勿論その時は身体を攻撃してたから角なんて気にも止めてなかったけど、その角との仕様の差まで罠だったなんて意地汚い。
ＨＰとスキル攻撃しか受け付けない身体によって僕達は本当に大切な物を見落としてた訳だ。
ＨＰは分かりやすくてプレイヤーの戦闘心を上手く煽る。逐一見てしまうのは角なんて一部分よりＨＰという大きな物だ。
狭い通路から麒麟の攻撃が迫る。どう切り抜けよう。よく考え得たら避けるスペースもあんまり無いぞ。自身でも付加スキルを使えたら良かったんだけど……生憎そんな便利な物は持ち合わせてない。
なんて自分は爪が甘いんだ――と、思ったとき赤い炎がその攻撃を叩いてくれた。またまたナイスタイミングだピク！　勝利を呼び込む天使に見える。

「うおおおおおお！」

僕達を阻む物は無くなった。後はただ自身の武器を信じて振るうだけだ！　だけどそこで更に麒麟は加速した。蹄の音は消え去る。変わりに聞こえるのは不気味な放電音。でもそれも数瞬遅くて……っ！！

僕は足を止めてニーベルを振るった。すると何かが砕ける音と衝撃――続いて腕から全身に伝わる重み……浮かび上がるは麒麟の姿。

ニーベルは届いていた。確かにその白銀の角へと。けれど角は折れてない！　じゃあ今――何が砕けた？　あの音は……届いていたニーベルの物だったんだ！

本当に一瞬の衝撃――だけどそれで麒麟は止まった。これもまた武器の意志の形だと思った。勝利に繋がる意志の形。それにまだ、ニーベルは死んでない！　元々双剣であるニーベルには共有する意志がもう一つあるんだ！

「バキッ」

そんな音が耳に届いた。麒麟の角ももう限界――奴もそれを悟って口を開く。そこには青白い雷が集束していた。右手が動くのとそれの放出は殆ど同時。

溢れだした光が森から空へと消えて行く。その光の中に白銀に輝く角が舞っている。

昇る落雷、銀の剣と共に（後書き）

第四十三話です。
今日はなんとか早く出来ました。最近よりは……だけど。明日はなんだか遅くなりそうです。これも多分。だけど上げます。必ずです！
なのでまた明日です！

正しい選択（前書き）

私のやった事は本当に正しかったのだろうか。目の前で倒れていく軍の人達を見てるとそう思わずにはいられない。ガイエンの権限を分け与えられた親衛隊に彼らが勝てる道理はなかったんだ。

だけど私のそんな不安を吹き飛ばす事を隊長さんは言ってくれる。そしてもう一人の軍の人も私を助けてくれる。これはきっと正しい選択だと。

正しい選択

黒と白が絡み合う。辺りに響く複数の金属音が甲高い音を立てては交錯していた。周りには物珍しげに集まったプレイヤーの群。

息を呑む人々の空気の中で最初の断末魔が私の耳に届いたのは両者が衝突しあってまだそんなに経ってない時だった。

「うあああ！」

親衛隊の膝元に崩れ落ちる黒い鎧が私には見えた。そしてそれがキッカケだったのか続けざまに二つの悲鳴がその場に響いた。それは勿論どちらも軍の方からだ。

「――――くっ！」

隊長さんがそんな風に歯噛みするのが聞こえた。無理もない、ここまでとは誰も思わなかった。軍と親衛隊。何が違うでも無いはずなのに……それはただ単に国の中の更に軍での役割の違いだけの筈……だった。

国の有事の際に外に向いて国と国民を守るのが軍っていう組織で、親衛隊はその時に中を向いて国の最も偉い人を守る役目って言う単純な、それだけの違い。

だけど親衛隊は軍の中でのエリート集団なのかも知れないと私は思った。私が良く読んでいたマンガや小説にはそんな一文が多々あった。

【若くして王族付きの親衛隊に上り詰めた彼には人々からの羨望の眼差しが見て取れる】

みたいな。それを考えるとただの軍より一歩二歩飛び抜けてるのかも知れない。だけど残った二人の内、一人が逃げ（？）ながらそんな私の考えを否定する。

「そんな大層なものじゃないんすよ～。この国での親衛隊はただ単にガイエン様に選ばれた奴らっす」

ガシャガシャ音を立ててそう言った彼は最初に情けない声をだしたあの人だと分かった。重そうな鎧を着てる割にはとっても軽快な動き……彼は親衛隊の怒濤の攻めを全てかわしていた。

その代わり、一回も反撃してないけど……だけどそれは賢明な判断なのかも知れない。

「このうちょこまかと！　貴様それでも騎士か！」

「いやいや、あの話が本当なら、あんたらに言われたくは無いすけどね～それ」

「「「殺す！！」」」

彼は相手をさかなでる事が得意な様だ。自らで窮地を呼び込んでいる。だけど彼に届いたのは親衛隊の刃では無かった。

「ぬおおおぅぅぅ！」

「――――むがぁぁ！」

轟いた二つの声。逃げ足一品の彼に最初に届いたのは親衛隊に吹き飛ばされた隊長さんだ。二人はぶつかってこちら側に転がってきた。

「大丈夫ですか？」

足下に転がった二人に心配気に声を掛ける。逃げ足一品の彼はＨＰをほぼ減らしてないのに対して隊長さんは既に黄色から赤になる寸前と言ったところ。
そう、親衛隊にも町中でＨＰを削れる権限があるみたいなんだ。これじゃあ、幾ら何でも勝てるわけない。こちらの攻撃は効かず、向こうの攻撃は通常状態で通るんだから反則だよ。

「ああ、問題ない」
「ありまくりっすよ。なんですかあいつ等のあの力？　勝てるわけ無いっすよ」

私の言葉に隊長さんは心配掛けまいと振る舞ってくれた様だけど、彼は全然違った。だけど大問題なのは既に私にだって分かってた事だから、それは私も知りたい事だよ。
なんで親衛隊までガイエンと同じ権限を持って行使出来るの？
私が巻き込んだ事で……彼らは一方的なリスクを背負ったんだ。

「お前も言ってただろう。奴ら親衛隊はガイエン様……いいや、ガイエンが自ら選んだんだ。奴はきっとこれをずっと計画してた。
そしてそんな自分の計画の賛同者を集めたんじゃないのか？　それが親衛隊。元がアイリ様直属ではなく奴直属の飼い犬だ。だから――――」
「――――だから、今のガイエンの権限を親衛隊は分け与えられてるって事ですか？　そんな……」

それじゃあ、このアルテミナスで親衛隊に勝てる訳がない。それにガイエンが軍にまでその力を分けなかったのはもしかしたらこういう状況を加味してたのかも知れない。
ガイエンなんかよりアイリの方がよっぽど人徳有りそうだもん。

もしもどこかから奴らの企みが軍にバレて、今こうやって私についてくれてる隊長さん達みたいなアイリ派が反旗を翻した時の保険。
親衛隊と軍では圧倒的に数が違うだろうけど、今の状況下ならガイエンが信頼する親衛隊が万に一つも負ける事はあり得ない。
それが数十と万の戦であってもだ。だって奴らには攻撃が意味を成さないんだから。

「分かったか？　なら降伏する事だ。まぁ、降伏したところでなぶり殺しにする事にかわらんがな」

そう言って周りを取り囲む親衛隊五人が武器を私たちに向ける。
よくよく考えたら周りに人、プレイヤーだって居るのにこいつらは堂々としてる。
もしかしたら既にバレる事を恐れて無いのかもしれない。なら益々やっかいだけど……どのみち、私たちが大ピンチなのは変わらない事実としてここにある。
私達を取り囲む親衛隊の顔には爛々とした色が見えた。そんなに見下すのが楽しいの……それとも手にした力にでも酔ってるのか……どちらにしても言葉が通じる様には見えない。
でも……それでも私にはそれしかない。私にとって戦う事とは剣を振ることでも魔法を願うのでもない。私に出来る戦いは言葉を紡ぐ事だけだ。
だから私は二人の前に進み出る。

「貴方達はなんでガイエンに協力するんですか？　この人達だって元は仲間じゃないですか！　なんでこんな事平気でやれるの……おかしいよ！」
「おかしい？　何が？　どこが？　一体全体、何を言ってるんだこの女は。ＬＲＯは普通にＰＫ（プレイヤーキラー）だって出来るだろ。
それが同じ種族なら我らが断罪するのは当然の役目。誇りと名誉

の為の行為だ。そうしてどこにも負けない強固な国が出来る……あの方の理想とする国が。なのに……」

私の言葉に応じた親衛隊の言葉はどこかチグハグな感じがした。それに最後……何、この間？　もの凄く睨まれて、その瞳には凄まじい怒りが見て取れる。そして続きが紡がれる。怒声という音と共に。

「なのに貴様はそんな崇高な我らが主を侮辱するか！　貴様などがあの方を呼び捨てるか！　許せん、許せん、許せんぞ！」

「――――ひっ！？」

本気の殺意と言うものをぶつけられて私の喉が微かな悲鳴を上げた。抜かれた剣が一直線に私の喉元を目指して飛んで来る。

恐怖が体を縛り付けた。口が震えて動かない。抜かれた刃に私の言葉は余りにも無力だ。

「うおおおおお！」

雄叫びと共に隊長さんが傷を受けた体に鞭を打って私の前に躍り出た。そして乾いた音を鳴らして剣をはじき返す。私はその瞬間、その場にへたり込んでしまう。

私は言葉の危なさも知ったんだ。同時にその無力さも感じた。届かない事もある。ううん、その方がきっと多い。隊長さんに伝わったのはこの人がきっとスゴく良い人だからだ。

そしてそんな隊長さんだから小隊の人達は私の言葉に疑いを持ちながらも戦ってくれたんだ。それは私の力なの？言葉の力だったのかな？

「また貴様か！　エルフの恥晒し共が！　そんな女に踊らされたク

ズが！　我らの邪魔をするな！」
「うるせぇよ……それに俺達は踊らされてなんかない！　墓穴を掘ったな。今の発言で疑惑は確証に変わったぞ。お前達はまんまとやられたんだ。彼女の言葉に！」
「何？」

隊長さんのそんな言葉は私にも疑問だった。私の無力過ぎる言葉が何かした？　そんな実感ないよ。結局、暴力と言う牙に押し込まれてしまったんだもん。
落ち込む私の肩にその時、優しく黒甲冑に覆われた手が乗せられた。それは逃げ足だけの彼。彼は自分の顔を覆う兜に手を掛ける。
「お前は今、言ったんだ。あの方の理想とする国ってな。それは紛れもない彼女の言ったことを真実だと示してる！　そうだろ？　これで満足したか、ノウイ！」

黒い兜が宙に舞う。そして現れたのは鮮やかな新緑の緑を塗った様な髪の毛。長い耳には左右対称の星形のピアスが揺れている。
エルフの美成年然とした作りの顔……だけど目は一般的なエルフの切れ長じゃない。それのせいでだねきっと。『ノウイ』と呼ばれた彼は残念な顔に成ってるもの。目が点という残念な顔に。だけどそんなの彼は気にしてない。隊長さんの声に初めて意欲的に応える声が私にはが届いた。
「了解っすよ隊長！　アンタの目は正しかった！」

ビッと親指を突き立てるノウイ。格好良い姿、光景の筈、だけどなんだか締まらない。それはノウイのあの目のせいかな？
でも……今の言葉は……そうなの？　私は何かが出来たのかな？
小さな真実を晒しただけ……しかもそれはただの偶然。

「俺がその女の言葉に俺が誘われたとでも……誘われた……誘われたと言いたいのか貴様！」

プライドでも傷ついたのか異様に叫ぶ親衛隊の一人。そしてその刀身にはエフェクトが帯び始めた。周りの奴らも同じように止めと言わんばかりに刀身を輝かせる。

「隊長さん……私……」

弱々しく口を開くしか出来ない。巻き込んでしまった。傷つけてしまった。本当ならこの人達はここでやられる事なんかなかったのに……私の言葉はきっと悪い方へこの人達を動かしたんだ。そんな考えが巡って……ごめんなさいが口から出ようとした。

でも返って来た言葉は私の考えとは全然違ってた。それはもっと優しくて、強い言葉だった。

「ありがとう。君のおかげで俺達は本来の側に立てたんだ。君の言葉のおかげで、奴らの嘘は知れ渡ったんだ。君はもっと自信を持っていいんだよ。

君の言葉はちゃんと届く。それを俺達が証明する！　最大限の感謝の代わりだ！　ノウイ、頼むぞ！」

その言葉と同時にノウイは私を抱き抱える。私はお姫様抱っこの状態だ。隊長さんの言葉に浸る間もなく、私はパニックだ。でも、確かに心は軽く成ってたかも知れない。

「隊長……相変わらず一人だけかっこいいっすね」

私を抱えたノウイがそちら側に背を向けて言い放つ。その動作で

私は二人が何を示し合わせてるのか理解した。

「待って！　ダメだよ！　隊長さん……そんな！　私のせいで……」

「君の……せいじゃない！」

隊長さんは親衛隊の剣をはじき返してそう言った。すると親衛隊側も何をやろうと理解したのか全員で私達に向かってくる。真っ先にやられるのは私達と親衛隊を隔てる隊長さんだ！

だけど隊長さんは臆す事なく言葉を紡いだ。それは私が見習わなくちゃいけない勇気の言葉。

「君のせいなんかじゃ絶対にないんだ！　お願いだ。君の言葉で真実を俺達に見せたようにあの人にも……アギト様にもその言葉を掛けてやってくれ。

アイリ様を助けるには俺達脇役じゃ役不足だからな。でも、託したいんだ。君のその言葉に。俺達の思いも一緒に。だから、行ってくれ……俺達の思いを届ける為に！」

「……はいっ！」

私はいっぱいこみ上げてくる感情を、だけど言葉に出来なかった。たったそれだけを言うので精一杯。これれじゃあダメだよね。

だけど今は……許してください。まだまだ私は未熟で、分からないことの方が多くて、きっと沢山の事を見落としてるバカな女です。だから間違った事を今までやり続けてきた。それは本当に沢山の人達に迷惑を今でも掛けてる。でも……みんな、そんな私をなぜだか見放さないんだ。

なら、私が自分を見放すのは早いのかも知れないと思える。みんなが許しくれるこの存在……私はそれを誰よりも信じなくちゃいけない。

思いを受け取ったなら……後は全力でやり遂げるしかない。泣く

か笑うかなんて分からないんだよね。でもやらずにしとくのはきっと一番ダメな事。
立ち止まらなければ、未熟は玄人にきっとなれる。分からない事はきっと減らせる。いろんな見落としてた物を拾える様になって、バカじゃない自分に成れる。
待てとは言いません。走り続ける事を許してください。貴方達の思いを届ける為に……私は今もう一度自分を信じて走ります。
気付けば涙が頬を滴り落ちていた。私はひんやりとするノウイの甲冑に顔を押しつけてそれを誤魔化す。だってまだ早いもん。まだ何も……終わってなんか無いから。

「逃げれるとでも思ってるのか？　貴様等はここで全員ジ・エンドなんだよ！」

濁った台詞が振りかざされる剣と共に振ってくる。だけど隊長さんは気合いでそれら全てを受け止める。武器で足りない分は甘んじてその大きな肉体を盾にした。
一気にＨＰが大幅に減っていく。その減りようは凄まじく止まる気配が無い。だけど隊長さんは小さく笑った。こんな絶望的な状況で……自分の命が削られながら……それでもいつもと変わらずにそうした。

「本当に……そうかな？　お前達は軍の末端なんて知らないだろう。だから教えてやるよ。そこに居るノウイって奴は実は――――」

隊長さんはこのノウイって人をかなり……ううん、絶対に信頼してるんだ。それが伝わってくる。でなきゃ、死に際にあんな風に笑えない。
それは信頼できる部下に後を任せられるから出来る事なんだ。この妙に勿体ぶった間の取りようもその証。そして何より。私を抱え

るノウイにもその笑みが見て取れた。そして情けない声ばかり上げていた彼とは思えない程、背筋は持ち上がり、胸を張っている。
これはもう、続く言葉に期待せざる得ない。そしてそんな二人の態度は親衛隊にも伝わったようだ。

〔一体あの目が点野郎は何なんだ？〕

そういう疑問と畏怖を感じた囁きが聞こえるみたい。だけど彼らにもプライドがある。この絶対に有利な状況下で逃亡を許すなんてヘマはあり得ないと確信出来てる。
それにそんな事が起こってはいけないんだ。……だけど、一抹の不安がよぎったのも確かだろう。二人はそれだけ淀みも迷いもないんだから。
そして遂に、隊長さんの口から続きの言葉が紡がれた。

「――軍の中で一番『逃げ足』が速いんだ！！」
「うおおっすううう！」

轟く叫びは一つだけ……それ以外は閑古鳥が鳴くような静けさに満ちていた。周りでざわめいていたプレイヤー達でさえ静まり返っている。
だってそれは余りにも、なんというかね……って感じの物だったからだ。良くここで吠えれたねノウイ。私は丸く成るしか出来ないよ。
そして次第に沸き上がる笑い声。そして大爆笑へと繋がった。もちろん一番笑ってるのは親衛隊の連中だ。気品も誇りもなく、下品にゲラゲラと笑っている。
だけど二人は気にする事はないようだ。最後に二人で短いやり取りを交わしてる。

「頼むぞノウイ。こいつらに見せつけてやれ、お前の武器を！」
「当然っすよ隊長。あい了解！　俺こそは海を駆けた男っす！」
「よし、行ってこい！　お前なら奴らなどに捕まりはしない！」

その瞬間、隊長のＨＰが無惨に無くなった。暗く色落ちしてその場に倒れ込む。だけど私達に感傷に浸る暇はなかった。
何故なら親衛隊は直ぐに向かってきたからだ。笑いながらもやるべき事はキチンとこなすらしい。全員が武器を構えて容赦なく振るう。
火が出たり、水が出たり、氷が出たり、風が起こったりする。それら全てが私達に向かっている。だけど何故かノウイは動かない。このままじゃ当たっちゃうよ！
だけど攻撃が到達する寸前、彼は私に点の目を線にして穏やかに笑ってくれた。

「ＯＫす。大丈夫、隊長達の思い……奴らに渡しはしないっす！」

次の瞬間、私には何が起こったのか分からなかった。気付くと私達は、親衛隊の背後に居たんだ。そして轟く複数の攻撃の衝突音。
ものスゴく速く移動したって事なのかな？　だけどそれでも異常だった。速い動きは何度か見てる。スオウの乱舞もそうだしクーちゃんもとっても速い。
だけどこんな気付くまで移動したのが分からないなんてレベルじゃない。だから異常……これもスキルなのかな？異常を裏付ける様に親衛隊は驚愕してる……てか、直ぐには私達が通り抜けた事にも気付いてなかったみたいだ。

「何をした貴様！」

そう叫んだ親衛隊の一人には得体知れない技への恐怖が混じって

た。でも確かにそうだ。それを抱くのも無理はない事だよ。だって私も鳥肌が立つ感覚があった。
だけどそんな周りの空気を余所に、ノウイはいつもの調子で喋った。

「ご安心を、皆さんを傷つける事は出来ないっすから」

けれどここで声のトーンが一段落ちて今まで覆われていた凄みが放たれる。

「隊長が言ったっすよね？　俺の逃げ足は軍一だって……それをひけらかす気もないっすけど、隊長と仲間達の思いのために……全力で！　逃げさせて貰うっす！」

ノウイの豆サイズの瞳に宿る炎。今のノウイは最高に輝いてるよ。
急ごう、さっきから大きな音が聞こえてる。何か嫌な予感がしてならない。ドロドロとした国内情勢に一際強い波をあそこから感じる。

凄まじい崩落音と周囲の地面までが亀裂を作って陥没していく。そんな状況の中心に俺とローブを纏った奴は互いの武器を合わせてにらみ合っていた。
俺の武器は槍『カシミナク』――赤い柄に黒い刃が特徴的な力強い槍で別名『神射し』と称される程の一品だ。
対するは三十センチあるかないかのオモチャの様な剣『王剣カーテナ』――だけどその実、この国の支配者にだけその力を与えると言われる国宝級の武器。その力は超越絶大。
そんな二つの武器が宿すスキルと力を込めて振るわれた事でのシステム異常。でなければこんな事は考えられない。

俺達には届いていたんだ。崩落音や地割れよりも大きくそして恐ろしい音が。それは地面が陥没したから当然だといえる事。その上に建ってる物が影響されない訳がない。
この国の象徴とも言える光明の塔がその姿を傾けていた。それは衝撃だった。この国に初めて降りたって見つめたあの力強い塔が……クリスタルが傾いている。こんな事、この国で育った誰もが目を背けてしまう。
それだけ、あの塔は象徴で、誇りで、自慢だった。

「案外柔い塔ね。君のその武器より頼りないんじゃない？　ふふ、そんなに怖い顔しないで、君は合格。カーテナを受け止めるんだからね。楽し☆」
「貴様！」

奴の言葉に怒りを沸き立たせてもこれ以上の力は出ない。カーテナと対峙して折れてないだけカシミナクは立派だ。神射しと言ってもバランスに沿ったカシミナクと『バランス崩し』とまで称されるカーテナ……二つの武器には絶対的なポテンシャルの差があった。
だけど活路も少しだけ考えてた。奴はどうやってかアイリの腕を振るってカーテナを使う。その時、アイリは気絶してるんだ。そしてさっき目覚めた時にはカーテナは発動しなかった。

（アイリの意識を戻せば奴は丸腰だ）

それが結論だ。そしてそれは俺なら出来る……と思う。俺は目の前でカーテナの黒い影に包まれて行っているアイリに声を掛けようと口を開いた――――その時だ。

「ずあああぁぁぁぁ！」
「ダメだよ君。女の子と対面してるのに別の子に声を掛けようとす

るなんてさ。マナー違反。そんな事で私の気分を盛り下げないで」

押し込まれたカーテナからの衝撃波で俺の体は地面を転がる。そして奴の芝居掛かった言葉と共に連続して振るわれるカーテナ。爆弾が体内で弾ける様な衝撃が何度も襲い、幾らＨＰが減らなくても別の意味で死ぬと思った。

こぼれ落ちるカシミナク。それはとてもあっけない敗北だった。これが軍の連中が起きあがれない理由。圧倒的な恐怖をカーテナは植え付けたんだ。それは絶望。体と心が切り離された。

翳される腕と紡がれる言葉。

「愛した女にやられる気分はどう？　いや、君は捨てられたんだっけ？」

霞む目に映るのは憎き相手。だけどここに力は無い。

正しい選択（後書き）

第四十四話です。

本当に遅くなりました。ごめんなさい。四十五話は今日中に上げます！　絶対！　なので今はこの辺でさようなら。

強さの形（前書き）

私はノウイさんと一緒に光明の塔を目指す。親衛隊も上手く振り切り順調だ。だけどその時、光明の塔の方から巨大な衝撃波が周りに轟いた。吹き飛ぶ木々や建物に私たちも巻き込まれる。

そして吹き飛ばされて来たのは瓦礫だけじゃなかった。暗闇の中で僅かに光るのは黒い鎧？　それが辺りに無数に転がっていたんだ。そしてそれの正体に気付いた時、私たちは向かうべき場所に居る者の巨大さを知った。

そして更に気付くんだ。光明の塔が傾いてる事に。

強さの形

「俺の夢は今、叶ってるっす～～！」

月光の下、夜を貫く様な叫びがアルテミナスの地に轟いた。流れる景色はいささか高く、私たちは建物の屋根を駆けている。

私たちと言っても駆けてるいるのは一人。黒甲冑に緑を写した様な髪を揺らし、両の耳には今の夜にピッタリはまった星形のピアスが流れ星の如く瞬く軍の人。

私はそんな人にお姫様抱っこをされて夜の風を優雅に切っていた。これだけ聞くと、純粋無垢な乙女はナイトに守られたお姫様を想像してしまいそうだね。

だけど残念な事にそんな気分と雰囲気では全然ないの。そんな素敵シュチュエースションで何故？　って声が聞こえてくるから応えてあげよう。

それは彼……『ノウイ』のあの目が原因だろうと思う。あれだけの素敵パーツを揃えてるのに、たった一つでそれらを打ち消す最強のあの目が原因です！

何故ならノウイの目は……黒ゴマサイズのつぶらすぎる瞳だから！　それでも少しは赤くなれるよ。だって格好良かったもん。

親衛隊相手に啖呵を切ったあの瞬間はドキってしちゃったよ。その後のノウイの手際は本当に見事で天晴れだった。流石は軍一の逃げ足。隊長さんが言ったことは本当だったよ。

だけどね、引き戻されるんだ。あの目を見るために、夢見心地な気分は晴らされる。まあ、でもそんな事はどうでも良いことだね。

親衛隊は上手く捲けたし、本当に感謝してるよノウイ。だけど今の叫びは何？

「夢ってどう言うこと？」
「いや～それはほら……こうやって可愛い子を颯爽と助け出しす事っすよ。いつかこんな日が来ること
を俺はずっと願い続けてきたっす。
現実じゃおきえないけど、ここＬＲＯじゃそんな場面に俺も出会えるかも知れない。そのためだけに鍛え続けて来た逃げ足っすよ！」

自信満々でノウイはそう言い切った。これだけの為に彼はここでの時間を費やしてきたのだろうか。まあ、生き方なんて人それぞれだし、他人がとやかく言うこともないと解ってる。だけどノウイは何故に逃げ足を選択したのだろうか？
私は良く知らないけど、ここＬＲＯというゲームではほぼ出来ない事は無いらしいし、逃げ足より格好良いやり方は幾らでもあるだろう。
実際、彼だって剣をその腰に挿してるし……ノウイの選択はある意味的外れな感じだよ。女の子は一緒に逃げてくれる人には感謝するけど、やっぱりポイントとしては守ってくれる背中に憧れるよ。
勿論、全員がそうじゃないだろうけど。だから私は尋ねる。至極当然に。

「なんで逃げ足なんですか？」
「そんなの簡単すよ。俺って強くないっすから。強くなろうとはしましたけどね～。だけど無理っぽかったす。ここの戦闘って本当に恐いじゃないすか～。向き不向きがありますよ」

軽快に、本当に軽い調子でノウイはそう言った。でも、それしか選べなかったなんて悔しかったんだじゃ無いのかな？　だってここＬＲＯは何にでも成れるのに……よりによって、逃げ足しか自分にはないだなんて。
それに強くなろうとしたって事はきっと憧れてた物があったんじ

ゃないのかな？　それを向き不向きで本当に諦めきれるの？
「優しいっすね。そんな顔しないでくださいっす。俺は確かに憧れてた物あります。それは本当に格好良い人なんすよ。お姫様を守る王子様でした。
だけど俺はその人の様には成れないって直ぐに気づきました。でも……今の自分を情けないとか格好悪いとかは思ってないっす。
寧ろこの逃げ足極めたらその人とも対等っすよ！　そう、思える様になったんすよ。そう思わせてくれる人が居たんすよ」
月明かりに照らされて恥ずかしげにノウイはそう言った。最後の部分はなんだかハニカミながら……嬉しそうだった。

「そっか……それってとっても格好良いですね」

そんな笑顔を見たら自然とそう口から言葉がコボレた。私は失礼な事を思ったのかも知れないな。彼は自分に誇りを持ってる。それも一本筋が通った真っ直ぐな物だ。
さっきの親衛隊やガイエンなんかとは違う。少しの中傷や、周りの勘違いなんか意にも介さないで笑える……そんな真っ直ぐな誇りだ。
だからこの言葉が出たのは当然だね。うん、格好良い。格好良いよノウイは。目が点なんて打ち消せるねこれで。
「はは、本当っすか？　そう言って貰えると嬉しいっす。力がみなぎってくるっすよ！　急ぎましょう……もう直ぐそこっす！」
ノウイは光明の塔を見据えて力強くそう言った。そして屋根を蹴る足に力を込める――その時だ。

「うあああああ！」
「きゃあああああ！」

私達の悲鳴はこだました。それは迫った光明の塔から伝わってきた衝撃波だ。木々や建物を吹き飛ばし、大きな音を伝えてきたそれに私達はぶつかった。
足場も崩れさり、私達はその場に落ちる。そこには瓦礫に混じって沢山の黒い物が見えた。

「え？　……何？」

街灯や明かりを称えるクリスタルも無くなった空間には暗闇が満ちて良く見えない。
だけどおかしくなっていた耳が元に戻りだすと、そこに蠢く声が聞こえだした。沢山の……痛みや恐怖を乗せた、言葉にもならない声。背筋から何かが這い上がってくる。それはきっと畏れだ。私は目の前の物を見たくない。
そう思いながらも、何故か目が離せないでいた。

（いや……いや……いや）

畏れは全身を痺れさせている。それにタイミングが良いのか悪いのか……雲が掛かっていた月がその姿を晒しだした。
月光がゆっくりと闇に落ち線を面にしていく。そして私の目に映し出されたのは戦争の様な爪痕……沢山の軍の人達の死に際の様な光景。

「――っひ！？　……きゃあああああ！」

思わず出た叫び。それに反応してか、一斉にこちらに向く目が見える。それがまた恐くて……まるで私もそちら側に引きずり込もうとしてるみたい。

這いつくばるように、何人かが不気味に甲冑の音を擦り合わせて迫る音も聞こえる。

「あ……ああ……あああ」

ろれつが回らない口から漏れるのは人とは思えない程のぞんざいな音。肺が苦しい……なんなのこれ？　どうして……こんな事に成ってるの？

死者の群が私に迫って来るような錯覚に囚われる。本当はほんの二・三人しか動けて無いのに、その音は十や二十では足らない。空気が肺から出ていくだけで、入ってこなくて……上手く働かない脳は、ますます混乱していくんだ。

私は震える足を必死に動かして地面を蹴る。下がらなきゃ……追いつかれちゃ行けない。そんな事を考えて……でも出来るのは数センチ程お尻を擦る事だけだった。

何故なら私の後ろにも黒甲冑を着た人物が居たからだ。ヒンヤリとした鉄の感触が、触れたお尻や背中から伝わってくる。そしてそれは脳で恐怖に変換されるんだ。

「いやぁあぁぁぁ！」

私は大声と共に、体に命令を送って立ち上がろうとした。だけど体は全然言うこと聞いてくれなくて……向こうの私みたいに心を縛り付けるだけの入れ物に成ったようだった。

それでも私は必死に動こうとした。足を叩きつけて感覚を取り戻そうとする。だけどその時……後ろの甲冑から腕が伸びてきてそんな私を抱きしめた。

私は捕まったと思った。死者の国に送られるんだ。そう思うと叫ばずにはいられない。

（イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ！）

心でそれを連呼しながら空気の足りない肺から絞りだした声で抵抗し続ける。けれど腕が離れる気配は無くて、直ぐに空気を失い、せき込んでしまう。

するとそこを見計らった様に声が聞こえた。死者の呻きのような声じゃなく、ちゃんとした人の声。それも知ってる声だ。

「落ち着くっす！　大丈夫！　何も恐い物なんてないっすから！」

「ケホッ……ゴホッ……はぁはぁ……ノウイさん？」

そうそれはノウイの声だ。じゃあこの腕も背中やお尻に伝わる冷たい感触もノウイの物？　頭がなんだか一気に冷めていく。だけど混乱が収まった訳じゃない。

ただ単に安心感が訪れただけだ。彼は必死に暴れる私を押さえつけてくれてたんだろう……かなりの力で腕が私の体に食い込んでる。

そしてそれに気がついたノウイは顔を赤らめて腕を外してくれた。

「ごごごめんっす！　その……痛くないっすか？」

「ううん……大丈夫。ありがとうノウイさん」

大きく息を吸って吐く。肺一杯に空気を満たせば頭もようやく冷静さを取り戻して来た。良かった……ちゃんと今度はお礼を言えたよ。

照れくさそうに笑うノウイには迷惑を掛けっぱなしだ。乱れた髪を整えながら私は改めて周りを見る。月明かりに照らされたそこにはやっぱり沢山の軍の人達が倒れている。

だけど今度は、ちゃんと見据えれる。恐怖に取り付かれたりしない。今、私は一人じゃない事を知ってるもの。こんな時、初めてノウイの目が点で良かったと思った。

なんだか小動物を見てるようで落ち着く。これも貴重な心の支え。私を今まで守ってくれてたスオウやサクヤから離れて初めての安らぎかも知れない。
結局一人では何にも出来ないんだけどね。それがイヤなんだけど……今は受け入れて、寄りかかろう。認める事も必要だよね。
そしたらまた、いつか同じような事があったときには逆の立場に成ってみせる。
その為にも今をしっかり見据えるんだ。

「みんな……大丈夫っすか？　一体に何があったんすか？」

そう言ってノウイは私を放して動けてた人に近寄った。だけどここで私は異常に気付いた。まあ、元々この光景事態が異常何だけど・・・そこに加えての異常だ。

「ノウイさん……この人達、ＨＰが減ってないですよ」
「え？」

それはオカシいような、オカシくないような事。私には戦闘不能なんて許されてないらしいから解らないけど、彼らは明らかに戦闘不能状態に見えてた。
だけど実際にはＨＰがちゃんと存在してる。ううん、それどころか減ってなんかないんだ。

「どういう事っすかこれ？　なんでみんなＨＰがあるのにこんな状態なんすか！？」

ノウイの乱れただした声が辺りに響いた。当然だよね。この人達はみんなノウイの同僚で仲間も同然だ。私だってスオウ達の誰かがこんな状態なら、どこからともなく訳の分からない感情がこみ上げ

てくる筈だよ。
ＨＰが存在してる以上、この人達が動けるのは当然……だけど、誰もが立ち上がれないほどの傷を負っている。それは私達にはどうする事も出来ない事を意味してる。
いや、そうじゃないかも知れない。ここＬＲＯのどんな魔法でも決してこの人達を回復する事は出来ないんだ。だってＨＰは減ってないんだから。
その時、ノウイが駆け寄った軍の人が途切れ途切れの声を発した。それは必死に仲間に現状を報告しようとする軍人の意地だったのかも知れない。

「カーテナ……あの方が……けれど……あの方じゃない。カーテナ……これが……王の剣」

本当に断片的な事だ。キーワードは『カーテナ』ということしか解らない。そしてそれを聞いたノウイは私なんかよりもよっぽど何かを理解してる様子だった。

「カーテナ……ってアイリ様がこんな？　いや待てっす自分……アイリ様じゃ無いとも言ったっす。でも……こんな事が出来るのはやっぱり……」

ブツブツと聞こえる言葉に私は耳を傾ける。私だって状況を理解したい。だけどなんだか、ノウイはもの凄い勢いで考えにフケったから声を掛けづらいんだよ。
だけどその時、その軍の人が最期の力を振り絞る様な動作である方向を指さした。考えるより行け、という感じだ。百聞は一見にしかずなのかも知れない。
私とノウイはその指の先を同時に追った。そして更に信じられない光景を目撃する。

「――なっ……なんっすかアレはぁぁぁぁぁ！？」

ノウイの大絶叫が瓦礫と化した建物に響く。思わず立ち上がった彼の行動はエルフなら仕方無いのかも知れない。だってアレは……この国の象徴みたいな物だったはずだ。

それが……その塔が……光を発する超巨大なクリスタルが……

「光明の塔が傾いてるっすぅぅぅぅぅ！！！」

まさにノウイの二回目の大絶叫の通りに傾いていた。あんな超巨大な物がだ。日本人にとっては東京タワーが崩れさる瞬間を見てしまう様な感じだよきっと。

それだけの衝撃がノウイの声を通して伝わってきたんだ。一体あそこでは何が起こってるんだろう……アギトは無事なんだろうか？

不安が募るのは私も一緒だ。確かめなくちゃ行けない。何が起こってるのか。

あそこに行けば解るんだ。そう軍の人が教えてくれた。

「行こう、ノウイさん！　確かめるんです！　その目で！」

私はノウイの前に回ってそう言った。ここでこれ以上私達には何も出来ない。それよりも、この事態を解決する事がきっとこの人達を助ける事に繋がる筈だ。

「行く……のはいいすけど・・何か出来る気は……しないっす。俺……弱いんすよ。ヒーローには成れなかった男っすから」

弱々しい、ノウイの声。それでもいつもの調子を必死に保とうとしてるのが分かった。それが彼なりの心の保ち方なのかも知れない。

もしかしたらこの周りに倒れ伏してうめき声を上げる所に加わりに行くような事かも知れないから……幾ら逃げ足に自信があるノウイでも逃れられない物はあるのかも知れない。
それでも私はノウイの手を引く。そうしなきゃ行けない気がした。示したのは軍の人なんだ。きっと彼に何かを望んでの事だと思う。けれど何も出来なくってもいいんだ。
私が思ったように、向かい合うことが大事で見るだけでいい。そしたらきっといつか……ノウイも代われるかも知れないよ。だから――

「いいよ。それでいい。いつでも逃げていいから・・行こう。何もしなくて良いから……見てて」
「何かする気なんすか？　ダメっす！　必要以上になんか近づいたらどうなるか分からないっすよ！」

それは分かってる事だよ。だけど何が出来なくても、行かなきゃ私はいけない。だってそれがサクヤとの約束で、私をここまで導いてくれた隊長さん達の願いだよ。
だから私は不適でも不自然でも笑顔を作って、元気を見せて、畏れを隠して進むよ。それにそれだけじゃない。この道は元が私が選んだんだ。
何が出来るか知りたくて……一人で歩いてみたかった。だけど全然、理想とは違って……一人でなんて早すぎたと分かった。私には一人で出来る事なんか何もない。
だけどここまでこれたのはサクヤの力……隊長さん達の力……そしてノウイの力のお陰だよ。自分から始めた事で、沢山の人達に助けて貰った……今更リタイヤなんて選択肢は無い。

「行けるところまで、私は行きたいんだよ。だってこれは私が望んで始めた事だもん。ゴールテープは……自分で切らなきゃね」

どこにあるかも分からないそのテープを私は目指す。その決意に迷いは無い。一杯この数時間で教えられたから。私はこの言葉に思いを乗せた。ノウイには伝わったかな？

すると私を見つめる黒ごまの様な目が細められて、息を吐く。ため息みたいな……諦めの息。

「強いっすね。俺は何も出来ないっすけど……逃げる時には役立つっすよ」

「うん！」

それだけで十分だよ。逃げ出す気なんて無いけど、アイリを助けた後にはどうなるか分からない。そもそも助けられるかも分からないけど……確実にあの場所には行るんだろう。そしてアギトも絶対にあそこにいる。

それからもしかしたら、戦ってるのは私が聞いた謎の声の奴かも知れない。それなら全ての目的はあの場所だ。傾き光も弱々しくなった光明の塔……その場所！　中枢に行こう。事件のただ中へ。

私達は走り出す。もう大丈夫だよ……今の私は走れるんだからね。隣を見ると、私のスピードに合わせて走ってるノウイの顔色はやっぱり芳しくなかった。後悔してるのかもね。だけど言ってしまった手前引けない感じ。

最近そんな感じの奴を見てた気がするよ。そうそう、思い出した。

「大丈夫、アギトもあそこに居る筈だよ。もしかしたら、さっきの衝撃はそれかも知れないし」

「おお！　成る程！　そうっすね、それなら既にあそこに危険はないっすね。流石アギト様っす！」

私のもの凄く楽観的考えを安易に鵜呑みにするノウイ。まあ、本当に鵜呑みにしてるわけじゃなく、これ以上暗い考えにハマらないようにそう振る舞ってるだけ……だと思う。きっと、多分、絶対に。

ノウイの豆粒サイズの瞳は感情を読みとりにくいからよく分からない。でも仮にも軍人だからね。仮想空間だから更に仮の仮、位だろうけど……今までの状況がそれを許す筈がない。

だから私も自分が始めたこの他愛も無い話を広げよう。あと少しでもう着いちゃうから、初めてこの国に来たときからの疑問を解消だ。

「ねえ、どうしてこの国の人達はアギトに様付けするの？」

実はずっと違和感があったんだ。それを聞く度に体が身震いするような変な感じ。なんでアギト様なの～って考えが巡らない時はないんだもん。

だからこの短い間で聞いておこうと思った。すっきりしときたい。この向こうには何が広がってるか分からないから。ノウイは私の質問に鼻高々な感じで教えてくれる。

「それは簡単な事っすよ。みんなアギト様を尊敬してるんす。なんてたってあの方はこの国の最初の騎士で、アイリ様から『ナイト・オブ・ウォーカー』の力を賜ったお人ですからね。

騎士の憧れっすよ」

ほえ～そんなにアギトって凄かったんだ。よく分からない単語もあったけど、取り合えずアギトに様付けする理由は分かった。愛されてるんだねアギトは……でも、その国をアギトは捨てた……それはどうして何だろう？

「それは……俺も良く分からないっす。本当にあの二人はそう成るんだろうなって誰もが祝福してたのに……それは余りにも突然って感じだったっすから。
末端の自分たちからはそうだっただけかも知れないっすけどね。でも……本当に悔しくて、残念でした」

ノウイの顔に再び陰が戻ってしまった。そしてそのまま私達は遂に光明の塔へとたどり着く。そこで私達が見たものは絶望……そういう類の物だった。

荒れ果てた……嫌違う……もっと凄惨に砕け散った地面がそこには広がっていた。元々は綺麗な場所だったんだろうと予想できる場所は既にその有様を変えていた。
この地殻変動とも言えるレベルの破壊で光明の塔は傾いたんだ。そしてその中心部分では凄まじい音と大気の弾ける衝撃が繰り広げられている。
ローブで確認できないけど女が笑って何かを振って……そしてアギトは為す術なく打たれ続けてた。終わったときには、アギトはその場に倒れ込んで動かない。ＨＰはある。あの軍の人達と同じだ。

「カーテナ……」

隣からそんな声が聞こえて見るとノウイは震えてた。私もきっと震えてる。それだけ一方的で……怖い物を見た感覚があったんだ。
だけどその時、奴はアギトに止めを刺そうとしてると分かった。何か言ってる。今、行かないとアギトが！　私は隣のノウイに告げる。

「逃げてノウイさん。貴方は自信ない様だけど、私はあの時……確

かにヒーローに感じたよ」

ありがとうは心の中で言った。私は駆けだす。その様子を止められない彼が最後に見えた。本当にヒーローだった。紛れもない事実だよ。少しは心の支えに成れたかな？

そうならいい、そうでなくてもいい。私は飛来する……二人の間に――その瞬間、見えたのは微笑む奴の口元だ。

強さの形（後書き）

第四十五話です。

宣言通りなんとか間に合いました。超ぎりぎりです。後一時間で今日も終わり。死ぬかと思った。今回でやっとアルテミナス側は合流できました。長かった。

ではまた明日です。お疲れ様です。

離れた人（前書き）

僕は光の中に居た。麒麟との衝突……どうなったんだろうか。それにここはどこなんだ？　気付いたらこんな変な場所に来ていた。

僕は取りあえず歩き出す。すると耳慣れたタイピングの音が聞こえてくる。そして僕は見た。久しいあの背中を。

離れた人

僕の目の前――――いいや、全てが光で包まれた。三百六十度余す事無く、そこは光の世界。

（どうなったんだろうか……僕は）

振り抜いた筈のニーベルは手の中に無く、麒麟もここにはいない。だけど最後、腕に響いたあの感触はきっと本物の筈だ。そうであって欲しい。

無我夢中で振り抜いたニーベルはきっと届いた。。だけど本当に二つの攻撃は同時に交錯したから……もしかしたら僕は死んだのかも知れない。

僕のＨＰは本当に僅かだった。麒麟のあの攻撃を僕は避けなかった。ならば僕のＨＰは尽きたはずだ。でも……僕は自分がどうなったのか確かめる術がない。

まだ僕は死んでも大丈夫なのか……そうでないのかは、確かめようなんて無かったから……僕は今、どっち側に居るんだろうか？

僕は残った右腕を見つめて握った。そこには確かな感触がある。胸に手を当てれば感じる鼓動がある。動く足があり、考えることが出来る頭もここに・・・それで、それだけでいい。

僕はまだ生きている……そう感じる。だから前に足を踏み出した。床は優しく波紋を広げるように波打った。だけど水って訳じゃない。やっぱりそこにも光があるようだ。

少し性質の違う光。それを踏みしめて僕は進んだ。何もないその世界を。しばらく歩くと何かが聞こえてくる。カタカタカタカタ……規則的に聞こえるその音を僕は何度も耳にしている。

光の世界の中に一点の黒がある。光を飲み込む様にして存在してるそこは部屋の様に見えた。光と陰の明暗のせいか良く見えないけ

ど、狭い部屋だ。そこには平積された紙の束に、更に次々と紙を吐き出すプリンター……耐えきれなくなった紙は床へと舞落ちる。
だけどその紙はキチンと平積の上へと乗っていくんだから不思議だ。パソコンの青白い光に照らされて浮かんでる背中を僕は知っている。
何度も何度も……こんな曖昧な世界で僕たちは逢ってるんだから。だけど声を掛けた事は有っただろうか？　掛けられた事は有った気もするけど……するような……だけど今は何気にそんな事が出来る気がした。

「いつまで……いつまで貴方はそうやってるんですか？　もうＬＲＯは出来てるんじゃないんですか？　どうして自分でセツリを助けに行かなかったんですか？　貴方は……当夜さんですよね？」

僕の言葉にタイピングの音が止んだ――と、思ったらすぐにまた響きだした。物言わぬその背中はいつも通りの光景だ。だけど今回は何かが違う……それは、僕の声が届いた事だろうか。
今までは、声を出すことも出来なかった。出来てもそれは何かの壁に遮られて届いて無いと思ってた。けれど、今の反応……確実に当夜さんには僕の声が届いたんだ。
なら、聞きたいことが山ほど有る。言いたいことも沢山有るぞ！
文句言いまくってやるぞコラァァ！　そのすかした背中に言葉の槍を刺してやる！

（え～とまずは……）
「私は……最後の鍵を探してる。それを見つけるまで、この手を止めるわけには行かない」

僕が辛辣な言葉を脳内で検索してる時に、不意に聞こえたその言葉。あっぶな、余りにも当たり前の様に喋るから聞き流す所だった

じゃないか！　まさか返して来るとは思わなかった。
だけど……鍵ってなんだ？　それは何に必要なんだろうか？　やはり、セツリをリアルに戻す為の物？　考えても自分の頭の中に答えなんてない事は分かりきってる。なら、その答えを持ってる人に聞くのが一番だ。
それは目の前にいるしね。最近ようやくコミニュケーションを覚えてくれたらしい彼に聞こう。

「最後の鍵……それって何なんですか？　やっぱり、セツリの為の物ですよね？」
「……勿論だ。あの子の事以外、私は興味なんかないよ。最後の鍵……それを知るには君はまだ早い。私はまだ……君を信用なんてしてないからね」

僕の眉根がピクっと動く。それはなかなかに失礼な言葉じゃなかろうか。誰がなんの為にここまでやってると思ってるんだ。

「どういう事ですかそれ？　僕はこれでも頑張ってるつもりですけど……」

僕は心で煮えたぎる物を奥に押し込めて声を絞り出す。ここは耐える場面だ。外面は爽やかに、気にしてない感じで。

「頑張る、頑張らないかじゃない。君は本当に……どうしてセツリにそこまで出来る？　君がそういう人間だから……それならそれで構わない。
だけどそれは……あの子にとって余りにも残酷だ」

当夜さんの声は低く小さくなり、なんだか後悔が伝わって来るようだ。それに僕は責められてる気がした。

「残酷なんてそんな……そんな言い方ないですよ！」
僕は吠えずにはいられかった。なんだよそれ……僕のしてきたことは全部余計なお世話だったのか！？　残酷って何がなんだよ。
「君は……あの子が本当に欲しがってる物を分かってない。君のその曖昧さがあの子を苦しめる。疑わせる。
今のままでは絶対にアンフィリティクエストは成し得ない。私の『命改変プログラム』それにはあの子の本心が必要だから」
「本心？　セツリはリアルへ帰る事を願ってる！」
それはちゃんとこの国に入る前に確認したことだ。みんなで話して……セツリはそれを願ってくれた。だからクエストは成し得る！
「あの子の闇は、君が思ってるほど浅くはない。そしてここのシステムはあの子を手放そうとはしない」
空しく響くタイピングの音が煩わしい。どんどん、どんどん否定されていく今までの過程に腹が立つ。なんなんだよ。この人こそ、何を願ってるのか分からない。
セツリを助けたいんだろ！　救いたいんだろ！　意味が分からない事ばかり言わないで、励ます言葉でもくれれば僕も素直に頷けたのに……
「システムを作ったのはアンタだろ！　セツリになにしたんだ！」
「あの子を守るための事だよ。……システムが、この世界があの子を守る……願いのために。自分達で動き出しても、それは変わらない」

周りはこんなに明るいのに、心には沢山の感情が押し寄せてその光を曇らせる。ああ、もうごちゃごちゃする。僕は一番、知りたいことを強引に言った。

「一つだけ聞かせろ。僕のやってきたことは無意味だったのか？」

タイピングの音が止む。今度は長い。それでも数秒が数十秒に延びただけだったけど、その時の僕にはとても長く感じれた。

そして再びタイピングの音が黒い空間から染み出してくるとき同時にその言葉も響いてくる。

「そんなことはない。君は良くやっているよ。想像道理で予想以上……君は間違いなくあの子の勇者だろう」

その言葉を受け取って……でも僕の心は安心も安らぎも得られなかった。こんな事聞くんじゃなかった。真っ先に心に沸いたのは空しさだ。

そんなことをこの人に言われても意味なんてなかったんだ。僕の行為を受け取ってるのはセツリなんだから……それは他人の意見も同じ事だった。

だからこの人に、「助けられない」と言われても僕は「助けてみせる」と言うだけの事なんだ。何も分からない僕だけど、それだけは確かな事。

「僕は助けますよセツリを。そう誓ってます」

「是非にお願いしたいね。私にはそれは出来ない事だから。だから色々言ってしまう……余計な事が口を付くのは私の悪い癖か。気にしないでくれ」

僕の宣言に当夜さんは軽く応えた。今更、散々言ったことを「気

にしないでくれ」って言うのも無理な話だけどね。この奔放さはセツリと似てる気がする。姉弟なんだから似てる所の一つや二つは当然か。

その時、光の世界に一点だけの存在である目の前の空間がブレた。そしてボヤケていく。闇は光に溶かされていっている様な感じだ。

「この空間も長くは持たないな。君がもう少しシステムに浸透すれば……いいや、それは諸刃の剣だな。お別れの時だ。久々に誰かと話せて楽しかったよ」

そう言って当夜さんは椅子を押して立ち上がった。それは予想外の事。見慣れた筈の背中が大きく感じれた。

「貴方は……」

僕は言葉を詰まらせる。何を言えば良いのか分からない。この場面で……僕は何を知りたい？　あるはずなんだ……有ったはずだ。セツリやアンフィリティクエストやＬＲＯじゃない、もっと別の事……

その時、更に当夜さんは驚く事をした。いや、それをやるだろうとは予想は付いた。だけどそれはここではタブーに感じれてたんだ。

だってずっと当夜さんは僕に背中しか向けてなかったから……ここではそう言う物だと勝手に思ってた。だけどそれら全てを覆して当夜さんはこちらを向いた。それは始めてみる彼の生きた顔。

「うん？　それよりも、これは助言として聞いてくれ。あの子はいつでも元気に振る舞うけど、心はとっても繊細なんだ。いつも何かに怯えてる。

それを君には覚えておいて欲しい」

当夜さんは僕を真っ直ぐ見つめてそう言った。イメージでは人と顔を合わせたりするのも苦手って感じがしてたからそれは意外だった。目を合わせるなんて事は以ての外みたいな……若くしてフルダイブシステムを確立させた天才だから人と多少違うだろうと想像してもはばかられない事だよ。

だけど話してると常識人ぽかったし世間に外れない天才って事か？　とことんスゴい人らしい。歴史上の天才は必ず何かが欠落してるものだ。

それが天才になり得る条件なら……それを満たさずに天才であれる者は天から二物を与えられたのだろうか。僕には知れない事だな。

どちらかと言うとバカと呼ばれる事の方が多い僕にはね。

当夜さんの瞳には凛とした強さが宿っているのが見えていた。余計な事でもない言葉。それは本当に純粋な助言だろう。その目を見返したとき、僕は聞かなきゃいけない事を思い出した。

揺らめく陰の様な空間が消えていく。その時、光の世界にも揺らぎが起こった。足下が柔らかくなり上下左右が反転したような感覚……三半規管がおかしくなった。

「それじゃあ、さよならだ」

「まっ――アンタは一体どこにいるんだ！　ＬＲＯにいるのか？」

僕は消え去る世界の中でそう叫んだ。そうだずっと疑問だった事……あの人がここに現れない理由。同じように意識不明なのにどうしてあの人はどこにも居なかったんだ？

ＬＲＯは広いからただ逢えてないだけ……その線も無くはなかった。だけど、おかしい。この人はセツリを助る為にああした筈なのに、この場所にいないなんてあり得るだろうか？

あの人は天才だ。同じ場所に行ける確証が有ったはずだろ。なら居るはずだろ。だけどこの人は何もしなかった。ＬＲＯが発売され

て一年間経つまでどうしてたんだよ一体？
セツリをリアルに帰して……その時アンタがいなかったら悲しむだろう。怒るだろう。だから僕は思う。どうせなら二人一緒にリアルに帰る事が出来れば……それが一番理想なんだ。
だけど最後に当夜さんの口から出た言葉はやっぱり意味不明な物で、凡人である僕には分からない事だった。

「私はここには居ない……いや、もしかしたらもう、どこにも居ないのかも知れない。こうやって話してる私は既に……。
とにかく君に私を見つけるのは不可能だ。私が居る場所とＬＲＯでは空間の成り立つ場所が違うのだよ」

その言葉を残して黒の空間は消え去った。そして直後、僕が居た光の空間もその姿を保てずに消え去っていく。

意識が心と体を繋いだ瞬間、自身の胸には麒麟の放った電撃の砲が胸を貫いていた。だけど、僕のＨＰは生きている。砲は次第に細く小さくなって最後には消えてしまった。
僕の胸には貫かれた跡さえない。腕に感じた重みを追うとそこには銀色の剣があった。『双剣ニーベル』その片割れのもう一本。
だけど直後、そのもう一本も甲高い音を立てて砕け散った。ニーベルの破片が照らされた森の中で光を反射する。
それは綺麗な銀色の光だ。まるで一本目を追っていった様に感じれた。二つで一つの双剣だから、なんだかそんな気がしただけだろか？
でも、流石におかしいな、とも思う。ニーベルでの戦闘はまだ一回目だ。幾ら強敵だったとしても初戦で折れるなんて考えられない。
対象破壊でもあの角には付いているのか？　それともウエポンアライアスの仕様かリスク……そこで思い出したように僕は麒麟を見

た。正確には奴の額部分。

「無い……」

ポツリと出た呟きは見たままを表してる。麒麟の額に輝いていた白銀の角はそこには無くなっていた。根本の切断面が鏡の様に見えてるんだ。

そして何かが背後に落ちる音が聞こえた。それはきっと白銀の角だろう。

僕の頭は混乱してた。だってさっきまでの当夜さんとのやりとりは何だったのだろう……そして気付いたら胸を貫かれた瞬間で……でも大丈夫で……白銀の角は切れてて……なのに麒麟は変わらず目の前に立っている。

どう言うことだよ。誰か説明してくれ。するとキリンは背を向けて歩き出す。するとその後方から一人の人物が訪れた。泉の精だ。一人と一頭は交錯してキリンはその背後に回った。

「貴方が角を切ったのが数瞬早かったみたいですね。それでこの子の攻撃は攻撃判定されなかったみたいです。助かりましたね」

足下まで垂れる長い髪を揺らして泉の精はそう言った。なるほど、僕の方が一瞬早かったから助かったのか。その一瞬が向こうならどうなっていたのかなど想像もしたくない。

実際そうはならなかったんだからそんな事は無意味なんだけどね。はぁ良かった良かった。

「それで、僕達は勝ったんだよな？」

実は未だに疑ってたりする。あれだけどんでん返しされればこう疑り深くなるもんだ。だってまだ麒麟はそこにいるし。今は、最初

見たときの姿に戻ってるけどどうしてもその口から聞きたいことだ。
するると泉の精はその口元を綺麗に曲げて笑顔を作りこう言った。
「ええ、貴方達はその力を見せてくれました。精霊化した麒麟を倒すその実力、見事でした。試練は終了です。安心して良いですよ」
「マジ？」
まだ疑う僕が居る。
「マジです」
「本当か！」
「勿論、違ったらデリート処理を要請して見せましょう」
ふむ、そこまで言われたら信じるかな。ここでデリートされても困るし。努力が水の泡になっちゃうよ。覆水盆に返らずだよ。だけどまだ間に合う。ここで僕が受け入れるんだ。それだけで万事解決。よし――
「実際は貴方が最初に麒麟を倒した時点で試練は終わりでしたけどね」
「ふざけんなぁぁ！」
――ダメだ。僕はもう何も信じられない！　最初に倒したときだと？　どんでん返しなんか無かったのよ。なんであんな事したんだ？
「興味ですよ。私もこの子も貴方に興味が有りました。あの方が気にする貴方の力を見たかったんですよ」
「あの方？」
そのフレーズが引っかかる。どの方だよ。ふざけた事吹き込みや

がって……おかげでもの凄く苦労した。だけど泉の精は僕の疑問には応えず、可愛い笑顔を引っ込めて周囲を見回した。

「それは、勝利の余韻に仲間と浸ってからでも良いでしょう」

そう告げた泉の精の左右からシルクちゃんとセラ、鍛冶屋の姿が飛び出した。そして上からはピクが飛来する。全員集合で全員無事だ。

「やったな！」

「終わったんですね。よかった～」

「まあ、今回はなんとか成ったけど、こんなバカな事続けてると死ぬわよアンタ。後それと、これは貸し一つだから」

それぞれがこの戦闘の終わりを噛みしめる。セラの毒舌も今はその裏の優しさが見えるから至って平気だ。

「何言ってんのよアンタ！　一生奴隷にするわよ！」

「貸し一つでそれはデカすぎだろ！」

たく、相変わらず無茶苦茶な奴だ。まあでも本当にみんなのおかげだった。一人じゃ何にも出来なかったよ。だからみんなの顔を見渡して頭を下げる。

「ありがとうみんな。本当にさ……僕のワガママに付き合ってくれてありがとう」

みんなの暖かな視線と僕は交錯した。こういう瞬間は良いものだ。みんなで何かを成す達成感。それは何にも代え難い物だ。

そこで「こほん」と咳払いが聞こえて僕らをそちらを向く。それ

は泉の精だ。

「そろそろ良いですか？　このフィールドが無くなる前にこのウエポンアライアスを達成したほうが良いでしょう。それにさっきの事も今話します。

取り合えず、いつまで白銀の角を地面に放置しておくんですか？　あれは最重要なアイテムですよ」

忘れてた。僕は慌てて、白銀の角を拾いに行く。取ってみると意外にずっしりと重い。アイテム名は『雷精の角』なんだか格好良いぞ。

「聞かせて貰おうか、あの方って誰だ？」

僕は雷精の角を手にみんなの所に戻りながら言葉を紡いだ。その言葉にみんなは困惑顔。さっきの会話は聞こえて無かったのか。一応黒幕とだけ伝えた。

「あの方の事は実は良く知りませんね。私達に自我を与えてくれる存在。既存のシステムからとき放ってくれるお方と言うことしか。

私なんてついこの間、自我を頂いたばかりだもの」

ついこの間？　その言葉に僕は反応した。それはこの周りを囲むモンスター共が現れた時期って事か？　それならモンスターを引き連れてた奴があの方？

確か、アルテミナスで聞いた話ではモンスターを操ってるのは女神の様な奴だとか。抽象的過ぎて良くわからんけど……それならタゼホに居るって事か？

「確かにあの方は女神の様な存在ですよ。私達にとっては。だけど

今はタゼホには居ないでしょう。もっと面白い事をやると言ってましたから」
「どう言うことだ？」
僕達の間に不穏な空気が流れる。結構親切にしてくれたし良い奴かなとも思い初めてたけど、やっぱり違うのだろうか？
僕の言葉に泉の精は含みのある言葉を残して言い切る。
「あの方は今頃、アルテミナスでしょう。私達が守らなければいけない方が居る。その人をお迎えに行きました。
あの方は派手好きで遊び好きですからね。今頃、あの都市はどうなっているんでしょうね？」
「「「「――――っ！！」」」」
僕達は全員、体が強ばった。他のみんなはきっとアルテミナスがどうなってるかで体を強ばらせたんだろうけど、僕はそこにもう一つ重大な事に気が付いてた。
（今、こいつは守らなければいけない方って言った！）
それは……セツリじゃないのか？　あの変な世界で当夜さんが言っていたんだ。「システムはあの子を手放さない」と……そしてこいつらはプレイヤーじゃない。ＬＲＯと言うシステム……それらが自我を持った存在。
戻らなくちゃいけない。僕らの脳裏に共通の認識が巡った。でもそこで疑問も沸いた。なんでこいつはそんな事を喋るんだ？　武器まで直そうとする？　おかしな事だ。
「そんなのは簡単です。それがあの方の意志だから。興味を持ってるんですよ貴方に。だからここでの戦いは試練。試したんです。

貴方がそれだけの人物か……」

敵意は感じられない。それどころか泉の精は晴れやかだ。この分ならシルフィングもちゃんと直してくれそうだ。だけどあそこまでやる必要あったかな？　試練厳しすぎだぞ。

「私は半端はしません。やるなら全力……正直あの方に興味を持って貰えてる貴方が疎ましかったのかもしれません。
だけどそれもあれだけの物を魅せられたら納得するしか無いじゃないですか。仕事はやります。私の役目ですから」

ちょっと悲しそうな泉の精。そして僕たちは泉の前に立つ。遂に『ウエポンアライアス』達成の時。深い森の中、その時は遂に来た。

離れた人（後書き）

第四十六話です。

遅くなってすみません。もうなんだかやばいですね。弱音を吐いても言いですか？　誰か僕に元気をください。いや、マジで。駆け抜けたいけどそうも言ってられなくなるかもです。

囁かれた核心（前書き）

私はカーテナに立ち向かう。といっても何が出来るわけはなくて。けれど何故かフードの人物は私に友好的？　意味が分からないまま持ちかけられたのは絶対的に有利にもかかわらず何故か取引。

私とアイリ……どちらを返すけど、どちらかは連れていく。その要求は余りにも理不尽で……そして答えは決まってた。

囁かれた核心

流石に無理かもと思った。振り卸される『カーテナ』と呼ばれたオモチャの様な剣……切っ先も無く短すぎる刀身で一体何が切れるのか？　そう思うのは寸前の光景を見ていた私には出来ない事だった。

だってあの剣はアギトを不可思議な力で滅多打ちにしていた。そして軍の人達をあんな状態にしたのも、きっとあの剣だ。

ＨＰを残して心を砕く……それはとても残虐な行い。一体どれだけの痛みを味わわせればそんなことが出来るのか私には想像も出来ない。

だけど私はその時、気付いた。アギトとローブの奴の間に割って入ってそいつの歪んだ口元を見たときだ。誰か居る？　黒い墨の様に塗りつぶされて行ってるけどそれはアイリ！

どうして……彼女がここに？　そっか目の前のこいつがアイリを浚った。だからアギトは戦ってたんだ。でもアギトは負けちゃった。それに良く見ると、カーテナを握るのはアイリだ。

奴の腕は黒い墨の様な物に飲み込まれたアイリの腕に添えられてるだけ・・それじゃあ、余りにも酷すぎる。アギトは大好きな人に、それにアイリも大好きな人を、傷つけた事になるよ。

許せない……だけど悔しい事に私には何も出来ない。せめて盾に成ることしか……その時、見えたのは煌めく雫。まだ墨に飲み込まれてない片頬を流れるそれは涙。アイリは気絶してるけどわかってる。

（逃げない！）

何も出来なくっても、一矢報いる事なんか出来なくても私は……

貴方の大切な人を守ってみせる！　どうせＨＰは減らないんだから、立ち続けてみせる！

私は振り卸されるカーテナを真っ直ぐに見つめ、そんな覚悟を決めた。そしてその時、粋なり衝撃が体に襲い視界がブレた。だけど――――え？　こんな物？

「あぁ～セツリちゃん、かわいいいいいい！！」

耳をつつく様な声が私の耳に響きわたる。何が起きたか分からない……てか、何をされたか理解できない。でもなんだか頬が熱いような……って本当に熱いいぃ！

「やぁーやぁーやぁー熱い！　焼けちゃう爛れちゃう！」

そんな事ある分けないけど、私は首を横に振りまくった。どうやら私はもの凄い勢いで頬ずりされていたらしい。それが頬の熱さの原因。

そしてさっきの衝撃は私にローブの人物が抱きついて来た衝撃だった。私の体はがっちりと捕まれているようだ。きっと胸に抱いたクーは苦しいよ。

「もう～セツリちゃんは恥～ず～か～し～が～り～屋～だね☆　そんな所もかわいいぞ☆」

「――――っひ！！」

背筋に走った悪寒は私の貞操の危機を警告してるに違いない。だって危ないよこの人。唇が的確に私めがけて飛んでくる。私は必死に唇だけはと死守してる。それはきっと端からみたら変な光景だろう。少女を抱えるローブの人物に、その少女はクネクネと変な動きしてるんだからね。

「キャーキャーキャーキャー！」

そんな私の悲鳴は光明の塔の崩壊した下方で響きわたる。ンチュー☆　ムチュー☆　と迫ってくる唇は恐怖の対象としか思えないよ！

流石に耐えきれなくなった私は最後の手段に打って出る。両手も封じられてるからこれしかない！

「や・め・て・よ！」

「――――あがっ！！」

重く重厚な音が辺りに響きわたった。それは私の中身がドッサリギッシリ詰まってる証だよ。簡単に言うと私は頭突きをかましたんだ。

額が奴の鼻辺りにメキッとめり込む感触があった。カウンターだったからね。丁度キスを迫る瞬間を狙ったもん。威力は女子のそれとは思えないほどに向上していただろう。

ご愁傷様、だけど貴方が悪い。同姓同士ならセクハラが許されるなんて事はない！

「はぁはぁはぁ」

解放された私の息はあがっていた。精神的にも追いつめられてたから疲労感がハンパない。てか、なんなのこの人？　なんで私の事を知ってるんだろう？

それにどうしてアイリを浚ってアギトにこんな事を？　軍を吹き飛ばしてあんな風にしたの？　謎が頭の中に沸き上がる。答えてくれるのだろうか？　だけど私には言葉しかない。

「なんなのアナタ？　どうして私の事？　それになんでこんな事す

るの！？」

私は前方で鼻の辺りを押さえているフードの人物に目をやる。私を抱きしめる為かいつの間にかアイリを手放してた様だ。アイリは奴の足下の後ろに倒れている。

「ふふふ、それはね――――」

私の質問に答えようとしてくれた声は、だけど不意に止まった。なんだろう・・不機嫌な雰囲気が突然奴の体を覆ってる感じがする。

まるで最高の気分を邪魔された様に……今にも舌打ちしそうだ。

「――――ッチ」

あ、しちゃった。吐き捨てる感じで不快感を伝えて来た。視線はこっちを見てる。だけどそれは私じゃない。そうだよね、奴は頭突きされても嬉しそうだったもん。

ならこの視線はどこを向いてるの？　私は視線を追って振り返る。するとそこには彼が居た。遂先ほど、奴になぶられてボロボロにされたアギトが震えながら立ち上がってたんだ。

「アギト！？」

「セツ……リ？　引いてろ……奴は……俺が……倒す！」

アギトは自分の武器である槍を支えに前に進もうとする。それは余りにも痛々しい光景だった。誰が見ても分かるよ。行かせちゃいけないって……今度同じ攻撃を受けたら、幾らＨＰが減らないからって死んじゃうよ！

矛盾してるけどそう思う。

「ダメ！　行っちゃダメよアギト！　今の状態じゃ無理だよ！」
「それでも……俺は……お願いだセツリ……行かせてくれ。これが……償いになるのなら……」

私は前へ進もうとするアギトを必死に押さえる。だけどアギトは何かに引っ張られる様に前へ進むんだ。それはあらがえない死に神の招きに誘われてる様に感じれて怖い。
行っちゃいけないのに……アギトはそれを望んでる。

「コレがそんなに大切？　私はもういらな～いから返してあげよっか？」

アギトの体を必死に受け止めてると後ろからそんな声が聞こえた。そして私の頭上からはガチガチと歯を鳴らす音。やばい……アギトの額に浮かぶ血管が切れそうな感じだ。
首を少し傾けて目線を声の方に向けると、奴が放り投げてたアイリを掴みあげて無造作に地面を引き回す絵があった。それは確かに怒りがこみ上げてくる光景だ。
でも――――

「待って！　駄目アギト！　あれは誘いだよ！」
「ふぅーふぅーふぅー」

――――私は彼の胸ぐらを体で必死に押し止める。アギトは既に言葉を理解してない感じに荒い息を吐いていて危ない。ＨＰが減ってる訳じゃないから疲労なんて実は無い体は私で押さえる事は難しい。
アギトの理性が本気で飛んだら、私じゃ押さえられない事は明白だ。

「聞こえてないの？　言ったじゃないまだって……でも、その時が来たから返してあげるって言ってあげてんのが分からない？
捨てられた男が！　見苦しいのよ！」
「――――うがぁぁぁぁぁ！」

奴の言葉はアギトの理性を吹き飛ばした。アギトは私を横に払い、獣の様に奴めがけて突っ走る。そして腕に握る槍を奴に向かって突き刺した。
赤いエフェクトが立ち上り、何かのスキルが発動してる事が分かる。だけど奴は動じない。むしろ待ってましたと言わんばかりにアイリを抱き寄せ、カーテナを振るう。

「だめぇぇぇぇぇぇぇ！！」

私は体を起きあがらせて叫んだ。だけどどちらの動作も止まることはない。奴の口元はいびつに歪んで狂喜が垣間見えた。
そして次の瞬間、私の前方にいたアギトが弾丸の様に弾かれて横を掠めて後ろに飛ばされる。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーー」

それが私にはアギトだと分かるまでに実は数瞬掛かった。何故なら見えなかったからだ。絶叫と共に私の視界の端を風が凪いだ・・それが実感だった。

「――――がっはぁぁ……」

後ろで聞こえた何かがぶつかる様な音と亀裂が広がる音。そして絶叫は唐突に止んだんだ。私はその時ようやく、その姿を確認した。アギトは瓦礫の山を更に砕いてそこに突き刺さっていたんだ。

そこが瓦解する音と共にアギトは地面に落ちる。ピクピクと弛緩する体の動きだけが見えていた。

「アギ……アギト！」

頭が理解した瞬間に私は動き出す。認めたくないけど……目の前の事は事実で……涙が出そうになる瞳を必死に堪えた。ここで私が泣くのは駄目だと思ったんだ。

「きゃはははは！　良い気味だわ。私とセツリの間に無粋にも入ろうとするからそうなるのよ。私を楽しくさせるだけでよかったの～。きゃは☆」

不愉快な笑いと言葉を発しながら奴はこちら側に歩を進めてくる。

（不味い、不味い、不味い、不味い、不味い、不味い）

頭の中ではそんな言葉が反響し続けていた。もうアギトは動けないだろう……目の前で見たカーテナの威力は想像を絶してた。

アギトを一撃で吹き飛すほど……軍を一挙に倒すだけの力……分かってたはずなのに、私は理解して想像してなかった。

でも、今の一撃で私はあれを食らった自分をイメージしてしまった。きっとグシャッっていうよ。ザクロを地面に叩きつけた様な状態に成ることを用意に想像できた。

今の私にさっきの決意を繰り返す事が出来る？　足が震えてアギトの前から立ち上がることが出来ないよ。でもそのとき、私の前のアギトが腕を地面に突き立てた。

そして必死に体を起きあがらせようしてる。けれど体はやっぱり言うことを聞かないみたい……その間に奴は私たちの元へきていた。

「ククク、団子虫みたいな状態にどいつもこいつもなるわね。なんでそんなに頑張るの？　捨てられた癖に。これを返してほしいのなら――――」

奴は私の方を見る。え？　……なに？　そしてアギトを再び見た。

「――――取り引きしましょう☆　そうしましょう☆」

風景にそぐわない明るくおどけた声が響きわたった。月明かりと、傾いた光明の塔から漏れる弱い光が私たちを照らしている。

「取引……だと？」

「そうそう、私も待ち人来たし。もうコレに用はないから返してあげるって言ってるの？　理解できた？」

首を僅かに傾けてアギトは半分だけで奴と対峙する。今はそれでも限界くらいだ。私は震えて声もでない……昔の自分に戻ったみたいでイヤになる。

奴の言葉に耳を傾けるけど意味不明。この状況で取引なんて……一方的に奪える筈じゃない。それを……自分も物を差し出す理由はなに？　どう考えても不信だった。

それをアギトも分かってる。動けなくても、頭はきっと大丈夫なんだろう。それを考えるとやっぱりカーテナのあの攻撃は質が悪い。

「お前は……なにを望んでる！？」

「それは勿論――――」

奴はアギトの目線にさっきよりも近づいた。それは奴が私に抱きついて来てるからだ。そして言い放った。

「――――セツリよ。私はこの子意外興味なんてないわ。う～ん、ピカイチ可愛い！」

最初とは違う悪寒が私の体に降っている。冷たい刃が心臓に突きつけられてる感じだ。いきなり、舞台の表側へ引っ張られて私は混乱してた。

「ふざ……けるな！」

怒りをはらんだアギトの声が響いて。腕が動いた。だけどそれは何の変哲もないただの腕。奴は避けようともしなかった。

下から上へ降りあげるだけの動作。それがきっと今のアギトには精一杯だったんだ。だけどその時、僅かに奴が顔を隠すフードに指が掛かった。

そしてそのまま腕は上へ行き、フードが奴の頭頂部を越え後ろに落ちた。

「「……」」

言葉を無くす私とアギト。ううん、きっと二人とも同じ言葉を頭で連想してた。だけど忘れたんだ……言葉に表現する事を。それか躊躇われた……もっと良い言葉があるんじゃないか……これで足りるのだろうか？　と。

それだけ露わになった奴は美しくて綺麗だった。芸術と呼べるのかも知れない。迷いなく、疑いようが無い黒のロングストレート。初雪でもかなわない程の白い肌。長いまつげの中に煌めくはサファイヤの様な瞳。

全容が見えるだけで今までの行い全てをリセットしてしまいそうになるほどの完成形がそこにはあった。女神……まさにその単語しか出てこない。

間近でその赤く透き通る瞳に見つめられて沸いてくるのは恐怖から羨望に変わっていた。

（綺麗……）

本当にどこを見てもそう思ってしまう。ここまで来るともう麻薬レベルだよ。机上の方程式が崩れさるみたいに根底から美の価値観を変えそうだ。

そこまでの人がいけるわけはないんだろうけど。

「貴様……まさか……タゼホを……襲った……」

アギトの震える様な声が私の耳にも届いた。タゼホ？　そう言えば「女神を見た」って言ってた人が居たはずだ。てか、もともと私達はそこを目的にしてたのに随分とおかしな方向に流れてる。

「タゼホって何の事か知らな～い。たまたま私達の行く道にあった村なら潰したけどね」

「「――――っつ！！」」

私達は察した。それがタゼホだ。間違いない……目の前、私の場合は背後に居るのは倒すべき敵だ。でも、今ここでそれを成せる確率はほぼゼロパーセント。絶対的な力が奴にはある。

『カーテナ』という絶対的な力が。

「それよりねえ、どうするの？　愛した女を捨てるの？　早く選ばないと、そろそろアレ、やばいわよ」

奴の言葉に促されて私は再び奴が放ったアイリを見た。すると墨の様な闇が彼女の殆どを浸食していた。それに心なしかアイリは苦

しんでる様に見える。最後に見えてる部分が顔の半分の部分だったからそれが分かる。
今まで余り気にかけてなかったけど……アレはなに？　カーテナからそれは出てる様に見える。

「あれはカーテナの浸食。これだけ桁外れな武器だよ～。君が知ってるだけが副作用の全容じゃ無いって事。コレはカーテナを使う物への呪いみたいなもの。
この呪いに全身が包まれたら一体どうなるのかな？　そればっかりは私も知らないのよね☆」
「アイッ……リ！」

その言葉を聞いて、動かない体に鞭を打つアギト。カーテナの呪い……幾ら何でも私やスオウみたいなのじゃ無いと思うけど……余り楽観視出来ないおぞましさがそこにはある。
だからだろう……アギトは体を引きずる様にしてまでアイリの場所を目指している。泥だらけになりながらも、少しずつ……少しずつ……だけどその時、私は解放された。
そして足を地面に叩く音がその場に響く。その足は丁度アギトとアイリを隔てていた。

「アレを選んだって事？　明言してくれなきゃ分からないわよ。それじゃあセツリは私の物～☆」
「ダメだ！　ダメ……ダ……メ」

アギトの声が響いて次第に小さくなっていった。アギトは選べない……どっちかなんて無理なんだ。でも本心ではきっとアイリを助けたいと思ってる。きっと私以上に。
だけど私を託したのはスオウだから……その葛藤の末にアギトは決められないんだ。

でも……ダメだよアギト。大切な人……何でしょう。見捨てたりしちゃ駄目。もっと視野を広く持ってほしい。

「アギ……」

私のそんな囁きをアギトはちゃんと気付いてくれた。

「セツリ……」

「クーちゃん頼むね。サクヤに返しといて」

彼の目が見開くのが見えた。私はその顔にニッコリ笑顔を送ってあげる。大丈夫、今日一番の笑顔だよ。不安で一杯で恐怖もあるけど、涙は流さない。

これが今、私に出来る最前の事。アイリを救い、アギトを助ける為の唯一の方法だ。だから顔を上げよう……立ち上がろう。ここがきっと今日、私が選んだ道の行き着く所だったんだ。

「私が……私が行く。だからアイリを返してあげて」

「！！……っ……」

むき出しにされた地面を握りしめるアギト。悔しさが溢れだしてる。だけどアギトは何も言えない……こうするしかないって分かってるから。

だって、アイリには時間的制限がある。多分、後五分も無いよ。でも私は違う。今までの奴の態度からして私は連れて行かれてもきっと酷いことされない。

それならまだ希望は繋がるよ。アイリを助けて……後から私も助けて貰うの。きっと大丈夫。スオウが絶対に来てくれる。

そう思えるから、私は行けるよ。怖くても前へ進める。信じてる。

「セツリ！　うれしい！　そう言ってくれると、思ってた☆」

最後奴の声が舌なめずりするように頬を撫でた気がした。もしかして先導された？　でも、それでもコレしかない。思惑通りでもこの一本道しか私には見えない。

私はアギトの傍にクーを置く。

（何もしてあげられなくてごめんね）

その言葉をかけて奴と向き合う。身長は向こうの方が高いから自然と見上げる形になる。奴は上機嫌でニコニコしてる。だけど時折それがニヤニヤという様な企みを含ませるんだ。

やっぱり信用なんて出来ないし、表層のこの性格は造りとしか思えない。中身はもっと黒いんだきっと。それは私程だろうか……

その時ニヤニヤが見えた。

「セツリは思ってるよね？　ここで連れて行かれても必ず助けが来るって……だけど宣言しといてあげる☆　セツリはスオウとは居られないってね☆」

衝撃が走った。なんでこいつがスオウの事知ってるの？　いや、待って……この声、もしかして……私に聞こえた声？　私が追ってきた声の主は目の前のこいつなの？　調子やトーンが違うけど……そうかも知れないと思った。

でも、取りあえず否定しておきたい所があった。

「私は、スオウを信じてる！　いつだって一緒に居たいって願ってる。それを許してくれる！　だから私達は一緒に居られるの！」

「それはどうかしら？　本当に彼は信じられるのかな？　ねぇ～ア・ギ・ト君」

含みを臭わせる奴の言い方。それになんでアギトに振るの？　直接私に言えばいいのに。それとも私に言えない何かをアギトは知ってるの？

「アギト？」

「……」

彼は何も言ってくれない。いつもの様に軽口で否定でもしてくれればいいのに今はそんな元気もないだけ……だよね。

「あはは、君の口からは言えないか。セツリ、人を信用なんてしちゃ駄目なの。それはよ～く分かってるでしょ？

同じなの……誰も例外なんてないわ。だから私と来るのは正解。だけど戻るのは間違いだからね☆」

「私は……信じるって決めた。スオウは信じれるもん！」

私はきっとそれを自分に言い聞かせてた。聞きたくない言葉でも耳は勝手に聞いちゃうから。もっと素敵な事を自分で言って耳に聞かせるんだ。

アギトが何も言わないのも気になる・・けど、信じるって言ったら信じる！

「スオウは……スオウだけは違う・・私の傍に居てくれる。いつまでも……」

「本当に？　スオウはセツリを選ぶかな？　セツリが一番大切？

ああ言うのは一杯抱えてる。大切な物を……セツリもその一個かも。

ああ～一体何番目なんだろうね？　スオウにとってのセツリの価値って？」

何……言ってるのこいつ。私は何番目？　大切な者、確か幼なじみが居るって……スオウは私は選んでくれる？　そんな確証なくて、自信もない。

私は……スオウに取って何なのかな？　スオウを信じれるよね私。言葉が脳内で巡り巡る。そして心を刺激する。私の意志はとっても弱い。すると目の前に手が差し出された。女神が差し出す手だ。

「聞いてみましょう。私が用意してあげる。セツリを助けに来てくれた時にスオウの全部吐き出させてあげる☆　そしてセツリが決めれば良いわ。

どっちと居たいか、ね？」

私は手を取る。信じてるからと言い聞かせ。遠くからは量産された足音が迫ってた。けれど私達は陽炎の様に消え去った。

囁かれた核心（後書き）

第四十七話です。
おそくなってごめんなさい。今日はこの辺でアデゥー！

新たな力（前書き）

僕達は泉の前に進み出た。遂にシルフィング復活の時だ。だけどその前に聞きたい事が僕にはあった。きっとこれを終わらせたらこの僕達を守るフィールドは消え去ってしまうだろう。

そしたら自我が目覚めたシステムとこんな風に話せる機会を失う事になる。だから今のうちに……だけどそんな中、最後にとある珍客が僕の心を揺さぶる事を告げたんだ。

新たな力

淡い緑を映したような小さな泉。もう一度ここに立つまでにかなり苦労した。でも僕は再びここに立てている。これも仲間のおかげだね。

後ろに居る三人と一匹。具体的にはシルクちゃんに鍛冶屋にセラ、そしてピクだ。ああ、それともう一人忘れちゃいけない人がいた。

テッケンさんにも勿論感謝だよ。さて、一体彼はどうなったのだろうか？　周りに大挙してるモンスターの群を見る限りやられたという事か？　でもテッケンさんは自信あり気だったし、逃げ切れたのかも知れない。言ってた時間分は持たせた訳だし、上手くやれたと信じよう。

「急ぎなさいよ。アルテミナスが気になるわ」

「分かってるよ。こっちだって……気になることがある」

セラの言葉に僕は歯切れ悪く応えた。あれは僕しか知らない事。体験してないことだ。

意味が分からない事が多々だったけど分かったことも勿論ある。取りあえず当夜さんはＬＲＯには居ないらしいという事だ。ＬＲＯとは空間が違うとか言ってた。

それは仮想の中でＬＲＯが立っている場所と当夜さんが居る場所が違うと言う事だろうか？　僕がリンク機能を使って行ったセツリの世界みたいな別の場所……多分そんな感じなんだろう。

それとセツリの事だ。システムは彼女を手放さない……不穏過ぎるその言葉。自ら動き出した目の前のこいつらはセツリをリアルに戻したくないって事なのか？

そしてアルテミナスに行ったという親玉らしき存在の奴はセツリ

を狙ってるとも考えられる。それに僕はまだセツリを分かってないらしいし……嫌な予感や懸念は払えない。
別にこの事を隠してる事はないんだろうけど、今はまだいろんな事がバタバタしてる感じで確証も無いことは言えないよ。
それに伝えるならみんな一緒の方がいい。それでもそのみんなにはセツリは含まない方が良いんだよな。当夜さんに関する僕たちの嘘への疑念は抱かせたくない。
ちゃんと伝えなくちゃ行けないときは多分来る……けど、それは今じゃなくていいと思うんだ。セツリには向こうに戻りたいと思っていてほしいから。

（はは……）

なんだか罪悪感みたいなのから笑いが起きた。心の中だけの自分に対する笑いだ。だって知ったから……何か一つを隠すために、人は更なる嘘を重ねなくちゃいけないって事を。
それは仕方ない事なのかも知れないけど、やっぱりいい気はしない。だってセツリの信頼を利用してる。助けたいってのは難しい……本当に果てしなく。

「何よ、アンタの気になる事って？」
「ああ、うん。後で話すさ。セラが僕らを仲間と認めてくれたら」
「ふえっ！？　ななななに言ってるのよアンタ！　劣等種が、ちょっと協力したくらいでいい気になるな！」
頬を染めたセラから抗議の声が飛んできた。少しは認めてくれた感じがしたんだけど……素直になれない奴だな。一緒に危機を乗り越えれば、それはもう仲間なのに。
「さあ、手にしたアイテムを落としてください」

この声は泉の精。小さな泉の中央部分――きっとそこが定位置、に戻った彼女は僕の行動に指示をくれる。僕は自身の残った腕に握られた白銀に輝く角を見つめた。

正式名称『雷精の角』これがシルフィング復活のキーアイテム。確かにそれだけの価値があったよ。あの苦労……というか試練だっけか？

半分以上引き延ばされたあの試練はゲームバランス的におかしかった。まあ存在がおかしな奴がやったんだからそれは当然なのかもしれないけど……ん？

「あれ？　麒麟はどこいったんだ？」

「あの子は帰りました。試練は終わったのだから当然でしょう」

「ああ……まあ」

僕の質問を泉の精は歯に着せず流した。でも、確かに試練が終われば麒麟は用済みなのか？　元々その為の存在みたいだし、それは当然なのかも知れない。けど、確かめたい事もあった。

「麒麟は自我に目覚めて無いのか？　だって麒麟のあの状態はおかしかったし、てっきりお前と麒麟はグルになってると思ったけど？」

そうそこがハッキリしない。麒麟はウエポンアライアスに沿った行動をしてたのか？　させられてたのか？　だってあの精霊化は異常だろ。

あんなのされたら、これからウエポンアライアスに臨むプレイヤーはどうなる事やら。いや……そんな事じゃないな。僕が知りたいのはそんなこれからもあり得るかどうかも分からないウエポンアライアスの事じゃない。

今のＬＲＯは遂に……というかとうとう動き出したって感じだ。

これはもう僕らだけの問題じゃすまない域に達してる。それが一体どこまで出来るのかを知りたい。
自我の覚醒は感染するみたいに広められる様だし、後はその力。僕らはシステムに対抗しえるのか？
「おかしな事を言いますね。言ってみれば私達、ここで作られた全ての存在はグルの様なものですよ。大きなシステムの子として生み出された訳ですからね。
母に逆らう事が何故出来ましょう。あの子が自我に目覚めてる？
そう思える原因があの状態なら、貴方は勘違いしてますね」
「勘違い？」

それはどういう事だろうか？　泉の精の言葉はとても興味深いものになりつつある。元々僕が臨んだのはシステムと言う大きな物だったのかも知れない。
アンフィリティクエスト……そこにいつも立ちはだかったのはそれだろう。越えなきゃ行けないものとしていつもシステムはそこにあったんだ。
そしてそれを成さなきゃセツリはきっと救い出せない。
泉の精はその姿を月明かりと周りの光に照らしながら続きを紡ぐ。
「ええ。私達は自我の目覚めでプログラムからの解放を成し得るけど自分自身をシステムから切り離した訳じゃない。既存の延長線上に私達は居るわけです。
幾ら自由を手に入れてシステムの裏側を覗ける様になったと言っても、私達はそれに手を加える事は出来ません。自身をラスボスに作り替えるなんて事は出来ないんです」
「それじゃあ、麒麟の精霊化は元々アイツに付いてた能力ってことか！？」
泉の精は頷く。それは大きな情報だ。自我を持った奴らは予想外

の動きはするけど、能力や力が向上する訳じゃない。既存のシステムに沿ったままなら僕らにも希望はある筈だ。
元々ゲームはクリア出来る様に作られてるんだからね。それでも普通は個々で来るモンスターが集団になるだけで難易度は格段に上がるだろう。
周りの獣人系モンスターの群が良い例だ。元から奴らはある程度固まってるらしいけど……流石にここまでじゃないだろう。
手の出しようがない。でもふと思った。こいつら全員に自我があるのか……と。

「そんな訳はないですよ。そんな無闇に自我を持たせたら頭の悪い彼らの事、何をしでかすか分かりません。手綱を付けて引っ張ってるだけですよ。
それにこのＬＲＯの全てに自我を持たせたら流石にパンクしてしまいます。ここの崩壊は望む事では無いですから」

確かに全ての奴らに自我なんて超高度なＡＩが量産されたら幾らなんでもＬＲＯでも耐えられないだろう。それこそ処理落ちとかしそうだ。てか、手綱だと？

「さっきお前システムに手は出せないって言ってなかったか？　それなのにアイツ等には手綱を付けて自由に動かす事が出来る。矛盾してるだろ！」
「例外は居ますよ……どこにでも」

僕の言葉に泉の精は妖しく微笑んだ。それは今まで会話の中だけで見てきた微笑みとは微妙に印象が違う。それはあっち側――敵側の印象だ。例外って言うのは大体予想が付くな。多分――

「あの方……とか呼んでる奴のことか？」

「ふふ、そうですね。あの方……あの方々は特別です。元が違うらしいですけど、後は知りません」

元が違う？　それはどういうことだ？　それに後は知らないっていきなり大雑把になったし……教える気が無い訳じゃなくて本当に知らない事なのか？

そのあの方ってのも全部話す事なんかない訳だしな。あの方か……一体何者なんだろうか？　システムやプログラムに介入出来てそれを自由に操作出来るのならこれ以上やっかいな敵はいないだろう。

そんな奴がセツリを狙ってるのなら大ピンチだ。でも当夜さんが言ってた「システムが手放さない」とは矛盾が生まれる気もするな。

あの方は元が違うのならなんでＬＲＯのシステムが適応されたようにセツリを狙う？　それとも根底はやっぱりＬＲＯのシステムに沿ってるからなのか？　これは自分の目と口と耳で確かめるしかなさそうだ。元が違うってなんだよそれ。

「なんだか暗くなって来てませんか？」

小さな声で少し脅えた感じにそう言ったのはシルクちゃんだ。言われて辺りを見回すと確かにフィールドを形作ってた電撃の柱が薄まり出してる。それに伴って自然と辺りを照らす光も薄まってるから暗くなったようだ。

みんな普通にしてたけど不安がらない訳がない。だって僕達はこの森を無事に出られるか分からない。というか、出れない確率が高いんだ。

完全に取り囲んでいるモンスターの数は最早数えたくもない。きっと誰も数えてなんか居ないだろう。暗い現実は見たくないからね。

転移結晶があれがどうにかなったかも知れないけど、あれは麒麟に砕かれた。実は二個ありました――ってのを期待したい所だけど、かなり高価な物だって言うしそれは期待出来ない。

現にあるんならここでセラが出し惜しみする理由なんて無いからね。

「くぴー！　クピィィィ！！」

桜色の鱗を持ったピクがこちらを睨みまくるモンスター共を威嚇してる。羽を精一杯広げて、それはきっとシルクちゃんを守ろうとしてるんだろう。

その姿はなんだか勇気をくれる。小さなピクが一生懸命主を守ろうとしてるんだ。僕達も諦める訳には行かない。ＨＰは全快だけど精神面の疲労は決してとれる訳じゃない。だけど弱音は吐けないよ。実際だれも吐いてない。

やっとで勝ち取った勝利を流されたくはないし、みんなそれぞれ自身の知恵を絞ってる所だろう。

「確かにフィールドは消えかかってます。お喋りはこのくらいにして始めましょう」

そう言うと泉の精はシャボン玉みたいなので包んでいたシルフィングを泉に沈めた。そして促す様に僕を見る。僕は今度こそ手の中の『雷精の角』を泉に落とした。

すると泉がその有りようを変えていく。緑だった水は七色かそれ以上に増して雷精の角の影響か水面を突き破って空中にまで白い雷が何本も噴出している。

電気のスパークする音が耳を強く刺激する。インクや絵の具を筆で混ぜる様に泉の色は混合していく。最後には白か黒になるのだろうか？

そう思って見つめていると後ろから「綺麗」やら「おお～」やら「ふ～ん」といった声が聞こえた。どうやらみんな始まったシルフィング復活に興味津々みたいだ。

当然だね。そのためにみんながんばってくれた訳だし。その時、泉を見つめる精が声をだす。

「まだ足りません。貴方の砕けた輝きはこれだけでは無いでしょう。犠牲には救済を……これを成してくれる為に犠牲になった輝きをここに」

「犠牲になった輝き……」

それはきっとニーベルだろう。やっぱりウエポンアライアスは一つの武器が砕ける仕様になってるのか？　でなければこれは自我を持った泉の精の慈悲なのか。

だけどどちらでもよかった。たった一回だったけど、ニーベルをこのままにして起きたくはなかった。だってこいつも自分が願って、そして起こしてくれた奇跡みたいな物だから。

それはとても短かったけど……全然上手く使ってやれなかったけど……それでもやり遂げてくれたもう一つの相棒だ。

僕は砕けたニーベルを鞘ごと腰から引き抜いた。その時横から顔を出した鍛冶屋が聞いてくる。

「犠牲？　お前ニーベルをどうした？」

なんだか嫌な予感を感じたのか鍛冶屋の顔には青い縦線が見て取れる様だ。てか、知らなかったのか。そう言えば折れた瞬間は鍛冶屋自身が作った高い壁に阻まれてたから見てないんだ。

どうりで今まで触れなかったはずだ。知ってたら真っ先にその事を取り出す筈だもん。さてどうするか……でももうしょうがない。世の中には知らない事が良いって事も多々あるけど他人の興味は防げない。

「ごめん、鍛冶屋――」

僕は真っ直ぐに鍛冶屋を見つめる。有る意味それで鍛冶屋は悟ったのかも知れない。でも僕を責めようとはしない。まるで次の言葉を待ってるかの様に握りしめた拳を震わせている。
やばいな。ここはあまり深刻にいかない方が良いかも知れない。これ以上、鍛冶屋の愛する武器を事も無げに「折った」なんて言ったら鍛冶屋の自信が喪失するかも知れない。僕はそうとっさに判断した。
なるべく明るく、重くいかずに、意気揚々と言ってみよう。

「折れちゃった――ごはぁ！」

殴られた。その勢いで勢い良く泉に落ちる。そして片手しか無く、元々泳ぐためにはスキルがいるらしいＬＲＯでそんな物持ち合わせてない僕は溺れる溺れる。

「死ね！　死ね！　貴様は一番武器を侮辱してる！」

ゲシゲシと何とか出す頭まで蹴られる始末。本当に殺されそうだ。しかも街の外だからＨＰもちゃんと減っている。

「ごばぁ……待て……鍛冶ップハァ屋……助け……」

これは不味い。鍛冶屋は怒りで加減を見失ってる。今の鍛冶屋には何を言っても無駄だろう。だからといってこの拷問を受け続ければ死んでしまう。僕は他の二人に助けを求めるしかない。
そして目が合ったのはセラだった。本当なら優しく一生懸命なシルクちゃんを希望する所だけど贅沢は言ってられない。
僕はニーベルを離した右手をセラに向ける。元々この泉にニーベルは落とす予定だったしいいよね。別に自分の命と天秤にかけたわ

けじゃないよ。
　するとセラは鍛冶屋の横に来て、膝を折って屈んでくれた。おお、意外にも普通に助けてくれるのか？　と思った僕は甘かった。いや、手を掴んでくれたまではよかったんだ。だけどその後の行動がおかしかった。

「え～と、こっち側だから――って暴れないでよ！　やりにくいでしょ！」

　現状はこうだ。鍛冶屋に頭を泉に沈められそうな状況の中、捕まれた腕は拳の先一つを伸ばされて表示された文字列をプッシュしなんだか見覚えがある紙に署名させられようとしてるんだ。
　というか、この状況で暴れるなと言うか？　それは「死になさい」と言ってる事と同義だぞ！　てか、その紙はアレだろ？　自分の口からは言いたくないアレだ。

「奴隷契約書が濡れちゃうじゃない！」

　言っちゃった。てかやっぱりそれか！　もう二度と見ることは無いと思ってた物を最低のタイミングで出すんじゃない！　それもねつ造だ！　いや、この場合は僕の指でやってることだからねつ造ではないのか？
　いや、んなわけない。これは立派なねつ造だろ。映画とかである悪い奴らが本人の指や眼球を切ったり抉ったりしたのを使ってセキュリティを抜けるのと同じ事だ。
　やっぱりセラはセラだったんだ。こいつにただで助けを求める事自体が間違いだった。

「ぬぼばぁぁ！」
「きゃあ！　――あっ、逃げられた。後一文字だったのに」

まさに間一髪だった。腕を勢い良く引いて何とか脱出した僕にセラのそんな言葉が届いたんだ。こうなったらもう助けを求められるのは一人しかいない。
いや、元々一人しかいなかったのかも知れない。僕は必死にそんなたった一人の天使に手を伸ばす。

「シルック……バフッ……ちゃっん！」
「スオウ君！　捕まって！」

天使の様なシルクちゃんは何も躊躇わずに僕に向かって手を伸ばしてくれる。ああ、これだよ。この優しさが僕は欲しかった。セラとは大違い。月とスッポンだな。
彼女の白魚の様な手に向かって必死に腕を伸ばすけど、さっきセラからの脱出で僕は地面から少し離れてしまってた。そのせいか絶妙な感覚で僕の腕はシルクちゃんに届かない。
拳一個分……そう拳一個分なんだ！　そこで危機的状況下で冴え渡った僕の頭は閃いた。一旦腕を伸ばすのを止めてウインドウを表示させる。
そしてアイテム欄へ指を滑らせて指定した一つのアイテムを手元に表す。そして僕は勢い良く腕を伸ばした。

「がぼっ――がぼぼばぁぁぁ！」
「スオウ君！」

そして今度こそ二人は繋ぎあった。届いたんだ僕の腕は……そう文字通り僕の腕が拳一つ分を埋めてくれていた。構図は僕の腕の先に僕の腕だ。僕はアイテム欄から『スオウの腕』を出して握って伸ばした訳だった。
これで助かった……そう思ってシルクちゃんの顔を見やるとなん

だか顔色が悪い。真っ青してる。そして視線はある一点で固定されていた。それは僕の腕を掴む彼女の手ら辺だ。
そして猫がするような身震いみたいなのが繋がった腕から全身へと走って広がる。そして――
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！」
――大絶叫と共に僕の腕は振り払われて顔面に吸い込まれた。そして世界が暗転していく。もう僕は戻れないよ。沈んでいく体を自分ではどうする事もできない。
そうだった……シルクちゃんはちぎれた腕をとっても怖がってた。こうなることは目に見えてたんだ。そこまで頭が回らなかった僕が悪い。
その時、声が届いた。水の中なのにやけにはっきりした声だ。
「あはははは、面白い事やってるね。本当に君ってゆかいだね～スオウ☆」
（――誰だ？）
やけに陽気な声。声質からして女だとはわかるけど聞き覚えはない。だけど向こうは僕を知っている？　声は出せないから僕は胸の内でそう呟いた。
聞こえはしないだろうと思ったけど声はたやすく返ってくる。
「う～ん誰だろうね？　すっごい美人のお姉さんって言ったら興味持ってくれるかな？　な？　うふふふ、私すっごく気分が良いんだ☆　なんと目的を一つ達成しちゃったので～～～す！」
（なんだよ目的って？）
軽くウザくなりかけてるけど興味が無い訳じゃないから聞いてみ

る。だってそもそもこの状態の僕にどうやって話しかけてるんだこいつ？　イヤな感じだ。声とは裏腹に。

「うふふあはははは！　教えな～い☆　自分の目で確かめればいいわ。でもヒントは一つだけあげる☆　お姫様は叫んでるわ「助けて」って、ね。だから早く来て勇者様☆」

（――っ！！）

水の中に大量の泡が浮かんでは昇っていく。それは僕の動揺を表してた。奴が言った意味はまさか！？

「あはははは、それじゃあねスオウ☆　いっぱい面白い事をしましょうよ。ああそれと、腕も治してあげてねイズミッチ☆　楽しさ半減つまんないぞ☆」

「ご心配なく。落ちた物は蘇らせます。それがこの『復活の泉』ですから」

「うんうん良い子は大好き☆　アデュゥー！」

そう言って一方的な言葉は消え去った。最後に言葉を出そうとしたけど別の方に行ったからそれは出来なかった。てかイズミッチって泉の精の事か？　悲しいな。

心の根っこにさっきの奴の言葉が引っかかる。これ以上モタモタしてるわけにはいかない。自分の目で確かめなければ。

僕の切られた腕に光が灯る。なるほど復活の泉か……その名は流石伊達じゃない。

「これは私の期待です。普段はただじゃ無いですよ」

（そっか、ありがとう）

別に言われたからではないらしい泉の精に、聞こえたか分からな

い感謝を表す。そして腕は繋がり、底にたどり着いた時にはその両手に輝く何かが現れていた。ＨＰがやばい。そして上の光が見えない。僕は剣を凪ぐ、すると泉の水が呼応して天に昇った。
弾んだ泉の水に照らされて浮かび上がるは青に一筋の銀が入った流星の様な刀身。それが誕生した新たな剣

『セラ・シルフィング』

新たな力（後書き）

第四十八話です。
物凄く遅くなってごめんなさい。なんでこんな事になったのだろう……遅くなる腕を止められない。まあ、でもこの話もようやく折り返し地点です。頑張ります。

壊れかけの冒険者（前書き）

俺はもう駄目だ……何も出来ず、何も守れず、何も救えない。一体自分に何が出来るんだろうと考えて何も浮かびはしなかった。自分には何もない……だけどその時、残っていた与えられた力を見つけた。証明しようと思った。

それですべてが終わる。目の前にちょうどいい相手も来た事だしな。

壊れかけの冒険者

（セツリ！　駄目だ！　行くなぁぁぁぁ！）

その叫びは結局出てはこなかった。俺は何も出来ずに消え去る彼女を見つめる事しか出来なかったんだ。いや……実際には俺はそれを見てもいなかった。いられなかった。

あの時、どちらを選択するか……その答えは同じだった。時間制限があるアイリと、比較的友好的に接せられるセツリ。それだけでどちらを選ぶかは明白だ。きっとセツリなら連れ去られても大丈夫だろうという思いが心に浮かんだ。

それに黒く塗りつぶされる様になっていくアイリを見てるのは辛すぎだ。だから俺は安心したんだ。あの時……セツリがその身をす犠牲にする決断をしたとき……俺は心の中でホッとした。

だから最後にセツリをみれなかった。見る資格が無かった。俺は自分を情けないと思った……だけどここにはもう、俺を避難する奴も罵倒する奴も、ましてや励ます奴も残っちゃいなかった。

ただちっぽけな、アリンコの様な自分が地面の数十センチの盛り上がりを作って震えているという事実だけが土の味を噛みしめて伝わってくるだけだ。

本当にそれは……きっとどうしようもなく情けない姿だったろう。俺は何で言えなかったんだ。

「必ず助けるから、アイリの為に犠牲になってくれ」

――てさ。そしたらもっと何かこの気持ちは違ったのかも知れない。セツリを犠牲にするのは変わらないけど、そこには目に見えない信頼関係があったはずだ。

彼女は信じて同じようにしてくれただろう。だけどきっと……そ

うしてれば表情は変わったと思う。もっと強く信じれた筈だ。でも、俺は何も言えなかった。
それがきっと本心だったからだ。犠牲にするだけじゃなく誰かも救うことも俺はそれで出来た筈だった。だけど俺が選んだのは安易な犠牲だった。誰かがそうしてくれるのを待って、期待して、胸をなで下ろした。
自分の大切な物の為に二つを犠牲にした。一つは勿論、あんな事を言わせたセツリだ。結局彼女はアイリの為にその身を捧げた。
そしてもう一つが、そんな彼女をアイツから任された信頼だ。スオウは俺なら大丈夫と判断した筈だった。でも結果はこの有様。
言い訳なんて全てが虚しく……胸を張れる事も一つもない。結局俺は、負けたんだ。その言葉が目の前で回ってた。

「ク〜、クック〜」

弱々しい声が憤りを覚えかけていた俺に届く。首を回してそこを見ると一匹の白いフクロウの姿があった。それはクーだ。
同じようにぐったりしたクーはそれでも俺に何かを伝えようとしている。

「ああ……そうだな」

体を茶色に染めながらクーは短い足である場所を目指していた。その先にはカーテナから垂れる黒い物に飲み込まれそうなアイリの姿。
そうだ……せめて、アイリをちゃんと救わなきゃいけない。その思いをクーは思い出させてくれた。
折れた心を拙い決意で裁縫して、俺もクーを見習って再び地面を這った。その時俺は気付いた。自分の瞳から流れ出る物を。
それは熱くて……今のどうにか繋げてる俺の中の熱を全て持って

いきそうなほどだった。だから俺はそれを認めない。歯を食いしばってこれ以上流れでないようにした。
でも今度は口の中に砂利っとした音が広がって土の味を伝えてくるんだ。それは分かりやすすぎる屈辱と敗北の味。

「――かは――ごはっ――ぐえっ……はぁはぁ」

喉をせり上がって来るような吐き気が襲った。体が勝手にそれを忘れさせようとしたのかも知れない。無かったことにするために口の中を別の味で満たしたんだ。
だけどそれはもっとイヤな味だった。これはゲームだから別に食った物が出てきた訳じゃない。地面に広がったのは見た目は大量の涎だ。
だけどそれは酸っぱくて……口の中にひたすら不快感を残す物だった。胃液までＬＲＯは再現してくれたらしい。
立ち止まりそうになる。こんな自分じゃ無くてもと、心のどこかの自分が囁く。お姫様を助け出すナイトにはなれない事を俺は知ってるから。

「くー！　くっくー！」

だけどまたまた響くクーの声。今度は本当に俺を呼んでるかの様だった。情けない顔を上げて前を見ると、既にアイリまでたどり着いたクーが必死に立ち上がろうとしていた。
アイリの体を使って拙い動作で……でも必死にクーは立ち上がろうとしていたんだ。でも傷のせいか途中で何度も何度もずり落ちてしまう。
地面にポテンと倒れてしまう。でも、クーはそれでも諦めなかった。俺は自然と手が前に出ていた。地面を力強く握りしめお荷物になった体を引っ張っては、再び腕を前に伸ばす。その作業の繰り返

し。
俺もクーも何度も同じ事を繰り返した。するとついにクーはその白い体を持ち上げ、力強く羽を広げて見せた。そして俺も気付く。いつの間にかアイリが目の前に居ることを。
どうやら俺は、クーに引っ張られたみたいだ。弱く、情けない俺をきっと見かねたんだろう。

「ありがとう、クー」

もうそれしか言えない。クーは何の事やら？　みたいな感じで首を捻ってるけど、間違いなく俺がここまでこれたのはクーのおかげだ。そしてセツリのおかげ。
あの、何も出来ないお姫様が勇気と決意を持って選択したからアイリは今、ここに居る。俺の手が届くこの場所に。黒く落ちかけているとしても、触れたら分かる感触があった。
情けなさすぎる自分……ふがいない自分……そのせいで間違った。いつも俺は、それに気付くのが遅いんだ。もっと素直に行動できたらいいのに……もっと素直に感情を出せたらいいのにな……スオウみたいにさ。
アイツは思いついて行動するまでがとてつもなく早い。脳と体が直結してる。後悔をする前に動けがアイツだ。そして俺は後悔をする位なら動くなを選択してしまう。だから俺は気付いたときには遅いんだ。
それがどれだけ大切でも、いつの間にか手が届かない場所に行っている。阻まれる。そして無様に足掻いた時には遅くて……結局後悔するんだ。
何度、同じ事を繰り返すんだろう……何度繰り返せば同じ過ちをしないように人はなれるのだろうか。後悔は今も俺の胸を裂き、皮を剥いで心に痛みを刻む。それは決して忘れられない痛み。そう昔も思った筈の痛み。

俺は上半身だけでも力付くで持ち上げた。そして体が重なる様になりながらも、アイリが握るカーテナへと腕を伸ばす。そして黒い物を吹き出し続けるカーテナをその腕から強引に引き剥がした。
すると瞬間、途端に黒い影か墨の様な物は空気に溶ける様に消え去った。現れたのは変わりないアイリの姿だ。

「アイ……リ」

消え入りそうな声で囁いた彼女の名前。それ以上の声が俺には出なかった。目を開かない彼女を抱き寄せて、その頭に顔を埋める。
そして何度も名前を呼んだ。小さな声で……沁み入る様に。このＬＲＯは頭だけは絶対に変わらない自分だけのものだから。そこだけは変えようがない唯一の場所だから、一番近い場所で呼び続けた。
届いて欲しい……目を開けて欲しい……許してくれとは言わない……でもそれだけで自分の情けない行いに意味を持たせたかったのかも知れない。
懺悔だったのかも。犠牲にしたセツリの為にも、信頼を裏切ったスオウの為にも、俺はアイリに目を開けて欲しかった。大丈夫……その言葉を聞ければ少しは救いになるとでも思った。
でもそんな思いの言葉は届くはずも無かったんだ。結局は俺はアイリを使って逃げ道を作ろうとしてる。何も変わらないまま、俺はまた逃げようとしていた。
アイリが小さく息を吐いては吸う音だけが俺の耳には届く。苦しむ様子なんて微塵もない、本当に安らかな吐息。きっと俺は今、世界を自分とアイリだけで構成していた。
ヘタレな俺には図々しい考え方。だからそんな時間さえ直ぐに終わりを迎える。世界が全てを俺から奪っていく。そんな音が迫っていたんだ。

「クー！　クー！」

ようやく聞こえてきたそんなクーの警告音。実はずっと発してたのかもしれないが偽りの安らぎと懺悔を繰り返してた俺は気付かなかった。
そして続いて届いたのは大量の足音。余りにも多すぎて地響きかと思った。もしかしたらこれもずっと前から聞こえてたのかも知れない。
そして黒甲冑の軍が俺とアイリを囲んだ。警告音が頭に響く。イヤな奴が近づいてくる感覚を本能的でも悟ったみたいだ。
そしてまさにその通りに奴は現れる。囲んだ軍が綺麗に割れてその先から白い騎士服に身を包んだ奴らが見て取れた。

（親衛隊……）

それはガイエンが集めてた直属の部隊。アイリを警護する役目を担うとかなんとか大義名分を掲げた奴の犬。そんな奴らが軍の中を歩いて、俺の斜め左右に並んだ。
そして最後にガイエンがその身を表して俺の所まで歩んでくる。そして周りを何気に見回してこう言った。

「これはこれは、随分と派手に暴れ回ったなアギト。軍もかなりやられたようだ。流石だな貴様は」
「――っ！！」

俺はガイエンを睨み据えた。こいつの事だ、何があったかなんて知らない訳がない。それなのにこんな事を……いや、これさえも奴は利用しようとしてる。
ここであったことは軍の末端までは伝わってないらしい。カーテナに寄って倒された彼らがそんな直ぐにまともに話せるようなるとは思えないし、それさえもガイエンは押しつぶすだろう。

俺は奴に寄って犯罪者に仕立てられた。これだけの事が出来る事がないのに……無駄な栄光がそれを可能にさせるんじゃないかという疑いを軍に蔓延させている。
「返して貰おうか、我らが姫を。犯罪者と成り下がったお前に深く絶望するかも知れないが……そこは心配するな。私が新たなる騎士として彼女を守っていこう」
掲げられる長剣。そしてその言葉の後に沸き上がった轟く様な歓喜。それらは全てガイエンに向けられていた。

「いや、今までも私が守っていたんだったな」

いびつにつり上がった口元。そこには高尚な顔なんてなかった。だけど誰も気付くことはない。軍の連中は親衛隊によって視界を遮られてるし、何よりガイエンは一番前にいる。
俺にとっての皮肉の言葉を紡いだガイエンは心底楽しそうだった。確かにもう、詰んだ状態なのかも知れない。
セツリがその身を差し出してまで守ったアイリはあっけなくもう一つの敵の手に落ちるのかも知れない。俺は自分には何も出来ないと悟っていた。
周りはもう何一つ、俺に期待はしてないだろう。犯罪者に落ちた俺を、周りは新たな英雄が切り伏せるのを楽しみにしてる。でも、それでいいと思えた。
だけどそれは勿論、アイリを潔く渡すと言う意味じゃない。期待されない自分でいいと言うことだ。
お姫様の騎士も始まりの騎士も勝手に付いてきた栄光も……そんな全部が剥がれ落ちて、ちっぽけな自分が晒されてただのアギトになっている。

「大人しく渡せアギト。お前の居場所はここにはない。今度こそしっかりと永久追放してやる。気まぐれで戻ってこれないようにな。

その方がアイリ様も幸せだ」

掲げた長剣を俺の眼前に突き出すガイエン。威嚇……なんかじゃないそれは警告・脅迫の類だ。後ろ盾は国という大きな力。対する俺は我が身一つ。

何も守れず、打ちひしがれかけているエルフ一匹だ。けれど諦めきれない余った力がこの身にある……この場合はどうすれば良いんだろうか？

俺は右手を振ってウインドウを広げた。抱きしめていたアイリを粗末な地面に優しく寝かせる。勿論少し後ろに、巻き込まれ無いようにだ。

「この後に及んでまだやる気か？　無駄な事だ。そこまで耄碌したかアギト」

呆れた様な声を出しながらも顔には爛々とそれを受け取る用意がガイエンには出来ていた。こいつは俺を倒したいんだ。こんな俺をさ・・・

「くっく……はははっはははははあ！！」

背中を向けたまま俺は大いに高笑った。きっと俺は壊れたんだとどこかで自覚していた。そしてアイテム欄の奥から二つの装備を引っ張り出す。

「良い選択だ」

その装備を見たガイエンがそう呟く。そうだろうな。こいつならそういうと思った。俺は右手に体を上回るほどの大剣を抱え、左手には輝く大きな盾を握っている。

俺は立ち上がりガイエンが向けている長剣と自分の刃を強引にぶつけた。辺りに響く金属同士の悲鳴の様な高鳴り。だけど俺たちはどちらも笑っていた。
奴の悪趣味な顔を言えない様な顔に俺もきっとなっている。だって俺は壊れてるから。奴と同じかそれ以下にまで落ちようとしてる。
それを自分で選択した。

「お前が正義が悪かなんてもうどうでも良い……ただ、俺の証明につき合えよ！」
「ふん、何をそんなに証明したいのか知らないがな。別にやぶさかではない。私もただ、貴様を追い出すのはつまらんと思ってたところだ！」
二つの言葉がぶつかり合う。その様子に周りはざわめいて武器を構えだした。別にそれでも俺は構わない。ただ俺は目の前のこいつを……だけどそれをガイエンは沈める。

「やめろ！　武器を引け！　こいつとは私一人で決着を付ける。騎士の名の下に我ガイエンは貴様に決闘を申し込もう！」
「なっ！　ガイエン様それは！」
軍の連中も相当ざわめいてるけど、親衛隊の方が何故か動揺している。こちらにとってはどうでも良いけど、目の前のこいつにこだわりがあるのは俺も一緒だ。そして決闘の申し出があったことを告げる内容がウインドウに表示された。
【プレイヤーガイエンから決闘の申し出がありました。ルールはパターンBを適応。先にHPが七十五パーセント未満なった方が敗者となります。装備の交換は自由、アイテムの使用は禁止です。スキルに制限は有りません。

この条件が呑めない場合はこちらから条件を提示する事も可能です。その場合は交渉を選択してください。
この条件で決闘を受けますか？　ＹＥＳ・ＮＯ】

何とも手際の良い奴だ。俺はそう思った。前に佇むガイエンを見据えると挑発的に唇が動く。

「逃げるかアギト？　お前はそれが得意だからな。私が追い出した？　引き裂いた？　全てはお前の被害妄想だ。逃げたのは貴様で、逃げきれなかったのも貴様だ。
ここらで絶つとしようじゃないか。わざわざ対等にしたんだ。これでも逃げ出すか？」
「くっくくく、はははははははは！　逃げ出す？　もう俺にはそんな場所どこにもねーよ。全部無くした……いいや、これから無くすんだ」

俺は決闘を受諾した。狂気が混じった様な笑い声を響かせてそれが望む事だ。言ったようにもう、逃げる場所なんてない。
どうやってあそこに戻れというんだ。セツリを守れもしなかった自分がどうやってスオウの前に行けるだろうか。決闘フィールドが形成される。俺たちの立つ位置の中心から円上にそれは広がる。それは動けないアイリやクーを守ってくれるだろう。決闘対象者以外にはその攻撃の効果が届かない様になるフィールドだ。

『決闘』――それはＬＲＯにおける対一戦闘の形式で、ライバルが腕を競い有ったりするときによく使われる。後は時たまある、バトル大会とか……喧嘩とかレアアイテムの争奪が泥沼化した時とかも決闘の出番だ。
条件を提示して、双方の合意の元に行われる決闘はとても格式高い物としてこの国では扱われてる。特に騎士同士の決闘は花の行事

並だ。
そして騎士同士の決闘はお遊びでは行われない。それは正真正銘の真剣勝負。お互いの誇りをかけた物なんだ。
だけど、今の俺にそんな誇りはない。ただあるのは――
「お前は気に入らなかったんだよ！　ガイエン！」
「奇遇だな！　私も心底貴様が嫌いだったさ！　アギト！」
【デュエルスタート】その文字とラッパの様な音が吹き荒れると同時に俺たちは動いた。そんな怒号と共に。一回目の武器の撃ち合いで空気は震え、二回目の武器の重なりで大気が弾けた。
俺たちはどちらも手の内を知っている。得手不得手までをも知り尽くしてる。特定の色のエフェクトを武器が纏えば何が次に来るかは予想が付く。
ガイエンは俺の大剣と盾の二段構えの攻めを焦らず受け流しその隙間に長剣を滑り込ませて来る。けれど俺は奴の長剣から放たれる剣技をそこまでの動作で絞り込める。
そしたら盾で防ぎ、あるいは刹那でどう動くか判断して大剣を振るう。
三回目の交錯でようやく俺は奴の体を武器ごと弾く。武器で戦うと言うよりも盤上で推理戦でもやってるかの様な感覚だった。ガイエンの一挙一動を見てるとあの頃の光景が重なるように頭に鮮明に奴の技を伝えてくれる。
「こんなもんか！　こんな物かよガイエン！　それなら俺だってやれるじゃねーかよ！　そんなわけねーだろ！」
よくわからない事を叫んでると自覚はあった。だけど止まらない。茹だったように頭は色々な物を流し込んでくるんだ。いや、吐き出

してるのかも知れない。
そして弾かれたガイエンは一度唾を吐き出し長剣をこちらに向けて言い放つ。その顔をいつもの何十倍にも歪めて。
「こんなもん……だと？　それはこちらの台詞だ！　貴様はこんな物か！　そんな軽い剣をいつから握った！」
再び辺りに連続した金属のぶつかる音と、同時に弾ける様々なエフェクトが浮かんだ。俺たちは少しずつ、でも確実に相手のＨＰを削っていく。本当に同じくらいのペースでだ。
「軽いさ！　俺の剣はいつだって軽かった！　お前は黒過ぎんだよ！　真っ黒な野望を剣から滲みださせやがって、その野望も全部、ここで打ち砕くぞ！　それは、俺には出来る事かあぁぁぁ！」
ガイエンの放った十二連撃を強引に俺は盾を付きだして防ぎ、そして大剣を真っ直ぐに突き刺す。それを体を回転させて剣に沿う様に交わした奴はその勢いのまま俺の側面を切り捨てに狙う。
そしてぶつかる長剣と盾。纏った黄色いエフェクトは本物じゃない盾をその場に出現させてくれたんだ。そして突きだしていた剣の腹でガイエンを払った。
「「ガイエン様！」」
周りからのそんな声が耳をつんざく様に聞こえる。暗躍してきたお前もこんな所で終わりかと思った。だけど地面を転がったガイエンは酷く不適な笑みを称えていた。
「フハ、フハハハッハハ！　……つまらんな。つまらん奴に貴様は成り果てた様だアギト。そんなに証明したいのなら教えてやろう

！」

奴は何の策も労せずままに俺に向かってきた。ただそこには倒されるなんて思ってもない顔を張り付けて。俺は首を取るつもりで剣を振る。その顔に一瞬何かを感じた。それは恐怖かも知れないし、憤りだったかも知れない。

避けようともしないガイエンは直前で長剣を無造作に構えてそれを受けた。すると当然、長剣は音を放って折れ去った。

だけどガイエンは飛ばされた先で何かを拾って立ち上がる。そして周囲に響く悲鳴の様な声。大量の子供の叫びの様だ。そしてその中でガイエンは呟く。

「貴様は全てを無くす。まさにその通りだ。何も守れもせず、救えもしない奴より、私の野望は高尚だ。聞こえるだろう我を認める祝福の叫びが！」

「何が祝福だ！　お前はここまで……俺はまだやれるじゃないか！」

俺は飛び出した。最後の一撃の為に。だけど奴は腕を掲げて言い放つ。その手には悲鳴を発する謎の指輪がある。

「リア・ファル、これは王を選定する。その意味が分かるか貴様に？　だらけた貴様のおかげだよアギトォォ！」

ガイエンが拾い上げた物を左腕で突きだした。それは王剣カーテナ。アルテミナスを統べる力が今、ガイエンに握られた。

壊れかけの冒険者（後書き）

第四十九話です。

いつも通り遅くなりました。なんだかもう当たり前すぎてこれが普通？　みたいな。まあ、実際はこれでもきついんですけど。まあ、なんとかやって行きたいと思います。見捨てられない限りは頑張ります。

私の観察（前書き）

私は泉を見つめました。だけど何も見えません。彼、スオウ君はこの泉に沈んで行ってしまいました。どうしてでしょうか？　私のせい？　えっと……やっぱりそうなのかな？　でもでも、弁解もさせて欲しいよ。

結果は私だけど、原因は違うと思います！

でも今更、ここで弁明してる暇はありません。早く助けないとスオウ君死んじゃいます。だけどその矢先にフィールドは消え去り、再び立ちこめる闇。その時、泉の水が空へと昇ったのです。そして現れたのは新たな力を手にした彼でした。

私の観察

お恥ずかしながら、私はシルクです。周りからは自主性がないとか、協調性がないとか言われます。でもそれは違うと思うのです。

周りが強すぎるだけです。美人すぎるフワフワ髪のお姫様とかそれの付き添いの巫女さんとか、最近加わった今隣の隣にいるメイド服暗器使いのツン〇レちゃんとか。

セラちゃんの場合デレがあるかは微妙だけど、時折スウオウ君にはそれっぽいのは見せます。最初に会ったときのアギトに対するデレっぷりは凄かったけど、あれは演技ぽかったです。

実際の所はわからないけど、スオウ君に対するのが一番自然っぽい気が私はします。今も複数の絵の具が混じり合った様な泉の中を心配そうにのぞき込んでいるのです。

だけど光と色の混じり具合で中を覗くことは出来ません。ここにはついさっきスオウ君が沈んで行ったのです。それは反省ながらも私のせいでも有ります。

（うう……やっちゃったな）

私が彼の救いの手を払ったのです。もう、まさしく呼んで字の如くの事をしました。スオウ君が私に届かせる為に継ぎ足した自分のちぎれた腕……私はああいうのは苦手です。

ゲームという仮想空間なんだからあれは本物じゃない！　そう思うおうとしたけど、ＬＲＯの表現力はそんな思いを断ち切るのです。五感に訴えてくるのです。何故か未だに血が通ってる様に暖かな腕……それにスオウ君はあの時気付かなかっただろうけどハッキリ言いましょう。

動きました！　あのちぎれた腕、私の手を握り返してきたんです

！　これで気持ちがらずに振り払わない女の子はいません。握った腕から悪寒が這い上がって全身にくまなくその感覚が巡ったときには私はその腕を恐怖で振り払っていました。
理性や思考は断ち切られ、それは反射の出来事。隣の鍛冶屋さんもその隣のセラちゃんも私のやったことを口を半開きにして見てました。
いやいや、二人はもっと滅茶苦茶な事してたよ。ねえピク。

「くぴ～」

肩に乗る桜色の小さな友達に私は同意を求めます。私だけの、この中だけのとっても綺麗な友達です。ピクは私の絶対的な味方。
だけどあの時、一番傷ついた顔をしてたのは何を隠そうスオウ君でした。彼は何故か私に絶対的な信頼を寄せてる気がします。そんな良い子じゃないのに……私は普通に普通な子だよ。
振り払った腕はスオウ君の顔にぶつかって彼と共に沈んでいきました。

「う～ん、流石にやばいか？」

現状を鑑みて鍛冶屋さんがそんな神妙な声を出します。う～ん、それも今更ですよ。ＬＲＯはスキルが無いと泳げない……訳じゃないです。
実を言うと普通に泳ぐ事はスキルが無くったって出来ます。当然でしょう。体一つで出来る事はＬＲＯは大抵出来ます。ただスキルがあるとリアルでは出来ない事が出来る様に成るわけです。
もの凄い流れの中でも泳げたり、深海に生身一つで行けたり、もっと単純に水中で息が出来るスキルなんてのもあります。下半身だけ魚の様にするとか、つまりは人魚に成るスキルがあれば魚の様に水中でも動けます。

だけどスオウ君がそんなスキルの数々を持ってる訳が有りません。ここまで来れたのが不思議な位に彼はスキル少ないですからね。
殆ど奇跡です。彼は奇跡を続けてます。でもそれは彼の諦めない姿勢や、困難に立ち向かう勇気の延長線上の様な気もするのです。
奇跡は続かないから奇跡であって、続く奇跡とは実力と捉える事も出来ます。私は混濁する泉を見つめて立ち上がります。でも同時にもう一つ立ち上がった陰が有りました。

「私が行くわ。あのバカ！」

そう言ったのはセラちゃんです。彼女の表情はなんだか複雑。瞳を何回も瞬かせて、首を振ります。何かと葛藤でもしてるのでしょうか？
それを知る術は私にはありません。でもやっぱりスオウ君をなんだかんだ言っても心配してるのは分かります。けれど彼を沈めちゃったのは私だし、セラちゃんを水浸しにするのは気が引けます。

「ダメですよ。私のせいだから私が行きます」

そう言ってセラちゃんを私は押しとどめました。私だって有る程度の泳ぎスキルは持ってるから、この小さな泉位なら楽勝です。必ず引き上げて見せましょう。

「う……でもシルク様。それなら私達の悪ふざけのせいですから、私とそこの武器マニアの方が罪はあります。なのでシルク様はここに居てください」

武器マニア――鍛冶屋さんに更に名前が増えている。と、言うか私達は彼の名前を知りません。彼は会ったときから鍛冶屋だったのです。そう呼ばれてました。

何故か彼も自身の名前を言わないし、それが私達にも定着したんです。
次第に暗さを増していく作られたフィールド。時間は刻々と迫ってきています。そして何のスキルを持たない水の中で、スオウ君のＨＰも刻まれているはずです。
セラちゃんは私に罪はないと言ってくれました。じゃあ、自分ではそれを感じてるのかな？

「セラちゃんは優しいね」

口をついて出てきた言葉に彼女は狼狽えます。自分に対して抵抗のある言葉だったようで首をもの凄い勢いで振ってガツッと肩を捕まれました。

「シルク様……安易に優しいなんて言わないでください」

なんだろう？　今のセラちゃんはとってもかわいいです。頬を染めてそっぽを向き、唇を僅かに尖らせたセラちゃん。

「とにかく！　私が行きますから！　それでいいですね？」
「――う、うん」

それを言うときには意を決した様な顔で迫られた。そんな迫力に押されて私は首を縦に振る。なんて良い人なんでしょう。
セラちゃんは私のしたことや鍛冶屋さんがしたことも全部ひっくるめて返す気です。総合してプラマイゼロなのにそれを率先してやるなんて良い人の証です。

「あの～俺が行ってもいいぞ」

そんな鍛冶屋さんの囁きは聞こえなかった事にしました。ここまで決意したセラちゃんの思いを折ってはいけません。私としては心苦しいけど、友達にこうも言われたら身を引きます。

ちゃんと心得てますよ。セラちゃんは地面の際に立ってスオウ君が沈んだ泉を見つめています。右手を振ってウインドウを開き、何かを操作する動作。

きっと泳ぐためのスキルを用意してる。だけどその時、私達の前方から声がしました。それは色を混濁させた泉の上に浮かんでいる泉の精から聞こえます。

「やめなさい。無駄な事ですよ」

「無駄ですって？　まだ邪魔する気なのアンタ！」

辛辣な泉の精の言葉にセラちゃんは怒ってる。だけどそれは私も同じだよ。無駄な事なんて無い。そう思える事も明日に繋がる物だよ。

泉の精は私達の様子を見てちょっと趣向する。そしてため息を吐いて再び口を開いた。

「少し、伝わり方に語弊があるようですね。落ち着きなさい。別に彼を助ける事が無駄だと言ったわけではありません。彼を助ける行為が無駄でいらない事だと言ったのです」

「一緒じゃない！　無駄だから、諦めなさいって言ってるんでしょ！？　アンタには今頃ＨＰが尽きたあのバカが見えてるって言うの？」

セラちゃんの声に促される様に、周りのモンスター達の呻きが増す。それは私達を今か今かと食す瞬間を心待ちにしているかの様で恐怖というスパイスが滲み出てきます。

叫び終わったセラちゃんはかなり興奮していて、今にも泉の精に

対して暗器を抜きそうな勢いです。でもそれは困ります。それをやるとどうなるか分からないから。
普通はＮＰＣを攻撃するなんて出来ないけど、今目の前に立つ存在は異常だからどうなるか分かりません。最悪本当に倒せたら、スオウ君が願うシルフィング復活は成し得ないのです。
だから私は取りあえずセラちゃんの手をそっと握ります。熱く成ったものを少しでも冷静な私と合わせる事で緩和するのです。熱伝導って奴ですね。ぬるま湯には成ってくれる筈でしょう。
だけど、結局は私もセラちゃんと余り変わらない考えにしか至らなかったんです。だってあんな泉の精の言葉じゃそう受け取っちゃいます。
でも、もしそれが違うのならもっと具体的に聞かせて欲しい。その言葉の意味がもっと別のところなら。

「どう言うことなんですか？　その言葉じゃイヤな事しか想像できないですよ。伝わり方に語弊があって、助ける事がいらない事って……」
「その通りの意味ですよ。寧ろ手順が一つ減ったので助かりました。心配症な貴方達にはこう言った方が良いのですか？　心配ないと」
泉の精はこともなげに簡素に最後の一言を言った。それを余りにも普通に自然に言うものだから、
「え？　何が？」的な事を心で思う程でした。
けれどそれを聞いてただ素直に安心……する程セラちゃんは私ほど楽観的じゃありませ。そっちの方がきっと正しいんでしょう。だって泉の精と私達は実質、敵みたいな物だから。
そう易々と信じたらいけないのは道理なのかも知れません。
「心配ない……ハッキリとそう言いなさいよ。だけど私は行くわ。敵の情報だけを鵜呑みにしない。私は自分の目と耳で確かめないと

気が済まないの！」

セラちゃんは幾分か落ち着けた心でそう言った。それは最悪の事態を避けるためにも必要な事でしょう。言葉に確証なんてないんですから。だけど私はそこまで出来ません。

言葉でよく丸め込まれてしまいます。もしかしたらセラちゃんの方が分かってるのかも知れないです。今やっている事はゲームであってゲームじゃないってことを。

どんな疑いも有るなら晴らさなきゃいけない。取り返しのつかない事に成るかも知れない人が一名居るんだから。そしてその人は失う訳にはいかないんです。

「はぁ～それだと言葉なんて意味を成し得ませんね。それにいつ私が貴方達の敵に成ったのでしょうか？」

そう呟く泉の精を無視してセラちゃんは泉に飛び込もうとします。当然服を着たまま。ここＬＲＯは衣服や装備に寄って泳ぎが阻害される事は無いのです。

まあ、ただし体が欠落したらきっと泳ぎにくいとは思います。例えば腕を片方失ったりとかしたら、ただでさえ水中に向いてるとは言えない人の体です。泳ぐのがままなら無くなるのは当然でしょう。

「私はただ、ウエポンアライアスを願い通りに発動しただけです。その後もキチンとこなしたじゃないですか。少し仕様と外れた暴走も有りましたけど、私は貴方達に危害は加えていませんよ」

「それが何？　アンタは親玉に従ってるだけでしょ。そんなアンタだからこそ言葉が軽薄なのよ」

「そうかも知れませんね。でも今、異物に入られると困ります。それに他人を気にしてる場合ではもうないですよ」

不穏な言葉にセラちゃんは顔を上げます。そして次の瞬間、私達が死闘を繰り広げたフィールドを形作っていた雷撃の柱が遂に消え去って行ったのです。
光が無くなると最初にこの森に入った時に立ちこめていた黒い陰が染み込む様に伸びてきました。そしてその後ろでは赤く輝く無数の瞳が踊っています。

「くぴー！　くぴー！　くぴー！」

甲高く響くピクの鳴き声は警告音。私達に危険を知らせてくれています。だけどそれを聴くまでも無く、その危険は肌で突き刺す様に感じられました。
だけど奴らは直ぐには襲ってきません。互いに隣同士の奴らを威嚇し合って牽制し合ってるのです。自分が獲物を食らうために先立つタイミングを伺っています。

「おい……どうする？　いよいよ持ってヤバいぞ」

泉に背を向けて周りを伺いながら鍛冶屋さんが私達に尋ねてきます。どうすると言われても、私達にはどうする事も出来ません。
逃げ場なんてないんです。そして勝ち目も今度こそ有りません。それは絶対的な数の差です。一対多数はこちら側がする事で逆をされたらプレイヤーは脆弱です。
ここを切り抜けるにはそれこそ超強力な攻撃で一撃必殺をしていくか、ハイスピードのスキルコンボの連続で波打つように迫る奴らの攻撃が届く前に斬っていくしかありません。
だけど実質それをなせるプレイヤーはいない。一撃で倒すのは出来なくはないかもですけど、タイミングや運が付きまといます。何より、それだけ強力な武器とスキルを持ち合わせた人がここにはいない。

少なくとも一振りで周りの数十体は巻き込まないと、直ぐに後ろのモンスターにやられるでしょう。
魔法という手もあるけどこれだけ大勢だと詠唱が長く強力な魔法は使えません。ああいうのは充実した前衛がいて初めて強力な魔法は活きるのです。
そして反撃を許さないハイスピードコンボ。これは敵の攻撃が届く前に斬る、それだけです。桁外れの早さと、その中での瞬時の判断力が必要で、実質これも不可能です。

「どうするも何も、私達は結局ゲームだから良いですけど……スオウ君は……」

スオウ君はこのゲームと密接に繋がりつつ有ります。そんな彼のここでの死は誰にも予想がつきません。まだ大丈夫なのか、もうダメなのか……判断の仕様がないんです。
だから絶対に訪れさせてはいけないこと……けれど、今その瞬間が二つの危機としてスオウ君には迫ってる。一つは水中でＨＰが減っていくこと。片腕を無くした彼は泳げない。
そしてもう一つは目の前に広がる、死を象徴する大群です。これもこの森を出るためには避けられない傷害と今ではなっています。
本当に泉の精が言うとおりに無事なら彼は直ぐにこの大群とぶつかる事になるんです。そしてその時私達はもう既にいないかも知れない。
するとそれこそ終わりなのかも知れないと私は思いました。

「本当にあのバカは無事なんでしょうね？」
「間違いなく。それをあの方も望んでいますから」

セラちゃんはおかしな事を確かめながら泉から背を向けました。
本当はそんな事絶対にしたくない筈なのに、今は屈辱にも敵の言葉

を信じるしかないようです。
今にも飛びかかりそうな奴らに立ち向かうなら一人でも多い方がよくて、無事らしいスオウ君に全滅した私達は見せられない……そう判断したのかもしれません。敵の言葉だけど、私達は彼がそう簡単やられるなんて思えないのです。
再び周りに立ちこめた黒い陰。だけど未だ光を発する泉にそれは近づけません。
そして遂にその時はやってきます。森を通る風がやけに冷えた様に感じられました。大きく唸った一体のモンスター。それが先行したのがキッカケだったのです。タガが外れた様に迫る大量のモンスター。
それはあたかも森自身が迫ってきてる様な錯覚を覚える程です。それぞれに武器を構え、ピクも私の肩から飛び立ちました。光、赤い瞳は大量のモンスターのせいでしょうか。幾重にも伸びたラインの様です。狂気を放つそのラインが私達に迫ります。
再び月が見えてるのに月明かりが射さなくなった森の中、私達の選択肢はただ一つです。

「「「やるしかない！」」」

そう覚悟を決めて私達は頷きあいました。けれどその時、場にそぐわない落ち着き払った泉の精の声が届きます。

「ウエポンアライアスの達成、おめでとうございます」

それは独り言だったのかも知れません。それとも私達に知らせてくれたのか。それかやっぱりスオウ君に向けたのでしょうか。どれかなのか分からないけど、ここから空気が変わる様なことが起こりました。
まずは泉の水が空に吹き出しました。渦を巻き光を称えた水が再

び辺り一面を照らします。その色はニーベルの様な銀色でした。
そしてさっきまでとは違う風が水を無くした只の空洞から流れてきます。いいえ流れて来たときには既にそれは起こっていました。
理解できない現象にモンスター達は足を止めて空に舞った輝く水を見ていた筈です。その時、捉える事の出来ない早さで来襲した何かが一瞬にして先頭を駆けていた奴を潰しその後ろの大群に風穴を開けました。
泉の水が綺麗にその場に落ち着いた時には、空には新たな陰が舞っていました。

（あれは……何？）

私の目がようやくその姿を捉えることが出来たのは自身の周囲の敵全てを宙に上げた後の事。宙に上がったモンスターは次々と砕け散り、そのエフェクトが彼の周囲に流れています。
キラキラキラキラと輝いて。

「風が見えるみたい……」

その声はセラちゃんでした。そっか、セラちゃんはスオウ君の本気の二刀流は初めてです。でも、あれは今までと少し違います。
あれが新しいシルフィング。彼の両手にある剣には一筋の流れ星が見て取れました。そして次第に蒼い刀身に浮かぶ白銀の星々。

「って、あれ？　手が元に戻ってる」

今更だけどその事に私は気づきました。恐怖に駆り立てられたモンスター達が次々とスオウ君に襲いかかるけど、彼は完全復活した両腕を振るってシルフィングを瞬かせます。
それが今までの乱舞状態の時の様に速いです。乱舞を使ってるの

かも知れないけど、今まで見えてた赤いエフェクトは今は上がっていません。
その代わりに見えるのは青白い電気が時折火花を散らす所です。あれは白銀の角……もとい雷精の角の持ち主だった麒麟が精霊化した時の感じと少し似てる気がしました。
今まで『風』の属性が主体だったシルフィングに『雷』が新たに加わって得た力なのかな？　とにかく今までのシルフィングでは無いのはわかります。
風が吹きすさび、雷がはぜます。その度に吹き飛ばされるモンスター達。そこには嵐が有るようでした。私が思ったハイスピードコンボ、それを彼はやっています。二刀流の彼にはその手数とスピードがありました。
ついにはモンスター達の動きが止まります。スオウ君は奴らに剣を一本向けて牽制しています。

「スオウ！　お前……その剣は？」

震える声を出したのは鍛冶屋さんでした。みたことも無い武器に彼は興奮してるみたいです。でも確かに気になる事だったので、私もセラちゃんも彼の言葉を待ちました。
なんだか幻の様に見えるスオウ君は顔だけを覗かせて答えてくれます。

「『セラ・シルフィング』僕の新しい相棒だ」

そう言ったスオウ君の声には自信が溢れる様です。『セラ・シルフィング』それが新しい彼の力。今回頑張った結果で報われた事の証明。

「本当に、アンタなの？　だって……こんなの」

セラちゃんは目の前の事が信じられない様子です。実際私も信じられません。だけど納得は出来ちゃうんです。それは今までのスオウ君のやってきた事を見てきたから。

「スオウ君、その腕は……」

私のその言葉を聴くと彼は更に後ろをジッと見つめました。その視線の先に居るのは泉の精です。混濁していた泉は元の緑に戻り光りも落ち着いています。そして視線を向けられた泉の精はなんと笑みを浮かべていました。

「どうですか左腕の感覚は？」

「まあ、ぼちぼち。サンキューな」

その会話で私達は腕を治してくれたのは泉の精だとわかりました。一体水の中で何があったのでしょうか？　ずっと話してた筈だけど……だけどそんな疑問を口にする前に彼は前を向きます。

「話は後にしよう。まずはこの森を抜けてだ。僕が道を開く――」

セラ・シルフィングが青い刀身を輝かせます。モンスター達は再び一斉に彼に牙を突き立て様と駆けだした。そしてスオウ君も臆す事なく二対の剣を振りかざします。流星が流れ、現れるのは一筋の道。

「――続けぇぇぇ！」

その道を進み私達は再びアルテミナスを目指します。

私の観察（後書き）

第五十話です。
もう、本当の本当に遅くなりました。自分でもこんなに苦戦するとは思いませんでした。ごめんなさい、ごめんなさい。
どうか寛容な目で見守ってください。お願いします。

向かうべき場所（前書き）

俺はカーテナとぶつかり合う。その力はまさに国そのもの……けれども俺は全てを出し切る様にぶつかり続けた。そうしないと俺は諦められない。知りたい事は通り過ぎて行くんだ。

そしてガイエンとの邂逅の果てに審判は下される。それはやっぱり思った通りの事だった。ここで俺の冒険は終わりだ……そう終わる筈だった。だけどその時、見知った奴ともう一人。

ヒーローを名乗る奴が俺の前に現れた。

向かうべき場所

空から矮小な俺たちを照らす月が歪んで見えた。それは自身の体に防ぎようが無く、あらがえない程の力がぶつかったからだ。
ガイエンがその手に握った王剣カーテナ。奴は確かにその力を行使した。

（あり得ない）

グラリと傾く自身の体と、地を離れた浮遊感の中で俺はそう思った。王剣カーテナを使えるのはこのＬＲＯという広大な世界でただ一人の筈だ。
この少し前にもう一人その力を使った奴が居たけど、あれは存在自体がおかしかった。プレイヤーでは無かった様だったし、アイリを操作してその力を無理矢理使ってる感じだったんだ。
だからシステムの裏技的な事を知っているのならおかしくはないと、そう勝手に決めつけた。余り深く考える余裕も無かった。
だけどこいつはどうだ？

「ふふ、はーはぁっはははははははは！！　これがカーテナの力！　見たかアギト！　私が王に選ばれた証だ！」

両手を広げて天を仰ぎ見ながらガイエンは吠えている。こいつは紛れもないプレイヤーだ。どうやってカーテナの力を行使してる？
あの指に輝く『リア・ファル』とか言われたあの指輪がその鍵か？
カーテナがその力を与えるということはプレイヤーである以上ガイエンにもこの国を統べる権利があるという事だ。
アイリと共に？　それともアイリはどうなるんだ？　俺はなんと

かその足を地面に卸して踏ん張った。別に頑張る気が出てきた訳じゃない。やっとで俺にも楽しくなってきただけだ。
アイリは確かにまだ守りたい。心の奥ではそんな願いも無いわけじゃない。けどここで、やっぱり俺は負けるのなら……もう、いいと思えていた。

「くく、まだまだガイエン。俺はまだ立っていられるぞ！　王を名乗るならへし折れよ！　その力が本当にお前の物に成ったのなら、お前はその証明として俺にわからせろ！」

それで俺は本当に壊れる事が出来るんだから……一石二鳥だろう。それぞれの目的が達成出来る。もしも俺がここを切り抜ける事が出来たら、もう少しこのままでいいと思えるかもしれない。
外したネジを戻して、また曖昧な関係に戻れるかも知れない。だけどそれを誰が望むと言うのだろう。

「良いだろう。楽しい余興に成りそうじゃないか。お前を屈し、私は誰もが認めるこの国の王に成ろう！　そして貴様には敗者の烙印を刻んでやる！」
「そうしてくれよ……もう俺が変な気の迷いを起こさない様に叩きつぶしてみせやがれぇぇぇ！」

俺はガイエンに向かって走る。一気に懐に入り、大剣を振るう。だけどガイエンは微動だにせず、僅かにカーテナを動かす。それだけで俺の攻撃はガイエンに届かない。
透明な何かに守られたガイエンはいやらしく口元を引き上げると、カーテナを真横に動かした。

「――っぐはぁぁ！」

その動きに合わせて自分の側面を何か大きなハンマーで殴られた様な衝撃が走り吹き飛んだ。だけどそんな物体は影も形もない。実際には大きなただの力で殴り飛ばされた感じで、端からみたらいきなり俺が勝手に飛んでいっただけ。

だけどその生み出された衝撃波や音は隠れもせずに伝わったのだろう。地面に転がった俺にもざわめく音が聞こえてくる。

カーテナのその力を初めて目の当たりにしたであろう、奴らがそうなるのは仕方ない事だ。あれは神の力と感じる奴もいるだろう。

「どうした？　まだまだこれからだぞ。この程度でくたばってくれるなよアギト！　もっと私を楽しませろ！」

そういって続けざまにガイエンはカーテナを握る左腕を振るう。俺はその挙動を目で追い、一点に向けて盾を構え飛び出した。

盾の前面にとても重い衝撃が走る。それは手を伝わり支える腕を痺れさせる……けど、それだけだ。他の衝撃は俺に当たることなく、後ろでぶつかり合い激しい風を生む。

俺はその追い風を勢いに足してガイエンにエフェクト付きの一撃をくれてやる。奴を守る薄い膜を貫いた感触があり、同時に爆発が起きた。

流石にこう何度も食らっていると特性はわかる。カーテナは本体の動きに併せた衝撃を対象物にぶつける事が出来る様だ。どうやって距離を算出してるのか、それともいつの間にかロックオンされてるのかわからないけど、まだまだやれそうだ。

前向きな理由でいろんな物に縛られてるときは動かなかった体も、それらを捨てる覚悟を決めれば案外普通に動いてくれるものだ。

元々あのローブの奴の攻撃はダメージには成ってなかった訳だし、こうなると自分はどうすればいいのかが益々わからなくなる。

守りたいときは動けなくて、どうでもいいと思えばか体は妙に軽いんだ。魂までも抜け掛けてる様に。

爆煙の中からガイエンの顔が現れる。だけどそこに傷は無くＨＰの減りも見て取れない。だけど、いやだからこそ言ってやろう。もっと力を出し切るように。

「当然だ。ついさっきまでそれを使ってた奴の比じゃねーな。もっと上手く使えよガイエン。そんなんで王だと？　笑えるんだよおまえはぁぁぁぁ！」

俺は勢い良く剣を滑らせる。ガイエンの首へと直ぐに剣は迫った。そしてここで初めての回避行動を取ったガイエン。奴は後ろに飛んで俺の攻撃をかわした。

周りが静まり返る。それはどちらも引けを取らないように見えてるからか……それとも俺が押してるようにでも見えたのか？　どちらにしても滑稽で、そしてどちらも違うんだ。

カーテナはこんな物じゃない。この身で食らった自分が一番良くわかってる。

「ふん、肩慣らしだ今まではな。自分でもゾクゾクしてたまらんのだよ。この感覚……どこかから供給される様なこの力……無限の頂が見えるようだ！

貴様にはわかるまいアギト。背を向けてきた貴様には高見へ続く段さえ見えんだろう！　それが貴様と私の違いだ。手にする者と、手放す者の違いだ。

勝者と敗者の違いだよぉぉぉぉ！」

ガイエンの握るカーテナから強い光が放たれる。そこで俺はおかしな事に気づいた。奴のＨＰ……そしてこのピンピンした言動はどういう事だ。

「お前……カーテナの代償はどうした？」

「代償？　ふふふ、ふはははははははは！　そんな物、偉大な私には何の意味もない！　――と、言うのは勿論嘘だが。
代償は我らが愛すべき姫が請け負ってくれている。それが彼女の役目だろう」
「――っつ！！」

その言葉に後ろを振り返るとアイリの体は再び墨の様な陰に呑まれて行っていた。どういうことなんだ？　アイリはガイエンが受けるべき代償をその身に引き受けてるみたいだ。
だから奴は気兼ね無くカーテナを振るうことが出来る。全ての苦しみはアイリへと流れるんだから。ガイエンはそれを気にする奴じゃもうない。
そして俺も沸き立つ怒りを抑える術を知っていた。もういいと思った。全部をここで諦めようとそう思った。逃げ出してばかりの自分には何もかもが大層な事だったんだ。
自分の役にたたなさを証明して心に区切りをつけて、後はログアウトをすればそれは全部幻だと思える。いいや、幻なんだ。
俺はスオウや、セツリとは違う。いつでもリタイアとギブアップが用意された側に居るんだから。元がその程度の場所に居るんだから……結局ゲームだと割り切ればいいだけだ。
だけどなんだろう。胸の辺りが微かに疼く。ジンと……アイリを見てると微かに感じる。だけどそれはまだ証明の途中だからだ。
自分に用無しの烙印が押されれば、大層なお姫様は雲の上の存在に成るだろう。そうなって欲しいと俺は願っている。それは確かな事だ。

「アイリ……」

こぼれる言葉は未練を表してる様だった。俺が証明したいのはそれだけじゃないから。僅かな何かに、俺は縋るためにもこうやって

全力を出してるのかも知れない。
だけどこれをやってる理由は実は俺にもわからない。頭の中はごちゃごちゃで、いろんな事がせめぎ合っている。頭で結論が出ないことは行動で出た結果に任せるしか無いじゃないか。
だから全てを出して戦うんだ。これが終われば、俺はどちらかを結論付けてるだろう。

「私は最強だ！　我が国土で私にかなう者無し！　終わらせようじゃないかアギト。もう十分だろう」
「ははは……最強か。最強の王の誕生か……くくく、くはははは！　まだだろ、まだそれは決まってねーよ！　俺の中はまだぐちゃぐちゃなんだよ！　まだ、やれるのか、やれないのか！
もう何も無いって位に見せてみろガイエン！」

俺たちは再びぶつかる。でもそこにアイリを守りたいと思う気持ちは有ったのかもう自分にもわからなかった。ただガムシャラに、自身の持てる全部をさらけ出す様に俺は大剣と盾を振るった。
だけど全ての攻撃がダメージに繋がらない。普通にかわす事も組み合わせて来たガイエンはかわせない物だけをカーテナの守護で防ぐ。
それこそまさに絶対防御だった。通らない……幾ら叩いても。大振りはかわされてしまう、けれど振り切れないと守護は貫けない。盾の方はやっぱり剣と比べれば、攻撃力が落ちる。
だからガイエンは長剣の大振り＋スキル発動に気を付けてればいいだけだ。それだけでダメージを食らう事はない。それに奴は俺のスキルを知り尽くしてる。
けれど時折、派手なエフェクトを帯びた攻撃が決まる事がある。だけどそれは有効打には成り得ない。奴の計算かなにかでそうさせられてる感じだ。
だけどそれでも、この腕を止めるわけには行かない。もう俺には

それが何の為かなんてわからない。いいや、どうでもいい。俺はその瞬間をただひたすらに待っているんだ。
審判が下るその時を。

「うおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉ！」

叫びと共に俺のラッシュは続く。長剣を振り回し、大きな盾を突きだし払う。今の自分の手数の多さはスオウにも匹敵するかも知れない。
武器でない盾まで武器として使い、実質両手に武器を持ってるのと変わらない。それも防御力高めの武器だ。
二つを想定したスキルを次々と発動していく。色とりどりのエフェクトが爆散しては次の色が弾け飛ぶ。

「逃がすかぁぁぁぁ！！」

幾ら奴の防御が堅くても、幾ら攻撃をかわせても、追いつめるように奴の回避の隙間を俺は塗りつぶしていく。今まで手にしたスキル、培った経験、潜り抜けてきた修羅場、それらの経験が収束していくような感覚だった。
盾をかわした先には剣があり、剣をかわした先には盾がある。そしてスキルは交互に瞬時に組み合わせを変えてく。光が消えぬ間に弾けていき、積み重なっていく。沸き立つ煙は瞬時に周囲に流れて取り囲む軍や親衛隊に被さっていた。

（届く！！）

積み重なった光の中で俺はそう判断した。まずはエフェクトをまとった大剣を奴の守護を切り裂くよ様に横に凪ぐ。纏ったエフェクトはその動いた場所から線を引いて爆発した。

するとその膜が僅かに切り裂かれた隙間が見える。それだけで十分だった。赤いエフェクトを纏う盾を今度はその隙間に突き立てて捻り回して隙間を広げ、一気にガイエンの顔面を潰す勢いで突進した。

避けられる筈もなく、今度こそ間違いなく通る攻撃だ。だけどここで遂にガイエンは動き出した。落ち着き払った声が不自然なほどにはっきりと聞こえた。

「アギト……今の貴様の剣には何も乗っていない。いや、聞こえてくるのは『イヤダ、イヤダ』と叫ぶ声か」

大量の人の集まりで無駄に気温が上がったようなこの場に、甲高い金属音が鳴り響いた。俺の自慢の盾にぶつかるのは僅か三十センチばかりの小柄な剣。

だけどそれはどんな巨大な剣でも抜けそうに無い強固さを感じさせている。溢れでる巨大な力がその時ばかりは俺の目にも映った気がした。

これが輝きの国アルテミナスに代々伝わる国宝で、王剣と呼ばれバランス崩しとまで賞される武器。与えられる力は国そのもの。

「そんな不抜けた武器でカーテナを抜ける道理無し。貴様の望み通りに終わりをくれてやる！　思い悩まずに済むように！　それがこの国の意志で、貴様の最後の仕事だ！

新たな王の誕生に花を添えられる事を光栄に思うんだな！」

カーテナが振られる。いつもならその一方向からしかこない衝撃が無数に飛んできて、避ける事も防ぐ事も出来なかった。跳ね上がる自身の体。骨が砕ける音が聞こえる様な気がした。

続けて突き刺す様にカーテナが向けられるとドスッという貫通音が体だけに響いて俺の体は宙でその動きを止めた。それは流れでな

い血が不自然だと思える程の光景だ。一気に減っていくＨＰ。
それを眺めながらやっぱりか、と俺は思った。これが結果だ。確かめたかった事はここに証明された。

「ふはは、はははははははは！！」

不快な笑いを響かせてガイエンはカーテナを振って俺を投げ飛ばす。ＨＰはこの決闘が終了になる一歩手前しか残ってはない。いや、ワザとそれだけ残したみたいだ。
地面に倒れ伏した俺にわざわざガイエンが迫る。そんな必要一切無いのに、あたかもとどめはこの手で刺すべきという体でガイエンはカーテナを振りかぶる。

「哀れだなアギト！　貴様がこんな風に這い蹲ってる姿は愉快でたまらんぞ！　貴様をこうやって潰す事が一つの夢だったよ！」

小さな輝きが振り卸されるのが俺にはゆっくりと見えていた。そしてその刹那、俺はこの審判に刃向かう気なんてなくて、これを有る意味納得出来てた。
だけど何故だろうか。全部を諦めた筈なのに……前を向くと見えてしまうあの姿。でも、もう苦痛しか彼女は与えてくれない。葛藤の末に心が削れていくようなんだ。
どうしてこんな事になったんだ？　いつから俺達の歯車は狂いだしたんだろう。それを考え出して不意に視界に入ったのは愉快な顔を浮かべたガイエンだ。

（ああそっか、コイツじゃねーか）

今まで全部を自分のせいで片づけた俺に現れたもう一つの矛先かもしれない奴。そう気付いたら怒りが一気に沸点を超えてわき出て

くる。
証明は出来た。俺はもうダメだとさ。僅かな期待は無くなってそれでいいと、良かったとさえ思えた筈だ。でも、繋ぐ……その存在が、俺と言う意識を強く繋ぐ。
だから沸き上がった怒りは尋常ではなくて、それは今のカーテナを受け止める程だった。

「うぐっあああああああああ！」

剣と体全体で上へ出した盾を支える。ぶつかったのは小さなカーテナ本体だった。だけど僅か三十センチの剣とは思えない重みがその瞬間、全身にのし掛る。
衝撃波の様な波が周囲に広がり周りの奴らを何人か吹き飛ばすのを目の端で捕らえていた。団子状態の軍の連中からはどよめきが上がる。

「貴様が貴様が貴様が貴様が貴様が貴様がぁぁぁ！」

人語を解してもそれは獣の様だった。俺は無造作に体を投げ出して、拮抗状態から抜け出す。そして荒い息を吐きながらガイエンに刃を向けて迫った。
でも今度こそ奴は距離をとりカーテナを振るう。現れる力という衝撃。だけど俺はその力を強引に力で受けきり剣でたたき落とす。
自分の足下が大きくへこみ、力の大きさを物語っている様なその光景をみることなく俺は前へ進んだ。もうずっと前の事で何を言っても変わることの無いことに怒りを表すなんて滑稽だとわかってる。
現に少し前までは許したなんて言ってたさ。だけど全てを無くして、投げ出して、その時苦しむアイリをみて真っ先にでも思ってしまったんだ。
なんでこんな事に成ったんだろう……て。すると目の前の奴がで

てきた。それは本質的には違うのかも知れないけど、壊れた俺にはその判断は出来ない。

（俺の歯車を狂わせ奴を――壊せ壊せ壊せ壊せ！）

そんな言葉が頭で延々に回ってる。本能というもので攻撃がくる場所がわかって、武器と防具の強度と威力を上げるスキルだけを常に発動した状態で強引に俺は突き進む。

僅かなＨＰを更に僅かに減らしつつ、俺はそれでも何とかガイエンの前に出る。だけど奴は焦ることもせずに言い放つ。本当に愉快に楽しそうに。

「今更何に憤る！？　何もかも、遅すぎだあぁぁぁ！！」

「ぐっ！　あああああああああああ！」

何が起きたのかわからない。ガイエンはカーテナを振り切った様な態勢に成ってるのだけは見えた。でもカーテナは届いて無かったし、今までの衝撃とも違った。突然、通り抜けた光。それは俺を焼き払った様だった。

これで決まった。俺の目には『Ｙｏｕ　Ｌｏｓｔ』の文字が青く暗いグラデーションで表示されてるのが見えていた。その瞬間、全ての熱が抜けていく感覚があった。

轟く周りの歓声や罵倒も耳を無くした様に届かない。でも俺は思っていた。

（負けた……負けた負けた負けた……くははははは！　そうだこんなんだ）

証明された俺は完敗の役立たず。やっぱりそれに変わりはなかった。さっきまで有った怒りはもう行き場がない。

「返して貰うぞその力。貴様にはもう必要が無いものだろう」
傍に寄ったガイエンがそんな事を言った瞬間。途端に両腕の大剣と盾が重くなった。それはきっと俺のあのスキルが奪われたことを示してるんだろう。だけどこれで、俺の中の物は全て無くなった。
「『ナイト・オブ・ウォーカー』貴様には過ぎた力だったなアギト」
虚空が開いた様な俺の心にそんな言葉が通り抜ける。本当にガイエンは王に成っている。『ナイト・オブ・ウォーカー』はアイリが選んでくれた騎士の証で、この国を統べる者がそのスキルを与えられる。
だから俺からそれを奪ったガイエンはまさしく王だって事なんだ。ガイエンは黒く塗りつぶされつつあるアイリを拾い上げ言い放つ。
「抜け殻だな貴様は。最初からお前の剣は私を切ろうとはしてなかった。何の覚悟もしてないお前が騎士であれる筈がない。
全ては必然の結果だな。貴様はもう、私の視界に入ることのないゴミだ。くくく、はーはっははははは！　私は全てを手に入れた。アルテミナスは私の国だ！」
アイリを抱えて、そう宣言されると親衛隊からグウの音を言わさぬ拍手が起こる。それは無言の圧力。そして軍にも蔓延した。
大喝采の中、俺の視界には白い服の端が映った。それは親衛隊。拍手とは裏腹の冷めきった顔……それで俺は悟った。終わりの時だ。
自分でログアウトしても良かったけど、俺は止めが欲しかった。これが決別の為の儀式の様な気がしたんだ。鈍い光を放つ剣が頭上に振り卸される。だけどその時、俺の前には小さな影が飛び出した。

「何をやってるんだアギト！　君はそんな男じゃ無いはずだよ！」
「……テツ」
それは紛れも無くテッケンだ。何故ここに？　邪魔するなよ。その剣を止めないでくれ。
「もういいんだ……疲れたんだよ俺はさ」
目を見開くテッケン。次にどんな言葉がくるかと思ったら全く別の方向から起こした顔を殴られた。
「ふざけんじゃねぇぇっす！　アンタがそんな事言ったら駄目なんすよ！　アンタはみんなの憧れで、アイリ様の騎士何でしょう！　こんな所で、止まるなっすよ！」
誰か知らない奴がそこにいた。そして胸くそ悪い、言葉を吐いている。本当に何なんだコイツは？　この目が点野郎は一体……
「俺はヒーローっす！　すっげー可愛いフワフワ髪のお姫様が認めてくれたっす！　一緒に逃げる事しか出来なかった自分をそれでもヒーローって！
だからアンタも逃がしてやるっす！　ここでアンタは死なせない！」
俺の前に現れたヒーローは、情けない事を誇らしげに言うおかしな奴だった。だけどその豆の様な瞳には、懐かしい炎が見えた気がした。

向かうべき場所（後書き）

第五十一話です。
ますます遅くなりました。ごめんなさい。もうほんと一杯一杯です。なのでここでお願いを聞いてください。
『更新を一日空けるのをを許してください！』
つまりは今日の次は明後日に更新をすることをお許しあれ。もう殆どそんな状態だったかも知れないけど……これからは更新⇒一日空けて⇒また更新。こうしたいと思います！
宣言を覆してしまってすみません。でも必ず完結させる事は誓います！　なので暖かく見守ってくださると嬉しいです。
では次の第五十二話は水曜日に更新します。一日空けば余裕です！　これからも頑張って行きます！

鏡の戦士（前書き）

俺は飛び出して後悔して……だけどやっぱり良かったと思ったッス。このままじゃ駄目で、だけど一人じゃ何も出来ない自分っすけど、この人となら何か自分にも出来る気がしたッス。

目の前に立つ人は自分とは比べ物にならない位に小さいっす。だけどこの人はとっても格好良いんっすよ。逃亡を謀る俺達に親衛隊が妨害に来て、そして遂には王を名乗るガイエンがその力を振るうッス。

そのただの一撃で俺の逃げの為のスキルは破られたけど、まだっす！　まだ俺達は希望を捨てずにそのスキルの再使用時間に賭けるっす！

鏡の戦士

（おらぁ何をやってるんだぁぁぁ！）

まず最初に思ったのはそんな事。自分のやったことの重大さは自分が一番よく分かってるわけすよ。今、自分は国という大きな物を敵に回しちゃったっす。

いやいや、その前にここＬＲＯでの家、自分に取ったら本当に第二の故郷的なこのアルテミナスから追放されかねない事を自分してるっす。

でもそれくらいもう我慢が出来なかった訳で……あの人のあんな姿はみたくなんかなかったっす。自分の目の前に倒れ伏したあの人。

赤い髪に巨大な剣と盾を有したその雄々しき姿は自分が憧れた物でしたっす。いいや、それは違うっすね。きっとこの人に憧れて軍への参加を希望した人はもっともっと沢山いたはずっす。

それだけ『ナイト・オブ・ウォーカーのアギト』と言ったらエルフという種族の中では凄いものっす。軽く伝説的な位。

エルフは元々何故か我が強い人が一杯なんす。なんでそうなのかは分かりかねるっすけど、とにかくそんな訳で前は国として種族としＬＲＯ内で最強では無かったっす。

エルフって言う人気な種族で人間に続く数を誇っているのに自分達には我が強いためか連帯感がんなかったんす。自分を強く……っていうか、自分だけを先んじる感じで、みんなで大きな事を助け合ってやろうなんて奴はいなかったす。

それは劣等種の人間のやることで自分達は違うと大多数のエルフが思ってたっす。それはここＬＲＯだけでは『人』と格別しようと

した結果なのかも知れなかったんすけど、それじゃあ国が発展するなんて事はあり得ないんすよね。
気付いたときに『人間』『モブリ』『エルフ』という三角から崩れ落ちそうだったんす。元々、数で保ってきただけのその牙城はいわば砂上の楼閣でしかなく、下には突き上げる種族がまだいたんすよ。
ＬＲＯでは国の開発もプレイヤー次第だけど俺達はそんな事やってなかったっすからね。他の種族がそれをやっている間に俺達エルフはそれぞれ個々の最強でも追っていたわけっす。

だけどＬＲＯのサービス開始から半年以上たった頃に、国の領土を広げられるシステムが導入されたんす。するとあら不思議、そこで国の力の差を俺達エルフは突きつけられた訳っす。
次々に領土を広げていく多種族に対して戦いを挑んでも勝てる事はなかったんす。向こうは組織でこちらは個。それは象の群に蟻が飛び込むが如しだったっす。
元々有してたエリアまで次第に毟り取られて行くとアルテミナスは小さくなったっす。まあ、けどそれでも俺達はバラバラでしたっすけど。
別にこの国だけに入れない訳じゃないっすからね。ただここが故郷ってだけっす。それも架空の……だからそんな強い物で結ばれる訳はないんすよ。その頃は。
そしてきっとそんな気持ちが明暗を分けていたんすね。俺達はもう領土を守るなんて事してなかったっす。最低限に残ったのはこの首都アルテミナスだけっした。
だけどそんな折りに、立ち上がったのがあの方々っす。そういえばあの頃から光明の塔に光が灯ったんす。それまではただのオブジェでしたっすから。
最初はそれでもみんな乗り気じゃ無かったっす。この国を守って取り戻そうとするあの方々を笑う奴多数っした。けれどもあの方々

が頑張って訪れた初めての勝利でアルテミナス国内、そしてエルフが少しづつ纏まり出していったっす。

それだけじゃないけど目の前で倒れてるあの方はその中心で輝いていた人でしたっす。それが……それが……こんなの自分は認めたくなんかないっすよ！

何が自分に出来るかなんかわかんないっす。逃げることしか出来ない自分っす。だけど後から沸いてきた軍に紛れて遠目から見てたけどイライラするんすよ！

なんでアンタがそんな無様に倒れてるんすか？　なんでアイリ様を助けてやらないんすか！？

「何なんだよお前……」

そんな消え入りそうな声が僅かに耳に届いたっす。沈んだ瞳には光の欠片も無く、いきなり殴られた事への怒りも見て取れないっす。それが当たり前で、当然の仕打ちというようにしてるっす。

重心が取れてない様に上半身を揺らして体を起こしたその姿はまるで体を通っていた芯を無くしたか、折られた様なそんな印象を与えるっす。

もうどうして……そこにかつての彼を重ねる事は出来ないす。でもきっとだからなんすね。俺は大胆不敵な事を言えるっす。てか言ったっす。

「俺はヒーローっす！　すっげー可愛いフワフワ髪のお姫様が認めてくれたっす！　一緒に逃げる事しか出来なかった自分をそれでもヒーローって！

だからアンタも逃がしてやるっす！　ここでアンタは死なせない！」

頭に浮かんだのはあの子の背中と隊長の言葉でしたっす。思いを託してくれた隊長達……そして、自分をヒーローだと言ってくれたあの子。
あの子はアイリ様の為に行ったんすよ！　それでアイリ様は助かると思って、アンタなら助けれると思って自分を犠牲にしたんす。
それなのにアンタがそんな事でどうするんすか？　このままじゃ俺さえもあの子に……隊長達にあわせる顔が無いっす！　自分じゃ何も出来ない俺っすよ。
きっと一人じゃ、やっぱり震えるだけだったと思うっす。だけど……

「助けはありがたい、けど君はそれでいいのかい？」

その人は小さな小さなモブリと呼ばれる種族の人っす。基本人より背が高い俺たちエルフから見たら、その姿は矮小その物。
けれどこの人が飛び出して行ってくれたおかげで俺も輪の中から飛び出せたっす。そのおかげで俺はあの子の言葉に応える事が出来そうっす。

「はい、いいんす。もう俺の覚悟は決まってるっすから！」
「よし！　君を信じよう！」

俺達はきっと、多分、いや絶対、初対面す。だけど目の前のモブリの人は意図も簡単に俺の事を信じてくれたっす。エルフという敵で有るはずの自分をたった一言の言葉で信じるなんて俺には出来ない事でちょっとびっくりしたっす。
ＬＲＯは有る意味、人の黒い部分もリアルより強く出てる事が有るっすから。自分が逆の立場ならこんな絶対的に不利な状況で加勢に来た奴は信じられないっすよ。

だってしかも俺は軍の鎧着てるっすから尚更っす。騙し討ちが目的か！？　位思うものっす。けどこの人は、なんて真っ直ぐに人を信じる人なんすか！？

そんな目で見られたら……そんなはっきりと信じられたら、例え騙し討ちに来た卑怯な奴でもそれを躊躇ってしまうっすよ。

「なっ、君は僕を騙してるのかい？」

「いえいえ、違うっす！　例えば。た～と～え～ば～っす！」

親衛隊の剣を弾いたモブリの人は小さな拳を握って間の抜けた事で言ったっす。

でも、やっぱり少しは疑った方がいいと思うっす。それで本当に騙されたら惨めなだけっすよ。だから状況を考えもせずに俺は聞いてしまったっす。

「どうして、信じるっすか？」って。そしたらモブリの彼は後ろから再び迫った親衛隊二人の攻めをかわして弾いて、スキルを使って吹き飛ばす。

浮いた小さな体がまた地面に戻った時に彼は言うっす。

「君は信じれると思った。アギトに言った言葉は心に響いたからね。済まないけど、そこの腑抜けを逃がすのを手伝ってくれ！」

俺は頷いたっす。周りに目を向けると数十人の親衛隊の奴らが武器を抜いてるのが見えたっす。そしてそこにはついさっきあいまみえた奴らも居て敵意満々なのが伝わるっす。

それにあいつらには攻撃は効かなくて、おまけに親玉まで居ると来てる……状況はすこぶる不利。この三百六十度を囲まれた状態から人一人抱えて抜け出すなんて、不可能に思える事っす。

だけど俺には逃げしかない訳で、ここでやれなきゃ自分の存在意義なんて無いほどっす。これが自分の役目なんじゃないか、とか思

うっす。
モブリの人もあの人を諦めて無いように、きっと俺もあの人を諦め切れないんすよ。もう一度と思って、その僅かな身勝手な希望に縋ってるっす。繋げたいと思うっす。それが例えあの人にとって苦痛でも、俺じゃ二人を助ける事は出来ないんす。

「どうやって逃げるっすか？」

取り合えず見る影も無くなったあの人に肩を貸して起こすっす。意外とすんなり受け入れてくれたけど、その表情にここを切り抜けたいなんて意は全くないみたいっす。
だからっすかね？　力がない肉体は異様に重いっす。心も体もボロボロになったのがよく分かるみたいに。

「そうだね――つっ！！　取り合えず君は逃げるの得意かい？」
「それしか取り柄ないっすから！　大得意っす！」

モブリの人は一手に親衛隊の攻撃を引き受けてるっす。そんな人に「逃げるのだけは大得意」って言うのも気が引ける感じっすけど、今だけは許される気がしたっす。
今必要なのはその一点だけっすからね。案の上、モブリの彼は笑ってくれたっす。

「ははは。そっか、それは大助かり――うあぁ！」
「ああ！」

小さな彼の体は親衛隊のスイッチ攻撃に寄って吹き飛ばされたっす。それでも今まで凌いでたのが凄いんすけど、その時、眼前には既に一人の親衛隊が迫ってたっす。

「二度も逃げ仰せると思うなよ。この恥晒しが！」
「――しまっ――――逃げるんだ！」

顔見知りな親衛隊の奴がその剣を横に凪いでるっす。俺ごとこの人も切り捨てる気っすね。さっき俺に逃げられた事を逆恨みしてるっぽいし、その剣には執念みたいなのが込められてそうっす。
そして聞こえたモブリの人の声。吹き飛ばされた様だけどそんなにダメージは無く、上手く地面に着地出来たみたいす。彼は小さな体を鉄砲玉みたいにして駆けて来てくれてるっすけど間に合いそうもない。
だけど、大丈夫っす。特技が「逃げる事」なんて堂々と言う俺は伊達じゃないっすよ。

「悪いけど、今回も逃げさせて貰うっす！」
「貴様あああああああああ！」

親衛隊の剣が俺の胴体にその鋭い刃を食い込ませた――っすけど、その俺は振り切った時には霧散したっす。そして当の俺はその親衛隊の背後っす。だけどホッとしたのもつかの間。
まるでそれを予想してたみたいに他の親衛隊が続けざまに俺を狙って連続攻撃を仕掛けるっす。

「奇妙な技を！　騎士の国に生まれたのならその剣を抜いてみろ！
――ぬあ！？」
「ちょこまかと逃げてばかり！　煩わしいのよ――って、え？」
「「「「とったあああああ！！　――っつ！？」」」」

親衛隊の面々が次々に驚愕の表情を作っていくっす。それは俺に攻撃が当たらないからっす。いや、当たったはずなのにその感触は無いから、頭が混乱するのかもしれないっす。

次第に動きを止めていく、親衛隊の奴ら。だけどそんな中、執拗に俺を追う奴が居るっす。それは一番始めに俺に一太刀入れようとした奴っす。

「動きを止めるな！　それこそこいつの思うつぼだぞ！　攻撃を浴びせ続けろ！　そしてこのおかしな技の正体を見破った時こそ終わりだ！

その恐怖を与え続けるんだ！　逃がさんぞぉ。逃がしてたまるかぁぁぁぁ！！」

四方八方から留まることのない剣の嵐が俺に浴びせられるっす。声を出した親衛隊の奴は、目が血走っててヤバい感じっす。

執念や憎しみをそのままぶつけて来るような剣激には黒いエフェクトが見えるようっす。黒のエフェクトは設定上プレイヤーに適応される事は無いから、それは見間違いの筈っすけど、背筋には嫌な汗が出てたっす。

あり得ない事が起こる恐怖って奴を、俺は今夜でイヤという程見てきたっすからその思いも否定出来ないんす。

「何故だ？　何故貴様は逃げ続ける！！」

親衛隊の奴の怒りに満ちた声が俺の耳に届くっす。幾ら切っても、幾ら剣を振っても逃げていく俺の陰にその言葉は向けられてたっす。

だけど無駄っす。俺はヘナチョコっすから。これだけしか自分には出来ない事を知ってるっす。だから俺は何を言われようと逃げ続けるだけっすよ。俺にアンタ等の攻撃は届かないっす！

「離れろ貴様等！」

その声は一瞬にして冷静さを失ってた親衛隊の頭に浸透して剣を

引かせたっす。俺はやっとで止まった攻撃に少し安堵して息を吐いた所でしたっす。その声を発したのを誰かも確認せずに。
だからモブリの人の叫び声が聞こえたときには「しまった！」と心の底から思ったたっすよ。

「止まるな！　カーテナが来る！！」

開いた親衛隊の間から見えるのは黒い霧に包まれようとしてるアイリ様を抱いたガイエン！　その掲げられた左腕には確かにカーテナの姿が有ったたっす。
自分は一瞬だけ足を止めて……だけどカーテナにはその一瞬で十分だったんす。上から下にただ重力のせいで落としたよう腕が振られるっす。

「煩わしい奴だ。剣も抜けぬ癖に、私達と同じエルフとはな。恥はカーテナによって断罪してやるわ！」
「避けろぉぉぉぉ！」

カーテナの攻撃が届く一瞬前に、モブリの人が俺達を助ける様に飛んで来たっす。だけど、ごめんっす。俺はそこには居ないんす！
モブリの人は俺の体をすり抜ける……だけどその体をあらぬ所から出てきた腕が引っ張って強引に小さな体の向きを変えたんす。
そして直後、カーテナの力は振るわれたっす。何かが割れる音と共に、地面を砕く衝撃が周囲に広がり、一番近くにいた親衛隊までその被害を被ったっす。
だったら一番近く……というか俺達に向けて放たれて落ちてきた衝撃の真下に居た筈の俺達はと言うとっすね。ガイエンと親衛隊から二十メートルは離れた位置に居るっす。
力が直撃して陥没した中心には陰も形も無く、決まった筈のカーテナから逃げ仰せてる俺達に周囲の軍からはザワメキが起きてるっ

す。

（はぁはぁはぁはぁ……カーテナ、本当に滅茶苦茶っすね。見てるのと向けられるのじゃ恐怖に差が有りすぎるっすよ）

それでも何とか間に合ったっす。俺の『逃げ』を支えるスキルを犠牲にしたのは辛いっすけどね。でもあの場面じゃ仕方なかったっす。肩にのっかってるだけの人は決闘終わりでＨＰヤバいっすからね。

それに今まで見てきたカーテナの攻撃には極力、イヤ絶対に当たりたくないっすから。あの攻撃で軍のどれだけの人間が戦意喪失したか……それも今の持ち主はガイエンで、今度はちゃんとＨＰも削るっす。

あれだけの攻撃力……数回当たるだけで心と体を持って行かれる筈っす。

「鏡？　――あっ。それにいつの間に？」

モブリの人のそんな声が聞こえて首を後ろに向けると、周囲に同化して立っていた鏡が砕け散ったっす。そしてその破片は自分がさっきまで居た所やカーテナの影響を受けた場所なんかでも月明かりを受けて煌めいて居るっす。

でも綺麗……なんて言える状況じゃ無くなったっす。

「くはははは！　まさかカーテナからも逃げ仰せるとはな。そのスキル、賞賛に値するぞ。どうだ貴様？　まだ間に合う、同じ種族なのだから手を取り合おうではないか。

その担いでる奴をこちらに引き渡せば全て不問にしよう。地位も約束してやろう。貴様のその力、使いようによってはアルテミナスの大きな武器になろう！」

ガイエンの言葉で周囲はさらに大きなザワメキに沸き立つっす。自分に地位？　実感がわかない言葉っすね。親衛隊の連中が何か言ってるのが見えるっすけど周囲の声で聞こえないっす。大方「なんであんな奴を」とか言ってると思うすけど。

「これは君のスキルかい？」

そんな中、周囲に聞こえない小声でそんな事をモブリの人が聞いてきたっす。この人に隠す事でもないし、一緒に逃げる事を目指すなら知っておいて貰った方がいいっすね。俺は頷いて同じように小声で囁くっす。

「ええ、まあ。スキル『ミラージュコロイド』っす。自身に纏う光を屈折する粒子と周囲に展開する七個の鏡がこのスキルの特徴っす。鏡は見えないように周囲と同化して、そして自由に操れるっす。その鏡に光をあてたり、合わせ鏡の要領で自身を写すと、纏う粒子の影響で残像よりももっと鮮明な影を作れるっす。いわば分身っすね。そして最大の特徴は鏡間を瞬時に移動出来る事っす。だから常に一枚は放した場所に置いてて、そのおかげでなんとか逃げれたっす。自分が臆病者でよかったっすよ」

なんとか陽気に言ってみたものの、流石に辛い事は感じられたっすかね。その肝心の『ミラージュコロイド』は破られたわけっすから、隠しようのない不安は悟られたかもしれないっす。

だけどモブリの人は俺の話を聞いて何かを確信したように前に歩きだしたっす。まるで覚悟を決めたようなその背中はなんだか小さいのに大きく見えたっす。

「成る程。いや、君は臆病者なんかじゃないさ。アギトを殴ってく

れたしね。それにそのスキルは、ここを切り抜ける切り札になる。
勿論それは、君が今のガイエンの話に乗らないのだとすればだけどね」

今の言葉……俺は更に前方に目を向けるっす。そこには優雅ほどにゆっくり歩いてくるガイエンの姿が有るっす。そして苦しむ顔が僅かに見えるアイリ様。ボロボロになったアギト様は肩に居るっす。
どちらも奴にとっては盟友の筈なのに……それをこんなにして笑ってる奴の言葉の何を信じろと言うんすか！　それに俺が欲しいのはそんな物じゃ無いんす。もう一度見たいだけっす。本当の騎士って奴の姿を……そしてアイリ様の笑顔を！

「どうだ？　心は決まったか？」

そんなガイエンの言葉にモブリの人は剣を抜くっす。そして俺は立ち上がりその隣に並んで周囲を見渡す。そこにはざわめく軍の人々多数見えるっす。なんでみんなそんな顔ができるっすか？
みんな見えてないんすか、アイリ様の苦しむ顔が？　俺だけじゃなくもっと沢山の人がそれを願って居た筈なのに、どうして誰も奴に刃向かわないんすか？
怒りはガイエンだけじゃなく周りの奴ら全員に向いてたっす。だから俺が示すっす。最初に俺がその意志を見せつけてやるっすよ！

「ふざけんじゃねぇぇぇ！　誰がアンタの言葉を信じるっすか！
みんなもちゃんと目を開いて良く見るんすよ！　アイリ様は苦しんでるじゃないっすか！　みんなが憧れたアギト様が犯罪者な訳ないっすよ！　この国をあんな奴に渡しちゃダメっすよ！」

静まり返る場の空気が伝わるっす。それは届いて無い訳じゃないと信じたい。だけど賛同する声はなくて、代わりに聞こえてきたの

は不快な声っす。

「ふはははははは！　それが答えか？　実に面白いな。何を今更な事を……この国は既に私の物なのだよ！　来なくてもいいわぁ！　貴様のスキルの秘密は殺してから聞くとしよう。もう逃げられんだろうからな！」

カーテナがこちらに向けられるっす。また来る……あの攻撃が。その時、前のモブリの人がもう片手にロッドを握って言ったっす。

「ごめん、そしてありがとう。大丈夫だよ、君の言葉はきっと届いた。だけど直ぐに行動には移せないさ。だからその為の時間を稼ぐんだ。彼らが立ち上がれる時間の為に、僕らはここでやられる訳にいかない！　テッケン――それが僕の名だ」

名前、それは認めてくれた証の様に思えたっす。テッケンさんは本当に格好いい人っす。不安が消えて生きる気力が沸くっすよ。

「ありがとうはこっちの台詞っす。ノウイが俺の名前っす。テッケンさん」

「ノウイ君だね。それじゃあ切り札再発動までのタイムは？」

テッケンさんが気にする時間は即ち俺達の凌がなきゃいけない時間っす。数十人と、カーテナの攻撃を凌ぎ続けなければいけない時間。それは――

「――後五分っす」

それが『ミラージュコロイド』再発動リミット。

鏡の戦士（後書き）

第五十二話です。
うん、やっぱり一日空けると随分違います。心に余裕が出来ます。本当に皆さんありがとう。これからも頑張って行けそうです！
今回の話はノウイ目線です。お忘れかも知れないけどアルテミナス軍所属でセツリをこの場まで届けてくれた目が点君です。本当は今回でスオウ達と合流……まで行く予定だったのに何故か続くに。
調整が難しんですよね。最初の千文字書くのに四苦八苦して、半分の四千までにここを書こうと思う訳で、だけど過ぎてそれは五千に行ったら、うわ、足りないじゃん！　となるわけです。
行き当たりばったりで思いついたのを書いてるせいですね。余裕も出来たし、頭の中のプロットを起こしてみるのもいいのかも知れません。質向上を計りたいですからね。見捨てられないようにも……
てな訳で次の第五十三話は『金曜日に投稿』します！　我儘を許してくれた皆さんありがとう！

セラの名を持つ二つの輝き（前書き）

僕達は大量のモンスターを蹴散らしながら前へと進んでいた。『セラ・シルフィング』その威力は凄いものだったんだ。こいつが有れば行ける！　そう思えるほどに。

森を抜けた僕等に舞っていたのは束の間の息抜きの様な時間だ。そこでなんだか鍛冶屋とシルクちゃんは言い合っている。森を抜ける前に一悶着あったんだ。それを止めたのがセラだった。

いつもなら面倒な事はしなさそうなセラが積極的にイザコザを止めた理由。それは届いたメールに関係していて……セラはいつからその仮面を被っていたのだろう。

セラの名を持つ二つの輝き

風が螺旋状にうねり、僕たちの道を造る。大量の獣人型モンスターが不用意にその風のトンネルを分けようとして風の鋭さと、新たに加わった雷撃の餌食となっていく。

『セラ・シルフィング』ハッキリいってこの剣の威力は絶大だった。シルフィングより一段階も二段階もパワーアップしてる事は間違いない。

新たに四つのスキルが加わって、そろそろ二桁も見えてきたところだよ。そして僕は、今その中の一つのスキルを発動中だ。

スキル名は『イクシード』これは二刀流のインフィニティスキルである『乱舞』を更に強化、効率よく使う為のスキルだった。

まあ、だけど今は第一段階イクシード1。これはどうやら乱舞の真似事が普通の状態でも出来るみたいだ。風を生み出せるのがその特徴でかなり使えるよ。持続時間も普通の乱舞より長いみたいだ。

このスキルの真骨頂はイクシード2からしい。2から乱舞が平行して発動して、その真の力を見せてくれることだろう。

「うおおおおおお！」

流星が煌めくセラ・シルフィングがうねりを上げる。風の道を抜ける度にモンスターの群が待ち受けてるから休む暇なんてない。まずは右を振り、そして復活した左手を振るう。左右から生み出された風は中央で重なり、襲いかかるモンスターを吹き飛ばして道に成る。

それを繰り返すこと五・六回。そろそろ森の終わりも近いはずだ。奥に進むときは見つからないようにしてたからかなり時間が掛かったけど、今はほぼ直線突破。行きに掛かった時間の半分以下でここ

まで来た。
だけどモンスターのただのＡＩもバカな訳じゃない。自我を持つのが異常なだけで、学習能力はちゃんとある。それにどうだか知らないけど、今いる獣人モンスターの思考は並列してるのかも知れない。
奴らは他の個体が味わった事を学習してるようだ。
こいつら、次第に風の終わりに集中してきてる。風に無闇に飛び込む奴らもいなくなってきたし、結集してきたモンスターどもに阻まれて風の道は徐々に短く成ってきてた。
（ここに来て更に増えてないか？）
そんな事を思いながらも風の道の終わりに向かって再びセラ・シルフィングを構える。だけどその時、後ろに続くシルクちゃんに併走して飛ぶピクの叫びが届いた。
「くぴぴーーー！！！」
それは危険信号？　でもモンスターの存在は元々分かってる事だし、今まで叫びもしなかったのに何で今更？　後方に向けた視線を再び前方に向けた――その時、ピクのメッセージが分かった。
「――っつ！？」
「スオウ君！　危ない！」
シルクちゃんの叫びが聞こえた。見えたのは暗い霧が広がる様な森からこちらに向かって放たれた魔法の光。狙いはまさしく風の終わりで、僕が振り抜く前を狙ってやがる。
アーチを描いて降り懸かる無数の魔法。そして地面には直撃時にタイミングを合わせて突撃を掛けてくるモンスターの前衛部隊。ど

ちらも片手で掃討出来る数じゃなく、かといって両手を一方に集中すればどちらかの攻撃は確実に当たる。

（迷ってる場合じゃない！）

僕は力強く踏み切って更に加速する。みんなを先導する為に合わせてただけで、今の僕のスピードはこんな物じゃない。みんなから距離を取って僕は言葉を紡ぐ――

「イクシー――」

――いや、正確には紡ごうとした。だけどその時、後方から光の柱とも言える光線が飛び出して来たんだ。

「聖典八機・光度収束砲――ブレイク！」

それはセラの声。麒麟戦の時に見せたあの大業が今度は襲いかかる無数の魔法を右から左に移動して撃ち落とす。ぶつかり合った光はセラの光線を残して爆発と共に消え去るんだ。

だけど無数をたった一つの光線で全て防ぐなんて叶わない事だ。漏れた敵の魔法は容赦なく降り注ごうとしてる。けれどそのあまり物の魔法が僕に届くことはなかった。それは地面から生えてきた黒い壁がその魔法を防いだからだ。これは……鍛冶屋のスキル。

「勘違いしないでよ。アンタだけじゃないのよ、ここにいるのは！」

「そうだぞスオウ。上は消した。貴様は前を見ろ！」

セラと鍛冶屋の声が背中に当たる。ありがたい。前を見据えると迫りくるモンスターの群が思惑外れたからヤケになって突っ込んで来ていた。

だけどこれだけの数にヤケに成られるとかえって困るものだ。暴走……とでもいうのか？　例えるならそんな状態。モンスターどもの力は一時的に跳ね上がってる様だった。

自分の見立てよりも奴らは早い。雪崩の様に押し寄せる奴らはその姿だけでも相手に畏怖を与えるだろう。だけど今の僕にそんな物を感じてる暇はない。

なんとしてもこの両手にある二対の剣を振りかぶって道を造らなくちゃいけないんだ。僕は力を込めてシルフィングの柄を握りしめる。奴らの攻撃が届くのが先か、僕がシルフィングを振るのが先かの勝負だ。

既に放たれた武器より早く動けると自負できるけど、それもタイミングの問題だ。流石に遅すぎたら、向こうが先に僕の体を叩くだろう。

そしてこのタイミングは微妙だった。見立てより早く接近してた奴らの先頭は既に斧の様な武器を振っている。それでも、僕は自分を信じてシルフィングを振り切るしかない！

だけどその時、視界に何かが写った。それは暗い森の中で僅かな光を集めて、その桜色を輝かせる存在。羽を優雅に広げて、伝えるのは春の訪れの様な小竜。

ピクが後方からの声に従って炎を吐く。

「ピク！　ブレスト・ファイア！」

「くぴ～～！」

暗い森に一気に熱気と光源が出来た。目の前のモンスター達がピクの口から放たれた炎に撒かれて断末魔の悲鳴を上げる。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

「今です！　スオウ君！」

そんなシルクちゃんの声が奴らの叫びに呑まれずに届く。ピクの攻撃は確かに届いた。奴らも悲鳴を上げた。だけどそれだけで倒れる奴はいない。

ピクはそれだけの攻撃力を有してはいないんだ。モンスター共は止まらない。だけどその一瞬で僕には十分だ！

「うあああああああああああああ！」

際どいタイミングに入った刹那のタイムロスが勝負の分かれ目だ。誰かが瞼を閉じて開いたときには決まっている。勝負とはそんな一瞬一瞬だ。

振り上げられた二対の剣に斬り裂かれたモンスターの体はピクの炎に撒かれて灰に成ったように消えていった。実際には灰じゃなくエフェクトが崩れただけだけど、そう見えたんだ。

そして振りかぶられた剣の動きに呼応するように、風は生まれ集い出す。続けざまに攻撃をしようとしてたモンスター達にその機会を与えず嵐はその場を蹂躙する。

吹き飛んでいくモンスター達が哀れだった。まあ、別に死にはしないだろうけどね。吹き飛ばしただけでそれだけじゃ、ピクの炎と同様に殺すことは出来ない。倒すのならこのセラ・シルフィングで直接斬るのが一番だからね。

でもこれだけの数を相手になんかしてられない。僕たちには急ぎの用があるんだ。みんなで勝ち取った風のトンネルに僕らは入り、足早に先を急ぐ。

「もうすぐだ。もうすぐできっとこの森は抜けられる！」

「ホント、そうだといいわ。疲れたし」

セラがちょっと後ろでそんな事を言う。毒舌じゃないって事は余程疲れたんだな。なんだかよく分からない大業やってたしその影響

かも知れない。
「大丈夫だよセラちゃん。本当にもう出れる。ね、ピク」
「くぴー！」
シルクちゃんの言葉にピクは反応して前に出てクルクルと自分の体を回してる。なんだ？　ピクにはＬＲＯの地図情報でも入ってるのか？　それならＧＰＳとしてスゴく便利なんだけど、そんな機能があるかな？
「感覚です。感覚。それにピクは森の出口を教えてるんじゃなく敵が居ないって言ってるんだと思います。そしてそれが即ち、森の外な訳ですよ」
「ああ、なるほどね」
シルクちゃんの説明に納得だ。流石にピクにＧＰＳは望めないけど、敵感知の優秀さは証明出来てる。敵をどこからでも感じるこの森だから、感じない場所が出口になる。
それをピクは教えてくれた。こっちは安全だ！　出口だ！　ってさ。
「うん？　だけどこのＬＲＯにエリアの切り替えは無いんだぞ。それなら今この森で付いてきてるモンスター共が外に回り込んでる筈じゃないのか？
実際、最初にこの森で襲われた奴はタゼホまで追いかけられたんだろ？　それなら俺たちだってそうなる筈だ」
「「「……」」」
鍛冶屋が悲観的な事言うからみんなが口を噤んだ。でも、確かに鍛冶屋の言うことは正しい。ＬＲＯにエリア移動時の切り替えなん

て旧時代の異物はない。広大な世界が広大なまま広がってるんだ。
自身の足で踏み込める場所は大抵いける。モンスターは普段移動する範囲は決まってるけど、プレイヤーとアクティブした時は見失うまで追ってくるのが常識だ。
なら……居るはずだ。森を出た先にまで回り込んでモンスターは居る。

「けど、ピクは間違いなんて言いません！」

そう言いきったのはシルクちゃん。確かにピクの感知機能は凄いから、間違うなんてないと思うのも確かだ。考えられるのはピクのメッセージが違うのか、本当に外には敵がいないのかだけど、確かめるにはどっちも覚悟は必要だ。

「あのな嬢ちゃん、ピクが言ってる事の方が確率的に低いんだ。この風の向こうに居る奴らが俺たちを追わない理由なんて無いじゃないか。
どこまででも追ってくる……それこそ俺達にとっての安全地帯は町や村だけだったんだ。その神話も崩れたがな」
「だけど、追わない理由だってあるかも知れません！　ピクが言ってる事は確かに確率的に低いかもだけど、それも決してゼロじゃない！　この森であの子はテッケンさんよりも優秀な感知能力を見せてくれました。
それは信じられる事です！」

後ろではそんな二人の言い合いが始まってた。なんか珍しいね。シルクちゃんが誰かの意見に突っかかるなんてさ。やっぱりピクはとっても可愛いからだろう。
でも視線を動かしてチラッと見たけど、何だかシルクちゃんの怒る姿はとっても微笑ましい。棘があるんだか無いんだか分からない

んだ。まあ有ったとしても決して刺さりそうも無いけどさ。
握った拳が綿飴みたいに見えるよ。フワフワだ。フワフワの粒子を彼女は放出している。　美少女だね。シルクちゃんを見てるとつい和んでしまうけど、今は和んでる場合じゃない。
「はぁ～」と大きなため息が付かれて、そちらを見るとセラがなんだか痛い視線を僕にぶつけてくるんだ。「何やってんのアンタ？」的な攻撃色をはらんだ瞳。
その痛さのおかげで……いや、せいでシルクちゃんの和み空気が僕の思考から消え去った。まあ、ここはおかげにしておこう。いつまでも後ろで二人に言い争って貰ってても困るわけだしね。だってもう、出口は直ぐそこだ。

「鍛冶屋もシルクちゃんももう止めろ。外に出れば分かるだろ。取り合えず戦闘準備だけはしといて――さあ、抜けるぞ！」

僕たちは風のトンネルを抜け出した。そしてそれと同時にいろんな事があった森から抜け出す。
木々が蹂躙して作り出していた緑の暗い闇と風が吹く度に鳴らしていた枝葉の合唱が不意に消え去り、現れたのは地面を優しく撫でる様に吹く風と、大地を太陽に変わって照らす月光の満ちる場所だった。
そしてそこには当然、森に居たモンスターの姿はどこにも無かった。後ろを思わず振り返っても、もう奴らの姿を見つける事は出来ない。
今度はあの森に立ちこめていた闇が覗く事を拒否してるみたいなんだ。入ったときには道を見失う程に僕達を覆って、出た途端に中を覗かせない様にするなんて……まるでこの森事態が生きてるようだ。
僕らはもしかしてあのモンスター達にじゃなく、この森事態に食べられ掛けてたのかも知れない。そんなアホらしいことを考えなが

らも背筋はちょっと強ばった。
周りのセラ達も何故か言葉を発しないし、もしかしたら同じ様な事でも考えてるのかも。

「何もいないな」

そんな僕の声が静かになった周りに消えていく。構えていた武器が今は不格好に見えるな。だけど有る意味、不自然な今の状況にみんな武器をしまわない。

「絶対におかしいぞスオウ。本当は今にも森の中からモンスター共が飛び出てくるのかも知れない」

一番警戒してる鍛冶屋が森に体を向けてそんな事を言う。確かにその可能性も無くはない。けど、ゴメンだけどそんな気配は一切無いんだ。
本当に長閑な風が吹いている。拍子抜けするほどの。森は幾ら見つめても闇を深めるだけで、モンスターの目が光ることも無い。
まるでさっきまでいた筈の大量のモンスターが消え去ったみたいだ。それは鍛冶屋が言うように本当におかしな事。けれど真実も、その理由も、今は僕達に確かめる術はない。もう一度森に入るわけにも行かないしね。

「もう大丈夫ですよ。ほら、ピクの言ったとおりだったんです」

シルクちゃんはいち早く武器を背中に戻し、飛んでいたピクをその両手に抱きしめる。シルクちゃんに続いて僕もセラも武器をしまう。ここに危険は無いと判断したんだ。どうしてかは分からない。
けど、ここに奴らは来ない。なら武器を構えてる必要なんて無いからね。

だけどそんな中一人だけ武器を頑なに構え続ける奴が居た。

「おい、いつまでそうやってる気だよ鍛冶屋？　取り合えず大丈夫そうだしもう良いぞ」

「そうですよ鍛冶屋さん。正しかったのはピクなんです。悔しいのは分かりますけど認めてください」

僕らの言葉も無視して顔を背ける鍛冶屋。ガキかアイツは。てか、そんなに自分の予想が外れた事を認めたくないのだろうか？　それか原因はシルクちゃんかな。

森で派手に言い争ってたからバツが悪いのかも知れない。鍛冶屋は鍛冶屋なだけに頑固なんだろう。職人気質って奴が強いんだ。

「鍛冶屋さん！　ほら、ピクにごめんなさいをください！」

「はあ？」

やっとで反応した鍛冶屋はちょっと苛ついた感じの声を出した。シルクちゃんはだけど怖じ気づに両手でピクを掲げて鍛冶屋の顔の前に突き出している。

なんだか一番迷惑がってるのはピクの様な気がするな。シルクちゃんも珍しくこの事に関しては引かないし……面倒な事になってる。

「貴方はピクを侮辱したじゃないですか。だけど正しかったのはピクなんだから謝るのは当然です」

「なんでわざわざそんなこと……別にいいだろ。あ～あ～ピクは凄いな～」

「全然心がこもってません！」

適当に応える鍛冶屋にシルクちゃんが今度はご立腹だ。あ～もう、なんでこんな事になってるんだろうか？　麒麟戦の時はあんなにみ

んなで協力して一つに成ってたのに見る影ないよ。
「はいはい、二人とももう止めろよ。今はアルテミナスに戻る事の方が先決だろ？」
僕は火花を散らす二人の間に入って仲裁を試みた。取り合えず目的を提示して問題は持ち越しに――

「スオウ君は黙ってて！」
「お前は黙ってろ！」

――しようとしたら二人から怒鳴られた。鍛冶屋はいいよ。別に心に刺さらないし、気にしないことは簡単だ。だけどシルクちゃんに言われたら泣きそうだよ。まさかそんな言葉が発せられるとは思っても無かったからテンションだだ下がりだよ。
優しかった風が冷たく空しく感じるのは気のせいかな？

「はあ～、アンタはどっちにも優しくて、どっちにも良い顔しようとするからそうなるのよ。そんなどっちつかずの言葉なんて安っぽいの、そして安直。
追い返されるのは当然ね」

肩を落として遠巻きに二人を眺めていた僕にそんな言葉を掛けたのはセラだ。いままで疲れたとか言って我関せずだった癖にどういう風の吹きようだ？　てか、何企んでる？

「何よその目？　別にアンタをからかおうなんて思ってないわよ。ただどっちつかずは有る意味無責任って事を知っときなさい。選ぶ事って大切よ」
「選ぶこと？」

時々セラの言葉は心の奥まで突き刺さる。ジャブジャブジャブ・

ストレートの感覚。ジャブは普段の毒舌で、ストレートは深く確信を抉る必殺パンチだ。
まあ効いてるって事は当たってるんだろう。僕としては認めたくないけどね。

「お気に入りを選ぶこと。私の場合はシルク様ね。女が組んだら男は勝てないでしょ？」
「はは、確かに」

悪魔の笑みを浮かべてセラは二人に近づいて行く。男に取っては悪魔の笑みだ。自分が潰される訳じゃないのに寒気がしたよ。
いつまでも喧嘩して貰ってても困るから止めはしないけどね。ここは鍛冶屋には悪いけど、セラの毒牙に掛かって貰おう。セラはシルクちゃんの後ろに近づいてガバッと抱きついた。

「ふえええ！？　セラちゃん、何？」
「シルク様、私は味方ですよ。ちょっと鍛冶屋！　貴方みっとも無いわね。ちっちゃいわ。とっても小さい。女の子一人に頭も下げれない男なんてさ・い・て・い・よ！」

いきなり女の子に言われたらキツい台詞を躊躇いもなく言いやがった。それも最後の部分を強調して。悪魔だ。やっぱりセラは悪魔だよ！
今の一撃で既に鍛冶屋はフラフラだ。なんだかんだ言ってもシルクちゃんは悪口言わないからね。その攻撃力の無さをセラが一手に引き受けたみたいだ。

「お……お前に関係ない事だ！　引っ込んでろ！」
「ふん、シルク様を侮辱する事は許さないって言ってるのよ。自分の間違いも認められないで何職人気取ってるの？　本当に誇りがあ

って芯がちゃんと通った人は、失敗を誤魔化そうとはしない。キチンと謝る強さを知ってるものよ。それも出来ないから貴方は職人として半人前なの。
一歩前に進みたいなら非を認めなさい！　アーサーウエポンは絶対に作れないわよ」

頑張った鍛冶屋だけど、軍配はやはりセラにあがった。返す言葉も無いらしい。下に恐ろしい奴だなセラは。所で『アーサーウエポン』ってなんだろう？

「……済まなかった」

そんな鍛冶屋の声が聞こえたのは直ぐ後だった。それでもセラは納得してない様だったけどシルクちゃんはそれで満足したみたいだ。彼女の優しさは海より深い。

「まあ、シルク様がそれで良いなら良いですけど。それではこれらかアルテミナスに向かいますが、状況は芳しく有りません。
私達じゃ無く、アルテミナスがです。その報告をメールで受けました」

急に沈んだ様な目になるセラ。その瞳に浮かんだ色は不安や怒り。僕は同じ様な目をつい先刻見たから分かる。僕を必死に止めようとしてくれた時の目と同じだ。
みんなそれに気づいてる。セラの痛々しい空気に……そしてそれを一番感じ取りやすい位置に居るであろうシルクちゃんがセラの手に自分の手を重ねた。

「どう言うことセラちゃん？」
「……クーデターです」

端的に発せられたその言葉を僕達は理解できなかった。空に浮かぶ月が雲に僅かに隠れて光を減らす。優しかった風が一迅を凪いで草を巻き上げた。

そして再びセラは言葉を紡ぐ。その瞳から一筋の涙を流して……

「ガイエン様がアイリ様を捕らえて、その力でクーデターを……アギト様も……ごめんなさい。これは私のわがままです。私達の愛した国を……私達の愛したお姫様を……助けるのに力を貸してください……」

気丈な仮面の下にあった顔は女の子。セラに強く抱きしめられたシルクちゃんがその顔を見つめて僕達の思いを言ってくれたんだ。

「私達は仲間だよセラちゃん！　助けての声だけで……それだけで十分！」

僕達はその時、月光の元仲間として目的の空を見据えた。アルテミナスが在る、あの空を。

セラの名を持つ二つの輝き（後書き）

第五十三話です。
きちんと更新これからも守って行きます。良かったら感想とかくださいな。悪いところを指摘されれば、頑張って治します！
そんな訳で次回、第五十四話は日曜日に更新します。ではまたです。

信念でさよなら（前書き）

俺達は最後の五分間に入ったっす。ここを乗り切り俺のスキル『ミラージュコロイド』を発動してアルテミナスからの脱出をしなければならないっす。カーテナを振るうガイエンの攻撃。集団やら俺を執着して狙う奴やら居る親衛隊の猛攻。

それは全てがギリギリだったっす。テッケンさんと協力して、最後に挑むはやはりガイエンとカーテナという力。再び戻った俺のスキルで逃げの勝利を掴むっす！

信念でさよなら

もう流石に剣を抜かないで逃げることだけを考える・・なんて事は出来なくなったっす。再び『ミラージュコロイド』を発動するまでの後五分、俺は絶対的な回避方法を失った訳っすからね。

（さて……どうっすっすか、後五分は長いっす）

心の中で舌打ちしながらウインドウを表示させて、予備スキルでの逃走構造を頭に思い浮かべてるっす。もしもの時の為にショートッカットに別のスキルを当てるのは、誰しもがやってることっす。

幾ら自信があるスキルの組み合わせでも、全ての局面にそれが当てはまる事はないんす。

だからある程度スキルが貯まったら、何通りものスキルを試し、組み合わせて、最低でも三つのスキル構造を作る物っす。

ＡＢＣと定義したそれのＡには尤も信頼するスキルを中核に組み込んだ物にしてメインとして使うっす。俺の場合はそれこそ『ミラージュコロイド』がそれに当たるっす。

そしてＢとＣにはそれぞれ中核を別のスキルに置き換えた物を組むっす。大抵窮地に陥った状況では、その信頼したスキルが使えなく成ってるからＢＣへって事っすからね。

だけど俺は特殊っす。元々戦闘時の交戦を余り視野に入れてないっすからね。俺のスキル欄は如何に逃げきって生き残るか……それに徳化した作りにしてるっす。

だから同じスキルが基本重なる様な事は無いっす。再使用時間が短い物なら別っすけどね。

逃げきる……この状況で限りなくゼロに近いそれを可能に出来るとしたら『ミラージュコロイド』しか無いっすよ。だから後五分を

繋げる事が出来る方を選ばなくちゃいけないっす。それはBかCか……

「何を算段してるかしらんが諦めろ！　カーテナから逃げる事など不可能なのだからな！」

「取り合えず回避だノウイ君！」

ガイエンの言葉の後に続いて響いた、テッケンさんの声に体が勝手に反応して動いたっす。アギト様に肩を貸したままその場から飛びすさった直後、ドバン！　と言う音と音に見合っただけの衝撃が俺の体を転がしたっす。

「うあああっあああああっあ……っつう」

跳ね転がった先にも親衛隊と言う敵が居るっす。奴らの一人が待ってましたといわんばかりに剣を振りかぶって来るっす。

「ようやく貴様を切れるわ！！」

「またアンタっすか！」

親衛隊の顔を確認すると、毎回俺を執拗に狙う奴っした。態勢も悪く、回避するタイミングを完全に逃した俺は握った剣を体の間に滑り込ませて奴の剣を受けるっす。

剣と剣がぶつかった音が焦燥の夜空に甲高く響く。だけど直ぐに片手と不慣れな事での差が明確に出始めていたっす。

「ははははは！　何度でも何度でも、貴様をこの手で斬るまで表れるわ！　その軟弱な剣ごと叩き斬ってくれる！」

「ぐ……ぬあああああああ……」

奴の剣が一層力を増して俺の剣を押してきているっす。押し返せる道理は無く、こく一刻と刻まれるのは目の前の奴の歪んだ顔っす。
やっとで我慢し続けた大好物に箸を伸ばせた子供の様な顔。だけどそれをマジで大人がやるとこんな歪んだものになるって知ったっす。
そこにはただ純粋なだけの理由を大人は持ち合わせないっすね。いや、この人が思う俺を斬りたいって思う気持ちは真っ直ぐで純粋なのかも。
でもその中には「気に入らない」とか「ムカつく」とか横に逸れた感情がペタペタとくっついてトゲトゲの様になってるっすか。
様はそんな横に逸れまくった感情の矛先が俺に向かってるって事がバレバレっす。
隠す気があるとも思えないっすけど。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇええええええ！」

奴の呪詛めいた声が歓喜の歌に乗せられて耳にひたすら届くっす。それは不快なんて安い物じゃ無いっすよ。恐怖と悪寒の相乗効果を知ったっす。人が持つ黒い感情をそのままぶつけて来られるとたまった物じゃ無いっすよ。
パキっと握る剣に亀裂が入り出した音が耳に届くっす。その時、地を蹴る複数の足音が聞こえたっす。きっと今がチャンスとばかりに止めを刺しに来てるんすね。

「ノウイ君！　クッソ……」

周りに視線を走らせると剣を顔等辺で構えて、取り囲む様に向かってきている親衛隊五人位が見えたっす。その向こう側では剣を必要最低限混ぜ合わせて時間稼ぎの為に色々小細工やってるテッケン

さんが見えるっす。
向こうも同じ位の人数を相手にしてるから、そこを抜け出すなんて出来そうもないっす。いいや、それよりこの状況は俺もテッケンさんも、どっちも切羽詰まってる訳っすから五分を生き延びる為にも構わない方がいいっす。
『五分後に双方が生きている事を信じる』それ位じゃないと無理っす。自分以外に意識を向けたときにやられそうっすからね。
ヘナチャコやら卑怯やら言われてる自分っすけど、逃げる事だけに関しては誇りを持って前向きに考える様にしてるっす。
だから俺は逃げることだけは諦めない様にしてるっす。派手な戦闘やら、誰かに喜んで貰える職人とかじゃなく、これが俺が選んだ道っすから。
最後の取り柄まで自分から捨てたら、もう何も残らないっすからね。だからテッケンさんは俺の事は五分間忘れて目の前の奴らをやり過ごしてくださいっす。俺もまだまだやられはしないっすから！
複数の切っ先が寸前まで来た時に、ついに俺の剣はポキっと逝ってしまった訳っす。その瞬間見せた、奴の歓喜と至福を思い描いた様な表情には流石にゾッとした訳っすけど、それは皮算用過ぎるっすよ。
それか早合点。どっちでもいいけど、だから俺はアンタにやられはしないっす。

「終わったあああああ！」
「いいや、まだ逃げさせて貰うっす！」

鼓膜を地味に腐らせる様な奴の言葉をはっきりと返してやったっす。そして同時に折れた筈の剣が赤く光って丸い玉に凝縮されたっす。そしてその現象は当然、親衛隊の奴らにも見えた様でしたっす。

「総員回避しろ！」

いち早く気づいた奴がそんな声を出したっす。けどそれも遅いっす。もっと早くに気づくべきだったんすね。取り出したばかりの剣が、そうそう折れるなんてあり得ないって事に。
幾ら何でも一太刀で折れる剣なんてＬＲＯに存在はしないっすよ。それがあるとすれば、それは剣では無いものっす！
凝縮された赤い玉が弾けて、巻き起こった爆発に親衛隊が包まれたっす。そして奴らの剣は届く事無く、俺から離れたっすよ。

「「「「うあああああああ」」」」

そんな悲鳴が大合唱されて吹き飛ぶ白服達。だけどダメージを受け付けないその仕様に意味なんて無いのかもしれないっす。
だけど……だからこそ、この罠には二重の仕掛けがあったっすよ。

「なん……だこれ？　動けない……」
「くっそ！　どこまでも……卑怯な真似を！」

何人かは上手く掛かったようっす。奴ら爆発に巻き込まれた親衛隊の何人かには、光鎖の様な物が体を縛っている。
あの派手な爆発も実はこれの為の伏線であり目眩ましっす。倒す事が元々得意でない俺っすから攻撃に見せかけるのは全部逃げるための算段っす。
倒せないから動きを封じるー逃げれないから動きを封じる。それはどちらも『逃げ』にとって有効な手段っす。追いかけてくる奴は一人でも少ない方がいいっすからね。
俺は距離が開いた親衛隊共に言ってやるっす。

「言ったっすよ俺は。逃げることしか出来ないって」

これだけが自分の出来る事だって。奴らは見失ってたんすよ。散々さらけ出していたのに俺って言う生き物の行動理念をね。だから今、アンタ達はそこに這い蹲ってるっす！

「なら、逃げ続けてみろ。この私からな。いつまで続くか見せてくれよ目が点君」

不意に聞こえたそんな言葉は、見なくても誰が発したかわかったっす。身体強化系のスキルでスピードを出来る限り上げることを俺は選ぶっす。

結局、ミラージュコロイドなんて特殊なスキル以外で逃げる事に徳化するなんてのはスピードを追い続けるしかないっすよ。

巨大なハンマーが振りおろされた衝撃が再び俺の鼻先をかすったっす。それは紛れもないカーテナの力。さっきまで使わなかったのは側に親衛隊が居たからっすか。

カーテナは威力もその範囲も、どうやったって周りを巻き込まずにはいられない代物のようっすね。それか、今はまだガイエンも完璧には扱えていないのかも知れないっすけど……それを確かめる事は俺には出来ないっす。

やる意味もないっすからね。取り合えず問題なのは、俺に向かってあの剣が向いているって事っす。

「ほらほら、潰されない様にしっかり逃げて見せろ」

今度は連続してカーテナが振られるっす。連続して響く大きな音と地面を揺らす衝撃は凄まじいものっす。だけど俺はそれをかいくぐるっす。今まで逃げ続けてきた事で、逃げ道を見つける嗅覚が自分には備わったのかも知れないっす。

だけどガイエンはまだ上下にしかカーテナを振ってない事実があるっす。確実に遊んでる。そう感じるっす。けれどそれでも、それ

だけでもやっぱり驚異っす。
次第に感覚が縮められていき、確実に俺は追いつめられてるっす。逃げ道を嗅ぎ分ける嗅覚も叫びを俺に届けてるっす。

（このままじゃヤバい、マズい）

一瞬でも良いっす。どうにかガイエンの動きを止められたら儲けもんす。再び武器を握り（今度は短剣）逃げまどう中、それをガイエンに向かって投げつけるっす。
だけどそれはあっけなく阻まれるっす。奴を守る様に張られている光の壁みたいなのがその原因っす。ガイエンに届くことなくその光の壁に阻まれた短剣っすけど、その瞬間不自然に折れてさっきの親衛隊にかました攻撃と同じ現象が起きるっす。
爆炎の中に呑まれたガイエン。一瞬だけど確実に止まったカーテナの攻撃を逃さずに体勢を整えるっす。そして手には再び別の武器を握るっす。
あれが効いてるなんて思ってないっすからね。

「良い心がけだ。こんな小細工、私には何の意味も成さないぞ」

立ち上る煙の中かからそんな声は聞こえたっす。そしてその煙をなぞるように何かが水平に移動するのが俺には見えたっす。

「――がっはっ！？」

ゆっくりな奇蹟を描いたその動きを注視したのが良くなかったっす。直ぐに分かったはずなのに、心のどこかでは油断や渇望をしてたみたいっす。
「もしかしたら……」という淡い望み。そんな物を見えない煙の向こうに期待した結果、俺の体はくの字折れ曲がり地面に埋まるか

と思う程の衝撃で叩きつけられたっす。

「なんだ？　まさか避けないとはな。当たると思ってなかったから少々投げやりだったのだが、良く効いてそうだな」

晴れて行く煙の中から、無造作にカーテナを振り回しながらガイエンが出てきたっす。なんとか体を起こしてその体を改めて見ると、傷一つどころか爆発の影響も微塵も受けてない様っす。

自分の攻撃力の無さは知ってるっすけど、硝煙位かぶっとけって言いたくなるっすね。それに投げやりなんて感じで放たれた攻撃がここまで効くのも予想外っす。

「確かに良く効いたっすけど……まだまだっす」

ＨＰは一撃食らっただけで三分の一は減ら去れたっす。単純に考えると後二回食らえば俺のＨＰは終わってしまうっす。たった三回の攻撃でやられるなんて、敵であるボスクラスのモンスターでも聞いた事ないっすよ。

立ち上がると何故か片側が軽く感じたっす。そして武器を握ってない方の腕が宙を掻くっす。スカスカ……スカスカ……恐る恐る目を向けるとそこにはアギト様が居ないっす！　どうやらさっき吹っ飛ばされて時に手を離したみたいっす。

（どこに……）

そう思って視線を走らせると、こちらに向かって来ていたガイエンが地面に転がる何かに手を伸ばしたっす。そして胸倉を捕まれて晒されたのは紛れもなくアギト様っす。

「ククククク、やはり貴様は、この私が潰さんとな！」

そう言ってガイエンはカーテナを構えるっす。アギト様は相変わらず死んだ魚の様な目でただそれを眺めるだけ。ダメなんすよ。アンタはここでやられちゃダメっす！

「うおおおおおおおっす！」

俺は何も策がないけど走り出してたっす。せめて至近距離で爆発させて目くらましにでもなれば幸いっす。だけどそこであの親衛隊の奴が飛び出して来たっす。

「やっとでやる気になったか？　けど諦めろ、過去はもう我々には必要ないんだ。明日の発展の為にあの方は奴らと決別しなさる！」

「またアンタっすか……どけっす！」

俺は手に持った武器（今度は片手斧）を投げるっす。ブーメランの様に回転して目の前の親衛隊に飛んでいく武器。だけど奴はいとも簡単にそれを叩くっす。

だけどそれが狙いで、思惑通り行ったっす。こんな奴に構ってる暇なんてないんすよ。叩かれた武器はまたも不自然に砕けて爆発をするっす。

最初の時は複数人いたから奴は縛られなかったっすけど、今度は一人。確実に奴の身動きは封じられた筈っす。爆煙に包まれた奴の横を通ってガイエンを目指す。けれどその時、黒い煙の中から声が聞こえたっす。

「温いな貴様。我に同じ手が二度通じると思うか！」

「――っつ！？」

奴は縛られていなかった。剣を突き出して煙の中から現れたっす。

そして黄色いエフェクトを帯びた剣が、俺の腕を貫いた瞬間、体が横に吹っ飛んだっす。
けれどその途中に小さな影が俺の横を猛スピード駆け抜けたっす。あれはテッケンさん！

「任せてくれ！」

そう言って二人に分裂したテッケンさんが奴を攪乱して一気に抜き去ったっす。そしてガイエンに迫る段階で更に八人に成ったっす。全包囲からの一斉攻撃で一時的にガイエンの動きを止めたっす。スゴいっすテッケンさん！
俺の様な騙し騙しの攻めじゃ無い、あれが本当の戦闘っすか。だけどあれも僅かな均衡が針の上でバランスを取ってる様な物っす。
僅かな介入で一気に崩れさるかも知れない……そしてさっきまでテッケンさんが相手していた親衛隊と、俺を吹き飛ばした奴が援護に向かおうとしてるっす。
ここで行かせたらダメっす！　俺は直ぐ様立ち上がり、両手に武器を構えるっす。今度は片手昆二本っす。

「行かせるかっす！」

それをまずは後ろから来ていた親衛隊の奴らに二本とも同時に投げつけるっす。そしてその特性を奴らは見てないから無造作に武器で払い爆発。これで数人は行動出来なく成ったはずっす。
だけどこの機会を逃がす手も無いっす。テッケンさん側だったこいつらは爆煙に隠れて状況を分かってない。なら一気に全員を行動不能に、と思い続けざまに武器を投げてやったっす。
ドガン！　バガン！　と武器が弾けて煙を巻き上げる。だけど何人が行動不能に成ったかまでは確認しないっす。そんな余裕はないっすから。テッケンさんにあの異常に執拗な奴が迫ってるっす。

奴を行かせちゃいけない。確かに戦闘では劣る俺っすけど、スピードはこっちが上っす！

「うあああああ！　止まれっす！」

「貴様！　そうこなくてはな！」

驚いた顔はせずに何故か奴は歓喜に満ちた顔で剣を重ねたっす。二つの武器がせめぎあう。ちなみに今の自分の武器は両手昆っす。無理せずに俺は直ぐに身を引くっす。そして再び武器は爆発。だけどやはり奴は鎖に縛られない。

「ふん、何度やっても貴様の卑怯な手など効かんわ！」

卑怯なんてＨＰを減らさない奴に言われたくもないっす。確かにこれを分かってる奴をハメるのは用意じゃないけど、俺には武器らしい武器はこれしかないっす。そして今の状況で唯一有効なのも事実。

必ず喰らわせる！　一個でダメなら二個。二個でダメなら三個。それでもダメなら持ってけドロボーっすよ！

「アンタはここで絶対に止める！」

出し得るだけの武器を奴に向かって放つっす。だけどそれは奴の剣撃に寄って全て叩かれて爆発していくっす。それは俺の思惑通りなのに奴はやはり止まりはしないっす。地面を蹴り勝利を目前にした奴の顔が迫るっす。

自分に残った武器は腰の長剣のみ。奴はそれを確認して更に不適な笑みを作ったっす。

「終わりだ！　それは軍に支給されるただの剣だからな！　勝利は

我が手が掴む！　貴様は結局ただの負け犬よ！」

剣と剣がぶつかり合うっす。確かに鞘から抜いた剣は今までと違い、ぶつかった位じゃ刃こぼれ一つしない立派な武器。だけどこれを最後まで取ってたのには意味が有るっすよ！

「確かに俺はアンタから見たら負け犬かも知れないっす。けどこんな俺にも期待してくれる人達はいるんすよ！　それに自分の国を救いたいと思うのは負け犬にだってある権利っす！」

片手に持ち直した剣。空いた片手は再び腰の鞘に向かい、柄を握ったっす。空だった筈の鞘に現れた剣……それを見て奴は驚愕したっす。

「貴様！　それはまさか！？」

「このスキルの制約は順番とストックっす！　思い出して見るんすね。投げていた順番を！　最後は勿論長剣っすよ！」

抜き去った剣を奴の腹に突き立てる。すると刺さりもせずに折れたっす。

「きっさまぁぁあああああ！！」

奴の声は直後に起こった爆発に呑み込まれたっす。爆発の中奴に光る鎖が巻き付くっす。そしてこの瞬間軍配は俺に上がったっす。

「騙し討ちとはこの卑怯物がああ！」

そんな事を叫んでる奴が足下に転がったっすけど、気にしてる余裕は無いっす。勝負に勝っても試合に負けたら意味がないんすよ！

試合とは勿論ここの局面を切り抜ける事を指すっす。前に視線を向けて走り出す。本当の敵はこいつじゃないんす！

「テッケンさん！」

俺の声に反応した八人のテッケンさんと目を合わせて頷き合う。ちょっと物怖しそうになったけどそんな事気にしてられないんだ。

「頼む！　ノウイ君！」
「はい！　『ミラージュコロイド』発動っす！」

見えない鏡を操作してガイエンの視点をずらす。そして八人のテッケンさん。状況は一気に有利に成ったように見えた。だけどカーテナの一振りは大抵の物を凪ぎ払うっす。

「小賢しい……小賢しいわ貴様等あああああ！！」

一気にテッケンさんの分身が消え去った。だけど本体は俺と一緒にガイエンの背後に鏡を使って移動してたっす。
テッケンさんの攻撃が奴の守りを打ち破ったっす。だけど体はかわされた。けど体勢は崩れたっす。それで十分。俺はアギト様の腕を掴んで引っ張るっす。だけどガイエンは胸倉を放してない！

「ふふ……ははははは！　逃がすわけない！　集ったな貴様等。終わりだあああ！」

振りおろされるカーテナ。ここで回避したらアギト様がやられるっす。逃げの選択は出来ない……けど武器はただの剣しか無いっす。
逃げない状況なんて自分には分からない。けどその時アギト様の服から何かが飛び出したっす。それは白いフクロウ？

「クー！」

そう叫んだテッケンさんが腕にクチバシを突き刺したフクロウに加勢するように飛んできたっす。そして今度こそアギト様をその攻撃で解放したっす。これで全ての条件が満たされたっす。

「今だ！　頼むノウイ君！」

「はいっす！」

腕を掲げ展開していた鏡を空に向けて一直線に並べるっす。向かうは月。月光の道を切り開くっす！　テッケンさんはクーを、俺は彼とアギト様を引っ張って後ろに出した鏡に飛び込むっす。

「逃がすかあああ！」

突き出されたカーテナが空に並んだ鏡を次々と砕いた。だけどそこに俺たちはもう居ないっす。飛び出たのは月が限りなく大きな空。遙か遠くにアルテミナスの光。

俺達は遂にやり遂げたっす！

信念でさよなら（後書き）

第五十四話っす！

て、ノウイの口調思わずなっちゃった。たく「っすっす」うるさいんだよね。読みにくいだろうか！　っす、の分文字が嵩むんじゃ！　地味にうざいですよね。

まあでもこれでノウイの活躍の場は終わったから、次の場は考えてません。次で合流できるから、次が本当の折り返しですね。アルテミナス編。そろそろリアルを出したいところです。リアルとの交錯をテーマにしてるんで！

次どうなるか分からないけど第五十五話は火曜日更新します！

月の落し物（前書き）

僕達はフィールドを駆けアルテミナスを目指していた。流れる空気はちょっと重たい。だってセラがね……それにこれからどうなるか何も分からないのも大きかった。

だけどＬＲＯの綺麗な夜空がその空気を緩和する役目を一役買ってくれた。そして夜空に響く不格好な叫び。それは次第に近づいて僕の頭上に伸し掛かった。随分大きな、月の落し物。

月の落し物

僕たちは駆ける。月明かりの下を風の様にだ。ＬＲＯの星空がリアルと同じかは知らないけど、何とはなしに空を見上げてみるとそれっぽいのがあったりした。

でも、僕は常々思ってたんだ。数十個位の星々を繋げてあれで良く動物やら物やらに見えた物だ……って。昔の人達は想像力豊か過ぎだろ。

あれを良く色んな物に当てはめたなってホント思う。無理矢理にも程があるぞ先人。一体誰が考えたんだろうね星座って。てかいつから有ったんだろうか？　小学生の時にはもうあったな……って、一人でアホなボケを心内でかましてみたり。

（……）

突っ込んでくれるもう一人の僕は居ないのか。流されるボケほど恥ずかしい物は無いんだよ。誰かが拾ってくれないとボケた人はずっとお尻を晒して、その一発を待っている態勢なんだからさ。

みんなは愛と優しさを持ってボケた人に突っ込むんだ。なんだか星座の話からボケと突っ込み話にどうなって行ったんだろうか？自分でも脈絡の無さにびっくりだ。

あれだね。空に浮かぶ無数の星の光が実は数年前に放出された光で有るように、僕たちは常に過去を振り返っちゃう生き物なんだ。

「あの頃は良かった～あの頃は良かった～」

そう言う大人が多いのがそれを裏付けてる。みんな何かしら過去に捕らわれて生きているのかも知れない。未来は変えられるけど過

去は変えられないから……色あせても、塗りつぶすなんて不可能なんだ。
過去に失敗した自分はずっとそこに居続ける。だから人は悔いのない生き方をしようと思う訳で、でも現実にはセーブもロードも無いから難易度超高い。
ゲームの様には出来てない。命は一人に一個っと決められて、逝ってしまえばこれっきりなんだ。戻れるのは思い出の中でだけだ。

「あっ」

その時、夜空の星が流れた。あれもシステムで、隕石でもなくてこの星空だって現実じゃないって分かってる。だけど、僕が感動する程の夜空を映したのは間違いなくこのＬＲＯだった。
無数の流星が輝いているのだと最初思ったよ。星の光の強さがちがくて、墜ちてくるんだと本気で思えたんだ。視界一杯に端から端まで余すことなく星が見える光景に圧巻された。
現実じゃないのに、これが本当の星空なんだと思えた。

「どうしたんですか？」

耳に触り心地良い声はシルクちゃん。例えるならそう、夏場に蝉の声がうるさいくらい聞こえてるときに不意に届く風鈴の様だ。
その音が届くと蝉の鳴き声さえも夏の風情の一員として脳内で処理できる。まあ、元から蝉の声は夏の風物詩なんだけどね。時々不快になるものさえ癒しに変える事が出来るって事だ。
そんな癒し要員のシルクちゃんに視線を向けて見ると、少し火照った頬に僅かに浮かんだ汗が見える。それに走り続けていることに寄っての激しさを増す呼気の感じがなんだろう……ホント可愛いなこの子。
無理矢理まとめて僕は再び空を向く。

「いやさ、流れ星見えたなって思って。三回願うとここでも願い事叶うかな～なんてさ」

僕のそんなアホな言葉にシルクちゃんは目をパチクリさせた。ちょっと言った後に自分でも恥ずかしくなる。違うんだ。さっきまで殺伐としてたから癒しを僕も求めてるんだ。

「ふふふ、そうだね。ＬＲＯの流れ星は隕石じゃないし、もしかしたら本当にそんな力があるかも知れません」

シルクちゃんは優しく笑って冗談っぽくそう言ってくれた。同意された事で少しだけ恥ずかしさ緩和がみられる。そして目だけ動かすと同じように空をシルクちゃんも見上げていた。

その顔の少し上にはピクが沿うように飛んでいる。

「やっぱり綺麗ですね。ここの空は」

それは僕に伝えてくれた言葉なのか分からない。呟くようなその言葉は独り言の様にも聞こえたからだ。てか、ちょっと見とれたよ。月明かりに照らされる銀髪は青白い光を纏ってた。

ピクはそんなシルクちゃんを真似するように月を見上げるけど直ぐに首を捻る様が愛らしい。いつの間にかセラや鍛冶屋も走りながら夜空を見上げてた。

「そうですね。眩しい位の星空です」

シルクちゃんの言葉に同意したのはセラだ。あれからなんだか思い詰めるようにしてて、ここまで一回も声を出さなかったセラがようやく発した言葉。

シルクちゃんに対する時だけは異常に丁寧になるその言葉に今は優しさもこもってるみたいに感じた。「仲間」って言ってくれた事を嬉しく思ってるって事だろうか。

それなら僕も鍛冶屋も嬉しいことだ。最初酷かったからね。でも良く考えたらもう今はシルフィングも直ったしセラに対する遺恨はなくなった訳だ。

どっちも今は歩み寄れる状況って奴だね。

「なあセラ。今でもエルフ以外は劣等種って思ってる？」

僕のそんな質問にセラは空を見上げるのをやめて徐々にスピードを落とした。ミスった？　声を掛ける選択肢を間違ったかも知れない。

僕達もセラにつられてその場に足を止める。そして俯いたセラから声が聞こえてきた。

「別に、今の段階では三割くらい見直してやってもいいわ」

俯いてる割には別段変わらん。僕の思いやりという気持ちを返せと言いたいな。

「残りの七割はどこいったんだ？」

「アルテミナスを助けた暁にはそれも加算してあげるわよ」

なんだか結局僕には上から目線のセラ。やっぱ落ち込んでる訳じゃないのか？　アイリもアルテミナスもまだ完全にどうなったか分からないけど、少なくとも僕達はセラに協力する事にしたからね。

少ないし小さな火だけど、少しでもセラの心の支えになってればいい。

「それより、あんた達だっていいのかなって思う。嫌いになったでしょ？　エルフの上の人たちのあの言葉、酷かったから」

セラはなんだか肩まで落としてる。もしかして悪いとか思ってるのかも知れない。同じエルフとして……だけど少し前までセラもそうだったけどね。

まあ、でもそんな事は関係ないんだけど。

「別に、どこの国も同じじゃないか？　僕は良く知らないけどさ。きっとどこだって上の方では他種族を罵倒してると思うし、罵ってる奴らはいると思うぞ。

それにあいつ等だけ見てエルフの人たち全員を同じように見る分けないだろ？　別に嫌いになんてならないよ」

「うん！　そうだよセラちゃん。私も普通にエルフの人ともパーティー組んでた。みんな良い人だったよ」

「まあ、エルフは武器方のお得意様だからな。大切にして貰えれば文句はない」

ぼくの言葉に続いてシルクちゃんも鍛冶屋もフォローする様な言葉をくれる。鍛冶屋はぶっきらぼうにそう言ったけど奴なりの照れ隠しととっておこう。

すると俯いていたセラが顔を上げた。広がっているメイド服のスカートが風に揺れて、月明かりが彼女の顔を表し出した。

それはセラの顔のバリエーションの最後の一つだったかも知れない笑顔だ。黒い訳でも元気一杯な訳でもない。それは微笑みと言った方が正しいかも知れない笑顔。

そこには確かな優しさや安心が見て取れるようだ。まさかセラからそんな物を感じるなんてって事で、僕と鍛冶屋はちょっと固まった。シルクちゃんは満足気にこちらもニッコニコだ。

「そう言って貰えると助かります」

セラはきっと自分だけの為にああ言った訳じゃないんだとこの時思った。セラが助けたいのはアイリは勿論で、国もそう……だけどそこに居る同じ種族の仲間全員なんだと分かった。

だからこそ、最初に会ったときの愛国者っぶりは納得だ。ある意味僕はセラがちょっと羨ましいのかも知れない。僕はいつだって直ぐに街を転々として国って言う枠組みを捉えたことはなかった。

気づいたらこんな違う種族の国まで来てるしね。

ここアルテミナスに来て、初めてそれを感じて知った。きっと最初に降り立ったあの始まりの街にもセラと同じ様に人と人の国を愛する人達が居た筈なんだ。

何か重い物を背負ってるのは何も僕だけじゃない。アギトだってそうみたいだったし、セラもその覚悟をした。格好良いことだ。自分の居る場所をそれだけ愛せるって事はさ。根無し草の僕にはそれが羨ましい。

でも、こんな素直なセラは思わずからかいたくなるね。

「しかしなんだか随分とお前も素直に成るようになったな」

「別にアンタに対して素直に成ってる訳じゃないから」

「ふ～ん、まあいいけど。良いもの見せて貰ったし。なかなか良い笑顔だった。可愛かったよ」

ボッ　（セラの顔から火が上がった……かの様に見える程に赤くなった音）

おお、なんと面白い反応だ。本当に火がでたかと思った。本当に火が出そうな位に大げさなＬＲＯの感情表現。ユニークの度合いが線を振り切ってるね。

まあ、ただちょっと言った本人まで赤面物なのは考える余地がある。効果覿面なのは良かったけどさ。やっぱりセラは攻められるの

に弱いのか？
よし、ここで恥ずかしがってる所に、「はは引っかかった、冗談だよ」とか言ってやれば――
「ちょ……なっ……良い言い良ってんの？　バカ……」
――ん？　あれれ？　なんだか思ってた反応の斜め上ら辺を今行ってるぞ。ろれつ回ってないし。妙にしおらしくなってるセラは、最後のバカを少し嬉しそうに言ったような気がした。
いや、あくまで気がしただけで、それは僕の自惚れの可能性が多分にある。もしかして独り身の寂しい男子高校生アイが妄想補正を行ったのかも知れない。いや、でもそれをセラでやるなよな。
でも最後のバカの異様なくすぐったさに予定の台詞を言えない。てか言っちゃいけない雰囲気だ。
「え～と、アンタさ……バカな事言ってないで急がなきゃいけないの分かってるでしょ？　だからさ……早く行こ、スオウ」
「ん？」
最後の部分は実は殆ど聞こえなかった。だから今記載されてる最後の台詞は男子高校生イヤーが補正を行った結果だ。真に受けないように。
顔を伏せて近づいて来てすれ違いざまが最後の部分だった訳で、振り返るとセラは既に走り出していた。その頭からは僅かに白い湯気が見える気がするけど、それはＬＲＯのユニークすぎる感情表現の妙だろうと思うことにする。
「スオウ君。セラちゃん行っちゃうよ。私たちも追いかけよう」
「ああ、そうだねシルクちゃん」
「たく、お前がおかしな事を言うから勢いが削がれたな」

セラを急いで追いかける様に僕達三人は走り出す。鍛冶屋の奴の言うことは僕のせいかよ。ただ単純にあれから一回もモンスターに出会して無いのは運だよ。本当に不自然な位にフィールドにモンスターがここまで居なかった。

まあ、だからそれを勢いと言うなら確かにそれは一端区切られただろうけど。でもここらでもう一度話すのは良かったと思う。

だってここまで気まずい空気が流れてた。誰もが言葉を紡ぐのを躊躇ってたんだ。気負ってたのかも知れない。いつの間にか自分達の知らないところで新たな事件は起きていて、目的が更に大きく成ったことにさ。

別に誰も後悔している訳じゃないんだ。ただ漠然とこれから立ち向かう物を想像すると、気負わない訳には行かない。だってそれは何だかんだと言っても味方だった筈の存在で国というとてつもなく大きな集団だからだ。

今までの戦闘と桁が違う戦いに成るかも知れない。それこそ言う成れば『戦争』とでも呼べる土壇場に成るかも。

「戦争か……」

誰にも聞こえないように僕は夜空にその言葉を飲ませた。完全な現代っ子な僕には縁遠い過ぎる言葉は声に出した程度じゃ実感も沸かない。

その可能性があるだけだしね。そうならずにもっと上手くやれる方法だってあるだろう、けどそれを考えずにはいられないのも事実としてある。

その場合は僕達だけでどうにか出来る訳はないかもだけど。だってアルテミナスと言う国は今のところ、ＬＲＯで一番の勢力らしいからね。

正攻法（？）として真っ正面から戦争なんて無謀なんだ。仲間で

あると言ったからこそ、下手な事をあの背中の持ち主に誰も何も言えなかった。
セラはきっと一番気に病んでるだろうからね。そしてその重荷をまだまだちょっとだけ分けてくれただけなのかも知れないだけだった。
仲間と気軽に言うには時間が足りず、友達と言うには思いがお互い空回り、みたいな。だから今見えるあの背中が少しだけ軽く見えるのは素直に嬉しいことだ。
勢いも大事だけど、あのままアルテミナスに言ったら押しつぶされそうな危うさがセラにはあった。勿論そんな弱い奴じゃないってのは少ししか一緒に居ない僕でもわかる。
けど、それでもやっぱりセラは女の子なんだよ。あれだけ強気なセラが泣いたんだ。あの涙を見たとき、やっとでセラは弱い部分も見せてくれる様に成ったんだとちょっとだけ嬉しく思ったりもした。
だけど同時にやっぱりこんなセラは見たくないとも思った。その涙の原因を僕らが止められるのならと走り出した筈だ。
でもそこにはさ、いつものアイツの姿が必要なんだ。顔が多すぎてどれが本当の心内か分かりづらいセラだけど、少なくとも何も気負わなくて良い状態で居てくれればいい。
そうでなきゃ意味がないだろうさ。僕達は少なくとも仲間の涙を止めるために走ってるんだから。

幾つものせり上がった岩肌には赤い実が成る木がある。そんなフィールドを僕達は走っている。広大なフィールドに動く影は僕らだけ……いつもはきっとそんな筈ないだろうけど今は僕らだけだった。
フィールドで完全にモンスターが消えるなんて、これもいまＬＲＯで起きてる何かが原因なんだろうか。それか普通に処理不足とか？　あり得ない数のモンスターが近くのフィールドに出現してるから他の場所は休憩中になってるとか。

まあ、でも助かってるよ。おかげでアクティブを気にせずにズンズン進める。元々最短距離から離れてアルテミナスを目指してるからね。まだまだ遠いけどそれでもこの分ならかなり早くつけそうだ。

「クピー！　クピー！」

「ピク？」

辺りにピクの叫びが響く。急に鳴き出したピクに促されてシルクちゃんだけじゃなく僕と鍛冶屋も辺りに目を走らせた。

「遂にモンスターのお出ましかな鍛冶屋？」

「さあな、けど見える範囲には何も居ないぞ」

確かに鍛冶屋の言うとおり視界にモンスターは写らない。けど、ピクが何かを察知したことに間違いは無いはずだ。ピクの感知精度は保証済みだからね。でも……それじゃあ何を――

「――って、セラお前！　一人で不用心に先行くな！」

辺りを警戒してスピードを緩めていたらいつの間にかセラと距離が開いてる。あいつ聞こえてないのか？　なんだか時々アイツもおかしくなる時があるよね。いや……セラの場合は会ったときから多少おかしかったか？

それより今はピクの叫びが重要だ。やっぱり今までモンスターに出会さなかったのはただ単に運か？　そうかもし知れないのにセラの奴、不用心過ぎだ。

「ピク？　何を見てるの？」

そんな言葉を耳にして横切る時に視線を向けると、確かにピクは

空を見てた。ある一点を見つめてる。だけど、これ以上セラを放置しておく訳にも行かないから急いで駆け寄ってその腕を掴んで止まらせる。

「何やってんだお前！　危ないから離れるなよな」

「――っつ？　アンタ……今、一生私の傍にいるって？」

「言ってない」

どんなおかしな脳内構造してたらそんな風に聞こえるんだよ。一回落ちて休んだ方がセラは良いかも知れない。

「……ぁぁぁぁぁ……ぁぁぁぁぁあ……あああ！」

ほら、僕も今日は疲れがたまってる。なんだか空から幻聴が聞こえるもん。それにしても次第にはっきりと聞こえてくる幻聴だ。何だろう近づいて来てる気がする。

「スオウ君！　セラちゃん！　上だよ！　上！」

「「うえ？」」

僕達はシルクちゃんの焦る声に促されて同時に上を見た。でもそこには満点の星空が広がってるだけだ。マジで流れ星が落ちてきてるのかとも思ったけど、そんな事は無いみたいだし、別におかしな所なんて……ん？

「月に何か重なってない？」

確かに僕にもそう見える。星と星の間の黒さとは違う何かがそこにある。そしてあの幻聴はそこから聞こえてくる気がするんだ。

その黒い物は次第にその輪郭を表していく。なんだかタコの様に

四肢がうねってる。新種のモンスターか？　けど次の瞬間、そのモンスターは僕の名前を呼んだ。

「あああああああああってスオウ君じゃないか！　暗中模索に光明の一点みたり！」

「えええ！？　何？　怖っ！　黒い何かが喋ってるぅぅ！」

逆光でこちらからはいつまでも黒いままなんだ。だから姿を確認出来ない。でもこの声は……もしかして、もしかしてかと頭が叫ぶ。

「うぎゃあああああ！　ちょっとそこどいてっすぅぅ！」

「むぎゃぁあああ！」

だけど違った。まず重量が違う。辺りに振動を伝えて、僕を巻き込んで土煙は上がった。確信したよ。これはテッケンさんじゃない。彼はこんなに大きくないし、最後に聞こえた声は知らない声だった。

そいつが空から降ってきたんだ。一体何がどうなってるんだか。人が落ちてくるって、どこまでおかしく成ったんだよＬＲＯ。

「イッツ……大丈夫っすか下の人？」

「そう思うなら……口動かす前に退いてほしい……んだけど、お前等……等？」

視界に捉えた人型の影が二つ分ある。それがタコに見えた原因。あれはテッケンさんではあり得ない。彼の手足は短いからね。

じゃあこの見知らぬ顔の奴の後ろに居るのは……

「スオウか……」

「アギト？」

間違いない。目を凝らせばアギトと認識出来た。でも、これって……なんでこんなボロボロなんだよ。どうしてそんな、精気の無い顔してるんだ。

「何があったんだ？　そうだ！　セツリが浚われたのは本当か！？　サクヤもどうしたアギト！」

「セツリちゃんが浚われたって、どう言うことスオウ君？」

駆け寄ってきたシルクちゃんが僕の質問に質問を返す。だけどその質問に僕は答えない。だって、言わなかったのも確証が無かったから。そしてそれは今、目の前の奴らが持ってきた筈だ。

「その事なんだが、スオウ君実は――」

「ちょっと待ってくださいテッケンさん。何羨ましい所にしがみついたまま真剣な面持ちで会話始めようとしてるんですか？　セラがパニクってますよ」

何とテッケンさんはセラの胸にダイブした模様だ。セラは余りの事に対処法を見失ってる。かなり救われてるよテッケンさん。素面ならきっと殺されてるからさ。

テッケンさんはちょっと残念そうにセラから離れ、セラは胸を隠す様に抱えて解放された僕の後ろに回った。その口からは「モブリ殺すモブリ殺す」とかなり物騒な言葉が聞こえる。見下す矛先が固定された様だ。

「セツリ……セツリか……ああ連れ去られたよ。俺のせいでさ。ククハハハハハ！」

突如辺りに響くアギトの狂ったような声に森組の僕らは唖然と、事情を知るテッケンさん達は痛い顔になった。僕には一瞬、アギト

がそうじゃなく見えたよ。

「アギト様？」

セラの戸惑うような声が背中から聞こえた。するとアギトは笑い声をピタリと止めてウインドウを開く。まるで無理して笑ってたみたいだ。

そして小さな声でただ画面の一部分を見つめて呟く。

「スオウ……みんな……ごめん。俺はもう、ここには居れない」

「アギト！」

叫ぶ声は空しく響いて、消えゆくアギトに届かない。『ログアウト』それがアギトの選択。訳が分からない。ちゃんと話せよ。僕はおもむろに右手を振る。

目指すは勿論、アイツが逃げた先だ。

月の落し物（後書き）

第五十五話です。

ようやく合流。そして直ぐに別々に……意味無いじゃん！　苦労した割にはあっけない物です。次はリアルでの話です。久々に日鞠も出る予感。リアルだし。あそこで日鞠は外せませんな。

引っ張り上げる役目はスオウに任せるしかありません。アギトが復活しないとね。この話的には追われないから。

ではでは次は木曜日に更新します。

腹の虫、ときどき仮病（前書き）

僕はリアルを目指す！　と、した所で知らない目が点みたいな奴の声、だけど無視した。すると今度はテッケンさん。こちらは無視できない。だけど別に彼は止めはしなかった。僕にアギトを託して背中を押してくれた。

そしてみんなの願いを胸に僕はリアルへ帰還する。

戻ったら夜中。電話をしても出ない秋徒。今から家を訪ねるのは諦めて明日に持ち越し。次の日に登場したのは日鞠。意味が分からない言動多数。そして何故か最後には……

腹の虫、ときどき仮病

「ちょちょっと待つっす！　せめて事情を聞いて事態を把握してからでもいいっしょ？」

そんな名前も知らない奴の言葉が耳に届くけど僕は意に介さない。腕を振って現れたウインドウの右端を僕の人差し指は目指してる。そこにある文字は『ログアウト』この世界から飛び出す魔法の文字。

だけど僕がその文字を押す前に今度はテッケンさんの真っ直ぐな声が届いた。

「スオウ君！」

ピタっと間一髪に止まる指先。知らない奴の言うことは無視できる。けれど見知った人の言葉はただの情報を伝えるだけのツールじゃない。いろんな感情をその一言から察せれる。

それが人という生き物の心の機能だ。だから僕も何かを察したと思う。彼の真っ直ぐな何かをさ。

「何ですかテッケンさん？　事情は向こうでアイツに聞きますよ。それが一番良さそうなんで」

僕はセラから離れて地面にその小さな体でも存在感を放っているテッケンさんに急いだ感をだして言葉を紡ぐ。やっぱりさ、気になるんだよ。安直に言えば心配だ。

だけどそういうことは余り本人の前では言わないけどね。お年頃だから周囲にだって隠したい……てのは昔の僕かな？　淡泊でクールなキャラを着飾りたいって時期は誰にでもあるものだよ。

いまさら、と言うかここＬＲＯで隠す事も自分的にはないわけで……リアルにまで干渉するのはアギトだけだからね。だからみんなはそれなりに僕の事を知ってるはずだ。姿がそのままなら、どうしても地が出ちゃうんだ。自分をグローバルにアピールしまくりだよ。まあでもそのおかがでここまで来れた感はある。

そして僕を知ってる彼は言う。僕を知らない彼とは違う言葉をだ。

「ふふ、分かっているさスオウ君。僕は止めはしない！　アギトを頼む。もう一度ここまで引っ張ってきてくれ！　それが出来るのは君しかいないんだ！」

「……テッケンさん」

響いた声に頷かないのはアギトを背負っていた奴だけだった。他のみんなは、セラだってそれを認めてくれた。なんだか仲間外れ感が否めない感じの彼は口ごもる事しか出来ないでいる。

僕はみんなを見回してから約束する。

「必ずアイツを連れ戻してきます」

「ああ、こっちの事は情報を整理してメールするよ」

「大丈夫、軍はそんなにずっと維持できないから今日はもう侵攻しないと思う。だから次までに……アギト様をお願い！」

テッケンさんの後にセラが僕の背中に額を押し当てて怪訝だった不足情報を補ってくれた。だけどこれはこれで結構鼓動が速まる行為だ。

女の子に密着されるって慣れないよね。イケメンでもない限り。ついでに言うと僕は自分なりには普通。色気も味家もない顔してるよ。今まで彼女が出来た試しが無いことがそれを物語ってる筈だ。

まあ、一部の原因には他に心当たりあるけど。それはここでは言及しない。なんでアイツがああも僕に構うのかは実はよく分からな

いんだ。ここでいうアイツってのはリアルにいる変態の事だよ。
そういえばもう夜も遅いし、イタズラされてないか心配だ（僕が）。
背中から伝わる鼓動や緩やかな息づかいが僕の思考をほんのちょっと奪った。もうちょっとだけこうしてるのも悪くない。でもふと気づく。
セラが求めてるのは僕じゃないんだ、と。セラが求めてるのはアギトだ。アイリを救えて、アルテミナスで認められてるアギト。僕はその中継役でしか今回はないんだなってさ。
けど、アルテミナスが救われた後はその限りじゃないけどね。目的にはきっと僕を待ってくれてるセツリの救出も延長線上にあるんだから。
そしてこっちには保証はない。結局時間の猶予を確かめる術はなくて、僕はもたもたしてられないって事だ。
セラが言った軍を動かす制約は納得出来るけどね。軍程のプレイヤーの集まりはそう気軽に編成出来る物じゃないだろう。みんなプレイヤーでリアルには生活があるんだからね。
なら今日はもう無理なのも道理だ。いろんな事で時間を食った。朝はもう迫ってる。少しだけの先延ばし。それでセツリが大丈夫かは分からない。
けど今は戻るしかない。アギトがあのままでいい訳がないから。僕はセラの額から離れる。それはほんの数センチの距離で済むこと。そしてこの指先の文字を押せば途方もない距離が開くことだ。
交わる筈の無い異世界が実はここだと言うほどの距離。ひょんな事から僕ら人類は遂にその扉を知ったんだ。僕達は招かれたのか犯したのか……想像したと言うには僕らは余りにもこの世界に振り回されてる気がする。
僕達が空を見て馳せる神様はそんなに間抜けじゃないだろう。僕はそんな事を思いつつ、ログアウトを押した。だってそれこそ想像主位しか知らぬ事だよ。

ちっぽけな僕達は天上の意志にあらがうように、走り続けるしかない。例えそれが手のひらの上の出来事だとしても。
僕は消え去る間際、セラに言った。

「任せとけ」

ってさ。視界から星が次第に消え去り、流れる風も肌を撫でない。そして閉じられた世界の扉の先にはもう一つの扉がある。それは地球という世界の扉。

目が覚めると部屋は真っ暗だった。光るのは電子時計の緑の光だけ。時刻は午前二時を回ってる。日付まで変わってるじゃん。
朝からぶっ続けてここまでやってたのかと、思わずＬＲＯの恐ろしさに気づいた。向こうがリアルでもやっぱりおかしくない気がする。

「腹減った」

最初に呟いたのはそんなこと。親友の事よりも食を求める本能の方が強かったらしい。何せ朝から何か食べたっけ？　だ。いや、朝は食ったな。日鞠と一緒に朝食したはずだ。思い出した思い出した。
ＬＲＯの中での出来事が満過ぎて忘れる程だよ。よくよく考えたらみんな長い時間入ってるけど、大丈夫なのだろうか？　まあ、そんな事を僕が気にしてもしょうがない事だろうけどね。
それぞれみんな自分の予定を分かった上でやってるだろう。入るも出るも基本自由だよ。引き留める事なんか出来ないし。今頃、実はみんな解散してるかも知れない。
いや、それもまだ無いかな？　せめて事情の説明をする時間はいるだろう。ならまだここに居るだろう。僕はコンコンと頭を覆うゲ

ーム機を小突いた。そして脱皮の如く頭から剥いでベットに置く。
触ると暖かくなっている本体を休ませる為にも電源オフ。本当に長い時間お世話になってたから休ませないと可哀想だ。どんなアスリートだって全力疾走は続かない。
そんなことやってたら壊れちゃうんだ。それだけは困るからね。フルダイブを支えるこのゲーム機は決して安く無い。数万円はする。高校生が気軽に買える値段じゃないよ。だから出来るだけ大事に大事にしないとね。
僕は暗闇の中立ち上がり、垂れ下がる紐を引いて電気を付ける。部屋に満ちる白色灯の明かりに目がシバシバする。もうＬＲＯでも暗いのに慣れてたからだ。なんだか腰に無い重さとか、向こうの風の匂いとかがここと違う懐かしさを思わせるのはどう言うことなんだろう。
僕はとことんＬＲＯに捕らわれてるって事かな？　低い天井を見上げて翳した手を握りは放す。さっきからなんだかジンジン疼くんだよね。左腕がさ。そこは丁度、麒麟にチギられた部分なんだ。
もしかして……と、思ってしまう。もしもあのまま腕が元に戻らなかったら、リアルのこの左腕はどうなっていたんだろう。先端が無くなってる……なんて事は無かっただろうけど、この疼きは『動かない』位はあったかも知れないと思わせる。
だからちょっとゾッとした。だけど動くことに安心も出来る。

「よし」

そう呟いてテーブルの上で充電中だった携帯を取り上げて画面タッチタッチ。短縮設定でツータッチでお目当ての番号へプッシュする。
プルルルルルルルルルルルルー、耳元でお馴染みの音が鳴り響く。プルルルルルルルルルルルルー、今も尚鳴っている。プルルルルルルルルルルルルー、これは無視としか思えない。あの野郎。確かにこんな時

間に電話するなんて非常識かも知れないけど、確実にまだ起きてるだろ。
ついさっき戻ったばっかりなんだからさ。それなのに出ないって事は無視しか考えられない。今から自宅まで押し掛けよう……かと思ったけどそれは流石に非常識だろう。
家にはアイツしか居ない訳じゃないんだから。僕の家の様な風が珍しいんだ。他人の家の常識は異文化とか言うよね。アイツん家って放任主義な訳じゃ無かったと思う。
しょうがないからコールを止めてメールに切り替える。これは返事が返ってこなくても、一方的に伝えたいことだけを伝えるにはもってこいのツールなんだ。
確認は誰でもするものだからね。それが目的。取り合えず意志は伝えておこうと思った。画面を見つめてしばし思考する。
僕は電話で何を言おうとしてたのだろうか？　よくよく考えたら電話ならどうにかなることもあると気づいた。それは勢いと言う誰しも持ってる物だ。
それは曖昧な作業を続けて道を見つける事が出来るって事。電話なら当人同士のキャッチボールだから、最初は他愛もない話題から話を持っていくと言う事が出来るし、直球勝負でも熱くらいは伝わるだろう。
だけどその勢いを文章にするとどうだろう？　寄り道なんて出来ないし、頭を整理して紡がれる文章にどこまで気持ちを込められるんだろう。そもそも、マジで僕は何言おうとしてた？
幾ら打ってもなんだか違う。説教臭く成ると言うか……問いつめる風に成るというか……それでもいいや、と送信しても良いんだけど、アギトのあの姿を思い出すとこれじゃキツいなと思って止めるんだ。
電話は出ない、メールはなんか薄っぺらい。最近はメールで声を届ける事も出来るけど、僕の携帯はそこまで進化してない。なら後出来る選択は直接会うしかない。

元々電話位でどうにか出来る状態でもなさそうだったし、今日は何もしない方がいいのかも知れない。気持ちの整理とか自分を見つめるとか、一人の時間が今は必要……って事もある。

僕は結局、ただ一言を打ち込んで送信した。

【明日行く】

今日有った事に何も触れないこれが良いと思う。追い込まないで寝て貰って、明日起きれたら少しは何かが違うかも知れないから。ついでに僕も眠いんだ。流石にあれだけ走り回ったら仮想でも疲れる。

まあ、眠いってのは向こうじゃ余り感じないけど、こっちの空気と言うか、この部屋の留まった空気感がそんな現時味有ることを僕の脳に届けてくる。

だからさっきから腹の虫がこれでもか、って位のたまってる訳なんだけどね。

「食うもんなんか有るかな？　日鞠の事だから晩飯位作って……」

ドアノブ回して部屋の明かりが廊下にまき散らされる状況で僕の言葉は止まった。足下からは冷ややかなフローリングの冷たさが染み込んでくる。

慣れているものの、こういうのって暗闇の向こうから何か出てくる気がするね。誰も居ない筈なんだけど……まあ、居るとしたらそれこそ日鞠だ。

う～ん、僕って何だかんだ言ってやっぱり日鞠に依存してる。だから言葉が詰まったわけだよ。それを再認識してさ。自分から自立を提案しておいて、結局当てにしてる訳だし。

「はぁ～」

僕は溜息付いて部屋から廊下へ、そして一階へ。
外からはうるさい季節の声が届いてる。扉の曇りガラスの向こうには時々影が入るんだ。まあ、それも不規則な動きと大きさからして蛾とか何だろうと察せれるけどね。
一階の廊下を降りて突き当たりが家のリビングダイニング。その奥にキッチンも有るからいわゆるＬＤＫって奴かな。一人で済むには物悲しすぎる家だ。一人じゃ手に余るって意味ね。
キッチンの方に進むと案の定、テーブルに食事があった。だけどそこに食べ物が有るとだけ分かって中身は判別できない。何故ならラップとかじゃなくそこだけ昔ながらの虫避け網みたいな物で包まれてるからだ。
変な所で日鞠は古風な奴だ。この近代化した現代のどこであんな物手に入れて来たんだろうか？　てか、この時期に出しっぱってどうよ。
もしも僕がこれを見つけるのが翌朝だったら、酸っぱくなってるかも知れないじゃないか。まあ、一日も経ってないんじゃ腐りはしないだろうけど。
取り合えず晩ご飯を守ってる物を取り去って中身を拝見。そこには恐ろしく近代的な物が鎮座していた。

「カ……カップ麺……」

手抜きにも程がある。てか、この防御壁は何だったんだ。意味ねー。僕は某元祖カップ麺を仕方なく調理（？）するために持ち上げる。するとその下に有ったであろう紙が少し張り付いて来て、それを維持できずにヒラリと落ちた。
僕はカップ麺を置いて代わりにその紙を拾い上げる。きっと日鞠からのメッセージが書いてある筈だ。ふむ、何々。

【もう許さない！　晩ご飯は一緒にって言ったのに！　スオウなんてカップ麺で充分だよ。汗が鶏ガラに成るまで食い続けちゃいな！　許して欲しかったら明日私に付き合う事。そしたら濃厚豚骨にランクアップしてあげてもいいかも！】

ふむ……取り合えず手の中でグチャッて潰した。結局食べられるのはカップ麺に変わりなさそうだしね。まあ、関係の改善を計って初日で潰すしたのは悪かったと思うけど、こっちはこっちで色々有ったんだ。

ちゃんと言われてた掃除とかはしたんだからもう少し寛大に成って欲しい物だ。それに俺だって別に何も作れない訳じゃない。野菜炒め位出来るぞ。お前の計画は既に潰れている。

今日はもう疲れてるし結局このカップ麺食うけど、取り合えず日鞠にもメールしとくかな。この時間なら寝てるだろうし。アイツは睡眠時間だけは多分な子供だからね。

それを前に指摘したら

「女の子だから！　どんな化粧品や、エステやトリートメントより重要なのは睡眠なの！　人は寝てるときに体が成長＝生まれ変わるのよ。

明日にはボンキュボン！　に成ってるかも。きゃぁー！」

とかのたまってた。結局今日まで平坦だけど。世の中って理不尽だよね。いや、日鞠は別にあれでいいのか。

さて、どうやって波風立てずに日鞠が諦める文面が出来るだろうか思考する。

「う～ん」

思いつかない。明日は日鞠と遊んでる場合じゃないんだけど。僕

が何言ったってアイツが諦めるとは思えないし、どうしよう？　カップ麺にお湯を注ぎ三分間で考える。
キッチンだけに灯った明かり。カップ麺の縁から伸びる白い湯気。イスに腰掛け、背中を預けて考えること一分弱、もう今日は頭働かないと判断した。
だから再び簡潔な文章を作成した。いいや、もう直球で。

【メモ読んだ。ごめん明日無理！　味噌で妥協する】

ポチッと送信――完了！　勢いついでに「頂きます」して上蓋とって麺を啜る。

「う～ん、堅い」

一分弱じゃ流石に早すぎた。それでも求める腹の虫の為に思い切って食べきる。それでも依然として腹の虫は収まらない。外で騒々しく叫び有ってる奴らとともに、僕の中で自作の歌を歌ってた。

爽やかな朝の到来……は縁遠い。寝ても覚めても腹減っただ。無理して寝て、目覚まし時計代わりに成ってたのは腹の音だった。
お腹に何も無いと返って痛く成ったりする物だと改めて知った。。
「くれーくれー何か入れろー」と叫んでる。おかげで四時間位しか寝てないよ。
朝の昇りかけの日差しが目を刺激する。時刻は七時になりかけ……遅かったかな。実を言うと日鞠が朝飯を作りに来る前に家から脱出する気だったんだ。
それで腹の虫にはコンビニ弁当で妥協して貰おうと思っていた。それで今日は一日自由だ、フリーダム！　を謳おうとしてたけど七時じゃ遅い。

日鞠の奴は休みでも平日と変わらない時間に来るからね。昨日のメールを見て自重してくれてれば良いんだけど、その期待は薄い。だからこそ、早々に逃亡を計ろうと思ってたんだけど自分の怠惰な生活の付けがここで来た訳だ。

このまま窓から映画さながら逃げることも思い立ったけど、流石に食事を作ってくれる奴をそこまで足蹴に出来ない。僕はそこまで恩知らずな奴じゃないんだ。

まあ、まだあのメールを受け入れて来てないことを心の片隅で祈ってるけどね。僕は自室の扉を開く。するとそこには頭一つ分低い位置に見知った姿があった。

「あ……日鞠？　おはよう」

「はぁふぃーはぁふぃー」

ん？　変な息づかいが聞こえる。遂に暑さにやられたのだろうか？　なんだか微妙な空気が流れるな。いつもはうるさいくらいに日鞠が喋るから変な息づかいだけじゃ間が持たない。

ノースリーブのシャツに太股を大胆に晒した短パンで、体の所々には日焼けの境目がわかる。健康的な体が眩しいくらいだ。

一体何してるか知らないけど、日鞠は僕なんかよりよっぽど社交的だからこの休みの間にも色々やってるみたいなんだよね。あの性格で驚くべき社交性なんだ。有る意味あの性格だから……とも言えるかもしれないけど。

う～んなんだろう、一向に日鞠が顔を上げる気配がない。何がそんなに息苦しいのか僕には謎だ。日鞠の行動原理なんて僕に分かるわけ無いけど、この家で息苦しい訳はないだろう。

するとようやく日鞠に動きがあった。変な息づかいを飲み込むように喉をコクンと鳴らす。そして決意した様な顔を勢い良く上げて声を出してきた。

「スオウ！　遊園地行こう！」
「話の前後をつけろよ。訳分からないぞ！」

右手を突き出した格好で躍動的な感じを出して楽しさ一杯な感じだな。少しだけ何かあったのかと心配しかけた自分を恥じたい気持ちが芽生えるよ。

「実はもうお弁当も作ってあるんだ」
「無視か？　お前の言葉の流れを説明しろよ。どうしていきなり遊園地なんだよ」
「んもぅ～最近コミュニケーションが足りないと思ってだよ。それと昨日メモ置いてたでしょ？　メール見たから言い逃れは出来ないわよ」

それなら僕のメールの内容まで読んだはずだけど……そこは頭から排除した様だな。都合の良いことだけを記憶するのは日鞠の得意技。

だけど本当にそれどころじゃないんだ。ここは引き下がる訳には行かない。

「メール見たなら今日はダメなんだよ。秋徒に用があるんだ。だから無理。一人で行ってろ」
「女子高生に一人で遊園地に行けと？　どんな拷問じゃ～いそれは！　理不尽よ！」

どっちがだ！　と言いたい。けど、ここで僕が日鞠のペースにはまったら時間が無駄になるからグッと我慢。ここは日鞠の顔を真剣に見つめて諭すことを試みよう。

「アイツに今は会わなきゃ行けないんだよ。僕しか居ないんだ。こ

っちではさ」
「それって……またゲーム？」
僕は頷く。
「却下です」
「何でだよ！？」
直ぐ様の判断に意を唱える僕。日鞠は僕をピッと指さしてその理由を教えてくれた。
「スオウの場合はしょうがない所を分かってる。だけど秋徒はそういう物を背負ってる訳じゃないじゃない！　ゲームと現実を混同しちゃダメなのよ！」
それはとても最もな意見だろう。正論だろうと思う。ゲームはゲームと隔てるべきだ。リアルとゲームを混同させたらただの危ない人か、痛い人だ。
けれどそれは何も知らないから……あの姿を見てないから言えることだ。僕は日鞠の突き出された腕を掴んだ。
「今のアイツを放ってく事なんか出来ない！　友達として、親友としてだ！」
日鞠の腕を力強く握りしめる。本当にきっと痛いくらいだったろう。だけど日鞠顔色変えずに僕の予想の斜め上をいつも飛ぶ。
「じゃあ、三人で行けばいいんじゃない！」
「意味分からん！」

こうして僕達は秋徒を誘って遊園地に行く羽目に成ったとさ。次回に続く。

腹の虫、ときどき仮病（後書き）

第五十六話です。

ここから少しリアルでの話です。今まで掘り下げなかったリアルを開拓するのもいいかも知れません。まあ、だけどあんまり長くならないようにします。せめて二・三話かな。

ではでは次回に続く。次回は土曜日更新します。

手繰り寄せる糸は陽炎の様に（前書き）

僕と日鞠は秋徒の家に二人で行った。日鞠が居るとなんだって無駄に時間を使うんだ。家に秋徒は居なくて、出てきたおじいちゃんはエロ爺。何が五十年若かったらじゃー！　日鞠は僕の……って。これ以上は言ってないから。

取りあえず秋徒は自宅に居ないようだから僕達は町を捜索する事に。そして遂に見つけた秋徒の背中は幾分か小さくなってる気がした。

手繰り寄せる糸は陽炎の様に

「あ～き～と～君、遊びましょ～！」

そんな日鞠の声がアスファルトを焼き出す前の太陽の下に響きわたる。古めかしいと言うか、僕と日鞠の家が有る側と違ってこっちは昔ながらの古株さん家が多くある、いわば地元密着下町側。

面白い事にこの町は僕達が通う学校が丁度ある中心から東西に分かれて発展と衰退（？）してたりする。そのせいか、大人達の間は東西で勢力が出来てたりするらしい。

僕はそんな郷土愛に溢れた奴じゃないからよく分からないけど、地域の至る所に根を張る日鞠が言うにはそうらしい。

今時の近代的な町並みが形を潜めて、こちら側は築三十年位が平均らしい家々が軒を連ねている。別に決して古めかしいって意味じゃないよ。日本の風情有る町並みって事だよ。

庭先には柿の木が有ったりさ、日曜の夕方六時位から流れる某アニメ二作品を思い出す景色だよ。まあそれでもこちら側も少しずつは様変わりしてるんだろうけどね。

リフォームって奴かな？　ここに来るまでに時々、浮いたような家を見かけたよ。だけどまだまだ、町の色が変わる程じゃなかった。

そしてこちら側の繁華街（無理矢理ここら辺の奴が呼んでる）らしき一角に秋徒の家はある。クルクルクルクル、円柱形の回る物体がいつも目印。

そう、秋徒の家は地元密着型の床屋さんなのだ。お得意様は大体、ご近所周辺のお年寄りって言う典型的なパターン。まあ、今の時代はお年寄りだらけだから案外儲かってるのかも知れないな。昔から変わらずあるからね。シャッターを閉める店も年々増える中、今のところその列に並んでそうではない。てか、今更だけど日鞠のさっきの呼びかけはちょっと一緒に並ぶ人として恥ずかしいぞ。

今時、小学生でも言わない様な誘い文句を元気一杯でよく言ったなこいつ。背景の時代に合わせたのだろうか。日鞠は日差しが強まる事を見越してか麦わら帽子を被って、肩からは小さな赤いポーチを下げている。

季節感バッチリな奴だ。それに麦わら帽子が良く似合う。今日の髪型は長い黒髪を二つに分けて肩に乗せる様に前方に投げ出して、胸の僅かな膨らみを嵩ましか誤魔化している様な感じだ。

ついでに僕は重心が傾きそうな位のバスケットを右手左手と頻繁に持ち変えている。これが日鞠が用意したお弁当なのは間違いない。中身は拝見してないけど、かなり頑張った様なのはその重みから伺える。

思い立ったが吉日を実行する日鞠だけど、でも何か今回は違和感ある気がするな。それも何となくだけど……幼なじみだけが感じるレベルのほんと些細な違和感。言葉には出来ないな。虫の知らせって奴かな？

それだと良くない事が起きそうだけど……って、日鞠が絡んで良いことがあった方が希だな。なんだ良く考えたらいつもの事じゃん。だからその違和感は頭の隅に追いやって、きっとここも築三十年は行ってるだろう木造建築の二階部分を見上げる。

秋徒の部屋は見上げた正面にあるんだ。だけどそこはカーテンが閉まりきって居て、訪問お断りの文字が見えるみたいな感じがした。

いつもなら僕達が店の前に居るのを見つけてカーテンばっ！　窓もばっ！　と開け放って元気な姿を見せる奴なのに。それが無いだけで少し不安が増す気がした。

そして日鞠の古風な誘い文句に促されて蝉の合唱の中に出てきたのは勿論秋徒では無かった。

「はむはむ、孫の友達かえ？」

「お爺ちゃん、おっはー！」

「おおう、日鞠ちゃんかえ。綺麗になって。儂があと五十歳若かっ

たら狙っちょるのにのう」
「あはは、残念だけど私にはスオウが居るから無理だよ。諦めてお婆ちゃんを愛してて」
「あのシワクチャをかえ～。瑞々しい肌が爺は恋しいの～」
このエロ爺は相変わらずだな。僕の事はいつも眼中に入らないらしい。日鞠を運んでくるコウノトリとでも勘違いしてるんじゃないだろうな。
日鞠も基本お年寄りには優しいから図に乗るんだこの爺。二人で会話を弾ませるなか、ようやく爺の目線が僕にも注がれる。
「はて、そこの冴えないのはどちらの田村さんかえ？」
「冴えないでも、田村さんでもねーよ爺！」
明らかにボケたなこの年寄りめ。そして年寄りであることを利用して日鞠にすり寄ろうとするな！　僕に突っ込ませたのはこれの為の口実か。
僕は日鞠を年食った変態から守るために間に立つ。すると明らかに不満げに唇を尖らせる爺が一人。
「カァァ、結局日鞠ちゃんを独占したいのかえお前は。本当に年寄りがいの無い奴じゃ。こ～んな奴より、家の孫の方が男前じゃぞ日鞠ちゃん。
乗り換えて家に入りなしゃい」
「その減らず口と共にさっさとお迎えの行列に並べ！　整理券はもう発行されてるぞきっと！」
僕の口調は他人の爺に向ける口調じゃないだろう。どっかの教育熱心な人が今の言葉を聞いたら説教しに飛んできそうな位の物だったと自覚してる。

だけどこの目の前の爺は僕の感情を逆撫でするのが上手いんだ。特に前半の部分。誰が何を独占したいって？　この爺。すると意外と近くに居た常識外れの常識人が僕の頭を小突いた。

「スオウ、メッだよ。お年寄りは大切に。巡り巡った時にスオウの周りには意地悪な若者しかいなく成っちゃうよ」

「そんな何十年後なんか見据えて生きてないんだよ僕は。それより爺、秋徒は居ないのかよ？」

日鞠の説教は華麗に流して本題へ。てか、最初にそう呼んだんだから本人連れて出て来いよと思わなくもない。完全に無駄な時間を費やした。

来たときより少し日差しが高くなった感じがするよ。

「ごめんねお爺ちゃん。スオウは照れ屋さんで意地っ張りなの。私たち秋徒をお誘いに来たの。居ないのかな？」

「んにゃ～、日鞠ちゃん苦労するでぇ～。孫はそうやのう、朝からどっか行っちゃようや～」

なんだか二人の間で僕の中傷が納得されてないか？　それに結局秋徒は居ないらしいし。逃げたなアイツ。今から暑く成ってくるのに町中を探し回らなくちゃ行けないのか。だけど逃げるほどだし、ほっとけない。

実際何があったのかはテッケンさんからメールが来てた。みんなの話をまとめて、集約された内容がパソコンに届いてたんだ。

それは殆どあの目が点君からの情報でやっぱり重要な所は秋徒に聞くしかない思った。セツリの事も……最後に一緒に居たのはアイツらしいし。

それに今度の軍の召集は三日後らしい。つまりはそれまでがリミットだ。ガイエンは自分の戴冠式に伯をつけたいらしくタゼホ解放

をそれに掲げてるんだって。
だからそれまではまだ秋徒にもチャンスが有るって事だろう。それまでにもう一度アイリを奪い返せばいい。それに三日は絶妙だと思った。
それが自分的にも限界だ。浚われたセツリの救出はさ。秋徒の事と同じくらいセツリの事は心配なんだ。それ以上経つと、また遠くに行くような気がする。
そうなったら次に見つけられる保証はないんだ。
実際秋徒に文句……は言いたいけど言えないかな今は。それは見つけて決めることにしよう。日鞠も居るし、そこまで暗く成ることは無いだろうと思う。

「そっかありがとうお爺ちゃん。どうするスオウ？　秋徒どこ行ったと思う？」

古めかしい床屋から離れながら日鞠が問いかけてくる。名残惜しそうな爺は日鞠が挨拶一つで片づけてくれたよ。さて、面倒な事に成ってきた。幾ら電話しても秋徒は出ないし、抜け殻みたいになってたからただブラブラしてるだけかも知れない。
自転車の籠にバスケットを押し込んでサドルを蹴って固定を外す。日鞠は荷台の場所に青春映画バリに腰掛けて僕の腰に手を回した。
その行為にいちいち胸を高鳴らせる自分にそろそろ慣れろと言いたいな。でも無理なんだ。自転車に二人乗り、それにそれが女子なら男子高校生として胸が躍らない訳がない。
正常なんだけど悔しい。だって日鞠に踊らされてる感が有るから。

「あ～取りあえずゲーム屋とか回るか？　ゲーセンとか？　アイツそんな所に居そうだし。てかあんまりくっつくなよ暑苦しい」
「えへへ～嬉しいくせに」
「嬉しくない……」

実は結構嬉しい自分が恥ずかしい。日鞠の臭いってなんだか安心するんだよね。母親代わりとでも脳が認識してるのかも知れない。

「まぁ取りあえず出発進行！」

「おおー」

恥ずかしさを悟られないためにも無駄なノリに付き合ってやる。熱気を漂わせ出した空気が肌を通る頃にはそこまででも無くて、カラッとした天気に今日は成りそうだなと感じた。

今度目指すは街側だ。同級生とか居そうだからこの姿を見られたくない……と一瞬思ったけどそれも今更かと諦めた。

入道雲が空を一段と高く見せて、そこには違う世界が存在してもおかしくない様な気がする。入道雲は大きな鍵穴。あれを開けれたらそこには別世界が広がってる……なんて入道雲の中には空飛ぶお城が有ると信じる小学生並の事を思いながら僕はペダルを漕ぎ続ける。

太陽が一段と高く上って漕ぎ続けたペダルの分だけ汗が増す。それでも何故か日鞠は嬉しそうに抱きついてるけど、こっちはそれを気に出来る状態では無くなっていた。

「ぜ～は～ぜ～は～」

「大丈夫スオウ？　昔から体力無かったし無理は禁物だよ。ゲームじゃないんだから息切れだけじゃ済まないよ」

「確かに……ちょっと休む」

日鞠の提案を易々承諾。部活もやってない僕には限界だ！　この季節は理不尽にも太陽を恨む機会が増えるの納得。きっと太陽さん

も良い迷惑だろうね。だけどそうせずにはいられないんだ。
自転車を止めて公園の木陰に倒れる様に根転がった。するとトテテと走り去った日鞠が缶ジュース片手に戻ってきて差し出してくれる。
ついでに汗も濡らしたハンカチで吹いてくれて清閑スプレーもかけてくれた――ってなすがままにされたよ僕。うう……自分がダメ人間だと感じる瞬間。
せめてもの抵抗で日鞠の分の缶ジュースのプルトップを男らしく（？）開けてやる。得意げになった自分に自己嫌悪だ。なんて小さいんだろう僕って。
おかしいな、ＬＲＯじゃもっと頼られるキャラの筈だった気がしたのにな。日鞠が居るとついつい甘えてしまうのだろうか？　僕は自立を目指してる筈なんだけど、この分じゃ苦労しそうだ。
ああそうそう、結局秋徒は居なかった。本当にどこに行ったんだろうか。木々の葉の間に宝石の様な光の粒が輝いていて視界を奪う。
見つめていると目が悪くなりそう……だけどパァーと眼前が白く成るのがちょっと病みつき。それが僕の頭の奥にあった何かを機上させて来る気がして、そして確かにそれが来た。
僕はガバッと状態を起こす。缶ジュースの中身がちょっと飛び出したけど気にしない。

「どうしたのスオウ？」

僕の突飛な行動に動じない日鞠は流石だね。休憩の筈なのに太陽光の下に居るし。そこでジュースを飲んでる姿がまたヤケに様に成っている。ＣＭにでも使われそうだ。カッコカワイイを両立させてるのも珍しい。
まあ、日鞠の場合はカワイイカッコの方がしっくり来るけどね。意味分からなく成ってるか。じゃあカワカッコイイで。うん、なんか違う。

取りあえずそんな事考えてる事が恥ずかしく成って日鞠の麦わら帽子を傾かせて顔を隠す。これで少しは緩和されるな。

「思い出した。アイツが行きそうな所」

「ホント？　じゃあ行こう！」

麦わら帽子を元に戻した日鞠の笑顔が今の太陽に負けないくらいに輝く。なんだ、意外と怒ってないんだなと思った。無理矢理秋徒を組み込んだからご立腹かと思ってたんだけどそうじゃないみたいだな。

「当然だよ。私だって秋徒とは友達だしね。それに協力者居ないと色々と不便になるし……」

「おい、最後の不穏な部分はなんだ？　この暑さの中で悪寒が走ったんだけど」

僕のそんな追求に日鞠は「気にしな～い、気にしな～い」と笑顔ではぐらかす。納得出来ないけど早く秋徒を見つけたいからそれ以上追求せずに労働に戻る。ギコギコとペダル漕ぐ労働ね。

今度こそ見つけてやるぞ秋徒！

背中が見えた。大きくて……そして小さくなった背中が。いつも僕の前にあった筈の背中はちょっとみない間に随分と萎んだ物だと思った。

「秋徒……」

僕がそう呼んだら一瞬体に電流走った様に震える。だけど返事はない。振り向きもしない。ただ眼前に広がる自分達の街を眺めるだ

けだ。本当にそこを見てるのかは定かじゃないけどね。
僕達はどこにいて結局秋徒はどこに居たかと言うと、それはとあるビルの屋上だ。ここは僕達の秘密基地立ったんだよね。今時は屋上の施錠も厳しく成ってるけど、ここは変わらずあけっぱだった。
下にはそれなりの人通りが有るのに、誰も僕達には気付かない。そんな所が秘密基地っぽくて良かったんだ。でもいつの間にか寄りつかなくなってた。それは成長したって事なのかな。
久しぶりに来たここは昔よりもこじんまりとして見える。剥がれた塗装や、さび付いた鉄枠なんかが時間の流れを感じさせて無駄な焦燥にかられそうだ。
目の前のアイツも昔にでも浸りに来たのだろうか？　それかやっぱりただ単に行き着いたのがここだったとか。ある意味ここは世界に取り残された様な感じがしなくも無いから、秋徒は引かれたのかも知れないな。

「ああ～中学の時、時々居なくなると思ってたらここに来てたんだ。ズル～イ！」

何となく僕まで昔に思いを馳せてたら後ろからそんな声が聞こえてきた。シリアスな雰囲気が一気に流れたな。流石日鞠だ。自分の空気にその場を染めあげる事が一瞬で出来る奴。
後ろから出てきて秋徒発見すると指さし元気一杯にこう言った。

「あ！　あ～き～と～くん、見～つ～けた！」

隠れんぼでもしてたかのような軽いノリだ。だけどやっぱり振り向かない秋徒。するとボソッと日鞠は口を動かした。

「私を無視するなんて秋徒の分際で良い度胸……ふふ」

背中に得も言われぬ悪寒が走った。こいつは本当に友達を心配してるのか？　というか秋徒を友達と見てるのか怪しいな。子分じゃないかな？　分際なんて友達に使わない、明らかに下に見てるもん。
秋徒、まだ間に合うから日鞠の機嫌を取っておくんだ！　と、心で叫ぶけど流石に届かないか。向こうももう意地に成ってるのかな。すると日鞠はポーチから何かを取り出す。それは……
「水鉄砲？」

「あ、スオウ。シーだよ。シー！」

それはまさしく、青透明な色した鉄砲の形の水鉄砲だった。しかも水は充電済みって、ポーチの中は大丈夫なのか？　てか、化粧品が入ってる訳じゃないんだな。
ある意味日鞠らしくて安心だけど、女子高校生としてそれはどうかとも思う。ポーチから水鉄砲って、今時の小学生でも持ってるか怪しいぞ。
だけど日鞠は得意げだ。何がそんなに自慢なのかはこの際追求しないでおこう。きっと常人には理解できないだろうからね。
立てた人差し指を唇に当てた動作を止めて日鞠は秋徒の後ろに立つ。そして水鉄砲を狙い定めて発射！

「食らえ秋徒！」
「うあ！？　冷た！」

シャカシャカシャカシャカシャカとトリガーを引く度に水の軌跡が太陽光を受けてキラキラと光っている。水鉄砲ってこんなに綺麗何だ……て、端から見てる分には暢気に思える光景だ。
だけど当事者はそうじゃない。いきなり背中や首筋、頭に冷水をぶっかけられた秋徒は事態が飲み込めず右往左往してる。そこに日鞠はケラケラと気持ち良い声を響かせて秋徒の後を追いかけながら

正確に体を打ち抜いている。
うん、仲の良いバカップルを見てる気がするな。何やってるんだアイツ等は……って感じだ。

「うぱっ……日鞠……ゴメンって……やめ……」
「きゃはははは、楽しいね～秋徒」

明らかに虐めだね。壁際に追いつめられた秋徒の顔に掛ける掛ける。小学生の時は女子の方が大きかったりしてこういう逆転が良く見られるけど、高校生の男女でこんな事が起こりうるのは希だ。
希有な存在が今目の前に。秋徒の助けを求める視線がこちらに向くけど、分かってるだろ。ああなった日鞠には関わりたくない。
大丈夫、もうすぐ水は切れるよ。そして案の定、小さな水鉄砲の水は程なく切れて空気を吐き出すだけになった。シャコシャコトリガー引きながら中身を太陽に翳す日鞠。まだ物足りなさそうだ。

「水入れてこよ～」

そう言ってビルの中に消えていく日鞠。完全に目的見失ってないかアイツ？　絶対に水鉄砲が思いの外楽しかったんだな。
日鞠がビルの中に消えると再び静寂が訪れる。少しの間は秋徒が空気を求める様にガボガボやってたけどそれも終わると、最初に逆戻りしたみたいだった。
でもそれでも、やっぱりちょっと空気は緩く成った気がするな。濡れまくったアギトを見るとさっきまでの日鞠の楽しそうな声が脳で蘇って笑える。
ある意味アイツはこの空気を作ってわざわざ僕らを二人きりにしたとか……いや無いな。日々を楽しく生きてるだけだし。
ここは秋徒に近づいて気さくに挨拶でもしとくかな。

「よっ。探したぞ」
「……てめぇ、なんてモンスター引き連れて来るんだよ。反則だろう日鞠は……」

おお、意外と普通に口を開きやがった。会話だけでももっと苦労するかと思ったけど、既に秋徒も日鞠のペースに呑まれた様だ。思わぬ所で役に立つ奴。
まあ、モンスターって言う表現は同意するしね。だけどあの企画外のモンスターのご機嫌を損ねたのはお前なんだから自業自得だ。気が済むまで相手するしかない。
そう言えばなんで日鞠はついて来たんだっけ？　ああ、そうそう。

「遊園地に三人で行くんだってさ」
「はぁ？」

素っ頓狂な声が秋徒の口から漏れる。友達が遊園地行こう言ってるのになんだその態度は。僕も仕方なく妥協したから納得はしてないけどね。てか、訳分からないし。

「しょうがないだろ。日鞠が弁当まで作って朝来たんだよ。そこに無理矢理ねじ込んでやったんだから感謝しろ。僕って友達思いだな～」
「嫌がらせにしか思えねーよ。なんで将来が決まったお前等の中に俺が入らなくちゃいけないんだ？　新婚気分で行ってこい」
「ふざけんなぁー！　僕はまだ墓場を受け入れたつもりはない！」

秋徒の言葉は禁句だよ。結婚って人生の墓場って言うじゃないか。僕はもっと人生を謳歌したいんだ。少なくとも日鞠とそうなったら尻に敷かれるのが目に見えてる。
てか、一生振り回される。心労で早死にする。そんなのゴメンだ！

するとその時扉が開いて再び日鞠登場。宣言通り水鉄砲には水が満タン入ってる。「日鞠ちゃん再登場！」って自分で言ってるし。

なんだか話の当人が登場すると途端に気恥ずかしく成るな。結婚とかさ、そんなの考えてた自分がイヤだ！　だけどそんなの知らない日鞠はあくまでマイペース。

水鉄砲を再び秋徒に向けて宣言する。

「よ～し、秋徒も見つけたしこれから三人で遊園地行こう！　ね☆」

水鉄砲なのに何故かジャキっていう重い音が聞こえた気がした。ここに拒否権は無い。だから僕も畳みかけよう。

「秋徒～僕達友達、いいや　親友だろ？　遠慮するなよ。旅は道ずれ、世は情けって言うじゃん」

完全に僕まで私情が入ってた。ここまで来たら逃がすかよ！　僕のこれからの人生の為に。二人で行ったらハネムーンって言いふらしかねないだろ。

「たく……分かったよ」

秋徒の渋々の了承の後、僕達は駅に向かい夢の国へ向かう。高まる気温の中で僕が一番気になるのはバスケットの中身。これ以上強い日差しは衛生上勘弁だ。

手繰り寄せる糸は陽炎の様に（後書き）

第五十七話です。

言ってたはずの遊園地は次回ってことで。うう、後一話で終わるか怪しくなってきたな……。まあ、その時はその時で！　寛大な心で許してください。

ではでは、次回の第五十八話は月曜日更新します。読んでくださった方々、ありがとうございます。

しゃがんだ心に二つの添え木（前書き）

僕達は遊園地を駆け巡る羽目になった。だけど日鞠のおかげで秋徒はいつもの調子を取り戻している。これはこれで良いのかな？そんな風に思って過ぎた時間の矢先、日鞠は食事終わりに秋徒に言葉を投げかける。

それは今日だけは忘れていようと思ってた事。けれど言葉を投げるのは自由だったのかも知れない。それを秋徒がどう受け取るかは別としてさ。

だから僕も、最後に心の言葉を秋徒に渡したんだ。

しゃがんだ心に二つの添え木

首都の冠を被りながら実は首都にはない、日本一のテーマパークに僕達は来た。ほらあれだよ、世界一有名なネズミが看板張ってる所。

他にもアヒルとか犬とか熊とかエイリアンとかが居るね。日鞠は案外子供っぽいからこういう所大好きなんだ。恥ずかし気もなくネズミの耳つけるし。

まあ、まだ中ならいいよ。みんなそんなのつけてるし。だけど日鞠の場合はなかなか抜けないからイヤになる。絶対帰りの電車でも着けてるよコイツ。

なんで入って最初に耳を買うんだよ。そして僕達にもそれを強要してくるし……言っとくけどここでだけだから！　似合う奴はいいよ。もっと言えば可愛い女の子なら良いけど、男がしたって痛いだけだ。

日鞠は麦わら帽子を背中側に回して、晒された黒髪にチョコンと二つの丸い耳をつけてご機嫌上機嫌。

不覚にもその姿はハマってる。別段違和感が無い。あれだな、いつも頭にお花が咲いてる奴だからそれが具現化しただけな感じなんだ。

「スオウ！　秋徒！　ほら、二人とももっと楽しく！　遊園地に来たら笑顔にならなきゃダメなの！」

そんな事を言う日鞠が僕と秋徒の手を引いて、一年で一番輝いてる時期の太陽を霞ませる程に微笑んでいる。そんな日鞠に僕らは逆らえない。

てか、ここまで楽しそうな日鞠の気分を削ごうとは思わないって

のが正解。日鞠の笑顔を見てると本当に心が無駄に持ち上がる。
まあ今はその効果に期待でもしようと思った。一緒に手を引かれる秋徒と目が合う。僕達はその時、心が通じた様に溜息が出た。

（しょうがねぇか）

そんな事を共通認識として僕達は思い浮かべたんだろう。重かった足取りに力を込める。それも本当に秋徒と同時だった。
そしていつもの笑顔をコイツも見せる。振り切っては居ないだろう。だけどここでだけはそれを忘れて楽しむのもいい。そんな風に割り切ったからの笑顔。
それでも良いかと僕は思ったよ。いっぱい笑えば暗い気持ちなんて吹き飛ぶしね。それを提供するのも僕らの役目かな。
だから僕も笑おう。いつも通り、三人で居るときと変わらずさ。気兼ねを忘れた心は軽くなった気がする。力強く踏み込んだ足には風が後押ししてくれる様だ。
すると僕達の気持ちの変化でも繋いだ手から伝わったのか日鞠が嬉しそうにニヤニヤしてる。

「なんだよその顔？」
「ううん、何でもないよ。ようし二人ともやる気が出てきたみたいだし、まずはあれ行こう！」

なんだかコイツから光が出てる気がするな。周りには人が一杯いるのに、その光が周りを見えなくさせる。
細く僅かに日に焼けた腕を伝い見える日鞠の笑顔。バッと振り向き秋徒の方へ。きっと同じ様な光景を見てると思う。
この引っ張られる感覚に僕達はあらがえない。だけどとても心地良くて、この手を離す気にはなれない。今日だけ今日だけ今日だけだ！　そう言い聞かせて僕は声を張り上げる。

「おおー！」

すると秋徒も同じように声を出した。

「あああああ！　今日は遊びまくってやるー！」

三人じゃなかったら出来ない奇行。だけど仲良し三人組だからやってしまった痛い事。いつの間にか再び認知出来る様になった周りからの奇異の視線を乗り越えて、僕達は青春の一ページに新たな出来事を加える事が出来た筈だ。

高いところから真下へズギューン！　水しぶきズヒャー！　ゴンドラに乗ってはドキドキで、ただ歩くだけでもワクワクキャッハーな時間は過ぎるのも早いものだ。

上に書いた擬音は日鞠が発したり、その脳内から飛び出していたのを感じとった物です。意味が不明瞭でもご容赦を。

日差しも頂点を越えたあたりで今が一日で一番暑くなる時。僕達はオープンテラスの一角でバスケットを開き日鞠の弁当を摘んでいる。

大きな傘が陰を作って熱気の中にも少しだけのすごし安さを作ってくれて良い感じだ。そよぐ風は暑さを乗せてるから鬱陶しいけど、それはドリンクを旨くするためのスパイスと思おう。

幾ら文句言っても代わりはしないからね。

「どう、スオウおいしい？」

横に座る日鞠が少し気恥ずかしそうに僕に視線を送ってくる。今更それを聞くのか、と思う。僕は日々の日鞠の料理を残した事ない

んだしさ。
だけど、期待する様な目を向ける日鞠にはちゃんと言ってあげなくちゃいけないんだろう。う～ん、今更だから恥ずかしい。改まるとさ、言いづらいじゃん。

「うわ旨！　お前こんなのいつも食ってんのか！？　かぁ～贅沢な奴だな。それ寄越せ！」

正面からテーブルを乗り越す様に箸を伸ばす秋徒。僕の皿からつまみ上げたのは唐揚げだ。弁当の概ねはサンドイッチだったけどおかずも日鞠は豊富に作ってた。
それは二人では絶対に食べきれなかったであろう量だ。テンション上がりすぎて作りすぎたのか、それとも……と妙な勘ぐりが入る前に日鞠の注意が秋徒に入る。

「コラー！　秋徒、行儀が悪い。人の物を横から盗むなんて、そんな子に育てた覚えはありません！」
「いや、育てて貰ってないし。寧ろそれはスオウだろ」
「ああ！？」

どういう意味だそれは。真っ当な事を言った後に急にこっちに振るなよな。別に唐揚げの一個や二個、見逃してやろうと思ってた気持ちが去るだろうが。
僕は曲芸じみた箸さばきで取られた唐揚げを掴む。二人で唐揚げの引っ張りあいだ。

「取り消せよ秋徒。僕は別に日鞠に育てられてねーよ」
「はっ、良く言うなそんなこと。食事も弁当も作って貰って家の事まで日鞠任せだろ？　十分育てて貰ってるじゃねーか！」
「ふん、今の僕は自立に向けて動き出し取るわ！」

過去の事が否定できない自分が居た。成る程、僕は日鞠に育てて貰ってたらしい。道理で頭が上がらない訳だ。……いや、気付いてたけどさ。認めたく無かっただけです。

「コラー！　スオウまで箸渡しはいけないんだー！」

二人で火花を散らす間に、横からは日鞠のそんな声が聞こえていて僕達の席は一際賑わっていた。それは本当にＬＲＯでの戦いを忘れる位に平凡で楽しい時間だ。

僕達は僕達の世界でこんなにも楽しく過ごせるという事実。だけど心の奥の方では小さな怖さがあったりする。それはきっと秋徒も同じ筈。

それさえも無くしたわけじゃないと思いたい。向こうを知ったからここの暖かさを知れる。そしてここの平凡は、向こうでの苦しみを本当に幻にしかねない・・そう感じる怖さがある。

人はきっと世界を一つ無くしたって生きられる。時間が経てばまた笑えるようになる。僕達にとっての世界はそんな大きくなくていいから……趣味が一つ増えて、一つ無くす。それも世界を無くすって事だ。

興味が無くなれば目を逸らせばいい。すると今まで見てきた物が見えなくなるだけだ。それはテレビの向こう側と同じ。分かってても実感なんて無い。

シャッターを閉めて元の鞘に収まるだけ。けれど別に自分の世界が狭くなる訳じゃないからね。切り捨てる事は簡単だ。

秋徒にとってのＬＲＯはどうなのか？　所詮ＬＲＯはゲーム。割り切ってしまえば去るのは簡単なのかも知れない。

そしてそれは僕だってそうだ。命を懸ける事に周りのみんなが疑問を投げかけてくる。実際死んだと思ったことも何度もあった。

それでも戦い続けてたのはセツリの為？　僕もまだ、切り離せる

位置に居る。ＬＲＯは意地悪く猶予をくれてるからね。
ここで臆病風に吹かれれば僕は二度とＬＲＯの地に足を踏み入れる事は無いのかも……なんて思う。僕はどうしてこうも秋徒を連れ戻したいと思ってるのだろう。
それは信じる仲間の為？　アイリの為？　もしかしたら自分の為が一番強いのかも知れない。僕をＬＲＯに引っ張り込んだこいつが消えたら、僕もいつかそんな風になる気がするとかさ。少なくともそんな逃げ道を見せつけられると迷惑なのは確かだな。
別にアイリやセツリを助けるのに絶対的に秋徒が必要か？　と言われれば首を捻る。三日あるのならこちらも数を集めれるだろうし、軍ほどじゃないにしても一人分位どうにかなるだろう。
だけど誰もそんな事は言わなかった。みんな秋徒もといアギトを必要としてる。その理由は……

「はぁ～食った食った～」

バスケットの中身はほぼ空になり、秋徒は腹をさすりながら満足気にそういった。目の前の奴に思いを聞いてみたい気はある。だけど今日はそれを忘れさせてやろうと思ってたから自分からは切り出せない。
もう秋徒の顔に生気の無さや暗い所は見えない。本当におもいっきり楽しんでる感じだ。今日はこれで良いんだ。そう自分に言い聞かせる。
心の奥に生まれてるだろう怖さにコイツは負けないと信じるしかない。墓穴を掘った？　いいや、戦士に休息は必要だ。そう、ただちょっと秋徒は休んでるだけなんだ。

「スオウ」

ジ～～～～と、日鞠の視線が頬に当たる。言葉を出さなくても

何を訴えているか分かる。先の答えを求めてるみたいだ。
ウヤムヤになったと思ってたけど、ただ先延ばしになってるだけだった様だ。食事がつつがなく終了した今が聞き時と計ったんだな。

「あ〜あ〜……旨かったよ。本当にさ。美味しかった」
「うん！　えへへー」

根負けした。てか、ここで言わなきゃずっと見つめてきそうなんだもんコイツ。出した箸とか数枚のお皿を綺麗に手早く片づけると、日鞠は「さてと」と前置きして僕が触れないと決めた場所にあっさり踏み込んだ。
それは今の時期に蝉がうるさく鳴くのが当たり前な位、当然で普通と言わんばかりの口調。

「じゃあ秋徒。何があったか話しなさい」
「は？」

秋徒の意表を突かれたかの様な間抜けな声が漏れた。実際僕もそう言いかけてた。まあ、日鞠が友達の事をちゃんと心配してた事は嬉しいけどさ、いきなり過ぎだろ！

「なんの事だよ。俺は別に……」

秋徒の言葉が不意に途切れた。それは日鞠の視線に秋徒が睨まれたから。ピンクの線が入ったストローを唇に添えて食後のドリンクを堪能してた奴の目とは思えない鋭さがそこにはある。
凄い変わり身の早さ。さっきまでの周りまでも煽るような愉快な雰囲気から一転、周囲の喧噪を遠ざけるみたいな空間にここだけがなっている。

「秋徒、スオウも心配してたんだよ」
「……ん……」
蚊帳の外からいきなり名指しされてそんな事言われると恥ずかしいじゃないか。秋徒の視線から僕は逃げるように顔を背ける。くっそ、微妙な立ち位置になった。ここで一気に日鞠と共に秋徒を問いつめた方がいいのだろうか？
だけどさっき新たに決意を固めた事だしやりづらい。たく、ことごとく予想外な奴だ。
「それに秋徒、お弁当食べたでしょ？　話さないなら一万円頂戴」
「「……」」
おいおい恐喝しだしたぞ。一万円ってそれ――
「た……高過ぎると思うんですけど！」
秋徒は叫んだ。当然の抗議の声だな。一体あの弁当に使われた食材のどこにそんな高価な物が入ってたのだろうか？　気付かなかった。
「せめて五千円にしてください！」
「それでも高いだろ！　正気を保て秋徒！　てか払うな！」
思わず立ち上がってしまった。いびつな音を立ててイスが地面を擦る。なんで五千円で妥協しようとしてるんだ。秋徒も日鞠には弱い……てか、良くこき使われてるから普段の主従関係が出てきたみたいだ。
「別に高くなんてないよ。私が込めた気持ち分の値段だもん」

成る程……とは言えない。日鞠がそんな事を言って僕に視線を投げるからなんだか妙にソワソワして勢いが削がれた。そして大人しく着席。

「さあ話しなさい秋徒。五千円払ってね」

あ、妥協……してないな。なんか相談料っぽくなってるし。なんて臨機応変な奴、お前は大層な占い師か何かかと言いたい。ちゃっかり五千円せしめようとしてるもん。

「お～い、オカシナ事に気づけ秋徒」

疑いも持たずに今や財布の紐を緩めかけてる奴に僕は釘を刺す。流石に親友が詐欺にあうのは見逃せない。いつの間にここまで懐柔されてたんだ？　ビックリだよ。

「あ……ああ、おかしいか？　おかしいな」

「むー、スオウのアホー」

正常な判断を下した秋徒に不服気な日鞠。いやいや、友達から金を取ろうとするなよな。どっちが目的だったか分からなくなるじゃないか。

結局日鞠は心配してるんだよな？

「勿論秋徒が心配だよ。だから心を鬼にしてでも話を引き出そうとしたのに～」

「そうか？　途中から金が出汁に成ってなかったけどな」

確実に利益を求めてた様に見えたんだけど。そこはあくまで否定

する様だ。頬を膨らませながら日鞠は、財布を閉じて俯く秋徒に目を向ける。

「ほら秋徒、吐露しちゃいなさい。もうお金は要求しないから。遠慮なんてしなくていいよ」

「なんでお前はそんな上から目線なんだ？」

今はもう僕達もここの喧噪に再び紛れてる。真剣モードは取りやめたらしい日鞠の言葉に秋徒はなかなか反応しない。見つけた時の状態に戻ったようだ。

「良いじゃない。スオウもちゃんと秋徒の口から聞きたいんでしょ？」

「まあ、それは……」

僕はどっちと答えれば良いんだ？　どっちを望んでる？　さっき決めたのは秋徒を信じるって事だった。ならそうするべきなんだろうと思う。まだ今は違うんじゃないかってさ。だから……

「いや、いいんだ日鞠。秋徒がまだ話したくないなら強要なんてしない。親友なんだよ僕達はさ。なら、ちゃんと話してくれる。そう信じて、それまで楽しく待つさ……だろ？」

「う～、スオウはそれで本当にいいの？　それに結局、私蚊帳の外じゃない。役立たずだよ～」

日鞠は面白くなさそうに歯噛みして僕に聞き返す。その時秋徒は何かに反応するように肩を揺らした様に僕には見えた。一体何に秋徒は反応したのだろう。届いてたメールの内容から考えるとそれは・・『役立たず』かな？

そんな風に考える事が一番しっくり来る気がするな。アイリを助

けれなかったこととセツリを守れなかったことを相当秋徒は気にしてたらしいからね。
だから日鞠が何気に発した言葉にも反応した。別にもういい……とは、言わないけどまだチャンスはあるんだ。今更責める気も無いのに、気にしすぎだこのバカ。
だから大きく何でも無い風で僕は言う。

「いいんだよ。それでいいの、分かったか日鞠。それにお前は別の所で役立ってるよ。心配するな。お前はいつも通り楽しく笑っとけ。それだけで充分だからさ」
「……うん！」

日鞠の顔に満開の笑みが咲き誇る。太陽を目指す向日葵じゃ無く、太陽という花の笑み。そんなに嬉しがる事、僕は言ったかな？　と首を捻る所だけど、それで日鞠が納得してくれてるなら水差す事じゃない。

「秋徒ねえ聞いた？　私は傍に居るだけで良いんだって。それってつまり……キャッハ☆」
「おい！　なんか行き過ぎた解釈してないか！？」

もう既に聞いちゃいいない。ふさぎ込んだ格好の秋徒の背中を容赦なくバシバシ何度も叩いては、その周りでハシャいでる。きっと秋徒にとっては迷惑極まり無いだろう。
流石に周りからも浮いてるぞ。あ～他人のフリしてぇ。今更遅いけどさ。もう僕たち三人ワンセットだ。するとその時「パン！」という音が響いた。それは日鞠が両手を弾いて光の粒をまき散らした音。

「スオウ……」

「よし！　この話終わり！」

あれ？　なんだかか細い声が聞こえた気がするけど、その声は後ろから響いた日鞠の良く通る声にかき消された。そして日鞠は言われたことを早速実行。秋徒を無理矢理椅子から引っ張り出すと元気一杯にその笑顔を近づけた。

「こら、秋徒！　いつまでもフテッてない！　立ち上がって背を伸ばす。顔上げたらニコッと笑顔。ほら、元気元気！」

「！！」

日鞠の、多分励ましてるだろう言葉が秋徒に掛けられる。結構大雑把に聞こえるけど本人は至って真剣だ。それに何故か秋徒が反応した。それも異常な程に。

無反応だった秋徒が勢い良く頭を上げて目を丸くしている。てか近い……近すぎだ。日鞠は秋徒を引っ張ったから手も二人繋いでるしで、それを見てるとなんだかモヤッと

「「あああああああああああああああああああああ」」

この絶叫は僕と日鞠のそれだ。僕は思考を断ち切るために、日鞠は顔を上げた秋徒なんか気にも止めず秋徒の後ろを見つめてそう叫んでいた。そして走り出す。勢い良く、傷心中の秋徒を振り回しながら。

「うあああああああああああああああああああああ」

「きゃー！　ミッキーとミニーちゃんだぁ！！」

日鞠の視線の先に居たのはこの遊園地の看板マスコットのネズミ二匹。日鞠は周りの子供と気さくに遊んでるその二匹にタックルか

ました。いいや、抱きついたの間違いね。
だけど興奮し過ぎて火事場のバカ力を意味ない所で発揮してたらしい日鞠は半ば秋徒をもう一方、確かミニーちゃんにこっちはちゃんとぶつけてた。
なんだか小さく「ぐえっ！」って聞こえたのは夢の国の為に記憶というフォルダから消しておこう。そう思っていると日鞠の声が前から飛んできた。

「ほらほらースオウ見て見てよ！　ミッキーだよ。ミッキー！」

花びらを周りにまき散らせる様な笑顔で押し倒したミッキーを抱き抱える日鞠。いきなりの出来事でも子供達の夢を壊さないように振る舞う二匹は流石だと思った。秋徒はそこまで出来てなかったけどね。
起き上がり様に日鞠に元気良く文句言ってたよ。だけどそれで調子が戻ったみたいでもあった。三人と二匹（十子供多数）で写真を撮って、僕達は再び日鞠に引かれて夢の国を歩き回る。
厳しい日差しが僕達の肌を焼く。だけどそれに負けない熱さがきっと僕達にもあったんだ。

歩き回ること早数時間。日は傾き、暑さも少し和らいだ時間帯に僕達は隣接するシーの方の湖の場所に集まっている。僕達の他にも見学者多数。今からショーが始まるんだ。
今か今かと待ちわびる事数分でそれは始まった。オレンジ色の空を目指す水の柱が打ちあがり、黄昏の日差しを受けて目映い光を反射するそれは真夏のダイヤモンドダストのようだ。
観客は一斉に沸いて次々と歓声が飛び交う。登場する人気キャラクターの面々はそれぞれ普段と違う衣装に着飾ってなんだか新鮮だ。
水の舞台は進み、空はオレンジから藍色を称えそして黒に近づく。

すると今度は湖が全面光りだした。興奮が募る会場で不意に日鞠が口を開く。

「ねえ秋徒。今辛い？　悲しい？　情けない？　やりきれない？　表面じゃないずっとずっと心の奥の方ね。私は何も知らないから大雑把な事しか言えないけど、そのしこりは今逃げたら一生そこにあるよ。

でもね、きっと今ならまだ大丈夫なの。こっち見て――ね？　頼りになる親友が居る」

そう言われて何だか話の続きを託されたみたいな感じだ。今度は粋なり真面目モードか。だけどここは間違いじゃない気がする。きっと今日一番の場面だ。

今度は夏の空に魚が飛んでいる。海になった様な舞台のクライマックスに合わせよう。

「なあ秋徒。僕はさ、向こうじゃセツリで手一杯なんだよ。知ってるだろ？　僕にしかセツリは救えない。それと同じようにきっとアイリはお前にしか救えない。

だから、みんなで待ってるよ」

「……」

秋徒は何も答えない。前方では浮き上がる３Ｄ映像の魚群が銀のうねりを作り敵の親玉のポセイドンみたいなのを貫いていた。

そして囚われのミニーちゃんを助けてエンドロール。水のカーテンの向こうに消えていく。それはハッピーエンドの物語。

周囲に巻き散る水しぶきが肌の熱を奪う。去りゆく熱は今日の暑さその物の様な気がしてた。

しゃがんだ心に二つの添え木（後書き）

第五十八話です。
なんだか風邪引いたみたいで頭がボーとしてる時に書いたから、また異常に時間が掛かりました。でもちゃんと次も上げます。
次の更新は水曜日ですね。頑張ります！

日だまれる僅かな時間（前書き）

遊園地終わりの次の日、僕はＬＲＯ内でセラと向かい合ってお茶してる。呑気と思われるかも知れないけど、今日だけはまだ時間が有るわけだ。それにただ何とはなしに二人でお茶してる訳じゃないよ。

今僕はセラからアルテミナスの現状を聞いている。これは明日の決戦の為に必要な事なんだ。そして僕達は互いにこの事態の裏側を見つめる。

日だまれる僅かな時間

「あんた、それ本当に大丈夫なの？」

不機嫌そうな声で向かいの席から僕を睨むのはセラだ。格好はメイド服……なんだけど、一昨日と違う。ロングスカートだったのに今は膝小僧が見える位の丈になって、なんだかリアルに居る感じのなんちゃって度が増してる。

暗器使いなのにそれでいいのかと思わなくも無いけど、本人が良いんなら別に僕が口を挟む事じゃないよね。細く長い脚は黒のニーソックスが守るように包んでいて、上半身はフワッとした感じを押さえ目にした体のラインが良く出て風になっている。

肩を露出して、二の腕から幅の広い布が手の甲まで覆うよう成っているんだ。その先からちょこんと出てる白い指先が銀のスプーンを握りカップの中の紅茶を回してる。

波紋が途切れる事無く渦巻いて紅茶に何も写らない。それはなんだかここＬＲＯみたいだ。今のここの状態を僕達は何も分かってない。

振り回される側と、それにのっかる奴ら、みたいになっててさ本質が見えない。僕は前者で、いつだってＬＲＯに振り回される側だ。そしてガイエンとかは後者と言えると思う。

まあたまたま重なっただけかも知れないけど、奴はそれにのっかって行動を起こした状態だよ。ＬＲＯ内では今のアルテミナスの動向は結構な話題の中心に成っている。

だけどそれはガイエンのクーデターじゃない。アルテミナス国内で起こっているモンスターの大量発生に暴走。そっちがメインに囁かれてて、どうやらクーデターとは認識されて無いみたいだ。

「ちょっと、聞いてるのアンタ？」

「ん？　あ、ああ、聞いてるよ」

何だか結構深く考え込んでたみたいだ。セラを無視した形になって、更にご機嫌斜めな雰囲気が強まった感がある。視線が棘みたいに刺さる感覚。日鞠の時もそうだったけど、女の子のそういう視線って痛いけどむずがゆくて、居心地が悪くなるな。

さてどうするか。これ以上空気を悪くしたくないけど、そうならざる得ない言葉が出る。

「う～んどうかな？　僕は信じてるけどね。やることやったと思うし。大丈夫だろ？」

「ちょっといい加減じゃないそれ？　親友なら引きずってでも連れて来なさいよ！　それじゃあ最悪の選択肢だって選ばないとは言えないわ」

まあ確かに、それも無くはない。絶対に秋徒がここＬＲＯに再びアギトとして戻ってくるっていう確証までは僕にも無いよ。でも、だから信じるんだ。

それにセラの意見は強引過ぎだろ。強制なんて意味が無いよ。自分からここに戻る気に成らなきゃ中途半端なだけだし、それじゃきっとまた失敗すると思うんだ。

そしたら本当にアギトは居なくなる。そんなのは僕だって困る。だから僕に出来たのは背中を押すことと、少しだけ心を持ち上げる位だけ。

後は秋徒の意志の問題だ。

「アギトの事信じてないの？」

「アギト様の事は信じてるわよ。アンタの事がそれほどでも無いだけ」

成る程ね。相変わらず厳しい奴だ。少しは信頼を勝ち取った気がしてたけどそこまでセラは甘い奴じゃない。まあ確かに知り合ってまだ数日だし、そんな簡単に人は絆を分かちあえない物だろう。

窓から木漏れ日が射して僕達を照らす。こっちの日差しは柔らかくて心地よく設定されてる様だ。まあ当然エリアやフィールドによって気候は変わるんだけど、今僕達が居る場所はすごしやすい気候を保ってくれている。

アルテミナスに戻れない事を知った僕達は取り合えず国と国の中間に当たる地方都市に行くことにしたんだ。ここは結構特殊な立ち位置で、どこの領土にも入らない占領不可地らしい。

なんでそういう仕様なのかは知らないけど、こういう都市は後二つあると言うことだ。それも国と国の間に同じように作られてるとか。

そしてここはプレイヤーに依存しないのも特徴らしい。それぞれの種族の国はプレイヤーが開拓出来るけど、ここはそうじゃない。プレイヤーの影響を受けない、いわばＮＰＣの町だ。それかシステムの……と言うべきか。

だけどそれじゃあなんだか僕は落ち着かなく成るわけだけどね。だってＬＲＯと言うシステムはいつだって僕に厳しいからさ。初めは入れてくれないんじゃないかとさえ疑ったよ。

取り越し苦労だったけどね。都市の名前は『ノンセルス２』どうやらここは二番目らしい。特徴が無いのが特徴の普通の都市だ。まあ、人の国と大差無いって事だよ。基本は西洋風の町並みが広がっている。通りに掛かる国の旗は無い。

何か物足りない感はあるけどね。それが何かは分からない。周りにはプレイヤーだって一杯居るからやっぱり別に変わらないんだけどそう感じてしまう。

だけどここを選択したセラ達に間違いは無かったよ。ここはアルテミナスじゃないから、外に出ない限りいきなり刺されるなんて事はない。

まあ、逃げ出した僕達をわざわざ追いかけてるか知らないけど。それらを確かセラ達が調べてた筈だ。

「で、どうなんだアルテミナス側はさ？」

僕がおもむろに切り出すと、セラは紅茶を一気に飲んでウインドウから地図を表示させた。ここＬＲＯの地図は最初自分の国だけが表示されて、踏破するに従って徐々にその全貌を表していく様に成っている。

だけど一年経った今でもこの世界の全貌を表した地図は無いそうだ。どういう事だよと言いたいね。そして当然僕のは虫食いみたいに成ってる。だからここはセラの地図の出番だ。

「良いニュースは殆ど無いわよ」

はなからそんな甘い期待はしてないけど、言葉にされると重く響く。セラの地図はアルテミナスにずっと居たと言う割には結構埋まってる様に見えるな。

テーブルに浮かび上がる様に表示されてる地図にセラが指を這わせると、その部分が拡大した。どうやらアルテミナス限定にしたようだ。

見えるのは国土のほぼ中央にアルテミナス、そして首都を囲む東西南北にそれぞれ街があり、その更に端に村がポツポツと点在してる。

「分かってる。それよりこの赤いのなんだよ」

「良く見てみなさいよ」

僕が指した場所には『タゼホ』と書いてあった。ああ、なるほどね。これはモンスターに襲撃された場所を赤く表示してるのか。だ

けど……あれ？　次々に地図上で赤い光が増えて行ってるぞ。

「セラ、これって……」

僕の声はきっと震えていたと思う。だってそれは信じられない事。僕がＬＲＯから離れたたった一日でこんな事有り得ない。地図上の赤い光は首都にもっとも近い、街の二つまでに灯ってるじゃないか！

「だから良いニュースは無いって言ったじゃない。奴らは勢いを増して侵攻してるのよ。止められないわ。このままじゃ後一日アルテミナスが持つかも分からないわね」

「なっ！？　奴は？　ガイエンは何やってるんだ？　このままじゃ折角手に入れた国が無くなるかも知れないんだろ。防衛してないのかよ？」

たった一日だぞ。明け渡したとしか思えない。だけどセラはそれを否定する発言をした。

「防衛はやった筈よ。だけど大きな軍を召集したばかりだったし何より、各地で奴らの攻撃は起きたの。それ全てに対応なんて出来ないわ。

私たちだって見たでしょ？　あのデタラメな数を」

そう言われると口を閉ざしてしまう。確かにあれは思い出すだけで鳥肌が立つ位の光景だった。あんなのが大量に押し寄せてきたら、パニックで応戦なんて出来る筈無いのかも知れない。

僕達は元々それを承知で向かったから覚悟も出来てた。だけどそこに居たプレイヤーの人達はそうじゃ無かった筈だ。

だけどこれって、スゴく厄介な事に成ってる気がする。

「なあ、これってどこにセツリは居るんだ？　どこ叩けばモンスターの侵攻は止まる？」

当初はタゼホにその親玉みたいな奴が居るって事だったけど、こうなったらどうだか分からない。僕の頭に話しかけて来た奴、そしてノウイとか言う目が点君が見たセツリを浚った奴。

それは同じ奴で、多分モンスター共の親玉であろう存在の筈だ。そいつの居場所が分からなきゃ動きようが無い。救いようがないんだ。

「きっとそれをガイエン様達も必死で探してる筈よ。向こうが掴めばそれで良し。城に残ってる侍従隊から知らせが届くわ。

後はノウイか、あのちっこい人の連絡待ちね」

「そうか……」

不安がのし掛かる。もしもこのままセツリが消えたらという不安がさ。頭に響いた声はわざわざ知らせて来たわけだしそれは無いと思うけど、せめて無事な姿は確認しておきたい。

頭に響くあの陽気さが逆に怖いんだよね。何をしでかすか分からない奴……声だけでそう思った。慌ただしく行き交う人々が窓の外に見える。ここは本当に何も変わった様子がない。

直ぐ近くでＬＲＯの中の大国が異常な軍団に攻め落とされようとしてるのになんでここまで何も変わらないで居られるのだろうか？

やっぱりそれはゲームだから？　電源を切れば抜けられる遊びではこの差し迫った状況も他の大多数の人達にとってはイベント程度なのかもしれない。

すると僕の視線を追っていたらしいセラが口を開く。

「別に他の人達だって興味が無いわけじゃないわよ。ただどうすれ

ばいいか分からない。事態が大きすぎるもの。国の存亡に自分と言う一人に何かが出来ると思える？
事態を見守る。それがもっともらしい個人の選択よ」
「……そんなもんか？」
「そんなものよ」

やっぱりセラは辛口だ。まあ、言ってる事は分かるけどね。何が出来るか分からないし、事情を知らない人達がわざわざ絡んでくること何てないんだろう。ある意味セラはそれを嫌がる気もするし。
追加注文した紅茶をすすりながらセラは再び広がった地図に視線を注ぐ。すると何かにセラは顔を上げた。そしてウインドウを開く。

「どうした？」
「メールよ。これは……ノウイね」
「情報か？　なんだって？」

机に身を乗り出す僕。もしかしてセツリの居場所が分かったのかも知れない。だけど何故かセラはため息をついていて、返される言葉に期待が持てなく成る気がする。
てか、言葉を返すのも面倒になったんだろうセラはメールをこっちに向けた。何々――

【もう無理っす！　死ぬ！　マジ死ぬ！　帰らせてくださいっす！】

――情報も何も無い。ただの泣き言がそこには綴られていた。いや、気持ちは分かるけどね。多分ノウイやテッケンさんは今、四方八方敵だらけなんだろう。
苦労してアルテミナスから脱出したのにもう一回そこに戻るなんて苦痛でしかない。

「おい、この人大丈夫か？　流石にやばいんじゃないか？」
「大丈夫よ。逃げ足だけは誰よりも早いもの。『ミラージュコロイド』があったからアギト様達を伴って逃げ延びれたのよ。一人なら余裕でしょ」

サラッとそう言ってのけるセラ。まあ確かにその話は聞いたし、逃げ足で彼にかなう奴は居ないと思う。それに彼ほど偵察やら情報収集に向いてる人は居ないだろう。その部分だけならテッケンさん以上だ。

それになんだかセラはノウイを信頼してるよな。だってセラは自分が認めない相手は使わなそうだもん。視界にも入れたくないって感じ。

それを鑑みるに、馬車馬の如くこき使われてるノウイはセラに信頼されてるって事だ。それなら僕とも向かい合ってるし最初よりは関係良好に成ったのは確かと見ていいな。

セラは手早くメールに返信を返す。きっとキツい言葉でノウイのメールを切ったんだろう。ご愁傷様だ。僕には助けられない。何故なら彼には頑張って貰わないといけないからだ。

「だけどあの『ミラージュコロイド』だっけ？　偵察とか逃げる事だけじゃなくて戦闘にも使えそうだけど。なんであの人はそうしないんだ？」

それは当然の疑問としてあった事。だって鏡を使っての幻覚と瞬時の移動だよ。それって凄い武器だ。戦闘に活かさないのが不思議な位の代物だろう。

だけどあのノウイって人はそれをしない。何か理由が有るのか気になる処だよ。するとセラはウインドウを閉じて僕の方を見た。

「さあ、別にただノウイがヘタレなだけじゃない？　それか発動中

の制限とか、とにかくノウイは逃げる事しかしないから知らないわ。興味も無いし。
ただ私の求める仕事が出来ればいいもの。だから偵察と情報収集なのよ。ノウイならやられる事がまず無い。情報が必ず生きて届くの。ここが大切」

う～ん、ノウイには深く同情するよ。これは死ぬまで働かされると今のセラの言葉で感じた。目が妖しく光ってたもん。
それに知らない興味ないって、そんな物なのか？　以外とその程度の信頼ってなんか悲しんだけど。

「そう？　普通でしょ？　私はちゃんと分けて考えてるの。だからこの程度で良いのよ」

それはゲームはゲーム、リアルはリアルとかそういうことか？
でもセラも結構入れ込んでると思うんだけど……涙を流して僕たちに頭下げた位なんだからさ。
それとも何か隠してる？　ってのは考え過ぎかな。よく考えたらそこまで詮索するほど僕も興味無いしね。一度セツリを助けてくれたようだし感謝もするし、今も彼の力に頼らないといけないのも認める。
けれど僕達は一度出会ってそれだけだった。まだ一度も言葉を直接交わしてない。だから僕にもまだ彼をどう見るべきか判断できないって感じだ。
これが終われば友達には成れそうな気はするけどね。

「じゃあアンタが友達やってあげればいいわ。私にとっては部下以外の何者でもないもの」
「あーはいはい、僕と彼はきっと気が合うと思うよ。でもじゃあさ、今の僕達ってどういう関係？　なんかセラも立場変わってるじゃん。

仲間とか思っていいわけ？」
「はあ！？　ちょっとふざけないでよね。仲間って……アンタなんかただの知り合いレベルよ！」

セラは顔を赤くしながら最後には顔を逸らしてそう言った。アンタって事は僕だけがただの知り合いレベルって事なのかな？　どう言うことだよ！　本当に良く分からない奴だ。
確かに厳密に言えば同じ目的って訳じゃないから仲間とは呼べないのかも知れない。僕はセツリ、セラはアルテミナスとアイリを助けたい訳なんだ。
それを成すために手を組むのが最良で、お願いもされた。ようは利害の一致って奴だね。だから何だろう？　なんて言うんだこういう一時的な仲間ってさ。う～ん、でも結局仲間でいい気もするな。
同じ目的を目指すのは『同士』じゃね？　なら『仲間』ってのは気持ちの問題じゃん。あれ？　それだと僕は結局セラに嫌われてるという結論にたどり着くぞ。
知り合った（たまたま）＋お願いした（仕方なく）＋仲間はイヤ（僕だけ？）＝嫌いじゃん。少しは認められたけど、人としては嫌いで仲間はイヤって事か？　生理的に受け付けないとか？　悪かったなイケメンじゃなくて！
自分では可もなく不可もない顔だと思ってたけど不可が有ったみたいだ。

「何遠くの空を見てるのよ？」
「別に……ただ全部上手く行くかなって考えただけだ」
実は全然違うけど、文句を言うと負けた気がしそうだから別の事を言ってみた。するとセラは重い声でそれに返してくる。
「今の状況だとそれは難しいわね。私たちは国とモンスターの大群

を両方相手にするんだから。そんなの考えたって夢の中でも上手く行かないわよ」

確かにその通りだな。僕達がやろうとしてることはそれほど無茶な事だ。だけど不思議と誰も諦めてないんだから僕達はみんなバカだと思うよ。

だけどそんなバカだから出来るんだって事をシステムにも、そして玉座でふんぞり返ってるガイエンにも教えてやろう。

「そうだな。まあ、そうなんだろうと思うよ。けど、やらなきゃ行けない。だからみんな頑張ってる。諦めない為にさ」

「分かってるわよそんな事。やりきって取り戻すわ。自分の居場所を必ずね」

セラの瞳には決意に燃える炎が見える様だった。自分の居場所か……そうなんだよね。セラは有る意味ノウイと一緒の造反者みたいな感じに成ってると思うんだ。てかセラがこの状況に追い込まれてるのもガイエンの策略かも知れない。

ハメられたか弾き出されたかそう考えられる。セラはアルテミナスで結構なポジションに居たらしく、そしてアイリやアギトを尊敬してた。それはガイエンにとっては邪魔だったんじゃ無いかと思うんだ。

侍従隊の長でなんだか情報を握れる立場だったセラ。それなら事前にガイエンの不振な動きを捉えておけよと言いたいけど、ここまでの事態の急変は予想外だったらしい。

そうしてまんまと一度もアルテミナスに戻れずここまで逃げるハメになったんだ。元々僕達と森に行った時から帰す気は無かったのかも知れないな。

でも、それだとまるで……まさかって事が考えられるんだ。

「なあセラ。お前のその居場所にはもしかして……いや、ガイエンはつまりさ」
「モンスター側と繋がっていた？」

セラは重い言葉を重くなった口で絞り出す。流石に考えて無いわけは無かった。だってタイミングが余りにも合致しすぎだ。
そうして一番得してるのはガイエン。僕の頭に声を届けた奴も目的を果たしたとか言ってたし、その線は結構濃厚なんだ。
ただどっちも手のひらを返したのかどうだか知らないけど、目的を果たした途端にそれぞれを潰そうとしてるから決めかねるけどさ。
だけどセラはそんな迷いを言葉に乗せない。時計の秒針がやけにちゃんと聞こえて、紅茶の湯気は不自然に揺れた。

「私の中では真っ先にガイエン様を黒く塗り潰したわよ。照らし合わせた情報がそう言ってるもの。モンスターの侵攻と言い、親玉の襲来、そして代わる様にソイツが姿を消した後に軍本体と親衛隊、ガイエン様の到着。
出来すぎでしょ？　そして何より『リア・ファル』王の選定石ですって？　そんな物、私は知らない。聞いたことも無いわ。それでも絶対に無いとは言えないけど、タイミングが良すぎよ。
でももし、あの泉の精が言ったようにモンスター側の親玉がシステムに介入出来るのなら……あり得なくもないわ」
「そう……だな」

二つを繋げれば全てが噛み合う様な気がする。実際噛み合ってる。後はただ確証が無いだけだ。僕達の間で長い沈黙が流れる。
僕は殆どガイエンを知らないから何も言えないけど、セラはどうなんだろうか？　まさかと思ってるのか、やっぱりとか遂にとか思ってるのかな。
その時、僕の頭に甲高い音が鳴った。それはメールの着信音。一

体誰だ？　僕にメールなんてアギトしかないけどそれさえも今はない。テッケンさんはセラの方に送る様に成ってるしシルクちゃんは今日は入ってない。
該当者がない中でメールを確認。
「は？　え？　これって……」
僕は間抜けな声を出して何度もメールの差出人名を確認する。向かいでは僕がウインドウを開いたのと同時に時間を確認してるセラ。そして「流石時間ピッタリ」とか呟いてる。
噛んでるなコイツ。僕が困惑の眼差しを向けると僕に普段向けない笑顔を見せてるもん。元から信用してなかったって事か。
「そう言えばサクヤだっけ？　その子、城に幽閉されてるらしいわ。上手く終われれば助けられるわ。
それじゃあ私は明日に備えて今日はもう落ちるわ」
「はあ？　今言うかそれ――ってこれ、間に合うか？」
「大丈夫よ。どうせ軍が揃うのは夜だから。それにモンスター共も動くのは夜から朝方に掛けて充分時間はあるわ。
えっとね……これってとっても勇気が入ることなの。だからお願い。協力してあげて」
真剣な眼差しがその目に見えた。そして僕もこれは願っても無いことだ。なら言うことは一つだけ。
「分かったよ」

日だまれる僅かな時間（後書き）

第五十九話です。
ちょっと頭まだ痛いけど、熱も引いて風邪も直った感じです。いやー良かった良かった。毎年一回くらいしか風邪引かないからこれで来年まで安心です。まあ、多分？
次は再びリアルかな。思い出話も良いけどう～んですね。取りあえず今回振った物の回収でって事で次回は金曜日更新します！

裏を知る者（前書き）

我らエルフこそがＬＲＯで最強！　ここアルテミナスこそがＬＲＯ最大であらねばならん！　それが誰にも侵されぬ盤石の国に……我らの威厳を永遠にする為に！　使える物は全て使おう。そうして王とは国を守り導き、発展させるものよ。私こそがエルフの王である！

裏を知る者

次から次へと慌ただしい報告が矢継ぎ早に届く。城の中はここ数日、ずっこんな感じだ。城の内外問わずに走り回る奴らのせいで、この荘厳なアルテミナス城がまるで騒音のはけ口かと思える程に騒々しい。

そこら中からドタドタ、バタバタ、ガシャガシャ、カツカツと、建物の中は走るなと教わらなかったのか貴様等は！　しまいには文句を言うためだけに集まってきた、権威にしがみつく豚共がうざくてたまらん。

このアルテミナスの王の前で何故にコイツ等は頭も下げずに、好き勝手な事をほざいているんだ？　謁見の間というバカでかい場所でも無い、執政室というそれなりに普通の広さの部屋で豚共が籠もるとウルサくて仕方ない。

私が書類に目を通して豚の声を無視してるとその中の一匹が痺れを切らしたように机に手を叩いてきた。

「ええい！　聞いてるのか貴様！？　どうする気だガイエン？　昨夜の襲撃で遂に東西南北全ての街が奴らに襲われたのだぞ！！

次は間違いなくここだ！　救援要請は出したのか？　『ラーズフアルト』か『ノウヘリム』へ直ちに使者を送らなければ……」

「ふざけるな！！」

私は目の前の豚を怒号と共に睨みつける。信念の無い瞳はそれだけで意気消沈し、それは後ろではやし立てていた奴らも同じ。

本当にコイツ等は何も分かってない。国に巣くうウジ虫としか思えない奴らだ。何が救援か？　コイツ等は普段、誇りや何やらを振りかざす癖に、それを易々売ると言うか！

背に有る大きな窓から曇り空の僅かな光が部屋に注がれている。それは今のこの国の雰囲気に良く合う様に部屋をそこまで照らすことは無い。
せいぜい表情をようやく確認出来るレベルだ。ドアの付近は見えそうに無い。私は手にしていた書類を目の前の、豚に投げつけてやる。元々、全部予想の範囲内だ。

「うわっ！？　な……何をするガイエン！　貴様！」
「貴殿等こそまだ理解してないのか？　私は既にこの国の王だぞ。それともその態度は処分を覚悟しての狼藉か？　それならば望み通りにしてやろう」
「「「……ゴクリ」」」

白い紙の束が無造作に床へと散らばっていく。場の空気がさらに凍り付く様に張りつめた。一番近くに詰め寄って来た奴は意図せずに足が後退を始めていた。
だけどその時後ろの豚が一人、再び声を上げる。そして面白い事を言うではないか。

「貴様を王だとは我らはまだ認めたわけでは無いぞ！　そんな重要な事が貴様の一存で決まるわけがない！」
「ふふ……ふはははははははは！　何を異な事を今更言うか貴殿は？」
「な……何だと？」

後ろの豚に乗ろうとしてた奴らの動きが止まる。動く前に征された場。だけど元からこの場、この城、この国は既に私の物よ。
「王は人に決められる物ではない。そもそもそれだと民主ではないか。それとも貴殿等がアイリの様に都合のいい王でも仕立てる気か？

もう、飾りなどいらんのだよ。ここに真の王が誕生したのだからな」

部屋につんざく様に響く無数の子供の叫びが豚共を震え上がらせる。そして向ける一本の剣。この国を納める者だけが使える王の剣。

「貴殿等の判断など入りはしない。『リア・ファル』この叫びこそ、私を王だと認めているのだからな。なんなら試してみるか？

カーテナの攻撃はそれはそれは痛いらしいぞ」

「「「――っひ！！！」」」

私はカーテナを握る“右腕”を振りあげる。それだけで一番後ろに居た奴らはドアから飛び出して行ってしまった。残ったのは文句を言ってきて豚二人。どちらもただ腰抜かしてるから逃げられなかった様だ。

ふん、安全圏で惰眠ばかり貪るからこの程度の脅しに屈し逃げ出し腰抜かすのだ。逃げ遅れた二匹は開け放たれたドアをしばらく見つめてる。そして恐る恐るという風にこちらに向きなおすと、ガチガチ震える口を動かし出した。

「わ……我々を……追放……する気か？　待て……待て……お前が王だ。それでいい……後の奴らも私達が説得してみせよう」

同じように腰を抜かした豚が首を何回も縦に振る。なんと無様な姿。私はカーテナを握る腕に力を込める。こいつらはそれが意味のないことだと気付いてないのか？

潮時だな。

「聞いてなかったか？　貴殿等の承認など私はいらないと言った。王の口を二度も使わせるな。煩わしい。

貴殿等などもういらない。この国は私が守って見せよう。それが王の責任でもある。『追放』だ。そして最後にその身に王の偉大さを刻め」

「「うううううあああああああああ！！！」」

カーテナを握る右手を私は振り下ろした。けれどそこに何の衝撃も生まれはしない。別にスカした訳じゃない。これで充分なだけだ。

目の前の豚二匹は腕が振られた瞬間に、悲鳴を上げてそのまま泡を吹いて気絶している。

「おい、そこのゴミを捨てておけ。ついでにさっき逃げた奴らも同様だ」

「「はっ」」

開け放たれた扉から入ってきたのは親衛隊の二人。今はもう、文字通り私の親衛隊だ。手早く豚二匹は片づけられて、同時にまた駆け足で二つの紙が届いた。それは親書。

届けた親衛隊の一人がその場で指示を伺う様に待っている。

「どういたすのですか？」

「そんなの決まっている」

そう言って私は届いた親書を破り捨てる。どの種族も今のアルテミナスの現状を知って借りを作らせようとしてるに過ぎない。そしてそれを私は許さない。

「この国は強く有らねばならない。どこよりも……何よりも。それを示すのに今の状況は好機でしかない。私達が弱ってる様にでも見えるか多種族め。

しらしめてやろうではないか。我らエルフこそがこの世界の頂点

だとな！　突きはねろ、こんな物！」
「はい！」

目を輝かせてこの場を後にする親衛隊の一人。そして扉が閉まるとようやくこの場に一人に成れたーーと、思ったらどこからともなく手を叩く音が部屋中に響きわたる。
そして部屋の一番暗い部分から奴は現れた。

「きゃはははは。すっごい、えっらいね☆　私感動しちゃったよ。この国はぁ！　強く有らねばぁ！　きゃはは賛成しま〜――ぷぎゃ！？」

アルテミナス城が衝撃で揺れた。そこかしこで被害を被った奴がいるだろう。だけどそれに目を瞑り、城を一部壊してまでやらなければ行けない時だと判断した。
何故なら今、出てきた奴こそがこの国を潰そうとしてる奴だからだ。私は“左手”に握ったカーテナを躊躇い無く振り切って部屋を二つ分程広くした。
運良く誰も居なかった様で何よりだ。それなら更なる追撃が可能。そう考えてカーテナを構え直す。するとその時、誰かの手がそのカーテナに添えられた。

「うんうん、調子は良いみたいだね☆　でも、さっきのはイキナリなご挨拶じゃないかな〜？　誰のおかげでその力が使えて、君はそこに入れちゃうのかちゃんと考えたら？」
「この……バケモノめ！」

私は歯噛みしながら構わずカーテナを振るう。窓と共に書類が溜まってた机までもが外に飛んでいった。だけど当然の様に奴は直ぐ再び現れる。

「ひっど～い！　バケモノなんて酷いよ君！　こんな美人で可愛い私に向かってそんな事言うならこうしちゃうもんね☆」
「――っつ！？」

奴が指をパチンと鳴らす。すると途端にリア・ファルの輝きが無くなった。そして当然、そうなったら幾ら振ってもカーテナは反応しない。ただの玩具同然だ。

「きゃっほ～～！　私の勝利だねぇ☆　当然だねぇ～、だってそれは私が～――」
「何が目的だ今更！？　既に貴様とは敵同士だ。この国から直ぐに追い出してやる！」
「――わぁお！　そっれはたのっしみだな♪」

奴は長過ぎる黒髪を振り回しなら踊っている。相変わらず感情が『楽』しか無いような奴だ。いつもクルクルパーみたいな発言してるのに、裏側までコイツは網羅してる。
だからこんな小細工まで……別に信用なんてしてなかったが、これはやられたな。
今の自分は王では無いと言うかカーテナ！　目の前の奴を倒したいが、私は今アクションを起こせない状態だ。並の武器では奴は倒せはしない。
これはいよいよ、やはり『アレ』が必要か？　それとも乗り切れるか、私は判断しなければ行けない。何故なら今のアルテミナスの王は誰が何と言おうと私だからだ！
奴は何しに来た？　今更も今更だ。何かよっぽどの事？それならカーテナ無しでもどうにか出来るのかも知れない。
「借り物の王様君は力が無くても大きいね☆　う～ん目的はね。ち

ょっとした交換条件だよ～」
「交換条件？」
奴らの方が今は圧倒的に押しているのに交換条件なんて怪しい。交換条件なんて弱い方が許しを請うために差し出すものだろう。何を言う？　何が望だ？　この外見だけは女神の様な悪魔は何を要求する？
私はこいつを知っている。だけど全然予想が付かない。候補はある。だけどこいつがそれを言うとも思えないんだ。いつだって私の理解の斜め上を行く奴だから。
そして案の定、奴の口から出た言葉は予想外の物だった。
「そっちにさ～居るっしょ？　プリチーでぇキュートでぇマーベラスな女の子がさ。その子くれたらここは見逃してあげちゃうぞ☆」
「……説明がたりん。誰の事言ってるんだお前？」
自身の捉えた主観で伝えようとするなよな。プリテーでキュートでマーベラスって分かるか！　ＬＲＯはゲームでキャラクターも好きに作れるから大概そんな子ばっかりだ。ブスを探す方が苦労する。
私の言葉に奴は頬を膨らませてご立腹。どうやらあれで分からなかったのが不服らしい。
「もう、これだから君って奴ぁ～さぁ。一体女の子のどこ見てるのかってことよぉ。君が王様になったあの日に、戦ったでしょ？　マーベラスな巫女さんと」
マーベラスな巫女さんってどんな巫女さんだ？　だけどここで私が思い出す巫女と言えばあれかしかない。
「それは、あのサクヤって奴か？」

「うん～大正解！　そうそう、その子頂戴☆」

コイツが求める物はあの巫女。このカードは役に立つか？　いや、立たせよう。この国の為に使える物は使うべきだ。元々、あの巫女も存在がおかしな感じだった。

もしかして同類なのか。

「なんであの巫女を求める？」

「ふふ、それを君に教える必要が有るのかな？　良い条件じゃない。彼女この国と何も関係ないんだし、それでここは救われるの。特しか無いよね～違う？」

確かにコイツの言うとおり、アレはここと関係ない奴だ。売っても何も問題ない。だがここでこのカードを切ることが最善かと考える。

「じゃあ、どうして今こんな交渉をする？　落とされる気など無いが、そっちが優勢だぞ。お前、条件を守る気など無いだろう？」

私の言葉に目の前の奴は目を細めて含んだ様な笑みを見せる。別にそれは確信を突かれたからとかでは無いだろう。そんな事を気にする奴じゃない。ただ単純に面白がるだけだ。

風通しが良くなった部屋で奴は長い黒髪を風にはためかせている。

「くふふふふ。まあ確かにそうなんだけどね。えっらいぞ！　よく分かったね。偉い偉い☆」

「当然だろ。お前は一度そうしてる」

コイツは目的を果たした途端に攻めてきた。そして今の状況が出来上がってる。そんな奴を信じられる訳がない。

「う～ん、きゃは☆　でもそれってお互い様だよね。だからもう一回信じあいましょう。きっと私たちなら出来る筈！　キャッホォォォォ！」
「どの口がそれを言うか？」
「この口、この口～☆」

陽気な奴は、口の両サイドを指に引っかけてニ～としている。本当に感情を逆撫でするのが上手い奴。他の大多数の男共はコイツのこういう天真爛漫さを魅力と捉えるかもしれないが、私はバカにされてるようにしか感じれない。
だが胸中をみっともなく晒すなどはしない。ここでコイツを上手く誘導出来れば、戦い安くなるだろう。それにカードはこちらに有るんだ。
それならこのバケモノとせめて対等に……それがアルテミナスの為だ。その為に使わせて貰おうではないか、あの巫女を。

「まあだが、渡さなくも無いがな。こちらの条件を呑むのならだ」
「へぇーはぁーほぉーん。まあ別に良いよ。どんな条件でもここを落とす事に変わりないからね。束の間の夢くらい見せてあげる。
私ってやっさっしー☆」

もう既に落とす宣言までするかコイツは。ここがその落とす奴らの本拠地だと分かってるのか？　分かってない訳ないから、これは挑発か……コイツの場合は天然か。
どちらにしてもアルテミナスは落とさせん。

「ふん、言ってろバケモノが。私もお前達との衝突を止める気など無いのだからな。必ず貴様等はこの地から追い出してやる」
「ふふ、良いね。どっちも腹の内出し合ってさ。なんだかスッキリ

しちゃったよ。で、何を君は求めてるのかな？」
「この石『リア・ファル』へのお前の干渉を排除しろ。徹頭徹尾完全に」

周りからは慌ただしい声が聞こえるな。だけどここにたどり着く者は居ない。これだけ派手に暴れたのに誰も来ないなんてあり得ない。
きっと目の前のコイツが何かしてるんだろう。良く分からない奴だからな。謎の代名詞みたいな存在。だがコイツの正体などに興味はない。
私が思うはこの国とエルフという種族だけだ。そしてそれらを守るために、これが必要な事。

「それが押さえられちゃったらカーテナ使えないもんね君は。だって借り物の王様だから☆　だけどそれで、守れるのかな？　私達を止められる？」
「止めてみせる！　そしてお前は私が潰そう！」

風が抜ける。暖かさをはらんだ風が私達二人の肌に触れて行く。鋭い眼光と声を向けたが、奴が動じる事は無い。少し趣向する程度。顎の部分に指を付けてのそんな態度。

「う～ん、まっ別にいっかな。あははは、楽しく成りそうだね。だけど君じゃ私は倒せないと思うけど☆　それじゃあ早速彼女の居場所をって、先にやっちゃおっか？
どうせ今は私倒されないし。そっちの方がいいでしょ君も？」
「そうだな。そうしてくれるとありがたい。だけど良いのか？　カーテナが使えれば、また私はお前を攻撃するかも知れないぞ？」
「この城を無駄に破壊したいならどうぞ☆」

その笑顔は自身には絶対に攻撃が通らない確信があるから出来るんだろう。さっき今は倒されないとか言ったからな。それに先の攻撃でも奴は実際効かなかった。確かにやるだけ無駄か。

「では、言葉に甘えてお願いしよう。だがお前の干渉が無くなった事をどうやって証明する？」

「ぬぬ～それは考えて無かったかも。信用？」

「ふざけるな！」

そんなもの既に崩壊してるだろう。それに初めから信用なんて私達の間には無かった。あったのは互いを利用するという黒い思惑だ。

だからこそ、今私達は衝突している。それぞれの目的を手にした時、手のひら返しを互いに行った訳だからな。そんな私達に信用など……片腹痛い。こっちは命運が掛かっているのだ。

そんな曖昧な物に頼れる訳がない。ここぞと言う時に再び掌握される訳には行かないのだから。

「うぅ～そんな事言ったってぇ～、君にはどうしたって分からない事だし～何言ったって演技とか思うわけでしょ？

無理無理～超私可愛そう～。冤罪を疑われるんだ～」

「じゃあ、あの巫女はいらないのか？」

「別に……潰した後でも良いことだよね・・そんな気がしてきた☆」

ボソッと奴はそう言った。しまった、それは最悪のケースだ。そもそもコイツがこのタイミングで巫女を条件付けてまで求める理由さえ分かってない。

それなのに余り強い押しは逆効果だったか？　ここでコイツに引かれたら対抗手段が無くなってしまう。それは絶対に避けなければ行けないこと。

どうすれば……巫女……カーテナ……リア・ファル……壊れた執

政室で頭を働かせる。
そして考えをまとめて口を開く。
「まあ待て。取り合えず『リア・ファル』にその仕様を施せ」
「でも、証明出来ないんでしょ？　ブーブー、私嘘つきに成りたくないしぃ」
既に嘘つきだろうがこのアマと言ってやろうか？　やけに拗ね始めたコイツが鬱陶しい。ボロボロの床に体育座りで小さくなってその長い黒髪が四方に広がっている。
「証明は私がしてやる。だから大丈夫だ。それに巫女もここに連れてこよう。お前もその方が良いだろう？」
「えっ？　本当それ？　って、君がそんな協力的ってなんか怪しいわね」
珍しく瞳に疑いの色を乗せる目の前に奴。それに勘が鋭いな。だけどそこまで深く考える奴でも無いはずだ。ここは言葉を被せて行くのが上策。
「違うな。別に私は協力してる訳じゃない。この国の為の行動をしてるだけだ。良いのか？　欲しいんだろう巫女が。成るだけ早く。だからワザワザこんなタイミングでお前は来てる。こちらが証明方法を実行するんだ。お前に落ち度はない。それに必ず成功するさ」
「まあ、それなら～いいっかな～。で、どうやって証明するわけ？」
「それは私に任せて貰おう。それより部下に知らせて巫女をここに連れて来させたい。何か妨害してるだろう？　それを解いてくれるか？」
今度は私を値踏みする様な目を向けてくる。その事に気付いてる

のが意外だったのか？　軽く見られた物だ。だがここを去るとき、お前はその評価を完全に改める。
そう確信出来る。

「気付いてたんだ。まあいっけどね」

そう言ってパチンと指を鳴らす。すると途端に親衛隊がなだれ込んできた。何やったんだコイツは？　底知れない奴だ。
親衛隊はすぐさま奴を取り囲むが、それを止めさせて巫女を連れてくるように命じる。コイツ等は私に忠実だ。疑問を挟んではこない。あの豚共の様に。
そして残った数人は再び部屋の外へ。

「じゃあ、リア・ファル貸して☆」

差し伸べられた手に指から外したリア・ファルを渡す。すると目を瞑って何かを唱え出す。浮かぶ意味不明な文字の数々。そしてそれが収まると私の手元にリア・ファルは帰ってきた。そして響くあの叫び。
これで後は――その時、大至急で親衛隊が巫女を担いで戻ってきた。私の横に放られた巫女は堅く瞳を閉じている。状態は気にしないのか奴は姿を確認しただけで、頬に両手を当てて満足気だ。

「で、一体どうやって証明しちゃうのよ。きゃはー☆」
「決まってる。それはつまりこうやってだ」

私はカーテナを振りあげる。巫女の方を向いてだ。すると案の定、奴の笑顔がひきつった。

「はは……何やってるのかな君は？」

「証明だ。お前に干渉されないかのな。この巫女を使えばそれが出来る。お前にとっては必要でも私達にはそうでもないこの巫女の利用価値はここだよ。
このカーテナの攻撃をお前が止めないのならその証明になる。その巫女が大切……なんだろ！？」

カーテナがその輝きを見せつける。上から下へと流された動き。その時、奴は何かを叫んだが衝撃音で全てかき消された。

「ふむ、確かに確認できた。ご苦労だったな。そんな顔をすることはない、お前に対する有効なカードだ。みすみす殺しはしない」

そう言うと煙が晴れた床から変わらぬ巫女の姿が出てきた。奴は安堵の表情を見せる。

「人間を舐めるなよシステム風情が！」
「ふふ……あはははははは！　君も結構面白いね☆　いいよ、今晩は楽しく成りそう。君達は木っ端微塵に潰してあげるわ。
それと、いつまでもシステムが手のひらの上にあると思わない事ね人間」

奴は再び影の様に消えて行く。最後の台詞、雰囲気が一瞬で変わった。あれが本性……上等だ。アルテミナスの輝きは失われはしない。

裏を知る者（後書き）

第六十話です。
最初に言うと、予定してたのと違います。前の話の話。回収してません。なんだか意外とこれが長くなったのが行けないんです。次こそは前回の続きっぽくなる予定です。
そして遂にアルテミナス編、クライマックスの戦いに入る事でしょう。てな訳で今日はこの辺で失礼します。では次回は日曜日に更新します！

入道雲の空の下（前書き）

俺はまだ諦めている。スオウと日鞠にあそこまでされたけどさ、踏み出せすまでは行かない。ＬＲＯから逃げて三日目、今日がタイムリミットだ。そんな今日という日に俺は一人の女の子と出会う。とても不思議なブラジャーの女の子だ。なんだそれ！？

入道雲の空の下

あの遊園地から何も音沙汰が無く一日が過ぎていた。誰からも届かないメール……みんな意外と薄情な奴らだ。まあ、別にそれで良いんだけどさ。

けれど結局、スオウがあんな事を最後に言うから俺は今日と言う日までモンモンとなっている訳だ。もう、考えたくもない……その筈なのに、目が覚めて最初にしたのはメールのチェックで、ＬＲＯの掲示板を眺めること。

習慣とは恐ろしい程に体を支配する。もう、やらなきゃ落ち着かないみたいなさ。真剣に取り組んでた名残。それだけＬＲＯは俺の生活の一部だった。

掲示板の今の専らの話題の的はやはりアルテミナス。そこには様々な情報が飛び交っていた。どうやら良い状況では無いようだ。

首都アルテミナス以外の領地が攻め落とされたとか……ガイエンは一体何を……って俺には関係無い事だ。もう、ＬＲＯに入る気はない。

日鞠はこのまま逃げたら後悔すると言った。だけど違うんだよ。俺はもう、ずっと後悔していた。アルテミナスから最初に逃げ出した時からさ。

だから逃げるのも、後悔するのも、もう慣れっこだ。

スオウは信じてると言った。仲間の誰もが俺が戻ってくるのを信じてるって。俺にしかアイリは救えないって……だけどきっとそんな事ない。

アイリとセツリは違う。スオウならアイリも救えるさ。アイツはもうビギナーじゃない。命が掛かった場面を何度も何度も乗り越えて凄く強く成ってる。

それに俺なんかより頼りになる仲間がスオウの周りにはいるんだ。だからもう、良いだろうと思う。ＬＲＯはゲームなんだ。出ていく

時も自由でいいと思う。
誰も追って来なくていい……電源を切れば忘れられる世界であれば良かったんだ。

「ん？」

その時ＰＣにメールが届いた。それはスオウからのメールだ。内容は考えたくないＬＲＯの事。アルテミナスの事だ。

【起きてるか？　今晩午後八時に集合だ！　ガイエンも動く。モンスター共も今日必ずアルテミナスに侵攻する。だからさ待ってるよ】

待ってなくてもいい。そう返信したいけど……手が動かない。俺は本当はどうしたいんだろうか。こっちに逃げ帰ってきた時の俺なら迷わずそう打ち返せたのに。
スオウと日鞠に言われた事が頭を回る。小さな期待が胸に再び灯ってるのかも知れない。それでまた、踏み出せる物じゃないけど……指に抵抗する位は出来る、そんな程度の灯りの物が。
悟った筈で散々それを思い知ったのに、俺はまだ何に期待してる？

自身の部屋はカーテンを閉め切り灯りはパソコンと隙間から見える光だけ。エアコンが風を吐き出し、快適な空間を作りだしてくれて居るけど、何故か体は重いんだ。
だからこの天気にも関わらず、昨日も一歩も外には出なかった。勿論部屋から一歩もって意味だ。きっとカーテン開けたら目が焼けると思う。この時期の太陽光は殺人級だから。
それなら丁度良かったかな……なんてさ。暇に成ったし課題をやれば学生らしい行いかも知れない。う～ん、俺はこっちでの楽しみ方を大分忘れてる？
自分から課題を机にだすなんて重傷だ。毎年、休み終わりのギリ

ギリにスオウの家に行って二人で日鞠に見せて貰うのが恒例行事だからな。
それまで課題なんて開かない……さもすれば連絡来なければ忘れるくらいだ。だけど今年はどうなんだろう。なんだか行きづらいよな。こうなったらさ。
あの時、スオウをＬＲＯに誘うんじゃなく俺が辞めとけば良かったのかも知れない。そしたらアイツも命を懸ける事なんて無かっただろう。俺ももっと早くに諦めがついてたのかも知れない。
でも、ただあの時はまだここまでじゃなかった。諦めなんてついて無かったから……いや、理由が欲しかっただけかもな。ＬＲＯに留まる。だから強引にスオウを誘ったんだ。
そして始まってしまったアイツの冒険。命を懸けた戦い。あれは俺のせいの様な物だ。俺のワガママと身勝手と弱さにアイツを付き合わせてしまった事が原因。
だから俺だけは付き合おうと思っていた。少しでもアイツの力に……どこまでいっても一プレイヤーでしか無い俺にはそれしか出来なかったのにさ。
その俺が一抜けしたら、もうアイツに会わせる顔なんて無いだろう。この休みが終わって学校で顔を合わせてもその時は親友なんて事はない。
てか、アイツはこのままだと二学期に顔を出すのかも分からないじゃないか。どんどん混迷をますＬＲＯで有限の命で本物の冒険をしてるんだ。何が起きたって不思議じゃない。
責任……って奴が俺にはあるんだろう。アイリにもスオウにもさ。そんな事分かってるけど、自分にはもう何が出来るか分からない。それをずっと考えて……ボロ負けしたんだ。
役立たずと誰もがみてくれれば良かったのに……アイツ等は俺を過大評価し過ぎだ。画面に映るメールをボーと眺めてはため息を吐く。
そんな事を三回は繰り返してると、もう一通メールが届いてた事

に気付いた。二通同時にアイツは出したって事か？　なんでそんな面倒な事を？

取り合えず二通目も開いてみる。

【ああ～そうだ。お前家にいるよな？　最近もう暑くてたまらないけどさ、こう暑くちゃ家の前に行き倒れとかいるかも知れないな。至急確認したほうが良いぞ】

「……」

明らかにおかしな文面だ。なんだ？　スオウの奴、来てるのか？

遂に日鞠に見捨てられて飯にあり付けなく成ったとかで恵まれに来てるのかも知れない。

まあ、ここまでする奴じゃないけど。それにここを訪ねる理由にしても強引過ぎだろ。何だ行き倒れって？　今の時代にそんな希有な人種はこの国にいねーよ！

取り合えず確認してみる為にカーテンを隅に追いやり窓を開く。すると突き刺さる様な日差しと同時に、熱気を含んだ空気が部屋に進入してきた。流れ出る冷気がもったいないな。

別に窓まで開ける必要無かったのでは無いのかと思うが、開けて閉まったもの仕方ない。上半身を出すようにして家の前をみてみる。だけど別に誰も居ないな。

休暇中の学生の姿さえ見えない。若者は街側へ繰り出すからな。こっち側は人気ないんだ。それにしたって閑散とし過ぎだけど……って、おや？

なかなか素敵な女の子が我が家に向かって駆けて来る。手には買ったばかりの缶ジュースが握られている。彼女は我が家の通りの向こう側でプルトップを開けて二・三口飲む。何故か電信柱に隠れる様にしてるのは謎だ。

そして噎せた。「コホッケホッ」って上体が激しく揺られているのが見える。なんだか小動物みたいな子だ。行動原理さえ分かれば

心が和めるんだけど……今の所理解出来ない。
ただの通りすがりの人かも知れないし……ってその割には怪しい動きを繰り返すんだよな。時折、電柱から顔を出しては周りを確認してるしさ。その前に通りすがりの人物は電柱に身を隠したりしないか。
なんだか彼女はジュースを飲み干すのに悪戦苦闘してるみたいだ。
「なんで減らないの？」みたいに首を傾げて、中を覗き込んでいる。そしてしばし考える。
彼女はしゃがみ込んで排水行に缶ジュースを傾ける。どうやら飲みきれないと判断して中身を捨てる気の様だ。けれど彼女は缶を傾ききれない。頭を左右に振って葛藤。
そして勢い良く立ち上がると、風呂の後のコーヒー牛乳みたいに腰に手を当てて天を仰いで一気飲み。その姿は「ゴキュ、ゴキュ」と聞こえてきそうな程だ。だけど「ぷはぁ」とは成らずに塀に手を当ててお腹をさすってた。
そこまでして飲まなくても良いのに、律儀な子だ。

「ん？　どっか行く？」

彼女は周りを見回して何かを探してる？　そして来た道を戻っていった。何なんだ一体？　やっぱり通りすがり？　そう思ったけど、彼女は再び戻ってきた。そして俺も気付いた。

「ああ、空き缶を捨てに言ったのか」

彼女の手にはさっきまでのジュースの缶が無くなっている。凄いな、関心してしまう。誰にも言われずにそこまでするなんてさ。俺なら近くにゴミ箱が無かったら置いて行くだろう。
悪いと思うけどやってしまう。それが人間だろ。だって面倒じゃん。彼女はそのせいで余計に汗をかいてる筈だ。　そして彼女はお

腹をさすりながらおもむろに我が家の方に前に立つ。俺は見つからない様にカーテンを引き寄せて身を隠した。
う～ん、俺も何をやってるんだか。てか、我が家に用があるのか？　髪を切りに……なんて事は無いよな。女の子は床屋なんて利用しないだろう。クラスメイトの女子とかは洒落た美容室を利用するし、彼女も例外では無いと思う。
茶色がかった髪は肩に僅かに触れる程度の長さで毛先にパーマでも当ててるのかクルフワっと成っている。家のじいちゃんは基本坊主か角刈り、スポーツ刈りしかしないから彼女がここを利用したら大変な事に成るだろう。
さて、実際どうしたら良いのか自分的にも困ってるんだけど、出ていった方が良いんだろうか？　けど、知り合いでもないんだよな。どう考えても知らない顔だし。
そして彼女は携帯を確認後、本当に突飛な行動に出た。俺はずっこけて窓から転げ落ちるかと思ったよ。それは晴天の空に響き渡る。

「ああ～！」

ズデム……と彼女は熱せられた鉄板みたいなアスファルトの上に奇声と同時に倒れ込んだんだ。何？　どこから突っ込めばいいんだ。てか、あれが行き倒れだろうか？
この炎天下の中良くやるな。スオウの差し金……何だろうけど、取り合えず拾った方が良いんだろうな。家の前で行き倒れとか嫌がらせとしか思えないけど。いくら人通りが無いと言っても誰かが見つけたら大変だ。
多分、きっと良い子の筈の彼女が可哀想だろう。自分的には女の子に優しさをアピールしたい時期なんだ。それがどんな子であろうとも……それが俺のモットーだ。
まあ、取り合えず迷惑だからな。騒ぎになっても面倒だ。この暑さだから行き倒れより日射病の方がリアリティがあったのに……と

いう思いは心の奥に押しやって店のテレビに夢中の爺ちゃんを横切って流し戸を開けた。

「暑い～暑いよ～」

ボソボソとそんな声が聞こえてしまってこっちが固まる。なんだか愕然だ。意外と人が目の前に倒れてるのは大きなショックに成ると知った一夏の時。

実を言うとこれはＬＲＯで見慣れてる筈だけど、リアルではなかなかお目に掛かれない光景だ。

「あの……何やってるんですか？」

俺の声に一瞬反応した彼女は急に「う～う～」言いだした。お産？　じゃなく、演技が始まったようだ。猿芝居という芝居がさ。

「う～う……動けない」

「……」

ある意味斬新な言葉を言う彼女。動けない人が動けない言うだろうか？　行き倒れならもっと具体的な「み、水を～」とか言いそうだけど、彼女は「動けない」らしい。

「大丈夫ですか？」

取り合えずこれが正解だろう。

「あ～貴方は誰ですか？」

何故か質問が返ってきた。心遣いという言葉がこの暑さに溶かさ

れて行くのが見える様だ。既に倒れ伏してる頭のを起こして、チラチラこっち見てるのに俺は気付いてるぞ。

「俺は秋徒だけど……この家の親父の息子。それが君がここに行き倒れてる理由と関係あるの？」

「いいえ……助けて頂く人の事を知りたかっただだけです」

何か最後の所はしどろもどろだった。額まで地面に押しつけるようにして暑そうだ。そして小さく

「秋徒……アギ……秋徒」とか言ってる気がする。地面に向かって声が出てるから良く聞き取れない。

「え～とここは暑いですね」

「……でしょうね」

そんな態勢してたらさぞかし暑いだろう。なんだか話が進まないな。本当に何がしたいんだろう。俺も暑いから早く部屋に戻りたいんだけど。今の状況に俺の頭も湯上がりそうだ。

「取り合えず上がりますか？　行き倒れなんですよね？」

「ほえ……はい！　――じゃなくてここは……」

彼女は何か思い出すように声をしぼめた。そして何かゴソゴソしてる。

「そう言えば素敵なカフェがあっちに……」

「奢れと！？」

「いえ……ただ、あそこの紅茶とシフォンケーキじゃ無いと私の栄養にはなり得ないのです」

「どういう設定だソレ！？　随分な偏食家だな！」

あ～頭痛くなる。こんなに暑いのに怒鳴らせないで欲しい。それしか食って育った訳じゃ絶対に無いだろう。だけど萎んだ花の様に体を縮ませて怯える彼女を見ると怒鳴ったのは悪かったなと思ってしまう。

え？　何？　結局俺は見ず知らずの自称行き倒れに紅茶とケーキを奢る羽目に成るのか。

「はぁ～」

思わずでる溜息。きっと幸せが一気に流れ出たな。暑さのせいだけじゃなく疲れる。

「あの……ごめんなさい。変な事ばっかりい言って……」

そう言ってなんだか普通に体を起こす彼女。俺はそしてたじろいでしまう。だって申し訳なさそうにする彼女が上目遣いにこちらを見るんだ。

それは男なら誰でも狼狽えるものだと思う。

「いや、もういいけどさ。そこに行けば元気になれるんだよね？」

「はい、それは勿論」

既に見た目だけは元気に見える彼女にそれだけ奉仕する理由もみつけられないが、この上目遣いのお礼で納得しようと思う。

なかなか直視出来ないけど、取りあえず部屋に一端戻って財布を取って再び玄関に。するとまたガサゴソと彼女はやっていた。刺すような日差しの中ワンピース姿の彼女は良く映える。

こうしてると彼女が迎えに来てくれたみたいで照れる。な。そんな経験実はないんだけどさ。

「じゃあ、まあ、大丈夫？」
「ええ……へ平気です。ああ！」

不自然に彼女は俺の方へ倒れてくる。香水の香り？　なのかどうかは分からないけど良い匂いが女の子はするものだ。それに異常に柔らかい物が同時に押しつけられてる様な……これはアレか？　女の子の胸部だろうか？

「えっと……ちょっと休んだほうがいいんじゃない？」
「だ、大丈夫です」

俺は何とか体を放そうと試みるけど、何故か彼女は服を握りしめてる。おかしい……絶対に何かがおかしい。大丈夫なら離れても大丈夫だろうと言いたい。
実際は離れるとガックリするだろうけど、でもこの状態で外を歩きたくない。だって恥ずかしい。体の外側じゃなく中から火が出そうだ。

「すみません……私を支えて行ってください」
「いや……それは……ちょ」

言葉とは裏腹に彼女が俺を引いてるのはどう言うことだ？　腕を取られて体重まで乗せられたら足は自然とそっちに行く。彼女は病人を装ってるから強く抵抗する事も出来ない。
それ以前に女の子って所も問題だけどな。こうなったら誰にも知り合いに会わない事を願うしか……ん？　俺を引っ張る彼女の足下に何かある。
白くて……レースが付いてて……女の子の豊かな部分を守る形のソレは……

「ブッハ！？」

ブラジャーにしか見えないんだけど！　いやいやいやあり得ないだろ？　え……何？　脱ぎたて？　じゃない！　てかそれじゃ今、腕に伝わってるこの感触って……生！

吹き出した俺の視線に気付いた彼女は既に赤面してた様な？　俺もテンパってるから見間違いと判断。流石にここまでしないだろう。

だがな、既に意図がわからん！

「キャアアア。どうしましょう……ブブブブラジャーが落ちてます」

自分の（多分）を拾い上げて何度か口をパクパクさせる彼女。何かを躊躇ってる様な感じが伝わってきて、俺にはそれが悪い事に繋がる気がして成らない。

端から見てる分にはきっと彼女の可愛らしさを微笑ましくみれるだろうけど、今は無理。当事者って大変だ。そして自分に何かを言い聞かせて彼女は今日一番の爆弾を投下する。

「あの……入りますか？」

「☆◆％＃△♪★！」

お互い真っ赤だった。俺の言葉は既に日本語じゃなく、多分地球には無い言葉だったろう。自分でも何叫んだか解らない。

いや、だって……それは……ええ！？　だぞ。狼狽えまくりだ。そして彼女は今まさに頭から湯気が出てる――様に見える。

ＬＲＯじゃないよなここ？　リアルでここまで茹で上がるなんて希有な例だよ。なんだか二人でスッゲー熱い。俺の頭はきっとおかしく成ったんだと思おう。多分聞き間違いだ。

だって、落ち立てのブラジャーを差し出す女の子なんて居るわけ

無い！　断じるぞ俺は。自分の中の常識を守る為にも！

「えっとさ……ちょっと良く聞こえなかったんだ。　なんて言った？」

「スーハースーハー」

落ち着くためか深呼吸を繰り返す彼女。この間に一体俺は何度神様に祈っただろう。多分十回は祈ったな。けれど彼女の手にある白い物体は異様に輝いて見えるな。

あれをブラジャーと認識した瞬間から、変な想像が巡るのを押さえられない。だって目の前に女の子がつけてた物だぞ？　男子高校生に想像するなと言う方が無理だろう。

だって俺たちは夏服から透けるブラで興奮する生き物だ。遮る物がなくなったブラジャーって兵器に近い。油断したら俺まで「スーハースーハー」しそうだ。深呼吸じゃない意味のほうで。

息を整えて若干火照りも収まった彼女がブラジャー片手にもう一度口を開く。

「秋徒君はこういうの好きですよね？」

「誰がそんな事を言ったぁぁぁぁ！？　スオウだろ？　アイツに何吹き込まれたぁぁぁ！？」

自分のブラを両手で広げる彼女に怒鳴りちらす俺。理性が吹っ飛んだ。親友に初めて殺意を覚えた瞬間だ。何？　アイツ俺をどうしたいわけだ？

彼女でも作らせようって事なんだろうか？　それにしても強引過ぎだろ。そして何故この人もこんな事に付き合うんだろう。恥ずかしいだろうにさ。

さっきから体彼女は震えてるんだ。深呼吸は意味を成さなかった様。そして気付くと超至近距離まで詰め寄ってた。すると目の前に

は彼女とブラが大アップだ。目がグルグル回ってる彼女は混乱して俺にポフッとブラを押しつける。
　するとその瞬間に鼻孔を擽る香りが伝わってきた。それは目の前の彼女の香り。それがブラからだと思うだけで脳がとろける様な感覚に陥る。それにブラが肌に擦れて、その部分が何故か熱い。
　意外とスベスベなのに……痛い位に熱い。外と中からの同時の攻めで茹で上がった頭がグルグル回り出す。

（ブラ痛い……けど良い。なんかめっちゃ良い。けど痛い。でも良い。太陽熱ぃ～。ブラ良い。けど熱い。でもブラ、熱い、ブラ、熱い、ブラ熱ブラ熱ブラ熱ブラブラブラブラ……）
「ブラ大好きです！」
「ふぁい！？　お粗末な物ですが、どどどうぞ！」

　二人とも混乱の極みだった。この時期の暑さに脳内をやられた二人の痛い出来事。端から見たら女子から強引にブラジャーを奪う変態の完成だ。
　いやさ、贈呈されたんだけどそれを誰が信じてくれるのか。目の前で広がってるブラジャーは既に我が手に……って違う！

「こんな筈じゃなかった！」

　スパーンと投げ捨てたかったけど、流石に本人の前では出来ない。倒れ伏す俺。にじみ出る汗が額から鼻頭へ流れ、そしてアスファルトに小さなシミを作った。

「何……やってるんでしょうね私達」
「俺が知りてぇよ！　何なの君？　何が目的だ！？」

　この僅かな時間で自分の常識が所々崩れさった気分だ。彼女は支

えが無くなった部分を気にしながら、そして俺の手にある物を視界から外すように背を向けた。

「私、愛……『藤沢愛』です。私は貴方と、お友達に成りたいんです！」

愛と名乗った彼女は横顔を覗かせて赤ペンキを被った様な顔を見せて再び前を向く。彼女の姿を真夏の太陽が遠慮無く照らしその姿を霞ませている。

これが俺と藤沢愛の出会いだった。

入道雲の空の下（後書き）

第六十一話です。

次でこの話は終われるかな？　てか、なんだか変な話に。まあ次回に期待！　とはどうだろう？　言えるか不安です。でも頑張ります。

次回は火曜日更新します。それではまたその時に。

日差しのスクリーン（前書き）

俺がまだまだ初心者だった頃、見るもの全てが輝いて、聞くもの全てに新鮮さがまだまだあった頃、俺は一人のプレイヤーと出会った。モンスターに追いかけられてた彼女を救おうとしたのが初めてのきっかけ。

だけど結果は散々だったと思う。けど、それでも俺達は友達になった。そして俺達は笑え合えたんだ……あの頃はさ。

日差しのスクリーン

それはまだ、俺がＬＲＯと言う世界に足を踏み入れて一ヶ月も経ってないときの事。要するに今のスオウと同じぐらいの時期。けどスオウほど切羽詰まってた訳じゃない。

てか、始めたばかりであそこまで追い込まれる事なんてまずはないんだ。天候に併せて出てくるエレメンタルって言うモンスターにうっかりアクティブされる位がせいぜいさ。

アイツ等は物理攻撃が蚊程しか効かないから初心者にはとっても辛い。うっかり目の前の敵に集中し過ぎると背後から強力な魔法が飛んでくるんだ。

初めて一ヶ月位のちょっとこなれた感じのビギナーは、過信して一度は奴らに挑んでやられる。ただ漂ってるだけのクリスタルの固まりみたいなエレメンタルについつい手を出すのは冒険者の性みたいな物なんだ。

そしてそんな冒険者を俺はあの日も見た。そのフィールドはアルテミナスからそれほど離れてない場所にある湿地帯で地面には靴を濡らすほどに水が張っている。

その水には大小異なる緑の葉が浮いていてポツポツと薄紅色の蕾を称えた物もあった。湿地帯には濡れない様に木で出来た一本道もあるけどそれを利用するのは純粋にここを通り抜けるプレイヤーだけだ。

「きゃあああああああ！！」

そんな湿地帯に響きわたる声を聞き、俺は今し方手にした戦利品を確認する手を一度止めて前を向いた。すると一人の少女が例のエレメンタルから逃げてるのが見えた。

その格好はいかにも初期装備ぜんとした物で、つい数週間前までの自分の格好と似通ってる。この世界に降り立ったばかりの格好。もしかして『祝福』もまだなんじゃ無いだろうか？

って、そんな考察してる間に彼女のＨＰはヤバい位に減っていた。エレメンタルの使う魔法は街からそれほど離れて居ないこの辺りでは最上の部類だからあの装備の初心者なら四・五発モロに当たればＨＰは削りきられるだろう。

「やれるか？　……って、迷ってる場合じゃないか！」

俺は走り出す。最近ようやく買った槍を力を込めて握りエレメンタルに攻撃を入れる……って、え？

「ノーダメージ？」

確かに当たった感触もあったし、何よりスキルが通った派手な音がした筈だ。けれどダメージが通ってない事は確か。エレメンタルは俺にターゲットを移さずに彼女を追いかけてるし、これはもしかして……

「おい君！　緊急コールを出せ！　そうしなきゃ助けられないんだ！」

「え？　え？　え？　なんですかソレ？」

彼女は粋なり声を掛けてきた俺に一瞬驚いた顔をしたが直ぐにそんな事は隅に追いやった様だ。てか、本当に初心者なんだな。それもきっと入りたての部類だ。

だって初心者は緊急コールを自然に覚える。初心者はどうしても追われる事が多いんだ。最初は誰だってモンスターの特徴とか習性とかを理解してないからそれは仕方無い事でしょうがない。

だから戦闘の一通りの基本の後には必ず緊急コールと成ってくる。けど目の前の彼女はそれさえもまだの様だから戦闘そのものが初なのだろうと推察出来た。それってつまりはド素人だ。

「ウインドウを出して、左端下にあるマークを押すんだ！　それでこのフィールドに居る全プレイヤーに緊急コールが通達される！　そしたら攻撃が通る様に成るから早く！」

「は、はい！　……ええと」

彼女はなんとウインドウを出すのにももたついていた。ただ右手の人差し指と中指を伸ばして下に振るだけなのにだ。

そうこうしてる間に詠唱を終えたエレメンタルの魔法が再び発動しようとしてる。まだ彼女が生き残れてるのは奴が使う魔法が強力なのしか無いことだ。そのおかげでイチイチ詠唱に時間が掛かっている。

だけどエレメンタルの特徴として詠唱中断は有り得ない。奴は普通攻撃を受けて止まる筈の詠唱が止まらないんだ。だからこそ逃げるのもやっかい。奴の餌食に成るのは初心者の最初の災難と言ってもいい。

俺は彼女とエレメンタルの間に割り込んで武器を盾代わりに構えた。そして直後に放たれる水の固まりに吹き飛ばされる。

「ぐあああ！」

「だ、大丈夫ですか！？」

彼女を追い越して水しぶきを立てる俺。驚愕した彼女は慌てて駆け寄って来た。流石に初期装備から一・二段上がった位の装備ではエレメンタルの攻撃はきつい。

けど予想通り攻撃を代わりに受ける事は出来る様だ。一回分は彼女を守れた事になる。でもこのままじゃ守れても助ける事は出来な

い。

「大丈夫だから、早く緊急コールを！　人差し指と中指を立てて下に振るんだ！」

「あっ……はい！」

そしてようやく彼女はウインドウを出して緊急コールを宣言する。それは俺にも直ぐに届いた。

（よし、これで）

再び詠唱に入ったエレメンタルからはその姿に合った光が周りから出ている。今回のエレメンタルに限っては青い水の色。エレメンタルは固有の属性の魔法しか使えない。赤色なら火で青なら水、緑なら風で黄色は雷とかそんな感じだ。

だから次も水系の魔法がくるだろう。しかしまだ詠唱には時間が掛かる。緊急コールも入った。今しかない！　俺は勢いよく立ち上がり駆け出す。そしてエレメンタルに一太刀を浴びせた。

「ちぃ……新調したのにこんなもんかよ！」

エレメンタルのＨＰはごくごく僅かばかりの減少でとどまっている。悪態を付くが元よりそれは分かってた事。エレメンタルに物理攻撃だけで勝とうと思うのが無茶な話なんだ。だからさ――

「あんまり減って無いですね」

「それ、言わないで欲しいんだけど！」

なんだか戦闘に緊張感が生まれない。いや、一撃入れた時はいつものピリピリする感じが確かにあった。だけど彼女の言葉が入ると

それが流される。
今度はスキルを乗せた攻撃を叩き込む。小さな爆発が起こりエレメンタルは後退した。
「うああ、惜しい！」
「何が？　ちゃんと当たったぞ！」
律儀に彼女の声に反応する事は無いんだろうけど、思わず声を出さずには居られない。本当に何を見て惜しいと思ったのか謎なんだ。
けれど答えを聞く前にエレメンタルの魔法が俺を襲う。地面を満たす水面から水流の渦が突き出して俺の体を貫いた。
「――っつ！？」
ＨＰがかなり持って行かれた。さっきよりも強力な魔法。思うんだけど、これって……勝てなく無いか？　二回の攻撃で俺のＨＰは目に見える位に減っている。それに対してエレメンタルはそうじゃなくまだまだ微細だ。
どう見積もってもこちらのＨＰが尽きるのが早いだろうと思える。だけど今更引けない。再び詠唱に入ったエレメンタルへ通常攻撃とスキルを組み合わせた連続攻撃を叩き込む。
今の自分の全力全開……前よりは確かに俺の攻撃は効いている。と、言うかここら辺なら俺は既に一人でも倒されないと自負している。エレメンタルを除いては。
それか偶に出現する通常モンスターの巨大バージョンではなければだ。けれど本当にエレメンタルとは相性が悪い。それを言い訳にする気は無いが……俺って格好悪いな。
「いけいけーやっちゃえー！」

押しているらしく見える彼女は俺に精一杯の声援を届けてくれる。けれどそれはここＬＲＯをまだまだ知らないからそう見えるだけ。実際は今の俺に勝算は無い。

俺は脳天気に声を上げている彼女に声を飛ばす。

「おい君！　今の内に逃げるんだ！　俺がタゲとっておくから」

「ふぇ？　タゲ？　どうしてですか？」

疑問符が三つも続いて彼女は首を傾げる。どうやら彼女はネットゲームも初体験みたいだ。

「タゲはターゲットだよ。どうしては・・言いたくないけど、俺だけじゃ勝てないからだ！　だから君だけでも逃げた方が良い」

「え……そんな？　だって勝てるんじゃ無いんですか？」

う～んそれは当然の疑問であるのかも知れない。助けに来てくれる人は誰もが頼れる様に見えて、自分より前からここに居る人達は等しく屈強に見えるんだ。

だからその人が負けるなんて初心では思えない。俺もそうだった。そして憧れたんだ。いつか自分も誰かを救える立場に成りたいって。

「そう思ってたんだけどさ……すまん。俺もまだ一ヶ月くらいしかＬＲＯやってないんだ。少しは強く成ったし、君を助ける位出来ると思ったんだけど……守ることで精一杯みたいなんだ。だから君は逃げた方が良い」

「そんな……」

彼女の失墜するような顔が一瞬見えて視界がブレる。奴の魔法が再三に渡って炸裂したんだ。後方に吹き飛ばされるが、何とか彼女の手前で踏みとどまった。

俺ももう逆の立場になれると思ったんだけどな。あんな顔をさせたくなんか無かった。初めてＬＲＯに来た新しいプレイヤーに夢を伝えるのが先駆者の勤めの気がしてた。

俺はあの時、助けられた時に確かにここに夢を見た。希望と言ってもいいのかも知れない感激。リアルでそれを実感する事は少ないからさ、曖昧だけどきっとそんな感覚を味わった。

もしもあの時、助けられずに死んでいたらただのゲームで終わってたかも知れない。そして今俺はそんな事に彼女をしようとしてる。

情けない……俺もまだまだビギナーの域から全然出てなんか居なかったんだ。それなのに逆の立場なんて笑わせる。

「でも……それなら……二人で逃げましょうよ！　私を守る為に貴方が犠牲に成ることなんて……良く知らないけどこういうゲームには死亡時にリスクがあるって聞いてます」

「まあ、確かにリスクはある。数時間分が無駄に成る位のリスクがさ」

「それなら、わざわざ数時間分を無駄にする事なんてありません。貴方は善意で助けに来てくれた訳じゃ無いですか」

彼女の言葉に俺は自信満々に首を縦に振れるだろうか？俺は本当に善意だったのか……ただ、そうしたかっただけじゃないのか？そういう思いが頭に浮かんでくる。

結局は良い格好を見せたいのと自己満足……そうなんじゃなかっただろうか？　初心者が陥りやすい過信。敵と自分との力の差を見極められない俺が誰かを助けようなんてまだまだ甘すぎた。

でもさ……この際もう費やした時間なんて関係ない。初対面でも何でも、倒せなくてもどうしても、俺は彼女にそういう世界とは思わせたくない。

自分のせいで始めたばかりの彼女にＬＲＯを見切られるなんて事はイヤなんだ。

「ダメだ！　それだけじゃあ！　善意でも何でもやれなきゃ意味なんて無い！　俺は君を助けたい……でも無理なら……せめて逃げる時間を稼ぐ位はさせてくれ！」

もうこれは勝手な言い分だ。親切の押し売りも良いところだ。でもさ……この程度と思って欲しくない。ここはリアルに無い、いろんな希望が有るところだと思わせたい。

自分がそう感じた物を彼女にも見せて好きに成って貰いたかった。けど……それは淡く崩壊仕掛けてる。だからって一番やっちゃいけないのはここで彼女を見捨てる事なんだ！　そんな事したら彼女はもうＬＲＯに入らないかも知れない。

俺の周りでは居ないけど、最初にモンスターにやられるのがトラウマになる人だって居ると聞く。そんな事にさせてたまるかよ。

「うおおおおおおおおお！！」

長い槍がうねりを上げてエレメンタルに襲いかかる。けどエレメンタルの詠唱が止まる訳じゃない。そして俺の胸の位置でそれは光った。

エレメンタルの次成る魔法。俺は防御なんてする気はない。ただ少しでもこの場に釘付けに！　けどそう思ったとき、魔法が炸裂する寸前・・俺の体は横から衝撃を受けた。

「ダメ！　……だっだめぇ～～～～！」

「うあっ、ちょ！？」

魔法が俺達の頭上を越えていく。それを横目に見たとき、俺は水の中に横倒れした。そしてその傍らには彼女の姿。つまりは彼女が俺に体当たりしてきたって事だ。

不発に終わった魔法が遠くではぜる音が聞こえて、エレメンタルは次弾の準備に取りかかる。少しの時間の猶予。その間に俺は彼女に詰め寄る。

「な、何で逃げないんだよ！？」

「だって……私だけ逃げるなんてそんなの出来ません！　私だって戦う位……出来ます！」

そう言って彼女は腰から剣を抜く。それは一番始めに支給される片手剣だ。どう考えても心許ない。てか殆ど無意味だ。エレメンタルには一桁位のダメージしか与えられないだろう。

「そんな初期装備の剣じゃ何の意味も無い！　君は逃げるんだ！」

「イヤです！　意味なんて無くてもいい！　私は私を助けようとしてくれた人を見捨てるなんて出来ません！　例えこれが木刀だって私は戦います！　てやぁぁぁ！！」

カンカンと彼女の剣がエレメンタルを打ちつける音が虚しく響く。ＨＰの減少は数字一つ分位でほぼ視認する事も出来ない微々たる物。

それでも彼女は真剣で……精一杯なのが見て分かる。そんな彼女にこれ以上俺に何が言える？　全ては俺がふがいないせいじゃないか。だから彼女は一緒に戦うと言ってるんだ。

「ほら早く！　今の内にいっぱい攻撃しましょう！」

「ああ……もう仕方ない奴だな！　絶対やられるぞ！」

「それでも、一人で死ぬよりも、一人で助かるよりも全然良いですよきっと！」

彼女は笑う。二コッと気持ちいい位の笑顔を見せてくれた。それを見たらなんだか心が軽く成った気になった。これまで背負い込ん

でた物が持ち上がった感覚。
だってそんな選択肢は俺の中には無かったから。意味の無いこと……何だろうけどな、二人ともやられたらさ。だから俺は自分の言ったことに抵抗しようと思った。俺達はどっちも諦める様な発言をしながら全然行動はそうじゃないんだ。
結果にはそっちの方面も念頭には入れとくけど、彼女は逃げる気無いみたいだし……ならまだまだ俺が頑張るしかないじゃないか！
それにスッゴくどうでも良い位の攻撃でも手数が増えたことに変わらないしな。

「おいアンタ、これ飲んどけ！　そのままじゃ後一回魔法喰らえばやられるぞ」
「え……あっはい！」

彼女は俺から受け取った瓶を口に当てて傾ける。それはＨＰ回復薬で中に入ってる薄いピンクの液が彼女のＨＰを少量だけど回復してくれる。
そして俺は今持ってる全部の回復薬を彼女に渡す。彼女は目を丸くしてたけど「戦うんだろ」そう言ったら頷いて受け取ってくれた。やられるにしてもさ……絶対俺より先には逝かせない。

「やるんなら覚悟決めろよ！」
「勿論！　やれるだけやりましょう！」

俺達は頷き合い、そして二つの武器でエレメンタルに襲いかかる。

俺達は二人で一つの敵と庇い合いながら戦った。炸裂する魔法の光は一定間隔でその場を照らす。
いつ終わるかも分からない戦闘で、いつしか俺はエレメンタルの

ＨＰも自分のＨＰも見てはいなかった。そして幾度の魔法を受けきり、幾重の太刀を振ったかももう分からない。

「うおおおおおおお！」
「うあああああああ！」

俺のスキルがエレメンタルに通る。切り口が黄色く光りそこから電撃が吹き荒れた。そして彼女の剣がカン！　と鈍い音を立てて弾かれる。てか彼女の扱いのせいか、武器のせいか、彼女の剣は一度も切れない。
弾かれた勢いでその場に尻餅を付いて水面に波紋が広がった。魔法の詠唱も終わり、エレメンタルは倒れた彼女に向けて魔法を発動しようとしている。
もう回復薬も底を付いてお互いに後一撃魔法を喰らえばお陀仏状態。彼女は態勢が崩れてるから避ける事も出来ない。俺は振り返りとっさに飛んだ。
そして空中で槍を両手で握りしめ頭の後ろまで振った腕から勢い良く振り下ろす。目指すはさっきの攻撃と寸分違わぬ場所。そこはまだスキルの影響でヒビが残っている。　砕けた音と青いエレメンタルの破片がその場に散った。槍は彼女の目の前まで突き出している。けれどそれでも魔法は止まらない！

「おい！　その剣を！」
「……はい！」

俺の声に反応した彼女は水に浸っていた剣を真っ直ぐに突き立てる。それは槍のすぐ横を貫いて俺のわき腹までも掠めた。初めて彼女の剣がその鋭さを見せつけた瞬間。
だけどその時、魔法が発動か暴発した。エレメンタルを中心に水が半円系に渦巻いて俺達もそれに巻き込まれる。グルグルグルグル

小さな空間で回り続け弾けたときにはエレメンタルは崩れさって消えていった。
どうやら俺達は勝ったようだ。メッチャ気持ち悪いけど、それでも勝ちは勝ちだろう。地面に二人して仰向けに倒れ込んでいる。すると頭頂部の方から笑い声が聞こえてくた。

「うふふ……あはははは！　私たち勝ったんですね」
「ああ、そうだな」

俺は力無くその質問に答えた。

「やった！　やった！　やりましたね。私達は勝利を掴んだんだ！　これって凄い事ですか？」
「ああ、超スッゲーよ。もう最高〜って感じ」

実際なんで勝てたか分からない。殆ど偶然か……奇跡みたいな物だ。でも、今は素直に嬉かった。発した言葉も嘘じゃない。それだけの元気があれば体で表現したい所なんだ。
でも体は脱力中……全ての力は使いきった。

「私達……なんだか良い感じでした」
「うん？　確かに途中からは良かったかもな」
「ですよね！」

バシャバシャアアと音を立てて彼女が俺の顔をのぞき込んできた。なんだかとても顔の位置が微妙というか絶妙な具合だ。目線はバッチリ合うし、彼女の濡れたストロベリーブロンドが頬に優しく落ちている。
彼女もその絶妙な具合は予想外みたいで、顔を遠ざけられない俺の変わりに肘を最大限に伸ばして自身を遠ざけた。顔は真っ赤で口

はパクパク……それはきっと俺も同じ様な状態だと思う。
少し離れた彼女の隙間からＬＲＯの太陽が見えていた。その光は濡れた彼女を照らして、彼女の全身から光の粒子が出ているような錯覚に捕らわれる。
それはきっと彼女から流れ落ちる水何だろうけど、俺にはそう見えた。彼女が煩わしい髪を耳にかける動作とかの時に粒子は飛び散り揺らめいて色を変えている。
そんな彼女に見とれていると、いろんな場所をさまよった視線が再び俺に合わせられた。そして彼女の口が開く。
「あの……私とフレンド登録しませんか？　時間が合うときでいいので一緒に冒険出来たら嬉しい……なあって。私全然初心者だけど頑張りますから！」
彼女は言葉が募るほどに興奮してズンズン近づいていた。最後の所では息が混じり合う距離だ。それに言い終わって気づいた彼女は再び距離を取る。そして互いに息を整えてから俺は口を開いた。
「そう……だな。まあ全然いいよ。俺なんかで良いならさ」
そう言うと彼女の笑顔が花開く。そして真横にバシャーンと倒れた。波打つ水が俺の顔を汚染する。ゲホゴホ蒸せた。するといつの間にか俺の手に添えられた温もりが有ることに気づく。横を向くと彼女がこっちを向いていた。
「こちらこそ、私なんかでごめんなさい。私『アイリ』って言います。ネットゲームというかこういうゲーム自体初めてのド素人です」
「やっぱり、それ思ってた。俺は『アギト』こっちは一ヶ月位やってるけど、どうやらまだ初心者らしいからよろしく」

そんな事を言い合った俺達は数秒見つめ合って吹き出した。そして俺達の笑い声はこのフィールドに長く響いたんだ。

カランコロン…喫茶店特有のそんな入店時の音が響き俺の意識は過去から現在へと引き戻された。目の前にはハンカチで汗をトントン拭う愛が居る。

そんな俺達のテーブルに一人のウエイトレスがやってきた。

「ご注文はお決まりかな？　あれれ～なんだかお似合いのお二人だね。そんな二人には当店自慢の大福かき氷でもサービスしちゃおう」

「ブッ！？」

聞き慣れた声……異常なテンション……横に居るウエイトレスは何故か日鞠だった。

日差しのスクリーン（後書き）

第六十二話です。

いきなり話が飛んですみません。でもそろそろいいかなぁ～って事で書いてみました二人の出会い。長くなったけど……てへ！　次は最後の部分の続きからですね。

でもここで悪いお知らせです。もしかしたら諸事情でしばらく更新出来なくなるかもです。まだ分からないけど……ちょっと実家の方で色々とです。まあ、でもその時は活動報告の部分にでもお知らせしときます。

実家はネット環境整ってないんですみません。帰らなくてよくなれば良いんですけどね。本当に色んな意味で。

てな訳でこれは予定として次の話は木曜日に更新出来たらいいな。

氷の山に挑む時（前書き）

俺の前に運ばれてきたのは大福かき氷なる代物だった。それは案にかき氷の上に大福が乗っている物だが、異様にでかい。そして何故か日鞠の手にはストップウォッチが握られていた。

俺は逃亡を試みるが日鞠の奴にお代を請求されて、それはもうボッタクリの金額だ。サービスとか言ってなかったか？　と思いながらも逃げる手段が無い。俺は渋々巨大かき氷に挑む羽目になったとさ。

氷の山に挑む時

アンティーク調のカウンターと窓際に五つしか設けられてない接客スペースは、これで利益が上がるのか疑問視する程の物だ。
今だって客は俺達を入れてたったの三人。カウンターに年輩のおじさんがスーツ姿のままで涼を取っているだけ。あれって休憩中なだけだよな？　随分とヨレヨレなスーツに……って良く考えたら今の時期にスーツもおかしいんではないのか？
クールビズを詠ってる時期だぞ。夏用スーツとかもあるとは聞くけどさ……わざわざ厚着をする事もないだろう。それに出されたコーヒーをずっと見続けてるんだろう背中には何とも言えない物悲しさがにじみ出てる様な気がしてならない。

「あの人……」
「ん？　何か言いました？」

愛は先に出された紅茶とシフォンケーキを突っつきながら俺の独り言に反応した。俺の前には何故かお冷やだけ。何この待遇の差は？　日鞠の奴は俺の注文を取らずにニヤニヤしながら奥に引っ込んだんだ。
絶対に何か企んでる。あの顔はいつもどうやってスオウに迫るか考えてる時の顔だった。
愛は俺の視線がどこに向いてるのか気づいた様で、顔を赤らめて空いてる腕で胸を隠した。

「いい言っときますけど、ブラはしてなくても透けないですよ」
「見てない！　俺が見てたのはケーキの方だ！」

いきなりのズレた発言に俺は思わず声をあらげた。いや、確かに彼女がフォークで持ち上げたケーキは丁度胸の部分にあったわけで……愛から見たらそう見えてもおかしくはない。
けどさ、彼女は俺がどれだけ胸好きと思ってる訳なんだろう。流石に真っ昼間から「ぐへへ～ええ胸じゃ～」とはならねーよ。
それに俺はエロを出す相手は選ぶ派だ。誰彼かまわずそんな事する奴はただの変態。愛は俺の言葉を聞くとフォークに乗ったケーキの片割れを差し出してきた。

「食べる？」
「一応聞くけど……パクついていいの？」

そのフォークにパクッとさ。それはある意味間接キス。愛は勘違いを失礼だと思ってそうしてくれただけだから、俺の発言に顔を赤らめて周囲を見回す。
ミスったな。これじゃあまるで俺に下心があったみたいだ。何も考えずに食いついてた方がラッキーだった。するとようやく視線が戻って来て愛は言う。

「ええっと……投げます！」
「それを食えと？」
「出来れば」

愛は微妙にフォークを揺らして狙いを定めてる感じだ。俺はそれを手を伸ばして止める。ここはちゃんと言っておこう。別に俺はそのケーキを狙ってた訳じゃないってさ。

「いいよ、別に欲しくないから。栄養源なんだろ君の？」
「ええっと……ああ、はい。うん、全身にカロリーというエネルギーが巡ってるのを感じます」

それは血だな。それにカロリーなら殆どの生物の栄養だ。無理な設定つけるからおかしな発言に愛はなっている。
フォークに乗っていたケーキを口に運び租借する。その姿がなんだか凄く愛は上品だ。それに姿勢がやけに良い。愛の行動は今の所大抵常識から外れてるけど、実際はその雰囲気も少し違う。
フォークの入れ方から紅茶の飲み方まで優雅さが漂ってると言うか……口を開けばそれが霧散するんだけどこの変なギャップがきっと原因だと思う。
時々不意に愛の姿が重なるんだ。俺が守りたかった奴とさ。だからこの喫茶店に入って向かいに座る愛の所作を見て不意に外を見ると、真っ白な光の中で上映された思い出に戸惑った。
まあ、アイツはブラジャーを押しつけて来たりはしなかったけど、やっぱりこうして見てると少しだけ思う。

（愛はもしかして）

そういう風にさ。疑う余地も十分に実はある。スオウのあのメールとかここに何故か日鞠が居ることとか、仕込まれてる気がするでもない。
目の前の愛はシフォンケーキを幸せそうに食べていて、俺の疑いの目など知る由も無いと言った感じだ。

「う……ほ、欲しいんですか？　あげますよ」

けれど俺の視線に気付いた愛は、渋々感たっぷりにそう言った。

「だから別にケーキが欲しい訳じゃ――」
「――だよね～、秋徒にははい！　特別メニューじゃじゃ～ん」

横から急に割り込んできた声が透明な器を俺の目の前に置いてきた。ゴト……と重量感たっぷりの音を鳴らして姿を現すソレは白と緑と紅色をした丸い物を器の三辺に乗せて氷上の頂からはそれぞれ分割するように赤、青、茶？　が滴る大きなかき氷だった。

俺はその大きさにと異様さに若干ひきつっていると、向かいの愛は瞳をキラキラしながら喉を鳴らしている。女の子はデザートは別腹と言うけど本当にそうなのか？　と変な事を一瞬考えてると、かき氷を運んできた日鞠が目の前にある異物の説明を始めた。

「こちら大福かき氷でございます。三種の大福は白が大福、緑が抹茶大福、紅色が苺大福となっております。そしてシロップも三種類！　赤はイチゴ、青はブルーハワイ、茶はコーラ。

三種三様の味をお楽しみあれ」

日鞠はウエイトレス仕様の笑顔を向けて息満々。それはあたかも初めて一人でお着替え出来た子供の顔にも見えなくない。

しかし俺は目の前の大福かき氷をゲンナリした目で見つめてる。別に暑い中を歩いてきた訳だし、素直にかき氷は嬉しいんだけど……大福を乗せる意味が分からん。

しかも三つも。これはどっちをメインと捉えればいいんだ？　大福？　かき氷？　かき氷も三つもシロップ掛けたら味が混ざるじゃないか！

「既に吐きそうなこの衝動はどうすればいいのか教えて欲しいな日鞠」

「飲み込んどけば？」

俺の悲痛な叫びは一蹴された。さっきの丁寧語……と言うか接客態度はどこいったんだ？　てか、こんな物はメニューに乗ってなかったぞ。

こいつの横柄さは一体どこまで許されてるんだろうか？　そんな疑問を持ちながらも一応スプーンを取ってみる。出されたまま放置しておくとだんだんかき氷は溶けていく。それはどうしようもない事実だ。

するといつの間にか日鞠の手にはストップウォッチがあった。何する気だ？

「さてさて、第一回最初の大福かき氷の早食いに挑戦するのはこの人、私の同級生でゲームオタクの秋徒君です！　どうですか今の心境は？」

日鞠はオーダーを取るときのペンをマイクに見立てて俺の口元に寄せてくる。こいつの行動が理解できない俺は思わず頭を抱えてしまう。

「あれれ？　秋徒まだ一口も食べてないよ。頭を抱えるには早すぎる！」

直ぐ横で頭痛の原因が何か言ってるけど、俺は妙な気恥ずかしさで頭を上げられない。主にコイツと友達と思われたくない。それになんだあの紹介文は？　陥れようとしてるのか。

チラリと前方に視線を向けると、それに気付いた愛が少しひきつった顔で「あはは」と愛想笑いを浮かべた。うう……あのひきつりは何が原因なんだろうか？

別に無駄に良い格好しようとは思わないが、女の子にはイヤな印象は与えたくないと思うのは男として当然だ。

「おい、どういう事だよ？　誰が何に挑戦するって？」

俺は小声で横の日鞠に現状の説明を求める。

「だからそのかき氷を十分で食べれたらなんとタダ！　うん、私って太っ腹だね」
「サービスとか言ってなかったか？　これじゃチャレンジゲームも良いところだ」

日鞠は俺の小声に付き合う気は無いらしく、むしろ店に良く通る様に声を出している。今日は仕事だからか長い髪を三つ編みにして、二つの三つ編みの付け根から伸びてる赤いリボンがチラチラ視界の端に入ってうざく感じる。
いつもなら面倒とは思ってもこんな黒い感情は沸かないんだが……今は人前だ。極力放って置いてほしい。

「ゲーム好きでしょ秋徒？　ほらサービス」
「あのな……」

それは誰にとってのサービスだ？　俺はどこで得すれば良いんだよ。わざわざ苦しく成りたくないんだけどな……って、ん？　俺はあることに気付いた。

「もう帰っていいか？」
「「ええ！？」」

愛と日鞠の声が綺麗にシンクロする。余りに唐突な俺の発言に二人とも面食らった様だ。でもさ……よく考えたら俺は役目を終えてると思うんだ。
愛はエネルギーを摂取して幸せそうで元気に成ったみたいだし、これ以上一緒に居る意味なんて俺には無い。やっぱりさ、愛を見てると思い出すんだ。どうしようもなく。
だから俺は帰りたい……そしてリアルでも……

「ふふふ、逃げるの秋徒？」

その日鞠の言葉に俺は必要以上に動揺した。決して外面には見せないけど内心ではかなり大きく鼓動が鳴り響いたのが聞こえた。

俺をなんとか引き留めようと必死でとっさに日鞠は言っただけ何だろうけど、必要以上にそれは効果的に効いた様だ。だから俺は少しムキになって日鞠に言い返した。

「どういう事だよ日鞠。俺がその子に付き合う理由なんてないんだよ。それに休みに何するのも自由だろ？」

「ふん、そんなの全ては言い訳よ。要するに秋徒はこのゲームに勝てそうに無いから逃げるんでしょ？　ゲーマーが聞いて呆れちゃうわね」

日鞠は嘲る様に方をすくめて大げさに首を振る。それは明らかに俺を挑発してる動作だ。ゲームの事に関しては俺も流石にカチンと来る……けど、ここで乗るのは日鞠の思う壺だ。

それに何より……

（なんか彼女と居ると調子狂うんだよな）

俺は僅かに視界の端に愛を捉えてそう思う。元々家から出る気も今日は無かったのに、彼女の変な行動のせいで訳が分からない内にこんな所まで来てしまったわけだ。

何なんだろう……この自然と足が進む感覚。それは懐かしいようでいて、少し怖いと思える物だ。だから俺は、これ以上関わりあいたくないと判断して、視界から戸惑う愛を外して立ち上がる。

拳を強く握っていろんな事を我慢して吐き出す決意をした。

「何と思おうが勝手だけどさ、オレはこれ以上その変な子に付き合う気はない。初めから迷惑だったんだ。俺は一人で居たいんだ」

カチャンと手からこぼれ落ちたフォークが僅かに残ったシフォンケーキの皿を鳴らした。その音が閑散とした店内に響き、溶けながら消えていくと同時に日鞠が俺に食ってかかる。

「秋徒そんなこと言っちゃだめ！　なんでそんな事言うの？　アンタの取り柄は女の子に優しくすることでしょ！　それも取ったらタダのゲームオタクしか残らないじゃない！」

「日鞠……何？　怒らせたいの？」

結構酷いこと言ってるぞ。まあ、否定はしないけどさ。再び視界に入った愛は俯いていてその表情を伺う事は出来ない。けどその姿だけで俺の胸に何かが刺さる痛みが感じられるのは確かでもあった。

酷いことを言った……その自覚はある。寧ろ意図してやったことだ。目的は分からないけど愛は俺に用があるみたいいだったし、スオウもそれに絡んでるのは間違いない事だろう。

それならこの時期にどうして……と問うと、おのずと答えは絞られる。きっとＬＲＯに来させるため何だろう。でもずっと分からないのは愛がそこにどう関係してるのかって事だった。

ＬＲＯでの俺の関係者？　だけど向こうではリアルの話はそうそうしない。それはマナーみたいな物だ。余程仲が良くて、そもそもリアルでの友達が一緒に始める位じゃ無いとリアルの事は持ち込まない。

それは俺にとってはスオウ位しか居ないんだ。それにゲームでの関係をリアルにまで引きずるプレイヤーがどこまで居るだろうか？

フレンドリストに登録した相手でも放っとけばそれっきりなんて良くある事だ。それに去る者は追わず……と言うか追えないから、そう言うものだとＬＲＯでは割り切られてる。

だからもしも、この愛と名乗る彼女がＬＲＯでの俺の関係者とはなかなか思えない。それももしかしたらアイツだなんて……影が重なる程度では信じ得ない。

てか、あり得ないだろう。俺はもう捨てられたんだからさ。

「そうじゃない！　私はただ愛さんの気持ちの為に――って今のなし！」

日鞠は手で口を覆い隠して言葉を切った。やっぱりコイツ等は知り合いか。分かってた事だが一応安心する。つまりはここに愛を置いていっても問題は無いって事だ。

「つまりは日鞠とそこの藤沢さんは知り合いだろ？　なら後は任せて大丈夫だな。良かった良かった」

俺は日鞠の横を通り抜けようとする。すると日鞠の腕が伸びてきて俺の行く手を塞いだ。その手には何か紙が握られている。伝票かな？

「待ちなさい秋徒！　このまま試合放棄してもお金は領収するからね！　紅茶とシフォンケーキとスペシャルデラックス大福かき氷でしめて七千二百円置いてきなさい！」

「ボッタクリだろ！？」

喫茶店とは思えない金額だ。なんだか名前に意味の無さそうなデコレーションを施して金額アップしてないか？　そもそもそんな注文はしてない訳だけどな。

しかし日鞠はそんな事気にしちゃいない。伸ばしてた腕を引っ込めて伝票を肩の所で得意気にトントンやりながら口を開く。

「それは秋徒が逃げるから。払いたく無いなら時間内に食べきればいいの。そしたら良心的な価格に早変わり！」
「それでも金取るのな」
「商売だからね。大丈夫、大福かき氷の分は引いとくよ」

うう～ん、まさかここまでしてくるとは……どう考えてもボッタクリだが日鞠なら必ず俺からその金額を徴収するだろう。それは結構困る。
実は先日の遊園地に行った際に結構金を使ったんだ。今月は既に厳しいのに更にそんな出費は勘弁してほしい。

「さぁ～これでも逃げる？　やっちゃおうよ～秋徒～」

明らかに黒い笑みを浮かべてる日鞠。その顔はまさに時代劇の悪代官その者だ。「越後屋～そちも悪よな～」と言っても違和感ないだろう。
俺は少し溶けだしている大福かき氷なる物に視線を投げて呟いた。

「時間内に食べられなかったらその金額のまま何だよな？」
「勿論」

俺は大きくため息を付く。てか金欲しいだけでは？　と思う。このメニューの売り上げを日鞠はこの店に還元するのか怪しいもんだ。
大福かき氷はバスケットボール位の器に山盛りに氷が乗っていてマジでボールに匹敵しそうなんだ。だけど氷だし出来ない事は無い様にも思えるけど、一体食べ終わるまでに何回頭痛を併発するか分かった物じゃない程の代物だから気が滅入る。
俺がゲンナリとした表情で大福かき氷を見つめているとその向かいの席から声が聞こえた。

「わ……私もお手伝いします。良いですよね……ウエイトレスさん？」

愛は顔を上げて日鞠を見つめる。すると日鞠は優しい笑みを付くって「ええ、勿論です」と答えた。そして二人の視線が俺に向けられる。

「ほら、彼女が手伝ってくれるって言ってるよ」

「ここだけで良いです。これだけお手伝いさせてください！」

愛はわざわざ立ち上がって頭を下げている。どうしてそこまで……俺にはいくら考えても分からない。この目の前に女の子は一体誰なんだろうか。

そんな事を一瞬思ってしまった。名乗ってるのにさ。

「あのさ……」

俺が声を出しても愛は顔を上げない。どうやらやると言うまでその格好を貫き通す気らしい。俺は諦めた様にイスに再び腰を下ろした。

「まああんな金額払いたくないしな。それに二人なら一人よりは成功率も上がる」

俺のそんな言葉を聞いた愛は心底安堵したように顔を上げて胸をなで下ろしてた。そして俺は気付いた。席を立った所から意識的に愛の顔を見ないようにしてたから気付かなかったけど、彼女の目尻は少し赤い様に見える。

もしかして顔を伏せていた時に愛は……そう考えると無性に心がかき乱される感じがしてやっぱり顔を逸らす。愛は再び席に着くと

乱れた食器を整えて、弾かれて飛んだケーキのカスをテッシュで集めて場を綺麗にする。
これは何だろう……あたかも力士が試合前に塩を投げて場を清めるとかの意味合いのそれか？　俺たち二人の間には微妙な緊張感が漂っていて、それがＬＲＯでの戦闘前と似てるからそう思ってしまった。
まあ、今から行う事も戦闘と言えば戦闘だしな。それも実害有りの。つまりは負けては成らないわけだ。
「はいもう一本スプーンです。それでは準備は良いですか？」
いつの間にかもう一本スプーンを用意して戻ってきた日鞠は愛にそれを渡してストップウォッチを構える。俺は二人で食べやすい様に大福かき氷をテーブルの中央に移動させてスプーンを握った。
（これだけ……これだけだ）
俺はそう自分に言い聞かせながら合図を待つ。大福かき氷は激しい太陽光をその身に受けて氷の粒を煌めかせている。透明な器の表面にも水滴が幾つも現れて、それが湾曲した部分を流れてテーブルに溜まっている。
今の時期限定のこの食べ物を見ると涼しさが飛来するものだけど、今の俺には何かくすぶる物が刺激されている気がしてた。
だけどそれが何かは今の俺では気付く事は無い。ただ漠然と実害を出さないために俺は目の前に氷の山に集中する。そして――
「では、スタート！」
日鞠の掛け声と共に俺の戦いは再び始まった。スタートから猛スピードで氷の粒を流れる様に口に運ぶ。氷の粒は口に入るとシロッ

プの甘さを広げて、程良く溶けていく。冷やされる口の感じが何とも心地良いではないか。
軽い軽い。かつてのＬＲＯで戦い抜いた俺にとってはこんな攻撃も返さないでくの坊は雑魚も同然！　そう思って次々に氷をかき込んでいるとそれは襲ってきた。

「ふぐぁ！！」

ズッキィィン！！　と頭を突き抜かれてさらにはその物をグリグリされてる感覚。これはなかなかの攻撃だ。ＨＰの一割は持って行かれたかも知れない。
ＬＲＯのモンスターで例えるなら……って何さっきからＬＲＯを絡めてるんだ俺。頭を降って痛みを振り払い、俺はまたスプーンを氷に向ける。すると向かいの愛も頭痛を併発してるのが見えた。
けれど彼女はそれが収まる前に、次の氷の粒をすくっては口に運んでいる。そして次成る痛みが襲うという悲惨な連鎖を繰り返してた。
俺はその姿を見ながら「なんで……」と口走ろうとしたがそれは直前で踏みとどまった。俺はこれ以上彼女に踏み込まないと決めたんだ。
それにあれだけ必死に成ってくれるのはこっちにとっても好都合だから……俺は大福かき氷を強引にこちらに引き寄せてスプーンですくえる限界を何度も口に運んだ。

「んぐぁ！！」

そしてさっきよりも強力な痛みが頭を走る。それでも俺は氷をかき込み続けて山の部分は大分滑らかになった。

「はぁはぁはぁはぁ」

「だ、大丈夫ですか？　二人なんだからそんな無茶しなくてもきっと大丈夫ですよ」

愛はあれから一回もスプーンを伸ばしてない。何故なら俺が独占してたから。それかガッツく俺に少し引いてたのかもしれない。けど頭痛は収まったな。

「別に……そっちこそ無茶してただろ？　これだけ減れば急がなくても大丈夫だから頭痛は収まってから食えよ」

「……あっ……はい」

俺は再び器を中央に戻す。すると顔を伏せた愛は申し訳なさそうな位の量をスプーンに取って口に運ぶ。その動作が異常にモジモジしていて俺までなんだか恥ずかしく成る気がする。

てかこうやって同じ器の物を男女二人でつつき合うなんて初体験だ。それを考えると自然と鼓動が早く成る。けれどそんな余裕な態度も最初の内だけだった。

かき氷を体内に入れていくと次第に腕が震えて来て手元が狂いだし、そして体温も下がってるのか夏場なのにあり得ないほどに寒気を感じ出す。

それでも俺たち二人はサンサンと降り注ぐ太陽光を後目に、この氷と大福の怪物に挑み続ける。その時、震えるスプーンが触れ合いカチンと小さく響きあった。

氷の山に挑む時（後書き）

第六十三話です。
予定通りに上げれてよかったです。なんだか微妙に長くなっちゃったけど、次でこの話は終われるかな？　でも、まだ実家の方の問題が無くなった訳ではないのでビクビクですよ。
それでは次は土曜日に上げれたらいいですね。ではまたです。

友達想い（前書き）

俺達は大福かき氷に挑み続けた。それは何よりも辛い戦い。身体は震え、腹はタップンタップンだ。そして愛はなんだか怒るし……だけど愛の活躍でなんとか達成された。

すると俺達の目の前には再びおかしな人物が現れた。それは最初からいたスーツ姿のおっさん。おっさんは言った。

「ユー達はヒーローになれる！」

友達想い

カチンと二つの銀スプーンが触れ合い音を立てる。その瞬間俺達は互いに視線が交差した。

「あっ」

そんな呟きが愛の口からは漏れて、サッとスプーンを手元に戻した。

「ごめんなさい」

蚊の鳴く様な声で紡いだ言葉。だけど俺は別にそんな事気にするでも無いと思ってる訳だ。だから

「ん……」とだけ返して大福かき氷成る化け物に再びスプーンを刺した。

スプーンを通して冷気が伝わってきて、また底冷えするような寒さが体を貫いた。すくった氷はほんの僅か。それを口に運んで噛み砕くんじゃなく、転がして溶かす様に今はしてる。それだけでも腹が拒否する様な感じはするけどな。

「残り五分だよ」

横に立つ日鞠が手でパタパタ自身を仰ぎながらそんな事を言うのがなんだか腹立たしい。それはこの状況が全て、コイツのせいだからだろう。

何、暑いのか？　こっちとしては冷房を切って欲しい位なんだけどな。

「あの……怒ってます？」

目つきが悪く成ってたのかどうか知らないけど、向かいの愛がそんな事を言った。俺は隣の忌々しい日鞠から視線を外して、俯き加減な愛へと移す。

「別に、怒ってないけど……どうして？」

「私、最初に急がなくても大丈夫……みたいな事言いました。でも実際は全然そうじゃなくて、私もあんまり役に立ってないしで……嘘ばっかり私付いてるなって……」

愛はどうでも良いことを何故か真剣に考える質の様だ。そんな事を気にするより、自身のブラを俺にあげた事をもっと悩むべきだと思う。女の子としてさ。

俺は俯いて少しだけ肩を震わせだした愛に驚いて、必死に慰めの言葉を探す。いや、慰めじゃなくても、この変な重りを下ろさせる術を知りたい。なんでこんなに必死なんだよ。

俺がその場で固まってると愛は器を勢い良く自分の元に引き寄せた。俺がその唐突な行動に思わず

「え？」と発すると、愛はスプーンを力強く握りしめてこう言った。

「まだ間に合いますよね？　私、頑張りますから！」

すると愛は大福かき氷を次々に口に運んでいく。それは今までの愛の所作からは考えられない下品な行動だ。口の中一杯に氷を詰め込んでは、痛み出す頭を叩いて強引に噛み砕き租借していく。

しかし、それでも大福がかき氷がみるみる減っていく……なんて事はない。基本、愛の口は小さいんだ。けど、そんな小さな口に次々と氷を詰め込んでいく姿が本当に必死で、痛々しく見えた。

てか、見てられない。女の子にここまでさせて男の自分が高見の見物なんて出来るわけがない。愛は頭痛のせいで目尻に涙を貯めだしている。
俺は身を乗り出して自分のスプーンを氷に突き刺してすくい上げた。だけどその時、再びカチンという音が響いた。

「おい、何するんだよ！」

俺は思わず声を上げる。何故ならさっきの音は俺がすくい上げた氷を愛が自身のスプーンをぶつけて落とした音だったんだ。どういう気の迷いなんだよ。

「ダメ……」

愛はズムズムと鼻を鳴らしながら宝物の様に大福かき氷を抱えている。そんなに気に入った……って訳じゃないよな？　何せ愛は目も鼻も真っ赤で限界っぽい。
それでもめげずに氷を口に運び続けていて、それを俺はどうしたらいいのか分からず、無言で見つめ続ける。

「私だってちゃんと役に立って見せるもん……」

涙を貯めて、鼻を濡らして、愛はボソッとそんな事を言った。それはいつかも聞いた事がある台詞だ。確か向こうＬＲＯで、俺とアイリが知り合って数週間位経った頃だった。
モンスターの密集地帯にうっかり入り込んで、絶対絶命の場面で同じ様な事をアイリは言ったんだ。

『私だってもう、背中を守ってあげられるもん！』

その言葉に元気付けられて何とか生還出来たんだよな。そして今も有る意味、同じ様な場面かも知れない。結構絶体絶命のピンチだし……俺の財布がさ。

だから言っとくけど、このままじゃ絶対に間に合わない。愛には悪いけど、それは確実だ。愛の可愛らしい口だけじゃ役不足だよ。

見てるとそろそろ咲立ての桜の様に鮮やかなピンクを称えてた唇が、青く成っているのがわかる。俺は再びスプーンを向ける。するとそれに愛は目敏く反応した。

「だ、だめ～頑張るから～」

「もう充分だ。知ってるから、頑張ったのはさ」

俺は強引に氷をすくった。けど何故か愛はまたそれを落とすんだ。意味が分からない。ちゃんと認めたのに、まだ抵抗するか。

「もっと、もっと頑張るの！　私が食べるって言ったじゃない！」

そう言って更に氷をかき込む愛。なんだか一方的なその言葉に俺も少しムキになってしまう。

「いい加減にしろ！　もう充分だって言ってるだろ！　てか、お前が食ってたら間に合わないんだよ。それくらい気付！」

「むむ～酷い！　秋徒君って紳士面してる割に酷いよね！　女を騙す詐欺師の一面持ってるよ！　ダメですダメです。絶対に私が食べきって、秋徒君の女への評価を改めさせてあげる！」

なんだか二人とも興奮して来た。不意に放った言葉からお互いのボルテージ急上昇だ。愛は更にしっかりと大福かき氷の器を抱えている。

服が濡れそうだけどな。白いから流石に濡れたら透けそうな感じ

て、俺にしては気が気じゃないない。それにブラしてないから男子高校生の妄想が膨らみそうだ。
けれど今はそんな場合じゃない。一刻も早く、大福かき氷を手にして無理にでも口に詰め込まないと実害が俺には降り掛かるんだ。
だから俺は愛の腕の隙間から器を掴む。
「上等だ。俺は結構親切に接してたつもりだけどな。苦しそうだからとか思ってた相手にそう言うなら遠慮しねーぞ！」
俺の言葉にもヒートアップしてる愛は怯まない。氷を詰め込んだ口を強引に動かして何かを言っている。
「ひゅごほごっほー！　ひゅひゅごはごひご！」
「何だって？」
ガリバリゴックン――と咀嚼する愛。
「こっちだってー！　助けるって決意したもん！」
「助けるなら、俺に渡せ！」
ブンブンと首を振ってそれを拒否する愛。なんだか本末転倒しそうな勢いだ。どうしてコイツは……と俺は思う。すると横から暢気な声がタイムリミットを告げてきた。
「ほらほら、後二分だよお二人さん」
後二分……それは儚すぎる時間だ。だけど愛は更に燃えて、スプーンを止めどなく動かしている。けれど幾ら何でも彼女だけじゃ間に合わないのは明白……だけど、こちらに渡す気はない。
それなら！

「ああ！　秋徒君、行儀が悪いですよ」
「今のお前に行儀の事なんて言われたくない！　実害を伴うのは俺なんだ。助けたいのなら黙って食え！」
「うう～助けたいですよ！」

怒ってはいるが愛は氷の山を減らすのに集中してくれた。俺は愛のすぐ隣に椅子を移動して来てる。手元に寄せるのは諦めて、自身が動く事にしたんだ。
だからすぐ横に居る愛の香りが微かに鼻孔に漂って来る。勢いが付きすぎたんだ。余計なほどに、俺は愛の近くに陣取ってしまった。
けど、ここで動くのもまた不自然というか……目の前にでニヤニヤしてる日鞠の視線がまずイヤだ。俺はせめて愛を気にしてない様に見せるために氷に手を伸ばし続ける。

「ふぐぅ！」
「いたっ！」

二人で同時に頭を押さえた。それでも意地だ。俺達はどちらが先かを競うようにスプーンを伸ばす。体もまた震えだしていた。不意にテーブルに置かれた愛の片手を見ると凄く白い……と言うか青い？
それはそうかも知れないな。愛はさっきからずっと食べ続けてるんだ。文句……と言うか、俺を助けると言いながら俺を拒否し続けて食べていた。その結果。

「はぐ……ふみゅ！」

愛は変な奇声を上げて、それでも食べ続けてる。さっきからスプーンが止まることはない。もう機械的にすら見える。けど、その細

く華奢な体はちゃんと血が通って生きてることを示す様に震えていた。
きっと愛は相当寒いんだろう。薄手のワンピース一枚に冷房の効いた店内でずっとこんな冷たい物を食べてるんだ。当然の反応か。

「後一分で〜す」

日鞠のそんな声が届いて俺は決意する。まずは愛が機械的に動かすスプーンを落とそうと。

「とう！」

氷をすくいに向かっていたスプーンを俺は横から凪ぎはらった。愛は何が起きたか分からず一瞬硬直して、そのままの姿を保ってる。
けれど直後に凪ぎ払われたスプーンが床を叩く音が響き、それと同時に愛は自分の手元をみやって俺を睨む。

「なな、何でこんな事するの？　そんなに私は邪魔なの？　何の役にも立たない？　それでも私は、君の為にっていつもいつも……もういい！」

愛は一瞬口を噤む様に間を空けた？　そして体を回転させて背を向けてしまった。俺はさっきの愛の発言に首を捻る。いつもいつも？　それってどう言うことだ？
けどそれを確かめる前に日鞠の声が思考を遮る。

「後四十五秒しかないよ秋徒」
「何？　くっそ！」

俺は器に顔が付きそうな位近づけて吸うように氷を運んでいく。

これはどうなんだ？　結構ギリギリ……って大福がまだ有るじゃないか！　何という伏兵。これは絶望的だ。
器の底には溶けた氷と数種類のシロップが混ざりあってなんだか混沌としている。そしてそこに大福まで浮いてるから、食欲が萎える。

「後三十秒」
「うおおおおおおお！　死なば諸ともだぁぁ！」

まずは普通の大福を口に含んで器を抱えて混ざり有った氷で喉に強引にでも流し込む。これでかなり咀嚼しやすくなって時間短縮だ。
けれど大福は後二つ。休む間もなく二個目の抹茶大福を口に含んで再び混沌としてる氷水を利用して強引に胃へと送った。

「後十五秒」
「くあ……はぁはぁはぁはぁ」

うぐぐぐ、腹がタプンタプン揺れている。吐く息まで冷気を持っていそうな感じだ。口の中は甘ったるくてなんかベタベタしてるしで、最後のイチゴ大福に手が伸びない。

（後……一個なのに）

ここで屈したくはない。けれど全ての体の器官が拒否してるかの様に感じられる。しかしその時、隣から伸びてきたスプーンがイチゴ大福をすくった。

「これが最後のチャンスです。私は頼りないかもだけど、秋徒君はもっと周りに頼ってもいいんだよ？」
「うげ、何の事だよ？」

気持ち悪さがこみ上げてくるから愛が言ってる事が理解できない。愛は大福をすくったまま複雑な表情を浮かべていて、怒ってるのか心配してくれてるのかも分からない。

「あと五秒」

そんな日鞠の声を聞くと、途端に愛の表情が固まった。それはやっぱり俺に対して怒りに見える顔だった。

「だから私に助けられたいのか、そうじゃないのかって事だよ！どうなの！？」

なんだか今まで見た中で一番強気な愛がここで出て気がする。でも確かに今、勝敗は愛が握ってるんだ。俺はもう限界らしいから、愛がその大福を食べきれるかだ。

俺は切羽詰まった中で苦渋の決断をした。

「たす……けられたい！　頼む藤沢！」

どう考えても五千円以上はきついんだ。前の部分は口に出さないでそう言った。だけどやっぱり男として……って部分がどうしても気恥ずかしさを生む。

俺はやっぱり格好付けたがりなのかもな。

俺の言葉を受け取ってからの愛の行動は凄かった。小さな口を精一杯広げてイチゴ大福を押し込み、後は俺と同じ方法を取っていた。

最後は器を高く持ち上げて残りの氷水を豪快に飲み干し「プハァ！」とかやった。愛の中の何かが壊れたのかも知れないと少し心配になった程の豪快さ。

それを男なら男らしいと言えるが、女は女らしいとは言えないか

らな。あんなに所作の節々に上品さを滲ませていた愛がここまでやってしまったんだ。
それは心配になるのは当然。だけど……その時の愛の顔は凄く生き生きとしてた様な感じだった。窮地で素が見えたみたいなさ……それかヤケクソか。
どっちにしても愛の活躍のおかげて俺達は勝った。

「タイムア〜〜ップ！」

日鞠のそんな声と愛の食べ終わるのは殆ど同時だったんだ。その後にすぐに日鞠が「チェ」と舌打ちしたのを俺は聞き逃さなかったが、それを突っ込む元気は無かった。
そして愛は満面の笑みで俺の方に振り向いてくれた。でも俺は素直じゃなくて……意地悪にも愛の口の周りを彩る氷の跡を指摘して彼女を辱めたんだ。
顔を真っ赤に染める愛は、背中を向けて口元を拭いて僅かに顔を向けてこう言った。

「もう、こんな事より先に言うことあるんじゃないのかな？」
「ええっと……ありがとう？」
「よろしい」

尖ってた唇を元に戻して愛は頷いた。俺は何故か胸をなで下ろす。どう言うわけか安心感が襲ったんだ。だけどそれはきっと実害を回避出来たからだと思う。それ以外に考えられないしな。

「あ〜あ、私のバイト代が。まあ、しょうがないから達成おめでとう秋徒」
「やる前と違ってテンションだだ下がりだな」

やる気がなくなったウエイトレスは心底面倒そうに器を下げていく。てかやっぱり自分の物に――と、言うかあの大福かき氷の料金事態があいつの給料だったのかよ。
なんて恐ろしい事をやる奴だ。

「「あっ」」

何気に手を動かすと直ぐ側にあった愛の手と指先が触れ合った。今更だけど、俺達は結構な至近距離に居る事を再認識した。
それは愛の香りが分かる位の距離だ。それはかなりの緊張感。俺は慌てて離れ様として椅子を引いて立ち上がろうとした。けれどその時、椅子の脚が床に引っかかって盛大に転けた。

「いっててて」
「大丈夫ですか？」

ひっくり返ったみたな形だったから椅子の背にのし掛かって背中へのダメージがかなりある。直ぐに駆け寄ってくれた愛が悶絶してた俺を起こしてくれて、背中をさすってくれる。
もの凄く情けない光景の様に思えて成らないなこの状況。その時、愛は俺の背中をさすりながらボソッと気になる事を言った。

「本当に、前から何かやり終えたときが一番無防備なんだよね」
「ん？　おい、どう言うことだよそれ？」

俺達は今日初めて会ったはずだ。それなのに前からって発言はおかしすぎる。愛は俺の言葉に動揺しまくっている。

「ええ！？　そそそれは……ね」

次いでの言葉は出てこない。目まぐるしく眼球が動くのは言い訳を考えてるからか？　そう言えばこの行動にも見覚えがある気がしないでもない。
やっぱり愛は……そう思った途端、テーブルの向こうから何やら変な言葉が投げかけられた。

「ヘイ、そこのベストカップルさんよ。ユー達の戦い見せて貰ったぜ。アイの心がこれだけ震えたのは久々だ。そんなユー達にアイからちょっとしたお願いがあるんだがいいかな？」
「「……」」

何故か背中の痛みが一瞬で消えた。いや、吹き飛ばされたと言った方がいいだろう。その余りにも奇怪な言葉遣いでだ。それと言葉に合わせるような素振り。
それは俺達が二人揃って絶句するに値する物だった。ちなみに最初に説明すると、テーブル越しに俺達に話しかけて来たのはカウンターで悲壮してた筈のヨレヨレスーツの人だ。
でもその印象は間違いだったのかも知れない。だって目の前のこの中年おじさん……どうみても悲壮してる感じじゃない。寧ろぶっ飛んでる。頭のねじが何本か確実にさ。
愛はその余りの衝撃に言葉もちゃんと理解できなかったらしく「な……何語かな今の？」と俺の耳元で囁いている。まあ実際、それは俺も同感だ。
俺もこのおっさんの第一声から「はっ？」と思ったよ。そして恐らく自身を指してるであろう英語のチョイスがなんで「ミー」じゃなく「アイ」なんだよ！　一瞬おっさんの名前かと思ったし、もしかして隣の愛の事か？　とも思ったじゃないか。紛らわしい。
おっさんは正面から見るとガタイもなかなか良く、細マッチョって感じで、顔も変な言葉の印象さえなければどっかの実業家と言われれば信じれる位の物を持っている。

面長だが目鼻立ちはくっきりとしていて、所々に刻まれた皺は老いと言うよりも大人を感じる。タバコか、それこそ葉巻でもふかしてればさぞかし似合うだろう。
顔だけ見れば。実際はボロボロスーツだから葉巻じゃ様に成らないだろう。

「どうしたんだいユー達？　大丈夫、アイは悪い人じゃないから安心さ。さあ言葉を投げかけてくれ。ユーの魂の叫びを、さあ！」

俺達が言葉を失ってると続いての言葉が発せられた。おっさんは悪い人じゃないかも知れないし、それは今の段階では判断できない。けど充分怪しすぎだ。
なんだよ魂の叫びって。俺は充分に警戒しながらようやく言葉を発する。

「あの……取り合えず黙って貰えます？　連れの子が脅えてるんで」

愛はおっさんの二回目の言葉で完全に不審者と認定したらしい。俺の後ろに回っては寂しがり屋のハムスターみたいになってる。
だけど俺のそんな言葉でもおっさんはメゲなかった。

「だ、黙ってはユー達とアイの理解は得られない！　どんな時でも人類にだけ与えられた言葉こそ、相互理解の鍵！　だからアイは分かって貰えるまで言葉を発し続ける事を諦めたりはしない！　聞いてくれユー達！　アイは脅える対象ではない！」

バッバッバ……と身振り手振りを交えて激しく演説するおっさん。その姿勢は立派かも知れないが、どうやら愛が脅える原因は言葉だけじゃないようだ。
おっさんのその大げさな動作にもどうやら愛は脅えている。つま

りは意味不明な言葉と大げさな動作での相乗効果に相成ってる訳だ。本末転倒だな。

「あの、普通にして貰えませんか？」

「これがアイにとっての普通だが？　柔軟性こそ人類の利点と言われてるが、アイはその柔軟性に思考まで乗せるのはどうかと思う訳だ。

つまりはアイは自身の普通は不変であると決めている。そしてそれこそ世界の普通！　アイは今こそ普通だぞユー」

ああ、もう頭痛い。まさか一日で二回もオカシナ人間に会うなんて、俺の人生経験上初の出来事だ。一人目は今背中で脅えてる愛だがさ……それは許せるんだ。

愛は俺の中では可愛い女の子の部類に入るし、そもそも女の子とは日に何度も出会いたい位だからな。けどそれが男……しかもオカシナおっさんとなったら話は別だ。極力出会いたくない。

どうか俺の人生の横をすり抜けて行ってくれる事を切に願う程だ。けどこうして俺の目の前にはオカシナおっさんが登場しちゃってる訳で、これはもう誰かの陰謀としか思えない。

まさかこのおっさんも……って最初考えたけど、愛は知らない様なんだよな。けどその時、俺はおっさんが手に持ってる携帯に気付いた。そしてそこから聞こえる声は、電話越しでも分かる位に馴染みがあった。

【ちょ……おじさん、本題……題。こっちはもう……備万端なんだから……日……と協力……して……今から……こっちに……】

スオウ？　やっぱりあの野郎の差し金か。俺の人生にこんなキャラは登場しない。そしておっさんは「了解ボス」とか言って電話を切って、それが多分お願いの内容だと思える事を言った。

「ユー達ならヒーローに成れるよ！！！」
「は？」

意味不明過ぎだろ。どうやらスオウに人を動かす才能は無いようだ。人選ミスにも程がある。しかしその時、タイミングを見計らってか日鞠が再登場。

「ふっふっふ、実は秋徒！　さっきの大福かき氷の試練は貴方がヒーローにふさわしいかのオーディションだったのよ！　――よし、完璧だよスオウ」

口元に持っていった携帯との会話がだだ漏れしてる日鞠。もうここまで来ると言葉の内容もさる事ながら悲しくなってくる。どうやら俺の周りにはアホしか居なかったみたいだな。

友達想い（後書き）

第六十四話です。
今回で終わらなかったですごめんなさい。流石に大福かき氷の件だけじゃ秋徒の思いの変化はどうだろうという事です。てか、元々そこだけじゃない事を予定してた訳ですけど……最後らへんは結構行き当たりばったり。決めて無かったんで。
多分次でリアルの方は終われるかな？
てな訳で、次は月曜日に更新します。

ヒーローの空の下（前書き）

俺はデパートの屋上で開かれるヒーローショウへ強引に出演させられて今、その舞台に立っていた。飛び交うちびっ子達の声援……夏の突き刺すような日差し……俺は機能性が抜群に悪いヒーロースーツに身を包んでるから蒸し風呂状態。

直ぐにでも帰りたい心境だった。けれど既にショウは始まり、つまりは賽は投げられた状態だ。俺は仕方なくこのショウを一刻も早く終わらせる方針で行く事にした。

ヒーローの空の下

サンサンと降り注ぐ太陽光が殺人的に俺を射している。先の喫茶店より太陽が近くて外と言う事もあってかなり暑い。てか格好が格好なだけに、今にも脱水症状に成りそうだ。ムンムンしてる。

そして俺の前方からは子供のうるさい声やらなんやらが飛んでいる。こんな暑いのにさ。子供は本当に元気だな。俺は結局、日鞠が言ったデパートの屋上のヒーローショウに出張って来てた。

あの喫茶店からおっさんに強引に連れてこられたも同然なこの状況。俺は実際、スッゲー帰りたい。自分が何でここに居るのかも分からなねぇよ。

そしてどうして赤いヒーローの格好してるんだ？　あのおっさんに騙された！　いや、最初から「ヒーローに成れるよ！」とか言ってたな。

俺は肩を落として大きくため息を付いた。すると後ろからバシっと背中を叩かれた。

「こら、ヒーローが子供達の前でため息しない」

それは愛だった。愛は服装変わってないんだよな。愛も出るんだけど、愛の役は悪の組織に襲われる一般人だからこのままで良いらしい。一応ヒロイン。

そして言っちゃうとショウはもう始まってる訳だけどさ……既に俺は疑問を呈したい。

「なんでしょっぱなからヒーローの姿で出なきゃいけないんだよ」

「え？　そういうものじゃないの？」

何も知らない愛は疑問感じないらしいけど、普段からこんな格好

してるヒーローはいないだろう。普通派手な演出の後に変身して今の格好に成るはずだ。それが普通。
なのにこのヒーローと来たら最初から変身後の格好してるんだ。どう考えてもおかしいって。

「う～んでもそういう設定って言ってたよね？　それにみんな最初からヒーローが居て喜んでるよ」
「きっと最後に盛り上がりに欠けるだろうな」

だって最初からヒーローの登場を素っ気なくやってるんだからな。後はせいぜい敵を倒す所ぐらいだ。まあ二十分位のショウだし、そこら辺は適当なのか？
渡された台本なんて簡潔すぎだったし、思い出すだけで腹が立つ内容だった。

【まあ取り合えず、ヒーローが敵倒せばいいよ。役者はそこに上手くつなげてくれればＯＫだ！】

台本を広げて閉じるまで二秒も掛からなかったと思う。そして当然逃げようとしたんだけど、スポーツを余りやってない俺が細マッチョなおっさんから逃げきれる訳も無くて、強引にこの訳の分からないヒーローやらされてる訳だ。
そして何故か愛はノリノリと来てるからやっかいでもあった。多分途中から仲間だと分かったんだと思う。喫茶店を出るときに日鞠がやけにウインクを愛に送っていたからな。
あんなに怖がってたおっさんにも何とか歩み寄ってたしで、それは協力者への配慮だと俺は思うわけだ。隣に立つヒロイン役の愛は、どうやら普段からこのヒーローを知ってる設定らしいな。
それとも友達なのか？　俺なら普段からこんな怪しい格好してる奴に絶対に近づかないけど、このショウの中の愛はそれを気にしな

いキャラらしい。
今の俺達の状況は二人で道ばたを歩いてる……みたいなのかな？
――と、その時舞台袖から複数人の出演者が出てき……あれ？
俺はてっきりここで敵の怪物が出てくる物だと思ったけど、どうやらそうじゃないらしい。
だって俺達の目の前に現れたのは普通のおっさん達だ。いや違うな。正確には俺が通ってる高校の制服に身を包んだおっさん達が現れた。一体どういう事だ？

「うっわ、おいアレ見ろよ。ヒーロー居るぜ」
「おいおい、マジかよ。しかも女連れとはよ～」
「良いご身分じゃねーかよユー！」

どよめく会場……じゃねーよ。どちらかと言うと俺がどよめきたい。えっと……普通のいじめっ子かなんかだろうかアレ？
するとおっさん達は抱えていた紙を丸めた物を俺に、いや、ヒーローに向かって投げつけて来る。攻撃力が全くないその攻撃だけど、俺にはどう反応したらいいのかが皆目検討も付かない。
そもそも台本があんないい加減な物でどうやったらこうなるんだ？　せめて普通にしよう、と言いたい。どうやらヒーローなる自分は虐められてるらしいな。
いらない設定だ。惨めすぎじゃないか？　ヒーローが虐められてるってさ？　てか何……ヒーローは高校生なのか？　頭が混乱しそうだ。そもそもアホばっかりで考えた様なこのショウに常識を求めるのが間違いなのかも。

「うららら～世界救って見ろよヒーロー」

とか良いながら三馬鹿みたいなトリオは紙を投げ続ける。すると次第に周りの子供達から声援が届く。

「ヒーローを虐めるなぁ！」「ヒーローはお前達なんかに負けないぞお」「ヒーローさん、がんばってぇー」

何ともみじかなヒーローが居たものだ、と思った。声援というよりも守ってくれそうな勢いだ。子供達はみんな目の前のおかしなヒーローを純粋に受け取ってくれている。すると今度はもっと近くでヒーローを庇う声が届いた。

「やめて！　ヒーローにそんな事しないでよ！」

それは愛だった。愛がヒーローである俺の前に両手を広げて立ち塞がってくれる。

「邪魔するなよ。シーはユーの何なんだよ？」
「わ、私は友達ですよ！」
「そんな役立たずのヒーローの友達だって？　あんた物好きだなぁ」
「「「はははははっははは」」」

愛の回答に三馬鹿はその場で笑いまくる。アレは演技だと分かってるけどなんだかムカつくな。それは別に愛が馬鹿にされたからじゃない。俺が馬鹿にされてるからだ。

まあ、向こうにとってはヒーローを馬鹿にしてるんだろうけどさ……自身が今それをやってる気持ちとしては嬉しくない。

てかやっちゃって良いんだよな？　俺にはヒーローとしてその権利があるはずだ。多分目の前のおっさんは敵と言える物だと思うから、それを排除してこのショウは終了。よし、それで行こう。

そう決めて俺は一歩を踏み出した。けどその時、おっさん達が投げる紙が一つ、愛の額に当る。すると途端にその場に崩れた。

「う……うう……」

大したダメージがある訳でも無いだろうに、大袈裟に痛がる愛。俺は一応「大丈夫か？」と言って愛の側に膝を折った。

「だ、大丈夫だよ。えへへ、やっぱりヒーローは凄いね。あいつ等の投げる石が沢山当たってるのに、全然平気そうだもん。

私は邪魔しちゃっただけかな？」

「いや……て、言うか――」

（――石だったのか！？）

後半部分は心の声です。どうやら設定としてはさっきからおっさん達が投げてる紙屑は石らしい。それが頭に当たって倒れたと言うのが今の状況という事だ。

「ははは、そんなヒーローを庇うからそうなるんだ！　ヒーローなんて今のご時世じゃおかしな奴だよシー」

お前に言われたくない。特に三馬鹿の中でもアンタにだけはだ。でもこれはもう、ヒーローとしての力を見せつける場面に違い無いだろう。

友達と言ってくれた人が言われ無き暴力を受けたのをヒーローは見逃しては成らない筈だ。俺は頭を押さえる愛にそっと声を掛けて立ち上がる。

「そんな事はない。君のおかげで俺は本物のヒーローに成れる気がする」

「……ヒーロー」

結構自分でも何言ってるのか分からないけど、一応今の状況とこ

れまでを鑑みて発した言葉だ。合ってたかは分からないが、どっちみち確かめ用はないから余り気にしない事にしよう。
これで奴らをぶっ飛ばしてハッピーエンドで終了だ。どうやら俺はヒーローとして体が強い設定の様だし、向かえば勝手におっさん達はやられてくれるだろう。
俺はそう思い、ヒーローショウっぽくするために前へ進み出ようとする。間違い様のない展開。そう感じて、これこそヒーローショウだと思える理不尽さで正義は俺にあるはずだった。

「待って……ダメだよヒーロー」

細い腕が俺の赤い服を引っ張る。俺の歩みは自然と阻まれてしまった。それも、助けようとした相手からの妨害。俺はヒーローとしてその声を無視してまで、無理矢理歩を進める事が出来ない。
なんてったって、今の俺はヒーローだから。横を少し見れば、イタイケな子供達の視線がそこにはある。

（く……だがどうすれば？　てか何故だ？）

何故に愛は俺の完璧なヒーロー的行動を止める？　今の状況で俺の行動が間違いだったとは思えない。いや、もしかしてこいつ等、打ち合わせしてる？
俺はそんな疑いに囚われる。けどいつだ？　そんな時間はなかった筈だ。

「えっと……何がダメなの？」

一応俺はそれを聞いてみる。愛は一体ここからどうしたいんだ。

「だってヒーローはヒーローだから。安易な暴力じゃダメなの。そ

れに今しようとしたことは私の為ですか？」
「は？」
愛の為って……それは……俺は口を噤んで目を反らす様に三馬鹿を見やる。確かに今の動機は愛の為じゃなく、自分が早くこのショウを終わらせたいから……と言うのが強かっただろうけど、そこをショウの最中に突っ込むのか。
というか、それじゃあ一体どうやってこのショウを進めて終わらせる気だ？　ヒーローが戦わないヒーローショウなんてそれこそ本当にあり得ないだろう。
今までは譲りまくって何とか許して来たけど、こればかりはどうなんだよ。ダメだろ実際。ここに来てるチビッコ達は悪が正義に倒される様を見に来てる筈なんだから――って、ん？
「まあ、ヒーローが怪物でもない普通の学生をいたぶるのはね」
「うんうん、ちょっとヒーローそれはどうよ、って思っちゃう所だよね」
「いやいや、ヒーローも人から派生した物で、彼はまだまだ未熟と言う部分を表した、いわばあれはですね……」
会場に居るチビッコ達の会話が節々から聞こえてくる。て、いうか何なんだこれ？　最近の子供はショウの最中に冷静にストーリー分析やってるのか？
なんだか深い所を語り合ってる奴いたぞ。
「おいおい、どうしたんだよヒーローよ」
「ヒーローの癖に女傷つけられて手も足も出せないのか？」
「ユーはヒーローやめちゃいなよ」
三馬鹿の調子付く声が会場に響く。俺は有る意味、ここでこいつ

等を懲らしめない事が教育上良くない気がしてきたぞ。てか単純にムカつく。こんな事、やりたくてやってる訳じゃねーよ。
暑いしムレるし痒いし、あー早く帰りてぇ。けど、俺は愛のせいで次の行動が分からない。せめてどうするかヒントが欲しい。
子供の支持も向こうにある以上、俺の独断と偏見で勝手な行動は出来ないんだ。

「ヒーローの力はみんなを幸せにする物じゃないといけないんです。それは全ての人が対象でしょう？　貴方はみんなの幸せをその肩に背負ってるの」
「そんな……それって――」
（――デカすぎだろ！）

再び心の中で突っ込んだ。ヒーローとはさも大変な物らしい。要するに、愛はあの三馬鹿も救ってこそヒーローだと言いたい訳か？
でもさ、俺的には言って分からない様な奴には暴力もやむなしって考えなんだ。

「言葉だけじゃ伝わらない事があるって事をヒーローは知っている」
遠回しに愛に俺の考えを伝えてみた。結構格好良く言えたんじゃないか？　自分的にはヒーローぽかった。
「それは、私も分かります。拳を交える事も時には致し方無い。でも、大事なのはその時心がどうあるべきかって事です」
「心の……あり方？」
なんだか深い話に成ってきたぞ。これって子供向けのヒーローショウだよな？　歴史ある舞台で上演される様な演技じゃない筈なのになんで心の話だよ。

こういうショウは深く考えずに、ヒーローが格好良く敵をバッタッバッタ薙ぎ倒していく爽快感だけで十分じゃないのか？　無駄に深い事は必要ないだろう。

けどこのショウがオカシナ事は最初からで、乗り出した船な訳で、途中下車は俺にも既に不可能に成っている。ここは凄く不安だが、もう愛やおっさん達を信じてやりきるしか無いのかも知れない。

結構チビッコ達は何故か食いついてるし……自分の世間の常識がまた崩れ掛けてるけど、どうにでもなれだ。

「ヒーローはいついかなる時でも暴力に心を支配されてはいけないんです！　例えその力を使うときでも、心は真っ赤に輝く太陽の様に誇らしげであらなきゃヒーロー失格です！」

愛は俺の脚を強く握りしめる。まさに迫真の演技。良く、こんなスラスラと舞台用の様な台詞が出てくる物だ。愛はもしかして演劇部とかなんだろうか？

それか人前に立つのに慣れてるとかか？　舞台に上がったときも緊張した素振りは見えなかったしな。

けど、ここで俺は思った。さっきの愛の台詞なら、誇りを持って拳を使うことは許されてるって事だ。なるほど、これが活路だな。つまりはこう言えばいいんだ！

かなり恥ずかしいが……どうせ俺の顔は誰にもバレない！　やれ、言うんだ秋徒！　このショウを一刻も早く終わらせる為にも！

「分かったよ。俺はこの胸に誇りを灯してこの拳を振るう！　太陽の様な輝きをヒーローとして心に宿す！」

会場が一気にバトルの雰囲気に包まれた様な感覚が走った。俺の中の脳内でアップテンポのＢＧＭが流れる。これはＬＲＯで戦闘を開始する前の緊張感にこの場がなったって事か？　良い感じだ。

「なんだよ！　やっとでやる気になったかヒーローよぉ？」
「「おおうおうおう！」」

どちらも完全にやる気になった。衝突はもう止められない。なんだか、床に黒い霧の様な物が発生してるのは誰かの演出なのだろうか？

そしてその時、愛の声が再び響いた。

「あの黒い霧は……ヒーロー！　貴方が倒すべきは彼らじゃない！　彼らの心に巣くってる闇の部分です！」
「闇の部分！？」

それってどうするんだよ。また変な設定を持ち込まないで欲しい。てか、愛は普通の一般人じゃ無いのか？　なんだかパートナー的存在に成ってる気がする。

「ヒーロー！　これを使って彼らを写すんです！」
「鏡？」

まさしくそれは何の変哲もない手鏡だ。だけどこのショウではどうやら重要なアイテムらしい。

「その鏡で黒い霧が出てる人物を写すと、闇の部分をさらけ出せるんです！　その闇こそ、ヒーローが倒すべき敵！」
「な、なるほど」

俺は困惑しながらもその言葉に従って鏡を三馬鹿に向ける。すると突然彼らは苦しみだして、霧の中に倒れてしまった。そしてどんどんと霧は増していき、用意されてた扇風機で霧を晴らすとそこに

は暑苦しそうな三匹の怪人が居たんだ。
それぞれカニみたいな奴と、クワガタみたいな奴と、サソリみたいな奴だった。

「あれが彼らの心の闇です！」

そう叫んだ愛の言葉に会場がどよめく。どうやらここまで納得のストーリーらしい。俺には疑問が多すぎるが、だがこれで確実に戦闘に入れる。奴らはもう人間ではないんだ。子供たちのからの非難の声も出ないだろう。

「アレを倒せば良いんだな！」
「ええ、あの醜悪な姿から彼らを解放出来れば心の闇は晴れます。そして彼らは善良で心優しい人に成るはずです！」
「よし！　なら行くぞ！　ヒィィィロォォォォブレードォォォ！！」

もう迷う事なんて無かった。俺は腰に挿してあった剣を構えて、それらしく叫んで突っ込んだ。それと同時に、今度は頭じゃなく本物のＢＧＭが流れ出す。打ち合わせもしてないのに、剣を振るとちゃんと効果音まで……なかなか優秀なスタッフが居るようだ。
会場の熱は最高潮に達してそこかしこから「いっけー！」やら「そこだー！　頑張れヒーロー！」とかの声援が届く。それはなかなか良いものだった。そしてそれに合わせて舞台袖に控えていた、マイクを持った体操のお姉さん的な司会役の人が会場を更に盛り上げるために子供達を煽る煽る。

「ほらー、みんなの声がヒーローの力に成ってるよー！」

的な事を言うんだ。恥ずかしいが、自分のテンションも子供達の熱狂振りに当てられて上昇な感じ。そして派手な花火がドバッと上

がるのと同時に、三体の怪物は地に伏せた。
何も知らされて無かったから俺まで飛び上がりそうな程の演出だったが、そこはグッと堪えてフィニッシュ態勢を維持した。ヒーローがビビる訳にはいかないからな。
会場からはヒーローに向かっての暖かい声が届いている。

（やっとで終わった）

俺はそう思ってマスクの下でそっと息を吐く。するとそのままモワッとした息が戻ってきた。一刻も速くこれを脱ぎたい。
けど、そう言えばエンディングをどうやるのか、どのタイミングで裏に引っ込むのか俺は知らない。ここは司会のお姉さんに任せるしかないか。
早くこの場をナレーション的な物で締めて欲しい――ってあれ？
居ないぞ。俺は周りをキョロキョロ見回すがやはりさっきまで会場を煽りまくってたお姉さんはいなくなってる。
仕事放棄？　とも思ったがそっと背中に触れられて、振り返るとそこには愛が居て、まだ終わってないと認識した。

「やったね。流石ヒーローです」
「あ……ああ、これで良いんだよな」
「はい」

愛は笑顔を俺に向けた。けどなんだかまだ含みがあるようなその笑顔に俺は引き込まれない。防衛本能か、学習機能が俺に「安心するな」と告げてる感じがする。
そしてその予感は的中する。倒した筈の怪人の一体、カニの様な奴がいきなり立ち上がり愛を人質に取りやがった。
「きゃきゃきゃにににに！　油断したなユー！　いや、ヒーロー！

アイの甲殻もとい、心の壁はそんな安い剣では切れないのよ！」
「ヒーロー！　私の事は気にしないで、戦って！」

これはとても良く見る展開だが、会場の子供達は意表を突かれたのか押し黙る。けどなんだか俺は面倒だと言うことが先行するな。
これはやりつくしてないか？　それにカニはアンタだったのかとも言いたい。「きゃきゃきゃきゃにににに」ってなんだよ。変に姿に合わせた笑い声まで作ってたのか。
痛み居る行動だ。だからどうか倒れていて欲しかった。

「きゃにに、ヒーロー。アイは感じたぞ。ユーは逃げ出したヒーローだとな」
「何だと？」

突然何言い出すんだこのおっさん。またまた変な設定を増やすのは勘弁し貰いたいんだけど、俺が不意に返した言葉のせいでカニ怪人は言葉を繋ぐ。愉快そうに楽しそうに。

「きゃーにきゃにきゃに。ユーの心の剣は既に折れてる。ユーはもう一つの世界から逃げ出してきたヒーロー！　そんな心無き剣じゃアイは斬れない。
でも代わりに乗せることが出来る物は幾らでもあるって教えてやろう。ユーのその心にある、ふがいなさややるせなさや悔しさ……そして憎しみ！
それを乗せればアイを斬ってこのシーを助けられるぞ！」

カニ怪人の言葉に俺の手が僅かに震えていた。これはショウでの設定であって俺に対しての言葉じゃないんだよな？　でも……何故かそれだけとは思えない物がある。

「ヒーロー」

弱々しく呟くアイ。その姿がマスクの黒いフィルターを通して次第に姿を変えていく。それはとても見知っていて、そして俺が向こうで守れなかった人。

（アイリ……）

向けられるカニ怪人の爪。その時、俺は考える間もなく飛び出して剣を抜いていた。人質から手が放れ、後ろ倒れになったカニ怪人はやられたにも関わらずに笑っている。

「きゃにににに……ユーの闇が見えてるよ……」

その言葉に自身を見ると俺のスーツから黒い物が噴出してた。そして倒れたカニ怪人は何かを持っている。それは鏡。俺が使ったあの鏡だ！

俺がそれを認識した途端に一気に会場全体に煙が撒かれた。これは俺も怪人に成るって事か？　だけど次第に晴れゆく煙の向こうから現れたのはもう一人のヒーロー？

それも色違いの真っ黒なダークヒーローが俺の前に立っていた。

ヒーローの空の下（後書き）

第六十五話です。
ごめんなさい。最初に謝ったのは、これがもう一話続きそうだからです。次こそは終われると思います。ダークヒーローも最後で出せたしね。さあ、二人のヒーローがどうなるのか！？　こうご期待！　かな？
それと秋徒の心の内は！？　てな感じで行きたいと思います。
それでは次回は水曜日に上げます！　ではまたです。

幾度の心がヒーローの証（前書き）

俺の前に現れたダークヒーロー。そいつは容赦なく俺の心と体をイタぶった。それは損じられない事……だってダークヒーローは。そして奴の剣は愛にも向けられる。

彼女の願うその姿に俺の身体は意図せずに動き出す。

幾度の心がヒーローの証

「ヒーロー？」

思わず自分でそう呟いた。けど、そいつはヒーローにしては随分と暗い色をしている。言ってみればブラックだ。そいつのヒーロースーツは俺のと寸分違わないデザインなのに色だけは真っ黒だった。

煙が消え去った会場からはそこかしこから困惑の声が聞こえてくる。そして当然俺も困惑中だ。けど、今までの流れから察するにつまりは今目の前にいるのは、俺と言うヒーローの心の闇とかそう言うの何だろう。

つまりはこいつがこのショウの最後の敵とみて間違いない。

「違うな……」

その時、不意に目の前の黒いヒーローから声が発せられた。そのいかにも厳かと言う感じで発した言葉で会場が続く奴の言葉を聞くように静まり返る。

そして俺も……確かめる為に目の前の奴の言葉を待つ。すると奴は腕を大袈裟に振って右手を俺に突き刺して来る。

「私はヒーローではない！　私は貴様の闇の部分……そう！　ダークヒーローだ！」

ババババン！　とこれが特撮アニメなら入ったであろうカメラアングルの違いが目に浮かぶ様だった。そして会場の子供達はその言葉に驚愕と興奮を覚えて大絶叫中だ。

「ダ、ダークヒーロー！　なんて事……」

後ろの方で膝を付いた愛が震える声を出した。ダークヒーローか。俺もそれに驚ければ本当に良かったんだけど……俺は半ば声を失っていた。

何故なら俺は、この目の前のダークヒーローを良く知ってると思うんだ。マスク越しだし声や口調も意図的に変えてるが、それくらいで騙される程安い関係じゃ俺達はないだろう。

このダークヒーローの中の奴は間違いなく『スオウ』だ。今まで電話越しに命令を下してた奴が遂に黒幕として登場したと言うことか。

スオウがこんな事をやるのは珍しいが、俺的には好都合だな。さっきから鬱屈してたんだ。だからそれを晴らす最高の材料が目の前にあるのは良いこと。このショウの上なら俺が悪を成敗するのは必然。勝利を手にするのは絶対的に俺だからだ。

「ダークヒーローだと？　貴様が俺の心の闇なら、貴様を倒すことで俺は真のヒーローに成れるって事だな」

俺は握っていたハリボテの剣を目の前のダークヒーローに向かって突き立てる。「おお」と言う声が客席の方から聞こえて、これから始まるだろう二人のヒーローの戦いに期待を膨らませているのが分かる気がした。

（その期待は裏切らねーよ）

そう心の中で呟いて、目の前のダークヒーローを黙って見つめる。俺達は互いに視線を確認する事は出来ないが、奴もこっちを見てるのは分かる気がする。そしてそれは多分スオウも同じだろう。

「ヒーロー……」

後ろから不安を乗せた愛の声が届く。だが、振り返る事はしなかった。何故なら、俺は異様なプレッシャーを感じてたんだ。張りつめた空気がそれを助長してるのかもしれないが、明らかに目の前のダークヒーローから俺はそれを感じてた。

そしてこの感じを怖いと心が叫んでるのが分かる。この感じは四日前位にガイエンと対峙した時と感じが似ている……そう思った。

そしてそれをスオウが発しているという事実に俺は驚愕する。こんなスオウを俺は知らない。

「くくく、真のヒーロー？　この私を倒す？　出来る物ならやってみるがいい。私はお前、お前は私だと分からせてやろう。

そして貴様の力の殆どが闇側に有ると言うこともな」

そう言ってスオウもといダークヒーローは背中から二本の剣を抜き去った。二刀流……それは奴のアドバンテージだがＬＲＯ内だけの事だろう。

ゲーム内で出来る事がリアルでも出来ると思うなんてまだまだ初心者だなアイツ。まあ、俺も最初の内は棒振り回してスキルが発動する様な気がしてた事も有ると認めよう。

けどここはやはりリアルなんだ。俺達がＬＲＯで使えている剣技や魔法は全てシステムの補助で出来ること。リアルにその経験が影響される事はない。

つまりは幾らＬＲＯで熟練されたプレイヤーでもリアルに返ればただの人って事だ。まあ、何のスキルも使わずにただ武器の扱いだけで上まで登り積めた様な奴なら、リアルでもその経験が生かせないでも無いのかも知れないが、それこそ何千時間とプレイした結果だろう。

まだまだ一ヶ月にも満たないスオウがその域に達してる事はあり

得ない。だからダークヒーローを恐れる事なんか何もない……筈なのに、俺の足は自然と下がっていた。

（何でだ？　リアルでも俺がスオウに喧嘩で負けたことなんか無いのに……この変なプレッシャーのせいか？）

二刀を握ったダークヒーローからは更に凄まじい何かが放出してる気がしてた。だからきっとそれに当てられたんだろう。ビビることと何てないんだと、俺は足に力を込めて前に戻す。

「ふざけた事抜かすなよダークヒーロー！　ヒーローの力は光の中にこそ有るんだ！」

俺は片手を天へと掲げて見せた。そこには世界を突き抜ける様な蒼天の空に、筆で神様が無理矢理にでも書き加えたような大きな入道雲が異様な白さでその存在感を浮きだしている。

そして何よりも凄いのは、指の直上……天蓋の遙か先からでもその存在で俺達を照らす太陽と言う光。最近はさ、この太陽が宇宙に有るって言われるよりも、ＬＲＯの様にデータで作られた虚像だと……そう言われればそれでもいいかと思ってた自分だ。

ヒーローで有ろうとしてた時、ヒーローを憧れてた時代、そんな頃には光ってたものを常に求めてたのにな。今の俺にはこの光は強烈過ぎるほどの物だ。自分で言った言葉に「その通りだな」と思い、確かにそうではなかった自分の剣を見やった。

これはハリボテだけどさ……ＬＲＯで俺が握ってたのもしょせんは幻だ。そう変わりはしないだろう。今の俺はあの頃と同じなのかも知れない。

俺は今でも、この口でアホな事を口走ってるんだからさ。唯一違うのは、それを信じてるか、信じてないかだけだ。そして再び、俺はあの頃の様な言葉を乗せて武器を構えてる。

覚えるのは苛立ちの様な感情。それを向けるは幸い、目の前の奴。これはいわゆる「久々に本気でやろうじゃねーか」とかいうアイツの誘いか？

上等だよスオウ……いや、ダークヒーロー！

俺達は互いに獲物を構えたまま動かない。別に動かなくても体力が消費されていくのがこのスーツの恐ろしい所だ。顔を隠すマスクが世界を薄暗く染めている。

その時、額から伝った汗が不意に目に流れてきた。反射的に一瞬目を閉じる――そして開けた時には目の前にダークヒーローの姿が無かった。

（どこに！？）

マスクに寄って大幅に狭くなった視界では舞台を見回すだけでも数瞬掛かる。だが、それじゃ遅いだろう。ダークヒーローの攻撃は今直ぐにでも来るはずだ。

「「「ヒーロー！　下だぁぁぁ！」」」

届いた声は会場の子供達からの物だった。俺は反射的に顔を下へ――すると見えた。奴が左右に握った右側の剣を俺めがけて振り上げる姿が！

「うらあああ！」

「くっ」

俺はその剣を自身の剣を使ってブロックした。二つの剣がぶつかりカンッ！！　と言う乾いた音が響く。俺達の持ってる剣はどっちも結局芝居用だからな。聞き成れた甲高い音が鳴る訳はない。けどそこは効果音の出番だ。

そして剣の重さは効果音と比例していた。俺は受けた瞬間に慌ててもう一方の腕を添えて弾き飛ばされるのを防いだ位だ。
俺達は舞台の中央で組み合う形に成っている。剣と剣での鍔迫り合い。けど、それは違った。何故ならダークヒーローは二刀流だからだ。
防がれた剣はあっさり引き、そして反対側から凪いだ剣が俺の腹に入った。いやマジで。勢いを殺すことなく横っ腹にめり込む感触が脊髄を貫いて脳を犯す。

「ガッハ……お前……」
「おいおいヒーロー。そんなもんかよ」

冷たい声に俺の背筋が凍り付く。膝を付いたその横からも次いでの攻撃が襲い、ダークヒーローは俺の頭の側面を剣で殴った。

「ぐああ！！」

会場全体がその光景にどよめくのが聞こえた。マスクを被って無かったら血が吹き出してもおかしくないと思える程の衝撃だ。
頭がクラクラする……目の部分にまでヒビが入ってるじゃないか！　あのダークヒーロー、ショウという物を分かってない。
こんなマジ攻撃なんかしたら観客は引くだろう。普通は打ち合わせでどういう攻撃をするかを入念にシュミレートして、それに合わせて受ける側も体を動かす物だ。
当たってないけど、当たった様に見せる。そういう物なんだよ！
こいつ本当にスオウか？　と疑問が頭に浮かぶ。幾ら何でも親友をここまで本気でぶっ飛ばすなんて信じられない。けど、ある意味……俺をこんなに本気で殴るのもコイツしかいない気もする。
それに実を言うと、俺も本気でこのダークヒーローを殴ろうと思ってたんだ。

「はは……」
「なんだヒーロー？　もう壊れたか？」
痛む頭の中で思わずこぼれた笑いにダークヒーローは目敏く反応する。ああ、やっぱりスオウだな……そう思った。今のコイツはムカつく。時々妙にスオウはムカつく時がある。それと同じ感情が今沸いてるから確実だ。
お互いを有る程度知ってるから出る感情の一種。
俺は自分の剣を握り直して悠然と立つダークヒーローに言い放つ。
「お前なんて認めない。ぜってぇ倒す！」
「やれるのかよ。無くしたヒーロー？」
俺は奴に斬り掛かる。それと同時に、復活したヒーローに会場が沸いた。俺は本気で剣を横に滑らせた。手加減？　寸止め？　なんだそれは。奴がそうするのなら俺だってそうするさ！　殴られるだけ殴られて、泣き寝入りなんかしたくない。
けど……俺の本気の剣は奴にクリーンヒットしなかった。幾ら剣を振っても凪いでも、奴はかわし受け止め、二本の剣で縦横無尽に反撃に転じる。
そんな筈は無いと思いたかった。だけど……これは決定的だ。スオウはＬＲＯでの経験がリアルでも生きている。俺が今までコイツを向こうで見てきた剣の筋と同じ……一ヶ月にも満たない、ましてや一年以上やってる俺ですらそんな影響は無いのに、スオウにはＬＲＯの出来事がそれこそ経験値の様に貯まっているみたいだ。
（まさか、もしかしてこれは……命を懸けた代償の副産物？）
スオウは浸透率がどうとか言ってたが、もしかしたらそれの影響

なのかも知れない。アイツは時間は短くても、普通のプレイヤーよりも深くＬＲＯと繋がっている。
それこそ、向こうでの死がだんだんとリアルに近づく程にだ。アイツは意識だけじゃなく、身体ごとＬＲＯに持って行ってるみたいな物なのかも知れない。
だからこその死のリスク……けど、それこそまさに本当の『フルダイブ』と言える物かも……俺はそれを考えて再びゾッとした。

「どうしたヒーロー？　まだ一太刀も私に届いて無いぞ」

その言葉通り、俺は既に防戦一方に成ってきてた。ＬＲＯでの戦士のままで居られるスオウと、リアルではただの高校生の俺……それは天と地程の差がある。

「なんで……なんでこんなに強いんだよお前」

俺が思わず呟いた言葉はダークヒーローに向けた言葉じゃない。それは中身のスオウに向けた言葉だった。けどしかし、スオウにとってはそんな事はどうでも良かったのかも知れない。

「それはお前が強かったからじゃねーの？　え、ヒーローよ。逃げ出す時にそんな事も忘れたか？」

スオウの声に迷いは無かった。真っ直ぐに、そして直に俺の心を突き刺す言葉を奴は発する。スオウもヒーローにではなく、俺に向かってその言葉を言っている。
けれど内容的に間違った事を言った訳じゃないからショウとしてもまだ成立している。観客の誰もこれがただのショウだと疑わないだろう。そして今のはその台詞に過ぎない物だとさ。
けど実際は、そんな都合の良い台本なんて無い一人の高校生を引

っかける為の大袈裟な仕掛けなんだよ。スオウは確実に俺をＬＲＯに戻そうとしてる。
コイツは待ってるだけと言ったのに……そんな言葉を変えさせたのは多分アイツだろう。
俺はスオウの剣撃を受けながら視線を後方に向けた。そこには愛の姿がある。心配そうな顔で、両手で祈りを捧げる様にしてこちらを見てる愛。今日という日の始まりは愛だった。あの日から新しく加わったのは愛だけだ。
だから当然、こんな事を促したのは愛の筈。愛はやはり……俺はそれを考えて、だけど考え終わる前に無理矢理前に出た。
意表を突かれたスオウもといダークヒーローの剣が空ぶる。そこに乗じて俺は渾身の一撃を振り下ろす。だが、それすらもかわされて、奴の剣が肉に食い込んだ。
カウンターの要領ですれ違いざまに重い奴を貰ったみたいだ。俺は剣を落として地面に四つん這いに倒れ込む。

「くはぁっ……そうか？　なんでお前にそんな事わかるんだよ……」

絞り出した声はピンマイクが無ければ誰の耳にも届かない位の声だった。情けないヒーローに子供達の声が届くが動ける気がしない。
俺は今はただの高校生なんだ。中身はゲームオタク。

「言っただろう。私はお前だと。だから私は知っている。お前が強いヒーローだとな。だが常に自信が無いのも俺は知っている。
だからお前は無くしたヒーローなんだよ」

俺を知っているらしいダークヒーローは俺の心を漏らすように喋りやがる。一体こいつはどこまで知ってるのだろうか？

「無くしたヒーローか……確かに今の俺はそうだろう。どうやら俺

の力はお前に持って行かれたみたいだしな。それでも……何か出来ると少しは足掻いてみたけどな」
「そうだな。全然だが、惜しいところまでは行ったと認めよう。最後の一太刀はなかなかだった。だが
それで負けを認めるのか？
なかなかで逃げ出すかヒーロー？　お前はヒーローだろう」

俺たちはきっとあの時間を言っている。それは俺がスオウを誘ってＬＲＯで起こった様々な出来事の事だ。あれは俺にとっては足掻きの様な物だった。そしてそれをスオウは惜しい所までは行ったと言う。
そして逃げ出すのか？　と。

「無くしたヒーローだ」

全てはこの言葉で片づいた。

「そうか、ならもう一つ無くしてやろう」

そう言ってダークヒーローは愛にその剣を向けた。

「お前何を！？」
「貴様の大事な者を奪う。もう一度、いや何度だってだ。わからせてやろう、逃げる事に意味など無いと。私は貴様の“逃げ道”を無くしてやる！
満足だろう！　貴様は無くしたヒーローなのだから！」

奴の剣が愛に迫る。堅く目を閉じた愛は今も願っていた。一体何に？　それは決まってる。これは俺にも分かる。愛はヒーローが助けてくれる事を願ってるんだ。

いや、この場合は信じてる？　なんでそこまで……その時、不意に愛の手が解けた。祈りの態勢じゃ無くなった。そして視線は剣じゃなく後方の俺に向いている。
それから愛が浮かべた表情がいつかのアイリと完全に重なった。それはもの悲しそうな表情。あれは、あの日に、俺がアイリに見放された瞬間の顔だった。

「う……あああああああああ！！」
「ぐあぁ！」

俺は無我夢中で後ろからダークヒーローに突っ込んだ。それはヒーローにあるまじき格好悪さだったに違いない。けど何とか寸前で愛を守る事が出来た。
俺は無様に息を荒く吐きながら退かしたダークヒーローの立ち位置に両手両足を付いている。それはあたかも、ふられた女を必死に繋ぎ止めようとする絵に見えなくもない。

（俺は何やってるんだ？　イヤでも、これはショウで……だけどアイリが……）

頭が混乱してる。これも全部スオウのせいだ。俺は出来る物なら今直ぐにでもこの場から逃げ出したい衝動に駆られていた。守った安心感より、あの顔をもう一度見るのがイヤなんだ。
だけど、次に振ってきた言葉に俺の心は揺れ動く。

「ヒーローはやっぱり、私を見捨てないで居てくれた……ありがとう」

それは考えつきもしなかった言葉だった。ショウの最中で、観客が居ることも忘れて俺は取り乱す。

「は？　え？　何言ってんだ？　だって……俺に幻滅した筈だろ。俺の様なヒーロー、信じれなく成ったはずじゃ……」

愛は首をフルフルと振る。そして膝を折り曲げると、俺に目線を合わせるようにして優しく言葉を紡ぐ。何故か目尻に涙まで貯めて。

「そんな事ない……私はずっとずっとヒーローを信じ続けるよ」

地球に寄りすぎた太陽を引きずり下ろせそうと思える程の衝撃が俺に走った。意味は分からないがそれ程の衝撃と察してほしい。

この言葉を言ったのは愛でアイリじゃない……それは分かってる。だけど聞こえたんだ。重なったんだ。愛とアイリが……そしてあの時の俺が。

涙が一筋流れる所まで、何もかもが完全に一致した様に見えた。もしかして俺がアイリに見捨てられた思ったあの顔も……アイリが俺に見捨てられたと思った表情だったのかも知れない。

それはとても都合の良い解釈で確証なんて何もない。だが……もしかして俺は、まだ何一つ無くしてないのかも知れないと思った。僅かに胸で何かがくすぶる音が聞こえてる。

「本当に……俺の様なヒーローでいいのか？」

それはただ何かを確かめたかったから出た言葉。アイリじゃないが、愛の言葉なら俺は信じれる気がした。このくすぶりに一つの結果をくれる様な……そんな感じが。

「私はヒーローが良い。ヒーローじゃなきゃやだよ。無くしたヒーローで、みんなから頼られなくなっても……その時は私だけを守るヒーローで居てください。

たった一人を守れれば、きっとみんなも守れるよ。そしたらもう、無くしたヒーローのなんて言われない。だから今は、無くしたままのヒーローでもいいんです」

その言葉は心に深く空いた穴に杭が一気に打ち込まれた様な感覚で俺を貫いた。だけど痛みとかじゃない。用意されてた穴にコツコツトントンとやっていくんじゃなく、一思いに全力の力で打ち込んだのが一発で綺麗に収まったんだ。それは清々しいと言える程の物。

「ありがとう。必ず守ってみせる」

俺は小さくそう呟いて、立ち上がる。振り返るとそこにはダークヒーローが待っていた。

「お前はヒーローか？」

おかしな質問が来た。だけど俺は迷わずに「ああ」と答えた。

「では守るのか？　守れるのか？」

また同じ様な質問。俺は「ああ、絶対に」と答えた。

「実は私もヒーローだ」

次いでは何か驚愕の事実っぽい効果音が入ってそう言った。俺は微動だにせず「知ってる」と答えた。ダークだけどヒーローだからな。それは俺の力らしいし。

「そうか……なら――」

俺達の雰囲気は何かおかしな感じだった。さっきまで戦ってた敵とは思えない。寧ろ同級生と下校時に何気ない話をしてる感じだ。
けど、次の言葉でその居心地の良い感じに終わりを告げる。

「――ヒーローは二人もいらないと思うだろ？」
「……ああ」

俺達はぶつかり合う。その剣と拳に想いを乗せて。

「うおおおおおおおおおおおお！！」
「うらあああああああああああ！！」

真夏の熱気が震えて弾けた様な衝撃が走った。どこまでも続く蒼天に甲高い効果音が吸い込まれて消えていく。だけどそれはミスとも思える間違い……の筈だった。
だって確実にダークヒーローの剣の方が早かった。てか寧ろ、剣と拳じゃリーチに差が有りすぎる。だけどそんな事は傍若無人な監督のご都合主義な台本に寄ってひっくり返された。
俺に出された監督の命令はただ一つ。

【ヒーローが最後に勝つように……】

その部分は他の出演者全員と共通してた様だ。おかげでヒーローはそこで輝くことが出来ている。

幾度の心がヒーローの証（後書き）

第六十六話です。
なんとか終われたかな？　本当はこの後もあるんだけど、それは次週で。次はリアルとＬＲＯの半々構成でいけたらいいです。
てな事で、次は金曜日に上げます。ではまた次回！

踏み出す別れ（前書き）

ヒーローショウが終わってもヒーローにはまだ重要なしごとが有った。それは子供の相手。それを終えてやっとで裏に戻ったのは三十分後くらい。その頃には既にスオウとかは居なかった。それと愛も……。

残されてた手紙。俺はそこに綴られていた番号へ電話を掛ける。

踏み出す別れ

大喝采で閉幕したヒーローショウは大成功と言えるだろう。そしてそれから三十分くらいは子供の相手に費やした。ショウの時間より長くて疲れたよ。今回のショウもぶっつけ本番、行き当たりばったりで相当だったけど、常に憧れの目で見られるって言うのも疲れる物だ。

気が抜けない。子供は見たことをそのまま受け取るからな。それでも何とかヒーローショウの関係者の人たちが使う控え室に戻ると案の定、ダークヒーローの中身は居なかった。

あれから三十分だしな。今更待ってる訳もないと思ってたさ。でも……そう言えば愛も居ないな。おっさん達は満足気にテーブルを囲んで早くも祝勝会みたなノリで乾杯してるのに、一体どこに。

スオウ達と帰ったとか……でもそれは、ちょっとな。俺は暑苦しいマスクをやっとで取り払い。エアコンが効いてる部屋の空気を目一杯吸い込んでから、目の前のダメな大人っぽい奴らに何気に聞いてみた。

「あのおっさん達さ……藤沢知らない？」

「ああユーのラヴァーな」

「ぶっ、誰がラヴァーだ！！　違う、そんなんじゃねーよ俺達は！」

このおっさん既に酔ってんじゃ無いのか？　いきなりとんでもない事言うじゃねーか。俺達は今日が初対面……だよな？　の筈。

俺の中には愛にとっての一つの可能性が無くもないが、実はそれを聞く気はないんだ。だから俺達はそんなんじゃ……

「わはははは、まあユーがそう言うならそうしておこう。シーはそう

だな……う～ん確かそこに書き置きを残してたぞ」
「それを早く言えよ！」

この酔っぱらいどもめ。てか、そもそも協力した俺が最後まで働いて、こいつらが飲んだくれてるっておかしくないか？
俺はおっさん達が騒いでる場を横にそれてスケジュール？　とかのファイルが置いてあるデスクに近づいた。そしてそこには一つの便箋が置いてあった。
それはいかにも女の子が使うような装飾がされた可愛らしいもので一目で愛のと分かる気がした。

「これか……」
「おいユー。それはユーに当てたものでヒーローに当てた物じゃないよ。つまりはいつまでその格好してるかって事だけどね。
そんなに気に入ったのならユーも正式な――」
「ベラベラうるさいぞおっさん！　これっきりだ！　こんな恥ずかしい格好継続的に出来るかよ。勿論さっさと脱ぎたいんだからな」

ただタイミングが悪かっただけ。脱ぐよりも早く、愛の手紙の内容を確認したかった。けどまあ、これを脱いでからでも良いかなと思うことにするか。
このスーツの密着感が何というか気持ち悪い。汗で湿ってるし……それにこの手紙は俺に当てた物。まあ実際、このままで読んだって何も問題なんて無いだろうけどさ。
おっさんが変な事言うから、抵抗が生まれた気がする。
俺は便箋を机に戻してロッカーに仕舞ってあった元の服を取り出して隣のシャワー室へ。このデパートはこういう人達の為に小さいけどシャワーまで完備してくれてる。
ビッチャリという感じを肌に付かせながらヒーロースーツを脱ぐと、もの凄い解放感があった。これは絞れば汗がバケツに貯まりそ

うだな。

「手紙か……」

シャワーを浴びながらそんな事を呟いたら、急にイヤな予感が背筋を這った感覚に襲われた。よく考えたら俺は愛の事を何も知らない。

そして思い出されるのはショウの終わりに愛が言った言葉だ。

『もう、大丈夫だね』

俺は五分も経たずにシャワーを終えて服を着て再びおっさん達が騒ぐ部屋に戻った。その余りの早さに騒いでたおっさん達がこちらを見てる。

「ユー、随分早いな」

「うるさい、俺は早風呂なんだよ」

俺はスタスタとおっさん達をやり過ごし、デスクの上の便箋を掴んで部屋のドアに手をかける。僅かなシャワーの時間で考えたんだ。このおっさん達がいる所でなんだか開きたくないと。

だから俺はドアを開いて出ることにした。だけどその時おっさんから声を掛けられた。それは変なテンションを抑え目にした、何だか真剣と思える物。

「ユー、ありがとう。楽しかったよ」

首を向けるとテーブルを囲む複数人が手のビールを掲げてる。みんな楽しそうに、子供みたいな笑顔でだ。だから俺は子供らしく時には素直になろうかなと思った。礼儀って奴は大切だ。

「こちらこそ、ありがとうございました」

そう言って俺はドアを閉めた。それと同時に中では宴会が再び始まった音が聞こえる。まあ感謝してもいい。少しは前を向ける様になったから。

非常階段の方へ行き、外に出て便箋の封を開ける。中から現れたこれまた花柄の紙を出して中身を確認すると、そこにはメールアドレスと電話番号の二つしか書いてなかった。

花の中に佇む二つの数字とアルファベットの文字列。それはカラーペンで書いてあって、丸いけど形が整った綺麗な字で綴られていた。

これは連絡して良いって事だよな。と、言うか愛はもう会う気は無いって事なんだろうか。帰ったのか？　何も言わずに？

でもだからこうしてメールアドレスと電話番号を残してる訳か。本当に訳の分からない奴だ。一体何がしたかったんだよ。

結局俺の中じゃブラジャーをくれた変な女という認識が一番強いぞ。結局返せなかったし。俺はポケットから真っ白なブラを出して眺めている。う～ん、こうしてると完全に変態だ。

もしも通りの誰かがこの光景を見たら間違いなく通報されるだろう。無実なんだけど、言い逃れが出来ない物的証拠が俺を下着ドロボーに間違いなくしそうだ。

見てるだけで赤くなる。思いだしたら笑えてきた。あんな変な奴もそうそういなからな。これが有る限り忘れられそうも無いし……実際俺はまだ、色々と納得出来てねーぞ。何で何も言わずに居なくなるんだよ。

思わずブラジャーに顔を埋めたくなる衝動を堪えてポッケに再び戻し、次いで携帯を取り出して花柄の紙と見比べる。

「どっちにするかだな……電話かメールか……」

何か電話って緊張する。けどだからといってメールじゃ何か違う気もする。メールだと会わないで去られたのと状態が余り変わらない様なさ。

てか、何より俺は愛の声が聞きたいのかも知れない。この半日ぐらいの僅かな時間だったけど、それが滅茶苦茶で、だから印象も強くてさ。いきなり居なくなられると調子が狂う。

まだ日は高いんだから。俺は夏の空を見上げながら携帯を耳元に持っていった。

「もしもし……」

か細く、だけど俺にとっては祭りばやしの様な少しのワクワクが胸を焦がす様な声が鼓膜を震わせた。そう、俺が選んだのは電話の方だ。

「藤沢だよな……俺、秋徒だけど……」

「うん、分かってるよ」

なんだか言葉が続かないな。きっと向こうも分かりきってた事だろうに、俺はそれを言ってしまった。愛が出てから俺は気づいた。何を言えばいいのか何も考えて無かったって事を。

あ〜こういう時は当たり障りの無いことでもまずは言うべきかな。

「今さ着替え終わったんだけど、スオウの奴居なくてさ。ってスオウってのは俺の友達何だけど……多分ダークヒーローの中身やってたと思うんだ――て、知ってる？」

「ううん、知らない。だって私達、今日初めて会ったんだよ」

「ああ……そうだっけ」

意外ともう、すんなり吐いてくれそうな気がしたがそうでは無いらしい。どうやら隠し通し続けるみたい。愛の声に迷いは無かった。

「……」

耐え難い間が続く。会話の糸が切れたな。何かを喋らないと終わりそうなこの時間。目に見えないか弱い電波が心許なさすぎる。

僅かに動いてる雲。照りつける太陽。眼下に見える世話しなく動く人と途切れることの無い車の波。時間は確実に時を刻み、隔たる距離は加速するような気がする。

「なあ、今どこにいるんだ？」

迷っててもどうにもならない。俺はそれを知ってるはずだ。口に出した言葉は確かに届いたのだろうかと、不安になるほど向こうは静か。

時折聞こえる音は何の音だろう。それが分かれば愛が居る場所も分かるかも知れない。愛が素直に答えてくれなかった時の為に、俺は電話の向こう側に耳を澄ます。

けどその時待ちわびた声が変な事言った。

「じゃじゃ～ん！　秋徒君、愛ちゃんクイズです」

「は？　何だよいきなり」

拍子抜けするようなアホッぽい調子の声になんだか安心感が広がる。思わず口元が少し上がった。でもそれを悟られたくない……って思ったら見えるわけは無いか。

「なんとこのクイズに答えていくと、ミステリアスな愛ちゃんの謎が明かされて行く――かもです！」

「かもってなんだよ」

それにミステリアスって自分で言ってるし。最初に会った時のアホッぽい行動が頭に浮かぶ。あれも有る意味ではミステリアスだった。

そして愛は俺の声に応える事無く話を進める。

「では、じゃ～じゃん！　第一問、愛ちゃんは今何年生でしょう？」
「は？　え？　高一位？」

見た目はそんな感じだ。顔はあどけない感じだし、何よりも行動が奇怪だから先輩という印象からは皆無だった。けど、だからと言って中学でも無いような発育が見て取れた様な……特に胸部辺り。

まあ、最近は中学でも発育の良い子は居るから一慨には言えないが、有る意味愛は整った体してたと思う。ワンピースだったけど……そこは想像と言う境地で補った。

妄想とも言うけどな。まあだから、高一。大人未満、子供以上みたいな。丁度この辺りの感じがするよ愛は。

「ジャンバラジャンバラ」
「は？　おい、その効果音はなんだ？」

電波に乗って届いたのは謎の言葉。なんだ？　宇宙の電波でも受信してるのか？

「不正解の音」
「お前のセンスを疑うぞ！」
「ん～？　音楽性の違いって奴？」
「その不思議な言葉を音楽と言うのが失礼な気がするけどな」

確かに俺と愛はいろんなズレが生じてるとは思うが、そういう事じゃないだろ。なんで不正解で「ブッブー」じゃなく「ジャンバラジャンバラ」なんだよ。
どういう選択だ？　その音は同じカテゴリーに収まって無いだろ。

「もう～、秋徒君は本当に細かい所にこだわるよね。男なんだから大きくなろうよ」
「そうか？　あれは誰もが突っ込む事だと思うけど……」

結構大きかったぞ。受け流してたら気になってしょうがない……ってこういう所がせせこましいのか？　自分的には大きなつもりなんだけどな。
周りが周りだから許してないとやっていけない事が多々あるし。特に日鞠の注文はいつも無茶が過ぎる。流石に高性能のＣＣＤカメラをあの台数ってのは……資金も少なかったしな。良くやったよ俺。
だから俺は懐具合は大きな筈だ。まあ、俺は愛と違って自己評価を口にはしないけど。

「もういいです。取りあえず不正解だからね。私はなんと大学一年生の十九歳だよ」
「は！？　マジで！？」
「マジマジ」

今日一番の驚きかも知れない。年上は無いと……せめて一つか二つ位なら許せたけど、大学生ってさ……信じられん。
けど、一応まだ二十歳じゃないから予想的には範囲内なのか。だけどあれは心配な大人に成りそうな感じだな。まあ取りあえず。

「俺おもいっきりタメ口だったけど敬語の方がいいかな？　いや、いいですか？」

「ううん、別に今まで通りで良いよ。いつも通りが一番――って言うか、秋徒君がそんなに驚くなんて意外だな。私こんなにお姉さんオーラを出してたのに」
「……はは、そうだっけ？」

そんなオーラは一度も感じなかったが。愛の今日の行動のどこを振り返ってもそんな所……ああ、一つ思い出した。カフェでお茶をする姿はそういえば上品で大人びてたかも知れない。
一体どこが愛的にはお姉さんオーラを放出してた部分なんだろか？

「ほ、ほら。ブラジャーあげたアレとか……きっと高校生には出来ない大胆さと色気を感じたんじゃないかな。うん、お姉さまって感じ」

うん、変態って感じなら感じたけど……あれでお姉さまとはなり得ないだろ。初対面の男にブラを渡す変な人だ。　大胆すぎだし……色気は確かにブラからは感じたかもな。残り香とか。

「そんなことより、じゃ～じゃん！　愛ちゃんクイズ第二問。愛ちゃんの趣味は何でしょうか？
1、読書　2、水泳　3、乗馬　4、フィンシング　5、ゲームさあどれ！」
「え～と、読書？」

何だか愛は運動全般が苦手そうだし、ゲームは想像できない。唯一抵抗無く想像できてしっくりくるのは読書くらいだ。思い出したあの優雅なティータイムの情景には本があってもおかしくない！

「ポカホンタスポカホンタス、不正解！」

何か微妙に変わってる。いや結構な変わり具合だけど、ニュアンス的に微妙なんだ。でも突っ込むのも面倒だから放置で。

「正解は1～5、全部です！　私に苦手などありません」

「いや、まあいいけど。全部ってありかよ」

またまた結構信じられない。水泳――溺れそうだし、乗馬――落っこちそうだし、フィンシング――ティーカップより重い物持てなさそうだし、ゲーム――トランプの事か？

「私のクイズなんだから私がありって言えばありなんです。ちなみに後はピアノとかもあります。幼少期からいろんな習い事させられてましたから。

ゲームはここ数年ですけど……」

ん？　なんだか声のトーンが少し後半落ちたような……電話越しじゃ表情が知れないから分からない。

「さて、それでは気を取り直して第三問！　じゃ～じゃん愛ちゃんが近年趣味に加えたゲームですが、それはどういうゲームでしょうか？

1、ボードゲーム　2、スティックピコピコみたいなゲーム　3、フルダイブ型のＭＭＯＲＰＧ

さあどれ！」

明らかに2のゲームって適当だよな？　余り知らないのを無理矢理数合わせに言った感じが丸解りだ。多分普通のテレビゲーム何だろうと思うけど、これなら2は除外だな。

1はある意味想像通りかも知れない、けど3も怪しい。2を余り知らない奴が3を出せるか疑問なんだ。それにやけにはっきりして

るし体験者な感じがする。
　ＴＶや雑誌で良く取り上げられてるから言葉だけなら知ってるという可能性も無くは無いが、俺は思うんだ。このクイズってもしかして、俺に対してのメッセージじゃないのだろうかと。

「い……ち、いや３だ！」
「メタコラパクス～大正解！　これで初めて秋徒君は愛ちゃんポイント１０Ｐを獲得です。愛ちゃんＰが五十貯まると極秘情報の開示が出来るから頑張ってください」

　メタコラパクスが正解の音ってやっぱり愛はズレてると思う。それに愛ちゃんポイントって何だよ。初めからあったのかその設定？

「その極秘情報って何？」

　一応聞いてみる事はする。女の子の口から極秘情報って言われるとなんだか気になるじゃないか。女子が隠しておきたい事と言ったらアレか？　スリーサイズとか。それはなかなか興味をそそる情報だ。
　けど、次に何気に発せられた言葉に俺はしばし固まった。

「それは私の居場所です。五十Ｐ貯めたらもう一度、会えますよ」

　それは暗にもう会わないと言ってる事と同義だ。肌に再び浮かんできた汗が頬を流れ落ちていく。

「それでは第四問。じゃーじゃん。愛ちゃんがそのゲームを始めた理由は何でしょう？
　１、現実逃避　２、憧れ　３、別人に成りたかった」

少しだけ、電話の向こうから感情が漏れだして来たような気がした。しみじみとした声に聞こえたから、そう思っただけかも知れないけどな。
それに今回は普通に難しい。フルダイブ型のゲームにはそれらの理由の人が五万と居る。だから全部？　とも思えるが……もしも愛がアイツなら。

「1と2だ！」
「ヘポホ～ポ～ロン。大正解だよ。愛ちゃんは当時、いろんなしがらみがイヤに成ってたの。だからある日知ったそのゲームに逃げ込んだの。勿論憧れも有った。
けど3が無いのは愛ちゃんはそこではあり得ない筈の自分を見てほしかったからです。良くできました。ボーナスで２０Ｐあげます。これで３０Ｐだね」

正解音もまた微妙に変わってるが、それを気にするよりも愛の喋った内容の方が重要だ。疑惑は確証に変わりつつある。
リアルの事は向こうでは余り話さなかったが、内面の事は少しは聞いてたから……目を閉じると浮かんでくる気がする。アイツの姿が。

「それでは第五問。じゃ～じゃん。愛ちゃんはそのゲーム内でとっても中の良い友達が出来ました。だけどある日、いろんな事があってその友達は愛ちゃんから離れて行きました。それは一体誰のせいだったのでしょう？
1、愛ちゃん　2、友達　3、友達ツー」

これはもしかして決定的かも知れない。責めてる・・訳じゃないよな。ならこれは……

「2だろ」
「アホポンタス！　不正解です。正解は選択４の“誰のせいでも無い”です。あの時は愛ちゃんを含めてみんなが急ぎすぎたんだよ。そしてズレ出した事に気づかなかった。だからきっと誰も悪くないよ」

また効果音が変わってるし罵倒に成ってる。そして４なんて無かった。けど……それら全てがどうでも良くなるくらいに、俺は電話越しの言葉に聞き入っていた。たとえ誰も悪くないなんて事は無いと俺が知っていても。

「では、これが最後の問題です。ふがいない秋徒君の為に最後は２０Ｐあげましょう。じゃ～じゃん。愛ちゃんは現在絶体絶命の大ピンチ状態です。
けどそれはゲームの中の事。今夜行かなければ良いだけだけど、愛ちゃんは行くことを決めています。それはどうしてでしょう？
この問いに選択肢は有りません。ヒントは今日これまでの時間全部です！」
「これまでの時間全部？」

たった半日位だがそれでも全部と言われると首を捻りたくなる。何をした？　ブラジャーを貰って、かき氷食べて、ヒーローゴッコをした。二つくらいは高校生と大学生がやる事じゃない。
愛はきっとアイツだろう……それならアイツが行く理由……待つ答え、それは俺の中に有ると思う。アイツはいつだって俺を信じて待っててくれた……なら！

「答えは俺……いや、ヒーローを信じてるからだ！」

俺はきっと電話越しなのに予想以上に大きな声で叫んでた。通り

を歩く人たちがチラホラこちらを見る視線が当たってた。
まだ待っててくれるのならこれしかない……そう思える答え。あれだけ裏切っておいて何様だけど、俺は願うよ。そうであって欲しいと。
そして長い沈黙の後に答えは訪れた。
「リックラックラ〜！　大正解！　愛ちゃんはいつだってヒーローを信じてる夢見る女の子なんだよ」
「……アイリ」
俺は思わずそう呟いてた。
「違うよ私は愛。２０Ｐ獲得おめでとう。それでは極秘情報を開示しましょう。私は今……駅に居ます」
俺は転げ落ちそうに成りながら階段を駆け降りて通りを走った。何事か？　と向けられる視線を全て無視して駅を目指す。そこは目と鼻の先だ。
だが途中で信号が俺の前に立ちふさがる。その時、そのまま手に握ってた携帯から声が聞こえるのに気付いた。
「愛！　そこに居ろよ！」
「ふふ、初めて名前呼んでくれたね。でもごめんなさい、時間切れです。もう行かなきゃ」
信号が変わり暢気な音楽が流れて人の流れが始まった。俺はそれをかき分けるように進みながら電話に叫ぶ。
「後少し！　後少しなんだ！　届くんだ今度こそようやく！　だから！」

「その言葉が聞きたいのは今じゃないですよ。だから待ってるの。信じてます。今日はありがとう、そしてさようなら」

ツーツーと虚しい音が漏れていた。踏み行った駅を幾ら探しても愛の姿は無く、流れ出た電車の後の疎らな光景だけがそこにはあった。

踏み出す別れ（後書き）

第六十七話です。
半々にするとか言ってたけど無理でした。なんか長くなっちゃって。けどこれですっきりしたから次からはアルテミナス編のクライマックスにつき進めます
てな訳で次回は日曜日更新します。ではまた！

月の無い夜（前書き）

後数時間後に僕達はこれまでで最大級の戦闘を行う事になるだろう。それはきっと誰も体験した事がない程のものの筈だ。不安がない訳じゃない。だけど僕の心は不思議と落ち着いていた。

そして遂にアイツがもう一度この世界に現れる。

月の無い夜

空に月は無く、集う数有る星の全てが見える様な気がする夜。僕達はＮＰＣの街『ノンセルス２』から少し離れたフィールドの一角に集っている。
広大な大地がどこまでも続く様に感じるフィールド。なだらかに下りに成り、そこには妖精の様なモンスターが小さな粒子を放ちながら所々にある花へ漂っていた。
風は心地よく肌を撫で、緑の香りが鼻孔を擽る。僕達はこれから決戦に向かう事になる。だけど、不思議と緊張感は無い。なんだか心は至って穏やかというか、この星空を素直に綺麗だな……と思える位に落ち着いていた。
きっとセツリもこの星空を見てるだろう気がするんだ。こうやって空を見てると、同じようにしてる人と繋がれる様な……勿論知ってる人でしか想像は出来ないけど、セツリも多分こうしてる。
だからコンペイトウの様な星を握る様に手を伸ばして掴んでみる。何も僕の手には入ってないけど、心の中だけで呟いた。

（もうすぐ行くから、必ずその手を掴んでみせる）
「ちょっとあんた。本当にアギト様くるんでしょうね？」

唐突に後ろからトゲがある声が刺さってくる。振り返らなくても分かるな。僕をあんたなんて呼ぶのはセラしかいない。
だから僕は立ち上がることもせずにただ空を見上げて答えてやった。

「来るさ。アイツはもう大丈夫だからな。絶対来る」
「……そっか、なら良いんだけど……上手く行ったんだ」

セラはそう呟くと僕の横に腰を下ろした。少し顔を向けてみるとセラは嬉そうに微笑んでる様に見える。セラも心配してたからね。僕達はアギトだけだったけど、セラはアイリの事もだったし……同時に何とか出来たのなら良かったんだけど、一応は成功したはずだ。

終わりの方は退散して見てないんだけど、終わった後にアイリからメール来たからな。『ありがとうございました』ってさ。それなら悪い事には成らなかったんだろう。

「それにしても私たちってすっごく無謀よね。たったこれだけで軍とモンスターの大群をそれぞれ相手にしようとしてるんだから。勝てる見込みなんて殆どないわよ」

「勝てる見込みね。そんなのあんまり気にしないな。まあ、最大限にそれを高める事はするけど、僕達は勝たなきゃいけないんだ。敵がどれだけ大きくても」

でなきゃいろんな事が終わる。セツリがどうなるか分からない。アイツを救えるのは僕だけだ。そしてアイリを救えるのはアギトだけなんだ。

それはいろんな事の為になる。僕とセツリはそれだけ、かもしれないけどアイリとかはそうじゃないだろう。アイリのあの細い肩には国というとても大きくて重いものが乗ってるんだ。

「それはそうだけど、あんた時には現実見なさいって言ってるのよ。無茶ばっかりしてると本当に死ぬわよ。そんな事に成ったら……悲しむ人だって……」

ん？　なんだか今日のセラはおかしいな。他人の、特に僕の心配をするなんて熱でもあるんじゃないのだろうか？　まあ、女の子に心配されるのは素直に嬉しいけど、セラはいつも通りでないと調子

が狂うというか……気持ち悪いというか……でもそれを素直に言うと言葉の暴力だけではすまない様な気がするからな。

「悲しむ人って、その中にセラは居るわけ？」

俺のこの言葉を聞いた瞬間にもの凄い勢いでセラはこちらに振り向いてそしてすぐさま俯いた。それから地面に生えてる草をもの凄い勢いでブチブチ引き抜いている。

「そ、それはまあ他の人達の十分の一位は悲しんでやっても良いわよ。でも、まだまだその位の評価なんだから思い上がらないでよ」

ブチブチブチブチ……いつの間にかセラの足下には草の山が築かれつつある。俯いてた顔を僅かにあげて目だけを見せて僕を睨んでる。

なんだかこういう行動するとセラが異常に可愛く見えるな。でも加減が分からないよな。どれだけからかったらセラは怒るんだろうとか。

「はいはい、自覚してるって。それに現実って、ここはＬＲＯだぞ。リアルでは出来ない事をやる場所だろ？」

「それはそうだけど、好き勝手やれるのは何度だってやり直しが出来るからよ。それが出来ないあんたが無茶してるのは、リアルで自殺願望持った危ない奴と一緒よ」

なんとまあ、セラは可愛い格好できつい事を言ってくれる。やっぱりセラはセラだな。しょうがないから俺も周りの草をプチプチ抜いてセラの山に足しながら言葉を紡ぐ。

「う～ん、それって結構酷いこと言ってるぞセラ。まあでも、実際

否定は出来ないよな。確かにどっかのマンガの主人公みたいに『死に場所を探してる』って感じかも知れないみたいだし。今の僕はさ。
でも実際、リアルではこんな事出来ないよ。向こうじゃ武器も無いし……あったとしてもその力が僕には無いだろう。格闘家な訳じゃないしね。
でもさ、ここではその力があるんだ。そしてそれで救えるかも知れない人が居る。それだけで今の僕には無茶を通す理由に成るよ」

ブチ……とセラの手が毟った草を握ったまま止まった。だけど直ぐに深いため息が漏れて解放した手からこぼれ落ちた草が風に流される。優しい風は数枚の草を夜の闇に運んでいく。

「なら……好きなだけ無茶すればいいわ。別に止める義理なんて無いし、あんたならやり通せるんじゃない？　死んでも知らないけどね」
「うわヒッデ～なお前」
「バァ～カ」

なんだかやけに晴れやかな笑顔でバカと言われてしまった。う～ん、よく分からないな。誉めた後にけなしやがって、それじゃどっちをくみ取ればいいのか分からないじゃないか。

「なんだ？　セラもスオウもいつのまに仲良く成ったんだよ？」
「うん？」
「あっ」

不意に聞こえた声に二人して同時に振り返った。そこにはここ数日姿を見せなかった奴がいた。具体的には三日前くらいに情けなく逃げ出した奴な。
赤い髪に背には槍を挿し、全身をやはり赤で固めた鎧を纏った戦

士がそこに立っていた。僕は座ったままだけど、セラは立ち上がってお辞儀をペコリとする。

「アギト様、お帰りなさい」

「うん……まあ、ただいま」

セラとぎこちなく挨拶を交わしたアギトは僕の方を向いた。

「おせ～よアギト。その図体で悩むなんて馴れないことしてんなよ」

僕は気さくに親友として親しみ溢れた挨拶を提案してやった。だけどアギトは無表情に歩み寄ってきて、その堅そうな鎧で守られた拳で俺を殴った。

「ブベ！　――って何すんだ！」

「昼間の礼だスオウ。あの時は本当に良くやってくれよな」

アギトは爽やかに笑顔を見せておかしな事を言っている。良くやったのなら殴られる心当たりがないんだけどな。その笑顔がムカつくから殴り返してやろうか？

そう思ってるとオモムロニ耳打ちをし出すアギト。こいつの息が耳に当たって気持ち悪い。これなら恐怖もあるが、セラの方がずっとマシだな。

「お前、昼間の二刀流……どういう事だよ？　分かってたのか出来るって？」

「へ？　何の事だよ？　僕はずっとこっちに入ってたぞ」

たく、何言ってるんだかアギトの奴は。落ち込みすぎて僕の幻覚でも見たんじゃないのか？　そこまで親友に頼るなよ。

「ふざけた事抜かすなよ。こっちは気付いてるんだ。お前が色々電話で指示してた事も、あのダークヒーローの中身がお前だって事もな」
「まあまあ、アギト君はこの大変な時にヒーローゴッコにお盛んですか。良いご身分だ事で」

ブチッ――そんな音が聞こえた気がした。そして顔面数ミリを何かが通り過ぎて後ろで地面が弾ける様な衝撃が背中と耳に直撃した。
おいおい、あんなの喰らったら僕の装備じゃ大ダメージになってる所だぞ。なんて事を親友にしやがるんだこいつは。一体僕がどれだけ頑張ったと思ってるんだ。

「お～いスオウ。これ以上シラを通すと今のより危ない事するぞ」

ガシッと頭をしっかりと掴んできたアギト。なんだかミシミシ聞こえるけど、これもダメージに成るのかな。て、言うか今の俺にはそれでも痛いんだけど。
かなり感覚がリアルのソレと近く成っている……と、言うかほぼ変わらないのかも知れない。それだとこの状況も本当にやばいな。
でも、久々に調子が戻ってるアギトに素直に屈するのは性にあわない僕である。

「ふん、今のより危険な事だって？　そんなの直撃しか無いけどそれは無理だろ。僕が普通のプレイヤーならお前は躊躇無く当てそうだけど、そうじゃないからな。
幾ら性格が悪くて口だけで頭も悪いからってお前一般的だもんな」
「ブスッとやっちゃいますかアギト様」

不意に会話に割り込んできたセラが何やら物騒な事を提案してる。

その手にはセラの同じみ暗器が握られていた。いつも太股に巻いてるであろうクナイのちっちゃい版みたい奴だ。
アギトは何か趣向する様に勿体ぶる。でも、首を振ってその案を否定してくれた。まあ当然だな。それは洒落に成らないぞ僕の場合。
だけど安心した僕の耳に聞き捨て成らない声が聞こえた。

「そんなことより効果的な武器を俺は持ってる」

そう言って再び俺に近づくアギト。なんだ効果的な武器って？
まさかＬＲＯにはＨＰを削らずに痛みだけを与える様な拷問器具が？　……って、んな訳ないか。
元々、痛みを具体的に表現してる訳じゃないＬＲＯで死がない拷問なんて余り意味がない。それこそ効果があるのは僕かセツリ位だろう。
では一体何だろう？　想像も出来ない。

「言っとくが、これはＬＲＯは関係無いぞ」
「何？」

アギトの発言に更に困惑する。ＬＲＯに関係無いって、それはどう言うことだよ？　リアル方面の事なのか？　それだと色々僕の弱みを知ってるだろうけど、今言う意味あるか？　てかそれは、ここの中じゃ禁句だろうに。
まあ、その配慮かアギトは小声で言葉を発する。

「スオウ覚えてるか？　中学の修学旅行の時の事。あの晩語り合った女子の事をさ。お前が日鞠との事をその他大勢に詰め寄られた時に言った言葉をだ」
「は？　そんな昔のこ……と」

んん、待てよ？　中学の修学旅行に確かにそんな事あったな。あの頃もずっと日鞠は僕の世話を焼いてたから、いろんな噂があったんだよな。そしてそれを妬む男子が多数で友達らしい友達が出来なかったんだ。
でもあの時はヤキモキした男子達が僕達の関係を確かめようと詰め寄って来て……何て言ったんだっけ？　確か

【日鞠とはお前等が思ってる様な関係じゃねーよ。僕達は幼なじみだから……まあそれは、僕にとっては……】
「うあああああああああ！　それをどうする気だ！」

思い出した。信じられない恥ずかしい事を僕は言っていた。そうだ、それから何故かそいつ等が僕の背中を叩くという変な現象に繋がって、普通に喋るくらいにまでなっていたんだ。

「思い出したみたいだな」
「ぐっ……どうする気だよそんな昔の事」

何て爆弾をアギトに握られてたんだ。殴ったんだからそんな記憶無くしとけよと言いたい。僕よりでかいくせに細々とした昔の事を良く覚えてる奴だ。
僕の目には既にこいつが邪悪な笑みを浮かべてる様に見える。てか浮かべてるな。ニヤニヤとどっかの嫌みなエルフと同じ顔してるぞ。
そして紡がれた言葉はまあ、ある意味想像通り。

「勿論、日鞠に教えてやる」

それしかないよな。でも敢えて言おう！

「ふざけんな！　その件はお前があの時見つけたレトロゲームで片が付いてるはずだろうが！」
「まあ、あの時はあの時だよな。今のままの態度じゃうっかり日鞠の前で口を滑らせてもおかしくない。はぁ～済まないスオウ。だけどうっかりはしょうがないんだ」

なんてムカつくうっかりを振りかざすんだコイツ。中学の時だって苦渋の決断だったんだぞ。アギトの口止め料にしてはあれは高かったんだ。
けど、あの言葉を聞かれるよりはと思って大枚はたいたんのに……おかげで修学旅行を楽しむための小遣いがほぼ消えたんだ。ソレをまた繰り返させようと言うのか！？
鬼だコイツは。親友なんて返上しちゃる！

「おいおい、良く考えろ。あの時と違うぞ、俺が要求してるのは」
「は？　ああ、二刀流がどうとかだっけ？」

う～ん実際、あれは秘密としときたい所だけど……こうなったらしょうがない。てか、吐くしかねぇーよ。折角日鞠とも少し関係が変わりつつあるのにあんな言葉は聞かせられない。
あんな……まるで僕が日鞠を……たた大切に思って……って言えるかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　間違いなくこっちの方が優先度が高い。
それにもう殆ど気づいてるみたいだし、隠す意味も無いのかもだしな。この場合はやっぱり愛の正体……って言うのも変だけど、気付いてるって事だよな？
愛は直接は言わないって言ってたけど、意図は分かっただろうしその推測には至ると思うんだ。まあ、どっちでも僕には良いこと何だけど。実際愛が何で言いたくなかったのかわからない。
最初は警戒されるとかいきなり当人同士ってのもどうかがあったと思うけど、最後の方はもう十分だったと思うんだよな。ヒーロー

ショウまでしか知らないけど、最後の方は何か晴れやかな空気が伝わって来てた。
　最後の拳には迷いは無かったしな。ここＬＲＯにアギトが来た時点で僕たちの目的は達成された訳だ。そう思おう。

「まあ、実際あんなに動けるとは思わなかったよ」
「じゃあなんであんな事したんだよ。自信があったから挑めたんだろ？　お前俺に喧嘩で勝ったことないんだからさ」

　はっきりとイヤな事実を言う奴だ。けどその事実は今日限り使用不可なんだよ。何てったって僕は勝ったからな。せいぜい僕を怒らせないようにすることだなアギト。
　こっちじゃ、ああも簡単には行かないだろうけど、その内こっちでもちゃんとあしらってやるさ。

「別にあの時のお前になら負ける気がしなかった。それだけだ。ヘタレてたからな」
「本当にそれだけか？」
「……ああ、それだけだ。何だよ一体」

　やけに気にするな二刀流の所。自分がヘタレてたのを認めたくないとか、二刀流は卑怯だったとでも言いたいのか？　まあそんな表情じゃ無いのは見ればわかるけど・・アギトは真剣に僕の顔を見て居て、そしてため息を付いた。

「はぁ、お前少しはおかしいと思えよな。ゲームが出来たからって造れない様に、ＬＲＯで出来ることがリアルで出来る何て事も希なんだ」
「ふ～ん、でも結構普通に出来たけどな」

あのヒーローショウの舞台でやったときは、こっちで戦闘を行う様な感覚にきっと似てた。と、言うか特に違和感がなかった。
僕は一体何でリアルとＬＲＯを隔ててるんだろう。それを考えると少し怖いな。

「それが普通じゃないんだ。お前、やっぱり確実に浸透率ってのはあがってるぞ」

アギトは僕の肩をつかんで真剣な眼差しでそう言った。これをあそこまでして聞き出したかったのか？　それはつまり僕の為……浸透率を実感させたかったって事か。はは、コイツ笑わせる事をしてくれる。

「そんなのお前に言われる間でもなく日々実感してる。それにその程度の事じゃ、後どれくらい持つのか分からないから結局意味ないし」
「それは……そうかもだがな」
「まあ、でも随分余裕じゃんアギト。凹んでた時にそんな考察する何てさ。自分の事だけで今は手一杯だろ？　なら自分の範囲だけみとけよ。
お前の悪い癖はなんでも手広くやろうとする事だ。図体デカくて手足も長いからか知らないけどな、人間大抵一つの事で一杯一杯だろ。
だから他の事は一番大事なことをやってそれからにしとけよ」

僕は暑苦しいアギトから離れて立ち上がる。解放されて背筋と腕を夜空に向けて伸ばすと、ポキポキと音がした。う～んこれは他のプレイヤーも鳴る音だよな……と少し不安になる。
「はは、お前も言うように成ったなスオウ。まだまだ初心者の癖し

てさ」
「うるせーよ。僕が言いたいのはつまりだな。そうそうやられたりしないから気にするなって事だ。それに今はこれがある」
僕はそう言うと腰に挿してある剣を引き抜き、掲げてクロスさせた。その剣は夜を飾る満点の星空の輝きを集めるかの様にして薄い光を放っている。
それを見たアギトが静かに息を飲む動作が見て取れる。そして呟いた。
「それが復活したシルフィングか……なんだか凄みがあるな」
そう言えばアギトはこれが初めてだな、この剣を見るのはさ。あの時はボロボロで何も目に入ってなかった感じだったから、事実上初対面。
確かにそれには激しく共感する。確かに凄みというか、そういう重圧を感じる剣なんだ。
「ああ、凄い剣だぞ。『セラ・シルフィング』僕の新しい相棒だ」
「セラ・シルフィング……」
アギトは何気に続けただけかもしれないけど、それだけでこの剣に魅了されてるのを感じる。僕は軽くアギトの前で剣を振るった。二刀だからどうしても体まで続いて、振るうと言うより舞うみたいに成っていただろう。
剣の薄い青い光が尾を引いていくのが僕には見えていた。少し回転を加えての六連撃。決まった瞬間に風がそこから巻き起こった気がしたけど、多分後ろから吹いただけだろう。
「なんだか随分二刀流も様に成ってきたな。最初は止めといた方が

良いって言ってたけど、こうやって見てるとお前の選択は正しかったんだな」

アギトは軽く拍手をしながらそんな事を言った。そう言えば最初は二刀は無理だって言ってたな。まあ、あの時はただ格好良さそうで余り数が居ないってだけで選んだでただけなんだけどな。

別に何が何でもって訳じゃ無かった。だけど直ぐにそうも言ってられなくなって……気付いたら僕にはこれしか無かっただけだ。セツリを助けるにはさ。

「ま、様に成っただけだけどな。そういえばお前は良いのかよその槍で？　でっかい剣と盾の奴が切り札だろ？」

そう僕が発するとアギトは「良いんだよ」と言って投げた自身の槍を拾いに下に降りて行く。そして地面に突き刺さったそれを握り引き抜いた。

「こっちが俺の本職だ。あれは借り物の力だからな。お姫様を助けるのそれじゃあ示しが付かないだろ」

「確かにな」

僕達はフィールドの上と下で視線を交差させてる。それぞれ自分の武器を信じてる目だ。あの時の弱いアギトじゃもうない。

その時、後ろから複数の足音が更に駆けて来る音が聞こえる。

「揃ったようよ」

いち早く視線をそちらに向けていたセラが呟いた。そして僕はみんなをアギトから見える位置に横に並んで貰った。その数ざっと二十人。勿論見知った面々ばかりだけどそのコネの人達も何とか集め

た。
まあ僕は人集めには駆り出されなかったけどね。だけど丁度二人は僕の力で確保した。アホにもこの事態のアルテミナスに入ろうとしてた二人「エイル」と「リルレット」だ。
そして勿論シルクちゃんにテッケンさんに鍛冶屋は定番。
「これが僕らの戦力だ。不満があるなら言ってみろアギト」
僕の言葉にアギトは目尻に涙を溜ながらも笑みを見せて言葉を紡いだ。それは精一杯の感謝と勇気のお裾分け。
「ない……ある分けない。ありがとうみんな」
僕らはそれぞれにそんなアギトに声を掛ける。気分は既に最高潮。その時、僕らとアギトの間に何かが落ちてきた。それは一人のプレイヤー、緑の髪に切れ長の耳、そして目が点なエルフ。その名も「ノウイ」
彼はガバッと顔を上げて叫ぶ。
「動いたっす！　やっぱり『ジャハラ平原』の大規模な展開は敵の目を引きつける為の物っす。ガイエン様は親衛隊を連れて『タゼホ』に向かってるっす！」
全員に緊張が走る。決戦の地は決まった。後はただ駆けつけるだけ。ヒーローの様に颯爽と。

月の無い夜（後書き）

第六十八話です。
遂にアルテミナス編クライマックスに入ります。皆さんにハラハラドキドキワクワクを届けられる様に頑張ります！　スオウは？　アギトは？　望むものを取り戻せられるのか？　そしてアルテミナスの存亡は如何に！？　って感じで。
次回は火曜日に更新します。それではまた～。

決戦の地　『タゼホ』（前書き）

僕達はタゼホを目指す。風を体に受けながら、星々の海を渡る様に。仲間と考えを伝えながら時には関係ない事を言ってみたりだ。そして辿り着いたのはタゼホの裏手側。僕等は戦いの只中に遂に飛び込む。

決戦の地　『タゼホ』

「本当にお前等っていつもいつもアホな事に巻き込まれてるよな。死ねばいいのに。てか、なんでまだ生きてんだ？」
「お前も相変わらず口悪いなエイル。少しはテッケンさんを見習えよちびっ子」
「なんだとー！　あの人と一緒にするなぁ！」

『タゼホ』へ向か道中、急いでる割には緊張感無くそんな会話を繰り返してる僕とエイルである。今回も殆どモンスターを見かけない。三日前と同じだな。
もしかして元々配置されてたモンスターを除外する事でその容量まで一杯に奴らはモンスターを召還してるのかも知れない。だからこそあの桁違いの数が居るのだろう。
それかただ単に邪魔だとか？　道を阻む奴らが居ないのは幸いだけど、タゼホに一体どれだけの数のモンスターが現れてるか想像したくないな。
前の森は森だけにどれだけいるかなんて全貌は分からなかったけど、タゼホは小さな村らしいからな。もしかしてモンスターがすし詰め状態とかだったらイヤすぎる。
だけど敵の大部隊も『ジャハラ平原』だから、そこまで……という事は無いだろうと思うけど、どうだろうな。実際奴らがどれだけの数居るのかは具体的には分からないんだ。
アルテミナスを落とすためにその殆どを割いてるのか。それとも僕達の行動を読んでタゼホにも戦力を残してるのか……ぎりぎりまで見つけられなかった僕らには分からない。

「どうしたんだよ急に黙って？　死ぬところでも想像したか？」

うぐ……このちびっ子は本当に洒落に成らないことを連発するな。自殺願望でもあるんじゃないか？

「お前のその冗談、僕には冗談に成らないんだよ。自制しとけ」

「言ったくらいで死ぬ玉だったのかよお前」

ううん？　なんだそれ？　もしかしてエイルの「死ね死ね」言う口癖は気遣いの現れとか。なんて分かりにくいんだ。けど、実際そうかは分からないし……そうとはとても思えない。

言いくるめられてる？　視界の横をちょこちょこ走ってるもう一人のモブリは要注意だからな。

「死なないけど縁起は悪いだろ。僕達は負けるわけには行かないんだよ」

「俺らからみたら負けない事の方が不思議な位だけどな」

「じゃあなんで僕の話に乗ったんだよ。負けたらリスクしか無いのにさ」

まあそのリスクも、具体的な『死』なんて物じゃなくゲームでのデスペナルティだろうから気にしないでくれる人だって居る。

主にテッケンさんとか。どうやら彼は三日前の森でやっぱりやられてたらしいからな。そして復活地点に設定してたアルテミナスに戻ったとき、連続するかも知れないデスペナルティを恐れずにアギトを助ける為にアルテミナス軍に向かったんだ。

だから僕らはあの時合流できた。もしもアルテミナスの現状を知らなかった僕らがのこのこ戻ってたらどうなってたか分からない。

多分だけど楽しくない結果に成ってただろう。それもこれもテッケンさんのリスクを恐れない行動のおかげ。僕らの中では一番彼がヒーローかも知れないな。だから隣のエイルにも同じモブリという種族として、せめてテッケンさんの十分の一位の心意気を持ってほ

しい。
まあ、協力して貰ってるのはこっちなんだからそんなこと言えないけど。本当になら何で僕の話に乗ったんだろうかコイツ。
「それはだな……まあつまり……」
歯切り悪くエイルは呟いて後ろを振り返っている。僕もつられてその視線を追ってみた。そこにはリルレットの姿がある。
「ああ、なるほどな」
「なあ、アイツどうだと思う？　リルの事どう思ってるのか知ってるか？」
「いや……まあ、それは知らないけどさ。僕達が誰を助けに行こうとしてると思ってんだよ」
エイルはいつも不機嫌そうにブスッとしてるけど、僕よりもアイツが居るとその顔は更に険しくなる。なかなか面白く無いように見えるみたいだ。
「はあ、あの子だろ？　あの悪魔に囚われてた子。それが何だよ」
それが何だよとは言ってくれるな。まあエイルにとってはそれより重要な事がアレ……何だろうけどさ。乗り気じゃないのに付いてきたのはそもそもリルレットが協力するって言ったからか。
そう言えば最初にそう言ったのはリルレットだった。エイルは渋々付いてきただけ……と言うか心配事が僕らにはあったから。
そしてその心配事は的中した感じな訳だ。リルレットの横にはアギトが居る。それがイヤなんだなエイルはさ。リルレットはアギトを好いてる……てか、憧れてる感じだからな。
でもだからこそ、これから助けようとアギトがしてる人が重要な

訳だよ。リルレットの心がどっちかは知らないけど、アギトの心は決まってると思う。

「だからセツリだけじゃないんだよ。今回はな。アギトもアギトで助けなきゃいけない人が居るんだ。だから安心しとけよ」

「ああ、つまりアイツはその人の事をって事か！　なぁ～んだ」

僕の言葉を聞くとエイルは嬉しそうにその小さな体で跳ねていた。だけどその時直ぐ横からテンションを下げるような言葉が入った。

「幾ら喜んだところであの子があなたに振り向くとは思えないけど」

「ああん！？」

ぐるっと回ってきた顔が僕を睨む。確かに僕の方から聞こえたかも知れないが僕じゃないぞ。言ったのは僕の影に隠れてるセラだ。

「どう言うことだよ！　ってか別に僕はそんなこと思っても……」

今更エイルは自身の気持ちを隠すような事を言うけど、それは遅すぎる。さっきの行動と発言でバレバレだ。それは初対面で有るはずのセラにもさ。

「まあ私には関係無いことで興味も無いからどうでもいいけど、あの子の視界に入りたいんなら一回告白でもしてみたら？」

「ぶっ！？　はあぁ？　何言ってるんだよアンタ！」

エイルは仰天して転びそうになった。そして密かに僕も仰天してたよ。マジ何言ってるんだセラの奴。

「俺は視界に入りたいからずっと一緒に……それにそう言う対象に

見られてないって知ってるし。けど一緒にいればいつかはとか、それだけで……」
「そんなのずっとそれが続いて終わりに決まってるじゃない」

ズガーン！　と目に見えない何かが振り卸された気がした。そしてそれはエイルの精神に直撃してる。フラフラと蛇行してスピードも落ちて後ろの方へ。
そしてリルレット達がそんなエイルを発見した。

「ちょっと、エイルどうしたの？　具合悪い？」
「大丈夫かエイル？」

心配されたい人と心配されたくない人に同時に声を掛けられるエイル。有る意味あの光景も無様だな。リルレットはフラフラのエイルを抱き上げてこちらに近寄ってきた。

「一体どうしたの？」
「いや、何て言うかその……なあ」

本人には流石にいえない。それに僕はこういう恋愛沙汰には免疫がないんだ。だから原因の発端を作ったセラに助けを求めた。

「別に何でも無いですよ。ただちょっと恋の極意を教えてあげただけです」
「恋！？　えっえ？　そうなのエイル？　誰々？　私知ってるかな？」

瞳をキラキラ輝かせて抱き抱えるエイルに言葉を掛けるリルレット。流石女の子。こういう話は大好物らしい。だけどその言葉はエイルには可哀想だよ。

なるほどね。本当にリルレットはエイルに眼中無いみたいだ。自分には結びつかないんだな。エイルがリルレットと一緒に居る理由は分かったけど、じゃあリルレットは何でエイルと一緒に行動してるんだろう。

エイルがしつこいからとかだったら笑えるけど、リルレットはそういう子じゃないし……少しは脈有りそうな気もするけどな。

そして当のエイルは大好きな子の腕に包まれて幸せそうで辛そうな複雑な感情を表現してた。そして決め込んでるのは無視だ。まあそれしか出来ないだろう。

リルレットは何も言わないエイルから目を離して僕らに交互に視線を送る。

「僕はまあ……何ともいえないな」

「別に貴女が気にする事じゃないですよ。的確なアドバイスをしましたから。とっとと告白しろと」

ゲホ、ゴホっとエイルは噎せる。何当人に言ってるんだと非難の目が見て取れるが、セラはぬいぐるみ化してるエイルには視線を向けない。こっちも無視だ。

「こ……告白ですか？」

セラの言葉を聞いたリルレットは頬を染めてセラの言葉に聞き返してる。これが普通の女の子の反応かな？

「ええ、話を聞く限りその彼は彼女の視界にも入ってないので、まずは告白で強制的に視界に入る様にしなさいと言うことですよ。

告白されれば大なり小なり相手を意識してしまう物ですからね。だからフラれてもまずはいいんです。というかまずはフラれるでしょう。

けど始まってもいない勝負で負けたままでいるよりは良いじゃないですか。強制的にゴングを打ってそれからですよ」
「な、なるほど～。確かに告白されたらその人の事、意識しちゃいますよね」

セラの案はかなり強引だと思うけど、リルレットは頻りに感心してる。そしてリルレットの発言に腕の中のエイルは何か思案しているのを僕は見逃さなかった。
試してみようとか思ってそうだな。この戦いが終わって次に会った時、二人一緒に居なかったらきっとそれはセラのせいだろうな。

「そうそう、告白から始まる恋もありますよ」
「そうですね。自然と見る機会が増えたりしちゃいそうですもんね」

意外に二人は気が合うのか良い感じだ。まあ何故かセラがブラックな一面を隠してるからかも知れないけどさ。アイツはシルクちゃんにも対応良いし……もしかして女の子の方が好きとか！？
それは凄い事実に気付いてしまったかも知れない。

「ちょっとアンタ。何か変な事考えてない？」

超直感。女の感って怖え～と思った瞬間。僕はしどろもどろに言葉で誤魔化す。

「いや～別に、何でも無いよ。感心してただけだ。女の子って本当にそういう話好きだな～ってさ」
「まあ女子ですから」

何故かセラは鼻を高くしてそう言った。そしてリルレットも「うんうん」と頷く。まあこのことは僕の胸にしまっておこう。そう他

言出来る事じゃないしな。
吹きすさぶ風が次第に重さを乗せていく様に感じる。それか重い空気を前から感じるとでも言うのか……そんな気がしてくる。
多分タゼホはもうそんな遠くない。それなりに距離は短縮してたからな。ノウイのスキル『ミラージュコロイド』とかでさ。でも流石にこの人数を連続して瞬間移動出来ないらしいから、こうして走ってもいる訳だ。

「おい、スオウ。なんでガイエンの奴はわざわざアイリを戦場に連れていく？　アイツはもうカーテナを自由に使えるんだ。そんな必要ないだろう」

いつの間にか横に並んでいたアギトがそんな事を言う。それはもう一つのノウイからの情報だ。ガイエンがわざわざアイリともう一人を親衛隊の他に連れ立ったってさ。
まあアギトの疑問は分かるよ。けど……僕達は集めた情報で一つの可能性を考えている。

「そうでもないかも知れないんだろ。良く思い出せよアギト。ガイエンがカーテナを使ってる時、黒い影だっけ？　カーテナの呪いって奴はガイエンじゃなくアイリに出てたんだろ？」
「そういえば……そうだったな」

アギトのあの日の事を思い出すように少し遠くを見るように空を仰いだ。そして自分の不甲斐無い姿も思い出したのか、少し唇を噛んでいた。
そんな様子を横目で僕は再び口を開く。

「つまり、まあもしかしたらだけどさ。奴がカーテナを使えるのには制約が有るんじゃないかって事だ。例えばアイリが一定距離以内

に居ないとその力を使えないとかさ。
それは殆ど憶測だったけど……奴がアイリまで連れ出したとなると結構当たってるかも知れないな。ノウイが言ってた『リア・ファル』とか言うアイテム……あれがそもそもおかしいとかさ思わないかアギト」
「おかしい？　確かにあんなアイテム聞いたことも無かったが、ＬＲＯは広大だ。誰にも知られてないアイテムが有ったって不思議じゃない」

それはまあ、そうかもな。アギトは僕より一年以上早くＬＲＯに来てるんだから、そう言われると僕にはなかなか返しようが無い気もする。
けどここで僕と同じ様な考えのセラが出てきてくれた。
「確かに……そのアイテムが正規のルートで出現した物という線も無くはないです。このＬＲＯは新アイテムが日々発見されるような世界ですからね。
しかしアギト様。何でも整い過ぎてたらそれは偶然では済まなくなる物ですよ」
「整い過ぎてる？」

セラの言葉に更に不信感を募らせたようなアギト。そしてこの会話には今ここに居るみんなが耳を澄ましてる様な気がするな。
「ええ、モンスターの大量出現にクーデター時の状況は色々と重なります。思い出してください。アギト様が一番それを直に感じてる筈です。
そしてその時感じた『なんで』『どうして』を繋げると一つの推測にたどり着きます……それは」
「ガイエンの奴がセツリを浚った奴と繋がってた？」

まさに肌で感じてたアギトは僅かな会話でそこへ思考を持っていった。まあ頭悪い奴じゃ無いし……ゲームの事になると特にだから、予想よりも早かった。
そしてそんなアギトの発言に驚いてるのは、周りのシルクちゃんテッケンさん鍛冶屋を抜いた面々だ。そう言えばここら辺は伝えてなかったよな。
僕は「ふえぇぇぇ」とか言ってるリルレットとかに視線投げて言ってあげる。

「まあそれも臆測だよ。確証はない。ただ、そうとも考えられるだけ」
「だけどその臆測の上でなら『リア・ファル』の存在を百歩譲って認める事が出来ます」
「どういう事だ？」

アギトは今度こそ首を捻ってる。そして周りのみんなは答えが欲しくてウズウズしてるのが効果音で聞こえてきそうだ。答えと呼べる程の事でもないんだけどね。
話さなかったのはそれが主な原因だ。確証が無い情報なんて無駄じゃん。しかし百歩譲ってって随分セラは譲った物だ。コイツの性格上それは希だろう。

「アギト様にはまだ話して無かったですが、私達は『復活の泉』で敵の情報を入手しました。それに寄るとどうやらモンスターを率いてる奴はシステムの裏側の存在らしいです」
「システムの裏側って何だよ？」

うん、まあそうなるよな。実際僕らもそこら辺はわからない。周りにも一杯ハテナが見える。

「厳密にはわかりませんけど、システムに介入出来るって事じゃないでしょうか？　その力があれば誰も知り得ないアイテムの情報も……いいえ、もしかしたら創造だって出来るかも知れません」
「それでガイエンはあんな物を……でも待てよ。ガイエン側とモンスターが繋がってたのなら何で今潰し合おうとしてるんだよ？」

それは当然そこに行き当たる。僕もセラもそうだった。けどそれはガイエンの性格を知ってるアギトなら既に分かってると思うんだ。だから言ってやろう。
そろそろセラに取られた役を取り戻す為に。

「そんなの簡単だろアギト？　それぞれが目的を達したからだよ。ガイエンは国を、敵の親玉はセツリを手に入れて目的は達成してる。そしたら後はただ邪魔なだけだ。敵の方は知らないけどさ、ガイエンは自国の領土を占拠されてるのを我慢出来る質じゃないだろ？」
「確かに……そうだな。アイツはエルフに誰よりも強い誇りを持っている。だからそんな事許して置けるはずが最初からない」
「だろうな。元々仲間意識なんてない、ただの協力関係……いやそうでもないな。ただどっちも利用したに過ぎないんだろうさ」

だからこうして潰し合おうとしてるんだ。それぞれを利用して、用が済んだらポイッと捨てる事を初めから考えてたんだろう。

「ガイエンの奴……なんでそこまで……」

強く強く、アギトは拳を握っていた。確かに本当に、そう言いたくなる。僕はガイエンの事を殆ど知らないから「あのクソ野郎がぁ！！」て感情だけだけど、アギトはきっとそうじゃないんだろう。
セラに少し聞いたけど、アギトとガイエンとアイリは三人でアルテ

ミナスを変える為に立ち上がったとかどうとか。
いわば同士みたいな物だったんだろう。それなのに違ってしまったそれぞれの道。僕には分からないけど、端からみたらそう見える。
その時先頭を走るノウイが声を上げる。

「ここを抜ければ眼下にタゼホが見えるっす。いよいよっすよ。天国か地獄かっす」

ノウイが言う天国はモンスターが余り居ないって事だろうけど、残念ながらそんな期待はみんなしてないと思う。というか伝わってくる物をみんな肌で感じてる。
多分モンスターは居るだろう。多分だけど絶対という矛盾を抱えながら少なくとも僕はそう思っている。空気が震えてる気がする。重い風はそれだけ吹いてくる場所が通り難いからじゃないかと感じる。
そして僕らは遂に『タゼホ』を視界に捉えた。その村は本当に直ぐ下に広がっている様だ。どうやらタゼホは崖の下に作られた村みたいで、僕らはその崖の上に居る。
でもこの崖を下ることは出来そうにない。まさに断崖絶壁風に直角に切り立っていて落ちたらそれだけでＨＰは尽きそうだ。
タゼホの村は後ろを崖に、前を川に挟まれて自然の城壁を築いてる訳だ。進入するならあの川に有る正門からしかアプローチの手段は無い様に思えるな。普通は。

「良く見つけたなこんな場所。なんでここにはモンスター居ないんだよ」
「俺怖いのイヤっすから。それに逃げ続けてると自然とわかるんすよ、穴の開いたような空間が。後ここからじゃタゼホには進入ルートないっすからね。
だからここには奴らは居ないっす」

う～ん格好良いのか悪いのかよく分からない発言だ。素直に凄いとは思うんだけどね。眼下に有るタゼホの村を眺めるとやはりモンスターの姿が確認できる。でも思ったけどここ崖だから風ってあんまり関係なかったな。
僕の所に届いてた風は奴らの影響受けてねーよ。ただそうだな、一概に外れても無かったし良しとしよう。

「本当に村をモンスターが蹂躙してますね」

マジマジとタゼホを見ていたリルレットがそんな事を言った。それは信じられない様な物を見る声。確かに眼下に広がる光景は異常な物だ。
今夜は月が無く暗いからかモンスターどもは松明の火を掲げている。そこかしこから見えるそんな明かりのおかげでタゼホの全容を何とか知ることが出来る感じだけど、逆に言うとそれだけ満遍なくモンスターが居ると言うことだ。
その時轟音が響いて村の正門が砕かれた。一斉に松明の明かりがそちらへ移動を始める。

「な、何ですか？」
「ガイエン達だろ。アギト！」

僕の言葉にアギトが進み出る。眼下には白い鎧がチラホラ見え始め、そして巨大な力が次々に建物ごとモンスターを押しつぶし吹き飛ばす。あれがカーテナの力。

「ああ、あそこにアイリが居る。ノウイ頼む」
「ハイっす！　ミラージュコロイドがここからの道を作るっす！」

宙に浮く鏡が直線に並ぶ。僕達がここに出たのは安全でそして道があったから。みんなを見渡すとそれぞれが頷いてくれる。ここまで来て怖じ気付く奴らじゃないな。

「行こうアギト。伸ばした手が届く所まで！」

「よし！」

アギトを筆頭に僕らは鏡へ一斉に飛び込んだ。月の無い空を僕達は一瞬で駆け抜ける。

飛び出したのは地面と空の中間。親衛隊とモンスター共の絡み合う頭上。突然現れた僕らにその場の全員が固まった。僕とアギトは武器を振るい、降り立つ空間を作る。

最後に出てきたノウイが何故か着地をミスったのは謎だが、その時既に二人は睨み合っていた。

「アギト……貴様今更何しに来た？」

「アイリを助ける為……そしてお前を止める為だガイエン！」

決戦の地　『タゼホ』（後書き）

第六十九話です。
いよいよ本格的に戦闘開始。期待に添えるように頑張ります。次回は木曜日に更新です。

三つ巴の戦場（前書き）

遂にタゼホに集結したそれぞれの思いを持った者達。そしてガイエンとアギトの言葉の投げあいの最中に突如響く声。それは僕が待っていた奴で、多分この出来事の原因を作った奴。

カーテナをも防ぐモンスター共の親玉は相も変わらない能天気な声でこの場を制する。そしてそんな奴に対してガイエンは何かを呼び出した。それは奴への切り札らしく……でも、僕達はそれを目にした時に驚愕し飛び出す。

だってそれは……

三つ巴の戦場

潰されたモンスター共が持っていた松明が、同じく潰された建物に移って行く。瞬く間に暗かった周りをオレンジ色の炎が包んでいき、夜の空を染め出した。

燃え盛る炎の影……だけど辺りに漂う熱量はその炎だけじゃないだろう。親衛隊にガイエンの部隊に、僕達に、そして周りで荒い息を吐き続けるモンスター共。

それぞれから熱気が上がっている。いきなりの登場で止まった場だけど、何かのきっかけで爆発したように動き出すだろう。モンスター共にとっては僕らも親衛隊も同じプレイヤーに変わりはないんだからな。

一番数的に少ない僕らは登場と同時にそれぞれ武器を抜き固まってモンスターと親衛隊を権勢している。そしてこの場で言葉を紡ぐのは中央で向かい合う二人だ。

「まさか、まだ夢物語を語るとはな。貴様がアイリ様の何を助ける？　ナイトオブウォーカーを無くした貴様がカーテナを持つ私に勝てるとでも思ってるのか？

遅いんだよ貴様は！　何もかもな！」

ガイエンは小さな剣をこちらに向かって構えている。それは元来何も切れなさそうな印象の剣だ。だけどあれが『カーテナ』なんだろう。上から見てるだけでその力が絶大なのは分かった。

その力が今こちらに向けられてると思うだけで緊張感が増すな。あれだけの威力なら固まってる僕らごと潰せそうな気がする。

「確かに……遅いと思ったさ。全部が手遅れだって、そう考えた。だけどそれでも『諦めるな』と言ってくれた友がいる！　待ってて

くれた仲間が居た！　そして何より『信じてる』と俺に伝えてくれた奴が居る！
　気付いたんだよ。諦めるには早すぎるって！　ガイエン、アイリはどこだ！？」

　アギトの声に迷いは無く、滲み出るような決意が周りを少し退ける気さえした。だけどそこは流石と言うべきかガイエンは微動だにしない。

「アイリ様が何故ここに居ると思う？　戦場に彼女を連れてくる理由なんて無いだろう？」
「ふざけるなよガイエン。お前のそのリア・ファルがアイリなしでは使えない事くらい分かってる！　だせよ。アイリをこの場に！」

　ヤバいな……僕らは肩を寄せあってモンスター共に武器を構えながらそう思っていた。奴ら今にも飛び込んで来そうだ。そうなったら一気に乱戦。
　数が少ない僕らは圧倒的に不利だ。それに目的はアイリだけじゃない。セツリの所に行くためにもそれなりの数は必要なんだ。
　それには親衛隊には僕らに目もくれずにモンスターの相手をしてくれてる方が得策。そしたらモンスターにとっては敵が倍になるわけだからな。
　けど、今は親衛隊まで僕らに剣を向けている。これは僕らの敵が二倍だよ。乱戦の中でもそれぞれがモンスターを相手して目的の相手とは一騎打ちが理想的だ。
　それにはきっとタイミングが重要。だけどまだピースがこの場に揃ってない。確認したい奴が居るんだ。そして印象的にはこういう勢揃いみたいな場所に来たがる奴と思ったんだけど、やはり一回喋った程度じゃ間違いだったかも知れないな。

「アイリアイリとうるさい奴だな。私のリア・ファルも別にアイリ様無しで使えない訳じゃない。それは首都限定だがな。首都以外では確かにアイリ様が必要だ。
だがなこんな危険な所にわざわざ入れはしない。もっと安全な所に居て貰ってる」
「なるほどな。つまりはお前がここでカーテナを使えるギリギリの範囲に置いてるのか。フィールドにモンスターは居ないし確かにそれで安全かもな」
「ああ、私は優しいからな」

不愉快……そんな思いが募ってくる。僕は初めからガイエンに良い印象なんて無かったけどさ。それが変わることは無さそうだ。何が優しいだ。
ただ邪魔なだけだろうし、きっと何らかの方法で拘束してるんだろう。そんな奴を優しいなんて絶対に言わない。だけどアギトは何かを言い返すことはしなかった。ただ目を閉じて何かを感じてるみたいな様子。
それが何かは僕には解らないが、数瞬の後にアギトは言い放った。

「なら、お前を倒してアイリを迎えに行くだけだ！」
「出来るか？　力をなくした貴様にそれが！」

アギトは一気に飛び出して槍をガイエンに突き立てる。スキルを宿したその一撃をガイエンは動くことなく受け止めようとしてる。
「力ならあるさ！　アイツと出会ったときから磨いてきた力が俺にはある！」

アギトの槍とガイエンのカーテナがぶつかった。その瞬間に大きな衝撃波が辺りに巻き起こり、僕らはそれぞれ足を踏ん張った。

「ぐ……ぬぅぅアギト……」

衝撃波が抜けた後に映った光景はアギトの槍がカーテナにピタリと止められた物だった。ガイエンは一歩も動いてない……いや――

「うおおお

き、その姿は近くの建物にぶつかった。そしてその光景は親衛隊にも衝撃を与える。
信じられない様な物を見る目でガイエンの消えた建物を凝視していた。アギトはその場で荒く肩を揺らしている。
しかしその時、ガイエンが消えた建物が一瞬で上下に割れた。そして轟音と共に宙に上がった建物が後方に落ちる。その衝撃が地面を揺らし、巻き起こった風が周りの炎から熱気をこちら側まで届けてくる。
建物の中に見える人影の腕は掲げられ、その左手にある小さな剣が上空に黒い影を伸ばしていた。

「はぁはぁ、まぁこれからだな」

そう呟いたアギトは再び槍を構え直す。左手を下ろして、建物の中から姿を現したガイエンに見た目上のダメージはほぼ無い。だけどＨＰは僅かに減少してる。それだけでも大金星何だろう。
ガイエンは悔しそうに口を噛み、その目にはさっきまでの余裕は余り見て取れず、激しくアギトを睨んでる。

「アギト……これくらいでいい気になるなよ」
「それはこっちの台詞だろ。カーテナが有るからって余りいい気になるなよガイエン。所詮それはお前の力じゃないんだからさ」
「きっさまぁあああああ！！」

そう言われた途端にガイエンは何かが切れた様にカーテンを構えた。左腕を右側まで回して溜を作るような格好だ。黒い影が地面に滴るように広がって行くのが見えている。
そして今にも奴がそれを振りかぶろうとした時だ。その場に不釣り合いな程の楽しげな声が響いた。

「あはははははー☆　ガイエン君、そんなに興奮しちゃっておっかしい～」
「っつ！！」

その声にガイエンはとっさにカーテナの攻撃対象を変えた。アギトからその声へとだ。僕らもそこへ一斉に振り返った。場所は建物の屋根。この村にしては比較的大きいその建物がカーテナの攻撃で一瞬で欠けた。
木で出来た外壁と屋根がズバンと言う感じで剥がれて飛んでいったんだ。避ける暇なんて無かったと思う。こっちも姿を確認出来なかった。
ガイエンの奴は思わず反射で攻撃対象を移した感じ。それは、カーテナと言う強大な力を有した今の奴でさえ、さっきの声の主に恐怖を抱いてると言う事かも知れない。
カーテナを有するガイエンがそれほど恐れる相手・・それにさっきの口調……僕にも心当たりがある。これはやっとで揃い踏みしたのかも。
僕は埃が上がる建物を見据えた。

（やられた……なんて事はないよな？）

それは有る意味、とても良いことの様に思える。けどさ、それじゃあ拍子抜けだよ。それにまだセツリの場所も奴らの正体も確かめてない。それじゃあ困る。
その時、一斉に周りのモンスターが吠えた。「グオオオオ！」やら「ガアアアアア！」などの叫びが伝染するように続いていく。
それは自分達の親玉が攻撃された事への怒りであるようにも聞こえるし、悲しみの様にも聞こえなくはない。大量に配置されてるモンスターにそんな感情が設定されてるとは思えないんだけどな。
これだけタイミングが重なるとそんな事を考える。こいつらを仕

切ってる奴はＮＰＣに自我を与える程の奴だ。これが本当の怒りや悲しみでもおかしく無いのかも知れない。

「うる……さい！　何なのよこれ？」

セラは長い耳を押さえて悪態を付く。まあ流石にこれだけの数が一斉に吠え出したら少し怖い物があるな。するとこれが奴らのきっかけになったらしい。

無い頭で考えてたモンスター共の思考が単純な物に統合された様に、その赤い目が一斉に光った気がした。そしてその統合された思考は奴らの次の行動をみれば至極単純。

【その目に映るプレイヤーの排除】

それだけだろう。そもそもこいつらが僕らとガイエン達を見分ける必要なんてないんだからな。単純なモンスター共は決定すると早い。

奴らはまるで雪崩の様にガイエン達との間を隔てる僕らに向かってくる。大地を揺らすような音が集合してる。こうなったらやるしかない。

まだアギトとガイエンの邪魔をさせるわけには行かないんだ。

「スオウ！」

「お前は前の敵に集中しとけ。同時進行で行きたかったけど、こうなったら先行は譲ってやる」

叫んだアギトに僕は余裕の笑みでそう返してやった。そして迫りくるモンスターを見据えて覚悟を決める様に武器を強く握りしめる。

多分みんながそうしてるだろう。

「いやいや……多過ぎだろアレ」
「やるしかないよエイル。私が守ってあげるから、デカいので援護よろしくね」
そんな隣の会話も聞こえてきた。既に逃げ腰の奴はまあ、リルレットがいれば大丈夫だろう。実際
「も、勿論だよ。リルを狙う敵は僕が魔法で消し去る！」
とか言ってる。後衛組は詠唱を開始し、僕ら前衛はそれぞれの武器にスキルの光を纏わせ始める。だけど本当に多い。単発の技じゃそれが終わると同時に押しつぶされそうだ。
せめてもう一回奴等の動きを止めなくちゃ、長くは僕らだけじゃ持たない。
（やるしかないか、イクシード）
多分イクシード1だけでも奴等の勢いは削げる筈だ。そしてその間にそれぞれ対処法でも見つけてくれれば幸いだ。みんなの実力はきっと確かだろうから、勢いに飲まれない限り直ぐに戦闘不能なんて事は無いだろう。
僕はシルフィングを前に突き出し、胸の前で二本を上下に配してその言葉を紡ぐ。
「イクシー」
「切り札見せるには～早過ぎじゃないのかな？　君の相手はそんな雑魚？」
「「「！！」」」
突如届いた声に僕ら全員が振り返った。だってそれは異様に近く

て……視線を向けた瞬間に更に僕らは仰天する。何故ならその声の主は僕らが背中を向け合って作った円の中に居たからだ。
一瞬で僕には解った。こいつがセツリを浚い、僕にふざけたことを抜かしてきた奴だと。けど、いつの間に？　誰も気付かないなんてあり得るか？　もしもこいつにその気があったら、僕らはやられてたかも知れない。
やられはしなくても確実に数発の攻撃は受けていて体勢も崩されていただろう。けど、目の前の女……そう美女は武器も持たずにただ僕にその艶めかしい微笑みを見せているだけ。
その顔、姿は声の印象と随分違うな。バカっぽい喋り方するからもっと幼いのかと思ったらそうじゃない。顔は端正で幼いよりも大人びてると言った感じだし、紅い瞳に月を映した様な長い髪はどこぞの天使か、それこそヴァンパイアの様に見えた。
女神……そう表現した奴の気持ちも分からなくはない。
体をすっぽりとローブの様な物で隠してるのもその要因かも知れない。僕らは誰もが声を出すことが出来なかった。男性陣は当然でも、女性陣まで言葉が喉に引っかかった様になっている。
そしてそんなつっかえを取り除こうとみんなが止まってしまってる。後ろにはいきり立ったモンスター共が迫ってるのに、それさえも頭から抜け落ちた様だ。

「あれれ？　どうしちゃったのかな？　スオウ、何止まってるの？
殺しちゃうよ☆」

トン……と奴の指が僕の胸を叩く。その瞬間、鼓動が一際大きく鳴った音が聞こえた。僕は必死に体の動かし方を思い出そうと力を込める。だけど動くのは指先位だ。
後ろの方ももうヤバい。きっと直ぐそこだ。元々そんなに離れてないんだから、少し目を離せばそれが勝敗を分ける要因になったっておかしくない。

だけど誰もがこいつから目が離せないんだ。モンスター共の叫びが更に大きくなった。目の前の奴を視認でもしたのかも知れない。ならこれは歓喜の叫びかな。
けれどその思いは届かなかったらしい。何故なら目の前のこいつは次の瞬間言い放ったからだ。

「ちょっとー！　うるさいのよアンタ達！　私の楽しい時間を邪魔する気？　少し離れてなさい！」

そして一気に背中に迫っていた圧迫感が消えた……と言うより意気消沈した感じの空しさが伝わってくるようだった。「ボスボス」と地面を踏みしめる音に勢いがない。
それから元の位置に戻ったのか目の前の奴が

「よしよし、私が『いい』と言うまでそこで大人しくしてなさい」

と言った。何とも信じ難いチャンスを不意にした奴だ。僕ら的には助かった訳だから良いんだけど……こいつの目的は何だ？　そんな思いが飛来する。
その時、今度奴は勢いよく１８０度首を回してアギト達の方を向いた。そして同時に響きわたる何かが衝突するような音と空気の響き。僕らは全員、何が起こったのか分からず体だけが条件反射的にビクっとなった。
顔を上げてみると腕を曲げて掲げる奴と、その頭上に何かシールドの様な物が僅かに見える。そしてそれは何かとせめぎ合ってる？

「本当に君はセッカチだね☆　話を終えてからでも良いじゃない。さっきから不意打ちばっかでツッキー驚いちゃうぞ☆」

頬を片側だけ膨らませて怒った風な表情を装う奴。だけどその仕

草が別段気にしてないのを物語ってる。けど、それが気にならないレベルや次元とは考えたくないな。
何故なら奴が受けてる攻撃はカーテナによる物だからだ。奴が向いている方を追うとそこにはガイエンが居る。そしてそのガイエンはカーテナを振り下ろしてるんだ。だからこれはカーテナの攻撃だろう。
ガイエンの顔は奴に比べて晴れやかとはいえないけど、だけどそれほどショックを受けてるようにも見えない。ガイエンは奴がこの程度でやられないと予想してたのかも知れないな。

「ふん、片手でカーテナを防ぐような奴が良く言う。それにここは既に戦場。せっかちなど有りはしない」
「まっ、それもそっだね～☆」

奴は腕を振ってカーテナの攻撃をかき消す。僕はその瞬間を狙って衝撃で回復していた体で二対の剣を振るって奴に迫る。この近さ、避けようも無いはずだ！
冷静に無言で僕の剣は奴に吸い込まれていく。出した音は踏み出す時の一発のみ。しかしそれでも奴は感付いた様だった。
けど、僕の取り柄は反射速度とスピードだ。どちらも乱舞で鍛えてきた切り札の足がかり。斬れる確信があった。別に奴はカーテナの攻撃から僕らを守ってくれた訳じゃないだろう。ただ自分が狙われてたから防いだだけ。
それで僕らが間接的に助けられた形になっても借りなんて思わない。
完全に捉えた筈の奴の体……だけど斬れない。紙の様にその軌道をなぞるみたいに剣が食い込まないんだ。

「くそ！」

だけど奴を遠ざける事には成功した。今の状況は僕達とガイエン達側、その両方の間に奴はいる。たった一人で……だけど奴に緊張の色はみえはしない。まさに化け物だな。

けど緊張してない奴の周りの僕らやガイエン側は否応無くそんな締め付けに確実にあっていた。あのカーテナを防いだ事はそれだけ大きい。

攻撃を初めて見た奴ばかりだろうけど、その噂はＬＲＯ中で轟く程の武器らしいからな。だからそんな武器の攻撃を片手で防ぎ、尚自分を狙ってる奴らの前に立ちこの余裕。その笑顔が僕らには不吉に見えるんだよ。

「きゃはー☆　いきなりスオウに拒絶されちゃった。私ショック」

奴にはダメージにすらなってない。僕は今一度奴に向かって武器を向ける。　今一番奴の近くに居るのはアギトだから上手くやれば連携で追い込めるかも知れない。

丁度アギトは僕の位置から元居たガイエンの場所まで突っ走ってそしてガイエンは吹っ飛んだから、僕が同じように吹っ飛ばした奴はアギトの直ぐ近くなんだ。

けどガイエンの方も警戒してるアギトは逆に言えばどちらからも攻撃されるって事だ。だから硬直したまま動けない。

だけど僕は見ていた。アギトのその向こうでガイエンが再びカーテナを構えるのを。そしてそれはアギトだって気づいてるだろう。あの位置ならガイエンは二人を巻き込める。躊躇いはしない。

奴に通るまでカーテナを降り続けそうな気さえする。そうなったら奴はともかく、巻き込まれたアギトは耐えられない。

そしてガイエンがカーテナを振ろうとする様が見て取れると、纏まらない頭でも体だけは動こうとした。しかしそれを響く声が征する。

「動くな！！　まだ舞台は整って無いでしょう？」

僕らは奴のその余りの変わりように動けない。冷たい何かが喉元に刃を突き立てた様な気さえした。

「舞台だと？　ふざけた事抜かすなよ貴様。整える舞台はこの辺境の村で充分だ。アレをここへ持ってこい！」

アレ？　ガイエンに指示された親衛隊は道を開ける。なんだアレって？　ここで出すって事は奴に対しての切り札的物なのかも。

そう思い、僕は開かれた道から現れるだろう物に注視した。何かを親衛隊が担いでくる。その瞬間、テッケンさんの頭に居たクーが羽ばたき夜空へと舞った。

そのクーの行動が僕に何かを予感させる。担がれてるのは何だ？

人の足が見える……その足には何かを書かれた黄色い紙が巻かれている。

そして無造作にガイエンの直ぐ前に捨てられたそれに僕とアギト、シルクちゃんにテッケンさんは同時に声を上げた。

「「「サクヤ！！」」」

「サクヤちゃん！」

目の前にどうしてサクヤが連れ出されたのか分からない。そんな中、クーがサクヤの傍らに降り立ち近ずくと全身にまで至っていた紙が何か紫色した煙を出し、それがサクヤの中に入っていく。

そして苦しみ出すサクヤ。だけどそれが異常だ。なんだアレは？

毒なのか？

「こいつはＮＰＣらしい。だから『呪い』と言うウイルスが良く効く様だ。こういう仕様では無い筈だがな」

ガイエンの言葉が終わる前に僕らは走り出していた。だけど奴の横に来た時、突如何かに弾き返された。そして結局たどり着いたのはアギトだけ。

そのアギトもカーテナで弾かれる。

「何故来ない？　貴様が求めてたもう一つの物だろう」

「ふふふ、あははっはははは☆　そんなの簡単。君を倒すのが私じゃないからよ。そう、言ったでしょ？　君の相手はほらソコに」

その瞬間、再びアギトがガイエンとぶつかった。その直ぐ後ろではクーの声がサクヤの悲鳴に絶え間無く消されて行く。

三つ巴の戦場（後書き）

第七十話です。
人数がいっぱいだと大変ですね。なんだか色々と。それに奴と表記してる奴もそろそろ名前出さないときついし感じ。次でそれも出来るかな。
てな訳で次回は土曜日に更新します。ではまたです。

刃の代償（前書き）

僕達の前に立ちふさがる奴に僕は剣を向ける。だけどそれでも抜ける事は出来なかった。ガイエンは更にその力をクーにまで……僕等の怒りは頂点を超える。けれどそれをくみ取ったのはアギトでカーテナに真正面から立ち向かう。

だけどそんな中、カーテナの闇がガイエンに牙を剥く。

刃の代償

「アギト！！　おい、何しやがんだ！　行かせろよ！」
「アギト君！　サクヤちゃん！」
「くそ！　ビクともしない」

僕とシルクちゃんとテッケンさんはそれぞれ行く手を阻む見えない壁を突破しようと試みてみたけど全ては効果無しだった。
視線の先には拮抗しあうアギトとガイエン。そしてその後ろに苦しむサクヤとクーが居る。今直ぐにでもあそこに行かなきゃいけない。だけどこの壁がそれを邪魔する。
このもどかしさが壁を作る奴に向くのは自然の事だ。

「何の気かな？」
「お前の場所を通る。それだけだ」

僕は奴の背に立つ。そこしか道はない。あんな状態のサクヤを放って置くことなんか出来るわけがないんだ。だから何が何でもこの場所より向こうに。

「ここじゃあちょっと、乗り気しないんだけどな☆」
「ならさっさと引きやがれ！」

気軽にそう言う奴に、僕はシルフィングを突き刺す。これならさっきみたいに衝撃を受け流すなんて事は出来ないだろう。
予想通り奴の所にだけシールドは発生していない。倒せなくても奴の体勢を崩すだけで充分だ。それだけで通り抜ける数瞬は稼げる。
だけど奴は避けようともしない。武器も盾も持ってるようには見えない。もしかしてこのローブの中の防具がもの凄く高性能だとか

かも知れない。
それでも今の僕なら……いや、『セラ・シルフィング』なら貫けると踏んで僕は勢いを止めない。依然奴は少しだけこちらに顔を見せて薄く微笑んでいる。
何もする気は無いようだ。ならこのまま貫くだけ。システムかなんだか知らないけどな、僕らを舐めるなよ！
シルフィングの青い刀身が奴の髪で隠れてるけどきっと細いだろう事が想像に堅くない背中へと向かい……そして
「ガキィィィィ！！」と弾かれた。

「何！？」

貫けない……それどころか何に弾かれた？　やっぱりシールドが張られてたとか？　けど触れた瞬間にそこが虹色に光る様な現象はなかった。シールドじゃない……それなら一体何がセラ・シルフィングを防いだ？

「どけ！　アギト！」
「ぐあああああああ！」

その時、そんな会話と共にアギトがこちら側に吹き飛ばされて来た。そして僕と奴の直ぐ近くでシールドに当たり止まる。
土埃がわずかに舞い、アギトがここまで吹き飛ばされた衝撃が風を生む。その時僕は気付いた。シルフィングを防いだのが何なのかに。
それは直ぐソコにあったんだ。奴を見て真っ先に目を引く物。

「髪の毛……お前のソレ何なんだ！？」

皮肉だけどアギトが吹き飛ばされたおかげで気付いた。アギトが

運んできた風……それは確実に奴の月を映す様な色の髪にも届いた筈だ。だけど奴の髪は微動だにしなかった。
足首まで多い隠す程の髪が揺れないなんてあり得ない。どんな些細な風でも毛先は動くだろう。それ所か、奴の髪ははみ出た毛先一つ見えないじゃないか。
そしてこの光沢。月の様に見えるブロンドだから反射が強いのかとも思ったけど、これはまるで金属の様だ。

「ふふふ、良いでしょう。髪は女の命、髪は女の武器なのよ☆」

そういって首を振った瞬間に髪は髪に戻ったみたいで、夜空にその細くしなやかな姿を見せつける。見取れる位の美しさだが厄介すぎる。
あの長さの髪なら、後ろからの攻撃はほぼ全て防げるじゃないか。

「アギト君大丈夫？」

そんなシルクちゃんの声が聞こえて振り向くと、アギトのぐったりした姿がある。シルクちゃんは回復魔法を唱え、肩に乗っていたピクも羽ばたきながらキラキラこぼれる光のブレスをアギトに掛けてやっている。
あれも回復用の技みたいだな。それにどうやら魔法は通る様だ。それならシルクちゃんにはこの場所から直接回復魔法をサクヤに掛けて貰う方が得策なのかも。

「ダメです。呪い系はただ回復するだけじゃ意味がないの。それに回復を受け付けなくするのもあるし……何より逆に働く場合もあります。
呪いの確実な解除は術者を倒すか、その呪いを発生させてるアイテムを壊す事。この場合はサクヤちゃんに巻かれてるあの紙です」

シルクちゃんの示してくれた救助方法は的確だ。確かにあれが一番怪しい。あの文字が書かれた黄色い紙から毒の様な粘液が溢れ出てる様に見えるんだ。

けどそれにはやっぱりサクヤまで近づかなきゃダメだ。攻撃魔法を今のサクヤに当てるなんて出来ないし、そもそもそれで確実にあの紙が破壊できるのか怪しい。

ここは手持ちの武器で寸断するのが一番確実。だけど僕達はサクヤに近づけない。あの綺麗だと思える髪が、最強の盾の様に僕らを阻んでる。

けれどイクシードを使えばどうだ？　奴があそこを動かないなら押し切れるかも知れない。それにイクシードの限界を僕はまだ知らない。

もしかしたらあの盾を越えれるかも知れない。いや、越えて貰わなきゃ困るんだ。僕は元々奴を倒す気でいるんだから。あの髪を斬り裂けなきゃ、どのみち僕に勝機は無い。

「アギト！　おい起きろ！　起きるんだ！」

テッケンさんが何度もアギトの事を側で呼び続ける。シルクちゃんとピクのおかげでＨＰはほぼ全快してるな。後は意識。けどそう悠長な事はやってられない。

アギトを遠ざけたガイエンはサクヤの直ぐ側に立ってカーテナを掲げてる。

「ふ……化け物が。こいつも必要なくなったか？」

「君と一緒にしないでよ。とってもとっても大事よその子☆　何回も言わせないで。君を倒すの私じゃないから。だから私が何をしなくてもその子は手に入るもの」

ガイエンの言葉にいつもの調子で奴は応える。それがガイエンは気に食わないらしい。けど本当にサクヤが奴を止める切り札？
確かに大事とは言ったけど、具体的に奴は何もしていない。大事だと思わせといて実はそうじゃないとか？　でもガイエンは確信を持って出してきたっぽかった。
じゃあ奴のこの余裕は何だろう？　敵の筈のアギトを何でここまで信じてる？　ガイエンが今直ぐにでもあの腕を振り下ろしたらアギトが入る間もなくサクヤはやられる筈だ。

「目障りなフクロウだ！」

そう言ってガイエンはサクヤの傍にいたクーを手の中で回したカーテナによって吹き飛ばした。小さなクーの体が高く舞い上がって、同時に白い羽が沢山散った。

「クーちゃん！！」

シルクちゃんの短い叫びが終わると同時にこちら側に落ちてきて二回くらい地面を跳ねる。そして痛々しい姿が僕らの瞳には映った。

「ふはははははは、そんな余裕もこれまでだ。同類が死ぬまで我関せずを貫いた事を後悔しろ！　ゲームの一キャラクター風情が、人間様を舐めるなよ！」

ガイエンはいよいよサクヤにカーテナをぶつける気だ。だけどそれよりまずこっちの怒りが爆発する。よくもクーまで……あんな小さな存在にカーテナを振るうだなんて許せない。
クーはずっとサクヤを心配してた。そしてやっとで会えたサクヤを助けようにも励ますしかきっと出来なくて……それでも声を出し続けてたクーが目障りだと。

僕の目にはもう奴の向こうのガイエンの腐った顔しか見えてない。そしてそれはきっと横の二人も同じだろう。
あのクソ野郎だけはぶっ飛ばさなくちゃ気が済まない。邪魔するなら誰だろうとこのセラ・シルフィングで切り捨てる！

「あれれ、ここでソレを見せちゃっていいのかな？」
「うるせぇよ！　退かないなら今度は全力で行く！」

風を感じる。システムがイクシードの発動をいよいよ感じて前準備をしてる様な気がする。だけどその時奴は夜空を見つめてさらに続けた。

「あ～あ、本当にスオウって誰に対しても全力に成れるんだね☆
それが例え人じゃなくても……本当に素敵。でもだからこそ不安に成っちゃうんだよね。
みんなに一生懸命に成れる貴方の一番は何？　ってね」

何言ってるんだ？　がまず浮かんだ事。だけど後半は何だか雰囲気が変わってまるで誰かの気持ちを代弁するような語り草。それが少しだけある少女を連想させた。
頭に浮かんだその少女と目の前の事……二つに分断された感情は勢いを保てない。纏いつつあった風が肌を抜けていく。

（間に合わない）

そう思った。けれどこのまま見殺しになんて出来ない。ヤケクソでもなんでも行かなくちゃとそう思い、再びイクシードを使おうとした時、腹の底から響く様な声がこのタゼホに広がった。

「やめろ！！」

それはいつか僕がしたボリュームを最大にして叫んだ感じだった。だけどあの時と乗っている気持ちが違うのか、その言葉に強制力が有るように体が止まる。
それは僕だけじゃない。その場の全員がそうなっている。奴の時と同じ……いや、あの時の様な刃物を突きつけられてる感じはしない。それよりももっと生々しい。
そしてその声を発した奴は頭をうなだれて、背中を見えないシールドで支えて立ち上がっている。荒く呼吸を繰り返し、そして僕の方に僅かに振り向く。

「スオウ、アイツは俺の獲物だろうが。手、出すなよ」

そう言ってアギトは背を離し、武器を握り直す。見つめるは勿論ガイエンだ。だけど背を見せたままアギトは再び僕に語り掛けてきた。

「言ったのはお前だろスオウ。それぞれが助ける奴の事に集中するってさ。信じとけ……俺はもう逃げないからさ。お前達のおかげで大丈夫だから……お前も目の前の敵を見つめてろ」
「アギト……でももう助けるのは一人じゃない」
「はは、なぁに良い具合だろ。俺はここでは先輩なんだよ。初心者のお前と違って一人が二人に成ったって関係ない」

オレンジ色の炎が建物を崩す大きな音が聞こえていた。そしてその火の粉がアギトの周りに舞い降っていた。アギトの赤い姿とオレンジの光源はスゴく合っていて、その背が大きな炎で包まれてる様な光景が僕には見えた。

「ふふふ、君はいつだって彼に立ち塞がれる☆」

そんな奴の声に反応したのはガイエンだ。サクヤにカーテナを下ろす格好で固まったガイエンが歯を食いしばり、態勢を元に戻してアギトの方を向いた。

「アギト、もう邪魔するなよ」

「それは無理な相談だな。俺は何が何でもお前を止める」

二人はにらみ合い、それは言葉だけじゃないやりとりが行われていそうな感じ。

「いつもいつも……本当に貴様は目障りだなアギト！」

「これ以上、俺の仲間は傷つけさせねーよガイエン！」

言葉の終わりと共にカーテナが横に振られた。その瞬間に、こちらにまで伝わる衝撃。僕達は脚に力を入れてその場に踏みとどまる。

辺りに漂う土埃が視界を遮り、アギトの姿が見えなくなった。

「アギト！」

土埃の向こうに声を発する。だってあれは避けた様子が無かったぞ。カーテナの攻撃を直に受けたとしたら、幾らアギトの防具が高性能だってヤバいだろう。

実際アギトは一度やられてる。それなのに避けようともしないなんて何考えてるんだアイツ。その時、土埃の中から何か白いのが飛び出てくるのが見えた。

あれは――

「クーちゃん！　ピクお願い」

僕と同じように気付いたシルクちゃんが叫んだ。そしてピクは一鳴きすると勢いよくクーが落ちる空に急上昇していった。ピンクと白の姿が重なり、すぐさまピクはシルクちゃんの傍らに降りてくる。
ピクは静かにクーを地面に横たえる。近くで見るとわかるけど、クーの体にもあの毒の様な泡が付いている。クーは叫んでただけじゃなかったんだ。
クーはあの紙を剥がそうとしてたんだろう。だからその体にも呪いが移った。

「そんな……これじゃあ回復出来ないよ。クーちゃん……ごめんね」

シルクちゃんの頬に涙が見えた。そしてその涙に気付いたピクが慰めるように舐め取る。悔しい思いが僕らの胸にのし掛かる。
何も出来ない……サクヤにもクーにもだ。特にシルクちゃんは回復魔法があるのに、それでもどうにも出来ないから悔しさは一層強いだろう。
だからこその涙。僕はアギト達の方を向くがシールドを挟んだ向こう側はまだ土埃で見えない。

（やられてないよなアギト）

そう願いながら剣の柄を強く強く握りしめる。アギトがああ言わなかったら、また直ぐにでも僕は飛び出す所だ。今度こそと、奴にイクシードを放つことを迷いはしない。
でも……ガイエンをぶっ飛ばすのは僕じゃない。そうだよなアギト。

「クククククハーハッハハハハハハ！　幾ら邪魔しようと同じだなアギト！　カーテナがある限り貴様を何度でも叩き潰せる！」

土埃の向こうから聞こえる耳障りな笑い声。それが届いたとき、真っ先に反応したのはシルクちゃんだった。

「こんな事平気で出来るなんて、貴方は人じゃない！」

シルクちゃんが怒っている。涙を沢山流して、何も見えない土埃の向こうに向かって叫んだ事はそうとしか思えない。いつも優しく暖かな回復魔法をくれる彼女がここまで感情を高ぶらせた場面を初めて見た。

だけどそれでも、ガイエンは更に頭に血が昇る様な事を言い返してきた。

「そうだな、私は人なんて劣等種ではない。エルフと言う高潔な種にこの世界では生まれ変わっているのだよ！　今の私は何だって出来る。その力が有る！」

シルクちゃんの銀髪が怒りで浮いた様に見えた。噛みしめすぎた歯がガチガチと震えている。そして立ち上がった彼女を包むように桜色の光線が幾何学模様を描いていく。

あんなエフェクトは見たことない。けど……何らかの魔法を放とうとしてるのは分かる。

「駄目だシルクちゃん！　その魔法はヤバすぎる！」

テッケンさんは彼女が何を放とうとしてるのか分かってるみたいだ。そしてあれだけ血相を変えて止めに掛かるって事は相当な魔法何だろう。

だけどテッケンさんが小さいせいか知らないけど、シルクちゃんは耳を貸さない。初めて見る、怒りに満ちたシルクちゃんは相当怖い。

今までの印象とのギャップでそれは尚引き立っているんだ。けれど良く見ればその魔法陣の中にも涙の粒が幾つも浮いているのが見える。
ちょっと怖くなったけど、あれは間違いなくシルクちゃんだ。彼女もただ必死に仲間を助けたいだけなんだ。イクシードを使おうとしてた僕と同じ。
だけどその時、僕達の怒りに満ちた感情とか、ガイエンの不愉快なゲスの笑いとは違う声がその場に響いた。ガイエンよりも近くに居るのに、シールドの向かい側の僕らには遠い存在の奴の声。
「人だろ……俺たちはどこまで行ったって、姿形が変わったって人なんだよガイエン。そろそろ目……覚まそうぜ」
言葉の終わりと共に、一陣の風が吹いて土埃を払いのける。そしてそれをやったのは当然アイツだ。
「アギト君……」
「ごめんシルク。だけど手出さないで欲しい。必ず助けるからさ。アイリも、サクヤも、そしてクーも」
「……うん、はい……信じてます」
シルクちゃんを覆っていた幾何学模様が空気に溶ける様に消えていく。そして涙を拭いて前を見据えた先には、再びその姿を現したガイエンが映ってるんだろう。
ガイエンは倒れていないアギトに表情を曇らせている。
「貴様どうやってカーテナを防いだ？」
「さんざん見せつけられた攻撃だぜ。俺が学習しないとでも思ってるのか？」

アギトの言葉にガイエンは再びカーテナを振るう。今度は左腕を引いてそして突き出した。そして真っ正面からカーテナの攻撃がアギトを襲う。
けれどアギトは逃げない。見据えたまま、槍にスキルを纏わせて……そしてぶつかった。

「うおおおおおおおおお！！」

アギトは叫びと共にスキルを解放して、その反動で強引にカーテナの力を弾いた？　信じられないけど、その場から数センチ後ろに下がっただけで確かに立っているのがその証。
そして弾かれた力は思わぬ所にぶつかっていた。それはこのシールドを展開していた奴だ。

「うげ、ちょっとー！」

とか言ってた。だけど直後にその叫びも掻き消えて、僕の目の前に土埃が上がると同時に僕達を隔てていたシールドは消え去った。
そして再び僕らは全員合流する。無駄に立ち昇らなかった土埃は僕らの足下で次第に消えていった。

「まさか、そんなバカな！？　カーテナは王の力だぞ！　それを捨てられた貴様如きが防げる筈がない！」
「確かに……俺もそう思う。けどな納得も出来る。俺は捨てられた騎士だけど、お前は偽りの王だからだろ？」

アギトの言葉に激高してたガイエンの動きがピタリと止まった。
そして何かをブツブツとカーテナに向かって喋っている。そしてそれは次第に大きく成っていって、再びその刃がこちらに向けられる。

「貴様が……貴様がぁ居るからぁあああ！！」

カーテナから黒いドロリとした粘液みたいなのが滴り落ちている。あれは最初から見えていた影みたいな物だろうか？　なんであんな風に……段々と実体化してる様な感じだ。

「きゃはははははは☆」

場の空気を寸断するような笑い声が再び流れた。するといつの間にか僕らとガイエンの間に再び奴が降り立っていた。

「滑稽だね～ガイエン☆　ふふ、君のそんな顔が見れただけでここに来た価値あったかもね。ブッサイクに成ってるよ～～」

ケラケラケラとその場で本気で笑い出す。その姿を見て更にガイエンは怒りを募らせる様に体を震わせている。

「お前が……お前が私を見て笑うな！　化け物がぁあああああ！」

ドロリとした粘液が次々と足下に黒い沼を作るように溜まっていく。そしてカーテナを奴に向かって振りかぶった時、目を疑う様な事が起きた。

「ふふ」

そんな風に奴が薄く笑ったのを僕は見逃さなかった。そしてカーテナの攻撃は発動しない。何故ならガイエンの左腕を溜まった粘液から出てきた黒くて細長い腕が絡め取っていたからだ。

「な……なんだこれは？」

後ろの親衛隊もザワメいている。ガイエンはその場でもがくが脚も既に粘液の中で身動きが取れなくなっていた。そして粘液の中から無数の赤ちゃんサイズの黒い人がガイエンの体を這い上がっていく。

いびつに開いた口らしき物から何か悲鳴めいた物をそいつ等は叫んでる。無数の子供の悲鳴の様な何かを。

「何を……した貴様」

「言ったでしょう。カーテナの呪いにご用心☆」

「だが！　それは私には……ぐあああああああああ！」

言葉の途中でガイエンは黒い人に全身を包まれた。そしてガイエンを包んだそいつ等は溶けていく様に合わさって丸い球体になる。その間も絶えず叫びをあげていた。

僕らは誰一人声を出せなかった。その余りの光景に言葉を失っていた。それは親衛隊も同じだ。

「さて、目的も果たしたし後は君に任せてあげる」

そういって奴が見つめるのはアギト。だけどアギトは目の前の球体から目が離せない。そんなアギトを見て再び嫌らしく笑う奴に僕は剣を向けた。

「何だよこれ？　一体どういう事だ！」

「あはは、大丈夫直ぐに出てくるよ。だから心配無用☆　それよりねえ、そろそろセツリの所に行こうよ」

唐突に出たセツリの名前に僕は一瞬固まる。そしてそんな僕の横を奴はもの凄いスピードですり抜けた。一瞬の油断、振り向いた時

には奴は建物の屋根で飛び跳ねてる。

「こっちこっちー！　スオウが助けたいお姫様はこっちだよー☆」

僕は脚がなかなか出ない。行かなきゃいけないのは分かってる。だけど今の状況は混沌としすぎだ。けどそんな僕にアギトが言う。

「何やってんだスオウ！　セツリはお前じゃなきゃ駄目だろーが！」

地面を蹴った。目指すは深月の月。奴が満足気に手を叩くのが見える。

「さあみんな、我慢はここまで☆　楽しいパーティーにしましょうね」

ここから僕達のそれぞれの戦いが始まる。

刃の代償（後書き）

第七十一話です。
ここから本格的にバトルの始まりかな？　って感じ。楽しめて貰えるように頑張ります。次回は月曜日に更新します。それではまた次回。

駆け抜ける道（前書き）

僕とアギトはそれぞれ別行動に移る。僕が目指すは倒すべき奴の所で、アギトはガイエンとの決着を付けなくちゃならない。だけどそれを阻む壁が僕等の間には立ち塞がっている。

奴の合図で再び動き出したモンスターの大群。この壁をぶち破らなきゃ僕は奴の……セツリの所まで行く事は出来ない。

駆け抜ける道

奴の言葉と共に、タゼホにモンスター共の叫びが轟きわたる。解放の瞬間だ。関を切った様に動き出すモンスター共の足音が雪崩の様に迫り、今度は止まることが無いだろう。止めた奴が「もういい」と言ったんだから。

我慢に我慢を重ねていたモンスターはうねりをあげて目の前に迫る。後少しで奴の居る建物なのにここに来て厚い壁が出来あがる。

「邪魔だ！」

僕はシルフィングを振るい、迫りくるモンスターを切り伏せる。だけど流石に数が多すぎる。切っても切ってもゴキブリの様に沸いてくるんだ。これじゃあ切りがない。

たどり着けない……直ぐそこなのに。

その時、モンスターの魔法が僕に当たる。いや、捕らえられたと言う方が的確。拘束系魔法で体の動きが阻害された。

「しまっ！」

迫りくる巨大な斧。そうだった、こいつらも僕らと同じように前後衛で分かれてるんだ。その程度のＡＩはこの獣人型のモンスターは持っている。

亀が二足歩行しだした様な姿しやがって、やっかいなモンスターだ。

一撃食らえばこの魔法は解けるだろうか？　一撃でやられる筈も無いし、その程度は我慢する！　普通のプレイヤーよりも痛みが直接的に来るんだけど、死にはしないさ。

僕は歯を食いしばってその攻撃に備えた。けれどその時、後ろから小さな影が目の前を横切る。

「チェストー！！」

そんな声が聞こえると、モンスターは後ろへと倒れて行く。倒れたモンスターの上には小さな人影が見えて、彼は自身サイズの小さな剣に輝きを乗せて再びジャンプした。

そして迫り来る亀の急所を的確に突き動きを止めている。

「スオウ君先走り過ぎだよ！」

「テッケンさん」

それはいつもどこでも頼りになる小さなヒーロー。本当に小さいのに格好良いなこの人。でも僕の拘束はまだ解けていない。

後衛陣はまだまだ後ろ……というか、倒しても倒しても沸いてくるのは大きな武器を持った前衛部隊だから、これじゃたどり着けない。

「ふん、やっぱりお前まだまだだな」

「もうーいいから早く！　エイルお願い！」

更に後ろから聞こえた二つの声。視線を何とかその方へ向けた時、再び小さな影が迫っていた。そして僕の背中と頭を蹴ってモンスター共の頭上へ上がる。

エイルはその間に詠唱を終わらせて装備した杖を振った。

「グラビティーウォール！！」

すると突然、モンスターが地面に張り付くように倒れ伏した。そ

して同時に僕の魔法も解ける。どうやらエイルの魔法で術者まで巻き込めたようだ。
助かった……そう思ったら今度は更に数人が横から飛び出してきてテッケンさんと共にモンスターに止めを刺していく。

「エイルの新しい重力魔法なの」
「重力魔法……」

後ろからレイピアを携えたリルレットがそう説明してくれた。成る程ね、だからモンスターは地面に這い蹲る様に成ってる訳だ。
でもこれで安心じゃない。既にエイルの魔法の範囲外からも迫りくるモンスターが見えている。流石に今倒れてる全部に止めを刺すのは不可能だ。
それに目的の奴は這い蹲っていない。確実にエイルの魔法を受けてる筈なのに。

「アイツ、ムカつく」

そんなエイルの言葉に珍しく賛成だ。あそこに行かなきゃ成らないけど、この建物も火の手が上がってる。まだ崩壊するまでじゃないが、建物に満ちた煙が窓から吐き出されてる。
流石に中を通ることは無理っぽい。どうなるかわからないけどフィールド効果で死にたくはないからね。毒の沼とかああいうのでやられると腹立つんだよ。それと同じに見える。
けどそれならどうやって……流石に屋根に飛び移れるだけの跳躍力は無いぞ。乱舞状態ならともかく。

「ほらほら〜早く〜☆　鬼さんこっちだ、手の鳴る方へ〜」

ウキウキランランしながらそんな歌を歌って僕を誘う奴。

「そろそろ魔法も解けるぞ！」
「第二陣も到着する。スオウ君急ぐんだ」

エイルとテッケンさんの叫びが耳に届く。確かに残ったモンスターが何とか立ち上がろうとしている。そして武器を振り回しながら迫り来るモンスターの群。

僕が奴に追いつかない事にはまた、同じ事の繰り返しだ。屋根の上の奴を見上げて歯を食い絞めてると更なる声が届く。

「行けるっすよ！　俺のミラージュコロイドなら！」

そして目の前に現れた透明な鏡。確かにこれならあんな距離一瞬だ。

「サンキューノウイ！」

僕はすぐさま鏡に飛び込んでそして現れたのは奴の頭上。丁度いいからシルフィング浴びせてやる。だけど、切ったと思った奴は影の様に消えていった。

「何？」

屋根に移動してきたみんなと共にタゼホの暗い道を見渡す。ここで見失う訳には行かない。なんとしても見つけないと。

するとその時、仲間の肩に乗るテッケンさんが叫んだ。

「居た！　崖の方に続く道だ！」

全員が一斉にそちらを向くと確かにブロンドの髪が揺れているの

が見える。一瞬であんな所まで……一体どんなマジックだ？
すると奴は僕たちに自分の位置を知らせるように立ち止まって手を振りだした。
「きゃっほ～～☆　こっちだよ～～」
明らかに遊んでる。楽しんでる。さっき鬼さんとか言ってたし、奴は鬼ごっこでもしてる感じなんだろう。こっちは真剣なんだけどな。
奴のあの余裕を無くさなきゃ対等な戦いは始まらない気がする。それにはまず奴に追いつくこと。
「スオウ！！」
轟いたのはアギトの声。振り返ると、モンスターを吹き飛ばしながら戦っているアギト達が見える。向こうにはセラやシルクちゃん後他十人位が残ってる。
幾らこっちより人数多いからって喋れる状態には見えないけな。
「何だよアギト？」
「気をつけろ。奴は全く底が見えない。それに俺が見た時、髪の色が違ったんだ」
「は？」
底が見えないとかは大いに分かる部分だが、髪の色はそう重要か？　何か意味があるのだろうかそれに。
「だから髪の色だよ。俺が見たときは黒かった。重要か分からないが、知ってたって損は無いだろ！」

確かに損は無いけど、得があるのかも分からない情報だ。黒から金へ……イメチェンじゃねーの？　と思う僕は浅はかなのかな。
まあ頭には置いておこう。それにしてもアイツはまた何でもかんでも気にしすぎだ。まあそれがアギトらしいんだけどさ。

「受け取っとくよ。アギト、死ぬなよ」
「はっ、お前もな」

僕達はそれから背を向けてそれぞれやるべき事に専念する。僕だってアギト側で気になることはあるけど……そっちは全て任せるしか出来ない。
僕が知ってる情報以上の物をアギトは持ってるだろうしさ。これ以上あそこに居続けるのは信頼への裏切りだよ。信じてるからそれぞれの場所へ行けるんだ。
だから僕も行かなきゃな。僕は僕を待ってる人の所へ。

「そういえば髪の色違うっすね～」

とか何とか言ってるノウイに僕は聞く。そういえばこいつもあの時のアルテミナスに居たんだっけ？

「なあノウイ。ミラージュコロイドで後何回飛べる？」
「後そうっすね。今回はこの人数だし三回は余裕っす。だけど遠くに行きたいなら開けた場所からでないとっすから、屋根を伝った方がいいんすけどね」

そういって周りを見渡すノウイ。このタゼホは家々も点々としてるし燃えてる家もあるからてじかな場所がない。それに奴の居る崖の方は大きな建物が一軒あるだけ。必ず地面に落ちる事になる。どのみち一緒だなこれなら。結局はモンスター共をケチらしながら進

むしか無いって事だ。
「最初だけでいいよノウイ。てかミラージュコロイドなら一気に奴の場所まで行けるんじゃないか？」
よくよく考えたらそれ出来そう。けどノウイは首を振った。
「ちょっと下で何枚か損傷したんでそれ無理っす。それに遠くに飛ばすには重量制限があるっすよ」
成る程、アルテミナスから脱出したときは三人だったから出来たのか。
「モブリは二人で一人の計算っすけどね」
て事は、あの時は二人半って事か。それを考えると今の人数は十人弱。五倍近い数じゃ無理がある。やっぱり楽は出来ないって事らしい。
「じゃあやっぱりなるべく奴に近い場所に一回でいい。後は強行突破だ」
「それしかないね」
「詠唱中はちゃんと守れよ」
「大丈夫だよエイル。さあ行こう！」
いつものメンバーがそれぞれ言葉を発して残りの人たちも異論は無いようだ。建物を囲むモンスター共が崩そうと攻撃を繰り返してそろそろこの建物も持ちそうにない。
なるべくモンスターが密集していない場所で一気に奴の場所まで抜けられる所。モンスターはこちらに向かって移動してるから上か

ら見てると分かりやすい。
松明あるし。けど、なんかやっぱり多い。次から次へとどこかから沸いてるんじゃないのかと思える程にモンスターの姿は途切れない。絶対的に飽和状態だよこんなの。

「どうするっすか？」

迷うノウイの言葉はごもっともだ。村だから路地なんて物は無いし……どこも自然に満ちたそれなりの道に成っている。その全てにモンスターが居るよ。今行る場所は村でも入り口付近。
崖の上から高さを活かさして一気に下ったのが仇に成ったのかな？　ガイエン達が崖の直ぐしたまでたどり着くまで待っとけば良かったよ。まあそんな事考えても意味はないけど。
今はこの状況をどうやって切り抜けて奴の場所まで行くのかが重要だ。どこも同じなら……せめて奴への道が最も近い場所へ。

「中央だ！」
「マジっすか？」
「大マジだ。直線で一気に抜けるぞ！」
「ええいここまで来たらヤケクソっす！」

エイルが鏡を前に並べる。そして僕らそこに飛び込んだ。出たのは多分村の中央通り。僕らの足下には移動するモンスターがパーティーを組んで移動している。ワンパーティーに一つの松明を持っているって事だな。

「うおおおおおお！！」

明かりを弾き飛ばし、モンスターを吹き飛ばしてみんなの降りる場所を作る。そして全員が揃ったところで一気に行動開始だ。

「エイル！」
「分かってる。命令するな！」

エイルは再び重力魔法を発動させる。指定した一体を対象として周囲のモンスター共が一斉に倒れ伏して道が開けた。僕らはそいつ等を踏みつけて、それぞれの武器にスキルを宿して先の敵に飛び込む。

これでエイルの魔法が途切れたら挟み撃ちだな。だからその前に道を開く！

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

真っ先に敵の側まで迫ったのは僕とテッケンさんだ。セラ・シルフィングは装備効果に『加速』が、テッケンさんはきっと何らかのスキルでスピードを上げている。

だから僕らが道を切り開くきっかけを作る役だ。敵が武器を構える前にまずは一体。飛び込んだ勢いで剣を振りかぶり、そのまま回転して続けざまにもう一方で追撃。

痛みを伴った様な叫びをあげるモンスター。けれどまだ倒すまでには至らない。しかしすぐさま横から別の攻撃が降り懸かる。

僕は勢いを止めないまま、下ろされる斧に左の剣を合わせて払い、そのまま右腕を突き立てる。だけど更に攻撃は続く。息を付かせぬ多段攻撃。こいつらはそんな事考えて無いだろうけど、確かにそうなっている。

僕は突き刺した剣を引き抜き前の敵をもう一度切りつけて、更に迫る攻撃を何とかかわす。微かに肩を掠ってＨＰが僅かに減少した。

（くそっ……けど二撃はノルマだからな）

心の中で呟きながら僕は敵の懐を抜ける時に二対の剣を同じように構えて同時に二撃を加えた。少し視線を向けるとテッケンさんの姿が見えたり消えたりしてる。
彼はどうやらその小さな体を最大限に使って敵を翻弄してるようだ。それに豊富なスキルも彼にはある。それに対して僕が頼れるのはこのセラ・シルフィングと、十にも満たないスキルのみ。
だけどそれでも……負けてやる事なんか出来ない！　避けて切って、時にはスキルですり抜けて舞うように群がるモンスター共に確実に二つの剣撃を浴びせていく。
すると次第にセラ・シルフィングの刀身に星の輝きが集まり出す。浮かび上がるのは今日の夜空と同じ様な光景だ。
モンスター共にはセラ・シルフィングで斬られた後が消えずに青い光を伴って残っている。それがこのスキルの罠。セラ・シルフィングが持っている力は『風』だけじゃない。
リルレット達も追いついてきてそれぞれがモンスターを切りつけていくのが見える。ここしかない。セラ・シルフィングが『今だ！』と言ってるのが聞こえる気がする。
左右から同時に振り下ろされる攻撃に合わせてその隙間に飛び込んだ。そして回転しながら左右の敵を同時に切りつける。浅い……けど充分後一撃だ。何も考えてないモンスターは斬られた事にいきり立ち、こちら側に一歩を踏み出した。
その瞬間、更に深い剣線がこいつらを捕らえる。それは着地と同時に剣を左右に凪いだから。鳥が翼を広げるような体勢で、その瞬間僕を中心に風が全包囲に広がった。
これでこいつらにも二撃目。その浅黒い体には青い線が縦と斜めに入っている。飛び交う魔法の光や、みんなの声とモンスターのうねりがこの空を満たしていく。
そしてセラ・シルフィングが僅かに放電し、それは今までつけたモンスターの傷に呼応している。空を染めるうねりの中心で僕はそのスキルの名を口にする。

「ライジングバースト！！」

その瞬間青い光がその場にスパークした。今まで斬ったモンスターの傷口からその雷撃は沸き立ち、セラ・シルフィングへと合流する。

辺りに響きわたるモンスターの断末魔の叫び。電撃が全身を包んで弾けゆくモンスター達はまるで、セラ・シルフィングに命を吸われている様に見える。

焦げ臭い様な匂いがその場に流れ出した。モンスター共はその突然の事に動きを止めている。そして全ての電撃がセラ・シルフィングに集まっていくと、辺りを覆っていた青い光と激しい音が不意に途切れた。

そんな中、後方の炎の明かりを背に受けて佇む僕の周りだけが明るい。青い光は二対の刀身に集約されていた。僅かに後ずさるモンスター共。きっとこれから起きることでも本能で察したか……僕は左腕を奴らに向かって突きだした。

「通らせて貰うぞ。今度こそ！」

その言葉を向けられたモンスターは理解したのかしてないのか分からないけど、一斉に吠えて大地を揺らした。そして一斉に僕へ向かって走り出す。

「スオウ君！」

「今度こそ抜けます。全員僕の後ろへ来てください！」

みんなそれなりに消耗している。こんな所で足止め食ってる場合じゃないのにさ。だからみんなの為にも道を開こう。今のセラ・シルフィングにならそれが出来る筈だ。

全員は戸惑いながらも僕の後ろに集まってくれた。そして僕がモンスター共に向かって走り出すのに合わせて付いて来てくれる。
壁の様に押し寄せるモンスター。まだまだこんなに居たとはびっくりだ。

「おい！　本当に大丈夫なのかよお前！　死ぬ死ぬ死ぬぞ！」
「大丈夫だよ。お前も僕を信じろよエイル！」

余りの敵の数に圧倒されてる様だけどさ、エイルにもこの状況は説明したはずだ。弱気なエイルに、僕は力強く声を返してやった。

「大丈夫、スオウ君ならやってくれるさ」

テッケンさんが横からエイルにそう言ってくれる。するとエイルは何か少し震えた後に、こちらを向いた。

「テッケンさんがそう言うなら……おい！　お前の力見せて見ろ！」
「はは、見逃すなよエイル！」

言葉を返した後、少しだけ仲間との距離を開く。そして迫り来るモンスター共に一番に迫る。だけど僕はモンスターに届かない間合いで両の手を振りあげた。すると意志を汲み取るようにセラ・シルフィングがその刀身を青く放電させ始めた。
その放電は青い光と共に強くなっていき、この言葉と共に内包されたエネルギーは解放される。

「ブレイク……バァァストォォォ！！」

振り下ろした剣から青い斬撃が飛び出し、モンスター共の戦闘を走る奴らを吹き飛ばした。そして一気にそこに僕は踏み込んだ。あ

の一撃だけじゃない。まだこのスキルは続いている。
左右の剣先からプラズマの様な物が線を帯びて地面に伸びていた。それは剣の動きに合わせるように付いてきて、地面を抉りながら進む。
それに触れたモンスター共は断末魔の叫びをあげて一瞬で丸焦げになり霧散していく。余りの高圧電流で抉れた地面にまで炎を走らせて行くそれは、目の前に大挙していたモンスターを次々に倒していく。

「うおおおおおおおおおおおお！」

雷を宿したセラ・シルフィングにモンスターは為す術がない。このスキルは集めた命の分だけ威力を増す。無造作に大量発生しているだけ好都合だったんだよ。
次第に向かってくるモンスター共に限りが見え始めていた。だけどこっちもそろそろヤバそうだ。この状態はそう長く持たないからな。
剣先から延びるプラズマが次第に小さくなっている。これが切れた時がブレイクバーストの終わり。

（後少し……後少しでたどり着けるんだ！　だから、持ってくれ！）

地面を抉り、木を切り倒し、建物を崩しても雷撃は止まらない。前方に集うモンスターを、もう何度目かも分からないくらいに払うとその先が見えた。
いや、実際はこのタゼホでならどこでも見えるけど、それが近くなり存在感を表している。このタゼホを囲む様にせりたっている崖……その大きさがマジマジと見えてきた。
最後に残ったモンスター共はどれも後衛タイプ。そいつ等はシールドを張って最後の砦の役を担っていた。だが、僕はシルフィング

を横一線に凪いだ。その瞬間道に二重に重なりシールドを張っていたモンスター共の上半身が傾く。
そして半円を描く様にモンスターの後ろには炎が上る。僕達はその炎を飛び越えて遂に崖下にまで躍り出る。その瞬間セラ・シルフィングの糸が切れた。
放たれてた青い光と放電の音が静かに消える。

「はぁはぁはぁはぁ……」

荒い呼吸を繰り返し酸素を体が求める。酸素がＬＲＯにあるかは知らないけど、体を巡る血の流れとかは感じるよ。
僕達が通ってきた道を振り返るとそこは炎の線が上がり、無惨に燃えている木や建物が見える。そして無数の消え逝くモンスターの光。
その数が余りにも尋常じゃないから、その通りが本当に黄泉とかいう所に繋がっててもおかしくはないかもと思えたりする。
満点の星空に上る無数の小さな光……それは本当に幻想的な光景だった。

「パチパチパチー流石だねスオウ☆　ほらほらセツリはこっちだよ～」

奴の声が一気に僕らをこちら側に引き戻す。振り向くと奴は大きな建物の方じゃなく、少し小高くなってる場所にいる。
僕らもそちらへ急いで上がるとそこには大口を開ける洞窟があった。そしてそこへ奴は入っていく。

「え？　こんな洞窟タゼホに無かったすよ」

そう言ったのはノウイ。ノウイは散々潜入してるし間違いではな

いだろう。ならこれは罠？　それでも、僕は逃げる訳には行かない。

「行こうスオウ君！」

そう言ったテッケンさん。だけど僕はあることをずっと考えてた。そしてそれは今だろう。ここに入ると気軽に出れそうにないからな。

「テッケンさんとノウイは悪いけど入らないでください」

「ど、どういう事だいそれは！？」

「そうっすよ！　何すかそれは！？」

僕の唐突な言葉に声を荒げる二人。けれどこれは必要な事だと思うんだ。だから真っ直ぐに二人を見て僕は言葉を紡ぐ。

「二人にはアイリを探して欲しいんです。そしてアギトの元へお願いします」

沢山の光が昇る夜。遠くでは今だ炎が揺らいでる。

駆け抜ける道（後書き）

第七十二話です。
評価・感想、随時超募集中っす！！　皆さんと一緒にこの作品をもっと良くしたいっす！　何故かノウイ口調でお願いしまっす！
てな訳で次回は水曜日に更新っす！　ではまたっす！！

轟く叫び、別れた空（前書き）

俺達もスオウ達に負けぢとモンスター共に応戦していた。こっちは親衛隊まで入ってるからまさに乱戦状態。そんな時、不意に空へ昇る光がこの場の全員の動きを止めた。モンスターまでだ。

だけどそれがおかしい事だったんだ。悲しみと怒りの叫びが空に轟いた時、モンスター達は今まで以上に尖った牙を向けて来る。

轟く叫び、別れた空

幾重にも地面に映る影が絡み合い交錯する。その光源は太陽や月なんて物じゃなく、ましてや夜空に輝く幾千の星々でもない。
俺達の影を映す光はもっと直接的で熱い燃え盛る炎。建物を燃やし、木々や植物にまで移ったその炎がこの場所で蠢く俺達に長い長い影を作り出す。
タゼホは今まさに燃えて消えようとしている。俺達のこの戦いに巻き込まれて。

「うらぁぁ！！」

一線した武器が亀みたいな獣人型のモンスターを真っ二つに切り分ける。そして無惨にも消えていくモンスター。だけど一息つく間も無く次から次へとモンスター共は現れる。
ここに来てまだまだ増えるだなんて、ゴキブリ並の繁殖力かこいつら？　これじゃあ倒しても倒してもきりがない。それに乱戦と化したこの場では敵はモンスターだけじゃないんだ。

「もらったぁぁ！！」

そんな声が後ろから聞こえてくる。視線を向けるとそこには白い騎士服に身を包んだ奴が俺に向かって切りかかって来ていた。
前はモンスターが後ろには親衛隊、奇しくも挟まれた俺はモンスターの膝を長い槍の特性を生かして一貫きする。するとモンスターはバランスを崩して勢いそのままにこちらに倒れてくる。
俺はそんなモンスターの防具を掴んで、そのまま後ろの親衛隊に投げ飛ばし親衛隊の剣線をモンスターに受けさせる。

「ちっ」

モンスターの叫びと共にそんな舌打ちが聞こえたが、親衛隊の奴が俺に再び切りかかる事は無い。何故なら蓄積ダメージが大きな方にモンスターはターゲットを移すからだ。ここら辺は幾らイレギュラーで召還されたモンスターと言っても普通の仕様の様で、ようするに渾身を込めて振るっていた親衛隊側にさっきのモンスターの意識は向いたんだ。

その証拠に、モンスターは攻撃を受けて直ぐに親衛隊へ反撃を開始した。

俺達に親衛隊まで相手にする力はない。それならこうやってでも強制的にターゲットを移すしかないって訳。こうして実質的にモンスターを相手取る人数を増やさないと瞬く間に押し切られるだろう。

それだけ、予想に反して戦力が多い。こんな中、スオウ達は無事に奴を追えているのだろうか？　ここには親衛隊も入れればモンスターに対抗する戦力が六十位は居る。

上手く親衛隊共を巻き込んで戦えば、俺達はそうそうやられないで入れるんだ。だけどスオウ達は十人位で奴を追っていった。

タゼホには至る所にモンスターが大量に居たからあの人数で進むのはかなり厳しい。自分で行けと言っておきながらかなり心配だ。

（スオウ……死ぬなよ）

そう炎の先に思いを馳せる。すると今度は三体のモンスターが同時に襲いかかって来た。本当に次から次へと世話しない奴等だ。

一体が後方で止まり呪文の詠唱を始め、後の二体が俺に向けて迫り来る。前後衛に分かれての攻撃……こういうチームワークが獣人系の強みで怖さ。はっきり言ってやっかいだ。

こういう時に真っ先に潰すべきは後衛の奴。ソーサラー系かヒー

ラー系か分からないが、どちらでもまず潰すは後衛だ。
迫り来る二体の攻撃を交わし、後ろに抜ける。けどその時、詠唱は終わっていた。発動する敵の魔法。それは願うなら攻撃系じゃなく補助系魔法だったが、宙を走り体に伝わった衝撃。

「っつ……がはぁ！？」

削られたＨＰが俺の願いが外れた事を意味してた。体の中に入り弾ける様に外へ向かう電撃に体が後退する。そしてそれを待ちかまえてた様に二体のモンスターがそれぞれの武器を振りかぶっていた。
このままじゃかなりＨＰを削られる。再び詠唱を開始してる後衛のモンスターを見ると、こいつらは連携でチェーン狙ってるのかも知れない。パーティーを組んだ獣人モンスターは偶にそういう高度な事をやることがある。
だがそれをこのまま受けるわけには行かない。しかし心とは裏腹に体は痺れた様に言うことを聞かない。

（これはまさか、さっきの魔法効果か！？）

魔法の中には一定確率で特定の効果を敵に付与する物がある。炎系なら火傷とか氷系なら凍結、そして雷系の魔法は麻痺を付加したりする。
けどそれが今来るだなんて俺も運が悪いとしか言いようがない。これじゃあ今のこのピンチを切り抜けられない。チェーンともなればその攻撃にはボーナスが付く。それは決して安い物じゃない。
だけどその時救いの声が届く。

「ピク！　ブレストファイア！！」
「アギト様はやらせない！」

上空から放たれた炎の玉が後衛のモンスターを包み込み詠唱が止まる。そして俺に武器を振り卸していたモンスターニ体には、その体を何かが斬り裂いた音だけが俺の耳に届く。
一瞬ニ体の動きが止まるがそれでも俺への攻撃意志は尽きてない。動けない俺へ向かいモンスターの武器が伸びてくる。
だがその時、俺は頭上に何かが見えてるのに気付いた。自身の直ぐ上。髪の毛に触れそうな位置にピアノ線みたいな糸が炎の光を受けて、斜め右上からそのまま回るように俺の斜め上へ動くのが見えた。

「やらせないって言ったでしょ！」

キュルルゥゥゥと何かが火花を散らして糸の先から俺の頭を掠ってモンスターニ体を同時に斬り裂く。上半身と下半身に分かれたモンスターは、今度こそ体を分解され天へと昇って逝った。

「よし、シルク様！」
「はい！　ピクはそのまま攻撃してて、アギト君大丈夫！？」

地面に立てもしない俺にシルクちゃんが膝を折って回復魔法を届けてくれる。すると白く暖かな光が全身を包み込み、体の痺れが引いていく。
このＬＲＯはゲームだから、誰が使おうと変わらない技や魔法の筈。だが、シルクちゃんの使う回復魔法は他にはない心地良さが有る気がする。
彼女の優しさとかがダイレクトに伝わると言うか、そんな感じなんだ。

「大丈夫。ありがとう二人とも。助かった」
「無事で何よりですよアギト様」

「うん！」

お礼を言った俺に暖かな笑みをくれる二人。俺を助けてくれたもう一人はやっぱりセラだったか。声で分かったが、アイツのあんな武器は見たこと無い。

だって暗器にしてはデカすぎだ。セラは今、自身の半身と同じくらいの大きな手裏剣をその手に戻したところだった。先の方に視線を向けるとこちらに向かってきてたモンスターが数体倒れるのが見える。

シルクちゃんが回復魔法を俺に掛けてくれている間、セラが守っていてくれたんだろう。

「セラ、その手裏剣暗器か？」

俺は貯まらずそう聞いてみる。するとセラは「はい、勿論です」と肯定した。そしてこっちにその手裏剣を向ける。

「この『烈刀七華』は組立式の武器なんです。パターンを覚えるのが大変ですけど、凄く使い勝手の良い暗器ですよ」

すると瞬間、セラは手裏剣の形からその武器を弓状に組み替えた。そして狙いを定めて、ピクが燃やし続けていたモンスターを射抜き止めをさした。

流石にこれは驚くな。まさかこんな武器が有るなんて、ＬＲＯはまだまだ広い。だけど組み替えた事も衝撃だったが、さっき放った矢の動きも実は衝撃だった。

細い糸で繋がれた矢は直線に走らなかったんだ。乱戦中だから不意に現れる障害物……それを有ろう事か矢が避けてた。そんな機能、かなり弓を使い込んだプレイヤーだけが持ってると言われる『ホーミング』というスキル位だ。

それは絶対に狙った獲物は逃さないと言われてる。けど、セラがそんなスキル持ってるなんて信じられない。セラが弓を使う所なんか初めてみたからな。

「なんださっきの動き？」

「驚きました？　どうやらこの繋がった糸のおかげで自由に動いてくれる様なんです。矢が一本しかないからせめてもの副産物じゃないかなと思います」

そう言ったセラの手には役目を終えた矢が戻ってきていた。どうやら糸を巻き取る装置でも付いてる様だ。さっき手裏剣の形状の時に聞いたあの音の正体はきっとその巻き取り音だろう。

この矢もこの武器の一部だからたった一本なのか。だからこその機能。確実に敵を射抜く為の一本だけの必殺技って所か。

それにやっぱり『ホーミング』とは話を聞く限り違うようだ。ホーミングはシステムが勝手に矢を制御して障害物を避けながら敵を目指すものだ。だけどセラの方はあくまで一本の矢を自分で操作してる感じみたいでここら辺が違う。

それにホーミングは複数同時に放てるらしいからな。

「自由に動かせるって言ったって、そう簡単じゃ無いだろ？」

俺はセラが簡単そうに言い切った事に苦言を呈してみる。だって考えてもみれば、高速で突き進む矢を目的の場所まで制御するなんてかなり難しい筈だ。大抵は制御する前に彼方に消えそうだ。

だけどセラはそんな俺の言葉に笑みを浮かべて言い切った。

「何言ってるんですかアギト様。私はそういう制御得意ですよ。忘れちゃいましたか？　私は二十まで同時に同じ様なのを操れます」

「あ……」

その言葉で思い出した。そう言えばそうだったんだ。セラは自身から離れた物を動かすのに慣れてる――と言うか、その系統の扱いならセラ以上のプレイヤーなんてここＬＲＯには居ないだろう。

何てたって今のＬＲＯでも最難度クエストの一つと言われる『聖典機種』を初めて攻略したのがセラだからだ。まあその説明はおいおい話す機会が有るかもとして、それはセラが太股に忍ばせてる小さなクナイの様な鏃の様な武器に関係してるとだけ言っておこう。

「思い出してくれましたか。では油断無く、敵を倒して行きましょ……」

「どうしたセラ？」

言葉の途中で不自然に言葉が途切れた。セラはある一点を見つめて止まり、そしてシルクちゃんが続いた。

「わあ、綺麗」

その言葉は余りにもこの場に不釣り合いだ。今のタゼホはどうみても戦々恐々としてる。だけどセラやシルクちゃんと同じようにソレに気付いた奴等が少しずつ動きを止めていく。ソレに見とれるかのようにモンスターまでも動きを止めている。

そして俺もセラ達の魅せられた方へ振り返った。

「なっ！？」

思わず飛び出した声だが、それ以上は続かない。言葉なんて今のこの光景には無粋何だろう。俺たちが見つめる先には満点の星空に上る無数の光がある。

今まさにそれ等の光が星に成るかのような光景だ。

（あの方向はスオウ達が奴を追って行った方向……）

それを思ってこの光の正体と原因に検討が付く。黒く聳える崖の方向、このタゼホの中心より奥の方から無数に上がるあの光を僕らは全員見たことが有るはずだ。

「あれってモンスターの消滅時の光？」

「はい……多分。けどあんな大量になんて一体誰が……」

シルクちゃんとセラは二人同時に顔を見合わせた。誰が、の部分が分かったのかも知れない。そしてそれは多分、俺が考えてる奴とも同じ筈だ。

さっきまでの怒号の飛び交いが嘘のように静まり返った場で、周りを照らす炎が音を立ててはぜている。そしてシルクちゃんは「よっと」と呟き立ち上がり、再び上り逝く光を見つめた。

その肩には桜色の小竜が優雅に羽を広げて降り立つ。

「きっとスオウ君ですよ。みんな無事に抜けられたんだ」

そのシルクちゃんの言葉にピクが甲高く鳴いて、まるでその言葉に賛成を示してるかの様だ。そしてセラがこちらを向いて言葉を掛けてきた。

「アギト様はどう思いますか？　私もアイツの様な気がしますけど、親友の意見を聞きたいですね」

「俺も……」

まあ実際そう思う。あの中でこんな事をやりそうなのはアイツ位。けどなんか二人がその……スオウに対する信頼とかを見せつけてく

れると親友として反抗したくなるよな。

「スオウと思えるけど、あれだけの光だ。アイツにそれだけを同時に倒せるスキルなんてあったか？　乱舞じゃどうしても同時になんて成らないだろう」

「大丈夫です！」

俺の言葉には直ぐにシルクちゃんの訂正が入った。何が大丈夫かはさっぱりだけど。けどそこは後ろに控えているセラが補完してくれる。

「私も大丈夫だと思います。アギト様は見てないですよね？　アイツの新しい武器の力を」

「セラ・シルフィングの事か？」

僕のその言葉にセラは頷く。とても嬉しそうに。だけど表すのは顔にだけ、態度も言葉のトーンも変わりはしない。

「はい。私達も一つのスキルしか見てないですけど、それだけで、あの武器が企画外なのは分かります。それは多分アイツが持って……何でしょうけど。

だからセラ・シルフィングがあれば心配なんて不要ですよ」

「ん……」

なんかセラには見透かされて様だな。こいつって前から妙に感が良いから怖いところがある。苦手って訳じゃないが（頼りになるし）けど、妙に恐ろしいんだよ。

「別に心配なんかしてねーよ」

まあ実際、セラ・シルフィングは相当なんだとは思うけどな。

「そうですか？　すみません」

ふふ、と意味深に微笑むセラは本当に楽しそうだ。。そんなに意固地になった俺はガキっぽかったかな？　悔しいから視線を外すことしか出来ない。でもそれじゃあなんか益々――って、その時同じように止まっていたモンスター共から呻きの様な声が漏れだしていた。

「「うううううううううううううううううう」」

そんな呻きがそこら中から聞こえる。静まり帰っていたこの場がそんな声で再びざわめきを取り戻していく。「なんだ、なんだ？」と周りの親衛隊達も不気味がってモンスターから離れる様に後ずさる。

「泣いてる……」

「え？」

そう呟いたのはシルクちゃんだった。けどそれは余りにも、考えられない事。モンスターが泣くだ何て……そんな事聞いた事もない。そもそも深い感情なんて奴らには与えられてないだろう。

だけどシルクちゃんは奴らを見渡してもう一度口を開く。

「そう見えませんか？　私には仲間が昇っていく悲しみに打ち震えている様に見えます」

モンスターが仲間の死を悲しむ……そんな事……だけど確かにそう見える。震える肩も……喉に絡む呻きも……それらは俺達も悔しさや痛みを耐えるときに取る事。

けど経験上、こういう後には感情の爆発って物がある気がする。だってもしもこいつ等が本当に仲間の死を悲しんでいるのなら、やられた仲間の為に出来る事は一つだけ。
こいつ等はただ、どこまで行ってもモンスター何だからな。

「「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」」

呻きは突如として一斉に天を突く様な叫びへと変わった。大量のモンスターの合わさった叫びに、俺達は思わず耳を押さえて地面に膝を付いた。
大気を震えさせる音の奔流が、俺達の平衡感覚を狂わせる。肌に突き刺さる音は、これだけで攻撃に成ってるんじゃないかと思うほどだ。

「――ぐっ、これは……」
「……怒ってる？」
「そう……感じますね」

俺の声に、シルクちゃんとセラが的確な言葉をくれる。確かにそう感じる。奴らの叫びはまさに怒り。大量の仲間が殺された事への紛れもない憤怒の叫びだろう。
そして奴らはゆっくりと再びこちらを向いた。その目は今まで以上に赤くぎらついている。それにモンスター共の体から赤い湯気の様な物が上がってる。

（あれは一体……）

明らかに今までよりも闘争的になっているのが一目でわかる。そして再び奴らは俺達へと向かってきた。

「――っつ！？」

俺の槍がモンスターの武器を受け止める。だが・・これはさっきまでより断然速い！　そして重い。実際後ろからは対応出来なかったのか、轟音と共に複数の叫びが上がっている。

横では何とか受け止めたシルクちゃんにピクが上空から加勢していて、少し後方ではセラが形状を変えた二枚刃の様な連結した武器でモンスターの攻撃を凌いでいた。

（こいつら……まさかコレは……）

俺の頭にある一つの可能性が生まれる。だけどその時、上空に幾つのも光が上がるのが見えた。平行して飛んでくるそれは炎の塊。次の瞬間俺達の視界が一瞬で弾けた。

「ぐあああああああ！！」

「「きゃあああああああああ！！」」

モンスターが放った大量の魔法に俺達は為す術無く吹き飛ばされる。直撃さえしなかったが地面を抉る程の衝撃が体を貫いたんだ。

「くそ！」

急いで体勢を立て直して周りを見ると親衛隊も俺達の仲間もこの数瞬でやられた奴まで出ている。早く蘇生魔法を掛けなきゃ五分経つと彼らは強制的に設定してるゲートクリスタルの位置まで戻ってしまう。

そうなったら戦力がた落ちだ。今の状況では一人でも欠けると押し切られるかも知れない。どうやら奴らは俺達を一カ所に集めて一斉に掃討する気らしい。

吹き飛ばされたのは俺達だけじゃなく、それぞれ別々に戦っていた人も、そして親衛隊の奴らまで同じ場所に集められた。
完全に三百六十度取り囲まれてる。この状況では流石に親衛隊の奴らも俺達に武器を向けるなんてバカな事はしないようだ。俺達は敵味方関係なく、背中を向けて目の前のモンスター共とにらみ合う。
後衛のシルクちゃん達とかはその円の中で回復魔法や防御・支援魔法の準備。

「何がおきたってんだ！？　こいつらいきなり強く成りやがって……」

それは親衛隊の一人から漏れた言葉だ。どうやらこいつ等も相当焦ってる。まあそれはこっちも同じだな。突然のモンスターの豹変ぶりに戸惑いが見える分には。
これは推測でしかない。俺だってこの現象は初めてだ。けど聞いたことくらいなら、ここに居るプレイヤーは有るはずだ。これは多分――

「「『覚醒』」」

――その言葉を俺とセラが同時に言った。そして同時に全員の緊張の糸がざわついたのを感じた。目の前の光景……戦闘力が突如上がった事実……これはどう考えても『覚醒』しかない。

「覚醒だと？」
「ああ、それしかない。『覚醒』は同種のモンスターを倒し続ける事で希に発生すると言われてる現象だ。それはつまり奴らの仲間意識を刺激してるって事だろう。
今この場にはあの亀型の獣人モンスターしか居ないんだ。覚醒が起こったっておかしくない」

ただ目の前のモンスターを倒してきた。けどそれが仇に成るなんて……ここまであの陽気そうな奴は想定したのだろうか。そうだとしたら本当に恐ろしい奴だ。
冷や汗が額から流れる感覚があった。

「だが……こうなったのはお前達のせいじゃないのか！？
あの大量の光が覚醒のきっかけだろう！」
「それは否定しないがな。けど、いずれはこの場の誰かのせいでこうなってたさ」

俺の言葉に親衛隊の奴は口を閉ざす。それは十分に考えられる事だからだろう。スオウ達が悪い訳じゃない。誰もこんな事予想出来る筈がない。
言い争ってる場合じゃないんだ。奴らは遂に動き出す。大地を揺るがす音を響かせて全方向から迫りくる。俺達は力を合わせてそれを向かえ打つ為に覚悟を決めた。
だがその時だった。有る一カ所から突如黒い何かが走ったように見えた。その瞬間、モンスターの動きは唐突に止まり、その場で消えていく。
するとそこには無数の黒い刺が有った。そしてそれは黒い球体へと続いている。

（アレは……）

皮膚が何かを感じ取り鳥肌が立つ。唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。そして球体の上部がバキっと音を立てて割れる。その瞬間、大量の子供の笑い声が辺りを包んだ。そしてその中から黒い影に覆われた腕が飛び出し、球体から剥いでてくる。
上半身だけ表に出した黒い化け物。

「くくくくく、我はカーテナと一つに成ることで真の王と成り得た！！」

「ガイ……エン！」

両手を広げて天を仰ぎ笑い続ける奴は間違いなく俺の昔の友だ。

だが随分と違う空を、今は見ている様な気がする。

轟く叫び、別れた空（後書き）

第七十三話です。
そろそろアギト・アイリ・ガイエンの関係が分かっても良い所まで来たかなって感じです。だけど小出しにするか、一気に出すかで現在検討中。う～ん、迷ってる場合でもないんですけどね。
取りあえず次回は金曜日に更新します。感想・評価随時受付中。お気に入り登録三桁目指して足りない、物を知りたいです。分かる人教えてください。

不協和音（前書き）

僕達はテッケンさん達と別れて洞窟内へ入ろうとしていた。だけどその時、エイルと何度も交してるお約束的な言い合いが思わぬ方向へそれていく。それは本当に予想して無かった事で……誰にもどうする事は出来なかった。

僕が知ったのは一つの真実と、目の前の他人だった。

不協和音

「それじゃあ行ってくるよ」
「ええ、頼みます二人とも」

背中に燃え盛る村の情景を背負い、テッケンさんはノウイの肩に上がっていく。そしてノウイがミラージュコロイドの鏡を村の外に向けて配置する。

「本当にいいんすね？　俺はアギト様からいざという時は君を引っ張ってでも逃がせって言われてるっすけど、傍に居ないとそれは出来ないっすよ」

ノウイは肩に乗せたテッケンさんのベストな位置を探しながら僕への気遣いをしてくれる。てか、アギトの奴そんな事を頼んでいたとはな。まあそれもアイツの調子が戻った証拠なのかも知れない。
僕は遂にテッケンさんを首の後ろに回し、両肩に足を置いて自身の髪を掴ませて完成系を見たノウイへと言葉を返す。

「別にいいさ。逃げる気ないしな。それに自分達のお姫様を助けたいだろ？」
「む……まあ、それはそうっすね。アイリ様の事は心配っす。直接危害を加えるとは思えないっすけど、随分派手にカーテナを使ってたっすからね。
その影響がどうなってるかが気になるっす」

カーテナの呪いか……そういえばそんな事言ってたな。それにノウイはそれを直に見てる訳なんだよな。気にしない訳がない。

そんな時僕達が走ってきた方向、つまり村の入り口側から大きな叫びがここまで届いた。それはきっと大量のモンスターの雄叫び。

「派手にやってるな。急いだ方がいいよ。こっちは本当に大丈夫だからさ。な？」

そう言って僕は後ろへ視線を向ける。

「うんうん大丈夫。心配しないで。スオウはちゃんと私達が守りますから。ね、エイル」

「まあビギナーを守るのも熟練者の勤めだし。良かったなスオウ。初心者で」

答えてくれたのはリルレットとエイル。だけどこのモブリ、本当に口を開く度に嫌みしか言わないな。周りだってなんだか微妙な笑いでジョークにしてくれようとしてるのに明らかに不発に終わってるし。

たくさ、そもそもエイルは熟練者じゃないだろう。僕よりはＬＲＯ歴長いかも知れないけど、せいぜい数ヶ月程度と見るね。やっとで初心者抜け出した位だろ。

熟練者なんてほど遠い、せめて中級者（下）位にしておけ。

「はぁ～はいはい、頼りにしてるよ中級者魔導士（下）のエイル君」

「ああ？　何だってこの死にたがり双剣士。誰が（下）だ！」

僕達は互いににらみ合う。

「ふん、エイルは上にも熟にも達してないだろ。正当な位置づけだ。それに僕は死にたがって何かない。

ただアイツを放っておけないだけだ」

「はっ、中にさえ達してない下の下だから本当にバカみたいだな。そろそろ気付よ。お前のその何？　自分にしかとか勝手に思ってる使命感のおかげで周りがどれだけ迷惑してるのかって事にさ」

エイルはモブリの愛くるしい筈の顔に最大限の歪みを張り付けてそんな事を言った。周りが迷惑してる？　そんな事百も承知だよ。

それに使命感……そんなの当たり前だろ。セツリは僕にしか助けられないって言われたんだ。だったら僕が行くしか無いじゃないか。でも、その事まではエイル達には言って無いんだっけ。

それならエイルが僕の事を自己満足とか、謎のクエスト達成者とかの名声を狙ってやってると思っても仕方無いのかも知れない。

「エイル！」

「ダメだよリル。一回こいつにはちゃんと言わなきゃいけないんだ。アギトとかも熟練者の割に甘いよね。現実を教えてやるべき。実際、アンフィリティクエストなんて物のせいでＬＲＯは滅茶苦茶に成りだしたんだ。

誰もが出来る事なら早く終わらせて欲しいと思ってる。だけどそれはお前の様な初心者じゃ無いんだよ！　誰もスオウなんかに期待なんてしてない。

むしろＬＲＯの攻略組が動くまで何もするなって思ってるさ。だってお前がやたらと被害を拡大してるんだからな。ついにはアルテミナスだって？　ふざけんなよ。

純粋にゲームを楽しんでる僕らの邪魔をするなって事を大多数のプレイヤーは思ってるんだ！！」

暗い夜にその言葉は溶けていく。エイルの言葉が終わったとき、僕は拳を力強く握りしめてそれに耐えるのが精一杯だった。殴りたかった……けど、今ここでそんな事をしたら仲間意識とかそう言うのが一気に無くなる気がした。

だから拳を出したい力に、押し止まる力をぶつけてひたすらに耐えた。

「本当に……エイルの言った事は真実ですか？」

耐えに耐えて、ようやく絞り出した言葉がそれだった。エイルの言葉を嘘にしたかったんだ。誰か他の人の口から、エイルを否定する言葉が上がる事に期待した。

けど、場に募るは沈黙。誰もが肯定もしないが、否定もしない。いや、この沈黙こそがエイルの言葉を肯定してるのかも知れない。

そんな折り、小さくか細い声が視界の端で上がる。

「あのねスオウ……エイルの言った事はね……」

だけどこの後は喉につっかえた様に続かない。すると前方、ノウイと合体したような体勢のテッケンさんが言葉を引き継いだ。

「うん、確かにエイル君が言ったような考え方をしてる人達も居るのは事実だよ」

「――くっ」

僕は爪が手のひらの皮を突き破るんじゃないかと思えるほどに力を更に込めた。噛みしめた顎の力で口に血の味が広がる。

もう本当に、この体にも血液が循環してるんだなと感じた。別に誰かに認められたいとか、そう思ってやってきた訳じゃない。

確かに僕の様な初心者が謎のクエストに手を出すのを危険視する人達が居て当然だ。そこは逆の立場とかで考えたら当たり前に思うって理解できる。

真のトッププレイヤー達、それこそ今もＬＲＯの攻略最前線に居る人達がやってれば今の状況も仕方ないで済ませられるのかも知れ

ない。
けど、今アンフィリティクエストに挑んでるのは始めたばかりの初心者プレイヤーの僕だ。というか、ハッキリ言ったら僕のせいで始まったような物だしな。
そのせいでクエストは達成出来ず……ＬＲＯはおかしく成るばかり。それじゃあ確かにこんな初心者に任せては置けないだろう。
別にそれはいいんだ。何と僕が言われようと別にどうって事無い。だけど僕が握りしめて、血が広がる程に噛みしめるのは、じゃあセツリの事はどうなんだって事だ。

（アイツはここに生きてるのに）

何もせずにしておけば良かったのか？　初めて出会ったのは仕方ない。けどその後犯罪者ギルドの奴らに浚われて、そこで現れたあの悪魔に捕まったセツリをあのままにでもして置けば良かったとでも言うことなのか？
セツリの命がたった一本のＨＰ分しかないと知っていても、自分が初心者だから諦めろと？　きっと頼れるのは僕達しか居なかったセツリを見捨てて、いつ来るかも分からない連中に全て任せておけばよかっのかよ。
そんな事、出来る訳がない。このＬＲＯのプレイヤーの人達がセツリの事をどう思ってるのか分かった気がする。それなりにもう僕達の情報だって出てるだろう。せめてセツリがリアルに実在する事は誰もが知ってるはずだ。
クエストの目的は『セツリのリアルへの帰還』けど、いやだからこそ、セツリは他のプレイヤー……関わりの無い人達にとってはクエストのキーアイテムでしかない訳だ。
それもしょうがないと言えばそうなのかも知れない。だって仮にここでの死がリアルに繋がってるなんて誰が信じるだろう。信じたとしてもそれは実感なんて無いものかも知れない。

僕達がただテレビから流れるニュースの悲劇を「そうなんだ」位にしか思わない程度の事。なんてたってＬＲＯはゲームなんだから。

「わかったかよスオウ。テッケンさんも認めただろ。お前の行動は迷惑なんだからこれから自制して生きろよな。今回はまた協力してやるけど、調子に乗るなよ」

テッケンさんの言葉を得てか、エイルが妙に胸を張っている。それがやっぱり妙に腹立たしくて、でも同時に何かが脱力した気がする。

だから握った拳から力を抜いて大きく息を吐く。そしてエイルに向かって言い放った。

「そんなに迷惑なら……もういいよエイル」

「は？　何言ってるんだお前？　死ぬ気か？　遂に死ぬ気になった？」

いつもこいつは死ね死ね言うな。これもいつものジョークなんだろうけど……今は楽しく受け取れない。てかいつも楽しくないし、この手のジョークは。

きっと冷めた目に僕は成ってるだろう。

「迷惑ならこれ以上はもういいって言ってるんだ。ここまで助かったありがとう。他のみんなも迷惑だったのならこれ以上はいいよ。ゲームなんだから……リスクを犯す必要なんてないんだ」

「「え、あっ……」」

完全にここにたどり着いた時の勢いは無くなっている。そして広がるのは戸惑いだ。そしてそれは僕も同じ……今まで漠然と『仲間』って奴を知ってたと思ってたけどさ、今、僕にはそれが分からない。

繋がってたと思ってた糸はそうじゃなくて、じゃあ僕は今まで何を持って仲間としてたんだろう。仲間って一体なんだよ。少なくとも僕は今……エイルを仲間と見れない。

と言うかなんでこいつが此処にいるのか……ああ、リルレットが居るからだった。じゃあリルレットは何で……それはアギトが居るからだったっけ？

なんだろうこれは……誰もセツリを見てない気がする。不安や憤りが心を捕らえて放さない。暗い……月がないから、今日の夜は暗すぎる気がする。

「何言ってるんだよスオウ！　一人でどうする気だ？　協力してやるって言ってるだろ！　それをもういいだなんてどういう事だよ。ここまで来て諦めるのかよ」

背中にエイルの声が刺さる。そして次にリルレットの声が届いた。

「そうだよスオウ。今更なんで？」

「別に、諦めるなんて言ってない。ただ僕はみんなは此処まででいいって言ったんだ」

僕の言葉に周りがざわつく。その意味を悟ったからだろう。つまり僕は……

「一人で行く気っすか？　どうして、そんな必要無いじゃないっすか。みんな協力するためにここにいるんすよ」

「そうだよスオウ君！　どうしたいんだい？　さっきの話がショックなのは分かるが、一人で行くなんて無謀すぎる。冷静になるんだ！」

ノウイとノウイの頭の上から声が届く。けれど僕には暗すぎてよ

く見えないよ。辛うじてまだ見えるのはそう、テッケンさんだけだ。だから彼の言葉にだけ言葉を返す。

「冷静ですよ。本当にこれまでに無いくらい冷めきってます。無謀でも何でも、一人で行くしか無いじゃないですか。気付いたんですよ。誰もセツリを見てないって、そしたら分からなく成りました。

僕らを繋いでた物って何だったんでしょう？　テッケンさんは何で僕に協力してくれるんですか？」

熱気を帯びた生暖かい風が僕らの凍り付いた様な場を通り過ぎていく。でも、そんな空気なんてどうでもよくて、僕はただテッケンさんの言葉を待った。

「僕は……君だと思った。ＬＲＯでどんなに高名なプレイヤーじゃなく、君があの子を助けるんだとそう思えた。だから今までずっと僕はその瞬間を見たくて、協力してるよ。

きっとあの子もそれを望んでるだろうしね。僕だけじゃない、アギトもシルクちゃんも、多分今はセラ君だってそう思ってくれてるよ」

「よかった」

本当にそう思える事を言ってくれた。まあセラがそうなのかは結構怪しいけど、少なくともアギトやシルクちゃんは信じれる。それだけでかなり安心感みたいなのが広がる。

けど……たったこれだけとも思えて成らない。ＬＲＯには数百万のプレイヤーが居るはずなのに、セツリを見る目は片手で足りる。

「ありがとうございますテッケンさん。やっぱり貴方は格好良い」

「スオウ君……」

本当にこの人は頼りに成るよ。出会えた事に感謝したい位だ。いやまあしてるけど……取り合えず、今の僕にはその言葉だけで充分だ。

「アイリを頼みます。ノウイもアイリの為なら本気に成れるだろ？　頼む」

「何言ってるっすか！　俺は今回はいつだって本気っすよ！」

「はは、ありがとう。うん、だから頼むよ。見つけるにはノウイの力が必要だ」

僕はそう言うとテッケンさんとノウイに背中を向けて歩き出す。ノウイはもう何も言わない。ノウイは分かってるよ。アイリを助ける時も、助けた後も自分が必要だって。

エイル達を素通りして僕が立つは洞窟の前だ。

「おいスオウ！　何がセツリを見てないだよ！　訳分かんない事言うなよな。俺たちはだからその子を救うのに協力するために集まったんだよ」

「そうだよスオウ。エイルが言ったのはあくまでそう言う人達も居るってだけで、私達はそんなんじゃないよ」

僕の前には真っ暗な暗闇が大口を開けて獲物を待ってるみたいだ。別に僕はエイルやリルレット……ここまで付き合ってくれたみんなを責める気なんてないし、感謝してるさ。けど、ここから先は止めた方がいいと思うだけだ。

「分かってる……分かってるさ。だけど本気には成れないだろ。なら来ない方がいいよ。今までみんなが相手にしてきたゲームのバランスに沿った敵じゃないんだ。

何が起きるかなんて分からない。初心者のワガママに付き合って

培った時間を無駄にすることない」
「お前、それって何だよ。本気に成れない？　バカにしてるのか俺達を！　協力するって決めた時から、その位の覚悟はしてる。それでもいいから俺達はお前達に付いていて来たんだ」

エイルの言葉が深い洞窟に反響するように響いて去っていく。でもさ、何を言われても僕とエイル達には圧倒的な思いの差があると感じてしまう。
それは仕方無いって分かってるし今までそれでもいいとずっと思えてた。けど何故か今はそれが許せなく成ってる自分が居る。
なんで……どうして……今までそれを許せてたのか自分でも分からない。だから僕は、言ってはいけない事を言った。

「その位の覚悟？　だからそれはゲームだろ。アイツは、セツリは……ただのクエストアイテムじゃ無いんだよ！　僕達は今、ゲームをただ楽しくやってる訳じゃ無いんだ！」

肩が震えていただろう。吐き終わった後は激しく呼吸を繰り返した。押しつける気なんか無かった……それなのに言ってしまった。
だけどあの話を聞いて、知ってしまって、そしたら押さえきれない何かがせり上がってきたんだ。後ろでは僕の言葉のせいで少しざわつき始めてる様な気配がする。
無理もない。だって僕が言ったことは身勝手な癇癪でしかない。だって彼らは何も知らないんだから。僕の事もセツリの事だって深くは聞かせてない。

「スオウ……なんだよそれ。お前は結局、自分だけがとか思ってるって事なのかよ！　そんなにその子のヒーローに成りたいんなら初めから一人で行けよ！」
「ちょっとエイル君落ち着くんだ」

「だからここまでで良いって言ってんだろ！　一人でも何でも僕は行くさ。幾ら迷惑がられたって、後ろ指刺されたって、アイツが待ってるのは別の誰かじゃない！　僕なんだから……命を懸けてでも僕は止まる訳には行かないんだよ！」
「スオウ君も落ち着くんだ！」

テッケンさんの叫びが僕の言葉に被さる様に響いた。だけど遅い。僕の言葉は八割型後ろに伝わっただろう。そして同時に何か重い物が落ちる音が耳に届いてきた。

「みんなどうしたいんだい！？　武器を投げ出すなんて、ここは戦場だよ」

そんなテッケンさんの声で後ろがどういう状況なのか分かる。どうやらみんな頭に来たみたいだ。元々それなりに実力者揃いの皆さん。好意で協力してくれたんだろうに、初心者である僕にあんな事を言われたらやる気を無くすのも当然か。

でもテッケンさんの焦りとは裏腹に、僕はこれでいいと思ってた。だってどうなるんだよ。仲間って同じ目的を持って共に進んでいく物じゃないのかよ。それなら僕らは仲間なんて言えない。

少なくとも言いたくない。僕はそう思ってた。

「テッケンさんには悪いけど、俺ら必要無いみたいだからさ。な～んか一気に冷めたって言うか……一人だけ高尚な感じ気取ってるのが気に入らないって感じ」

そんな誰かの言葉に周りが頷いてるのが見なくても分かる。場の雰囲気は最悪。とてもこれから誰かを助けに行こうと集まった人々の空気じゃない。そんな中テッケンさんだけが何とかしようと、ノウイの上から色々言ってる。

けどそれでどちらも気が変わる訳じゃない。彼らも僕もだ。

「別に誰かに気に入られる為にやってきて訳じゃない」

「俺らも別にそのお姫様の事なんてどうでもいい。俺達が協力したのはそれぞれ世話になった人に頼まれたからだし、何よりアンフィリティクエストとかこの情勢のアルテミナスをどうにか出来る一人になれるなら面白そうだと思っただけだ」

僕と後ろの誰かの言葉にテッケンさんが「ああ～」と唸ってるのが聞こえてくる。本当にテッケンさんには悪いことをしてると思うけど、もうどっちも止まれない。既に意地張り合いだよ。

「ならもう充分だよ。アンフィリティクエストの方は分からないけど、アルテミナスの方はアギトに付いていけばどうにか成るだろうし、よかったな」

「ああ、それもそうだな。アイツの方が信頼できる。けどその前にお前が泣きつく所でもみたい感じだよ俺達はさ。どこまで一人でやれるってんだ？　安心しろよ。やられて、もう一度行くときに頭下げてお願いするなら協力してやらなくもないかもだぜ」

有り難い忠告を耳に受けながら僕は一歩を踏み出した。こんなに重い気持ちで戦いに挑むことなんて今まであったっけと思う。けど……無理なんだ。一緒になんかいけない。僕は最後にこういうしか出来ないよ。

「それは有り難い。だけど多分、僕がやられたら二度と会うことは無いよ」

誰もがその言葉にハテナを浮かべただろう。だけどテッケンさんは直ぐに叫んでくれた。

「スオウ君！」

彼だけがその言葉の意味を知っているから。だけど僕は歩き続ける。止まりはしない。口に出すと、まだそうなのかも分からない事だった筈の死がリアルに感じれた。もしかしたら今度こそ本当に……そう思えて僅かに腕が振るえる。

「スオウ！！」

「やめろよリル。良いんだよ。どうせ直ぐに泣きつくさ。それに俺達は迷惑らしいし、本当にムカつく奴。死んじまえバカスオウ！」

後ろからマジでムカつく声が聞こえる。そもそもの原因はアイツだ。だけどいつかは遅かれ早かれ同じ事は起こった気がする。けど不幸なのは今此処にはテッケンさんしかいない事だ。

アギトやシルクちゃん……セラもいれば、もっと冷静に成れたかもしれない。でもやっぱりここにはテッケンさんだけで……それだけじゃ僕はもう止まれない。

僕はこの場から離れるために一気に駆けだした。一寸先が闇へと繋がる暗い暗い洞窟を一人で突き進む。何も考えたく無かったから、たった一つの足音がやけに大きく響いて孤独を伝えるから、そんな恐怖を感じる間もないように僕は走り続けた。

そしてしばらく進むと広い空間に出た。そこは明らかに自然物じゃない。くり貫かれたようなだだっ広い空間。大理石が敷き詰められ、真っ白な柱が天井を支えている。その更に先には何だろうか……あれは神殿？　そんな建物が白の背景に埋もれる様に見える。

僕は再び走り出す。きっと奴はあそこだ。そしてセツリも。だけどその時、巨大な柱の陰から何かが出てきて攻撃された。よく見る

と他の柱の陰から更に二体。それは白い石膏の様な巨大な神像。それが三体……出し惜しみなんてしてられない。
セラ・シルフィングを抜くと同時に僕は叫ぶ。
「イクシード！！」
だけど……僕に応える風は無かった。

不協和音（後書き）

第七十四話です。
セツリへ辿り着く前に一つの試練。スオウとその他の確執です。
賭ける想いの違いがスオウには信じれなくなります。そして使えなくなった力……さあ、どうなる！！　で次回へ続きます。
次は日曜日に更新します。ではまたです。

黒の叫び（前書き）

俺達はガイエンの力を目の当たりにする。それは理不尽と思える程の力。モンスターどもを蹴散らし、黒い影は無数に広がる。ガイエンはその中で嵩笑いを続けていた。

黒の叫び

「アギト……アギトアギトアギトアギトォォォ！！　貴様を今こそ完全に越えた！　もう……並ぶべくも無い！」

ビキッ――そんな音がガイエンの下半身を包む丸い球体から響き広がっていく。それと同時に夜より黒い影がガイエンを中心に広がりだした。

「――っつ！？」

近くに居たモンスター共が吹き飛ばされ、その余波は俺達にまで届く。ただの影じゃない……これ自体に重さがあるみたいだ。

そして球体の正面に何かがせり出してくる。あれは……

「カーテナ……」

間違いない。

「ああ、その通り。王の証は我の一部……文句の付けようも無いだろう！」

黒光りする腕が振られる。それだけで辺りのモンスター共が空へ上がり消えていく。カーテナと一体化したガイエンは全身が武器って事なのか？

防具も無く上半身を露わにしたのはそんな物必要ないから……唯一ガイエンが身につけてる物があるとすれば、それは指に光る小さな指輪だけ。

「ガイエン……お前、自分がどうなってるか分かってるのか！」
「クフフフフ、ハハハハハハハハ！！　分かっているさ。カーテナを取り込んだ私は、真の王と成っている。
受け入れろアギト。これがエルフを統べる為に、エルフを越えた者の姿だ！」

ガイエンはどうやら自身の姿を問題視してない様だ。だけどそれがおかしい。どうみてもガイエンは人ではないしましてエルフでもなくなってるんだ。
幾らここがＬＲＯと言うゲームの中で、リアルの自分はどうにも成ってないと分かっていたって、ここで感じる事は本物だ。
自身の変わり果てた姿に何も思わない筈はない。正常なら、ＧＭコールが最優先だろ。
揺らめく炎を背にして異形と化したガイエンは高笑い続けている。だけどそこに溢れ続けるモンスターが声を被せる様に叫びだした。
覚醒はタゼホにいる全ての亀型獣人モンスターに発生しているみたいだな。後から現れる奴らも同様に体から怒りのオーラみたいなのを纏っている。
モンスター共はもう僕らをみていない。奴らの狙いは一度に大量の仲間を消し去ったガイエン。元々ここに居た奴らと合流したモンスター共は俺達の目の前でガイエンへと襲いかかる。
次から次へと積み上がっていくモンスターの山。これじゃガイエンだけじゃなく、下の仲間も圧迫死してそうだ。だがその時、山と成っていたモンスター共が弾けた。風船が割れる音を何十倍にもしたような音と共に、空へと飛ばされ大量の光が再び夜空へと昇っていく。

「ふん、無粋な奴らだ。雑兵が幾ら集まろうと意味はないと、その無い頭に分かるように刻んでやる」

めげすにガイエンに向かい続けるモンスターの叫びの中で、そんな奴の声がねっとりと張り付く様に俺には届いていた。
そして次の瞬間、俺の目の前で起こった事は完全なる“理不尽”の固まりだった。
ガイエンが自身の口を裂く様に唇の端を引き上げる。そして腕を子供が癇癪を起こした時みたいにただ闇雲に振る。そしてその行為にガイエンだけじゃない笑いが混じってる事に気付く。
こいつが出てくる時に響いたあの声……大量の子供の笑い声。

「くくくくく、くはぁ～はっはっはははははは！！」

ガイエンは自分の声さえ飲み込むほどのその笑いが聞こえてないのかやたらと上機嫌だ。ガイエンが嬉しそうに腕を闇雲に振るう度に、その動きと併せてカーテナが力を振るう。それで十分なんだ。次々と起こっていくカーテナの力の嵐に、モンスター共はただ巻き込まれて行くだけ。
けれど猪突猛進な彼らはそれでも止まろうとはしない。仲間の叫びに力を貰うように次から次へとカーテナへとその身を捧げ続けてる。
ガイエンの周りはもう溢れだした光で埋め尽くされる程に成っている。だけどガイエン自身の体は段々と深く濃く成っていく感じがする。
あたかも強い光で影がより濃く、より深く成る様に。

「やめろ……」

俺は静かにそう呟いた。なんでそう言ったのか自分でも驚いた。だけど何だか悲しくなってイライラするんだ。今のガイエンを見てるとどうしても……

その時、吹き荒れていた嵐がピタリと止まった。風のうねりも、モンスターの叫びも、ガイエンとそして無数の笑い声も無くなったこの場所はとても静かにあいなった。
耳に届くは鳥の声と、はぜる炎の音。いつの間にかモンスターは綺麗に消え去っている。そして次に現れる様子も無い。出尽くしたみたいだ。
それから大きく息を吐いて脱力したガイエンから、声が漏れてくる。

「くく、刻む事も出来ずに終わったか。しょせんは雑兵、学習すると言う機能も奴らには高尚過ぎた様だな。かはははは、がはははははははは！！　頭が高い、ここは王の御前だぞ」

モンスターが居なくなってやけに広く感じられる場所に佇み、ガイエンはまた笑い出す。本当に上機嫌に……おかしな事を言いながら。
何が王の御前だ！？　何が高尚だ！？　今のお前はそれらから最も遠い位置に居るだろう。

「ガイエェェェェェェン！！」

俺の槍が叫びと共にガイエンの胸を貫いた。そして瞬間、槍とガイエンの体の隙間から子供の叫び聞こえてくる。後ろからは親衛隊のガイエンを心配する声もある。
こんな状態の奴でもまだ付いていけるのだろうか。

「アギト……貴様……」
「お前は王なんかじゃねーよ。ノウイが居れば、その醜い姿を鏡に映して見せてやれたのにな。そして知れた……自分がただの化け物だと！

目を覚ませよ！　お前がこだわったエルフはそんなんじゃ無いはずだ！」

俺は畳みかける様にガイエンに言葉を浴びせた。こんなんじゃ無かった筈と言い聞かせた。俺はそれを知っているんだ。だからそう言える。

こいつは誰よりもエルフという種族に誇りを持ってた筈だ。それなのに……こんな姿を許せるだなんて思えない。

「言いたい事はそれだけか？」

「――っつ！！」

その時問われ返されたガイエンの言葉に痛みや苦しみは無かった。ただ何気にそう言っただけの様な口調。おかしい……確かに俺の槍はガイエン体を貫通してるのに。それに間違いなんてない。

けど確かに良く考えると変だった。ガイエンに槍を突き刺した時から感触が殆ど無かったんだ。まるで液体か、ゼリーでも刺してる感じ。

そして確かに目では突き刺さってると視認出来るのに、ガイエンのＨＰは一ミリたりとも減ってはいない事がその証拠か。

初めから効いてなんかいない……最初のアレは演技か。

「くくく、相変わらず知った風な口をきくガキだな。そんなんじゃない？　貴様は何も分かってない。言っただろう。この姿はエルフを越えた証だと」

「お前は結局……人の上に立ちたいってだけか？」

「浅いなアギト。それに貴様も頭が高いぞ」

瞬間、俺の居た場所の地面が陥没して、周りの土が圧縮された分を吐き出すために割れ上がる。だけどそこに俺はいない。

ガイエンの言葉で攻撃を悟った俺は、とっさに槍を引き抜いて後ろに飛んだ。そして直後、ガイエンは腕を振っていた。
まさに間一髪……覚醒中のモンスター共をたかが数発で天に召す攻撃は一発でも当たればかなりやばいだろう。だが間一髪じゃ今のガイエンにはまだ甘かった。
予想外だし、ガイエンもそれを考えてた訳じゃないだろうが、カーテナの余波だけで俺の体は数メートルは深く後ろに飛んでいた。

「ぐっ……」

地面に接した靴が地面を滑る。止まったときには俺は膝を付く態勢に成っていた。

「そう、それでいい。貴様もへりくだった姿が似合うじゃないかアギト。そうしてれば少しはカワイ気があるぞ」
「テメーに可愛いなんて思われたくもない！」

俺はそう言うと力強く立ち上がる。こいつにへりくだるなんて死んでもイヤな事だ。特に今の状態のガイエンに頭下げるなんて更に屈辱。
それに何、気持ち悪い事言いやがるんだ。

「くくくく、王に頭を下げる事は自然の摂理だ。そしてお前がエルフであるのなら私に頭を下げるのは絶対法則。さあ、ひざまずけアギト」

ゆっくりと両手を広げたガイエンの言葉が頭に響く。それと同時に何故か体が重くなった様な感覚が襲う。

（攻撃された？）

そう思ったが何かが違う。体が勝手に動く？

「え？　セラちゃんどうしたの？」

「体が……」

後ろからの声に何とか振り返ると、セラが地面にひざまづいていた。有り得ない……アイツが敵と見なした相手にひざまづくなんて不可解の以外の何者でもない。

視界の中には同じようにひざまづいている姿が見える。大多数は親衛隊……残りの奴もエルフと来てる。コレは一体どういう事だ？

「エルフである貴様等はその更に上位種へと成った私を崇める運命と言うことだ」

「な……んだと？」

そんな事が強制出来る物なのか。そうこうしてる間に俺も地面に膝が付く。これは外より中のダメージが大きそうだ。マジでイヤだけど、体は奴へ頭を下げ様とする。

「くくはははははは！　これでお前も認めざる得なくなる。貴様を常々そうさせたいと思っていたよアギト」

「はは……こんな形だけ頭下げさせて喜ぶなんて落ちたなガイエン。そんな風に成る前のお前なら、こんな事に意味なんて無いと分かったはずだ。

例え頭を下げたって、俺はお前を王だなんて認めない。俺達が認めた奴はたった一人……アイツだけ何だからな」

「アレにもう力など残っていない。ただのカーテナの寄り代であればいい」

寄り代？　どう言うことだ。分からない事が多すぎる。次々とおかしな事が起こるから考える暇がない。それでも少しづつ繋げて行くしかない。
頭が地面につきそうだ……考えろ、考えて、考え抜いてアイリを助け、ガイエンを倒すんだ。

「ふざけないでよ！！　聖典三機リリース！」

その声と共に俺の上を何かが通っていく。そして前方でピンク色の閃光が走ると、ガイエンのいた部分が爆発した。
その瞬間、呪縛が解けたかの様に体が自由を取り戻す。

「セラ！」
「ふざけた事をグダグダと！　男の嫉妬って本当に見苦しいわ！
アギト様に嫉妬して……アイリ様に嫉妬して！　手に入れたのがその姿ならお似合いよ！」

更にセラは畳みかけるように三機の聖典から光線を放ち続ける。
収まらない爆発の渦が暴風を伴って辺りにまき散らされ、舞い上がる粉塵が俺達の視界を狭めて行く。

「「ガイエン様〜〜！！」」

親衛隊のそんな悲痛な叫びが上がる。アイツ等はまだあんな姿になったガイエンに付く気なのか。一体何で親衛隊とガイエンを繋いでるのか気になる所だが、それよりも気になる声が煙の中心から聞こえてきた。

「安ずるな。お前達の王は倒れはしない」
「くっ！」

その瞬間、内側から巻き起こった風が煙を晴らしていく。続いて聖典の一機が撃破されたのか、炎に包まれて消えていった。
多分煙を晴らしたこの風はカーテナの力の影響なんだろう。ガイエンの狙いは間違いなく三機の聖典だった筈だ。だけど潰れたのは一機だけ、つまりセラはいち早くソレに気付いてたって事。
さっき苦い顔して呟いた「くっ！」はその為だったようだ。残り二機の聖典は空を旋回してセラの元に戻って来る。

「すみませんアギト様。あんまり効いてないみたいです」
「と、言うかほぼ無傷みたいだけどな。でも助かった。アイツに頭下げるなんて死んでも嫌だからな」
「同感です」

セラは戻ってきた聖典の胴体を労う様に撫でながら前を見る。そこには黒い腕を掲げてヒラヒラと振るガイエンの姿がある。

「聖典か。だが今の私には蠅と同じだな。私は王だ。群がる場所を間違えるなよ――」

言葉に併せて黒い影が俺達の足下を浸食していく。そして言葉は続く。

「――叩き落とすぞ」
「セラ！」

奴の言葉の終わりと同時にそれは起こっていた。足下にまで広がったガイエンの夜よりも暗い闇。それから刺の様な物が延びている。
だけどそれすらもセラはとっさに交わしてる。聖典は思考で操るって言ってたが、どれだけ頭の回転が早いんだか。でもそれくらい

でないと聖典は一機以上同時に操るなんて出来ないのも事実。
だからこそ未だ聖典を扱ってるプレイヤーなんてセラ以外見たこと無い訳だ。
最初の一撃を交わした聖典二機だが、直ぐに周りの影から大量の刺を空に伸ばして追撃しだした。

「なっ！？　ちょっとこんなの……」

思わず声をこぼすセラ。だけどそれも無理はない。だって聖典を追撃する刺の数は尋常じゃないんだ。無数の刺が地上から伸びすぎて俺達は一歩も動く事は出来ない。
だけどこの刺がいつ俺達に向くかと思うと寒気がする。てかそれをすれば早い筈なのに、何故か刺は俺達を避けて飛び出してる。
これで俺達を倒す気は無いって事なのか？　刺で遮られた視界ではガイエンの顔を伺うことも出来ない。見えるのは区切られた様な星空だけ。そこでは聖典二機がまだ無数の刺をかわし続けていた。

「やっぱスゲーなアイツ」

思わずそんな言葉を呟いてしまう。だってそうだろう、あんな上下左右から無数に飛来する物をかわし続けれるか？　それも自分の体を離れた物を二つ同時に操って・・俺は無理だと断言出来る。
俺だって戦闘中に頭は使うけど、セラのそれとは性質的に大分違うだろう。その時後方の方から声が聞こえてきた。これはシルクちゃんとセラだろう。

「ダメだよピク。飛んじゃダメ！　ブスッと刺されちゃうよ。セラちゃん、どうしよう……」
「ああ～もう！　ちょっと静かにしてて貰えませんかシルク様。集中してるんです」

「んきゅ……ごめんね」

てな会話が突き出た刺の向こう側から聞こえて来ていた。それに更に複数の言葉も聞こえる。セラ達は固まっていたからもしかしたら全員を囲んでるだけなのかも知れないな。

俺は一人飛び出してたからこんな事になってる感じなんだろう。

刺は幾ら攻撃してもビクともしない。ガイエンは二つの聖典を潰すまでコレを引っ込める気は無いだろうし、完全に立ち往生だ。

「流石は蠅だ。良く飛び回る」

「聖典は飛び回るだけじゃ無いわよ。私は今のアナタをガイエン様とは認めないわ。この化け物！」

その瞬間僅かに覗く夜空に閃光が走った。コレまでの小さく一瞬で消える物じゃない。二機だから細いけど、あれは間違いなく聖典の特性技だ。

聖典は操る数に比例して性能が向上する。そして重ねた技は陪乗だ。走った光は前方の影をケチらして一直線の走っている。その先は見えないが多分ガイエンを目指してるんだろう。

そして三つの爆発が重なった。二つは空から……そして一つはガイエンがいた方だ。刺の隙間から噴煙がこちら側にも染み出してくる。

（やった？）

とはとても思えない。たった二機の聖典のブラスト位で今のガイエンが倒れるとは到底考えられないからだ。だけど刺は次第に引いていき、闇の中へと全て消えていく。そして声は響いた。

「蠅退治は終了だな」

「そうかしら？　私の聖典は決して落ちないわ」
「ふふふはははは！　何が落ちないだ？　今しがた三機も落ちていったぞ。私が落としたのだ」

ガイエンは楽しそうに、子供の様に得意気にそう言った。苛つくが、確かに間違いは無い。聖典は落とされた。だがセラはそうじゃないと言う。

「言ってなさい。必ず私の聖典がアンタを焼き殺してあげるから」
「ふふふ、王に向かってその豪気。お前がそんな奴とは知らなかった。面白い、気に入ったぞ。もう少し早ければ、お前も親衛隊に誘っていたのに」

そんなガイエンの言葉に今度はセラが高笑いを始めた。ガイエンとは違い、気持ち良いぐらいの高笑いっぷりだ。

「あはははははは！　やめてよねそういうの。知らないのも無理ないわ。だって私、アンタだけには媚び売ってなかったもの。興味なんて無いの。嫉妬に狂う男って特に」

その言葉の後に二人は盛大に笑いあっていた。そしてしばらくするとガイエンは唐突に俺の方を向いて叫んだ。

「アギトォォォォ！！」
「何で俺だよ！」

訳分からん。何で唐突にこっちに矛先が変わるんだよ。さっきまで会話してたのはセラだろ。だけど既に据わった目でガイエンは俺を睨んでいる。

「貴様が居るから……居るから……居るから……いつまでも目障りな奴・・消す消す消す！」

どんどんガイエンの言葉が物騒に成っていってる。それに怒りに呼応してるのか地面の影が激しく揺れだしていた。

「みっともない……アギト様が居るから自分が、とか思ってる様だけど、単純にアンタにそれだけの力が無いとか思わないの？　そろそろ認めなさいよ！」

「うるさい！　私は王だ！　王に成った！　全てで勝ることが証明出来る！　なのに何故、お前はそっちにいる？　アギトが居るからだろう！」

セラの挑発めいた言葉で更に激しくいきり立つガイエン。こいつが俺を嫌いなのは知ってたが、まさかこれほどとは。いつからだったんだろうか……ガイエンがこうまでなった理由がコレなら、それは俺のせいなのか？

何で俺なんかと比べるんだよ。

「自分だけで吠える王なんて王じゃないわ。そんなの子供が憧れてるヒーローのグッズを手にして、自分もヒーローに成った気に成ってるのと同じよ。

だけどアンタはもう子供じゃないんだから、私達は優しく受け流さない。それに私子供も嫌いだけど、子供のままの大人ってもっと嫌いなの。だからはっきり言ってあげる。

私がここに居るのはアギト様が居るだけじゃ無いわよバカ！！

私、アンタの事大嫌いなの……それだけよ」

一瞬でこの場が凍り付いたと感じた。まあ主に凍り付いてるのはガイエンと親衛隊の面々だけど、心がピュアなシルクちゃんもセラ

の言葉に幾分引き気味だ。
彼女は嫌いな相手にも歩み寄ろうとする性格だからな。きっとセラの言葉が理解出来なかったのだろう。豪慨不遜な態度のセラは言い終わると自身の髪をさっと撫でてプイっと横向いた。
俺は流石セラ……とか思ってたよ。あそこまで気持ちよく言ってくれるとなんだか笑いがこみ上げてくるな。いやマジで。実際俺だけじゃなく、セラの周りの何人かも腹を抑えてるのが見える。
だってあれだけやりたい放題のガイエンを一喝したんだからな。見事で天晴れだ。
だけど当然に言われた方は笑えるわけはない。奴の影が凄い勢いで震えだし、その影からかまたも無数の叫びが聞こえ出す。笑い声じゃない……今度は叫び。この声もガイエンの気持ちとシンクロしてるのかも知れない。

「私は……私を認めない世界などいらない！　そうか貴様等は私を認める事が出来ないか……なら、私の国に私の世界に居場所は無いと知れ！」
「だからそういう性格が大嫌いなのよ！！　それでも……前はまだマシだったのに」

臆することのないセラ。その視線に耐えきれなくなったのかガイエンは更に叫ぶ。それはセラにではない。そして俺にでも無かった。
ガイエンが求める物は一個の集団だ。

「親衛隊！！　貴様等何をしている！　王を侮辱するそいつ等を戦滅しろ！　認めさせてやるがいい……私が王だと！」
「「「はっ！！」」」

親衛隊は武器を握ってセラ達へと構える。セラ達もそれに応戦するために親衛隊へ向いた。だがその時黒い影が親衛隊を覆うように

被さる。そして轟く悲鳴が聞こえる。
だけど次の瞬間にはその影がどこかへ吸い込まれるようにして消えていった。

「何が……」
「カーテナは、この地を守る騎士にその力を分け与える事が出来る。それこそが『カーテナの加護』と呼ばれる物だ。知ってるだろう？」

現れた親衛隊は一様にその肌を黒く染めている。けどそれはとても俺の知ってる加護なんかじゃ無かった。

黒の叫び（後書き）

第七十五話です。
う～ん色々と難しいです。なんかタイミングが！　てな訳で今回は過去話はお預けです。やっぱ三人揃った時が良いのかな～どうかな～みたいな。
まあもう少し待ってください。
次回は火曜日更新します。ではその時までアディー！

たった一人の戦い（前書き）

僕はたった一人で三体の巨神兵と対峙する。切り札の『イクシード』は何故か発動しなかった。一人で切り札も無くしたが、僕に頼れる奴らなんていない。逃げる事なんか出来ない。

何故なら待ってる奴が居てくれる筈だから。幾ら無謀でも僕はわが身一つで巨神兵へと戦いを挑む。

たった一人の戦い

「一体何で……イクシードが発動しない！？」

洞窟だから？　とかは思えない。何故か今まで掴めていた風が掴めない。この空間のせい？　思ってみればおかしいな場所なのは間違いないんだ。

ここは元々タゼホには無かったとノウイは言っていた。ならこの空間はそもそも奴が用意したもの。イクシードを危険視した奴がそれを封じに掛かっていてもおかしくはない……と思う事にしよう。

「「「キィィアアアアアアアアアアアア！！」」」

「――っつ、くあっ！」

三体の巨神兵が同時にどこからか変な叫びを上げる。その瞬間平行感覚が狂うような立ちくらみが襲ってきた。脳を揺さぶるような叫びに膝を付き、頭を抑えながらも上を見るとそこには鮮烈な光が射していた。

（何だあれ？　揺れてる……振動か？）

奴ら三体の背には何か円形のトゲトゲした物が生えて居てそれが光を放ちながら高速振動してるようだ。そしてこの音もそこから出てる。

その時、その中の一番近い奴が腕を引くのが見えた。

（ヤバい！）

そう思い、僕はとっさに地面を転がった。その直後大きな振動と共に破壊的な音が響いた。何とか避けれたみたいだけど、その攻撃の跡を見たら寒気がした。
かなり抉れてる。大理石も粉々だ。するといつの間にか近づいていたらしいニ体目の体が僕に影を作った。

（間に合わない！）

そう思い、武器を十字構えて防御を選択する。そして次の瞬間、巨神兵の拳がセラ・シルフィングにぶつかった。

「くっ！　ぐあああああああああああ」

受け止めれる……そう思った僕は甘かった。根本的な大きさの差か、あの質量を人一人で止めれる訳がない。僕は踏ん張る間も無く、一瞬で後方へ吹き飛ばされた。
宙に飛ばされた事と、この妙な音のせいで僕の方向感覚は完全に失われた。過ぎゆく視界はただの線で、どっちが上か下かも分からない。
このまま壁に激突するのを防ぐことも出来ないなんて最悪だ。今の勢いじゃ計り知れないダメージが予想できる。最悪、潰れたトマトの様になるかも知れない。

（こんな所で……いや、ここまで来てそんな結末許せるかよ！！）

僕はセラシルフィングを闇雲に振りまくった。とにかく何でもいいんだ。何か縋る感触が欲しい。ここには柱がそれなりに有ったはずだ。運良くそれに触れさえすれば。
その時、セラ・シルフィング何かを捉えた。その感触が切っ先から腕へと伝わった。

「届けぇぇぇぇぇぇ！！」

僕はその感触の方へ体を無理矢理回転させて、届くかも分からないその何かへ剣突き立てる。そして感触は確かにそこに有った。

刃切りの良い音を立ててそれに突き刺さったセラ・シルフィングのおかげで何とか僕は止まることが出来た。でも危機は去ってなんか無い。

特に足下とか……ニ体目の拳は地面すれすれから上へと向かう軌道を取っていたせいで僕の体はかなり上の方へ飛ばされてたらしいんだ。

つまりはこのままじゃ地面に降りれない。さっきと同じようにここから飛んだら潰れたトマトに成りそうだ。それに更によくない事に下の方へ三体の巨神兵が向かってきてる。更に更にはこの音のせいで腕になかなか力が入りづらい。

さっきからシルフィングにしがみつくだけでも精一杯って感じだ。

（本当に、何でこんな事に）

そう思うと頭にさっき分かれた奴らの顔やらが浮かんでくる。リルレットやエイルとか……だけどそれらは頭を振って振り払う。今更だ。それにあいつ等に助けられたく何て……

その時、柱に衝撃が走った。下を向くと巨神兵がこの柱に攻撃を加えている。今更だけど……マジでドデカい広さだここは。特に洞窟の癖にこの高さが信じられない。

あの巨神兵だって十五メートルくらいは有りそうだったのにさここには届かない様なんだ。奴らが小さく見えるってどうなんだよ。

でもここで達観してるわけにも行かないんだ。どの道この柱が壊されたら一環の終わりな訳だし、近くの柱へ跳び移るって事も今の状態じゃ厳しい。

なら、後手に回るより先手を取った方が良いのかも知れない。今ならそれが出来そうだしな。

「イクシード発動」

僕はもう一度そう呟いてみたけどやはり、イクシードは答えてくれない。僕の周りに風は集まらず、奴らの巻き上げる乱暴な風が肌を打つ位だった。

僕は唇を噛みしめて別の言葉を口する。そして柱に刺していたセラ・シルフィングを引き抜き一気に下へと落ちていく。

向かうべき場所を自分で決めてそこへ落ちるだけなら方向感覚なんて無くても行ける。後はタイミングだけだ。

僕が柱から落ちてくるのを察した巨神兵達がこちらを見据えてその巨体を豪快に構え出す。三体でタイミングを合わせて同じ場所で攻撃する気みたいだ。

でも、それならそれで好都合。連携ってのはタイミングを合わせて別の事をやるから驚異であって、同じ事を同時にしてくれるのなら読みやすいし避けやすい。

まあそれでもあれだけ巨大な拳が三個も迫るのは迫力有るし、この感覚が狂わされっぱなしの状態で上手くかわせる保証も無い。

だけどやるしかないんだ。僕しかもう居ないんだから。それにあの拳をかわせずにまともに受けたらきっとＨＰは残らないだろう。だから何が何でもかわす！

三体の拳が目の前に迫る。僕はその瞬間、柱に足を付く。

「――っつ！」

平行感覚の狂いで膝が折れそうになる。だけど何とか体を支えて、そして加速の為に一気に柱を蹴る。更にスピードが上がった僕へ対して狙いが狂った巨神兵。奴らの拳は僕が通った後に柱へ激突して、

凄まじい音と共に柱を折った。
後ろから柱が倒れた影響で粉塵が巻きあがる。これも有る意味好都合。僕の姿が奴らから見えなくなる。既に懐目前。一気に決めるためにセラ・シルフィングにありったけの力を込める。
一体でも良い……このチャンスに倒さないといけない。

「食らえええええええええ！！」

ドデカい図体へ幾重にも剣撃を重ねていく。そしてそれが確かに効いている様に、巨神兵が断末魔の叫びを上げる。だけど、まだまだ！
まだ足りない……こんなんじゃ一体も倒せない。巨神兵の体から離れないようにデカい図体の起伏を利用して攻撃を続けるが一体後どれだけやればいいのか……途方も無く思えてくる。
ＨＰの減りが微弱。ボスクラスだろうしそれが当然だと分かってるのに、気にしてしまう。いつもなら倒すまでそんな事気にしてなくて、いつの間にか終わってる位に夢中に成れるのに今回は気持ちがそこまで入らない。
だから少しずつしか減らない奴のＨＰを見てイライラして焦りが募る。集中力が持たない。そしていつしか単調に成っていた攻撃は防がれて……ミスへと繋がる。
一番大きなダメージを狙える顔を斬ろうとしたときだ。巨神兵の腕がそれを阻んで、避けようと奴の肩部分から別の場所へ跳ぼうとした時に踏み損ねた。

「しまっ！」

そう叫んだときには遅い。支えを失った体は落ちる事しか出来ないんだ。そしてその落ちゆく僕に追撃を防ぐ事は出来ない。
巨神兵の開かれた手が、蠅を落とすような感じで僕の体を地面に

叩きつけた。

「がっはっ！？」

もしかしたらこの一撃で終わっていてもおかしくは無かったかも知れない。そう思えるほどの衝撃が全身を貫いたんだ。飛び散った血液が真っ白いこの場所には良く映えて見えた。

でも……まだ僕は生きている。ＨＰは僅かだが残っていた。本当に雀の涙程だけど、それでも助かった。

（いや、まだか）

不意に視界に入ったのは両側に居た巨神兵の姿。奴らはこちらに拳を向けている。さっきまでは張り付いてたから二体は無視できたけどもうそうじゃないんだ。奴らもここで畳みかける気……というかそれはもう止めのレベル。

受けるわけには行かない。防ぎきれる訳がない。まだ全然足りないがもう仕方ない。これしか奴等の気を引く方法は無いんだ。

僕は立ち上がる事も出来ないままに叫ぶ。

「ライジングバースト！！」

その瞬間中央に立つ巨神兵の体から無数の剣線が青い稲妻と共に吹き出した。それは外で獣人から吹き出した比じゃない。

このスキルは使用条件に必ずニ撃入れる必要があるけど、積み重ねれば積み重ねるほどその威力をますという特徴がある。

まあ、それだって大きさでやＨＰで限界も有るだろうけど、こういう色々な面で規格外な奴ならその効果は絶大だ。幾らだって切れるし。

てな訳で、激しい稲妻が全身から吹き出しそれらは両側のニ体へ

も移る。これで三体が同時に攻撃された状態だ。激しい閃光と三体の合わさった叫びがこの空間に木霊する。

（逝ってくれ）

僕は何とか膝を付いて剣で上体を支える態勢にまで持っていきそう願った。実際僕も今日初めて使ったスキルだし、これは明らかに予想外の威力。

先の獣人戦で使える事は確信してたけど、これなら行けるかも知れない……が、奴等だってそんなに甘くは無さそうだった。

中央の奴はＨＰが半分以上減ったがそこが限界らしかった。両側の奴等なんて影響を受けたといっても更に微々たる物だ。

次第に小さくなっていく電撃……そして再び力強く地面を踏みしめる三体が減らずに目の前に居る事実……最悪だ。

だけどその時、ある事に気づく。

（ん？　音が無い）

あの平行感覚と三半規管を狂わすような不快な音が消えている。さっきまではスパークする電撃の音で聞こえないだけと思っていたがそうじゃない感じだ。何か致命的な物をさっきの攻撃で破壊出来たのかも知れない。

すると中央の一番ダメージを食らってる巨神兵にそれは現れた。奴の背中で光っていた円形のトゲトゲした物体が光を失い地面へと無惨に落ちていった。

半分以上のＨＰを削られた巨神兵は怒っているのか、両側のニ体よりも早く動き出す。だが……あの音が無いのならそんな直線的な攻撃、避けれない物じゃない！

しっかりと地面を踏みつけ後ろに跳ぶ。それだけで事足りる。今のＨＰで攻めるのは危険すぎるし、横へ逃げれば両側のニ体が来た

だろう。だからこれがベストな選択の筈だ。
僕はかわした直後にウインドウを開き、アイテム欄から小瓶に入った黄色の飲み物を出して口に運ぶ。シュワシュワと口の中で炭酸が弾ける感覚。そしてＨＰがそれなりに回復する。
それを続けざまにもう後ニ個飲んでなんとか安全圏へ。これでもう一度戦える。

「でも、おかしいな」

僕はそう呟いて追撃を交わしつ巨神兵を考察する。そもそも何で音が止んだ？　一個を壊したからって後ニ個有るじゃないか。それにそのニ個はちゃんと光を放ち振動してる様に見える。

「元々三個が揃って共鳴した音にだけ効果が付いてたって事か？」

そう考えるしかない。でもそのおかげで助かった訳だ。まともに動けないんじゃ戦いようが無いからな。それにこいつら、まともな技をあれ以外持ってないようだし。
さっきから『殴る』しかしてこない。その図体でたった一人の人間を潰すのは逆に難しい様な気もする。柱を上手く使えば三対一でも何とかやる過ごせる。
だけどこれはこれで怪しい気がするんだ。こんなたった一つの技しかないモンスターなんて作るだろうか？　それにこいつら、三体いるのが味噌の様な気がする。微妙に造形違うし。
そう一刻も早く一体を消した方が良いような……そんな感じが肌をピリピリと刺激するんだ。

「逃げててもしょうがない……か！」

僕は拳をかわし、地面にめり込んで止まった腕を駆け上げる。狙

うならやはりこいつ。さっきの攻撃で半分以上ＨＰを減らしたからこいつが一番倒しやすい筈だ。
腕から飛んで顔面へ斬撃を食らわせる。すると意外な程に効いてる？　ライジングバーストを食らわせる前より、奴の装甲が薄くなってる感じだ。
これなら一気に畳み掛けれるかも知れない。グラツく巨神兵に更なる斬撃を追随させる。確実にＨＰは目に見えて減っていく。
だが巨神兵も自身の両手で僕を払おうとしてくる。だがそんな攻撃をかわすのはわけない。僕は装甲が薄い分……というか命に関わるから避けるのだけは常に磨いてきた事だ。

「よっとっはぁ！」

執拗に頭を狙って切り続けてようやく、ＨＰバーが黄色くなった一体の巨神兵。もう少し……後少しで倒せる。そう思った矢先だ。
視界に入ったのは後二体の巨神兵。だけどこれだけ近づいてたら奴等は手出し出来ない。それは前の状況が証明している。だが手を出したのその二体じゃない。
僕が攻撃してる奴が後の二体へ手を出した。というか腕を伸ばして背の輝いてる部分をもぎ取った。そしてそのもぎ取った部分が僕が攻撃してる奴の背で結びつく。

「何だ？」

その瞬間強烈な光が視界を遮り、同時にその光の衝撃に体を強引に離された。大理石を擦って地面に降り立ち、前を見ると今度は三体が同時に光りだしている。
背のアレを取られた奴等まで光ってるって事がよく分からないが、取り合えずイヤな予感がするのは確かだ。強烈な光のせいでよく見えないが二体のシルエットが変わってるような気がする。

そして次の瞬間頭上から何かが振ってきた。

「ぐあああ！！」

何とか間一髪でかわしたけど、衝撃で飛び散った破片やがら容赦なく体を打つ。何が起こったのか目をやるとそこには大きな白刃の剣がめり込んでいた。

「まさか……これって」

視線を今度は前方へ。すると和らいできた光の中からその姿が徐々に鮮明に現れていく。白刃の巨剣を引き戻し、もう片方には巨大な白百の盾。それらを携えて勇猛に立つその姿はまるで――

「騎士」

――そう思わずにはいられない姿だ。そう言えばアルテミナス城の彫像に似たようなのがあった気がする。この巨神兵が三体で、しかも単調な攻撃しなかったのはこういう事か。

元が三体で一体の騎士って事らしい。この剣も盾も両側の二体が姿を変えた物に違いない。元々デカい図体の割には良く減ると思っていたＨＰも一体を三つに分けてたから。

だけどそれもこうなると無意味だった様だ。三位一体した巨神兵のＨＰは全回復してる。それに良く見ると三つのＨＰ表示が本体・剣・盾とある。何これ？　さっきの三倍位ＨＰがありそうなんだけど。反則だろう。

なら僕の努力の分を蓄積しとけと言いたい。まあ、ここからが本番……って感じかな。苦笑いがこみ上げて来そうだ。

そうこうしてる内に巨神兵は剣を引き真っ直ぐに僕めがけて付いてきた。あんなの受けるわけには行かない。僕は横っ飛びでそれを

回避。すると信じられない位勢い良く、剣は床へ突き刺さる。
まるで大理石の床がスポンジケーキみたいに見えたよ。だが安心してる場合じゃ無かった。それだけ簡単に床へ刺さるほどの切れ味と攻撃力。そしてこれだけ巨大な剣をあの速さで振れる腕力……それらがあるから出来る規格外。
突き刺さったまま剣はこちらに向かってくる。そしてその振動が足を奪う。そして床を抉って弾き出される刃を何とか剣で受け止めるのが限界。
凄まじい衝撃は剣から腕へ伝わり、そのまま体は中へ浮く。そして不意に頭上に影が落ちる。衝撃に耐えながらも上をそこにはあの巨大な盾が待ちかまえて居たよう準備されている。

（不味い！！）

そう思ったときには、そのドデカい盾は振り下ろされていた。受ければ確実に地面に叩きつけられる。かといってこれだけの広範囲をカバーする盾は避けられない。
でも今のＨＰ残量じゃ絶対に受けること何て出来ないんだ。回復役のヒーラーだって居ないんだ。これ以上攻撃を貰えばセツリの場所までたどり着けなくなる。魔法と違ってアイテムは有限だ。
だからここはこれしかない。

「残影！」

その瞬間自身の体が一瞬ブレる。そして振り下ろされた盾が僕の影の方を打ち払った。一分に一度の絶対回避スキル。僕には傷一つ付かない。
丁度いいから下にある盾に攻撃を加える。すると横から凪ぎ払う形で剣が来る。とっさに盾に潜ってそれをかわす。だけど今度は巨神兵が盾を持ち上げたからそのまま地面へと落ちた。

「くそ、意地でも張り付いとくんだった」

あれだけデカいんなら近くに居る方が安全だからな。でもそんなのは後の祭り。再び白刃は振り下ろされる。同じ様な軌道。今度は衝撃まで踏まえて少し前方斜めへ、そして背に受けた衝撃を利用して一気に加速。破片の痛さは我慢する。

だがその時立ち塞がる壁が現れた。それは盾だ。

「どけええええ！！」

叫びながら僕は盾を切りつける。だけどその瞬間刃が届く前に何かに押し戻された。

「くあっ……何だコレ！？」

切りつける事も出来ないなんて反則だろ。斥力でも張ってるのかあの盾。でもさっきは裏側には攻撃が通ったのに――って、それは裏側だからか。ようはあの盾の攻略法は裏側って事。でもそうそう裏えなんて回れない。

だって基本攻撃は剣が、それをかわして目指すべき場所の前へ盾はある。一人でやってる今の状況で盾の裏を取るなんて分身でも出来ない限り無理だ。それかセラのあの特殊な武器。

どんどん勝てる見込みが狭まる気がしていく。一人での限界……そんな物が見えだして来た気がする。

後ろに飛ばされた僕へ再び剣が襲う。床を本当にサクサク斬りやがって寒気がする。あの柱だって三体いたときは何発も打ってようやくだったのに、あの剣なら一撃で切れる様だ。間違いなく攻撃力も桁違いにあがってる。

そしてあの盾……どうしよう、糸口が全く見えない。盾は無駄な

攻撃はしないが、来るときには絶妙なタイミングであの剣と連携してくるんだ。それがやっかい過ぎる。
今はどうにかやり過ごしてるが、少しずつ確実に肌にまで届いて来てる。波の様に続く波状攻撃……これを僕は前にも見たことがある気がする。
その瞬間、ついに盾が僕の体を捉えた。打ち出された盾の側面部分が凄まじい衝撃で僕を襲った。

「ぐあああああ！！」

ズドーンと柱に盾ごとめり込む形だ。不味い……動けない。このままじゃ今度はあの剣で刺されるだろう。動かない標的なら、当てるのなんて簡単だ。
目の前に立つ巨神兵がその巨大な白刃をこちらに向ける。結局僕は何も出来なかった……人一人の力はこんなにも矮小なのかと嘆きたい。ただ一人でも助けたい人を救える力があっても良い筈じゃないか。

「イクシード！　イクシード！　イクシード！」

だがやはり幾ら叫んでもここに風は生まれない。そして迫る白い刃。

（ごめんセツリ……）

この場に地震の様な衝撃と轟音が響き、粉塵が大理石の床静かに漂う。そして僕はやられた……筈だった。

「スオウ……私はね、アギトに会えるって確かに思ったよ。でもそれだけじゃない！　あの時……あの悪魔戦で助けられなかったあの

子を今度こそって……今度こそ助けてあげられるって、私もエイルもちゃんと思ってるから……それじゃあダメですか？」
「リルレット……それに……みんな」
目の前には別れた筈のみんながその白刃を受け止めてくれていた。そして後ろから暖かい光が僕の身を優しく癒してくれる。それから続いて複数の魔法が巨神兵へと直撃して奴を後ろへ後退させた。
「どうして……」
そう呟いた僕に彼らは言う。
「別に……俺達はどこまで行ったってここをゲームとしか見れないし、それで良いと思ってる。お前から見たら覚悟が足りないのも遊び半分なのも認めるさ。
だが俺達は俺達なりにこの遊びに真剣なんだよ。それだけじゃやっぱりダメか？」
何でだろう……何でこんなに、この背中が暖かいと感じるのだろう。離した筈なのに……

たった一人の戦い（後書き）

第七十六話です。
どうしてリルレット達が来たのかは次の次位で分かります。引っ張る必要ないしね。スオウがどういう形で仲間を信じ受け入れるのか……まあ、最初から知ってた筈なんですけどね。
意識してなかった事を改めて考えると不協和音が生じるというやつです。
てな訳で次回は木曜日に更新します。それではまた～。

燃えたぎるは炎の壁（前書き）

カーテナの加護を受けた親衛隊との戦いが始まろうとしてる。だがその姿を俺達は加護なんて物に思えない。それを知ってる俺達には特にだ。そしてセラやシルクちゃんは俺を退け者にしようとするし……挙句の果てには俺とセラ達を分ける炎の壁が夜空を突いた。

だがそれはみんなの優しさ。そして思い。俺の前にはガイエンだけが佇んでいる。

燃えたぎるは炎の壁

『カーテナの加護』それは過去に一度、アイリがこの国を取り戻す為に解放したカーテナの力。あの時は個を主張するエルフがようやく団結した時で、加護は俺達に勝利をもたらした要因と言っても過言じゃない。

アルテミナスの国土に居るエルフ全てに距離を関係なく、攻撃力・防御力・身体強化あと他色々をブーストしてくれる加護はまさに最高峰の補助スキルだ。

それが今や敵である親衛隊に施された。同じエルフで、アルテミナスの地を踏んでる俺達には何故にカーテナの加護が掛からないのか……それはあくまでその対象者を使い手が選べるから。

前の時は全員で一致団結してたから、この地に居るエルフ全てにアイリは加護を施した。そこに迷いなんてなかっただろう。

だけど今の加護は条件付き。きっとガイエンがカーテナに下した指示は『親衛隊にだけ加護を』みたいな事だろう。多分、同じようにガイエンの指示で首都を守るために戦っているアルテミナス軍に加護は施してない。そういう気がする。

「カーテナの加護ですって……これが？」

そう呟いたのはセラだ。見据える先は浅黒い肌に一様になった親衛隊。セラも加護がどういう物か知っている。これがアイリが使った加護とはどうしても思えない様な疑問の声。

それは俺も全く同じだ。だってあれはかつてその身で受けた物とは随分違う。あんな浅黒く肌がなったりしなかった。ただ優しい光が仄かに体を包み、すると感じる……このアルテミナスと言う大地全てが守ってくれる様な包容感。そんな暖かな物だった筈なんだ。

「そうだ、それは紛れもなくカーテナの加護を受けてる状態。疑うのなら確かめて見ればいい。だが覚悟する事だな。そして後悔も同時にしておけ。
王に逆らう事がどれだけの罪で、貴様が認めなかった私が真の王だったとな」

ガイエンの言葉に鋭い眼光を飛ばすセラ。だがその時、セラの前に白い影が舞うのが見えた。

「我らの王を何故認めない？」

それは一人の親衛隊。肌は黒くなっても服までは変わってない……というか、肌が黒くなった分騎士服の白さが逆に栄えている。
闇に浮かぶような騎士がセラに接近して長剣を振りかぶる態勢。

「――っつ！　アンタ達」

セラは何とかその攻撃を袖から出した暗記で受け流しす。だが普段なら続けざまに反撃をしそうなセラの体は、予想よりも大分崩れてる。
どうやらカーテナの加護でパワーアップしてる状態だから思ったよりも威力が高かったんだろう。それに速かった。親衛隊が幾らガイエンが集めた精鋭だからってセラだって引けを取らない筈だ。普段なら。
やっぱりアレは紛れもなく加護の状態と言うことか。セラは崩れた態勢でもそのまま言葉を続ける。

「なんでそんなに成ってまであんな奴に付くのよ！　どうかしてるのよアイツ。ちゃんと目開いてるんでしょうねアンタ達？」

「たかが色が変わっただけだろう。それにアイツなど無礼千万だな。あの方がどれだけ国を……我々を思ってるのかも知らぬ分際が！！
貴様等の方こそ、その目を開いてあの方の姿を焼き付けろ！　自身を犠牲にしてまでこの国を想うあの高尚な姿をな！！」

激しい言葉がこの場に木霊した。親衛隊の奴らにはあのガイエンの姿が立派だと映ってる様だ。それに自分達の変化も気にして無い様子。
確かに肌の色が変わるだけなんてカーテナの加護っていう前提を取り払えばそんな驚く変化じゃないのかも知れない。肌の違いなんてリアルでもある訳だし、ガイエンの様に化け物じみてる訳じゃないんだからな。
寧ろこいつ等はこの変化をガイエンに近づけたと喜んでいそうでもある。高尚……なんてあの姿を見て思えるんだからな。
言葉と共に地面に膝を付くセラに突きつけられる長剣。あのセラがたった一撃で追いつめられるなんて……やはりカーテナの加護の力は厄介だ。ただでさえ親衛隊はこちらより数が多い。
まさに圧倒的に不利な状況。

「何が目に焼き付けろよ……あんなの一分一秒たりとも見たくもないわ」

だけどどんなときでもセラの毒舌は変わらない。本当に頼もしい奴だ。前よりしつこく無くなったしな。だけどその言葉は親衛隊に剣を振らせるには十分な言葉だった。
突きつけられてた剣を親衛隊の奴は一度掲げる。

「よろしいですかガイエン様？」
「ああ、その身にわからせてやれ」
「はい」

そんな僅かなやりとりの間に俺は駆け出す。セラをやらせる訳には行かない。だけど後振り下ろすだけで良い時間と駆け寄る時間には差がある。間に合わない……だけどその時、何かが親衛隊の腕へかぶりついた。

「クピー！」
「ナイスピク！」

言葉と共に動き出すセラ。ピクに腕を噛まれて攻撃出来ない親衛隊へあの変形型の武器を振りかぶる。それはダメージとして通り親衛隊は後ろへと下がった。

「セラ！　大丈夫か？」
「ええ、ピクのおかげで助かりました」

セラの元にたどり着いた俺は親衛隊共を睨んで武器を構える。そして良い働きをしたピクは主の元へ戻っていた。
そしてそんなセラを肩に下ろしてシルクちゃんがおもむろに俺の槍に手を添える。

「アギトはこっちは良いですよ」
「は？」

訳が分からない。親衛隊は加護の力でかなりパワーアップしてるのに、ただでさえ少ないこっちは一人でも多い方が良いはずだ。
それなのに……

「そうですね。アギト様はこっちは気にしないでください」
「おい？　セラまで何言ってるんだ？」

何で二人してそういう事を言うんだよ。周りのみんなも戸惑い気味じゃないか。今言い争ってる場合でも無いだろうにさ。

「くくはははははは！！　女二人に用済み扱いとは、よかったなアギト」

少し離れた場所からガイエンのそんなふざけた言葉が聞こえて腹立たしい。だけどそれには直ぐにセラが言い返してくれる。

「うるさい、黙ってなさいよ。アギト様をアンタと同じ価値まで下げないでくれる」

「くっ……親衛隊！　全員で掛かれ。一匹たりとも逃がさずにねじ伏せろ！」

セラの言葉に堪忍袋の緒が切れたガイエンが一斉に親衛隊を動かした。黒と白したパンダみたいな色の集団が一気に俺達へと詰め寄って来る。この状況じゃ、さっきの様な言葉はもう言えないだろう。

だがシルクちゃんは俺の槍から手を離そうとはしない。自分の直ぐ後ろにまで既に親衛隊が迫ってるのにも関わらずだ。

「シルク！！」

「アギトはここに何しに来たの？　私達は何の為に集められたの？　それを思い出して！」

その瞬間、後ろからの光線が迫っていた親衛隊の足を止めた。そしてその強い光に誘われるように、ここに居る誰もがそれを放った人物へと目を向ける。

そこには腕を突き出したセラとその周りに八つの聖典が円を成して回っていた。

「聖典収束砲解放終了。アギト様・・私達は貴方が決着を付けられる様に居るんですよ」
「セラ……」

八機の聖典からは白い煙が上がっている。あれは大技だからな。収束砲は最低でも四つの聖典を同時に操れないと出来ない技。そして四の倍数毎にその威力は跳ね上がると聞いた。
だから八機の今回も威力は上がってる筈だ。その証拠にカーテナの加護を受けている親衛隊でも、直撃した奴は半分以上のＨＰを減らしている。
確かにこれなら……とも思う。

「いや、ダメだ。危険すぎる。数が違うんだぞ。きっと次は無い」

元々収束砲は連射出来るものじゃないんだ。それに真っ直ぐにしか進まないし、気を付けてればそうそう直撃なんかしない。切り札には成り得るけど、それは止めの一撃としてだ。
これだけの数相手だと次を打つことだって難しい。だけどそんな俺の真剣な言葉をセラは笑顔で吹き飛ばす。

「なら尚の事でしょう。今更こちらに一人増えたって余り意味はないですよ。それよりも頭を潰した方が確実じゃないですか？」

セラは横を向いてガイエンを指さす。そして指を刺されたガイエンはまた笑っていた。

「はーはっははっはははは！　私を倒す？　世迷い言だな。全てを無くしたそいつに、全てを手にした私を倒す事など不可能な事だ！」

今度はガイエンが俺を指さしている。嘲りと、中傷の入った顔でいやらしく微笑みながら。あの余裕あの自信。全てはカーテナがその身にあるから何だろう。

確かにガイエンは周到な計画で全てを手に入れた様だ。そして俺は全てを確かに無くした。力も無くした……想いだって……そして挙げ句の果てには仲間や友を自分から捨てようとまでした。

だけど俺はまた戻ってきた。捨てた物を拾い集めて、無くした物を取り戻す為に。けれど確かに、それが果てしなく難しいと感じてる。

俺の手に残ったたった一つの槍と、奴が一体化したカーテナという剣は武器の格がそもそも違いすぎる。それにあんな姿に成ってまで……ズレてると思うし、確実に間違ってると思う。

だが、あれだけの覚悟は本物だと親衛隊や今までのガイエンの行動で確信していた。だからだろう……俺の槍は無意識の内に僅かに震えている。そして言い返せない。

だけどその時、強い何かが槍を伝って伝わった気がした。震える槍を彼女は力強く握ってる。

「そんなこと無い！！　アギトならきっと……ううん絶対に貴方を倒す事が出来ます！　この場に集った私達は、誰もがそう信じてるんですから！」

放たれた言葉は力強く攻撃的。彼女にとってはとても珍しい事だ。だが、俺に伝わって来た物はもっと優しい感じの物。

彼女が……シルクちゃんがそう叫んだ時、槍から伝わった物を悟ったよ。きっとあれは『勇気』だったんだ。シルクちゃんは俺に勇気を分け与えてくれた。

「ふん、人間風情では力の差も分からんようだな！」

その瞬間再び、ガイエンの影が炎の様に揺らめきだした。そして俺も槍を握る腕に力がこもる。

「分かりますよ。私はエルフ……だから分かります。アギト様はアンタ何かに絶対に負けはしないと！」

セラの言葉の終わりに爆発したように伸びた黒い影が二人へと襲いかかる。今度は初めから飛び出た二つの影が二手に分かれてセラとシルクちゃんを狙っている。

だけど二人は動かない……何故……その時俺は気付いた。槍に添えられてたシルクちゃんの手が離されてる事に。後はもう考える事なんかしない。ただ想いのままに俺は飛び出し、分かれた二つの影をスキルを発動させた槍で叩き斬る。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

本体から切り離された影は砂のように消えていく。

「アギト、貴様！！」

「勘違いするなよガイエン。お前の相手はこの俺だ！！」

吠えるガイエンに俺は槍を突きつけて言い放った。そしてピクが甲高く鳴いて、その羽を世闇に舞わせる。だけどにらみ合う俺達にそれを綺麗だと思える余裕はない。

やっちゃった感は有るがこうなったら……元々そのつもりで来たのも事実。シルクちゃんから貰った勇気のおかげでもう腕は震えてない。

瞬きすら出来ないような緊迫感の中、いきなり俺の背中に衝撃が走った。

「ぬあ！？」

まさか親衛隊の攻撃？　そう思って振り向くと背中に思いっきりぶつかってるのはピクだった。なんでピクが？　とか思ったけど、ピクが自分からこんな事するわけ無い。　俺は少し離れたシルクちゃんを見やった。

「よっし！　ナイスだよピク。これで準備万端。アギトはもう大丈夫だよね？」

「シルク……」

その顔は何だか決意に満ちたような顔だった。だからだろう、文句を言おうと思った口が名前を呟くだけに止まったのはさ。

「くっ、ガイエン様を守れ！」

今までセラの収束砲で止まっていた親衛隊がその声で再び動き出そうとする。だがそれはどうやら一足遅かったみたいだ。さっきのシルクちゃんの準備万端――その意味がここで分かった。

「行かせません！　ピク！」

シルクちゃんの声で背中から離れたピクが俺の後ろに炎を吐く。そして続いてシルクちゃんが片手で杖を掲げて詠唱してたらしい魔法を発動する。

するとなんと、地面に吐いたピクの炎が俺とシルクちゃん達を隔てる壁の様にせりたった。

（ピクとシルクちゃんの複合技？　こんな物いつのまに……）

というか、まだ正式実装されて無いのにピクは随分技が豊富な感じがする。炎の壁に阻まれてこちらに向かおうとしてた親衛隊は立ち往生。その間にも炎の壁は広がり続けて迂回するルートをも阻んで、完全に俺達は寸断された。

炎の壁は空へと真っ直ぐに伸びて、この夜の一番の光源と化している。そしてそんな炎の向こうから声が聞こえる。

「アギト様……早くそこのバカを倒してください。まあ私達は誰一人、やられる気は無いですけどね。だから心おきなく戦ってください」

「貴様等ぁぁぁぁぁ！！」

言葉と共に聞こえだしたのは武器のぶつかる音やスキル・魔法の炸裂音。道を阻まれた親衛隊がみんなに攻撃を始めたようだ。

なんでここまで……そう唇を噛みしめる。なんでここまでさせてしまったんだ。それは俺が一瞬でも怖じ気付きそうになったから。みんなが出来る後ろ盾はこれだけだから。

みんなは譲ってくれたんだ。そして託してくれたんだ。確かに全員が無事にここを切り抜けるにはセラの言ったとおり、ガイエンを潰すのが一番有効。

そうすればカーテナの加護も無くなるし、ガイエンを倒せばまたアルテミナスは一つになれる。なら、俺のやるべき事は一つ何だろう。

けど、炎の壁の向こうで響く声が気になる。加護を受け取っている親衛隊は強敵だ。だけどその時、そんな不安を吹き飛ばす様な声が向こう側から届いてる事に気付いた。悲鳴も呻きも有るけど……それ以上に叫ぶ声がある。

「行けええええええアギトオオオ！！」

「しょうがないから、こっちは引き受けてやる！」
「セラやシルクちゃんの言うとおりだ！！　俺達は全員お前を信じて賭けてんだよおおおお！！」
「「「だからさっさと行きやがれえええええ！！」」」

その力強い声に頬を叩かれた様な衝撃が走った気がした。セラやシルクちゃんの言ったことにみんなが本当に賛同してくれてる。仕方なくらしいけど、それでもそのエールは次々と『勇気』という形に変わって俺の心に貯まる気がする。
俺は炎の壁に背を向けて言い放つ。真っ直ぐに俺も自分が倒すべき相手を見つめて。

「任せろ！　必ず倒す！！　だから誰もやられるな！」
「「「おう！！」」」

迷いなんて吹き飛んだ、不安なんてこの炎に焦がしてしまえ。そして燃えたぎらせるは消えない闘志。みんなから受け取った勇気がその燃料だ。
構えた槍にスキルを纏わせて、俺は駆け出す。因縁の相手へと。

「倒せる物か！　お前に私がな！！」
「倒す！　何が何でもだ！　お前はやりすぎたんだよ、ガイエン！！」

振るわれるカーテナの攻撃。それらは地面を砕き、激しい衝撃が空気を伝って肌に伝わってくる。だが、当たりはしない。
攻撃が来るタイミングはガイエンの腕を見てれば分かるんだ。後はそれから逃れるだけのスピードが重要。流石にテツやスオウ程じゃないが、それを成すスキルだってある。一瞬の加速程度訳はない。
それにガイエンの奴は化け物じみてから動きがどうも緩慢だ。余

裕の現れ……アイツはいつだって自分が一番と思いたいタイプ。それがカーテナと一体化した事で、まさしく誰よりも優れていると実感でもしてるんだろう。
　ようは他人を下に見る癖に拍車が掛かった感じ。ならその下の奴の攻撃で目を覚まさせてやる！

「うおおおおおおお！！　食らえガイエン！」

　ガイエンまで後一足。振るった槍は確実にガイエンの頭へと直撃して爆散した。槍の先端で上がる煙の中にもう奴の頭は無いはず……だけどおかしい。
　ガイエンのＨＰバーは一ミリも減ってはいない。そう思った時、奴の影が揺らめくのが見えた。

（ヤバい！）

　そう感じた俺は槍を引き抜いて後ろに後退する。その瞬間、影が無数の刺が飛び出す。危なかった。判断が一瞬でも遅れていたら今頃は串刺し状態だ。
　でもどういう訳だ？　なんでガイエンのＨＰは減らない？　そういえば変身後最初にアイツの胸に槍を刺した時もＨＰは減らなかったし、変な感触で動じてもいなかった。
　そして今度は爆散までさせたのにそれでも無傷……って訳じゃ見た目は決して無いのに、ＨＰはソレを表している。
　煙が晴れたガイエンの頭は確かに無い。体もダランと力無く垂れ下がっている。なのにさっき攻撃された。倒してなんか無い……畳みかけた方がいいのかどうか迷う所だ。
　こうやって見ると、本当に俺達は遠く成ったと感じる。だけど実はそう感じてるのは俺だけなのかも知れない。こいつは元から同じ空なんて見てなかったのかも知れない。そんな事を思ってしまう。

力を込めて槍を握り。俺は再びスキルを発動させる。そして顔の無いガイエンへと突っ込んだ。そして防御するように立ち塞がった黒い刺を凪ぎ払い、再びガイエンへ直接攻撃を試みる。

「お前は！　出会った頃から野心に溢れてたけど！　それでもエルフという仲間に対する思いは本物だった！　少なくとも俺やアイリはそう思ってた！

仲間だと思ってた！　なあガイエン……いつから狂ったんだよ俺達は！」

休まぬ攻撃を続けながらそんな事を俺は叫んだ。頭がない奴に叫び続けるのもおかしな事だと思ってたが、こいつには聞こえてるはずだ。何故ならガイエンはやられて何かいないのだから。

実際、幾ら切り刻んでも奴のＨＰは毛ほども減りはしない。そして遂に俺の槍は何かに防がれた。見えない壁の様な物……俺はこれを知っている。

これはカーテナの作り出す障壁だ。そして阻まれた攻撃の向こうからくぐもった声が聞こえ出す。

「いつからだと？　教えてやろうかアギト。それは……」

耳障りな声と共に目の前の頭の無い首部分へと黒い影が集まりだしている。そして形成されていくのは間違いなくガイエンの顔だ。

アンパンマンかお前は！　と突っ込む余裕は俺には無かった。目の前で頭が粘土の様に練り上げられていく様を見ればきっと誰だってそうだろうと思う。

そして完成された顔で真っ黒な口を開けてガイエンは言い放つ。

「初めからだよぉぉアギト！！」

「――っつ、ぐあ！」

奴の言葉に弾かれる様に後方に飛ばされた。カーテナと一体化してるって事は実は腕じゃなくてもいいのかも知れない。それは即ち、ガイエンの全身がカーテナ。
うまく着地したが、衝撃分の微弱なＨＰは持って行かれた。割に合わない事だ。こっちはアイツの体を引き裂いてるのにダメージは無いのに、俺はあれだけで持って行かれるんだから。
そして当のガイエンは面白そうに高笑いを続けている。だけどこれはアイツの笑いだけじゃない。再び無数の子供の笑いが混じっている。
ガイエンの口から、それは聞こえているのかも知れない。

「くはははははははは！　お前達は本当におめでたかったな。利用されてるとも知らずに、仲間だの友達だのと好き勝手に信用してくれて、実に扱い易い奴等だった！
おかげで私は今、ここに居る！」
「お前……本気で、そんな事！！」
「偽りの世界で、私は友など求めていない！　ただ上に！　もっと上へ！　それだけだ！」

言葉の終わりと共に、降ってきた重たい力。だけど俺はそれを跳ね退けて駆けだした。

「ここが偽りの世界でも！　俺達が共有した時間は一生の内の掛け替えのない本物だ！　あの時の笑いも涙も喧嘩も、今更偽りだなんて言わせるか！」

炎の壁が夜空を焦がす。その時、星が一つ流れて行く。

燃えたぎるは炎の壁（後書き）

第七十七話です。
ようやくアギトとガイエンの一騎打ちの場が整った感じです。てか、カーテナなんて反則的な物と融合したガイエンにアギトは勝てるのか？　まあ穴は色々と空けてるけど、それも余りある位にカーテナは強いのです。
でも想いだけで勝つってのもご都合主義的で嫌なので、アギトには頑張ってもらいましょう。
てな訳で次回は土曜日に更新します。お楽しみに。

想いという風（前書き）

僕の前に現れたのは別れた筈のリルレット達だった。なんで……どうして……そんな風に困惑した。だけどそんな僕とは裏腹にみんなは笑いかけてくれる。そして理由と訳を知った時、この場に生まれている風に気付いた。

みんなと共に目の前の敵を倒す為にもう一度行ってみよう。

「イクシード」と。

想いという風

みんなから問われた。

「やっぱりこんな俺達、私たちじゃダメなのか？」

と。僕とは絶対的に違う思いだけど、それじゃやっぱり仲間とは認められないかとみんなは言った。それはみんなは僕の事を許してくれてるって事なんだろうか？

あんな身勝手言って、飛び出したこんな僕をさ。最初から分かってた事に文句を付けたんだ。一方的に僕がみんなに失望したに過ぎなかった事。

でも……みんなにとってはそれすら謂われなんて無かった筈だ。怒るのも無理はない……そしてたがった筈。じゃあ、なんでみんなはここに来たのだろう。それが僕には信じられない事で、だからみんなからの問いを片隅に置いた言葉が口から出ていた。

「どうして……」

僕はみんなの顔が見れないよ。申し訳なくて…大口叩いたけどこんな情けない格好でさ。そして安心した自分が居た事をまだ悟られたくなくて……だから顔は必死に伏せた。

その時、トコトコと後ろから小さな姿が出てくるのが見える。それは良く知った奴で僕にみんなを信じれなくさせた奴。

「あーそんなの決まってる。あの人だよ。テッケンさんがお前の暴言にフォローを入れてくれたんだ。出なきゃ誰がお前を助けに何か来るかよ」

頭を背けてフンッと鼻息を荒く吐き出すエイル。すると真っ先に駆けつけてくれたリルレットがそんなエイルをポカンと小突いた。

「もうーエイルはまだ言ってるのそんな事。エイルだって本当は悪い事言ったと思ってる癖に。もっと素直に成らなきゃダメだよ！」

「だ、誰がこんな奴の事！　リルが言い出さなきゃ俺は絶対に反対だったよ！　だから勘違いするなよな！　俺はリルを守るために一緒に来ただけで、お前を許して助けに来た訳じゃないんだぞ！」

リルレットの言葉に動揺してるのかエイルはやけに口早に成っている。それに顔もなんだか赤いし。本当に素直じゃない奴だ。まあそれは僕も言えないだろうけど。

その時、魔法で吹き飛ばされた巨神兵が再びこちらに向かって来てる。前方では集結したみんなが色々と攻撃を加えているが不意打ちじゃないからか、奴の態勢を崩すまではいかない。

それに巨神兵はみんなを攻撃していない……ただ何かを目指すように腕を伸ばしている。そしてそれは真っ直ぐに僕へと向かってる。いや違うか。

巨神兵は僕じゃなくこの盾を取ろうとしてるんじゃないか？　そう思うと同時に案の定、巨神兵の腕は盾を突き刺さった柱から引き抜いた。そして僕も解放されて地面へと落ちる。

「――っつ！」

そんなに高くは無かったけど、ダメージが蓄積された体にはキツい物があった。傷や外傷はヒーラーの人の魔法で粗方直ってたけど、鈍い痛みの様なのが僕の場合しばらく続く。

「大丈夫？」

そう言ってくれたのはリルレットだ。僕はそんな彼女に「ああ、平気だよ」と返した。なんだかさっきのエイルの口調からだとここまでみんなを引っ張ってくれたのはリルレットみたいだし……これ以上迷惑掛けるのも何だしね。

それに平気なのは本当だ。回復魔法の有り難みに痛みいるね。ＭＰが入らないＬＲＯでは本当に魔法は便利なものだ。使いたい放題だし。

だけど何故かちゃんと自分で立ち上がった僕をリルレットはジッと見つめてる。何だか辛そうな視線だ。そんなに弱々しく見えるだろうか？

するとリルレットはか弱い声を出した。

「その肌や、服に残った跡は血……なんだよね？」

「え？　ああ、まあ」

突然のそんな質問に僕は素直に頷いた。って、余り広めいない様に心掛けてたのに何やってんだ僕は。でもリルレットが普通に指摘するから……と言うか、みんながテッケンさんから聞いた事ってもしかして――

「やっぱり本当なんだ。どうして……最初から言ってくれなかったの？　いつから……あの時の悪魔の時からそうだったの？

私的にはこっちの事の方が怒るよ！」

「リルレット」

――やっぱりそうだと確信した。テッケンさんはこの事を言ったんだろう。それでもこんな事、信じれる筈無い物だけど……みんなはそれを信じたって事なのか。

だから「お前からみたらどこまで行っても遊びで、覚悟も足らな

い」か、確かに僕はあの時そう思った。エイルから突きつけられた周りの見る目なんかを知ったときに、「遊び」だとそう思った。
それが何だか許せなく成ったんだ。でもそれが何だったんだろうと今は少しずつ思える気がする。だってその後に続いた「遊びでも俺たちはそれを真剣にやってる」に嘘なんてきっとない。
みんなこのＬＲＯに真剣なんだ。有る意味、その遊びに命を懸けてる奴だっているかも知れない。同じように真剣じゃなくて……いろんな自分の目指すべき物の為に真剣。それで良いのかも知れない。
その道の途中でかかわり合えたら、それで仲間と呼んでも良いんじゃないかな。同じ方向を決して見てないかも知れない。歩く早さだってきっとバラバラだ。
でも変わらない物が僕とみんなには有ったんだ。みんながこの世界を好きで、そしてみんなが真剣にそれぞれこの世界を楽しんでる。
辛いことだって勿論みんなにだって有ったはずだ。自分だけじゃない……それの大小なんて関係ない。自分とって大切な事は人それぞれなんだからさ。

「ありがとう心配してくれて」
「うん？　何でそんなに嬉しそうなの？」
何だかいろんな事に気付いたような感覚のせいだよそれは。今なら素直に……リルレットの頭を撫でれる。
「何するの！　私子供じゃないよ！」
怒られた。でも何だか楽しいじゃん。「仲間」だからな僕達はさ。
「リルに何してんだ！　殺すぞ！」
「うっせーチビ。そんなに大切ならさっさと告白でもしてろ」

その瞬間、エイルの頭からボフっと湯気があがった。そして告白というワードを口にしながら変な動きをしだす。

「エイル大丈夫？　もう、変な事言わないでよスオウ。私達はそんなんじゃ無いんだからね。私達は友達！　天地神明に誓ってもそれ以上じゃないんだから」

「！！」

自信満々にそう言い切ったリルレット。彼女からは見えてないだろうけど、今後ろで一つの尊い命が失われ掛けてるよ。

きっとエイルにとってはどんな強大なモンスターの一撃より効いただろう。天地神明って脈は無いのだろうか。まあ、エイルの色恋何て僕にはどうでも良いけどね。

そもそも何でアイツモブリ何だよって始めに突っ込みたいし。どう考えてもＬＲＯじゃペット位にしか思われてないよ。せめて同じ人間タイプにしとけばもっと意識して貰えただろうに。

「そんなことより、私の質問に答えてくれてないよスオウ！　私達へ隠し事してたでしょ！」

そんなこと発言でさらにエイルに攻撃が加わった様だ。なんか流石に可哀想に成ってきたから話題をズラす為にもプンプンしてるリルレットに乗っておこう。それにそろそろ巨神兵も待ってはくれなさそうだし。

盾を再び手にした奴にはみんなの攻撃が殆ど通ってない。せめて缶詰状態が精一杯。

「まあ確かにね。テッケンさんから多分聞いたのはこれだろ？　僕の体は段々とこのＬＲＯに浸透してる。そろそろ本当にこのＨＰが僕の命の残量に成るかも知れない」

「……うん。言いたくないのは分かるけど、言ってくれれば私達だってもっと力に成るのに。それにああ言ったのだってもっとちゃんと理解できたよ」

再び僕に残る血の後に声のトーンを落とすリルレット。リルレットも大概優しいな。

「そうかも知れない。でもさ、この事で余計な気なんて使わせたく何て無かったし、ＬＲＯがゲームのままであれるのならその方が良いじゃん。

そうであって欲しいよ」

「それは、確かにそうだよ。ＬＲＯは私達にとってはゲームが良いよ！　だけど、ゲーム感覚の私達にだって知ってればゲームだからこそ！　一杯一杯出来る事が有るんだよ！

私達はここがゲームだから、スオウに付いて来れるんだから！助けれられる。一緒に戦える。私達にとってはゲームなんだから、それでも仲間と思ってくれるなら、これ以上ない冒険に私達はいつだって行くよ！」

白い光に照らされるリルレットの笑顔はとても暖かい。今は素直にそう思えるよ。だってゲームでも、みんなは真剣に協力してくれてるんだから。

そしてリルレットはみんなに同意を求めるように後ろへ振り返り「ねえ、みんな！」と叫んだ。すると次々に上がる声に僕は思わず顔を下に向けるしかない。

「あったり前だあ！　こんな面白そうな戦いならいつだってどこだって駆けつけてやるさ！」

「おう！　俺は回復薬を持ちまくってお前が死なない様にスタンバっててやるよ！」

「一声だけで十分だ！　そしたら駆けつけて、お姫様への道は俺達が空けてやる！　それくらいのナイト精神はこっちでなら有るんだ！　それはやっぱり俺達にとってはゲームだからなんだよ。命まで賭けるお前はバカだと思う！」
「でも、そんなバカに手を貸すと勇者の一行に成れた様な気がするゲームバカなんだ俺達は！」

そして攻撃を続けながら笑い声とか罵声とかいろんな声が飛び交うのが聞こえる。本当に楽しそうに、目の前の強敵に向かってる。
そう言えば……まだ最初の答えを言ってなかったな。「俺達、私達じゃダメなのか？」とみんなは言ったその問いかけへの僕の答え。
握る剣の柄に力を込めて答えよう。

「仲間……だよ。みんなを仲間ともう一度僕は思いたい。ダメなんかじゃない。僕がそう願う。こんな僕を許してくれるか？」

すると空気を震わす様に全員の言葉が一致した。

「「「当然！！」」」

その瞬間一陣の風が吹いた気がした。そして強く握ったセラ・シルフィングがそんな風を掴む。今ならきっと……アレが使える。そう感じた。
二対の剣を前に出し僕は叫ぶ。自身の新しい切り札の名を。

「イクシード！　発動！！」

その瞬間、前に居たみんなが巨神兵の白刃の剣によって弾かれた。そして開いた道に僕は突っ込む。まさに風の様に雷の様にその場を駆け抜ける。

「うあ！」「きゃあ！」という叫びが後ろの方から聞こえる。きっとイクシードの余波だろう。自身を包む風が、今までに無いくらいに大きく成っているのを感じるんだ。
迫る僕に巨神兵はその鉄壁の盾を構える。あの盾の防御力は知っている。だけど止まる気なんて無かった。多分きっと、このイクシードはみんなから貰った物だ。
何で一人で戦ってた時に発動しなかったのか……最初は洞窟だとか、風がないとか言い訳したけどそれは違うと今なら分かる。
あの時はきっと僕が自分で萎んでたんだ。一人で不安や苛立ち、そういう物を一杯抱えていた。風を感じる余裕も手段も忘れてた。
だけど今は違う。解放された様な心はいろんな物を感じれる。イクシードが掴む風はそんな暖かい物なんだ。仲間から貰う勇気や元気。溢れ出す優しさや楽しさ。見いだす希望・・そんな周りに溢れる光を風に変えて、イクシードは僕に力をくれる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！　それらを内包したこの風を受け止められるかあああああ！！」

振りかぶったシルフィングの切っ先から風の渦が線を成して一直線に奴の盾へとぶつかった。だが巨神兵は下がりはするが倒れも盾が砕けたりもしない。
だが

「まだまだあああああ！！」

もう片方のシルフィングを僕は振る。二つの風のうねりはぶつかり、そして合わさり有った風は威力と大きさを増していく。それは盾の不思議な壁を飲み込むまでにだ。
ベキバキ！！　そんな破砕音が聞こえ出すと同時に盾に表示されてるＨＰが減少し出す。それは遂にシルフィングの纏う風が奴の盾

に届いた証。
そして無数の風の刃は一気に巨神兵の盾を砕き割る。盾を無くした奴はただの的だ。動きも速い方じゃない。後ろに居たみんなも一斉に攻撃に移り、スキルと魔法の光が巨神兵に舞落ちる。
洞窟内だから音が反響して、声を発しない筈の巨神兵の叫びの様に聞こえ出す気がした。だけどまだまだだ。奴はその膨大なＨＰを生かして守りになんか入らない。
奴の背中の円形のオブジェが更に光と振動を増すと、そこから白い炎が沸き上がった。そしてその炎は腕を伝い、奴の白刃の剣へと宿る。
白い炎を纏った白い刃。それは何ともまがまがしい光景だ。美しいと一歩間違えれば言えそうだが、今の僕達にあの炎を纏った刃を美しいと思う余裕はない。
そしてそんな刃を掲げる巨神兵。すると白い炎から飛び火がそこかしこに舞落ちてきた。それはこの空間の白さとも相まって何とも見えにくい。そのせいでその炎を何人かが被った。

「うわわ！　あっつー……くない？　何かダルいけど、熱くはないな」

被った奴がそう言った。白い炎は無くならずにそいつの肩に灯ったままだ。

（攻撃じゃないのか？）

とも思ったけど、モンスターが行う行動に意味がない訳がない。ましてや誰も見たことがない白い炎なんて物まで出して、ただの演出だなんて思えない。
そして案の上、その効果は直ぐに分かった。

「まあいいや。ＨＰの減りは微弱だし、この分ならこいつを倒すのが早い！　畳みかけようぜみんな！　……て、あれ？」

一人をきっかけに白い炎を被った面々から次々と同じように困惑の声が上がりだす。

「スキルが発動しないぞ？」

「魔法も使えない！」

「アイテムも使用不可になってる！！」

聞こえてくるそんな声に僕は上を見た。この白い炎……かなりやっかいだ。このままじゃまずい！

「全員集まれ！」

そうみんなに指示を出し、僕はシルフィングを振る。そして付いてくる風の唸りが白い炎をかき消していった。だけど既にプレイヤーに取り付いたのは消せないみたいだ。

落ちてくる炎を消された巨神兵は無駄と判断したか、それとも充分と判断したのか分からないが、今度は直接攻撃に移ってきた。

振り卸される白刃の炎の刃。それに対して僕もシルフィングを振り被る。シルフィングの纏う風のうねりが巨大な白刃の刃とぶつかりどちらも弾かれた。

「――くっ……」

だが体格と言うか質量の違いか、巨神兵は大地に根を張るようにその場に踏みとどまったのに対して、僕の体は後方へと押された。

そしてその時、みんなから悲鳴の様な声が上がった。

（なんだ？）

そう思い顔を上げると白い炎を必死に避けるみんなが居た。まさかこれって……さっきシルフィングと奴の武器がぶつかった時に飛散したって事か？　というかそうとしか考えられない。

すると集まってる中からリルレットがこちらに寄ってきた。

「大丈夫？」

「ああ、僕は全然。だけど周りは……どうなってる？」

「それがもう、超大変だよ！」

リルレットは手と足バタバタしながらそう言った。だけどリルレットの言い方とその情けないけど愛らしいような表情だと緊迫感に欠ける気もする。だが本人は至って真剣だ。

「気付いてると思うけど、白い炎に当たると微弱なＨＰ減少とスキル魔法アイテム全部もろもろ使用不可！　しかも今のでまた一人当たっちゃったしでこれで半分は何も出来ない状態だよ。

火力もだけど、一番は後衛の回復役が後一人なの。これじゃ回復が追いつかなくて攻撃もまともに出来ないよ！」

「確かにそれはヤバそうだ」

こういう誰かと繋がって戦う戦闘において一番重要なのは回復役だ。回復してくれる人がいるから前衛の僕らは全力で敵にぶつかれる。

てか、基本僕達プレイヤーよりモンスターは強い訳で、一回ずつ交互に攻撃を当てていったとしてもプレイヤーが先にやられる。

そこを対等にするためにスキルや魔法や様々なアイテムが用意されてる訳だけど、制限が無い魔法での回復は一番重要。ＬＲＯではＭＰなんてないからね。

だからパーティーに一人でヒーラーは充分だけど、逆を言えば一人もヒーラーが居ないと狩りは成立しない。それに危ない場面になって一番生き残って欲しいのはヒーラーだ。
彼らが居れば何度だってやり直しがその場で効く……とアギトが言っていた。それだけヒーラーは重要な位置にいる。

こっちに付いてきたヒーラーは三人だった筈だから二人があの炎を被った事になる。残り一人で回せるかは実際、自分がやったこと無いから分からない。
けど、被ってないのは僕も入れて四人程度なんだから……って別に炎を被った奴らが攻撃出来なくなった訳じゃないんだ。それに微弱だけどＨＰは確実に減っている。
今は大丈夫でもアイテムも使えないんじゃ、いずれは一人のヒーラーに頼らざる得ない状況になるのは間違いないのか。これは本当にマジでヤバいな。
長引かせると不利に成る一方だ。

「イクシードの制限時間も見えてきたし、ここで決めよう」
「でもどうやって？　あの剣に触れたら不味いよ」
「だから本体を狙うさ。やむ終えずに飛び散った炎は既に炎を受けてる奴を盾にする！」
「……スオウって以外に酷いね」
「これしかないだろ！」

だってスキルも魔法もアイテムも使えない奴等をぶつける訳にも行かないし。そもそもそれじゃ蚊ほどもダメージは通らないだろう。
今この場で巨神兵を倒せるだけの威力のスキルを保持してるのは僕だけだ。イクシードならやれる。
僕は走り出し、同時にシルフィングを振るった。狙うは剣じゃなく本体。それぞれにＨＰが設定してあるんだ。本体だけ倒すことも

可能だろう。
使い手が居なくなれば剣なんてただの置物だ！
「うおおおお！！」
風のうねりが素早く巨神兵の肩に食い込んでいく。だけど流石に堅い。その時再びこちらに白刃が卸されてきて、それをもう片方のシルフィングで弾く。
それしかなかった。だけどやはり弾いた瞬間に白い炎が周囲に飛散する。巨神兵を相手にしてる間は守れない。だけどここはみんなを信じるさ。
振り返るより僕は前を向いてなくちゃいけない。みんなを守る為にもだ。そして豪快な音と共にちぎれた腕が大理石の床を無惨にも破壊する。
だがあの剣を握るのは右腕。僕が切り落としたの左腕だ。けどそれでも充分に大きくＨＰは削れた。続けざまに更に深く懐に僕は飛び込もうとする。だがそれを阻む様に白の炎の白刃が迫る。
だがそれを二つ同時に動かしたシルフィングで勢い良く上へ弾き、態勢を崩させる。そして弾き飛ぶ白い炎。その一つが真っ直ぐに僕へ向かってる。
（これが当たったらどうなるんだっけ？　イクシードが消えるのか？　それはダメだ！　避けないと避けないと避けないと）
だけど態勢が白刃を弾いた衝撃で……後数瞬なのに、その刹那が間に合わない。スローモーションに見えていた。無数に流れる白い炎の一つが僕に向かってる。当たると確信出来る。
けれどその時、小さな影がその炎に飛び込んだ。
「これは謝罪の代わりだからな！　さっさとそのデカぶつ打っ倒せ

！！」

白い炎に頭から突っ込んだ奴はエイルだった。いつも僕に死ね死ね言って来るアイツが僕を守って飛び出した。それならもう……やらない訳には行かない！

僕は見据えた巨神兵の懐に跳んでセラ・シルフィングを振るった。再び手にした仲間の為に、奴のＨＰが尽きるその瞬間まで絶え間無く。

唸る風の音はファンファーレかレクイエムか、きっとどちらもはらんでいたんだろう。ただの石になって崩れさる巨神兵は何だか空しくて、だけどその後にみんなから褒められたのはこそばゆくて……それはきっと絶対に一人では味わえない物だと思った。

白く美しいこの空間で、僕は大切な物を見つけた気がしたよ。

想いという風（後書き）

第七十八話です。
取り戻した絆が風を生む。そんなお話です。スオウ君が仲間を取り戻して一安心。流石に一人じゃここから先無理あると思うから！
さあ、いよいよ対峙するは謎の敵。そして既に何十話も出てないメインヒロインは何処へ！？
次回は月曜日に更新します。ではまたです。

始まりは拳から（前書き）

俺は奴へと向かう。その槍に思いを込めて。だけどガイエンの持つカーテナは遥かに強大だった。動きを封じられるも何とか切り抜ける。だけど届いた痛みは拳一つ……そして溢れだしていたカーテナの力の渦に呑み込まれた俺は、在りし日の思い出を浮かびだす。

始まりは拳から

俺の槍が異形と化したガイエンへと真っ直ぐに向かう。背中に受ける炎の壁の熱をそのままたぎらせて振るう槍に俺は最大限の力を込めていた。

「何が今更か！　貴様がこうやって私の前に立ちふさがる事も今更だろう！」

ガイエンの言葉が俺の心に痛みを与える。何故なら確かにガイエンの言うことはその通りだから。俺は一度捨てたんだ。責任とか期待とか色々な物を全部投げ出して、押しつけて、俺はこの国から逃げ出した。

だからこそガイエンにとってはそんな俺がまさに「今更」だと言っても仕方ないこと。でもそれでも……

「その通りだ！　俺も今更だよ！　そんなの分かってる。だけど結局、俺は何一つ捨てきれなかったから戻ってきたんだ！　もう一度……そのために！」

「そんな身勝手！　甘えで許されるとでも思ってるのか！　なら貴様は相変わらずだ！」

腕を両側から合わせるように振るうガイエン。パン！　と手と手が合わさった音が響いたとき、両側からカーテナの力が迫る。

「ぐっ！！」

デカい、とても避けれる次元の力じゃない。俺は槍を横に構えて何とか防いだ。でもスキルも不発に終わって、何とか防いでるこの攻撃も勢いが落ちた訳じゃない。今にも受け止めてる槍が弾かれる

位にしなっている。
直ぐそこに……後一足で届く位置にガイエンが居るのに……奴のそのムカつく顔に俺は一歩も届かないのか。
カーテナの力と拮抗するだけで精一杯の俺へガイエンが今度は正面に片手を向けた。それは攻撃態勢だろう。今の俺に防ぐ術はない。
槍を放さない様に力を込めて、絶対絶命のピンチの中それでも俺はガイエンを真っ直ぐに見据える。だって結局ピンチは自分だけじゃない事を俺は知っている。
協力してくれた誰もが厳しい戦いに成ることを分かっていて、それでも協力してくれたんだ。それなのに俺が真っ先にやられるわけには行かない。
そもそもこの戦いはゲームだからって負けて良い物じゃないんだ！
「身勝手も甘えも重々承知だよ……本当に今更だし、自分の弱さが原因だし、お前のせいだなんて言わない。でもだからってもう一度繰り返す事なんか無いだろう」
「繰り返す？　私はあの頃と何もかもが既に違う。私はお前と違い、常に進んでいるんだよアギト！」
ガイエンの腕の先へと影が集まっていく。そして放たれるは黒光りする長い槍。それが一直線に俺の頭へと向かって来る。
「――っつ……」

避ける術も防ぐ術も俺には無い。これが違った道の結末何だろうか。ＬＲＯは部位によって受ける攻撃のダメージ比が異なってくる。
そして当然、頭は急所の部位だ。ダメージ比は最も大きくなる場所。この黒い槍がどこまでの攻撃力を持っているかは分からない。
だが、無事で済むとは思えない。奴が満面の笑みを浮かべて放った攻撃だ。一発でしとめなくても、どんな嫌らしい効果が付加されてるか分かったものじゃない。
ゆっくりと見えるこの瞬間――この数瞬――この刹那――聞こえ

たのは思い知った彼女の声。

『待ってるから……向こうで、その言葉を聞かせてね』

追いつけなかった……リアルでは。それを許されなかった。ずっとずっと、いつの間にか二人は遠くに行っていた。目の前のコイツも、そしてアイリもだ。

後悔はもうしつくした。それで止まった足は仲間と友達に、もう一度引っ張ってもらった。でもそれは歩き始めだけ……歩き続けるのは俺の意志で、でもそれだけじゃ決して追いつけないから俺は走り出したんだ。

まだまだ……まだまだ……止まるには早すぎる！！

「うおおおおおおお！」

黒い槍が俺の頭に刺さる瞬間。俺は槍から手を離し前へ出た。頭を傾けて黒い槍をかわし、同時にウインドウを開く。

離す直前に再度発動させたスキルが主を失っても一瞬だけカーテナの力を防いでくれた。けれどその一瞬で充分だ。

俺は思ってた。これだけの力、自身に当たることは無いのかと。これだけ近くで何の躊躇いもなく放つんだからやっぱりそれは無いとも思える。

けれど逆にこれがその限界なのかも知れない。奴自身を中心に置いてそこから放射状に放つタイプは別として、こうやって力を自由に操って向かわせるタイプはもしかしたら自身に当たる事だってあるかも知れない。

でもガイエンは力を躊躇わなかった。それも凪払う形のをこれだけ近くで、この巨大さでだ。考えられる事は幾つかそれでもある。だけど俺はその中の一つに賭ける！

ガイエンの……コイツの僅かな周囲。そこだけはカーテナの力の影響は受けない絶対領域だと！
その瞬間、後ろで爆発の様なカーテナの力同士がぶつかる音が周囲を埋め尽くした。だけど俺はまだ生きている。どうやら俺の推測は正しかった様だ。
潰されずに自身に迫った俺にガイエンは驚いている。けれど俺も余裕なんて無かった。考えてたよりも絶対領域は狭い。体全部がそこに収まって無かった。
片足が一瞬で異様にブレた。きっと直撃こそしなかったが、あの巨大すぎる力の余波だろう。後ろではぶつかり合った力が渦を巻いていて、俺もこのまま巻き込まれそうだ。ブレた片足が宙をさまよい、そして体がそれにつられる。

「つぁ！？　くっそおおおおお！！」

開いたウインドウから新たな武器を出す余裕はない。俺は拳を握りしめて今届くガイエンの体の一部へと向けた。そこは丁度、奴が止めの黒い槍を出した拳しかない。
ＬＲＯでは武器を持たなくったって我が身一つで攻撃出来る。決して大した威力には成り得ないが、今は諦めずに向かうことが大切だと思える。例え、今の奴の体には効かないとしてもだ。
力と思いを込めた拳を俺はガイエンの左拳にたたき込む。

「ぐああ！！」
「――っつ！？」

ガイエンは思わず悲鳴を上げた。俺もその拳の痛さに奥歯を噛みしめる。だがこれは予想外だった。だって奴の今の体は俺の槍でも無力だったんだ。ただ貫通しただけ……だけどそれが何で、こんな何の変哲もない拳が効いた？

分からない……けど、その時あることに気づく。

（悲鳴だ）

大量の子供の悲鳴が聞こえる。さっきまで愉快というか不気味だけど笑い声に聞こえていた声が、悲鳴の様な叫びに変わってる。

体がカーテナの力の渦に引っ張られてガイエンから離されて行く。するとその時にある物を俺は見た。それはガイエンの指に輝く指輪だ。

そしてあれは王の選定石と言われる『リア・ファル』あれを手にした事で……あれがガイエンを王と認めた叫びをあげる事で、カーテナはガイエンに力を与えている。

そのリア・ファルが痛みを訴えるかのように悲鳴を上げて、その拳には攻撃が通った。いや……もしかしたら、さっきの俺の拳はガイエンに届いたんじゃ無いのかも知れない。

まさか、この戦いの鍵はカーテナじゃない？

「うあああああああああああ」

けれど空しく響く声と共に俺はその竜巻の様に成っている渦へ飲み込まれていく。最後に見たガイエンは恨めしそうにこっちを睨んでいた。その大切な腕を抱えて……いや、その大切な物を抱えて……か。

俺はそんなガイエンを見るとふと昔と同じ事を思ってしまう。それはいつ思ったか思い出せないが確かに俺はこう思った。

（いつもいつでも、そんな目してないで笑えよガイエン。楽しんだ奴が勝ちだろ……ここはゲームなんだから）

今の渦に吸い込まれる俺を見てガイエンが何を思ってるかは分か

らない。だけどそれは……きっと昔と変わらない気がする。
そして俺は巨大すぎる力が生み出した渦の中へ消えていく。

「諦めるな貴様等！！　まだまだ我らはやれる！　エルフの誇りをこの醜いモンスターに見せつけてやるんだ！」
「ちょっ――ここは撤退でしょ！？　ヒーラー全滅しちゃってるのよ！　誇りとか暑苦しい事言ってないでさっさと逃げる！」
「「そうだ！　そうだ！」」

フィールドに響くそんな声がどこかから聞こえてくる。何だか危ない様な状況が声から伝わってきて、僕達はその方へ駆けだした。
今居るフィールドは活火山内部。マグマ溜まりがそこかしこに顔を覗かせて、時々そこからマグマの柱が吹き出していたりする過酷なフィールドだ。
時期に寄ってはここは侵入できない位のマグマが吹き出してるけど、今はそれの解禁時期。マグマも穏やかに成ってるけどそれでもとても熱い場所だ。
そこらの岩も溶けると思える程に熱いけど、活火山でしか採れない鉱石アイテムもあるから職人らしき人達もチラホラ見える。職人集団のスレイプル族はテントとか表に張ってたし……随分と最近は境界が緩く成ったもんだ。
そんな事を考えながら奥に進み続けると、再び言い争う様な声が聞こえてくる。

「逃げるだと！？　お前達に恥は無いのか！　ここはゲームなんだぞ。そんな場所でも逃げるのか貴様等は！！」
「ちょっと何よそれ！　ゲームだから無理はしなくてもいいんでしょ？　無理なんてリアルでし飽きてるのよ。私はスカッと敵を倒し

たいのよ！　憂さ晴らし！　分かった？」
「ふん。貴様の様な奴がエルフとは反吐が出るな」
「はぁ！？　もういいわ、最初からムカつく奴とは思ったけど、アンタなんか誘わなきゃ良かった。みんな行きましょう！」

ドタドタと響く足音に俺達は顔を見合わせる。「あちゃ～」って感じに。だってそうだろ？　顔も姿も見てないけど、女の方が怒るのも無理無い。俺だって頭に来るさ。てか、あんな事を堂々と言う奴なんて居るんだなと少し関心したと言うか、呆れたと言うか、きっとフレンド登録者数はゼロだな。
そう確信出来る。会ってもいないけど。そんな事を考えてると前の方から数人のエルフのパーティーが降りてきた。きっとさっきの声の主も居るはずのパーティーだな。
そしてそれは一番前を走る、体に不釣り合いな程の巨大な剣を背負った彼女だろうと推測できた。だって異様にプンスカしてる。そんな効果音は出てないが、ＬＲＯの感情表現は大げさだから良く分かるんだ。

「ちょっとアナタ達待ちなさい」
「うん？」

何だろうか。いきなりすれ違いざまに呼び止められた。彼女らと俺達は坂道の中腹辺りで向かい合う。

「アナタ達、ここから先には行かない方が良いわよ。ＥＸモンスターと戦闘中だから……スッゴいヤな奴が」
「えっと……」

流石に「聞いてたから知ってます」とは言えない。本当にもの凄い嫌悪感を混ぜた口調だったからな。てかさ

「それはどっちに対する注意を促してるのか良く分からないんだけど？　モンスター？　それともそのヤな奴？」

俺がそう言うと巨剣を背負う彼女は腰に手を当てて、ズイッと顔を近づけてきた。

「そんなの当然……あのヤな奴よ！！　思い出しただけでも腹が立つわ！　何が誇りよ！　私達はそんなもん背負ってないつーの！　気楽に楽しくやっちゃダメなわけ！？」

何かその鬼気迫る表情がこえーよ。と言うかそこはモンスターだろ普通。当然の使い所が違う。まああんな事を言われた彼女にとっては当然かも知れないけどさ。

どうせならその周りの仲間に当たって――って、何か助けを求めた俺の視線を悉くその連中が避けるんだけど。どうやら既に被害には遭ってるらしい。でもこんな見ず知らずの俺にまで絡む事無いだろう。完璧とばっちりじゃんか。

ああ～さっきから同じ事を織り交ぜながら不満や怒りを吐き出してるから通常の二倍は長いしウザい。

「いやーそれで良いと思いますよホント」

取り合えず収拾のためにもそう言うしかない。まあ俺にとってもここはゲームだしな。それ以上でも以下でも……隣を見るとそこには知り合ってからいつも行動を共にするパートナーが居る。まあだから以上はちょっと越えるかも知れないが、基本やっぱりＬＲＯはゲームだ。

だから棒読みだったが、心は込めて言ったつもりだ。そしてその言葉は棒読み、だったが伝わったらしい。

「だよね！　だよね！　私間違ってないよね！　あーもう、あのバカに一発ぶち込んどくんだった、スキル！　アナタ達も関わらない方が良いわよ」
「ははは、俺たちはただＥＸモンスターを見ときたいだけですよ。そんなムカつきそうな奴とは馬が合いそうに無いんで心配無いです」
てか、合う奴なんてそれこそ特定の集団くらいしか無いんじゃないだろうか？　言葉を聞いてる限りアレっぽいんだよな。
俺に迫ってた彼女は、その言葉で納得したみたいで（と言うか、不満をぶちまけて落ち着いたみたい）パーティーの先頭に戻る。
「あははは、まあそうだよね。アイツもしかしたら『レイアード』かも知れないし、二人なら見つからない方がいいよ。じゃねー」
「ええ、気を付けます」

そして彼女達は去っていった。俺が思い至っていたキーワードを心の隅に引っかけて。てか、結構長い文句に付き合ったせいで時間を食った。もしかしたら上の奴はもうやられてるかも知れない。
急いだ方が良い。でももしかして本当にそれなら関わりあいたく無い気持ちが生まれてる。
「ねえ、『レイアード』って何アギト？」

ようやく声を発したアイリが例の言葉を発した。さっきまで頑なに何も言わなかったのに、ようやく言ったのがソレか……こっちとしては知らせる気も無かったんだけど、こうなったら仕方ないな。
「『レイアード』ってのは種族至上主義の連中の事だよ」
「種族至上主義？」

首を傾げるアイリのストロベリーブロンドが炎の明かりが余り届かない坂道に揺れる。

「そう、俺達は『エルフ』だろ。後このＬＲＯには『ヒト』『モブリ』『スレイプル』『ウォンク』『シースルー』の五種族がそれぞれの国を持って居るじゃん。その種族間それぞれで自分達が一番だ！　って思ってる奴らの事だよ。

まあ多少はさ、誰しもが自分の種をそう思うのは有ることだけど、それが行き過ぎた奴等やその集団を総括して『レイアード』って言うんだよ」

「なるほど。要は危ない人達だね」

「まあそうなんだけど……何だかその解釈じゃ、俺の熱のこもった説明が空しく感じるな」

「ほへ？」

何だか良くわからないって感じの間抜けな声を出すアイリ。たく、かなり装備も整って来てもう脱初心者位に成ってるのに何だか妙な所が抜けてるんだよなアイリって。

結構奇行も多いし、これじゃいつまで経っても一人立ちは出来ない感じだな。本当に俺が付いてなきゃ一人で狩りにも行かせられないって言うか何と言うか……何かこれじゃ理由を付けて逆に子供から離れたくない親みたいな感じに成ってないか俺？

何……実は俺のせい？　とか思ってると服の端をチョンチョン引っ張る感覚が有った。誰だ？　何て思わなくてもここには今アイリしかない。

「うん？」

「で、良いのアギト。　行かなくて？」

そう言って上の方を指さすアイリ。俺はそこを見つめてため息一つ付く。

「はぁ～、実際何かやる気が削がれたな。レイアードの奴等って過激派だから関わりたくないし」

「てぃ！」

コツンと頭を気合いの入った声で小突かれた。

「何すんだよ」

「フンだ！　アギトが情けない事言うから。だってまだ上で戦ってる人がそのレイ何とかって決まっても無いのに避けるのは良くないよ。

どんな人にもまずは歩み寄り。それさえ出来ればみんな仲良し何だから」

「またそれかよ。ついでにレイアードな」

アイリの言葉に投げやりな言葉を返す。だってアイリはそう言って直ぐに分不相応な救出に向かうんだ。まあそれが余裕がある時なら良いけど、こっちも消耗してる時とかマジでやめて欲しい。

アイリのこの言葉のせいで一体何時間分のスキル上昇が不意に成ったことか。幾らゲームだから時間は戻って来ないんだ。

だけどこれには最初に俺に助けられた印象が強く残ってるのが原因っぽいから強く言えないんだ。原因の一端と言うか発端だから。

「またそれかよって今回先に走り出したのはアギトでしょ。助けようと思ったのなら途中で投げ出さない！　これもアギトに教わったよ」

「うぐ……」

そんな事を満面の笑みで言われたら返しようも無いじゃないか！
最近思うように成ってきたけど、もしかして俺の方が押され気味？　って感じる場面が多々ある。
おかしい……俺の方がここでの全てにおいてアイリより勝ってる筈なのに一体どうして？

「大丈夫！　きっと上の人も助けを待ってる筈だよ。だって一人は怖くて寂しいから」

シュン――っと少しだけアイリの瞳が暗く成った気がした。流石にＬＲＯでもそこまでの微妙な表現が有るかは分かりかねるが、そう見えた物は仕方ないんだ。
こうなったら自然と足が動き出す。自分が死地に向かってると分かってても、幾ら無謀だと言い聞かせても、アイリのあの目を感じると立たずには居られない。

「ああもう！　分かったから行くぞアイリ。てか本当に助けなんて求めてるのか？　緊急コールも出して無いぞ」
「きっと一人で戦ってるかそんな暇無いんだと思う。だって何だっけ……ＥＸＰモンスターと戦ってるんだよ！」
「Ｐが多い。ＥＸ、エクストラモンスターな。てか、そうだった。二人追加したくらいじゃ勝てないと思う……から、やっぱやめようぜ。
今ならまだ間に合う。背中は任せろ！」

俺は何とかアイリの心変わりを願ってそう言った。だってＥＸモンスターって特定のアイテムを揃えて出現させるハイクラスな奴だ。簡単に言うならボスか中ボスレベル。
その出現させる為のアイテムにもよるけど、下手すればアライアンス程の人数で挑む奴だって居るんだ。そしてさっき降りてきた人

達は少なくとも2パーティー。
それで勝てなかったのに、どうやって三人で勝てと？　アイリは器用で魔法剣士みたいな事が出来るけど、それでも本職のヒーラーに並ぶべくもないし。
だけど、横を走るアイリは既に変な使命感に取り付かれてる感じだった。

「何、格好良い台詞で情けない事言ってるの！　勝てる勝てないじゃ無いよアギト。私達が彼の為にやるか、やらないかだよ！
そして今やめたらきっと私達の心はモヤモヤーってして、彼は無惨な死を遂げるの。そして折角の夢の場所でも誰も信じれなくなって……そんなのダメだよ！」
（ああ、そうっすか……分かってたけど、今の状況はその彼が自分で撒いた結果だと思う。それに途中から、妄想入りすぎだ）

もう色々と面倒だから、いつもの様に何も考えない事にしよう。俺はただアイリを守れればそれで良いし、コイツが楽しそうにしてれば良し。きっと今日稼いだスキルポイントは不意に成るだろうけど、それも考えない（涙）

そして俺達はその場へと顔を出す。見えるのは四足歩行で溶岩を背負ったような大きな獣と、一人のエルフ。

「おい！　協力するから緊急コール出せ！」
「ふん。緊急コールだと？　そんな侮辱を晒す気は無い！」
そう言ってこっちを見ようともしない奴に既にイラっとくる。
「何で侮辱なの？　私達は一緒に戦いたいだけだよ！」

「貴様等に信念は有るのか！？」

そう問いかける奴にアイリはまっすぐまともに返す。ある意味凄い奴だ、両方な。

「有ります！　アナタと戦うっていう信念が！」

すると初めてこちらを向いて、奴は俺達を一瞥して言い放つ。

「エルフか……喜べ！　貴様達は合格だ！」

あぁ？　と内心言ってた。喜んで武器を抜いてるアイリには悪いけど、まず俺にはやるべき事が有る。俺は拳を握りしめて駆けだした。

自分とは対象の蒼い髪をなびかせるそのエルフに一発入れる為に。そして響く、鈍く乾いた音。これが俺達三人の初めての邂逅だった。

始まりは拳から（後書き）

第七十九話です。
今回遂にやっとでアギト達三人の過去編へ。なんだかどこで出すか悩んでたけど、書いていったらここしか無いだろ！　って思いました。てか、これ以上延ばして二人のバトルを続けるのは無理。色々と昔の事を引き合いに出してたから、そろそろ分からなくちゃ話が進まない様です。
そんな訳でアギト視点は過去編が続きます。では次回は水曜日更新という事でさようなら。

命の重さ（前書き）

僕達は白い空間に有る巨大な神殿の階段を上っていた。きっとずっと走って来た目的地はここの筈だ。だけど異様にでかいその造りに上るのも一苦労。一段一段が大きすぎる。

そんな中投げて貰って一足先に常に行っているエイルがムカつく。だから僕は思わず全力でぶん投げた。すると頂上まで一気に飛んだ。だけどその僕の浅はかな行動が取り返しの無い事態へ繋がってしまう。

命の重さ

「さあ、行こう」

巨神兵を倒し、白く荘厳に佇む宮殿を見つめて僕はそう言った。そしてもう、誰もそれを止めるなんて事はしない。どうやらあの白い炎は巨神兵の消滅と共に効果を無くして消えたようだし、術技を取り戻したヒーラーの活躍で一気に全快だ。

気負いも迷いも寄り道ももう十分……後はただ、目指すべき場所へ。

「はぁはぁ」

長い長い階段を僕らはひたすら上り続ける。遠くから見たらそうでも無かったけど、近くに来たらその大きさにびっくりだよ。それに遠くから見えるだけあってか、予想以上に高いんだ。

そして更に更に面倒なのがやたらと一段一段がデカい事。まるであの巨神兵に併せて作ってある様なそんな感じだ。

だから人間サイズの僕らがこの階段を上がるのはとても苦労する。まあ一人例外がいるけど。

「キャッホー！　遅いぞおまえ等！」

「あんの、クソチビ。一人じゃ上れない癖に、投げて貰うだけで先に行けるんだから楽だよなまったく」

さっきからポンポン投げられて僕達より先に行っているエイルがホントムカつく。転げ落としてやりたくなるよ。アイツ丁度良く丸いから止まらずに下まで気持ちよく落ちると思うんだ。

「くくっ」

今度アイツの所までいったら実践してやる。そう思って一人ほくそ笑む。すると突然上から声と重さが――

「ちょとスオウ！　ちゃんと支えてって、きゃ！」

「ぐうぇ！」

――落ちてきた。何だか罰が当たった気分だ。女の子ってそんな柔らかく無いもんだな。スッゲー痛いよ。なんかゴツゴツしとる――って、防具付けてるからか！

リルレットは落ち方が悪い。背面から来るから防具の全面で叩かれたんだよ。せめて尻から落ちてきて欲しかった所だ。

「もうーちゃんと支えててよスオウ！」

「ごめんごめん。良いから早く退いてくれ。上の方からスッゴい殺気を感じるんだよ」

その殺気を放ってるのは見なくても分かるけど、きっとエイルだろう。するとリルレットが立ち上がりざまに言う。

「エイルを羨んでも仕方ないよスオウ。モブリじゃこの階段上がれないし、そんな時はみんなで協力しないとね。それでこそ仲間でしょ？」

「ま、それはそうだけど……アイツがあの態度を改めれば少しは僕も大人に成るよ」

何だか上の方から声が聞こえるんだ。

「スオウてめー、リルに怪我でもさせたら只じゃ済まさないぞ！
てかわざとだろお前！　この鬼畜が！」

何であそこまで言われなきゃいけないんだよ。理不尽過ぎるだろ。いや、思いこみが激しすぎるのか？　とにかくエイルの野郎は僕に突っかかる。

つーか、あれだけあからさまに自己主張してて良いのかエイルは？　完全にリルレットにまで気持ちが伝わりそうな物だけど……

「態度を改めるって、確かにエイルにも悪いところあるけど、あんなに仲間想いで良い子なんだよ。分かってあげて」

え？　リルレットの言葉に一瞬固まる。そしてマジマジと彼女を観察。もしかして……いや、もしかしなくても実はリルレットってそっち系にスッゴい疎い？

あからさまなエイルの態度に全然気付いてないし、もうそれは本人が可哀想なくらい。多分だけど、リルレット以外のみんなは気付いてる筈だ。分かってないのは当人だけ。

てか、ここまであからさまにエイルが行動するのって、自分でもそれを知ってるからか。自分の気持ちに当人のリルレットが気付かないと確信してるからあからさまに傍に居られるっていう……超切ないなソレ。

なんだか自分を罵倒してるエイルが少し良い奴に思えた瞬間だった。

「……うん、分かって上げた方がいいよね」
「そうだよ！　みんな仲良しが一番だもん」

僕の言葉の真意に彼女が気付く事は無いんだろう。みんな仲良しの間は仕方ないからエイルの罵倒に付き合ってやる事にしよう。

そうして僕達はようやくエイルの居るところまでたどり着く。エイルは相変わらず、僕に悪口を言うけど今回は見逃そう。だってこの小さな背中には溢れ出す想いが詰まってるポイから。

「お前も大変だなエイル」
「はあ？　何言ってんだお前。またすぐに上へ行けるんだよ俺は。死んでろバカスオウ」

アハハハ、心の中でさえ笑えるさ。傷にさえ成らないな。こっちの方が楽しそうなネタを握ってるから。

「その事じゃねーよ。まあせいぜい目の前を走り続けろよ。彼女が気付いてくれるその日まで」
「ぶっ！？　何の事だよお前！！」

顔を赤らめてヌイグルミの様な腕を向けてくるエイル。なかなか面白い反応だ。と言うか、初めて上に立ってる気がする。あ～何か良い気分だから今回は僕が投げてやろう――全力で。

「さあ、上に行こうなエイル」
「おい、やめろ！　お前何かの手なんか借りたくも……」
「何言ってんだよエイル。リルレットも言ってたろ？　みんな仲良しが一番だってな。遠慮なんて水臭い、僕達仲間じゃない――かぁぁ！！」
「ぐおおおおお！！　覚えてろスオウォォ！！　死にやがれぇぇぇぇ！！」

一気に頂上まで消えていくエイルはそんな言葉を反響させる。たく、本当にいつもどうり照れ屋な奴だ。

「うわーエイル一気に頂上だね」
彼方に消えていくエイルを見てそう呟いたのはリルレット。
「まあ友達だからね。この位当然さ」
「二人ともようやく仲良くなったんだね。良かった」
「リルレットのおかげだよ」
満面の笑みの僕とリルレット。うん、みんな仲良しって良いよね。本当に。きっと消えていったあいつはそう思ってないだろうけどね。
「えへへ、そんなことないよ。さあ、早くエイルに追いつこう。一人にしとくと怒っちゃうんだ」
「おう！」
そう言って再び僕らは巨大な階段を上り出す。きっとアイツが怒るのは寂しいからだよ……リルレットが居なくて。リルレットもだけど、エイルもあのモブリの姿を利用してるから、今の様になったんじゃ無いのかと少しだけ思った。
エイルにとっては良いことも有ったけど、裏目にも出たって事なのかも知れないな。そんなことを考察しつつ、上っていると突如上の方から声が聞こえた。
「うあああああああ！！」
と言う声。悲鳴という叫び。
「エイル！？」

リルレットが上の方へ名前を叫ぶ。だけど反応はない。上に投げたのはエイルだけだし、間違いなくアイツの悲鳴だろうけど、一体何が有ったって言うんだ？

「急ごう！」

僕はそうみんなに言ってペースを上げて上り続ける。一気に上まで上げたのは投げたのは不味かったのかも知れない。何が有るのかも分かったものじゃないのに、安易過ぎたんだ。

自分の面白がった行動のせいで仲間がやられるのは耐え難い。何としても……一刻も早く頂上へ。その時、上の方から何かが落ちてくるのが見えた。ボテ――ボテ――と階段を転がり落ちてくるそれは……

「エイル！！」

僕はその進路上に移動して転がり落ちてくるエイルを受け止めた。するとその体は異常な程に熱く成っている事に気付く。

「エイル！？　どうしたの？　何でこんな事に……」

「回復魔法を！」

ヒーラーの人達の魔法が一斉にエイルを包む。だけど瞬間、何かに弾かれる様に回復魔法の光が消え去った。

「「「なっ！？」」」

この場の全員に驚愕の色が浮かび上がる。だってこんな事……システム側からのメッセージがそこには現れてるんだ。

【書き換えられたシステムにより、十秒後にオブジェクト化を開始します。尚、このシステム変更を取り消す場合は内部アクセスコードを発声してください】

意味が分からない……多分それが全員が思ったこと。こんなメッセージ、この広大なＬＲＯでみた奴なんて僕達以外にはきっと居ない筈だ。

オブジェクト化って何だよ！　それからヒーラーの人達が持ちうる全ての魔法を試みる。だけど出るのは【エラー】の文字だけ。

エイルを支えている僕の腕にはどんどん熱くなっていく体温が痛いくらいに伝わってくる。何で……一体何がエイルの体に起こってるんだ？

僕は階段の頂を睨み据える。そこには何かが居る。いや、誰か……顔は見えないが、長い髪がそこで揺らめいている。

ここまで追ってきた“奴”程の長さじゃないし、見えるシルエットには大きなアホ毛も有るし別人？　だけどアレがエイルを落としたのは間違いなさそうだ。

「お前！　コイツに何をした！？」

そう勢いよく立ち上がり叫ぶ僕。だけどその声を聞いた頂上の謎の人物は振り返って消えていく。

「待て！」

追いかけようと思った。だけどその瞬間エイルの体を包むようにコードの渦が現れたんだ。同時に強制的に腕を払われた。

「エイル！　お願い！　目を覚ましてよ！」

リルレットの必死な叫びがこの場の響く。その時、エイルの瞳が僅かに開いた。リルレットの言葉はどんな時でも聞こえるみたいだな……本当にコイツは。
だけどコードの浸食が収まった訳じゃない。元々小さなモブリの体だ。時間なんて無いのをエイルは分かってる。だから必死に唇を動かして僕らに何を伝えようとしてる。
けれど僕達には聞こえない。何て言ってるんだよエイル！　でもその時、リルレットが一人頷いた。

「うん……分かったよエイル」

そう伝えたリルレットの言葉で満足そうに微笑むエイル。そして視線が僕にぶつかった。口なんて動いて無かった。だけど確かに僕には聞こえた。
その瞳から、エイルの言葉が伝わってきた。

『リルレットを守らなきゃ殺す！！』

その瞬間、全身がオブジェクトコードなる物で包まれたエイルは僕らの元から巨神兵と戦った広場へと流れていく。そしてそこの一角で一際大きな光を発すると、解放されたコードが天井と地面に伸びていき、何かを形作って行く。

「あれって、まさか……」
「そんな……こんな事って……エイル……エイルーー！！」

広く白い空間にリルレットの叫びが木霊する。だけどそれに応えなきゃいけない奴はもう声を発することも出来ない。
何故なら……エイルはこの空間にそびえ立つ一本の白い柱へと姿を作り替えられてしまってるから。オブジェクト化……それはプレ

イヤーをＬＲＯの一部品に作り替える禁忌の様な反則技だった。

「な……んだよこれ！」

そんな掠れた声が誰かから漏れる。それは仕方ない事だろう。何も言わないで居るなんて出来ない事だ。だってこんな事・・柱に成ったエイルは一体どうなったって事なんだろうか？　ここではない……リアルの方はどうなってるんだ？　考えたくもない想像が何度も頭をよぎる。

「おい……これ俺達もやばいんじゃないか？」

目の前で起こった出来事が集団での不の連鎖を始めていた。一人と複数の違い……集団心理……一人じゃ出来ないと思える事も誰かと一緒なら出来る気がする。複数なら勇気が湧き、いろんな事が怖くなくなったりするものだ。

だけど、それの逆も起こり得るって僕は今気付いた。勇気を、力をくれるみんなが一つの不安を倍・倍に膨らませていくんだ。

集団の不安は感染する。それもあっと言う間に。

「アレどうなったって事なんだ！？　ログアウトしたって事なんだよな？　でなきゃ、あり得ないし……ログアウトしてないなんて筈……」

ザワザワとどよめきはどんどん大きくなっている。広がった不安を納めるには落ち着かせるしかないけど、当の僕も頭は変わり果てたエイルの事で一杯だ。

（僕のせいで……）

そんな事を果てなく回していた。そして誰かが呟いた一言がキッカケでみんなの視線が一斉に僕へ向く。

「もしかして……ここから先は全員がスオウ君と同じ状況なのかも」

「それって、つまり死ぬかも知れないって事かよ！？　冗談じゃない！　ゲームで何でそこまでしなきゃ行けないんだ！」

「そうだ！　スオウには悪いけど、自分が死ぬかも知れないなら話は別だ。俺達がここまで協力できたのは、あくまでこれがゲームの延長線上だから何だよ！

ごめんだけど、自分の命を晒してまで進む気には成れない」

みんなの目から今までの光が薄れて行くのが見える。そして変わりに浸食してくるのは不安や恐怖という影だ。

「済まないスオウ。俺達は死にたくなんかない。言ったろ？　俺達はゲームのままが良いって……だから許してくれ」

「みんな……」

一人がウインドウを開く。すると次々と傍らに四角いスクリーンを出現させる。そして誰もが同じ場所を目指すように指を動かす。

転移結晶でも使うのか思った。だけどその考えは甘すぎた。みんなの指が目指すべき場所はアイテム欄なんかじゃないし、そもそも転移結晶なら一人で十分だ。

ウインドウのもっと端……そこにあるのは――『ログアウト』そんな、ここまで来て。だけどなんと言って引き留めれば良いのかなんて分からない。

本当に誰もが自分と同じリスクを背負ったのなら、僕は何も言えない――そう気付いた。そうなんだよ……今まで自分と彼らの想いは絶対的に違うと思って憤ったことも有った。

具体的にはついさっきだけど、有る意味だからこそ僕はわがままが言えてたんだ。そして今まで協力してくれてるアギトやテッケンさんやシルクちゃん……それからみんなが僕に協力してくれるのはゲームの一環として……それで良かったんだ。

というか、そうじゃなきゃ誰がわざわざ死にに行くような事をするだろうか？　現に自分達の目の前にゲームじゃない『死』が突きつけられると誰だって今の様に怖じ気付く。

そしてこっちも『死』が見える場所に引き留めてなんて置けない。だってみんなはやっぱりゲームを望んでいたんだから。そう言った。そんなみんなに僕は言えない。

『死ぬかも知れないけど、協力してください』

なんて。だってこればっかりは誰かに流されて決められる事じゃないだろう。自分で選ばなきゃ……そして納得しないと戦いの場に……本物の戦場に命を抱えて出る事なんて出来ない。

しょうがないと思った。柱に成ったエイルを見て、みんなを見て、拳を握りしめる。だけどその時、ウインドウを開きもしない一人の少女が呟いた。

「待ってください！　エイルは……私の友達なんです！　一緒にこのＬＲＯを初めて、今までずっと一緒に冒険してきたんです。だから！」

リルレットの肩は激しく揺れて、大きな白い階段には水が染みて行っている。それが涙とは誰もが分かったはずだ。だけどそんなリルレットに無情な言葉が投げかけられる。

「無理だよ。だって死ぬかも知れないんだぞ！　本当の顔も名前も知らない奴の為に命までは賭けられない！　君だってそうだろ！」

「私は、エイルの本当の顔も名前も知ってます！　リアルでも知り合いだもん！」
「そうなのか、でもそれは君だけだ。俺達にとってはリアルに戻れば知らない仲。繋がりなんて何もない」

確かにそうなのかも知れない。向こうの言う事も最もなのだろう。他人の為に命を懸ける人間がこの世界にどれだけ居るだろうか。
けど……本当にそうなのか？　と強く想う心が僕には有るよ。そしてそれはリルレットにも……

「仲間……じゃないですか！　一時でも、一つに纏まった仲間ですよ私たちは！　それでも繋がりが一つも無いんですか！？
何百万というプレイヤーが居るＬＲＯで今日出会えた奇蹟は繋がりじゃないんですか！？　真剣にゲームをしてる割には、それじゃあ随分と薄っぺらいじゃ無いですか！！」

広い空間に叫ぶリルレットの言葉が幾つも木霊する。柱の影響か分からないけど、発せられた言葉は何回も耳に届いた気がした。
そして動きが止まったみんなと同じように、僕もリルレットの言葉でハッとした。自分は時々、妙に潔くないかって。物事を割り切る事が他人よりなのかも知れない。
だってリルレットは知っている。一人じゃどうにも出来ない事を。そして僕だって、本当は気付いてる。二人でも例えエイルを救うのは難しいかも知れないと。
絶対に諦めはしないけど、あの謎の奴は手強いだろうし、さっきエイルを柱に変えたのは多分別人……ここで戦力が減ったらセツリの救出だって危うい。
それなのにどうして僕はリルレットの様に出来ないんだろう。僕はどこかで自意識過剰なのかも。何故かこういう時、自分だけが諦めなければどうにか成ると思ってしまう。

だから引き留めようとしない。実際はそんな訳無いのに……というか、身を持って実感してるじゃないか。みんなが来てくれなかったら既に巨神兵に僕はやられてた。
だから変な理屈をこねてる場合じゃない。リルレットと同じように言わなきゃ行けないんだ。それが例え理不尽な自分勝手な事でも、一人じゃどうにも出来ないから。

『命を賭けることに成るかも知れない。だけど一緒に戦ってください』

そう言わなきゃいけない。

リルレットの激しい呼吸音が聞こえていた。みんなの顔はそれでも……いいや、それを言われたから余計に暗い物に成ってるように見える。

「そんな事を言われたって……命は何よりも重いじゃないか！　そんな易々と預けられない！」
「仲間なら、立ち上がってくださいよ！　私の友達を助けるのに協力してください！」
「だから無理だ！　俺達だって出来る事なら助けたい。だけど怖いんだ！　あんな柱になって……リアルもどうなったか分からない。
このままじゃ次は自分がそうなるんじゃ無いかって思うだけで怖くて何も出来ねーよ！！」

そう叫んだ一人と同じように、誰もが僕とリルレットから視線を逸らす。みんな助けたくない訳じゃない……特にエイルはみんながちゃんと知ってる。
姿も知らないセツリとはみんなにとっても重みが違うだろう。だ

けどそれを凌駕するほどの恐怖がみんなにはのし掛かってる。だから歯を食いしばってでも逃げることを選択したんだ。
そしてそれを責めることは自分には出来ないよ……だけど、それじゃあ困ると僕は認めた。だからお願いしなきゃ行けない。
リルレットにもう次に出る言葉は無いようだ。大粒の涙をその頬に垂れ流し続けてる。そしてそんなリルレットを見まいとみんなが一斉に再びログアウトを目指す。

「待ってくれ！！」

僕はようやくその言葉を絞り出した。そして今度は僕に視線が集まる。泣いて居るリルレットの縋るような目も見えた。

「みんなが不安に成るのも分かる。だけどそれじゃあ困るんだ！みんなが居ないと、僕達だけじゃ誰も救えない。セツリも、エイルも」
「だから俺達の命を晒せってか？　てか言ったろ、怖いんだよ。こんな俺達じゃ役になんて立たない」
「例え命を晒してでも……お願いします。無茶を言ってるのも分かってるし、僕は自分の目的の為にみんなを危険に促そうとしてるって事も分かってる。
軽蔑してくれてもいい……だけどそれでも、救いたい奴が居て……僕一人じゃそれは決して叶わないからお願いします！！」

僕は深々と頭を下げた。随分と自分勝手な事を言い放って。そして次に掛かった言葉は意外な物。

「本当に、こうなってようやくお前の凄さが分かる。尊敬すら出来る姿勢だ。だけどさ……そんなお前はやっぱり眩しすぎるんだ、俺達凡人にはさ。

出来ねーよ、そんな事……許してくれ」

それからみんなの指が『ログアウト』に触れる。僕には分からない。何が凄くて、何が尊敬で、何が眩しい？　誰にだってあるだろう、無くしたくない大切な物。だからこれは当然の事……僕は欲張りで寂しがり屋だから、手にした物、集めた物、その全てを無くしたくないだけなんだ！

砂の様に流れ消え去ったとしても、もう一度砂の山から奇蹟の粒を探し出そうと思う程に。

命の重さ（後書き）

第八十話です。
今回は言うなれば仲間に、スオウについてく人達に求める『覚悟』の回です。それもこれまでの覚悟とは違う重さです。それは絶対無二・そして唯一の物をもしかしたら晒しても戦えるか？　みたいな。
ええと、ここからが編集分です。次回は金曜って報告してたけど実家に帰省する様が出来たので一週間位更新出来ないと思います。本当にゴメンナサイ。どうか見捨てないで暖かく待っててくれると嬉しいです。
と言う訳で次回の更新はちょっと未定です。戻ってきたら直ぐにあげます！

ピンチと仲間に祝福を（前書き）

俺が真っ先にやったのはムカつくそのエルフを殴る事。は？　目の前にモンスター？　それがなんだってんだ！　こういうアホは一回殴らなきゃいけない。それでも一発じゃ全然効いてなんか無いんだけど……取りあえず絶対にお互い合いそうに無いのは既に本能で察したな。

だけどそれでもＥＸモンスターからアイリを守るために少しだけ、俺達はお互いを認め合う。

ピンチと仲間に祝福を

「ぐっ……貴様、何をする！？」
「アアアアギト？　どうしたの？」

二人の視線と声が俺にぶつかる。この目の前のエルフは明らかに俺を睨んでるし、後ろのアイリは何だか震えた声出してるから、俺の凶暴性に引いてるのかもしれない。
だけどアイリに引かれてもコイツは殴りたかったんだ。てか、アイリは気にしなさ過ぎだ。何だよあの態度、あの言葉。元々萎え掛けてた気持ちが枯れ果てて、そしてむかつきが一気に上昇したぞ。まあその結果がこれな訳だけどな。
俺は振りかぶった拳を納めて、ぶっ倒れなかった蒼い髪のエルフを睨み返し言葉をぶつける。

「気に入らねえなアンタ」
「ええ！？」

驚愕の声を絞り出して叫ぶアイリ。後ろから掛けてくる音が聞こえるが、俺は振り向こうとはしなかった。何故ならこの目の前の奴が今にも飛びかかって来そう――

「いきなりやってくれるじゃないか！！」

――と思ってたらそんな言葉を吐きながら、案の定蒼髪エルフは拳を振るってきた。俺はその拳を避けずに正面から受け止める。
只の拳の割にはなかなか重い、良いパンチだった。

「アンタこそ……すかさず反撃するなんて、態度のままの中身のようだな」
「前言撤回してやろう。貴様は失格だ！」
俺達は火花を散らす程ににらみ合っていた。受け止めた手に力を振り絞り、コイツの拳を壊そうかというくらいに力も込めてる。
まあ壊れる事なんてあり得ないけど……なんだかダメなんだよな。こいつはムカつく。一目見た瞬間にそう感じて、そしてこいつの言葉の数々で確信した。
多分目の前のコイツも同じ様な事を思ってる筈だろう。
「もう！　アギトダメ！　いきなり殴るなんて酷いことです。どうしちゃったの？」
そう言って割って入ってくるアイリに俺達は取り合えず引きはがされた。だけどそれでも視線の火花は終わってない。俺はあいつを睨みながらアイリへ言葉を返す。
「別に、最初に言った通り気に食わないんだよ。アイリは何でそんなに普通なんだよ？　この野郎の上から目線言葉聞いただろ。
ある程度は俺だって覚悟してたけど、なんか無理だったんだ」
「確かにちょっと上からの言葉だったけど、きっと必死だったからだと思うよ。そんなにこだわることないから喧嘩は止めて」
「う……」
そう必死にアイリから言われると、自分が子供っぽい事した気に成ってくるな。アイリが俺の殴った理由を別段気にしてないのも、それに拍車をかける原因だ。
それはただアイリが寛大というか、優しいからだと分かってるけど、こう言うのが大人の余裕かな……とか思うんだ。実際何歳かな

んて聞いた事無いから知らないけどさ。
もしかしたら同年かも知れない。だけどそれだと余計に恥ずかしくなるから、ここは引いとくか――そう思った。だけどその時、目の前のアイツがポツリと言葉をこぼす。

「ふん、器が小さい奴だ。エルフを汚すな」

ビキッ――そんな音が頭の辺りから聞こえた気がした。俺は分かる。これは幻聴なんかじゃない。今にも第二波を打ち卸したい。
だけどその衝動を今度はグッと我慢する。そしてアイリの手を取ってそのまま背中を向けてこの場から去ろうとした。

「え……え？　アギト、何で帰ろうとしてるの？」

アイリのそんな言葉に少しイラッと来てしまう自分がいる。だから少し声をあらげてしまいながらも、歩きながら後ろのアイリに説明する。

「お前だって聞いたろ、さっきのアイツの暴言。こっちが少し引いてやったらいきなり……アイリは人良すぎだ！　あんな奴をまだ助けようなんてさ。
それに俺達は失格貰ったからもう良いんだよ。後は一人で殺されるだろうよ」
「む～」

何だか納得出来ないと言うような呻きが聞こえるけど、直接言ってこない間は大丈夫だから歩き続ける。するとその時、聞きたくも無い声があり得ない事を平然と言いやがった。

「おい貴様、失格はお前だけだ。そこの女は置いて行け。私が上手

く使ってやる」
「あぁ！？」
ガラガラガラ――これはきっと何か常識とか倫理とかの壁が崩壊する音だと思う。だってアイツ、今何て言いやがった？
『アイリを上手く使ってやる？』
何だその物みたいな言い方。俺は決めたよ。きっとこのＬＲＯ史上初だと思うが、モンスターと共にあの屑を打ち倒す！
アイリから手を離し、背中の槍を握りしめて振り返る。
「なんだ？　女が残ると聞いてお前も去るのを止めたのか？　ふん、だが残念だな。私はもうお前を必要としていない。
気品の欠片もない貴様など見てるだけで腹が立つ」
「何が腹がたつだ。うる――」
俺は一気に来た道を飛んだ。その手にある槍は赤いエフェクトを帯びてスキルも準備万端。そして振りかぶりながら残りの言葉を言い放つ。
「――せぇぇ！！」
爆発が起こり、その衝撃で巨大なモンスターが興奮するように吠えた。何だかさっきから何もしないと思っていたら、よく見るとあの四足歩行型のモンスター……何だか背中のマグマだまりから溶岩が溢れ出し始めてる。
そしてそれが岩の様な体表面から下へと流れ落ちている。何かの前準備か分からないがそろそろ動き出しそうだ。
けれども目下、俺のターゲットは目の前のクソエルフ。爆煙が晴

れて行くと奴の武器だろう長い長剣が俺の槍を受けている。

「ちっ、殺し損ねたか」

「貴様、拳の次はスキルとは……節操のない獣だな！　良いだろう、今すぐエルフは辞めて貰おうか！？」

今度は奴の長剣に淡い光が灯りだす。そして踏み込んで押し戻すと同時に三連撃の多段技が俺を襲った。銅を払い、胸を切り上げ、頭を突き刺す三連撃。しかもそれが只でさえリーチが長い長剣でその光の影響か、硬質化した光の分だけリーチが増していた。

元が超至近距離に居たわけで、全て完璧にかわすことは出来なかった。そして最後の頭への攻撃は完璧に狙われてる。

だから逃げずにこちらも槍を突き出して反撃を試みる。槍と長剣……普通なら槍の方がリーチは長いが今は同等。後はスピードの勝負。

「そのクソ苛つく口を今直ぐ塞いでやるよ！」

「貴様の様な奴が居るからエルフが落ちていくんだ！」

二つの武器は交差して真っ直ぐに顔面に向かっていく。ここまで来たらどちらも引かない。俺達にはもう、目の前の奴しか見えてなかった。ＥＸモンスターなんて完全に蚊帳の外。

今攻撃されたら二人揃ってお陀仏でもおかしく無いが、幸か不幸か動いたのはモンスターじゃなかった。

「いい加減にしなさい！！」

「「――づあ！？」」

何が起こったのか俺達には分からなかった。だけど気付いた時には俺達の武器は手元から消えていた。そして二つの武器は数瞬して

から後方へ落ちて甲高い音を鳴らしたのは分かった。
一歩間違えばこの空間の所々にあるマグマの噴出口に入ってそうなもの。ヒヤヒヤした所だが、その事よりももっとヒヤヒヤするのは怒ったらしいアイリの事だ。
目を向けるとアイリは自身の細身の片手剣を肩に持っていきトントンしている。これは本当に怒ったときにアイリが良くやる動作だ。つまりはマジギレ中の証。
それでも武器があればまだ何とか話せるんだが……さっきの一瞬で獲物は弾かれてしまった。てか、一体どうやったんだよ。一瞬で二つの武器を同時に吹き飛ばす何て信じられん。

「女！　一体何――」

不意に蒼髪エルフの言葉が途切れた。原因は予想できるけどね。ヒントはアイリの腕が動いてる事だ。

「――ぐあ！」

蒼髪エルフの膝が地面に付く。やっぱりアイリに斬られてたみたいだな。怒ったアイリは容赦がないから怖いんだ。それに幾ら同じエルフで、決闘も申し込んで無いって言っても強すぎる衝撃はシステムの壁を越えて伝わってくる。
それにその現象が何故か怒った状態だと起きやすい。だからこの蒼髪もＨＰに影響はなくても衝撃は伝わったんだろう。

「本当に……まだそんな闘争心一杯の目で見て……それにアギトの言うとおり少し口調が荒いですよ」

冷静なアイリの声が異様に背筋に緊張を与える。だけどその怖さを知らない蒼髪は、それでもアイリに食ってかかろうとしていた。

「くははは、凄いな女。私をひざまづかせた女はお前が初めてだ」
「そうですか。たいして興味ありません。それよりさっきから女、女って私にはちゃんとアイリという名前があるんです。分かります？」

今のアイリも相当だが、あの状態で笑った蒼髪も相当だ。蒼髪の方は気味悪いって事だけどな。やっぱり最初から思ってたけど少しコイツおかしいと思う。
やっぱり関わらない方が良かったと後悔してももう遅い。そして蒼髪は更に言葉を続ける。

「女……お前は今までのエルフの中で一番見込みがある」
「だから女なんて呼ばないで。アイリです！」

再び振るわれたアイリの剣には手堅くスキルを纏ってた。そしてそれで何回も叩かれる蒼髪。流石にダメージ無くても死にそうな光景だ。
そしてようやく止まったアイリが振り向いて言った。

「どうしましょうアギト。この人、全然分かってくれません――と言うかちょっと怖いです」
（お前もな……）

とは流石に言えない。それにこっちを向いた事で俺は心臓の高鳴りがやまない。一応言っとくけどこれは決して良い方面のトキメイタ高鳴りではなくて、死刑宣告されるかも知れない被告の様な高鳴りだ。超苦しい。
だってこっちを向いたって事は、こっちに話が振られそうなんだよ。

「それよりアギトもアギトです。一度暴力はダメだって言ったのに、今度は武器で直ぐまた行っちゃうんだから……私は悲しい。
良いアギト。暴力で全てを解決しよう何て最も愚かな行為だからね。戦争がその良い例だよ！　ＬＲＯでは戦いが前提として出来るけど、それは暴力や喧嘩じゃないの。わかりますかアギト君？」

発した言葉に重みもあった。納得も出来るし、理解も出来る。それに勿論、同意だって出来るさ。俺だって戦争とかは絶対反対だし、暴力も許せない。まあ喧嘩は男同士ならたまにはな……だけど。
けれどその言葉の最中納得出来ない事があったんだ。そしてそれは今も続いてるけど……

「分かりましたかアギト君？」
「サーイエッサー！」

喉元に剣を突き立てての説得は脅迫では無いだろうか！？　言うしかないじゃん！　そう言わざる得ないだろ！　まあ別にそれでも機嫌が少しでも直るのなら良いんだけどさ。
結局悪いのは俺達だし。

「うん、アギトなら分かってくれるって思ってた」

ようやく少しは落ち着いた感じになったアイリ。あの蒼髪をボコボコにしたのも良かったんだろう、今日は直りが早い。
そしてアイリはようやく再び立ち上がった蒼髪にも俺と同じ同意を求める。

「ね？　貴方もそう思うよね？」
「ふん……私は戦争も何かを得るための一つの手段と考えてるがな。

ここではそれが正義だろう。誰もが暴力を振るっている。
お前はあまつさえ、モンスター狩りをスポーツとでも言う気か？
我々は既に戦争をしてるんだ。奴らとな」

蒼髪から帰ってきた言葉はアイリの求める言葉ではなかった。だけど俺的には初めてコイツの言葉に関心が持てた。まあムカつく事に変わりはないけどな。
でもアイリはこれじゃ許してくれない。カタカタと腕を震わせて剣を掲げようとしてる。そしてそれに気付いた蒼髪野郎は「不味い！」みたいな顔をして慌てて言い繕う。

「いや……でもだな……取り合えずソレが無駄なら私は絶対にそんな事はしない」
「……まあ、今はそれで許してあげます。だけど私は貴方がその言葉を違えるのなら、この剣を持って貴方を止めます。そう覚えててください」

アイリの剣が溶岩とかの光じゃない何かでその時輝いた様な気がした。俺の見間違いだったかも知れない……けれど同じように蒼髪野郎もそんなアイリを見つめてる。

「覚えておく事にしよう」

その時初めて俺は見た。蒼髪野郎のムカつかない笑顔って奴をだ。普通に笑った顔だったと思うけど、希少で思わず「あっ」と言ってしまった。
そしてアイリと二人してニヤニヤとしてしまう。するとなんだか蒼髪野郎が照れ隠しの様に叫んだ。

「何だ貴様！　何を笑ってる！？」

アイツ明らかに俺一人に向けて言ってると思う。だけど、今はあれが照れ隠しと分かってるからそこまでムカつかない……てかおかしい。
意外とシャイなのかコイツ？　するとアイリが大きな声で場違いな事を言いだした。

「もうー気にしなくていいよ！　それより自己紹介しましょう。自己紹介。私は言ったから次はアギト！　ってアギトって言っちゃ――きゃあ！！」

言葉の途中で突如響いたアイリの悲鳴。それは余りにも唐突……突然。俺と蒼髪野郎の間に居たアイリは、その間を埋め尽くす程の火炎放射？　……違う、もっと高密度、で高温の攻撃に吹き飛ばされて行った。
実際リアルなら「きゃあ！」なんて言う間も無く溶けてるであろう攻撃。

「アイリ！！」
「大丈……夫」

だけどここはＬＲＯ。そう返したアイリが溶けて無くなることは無かった。けれど相当なダメージだ。単純に油断してたってのもあるだろうけど、きっと攻撃力が冗談みたいに高いんだろう。
ここでの狩りに併せて炎耐性の防具にしてなかったらもしかしたら一撃だったかも知れない……そう思えるほど、さっきの攻撃はデタラメだ。
何でＥＸモンスター程の敵が今まで何もしなかったのか。その謎はきっとこれだろう。一撃でプレイヤーを凪ぎ払えるだけの攻撃の準備をしてたんだ。そしてその恐ろしい程の為を作ってまででも放

った一撃……でもどうしてそれがアイリに向いたんだ？
ＬＲＯのモンスターは強力な攻撃をするプレイヤーにターゲットを移すけど、そもそも俺もアイリも奴に攻撃なんかしてない。明らかにおかしいぞ。攻撃するなら、このムカつく蒼髪野郎の筈だ。
だからこそ、俺もアイリもそんな事ないと油断してた。

「くっそ！　どういう事だよ！」

誰に向けたかも定かじゃない言葉。きっとアイリを守れなかった自分に言ったんだと思うが、それを受け取ったのは意外にも蒼髪野郎だった。

「貴様等敵のリサーチもせずに助けに来たのか？　どうりで随分とおかしな奴等だと思った。今回だけの共同戦線だから教えてやる。今のは奴は狙って無いだけだ。
だが漠然とプレイヤーの方へ向かって撃つ。だから基本奴との戦闘時は囲む様に戦うのが基本戦術なんだ」
「それならそうとさっさと言え！　それかせめて注意を促せよこのアホ！」

マジでなんて大事なことを今更得意気に言うんだこいつは。必殺の一撃を撃ったモンスターは岩が張り付いた様な体表面から蒸気が上がり、溢れ出ていたマグマは枯渇気味に見える。
どうやらあの背中のマグマを打ち出したって事みたいだ。見る限りもう一発撃つには時間が掛かりそうだけど、油断は出来ない。そう思っていると、蒼髪野郎が珍しくそっちから口を開いた。

「もう一発さっきのを警戒してるのなら無駄だぞ。あれは一回の戦闘で一度切りだ」
「一度切り？　そんな物を当てずっぽうなのかよ。あのモンスター

は？」

俺の問いかけに蒼髪はいつもよりも楽しそうに、何かを含んだ言い方をしやがる。

「くく、まああの攻撃はもう警戒しなくて良いってだけだがな。知らないのなら一瞬も貴様は目を逸らすなよ」

そう言って蒼髪はモンスターを見据える。俺も疑問は尽きないが、後ろで回復を始めたアイリをチラリと見て前を見据える。

（一体何が……）

そう思っていると、巨大なモンスターが犬の様に体を震えだし始めた。すると隣の蒼髪は言う。

「始まったな」

だから何がだよ……そう文句を言おうと思ったら、それは直ぐに見て取れた。

ズウゥゥン！！

その音はモンスターの体表面の岩が取れて地面に落ちた音だ。どれだけあの岩が重かったのかその光景で想像が付く。何故なら落ちた岩は地面に真っ直ぐに埋まってるのだから。

ここの地面も岩の様なのに、その岩を上から圧し砕いてるんだから相当だ。

だけど俺にとっての衝撃は単純にモンスターの岩の外装が取れたこと。奴が体を震わせる度に次々とそれは落ちて行き、最初とは別のモンスターに成って行くかの様だ。

今まで亀みたいに見えていたモンスターは、今ではすっかり俊敏

な狼の様だ。それに外装は全部取れた訳じゃなく、部分部分に鎧の様に残っている。

「おい……あれって……」

「あれが奴の本当の姿。いや、第二形態とでも言った方が好みか？」

「ふざけんなよお前……」

洒落になってねえんだよ。明らかにやばい感じがする。よくよく考えたら最近はずっと二人でやってたせいで、このクラスの奴を相手にする機会はなかった。久々に肌を刺すような緊張感が全身を包む感じだ。

まあ、その感が既に警告発してるけどな。

『逃げろ！！』

って。けどなんだか、どいつもこいつもそんな気無さそうなに行き満々。別に幾らこの蒼髪がやられようと良いけど、アイリもその気だからやっかいだ。

その時、モンスターが吠えた。

「来るぞ！　武器を構えろ！」

何だかいきなりリーダー面する蒼髪に文句を言う暇は無さそうだ。だけどそこで俺は気付いた……とんでもないことに。

「おい！　構える武器が無いぞ！」

「くっ――そうださっきアイリに……」

それぞれが一斉に飛ばされた武器の方を見た。だがとても間に合わない。武器無しで一体俺達に何が出来る？　モンスターは凄まじ

い爆音を鳴らして地面を蹴った。
どっちに来る？　蒼髪か……蒼髪だろう……だけど、何か進路が中途半端だ。またしても俺達の丁度中間を狙ってる様な感じ。
「クソ野郎！！　完全にアイリを狙ってるじゃないか！！」
もう、そうとしか思えない。何故かは分からないがあのモンスターはアイリにターゲットを固定してる……って魔法か！！　回復魔法や攻撃魔法の類は武器での直接攻撃よりもターゲットを取り易い。
まだ回復は完全じゃない……今攻撃が直撃したらアイリは終わりだ。
「諦めろ！　私達が避けてこいつを倒せば良いだけだ！」
「バカ言ってるんじゃねぇえぇ！！　あいつは絶対に俺より先には死なせない！　それに俺は最後まで二人で勝つことを諦めたりしねえええ！！」
俺はモンスターの進行方向へ飛び出した。たった一つ我が身だけで。そして次の瞬間吹き飛びそうになる体を必死に支えた。足がモゲてもおかしくない衝撃。だけど……
「うおおおおおお、行かせるかあああああああ！！」
踏みとどまる。踏みとどまり続けなければ行けない。けれど幾ら足が地面を削っても止まらない。自分のＨＰだけがみるみる減っていくのが見えている。
無理なのか、やっぱり無茶すぎたか、そんな思いが心をよぎった。後ろのアイリが迫る。その時、俺の隣にもう一つの陰がぶつかった。
深い海の蒼が視界にちらつく。

「お前！？　何で？」
「貴様に出来る事が、真のエルフである私に出来ない筈は無い！！」
それはあの蒼髪野郎。用は負けず嫌いな性格か何か知らないが、これで！　赤と蒼の叫びが合わさる。そしてついには我が身二つでＥＸモンスターの突撃を食い止めた。
「やるじゃんか蒼髪」
「蒼髪ではない、私は『ガイエン』だ、覚えておけアギト。それにアイリ」
それは初めて互いを認めあった瞬間……ここからが反撃開始！
――と思いきや、まだまだ俺達は全然チームですら無かったんだ。
まあはっきり言うと、完敗したさ。それはもう木っ端微塵に。そして俺達にはイヤな悔恨が残ったとさ。

ピンチと仲間に祝福を（後書き）

第八十一話です。
遅くなってしまって本当にゴメンナサイ。今日戻ってきました！
まだ若干眠いけど、またいつもどおりに上げて行きます！　てな訳でアギト過去編第二回です。今回は三人の初めての戦闘編。仲が悪い二人を繋げるのはこの時からアイリだったんですね。
さて、これからどうなるのかは次回へって事で、次は水曜日に上げます！　それでは待っててくれた方々ありがとうございます。

逃げない選択（前書き）

僕達は岐路に立たされてる。このまま崩れ去るか、それとも持ちこたえるか。そして僕は何が何でも持ちこたえさせたい。逃げない選択を彼等に……その意思でさせたい。まだまだ全然不完全だけど……後は姿を見せるしかないと思った。

だからまあ、今はこれで上出来。みんなは僕等で守ろう。僕とリルレットの二人でさ。

逃げない選択

『現領域はログアウト不可空間です』

そんなメッセージがログアウトを押した一同から流れる。これで「助かる」――そう思っていた面々はそんなメッセージを瞳に映すと同時に絶望の色が浮かぶようだった。

「な……何だよこれ！？」
「ログアウト…不可？」
「そんな……」

口々に出る覇気の無い声。そして信じられない様に何度も何度もログアウトへ手を伸ばす。だけど結果はすべて同じ……出てくる文字は寸分違わぬ機械的な物だ。

元々、それだけの覚悟が必要な場所って事か。この洞窟を観て感じた簡単には戻れそうも無い感じ……それはこういう事でもあったんだ。

確かに今考えれば、僕達のログアウトだって奴等にシステム側に握られてる訳何だよな。確か会社の人達はシステムで引っ張り上げてる――そう言っていた。

なら、それをシステム側が拒否すれば僕達は帰れなく成るのは道理。この空間は多分、奴等が無理矢理作った場所。だから僕らは罠にはまったも同然なんだ。まあそれを覚悟したはずだったけどーー直面すれば脆くも壊れる物か。

「くそ！　くそ！　くそおおおおおお！」
「柱に何か成りたくないよおお」

悲劇を叫ぶ面々。崩れ去る間際の一同に僕はこう言うしかない。
「前に進もう」
だけどその言葉に反応するのはエイルを想うリルレットだけ。
「スオウ……」
「もう、それしか無いよ。仲間だろ、僕達は」
拳を握りしめて選択を迫られている面々を見据えるリルレット。その潤んだ瞳はきっと何かを期待してる筈だ。けれどみんなは首を振ってその眼差しを投げ捨てる。
「今の状況でそんな事……出来る訳がない！」
「そうだ、俺達は死にたく何か無いんだよ！」
そんな叫びが虚しく、この巨大な広い空間に響きわたった。リルレットは声を出せないしみたいで口をパクパクするだけでそれを受け止めている。
僕は反響する声が収まるのを待って柱と成ったエイルを見据えながら声をだす。
「なら余計、進むしかない。ログアウト出来ない以上、助かる為には奴等の元まで……それが唯一の手段だよ」
僕の言葉は静かに消えていく。そして上を向いて見据えるのは頂上だ。だけどそれでも決心なんてそうそう簡単に付くもじゃない。
みんなは頑なに下を向き続けてるよ。

「だからってどうなるか分からないじゃないか！　何をされるかも分からない！　向かったところで勝てる保証も無いんだぞ！　何でこんな事に……」
「俺達はただゲームをしていた筈だったのにな……」

暗い空気はなかなか取れそうに無いな。二人で行くのは無謀と悟ったから、そんな事はもうしない。でも、ここでずっと押し問答を繰り広げてる訳にも行かないんだ。
どうすればみんなの気持ちをもう一度上げられるのだろうか？
だけどその時、明るい声で最悪な事に気付かれた。

「いや、待てよ。ログアウトじゃなくても、来た道を戻ればいいだけじゃん！」
「おお、そうだよな！」

イヤな感じがまんえんしだしてる。ある意味これはみんなにとっては希望と分かるけど、僕やリルレットにとっては痛い事だ。けどもう、見いだした希望にみんなの目は奪われていて、僕達の言葉が届きそうに無い。
でも実際はそこから脱出出来る可能性も確実とは考えにくい。だってわざわざログアウトを不可にしてる奴がもと来たルートを閉じてないなんて考えにくい。
元々この場所は無かったのなら、あの入り口を閉じる事だって出来る筈だろう。けれどみんなそこまで考えてなんか無いんだ。
見えた希望にすがりつくように……自身のゲームを取り戻すために彼等は下へ駆けようとする。

「待ってください！　行かないで！」

けれどその時、飛び出したのはリルレット。震える声に両手をい

っぱいに広げてみんなの進路を防いでる
僕もみんなの後ろからリルレットを後押しする為に声を荒げた。
「そうだ、よく考えろ！　ログアウトも出来ないのに、出入り口が残ってると思うか？　奴等は僕達を逃がす気なんてないさ」
「そんなわけ！　でも例えそうだとしても行ってみないと分からないだろ！　まだある可能性だってある！」
「それなら出口が無かったときはどうするんだよ？　その時は今度こそ上を目指すしかないぞ」
僕のその言葉に更に行くのを萎縮するみんな。だけどこの空気もダメなんだ。目標はさっきの希望を見つけたようなテンションでの登頂。その為にもどうすれば……その時僕は気付いた。ここから見える筈の所にそれは有ったはずじゃないのかって。
「おい、どうやら覚悟を決めた方が良さそうだぞ」
「「「え？」」」
僕はその方向へと指を伸ばす。こちらを見ていたみんながその指の進路を開けるように頭を向けていく。
そしてたどり着くのはリルレット……じゃなくてその更に先。幾本もの柱の先にある――いや有った筈のその穴に向いている。そしてみんなが気付く。その事実に。
「もう既に退路はない」
「嘘だろ……」
その言葉に嘘は無かった。それはもうみんながその目で確認してる。僕達が進んできた筈の洞窟の道は、今や元からなかったかの様に跡形も無い。

遠いから実際は分かりづらいけど、ぽっかりと口を開けた穴はこの距離でも見える筈なんだ。

「なんてこった……どうすんだよこれから！」

一人が地面を打ち叩きそう声を荒げた。そして失われた希望に膝が崩れそうに成っている。でもまだ……そしてここだと僕は思った。一瞬だけ灯った光。それはまだくすぶってるかも知れない。

「進もうみんな。そしてみんな無事に脱出だ。この戦いを勝利で終わらせるんだ」

「またそれかよ。無理なんだ俺達には……お前の様に覚悟なんて出来ない」

背中で発したその言葉は弱々しくて、とても前を見れる状態じゃないと分かる。分かってる……けど、進まなきゃ誰も救われない。それは確実だ。

だから僕は有る決心をした。

「なら、みんなまとめて僕が守るよ。それなら文句ないだろ？」

「「なっ！！」」

一斉に誰もが振り返る。向けられる視線は「そんなバカな！」と言うのが見て取れる様だ。でも僕は本気で言ったよ。でなきゃ意味なんて無いじゃないか。

「お前！　そんなの無理に決まってるだろ！？」

「無理でも何でも進むにはそれしかない。大丈夫、全員まとめて面倒みてやるよ」

僕は余裕たっぷりにそう言って見せた。強がり以外の何物でも無いけど、それでも余裕を見せないとみんなの不安を煽るだけだ。
だから僕はみんなの中にまだくすぶってると信じる希望をこの態度で刺激する。少しでも僕の言葉に乗ってほしいんだ。

「私も！　私もみなさんを守ります！　守ってみせます！　だから行きましょう」

声を出したのはリルレット。僕の計画に乗ってくれた様だ。これで少し場の空気が変わり始める。誰だって一人は不安なんだ。だけどそれが二人なら、与える安心感が違う。もうしかしたら……そう思える。そして――

「俺たちは本当に何もしないからな……」
「ああ、充分だ。な、リルレット」
「はい、みなさんありがとうございます」

深々と頭を下げるリルレットにみんなはちょっと恐縮気味。だけどこれで僕達はみんな揃って上へ行ける。その選択が出来た。まあ、それなりの人数と言う荷物が背中に乗ったわけだけど、きっと価値があると僕もリルレットも信じてる。
だからまずは僕達が――私たちが……そう二人で思っていた。

タン……そんな音を鳴らして僕らは階段を上りきる。そして目の前に見えるのはこの神殿の入り口だろう巨大な扉。それから追い続けていた月光の様な輝きを放つ髪を持つ奴。奴は扉の両端の柱の右側に背を持たれてこちらを見ている。
そして何故か大きなため息。そして口を開いた。

「あ～あ、何だ余計なのが一杯居るよ～☆」

そう言って柱から背を離し柱の間、扉の正面へその長い髪を揺らしながら進む。

「もう、ちょっとは空気って物を読んでよね。大勢で女の子の家に押し掛けるなんて非常識だぞ☆」

今まで通りの明るい声に僕らは緊張感が抜けそうになる。言ってる事も場違い――ってやっぱりここはこいつらのホームなのだろうか？　でもそれよりももっと気になってる事が僕にはある。

「アホな事言ってないで答えろ。エイルを柱に変えたのはお前か？　それともやっぱりもう一人居るのか？」

僕の質問に奴は指を顎に当てて考えるふりをする。でもそれは明らかにふりなんだ。

「エイルってだぁれ？　私知～らない☆」

「ふざけるなよ。お前じゃなければもう一人の奴だ。居るだろ！？　僕は見たぞ、アレは明らかにお前より髪が短かった」

その言葉に更にニヤニヤとする奴。でも僕はそんな奴を見据えて少し考えた。そう言えば、今の奴はアギト達が見た時と髪色が違うと言っていた。

どうしてそうしたのかは謎だけど、それを考えると髪の長さを変える事も簡単に出来るのかも知れない。まさか……やっぱりこいつがエイルを？　くそ、判断出来ない。その時進み出たリルレットが答えをくれる。

「幾ら笑顔で誤魔化そうとしたって無駄です。同じ女にはそんなの効きませんよ。それに私には確信があります。エイルが柱になる直前に言ったんです」

彼女の目は強い光を帯びて真っ直ぐに奴に向いている。そこには必ずエイルを助ける――そんな決意が見て取れる様だ。そしてリルレットのあの確信はそうか、確かにエイルは間際に何かを言っていたんだ。

僕や他のみんなはそれを聞き取ることは出来なかった。だけどリルレットはそうじゃ無かったんだ。確かにあの時受け取った様にリルレットは頷いていた。

「ふ～ん、それは楽しみね☆」

「ええ、エイルはこう言ったんです。『奴は一人じゃない』そう私に伝えてくれました。多分それがエイルがここで見た事だった筈です。

だからスオウが見た人は間違いなく居るはずです！　その人がエイルをあんなにしたのなら……私は許しません！」

隣に立ったリルレットが自身の細身の剣を抜き去り、奴に向ける。白い光を受けて輝く刀身はきらびやかな光を発していた。

『奴は一人じゃない』確かにそれだけで複数人は確認出来る。けれど何人かとかは分からない。信じることは出来るが答えには入らない……そんな感じだ。

だけどその答えを知る奴は今目の前にいるし、解くための数式みたいなのは今のリルレットの言葉で出た気がする。

それなら後は迷わず詰め寄れる。

「だ、そうだ。そして勿論、僕だって許さない。まあ僕の場合は当然お前もだけどな」

「ふふふ、何だかそんな熱い視線を向けられるとあの子じゃ無くてもドキドキしちゃうね☆　それにそんなに身構え無くても教えてあげるのに。絶対に隠し通したい訳じゃないんだしね」
「どう言うことだよ？」

さっきまで頑なに別の物で取り繕ってた奴の言葉とは思えないぞ。そして奴は視線の先でその月光の髪を僅かに揺らし言葉を紡ぐ。

「君が私たち姉妹に会うのは必然だもの。あの子の王子様でいたいのならなおのことね☆　それにみんな興味が有るし……それにこっちだってね、許しはしないの君の事を」
「……姉妹」

一体何人姉妹？　と思わず頭を巡らせた。希望は一人。当たり前だろう、こんな企画外なゲームのバクみたいな奴等がそうポンポンといたら迷惑極まり無い。それに僕が見たのは一人だし、エイルも具体的な数字を言わなかったのはその一人だけしか見てないからじゃないのか？
まあここに全員が居るとも限らない訳だけど……取り合えずは一人は確実なんだ。そう考えた矢先に、左側の柱の陰から声が聞こえた。

「何姉妹？　とか考えてる？　なら教えてあげようか。私『柊』とそこの『シクラ』、そして残り三人で五人姉妹なの私たち」
「ああ～ヒーちゃん私の台詞取らないでよね。と、いうかもっと派手に見せ場的な登場の用意をしてたのに、出るの早すぎ！」
「仕方ないじゃない。だって結構あのモブリしぶとかったんだもん。最後に私の存在を託してるなんてね。まあ、それよりももっと計算外なのは……」

二人はまさに姉妹の様に馴れ親しんでる感じ。と言うか姉妹に見える。出てきた女の子は『シクラ』と呼ばれた奴より二回り小さい感じ。どっちかと言うと妹系だな。

中学生位の容貌に髪はやはりシクラよりは短いけど、腰まではある長いストレート。けどこいつ『柊』だっけ？　何だか色が毛先と生え際で違う。

でも新しく毛が生えてきた様な不自然な感じじゃなく、そのままがそういう仕様の様な髪。柊は生え際は黒だけど、毛先に行くほどに艶やかな白……いや白銀へと色が変わってる。白髪とは思えない光沢だから白銀な。

そして服装は奴シクラの可愛らしさのないマント姿とは違ってタイトで鮮やかなミニスカートに鎖骨と肩を大胆に露出した感じの服。腰には大きめのベルトが意味無さ気に巻かれていて、同時に武器なのか鞭も見える。

ここまでで言ったらＬＲＯの冒険には不向きなリアル系の服装だけど、ちゃんと防御を考慮して二の腕までを包む鉄甲に、脚には銀糸とメタリックな鉱石により作り込まれた膝までをガードするブーツが見える。

アレに蹴られたらかなり痛そう……そう思える感じ。

「計算外なのは……」その先はよく聞こえなかった。もしかしたら心の中で呟いただけかも知れない。システムの裏側にいる筈のこいつらにも計算外な事――そんな事あり得るだなんて気になる事だ。

だけど今の僕たちにはもっと気にすべき一言をこの柊は言っていた。そう『あのモブリ結構しぶとかった』それはつまり――

「柊っていったっけ……今の言葉本当？　アナタがエイルをあんな風にしたの？」

登場したもう一人の謎の少女に戸惑いを隠せないし、あと三人も

同じような存在が居ると分かった衝撃も大きい。だけどそれを押し退けてでもリルレットには真っ先に確認するべき事があった。
籠もる様な声と、下を向く顔。そしてシクラの方を向いていた筈の切っ先は今は垂れて震えていた。

「うん、そうね。私がやったわ。それが何？」
「それっ――がっ何って！！」

リルレットの額に浮かんだ血管から血が飛び出してもおかしくない。そう思えるほどにリルレットの顔からは怒りが見えた。でも対する柊やシクラは余裕で動じる事なんかない。むしろ薄く口元を上げている様にすら見えるんだ。

「おかしな事なんか何もないじゃない。私達はいわゆる敵同士なんだから、出会ったら対峙するが道理でしょう。その結果がアレよ」

そう言って柊は柱のエイルを指さした。

「そんなこと言って、本当はヒーちゃん恥ずかしがり屋だからいきなり現れた彼にびっくりしちゃっただけだよね～☆」
「ちょとお！　違うわよそんなの！」

途端に頬を染めだした柊。だけどちょっとビックリしただけにしては随分とスゴい事をやってくれた物だ。何でわざわざ柱にする必要が有るんだよ。
それにもっと悪役風で無いと困る！　だってその通りなら僕にも明らかな非があるじゃん。く……覚悟はしてたが助けた後にエイルには謝らなきゃな。

「あはは～でも結局自分のタイミングで出てきたかっただけだよね。

私の演出はいつも派手だって怒るもんシーちゃん☆」
「そんなの当たり前です！　それにそれに、仕方ないじゃん。シクラはいつだって演出過多だもん。私は繊細なお年頃だし……何より私達に男との接し方なんてプログラムされてない……」

そう言って柊は柱の陰へ再び入って顔を半分だけ出している。こっちを伺う瞳も女の子だけを世話しなく見てる感じ。きっと僕たち男は線にでも成ってると思う。
こうやって見ると限りなく普通に見える。だけどその存在はあのモンスター共を操るシクラと同じ存在……システムの裏側の住人。そしてそれが後三人。
考えたくもない事だ。でもこいつらの目的がセツリなら確かに僕らは必ず交わる事になる。
どっちも降りる事なんか出来ない。その時、靴の音を響かせてリルレットが一歩を踏んだ。

「そんなアナタ達の体質とか気持ちなんてどうでもいいんです。今すぐ、エイルを元に戻しなさい！」

そんな力強い声が二人の姉妹の動きを止めた。そしてこいつらは本当にコロコロ雰囲気が変わる。それは姉妹で同じらしい。柱の陰から柊が黒い笑みを浮かべてる。

「それって無理な事なの。てゆーか何で敵のお願いを聞かなくちゃいけないの？　そんな道理ないじゃない。それに私はシクラ程甘くも優しくもないから……私達の大切なあの子を奪いに来たアナタ達を返す事なんかしない。
そう肝に銘じてなさい」

妖しく光る柊の目はエメラルドグリーンを宿している。だけどリ

ルレットは動じずにその刀身にスキルの光を纏わせる。エイルを助けるにはやるしかない……そう判断したんだろう。
確かにそれしかないとは僕も思う。そう柊の奴も言ったしな。単純に考えればニ対ニ、悪い条件じゃないのかも知れない。

「なあ、ずっと聞きたかったんだけど……何でお前達はセツリを――」

「――ちょっと待って！　男は口を開かないで！！」

ええ？　男が苦手とかは聞いたけど、最初そっちから声掛けて来なかったっけ？　あれは自分のタイミングだから大丈夫だったって事なのかな？

「ヒーちゃんは本当に純情だね☆　ほらちゃんと見た方がいいよ。アレがスオウ何だからね」

「アレが……私達の……」

シクラの言葉で必死な顔でこちらを凝視する柊。何だかイヤな物を無理矢理見てるみたいな感じで結構辛いんだけど。向こうが無駄に美女だから余計ね。
そして呟く言葉の最後が聞こえた。

「居場所を奪った奴」

そう言うと突然に、腰の鞭を振り回して自身の隠れる柱を壊した。大きな柱が一瞬で砕け散り、大音響と衝撃でこの聖堂が大きく揺れる。

「――っつ！？」

巻き起こる粉塵が視界を遮る。周りでも余りの衝撃に悲鳴が上がっていた。互いの無事を確認する声が上がる中、不意に前方から重厚な音が聞こえて、一筋の光が延びてきた。
そしてそこへ立つ二つの人影。それは姿が見えなくたって誰か分かる。絶対的にあの二人だろう。シクラと柊。

「おい！　何やってるんだ！？」
「ちょっと！　男が叫ばないでよ！」

聞こえてきたのは柊の声。本当に男嫌いだな。その時こちら側の影も動いた。音も無く素早く二人に迫る。

「うん、やっぱり女の子よね」
「逃がさないから、絶対に！」

聞こえてきたのはリルレットの声。一人で突っ込んむのは幾ら何でも無謀だ。それに今の声を聞く限り奇襲も失敗してる様だし、これはやばい。
そう思って僕も光の方へ駆けだした。だけどその時リルレットの悲鳴とともに衝撃が全面に伝わって地面に一緒に倒れた。

「大丈夫か……リルレット？」
「うん……ありがとうスオウ……でもあいつ等が」

晴れていく土埃の間から見えたのは僅かに開かれた正門。そこから光は出てるんだ。そしてその扉の向こうに行こうとしてるシクラの姿。

「それじゃあシーちゃん行こっか？　うふ、スオウにも良いこと教えてあげる。こっちに来れたら、セツリと会えるよ。この向こうが

ゴールだからね☆」
「なっ――おい！！」

僕はリルレットを押し退けて走り出す。あの向こうにセツリが居る。だけどその時、続いて扉に入ろうとする柊が言う。
「私としてはもう二度と逢わせたく何かない。だからお願い、それが二人の為なの。来ないでね」
「そんな事！　今更――」
「そう言うよね。だから後はお願いするわ」

閉じていく扉に僕は腕を必死に伸ばす。だけどその時、扉までの道を誰かが塞ぐ。見覚えの在る種族の姿をした誰か達が……

逃げない選択（後書き）

第八十二話です。
ようやく奴を改める事が出来ました。『シクラ』てのはシクラメンから取りました。まあ新キャラが『柊』だから姉妹全員草花で行こう！　と思って最初は漢字で統一しようかな？　とも思ったけど、思いついたのを入れた感じです。
あんまり知らないですし……五姉妹だから後三人。その三人はアルテミナス編で出るかは微妙です。出たとしても……ってこれはネタばれか！？
てな訳で余計な事を口づさむ前に、次回は金曜日に更新します！
それではまた！

引けない刃（前書き）

ガイエンと出会って数日後。俺はアイリとの待ち合わせでアルテミナスのカフェに一人でいた。そんな時通りの方で聞こえてきたのは今何かと活発に成ってる『レイアード』の奴らの演説。

しかもあれはリーダーのグラウドとか言う奴だ。遠くで我関せずを決め込んでいた俺だけど、何故かそちら側に向かう見馴れた姿を発見する。それは間違いなくアイリだ。何やってるんだアイツ！！

引けない刃

今現在、ＬＲＯで専ら噂されているのはもうじき実装される予定の領土争い――言う成れば『侵略システム』成るものだ。
もうテストも終わって実装間近。だけど俺達エルフは他の種族と違い、これには余り意欲的じゃない。と言うか実装さえ反対の奴等だって居るくらい。
まあテスト開始、最初の方は「面白そうだ」とか言ってたんだが、相次ぐ連敗の末にエルフでこのシステムの実装を心待ちにしてる者は少なくなった。
何てたって領土を侵略されれば色々と不都合。町や村でその地域で取れる物が高く成ったりするし、国としての力も弱まるだろう。

まあだけど、エルフで国をどれだけの奴が意識してるのかって事なんだけどな。ここＬＲＯはそれぞれの種族にそれぞれの国が在るけど、基本そこにいけない訳じゃない。町中でＰＫされる事もいきなりはシステム上無いし、だから常にそれぞれの種族がいろんな国に結構居る訳だ。
だから自分の国が小さく成ったところでそんなに今の暮らしが変わる訳じゃない。ただ他国のフィールド内なら何時ＰＫされたって文句は言えないけどさ。
だけど、だからこそこのシステムはいらないんじゃないか！　とエルフは声高々に叫んでる。別に何が変わるわけでもない……イベント程度の仕様ならいらないだろってのが言い分だ。
エルフである奴等は何故かプライドが高い。だから国はどうでも良いけど、自身が下の位置に見られるのはイヤなんだ。

侵略システムが実装されれば数じゃない、本当の国としての力で

優劣がハッキリするだろう。すると多分、このエルフの国『アルテミナス』の地位は陥落しかねない。
今まで数で三強に入ってたがそれすらも危ういとみんなが思ってる。今まで「はっスレイプルかよ」とか数が少ない奴等を見下してたのが、もしかしたら「数だけのエルフが居るぜ」とか言われかねない。
プライドだけはみんな高いエルフはそんな小馬鹿にされるのは許せないんだ。それなら全員で協力すれば良いのに……そう安易に考えてはいけない。
プライドが高いってのはつまりは自己中な奴等が多いって事と同位。自分が一番であって自分達が一番な訳じゃないんだ。だからこそ他の種族に比べチームワークが無い。連携が個人技になってしまう等の数々の問題の露呈により、俺達エルフは団体戦が苦手と判明。

そしてテストではそのせいで連敗……と言うか全敗だったんだ。まあどれだけ酷かったのかは俺は参加してないから知らないけど、想像は付くな。普通の狩りのパーティーでもエルフは二人までが基本と言うか鉄則に成っている位だし。
五人の中の二人なら少数だからがその理由。少数なら制御が効くからな。普通のパーティーにエルフを三人以上入れると効率が悪いと言われている。
他人を生かす事をしないから。在る程度はやるけど、同じ感じの奴等が集まったら止められなくなるのと同じだ。はまれば強いんだがな。
でもなかなかはまらない。てかそれには強力なリーダーシップが在る奴が必要だ。それも侵略に打ち勝つにはエルフでだ。だけどエルフは余り集団に成りたがらないからな・・でも人の上に立ちたそうな奴等は結構いる気もする。

最近会ったあのムカつく蒼髪野郎……名前は確か『ガイエン』だ

っけ？　アイツは口調が命令形でまさに上から目線の奴だったから多分そうだと思う。
アイツの様に野望とか言う物をエルフの人達は多分結構持ってる人多い。でもそれぞれが我が強すぎてぶつかり合いにしか成らないのが問題だ。

「はぁ～」

思わずため息が出てしまった。カフェテラスでウインドウを開いて情報を眺めて考察してるとどうしてもな。最近は特にだけど……みんなそんなに気にしてないけど、本当にこのままじゃやばいと思うんだよな。

「でも、俺も自分から率先する方じゃないし」

まず俺は人の上には立ちたくない。めんどいじゃんか。色々と指示を出すよりも一人こっそりと戦績を上げていくタイプなんだよ。
責任とかさ……恐ろしいし。俺は自分がそう言う器じゃないと知っている。だから達観してるしかない。俺は絶対にアイツの様には成れないとわかってるんだ。
リアルの知り合いの妙なカリスマ。アイツと知り合ってから自分は遣われる側と悟ったさ。本当にさ、上にはああいう奴が立って欲しいよ。
でなきゃやる気なんて出ないな。どうもエルフでって言うか全般に言える事だが、上を目指してる奴って偉そうなんだ。
まあそれが目指す奴と、たどり着く奴の違いなのかな。そう言う訳で未だ俺は侵略システムの合戦には参加予定はない。今のエルフの現状で勝てるとも思えないしな。

昼下がりの日差しが木々の隙間から適度に暖かさをくれる中、ア

ルテミナスは今日も変わらず活気に満ちている。遠くに見える光明の塔と呼ばれる巨大なクリスタルはその名ばかりの姿で黒ずんでるから景観が悪く見えるけど、それ以外はとても綺麗で整備された街なんだ。

アルテミナス城を中心に広がった城下町。整った石畳みにそこかしこから顔を出すクリスタルはいちいち目を奪う。朝昼夜と光を変えるのが憎い奴だ。

そんないつもの光景の中で突然周りが何事かと騒ぎだしていた。その方向へ目を向けるとなにやら集団が集まっている。そして立てているのは蛇を食う獅子の図がプリントされた旗。あれは……

「レイアードか」

そう呟いて、目の前のグラスを傾ける。冷たい飲料が喉に爽やかに染みてくる。種族至上主義のレイアード。最近アイツ等の活動が活発に成ってきてるんだ。

多分それは例の侵略システムと関連してるんだろうな。だってアイツ等は自分達の種族こそが一番優秀と証明したい筈だ。なら他種族の領土を奪える侵略はそれを証明するには絶好のシステムだ。

だからそれぞれの種族のレイアードは最近活性化してるんだろう。ああやって勧誘をしてる所をよく見るな。エルフのレイアードが一体何人居るかは知らないが、そのリーダーは結構有名だ。

確か『グライド』とかいう槍使いだった筈。結構過激な奴でアルテミナスに入る他種族を相手に勝手に検問とかしてた記憶があるな。

そして基本エルフ以外は入れないんだ。フィールドではエルフ以外のプレイヤーを狙った狩りをしてるとも聞くし、なるべくかかわり合いになりたくない奴だ。

だからいつもはこうして遠目でしか見ないんだが……何だろう、凄く見覚えのある奴がそこへ近づいてるのが見える。

「アイリの奴、何やってんだ」

そうそれは間違いなくアイリだ。アイツはつい最近までレイアードを知らなかったから、あれも何かのイベントか何かだと勘違いしてるのかも知れないな。

ＬＲＯでは管理者側からのサプライズ的なイベントとは別にいろんな集団が日々何かしらやってるんだ。それは野外ライブとか、大道芸とか様々だけど、きっとそれらと同じとアイリは思ってる。

俺はイスから立ち上がり、アイリへと向かう事にする。別に放って置いてもしばらくすればこっちに来ると思うが、なんと言うかアイツって……

「不幸体質？　いや、巻き込まれ体質……う～ん」

どうもしっくり来ないが、取りあえずは何かしらが良くアイツの周りでは起こる。それも良くない事が。だからだろう、妙に心配になったんだ。

万一に目を付けられて勧誘でもされたらやっかいだ。アイリって攻められると弱そうだし、軽く頷きそうな気がする。

「このままで良いと思ってるのか皆は！？　俺はそうはおもえん！

エルフは人から更に神へと近くなった種なのだ。そんな俺達こそがこの世界を手にするにふさわしい！

他の種族など侵略システムが実装された暁には世界の端へと追いやり、全領土をアルテミナスとしよう！　そのためにも皆の力を貸してくれ！

テストでは一勝も出来なかった事は気にするな。あんなのは遊び

でしかない。奴等を油断させる作戦よ！　俺達上位種のエルフが他種族に遅れを取るなどありえん事だ！」

力強い声が大きく響く。それに併せて周りの部下か何かが煽るように声を出す。俺はこんな演説で人が集まるか毎回疑問だ。けど実際、近頃は人が増えてるとも聞くし案外効果はあるのかも知れないな。

けどレイアードはテストの方にも参加してたのか。ワザとって……明らかに負け惜しみのような気がするぞ。だけどそんな言葉を真に受ける素直な奴が俺の知り合いに居た様だ。

「そっか、ワザとは優しさだね」

「んな訳無いだろ。明らかに負け惜しみだ」

そんな言葉を後ろから掛けると、アイリはパアっと花咲く様な笑顔で振り返る。

「あっ！　アギトお待たせしました」

「……ああ、って何で真っ直ぐに来ないんだよ」

何だかアイリを直視出来ない。顔が赤くなってる気がする。このＬＲＯでは本当に真っ赤っかに成るからさ、隠す何て出来ないんだけど、抵抗は試みるさ。

取りあえず不自然に顔を反らすとかな。空をこよなく愛する男子を演じるんだ。

「大道芸でもやってるのかと思ったの。けど何だか違うみたいだね。ねぇアギトはこれが何かわかる？」

俺の不自然さは気にも止めないアイリ。在る意味助かったけど、

ちょっと心が寂しい気持ちに成るのは何でだろう。

「この前話しただろ。奴等がエルフ種の中のレイアードだよ。もうすぐ実装される侵略システムへ向けて勧誘を行ってるみたいだぞ」

「成る程、あの人達が種族至上主義……つまりはエルフがどの種族よりも上って思ってるって事ですね」

「まあ、そうなるな」

チラッと言葉の終わりにアイリを見ると何だか厳しい目をして今まさにエルフの優秀さを語ってるグライドを見つめていた。そしてポツリと言葉をこぼす。

「くだらない」

俺はその言葉に些か驚いた。何がってアイリがそういう言葉を口にした事が驚きだ。いつも一生懸命で、いつも自分を犠牲にするような事を平気でするアイリが、誰かを見てそう言うなんて初のこと。

それに驚くほど冷たい声だった気がした。

「アイリ？」

俺は恐々とそう声を掛けてみる。

「アギト……ううん、何でも無いんです。悪口は行けませんね。誰にだってそれぞれの考え方があるんですから」

こちらを向いたアイリはいつものアイリだった。最近はずっと一緒にいるけど、結局俺が知ってるのはＬＲＯの中だけのアイリというプレイヤー何だよな……ちょっとだけそんな事を思った。

俺達は本当の顔も名前も知らないんだ。だから俺にはアイリのあ

の瞳の訳を知ることは出来ない。きっと色々あるんだろうな――って位しか思えない。
それで良いと思ってたし、それがここでのマナー。けれど何だろうな、アイリの事は少しは知りたいと……そう考えてしまう。
だけど決して口にはしない。やっぱりそれがマナーだからな。ＬＲＯではリアルの詮索は御法度だ。まあそれでも隣には居れるよな。

「そうか？　俺も上とか下とか結構下らないと思ってるけどな。どうしてここまで来てそんな事を気にしなきゃ行けないんだよってさ」
「そうですね。中身はみんな人間なのに皮が変われればそれに染まるんでしょうか」
「はは……上手いこと言うなお前」

在る意味残酷な事をサラッと。確かにそれぞれの種族で特徴があったりするように成ってきてると思う。エルフが自我が強いように人は協調性が特徴、モブリは団結とか友愛とかかな？
小さくか弱いモブリはとにかく社交的な奴らが多い気がする。そして職人が多いスレイプルは職人肌の頑固者とかさ。確かに皮に寄って俺達は変わるのかも知れない。
それに誰だってここにはそんな感じで来てるわけだし、それは別に悪い事なんかじゃないんだよな。リアルとは違う自分を……後は元々変わりたいとか、そんな事を誰もが思ってここに居る。
ＬＲＯにはそんな思いが溢れてる。

「でも、俺達もそうじゃないのか？　染まるって言うか、俺達は人の皮から抜け出したかった感じだろ？　人を選ぶ人はもう一度やり直したいのかもしれないし、俺達はきっと変わりたかった。
そんな感じじゃないか？」
「そう……かも知れないですね。結局私はまだ、皮を破れない感じなのかな？　そしてあそこで演説してる人は本当にエルフって感じ

なのかも知れないですね。リアルの皮なんて感じさせない」

そう言って再び壇上のグライドをみやるアイリ。だけど今度の瞳はきつい感じじゃない。それは少しだけ……そこに自分の憧れがあるような。そんな感じに思えた。

それはちょっと寂しさの様な・・だから俺はそんな寂しさを吹き飛ばすように笑ってやろう。

「本当のエルフってあんなに偉そうなのか？　なら俺としては降りたい所だぞ。それに俺にとっては今のアイリがアイリだと思うけど。ああは成って欲しくないぞ」

「私だってあの人の言ってる事を肯定してる訳じゃありません。でもただ……」

不意に途切れる言葉。不自然な間は周りの喧噪に飲み込まれてる。

「でもただ……何だよ？」

するとアイリはそのストロベリーブロンドの髪を揺らして弾ける笑顔を俺に向ける。何かをはぐらかせる位の眩しい笑顔。

「ただ、私もああ成りたい訳じゃないって事ですよ」

「……あっそ。それなら良かった」

視線を反らして頬をポリポリ掻く。結局は俺はアイリに弱いからな。所在無さ気に視線を動かしてると演説を終わらせた奴と視線がぶつかった……気がする。

「どうだ？　そこの赤い髪の奴。なかなか見所ありそうだ」

いきな壇上からピンポイントで投げかけられた声に思わず体を反対へ向ける。どうやら目があったのは気のせいじゃ無かった様だ。レイアードとは関わりたくないのに――無視はあの気が短そうな奴には不味そうだから一応は背中越しにでも反応してやろう。

「それはきっと勘違いですよ。俺に見込みなんて無いんで忘れてください」

そしてアイリの手を引いて早々にこの場から離れる事を試みた。だけどその時、目の前に空から何かが降ってきたんだ。

その背中には機会仕掛けの複雑な槍が携えられている。

「ふはは、そう連れない事を言うな。貴様のような奴は見込みがあるぞ」

マイクで拡張されなくても野太い声が響きわたった。間違いないこの声はさっきまで壇上から聞こえていた声だ。ならこいつはグライド・・エルフ族のレイアードのリーダー。

危ない過激派で遠いところに居て欲しい存在なのにどうしてこんな目の前に。それに何を見て俺に見所があるとか思ったんだ？　訳が分からない。

「買ってくれるのは嬉しいですけど、俺達はそこに連れる気ないんで。なっアイリ」

「う、うん」

こうなった以上曖昧な表現はややこしく成るからキッパリと言い切った。なるべく早く立ち去りたいからな。だけど何故か更に大笑いをするグライドは言う。

「良いぞ、ますます気に入った！　俺を前にして変わらん態度がデカいな。共にエルフを導こうではないか」

こちら側を向いたグライドは精悍な顔に男気溢れるような笑顔を張り付けてこちらに手を差し伸ばす。なんて面倒な状況に成ったんだ・・基本同族に手を出す奴とは聞かないが他の種族にやってることを考えると、交渉が決裂すると荒っぽく成りそうな気がする。

アイリも居るのにそれだけは避けたいところだけど……その時そのアイリが俺の後ろから進み出た。

「ふざけないでください！　アギトは貴方達とは違います。私たちは他の種族の人達とだって普通に接したいんですから！」

セツリは大勢のレイアードも居る中でそう啖呵を切った。まあ、だけど有る意味スッキリだな。俺やアイリや、それに大多数のエルフは多分そうなんだろうし。自分達がこの国をかき乱してると知れ。

「軟弱だな。俺達エルフがどうして他の奴らと同列で無くては成らない？　設定上でもエルフは神の御子なんだよ。よってこの世界を統べるのは俺達エルフが一番妥当だろう」

「そんなの、ただの設定じゃ無いですか。実際は私達も他の種族も何も変わりません」

確かにアイリの言うとおりそんな設定は有って無い様な物だ。俺達が神から生まれた訳じゃ当然無いし、みんな同じにシステムから作られた姿だろ。

まあでもこういう浸る奴は本当にＬＲＯの設定を鵜呑みにしてたりする。それかただの言い訳か。そして言われたグライドは食ってかかるかと思うほどの勢いで言い切った。

「設定だと？　素人だなお前は。俺はエルフ何だよ。見ろこの姿、エルフ以外の何者でもない。人なんて安い体じゃない強靱な肉体、溢れる力！　比べるべくもない。
　エルフで有る限り誰もがしばらくするとこう思う。我らは『違う』とな。そうだろ？　アギト」

　グライドの目がアイリから突如俺の方へ向いた。なんで俺の名前を……ってさっきアイリが言ってたからか。それに俺はアイリより長くやってるのを見抜いてるっぽいな。　流石リーダーただの暴力バカって訳でもなさそうだ。思想は偏ってるけどな。

「知らないな。残念だが俺はそんな事思ったこともない。俺は全面的にアイリ派なんだよおっさん」
「ふは、おっさんか。姿は二十代の筈だがな。だがそうか、この女が原因か……惜しいな、本当に惜しい。お前もきっと感じる筈なのに、こんな軟弱な女のせいで思いを共有出来ないとは……許せない事だ」

　グライドはアイリを鬼気とした目つきで睨んでる。何でそこまで俺にこだわるのかは知らないがこのままじゃ本当にアイリに何かしそうだ。
　こっちに意識を向けさせないと。

「別にアイリのせいって訳じゃない。本当に俺はおっさん達に共感出来ないだけだ。そもそもレイアードって嫌いなんだよ」
　そう言いきって俺はグライドを真っ直ぐに見つめる。すると口元を引き上げたグラウドの顔が崩れた笑いを見せていた。
「はっはー、それなら俺達エルフの本能の部分に訴えてやろう。お

前はこんな軟弱な女と居るべきじゃないとな！」

その瞬間奴の腕がアイリに襲いかかる。何をする気……とかどうでも良かった。ただ俺は直ぐに前に出てグラウドの腕をつかみ取った。

「ふざけるなよ、アイリに何かする気なら許さねえ！」

「ふん、良い目をしている。やぱり俺の目に狂いはない。自分がどれだけ哀れかもわかってないとはな。目を覚まさせてやる。俺はお前に決闘を申し込む！」

そう言って即届いたのは果たし状。つまりは決闘を受けるか否かのメッセージ。どうしてわざわざこんな物受けなきゃ行けないのかわからない――が、いつの間にか周りに集っていたギャラリーが沸いている。

決闘ってのは町中でやると必ず見せ物の成るし、それに有名な奴がやるとなれば尚更だ。グラウドは名が通ってるからその発言に沸き立つのは無理ないとは思うが俺は受けたくない。だけど……

「逃げるなよ。俺達はしつこいぞ。何度でも何度でもお前を・・・いいやその女を狙おう。だが決闘で勝ったならキッパリと諦める。その代わり負ければお前も仲間に成って貰うがな。

さあどうする？」

「くっそ、卑怯な真似を！」

「アギト……ダメ。挑発だよ！」

アイリの忠告はわかってる。グラウドが強いことだって」。こいつは自分が負けるなんて思っちゃいない。そしてここで俺が受けなければ確実にアイリを狙うだろう。

そんな奴だ。確信できる。アイリを危険に晒したくなんかない。

ようやく楽しく成ってきた所なのに……こんなクソみたいな連中に邪魔されてたまるかよ！

俺は背中から槍を抜き去って答えてやる。

「いいぜ！　受けてやるよ！」

「アギト！」

「お前は必ずそう言うと思っていた！」

グラウドも槍を抜く。機会仕掛けの槍は不気味な音を奏でて獲物を前に舌なめずりしている。

引けない刃（後書き）

第八十三話です。

僕は飛んでも無い事に気付きました。全員が居るはずなのに『鍛冶屋』出すの忘れてないか？　って事を！　タゼホに入ってから書いてないもん！　完璧ミス！　いや、居るはずなんですけどね。もうどうしようかなって感じだよね。

多分スオウの方についてきてると思うだけど……数合わせ的に。だけど書いてないからな。このまま最後まで何となく居た筈、にするしかないかな？　別に今回はそんなに見せ場が有るわけじゃないし……だからこそ忘れてたんだけど。

まあどうしたかは本編で確認ください。

てな訳で次回は日曜日に上げます。ではまたです。

届かぬ声（前書き）

僕達の前に現れたのはプレイヤー？　だけど無機質な瞳はその仲に人が居るとは思えなかった。だけどリルレットがその中で一人の知りあいを見つけた。それは小さくて生意気な顔が特徴的で、僕も良く知る奴……というか、今いるみんなが知っている。

だってあれは『エイル』じゃないか！！

届かぬ声

扉が閉じきったと同時に、その奥の光は残滓を残して白の風景に溶けていく。そして鮮明にその姿を現しだしたのは、その扉までを塞ぐ奴らの姿。

でも、やっぱり“奴ら”はモンスターに見えない。その姿はどう見ても僕らと同じ、プレイヤーが始めに選択する五種族のソレとしか思えない……これは一体。

その時、リルレットの声が弱々しくこの場に響く。

「エイル？　エイルだよね！？」

「何言ってるんだよリルレット？　エイルは柱に……」

声が最後まで出てこない。認めたくない出来事だったから、言葉にするのが辛いんだ。そしてそれはリルレットも同じはず。

この五種族の中には当然モブリも居るから、それをエイルとみたい気持ちが錯覚を起こさせてるのかも……そう考えた。だけどリルレットは指を指してまで僕にその存在を示そうとする。

「違うよスオウ！　あれ！　ちゃんと見て。絶対にエイルだよ！」

僕もリルレットが指さした方に居たモブリに目を向けた。そしてその姿に目を見開く。

「なっ」

「間違いないよ。だって防具も武器もそのままエイルだもん。それにあのしかめっ面も」

どういう事か分からない。だけど確かに、リルレットがいう様に僕の記憶にいるエイルと向こうでこちらを見据えるモブリはがっちりと一致した。
防具も武器も……なによりあの顔も記憶の中のエイルそのままだ。今にも「死ねよ」って言ってきそうな気さえするけど、そんな事はなくただ無言でこちらを見続けてる。
それが何か変な感じだ。

「確かにエイルっぽい……てかエイルにしか見えない」
「うん、あれはエイルだよ！」
「みんなはどうだ？」

僕は嬉しそうなリルレットと違って何だかおぞましい感じがしてた。だからみんなにも聞いたけど、やっぱり外見上はエイルにしか見えないのは同じ様だ。
その時後ろの誰かが震える声を出した。

「そんな……まさかお前『エゴイチ』か？」
「エゴイチ？」
「何回か同じパーティーで狩をしたことがある奴だ。フレンドって訳でも無かったが……何でこんな」

視線の先に居るのは短髪のエルフ。きっとこの人も装備や防具はそのまま何だろう。って事は待てよ……僕はこの場に現れた五種族の人達を見やった。
全員が誰も彼も統一なんてされてない防具や武器ばかり。これはもしかしたら全員が元はプレイヤー何じゃないか？　そしてここに現れた人達は全員が柱に成った人達……そう考える事が出来る。
それは最悪の想像だけど、きっと多分、間違って無い気がする。僕達は全員がエイルが柱に成るのを見てる。それは間違いもない事

実だ。そして人形の様なエイルが目の前に現れた。そして見覚えがあったプレイヤーがもう一人だ。
この数はあの柱の数と同じじゃ無いのだろうか。つまりはあの柱全てが元はプレイヤー。一体いつから……それを考えるだけで手に汗が滲む。

「なんて事をしやがるんだアイツ等！」

僕の叫びに一斉に虚無の目をした奴らがこちらを向いた。生気がない……ただ本当に形だけを再現したような感じだ。
そして僕と同じ様な考えにみんな辿り付く。それから上がるは恐怖の言葉だ。

「まさか……これ全員柱に成った奴とかか？」
「そんな嘘だろ！」
「信じられねえ！　何だよこれ！」

後ずさるみんなとは反対にリルレットはエイルをまっすぐに見つめている。そして届いてるとも思えない言葉を投げかける。

「エイル！　私だよリルレットだよ。思い出して、そんな目で見ないでよ！　ここには一杯一杯楽しいことが有るって言って誘ったのはエイルでしょ！
私を不安にさせないで！」
「リルレット……」

リルレットがいつも元気に笑ってられるのは実はエイルのおかげだったのか。だけどそんな叫びを聞いても目の前に見えるエイルは眉一つ動かさない。
僕の知ってるエイルならリルレットにこんな事を言われたら顔か

ら蒸気でも出そうな物だ。やっぱりあれは形だけ。
リルレットだって分かってる筈だ……だけど、諦めきれない様で何度も何度もその名前を呼び続ける。

「エイル！　エイル！」

そしてその度に少しづつ前へ。すると何だ周りの奴らがリルレットへ視線を向けてる様な……

「エイル！　私だよリルレットだよ！　思い出して！」

ザンッ――とリルレットは更に一歩を踏み出す。その瞬間だ。目の前のエイルモドキが武器を掲げて詠唱し始めた。

「ダメだ！　それ以上行くなリルレット！」
「きゃあ！？」

僕はとっさに腕を伸ばしてリルレットを後ろへ投げた。そして直後、さっきまでリルレットの居た場所から鋭い土が飛び出して来ていた。
後一歩前に出てたら僕に刺さってた所だ。だけど安心も束の間、どうやら動いてたのはエイルモドキだけじゃなかった様だ。左右から迫る二人のプレイヤーモドキが見える。
一人は斧、もう一人は槍を携えてた。リーチが違う両方の武器。まずは槍の方が迫ってくる。機械仕掛けの槍は回転をしながら一段と破壊力を増した様な音を響かせている。
速い！　その初速はアギトと余り変わらないかも知れない。けれど狙いが何故か脚の方だ。これなら飛んでかわせる。そう踏んで僕は槍を飛び越える様に後ろへ飛んだ。
でも直ぐにその判断は間違いだと気付いた。何故ならもう一人が

飛んだ方から一直線にその巨大な斧を振って居たからだ。これってまさか――誘われた？

「――っづ！　ぐああ！！」

とっさにセラ・シルフィングでガードしたけど、完全にハマった連携はスキルまで発動していた。そして元々斧やその風貌が巨大な物はガードの上からでも叩き潰す様な完全攻撃特価型だ。

地面に足が着いてない状態だと、軽々と吹き飛ばされる。いや、下手に耐えるよりも武器にも自分にも有る意味ダメージは少なかったのかも知れないから良かったのかも――

「とは思えない！！」

吹き飛ばされた先には既に他の奴が武器を構えて待っている。それは弓……それもかなり華美で豪奢な作り。けどもっと問題なのはその後ろにスキルだろうか？　何だか、同じように弓を構える戦乙女みたいなのが見える。

なんだあれ？　『ヴァルキリー』か？　そんな事を考えてる間にその戦乙女から光輝く矢が放たれた。だけど僕は真っ直ぐに向かってきたそれを武器で弾く。

「あれ？」

あれだけ過度な演出があったからどれだけ強力なスキルかと思ったけど、何だか随分とあっさり弾けた事に拍子抜け――と思ったら弾いた先で光の矢は数十本に分裂して別々の軌道を描いて向かってきた。

「なっ！？　げげっ嘘だろおい！」

全包囲から降り注ぐ矢をそれでもシルフィングで何とか落としていく。二回目の分裂は無いようで安心だ。だけど今度はどこかからか歌が聞こえて来る。そして突如体が上手く動かなくなる感じがした。

いや、もっと正確に言えば方向感覚が滅茶苦茶に成ってると言うか……さっきまで平気だった視界までグルグル回ってる？

そのせいで着地も出来ずに僕は固くヒヤリとする大理石の床を滑る羽目に成った。

「何……だ、これ？」

くそ、立ち上がる事さえまま成らない。地面に付いてる筈なのに上下が区別出来ないってどういう事だよ。視界の端か上か下に流れる虹色の音符をその声で発しているプレイヤーモドキが見えるけど、ぜんぜん正確な位置が分からない。

これじゃ攻撃のしようもましてや守る事だってまま成らないじゃないか。視界が回るせいでプレイヤーモドキの数がとんでもなく多く見える。それに確実に近づいてる。

どうにかしないと、だけど対策が分からない。『歌』なんて攻撃方法は僕は初めて何だ。絶対に攻略方法は有るんだろうけど……こんな事ならアギトの言う通りマニュアルは一通り読んどくんだった。

そこになら『歌』の存在だって有っただろうに。

「くっそ……そんなに遠くないと思うんだけどな」

既に動けないと判断してるのか、プレイヤーモドキ共は僕を囲んで各々の武器を掲げている。今にもいくつもの武器がこの体に突き刺されそうだ。

「あ……あ……ダメ……エイル、やめさせて！」

その声はリルレット。そうだ僕にはまだ頼れる人がたった一人だけ居たんだ。

「リルレット！　歌を歌ってる奴はどこに居る！？」

リルレットは多分、歌の影響を受けてない。僕が知らない対処方をとってるか、それとも届かない位置にいるかは知らないけど、僕はもうリルレットに頼るしかない。

「真っ直ぐ！　スオウの位置から真っ直ぐ十五メートル位行った所！」

「良し！」

僕は目を閉じて前方にシルフィングを一払いして駆けだした。実際囲んでた奴らが避けたのさえ見てなかったし、駆けだした瞬間にはもう地面に倒れ込みそうな程だった。だけど直後に背後から聞こえた無数の武器が地面に弾ける甲高い音に背筋が凍るのと同時に気も引き締まってそこを何とか踏ん張る。

そして目指すは歌い手の場所だ。取り合えず真っ直ぐなのは助かった。正確な位置までは分からないが、方向感覚が狂っても使える部分は残ってる。それはこの歌が聞こえる耳だ。

そこだけは潰すわけにはいかないからな。この歌を聴かせ続ける為にも。だけどそれなら……この耳に届く歌が一番近い場所が歌い手の居る所だ！

そして確実に近づいてると分かる。気を緩めれば直ぐにでも転倒しそうな程の頼りない足……だけど後少し、もう少し――ここだ！

「うおおおおおおおおおおお！！」

僕は絶対音感なんて持ち合わせちゃ無いし、特別に耳が良いって訳でもない。だけど音の大きさ位、誰だって区別出来るだろう。
それにこいつらはその歌を歌ってる奴以外、声を出さないのもありがたかった。雑音が混じる事が無かったから。だから確信を持ってシルフィングを振れる！

確かに感じた感触……その瞬間歌声がピタリと止まった。そしてようやく戻る地面の感触、自身の体の位置情報。急に夢から叩き起こされた様な感じだけど、あの異様な気持ち悪さよりもやっぱりこっちが断然いい。
地面のありがたさを感じれる。そして僕は敵を見定めて連続でシルフィングを振りまくる。歌使いは基本後衛何だろう。ろくに反撃も来ない。

（丁度良い。やっかいだからこのまま一気に――）

そう思って更に加速を付けようとしたらその時、腕に暖かな感触が絡み付いてきた。

「だめ！　待ってスオウ！　倒しちゃったら、この人はどうなるの？　みんな柱になったプレイヤー何でしょ！？」

その瞬間僕が生み出してた勢いがピタッと止まった。そうだったんだ。この人達はみんな柱にされたプレイヤー。今はただの人形の様だけど、確かに生きてた筈の人達だ。
プレイヤーがどうなってるのか分からない……もしも僕やセツリみたいにＬＲＯに囚われてるのだとしたら、この目の前の奴らを倒したら最悪それは僕達と同じように『死』へと繋がるかも知れない。

勿論そんな確証はない……けど、そうじゃない確証も無いんだ。もしかしたらプレイヤーはキャラが柱に成ったと同時にリアルに戻されてるのかも知れない。それからずっとログイン出来ない状態にされてるとか……けれどそれだって僕達に確認する方法は無いんだ。

どっちも考えれる。そして最悪な結果が有る限り、僕達はこいつらを倒す事は出来ない。倒せる訳がない！

「じゃあ……どうすれば……」

僕は無理矢理止めたシルフィングを震わせながらそう呟いた。だけどそれに返す答えをリルレットも持ち合わせてなんかいない。それも重々分かってる。

でも言わずにはいられ無いじゃないか！　だって直ぐそこなんだ。あの扉の向こうにセツリが居る。それなのに！

その時、僕とリルレットの頭上からとてつもなく重い何かが振ってきた感じがした。

「ぐあっ！？」

「きゃああ！？」

二人して同時に地面に張り付くように倒れ込む。何かがのし掛かってる感覚は有るのに、目を開いてもそこには何もない。これって――その時リルレットがポツリと呟くのが聞こえた。

「エイル……止めて」

その瞬間に理解した。そうだよ、これはエイルが自慢気に見せびらかしてた魔法だ。確か重力魔法とか言っていた。つまりさっき何かが降ってきたと思ったのは魔法で通常よりも何倍にも増幅された重力だったんだ。

どうりで何も見えない訳だ。食らって分かるけど、結構屈辱的な魔法。エイルにピッタリだな。
視線を巡らせると確かにアイツの杖が光ってる。無機質な瞳でこちらを見ながら何も言うことなくだ。そしてこの魔法は直接攻撃系なのか微妙。初めの一回だけ攻撃対象だけど重力がのし掛かってる間にＨＰが減ることはないからだ。
だからこれはほぼ足止めみたいな感じだ。エイルもそういう風に使ってたしこのままじゃ再びプレイヤーモドキに周りを囲まれてしまうだろう。
くそ……リルレットもいるのにエイルの野郎。その時僕の頭には別れ際のエイルの言葉が浮かんだ。

【リルレットを守れ！　でないとぶっ殺す！】

声には出てなかったけどきっとこんな感じの事を目で言っていた。そしてなら……僕はやらないといけないと思う。例えお前を倒しても……そうだろエイル。

「イクシード！！」

風が刀身にその刃を纏わせる。そして僅かだがシルフィングを動かす。それに併せて出来た風の唸りが素早くエイルの杖を斬り裂いた。
その瞬間のし掛かってた重力が消え去る。体の重さが無くなり僕は素早く体を回転させて三百六十度に刃を振るう。

「伏せてろリルレット！」
「だめ！　スオウダメだよ！」

迫っていたプレイヤーモドキがイクシードの風に弾き飛ばされる。

だけどそれでも次にはスキルを発動させて様々な手段で迫ってくる。それに魔法も飛んできて、イクシードで圧倒的に押せないのは初めてかもしれない。
リルレットが必死に叫んで僕を止めようとする。だけどそれは出来ない事だ。何故ならそれは……

「言いたいことは分かる。だけど僕は君をやらせる訳には行かない！　例えあのエイルを倒しても、それでも守れと言われてる！」
「……そんな、そんなのエイルが言うわけ」
「言うよ。リルレットの為なら、アイツは迷わずにそう言う。僕が知ってるアイツはそんな奴だ！」

スキルの爆連鎖が絶え間無く紙一重の位置で続く。きっとこのプレイヤーモドキ共は自身のスキルを使ってるんだろう。研鑽を積んだスキルに研究を重ねたスキルの組み合わせ。この戦い方だって多分知ってる人が見たらその人のまま何だろう。
だから……だからこそ、もの凄くやっかいだ。後ろから迫る機会仕掛けの槍を防ぐと、既に左右から剣と斧が迫ってた。どちらにもスキルの光が見える。
剣がその幅を翼の様に広げてクチバシみたいのをも大きく開けてる。ただでさえ避ける範囲が少ないのにこれは……

「くっそ！」

それでも風の唸りを利用して奴の真横からそれをぶつけて吹き飛ばす。そしてもう一本で迫っていた斧を防ぐ。あの斧を一本で防げるとは思えないがしょうがない。
だけどそれさえ甘かった。斧の方のスキルは思ってた攻撃系じゃない！　イクシードを発動させたシルフィングを斧は影の様にすり抜ける。

「なっ！？」

その瞬間、今まで見えてた奴の姿も消えて半歩後ろに同じ姿が現れる。陽炎の様なスキルか！？　完全に外されたタイミングで巨大な斧が僕の体に食い込んだ。

「ぐっああ！！」

赤い鮮血が飛び散るのが見えた。体が大きくブレて膝が崩れ落ちる。

「スオウ！」

そう叫ぶリルレットに迫る魔の手が見える。血反吐を吐いても立たなきゃいけない。こんな所で崩れ落ちたまま終わるなんて出来ない。

だけどその時機会仕掛けの槍を支柱にした蹴りが顔面を捕らえた。防いだ後に奴は次の行動に移ってたって事か。脳が揺れる……血が流れ出る感覚だけがやけに鮮明に感じれる。

ぶっ倒れる――なんて出来るか！　床に腕を突き立てて踏ん張った。前を見据えて駆けだした。イクシードはまだ終わっちゃなんかない！

リルレットに振り卸される幾重もの刃の間に割ってはいる。

「きゃあああ！！」

ドスドスドス……そんなイヤな感じが肉体を貫く感触がした。そしていつまでも何も起きない事に疑問を持ったリルレットはゆっくりとこちらに視線を向ける。

「あ……ぁあぁぁあああ……スオウ」

リルレットの眼球が大きくなったり小さくなったりしてるのが分かる。それだけ衝撃的な映像が映ってるんだろう。そして確かにそうかも――とも自分で思う。

背中から胸に突き抜けた武器は、リアルなら即死物の光景だ。それなのになまじ動けるから余計に気味悪く見える。武器の刀身には僕の血が流れて落ちているし……実際少しこうやって達観してないとパニックに陥りそうな感じだ。

「うん？　ああこれか？　良かったよリルレットが無事で」

僕はそう言ってシルフィングを再び振る。だけどあれ……何だか上手く力が入らない。足下がおぼつかないって言うか妙に体が重い感じがする。

みるとＨＰがレッドゾーンに突入してるじゃないか。これはかなり危ない感じだ。それでも僕はリルレットも守りながら奴らの攻撃を弾き続ける。

「ダメ、逃げて！　このままじゃスオウが死んじゃうよ！」

「逃げるなんて……ここまで来て出来るわけ……」

口も重い。息を吐く度に力も抜けていく気さえする。けれど守らなきゃ、進まなきゃ……そんな気持ちでシルフィングを振り続けた。

「さっきスオウはエイルを倒してでもって言ったけど……実際は倒すまで攻撃なんかしてないじゃない！　誰一人、倒せてなんかない。スオウはこのままじゃ誰も倒せないよ。それなのにこんな所で死ぬ気なの！？　お願い……せめてみんなの所まで退いて」

その言葉で不意にみんなの方を向くと、それはおかしな光景だった。

（何で……）

何で、みんなは普通に無事なんだ？　少し離れたみんなの場所にはプレイヤーモドキが一体も攻撃しに行かない。そう言えば最初、僕達もあそこ等辺に居るときは攻撃されなかった。いや……と言うか、現れてもリルレットが近づくまではこいつらは何もしなかったんだ。

それってつまり、こいつらは守ってるだけなんじゃ無いのか？　あの扉に近づく者だけを対象に攻撃を開始してるだけかも知れない。

その時上から炎の塊が降り注ぐ。高圧な炎が白い床に一面に広がった。

「ぐあああああ！！」

不味い……本当にもう雀の涙ぐらいしかＨＰが残ってない。でも唯一の救いはこの攻撃に併せて前衛部隊が間を空けたこと。

続いて第二波の炎が見えるがこの期が離脱する絶好の時だろう。確かにこのまま進むのは勇気じゃなくて無謀だ。あの場所まで下がれば奴らが攻撃しない事に賭けて行くしかない。

「リルレット！　走れ！　みんなの場所まで行くぞ！」

「え？　あ……はい！」

僕達は同時に走り出す。目指すはみんなの居る場所だ。だけど間に合うか……第二波の炎は直ぐ上だ。僕のＨＰに次はない。

その時更に後方から矢が迫る音がする。どう考えても追いつかれ

る。だけどその時リルレットが横に飛んだ。

「おい！」

「ごめんね……私のせいで一杯怪我させちゃった。だからこれ位大丈夫だから……だから走ってスオウ！　君はやられちゃダメなの！」

リルレットは体で矢を受け止めながらも走り続ける。なら僕も止まるわけには行かない。体を張ってくれたリルレットの為にも、待ち続けてるセツリの為にも、まだ死ねない。

「間に合ええええ！！」

その瞬間炎の塊が再び降り注ぐ。白の空間に赤の渦が立ち昇った。

届かぬ声（後書き）

第八十四話です。
はてさて、アギトの方は過去へダイブしてるけど、こっちはリアルな時間が進んでます。倒せないプレイヤーの影をどう突破すれば良いんでしょうか？　てか、スオウは生きてるのか？
あれだけ攻撃受けたらリアルの身体もやばそうだ。だけど今は気にせずに進むしかない！　ここを抜ければセツリの居る場所なんだから！
と、いう訳で次回は火曜日に上げます。お楽しみに！

二人一緒に（前書き）

俺とグラウドの決闘が始まった。同系統の武器の使い手だがあいつの武器は見た事無い感じだ。そしてやっぱり強い。この国のレイアードを組織するリーダーなだけの強さをグラウドは持っていた。

だけどそれでも負けるわけには……レイアードに何か成りたくない！

二人一緒に

二つの槍がぶつかり合い、押されたのは俺の方だった。

（強い）

まさにその感じが一撃で伝わった。初めから決めるつもりで行ったのに、力で強引に押し返された。スキルごと強引に……

「くわっはっは！　良い一撃だ。さあもっと楽しもうぜ！」

身体強化のスキルの発動。そして地面が吹き荒れる様な踏み込みでグラウドは俺に迫ってくる。奴の槍は特殊だ。機会仕掛けのあの槍はソレ事態に特殊なスキルを纏ってる？　いや装填してるのか？

回転に併せて発動していく威力加算型のスキルがその正体。一つのスキルではどうやら太刀打ち出来そうにない。俺は奴の槍を紙一重でかわして前へ出る。

幾ら破壊力抜群の一撃でも当たらなければいいだけなんだからな。それにグラウドは常に大振り。一撃の破壊力に頼った戦法何だろうが、それだけにかわせば一気に隙だらけだ。

「うらあ！」

懐に入っての一撃がグラウドを捕らえる。この距離でかわす事なんか不可能。吹き飛びやがれ！！

「ふっ」

その時見えた余裕の笑み。そして次の瞬間、大きくグラウドの体が後ろに退いた。いや、退いたというか飛んだみたいだったぞ？
不発に終わった自身のスキルが消えていく中、俺は奴の回避の正体を見た。

「お前のその槍……」
「どうだ？　まだ俺以外には見たこと無い槍だ。格好良いだろう？」

確かにあんなのは見たことないし、格好良いとも思う――が、グラウドが持ってるせいで何だかイヤな武器に見えてムカつくな。
きっと俺は今後あのタイプの槍は使わないだろうと思う。まあそんな自分の中だけの決め事はどうでも良いこととして、あの槍どうやらブースターも付いてる様だ。
ブースターと言うか噴射口かも知れないけど、どっちにしろそれで逃げられた。
「知るかそんなの。色々と詰め込み過ぎじゃ無いのかその槍」

「う～んまあそうかもしれんがな。俺は気に入ってる。その理由をお前には見せてやろう。詰め込みも物に寄っては陪乗だ」

そう言って少し離れた位置で槍を構えるグラウド。先程と同じく、再び回転を初めてその回転する段々事にスキルの発動が見られる。
同じ奴が来るのは間違いだろう。だけど疑問なのはあの位置からって事だ。二・三歩じゃ足りないぞ。それでも同じ事をやる気だなんて……そう思ってると更に機能が加わっていた。
回転の音に混じって空気を吸い込むような吐くようなそんな音が聞こえてる。そして回転する槍の隙間に何か熱気の様な物が見える？　アレは一体？
そしてグラウドは満足気な笑みを浮かべながら言う。

「今度は紙一重では足りないぞ」

次の瞬間、槍の間から出ていた物が一気に後方へ線を引いた。それはつまりアレが推進力となってるって事だ。さっきのブースターはアレか！？　と思ってると既にグラウドは目の前に来ていた。

凄まじい速さだ。もうグラウドは完全に槍に引っ張られて飛んでるのと変わらない状態じゃないか。でもそれで事足りるって事なんだろう。

元々の威力加算型のスキルの発動にこのスピードが加わればそれはもうかなりの威力なんだろう。目の前から迫るグラウドを見据えると、確かにモンスターを一撃でなぎ倒せそうな迫力がある。

つまりは防御なんて考えられなかったって事だ。きっと防御を抜かれてあの槍は俺の体まで易々と届く。そう簡単に想像出来る。

「ちっ！」

俺は真横に飛んでグラウドを避ける。別にアイツの忠告を受けたからな訳じゃない。そうしなければヤバい気がしただけだ。

だけど――

「――っつ！？　ぬあ！　ぐべっ！！」

避けた筈だった。完璧に、紙一重じゃない様に。だけどこれは……それでも足りなかったって事なんだろう。真横に飛んだ俺の足を何かが巻き込んだんだ。

そしてそれはグラウドの生み出したあの強烈な風なんだ。ブーストと強力な乗算されたスキルの余波みたいな物に足を取られて、そのままあらがえない乱風によって地面に強打させられた。顔面から。

「くっそ……あんなのありかよ」
「アギト！　頑張って！」
愚痴をコボす俺にアイリの精一杯の声援が届く。結構ガヤガヤうるさいのに、アイリの声だけはやけに自分の耳にはっきり届く事に疑問だ。
システムがわざわざ選別してくれてるのかと思うな。それならありがたい事だけど……そんなことあり得ないだろう。まあでも、アイリの声でまだ終わった訳じゃないと思える。
攻略法なんて今の俺には無いけど立ち上がろうってさ。
「良い目だ。だが今の一撃で実力差は分かっただろう。大人しく負けを認めればこれ以上痛い思いはしなくて済むぞ」
「はっ、実力差？　何のことだよグラウド。俺はまだ負けちゃいないぜ」
グラウドの言葉にそう返した俺は、スキルを纏わせた槍を構える。そしてグラウドもそんな俺を見て楽しそうに笑いながら再びあの技の態勢に入った。
「そうだな。勝負はやり遂げなければ面白くない。遠慮無く潰してやろう。そしてお前を手に入れる！」
爆音が尾を引いて俺に迫る。突き出したグラウドの槍は加算されたパワーが溢れ出す様に広がっていた。本当に凄まじい……だが、逃げても意味ないならこれしかない！
「潰されるかよ！　俺達はレイアードになんか成る気はない！！」
俺は全身全霊を持って真っ正面からグラウドにぶつかった。纏わ

せたスキルは今の時点で最強の物。槍に灼熱の炎が被さり、その威力を飛躍的に高めてくれる物だ。
そしてこの炎は操れる。だから槍一本に更に二本の炎を加算して受け止める。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

後ろに徐々に下がるが、二つの力は拮抗していた。完全じゃなくても、何とか受け止められてる。腕が震える。炎の様に燃えたぎってるみたいに熱い。
だけどこのままじゃ駄目だ。このままじゃ確実に弾かれる。けれど反撃の糸口さえ見えない。全霊をこの槍に込めてるからこれ以上出来る事なんて無い。
この槍で、グラウドを突き破るしか道はないんだ。だけどその壁が余りにも分厚く感じれる。そしてその時、目の前のグラウドの声が嵐の様に響いた。

「良くやったが終わりだ！　カートリッジ間装・装填！！」

その瞬間更に増した槍の回転。そして更に加算されたスキル。実際、嵐の様に響いたのはその後に巻き起こった凄まじい暴風だったのかも知れない。
加算されたスキルを纏った槍は用意に俺の槍を弾いた。そして直撃した槍と共に、俺の体もグラウド同様浮いたんだ。そしてどこかの建物に突っ込んだ。

「――ぐっはぁぁ！！」

爆音と衝撃が体を駆け巡り、視界は一瞬で煙に包まれた。そして目の前に表示される画面は【Ｌｏｓｔ】の文字。どうやら今の一撃

で規定のダメージを越えたらしい。
　そしてグラウドの方には勝利を知らせるメッセージとファンファーレが贈られている。それを聞いたヤジウマ連中は決着が付いた事を知り、周りで騒ぎたててる。
　だがグラウドはそんな様子を気にすることなく、俺の前に悠然と立っていた。そして勝ち誇った顔で俺を見下ろしながら言葉を掛ける。

「俺の勝ちだな。約束通り、仲間に成って貰おうか」
「……っち、分かったよ。それじゃあ――」

　気に入らない……がこれは約束だったんだ。そしてそれを受けたのは俺だ。ここは素直に受け入れるしかない……筈だがその時、俺とグラウドの中に声が割って入ってきた。

「ちょっと待ってください！！」

　それは紛れもなくアイリ。アイリは急いでこちらに駆け寄ってくる。そして俺の隣に膝を付いてハンカチを当ててきた。

「アギト大丈夫？　痛くない？」

　そう言って顔を拭くアイリは超近い。何だか知らんが胸の鼓動が速く成っているのがわかる。

「あああ……大丈夫。痛いところなんか別に……っは！？」

　俺はこの瞬間自分がもの凄く情けない奴に墜ちてる事に気付いた。だって、自信満々で受けた決闘に負けて何介抱されてるんだよ。
　スゴく格好悪いだろこれ。

「どうしたのアギト？」
「いいや、別に……ありがとアイリ。もう十分だよ」
「そう？」

俺は居たたまれなくなり顔を伏せながらそう言った。なんだか既に体の痛さより、心の方が重傷だ。俺はあの攻撃でも実はビクともしてなかった建物の壁に縋るように体を丸めたい。
だけどそれこそ情けないからしないけど……町中のオブジェクトは破壊不可だからな。あの煙と音はゲーム上の演出なんだ。
まあ規格外の衝撃を与えれば壊すことも出来るって言われてるがそんな苦労をする奴はいない。

「おい、女邪魔だぞ。これは男同士の真剣勝負だったんだ。女が介入する余地はない」

俺とアイリのやりとりに業を煮やしたのかグラウドがそんな事を言ってきた。そしてこればっかりは向こうが言う方が正しい。ちゃんと双方で合意した上での決闘だったんだ。今更無効になんて出来ない。
だけどアイリはその言葉で少しムッと来てたのか分からないが、俺もグラウドも予想だにしてなかった事を言った。

「違います！　アギトが負けたのなら今度は私と勝負です！　アギトの仇は私が取ります。それにレイアードなんて真っ平ゴメンです！」

ズバーンと臆すことなくそんな事を言ってのけるアイリは大物かも知れないと思った。だけど明らかに無謀だろ。だってアイリは数ヶ月前よりは確かに強く成ったが、まだまだ俺の方が断然強いし。

その俺が負けた相手に勝てるだなんて思えない。絶対いつもの暴走スイッチが入ってる。俺は助けなんて呼んだ覚えはないのにな。

「女、貴様が俺と決闘したい？」

「ええ」

「そいつの仇を取りたいってか？」

「その通りです。二度言わないと理解できないんですか貴方は？」

おいおい、敵と見なしてる奴にはやけに強気だなアイリの奴――って流石に止めないとヤバい気がする。

「やめろアイリ。お前が勝てる相手じゃないぞ」

「負け犬は黙っててください。しょうがないから私が守ってあげますよ」

「負け……」

犬？　って言ったか？　聞き間違いと願いたいが、何だか耳に張り付いている。延々とアイリの声で

『負け犬』が復唱されてる感じ。ヤバい、トラウマになりそうだ。

それに本当に負け犬だから何も反論出来ねーよ。心が折れる。

「わっはっはは。負け犬か！　言うな女。貴様もなかなか……」

（不味い！）

落ち込む俺の頭に本能がそう告げた。グラウドの野郎がアイリにまで興味を持ち始めてる。だからこのままじゃ不味いと。

「じゃあ戦ってくれま――」

「――ちょっと待て！　俺がレイアードに入るからアイリはやめろ！　あくまでも俺だけだ！　それで十分だろ」

アイリの言葉に強引に言葉を被せて話を進める。だってアイリをレイアードに引っ張り込みたくはない。このままじゃアイリが決闘して二人で入る事に成りそうだが、今なら俺だけで良いはずだ。

「まあ、確かにお前だけでも十分だがな」

「ちょっとアギト！　何言い出すんですか！？」

納得しだしたグラウドと怒った様な顔でこちらを睨むアイリ。グラウドの野郎もさっさと決めれば良い物を、アイリを惜しむように見やがって。絶対に入らせる訳にはいかないな。

そしてそのアイリは俺が何としても引かせなければいけない訳だ。

「今なら俺だけでいいんだよ。それでアイツも納得する。アイリには手が出せないんだから、これで良いんだよ」

「イヤです！　そんなの私がイヤだもん！　一緒に居られなく成るよ……それでもアギトがレイアードに入るのなら、私も一緒に入る！！」

「はあ！？」

こいつは俺が言ってた事を聞いてたのか？　アイリをレイアードに入れさせないために俺が入るって言ってるのに何言ってんだこいつは！？

「訳がわかんねーよ。だからお前は入らなくても良いんだ！」

「だから私はアギトが入るなら入るって言ってるんです！　それがイヤなら私を信じて決闘させてください！　そして勝てば全部納まるんだから！」

アイリも俺も息がゼ～ハ～ゼ～ハ～する位に興奮していた。どう

やら全ては俺が決闘に負けたことによる悪循環みたいだ。
　こんな事なら安易に決闘するんじゃ無かったと考えても後の祭りか。アイリの瞳は真剣その物でとても冗談じゃ無いみたいだし……と言うかアイリは普段から冗談何か殆ど言わない。
　毎日をとても真剣に生きてるのがアイリなんだ。だから当然これも真剣に考えて出した答え何だろう。そして更にアイリは意外と頑固という特性を持っている。つまりは一度言い出した事は曲げない奴だ。
　くそ……何だかリアルの親友の顔が浮かぶじゃないか。アイツはそんなに日々を真剣に生きてないが、何でだろうな。
　まあアイツなら勝てないと分かってても決闘位なら迷わずに突き出せるんだが、アイリはそうじゃない。だって女の子だしな。雑な扱いは出来ないだろ。
　だからこそ、同じ穴に何か道連れになんかしたく無い。

「絶対に認めねえ！」
「アギトが何言ったって決めるのは私です！」
「迷惑だって言ってんだ！」
「それでも同じ時間を共有したいんです！　良いじゃないですか！
　一人なんてイヤだもん！」
「一人ってお前、知り合い位……あっ……」

　今まで考えて無かったが、もしかしてアイリの奴は俺と約束したときしか入ってないのか？　気恥ずかしそうに斜め下を向くアイリは何だか少し顔が赤くなってるように見える。
　俺とやる時は殆ど二人だし、知り合いなんて増えて無いって事なのかも知れない。アイリなら友達百人居てもおかしく無さそうだが、そう言えば俺以外と話してる所なんかあまりみない気がする。
　せめて買い物とかの時は頑張って話してるっぽいが、もしかしてアイリは人見知り体質？

「お前……まさか俺以外にフレンドいないのか？」
「そそ、それが何ですか？　アギトが私をストーカーしてたせいじゃないですか！」
「ストーカーだと！？　人聞き悪すぎだろそれ！　一緒に楽しくやってただろ！」
「だから楽しいままが良いんです。どっちかが何かに入って会えなくなる位なら、二人一緒が良いんです！」

ああもう、どうすれば良いんだよって事に成ってきた。マジでアイリの奴は引く気が無いみたいだしこのままじゃ二人揃ってレイアードに入る羽目に成りそうだ。
でもまあ、そこまで言ってくれるのは嬉しいんだけどな。

「おい、そろそろどうするか決めてくれないか？　ノロケはこれ以上ゴメンだぞ貴様等」

いつの間にかほっとかれたグラウドが呆れた様な声を出す。気付くと周りの人たちも何やらクスクスやってるのが見えるじゃないか！　なんて恥ずかしい事を……てか、完全に誤解してるよな。グラウドも何やらノロケとか言ってたし……俺達はそんなんじゃない。
それにそんな事を言われたアイリは何やら頬を染めて呟いた。

「ノノ……ノロケって、私達はそう見えるのかな？」

その顔が何だかとても女の子してて、しかもそんな事言われたらドギマギしない男はいない。どう言えば良いんだろうか？　アイリはどう思ってるのか知りたい所だけど、こんな所で聞く勇気なんか俺にはない。
それに俺も……実際どうなんだろう。出会ってから本当に入る度

に一緒に居るけど、それは特別な感情ゆえだったのかな。改めて意識すると、まだガキの自分には良く分からない事が一杯だ。
体はでかくなって大人ともう殆ど変わらなくても、心の方は年相応何だよな。こういう所は実はアイツの方がずっと速く大人に成ってる気がする。
アイツの家は本当に特殊だし……いつも一人でって日鞠がいたか。アイツがひねくれて無いのはきっと日鞠のおかげなんだろうな。

「はあ」
「何で溜息なの！？」

ちょっと憤慨なアイリ。別にそう言う事ではなくて、この溜息は今は別にアイツの事は関係無いなって思っての溜息。

「別に、そう見えてても関係無いって言うか」
「そうなんだ……関係ない」

アイリの声が暗く落ち込んだ様な気がした。傷ついたのだろうか？　それってもしかして俺のことを……そんな考えが頭の先までかかった矢先、アイリは先の声を吹き飛ばす位の声を出した。

「でも、私は一緒にいるから！！」

え～あ～っと……なんだろう、凄く嬉しいような恥ずかしいような。アイリは凄いな。本当にさ。プルプル震えてるから随分勇気を出したのも分かる。
これは……マジ無理かも。

「本当にお前……後悔しても知らないぞ」
「そしたら責任とってアギトが後悔をぬぐい取ってください」

それは迷いなんて無い顔だった。その少しハニカんだ様な笑顔は結構反則くさい感じ。

「で、どうなったんだ？　勝負するか？」

意気揚々とそんな事を言う戦闘ホリックを一瞥して俺は立ち上がる。

「やらねえよ。俺達二人、レイアードに入ってやる。だけど勘違いするなよ。俺達は別にお前等と同じ考えな訳じゃないからな」

「ふん、まあそれでいいさ。その内他との違いに気付いていく。俺達エルフは高尚だとな」

そんな事を言って振り向き歩を進めるグラウド。何？　何も言わないがそれは付いてこいって意味なのか？　背中で語るとかをやってるのかも知れない。

まあ入ってしまった以上、付いていかない訳にもいかないから他の取り巻き連中と共に歩き出す。

「もう後戻りは出来ないぞアイリ」

「どこだって平気ですよ。一緒なら」

何だか自然と手を繋いだままの昼下がり。降り注ぐ太陽の光よりも、触れ合った手の温もりはずっとずっと暖かかった。

そしてこう思う。

（まあ、いっか）

てさ。

たどり着いたのアルテミナス外れの一軒家。ここＬＲＯでは金さえあれば家も買えるから、多分ここがこいつらのホームって訳なんだろう。
だけど家ってかなり高いんだ。それもここは結構デカい。家ってよりも屋敷に近い感じ。これだけの建物はきっと相当だろう。
資金を出し合って買ったんだろうか。入会金とか取られないよな？　俺達は二人でもそんなに金持ってないんだ。
だけどそんな心配は杞憂だった。建物の敷地を跨いでもそんなこと言われなかったし、中に入っても強面の人達に囲まれる事はなかったよ。

中は意外と綺麗で調度品もちゃんとしてるし、観葉植物何かもある。何より日当たりが良い。こういう奴らのアジトは薄暗く埃っぽく、明かりなんか豆電球の様なイメージがあったのになかなか感激じゃないか。
中には二十人位のプレイヤーがたむろってて勿論全員エルフだ。みんなグループになり何やら話し込んでる様子。
そんなリビングと思われる場所の中心に俺とアイリは引っ張られる。そしてグラウドが気前の良い声でみんなにご紹介。
「おう、おまえ等良く聞けよ！　この二人が今日の収穫だ。なかなか骨のある奴らだから仲良くしろよ」
その言葉で全員の視線が俺とアイリに集中する。そしてトンと背中を小突かれた。ああ、自己紹介な。上手くやる気もないんだがな。
「え～と、アギトだ。仕方なく入るだけで俺はレイアードじゃない

から、そこ辺勘違いするなよ」
「私はアイリです。私も彼の言う通りなので以下同文と言うことでお願いします」
「「「あああ！？」」」

何だか一斉に全員の目に敵意が宿った感じ。だがそんな奴らをグラウドは豪快な笑いと共に納めた。
「はっはっは。どうだ骨がある奴らだろう。ジョークみたいなもんだから軽く受け流してくれや」
それで一応は全員腰を下ろした。やっぱりなかなかリーダーやってるらしい。その時、アイリが何かを見つけた様に俺の袖を引く。

「うん？　あっ」

そこには蒼髪のエルフが感じ悪そうにこっちを見据えてる。

二人一緒に（後書き）

第八十五話です。
なんだか長くなりそうな過去編です。ヤバいですね。スオウ側は進んでるのにアギト側は止まった状態。ちゃんと上手く合流出来るか不安です。でも何とかそこは調整します！　頑張ります。
次回は木曜日に上げますのでよろしくです。ではでは～。

無茶で伝わるもの（前書き）

地面に落ちた炎が僕を追いかけてくる。イクシードの風を受けて更に大きく、勢いを増して。逃れなれない鎖で繋がれた様に迫る炎を「振り切れない」そう思った時、炎が僕の視界を覆い尽くす。

だけど炎が僕のＨＰを削るより早く、目の前に道が開かれた。そして飛び出して来たのは動かないと決めた筈のみんなの姿。一人では開けない道……それはみんなの手で開く『活路』

無茶で伝わるもの

後ろから炎が迫る。それも凄いスピードで……これは

「まさか！！」

イクシードで僕の周りに発生している風の渦やうねり、これが原因か？　風は本来、炎をたぎらせる物。イクシードの風を飲み込む様にして炎は僕に迫ってる。

まさか最大の切り札が裏目に出るなんて……でもここでイクシードを切ってもあの炎の勢いは止まりそうにない。そしたらどっちみち黒こげだ。

なら――

「振り切るしかない！！」

地面を激しく蹴ってただひたすらに前へと進む。巻き起こった風に一瞬炎は押された様に感じたが、その直後に伝わる熱気は増した様な気がする。

多分酸素の供給で更に燃え上がったのだろう。リルレットの事も心配だけど、繋いでくれた命だ。こんな所で終われない！　大丈夫と信じてただ前へ――それが今、やるべき事だ。

だけどイクシードの風に乗る炎は速い。風を絡め取る様に進んでくる。

（振りっ……切れない！）

もう少しなのに、目の前にみんなが居るのに……きっともうプレイヤーモドキ共の攻撃範囲外へ出てる筈だ。だけど攻撃の余波みたいなこれは別らしい。
立ち上る炎はどこまでも強大で、僕を飲み込むまで消えない気がする。

「くっそおおおおおおお！」

炎の先端が僕の頬に舌なめずりをするようにちらつく。光源がわからない光に四方に延びてた影が今では一つの強力な光で前方に長い影を作ってた。
そしてその影が不意にいびつに歪む。それはきっと光源が揺らめいてるから……

【捕まえた】

そんな事を言われた気がした。そしてそれは合図。炎が僕の体を覆っていく。手から……背中から……熱気は確実に僕の体を蝕んで――

「死ぬなあああ！！　スオウオオオオオオオ！！」

――真っ赤に包まれた視界が弾けた。炎を切り裂いて現れたのは怖がってた筈のみんなだった。もしも本当に僕やセツリと同じ状態に成ってるのだとしたら、傷一つでも怖い筈なのに……こんな炎の中に飛び込んで来るだなんて。
始めに炎を切った三人が僕を越えて行き、開いた穴からヒーラーの一人が更に飛び込んで僕らを包むバリアを展開してくれた。
そして再び周りは炎に包まれる。だけど業火の叫びはほんの数瞬で消えていく。だけどこの数瞬でも十分に僕のＨＰは削られただろ

う。
まさかイクシードが裏目に出ることがあるとはな。
「助かった。ありがとうみんな。でも何で？」
僕は当然の疑問を提示してみる。だってあれだけ嫌がってたのに、こんな危ない場面で良く行動してくれたよ。するとみんなは何だか視線をはぐらかして罰が悪そうな感じ。
そして炎を切り開いた三人の内の一人が僕の後ろで気恥ずかしそうに呟いた。
「お前が……お前達が余りにも必死だからだな……俺達だって戦えるのに何やってんだって、そう思っちまったんだよ！　てか、お前バカか！
マジで死ぬかも知れないんなら頼れよ！　こっち見たとき泣きそうな顔でもするのかと思ったら、全然そんな事ないんだからな。
お前は俺達の事、本当に仲間と思ってるのかよ！？」
あらら、何だか随分と心配を掛けたみたいだ。でも、何だかこれだけ傷ついても、その言葉だけで救われた気になるよ。
僕はみんなの顔を見回した。ついさっきまでは目を合わせようとしなかったみんなが、こっちを向いてそれぞれぎこちない笑顔をくれる。
それはきっと全員が同じ気持ちって事なんだろう。それは本当に嬉しい事だ。僕は振り返りちゃんと思いを伝えようと思った。
「んなの当然――っつ、リルレット！！」
振り返り様に目に入ったのはプレイヤーモドキから追われるリルレットの姿だった。だから次の瞬間、僕は後ろにいた奴とすれ違い

一気に逆走をした。
多分プレイヤーモドキの攻撃ライン外はもうすぐだ。伸ばされた手を引っ張るだけで良いと思う。だけど急がないと、リルレットもＨＰが半分を既に切っている。

「スオウ！！」
「手を伸ばせリルレット！」

その言葉でとっさに伸ばされる細い腕を僕は取る。そして一気にこちら側に引き寄せる。目分量だから、このラインで実際は大丈夫なのかは微妙だが更に下がる前に追いついてた奴の槍が迫る。
それはまさに突進。機会仕掛けの槍は使い手を逆に振り回すようにして一直線にもの凄いスピードとスキルの圧を発生させていた。
少し前に防いだ物とは明らかに威力が違う。てか止まる様子ねえよ！

「ちっ」
「「「うおおらあああああああ！！」」」

出来るかは分からない。だけどシルフィングで防ごうとした時、案の定後ろから助けが入った。始めに炎を斬った三人が掛かって槍を止めに掛かる。
だけど吹き飛んだ。三人がだ。

「なっ！？」

叫びと共に三人は後方へ吹き飛ばされ、なおも槍はこっちに向かう。

「下がれスオウ！」

「くっ」

僕はリルレットを抱えたまま後ろへ飛ぶ。その時目の前に再びシールドが展開した。槍の方を見据えながら、これなら……そう思った。だが、機会仕掛けの槍はそのシールドさえも砕いて進む。

「ありえねえ！！」

だが実際に目の前であり得てしまった事実。後ろ足で下がるがそれはとても比較出来ないスピードの差。迫る槍は既に目の前だ。

三人と一つのシールドを突破した攻撃力だ。防げるとは思えないが、防がない訳には行かない。だけどその時、全員が一気にそいつに飛びかかった。

「なっ！？　みんな何やって……」

「良いから、お前はさがっ――」

途切れた言葉の原因はみんなが一斉に弾け飛んだから。僕は人の雨が降る光景を始めてみた。そしてその中を突き進む銀燭の光。

（下がらないと）

僕はそう思って一歩……二歩と後退する。だけどそれは本当に亀の様に遅い。直ぐにあの槍が今度こそ僕達に牙を向く――筈だ。

「あれ？」

そんな声が腕の中のリルレットから漏れた。そして同じ様な言葉は僕の頭にも浮かんでた。だって明らかに奴のスピードが落ちているから。

直ぐに追いつかれると思った。だけど今はスローモーションに成ってるのかと思うほど、徐々に遅延していく感じ。
そしていつしか槍からさっきまでの勢いは消えていて、使い手がその足でこっちへ向かってる。僕は後ろへ下がるのを忘れてた。
弱々しい機械の音がこの場に響いてる。だけどそれも……ついには僕の目の前で完全に停止した。そしてこれ以上の追撃はない。
プレイヤーモドキ共は静かにただそこに佇んでるだけだ。

「これって……」
「ああ、みんなに助けられた。みんなのおかげで僕は生きてるよ」

僕は思わず、リルレットを解放して地面に尻餅を付いた。なんかちょっと気が抜けたな。でも本当に……みんなが頑張ってくれなかったヤバかった。
きっと助かったのはあの三度の防衛線のおかげだ。特に三回目のあの捨て身で勢いを押さえられた。スキルが出尽くしたか、発動が止まったかで、境界線を越えての行動が出来なく成ったんだろう。

「ご苦労さんみんな」
「「「お前なああ！！」」」

うあ、何だかみんなご立腹だぞ。まあみんなが怒るのも分かるんだけどな。でも一番早く気付いたのが自分だったから、行かなくちゃだろ？
それにこれはちょっと読みが外れた感じなんだよ。僕は取り合えずみんなを宥める。

「まぁまぁ、後数歩位、アテが外れただけなんだ。だからゴメンって」
「そんな事じゃねーよ！　お前は何でこんな無茶するんだよ！　死

んでた。そのアテが外れてお前死んでたぞ！」

うんうんと周りで頷く奴らが見える。みんな無事な様で良かったが、満場一致か？　確かにアレはヤバかったけどだってアレは……

「みんなが来てくれると信じてたんだ。だって仲間だからな」

そう、そう言う事なんだ。あの時何も考えずに危ないＨＰで無謀にも走り出せたのはみんなが立ち上がった様をこの目で見てたからだ。きっとそれが一番大きい。

笑顔を向けてそう言った僕に何だかみんな照れくさそうな感じだ。

「うん、みんな本当にありがとう。うれしいよ」

僕に続いてリルレットもみんなに向かってそう言った。リルレットは立ってくれたみんなを見て、感極まりそうな感じだ。

すると誰かが言った。

「しょ、しょうがねーだろ。お前達二人じゃ頼り無いし、俺達は死にたくないからこうするしかないんだよ。怖いけど、怖いなんて言ってられるかって事にはお前達のおかげで気づけたけどな」

みんな槍の攻撃を攻撃を受けてそれなりにＨＰが減ってる。だけどそれでもいつもの様にしてる。この位で怯む事なんて無いって感じに。

僕とリルレットに向けられる顔に恐怖が見えない訳じゃない、けれどみんなはそれでも立ったんだ。前を向いて。

「まあ僕も死ぬの怖いしな。でもそれでも、それ以上に救いたい奴がいるんだ」

「まあ、そいつを助ける事が俺達が助かる事にも繋がるんだから協力するさ。ただし、マジでヤバくなったら俺達どうなるか分からないからな。これだけは言っとくぞ」

なんと潔い事を言う奴だ。これって逃げるかも知れないって言ってるよな。だけどそれは言葉だけの様な気もする。今のみんなを見てるとな。

あんなに嫌がってたのにこうやって助けてくれた。それは恐怖に打ち勝ったって事だろう。頼りがいが増した感じだ。とってもな。

「ああ、いいよ。それでも信じてるからさ」

みんなが立ってるなら僕だけ座って笑ってみた。すると呆れたようにみんな笑ってくれた。きっとこの瞬間、僕達の絆は深まったと僕は勝手に思ってる。

淡い光が僕の体を包んで傷を癒していく。でもどういう訳か血糊だけは消えないんだよな。それはＬＲＯに元はない物だからかも。

だけど一回ログアウトして戻ると綺麗に無くなってるんだ。けれど今はそんな事は出来ないし、血を拭う必要もないか。

そう思って見据える扉の前には微動だにしないプレイヤーモドキの姿がある。そしてあの機械仕掛けの槍を持つ奴はしばらくすると消えて、扉の前の輪に戻っていた。

あのまま硬直してくれてると助かったんだけどね。しょうがないか。

「どうすれば良いのかな……」

前を見るリルレットはそんな事をポツリと言った。それはきっと誰もが思ってる事。どうすれば……あいつらを突破出来る？　何よりも一番のネックは倒せないって事なんだ。
倒してしまったとき……彼らがどうなるかが分からないから。そしてもしも、最悪の事が後から分かったとき僕達はどうする事も出来ない。それが僕も後一歩を踏み出せなかった理由。
でも、ここを突破するには誰も倒さずになんて無理な事だと思うんだ。あいつ等は強いから、反撃をしない訳には行かない。そしたらいずれは……

「僕達は行かなきゃいけない」

それでも。そびえ立つ扉を見据えて僕は僕の思いをそのまま口にした。

「スオウ……でも！　この人達は……エイルは……」
「それもわかってるけど……でもこいつらは本当にエイル達と直結してるのかな？」
「どういう事？」

リルレットと同様に思ったみんなが僕へと視線を集中させる。停滞したようなこの白い場所で僕はモンスターモドキ共を見ながら言葉を続ける。

「あいつ等はどう見てもそのプレイヤーの姿を模してるけど、本人じゃない。どっちかって言うとＮＰＣの様な感じが強い」
「うん、だって本当のエイルは柱にされちゃったんだもん。アレはエイルじゃない……そうだね、確かにＮＰＣみたいではあるよ」

決められた事、プログラムされた事しか出来なく喋れないＮＰＣ。

今、目の前に佇む彼らはおそらく範囲内に入った者か扉に近づく者を無条件に攻撃するようにプログラミングされたＮＰＣ。
だけどまあ、どっちかって言うとモンスターって言う方が近いかも知れない。僕達プレイヤーを襲うのならばそれはモンスター。
だけど友人と同じ姿をしたアレをモンスターとは呼びたくない。だから強引でもＮＰＣで通そう。
そして問題はそのＮＰＣの在り方と言うか何というかだ。

「あいつ等は思うにＬＲＯ内に保管されてるキャラ情報を元にシステムが作り出した同種のキャラじゃないのかな。全く同じのを作り出せない訳がない……だってあのシクラと柊とかいう奴らはシステムに干渉出来るんだからそれは可能だ。
だから言う成れば今目の前に居るエイルも本当のエイルだよ。本家のシステムが形作った姿何だから。ただ違うのは中身ってだけだ。入ってるのが人かプログラムかってだけ」
「じゃあ……そのキャラって言う器をとられた『人』達はどうなったの？　もしかしてあの柱の中に閉じこめられてるの？」
「一番の問題はそこなんだ。閉じこめられてるのか、そうじゃないのか分からない」

ＮＰＣに器を取られた人達がどうなったのか？　僕は後ろに整列する柱とプレイヤーモドキを何回か見比べる。多分整列してない輪から外れた柱は元からの物、それを抜いて数えれば間違いなく同じ数の柱がある。

（折れてるのもあるけど、大丈夫だよな？）

そう言えば先の戦いで何本かいっちゃってる。だって巨神兵と戦ってた時は知らなかったんだよ。ただのオブジェクトかと……と言うかこんな事誰にも想像出来る事じゃない。

崩れた落ちてる柱はただの瓦礫にしか見えなく、僕らの心の焦燥を表すみたいだ。あの中の誰かだった筈の柱……そう考えるとやっぱり怖い。

プレイヤーモドキ共を倒しても器の中に居た『人』に影響がないと分かれば何の問題もないんだけど……それにはその『人』達が柱にされた後どうなったかを知らなくちゃいけない。

エイルでは残念だけどそれを確かめる事は出来ない。ついさっきの事だし、もしも柱の中か何か分からないがＬＲＯから出ることが出来なくなってても僕達にその報せは届かないから。

（でも……待てよ）

不意に佇むエイル以外のプレイヤーモドキに目を向ける。そこにはいろんな種族に多種多様な武器や防具を揃えたプレイヤーモドキがいる。そして思った。

（エイル以外は今日の筈が無いんじゃないか？　いや、これだけの人数昨日今日で揃うわけ……それなら、もしかして）

僅かな希望とも思える可能性が沸いてきた気がした。何回も何回も頭の中でそれを巡らせて行けるかどうか考える。

そして僕は笑った。「ははは」っといきなりさ。だからみんな驚いた。無茶しすぎて遂に壊れたか？　とか思われたかも知れない。だけど大丈夫。この笑いは自分を誉め称えてしまって思わず出ただけさ。

う～ん、でも何かそれも壊れたと表現出来る気がしないでもないな。

「どうしたのスオウ？」

そんな自己評価を下してると心配そうにリルレットがこっちを見てた。僕は笑った笑顔のままリルレットにこう言った。

「いや、エイルだけじゃ無いのは僕達にはありがたい事だったかもだよリルレット」

「え？　それってどういう……」

リルレットの顔には疑問符が見えるようだ。これだけの数が居ることであの扉への道を強固にしてるんだろうけど、そのおかげで僕の考えは成り立つ筈だ。

僕はリルレットに少し微笑んでから言葉を続ける。これはみんなにも聞いて欲しい事だからちょっと声を大きくしよう。

まあ、音なんて僕の声しか響いて無いからみんな初めから聞いてるだろうけど、そこは気持ちの問題。

「これだけ柱にされた奴が居るって事はつまり、きっとそれなりに時間が経ってる奴もいる筈って事だよ。だからさついさっき柱に成ったばかりのエイルだけじゃ考えられない一つの可能性が考えられる」

「可能性？」

復唱するようにそう呟くリルレットから視線を外すと、僕はみんなを見てこう言った。

「誰か聞いたこと有るか？　セツリ以外で、フルダイブして戻れなくなった奴の事」

「戻れなくなるなんて……つい最近までそんな事噂にすら……」

「てかそんな事になったらネットに流れるだろうし、ニュースにだってなり得るかも……」

口々に考え込んで呟く声が不意に同時に止まる。みんな口に出すことで気付いた筈だ。僕と同じ可能性って奴に。そしてそれはみんなの言葉に耳を傾けていたリルレットも同じだった。

「みんな無事なの……あの人達は大丈夫って事？」
「そう考えられるよ」
「じゃあ……エイルも……」
「うん、きっと無事だよ」

その言葉を聞いたとき、リルレットは膝から力が抜けたように地面にお尻を付いた。そして俯いたまま震え出す肩に大理石が吸わない滴を光らせている。

絞り出す様な声が静かに聞こえてきた。

「怖かった……怖かったの。エイルが戻れなく成っちゃったって……私のせいでエイルが……私が協力するなんて言ったからエイルがこんな事に成ったんだって……うぅ……」
「リルレットのせいじゃないよ」

そう言ってそっと頭に手を置いた。そしてその頭を優しく撫でる。リルレットの髪は少し茶色が入った黒でリアルでも普通にいそうな感じ。

だからかな？　なんだか親近感が沸くよ。同じ種族だしね。それに何より、エイルがああなったのは多分に僕のせいだと思うんだ。本当に申し訳ないよ。

自分が泣かしたような罪悪感。でもこれは嬉し泣きなんだよな。

「でも……確実に無事とはいえないよな。ただここに居る全員が知らないだけかもだし。規制されてるって線もある」

どっかのアホがリルレットに再び不安を与える様な事を言いやがった。まあその通りなんだけどな。だからこそ「きっと」を付けたんだし。今の状況で「絶対」なんて言えねーよ。

「そう……かも知れないですよね」

そしてそれを肯定したのは意外にもリルレットだった。泣きながら――いや、涙を拭いて今度は力強い瞳で立ち上がりこちらを見てる。

「だけど私は、スオウが言ってくれた事を信じます。きっと今はエイルが私の帰りを向こうで待っていてくれてる筈だって。だから私はエイルのために手土産話を持って帰らなくちゃ行けないんですよね。それにはこの戦いの勝利の話が最高です」

「ああ、それは最高だな」

リルレットは笑顔だった。やっぱり男の笑顔より女の子の笑顔は花がある。場に漂おうとしてた不安を吹き飛ばしたよ。

「まあそうだな。もう後ろ向きなのはゴメンだしな」

「そうだな信じる事しか出来なんだよな。まさかこんなクサイ事言う日が来るとは思わなかったけど……何だか物語の中に居るって感じで良いかも」

「何言ってんだよお前。それなら『俺が全員を助け出して見せる！』位言ってみろ」

「無理無理、アンタ達はモブキャラ何だから無理はしない方が良いわよ」

明るい声でみんながそれぞれの不安を打ち消し有っていく様な光景だった。ここに来てようやく取り戻した笑いや楽しさ……それを感じて進むことがみんなで出来そうだ。

「じゃあ行こう！　薙ぎ倒してでも、あの扉の向こうへ！」

僕の言葉にみんなが目的の扉を見据えた。あの向こうにセツリがいる。今再びみんなで進もう。僕が見つけた可能性は柱にされた人達がＬＲＯ内には囚われてないかもと言う推論。それはみんなの手で信じれる所まで行き、そして敵を迷わず打てる力に成った。

多分この話があまり広まらなかったのは単なる不具合で処理されたり、柱にされた人達は同キャラでログイン不可にでもされたからだろう。向こうに戻ってるのならだけど、それはもうそう信じるとみんなで決めた。

次々と武器を構える音とスキルの光が灯り出す。そして最後に剣を抜いたのはリルレット。細くしなやかなレイピアが軌跡を描いて引き抜かれた。華奢な刀身に込めきれない位の思いをきっと乗せて灯る光は橙。

「はい！！」

リルレットのその返事で僕達はもう一度あの扉を目指す。

無茶で伝わるもの（後書き）

第八十六話です。

そろそろ本当に反撃をしたい！　って感じです。でも敵は強大です。なんてったってシステムに介入できるなんて……ゲーム世界においてそれは神とも呼べる所業です。

だけどそれでもスオウは諦めないでしょう。いや、プレイヤーは諦めない！　本当のシステムに必要とされるのは一体どっち何でしょう。

てな訳で次は土曜日に上げます。ではまたです。

イラつくアイツ（前書き）

レイアードに入って数週間が経った頃、俺たちの周りには一つの影が付きまとってる感覚がいつもあった。レイアードに入ったからって別に変らない日常に少し安心してたのに、これはマジで迷惑なんだ。

なんで？　なぜアイツは俺達が狩りに行く時の待ち合わせ場所に幾度となく鉢合わせるんだ？　何企んでるガイエンの野郎。

イラつくアイツ

俺とアイリがエルフ族のレイアードに入って数週間が経った。まあ入ったからって何が変わった訳でも別にない。別に誰がレイアードだって公表されてる訳でも無いし、何か制約が有るわけでも無かった。

ただ連絡が来て時々集会みたいなのに顔を出すだけ。俺とアイリはその時位しかアジトに行かない。だから他のレイアードの連中とも薄っぺらな関係……が大体何だが――

「おい、今日は何の様だよガイエン？」

「何、たまたま通りがかりにお前を見つけただけだ。貴様かこそこんな所で何やってる？」

「お前……あからさまに毎度毎度同じ展開で来るなよな」

――このガイエンなる蒼髪野郎は最近いつもこうやって俺達の待ち合わせ場所に現れる。そして言うことがいつも同じだから有る意味不気味だよコイツ。

「毎度毎度同じとは心外だな。それじゃあ私が狙って現れてる様ではないか」

「様じゃなく、完璧そうだろ！　何お前？　グラウドに言われて俺達を観察でもしてる訳か？」

「はっ、あの単細胞がそんな事をさせる奴に見えるのか貴様は？」

「質問を質問で返すなよな。それに単細胞って一応リーダーだろうが」

酷い言い様をする奴だまったく。てか何の指示も無く自分の意志

で俺達を追い回してるって事は、それってストーカーじゃね？
どうやら今日こそアイリが来る前に退場して貰った方が良さそうだ。今までは居座られてる間にいつの間にか狩りにまで同行されてたからな。
大きなゲートクリスタルがある門の前で、俺達は多分それぞれの思惑を巡らせていた。多くの人々が通るこの場所で、いつその人混みに紛れてアイリが来るか冷や冷やする。
アイリの奴は気にせずに「一緒に行こー」言うからな。だからアイリが来る前に何としてもコイツを帰らせる。

「リーダーか……ああ、そうだな。リーダーリーダー。そうそうそう」
「おい、お前……忘れてたのか？　よく自分が入ってる組織のリーダー忘れられるな。そんなんだからレイアードでも孤立してんだよ」
「ふん、余計な世話だな。私は元々誰かと馴れ合う事など求めてない」

きっぱりとそう言いきるガイエン。ならどうして俺達には馴れ合いに来るんだよって言いたい。気紛れか？　勝手な気紛れで喧嘩の火種を抱えて狩りをするのって気分重いんだよな。
マジで帰って欲しい。

「あっそ、なら何で毎回邪魔しに来るんだよ」

ボソっと横向いてそんな言葉を発する。喧噪に紛れてしまうかと思った言葉はどうやらちゃんとガイエンの耳に届いたらしかった。

「別に貴様等の逢い引きを邪魔しに来てる訳じゃない」
「逢い引……ゲホッゴホ！？」

何て事言いやがるんだコイツ。おかしな言動も程々にしとけよ。思ったことを自由気ままに言う奴なのか？　どうりで誰とも仲良く成れないわけだ。

てか、やっぱ狙ってきてるんじゃねーか。

「何だ、違ったか？」

「当たり前だ！　俺とアイリはそんなんじゃねーよ！」

「まあ、別にどうでも良いことだがな。他人なんてな」

くっそーつい取り乱してしまった。ガイエン相手にあんんな姿を見せるとは不覚だ。妙にニヤニヤしやがって本当にムカつく顔つきしてやがる。

「なら俺達の事もスルーしとけよ。他人なんだから」

本当に何でコイツと喋ってるのが理解できない。最初にあの火山のダンジョンでの印象はプラマイゼロ位に成ってたからさ、結構気まずく最初にアジトで見かけた時は一度もどっちも喋らなかったのに。

そのまま来たら良かったのに……一体どこで間違ったんだろう。

するとガイエンが衝撃的な事を言った。

「先に話しかけて来たのはお前達の方だろう」

「うぐっ……」

そう言えばそんな気がしないでもない。確かあれはアジトに行った次の日に偶然……あの時はきっと偶然にも通りかかったコイツにアイリが声かけたんだった。

それがガイエンのストーキングの始まりか。

「アイリが私に声を掛けた。忘れたとは言わせん」
「だからって毎度毎度来なくて良いんだよ。誘われてもねーんだからな。図々しいのか、シャイなのかどっちなんだよテメーは」

自分で一緒に行きたいとは言えないが、目の前に現れて勝手に付いてくる……両方を併せ持ってるな。「思春期か！」と言いたいかも。

実際ガイエンが何歳かなんて知らないが、どう感じても同年代とは思えないんだよな。アイリはそんなに年が離れてる感じはしないけど、ガイエンは言葉遣いとかあの偉そうな態度とか……成りたくない大人像が見える感じ何だよな。

「だから毎度毎度偶然だと言っている！　貴様達が私の行く先々に現れるんだろうが」

なんだその言い訳？　たく……もしかして、ガイエンは・・俺はあくまでも偶然と言い切るガイエンをジトーとした目で睨んで言ってみた。

「お前まさか嬉しかったとかか？　アイリに声かけられて？　だからこうやって現れて――って、気がある？」
「はっ、何をバカな事を。恋や愛など病気だよ。ましてやここＬＲＯでは、そんな感情は全て幻・幻想だろう。私がまさか、あんな偽りの姿に騙されるとでも思ってるのか？
笑わせる」
「……あっそ」

もの凄く舌は良く回ってた。でも俺の瞳は冷めてたよ。だってガイエンの言葉が上っ面だと直ぐにわかったから。だってコイツ……

「ガイエンお前さ、メッチャ膝震えてるぞ」
「ぬお！！　……はは、勘違いするな。これは武者震いだ。一体今日は、どんなモンスターの断末魔が聞こえるのかを想像してな」
「チビッたのか？」
「武者震い言ってるだろ！」

突っ込まれた。多分スッゲー今動揺してるんだろう。表面上はそんな物見せないように必死に取り繕ってるが、既に遅い。
コイツの弱みを一個握れた気がする。だけど何だろう？
素直にからかえないと言うか……胸が苛つくみたいな感じがする。まあだけど、それはガイエンを見るといつも思う事だから変わりないか。

「お前とはちゃんと決着を付けた方が良いのかも知れないなアギト。貴様を見てると何故か異様にムカムカするんだよ。理由は知らんがな」
「奇遇だな。俺もお前の面を見る度に殴りたくてイライラしてたんだ。理由はしらねーけどな」

喧噪の続く門の脇で二人のエルフがにらみ合っている。本当さ、俺達はつくづく相性が悪いんだと思う。どっちも本能で「こいつは嫌いだ」って思ってるって事が今発覚したしな。
元々馴れ合いなんて俺達には不可能な事だったんだ。俺達二人では激しい科学反応を起こすだけ。いつの間にか俺の中でも退場の意味が変わってる。
（ガイエンはこの場から退場じゃなく、どうせなら俺の目の前から永久に退場して貰おう）ってな。物騒な考えが巡り巡る。
俺達の異様な雰囲気に周りで同じく待ち合わせか何かしてた人達も引いている。そしてゆっくりと同時にウインドウを開く。呼び出す項目は勿論『決闘』しかも『デスマッチ』で！

これは何の制約も無く戦闘不能までやり合えるメニューだ。俺には分かる。ガイエンも同じ項目を出してることが。俺達はお互いに目障りな存在何だと思うんだ。
だからここで……消しておこう。

「覚悟は言いかよガイエン？」
「それはこっちの台詞だな。グラウド風情に負けた貴様が調子に乗るなよ」

やっぱガイエンの奴、グラウドをリーダーなんて認めて無いよな。足蹴にしすぎだろ。だけどあの台詞は自分がグラウドより強いって言ってるみたいに感じる。
自己欺瞞か自己陶酔かそれとも本当か知らんけど、今更そんな言葉で引く気なんてない。俺達は武器に片手を掛けて、そしてもう片方は果たし状を送るためにウインドウへと延びる。
積年……と言うほどの関係は全くないが、決闘への意気込みはそれを感じさせる何かが有った気がする。迷い無く延びた手が送信を捕らえる――寸前で、耳に陽気で明るくて聞き覚えの有る声が鼓膜を震わせて脳にまで届いた。

「アギトーごめんねー。遅く成っちゃったぁ」

現れたのは待ち合わせに遅れてもいないのに謝るアイリ。その声だけで何だか不自然な態勢で止まってしまって動けない。タイミングが秀逸過ぎるんだよ。
周りの異様な空気なんて何のその、アイリはてこてこ近付いてきて俺の向かいの奴に気づいた。

「あれ？　ガイエンさん、また来てくれたんですね。二人はいつの間にそんなに仲良く成ったの？　てか、何やってるの？　向かい合

って、そんな中腰で？」

張りつめた空気が次第に流れていく感じが分かる。俺は正面に居るガイエンに目で訴えた。

〔おい！　何とかしろよ。お前のせいだろ〕

〔はあ？　ふざけるな。何で私が貴様の為になど〕

おお、何か帰ってきたぞ。内容はムカつくけど感激だ。

〔元はと言えば、お前が俺達に付いてこようしたのが原因じゃねーか！〕

〔はっ、誰がそんな事を……被害妄想も大概にしろよ貴様。私はた・ま・た・ま、ここを通りがかっただけだ〕

目だけの会話（？）がどんどん白熱していく。もうどうして意志が伝わってるのか何て、俺達の間ではどうでも良いことだった。

〔まだそんな言い訳するかこの見栄張りエルフが！〕

〔貴様こそアイリアイリと……腰巾着か貴様は！！〕

〔ぬぁに！？　誰が腰巾着だこの一匹狼野郎！　完全に分かったぞ。お前はただ友達作れないだけじゃねーか！　そのねじ曲がった性格のせいでな！

格好付けてんじゃねーぞコラアアアアア！〕

壊れだした俺である。

〔ねじ曲がっただと……私は貴様等の様に他人の顔色を見て自分の考えを変えるような事をしないだけだ！　薄っぺらく、貧弱な貴様等の信念やらを見てると、私は吐き気がするんだよ！

女のケツを追いかけるしかしない貴様は吐き気どころか反吐が出るわあああああ！！」

再び再燃した炎は二人の間で絡み合って火花を散らしていた。勿論精神世界でだけどな。イメージ映像って奴だが俺達には確実にそれが見えている。

だけどそれが見えてない奴がヒョコッと駆け出しそうに成った俺達の間に入ってきた。

「もう、アギトもガイエンさんも無視しないでください！　寂しいじゃんですか。二人だけで見つめあったり何かして……何だか私だけ仲間外れみたいじゃないだし」

頬を膨らませて怒った顔を強調しようとするアイリ。だけどそれは失敗だろう……だって再び燃え上がった炎が即座に鎮火されるほどにその顔は愛らしい。

「いや……別にそんな気は毛頭無いよアイリ」

「本当に？」

そう言って今度はガイエンにも確認を取るみたいに視線を向ける。するとガイエンは首を無理にでも曲げるように横へ向けやがった。

何あいつ？　思春期の中学生か？　そして心許ない声で「ああ」と言った。最初あったときは、まだ全然まともに話してたのに……まさかマジでアイツアイリの事を？

今度はイライラよりも妙な不安が心を覆うような感じがしてきた。イヤな気分だ。アイリは俺とガイエンを交互に何故か見比べてる？

そして――

「そっか、良かった私も居て良いんだね」

――なかなか訳の分からない事を言った。だから俺は問いただす。

「どういう意味だよそれ？」

元はアイリとの待ち合わせ何だからアイリが居ちゃいけないなんて事有るわけ無いのに。おかしな事を言う奴だ。

「だってね……二人がさっきスッゴく熱い眼差しで見つめあってるの見て気付いたの……」

「何に？」

何だかイヤな予感がする。アイリってどこかズレてる所があるからさ。数ヶ月一緒にいればおかしな考えをしてる時のアイリが分かるように成ってくるんだ。そしてそれが今だ！　と経験が告げている。

そして真っ青な空の下……アイリはマジでとんでもない事を言いやがった。

「それ……はね。アギトとガイエンさんはその……もう、友達以上の関係なんだって！！」

「「――っつ！？　はあああああああ？」」

アイリは真っ赤な顔で拳を堅く握りしめて、大きな声でそう叫んだ。そして俺達二人はその言葉を一瞬理解出来なかったが、直ぐに打ち消す様に声を上げる。

だけど既に遅いようだ。晴天の空に突き抜ける様に広がったアイリの染み込み易い声はこの門の前で行き交う人々、待ち合わせにタムロってる人々、その他色々にしっかりと届いたらしい。

周りの目が俺達に向いてるのが分かる。四方八方から様々な目が

俺達を捕らえてる。叫んだアイリの両側に顎が外れそうな程、口を開いたエルフが二人……自分達の良からぬ噂の広がりにおののいて、滴るイヤな冷や汗を止めることが出来ないでいた。
その時、俺達は初めて利害が一致したテレパスをした。

〔〔誤解を解こう！　何としてもだ！！〕〕

至上命令でした。いや命題かも知れない。だってこのままじゃアルテミナスに居られなくなりそうだ！　いや、アルテミナスで噂が止まるとは限らないんだ！　下手すれば情報伝達が発展した現代じゃ一気にＬＲＯ中に広がりかねない。
それはもう生きていけない！！　寄りによってこいつと何か……絶対にイヤだ。そもそも何だよ。友達以上の関係って。どういうつもりでアイリはそんな事言ったんだ？

「アイリー！！　何だよ友達以上の関係って！？」
「それは……その……口に出すのもはばかられる様な……私には言えないよ！」
「お前は一体俺達の何を見てたんだ！！」
「仲良しな所です」

アイリの仲良しの基準が分からない！　いや、アイツの目が何を写してたのかが疑問だよ。ガイエンと仲良くしてた事なんて一回だってないのにマジで何を見てたんだ！？
俺は言い切った、みたいな顔をしてるアイリに詰め寄って両肩を掴んで言ってやった。

「お前、いつから幻覚魔法に掛かってんだ！？」
「そんなの掛かってないですー」

頬を膨らせて否定するアイリ。

「じゃあシステムのバクだな。良く聞けアイリ。お前にはあり得ない事が見えていたんだ」

「あり得ない事？」

「ああ、今の俺の言葉だけが真実だからな。今まで自分が感じた印象は全て取り払え」

「ええ～？　そうなのかな？　ガイエンさんはどう思います？」

鬼気迫る俺の勢いを交わしつつガイエンへと首を向けるアイリ。だけど当然ガイエンもこっちに乗ってくる筈だ。

「あり得ない事を、お前は見てたんだ！」

向こうも鬼気迫る感じの顔で言い返してくれた。本当に向こうも必死らしい。アイツプライドの塊みたいな感じだから、変な噂なんて耐えられないのかも知れない。

そして両側から異様な空気で挟まれたアイリは、ようやく俺達の必死さに気付いたかも？　「あれ～？」みたいな顔してるよ。

まあ実際バクなんて普通にＬＲＯの知識があれば、んな訳無いと分かるはずだが、アイリは良く分からずにＬＲＯやってるタイプだから混乱してる。

それに信じやすい。多数決に左右される日本人の特徴を持ってるよ。この頭が整理仕切ってない所で、俺達は仲良しというアイツの見解をボロ屑の様に壊せば万事解決。

畳みかけよう、アイリの脳に刷り込んでやる。

「いいかアイリ……」

俺はアイリの肩を強く握って緊張感を殊更出す。そしてその空気

に飲まれた様にアイリは唾を飲み込んだ。細い喉がコクンと動いたのが見えたんだ。
周りの喧噪が耳から遠ざかる感覚。代わりに木々が風に揺れて枝や葉を擦る音だけが異様に大きく聞こえている。
「天地神明に誓って……俺はガイエンの野郎が、ダイッィィィキライなんだよ！　顔を見る度に殴りたい衝動と腹が煮えたぎる思いを感じてる」
まさに心に隠してた思いを全部ぶちまけた。するとアイリは俺の言葉に引いたのか、ちょっと震えてる。
「あ……アギトがそんな事言うなんて信じられない。こっちがあり得ないよ！　本当に……そんな事思ってるの？」
アイリが必死に叫ぶと何だか本気で自分が責められてる気がしてくるな。まあアイリは純粋に俺を責めてるんだろうけど……でも、幾ら痛くてもこれが真実だと分からせなければいけない。
だから俺は俺から見て前方、アイリからは後方になるガイエンへ振った。
「ああ……残念だけど俺は思ってる。けど、同じ様な事はアイツも思ってると思うんだよな？　違うかガイエン？」
「ふん、当然思ってる。貴様は出会った時点から気に入らなかったしな。殴りたいなんて生温い……私は百回殺しても殺したり無い位だよ。
確信して言える。私のこの感情は、貴様が転生してエルフを辞めなければ消えないとな」
「ガイエンさんまで……」

ショックを受けてるアイリ。無理も無い……今のガイエンの言葉は俺にもショックを与えたからな。だって、何て言ったかアイツ？　百回殺しても殺したり無いって、どんだけ俺は恨まれてるんだよ。

あ～、やっぱアイツムカつくわ。何、言い切った後にあんな爽やかな顔してるんだよ。ガイエンも胸に有った物を出したって事なんだろうか。

あんまりアイリに攻撃されてないのが不公平だが、ここが決め場所だ。後一押しで納得してくれる筈だ。

「分かったかアイリ？　これが俺とガイエンの本当の姿なんだよ。仲良しなんてままならない、言う成れば俺達は犬猿の仲だ」

「そうなんだ……がっくりです」

何故か異様に肩を落とすアイリ。一体何を期待してたのかは知らないが、取り合えず俺達の不仲を正しく理解してくれた様で何寄りだ。けれどまだアイリは一縷の望みを何かに懸けてこう言った。

「だけど……いやよいやよも好きの内って言うし、嫌い嫌いは大好きの裏返しと言う線も……」

「そんな事はどっかのツンデレにでも言ってろ」

一縷の望みもバッサリと叩き斬ってやった。きっと今までで一番冷たい瞳をアイリに向けたと思う。だって言った後、アイリの震えが増していた。

「あ……アギトが怖いよ～」

だけどそんな声が耳に届くと途端に俺の気持ちも沈んでいく感じに襲われる。あ～何嫌われる様な事やってんだろ俺？　って泣きたくなるな。

そして救われたのはガイエンだけって感じに成ってるのがやっぱり気に入らないから一発殴ってやった。そして結局始まった喧嘩はアイリが喧嘩両成敗するまで続いた。

「もう～二人が仲悪いのは分かったよ。だけど町中で喧嘩何かしちゃダメだからね」
「はいはい、悪かったよアイリ」
「ふん、手を出して来たのはそっちだろう」

俺達は門の有る場所の端の方で正座させられている。だけど反省なんて……だって俺達が仲違いするのは何かもう宿命みたいな？そんな感じがする。
けれどアイリはそんな俺達にご立腹だ。

「二人の仲の悪さは以上だね。でもそれはきっとお互いをまだ良く知らなくて誤解が多いからだと私は思うの」

怒った口調から徐々に優しさを帯びていく言葉。何だ？　一体何を企んでる？

「何の事だよそれ？」
「ふふふ、だから私はあえてそんな二人を仲良くさせたい！　きっとね、二人は友達になれるよ！　うん絶対！　そんな気がするの。だから私が心の架け橋になって二人の誤解を解いて行きます。だからこれからは三人で仲良くしよう！」

唐突に出た、アイリからのそんな宣言。当然僕は猛抗議したが受け入れて貰えず、ガイエンの野郎は嫌々言いながらも別に反対はしなかった。

そしてこれから俺達は三人でパーティーを組むように成った。そして一緒に居る時間が増えると、イヤな奴とでも仲間意識ってのは芽生えてしまうものだ。

いつしかこれが普通になって……そして遂に『侵略システム』が実装された。俺達を大きく巻き込むそのシステムへと自分達から歩み寄って行くことに、これらから成る。

悲しい結末が有るとも知らずに……いや、お前は知っていたのかもな……ガイエン。

イラつくアイツ（後書き）

第八十七話です。
アギトとガイエンとアイリのつるむ切っ掛けの様なお話です。これから三人が色々とやっちゃう訳になるのです。今の地位にそれぞれが居る理由。全ては本当にガイエンの思惑通りだったのか？
どうしてアギトがアルテミナスを去ったのか……その理由も明らかに出来るかな？　って感じです。
それでは次回は月曜日に上げます。ではまた～

白の断絶（前書き）

僕達は全員でプレイヤーモドキに挑む。みんなで決めた一つの結論。それをただ信じて前へと進む。そして乗り越えられたと思った時。リルレットにとってとても辛い事が起こったんだ。

でも逃げ場無い……挑んでそしてあの扉の先を僕達は見据えなくちゃならない。

白の断絶

この神殿の門広場に大きなうなりが起きていた。それは覚悟を決めた者達の叫び。溢れ出す勇気の印かも知れない。
止められると思うなよ。貴様等プレイヤーモドキ風情に！！

「うおおおお！！」

雄叫びと共に切り伏せたのは、自分と同じ人型の少女だった。ＨＰが尽きた少女は蘇生待ちの時間を待たずに消えていく。淡い青のメッキが剥がれるようにして、その形が空気に溶ける。

（ごめん）

心でそう謝りながら僕は次の相手に斬り掛かる。やっぱり平気って訳にはどうしても成らない。あの考えだって確信は無いんだし……最悪は自分が人殺しをしてると思ってしまう。
そんな考えが悲しそうなあの虚空の瞳をみてると沸いてくる。だけどあのごめんは罪の意識で言ってるわけじゃない。立ち止まる為に言ってる訳じゃない。
一個一個に自分でけじめを付けてるんだ。ごめん……それは正確には「今はごめん」だ。だからおもいっきりシルフィングを振れる。
もう自分の考えは疑わない。確証なんて無くてもそう信じないと、どのみちこの器は解放されないんだ。そしてみんなが同じ思いを抱いてそれでもやってくれてる。
完全に拭えた訳じゃない不安。ＨＰが尽きる事への恐怖を抱いてるのは同じだから……でもそんな不安がそれぞれを思い合う連携へ

と繋がっていた。
自分は死にたくないから、みんなを死なせたくないへ。それぞれの意識の改変は強い繋がりと成って実を結ぼうとしてる。

「づああ！！」
「ちっ、下がってろ！　こいつに回復頼む！」
「はい！　今直ぐに！」

途切れない言葉の応酬は奴らには無いものだ。プログラムの通りに行動し、プログラムの通りに考える。それは一見、とても効率的の様な気がする。
それに比べて僕たちはさ……感情と言う物がその間に入ってくるんだ。怖がったり、憤ったり、戦う上ではそれは邪魔なだけの物かも知れない。
けれど僕達にはそんな感情が有るから、みんな姿形が変わっても自分何じゃ無いかって思う。僕はリアルと変わんないけどさ、みんなは自分じゃない姿を自分にしてるんだし。

「連携行くぞ！　しくじるなよ！」
「「「おう！」」」

幾重もの剣線が浮かび上がってる。そしてまた一人のプレヤーモドキが姿を消していく。だけどそれに目を向ける仲間はこいつらにはいないんだ。
無表情で無機質に仲間の消え去る瞬間を付いてまで攻撃を仕掛けて来る。感情は心だから……それが無い奴等は本当に淡々と最善と思われる行動を取るんだ。
そして確かにその攻撃は実る。深々と剣は肩口を貫いた。それは最善のなせる事なのかも知れない。僕達は感情が有るが故に隙が出来きたり、躊躇う時がある。取り返しの付かない間違いだってやる

かも知れない。
だけど……
「この……程度じゃ！　やられねえ！！」
そう言って肩口を貫かれた奴は剣を握る。
「今だ！！」
「よっしゃあああ！　放すなよその手！！」
僕達はそのやっかいな感情のおかげで、こんなにも強く、楽しく、誰かと繋がれる。最善なんてなかなか出来なくて、効率的なシステムから見たら僕達は無駄な事を繰り返してばかりに見えてるんだろう。
でも僕達はさ、この感情や心って奴を手放そうとは思わないんだ。絶対に。
「リルレット！　あそこ！」
「エイル……ごめんね」
「やっかいな奴等が勢揃いしてる。最終防衛ラインってとこだな」
扉の直ぐ前にワンパーティーを組んで待ち構えていたのはエイルを含んだ五人のプレヤーモドキ。ここにエイルを交えてる事があの柊とかいう女の底意地の悪さが感じれる。
どう考えてもエイルは周りの奴等と比べると何段階か落ちるだろう。だけどこれが、お誂え向きって奴かもな。
リルレットは沈痛なおもむきで剣を構える。幾らあれが器だけで、覚悟をしたと言っても感情と言うものは揺さぶられる。
けれど剣を卸すことはしない。そんな感情の揺れを噛みしめて僕達は自分や周りと向き合っていくんだから。そして一人で辛いこと

は心を繋げる事で支えれるよ。
脆くやっかいで、直ぐに周りに影響されたりもするけど、心や感情は許した相手となら重なりあうことが出来る。そしてずっと強固に、ずっと大きく広がる。
そしてそれが、システムという機械には無い人が持つ強さの源だと僕は信じるよ。

「行こうリルレット。みんなまとめて助けてやろう」
「勿論――そのつもりです！」

僕達は誰一人欠けることなくこの場に立てている。後五人……イケると言う思いがこみ上げている。数も気持ちも、既に僕らは奴等を凌駕している。
迫った槍使いの桁外れな攻撃は数で押し戻す。重なるスキルに対抗して、こちらは一死乱れぬ連携とチェーンを駆使してあの機械仕掛けの槍を打ち砕く。
脳にまで響く歌声に、無数の矢。だけどそれは数と、自分には無かった仲間の知識と力で活路を開いて貫った。一つの弓から放たれたとは思えないほどの矢は、身をていしてまで仲間が防いでくれた。

「頼むぞお前等！」
「これで決めてくれ！」
「「イッケエエエエエ！！」」

そして僕とリルレットはエイルへと迫る。エイルじゃないとわかってるエイルに近づく毎に心が熱くたぎる気がしてた。これも感情。
みんなの思いを確かに僕達は背負ってるから。重荷？　いいや違う、そしたらこんなに熱くない。これはきっと願いや、勇気とかがどんどん大きくなる感じ。嬉しいのかも知れない、けどやっぱりちょっぴりエイルには申し訳ないかな？

だけどさ、僕が謝るべきエイルはこいつじゃないから。

「後四体……スオウ！！」

「わかってる！」

前方にいるのは槍使いを抜いた奴等。その時、冷たい風が後ろから追い抜く感覚。そして次の瞬間、こちらに狙いを付けていた弓使いと歌手？　踊り子？　みたいな二人が地面から生えたみたいな氷柱に飲み込まれた。

これはバッチシなタイミングでの後衛の支援。合図や目配せもいらない、後ろを選んだ彼らの思いやりという感情のなせる技だ。

全員を助ける。この言葉に偽りはない。だから僕達は全員を倒す事を決めた。倒すことで器が解放されるのは知らないけどこれもまあ、一つの覚悟だよ。

だから僕とリルレットは畳みかける様に弓使いともう一方に攻撃を加える。氷を砕き、先制を取って、魔法と直接攻撃の折り合わせで一気に畳む。

そしてその間にエイルが発動しようとしてた魔法はこちら側の更なる魔法で出る前に潰す。単純な数の差。前衛がいないと普通はこうやって、魔法を打つことも出来ない。

（後二人）

僕は前衛よりの弓使いを倒し、リルレットは後衛よりの歌い子（組み合わせた）を倒した。後はエイルとヒーラーの二人。だけどもう回復も攻撃も間に合わないだろう事は一目瞭然だ。

魔法は発動出来ないんだから。だけどそれでも僕達はやらなきゃだろう。こんな人形の様なエイルは見たくないから……解放してやろう。

けれどエイルに切りかかったのはリルレットの方。実は最初から

決めていた。エイルを倒すのはリルレットだと。

『大丈夫です。私がやります。エイルは・・私が倒します』

どんな思いで友の体を倒す事を決めたんだろう。リルレッはここに居る誰よりもエイルを傷つけたくないと思ってた筈だ。

でも彼女は友達だから……とそう言った。それは本当のエイルが聞いたらガックリするのか、喜ぶのか微妙な言葉だけど、一番近くに居たからこそそれは許される事なのかも知れない。

リルレットはあの時……悪魔との決闘の時よりも強く成ってると思った。もう誰かに背中を押されなくても、自分でやるべき事を決められる。そんな強さがリルレットにはある。

辛くても、泣きそうでもさ、リルレットならやれる。それにエイルも僕にやられるより気分が良いんじゃ無いかな？

煌めく粒が宙を舞い細い体は止めどなく動いてた。そしてその細い刀身は確実にエイルへと届いている。僕はヒーラーを倒して、その光景をただ見守っていた。

手を貸す……なんて事出来ないよ。リルレットの一線一線に多分『ごめん』を込めてる。それでも止まらずにやってるんだ。僕達にはそこへ入る事なんて出来ない。

みんながみんなそんなリルレットとエイルモドキを見守っていた。そしてエイルのＨＰがレッドゾーンへ入った時だった。

「り……り……リルレッ……ト」

そんな言葉が立ち上がり際に聞こえたんだ。そしてそれはリルレットの動きを止めるには十分な衝撃。勿論僕達だって一瞬息が止まったよ。

だって今までプレイヤーモドキで喋る奴はあの歌い子だけだった。だけどアレはああ言うスキルってだけだったんだろうけど、今のエ

イルモドキは違う。
確実にリルレットって言った！　何でこのタイミングで？
「エイル？　エイルはそこに居るの！？」
動揺するリルレットが震える声でそう言った。そこにいる？　エイル本人が？　あり得なくはないけど……それは最悪な想像だ。
だけどリルレットがそう思う事を否定するなんて出来ない。でも――
「痛い……痛いよリルレット」
――何だあれ？　棒読みだし、何より目に光が戻ってない。感情の無い、機械の目のままだ。けれどリルレットはそんな事には気付いてない。
「ごめん……ごめんねエイル」
甲高い音を立ててリルレットのレイピアが大理石に落とされる。涙を流す瞳を拭うリルレット。でも止まらない。幾ら拭っても枯れない花の様に尽きない涙は落ちてくる。けれどエイルはそんなリルレットを無機質な瞳で見上げてるだけ。
何かがおかしい……そんな思いが離れない。違和感がベッタリとあのエイルには張り付いてる。
「リル――」
「いいんだよリルレット」
僕がリルレットに声を掛けようとした時に声をかぶせてエイルが声を出した。不気味な機械仕掛けの音の声を。そしてその言葉にホ

ッとしてるリルレットの横に落ちてるレイピアをエイルモドキは取る。
何する気だあいつ？
「エイル、ありがとう」
「ううん、全然良いんだ。それにありがとうは早いよ」
「え？」
いつの間にかあのエイルモドキの異様な空気にみんなが飲まれてた。何も出来ない……何が出来る？　そしてエイルはリルレットの目の前で自身の頭にレイピアを刺して言ってのけた。
「だってまだ君は、僕を殺してくれてないじゃないか」
「っひ……」
空気が喉に引っかかった様な音を出すリルレット。そして僕達も、その余りに異常な光景に止まってた。
分からない。理解できない。一体どういう事なんだよ。冷たい空気が脳を一気に冷やしたみたいに、頭がズキズキしてた。
「エ……イル……」
もう今にも消え去りそうなか弱すぎる声が上手く使えてない喉から出てくる。リルレットの開かれた瞳はたった一点を見てる筈なのに、ここからでも分かるほどに、眼球が激しく動いてる。
アレはどうみても危ない状態だ。何かが崩壊する直前の様な――そんな感じ。
「リルレット、ほら……君がしてくれないから、僕が自分でやっちゃったよ。ほら……ほら……見てるリルレット？」

ズグズグとレイピアを更にめり込ませるエイルモドキ。すると血じゃない何か白い泡の様な物が出てきてた。それがまたグロい感じがする。
なんて事やってるんだよあの野郎。

「やめ……て……それ以上……自分を傷つけないで！」

リルレットはようやく頭の整理が出来たのか、視点が固定されてちゃんとした口調に成っていた。でもどうだろうか？　整理が付いたってより、自分を傷つけてるエイルを見て思わず止めに入った感じなのかも知れない。
整理なんて……僕達でも出来てないのに、一番衝撃が強かっただろう位置に居るリルレットが僕達よりも先に状況を飲み込むとは思えないんだ。

「ああ～痛いよ～苦しいよ～リルレット～」

頭に剣を刺したシュールな姿のエイルがそんな事を言っている。抑揚の無い声で。そして更に深くめり込むレイピアはとうとう後ろへ貫通してもオカシくはない状態だった。
血の代わりに落ちていく泡の固まり……アレで少しは救いに成ってるのか疑問に思える。その証拠にリルレットは流れ出る泡にも恐怖してるよ。

こいつは何だ？　リルレットを恐怖させたいのか？　それなら自分の武器で友達が死んでいく様を見せる様なこのやり方はリルレットに大きなダメージを与えてる事は間違いない。
離せない瞳に隠せない耳がエイルのあの様子をばっちりリルレットに伝えてる。それによって確実に見える、リルレットの震えが。

「痛い」も「苦しい」も何故に言う？　自分で刺しておいて助けを求めるなんてオカシいだろ。だけどそのおかしさを真っ直ぐにリルレットは受け取ってしまってる。
そしてそれをやったのが自分じゃなくても、自分の武器がソレをやってるってだけで責められた様な気に成るものかも知れない。

「だめぇ……やめて……ごめんね」
「痛い～痛すぎる～」

リルレットの悲痛な訴えは聞こえてるはずだ。なのに、エイルモドキは同じ言葉を繰り返す。そしてついには、その小さな体に付いた自身の頭をレイピアは貫通した。
細い煌めきが泡の水滴を纏って輝いてる。けれど相変わらずエイルモドキは変わらぬ顔で「あ～あ」と言っていた。
そしてその光景には耐えきれずにリルレットは顔を背けた。無理もない今まで見てただけで凄いよ。友達が自分の武器で傷つく姿をさ。

「ホラ見てよリルレット。君のレイピアが僕の頭を団子状に突き刺しちゃってるよ。リアルなら僕死んでるね。でも見てよ、まだ生きてるんだよ」

門広場に不気味なエイルモドキの声が溶けては消えていく。そしてそっぽを向くリルレットの手を唐突に取った。

「え！？　何するのエイル？」
「言ったじゃないか、君には僕を殺して貰うんだ」

そう言ってエイルモドキは掴んだリルレットの手を今しがた自分で突っ込んだ剣の場所まで持ってきた。あいつ、まさかリルレット

に剣を取らせようとしてる？
けど、当然リルレットはそれを拒む。当たり前だ。
「――っひ、いや！　やだ！　そんな事出来ないよ！　したくない！」
「そんなバカな……だって僕が喋る前まで君は僕を殺す気だったじゃないか」
「あれは……だって……こんな事とは違う。違うもん。私はエイルを……助けたかったんだもん！」

リルレットが流れる涙をまき散らしてエイルに捕まれた腕を解いた。そして顔を背けたまま手で顔を覆ってしまう。
もう何が何だか分からなくて……自分の混乱する感情を抑えきれないでいるみたいだ。リルレットの息を吸う音、吐く音、鼻を啜る音――それらが本当に痛いくらいにこの場に聞こえていた。
だけどその時、エイルモドキはその小さな体にはあわないナイフを降り卸した。言葉の暴力っていうナイフ。
今までは切りつけて浅く入ってた感じと思うほど、今度のは強く真っ直ぐにリルレットの心を突き刺す物。
「君が僕を助けるだなんて・・願った事なんか一度もない、迷惑な行為だよ」

その瞬間、聞こえていたリルレットの息遣いが消えていた。止まったように感じるこの刹那……僕の踏み込んだ足が針を回すきっかけになる。
「お前……誰がそこにいる！？」
僕は声をあらげてそう叫んだ。この状況を把握しようとしてた時

間は一気にこれで吹っ飛んだ。整理してた頭は綺麗さっぱり怒りと言う感情に包まれた。
そして僕の叫びにエイルモドキは冷めた目を向けている。だけど口を開いた瞬間、そこに表情がついた。笑顔――と表現していいのか分からない不気味な顔。
目を見開いて、口元は堅く上がってる。そしてその表情を固定して喋るからこれまた不気味なんだ。

「何言ってるんだ？　この姿……エイルさ自分は」
「っつ――違う！　お前はエイルじゃない！　顔会わせる度に喧嘩するけどな、その位分かる。アイツは絶対にリルレットを傷つけたりしないってな！！」
「ス……オウ」

か弱いを通り越して、消え入りそうな声でリルレットは鳴いた。そしてその瞳は霞んだように生気が乏しく成ってるみたいだった。
それだけあのエイルに言われた事が効いてるって事か。でもそれは気にすることでも何でもないって教えてやろう。
あの目の前の奴は絶対に・間違いなく・エイルじゃない！

「リルレットが一番分かってるだろ！　エイルがあんな事を言うはずがないって！」
「でも……私……」
「でもでも何でも、あり得ないんだ！　もっと自分に自信を持てばいい。リルレットが出来ないなら僕がやるよ」

最初はリルレットの意志を尊重したけど、これは完全な予定外・イレギュラーだ。これ以上何か言われる前に倒す。セラ・シルフィングなら一撃――

「来るなよスオウ。お前嫌いだ」

――と、思って見据えた時だった。聞こえたそんな言葉の後に、周囲に降り懸かったのは重さを増した重力の壁。一体いつ詠唱を済ませてた？

「時間はお前達が突っ立ってる時間が幾らでも」

心を読まれたみたいにエイルモドキは僕を見てそう言った。この魔法は範囲系。今その範囲外には居るのは奇しくもリルレットだけ。

「みんな……」

「何で違う事を怖がるかな人間は。そうだ、ならみんなをこっち側に連れていってあげよう。それで分かって貰えるよね？　僕がエイルだって……」

「な……にを……」

地面にへばりつきながらも僕は必死に見てた。アイツ、リルレットに何する気だ？

「まずは君からだよリルレット。僕達は『友達』何だから拒否らないよね」

そう言ってエイルモドキは自身の杖をリルレットに向ける。妖しく光る杖から何かが延びて巻き付いて行くのに、リルレットは抵抗しない。

まだ、アレが本当にエイルだとでも思ってるのか！？

「エイル……私は……」

「僕達『友達』だよね」

その言葉でリルレットは自分の言葉を飲み込んだ。ダメだ……このままじゃいけない。あの巻き付いていくコードの様な物は絶対にヤバい。
でも情けないが動けない……エイル本人が使ってた時よりも強力じゃないかこれ？　だけどそれでも僕は上体を少しだけ上げてコードに包まれて行くリルレットに向けて叫ぶ。
肺の中の空気を全て投げ出す位に……だってそうだろ？　僕は頼まれたんだ。本当のアイツにさ。

「違う！！　エイルは友達何かで満足何かしてない。リルレット！　アイツが惚れたお前は、こんな形だけの偽物に騙される奴なんかじゃない筈だろ！！
お前にとってもエイルは……そんな奴じゃないだろ！！」

空気が無くなった……重くて肺が機能しない……届いたのかな？

「今更何を言おうと、そんなの――」

不意に切れた言葉。霞む視界で捉えたのはコードの中から伸びた腕がレイピアを握る。そしてリルレットの姿がコードを押して現れてきた。

「あああああああああああああ！！」
「――な……何ぃぃぃ！？」

掴んだレイピアに光が芽生えていく。コードの呪縛を打ち破り、エイルモドキの頭に刺さった状態でスキルが発動する。
僕に見えたのは進んだ軌跡が頭と体を切り離した所まで。その後に頭が残っていたのかは分からない。

そしてその瞬間重さは消え去り、肺が空気を目一杯求めた。リルレットはやってくれた。自分と虚構に打ち勝った背中はとても頼もしく見える。

だけど次の瞬間それは綺麗に消え去った。何故ならその時のリルレットが余りにも取り乱してたから。顔を真っ赤にしてさ。

「あ……あのスオウ！　ほ……ほほ、惚れてるって何ですか一体！？」

取り乱してるリルレットに僕はやれやれって思ったよ。

白の断絶（後書き）

第八十八話です。
なんか長くなっちゃたけど、これで遂にセツリの所へ行けます。
リルレットとエイルの話もいつか出来たらいいかもです。
では次回は水曜日に上げます。またまた～

陰る国（前書き）

侵略は開始された。俺達エルフの地が侵されていく。迫る地響きの様な足音が日々アルテミナスに近づいて、それを止める事が俺達には出来ない。陰りだすアルテミナスの光に、真のリーダーが覚醒しようとしていた。

陰る国

大量の足音が開かれた草原に響いていた。蒼天の抜ける青空に靡く緑の風景はいつもならピクニックにでもやれば気持ちよさそうな物だが、今はそんな風景に似合わない光景が広がっている。
風に乗って漂う匂いは新緑の匂いでは無く、焦げ臭い様な暑苦しいような爽やかとはほど遠い匂いだ。その原因ははっきりとしている。
それは今、このフィールドが侵略対象エリアとしてプレヤー同士――いや、エルフと人の国による戦いが行われているからだ。
そこかしこで上がる爆炎に、途切れる事の無いスキルの光。倒れてる双方のプレイヤーは、今までに見たことのない数に成っている。
これはまさに……戦争だ。

「いけいけ行けぇえええええ！！　脆弱な人間どもを踏みつぶせ！！」

グラウドのそんな声と共に突撃を掛けるエルフ勢。こういう国を掛けた戦いってのは、別にレイアードじゃ無くても参加したプレイヤー達は別に違和感無くグラウドの指示に従ってる。
やっぱり自分が選んだ種族だからな。多少なりは愛着があって当然か。それにやっぱりこういう所でグラウドの奴は一際存在感があったりするようだ。
だからこそ、それなりにはこうやって指揮する立場になってる。自然にな。まあ指示なんて言っても、何か作戦を事前に立ててた訳でもないからスッゲーずさんだけど。
それにやっぱりエルフなんて言う種族の奴らはこうやってそれな

りに追い込まれないと他人の話になんて耳を貸さない。
レイアードは二十人位しかいないし、それだけじゃこの大規模な戦闘には勝てないんだ。だからこそ一般プレイヤーの取り込みが大事だが、知っての通りエルフは我強く自己主張が強い。
だからやっぱり纏まりきらないって感じ。多分向こうとは結束の力が違いすぎる。俺だってレイアードに入ってるから無理矢理グラウドに連れてこられた感じだし……やる気がなかなか出ない。
まあ一人やる気一杯の奴が目の前に居るけどな。

「ちょっと！　ここで突撃なんて、無謀にも程があります！　アナタは本当に勝つ気があるんですか！？　このままじゃ、このフィールドも取られちゃいますよ！」

そう叫んだのはアイリだ。この戦争の間は何故かアイリは良くグラウドに喰い掛かる。こんな激しい子じゃ無かった筈だが、多分アイリは人一倍郷土愛とかが強いんだろう。
だからこそ、最近は自分達で「アルテミナスを守ろうよ」とか言って頑張ってるんだ。だけどそんなアイリの言葉を聞くグラウドじゃない。
こいつこそまさに我の塊みたいな奴だからな。

「うるさいぞアイリ。貴様に言われる事じゃないそんなこと。言葉の前に貴様も力で貢献してろ。一体でも多く奴らを倒すんだ」
「それって……ただ、戦闘をやりたいだけじゃない」
「それがどうした！？　俺達エルフは一体一体、出来る限りの敵を倒す。それだけで最強種は事足りるんだよ」

部下を引き連れて歩き出すグラウド。やっとでアイツも出るみたいだな。だけど幾らアイツが強くても、今からじゃこの戦局はひっ

くり返る事はないだろう。
元々個人でどうにか出来る物じゃないだろう戦争ってさ。それにやっぱり人の統率性はスゴい。それをそろそろ認めろよって思う。
最強種ってさ……一体どの種族を言ってんだよグラウド。

「無駄話やってる暇があるなら貴様等も後ろに続け！　俺達の力を見せつけてやる！　手に手を取り合うだけの脆弱な種に真の力と言う物をな！！」

ようやく出てきて何言ってんだよって感じだ。こっちはさっきからずっとその力って奴を行使しとるわ！　だけど当然、人と変わる訳もない。
だって、グラウドの言ってる事は設定でしかないんだからな。ＬＲＯの世界を形作る上での、それぞれの種族に与えられた物語に過ぎない物だ。
それでプレイヤーに優劣何か付いていない。だけどこいつ等はそんな設定を本気で信じきってる奴ら何だよな。レイアードってのはそう言うことだ。エルフの場合は。

「やろうアギト。仕方ないけど……こうなったら最後まで頑張ろう！　私達だけは純粋にアルテミナスの為にね」
「アイリ……まあ仕方がないか」

アイリは拳を握りしめてグラウド達の後ろへ続く。そして俺も仕方ないから続いてやる。アイリを一人敵陣の中央へ行かせる訳にはいかないからな。
レイアードの奴らは庇い合うって事を知らないから、アイリだけじゃ大変だ。それに結局、俺が嫌々でも参加してるはアイリが心配だから。
ただそれだけなのに、アイリと共に居なければ意味なんてない。

後ろに続いてグラウド達の背中を追っていると、横から同じようにグラウドを追う影が入ってきた。

「アルテミナスの為……なら、私の方が余程頼りになるぞアイリ」
「どっから沸いてきてんだガイエンてめー！」

どこからともなく現れたのは蒼髪エルフのガイエンだ。何こいつ？　最近すっかり、アイリに取り入るような行動ばかり取りやがって。マジで狙ってんのか？
そしてガイエンは俺の言葉にいつも通り鼻に付く言葉を返しやがる。

「うるさいなアギト。貴様のそう言うところが将に成り得ない由縁だ。雑兵は雑兵らしく、先に死んでれば良かったものを」
「ああ！？　悪かったな、お前よりも敵を沢山倒してて」
「質の問題だな。貴様が倒せてるのは同じ雑魚ばかりだ。雑魚は雑魚を将は将を倒すと、良く出来てる世界だなまったく」

何かの間違いが起これば握りしめる槍が隣のこいつに向きそうだ。取り合えず間違いをどう起こすかだな。躓いた振りをしてその拍子にブスッとやってもいいな。
本当に減らない口だから最後はいつも拳。時も場所もガイエンとの場合は関係ない。こいつは年中無休で殴り飛ばしたいコンビニみたいな奴なんだ。
まあコンビニよりもお手軽じゃないのが偶に傷だけどな。俺とガイエンの実力は拮抗してるから、バトルに成るとどっちもボロボロになる。けれどぶつかり合うことを止められない……きっとそんな宿命の元の関係何だろう。

「こら二人とも！　これは遊びじゃないんだよ。私達の国が掛かっ

てるんだからね。ガイエンもアギトもそんなにお互いを意識しないでよ。
お互いを必要としあって！」
「「え～」」

アイリのお説教に俺とガイエンの声がハモった。何とも不愉快だが、これが結構いつもの感じだ。俺達を止めるのはいつもアイリ。
てか、アイリが居なかったらこんなクソムカつく奴と一日とて一緒には居られない。だけどお互いを必要としあうだなんて……どっちも多分、消えて無くなれ位思ってる同士だからそれはなかなか厳しい。
でも今のアイリは厳しかった。

「え～じゃない！　もうこうなったらせめて私達でみんなに声かけよう」

アイリは決意に満ちた瞳を俺達に向けてそう言った。少し前を走るアイリの背中……それが出会ったときとは明らかに今は違ってる。
あの頃は右も左も分かってなくて、どうしてこんな子がＬＲＯなんて始めたんだろうって思ったけど、今はもう完全にこっちでも生きてるって感じだ。
結構死に続けて来たけどさ……三歩進んで二歩下がるって奴をまさに体現してきたが、あれがアイリ何だよなって今は分かる。
頼もしく成った背中はもう、もしかしたら何かを背負えるのかも知れない……そう思える。だから俺はその背中にこう応える。

「分かったよ。俺もただやられるだけなんてイヤだしな。やれるだけやろうぜ！」

そしてガイエンも俺に続いて言葉を紡ぐ。

「まあ実際かなり厳しいが……私はこれ以上負ける事など許せない。あんな脆弱な種族にな。いい考えだ。あんなクソ頭悪い奴にはこれ以上任せてなんて居られんからな」

こいつはマジでレイアードだな。ほぼ私情じゃん。アイリがさっきアルテミナスの為って言ったの聞いてたか？　それに相変わらずグラウドの事見下してるし。

俺も実際は変わらんし、アイリさえも最近はそんな感じに成ってるが、コイツ何でここにいるんだ？　良く考えたらレイアードに何で入ったんだガイエンは？　誘われてって訳でも無さそうと言うか……コイツが誰かに言いくるめられるところなんて、アイリ以外では想像出来ない。

てかあのグラウドにそんな話術は無いだろう。なら俺達と同じか、自分から？　どっちかって言うと前者の方が想像が付く。

まあ、別にガイエンの事なんか興味も無いからどうでも良いんだけどな。俺はただ目の前の背中をもう少し支えられれば……支えられれば……良いんだろうか？

何だか最近、頼もしくなったアイリをこうやって見てると寂しい様な気が沸くことがある。これが親心って奴かな？　それとももっと別の感情？

少しだけ遠くに感じる事が不安の波紋を広げる感じって一体さ……

「じゃあ行くよ二人とも！　まずは敵を倒しながら協力者集めてね！」

「「おう！！」」

考えは迫った敵の中心で途切れた。そこでは激しい戦いが既に繰り広げられてる。そして倒れてる人影に目を向けると、それはエル

フばかりだ。
そして人側は組織的な動きで効率よく回復を回して戦闘不能を防いでる様だ。こっちは絶対的にヒーラーもそう言えば少なかった気がする。

まあ定員数までに登録した奴らが参加できるシステムだから、俺達エルフの場合は前衛と後衛の比率も始まるまで分からないんだよな。
向こうは元から決まった人数を集めてるみたいだったから、多分バランス良く集まってるんだろう。少なくとも、一パーティーに一人はヒーラーが居そうだ。それに比べてこっちは二パーティーに一人居れば良い方かも知れない有様。
回復が追いつかなくて当然だ。それにヒーラーを守ろうとかいう殊勝な奴が居たかも微妙だから最悪だな。一体どれだけヒーラーが残っているのかがこの戦闘をどこまで延ばせるかの鍵に成りそうだ。
そしてそれはアイリも同じ考えの様だった。

「アギト、ガイエン！　ヒーラーの人を守ってあげて！　復活させた人達はきっと協力してくれやすい筈だよ。それに戦力を取り戻さなきゃ話に成らない」
「よし！」
「了解だ！」

俺達はバカバカと戦闘を楽しむグラウド達から一線を置いてヒーラーの人達の援護をする。アイリは魔法も剣術も使えるから、見つけたヒーラーはまずアイリが回復だ。
そして恩を売ったそばで説得。これはなかなか効率的だった。助けて貰えば誰だって無碍には出来なくなるからな。
これならアイリの考えは上手く行きそうだ。戦闘不能状態って惨めだからな。

俺達はグラウド達が全力で戦ってる間に、何とか出来る範囲の戦力を回復させた。向こうだってバカじゃないからな。こちらの行動に気付いて攻め立てられると、流石に防護だけに偏ってられなくなった。

復活出来たのは十数名……これじゃ幾ら頑張っても形勢逆転なんて無理だろうが、アイリの元でみんなやる気になっている。

「まずは彼らの布陣を崩しましょう！　大丈夫です。私達ならまだまだやれます！」

そんなアイリの言葉と笑顔に後押しされて俺達も遂に敵陣へと突っ込む。驚く事にグラウド達の野郎はそれなりに戦線を崩してるみたいだ。伊達にリーダーやってる訳じゃに無いな。

俺も負けたし……それは消したい過去だがな。

「「「「うおおおおおおおおおおおお！！」」」」

俺達は気合い一線、敵陣へと殴り込む。どうせだからグラウド達を上手く使う形で、一番薄くなった所へ突っ込み、更に魔法で分断させた。

これで俺達が前へ進める希望が沸いてくる。敵側にとっては二段構えの攻撃に成った感じ。戦力差は絶対的だが、これなら。

【まだやれる！！】

きっとそんな感情がみんなの心に燃えていた筈だ。そう俺達は一人の少女の下に集うことが出来る。それは俺達エルフが今まで出来

なかった事へのキッカケ……この時、確かに俺達は纏まってた。

耳に届くどちらか分からない悲鳴の応酬。スキルの光が常に視界の端にチラツいては弾け飛ぶ。刺しても刺しても次々に迫る敵にウンザリしそうだな。

完全に倒せる事がまず無いように敵側はやってるから、実際は進んでるのかも分からない。今の俺には突破力が足りないって事かも知れない。

「くっそ、次から次へと……」

既に俺達は囲まれた状況だ。良い線までいけたが、やっぱり戦力不足は否め無い。いや、敵の統率力が予想よりも上回ってたって事かもな。

やっぱり付け焼き刃のチームワークじゃどうしたって限界が見える。

「ふん、倒れるのなら邪魔に成らないところで死ねよアギト」

「はあ？」

唐突に側に迫った声は振り向かなくても誰か分かる物だった。わざわざ俺の感に障る言い方をする奴なんてガイエンしかいねーよ。

「何だよガイエン。随分ボロボロの癖に嫌味言いに来たのかよ？んな暇あるなら、もっと倒せやクソ野郎！」

「当然！　私は貴様よりも先にやられる気なんて無いからな。私の気を張り続ける意味でも、せいぜい貴様は気張ってろアギト！」

こんな事は初めてだ……まさかコイツと背中合わせで戦う事に成るなんてな。そしてその時、今度は俺達のリーダーが戦場に咲く花の如き声を響かせて頭上から降ってきた。

「アギトもガイエンも協力してね！　大丈夫！　私達三人なら突破口を開ける！」

そう言ってアイリはどこか目的があるように前へ行く。すると俺達に何か暖かい光が加わった。

（これは……身体強化の魔法か）

どうやらアイリが掛けてくれたらしい。ヒーラーの人達は回復にてんやわんやで補助系をやる暇無いからな。これは助かる。そして更にアイリは魔法を付加させた自身の剣で、横には目もくれずに進んでいく――って流石に無茶だぞ！

「行くぞアギト！　我らが姫のお言葉だ」

「はっ……いつからあいつは姫なんだよ！」

なんか最近ガイエンの奴は乗りが良く成ってきたと思う。良く笑う様になったし……って、今はコイツじゃない。アイリの元へ！

俺達はアイリと共にラッシュをかけて突き進む。最近ハマって来たと思ってた、アイリの魔法と剣の同時運用はかなり強力に働いてる。

直接系の武器では届かない場所・そして範囲に攻撃を出来る魔法を直接戦闘中に出せるってのがコイツのスゴいところだ。

そして俺達三人の連携は決して付け焼き刃なんかじゃない！　喧嘩を繰り返してでも組んでいただけの事はある。

「てやあああああ！！」

風の暴風が前方の敵を吹き飛ばす。そして見えたのは、何だかゴツい鎧に身を纏った奴ら。軍で言うなら将校みたいな感じ。

そんな奴らがこんなフィールドの中ぐらいで何やってるんだ？　いや……そんなの考えられるのは一つしかない。

「まさかアイリ！　あそこに！？」

「そのまさか。だってあの人達、スッゴく偉そうでしょ？」

「ああ、決まりだな！！」

俺とガイエンが一気に奴らに近づく。そしてアイリは大きな魔法の為に詠唱に入る。この侵略の勝利条件……それが奴らが居るあの場所にある！　多分その筈だ。

侵略側の勝利条件は制限時間内にその地に埋まる国のシンボルを捜し当てて破壊すること。そしてその場所に自分達のシンボルを入れ替える事で侵略完了となるーーだ。

埋まってるシンボルの場所は守る側も分からない。だから両陣営が守るため・壊すため――それぞれの目的を持ってフィールドを駆ける事になる。

そしてシンボルの埋まる場所はスキルに反応する。それにＬＲＯのフィールド一つはだだっ広い。掌サイズのシンボル一つを見つけるのはかなり困難だ。

だから実際は探索班と戦闘班に分けるのが定石だが、俺達はグラウドがああだし、最初はまとまっても無かったからただただ戦闘してただけ。

だけどやはり向こうはちゃんと探索してたらしい。しかも大部隊で。今まで微妙に戦闘位置を変えてたのは、シンボルの位置を特定するためか。
最初は小隊に分けてやってたんだろうけど、大体あたりを付けたら俺達がそこに近づけないように大部隊を配置したって事だろう。
でも俺達は届いた。今からじゃシンボルを時間まで守り抜くことは出来ないかもだが、目の前でやらせてたまるかよ！
今までは全滅させられてシンボルに俺達は届きもしなかったにこれは大きな進歩だ。
アイリがさっき上から現れたのはもしかしてコイツ等を見つける為だったのかも。俺が目の前の敵で精一杯の間に、ちゃんとリーダーぽい事やってたらしい。
大した奴だ。

「「やらせるか！！」」

俺とガイエンの声が重なってゴツい装備の奴らに武器を向ける。だけどその時、横から人が吹っ飛んできた。そして現れたのはグラウドだ。

「なっ！？」
「雑魚共め。ん？　貴様等何やってる？」

信じられんバカだ。ここまで一人で生き残って来たのは賞賛物だが、明らかに邪魔してんじゃねーよ！　その間にも奴らは地面からシンボルを取り出してる。
その時、後ろに居たアイリが動き出した。あの状況が分かってないバカに期待なんて出来ないから、アイリにここは頼るしかない。
あいつの最大の魔法や技でも通るか分からない装備だが、アイリのコンビネーションなら――そう思った時、信じられん事をグラウ

ドの野郎はまたやりやがった。

「きゃあああ！！」

「アイリ！？」

攻撃をしたのは敵じゃない……グラウドがアイリを止めるために槍を突き立てやがった。

「な……何しやがるグラウド！！」

「骨が有りそうな奴を取られちゃかなわん。アレは俺の獲物だ！！」

こんの、戦闘中毒者が！　コイツは国の勝利なんて微塵も考えて無いじゃないか。ただ気に入らない他の種族を潰したいだけ、そして自分の強さに酔ってるだけだ！

「止めてよ！　やっとで……みんなでここまで頑張ったのに邪魔しないでよ！！」

「邪魔だと？　貴様等は誰に付いてきてると思ってる！？　俺だよ。俺という最強のエルフに付いてきてるんだろうが！！　そうだろう貴様等！」

グラウドの言葉の先には今も頑張ってくれてる協力者がいる。そして俺達もいつまでも倒れてる訳には行かなかった。

将校を守る様に立ちふさがった敵だけで先が見えなくなる。最後のチャンスだったはずなのに。

「ふざけないでよ！　一人で勝てもしない癖に！！」

アイリの叫びは良く通る。俺達はそれぞれがどこに居るかももう分からない状況だ。でも声がした方へ必死に進む。降り注ぐ攻撃に

あらがい続けて。

「国が無くなろうと、俺が居ればエルフは最強だ！　それをこの戦いで証明していくだけだ！！　勝てるさ。俺だけはな！！

そしてそれがエルフの繁栄だ！　貴様等も最強の下に居たいだろう。か弱い女の下で満足など出来る訳がない！　知れ、何も出来ないのは貴様だとな！！」

ガイエンの声がどこかから聞こえてる。ムカつくことを淡々と喋りやがって。

「戦え！　戦略戦術助け合い？　俺達に必要なのは目の前の首だけだ！！」

「「うおおおおおおおおお！！」」

呼応する声。そんなまさか・・あんな言葉で上手く回って連携を止めるわけ――

「だめーー！！　みんなそんなんじゃダメだよ！！」

――無いと思ったがアイリの声でそれは消えた様だ。何で……そんなにバカばかりかよエルフって……今度ばかりは呆れるぞ。

俺は必死にアイリを探す。声のした方の敵を払って、その涙声を辿る。聞こえるんだ。俺にはさ。だけど遂に見つけたアイリの体には幾重もの武器が突き刺さり、そして色が黒ずんでいく。

ＨＰ表示はゼロ……そして同時に俺の視界もフィルターを重ねた様に色を奪われた。侵略システム実装からこれで三度目の敗戦……アルテミナスの輝きは失われつつある。

陰る国（後書き）

第八十九話です。
遂に始まった侵略。それを抑えるために三人はそれぞれ力を求める様に成ります。守りたい物を見据える者と自分達の居場所を何よりも大切に想う者と、そしてただ真っ直ぐに自分の思いに素直な奴が求める力はそれぞれ違って……って感じになってく予定です。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではまた～。

楽園の庭（前書き）

僕達は辿り着く……遂にその場所へ。そのための扉は今開かれたんだ。この先にセツリは居る。だけどその前に、純情可憐な乙女が顔を真っ赤に染めて、僕の言葉の意味を求めてた。

楽園の庭

「エイルの奴はリルレットにそんな感情を抱いてるって事だよ」

僕は真っ赤な顔して火照ってるリルレットにそう返してやった。エイルには心の中で謝りながらね。これはしょうがない事だったんだ。

「エ……エエイルが？　これってドッキリですか？」

認めたくないのかそんな事を言うリルレット。まあ二人の関係性がどんなのか知らないから、これは完全に余計なお世話何だろう。だけど思わず出るため息は止められなった。

「ドッキリって……僕達ふざけてここまで出来ないよ」

「うぎゅ……」

今までの事がそんなふざけて出来る事じゃないってリルレットはわかってる。まあ当たり前だけどね。何回も窮地が訪れてたんだからな。

しかしそれでも何だかリルレットは曖昧な感じ。

「でも……でも……うう……」

「信じられない？」

僕のその問いにリルレットはコクンと頷く。僕達としてはそっちが信じられないけどね。すっげーエイルってあからさまじゃん。

でもそれでも全然伝わって無いって事は脈はないって事なのかな？　やっぱエイルには悪いことしたかも。しかしけど……この反応

はどうなのだろう？
脈がない様には見えないっていうか……信じられない理由がある感じ？　でもそれなら本人が直接言えばリルレットも認めざる得ないんじゃないかな。
やっぱ僕から伝え聞くのは違うっぽいしね。湯気が出そうな位真っ赤で少し震えてるリルレットと、ここにはいないエイル二人の問題だから後は丸投げで。

「それならこの戦いの後に本人から聞くといいよ。それならきっと受け止められるだろ？」
「そんな！　……うぅ」

勢いは呆気なく萎んでいった。まず聞ける訳なんて無いのかも知れないな。でもそしたらエイルの奴は踏み込まない気がするんだよ。
アイツがリルレットの事を思ってるのは間違い無いのに、このまま良いと思ってそう。そしてそれはリルレットも同じなのかも知れない。居心地の良い関係ってのは得てして壊し難い物だから。
だけど亀裂は入っちゃったかも知れない。僕のあの一言のせいで。これからはエイルにも優しくなろうかなとか思うよ。
するとその時、僕達しか居ない筈のこの場所に変な声が響いた。

「あはははは、くだらないわね。やっとで全部倒したのに、どうしてそんな事で足踏みしてるのかしら？　そんな事じゃ、折角私が用意したオモチャが可哀想じゃない」
「オモチャ……」

リルレットが声を一段低くして眼下に目を向けている。そして僕達もそこに横たわる物へと目をやった。あれは……倒したはずのエイルモドキの体だ。
頭はリルレットが吹き飛ばしたから無くなってる状態のエイルの

体が地面にポツンと残ってる。けれどそれがどうしてなんだよ。
今までプレイヤーモドキは倒した瞬間に蘇生待ちの時間を省いて消滅してた。だけどエイルはそうじゃないらしい。何で今まであの不自然差を気に止めなかったのかが不思議だ。
直ぐに気づいても良さそうだったけど、安心とリルレットの純情さにやられてた。けれどまだ終わって無かったって事か？
だけどあれは……あの声はエイルモドキって言うよりも、もっと別の口調だった感じ。そう、少し前に聞いた様な声だった筈だ。

「お前……あの柊って奴か！？」
「ふふ、覚えててくれて光栄ですスオウ。でも意外と強く無いんですね。思ってたより時間掛かってますよ。それともあの程度の敵じゃ役者不足でしたか？
貴方の実力を出すのには」

向いてもいない……それどころか顔すらない筈なのに、奴の顔があのエイルの体に浮かぶ様な気がする。こっちを見て言ってる……そう感じるんだ。
それに役者不足って、趣味の悪いことをやった割にはまだ足りなかったって事かよ。どんだけ悪女何だよ。

「言ってくれるな……あんな事やりやがって。実力が知りたいなら自分で来れば良いだろ。戦えない訳じゃないだろう？」
「三百万の内のプレイヤーの中で私達に使われた事を光栄に思って欲しいくらい。そうでしょ人間？　それに私達はまだ……貴方を殺さない。
ちゃんと私達のあの子を奪った償いをして貰ってから殺してあげるって決めてるの。だから良かったわ。万が一にもこんな雑魚に倒される事がなくてね」

奴の傍若無人な物言いに先に関を切ったのはリルレットだった。自身の納め忘れてたレイピアを無惨な体のエイルへと向ける。

「ふざけるな！！　何が雑魚よ！　何が光栄に思えよ！　私達がどんな思いで彼らを倒したと思ってるの！？　心は痛かったんだよ！　どこから声出してるか知らないけど、次にふざけた事言ったらその体を今度は消してあげる」

「ふん、直ぐに私を消さないって事は何か聞きたい事でも有るのかしら？　特別に発言を許してあげるわよ」

リルレットの眉がつり上がるのが見える。既にアイツはフザケてるからな。だけどそのレイピアを降り卸す事をリルレットはしなかった。

グッと堪えるようにして、きつい瞳で下を睨み口を動かす。

「それ……なら……アナタが使ったエイルや、他の人達。柱にされたその人達はどうなってるんですか！！　中の人達は無事なんでしょうね！？」

「ああ、その事。無事じゃなかったら貴女はどうなるのかしら？　ふふふ、囚われてたら柱になった人達は貴女達に殺された事になるのかしら？」

「「「！！」」」

その場の全員が緊張感を張りつめた。だってそれは僕達が想像してた最悪の結果だ。そしてそれが原因を作った奴の口から出たんだ。動揺しないなんて出来ない。

首がないエイルの体が異様にまがまがしく、恐ろしく感じた。それが僕達のやった結果だとでも言うように。

「どうなのよ！　答えなさい！　そんな曖昧な言葉じゃ認めないわ

！」

アイリは気を強く持ってそう言った。本当は自分が一番怖いはずだろうにさ。それでも真実を求めてる。それは勇気だ。

後戻り出来ないだけの様にも見えるけど、僕達はそれを求めなくちゃいけない。どっちみち、目を逸らす事なんて出来ないんだからな。

でもここで聞いても大丈夫かどうか……もしもこいつからの真実が最悪の物だとしたら、みんなは進めるだろうか？

人殺しなんて罪……背負ったらどうなるかなんて分からない。それは想像を絶する様な罪悪感何だろうからな。動けなくなったっておかしくない。

どっちだ……どっちなんだ一体。

「ふふ、そうね。み～んな無事よ。だって私達に精神を捕らえるだけの権限は無いもの。システムはそこまで私達に開示してはくれない。

だから私達にプレイヤーをＬＲＯに閉じこめる事は出来ないの。貴女のお友達は今頃リアルで困惑してるんじゃ無いかしら？」

システム？　それが開示しないってどういう事だよ。こいつらはシステムに介入出来る筈だろう？　いわばシステムの上に居る奴らじゃないのか。

だけどそんな疑問よりも分かりやすい感情が確実に上がってくる。

「それって……本当？」

「今更よ。嘘付いてどうなるの？　それにもう十分に時間は稼げたもの。そう……時間はね」

怪しい言葉。それにこいつが本当に真実を言ってるとは限らない。

けれど嘘を言ってる感じでも無かった。用が無くなった道具の事なんてどうでもいいって感じ。
それなら本当に嘘付く理由も無いだろう。
「じゃあエイルは無事なんだ。良かった……」
リルレットの瞳から大きな涙がこぼれ落ちる。僕達も少しだけ何かから解放された感じがする。だけどそんな想いも長くは続かない。
何故なら原因がそこに居るんだから。
「なかなか楽しんで貰えたみたいで良かったわ。シクラが何で人を操るのを楽しむのか分かった気がする。だけどそれでも、私はやっぱり人の非合理性は見てて苛つくけどね。ふふふ……反吐が出るわ」
広い門広場に広がる奴の冷たい言葉。こいつにプレイヤーを捕らえる術が無くて本当に良かったと思う。もしもそこまで出来たら、こいつは最悪の想像をやってた筈だから。
だってそれが一番効果的だ。
「お前！！」
「アナタは遅すぎた。それを扉の向こうでしると――」
不意に途切れた言葉。それはリルレットが残ったエイルの体にレイピアを突き立てたからだ。それによってエイルの体は青い炎に焦がされていく。
「それ以上エイルの体を汚さないで！！　そして貴女は絶対に許しません！！」
「――ふふ、私はあなたに興味なんて無いわ。でもついでだから、スオウと一緒に絶望をあげる。それだけの覚悟をして扉を潜りなさ

い」

言葉の終わりと共にエイルの体は燃え尽きていく。そして最後に僕へ向けての言葉が空気の中から聞こえてくる。

「スオウ……セツリはね、いつまでもアナタ側には居ないわよ。あの子は元々、私達の所へ居るべき存在なんだから」

言葉が空気に溶ける様に消えると、大きな音を立てて門が開いていく。重厚な音と中から現れた強烈な光が僕達の影を長くする。

この向こうにセツリが居るんだ。多分それは間違い無いだろう。けど――

「どういう事だよ……お前達の言ってる事なんて一ミリもこっちはわかんねーんだ！」

本当にどいつもこいつも言葉が足りない。人を置いてけぼりにしやがって勝手に話を進めるな。何が私達の所に居るべき存在だ！？

セツリはちゃんと人間じゃないか。

何か似たような事を当夜さんも言ってた気がするけど――確か『システムはあの子を手放さない』とか何とか。似たような事だろうか？

でもアイツ等はシステムと自分達は違うみたいな事言ってたぞ。あ～もう！　訳が分からん！　ここでウダウダやっててても解決何かしないんだ。

そう思って僕は開かれた扉を見据えた。

（この向こうにセツリが居て、アイツ等もいるんだ）

それなら行けば、全部わかりそうじゃん。それに僕は立ち止まっ

て悩むタイプじゃない。大抵が行き当たりばったりなんだよ。
最初にセツリを見つけてから、大体そんな感じでやってきた。見つけて見据えて、そして受け止めるんだ。それで良いと思える。
立ち止まってたら一生答えなんて出ないから。だから知るためにまずは進む。どうするかは受け止めてから考える。

「みんな……ここからマジで危険になると思うけど、一緒に来てくれる？」

もうとっくに退路なんて僕達には無いけど、一応ね。僕はここでみんなに何て言って欲しいのか……何回も幾度と揺らいだこの選択。
けれど今回は流石に早かったよ。逆に僕がみんなを実は信頼してないように思える程にさ。

「勿論！」「当然」「がってんだ！」「当たり前」「何言ってんだ今更」

様々な了解の声が真っ直ぐに僕の耳には届いてた。光で照らされるみんなの顔は、何かみんな静観に見えた。そして少しだけピリッとくる緊張感みたいな物がある。
それはきっとみんなが本気だと言う事だろう。みんなこれまでの事でもう覚悟とか決めてる。それを今更問うなよって空気で言われてる気がした。
油断も人任せにもしてる訳じゃない。みんながそれぞれ、自分がここで出来る意味を本気で見据えてる。だからこそ、この良い空気が出来てるんだろう。

「はは……ありがとうみんな」

僕はみんなにそう言って笑顔を作る。一人じゃ何も出来ない弱い

自分だから、本当にそれは最大限の感謝の印。ここまで良く来てくれたし、ここからも来てくれるみんなが最高だと思える。

「スオウ、行きましょう。私達が当初目指してた場所へ！」

「――ああ、そうだな」

僕達は元々セツリ救出班だった。だからリルレットは目指してた場所何て言ったんだろう。まあだけど、僕はセツリと出会っていつもそこを目指してる気がするな。

ずっと追いかけてる……出会いも突然で、そして居なくなるのもいつも突然。掴んだと思ってた手を呆気なくすり抜けて行きやがる。

何度も何度もさ。でも不思議と追いかけるのを止めようとは思わなかった。それはいつもアイツは待っててくれたからだと思う。

それにもう、誰かに……何て任せておけるわけがない。一度掴んだ腕は、僕は何度だって掴み直して見せる。それがセツリなら……尚更だしな。

（ようやく追いついた。今度こそちゃんと捕まえてやる！）

そう心で思いながら僕は扉の中へと入っていく。目も眩むような光線を浴びて、出来る影させも消えていくかの様な光に全身を包まれる。

そして不意に草木の音と、涼しげな風が水の匂いを僕達に伝えてきた。何も見えなかった光は次第にその光明を減らして、僕達の瞳にそこを映し出す。

思わずため息が出そうな程のその光景を。

「綺麗……」

女性キャラの面々は思わずそう呟いてしまう程の物で、僕達男性キャラはため息を出したり飲み込んだり、素直に綺麗なんて言えなくて「うわー」とか言ってみたりを繰り返してた。
でもそれは無理も無い事なんだ。だってそれだけの物が僕達の目の前には広がっている。ＬＲＯはそれぞれの場所でいろんな驚きをくれるけど、これもまさにその一つに成り得る物。

最近ではアルテミナスのクリスタルの町並みにも衝撃と圧巻を受けたけど、これは自然の美しさを表した系としては最高クラスだ。
空の青をそのまま地面に落とした様な湖に、地面に咲き誇る一面の花はどれも大きく凛と咲いてる。枯れた物なんてここから見る限りじゃ一つもないよ。そして少し視線を巡らせるとちょっと小高い丘の所に建物が見える。別荘の様な豪奢な作りのそれと、湖畔の傍にもお茶が出来る様なテラスみたいな場所もある。
小川のせせらぎに小さな腰ぐらいの水車も何か稼働してた。画家とかなら、この場所を描きたいとか思うかも知れない。写真家なら、永遠の一枚に残すかも知れない。そう思える程の美しい光景だ。
時間が自然とゆっくり流れる様なさ。そんな感じになるよ。

「でも……思ってたけどやっぱりあの白い宮殿の中……じゃないよねこれって？」

リルレットが言ったそんな疑問にみんな頭を捻る。実際、あり得なくないかって言ったらあり得なくもないかも知れない。
別に宮殿の中にこの空間を作る事だってＬＲＯ……もとい仮想空間なら出来ないことは無いだろう。外見にあってない広さを用意する事だって出来るって聞いたし、それならあれだけデカい宮殿ならすっぽりとこの空間が収まっててもおかしくはないんじゃないかな？

でもしかし……やっぱりここが宮殿の中ってのは違和感が有る気がする。外は外って区別したいし、中ならわざわざあんな光で多い隠す必要が有るのかって感じ？

今思えば何だかあの光、移動系の魔法の感じに似てたかも知れない。それならここはやっぱり別の場所で、あの扉は空間移動系の魔法で僕たちをここに運んだのかも知れない。

それならＬＲＯ初のエリア移動って奴だな。あの光の扉の中は普通のＴＶゲームで言うエリアとエリアの読み込み期間みたいな感じ。

そっちの方がまあ納得？　すると誰かが気付いた用にウインドウを開いて言った。

「そうだよ。エリアサーチすれば分かるんじゃないか？　さっきまではアンノウンだったからさ、エリア移動したのなら名前が表示されてるかもしれない」

成る程ね。みんな細かい所にまで気を配ってる。僕はさっきまでいた場所がアンノウン表示だった事さえ知らなかったよ。

やっぱりタゼホに無理矢理作られた場所だったからアンノウンだったのか？

「――ん？」

僕の頭に何かがその時引っかかった。何だろうこれ？　この光景……この場所……僕はどこかで見たことが有る気がする。一面の花咲く場所に湖畔のテラス……御花畑を駆ける一人の少女と、それを見守る黒い髪の女性の姿……何だろう、この二人を僕は知ってる。

多分以前に見た映像が重なって写し出された様だ。実際は御花畑を駆ける少女は居ないし、それを見守る黒髪の女性も居ない。

でも確かに……僕はここを知っている。

「あったぞ。表示されてる。え～とこのエリアは『エデン』そう書いてある」
「『エデン』」

それって楽園って事だろうか？　旧約聖書でアダムとイヴが罪のリンゴを食べてしまうまで過ごした神の箱庭。確かにここはエデンと呼ぶにふさわしい感じはする。
楽園とか天国とかのイメージはこれからこの場所を浮かべそうと思える程だしな。だけどアンノウンだった所から名前が有る所に居るって事はやっぱりここはさっきまでの空間と違うって事なんだろうか？
奴らが割り込ませて作った場所じゃなく、元から存在してた場所って事に成るのかな。

「それにしても……あのシクラと柊とかはどこに居るのかな？　それにセツリも」
「まあ向こうから出てこないなら探すしか無いよな。取り合えずあの建物が一番怪しい」

てか外に居ないのならあそこしか考えられないだろう。あの建物も実際にリアルで建てると成ったらそうとう金が入りそうな作りしてる。
小さな城って言うか、宮殿と言うか、とにかくそんな感じ。童話にでも出てきそうな感じなんだよな。ここはそう……セツリが好きな物で溢れてる様な、そんな感じがする。

「けどさ良く考えたら実際俺たちってその助ける子の姿知らないんだよな。敵は会ったけどさ、実際どうなんだよ？
かなり美人って聞いたけど？　こんな場所が似合いそうな天使の様な容姿してるってな」

その言葉に「うんうん」と男共が協賛してくる。て言うかもの凄い今更な発言だよな。まあ最初はただ協力するだけの感じだったから、セツリにまで興味なんて無かったんだだろうけど。
それぞれみんな目的とかがあったんだろうしさ。だけどここまで来たらそうもいかないか。てか苦労したんだし知りたくなって当然。
「私少しだけ見たこと有るよ～。悪魔戦の時にね。でもあれは幻みたいだったけど、それでもやっぱり綺麗だったな」
そんな事を言って男共を煽るリルレット。そして案の定、興奮が激しさを増す男共。だけどさ、ＬＲＯってどこにでも美男美女が溢れてる訳だし、そこまで興奮する事かな？　とも思うんだけど。
まあセツリの場合はその容姿が『本物』って言うアドバンテージが有るわけだけどね。だからかは分からないが割り増しで良く見えるかも。

他のプレイヤーなら「リアルは一体……」なんていう詮索というか疑いの目とかが入るしね。それにそもそも「本当に女だろうか？」という問題もあったりする。
まあ大体が所作や不意に出る言動でアギト曰く分かるらしいが、偶に本物よりも女性してる人も居るらしいからね。それはもうプロらしい。プロってどういう事か分からないが、どうしたってＬＲＯではそう言う事が起こりうるってことだ。
だから絶対に信じれる美少女であるセツリはとても貴重って事なのかな。こいつらの期待値半端無さそうだもん。
「お前等な、少しは鼻息納めろ。それにリルレットも煽るなよな。確かにセツリはこういう所が良くにあ……う」
「うん？　おいどうしたスオウ？」

また頭に記憶の残滓が顔を覗かせた。自分で言ってて要約気付いたよ。

（そうだ……あれはセツリとサクヤなんだ。そしてここは……あの時見た）

その時、一際強い風が吹いた。そして空に白い何かが見え、次の瞬間視界を覆う。どうやら飛んできたのは紙だ。それも原稿用紙。そして何か文章が綴られてる。

そしてその丁度一ページだったらしい場所の右端を瞳が捉えて僕は目を丸くした。だってそこにはこう綴られていたんだ。

『私の冒険！！　命改変プログラム』

舞う紙は一つじゃない。幾つもの紙が空と花を包んでる。湖畔のテラスに二つの残滓。笑いあうセツリとサクヤ。

でも残滓が消えると姿は一つ。彼女は僕を見て照れ笑いを浮かべてた。

楽園の庭（後書き）

第九十話です。

とうとう九十話って、もう百話まで直ぐですよ！　なげーなアルテミナス編。だけどようやくセツリ再登場。出るぞ出るぞって言いながら長かったですね。そろそろアギトには過去編から帰って来て貰わないとズレが生じそうだし、色々大変です。

でも頑張ります！　次回は日曜日に上げますのでそれではまたです～。

苺色の決意（前書き）

俺達はある一日、二人で出掛けた。アイリと二人っきり。余計なガイエンは勿論いない。アイツが居たら無条件で気分悪いから。でも居なけりゃ最高だ。曇天でも快晴に見える程。

てな訳で俺達は初めの頃を思い出すような時間を過ごす。けどどうだろう……何だかあの頃が遠く感じる。

苺色の決意

侵略間の中休み的な日。俺とアイリは久々に二人で狩りに来ていた。アルテミナスはまだ一回も守り切れて無いし、攻め込めても居ないから他の種族の格好の的に成ってるんだよな。

おかげで回し回しで攻められる事なって大変だ。侵略は侵略らしく、こっちの都合なんて考えないシステムに成ってて、どこかの国から届く侵略宣言は強制で突き返す事が出来ない。

それにエリアと時間は向こうの都合という守る側にとっては不利ずくめ。まあそれでも大量の人員を必要とする侵略だから、三日前の宣言が鉄則でその間に守り側は人集めをしなければ成らない。

インターバルが一日空くことに成ってるが、それでも四日後にはまた別の国との防衛戦は流石にきつい。負け続けてるから徐々に人も集まらなく成ってきたしな。

どっかの国と同盟でも結べばこうも攻められ続ける事も無いんだろうけどな。同盟を結んだ国は侵略中に援軍として参加出来るシステムも有るんだ。

それに単純に敵国が一つ減るんだし、それだけでも大きい。だがエルフという種はそれをやろうとはしない。誇りとかが無駄にあるし、何よりも他の種族を下に見てる所が有るからな。

別にレイアード程過激じゃなくても、今までは一番伝統も有り広大で、それに人数も多かったし一番の人気種でもあるって事でそういう目をしてる人は結構居るんだ。

それに一応侵略を取り仕切ってるレイアードのリーダーがアイツだからな。グラウドは絶対に同盟とか、ましてや他の国の援軍なんて認める訳もない。

未だにエルフだけでこの事態を何とか出来る……と言うか力押しできるとか考えてるんだからな。信じられんバカさ加減だ。
本当に折角久しぶりに二人きりで、アルテミナスの数える程のフィールドの一つに出てきてるってのにさ。
あの何も考えて無さそうなグラウドのせいで侵略の事ばかり考えてしまう。ガイエンの奴も丁度良く用事があるとかで来てないのにこれじゃ台無しだ。
もっとちゃんと頭を切り替えないとな。そう俺には目的が有るんだ。

「ふふふ、何だか新鮮だね。二人でこうやってるのって」

頭の中で悶々としてるとアイリの声が梅雨を晴らす新緑の風の様に吹き抜けた。そしてその笑顔も俺だけに向けられるのはえらく久しぶりな気がする。
それだけで悶々と考えてたのはどうでもよくなる感じ。最近は全然気づけなかった自然の空気のおいしさとかが感じれる。最近は爆発と埃っぽさと誰かの悲鳴とか雄叫びばっかりだったからな。
忘れてたよ、ＬＲＯのこの自然な感じ。

「ちょっと前までは二人でこうやってるのが当たり前だったのにな……」

いつの間にか周りが随分と騒がしく成ってしまった。こんな事望んで何か無かったはずなのに、どこで間違ったかな？
まあいつまでも二人で……なんておこがましい願いだったろうし、アイリなら遅かれ早かれ気の合う仲間をいずれは見つけてたと思う。
でもそれは、きっと今のアイツ等じゃ無かったと思うんだ。
幾つもの木々を横目に俺たちは山を進む。適度に日光が差し込むように計算された山は涼しくて暖かい。そして木漏れ日は光のカー

テンの様で美しく見えている。

「そうだね。でも今もそれなりに楽しいよ。ガイエンとは仲良く成れた気がするし、三人なら二人じゃいけない所も行けるしね。

それに賑やか。アギトは今はイヤなの？」

「別にイヤって訳でもないけどさ」

やっかいでは有るんだよな。アイリの心配そうな眼差しが何だか痛い。心配してるのはこっちなのにな。

「アイリは……その……最近楽しんでるか？」

「え？」

俺たちの間に足音だけが響いてる。「タッタッタッタ」そんな音が二つ重なって聞こえてる。だけど次第にずれていく。そしてか細く成った音は聞こえなくなった。

俺は足を止めて振り返る。すると丁度木漏れ日を浴びたアイリが立ち止まってた。

「アイリ、どうした？　ごめん、変な事聞いちゃったな」

「……ううん、そんなこと無いよ。そういえば最近、そういう事考えてやってなかったなって思っただけ。そしたらね。改めて最近を振り返って考えちゃったの」

いつもの優しい笑顔を溢れさせるアイリ。白い頬を桜色に染めて指で照れくさそうに掻いている。最近ちゃんと楽しめる事が有ったんならいいけど――そう思いながら俺はその答えを促した。

「で？　どうだったわけだよ」

「えっとね、楽しんでた……とは思う。でもやっぱり後味が悪いか

な。侵略はずっと負け続けだし、そこは楽しいだけじゃないかな」
「まあ、だよな」
アイリの言ってる事はわかる。アイリは最近誰よりも真剣に侵略の防衛戦に望んでると思う。だから以前では考えられない位グラウドとぶつかってる。
それに作戦とか防衛方法とか考えてる時は楽しそうに見えるし……けれどそれが通ることは無く、結局は敗戦続きに成ってるんだから一概に楽しい何て思えないよな。
「でもね。だから今日は一杯楽しみたいな。大好きなＬＲＯをおもいっきり！　アギトとならきっと出来るよね」
アイリのストロベリーブロンドの髪が揺れている。緑の背景にそれは良く映えて、木漏れ日に煌めく淡いピンクと自分だけに向けられるその笑顔は眩しすぎて思わず手で覆ってしまうほどだった。
何だか心臓の鼓動がヤバい位に速くなってる。今にも破裂するんじゃないかって位だ。あれ？　今まで二人でやってた時もこんな感じだったっけ？
何だか少し前の事が思い出せないぞ。当たり前……だったからか？　けれどいつまでも手で視線を覆って無言な訳にもいかない。アイリはきっと俺の言葉を待ってる。だからいかにも平然と言ってやろう。
ただし視線は木々に覆われた空を見つめて。
「当たり前だろ。誰がその楽しさを教えたと思ってんだよ」
「ふふふ、そうだね。感謝してますとっても」
「おう、崇めてもいいぞ」
何だか照れ隠しにおかしな事を言ってないか俺？　だけどここは

アイリなら乗りよく返してくれる筈！

「そこまではちょっと……」

「拒否られた！！」

何か真剣に。思ってもない発言だったからつい声にも出てしまった。すっげー恥ずかしいじゃん今の俺。まさかここで否定とは、アイリも成長したな。

「あははは、アギトはやっぱり面白いですね。これで元気ポイント一貯まったよ」

「元気ポイント？」

何だそれ？　って視線でアイリを見る。

「元気ポイントはやさぐれた私の心を満たしてくれるアイテムです。些細な幸せで元気ポイントは貯まります。そしてその元気ポイントが貯まった分だけ今日の私はハッピーだったって事に成るのです」

「ふ～ん、ちなみに今何ポイント今日の分は貯まってるんだよ？」

「……二十三ポイントかな」

「明らかに適当だよなその数字」

どう考えても今思いついた思いつきだろうそのポイント制。それに二十三ポイントって微妙すぎる。何か不自然に目が泳いでたしな。

「そ、そんな事無いもん！　私の採点はいつも正確無比ですぅ～。学校の先生からもあの子の採点はいつも正確で間違いが無いから頼りになるわ～ってよく言われます！」

「どんな学校だよそれ！　生徒にテストの採点でもやらせてるのか！？　大問題だそれは！！」

アイリも何だかおかしいな。でも実はいつもこんな感じだったような気もしなくはない……様な感じもする？　調子が戻ってきたのかそうじゃないのかイマイチ判断できないな。

「と、とにかく！　今は二十三ポイントだから今日で百点目指してがんばります！　そしたらきっと明日からも楽しい日々が送れる筈です」

「まあ、だといいけどな。取り合えず頑張れよ～」

「むむ～何だかやる気の無い応援だね。私の元気ポイント獲得の為にはアギトの頑張りが必要なんだからね！」

何だかいきなり無茶ブリを要求された気がする俺。そのポイント制に加入した記憶はないんだけどな。

「何で俺が関係してんだよ？」

「当然だよ。一人より二人で一緒に楽しめば楽しさは二倍・三倍・四倍と膨れるんだから。そしたら百点なんてあっと言うまです」

木漏れ日の中両手を大きく広げて、笑顔を咲き誇らせるアイリがとても眩しい。でも二人で四倍まで膨れるかは微妙だけどな。せめて二倍位じゃないか？

こう言うのって人数とかに比例しそうじゃん。それか気持ちとか。意識してる相手とだと確かに四倍に位膨れ上がったっておかしくはない――ってもしかしてアイリは俺の事を意識してそういったのか？

楽しさ四倍の相手としての認識をしていいのだろうか？　う～んだがアイリは結構分け隔てないかいからな、下手な期待は命取りな気もする。

（ん？　期待してるのか俺？）

そう思ったとたん、アイリを見て顔が赤くなる感覚が襲う。いや……まさか、でも……そうなのか俺？　ヤバい結局また直視できないぞ。

「どうかしましたかアギト？」

俺の様子がおかしい事に気付いたアイリが木漏れ日から出てこちらに歩を進めてくる。このままじゃこの火照った顔晒す事に成ってしまう。それは何かイヤだ。

「と、取り合えずアイリの目的がソレなら、俺の目的にもちゃんと付き合って貰うからな。だからいつまでもこんな所で立ち止まってないで行くぞ！」

そう言って俺は顔を隠しながら走り出す。そして常にアイリの前にいつづければその内この顔も収まるだろう。

「ちょっと待ってよアギト。元からそのために来たんだからちゃんと付き合うよ～」

そんな声が後ろから聞こえるが俺は最初の目的の場所まで振り向くことはしなかった。てか出来なかった。そしてちょっと怒ったアイリがスピードを上げるから何か追いかけっこの感じで山を走ることになったんだ。

おかげでかなり速く着いたが、何だかしょっぱなから異様に疲れた。

俺とアイリはゼーハーゼーハー荒い息を繰り返しながら前を見据えた。そこには山の斜面がぽっかりと崩れたみたいになってる。そして壁面から顔を覗かせる星を内側に飲み込んだみたいな黒いキラキラした岩。
あれがまずは俺が求める物。

「のぞき込むと宇宙みたいで綺麗だね」

何だか早速岩に近づいてるアイリ。両手で輪を作っておもむろに中を覗いてる。好奇心旺盛な奴だ。
最近の大型アップデートで実装されたのは何も『侵略』だけじゃない。大きな実装はもちろんそれだが他にも追加クエストやら細かな変更点何かもあった訳だ。
そして今やってる事もその中の一つ。追加されたクエストだ。

「さあーて採取するか」
「削るの？　こんなに綺麗なのに」

不安気な顔を見せるアイリ。槍の代わりに採取アイテムであるピッケルを握る俺は相変わらず浸ってるアイリに言ってやった。

「あのなアイリ。削ったって別にそのデカいのが欠ける訳じゃないんだぞ。だからそこどけ」
「あ、そっか」

こういう所はＬＲＯも普通のゲームと同じ。枯渇する事なんて無いし、沢山のプレイヤーが同じ場所で採掘したってその分穴が空くわけでも木が切り倒される訳でもない。
プレイヤーの開発可能エリアは決まってるからな。オブジェクト

に影響無くアイテムは手には入る。その位流石にわかっておけよな。
俺はピッケルを何回か叩きつけて落ちてきた破片を拾う。よし、間違いないな。

「次行くぞ次！」
「ねえ、何が手にはいるの？」
「それは秘密だ。いいだろ別に、今日はＬＲＯ巡りを楽しめばアイリはいいよ」

強力な敵なんて出ないからな。そこまで行く必要も無いし。でもやっぱりアイリは知らないらしい。それは好都合。結構侵略以外では話題になってるクエスト何だが、アイリはＬＲＯの情報を集めないからな。
計算通りだ。

「うう……ちょっと納得出来ないけどアギトがこれを……その……デートだって認めてくれたらいいよ。それで」
「は！？」

何？　デートって……今更のような。だって前はいつも二人だったし、それなら前はいつもデート？　とはやっぱりアイリの中でも違うんだろう。
俺もデートって感じで意識してた事なんて無いし、粋なりそんな事言われたら動揺する。アイリも恥ずかしそうだし、そんな顔されたら益々意識するじゃん。
でも、アイリもデートしたいって思ってるって事だよな？　それも俺と……なのかな？

（こここれは、これ以上の詮索を避けるための苦肉の策としてだな……一番最善と思われるから）

自分の中で沢山言い訳を述べてから、動揺を隠して告げる。
「え～と、まあ……それじゃあ今日はデートって事で」
「うん！！」

アイリの笑顔が花開いた。そしてその声は晴天の空に突き抜ける様に響いた気がした。

それから俺たちは各地を廻って順調にアイテムを集めていく。本当に危険も無くて、長閑な旅をしてる感じだった。そして今いる丘は最後のアイテムの入手場所。
目の前にある十字架は、この世界で作られた英雄の墓。そこに一滴のアイテムを垂らすとある花が一輪咲くんだ。そしてそれが最後のアイテム。

「よし。ミッションコンプリートだな」

俺はそう言って花を摘んで立ち上がった。空は青から最後に暖かさを感じさせる様な橙に変わってた。太陽も名残惜しそうにしてる感じだな。
一日で一番影が長く延びる時間。横側から差し込む黄金色の日差しは周りの景色を煌めかせる様に見える。草木の僅かな反射も眩しくて、黄昏という間がお互いの顔を隠してしまう。

「うん、おめでとうアギト」

アイリの顔も見づらいな。笑顔だってのはわかるけど、光が眩しい。でも何だか今日一日ずっとデートって事を意識したせいでまと

もに向かい合え無かったから、丁度いいのかもしれない。
今なら……この一日の中の僅かな黄昏時だけなら……俺達は向かい合っていられる。

「付き合ってくれてありがとうアイリ」
「まだ付き合ってはないよ私達！！」
「は？」

何言ってんだアイリは？　まだ付き合ってないって、それは……

「あわ……はわわ、今日付き合ってくれたって事か……何言っちゃってるの私……間違っちゃった」

アイリはもの凄く焦って体を動かしてる。顔に両手を当てて、光のせいでの見間違いじゃなかったら頭から湯気が出てる。
いや、それはこっちも恥ずかしいんだけどな。何か向かい合うのがまた精一杯になった。そして流れる長い沈黙。本当は十秒位だったかも知れないが、それが一時間位に感じる程だ。
俺ってもしかしてアイリの事が……そう考え始めた矢先にアイリが声を出した。

「あ……あああああの、どういたしまして！！」

無かったことにしようとしてる！　でもそれは曖昧な今の自分にも都合が良くて……モヤモヤはするけど、必死に頭を下げてるアイリを見てるとまだいっか――と思った。

「アイリ」
「えっとね。あれは、そのえ～と何て言うか……」

テンパってるアイリは面白い。だけどこの恥ずかしさはお互いに結構良くない気がするから、俺はアイテム欄から飲み物を取り出してそれをアイリに投げた。
瓶の容器に入ったそれは、放物線を描きながら黄昏色の光を反射してる。

「わっ！　ちょっと危ないでしょアギト！」
「ちゃんと声掛けたじゃん」

そう言って俺は何とか笑ってみせる。いつも通りに笑えてるかな？　アイリの手にちゃんと収まった瓶。少しの間こっちを睨んでたアイリだったが、直ぐにその瓶に逃げ道を見つけたみたいだった。
プシュッと音を立てて瓶の蓋を外す音が聞こえた。そしてコクコクとその細い喉を鳴らしてる。みるみる消えていく瓶の中身に正直驚いた。
いつもは上品に飲むのに、それだけテンパってたんだろう。そして俺も同じアイテムを取り出して喉を潤す。飲み終わったときには、お互いの顔が既に確認できる様に成っていた。
そして少し冷えた風が肌を抜けていく。黄昏色だった空は太陽から離れた所から藍色と紫が混じってた。

「たのし……かったねアギト。今日一日本当に……満点ポイントも百点越えしてるね」
そんな言葉が風に乗って聞こえてきた。アイリは霞掛かった空を見つめてる。湯気も収まり、声にもいつもの冷静さが戻ってる。手か満点ポイントはちゃんと数得てたんだな。ネタだと思ってた。

「はは、満点ポイントな。百点越えしたのなら良かったよ。俺も楽しかった」

同じように次第に暗く成っていく空を見つめてそう言う。実際満点ポイントの判断基準は分からないが、俺も久々に思いっきりＬＲＯを楽しんだ。確かに百点なんて簡単に越えた感じだ。これがＬＲＯって感じだったと思う。

耳を澄ますと夜にいざなう様な風の音が聞こえる。適度に涼しい風が火照りだそうとする肌を冷ましてくれて、だから俺もいつもの様に喋れてる。

「ねえアギト。これからもＬＲＯは楽しい世界のままであれるかな？」

「何だよそれ？　どう言うことだ？」

アイリが言ったことの意味がイマイチわからなかった。これからもってＬＲＯはＬＲＯだろう。偶に大きなアップグレードがあったりして常に進化していく世界。

だから必ずしも良いことばかりじゃないかもだが、基本楽しいって事に変わりはないと思うけどな。だけど俺のこんな考えとはアイリの言ったことの意味は違ってた。

「私はね……変わるだけじゃイヤだよ。守りたい物もある。終わらないで欲しいもの……それはアルテミナスだよ」

「それってアルテミナスが無くなったら楽しく無くなるって事？」

アイリは藍に染まる空に頷いた。

「だって思い出いっぱいだよ。それに好きなんだ私。あの国が大好き。初めて降り立ったとき、こんな綺麗な国に来れて良かったって思った。

エルフにして良かったなって思ったの。だから無くなっちゃうのは嫌だよ」

アイリの声が空気に消えていく。光は萎んでいき、影は夜に飲まれていった。

「だからあんなに頑張ってたのか」

「うん……だけどどうしたって私の声はなかなかみんなに届かないね。みんなアルテミナスなんてどうなっても良いのかな？」

大多数はきっとどうでもいいと思ってそう……と言うか最近の侵略事情で諦めてる奴ら急増って感じだな。だけどこんな事アイリに言えるわけがない。

アイリは一人でもずっと頑張ってきたんだ。誰よりもアルテミナスを想って。それに郷土愛が無い訳じゃないと思うんだ。誰だって自分の生まれた場所が無くなるのは嫌だろう。

それが例え仮想でもさ。でも仮想だからこそ誰もが諦め切れるのかも知れない。それにやっぱりプライドも邪魔してる。それに一番の問題はアイツだろう。

グラウド……奴がもっとまともならここまでの事態には成らなかっただろうし、アイリの言葉を聞く奴ももっといたはずだ。

慰めにも成らないかもだが、俺はたった一つ確かな事を言うことにした。

「俺は……少なくとも俺はアルテミナスが無くなっても良いなんて思ってない。たった一人じゃ気休めにも成らないかもだけどさ」

俺の言葉を受けてアイリは首を振った。そしてようやくこっちを見て笑顔をくれる。

「そんなこと無い。誰よりも何よりも心強いよ。アギトがいてくれたら、私もっともっと頑張れる！　目指すんだ。またアルテミナス

があの一番星の様に輝ける日を！」

アイリが指さした先には確かに何よりも早く輝きを放つ一つの星があった。その星は確かに輝いてたが、俺にはアイリの光の方が眩しく感じれた。

諦めない……その強さの光がさ。そしてそんな光に照らされるアルテミナスが見える気がした。

そして次の集会の時、アイリと俺とガイエンは集まってた。どうやらガイエンも仲間に加えたらしい。そしてそんなガイエンは言い放つ。

「それを実行する上で丁度良い作戦が近々始まる。王族に連なるクエストへの挑戦をグラウドは考えてる。それを達成するとあるアイテムが手に入ると言われてる物だ。

アイツも箔を付けたいんだろうが、その達成条件は謎のまま。だがそれだけやる価値がある。アルテミナスを救う為にはな」

その言葉にアイリは乗った。そして俺達は遂に進み出る。『カーテナ』という王家の宝剣を求めて。

苺色の決意（後書き）

第九十一話です。
ここからアギト達の過去は加速していきます。今でも最も重要なアイテム『カーテナ』誰も手に出来なかったそれが、何故アイリに応えたのか。でもそれを手にした事でアギト達は通り過ぎる……『ポイント・オブ・ノーリターン』を。
それでは次回に続きます。次は火曜日に更新します。ではでは～
また次回に会いましょう！

ほどけ掛ける結び目（前書き）

僕はセツリを抱きしめる。ギュ～と強く強く……ここに居るのがセツリ自身だと確かめる様にセツリを感じたい。セツリの暖かな体温や、回した腕に優しく触れる栗色の髪。

鼻孔を擽るセツリの香りは懐かしく、色づく蕾の様な口から吐かれる吐息は彼女の生きてる証に思える。僕達は噛み締め合った。またここで再会出来た事を。

ほどけ掛ける結び目

舞落ちる紙の束、鼻孔を擽る花の香り、そして美しい景色がそこにはある。けれど僕の瞳にはそられ全てをボヤかしてでも映したいたった一つがあった。

足下まで届きそうな長く柔らかな髪。もう見慣れずぎた真っ白なワンピース。陶器にも負けない白い肌に、頬にはほんのりピンクが浮かんで、長い睫の奥には大きくて深い色をした瞳が見える。

あれはそう、間違いない。

「セツリ……セツリ！！」

僕はそう叫んで湖畔のテラスへ駆けだした。だって彼女をずっと求めて来たんだ。いっぱい苦労して、沢山の人に迷惑を掛けてやっとでたどり着いた。

駆け出しもしてしまう。

近づく毎にはっきりとその姿は確認できる。だけどそれだけじゃ僕は安心できない。どう見てもセツリだけどさ……もっとしっかりと僕はセツリを感じたかったんだと思う。

だから思わずガバッと抱きしめた。

「きゃ……スオウ？」

「セツリだな……セツリの匂いがするよ」

セツリの香りが体全体を包む感じがする。懐かしい香りだ。初めて出会ったときと変わらない良い匂い。女の子の香りって奴かな。

「わ、私そんなに臭わないよ！」

けれどセツリはそんな発言がちょっと気に入らなかった様だ。ちょっとお冠。だけどそんな強い抵抗は無い。寧ろそっと背中に手が回ってくる感じがする。
だから僕はもっと強く抱きしめてこう言った。
「感じるんだよ。セツリの香り。大丈夫、とっても良い香りだから。スゴく優しい香りだ」
「私も……スオウの匂いを感じる。私をいつも守ってくれた匂いがするよ」
セツリの腕にも微かに力がこもった感じがした。だけど直ぐに触れた腕は解かれた。そして頭が何か熱い様な……セツリは普通よりも体温高いのか、いつもホッコリしてるけどこれは異常。
どうしたんだ一体？　と思ったら後ろから第三者の声が聞こえた。
「う～ん、スオウって以外と大胆だね」
ビクゥと肩が上がった。心臓が飛び出るかと思った。てか一瞬止まったような……成る程、セツリが茹でってる原因が分かった。
分かったけど……僕は振り向けない。だって忘れてたし、分かったら余計恥ずかしいじゃんか。リルレットの白い目が待ってそうなんだ。
だけどいつまでもこうやってる訳にも行かない。何か更に後ろで何かゴニャゴニャ聞こえるんだ。これはヤバい。
「はっは、まあ良くあるよね。抱きしめたくなることってさ」
そう言ながらゆっくりとセツリを解放して振り返る。動じてない風を装ってね。だけどこの言葉は余計いリルレットの白い目を加速させたようだ。

「ふ～ん、スオウってセツリちゃんを良く抱きしめたいって思ってるんだ」
（僕のバカァ！！）
誤解が生まれる様な事を言うなよこの口が！　確かにさっきの言い方だとそう捉えられるかもだけど、違うんだ！
「えっと……スオウは私を抱きしめたいの？」
そんな事を顔を染めてつぶやくセツリ。真面目に受け取らないで欲しいんだけど。くっそ、前方の竜に後方の虎か、逃げ場がない。
「いや、言っとくけどそんな頻繁じゃないから！　リルレットの言い方が過剰なんだ。僕が言いたかったのは……そうだな。
今のはサッカー選手がゴールを決めたときの感覚って言うか……」
「テンション上がって思わずって奴？」
「……まあ、そんな所？」
何かリルレットの視線はやっぱ痛いよ。直視できない。あれ～リルレットってこんな怖い存在だったっけ？
「スオウってテンション上がるとナニからナニまでやっちゃう人だったんだね」
「何だナニって！？　スゴい誤解を感じる！　後その白い目をやめてくれ！　無理、耐えられないから！」
ナニが怖いよ。てかリルレットからそんな言葉が出ることがもう恐怖だよ。ナニを考えたくない。もう何も考えたくない。

「ナニ？」

そんなセツリの声。後ろできっと首を捻ってるんだろうな。セツリはそう言う事に疎そうだから、いやらしい事に結びつきはしないだろけど考えて欲しくはない。

それだけで僕は辛いじゃん。

「ナニ……は分からないけど、私はスオウに抱きしめられるの……嫌じゃないよ」

「は？」

小さな声でそんな言葉が聞こえた気がした。いや、実際追いつめられすぎての幻聴かも知れない。妄想が声を持って出てきたとか。

「えっと……セツリ何か言った？」

だから僕は確認するためにもそう聞いてみた。するとセツリは顔だけじゃなく首まで染めてこう言った。

「なな、何にも言ってないもん！」

やっぱり幻聴だったらしい。セツリがそう言う限り、さっきのは空耳って事になる。だけどそう叫んだセツリは何だか口をパクパクさせてる。

まだ言いたいことでもあるのだろうか？　でも声にまで成らないから分からない、伝わらない。その時信じられん呼び名で呼ばれた。

「ねえナニの人」

「ナニの人！？」

誰だそれ！　それこそ幻聴・空耳として処理したい位だ。だけど明らかにそれはリルレットの声で、彼女はとっても堂々としてました。

ああこれは現実なんだ……そう諦め切れたよ。

「あはは、ごめんねスオウ。ちょっとからかいすぎたね。だから泣かないで」

「泣いてねーよ！　小説だからって描写を捏造するなよな！」

くっそーやりたい放題なリルレットに押されまくりだ。言っとくけど泣いてないから！　するとリルレットがにっこり笑って耳打ちしてきた。

「ねえスオウ。ナニで何を想像してたのかな？　セツリちゃんの何を考えたの？」

「は……」

セツリの何って……自然と視線がセツリへ向く。綺麗で可愛いセツリの姿。小顔に、ワンピースから覗く鎖骨……適度な膨らみの胸に小さなお尻・・そして細く脚線美を描く脚――って何考察してんだよ！

ヤバい、黒いリルレットに乗せられてる。な、何がリルレットは目的なんだ？　貶めたいのか僕の事。そんな子じゃ無いと思ってたのに。

するとリルレットは僕から離れてセツリの方へ向かってた。ヤバい、何を言う気だアイツ。

「初めまして、私リルレットって言います。直接こうして会うのは初めてだから、まずは自己紹介からね」

そう言ってセツリに手を差し伸べるリルレット。何だ、意外とマトモな事をやっている――ていうか、僕が知ってるリルレットはあれだよ。
今までのは悪夢に思えるな。
「えっと、セツリです。こんな所までわざわざどうも」
セツリはその手をとって恐縮そうにそう言った。まあいっぱ迷惑を掛けたって事は分かってるだろうし、前からセツリは何か悩んでた感じだったから、赤の他人にまで迷惑掛けた事を気にしてるんだろう。
でもそれはセツリのせいじゃ無いだろうに。特に今回はあの訳の分からない奴らのせいで……
（そう言えば奴らは何でいないんだ？）
確か一足先にここにいるはずだろう。こんな簡単にセツリと僕らを接触させる事自体、おかしいんじゃないか？　だけど、僕が幾ら思いを巡らせても奴らは見える範囲にはいないんだ。
「そんなやっとで会えて私は嬉しいよ。所でスオウはセツリちゃんに夢中みたいだけどどうなのかな？　どう思ってるの？」
「ふえ？　夢中って……あの……」
「おい！！」
何？　僕が他の事考えてる間に何言ってるんだリルレットの奴？
もしかしてリルレットの奴、恋バナって奴に夢中になってる？
確かに女子はそれ系の話が大好物って聞くけど、もうっちょっと節操って物を持とうよ。リルレットの奴、自分の事はからっきしなのに人の事には興味津々なのか。

「その口がさっきからアホな事を口走ってるのかな～リルレット」
僕は後ろからその頬をつね上げてやる。本当ならホッチキスか何かでその口を止めたいくらいだ。開かないようにな。
「いたいたいよスオウ！　じゃあ何？　セツリちゃんの事嫌いなの？　そんなわけ無いよね。嫌いな相手の為にここまで出来ないもん」
「そ……それはだな」
「スオウは優しいから……」
勢いのあるリルレットの言葉にどう返そうか考えてた間に、セツリがそう呟いた。優しいから……それは喜ぶべき評価の筈なのに、何だか素直に嬉しくない様な。
そう言ったセツリも晴れやかな顔とはとても言えない。
「でも優しさだけなのかな？　私にはとてもそうは思えないけどな。だって私は最初の頃から知ってるもん。スオウが必死にセツリちゃんの事を追いかけてた事」
「おいリルレットいい加減にしろよ。それ以上一言も喋るな！」
何？　どんな罰ゲームなんだよこれ。てか他の人にはそう見えるものか……まあ見えないわけ無いよな。僕はやっぱりセツリの事が……その……好きって事なのかな？
嫌いか好きで言ったら、嫌いなわけ無い。確実に好きだと思う。てかセツリほど可愛い子を嫌いな男子はそう居ないだろう。
誰もがお近づきになりたい容姿してる。でもそれだけで僕は追いかけてたって訳でも無いような。セツリは何だか、ほっとけないって言うか、最初に見つけ時の孤独感。
あれが……そう……似てたんだ。

「私に……それだけの価値があるのかな？」
「うん？」
「私に……スオウに守られる価値があるのかな？」

不意に萎んだセツリの声。何がセツリを伏し目がちにしてる？そんな事今更だろう。僕は勝手に……最初から勝手に追いかけてたんだ。

そして勝手な使命感を持ってただけだ。それにアルテミナスに来る前に、みんなで確かめあった目的。それはセツリだって納得したはずだ。

僕たちはアンフィリティクエストを達成する。そう誓った。だからそんな事言わなくても良いことなんだ。僕達は好きでやってるんだから。

「そんなこと……」
「スオウはずっと必死だったの？」

何かおかしな事を言うセツリ。そこは知っててくれた筈じゃないのかな？　でもそう言えば僕らが頑張ってる時はいつもセツリは気絶してたっけ。

まあ格好良い姿を見せたかった訳じゃないしいいけど。するとリルレットがまた余計な事を言いやがる。

「うん、それはもう必死過ぎなくらい。だって命懸けてるからね。そんな事、好きな相手にじゃなきゃ出来ないよ」

満面の笑みのリルレットは自信満々に胸張ってる。何か無責任に言い切られたんだけど……どうすんだよオイ。でも完全に否定も出来ない。

確かに言われてみれば命懸けてる時点でセツリは特別何だと思うし、それも否定しないよ。

「そう……なのかな？　スオウなら困ってる人は命懸けで助けそうな気がする。それが今は私ってだけで……」

「セツリちゃん……」

何だか伏し目がちなセツリにリルレットのテンションもやや落ちた。それはいいんだけど、どう考えてもセツリはおかしい。どうしたんだ一体？

何でそこまで突き放そうとするんだ。何でそこまで、自分を一人にしようとする。迷惑なら迷惑とそう言ってくれればいい。

けれどそうじゃないだろ。僕達は仲間の筈だ。もう赤の他人じゃない。泣いてくれた、待っててくれた、信じてくれたじゃないか！

だから僕はそれらを否定する様な……いや、僕自身が実は突き放された様なその言葉に苛立ったんだと思う。

「ふざっけるなよセツリ！」

肺から空気を絞り出す様にして僕はそう叫んだ。声はただ大きいだけ、だけど抑えきれない感情で水面に微かに波紋が広がったかも知れない。

花々に止まってた蝶々も驚いたのか一斉に飛び上がって光の燐粉を舞散らせてる。

「スオウ……」

目を丸くして僕の声に驚いた様子のセツリ。けれど言いたいことはここからだ。

「言っとくけどな、僕はそんなお人好しじゃない！　誰も彼もを助け様なんて思っちゃ無い。そんな事、出来る分けないって僕は知ってる」

人の手は二本しか無いんだから……だけどそのたった二つでも、すり抜ける事があるんだ。初めに埋まるその二つが、取って貰えない事を僕は……

「じゃあ、どうして？」

セツリの声が落ち掛けてた僕の意識を引き戻す。彼女の柔らかな雰囲気が、香りが、勢いじゃない何かを引き出す気がした。

「特別……だから」

口走った言葉に驚いたのは何もセツリだけじゃない。僕だって驚いた。自然とそう口が動いたんだ。

「とくべつ？」

甘い声でそう繰り返したセツリ。『特別』なんて意味深なのか直球なのか分からない言い回しじゃん。でもどう解釈したって『特別』何て言葉には多大な期待が宿ってる気がするのは共通だろう。

つまりはこの状況ではそれの解釈が容易に想像できる。だから何か後ろが騒がしい。

「えっと……それって……」

そしてやっぱりセツリも顔火照ってる。当然だけど、でもこれは先走ったような、ちょっとした言葉のあや。

「セツリ、特別ってのは……」
「はい」

何か受け入れ態勢出来てないか？　しっかりと立って、姿勢良く、そして両手は腰の当たりでそっと併せてある。でもよく見ると、目は深く沈んでる様な気がした。どこかで達観してる様な、見定めてる様なそんな気が。

それに気づくとなかなか言葉が出ない。ていうか、『特別』ってのは間違っちゃいないと思う。セツリは僕にとって特別だ。

短期間でいろんな人に知り合えたのも、心通わす仲間が出来たのも、そして強く成れたのも、全部セツリとのあの出会いがあったからだ。

だからセツリは、僕にとって……僕のこのＬＲＯにおいてかけがえのない特別な存在。そしてＬＲＯの中だけで終わらせない為に、ずっと頑張って来てるんだ。

だから偽るっていうか、取り繕う事なんて無いと思えた。いや、この瞳に嘘は付けないって感じかな。

「特別ってのは本当だよ。間違いない。僕が初めて助けたいと望んだ相手がセツリだよ。僕はセツリが思うほど出来た人間じゃないから、せめて今ある繋がりを守るので精一杯。

誰これ構わずなんて出来ないけど……セツリの事だけは僕は本気だ」

カサ――と地面に落ちていた紙を誰かが踏む音が聞こえた。いつの間にか後ろの喧噪は止んでいる。そして僕はその瞳を見つめていた。

恥ずかしいけど……だけど吸い込まれて行きそうなその瞳に思い

を精一杯伝えた筈だ。するとセツリはゆっくりと目を閉じた。

「スオウの特別って……そういう事だったんだね」

その声は少し寂しそうに聞こえた気がしたけど、自分の自惚れかも知れない。

「酷い奴になった？　頼りないかもね、こんな選り好みする奴じゃあさ」

それに変な誤解与えたし。それは自分の口からは言いづらいけどね。てかリルレットが悪のりするのがいけないんだよ。何かややこしく成った。

するとセツリは首を振る。それに併せて長い栗色の髪も空気に舞うように流れていく。何だか髪から粒子が散っている様に見える。そしてセツリは呟いた。

「ううん、そんな事ない。本気なのは分かったし……て言うかそれは前から……うん信頼してたから。嬉しいのもガッカリなのも有るけど、でもやっぱり嬉しかった。

格好良かったし……私ももっともっと頑張ればチャンスは有るかなって思えたもん」

チャンスね。まあ何だか許して貰えたみたいでほっとするよ。それにやっぱりセツリにはこういう笑顔が似合ってる。不意に見せる伏し目がちな顔も確かに良いけど、やっぱりこの笑顔にセツリって感じがするんだ。

「それに……今はまだこれが精一杯なのかなって割り切らなきゃなのかも。助けられてる間は、彼女と同じ所には立てないよね」

元気にそう言い切るセツリ。でも彼女って誰だよ。それに助けられてる間は……か。早くセツリを解放してやりたい。三年――それがセツリが眠り続けるリアルの時間。
リアルにもセツリにとっては辛いことが沢山あるだろうけど、ここで死んで欲しくないとは思うんだ。それじゃあきっとセツリは何も手にせず逝ってしまう。
知って欲しい事がある。分かって欲しい事がある。それを伝えたいから、僕はセツリを追いかけてるんだ。

「それじゃあ――」
「それじゃあ、そろそろ戻りましょうかセツリ」

唐突に被せられた声に僕達は驚いた。いつ……いや、どこから来た！？　どうやってこんな近くに現れたんだコイツ。

「そんなに驚く事じゃ無いじゃない。だってここに呼んだのは私達何だから」
「――っつ、シクラ！？」

セツリのすぐ後ろ。て言うか、シクラはテラスに腰掛けてお茶してやがる。それも自然に。いや、この状況だと不自然なのか知らんが、ようやくお出ましか。
てか今まで居なかったことの方がおかしいんだが……セツリは大して驚いてない？　まさか最初からそこに居たとか言わないよな。

「なあにスオウ？　人の目の前で私達のマスターを誘惑しないで欲しいわね☆　抱きしめた瞬間なんて、カップを一つ無駄にしちゃったじゃない」

そう言って視線を下げるシクラ。僕もつられて視線を落とすとそこには確かに割れたカップが有る。ぞっとした。つまりコイツは本当に最初からここに座ってたって事か。スキルを使ってたって訳でも無いだろう……やっぱりシステムへの介入？　認識阻害でもされてたのかも知れない。僕達に見えてる視覚の改ざん。確かに出来なさそうじゃない。

「どうしたのスオウ？　って待ってよシクラ。私はそのスオウにね……ううんもうスオウの気持ちちゃんと分かったから――」
「分かった？　セツリは甘い！　アマアマよ！」
「ふえぇ？？」

何か妙に親しげな二人。どうやら連れ去られた三日の間に友情でも育んだか？　悪い様にはされなかったみたいだし、とにかく打ち解けては居るようだ。やっかいな事にな。
「いいセツリ？　スオウにはリアルに幼なじみの女の子が居る。これってスッゴく不利。だって年数分の思いでの差は容易には埋まらないもの。
そしてさっきの助けたいことは本気って、助けた後はどうなるのって事よ☆　セツリは一人寂しく病室暮らしをまたしたい？　そんな訳ないよね。なら、いっちゃだめ」

「でも……私……」

好き勝手言ってくれるシクラにセツリは押され気味というか、コイツがセツリに色々吹き込んでたのか。言い返せない様子のセツリはこちらに振り返って、何かを求める様な視線が見える。
だから僕は言ってやる。ようやく一緒にまた来てくれる気に成ったセツリを取られてたまるか！

「リアルに戻ったってここで過ごした絆が消える訳じゃない！　ちゃんと病室にだって行くし、遊びに行ったりだって出来る！」
「うん、うん」

僕の言葉に頷いてセツリはシクラを見つめる。「大丈夫そうね」とか「仕方ないわね」とかを期待してそうな瞳だけど、シクラの奴はもっと別の事を言った。

「それでも……いつかは一人に成っちゃうよ。私はそう思う。だけどここならそんな事させない。私達はみんなセツリの為の存在だから。
ここに居る限り一人に何てさせないよ☆　不覚定なリアルは、いつだって貴女を一人置いていくわ」

そう言って優しくセツリを包むシクラ。その肩が少し震えてるように僕には見える。

「セツリ……」
「何でかな……リアルでの事は寂しくて、辛い事しか思い出せない。けど、ここはとっても暖かい。そんな日々が目を閉じると浮かぶんだ。
ここでの方が私は幸せに成れるのかな？」

透明な滴が頬を伝ってた。泣いているのに笑ってる。セツリもその答えを出せる訳がない。だってそれは選んだ先の未来にしか無い物だから。
けれど放さない為には言わなきゃ……何か、何か！

「それは……」
「違うとでも言う気？　君にそれが言えるの？　本当で確実にリア

ルでこの子を独りぼっちにしないとも言い切れない君がね☆」

僕は何も返せない。助ける事、救う事、それは一体どれだけの願いを背負う事なんだろう。

ほどけ掛ける結び目（後書き）

第九十二話です。
いよいよセツリを賭けた決戦の始まりかな？　そしてシクラ達の秘密にも迫ります。セツリはどちらを選ぶのか……リアルか幻想か。まあどっち選んでもスオウのやる事に変わりは無いと思えるけどね。
なのでスオウ君にはまだまだ元気一杯に頑張って貰わないと！主人公だし！
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではまたです。

王家の探し物（前書き）

俺達はダンジョンを進む。真っ暗な中を松明を掲げて、さながら昔のＲＰＧ風にさ。ここにアルテミナスを救える筈のカギが有る筈なんだ。発生してまだ一度も達成されてないクエスト。

アルテミナスの王家に連なるそのクエストでは前々からそんな力が手に入ると言われてた。このＬＲＯに数本配されてると言われてるバランス崩し。その力に俺達はもう、頼る以外に無くなっている。

でも俺達は思う。このまま……それを手にするのがグラウドでいいのか？　ってさ。

王家の探し物

今、俺たちは薄暗い迷宮を進んでる。頼りに成るのは手に持つ松明の明かりだけ。その火の揺らめきに合わせて、俺達の影も壁や地面を這うように揺れている。

肌を撫でる冷たい空気の流れ、さっきから不意にヒューヒュー聞こえてくるのは明らかに風の通り道があるからだろう。

そういう風に造られてるって事か。俺達が入ってきた場所から風がここまで入ってこれるとは思えないからな。このダンジョン、正式名称『試しの迷宮』は王都アルテミアスの真下に広がる地下迷宮。

入り口はアルテミナス城の中にあるから風が入ってくるなんてあり得ない。このＬＲＯのサービズ開始時からあるダンジョンだが、ここはまだ殆ど攻略されてないのが現状だ。

てか訪れる事がまずないからな。アルテミナスの地下っていうとてもお手頃な場所だけど、狩りには全く持って不向き何だ。

まず入る度に構造が変わるやっかいな仕様で、それに加えてモンスターの出が悪い。てか殆ど出くわさない。けれどいろんな厄介な罠が有ったりするから、一度入ると二・三時間迷う羽目に成るってのを良く聞く。

にわかには信じ難いが、一日出られなかったって事もあるらしい。その場合の究極は何とかモンスターを見つけて殺して貰うか、自身に毒でも盛る事だそうだ。

ログアウトじゃまた入っても同じ場所のままだからな。だから戦闘不能でゲートクリスタルへ飛ばされる他ないんだ。

けれどそんな厄介な場所こそ好む奴らも居るわけで・・・いわゆる攻略組って奴らだな。後は世界の全ての目測を企む集団。確か『世

界図絵』って名前だったか。
純粋にゲームの攻略の為の奴らと、そのためだけに命を張ってでも世界の果てまで行く奴らのおかげで、ある程度の情報がある。

まあ、普通にマップって行った場所は埋められて行くもの何だが、彼らが造る地図は詳細が売り。何と立体表示するからな。最初からあるのは古臭い紙型なんだ。
ホログラムっていうんだっけか？　そう言うので表示して、どんなモンスターが出るかどこに宝箱があるかどんなトラップがあるか、それを詰め込んでるんだ。
だから効率やらを徹底的に求める人は殺到する。結構売れてるって聞くし。

そしてそんな世界図絵の地図が今も絶賛活躍中だ。先頭を行くレイアードの一人の掌にはゴルフボール並の球体がある。普段は曇り空の雲が流れてるそれが、今は青い光を放って三十センチ四方の場所に『試しの迷宮』の詳細な地図を表示してる。
そしてそれに従って進んでる……筈なんだが。

「なあ、かれこれ一時間は歩いてるよな俺達」
「そうだね。でもこれくらいは聞いてた通りって言うか――きゃ！」

唐突にダンジョン内に響いた悲鳴。みんなの視線が俺に集中してる。それもその筈、だってアイリが粋なり俺の腕にしがみついてるからだ。

「どうしたんだよ一体？」
「ね……ネズミが」

ネズミって、まだそんな物が怖いのかアイリは。てかＬＲＯって

いるのかそれ？　って物まで再現してるよな。
俺は仕方ないからアイリが安心出来る様に頭を撫でて見た。何て髪の毛サラサラしてんだろコイツ。
「ネズミぐらいでそんな……もっとグロいのモンスターにいただろ？」
「違うの！　ネズミがね、何かウネウネしたものくわえてたぁぁ！」
そう言って涙目に成ったアイリが上目遣いに俺を見る。
（うわ、やばい……超可愛い）
思わずそう思うのも仕方ないだろ。アイリは怖がってるけど、俺は何だか和む感じだ。てかウネウネって何？
「ミミズとかじゃねーの？」
取り合えずウネウネって言えばミミズだよな。するとアイリは耳を塞いで叫ぶ。
「きゃー！　ミミズって言わないで！　ダメなのダメなの。あれだけは絶対にイヤー！」
もの凄い拒否反応。女の子でミミズが好きって言う子も居ないとは思うけど、ここまで苦手って言う奴もあんま居ないよな。
偶に計算高い奴も居るけど、アイリはそんな奴じゃないし、てかやっぱり異常だろ。ここまで嫌われたらミミズだって悲しむんじゃね？
ブンブンと俺まで一緒に揺らされる。何か周りの奴らの白い目が俺に向いてるぞ。それに異様な殺気も感じるし。これは一刻も早く

アイリを落ち着かせた方が良さそうだ。

「落ち着けアイリ！　大丈夫だ！　もう何にも居ないから」

「ホント？」

グスっと半ベソ状態のアイリが見つめるから、俺は精一杯コクコク頷いた。これは俺も早く離れた方が良さそうだ。

このミッションにアルテミナスの運命が掛かってる・・筈なのに、うっかりと目的を見失いそうになる。それだけアイリの泣き顔は強力だ。女の子の涙って色々男には毒だよ。

そして周りを見回して何も居ない事を確認したアイリは、ようやく俺の腕をがっちり掴んでる事に気づいたらしい。

「あわっわ……ごめんねアギト。皆さんもお騒がせして済みません」

振り返って丁寧に礼するアイリ。やっとで解放された。けど何か名残惜しい様な――でもどっかのバカに後ろから刺されたくはないから今は残り香で我慢我慢。

「お遊び感覚とは笑わせるな」

「むっ……」

そんな事をぼそっと言ったのは、我らがレイアードのリーダーグラウドだ。最近は侵略で目一杯暴れられるからって最後で負けてれば気分良くないらしい。

それに徐々にグラウドの呼びかけにも応えなく成ってきてるしな。まあ結果を見ればそれも仕方ない事って言うか、当然なんだが。

偉そうなことをのたうち回る癖に結果は全然付いてきてないしな。それにそろそろグラウドの無能っぷりも知れ渡ってるだろ。

今までは勢いというか、少しは持ってそうなそのカリスマ性とかで率いてきたが、そのメッキも今や危ない。けれどグラウドが居なければ、後はなし崩し的にアルテミナスが崩れるのも見える。

今はまだ……だけどな。犬猿の仲に成りつつあるアイリとグラウド。そんな二人だから、んな事言われたアイリはちょっと目くじらたてる。

今にも火種が燃え上がりそうなそんな感じ……その時、アイリの開きかけた口を征するように前から腕が伸びてきた。

「押さえろアイリ。まだ早い。決めたのはお前だろう」
「う……早いって私は、まだそこまでやるとは……」
「そうかな？　私には奴にこれ以上の期待値は見えないがな。そうだろアギト」

急に何振ってんだよガイエンの奴。それに何か悪い顔してるぞ――ってそれはいつもか。アイリもこっちを見てるし、何か言わない訳には行かないな。

「まあその通りだが、過激な事なんてアイリはしたくないんだよ。アルテミナスが守れれば良いんだから、変に煽るなよな」
「だが、やりたいことは自分でやるべきだと思うがな。タイミングを逃せば何も出来なくなってしまうからな。分かってるはずだろお前達」

そう言ってガイエンは俺達を見据える。何だこいつ？　煽るなと言った傍から煽ってじゃん。言ってることも分かるが、タイミング……それが今か今回か……それをアイリは判断する気だろ。

「ガイエンもアギトも心配してくれてありがとう。でも……もう少

し待ってて。だってみんなで出来るのならそれが一番だもん」
アイリは優しい。いつも誰かの為に身を投げ出せる奴だ。だから俺はそんなアイリを守りたいと思う。誰かの為に……みんなの為にアイリが我が身を犠牲に晒すなら、その痛みを俺は受け止めたい。
アイリの優しさが届くようにさ。
「俺はいつだってアイリを信じてるよ」
「ふん、腰巾着が。まあいいさ。でも覚悟はしておけよ」
そう凄むガイエン。だけどアイリは俺をちらりと見てこう言った。
「もう覚悟は出来てるから大丈夫」
あの日確かにアイリは言った。『この国を守りたい』と。その覚悟はあの日にしたんだ。だからアイリは笑ってる。

「こそこそと相談事は終わったか？」
「そっちこそ、最深部へのルートは分かったのかよ？　これ以上迷わせるなよな」
何か感づいてる気配のグラウド。だけど何でも無い風を装って俺は話を持っていく。てかこれ以上こんな暗いところにいたら気が滅入る。
それに何の為に高い地図を買ったんだって事になるしな。
「ふん、この地図でも全てのダンジョン生成パターンを記録してるわけじゃない。ここは勝手が違うんだからな」

「なら、どうするんだよ？」

運か？　運でも使う気かこいつ。元々そんな頭使うタイプでもないし、いざと成ったら棒倒しの要領で進みそうだ。

毎回変わるダンジョン生成の仕様が仇になってるのか。それでも百通り以上は網羅してる筈と聞いたけどな。この目に見える範囲で殆ど変化しない壁と床と天井の作りの中、地図を頼りに出来なきゃ五秒で迷うぞ。

「こうなったらこの脆そうな壁でも壊して進むか？」

そういってこんこんと壁を叩くグラウド。早速地図捨てやがった。そして原始的に暴力的な事言ってやがる。

「ふけるなよ。こういう迷路じみたもので壁なんて壊せるかよ。大体ダンジョン内のオブジェクトは基本破壊不可だろ」

こんなの一般常識だ。何でもかんでも壊せたらリアリティとかが壊れるわ。クエスト的にも問題だしな。だから壊せるわけ無いと思うが、グラウドは自身の武器を取った。

「知ってるかアギト？　ＬＲＯのオブジェクトは許容量を越えるダメージを与えると壊れるらしいぞ」

「そんなダメージ、そうそう叩き出せる物じゃないだろ」

「お前達にはな。だが俺のスキルと武器はそれを出せる要素がある！」

暗い迷宮に機械音が響き出す。そして何回も打ち付けるカートリッジが火花を散らしてる。こいつ……マジでやる気らしい。

確かにスキルを加算できるグラウドの武器ならそれが可能かも知

れないが、それって無限に加算出来るのか？　そんな事を考えてる間にもグラウドの槍からはもの凄い熱が放出されている。

「行くぞおお！！　離れてろよテメーら！！」

「あのバカ！　アイリ！」

俺はアイリを庇うように動いた。そしてその直後、爆音と煙が辺りに轟き立ちこめる。握っていた松明の明かりさえも煙に封じ込められる様に光を奪われて行く。

「ケホッコホ……どうなったの？」

「分かんないが、あの音はもしかするかもな」

信じられんが、この煙やあの音はそれを想像させる。煙たい暗い空間に浮かぶ幾つ物丸い光は示してる。そして前の方には未だ火花散る槍が微かに輪郭を現してる様な・・しかし、地下だからなかなか立ちこめた煙が拡散しないな。

微かに流れてる風だけじゃ心許ない。こうなったら――

「アイリ頼む」

「そうだね、待ってられないよこんなの」

――アイリの魔法で一気に流すほか無い。了承してくれたアイリは早速詠唱開始。オールマイティな魔法剣士してるアイリは本当に便利だな。

ある意味、ＬＲＯ中の誰もが「こう出来たら良いのに」と思う事を実現してる。アイリの奴は当たり前みたいにやってる魔法と剣技の混合戦闘。けれど実際は簡単なんてもんじゃない。

誰もが出来るなら、誰だってやってる筈の技術だからな。でも出来ないのはＬＲＯの魔法は詠唱が必須ってのがネックになってる。

詠唱の判断はシビアで一文字の間違いも許されないし、しかも戦闘で有益に使える魔法なんてなるとそれなりに長い。
それに詠唱の言葉って独特なんだ。それを攻撃したり避けたりなんだりやってる間に剣技系のスキルと使い分けるってなると、脳が一つじゃ足りないくらいだ。
そんな考察をしてると、詠唱が済んだアイリが魔法を発動させる。通路一杯に剛風が吹き抜けて一気に煙をかっさらって行った。

「よし、煙は晴れたよアギト」
「ああ、でももうちょっと弱い魔法でも良かったんじゃないか？耳がキンキンするぞ」

てか、風ってよりも衝撃波に近かったような……そこかしこで小さな悲鳴が聞こえたぞ。まあ、攻撃魔法だろうしこんな物なのだろうけどさ。
それに最悪なのは松明が消えてる事だな。

「おいアイリ、何にも見えないぞ。意味なくないか？」
「大丈夫です。グラウドの位置は確認できますよ」

確かにグラウドの槍は光ってるから分かるが壁が壊せたのかは全く持ってわからん。今度は火の魔法が必要だな。そう思ってると火花散る槍の側から声が聞こえてきた。

「ふん、なかなか持って頑丈だな」
「なんだ、要するに壊せなかったって事か」

まあそうそう壊せるように出来てる訳なんてないんだが。すると俺の言葉にグラウドは負け惜しみのような言葉を返す。

「もう一度やれば壊せそうだ。感触で分かる。壁にヒビも入ってるしな」
「ホントかよそれ」

ここからじゃ壁は見えないから確認できない。だけど取り巻きどもはグラウドの気持ちを煽る事しか言いやがらねえ。そのせいで再びスキルの加算に取りかかるグラウド。

「次こそぶち抜いてやる！！」

そんな声と機会音が再び膨れ上がってる。その光で暗闇にうっすらと奴の姿が浮かび上がってきた。そして同時に壁も照らされて見えてくる。

「マジかよ……」

思わず出た言葉。それはグラウドが打っ叩いた壁に大きな亀裂が入っていたからだ。間違いなんかじゃない、確かにその壁には大きな傷が付いてる。

「うらあああああああ！！」

そして二撃目がグラウドの手によって再び叩き込まれる。するとその瞬間だ。同じように轟音と爆煙が木霊するのは勿論だが、異変が起きた。
貫通したんじゃない……床・天井・壁――全てに細い光が流れ出した。

「おい！　何が起こったんだ？」

「動じるなアギト！　何かが起こるんだろう。貫通した感触はあったぞ」
「そのせいだろ！！」
何冷静に語ってんだこいつ。こういう所は有る意味大物らしいが、何も考えてないだけの様な気がするな。次第に細い光は量を増していく。
「これって……グラウドが無茶やったせいでバグってるって事じゃないよな？」
「もしそうなら、私たちはＧＭに呼び出されるかもな。最悪出入り禁止とかの処分が」
「そ、そんなのだめ！」
ガイエンの冗談めいた発言を真に受けるアイリ。怒られる事はあっても最悪までは行かないだろう。いくらバグってもそこまではされない……と思う。てか信じたい。
すると光の線で輪郭を表す様に、真っ暗だったダンジョンの全容が見えてきた。そしてそれが組変わってる？　これって……
「まさか俺達が居る中でダンジョンが組み替えわろうとしてないかコレ！？」
「そうみたいだな」
確か入る度に変わるダンジョンが入ってから変わるなんて、ますます分からなくなりそうじゃないか？　どうなるんだよ俺達は。
目的の場所までたどり着けるんだろうか？　そう思っていると組上がったらしいダンジョンは光を納めていく。今度はいったいどんだけ複雑になってんだろう。

「はれ？」
「何やってるのアギト？　さあ行こう！」
何かみんな躊躇なく真っ直ぐ進んでるんだが何故だろう。一日中迷うかもしれない複雑な迷宮は？
「アホ面してるな貴様。見てなかったのか？　組上がったダンジョンは単純明快だぞ」
「単純って……」
だからこんな堂々と歩いてるって事か？　そういえば最後まで俺は見てなかったな。組上がる所を見てれば透けてたしルートが分かったかも知れない。
「直線だったよ」
「はあ！？」
直線ってあり得るかそんな事？　確かにさっきから暗闇の中をズンズン進んで曲がろうと誰もしないが、だからって直線？
迷宮はどうしたんだよって言いたい。組上がりがランダムだからこういう事が起こり得るのか？　それならこれは何千通り・何万通りと有るかも知れない組み合わせの中のアタリって奴かも知れない。
「直線ってマジ？」
「ああ、だから単純明快だ」
ガイエンに確認を取ると先と同じ言葉が返ってきた。しかも振り返りもせずに。
「俺に感謝するんだなアギト。これで迷う事など皆無だ！　わっは

っはっは！」

何かグラウドの奴が調子づいてるな。それに認めたくない。今更おまえの事なんて。だからこう言ってやろう。

「ふざけるな。たまたま偶然の産物じゃねーか。奇跡の様な出来事だろこれは」

「その奇跡も踏み出す奴にしか訪れない事を知れアギト。お前はお前は型にハマってないようでキッチリはまり過ぎなんだよ」

上機嫌なグラウドの言葉に何か言葉を飲み込む事しか出来ない。俺は無難ってか？　だけどそれを否定出来ない自分が居る。

「貴様も言うようになったな」

うん？　何かガイエンが言ったような。けれどそれは誰に向かってだ？　背中しか見えない俺には分からないが、グラウドがサッと前に向き直った？

それに何か姿勢が正されてる様な……

「でも奇跡でも何でも良かったよ。あのままじゃ本当に一日迷ったあげくに死亡フラグだったもん」

「なんだ？　死亡フラグなんてこっちの言葉も使える様になったのかアイリ？」

「このくらい使えるよー！」

アイリとガイエンが少し前で話し出すと、グラウドの緊張が解けた様な気がした。何だったんだろう今のは？　少し変な雰囲気だった気がする。

けれどガイエンは俺達が来るまでレイアードでも浮いてた奴でグ

ラウドともソリがあってない様だった。そこに何か有るとも思えないが――

「ちょっとーアギトもガイエンに教えてあげてよ。私の成長っぷりを！」

「ん……ああ、所でアイリってミミズが苦手なんだな。知らなかった。何で？」

「ええ？　唐突な話題転換……私の成長なんて語る価値も無いって事だね」

――肩を落とすアイリを見てるとそんな事は直ぐに忘れた。よく考えなくてもどうでもいいし。そしてどうでも良い話が続く。

「ミミズってね……地球外生命体なの」

「何言ってんだお前？」

また訳の分からない事を言い出すアイリ。面白い頭してるな本当に。

「私は知ってるの！　あのウニュウニュしたやつらは鼻から体内へ進入して脳へ……そして人体を操るんだよ。知らない？　そんな映画観たもん！」

「それは映画だろ」

「でもママが『こんなミミズがいないって保証は私には出来ないわ……』っていったの。それ以来、いつか出会うかも知れないそんなミミズを警戒してるの！」

「無駄な事に神経使ってんだなお前。だからどっか抜けてるのか」

変な子だ。変な子が目の前に居る。今まではもしかしてと思いつつも止めて置いたその評価を、今はもう止まらせる事が出来ない！

そんなアホな会話をやってるといつしか前方に何かが見える。あれが最深部？　たどり着くとそこには壁一面の彫像が掘られてた。
それもクリスタル……しかも淡く青く光ってる。

「ここが最終地点か？　別に何も無いって訳じゃないんだな」
「こんな彫像何の役に立つ。俺達は王家の力を手に入れに来たんだ。お前も付いてきた事を無駄にしたくなければ何か探せ。
ここからは未知だぞ」

そのグラウドの言葉で全員で“何か”を探す。何も手掛かりがないのに見つかるわけ無いが、怪しさ満点なのがこの壁一面の彫像。
何だか何かを表現してるように見える。それにここだけクリスタルって何か違うんだよな。このクリスタル……天井を突き破ってる様な？
全貌がどうか分からないがかなり大きいのかも知れない。それならこれを守るために作ったようなダンジョンだったのかも……
その時、アイりが何かに気づいた様な声を出す。

「この彫像って城に有る絵に似てる。確かタイトルは『カーテナの光』っていう……」
「なるほど、その絵は知ってるぞ。カーテナ、つまりそれが手に入る王家の力！」

そこでグラウドは有る物に目を付ける。それは剣……騎士の国アルテミナスの力はイコールを剣で結んでる。

王家の探し物（後書き）

第九十三話です。
本当はこの話で衝撃の展開！　てのをやりたかったんだけど、なんか長くなっちゃいました。加速しなきゃいけないのに……でも、ここが終われば一気に過去編は集束できるかな？　って感じなので頑張ります。
では次回は土曜日にあげます。それでは～。

ごちゃごちゃでぐちゃぐちゃ（前書き）

選べばない……選ばせれない僕達の前に、また一人厄介な奴が現れる。シクラと同じ存在であと数人はいるらしい柊だ。奴は現れて早々辛辣な言葉を僕に浴びせる。

だけどこんな所で諦めて何か居られない。だから僕も必死に反撃をした。けれど僕達のそんなやり取りで一番ダメージを受けていたのはセツリ本人だった。

僕達はそれぞれの場所で、セツリの居場所を否定してたんだ。

ごちゃごちゃでぐちゃぐちゃ

「ひ……一人に何かさせないさ」

弱々しい。自分でもそう思う声がこの箱庭に微かに響く。それは言わなければいけないことで、出なきゃセツリは向こうに取られる。どこまでが救いや助けなんて分からない……けど、それを目指す事は今の僕にだって出来るはずだ。そう思って、必死に絞り出した言葉の筈だった。

だけどそんなひ弱な声は、直ぐに新たに現れた声によって否定される事になる。

「何が一人に何てさせないなのかしら？　貴方の今のその言葉にどれだけの重みと信頼が出来るの？　絶対に……が足りてないわよ」

僕は目を見張った。言葉にもだけど、その現れようにもだ。何で……一体そんな所から？　って場所に柊、奴は居た。

僕の様子を見て取ってキョロキョロと辺りを見回して居たセツリもそれに気付く。そしてそのセツリの視線のやりようで僕の後ろ側に居たリルレット達も気付いた様だ。

「ヒイちゃん……湖を歩いてる」

まさにその通りだ。呟いたセツリの先には光を水面で反射する湖の上を、さも当然の様に歩いている柊が見える。本当に信じられない事をやる奴らだな。

当然後ろのリルレット達もざわついてる。微かな波紋を水面に作りながら、奴は湖畔のテラスのこの場所に真っ直ぐ歩いてきてる。

「絶対に……なんて分かるかよ。けれど出来る限りの事はやりたいし、それにさっきからお前達の言う事は飛躍し過ぎなんだよ！」

一生とかそんなの分かるわけ無いじゃないか。いつか一人になんて、それが本当に悪い事なのかよ。向こうでもセツリがずっと僕と居てくれる保証なんて、僕にだって出来ないじゃないか。

「そんなのだから、リアルは人は……彼女にとって辛い場所なのよ。貴方は考えたことある？　不覚定な未来を選べる人達の愚かさを」

「それの何が愚かなんだよ。未来なんて大抵不覚定だろ。運命が僕らを支配してたとしても、それが見える訳じゃないんだ。

だれだって一分一秒の未来を手探りで進んでる。それは自分自身で今より先の自分が幸せであれる様に足掻いてるからだ！　だからそれをやめる事は、生きることを諦める事と同義だろ」

諦めて欲しくないから、未来へと進んで欲しいと思う。そう、それはセツリもだ。ここじゃセツリの未来はもう長くない。

三年という時間は元々弱い体を限界に近づけてる筈だ。魂の無い器……それはプレイヤーモドキ達の時に思った事だけど、リアルで眠り続けるセツリはまさにずっとそんな状態じゃないのか。

セツリの意識……魂は今目の前に居る。居続けてる。もうここに根を張りだしてる。それは僕のせいかも知れないが、でもだからって器を無くした時、魂だけがＬＲＯに残り続ける何て考えられない。

つまりはセツリがここを選ぶって事は明日を諦めてるって事じゃないか。

柊はゆっくりとした歩調でようやくテラスに足を踏み入れた。コツン……と初めの一踏みがやけに大きく際だって聞こえた気がする。

多分それは僕達が奴に注目してたからそう感じただけかも知れな

い。でもその存在感は、近くに来て異様に増した気がする。
結構な割合でニコニコとぼけてるシクラとは違って、柊は周りに張りつめた様な空気を作り出してる感じなんだ。だからそのせいもあるな。

力強い事を言ったつもりだが、ゴクリと唾を飲み込んでしまう。そしてセツリに近づいた柊は初めて見せる優しい笑顔で、その涙を掬った。
外見的に柊の方が幼く見えるが、頼りない姉を慕う妹の様な暖かさがそこにはあった。

「泣きたくもなりますね。スオウは何も分かってないんだから。愚かな人間の一人ですよ。もうあの人と関わるのはやめてください。私たちが居ますから」

優しく心温まりそうな光景でも聞こえて来る言葉は辛辣だった。あいつは僕の言葉を聞いて無かったのか？　ちゃんとしたこと言っただろうが。
柊の言葉を受けてこちらに寂しげな目を向けるセツリ。そんなセツリを取り戻す為にも言葉を繋げないといけない。
結局はセツリが本気で戻りたいと思わせられなきゃ、僕達はこいつらに勝なんて出来ないと思うんだ。

「ふざけるなよお前等！　何が分かってないだよ。セツリも、そいつ等の言うことは全部正しいのか！？」
「わた……しはね」

言葉を探すようにセツリは視線を巡らせる。僕、シクラ、柊へと。けれど言葉はなかなか出てこない。その時先に柊が僕を睨み付けて口を開く。

「だから、そんな事を言ってる時点でアンタは何もセツリの事を分かってない。愚かな人間。この子の前で気安く未来を選ぶなんて言わないでよ。
初めから終わりまで、決まった場所で選択なんてない人生だってあるの。アンタ達が愚かでも愚鈍でも、不覚定な未来を選べるのは光を知ってるから……だからアンタ達は分からない未来を選んでいける。幾ら愚かでも」

なんだコイツ？　愚か愚か言ってるけど、そんな僕達を疎ましく思ってるって事なんだろうか？　何だかそんな気がする言葉だったような。
そしてそれは暗にこう言っていたんじゃないか。

「セツリにはそれが出来ないとでも言う気かよ」

その言葉を聞いてセツリの肩は少し揺れたかも知れない。そしてシクラに抱かれるセツリを一瞬見て、柊が言い放つ。

「出来ないわ。だってセツリは光を知らないもの。言ったじゃない、リアルの事で思い出すのは辛いことばかり。そんなリアルに、愚かな選択に希望を信じて戻るなんて事は出来ないわ」

柊の言葉が痛く胸に突き刺さる。それはそうなのかも知れない。セツリの境遇は決して恵まれてるなんて言えない。ずっと病院で過ごして、肉親はただ一人。友達も居ずに、ていうか学校にさえ行ったこと無いんじゃないか。
そんなセツリだからこそ、リアルで思い出すことは辛い日々だけ……確かにそれじゃあ未来に希望を見る事なんて出来ないかも知れない。

どこかでセツリは、もうずっと諦めてるのかも。

「けど……それじゃあお前等は確実にセツリを幸せに出来るとでも言うのかよ」

「出来るわ。だってここはこの子の世界。そして私達が居れば出来ない事なんて無いもの。ここにはセツリが欲しがった物全部が詰め込まれてる。

つまりここに居ることがセツリの幸せ。そう思ったからこそ、三年前にあれをやったんだもの……ね」

そう言って柊はセツリに目を向ける。同意を求めるように。その視線に、言葉に、セツリは何を言う気だろう。少しづつ開いていくピンク色した唇。

けれどあまり良い想像は出来ない。あんな辛そうな顔をされたらさ。だから僕はセツリが声を発する前に言葉を紡ぐ。

このまま素直に認めさせちゃいけないんだ。

「だけどそれは間違いだったんだ。確かにＬＲＯはセツリの望んだ世界そのものかも知れない。ここなら体も動くし、冒険だって出来る。

仲間だって長くいれば出来るだろう。けど、ここは誰もが願う仮想なんだ結局。それはセツリにとってもそうなんじゃないか？　ここで育んだ友情や絆が幻だなんて言わないけど、本当にそれを実感できるのはリアルがあるからだ。

だからここは全部を確かにくれるかも知れないけど、セツリは小さな不安をずっと抱える事になる。本当の光を、友情とかを知らないセツリが仮想をどこまで信じれる？　きっとそうなる。それでもここにいれば幸せか？　いや、居続ければか」

僕の言葉に今度は柊が初めてちょっと苦い顔をした。コイツの言

葉を使ったのが効いたのかも知れないな。それに仮想だからこその不安ってのはぬぐい去れない物なのは本当だろう。
だってここじゃ大多数の人が分厚い仮面を被ってる様な物だ。姿形は勿論、リアルでは出来得ない自分を演じてる人達だって沢山居るって聞く。
まあある意味さらけ出しでもあるんだろうけど、近くなるに連れてどうしても思う事がある。どんな人なんだろうってさ。
けれどここに居続けるなら越えられない壁がある。仮想と現実の壁。その世界で別々の人とでも認識すれば良いんだろうが、そんな風に割り切れるかが問題だ。
僕は柊を飛び越えてセツリに視線を向ける。柊を封じてもセツリがそれを納得しないと意味ないからな。そして僕の視線にセツリは迷ってる。そして絞り出した言葉は予想外な物だった。

「そんな事言われたら……私はどこにも居ちゃいけないって事なのかな？」

「お前……なんでそうなる！？」

自虐にも程あるぞ。でもグチャグチャグチャグチャしていたであろうセツリの前でどっちがどっちだとか言い過ぎてたのかも知れない。
僕達は互いの為にリアルへ、仮想へと言っていたけど、その度にそれじゃダメ、何がいけないとか……追いつめてたのはセツリ自身だったんだ。

「だって！　だって！　リアルに戻るのはやっぱり怖いよ！　それはどうしても消えない。最初会ったときに言ったよね、私は自分が

嫌いだって。桜矢摂理が嫌いだって。
でも今はそれだけじゃなくて……シクラやヒイちゃんが言ったように私が……ううん『桜矢摂理』って言う役立たずでダメな子が……スオウに捨てられるのがとっても怖いの！」

セツリの瞳から再び大粒の涙が流れ出る。そして震える肩はその恐怖の大きさを物語っている様だ。そういえばそうだった気がする。
最初にセツリに会ったあの日。僕がＬＲＯを始めた日。アギトからの情報で僕はまだ名前も分からなかったセツリにこう聞いた。

【桜矢摂理さんですか？】

するとセツリは確かに言ったんだ。

【違うよ。桜矢摂理はリアルの私だもん。ベットから動けない生きてない私……】

自分の事を「生きてない」なんて表現するなんてよっぽどだって思った記憶がある。けど今は嫌いな自分が、更に僕に嫌われる事が怖い……それもまた、セツリは友達とかを知らないからそう思うんだろう。
「愚かな選択なんて出来ない」か……確かにその通りなのかも。セツリは誰よりもリアルの自分を知っているから、それを思わずには居られないんじゃないか。
当夜さんは肉親・兄弟っていう切っても切れない関係だけど、僕達は違うんだ。他人との関係なんてとても曖昧。
それは友達だってそうだろう。てかどこから他人で、ただのクラスメイトとかから友達に上がるのか僕でも定かじゃない。

今までの人生で『友達になりたい』とか『友達だよね？』なんて

事言ったことないし。そう考えると僕達はもの凄く不安定な繋がりの上に立っている気がする。
そして立てても、立てたことも無いセツリは僕以上にきっと不安なんだ。もの凄く細い糸で僕らは繋がってるだけかも知れない。
本当に心許なく見えるその一本の糸は知ってれば案外頑丈だって分かるけど、セツリにその経験はなくて大切に大切に扱うしか出来ない物。切れたら再び繋がる事なんて無い……そう考えてるかも。
だから余計に慎重になる。最悪の事なんて出来ない。迷惑な自分を見せたくない。だからいっそずっとここに？　じゃあ僕がそれを完全に否定できれば、セツリはこっち側に来れるのか？

「役立たずなんて――」
「でも……スオウはここに居ることも否定する」

けれど紡ごうとした言葉は弱気に弱気を重ねるセツリの言葉に飲まれてしまう。そして僕が言おうとしてたことさえも、セツリにとっては苦しみにしか成らないみたいだ。
目の前ですがりつく様に涙を流すセツリ……その涙を流させてるのは僕なんだ。

「それじゃあ、私の居場所は無いよ！　スオウは知らないから……世界から置いてけぼりにされる気持ちなんて分からないから！
イヤなのもう……そんなのは。イヤだよ……独りぼっちは」

セツリの涙が地面にあった紙を濡らしてる。インクで書かれてたのか、その紙には黒い染みがうっすらと所々に浮き出てきた
それが何だかセツリの今の気持ちを表すように見えてしまう。僕達の言葉に浮き上がってきた幾つもの不安みたいにさ。
置いてけぼりにされる気持ち。ずっとベットの上でしか過ごせなかったセツリ。窓の外だけが移り変わる世界だったのだろうか？

そしたら本当にそう感じてしまうのかな。世界に自分だけが取り残されてる様に。脳裏に浮かぶは、ベットの上で憂鬱そうに窓の外を眺めているセツリの姿。
桜の花が散り、長い雨が続いて、入道雲の空が見え、色づいた葉が木枯らしに舞い、最後に世界は純白に覆われる。けれど外を見続けるセツリの姿は変わらない。

「ここなら……セツリは置いてかれないのか？」
「……ここなら、私も同じように歩けるよ」

誰かの幸せを、他の誰かが決める事なんて出来ない……と思う。そう傾きかけた。リアルがセツリにとって辛い場所なのは知っていたんだ。
だけどずっとその気持ちは取り合えず置いといた。だってそれよりも命は重要な筈だったからだ。けどセツリはリアルで生きてなんか無かった。そう言った意味がようやく分かった。
でもＬＲＯには僕が想像できなかった姿が見える。ていうか知ってる。それは共に歩いてきた時間だ。

セツリは確かにここで生きてる。それを再認識して、僕は拳を握りしめるのを止めた。てかなんか……僕も分からない。
僕の頭もゴチャゴチャだ。それで良いようにも思えてきたし、やっぱりそうじゃない気もする。その時、ずっと口を噤んで僕達の会話を聞いていたシクラが唐突に口を割った。

「これ以上は何回言葉を重ねた所で同じだね☆」

この場にそぐわないと思える変に明るい声だった。いつものコイツの声と言えばそうだけど、今だと余計おかしく感じる。

だから僕は睨みつけてこう返してやった。震える鼓動を必死に隠すようにして。

「何が……どう言うことだよ」

「だって君は今、諦めた。答えがない。芯の無い言葉なんて全部が嘘っぽいよホント……それでせっちゃんの不安や痛みを取れる分けないよね☆　だからおしまい」

「――っつ！？」

見透かされた気分だった。傾いた自分の気持ちは本当だから何も言い返せない。そしてこの僕の行為や気持ちが何を意味するのか……それを次のシクラの言葉で思い知らされる。

シクラは僕と向かい合っていたセツリに後ろから抱きついてその耳元で、その色香漂う唇をはっきりと動かす。まるで聞き逃す事がない様に。

「何だかつまんないね。そして残念、気づいてる？　君は今この瞬間、諦めたんだよ」

その言葉は一瞬、自分のどこよりも深い場所に突き刺さった気がした。そして耳元で囁かれたセツリの眼球は、瞬きという行為を忘れて見開かれてる。

そしてそんな中、シクラは追い打ちを掛けるかの様に聞きたくもない言葉を紡ぐ。

「君はこの子を、せっちゃんのこの手を離した。助ける事・救う事を諦めた。理由は何かな？　面倒くさく成っちゃった☆」

コイツはどっちを攻めてるんだ？　僕なのか……それともセツリか？　両方なのかも知れないな。そしてやっぱり何かが突き刺さっ

たのは気のせいじゃない様だ。
痛い、どこかが。そしてシクラが遊びの様にセツリの手をこっちに向けるその行為が苦しい。
（僕は……僕は僕は僕は……諦めたのか？）
そんな事実を心と体が否応無く拒否でもしてるかの様で、自分が今どこに立ってるのか分からなく成りそうだ。だってセツリは……セツリを……助けることがずっと目的だった筈なのに。あれはそういう事なのか？
面倒くさく感じたか？　すると頭はイヤな答えを弾き出す。
（そうだったかも知れない）
そんな答えを出してしまう。いろんな事がグチャグチャになって……何が正しくて、何がセツリの為なのか分からなくなって……自分がどうしたかったのか……それをセツリは望んでないかも知れなくて……そして僕は、諦めたのか。
あの一瞬。拳から力を抜いたあの瞬間・・僕は全てを投げ出した。頭を空っぽにした。それは諦めたって事だったんだ。
それはシクラの言うとおりじゃないか。こちらに向けられている手が震えてる。白くて華奢な女の子の手だ。守ってあげなきゃと思わせるそんな手を僕は放してしまった。
（まだ……間に合うのかな？）
だけど僕はそう思い、セツリの手へと自分の手を伸ばす。もう一回……もう一度とそう唱えながら。後少し、後少しでまた繋がれる。まだ間に合う筈だ。
必死だった。何も考えてなんか無かった。一度放してしまった罪

や、罪悪感……そしてその大きさに追い立てられてただけだ。
触れそうな位置……けれどその時、僕の手を扇子が遮った。ウグイス色をしてて紫陽花が描かれた扇子。
持ち主を見るとそれは柊だった。彼女は僕を強く睨んで高圧的に言い放つ。

「アンタ、何する気！？　ううん、何が出来る気でいるの？　その手を取って、どうしたいのよ！」

その言葉に僕は止まった。何が出来る？　どうしたい？　何一つ僕は解決何かしちゃいない。こんな状態でセツリの手を取って、本当にどうしようって言うんだ。

「僕は……」

霞消えていく様な声しか出ない自分が情けない。声に張りも増してや精気も感じれない。今まで感じなかった重さが、この手にのし掛かってる気がする。

「ヒイちゃん」

そう言って首を横に振るシクラ。すると柊は扇子を退けた。そんな邪魔も、隔たりも今の僕達には必要ないって事か？
はは……でも何だろうな。扇子は無くなったのに、僕の手は進もうとしない。それどころか下ろしたがってる様にさえ感じる。
何かが絡み付いて下に引っ張られる様な……でも、それに従ったら今度こそ次はない気がする。それに僕しか居ないと言われたんだ。
僕しか……セツリを救えない！　だからここで下ろすなんて――

「私は……諦められちゃったんだね」

――そんな絞り出す声は目の前から聞こえた。視線を上げると、そこには「てへへ」なんて言いながら笑うセツリが居た。
そしてその笑顔を僕は見間違いだと願う。だって信じられないじゃないか。何でセツリが笑ってるんだ。そして僕は言わなきゃ成らない。「そんなこと無い！」って。
だけど声が……そんな簡単な言葉にさえ自信が持てない。

「当然だよね。だって……動けないし歩けないもん。何にも出来ない、迷惑しか掛けれないお荷物。生きてるだけでごめんなさいの存在。
そのくせ、欲張りで欲しがりで夢見がちで……お兄ちゃんには一杯迷惑かけたな。もう……自由にしてあげたい。私に出来る事ってそれだけだから……良いよね……スオウ」

向けられた笑顔に一筋の滴が伝ったのを僕は見た。それはきっと僕が流させた涙だ。そしてその時、関を切らした様に後ろから声が流れ出てきた。

「ダメエエエ！！　そんなこと無いからダメだよ絶対！　私は知ってるよ！　スオウが言ってた事を聞いてるよ！　何でそれを言わないの！
単純じゃない！　思い出してよスオウ！」

リルレットの声に続いてみんなの声が背中に押し寄せる。僕が言ってた事って何だっけ？　単純って何がだっけ？
頭を巡るこれまでの記憶・軌跡・足跡。そこで僕は何を言っていた？

（僕は……僕は僕は僕は僕は！）

出会った人達に問われた事が幾度も有る。『何でそこまでするんだ？』って。そして僕は確かこう答えた。

「ただ助けたい！　それじゃあダメか？」

単純すぎて忘れてた事を口にした。けどこれが真実。あの頃と今、何が変わってる？　同じものを追いかけて、同じ場所を目指してるじゃんか。

なら間違ってなんか無いはずだ。僕は再び腕を進める。その手をもう一度取るために。

「忘れようスオウ……私達の出会いを」

聞こえた声と同時に、僕の手は宙を掻く。一度拒絶した手に、掴める物なんて何も無かった。

ごちゃごちゃでぐちゃぐちゃ（後書き）

第九十四話です。
これはサブタイトル通り、書いてて実際訳が分からなくなりました。助けるってどういう事で、救うって何だろうって考え過ぎて頭が痛くなりましたよ。本当に絶対に「お前を一人に何かさせない！」て言えれば良いんだけど、今のスオウにそれは無くて。
誰かを幸せにする事を約束出来る程、スオウは大人何かじゃないのです。さあて、スオウとセツリはどうなるのかで次回へ続く！
次は月曜日に上げます！　カーテナがきっと光り輝くはずの回です。ではまた。

四つの剣線（前書き）

俺達はカーテナを探し続けた。だけど何の手がかりもない。彫像も抜ける剣なんて一本もない。どん詰まり……そんな状況に業を煮やしたグラウドは再びあらっぱ追い事をしようとする。

このクリスタルの彫像を壊して中身を確認するとかさ。そしてそれにアイリが断固反対する。そして互いの国への思いをぶつけあった時、その想いに反応するように、クリスタルの光が増した。

四つの剣線

「カーテナ！　その力を我が手に！」

そう叫びながらグラウドは彫像へと手を掛ける。このクリスタルで出来た像の中に、そのカーテナが有ると思ってるって事だろう。

でもそんな単純か？　それなら前にここまで来たって言う攻略組が手にしたっておかしくは無いだろう。彼らの知識とかははんぱないって聞くし、アイリが気付いた位の事を彼らが気付かないなんて考えられない。

でも彼らさえカーテナを手にする事は叶わなかった。それが事実で結果。まだ、何かが有るはずだ。『カーテナの光』という絵は俺も見たこと有る。

てかアルテミナスに居るエルフでそれを見たこと無い奴なんて居ないだろう。だって城の一室を全部その絵が覆ってる程の物なんだ。

だけどそれだけの絵だから人物も一杯描かれてるし、それにどれがカーテナか何て銘打ってない。一番怪しいのはアルテミナスの初代女王って言われてるそのエルフが掲げてる剣だろう。

一番目立つし、それに装飾も勿論立派に描かれてたと思う。だけどまたそれも単純過ぎな気もする。だがグラウドの手は迷わずそこへ向かってた。

やっぱり単純な奴だな。てか彫像の剣が取れる訳なくね？　だけど何の手がかりも無いんだし、取りあえずは出来る事を全部試すしか無いのも事実か。

グラウドは無造作に彫像を掴んで剣を引き抜こうとしてるがやっぱり取り外し可能な訳じゃない用だ。でも何かさっきと印象が違う

ように感じる？
綺麗な彫像の中に無骨なグラウドがまとわりついてるせいかな？
その時、諦めきれないグラウドは周りに叫ぶ。
「お前達も探せ！　これだけ有るんだ。どれか取れるのが有るかもしれん！」
その言葉で躊躇っていた奴らもワラワラと彫像に触り始める。するとやっぱり何かが……
「私たちも探しましょう」
アイリの声に俺の思考は中断された。そしてガイエンもその声に続いて行く。何か引っかかる違和感がそこには有るが、それが何か分からない。
だから俺もアイリと共に彫像を調べるしかない。それしか出来ない。こんな事ならもっとアルテミナスの歴史でも調べておくんだったな。
俺は手近な彫像に手を伸ばす。どれもこれもやっぱり外れる様には見えないんだよな。全部一つの巨大なクリスタルを掘って作って有るような感じだし。
でも素直にグラウドへカーテナが渡っても困る訳で……アイツがアルテミナスの事を本当に考えてるか、アイリは知りたいんだ。
だからアイリもグラウドに負けず劣らず必死に彫像を調べてる。そしてガイエンも珍しく、その輪に入ってる。これで未だに彫像に触れてないのは俺だけか。
そう思いながら俺は彫像の剣の柄を握る。その時、誰かの声が不意に聞こえた。

「何か思ったんだけどさぁ。さっきからこのクリスタルの光……微妙に変わってない？」

その瞬間、違和感の正体に気付いた。そうだ……色だったんだ。最初は青く光ってた筈の光。それが誰かが触れる度にその色を微妙に変えていたんだ。

そして俺が触った今は……

「赤い」

奇しくも自分の髪と同じ色に成っていた。

「クリスタルの色が変わる？　どういう事なの？」

「知るか！　取りあえず触りまくって見ろ。また何か起きるかもしれん！」

アイリの考察するような言葉にグラウドはいきなり実践的手段で強行突破を試みる。とにかく何でもかんでも取りあえずやってみる奴の様だな。

まさにこいつの戦闘スタイルその物の直撃前進。全ての傷害は壊せるとでも思ってそうだ。でもいつもそんなんで良い分けない。

現にグラウドの後先考えない無謀な突撃戦略のせいで連敗続きなんだからな。

グラウドの言葉に取りあえずで触りまくる奴ら。だけどこれ以上は変わらない？　それか彫像に寄って色が分けられてるとかか？

でも隣の奴を触っても赤いまま。これ以上は何も起きないみたいだ。一体何を意味してる？　またドン詰まりだな。

もっと注視して光を見てれば何か分かったかも知れないのにミスした。今ここに居るのは七人。もしかしたら虹の様に変わったとか？

けど今となっては全てが憶測だ。他の奴に聞いてもハッキリとは見ていないし、どうする事も出来ない。ついでに全ての彫像を調べたが、剣は一本も抜けなかった。

『カーテナの光』っていう位だし、光も何か意味がある事だとは思うが繋がらない。すると業を煮やしたグラウドが再び飛んでも無い事を言い出した。

「壊して見るか。このクリスタル」

何か超軽いのりだ。こいつの行動理念は「壊して進む」しか無いのか？　するとすぐさまそんなグラウドの発言をアイリが否定する。

「ちょっと！！　何言ってるんですか！　そんなのダメに決まってます！」

「何故だ？　カーテナはこのクリスタルの中にあるかも知れないじゃないか」

「そんなの何も決まってません！」

けれどグラウドはアイリの言葉を聞く気は無いようだ。槍を手に取りやる気満々でクリスタルを見据える。そしてアイリを見てこう言った。

「無い何て事も決まってない。俺達の目的を忘れるな！　これはアルテミナスの為の所行だ！　クリスタルの一つや二つがどうした？　この国には大量に突き出てるじゃないか」

舌なめずりする顔が気持ち悪い。こいつ単にオブジェクト破壊で自分の武器とスキルの威力を確かめたいだけ何じゃないかと思える。それにアルテミナスには確かに至る所にクリスタルがあるが、だ

からこそそれを大切にしてる節がある。クリスタルの輝きはアルテミナスの輝きと言うほどだ。
言う成ればこの国とクリスタルは一心同体みたいな物じゃないのか？　それを安易に破壊するなんて言うことは、アイリに取ってはアルテミナスの輝きの一つを奪うみたいに聞こえたはずだ。
だからこそ、そんな事は認めない。

「クリスタルの一つや二つ……そうじゃない！　この国にあるクリスタルは自身で光を放って国を照らしてくれる大切なものです！
その一つ一つが、この国の輝きなのに……それを安易に壊す様な事がどういう事か貴方は分かってない！」

アイリの叫びが暗い地下空間に木霊する。けれどそれ以上の叫びをグラウドは突きつけた。

「ふざけるな！！　分かってないのはお前の方だ！　このまま何も手にせずに帰ることが罪なんだよ！　出来ることは全てやるべきだろう！！
どんな犠牲を払っても、それで国を守れる力が手に入るなら安いもんだ。そう思え！　それが正義だ！　光を支えるのも力有ってこそなんだよ！」
「そんなの違う！！　力が光を支えてるんじゃない！　光が有るから、私達は力でそれを守ろうとしてるんです！　その光が私達エルフに取ってはアルテミナスなんじゃないですか！」

振り乱れたストロベリーブロンドの髪が赤い光に照らされて、更に赤みを増してる様に見えた。アイリは大きく肩を揺らして呼吸している。
大柄なグラウドに負けない様に声を出したから、一気に空気が肺から尽きたのかも知れない。だけどそれだけの価値はあったと思う。

少なくとも俺には届いたよ。けれど当然グラウドは自身の考えを曲げるなんてしない。奴はいつだって自分が正しいって思ってる奴だから。

「そんな軟弱！　俺達の国はそんな弱々しくなど無いわ！　俺達エルフとい上位種が照らす国！　それがアルテミナスよ！！
太陽も月も、ましてやクリスタルが照らしてる訳ではない！　あの国を照らしてるのは俺達だ！！」

ガイエンは自身の槍をアイリに向けている。そして耳障りな機械音が回転を始めていた。けれどアイリは動じて何かない。
真っ直ぐに堂々とグラウドに立ち向かってる。

「そんな傲慢……そんなエゴ、貴方しか思ってない！　一人の力には限界がある！　それは貴方だってそうですよ！」
「だからこそ！　カーテナが必要なんだ！　その力があればアルテミナスの光は保たれる！　それどころか更なる高見へも昇れるぞ！
バランス崩しと予想出来るその力なら限界を超えられるんだからな！！　それを何を躊躇う必要がある！？」

勢いを増していくのはグラウドだけじゃなくて、その槍の回転もだ。それは今にもアイリへと向かって行きそうで、俺は気付かれない様に武器へと手を回す。
グラウドの上がるテンションとは裏腹に、アイリはその瞳にうっすらと涙を貯めてる様に見える。だけど別にグラウドの勢いに負かされ掛けてるからとか、押され出してるとかじゃないだろう。
アイリは本気の時、良く感極まって涙を流す。止められないんだってさ。自分じゃあ。そしてそんな本気のアイリは今日……いやあれからずっと確認したかった事を口にする。

「躊躇うのは……貴方が本当にアルテミナスの為にカーテナを欲してるのか分からないから！　アルテミナスの為と言いつつ、アルテミナスを傷つけるグラウドが私は分からない！」

ずっと考えてた事だ。グラウドの奴が言ってることとやってる事のズレ。伴わない結果に、それでもアイツは何も変わらなかった。

それは本当はアルテミナスを潰したがってるんじゃないかとも思える所行だろ。でもアイツは言い続けた。堂々とアルテミナスのエルフの為と。

それが本当に本当なら……このままカーテナをガイエンが手にしても良いとアイリは言ってた。誰が救ったって国は良いってさ。

その言葉が本物なら、カーテナさえ有れば変わるかも知れないと思ってた。だからここまでずっと見てきたんだ。そしてその答えが今出される。

「それは当然、アルテミナスの為だ。俺がカーテナを手にして最強と成ることが、即ちアルテミナスの為なんだよ！！」

それはきっと思っていた最悪の答えだった。「何だよそれ」そんな怒りが沸沸と煮えたぎってくる。そしてアイリはその場で拳を握ってた。

「そんな詭弁……そんな後付けの理屈で私は騙されません！！　グラウドは結局、自分がカーテナを手にした最強を証明したいだけ。その一番分かりやすい手段がアルテミナスを救うってだけです！　そんなついでの様な気持ちの人に！　一つの国は軽く何てない！　背負ってなんてほしくない！！」

「ならお前はどうする！？　お前が背負えるのか！？　あの国を！　アルテミナスを！！　そんな訳ないな。

人とは！　自分の目的のついでに何かを成すものだ！　俺は最強である事を証明する！　それがつまりはアルテミナスを支える事！　それが強く太い幹へとなるんだよ！」

グラウドは言葉の終わりと共に飛び出してた。そんなに距離が有ったわけでもない二人。耳障りな音と共にガイエンの攻撃は炸裂し、その強さの権化の攻撃がアイリを爆煙ごと多い隠す。

視界が消えた。淡く光るクリスタルの彫像が横に有るのは分かるが、それ以外はさっぱりだ。まあでも、気が抜けない事になってるんだけどな。

そしてやけに近くで再び聞こえるグラウドの声。

「くっくっく……はははははは！！　これで分かっただろうアイリ！！　弱さは罪だ。お前の言葉こそが、机上の空論でしかない！

弱い奴は何も守れん！　守る資格すらない！　強者こそが選び取る権利がある！　その俺がついででも背負ってやるんだ。ありがたく使わせてろよ、アルテミナスをな！！」

爆煙の中グラウドの言葉だけが上機嫌に轟いてた。こいつは結局、自分の為だけにアルテミナスを利用してんだ。自分の強さの証明……それにこいつは『最強』ってのに憧れてる。

マンガとかアニメを見て、男なら一度はそんな物に憧れるけど、その中のヒーロー達は絶対にこんな考えしてないだろう。

グラウドは自分勝手な最強しか見て無いじゃないか。自分しか見てない。この世界のエルフとして、先んじて力を持ってしまった事で酔ってんじゃないか？

強い自分……強いエルフで居ることがこいつのＬＲＯでの存在価値でも有るのかよ。だから俺はそんなこいつをくだらないと思う。やってられるかって心から思う。

そしてそれは俺だけじゃ無かった様だ。

「「テメーに自分が使われるのも、アルテミナスが使われるのもはっきり言って、ムカつくんだよ！！」」

「何！？」

二つの光の線が同時に爆煙を切り割く。赤と青……それは俺と、そしてガイエンのスキルの光だった。切れた煙の先でそれをお互いに知った。俺達はきっと同時に飛び出してたんだな。

アイリを守るためにさ。そして爆煙の中、グラウドのあの攻撃を受け止めてたのは一人じゃ無かった。知らなかった。気付かなかったが、二人だったから、止められたのかも知れない。

重なって振るわれた二つのスキルで、俺達は目の前でゴチャゴチャ叫んでたグラウドを押し返して、互いの存在にケチ付ける。

「何でお前が居るんだよガイエン？　何かテンションが上がりきらないと思ったら、その青い光のせいだったのかよ。邪魔すんな」

「邪魔だと？　はっ……それはこっちの台詞だな。貴様の目障りな赤が入ってきたせいで、暑苦しくて叶わん。最低五メートルは離れてろ」

ビキっとお互いの額に血管が浮かび上がる感覚。だって許せない、何同じ事やってんだよ。俺達は基本、仲が悪いんだ。

てか仲良くしたくないってのが本音だな。だから言ったらさっきの何て鳥肌物の出来事だ。でも何であんな状況が出来たのかって言えば、原因はハッキリしてるよな。

行動がそれを証明してる。俺達は互いに守りたかったから同じ行動を取ったんだろう。アイリっていう一人の女性をさ。

「アギト！　ガイエン！」

弾けるようなそんな声に俺達は振り返る。そこには出したけど使えなかった剣を、中途半端な位置で止めてるアイリが居た。
ちょっと怒ってるような……でも次の瞬間。二人同時に抱きつかれた。ガバッて感じでさ。そしてとても近い位置でこう言った。

「遅いよ二人とも！　潰れるって思っちゃったよ！」

何か怒られた。でもアイリの顔は笑ってる。するとこんな場所でも少し顔が綻んで……だがガイエンと目が合うと俺達は互いにそっぽ向く。
顔も意地張ってな。するとその時、吹き飛ばした方に多数の気配を感じた。拡散していく爆煙の中には無数の影。まあ無数って言うか俺達三人を除いた四人何だがな。
そいつ等がグラウドの後ろに集まってた。

「ふん、アギト……お前はアイリに付くと思ってたぞ。だが……」

そう言ってグラウドが見てるのはガイエンだ。何だか随分深刻そうな顔してるが、そんなに意外か？　あった当初かガイエンはあんたの事ボロクソ言ってたぞ。
それを考えると俺的には妥当……納得はいかんけどな。

「何だよ？　文句でも有るのか？」

見据えられたガイエンはグラウドにそう返す。

「いや……別にいいさ。そっちに付くなら潰すだけだ」

そう言ってまた槍が回転を始めた。そして後ろの取り巻く連中も、

今度は入ってくるだろう。もしかしたら予想されてたか？　グラウドの奴は一番みじかな奴らを連れてきてるし、人数も多くしてる。
でも自信過剰な奴にしては弱気な気もするから、やっぱりたまたまか？

「お前達は身を持って知れ！　力の正しさをな！　力での支配を誰もが望んでる事だとな！　それが絶対の正義って奴だ！」

その言葉と共に、リーダー権限で俺達はパーティーから外された。それは完全に俺達を敵と認めたって事だ。フールドやダンジョン内ならＬＲＯはＰＫ有り。
それは別に同じ種族にだって出来る。これで俺達は殺しあえる。上等だな。

「もう、十分だろアイリ？」

俺のその言葉にアイリは頷く。そしてガイエンを見据えて最後の思いを伝える。

「力は……責任ですよ。私は貴方にはそれが有ると信じようとしてました。でも貴方は、その力を使いたいように使うだけ。見せつける様に示すだけ。
そこには実は何の方向性もない。理性や責任……それに繋がれてない力は暴力でしかない！　そんな物の支配を私達は認めません！！　アルテミナスはそんな支配に落とさせない！　あの国は、白く綺麗で……光明で照らされるのがふさわしい。そんな国です！」

それがアイリの決断だった。そしてその瞬間だ。アルテミナスを……エルフの全てを思うその言葉に反応するようにクリスタルが強く輝きだす。

「何だこれは？」
「まさかこれが……カーテナの光？」

グラウドの声に俺の声が続いてた。そしてそれはそうとしか思えない。強く光るその光は、今まで薄暗かったこの迷宮をどこまでも照らしそうな程……これがカーテナ以外で何だと言うんだ。
まさにアイリが言った光明その物。

「遂に姿を現すかカーテナよ！！　俺の元に来い！！　俺の意志に応えろ！　その光だろう！？」

グラウドが光の中、クリスタルに向かってそう叫ぶ。どう考えたって反応したのはアイリへと思うが、この自意識過剰野郎はそんな事気にしない。
まだカーテナの姿は影も形も見えないが、こいつがここに居るとやっかいなのはどう考えたって確かだ。だから俺は井の一番にグラウドへ向かった。
そしてそして振るった槍は直前でグラウドに止められる。

「もうお前の役目は終わりだ。お前の示す国に何て、これっぽっちも同意なんかできねえよ！」
「ふん、忘れたのか？　お前は俺に負けたんだ！！」
「だから！　今度は勝つ！！」

今度こそ負けられない！　アイリの前で、二度も同じ奴に負けてられるかよ。グラウドの怖さは突進。特別な武器によるスキルの多重掛けで増す攻撃力。
だが、張り付いていればそんな沢山のスキルを一気に掛けることは出来ない。それなら何とか防げるんだ！　規格外に何てさせない。

お前が最強じゃない事を今この場で証明してやる。

槍と槍の応酬は激しさを増していく。周り何て見てる暇さえない。けれど不思議と援護も横やりも入らない。それはきっとアイリもガイエンも戦ってるだろうから。二対三だが大丈夫だろう。

ガイエンはムカつくがその強さは知っているし、アイリも更に成長してる。だから俺も過去に勝たなきゃいけない。アイツの背中を支えるためにもグラウドを越えていく！

「うおおおおお！！」

俺の槍が炎を帯びる。そして突いてきたグラウドの槍とクロスして奴へと向かう。だが間一髪体を逸らされた。けれど鎧を掠った感触。

それだけで十分だ。

「ぐあああ！！」

そんな悲鳴と共にグラウドは避けた方向へ吹き飛ぶ。何故なら俺の槍が掠った部分が弾けたからだ。正確には爆発した。そういうスキルだ。

そしてこれが初めてのまともなヒット。でもまだまだこれからだ。そう思い一気にグラウドに迫る。だがその時、グラウドの槍の一部が外れ落ちた。

そして口元も上げる仕草が見える。

「調子付くなよアギトオオオオオ！！」

「――っづ……くっ！？」

とっさに急ブレーキを掛けて槍で受ける。だが……これは！　さっき落ちた部分はカートリッジ。そしてその部分にグラウドは再びそれをはめ込んだ。
刃と柄の間が何度も打ちつける。そして膨れ上がる奴の攻撃力。それはとても体一つで受けれる物じゃない。ブースターが作動し、地面を削り俺は下がり続ける。
そして遂に限界を超えたダメージに寄って、炎の槍はへし折られ、幾重のスキルの重なりが俺の体を貫いた。クリスタルに突き刺さり、今もＨＰは減り続ける。

「ダメなのか……」

そう思った時、二つの影が見えた。だが捉えたのは一つだけだ。自然ともう、そうなるんだ。

「「アギトオオオ！！」」

そんな声と同時に俺は残った槍の残骸に力を込めた。そして四つの武器が軌跡を描いて一つに集まる。俺かアイリかガイエンかグラウドか……カーテナの光の中、俺達は互いの思いをぶつけ合う。

四つの剣線（後書き）

第九十五話です。

カーテナ……次で手に入るかな？　そして一気に収束の鐘を成らななきゃいけません。てかカーテナを取るのがこんなに長くなる予定はなかった！　なんだかいつの間にですね……面目ない。

取りあえず次回は水曜日に上げます。それではまた。

間違いの代償（前書き）

僕はその手をもう一度掴もうと必死に言葉を紡いだ。けれど間違いの代償は大きくて……それはセツリに欺瞞と疑心と不安を植え付けた。それはもう、言葉だけでは拭えない物。

時間を掛けて行動で証明するしかない事。けれどセツリは言う。

「貴方と居ると、それだけで辛い」

でも僕は見せなきゃいけない、諦めない姿を何度でも。

間違いの代償

「どうして」

何て言える訳も無い。そんな事、改めて確認なんてする必要すら無いことだ。

僕が……そうさせた。一度でも投げ出したその代償。セツリはあんなに大事に大切にしてたのに、僕が自らその糸を断ち切ったんだ。

思わずだったかも知れない、思考が追いついて無かったのも事実……けれど、そんな言い訳は彼女に何も響くことはきっと無い。

だってセツリに残ってる事実は、僕が彼女を諦めたって事だけだから。それだけが……いいや、それこそがセツリに取っての見たくなかったものじゃないか。

僕は知ってたのに……他人と一度も繋がりを持て無かったセツリが、それを失いたくないからと……リアルの動けいない自分じゃ見捨てられるのが怖いからと……ずっと拒み続けて来たものじゃないか！

それを僕は、このＬＲＯと言う彼女の夢の世界でやってしまった。戻ることのない、完璧な筈のセツリを僕は見放した。

目の前のセツリの瞳は前髪で隠され、流れ出る涙だけが際だって見える。僕は拒絶された筈のこの手を伸ばせば、そんなセツリに今度こそ届くはずだ。

けれど、それをもうセツリは望んでなんかいないのかも知れない。ていうかさっきの言葉はそういう事だろう。

忘れよう……それも最初からってさ、全部を無かった事にでもする気なんだ。僕達の出会いや、一緒に見た景色、語らった時間……それら全てをセツリは手放す事を決めている。
僕のせいで……遅すぎたんだ。

「スオウは！　それでいいの！？」

その時、リルレットの声が背中に掛かった。檄を飛ばすようなそんな声。そんな声に心はいち早く応えてた。

（良くない。これで良い訳無い！！）

知らないなら教えて上げればいい。間違ったのなら一生懸命、その間違いを吹き飛ばす様に頑張ればいい。それが自分の間違いへの制裁だ。
間違ったから、諦めるんじゃない。間違ったと思うのなら、そのままに何てしておく方が罪じゃないか。だってそれは、ずっと間違いのまま進む事になるんだから。

実際はさ……何が間違いとか、人生に答え合わせが有る訳じゃ無いからわかんない。もしかしたら、セツリの幸せは本当にここに有るのかも知れないけど、でも僕はセツリのその涙を受け入れる事が明日に繋がってるだ何て思えないんだよ！

僕は伸ばした腕の先の拳を握りしめる。そして先にはセツリが居る。そうまだ居るんだ。伸ばせば届く距離に。いつも消えるときは突然で、儚い桜の様に名残だけを残していくセツリ。
そして僕はいつもその名残を追いかけてた。いつも握ってる暇なんて無いくらいに儚いからさ……けど、今伸ばせばきっと届く。

でもなかなか手を伸ばせないのは、こういう泣いてる女の子に弱いから。て言うか、ゴチャゴチャやっぱり考える。

今更僕がとか、これがセツリの選択だとか考えて、これは結局僕のワガママにしか過ぎないんじゃないだろうかって思う。

これもまた結局は僕の性分何だろうな。他人の思いなんてそうそう見えるものでも無いのに、それを気にせずにはいられない。

だってそうだろ……僕は知っている。誰かの思いを知ろうとしなきゃ、誰も何も開いてくれないってさ。でも結果、それが今は足枷の様に成ってる訳だよな。

だから僕は今ここで最も頼れる奴に聞いてみた。

「なあリルレット。少し強引でも……それは良いもんなのかな？」

するとここで頼りに成るリルレットはこう言ってくれたよ。

「女の子は、多少の強引は頼りがいに変換してくれるよ！」

「それは良かった」

僕は意を決して腕を伸ばす。今度は避けられない。僕はそしてセツリの肩を掴んで、揺れた髪の毛から覗く瞳に言ってやる。

「忘れるかよ。忘れられる訳なんてない！　だってそうだろ……セツリ」

僕の見間違いじゃ無かったら、セツリの眼球が大きく成った気がした。忘れられるわけ無い……それはきっとセツリだって。だからこぼれてた涙と思いたい。

楽しかったのはきっと事実で、だからこそ本当は無くしたく何か

無いはずだ。だってセツリはずっとあんな日々を願ってた筈なんだから。

それを無くすのは、またいつかの自分の所まで戻るのと同義だ。人生ゲームで言うところの振り出しに戻るだ。そんなのセツリは絶対に望まない。

だってそれもまた、セツリがイヤな独りぼっちだ。

「スオウ……やめてよ。何で、そんな事言うの？　スオウがやったのに！　スオウが私にそれを選択させた！」

セツリは上体を振り回してそう叫ぶ。思わず肩に置いていた腕が外れて、絡まってたシクラも思わず離れた。けれどセツリの激しさは止まらない。

「そうじゃなきゃ言わないよこんな事！　でも忘れなきゃ！　捨てられたのに、こんなの持ってても苦しいだけだもん！」

その瞬間、僕は両手でセツリの肩を強く掴む。振り回してたセツリの長い髪が結構痛かったが、そんなのはお構いなしだ。

だってそんな痛みよりもよっぽど、セツリは苦しんでる。僕のせいで。だからちゃんと伝えなくちゃいけない。

涙流れるその瞳を僕は正面からまっすぐに見据えて叫んだ。

「捨ててなんか無い！！　もう一度……許されるのならもう一度掴むから！　だから忘れるのなら、その苦しみにしてろ！」

強引に……セツリの気持ちさえ踏みにじった様な言い方だったかも知れない。でも、もう僕にはこう言うしか無かったんだ。

考えたらまたきっとパンクする。だってセツリの願いに僕はどれ

だけ応えられるか、まだ自分でも分からない。だからもうやけくそだったのかも知れない。
その時、何か嫌みな笑い声が聞こえた。
「ふふ、あははは。本当に人間って身勝手。随分偉そうじゃない。誰のせいでセツリが苦しんでるか棚に上げるつもり？」
柊は扇子を口元に当ててそう言った。だけど身勝手何て重々承知した上で言ってんだ。今更こいつらに怯んで何かいられない。
今ここで、もう一度切れた糸を繋ぐ方が重要だ。だから僕が見るのはセツリだけ。
「身勝手何て分かってる。僕がやったことは深くセツリを傷つけたって事も。何度だって謝るし、言い訳なんかしない。
その上でもう一度なんだ！　もう一度……僕を信じて欲しい！」
「……随分、無茶な注文だよそれは」
僕の勢いを、だけどセツリは冷静な口調で返してきた。そして僕にはもうセツリの瞳は見えない。その柔らかな髪が、まるでカーテンの様に僕の視線を遮ってる。
「だってもう……前みたいには成れない。時間は戻せない。この痛みは消えたりしない。代えることもきっと出来ない」
「だからもう一度！」
僕は淡々と言葉を紡ぐセツリが、今まで僕が知ってるセツリとは別人の様に感じた。そしてそれにきっと恐怖した。だって別人に感じるなんて……間違いなく目の前の彼女はセツリなのにそう感じるって……まるで僕達が離れて行ってるみたいじゃないか。
僕達が立つ距離はこうやって触れてられるけど、心がどこか彼方

へと見えなく成っていく……そんな気がする。だから思わず、つなぎ止めたい一心でそう叫んだ。

手にもきっと力が入ってた。セツリの細く柔らかな肌へ僕の指は食い込んでた筈だ。けれどそれでも「痛い」なんて言葉も無い。

そして代わりに突き刺さったのは僕の方。それはとてつもなく今の僕には痛いと思える言葉。

「もう一度……同じ痛みを繰り返させる気なのスオウは？」

「そんなわけ無い！　もう絶対に、セツリの事を諦めたりしない！」

「……ごめんねスオウ。私イヤな女に成っちゃった。今はどうしても、何を言われても、貴方の言葉が信じられない。心に何も響かないの」

そう言われた瞬間……僕の腕から力が抜けた。食い込んでた指は触れる程度に止まって、セツリの暖かさと告げられた言葉の寒さのギャップを僕に伝えてる。

でもそれは当然なんだ。僕がセツリの手を離した。僕が彼女の信頼を裏切った。そんな奴が今更何を言ったって、簡単に信じれる訳なんて無い。

それこそセツリだけじゃなく、誰しもがそうだろうと思う。信頼って奴はいつだって作るのは難しくて、壊すのは簡単だと言う。

そして一度壊れた信頼は、最初に信頼を築いた時の倍の労力が必要とも言われる程だ。要するに、僕は今最も困難な所にいる。

離れた心は、僕が思ってた以上に大きい様だ。だってこんな事は今まで一度も言われなかった。今までいつだってセツリは僕を必ず信用してくれた。

でも……もう、そんな夢見心地の甘えは晴れたって事なんだろう。

元々、初心者で頼りなかった僕のどこを見て信用してたのか自分でも分からなかったし。
だからもしかしたら、今のセツリの方が正しく見てるのかも知れない。僕の言葉の薄っぺらさとかをさ。でもここで、僕は素直に引いちゃダメなんだ。

長閑に過ぎる風景の中で、僕は足下でうごめく何かに気付いた。それはセツリの小説の下敷きに成ってるみたいだ。
ガサゴソガサゴソ……動いて見えてきたのは、そこら中を飛び回ってる蝶の一匹。紙の下から這いでると、潰れた羽を戻すように何度も動かす。
するとしなやかな蝶の羽は次第に形を整えて、再びその体を舞い上がらせる翼へと成った。まあ実際はそれは奇蹟でも何でもなく、ただ設定上あの蝶は壊せない様に成ってるだけかも知れない。
けれど今の僕は、そんな姿にただ感動したよ。そして勇気を貰った気がする。再び僅かだけど僕は腕に力を込めた。今度は優しく、撫でるくらいの優しい力だ。

最初は勘違いとか見間違いとかだったかも知れないけど、あれから過ごした時間や辿った世界はどれも掛け替え無くて、今更相手が目を覚ました位で放せない。
それに十分とは言えないかもだけど、そのどこから来たのか分からない信頼に応える力を、僕はもう少しは手に入れてる筈だ。
この手にある……この力。それはセツリを守るために願って求めた物なんだ。だから何が何でも、このまま「サヨナラ」なんて認めない！　出来るわけがない！
「それなら……何度だって頑張るだけだ！　セツリがもう一回認めてくれるその時まで！　僕は絶対に……もう絶対に諦めるなんてしない！！」

僕の身勝手な思いを全て言葉にした。だけどそうなんだ。拒絶されたからってまだ早い。幾ら労力が掛かろうと、どんな努力が必要でも、それをやり遂げればもう一度あの信頼を取り戻す事が出来るかも知れない。

その可能性は0パーセントじゃないと思う。やりすぎれば、それはただの思いの押しつけ。行き過ぎればストーカーとかって呼ぶのかも知れない。

でもそんな宣言を堂々としたって、恥と思わない何かが僕にはあるよ。それは最初にセツリを見つけた瞬間から芽生えたものだ。

「そんな事、無駄だよ。スオウがどんな人か私は知ってる。だけど……どうしても消えない不安が芽生えちゃった。

一回あったことはもう一度あるかも知れない。そして次は……私耐えられない。だから……」

そう言ってセツリは僕の手に自分の手を重ねる。そして優しく触れたその手で、僕の腕は落とされた。

「さようなら。今までありがとう」

一歩下がって、振り代えるセツリ。そして進はシクラ達の方。長い髪が揺れていた。湖畔のテラスに、セツリの足音だけが数歩響いてた。

真っ白な純白なワンピースが照らし返す湖畔の光を拡散させて、眩しすぎる位の粒子をセツリは纏っている。その姿はまるで……届

かない楽園へ踏み出してる様に僕には見えた。

そしてそれが意志なのか？　本当にセツリの？　認めたくないだけの悪あがきかも知れない。だけど僕はその光の楽園とかを作った物がいるならそいつを許せないとか思う。

それこそ神や仏とかいう存在かも知れないそいつ等は、足掻く僕らから何でも奪う。用意するのは楽園という幻想だ。ここならそれはシステムか。

人が作ったはずのシステムが神を気取って、僕達を翻弄してるようにしか思えないじゃないか！

【システムはあの子を手放さない】

システムと言う名のこの世界の神が求めるのは常にセツリだ。そう言われてた。だからこんな結末さえも……それはシステムの思惑なのかと文句を思わずにはいられない。

全てはＬＲＯと言う世界の上で、踊らされただけの様に感じてしまう。人のあらがい何て、神はせせら笑って終わらせる程度の物で、運命と言う名の物語は、既に書き手によって全てが決まってるとでも言うようにだ。

「そんなの絶対に認めない！」

僕はそう叫び、そして再びその背中を追う。この世界で追い続けてきたその背中……救いたいと思ったその背中……一度は諦めてしまったその背中……でもその間違いを正すためには、何度だって向かってみせる。

もしかしたら僕は、システムがセツリにここを選ばせる為だけに三百万の中から選んだ中途半端な奴なだけかも知れない。

どうしてあの日、僕とアギトの前に道が出来てたのかずっと不思議だったんだ。だって……僕は決して、物語の主人公にふさわしい何て思ったことはない。

でもあの日……この世界でなら、そう思った。力が与えられるこのＬＲＯでなら僕もたった一人を救える人になれるかも知れないと。

いいや、たった一人でも良いから誰かを助けれる人に自分が成れるのだとしたら一生懸命やるのも悪くない……そう思った。だから必死に走って……走って……走り続けた。

ＬＲＯでは自分は走ってばっかな印象が強い。だけどついにはそんな仮面は外れてしまう。自分を貫き通せもしない奴が、誰かを救う何て片腹痛い事だった。

結局は、どこでだって浮いてしまう存在。リアルでもここでも実はとけ込めてなんか無かったかも知れない。僕は容姿もそのままで、するとやっぱりここでは少し違うかも知れないじゃないか。

実は見ている全てが信じられなかったのは僕の方だったのかも……だけどセツリがそのままで誰をも信じるから、同じ何だと思えてた。

外見やいろんな物で覆っても、この世界で出会う人達は同じ人……それに変わりなんてないってさ。僕はセツリのリアルも知ってるから、余計に同じように思ってたのかも知れない。

必要としてたのは既に片一方だけじゃなかった。もしも、システムの都合で出会わされた僕達だったかも知れないけど、そんな物が無くても僕は自然と同じように思える人を捜してたんじゃ無いだろうか。

そしてたどり着くのは同じだったと思うんだ。もしもそこに至る道が実は無くたって、僕達は出会ってた。そう思う。

今更システムが……何て言ったって何も解決何かしないよな。ト

チったのは僕で、意志なんて持ってるかどうかも分からないシステムに神を見るのもどうかしてる。
いつだってここで戦ってるのは僕自身だろ。何か大きな意志や思惑なんて、ちっぽけな僕らにはどうでも良いことだ。
けれどそれを邪魔するなら、僕はその神やらという存在にだって立ち向かおう。そっち側になんて……行かせたくない奴なんだ。
だから僕は早足でセツリの背中に迫る。

「セツリ！　本当にサヨナラしたいんなら。そんな風に泣いてるな！！」

掴んだ肩をこちらに引き、その勢いでセツリは半身を僕へと傾ける。そして覗いた顔は、やっぱり涙で一杯だった。

「そんなこと……スオウに言われたく何かない！！」

けれど直ぐに怒りに変わったらしいセツリの勢いで、再び手は放れてしまう。でもさっきまで押さえてた感情が一気に爆発した感じだ。
どんなに嫌われても本心を隠されるよりずっといい……ぶつかり合えばお互いの事がもっとわかる筈だ。そうやってもう一度最初から始めようと決めたんだ。

「それすら分かってて言ってんだ！　だからゴメンって言ってんだろ！」
「スオウ、何か謝ってる気がしない！！　てか、酷く成ってる！
私の気持ち……これっぽっちも分かってない！！」

うう……余りにも自分勝手だったか？　でもこの勢いは大切だろ。もうどうにでもなれだ！　今の僕には無くす物なんて無い！　今ま

さに無くそうとしてるんだからな！

「ならこれからはもっともっと努力する！！　セツリの事をちゃんと考える！　直ぐに信じて貰おうだなんて思わない。
だけど、傍にいて見てて欲しいんだ！　だから僕は……サヨナラ何て出来ないよ」

セツリの顔が一瞬火照った感じに赤くなった。けれど直ぐに首を横に振ってそんな火照りを取るみたいな動作をする。てか移った？
何かスッゲー恥ずかしい事言った気がする。後ろにはリルレット達も居るのにさ。
絶対に振り替えれないな。

「スオウも意外と……自分勝手だったんだね。でも、もう遅い。こうやって向かい合うだけで私は、私は……耐えられないの！！」

再び顔を伏せたセツリ。今度こそ本当に、僕が流させた涙が見える。そしてその震える肩にそっと触れる二つの手。

「シクラ……ヒイちゃん……」
「せっちゃんは泣き顔も可愛いけど、やっぱり笑顔が一番だよ☆
大丈夫、私達ならその涙を止めてあげれる。ね、ヒイ？」
「そうですね。具体的にはその涙を流す原因を排除出来ますね」

二つの視線が僕に注がれる。そして動いたのは柊だ。アイツ前々から僕の事嫌ってただろうから早かった。手の内に有るウグイス色の扇子を僕に向けて一回し。
それだけで次の瞬間には、僕の天地がひっくり返ってた。頭が地面に打ちつけられて、足は天へと向かってる。一体何が？　そう思わずにはいられない状況だ。

「スオウ！」

そう言って後ろから駆けてきてくれたのはリルレット。僕は体を起こしながら、リルレットに何が起きたのかを尋ねる。

「どうなった？　てか何が起きた？」

「わからない。ただ柊が扇子を回したと同時にスオウも同じように回って……」

つまりは僕の動きがあの扇子によって制御されたって事なのか？

それか空気の流れとかで倒されたとか？　何にしてもあの扇子はやっかいだ。

すると僕の目の前でセツリは言う。情けない今の僕を見下ろして。

「これ以上、来ないで。スオウが何言っても……私達はもう遅いの。さようなら……これに拒否権無いからね」

そう言ってシクラとセツリは一歩二歩と下がっていく。そしてどこかから響く鍵が開くような音。すると湖に大きな扉が姿を現してた。

それは僕達がこの空間に誘われた扉と良く似てる。湖に浮かぶその扉は水面にも同じ姿を映していて、開いた扉の奥から漏れる光で湖の底まで写しそうな感じだった。

そしてセツリとシクラは確実にそこへ進んでる。水面の上を柊と同じように渡りながら。

「来ないでなんて……そんな事！！」

走りだそうとした僕の前に扇子を構えた柊が立つ。

「もういいんじゃないかしら？　貴方の役目は終わりなのよスオウ。いい加減、見苦しいわ」
「――ちっ」

僕はシルフィングに手を掛ける。このままじゃまたセツリが遠くに行ってしまう。しかも今度は待ってて何かくれないんだ。行かせられない……行かせていい筈が無い！
その時、僕よりも先に動いた奴がいた。そいつは真っ直ぐに柊へと向かってスキルを放つ。

「行ってスオウ！　それは貴方の責任何だから！　柊は……こいつは私がやるから！」
「リルレット……今だけ頼む！！」

僕は二人の間を抜けて一気に湖へと飛び込んだ。僕には水面を歩くスキル何か無い。けれど泳ぐことぐらい出来るから！　服が重い……肺に空気が足りない。それでも僕はもがき続ける。

「せっつ……り……行く――なっ！　行くなあああああああ！！」

大きな光に包まれていく二人。そして閉じていく扉の余波で大きな波が僕を飲み込んだ。

間違いの代償（後書き）

第九十六話です。
とうとうです。そして流れはバトルへ進展して行く事でしょう。てかスオウにはもうそれしか二と言うか。柊達は立ち塞がるでしょうからね。そして諦めない限りスオウは戦っていかなきゃならなくなるのです。
その先でセツリが何を選ぶかは分からないけど、それしか出来ない。
では次回は金曜日に上げます。ではまた～。

三人の力（前書き）

俺達は立ち向かう、最強を欲する男に。規格外の武器に規格外の威力をまとわせたその攻撃を俺達には防ぐ術は無いのか？　そんな時にアイリは言う。『重なり合う力がなんとやら』ってさ。

でも俺とガイエンなは知っていた。それを成すには二人じゃ駄目だと。俺達の間にアイリが居るから俺達はそんな力を感じれる。

三人の力

「うぅがあああああああ！！」

光の中、俺は槍の残骸をグラウドの顔面へ向かって投げつける。大したダメージに何てならないだろうその攻撃。だけど人は、頭への攻撃は反射的に避けるものだ。

そしてその一瞬が二人の攻撃を確実にする。ガイエンの長刀とアイリの剣が左右からグラウドを捉えた。重なり有った二つのスキルがグラウドの体を押し戻そうと膨れ上がっていく。

「「あああああああああああ！！！」」

二人の叫びが木霊する。そして深く刺さっていたグラウドの槍が俺の体から抜けていく感覚が有った。

「きさぁまぁらぁあぁぁぁぁ！！」

グラウドの声が延びと共に遠くなる。それは左右のガイエンとアイリが武器を振り切ったから。その瞬間、グラウドの槍が俺の肉をちぎりながら抜け、持ち主と共に後ろに吹っ飛んだ。

肉がちぎれる何て言っても、別に血が出るわけでも無いが体から異物が抜けていく感覚と、さらには回転のせいでそんな気がした。

そして解放された俺は上手く地面に立てない。傷のせいか分からないが、膝で地面を受け止めて四つん這い状態だ。息も荒く成って、これはＨＰ残量の問題だな。

さっきので一気に限りなくレッドに近いイエローまで減っている。一体どれだけバカ力何だよあの野郎。最初に決闘した時よりも防具

もグレードアップしてる筈なのに、一撃でこれとはな。

「アギト！」

そんな規格外の攻撃のショックを受けてると、暖かな光が俺の傷とＨＰを回復してくれる。アイリが回復魔法を掛けてくれたみたいだ。

「無様だなアギト。勢い込んだ割にはその様か？」

体の怪我が治った所でそんな言葉を掛けるのは当然ガイエンの野郎だ。今言うかそんな事……とも思ったが、今しかない気もするな。

「うるせえ。アイツの武器とスキルが想像以上にやっかいなだけだ」

実際、グラウド自身はそんな強い何て思わない。アイツ戦い方大雑把だし。まあ全ての攻撃を一撃必殺にしようとしてるんなら納得だが……それはつまりあの武器の特性とスキルに頼ってるって事だ。

その証拠に張り付いてる時は互角の戦いが出来た訳だしな。でも距離を取られるとやっかい。一直線に向かってくるだけなのに、何故か避けられないんだ。

「ふん、負け惜しみだな」

「ちょっとガイエン。そんな言い方無いよ！」

アイリはガイエンの発言に怒ってくれた。だけど実際はその通り。俺が言ったことは言い訳で負け惜しみだ。そんな事分かってる。

自分が用意したとっておきの武器も砕かれたし、その時点で俺の負けは決まってたんだ。二人が来てくれなかったら、今頃俺は戦闘不能に成ってた筈だ。

「悔しいがアイリ……ガイエンの言うとおりだ。ここで格好付けてもしょうがないよな。認めよう。俺はグラウドに二度負けた」
「殊勝な態度だな。貴様にしては珍しいが、負けた事が効いてるようだな。というかまだ言うことが有るだろう？」

ああ！？　何て態度でかいんだコイツ。人が下手に出てれば調子づきやがって。一日に一度もお前と会話をしようとは思わないのに、何が言うことがあるだ。ねえよそんなの。

「身に覚えが無いわけ無いだろう？　ついさっき貴様を助けたのは誰と誰だ？」
「うぐ……」

そういえば言ってなかったな。二度もコイツの言うことを認める事に成るだなんて、今日は厄日だ。間違いない。

「ありがとさん」
「気持ちが入ってないな」
「うん、それは私も納得だよ」

適当に言ったらアイリにまで突っ込まれた。別にアイリにまで適当に言った気は無いのに。「ありがとさん」はガイエン仕様だっつの。
そんな事で揉めてたら、吹き飛んだグラウドの声がこの光に包まれた場所に響きわたった。
「チョロチョロとゴミの分際で……許さんぞ貴様等あああ！！」
激高してるグラウドは槍に再びスキルを込める。そしてそれを受

け取る機械の音がし始めた。

「アイツまだ……くそ、ヤバいな」

こっちは三人居ると言っても俺の武器は壊されたし、何より最強を自負する奴は、カーテナを手にするまで引く気何か有るはずないか。

周りには既に倒れたレイアードのメンバーが居るのに、グラウドは気にも止めない。自分の為に倒されたんだから、少しは気遣う優しさでも見せてやれよと思うが、奴の興味は『強さ』と言う一点だけか。

その時、ちょっと気になることを俺は感じた。周りに倒れてるレイアードのメンバーは三人だ。それもグラウドの側近クラスって言うと、レイアードの中でも実力者揃いだった筈。

そしてそれに立ち向かったのは数でも劣るガイエンとアイリだろ？　それって……

「何か思ったけどさ。良く俺を助けに入れたな」

「うん、ガイエンがバッタバッタなぎ倒してくれたからね」

「は？」

助けられた俺が言うのも何だかな質問だったが、それは意外だ。ガイエンがコイツ等三人をあっと言う間にアイリは倒したと言う。

だが確か、俺とガイエンの実力って拮抗してた筈だ。そしてそれなら間違いなくあんな早さじゃ倒しきれない。弱気とかじゃなく、物理的に今の俺の実力じゃ無理なんだ。

それに同じ数ならまだしも、二対三で余裕を持って勝てるなんて……俺は不振な目をガイエンに向ける。するとガイエンの野郎は青い髪を掻き上げて、余裕たっぷりにこう言った。

「私の成長速度を貴様と同じにするな。分進秒歩の速度で私は成長してる。亀な貴様とは違ってな。言う成れば私は兎だ」
「なら最後には俺が勝つな。良かった良かった。なまくら兎は譲ってやるよ」

ガイエンの視線に火花が宿って飛んできた。どうやら俺が言ったことをちゃんと理解したようだな。童話「ウサギと亀」になぞらえた訳だ。
あの物語で最後に勝利するのは亀だからな。足の速いウサギは寝過ごして勝ちを逃すんだ。そのなまくらっぷりを存分に発揮してる。

「こら！　二人とも前！！」
「「あ？」」

アイリの言葉に火花を散らすのを止めて前方に視線を向けると、そこにはもの凄いスピードで突進してくるグラウドの姿がある。
てか何か、溜めすぎた力が漏れてるのか通った場所が抉れてるんだけど……あれはヤバい。

「お前等全員、吹き飛ばしてやるよおおお！！」

歓喜の表情で、槍にしがみついてるグラウドは叫んだ。コイツには仲間だった奴を倒す躊躇いも躊躇も無いようだ。まあそんな深く関わった訳じゃないが、その時期は確かにあった筈なんだけどな。
でもそんな感慨は早すぎる。俺達は倒される訳には行かないんだ。そうアイリが宣言した。アルテミナスの為に、カーテナをコイツには渡せない！
だから俺達は最後の砦。けど……俺の拳に掴める武器が無い。その時いち早くグラウドの接近に気付いてたアイリが魔法を発動した。

防御系の魔法。それもより高度な重層。張られたのは言う成れば五重のシールドだ。これで時間が稼げるか。

「こんなシールド！　泡の膜と同じだ！！」

しかしそんな考えは甘かった。既に奴の攻撃力は壊せないはずのオブジェクトにまで刺さるほど。不可能を可能にした力。

それを破ることが可能な普通のシールドでは防げないのは道理だ。グラウドがシールドにぶつかって止まるのは僅か二秒程度。五枚でも十秒の時間稼ぎにしかならない。

「そんな……」

アイリの驚愕する声。それは当然だ。俺達に至っては声が出てないだけ。幾ら何でも、十秒しか持たないシールドなんてあり得ない。

そして遂に最後の一枚が目の前で破られる。光に反射するシールドの欠片が消えきらない内に、グラウドは迫ってた。

「さっきまあああ！！」

そう言ってガイエンが長刀でグラウドを受け止める。だけどそう思ったのは一瞬だけ。余りのパワーに直ぐに押され出してる。

「ぬうぐうううう」

「がはは！！　丁度良い、なあガイエン！！」

丁度良い？　その言葉の意味は分からなかったが、これは不味い。ガイエンの直ぐ後ろにはアイリが居るんだ。ガイエンが一人で吹き飛ぶ分には問題ないが、今の状況でグラウドに勝つには、悔しいが俺だけじゃ無理だと証明されてしまってる。

俺はウインドウを開いて装備品の中から武器を選択。そして現れるのは、折られたのと同じ型の槍だ。

「ガイエン！　耐えろ！！」

俺はそう叫んでアイリを抜いて前に出る。そして帯びるは赤い光。そしてぶつかる位置は正面よりもやや斜め。それはガイエンが居るのも有るし、その方が効率良いからでもある。軌道をずらせればアイリを巻き込まなくてもすむ。

「食らえグラウド！！」

その言葉と同時に巻き起こった大爆発。だがそれをグラウドの野郎は防ぐこともしなかった。けれど槍の先から伝わるグラウドの存在の力強さに代わりなんて無い。

気を抜けば今度はこっちが弾かれそうな程。どういう事だ……そう思う俺の前に答えは現れる。無傷のままでさ。

「なっ！？　まさかそんな……」

「ふん予備があったか。だが性能が劣るようだな。先の奴なら貫けたかもしれんが、今のお前には力不足よ！　何よりも誰かに頼っての攻撃など俺には通らん！！」

「くっそ！」

ガイエンと俺、二人でぶつかってるのにまるで止まらねえ。それに直ぐに予備とばれたし……だけどそれは当然か。戦闘中に取り替える何て切り札か、それじゃなきゃやむなしだ。

そして俺が後者なのは明白。この槍は先の奴と姿形は同じでもスペックに違いが有るんだ。職人が作る武器や装備には希に＋１とかの数字が足されたのが出来る事がある。

それは上級装備や上級武器と呼ばれて性能が普通に出来た物よりも良い。そして勿論値段も高い。
だから今の武器と先の武器はそれの違いだ。今のは通常版で先のは限定版みたいな感じ。その差で俺はグラウドが出してる力の奔流の様な物を抜けなかった。
て言うか、溢れだしてる溜め過ぎた力がシールドの様な役割をするなんて反則だ。いや、それとも攻撃指定だったのか？
どちらにしても俺の攻撃も通らなかった。グラウドの軌道も変わってない。そして何より二人掛かりでも止まらない。

「アギト！　ガイエン！　諦めないで！！」

その時真っ正面へと突っ込んでくるアイリが叫んだ。俺とガイエンの丁度間しか攻撃する隙間が無いからといって、まさかそこに突っ込んで来るなよな。
この中じゃダントツでアイリが攻撃力弱いんだから、それは無謀と言うものだ。だがアイリに迷いは無い。真っ直ぐに強い目でこちらを見つめてる。

「バカかお前！　お前程度のパワーじゃたかが知れてる！　何の為に俺達が必死にこいつにかじり付いてるか分かってんのか！？　お前にまで届かせない為だ！」

それなのに守りたい奴が向かってきてどうすんだよって事だ。少しは稼いだ時間で避けれたはずだ。だけどアイリはそんな俺の言葉を否定する。

「アギトこそバカァ！　私だけ逃げてどうするんですか！？　アギトが勝てない人に、私一人で勝てる分けないじゃない！！　でも…

…私たち三人ならきっと勝てる！　勝てるんです！」

元気いっぱいにそう宣言するアイリ。そして剣に添える形を取っている手に何かが集まりだしてる？　何だあれ？　魔法か？

「ふん、どうして……そう言える？　言っとくが私は力を合わせる何て死んでも出来んな……コイツとは！」

一番長くグラウドの攻撃を受け止め続けてるガイエンが、辛そうな中そう言った。俺を睨みながらな。なら今の状況はどうなんだって言いたいが、それより早くアイリが動く。

「そんなこと無い！　もうずっとやってきたよ。そして証明してきた！　私達の力は足し算じゃないって！　私に二人は見せてくれました。重なりあう力の強さを！！
ＬＲＯはゲームですけど、そんな心をちゃんと拾ってくれます！
だから私たちならやれるんです！！」

心……か。本当にどうしようもなくアイリはそう言うのが好きだな。後先考えずに誰かを助けに行くのも、その考え方のせいだろう。
心って奴に素直に行動してる。そして確かにＬＲＯはそんな俺達の心の変化まで時に分かってる様な気もしなくはない。

ゲームで……この世界を形作ってるのは膨大な量のプログラムなのにな。でも本当に心から望んだ時、自分でも想像できなかった力が出るときがあったりする。
そしてそれはやっぱり誰かと居るときが多い気がするな。守りたい誰か……信じあえる誰か。
重なりあう力……良くそんな恥ずかしいことを堂々と言えるよなアイリは。思っててもも、俺は絶対に言わないな。まず認めないし、

ガイエンの野郎と重なった力なんて、俺のじゃねーし！

そんな風に思ってると、丁度同じ事を考えてた様なガイエンと苦しい顔を見せあった。そんな余裕あるわけも無いのに、ついついアイリに乗せられたな。

「何が重なる力だ！　そんなもの、脆弱な種が頼る恥ずべき力だ！！　俺達エルフはそんなんじゃない！　そんな事も分からぬ貴様に、俺を倒してアルテミナスを救える訳がないだろう！

あの国は力を象徴とする国なのだから！　たった一人の最強の王が統べる国。それが俺達のエルフの国、アルテミナスになる！！」

ここに来て更に勢いが増すグラウド。あのカートリッジシステム……どこまでもやっかいな代物だ。弾丸に何が込められてるのか知らないが、ガシャコンとロードするだけでパワーが跳ね上がるのが分かる。

もう流石に俺達はヤバい。今にも弾かれそうな具合だ。アイリは重なる力とか言ったが、今この時協力してる俺は孤独な気がする。相手の存在なんて微塵も感じない。多分それはガイエンも同じだろう。

お互いに俺達は感じたくない相手だからな。重なる要素何て微塵もないんだよ。一人の力には限界があって、俺達は互いにまだグラウド程の時間を要してない。

まあ同じくらいの時間が経ったときに、俺達もコイツ並の力を手にしてるのかは分からないが、でもグラウドは一人で一人の力の壁を突き破ってる。

それは確実だろう。だからこそ、これまで一人で挑んできた俺は勝てなかったのか。ついさっきも、そして最初に勧誘された時もだ。

明白で歴然だった力の差って奴か。グラウドをこの武器とスキル

に頼っただけの奴……なんて見方は間違い。コイツはずっとこの『猛進』に全てを掛けて限界を破った奴なんだ。
この槍の特性とカートリッジシステム。そして多重掛け出来るこのスキルを最も効果的に最大限の効力で発揮するための猛進。
理由があってのこだわり。そして積み上げてきた経験による確かな自信。それがグラウドの強さ。

「だからそんなことは認めません！　脆弱って何ですか！？　エルフもどの種族も変わりなんてしない！　私達は同じ人何ですから！！
私は！　最強とか力とか……そんなのどうだっていい！　ただエルフという種が、安らげる場所を……私達の居場所を、守りたいだけです！！」

アイリの手から何かがこぼれてる。アレは……水？　やっぱり魔法を使おうとしてるのか？　でも何かがおかしい。不安定と言うか、何というか……まるで放出されないじゃないか。
それにそのまま剣にまとわりついてる様でもある。アレと同じ様なのは武器に元々付加する用の魔法があるが、今見えてる魔法はそんな感じじゃない。
こっちも付加するには要領を越えてる。アレは攻撃魔法何じゃないか？　だけどアイリは間違ったとかでは無いようだ。そして力を込めて行き、魔法と共に剣の刃を握りしめる。

その瞬間、一気に大きな水流がその場に溢れ出て来た。俺達には何が起きたか分からない。ただの暴発か……それとも。
すると今度はその溢れだした水がアイリの振った剣に何故か集まっていく。それは吸収しているような、繋がってるような……とにかく何やったんだアイリの奴。
そしてその時、アイリは自信のあるような笑みを俺とガイエンに向ける。そしてこう言った。

「やるからね！　アギト、ガイエン！　完成！！　魔法混合ハイブリット　水疱『カナン』！！」

アイリの握る剣に吸収何て言葉はぬるかった。吸収というかアレはもう同化。アイリの奴は自身の武器に、その攻撃魔法を融合させやがった。

そしてアレは既に魔法と武器の中間地点。『カナン』とか言ったか？　あんな武器はきっとＬＲＯ史上初だろう。水が剣で、剣が水で・・幾らＬＲＯでもあんな事が出来る物なのか？

でも実際にアイリはそれを成し遂げた。そしてその武器を真っ正面から突き立てる。

「でああああああああ！！」

大きな声と共にカナンも加わっての三つの武器との攻めぎあいになったグラウド。そのせいで流石のグラウドも流石に勢いが殺がれてる。想像以上にあのカナンは強力な様だ。

だけど認めたくないグラウドは更にスキルを加算する。

「ふざけるなよアイリ！！　そんな力！　今ここで潰してやる！！」

ようやく拮抗できたと思えた矢先。更に力を付けたグラウドの槍がカナンを割った。そう四方に水の剣で有るカナンは割れたんだ。

「「――なっ！？」」

「まだです！！　私達は負けるわけには行かなぁい！！」

絶望に染まりそうになり掛けた、俺とガイエンの心をその言葉がつなぎ止める。そしてアイリのその言葉どおり、カナンは壊れた訳

じゃなかった。
それがこの武器の特性でも有るかの様に四方に割れた水は再び円を描いてアイリへ戻る。それは決して絶える事無い力の循環。そしてその円は輪の様だった。
俺達をいつも包む輪。俺とガイエンだけじゃ感じれない重なりの力。だけどそこにアイリが入るだけで俺達は輪になって繋がれる。お互いの力を感じれる。
そして広がる力が伝わってくるようだ。

「「「うあああああああああ！！！」」」
「――っづぅ！？　こん……な、事が……有って……たまる……かあああ！！」

グラウドが更に無茶なスキルの加算をする。だけどそれはどうみてももう限界。そしてそれでも俺達三人の重なり有った力は押し負けはしない。
ここにアイリの事が正しかった事を証明しよう。さあ、決着の時だ！
水の輪が力の象徴の様に、巡回する度に膨れてた。そして光を跳ね返すその輝きがついにはグラウドの体に届き、奴の体を吹き飛ばす。
全ての力をぶつけたカナンは、いつの間にかその姿を元の剣へと戻してた。その刀身に一粒の水滴を残して。

「やった……」

そんなアイリの呟きに俺とガイエンが同時に「ああ、やったな」って言ってしまった。ここで重なる何て最悪だ。良い所なのに邪魔するなよ。

かなり遠くまで吹き飛んだグラウドはまだ微妙にＨＰが残ってるが、奴の武器はもうボロボロ。アレなら驚異にはならないだろう。
だからこれは俺達の勝利だ。そしてそんな勝利を徐々に実感してきた最大の功労者のアイリが喜ぶのも無理はない――

「やっ……」

――筈、だったが様子がおかしい。アイリの体が光ってる？　それもクリスタルと同じ色に。そしてひび割れた箇所から胸を貫く光が射して、何かが浮かび上がってくる。
それは剣と言うには余りに小さく、だけどナイフよりは真っ直ぐなシルエットしてる物。そして俺達は一つだけこれと同じ様なのを知ってる。
それは女王の腰に掛かってた飾りの様な剣。どれもが立派な中、たった一つ不似合いだって物。でもここで姿を現すそれを、俺達は認めるしかない。
そう、きっとこれが……

「カーテナ……？」

アイリは呟き、自身から出たそれに手を掛ける。そしてこの時初めて、光明の塔は王の帰還を報せるように、その名に恥じない光をアルテミナスという国に届けたんだ。

三人の力（後書き）

第九十七話です。
ようやくカーテナ登場……って言っても何か出ただけで終わった感丸出し。くっそー、グラウドの野郎が妙にしぶといからこんな事に。まあ自分の構成の甘さの結果だけどね。分かってます。
でもちゃんとカーテナの事は伝え起きたいし、うんどうしよう。
取りあえず次回は日曜日に上げます。次はぶっちゃけ、スオウの方じゃありません。物語をちゃんと進める為にも周りに目を向けます。ですのでご容赦を。

影に飲まれてる私（前書き）

タゼホから少し離れたクリスタル多岩地帯。そこに私は倒れてます。せり上がって来る黒い影はカーテナの呪い……ううんこれはガイエンの闇。深く根深い奈落が私に迫ってる。

でも落ちるわけにはいかないよ。だって私は約束したから。

「待ってる」って……「その続きは向こうで聴かせてください」って……私は秋徒君に言ったんです。だから私は、闇に落ちるわけにはいきません。

影に飲まれてる私

あの日、あの時、あの瞬間、光明の塔から溢れ出た光はもうこの国を照らしてくれない。今思えば、あの頃が一番ＬＲＯで楽しかった時期かも知れないです。

アギトと出会った……レイアードに入ったのは不本意だけど、そこでも新たな出会いがあって、二人は仲悪かったけど、それでもやっぱり私は三人で何かをやれるのが楽しかった。

どうしていつまでもそんな日々は続かなかったんだろう。ゲームの仲で位、願うものだけを見ることが出来れば良かったのに。変わらない物が……欲しかっただけなのに。

タゼホから少し離れた遺跡の様なクリスタル多岩地帯。そこで私は倒れてる。ここのクリスタルも、少し前まではその色とりどりの光を発してた筈なのに……今は黒く黒ずんで、そこに目を奪われる美しさは無くなっています。

それに今日は月もなくて、いつも以上に暗い夜。

「う……ずっ……つぁう」

冷たい地面の感触が頬から伝わってくる。そしてそれより冷たい物が、私の体を覆おうと内側から迫ってきます。私には分かる。これがカーテナの黒い力だと。

カーテナは私の体から……と言うか私というエルフから、その意志を受け取ったシステムが作り出した武器。エルフになら誰しもが、実はカーテナを胸に持っていると言えるもの。

でもあれは私のだから。あのカーテナは私の意志に応えた王家の

形。設定上だけでもこの国には長い歴史がある。そしてそれは光明で有り続けた訳じゃない。
だからこそ、カーテナで振るう力は明るい物だけじゃないのです。そしてそれを初めて感じたのは、少しずつ私たち三人の意志がズレだしたとき。
でもここまでじゃ無かった。こんな真っ暗な闇の底に食べられるみたいな事までは初めてです。

（苦しい……）

そんな感情が押し寄せてくる。私の心を写してたはずのカーテナ。アルテミナスでカーテナの呪いが発現した時は確かに私の闇だった筈の物。
でも……これは違う。だって私はもう信じてるから。リアルで約束しました。

『待ってる』

って。そう

『向こうで待ってる』

と言ったから。きっとアギトは私を助けてくれる筈。この苦しみに、この私を全部飲み込もうとする闇に、何とか耐えられるのはその事があるからです。
私の胸にもう闇なんてない。でもカーテナの呪いの力はどんどん力を増している。その原動力はきっと……今、カーテナを振るってる人の闇。
そしてそれはガイエン以外にあり得ません。元々どうして私以外にあのカーテナを使えるのかが不思議だし、ここまでガイエンの心

を掬うって事は、何かとんでもない事が起きてるのかも。

どうして彼はこんな事をするのだろう。どうして彼はアギトをハメたのだろう。どうして私達は彼を救えなかったのだろう。

そんな思いが募ってくる。だって友達をしてた筈なのに、私は何も出来なかった。何かずっとしなきゃと思いつつ、自分の事で一杯一杯で動くことが出来なかった。

そう、いつの間にか随分こっちの体も重く成っちゃってたんだ。こんなに育ったガイエンの闇は、私達のせいでもあるのかな？

そうなら、悲しいよ。

「アギトォォ……ガイエン……」

弱々しい声。本当に、私はいつだって二人に頼ってばっかり。でも、そういえば二人の喧嘩を止めるのはいつも私の役目だったな。

そこだけで、いつも守って貰ってた私と釣り合いが取れてたとは思えないけど、でも確かにそれは私の役目。もう一度……あの頃に戻ることは出来ないのかな？

もう一度……やり直す事は出来ないの？　そう考える私は黒く成りつつある自分の手に力を込めます。だってそれなら……

（二人だけじゃきっとダメだから）

そう思う。アギトとガイエンは仲悪いから、二人だけじゃ収まらないもん。

（私も……行かなきゃかな。今度はちゃんとどっちも信じて、どっちも許してあげたいな……）

また蚊帳の外にいるのはやっぱり嫌。アギトには待ってる何て言ったけど、このままじゃ前と変わらないのかも知れない。

そしてまたどっちかが居なくなる……そんなの私は嫌だよ。苦し

くて……辛い……何よりもこの闇は重い。心と体を重くするこの闇がガイエンの心なら、助けてあげなきゃ。

それが出来るのはアギトと私しかないよ。私が手にしたカーテナは、こんなんじゃない。そしてガイエンがここまでして手にしたかったのは本当にこんな物なのかな。

何が彼は欲しいんだろう。この国アルテミナス？　貴方は本当は何になりたいの？

今度はちゃんと聞いてあげよう。また三人で話し合おう。そのためにも、私はここで倒れ続けてる訳には行かないよ。

「っづあぁぁぁぁぁぁ！！」

黒い陰が付き纏う体を私は起こそうと試みる。だけどなかなか体が言うことを聞かなくて……今までで一番濃く出てきてる陰は私のこの体を浸食しだしてる？

この黒い陰か闇が覆った手や足は、染み込んだ様に黒くなってなんだか不気味。まるで自身が違う物に成っていってる様に見えちゃう。

（怖い……）

だけど、ここで全部が終わってからそれを受け入れるしかない事の方がもっと怖いよ。アギトがアルテミナスから出ていったみたいなのはもう嫌。

幾らメールを送っても帰ってこなかった日々……ついには送れなくなったりした時の悲しみとか……私はそれを受け入れるしかなった。

だからもう嫌。決着はつけて欲しいし、この騒動は終わらせたい。だけどね、それでまた誰かが居なくなるのは嫌だから。

アギトもガイエンも二人だったらきっと自分達を止められないから……だからそんな時、私が『こら！！』って言ってあげなきゃいけないの。
そうしたらまた三人で、居れるよね？

「何やってるんですかアイリ様？　無茶なんてせずに大人しくしててください。ガイエン様はアルテミナスの為に戦ってるんですよ。
それは貴方の本意でしょう？　その為にも貴方はまだ必要だ。カーテナの人柱として」

星空が僅かに地上を照らす空の下。沢山突き出してるクリスタルの影から二人の親衛隊が出てきた。私を監視しておく為にガイエンが残した二人。
本当にガイエンは性格悪い奴らを集めてるなあと思った。一応私、まだアルテミナスのトップなんだけど。プレイヤーの中ではね。そして親衛隊は私の護衛の為という名目でガイエンが作った部隊。

だけどいつの間にか……ううん、最初から私の護衛何て建前だったんだろね。元々私の護衛なのに私が選んだこと無いし……私が選んだのはセラが作った侍女隊くらい。
だから彼らは完全にガイエンの考えに賛同してる人達なんだよね。なら……そう言えば聞いておきたい事があった。

「人柱……か。私がトップじゃなくて、手が出せないのはカーテナのせいって訳だ」
「こんなにこの国を温くした貴様を誰が王などと認めるか。ただの飾りだろう。今までも、そしてこれからもな」

きついことを言ってくれる二人組だ。どっちが喋ってるとかどう

でもいいけど、声や口調の感じから最初の人かな。もう一人の方はがっしりした系の無口っぽい人だったから喋る担当違い？
確かに私はただの飾りだったと思う。アギトが居なくなって……心細くて……自分の立場や責任が怖くなった。だから他の人達の意見に押されるだけになったんだ。
いつの間にか気付くと誰も私の言葉なんて聞いてなかった。手助けしてくれてた人達がそこだけでまとまって物事を決めていく。

そしてその人達にもいつの間にか地位や肩書きが付いていて、どうしようもないじゃない。必要だってみんなが決めたって事だもん。
次第に私は口を噤んで、下を向いてる事が多くなった。そして偶に上を見ても、そこには高い天井があって空が見えない。
いつの間にか私は、あの城を巨大な監獄の様に感じてた。もうＬＲＯに自由は無くなって、あの頃に戻ることは出来ないって。
自由に駆けられる世界はとても小さく……狭く成ってた。

「確かに……私はただの飾りです。でも……じゃあ、貴方達が信じるガイエンは……この国をどうするんですか？」

ガイエンが昔からアルテミナスの事を思ってるのは知っていた。だけどここまでするほどだったのかな。一体いつから、ガイエンはこんな事を考えてたんだろう。
もしかしたら私が余りにもふがいなかったからかな。それだとガイエンの事何も言えない。

「あの人はこの国を強くしてくれる。アンタと違ってな」
「強く？」

それっていつかどこかで聞いたような事なのかな。なんだか思考があの人に似てきてる気がするよガイエン。それを否定して、三人

で倒した筈のグラウドと同じなの？
そう言えば、この人達……親衛隊からはあそこの臭いがする気がする。レイアード……そんな感じがしないでもない。
もしもそうなら……やっぱりダメだよ。このままじゃいけない。私はやっぱり力を込めるのをやめる訳にはいかないよ。

「ああ、この国はこんな物じゃないとな。カーテナがあれば三国の均衡も崩せていける！　生ぬるい仲良しこよしなんて今日までだよ」

私達がカーテナを手にして頑張った結果を総崩しにする気なんだ、ガイエンは。その力を見せつける事で、復権を示したアルテミナス。それで三つの大国のパワーバランスは拮抗して、今や侵略は殆ど行われなくなった。
いつかの殺伐とした空気は無くなったのに……何でまたそんな事をやる必要があるんだろう。私達は望んだ結果を手にした筈じゃないのかな。
確かに良いことばかりじゃなかったけど、あんな戦場にまた誰かを巻き込む権利は私達にも無いよ。折角世界に垣根が無くなったのに、またそれを作る事なんか絶対にない。
それにこんな行動に対する答えは、もう前に出してあるんだ。

「そんな力……誰が望んでるのよ。私はもう決めてる。私は飾りだけど、それでもそんな事だけは絶対にさせない！

そう思って頑張ってきたんだもん。でもそれをガイエンが本当に望んでるなら……やっぱり私は行かなくちゃ。友達を止めるのは・・友達の役目だから！！」
ザッ――と私は黒い影に覆われた足をようやく地面に突き立てる。実際立てたのが不思議な位、感覚が無い私の足。
でもまだここから、私はタゼホを目指さなくちゃいけないもん。

そしてここから脱出するためには目の前のこの親衛隊二人をどうにか倒さなくちゃ。

そう思って私は久しぶりにウインドウを開いて武器欄へ。そしてそこから懐かしい一本の剣を選択して取り出します。

久しぶりに腰に加わるこの重さ。実際それだけで辛いけど、でも支えられる様な感覚もある。前はずっとこの剣で戦ってたもん。だからこの子は私の頼れる相棒です。

もしかしたらもう抜くことは無いのかな？　って思ってたけど、今の私はただのエルフだから……昔の様に無茶……やってみようって思う。

「行くとはもしやタゼホか？　やめとくべきだな。カーテナもないアンタが行って何が出来る？　まあそもそも、ここから出すわけもないがな」

そう言って親衛隊の二人も剣を抜く。ガイエンと同じ様なロングソードだ。それは親衛隊の基本装備。国費で揃えてあげたのに、それを向けるなんて恩を仇で返す奴らです。

それに侮って貰っては困ります。そう思い私は半身をさらして構えをとる。

「それは……残念です。国民に手は出したくないですけど、緊急事態だからしょうがない。カーテナ……確かに今はその力を持ち合わせて居ないけど……甘くみないで！

私はアギトとガイエンの二人と、この剣一本でいろんな敵を倒してきました！　私の力は決してカーテナだけじゃない！！」

そんな宣言と共に私は駆け出します。スキルを付加した剣は黄色い軌道を描いて前へ進み。同時に私は詠唱開始。一人に剣を、もう

一人に魔法をぶつけて動きを封じる。
二対一じゃどうしても不利だから。まずはどちらか一方の動きを封じるのが先決です。

「そうかもな。あの人達と一緒に居たその実力は買ってるさ。だけどな……だからどうしたってんだ。そんなフラついてる剣じゃ何もさせないぜ！！」
「――っぐ……きゃあああああ！！」

速い！　と思う間も無かった。だって見えなかったから。私の剣は簡単に避けられて、その直後にお腹に攻撃が入った。
そして簡単に吹っ飛んで、今は黒いクリスタルにぶつかって止まった所。久々の戦闘は、やっぱり結構痛い。て言うか

「私も……随分弱くなったものです」

そう呟かずに居られない光景。何にも上手く行かないな。自分の情けなさに失望だよ。そしてこんなに鈍ってた事も愕然な事実。
ってそれは当然か。あれからずっと、私はアルテミナスに繋がれてたもん。偶に外に行くときも、私が剣を抜くことなんか無かったし、何よりもカーテナは圧倒的すぎて面白味がないよ。

私なら目測出来れば魔法と同じくらいの距離からでも攻撃できるし。見えないカーテナの力に逃げ場なんてない。基本数発で滅多打ちで終わっちゃう。
こっちは軽く振ってるだけなのにね。だからこんな生の戦闘は忘れちゃう。いろんな物が見えなくなって、出来なくなってる。
実際、さっきの詠唱は失敗してたし……情けない。何にも私は出来ないのかな。ずっと俯いてるだけなんてもう嫌なのに。

「あんまり無茶しないでくださいよアイリ様。そんな状態で何ができます？　いや、万全でも今のアナタに負ける気などしないけどな。
だから大人しくしててくださいよ。あんまり痛めつけると、俺らがガイエン様に怒られるんだからさ」

そう言って近づいてきた奴が剣を私に向ける。あんまり痛めつけると？　それってある程度は痛めつけてもいいって事？
まさかガイエンがそんな事……と思いたい。だけどもうここまでやってるんだよね。私を使ってガイエンはカーテナを振るってる。
それは自身にリスクの無い方法だもん。私の事なんて、もうどうでもいいって事なのかも知れない。だってガイエンはきっと知ってた。私がどうなるか。
その時、今まで口を開かなかった方の人が初めて言葉を喋った。

「やめておけ。ガイエン様は不用意に傷つけるなとおっしゃった。この方は大切な方だ。それに今ので気付かれただろう。
自分が戦闘できる状態で無いことを。大人しくしているしかないとな」

そう言って興味なさげに私に背を向けるそのエルフ。そして剣を向けてた方もつまらなそうに「はいはい」言いながら剣を納めた。

「人形は人形らしくしてて下さいねアイリ様」

そう言って奴も背中を向ける。悔しかった。何も出来ない自分が……手にしたと思っていた物が手のひらから流れ落ちていく感覚をどうする事も出来ないのかな。

「そ……んな……事ない！！　人形……なんて……もう言わせない

んだから！！」

私はもう一度立ち上がる。まだ全然私はやれる。諦めなければどうにか成るって私は知ってるもん。どうにか成らなくても、諦めない行動を取ることが大事。

この剣を握ってる時、そして最初の頃のカーテナと共に突き進んだ侵略の日々はそうだった筈だよ。私はいつの間にか弱気に覆われてた……だけどそれも今日で終わり。

もう一度私は目指してみる。今度こそみんなでわかりあえる国を。その為には、アギトもガイエンもどっちも必要だもん。

このアルテミナスのピンチに、喧嘩何かいつまでもやってる場合じゃないよ。

すると私の様子を横目で見た親衛隊二人が大きなため息を付いていた。そしてお互いを見てこう言った。

「おいおい、どうするよアレ？　懲りてないようだぜ？　分からせた方がいいんじゃねーの？」

「仕方ない。だが殺すなよ」

「当然」

一人のよく喋る方の親衛隊が剣を抜いて、嫌な顔で再び近づいてくる。実際私をいたぶりたかったとでも言うような顔だ。

正直ゾッとするような感じ。だけど私は引かないよ。前に進むと決めたから。重い腕に力を込めて、今度は両手でしっかりと剣を握る。

体を覆う黒い影がどんどん顔にまで近づいてる気がする。気持ちを強く持ってなきゃ、たちまち私もこの闇に飲み込まれてしまいそう。

心と体で対する物が違って、実際は立ってるだけで一杯一杯。さっきの事を教訓に、自分から攻める事が出来ないよ。だけどどの道、今の私には彼の剣線一つ受けきる事も出来ないかも知れない。

そう思うと、こうやって睨みあうばかりじゃこっちが不利になるばかり。だって私は変なステータス異常を食らって状態に近いもん。

この影がその原因。動かないのもじり貧で、動けば当たる確率何て低いって、凄い賭にでてるよ私。でもよく考えたら、勝てない相手に私はいつだって向かっていったっけ。

アギトは迷惑がってたけど、一度も私を置いた事は無かったな。アギトは偉いよね。こんな私に付き合って、稼いだ時間を不意にしてくれてたんだもん。

そしてそれが出来てたのは隣に絶対にアギトが居たからだって分かるよ。だって今の私は……こんなにも情けない。

影のせいとかだけじゃなく、普通に怖いと思うもの。でも進まなきゃ、今度は私から誰の手も離さないように掴むために。

「やめといた方が良いですよ？　アナタの剣なんて掠りもしないんだから。まあ少し抵抗してくれた方がこっちも楽しくやれるんですけどね」

「私は……アナタの遊びに付き合ってる場合じゃないんです！！」

何が抵抗してくれた方が楽しめますだ！　ただの変態じゃないですか。私は両手で握った剣を大きく振り上げて、目の前の親衛隊を一刀両断する気で振り下ろします。

だけどそれを横に軽くそれて交わす親衛隊。すると今度もまた同じように、このタイミングで奴の剣が迫ってきます。

「ふん、おかしな事をいいますねアイリ様は。この世界そのもの、

ＬＲＯ事態が遊びじゃないですか！　ここだけでも身勝手に自分勝手に、生きるのが何が悪い？
俺達はもっと住みやすくしようとしてるだけだよ！！」

迫る剣を避けることも、はじく事も、防ぐことも、今の私には出来ない。この手に有る剣を放さない様に握りしめるだけで精一杯。また痛いの来るとわかりながらも、私はどうすることも出来ない。

（なら……それなら！！）

覚悟を決めた私は迫る剣に向かって行く。逃げることも避けることも防ぐことも出来ないなら、せめて攻め続ける事をするだけです。
後何回振れるかも分からない剣。それならこのタイミングなら確実に当たる筈。有る意味、良い選択じゃないのかな。
問題は攻撃のインパクトに耐えて振り切れるかだけど、やるってもう決めたんだ。

「小賢しいですよアイリ様！！」
「あああああああああああ！！」

奴の言葉に返す余裕なんて無い。こっちは剣を支えて振り切るのに全神経を集中してる。そして奴の剣が私に食い込む……まさにその時だった。
どこからともなく現れた小さな影が、私の体を貫く筈だった剣を弾いた。

「何！？」
「今だ！　アイリ様！　遠慮なんていらない！　やってしまえ！！」

その声に促されて私は全身全霊を持って剣を降る。そしてとても

遠くに感じれた奴の体に食い込む、その感触が確かに私の手には伝わってきた。
　大きな音を立てて吹き飛んだのは親衛隊の一人。その光景にもう一人は驚いていた。そしてそれは当然私もです。誰が一体……その時、どこからともなく情けない声が聞こえる。
　そして空から落ちてきたのは一人のエルフ。ポカンとする私たちの間で彼らは言いました。

「遅いよノウイ君。と言うか、位置の算出が甘い」
「うう、それはテッケンさんが飛び出すからっすよ！」

　それは心強い私の味方？　でも間違いなく、私の心の光がまた一つ強くなった気がします。

影に飲まれてる私（後書き）

第九十八話です。
今回は現在進行形アイリ編です。囚われのアイリの現状みたいな感じ。アイリの二人への思いとか、だけどそれでも少しずつガイエンとアギトとの違いとかを出せたらいいなあって感じです。
では次回は火曜日に更新します。それではまた～。

手にした力（前書き）

カーテナ……伝承ではそれは、一度振るえば千の敵をなぎ倒し、二度振るえば万の敵を地に伏せさせ、三度振るえば天の裂け目で敵の国を滅ぼしたと言われる武器。

流石にそこまで大袈裟な事にはならないだろうが、規格外なのは間違いないんだろう。そしてその力を手にすると言う事は、同時にこの国を背負う事と同義だ。そしてその気持ちがなければカーテナは現れない。

そうアイリはもう、自分のやるべき事を……やりたい事を決めている。

手にした力

「カーテナ……その……光を……力を……寄こせぇぇ！！」

風前の灯火のグラウドが、アイリが放つその光に触発されたように動き出した。奴の槍は歯車が欠けた時計の様にガクガクで、もう上手く動いて何か無い。

だけどそれでもグラウドは求める。あの力を。無理に回転させようとする余りに響く音は明らかに不協和音でしか無く、スキルを纏わせる事も出来なく成ってる。

だがグラウドは迫る。その顔を羅刹の様にして。それはもう執念とかの域を越えてる表情だ。何がこいつにここまでさせる。どうしてここまで力を求める？

ゲームだからって、いろんな所で折り合いをつける人が多い中、こいつはこのＬＲＯに何を賭けてるんだよ。まあある意味、ここまで入れ込んでると天晴れだけどな。

けれどカーテナを渡すわけには行かない。俺もガイエンも動こうとする。人外に落ちそうな位の表情を浮かべて迫るグラウドは怖すぎて、アイリは思わずカーテナを振ってこう叫んだ。

「こ……来ないで！！」

「ごっは！？」

俺達は握っていた武器を落としそうに成った。だってそれはまさに一瞬の出来事。てか何が起きたのか理解できない。

さっきまでこっちに向かって勢い込んで走り込んで来てた筈のグラウドが目の前から消えた。無様な悲鳴の様な叫びだけを残して。

そして同時に凄い衝撃音と衝撃波も伝わって来て、何が何だかさっぱりだ。

アイリも目を丸くしている。拡散していく煙から見えてきたのは、クレーターの様に抉れた床と、その中心で色褪せたグラウドの姿。あれは戦闘不能状態。

つまりはＨＰ０って事だ。そしてただでさえ限界だった奴の武器は、みるも無惨にペシャンコだ。火花が悲しく散って、それが最後の火の様だった。

「え？　え？　何が……え？」

アイリは混乱してあたふたしてる。そして視線が俺とガイエンに交互に注がれるが、生憎答えを俺達も持ち合わせちゃいない。

何が起きたのか、こっちが聞きたい位だ。だって俺達もまだ何もしてないんだぜ。それなのにグラウドは攻撃を確かに受けて倒されてる。

でも一体誰に？　アイリが俺達を見るのも無理はない。今ここには俺達三人しかいないんだからな。だけど俺も、ましてやガイエンも何も出来て何か無かったと確実に言える。

だってガイエンもアイリを挟んだ向こう側で驚愕の顔してた。こいつが目を丸くしてる所なんか貴重だったから、残したくない記憶に残ってた。

そしてそんなガイエンが一つの可能性を提示する。

「もしかして、今のがカーテナの力……何じゃないか？」

「え？」

「は？」

俺とアイリはガイエンの言葉で同時にその光剣に目を向ける。するとさっきまで光輝くシルエットだったその剣は次第にその姿を現してきた。
だけどやっぱりちっちゃいな。綺麗な装飾がされていなければただの玩具にしか見えないかも知れない。だからだろうか？　何だかこれがカーテナとは受け入れ難い。

「本当にこれがカーテナのかよ？　何というか……陳腐過ぎじゃないか？」
「それなら確かめれば良いだけの事だ。アイリ」
「う……うん」

まあガイエンの言うことはもっともだった。だからアイリも素直に自身が掴むそのカーテナと思われる武器に手を伸ばす。
そしてチョンと触れると横に画面が表示される。武器の名称やパラメーターとかが出てくるように成っている……筈、なんだがそこに表示される画面は真っ暗だった。

「あれ？　どう言うことなんだろ？」

そうアイリが呟くのは無理もない。俺が今まで見てきた中でもこんな事は一度だって無かったからな。もの凄く特別な物だからって事なのか？　それともただのバグ？
でもＬＲＯは超が三つ程付くほど高性能だ。今まで処理待ち何かあった事がない。つまりはバグでこうなってるだ何て、余り考えられないな。

するとその時、その黒い画面に青い線が中央に入って、そのまま上へと画面から飛び出てきた。そして驚く俺達を無視して、システムは淡々と作業をこなしていく。

青い線は次第に多く成り、形作りは人の形。そして現れたのは等身大の女性のエルフ……って言うかこの人何だか見たことがある気がするな。
つい最近、ついそこら辺でさ。

「この方は……アルテミナスの初代女王。なるほど、ここら辺はイベントか」

まさにガイエンが言ったとおり、ホログラムされて現れたのはあの彫像と、絵にあった女王様だ。そして確かにこれは強制インベントっぽい。
この武器を手にした奴にだけ起こる限定のイベント。それなら超貴重な体験を俺達は目撃してる事になるな。現れた王女様はやっぱり綺麗な人だ。

それも戦乙女って感じ。まあそれでも服装はロングスカートとか何だが、鎧とマッチするように作られてるんだろうそれは、やっぱりあの絵の中心で力強く剣を掲げてた人だと分かる。
ヴァルキリーっていう言葉が似合いそうな人だ。
そして完全に浮かび上がると、彼女はそっとその瞳を開いた。長いまつげの中から現れた瞳はまっすぐにアイリを見つめてる。

「えっと……あの……」

たじろぎながらも声を掛けようと試みるアイリ。会話が出来るのだろうか？　実際ここまで出したのなら出来そうな気もするが、こういう歴史と繋がりがあるイベントやミッション系ってその場で物語を体験する……みたいな感じだから、ＮＰＣが勝手に話すのを聞いてるだけなんだよな。

だからこの彼女はどうなんだろう？　そう思っていると王女様はその色づいた唇を優しく開く。

【カーテナの出現は想いの証。私の次は貴女ね。頑張りなさい】

「え？　ええ？　あの……」

何だかいまいち応答してくれたか分からない王女様にアイリは再度アタックだ。すると今度は優しく微笑んで「うん？」と問い返してくれた。

どうやらちゃんと会話が出来る様だ。

「これはカーテナ何ですよね？　でも……何で私に？」

【言ったでしょ？　それは想いよ。アルテミナスの事、エルフの民の事、それらを一番大切に思える心がカーテナを生むの。

エルフであれば誰しもが心にカーテナを持ってるわ。けれどそれを形にするにはアルテミナスに認められなきゃ駄目なのよ。

試しの迷宮で試す試練はそんな想い。そしてアルテミナスに認められた私たち王家の者は、カーテナの器を贈らる。

カーテナという心を形に移して、アルテミナスの力を振るえるのが私達王家の者よ。まあ最初に私がそうであっただけで、以後は一度もカーテナは出なかったんだけどね】

そう言って王女様はクルクルと回ってニコッと笑う。何だか無邪気な人だ。体を実感してる様に無駄に動いてる。

まあ確かにアルテミナスの史実にもカーテナの事はこの人の時代にしか記されてない事だからな。アイリはＬＲＯという世界の中で凄いことをやったことになる。

カーテナを手にする可能性はみんなにあった・・だけどそれを手にしたのがアイリってのは何だか、運命の様な必然の様な感じだ。

俺は知ってるからな。アイリが誰よりもこの国を……そして俺達

を思ってくれてたこと。この周りを照らす光はやっぱりアイリへ向けられた、アルテミナスの心みたいなものなのか知れない。

そして胸を貫いた光はアイリの想いを器に移してたって事？　だからアイリから出てきた様に見えたのか。けどあのカーテナがアイリの心から出来てるのなら、それもあながち間違いじゃないな。

「じゃあ責任重大何ですね」

【そうね。潰れちゃう位、重い物がのし掛かるかもしれないわ】

俺がこの凄さを端からポケーと見てるとアイリは少し強ばった声でそう言って、そして王女様も少し瞳を伏せてそう言った。

けれど直ぐに王女様は顔を上げてアイリに近寄る。その顔に微笑みを乗せて、高貴な雰囲気で包み込む。

【でも大丈夫。恐れないで、その力を。そして正しく使いなさい。この国を照らす輝きは、今この瞬間から貴女に成ったのだから】

「え？」

キョトンとした顔をして王女様を見つめるアイリ。俺達もよくわからなかったな。比喩表現か？　カーテナを持ったアイリがこの国を導くであろうから、それを例えたとか。

でもそんな抽象的な事じゃなくて、王女様が言ったのはどうやらそのままの意味だったらしい。俺達の後ろで輝くクリスタルを指さしてそう言った。

【この国が息吹きを繰り返してる。この輝きは今やアルテミナス中に届いてるわ。光明の塔はね、カーテナを持つ者と通じあってるの。だから貴女の光が失われない限り、光明の塔はこの国にその輝きを見せ続けてくれるわ】

「光明の塔って……黒かったですよ」
【もう光ってるでしょ？】

そう言われて俺達はようやく気付いた。まさかこの彫像が彫られてた巨大なクリスタル……これ自体がアルテミナスにそびえ立ってた光明の塔その物か！！

確かにこれだけデカいのと成るとそれ以外ないと今ならわかる。天井を突き破ってるのも、地上部分が光明の塔と呼ばれてる部分って訳だ。

でもまさか……だろ？　塔とか言いながらあれがクリスタルって事は知ってたが、あんな景観を損ねるだけの物、誰も注目なんてしてなかったから気付かなかった。

それに最初から微妙に光ってたしな。ちゃんと役割があったんだな光明の塔ってさ。

でも話を聞いてる限り、かなり強力に光ってそうだな。アルテミナス中を照らすってさ。外の人達は一体何が起こってるのか分からないだろう。

「あ……あの！　私は何をすれば良いんですか？」

アイリのそんな質問に、ホログラムの筈の王女様はギュッと抱き締めた。そして耳元で囁く。

【それはもう貴女は知ってるでしょう？　ううん、決めてるでしょう。それをやり遂げなさい。自分を信じて、付いて来てくれる者を信じなさい。

それで、きっといいのよ】

それを聞いてアイリは俺とガイエン、双方に目を向ける。その瞳

が少し潤んでる様にも見えたけど……どうだろうな。
アイリは王女様に向き直ると、「はい」と優しく告げた。するとの返事に満足したのか、王女様は淡い光に拡散して消えていくんだ。
そしてその時にもう一言。それが王女様の役目だったのか、謎に包まれてるカーテナの機能の一つの開示を示す。

【ああそうだ。今の貴女には騎士を選び力を与える事が出きるわ。だからまずは選んでみてはどうかしら？　貴女が信じ、頼れる貴女だけの騎士を。
その騎士はきっと特別よ】
「え？」

王女様の腕が僅かにアイリの髪を引いて、最後に消えていった。その瞬間持ち上がってた髪が空気をかき分ける様にゆっくりと落ちていく。
だけど光の粒子に成った王女様はなんだかまだそこに居る感じ。アイリの上に集まってるからかな、その光が。けれどその光は直ぐに一つの場所に向かって行く。
優しい風を吹かせて王女様の光が向かったのは輝くクリスタル。そしてその中に入ると一際強い光を放つ。それは何だか「さよなら」と言われてる様な気がしたのは俺だけか。

そしてそのまま王女様は光を放ち、中心へと進み一気に上へ昇っていった。天国までの片道切符はロケット噴射並の速さみたいだ。
あれなら月のない夜空までひとっ飛びでいけそうだ。このクリスタルが光明の塔なら……あの人はきっと、愛したこの国に見送られて逝ける筈だ。
そして沢山の同胞にも見送られてな。

ＬＲＯは不思議だ。さっきの王女様はプレイヤーじゃない。ただのプログラム。言わばＮＰＣの筈なのに、少しだけ知ってる昔の事（これも作り物だけど）が、彼女の事を感慨深くさせるんだ。

それにやっぱり目の前で見れて、感じれるのが大きい。『生きてたんだ』そう思える。彼女はそれを疑って何かいなくて、彼女にとっては本当にこれが最後の時だったんだ。それを思うとどうしても、いくらゲームでもやっぱり何かがこみ上げてくる。

ここには画面と静態してた時には伝わらない物で溢れてる。日差しの暑さや風の運ぶ緑の匂い。雨の奏でるメロディーに、水の冷たさ。

そして耳から伝わる言葉の重みや、目の前に現れる敵のプレッシャーなんか……それらは家の中でコントローラーを握ってピコピコやってる時には決して感じ得ない『リアル』何だ。

仮想であるＬＲＯでリアルってのも変な気がするが、そうなんだよな。俺達もここに居る間は、ここで生きてる気がする。

それだけＬＲＯは“世界”を造ってるんだ。

「よし、これでここでの用は終わったな。取り合えず外に出るぞ」

「ガイエン……お前な」

何だか一気にこの空気をぶち壊してくれたな。どうやらこいつは、あの王女様の最後に何も感じて無かったようだ。まあ、こいつはそう言う奴なんだけど。

ゲームはゲームとしか見てないからな。

「なんだアギト？　私にお前達と同じように感慨へ浸れとでも言う気か？　それは無理な相談だな。逆に分からんよ。

あれは魂も何もＮＰＣ。それに引きずられるお前達がな。お人好しが過ぎる。アイリはそれが当然だが、お前も相当だアギト」
「う……別にそんな訳じゃ……それに今更お前に、んな事求めるなんて事しねーよ。ただ興が削がれるから、少しぐらい言い方考えろ。
俺は良いけど、アイリは直ぐに何とでも通じるんだよ。そんな事分かってるだろ」

そう言ってアイリの方を見ると、アイリはまだ光が昇ったクリスタルを見てた。そんな様子をガイエンも見て肩を竦める。
ガイエンの奴は何かとアイリには甘く成ってるから、少し言い直す気でも出てきたのかも知れないな。だけどそう思った矢先に、アイリが先に口を開いた。

「いいんですよガイエン。私なら気にしてないですから。そうですね……行きましょう。約束したから、信じる事をやるって――」

そう言って振り返ったアイリは笑ってた。そして俺達に近づいて来て真っ直ぐにカーテナを握ったままの拳を突き出した。

「――ねっ☆」

その瞬間だ。シャンと空気を切ったカーテナが猛威を振るったのは。

「ぶがあああ！？」
「ぼべえええ！？」

それは驚愕するしかない衝撃だった。まるで見えない巨大なハンマーで打っ叩かれた様な……大型トラックとかと衝突したら、きっとこんな感じ何だろうって思う程の衝撃が真っ正面から俺とガイエ

ンにぶつかったんだ。
　そして俺達が進んできた直線のかなり先の方まで飛ばされた。地面に付いてからもギャグみたいに滑りまくった。

「っつうぅぅ……何だ今の？」
「ぐ……どう考えたってカーテナの攻撃だろう」
「そんなの分かってるよ！　何で粋なりそんな物騒なもんを食らわせられるのかって聞いてんだ」
「貴様の面がムカついたんじゃないか？　たく、とんだとばっちりだな。地面に頭を擦り付けて謝れアギト」
「あっ？　バカ言ってんなよテメー。お前の言動に実はムカついてたんだよ。こっちが被害者だ！　別に頭を下げろとかは言わないから、俺の穴で踏んだこの石でも美味しそうに食ってみろ」

　俺達の間に一瞬で険悪なムードが漂う。もしもパーティーに成ってなかったら一撃でやられてたかも知れない攻撃だったな。
　だけど俺達がにらみ合うは横に居る被害者同士。どうしてもアイリの方へ詰め寄らないのは俺達らしいが、これは何か引っ込みが付かなく成りそうな感じだ。
　てかあんな痛いところに、あんな事をこのガイエンが言いやがるのがそもそもの原因。やっぱムカつくとまた再々再確認したな。こいつとは拳以外で語れそうもない。

　ガイエンは俺が差し出した瓦礫をたたき落とすと、ゆっくりと自身の武器に手を伸ばし始める。だから俺も自然と槍へと手が伸びる。
「この私に石を食えだと？　しかも貴様がその汚いケツで踏んだ石を？　やはり貴様にはどっちが上かはっきりとさせて置いた方が言いようだな」
「上等だな。いい加減に分からせてやるよ。俺にはお前に下げる頭

は持ち合わせてないってな」

ゴゴゴゴゴ……と俺達の間の空気が振るえる。するとその時、追いかけて来てたらしいアイリの声が聞こえた。

「えっと……あのね……どうしよう！！　ごめんね二人とも！　でも制御出来ないの～」

責任感じてたアイリは既に泣き顔だった。まあ粋なり仲間を吹き飛ばせば泣きたくも成ると思うが、それがいかにもアイリらしくて一気に雰囲気を持ってかれた。

まあつまりはガイエンと一戦交える気が失せたって事だ。そしてそれはガイエンも同じ様で、手を添え掛けてた長刀を抜くことはしなかった。

そして近づいてくるアイリに慎重に言葉を投げかける。

「そうか……まあ気にするなアイリ！　だからまずはそこで一端止まっておけ」

「え？　本当に許してくれる？」

俺達から十メートル位離れて立ち止まったアイリはちょっと信じれない様に聞いてくる。確かにアイリに幾ら甘いガイエンでもそれは……と思ってるんだろう。

だけど俺も今回ばかりはガイエンの感じた危機に賛同だ。

「当然だろ！　ＨＰも減らないし、別に気にする事じゃないさアイリ。だからとにかく、一度冷静に成れよ」

「うん……ありがとう」

俺達は必死だった。何故ならアイリが腕を振り回して来た跡がと

っても悲惨な事になってたからだ。それはまるでついさっきの自分達を見てるようなんだ。
何か全身が今の痛みを思い出す感じがぶり返して寒気がさ……破壊不可の筈のダンジョンで、ガイエンのあの攻撃でさえ完全に破壊は出来なかったのに何だよあれ。
ボロッボロだ。壊れた部分が多すぎてプログラムコードが走ってるのが見えてるぞ。まあ取り合えずアイリは離れた所で止まってくれたが、これは実際大丈夫なのか分からない。
カーテナの攻撃範囲はまだ未定だ。把握できてない。俺達の言葉で落ち着いてきたアイリだが、安心は出来ないな。

「力が溢れて来る感じが止められないよ……」
「暴走とかしてるのか？　それか力を受け止める為の物が無いとか……そうか！　鞘が必要なんじゃないのか？」

そのガイエンの発言には俺も納得だ。そういえば彫像も絵もカーテナは鞘に入ってた。それに鞘って意外と重要な感じで物語って描かれてるし、カーテナほど特殊な武器ならそれも考えられる。
だけど……

「鞘なんてどこにもないよガイエン。彫像のは取れる訳も無かったし……このままじゃ腕振れない！」
「まあ確かに無かったよな。じゃあアイテム欄に戻すとか？」

俺がそういうと早速実行。だけど次の瞬間にはポンッとカーテナはアイテム欄から出てきた。八方塞がりだ。涙顔のアイリには悪いが今はどうする事も出来ない。
取り合えず離れて、腕を動かさないようにしながら俺達は出口を目指した。そして流石に光が届かなくなった暗い道を進んで階段を上がる。

出口を出ると俺達は目を覆った。だってそこは眩しく光ってたから。夜を昼と見間違ってしまいそうな輝く光。それは正しく、光明の塔から発せられてる。

「綺麗……」

そう呟いたのは最後に出てきたアイリだ。これを自分がやったなんて信じられないだろうな。だけどそれが事実。それを証明する証をアイリは握ってる。

カーテナというこの世界でただ一つの剣を。そしてこの国を真に照らすのはきっとアイリというプレイヤーの役目何だろう。

そして俺は、そんなアイリを支えて行きたいと思う。これからもずっと。この華奢な体で抱えたとてつもなく大きな物を、少しでも一緒に支えて上げれたら……俺はきっと嬉しいはずだ。

アルテミナスを照らす光はアイリの様に暖かくて、そしてどこまでも広がってた。きっと今夜は、この国に居る誰もがこの明かりに照らされた空を見上げた筈だ。

新たな光が昇った空を。

手にした力（後書き）

第九十九話です。

なんと次で百回ですよ！　百話って何だか感慨深いけど、アルテミナス編やり過ぎだ！　見返したら三十話位から入ってるし……長い。自分で言うのもなんですけど長い！

でも自分的には終わりは見えてるんですけどね。何だか長くなっちゃう。未熟ですみません。でもこれからも頑張るので見守っててください！　出来ればこの作品の最後まで！！

ではでは次回の百話目は木曜日に更新します。それではまたその時に。

暗黒の騎士（前書き）

私の前に現れた二人の味方。そんな彼らは私が一番欲しかった事実を与えてくれました。それは彼がちゃんとここに居るという事です。もしかしたら……何て気持ちが無かった訳じゃないんです。

だけど伝わったその事実が私の中に灯ります。そしてこの人達と行かなくちゃ、そう思いました。けれど立ちふさがる親衛隊は予想以上の切り札を持っていました。

暗黒の騎士

「貴方たちは？」

そんな私の言葉に小さなモブリが応えてくれる。小さい筈なのに、その背中に異様な力強さを持ったモブリ。彼ははっきりとこう言いました。

「救援ですよお姫様！」

そして後から落ちてきたエルフの人も言ってくれます。

「そうっすよアイリ様。俺達が運んで見せます！　アギト様の所まで！　行きましょう！」

情けない登場だった割には力強く彼は言いました。そしてアギトって言葉が出たとき……こみ上げて来る物が押さえきれない。

涙が涙を押し退けるように大渋滞です。ううん押し退けてたら大事故だね。だけど……止まらないよ。

「ええっと……何か不味いこと言ったっすかね？　大丈夫っすよ。俺達は味方っす！」

震えながら涙を流す私にノウイと呼ばれたエルフは狼狽えてます。だけど当然ですね。私はいきなり泣いちゃう変な子です。

でも、今だけは許してほしい。だってずっと不安だったから。信じてたけど、それを確認する事なんて出来なくて、来てくれてるのか実はずっと知りたかった。

そしてそれは彼の何気ない一言で確信に変わりました。私を助けてくれたこの人達に嘘を付く理由なんてない。それにこの小さなモブリ・・テッケンさんと呼ばれたこの人を私は一度見てます。
この人、アギトが今やってるアンフィリティクエストのパーティーの一人の中にその姿を。だから間違いない。彼はアギトはちゃんと来てくれてる。
それが私の胸を一杯にしてしまってます。そしてそれならアギトは今まさにガイエンと……

「あの！　それは……大丈夫……わかってます。アギトは……今戦ってるんですか？」

涙を浮かべて迫った私にノウイは安心するどころか更にたじろいだ感じです。うう、本当にごめんなさい。いちいち様子が変わって変な女と思われてそう。
だけどこれは大事な問題。だってアギトがまたここに来たのなら、あの二人がぶつからないわけがない。だって私をこうしてるのはガイエンなんだから。

「はい。ガイエン様……いいやガイエンと戦ってるっす。勿論貴女を取り戻す為に」

やっぱり、絶対にそうなってると思ってた。このカーテナの闇が強くなったのも、ガイエンがアギトと相対してるから。私はやっぱり……ここで待ってるだけな訳にはいきません。

「私……行かなくちゃ！　だからお願い……私を二人の元まで連れてって……お願い……」

陰が深く私を浸食してる。さっきの一撃で体力と気力の両方を沢山消費してしちゃったみたいです。剣を持ち上げることはもう出来なくて……立ってることも……もう限界。
膝が折れて、私はノウイの方へ崩れていきます。そしてそんな私を、彼はとっさに支えてくれました。そこはアギトとは違う胸の中。

「だ……大丈夫っすかアイリ様？」
「だい……じょうぶ。ごめんなさい……こんな情けない私のせいで……みんなに迷惑掛けて」

本当に、もうどうしようもないな私。肝心な時に役に立てなくて、ずっとまともな事なんて出来なくて……言いなりで、人形で、アルテミナスのみんなを実は騙してたんだ。
こんな私がエルフの国の代表に成ってご免なさいだよ。本当に。

「そんなこと……そんなこと無いっす！　迷惑なんて、幾らでも掛けていいんすよ。だって俺達の国があるのは、アイリ様のおかげなんすから。
誰もその事を忘れる奴なんて、エルフの中じゃ居ないっす！　親衛隊の様な奴らばっかじゃないっす。自分のやってきた事にもっと誇りを持って良いんすよ！
俺達エルフは、アイリ様に感謝しきれない思いを抱えてるっす。それを少しでも返せるのなら、一杯迷惑掛けて欲しいっすよ」

頭上から掛かるノウイの言葉は直接私の脳に響く様でした。心が本当はどこに有るかとか分からないけど、この時はきっと頭と合体してた筈です。
だって、スゴくその言葉が染みてきたから。上を向くと変な顔でノウイはハニカんで笑ってました。豆粒の様な目を線にして、眉は情けなく垂れ下がり、ちょっと申し訳なさそうに。

そんな顔なのに……ううんそんな顔だからかな？　何だかとっても安心出来ます。この頬を伝う涙が、今はもう一つの事で流れてる訳じゃなくなってた。

自分がやってきたことが間違いじゃないと言われて、そしてそれが沢山の人に安心を与えてたと言われた。もっと誇りを……本当に持って良いのかはまだ分からない。

だけど……救われた様な気持ちに成るよ。そしてこの騒動を終わらせれば、また少しは自分に自信が持てるかも知れない。

そう思える。

「ありがとう……」

そう伝えるのが精一杯。口に出したいことはいっぱいあったけど出てこないよ。私がこの国とみんなを思ったように、今はみんなが同じようにこの国と私を思ってくれてる。

そんな光に溢れるアルテミナスを、やっぱり潰させるなんて許せない。それに気付きました。幾ら窮屈に成っても、大切な思い出が沢山あるこの国が……私は大好きです。

キュッとその胸に体を預けてみると意外と力強い。そして思います。この国のエルフ達はきっとみんなこういう風なんだって。

何かを支える物をみんなが持ってる筈です。だから少しの間、私は任せてもいいのかも知れない。だってもうあの頃とは違うんです。

みんながこの国を大切に思ってる筈だから。沢山の人が今この瞬間も戦ってくれてる。任せられる背中が一杯に増えてます。

だから少しの間……ね。

「アイリ様？」

「えへへ……みんな大好きだよ。だから私の事……ちょっとお願い

していいかな？」

私のそんなおかしな事をノウイは真剣に聞いて頷いてくれます。

「はい……光栄っす。必ず、アギト様の所まで送り届けるっす！だから安心しててくださいっす」

「ああ任せてくれ。男として、僕は約束は違わない。君は君のやるべき時の為に少し休んどくといい。かなり辛そうだ」

「そうします」

一気に安心感が体を包む。するともう全く力が入らないよ。でも不思議と抵抗してる訳じゃないのに影の浸食は起こらない。

心にまた一つ光が灯ったお陰かな。私たちの光は、ただ見えなくなってるだけなのかも知れない。本当は前と変わらない光がそこにあって輝いてるのかも。

そしてその光は、今もきっとアルテミナスを照らす光に成り得る気がする。

「くっくはははははは！　今更その女に何が出来る！？　何を見いだせる！？　お前達も自分達の上に立つ奴は選ぶべきだぞ！！」

その時聞こえたのは私が吹き飛ばした筈の親衛隊の声。下品な笑い方に失礼な事をズバズバ言う奴です。折角の安心感が台無し。

だけどノウイとテッケンさんは打ち合わせてた様に、その返事はせずに動き出します。

「行きたまえノウイ君！！」

「はいっす！　ミラージュコロイド！」

テッケンさんは前へ、ノウイ君と私の周りには何か透明な物が展

開しだしてます。そしてその何かは斜め上の方向へ向かって重なる様に広がって……その方向が多分タゼホ何でしょう。
ノウイはしっかりと私を抱いて、その何かへ向かった……その時です。ミラージュコロイドなるスキルと思われる物の間に何かが隔たりました。
そしてその何かはこの遺跡を包むように展開してます。

「しまっ……くそ！」

そういってミラージュコロイドを動かすノウイ君。だけどその何かの外にある物体はそこを通過する事が出来ません。あれは結界？
どうやら私を逃がさない為にそういう仕掛けをしてたみたいです。

「結界装置とは手の込んだことを……彼女の為じゃないな。今のあの子はこんな事しなくても良いはずだからね。何が目的なんだい君達は」
「ふん……」

テッケンさんの言葉を端から聞いていた私たちはびっくりです。私用に用意されてた訳じゃない？　確かに自分で認めるのも何だけど、今の私にはこんな事までする必要なんてないかも知れない。
じゃあ一体どうして……これじゃあまるで最初から私を助けに来た誰かが目的でも有ったようです。

「俺の目的は貴様だ！　目が点野郎！！　良かったぜー、お前が落ちてきた時は天使にでも見えた位だ。まあお前ならここに来るだろうと思ってわざわざそんな女の監視役に志願したんだからな」

そう言って親衛隊の一人がノウイ君に指を指してます。何だか話を聞く限りかなりノウイ君に執着してる様な感じ。一体何をしたん

でしょうか？

「なっ、俺がアイリ様を助けに来ると思ったからこんな物仕掛けて置いたって事っすか？　何でそんなこと……タゼホに居ればイヤでも会えたっすよ。

随分な賭に出るんすね」

「何で、だと！？　何でと言うかお前が！！　くっくくくく、まあ敗者の顔なんて覚えてないか。まあ良いさ。そう俺は賭をした。そして俺はその賭に勝った。タゼホは混戦になるだろうと思ってな。俺はお前をタイマンで倒したいんだよ。誰の邪魔もさせねえ。

そして今度こそ忘れられないようにしてやるよ。『逃げ虫ノウイ君』よ」

『逃げ虫ノウイ』？　それって何だか聞いたこと有る気がします。確かいつかの日にセラちゃんがそんな事を言ってた様な……

「アンタ……そうか思い出したっす。アルテミナスでクーデターを起こしたときにセツリさんを襲ってきた奴っすね？

別に何と俺の事を言おうと勝手っすけど、負け犬の遠吠えは見苦しいっすよ」

「――っつ！！　きっさま！！」

ノウイ君の言葉に逆上した奴はこっちに真っ直ぐに向かってきます。だけどそこで立ちふさがるのはテッケンさんです。彼は前に出てたから……だけどそこに横から影が入ってきます。

「そうか！　そう言えば二人居たんだったね」

「アンタの事は気になる。テッケンって……まさかあのテッケンか？」

「それは自分の目で確かめてみる事をお勧めしよう！！」

寡黙だったはずのもう一人の親衛隊。だけど彼が異様に饒舌にテッケンさんと邂逅してます。そして一足先にその二人がぶつかり合い、その隙間を抜いて奴はこちらに迫ってきます。

「すまないノウイ君！　少しの間持ちこたえてくれ！！」
「マジで少しの間っすからね！」

ノウイ君は私を抱えて残った透明な板数枚を展開させます。この結界の内側にある分だけ。そしてその間に迫った親衛隊の饒舌な方がスキルを宿した剣を突き立てて突っ込んでくる。
私にはノウイ君がどうするのか分からない。私を抱えたままで戦えるのでしょうか？　でも腰の剣を抜こうともしないし……テッケンさんがもう一人を倒す間、彼はどうしようと言うのだろう。

「またそのスキルか！？　同じ様な事が二度も通用すると思うなよ！！」
「そんなこと……俺が思う訳ねえっすよ」

そう言ってノウイ君はトッサに横に飛ぶ。その瞬間、私の視界の遠くにさっきの親衛隊がいました。

「え？　一体……何が？」
「すみませんアイリ様。少しの間視界が次々に変わって酔うかもっす。でも俺にはこれしか出来ないっすから勘弁してください！
必ず傷一つ付けずにアギト様の所まで届けるっすから」

ノウイ君はそう言って私から視線を前へ移動させました。すると間髪入れずに奴は駆けて来てます。向こうもかなり速い、多分何かのアイテムでスピードをアップさせてるんでしょう。

だけどノウイ君のこのスキルはスピード云々の次元じゃない。親衛隊が追いついたと思ったときには、またこの結界の一番端に居るんだもん。
決して追いつかれる事の無い、決して本体に届かない、鏡を追いかける様なスキル。それがミラージュコロイド？
でも思うけど、これなら相手の後ろを取ることも簡単だし、不意を付くことだってたやすく出来そうなのに、何でノウイ君はそれをしないんだろう。

やっぱり私を抱えてるから？　でもテッケンさんに任せるって言ってた。あの人が倒す役目って事なのかな？　まあこれなら捕まる事なんて無いと思うけど、絶対に追いつけないと分かったらテッケンさんが危なくなる気がする。

「このままで……大丈夫なのかな？」
「大丈夫っすよ。テッケンさんはああ見えて強いっすよ。それに俺にはこれしか出来ないっす。アイリ様を守るために逃げ続ける……それが俺の役目っす」

これしか？　逃げることしか出来ないってどういう事でしょうか？　これだけのスキルを所持してる人が戦って来なかったわけは無いはずなのに・・それでもこれだけって。

「私が居るから……」

そう思うしかないよ。するとそんな私の呟きを聞いたノウイ君は慌てて言葉を重ねます。

「ち、違うっすよ。アイリ様のせいな訳じゃないっす。ただこれは……俺の弱さのせいっすよ。リアルでもここでも逃げ続けてた時に、

不意にどっかから降ってきた力がこれっす。
まあ力って言っても、これを発動中は攻撃力が極端に下がるんっすけどね。逃げ続けた俺に、逃げるための力が与えられたっす。
なら俺は、誰にも追いつかれない場所まで逃げちゃるって決めたんすよ。だから俺は戦ってるっす。『逃げ』こそが、逃げきる事こそが俺の戦いっす！！」

その時、横からいつの間にか迫ってた親衛隊の剣線が見えました。だけどノウイはそれを見ることもせずにかわします。
気付くと再び、奴の背中が遠くに見えます。それに微妙に位置が変わってる？　私たちはきっとスキルで出したあの板？　じゃなくミラージュだから鏡？　を移動してる。
基本それは見えないけど、何度も同じ場所に出てたら親衛隊にも鏡の位置がバレちゃうかも知れません。

そして実際、親衛隊の彼は次第に追いつくのが速くなってる。さっきの一撃なんて、ノウイ君が逃げの達人じゃなかったら危なかったよ。
逃げ続けてるって言ったノウイ君は、逃げ続けるって事は……辛くないのかな？　だけど私のせいじゃなく、自分が決めたこととノウイ君は笑ってた。
それは私が思う『逃げ』って事とは違うのかも知れません。

赤い筋が蠢く結界の中、黒くくすんだクリスタルに私たちの姿が映り込むんでは消えていきます。相変わらずノウイ君は逃げ続けてるけど、私が危惧した様には成りません。
それは相手がかなりノウイ君に執着してるのも有るけど、やっぱり交わすのが上手い事がその要因でしょう。本当に紙一重、届きそ

うで届かない……だから親衛隊の彼も諦め切れないんでしょう。
そして横目でテッケンさんを流し見ると、それなりに優勢みたいです。ＨＰ表示を見るとそれがよく分かります。このまま上手く行けば良いんですけど……

「はは……はっはははははは！！」

そう思った時、背中越しに私たちを追っている奴が笑い出しました。それは何だかイヤな予感を私に届けます。だってさっきまであんなに必死になって追ってきてたのに……一体今の状況のどこに笑える所が有るのかも分かりません。

「壊れたっすか？」
「ふん、流石に速さではかなわんか。相変わらずムカつくスキルだな」
「アンタにそう思わせられたら光栄っすよ俺は」

諦めたのかな？　何だか今回は追ってこないし……でもやっぱり胸の奥の方ではムズムズとした感じがある。何かが引っかかってる様な。
そして奴はこちらに向きなおり自身の剣を納めます。まさか本当に諦めたのかな？　この不安は杞憂？　でもそこで奴は口元をつり上げて不気味に笑います。

「ああ、だからお遊びは終わりにしよう。思い上がるなよ貴様。モブリ一人で俺達を倒す？　やれる物ならやってみろ！」

その瞬間、親衛隊の足下から私を包もうとしてるのと同じ様な黒い影が延びてきました。そしてそれは彼らを包み込んで球体の様に成りました。

「何だ？　一体これはどう言うことだい？」
「わかんないっす。けど……なんかやばい感じがピリピリしてるっすよ。そう言うの敏感なんで俺」

確かにノウイ君が言うように空気が一段と重くなった気がします。結界さえなければこの間に逃げれるのにそれも出来ないから下手に動けません。
そしてほんの数秒でその影が弾けました。だけど風とかが起きた訳でもない……けど異様に静かなその感じが変な威圧感を出しています。
そして周りに弾けた影が今度は一斉に親衛隊の体へと吸い込まれていく。そして出来上がったのは浅黒い肌に瞳を赤く輝かせた彼らでした。

「何……すか……あの姿？」

途切れ途切れの声のノウイ君。だけどそれも分かります。あれは一体……でもあの影がもしも私のこれと同じ物だとしたら、まさかあの状態は……あのスキルは……

「はあぁぁぁ、凄いなこれは。力が……みなぎってくる。なあそっちは――」
「ぐっあ！？」
「小さき戦士よ。俺を倒すと言ったその言葉。もう一度口に出来るか？」

奴の顔の向いた方からの悲鳴。それはテッケンさんにもう一人の親衛隊が攻撃を決めた瞬間でした。そして勢い良くテッケンさんの小さな体は吹き飛ばされます。

「テッケンさん！！」

ノウイ君はミラージュコロイドで飛ばされた先へ先回りしてどうにかテッケンさんを受け止めます。私を右側に抱えてるからテッケンさんは左腕で何とかキャッチです。

小さなモブリだから出来た芸当ですね。でも無事で何より。

「すまないノウイ君。助かったよ。だけどいきなり強くなったよ彼ら。少し不味いね」

ここに来てテッケンさんの顔が初めて歪みました。苦しそうな、悔しそうな表情です。そして親衛隊二人は合流してこちらに歩を進めてきます。

それは確かにテッケンさんの言うとおり不味い状況。どう考えても今の彼らを一人で倒すなんて無茶な気がします。

だってあれは……信じたくないけど私には分かる。あれは……

「カーテナの加護……」

そう呟いた私の言葉にノウイとテッケンさんが二人同時「え？」っと言います。そしてどうやら目敏く私の言葉を聞いてたのはその二人だけじゃなかった様です。

「ほう……よく分かったな。貴様の弱輩な加護とは随分違ってる筈だがな。確かにこれはカーテナの加護。我ら親衛隊にはこの国の力が付いてるって事だよ。

これがどういう事か分かるだろう？」

その瞬間、大柄な方の親衛隊がこっちに突撃してきます。そして

それに併せて、再びテッケンさんが飛び出します。基本背が高いエルフに、基本から一番ちっちゃいモブリの彼が向かう姿はとても無謀な光景に見えてしまいます。
背なんて力に関係ないけど、ただの背では比べられない国というカーテナの加護が向こうには付いてます。テッケンさんは分かってない。あれがどれだけ強大か。

「どう言うことだって？　倒せないわけじゃ無いだろう！　僕たちは連れていくんだ彼女を！」
テッケンさんは一人とぶつかりあいます。だけどやっぱりもう一人に掛ける余裕はありません。するとノウイ君が囁きます。

「アイリ様、テッケンさんを信じましょう。俺達に出来ることはアイツを引きつけとく事っす」

私は頷いて腕に力を込めます。そしてノウイ君が再び鏡を配し終えた時、近づく奴は言いました。

「これ以上、そのスキルは使わせない。なあアイリ様。カーテナには一つの特権があったよな？　それをガイエン様が取り上げて、俺に与えてくださったんだ。
一体加護と合わせるとどれほどの力に成るんだろうな？」

立ち止まった奴。そして風が奴の周りに集まります。カーテナの特権……取り上げた？　そして与えた？　それが意味する物ってまさか！！
赤い瞳を光らせて奴はその言葉を口にします。

「スキル『ナイト・オブ・ウォーカー』発動！！」

その瞬間一陣の風が吹き抜けた。砕け散る幾片のもの鏡が私達を無数に映してる。そしてその場には黒い鞭の様な影が私達を囲み、獲物を狙う蛇の様な目で奴は笑ってる。

暗黒の騎士（後書き）

第百話です。

パンパッカパ～ン！！　おめでとう（自分に）　そしてありがとうございます。遂に三ケタですよ。何だか長かった様な短かった様な……まあ取りあえず今感じるとあっという間でしたね。

だけど何と……重大な事実に自分は気付きました。それは……主人公出て無いじゃん！！　記念すべき百話なのに！！　てかヒロインも出てないし！！　おいおい、やっちゃったな自分。

まあだけど、仕方ない事だと割り切ります。これからももっともっと頑張るのでこれからもよろしくお願いします！！

では次回は土曜日に上げます。ではまたです。

違いの始まり（前書き）

俺達はカーテナを手にして色んな事をした。そう色んな事をだ！
まあそれは本編を読んで頂けば分かると思う。
そしてそんな色んな事でまだまだドタバタやってる時だった。あの日までのカウントダウンが静かに始まったのは。

違いの始まり

新たな光の昇りと共に、ここから今のアルテミナスは始まったと言っても過言じゃない。だけど大抵のエルフの人々はその意味を理解せずに見つめていた人ばかり。

そして連敗続きの侵略戦でやる気なんて殆ど失われてた筈だ。そんな彼らに再び火を灯らせるのは簡単じゃなかった。

アイリの事なんて誰も知らないし、まだこの時は誰もカーテナの性能を知る由もなかった。流れてたのは噂ばかりだからな。

それにアイリがカーテナを手にしたってのも噂に陥るみたいな状況にも成り掛けた。まあそれだけ信じられない事だった訳だけど。

俺達三人もまだまだカーテナに付いては謎だらけだったし、示すには力が一番早かった。エルフってのは力って言葉に弱いんだ。だから中にはあんな力に溺れる奴が出て来たりするんだよな。

でもカーテナを手にした次の侵略戦は酷かった。多少なりともグラウドの名前は人集めに役立ってたらしいことを痛感した瞬間だ。

だけどここらの連敗も広がってるだろうから、やっぱり結局はこんなもんかと思えもする。カーテナをアイリに奪われて以来、姿を消したグラウドとレイアードの面々。

今にして思うと、二十人くらいでも常に集まってくれるだけ助かってた。だってこの時に侵略戦に集まった人数は過去最低。確か二十人にも達してなかったと思う。

だけどそれでも必死に集めた人数だった。カーテナの力を示す初舞台、どうせなら勝利で飾らなくちゃだろ。まああの人数差で勝負を諦めてなかったのは俺達だけだったんだけどな。

けれどそれも当然。何の希望も無く頑張れと言う方が酷だ。だからアイリは見せる気だったんだ。始まるその時まで、みんなに声を

掛けてた。
そして始まった侵略戦。ここで負けたらもう後がない程重要な戦い。それなのに集まった人数はたかが知れずで、相手は余裕をかましてた。
今までの俺達の戦績とこの人数じゃ、策さえも必要無いって感じだ。まあそう思われても全然文句も言えない状況だが。そこでアイリ一人が前へ進み出て行く。
ここで重要なのは力を示すことだ。それもみんなが奮い立てる様な憧れる程の力……エルフが追い求める力の最終形とでも言いたい位の力。
だからアイリは一人で進み出る。

「行ってきます」

そんな言葉を残してただ前へ。誰もがそんな事無茶だと思ってた。俺とガイエンも実際はそれが出来るかは確証なんて持てない。
けれどアイリは決めた。

「まずは私が示します」

それだけの決意を秘めてたった一本の小さな剣を携えて大軍に向かう様は、実際かなり格好良かった。そしてこの侵略戦で起こった事はＬＲＯ中の話題となる。
相手が油断してたからこそ格好の宣伝へと成ったが、それだけじゃない。これはアイリの勇気の結果。大軍を固まらせてた相手はきっとアイリが何をやってるのかすら分からなかっただろう。
ゆっくりとカーテナを掲げて振り下ろす。その瞬間、相手の全員が地面ごと潰れた。そして再びカーテナを鋭く上へ。すると今度は地中からの攻撃で全員が空へと綺麗に放り出された。

そして何が何だか分からない内に滅多打ちだ。空中で左右上下斜めまで加えてのフルボッコ。反撃何て出来る間も無く、ＨＰが低い奴らから退場していく。

一見するとそれをアイリがやってる様に見えないのも凄いこと。だってアイリは相手を見つめてカーテナを振っているだけだからな。

そこに派手さ何て無い。でもその静けさがまさに圧倒的って奴を感じるんだ。こちら側の連中は息を飲んでた。そして全員を戦闘不能にして息一つ切らさずにアイリはこう言った。

「どうでしょう？　これがカーテナの力です。もう一度、私と共に戦ってくれませんか？　アルテミナスの為、そして私達エルフの為に」

アイリのこの言葉にこの時、あの戦闘を見た人達の中でそれを拒む人なんて居なかった。そして上がるのは勝利の雄叫び。

それは格別な物。何てたって国としての初勝利を俺達は飾ったんだからな。

そしてそれからも侵略戦は続いた。まあ結局、ある程度の力を手にしたからって国という大きな侵略意識は、そうそう消えないらしい。

それにどうやらどこもかしこも裏で同盟とかを結んでるらしく、必然的にアルテミナスは都合のいい国に成ってる。完全にいろんな事を出遅れたから、このＬＲＯでほぼ孤立状態みたいに成ってた。

他の国と違ってアルテミナスはみんなの意見を纏めて伝えれる様な国家元首みたいな立場の奴が一人も居なかったからな。しょうがないと言えばしょうがないが、そのせいでのこの窮地だ。

相手にするのは常に二国以上という厳しい侵略戦。あれからカーテナの存在はＬＲＯ中に知れ渡ったし、その力も良いようにも悪い様にも伝わった。
だから相手も警戒してる。もう最初の様には行かなくなった。それを予期しての最初のアレだった訳だけどな。それに元々、アイリは一人でやる気なんか無かったんだ。

「みんなの場所だもん、みんなで守らなきゃ」

そんな事を言ってた。そしてそんなアイリの思いは少しずつだけど確実に伝わってる。侵略戦を重ねる毎に俺達と共に戦ってくれる人達は増えていったんだ。
そしてそんな侵略戦の合間を縫って、俺達はカーテナと共に新たに発生してた王家クエスト第二段へと挑んでそこでようやくカーテナの鞘を手に入れる。これでカーテナの暴発を押さえられる様になった。
てか完成形として鞘がないといけなかったらしい。どうりで偶に振ってもいないのにカーテナが暴発して建物をぶっ壊してた訳だ。

どうやらカーテナ自身はアルテミナスから無尽蔵に力を供給されていて、だけどあの小ささだからかそんなに蓄えて居られないらしい。
だから偶に貯まったエネルギーを放出してた。そしてそれがアルテミナスを壊すんだから本末転倒だ。そこで供給される力を効率よくアルテミナスに再び戻して循環させる役目を負うのがカーテナの鞘な訳だ。
それによって使い手のアイリが傷つく事も無いわけで、放出され続けた力は光明の塔が輝く一つになって国を巡る。

そしてもう一つの問題だった『騎士』の事。それは王女様が伝え

くれていたカーテナが持つ権限。ずっと考えてくれたいたらしいそれは、騎士を求めたガイエンじゃなくアイリは俺にその力を与えてくれた。
それは慌ただしい中の一コマの様な抜けた時間。もう一度だけ二人でアルテミナスを離れた時の事だ。俺はアイリに渡す物があって・・アイリもその時には決めてくれていた事らしい。
だから俺達は受け合って誓い合った。そしてあの時、俺達は変わらぬ騎士の誓いを立てたんだ。

それから何回かの侵略戦を経て、アイリの言葉はアルテミナス中に届くように成っていた。今や光はカーテナじゃなく、アイリ自身とでも言える位だ。
アイリを中心にこの国は大きく纏まってきてる。それを感じれる。そして大きく成って行くにつれて国軍なんて呼ばれる様になったり。
いつの間にか侵略戦の度に集まる人数が前の比じゃ無くなってる。二十人……え？　何それ？　そんな時代あったっけ？　てな位だ。
でもそれだけ大きくなったら指令系統が必要に成ってくる訳で、自然と組織みたいな事に成っていく。そしてそれを率先してやったのがガイエンだ。
てか何だか手慣れてた。他人をバカにしてる様な毛があるのに使う側は好きなようだ。そして名も無き俺達の組織は侵略を防いでいく。

それが続くとまた志同じにする仲間が増えていく。ここまで来ると、一回の侵略戦で協力してくれる人達には事欠かない。
ガイエンの奴が色々と調整してくれてるらしいからな。
だけどそろそろ守るだけでは行けなくなってきてる。本当の勝利は守るだけでは得られない。アイリが願う元のアルテミナスの形は

既に失われてるんだからな。
だからここからは反撃開始。取り戻さなきゃ行けない。アルテミナスの土地を。そしてそれはこれまでの戦いとは違った。

アルテミナスでは圧倒的な力を震えたカーテナも、他国の土地に成った場所では、どうやらその力を完全には振るえないらしい。
まあそもそもかなりカーテナ対策をして来る様になった相手国にカーテナ一辺倒で勝てる訳も無くなってた訳だが、それでもその力は大切な物だった。
こちら側には安心感を与えてくれるし、敵にはそれでも脅威を与え続けることは大切だ。カーテナは視界に入りさえすれば、相手がどれだけ離れてても攻撃を加える事が出来る様だから、相手はもう玉砕覚悟か逃げ回ってシンボルを先を見つけるしかないわけだからな。
だけどこれからは戦闘でもそこまで圧倒する事は出来ない。これからはもっともっと一人一人の頑張りが必要になって、これまで以上のまとまりが鍵になる。

だけど今度は前と違う繋がりが出来てる様だ。みんなの意識が前とは違う。苦戦をして、そして結果的に勝てない事があっても組織に集まる人は途絶えなかった。
それどころか

『絶対に取り戻す！！』

って意志が強く成るみたいな。それはアイリが願った、みんながこの国を大切にするって事だろう。それは今、こうやって形に成りつつある。
でも次第に大きく成る組織の中で、一人の意志ってのはなかなか言いにくく成るものだ。自由な行動も今のアイリにはほぼ無いし…

…アイリは優しいから、誰の言葉も聞こうとする。
まあそんなアイリだから大人気な訳だけど。俺達のアイリだったのに、そこにみんなが付くと指に光指輪を見ても、あんまり良い気はしないんだよな。

身勝手な独占欲だけど、不安だろ。アイリの自由は無くなって、それで大丈夫なのか。誰だってここには、ＬＲＯには誰しもがリアルでは得られない自由とかを求めてた筈だ。
まあ野望を持って来てる奴もそこそこ居るが、アイリはそういう奴じゃない。それに集まった人の分だけ、アイリに掛かる責任は大きく成りそうだった。
それも覚悟してた事だが、それは周りで俺達が支えていくことが前提だ。でも膨れ上がった組織の中では俺も自由に出来ない事がある。
最初の騎士として、いつの間にかアイリだけじゃなく、俺達二人にもそれぞれの立場って物が出来てた。俺はいつだって侵略戦の時は最前線に立ってたし、ガイエンは参謀として作戦総指揮をとる立場。

侵略戦が領土奪還に移行してからは更にその立場が強くなった気がする。カーテナに頼らない集団戦闘戦に成ってきてるから『ナイト・オブ・ウォーカー』と作戦は守るときより重要だ。
でもプレイヤーも人で、激しさを増していく侵略戦の中、予想外の事は良く起こる。それは向こうもきっと必死だから当然何だろうけど、作戦だけに頼ってばっかも居られない。
俺には力があったから、そんな時は無茶の連続だ。そしてそう言う時は必ずガイエンの野郎と言い合いだ。あの頃はゴタゴタしてたから、命令を聞かない俺はきっと厄介だったんだろう。

でも前線ではそこに居なければ感じ得ない事がある。その時守れるのは自分だけで、その力が有るのならやらない訳には行かない。
だから俺とガイエンは何度も何度もぶつかる。でも二人にも立場が有るとそれがただの言い合いじゃ収まらない時があって、それに正論じみた事はガイエンの方が得意なんだよな。
だからこの頃から、俺は既に少しづつ孤立してたのかも知れない。

奪還戦は実際、そうそう上手く行かなかった。カーテナはやっぱり思っていた以上にこちらの戦力に成ってたし、前ほどの威力が無いと相手側に知れると向こうは勢い付いてきたからな。
それに向こうは国同士の連合軍。カーテナの力が十分に発揮されずに戦うのは正直厳しかった。それでも良くやっていると言えばやってたわけだけど、でもまだ一つも取り戻せてない。

押し戻されず、攻めきれず……みたいな。そんな折りに持ち上がったのが第三の王家クエストの達成だ。現状打破の為に更なるカーテナの機能覚醒がもう必須条件みたいな。そんな感じに成ってた。
そしてこの王家クエスト達成で得られたのが正式な称号と言うか……アイリにとっての立場を決定づけたもの。今まではやっぱり一組織の頂点でしかなかった訳だが、この第三の王家クエストで得られた物は入城の権利だった。
それは完全にアイリが王家に連なった事を意味していて、強制イベントでアルテミナス中がお祭り騒ぎに成った程だ。

そしてアイリの王族化に伴って俺達もアルテミナス城へと入城出来た。これに寄ってバラバラな寄せ集めだった俺達には『軍』という、この国を背負う者達の名で呼ばれる様になる。
まあそれぞれ全員がこの国を盾であり矛になった。それは騎士と同義だ。だからかな？　俺達が入城出来たことでカーテナの新たな

機能が解放されたのはさ。
それはもしかしたら前から有ったのかも知れない。だけどどうやらそれを受けてたのは俺だけで、他はカーテナには騎士と認められて無かったのかも。
でも軍になって、それを示すシステムが作られると、みんなが騎士と認証された。だからその力は名を持ってカーテナのスキルの一つに加わったんだろう。

それが騎士一人一人に能力強化とブーストを付加するスキル『カーテナの加護』だ。そしてこれは条件を満たせばアルテミナスの領土外でも有効な事がわかった。
カーテナの加護に寄って俺達は次第に侵略戦で押し始める。その条件を満たす為に、アイリは直接戦場に来れなく成ったけど、カーテナの不足を数で補えるほどに加護は凄い能力強化を与えてくれた。
どれだけの人数でも余すことなく加護は行き渡るし、戦闘中に切れることはない。それに普通は魔法とかアイテムでの僅かな防御力・攻撃力上昇とか命中率アップとかたかが知れてる付加が当たり前だが、加護はどこか違うんだ。

多分全部が上昇してる。動き一つとってもそれは雲泥の差だ。加護を受けてるときはＬＲＯと深く繋がってる気がして、そしてアイリを感じれる。
そんな気がしてるのは俺だけかも知れないが、おかげで取り戻せたいくつかの領土。それに寄って光明の塔の輝きは少し力強さを増していく。
もう今の俺達は以前のエルフとは違ってた。完全にさ。きっと他の国でもその評価を改めたのもこの時期だろう。もうエルフを自己中だなんて言わせない。
その自信がみんなにあった。
だけどこの頃か……しばらく消えていた不審な影がアルテミナス

で目撃されるように成ったのはさ。それもガイエンと共に入るところをだ。

「はあ？　グラウド？　奴がどうしたって？」

久々に出たその名前に、俺は少し動揺して報告に来た兵に聞き返す。するとそいつは周りをキョロキョロ確認して、耳元を手で隠すようにしながらもう一度言う。

「だからですね。ガイエン様が多分、そのグラウドって人と会ってたらしいんですよ」

「本当なのかそれ？」

俺はいぶかしんで聞き返す。すると首をひねって曖昧な言い方に切り替える。

「う～ん確証はないですけど、でもほら、グラウドって有名だったじゃないっすか。まあ今のお三方には及びませんが。

でもアルテミナスだけならそれなりだったでしょう？　だからこの事を伝えた奴も見間違えるとかは無いと思うんですよ」

「まあ……確かにな」

俺たちの前は確かにグラウドだったし、アイツはアイツでかなり目立ってた。だからエルフなら見間違うはずはない……か。でも今更どうして。何が目的だ？

それにガイエンと会ってた？　そっちも見間違える筈がない無いことだ。何であの二人が……ガイエンはグラウドの事嫌ってた印象しか無いけどな。

それなのに二人で会うなんて、ガイエンの奴も何考えてんだ。既に自由な俺たちの城と化してるアルテミナス城の専用部屋でそんな内緒話中。

俺たち三人にはそれぞれの部屋がちゃんと与えられた。俺は別にいらないって言ったけど、ガイエン的には立場場それはダメらしい。

そこら辺は組織になったから上に必要な威厳とかなのか。俺には過ぎた事だけど、与えられた物はしょうがない。

流石城だけに一室一室が豪華な作り。装飾品も実際、今まで止まったどの宿屋より華美だ。そして今そばにいるこいつは、俺の部隊の一人。

俺はいつも前にいるから、突撃部隊とか強襲部隊とか名付けられてガイエンに作らされたんだ。

「貴様も部下を持って責任感でも養え」

とか言われてな。まあ大きく成ってた軍だし、いつか来るかもしれないと思ってた事だ。だけどやっぱりなんか合わないよな。

それとも慣れないとでも言うべきなのか？　俺は他の誰かを部下だ何て思えない。後輩とかならまだ分かるけどさ、社会経験が無い俺には部下とか言う感覚がまだ養われてない。

それはきっとアイリも一緒だと思う。アイツはアイツの下に集ってくれた誰一人も部下だなんて思ってない筈だ。俺たちは仲間じゃいけないのかよガイエン。

そんな事を思っていると、木製の扉が二回叩かれて声がした。それは思いを巡らせてたガイエンだ。

「おいアギト、次の奪還エリアが決まった。作戦を立てるから貴様も来い」

ここでガチャっと扉を開けずに歩き去ろうとするんだからガイエンは質が悪い。だから俺は慌てて扉に駆け寄る。

「おい、その話他言するなよ」

「了解です」

そう念を押して扉を開けると、もう既にガイエンの野郎は廊下の先に行ってやがる。たく、一人で来させたいなら、場所を言え！場所を！

「待てよガイエン！！」

急いで駆け寄るとガイエンは俺を一瞥して歩調を変えずに言葉を出す。

「貴様にしては珍しいな。いや、ようやく部下の使い方を知ってきたと言うことか」

「はあ？」

何だこいつ。実は部屋の前で俺たちの会話を聞いてたのか？　だってガイエンは扉を開けなかった。それは中をみてないって事で、それなのに部屋にはもう一人居た事を知っている。

それってそういう事だろ。たく、何やってんだよこいつ。合わない性格なのに、そこに人を使うから余計俺たちの溝は深まるばかり何だよ。

「お前さ、一体最近何やってんだよ。お前が言う部下ばっかり走らせてるよな？　その間にお前……何やってるんだ？」

俺は横から鋭い視線をガイエンに送ってみる。まあちょっとした

探りだ。やっぱりグラウドと会ってたてのは気になるしな。
だけどこんな事で動揺するようなガイエンじゃない。

「アルテミナスの為に、エルフの為に私は自分に出来る事をやっている。敵を倒す事しか出来ない貴様とはやるべき事の多さも、考える事も圧倒的に多いんだよ」
「ふ～ん、でも倒さなきゃ勝てないだろ？」
「敵なんてウジャウジャと、それこそ絶え間無く沸いてくる物だ。だから考える事が必要なんだよ」

むむむ……相変わらず正論を吐きやがる。確かに目の前の敵を倒すだけじゃ勝てないのが侵略戦だ。くそ、なかなか悔しいじゃないか。
どうにかこいつを揺さぶってみたい。そしてあわよくば何か情報が欲しい。今の軍の情報は一手にガイエンに流れてるから、実際コイツが何しようとなかなか気づけないからな。
ここまで一緒にやってきた……一応……仲間……だし。信じて無いわけじゃ無いが、本能が言うんだ。コイツには気を付けろってさ。

「なあガイエン。知ってるか？　最近グラウドが居るらしいってさ」
「グラウド？　ああ、あの負け犬か。それがどうした。私達は今や官軍だ。国家権力。レイアードなど、目にも入らぬ小さな虫と同じだろう」

そう言ってガイエンはグラウドの事を笑い飛ばして終わらせた。
だけど俺には、やっぱり言いしれぬ感覚が胸中で靄の様に広がって行く気がしてた。

違いの始まり（後書き）

第百一話です。
この話はまあ随分省略させてもらいました。だって出ないともう十分長いのに更に長くなりそうなんで。しかしいよいよ引っ張った部分にきました。さあ三人に一体何が！？
てな訳で次回は月曜日に更新します。ではでは～。

砕けた鏡と無力な私（前書き）

ナイト・オブ・ウォーカーそれはカーテナを持つ者が自身の騎士に与える力。我が最強の盾と矛の証。それはこの国で一番の騎士である筈の力。だからその力は、アルテミナスを守るため……そして自身が絶対に守り通したい何かの為に振るわれるべき力。

暴力になんて成ってはいけないその力が、いま私たちの前に姿を変えて現れた。予想してなかったその切り札に私達に対抗する手段はあるのでしょうか。

砕けた鏡と無力な私

「やばっ！？　すいませんっすアイリ様！！」
「え？」

そんな声が聞こえたと思った瞬間。私の体が宙に投げ出されていました。幾つ物鏡の破片が砕け落ちていくのと同じように、私も投げ出された勢いのまま地面を転がります。

（どうして……いきなり、こんな……）

鈍く体中が痛む中でそんな事を考えていました。でもそれはやんごとなき事情があったはず。ノウイ君は多分何かから私を守ろうとした結果。

そう思います。だって彼は・・彼もアルテミナスの誇り高き騎士のだから。私をアギトの所まで必ず連れていくと言ってくれた。それに自分は戦闘得意じゃ無いのに、ここまでやってくれてる彼は信じれます。

そんな彼の行動の意味。視線を上げると、そこには月の無い分光輝く無数の星空が見えました。だけどその星空を何かが寸断してます。

夜空を汚すそれは、悪魔がイタズラして垂れ流した夜より暗いインクの様でした。淡い影が揺れているのがそう見える。

だけどその中にしっかりとした何かがあるのかも知れません。夜空を遮るそれは一体？

「よかったっす……アイリ様は無事な様っすね」

その時聞こえた声はノウイ君の物でした。だけど何だか心許なくなくて、息も荒い感じです。そして私は気付きました。
夜空を寸断してるその黒い物が、ノウイ君の体と重なっています。そして更に後方へ延びてる。それはまさかと思わずに居られません。
ただ私が見上げる形に成ってるだけだからそう見えてて、実は位置的にはズレてる……何て事じゃない。だってじゃああの辛そうな声は……私を投げた訳は……それが繋がります。

「ノウイ……君。それって……」

だけどそんな風に聞いてしまう自分が居ます。また私のせいで誰かが犠牲になる。そんなのがイヤだから。きっと私を抱えてなければノウイ君はあれを避けれた筈です。
戦いなんだから甘い事は無いのかも知れません。だけどついさっきまでの任せられる状況じゃもう無くなってる。二人の自信は焦りに変わって、感じてた暖かな包容力はビリビリと破れた感じです。
それでも二人を信じてない訳じゃない。だけどさっきまでの様に『大丈夫』そう言って脱力はしてられません。それどころか、伝わる苦戦の色が体を無理にでも縛り付ける。
息が……今はしずらいです。

「はは、大丈夫っすよ。ちょっと油断しただけっす。穴が開いた分、軽く成ったかもっすよ」

ノウイ君は精一杯私に心配を掛けない様な事を言います。だけどズレてるよ。穴開いてる言っちゃってるし。そんな事言われたら、心配しないわけ無いじゃないですか。

「っつ……」

ジャリ――っと私が腕に力を込めて進んだのはほんの二センチ程度です。完全に影に浸食された箇所はもう動きません。だから立つことも出来なくて……もしかしたら、親衛隊の加護とかにこの影も反応してるのかも知れない。

出所が同じガイエンなら共鳴とかして、活性化してもおかしくは無いのかも。だけどそれでも私は、進むことを諦めません。

引きずってしか前へ進めなくても、自分を守ってくれた人の事を諦めるなんて……それに私は背負ったんです。この国と、この国を愛してくれた全てのエルフを！！

幾らあの城が自分にとって牢獄で、いつしか重荷にしか成ってなかった立場だったとしても、間違って無かったんだとノウイ君は再び気付かせてくれました。

こんな私の役に立ちたいって……感謝してるって……それなら私は彼らの思いに答える義務が有ります！　この国の王女として。

「アイリ様……きちゃダメっすよ。これは……貴女の知ってるナイト・オブ・ウォーカーとは違うっす」

夜空を寸断してるその何かはやっぱりナイト・オブウォーカーなのでしょうか？　でも実際それしか考えられない。あの親衛隊の一人がそう叫んで彼のミラージュコロイドが破壊されて今に至ってるんだから。

「その申し出は受け入れられません！　私にだって有るんですよ責任が！！　私は……私を今も信じてくれてる人達を見捨てません！

私が守りたかったのは、この国と……貴方達何だから」

私は少しづつ……本当に少しづつだけどノウイ君へと近づいて行

きます。実際、今の私に何が出来る訳でもきっとない。
だけどこれは意地でした。私を人形した者達への反抗の意地。私を慕ってくれる人達への放したくない意地。そんな意地で私は地を這います。
だけどその時、大きな笑い声と共に不愉快な言葉が私に降り掛かりました。

「くはっはははは！！　無様、いや滑稽かな？　地を這うお姫様の姿なんて、バカな奴らの同情を引けそうな姿だな。
権威の底の味はどうなんだ？　大好きなアルテミナスの味がするだろう」

私は歯をおもいっきり食いしばりました。悔しい……だけど今の私には何も出来ない。アイツの鼻面を叩き砕きたい。それが出来ればどれだけこの気持ちが晴れるでしょうか。
でも今は言葉にしか出来ない。一矢報いる手段がそれしか有りません。だからガチガチ震えてた顎を持ち上げて私は言います。

「権威なんて……そんなもの望んでた訳じゃない。そんな物欲しそうな目で私をみないでよ。
ははは……無様・滑稽？　上等です。私はいつだって無様で滑稽にしか誰かを何かを助けられない。昔から……そうだったんです。
だから痛くも痒くもないですよ。んべ～！！」

言ってやりました。舌まで出しちゃってこれこそ権威の失墜の瞬間です。地を這うのが何ですか。そんなの今まで何度だってやってきました。
思い出した昔の事。ほんの一年ちょっと前位だけど、その頃はよく無様で滑稽な事やってました。そしてその度にアギトに呆れられるんです。

だって私は実力も無いのに誰かを助ける事に必死だったんです。だから沢山のモンスターに囲まれて困ってるパーティーとか、緊急コール出してる人かが居たら取り合えず絡みまくってました。

今考えたどうしてあんな事してたのか自分でも謎ですけど、きっとその人達にＬＲＯを嫌いになって欲しく無かったんだと思います。

まあ大抵二人して自滅してまして、稼いでたスキルポイントを不意にしちゃってアギトはうなだれるのです。だけどそれでもアギトはいつだって私の後ろから付いてきてくれました。

一度も見捨てられる事なんて無かったんです。そしてやっぱり二人で地面に這い蹲って誰かヒーラーが通るのを文句を聞きながら待つのも好きでした。

そんな思い出が私の根幹です。なら幾ら無様で滑稽でもそれが私だと思えるじゃないですか。恥よりも楽しい思い出がそのおかげ出来てたんです。

「恥を恥とも思わないとはな。そして品も無いとは救いようがない。軟弱だ。やはりエルフは貴様のせいで軟弱になってしまったとしか思えない。

しかも無様で滑稽を認める貴様が俺達の頂点だと？　そしてそんな権威を物欲しそうに俺が見てる？　ふざけるな！！

その場所は貴様の場所じゃないんだよ。そして勿論俺の場所でもない！！　貴様に分かるか？　俺達の悲願が！？　あの人の思いの大きさに俺達はついて行ってるんだ！！　何も分かってない貴様にはやはり、真の騎士の力を見せ付けないと気が済まん！！」

そう言って奴は腕を振り上げます。すると夜空を寸断してたその黒い物も同時に蛇のうねりの様に動いてます。

「ぐっうがあああああ！！」
「ノウイ君！！」

そして当然それは体を貫かれてるノウイ君に影響します。断末魔の様な叫びがこの場に響きながら、彼の中からその黒い武器は出ていきました。

その瞬間、クラっと倒れ掛けたノウイ君だけど、何とか踏ん張って私に笑顔を見せてくれます。

「大丈夫っすよアイリ様。寧ろ出ていってくれてラッキーす。串刺しにされたままじゃ気が気じゃないっすからね。それよりも……アイツのあの武器はやっかいすよ」

そう言ってノウイ君は前を見据えます。それにつられて私も前へ視線を向けてギョッとしました。だってそれは武器と言うより、生き物に見えたから。

無数のクリスタルが黒光りをしてる中、奴は立っています。そしてその周りをさっきの黒い物がうねりながらアイツの周りを覆ってるんです。

それはまるで、巨大な蛇を従えているかの様な錯覚に陥る光景。あの黒い物そのものが蛇に見える。やっぱり、何度でも思ってしまう。

「あれが……本当にナイト・オブ・ウォーカーなの？」

そんな思いは断ち切れない。だって盾も無ければ、あの武器は何？　アギトは一度もあんな物使わなかった。ううん、それよりもナイト・オブ・ウォーカーはあんなにまがまがしい物じゃない。

もっと神聖な力の筈なのに……少なくとも私達の時のはそうだっ

た。力強くて、頼りになる感じが全身から溢れ出てた。
だけど今目の前にいるアレからは全然別の物を感じる。荒々しくて凶暴で、獲物を狙う赤い目が二つ。背筋に冷たい感覚しか走らない。

「ああ、貴様にはわからんだろうがこれもナイト・オブ・ウォーカーだ。素晴らしい力を感じるだろう。貴様ではあり得ない力の上限。これが主の差と言う奴だ！！」

カーテナはアルテミナスその物から、そして加護やこのナイト・オブ・ウォーカーはカーテナを経由してその力を与えてる。
経由地点の要領の問題とでも奴は言いたいらしい。私は前時代の石炭で、ガイエンは今をときめくハイブリッド？　多分そんな感じ。自分で解説してて何だけど、やっぱりカチンきちゃうよそれは！
それに武器の形は要領じゃ無くて、性格の問題だと私は思う。

ガイエンもこいつも何だか戦闘好きだもん。ガイエンは口調は丁寧だけど負けず嫌いだから。そんな荒っぽい所をくみ取ってる感じだよ。
アギトは戦いは好きだけど、自分の為だけにってなかなかやらないし、私も実は争うのは嫌いだからそこら辺がきっと防ぐ盾と時には攻める剣に出てるんだよ。

「くっ……」

あの武器の回転とうねりでとても不規則な風がこの場所を流れてる。まるで乱気流のぶつかり合いの中に居るみたいな感じだよ。
そして奴が掲げてた腕を振り下ろすと同時に蛇は動く。まるで乱気流の隙間を縫う様にして、もの凄いスピードで向かってきます。

風をかいくぐり、大きな口を開けた蛇が目の前に迫ってる。

（避けれない……食べられちゃう！！）

思わずそう思って私は目を閉じました。だけどその時、大きく響いた金属音……そして蛇の毒牙は私まで届きませんでした。でも同時に鈍く唸る様な声も聞こえます。

「づうぅ……」

「ははは！！　どうした？　逃げることはもう辞めたのか！？」

そして次々にぶつかり合う衝撃が私の肌にまで伝わってきました。でもやっぱり私は無事です。恐る恐る目を開けるとそこには緑色の髪が見えました。

私の前に立って、剣を構えるその後ろ姿はノウイ君。逃げることしか出来ないって言ってた彼が……立ち向かってくれてます。

地面を抉りながらでも止まらないその威力。周りにあるクリスタルを砕きながらでも縦横無尽に向かってくるその武器に彼は対峙してる。でも・・

「ぐあああああ！！」

どうやら軌道を自由に変えられるその武器は直前で、ノウイ君の剣を避けて彼の足を刻みます。蛇の様に見えたあの武器は、鞭の様で剣で有る物。刀身が一本じゃくなく、無数の関節の様に分かれてて、しかも伸縮出来るみたいです。

だからあんな動きを……

「はっはあ！　どうした！？　逃げるしか脳が無いお前はその程度だよなあ！！」

そう言って奴は更に腕を動かします。すると今度は地上スレスレを真っ直ぐに私に向かって刀身が迫ります。ノウイ君を動けなくして、次は私ですか。

「ア……イリ様！！」

その時ノウイ君が横から腕をおもいっきり腕を伸ばします。そして二つの武器はぶつかって私の目の前で火花を散らしました。

それによって蛇は軌道を変えて私の真横をすり抜けて行きます。空気をいびつに切り刻む様な音が耳元で聞こえてました。ゾッとするようなそんな音に、情けなくも私は動けません。

だけどそんな私の前に、またゆっくりと彼は立ち上がります。

「何とか……当てられてよかったっす。逃げてたから避けるのは得意なんすけど……悔しい事にアイツが言うとおり、こっちはその程度何すよね」

そう言って豆の様な瞳を細めるノウイ君。その時私は気づきました。彼の腕が震えてるのに。

「そうだ、早く立ち上がれ。俺が味わった屈辱分、貴様は痛めつけないと気が済まんからな！！　貴様も味わえ、自分の無力さと屈辱をな！！」

蛇は再びウネリを伴い軌道を変えました。次の攻撃態勢に入ったようです。またどこからでも奴は攻撃出来る。そして私を狙えば、ノウイ君は絶対にそれを受け止める為に最悪体を張っちゃう。

そして今の彼にあの攻撃に今までの様に対処するのは難しくなってます。ＬＲＯは別に足を切られたからって歩けなくなる訳じゃ有

りません。
だけど戦闘中ならその分動きが鈍くなったりします。その部分が動きづらかったり、重かったり。だからこそ、部位破壊や部位狙いが成立するんです。

そしてどう見ても今のノウイ君は動きが鈍いです。足を引きずる様に立ってます。これじゃあ、あの蛇の様な動きに対処するのは難しい。
だけどそれでも、ノウイ君は震える腕を構えます。

「どうして……もういいですよ！　逃げてください！　責めたりなんかしないですから！！」

私はその痛々しい背中にそう叫びました。だって……これ以上、無理させたくなんか無い。何も出来ずに見てるだけなんて辛すぎます。
だけどノウイ君はそんな弱気な私に、その背中を向けたまま言いました。

「本当は、今直ぐにでも逃げ出したいっす。でも……今だけはそれがアイリ様の命令でも聞けないんすよ」
「何で……」
「だって、俺が逃げても何も終わらないっす。俺は今までずっと一人で逃げて来たっすよ。任務でも大概一人……それは逃げやすいからじゃ無くって、誰にも迷惑掛けない為っす。
自分の中だけで始まってそこで終わる。俺が逃げるときはそんな時っす。だけど今はこんな小さな自分の中だけじゃ絶対に終わらない事態で、今逃げる事でもっと大切な物を無くすのが分かってるっす。
それにアイツは俺に恨みがあるっすし、アイリ様は必要な人で、

そして初めて頼ってくれる小さな友達も居るっすよ。
ならこんな一生に一度かも知れない時なら、自分も一生に一度だけの逃げない日でもいいんじゃ無いかって思うんすよ」
「ノウイ君……」

その時、蛇は再び牙を向きます。斜めやら、横やら地中からやでノウイ君をいたぶる様に攻撃を仕掛けてきました。
だけどそれらを辛うじて剣で防いでいきます。何とか当てる事が出来れば、軌道は簡単に変えられる。それは相手が蛇の様に動ける利点のおかげです。
あれだけうねるから、僅かな衝撃で軌道は変えられる。嵐の様に吹きすさぶ蛇のうねりと剣のぶつかった火花は幾度となく光っています。

「それに……もうっとくに、俺の逃げ道はドン詰まりっすよ」

そう言って彼は笑いました。確かにミラージュコロイドも破られて、この結界内に閉じこめられた時点でどこにも逃げ場なんて無いのかも知れません。
でもノウイ君が伝えたかった逃げ道ってそう言う事なのかな？とも思います。ここの事じゃなくて、もっとこう大きな目線で見た物の様な……だけどそれにイヤな声が答えます。蛇の様な剣を操る親衛隊。
奴が絶え間無い攻撃を続けながら薄ら笑いを浮かべてます。

「ああ、その通りだ！　逃げ道も、逃げる手段ももう貴様には無い！！　そして何も守れず死んでいけ。力がないから、逃げることしかしなかった臆病者は、この舞台に上がり続けてる資格なんてないんだよ！！」

そう言って更に激しさを増す奴の攻撃。そしてあれは、伸びてる所全てが剣だったんです。注意するべきは迫ってくる切っ先だけじゃなかった。

大きくうねる腹の部分も刀身何です。そしてそんなうねりはいつの間にかノウイ君を囲んでました。弾いても次から次へと迫ってた切っ先はこの為の複線。

「つ～かまえ～た！！」

そんな不気味な声で一気に蛇はノウイ君の体に巻き付きます。それと同時に締め付け何かじゃなく、彼の体を襲ったのは切り刻みです。全身に食い込んだ刀身が、回転しながらノウイ君の体を切り刻みます。

「ぐあああああああああ！！！」

断末魔の叫びは月の無い夜空に響きわたります。そして私にはあり得ない筈の血しぶきが見えた様な気がしました。それだけ凄惨な光景。

そして解放されたノウイ君は糸が切れた人形の様にその場に倒れ伏しました。

「あ……ああ……」

どうなったのか分からない。動転した私には、血みどろの彼が横たわってる様に見えて……気がおかしくなりそう。そんな……こんな事って……今まで何度だって戦闘不能状態は見てき筈なのに、こんなに死に見える物は初めてです。

「ノウイ君！！」

その時横から現れたのはテッケンさんです。どうやらもう一人の親衛隊を突き飛ばして駆けつけてくれた様。だけど……遅いよ！！

「何で……今更……もっと早く来てくださいよ！　そしたら……そしたら……」

八つ当たりだと分かってた。それに何も出来てない、まして助けられ側の私がテッケンさんを責めるなんてお門違いです。だけど……言わずに居られない。

無力な自分が許せないから……仕方ないじゃないですか。けれどテッケンさんは冷静でした。彼は回復役を取り出すとノウイ君の口に含ませます。そして私を見て言いました。

「落ち着いてくださいアイリ様！！　辛うじてＨＰはありますよ。だけど……面目ない」

素直に頭を下げちゃうこの人は立派です。私なんかよりずっと。その時、ＨＰを回復したノウイ君が僅かに体を起こしました。

「すみませんっすアイリ様……俺、本当に弱くて……」

私はそんな事を言うノウイ君に俯いて首を振りました。そんな事絶対に無い。彼は弱く何て無いんだと、伝わればいいけど。

「アイリ様……俺はエルフにして良かったって思ってます。俺の大切な物はここに一杯あったっすから。こんな俺にも仲間が出来て、ちゃんと見てくれた人もいたっすよ。

俺達エルフにとっては……間違いなくあそこが故郷何すよ。目を閉じればアルテミナスの情景と、慕われてるアイリ様が浮かぶっす。

貴女が治めるあの国が……大好きっすよ。ずっと俺達のお姫様でいてほしいっす」
「あっ……っづ……グズ……ノウイ君」
私は彼の腕を取ろうと腕を伸ばします。でも何だか前が霞んでよく見えない。止めどなく溢れてくる涙が止まりません。
その時でした。
地中から出てきた蛇の切っ先が目の前でノウイ君の胸元に突き刺さり宙に持ち上げたのは。そして何が起こったのか理解出来ない私達を余所に、蛇は更にノウイ君を振り回して空へ昇り、投げ捨てました。

ノウイ君が落ちていく先には一際鋭く突き出たクリスタルがあって……その瞬間、ザシュっという不気味な音が脳内に響きわたります。自分の瞳が何を見てるのか認識出来ない。というかしたくない。
無数にあっても月にも増されない星星のか弱い光が、悲しく照らすその光景。土と血が混じりあった様な風を何故か届けるこのシステムに私の頭は溶かされていく様でした。
その時響きわたっていたのは歓喜の沸くような親衛隊の笑い声。その瞬間、私の中の黒い何かが爆発したような気がしました。
押さえきれない、怒り怒り怒り。私の肌を黒い影が染め上げる。

砕けた鏡と無力な私（後書き）

第百二話です。
もう絶体絶命の大ピンチ！　一体どうやってこのピンチを乗り切るのか！？　アイリはアギトの元まで辿り着けるのか！？　てかその前にアイリはどうしてしまったのか！？
この話は多分次で決着出来ますのお楽しみに。
では次回は水曜日に上げます。ではではまた～。

最後の抱擁（前書き）

会議の最中に俺の中に有る危険な一面をガイエンに見抜かれた。そんなはずないと言い聞かせても、決して拭えない事を俺自身が気付いてるそれが全てを狂わせていってしまう事態にまで陥る事をまだこの時の俺は知らなかった。

だけど確実にその日は近づいてる。色んな思惑が重なり合ってぼろぼろになってしまうあの日が。

最後の抱擁

ガチャっと音を立てて扉のノブを回す。中に入るとそこにはアイリを含めた数人の姿が見える。それぞれ部隊を率いる隊長クラスの奴らだ。

「アギト」

そう呟いて小さく手を振るアイリ。この部屋で一段高くなってる所に設置されてる豪華な椅子に鎮座してるアイリは、やっぱりちゃんとした待遇されてるな。

まあだけど、そこの横にさも当然の様に進み行くガイエンの野郎はどうかと思うけどな。

「おいアギト。さっさと空いてる席に着け。会議を始めるぞ」

「うぐ……」

どうせなら二人でアイリの横で良いような物だろうに、ガイエンの奴はそれを許さない。でもここでそんな些細な事で言い合う訳にも行かない。

折角今はエルフ全員が一致団結してる時なんだ。余計ないざこざはアイリの為にもならないし。それに……アイリが撰んでくれたのはアイツじゃなく俺だったって自信がある。

渋々、他の面々の前を通って一個余った端の席を目指す時に再びアイリを見る。すると少し申し訳無いような顔で応えてくれたから、俺は少しだけ微笑んで別に気にしてない事を伝えるさ。

だってアイリの指には、今日も忘れずにあの指輪が光ってる。それは俺との絆の証。だから大丈夫。今は俺もアイリの為に出来る事

をやるさ。
ガイエンが隣を牛耳ってもアイリの心はこっち側にあるんだからな。この騎士の力だってその証だ。

席に着くと早速ガイエンが一歩壇上から俺たちを見下ろしながら次の目標とその作戦を話始めた。まあ最近はいつもこんな感じだ。俺たちを集めるのはそれを伝える為と、最終的な調整な感じの為。
会議って言っても既に大方はガイエンが決めてる。まあでもそれがこいつの仕事か。気に入らなければ反対も出来るし、ちゃんと意見も聞くんだし正当だな。

俺たちとガイエンの間にはホログラムで浮かびあがった今度のフィールドの全体図が示されてる。どうやら次の奪還地は雷雲轟く危険地帯『バスチル雷招林』らしい。
アルテミナスの端にある、ぶっちゃけると結構どうでも良いような場所だな。林ってなってるけど実際は木とかあんまりなくて競り立ったクリスタルが、常に鳴り響く雷の避雷針となってる場所。
でも偶に漏れて来た雷が地面を直撃したりしてるから危ないんだ。それに常に雨で薄暗く、その中で戦闘って心なしかいつもより体力を奪われる気がするんだ。

ＨＰは減らないけどさ、気持ちの問題。だけどアイリは元のアルテミナスの姿を取り戻したいから、幾ら端の危険地帯でも放っとく事は出来ないか。
まあなら異論は無いよな。でも何でまずここなんだ？　後一つ奪還地は有ってそっちは街道もある重要地だろうに。俺はその事をそれとなく聞いてみる。するとこんな事を言われた。

「お前も少しはアルテミナスの史実でも図書館で学んで見ろ」
てさ。どうやらちゃんとした理由が有りそうだな。
「何だよ、別にそこら辺はお前の役目だろ。いいから理由が有るなら教えろよ」
自分の事を棚に上げて取り合えず話を促す俺。すると何だかガイエンの奴は少し不機嫌そうな仏頂面を構えてる。何かそんなに気を悪くするような事を言ったかな？
するとガイエンの代わりに、後ろから進み出て来てくれたアイリが話してくれる。
「バスチル雷招林はね、アルテミナスその物のエネルギー供給地って言われてるの。絶え間無く降り注ぐ雷をクリスタルでエネルギーとして地面に伝えてるって、そう言われてる。
だからあそこは重要なの。アルテミナスのいわば聖地だよ」
「ふ～んなるほどな」
それは知らなかった事実だ。じゃあカーテナが扱う力の源もあそこなのか。ただの危険地帯だった訳じゃないんだな。
「そう言うことだ。あの地が再びアルテミナスに戻れば、カーテナの力も増幅するかも知れない。それは必要な事だ。だからまずはここを取り戻す。
いいか、戦陣は貴様がきれ。初めの騎士の貴様がふさわしいだろう？」
「上等だ」
それは今更な役目。散々やってきた事だ。だけどその時周りから

否定的な声が出た。

「よろしいでしょうか。およばずながら、アギト様は戦闘中、多々作戦無視をされます。それは行き過ぎた無茶です。

貴方は大丈夫かも知れませんが、今は貴方を慕う多くの部下を持っている事をお忘れ無き様にお願いしたい。いいえ、貴方の場合仲間と言った方がよろしいかな。

とにかく、今度の戦闘ではくれぐれも作戦に従事して頂きたいな」

「う……」

その一人の発言で俺へ視線が集中する。まあみんながそれなりに迷惑してたのは知ってるけど・・俺にも俺の事情ってのが有るんだよ。

「でもな、その作戦無視で助けられた奴だっているし、良かった時だってある」

「それは結果論だアギト。作戦は何通りも有るんだぞ」

確かにガイエンは敵側の救援とかいろんな事を想定して何通りか作戦を立ててる。ここに入るみんなはちゃんとそれに従って戦闘してるわけで・・作戦をかき乱すのが仲間に入られたら困るのもわかる。

だけど自分の中では、あの事態でああしなければって思うんだ。そして自分なら出来ると疑わない。

「確かにそうかもしれない。結果的に良かったし、上手くいっただけかも知れない。じゃあ、目の前で作戦からはじかれたり、お前の予想外で仕方なくやられてろって言うのかよ。

それこそ、俺達は仲間だろう！　仲間が危ないなら助けるのは当然で、俺はそれが間違ってる何てどうしても思えなねえよ」

このたった数人が入ってる、それなりに広い部屋に俺の声が響きわたる。間違った事は言ってない。その確証がある。そしてその証拠に、みんなが口を噤んだ。
これからも仕方なく作戦無視をするかも知れないって言ったのに。だけどその時壇上から冷静な声が響いてきた。それは勿論ガイエンだ。

「仲間か。別に構わんが、これだけは知っておけよアギト。お前のその作戦無視の行動が、常に貴様の大事な仲間達を危険に晒す事に成ってるって事にな。
私達はもう、個じゃなく団体なんだ。一人を助ける為に全員が全滅したら本末転倒も良いところだ。切り捨てる所は切り捨てろ。
別に死ぬ訳じゃないんだよ。自分のせいで負けたと思わせるより、自分の犠牲で勝てたと思える事がＬＲＯでは出来るだろう」
「「おお」」

ガイエンの言葉の後に、そんな関心するような呻きが沸いた。俺も成る程って思えた言葉だ。もしかしたらガイエンの言ったとおりの事の様に考えられるのかも知れないな。
ＬＲＯはゲームなんだから。俺達は国同士で戦争してるけど、リアルでのそれと違って戦いの後でもみんなが居る訳だ。戦闘中にやられたって、消えてなくなる訳じゃない。
何気ない顔で戻ってこれる訳だし、仲間の死さえ作戦の内に出来るのか。自分のせいで負けるのは誰だってイヤだしな。

これだけの人数が動いてると特に。それならあの時の自分の行動が、自分の犠牲が、勝利に繋がったと思える方がいいのか。
俺が自分の中でいろんな考えを巡らせてると、ガイエンが調子に乗って更に続けてくる。だけど今度の言葉は全然予想外な言葉だっ

た。

「それに……貴様は本当に仲間の為にそれをやってたのか？」

その言葉を静かに告げられた時、胃の所が何だか重く成ったように感じた。どうしてかはわからないが、自分の中でもその言葉の意味が回ってる。

「どう言うことだよガイエン」

そして結局聞き返す事しか出来ない。容赦とか遠慮とかを知らないこいつにさ。

「だから本当に貴様はその誰かを助ける為だけに作戦無視をしてたのかって事だよアギト。本当はただの貴様の独りよがりな行動だった……何て事も有りうるんじゃないか？」

「意味……わかんねーぞお前。仲間の為じゃなかったら、何で単身で敵軍に突っ込む？　俺に自殺願望はねーぞ」

ドクンドクンと何故か妙に心臓の鼓動が聞こえてた。自分でも何だかおかしいと分かってる。俺は一体、何を恐れてるんだろう。

一体どんな言葉が突きつけられると思ってる？

するとガイエンは上から俺を見下ろしながら観察する様な目をしてる。そして直ぐ隣では、何だか心配そうに俺達を見つめるアイリの姿。

今止めた方がいいのかどうか迷ってるみたいだ。だけどやっぱりアイリが決断するより早くガイエンの口が再び動いた。今度出た言葉は絡み付く様な感じ。

「それだな……」
「は？」
「貴様のこれまでの作戦無視の行動は無茶とか無謀としか言いようが無い物ばかりだ。だが貴様は今ハッキリと自殺願望は無いと言った。
　果たしてあの状況で、自分が倒されるかも知れない可能性を万に一つも入れないか？　もしもそうなら、それは自分の力に絶対的な自信でも有るのか・・ただ単にバカなのか、どっちかだ。
　そして少なくとも貴様はバカではない」
「……」

　何だか初めてガイエンに面と向かって誉められたかも知れない。あんまり良い気はしないけどな。そして更にガイエンは言葉を続ける。

「ならもう分かるだろう。残ってるのは一つ……貴様は自分がやられる筈はないと信じ、自分なら絶対にその仲間って奴を助けれると思ってた。
　だが貴様の目的は実は、仲間じゃ無かったんじゃ無いのか？　貴様はただ単に証明したかった、自負したかっただけ……自分が手にした力の大きさって奴を。
　そうじゃないのか？」
「なっ！？」
「そっ……れはあんまりですガイエン！！」

　自分の驚きとアイリの怒りが重なった。だけど何でだろう。更に心臓の鼓動は早く成ってる。ドクンドクンなんて物じゃない。ドクドクと血流が体を巡ってる。
　それにアイリの怒りに沸いて来る感情は嬉しさじゃく、どこか居心地が悪い感じ。これってどういう事だよ。だから俺は必死にガイ

エンの言葉を否定する。

「ちがっ！　そんな訳……そんな訳無いだろ！！　俺はグラウドとかとは違うんだ！！」

「それは知っている。だけどなアギト。強大な力は人の心を容易に捕らえるぞ。私もアイリも貴様もそれは知ってるだろう？」

そんな言葉で浮かぶのはやっぱりグラウドの姿。あの力に取り付かれた姿……あれと今の俺が同じとでも言いたいのかコイツは。

力に心を捕らわれてるってか？　そんな筈……そんな筈無い。あってたまるか。でも……あの時、作戦無視して大量の敵を相手にしてる時に俺は何を考えてた？　俺はあの時、本当に後ろに居た仲間を見ていたか……その自信が無い。

目の前の敵をただ倒して倒して、そして一人だけその場に立っている事、無事なこと……それに変な優越感を感じた？

（いや……あれは安心なんだ。仲間を助けれた事への安堵感。その筈だ）

そう自分に言い聞かせてた。そうだよな？　その筈だ。その考えに間違いなんて有るわけ無い。

「ガイエンはアギトが力に捕らわれてるって言いたいの？　アギトに限ってそんな事あるわけないよ！」

「落ち着いてくださいアイリ様。何も私はアギトがグラウドと同じに成ったと言ってるわけじゃないですよ。ただ最近は、何だか妙に自信有り気なコイツが気に入らないだけです。

そしてその自信がどこから来てるのかを考えるとどうしても……別に強い力を責める気なんて無いですよ。それはアルテミナスにとって必要ですから」

ガイエンはそう言ってアイリの興奮を冷まそうとする。するとガイエンの丁寧語にアイリも色々と周りの目とかを気にして冷静にこう言う。

「そう……そうですよ。アギトは必要なんですから」

そしてこちらをチラリと見て、微笑んでくれる。だけど俺はその微笑みにどう返しただろう。ちゃんと笑えたか分からない。強ばってたかも知れない。

だって……俺は……

「だがな、これだけは言わせて貰うぞ。その力はお前の物じゃない。ただの借り物だ。勘違いして浮かれるなよアギト」

「ああ、分かってるさ・・そんな事」

勘違い……してるのかな俺は。そう思いながらも、ガイエンの言葉に分かってる風に答えておいた。実際は、もっと食いつきたかったけど、俺はもしかしたら今の自分に自信が無いのかも知れない。

本当に確実に……ガイエンの言葉を否定出来ないんだ。このナイト・オブ・ウォーカーは借り物の力。カーテナによって与えられた力。もしも本当に、今までの侵略戦でやった無茶を自分の力だと言いたいなら、俺が今まで使ってきた槍でやれなければ意味は無いのか。

でもそんなのあり得ない……そう思ってる自分が居る。出来ないだろう。加護とこのスキルがなければさ。それを思うと、やっぱり俺は与えられた力に酔ってた所はある。

ヤバいな。言われるまで気づかなかった。自己嫌悪に陥りそうだ。だからもう一度俺は言う。

「分かってる」

それは自分に言い聞かせる様にしてた。

それからその問題はひと段落して当初の予定通り、俺が先陣って事はそのままになった。それから会議も終盤で、それぞれが気になる事を思い思いに言う感じに成ってた時にその話は出た。

「そう言えば、最近『レイアード』が復活したとか聞きましたよ。お三方には因縁のある所ですし、恨みだってもしかしたら買ってるかも知れません。

今更、再びそんな物を結成した意味は分かりませんが、何やら周りを嗅ぎ回ってると聞きますし、注意した方が宜しいかも知れませんよ」

「『レイアード』が？　それ本当？」

「まあまだ確証では無いですが、そういう物達が城下で過激な発言をしてると聞いてます」

レイアード……その言葉にアイリは沈痛な面もちをしてる。実際、前のレイアードを潰したのはアイリみたいな物だからな。

実際は俺達三人でグラウドを倒した訳だけど、カーテナを手にして戻ったのはアイリだったから。そして頭をやられたレイアードは綺麗に消えていた訳で。

それはもう見事な位だった。アイリは俺と違ってさ、少なくとも仲間とそれなり思ってたみたいだし。事情を話そうと考えた。

だけどそれをする前に、きっと俺達を恨んだままレイアードのみんなは消えた訳で……それを何とも思わないアイリじゃない。

ずっと誤解を解きたいとか思ってた筈だ。

「あの……今のその過激な事を言う人たちの中に……グラウドは居

るんですか？」

その名がアイリから出たとき、ついさっき聞いた言葉が脳裏をよぎる。グラウド……そしてガイエン。これはアイリに伝えるべき事なのか？

「いいえ。レイアードの元リーダーですよね？　そいつの外見は知ってる者も多いはずですけど、まだ見たとは聞きませんね」

「じゃあ一体誰が……いえ、それなら……」

アイリはブツブツ言いながら思考の世界へ入ってく。どうせグラウドがいないならちゃんと説明出来るかも知れないとか考えてるのだろう。

だけどそこでガイエンがアイリの肩に手を置いて言う。

「大丈夫ですよアイリ様。グラウドがいないのならただの烏合の集。何を企んでるか知らないが、我らとは規模が違う。何なら捻り潰しときましょうか？」

「だ……ダメだよそんなの。あの人達だって私達が守るべき存在です。私達が傷つけたんだし……何も知らないからすれ違ってるだけです。

ちゃんと話せば分かってくれる。私達仲間だったんだから」

何かに願いを込める様なアイリの言葉。するとそれを聞いたガイエンは結構意外な事を言った。

「まあ、アイリ様がそう言うのなら。だけど念の為に護衛をつけましょう。それと出来ればその意に添える場を取り次げましょう。

それまでは会わない方がいい。変な誤解が出来るといけないですし」

「分かりました」
「アギトも、レイアードの奴らに何かされても耐えとけよ。余計な事はするな」
「ああ、だけど別にアイリに護衛が必要か？　安心は出来るけど、アルテミナス内でアイリにかなう奴なんて居ないだろう」

カーテナを持つアイリは、アルテミナスでは最強だ。それはエルフなら誰もが知ってる事だからな。いくらレイアードが過激な奴らだからって、そのアイリに直接的な事をするわけも、出来る訳もない。
それはガイエンだってわかってるだろう。

「私、そんな化け物じゃないよ」
「そうだぞ、奴らが直接的手段だけで来るとは限らない。それに安心するのならそれでいいだろう。お前は日が浅いから知らないだろうが、あいつ等はしつこいぞ」

その言葉に俺とアイリは息を飲む。不安に成ることを言いやがる奴だ。まあでもそれなら……

「アイリがいいなら、護衛もいいかもな。それにトップにはそれが普通だし」

てかそれはアイリの騎士である俺の役目ではないだろうか？　でも実際はそれがなかなか出来ないんだよな。侵略戦はアルテミナスから離れるし、アイリはここから離れられない。
どっちも大切な役目だからな。

「私もガイエンも信じるよ」
「ああ、お任せを」

そう言って頭を下げるガイエン。これで大丈夫な筈なんだよな。ガイエンが実際にグラウドと会ってた確証は無いし、もしもそうだとしてもこれならアイリに何か出来る訳はないと思う。
ガイエンを信じると言ったアイリの為にも、何も起こらずにこのままこの事態が収束していけばいいんだけどな。それにはこの次と次で、確実に領地を取り戻す。
それが最前で最速の方法だ。

会議の終了後、一人で長い廊下を歩いてると、後ろから追いかけてくる足音に気づいた。振り返るとそこにはアイリの姿がある。
長いスカートを靡かせて走り難そうにしながら追いついて来た。

「何だよアイリ？　護衛をつけるって言ったそばから独走してたら世話無いぞ」
「護衛なんてまだ誰が付くかも決まってないもん！　そんな事より、大丈夫？」

いきなりのそんなアイリの言葉にビックリだ。下からのぞき込む様な態勢なのもヤバいかも。それにこんな夕刻時……黄昏てる光が斜めに差し込んで何だか幻想的だ。
そして俺達が居るのは城の中。大きく長い廊下に今は二人だけ。いつも世話しなく聞こえてる足音が消えていて、特別な場所の特別な時間の様な気がして来る。
でもあんまり心臓が早く成ってるのを悟られたくないから何でも無い風に装う。

「何の事だよ」

「さっきガイエンに言われてた事だよ。アギトは力の誇示の為に作戦無視をやってるって……私はそんな事ないと思うよ。
アギトはそんなわけない……だって、ちゃんと誓ってくれたもん」

そう言って差し出された手には銀色の指輪が黄昏の光を浴びて輝いている。俺はそんな手を同じ指輪が光る手で取った。絡ませた指から伝わる温もり……それがいろんな不安を流していく様な気がする。

この暖かさを……この笑顔を……俺はいつから守りたいと思ったんだろう。誰に何を言われようと関係なんか無いんだ。

俺はただ守りたい。アイリとアイリが守りたい全部を余す事無くだ。だからそのためにどんな時だって、やっぱり見捨てるなんて事は出来ないんだよな。

それが答えで……今はいい。俺はそのために、この力を使うと誓ったんだ。

「アイリ」
「はい――きゃ！？」

彼女のストロベリーブロンドの髪が優しく浮いた。黄昏の光がそんな髪を照らしてキラキラしてる。一気に引き寄せてアイリを胸に抱く。

アイリの香りが一杯に伝わってくる。細い体を抱きしめるとその温もりが伝わって来る気がする。何回だって求めたいこの温もり……絶対に放したくない存在がここにある。

それを確認出来る。すると背中にソッと添えられる手の感触が伝わってくる。

「ありがとう。絶対に守って見せるから」
「うん……」

温もりが何倍にも感じれた。今この瞬間。俺たちはきっと同じ事を思ったと思う。

『時間よ止まれ』

てさ。

最後の抱擁（後書き）

第百三話です。

大きな力……それを手にしてしまうのは幸せな事なんでしょうか？　物語の主人公とかは偶にそれを突然与えられたりするけど、それによって大抵激動の日々が始まる。

その中で真っ直ぐに進むのはとても難しい事です。きっと。でもそれぞれに見つける答えとかがあって、それがどう転ぶのかは誰にもわからない。だけど進まない訳にもいかない。

何故なら時間は止まらない。待ってはくれないから。

次回は金曜日に上げます。それではまたです。

狂気の宴（前書き）

堕ちて行く……暗い暗い闇の底へ。私はどうして何も出来ないの？　どうして何も守れないのかな？　許せないよ。あの親衛隊が……そして何より、何も出来ない私自身が許せない。

力が有ればと願った。ううん掴んだんだ。無理やり私は、闇の底への扉を空けてその力を。正しくない使い道で、私はアルテミナスを搾り取る。

狂気の宴

闇夜に蠢く何かが見えてた。いいえ違う……その何かは闇夜に蠢いてるんじゃない。私の中にそれは居る。私の眼球の中を闇へと染め上げていってるんだ。

光を……映せない闇へと、私はきっと落ちてる。行かなくちゃ行けなかったのに、どうしてこんな事になっちゃんたんだろう。

私はただ、この世界がみんなにとって楽しくて楽しくて仕方ない場所であることを望むのに、どうして悲しみはどこまでも付いて来るんだろう。

何かを間違えたのかな。それともやっぱり最初から間違ってたのかな。グラウドを倒して横から奪った力……だけど次第に私も亡くしていったんだ。

始まりはアギトで、次第に周りのみんながどんどん離れて行く気がしてた。そして今度は私をずっと支えてくれてた筈のガイエンが行っちゃった。

傍には居たけど、もうずっと前からきっと心は離れてたんだ。

だけど私は誰も責められない。私のせいだもん。私がダメだったから、私が何も出来なかったから……離れてくんだ。そして今も……何も出来ないままの私のせいで彼が狂気にやられてしまった。

（こんなのは……もうイヤなのに……何で、大切な時に私はいつだって無力何だろう）

アギトが私の前から居なくなった時もそうだった。何も出来ない私だった。彼を止めることも出来ない私だった。離れていく誰かを、

繋ぎ止めて置くことが出来ない私。
でも……今度こそはって思ったのに。

目に映るクリスタルに突き刺さった黒い影。暗くてシルエットしか分からないけど、それはノウイ君何です。私がまた無力だった証は最悪の形で私の心を叩き出した。
痛くて苦しくて辛くて……何がアルテミナスを統べる者ですか！！　何が姫やら王女ですか！！　誰一人……助けられないじゃないですか！！
大切な人も……守りたかった人々も私は救えない！！　幾ら覚悟を決めたって、どれほどの力を手にしてたって、必要な時に無いんじゃそんなの役に何てたたない！！

だから私はノウイ君の刺さったクリスタルを見つめて言ったんです。もっと直接的な力が欲しいと。この虫酸が走る笑い声を今すぐ止める力が欲しいと。
でもそれはカーテナへじゃ無い。だってカーテナは結局物でしかないもの。だから私はこの地に叫び願った。

（力を……力を寄越しなさいよアルテミナス！！）

その瞬間、元から私を浸食してた影の上からもう一つの影が私には見えてた。そしてその更に濃い影は私を瞬く間に包み込む。
私も抵抗なんてしない。心は不思議な位に満ち満ちていくのを感じてた。そして私の眼前は完全に闇に染まる。

「あは、はははははっはは！！　流石ＬＲＯ！　まさかぶっささ

るとはな！！」

不愉快な声……虫酸が走り耳が腐るよう。こめかみの辺りがズキズキして一刻も早くコイツを消し去りたい。だけどあれ……何だかふらついちゃうよ。

上手く立てない。いろんな方向から圧迫されてるみたいで……何だろコレ……もうパンパンに成っちゃって――

「うげぇ！？　がっは！！　……ぶげぇええ！！」

「アイリ様！？」

――ブチャ、ベチャっとお腹をせり上がって来た物を私は吐き出した。こんな事、ＬＲＯで初めての経験。吐くだ何て……何だろこれ？

「どうしましたかアイリ様？　ちょっと貴女には刺激が強過ぎましたかね？　でも大丈夫ですよ。貴女にはあそこまではしませんから！！」

「くっ……」

頭に浸食するようなそんな言葉が忌々しい。テッケンさんが私を庇うように前に出てくれるけど、彼の背中じゃ私を覆う事も出来ないよ。

それにもう……私は手に入れてるから良いんだ。そんな事されなくても。

「はは……ふふふ……げぇっ！　ぼへっ……あはははは！！」

口を開く度にこみ上げる嘔吐感。だけど私は気にしない。何だか吐く度に面白くなって行く感覚で、口の周りの酸っぱい臭いが頭を

程良くフラットにさせてるよ。

「はは、壊れたのか？　なあ、スクラップはどうしたら良いんだ？
用済みか？」

「あの方はカーテナの力を使う為の鍵だ。その存在があるだけで良いんだから、倒しはする――」

「――うるさい……」

さっきから人を散々物呼ばわりしまくって……

「アイリ様、ここは下がってるんだ！　どうにか僕が――」

「――うるさい……」

「！？」

テッケンさんも、小さな形でチョロチョロと目の端で動き回られるとイライラしちゃうな。それに邪魔しないで欲しいよ。

私がやらなきゃ何だ。私が出来なきゃ行けないのに……これ以上目の端で動き回られちゃ、つい攻撃しちゃいそうだよ。

「この状況で何言ってるのか分かってるのかなアイリ様。しかも唯一の味方にまで。マジでおかしくなってんじゃねーのか？

そのモブリ、さっきの目が点野郎よりも頼れるだろ。あんな逃げるしか出来ないクズなんかよりな。あんただって思ってただろ？

あんなクズがエルフだなんて、恥みたいなもんだってなあ！！」

「うるさああい！！！」

その瞬間、私の中に溜まってた闇やら影が一気に放出された。自分がどうなっているのか分からないけど、これはもうただ肌が黒くなって、目が赤くなる次元じゃない。

でも不思議……全然怖くなんか無いんだよ。

「ごちゃごちゃごちゃごちゃ、借りれた力のひけらかしがそんなにご自慢？　うげっ……あはは、アンタのその哀れな言葉……もうお腹一杯なのよ。あはははは！」

グシッと私は無造作に汚れた口元を拭おうとした。だけどあれ？　自分の腕が口元に当たらなかった。ううん、正確には当たってはいた。影の様な物体の腕が。

でもそれには皮膚の感触は無くて、脈もない。温もりも勿論有るわけ無くて、触れると影が拡散するだけ。もしかすると全身がこの状態？

じゃあまさか顔も影の様になってるのかな？　私は腕を顔に近づけていく。だけどその時、親衛隊の声がそれを邪魔した。

「ははは……まさかアンタの口からそんな言葉が聞けるとはな。随分印象変わってるぞ。借りれた力か、だけどお前はその自分の力で壊されたんだろ！

負け惜しみにしか聞こえんなあ！！」

奴の蛇の様な剣がうねりを上げてこちらに向かってくる。だけどその時、小さなモブリが飛び出した。けれどそんな彼をあざ笑うかの様に切っ先は向きを変えてテッケンさんをかわして向かってくる。

「くっそ……逃げるんだアイリ様！」

「あっはっははは、逃げる？　そんなこと」

その瞬間、蛇が私の頭を貫いた。そこは丁度私が触ろうとしてた場所。でもやっぱり、どうやら全身が影に成ってるみたいだ。

だって、全然痛くないもん。視界が一つ減って、頭に直接ジャラジャラという音が聞こえて不快だけど、全然これっぽっちも痛くな

い。

「おいおい、殺してしまったか？」

「やりすぎだ。頭を狙うなんて……」

途中で途切れたもう一人の親衛隊の言葉。どうやら彼は気付いたのかも知れません。でも普通は気付くよね。攻撃が決まって有頂天にでも成ってない限り……私の顔はきっと見えてるもの。

どうなってるかは知らないけど、きっとそれは笑ってるよ。そう笑ってる。

「アイリ……様？　なのか？　君は本当に……」

一番近くに居るテッケンさんが足下で何か言ってるけど、そんなのどうでもいい。だって今はそんな事を気にする場合じゃ無いほど嬉しいんだもん。

力が……力が私にある。せり上がってくる力を感じてる。いっぱい吐く度に力がこみ上げて来るんだよ。

「くふふふふ……ねえ、誰を殺したって？」

「「――っつ！？」」

二人の親衛隊の目が見開かれたのが見える。面白い、面白いよ。今日初めてあいつ等にあんな顔させた。思ってたよりも、暗闇の底も悪いものじゃない。

これで奴らを倒せるのなら……奴らを痛めつけれるのなら、この位どうって事ないよ！！

「ねえ！　教えなさいよ！　誰を殺せたって！？　誰が恥さらしだって！？　……うるさいんだよアンタは！！」

私は蛇が頭に風穴を開けてる状態のまま腕を振り上げました。それは決して私の腕が届く距離じゃない。だけどその瞬間、蛇を操る一番ムカつくアイツが吹き飛びます。
そしてそこには、私の体から溢れ出てる黒い影が有りました。

「がはっ！？　何だ……これは？」

空中に浮いてる時にもう一発浴びせてそいつを後方へとばし、それと同時に顔を貫通してた蛇も抜けて行く。だけどやっぱり頭を這いずり回られてる様でイヤな感じ。
けどそれ以上にアイツ等を叩くのは面白い。

「ふふふ、あはははははは！！　何って力でしょ？　アンタが愉快気に話してた力って奴！！　どう？　見直してくれたかな？　かなぁ！？　あはははは！！」
「力……だと？　カーテナも無いアンタに、こんな力有るわけ……ない！！」

そう言って再び蛇が私に迫ってくる。そしてもう一人の奴も向かってきてる。そして蛇と剣の連続攻撃が私に迫る。だけど避けるのもめんどいし、まだ信じて無いようだから見せて上げよう。
それに力を使わなくちゃ、お腹のこみあげる物が酷くなる。

私は拳を前に突き出して、その前方に黒い影を集中させる。闇よりも暗い黒い影。地面から湧き出る黒い影。そして攻撃が届く寸前でそれを解放させた。
まず先に小さな線が走ったかと思うと、一気に私の背のよりも大きな黒い閃光が向かって来てた親衛隊と蛇の間に放たれた。

「ぐうおおおおおおお！？」

そんな声と共に生まれ出た風圧に弾き返される親衛隊。そして蛇もウネりながら使い手の元へと弾かれた。黒い閃光が通った後は完全にそこが消滅したように成っている。

だけど不思議と爆発とかはしなかった。元がアルテミナスの力だから放たれた後、しばらく進んだら地に帰ったのかも知れない。

それか闇に溶けたとか……それはそれで面白いよね。

「どう？　わざと外したんだからちゃんと見てたよね？　焼き付けた？　じゃあ想像しなさい。自分達にあれが突き立てられる瞬間を」

そんな言葉を浴びせた瞬間の奴らの表情は最高だった。見えだした恐怖の色。それが私の暗い心を満たしていく様。もっともっとそれが欲しくなるよ。

だけどまだまだ、奴らの気持ちは折れない。ナイト・オブ・ウォーカーと加護が有るからなかなか絶望してくれない。

「ふざけるなよ！　今更何だよ！！」

「ああ！　そうなったアンタをあの人に見せる訳にも行かない！！」

「あはっははは！！　いいよ、もっともっと苦しめてあげる！私がそうだったように、ノウイ君がそうだったようにね！！」

そう、こいつらが嘆くまでやってやる。それでいいんだ！！

親衛隊二人の攻撃が同時に迫る。逃げ場なんて無いように、蛇が私の周りを覆った。そして一気にその幅を縮めてくる。

でもこんなの今の私には……そう思っていたら蛇の連結部分が光

りだした。これは何かの技の前触れ？　そして私の体に食い込んできた蛇は、その瞬間大爆発を起こす。
視界が一瞬で奪われて、耳もキンキンする。体の半分は消し飛んだかも知れない……だけど。

（アルテミナス！！）

そう思うだけで、地中から湧き出る黒い何かが私を力強くしてくれる。そしてボフッと爆煙を抜けると待ちかまえてた様に、もう一人の親衛隊が待ちかまえてた。

「今のアンタに容赦は不要だろ！！」

そう言って加護で底上げされたパワーと剣に纏わせてたスキルで私を一刀両断する。するとその剣線が通った場所から今度は無数の土のトゲが私の内側を襲って来た。
これもまた実際ならやっかいなスキル……けれど私はその時、闇に溶けるように消えていく。そして消えた私の居た場所の半歩後ろから身を乗り出して親衛隊の一人の首を掴んだ。

「がっは！？」
「あはは残念。容赦も遠慮も不要だよ勿論。だけど……それは私もだからね！！」
「がっ……影……の、分身だったのか……」

力を込めて握ってる筈なのにいびつに歪む声が聞こえる。腕力はあんまり上がってない？　ポキッとこいつを逝かせる気だったのに……だけど驚愕と恐怖に染まる顔色も悪くないかもしれない。
面白いもん。

「それは違うな～。あれも力その物。ぶべぇ！　……ふふふ、常に溢れだして来てるんだもん。こういう感じで」

何だかもう、自分が何を吐いてるのかも分からないな。そもそもＬＲＯ内でお腹から何が出てきてるって言うんだろう。

私は言葉の終わりと共に、首を絞めてた奴を地面に投げた。そう私が吐いた物の上にね。そしてその上で、無様に息を必死に吸ってる姿が愉快。

ばっちい物のせいでそいつも吐き気がこみ上げてきたのか口を押さえて、でも空気が欲しい感じも相まって板挟み状態。

「あはっはははは。加護程度で直接アルテミナスから力を取ってる私に勝てるとでも思った！？」

「うっ……ぶはぁ……何だ――っづ！？」

私は唐突に顔を上げた親衛隊の頭を踏みつけてやる。何だか丁度良い場所にあって、丁度良い踏み心地してるよ。グリグリと私の汚物に擦りつけてあげる。

それを表現してるだけって感じだけど、屈辱じゃないかな？　親衛隊はエリート意識高いから。汚物に頭を擦りつけられる。それは本当に悔しい事の筈。

だから私には出来ちゃうよ。

「ふふ、だから私にはね。アルテミナスがついてるの。分け与えられた程度の力じゃ勝てないよ。さあもっともっと、悔しがってよ！

怯えなさい！！

私の千倍、百倍……後悔なさい！！　あはははは！」

ガツッガツっとヒールの部分で頭を蹴りまくる。するとその時、私の体を何かが貫いた。だけどそれだけじゃ終わらない。

切っ先は軌道を変えて更に私を切りつける。胴体部分もうねりをあげて、いろんな所を切りつけて来た。

「うおおおおお！！　それ以上は許さんぞ、化け物！！　貴様は完全に落ちてる！　人でもない！！」

奴はもう一人の親衛隊。ナイト・オブ・ウォーカーをもってノウイ君にあんな事をした奴。だから私は思った。

（ああ、アイツの方が許せないや……）

そして周りをジャラジャラ言わせながら飛び回ってる蛇がウザいから、取ってみようとした。けど触れた瞬間に私の手は無くなっちゃった。

影に……闇に成ってる私の体は攻撃を受けない代わりに脆いみたい。しょうがないから遠距離でフルボッコにしてやろう。

そう思って私を視点を奴に合わせて腕を振るう。それに併せてこの闇が奴を攻撃してくれる筈。見えるカーテナの力みたいにね。

だけどそれは起きなかった。

（何で？）

腕を見るとそこには何も無い。代わりに蛇がその刃を響かせてる。

「やらせるかよ！　脆い体ってのは不便だな化け物！」

どうやら奴は私が振りきる前に腕をピンポイントで消滅させたみたいだ。そしてその勢いのまま、もう片方の腕、左足、右足と逝かされた。

「はっははっははは！！　何が力だ！　結局アンタはその程度何だよ！」

後方へ倒れていく私に浴びせられるそんな言葉。そして再びスキルを帯びた蛇がとどめと言わんばかりに向かってくる。

だけど……

「なら教えてあげる。その体にたっぷりと、アンタ達が欲しがったカーテナ、それ以上の力を……」

その時私は、五体満足で蛇が伸びてる真横に居る。もれなくその正面に奴。蛇の突き進む余波で影が揺れるけど問題ない。

私であって、私でない物でも倒してればいいよ。

「なっ！？」

「今の私に躊躇って言う優しさは無いからね！！」

その瞬間奴は一気に後方へ吹き飛ぶ。そして上へ上がって滅多打ちだ。私は髪を振り回して笑いまくった。

「あははっははっははっはははははははは！！」

死ね死ね死ね死ね死ね死ね。そんな感情が爆発してる。だって許せないの、どうしたって。笑ってるのに何だか目が熱かった。

その時、更に大きな物が中からこみ上げてきて私は動きを止めて膝を付く。

「うげぇ！　がほ……がはっがは……ぐえぇ！！」

何だろうこれ……体が重い。吐いても吐いても押さえられない物

がこみ上げてくる。

「アイリ様！」

それはきっとテッケンさんだろう。だけど私はそれでもまだ息の根がある奴を見てた。だって一緒にしなきゃ許せないよ。ノウイ君と同じ結末を与えてやる！　それだけが頭で巡ってた。

鼻を突くような臭いの中で、私は必死に腕を伸ばして闇を操る。簡単だよ。上へ上げて落とせば良いんだから。実質あげればいいだけ。

（後少しだよノウイ君……）

そして腕を振ろうと思ったその時、私と奴の間に小さな影が割り込んだ。

「邪魔……なのよ……それじゃ視界に奴を入れれないじゃながっは……はぁはぁ」

カーテナと同様、視界に入れるだけで攻撃出来る代わりに見えてなかったら何も出来ない。何で……今更なのテッケンさん。

「ダメだ！　それ以上、力を使っちゃいけない！！　カーテナは武器だから耐えられてたんだ。君の体じゃアルテミナスその物の力を受け入れ続けるなんて出来ない！！

そもそもそんな事が起こり得た事が奇跡何だよ。でも……これ以上はいけない！」

「貴方に……数日前に会ったばかりの貴方に何が分かる！？　私の絶望の何が分かる！？　私の苦しみも痛みも分からない貴方に……この制裁を止める権利なんて無い！」

這い蹲って目の前にモブリに私は凄む。だけど彼は引かない。悲しい顔に強い瞳を宿して言います。

「あるさ！！　僕にはある！　僕は頼まれてるんだ。君を必ずアギトの所まで連れていって欲しいと。仲間とすれ違っても、それでも友を想う彼に託されてここに来た。

でも……連れて行かなきゃいけない君は、そんな君じゃない。だから僕は止めなければいけないんだ！　君が戻れなくなる前に！！」

「は……ははははは！！　べほっかは・・何が戻れなくなる前なのか分からない。それって……守るべき人たちに守られて……あまつさえ見殺しにしか出来ない私？

そんな自分に！　戻る気何かない！！」

喋る度に吐き出す物は多くなってる。見た目は全然変わってない感じだけど、今にも破裂しそうな風船の感じなのが分かる。早く力を出さなきゃいけない。

取り合えず目に付く物に視点を会わせて僅かに腕を振るう。すると小さくクリスタルの一つが欠けた。全然ダメだこんなんじゃ。

もういっそ、邪魔な奴から打っ叩いて行こうかな。だってさっきからウザいもんこの人。

「本当に……そんなに前は悪かったのかい？　そんな筈無い！！君はノウイ君から聞いたじゃないか！　聞かされたじゃないか！その言葉を忘れたなんて言わせない！」

「ノウイ君の……言葉……」

そうだ、彼は私に感謝してるって言ってくれた、みんながそうだと伝えてくれた。だから少しだけ良かったと思えた……だけど、その後に起こったのはあんな事。

「幾ら感謝されたって……私は自分が許せない！　弱い自分。何も出来ない自分。そして願ったこんな力だよ。
今更遅いじゃない……幾ら取り繕ったってもう戻れない。生まれた黒いこの感情は本物だもの。みんなの為に、こんな私がやれる事はもうこれだけよ！！」

そう言って私は腕を振る。その瞬間ドン！！　っと言う音が耳に届いた。そして消え去ったテッケンさんの姿。これで邪魔者はいなくなった。
大丈夫、後一発なら打てる。これで終わるんだ。やっとで私にも何かが出来る。でも何だろう……ずっと何かが引っかかってる。
違う……悲しいんだ。もう戻れないから、あの輝いてた日々に。それが自分で分かる。でも……この黒い感情は抑えられないの！

「うあああああああああああああああああああああ！！」

狂気の宴（後書き）

第百四話です。
え～とまずはごめんなさい。これで終わると思ってたけど終われませんでした。次回絵ｈ続くで。だけど次には絶対に追われます！
どういう風に成るのかはお楽しみで。
てか聞いてください。さっきまで次に上げる分を半分位書いてたんですけど……消えちゃった（泣）　全部！！　もう死にたい。まあだけど間に合わせるのでご心配なく。
てな訳で次回は日曜日に上げます。それではまた～！

因縁の相手（前書き）

このままじゃアイツは終わらない。絶対にもう一度俺達の前に現れる。そんな気がずっとしてた。今まで向けていた矛先を俺達に変えてさ。機械仕掛けのあの槍の音が、少しずつ背後から聞こえて来てる。

そしてそれは、勘違い何かじゃ無かった様だ。危機感は突然、俺の前に姿を現す。

因縁の相手

何だか後を付けられてる？　会議の時にレイアードの事が出たすぐ後にこれって、あからさまじゃないだろうか？

城から出てブラブラと息抜きしてたらそんな足音に気付いたのがついさっき。どうやら足音は一つみたいだがこれってどうした方が良いんだろうか。

実はもしかしたらグラウドの野郎か、それこそレイアードの誰かにでも見つけられるかも知れないと思って出た俺にとっては願っても無いチャンスな訳だし。

だけど釘も刺された訳だよな。余計な事はするなってガイエンにさ。でもやっぱり不安なんだ。もしもガイエンがグラウド連中と繋がってたら？　それは最悪な事だ。

流石にここまでやってきた仲間だし、信じてはやりたいけど、あいつはどこか謎なんだよ。それが気に掛かる。自分の事話さないしなアイツ。

それに明日からはまた侵略戦。ここで何もしなかったら何も出来ないかも知れない。もしもあの時……なんて後悔はしたくないんだ。

アイリの為にも、出来る事は全部やる。アイリが誰も疑わないから、代わりに俺が疑う。それが例えどんなに近い奴でもだ。

だからここは……俺はそう思って路地裏に進路を変える。大通りで何か出来るとは思えないからな。てか、ゲームであるＬＲＯで何をやるのかも問題だけど。

リアルと違って今日殺しても何の意味も無いしな。それに町中なら幾ら何でも決闘位しかやりようがない。それじゃ後を付ける意味が無いってか襲えてない。

ならただ動向を伺ってるだけ？　それならこっちから捕まえるか。
そう思って駆け足で取り合えず逃げるフリ。古典的だけど、どっかの角を曲がってそこで待ち伏せて捕まえる作戦だ。
やっぱり足音は付いてくる。走る音が街頭も余り無い暗がりに響いてる。そして丁度良いタイミングを見計らって俺はその誰かに飛びついた。

「うおうりゃー！！」
「うあああうあいあうあうあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ズンガラドッスウンと攻防の果てに俺はマウントポジションを確保。勝ったな。これでレイアードの誰が、もしくはグラウド本人が後を付いてきてたのか分かる。
一応だけど、レイアードの奴らの顔は覚えてるんだ。今現在は俺の知ってる奴らのままかは不明だが、多分幾ら活動したって新しい奴が入る事は無いと思う。
だってグラウドの事は悪評が広まってるし、何より今はアイリが大人気だ。エルフは今、大きな一つの固まりに成ってる。レイアードから抜ける奴は居ても増えてる事なんか無い。

「さあ、何で俺の後を付けるのかじっくりと聞いてやる――の前に、顔を拝ませて貰うぞ」

そう言って俺は顔面を押さえつけてた腕を外す。すると街頭の頼りない明かりに照らされてその顔が目に入ってきた。だけど――

「え？　お前誰？」

――全然知らない奴だ！　それに何だか小さい。どうみても小学生位の姿してる。言う成れば子供のエルフ。気付いたらこれ……虐

めにしか見えなく無い？
　もしもこの子供が女の子だったら犯罪物だ。幸い下に居るのは男だけどな。けど……マジで誰だこれ？

「ふん……俺を押し倒すなんて少しはやるようになってるじゃないか。いやもしかして加護とかのおかげなのか？」
「何が加護だ。そんなもんに頼る程の事じゃねぇ。何なんだよお前。やっぱり俺の知り合いか？」

　どうも知り合いらしい口調なんだよな。だけど流石に、こんな容姿の奴は見覚えがない。ＬＲＯはキャラ作成の時に身長も自由に出来るけどさ……子供ってのはなかなかしないものなんだよな。
　だって戦闘に不利だし、どうしてもリーチとかの差が出る。ＴＶゲームのＲＰＧとかならそんなの関係なんて無いんだろうけど、ＬＲＯはそうは行かないからな。
　同じ長さの武器なら、腕の長い方がより遠くに届く訳だし、その届かない分だけ子供の身長じゃどうしたって不利なんだ。

　まあだからって全然居ないわけじゃないが、エルフってこう……スラーと長い優雅で気品溢れる姿に憧れる訳でさ、これじゃちょっとな。
　エルフの意味がない様に思える。でも何だかこの子供、さっきから妙な圧迫感だけはスゴく感じるんだよな。それも何か感じた事のあるような感じのプレッシャー？

「ふん、なあアギト。お前は姿が変わると他人になれるタイプか？
　違うよな？　俺もそうなんだ」

　何だこいつ？　いきなり変な事言い出したぞ。それに俺の名前――って今や俺もそれなりに有名人か。会ったことが無い人が知って

いてもおかしくない位には。
　それがエルフなら尚更だ。でもすっげー今の発言は危ない感じ何だよな。もう一度逃げた方が良いかも。だけどそんな俺の感情何て知る由も無く、この子供は無駄な圧力を掛けながら話を続ける。

「魂が……心でも良いが、それを許さない。強固な魂はどんな器にも侵されないんだ。だから俺はこういう風に生きていく事しか出来ないんだよ。
　でもいいんだ。俺はそんな自分を誇りに思ってるから。だからやってきた事を後悔なんてしない……そう後悔なんてな。まだ終わってないんだし」

　ブツブツブツ一人で呟くコイツは、ハッキリ言って不気味でイヤだ。だけど何だか、不思議とコイツの言葉はどこかに引っかかる。忘れようとしても忘れられない何かの、突き出た部分にカッカッてさ。
　そして俺はそこから何かが落ちてくるのが怖い様な気がしてる。

「何が終わってないんだ？」

　俺は思わずそう聞いた。だって気になるじゃん。そんな言葉。こんな危ない奴が呟く言葉なんて大抵物騒に聞こえるんだ。
　そしてそんな俺の言葉を受けて、仰向けになって倒れてる子供は突如俺に不気味で妖しい笑みを浮かべた。

「全て……さ。まだまだこれから……ふふふはーっはははは！　なあアギト。どうなんだ？　その力、愉快だろ？」

　その最後の言葉の時、俺はゾクッと背筋が凍ったような気がした。だって……何でどいつもこいつもそんな事を言うんだよ。

ようやくアイリの優しい言葉と行動で気にしなくなってたのに、インパクトの強い奴のせいで掘り返された。それに俺には何だかその瞬間見えたんだ。
この目の前の子供が、あの忌まわしい俺達三人の天敵だった奴にさ。それによく考えた口調が同じで……言い方も。最初に言っていた魂がどうとか器がどうとか、それってまさかってっ心当たりがある。

ＬＲＯは何も一人につき、一キャラクターしか作れないなんて制約は無いんだ。最大三人までのキャラクターを作る事が出来る。
だけどその三体どれもで同じ域に達するのはとても難しい。幾らＬＲＯがレベル無しの完全スキル性と言ってもその手にしたスキルを三体で共有出来る訳じゃないし。

一つのスキルを拾得するのも時間はかかるんだ。だから大抵はメインの一人を確定して、後はサブと呼ばれる形に成るのが大半。
キャラ同士でなら物の受け渡しは可能だから、限られてる倉庫に使ったりさ、後は気分転換とかとも聞く。それにサブは奇抜なスタイルが多いともな。
それは多分サブだから！　ってのが強いんだろう。流石にそれを主体に……って躊躇う奴でもサブならありかって成るんだ。

だからこの子供のエルフ……それもサブの奴で、メインは俺が知ってるって事が出てくるな。多分そうなんだろう。コイツは俺を知ってるし、何か恨みありそうだし……
いや、俺は既に当たりをつけてる。
子供の容姿してたって、消えてないその感じ。それは最初から感じてた物だ。全然子供っぽくも演じないし、その口調も俺は知って

いる。
まさかコイツ……そんな考えが膨れ上がると、言われてきた事が重く感じる。
「何が愉快だよ……俺はアンタとは違う……」
「！　ようやく気付いたか。だがなアギト、俺達は同類だ。それが分かってたからこそ、俺はお前をレイアードに入れたんだ。
無駄だぞアギト。幾ら取り繕ったってな。解放しろよ。狭い世界だけを見てるな。力が有る者にしかやれない事をやれ！　そして更に求めればいい！
なあ、もっと欲しいだろ？」
何だよコイツ。何でこんなに這い上がってくるんだ。俺の心を掴み取ろうとする？　やっぱり間違いない。レイアードに入れたとか言ったし、もう確信だ。
やっぱりコイツはアルテミナスにまだ居やがったんだ。
「言っただろグラウド……俺はお前とは違う！　何が同類だ！？俺は自分の為だけに力を求めたりしないんだよ！　お前の様に力に溺れたりも絶対にしない。この力はな……お前が思ってる様な物じゃないんだ！！」
俺は肺の空気を全部使って殴る様に言ってやった。本当は実際に殴りたい所だけどな。だけどダメージ何て成らないから、せめて心を殴ってやろうって事だ。
でもどうやら全然効いて無いようだけど……本当に、相変わらずムカつく奴だ。
空気をを求めながら、視線を投げたグラウドの野郎の薄ら笑い浮かべてるんだ。同類……ずっとその言葉が俺の心に引っかかってる。
そんな訳無いと言い聞かせても、似てる所が有ったのかも知れな

いと心は告げる。それにガイエンの奴が言ったことも掘り返されてくるんだ。

「あの女と繋がりか何かか？　そんな言葉で逃げてるなよアギト。お前はただあの女を利用してただけだろ？　力を手にする為にな。まあお前は俺と違って二番目を求めた様だが。だがそれじゃもう満足出来てないんじゃないか？　素直に成れよアギト。力が……もっと力が欲しいだろ。もっともっとその力を振るいたいだろ。俺には分かる……同類だからな」

「――っつ！？」

俺はマウントポジションのままスキルを発動させた。ナイト・オブ・ウォーカーなら実はある権限を持ってるからな。だから取り出したその巨大な剣の切っ先をグラウドの顔面に突き立てる。

コイツの言葉……これ以上聞いてたらダメな気がする。今分かったよ。コイツがわざわざこんな形で現れた訳。それはこの為か。

グラウドの元のキャラは誰もがエルフなら知ってるし、それにこんな小学生みたいな格好の方が警戒されない。分かってても、この形で言われるとズカズカ心に入ってくる気がする。

そして俺の心をかき乱すのが目的か？　まあそれはこれから聞こう。コイツにそもそも容赦何かする必要無かったんだ。

「いい加減にしやがれ！　何でこんな事……いいや、何する気だお前？　答えやがれ。今更何で戻ってきた？　自分達が無力だって気付いてないのか？」

「ははは、言っただろ？　何も終わってなんかないとな。無力だと？　それはどうかなアギト。俺は貴様が手にした物がどれだけつまらないか教えてやろうってだけだ。

それだけの力もしょせんは借り物。だが利用しない手はないだろ

う？　与えられた物で喜ぶのは子供……自分で掴み取った物で喜ぶのが大人だアギト。
大人の世界に来いよ。そしたらもっともっと楽しい事があるもんだぜ」

コイツ……まさか俺を勧誘してるのか？　それはふざけた事だ。誰に何と思われようとも俺は……俺の居場所はもう決まってる。
側にいて守りたい奴はあの頃から、何一つ変わってなんかないんだ。

「腐った大人な奴等の世界に何か興味はねーよ！　お前みたいに周りの迷惑も考えない様な奴にそもそも大人なんて名乗って欲しくなんかない。
それにな……つまらないって何だよ。俺は今がこの上なく楽しい！　何も知らないお前が、俺の事を知った風に言ってんじゃねー！
この力のこともそうなんだよ！　お前は何も知らない。この力は俺とアイリのもう一つの誓いの証だ！！　これ以上の物なんて俺は求めたりしない！　絶対にな！」

そうこの力は誓いだ。俺達二人の約束だ。あの日あの時あの場所で、俺達は誓いあった。だからこれ以上の物何て俺にはきっとない。そう思ってる心に間違いなんてない。

「お前はあの女に捕らわれすぎてるんだよ。もっと自由に生きろよアギト。もっと自由にその力を解放しろよ。そしたらもっと素直になれるはずだ。
戦場ではそうしてるんだろ？　その力で敵を倒すのが楽しいんだろ？　迷惑だってかけてるんだろ？　やっぱり同じじゃないか！！
その力を誇示しろよ。悪い事なんかじゃない。だけどお前は気づ

くんだ。幾らこの力を誇示してもしょせんは借り物。そして越えられない壁の先にアイツがいるとな！」

「アイツだと？」

「ああ、あの女！　アイリだよ！　そしてカーテナだ！！　お前はいずれ俺と同じように求めるさ。それかその前に崩れさるかだな。あの時の俺の様に。その時にお前がどういう行動を取るか楽しみだ！！」

俺達三人がグラウドを倒した時と同じ様な事が起こる？

俺がアイリとの誓いを破ってカーテナを求める？　そんな事……あり得ない！！　全てはコイツの詭弁だろう。こうやって俺を不安にさせるのが目的とか。

俺は倒れてるグラウドに向かって言ってやる。

「成らねえよ！　そんな事には死んでもならねえ！！」

「……そうか？　だがお前は全てを無くすさ。求めなければ、何もつなぎ止めて置く事なんて出来はしない。ただ後に付いて来ただけのお前にはもしかしたら全てが重いのかもしれんしな」

「何？」

重い？　一体それはどういう事だ？

「お前のしてきた覚悟は、常にあの女一人の為の物だろう。だがあの女はどうだ？　よく考えろよ。お前が見てるのは常にたった一人。だが今のお前を見てるのはあの女一人でも、ガイエンを入れての二人でもないって事だ。特にお前は最初の騎士様なんだからな」

最初の騎士……それはナイト・オブ・ウォーカーを与えられた奴に漏れなくついてきた称号だ。まあアイリの騎士って事はそういう

事で間違いはないけどな。
加護でも最も多くの力が与えられてるぽいっし。でも俺がアイリしか見てない？　そういえばそれもガイエンに言われた気がするな。
責任感を養えとか……同じ様な事だろ。俺は最初の騎士だから、アイリ程じゃなくてもガイエンと同等位の注目はされてるか。

そして俺の覚悟はいつもアイリだけ……それはそうかもしれない。ここにただ付いてきただけってのが当てはまるのか。
アイリは当然に言ってたけど、ガイエンもそうなのか？　いやきっとそうだな。アイツはよくやってるし、アルテミナスを背負ってるって覚悟がきっとある。
じゃあ何で俺はここに居る？　それを考えたとき、俺はアイリが居るからだと思う。付いてきただけか……確かに端から見ればそうかも知れない。
でもアイリがそれを覚悟したときに、俺だって同じように覚悟したさ。そう多分な。だからこう言える。

「そんなの分かってる。俺達は三人で背負ってるんだから。誰が欠けたってきっとダメなんだ。でもな、三人だから出来てるんだよ。
お前に出来なかった事がな！！」
「そうか……三人同じ方向を見てればいいがな」

何だか意味深な言葉を言いやがった。コイツ何か知ってるのか？
どんなに幼くなってもやっぱりコイツの顔はムカつくな。
いっそ本当に振り下ろしてやろうか。このままにしておくとヤバそうだし……でもかといってこの世界に拘束の手段なんてない。
一時的にならそれも可能だが、ずっとＬＲＯに閉じこめておくなんて無理。牢にぶち込んでもログアウトされたらそれまでだし、何よりもこの姿は本体じゃない。
それなら問題何て無いんだろう。戦闘力低そうだしコイツ。完全

な捨てゴマだろ。だからこそ接触してきたってのもあるんだろう。
グラウドの癖に頭使ってやがる。

「おまえ等……何する気だ？」

するとグラウドはその幼い顔の口元半分だけをつり上げて笑みを作った。それは子供なのに本当に背筋が凍る様な微笑み。
それを見ると確かにレイアードは終わって何か無いのかもと思える程だ。

「まあ今日はそんな忠告をしに来ただけだ。忘れるなよアギト。我らレイアードはまだ終わってなんかないとな」

そう言ってグラウドは腕を振ってウインドウを表示させる。何をする気かは直ぐに分かった。だけど捕まえて置くこと何て出来ないんだし、俺は止めなかった。
そしてグラウドはログアウトを押して消えていく。ムカつく奴が居なくなったら、急に夜の静けさが戻った様な気がした。

結局アイツ等の動向は何も分からなかったな。ガイエンとの繋がりもだ。
考え過ぎならそれでいいんだが……でも近々奴等は何かをするんだろう。それだけは伝わってきた。今日現れたのにも意味があるとするなら……それは何だ？
グラウドの狙いは復讐なのか、それともやっぱり力か。でもどちらにしてもアイリは危ない。ある意味一番恨まれてそうだしな。
だとするとやっぱり明日からの侵略戦の時が怪しい。アルテミナ

スに残らなければいけないアイリを狙ってレイアードが動く可能性は十分にある。
俺もガイエンも前線だし……あれ？　それならガイエンはやっぱり関係ない？　いや、確証は何も無いか。どうする？　侵略戦に参加しない何て言える分けないし、今日グラウドと接触したなんて更にガイエンには言えない。

行かない理由を問われれば心配だからじゃ通らないだろうし……一体どうすれば。
信頼出来る奴に頼むしかないか。幸い、俺の部隊以外でそれに適任な奴の心当たりが一人いる。性格が少々問題だけど、今では一番のアイリの理解者かも知れない奴。

「よっと。そうと決まれば善は急げだな」

俺は立ち上がり、剣をしまって城を目指そうとした。その時、足音が聞こえる？　それも駆け足……誰だ？　こんな場所に駆けてくるなんてさ。
少し警戒しながら壁に張り付いて、そこから走って来る奴を見定める。あれは……

「アギト様～アギト様～どこですか～？」
「何だゼブラかよ。どうしたんだ？」

『ゼブラ』って言っても別にシマウマでもしま模様な訳でもない。名前な。この俺の一応部下に当たる奴。俺の部隊じゃそこら辺は意識しないけど、だけどどいつもこいつも様付けやめないんだよな。
こっちはこっぱずかしいって分かってるのか。装備は中の中位の普通の奴でエルフの気品とかは無いな。まさにモブキャラって感じ何だが、そこら辺が親しみある奴だ。

で、何だっけ？

「いえいえ、別に何にも無いですけど、自分はアギト様の付き人ですから。会議の後にフラ～とどっか行くからずっと探してたんですよ」

「あ～ああ、そりゃ悪かったな。だけど別に常に一緒に居ること無いじゃん。お前だってやりたいことあるだろ？」

う～ん、何で俺にこんなに付きまとうのか実際わからん。てか会議の後から探してたって……アイリと居る時に見つからなくてよかった。こいつもどっかズレてるからな。

何で城で見つけられなくて、更に広い町中で見つけれるんだよ。絶対におかしいと思う。

「自分の目標はアギト様ですから！　日々勉強の為に付いていたいんです！！」

うわ……何て暑苦しい奴だ。でも、何かそんな風に言われるとなんだかまんざらでもないよな。こいつは俺の事をどう思ってるのか……それを聞いてみたくなった。

「なあゼブラ。お前は俺がさあ……その……この力をどういう風に使ってる様に見える？　何かあんまり印象良くないんだよな」

するとゼブラは興奮してこう言った。

「そんなの決まってます！　アギト様はその力をみんなの為に使ってらっしゃいますよ！　誰が何と言おうと自分はそれを知っています！！」

その真っ直ぐな言葉。そして真っ直ぐな瞳。俺の心に引っかかってた不安が少しだけ落ちていった気がする。

「そっか、はは……サンキューな」

沢山の仲間が今はいる。それを感じると大丈夫……そう思える。

だから行こう聖地を取り戻しに。

因縁の相手（後書き）

第百五話です。
予定通り上げる事が出来て良かったです。これからはこまめに保存しようと思いました。マジで泣きそうだったから！　てかなかなか思うように進まない。結末は分かってる筈なのに、色々とそうなるまでが今回は大変です。
でも頑張るので次回もお楽しみに！
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではまたです。

事実を知る事（前書き）

放たれた狂気は自分ではどうしようも出来ない物。だけどそれも、確かな自身の望みなのです。最悪のシナリオへと続く奈落の道。

私はその扉を開けて、そして戻れないように閉じようとしてます。もしかしたら復習と言うのもただの名目なのかも……ただはっきり言えるのは、私は目の前の親衛隊が憎くて、だけどそれ以上に自分が嫌いだって事。

ここでバイバイしていいなら、いろんな物を置き去りに……それも良いかも。だけどそれを許してくれない人が居る。小さくて……でも強く真っ直ぐな瞳をした彼の仲間が私の閉じかけた扉をこじ開ける。

事実を知る事

真っ暗な……真っ暗な場所で私は泣き叫んだ。私の声は夜空を突いて轟いて……だけどその時、私は心でもっと別なことも叫んでた。訳が分からなくなった不安定な心で、闇に飲まれた深淵で、空しい叫びをあげてたの。

（ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい）

至らない私のせい……無力な私のせい……そして何よりこんな風になっちゃって、私は私の心の闇に負けて……ごめんなさい。

テッケンさんに言われて分かってた。私が今、やろうとしてること……それはきっと誰も彼も望んで何か居ないんだって。

だけどごめんなさい。止められない。憎しみが、怒りが、憎悪が……そして自分に対する憤りが、どこからともなく沸いてきて、力と共に増幅されていくんだ。

まるでアルテミナスの力を直接取り込む事と同時に、そんな感情まで付いてくる感じ。とても一人じゃ押さえきれない憎しみの渦の様な激情が体を支配していくの。

もうどれが私の本当の感情なのか分からなかった。もしかしたらこれ全部が私の感情かも知れないし、もっと別の誰かの感情がゴチャゴチャに混ざりあってる気もしてた。

でも結局それらは全部言い訳です。こうなったのは全て私の無力のせいで、今振り上げようとしてる腕は紛れもない私の腕。

誰かに押しつける事は出来ない私自身……もう私にはこれがゲームだからって軽い気持ちでは居られない。だって……ずっと感じて

きた想いにリアルも仮想も無いんだもん。
それを知ってるから、目の前が霞む。本当は止めたいの？　それともやっぱりこの目の前の奴を殺したいの？　答えが出せないまま、私の叫びは頂点へと達します。引き裂かれんばかりに口を開けて、闇と同化してる肉体を振るわせて私は腕を――

「させないさ！　まだ間に合う！　戻ってこいアイリ君！！」

――私の腕を押さえ込む小さな姿。それは先ほど、激情に任せて吹き飛ばした筈のテッケンさん。どうして？　確かに彼には攻撃が直撃した筈です。
そして吹っ飛んで、そこからここまでこの瞬間に間に合う分けない。でも彼はここにいます。ここにいて、私を真っ直ぐに見つめて言葉を投げかけてきます。

「君はもうわかってるんだろう！　感情を押さえられなく成ってるだけだ！！　僕は思うよ。君が今まで頑張ってきた道の先はこんなんじゃないと！
諦めないでくれアイリ君！！」
（あき……らめない……）

それはいつかの自分が良く言っていた言葉の気がします。光輝いてた時、あの頃全てが楽しかった時。大変だったけど、今の様に暗い事はそんな言葉で乗り越えれた。
でも今は……私に何があるんだろうって思う。諦めない事のやり方を忘れてる。アギトが去って、あの頃から私はいろんな事を諦めすぎたから今更……分からないよ。

「何を……諦めないの？　何を諦めてるのか……それすらも分からない」

「そんなの簡単だ！」

そう言ってテッケンさんは胸を張りました。かわいらしくエッヘンてな感じで決めて、言葉を紡ぎます。

「君の大切な全ての事。何一つ諦めちゃ駄目なことだよ！！　アギトの事やノウイ君。アルテミナスと言う国。エルフの民全て。そしてガイエン君さえもだろ？

君がいれば、きっと全てが上手く回る。君が回せるんだ！　今この時、この戦いで最も重要な鍵は君なんだからね。

だから君が諦めちゃいけない。重圧とか立場とか、そんなんじゃなく、君もこの国を愛する一人のエルフなんだろ？　今はそんなみんなが同じように頑張ってる時だ。

感じてみて……今の君にはそれが出来るんじゃないかい？」

そう言われて私は自身の堕ちた体に目をやった。黒く醜悪な、すでにエルフじゃないかも知れないその姿。こみ上げる吐き気に、弾け飛びそうな存在の私。

でも……今の私がアルテミナスの力に犯されてるのなら、確かにそれが出来るかも知れない。この地で今も戦ってる人たちの声が聞こえるのか、私は耳を澄ます。

すると真っ暗な闇の中のどこからともなく声が聞こえ出します。

「隊長！！　第二防衛ライン突破されます！！」

「ええい！　早すぎるぞ！　まだまだ時間稼いでろ！　アルテミナスにこれ以上近づけさせるな！　我ら軍の力をみせてやれ！！」

「カーテナは……加護は無いんですか？　あれさえあれば！」

そんな言葉が出た瞬間に私は暗闇の中で思わず耳をふさごうとします。だけどそれより早く、直ぐにさっきの隊長さんの声が入って

きました。

「甘ったるい事いってるんじゃねー！！　俺達がどれだけあの人に助けられたと思ってるんだ！！　あの人はなあ、今大変何だよ！　この軍勢を止める為に動いてる！　これ以上俺達が負担を掛けてどうする！　何の為に俺達がいる！？　アルテミナスを、あの人を守る為だ！！

恩返ししなきゃいけねえ……それが今だと思え！！　あの人が作ったアルテミナスを守り抜く事！　そしたらきっと笑ってくれる！！」

「……そうですね！！　俺達じゃ役不足かも知れないけど、アイリ様が笑ってくれたら最高です！！　やってやりますよおおお！！」

「「「うおおおおお！！」」」

何だか肌にまで響く様な大絶叫が聞こえました。思わず顔を上げると、まだまだ響くそんな声が聞こえます。

「きっとアギト様がやってくれる！！　それまで私たちはやられない！！」

「そうだねセラちゃん！　私も信じてる……だから頑張ろう。全部を取り戻す。そしたらきっとみんなが幸せになれる筈だもの！」

セラ……そして新たなアギトの仲間の声。後者の人は余り分からないけど、セラはずっと私の側にいてくれた一番の友達。

もしも私の今の姿を知ったら、ご自慢の聖典で消し飛ばされるかも知れません。そこら辺セラは厳しいから。でもそんなセラは離れて行ったアギトやガイエンの変わりにいつも私を気に掛けてくれた。

初めてカーテナを手にした後で、立場とかを飛び越えて私に接触してくれた子です。その自由で、でも一本通った芯に凛とした姿を現すセラが格好良いと思った。

本人はその評価には不満みたいだけど、でも初めて会ったときから友達に成れるって確信してたんだ。面倒な立場を気にしない関係。

それは今日まで、私を支えた確かな物の一つ。でもこのままじゃもしかしたらそんな友達も無くすのかな？　きっとピンチなのが言葉から伝わってきた。

でもセラも頑張ってるんだね。ううん、今この瞬間、この国で逃げてるのは私だけなのかも知れない。私はいろんな責任を投げ出して、みんなの戦いから一人だけ逃げようとしてる。

ノウイ君の敵討ち？　……違う、私はこれ以上見たくなくて、耐えられなかっただけだ。私はみんなのこんな気持ちの一パーセントも分かってなかったんだじゃないのかな。

ノウイ君はそれを必死に私に伝えようとしてたのに……私は目の前で起こった悲惨な光景ばかりを焼き付ける。それでもの想いを汲み取れて無かった。

それはまるで、人生の中で必ず幸福もあった筈なのに不幸だけを数えて悲観的な考えに捕らわれる様なもの。目の前まで伸ばされてる筈の手が幾らでもあったのに、一度もそれに気づけない愚かな私。

誰も強制なんてしなかったのに、勝手に重圧を感じたバカな自分。私は私が選んだ道で勝手に潰されかかってたのに、そんな私にみんなは優しい手をずっと伸ばしていてくれてたんだ。

でも、引っ張り上げるまでは誰もしてくれなかった。みんなそれを私が誰に望んでるか、きっと知ってたからです。だから後一歩は私の役目だったんだと思う。

私がもっと求めれば良かったんだよ。伸ばされた腕を掴む……それが出来てればきっとこんな事にはならなかったんだ。

それだけで、私の周りはもっと随分と変わったのかも知れない。ずっと俯いてたから気付かなかった。そんな頼りなく、役に立たな

い私に向けられていた手のひらの数々。

私は真っ暗な闇の中で右腕を宙に伸ばしてた。だって見えるんだもん。まだそこにある伸ばされた手が。誰かの声が聞こえる度に一つずつ増えて行ってます。

その中の一番近くの一つ……それに触れる直前で私は動きが止まります。それは私の悪い癖に成ってるのかも知れません。

（今更、この手を取っていいのかな？）

そんな考えが心をよぎってしまいます。だって散々待たせたよ。私は実はみんなを信じて無かったって事に成るし、今の私を許してくれるでしょうか。

それに何より、まだ本当に間に合うのかな？　こんな化け物じみちゃっててもいいのかな？　いつの間にか私は誰かの信じ方を忘れてる。そして自分の信じ方も。

また去られるのが怖くて、踏み出せないでいるんです。だけどその時、予想外な声が聞こえてきました。

「くくっ……ははは……アギト、やっぱり遅いんだよお前は。捨てたもの全部を取り戻そうなんて、はなから無茶な事だろ。

それにやはり貴様にむざむざ返す気はないしな。やっとで手に入れられるんだ。願った物も、願った人もな。だから貴様との勝負もこれまで・・安心しろよ、これからはもっとアイツを大切にするさ」

え？　あっ……これってガイエンの声だよね。どういう事なんだろう。願った物？　願った人？　物は分かるよ。それはきっとアルテミナスを指してるって。だけど人って誰？

あのガイエンが大切にするってまで言う人の存在を私は知らない。だってガイエンはＬＲＯでの出会いや繋がりをそんなに大切だと思

って無かったような……あれ？　でもよく考えると一つの考えにたどり着ける様な気がする。
まずポイントはアギトにそれを言ってること。それはアギトもその人を取り返そうとしてるって事で、二人に共通してるその人は……私とか？

（ガイ……エン！？）

いやいやいや、待ってよそれ。飛躍しすぎ。そんな筈無い。ガイエンに限ってそんな事……あるわけ無い……よね？
だってそれなら、いつからか分からないけど酷いことを私は言ってる。気持ちを知らなかったからって、何も知らなかったからって不用意な事言ってた。

（わわわ、私はどうしたらいいの！？）

何だか別の問題が持ち上がっちゃったよ。これこそ逃げたい気分。体は弾ける寸前で苦しいのに、これ以上詰め込みきらないよ。
だけどその時あることに気付きました。

（勝負がこれまで？）

その言葉の意味です。会ったときからずっと二人は事あるごとにぶつかってきました。あれが二人の勝負なら、それがこれまでって決着が付いたって事。
そして二人は今まさに戦ってた筈です。だけど聞こえたのはガイエンの声だけ。同じ場所に居て今も戦ってるならアギトの声も聞こえて良いはずなのにおかしい事です。
それってつまり……

（二人の戦いは終わってて、アギトは……）

そう考えた瞬間に私の瞳から、苦しさから来る涙とは違う滴が落ちました。止めたくてももっと奥から、こみ上げて来るこの涙は止め方が分かりません。

でも不思議と、泣いてる場合じゃないと思えてきます。泣きっぱなしで思うのも不思議だけど、そうなんです。

（行かなきゃ……行かなきゃ……行かなきゃ……）

沸き立つこんな気持ちに、心底私はワガママだと思いました。私を信じて優しい手を差し伸べてくれる人達が数え切れない程居ます。だけどそこで躊躇う私なのに、彼の事は直ぐに心が決めるんです。頭じゃ無くて心が私を動かすの。でも今回は今の状況を一人で乗り切れそうもない。

乱れきった心の整理をつけて、彼に会える姿に戻りたい！　その為に私はワガママを言って良いのかな？

「ねえ……テッケンさん。私は行かなきゃ……こんな所で追われない！　でもね、それは彼の為で、私はこんな個人的な感情なの。

貴方が言うほど私は立派じゃない。みんなの優しい気持ちに気付けたのに、その声が聞こえたのに、その時躊躇った私を動かすのは国でも同胞でも無くてね・・たった一人の彼なの。

そんな私でも……みんなは許してくれるかな？」

瞳を涙に濡らして目を開けた。そこには目を閉じる前と変わらない光景がありました。当然です。だけど陰で覆われてた様な感情は今はどこかに消えていて、もっと違う見方が出来る気がします。

ノウイ君のクリスタルに刺さった姿も、あれは私に進んで欲しかったから。逃げれない事を悟っても、それでも立ち向かってくれた

勇気の姿。
私は嘆くよりも前に進む事をしなくちゃいけなかったんだ。あの状態で何でずっとノウイ君があそこに居るのか。それはきっと心配してるから何です。

こんな風に成っちゃった私を彼はずっと見てる。戦闘不能でも見続ける事は出来るから……だからノウイ君は消えないんだ。
そんな彼にこれ以上、あの状態でいて欲しくない。早く解放して上げたい。すると私の言葉を聞いたテッケンさんが優しく言ってくれました。

「みんなの事は僕には分からないけど……ノウイ君の言葉でこれだけは言えるよ。きっとこの国の誰もが、君の幸せを願ってるってね」

その言葉を聞いたとき、私の視界は完全に晴れました。実はずっとさっきの私の目が長い間続いてたのかの知れない。お姫様のに、私は何を見ていたんだろう。それか本当に何も見てなかったのかも。
スゴく反省……反省の極みに至りたい。何だかさっきよりも体が圧迫されてる感じが小さくなった？　体を覆う影が少し色を持っている様な・・これって何なのかな？
分からないけど、きっとこれまでの様な悪い物じゃない気がします。

「ありがとうございます。テッケンさん」

私はそう言うと再び瞳を閉じました。そしてもう一度、差し出される手のひらの前に立ちます。真っ暗な闇の中で、私の方に差し出されてる無数の腕。
淡く光ってるそれはさっきよりも多く成ってます。本当に、みんな優しい。優しすぎです。こんな私なんかに。

（これは私のワガママ。だけど応援してください。今度こそ捕まえるから。大丈夫、私には分かります。まだアギトは生きてるって。だからそしたら、ちゃんとみんなともう一度頑張ります。諦めたり何かもうしません。逃げたりなんかもうしません。だって今のこの道は私が自分で選んだ道。

それに私はこんなに恵まれてる。約束します。必ずこの国を落とさせないって……私、アイリ・アルテミナスの名に賭けて！）

私は一番近くの腕に自身の手を重ねます。するとその瞬間、一瞬だけど、その腕の一人一人と繋がれた様な気がしました。私が一方的に見てる幻覚なんじゃ無いのかな？

気のせいかも知れない……でも、確かに沢山の腕に私は言いました。

「ごめなさい」と「ありがとう」を。そして瞳を開けて、この地に手をつき、優しく撫でながら言います。

「アルテミナスもありがとう。でも、もういいの。返すねこの力」

すると私の体から溢れ出てた影が、地面に染みて行くように消えていきます。体に貯まってた黒い力もこの大地に吸い取られる様に私の体を解放しました。

そしてそれと同時に影化していた私の体に実体としての重さが戻ってきました。肌も白くて、髪もちゃんとストロベリーブロンド。

今、私は私を取り戻しました。アイリと言う存在をです。すると私の足下に吸収された影が一面に広がって行きます。

アルテミナスに戻ると思ってた力……だけどそうじゃないのかな？　でもその時、力が目指してる物に気付きました。それはクリスタルです。

ここに突き出す黒く淀んだクリスタルに、私から出された力は吸われて行きます。そしてついにはより黒く成ったクルスタルから次々に割れて行くんです。

「これは一体……」

「クリスタルはアルテミナスの象徴です。そしてエネルギーの供給もクリスタルはしてくれます。そんなクリスタル達が、私の淀んだ心に感応した力を引き取ってくれたんだと思います。

この地に実は返す事なんか出来なかったんです」

だって本当はきっとアルテミナスの力は、こんな淀んだ物じゃ無いんです。もっと真っ白な筈……だから白に淀んだ色を混ぜて全部を淀ませる事は出来ないから、クリスタル達がその役目を負った。

私はそんなクリスタル達に頭を下げます。

「ごめんなさい」

そしてそんな中ついにはノウイ君が突き刺さってたクリスタルも砕けます。私は思わず駆け寄ろうとします。だけどその時、テッケンさんの激しい声がそれを制止ました。

「待つんだアイリ君！！　まだここの戦いは終わっちゃない！」

「え？　きゃっ！？」

ドッガアアンどクリスタルの破片が盛大に夜空へと昇りました。キラキラ光る欠片の雨が私達の頭上に降り注ぎます。

そして発信源には何かが渦を巻いてる？　あれは蛇の様に動く剣……と言うことはあそこに居るのは間違いなく親衛隊。

「はは……あーはっはっはははは！！　やっぱりアイリ様！　貴女はバカですよ！　どうして我らを倒さずに力を手放すんですか？　折角の奇跡が台無しですよ！！」

渦を巻いてた蛇が解かれて姿を現す親衛隊二人。どうやらこの時を待ってたみたいです。そしてそんな二人を見て、苦い顔をテッケンさんがします。

「くっ……確かにアイツ等を倒すなと言ったのは僕だが、この状況の打開策はこれで消えたのは真実か。だけど君だけでも必ずここを切り抜けさせてみせる！」

そう言ってテッケンさんはウインドウから何かを取り出します。ここで出すものと言ったら切り札……多分それしか無いでしょう。あれは巻物かな？

だけど私はそこまで追いつめられてるテッケンさんに言います。

「大丈夫です。私に任せてください。テッケンさんには仕上げをお願い出来ますか？」

「ん？」

ニコニコ笑顔で言う私を見て巻物を落としそうになるテッケンさん。意味が分からないのも無理無いけど、今は説明してる暇はありません。

だからおもむろに私は前へ進みます。

「随分な自信じゃないですかアイリ様？　力も無くして、無力な自分に戻った事を理解してないんですか？　それは傑作だ」

「そんなことより、あのモブリの切り札見たかったんだが、邪魔しないでくれますかアイリ様」

二人してイヤな目を向けて来る親衛隊。私は大きく息を吸ってそんな二人に言ってやります。

「貴方達、誰に向かってそんな口の効き方してるんですか？　私は正真正銘、この国の王族に連なる姫ですよ！　頭が高い！　下品な口を閉じて頭を下げなさい！！」

するとその瞬間この場がポカーンと成った。そして沸き起こる大爆笑。今まで余り笑わなかったもう一人の方まで笑ってます。

だけどそんな笑いも不意に止まって歪んだ顔が現れました。

「はぁ？　姫ってなんだそれ？　そんなお飾り、何の意味もねーよ！！　目覚ましてやるからちょっと死んでみろよおおおお！！」

迫る蛇と一緒に親衛隊二人も私に向かってきます。確実に獰猛な蛇の刃は私を捉えてる。だけど私は一歩も動きません。

そんな私の様子に後ろのテッケンさんが郷を煮やして動こうとするけど、それを私は横目で制止ます。アイコンタクトって奴です。伝わるかは分からなかったけど、私の目にはきっと確信と信頼があったはずです。

だから彼はグッと堪えてくれました。そして再び前を向き、凛と睨んで腕を振る動作を加えて叫びます。

「私、アイリ・アルテミナスは、この国の王族に連なる姫として宣言します！　王族である私に剣を向けるその者達を私は……騎士とは認めない！！

過ぎたる力は去りなさい！！」

それが私の勝機……だって私は、アルテミナスのお姫様。それは

飾りなんかじゃ無かったもの。暗闇の中で見つけた一つの真実。

事実を知る事（後書き）

第百六話です。
え～と、またまた終わんなかったね！　はい、ゴメンナサイ！！
いや～もう、自分の構成力の無さに愕然ですよ！　まあだけど、何とか勝機を見せれる事が出来たからよかったよかった。
あそこまで行かなかったらどうしようって事でしたよ。まあでも次でマジにアイリ編は追われます。今度こそ本当。うん絶対と宣言しても良いくらいだよ。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではまた！

始まった陰謀（前書き）

雷鳴が鳴り響き、激しい雨が常に肌を打ち付ける。遂に始まった領土奪還を目的とした侵略戦の残り二つの一つ目は、最悪のコンディション。覚悟していた事とはいえ、流石にこれは想定外だ。

そして俺達にとって負けられない戦いの中、雨に交じって迫る敵は前だけじゃなかったんだ。

始まった陰謀

「うおおおおおおお！！」

暗雲が立ちこめ、周りは激しすぎる雨で数メートル先も分からない状況だ。地面を打ち続ける雨の音に混じって、辛うじて聞こえる複数の唸り声と武器の衝突音。

それらが今正にこの場所で激しい攻防が繰り広げられてる証。先陣を切って敵と接触した俺の部隊は予定通りだが、この天候の悪さは想定外だ。

ここまで雨足が強いと、連絡は取りにくいし何よりも自分達の位置まで把握しづらい。先陣っていっても本隊からそう離れる訳にもいかないのに、見えないんだ。

多分後ろに居るはず……そんな感じでしか把握できない。一直線に進んできただけだし、必ずその筈だけど流石に自信が無くなるぞ。

取り合えず、今接触してる（多分こいつらも先陣部隊）を倒して一時後退だな。

「全員気を抜くなよ！　視界が悪いんだ。声出し合ってそれぞれを確認してろ！　深追いはするなよ！」

「「了解！！」」

雨のカーテンの向こうから聞こえてくる声に少し安心。誰もやられちゃいないようだ。だけどその時、雨の向こうから二つの剣線が同時に俺めがけて飛び出してきた。

「うお！？」

「ナイト・オブ・ウォーカーのアギトだな！！　あんたを倒せれば俺達の名も上がるってもんだ！！」
「そうそう、だから死んでくれよ！」

同じ様な格好をした人姿の奴らの連続攻撃が俺を襲う。息の合ったコンビネーション……こいつら兄弟とかなのか？　それか双子とか。
確かに息も付かせぬコンビネーションは賞賛の域。かなり出来る方だとも思う……だけど、決定的に火力不足だ。俺のこの盾を破るにはな。

「残念だけど、それにはおよばない！　てかお前達じゃ役不足なんだよ！！」

剣を横に一線して向かってきた二人組を吹き飛ばす。二人同時だとうざいからこの瞬間に追い込んでやろう。地面を蹴って、一気に間合いを詰めて、もう一度剣を振るう。
周りの雨も一気に弾け飛ぶほどの剛檄。だけどしとめた感覚は無い。

「こっちだぁ！！」

そんな声と共に上から一人が現れた。でもそれは失敗だ。勝率をあげるためにも、どうせ俺の一撃を交わしたのならもう一人と合流すべきだった。
まあもう遅いけど。
俺の武器は何も一つじゃないんだ。この盾も、使いように寄っては立派な武器になる。だから俺は盾を回転しながら頭上の奴に食らわせる。
でも今度は逃がさない様に、飛ばさずその勢いを利用して地面に

叩きつける。
「がっは！？」
「だから言ったろ？　役不足だってな」
突き立てた剣を俺は振り下ろす。雨に打たれながら色が落ちていく様は何だか哀れだな。だけどこれで、ご自慢のコンビネーションは使えない。
「うおおおお！！　よくも兄者を！　貴様は許さん！」
「勝負事で許さん言われても困るんだが……まあ、こういうのがやりやすいか。いいぜ、直ぐに兄貴と同じ所に送ってやるよ。
力の差を知れ」
遙か天空で光った閃光。そしてその直ぐ後に大音量の音が響く。思わず身が竦みそうになるほどの轟音は、近くのクリスタルに伝わったようだ。
何だかバチバチ鳴ってる。アイリが言ってたな。アルテミナスのエネルギーは雷そのものかも知れないって。そしてそれを大地に伝えてるのが、ここのクリスタルかもとか。
だからこその聖地。なんとしても取り返さなきゃいけない重要な場所。まあアイリの為に俺はやるさ！
向かってくる片割れの攻撃を盾でいなして、剣で攻撃。悪くはない動きだったが、やっぱりそれは二人居て初めて生きてた物の様だ。
一人だと平凡、そんな奴に俺はやられない。
「くっ……っつ……くっそ、これほどか……済まぬ兄者」
防戦一方に成っていた片割れからそんな言葉が漏れていた。こっちは傷一つ付いて無いのに……こんな風なのを見てると思う。

『圧倒的』
そんな言葉をさ。すると不意に浮かぶアイリの顔。その瞬間俺は自分が危ない考えに取り憑かれ掛けてたのに気付いた。
やっぱりガイエンに言われた事は正しいのかも知れない。俺は何やってるんだ？　こんな雑魚相手に遊んでる場合じゃないのに……これも力の誇示じゃないか。

俺は無意識に力をこいつに見せつけてる。それにさっき思ったこと。笑える位爽快だった。アイリに信じて貰えた自分は一体、どこにいったんだ？
情けない。
俺は目の前の片割れ野郎を見据えて一気に動く。考えを改めて、力の誇示じゃなくアルテミナスの為に……それが正しいこの力の使い方だろ。
アイリを守ってアルテミナスを守る。その為の力。それだけを考えて、俺は真っ直ぐに剣を突き出す。切っ先が雨を弾きながら進み、それだけじゃなく奴の防御に回った剣も突き折って体の真を貫いた。
それが止め。

「悪いな、俺の相手はお前だけじゃないんだ」

そう言って剣を振って、突き刺さった片割れを地面に落とす。そしてそのまま色あせていった。これでいいんだ。そう思いながら自身の感情を戒める。
もっとちゃんとしないといけない。だって俺には……

「アギト様！　ご無事ですかぁ！？　我ら全員無事です」

バシャバシャバシャと複数の足音が俺の後ろに揃ってる。振り返るとそこにはみんなが居る。何だか良い顔してさ。そう言えばこい

つらは志願性にしたんだ。
ガイエンが俺にも部隊を作れと言ったとき、いろんな資料くれたけど面倒でさ。だから適当に向こうから来てくれる感じで楽をしたんだ。
そして集まってくれたのがこいつらだから……てか、何で俺なんかにと思う。一人は理由知ってるけど、他は何だろうな？
憧れとかならやっぱり恥ずかしい。だけど慕ってくれてるのは間違い無いし、こいつらにも俺のあんな一面を見せる訳にはいかない。
だからもっとしっかりと気を持て俺！！

「よし、こっちも終わった。これから本隊と合流するぞ」
「はい！」

俺達は走り出す。もしかしたらこれがガイエンの言ってた責任感とかなのかも知れない。俺にも慕ってくれる人たちが居るのなら、それらまとめて背負ってみようと思う。
もう少し、大きく手を広げればこの位の人数はきっと守れるさ。そうきっと。

幾ら拭っても雨が目に入ってくる。鳴り響く雷鳴がいつ頭上に落ちるかと思うと、幾らゲームでもゾッとするな。地面を這うように生えている蔦に足を取られない様に急ぎながら来た道を戻る。
だけどなかなか本隊が見えない。てかそもそも来た道ってどこだっけって感じだ。雨足が強すぎて数メートル先も見えないし、上も見れない。
だから俺は思わず聞いた。

「あのさ、こっちで良かったよな？」
「……多分？」

「もしかたら……」
「その筈？」
思い思いの言葉が返ってくる。だけど誰も違うともあってるとも言わない。マジで迷ったとかか？
でも真っ直ぐに進んできただけだぞ。それで迷うなんて幾ら視界悪いからってな……それよりも、もしかしたら本隊が移動したとかかも知れない。
だけどその場合も、何の連絡も来ずに動くなんてあり得ない事。だってこんな状況でバラケるなんて危険すぎだろ。そんのガイエンが分かってない筈無い。
でも未だ本隊の影も形も現れない。激しく続く雨音と、暗雲に竜の如く走る稲妻が空しく感じた。本当にどういう事だよ。
俺達はその場で立ち止まって周りに目を凝らしてみる。だけど
「何にも見えないですね」
「こちらも同じ」
「こっちも同じです」
やっぱり道を間違えたのか？　本隊はかなりの大人数。近くにいれば直ぐにも分かりそうな物なのに、まだ見えないってこれは結構お手上げだ。
その時、違う足音が俺達に向かってくるのが聞こえた。
「誰でしょう？　まさか敵と鉢合わせとか？　それだと最悪ですね」
そんな事を言うゼブラのせいでみんなが固まって息を飲む。だってそれは冗談に聞こえない。マジで敵なら確かに最悪。
でもよくよく聞いてみるとそんなに雨を踏む音は多くない。てか

一つ分しか聞こえない。それならどうにでもなる。
俺は一歩前に進み出て足音の主を待つ。すると雨をかきわけて一人のエルフが現れた。
「うわ！？　ってああ、アギト様ですかよかったぁ」
「ああ、こっちも良かったよ」
まさに天の助けだ。こっちはどこに行けば良いかも分からなかったからな。
でもこいつは何だか俺達を探してたみたいだし、これで本隊と合流できるだろう。
「それじゃあ早速本隊まで連れてってくれよ。そのために来てくれたんだよな？」
「え？　あ～そうですよ。勿論その通りです。ガイエン様が心配して捜索隊を動かしたんですよ」
「なるほどね。まあアイツが心配してるのは作戦への影響だろうけど……」
きっと多分な。俺はガイエンの事分かってるつもりだからな。不本意だけど。だからこそガイエンも俺の事を分かってる。それは不愉快。
「はは、そんな事ないですよ。だって二人は戦友でしょ？　本心ですよ。捜索隊を出したのは。まあだけど今は急ぎましょう。こっちです」
そう言って迎えに来たエルフの一人が先頭に立って俺達を誘導してくれる。これで無事に本隊と合流できるだろう。
この雨のせいでまさか闇雲に動き回った結果、敵の本隊と出会す

……なんて事から避けられただけでも良いことだ。
てか何かやっぱり道が違ったみたいだな。そっちかよ！　って言う方向に前を走る奴は向かってる。

「なあ、本隊って移動したか？」
「いえ。最初の場所のままですよ。仕方ないですよ。この雨の強さですからね。全然周り見えないし、戦ってる最中にきっと動き回って、帰る方向を見失ったんでしょう」

確かに言われてみればそうだな。戦闘の間に動けば、幾ら真っ直ぐに来たって分からなく成るものかも知れない。この雨じゃ……それも仕方ないといえる。
でもそれだと問題がある。それはこの侵略の勝利条件だ。

「おい、ガイエンの奴はこんな状況でどうやってシンボルを見つける気だ？　これじゃあシンボルを見つけた捜索隊が戻ってこれなく成る事だってあり得るだろ。
そうなったら意味ないし、だけど大人数を伴ってくまなく探す時間なんて無いぞ」
「そこは捜索隊の人たちには覚悟を決めて貰って、見つけ次第即刻シンボルの破壊が許可されてます。だから誰かが敵よりも早く見つけるのが理想的ですけど……」

今この地を持ってる国のシンボルを見つけて破壊する。それがこの侵略戦の勝利条件。それはこのフィールドのどこかにある。
広大なＬＲＯのフィールドだ。普通なら部隊を幾つもに分けて連絡取り合いながらやる事。それは常に本隊が状況を判断しながら指示を送るためだが、今はそれが難しい。
一つ一つの部隊が孤立した状態での捜索じゃ、いざって時に助けも呼べないし……密に連絡取れないって事は、最悪見つけた直後に

やられたりしたら俺達は誰も知ることが出来ない。
もしも既に敵がシンボルを発見してても、それを知らせる事も出来ないんじゃ、戦力を削り続けてる様な物だ。ま、条件は向こうも同じだと思うが……どっちに神様がサイコロを振るかだな。
俺は前を走る奴に、重い言葉を返す。

「理想的な事が運良く起これば な……だけど、この豪雨の時点でこっちに運は向いてないっぽいよな」
「それは……」

俺の言葉に返す言葉がない様子。だって向こうは人とウンディーネの混成連合。この雨が既に向こうへの祝福とも取れるかも知れないからな。
人は普通だけども、ウンディーネ族は特殊だからな。アイツ等、水のあるところでは異様に強いんだ。それに唯一、水中で息できるし。
ウンディーネの国はそれこそ海の中にある。他の種族は攻められないから安全で外野を決め込んどけば言い物を、何でよりによって人と手を組んだのか。
まあウンディーネも多い方じゃないから、どこに付くのが賢いかとかを考えたんだろう。アイツ等の領土は広大と言っても海だけだから、これを気に陸地にあがろうとしてるのかも。
でもその標的がアルテミナスとは頂けないな。魚臭くなりそうじゃん。

「大丈夫ですよ。アイリ様とアギト様とガイエン様が居れば、人にも、ましてウンディーネ何て弱小な奴らには負けませんよ。
だって奴らは水しか特性がない奴ら。今までの侵略戦でも奴らが何かしてるの何て見たことありません」

まあ、ゼブラのそんな言葉も最も何だ。確かに今までの連合の中じゃ、ウンディーネは特にこれと言って驚異なんかじゃ無かった。言う成ればフツー。可もなく不可もなく、残る印象はその姿くらいだった。ウンディーネは数が少なくて、なかなか見ないから物珍しいんだよな。

俺達エルフは長い耳だけど、奴らは飾りの様なヒラが付いていて、透き通る様な肌は常に水々しい感じ。何だか光沢があるんだ。

それに水の中では人魚とかに成れるとも聞く。だからそれにふさわしいだけの美しさが有るんだ。まあ人の女が優しさとかを表すなら、俺達エルフの女性は凛とした力強さ、そしてウインディーネは神秘的って感じだな。

誰にだって当てはまる事じゃないけど、大きく見たらそんな特色が有る。そしてそんな神秘的さは外見だけじゃない。

ウンディーネって一つだけ国も離れてるし、行くのが大変だしで、ウンディーネをやってみないとわからないって事が多々ある。

それは他の種族には大いなる謎で、余り公開もされない事。少ない種族だからこそ、結束も堅いのかも知れない。だから俺達が知らない、武器があったっておかしくないと思うんだ。

それに人も、足手まといにしか成らない奴とは組まない筈だし……何だか不安がくすぶる感じだ。この大雨が気持ちを抑えてるのかも知れない。

さっきからバケツをひっくり返した様な水量がのし掛かってきてるから決して比喩表現じゃ無いぞ。これじゃあある意味、ウンディーネが得意な水の中と変わらないんじゃ無いかと思うほど。

「……！！　待てよ」

そう思った瞬間に俺の頭に引っかかりが出来た。だってそもそも、この雨の量はおかしくないか？

「どうしたんですかアギト様？」
「おい、お前等このフィールドでこんな激しい雨に打たれた事ってあるか？」

俺はそんな質問を部隊のみんなに投げかける。すると直ぐに次々と雨の中、声が聞こえてきた。

「これほど激しいのは初めてですけど」
「だけどここって良く雨降っていますよ。それも強いのが。雷が常に起きてる場所ですからね。これだけ強い雨がたまたま降ってもおかしくないですよ」
「「だよな～」」

みんなの意見は別におかしくは無いって事か……それは俺もそう思う。ここは普段から雨振ってるから、俺もそう思ってた。
だけど、タイミングが良すぎな気もする。ウンディーネの事を考えてて思ったんだ。奴らは水特性に徳化してる。でもそれって確かに、ゼブラの言うようにとても限定的だ。
器用貧乏でも人の方が対応力はずっと高い。でも、もしも奴らがその隠された力で自分のフィールドを作れるとしたら？
相手をそこに引きずり込めるのなら、これほど有利に戦える事はないんじゃ無いか？

「どうしたんですかアギト様？　顔色が悪いですよ。さっきの話……まさか、この雨はウンディーネ共のスキルか何かで既に我らは奴らの術中にはまってるとでも？」

前を走る捜索隊の奴に見透かされた様に考えを突かれてしまった。すると周りからは冗談みたいな笑いが起こる。まあこれも当然。

天候を操る程の魔法なんて聞いたこと無いからな。しかもそれを今まで目立つ活躍を何もしてないウンディーネがやるとは思えない訳だ。
でも俺は、そう考えると不安もあるけど、何だか心が少し疼く様な気がしてくる。

（今までと同じじゃつまらない……）

そんな思いがずっとあったから思わずそう考えてる自分がいる。このうるさすぎる雨の音の中って単調でさ、考えがいつの間にかフッした瞬間深くなるんだ。
そしてそのせいで俺はまたこんな事を考えてしまった。

（いやいや、そういう可能性も考慮して動いた方が、いざって時の為になるって事だから！！　そう絶対に！！）

俺は首を振って今の自分の考えに正当な理由を必死に後付け。そして前の奴に言葉を返す。

「笑い事ならそれでいいんだよ。だけどもしもこの雨が敵の仕掛けた事なら……それは不味いだろ？　俺たちは必ずアルテミナスを元の在りように戻す。それがアイリの意志だ。
どこも見捨てる訳には行かない。だからいろんな事も考えて置かなきゃだろ？　偶然か、それとも必然か……な」

そんな俺の言葉にいち早く返してきたのは、前の奴じゃなくゼブラだった。何だか異様に興奮して迫ってくる。

「流石アギト様です！　いろんな細かな所にまで気を配ってるんですね。そうやってきっとアイリ様を守ってきたんですね！　尊敬し

ます！」
「いや……まあ、程々にな」
やっぱりこいつはちょっと暑苦しいな。とか思ってると、周りの奴らも何だか目が輝いてるような？
「アギト様はやっぱり凄い！　俺たちが気付かない所にまで……流石です！！」
「私たち全員尊敬してます！！」
「あ……あはははは……」

どうやら俺の部隊のみんなは全員同じ人種の様だ。この時初めて、人選をもっと考えて置くんだったと思った。だけど同時に、「まあいいか」っ思う気持ちもある。
俺は何も、人の好意を斜めに扱う酷い奴じゃないからさ。こんなに好意を向けられる事がイヤな訳じゃないんだ。ただ成れてないだけ。
だからどうしても困る気持ちが先に来るんだ。そんな俺たちを見て前を行く奴は、心なしか笑い気味にこう言った。

「くくっ、そうですね。ちゃんと自分から伝えておきますよ」
「別にアンタからで無くても、本隊ともうすぐ合流できるなら自分で伝えるぞ」

だってこの状況でガイエンの野郎もイライラしてると思うんだ。そんな中に不覚定な情報持っていったら、まず怒りそうだからな。
俺のせいでそんな罵声を浴びせるのは忍びない。その分俺は馴れてるし、抵抗出来る。それに重要な事は直接言いたいからな。
負けるわけには絶対に行かないし。後二つ。こことも一つを取り戻せば終われるんだ。そしたらアイリを責任という重圧から解放できる……その筈だ。

「そうですね。ガイエン様にもその方がいいかも知れません……」
「ああ、そうするよ」

痛いくらいの雨の嵐。そんな中を俺達は走り続けてる。実際は声を聞き取るのも大変だから、俺達はそれなりの声を出していた。
だけどその時、その一瞬……前を走る捜索隊の彼は何とかギリギリ聞こえる位のこえでこう言ったと思う。

「……合流出来たらだけどな」
「ん？」

確かに俺の鼓膜はそんな言葉に震えた筈だ。聞き間違いと信じたいが、あの一瞬に感じた寒気は多分雨だけじゃない。
そう言えばさっきから随分走ってる……本隊が動いて無いなら、これもおかしな事じゃないか？　こんなに離れてる訳ない。

「おい、本隊はまではまだなのか？　流石に遠すぎだろ？」
「もうすぐですよ。もうすぐ……」

周りのみんなはそんな言葉を疑ってもない。俺だってあの言葉を聞いてなかったらそうだろう。だけど……

「もうすぐってどれくらいだ？　おい！」
「はあ、何か感づいた？　でも遅い。冥途の入り口には到着しましたよ。言ったとおりに」

その瞬間豪雨を突き破って、何かが飛んできた。これは間違いなく攻撃。ハメられた？　でも何で？　アイツもエルフだ。俺をハメる理由なんて……考える事、疑う事が多すぎて何を信じれば良いの

かわからない。
雷鳴轟くこの場所で、交錯してる思いは今までの様に単純じゃない様だ。

始まった陰謀（後書き）

第百七話です。
う～んやっぱり難しい。もう頭が痛くなる！！　でもここを乗り切らないと本編には行けないのです。てか掛かり過ぎじゃあああ！！　一体誰がこれだけ掛かるかと思ったか！！
自分でビックリだよ！　でも終わらせて見せます！　必ず納得のいく形で！
てな訳で次回は土曜日に上げます。　それではまた～。

今度こそともう一度の為に（前書き）

私は姫なんです。アルテミナスでただ一人……プレイヤーとして王族に連なる存在です。それは周りの冷やかしや、ただの自己宣言でもありません。私は今ここに、自分の存在を賭けたんです。

私の言葉はカーテナを通り越して、直接アルテミナスに届く。それを王族としての証明として信じて……

今度こそともう一度の為に

「私……アイリ・アルテミナスは、この国の王族に連なる姫として宣言します！　王族である私に剣を向けるその者達を私は……騎士とは認めない！！
過ぎたる力は去りなさい！！」

私はこの言葉を確信を持って言ったんです。砕け散ったクリスタルの尊い犠牲……こんな奴らに変えれないＬＲＯの情景を壊して得た、事実なんです。
それはきっとずっとわかってた事。誰もが私を姫と呼ぶから、勿論こいつ等だってそれは分かってた筈のことです。
だけど理解が足りなかった……私も含めて全てのエルフがそうでした。そうそれは目の前の親衛隊二人もそうです。

「はっはははははは！！　何だそれは！？　アンタに認められる必要があるのかよ？　お飾りのお姫様よおお！」
「確かに、そんな事実に今更何の意味がある！？　アンタのその称号はカーテナと共に付いて来ただけの物だ！」

二人のそんな言葉が真っ正面から私にぶつかります。だけどめげません。倒れません。だって二人の言葉は間違ってるから。二人は気付いてないから……一体さっきまで何を見てたのやら。
お飾りなんでしょうかその両の目は？

迫りくる黒く色づいた二人と、うねりを伴って少し先を行く蛇。どちらも目指してるのは間違いなく私。どちらのの攻撃も当たれば

相当なダメージでしょう。
下手をすると一撃で残りのＨＰが消し飛ぶかも知れない。だって私の服装はお世辞にも余り防御力が高い服じゃない。
お金にすれば高いけど、それは装飾代とでも言える代物です。それにさっきの状態のダメージも残ってます。この体は幻想の筈なのに……だけどそこから湧き出てきた、何か分からないもの。

力……何だろうけど、あれはきっとそれだけじゃ無かったんです。そんな残り香が私の体を重くしてました。それにやっぱり吐く度にダメージになってたみたいですし、この攻撃を受ける訳には行かないのです。
でも大丈夫……だって私はちゃんと知りましたら。

「二人はまだ分かってないようですね。でも直ぐに理解できますよ。私という存在がどれだけの位置に居るのかって事を」
「はっ、そんな事！！　食らえ！！」

蛇が勢いを増して、切っ先向け迫ってくる。でも私は動かない。本当は怖い……だけどこれしか無いじゃない。私は、私という存在の可能性に賭けます！！

「アイリ君！！」

後ろから必死に堪えてるテッケンさんの声。だけどまだなんです。まだ……私は前で組ませた両手を強く握りしめます。
蛇の進む音が不快に鼓膜を揺らしてる。私は精一杯耐えてその迫りを見続けます。目を逸らしてはダメなんです。私は凛と構えて無くちゃいけない。

私はみんなの手に伝えました。「ありがとう」と「ごめんなさい」

を。そしてそれは新たな誓いです。今日できっと変わるから……変わってみせるから、私は逃げない。
だって変わるなら自分からです。今度こそ取り残されないように、祝福を掴むために私はやります！！　私は震える体を必死に押さえつけて、凛と背筋を伸ばしてもう一度言います。

「消えなさい！！」

その瞬間です。目の前に迫っていた蛇が霧の様に、私に突き刺さる直前に掻き消えて行きます。そよ風が私の髪を優しく靡かせてね。
そしてそれだけじゃありません。

「なっ！？　どういう――うっあああああ！！」
「あああああああ！！」

親衛隊二人が勢いを無くして、その場にひざまずきます。そして苦しむような声。良く見ると彼らの黒く変色してた肌が元の色に戻って行ってるのが分かります。

「行くな！　待ってくれ！！　力が……俺達の力が抜けていく！？」
「これは！？」

ウネリを上げてこの場を蹂躙してた蛇も消えて、ただの剣に戻ってます。もう二人はただのエルフに完全に戻ってます。
私はそんな二人に言いました。

「あれは、貴方達の力なんかじゃない。アルテミナスに借りた力でしょう？」
「――っつ！？　ふざけるな！！　何をしたんだ一体？　ガイエン様が持つカーテナからの供給が途絶えるなんてありえん事だ！

カーテナを持つこと、それ即ちこの国で最強の筈だ！」

私の言葉に逆境する、蛇を持ってた奴。だけどもう一人の図体デカい方は何か見定める様に、私を見上げてます。顔色は悪くなってるけどね。

「アンタがさっき言ってた事がこれか？　カーテナが力を与える者を選んでる訳じゃない……と言うことか」

流石にこっちの奴は良く頭を働かせてます。激情に心が支配されてません。隣の奴は激情におもいっきり身を任せるタイプみたいで、さっきからうるさい事この上ないです。

「何だそれ！？　まさかただのお飾りと思ってたこいつの立場、それが作用したとでも言う気か？」

「そうとしか考えられん」

二人の突き刺す様な視線が私に向けられます。だけどここで怯んじゃダメ。それにこいつらは既に出涸らしです。だから私は一歩進んで、言葉を紡ぎます。

「その通りですよ。私は、私の立場を……地位を理解したんです。貴方達のおかげで」

「何？」

「私も今の今まで、この立場や王族なんて称号はカーテナの付属品だと思ってました。そこにどれだけの意味が在るのか何て考えてもいませんでしたよ。

だって私は……あの時からずっと俯いてたから。そんな事考える事に意味なんて見いだせなかった。姫と呼ばれる事が辛くて、様付けされるのが当たり前なのが、私をもっと孤独にしてると思ってた。

けれどここ数日で、私はその考えを改めました。そしてさっきの出来事で、私はこの王族という称号がカーテナとは違う力を持つって気付いたんです」
「違う力だと？」

闇夜に輝く幾百の星の明かりが周りに散ったクリスタルに映っていて、そこはまるで星の海の様。上下ともに星々に囲まれて、私はそんな中静かに二人を見つめます。

「ええ、カーテナとは違う……それは私自信に宿った力。この仮初めの体にあるかも分からない血の力。怒りと狂気に取り付かれたさっきの私はそれを事実として知ったんです。
私はさっき、アルテミナスから直接力を取り出しました。カーテナと言う受信機を使わずともそれが出来たんです。最初は奇跡が起こった……アルテミナスが応えてくれた……そう思いましたよ。
だけど、それは本当に奇跡や偶然の産物だったのかな？　だって今までそんな事は起きてません。それにアルテミナスという国が応える特別な条件があったんじゃないかなって……そう考えると、私には思い当たる事があります。
それこそが――」
「――王族か！　事実ってそういうことかよ。何もやってなかったのに、立場だけは本物とはお気楽なものだな！」

星の海に似合わない罵声が私に向けられました。だけど実際、彼がそう思うのも無理はない事です。事実私は、あの時から大した事やってないですから。
でも……それでも私は戦ってたんです。逃げてたけど、投げ出すことはしませんでした。いつか戻って来てくれると信じてた彼の居場所を私は守りたかったから。
少し生暖かな風が頬を撫でて行きます。ＬＲＯは日本の季節と連

動してるから……だけどそれでもここら辺は涼しい方。

でも気付くと随分虫の声を聞いてません。そういえば最近の夜はやけに静かです。まるで虫達もこの戦争を察知して逃げ出してしまったかの様……私は大きく呼吸して、今のこの空気を体に巡らせます。

「否定はしませんよ。私は良い姫じゃ無かったでしょうから。ずっとみんなに心配を掛けてました。でもだからこそ、私は今やられる訳には行かないんです。貴方達には分からなかったかも知れないけど……私はあれでも歩いてた。

ゆっくりと、けどずっと出口の見えない道を歩いてた。そして今、そんな道の終わりが見えてます。私はずっと……みんなに思われながら思ってたのはたった一人。

ずっとそんなわがままにつき合わせて、それでも愛されてた私は、もう一度やりますよ。今のこの国を誰にもやる気なんてないんです。

モンスターにも……そしてガイエンにも！」

そう私は守らなきゃいけない。それが出来の悪い姫を見守ってくれ続けたみんなへの恩返し。するとそんな私の言葉に親衛隊の一人は、ようやく腰を浮かせながら喋ります。

「ははは……幾らアンタが王族の権限でアルテミナスの力を直接自身に取り込めても、あの人には勝てない。絶対にな！

ガイエン様の意志と思いは既にこの国中を覆ってる。アンタも知ってるだろ？　あの揺るがぬ意志の強さをな。あの人こそ、人の上に立つ器なんだよ。

何を間違ってアンタなんかにその立場が転がったのか知らないが、走り出したあの人は誰にも止められない！　消え掛かってる王族の

威光でも何でも……もう遅いんだよ！」
ガイエンの意志……か。それが私はずっと引っかかってるんだけどね。だって……アルテミナスの力を受けている時に聞いたこと、あれって・・私は片手を胸に置いて少し早くなった鼓動を確かめます。

そして瞼の裏に浮かぶのは今までのガイエンの姿。それを思い出すとどうしても、この人達が言う事が本当なのか分からない。
だって私がずっと見てきた彼は……ずっと私を支えてくれた彼は……きっと嘘なんかじゃなかったと思う。そしてもしかしてガイエンがこんな事をする原因って……

「ねえ、ガイエンは本当は……何が欲しいんだろうね？」
「「あ？」」

私の変な言葉に、二人の親衛隊の抜けた声が重なりました。そして二人目もようやく立ち上がります。

「私はね……実は貴方達よりもずっと前からガイエンの事知ってる。だから私にはどうしても貴方達の言葉は信じれないな。
だってカーテナが欲しいなんて一度も言わなかった。でも一つだけ納得したのは……走りだしたって事かな。でもきっと時期が違うと思う。
ガイエンはもうずっと走り続けてるんだよ。多分私のせいかな？
それで止まり方を忘れちゃったか、自分から捨てただけなの……だって、本当に昔は楽しそうにしてたもん。
三人で一緒にやってた時……あの時からガイエンはこの国を思ってたし、陰謀もあったかも知れない。でも……あの時間を大切にしてたガイエンも、本物何だと私は信じてます」
「あの人はそんな事、仮定の一つとしか見てないですよアイリ様。

確かに貴女の方が我らより長く共に居るかも知れませんが、実際に思いを同じくした時間は我らの方が長いと思いますよ」

立ち上がったデカい方の親衛隊が私の言葉を真っ向否定。でも確かに私達はいつの間にか少しずつズレていた。だからこそ今こんな事に成ってる訳だしね……だけど、仮定の一つでは決してないと思う。

だってガイエンはずっとアギトにこだわってた。アギトがアルテミナスを去っても、きっとそれは変わって無かった筈だよ。

だってここ最近楽しそうだったし……少なくとも私にはそう見えたかな。

「アンタの的外れな勘違いも、いい加減ここまでにしとこうぜ。ガイエン様がこの国を手に入れる。それは決定事項なんだよ！

そしてアルテミナスはより強く、より強固な国へと成ってこのＬＲＯの世界を我らエルフが征するんだ。失われていない侵略システムによってな！！」

高らかにそう宣言した小さい方は、元に戻った剣をこちらに向けてきます。まだやる気……鈍く光る剣の光沢が私を捉えてる。

「それで……それでガイエンは満足するのかな？　どこまで行けば……彼は止まれるの？　侵略なんて、気を紛らわせる手段でしかないよ。

それこそゲームの一要素……後から加えられた、この世界の混乱の種。私達は沢山の戦いの果てに、また元の世界を取り戻したの……その価値をガイエンは知ってます」

侵略システムはまだ確かに存在してる。でも今はどこの国もそれをやることはありません。何故なら、人とエルフとモブリの三強が、

それぞれ拮抗をしてる事が分かってるから。
それに三強はそれぞれ他の種族とももしもの時の為に約束ごとを交わしてます。そして私達エルフも今や例外ではありません。

侵略なんて今や、簡単に出来る事じゃない。それを起こす事は世界の均衡を壊すこと。世界を敵に回すこと。走り続けた道の先は、世界征服なのでしょうか？
確かにガイエンなら考えそうな事だけど、現実的じゃない。だって彼らが頼りにしてるカーテナの力は、この国限定の力だもん。
それが無かったから、侵略は格段に難しい。幾ら昔と比べて統率がとれる様に成ったからって、人とモブリにもアレがあります。
カーテナと同じ存在の武器――『バランス崩し』が。だけどそんな考えを持つ私に彼らは言います。

「何が元の世界の価値だ！！　ガイエン様は常に言ってた。あの頃、もっと強引に攻め続けていたらとな！　アンタが勝手に戦いを終わらせたせいで、アルテミナスは元のままだと嘆いてらっしゃったわ！」
「確かに早計だったと俺も思う。あの頃の勢いなら多種族の領土の幾つかもとれた筈だ。気を使う必要なんて無いでしょう。
何故ならここは貴女が言うようにゲームなのだから。リアルで押しつぶされる思いをそのまま出して良い場所でしょう？
それをやろうとあの方はしてらっしゃるんだ！　この温くなったＬＲＯに、再び存在理由を示してくれますよ！！」

二人の言葉がこの星の空間に響きわたる。それは洗脳なのか、それとも信仰なのか……彼らはガイエンがやってる事、やろうとしてる事に一つの疑いも無いみたいです。
もしもまともな人達なら、クーデターもそうだけど、私を傷つけようとはしません。そこを考えるとガイエンの人を見抜く瞳は本物

です。
沢山いる軍の中で、ガイエンが一人で目利きして集めたのが彼ら親衛隊なのだから。自分の考えを押しつけるのではなく、共感してくれる人達を見定めて集めたみたい。

だからこそ、今の今まで誰にも気付かれなかったのだろうから。ガイエンは本当にスゴい事をやってたと思う。でもその原動力は……本当に彼らが言うような一つの野望？　ガイエンは誰にも言ってない……あの時聞いた気持ちを。だからこそ誰も知らない・・彼の想い。ガイエンは本当に彼ら親衛隊を信じてる？

もしもガイエンが誰も信じず、自分の思いをひた隠しにしてるのなら、もっと彼らに伝えただけじゃない目的があると思う。そんな気がする。
自惚れで推察していいのなら……もしかしたら私達への事。そうだとしたら私は……

「戦いを終わらせたのは、それが私の役目の終わりだと思ったから。そしてＬＲＯの存在理由は、私達に夢を与えてくれた事です。なら今のままで十分とは思いませんか？　大抵の人はきっと今のままで満足してる筈ですよ。
ねえ、貴方達は楽しく無いんですか？　変えなきゃ行けないと本当に思ってますか？　ＬＲＯには様々な楽しみ方があるけど……何人かの意志で誰かの楽しみを壊すような事はいけないんです。
ＬＲＯは貴方達が楽しい世界じゃない。みんなが夢見た楽しい世界であるべき何です！　だから本当にちゃんと考えなさい。自分の頭で」

自分の意志を持って欲しかった。でもダメなのかな。彼らは私の言葉にプルプル震えてます。そもそも強制なんてガイエンはしてな

い。
自分に共感させてるんでした。でも私はもっと広く世界を見て欲しいと思ったんです。アルテミナスや、ガイエンだけじゃない所。
だって彼ら親衛隊の視野は狭すぎです。ガイエンを狂信する余りに、その言葉と行動しか見てない。いつしかガイエンに吊られてる所があるんじゃないでしょうか。
私はそう思います。それはとっても巧妙にやったことでしょう。だけど元からガイエンと同じ考えを多少は持ってたのなら、乗せるのは簡単だったんじゃないでしょうか。
そうやっていつしか作り上げたのがガイエンの考えに疑問も疑念も持たない狂信者集団。エリート意識を植え付けるのもその一環。
そして人間は欲を見ます。
それがガイエンの掴む物なのかも。だって彼らは既に私より上に居るようだし……
「はは！　やっぱり的外れだなアンタ。俺達はそれぞれ自分の頭で考えてるよ。それに何だって？　みんなが楽しい世界であるべきなんて、だから腐って行くんだよ。
この国も……そして他のエルフもな！　もしかして俺達にガイエン様を止めさせようとでも思ったか？　そんなのアンタには無理だよ。
だって俺達にこの世界の間違いを気付かせてくれたのはあの人何だから。俺達の見てる物はきっとアンタには理解できないだろうな……でもアンタは生かしてやろうとしてるんだぜ。
あの人の優しさに感謝しとけよ」
何だか強気に成って言ってる感じ。ニ対ニだけど私は戦えないから実質一対ニだから？　それに優しさですか。それはちょっと複雑

な感じです。
どんな優しさなのかなそれは？
いつまでもここでお喋りしてる事は出来ません。私が後ろに視線を向けるとテッケンさんは首を振りました。それに私は応える様に縦に首を振ります。

きっとずっと聞いてたであろう会話の押し問答はこれ以上は無駄だと彼は言っているんでしょう。そしてそれに私も合意しました。
それはしょうがない事……この人達の説得はきっと無理何でしょう。人は二度救えないのかも知れません。それか既に救われたと感じてる人を救うなんて元から不可能な事なんです。
だから私はこの言葉を最後に、前へ進みましょう。

「貴方達の思いはわかりました。けれど、それを容認する事は出来ません！　ガイエンが私に優しさをまだくれるなら、私も私の優しさを示します。
彼の走りをやめさせる。これ以上無理しなくていいんだよって言って上げます！　そして私は……ちゃんとごめんなさいと謝ります！　彼の想いを受け取って。
そして誰も失わない！！　それが私のやるべき事です！」

辛い事をやっぱり強いる事に成るのかも知れません。だけど知った以上、無視は出来ない事……そして今度こそちゃんと彼の心の言葉を受け取りたい。
だけどそんな私の言葉と同時に奴らは動いてました。

「だからそれがなんだってえええ！？」

鈍く光る剣が降り上げられてる。だけどその時、二つ影が私の後ろから飛び出します。そして親衛隊二人に青い光の多段スキルが炸

裂しました。
「「――がっは！？」」
「わかってないね君達。それが希望と言うものだよ」
テッケンさんの背中が見える頃には二つは一つに戻ってます。そして親衛隊は今の一撃がクリティカルと成ってお陀仏です。

色あせた二人をよそ目に私は解放されてたノウイ君の所へ行きます。だけど蘇生は私には出来ない……でも言って起きたい事があったんです。
聞くことだけは出来る筈だから。
「ノウイ君……ありがとう。君のおかげです。必ずやり遂げるから、安心してアルテミナスへ戻ってください。そして私達が戻るまで、ついでにアルテミナスをお願いします。
私、アイリ・アルテミナスからのお願いです。私達の帰る所を守ってて」
すると粒子を伴って彼は消えていく。握った手が消える頃にテッケンさんが言いました。
「行こうアイリ君。彼の為にも急がないとね」
「はい！」
私達は走り出す。星が瞬く闇夜を真っ直ぐにタゼホを目指して。
もう止まって何かいられません！

（待っててね、アギト！　そしてガイエンも！）

三人で……どんな事も三人でなら乗り越えられるから！　私の足は力強く地面を蹴ります。おかしいけど……今久々に私は世界の広さを感じてる。

今度こそともう一度の為に（後書き）

第百八話です。

宣言通りようやくアイリの方の問題は解決です！　やったー！

何か最後は駆け足気味だったけど、ノウイをあのままほっといて行くのもなんだかね。アイリはきとそんな事しないと思うんです！

でもこれで三人が揃う条件が出来たというか……まあアイリは間に合うかも問題ですけどね。ミラージュコロイドはもうないし。でもアイリは駆けますよ！

てな訳で次回は月曜日に上げます。それではまた！

雨と雷と俺達と（前書き）

俺達の前に現れたのはエルフだった、だけど何か友好的じゃない。むしろ敵って感じの空気を感じるのは気のせいだろうか？　てかそもそも俺達は本隊目指してた筈だし、完全にはめられただろうこれは。

エルフのくせして同じエルフに敵対するこいつら……俺はそんな奴等の正体知る。

雨と雷と俺達と

数本の雷が続けざまにクリスタルへと落ちた。するとその一角の雨が、雷によって弾かれた様に円の形に不思議な空間を作り上げていた。

そして雷を受けたクリスタルは淡く輝き、そんな光が現れた人影を照らしてる。雨の中浮かび上がったその影は、数人なんてもんじゃない……数十人はいそうな雰囲気だ。

ぞろぞろぞろぞろと出てくる奴らは、どう感じても援軍とかじゃない様だ。

「何なんだよこれは？　どういう事だ！　てか、本隊はどこだよ！？」

「あはははは！　めでたいなアギト。本当にいつからそんな口の効き方するようになったんだ？　いや、考えれば前からお前はそんなんだったな。

初めてアジトに来たときから、お前は物怖じせずに生意気だった」

初めてアジトにって……何言ってるんだこいつら？　てか現れたのはエルフじゃんか。てことはこいつらも侵略参加者。

でも明らかに目的は俺達とは違いそうだな。それにここまで俺達を引っ張ってきた捜索隊だと言ったアイツ……完全に口調変わってるし。

そしてそんな捜索隊の言葉に周りの奴らも「そうだったな」とか言いながら笑ってる。何だか不愉快。

「つまりお前達は俺に用があるんだよな？　何のつもりかは知らないけど、今は侵略中なんだよ。お前達もエルフなら、この戦いの方

へ集中してろ」
「ははは、俺達はちゃんと集中してるよ。それに何のつもりか知らないとは良く言えた物だ。まさかまだ分かってないのか？
初めての騎士がそれじゃあ、やはり我らの恥だな。教えといてやるよアギト。エルフだってな、全員が貴様等を支持してる訳じゃない。
それに会ったんだろ？　グラウド様に。そこから気付よ」
「――っつ！？　お前等……」

俺は前の奴らを見据える。だけど幾ら雨足が強いからって、知ってる顔は一人もいない。だからこそ気付けなかったってのもあるが……こいつらの言うことを真っ向から受け取るのなら、答えは見えてくる。
最初に言ったアジトやこいつらの言動……そして最大のキーワードはグラウド。それらが結びつける物は一つしかない。
確かに全員が俺達を支持してるなんて思っちゃいない。だけどこんな行動を取る奴らなんて『レイアード』しかいないじゃないか。
グラウドは昨日、俺の前に現れた。だけどその姿は俺の見知った姿じゃ無かったんだ。アレはサブ……だとしたらこいつらも全員、その原理か。

「サブキャラまで使って、今更何の様なんだよレイアード！　お前達の役目はとっくに終わってるぞ」
「レ、レイアード！？　それってアギト様達がリーダーを潰して、そのままなし崩し的に消えていった危ない奴らじゃないですか！
でも何でここに……はっ！！　まさか復讐か！？」

ゼブラの言ったことはあながち間違いでもない雰囲気。復讐・・それは自分でも考えてた事だ。まあ俺達が潰したのはあくまでグラウド一人であって、レイアードまで潰した覚えは無いけどな。

こいつらはいつの間にか居なくなってただけだ。この激しい雨の中・・復讐って言葉は余計に重く感じるな。

「ふん、ようやく察したか。それに後ろの奴の感もなかなかだ。そうだな俺達は復讐したいんだよ。そして手にしたいんだ。この国を！」

「まだそんなこと……」

俺は自身の力で出した剣を握りしめる。だってそうだろ？　何で今更そんな事やる必要があるんだ？　大多数のエルフは今で纏まってるんだ。

そこにアイリが居るから出来てる事だと思う。そしてこいつらが願ってた強い国にも成りつつある。少なくとも、グラウドの野郎が無理矢理引っ張ってた時よりも、数段この国は強くなった。

それが分からないこいつらじゃ無いだろう。なのにまだやる気なのかよ。全然ちっともかわってないな。

「何でそんな事やるんだよ？　この国は強くなった。それはお前達が望んだことだろ！？　本当はただ俺達が気に食わないだけ何じゃないのか？

別にそれでもいいけどな……それならもっと別の場所で直接こいよ！　そしたらちゃんと相手してやるよ」

「はっ、強いだと？　この国が？　脆弱だ……どんどん温く成って行ってるのが我らには分かる。グラウド様も嘆いてた。

だから再び立ったんだよ。それにな、復讐は復讐でも、俺達はそんな生ぬるい事をやる気はない。お前にきっちり、どん底を味あわせてやるよ！」

すると俺達を取り囲む様にレイアード連中は動く。だけど実際、俺達は今の段階では設定上味方だ。侵略中にそのエリアに居る同種

族同士は全員そうなる。
なら俺達に奴らの攻撃が通る訳なんて無い。何やる気だこいつら？
「どん底？　どうやってだよ。それに今更、お前達レイアードが何やったって入る隙間何て無いんだよ。それよりも一緒にアルテミナスを取り戻そうぜ。
その方がアイリも喜ぶ。アンタ等だって肩身の狭い暮らしは嫌だろ？　俺達だって、実を言うと気にして無かった訳じゃないし……どうだよ？
過去の事はお互いに水にながしてさ」
「ふざけるな！　そんなだから、エルフの誇りが汚されるんだ！
こんなグラウド様から横取りした力で作られた場所になど入る気はないな！
それにな、我らはその隙間を作りにきたんだ。人なんて、簡単に疑念も不満も募らせる生き物だ。我らはそこにつけ込んでひっくり返してやるよ」

向こうが剣を抜いていてこちらが抜かない訳には行かない。俺達は円形に成ってそれぞれ武器を構えてレイアードと対峙する。
幾らダメージに成らないからって黙っていたぶられる気は無いからな。

「んな事、出来ると思うなよ。てかどうしようってんだ？　たったそれだけの人数でさ。それにサブじゃどうしたって役不足だろ？
アイリどころか、俺にもその剣は届ねえよ」
「ふん……確かにな。今のお前を倒すなんて、骨が折れる様な事だ。めんどくさい事この上ない。だからこうやって取り囲んでるんだよ。
分からないか？　言っただろ、人は簡単に疑念も不満も持つってな。それを生み出すんだよ。まず手始めにこの侵略戦、負けて貰う」
「は！？」

レイアードの唐突な言葉に思わず間抜けな声を出してしまう。負けて貰うってそれがどういう事か分かってるのかこいつ？　てか分かって無いはずないか。
むしろこいつらが言う疑念や不満ってそういう事だろう。

「だから負けて貰うんだよ。簡単だろ？　そして俺達はこの国の弱さを示してやる。すると必ず、俺達の言葉に共感する者も現れる。俺達はやがて再び、強大なうねりに成り得る。
国を飲み込む程のな。そしたら引き吊り下ろしてやる。お前達全員な！」

なるほど……それがこいつらの計画か・・だけどそれってかなりの長丁場な事じゃないか？　俺的に考えるとグラウドの野郎がそんなまどろっこしい事をやるとは考えにくい。
俺はだから確かめる。

「そして俺達から地位も名誉も取り上げようって寸法か。だけど何だか随分まどろっこしいくないか？　過激なレイアードのやり方はどこにいったんだ？」
「ふん、我らだって敵はちゃんと見極める。国となった貴様等が相手だからな。だがいつまでもそこにいれるとは思わないことだ。
努々、首を洗って待っていろ！！」

こいつらにも相手の強さを計る事ぐらいは出来たようだ。さっきから取り囲んだだけで、距離を詰めようともしないのは足止め目的だからか。
こいつらの狙いは俺という戦力の無力化。確かにそれによってエルフ側はそれなりに戦力ダウンする事になると思う。
それに今のこの状況……一人でも戦力が欠けるのが痛いくらいだ。

だけどもう十分か。こいつらの目的もわかった事だし、これ以上ここで足止め食ってる訳にも行かない。
だから俺は一歩前に出て大剣を横に凪いだ。
「はっ……どこにもいかせんわ！　貴様等はここで仲間の悲鳴でも耳を澄ませて聞いていろ！！」
そんなレイアードの言葉に耳を澄ませてみると……聞こえる。雨がうるさいが、確かにいくつかの叫びが聞こえてくる。
それはそうだ。だって戦いはとうに始まってるんだからな。俺はこんな所で一応の仲間内で揉めてる場合じゃない。
だから防がれた大剣に更に力を込めて降り抜いた。
「ぐあああああ！！」
「邪魔なんだよ。やる気がないんなら、お前達の方こそ大人しくしてろよな。俺は必ず、この戦いに勝ってみせる。
あんな事聞いたら尚更な。それでも上手く行くとは思えねーけど……万が一だって、俺はアイリの為に傷害は全部潰してやる！！」
吹き飛ばされたレイアードはクリスタルにぶつかってそのまま地面にズルズルと落ちていく。ダメージには成らないが、衝撃は伝わる。なら、邪魔な障害物は吹き飛ばせばいいだけじゃん。
だがその時、地面に吸いきれない水を蹴って向かう足音が聞こえてた。
「初めての騎士だか知らんが、調子にのるなよ！！」
そして再び、迫る剣。だけど俺は微動打にせずに一気に振り向きざまに大剣を振りかぶる。威力もスピードもこちらが上だったようで、レイアードがまた一人飛んでいく。

その光景を見た残りのレイアード共は流石に萎縮気味。するとゼブラが後ろから声を掛けてきた。

「アギト様。こいつら全員相手にしてても無駄ですよ。どうせ倒せないんだし。それよりも早く本隊と合流しましょう。

この事をガイエン様に知らせないとですし、一番不味いのはこの状況で本当の敵に出くわす事です」

「ああ、まあそうだな……だけど本隊の位置が分からないから困ってる訳で……」

そう呟きながら俺は周りのレイアード共に視線を向ける。すると良いこと思いついた。

「なあお前等。本隊の位置、知ってるだろ？　別に隠したければ隠して良いけどな……どうせ死なないんだ。何回だって痛い目にあわせてやるよ！」

そう言って俺は手直にいた二人を続けざまに地面に叩きつけた。まさに圧倒的だな。こいつらも加護は受けてる筈なのに、ナイト・オブ・ウォーカーは格が違う。

「どうしんだよ。さっきまでの勢いは！？　そんな腕で俺を止めようとか、腹が痛いくらいに間抜けだなお前等」

次々とレイアードをねじ伏せていく。数十人居たレイアードは余すことなく地を這いずる姿に変貌だ。何だか良く似合ってるじゃないか。

俺は更に追撃しようと大剣を振りあげる。するとその時声が上がった。

「お前……随分楽しそうにしてるな。そんな奴だったんだな」

そんな言葉に俺はピクッと反応する。どんな奴だって？

「力は楽しいだろ？　なあアギト」

「言ってろ！！」

俺は思わず大剣を振りあげてソイツを飛ばした。だってどいつもこいつも人の顔を見る度に同じ様な事言いやがって……不愉快なんだよ！

「ぐあっ……がっは！　……はぁはぁ」

地面を転がって行ったソイツの所に歩み寄って俺は見下す。泥と土で汚れた姿が良くお似合いだ。

「いい加減聞き飽きた台詞だな。楽しい？　……ああ、そうだな。この力でアイリと共に行けるのなら、これ以上楽しい物はねぇよ！！」

「「アギト様！」」

今までの否定じゃなく、違う解釈での肯定をした。そんな俺の言葉の後に続いたのはゼブラ達だ。何だかおもいっきりテンション上がってる様に見える様な。

「流石アイリ様への愛を感じました！　俺達もあの方とこの国を支えれる一つに成れる様に精進します！」

「は……はあ！？」

何？　何言っちゃってんだこいつ！？　愛ってそんな物……込め

てないとは言わないけどな、口にする事じゃないだろ。しかも恥ずかし気もなくなんて。
こいつら俺の言うことなら何でも肯定しそうである意味怖いぞ。
「ははっはは！　貴様等が支えるべき国なんてひ弱過ぎて我らは願い下げだな！　だからそんなひ弱な国はあの方が変えてくれる。
もっと強固でもっと強靱な国へとな！　それこそがエルフの国の在るべき姿だとおもわないか？」
俺に吹っ飛ばされたソイツが地面にへばりつきながらそんな事を言う。あの方ってグラウドの事だよな？　って待てよ……グラウドはどうしてここにいない？　何やってんだ？
「別に俺達はそんな事思わない。あんた達レイアードの身勝手な考えなんてごく少数！　それを真実みたいに押し売りするのはやめて欲しいな。
俺達は今のアルテミナスが好きなんだ！」
うんうん、ゼブラの言葉に続いて頷くみんな。なかなか良いこと言ってくれるじゃないか。自分が必死に言い聞かせてた何度何百の言葉よりも、誰かから言われるそんな言葉はなんか違う。
思いたいが、思ってくれてるに変わったって事が、そうスゴくうれしい事なんだ。重みが違うというか、支えが違う。
信じようと思うことを自分だけで信じるのは難しい。だけどそれが報われる様な事を聞くと自信になるな。
「だ、そうだ。こいつらも今のアルテミナスで良いってよ。そして多分、今こうして協力してくれてる人達はきっと同じだぜ」
俺は良いことを言ってくれたゼブラの後から、更に言葉を続ける。

それは自信の現れか……元々侵略に困らない人数が毎回毎回、直ぐに集まる事自体がスゴいこと。
それが示してるじゃんか。アイリがやってきた事は間違いなんかじゃなかったって。

だけどどうやら、それでも奴らは変わらないらしい。まあ他人の考えや価値観が直ぐに変わるわけもないんだろうけど……というか、こいつらはそれを分かった上で、こんな事をやろうとしてるのか。
頑固なのか、ただ諦め悪いだけか……こいつらのやろうとしてることは強引な押し売りと変わらない。そんなの誰が望んでる？　誰も望んでなんか無いんだ。

「それがどうした？　ぬるま湯につかり続けてるから脆弱な考えに誰もが捕らわれてるんだ。今は誰もが毒気に当てられてるような物なんだよ。
あのアイリとか言う女の毒気にな。だから我らが覚ましてやる。あの方が必ずや、在るべきエルフの姿を貴様等全員に思い出させる事をしてくれる！
あの方ならそれが出来るんだ！　そして知るが良い……我らエルフの本当の姿をな！」

倒れたまま笑う声が一つ二つと増えていってる。どうやら、俺がぶっ飛ばした奴らがこぞって笑いだした様だ。激しい雨の音にも負けない笑いの合唱……それは何だか唾を飲み込むほど不気味な状況だった。
それにやっぱりグラウドも動いてるらしい。だけどここにはいない……その意味が気になる所だ。

「うわわ、アギト様……何ですかねこれは？　ちょっと不気味って言うかこいつら恐い位ですよ」

ゼブラのそんな弱気な発言も最もだな。こいつらの思いは、いつだって引くくらいに強いんだ。だから弾き者にされる。
でもその溢れる思いをぶつけるのと共有するのとじゃ全くの別物に変わると思う。こいつらはいつだってぶつけるだけ。
自分達の事を絶対的に正しいと思ってるから質が更に悪い。自分らしさと自己中を一緒くたにしてるんだ。ただぶつけるだけの思いは痛いだけ。

それを知って、周りにも目を向けろ。まあ無理だろうけど。信じる者を間違えるとさ、人はそれ以外を目に入れないし、聞く耳何て持たない。
絶対何て事が確立された一人の存在がこいつらの中では一番何だ。さすが狂信者。でも諦めて貰うしかこれは出来ない事。

だって今のアルテミナスは、アイリの自由と覚悟で建てたんだ。それをみすみす壊させる訳には行かない。アイリは自分の溢れる思いをこの国のみんなと共有して出来なかった事をやったんだ。
それでこそ良いと俺は思う。

「毒気何て……誰もが笑えるそんな毒気なら、払う何てしなくていいな。それにグラウドの野郎が何だって？　何をアイツはしてる？」

俺のそんな言葉を……だけど奴らは笑って答えようとはしない。まさにおかしく成った状態だな。いつもどこかおかしい連中だったけど、こうなると危ない連中だと再認識させられる。
よくこんな奴らと同じ場所に一時居れたよ。今考えると信じられない。こいつらは笑いで誤魔化して、グラウドの事は言いたくないって事らしい。

それはやっぱりアイツが何かをやってるって事だろう。気になる……だがこいつらはこれ以上口を割りそうもない。
雨に溺れながら、狂った様に笑いまくりやがってるからな。

「くそ！」

俺は悪態をついて左右と前後ろ、全部に目を向ける。だけどやっぱり本隊が見える訳でもない。結局、同じ仲間って事に一応されてるからこれ以上の事は出来ないし……本当に言いたくない事は言わせられないか。
だけどその時、急に奴らの笑い声が止んで、地面を激しく打ちつける雨の音で世界が満たされていく。急にどういう事だ？　一体どうした？　そんな風に思ってると前で転がってる奴がボソリと言った。

「足音が……はは……足音が聞こえるぞ」
「足音？」

それってつまり誰かがあるいは誰か達がこっちに向かって来てるって事か。問題なのはそれが敵か味方かって事。でもこいつらのこの表情。余裕を見せるような笑い。

（味方じゃない？）

そんな風に感じれる。だって味方だと、こいつらには都合が悪い筈だからな。それにこいつらがここに俺を誘導してきた訳……それはこっちには味方がいないからじゃないか？
だからこそ、来るのは敵しかいない筈との余裕。

「確かに聞こえるような……アギト様どうしますか？」

ゼブラは一抹の期待を考えてるからこそ迷ってるんだろう。だけど俺は確信してる。今来てるのは敵だと。

「どうするも、こいつらのこの余裕……来てるのは敵だ！
取りあえずこの場から離れるぞ！」
「「はい！」」

無駄な戦闘は今の状況だと避けたい。俺達は反転して雨の中を駆けだした。レイアード共を放って置くのはどうかと思うが、こうなったら奴らより先に本隊に合流するまで。
それか敵に倒される事を望むな。それなら足止めとして使えるし、何より気分がいい。まあ最高なのは俺自身で冥途に送ってやることだがな。

しばらく進むと、後方から激しい爆発音と閃光が伝わってきた。それはレイアード共と戦闘をしてるって事だろうか？　まあ位置的にもそう考えるな。
実は少しだけ、レイアードは敵側と通じてるんじゃ無いかと思ったが、奴らは他の種族を毛嫌いしてるからな。それはしないだろう。だって奴らは誇りとかを大事にしてる。
でもこれでまた同じ状況に立ち返った訳だ。すると前から雨を割って何かが出てきた。それは――

「う……ウンディーネ！？　敵か！」

――ウンディーネに率いられた二個小隊だ。そして間髪入れずに襲ってくるのは奴らお得意の水系のスキル。俺は盾でそれらを防い

で、勢い良く大剣を振りかぶって地面を抉る。
スキルも同時に纏わせていたから、一瞬で蒸発した水が周りを白に染めていく。

「ちっ……今は引くぞ！」

流石にバックアップも無い今の状況で二個小隊相手に立ち回るのは厳しい。俺一人ならまだしも、ゼブラ達の誰かが犠牲になるかも知れない。
俺は水蒸気の中方向転換して走り続ける。どこに向かってるのかも分からずに。だけど直ぐに別の敵小隊にぶつかった。だけどそれも交わして……と思ったらまた別の敵小隊と遭遇する羽目に。
これはどう言うことだ？　幾ら何でもこんな狭い範囲で次々に敵に会うなんてまるで敵の本隊が近いみたいじゃなか。
そしてついにはヤケクソ気味でこう言った。

「鬱陶しい、やるぞ！　俺が出来るだけ引きつけるからお前達は一体一体確実に行け！！」

俺達は逃げるのをやめて向かってくる敵に立ち向かう。
勝算が会った訳じゃ無い。だけどやれると思った。そして何とか俺達は勝った……けれど、絶望の中に俺達は既に入ってた。

雨と雷と俺達と（後書き）

第百九話です。
なかなかもどかしい話が続いてゴメンナサイ。てか自分が一番もどかしいよ！　だけどこれでようやく繋がって行くかなって感じです。そろそろアギトの鼻っ柱を折らないと終われそうにないので頑張ります。
次回は水曜日に上げます。ではでは。

暖かさと絶望の象徴（前書き）

聖典は私の切り札で、それぞれが私の目となります。だけど人の頭に複数の映像処理機能はついてなくて……映像と言う、とてつもない情報の塊が常に流れ込んでくる事は頭の容量を一杯にします。

それによって聖典を八機以上使うと頭痛が併発するのです。しかもその影響はリアルにまで……きっと頭は体と違って本体だからなんでしょう。

でもそれでもこの力はいまだ私だけの特権。どこまでも誰よりも自由に速く！　私の光が、闇を照らす先駆けに成れればいい。、

暖かさと絶望の象徴

炎の壁が高くそびえ立ち、今にもこの暗がりに飲み込まれそうなこの村を照らしてる。他にも燃え盛る建物やらから、赤い火の粉が絶え間無く宙に流れて出てた。

そしてそんな火の粉が紛れながらも目が映すのは、繰り広げられる戦闘の光景。私の知らない加護を受け肌が黒ずんだ親衛隊と私達……第三勢力。

戦力差は歴然で、だけど私達はここを通すわけには行かない。何故なら、この炎の壁の向こうで繰り広げられてるであろう戦いは他者の介入を許してはならない物だから。

つけなくちゃいけない決着で……それはもう避けられない事。ならおもいっきりやって貰うのが一番でしょう。気兼ねなくね。

勝てるかどうかは正直分からない。理屈的に考えたら、それは奇跡でも願わないと無理なのかも知れない。だって今のアギト様には栄光を支えた騎士としての力はなくて、頼れるのは本当に磨いてきた己自身だけ。

それなのに、ガイエンはこの国では最強に成れる武器を所有してさらにはおかしな事に成ってた。あんな得体の知れない力に、正直単身で向かわせるのは酷なのかも。

だけどそれでも、私はアギト様を信じたかったんです。もう逃げ続けるのにも飽きた頃と思って連れ帰ったのは私の意志。それから始まった……まあたまたま時期が重なっただけと思いたい、この騒動。

まだまだ辛い事をこの世界は彼に突きつけました。けれど私達とはまた違う、頼もしい仲間達が居たし更に成長したみたいに見えた彼は、きっと大丈夫。

アイリ様が選んだ人で、あの栄光もそれは決して力だけじゃなかったと私は思ってる。彼は強い人です。腕っ節とか戦闘技術とかじゃなく、そう心が。

奇跡を起こすきっかけがそういう心の問題なら、私はやっぱりガイエンを止められのはアギト様しかいないと思う。

（勝ってよ……そうじゃなくちゃ、こっちだってヤバいんだから）

私はチラリと見た炎の壁の向こうにそんな心を投げかけた。

だって余裕なんて無いんだもん。数でも押されて、おまけにスペックまで上回れてる現状、この人数で渡りあってるだけで大金星もの。

それはみんながアギト様を信じて、終わりが来るその時を待ってるから生み出せるこれも心の力でしょう。ＬＲＯは偶にそういうのを感じる瞬間ってのがあるんです。

でもだからこそ危うく感じる事でもあります。心は移り変わり安いから……それに持ってる期待が大きいほど、頑張れば頑張った分だけの価値を見いだしたい物。

けれどそれが全部無駄になったと分かったとき、心から生み出されてた力はなりを潜めるでしょう。そうなったら私達は終わりです。

苦しくて苦しくて……苦しみ抜いてもその先に何も無いなんて考えたくもない事。

「セラちゃん危ない！！　ピク！」

黒い陰が私を覆ったと思った瞬間、同時に聞こえた声の後に炎が頭上から舞い降りてきた。そしてその炎は私を攻撃しようとしてた親衛隊を包みました。

だけど降り下ろされる武器は止まらない。気付いてたけど、この位の攻撃じゃ奴らには通らない。

「――っつ……」

頭がズキズキして一瞬ふらついてしまった。これで完璧に避けるタイミングを見失ってしまいました。ピクが作ってくれた一瞬を無駄に……一撃食らうのはしょうがないか、そう思いインパクトの瞬間に備えます。

その変わりにただでは受けないけどね。やられたら直ぐにやり返す。それが私の信条なんで。

（覚悟はそっちも必要よ）

そんな事を自身を攻撃しようとしてる親衛隊に目で訴えてやった。伝わったとは思えないけど、それでも忠告だけはしておいたわ。

姿形はエルフのままの筈なのに……力に溺れていくような親衛隊。肌だけじゃなく、その心までもしかしたら黒くされたのかな。

私が知ってる加護でこんな事に成った人は見た事なんて無いのに、やっぱりこれはただの加護じゃない。赤い瞳がぎらついて、そこと重なるように私には見える剣が降り下ろされる。

「食らえええええ！！」

私は目を逸らさずに真っ直ぐにそこを見つめてた。だけどその時、横から何か柔らかい物が勢い良くぶつかってきた。

「だめえええええ！！」

「きゃっ！？　シルク様？」

私達は勢いのままに横倒しになる。だけどそのおかげで親衛隊の剣は避けられた。地面にめり込む奴の剣と私達が地面に倒れるのは同時だった。

「大丈夫セラちゃん？」

「ええ、だけどシルク様……なんて無茶を」

だけど私がそう言ってもシルク様は優しく微笑んで優しい言葉を掛けてくれるだけ。だけなんて言い方も失礼だけど……自分が近接戦に向いて無いことは分かってほしい。

それにただでさえ後衛の防御力は低いんだから、一撃貰うのだって後々考えれば痛いこと。なのにこの人……もう何でこんなに屈託無く笑うのかな。

私が自分から様付けしちゃうのってアイリ様とアギト様以来だよ。ガイエンは立場上仕方なくなだけ。だからまさかの三人目が居るとは自分でもビックリ。

それにエルフじゃないからね。人は一番のライバルなのに……って自分的にはそこら辺はどうでも良いことか。

「ちっ！」

ちょっと和んでるとそんな舌打ちが聞こえた。声の方を見てみると充血した目が周囲を這って私達を捕らえてる。

でも何だかおかしい……別にあんなに目を動かす事じゃないはず。なのに奴はまるで一瞬私達を見失ったかのようにそうした。

目が悪くなってるとか？　ううんそれはちょと考えられない理由かな。もっと別な……夢中過ぎる感じ？　一点の狭い範囲に夢中に成りすぎてるとか。

だから視野が極端に狭くなってる？　正面同士の戦いならそれは

やっかいな事だけど、不意の乱入には気付けない。
だけどやっぱり一度視界に捕らえられたら厄介なのは変わりない。上に乗ってるシルク様のせいで動けないし。このままじゃ二人ともあの剣の餌食に成りそう。
まあそれもこのままなら……だけど！

「シルク様！　動かないでくださいね」
「え？　急いでどかなくちゃって思ったんだけど……」
「いいから取りあえずそのままで！！」

私は大声でシルク様をその位置に止まらせた。勿論これには訳がある。だって粋なり動かれて流れ弾に当たったり、狙いが動く事で予想出来てる親衛隊の動きが変わるのはイヤだからね。
取りあえずこの瞬間この体勢で我慢する。

けれどようように戦闘とは思いがけない事が起きるものである。てかあり得ないだろ！　って言いたい。まあ地面ってのは土がむき出しなら掘り返したりとか出来るように成ってるから、多少は岩とかが敷き詰められたりしてるのよりも壊しやすいだろうけども！
地面にめり込ませたまま剣を振るうってどんなバカ力なのよ！
こっちは抜いてから来ることを予想してたのに、モーションの短縮されちゃった。

「二人まとめて叩っ斬ってやる！！」

そんな言葉と共に地面を激しく抉りながら迫る剣。これだけの力の攻撃は受けるわけにはいかない。パワーもスピードも想像以上に成ってる気がする。そう、前の加護よりもスゴくなってる。
認めたくはないけど、多分そう。でもだからって私達は負けないわ！　負けるなんて事出来るわけがない！　きっといろんな場所で

誰もが頑張ってる筈だもの。
早々にリタイアなんかしたくもない。だから誤差修正、狙いを改めて、そのイメージを固定し解放！！

「そんな事、させないわよ！！　聖典！！」

その瞬間、真横から親衛隊の武器めがけて光の光線が過ぎ去った。そしてその切っ先に見事に当たり剣を弾き飛ばす。

「なっ！？」
「――っつ、食らいなさい！　生憎、今のアンタには見えないでしょうけど」

私は私のイメージを解放する。頭に走る幾筋もの閃光が聖典と私を繋いでる。そして一斉に放たれたイメージを受けて聖典は動き出す。
四方八方からの連続攻撃。頭には全ての聖典の動きが入ってきてイメージと視覚と後は直感で全てを狂い無く操ります。
今操ってのは同時で十体以上……かなり脳に負担が掛かる感じ。だけど無理してでもやらなきゃ……
聖典から放たれた光線が幾度も親衛隊に降り注ぐ。私はシルク様を庇うように抱いて後ろに下がります。少し派手に成るからね。

「ぐあああああああああ！！」

降りすさぶ光線の爆発が次第に大きく成っていきます。だけどまだ足りない。数で攻めても、予想以上に加護の力は強大です。カーテナの加護ーー自身に掛けられるのはこれ以上無い頼もしさがあったけど、逆になるとこれほど厄介な力も無いですね。
それに本当の加護はこんな数十人にだけ掛けるものじゃなく、同

種族全員に最高峰の補助魔法を一斉掛けだから考えたら凄い。
これ自体もバランス崩しの称号に負けない力。だけど今は、そのバランス崩しのバランスまでも崩れてる感じなのよね。

何で肌が黒く成っちゃうの？　それにガイエンに至っては最早化け物だったし……カーテナには今や得体の知れない力が更に加算されてるのかも知れない。
でも通さなくちゃ……幾ら堅くても、凌ぐだけじゃこちらもじり貧だもん。数を減らして行けなきゃ、いつかは押されてしまう。だから巻き返すきっかけをここに賭ける！
嵐の様な連続砲撃の中をそれでも進もうとする黒い親衛隊。もうなんかそれはホラーっぽい。肩を抱いてるシルク様が「ひっ」ってちょっと怖がってるし……私は数機を自身の周りに集めて腕を伸ばす。

「こんな物かよ……自慢の……聖典ってのは！！」
「こんなもんかどうか、それはこれを食らって判断しなさい！！」

八機の聖典が私の周りを回りながら、腕の先に光が収束していく。四機じゃ足りなさそうだったから、更に増やしてきっとこれなら通るで筈。
威力は四機の時の陪乗。制御が難しいけど、これ位じゃないと一気に奴のＨＰは削りきれないと思う。腕の先の光は大きくなり、それに伴って聖典が回る軌跡に光の円が現れる。
そして徐々に膨れ上がった光からは青白い放電が周囲に放たれてる。もう十分だね。聖典の回転で巻き起こった風が髪を靡かせてる。いよいよこの時。
私は指を二本尽きだして叫びます。

「聖典八相収束砲、ブレイク！！」

その瞬間肥大した光線に飲み込まれて一瞬音が周りから欠き消えた。だけど直ぐにその静けさは吹き飛びます。一瞬の静寂を次の瞬間には切り裂く力……これが八相の威力。
私は体が押し返されない様に必死に耐えます。前方は真っ白な光が覆ってる。だけど私には見える。真っ直ぐに向かったこの収束砲が奴にぶつかるを……でも、だけど！

「しぶとい！！」
「んぎぎぎぎいぐぐぅぅぅぅぅ！！」

親衛隊の奴は両手を尽きだして収束砲を受け止めてた。信じられない事だけど、今日だけでそんな事が幾つも起こってるから驚くよりも、私は更に押し込みます。
でも八相は強大過ぎてあまり上手く制御出来ないんだよね。でもここは根性の見せ所……これが通らなかったらきっと戦いに影響しちゃう。

加護……ううん、もうあんな姿なら呪いとかの方がしっくり来るこの力。なんてタフなのよ！　それに比べて私の体はひ弱です。女だからかもだけど、既に自身の体を支えるのも辛い。それに収束砲も今にも弾け飛びそう。この腕を落としたら、きっとそうなる。
でも腕が信じられないくらい重い……いつもは一瞬だけだからそんなに気にならなかったけど、収束砲を、しかも八相を続けるのがこんなにきついなんて。一秒がとてつもなく長く感じる。
早く早く通ってよ！　と叫び続けても焦った気持ちじゃ上手く制御出来ない。それに思考もいろんな所に拡散しちゃって、これじゃあ気持ちが乗らない。

（もう……だめ……）

そう思った心。私はこんな雑魚にも負けちゃったんだ。すると何だか力が抜ける。腕が……落ちてい――

「セラちゃん！　頑張りましょう！　私も手伝うから！！」

――かない。私の腕はもう二つの更に白く華奢な腕で支えられてます。そして優しくて心に染み入るような声。元気をくれる言葉。

そこには銀髪を靡かせたシルク様が優しく微笑んでました。私は最近良く思ってたんだよね。この笑顔……反則だって。

なんだかずるいよ……私女のに、それでも保護欲掻き立てられちゃうよ！　守ってあげなきゃ……それに私がここを預かってる。

私がアギト様に言ったんだ。

【任せてください！】

と。それなのに私が真っ先に諦めたら周りのみんなの頑張りまでも無駄にしてしまう。エルフだけじゃない彼らが、ここまで協力してくれてる。それだけで凄い事なのに、この国の私が誰よりも頑張らなくてどうするのよ！！

「やって……やります！！」

支えはシルク様に任せて私は集中モードに入る。今まで無駄に流れてた力の流れをコントロールして、微妙な聖典同士のズレも修正。

効率よく……そして効果的にを目指します。聖典との繋がりが何だか今までで最高の物に成っていく感覚がある。

（行ける！！）

私はそう思い、瞳を開けて前を見据えます。

「セラちゃん？」

「やりましょうシルク様！！」

「はい！」

私たちは強引に一歩を踏みしめた。そして力強く指を突き出す。真っ直ぐに胸を張って！

「「行けええええええええええええ！！」」

二つの声がシンクロして響きます。そして修正が加えられた聖典八機は一糸乱れぬ動きに違う光が加わってました。それは後光の様な黄色い光。黄金と言った方がいいかも。

そんな光を聖典が出してるから、自然と収束砲も色を変えていきます。だけど変わったのは色だけじゃない。手前で膨れ上がった収束砲はさっきよりも姿を小さくして親衛隊に向かいます。

これが調整の結果。更に効率よく収束した光の形。これが受け止められた、更に厄介な事をしなくちゃ行けない。でも私はやれると確信してます！

腕を掲げたまま黄金に変わった光を受け止めようとしてる親衛隊。そしとうとう白い部分が終わり全てが金に染まったその瞬間・・収束砲は弾かれる事無く一気に親衛隊の体を覆い尽くします。

「ぬあああああああああああああ！！」

そんな声と共に一気に減っていくＨＰ残量。流石にこの光景に周りの戦いも止まってます。そして巨大な黄金の光はある程度の所で親衛隊の所で大きく大爆発を起こしました。巻き起こった粉塵と粉煙で一気に視界が無くなります。

「やったのかな？」
「手応えはありましたよ」
そう確かに手応えは感じた。だけど直前でのこの爆発でやれたのかはわからない。私たちは必死にこの煙の先に目を凝らします。
そして薄れていく煙の先に影が見えました。立ったままに見えるその影に私は思わず
「そんな……」
と言ってしまう。だって……これで倒せ無いだなんて。だけどその時、未だに私の手を繋いでくれてるシルク様が言いました。
「セラちゃん……結論付けるのはまだ早いかも」
「え？」
シルク様のそんな言葉に、私は再び前方に目を凝らします。すると煙も完全に晴れて来て確かに確認できる立ち姿。でも……確かにそこに生気は感じられない。
そして唐突にその親衛隊は支えが無くなった人形の様に前の方へおもいっきり倒れたんです。ＨＰを確認すると確かにゼロ。そして目に見えて奴の色があせていきます。
それは私たちの小さな勝利を意味してました。でも自分たちの中では決して小さくない勝利。
「良かった……」
私のそんな言葉がかき消される位の雄叫びが周りから沸き立ちます。

「「うおおおおおおおおおおおお！！」」

そしてそれぞれが親衛隊に一斉に再び切りかかった。それは猛攻と呼べる代物です。私のこの小さな勝利がきっかけでみんなが奴らを「倒せる」そう思ってくれたみたい。

だけど油断は禁物……数は依然として向こうが多いんだし、誰かがサボって勝てる相手じゃない。むしろ今、更に頑張らないと行けない瞬間だ。

だから私は、小さな勝利を早々に心の片隅に追いやって聖典を再び空へ放つ。だけど思い出すと、この頭痛がぶり返してくるみたい。

「っつうう……」

「大丈夫？　セラちゃん少し休んだ方が良いですよ。頭の中までは私でも回復出来ないですから」

「大丈夫です。今休む訳には行きません。折角ここに来て風が私達側に吹き始めてる。地の強さでも、数でも上回れてる私達が勝つには、ここで踏ん張るしかありません。

だから大丈夫！」

この炎に包まれつつある小さな村。だけどね、跡形も無くなるだなんてやっぱりイヤだよ。そして私達が磨いてきたスキルとかはこういう時の為のもの。

それに私が相手してるのはやっぱり雑魚クラス何だもん。アギト様がガイエンで、スオウも得体の知れない方を追ってった。それに比べてこっちなんて、数は多いけど加護を受けただけのプレイヤーの集まり。

そんなのに私だけが屈してる訳には行かないのよ。

激しさを増すそれぞれの戦いで、私の聖典は縦横無尽に戦場を駆

け抜ける。親衛隊どものペースを崩して、味方の攻撃の隙を作ってあげれる。
奴らの視界の狭さ……それを利用して視界の外から攻撃できる聖典はとっても効果的にサポート出来る。

「もう、セラちゃんも無茶しますよね。だけど、しょうがないですね。わかりました。みんなの背中は私が守るから、前だけ見て行ってきなさい！」

そんなシルク様の言葉に胸がトンと押されたようだった。大丈夫、ある程度の無茶なら直ぐにでもシルク様が回復してくれる。
それが分かってるからこそみんなもおもいっきりやってるんだしね。私は華奢なその手を握り返して言います。

「頼ます！」
「はい」

私は手を離すと前へ向かいます。聖典だけでもやっぱり足りないから、頭だけじゃなく体も動かさないと。

私達の勢いは凄まじく続いた。もう頭の痛さなんて忘れる位に暴れ回った。本当に勢いってのは大事。心が勝ればＬＲＯは不足分をちゃんと補ってくれる。
増える屍の数は圧倒的に親衛隊が多い。次々に・・とは行かないけど、確実に私達は奴らの数を減らしていく。まあ向こうにもヒーラーは居るけど、詠唱は全て聖典が空から妨害した。聖典様様！

「行ける！」
「行けますね！」

そして誰もが同じように思ってた筈です。この勢いを途絶えさせない為に、みんなが頑張ってました。けれどそんな時です。

【私ももう一度、頑張りますね】

そんな声がどこかから聞こえた気がしました。そしてそれはどうやら私だけじゃない。周りのエルフ達は親衛隊も含めて動きが止まってます。

でもそれはどうやらエルフにだけ聞こえた声みたい。そして私達はその声の主を知っています。アレは……きっとアイリです。

この心を繋ぐ様な温もりはきっとそう。何かで今、私達は繋がってる。そしてそれはもしかしたら親衛隊にも伝わってるのかも。そんな淡い期待を込めて今なら、戦わずにどうにか出来ると思った。

でも次の瞬間そんな期待は砕かれます。唐突に寸断される炎の壁。そこから現れた一体の化け物によって。

「今の声はアイリ……ここに来るか？　それも良い。なら私も今度こそ……な」

そんな事をブツブツ呟いて現れたのは下半身が球状に成って浮いているガイエン……そうガイエンだけ。それはつまり一つの事実を示してます。

「セラ、そんな顔せずとも分かるだろう？　おまえ達の希望も、アイリの願いも摘み終わった。さあ、アルテミナスの新たな創世歴をここから始めよう！」

その瞬間私達に降り掛かった重圧はとても重く、まさに今のガイ

エンは絶望の象徴。このタゼホの戦いはまだまだ終わらない。

暖かさと絶望の象徴（後書き）

第百十話です。

この話は結構アイリの話と時間軸は一緒でしたね。だけど最後の方からはアイリが駆けだした先になるのかな。いや、それはこれからかな。とうとうガイエンも再登場して、セラ達はどうなるのか！？

てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

成せない選択（前書き）

出くわした敵を倒した俺達。けれどそれはほんの一握りでしかなかった。俺達はどうやらレイアードの連中のせいで随分と敵側に誘い込まれてたらしい。そう、俺達が目指してた場所は本隊は本隊でも、よりにもよって敵の本隊だったんだ。

そこは覆せない数の差……一騎当千なんてまだまだ俺には程遠い力なんだ。

成せない選択

「ふう～何とかやれましたね。流石アギト様です！　大半を一人で倒してしまうんですから！」
「はは、まあこれ位の相手ならな」
「おお～一生付いて行きます！」

倒れてるウンディーネと人の中でそんな会話をしてる。誉められてつい、調子に乗った発言してしまったな。だけど確かに、俺が敵の大半を倒せた。
ゼブラ達も決して弱い訳じゃない筈だけど……最近は特にこの力に慣れて来た感があるんだよな。多分そのおかげで、力を今までよりも効率よく使えてる気がする。
天候を味方に付けてたウンディーネもそれほどじゃなかったな。でもおかげで自分達がどこに居るのかさえよく分からなくなった。

「所で、どうしましょうかアギト様。完全に迷子ですよ」
「それを言うなよ。それを」

さっきからそればっかり考えてるんだからさ。ここまで雨が強くなければ風景とかで本隊があった方向位なら何となく分かるんだけど……今の状況じゃそれは無理。
てか何だかイヤな感じなんだよな。続けざまに敵と三回も出会した。これってまさか、敵本隊の方へ近づいてるってこと何じゃないか？
一回だけなら、運悪く向こうの捜索隊と出会したーーって感じで済むが、三回でそれもあんな近い場所。それって捜索って感じより……まるで周辺警備？　警戒？　みたいな。

「――ん？」
「どうしたんですかアギト様？」
「いや……何か雨の向こう側が動いてるような……」

俺のその言葉でみんなが土砂降りの中目を凝らす。だけどよく分からない。常に雨が目に入ってくるのもウザいからな。

「気のせいか？」
「そうですよ。これ以上ビビらせないでください。アギト様は良くても自分達はきついですよ。あんな不利な状況の戦闘は」

周りのみんなもうんうん頷く。別に俺だって確実に勝てるって踏んで立ち向かった訳じゃないんだけどな。その証拠に最初は逃げてた訳だし。
だけどいい加減しつこかったんだよなこいつら。この悪い視界の中、まるで鮮明に俺達が見えてでも居るような……

（いや、見えていたとしたら？）

その考えに至った瞬間、背筋に寒気が降ってきた。そしていきなり、ただの土砂降りだった雨が鋭い水の槍となって俺達に降り注いだ。

「「「づあああああ！！」」」

それはかわすなんて不可能な量。雨をかわせないのと同様で、しかも完全なる不意打ち。辺りに響く断末魔の叫び声が頭に刻まれる様だった。
水の槍がいつの間にか、再びただの雨に変わった時、その場に立

てていたのは俺だけ……俺は一番近くで倒れてるゼブラに駆け寄った。

「おい、大丈夫か！？」

「はは……流石アギト様。不意打ち何て意味ないですね」

「そんな事言ってる場合かよ」

俺の事じゃなく、自分の事を考えろよな。膝を付いて立ち上がろうとするゼブラ。ＨＰは半分位減ってるな。他のみんなも取り合えずやられた奴はいない様だ。

必死に立ち上がろうとしてる。でもそれより早く立ち上がる奴らが俺達の直ぐ側にいた。それは何と、倒したはずの人とウンディーネ。奴らには降り注いでるこの光……

「蘇生魔法か……くっそ」

こっちはダメージをおって、倒したはずの敵が蘇る。それって最悪なパターンだろ。それにこれらの事は一体どこから？

すると復活した敵が俺達に何もせずに前へと歩いていく。それを目で追って気づいた。

「なんてこった……やっぱり動いてたのか。でもそれがわかりづらかったのは少数じゃ無かったから。雨の向こう側の風景に成ってたから……つまりは周りを多い尽くすだけの人数」

「まさか！？　アギト様それって……」

ゼブラは俺の言いたいことを理解してくれた様だ。そして勿論、周りのみんなも。

「それだけの大人数……本隊何だろうな。俺達はどうやら敵の本隊

に向かってたらしいぞ」

笑えない冗談だ。まさに今目の前に無数の敵が居る事実から目を逸らしたい程に。だけどそうは問屋が卸さないものだよな。

次第に雨の向こうに見えていた広い影が姿を現す。それはやっぱり想像通り、数え切れない程の敵が既に俺達を取り囲んでる状態だった。

こっちは気付かなかったのに、向こうは気付いてた。それってやっぱり、ウンディーネにはこの雨の中でも関係無い視界が確保されてるって事なのか？

「案外、間抜けなのだな。エルフ最強の騎士と言うのも」

「ああ？　誰が間抜けだって？」

進み出てきたのは多分偉いんであろうウンディーネだ。ウンディーネは薄着でヒラヒラした物を靡かせてる奴が多いって聞いたが、こいつはちょっと違うな。

なんだかウンディーネの中でも戦士って感じ？　余り肌を露出してないし。その分、堅そうな防具で体を覆ってる。女なのに残念な奴だ。

そんな奴に俺は指さされる。

「君だよ君。君だろ？　アギトってのは？」

ちょっと小馬鹿にされてる言い方だな。すると唐突に勢いよくゼブラが声を上げた。

「そうだよ！　この方こそ、アイリ様から選ばれし最初の騎士！　アギト様だ！！　貴様の様なウンディーネ風情が気安く指させる方

じゃないんだよ！　後呼び捨てもな！」

何か口調変わってないかゼブラの奴？　てかそこまで言わなくていいって言うか……何か否定したい位だったんだけどな。

言われる方の身にも成ってほしい。そんなに俺って偉かったっけって自分で思う。

「ふ～ん、それは済まない。一人にでも尊敬されてるのならそれだけの人物なのだろう。まあもしも……立場を利用して、そう洗脳してるのなら傑作だがね」

上品そうに喋る癖に言うことは何だかムカつくな。ウンディーネへの印象が一気に急降下だ。俺の中のウンディーネのイメージがこいつで固定されそうな程に。

そして今回もやっぱりゼブラの奴がプルプル震えて再び口を開けかける。でも今回は俺がそれを止めて、前へ出た。なんせ奴のあの言葉と、あの言いぐさは少しばかり感に障る。

「はっ、なら確かめてみるか？　俺がそんな小さい事をする奴かどうかってな？」

「いいとも、面白そうだ。今度食らえば君以外はきっと助からない。見殺しにしたくないなら守ってみたまえ」

そう言って奴は腕を空へと掲げる。すると周りに控えてるウンディーネ達も同様の格好に。奴のあの言葉の意味……そしてあの行動を・・まさか！？

上を見ると雨じゃな鋭利な切っ先が落ちてきてるのが見えた。さっきと同じ魔法。つまりあの攻撃はこいつらが仕掛けた物って事だ。

そして奴が言ったように、また同じだけＨＰが削られるとしたら、

今度こそ本当に生きてるのは俺だけに成るかもしれない。そんなことさせてたまるかよ！！
俺は大剣を握りしめて声を張る。
「うらあああああ！！」
その声に併せて腕を斜め上に一線。その瞬間、雨の槍は何かにぶつかったように弾け飛ぶ。弾けた槍はただの雨。ダメージ何か与える事は出来ない。これでみんなは無傷。この間に少しでも回復魔法を行き渡らせないとな。
俺は大剣をウンディーネの奴に向けて言ってやる。
「どうだ？　守りきって見せたぞ」
するとウンディーネはクスクス何だか笑ってる。そして俺に向かって言い放った。
「守りきった？　たった一度防いだだけで随分な言い草だな。ほら、油断してると危ないぞ」
その瞬間シュッと何かが頬を掠る感触があった。視線を地面に向けるとそこには水の槍が刺さっていて、そして流れて消えていった。
「ぐあ！」「きゃあ！」
そんな声が後方から再び聞こえる。俺はまた、大剣を宙に向かって振った。弾ける水の槍……だけどその先からまだまだ大量に槍は降り注ぐ。
まるでこの雨の量だけ槍があるみたいに。

「――っち……くっそ！」

弾けども弾けども現れる水の槍。剣が一本じゃ足りない。あまりの量に押され気味だ。水もこれだけ集まると相当な重さだし、それを何回も相殺するのはきつい。

だけどまたあんな風に成るのはイヤだ。俺以外のみんなが地面に倒れ伏してるのは、いやな夢でも見てる感じだった。

「もうそろそろ限界かな？　このままじゃ全員串刺しに成ってしまうよ」

そんなウンディーネの声に闘志が何か燃え上がる。いや、やっぱりこいつの口調が俺の勘に障るんだと思う。そうだ思い出した。

このウンディーネの丁寧なのにムカつく喋り方って、最初の頃のガイエンを彷彿とさせるのか。だからこんなにムカつくんだな。

なら尚更こんな奴に……アイツに似てるこんなウンディーネに負けられない！！

俺は盾の方も剣と同じように振り出す。これで手数は実質二倍だ！！

「うらあああああああああああ！！」

「なっ！？　盾まで使うとは……はは、その必死さ加減は嫌いじゃないよ」

こんな奴に好かれたくも無いが今はそれを言える状況じゃない。降り注ぐ雨の槍は一瞬でも気を抜けば俺達全員に降り注ぐ事確実だからだ。

でも救いはこの雨の槍が脆いって事だった。雨だけに風圧か何かで弾け飛ぶし、弾け飛んだ雨粒にぶつかっただけで形を崩す。

でなければ流石に剣と盾、両方使ってるからと言ってさばける量

じゃ絶対にないんだ。これが普通に矢とかだったから何人かは確実に串刺しに成ってるだろう。

少しづつ確実に手応えが変わってる。少しづつ軽く成ってきてるような……押し返せてる？　そう思った時、雨の槍を弾いた俺のスキルがそのまま雷雲へと飲み込まれていった。

するとそこからイヤな光がバチバチ言ってる。そして視界を一瞬で奪う閃光が世界を白に変えた。ズガアアアン！！　と直ぐ横でそんな音と衝撃が肌に伝わる。

考えたくない……考えたくないが……この雨の中でも分かる焦げ臭い匂いってまさか？　視界が戻ると俺の数センチ横に穴が空いてた。

まさしく雷が落ちたようなそんな穴がな。危なすぎる。もしかしたらこの雷でやられてたかも知れないと思うと、間抜け過ぎるだろ。

でも絶対にさっきまでの雨の槍より、この一発の方が恐怖感が凄いんだ。心臓の高鳴りがハンパない。

「あっぶねえ！」

「まさか自身に向かって雷を落とすとはね。恐れ入ったよ。洗脳と言ったのは取り消そう。君には人を引きつける何かがありそうだ」

……実際そんな事、既にどうでも良くなってた。よく考えたらピンチなのに変わりないし。とにかく雷は超恐ろしいって事だ。

てか人を引き付ける何か……ね。俺は実際、引き付けられる側の人間だと思ってるんだが。どっちかって言うと周りがそのタイプなんだよな。

だから俺は自然と集まった中の一人って感じ。アイリともそうだし、リアルの友達二人ともそうだ。だからもしもその何かがあるとしたら、それは与えられたこの力何じゃないかって思うな。

「その通り！　アギト様をなめるなよ！　そして敬え！」
「うわ……あのちょ……やめて貰えるかそれ」

自分が一人で己の考察をしてる時に何言ってくれてんだよこいつは。それに敵はどう考えても敬わないだろ。俺の結論はゼブラが言う敬う側何だよ。
おまえ達と一緒。するとウンディーネ十人の混成連合である敵側から何だか笑いが漏れてる。そして例のウンディーネもこの雨の中、それを忘れる位に爽快に笑い声をあげた。

「あはははははは！！　いいね、君達。この状況でそこまで言えるだなんて面白い。最高だよ」

う～ん、これは誉められてるのか？　どちらかと言うとバカにされてる気がするんだけど……どうなんだろう。雨に濡れてる鮮やかなサファイヤブルーの髪を垂らして大爆笑。
これはやっぱりバカにされてるな。だけどこの人数で本隊とやりあう何て出来るわけがない。どうにかして退路か逃走ルートを確保しなければ、俺達はここで全滅だ。

俺は気付かれない様に、周りに目を這わす。だけどやっぱり雨が邪魔で、表面部分しか把握できないんだよな。一番敵の少ない場所を突破したいところだけど、見える所しか見えないんだ。
言い方がおかしいかこれじゃあ？　見えるところが極端に少なくて、前列部分しか状況が分からない。だから後ろにどれだけの敵が居るのかが把握できないんだ。

まあ本隊だけにどの方向もびっちり埋まってるとも考えられるんだけど……それはもう最悪だ。そうなったら幾らナイト・オブ・ウ

ォーカーでも突破出来るかは分からない。
そもそもみすみす逃がす気なんて無いんだろうし・・さっきからあのウンディーネ、笑いながらもしっかり警戒してやがる。
やり手の様な気がするし、隙なんて作ってるわけないか。俺はちょっとした交渉をしてみることに。

「なあ、そんな愉快な俺達に免じて帰してくれない？　沢山笑いあってこの後剣を交えるのも無粋だろ？」
「いや……私は寧ろ君に興味が出てきたよアギト様。それに、それとこれとは話が別だ」

だろうと思った。言ってみただけさ。そしてウンディーネの奴は腰に掛けて居た何かを取って俺に向ける。

「生憎、これは戦争で国と国の威信を懸けた戦い。個人の意志で降りる事なんて叶わないだろ？」
「まあ、確かにな」

この戦争、参加は基本自由だけどさ。参加した以上は俺たち全員、それぞれの国を背負ってる訳だ。分かりやすく言えば、参加者全員がその国の代表みたいな物。
だからこそ俺たちは既に個じゃなく隊であって、それが勝つために必要な事だった。だから隊である以上勝手は出来ない……まあ俺には結構その勝手が許されてるけどな。

「だから敵は、倒せる時に倒しておく事が重要。それが絶対に揺るがぬ勝利の時なら、逃す手なんてない。そしてそれが敵側の切り札なら尚の事。
退路何てありはしない。だから全力で見せてほしい物だな。最強の騎士の力と言う物を」

その言葉の中で、俺に向けられてた奴が手に持った何か。それに水が集まって行ってた。そして出来上がったのは水の剣。どうやら、奴が持ってたのは剣の柄の部分だけみたいだ。

何か前にアイリが見せてくれた剣と武器のユニゾンした形に似てるけど、あれは武器そのものを魔法側に変えてたから違うのか。

奴が手にしてるのは、元からその為の武器って感じだしな。そこに水を集めて凝縮する使用に成ってる柄って事か。

これも何ともウンディーネらしい武器だ。そしてこいつらしいと何となく思ってしまう言い分。確かにみすみす本隊にまで迷い込んだバカを逃す手はない。

これが逆の立場なら「飛んで火にいる夏の虫だな」って俺は言うだろう。俺たちは今戦争してる、それもゲームと冠付いた戦争だ。

容赦なんていらないだろ。そこら辺は誰もが分かってること。だけどある意味、退路なんて無いとはっきり言われたら逆に作りたく成るじゃんか。

挑発なのは分かってる。けれどどの道、ここを切り抜けるにはそれしかない。だけどナイト・オブ・ウォーカーを使ったとしても、この戦力差はどうにも出来ないかも知れない……というか出来ない確率の方が大きいだろう。

「おまえ達、やっぱ俺何かに付いてくるかこうなるんだよ。今度ばかりはお前達を守る余裕は無さそうだ」

俺は周りを囲む人とウンディーネを見つめながらそうぼやいた。まあ愚痴って言ってもいい。だってこいつらがいなけれ、こんな思いをしなくても良かったんだ。

俺一人なら、全部俺だけで済んだ物なのにさ。余計な気を持つか

ら、悪いと思う事になる。
だけどそんな俺に対して、返ってきた言葉は明るかった。
「そんなの入りませんよアギト様。俺たちは貴方に守られる為にこの部隊を志願したんじゃありません。貴方と共に戦って、貴方の役に立ちたかったんですよ。
だから守ってくれなくて結構です。寧ろ、俺たち全員を犠牲にしてもアギト様が逃げれる退路を造って見せます！」
「お前等……」
全員の顔を見ると何だか満足そうに頷きやがる。そういうもんなのか？　って俺は思うけど、こいつらのこの雰囲気に言葉は別にいらなそうだった。
それに結局、俺は誰一人欠かす事何てしたくないんだし、俺を助けると思うことでこいつらがいつもよりも力を発揮できるならそれでいいだろう。だからこれだけ……
「頼むぞ！」
「「「はい！！」」」
そして無謀な戦いに俺たちは身を投じる。これしかここを脱する方法は無くて、手段もこれだけならやるしかない。
「アルテミナスの最強の騎士の力、見せてやるよ！！　後悔しても遅いぞうらあああああ！！！」
特大に膨れ上がった剣で挨拶代わりの一発を敵陣へと舞散らせる。その剣に弾かれて奴らが飛ぶ飛ぶ。だけどその時、俺の剣が誰かに受け止められた。
そしてそれは言うまでも無く、あのウンディーネ。奴の水の剣が、

俺の剣を串刺しにしてる。どれだけの切れ味誇ってるんだと言いたい所だ。

「後悔か……私にそれを感じさせる事が出来るのならやってみるんだな」

そんな奴の言葉と共に、俺の剣に亀裂が入っていく。だけど

「はっ、このまま俺の剣を砕こうとか思ってるんだろうがな。この力と共に現れたその剣は、んな柔じゃないぜ！」

その瞬間言葉とは裏腹に俺の剣は砕け散る。でも俺は既に走り出してた。奴にむかってな。そして手にはちゃんと盾と一緒に大剣もある。

何故なら、砕けたのは剣の膨張した部分だけだから。本体であるこの大剣は無傷だ。そして一気に詰め寄って大検を今度こそ奴に振り卸す。

だけどクルリと回って交わされた。けどまだ追撃してる盾がある。二段構えの攻撃。ここでようやく、俺の攻撃が奴の体を捕らえた。

「ぐっ！？」

だけど奴もただでは吹き飛ばない。水で出来てるから、奴は吹き飛びながら、その刀身だけを俺めがけて分離しやがった。そしてそんな刀身は勢い良く俺に向かって肩口を僅かに掠っていった。

「ふふふ、流石だ。最強の騎士を名乗るだけの事はある」

「そっちも、俺を挑発するだけの実力は持ってそうだな」

俺達は再びぶつかり合う。奴の空っぽだった筈の柄には再び水の刀身が出来ていた。やっかいだな。それに俺は決してこいつだけを相手してればいいだけじゃない。
周りから次々迫ってくる奴らだって無視は出来ないんだ。数の圧倒的差は、そう時間が掛からずに如実に戦闘に現れて来る。
それは幾ら攻撃を当てても倒せる敵が居なかったり、それどころか少しづつ反撃の芽さえ無くなっていく。元々針の穴を通すように凌いでた戦闘。
だけど今や、その僅かな穴さえも無数の人とウンディーネに寄って埋まろうとしてる。

「ちっくしょおおおお！！」

ズガアアアンと雨と地面を吹き飛ばす程の攻撃で何とかその穴を死守できてるのが今や俺だけ。ゼブラ達は防戦一方だ。
けれどこんな終わりの無い戦いに俺も限界を感じてた。今やあのウンディーネ所じゃない。

「力が！　もっと力があれば！！」

そう声にだした所で何かが変わる訳じゃない。その時、周りで魔法の光が見えた。するとゼブラ達が水の膜に包まれて敵側に奪われていく。そして俺にもその膜は張られた。

「何するんだてめえら！　くっそ……こんなも！　がっはっ！？」

いきなり肺が圧迫されるような変な感じ。空気が漏れて、それにこの中じゃ息も出来ない。つまりは俺達は囚われたって事。そんな中、人混みの中から一人の人間が現れた。そしてそいつはこう言うんだ。

「今から言うことを天秤に掛けてみろ。部下を助ける為に仲間を襲うか、部下を見捨てて自身も死ぬか、好きな方を選ばせてやる。いっとくがな、水圧の変化は人体にはきついらしいぞ」

それはここでも拷問が出来るとでも言いたいのか？　それなら捕らえる価値はあるのか。止まない雨の中、俺に突きつけられた選択はどちらも最悪だ。

成せない選択（後書き）

第百十一話です。
追い詰められていくアギト君。きっとここから辛い事が続いていく筈です。それによって去ってしまうアギトだけど、それでもＬＲＯを止めなかったから再び向かい合う時が来たのでしょう。
だからアギトが向き合って今度こそ乗り越えなくちゃいけない者を知ってほしいんです。その先にきっと誇れる未来がある筈だから。
次回は日曜日に上げます。ではそれまでさようなら。

希望の屍（前書き）

黒い体……白い髪……そして赤い瞳が私を捉えてる。それは絶望の色。失望の始まり？　けれどシルク様はそんな私達を切り裂く言葉を言ってくれた。それが伝わったのは私だけだったけど……それでも私はもう一度前を見据える。

まだ終わってなんてない。あそこに横たわる屍は僅かな希望を刻んでると気付いたから。

希望の屍

高く聳えてた炎の壁が夜空へと散っていく。虚しく感じる熱量と共に、私達の中の何かが黒い物で覆われそう。折角乗ってきた勢いとかが、プツンと切れそうなのが空気で分かる。

「ガイエン……」

「セラ、お前は付く側を間違えたな。もう少し、賢い女だと思ってたがそれは間違いか？　今ならお前の貴重なその能力を買って生かしてやる事も出来る。

どうする？」

ガイエンからの思わぬ言葉。そんな言葉のせいで私にまで視線が集まるじゃない。別に注目されるのは嫌いじゃないけど、こういう不安を乗せた様な視線は重いのよ。

私の好み的には羨望ね――って、そんな事考えてる場合じゃない。意外だけど、ガイエンはどうやら私の事を買ってくれてたみたい。

そして今、仲間に誘ってる。賢い女か……確かに私は自分で賢い女と思ってる。でもね、その賢さを人間関係でなんか使わないのが信条よ！

「お生憎様。私は確かに賢いけどね、付き合う人達はフィーリングで選ぶようにしてるの。だって計算で人付き合いなんて疲れるだけでしょ？　そんなのリアルだけで十分なの。

私はここで……今ここで出会った人達に満足してるわ。私のここでの優先度は楽しさが一番なんだから、それが感じれない貴方とは付き合えないわね。ごめんなさい」

「セラちゃん！」

私の言葉を聞いて何故かシルク様が嬉しそうに抱きついてきた。う～ん、この人は何だか子犬みたいで可愛いな。まあ実際、ガイエンの手を払いのけた事で大ピンチな訳でそんな事考えてる場合でも無いんだけど……。

「ふ、お前はそう言うと思ってたよセラ。けどそれじゃ困るんだ。アギトも居なくなってお前も居なくなったらアイリが寂しがる。

お前の事は嫌いだが、そこだけは頼りにしてる」

「アンタ……それが人に物を頼む態度なわけ？　てか、私を欲しい理由全然違うじゃん！」

最初は貴重な能力とか言ってなかったっけ？　それって聖典の事じゃ無いの？　だけどガイエンはその真っ黒な肌に真っ白に伸びた髪を翻して言ってのけた。

「何の事だ？　お前の貴重な能力はアイリを楽しませる事だろう？

他に何がある？　それとこれはお願いじゃない。

お前が仕えるアルテミナスの新たな王からの命令だ」

「私は……エルフの国に仕えたのであって、化け物の国に仕えた覚えは無いわよ」

今のガイエンをエルフとはだって言えないと思う。どう考えてもモンスターに近い姿してる。こいつを王にしてへりくだるなんて絶対に無理と断言出来るわ。

それに元から私は一人だけと決めてるもの。私はアイリだから側に居てあげようと思った。それだけ。それだけで軍に居たの。

まあアギト様の事もあったけど。それはもう昔の事。今は二人の

幸せ願ってます。だからガイエンを王だなんて認められる訳がない。
それに命令されるのとか嫌いだし。ガイエンは何だか自身の体を見直してる。そんな事をしながら口を開くんだ。
「化け物か……この姿の高尚さがわからんとはな。私はエルフより上の存在になったんだ。上の存在が下の存在を統べる事は当然の摂理。
エルフが私に統べられるのは逃れられんぞ」
「それが高尚な姿ですって？　ガイエン、アンタちゃんと鏡見た方が良いわよ」

そんな私の言葉に後ろで抱きついてるシルク様も首を縦に振っている。すると今度は横から、声が聞こえてきた。
「無駄ですよガイエン様。こいつらには我々の姿を理解するなんて出来ませんよ。何故なら貴方は既に存在が違うのですから。
きっとそれは神を見て我々が信じれないのと同じ事。存在の違いを下の物達は例えどこかで交わっても気づきもしない。
そんな所でしょう」
「まあ、そうかも知れないな。ならやはりこうするしか無いか？
存在の違い……そして上下や優劣をてっとり早く示すにはな」

ガイエンはそう言って左腕を斜め前へ振った。異様に細くて長い腕に見えたが、別にそれが飛んだ訳じゃない。だけどその瞬間、その腕が振られた方向に居た仲間が吹っ飛びました。
そう、まるで見えない何かにぶつかった様に。
「みんな！！　シルク様！」
「うん、ピク行くよ！」

私は吹き飛んだ仲間の方を見て叫びます。そしてその意図に直ぐに気づいてくれたシルク様はピクを引き連れてそちらに。
いつの間にか親衛隊はガイエンの側に集結してたから、後ろにはもういない。だから安心って訳でも無いけど、取り合えずシルク様を阻む敵は居ません。
今の状況で誰か一人でも欠けたらアウトだと思う。だからこそ、シルク様とピクには頑張って貰わないといけない。

だけど今の攻撃で他の当たらなかったみんなが明らかに真っ青な顔してる。実際私だって血の気が引きそうな位。けれどそれは許されない。
自分を気丈に保って私は一人、ガイエン達に向かいます。

「カーテナ……存在が上に行った割には、私達と同じ次元の武器を使うんだ。未だに」

それは精一杯の強がりでした。だってカーテナだよ。この国の力を無尽蔵に供給するバランス崩し。それに今じゃそのバランスが崩れまくってる様に見える。
何であんな所にカーテナが？　って感じだもん。奴の球状になった下半身のど真ん中にそれはある。
もうカーテナを振ってもいない。持ってもいない。いろんなバランス崩れてる。しかも隙を付いてカーテナを手から放すなんて事もあれじゃ出来ない。

だって体の一部に成ってるんだから。今のカーテナに弱点は無い……それはガイエンもそうだと言うこと。この国内でカーテナに持つ者に勝つなんて事は不可能だと言われてる。
アギト様には簡単に投げれたんだけど、自分がいざその立場に成ってやらなきゃいけないと成ると、勝機が見えない。考えれば考え

るほどに。

「強がってる割には顔色が良くないぞセラ。賢いお前なら分かってるだろう。私に勝つことは出来ないと。潔く降参してくれると助かるんだがな。

国民はなるべく減らしたくはない。それが例え私を非難する者だとしてもな」

そのガイエンの言葉はちょっと意外。だから私はそこを突いて会話を伸ばす。こんな一秒一秒を考えて話すの何て初めての事だ。

言葉は慎重に選ばなきゃね。さっきの様に気紛れでカーテナを使われちゃ堪らない。だからってお世辞はＮＧ。ガイエンは疑り深い性格してるから、あくまで自然な私でいないと直ぐに意図に気づかれちゃう可能性がある。

このまま行くと最終的には戦闘は逃れられないだろうけど、せめて一秒でも長く生きる努力を。だってまだ全部が終わったなんて私には思えない。

「あらら、気遣い痛みいるわ。でもそれが邪魔者を片っ端から排除してきガイエンの言葉？　意外すぎて信じる気にも成れないわ。アイリの周りを全部自分の息の掛かった者で埋め尽くしてがんじがらめにしたくせに。

今更どういう風の吹き回し？」

「どういう風と言われてもな。別にただ、あの頃とはもう状況が違う。私は既にこの国を統べる資格と力を手に入れてるんだからな。

まあようは、お前達など潰す価値も無いと言うことだがな」

「確かにその通りですねガイエン様」

そしてこの場に響く黒い奴らの高笑い。流石にこれには私がピク

ピクしてしまう。こめかみに血管でも浮き上がってそうだ。
でも今飛び出してもガイエンの言うとおり、片手間であしらわれるだろう事は目に見えてる。だって私達はこの戦争の主役には成れない。

多分……そうなんだと思う。私はアギト様に成れないし、アイリにも成れない。結局はただのメイドだもん。でもそれでも主人は自分で選びます。
拒否だってさせて貰う。その為にもこの高笑いをぐっと堪えて我慢します。カーテナ……それに加護を受けた親衛隊共に一矢を食らわせられて、渡り合える何かを見つけるまでは。

「所で、さっきからアイリ様の事を随分気に掛けてる様だけど、その情けない腰を上げるには醜いと思うわよ。今の貴方の姿」

私は実は知ってた。ガイエンのアイリへの想い。だってずっと側に居たもん。そして二人を見てた。それで気づかないのがおかしい。
確かにガイエンはそう言う事を表に出しにくいタイプだけど、ずっと見てれば分かる変化ってのがある。それにその事を入れて考えれば、あの時の事も結構簡単かなって思うんだ。
そして私の言葉でガイエンは歪んだ独占欲を示しだした。

「ふん、何の話だ？　アレは私がカーテナを使うのに必要なだけだ。いわばただの物。だからこなくなって貰うのも困るから貴様が必要なだけだ。
カーテナの源泉としてこの国に一生繋げて置く存在。それがアイリなのだよ。どこにも逃がしはしない。私の物に拒否権など与えない」

何だか偉そうに言い切ったけど、つまりはアイリをどんな口実で

も手に入れたいってだけにしか私には聞こえない。
カーテナの源泉って事は王族で有ることに変わりはないんだろうし、そのアイリを所有するって、結婚でもする気何じゃないのかな？
ＬＲＯはそれが出来るから。そういうシステムがある。意中の相手同士なら、当人同士の合意の上で夫婦に成れる。
普通は財産が同じに成ったりするだけだけど、アイリの場合は違いそう。だってアイリと結婚するって事は王族に入れるって事に成りそうだし……そこら辺もガイエンはきと考えてる。
「もしもそれが出来たとしても……アイリ様の心は手に入らないと思うわよ。そんな事しなくて、まずは真っ直ぐにぶつかりなさいよ！！」
私はもっとここを掘り下げる事にした。だって実はずっとイライラしてたんだ。ガイエンの態度とかさ。アイリが気付かないのは実際仕方ないと思う。
アギト様の事しか見てないし……それが極端だから周りに目を向けない。てか自分に好意を寄せてる人が居るなんて発想がない。
アイリにとってアギト様以外はみんな『お友達』でしかなくてそれは揺るがないんだよ。だから実際ガイエンは可哀想でもあるけど……私が知る限りかなり前から三人は知り合いな訳だし、ガイエンが遅すぎる。
何か訳が有ったのかそこまでは知らないけど、ここまでしなきゃいけない位に差は開いてた？
「何訳の分からない事を言っている？　アレは道具だ。それ以上でも以下でもなくな。私の為に成れる幸運な道具。それで手には入った事になる」

「アンタ、それで本当に満足なの？　そんな事本当に思ってる？　ヤケクソにでも成ってるだけじゃないの？」
「お前！　ガイエン様になんて口の効き方だ！」

周りの親衛隊の剣が一斉に私に向く。だけどここで止められない。

「いい加減にしなさいよ！　アンタのその姿！　高尚なんて甚だしい。実は嫉妬に狂った哀れな心の姿じゃないの！？　それを映してるのなら納得してやるわよ！」
「ふざけるなよ貴様！　ＬＲＯで色恋なんて……そんな感情は偽物だ！　作られた世界で偽りに覆われた中でのそんな思いに何の意味がある？
ガイエン様はそれを一番よくわかってらっしゃる！」

そう言って親衛隊の奴らはガイエンに手を向ける。だけど何故か反応は無い。効いたかな？　少しくらい本音を抉れただろうか。
実際そこまで的外れじゃなかったと思うんだけど。

「ああ……そ……りだ」
「え？　ガイエン様？　何と？」
「ああ、その通りだ！」

聞き取れない位の微かな声の後の大声量。どれだけ力入れて肯定してるのよ。それにその言葉だけじゃどっちを認めてるかイマイチ分からないし。
だけど直ぐにそいつの言葉が続いてきた。

「その通り……この世界で感じる事など全て偽り。私が散々利用したアレに惚れた腫れたなどとよく言える。踏み台何だよ。
アレは私に踏まれる為に有る物なんだ！　それだけに決まってる

だろう！　それ以上その口でふざけた事を言うのなら、やはりお前も潰すことになるぞ。
アギトと同じようにな」

その言葉が出たとき、私はどう反応したのだろう。分からなかったけど多分、一瞬鼓動が大きく弾んだと思う。アギト……彼は本当に負けたの？
でもそれは、実はみたく無いことなのかも知れない。信じてると心で唱えながら、結果はもう目の前に有るんだもん。

私達の前にガイエンが居る……それが顕然たる事実。でもそれでもを願わずには居られなかった。けどその姿を見ちゃったら……私達の戦いは終わりそうな気がする。
辛うじて繋いでる糸が切れてしまいそうな気がする。それがとてつもなく怖い。だから今までなるべくガイエンの後ろは見ない様にしてた。
だけどそれも限界なのかも知れません。私はゆっくりと口を開きました。

「そう……言えば聞いてなかったけど、アギト様は本当に」
「死んださ。私がここに居るんだ。それしかあり得ないだろう？
それでも信じられないなら・・お前達にも絶望をと言うものを見せてやろう」

そう言ってガイエンは親衛隊を退かして、そして自身も僅かに体を横にします。するとそこには今まで見えなかった二つの体が転がってます。
一つは色が有ることが周りの火事の明かりで見える。でももう一つは……明らかに色が無くなってます。色褪せたその姿は見間違う筈もないあの人の確かな姿。

それはもう、見たくなかった確かな絶望。

「あ……アギト様！」

私は思わずそう叫びました。だけど反応が有るわけがない。私は展開してた聖典を全て自身の周りに集めました。それは勿論、目の前の敵を突破するためです。

「どうだ？　これで理解しただろう。お前達の戦いは既に終わってると言うことを」

その言葉、今の私達にはとても効くものだった。私はまだしも、周りのみんなにはとてもきつい。だってアギト様がガイエンを倒すことが勝利条件だったんだもん。

そしてそれによって加護を失った親衛隊を倒せる。そう思ってた。けれどそれは今や潰えたんだ。今私達の目の前にはカーテナという絶対的な力が君臨してる。

そしてその周りには加護を受けた親衛隊。希望も失ったこちら側に、それらを相手取るのはとても厳しい。私はみんなをどうやってもう一度奮い立たせればいいのか分からない。

「そんな……」「もうここまで……」

そんな言葉がちらほら聞こえて、俯いてる人が多い。握った武器が垂れ下がるようで、そこに戦気は感じれない。私だって……もうだめかも知れない。そんな考えが頭を巡る。でもその時、後方から威勢の良い声が私達を貫きました。

「まだです！！　まだ終わってなんか無い！　私達の希望はまだそ

こに有ります！！　そうでしょセラちゃん！」
「シルク様……」
後方から吹き飛ばされた数人を引き連れて横に並んだのはシルク様でした。そしてその瞳は私に何かを訴えてる。でも何言ってるの？　もうアギト様は……
「目を伏せてる場合じゃないよ。よく考えて、そこにまだアギトは居るんだよ」
その言葉で私は悟った。シルク様が何を言いたいのか。そしてアギト様がまだそこに居る意味。まだ僅かな希望がそこには繋がってる。
私は真っ直ぐに前を見据えて言い切ります。
「そういう事ですかシルク様。確かにそうなんだって理解しました！　まだ完全に私達は終わってなんか無い！！」
「そういう事です！　みなさんももう一度協力してください！　まだ諦めるには早すぎます！！」
私達二人は意気揚々と声を張り上げました。それでも多少の強がりは有るけど、下がった気分が持ち上がったから振り幅の影響でこういう感じ。
だけどそれでも周りのみんなの空気は余り変わりません。
「もう今更だよ……」「ここからどうしろっていうんだ」
そんな言葉が聞こえてくる。確かにそう思うのも無理はない。私だって実は自信有りません。

「この雰囲気じゃあそこまでいくなんて出来るかどうか」
「だけど、時間がないよ。戦闘不能の蘇生限界時間まで後二分弱。それを過ぎたらアギト君はゲートクリスタルで蘇生されちゃいます。そうなったら、ここまで戻るので時間切れです」

確かに、シルク様が言うとおり私達には時間が無い。シルク様が言ったことが私達の僅かな望みなんだから、後二分でアギト様の側までいかないと……本当の絶望が来ちゃいます。
より正確にはヒーラーを一人でも向こう側に通さないと行けない。アギト様を蘇生させなきゃいけないからね。だけどそれが今の状況じゃとても厳しい事。

カーテナと加護を受けた親衛隊を突破しなきゃ行けないんだから、それはとても一人じゃ無理です。シルク様は攻撃型じゃ無いし。
だからみんなの協力は必要なのに……このままじゃダメです。無理矢理でも意味なんてないし……どうにかしてさっきまでの勢いに持っていかないと、あの壁を突破なんて出来そうも有りません。

「まだなんてもう無い。何が今のお前たちに出来る？　もう諦めた方が身のためだ。何でここまでする必要がある？　無駄だ、何をしようとも」

ガイエンの言葉が私のこめかみにチクチクきます。何でここまでって……それは――

「無駄なんて……それは私がここを、この場所を好きだら！！　無くしたくない、変わってほしくない場所なのよ！！　それに私はこの全てを偽りだなんて思わない。
偽りにしたいのはアンタの心でしょ！！　ちゃんと向き合えば姿形も場所も関係無いわよ！！　通じ有って築いた関係は偽りじゃな

く大切なんだからね！！」

私はズバーンと言ってやります。そして同時に聖典を上空に一気に飛ばします。とにかく時間が無い。考えるより行動です。

てかそれしか今の私には出来そうに有りません。

「セラちゃん。　私もやるよ！」

「ダメです！　シルク様は下がっててください。シルク様には大切な役目が有るんですから！」

そうアギト様を生き返らせるって言う大切な役目。ただでさえヒーラーは少ないんだから、前線に出せる訳がない。

「無謀だな。一人で来るか？　まあそれもいいだろう。私の力を思い知らせてやろう。エルフを越えた私の力をな」

そう言ってガイエンが前へ進み出てきます。余裕たっぷりなその表情を崩せるか試してみましょう。

「いい加減、その人を見下した様な態度は改めさせてあげる！　聖典！！」

その叫びと共に、上空から無数の光がガイエンに降り注ぐ。こうなったらカーテナの特性を逆さに取るしかない。カーテナは視認出来ればどんなに離れてようとも攻撃できます。

だけど逆に言えば見えなかったら攻撃は届かない。聖典を夜の闇に紛らせてしまえばこっちの物です。反撃できずにこのまま攻撃の隙を潰してやります。

余裕なんて見せない。ガイエンのＨＰが無くなるその瞬間まで打ち続けてやる！

爆発は徐々に大きく、激しくなってく。私が一方的に攻撃をしてる筈なのに……なんだろうこの不安。凄く嫌な空気がさっきから周りにある。
それでも、そんな考えを振り払って攻撃を続けます。そんな時、ふと攻撃の中心で何かが動いた様な気がした。その瞬間です。
私の体はとてつもない衝撃で地面に叩きつけられました。

「づあああ！？」
「セラちゃん！！」

シルク様がすぐさま回復魔法の詠唱に入る。これは間違いなくカーテナの力。油断しないつもりだけどしてたみたい。戦闘開始直後から元の場所は移動するべきだった。
そしてそうなってしまっては続けられない攻撃。煙の中から黒い悪魔が姿を現します。そしてどうやら、その体には傷一つ有りません。

「聖典か。確かに厄介な力だが、今の私には蚊ほどもきかんな。お前の自慢の力、今この場でたたき落としてやる」

その瞬間奴の広がった闇から無数の陰が伸びていきます。そして夜空にいくつかの流星が地上に墜ちていく。

希望の屍（後書き）

第百十二話です。
　これはゲームだから出来る事だと思います。アギト達はそこを最大限に利用しなきゃなんです、だってスオウやセツリじゃ出来ないから、時々でもちゃんとゲームっぽさってのを出して行きたい所です。
　でもそこは緊迫感を失わずにモットーです！
　てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

無言の剣（前書き）

俺の前に突き付けられた選択はどっちも最悪な未来へ繋がってる。それを選ぶしかないだなんて……俺にはどうしていいのか分からない。こんな事に正しい答えがあるのかどうか。いや、きっと無いんだろう。

けれど選ばない訳にいかない。握られたのは仲間の命で……そこに痛みが有るのなら、俺に無視なんて出来ないんだ。どう転んでも最悪なら、俺はそれらをひっくり返す行動をするしかない。

無言の剣

「相変わらず貴方は性格が悪い」
「はっは、これ以上巻き返される訳には行かないだろう。それとも君達ウンディーネは何も得ずに海へ帰って良いのかい？
これは戦争だよ。しかもゲームでのね。罪悪感など必要ない。使える物は使って、貶めていく楽しさを味わいたいとは思わないかい？」

雷が猛々しく鳴り響き、豪雨が肌に刺さる中、俺は最悪な人種を目の当たりにしてる。人とウンディーネ連合の結構偉い奴何だろうけど……こいつガイエンよりねじ曲がってるな。
ゲームだから。そういう風に割り切るってか、切り捨てる様な考え方……俺はどうも気に入らない。まあこう言う奴らは結構居るけどな。

流石にここまであからさまじゃないが、犯罪者ギルドの奴らなんて大抵、ゲームだからやりたい放題だぜキャッホ～てな感じだ。
別に逮捕される訳じゃないし、ここはリアルとは違うって事が理性やモラルとかのたがを緩くしてるのかもしれない。

まあ勿論大抵はちゃんと常識的だけど、人間性がより強く出てる奴も居るって事だ。ウンディーネの人の方は、性格きつそうだけど真っ直ぐな感じだからな。

「思いませんね。私達は貴方の趣味に付き合う為に同盟を組んだ訳じゃない。別に主戦力の彼はここで倒すだけでいいではないか。
むざむざ逃がす事など無い。その上で奴らの本隊を叩けば良いだ

けの事だろう。今の我らは負けはしない」

凄い自信でウンディーネの人が言い切った。まあ確かに今のこの天候はウンディーネに完全有利を与えてる。それに何かこの人……武士って感じだ。

「相変わらず君は堅いな。それに私はただ趣味趣向で言った訳じゃないんだよ。向こう側の戦場での支え。初めての騎士である彼が乱心したとなれば随分な同様が広がると思わないかい？」

「だから我らはそんな動揺なんて無くても勝てると言ってる」

二人の間の空気は雨でも流され切れない位に何だかピリピリしてる。てかウンディーネの方が一方的に隣の奴を嫌ってる感じだな。人の方はそれを面白がってるのか、性格の悪さがにじみでてる。

「私はこの戦争に勝たなきゃいけない責任が有るんだよ。その為には一パーセントでも確率をあげる。そこに汚いもクソも関係なんてない。

それは私の信念でね」

「ふん、幾ら確率を計算しようと、絶対などこの世にはあり得ないぞ」

「それも重々承知してるさ」

そう言って浅い笑みを浮かべて肩を竦める動作をする性根が悪そうな人間。だけどウンディーネの人の方は引いたみたいだ。

てかあの浅い笑いの時には既にこっちに踏み出してきててきっと見てない。彼女は俺の前に立つとどこかへ合図を出した。すると俺を包んでた水泡が弾ける。

「けはっがほ！」

「何だ？　息は出来た筈なのに苦しかったか？」

……その言葉に両手両足を付いて空気を求めてた自分が情けなくなる。息できたのかよ。だけどそんなの実際、息が続かなくてもうダメだって思った時に初めて気付くもんだろ。

（恥ずかしくない、恥ずかしくない）

そう言い聞かせる。すると目の前に剣が突きつけられた。細身で綺麗な装飾がされた剣だ。そしてその剣を握るウンディーネが俺にあの言葉を突きつける。

「で？　お前はどちらを選ぶ？　仲間の為に仲間を傷つけるか、僅かな仲間と共にここで果てるかだ。まあどちらにしてもアイツの楽しみに成るだけだろうがな」

そう言って僅かに後ろ向くウンディーネ。その先にはあの性格の悪い奴がニヤニヤしながらこっちを見てる。確かにアイツはどっちでも実はいいんだろうな。

この戦争に勝ちたいってのは本当だろうけど、その手段はきっと二重三重に用意してるはずだ。その一つを思いつきで転がそうとしてるだけ。アイツはきっと、高見に居る気でいるんだろう。

「俺は……」

どっちを選んでも最悪。こんな選択があるかよ。どうにも出来ないことで、どちらかを絶対に選ばなきゃ行けないとしてもこれは……

「言っとくが、お前が感じたように苦しめる事が出来る。お前が見捨てた仲間は水死……ＨＰの続く限りの苦しみ。助けを求める仲間

の声に、けれどお前は届けない。
お前の大切さ加減を天秤にかけて決めるといい」
「そんなの！！」

そんなの……比べる事なのかよ。沢山の仲間を犠牲にも、僅かだけど必要以上に慕ってくれるこいつらを犠牲にもしたくない。
でもそれは今や出来ない事。どちらかという選択。俺にとって一番はアイリだけど、だからってこいつらを見捨てたり他を傷つけたりした自分をアイリは許してくれるだろうか。

アイツが守ろうとしてるのはこの国と、そしてこいつら全員なんだ。でも……そう分かってても、逃れられない選択が今目の前にある。

「じゃあ……全部が同じ位大切なら……どうしたらいいんだ？」
「それは、何も大切で無い事と同義だ。人は必ず優劣や順位をつける。順位を隠さず、天秤を傾けろ。その他大勢なら気が楽じゃないか？」
「――っつ！？」

その他大勢……その言葉が俺の本心を実は付いてたかもしれない。俺はアイリとは違うんだ。アイリはみんなが大切でも、俺はアイリが大切で・・そしたら実際、後はその他大勢でしかないと思う。
仲間意識とかが無いとは言わないけど、元々自分の部隊なんていらないと言ってた訳だしな。俺の天秤は実はずっと傾いていて、幾らその他大勢が乗ってもそれが変わることはない。
でもそれじゃ誰の期待にも応えられない。幾ら考えても良い結果に繋がらない。

頭を上げる事までも億劫に成ってきた。雨がそれを許さないって

か……でも僅かに顔を上げると、そこには捕まったゼブラ達が見えた。
何かを叫んでる様に見えるが、こちらまで音は伝わらない。でも「助けて」とかを言ってる訳ではなさそうだ。そんな目を誰一人してない。
言う成れば「自分達の事は気にするな！」って感じの瞳に見える。
「元気が良い奴らだな。なかなか決めれないのならちょと手伝ってやろう。ほら、ちょちょいっとやってくれよ」
そう言ったのはゼブラ達を見上げて嬉しそうにしてるあの野郎。
するとウンディーネの人は嘆息して腕を上げた。
「「「がっぼぼぼぼぼ！！」」」
その瞬間大量の泡が全員の口から吹き出てる。きっと俺が受けたあの苦しみを受けてるんだろう。
「早く決めないとあの苦しみが続くことになる。私もこういうのは好かないんだ。だが奴はこういう性格だからな。
さっきは誰もが同じくらい大切なら誰も大切な物など居ないと言ったが……だけどお前のその他大勢と奴のその他大勢は違うだろう。
奴は道具だが、お前は違いそうな顔をしてる。だがな逃げられないんだ。覚悟を決めて選べ」
ウンディーネのその言葉は、俺がちゃんと軍のみんなを仲間と思ってるって認めてくれたって事なのだろうか。それかただ単に、アイツが嫌いだからすこしはマシと思われたって事？
でもどちらにしてもやっぱり彼女は敵だった。でもそう……仲間だから選べないんだ。

「んな事言ったって……どうすれば良いかなんて全然わかんねーよ！！」

俺はそう叫ぶしかなかった。アイツ等の苦しむ顔も見たくないけど、だからって他の奴らの苦しむ顔を見たいわけじゃない。堂々巡りなんだよ。

どっちがより最悪じゃなくて、どっちも最悪。最終的にこの侵略戦に勝つことを考えたら、俺達が犠牲に成ることが一番何だろうけど……それを何故か選べない。

だってあんなに苦しそうなんだ。それを見てるとどうしても一歩を踏めない。俺がここで暴れ出して、倒されるとゼブラ達に人質としての価値が無くなる。

ガイエンは関係無しに突撃掛けてくるだろし、それなら人質なんていらないはず。用済みになったこいつらはこの水泡の中で苦しみ抜いてＨＰが尽きるのを待つしかないなんて残酷過ぎる。

雨が冷たい……この幻想の体の芯までも冷やすように底冷えがする。

「俺は……」

「ん？　何だ？　聞こえないぞ」

俺は地面の土を握りしめる。どっちかを選ばなくちゃ行けないんなら……俺は目の前の光景を無視なんて出来ない。これ以上考えても答えなんて出ないんなら、俺は俺を慕ってくれてる奴らを守りたい。

「俺は……何やればいいんだ？」

「それは私達の言うことに従うって事でいいんだな？」

そんなウンディーネの言葉に俺は頷く。するとソイツの指示で直ぐにゼブラ達は苦しみから解放された。まあまだ水泡の中だけど。
それは仕方ない事。すると今度はあのいけ好かない奴がこちらに歩み寄って来る。

「賢い選択をありがとう。流石はあのカーテナの持ち主が選んだ騎士だ。へりくだる姿が素敵だよ」
「……」

やっぱこいつはムカつく。いちいち感に障ること言いやがって。さっさと本題を言えよ。このままムカつき度が上がると気が変わって思わず攻撃しそうだ。

「あらら、騎士様は無言を貫き通すっぽいよ」
「当然だろう。貴様の喋りにこの不機嫌な時に付き合って居られるか。努々隙は見せるなよ。あまり挑発し過ぎるとこの距離でも奴は来るぞ」
「だからそこは君に任せてるんじゃないか。私は潰すのは好きだが、潰されるのは嫌いだからね」

ウンディーネの人は心底面倒そうに奴と会話してる。だけどまさに奴が言うとおり、ウンディーネの人は相当出来そうだ。それに何か見抜かれてるし。
結局、感情に任せた行動なんて上手く行くわけ無いって事か。

「さて、それでは君にやって欲しいことなんだが……もう分かってるだろう。用は君が味方相手に大暴れをしてくれればいいんだ。
そう……その信頼と羨望を叩き崩すくらいのね。後、君達の指令官を孤立させて欲しいね。君じゃ倒せないだろうけど、それだけで

十分。後はこちらでやれる。
さあ、それでは彼らの為に頑張ってくれたまえ」
奴は底意地の悪そうな顔で俺を見下ろしてる。その後ろには人質としてのゼブラ達。水泡の中で何かを必死に叫んでるけど……悪い、もう決めたんだ。
だから俺は立ち上がり背中を向けた。
「約束だ。それだけしたら必ずそいつ等を解放しろ」
「ああ、勿論。約束は大切だからな」
「アンタじゃ無く、俺はそこのウンディーネに言ってんだ。少なくとも約束を破る様な奴じゃなさそうだからな」
どうもこの人間野郎からは信用なんて言葉が思い浮かばない。だからウンディーネへ。武士だからな。そして俺の期待通りの言葉をくれる。
「承知した。確かにコイツに約束など無意味だからな。我らはそれを良く知ってる」
「ははは、こりゃ痛い事を言われたな。まあいいさ、彼らの事は君に任せるよ。どの道、この作戦の後ではエルフは生き残れないだろうからね。
さて絶対的有利を確信に変えようじゃないか」
生き残れない……か。確かにもしも俺がこれからやることではそうなる可能性が高い。やっぱりこの選択は間違いかも知れない。
昨日ガイエンの奴が言ってたっけ。その誰かを助けるために負けるよりも、その誰かを見捨ててでも勝つことに意味があると何とか。
そっちの方が犠牲に成った奴らも気持ち的に楽だろうって……アイツ等もやっぱりそうなのだろうか。確かに自分達のせいでこの戦

いに負けるのはきっと嫌だろう。

けど……助けるの俺で、見捨てられないのも俺だ。苦しまずに逝けるのなら、ガイエンの言ったことをやれたかも知れない。

ただのゲームとして割り切れたかも。けれど苦しんで苦しんで逝くなら話は別だ。俺にはどうしてもそれを選ぶことは出来ない。

きっとガイエンからしたら「自覚が足りない」とか「それはただのお前の自己満足でしかない」とか言われるんだろうが、無理なんだ。

その時、俺の踏み出し掛けた足が止まる。何故なら重要な事に気付いたからだ。

「所で……俺達の本隊はどこだ？　言っとくがな、俺達はそれを探してここまで来たんだ！」

何となく恥ずかしさを誤魔化す為に偉そうに言ってみた。だけど後ろの二人は冷静だ。

「なるほど、ここまで来たのはそういう事か。けれど安心しろ。お前達の本隊は我らの目が監視してる。この雨に阻まれない我らウンディーネの海の瞳がな」

「まあそういう事だ。迷い無くおもいっきりやってくれ。その方がこっちもやりやすいからね」

海の瞳ね。そういうスキルの名前か？　それともデフォルトでウンディーネはそういう目をしてるって事なのか？　だけどまさか本隊が常に監視されてたとはな。まあ普段ならこちらもそういう事はやるけど、この天候じゃそれが出来るのはウンディーネだけだろう。

周りさえも良く見えない豪雨の中、奇襲なんてされたら堪らない。しかもそれが仲間からなら……十分な混乱物だ。しかもそれが俺っ

てのが更になんだ。
すると一人のウンディーネが俺の元に寄ってきた。
「彼女は案内役だ。それで君の念願だった本隊までたどり着ける。まあ今も念願かは知らないが、変な考えにはいたるなよ。
我らウンディーネは今の状況ならある通信手段がある。君は我らの手のひらに居ることを忘れるな」
「忘れるかよ……」
こんな最悪な気分の事何てそうそう忘れられる訳がない。リアルに戻ってからも鬱になりそうな位だっての。
「ではでは言ってきます。スズラ様」
「ええ、慎重に。くれぐれも他のエルフの部隊と遭遇しないように」
「大丈夫、奴らの目には何も見えてませんから！」
妙にテンションの高いウンディーネが付けられたな。それにあの武士っぽいウンディーネは『スズラ』と言うのか。何だか大物っぽいから覚えておこう。
このままで実際終わる気はないからな。アイリが望んでるのは全アルテミナスエリアの奪還だ。それにはどこも落とせないんだ。
俺はまだまだ諦めない。この選択の先を考えるだけ考えたけど行き着く先はどれも最悪。けれど俺は……誰もが大切なら、誰もを守れる奴に成らなきゃ行けないんだ。
そのためにアイリがくれた力だろ。ゼブラ達も助けて、この戦いにも勝つ……そんな未来をまだ諦めない。
だから俺は必死に水泡の中から叫び続けてるゼブラ達に最後に振り向いてこう言った。

「必ず助ける」

聞こえてたのかは分からないけど、その一言を残して俺は雨の中を再びひた走る。

「ああ、アギト様！　心配してたんですよ。この雨の中フィールドをさまよってるんじゃないかって。あれ？　そういえば他は……」

その瞬間、きっと彼は何が起きたのか理解なんて出来なかっただろう。そしてどうして、こんな事をされたのかを知る由もない。

俺だって……どうしてこんな事をと歯を喰い閉めずにはいられない。けれどやるしかないんだ。あのウンディーネは見てる。

あの瞳はこの雨の中でもはっきりと俺を捉えてる筈だから。

俺が無言で振り抜いた大剣で彼は宙に浮いてる。そして同時に弾いた無数の雨粒が周りの人達にまで当たって、僅かに視界を奪ってた。

ドシャっと後方に彼が落ちた時には既に、俺は再び大剣を大きく振り被る。

「なっ！？　にを……アギ」

エルフの本隊、その端が大きな爆発で包まれる。さっきので今度は四・五人は一気に吹っ飛ばされたかな。

「敵襲か！？　ってアギト様？　これは……一体？」

俺はそれに応えない。次々とこちらに注目と戦力が集まってくるが、誰もが俺を見て動きを止める。それはそうだろう。だってこれは信じられな事。

でも……これが事実なんだ！！　俺の大剣は赤い光を帯びる。それはスキルの光で……攻撃の現れ。

「「アギト様！！」」

そんな必死な叫びを無視して、俺は次々に目の前の絶え間ないエルフの面々に攻撃をし続ける。叫ぶことも無く、ただ心で謝りながら。

剣を振るう度に衝撃波が起こり、無数のエルフが宙に飛んでいく。この豪雨さえも地面に落ちる事を許されない力の支配。剣を振っている間、俺に雨が当たることは無かったんだ。

それほど凄まじくて……だから迷いがあるみんなの攻撃何てかすりもせずにねじ伏せられた。けれど攻撃は一度も届いてないのに俺は痛かった。

みんなの攻撃を受けた瞳が雨が届かないか、やけにはっきりと見えるんだ。その瞳が俺に言っている。

「何で？」「どうして？」「仲間なのに！」

一振りする度に……まとわりつくそんな想いが、やけにこの大剣を重くしてる。結局ここまで来ても何一つ良い手は浮かばなかった。

どっちも掴み取るなんて端から不可能な事だったのかも知れない。それにどの道……俺はやってしまった。何も策がないまま、俺はみんなを傷つけてるんだ。

こんなのやけくそと変わらない。最悪な結果が一歩ずつ確実に近

づいてる。けれどそれを俺は止められない。もの凄くはっきりと感じる。

あの目を。あの瞳が俺を見てると。それはもう恐怖だ。ここで止まったらゼブラ達が苦しむ。だけどそれ以上に俺は数多くの仲間達を傷つけてるこの矛盾。

このままじゃ俺のせいで全滅させられるんだ。きっとこの混乱が頂点に達したくらいで、奴らは攻めてくる。そうしたら今のエルフ側に対抗なんて出来ないだろう。

何てたって俺のせいで陣形が滅茶苦茶。更に頭は混乱してその上、敵の一斉攻撃なんて理解する前にやられるかも知れない。

俺の頭は完全な袋小路にはまってた。

（どうすれば……誰か誰か誰か誰か誰か誰か！！）

そんな事を考えながら無言で仲間達を吹き飛ばしてる。でも今の俺はナイト・オブ・ウォーカーと加護の相乗効果中。ハッキリ言って全員が本気に成らないと止まりそうもない。

「はぁはぁはぁはぁ」

無我夢中で爆進してきたから息が辛い。結構進んできたな。周りは流石に、無闇に突っ込まない様に成ってた。距離を開けて様子を伺う感じ。

剣を振るうのを止めると、途端に雨の音が再び周囲を満たしてく。そして視界までも雨で染まって。だけどそれがいいのかも。

誰か分からずに叩けるのなら……もうそっちの方が気が楽だ。

（あ……だけどこれを振ったらまた見えるのか）

そう思いながら、自身が握る大剣を見つめる。自分の罪を見つめろ、目を背けるなとでも言いたいのかこの力は。するとその時、雨の向こうで青い光が瞬いた。
その瞬間、とっさに盾を前へ。すると降りしきる雨を真っ直ぐに貫いて、凄まじい衝撃が盾から腕へと伝わって来た。

「――づあ！！」

俺の体が押し戻される。後ろにはこれまで吹き飛ばした面々が倒れてたり、起きあがろうとしてたり。だけど基本屍るいるいの状態だ。
誰も死んでは居ないけどそれ所かＨＰが減っても無いだろう。だけど俺は、混乱させないと行けないんだ！

俺は踏ん張って勢いを止めて、すぐさま剣を振り被る。地面の弾ける衝撃と、高速を越える音の波動が周囲に広がる。だけど手応えは無かった。
でも感覚で誰かは分かる。あの迷いのない攻撃……容赦のなさ……そんな攻撃を俺に繰り出す奴は一人しかいない。

「ようやく戻ってきたと思えば……どういうつもりだ貴様。これ以上厄介事を増やすな」

それは間違いなくガイエンだ。青い髪を雨に濡らして、奴がそこにいる。コイツは確か、吹っ飛ばさなくちゃだったよな。
ガイエンがこの戦いの作戦総指揮やってるからな。ガイエンを吹き飛ばすか……それは何だか、やりやすそうだ。俺は無言のままガイエンに向かう。

「ふん、言葉も忘れて犬畜生に落ちたかアギト！　なら私が直々に思い出させてやる。これ以上貴様の好き勝手にさせるわけには行かないからな！！」

俺の攻撃をかわして、ガイエンの長剣が迫って来る。けれどその程度だ。俺はきっと勝てるだろう。その先に何も無くても。

無言の剣（後書き）

第百十三話です。

マジでヤバい！　だってセラ達が頑張ってるもん！！　セラ達が上手く行ったらアギトが目覚めない訳にはいかないんだし……それまでに過去編終わるだろうか？　いや、終わらせるしかないんだって感じ。ここまで来たらあと少しだし……多分。頭の中ではそんな長くないはずなんだけど、だけどやります！　そしてみんなで反撃の狼煙をあげるんだ。

てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは！

私と聖典の戦い（前書き）

聖典一つ一つが私の目で、私の分身。思考と共に想いを乗せて大空を駆け抜けてくれるあの子達はとても大切な物。だってそうでしょ？　あの子達が居れば私は空が飛べるもの。

手を伸ばしても届かない場所に連れて行ってくれる夢の乗り物。鳥になった気分も味わえる。けれどそれだけじゃく、本当はとっても頼もしい。放つ光はきっとこの闇を晴らす事が出来ると私は信じてる。

私と聖典の戦い

「まだまだあああああ！！」

襲い来る黒い無数の影をかわしながら聖典は空を駆ける。時間がないの。止まるわけには行かない。何としてもシルク様を向こう側へ通さなくちゃ！！

そうしないと……全てが終わっちゃう。さっきガイエンはアイリがこっちに向かってるって言った。どういう事か分からないけど、それはきっと最後のピースだよ。

私には幕を閉じるにはまだ早い様に感じる。だからもう一度立って貰わなくちゃ！　アイリが来たとき、ナイトが地面に伏せたんじゃ絵にならないからね。

だから何としても通して貰う！！

タゼホの空がガイエンの闇で更に黒く成っていく。炎さえも押さえつける圧倒的な闇。その計り知れない影の数に聖典がまた一つ……一つと流星となり散っていく。

「無駄だよセラ。確かにお前は強く、聖典は素晴らしい力だろう。だが、今の私には届かんよ。単純にパワー不足だ」

「あっそう！　そんなのは結果が出てから言いなさいよ！！」

更に速く！　もっと速く動いて聖典！　闇に捕らわれない位のスピードを！　余裕をかますガイエンの鼻を開かす為にも限界のその更に先へ！！

漆黒の空に数本の光の筋が舞っている。それは間違える筈もない

聖典の輝き。黄色い閃光は放つ攻撃だけじゃなく、その物から溢れ出てた。

「――っつ！！　ここからなんだから！！」

「セラちゃん！」

私は頭を押さえながら前へ出る。シルク様の声は聞こえてたけど私は振り向きもせずに行きます。だって他に割ける頭が今の私にはない。

ただ前を見据えなきゃ、あの闇を切り裂いてガイエンに届くなんて出来っこない。ただでさえ今まで最高に達してる聖典の性能。だけどそれに伴って……ううん予想はしてたけど、頭に入ってくる景色が違う。

情報が半端無くて、私が飛んでる訳じゃないのに、まるで自分が聖典の数だけ分かれて空を飛んでるみたい。けれどそこに全部の感覚を持って行かれる訳にも行かないの。

だって幾ら速く動けても・・あの闇の隙間を縫って行けても、パワー不足は顕然たる事実。あれだけじゃガイエンを吹き飛ばして道を造るなんて出来ない。

だからどうしてもパワーが必要。けど……今飛んでる聖典は僅かに五機。元々飛ばしたのが十二機だから既に七機落とされた事になる。

そしてあの五機は道を造るのに必要で戻せない。なら、まだ飛ばしてない残り八機を飛ばすしかない！　そして狙うは、超至近距離での収束砲の解放……それが私のパワー不足を補える唯一の方法。

だけどそれをガイエンに悟られる訳には行かない。カーテナの力を使われたんじゃ元も個も無くなっちゃう。だから残りの聖典の展

開はギリギリで……そして収束までもそこまで時間は取れないから、これまでの最速で一気にチャージしないと行けない。
どれも成功する確率は極めて低いけど……やるしかないの。だって、今この場でそれがやれるのは私だけ何だから！

「そんなむき出しの身を晒して、何をする気だセラ？　まあ良いがな。アイリが来るまでの暇つぶしだ。付き合ってやろう。
そしてその頭で理解しろ。私の偉大さをな」

そんな言葉と共にガイエンの腕がこちらに向けられる。その腕はカーテナと連動してる……ならそれが既に攻撃動作。背筋が凍る。
けど、私は止まらない。止まれない。だからトッサに横に飛んだ。その瞬間、私がさっきまで居た場所の空間が捻れてる？

前を見るとガイエンが突き出した腕を握りしめて捻ってた。つまり奴があの空間を掴んでねじ曲げてるって事！？
どれだけふざけた力をしてるのよカーテナって！！　あんなのに捕まってたらきっと終わってた。けれど安堵の暇なんて無い。奴はカーテナの力を両腕から放てるんだから。

「はははははは！！　さあどうしたセラ！　そろそろ理解出来て来るんじゃないか？　逃げることしか出来ない自分と私の格の差という奴がな！！」

両手左右から繰り出されるカーテナの力の渦。それを避けれてるのは実際奇跡の様な物。それかもしかしたらガイエンの奴はワザと避けれるタイミングでしか攻撃を行ってないとか。
だけどその理由は分からないから、やっぱりその考えは却下かな。ただ今の私は、頭が爆発しそうな位に脳をフル回転させてるって事。

ガイエンの一挙一動を逃さずに見て、私は攻撃の軌道を瞬時に読みとって動いてる。だってカーテナの力は必ずその腕の動きと同じ様に繰り出されるからだ。
でもその腕が振り終わったりしてたら遅い。その瞬間にはペシャンコかクシャッとトマトが潰れた様に成っちゃう。
だから見るのはあくまで肩を通して肘に伝わるまで。後はカーテナの力の外まで全力で逃げる。それしか逃れる手はない。

だけどそれじゃ、ガイエンの言ってることを自分で証明してるみたいでイヤに成ってくる。認めたくないのに、奴が本当に厄介だって思っちゃう。

（違う違う！　凄いのはガイエンじゃなくカーテナ！　だから絶対にあんな奴を私より格上だなんて認めない！）

そう思って避けながらでも私はガイエンに近づいてく。

「――っつ！？」

頭がズキズキする……これは今までに無いほどの痛み。もしかしたら今の状態……この聖典のスペックで更に数を増やすのはとても危険な賭なのかも知れない。
収束砲を制御出来るかどうか……でもこの行動全てが賭の様なもの。私は私を信じてやるしかないんだよね。頭の痛さなんて気力で吹き飛ばして、私はスカートの中の残りの聖典に手を掛ける。

「辛そうだなセラ。後ろにはまだまだ戦える筈の奴らが居るのに、たった一人で戦って空しいとは思わないか？　これだから多種族など信用出来ないとは思わないか？
まあ答えは急かんよ。この舞台から退場して、自分の考えを改め

ることだ」

ガイエンは言葉の終わりと共に構えを取った。それは今度こそ逃げられないと言ってるみたいだ。そして実際、雰囲気がそれを伝えてる。もう私たちの距離は十メートルもない。

なら外しようがないって事なのかも。それに実際・・更に連続で振られたら。この距離じゃどうしたって対応しきれなくなるのは目に見えてる。

だから私は真っ直ぐにガイエンに言ってやる。

「改める？　一体何を！？　私は私が信じた仲間を信じます！！それに辛いのもここまでよ！　アンタを吹き飛ばして見せるから！

もう逃げないわ」

「逃げないだと？　その細い体じゃカーテナの力には耐えられんぞ。いや、例えドラゴンでもこの力の前にはひざまづく。

そんな絶対的な力に、貴様はどうやって対抗しようというのだ！！」

ガイエンの長い腕がしなりを伴って後ろから前へと振られていく。しかも両手同じ動作。こう言う時は決まって、広範囲で威力も高く成る傾向がある。

それはつまりこれまでの遊びじゃなく本気って事。逃す気なんて無いし、確実に相手を潰すだけのやり方。逃げ道は確実に無くて……だけどそもそも私は逃げないともう言った！！

だから私は逃げずに言ってやる。

「こうやってよ！！」

私の言葉が響いた瞬間、空から黒い闇を切り裂いて二筋の閃光が煌めいた。そしてその二つの閃光は振られてるガイエンの腕を正確にぶっ飛ばす。上方からの攻撃を受けた両腕は一気に下へと下がる。

そしてその瞬間。私の真横の地面が同時に大音響と共に弾け飛ぶ。

「くっ！？　聖典か！！　まだ生き残ってたとは味な真似をおおおお！！」

そう言って空に目を向けるガイエン。だけど既に遅いのよ。この時を待ってた。この瞬間の為に泥まみれになりながら頑張った。必ず当てる。

弾かれた腕を再び振ろうとするガイエン。けれどその瞬間再び空から一陣の閃光が降り注ぐ。だけど今度は誰にも当たらない。てか当ててない。

狙いはガイエンの周り。その地面を抉る様に聖典の光線は円を描く。そして巻き起こるのは土埃。それはガイエンを包んで姿を消していく。

これでカーテナは封じた。カーテナを使う上で絶対に必要なのが視覚だから、それを奴は失った。視認した場所に正確に力を叩き込むその性質が仇なのよ。

「ははっやるなセラ！！」

「必ず決めるわ！！　聖典八機、解放！　更に収束！！」

解放した聖典を自身の周りに止まらせて腕の先に光を収束し始める。八機の聖典の光が一カ所に集まってこの闇を照らし出し始めてる。

だけど想像以上に頭が悲鳴を上げていた。頭が割けるような痛み……だけどそれに気を取られると、折角収束させてる光が弱まって

しまう。
収束のバランスが酷く危うい。支える為の精神が持たない。私の眼前も今や土埃で満たされてる。だけどこの先にガイエンが居るんだ。

（出来る……出来る……私は……出来る！！）

それだけを考えて私は地面を強く踏みしめる。しかしその時、関を切らしたように周りから声が聞こえた。

「「「ガイエン様あああああ！！」」」

それはずっと控えてた親衛隊。ガイエンが危ないってようやく理解したらしい。けれど邪魔はさせないわ。

「こ……ないでよ！！」

そう叫んだ瞬間に空から無数の閃光が親衛隊に飛来する。飛んでるのがたった五機でも使いよう。一瞬の足止めにしか成らないだろうけど、それで十分。

「くっそ……どうして！？」

どうして？　それは聖典も私の目だから。頭が痛い代わりにそれだけの対価をくれてるのよ。
私は土埃を抜けてガイエンへと腕を伸ばす。その距離一メートルも無い。収束した光はまだ大きく成ったり小さくなったりを繰り返してる。どうやっても今の状態じゃ上手く制御出来ないみたい。
けれどそれでももう放つしかない。今、このタイミングがベスト。

ガイエンはよりも私の攻撃が絶対速く届く！　大きくても小さくても……その中に変わらない強い光があるんだから！

「セラ！　貴様！！」

「食らいなさい！　聖典八相収束砲ブレイク！！」

回転が速まった周囲の聖典から一カ所に集められた光が解放される。黄金の光が炎と闇に染まるタゼホを貫く光となる。

ゼロ距離での収束砲の解放は成功した。けれどまだまだこれから！　私は更に踏ん張って叫ぶ。

「バーストオオオオ！！」

その瞬間更に光は大きく成る。だけど同時に頭に掛かる負担も腕に掛かる力の反動も飛び抜けた。そしていびつに歪む聖典から結ばれる光

すると周りを淀み無く回ってた聖典の一機が突然火花を散らして爆発した。

「――っつあ……何！？」

そんな言葉を言ってる側から次々と聖典は爆発して行く。そして見るからに光は弱く小さくなっていってる。これはきっと……制御に失敗したってこと？

元から収束砲は制御に難しいけど、こんな事は初めて。それだけ私の頭は限界なのかな？　何だか目まで霞むみたい……このままじゃもうガイエンを吹き飛ばすなんて無理だ。

けれど後僅かな聖典だけでも諦める訳には行かない。もう少ししか持たないだろうけど……後少し持つのなら、この光の最後の一辺

まで目指した事の為に！！

「シルク様！　今の内にアギト様をお願いします！！」

弱まっていく光の中、私は後方へ視線を送り叫ぶ。その時、肩がビクッと上がったシルク様は少し戸惑った様だったけど言ってくれました。

「えっ……んっ、わかりました！」

タッタッタッタッタ……そんな音が後ろから近づいてくる。そしてそれが向こう側へ行ければ、それが私達の勝利。目的の達成。だからそれまで……闇夜を貫くこの光、絶たせる訳にはいかないの。

風が流れ、聖典が大気を震わせてる。けれどその波はどんどん、どんどん弱くなっていく。周りに残ってる聖典のどれもが危ない火花を散らしてる。

（行って……通り抜けて！！）

また一つ……聖典が形を失って行く。顔の横を炎と化した固まりが落ちていく。

（まだ、もう少しだけ！！）

更に弱々しくなった光に私はそう願う。けれど現実（現実じゃないけど、今ここに体感してる現実）はそんなに甘い物じゃない。

想いとはぶつかるもので……人は誰しもが自分を幸せにしたい。そして目の前に居る奴はそれに貪欲なのか、いやもう暴走の域。

姿形を変えてまで貫きたい事があるんだろう。でもこっちはそれを許せない。守りたい物がある。だから私達はぶつかってるんだ。

だからガイエンはそれを許しはない。それはシルク様が私の真後ろに来たときに動き出す。

「随分、弱ってるじゃないかセラ」

その瞬間、私達二人は同じ場所へ目を向ける。拡散する光線の中、浮き上がるように見えてきた黒い影。四方に散らされた収束砲の幾つかが地面を抉り、炎に包まれた建物を突き破る。

「――っつ！？」

「狙いはアギトの蘇生か。あんな奴、幾ら立ち上がっても結果なんて変わらんよ！」

振られる黒い腕。その瞬間力の奔流が聖典を無に帰し、私達まで同時に吹き飛ばす。トラックにでもぶつかられた様な感覚……見えていた筈の向こう側が遠ざかる。

「「きゃあああああああああああ！！」」

私はシルク様を巻き込んで後方へ飛んでいく。地面に体を打ちつけて止まったときには、空にあった残り全ての聖典までも炎に包まれてた。

「これで、お前は何も出来ない」

時間は一分を切って……そう言われた。それは絶望。希望の灯火は今にも消えそう。切り札の聖典は無くなり、私の全てを出してでもシルク様を向こうに送ることは叶わなかった。

「セラちゃん！　大丈夫？」

「……えぇ。シルク様こそ……巻き込んじゃってすみません」

私はそんな事を言いながら、何が出来るか考えてた。でも、そこに答えがない。何も見いだせない。私はもう出涸らしだよ。

もう無理だ……そんな闇が私にもせり上がってくるよ。

「私の事は……けど、このままじゃ間に合わない。どうしよう。どうすれば……」

「もう、ダメです。私にはもう何も出来ません。ごめんなさい」

土を握りしめても儚くこぼれおちていく。そんな光景が、何も出来なくて座り込んでる私のよう。あの一瞬が、儚い私の最後の輝きだったのに……結局はこの様です。

何だって出来ると思わせてくれるこの世界。だけど本当に大切な事や重要な事ってのは、大抵一人じゃ出来無いんだよ。

落ち込む私にそっと優しい温もりが伝わってくる。顔を上げると、頬に添えられた手の先に私と同じように土で汚れたシルク様の顔があった。

「おかしいよ。謝る事なんて何一つ無いよ。セラちゃんは頑張ってくれた。私の方がごめんなさい。私は弱く無力で……駆け抜ける事も出来なくてごめんなさいだよ」

その言葉は自分を責めてた私を解放するような言葉だった。そん

な訳無いのに……頑張る事なんて普通で当たり前。生きてたら誰だって頑張ってて、それを評価するのなら、目的までたどり着かなきゃ全然ダメな筈なのに……それでもシルク様は笑って私の重荷を取り除いてくれました。

謝る事なんて何もない。だって私達じゃ役割が違うもの。私はシルク様より戦いが得意で向いてるから、前に立っただけの事。だってそれが私の役割で、シルク様の役割はもっと大切な事があっただけ。

一緒に戦うって隣で剣を振るうだけじゃないと私は思う。シルク様は十分に、私と共に戦ってくれてた筈だ。だから私も手を上げて、頬にあるシルク様の手に触れる。

「ごめんなさいなんて、言わないでください。そうですね。二人でよくやった……それでいいじゃないですか？」

「そうだね。私達頑張ったよね。特にセラちゃん。凄く格好良かったよ」

そんな言葉とシルク様の屈託のない笑みに思わず私は照れちゃいます。

「あ、ありがとうございます……」

少しだけ重い空気が晴れたような気がする。だけど、残った事実は変わりません。私達は失敗した……これじゃもう本当に終わりかも知れません。

「よく笑っていられるな？　絶望的過ぎて頭がおかしく成りだしたか？」

既に頭がどうかしてるガイエンがそんな事を言って、勝利を突きつけてきます。反論したい……けど、それは出来ません。だって私達は負けたんです。
これ以上何が出来るのか、自分でもわからない。ただ刻まれていく数字を遠くから眺めるしかない。だけどその時、目の前のシルク様が立ち上がりました。

「まだです。私達が笑うのは、希望を捨てないから……諦めないから！　勝ち誇るには早いですよガイエン！！」

啖呵を切ったその声は内蔵までも震わせる様でした。けれどそれを聞いたガイエンは笑って言い返します。

「人間は余す夢を見るものだな。そのせいで今の状況の判断も出来んか。今勝ち誇らなくてどこで勝ち誇る？　終わったんだよ。
貴様たちは負けたんだ」

悔しいけど……その通りです。シルク様の言葉はとっても心に響くけど、もうどうしようもない。本当にそれはただの夢。私はどうしようも無いときも笑っちゃいます。
今から何が出来るかなんて思えない。

「シルク様……もう……」

無理です――そう言おうとした。けれどそれを言わせない言葉が振ってきました。

「まだ後一分もある。もう切っちゃってますけど……セラちゃんの頑張りを無駄にしないためにも私は諦めません！！」

その言葉を聞いたとき、私はハッとした。私が頑張ったから、シルク様は諦めようとしないの？　それは破れたけど決して無駄じゃ無かったって事なのかな。
私自身が、負けたって思ってたことも、シルク様には何かを残して伝えれたのかな？　そう思うと、何だか嬉しい。心がほっこりします。
でもガイエンはそうじゃないみたい。そろそろ目の前の蟻に鬱陶しさを感じ始めたみたいです。

「ふん、これだから人間は！！　無駄になったのだよ！　あの頑張りも全て！　今更ろくに戦えもしない貴様一人で何が出来る？
大人しく、地面に這い蹲って泣いていろ！」

黒い腕を再びしならせるガイエン。カーテナの力が再び来る。だけどシルク様は避けようとしない。私を庇う洋に両手を広げてる。
そんな事意味はないって分かってる筈なのに……

「私は確かにろくに戦えないけど、きっと私だけじゃない！　無駄じゃないって思ってるのは！！」

その言葉の後に大きな音が聞こえた。地面が潰れる様なイヤな音。けれど何だろう……痛くない。あの距離なら私も巻き込まれてる筈なのに、全然痛みがないよ。
それどころかちょっと離れて聞こえた様な気さえした。腕が振りかぶられる瞬間、目を瞑ったから、一瞬で終わったのかも知れない。

前のダメージもあるし……それじゃ本当の本当にこれで終わりなんだ。そう思うと悔しさがやっぱりこみ上げてくる。
もっとやりようがあったんじゃないかとか・・だけど何だか、随分と風が優しく撫でる気がする。戦闘不能ならそこら辺に影響しな

い筈だけど・・そう思って瞳をあける。
するとそこには見知った面々の姿が映りました。
「み……んな？　どうして？」
そんな言葉を思わず出しちゃうと、私をお姫様だっこしてる彼が言います。
「シルクちゃんが言った心の持ち主かな？　凄かった……一人であそこまで出来るなんて。そんなセラを見てたら、恥ずかしく成ったんだ。
きっとあの時、俺たちが加わってれば突破出来た筈だ。今更いくら謝っても遅いけど……でもだからもう一度！　今度は俺達もやってみるよ。
そしたらきっと抜けるよな？」
抱かれた体に熱いものがこみ上げてくる。みんなが私達を守ってくれたみたい。闘志が灯ったその瞳は、恐れよりも強い意志が見て取れる。だから私ももう一度――
「勿論、今度こそ絶対に！！」

私と聖典の戦い（後書き）

第百十四話です。

今回は聖典大活躍！！　ってな回でした。まあだけど決めれはしなかったけど、聖典の凄さは伝わったかな？　実際ああいうのってどういう風に操ってるの考えるのが大変です。

勝手に動くだけじゃ駄目だし、かといって全てマニュアルって訳にも……だけどセラはかなりマニュアル操作ですけどね。だから頭に凄い負担がのしかかってくるのです。それでも操る所はセラの凄い所。

セラしか使い手がいないのも納得の難易度でしょう。まあ一機二機位なら使える人はセラ以外にも居るでしょうけど、聖典は最低でも四期以上同時に操れないとその真価は発揮できません。

なのでやっぱり使い手はセラだけって事ですね。いやー凄い凄い。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではまた～。

雷鳴の行方（前書き）

俺達はぶつかるしかないんだろう。「悟ってくれ」なんて言いたくても言えねえよ。けど俺が思ってたよりもガイエンは思慮深く、その才を今の立場で発揮してたみたいだ。

アイツは俺のこの理不尽な行動からもある程度の事を推察してて、そして口を開かせるのは確証が欲しかったから。こいつは本当にただ戦闘しか出来ない俺とは違ってた。

見えなかった繋がる先ってのを思わぬ形で提示してくれる。

雷鳴の行方

「アギトオオオオオオ！！」

そんな叫びが一本まっすぐに空に響く様だ。実際、ガイエンの奴がこんな風に必死に叫ぶのは初めてっぽいから無言を貫き通してる俺も、少しビクッとしたよ。

ガイエンの奴はもっとクールを売りにしてるからな。だからこんな事は珍しい。考えてみればこいつがわざわざ直接出てきてる事自体希だ。

ガイエンのやり方なら、周りに居る圧倒的な数を使って泥臭い事をせずに俺を押さえる事は出来るはずだ。幾らそれまでに何十人が吹っ飛ばされようとも、死んだ訳じゃないんだ。

命令一つでみんな目の色を変えて襲ってこれたはず。そしたら幾ら俺でも、この数全部をさばききれる訳なんて無かったんだ。

だから絶対にそっちの方がスマートだった筈。けどガイエンはそれをせずに、何故か我が身虚空で俺の前へやってきた。

「うおおおおおおおおおお！！」

ガイエンの長剣が一振りする度に、倍の剣劇をまき散らす。それは俺の体を僅かにかするが、決定打にはなり得ない攻撃。

激しく打ちつける豪雨も止めることが出来ない位の攻撃じゃ、俺には届かないんだよ。それに折角の倍撃もこの雨で軌道が分かる。

普通ならそんなの見れる分けないのかも知れないが、いかんせん俺には見えるんだ。絶え間なく降り続ける雨を受けてしまう残撃っ

て奴が。
俺達はもう……戦闘において、最も実力が近い訳じゃなくなってる様だ。それはきっとこのスキルの差ってだけじゃない。
俺は常に前線に、そしてガイエンは常に後方に居たことによる差だ。久々に、本当に久々にガイエンの戦闘を見るけど、何だかぎこちないって言うか……切れがない。

こんなもんじゃ無かった筈だこいつはさ。それとも本当に、いつの間にか俺が強く成りすぎてしまってたのか？
俺はガイエンが長剣を振るう度に出てくるスキルの残骸を一振りで弾き飛ばす。その衝撃は雨を弾丸に見立ててガイエンに届く。

「ぐっ……ああ！！　くっそ、さっきから無言で人を見下した様な目で見やがって……何がそんなに気に入らないんだ！？
言ってみろアギト！！」

けれどガイエンは何か自身のキャラとは違う様な言動を取る。こんな奴だったかお前って感じだ。だけど今の俺にはありがたい事なのかも知れない。
この空しさを無数の仲間に向けるより、ガイエン一人に向けてた方が気が楽だからな。けれどずっとこいつの相手をしてる訳にも行かない。

もたもたしてたらゼブラ達にあの腐れ野郎が何するか分かったものじゃないからな。でもこのままじゃ、解放させる事が出来たとしても、何にも成らない事も確か……それを考えるとガイエンが感じた見下した様な目にも成る。

だって俺にはいい方法なんて思い浮かばなくて、でもガイエンならって思う自分も居て、けれどこんなに弱いのにって感じる俺も居

て・・実際訳が分からなく成った目なんだよ。
けど「言って見ろ」と言うその言葉・・大剣を振るいながら俺はずっと考えた。何か今までに無いくらいに親切なガイエン……こいつになら素直に話す事が出来るかも。

「どうすればいい……どうすれば俺はいいんだガイエン！」

振り上げた大剣が赤い閃光と共に地面を割って掛けていく。思わず力がこもってしまった。今までは何も考えずにやってたけど、言葉を紡ぐ事で気持ちが剣にまで乗ってしまった。
けれどガイエンはそんな攻撃を何とかかわす。だがそのせいで後ろに居たエルフの面々が盛大に空に舞った。

「どうすればいいだと？　なら事情を話せ！　貴様がこんなバカな事をする訳をな！！」

確かにガイエンの言葉は尤もだ。みんなだって何も分かてない。それは全部俺のせい。けれど……俺は視線をあの監視役のウンディーネが居ると思われる方をちらりと見て思う。

（見られてるって事が話す事を躊躇わせるんだ。だって聞こえてたら？　ゼブラ達が危なくなる）

この雨で俺にはウンディーネは見えない。けれど奴は絶対に俺を見てるはずだ。だからと言ってこの雨の中、音まで正確に拾えるのかは分からない。
だけどガイエンはめざとかった。

「そっちに誰か居るのか？　そしてお前以外の部隊が戻ってない事……だがまだ生きてる事を考えれば自ずと貴様の状況は見えてくる。

敵と接触したな？　そして考えられる最低なことは人質か？」
「――っつ！！」
流石に俺はビックリした。伊達にアイリの片腕として参謀をしてる訳じゃないなコイツ。戦闘が疎かに成った分、頭を使ってるって事か。
それに気を聞かせてか、ガイエンは武器のぶつかり合いのタイミングでそれを言った。つまりはもしもの場合にも聞き取られない様にって事だろう。
そして俺の反応でそれを確信したらしい。
「ビンゴか。貴様はバカか！　これはゲームだぞ。幾ら何でもその力で全部を背負える何て思うな！　死ぬ訳じゃ無いんだ。貴様さえいれば戦闘はどうにでも出来る。
アイリの為にも勝ちたいだろう。それなら大局を見謝るな！」
「……そんなの分かってる。けどな……苦しませられるんだ！　ただ戦闘不能に成るだけなら俺だってこんな事しねえよ。
だけど、苦しんで苦しんで殺されるってんなら話は別だ。見捨てられる訳ねぇよ！」
思わず力を込めた攻撃がガイエンに直撃した。大きく吹き飛んだガイエンは群衆の中へ飲み込まれる。あれは流石に……やばいかも。
ダメージは無いと言っても衝撃はもろに伝わる。だから俺の後ろの奴らは、そのまま昏倒してる奴だって居るんだ。
「ガイエン！」
俺は思わずそう叫んだ。心配何て……見せちゃいけない。それに嫌いな筈のアイツに向かって。けど今は頼るしか無いんだよ。都合がいいけど、この袋小路は自分じゃどうにも出来ない。

力だけじゃ破れない。けど、流石にここまでやった俺に周りは武器を構え出す。

「もう我慢出来ない！！　あんたは最初の騎士で……仲間だと思ってたけど、これ以上の暴走は俺達全員でねじ伏せてやる！！」

「「「おおおお！！」」」

それは今この場に居るエルフの騎士、全員の総意みたいだ。当然と言えば当然。完全に俺が暴走してる訳だからな。みんなアイリの為に必死に成ってくれてるんだ。

それはきっと正しい選択何だろう。

だがその時、そんな騎士達の中から飛び出る影があった。

「ガイエン様！」

そんな声が聞こえる間でもなく俺には分かった。青い髪を靡かせて奴は再び俺に向かってくる。そして武器と武器がぶつかった時に奴は再び口を開く。

「ふん、貴様が私を心配するとはな。この異常な雨はそのせいか？

まあいい、取り合えず今の内に簡潔に説明しろ」

その言葉に俺はこうなるまでの事を伝える。だけどレイアードの件は抜かして、雨の中で敵の本隊と遭遇したこと、そこでゼブラ達を人質に取られた事、そして少しのウンディーネの能力と、奴らの目的。

するとガイエンは全てを聞き終わった後にぽつりと呟く。

「なるほど。なら奴らの本隊も既に近くにいるな。今の状況をどこからかウンディーネのその能力を使って伺ってる筈だ。

そして攻めいるきっかけはおそらく私を吹き飛ばした後」
「なっ……それって……」
俺は少し驚いたが、考えてもみれば直ぐに思いつく事。だって奴らは混乱した隙に襲撃すると言っていた。ならあの場所に止まってる訳がない。俺が先行したってだけで、本隊もその後に付いてきてた筈なんだ。
そして奴らの総攻撃のタイミングはまさにガイエンが吹き飛んでからにきっと間違いない。その直後が当然一番混乱するはずだから……でも、それじゃあいつゼブラ達は解放される？
こっちの本隊が全滅した後？　それじゃ確かに意味なんて無いじゃないか。けどそれでも俺はきっと反撃なんて出来ないんだ。ゼブラ達が解放されるまでは。
情けない……俺は何も見えてなかったんだ。あの底意地の悪そうな野郎の手のひらで踊ってただけ……このままじゃ確実にこの戦いはエルフの負けだ。
このフィールドを取り返す何て出来ない。そんな事を考えてると初めてガイエンの攻撃が俺にまで届く。複数の残撃が体の各所に当たり後方へ後ずさった。
そんな光景に沸き立つ騎士達。完全に俺は敵だな。当たり前だけど。けれどその時、ガイエンだけが違う目を俺に向けてる。
それが本当に仲間に向けてる目とかは分からないが、ただ敵って訳じゃなさそうな……
「アギト、この責任は今直ぐ取って貰うぞ」
「責任なんて……今更取れるのかよ」
ガイエンの言葉に俺は弱々しく返す。そりゃあ責任が取れるなら

取りたい。それは当然だ。だってみんなには酷いことをしたんだ。
それが仕方なかったとしても、俺はみんなの痛みとゼブラ達の痛みを天秤に掛けた訳だからな。そしてより傷つける選択をした。許して貰える方法があるのなら・・それを断る理由はない。

「取れるさ。更に言えば最高の形でだ。勿論貴様の部下も上手く行けば助けられるかも知れない。どうだこの全てを帳消しにする素晴らしい作戦は？」

ガイエンの言ってることは荒唐無稽にも聞こえる。けれどこの自信。それに今の俺にはもうガイエンのこの言葉にすがるしかない。だから俺は言ってやる。悪魔に魂売る気分だけど、今だけは天使に見えるぜこの野郎！

「それが本当なら、何だってやってやる！」

するとガイエンは空いてる手を掲げて俺に向ける。そして大声でこう言った。

「全員遠慮する事はない！！　あのトチ狂った赤毛のエルフを締めあげろ！！」
「「「うおおおおおおおおおおおお！！」」」

その瞬間聞こえだした地響きは恐怖の象徴の様だった。ガイエンの言葉で遠慮というタガが外れた様だ。流石にこうなると、この数相手では一筋縄では行かないだろう。

「てか、何考えてんだあの野郎！！」

俺のそんな叫びは雨に消される前に迫り来るエルフの大軍に欠き

消される。そしてガイエンはその中に消えていったんだ。
一体どうする気何だよ。

雨と地面を踏みつけて、迫り来るエルフ達を俺は吹き飛ばさない訳には行かない。だからって今までの様に楽々とそう出来る訳じゃ無くなってるし、今度は俺の方へ戸惑いがある。
ガイエンの奴は何かを企んでそうだった。だが、何も言わないからこっちは何も分からない。それを監視役のウンディーネに悟られる訳にも行かないから、俺は向かってくるみんなを飛ばし続ける。

ドガンドガンズバンと続けざまに大剣を振る。でも遠慮が無くなった分、みんなは頑丈だった。加護でかなり能力がアップしてる訳だし、元々ダメージにならない攻撃で倒れる奴は居ない。
そして押し寄せる波の様に迫る攻撃に、俺は徐々に押されていく。

「くっそ……このままじゃゼブラ達が……」

俺が本隊に混乱を与えられないとゼブラ達がヤバいのはガイエンの奴も分かってるだろうに……何やってんだ。既に無数のエルフの波の中で、ガイエン一人を見つけるのなんて不可能。
最善の可能性があるとか言ってたが、それが段々疑わしくなってきた。だけどそれがもしも本当に無かったら……訪れるこの先は敗北だ。

何も残らない、そんな未来。だから俺は信じたい。例えあのガイエンが言ったことでも……アイツは案外、アルテミナス関連の事なら割と真剣だから、そこに賭けるしかないんだ。
数パーセントでも、僅かな信頼位持ち合わせてるから。だから俺はもう一度アイツが姿を現すまで持ちこたえる！

「うらあああああ！！」

俺は開き直って力を込めて大剣を振るう。するとその瞬間おかしな事が起きた。いや、実際おかしいのか判断に苦しむけど、ここまでの手応えだったか疑問だ。

何だか、随分沢山の奴らが吹き飛んだ様な……加護があって勢いと共に持ちこたえてた筈じゃなかったか？　確かにさっきよりも力を込めたが、だからってこれは・・・。

そんな事を考えてると、様々な罵声と共に更に後ろのエルフ達が攻めてくる。けど何だろう？　勢いが言葉だけになってる気がする・・様な。攻撃も何だか当てようとはしてるけど、威力が強い物じゃない。

それに吹き飛ばしたみんなが立ってこない。そんなわけ無いのにこれって……そう思って視線を巡らせると、アイツが見えた。

最初よりも確実に少なくなったエルフ達の間を縫う様に青い髪が進んでる。多分どうやら、ガイエンの奴が何か指示してるみたいだな。

そしてある程度そんな三文芝居が続くと、ようやく奴は俺の前に再び現れた。

「流石だなアギト。ナイト・オブ・ウォーカー、その力は伊達じゃない。けど、これ以上部下をやらせる訳には行かない！」

そう言って長剣を俺に向けるガイエン。これはそのままぶつかりそうな流れ。でももう、俺は信じるしかない。何かやってくれるんだろう。

なら俺は、今の俺の立場にふさわしい行動を取るだけだ。それが

きっと正解だろう。俺は無言で大剣を構える。激しく雨が打ちつける中、赤と青の光が立ち上っていた。

「貴様はもう敵だアギト。私の手でその暴走、止めてやる。行くぞ！！」

地面を激しく蹴って迫るガイエン。それはアホな位に真っ直ぐだ。俺はここできっと、コイツを吹き飛ばさなくちゃいけないんだろう。

けど、やっぱりいざやるとなると多少の躊躇いがあるな。向かい打つだけできっとやれる。だけどだからこそ……するとそんな時、ガイエンの奴と目があった。その目はムカつく位に自信に満ち溢れてる。

（やれよ。出ないと斬るぞ）

ってな事を目で訴えてやがる。上等だな。俺は構えた大剣を更に力を込めて握り、更に赤い光は大きくなった。

（望み通り……やってやるよ！！）

俺は頭でそう叫んで、一気に大剣を振りかぶる。すると確かな感触と共に降り注ぐ雨が周囲に拡散して、雷鳴が鳴り響く空へと何かが飛んでいく。

（やった……）

多分あれはガイエンだろう。確かにやったではあるけど、これほど喜べないやったも無い。剣の軌道を示すように延びていた、赤い光が消えていくと同時に、再び雨は頭上に舞い戻ってくる。

そして空を仰ぎ見ることは叶わなくなった。

「「「ガイエン様アアアアアアア！！」」」

そんな叫びが立っているエルフ達からあがる。そしてもの凄い形相でこちらに剣を向ける。

（え？　あれって演技だよな？）

そう疑問に思うほどの迫力。スゴい逸材がいたもんだ。けどその時だ。どこからか灯った光が、俺を過ぎ去って残ってたエルフ達に降り注ぐ。

しかもそれは爆発かしない。大量の水が溢れ出てくる物。それってつまりは……俺は後方を振り向くと必死に目を凝す。

「やっぱり……ウンディーネの奴らの攻撃か」

更に続いて人間は雷系の魔法を放つ。この状況じゃそれは確かに良いコンビネーション。伝導率が高そうだ。とうとう敵さんが今が好機と言わんばかりに攻めだして来たって訳だ。

まさにガイエンの読み通りだな。けどそのガイエンは今頃大ピンチじゃ無かろうか。きっとこの本隊とは離れた別動隊がアイツの首をねらってる。

これからどうするんだと言いたいが、俺もどうやらうかうかしてられる状況じゃ無くなったみたいだ。真っ直ぐに俺に向かって走る水の柱。それを潰した直後に、更に複数の攻撃が俺を襲い出す。

「――っつ、お前等！　何で俺を攻撃する？」

すると敵の中の比較的偉そうな奴がこう言った。

「何故？　命令は『混乱に落ちたエルフ共を戦滅しろ』だからだ。

貴様もエルフである以上、命令から外れはしない！！」
「ちょっと待て！　俺はお前たちのボスと約束してる。本隊を混乱させたら人質を解放させるってな！　そいつをだせ！」
水と電気の複合攻撃が襲いかか手は止まらない。そしてその人間から発せられた言葉に俺は怒りが沸き立つ。
「人質？　ああ～あのエルフ共なら、安心しろ。もうじき開始地点に戻るだろう。死体となってな」
「きっさまらあああああ！！」
俺は遠慮も躊躇も無しに、力をありったけ込めた大剣を地面に叩きつけた。その瞬間、地面は爆発したように弾け飛び、敵の前線部分までも巻き込んで行く。
でもそんなのじゃ全然たりねえ！
俺は一体……奴の何を信じてたんだ。いや、元から信じて何かなかった。こうなる事も有り得るって頭の隅では考えてたさ。でも、実際そうなるとアイツは俺を手のひらで踊らせるだけ踊らせて落とそうとする奴って事がわかった。
ムカつくムカつくムカつき過ぎる！　こうなったらただでやられてたまるかよ。奴がこの場に居ないって事は、多分ゼブラ達の苦しんでる姿でも楽しんでるんだろう。
俺は人とウンディーネ共を凪払い凪払い、口を開いてた奴を地面に叩きつける。
「どこだ！？　あのクソ野郎はどこにいる！！　五秒以内に答えろ。出ないとその頭を潰す」
俺は精一杯に迫力を出して脅した。だけど誰もが知ってる。ＬＲ

０では死ぬほど痛い事なんか早々無いって。特にプレイヤー同士の攻撃なら尚更。それこそ、ゼブラ達が受けてる状況が異常なんだ。
だからコイツは笑いやがる。
「くはははは！　行けねえよ。お前はここでエルフ共と倒されるんだ。幾らお前が強くても、どうにも出来ない数の差とこの天候がそれを示してるのさ！！」
その瞬間、雨が背中に突き刺さる。それは前に食らったウンディーネの攻撃。回避不可の雨の槍。これは不味い。ダメージに成ってないみんなにも当たる。
するとその時、骸の山から見慣れた青い髪の奴が立ち上がって言い放つ。
「後衛全員で盾を展開しろ！　全軍に通達する。寝たフリは解禁だ。各、目の前の敵を戦滅しろ！！」
その瞬間頭上に大きなシールドが展開されて雨の槍を防いだ。そして一斉に動き出した、地に伏せていた筈のエルフ達に敵軍はたじろいだ。
「貴様どうして！？　確かに飛ばされたのをウンディーネの目が確認したはずだ！！」
いつの間にか俺の腕から逃れてた奴がそんな事をガイエンを指さして言った。まあそれは俺も聞きたいな。するとガイエンは得意気な笑みを浮かべて言い放つ。
「ああ、あれは人形だ。そちらが良い目を持つ隣人に助けを求めても、我らエルフは自身達でその上を行けるんだ。　スキルの一つさ、

あんなのは。誘われたのは貴様等の方だ。格の違いを教えてやろう。ただの魚人と平凡な貴様等にな」

混乱もしてない、指令官も居るのならそれは完全な正面対決。いや、向こうは余裕を無くした戦いを余儀なくされた訳だから、こちらに部がある。

てか俺も騙されてた。分身ってあれは多分ガイエンのスキルじゃない。倒れてた誰かのスキルとタイミング良く入れ替わったんだろう。

「行けアギト！　何の為に皆協力したと思ってる？　貴様の為ではないぞ。同じ仲間と、一つの思いの為だ」

そんなガイエンの言葉で、俺は周りを見渡す。誰もが必死に戦ってる。この戦いに勝つために。それを一度諦めたのは俺だけか。

でもアイツ等を取り戻せばもう一度同じようにめざせる気がする。

「お前の印象が変わったよガイエン。今回ばかりはな。本当に助かった。後は俺の役目だな」

「その通りだ。貴様は騎士の代表。舐められるなアギト！」

「了解！！」

俺は駆けだした。手近なウンディーネを一掴みして。それは丁度俺を案内した奴。なんて偶然で立場逆転。女だからって今更容赦する気更々ならない。

目指すのはあのクソ野郎の場所。激しくぶつかり合う戦場を、俺は風の様に駆け抜ける。どちらにこの戦いが転ぶかは、きっとこの一戦に掛かってる。

だけどまだ闇は完全には晴れてなんか無い。頭上で鳴り響く雷が嫌な音を奏でてた。

雷鳴の行方（後書き）

第百十五話です。
反撃開始！　……になるのかどうか。実際そう易々とはね、出来ない筈です。何てたって向こうの大将も相当性格ねじ曲がってるからな。微妙に浮き上がった今こそ危ない。
見出した光がつぶされる事ほど、応える事は無いからです。
てな訳で次回は月曜日に上げます。それではまた！

さまよう意識（前書き）

聖典が消えて、もう駄目だと思った。だけどそれは早すぎる思い込みだったんです。私には仲間がいます。彼等はもう一度燃えてくれています。この戦いに一番必要な物が、想いの強さなのだとしたら、きっとみんなそれを取り戻した筈です。

聖典を無くしたのは痛いけど、私にはもう一度立ち向かえるだけの力と想いがここにある。だからもうい一度頑張ってみよう。大切な友達の為に。

さまよう意識

再び彼らの中に燃え上がった炎は、私の唯一の成果と思っていいのだろうか。全てを出し切ってでも越えられなかったと思った壁は、でも実はまだ全部じゃなかった。

私にはまだ……力を貸してくれる人達がこんなにも居る。

「遅いよ！」

なんて野暮な事は言わないよ。もう一度、立ち向かってくれるだけでありがたい。希望を繋ぐ事を諦めないでくれて、みんなの力を宛に出来るのなら、私はまだまだ頑張るよ。

だって私は、諦めが悪い女ですから。

炎に包まれたタゼホの地で、今は正面からガイエン達と向かい合える。火の粉が夜空に舞い上がる様を視界に映しながらも、真っ直ぐに見据える先は奴らの向こう側。

「今更、腰抜け共が加わってどうにか成るとでも本気で思ってるのかセラ？　聖典に代われるほどの力がそいつ等にあるのか。

よく考えろセラ」

化け物じみてるガイエンのそんな言葉が投げかけられる。だけど私は無言で抱き抱えられてた状態から、地面に足を付いて立ちます。そして懐から出すのは、金色をした球体。

それを握り締めると輝きを増し、私の手を離れて顔の前で形を変えていきます。まずは第一形態の剣の形へとその姿は固定されてい

く。

「セラちゃん……」

「セラ……」

何も答えない私に不安でも感じたのか、シルク様達が私の名前を呼びます。でもそういう事じゃないの。私は手に取った金色の剣を組み替えていきながら、みんなには笑顔を返して前の奴らにはこれを送りましょう。

「一人の力と、みんなの力……それは比べる事なんか出来ないわ。それにアンタ達に費やす言葉の一秒がもったいない。

だから全ては行動と結果で示してあげる！！」

組み上がった武器は弓。私をその矢を言葉の終わりと共に解き放つ。

「結果か。見え透いたその結果さえ耄碌してるなセラ！！」

振られる腕は私が放った矢を狙ってる。だけど当たりはしない。聖典程じゃないにしてもこの矢も自身である程度は操作できる。

それにたったの一本。私にとっては息を吸って吐く程の操作だ。そしてガイエンは見謝ってる。この矢の狙いを。真っ直ぐに向かってた矢はガイエンの攻撃を避けるために大きく上昇、そして今度は一気に急降下。

でも元々、たった一本の矢なんか驚異に感じてる訳もないガイエンは矢の軌道を見るのをやめてこちらを向く。とことん他人を見下す奴だ。

手に入れた力の大きさと、絶対的な自信が生む隙。それが命取り

だって教えてあげるわ。狙いを定める様に腕を伸ばして黒い腕を構えるガイエン。

「一撃、それで全てが終わる。天と地が入れ替わろうとも絶対……に」

その瞬間奴の顔面スレスレを矢がすり抜ける。それは別に外した訳じゃない。

「天地が何だって？」

そんな言葉の後、矢が突き刺さった地面が盛り上がる。そのせいで地面から少し浮いていたガイエンもバランスを崩した。そして一気に爆発。再び奴の周囲に土埃が蔓延する。

「ちっ！」

だけど今回は流石に対応が早かった。そんな舌打ちと共に土埃を視覚指定したガイエンは腕を振り、カーテナの力で一気に土埃を払いのける。

だけどそれも予想済みの事。土埃から出てきたガイエンの目の前には用意されてた複数の魔法がある。

「小癪な！」

だけどその魔法も、もう片方の腕での攻撃で届く前に打ち払われた。けどまだまだです。みんなはもう、あの瞬間にそれぞれ動いてくれた。その時の私たちに言葉なんて不要だった。

だから今も止まらずに私たちは走ります。両腕を振り切ったガイエン。その僅かな隙が狙い目。私は再び剣の形に組み替えてた武器

を真っ直ぐに奴の喉元めがけて突き立てます。

「これでどうです！！」

「甘いわ！」

その瞬間堅い音が周囲に鳴り響き、私の腕には痺れが走りました。防御なんて出来なかったはずのガイエン。けど私の前には黒い何かが足下から延びてます。

（これは……影？）

そう言えばガイエンは自身の影も操れたんです。でもここまで影が硬質化するなんて予想外。そして私はピンチです。

「結局一人じゃないかセラ！　どうにも成らなかったな」

握りしめる拳が見える。拳と共に私にカーテナの力をぶつける気だ。握りしめる事であの力がどう変化するのかは知らないけど、単純に威力が上がりそうな気がする。

それにこの距離……避けることも間に合わない。だけどその時、ガイエンの腕に炎の固まりが当たった。あれは……

「ナイスだよピク！　今のうちにお願い！」

「よし！」

シルク様のかけ声で一気に数人がこちらに迫る。けどガイエンにはまだ片腕がある。そして案の定その片腕で走り出してた数人が潰された。

でもその影から更に同じ人数が現れた。しかも既にスキルを纏ってる。どうやら、前に居た方は囮役だったみたいだ。これなら行け

る。
でも流石に上位種を気取るだけあって頑丈な体。ピクの炎が当たった腕は既に動き出してた。
「やらせない！！」
私は体を回転させて影の盾を回避して剣を振るう。前方に気が散っていたガイエンは反応が遅れてる。影が来る気配もない。
金色の剣は今度こそガイエンに届いた。握りしめた拳をスパっと寸断。その瞬間に、切り離された拳は影の様に消えていった。そしてカーテナの力も発動しなかった。
「――っつ！　親衛隊！　何をやってる。こいつらを通すな！！」
その言葉でようやく親衛隊も動き出す。ここからが本番。数で勝られて、スペックでも上に行かれてる。この状況で私たちが狙うのはヒーラーを向こう側に通すこと。それだけだ。
私は合流した仲間と共にガイエンが腕を振れないように攻撃を続ける。でもそれだけで四人も使ってる。これじゃ参戦しだした親衛隊の対処は出来ない。
時間も無いし……一瞬だけでいい。道を造らないと！　でも私達にはもう決め技がない。ガイエンを押さえるだけで精一杯だし、これもいつまで持つかわからない。
影まで使われだしたら今の私達じゃ対処出来ないだろうし、どうするどうするどうする！？
「座標ロック。ハイ・バインドエンゲージ！！」
その瞬間迫り来てた親衛隊の動きが止まった。奴らの足下には光

輝く魔法陣。それが筒上に伸びて奴らの動きを止めている？
そして後方か更なる声が届く。

「セラちゃん！」

その声はシルク様……て、事はこの魔法も彼女の？　凄い、ここまで大量の同時バインドなんて初めて見た。でもそれだけに長くは持たない事を彼女は知ってる。
ここが本当に最後の踏ん張り所なんだ！

「親衛隊は良いわ！　全員でガイエンを押さえる！！」
「「「うおおおおお！！」」」

親衛隊の対応に回ろうとしてた奴ら全員集めてガイエンを攻め続ける。反撃する隙を与えないくらいの攻め。けどそれでも当たってる気がしない。
いや……届いてない？　切ってるのに切ってない様な、変な感覚が腕に残る。だけど止めるわけには行かない。

「シルク様は今のうちに！　今度こそ通してみせるから！」
「今度こそ行ける！　だって俺達もいるんだからな！！」

そう今度は一人じゃない。一人じゃないからきっとやれる筈。それぞれで支え合ってる今なら、カーテナの力にだてもっと強く立ち向かえます。

「はい！　わかりました！」

そんな声と共にシルク様は走り出す。目指すはアギト様の場所まで。それまで必ずガイエンを釘付けにしとかないと行けない。

私達のスキルの光が絶え間無く瞬き続ける。ガイエンの体を裂き、腕を飛ばして確実に手数で私達は圧倒してる。でも異常に回復が速い。

次見たときには既に傷らしい傷は一つもないんだ。切り落とした筈の腕だって一瞬で元通りになってる。だけどそれでもいいんです。

私達はガイエンを倒したい訳じゃない。確かにそれが出来ればいいんだろうけど、私達じゃガイエンは倒せない……そんな気がする。

けどだから、倒せる希望に託すんです。決着は彼らがつけ無くなくちゃ駄目だから……ここらでアルテミナスを巻き込んだ因縁にもケリをつけて貰いたい。

何回も感じてるけど、私達は引き立て役ですよ。だからいつまでも寝てないで、とっと起きなさいアギト！

繋がる光がチェーンとなってガイエンを多い尽くしていく。幾ら強大な攻撃でも放てないなら零と同じ。それを私達は絶妙なコンビネーションで実現してる。

何も出来ない親衛隊はその光景を見て声を飛ばすだけ。流石にヤバそうに見えるみたい。実際、ここまで攻撃浴びせて倒せないなら、どうやってって事に成りかねない攻撃の嵐。

でも何かがおかしいとはきっとみんな気付いてる。けどそんな何かは押し込んで、攻撃を続けるしか私達は出来ないんです。

けど遂に、その何かを隠したガイエンは動き出す。

「いかせはしないさ。貴様等がどう足掻こうとアイツはもう死んでいるんだ！！」

その瞬間、弾き掛けてたチェーンボーナスが砕け散った。そして私達の体が今度は止まる。それも痛みを伴って。気付くと地面から伸びた影が私達の体を貫いてます。

「そんな……あれだけの攻撃を受けて……」

「ふん、貴様等の攻撃など、受ける気にもなれん」

え？　それってどういう意味何だろう？　そんな事を考えてる間に、ガイエンはクロスさせて顔の前で握った拳を勢い良く左右へ凪いだ。その瞬間、私達全員に襲いかかった衝撃は凄まじく、後ろを走ってたシルク様をも巻き込んで吹き飛びます。

「「ぐおおおおおおおお！！」」

「「きゃあああああああ！！」」

そんな叫びが響いて消える頃には、私達全員タゼホの地に伏せていました。体が重い……さっきの一撃はかなり効きました。

そしてここからじゃもう間に合わない。完全に私達の負けです。近づいてくる無数の足音。顔を上げると、バインドが切れた親衛隊が私達を取り囲んでます。そしてその囲いを割って進み出る人外。

ガイエンの姿が憎たらしくこの目に映る。

「終わったな。貴様等は届かなかった。これが結果だセラ。お前達の力などその程度。これで諦めも付いただろう？」

「くっ……」

私は何も言い返せません。だって本当にこれで終わりだから。それを思うと、こいつに向ける牙さえもう意味の無いものだと思える。

でもその時でした。いつもいつも、この人は私の信頼を鷲掴みにします。

「本当に……終わったのでしょうか？　それに結果なら、直ぐに出ます。まだ今は過程ですよ」
「何？　頭がおかしくなったのか？　これが結果だ。貴様達は結局アギトにたどり着く事は出来なかったのだからな」

まさしくその通りの筈です。ガイエンの言うとおり、私達は届かなかった。けど、そんなガイエンの言葉にシルク様はその後ろに視線を向けてこう言いました。

「だから……その結論がいささか早計だと言ってるんですよ」
「え？」

その瞬間ガイエンから後ろ、私達にとっては前から微かな光が輝きます。諦めていたその光……それは暖かな回復系魔法の光です。
シルク様が早計だと言った意味はこの事だったんです。

「何！？」

ガイエンがそう叫ぶのも無理はない。それは私達にとっても予想外の事だもの。もう今この瞬間、この場に居る全員の瞳はその光景に釘付けです。
本当に一体いつの間に、あの人はあそこまで行っていたんだろう。アギト様の体が柔らかな光に包まれて浮き上がる傍らで、その光景を作り出したあの人。
それは確かにシルク様と共に、私達のバックを支えてくれてたあの子なんです。

「くっ、貴様！」

ガイエンの視線がシルク様を貫きます。だけど彼女は余裕の笑みでこう言います。

「これだけの人数の回復を全て私一人で支えてるとでも思いましたか？　少し考えればわかる事だった筈ですよ。でも貴方の膨れ上がった自尊心がその目を曇らせました。

まあその分私も、派手に動いた訳ですけどね。けどそのおかげで、完全に抜け落ちた彼女を通す事が出来た。

無駄ですよガイエン。もう蘇生魔法は発動してます！」

降りあげてた腕を振るえながら握りしめるガイエン。それでも彼女を倒す事は出来るだろうに、それをやらないのは諦めたから？　けど本当に大金星。あの走り出したときから、シルク様は自身を囮にしてたって訳だ。

実際完全に騙されました。私達味方までね。私は関心した目でシルク様を見つめます。すると申し訳なさそうに微笑んでくれました。それにきっと

（ごめんなさい。何も伝えなくて）

多分こんな感じの想いが入ってた筈です。けどそんなの全然問題なし。結果オーライだからね。敵を騙すにはまず味方から。

まあ騙すって程でも無いけど、シルク様の作戦は見事にはまったわけです。私がシルク様の事を大声で呼んでたのもよかったのかな？

あれでガイエン達と親衛隊には、アギト様を復活させる役割は必ずシルクだ！　とか思わせられてたのかも。だから彼らはシルク様を通さない事だけを心がけてた？　でもそれも勝手な思いこみ。

私も後衛の誰かを……とか思ってた筈なのに、呼んでたのはいつ

もシルク様だったからね。ガイエン達にとっては居るはずのないヒーラーが出来上がってたって訳だ。
全てが紙一重の綱渡り状態の様に思える事だけど、でも今この瞬間にその知らない賭に私達は救われた。必死にやって来た事が、あの頑張りが、無に帰せずに済んだんだ。

アギト様を包む光が力強くその体に入ってく。あれが新たな命の火にきっとなってくれる。てかそういう魔法で、そういう演出だ。
戦闘不能状態は体が全く動かない状態。力も込められなくて本当に、宙に浮いたらブーラブラしてる。けどそれももう終わるはず。

あの光がＨＰをある程度回復して、感覚も全身に直ぐに行き渡る。だからもうきっと立てる筈。アギト様の体を、光がバランスを取って地面にゆっくりと足を付かせる。
無くした色も取り戻し、完全に舞い戻ってきたはずのアギト様。だけど光が萎んでいくと、信じられない事が起こった。

「ふあああ、きゃ！　って、えええええ！？」

ちなみにこれは蘇生魔法を掛けてくれた仲間の声です。それだけ衝撃的な事がそこでは起こってました。そして流石にこの出来事まではシルク様も考えて無かった様子。

「そんな……どうして……」
「くくく、はーっははっはははははは！！　どうやら貴様達の希望は立ち上がる事さえ出来ないらしい。所詮奴などその程度よ。
お前達が知恵を絞って得た結果がアレとはな。アレがどうやって私を倒す？」

ガイエンの高笑いを私達は止められない。それだけ今、目の前で起こってる事が信じられなくて、頭が理解しようとしない。
だって、私達はアギト様を復活させれればどうにか出来ると、本当にただ漠然と信じてたから……だから、これはようやくたどり着いた一生懸命の先にしては酷すぎる。
私達の目のまで何が起こったか……それはアギト様が目覚めないって事。彼女の蘇生の光が、地面にその足を付けさせてもアギト様は自身の足で立つことは無かった。

光が消え去った瞬間、再び彼は地面に崩れる様に倒れたんです。それが私達に信じれない。いや、あり得ない事でしょう。
色も戻ってＨＰだってちゃんと黄色位まで回復してます。蘇生魔法が上手く行かなかった訳じゃない。でもだからこそ、理解できない。
だってゲーム上は、アギト様は復活してるんです。けれど目覚めないのはどうしてでしょう。まるで心だけ、意識だけどこかに忘れてしまってる状態とでも言うのでしょうか？

「えっえ？　私何か間違った？　駄目だった？　何でこうなるの～」

情けない声を上げて一番近くに居る彼女がアギト様の体をユサユサします。でも何も返らない反応。堅く閉じきった瞼はピクリとも動きません。

「無駄だ。起きないのはソイツが起きたがってないからじゃないか？　お前達が思ってる程、ソイツは頼りになる奴じゃない。
腰抜けで、他力本願で、期待に応えれない……そんな奴だ。結局お前達の望みも流すような奴。もういいだろう。起きないのなら、また眠らせてやろう」

そう言うガイエンにはさっきまでとは違う余裕が見える。掲げてる腕には、既に無駄な力は入って無く、終わらせることにもう躊躇い何て無いみたい。
ここからでも、ガイエンは終わらせる事が出来る。カーテナなら、このくらいの距離は難なく飛び越えられるからね。

炎の熱と元の暑さをはらんだ風が頬を抜けていく。必死に目指した場所での、予想外の裏切り。起きたがってない？　まさか本当にそうなのかな？
アギト様なら……と思った。ガイエンを止めて、アルテミナスを救えるのはこの人だと……勝手に私が押しつけてた？
私が勝手に延長戦を望んだだけで、アギト様は確かにそれを望んでないのかも。だってあの時、あの炎の壁の向こう側で、決着が付いたから彼は地に伏せてたんだ。

一度負けたんだよ。それなのに私は、何を持って彼ならと思ってたんだろう。勝てなかった相手に勝つ事を期待するなんて、それは身勝手だよね。
想いの押しつけなのか、私こそ他力本願なのかも知れない。生き返った筈なのに、立ち上がらないアギト様を遠くに見て、私はそう思う。
でも……私はその時、勢い良くガイエンの腕に飛びつきます。

「そんな事……無い！　アギト様は腰抜けでも弱虫でもないわよ！　ただちょっと準備してるだけ。心がアンタと対峙する為に必要な物を探しに行ってるだけよ！」
「このっ！　見苦しいぞセラ！　奴は逃げたんだ！　それを理解しろ！」

そう言ってもう片方の腕をガイエンは振ろうとします。ヤバい…

…私は一本だけを押さえるので一杯一杯です。アギト様のＨＰは万全じゃない。
だからこの一撃を打たせるわけにはいかない……のに！
「アギト君は確かに腰抜けではないと思うんですよ。私もね」
「シルク様！」
もう片方の腕に飛びついたシルク様のおかげでカーテナの攻撃を防げた。だけど流石にこう言うのはウザいみたいなガイエンは私達二人を睨んで叫びます。
「貴様等、いい加減にしろおおおお！！」
その瞬間足下から黒い影がせり上がってきました。そしてそれは私達を押し退ける質量を持ってます。まるでその黒い影が波のように私達を押し流します。
「「きゃあ！！」」
悲鳴と共に、気付いた時には私達はガイエンの腕から放されてました。そして怒りを称えた様な表情で睨むはアギト。
良く見ると、ガイエンの黒い腕にはさっき溢れ出てきた影が絡まってる様に見えます。
「アギト様をお願い！！　逃げて！！」
私はとっさにそう叫びます。だって明らかにヤバいもの。今の私達じゃどうやったって守りきれない。けど、もしも本当にアギト様がガイエンの言うように目を開けたくないのだとしても、私達は信じるしかないんです。

だから……お願い！！

「え？　あ……そんな～」

けれど情けない声を上げて涙目な彼女。確かに怖いのもわかるし、無謀かも知れない。けど今、アギト様を守れるのは彼女しかいない。前の方ではガイエンが腕を振り出してた。迷ってる時間なんて無い。

「お願い！！」

私は短くそれだけ言います。すると彼女は「もう！！」と叫んでアギト様の襟部分を掴んで精一杯横に飛びました。

その瞬間、ドパンと地面が弾け振動が伝わります。大丈夫だっのかかなり際どい……けど土埃の中から微かに見え出す二人の姿。

私は少し安堵します。けどガイエンは潰すまで止めないみたい。既に次の攻撃に入ってる。けどその時、仲間達が動いてくれました。

ここから私達の戦いは逃げと守りに変わります。

さまよう意識（後書き）

第百十六話です。
みんなの思いが合わさって今ここにミッションコンプリート！
の筈だったけど、そう簡単には行きません。まあ十分苦労したけど、アギトは過去を見終わるまで帰ってこないでしょう。だからそれまでセラとシルクには頑張って貰わないとです。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではまた。

力と恐怖（前書き）

ガイエンの機転で互角以上に渡り合える結果になったエルフ軍。これで俺は心おきなくゼブラ達の救出に向かえる。けどそこでも奴の卑劣な策が俺を追い詰める。肉体的にではなく、精神的にだ。奴が笑って俺の前に盾として出すのは苦しみ悶える仲間達だった。

力と恐怖

「無理よ。間に合わない。確かに私達は一杯食わされたけど、アイツを甘くみない方がいいわよ」

俺の腕の中でそんな事を言うウンディーネの案内人。拉致したソイツを抱えて戦場と化したこの場を走っている物の、こいつは何故か俺の心配でもしてるのか？

それかやっぱりその場所は教えたくないって事かも。でも生憎、今の俺は優しさなんて持ち合わせちゃいない。

「何だよソレ。余計な事は口にするなよ。お前はただ目指すべき道のりさえ発してればいいんだ」

「む……あ～あ～折角の忠告なのに。私もアイツの事は嫌いだから言ってあげたってのになによ。ならアンタも死ね！　あのクソな奴と相打ちにでもなってね！」

バタバタバタバタと腕で暴れるウンディーネ。何てウザい奴だ。グサッと行くぞグザッと。けれどそこは我慢して進み続ける。戦場の中心から端へ、そしてその先に少し行く。

ドデカいクリスタルの岩が数本密集してる場所。そんなに離れてないけどこの雨だとやっぱり見つけるのは難しかったはずだ。

幸いなのは奴らが俺達を取り囲む様に攻めてきてたって事だ。まあそのせいで敵の本陣がどこかはわかりづらかったけど、本陣の方まで同じ厚さだったから突破は用意だった。

後はこいつがちゃんと真実を言ってくれた事だな。奴の事が嫌いってのは多分事実何だろう。あのクリスタルが密集してる中に奴と

きっとゼブラ達も居るんだろう。
その証拠に何小隊かが周りに配置されてる。でもいずれも人のみで構成された部隊だな。連合ってのもそう単純な物じゃないって事か。

でもそれはそれで都合がいい。実際ウンディーネが一人でも居たらこの隠れ方に意味があるのか怪しいからな。単純に茂みに身を潜めるって……しかもかなりの近距離。
それでも気付かれないのはこの雨のおかげだし、ウンディーネがいたらそうは行かないだろう。

「悪いけど、もうしばらく付き合って貰うぞ。今放して、叫ばれでもしたら意味ないからな」
「別に……戦闘中にそんな情けない声は出しませんよ。それに貴方なら私が叫ぶ前に倒せるでしょう。いいですよ、せいぜい存分に殺しあってくれればこっちは愉快痛快だから」

抱えられた腕の中でニシシと笑うウンディーネの少女。実際どうするか厄介だったから、そう言われると楽になる。でもこいつわかってるのか？

「あそこにはお前の上司だって居るんじゃないか？　いるならきっと戦闘は避けられない。俺はもう、容赦も加減もしないぞ」
「それってスズラ様の事？　なら大丈夫、あそこには居ないもの。貴方達のトップを取りに行く役目、それがあの方だったから今頃ハズレを引いちゃってる頃よ。
だからいいのよ。丁度ね」

今度の笑みは妖しい子悪魔的な顔をしてる。それにしても今の話からすると、スズラがいたら絶対に案内しなかったよなこいつ。

でも貴重な情報だったことは確か。あのおっかない武士が居ないなら、かなり楽になる。俺は大剣握りしめて勢い良く飛び出した。

やるならまさに今がベスト。一つ一つの雨粒が肌を打って落ちていくこの瞬間でもきっとスズラは戻ってきてるだろう。

ならアイツが戻ってきたときには全てを終わらせておいてやろう。

「邪魔……するなあああああ！！」

横に振り抜いた大剣が小隊二つ分を一気に凪ぎ払う。立ち上がろうとする奴も片っ端から潰して、邪魔者も居なくなったところで奥へと進む。

するとそこには間違いない奴が居る。そしてその後ろに浮かぶ水泡。

「やってくれる。本当に胸くそ悪い姿だなお前達は。まさかあの状況で示し合わせるとは、流石はここまでアルテミナスを支えてきた両雄と言った所か？」

「はっ、そんな事今までは認めたくも無かったけどな。でもそんな所だ。さあ、チェックメイトだ。言っとくがな、お前はどうあってもここで潰す！」

こいつは危険だ。本能がそう伝えてる。ＬＲＯがゲームだからってやりすぎだ。俺は連れてきてたウンディーネを放して剣を構える。

周りの奴らもぶっ倒したし、今更必要ないからな。

「殺さないでくれるんだ。敵なのに」

「うるせえよ。今はただ、お前に向ける剣が無いだけだ。わかった

らとっとと消えろ」

今はただ目の前の奴をぶっ殺す事してゼブラ達を救い出すことが最優先。それに力の差は見せつけてる。こいつ一人でここで向かってくることは無いだろう。

だから逃がしても問題なし。だからとっとと消えれば良い物を……何でクリスタルの影に隠れるだけなんだよ。

「ふん、随分あっさりとここまでこられたら思ったら、裏切り者がいたわけか。これだから魚は飼うには向いてない。

捕まえたのなら食べるのは一番。そうだろ？」

奴はそんな事を良いながら何故か俺に同意を求めてくる。でもそれに答えたのは俺じゃない。

「別に裏切った訳じゃないわよ！　私はそいつに拉致されたの！勘違いしないでよね！　それとだれが魚か！　言っとくけど、私たちを食べられる何て思わない事ね！」

「魚は礼儀も知らないようだな。それと立場の違いも。釣り上げられる側であれば良いも――うお！？」

さっきからこいつは何をベチャクチャ喋ってるんだ？　得意そうな話術で自分のペースにでも引き込むつもりなのか知らないが、こっちはそんな会話に付き合う気はねーんだよ。

「さっさとゼブラ達を解放しやがれ！」

不意を付いた一撃を避が避けられた。けどそれはただの偶然だろう。こいつはどうみても直接戦闘を得意とするタイプじゃない。

次で決める。ＨＰが尽きるまで叩き込み続けてやる。弱みなん

てもうないんだ。こいつのムカつく顔を一分一秒でも見てるのがイヤだから、どうでも良い会話になんか付き合ってられない。

「ゼブラ？　ああ、それはこいつだったかな？」

そう言って俺の盾が届く前に奴は後ろにあった水泡を移動させた。それは目の前、眼前だ。そしてそこには苦しみ悶えるゼブラの姿が有った。

「――っつ！！」

止まれと、その瞬間俺は心で叫んだ。だけど遅かった。ナイト・オブ・ウォーカーと加護で強化された俺の一撃は速い。

その勢いはちょっとやそっとじゃ自分でも押さえきれない。だからその勢いそのままに俺の盾は水泡に到達した。突起が水膜を破り、その瞬間に一気に水が弾けた。

まるで水風船が割れた時みたいな感じ。そして辺りに水をばらまく中で、止まらない盾は苦しんでいたゼブラにまで深く届くんだ。

「ふぎっ！？」

その瞬間、この腕に伝わる感触がこれほど気持ち悪いと思った事は無かった。でも、それでも結局俺は振りきるまで止まらなかった。

俺の攻撃を受けたゼブラはクリスタルにぶつかって地面に崩れる。それがダメージに成ることは無いってわかってても、衝撃はきっとハンパない。

助けようとした相手を、結局は傷つけてる。

「ははははは！　容赦がないね君は。流石は騎士だ。役立たずな部

下には鉄拳制だね。でも苦しみからは解放された訳だし、それもやさしさ……だよ」

優しさの言葉の後のわずかな溜。そこで微かにイヤらしく微笑んだ奴の口元を俺は見逃しはしなかった。いや、それもワザとか。見せるようにきっと笑ったに違いない。

振り払った奴の楔。だけど今でも僅かに捕まれたそれを利用されてる。

「ア……ギト様……」

その時雨の中から聞こえた弱々しい声。それはさっき吹き飛ばしたゼブラだ。俺の攻撃はダメージに成らないが、それでも残ってるＨＰは僅か。

相当奴にジワジワといたぶられてたみたいだ。そこで俺の止めに実際なら成ってるはずのあの一撃……けどゼブラは、そんなボロボロの状態でこう言った。

「助けて……くれて、ありがとうございます」

ゼブラのそんな感謝の言葉……だけど俺の心はそれを受け止めきれないでいる。

（違う……助けれてなんかない。俺は何も出来なかったんだ。それなのにまた傷つける事でしか苦しみから解放出来ないなんて……そんなの）

俺はゼブラの顔を見れない。あれは絶対に助けたなんて言えないから。でも何も言わないわけにも行かない。だから俺は下を向いてこう答えた。

「ああ、ちょっと待ってろ。直ぐに全員解放して、この戦いを終わらせる！」

自分のふがいなさは、それを利用する奴にぶつけよう。この苛立ちと怒りも、それがきっと正しい向けるべき相手だ。

何だか重いんだよ。「ありがとう」のその言葉が。感謝の言葉で有るはずのそれが、何故か俺の胸には突き刺さってる。

「ふふふ、仲間の傷など大局の為ならば致しかたないか。流石流石。まあ私は君とやり合っても何の特も無いんだし、その調子で行ってみようか！」

奴がそう言って指を鳴らした直後、水泡の中の泡の数が倍増した。そしてそこでのもがき方も激しさを増す。ＨＰの減りも今までの比じゃない。

「きっさまあああああ！！」

俺はそう叫ぶと同時に駆けだした。けどその時、奴は残り三つの水泡をそれぞれ三方向に移動させた。それぞれがこの空間でもっとも離れた場所へとだ。

「いいのかい？　このままじゃ直ぐにでも大事な仲間が苦しみの果てに死ぬことになる。助けたかったんじゃないのかな？

まあただし、あの水泡は生半可な攻撃じゃ潰せない。でもコツはわかってるだろう？　さっき壊した時と同じ勢いで叩けばいいんだから」

「くっそ！！」

俺は方向転換してまずは一番近い所へ向かう。何で……こんな時の顔はやたらとはっきり見えるんだろう。苦しんで……泣いて……手を伸ばす……そんな姿が俺に向いている。

さっきと同じ。でもそれじゃまた吹き飛ばす事に成る。それはまさに追い打ちで止めを刺す気分だ。でも見る見る減っていくＨＰは待ってはくれない。

死なせないのが最優先！　それだけを頭に置いて俺は剣を振りかぶった。

パンッという音と共に、雨とは違う水が顔に掛かる。そしてその時には既に、俺の剣の下に助けるべき仲間が倒れてる。

けどそれでも……弱々しく言ってくれるんだ。

「ありがとう……ございます」

そして再び俺の胸の同じ部分にその言葉が刺さってしまう。この光景を見てた等さ……自分が何を助けたかったのか分からなくなる。

けどそんな思いをそのままに、俺は残り二人も水泡ごと吹き飛ばした。「そうするしかなかった」がまた言い訳だ。

そして二人も等しく「ありがとう」をくれた。どう受け取っていいのか分からないそのありがとう。本当に何が最初の騎士だ。

こんなんで俺は……一体何を守れるのだろう。いいや、守ってた気になってたんだろう。数発同時に空から降り注いだ雷がここのクリスタルに直撃した。

雷の力で僅かに輝いたクリスタルがきっと痛々しい俺の姿を映してる。そして気付くと、そこに奴の姿はもう無かった。

（逃げられた）

そう言えば「特なんて無い」って言ってたっけ。奴にとっては俺を利用する事なんかちょっとした思いつき。だから別に慌てて何か無かったし、未練も何も感じて何か無かった。

ちょっと予定を修正するだけ何だろう。ここで本当は奴を倒すべきだったのかも知れない。そしたら少なくとも、俺たちに負けは無かったんじゃないか？

さっきは本当に、勝利を拾える一歩手前まで来てたのかも……でも俺が選んだのは、受け取り方が分からない、ふがいないゲームでの生だ。

「すみません……俺達のせいで奴には逃げられましたね」

回復用アイテムでＨＰを回復させたゼブラがふらつきながら横に来た。ＨＰが戻ったからって精神まで回復する訳じゃない。

あの苦しみはまだ心の内側に効いていそうだ。

（あの野郎……）

そう思って俺は拳を握り締める。何でこうなったか・・それは奴の悪意の糸に絡まれたのが原因だ。おちょくる様に人を利用しやがって、奴は逃がしてはいけない敵だ。

今ならまだ、やれるんじゃないか？　そんな思いが脳裏をよぎる。その時、どこかからパシャッと水を踏む音が俺には微かに聞こえた。

（アレは……）

俺は少し口元を綻ばせるとそちらへ一気に加速する。きっとアレは頼りになる目だ。

「ぷぎゃ！！」

そんな声を出して地面に叩きつけたのはまた同じウンディーネだ。つくづく縁があるってか、まだ逃げて無かったのかよ。

「アギト様！　そいつはウンデェーネじゃないですか。倒しときましょう！」

そう言ってふらつく足で武器を構えようとする面々。だけど俺はそれを制した。

「いや、その必要はない。丁度良いんだよ。コイツはな」

「というと？」

ゼブラ達は訳が分からないという風な顔で互いを見合う。だけど次の言葉を紡ぐといたく驚き、反対された。

「俺はコイツの目を使って“奴”を追う。今なら一人だろうし、俺なら追いつける。多少敵が居ようが関係ない。

だから……お前達は本隊に戻ってろ。直ぐそこだ。戦闘中だけど、まあ優勢だろうから無理はしなくて良いはずだ。

少し休んでろ」

「な！？　何言ってるんですかアギト様！　危険過ぎます。それに一番大変だったのはアギト様でしょう！　貴方がそこまでやらなくても、一度本隊と合流してからでも良いじゃないですか！」

ゼブラのそんな言葉に周りのみんなが「うんうん」と頷く。まあ確かに、ガイエンへの印象も少しアップしたし、それも悪くない……けど、そうしたらきっとガイエンは俺を単身で行かせるわけ無い。

戦友とかじゃなく、一戦力としてそれを許さないだろう。けどこのチャンスは今しかない。

「今行かないと、追いつけない。態勢を立て直されたら、この戦い長引くぞ。そうなるとこっちは不利だ。何てたって向こうは、俺達にはない目を持ってるんだからな」

そう言って俺は捕まえてるウンディーネへ目を向ける。すると何かを懇願するような目を向けてパチパチしてる。だけど生憎、俺達はアイコンタクトが出来るほどの関係は築いてない。

「いつまで押し倒してんじゃって事よコラアアアアア！」

「「「うお！！」」」

姿に似合わない暴言を吐くウンディーネ。泥水の中に押しつけてたのが余程感に障った様だな。俺は取りあえず、ウンディーネを持ち上げる事にした。

今度は肩に背負う感じ。腕だけで支えるのは正直きついからな。

そんなこんなでちょっと崩れた空気感。けど立て直すようにゼブラは言う。

「確かにそれは有りますけど……なら自分達も連れていってください！　今度こそお役に立ちます！　あんなヘマは二度としません」

すると他の三人もやる気な瞳を輝かせる。まあコイツ等ならそう言うと思ってたけど……でも。

「ダメだ。それにＨＰは戻っても苦しんだ疲れが残ってるだろ。そんな状態のお前達が居ても邪魔なだけ」

「そんな……」

降り続く雨が一層冷たく感じるのは気のせいか？　いや、きっと気のせいじゃない。一気に下がったゼブラ達の空気が雨にまで染みて伝わって来てるんだ。
でも、もうあんな事にだけは万に一つも成ってはいけない。だから俺は離すんだ。
「今のお前達は足手まといなんだ。だから絶対に付いてくるな」
俺はそう言うと本隊同士がぶつかり合ってるのとは逆方向へ走り出す。多分きっとこっちだと思うからな。奴が戦闘に参加するとはなかなか思えないし、それにこの状況なら一時撤退が定石。
後ろは見ない……けど、寂しそうにしてる顔が浮かぶのは何故だろう。アイツ等とはそんなに時間を共有した訳じゃないんだけどな。
「ま、別に教える分にはいいけど……後悔しても知らないよ」
「後悔なんて、さっきまででもう何十回としたさ。それで選んだ道だ。俺が奴をぶっ倒す！」
ゼブラ達と分かれて、やけにあっさりと奴の道のりを教えてくれるウンディーネの案内で俺はこの地を独走してた。
「それって復讐？　でも十分それならやったと私は思うけど。奴の悪巧みも潰して、あれだけ追い込んだ。それじゃダメな訳？」
「ダメだな。元が敵だし……それに復讐だけじゃない。奴はどのみち生かしておけない。アルテミナスの為にもな」
それにぶつけたい……この怒りと自分のふがいなさをさ。それを

やれればどうにか成る気がする。でもそう考えると随分、ワガママな事だな。
けどそれをやらないと、俺はこの突き刺さった「ありがとう」をどうする事も出来ない。それじゃ自分が情けなさ過ぎるだろう。
アルテミナスの為とか言っといて自分で笑える。結局俺は敗北の二文字を消したいだけじゃないのか？

（まあそれでも、奴は潰すがな）

心の中でそれを結論に俺は走る。雨が遮るカーテンをかき分けて、きっと前へと。

「うおおおおおお！！」

振りかぶった大剣が雨を切り割いた。けど奴には当たってない。奴のあの回避……最初は偶然だと思ったけど、どうやらそうじゃないらしい。
攻撃・防御は除いての回避スキルを優先して組み込んでるのか？
やたら避け方が上手い。

ようやく追いついた奴に、俺は間髪入れずに攻撃を仕掛けた。周りに数人居た護衛は諸ともせずになぎ倒して、向かうがなかなか以てしぶとい。
けどこっちも逃げ続けられる様な柔なスキルじゃ決してないんだ。
「アンタは絶対に俺がこの手で葬ってやる！　あの辛さをその身に刻んでな！　だから、鬼ごっこはもおう十分だ！」

スピードもパワーもこちらが上だ。それに実践もそうだろう。ならやりようは幾らだってあるんだよ。徐々に掠る具合が深く成るのが感覚で分かる。
あ、ちなみにウンディーネは奴の姿が見えた瞬間捨てた。
大剣と盾を組み合わせた追い込み攻撃。そしてついには大量の雨粒に打ちつけられた所を俺の大剣が捕らえた。

「ぐはっ！！」

そんな声と共に斜め前方に吹き飛びそうになる奴。けどそんな一発で気が済むわけもない。俺はその勢いを全て盾で叩き弾いて、再び大剣を打ちつける。
それは自身一人でチェーンを繋げる程の攻撃速度。再び俺の周りの空間だけ、雨が落ちてなかった。
そしてチェーンの光とスキルの光が重なりあって爆発する。奴は自信から煙を上げながら塗れた地面を転がっていく。

「どうだ痛いだろ？　けどアイツ等はこれの何十倍も苦しんだんだ。だからお前も苦しみながら逝け」

打ちつける雨が、地面に貯まった水たまりがそんな俺の姿を映す。けど僅かに残ったＨＰで奴は笑ってた。

「くくく……はは。なんだいそれは？　自身に対する言い訳かい？
それか責任転嫁。私に負けた君が悪い。何も出来なかった君のせい……そうだろ？
餓鬼が、責任という意味も知らずに持った力で奢るなよ！」
「――っつ！？」

何だコイツ……死にかけの癖に変な威圧感がある。大丈夫落ち着

け。奴に何が出来る訳はないんだ。ただ最後に得意な話術でこの場を逃れようとしてるだけ。

「くく、良い顔だ。君は結局何も守れないし救えないと気付いたかな？　分かってるんだろう……だから君は一人なんだよ。

それだけの力が有っても何も守れる気がないから、君は仲間を置いてきた。怖くて仕方ないんだよねぇ、この私が！」

奴の言葉がねっとりと絡み付いてくるような感覚。大きな蛇が足先から這いあがって来てる様。何で……何でこいつは簡単に他人の心を抉る。それも的確に。

怖くて自信が無くて、見れないから全部をコイツにぶつけたかった。元凶を断ちに来たはずだ。けどコイツは、まだ笑ってる。

（何で何で何で何で……どうしてだよ！）

殺せ殺せ殺せ、そんな言葉が呪詛の様に頭を回る。危険なんだコイツは……だから！

「うあああああああああ！！」

その瞬間、地面に深く大剣は突き刺さる……そんな衝撃がこの場に静かに伝わってた。

力と恐怖（後書き）

第百十七話です。

さてさて、アギトは奴を倒せたのかな？　でもそれで言われた事が間違いとされう訳じゃ無く……それに奴もただじゃやられないよね。誰しもが想いを持ってこの戦場にいるわけだし、奴の振る舞いは決して自己陶酔なんかじゃないのです。

そしていくつもの想いが絡み合ってアギトを追い詰めて行きます。

てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

氷の牢獄（前書き）

タゼホでアギト達と別れ、セツリを助け出す為に僕達はシクラの後を追ったんだ。そして辿り着いたのがここ『エデン』。この場所は昔、セツリがサクヤと共に過ごしていた仮仮想空間とも呼べる場所。

そしてここに来る前に現れた敵が『柊』。だけどそれでも負けずに手を伸ばすつもりだった。けど僕は失敗した。それはセツリにとても深い溝を作ってしまう。そのせいでセツリは背を向けて歩き去ってしまった。

扉の向こうへと……そして僕は深い湖の中へ沈んでいく。

氷の牢獄

暗く底が見えないほどの湖に僕は落ちて行ってる。拒絶されたその腕を伸ばしたまま、水をかき分ける気にもなれないでいた。

（セツリ……）

振り向きもしなかったなアイツ。僕のせいか……届かないのかなもう。だけど……まだ上を見上げれば僅かな光がそこには見える。ユラユラと揺れるこの世界の太陽の光。きっとゆっくり優しく流れて筈の時間が有ったんだって、ここに来て思ったよ。

セツリがそれを望んだことだって、誰にも否定出来る事じゃないのかも知れない。特に家族でも無い僕なんかはさ。

自分の人生だ……好きにさせれば良いのかも知れない。けど人は一人じゃ生きてなくて……でも、アイツはまだ一人きりだと思いこんでる。

もうそんな事絶対に無いのにさ。少なくとも僕達はそう思ってるんんだ。だから強引でも何でも、関わったからにはこっちは見捨てられない。

（助けたい）

そう思う心をまで拒否はさせない。今はまだ届かなくても、間違って無いと思うなら、諦めたらダメなんだ。本当はさ……もっと違う形でここに来れたかも知れない。

前にサクヤの映像で見た、暖かな場所であれたかも知れない……

のに、去っていったアイツは寂しそうだった。僕のせいでだ。
でもだから！　やっぱり自分しかダメなんだと思う。二対の流星の剣セラ・シルフィングが風を呼び、僅かな光をここまで届けてくれる。

（まだ流れてる。風はきっと届くよな）

想いを感じる様にセラ・シルフィングは応えてくれる。示す道はまだ続いてるって言ってくれてる様だ。

（行くか……）

握った二対の剣。僕はその剣を水中で振り切った。続けさせるために、諦めないで追いかけよう。だって僕達が頑張って来た旅の終わりはこんなんじゃない。
こんなの絶対に認めれる訳がない。

水面に大きな水柱が昇る。それは僕が振り切ったシルフィングの影響だ。真っ二つに分かれた水が風によってへだたれてる。
そんな中に僕は居た。暖かな日差しが惜しげも無く降り注ぐ。見上げると真っ青な空が広がってる……けど、あの大きな扉はそこにはもう無い。
閉じた事で消え去ったようだ。これでまた、追いかけっこの始まりか。でも、ここにはまだ足がかりが居る。
「あ〜あ〜、派手な復活。でも良かった。あれで終わりじゃ面白味が無いですもの。もっとあがいてみなさいな。そしてそんな貴方を

木っ端微塵に潰してあげる」

その声は割れた水面の向こう側から聞こえ、僅かに見えるその姿……きっと柊だな。やっぱり僕の事を潰したくてウズウズしてるようだな。

別に嫌われる事をした覚えはないけど、きっとセツリ関連何だろう。

奴は水面を歩くことが出来るから、水面に立つこと何てお茶の子さいさいか。でも丁度いい、だって最後の望みの綱が柊だからな。こいつだけは逃がせ無い、聞きたいこと、知りたいことが山ほど有るんだ。

「足掻いてやるよ。足掻いて足掻いて……僕はもう一度セツリを取り戻す！　だから、お前を倒す！！」

湖の底を蹴って割れた水を駈け上がり水面にあがる。でも僕は水面に立つ事は出来ないし、泳ぎ系のスキルも持ち合わせちゃない。

だから反撃を食らわない程の一撃を叩き込んで、態勢を立て直す時間が絶対的に必要だ。水面から空中にまで飛んで柊の姿が見える。十四・五歳の容姿で、ヒラヒラした服にあの扇がミスマッチに見えて仕方ない。

でも柊が持ってるから許される？　そんな感じが有るのも事実。けど厄介だからなアレ。攻撃の原理がわからない。でも何であれ、今はただ思い切りの一撃をぶつけるだけだ！

「食らえええええ！！」

シルフィングに風と、そして電気が宿る。これで奴を水中にまで

たたき落とせば、それ相応のダメージが期待でき筈だ。水は電気を良く通すからな。
だけどその時、柊はあ扇子を俺に向けた。慌てた様子も無く、奴は優雅に扇子を回してクルリと自身も回る。その瞬間だ。俺の視界も同じように回りだしたのは。そして気付いた時には水中へ落とされてた。

しかも自分で発生させてた電気で思わぬダメージを被った。電気による感電は直接的な自身の攻撃……ではなく、能力と現場の相性に寄る二次効果。だからしっかりとダメージとして通りやがった。

「ぶはぁ！」

防具や服……それに武器もやっぱり重いな。でも全て重要でどれが掛けても困る代物。何とか顔は引っ張り出した物の、このままじゃ溺れそうだ。
てか、どうにかして陸に上がらないと不利すぎる。

「スオウ！」

その時陸の方から聞こえた声。それはリルレットだ。けどみんなも地に伏せてる状態に見える。どうやら柊のあの不可解な攻撃にみんなやられてしまってる様だ。
あれだけの人数差をも物ともしないだなんて……これじゃあマジで、今の場所で戦うのは自殺行為に等しい。シクラのそうだったけど、こいつ等はＬＲＯというゲームに乗っ取った戦い方をしない奴らだ。

まあだからこそ『裏側を知る者』なんだろうけど。ようはそれって反則だ。でも俺たちはその反則的な力に挑まなきゃいけない。で

なきゃたどり着けないんだ。
諦めないと決めたのなら、こいつらにも勝たなきゃいけない。
「あらら、折角生かして置いたのに邪魔する気なのね」
そんな事を言う柊の頭上には魔法の光が有る。あれはソーサラーの魔法……それがまっすぐに柊めがけて降り注ぐ。結構大きな魔法だ。
避ける事なんか出来る訳ない範囲。それに術者は遠く、今までの様に、届く前に何かやる何て出来ないだろう。これなら！
「甘いのよ。本当にね」
その瞬間真っ直ぐに落ちていた魔法がネジリを伴って曲がった。そして僕の方へ落ちてくるじゃないか！　なんて事しやがるんだアイツ！
「うおおおお！！」
僕は必死に泳いだ。重い体を引きずって必死にさ。でも魔法は迫る迫る。そして高い水しぶきをあげて水面へと落ちる。その瞬間、再び高い波と共に僕は水の中へ引っ張られた。
「がぼぽぽぽっ……」
口の中へと進入してくる水が苦しい。アイツ・・何でもあの扇子通りに操る事が出来るのか。魔法ま
でその対象なんて、どうやって攻撃を仕掛ければいいんだ？
くっそ、本当に反則的な奴らだ。ああいうのが後三人位いるんだっけ？　イヤになるな。一体何者何だろう。

気になることは山ほど有るけど、けど今は――

「がっはがは！！」

水面に何とか出て空気を貪る様に吸う。マジで危なかった。やっぱり水中はいろんな意味で危険だ。

「どうしたの？　苦しそうですね。丁度いいからもっともっと苦しんでみる？」

そう言って向けられる扇子が異様に怖い。いつの間にか側に歩いてきてた柊は良く見たら汚れ一つ無い。さっきまで一人で多数を相手にしてた奴の格好とは思えないな。

それだけ圧倒的だったって事か？　みんな確かに強いはずなのに……それでも届かないのかよ。俺は抵抗するようにシルフィングを交差させて構える。

けどそれは何の意味もなく、柊が扇子をクルリと回すと、僕の体も同じように逆さになった。つまりは足が水面から出てる状態。当然、いきなり奪われた空気に軽くパニックだ。

きっと相当間抜けな格好だろうな。でもこっちは必死に体を動かそうとしてる。だけどどう足掻いても頭が上へ行くことはない。

（あ……やばい……暴れたせいで酸素が足りない……）

くっそ、こんなふざけた攻撃でやられるなんてあり得ない。歯を食いしばり、薄れゆく意識の中でシルフィングの片方を水面の柊に向けて振りあげる。

届かない訳がない……だってシルフィングは風を纏う剣なのだから。もう一度水ごと切り裂いてやる。そんな気概を胸に振るシルフ

ィングは、僕の思いに応えてくれる。
刀身から生み出る風は水の中でうねりとなって柊へと向かう。水面から飛び出す時には、風は水をも巻き込んで強力な一撃となっていた。
そこにセラを冠する事で得た雷撃まで重なりあえば、三つの特性を複合させた攻撃へと相成る。

（届け！）

僕はそう願いながら、攻撃の行く末を見守る。柊は向かいくる攻撃を前に、一度扇子を畳みそして再び開く。いつものモーションにワンテンポ加わった動き、けど後は同じだ。
迫る攻撃に向けて扇子を振るうとたちまち攻撃が分かれる。風のうねりと雷撃、そして水。三つの力の内、風と雷撃の二つは扇子の動きのせいであらぬ方向へ曲げられた。

けど水だけはそうじゃない。ただの水柱だけど、確実にそれだけが柊の扇子の影響を受けてなく見え、そのまま向かってる。

「濡れるのはいや」

けれどそう言った柊には最後には届かなかった。奴は再び畳んだ扇子を開いて、クルリと回して今度は逆側に凪ぐ。すると水柱は風に煽られでもしたように、柊を避けて湖へと帰っていった。

「残念。苦し紛れの攻撃も届かなかったわね」

確かにそうだ。でも苦し紛れの目的は達してる。奴に支配されてたこの体……柊が扇子を畳むと同時に自由に成れた。

それにさっきの行動の意味……あの「畳む」という動作は『リセットとスタート』を意味してるんじゃないか？　対象のリセット、そして変えた対象への力の干渉のスタートだ。

そして思わぬ収穫が、あの力は一度に二つまでにしか影響しないって事だ。まあまだ確証は無いけど……それとも相手の力への干渉なのかも知れない。

さっき影響を受けなかった水は、セラ・シルフィングの力じゃなくて、いわばその干渉で起きた余波みたいな物だ。

だからって線も無くない。でもどちらにしろこれは使える。この湖から脱出するためにさ。

「一つではだろ？　じゃあこれならどうだ！！」

僕はそう叫ぶと、水面で両手のシルフィングを振りかぶる。それに伴って再び風が――って水がついてこない？　いや、片方は水も伴って再び柊に向かってる。けどもう一方は風と電気だけ……

（どういう事だ？　腕の振り方が不味かったとか？）

ただの干渉だけにシステムが補ってくれてる訳じゃないから、そこら辺は技術なのかも。右は利き手だから良いとして、問題は左だな。

てかそんな事を考えてる間に、柊は一線で両方の風と電気を退けていた。残ったのはやっぱり水柱。同時に二つしか……なんて事は間違いか。

「幾らこんな見窄らしい技打とうと、私の固有スキル『天扇』には及ばないわよ」

『天扇』――それが柊の振るう力の名称。固有スキルってつまりは奴だけの唯一無二って事か。それって『バランス崩し』と同列クラスじゃないか？

まあカーテナ程派手じゃないし、いろんな特性があるって訳でも無さそうだけど、そう言えば攻撃スタイルが似てる気もする。

相手に触れずに倒すところが特に……

「くっそ！」

水柱も足蹴にした柊はこちらに扇子を構えようとしてる。またあの攻撃に捕らわれたら、逃げれるかわからない。僕は息を大きく吸い込んで、水中へ潜る。

その瞬間、僕の頭上ではあり得ない事が起こってた。

（水が……握り潰されてる！？）

どういう事かはわからないけど、特定の範囲の水が握られた様に細く成ってる。しかもその間にくり貫かれた場所へ水が入ってこない。何なんだろう……水の中からのせいか、何かが見える。

握りつぶされた水は細く空へ延びて、それを成し得る空間の形成。それは丸い……丸い！？　まさかあの扇子を回す動作……何かが見えかけたその時、水面を踏みしめる音と共に握られた水の横から柊の姿が見える。

そして何故か水中にまで届くあの音……パチンと扇子を閉じるあの時の音。それと同時に戻りゆく握られた水。その陰で柊が扇子を開くのが見えた。

（やらせるか！）

僕は再び両手の剣を振りかぶる。そして今度はそれと同時に岸に向かって泳ぎ出す。分析も大事だけど、生きることも大切だ。
結構な収穫はあったし、今は同じ大地を踏むことが大事だ。そうしなきゃ、やっぱりこいつとは渡り合えない。

（だけど、やっぱ重い）

思うように進めてるのか正直わからない。成るべく顔を出さない様にしたいけど、酸素が無限に持つわけ無くてどうしても息継ぎは必要だ。
けれどきっと柊もその瞬間を狙ってる。それに向こうは水面を歩いてるんだ。その気になれば走れもするだろう。泳いでる僕が逃げきれるのかさえ危うい賭。

幸い、奴の攻撃は受け身の姿勢が多いから水中にまで届かない様だけど、奴だけの固有スキル……あれだけとは到底思えない。

（うぐ……そろそろ息が……）

上からどこまで見えてるのか知りようが無いけど、何も対策を練らずに顔を出せばきっとそれまでだ。奴の天扇は初動作なら軽く振るか回すだけで事足りるからな。
無茶を承知でやってみるか！

ゴボボボボ……左右の足をバタつかせ、更に湖の深くに身を沈める。かき回された水が泡となり、暗い場所から光がいっぱいに広がる水面へと上ってく。
この湖、今まで特に表現しなかったけどかなり綺麗。透き通った水は地上から見たら空をそのまま写した様に蒼かったし、水中でも

結構な深さまで光が届く。

そして透明度に差があるのか、水中での演出なのかは知らないけど、雲の切れ間から雨の後に伸びる様な、光の線がここでも見れるんだ。

それはまさに幻想的で、もっと自由に泳げれば空を飛んでるみたいに成れるのかもしれないと思うほど。まあだけど今はそんな感慨に思いを馳せてる余裕は実はない。

この水の透明度がある意味怖いし、少しでも光の届かない場所まで泳ぐ。そして後はここから一気に空気と陸を目指して上昇する訳だけど、その間にダミーを幾つも出さなきゃな。

（気を引ければいいんだから、今までの様な繊細な力のコントロールは抜きで行くぞ！）

途中で溺れちゃ意味がない……だけどどこに上がるかも悟られる訳にも行かない。僕は力の限り水を蹴りながら、左右の剣をそれぞれデタラメな方向振り続ける。

幾多も発生する風のうねりは水面で派手な音を立てて舞い上がるだろう。そんな幾つ物ダミーの中に紛れ込む。それしか今の僕に出来る事はない。

体中の酸素が腕と足に取られて行くようだ。次第に水が膜の様に感じれてくる。上に進むにはその膜を破らないと行けないみたいなさ。

水面はもうすぐ……だけど既に腕は鉛の様に重かった。とてもじゃないが動かせない……武器を手放さないようにするので精一杯。

最後に打てた風は四つ……その中に紛れ込めなきゃ意味がない。

（動け……動け足！！）

捕らえれない事を祈るしか僕には無かった。水の中に沈まない様にじゃなく、上へ上がるために足を振る。そして光が溢れる様に成ってる水面の水を押し上げて、僕は大きく息を吸い込んだ。

その瞬間真っ青な空なのに雨が降ってる事に気付いた。きっとそれは僕が仕掛けた風のせいだろう。今もこうやって空から水が落ちてくるって事は、多分間に合ったんだろう。

体全体に空気が満たされていく感覚。こんなにも空気を美味しいと感じたのは初めてだ。濡れて体が冷えてるからか、この日差しも異様に気持ちいい。

だけどいつまでも顔を出してる訳には行かない。直ぐにでも再び潜って陸を目指さないと、どこで柊に見つかるか分かったものじゃない。

「ん？」

そう思ったとき。不意に落ちる影が僕の日差しを遮った。そして同時に聞こえる岸からの叫び声。

「スオウ！　上！！」

「上？」

リルレットの声に吊られて上へ顔を傾けたその時、既に通過した影からの日差しで目が眩む。そして静かに伝わる水の波紋、靡く髪……僅かに映る鶯色のその扇子が誰が舞い降りたかを示してる。

「どうしてくれるのよ」

視線だけで追いかけてたその姿にコンマ数秒遅れて、首が付いてきたとき、そんな言葉が聞こえた。けど僕は何も言うことが出来ない。だってこの近さはヤバい。

「貴方の攻撃に汚染された水、ちょっと掛かっちゃった。汚らわしい」

その言葉に僕はゾクリと総毛立つ。何だか柊は静かに怒ってる？ちょっと掛かっただけじゃないのかよ。汚らわしいなんてかなりの拒絶反応だ。

これはかなりヤバい……こういう静かに怒るタイプって怖いんだ。そしてその時、柊は今までしなかった事をした。

「消毒しなきゃ……そう君も」

そう言って僕を見る柊は扇子を閉じる。それは明らかに無駄な動作。その動作無しで僕を捕らえれた筈だ。なのに何故？

（けど今は！）

そんな事を考えてるより先に動く事が先決。さっきから体中のアラートが鳴り響いてる。「ヤバい、逃げろ」てさ。

だから僕はこの一瞬で再び水中へ。天扇は敵を認識出来なかったら命中率が下がる。てか水中とは相性が悪い様だし、そこまでもう岸とも離れてない。

後は一直線に岸を目指せばいい。

「天扇二の舞・粗氷」

何だ？　水中に輝く何かが見える。それがそこら中に……

（これは氷？）

その氷が無数に水中に・・いや、水中だけじゃない。上を見ると乱反射する光が幾つも見える。それに次第に光を遮る、白い煙の様な物も……

（――っつ！？　何だこの多さ！）

少し目を離した隙に水中の氷は大量を通り越してる。それにさっきより一つ一つの粒が大きくなってる？　これは……不味い！！

そうとっさに判断して上を目指す。だけどその瞬間、体に触れた氷が大きさを増した。そしてそんな氷は上下左右からまだまだ迫る。どこにも逃げ場なんて無い。

（くそ！）

僕はシルフィングを振ろうとした。けど動かない……見てみると既に大量の氷に覆われてる。しかも連結……いや、結合しあってってる。

足にも、腕にも、頭にも、氷の粒が当たり膨れ上がってく。

（これはダメだ……）

そう心が告げている。八方塞がりとはこの事。これって全身が覆われたらもう死亡って事なのか？　冷たさを通り越して痺れしか感じ得ない体に成っていく。

ＨＰは……分からない。このままじゃ本当に眠るように終わって

しまいそう。でもイヤなんだ。けどこの眠気に勝てそうにない。

視界が薄らいでいく。全ての感覚がこの体から離れていってる様な感覚。もしかしたら死ぬのかも知れない。本当の意味で……けどその時、遠くで何かが聞こえる。

「……ざけないで！　……たす……てよ！　あの子の事……きらめないんでしょう！」

何て言ってるか分からない。良く聞こえない。同時にガンガン成ってるのもうるさいんだよ。でも……次第に通ってくる。僅かに入ったヒビ割れから、伝えたい言葉が僕の耳へと。

「ふざけないでよ！　エイルを一緒に助けてよ！　あの子の事、諦め無いんでしょう！！　だったら、そんな所で寝るなスオウオオオオオオオオ！！」

氷の中で、意識がつなぎ止められる。実際は寒いし痛いし、もう良いかなって思いたい。けど、僕にはまだ、僕を信じてくれる仲間がいるんだ。

もう湖はスケートリンクみたいに成ってる事だろう。指一本動かせない状態……後は僅かな顔周りだけ。でも……それでも僕はまだ生きている。

なら……足掻いてやろうじゃないか。命尽きるその瞬間が今では無いとさ。運命とか言って受け入れず、地面を這って泥水をすすり、後ろ指刺されようとも歩みを止めちゃ行けないんだ。

願う場所はやってきてはくれないから。それだけは絶対の真実で真理だから……自分で近づいていかなきゃダメなんだ。

目を閉じて瞼に映そう。願う風景とそこにいるべき人達を。すると心に勇気が沸いてくる。冷えきった体に、そんな勇気が染み渡る。

勇気は力に……力は未来を繋げてくれる。僕は心で紡ごう勇気の言葉を。

（イクシード）

氷の牢獄（後書き）

第百十八話です。
久しぶりに主人公『スオウ』視点の回でした。ようやくここまで戻ってこれたかって感じです。ここからは徐々に柊を通して彼女らの正体や目的が明かされていく事でしょう。
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではまた！

雨と共に散る（前書き）

許せなかった、どうしても……でもそれだけじゃなく、俺は自信が欲しかった。この侵略戦前にこぞって言われた事とかのせいで実際凹み気味だったし、続いた失敗とかが自分を情けなくしてる。

けど俺はこの選択を後悔することになる。なんで俺は一人でやったんだろう。それはきっと……

雨と共に散る

地面の割れた場所へと流れ行く雨水。盛り上がったり凹んだり、俺を中心に周りの地面は剣を打ち付けた衝撃によってそうなってた。

「はぁはぁはぁ……」

荒い息を吐きながら、俺はそんな地面の中心に立っている。そして地面に突き刺さった剣に貫かれてるのは奴。名前は知らない。けど生かしてはおけなかった奴。

人とウンディーネ連合の指揮官か何かだろう。結構偉い奴だった。そいつを俺は今、しとめたんだ。

色を失って行く奴の体。それは尽きたＨＰの証。これで俺の不安は少しは……と思ってた。けど、何でコイツ

「笑ってんだ……」

満足気に口元上げやがって。そんな顔のせいで、勝った気に成れない。てかやけにアッサリしてた気もする。こいつはどんな行動をするにも保険をかけて置くタイプだと思ってたんだけどな。

それとも予想以上に俺の力が強かったって事か？　護衛は居たわけだしな。けれどそれにしたってこの表情……見れば見るほど胸くそ悪い。

予想が外れたにしてはおかしな顔だ。どう見ても予定通りの顔だろ。

それともそう思わせて疑わせるのが、コイツの最後の足掻き？

てか、そもそも俺は、コイツを倒してどう思いたかったんだろう。

敵討ち……それだけだったかのだろうか。コイツの言ったこと……多分間違って無かったんだと思う。俺は怖かったんだ。

自信があるこの力。信じて託された二人の誓い。けど俺は悉くはめられた。強いはずの力が俺のせいで弱くなってる様な気がしてた。

だから怖かった。守りきれない事が。

俺は剣を奴の体から抜き去る。だけどもう一度、今度はその顔へと剣を突き刺す。

けれどその行為は何にも成らない。感触何てなくて、剣はただ奴の体を通り抜けるだけ。当然その顔を戻せるわけじゃなかった。

「ふん」

俺は剣をもう一度引き抜いてスキルを解除する。

（これで勝てるよな）

敵側のリーダーは討てたんだ。それはとても大きい。今はもう余計な事は考えなくていい。後はただ、残党と同じ。

なら数を減らしつつ、シンボルの捜索をするべきだ。いや、それか全滅って手もある。取り戻したい自信があるんだ。それにはもっと敵を倒す事。

降りしきる雨の中、俺は奴の死体に背を向ける。やれることはきっとやれた。だからもう見たくもない。

「よかったね。殺れて」

振り返った俺に唐突に掛けられたそんな言葉。雨の中目を凝らすと、奴を見つけた時に投げ捨てたウンディーネが居た。
この豪雨で霞む様にしか見えないけど、今更コイツを見間違える訳もない。なんか結構世話になったしな。でも何でまだ居るんだ？

そう言えばゼブラ達を助けた時だって逃げなかった。まあそのおかげで俺は奴を倒せた訳なんだけど。コイツの目が無かったらきっと逃げられてた。
だから一応……

「ああ、ありがとう」

そう言った。雨の音が俺たちの間に流れる。何だかおかしな空気。今まではドタバタで言い合いみたいなのをずっとやってたから、この間が変な感じだ。
うるさい位に喋る奴だと思ってたんだけどな。

「何だかあんまり嬉しそうじゃないね。許せなかったんでしょ？ソイツの事。ならもっと噛みしめればいいのに」

霞む姿を見せながら、そんなことを淡々と喋るウンディーネ。やっぱり変な感じだな。

「そう見えるか？　別に嬉しくない訳じゃない。でも何だか……ただ胸がスッキリしないだけだ」
「それってソイツの顔のせい？　確かにムカつくよね」

おいおい、それが一応な協力関係にある奴に向ける言葉か？　まあコイツが奴を嫌ってるのは分かってるけど、この会話って奴に聞かれてるんじゃね？

奴がＨＰを失っても消えなてないって事はそういう事だ。やられて蘇生を待つ間だってやることないから、余計に周りの会話に集中するんだよな。

従来のゲームの様にコントローラーでピコピコやるタイプなら、蘇生を待てる時間の間の暇つぶしも色々出来るけど、フルダイブしてるＬＲＯじゃそうも行かないんだ。

だからきっと確実に奴は聞いている。結構偉い奴にどうどうと悪口言ってる事と変わりないだ。まあ奴は言い返せない訳だけど、出会うのがこれっきりな訳じゃないだろうし、失言だよな。

ある意味、これが原因で国際問題とかになって同盟崩れたりして。それはそれは好都合だが、いかんな楽天的過ぎる。

奴を倒した事でこれ以上何か意地悪い事が無いと思うと、やりやすいと思ってるのかも知れないな。

「本当に……何を思ってただやられたのか。ふふ、ようやくおもいっきり動けるね」

それは独り言の様にも聞こえた言葉。その中の不穏なワードだけは聞き逃さなかった。今確か「ようやく動ける」とか言わなかったか？

「おい、今の言葉……どう言うことだ？」

俺は絶え間無く打ち付ける雨の中、表情に少し気を張ってそう言った。するとウンディーネは雨の中に消えていく。けれど声だけは聞こえてきた。

「あれれ、何の事だろう。私は本当にソイツが嫌いだったから、実

は喜んでるんだよ」
「それじゃない」

それはだから知ってる。わざわざそんな確認いらない。そっちが大変になる告白だろそれは。ワザと？　何だか不穏な感じが感じ取れる。

だって何故ウンディーネは雨に紛れる？　幾ら関わったって、所詮俺達は敵同士……それが頭の隅から浮上してくる。

「さっきお前がボソッと言ったの聞こえたんだ。『動ける』って、まだやる気かよ？　お前達の指揮官はもう居ないんだぞ。
それにそっちの作戦は失敗してる。勢いは完全に俺達にある」
「ふふふ、あはははは。そっか聞こえてたんだ。それは失敗失敗……ああ、でも良かった」

良かった？　言葉が矛盾してないかコイツ。どうするか対応に迷う所だ。一気にナイト・オブ・ウォーカーを発動して雨をぶっ飛ばせばウンディーネは見つけれるだろう。
けどそれでコイツの思惑が計れるか？　俺達は今、話してる。それが実は最も効率的な情報収集の手段はないか。下手に動くよりも、まずはこのまま会話を続けてコイツの真意を計ろう。
「良かった？　聞かれてって事か？　失敗とか言ってなかったか」

「確かにね。でも興味出てきたでしょ？」

その言葉は完全に俺に聞かれるように言っていたと言ってる様なものだ。それに「興味」って言葉でもしかしたらと思えるこいつの真意が少し顔を出した様な気がする。
それならコイツが姿を隠していろんな方向から声を伝える事もある推測が立つんだ。コイツが引きたいのは俺の気で、興味を持たせ

ての会話の持続……姿を消したのは俺が無闇に動けない様にするため。
戦闘じゃ幾ら不意を突こうと、俺とコイツの戦闘力はきっとかけ離れてるから保険もあるんだろう。それらの事から見つけた自分なりの考え……それは

（足止め）

その言葉が頭に浮かぶ。でももしかしたらで、確証がある訳じゃない。けど、だからって思いついた可能性をただ足蹴にも出来ない訳で……さっきからのコイツの余裕っぷりも気にはなってるんだ。
乗るか反るか……強引に突破するやり方だってある。きっとコイツは俺を止められないだろうからな。だが、まだ何かやる気なら……このまま見過ごすのもどうかと思う。
俺は手のひらを見つめて考える。この手ある力を見つめるように。

（大丈夫。俺だから……力がこの手にはあるんだ）

そう思い握りしめた拳。俺はウンディーネの言葉に応えてやる。

「ああ、興味があるな。何やる気だよ？」
「何やる気？　そんなの当然、勝つ気に決まってるでしょ？　そうでなきゃ、わざわざここまで上がって来るなんて事しないもの」

勝つ気……か。それは当然と言えば当然だ。初めから負ける気で戦を挑む奴なんかいないだろう。俺達アルテミナスだけじゃない、それぞれの国にだって事情や思惑がある。
特にウンディーネの様な小さいところは特に、取れる時には取っときたいだろうし、折角勝ち取った土地をみすみす返す気には成れないか。

それじゃあ、どっちもぶつかるしかないな。

「でも意外と障害ってのは内側にあるものなの。あそこで死んでる奴とかね。私達は結局小国だもの。同盟何て結んだって協力者扱いよ。

このフィールドだって、奴らに取られてる。けど知ってる？　占有権はその都度移せるって」

「つまりお前達は、この侵略戦で実は、俺達と同じ狙う側だったって事か」

占有権が移せるか。まあ確かに、同盟を組んでる以上そういう処置は必要かもな。でも問題はその条件。

「まあね。私達は侵略側だったの。実は人間の敵は一国じゃなかったって事ね。占有権を得られるのは、最も多く敵を倒したプレイヤーが居る方。

ようは活躍の度合い。ここはね私達が狙える条件が揃い踏みの場所なのよ」

なるほど、今までの侵略でもこの話を聞く限り、全部が人間側に流れてたんだろう。けどここはウンディーネがそのポテンシャルを発揮するには十分な場所。だから俺達からの侵略戦をきっかけに占有権の奪取をウンディーネ側は画策したわけか。

「まあだから、私達の計画には奴は邪魔だったわけ。そして狙う事もこれでわかるでしょ？　本当にイヤな笑顔を作る奴だった。

当然の様に、私達の求める大地を奪っていって……本当の敵は奴だったのよ。けど良い気味って言い難い顔。私の仲間が目の役目を放棄して、狙ってた伏兵が動いてないってのに……」

「なに？」

てかやっぱりあれだけの戦力で逃げてた訳じゃなかったのか。けどそれじゃまた俺は何かに助けられて勝ちを拾った様な物じゃないか。

伏兵がどのくらいの規模だったかわからないが、確実に勝てたのか自信はないな――って待てよ。それじゃ今もそこら中に居るんじゃないか伏兵？

俺は周りを見渡す。けど雨のせいでやっぱり見えない。そしてそれは伏兵の人間も一緒で、だから目としてウンディーネが居るんだろう。

けどウンディーネは何も言わないでこの状況をただ見てるって事か。でもそれって、俺にとってはどっちしろ敵に囲まれてる事と変わりなくないか？　いや、きっと、絶対そうだ！

「ねえ、今不味いって思ってる？」

「！！」

ウンディーネの言葉に大きく心臓が跳ねる。まさに心を見透かしたような言葉だったからだ。

「アギト……だったっけ？　よく見えるよ……私には、君が苦そうな顔してるのが。でもそっちからは見えないだろうから教えてあげる。

私の表情。えっとね……感謝の笑顔を浮かべてるよ。奴を倒してくれたこと、そして私の話に付き合ってくれたこと」

言葉と共に聞こえていた足音。雨をパシャパシャと踏みしめるその音で位置を特定しようと試みた。だけど無理。明らかに足音が増えてるような気がする。

これはもう、避けられない物がそこにある感じ。そして続く言葉がその思いを証明していた。

「でもね、よく考えてみて。この作戦、侵略戦に勝つことが前提なの。当たり前だよね。ここで負けたら取り替えされちゃうんだもん。だ・か・ら、一番の戦力である君は、ここで殺します」

パシャン――と真後ろの、それもすぐ近くでその音が聞こえた。俺はその瞬間、スキルを発動。大剣を振り向きざまに逢わせて振るう。

吹き飛ぶ雨の粒、風を切る音と共にそれらは起こっていた。だけど切ったのは雨だけだ。そこにプレイヤーの姿は無く、吹き飛んだ雨と共に消えていったのは水の固まりの様なお粗末な替え玉。

あれはきっとウンディーネのスキル何だろう。けど囮まで使って別の所を向かせたって事は、別方向からの攻撃を狙ってる。

振り切った大剣じゃ反撃はしずらい、けど左右後ろどこから来ても、攻撃を届かせない自信があ――

「戦場で見るはただ前と、倒すべき敵のみ。我らが主の為、空へと帰れ！！」

「――っつ！？」

現れた敵は左右でも後ろでもない。真っ正面だ。けどわざわざ向かせて正面から来るなんて……でもコイツなら、武士だからな。

「スズラ！！」

スズラはきっとウンディーネ側の偉い奴。そして武士だけあって奴とは違う。長い刀を抜いてる。それも素材は鉄とかじゃないのか

も知れない。
柄も刀身も一つの素材から出来てる感じで、何よりも巨大な魚のヒレを連想させるようなシルエット。そしてそれだけに特性はどうやら『水』らしい。
盾で受けると同時に凄まじい水圧が刀身から噴出されて、盾ごと俺は吹き飛ばされた。

「うわっとっとっと！！」

地面をみっともなく転げ回る事は無かったが、かなり驚きの威力だな。盾には水圧で付けられただろう傷が残ってる。
流石は最初から倒せると豪語してただけはある。雨に混じって時々光る雷光が俺達の姿を照らしだす。一気に攻めて来るかと思ったが、そうはしないらしいな。

微かに見えるあの姿……「やられた」という悔しさが募りつつある。やっぱり強引にでも逃げとくべきだったか？

「スズラ様。ご苦労様でした」

そう言って雨の中、姿を表したのはあのウンディーネ。けどまさかアイツの狙いがこれだったとは予想を大きく外してくれた。
倒れた奴が用意してた伏兵を使うとばかり思ってたけど、時間稼ぎはスズラが戻って来る為だったのか。

「よくやってくれたな本当に。危険な任務だったが、お前ならと信じていた」
「は、はい！」

スズラに誉められて、顔を赤くしてるウンディーネ。まさかそっ

ちの毛がある奴だったのか？　けど実際ヤバいな……これ以上、敵が出てく前に逃げた方が良さそうだ。
目的は達したし、今のウンディーネ連中とやり合うのは分が悪い。するとスズラは前へ出てきてその刀をこちらに向ける。
「ありがとうと、言うべきなのかな貴方には。アギト、アルテミナスの始まりの騎士。こと戦闘においてはスキルもあってか凄まじいが、中身はまだ子供だな。
乗りやすく分かりやすい。だから本当に貴方は使えたな」
「最初から俺を利用する気だったってか？　その後ろの奴が俺から離れなかったのもそのため……」
俺のそんな言葉にスズラは頷く。
「その通り、我らウンディーネには特殊な通信手段がある。あの子は、その力で貴方を見張ってたんだ。この侵略戦で必ず障害になる貴方をどこで殺すか……そのために」
んべ～と後ろで舌を出してるアイツを真っ先に叩きたい。でもアイツが逃げなかった理由はそれか。でもそれなら見つからない様にしといても、こいつらの目なら十分に出来たと思えるけど……ああそっか、俺はつまり良いように操られてたって事か。
俺の行動に干渉するために、アイツは俺の側に居たわけだ。それに奴を倒して貰わなきゃいけなかった訳なんだろうしな。俺も随分、こき使われた物だ。
ラッキーだと思ってた事は、思惑が乗っていた必然って訳だ。
「それで、ここで俺を殺せるって踏んだ訳だ。まんまと使われた様だが、働いた分はきっちり返して貰う。お前をここで倒せば、ほぼ

勝ちは決まったような物だ！」

物事はポジティブに考えよう。だってそうだろ。今、要はこいつだけだ。つまりはスズラを倒せば敵側は指揮官を失って烏合の衆になり果てるだろう。

それなら勝利確定。色々とそっちも大変そうだが、そんな事に耳を傾ける気もないし……奇しくも俺達は、互いに重要な位置づけなんだ。

俺を倒せば戦闘が楽になる程度だろうが、スズラを倒せば勝利が手に入る……これは魅力的だ。ここにもまた、危険を犯す勝ちがありそうだ。

それに実は物足りなかったんだ。奴は『武闘派』じゃなかったらな。でもスズラは違う。こいつは強い。そしてそんな強いスズラを倒して勝利を掴めたら、俺も胸を張れる筈だ。

「私は一人じゃない。わかってると思うが、これは戦争。私も大儀の為なら、自分のやり方だって曲げられる。願うは勝利の二文字ただ一つ。

我らウンディーネの最大限のポテンシャル。甘く見るなよ」

その言葉と同時に、スズラが引き連れてたウンディーネ部隊が詠唱を開始した。そして向かってくるのはスズラただ一人。伏兵を使うのかと思ったら、そうじゃないのか？

でもこれは好都合だ。この程度の人数なら、周りを全滅させてから、スズラを叩ける。

けどそう思っていた俺は、スズラが言った事を本当に理解してなかった。甘く見てたんだ。きっと武士として忠告してくれた筈なのに。

凄まじい剣劇の押収だった。スズラの剣は強力な水圧の水を飛ばせる事も出来て厄介だ。岩とか貫いてたし……どうりでこの盾に傷が付くわけだ。
それにウンディーネの魔法なのか、詠唱を終える度に激しさを増す雨足……これはもう雨のレベルを超えている。まるで滝に打たれながら戦ってる様な物。

流石にここまでになったら、俺の剣の勢いでも晴らせない。おかげで息も続きづらいし……これはヤバいと思い始めてた。
けど、これ以上負けたく何かない俺は強引に行く。大振りを多用して一撃大きいの当てようとしてた。でも当たらない。きっとだからこそ……なのに、俺は俺がやらないとと勝手に思いこんでた。

「良い感じになってきた」

そう呟いたスズラは俺の攻撃をかわして空へ上がる。飛んでるんじゃない。泳いでるんだ。それもなんて軽やかに……こっちは地面にまで貯まってきた水で更に動きが制限されてるってのに……空にまで上がられたら手の打ちようがない。
水を得た魚とはきっとこの事。降り注ぐスズラの攻撃を、俺は防ぐだけで精一杯に成ってる。

「この水が耐えない土地は、我らが為にあるような物だ。加護は貴様達だけにある訳じゃないみたいだな！！」
「ぐあああああ！！」

ガードを抜けて切られた！　いや、既にガードさえも追いつかなく成ってるのかも知れない。膝が地面に付く。

すると水が腰まで来るじゃないか。幾ら何でも貯まり過ぎだろ。あのたった数人でこれだけの魔法を？　考えられない。
けどこれは事実で、水に足を絡め取られてしまっては続く攻撃を捌ききれない。

「自信の力を奢った結果がそれだ。人は一人では、か弱い存在でしかない物を……何を血迷った？　仲間を助けようとする君は強そうだったんだがな。
今の君は何を背負ってる？」

スズラの位置からは頭を狙える。一番大ダメージをたたき出せる部位だ。そこに連続で攻撃を貰うのは流石にヤバい！　しかもあの威力。
何を背負ってるって？　俺は今でもゼブラ達とアイリとアルテミナスを背負ってる筈だ。そうだろ……そうじゃないのか？
何で……こんな奴に勝てないのかわからなくなる。迫り来る刀身を見つめてた。するとその時、声が聞こえた。

「アギト様！！」

そしてその声の主は俺とスズラの間に飛び込んだ。それは一瞬の出来事。その瞬間、刀身がそいつに触れて、白く細長い水の線が上がった。
それは岩をも貫く水の線だ。ろくな防御もしなかったそいつは信じられない事に、真っ二つに割れた。そしてそれと同時に色が消えていく。
目を離せない光景……だってそれは守る為に置いて来たはずなのに、何で俺の前で割れてるんだ？

「何……やってんだよゼブラ……」

そんな言葉に、色褪せて行く中でゼブラの奴は言った。

「良かった……すみません。折角救ってもらったこの命、無駄にしちゃいました」

何で、お前も笑ってる？　俺は本当は怖かったのに。こうなる事が怖かったのに……だから置いてきたのに、何でこう成るんだ！！

水の中へ沈んでいくゼブラが痛々しくて堪らない。

「「「アギト様！！」」」

その時更に増えた声。それはやっぱりみんなだ。全員で俺を追ってきたのか……でも、駄目だ！　来たらきっとゼブラの二の舞。けれどその目に映った俺のせいでだれ一人逃げる者はいない。

雨と共に散る（後書き）

第百十九話です。

力が有る責任……けどそんなの高校生が分かるかな？　アギトはそんな責任や重圧に耐えきらなくなるのでしょうか。てかまあ結末は分かってる筈ですけど。自分が情けない絶望感……裏切る期待……それが降り掛かる。

てな訳で次回は火曜日に上げます。ではまた。

追いかける事（前書き）

氷の牢獄を抜ける為に僕はイクシードを発動させる。いつだって頼るのはこの力。だけどその深淵はこんなものじゃないんだ。普通の状態で発動させるイクシードは『乱舞』を模して効率化したに過ぎない代物。

まだまだ上がイクシードにはある。だけどそれがどういう力か、僕も分からない。ただのイクシード……それだけで事足りればいいのだけど。

追いかける事

『イクシード』それは僕の力。『イクシード』それは勇気を表す、力強い言葉。想いを通すため、誰かを救うために宿った優しい力。
どんな時でも最短で送り届けてくれる風と、敵を寄せ付けない雷撃。この二つが揃えばどんな盾でもきっと切り裂ける。
『絶対に負けない』そのための進化した力……それが『イクシード』だから。

湖の水、全てを氷に変えるほどの技。しかもそれだけじゃなく、空気中に含まれる水分まで結晶化出来ぶつけれる。
周りはもう氷の世界……だけど、僅かに風が流れ出してた。風はどんな小さな道でも教えてくれる。そして新たに宿った雷は、その道を青白い光と共に走ってく。

それはまずは僕の周りから……けど次第にもっと広い範囲へと移って、氷を脆く弱くしてくんだ。僕を覆い付くす氷に変化は見れないかもだけど、もう十分。それを風達が教えてくれる。
ここからは一気に行こう。拳に力を込めてセラ・シルフィングが纏う風を大きくする。その風で体の自由を奪う氷を砕き、更に両側にぶっ刺した。

そしてこの僅かな空間で風と雷が発生しあう。イクシードには制限時間があるからな……この牢はこの一撃で崩して見せる。
左右のシルフィングから風のうねりが発生して、突き刺した刀身から氷を一直線に砕いていく。それは下準備のおかげの事。
内側から砕かれた氷には大きな亀裂が無数に入る事だろう。そし

てその亀裂にはもう一つの力が走るんだ。

「いっけええええ！！」

風のうねりを追うように走り出す雷撃。けど雷撃達は氷という媒体へ、枝分かれして流れていく。すると一気にビキっと言う音と共に、この空間からでもわかるほどの亀裂が無数に入る。

この氷を満たしていく雷撃達は、きっと地上までその勢いを絶やすことは無いだろう。何本もの雷の柱が砕けた氷の隙間から吹き出してる。そして最後の仕上げだ。

シルフィングを振ってこの氷共を完全に砕く。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

両の腕を上へ向かって移動させる。それによって更に大きく崩れていく氷の空間。これはある意味、一種の世界の崩壊の様な光景だ。

青白く光る雷撃が砕けて行く、氷を幻想的に照らしてた。そして顔の前で腕をクロスすると同時に、風と雷撃が道を示す。

「スオウ！」

するとその穴から差し伸べられる手が一つ。それはリルレットだ。僕はその手を取って、崩れ行く氷の牢獄から脱出した。

ズズズ～ン、と地響きが成っていた。冷気が凄い事になってる氷の上は、何だかドライアイスから出るような白い煙が地面を這っている。

そして中身から壊された柊の氷は元の高さから数メートル沈下してる。砕けた氷の分、そうなったんだろう。特に僕たちが居るとこ

ろは一段低く成ってる感じ。

まあ破壊の中心部分だし、こんな物なんだろう。表面にも亀裂が沢山入っていて思惑通りだけど、外に出た今と成っては危ないな。

「スオウ……」

「助かった。リルレットが呼びかけてくれなかったら危なかったよ」

繋いだ手から震えが伝わってくるリルレットにそう伝えて振り返る。するとそこには白い雪の様な物が舞い落ちる扇子を手にした柊がこっちを見てた。

「それがイクシード……風と雷のシンフォニーが力強い意志を奏でてる様ね」

パチンと再び扇子を閉じる柊。その瞬間身構えたけど、別に何が起きる訳でも無かった。雲は晴れたけど、湖の氷がいきなり水に戻るなんてことは無かったんだ。

どうやら、やっぱり何か変わってるらしいなあの扇子。色も紙のデザインも骨組みも変わってるし、その力も今まではとは違う。

けどどっちにしろ凄まじい。これだけ大きな湖を凍らせるって……普通の氷結魔法じゃ絶対に無理だろ。本当に何しても、例外な奴。

「それは誉めてるのか？　まあどうでもいいけど、こうなったらグズグズなんてしてられない。案内して貰う。セツリの所まで！」

僕はセラ・シルフィングを柊に向ける。風の唸りが柊の顔の横を通って氷に穴をあける。けどそんな事奴は気にもとめてない。

「諦めが悪いわね。あの子は君を捨てたのよ。私たちを選んでくれた。大丈夫。私達はあの子を傷つけたりしない。君と違ってね」

顔の横で開かれた扇子。それを俺の風にわざわざ当てた？　すると信じられない事に、うねる風が凍りだした。そして直ぐに刀身にまで氷はたどり着く。

「ちっ、雷放！」

そう叫ぶとセラ・シルフィングから放たれる雷撃。流石に雷撃まで凍らせる事は出来ない。風の氷も雷撃よって砕いて扇子が届かない位置まで移動させる。

太陽が照りつけても溶けない氷……けど異様にこの湖の場所はキラキラしてる。氷の表面がじゃなくて、大気中がって事だ。

「確かに僕はセツリを傷つけたかも知れない。だけど拒絶されたからって、簡単に見捨てられる訳ない！　帰るべき世界がアイツにはあるんだ！」

「そうだとしても、あの子がそれを望んでないのは確か。決めるのはセツリで、そしてもう決めたのよ。往生際が悪いわよ」

そう言うと柊は扇子を振りかぶる様な態勢を取る。そして無数に光る大気中の粒？　振った腕と共に、扇子から流れ出る冷たい空気。

（待てよ……確かさっき、空中で作った氷を湖に落としてもいた。この光ってるのもそれだとしたら……まずい！）

冷気と共にこちらに流れてくる小さな光達。僕はシルフィングを振って風の盾を形成する。流れに乗ってきてるだけなら、これで十分な筈だ。

「往生際が悪くたって、僕はセツリを追いかける。アイツは生きることはきっと望んでる筈だから！」
「あんな無駄な世界で、生きることに何の意味があるの？
こっちを現実にすればいいのよ。ここならあの子は自由なんだからね」

風と冷気が丁度間でぶつかる。けどシルフィングにはそれだけじゃない力がある。それにこの手のぶつかり合いは手慣れてるんだ！
冷気を切り裂き、僕は柊へ直接攻撃を仕掛ける。無駄な世界？
ＬＲＯを現実に？　そんなの全部認めない。だってそれは荒唐無稽な話だろ。

ＬＲＯは一つの世界であっても、現実には成り得ない。成り得る筈がない。僕は柊の懐でシルフィングを一線する。完全に対応仕切れてなかった柊に、それはクリーンヒットだ。
けど二刀流の神髄はここで終わらない事。多重連続攻撃でＨＰを削り切る！　そう思ってもう一方も振ってたときだ。

ピキパキ……そんな音が耳に届いたのは。音の出所はさっき僕が切り裂いた場所。そこがヒビ割れてる？　服諸とも？
その時、目の前の柊が色を失っていく。いや、透明に成って行ってるっていうか……これは、氷！？　分身か！！

「ちっ、無駄な世界なんかじゃない。アイツはあそこで生まれて育ったんだ。そんな世界を無駄とかいうな！」
「でも、何もくれなかったじゃない。あの世界はあの子から全てを奪うだけ……そんな世界に何故止まらなくちゃいけないの？
そんな辛さを背負い続けろと、スオウは言うんだ」

周りが何だか眩しい。これは小さな小さな氷のつぶて。それらがもう周りに展開してる。これは誘い込まれたって事か。
一端離れようと後ろに一歩を踏む。けどすると僅かに触れたつぶてが一気にソフトボール位に成った。すると連鎖反応の様にビギビギビギィィと続いてく。一歩を踏んだ足があっと言う間に氷に覆われた。

柊達は、何もセツリに与えなかった世界から解放しようとしてるのか。けど僕は、あんな世界でも与えれる物があると思ってる。
それに一番大事な物をくれてる筈だ。『命』って言う何にも変えられない物を。

「っつ……僕はただ、早すぎるって言ってんだ！　結論づけるのがさ。世界が奪ったとか、背負い続けるとか、確かに辛かった事は分かるけど、それで世界を否定するのは逃げてるだけだ！！

お前達が用意してるのはただの逃げ道。けど、もうそれだってセツリは一杯一杯なんだよ！」
僕は氷付けになった足を無理矢理動かして、シルフィングを真後ろへ振る。踏ん張りも効かずに、さらには勢い余って滑って転ぶ事に成っても、強引に振り切った。さっき斬ったのが分身なら、本体はこっちと当たりをつけて見たけど……どうやら外れみたいだ。
感触はあったけど、転びながら目に入った光景は砕けた氷の固まりだけ。さっきと同じだ。

「いってぇぇ！　くそ……どこ行きやがった？」

立ち上がることも難しい状況。シルフィングを支えにそれを試みるけど、こんなんじゃ戦闘どころじゃない。柊が撤退とか考えられ

ないから、必ず攻撃が来るだろうに……これじゃあただの的だ。
「スオウ！　ちょっとジッとしてなさい。私達が周囲警戒してるから、その足治して貰いなさい」
そんな言葉と共に、僕を無理矢理地面に押しつけたのはリルレットだ。そして僕を庇う様にみんなが周囲を固める。
「みんな……」
「そんなんじゃまともに戦えないでしょ？　それにスオウは一人じゃない。忘れないでよね。さっきから一人で奴と戦っちゃって……私だって柊には用があるんだから」
あ、そっか。リルレットだってここでじっとなんかしてられる筈がない。だって奴は……柊はエイルを柱に変えた奴の筈だ。
エイルを元に戻す為にも奴には負けられないんだ。それにさっきから本当に自分だけで焦りすぎてたのかも……
「ごめん。助かる」
「分かればよろしい。詠唱が終わるまで動かないでよ」
「へいへい」
進み出てくれたヒーラーが僕の足に杖を向けて治療魔法を唱えてくれてる。魔法の事はよく知らないけど、これは『凍結』って言う状態異常の一種だよな。
なら直せない筈も無いって訳だ。
けどそんなとき、僕たちを白い煙が包んでく。それに混じってるこの光の粒はきっと……
「不味い。柊の攻撃だ！　この煙晴らさないと！」

僕はシルフィングを握りしめる。一気に視界が包まれて行くほどの煙……いや冷気。これを晴らすにはイクシードを発動してる、僕がやらなきゃ。

「動かないで！　大丈夫、もっと我々を信じてください」

そう言ったのは僕を囲んでる中の一人。杖を持ったその人は確か……ソーサラーだ。彼は詠唱を直ぐに開始した。そして杖を空へ掲げてこう叫ぶ。

「フレイムウォール！！」

その瞬間、ドーナツ型した炎が空から一気に降り注ぐ。僕たちに当たらない空間を作って、飛来したみたいだ。

「奴が今使ってるのは氷。なら風よりもこちらも方が効果適でしょう」

「はは、そうだな。でもスゴいな。この炎の結界」

燃えたぎる炎が自分達の身を守ってくれてる様だ。確かに風と雷のセラ・シルフィングよりも、こっちが効果的だろう。

これだけ熱気が漂ってたら、冷気なんて居られないしあの小さな氷の粒なんて一瞬で溶け筈。チーム戦ってのをそういえば忘れてた。

自分に足りない物を補える事が集団戦の強み何だよな。それに大抵僕達は何かが足りない物だ。全部揃えてる人間なんか一人もいないだろう。

だからこうやって助け合って手を取り合って、出来る事に全力をだす。長所と長所を補完すれば、どんな状況だって切り抜ける。

「ディザイアス！」

そんな言葉が、杖を向けていたヒーラーから叫ばれた。すると黄色い光が凍った足に絡みつき、徐々に締め付けて来る。

けど痛みはない。でも確実に氷にはヒビが入ってた。そしてついには氷だけが脆くも崩れさっていく。

「やった」

「治療完了です」

僕は立ち上がり、足の感触を確かめる。トントンと地面を叩き、軽くジャンプ。問題ないな。

「ありがとう、これでおもいっきり動ける」

「いえいえ、我らヒーラーは前衛のバックアップが役目ですから。てか貴方達がやられると、何にも出来ないんで代わりに頑張ってって感じですよ。死ぬ気で……あはは」

何だかこの人も結構面白い人だな。持ちつ持たれつを言いたいんだろうけど、何かおかしいぞ。

「よし、スオウも回復したことだし、そろそろ打って出よう！」

「それはいいけどさ。柊の奴はどこにいるかわかんないぞ。姿眩ましてるし……それに何でリルレットがリーダーやってるわけ？」

別に僕がやりたいわけでも無いし、出来れば遠慮したいところだけど、それでもリルレットって……

「ななんでよ！　何か問題でも？」

「いや、だってリルレット……一番弱いじゃん」
「ぬあぁぁ！！？」

ズガーンと面食らってるリルレット。まあそれこそ言いたく無かったことだけど、多分事実だと思うんだ。だってセラやテッケンさん達が集めたこの人達、かなりの熟練者揃いだし。
リルレットとエイルって流れだし……

「そそそそんな事ないもん！　少なくとも一番じゃありません。だってスオウがいます～。初めてまだ一ヶ月も経ってない君だけには言われたくないな～」

うぐ……まあ確かに経験不足なのは認めるさ。でもこの戦いの目的の大きな一つにはセツリの救出があったわけで、それなら自分は重要なポジションを占めると主張しよう。てか

「リルレットが僕より強いって……イクシード舐めるなよ」
「柊に軽くあしらわれてたじゃん」
「ぐっ……」

リルレットの言葉に直ぐに続かない。確かに端から見たらそう見えたかも知れない。けどあれだって結構イクシードだったからって事大きい。
実は奮闘してたんです。それに実際、こんな物じゃない筈なんだ……今のイクシード。いや『乱舞』はさ。

「イクシードの本当の力はこんな物じゃない。まだやったこと無いけど分かるんだ。イクシードは乱舞を効率化するためだけのシステムじゃないんだよ。
だから、まだまだやれるんだ」

「なら、出し惜しみなんてしてる場合？　スオウはセツリちゃんを、私はエイルを助けたいんだよ！　半端な力じゃ柊は倒せないってみんな感じてる。
それでも立ち向かうのは諦めたくないから……スオウならってみんな思ってる。そしてそんな切り札あるんなら尚更だよ」

リルレットにそう言われて僕は自身で握るセラ・シルフィングへと目を向ける。まあ確かに、切り札を温存して負けるとか愚の骨頂何だけど、イクシードのさらに上の力って今の僕にはなかなか想像できないんだよ。
てか何となく思うんだ。こうやってジッとセラ・シルフィングを見つめてるとさ。

「まあ、リルレットの言うことも分かるよ。頼りにされるのも……って何かさっき言ってた事と矛盾してるけど、嬉しい。
けど、今じゃないんだ。そう言ってる。切り札だからって出し惜しみする気はないけど、これを使うときは本当にもう駄目だって思ったとき。
全てを出し尽くしたときだよ。まだまだ僕達にはやれる事がある。みんなおかげでそう気づいたよ」

そう言って僕はリルレットを始め、全員を見渡す。するとみんな複雑そうな表情の後に思い思いに答えてくれる。手を挙げたり頷いたり笑ったりして。

「まあ、上手くやれる事に越したことは無いんだし、結局使い所はスオウ次第って事よね。同じ様なのが後数人居るらしいし、切り札は早々見せないのがいいのかも知れない。
けど覚えておいてよ。負けたら何にも成らないんだからね！　スオウはセツリちゃんを取り返せない、私もエイルがどうなったか分

からない。
それが最悪何だから、もしもの時は迷わず使ってね」
真剣なリルレットの表情。今までも割と真剣だったけど、今まで一番強い瞳をしてる。自分が巻き込んだこと、後悔してるのかも知れない。
僕達に協力するって決めたのはリルレットだったから、そのせいでエイルは……ってさ。強く歩きだしても、心の隅にはきっとずっとそんな想いが有るはずだ。
それこそ、この戦いが終わるまで。
「了解。そのつもりだよ。もうこれ以上誰も死なせたりしない。したくない……だからその時は迷わず引き金を引くさ」
「うん」
僕とリルレットはお互いの気持ちを再確認するように拳を突き出す。そして拳を軽くぶつからせて完了だ。
「だけど、我々は死ぬ訳じゃ……てそうじゃないのか。それじゃあ宜しく頼むとしか言えないな。プレッシャーを与える様だけど」
そう言ったのはヒーラーの彼だ。そうここに居る誰もが既に死にリスクを背負ってる。まだ確証はないけど、でもそんな確証欲しくもないな。
だからそれを想定して、そうならない様に頑張るしかないんだ。
「それで良いんですよ。僕が脅してみんなを引き留めた様な物だし。それでもここまで協力してるんだから、守ります。
もう誰も、エイルの様な柱にはさせない」
「当然……そうじゃなくちゃ困る」

何か顔色の悪い人が弱々しく……てか不安気にそう言った。みんな本当は怖い筈だからな。無理もない。一応仮説でエイルは大丈夫って事にしてるけど、それはあくまで推測でしかない。
そしてここじゃエイルの無事を確かめる方法も無いわけで、推測は推測の域を出ることはない。だからこそ僕が前線であり続けなきゃ駄目なんだ。
守れる事を示さなきゃ、みんなまた恐怖に足が竦むかも知れない。そうなったら本当に終わりだ。

「まずは柊の奴を見つけないとな。そうしなきゃ攻撃のしようがない」

僕の言葉にみんなが顔を強ばらせて考え込む。そこが一番の問題だからな。見つけられなきゃこちら側から攻撃出来ない。
なのに向こうは出来るなんて不利過ぎる条件だ。そう言えば、柊は汚れるのとかを嫌ってたな。攻撃スタイルも直接触れるタイプの物じゃないし、そもそも僕達とかかわる事自体が嫌そうだ。

だから触れるなんて論外って事で……そういう性格が戦闘に出てるってことか？　でもそれなら、最悪もう姿を見せないんじゃないか？
汚れるの嫌みたいだし、固有のスキルまで持ってる奴だ。自分が一番やり易い戦闘が出来る様にしてるんじゃ……それは考えたくないけど、考えざる得ない事だ。

「でもこの湖のどこかには居るはずだよね。あ……っていうかちょっと待ってよ。わざわざ奴が作り出したこの場所で戦う事無いんじゃないの？」
「まあ確かにそうなんだけど、どこに行ったって同じ気がするな。

この大量の水をこんな簡単に氷に出来る技だ。何処だって凍らせる事が出来るだろ？」
「それは……確かにそうだね」

つまりは僕達は奴が用意したフィールドでしか戦闘が出来ない。不利なのは当然かも。でも今まで不利じゃなかった戦いがあったか怪しい位。
だから今回もきっとやれるさ。みんなと一緒なら。面子は違うけど、既にここまで色々ぶつかって来たんだ。おかげでお互いがそれなりには分かってるだろう。

それに柊のせいで、ただの協力者以上の関係性だしな。みんなが生きるために必死になってる。そしてやることが合わされば、きっともっと強くなれる。

「そろそろ準備はいい？　こんな炎で、私の理を歪める天扇を防げる何て思ってた……分けないよね」
「――っつ、柊！！」

突如炎で守られた空間に響いた奴の声。今まで実は何やってたとか知りたくない感じだな。こんな炎、壁にさえなってないと言われたんだ。
それなのに何もしなかったのはそっちの準備があったから……理を歪める……その言葉にふさわしく、炎が氷に変わっていく。
そして周囲に再び小さなつぶてが現れる。

「くっそ、もう一度！！」
「駄目だ、同じ程度じゃもう意味なんて無い。氷を砕いて脱出するぞ！！」

僕はソーサラーを制して、シルフィングを振るう。砕け散る炎の氷。その中から一斉に飛び出す。白い煙が床一面に蔓延してる。
氷が落ちた衝撃でそれなりに舞い上がり、再び落ちゆく煙の中で、僕達は柊の姿を確認した。だけどそれは、今までの柊とは格好が違ってた。

追いかける事（後書き）

第百二十話です。
過熱化して行くバトルバトルバトルです。柊は規格外の力で攻め立ててきます。だけどこれからはきっとそんなのばっかり。けどスオウは一度だって負けるわけにはいかないのです。
色んな事を経て、通じ合った仲間とならきっと乗り越えられる。それを信じて進みます。
では次回は木曜日に上げます。ではでは。

空しさ（前書き）

俺は助けを拒否った筈だ。だけどあいつらは来てしまう。こんな俺の元に。そして助けられるのが俺だなんてそんなの情けなさすぎる。守れりたいものが何も守れない強さなんていらない。

空しさ

「来るなあああああああ！！」

俺は降り注ぐ雨が弾けるかと思うほどの声を出す。そしてみんなが迫り来る道に向かって大剣を振った。雨が吹き飛び、地面が割れる。

その衝撃にみんなはたたらを踏んだ。

「アギト様！　どうしてですか！？」

「今の俺じゃ……お前たちを守る余裕なんて無いんだよ！！」

俺はちっぽけな自分に気付いた。俺は一騎当千に何かなれない。大層な力があったって、仲間一人守れやしない。いや、ある意味……邪魔なんだ。

何も考えずに突撃戦の方が俺にはあってる。元が優秀な盾と攻撃徳化型のスタイルなんだ。それが一番楽だった。　増えすぎちゃいけないんだよ。守りたい者を守るにはさ。俺の腕は二本しか無いし、体は分かれやしないんだ。どんなに力があったって限界って物があるじゃん。

そう思うとさ……守れないんじゃない、守りたくないんじゃないか？

（はは……我ながら最低の所に考えが至ったな）

身を呈して守ってくれたゼブラには悪い考え。二つに割れたゼブラの体は、嵩を増していく水の中で無惨な姿に成っている。

みんなが居るなら、何とか蘇生させたい所だけどこの状況じゃな

かなか厳しいな。周りはスズラが引き連れてたウンディーネ達による魔法で、あり得ない程の豪雨。

そんな滝の様な雨を自由自在に泳げるスズラ。そして未確認だが、周りにまだまだ居るらしい敵。出来ないと思う自分が嫌になる。

何の為にある力だよってさ。でもちっぽけな自分にはおいあい選択なのかも。

「仲間を求めず、それでどうする？」

「くっ……」

頭上から降ってくるそんな言葉。そして同時に降られる剣。ジャボジャボと無様な音を立てながらも何とか数歩後ずさる。

その瞬間高く上がる水柱。ギリギリ避けれたって事か。

俺は顔を出してるスズラに向けて剣を振るう。真っ二つ割れる滝の様な雨。けど当たってない。

スズラの影は流れる様に水の中を走ってる。この雨でどうしても振り遅れてしまう。その僅かなタイムロスで俺の攻撃は届かない。

けど……それでも……俺は誰にも頼らずやってみせる！

手前で止まったみんなが不安気な顔を向けている。これ以上苦戦してたら、またゼブラの二の舞に成るかも。

「仲間を求めなくても、やりようはある！！」

俺は水に浸からせた剣を再び振るう。けれどそれはスズラに向かってじゃない。こういう時の定石は、まずはバックスから叩く。

ウザい支援をしてる後他のウンディーネ。狙いはそいつ等だ。噴き上がる三つの水柱が鋭い勢いを伴ってそいつ等に向かう。上手く動けない今の状況じゃ、これを後数発たたき込むしかない。

完全な直撃コース。それに奴らは避ける気が無いみたいだ。気にも止めずに詠唱をしてる。それだけスズラを信頼してるって事か？
だけど流石に間に合う訳がない。
まあ、何処に居るのかは見えないんだけど・・けど例え奴が庇ったとしてもそれはそれで良いんだ。張り付けにして、力で押し切る事がきっと出来るから。

俺は間髪入れずに剣を振るう。幾つも上がる水柱がウンディーネへ向かう。そして第一波が奴らに当たる……その瞬間、真横から凄い音がして水柱を消し飛ばした。
いや、音と言うか今のは・・超音波の様だった。そしてさらに向かう水柱にその超音波らしき声は向けられた。

「っづ……何だこの音？」

次々と消滅させられる水柱。音に圧力がある……そんな感じだ。それに音ってのは直接脳に響く。それが超音波ともなればかなり効果的だ。
脳が揺れる様な感覚に、足下がふらついてしまう。そんな中、俺は必死に誰がそれをやったのか見定めようとした。けどその時、忘れては成らない相手が降ってきた。

「あの子等の守りを何も考えてないとでも思ったか？　言っておこう、私は一人では無いのだよ！」
「づあああ！！」

俺はその攻撃を辛うじて盾で受け止める。だけど重い。スズラだけでも相当の勢いだからきついが、それに加えてこの雨……滝の様なこの雨の中で、上に向かって盾を構えるのはかなりきつい。

水圧が半端なく襲いかかってる。そしてついには、激しい水柱をあげて水中へと押し倒された。

「がっぼっぼこここここ……」

そんなに深い訳じゃないから直ぐに背中に地面が当たる。けどこのままじゃ、十分に水死出来るレベルだ。

（くっそ）

一刻も早く体を起こさないと……だけど、スズラの攻撃は止まらない。腰くらいまでしか無い水の中でも、スイスイ動くしどうやらあの剣、水の抵抗を受けないみたいだ。

振るスピードが陸の時と何も変わってないんだ。縦横無尽に切り刻まれる俺の体。これは流石にヤバい。幾ら加護でも高められた防御力でも、削られていく物は削られる。

それにこの好条件下でウンディーネとしてのスズラの能力はきっと自国にいる位に発揮されてる。

（随分早く泳げると思ったら……何だあれ？　フォームチェンジ？　人魚か……）

この水中で見えたスズラの速さ。それはこれが原因。ＬＲＯの海を支配するウンディーネ。あれがその理由の姿って訳だ。確かに速い訳だ。

けど陸であんな姿まで見せる何て初じゃ無いだろうか。基本陸じゃあの姿に意味ないし、ウンディーネの国は行きづらいから国交が余りない。

海で泳いでる姿もそうそう見かけないし、まずこっちは泳がない

からな。だからこんな技があるなんてって感じだ。
水中戦最強を詠うだけの事はある。
「良く耐える。だが、ここまでよ。水の中なら最強の騎士にさえ遅れはとらない！！」
スズラの言葉が普通に聞こえる。こっちは息止めてるってのに、向こうは必要無いみたい。まっすぐに突撃してくるスズラ。
構えた剣には水が付いていた。とことん水にこだわった戦い方。それなら！！
「がぼばあああああ！！」
俺は水の中で真下に剣を突き刺した。防御が間に合わないならこれしかないんだ。この水たまりは、土が水分を吸収する限界を超えてるから起きることで、それと多分奴らの魔法か何かでせき止めてるんだろう。
ここから魔法を破壊は出来ないし、ならこの状況を切り抜けるには何とかして、もっと大地に水を流す他無い。だからぶっ刺した。
力をここ周辺の大地に行き渡らせる。
（大きく砕けろ！！）
『クラッシュザアワー！！』
その瞬間大きな振動と共に、地面に亀裂が走り広がった。その亀裂は目には見えない地面の深淵にまで届いてる。そして剣を引き抜くと同時に、さらに大きな地震。
亀裂は更に大きく、水が流れやすいようになる。
「ぶはっああ」

ゴゴゴゴゴ――と排水抗に流れ込んでいく時みたいな音が聞こえる。確実に水かさは減っていた。だけどそれでもスズラは向かってくる。
腹を掠る程のスレスレで、だけど直前に飛び出してきた。
「考えたな。だがそれでも、尽きぬ水がここにはある！！」
水を纏った剣の突き。容易に防げる物じゃない。だけど、今の足場は幾分かマシだ。さっきよりもこっちだって速く動ける。
それに避ける必要なんて俺にはない！
「『守護者の盾エンアリオール』――敵の全てを受け止めろ！！」
その瞬間盾の面積が大きくなる。それは盾の周りに光のシールドが顔を出したから。この状態なら、どんな攻撃を防いでみせる。
そしてその思いの通りに真っ正面から俺はスズラの攻撃を受け止める。盾を貫かんとする白い水圧。だけどそれら全ては四方へ散っていく。
待っていたのはこの瞬間。普通にやってたんじゃ絶対に捕らえられないフィールドの差がある。けど決めに掛かる絶対の一撃を防げれば、抜こうとするはず。
その読みは当たってた。今スズラはマグロが止まった状態じゃ！！　つまりは『死』――
「たたき落とせ『守護者の大剣アインヴェング』！！」
更に握る大剣にまで、その切っ先に光の刃が浮かび上がる。更に切れ味と攻撃範囲を増した状態。盾の上から俺はそれを振りおろす。

その瞬間爆発の様な音が周囲に広がり、剣線から生じた衝撃が地面を抉りクリスタルを砕き落とす。クレーターの様に陥没した地面……だけどそこにスズラの姿はない。
あるのは無惨にへし折られた奴の武器だけ。

「スズラ様！！」

そんな声と共に、僅かに弱まる雨。敵にも動揺が広がってる証拠か。詠唱をしてるウンディーネ共もスズラが心配なのだろう。
そしてそんなスズラは雨を伝って仲間の元に姿を現す。最初に叫んだアイツは俺の道案内役だった奴。アイツだけ詠唱をそれまでやってなかったって事は、奴があの超音波を出した奴だろうか。

「っつ……とっとっと」

足下がフラツく。スズラの武器は壊せたが、こっちも相当なダメージを食らった。その影響か。ＨＰが黄色信号を放ってる。

「アギト様！！」

今度こそ来てしまったみんな。どうしてこうなるかな？　ああ、情けないからか。頑張ったけど、今の俺は結構情けない姿してる。この状態でも抉れたのはスズラの武器だけ。最強の騎士とか呼ばれる訳には行かないな。

「何やってんだ？　アイツの強さは見ただろ。さっさと本隊の所へ行ってろ！　ゼブラの二の舞になるぞ」

心配してくれてるのは分かってる。だけど、こういう言い方しか俺には出来ない。けれど誰一人、この場を離れようとする奴は居な

かった。

「すみませんアギト様……だけどゼブラだって後悔何かしてませんよ。貴方はこの国に必要な方で特別何ですから。だから逃げるならアギト様がお願いします。

俺達だけじゃ足手まといにしか成らないけど、本隊とならこいつらだってきっと叩けます。そして勝利を掴むんです」

みんなが良い笑顔で俺の前に立とうとする。けどそんなこと……何でお前達が犠牲になる必要がある？

「何言ってんだお前達。こんな……こんな何も守れない特別な奴がいるかよ。俺はアイリやガイエンの様に、そんな重責を負える様な奴じゃない。違うんだ！！」

きっとそれは自分を信じてくれてる人たちに言ってはいけない事だったのかも知れない。だけどそうでも言わないと、潰されそうだったんだ。

自分を信じてくれた奴らだからこそ、その命が重い。ゲームだけどさ、リアルではあり得ない信頼だろこれは。特に日本なんて国じゃ、普通に生きてる限り出くわさない事だ。

そんな国の子供なんだよ俺は。何気に生きて、ゲーム好きだから何気に始めたＬＲＯだ。ただ楽しく、時に厳しく位でよかったのに……離せなく卸せない何かが、いつの間にか絡み付いてる。

期待に応えようとしなかったわけじゃないし、最初は上手く回ってた。だけど今回は違う。やるやる事、裏目に出てばっかりだ。

そしてみんなを捕らえられた時から、恐怖感が離れない。助け出しても、それは消えはしなかった。

だからこそ、追いかけて討ち取って……でもその結果がまたこれだ。恐怖に刈られて恐怖を狩れば、また違う恐怖が顔を出すだけ。
責任ってのは逃れられない物なのか。力があるから、守りたいと思う。けど力があるから、争いのまっただ中へ俺は行きたがる。

そこで犠牲になるのは付いてきてくれる者達だ。そこで力がないと嘆くのはおかしな事なのかな。求め過ぎなのか？　俺達に出来るのはいつだってたった一つの事……それを通用させられもしないから、俺のこの力は中途半端にから回るのか。

「そんな事ないですよ」
「！」

はっとする様なそんな言葉。そんな事絶対にあるんだけど、そう言われると少し気持ちが軽くなる。

「そうです、アギト様は自分が思ってるよりずっともっと尊敬されてます。いつだって最前線で戦って……誰もが知ってます。
アルテミナスの為、アイリ様の為、ひいては我々の為だって。そんな貴方だからこそ、守りたいんです！！」
「そうそう、まあぶっちゃけ俺達の代わりは幾らでも居ますけど、アギト様はそうじゃないんですよ。救って貰った命をぞんざいに扱う様に感じるかもですけど……決して俺達は無駄じゃないって分かってますから！」
「はい、その通りですアギト様。貴方を生かせばきっと勝てる。だから勝ってくださいね。私達だって騎士ですから。
アルテミナスの為にその位させてください。ゲームでの死なんだから、余り重く捉えないでくださいね。勝利に繋がれば万々歳ですよ」

そう言ってみんなが武器を構える。何でこんなに俺に期待するんだよ。だから俺は普通で並の人間だって言ってんだろ。
どれだけプレッシャー背負わせる気だ。体全体を流れる雨がいろんな者まで流しきってくれたらどれだけ楽になるだろう。

そんな事を考えて、やっぱりそんな俺が嫌になる。結局どうしたいのか分からないんだよ自分でも。守りたいのに守れなくて、だから色々諦めたくなってる。
煩わしい物を切り捨てて、それでも絶対に一つはやり遂げるために。

（そうだ……）

言われるまでも無いことが一つある。

「勝ちはするさ。それは絶対に譲れない事。だけど……俺は本当は、全部守りたかったんだよ」
「「「はぁ」」」

その瞬間全員にポカポカ殴られた。まさかこいつらに手を上げられるとは予想外だ。何なんだ一体。

「あのですねアギト様。私達は貴方に守って貰うために同じ部隊に入った訳じゃないんですよ。私達は少しでも役に立ちたかったんです。
貴方の手助けをしたかった。だから少しでいいんです。協力させてください。私達だって守るべき側の騎士何ですよ」

騎士……確かに、ここに参加してる全員は紛れもない騎士だろう。それはアイリが認めてる。だからこそ余すことなく、加護が受けれ

るんだ。
俺はやっぱり傲慢だったのかな……いや頑固か？　騎士であるこいつらもただ守る対象なんて、悪い事だったのかも知れない。
なまじあった力があったから、何でもかんでもそうしようとしてたって事か。でもそれでも守るのは力がある奴の役目だろ。
やっぱり間違ってたなんて思えない。でも放棄したのも事実で、ああ～こんなんだから俺はダメダメなのか。
「俺は……」
そう口を開きかけた時だった。何を言いかけようとしてたのか、今の俺じゃもう分からないけど、その瞬間奴らは動いた。
「――――――

そう叫んだスズラの腕には降り注ぐ雨が集中してる？　そう見えた瞬間、スズラは腕を伸ばしてその水を放出した。

「アギト様！！」

その瞬間俺は押された。そして地面に膝と手を付いた時、後ろで凄まじい音が上がった。

「おい、お前バカか！？　あの程度の攻撃、盾で防げたんだ！！」

今のエンアリオールはかなり堅いんだからな。だから無駄……

「そうかも知れない……けど、それがきっと奴らの狙いですよ。奴らはここでアギト様を潰したがってるんです。だから攻撃を受けてる場合じゃない。

どんな事言ったって……アギト様は驚異だから……だから何とか本隊まで行ってください。それまで俺達が盾に成りますから！！」

「お前達……」

残り二人も何だか同じ意見の様に頷く。逃げるのか……みすみす絶対に勝てないと分かってる三人を残して。それが勝利に繋がるなら……それでいいのか？

さっきの一撃は何とか耐えたみたいだが、そう何発も耐えれる攻撃じゃない。

「邪魔……するな！！」

続いて数発連続して放たれる水の攻撃。本当に執拗に俺を狙ってる。けど盾を構えたのに、三人が壁となる。

「「ぐあああ！！」」
「きゃあああ！！」

水に吹き飛ばされて行く三人。それでもまた直ぐに立ち上がって盾になる。

「行って……ください！　早く！！」

三人で協力して水を防ぐ。俺は歯を喰い締めて背中を向ける。これがあいつ等の願うことならと。

「最強が守られる側とはな。自分の招いた事態を部下に押しつける気か？　飛んだ笑いぐさだな！！」

そんな言葉と同時に三人が吹き飛ばされて俺の前にまで飛んできた。だけどまだやれると言わんばかりに、立とうとするんだ。

そんな泥だらけの体でさ。

「聞く耳なんて持たないで……早く……早く行ってください」
「ええ、そうですよ。あんな魚の言うこと何て、気にしないでください」

そう言って再びスズラの前に立つために進み出すみんな。雨を泳ぐ奴の音が聞こえてて、やっぱりそれを捉える何てきっとこいつらには出来ない。

（これでいいのか……）

このまま逃げて良いのかって自分の心がそう言う。勝利の為に小

を捨てる。別にあいつ等がそれを望むなら、悪いことでも無いと分かってる。
けどさ、俺自身がそうじゃダメなんだ。アイリを守りたいし、勝利だって掴みたい。望みはたった一つに絞った筈だ。
なのに……ここまで自分を犠牲にする奴らを見捨てるのか。ゲームだからとか、そんな気持ちであいつ等やってないだろ。
背中から聞こえる叫びが、激しく胸を打つ。分かってるけど、納得は出来ないって奴なのかな。あいつ等の意志を尊重したかった。
けど……俺はもうあんな思いはしたくないって決めたんだ。そのために身勝手して、わがままやって、それでこれじゃもう耐えられねえよ！
俺はその瞬間、雨を斬り割いた。丁度スズラの位置まですっぱりと。そして一気に接近して盾を叩き込む。これは初めてのクリーンヒットだ。

「どうして？　何やってるんですかアギト様！！」
「別にいいだろ。自分だけ逃げるなんて胸くそ悪い。いいんだよこれで。全員けちらせば文句無いだろ」
俺はそう言って、更に剣を振り回す。最初は呆れた様にしてたみんなも、次第に仕方なくやってくれる。それにその顔は以外と晴れ晴れしてた。
まあ怒ってるのも見えたけどさ、それでもさっきまでの苦しそうな物じゃない。俺達は再び、不利な戦いを行う選択をしたんだ。
だけど実戦はそんなに甘い物じゃなかった。地の差は次第にはっ

きりとしていった。どう考えても今回はウンディーネ側に傾き過ぎてるけど、それを今更言ったってしょうがない。
それにイレギュラーもあったんだ。まさかそんな事が起こるなんて。けど俺は最後までその場に立ち続けた。ガイエン達が向こうの本隊を崩してこちらにくるまでさ。

それによってスズラ達は一時撤退していったけど、俺の中に残ったのは空しい焦燥感だけ。勝ったなんて、やり遂げたなんて思えなかった。
だってこの地面に立ってるのは俺一人だから。地面には空しく残ったみんなの武器だけがある。

（結局……こうなのかよ）

そう思った。俺は自分しか結局生かせてない。彼らの死にゆく様が脳裏に焼き付いてる。泣いてる場合じゃない。もっと大変な事が起きてるんだ。
だから涙は雨に溶かして前を向く。敵を全員、余すことなく倒してこの戦いを勝利する。それがせめてもの償いで、責任の取り方。そして急いで戻ろう。アルテミナスへ！

（一体何が……無事だなよ……アイリ）

空しさ（後書き）

第百二十一話です。

ようやくこの戦いも終われそう。そして過去編も急ピッチで行きますよ！

今回はちょっと時間がないからこの辺で。実は今日から実家に帰らなきゃなので。だけど次回分は予約掲載しときます。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではまた。

封じられた牙（前書き）

僕達は再び柊の前に立つ。だけどそこにいたのは今までの柊じゃなくて、そしてそんあニュー柊は攻撃は既に始まってたんだ。身体の芯から気付かせずに凍らせる技。

だけどその本命はどうやらたった一つだたらしい。僕達はそんな柊の罠に次々とはまってく。

封じられた牙

真っ白な冷気の中に奴は佇んでた。氷を砕いて飛び出して来た僕たちに何をするでも無く、ただそこでその姿を見せつけてる。
冷気を放つ白と薄い紫が混じりあった扇子を手に、氷で作られた様なその花の姿……いや、ドレスなのかな。花は装飾。

けど装飾を越えた量ではある。腰から無数に伸びたそんな花は床へかなり広がってるし、頭にもワンポイントとしてついてる。
邪魔に成らない様に括ったのか、今はサイドアップって奴か？
けどそんな下半身のボリュームとは正反対な位に上半身がかなり無防備な状態になってる。

鎖骨も肩も大胆に出てるし――てかそんな問題じゃないな。氷が体を這って、それが胸の膨らみに届いてるだけ。細い氷が背中にも回ってそうだけど、氷の周りは皮膚を浸食するように成ってるんだ。

腰のかなり際どい部分から胸に向かって出てる氷。下半身のあの豪奢なドレスはその氷が厚みを増した感じなのか
？

てか、柊の華奢で可憐とも思えるほどの白い肌に張り付くあの氷……かなり危ない感じだ。
実際あれって、角度変えれば中身が見えるんじゃね？　とか思っちゃう。

（いやいやいや、それはあり得ないだろ！！）

そういう劣情にＬＲＯは厳しいんだ。限りなくリアルだからこそ、

そこら辺は分別を付けてるんだろう。だからきっと見えないよ。

「スオウ……」

何だか横から少し声色が落ちた女の声が……僕はなるべくそちらを向かない様に気をつける。だって絶対に冷めた目で見られてるもん。

見なくても分かる。きっと僕だけじゃないのに。てか、男なら思わずには居られないだろ。一瞬でも考えない分けない。

けど同時にゾクッともしてた。自身を氷に包んだあの姿。あれがきっと本気の証だろうから。綺麗な中に棘がある。そんな女性がここには沢山で、良く学んだからな。

「さむ……」

仲間内の誰かがそんな事を呟いた。そう言えば吐く息が白く成ってる。柊は不気味な程微動打にしないからこっちも動きずらかったけど……これって。

僕は剣を握る腕を少し動かしてみた。

「！――堅い」

体全体がそんな感じ。冷やされてるんだ、この冷気に。気づかないほどゆっくりと、でも急速に。僕たちは気付いてなかっただけで、柊から攻撃されてたんだ。

いかにもアイツらしいじゃんか。自分が手を下さずとも倒すってさ。汚れるのが嫌いらしいからな。でもそんな簡単にやられてたまるか。

「みんな、これ事態がアイツの攻撃だ。動かなきゃ凍らされる。僕が正面から行くから、援護頼む」

僕の言葉にみんな頷いてくれた。モタモタなんてしてられない。動こうとしたことで事態の深刻さに気付いた様だ。

てか早い奴は足下が氷にくっついてたりしてる。派手に凍らせるだけじゃ無いわけだ。剣を構えるだけで体の節々からパキパキと音が聞こえる。

僕の体も思ってた以上に影響を受けてる。そんな時ガシャンガシャンと重い音が後ろで聞こえた。振り返るとそこに落ちてるのはそれぞれの武器。

「腕が……」

そんな声が呟かれてる。どうやらこの冷気で腕の感覚が無くなってるらしい。遅かったのか？

（いや、まだ間に合う筈だ！！）

風が僕の周りに集い出す。イクシードは継続してる。だから一気に、こっちに引きつける。その間に暖かくすれば感覚も戻るはずだ。

竜巻の様に白い風が自身の体を包む込む。そして足に力を込めて……

「行くぞ！！」

自身の周りの風を二つに分けて刀身へ。イクシードでスピードもかなりアップしてる状態なら、柊まで一瞬だ。そう思ってた。

けど、僕の体は動かない……

「何……だ……これ？」

首も動かない状態。視線を這わせると見える範囲でも白く成ってるのがわかった。それは柊の体を這ってる氷と同じ。

これはつまり、今までの比じゃないスピードで僕の体が凍ったって事か？　でもどうして……すると、今まで微動打にしなかった柊が、顔を上げて妖しく笑った。

「ふふふ、どうしてって顔してる」

まさにその通り。それに氷が顔にまで来ていて、口が動かせない。問いただしたいのに、それさえ出来ない何て。

「スオウ。ちょっとどういう事よ！！」

するといきなり後ろから聞こえた元気一杯な声。リルレットが横に来て、柊に向かってそう叫ぶ。何だか随分軽快に動けてるように見えるな。

こっちは症状が進んでるってのに何で？

「あらら、雑魚が粋がっちゃって。別に私は何もしてないわ。今まで通りにしてただけ。でもスオウが凍って、貴方達が動けてる……その違いは明白でしょ？」

僕が凍ってリルレット――達？　が動けてる理由。達って事は後ろの方も回復しつつあるのか？　でもだから何でだよ。

勿体ぶった言い方しやがって・・明白な理由、それが何か分かれば苦労なんてしない。腕の先で吹き荒れる風の唸りが耳の近くで聞

こえてる。

（これをぶつけられれば……あの氷全部砕いてやるのに）

けどそんな事は、今の状態じゃ夢のまた夢。

「何もしてないわけ……スオウどんどん白く成っちゃってるよ」

自分の全身は見えないけど、リルレットがそう言うんならそうなんだろう。本当に何で僕だけ？　イクシードがこんな冷気何かに負ける筈が……

「分からないかな？　その自信満々のイクシード、寒いでしょ？」

「！！」

その瞬間、まさかって考えが頭を貫いた。いや、だってイクシードは僕の切り札なんだ。でも、柊の奴がただ冷気を出してるだけで、僕のこの状態の間にみんなが動けるって事は、本当にそうなのかも知れない。

「何言ってるのよ？　寒くしてるのはあんたでしょ！！」

そんな風に叫ぶリルレットの声が聞こえる。けどその時、さらに違う声が後ろから聞こえてきた。

「違う、風だ！　イクシードが生み出す強力な風が、奴の冷気を巻き込んで彼の周囲だけを著しく冷ましてるんだ！」

そう、僕も同じ事を思ってた。「寒いでしょ」と言われたとき、この頼ってきた風が脳裏に浮かんだんだ。風に寄って奪われる体温

は安くなんてない。
それが冷気をはらんで、しかも周囲までもそれだけで体の機能をおかしくさせてる状態なら奪われる体温は想像以上。
吹雪の状態とも変わらなかったのも知れない。みんなの症状が軽く成ったのは、イクシードがそこら中の冷気を巻き込んだ風を作ったから。
それを一身に受けてた僕がこうなるのは当然か。
「風って……それならイクシードを解けば大丈夫って事だよね？」
「ええ、後は自分が元の状態まで回復させて見せましょう」
そう言う二人の会話が聞こえて来てた。だけどイクシードを解くって事がどういう事なのか……それは切り札を無くした状態で柊に勝たなきゃいけないって事だ。
それがどれだけ困難か……イクシードはだって僕の心の支え。道を切り開いてくれる絶対的な力。
そりゃあ、イクシードだけで来た訳じゃないけど、使えるか使えないかで心の余裕が違ってくる。
「ほら、聞こえてるでしょスオウ！　イクシードを止めて！」
リルレットの声は確かに聞こえてる。だけど僕の苦悩は止まらない。だって、イクシード無しで奴に勝てるか？　イクシードは乱舞の機能を模して効率化し使用時間を延ばしてるから、その分再発動までの時間が乱舞より長くなってる。
その時間は十分……普通のボス戦なら何十分もかかるらしいからチャンスはあるかも知れない。だけどそれはちゃんとバランスに沿

ったボス戦の話だ。
みんなで頑張って、ちゃんとやれば確実に倒せると保証されてる敵。けど……今僕たちの前に居る奴はそうじゃない。

バランスを無視した存在で、それだけの力を有してる。それは今までの攻撃で証明されてるんだ。そんな相手に十分……次があるか何て分からない。
それに今からの十分は長過ぎる。セツリを追いかけたいのに、それじゃ遅いんだ。だけどこのまま氷漬けにされる訳にも勿論行かなくて……のし掛かる不安から、僕はイクシードを手放せない。
そしてそれを見破ってる様に柊が口を開く。

「出来ないわよね。だってイクシードはあの子に辿り着くのに必要だもの。その前に私を倒すためにかしら？　それが無くなったら自信も無くなる」

技同様冷たい言葉が刺さってくる。自信も無くなるか、言ってくれる……当たってるけどな。

「そんな事！　……でしょスオウ！？」
「じゃあ何で風は消えないの？　イクシードを手放すのが怖いからよ」

そんなやりとりが行われてる間にも、僕の視界には氷が浸食して来だしてた。時間がない……イクシードは思うだけで止める事は出来る。
けどそれでいいのか・・イクシード無しでやれるか？
「それは、確かにイクシードが使えないのは痛いけど……でもここでスオウが倒れたら元も子もないよ！」

それはそうなんだけど、前に進めなくても意味なんてない。このまま凍るのも、柊の先に行けないのもイヤなんだ。
だから……どうすればいいのか分からない。

「そうだ、ソーサラーの魔法ならイクシードを止めなくても暖かくすることが出来るんじゃ？」
「それです！！」

そう言って二人は後ろに何かを言っている。この際、動けるようになってイクシードも手放さないで良いのであれば何してもいい。
炎系の魔法をぶち込んでくれって気概だ。どうせＨＰは減りはしない。

「行くよスオウ！！」

後ろからそんな声が聞こえてきて、光源が前に影を向ける。もう来てる筈だ。

（頼む！）

僕はそう祈りながら心だけで身構えた。だけどその魔法が僕に当たることは無かった。幾ら身構えてても衝撃なんて一つも無い。どういう事だ？
撃ったはずだよな？　すると後ろからリルレットの声が聞こえた。

「なっ……そんな！　あの程度じゃ駄目みたい。もっと強いのお願い！！」

一体何が？　僕には前しか見ることは出来ないから分からないけ

ど、想定外の出来事が起きてるみたいだ。撃ったはずの魔法が当たらなかった……まさか柊が？
だけど奴の武器である扇子は振られる事は無かったはずだ。じゃあどうして？
真っ白い冷気が周りを流れてく。僅かに吐く息までそんな冷気と大差なく感じれる。

（どうして何て僕が考えても、どうにも出来ない事か）

今の僕には仲間を信じるしか出来ない。遠慮なんて良いからおもいっきり……きっとやってくれる。

そして今度は頭上から熱源が降ってきてる。これはさっきの炎の壁？　いや、違う。もっと攻撃的になってる。てか大きい？

「「「いっけえええええ！！」」」

三人のそんな声が鼓膜に伝わる。これは相当自信あるんだろう。確かにこれだけの炎の魔法なら確実だ。柊も動かない様だし。
もの凄く余裕の顔で佇んでやがる。体が動く様になったら一瞬でこの風、全部返してやる。そう思ったけど

（あれ？　炎は？）

周囲に落ちていく僅かな残り火は見える。だけどさっきまで頭上に落ちて来てたあの炎は何処へ？

「そんな……」
「まさかこれ程だなんて・・後はないのですか？」

「俺が持ってる炎系ではあれが精一杯なんだ。でもあれでも結構な魔法なのに……」

一同が肩を落としてるような会話が聞こえてくる。それは僕も同じだ。あれだけの魔法が掻き消えるなんておかしい。

やっぱり柊が何かしてるとしか。けどその時、僕の瞳はある現象捉えた。それは掻き消えた魔法の炎の一部が舞い落ちてるとき、それが風に巻き込まれた瞬間に消えていった。

（まさか、魔法が届かない理由って……）

僕がその可能性に気付いたとき、リルレットが僕の前に進み出て言った。

「あのねスオウ、無理みたい。放出型の炎は全て手前で消されちゃうの。イクシードの風で」

まさにそれはさっきの光景と同じ事が起こってたって事なんだ。イクシードの強力さがこんな所で裏目に出るなんて……けど、いつもあれだけの炎を消す何て事が出来るかは疑問だ。

きっとこの条件下だからだ。今イクシードが纏う風は冷気何だ。だからあれだけの炎をかき消せるだけの力がある。

まさか柊の奴、分かってたからあんなに余裕だったのか？　いや、そもそもこうなってからは全てが奴の狙い通りだとしてもおかしくないと思えてくる。

この冷気の充満も、そもそも僕がイクシードを使うことを分かってたから打てた対応策。まんまと僕はそれにはまったんじゃ……だからこそ、何もしてこなかったんだ。

僕がイクシードで自滅すると分かってたから……何かそれって

（すっげー悔しい。柊の手のひらで踊ったのかよ僕は。そして今も……）

「お願い！　イクシードを止めて！！　それしか無いよ！」

リルレットの顔が膜掛かった様に見える。既に顔の半分以上が凍ったのかも知れない。なまじ見えない分、怖い。いつ自分が凍りきってしまうのか……それを考えるとさ。

「さあもう諦めなさい。イクシードがなければここは抜けない。分かってるでしょ？　それどころかイクシードが無いと君はただの初心者。

そんな初心者には万の一つも可能性何て無い。頼ってきたイクシードに邪魔されて、惨めに手放しなさい。そして無力の中で立ち止まるの。

そしてくれると助かるわ。だって私汚れるの嫌だもの」

そう言って優雅にワンターンする柊。氷のドレスが光を反射して煌めいてる。もう勝った気満々だな。でも確かに、僕はイクシードが無かったら初心者だ。

こうやって熟練者の中で対等以上に居られるのはこの力のおかげ。『乱舞』が僕を選んでくれて、『イクシード』が更に昇華してくれたおかげだ。

そんな二つの繋がりは大きく強いと思ってた。だけどその繋がりが今思わぬ問題となって立ちはだかってる。イクシードの先をやるには先にイクシード事態を発動させてることが条件。

だからイクシードが十分間使えないって事は、その先の力も使えないって事。

「スオウ！　あんな奴の言うことばっかり気にしないで！　スオウはイクシードがなければ何も出来ないの？　スオウの信頼って結局そんな力だけだったの？
それじゃあ私たちは何なのよ！　何の為に私たちを求めてたの？
イクシードだけで勝てるのなら、私達なんていらないじゃない！！」
（リルレット……）

確かにリルレットの言うとおり、僕はみんなの力を元から頼ってた筈だ。そうじゃなきゃきっとここまでこれ無かったし、もっと早くで力尽きてた。
確かにこれじゃ僕はみんなよりイクシードを信頼してるみたいかも。

するとリルレットが凍り付いて行く僕の頬に手を添える。その瞬間リルレットの手にも氷が這っていくのが見えた。このままじゃいけない……けどリルレットは気にせずにこう続けた。

「確かにイクシードはとっても強力で、きっとこれまでもスオウの道を一杯切り開いてた力だから、それが戦闘中に使えなくなるのが怖いの分かるよ。
私達はそんなイクシードには成れないもの。けどね、私達は力を合わせる事が出来るの！　私達それぞれ、きっとそんな強くないけど、合わせた力は絶対にイクシードにも負けないよ」

そう言って最後に優しく微笑むリルレット。その笑顔になんだか怖がってた自分がバカみたいに思えてくる。みんなを無理にでも引き留めたのは僕なのに……必要だって言ったのに、今がその時じゃ無くてどうするんだ。

絆とか思いの力とか、僕はそれを知ってる筈だ。イクシードだから倒せるんじゃない、負けない思いが集うから道は切り開くんだ。

（もう、いいか）

そう思った。イクシードには少し休んでもらってもさ。みんなとなら、きっと倒せる。全員無事に元のＬＲＯに戻るし、その時はセツリもエイルもきっと一緒だ。

いつかここに笑って戻れる様に・・そう願ったじゃないか。今は無惨な氷の世界に成っちゃったけど、全部終われば元通りになるだろ。

楽園なんだ。きっとここはセツリのさ。そしてそれを願って作った人の。

風が次第に弱まっていく。自身の周りに集っていた風が周りに拡散して行ってるんだ。そして風が収まると同時に炎の魔法が容赦なく打ち込まれた。

「ってってってって――あっちーだろ！！」

「あ」

「お」

思わずあがった僕の叫びに一言づつ言葉を漏らすリルレット達。すると僕を撃ちやがったソーサラーがぞんざいにこう言った。

「喋れる様になったな」

まあ確かに一気に体はホッカホッカだけども！！　確かにさっき

までは容赦なく撃って来い！　とか思ってたけど、このシーンでやっちゃうか。
何だか風が冷気を周りに流していって、幻想的に成った中で佇む自分とリルレットが絵になってたのに……一気にこれじゃコントだろ。

せめて一声欲しかった。まあでもこれで、ようやくまともに戦える。まともかは実際微妙だけど、体はまともに動く様になった。

「ホットアーマー！！」

そんな言葉が聞こえたと思ったら、今度はその暖かさを包むような魔法が施された。後ろを向くとヒーラーのアイツが補助系魔法をしてくれたみたいだ。

「今のこの場所は氷雪地帯と同じ様なので……最初の時は気付くのが遅れて申し訳ない」
「いや、いいよ。しょうがなかったし、これはありがたい」

これで冷気に凍らされる心配はなくなった。ちゃんと対応できれば結構やれる物だな。流石は熟練組。便利なスキルを一杯持ってる。
一礼をして後ろに控えるヒーラー。何か執事みたいだな。まああそこが定位置なだけだけども。

「信じてくれてよかったよ」
「何のことだよ？　僕はいつだって仲間の事は信じてるさ」
「むう～何よそれ！！」

リルレットには軽口で返してみる。まあ本当に助けられた訳だけど、何か気恥ずかしかった。するとその時、甲高い音がこの場に響

いた。
目を向けるとそこにはヒイラギの姿。あの音はどうやら、地面を踏んだ音か？　まあアイツにとってはどっちを選んでも余り大差無いんだろうけど……だがこっちの方が面倒なのかな。

「あらあらあらら、私も舐められた物ですね。薄っぺらい繋がりとかで勝てる何て思われちゃってるんですから、ホント心外です。
あのまま凍っておけば、この先の絶望を知ることは無かったのに……やっぱり貴方はバカですね」
「ああ、別にバカでもいいさ。最近それも悪く無いかなって思ってきたし。立ち止まって何も出来ない奴より、仲間を信じて進み続けるバカがいいんだ」

僕はそう宣言してやった。すると柊は扇子を音を立てて畳んだ。それは今までの行為から考えると、次の攻撃に入る動作。そして柊は短くこう言う。

「あっそ」

そして腕を前に振って開かれる扇子。すると真っ白な壁が迫ってきた。いや、あれは冷気の嵐だ。

「「「うあああああああ！！」」」

あっという間に視界が真っ白に変わる。そして吹き荒れる冷気の中で煌めく小さな氷。それが体に当たって大きく成っていく。

「またこれか！」

どうやらつくづく凍り漬けにしたいらしいな。そんな中で聞こえ

たリルレットの声。

「スオウ！　イクシードが無くても出来るって所、アイツに見せようよ！　併せて！！」

その瞬間リルレットのスキルの光が見えた。実際何を合わせれば良いのか何てわからない。けどここはやるしかない。

「いっくよおお～バサラ！！」

「雷放！！」

二つの色の違う雷撃が冷気の嵐に放たれた。それらは絡み合いそして大きく弾け飛ぶ。その衝撃で嵐も冷気も拡散していった。

そして雷撃に当てられた氷がきらめき僕らの周りを落ちていく。

（やれる！）

僕は心でそう確信して、自慢の剣を奴に向ける。「覚悟しろ」と言わんばかりに。

封じられた牙（後書き）

第百二十二話です。
柊強しです。でもそれでもスオウ達は向かいます。けど服装が変わったのは伊達じゃないのです。次回はそこら辺が見れるはず。これが掲載される時は実家ですので本当なら次回は月曜日更新！　としたいけど、不安ですね。
なのですいませんけど次回は火曜日位にまけといてください。でも上げれたら月曜日に上げるかも。
その時までお楽しみに。

雨上がり、心曇り（前書き）

消え去った力は偉大だった。みんなの心の支えで、自信に繋がって、一歩を迷わず踏み込む勇気をくれてた筈の優しい力。だけど今それが姿を消した。まどう仲間達にガイエンが示したもう一つの力は俺と言う存在で、それはきつい事だったけど、「やるしかない」そう思って俺はやる。

雨上がり、心曇り

加護がその身から消えていた。そんな事あり得ない筈なのに……そのあり得ないが起こってる。一度掛けてしまえばその戦闘中は永続的な筈なのに、そんな加護がスズラ達との戦闘中に消えたんだ。

そしてそれはどうやら俺たちだけじゃない。ガイエン達本隊からも加護は消えていた。何が起こったのか分からない。でもただ一つの可能性が考えられる。それはアイリ……あいつに何かあったって事。

俺たちに加護を届ける為に城に止まってくれてる間に、何かが……だってこんな事は今まで無かったんだ。加護の大きさを分かってるアイリだ。仮にもこの侵略中に落ちたなんてあり得ない。

じゃあ何が？　俺たちに知る術はない。

「ガイエン……ウンディーネ共が。それにこれって……」

俺はザワザワとなってる中で静かに自信の手のひらを見つめるガイエンに声をかける。周りの誰にも反応しなかったガイエン。だけど俺を見つめて一言こう言った。

「分かってる」

それを言われた直後、俺たちはそれなりに分かり会えてる――そう思った。そして直ぐに混乱する周囲を抑え始めるガイエン。

加護はみんなに自信と勇気と安心をくれてた力だ。それが突然消

えたのは、軍を混乱させるには十分な出来事。でもガイエンは的確にそんな空気をその言葉の中に納めていく。

この豪雨で加護を受けても劣勢だった状況。そんな中ようやく掴み掛けた勝利だった。けど加護の消失でそんな勢いまで無くしてしまうかも知れなかった。

気持ちで負ける……そんな感じ。だけどそれを上手く回避した。最後の最後に俺を使って。

「皆、案ずるな！　加護が消えて不安なのも分かるが、ここまで勝ってきたのはそれだけか？　そんな分けない！　私達全員がこの国の為に！

それを胸に抱いてたからだ。それさえあれば私達は決して負けない。責任を感じるであろうあの方に『問題ない』と言える強さを見せるんだ。

それに私達の最強の剣はまだ健在だ！」

俺の注がれる視線を周りいっぱいから感じた。ガイエンもコクリと頷いてる。けど俺はさっき感じたばかりだ。自分のふがいなさを。

慕ってくれてた部隊の仲間……俺は誰一人守れもせずに生き延びた。それはとても空しい事だった。でもここでこの視線を全部裏切れるかって俺はガイエンに言われてる。

そしてそんなの出来るわけ無い。あいつ等は俺に生きて勝つことを願ってた。ならのうのうと生き残った俺は勝たなきゃ……勝利を掴まなきゃ本当に何も出来ない奴になってしまう。

俺は拳に力を入れて、雨降る天を切り割いた。すると雨雲までも切り割いて降り注ぐはスポットライトの様な光だ。

すると一瞬静まり帰った周囲……だけど直ぐに地鳴りの様な雄叫びが沸き上がった。

「「「うおおおおおおおおおおおおお！！」」」

けどそんな息上がる周囲の熱を、俺は重く感じてた。だってこの叫びは、その分だけ俺への期待とかだろ。今までなら、それを嬉しくも感じれた。

だけど今は……

「良い演出だったぞアギト」

そんな事を傍に来て言うガイエン。演出か……確かにそうだろう。こんなのは演出だ。でも俺に力があるのは事実で、それがこんな状況の為でもあるのは確か。

それを「力はあるけど、俺が使ったら弱いんだ」なんて言うのは許されないだろ。俺は『倒れられない』事を義務づけられてるみたいだった。

「俺は勝つ。前線で行くぞ。文句はないよな？　奴らは全員先滅だ」

それがきっと俺がやらなければいけない事。俺はそれをガイエンに伝える。

「当然。加護が無い今、お前を全面に押し出して生き残り共を追いつめる。先滅するもまあいいさ。こっちはその間にシンボルを探す」

ガイエンはすれ違い様にそう言う。そして一言付け加えた。

「きつそうだな」

それは意外な言葉。何を看破されてるかなんて、こいつとの場合考えたくもない。だけど結構弱気になってた俺はついつい言葉を漏

らす。背中越しのガイエンに向かってさ。
「お前は……お前はきつくないのかよ？　お前が言う責任って奴がさ」
「それはお前と私との覚悟の違いだ。それと目指してる場所の違い。お前は何でそこにいるんだ？　明確に答えてみろ」
「それは……」
言葉が出てこない。あの三人の中で流されてたのは俺だけって事か。ガイエンはそう言えば最初から何か目的があったみたいだったし、アイリは自分で自分の道を選択した。
そしてみんなの為にってゲームなの本当に必死だ。まあだからこそ、そんなアイリだからこそみんなに慕われてるんだろうけどな。
そんな二人に挟まれて、俺が目指した場所はどこだった？　アイリが俺に自分の中の決意を言ってくれたとき、『力になろう』そう決めた。
ガイエンの目指す場所がどこか知らないが、二人に比べたら俺は軽かったかも知れない。同じ場所を歩いてれば、同じだけの何かが得られるとでも思ってたんだろうか。
二人は、いや少なくとも俺が知ってるアイリは、もっともずっと凄い決意でここまで来たんだ。俺があの時決めた何十倍何百倍位の気持ち。
それが今も前を向いて歩ける理由なら、俺は本当に全然、何もかもが足りなかったのかも。ここに居る理由が「アイリの為」なんてもうきっといえねーよ。だってアイツは歩いてるんだ。俺の少し前をさ。
じゃあアルテミナスのため？　エルフの為？　いやどれもピンとこない。間違いでは無いけど、どれもこれもアイリの二番煎じだ。

じゃ何が……指にはまった無骨な指に似合わない指輪が、空を走る稲妻で照らされる。そえはこの力を託された時に交わした指輪。
あの頃は本当に迷いなんて無かったのに。この指輪の誓いだって・・・

（俺はダメかもな）

何となく一瞬そう思った。直ぐに否定するように頭を振っても、一度してしまった行為は頭では取り消せない。

「分からなくなってるのなら、もう一度示せばいい。お前はあれこれ悩むタイプじゃないだろ？　とりあえず、弱気は見せるなよ。
初めてあったときみたいに無駄に生意気でいろ。アイリに持っていくのは良い報告が良いだろ」

言葉を返せない俺にガイエンは何だかまともな事を言う。てか今回でかなりガイエンが良い奴に感じるんだが、天変地異の前触れか？

（けど……実際俺は体動かす方が得意なタイプ。間違っちゃいないし、そうだアイリ）

俺はうじうじ考えてた自分を頭の隅に追いやった。そして下を向いてた顔を上へ上げ、この土砂降りの雨を顔面で受けとめる。
余計な気持ちを雨に流して、俺は言う。

「ああ、今はアイリだ。ここに時間なんてかけてられない」

俺たちは動き出す。幾らウンディーネ共がこの雨を味方に付けて

るとはいえ、この地は元はアルテミナスの一部だ。
地理に詳しい奴や、捜索スキルに長けた奴が居れば見つける事が出来ない場所じゃない。不意打ちや先手は取れないし、多分向こうも既に気付いてるだろう。

加護が消えてる事に。けど……それでも俺は放つ。真っ正面から乗り込んで、関係ないと言わんばかりの一撃。吹き飛んだ水しぶきは有に二十メートル位延びたかもしれない。
そして続けざまに向かってくる敵に対して剣を降り続ける。無数の影が宙を舞う。それらは数えるのも億劫で、気にせずに前へ行く。

するとそんな俺の後ろから地鳴りの様な音が続いてきた。触発されたみたいな軍のみんな。加護が消えての不安はあるだろう。だけどみんな、それを気持ちで補うかの様な叫びをあげてた。
再びぶつかり合う両軍。だけど今回は逃げ場なんて無い。この侵略戦の最終決戦地なんだからな。

スズラが率いる混成連合軍が撤退したのは元は俺たち側の開始地点の方だった。その真意はきっとシンボルがこっち側にあるから。俺たちはこの雨のせいでほとんどシンボルの捜索が出来なかったからな。

けど多分奴らはやってる。便利な目が有ったんだし、やらないわけ無い。それにスズラ達ウンディーネは勝たなきゃ何だからな。
シンボルが万が一でもこちらに見つかるよりは、自分達で見つけて守護してた方が安全って考え。一人でも逃げきれるだろうしなウンディーネは。

人間共は利用されてるとも知らずに、次から次へと向かってくる。けどこちらも凪払い凪払い、道を造り続ける。この状況は有る意味

好都合何だ。
だって検討もついてなかったシンボルの場所を向こうが示してくれたんだからな。だからって渡すわけには行かない。俺達は勝つ。その為にはシンボルは必須。

（全部ぶっ潰して、行く先にシンボルだってある！）

俺はそう思いながら、進んでた。もうこうなったら、ガイエンの方を待つ事なんてない。俺はここでありったけの力を振るう。
そしてそれは確実に脅威となってる。ああ、その筈だ。だけど少しずつだけど感じて来てた。絡み付いてくる何か……増援が増す度にそれは多分増えてる。
重くなってる。

「ぬぁぁあああああああ！！」

一振り一振りが……一挙一足が……阻害されてる。いつしか次第に俺は「イヤだ」と思いながら戦ってた。けどそれでもやめられない責任がある。
大乱戦の中、俺はついにその場にたどり着く。地面から輝いて現れたのは奴らのシンボル。そしてそれを取ろうとしてるのは間違いなくスズラ！
その手にシンボルを握らせる訳には行かない。だけど立ち塞がる奴らが邪魔だ。その時、後ろから飛び出して来た援軍がそいつ等の相手をしてくれる。

「行ってくださいアギト様！」
「シンボルをぶっこわしてください！」

俺はそんな声に応えて、開かれた道を駆けようとした。だけどそ

の瞬間「ジャラ」なんて言う、鎖が絡まったかの様な音が聞こえた……気がした。
振り返っても何も見えない。体のどこにもそんな物は無いのに……だけど確実に感じる重さがある。全身を流れ落ちる雨の中、輝くシンボルはもうスズラの手に吸い込まれようとしてる。
重いなんて言ってられるか！！

「あぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁ！！」

地面を踏みしめる音がこんなにも大きく聞こえたのは初めて。そして「ジャラジャラ」と聞こえる音はもう、幻聴なんてレベルじゃない。
でも全てを無視して目指すはあのシンボル。振りかざす大剣。だけど向こうも反応してる。予備の剣なのか知らないが、携えたその武器を俺の大剣へとぶつけてきた。

二つの武器の衝突は凄まじく、弾き出た衝撃波が周囲を軽く吹き飛ばした。けどどのみち届かなかった大剣。スズラはその間にシンボルを手中に収めてる。

「悪いがゆずれんなここは！！」
「譲る事なんてない……ただ、奪い返してぶっ壊すだけだ！！」

パキ――そんな音がどちらかの武器から聞こえた。そして俺たちは言葉の終わりとともに強引に押し切ってた。振り抜い互いの武器。
俺の大剣は地面に刺さり、周囲にひび割れを起こさせる程の威力があった。そしてスズラの方はと言うと、その剣の先が無くなってる。打ち勝ったのは俺の方。

この剣は絶対に打ち砕けない。それだけの力を秘めてる。俺が使

いこなせてるかは別にして。
二度目の武器破壊で流石に動揺・・してるかと思ったらスズラのそうじゃない。どちらかと言うと俺の方が必死だ。
追い込むために続いて振った大剣。歯を食いしばってありったけの力を込めた俺に対して、スズラは武器を捨てて軽く上を向いてる。
「文句などいわせんさ。この土地の占有権は我らが頂く」
そんな声が漏れ聞こえる。続く攻撃に気付いてる訳はないだろうが、そんな事を言っていた。そして俺の大剣が雨を横に切り割いた。そう雨だけを。
そこにいた筈のスズラ……だけど切った瞬間にスズラは水となり雨の一部に欠き消えた。水を使った身代わり？　スキルなのか？　でも……その瞬間滝レベルにまで跳ね上がる雨の量。
そしてそんな雨を割って迫るは水の槍。俺は剣でそれを叩く。けど次の瞬間には無数に空いた穴から槍が次々と降り注いで来た。
（やっば……）
それは流石に捌ける量じゃない。俺はとっさに後ろへ下がる。ドドドドドドドドドドと地面に突き刺さる雨の槍。止まらないその量は重くなってる体にはきつい。
追いつかない……体を、髪を、肌を紙一重で水の槍がかすってく。
「負けられない……俺は倒れられないんだ！！」
大きな盾で体を覆い、槍を避ける事をやめた。そしてタイミングを待つ大剣。それは直ぐに来る。槍の一段が振った後の僅かなインターバル。
その瞬間に雨ごと吹き飛ばしてやる。うざったいんだこいつら、

雨で隠れてコソコソと……こっちはもうただ苦しいのに、これ以上粘るんじゃない。
けど向こうも必死……だがな俺には誰かの気持ちをくみ取って加減なんて出来る状況じゃない。だから

「死んで貰うぞスズラ！」
「それが出来ると？　手も足も出なかったのを忘れたか？」

人魚形態になってるスズラは雨の中を自在に泳ぎ回る。そのスピードはまさに魚……こんな重い体じゃ確かに捉えられないかもしれない。
だけど不思議と力は沸くんだ。自分が自分に追いつめられるせいか知らないけど、切羽詰まってる俺はルールとかそんなの軽く無視してる。

きっといつでもどこかに有った理性ってリミッターが外れてる。だからいつもより大きく切れて、いつもより派手に敵が飛ぶ。

「はぁはぁはぁはぁ……」

けどその分、体は無茶してた。それをスズラも見破ったらしい。

「苦しそうな顔をして、暗い目をしてるな。そんな状態で我らに」
「うるせえ！！」

ドッバァァァン！！　と弾ける雨。だけど直ぐにバケツはひっくり返される。言葉を遮ってまでやったけど、分厚い雨の壁が奴にまで攻撃を届かせない。
今更だが、この雨がスズラを守る盾にもなってる。けどそんなのどうでもよかった。俺はただ……こいつらをなんとしてもぶっ倒す、

それだけだ。
止めたいとか思ったけど、こいつら……あの時あの場にいてゼブラ達を倒したこいつらは取り合えず絶対戦滅。
「仲間の死で荒れてるのか？　まるで獣だな。野獣に加減なんていらないよな。今のお前は無闇に力をぶつけてるだけに見える」
「うるさいって言ってんだろ！！」
どうでもいいんだそんな事。本当にうるさい奴。無闇に力をぶつけてなにが悪いってんだ。敵なんだよ。ただ黙ってやられてれば言い物を……武士の様なウンディーネであるスズラは、けど気にしながらも簡単に割り切ってる。
こいつの放つ水の刃は確実に俺の命を取りにきてるしな。心配してる様な言葉で誘ってこの仕打ち……流石武士。
「お前も戦士なら、戦いの途中でグダグダ喋るな！！　通したいこと、語りたいことはこいつで語る。そうだろ？」
俺は雨に純粋な力をぶつける。ドーム状に吹き飛ぶ雨の中、俺の大剣の刃は真っ直ぐにスズラに向いている。するとそんな事を言った事に納得でもしたのか、スズラは頷いた。
「確かに、私がしてた事は侮辱か。互いの刃で全力で語る。それが戦士として、騎士としての純粋なあり方。どの道、貴様は倒すべき相手だしな。
活躍をシステムに認めさせる為に、最大戦力を我が手でほふる。正々堂々……この土地はもらい受けよう」
空気が変わった。そんな気がする。そしてスズラは有る物を取り出した。それは光輝く手のひらサイズの物体。

「シンボル！」
「ああ、どのみちここが最終ライン。ならお互い真っ直ぐに決めようじゃないか。私が求めるは一対一での決闘だ！
貴様が勝てばシンボルはくれてやる。まあ負ける気は無いがな」
その言葉に周りが動きを止める。だって決闘だなんて……けどそれはこちらにとっては思わぬ提案。乗らない手はない。
「いいのかよ。もしもの時とか、考えるとリスクしかないぞ」
「ふん、我らがウンディーネの花道に背は向けない。それがここまで預かった私のケジメだ。もういいだろう。騎士もこいつで語るんだろう」
そう言ったスズラの腕には水が集まってる。言うなれば今この空間全てが奴の武器。今の俺に勝てる見込みが有るのかはわからない。
けど注がれる視線は裏切れない。重い体を押し殺し、俺は余裕な顔を向けた。
「その通りだ！！」
スズラは何も要求しない。けどわかってる。奴が求めてるのは物じゃない。俺を倒せればスズラの目的は多分達成される。加護が消えた今、心の支えになってる俺がやられたら、何とか互角に渡り合ってる気持ちが下がる。
それはきっと決定的な差だ。したたかな奴。負けない自信と、自分の目的の本当はこれが最短じゃないか？　元がウンディーネの奴らは殆ど後衛だし、戦闘要員はスズラが一気に担ってるんだ。
捨てゴマ扱いの人ではそれだけじゃパッとしてない。これが最後のシナリオか。

「食らえ！！」
「遅い！　そんな攻撃、今の私なら目をつぶってでも避けられる」
雨の中を自由自在に泳ぐスズラに攻撃を当てるのは難しい。それに比べて向こうからみればこちらは的その物。けどこっちだって堅く頼れる盾がこの身を守ってくれる。
本当に水が有るのならウンディーネは強い。それにスズラは本当にな。アイツも責任とかが有る立場の筈なのに、淡々とこなしてるし、時にはこんな大胆な事まで……凄い奴だ。
雷鳴と雷光が織りなすフィールドの中、いつしか誰もがこちらの決闘に注目してた。この侵略戦を決める戦いだから当然か。どう見ても、きっと地の利を得たスズラが優勢に見えるだろう。
こっちは加護引かれてるし……けど感じる期待や希望はきっと勘違いじゃないんだろう。力がある者に願いを託すのは当然で、それに応える必要がある。
そう考えると必要以上のプレッシャーを感じる。
（ああ、何でこんなに重くなったんだっけ？）
空を……と言うか水の中を自由に動き回るスズラ見て羨ましいと感じた。俺もあんな風に、昔はもっと自由に楽しく戦ってた筈なのに……立場や力がそれを許さなくなってしまった気がする。
あれだけ手が届きそうだった空が……今は暗く遠くに感じる。
（あの頃の空に……）
戻りたい。それは思う前に止めた。だってそれは頑張ってるアイリを否定する事だ。どんな努力だってきっと無駄なんかじゃない。

だから俺も、今は努力あるのみなのかも。

スズラは埒があかない中距離戦を止めて武士らしい近接戦闘に変えてきてた。こっちとしてもそれはありがたいが、絶対的なスピードの差か、リスクを求めてもきっちりと成果だけをスズラは勝ち取ってた。

ようは俺が一方的に殴られてる。けど……まだだ。もおずっとこの状況だ。流石に慣れって奴がある。それに近接戦なら、吹き飛ばすのは自分の周囲の僅かな範囲で事足りる。

一瞬で良い。水を無くしてスズラを捕らえる……その一瞬。俺はその瞬間、盾を捨てた。まさに一瞬だったが、捕らえたのは奴の細腕。

このまま握れ潰せそうな細い腕だ。でも甘さも優しさも捨てた俺だ。決めるためには鬼になろう。これはきっとたまたま、掲げた大剣に雷が舞い降りた。

体が痺れてるのもお構いなしに俺は剣を振った。けどいつの間にか脱出を計ってたスズラ。でも関係ない。放たれた雷は泳ぐことより速い。

それに奴の力は水だった。どこにも逃げ場なんて無いんだ。空で青い閃光がスパークする。そしてそこに向かって俺は飛ぶ。

振り卸した剣は、ただ終わりたいだけの剣。空と雨を割ったその一撃はついでにシンボルも砕いてた。そして新たに刻まれる印は、アルテミナス……その印だ。

俺達は勝った。だけどそれを噛みしめる余裕はなく、アルテミナスへと舞い戻る。

雨上がり、心曇り（後書き）

第百二十三話です。
お久しぶりです。ようやくここも終わっていよいよ過去編最後です。一体アイリに何が有ったのか……てなわけで次回は木曜日に上げます。
ではではまたです。

白の計略（前書き）

圧倒的、そんな気がしなくもない目の前の敵。これまでもそう思える敵は幾らだって出会ってきた。それこそ何十メートルもありそうな悪魔とだって戦って、そして勝ったんだ。

これまで僕はＬＲＯは随分と理不尽な事をしやがるとか思ってたけど、けどあの悪魔だって一応はちゃんとしたゲーム内で設定されてた敵だ。けどこいつは違うんだ。システムから……このＬＲＯから一歩外に居る存在。

限りなく深い闇がそこにはある様に見える。

白の計略

パン！！　っと目が覚める様な音が辺りに響く。異様に大きく感じたけど、それは何のことはない柊が自身の扇子を閉じた音だ。
けど僕は本当は、何のことはない……そんな風に捉えちゃいない。だってそれなら、『目が覚める様な』なんて音の感じ方をするわけ無いんだ。
僕たちは知っている。その動作の意味を。でも奴の底はまだ全然見えない……だからこそ、僕達は本能できっと恐怖を感じ取ってた。

（来る！！）

全員の視線が交差して同じ事を語ってる。柊の攻撃までの流れはみんなが知ってるから、互いを思い合っての警告。
胸の前で再び開かれる扇子を見逃すはずがない。雪の様な欠片が舞い、白と群青に彩られた扇子の中に不釣り合いな鮮やかな何かが出てた。

「ほんと、救いようが無いわよね。大人しくオブジェに成ってれば使い道にもあったのに……そんな目を私に向けないでよ」

そう言ってこちらに扇子を向けた柊。その瞬間、いつの間にか現れてた巨大な氷柱が、僕達に向かって放たれた。この冷気で見えなかったとはいえ、これは不覚すぎる大きさ。
向かってくる一個一個が有に大人一人分の大きさはある。串刺しに成ると洒落に成らない感じだ。

けど伝え合ってたのも効果があって、誰一人としてそんな直線的

な攻撃には当たらない。一気にそれぞれの方向へと四散した。後衛は援護と回復が出来るギリギリの位置まで下がり、僕達前衛はそれぞれ数人で組み、別方向から柊との距離を積め出す。
これである程度、奴が標的を選ぶのに数秒でも良いから迷いが出れば、その分僕達が近づく事が出来る。それから一気に攻め続ける。扇子を閉じる暇も再び開く隙も与えない。そう考えて僕は走ってた。

柊の奴はどう考えても前衛って感じじゃないし、どちらかと言うと中衛タイプ。いや、もしかしたら後衛が元々の位置なのかも。
だからこそ、今の僕達にある勝機は張り付く事だ。近場の接近戦でなら、あの動作は無駄以外の何者でもない。けど……流石に裏側の敵。そう思い通りにはいかないみたいだ。
何度も何度の奴らはこっちの二・三手上をいきやがる。

「一発で、終わりじゃないわよ」

柊はそう言って、扇子を回しながら左右から腕を振るう。すると続けざまにあの氷柱が冷気の向こうから射出されてくる。それはどちらをまずは潰すか何て、関係ない早さだ。

「ちっ、これじゃあ近づけない！」

僕達は次第に横に広がる様に走ってた。それはあの大量の氷柱を避けるため。やっぱり厄介な事に、近づけばそれだけスピードが速く感じる。
それでも救いは、それぞれで纏まった方で逆に散っているから奴の氷柱が分散されて行ってる事。奴の真横位までいければ、流石に両側を同時に攻撃は出来ないだろう。

奴の扇子は一つだけだ。冷気でも無い限り、全体攻撃は不可能。

だけどいつの間にか随分氷柱が周りにぶっささってる印象がある。そして思った。

（ここまであったか？）

避けるのに必死でその後を見てないから何とも言えないが、無くは無かっただろう。それだけ大量の氷柱が詠唱無しで放たれてた筈だ。

けどおかしいのは前にあることだ。今まさに走ってる前に氷柱が数本刺さってたりする。それはどう言うことだ？

不発に終わった奴とか？

だけどここＬＲＯでそれは……これまで奴が無駄な事をしただろうか。いや、そんな事無かったんだ。あいつの行動には、きっと全てに意味がある。

だからこれも……とことん姉妹とか言ってた割にシクラとは対照的だな。シクラの奴はノリが多分に含まれてたけど、柊の場合は自分のやるべき事だけをやってるって感じだ。

その分、柊には隙らしい隙もない。けど遂にその時は来た。広がりきれなくなった柊の氷柱達。どっちかに背を向ける事はしたくないのか、ここで腕を降る動作事態が止まってた。

そしてそんな隙を見逃す手はない。俺達は両サイドから一気に柊を目指した。

（今度こそ届く！）

きっとみんながそう思ってた。僕だって例外無くその一人だ。けど、イヤな予感ってのは時たま凄い的中率を誇ったりする。

「「「うおおおおおおおおお！！」」」

そんな雄叫びが氷上に轟いてる。みんな一撃を入れたい気はあるんだ。散々苦労したこれまでの道のり……それを思うと、こいつはそれらをぶつけるのにはさいっこうの相手だ。

黒幕一味の最初の一人。申し分なんて無い。けどそんな時、微かに動く唇を僕は見逃さなかった。そして同時に扇子を閉じたんだ。

（別の何かが来る）

そう思った。聞こえた言葉の欠片を必死に繋げてその意味をくみ取ろうと頑張る。だけど実際に聞き取れたのは天扇の部分と、僅かな技名（？）だけだ。

『天扇・樹……冷……』

わからない。でもこうなったら柊が再び扇子を広げて、腕を振る舞えに一撃少なくてもいれる！　セラ・シルフィングの刀身には、待ちきれないと言わんばかりに電撃が放たれてる。

冷気はまだこの凍った湖全体にあるんだ。メインの風は使えない。まあだからって、イクシード程の風が起こせる訳でも無いけどな。

でも危うく全身が凍りかけたってのは精神的に結構ダメージ受けてる。それに今更だけど、氷には風より雷撃の方が効果高そうだ。

（後少し……これなら）

あの無駄なモーション分を埋められるかもしれない。それはとても確信をもって思える事。今まで奴が閉じて開いて振る、を何度も見てきたんだ。

だから感覚でわかる。

（行ける！！）

てさ。けどその時、柊の奴は全くもって予想外の事をまたしやがった。その行為を目をした僕は思わず「はっ？」と声を漏らした程だ。

緊迫した緊張感の中で、その声はおかしな程不釣り合い。けどそんな声が思わず出ちゃうほどの事をアイツはやったんだ。

白い雪の欠片が上がってた。いや、そうじゃないのかな。本体があの欠片よりも重いから、下にあることでそう見えるだけ？

まあようはだな……柊の奴は自分のたった一つの武器を捨て去った。手放したんだ。ポロリと滑らせる様に自然にさ。

だからそれが起こった瞬間、何やってるのかわからなかった。けど実際に開いた扇子は間違う事無く落ちていた。地面に向かってヒラリクルリとさ。

どの道、あの扇子が落ちたらやばいんだろう。なら止まる道理は無い！

「スオウ！」

「ああ！　間に合えええええ！！」

僕とリルレットは同時に縦に剣をふった。放たれる二つの雷光は氷を砕きながら柊へと向かう。けどその二つの雷光が届くより先に、扇子は地面に落ちた。

いや、その表現も実際には正しくない。だってもう扇子はどこにも見えないんだから。

「残念」

そんな言葉と、含み笑いを浮かべた柊がこちらを見てた。奴は一体何をした？　あの言葉はどんな技だ？

「「うあああああああ！？」」

「きゃあああああ！！」

その時、右斜めの位置に成っちゃってた仲間から悲鳴が上がった。あそこは後衛が陣取った場所……けどそこは異様な白い蔦？　いや木によって阻まれてる。

「なんだあれ？」

そう呟やくといつの間にか炸裂してた二つの電撃、それによって巻き起こった黒い煙の中から、柊の声がする。

「私の攻撃。アートでしょ？」

そう言って煙から出てきた柊には傷一つどころか、その刺激的な服や体のどこにも汚れ一つ無かった。

（何一つ……届いてない）

歯ぎしりする様な思いが沸き立つ。アートか何か知らないが、元から僕達の攻撃なんて眼中に無かったのかよ。けど一体どうやって防いだんだ？

奴のご自慢の天扇は手元に無いはずなのに……こうなるとやりようがわからなく成るな。

「スオウ！　迷わないで！　きっと大丈夫って思って今は攻撃だよ！」

そんなリルレットの声で僕も前を向く。でも……きっと大丈夫って流石に無理を感じる。だってさっきの悲鳴は確実に後衛の人たちに何かがあったことを示してる。

あの木がどういう攻撃かもわからないんだ。このままにしておいたらきっと不味い。誰かが欠けて勝てる様な相手じゃないんだ。

「ふふふ、随分甘い考えね。私になんて構ってたら、間に合わないわよ」

そんな柊の言葉で僕は反転する。これ以上誰も死なせない。そう決めたんだ。

「スオウ！！」

「ごめんリルレット。だけどきっと本当に危ない！！」

「ああ～もう！　これ以上無いチャンスなのに！！」

そう言ってだだをこねたリルレットだけど、僕の後に続く足音が聞こえてる。それでも未練はあるだろうけどね。

「誰かを犠牲になんてしたくないんだ。特にこの戦いでは」

「わかってる。どうなるか、わからない物ね」

「ああ、だから――」

「――謝らないで！！」

ごめんとまた言い掛けたのを制された。そしてリルレットは僕の隣に追いついてこう言った。

「そんな風に何回も謝られると、負けてないのに負けた気分に成っちゃう。これから、でしょ？　みんなで勝つの。そのための選択よコレは。
それに後衛がいないと心許ないしね」

そうこれは勝つための選択。リルレットも良いこと言ってくれる。別方向から柊に向かってた班も戻ってるみたいだし、考える事は一緒だな。
僕達は弱いから、それぞれが助け合ってここまで来たんだ。犠牲だってあった。でもそれはあれっきりでいい。

目の前に広がるのはそれは『森』と表現するべきなのか迷うほど森に見えた。けど色は緑じゃない、全部が透明と白の森。この森の木全が湖の氷で出来てるのは明白だ。
それもあの氷柱から派生してる。じゃああの攻撃はコレを作るための伏線？
武器を手放してまで、ここにこんな森を作る理由は何だ？　理解できない事が多すぎる。氷の筈なのに、本物と同じ様に揺らめき、葉の音を散らせるその森が、僕にはとても不気味に見える。

「急がないの？　手遅れに成るわよ」
（――っつ、アイツ……）

確実に誘ってる。後ろから声を掛けて来た柊は怪しすぎる。多分この森事態に何かある。でも……それでも踏み込まない訳には行かない。

「お前が何を企んでようと、僕達は絶対に負けはしない。誰一人も

！！」
「あらそう。ならやって見せてよ」
柊の奴は僕の言葉にそう軽く返した。別にどうでもいいのかよくわからない。氷上に垂れる氷のドレスを引きずって柊は僕を見つめてる。
「ああ、その両目ちゃんと開けてろよ」
「スオウ速く！！」
僕がそんな宣告をしてる間に、リルレット達は氷の森へと踏み込んでた。恐ろしげ気もなくズカズカと。心配なのは誰もが同じか。
一直線に最短できっと向かいたいんだろう。僕も取りあえず言いたいことは言ったし、リルレット達の後を追う様に森へ入ってく。

そんなに広くはない筈の森。だけど密集した大樹のせいか先が見えずに、実際の広さよりも大きく感じる。それに何だかさっきから……この木、何かが通ってる？　流れてる様な気がする。
透明だけど、向こうが見える訳じゃない白濁色。中央部分になると白さが際だってきてる。
「綺麗……だね。こんな状況じゃなきゃ、写真に収めたい位だよ」
「確かにな。氷の森なんてそうそう見れる物じゃないし、写真に収めとけば自慢できそうだ」
「でしょでしょ」
全体からわき出てる不安な感じ。それを少しでも除ければと僕とリルレットは他愛も無い会話をしてた。まあ気が紛れるって事で楽でもあるしな。

でも何だか余計に空気が重く成ったような……話題のチョイスが不謹慎だったか。だけど本当に外見だけなら綺麗な森なんだ。

揺らめく透明な枝葉とか、光が屈折を繰り返して線に成って森を走ってる様とか、とても幻想的だ。柊の奴がアートとこれを表現したのが少なからずわかる。

まあでもアートなら、感じ方は人任せにしてほしいよな。この森は絶対に主張してきそうじゃん。必ず何かある。というか、そうでなきゃおかしい位。

その時前方を走ってた奴らが声を張り上げた。

「居たぞ！！」

そこはこの森でそこだけぽっかりと穴が開いたような空間だった。そんな場所に後衛組が氷の葉でくるまれて蓑虫状態でぶら下がってた。

よく見るとこの森全部の木が、それぞれを繋げてる様にも見えるな。透明で日光のはいりが良かったから気付かなかったけど、重なり合ってる部分は結構ある。

「何で蓑虫？　どういう事なの？」

「さあなでも取りあえず助けるぞ」

考察なら後で出来る。まずは救出が先決だ。みんなもそんな僕の言葉に納得してそれぞれ動いてくれる。けどその時だ。異変が起きた。

僕達にでもこの森にでもなく、それは後衛組三人だ。微妙な震えが始まって、それから次第に何かを絞られるみたいな振動が蚤の中で起こってた。

そして、それと同時にうめき声の様な叫びがあがり出す。

「「「うが……あああああああああ！！」」」

すると三人の中から何かが出てきたのか、三つの光が葉を通して周りの木全てに流れていく。葉から枝を伝い幹へ、そうかコレがさっきも流れてた何かの正体。

正体と言うほど何かわかった訳じゃないけど、コレ何だ。どうやら一回その何かが絞り出されると再び静かに成るみたいだ。

でもまたきっと震え出すんだろう。あんな叫びを出す事なんだ、このままでいいはずがない。

「みんな今のうちに！」

「はい」

「おう！」

次の震えが来る前に僕達は救出行動に移る。だけどその時、僕達は一斉に別々の方向へ視線を向けた。

「どう……した？」

何だか歯切り悪く、そんな事を聞いてみる。するとみんな同じ事を言ったんだ。

「いや、何だか視線を感じたって言うか……」

「俺も誰かにみられてる感じがさ」

「私も変態の視線を感じたわ」

なんか一人勘違いしてる奴が居るけど、概ねみんな一緒だ。そして僕も、何か強い視線を感じた。ねっとりと絡みつくような視線…

…ってそれじゃリルレットの言った事、案外間違ってないな。
変態っぽいみられ方してる。だけどおかしな事にここには僕達と柊しか居ないはず。誰がそんな視線を出せる？　それに一カ所からじゃなく複数から……誰一人同じ方向を向いてない。

そこにあるのは半透明な木だけ。視線を浴びせる様な生物なんて陰も形もない。葉と葉がこすれる音が、僕達の周りで僅かな音となって響いてた。

「みんな今助けるからね」

そんな事を言ってる内に所定の位置に着くリルレット。取りあえず僕達にはやれる事をやるしかない。後衛のみんなはそれなりに高い位置に吊されてる。
だから僕達はそれぞれお互いに力を合わせるんだ。

「よし。来い、リルレット！！」
「うん！！」

僕は吊されてるみんなの真下位に陣取って両手を丸みを付けて重ねあい、腰を落として重心を低くする。そこに離れてた位置にいたリルレットは猛スピードで突っ込んでくる。
まあこれはリアルでも出来そうな、下の奴が走ってきた奴を高くにブン投げると言うあれだ。リアルではそんなに飛ばせられないだろうけど、ここＬＲＯではきっと後衛組のみんなまで一直線に届くはずだ。

僕達はお互いを見つめあってタイミングを合わせてた。直ぐにでも解放したいみんなが居るんだ。失敗何て出来ないから、当然必死。

だけどその時、僕達はお互いを見てたからそれぞれの背後に迫った物を見てた。そして同時に叫ぶ。

「スオウ！」
「リルレット！」
「「後ろ！！」」

その瞬間、後方を確認する間もなく僕は体を降り曲げてた。リルレットは逆に上へジャンプしてた。そしてそんなお互いの頭上と足下には無骨な氷が伸びてたんだ。
そしてその氷は僕たちが避けたことで、お互いをぶつけ合って真ん中付近で花火の様な形でパキパキと融合してた。

「なっ……くっそ！」

やっぱり柊の奴の悪趣味な攻撃だ。ただの森な訳無いと思ったけど、何だよこれは。これじゃあまるで……氷が生きてるみたいだ。
そう思ったとき、僕の頭上の氷が僅かに膨らんだ気がした――と思ったら鋭く伸びて来た。それも連続で。

「うあ！　ちょ……何だよコレ……って、ああうざい！！」

僕は途中で避けるのを止めて、両手のセラ・シルフィングに力を込めた。そして二刀を振り回す。新たに伸びてくる攻撃的な氷を切り裂き、そして同時に最初に僕たちを狙った太い奴もぶったぎる。
だって元から邪魔だったんだ。

バッカァァァンと砕け散る氷達。その白い煙の中から飛び出てくるのはリルレットだ。けどもう位置が滅茶苦茶で、それに武器を握っちゃってる。

（どうする？）

また横やりが入れられる前に後衛組を助けたい。僕は両手に力を込めて、リルレットの着地点めがけて走り出す。武器はもうしまってられない。

いや、寧ろセラ・シルフィングなら行けるはずだ。

「乗れリルレット！！」

僕のそんな叫びにリルレットはすぐさま頷いてくれる。僕は途中から氷を滑りながらリルレットの方に一本の剣を平らに向けて、体はリルレットの方じゃなくリルレットが向かうべき場所の方へと向いてる。

それは勿論、後衛組の場所の方へとだ。セラ・シルフィングは電気を纏い、準備は万端。後はただタイミングだけ。その瞬間は、僅かに腕に掛かる重みが増したまさにその時、リルレットがセラ・シルフィングへと体重を掛けた一瞬。

その一瞬に僕は一気にセラ・シルフィングを上へ向かって振り抜いた。

「いっけえええええ！！」

バチン！！　と電撃が弾ける音が轟いた。そして見てみるとリルレットの姿は既にかなり高くまで上がってる。そしてその下には、追いかけて止めようとしてるんだろう、氷が見える。

けどそれが追いつけるスピードじゃない。

一気に後衛組までたどり着いたリルレットは自身の剣の高速突き

を炸裂させて、木との繋がりを断ち切った。そして落ちてくるみんなを受け止めるのはこちらの勤めだ。
前衛組の残りでそれぞれ上手く受け止めて、僕は最後に落ちてきたリルレットを受け止め――

「ぶがぁ！？」
「あれ？　ごめんねスオウ」

――られなった。てか不要だったみたいだ。何地面直前で華麗に回って着地を決めてるんだよ。おかげで下で腕を伸ばしてた僕の顔面を踏みつけやがって。とんだ災難だ。

「うう、まあいいよ。それよりどうなんだ？」

僕たちは助け出した後衛組に駆け寄った。既に凍りの葉は取れて蓑虫状態では無いし、それにＨＰも別に変わった様子はない。表示されてるのにステータス異常も見られないし、別にどこも問題は見られなかった。
でも問題が無いって事が、問題な気もする。おかしいだろ絶対に。じゃあ何が搾り取られてたんだ？　手放しで喜べる状況じゃない。けど――

「う……ううん」

そんなうめき声と共に、次々と目を覚ましてくれて安心しない訳はない。

「大丈夫なのか？」
「あ、ああ。別にどこも問題はなさそう……だ」

僕の質問に体のあちこちを見て回ってそう答える。本当に大丈夫そう。けどその時、周りの木々がおかしな動きをしてた。
ザワザワザワザワ……そんな音がマジで聞こえるレベルでザワツいてる。そして一斉に放たれるのは、無数の氷の枝。
それは余りに多すぎる量だ。

（剣で凪ぎ払う？　出来るか？）

すると目覚めたばかりのヒーラーが声を出す。

「私の魔法で防ぎます。固まって！」

そう言って詠唱を開始したヒーラー。だけどその時、いきなり詠唱自体が取り消されて、メッセージが現れた。それには信じられない事が記されてる。

『この魔法は貴方のスキル欄に存在しません』

「え？」

呆けてるヒーラー。もう間に合わない。その瞬間、白の衝撃が大地を貫く。

白の計略（後書き）

第百二十四話です。
さぁさぁまさか遂に柊がその力を存分に見せつけてくれるかも！
まあそうなったら今のスオウ達じゃ……って感じなんだけど、それをひっくり返すのが主人公！　って事でスオウ達にはまだまだ頑張って貰います。
てな訳で次回は土曜日にあげます。ではでは。

裏切りの剣（前書き）

舞い戻って来たアルテミナス。俺とガイエンは一足先に城を目指す。そこはいつもと違う印象を受ける様になってた。何かがあった……もしくは起きてる、それを感じさせる雰囲気だ。

アイリが居ると思われる場所へ行く途中に見つけたのは傷ついたセラ。そしてそこから更に奥に行ったところで、この物語の歯車がきしみだす。

裏切りの剣

からくも勝利をもぎ取って戻ってきたアルテミナスは別段、変わりなく見えた。別に街としては何が起きたわけでもなさそうに見える。

けど胸騒ぎが俺にはしてた。それにやっぱり城を見ないとだ。一般の普通の人達は城までそうそう入らないから、あそこで何が起こっても気付かないかも知れないし、だから俺は労をねぎらいあう兵士達の輪を離れて城への道を急いだ。

時刻は夕刻。あの豪雨の中から戻った俺には、それでも暖かく感じるほどの色合いを持った光が周りを照らしてる。

「それにしても……」

こうやって改めて見るとやっぱりあの城はなかなか変な色合いしてると思う。何で城の中付近から白と黒とで分かれてるんだ？

まあ、今はそんな事どうでもいいんだけど。アイリが王家クエストをやっていけばそれもきっと理由がわかるんだろうし……けど、その時まで俺はここに、いや、アイリと共にいるのか……

城の前の広間を抜けて城門へ入ると、明らかに「おかしい」そう思えた。

「静かだな。それにいやな臭いがする」

いつもなら城の中も外ももっと賑やかだ。けど今はどうだ？　そんなうるささ微塵もない。
鬱陶しかった筈だけど、これだけ静かだと物足りなく感じる物だ。けど、本当に何があったって言うんだ？　ここは町中、戦闘行為は行えない筈だ。
それこそ決闘とかしか……とにかく城の中へ。そう思ったとき、後ろから声がした。

「おい！　待てアギト」
「ガイエン」

追いついて来たのはガイエン一人。こいつが周りの腰巾着共を離すなんて珍しいことだ。それだけこいつも急いでたって事だろうか？
やっぱ良い奴に見えるな。不思議な事に。

「何だよ、止めても無駄だぞ。城が静か過ぎる。何かあったのは間違いない」
「そんなの貴様に言われるまでも無くわかってる。だからこそ一人で行くなと言ってるんだ。二人で何があったか確認するぞ」

それもまた、ガイエンが言ったとは思えない言葉。俺からすればだけど。けど今日だけで移り変わったガイエンの印象からすれば、アリだな。
だから俺はポカンとした顔を笑顔に変えてこう言った。

「ああ、そうこなくっちゃ」

扉を一枚隔てて、そこは戦場と化していた。重苦しいドアを開けて入った城の中はまさに戦闘の跡がまざまざと残ってる。

「何だこれ？　いや、どうしてこんな事になってんだ？」
だってこれは……明らかに決闘でもない。普通にフィードでのバトルっぽいぞ。ここはアルテミナスで一番厳格な場所の筈なのに、何でこんな事が起こってるか理解できない。
「バトルフィールド化……してるようだな」
そう言ったガイエンは自身の武器を手にとって、その場でスキルを纏わせてた。
「バトルフィールド化？　そんな事出来るのかよ？」
「ある特殊なアイテムで可能だ。一定のエリアを囲む様に配置するタイプだから、多分この城の周りに設置してあるんだろう」
ガイエンはスキルが発動する事を確認すると、剣を鞘へと戻す。てかまさかそんなアイテムがあるなんてな。流石ＬＲＯ、知らないアイテムはまだ五万とあるんだろう。
「でも、どいつが城に攻め様なんて考える？　幾ら侵略戦でいつもより手薄なってるって言ったって、仮にもここはアルテミナスの中心だぞ。
そうやすやすと落ちるはずが……」
「だが、現にこの有様だ。それにお前は心当たりあるんじゃないか？　これをやった奴に」
「そう言うお前こそ、思う奴がいそうじゃないか」
「まあな」
ガイエンが考えてる奴と俺が考えてる奴はきっと同じだと思う。

だって今のアルテミナスでこんな事をする奴なんて限られてる――って言うか奴らしか思い浮かばない位だ。
どっかの種族が行動を起こしたって訳でも無いだろうし、流石にそれじゃ町中でも騒ぎになるだろうからな。他の種族は今の情勢の中じゃ目立つし、それが城を襲う為の物々しい輩なら更にだ。
でも町中は至って普通だった。この状況を誰も知ってはいない。目立たぬ行動ができるのは同じエルフだからだろ。そしてアイリを慕う国中の民の中で、こんな事をする奴はアイツだ。
そう……
「「グラウド」」
俺たちの言葉が重なった。やっぱりピッタシ同じ奴だったな。いつもならこんな気色悪い事ごめんだが、今日は何だか許せる気分。
「だよな。アイツなら厄介だろ。俺達だけで良いのか？　軍は居るんだし、周りを固めるぐらいさせとかなくて良いのか参謀？」
「お前にしては珍しい事を言うなアギト。俺達三人とって因縁の相手だ。お前の事だから余計な邪魔はいらないと思うと思ってたがな。
自分の手でアイリは助けたいだろう」
「そんなの……当たり前だ。けど……」
ガイエンの言うことは、少し前の俺ならまさにその通りだと思う。俺達がきっちりケジメを付けなければいけない事。だから余計な横やりなんて必要ない……けど、そんな事を言ってる場合かよ。
アイリはもう、俺達だけのアイリじゃない。このアルテミナスの頂点何だ。もしもの事があったら大変だろ。それに俺達は、三人がかりでもアイツには勝ってない。

「自信がないか？」
「――っつ！？」

ザクリと心の内を言い当てられた。いや、でもちょっと違うのかも知れない。自信がないと言うか、怖いって言うか……それじゃダメだと分かってるのに、俺は弱くなってる事を実感してる。

「なら全部投げ出せばいい。私にその力を明け渡せ。そしたら誰もお前に期待なんてしなくなる。その代わりに居場所も無くすことになるがな」

ガイエンの野郎は全然丸くなんかなってないな。何だか良い人キャラに成ろうとしてると思ったが、別にそうじゃないんだな。言うことは相変わらず的確でムカつく。

俺がここに入れるのは、アイリがこの力をくれたから……そう言うことかよ。まあ否定は出来ないがな。この力が無くて、戦闘以外で、俺に何が出来るか……きっと何も出来ないからな。

でも今の俺は、その戦闘でもどうなんだろうって感じ。特に今回の侵略戦はそうだった。アイリなら笑って許してくれるだろうし、そもそも責めたりもしないと思うが、自分でこれで良いとは思えない。

戦闘の跡が垣間見える場内を横目に、俺達はある場所へ向かってた。前を走るガイエンはさっきの言葉を本気で言ったのだろうか？

こいつの場合は冗談を言うタイプでもないけど……

「居場所か、何か随分重く感じるんだけどな。てかガイエンお前、こんな力まで求めて、どうするんだよ。十分お前やってるだろ」

俺の何気ないそんな言葉にガイエンは振り向かずに短く返した。

「まさか……」

とそれだけ。首を振る動作を加えてたから、まだまだ全然みたいな意味が込められてたのか？　でも、もう完全にその地位を確率してるガイエンが何でそこまで？　って感じだ。

「ならお前、何をしたいんだよ本当は」

そうなるよな。ずっと曖昧だったこいつの目的。今日という少し距離が近づいた日に聞いてみるのも悪く無い、そう思った。

前ならそんなの興味も無かったけどな。てかよく考えたら、誰かを間に入れずに二人で走るなんて寒気がする行為だ。

何だか仲良く見えるじゃないか。まあだけど今はここには誰もいない。俺は追いつくようにガイエンの隣へ追いつく。

するとそんな俺を横目で一瞥したガイエンは口を開く。

でもそれはよく分からない言葉だった。

「直ぐに分かるさ」

ただそれだけ。いつもはムカつく事をベラベラ喋る癖に、自分の事となると途端にこれだ。何こいつ、自分を語らない格好良さでも目指してるのか？

「なんだそれ？　意味わからん」

「だから直ぐにこの言葉の意味も、私の目的も知ることになる。その時お前がどうするか、見物だな」

「はあぁ？」

やっぱり良く分からない奴だなガイエンは。直ぐに分かるのなら今話せば良いじゃん。どんだけ勿体付ける気だ。

「それよりお前はどうなんだ？　どうせなら、ここでその力、明け渡してくれても良いぞ。それだと色々楽だからな」

そんな事を気楽に言うガイエン。色々楽とか、やっぱり謎だ。俺は自分の手のひらを見つめた。この手にある力……それを明け渡す？

「ダメだ。そんな事出来ない。少なくとも今は……」

「もういや何じゃ無いのか？　全てを任せても別にいいんだぞ。腐れ縁だとしても、ここまで共に来た仲だろう」

「ガイエン、お前……本当に何か変わったな」

まさかそんな事言われるとは思わなかった。だってこいつとは世界が明日で終わると決まっても友達には成れないんだろうなって思ってたから。

お互いそんな感じでしか接する事しか出来なかった。けど今、それらを吹き飛ばす様な事をガイエンは言った。言ったよな？　あれ言ったっけ？　空耳……じゃない！！

だってガイエンは不自然に首曲げて、こっちを絶対に見ないようにしてる。でもそう思ってくれてた事が嬉しいじゃん。

それが仲違いばかりしてた奴となれば尚更だ。けどそれならなおのことだな。

「なら余計背負わせられねーよ。お前だって相当だろガイエン？これ以上、友と思ってくれてる奴に重責を肩代わりさせれるわけない。

だからもう少し気張るさ。それに三人でなら、どんな事だって乗

り越えられる。そうだろ？」
「……ああ、そうだな」
俺の結構良い言葉に、ガイエンが返した言葉はそれだけ。それにちょっとぶっきらぼうな感じだった？　気のせいか……さっきの恥ずかしさをきっと引きずってるだけだ。

長い道のりを経て俺達がたどり着いたのは何の変哲もない小さな部屋。この城で一番狭いんじゃないかって位の場所だ。
窓もなく、正方形の部屋には一枚ずつ絵画が飾られてるだけの寂しい部屋。でもここから儀式場に通じる秘密の通路があるんだ。

一般には知られてないし、軍政府でもアイリに近い人達しか知らない場所。王家クエストで解放された場所の一つ。
グラウドの奴がここの存在まで知ってたかは分からないが、アイリに何か起こった以上、それはこの先で起きた筈だ。

俺達はこの部屋の条件を満たし、通路を出現させる。それは中央の床がズレる事で現れる。登ってきて悪いけど、今度は下へ行くことに成るんだ。
だけど通路が現れたとき、そこに誰か倒れてた。あの城内で似合ってるのか不釣り合いなのか分からないメイド服はまさか――

「セラ！？」

――駆け寄って抱えが上げると確かにセラだった。趣味だとか言ってメイド服を常に着用してるこのコスプレイヤーは確か、アイリの警護を任せてた筈だ。

セラはこんな成りでも結構強い。それにアイリとも心許せる仲……俺やガイエンとは出来ない話とかしてるし、言う成れば親友みたいな感じの奴だ。

「おい！　何があった？　アイリはどうしたんだよ！」

俺はセラの肩を持ってガクガクと振るう。辛うじて残ってるＨＰだけど、どうやらステータス異常を食らってる。毒みたいな奴だ。

生憎俺達はそれを直すアイテムを持ち合わせちゃいない。

「セラ！　死ぬ前に情報はしっかり伝えろ！」

するとその時、想像を絶する事をセラはした。

「ぺっ」

てさ。弱っててもまさかそんな事するかって行為だ。しかも女の子が！　唾を吐くなんて、いや吐くだけならまだしも、まさか顔面にそれを向けるか？

俺なにしたの？　するとそんな理由をセラは弱々しくも教えてくれる。

「耳元で……アイリ、アイリ……うるさい。ちょっとは、私の心配してください。もう一発……ひゅいまひゅよ」

最後の方がおかしな口調に成ってるのは、再びセラが胆を集めだしたから。それでも強引に喋るから訳分からなく成ったんだ。

まあ多分「もう一度やりますよ」的な事を言ってるんだろ。俺はその顔を強引に押さえつける。だって二度目は遠慮したい。

幾ら可愛い女の子でもさ、やられりゃ腹立つ行為ってのがあるぞ。それが的確に顔面を捕らえる吐き物だとしたら尚更だ。

「あーもう、わかった。悪かったよセラ。大丈夫か？　無事って訳でもなさそうだが、アイリはどうした？　何が一体あったんだ？」

もう流石にしつこいからな。俺は言い方を変えてみた。文面にはちゃんとセラを労る一文が添えられて、これでどうだ！

「ひゃいり様は……ぺっぺ」

ため込みすぎた胆を一端下に吐き出すセラ。う～ん、こういう所作とかが何か女としての何かを示してるよな。間違ってもアイリはしないし。

メイドと王の違いか？　メイドとしてもどうかと思うが。でも取りあえず、胆を捨てたって事は教える気になってくれたって事だ。

ふう、難儀だった。

「アイリ様は下にまだ居るはず……でも何が起こったか正直よく分かりません。本当にあっと言う間だったから……ふがいないと認めるしか出来ません。

私の実力不足。城の中に残ってた警備兵達を打ち倒してここまで来るのに、きっと三分もかかって無い。そして私もこの有様……聞いてたよりもずっと強かったかもです」

「それって、やっぱりアイツか？」

俺は瀕死なセラに、酷なようだけど間髪入れずにそう聞いた。聞かずには居られない。するとセラは静かに首を縦に動かして続けた。

「はい、この城の有様……今回の襲撃……すべてはレイアードのグ

ラウドの仕業です」

分かっていたこと。だけど改めて聞かされると、怒りとかがこみ上げる。そんな資格俺には無いのかもだけど、それでも……いつまでもそんな事やってんだって思える。

そろそろ認めろよ。この国が選んだのはお前じゃなくアイリだってさ。奴がやってるのは駄々こねてる餓鬼と同じ。

自分じゃなきゃそんなにイヤなのか。

「あの野郎……それでアイリは無事なのか？」

「アイリ様は、多分大丈夫。何か目的があるようだったし……」

更に弱々しくなるセラの声。目的か……それは今更動き出した事にも関係あるんだろうな。レイアードはそういえば侵略戦にもいたし、そこでグラウドの奴もきっと何か動いてる。

そう思ったけど、まさかこんな事だとはな。そんな時、後ろからガイエンの事が降ってきた。

「おいアギト。そろそろ休ませてやれ。彼女は良くやってくれたさ。お前の指示で護衛についてくれてたのだろう？　良い判断だ。私からも礼を言おう。君のおかげで少しでも事態の進行は遅く成ったはずだ」

「いえ……そんな……私は何も出来なかった役立たずだから」

ガイエンが外面全開でセラへ言った、お礼？　けどセラはそんなガイエンを余り見ない様にでもして丁寧な言葉を紡いだ。

それは俺との間でやり遂げられる感じとはまた少し違う感じの言葉。そして急かすガイエンに誘われて、俺も行こうとしたとき、同じトーンでいきなりセラは耳元まで近寄ってきた。

「アギト様……気を付けて」

突然のセラのそんな大胆行動に赤面するも、視線が追いついたセラの顔は真剣だった。というか、きつい目で先を見据えるガイエンを睨んでる？

「セラ？」

「本当に……気を付けて……やっぱりどうしても……私はアイツを……」

そこでセラのＨＰが無惨にも消滅した。声は声に成らず、色を失って行くセラはもうただの屍だ。こいつは最後に何を言おうとしたんだろう。

「私はアイツを……」何だ？　セラは前々からガイエンの事余り良く思ってなかったから、その事か？　最後の気を付けて……あれもまさか、グラウドにじゃなくガイエンに？

確かに前の俺ならセラと同じ気持ちだった。でも今はさ、ガイエンもちゃんとした仲間に思えてる。長かったけどさ、今回の侵略戦で踏み込まなかったところにまで踏み込んだって感じ？

だから俺は……

（セラの忠告はありがたいが、アイツは大丈夫だと今の俺は信じたい）

そう思った。確かに思い返せば怪しいところもある。特に侵略戦前の情報とか。『ガイエンとグラウドは通じてる』でも証拠は何も無い。

だからもう、押し込もう。ガイエンを疑う様な物は全部。分かったんだ。ガイエンもたださ、この国の為に本気何だって。

これからもきっとアイリを支え続けてくれる筈だ。そうでなければ、俺が困るしな。

「行くぞアギト。急いだ方がいい」

「ああ、そうだな」

グラウドの野郎が何する気かは知らないが、ここまでやるって事は相当。『追放』を受けたって文句は言えない所業だ。

それなら向こうもそれなりの覚悟と理由で今動いたんだろう。もう後手後手だが、それでも一刻も早くアイリを解放する。

俺はセラを床に置いて階段を進む。壁に掛かった松明の明かりだけで照らされた暗い道。そして階段の突き当たりには古びたドアがひょっこりと顔を出す。

この先が儀式場だ。俺はドアノブが無いそんな扉を上から下へ溝に沿って指を動かす。

するとその溝に光の筋が浮かび上がって行く手を開いた。それと同時に俺は中へ飛び込む。

「アイリ！！」

そんな叫びが二十畳位の空間に響きわたる。部屋の中央に配された、この国のシンボルに加工されたクリスタル。そして床一面には複雑怪奇な魔法陣がびっしりと刻まれた部屋。

そしてそんなクリスタルの側に、俺は二つの人影を確認する。一つはクリスタルに寄りかかる様に身を任せてて、もう一つはそんな彼女に何かをしてた。

けど俺の声が聞こえたんだろう、奴は勿体ぶりながら立ち上がり振り返る。

「ようやく来たか。意外と遅かったな」
「……お前、何やってる？　いや、自分がやってる事理解してんのか？　今直ぐそいつから離れやがれ！！」

俺は直ぐに背中から槍を手にとって、グラウドへ向ける。何が「遅かったな」だ。俺達が来た以上、ここでチェックメイト何だよ。

「理解だと？　そんなこと、俺がする必要が無いと言ったらどうだ？　なあアギト、お前から見た俺がもしも黒幕にでも見えてるんだとしたら、言っておいてやる。
間違いだってな！　がははははは！」
「な……に？」

高笑いを始めたグラウド。俺には何がおかしいのかイマイチ分からなかった。いや、アイツだけが受ける話立ったのかも。
だけど気になることは幾らか言ってた。「理解する必要がない」それに「黒幕」……グラウドはまさか自分の行動の意味を分かっちゃいないってのか？

それは今回だけ？　それとも今まで全て？　グラウドの他に全てに糸を垂らして操ろうとしてる奴が居るって事か。それが黒幕。
グラウドの野郎は、そいつの言うことをヘコヘコ聞いてただけって事なのか？　こいつが……まさかそんな……だって使われるのが何よりも不快に感じる奴だろ。

そんなグラウドを手足の様に使える奴。それはきっとこいつの強さも圧倒出来なきゃいけない筈だ。そんな奴が居たか？
一体誰？　不快で耳障りなグラウドの叫び声。それがこの部屋一杯に反響をしててどうにも苛つく。けどそんな中、ずっと俺の頭には浮かぶ名前があった。

辻褄はチグハグだけど、心がそう叫ぶって奴なのかさっきから浮かんでは俺はその名前を消している。だってそんな筈ないから。

「黒幕とかそんなのどうでもいい。人を使うしか出来ない臆病者なんなんてな！　俺はただ、お前を倒してアイリを奪い返すだけだ！！」

俺は面倒な考えは捨てた。そしてスキルの光が俺を包む。両腕に現れる、剣と盾のシルエット。これならグラウドにも負けはしない。

だから俺は光を纏って進み出る――その時だ。

「アギト、だからお前は何も守れない」

「ガイ……エン？」

その瞬間、体を貫く冷ややかな感触が俺の動きを止める。視界に映るは自身の胸を貫いた長剣の刀身。更にその先でグラウドの腐った顔が笑みで満たされてた。

裏切りの剣（後書き）

第百二十五話です。

ようやくというか、遂にかって感じのガイエン。次で過去編終わればいいけどどうだろう。でも頑張ります。これ以上長くしたくないし！

てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

立ち向かう時（前書き）

森が迫る。氷で出来た森が容赦なく僕達を追い詰める。どれだけの力。どれだけの攻撃のバリエーションがアイツにはあるっていうのか。襲われた彼等は僅かな違和感と力を奪われた。

それが一体何を意味するのか。奴等の目的は何なのか……その一辺が最後の言葉に現れてた。

立ち向かう時

「「「ぐあああああああああ！！」」」

そんな声と共に立ち昇る白い煙。その中から僕達は吹き飛ばされる。僕の様に何とか防御が間に合った連中は、地面に倒れる事無く立ってるけど、直撃した奴らも少なからず居た。

そいつらは氷の地面に倒れて滑っていく。するとその時、煙の中から再び枝が飛び出てくる。それは滑っていく奴らを追ってる？

「くっそ！」

僕は走り出す。なんでかはわからないけど、この森プレイヤーを狙ってるみたいだ。またあんな蓑虫状態にされても困るし、それにさっきヒーラーの魔法が使えなかったことも気になる。

さっきこの森に捕まってたこと……それが関係無いなんて思えないだろう。

（流石に追いつけないな……だが！）

僕はただ真っ直ぐ滑り行く仲間を追うのをやめて、目指すは氷の枝だ。その伸びていく枝の間は変わらずにそこにあるんだから、追いつく必要なんてないんだ。

枝が滑り行く彼らに追いつく寸前、僕はセラ・シルフィングを振り抜いた。両の剣が伸び行く枝を砕き、その先はその瞬間に空気中に霧散していく。

「スオウ！　なんなのこれ？　森が……」

追いついてきたリルレット達が周りを警戒しながらそんなことを言う。けど僕にもその答えは持ち合わせちゃ無い。

「元々この森は柊の奴が作った物だろ。何が起きたってそんなに驚きはしないけどな」

「まあそれはそうだけど……あいつ等の反則っぷりはもう散々だしね。けど、さっきのあのメッセージは？」

リルレットが言ったことで場が重く成る感じ。それこそわからない事の筆頭だ。あんなメッセージ、きっと誰も心当たりなんか無いから。

「わからない……けど、どう考えても出た方が良いっては思う」

「うん、そうだね」

みんなも僕の意見に同意してくれる。それなら善は急げだ。僕達は木の幹に当たって止まった直撃組の元へ。みんなそれなりにダメージ受けてるけど、誰一人戦闘不能には成っちゃいない。

「魔法が……どうして？」

「今はそれよりも脱出だ。出たときに表の奴にでも聞けばいいだろ」

ショックを受けてるヒーラーの腕を取って半ば強引に立たせる。それに実際、僕が自分で言ったとおり、表の奴に聞くのがきっと一番だ。

けどその時、再び森全体がざわついた。氷の葉が揺らめく音がカサカサと耳を付く。そして僕は見た。その葉全てに一粒の目玉がある様を。

「なっ！？」
「ひっ！？」

どうやらそれを確認したのは僕だけじゃ無かったようだ。リルレットは口を押さえて息を飲んだし、周りのみんなもそれぞれの反応をしてた。そのどれもが恐怖に煽られた様な物ばかり。

まあ無理もないけどね。僕も全身に鳥肌が立ったよ。少し前の強烈な視線……それはどうやらあれが原因みたいだ。

そしてどこからともなく、聞こえてきた声が森に響く。

『どこにも逃げ場なんてない』

それは間違いなく奴の声。じゃああの目は……そう思った時、抱えたヒーラーが苦痛の声を漏らした。

「ガッハ！！」
「おい！」

視線を向けると、そこには細長い氷が彼の体から飛び出していた。一体どこから……そう思い視線を向けると幹から今度は僕めがけて鋭利な氷が伸びてきた。

微かに飛んだ赤い滴。けど僕の視線は捕らえてた、氷の幹がうねるよう成りに次弾の準備をしてるのを。僕はヒーラーを引っ張ってとっさに木から距離を取る。

その瞬間無数の氷が突出された。まさに間一髪。一瞬でも遅れてたら、体中串刺しにされる所だった。ザワザワザワザワ……不気味な音は常に頭上で響いてる。

「おい、大丈夫か？」
「ええ、このくらいは……直ぐに治せます」

無理矢理引っ張ったから氷は抜けずに根本の方から折れた。けどそれでもこの氷の特性状問題は無かった。何故なら、本体から切り離された氷は霧散するからだ。
けど「直ぐに治せる」そう言ったヒーラーは、だけど詠唱にどこか戸惑いがあるのか、なかなか言葉を紡げ無い。
もしかしたら……きっとそんな思いが彼の中に生まれてる。でも戸惑ってる場合でも無い状況だった。

「スオウ！」

そんなリルレットの叫びに顔を上げると、周りの木からも同様な事が起こってた。渦巻く幹から延びる氷の刃。奴の言葉の意味はこういう事か。
だけど！

「うらああ！！」
「てええええい！！」

砕かれた氷が儚くこの場に散っていく。直線的な単純な攻撃だ。決して落とせない事は無い。量は問題だけどな。前衛全員で協力しあえばまだいける！
けど、このままやっていてもじり貧だ。体力的にやばいし、やっぱり森から出ることを考えるべき。

「おい、今は取りあえず走れ！　回復はもう一人に任せてろ！」
「くっ……済まない」

ヒーラーは二人居るんだ。無理する必要何て無い。それに簡単なっていうか初歩的な回復呪文ならソーサラーだって使える。
まあ元々、明確な区分がある訳じゃないしな。それでも自分の役割を全う出来ないと感じ彼は苦痛の面持ちだ。でも僕には慰めてやる言葉をかけられる状況じゃなかった。　しんがりを努めて、後ろから迫る氷を一手に引き受けてたから。後はそれぞれ前と左右に複数人を配置して真ん中に後衛組を入れてる。

こうしなきゃ、まともに詠唱も出来ない。それどころか進めない。電撃がスパークして、炎が氷を蒸発させる。けど次第に、その間を縫って落とせない氷が出てきてた。
氷から氷が派生する。それはどこまでだって続きやがるから、きりがない。それに今叩いてるのは一番端っこ。根本じゃないから、一気に全部が消えるって事がないんだ。

「くっそ……」

次第に確実に追い込まれる。けどそれよりもおかしな事を感じてる。それはこの森ってこんなに広かったかって事だ。もうとっくに来た分の距離は超えた筈だ。
なのに、周りには立派な氷の気が生い茂ってる。

「リルレット！　出口はまだか？」

僕は耐えきれずに先頭に居るリルレットにそう呼びかける。すると聞きたく無かった応答が返ってきた。

「そんなの、私が聞きたい位！！　どこをみたって同じ様な森しか見えないよ！」

その瞬間、これまでとは違う攻撃が僕達を襲う。氷と化した湖に光の線が進む。その進んだ場所から大きな氷が突き出てくるんだ。
ガガガガガガと激しい音を奏でて地面から炸裂した攻撃に、僕達の反応は僅かばかり鈍くなる。今まで自分より高い場所の攻撃に気を張ってたから、それは全くの警戒外。

「ケホコホ……みんな無事か？」

何とか僕は回避出来た。けど後のみんながどうなのかわからない。守る余裕すらなかったし、そもそもこういう攻撃の守り方なんてわからない。

僕に出来るのは避ける事か叩き斬る事だけだから。視界に映るのは氷の山。二メートル位突き出したそれには、最悪な光景が映ってる。
突き出た氷の中……そこに囚われた仲間の姿だ。氷漬け、まさにそんな言い方が最適。

「そんな……」
「おい！　くっそ……おい！」

周りで無事だったみんなが氷を砕こうと武器を振る。だけど二メートルもの厚い氷は今までの細い奴と強度が違う。
それにここじゃ自然に溶ける事も無いだろうし、結局は助けるには砕くしかない。このくらいならスキルを使えば行けるはずだ。

「リルレット！」
「うん！」

雷系統で一気に砕く。両方からの同時攻撃だ。そう思ったとき、僕達の攻撃よりも速く奴らは動いた。今まで僕達に向かって来てた氷の刃。それが僕達には見向きもしないで突き出た氷柱へと突き刺さった。しかも無数に。

いや、突き刺さったとは違うかもしれない。まるで氷同士で同化してる様な……天上から垂れ下がった糸に絡まれた様な光景だ。

「――っつ！」

でも上を見るとそんな神秘的な物じゃない。無数の目玉がギョロついてこちらを、いや繋がった氷を見てる？　ザワザワと異様にざわめきだす木々たち。

すると再びあの声が聞こえた。

『さあ、食事の時間』

その瞬間、喚起に震える様に葉の一枚一枚が異様に震え出す。そして氷に囚われてる数人から何かが絞り出される。それらは繋がった氷を伝ってそれぞれの木々へ運ばれていく。

これって……

「さっきと同じ状況。何だかわかんないけど、これ以上食事なんてさせるかよ！」

「うん！」

僕達は前と後ろから、それぞれの剣を突き刺した。そしてそこから電撃を押し通す。青と黄色い雷撃が周囲をその色に照らし出す。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

「てやあああああああああああ！！」

叫びと共に、放ち続ける雷撃。互いの背中は仲間に任せて、僕達は更に剣を氷に食い込ませる。すると内側からバキンと言う音が聞こえて、中の氷の見え方が変わった。

それはきっと氷が内部から割れたことで、光の屈折率に変化が起きたせい。後少しだ！

雷撃は走る、どこまでも。いつしか周りの全てが自分達の放つ色で染まってる気がした。全てが同じ氷で繋がってるのなら、それもおかしくは無いのかも知れない。

そして遂に、氷は内側から砕かれる。大粒の粒がゴトゴトと地面を叩いてた。そして解放された仲間は地面に膝と手を付き、大きくせき込んでいた。

どうやら意識があったみたいだ。

「がは……こっは……はぁはぁ、何が？　いや、どうなってたんだ？」

「大丈夫？　みんな氷漬けにされちゃってたの。でも良かった、辛いかもだけどもう一度走れる？」

リルレットは介抱しながら結構きつい事を言ってる。だけど確かに、ここにいたらまた同じ様な事になるかも知れない。

けど……ダメージを負った仲間を連れてここを抜けれるか？　このどこまで続いてるかもわからない森を……三百六十度、どこを見回しても変わらぬ森が続いてる。

これはもう、拡大された……そう考えるのが妥当だ。柊の奴が僕達が森へ入った後、森をこの湖全体に広げたとしたら？　それはもう抜ける事は厳しい。

（氷で簡単に生やせるんだ。無いことなんかない。じゃあ抜ける事が無理なら、他に出来ることは……）

それを探さないと僕達はヤバい。今までずっと柊の奴の手のひらの上で踊ってる感覚があって、それは今も続いてる。

あの葉の目が柊自身と連動してるとしたら、僕達が逃げる様子でも楽しげに見てるに違いないし、全部はあいつの予想通りって事だ。

そんなのムカつくじゃんか。

「スオウ、何してるの？　止まってちゃダメだよ。早く抜けなきゃ！」

「抜けるってどっちにだよ。」

「それは……でも走らなきゃ出口は見えないじゃない！」

氷漬けになってた一人に肩を貸してるリルレットが僕の言葉に、苛立った様にそう叫んだ。言い方が悪かったかな？　諦めた様にとらえられたかも。

そうじゃなんだけどね。諦めるなんて今更出来る事でもないんだからさ。

「戦い続けて、いろんな事があってみんな疲れてる。そんな状態で出口が見えない道を走り続ける事が本当に得策かな？」

「じゃあどうするの？　このままここで訳の分からない木々の食事にでもなってろって言うの？」

「そんなこと……僕の方こそごめんだな」

諦めるなんて出来ないってさっきから言ってんじゃん。でもリルレットもみんなを守ろうと必死になってるからな。今一こう、伝わりにくいというかだ。

「だから！！」

リルレットは髪を振り乱して、自分の思いを必死に語ろうとしてる。でもこのままじゃきっと埒があかない。だから僕は、僕の思いが伝わりやすい行動を取るしかない。

（それなら）

僕は一番近くの氷の木に近づいた。

「――ってスオウ！　危ないよ！」

これまでの経験上、危険は承知の上。怒ってた様子だったリルレットだけど、一変して心配する声を上げるなんて流石。とってもらしいよ。

でも危ないなんてわかってるし、これも一つの思いを伝える手段だ。仲間に剣は向けられないからな。その必要もあるわけ無いし。

「危険でも何でも、これで伝えるよ。僕の考えをさ」

「え？」

僕はそう言って二対の剣を木に向ける。青い電撃が刀身から僅かばかり放たれてる。そしてそんな攻撃色を感じ取ったのか、さっきまで僕とリルレットの攻撃で痺れていた筈の木々が防御の為か動き出す。

氷の幹に蠢く、幾つかの渦。そこから放たれるのは氷の棘だろう。でもそれよりも速く僕は動く。まさにあっと言う間。踏み込んだ一足。その瞬間に両の剣を一回ずつ振るった。

そして、緊張を解くような息を吐く。

「ふう」

その瞬間に、斬り裂いた切り口からバシュっと青い電気が放たれる。そして幹はその場所から大きくズレて、倒れ出す。

ガサガサガサ、ズドォォォンって感じに氷の木は地面に落ちた。すると程なくして攻撃の棘と同じように霧散していく。

「スオウ、これって……」

「もう、止めようと思う。逃げることを。けどそれは諦めたからじゃない。これ以上みんなに無理させ続けて、それでいざって時に誰も動けなくなったら、それこそダメだから。

だからもう、そのいざを決めようって思ったんだ」

僕の周りにリルレットを始めみんなが集まってきた。大きな氷の木の消滅の光を背に受けて、不安気な顔をするみんなに強い言葉を示す。

「みんな、ここで柊を向かい討とう！！」

「「「！！！」」」

僕のそんな言葉に、マンガでならそれぞれのコマにみんなの顔がアップでドドドドン！　って感じで描かれたであろう瞬間だ。

「ちょっと待ってよスオウ。それって……そもそも奴がここまで来るかな？」

リルレットの尤もな意見。まあそれはある。ここには奴の代わりに攻撃する木があるわけだしな。でもだから、僕はさっきその木を

倒せると証明したんだ。

「だから来させるんだよ。アイツはきっとあの無数の目で僕たちを監視してる。そして追いつめるのはこの木々共に丸投げだ。

ようは高見の見物を決め込んでる訳だ。でも木々は倒せるし、もう一度生えることは無い。なら、逃げて安全地帯を探すよりも、この場所を安全地帯に出来るんじゃないか？

そうなったら、優雅に見物とはいかなくなるだろ」

「つまりは、ここらの木々を全部薙ぎ倒すって事？」

「流石に全部とは言わないな。五十から八十メートル四方でいい。それなら幾ら木々が枝を伸ばそうと避けられる」

それだけ距離があれば僕だけじゃなく、きっと後衛組でも大丈夫だろう。詠唱だってかなりしやすくなる。時間もあまり掛けてられないんだ。

どこまで行っても出られないかも知れないのなら、ここを出た後と同じ条件にしてしまえって事だ。

「だけど、それって言うほど簡単か？　それに結局は柊の奴のフィールドに変わりはないぞ」

「今ここに、簡単に出来る事なんて何一つ無いよ。それにこの空間なら、どこに逃げたってアイツのフィールドだ。なら、ここで腹を決めるのも悪くないじゃん」

元々この場所はシクラを追ってたどり着いた場所。てか誘い込まれた様な気がしなくも無い場所だ。元々ＬＲＯには存在しないかも知れない所何だから、この場合どこにだって奴らの息が掛かってると思う。

ならもう、自分達が決めた場所で戦うのも良いかなって事だ。僕

のそんな言葉に言い返す言葉を見つけられないでいるみんな。
だって誰もが気づいてる。どこまで行ったって柊の手のひらの上だって。それに他に良い案があるわけでも無い。

「まあ、みんなを巻き込んだ僕が一人で決めれる事じゃないし、どうかなってことなんだけど？　結論を急かすのは些かズルく感じるけど、そう待ってもいられない。
僕とリルレットの雷撃の余波が残ってる内に動きたい」

そう言うとみんなが上を仰いで唾を飲むのがわかった。今度攻撃されたら、また同じように助けれるかなんてわからないんだ。

そして次は自分が凍り漬けになるかも知れない。そんな恐怖が沸き立ってるんだと思う。別段何がどうなってる訳でも無いけど、「何かされた」感は確実何だ。
その得体の知れない事が、余計に恐怖をかき立てる。そして一番最初の被害者のヒーラーがこう言った。

「そうですね。それもいいかも。どこに逃げても同じなら、自分達で僅かばかりでも作った場所の方がいいのかも知れない」

すると一人の賛同と共に、みんなが次々と頷いてくれた。

「よし、そうと決まれば一気に行くぞ！　これは残りの前衛組でやる。後衛はフォローでさっき凍り漬けになってた奴には悪いけど、その場で護衛頼む」
「任せろ！」
「うん！」

それぞれがそれぞれの役割を理解して行動を開始する。その行動

を理解でもしてるかの様に木々も動き出すけど、まだ雷撃の影響は残ってる様で、動きが鈍い。だからこの間に少しでも多く倒しておこう。
なるべく後衛組から離しておきたいからな。

でも流石に、攻撃の元に向かう訳だからそう易々と近づける訳じゃなかった。鈍くなってると言っても量が量だ。僕はスピードも手数も二刀流なだけに自信があるから一人でも対応出来るけど、リルレットとかが心配だ。

けどチラリと横目で見ると、リルレットはスキルを上手く活用してやっていた。あれなら僕の心配は杞憂だな。他のみんなは流石にベテランなだけあって対応力があるし、自分がやるべき事に集中する事が一番だな。
延びてくる氷をかわしたり落としたりしながら、幹を次々と切りつけていく。だけど僕の場合はそれだけだ。決めの一撃は放たない。

だけどそれは、それだけで十分だから。僕の場合、一本一本切り倒して行くのは逆に効率悪い。このスピードと手数の多さを最大限に生かすスキルがセラ・シルフィングにはあるんだ。
風の速さで周りの木々に傷跡を刻んでいく僕。セラ・シルフィングが刻んだ場所は淡く光って存在感を出している。

そしてある程度の木々に傷を付け終えると、僕は立ち止まった。そしてその時を待ってましたと言わんばかりに、氷が一斉に伸びてくる。
けど遅い。仕込んだ種を芽吹かせる時は今この瞬間だ。

「ライジング・バースト！！」

その言葉を放つと同時に、後方で光が一斉に瞬いた。それは付けていた傷から生じた雷撃の光だ。それが氷の幹を砕き斬り裂き、放たれていた。

そして木々が倒れる重たい音と共に地面も少し揺れた。まああれだけの木が一斉に倒れるとね。けどまだまだ足りない。安全圏を作るには周りの木を一掃しなくちゃだ。

だから僕は再び走り出す。戦場でより戦いやすい戦場の為に。

「はぁはぁはぁはぁ……」

行き絶え絶えになりながらも周りは随分と開けて、見晴らしも随分良くなった。綺麗に円上に開けた空間の完成だ。

周りの木々共もこの距離のせいで氷を伸ばしづらくなってるみたいで周囲でウネウネさせてるだけに止まってる。

まさに狙い通りだな。

これで後は役者が来るのを待つだけだ。するとその時、突然湖の氷が輝きだした。それと同時に声が聞こえる。

「本当に、君って厄介。何の抵抗もせずに、全てを渡せば良い物を……そんなに絶望を知りたいの？」

それはこれまでの天からの声じゃなく、普通に聞こえる声だ。それはつまり……遂に奴が来たって事。

「柊！」

森の中から白い冷気と共に現れる柊は歩いてなんかいなかった。滑る様に勝手に進んでくる様が不気味な威圧感を放ってる。

そして伸ばしたその細い腕・・すると突然、湖の光は波を打って収束し、僕たちの足下から何かが飛び出す。それは柊の腕へまっすぐに向かい、そして優雅に開かれる。

これで奴の武器はその手に還った。一気に張りつめた空気がこの場に広がる。

「分かったわ人間。私がこの手で奪ってあげる。『真の命改変プログラム』その礎に成りなさい」

立ち向かう時（後書き）

第百二十六話です。

今回は最後に大きなキーワードとなる言葉が出てきました。最後の言葉が何なのか、それは柊達の存在意義にかかわる事となるでしょう。これから更に激しさを増す戦闘をと共に、そこら辺の謎もお楽しみに！

てな訳で、次回は水曜日に上げます。それではまた次回！

見果てぬ夢（前書き）

少し筒、実は俺の知らない所で歯車は狂って行ってたのかも知れない。同じ方向を見てるとは思ってなかったが、それでも何となく、そう変わりはないんだろうって信じてた。

だけどそれは淡い期待で、儚い泡沫だったんだ。自分の胸から突き出る冷たい感触……それがガイエンの真実。

2023

見果てぬ夢

何が起きたのか、ガイエンが何を言ったのか、俺には理解出来なかった。けど、胸を貫く鈍い痛みだけは体がいやと言うほど伝えてきてた。

「丁度良い頃合いだろアギト。ごっこ遊びもここら辺で終わらせて、お前は退場してろ。私がそれを許してやる」

そう言ってガイエンは俺に突き刺した剣を勢い良く引き抜いた。その瞬間、俺の体は支えを失ったように傾き掛ける。

そんな俺の瞳には前へ進み出るガイエンの背と、鈍く光る剣の刀身が見えていた。何で……いつのまにか遠くに感じるガイエンに、俺は弱々しく腕を伸ばす。

「てめえ……」

だけど見向きも、止まる事さえもしないガイエン。俺はそれでもその背を追おうとした。でも体が上手く動かない。腕を伸ばすだけで精一杯で、動こうとした反動で膝が砕けてその場に倒れ込む。

（くっそ……そうかコレって……）

この状態、明らかにただの一撃食らっただけのダメージじゃない。そう言えばガイエンの剣もまた特別な物なんだ。

アイツの性格にあった、嫌らしい性能付きの長剣。

『ポライゾン・レイソン』は切りつけた敵の自由を奪う、神経性の毒を常に精製してるんだ。つまりこれはその効果。

かなり厄介だな。ナイト・オブ・ウォーカーが俺が与えられてから、ガイエンが探し出したあの武器がこれ程だなんて。
なんだかこれってさ……イヤな思いが頭に浮かんでくる。けど多分間違いじゃない。さっきの言葉……直ぐには理解出来なかったが、今なら分かる。

自分から言ってんじゃねーかあの野郎。けど、何でって思う俺もいる。今回の侵略戦でようやく僅かばかり通じ逢えた筈じゃなかったのか。

「ガイエン様、ご苦労様です。ようやくこの時が来たようですね」

だ……誰？　と思ったが、ここには俺とガイエンとグラウドとアイリしか居ないはず。上手く動かない顔を上げて見ると、やっぱりだがあれはグラウド。
信じられない事に、奴が頭を下げてる？　それにあの口調。

「ようやく？　違うな。ここからだまだ先は長い。何せカーテナはもう主人を選んで居るのだからな」
「これだけは唯一の計算違い。何故にこんな女に我らがエルフが従わねば成らぬのか」
「そういうな。カーテナは存在自体が不確かだったのだ。それにアイリは私の伴侶として同じ場所に居て貰うのだからな。
私の目に間違いは無かったと確信してる。間違いがあったとすれば、それはやはり」

会話の中でようやくガイエンが再びこちらに視線を向けた。だけどそれは、今まで向けられた視線のどれよりも冷たくて暗い視線だ。
初めて会ったときよりも、互いに好きになれないと思ったときよ

りも、更にヒドい阻害感と嫌悪を感じる。今日会ったこと……向けられた言葉の全て……あれは幻か？

何だったんだ一体っていいたくなる。その中で奴らの言葉を聞いていて、何言ってるんだよとも思う。そして更に耳に届いてくる言葉と、武器を手に取って進み出るグラウドの姿が見えていた。

「アギトの存在。お前がいろんな事を狂わせた。特にその力の事は予想外だったよ。それ以外は全てガイエン様の予定通り立ったのに」

「予定……通りだと？」

それって一体どこからなんだ？　グラウドの野郎、冗談でガイエンに遜ってるんじゃないのかよ。いくら積まれたんだ？　出なきゃそんなお前おかしい筈だ！

「予定通りは言い過ぎだなグラウド。私の計画は何度も修正してある。その都度その都度な。まあその修正が一番大きかったのが、お前のナイト・オブ・ウォーカーの存在だ」

「まさかこの女、何も言わずに唯一無二の力をアギト、お前に与えたんだからな。そのせいで簡単に居場所を無くす筈だったお前が、それだけで掛け替えの無い象徴の一つになった。

大きな誤算だ。初めての騎士は偉大なる王を守る盾と矛であるべきだからな。それが誰もの考え。だが、下地はもう済んである。

今更、強大な一人だけの力なんていらない。使いどころも終わったし、そろそろ消えて貰おうアギト！　貴様にはな！！」

目の前で火花を散らしながら回転するグラウドの武器が見える。奴の機会仕掛けの槍の威力は、この身をもって知っている。

それに……もう、いろんな事がグチャグチャに成りすぎて、結構キてるんだ。その瞬間、グラウドの奴の攻撃が炸裂した。部屋中を

振動させる程の一撃。
立ちこめる煙の中、だけどそこに俺の姿は無い。
「ガイエン様！」
「慌てるな。アイリがここに居る以上、アイツは逃げんさ。きっとアイツの頭では混乱してるだろうから、ゆっくりと分かって貰おうじゃないか。
それからアイリを救い出すして遅くはないだろ？　なあアギト」
そう言ってガイエンは鞘に戻してた長剣を居合いの如く振り抜いた。そして放たれた斬撃が向かってくるのは、アイリが眠ってる部屋の中央部分。
だけどその斬撃は現れた大きな盾によって阻まれた。
（アイツ、気付いて……）
その衝撃で拡散した煙の中から、俺は姿を現す。アイリを抱えようと思ってたが、その状態でこの二人を相手取るのは流石にキツいみたいだ。
しばらくは冷たい床の上で寝て貰う事に成りそう。けど、それにしてもどうやってアイリを？　何かのアイテムか魔法で眠らせてるんだろうけど、カーテナを持つアイリの防御は完璧だ。
それをどうやってグラウドは通したんだ？　本当に訳が分からない事が多すぎる。
「どうやって私の毒を打ち払った？　やはりその力の賜物か？　それとも気合いとか言う物じゃないよな？　それは止めてくれよ。
私はそう言うのは嫌いなんだ。気持ちだけで全てを乗り越えられて、諦めなければ何だって手に出来る……そんなガキ臭いきれいごとなら許さんぞ」

ガイエンは抜き去った剣をこちらに向けて牽制してくる。とことん上から物を言う奴。出会ってからほんの少しずつだけど、確実に変わって来てる……そう二人で感じてたのも幻か。
それとも、今のこいつがその果てなら、こんなに虚しく悲しいことはない。どうしてこんな事をするのか、俺には理解なんて出来ないんだ。

「うるせえよ。ガキ臭くてきれいごとで何が悪い？　俺はまだまだガキで、綺麗事だって夢もって信じれる年頃なんだよ。
教えてやるよガイエン、それにグラウド。今、俺が動けてるのは、お前達の事が最高にムカつくからだ！！」

そう叫んだ俺は地面を思い切り蹴って動いた。そして一瞬で向けられてたガイエンの剣を上へ弾いて懐へ入る。一瞬にして形成逆転。
今度は俺が、奴の喉元に大剣を突きつける。

「はは、素晴らしい。それだけの力、何故にお前なのか理解出来ないな。責任も意志も不十分なお前には、重すぎるだろう。
まあ私とて、その力では満足はせんがな。ムカつくだけで動けるか。相変わらず、ＬＲＯは無駄な意志を汲み取るな」
「うるせえ！　うるせえ！　うるせえ！！　さっきから昔に戻った様な喋りを繰り返しやがって！　その減らず口、今なら一瞬で潰せるんだ。
俺の質問にだけ答えてろガイエン！」

チャキ――と俺は更にガイエンの首に剣先を当てる。本当にこのまま突き刺してやろうか。するとその時、横からグラウドが自慢の突撃力で突っ込んで来た。
だけど、大きな爆発と共に後ろに下がったのはグラウドだった。

「なっ……それが手にした力の大きさか！」
「そう言う事だグラウド。ナイト・オブ・ウォーカーを甘く見るなよ！　そこで大人しくしてろ。出ないと、いつから様様呼んでるか知らないこいつの首が飛ぶぞ」

俺は自分の力の大きさを見せつけた。グラウドの攻撃に対して、避ける事なんてせずにただ盾で防いだだけ。けど今の俺にはそれだけで十分だった。
それだけ俺の盾は堅牢だ。でもグラウドはそれでも諦めてはいないらしい。奴の槍はまだ元気に唸ってる。でも流石に二撃目をやるかには戸惑いがあるみたいだ。

「――っち」
「いいさグラウド。ここもまた時を待て。で、最初の騎士様は私に何が聞きたいんだ？」

喉元に剣を突きつけられてるってのに随分と余裕をかますガイエン。何だか俺の方が追いつめられてる感じだ。まあ精神的な事ならまさにそうなってる訳だが、今はそんな事悟られる訳にはいかない。
「全部だ！　お前が何を目的にして、今まで何をやったのか！　そしてこれからお前が何をやろうとしてるのか、全部喋って貰う！」

強気……それを全面に押し出して俺はそう言った。だけど気付かれてるのかも知れない。本当は腕が振るえてるって事に。
ようやく友達になれると思った。けど結局は前と何も変わらない。いいや、それどころかもっとヒドい。俺の中に渦巻く感情は怒りだけじゃ無いんだ。

後悔や失望や寂しさなんかも相まって、そして無駄に少しだけ通じたと思えた事が、俺の腕に震えをもたらしてる。

「全部か、また大雑把な。お前が知りたい事は本当にそれか？　まあいい、そうだな。まずは私の目的を教えてやろう。

私はこの国を手に入れる。そして行く行くはＬＲＯの全てを、エルフの覇で覆って見せよう。そして私は神へと成るんだ！」

「神だと？」

一瞬こいつ何いってんだ？　って思った。夢見てるのは完全にこいつだろ。それこそガキ臭い綺麗事じゃないのか。夢物語とも言えるだろ。

でも冗談言ってる様には見えない。

「お前……そんな事本気で言ってるのか？　幾らＬＲＯがゲームだからって限度って物がある。それに神ならもう居るだろ。

この世界を管理してる人達こそ神と呼べる存在だ！」

「そんな干渉してこない存在など、居ても居なくても私にとってはどうでも良いことだ。奴らは運営者。

私が統べる為のこの世界をただ管理してるだけの、いわば裏方よ。私が言う神はそんな見えない存在じゃない。畏怖と敬意を一心に集める存在の事だ」

「それこそ、どうかしてるとしか思えねえよ！　よく考えろ！　ＬＲＯはゲームなんだ！　その中で手に入れた地位や名誉にどれだけ執着したって意味なんて……」

「無いなどとはお前の口からはいわせんぞアギト！！」

その瞬間、俺の剣を素手で掴み取ったガイエン。その剣幕と行為に俺は一瞬たじろいだ。

「私たちがここに何を求めて来てると言う？　それは夢だ。リアルで見れない夢がここにはある。それに意味なんて無いなどとはいわせんよ！
結果を求めるのは人の性。私はな、青臭く諦めないなどとは言わんよ。大人らしく、どんな手段を使ってでも目的という夢を叶えよう！
ここにはまだ、その権利がある！　だから邪魔はするなよアギト！」

握った剣を自分の方へ引き寄せるガイエン。そして上に弾かれてた自身の長剣を振り卸してきた。毒をはらんだその刀身。もう一度受けて、もう一度立ち上がれるかの保証はない。
俺は盾を上へ。ガイエンの長剣と俺の盾がぶつかり合う。結構な衝撃だ。だけどこの位で俺の盾は砕けない。けど気付くと、盾の横から緑色の煙が落ちてきてないか？
これってまさか毒！？

「その気になれば、周囲に放つことも出来る。二度目はないぞアギト」

そんなガイエンの声が盾で見えない向こう側から聞こえてくる。そんな事自分でもわかってる。ＬＲＯは気持ちを汲み取ってくれるが、それが何回も通用するわけない。
実際、最初に受けた毒が消えたわけじゃないんだ。俺は奴の毒を消すアイテムなんか持ち合わせちゃいないんだから、ただ体が鈍く成ってるだけだ。
だからもう一度食らうわけにはいかない。俺は腕に力を込める。

「俺は弱いけど、この力を舐めるなよガイエン！！」

突き刺せばきっと早かった。だが俺はそれをしなかった。今の俺の力なら、ガイエンが剣を押さえてたとしても、それ以上の力で喉元に刺せた筈だ。
だけど俺はそれをやらずに持ち上げた。力を込めた腕で、ガイエンごと剣を上げる。そしてそのままおもいっきり振りかぶる。

その瞬間、空気が弾ける様な音と共に、前方の壁が崩れさった。そこにはついさっきまで目の前に居たはずのガイエンが尻餅をついていた。
これで毒の心配はいらないだろう。

「ここは夢を見る場所だ。だからそれを否定なんかしない。でもなガイエン。どこにだって常識とか倫理とかあるだろ。勿論ここにも、暗黙のルールとかがある。
なあガイエン。お前の夢が今言った事なら、俺たちって何なんだ？　汚い手段に使われてた関係なのか？」

そんなの思いたくない。幾らこいつがムカつく奴で、気に食わないとしても、そんな関係だなんて最悪だ。俺はだから否定してほしかったんだ。
だけど、壁を背に立ち上がるガイエンは妖しく笑ってこう言った。

「くっくっく、その通りだアギト。最初にお前達と出会ったあの日、『使える』そう確信したよ。だからグラウドを差し向けて、強引にレイアードに入れた。
そしてそこで案の定お前達は風を吹き込む役目を担ってくれた。正直、マンネリ化した毎日に飽き飽きしてたからな。
カーテナの出現条件は分からないし、全ての事が滞ってた時だ。お前達が来たのは」
「おい、待てよ……レイアードに入れた？　いや……じゃあ、まさ

か！」

ガイエンの言葉があの頃を回帰させる。でも奴が言ったことを加味して思い浮かべるあの頃は、何だかドス黒い物で覆われてそうだった。

「まさかも何も、私がエルフのレイアードを作ったんだ。あそこに居るのは私の大切な駒達。昔も、そして今もな」

「今もって事は、さっきの侵略戦でレイアードが紛れ込んでたのは……」

「ああ、私がそうしといてやったよ。お前を追いつめる為にな」

「――っつ！！」

当然とばかりにガイエンは見下すような目で俺を見てる。何で……なんて言葉はもう意味すら持たないんだろう。こいつの行動は全て、あのおかしな夢につながってるんだから。

そしてそのためなら、何だってするって言っている。けれどそれって……俺は一気に地面を蹴ってガイエンに迫る。

「ふざけるな！！　何で俺が……俺達が、お前の夢の犠牲に成らなくちゃいけないんだ！！」

俺は大きく剣を持ち上げる。今まで、どうにか我慢してきたけど、ああもハッキリ言われたら限界だ。自分が儚く望んでいた物は、ガイエンの一言一言に裏切られていく。

だからきっとこのまま振り卸せる。その筈だった。けどその時、ガイエンは僅かに頭を俯かせて、微かにこう言ったのが聞こえた。

「仲間……だろ」

その瞬間、今にも振り卸しそうに成ってた腕にたがが入った様に動かなくなった。言葉の流れで考えると、それも随分理不尽だったが、俺には仲間の部分が強調して聞こえてたんだ。

「お前……今、何――」

「うらあああああああああああああ！！」

突如割り込んだ声。そして直撃したのは、グラウドの槍だった。完全な不意打ち。防御なんて一ミリも間に合わなかった。

グラウドの槍の爆発的な突進力と掛け合わさった攻撃力が横腹付近に炸裂する。俺はどうなったかも分からずに吹き飛んだ。

「ぐあ！！　だっ！？　ずっ！？　がっは！！」

止まったときには今度は俺が壁を背にしてた。体中が重く感じる。かなりのダメージを負ったみたいだ。すると少し離れた場所から音が聞こえる。

機械が回転するような音。そしてプシューと熱気を吐き出してる様な音。顔を向けると、グラウド武器から立ち上る白い煙を押し退けて、ガイエンが進み出て来る所だった。

「良いタイミングだ」

「はい、有り難き幸せでガイエン様」

本当にどうしたんだって言うくらいのグラウドの遜りようが、ある意味吐き気を催すな。あれが本来の関係なのか。見慣れないから違和感ありまくりだ。

「――っ……グラウド、お前変だぞ。あの異常な自信はどこに行ったんだ？　正直言ってかなり気持ち悪い」

「全てはこの方の采配に従ってたまでよ。それに勘違いするんじゃねーよアギト。俺が狂おしい程に力を求めてるのは何もかわらねーよ！

ガイエン様についていけば俺もどこまでだって強くなれる！」

グラウドの奴のガイエンへの執着はどう考えたっておかしい……というか異常だ。新興宗教の教祖と信者みたいだ。

グラウドは自分で変わってないって言ったけど、俺にはそうは見えない。てか力の概念がそれでいいのかよ。俺が知ってるグラウドは絶対に今の言葉じゃ満足しない筈だ。だって……

「どこまで行ったって、『二番目』の力をか？　随分と丸く成ったじゃねーか。俺的には、やっぱりお前誰だよって感じだよグラウド」

「何だと？」

俺の言葉に僅かにだけど反応するグラウド。だってそうだろ？ガイエンが神ならガイエンが常に一番の力を持つ事になる。

最強なんて手に入る訳がない。それでも満足なら本当に丸くなってる。だがそんな問答の間に再び奴が入ってくる。

「落ち着けグラウド。アギトは分かってない。だから理解も出来ない。奴は浅はかさの固まりだぞ。お前の求める強さ……最強と言う物もこの先にある。

私がいるから一番に成れない？　アギト、神とは別次元の存在なのだよ。見えても決して届かない。そこにお前達が求める強さなど無意味な程にな。

神は神であるだけでいい。最強の神なんて言わんだろう？　だから強さとは、人である内にだけ価値がある。迷うなグラウド。

覇業を成せば、お前が最強だ」

「お、おう！！」

何だかかなり自己中的な思想が入ってる言葉だったが、それでグラウドは良いらしい。単純なのは元からか。
小難しい事を言えば、変な説得力が言葉に宿るんだな。

「納得いかんと言う顔だなアギト」

ガイエンが俺の顔を見てそんな事を言った。だから俺は立ち上がりながら言ってやる。

「当たり前だろ。結局お前は全ての上にいる。見下す世界での事を言ってるだけだ。最強の神は居なくても絶対的な神がお前なら、見下した最強なんてハリボテも良いところだろ」

窓一つない儀式場で、床の一面に広がった魔法陣の光が俺達を照らしてる。そんな限定的で神聖な場所だからか、こんな神やらの話が出来るのはさ。
言ってておかしく成る。真剣に成れば成る程さ。だけどガイエンは妙に楽しそうでもある。ようやく動き出した夢の第一歩。それを語ってるのが嬉しいのかも知れない。

「それが神と言うもので、神の下で生きるのが人というものだろう。何もおかしな事などない。リアルは想像の神にひれ伏して、その下に自分達が生きてるのを当たり前としてるじゃないか。
それが神の力と言うものだ」
「そんな物に……本当に成れるとでも思ってるのか！？　だとしたら相当イかれてるぞお前」

本当に、リアルだったら精神科の世話になるレベルだ。

「成れるさ。ＬＲＯに出来ない事などない！　やれない事など！　見れない夢などありはしない！！　奇しくもそれを確信させたのはお前達だぞガイエン」
「何？」
「カーテナの存在の証明！　そこに至る過程。あの圧倒的な力！！　あれほど心躍った時はない。だがこんな物じゃないとも思った。私が夢描いた光景……その場所はな！！　不可能など可能に出来る！　現実と仮想の狭間の夢を私は大願しよう！！」

その時、俺の目にはガイエンが大きく映った。視覚がおかしく成った訳じゃない。奴の圧倒的な自信。それが俺の心を萎縮させて、そんなイメージを伝えてくる。
このゲーム、ＬＲＯならまさかそんな事まで出来てしまうんじゃ無いかとさせ思えてくる。前しか見てないガイエン。
そんなこいつを、後ろばかり振り返ってる俺が果たして止められるか？　けどそれでも、許せない怒りの分のケジメはつけよう。後はわからないけど。

見果てぬ夢（後書き）

第百二十七話です。
やっぱり次まで続きます。ごめんなさい。だけど次回で必ず過去編は終わります。そして現代に戻った時、アギトはどうするのか……お楽しみに。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

氷上に綴る真実（前書き）

命改変プログラム。それを聞いたのはあの人の口からだった。それから取りあえず、僕の目指すべき物に成ってたそれが、まさか柊の口から紡がれるなんて。しかも微妙に付け加えられた形で。

『真の命改変プログラム』それが何か……いいや、そもそも命改変プログラムに関して知ることが余りにも少ない僕には、決して無視できないその言葉。だけど全ては、僕が思ってたよりも大きくなりすぎる話だった。

氷上に綴る真実

冷ややかな冷気が頬を撫でていた。周りで自然を模して奏でる森のささめき、影の揺れ、それらが一気に遠くなる程に、僕は柊が放った言葉だけに耳と全身の感覚を注ぎ込んでいたんだ。

だって……何て言ったアイツ？　『命改変プログラム』だと？　何でこいつがその言葉を知っている？　それは当夜さんが僕に伝えた、セツリをＬＲＯから解放するためのキーワードの筈だ。

「お前……今なんて？　命改変プログラム……どうしてそれを……」

僕は震える声で柊に真実を求める。それを知っているのもそうだけど、奴が言ったのは厳密には違ったんだ。『真』その言葉がついていた。

それこそ本当に、僕にとってはどう言うことだって感じ。『真』って事は『偽』とかあったりしたのか？　僕が教えられて、求めてる命改変プログラムはどっちなんだ？

それとも全く別の物……って事はないよな。

（分からない）

今の僕には何も。だから柊の奴に喋らせる必要がある。アイツは……いや、アイツ等は僕が知らない事もきっと沢山知ってるんだろう。

それこそ、本当に命改変プログラムの事まで。

「その反応。やっぱり君は知ってるんですね。命改変プログラムの存在を」

柊は顔を傾けて、少し妖しい笑みを作ってそう言った。幼さが残る顔してると思ってたけど、今の格好であんな顔されたら妙に色っぽく見える。
けど今は、他の事で胸がドキドキだからイチイチときめいては居られない。

「知ってる……って程じゃないかもだけど、聞かされた。てかお前のその台詞、そのまま返すぞ。お前こそ何でソレを？」
「愚問ですね」

僕の言葉に軽くそう言った柊は、何だか扇子の感じを確かめる様に開いたり閉じたりしてる。けどその動作がイチイチ僕達を警戒させるんだ。
だってあの扇子が奴の攻撃の鍵で、その動作がいろんな事のキッカケって分かってる。だから意味の無いようなその動作でも警戒してしまう。

すると不意に服が引っ張られる感触に気付いた。端っこ方をクイクイと申し訳なさそうな程度の引っ張り具合。視線を向けるとそこにはリルレットが僕の服の裾を引っ張ってた。

「何？」
「何じゃないよ。さっきから私たち置いて話が進んでる。何なの命改変プログラムって？　そんなの初めて聞いたよ。仲間なんだから、ちゃんと教えなさい。
ねえみんな。知りたいよね？」

すると周りのみんなも頷いた。そう言えば、リルレット達が知ってる筈ないよな。あんまり人に話す事じゃないと思ってたし。

てか誰かに話したっけ？　って感じ。まあせいぜいアギトやシルクちゃんやテッケンさん、そしてサクヤ位にしか言ってなかった気がする。

でもサクヤは元から知ってたんだっけ。アイツも実際、全部を知ってそうな感じはある。でもサクヤも全部は一気に喋らないんだよな。

まあだから、僕が知ってるのは本当に名前とそのプログラムの効果位。あんまりリルレット達に深く聞かれても、答えられる知識も持ち合わせちゃ居ないんだけど、もう言っちゃった事を隠す事もない。

「さっきも柊に言ったけど、僕もあんまり詳しくない。ただ命改変プログラムって言うのが、セツリをリアルに戻すために作られた物だって事だけだよ」

「成る程、セツリちゃんを通して出てくる共通のワードって事なんだ」

「まあ……」

リルレットが何気に言った『共通』って言葉が引っかかった。別におかしくはないし、リルレットの言うとおりだと思う。

僕達が同じ良く似た言葉を知ってたのはセツリを通してだ。でも何か、柊が言った『真』の意味……それが共通に待ったを掛けてる様な気がする。

だって僕の知ってる命改変プログラムは柊達の目指してる事とはきっと違うんだ。奴らはセツリをここに閉じこめて置きたいんだからな。

そんな事を思っていると、僕達の会話を聞いていたのか、柊が間に言葉を割り込ませて来る。

「君は命改変プログラムが、ただの脱出用プログラムだとしか考えてないのね」
「何？」

どういう意味なんだそれは？　奴の扇子からこぼれ落ちていってる白い冷気の固まり。それを何となく視界に捉えながら、僕は柊を見据える。

「ねえ、君はマスターにその事を聞いたんじゃないかしら？」
「マスター？　誰だそれ？」

そんな名前の奴は僕の記憶には無いけど。ＬＲＯには特徴的な名前の人達も沢山いるけど、まだマスターさんとは出会ってないな。

「ああそうですね。この言い方じゃ分からなくて当然。開発者ですよ。もっと具体的に言うと桜矢当夜です」
「……そうだけど、何でそう思ったんだ？　当夜さんは今……」

僕は言葉を濁す。てかこういう事はそう安易に口には出来ない。でも柊の言ったことはただの推測じゃないだろう。何だか確信めいた物を感じるし、とっても淡々としてるよアイツは。

「別に、マスターが起きてるとか生きてるとか死んでるとか、どうでも良いことです。ただ、命改変プログラムの存在を私たち以外で知ってると成ると限られますから。
後、君にわざわざ教えてあげるっていうのも他じゃない、マスターがやりそうな事です」

その瞬間、どうでもいいとか言ってる割に、柊が『マスター』と

口ずさむ声が何だか切ない……そう気付いた。それにマスターって名前以外の名称でもあるってさ。
例えば師匠とかも海外ではマスターって呼ぶし、達人とかもそう。それに映画やマンガなんかでは、人から生み出された意志有る物はそう人を呼んだりする。

だから柊が口ずさむマスターはそっち系なのかも。柊達はシステムの外に居るけどプレイヤーじゃない。なら誰かに造られた訳で、意志有る物なんだ。

「ふうん、で？　当夜さんに聞いてたら何だっていうんだ？」
「わからないかしら？　頭はあんまり良くないの？」

む……何て失礼な事を普通に言う奴だ。何か無駄に純粋な感じで言われたから余り否定出来ないじゃないか。せめてこう言うのが精一杯。

「別に、悪くもないから良いんだよ」

それは有る意味、普通って事だ。可もなく不可もない点数を稼いでます。リアルの僕はここ程、パッとはしないんだ。

「開き直ってるのね。まあいいわ。私が言いたいのは、あの子の為の脱出用プログラム何てのは建前だって事」
「建前？」

まさに何だそれって感じだ。

「建前じゃ日本語としておかしかったかしら？　なら一部にするわ。この世界からあの子を放つ事……それは命改変プログラムの本質の

たった一部分だと言う事よ」

パン――と閉じた扇子が開かれた。目が覚めるような音……じゃなくて今度は言葉。でもそれはまだ信じ難い事だ。

こいつらはどこまで何を知ってるんだ？

「考えてもみてよ。あの子には二つの選択肢が有った。この世界に留まる選択と、君が言うリアルへと帰還する選択。

あの人にとって妹は全てと言っていい存在。だからこそ、幸せの形の選択を委ねて後悔のない……出来ない、唯一無二の事にも保険を掛けたの。

どちらを選んだとしても、あの子が寂しくないように」

「それってつまり……命改変プログラムには二つの選択肢、そのどちらにも対応した機能がある……そういう事か？」

「うん、なかなか聡いじゃない」

褒められた。でも聡いとかのレベルじゃないよな。あそこまで言われて気付かなかったらバカだろ。って待てよ、なら僕はバカにされてるのか？

扇子で口元覆ってる柊は、実は笑ってる？

（けど、それにしても……だ。確かに最初に柊が言ったように、その可能性に気付いても良さそうな物だったのかも）

そう心で思うと何だか落ち込むな。セツリをリアルに返せるんだって分かって、僕はただ喜んだだけだったけど、それってその時の喜びって自分の事……だったんだなって今なら思う。

でも当夜さんはいつだってセツリの事を想って考えていたんだ。どんな形でも絶対に幸せに……そう感じれる様にしようとしてたって事だよな。

自分は絶対に戻って来て欲しいと考えた筈なのに……

「二つの選択肢のそれぞれの保険。じゃあそれが何だか分かる？ ヒントはあの子が求める物ね」

おいおい、何だかクイズ形式なって来やがった。柊の奴も結構ノリノリじゃないか。もっと物静かなのかと最初は思ってたけど、やっぱりシクラと姉妹何だな。

てか「知りなさい」そんな風に訴え掛けて来てるようにも捉えれる。まあそれならもっとすんなりと教えてくれれば良いんだけどな。

こっちだって教えてくれるんならありがたいんだ。だからこそ、どんなに回りくどくても付き合わなければいけない。

でも実際、この問題は結構簡単だ。

「保険か……それって帰還側なら僕で残留の方ならお前達って事だろ？ セツリの奴、一人は嫌みたいだからな。

いや待てよ。お前達が人じゃないなら、こっち側の保険もそうなのか？ ならサクヤがそうなるのか」

だってどんな奴なのかも分かったものじゃないプレイヤーの誰か――なんて不覚定過ぎるだろう。それじゃあ当夜さんだって不安いっぱいの筈だ。

なら柊達と似てるような存在でセツリを溺愛してるサクヤが浮かぶ。アイツはセツリに帰って欲しいと願ってる。だから保険の条件に合うだろう。

だけど僕の答えを聞いて、柊は首を振る。

「三角ですね。後から余計な事を言わなければ丸だったのに。まだ良く理解してないみたいですね」

「なんだよそれ。間違っちゃいないだろ？　セツリがここを選んだ時の為の存在がお前達なら、外を選んだときはサクヤだろ？」

すると柊はちょっと複雑な顔をしてこう言った。

「確かにアレも保険の一つではあるわ。けどアレじゃ駄目なの」

「駄目？」

「だってそうでしょう。アレがあの子にそれを選択させれるかしら？　それはきっと、いえ絶対に無理だもの。いくらアレが耳元で叫んでも、それだけじゃあの子は選ばない。選べない。

マスターが求めたのは、あくまであの子が選んだ世界を共に歩ける存在だもの。だから君が正解よ」

成る程、そう言う事か。確かにサクヤの言葉だけじゃセツリはもう一度リアルに戻ろう何て考えないだろう。だってもしもそれで戻ったとしても、セツリは一人なんだ。

そんな世界に、きっと意味なんてないんだろうからな。でも……それじゃサクヤって何なんだ？　いや、普通に元々のセツリの御世話をするための存在なのか。

帰すとか何とかの役目の方が寧ろ後付け。

「僕が正解か……でも何か期待に応えられるか怪しいけどな」

「何言ってるのスオウ！　きっとセツリちゃんは偶然の中の当たりを引き当ててる。それらの運を無駄にしちゃ駄目だよ」

「リルレット……」

「女の子の運ってとっても大事何だから。毎日占い観て一喜一憂するほど！　だから二人の出会いは奇跡なの！」

何だか異様に熱く語られてしまった。それも僕が、さっきの失敗

をちょっと思い出して弱気になったせいかな。運か……セツリにとって、僕がその役目を担ったことが果たして幸運だったのかは正直分からない。

だけど男にだって運は大事でさ。少なくとも僕からしたら、ＬＲＯを初めてセツリと出会えた事……それは思い返せば幸運だ。

光花が咲き乱れるあの空間で、ベットに眠るセツリを見つけてから、僕のＬＲＯでの冒険は始まったんだ。あの出会いが無くちゃ、僕にとってＬＲＯはＬＲＯじゃないんだ。そう思う。

訳分からない事を自分で言ってるけど、そう言うこと。

「奇跡ね。その奇跡ももう終わってるわ。だから諦めればいいのに」

ため息つきながら柊が元も子も無いことを言いやがる。その言葉にカチンと来たらしいリルレットを僕は腕を出して制し自身で声を上げる。

「奇跡が終わったって別に良い。もう一度始める為に僕はアイツを追いかけてるんだ！」

「そう……だったよね。そんな君だから、シクラは面白いって言ってたんだっけ。だけどね、私達も役割があるの。託されたその役目……はついで何だけど、思い描く世界の為にあの子はやれないな。それに私達も幸せになって欲しいって思う気持ちは本物なのよ」

柊は胸に置いた扇子で心を表す様に、それを優しく包み込む動作をする。こいつらが本当に、その保険の為の存在ならその気持ちが無いって訳でも無いと思う……けど、相入れない思いで有ることに変わりはない。

僕はセツリに死んで欲しくないからリアルへ戻って欲しいと考え

てる。だけど柊達は、例え死ぬとしても夢の場所に居ることが幸せだと考えてる。予想だけどね。
そう間違っちゃいないだろう。その確執は簡単には埋まらない。だって命は一個しかないんだよ。こいつらはそれが分かってるのかと、僕は思う。

「お前等だってセツリの事をちゃんと考えてるのなら、それは生きて欲しいって事じゃないのかよ！？　リアルに戻ったって、ここに来れなく成るわけでも、無くなる訳でもないだぞ。
でもこのままずっとＬＲＯに居続けたらセツリの体は持たないんだ！　どっちがアイツの為かなんか明白だろ！？」

柊達がここでセツリを幸せにしたいと言っても、それはセツリが一度リアルに戻ったって出来る事だ。きっとその筈で、その可能性位こいつらなら分かってるだろう。
でも、僕のその言葉をこいつらが受け入れた事はない。柊には初めて言ったけど、シクラの奴だって随分セツリをここに留まらせるにこだわってた。

だから無駄なんだろうとは思う。けどそれでも、こいつらが自我を持って感情を育んで、誰かを愛おしいと思えるのなら、届く事だって有るかも知れない。
それに言葉を紡ぐ事を最初から放棄したら、口の必要性なんて無いし、そしたらもう力でのぶつかり合いしかなくなる。

一番単純だけど、一番効率の悪い事。それをリアルの言葉で言えば、戦争とかに成るんだ。でもやっぱり柊から帰ってきた言葉は期待に答えない。
やっぱりそれがこいつらの総意なんだろう。

「あの子の為ね。でもそれは君の一方的な考えでしょ？　だからこそあの子は君を拒否したんだから。そこら辺を分かってない様じゃ、もしもあの子にたどり着けても結果はきっと同じだと思う。
あの子の為……何て散々考え尽くされてるのよ。マスターがそれこそ、『天才』と称された頭を四六時中使ってね。
それに、君の浅はかな思いがどこまで追いつける？　きっと全然全く無理よ。幸せの定義なんて、結局誰かが与える物じゃないもの」
「それは……」

言い返す言葉が出てこない。そうだよなって思う。天才が考えた事に比べたら、僕の考え何て浅はかさの極みだろう。だって僕は子供で、ただの高校生だ。
当夜さんの考えなんて及ばないし追いつけない。だってそうだろ？　僕には『フルダイブシステム』も『ライフリヴァルオンライン』も作れっこない。

でも、それじゃあ、それってつまり……リアルじゃセツリを幸せに出来ない……そう当夜さんは考えたって事じゃないか。
いや、それもちょっと違うような……僕は頭を振って考えを振り払った。

（本人が居ないのにこんな考察、意味なんてない。それよりも……だ）

僕は前を見据える。そこには危ない格好をした、僕より少し年下っぽい女の子が白い冷気の中に佇んでる。けど、幼いって言っても、その表情に幼さなんて微塵もない。
その姿で既に完成された様な雰囲気。人間とは違う存在だから、そうなり得たのかも知れない……それが、僕の敵だ。

「確かに、柊が言うように幸せの定義なんてそいつの物だ。誰かが願った事なんて、押しつけにしか成らないのかも知れない。
でも……大切に想う人の為に幸せの方法を考える事、それを伝えること、そしてそのための行動……全部しょうがない事なんだ。
人が幸せを感じる瞬間は勝手でも、そこに至る道は一人じゃ開けない。そう思いたいだろ」
「人は勝手に幸せを感じて、身勝手に不幸に陥るって事？　随分寂しい事を言うのね。結構意外よ」

寂しいか……でもそれはちょっと違うと思う。確かにそりゃあ、勝手身勝手言えば寂しいよ。でももっと違う思いが隠されてるだろ。
それこそ繋がりとか思い合いとかだ。

「そういう事じゃない。考えてもみろよ。一人じゃいけない幸せの場所だぞ。振り返れば、きっと一人じゃ無いって事だよ。
まあ誰もがそれを願って手を貸してくれる分けたわけじゃないかも知れない。けどそんな何気ない繋がりも思い合いだろ。
世界が回る条件だ」
「世界が回る……だなんて。少なくともリアルはそんな綺麗な事だけで回ってなんか居ないわよ。それならＬＲＯの方がよっぽど綺麗。
だからあの子には綺麗なこの場所が似合うでしょ？」
「似合うことと、生きることは違うだろ。僕は何言われようと、アイツを生かしたいんだ！」

そう、だから間違いを犯しても追いかけてる。諦められないのは、セツリもその気があった筈だからだ。あの時見せた涙も言葉も、それを証明してる。

「諦めてくれる気は無さそうね。言葉で済めばそれが最良だったんだけどな。汚れるの嫌だし。でも、これを聞けば君の考えも変わる

かも知れない」
「？」
　これ以上何か有るのか？　柊の奴はこれまでの妖しい笑みから外見相当の、素直な感じに微笑んでる。まあそれが返って不気味何だけどな。
　どうすりゃいいのよ！　とか突っ込まれそうだが、こればっかりは仕方ない。こいつらは何やっても、恐怖の対象だ。
「私達の究極の目標。それはマスターの考えも越えた事かも知れないわ。それはまさに『真の命改変プログラム』その神髄。
　私達はねスオウ……あの子の為の、全く新しい世界を造ってるの」
「世界……だと！？」
　いきなり随分壮大な事を言い出した柊に、僕は開いた口が塞がらない状態だ。セツリの為の世界の創造？　今時そんな事、映画やマンガでもやらないぞ。
　それに命改変プログラムの神髄ってどういう事だよ。真の方がこいつらの使う部分ってのは分かったけど、それが世界を造るって事になるのか？　てか出来るのかだ。
「そう、私たちが何でＮＰＣに自我を目覚めさせてるか考えてよ。私たちが何でアルテミナスを攻めてるかも。その全部には意味があるわ。
　無駄な事なんて、基本私たちはしないわ。シクラくらいね。シクラは私たちの中でも一番情緒豊かで、ある意味人間らしい子だから」
　人間らしい……確かにシクラはそんな感じがある。この柊に比べたら、年相応に遊んでます！　って感じだった。てか全てに意味がある……か。

最初に出会ったのがシクラのせいで、そこら辺も実は遊びとか思ってたのは間違いか。世界を造る為に、全ては必要な事だと言う。
ＮＰＣを目覚めさせて、三強の一国を落とす事。

「あの野郎のせいでこっちは随分振り回されたけどな。確かに人間らしいって意味じゃお前よりシクラだよ。それでもアイツのやってた事も無駄じゃないのなら……世界を造る事に必要な事か。
ＮＰＣ……アルテミナス……正直に言えば世界を造るって事自体が想像出来ねーよ」

だってそうだろ。世界って何だよ。一高校生は日々の生活に精一杯なんだ。特にこれまでの僕は、ただ目の前の状況を突破していく事しか考えてなかった。
そしてその先でセツリを救える筈だって思ってた。だけど、いつの間にかいろんな思いが絡み合って遂に世界まで……放された手は結構遠いと感じてしまう。
そしてその艶やかな唇から放たれるは、衝撃の世界想像。その方だ。

「そっか、なら教えてあげる。この世界の住人は自我を持って解き放たれる。そこに余所者なんていらないのよ。私達が作り出す世界はＬＲＯと言う世界の人からの解放！」

氷上に綴る真実（後書き）

第百二十八話です。

遂に明かされてきた柊達の目的です。何か壮大な事言ってたけど、ちゃんと理由もやりようもありますよ。そしてこれはこれからの展開にもかかわってくる大きな事です。

どっちが正しいなんて言えないのかも知れないけど、主人公は正しいと思う道を進んで勝たなくちゃなのです！　まあ今の所絶望的だけど……必死な姿はきっと届くと信じてね。

てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではまた～。

誓いの指輪（前書き）

過去に出会って、あの頃の時間が過ぎて行く。何度繰り返さないと願った時間は、何も変わらずただただ、通り過ぎただけ。けどそれは当然だ。だってこれは過去で有り、想い出。

変わる事の無いあの頃……だけど決して目を逸らしては駄目なんだ。どんなに思い通りに行かなくても、変わらない想いのリングが繋げてくれる筈だから。

誓いの指輪

「バッカ野郎！！」

俺は大きな野望を堂々と宣言したガイエンに突っ込んだ。

（止めなければいけない。こいつの考えは危険だ）

そう思った。ＬＲＯという自由の庭で、語りだした夢……それが止まらなく成ったような果てのない夢だ。俺の想像を遙かに越える事をこいつは考えた。

てか俺程度じゃそんな考え、持ちようもない事。でも少しだけ、ほんの少しだけだけど、俺はガイエンを羨ましいと思ったかも知れなかった。

こんなに果ての無い夢をこれだけ堂々と語れるなんて、今の俺が忘れてしまったことだ。この頃見上げる空は遙か遠くに感じて、夢を見る翼を開く術を俺は忘れてる。

時々思うんだ。何やってんだろうって。俺はこんな重荷を背負おう為にここに来てるのか？　ってさ。最初は頼られる事、強い力を与えられた事が誇らしかった。

でも気付くと、それには責任も同時について来てたんだ。段々遠くなる自由。それは俺のここの夢を奪う事。ゲームってだけで割り切れなくなった世界。

いや、俺はゲームをやりにきてた筈なのに……本当にもう、重く成りすぎた。

俺はガイエンの武器と強烈に自身の大剣をぶつける。幾らガイエンのあの長剣がヤバい代物だとしても、武器を通して浸食される事は無い。
武器同士の対決なら俺が負ける事はあり得ない。だってナイト・オブ・ウォーカーだからな。だけどガイエンはまだ笑ってる。

「お前に理解されようなど思わんさアギト！！　だがな止められはしないぞ。私の歩みはな！！」
「ふざけんな！　お前のその夢の先に、どれだけの人が迷惑するんだよ！！　そんな事、させる訳にはいかない！　言っとくけど、これはエルフ同士とか立場とかで言ってるんじゃない。一プレイヤーとしてふざけんなって言ってんだ！」

俺は更に力を込めて、ガイエンを弾いた。でもそこで終わるわけない。そこから更に大剣をふり被って追い打ちをかける。
だけどやっぱり、ガイエンは追いつめられた感なんか出さない。自慢の長剣を使って何とかかわすだけなのに、奴は笑いながらこう言うんだ。

「ふはははは、はははは！！　一プレイヤーだと？　まだそんな事を言ってるのかアギト。その力にどれだけの願いがのっかってるのにも気付いてるくせに。
そんなに苦しいんなら捨ててしまえ。安心しろよアギト。アイリは私の傍らに置いといてやる」
「――っつ！？」

どうしてだ。何でこっちが押してるのにきついんだ？　侵略戦の時と同じ……体が重い。ガイエンの言葉がそれを余計に感じさせた。
アイリを助ける。その気持ちで毒を忘れた筈なのに、他の事がせり上がって来やがった。けどこればっかりは、そんな簡単に捨てる

事なんて出来ないものなんだ。

「何だ？　言い返す事も出来なく成ってるのかアギト？　信頼してくれた仲間も結局守れなかったしな。それを考えれば、私にアイリは任せた方が得策だ。

一国の主より、神の伴侶の方が博がつくと思うだろう？」

「お前……何でそこまでアイリを求める？　アイツの性格分かってるだろうが。アイリはそんな物、軽く弾き返すに決まってる！」

俺は重い体に鞭打って、ガイエンの武器を再び押し切る。その瞬間、耳にピキっと言う音が届いた気がした。それはきっと……

「惚れてるから。それだけじゃいけないかアギト」

その瞬間、俺は剣線を止めてしまった。だって余りにも似合わない事をこいつが言うから頭が混乱してる。てか耳を疑う。

いや、それを疑った事はあるけど、まさかこのタイミングでカミングアウトするなんて……でも余計にそれなら、こんなやり方ダメだろ。

だってそれって……

「お前、その言葉が本当なら、惚れた相手まで利用してるって事だぞ！　そんな事が出来るものなのかよ！？」

「青いなアギト。やっぱりお前はまだまだガキだ。言ったはずだ。私は大人らしく、使える物は全て使うとな。

例えそれがアイリでも、それはそれと割り切れるのが大人と言う生き物なのだよ」

目の前でのうのうとそんな事を語るガイエンにえらく腹が立ってきた。子供の俺達は学校に縛られてない『大人』に早く成りたいと

か思う事もあるけど、今この瞬間こういう大人はイヤだと思った。
子供の俺には分からない感覚だ。だって大切な人を利用するなんて……てかそれってそもそも、本当に大切なのか疑問だ。

「そんな考え……なあガイエン。お前にとって仲間って何なんだ？
レイアードの事も駒って言ってたよな。俺達もそんな駒の一つなのか？
いや、俺はいい。仲間って俺もお前の事をそう思えたのは今日が初めてだし。だけど惚れたと言ったアイリさえそうなら……お前にとって大切な物って何なんだよ！」

するとガイエンは一度目を閉じて、そして数秒後位に再び目を開けた。ほんの僅かな時間に、自身の答えを見つけだして来たのだろうか。

「大切？　仲間？　そんな物ここにはありはしないさ。ゲームと言う名の偽りだろう――」
「お前！　本気で！」
「――と以前の私は言っていた。だがなこの感情はごまかしは利かない様なんだ。お前が憎いと思うこの感情はな。それに私は自分でも驚くほど、アルテミナスに執着してるしな。
それに存外、お前達と出会った日々は悪くなかった。いつしかアイリには心と言う物を持っていかれた訳だしな。だから偽りとだけ思う様にしてたのは辞めたさ。
お前が当たり前の様に使うこの力……それを見る度に、私はそれを再確認してるのだから！」

その瞬間、ガイエンが今までで一番切れよく剣を振った。ぶつかり合う互いの武器。だけどガイエンが出したのは武器だけじゃなかった。

弾き合った武器をよそ目に、鋭く入ったのは奴の蹴り。それがわき腹にめり込んだ。

「なあアギト！　今日の今日まで、何故にお前かと思わない日は無かったぞ！！」

そして強引に振り切られる奴の蹴り。俺はそれなりのダメージを心に負っていた。別に外傷はそうでもない。元々生身の攻撃なんて、武器に比べれば軽い。

でも、そんな事思ってたのか……いや、思うよな。それまで三人でやって来てたのに、大切な力を何の相談も無くだから……それに、お互いが掛け合った指輪。

それを見て、ガイエンがどう思ったかなんて、実際考えたくない。裏切られたと感じてもおかしくは無いかも。

「だから俺を目の敵にしてんのかよ！　だから追いつめる様な事をしたのか！？　どこまでがお前なんだ！　お前、俺の事どう思ってる！！」

何かちょっとプッチン来たぞ。いや、ガイエンがそれだけ感情を出すから、俺もこうなった。てか、謝る言葉もみつからなかった。だって俺の苦しみだってなぁ、大変何だよ！

俺達は再三に渡り、武器をぶつけ合った。緑の臭気を纏う長剣と最強の騎士の剣のぶつかり合いは、この時決着が付いた。

何故なら、ガイエンの長剣の方が耐えきれずに砕けたからだ。さっき聞こえたピキって音は、限界を伝える音だった様だ。

「はは、やはり憎むべき強大さだな。どこまで？　それはどこから

の話だ？　まあだが取りあえず、私はグラウドと繋がり、裏でレイアードを操ってた。
あの侵略戦の大雨。あれは実は私の努力の賜だ。そしてお前の事は、言うまでもなく大嫌いだよアギト！！」

あれもこれもそれも……全部こいつの策略。さっきの侵略戦でさえそうなのかよ。初めてガイエンを、隣くらいに感じたのに……あの時の気遣う様な言葉も厳しい言葉も、全部はまやかしか。
俺もガイエンと同じように憎しみが真っ先に立つと思ってた。だけどそうじゃないみたいだ。紡がれる言葉を、今になっても俺は信じたくなかった。
俺は自分が思うよりもずっと前から、実はガイエンを仲間と見てたのかも知れない。だから悲しい。本当にビックリする程にさ。

「そうか……俺は今になって思う。俺とお前はどこかで似てたのかも知れないって。だから……違った道がこんなに悲しい。
でもやっぱりこの苦しみの分は、俺も憎いんだよ！　どうにか成らなかったのかよ！！　なあガイエン！！」
「今更何を！！　それにどうにかしたいのなら、私を今ここで止めて見せろアギト！！」
「ううぅうあうあああああああああ！！」

ガイエンには防御なんてもう出来ない。きっとこれで終わるんだろう。そうしたら、何かが変わるのだろうか？　何だかもう、訳が分からなくて振り卸してる感がある。
ガイエンを打った斬って、アイリを救い出す。それに間違いなんてきっとない。それからどうなるんだろう。それを考えたとき、浮かんだのは無数の腕。
それが俺を掴んで放さない。地の底にまで引きずられて行くよう

なイメージ。その瞬間、熱せられた空気だけがガイエンの頭上に注いだ。
呆然とする俺の腕の先で、大剣の光は失われていく。
「やはり、お前には荷が重いか。グラウド、そろそろ頃合いだ。アギトとの戦いはお前に譲ろう」
「ええ、それは有り難き幸せ！！」

バシュン！　そんな音が耳の遠くで聞こえてた。だけど次の瞬間、爆発的な勢いで俺の体は吹き飛んだ。視界が三百六十度回転して、心と体が引き剥がされたかと思うほどの感覚。
自分はまだあの場所に武器を向けて立ってた筈なのに、気づくと瓦礫の下に埋もれてる。ついでに全身が痺れる様に痛い。
変な音が聞こえてる。機会が回転してる様な、耳障りな音だ。

「アギト、この結果はお前の弱さだ。敵を敵と認められない弱さ。戦場では迷うなと教えた筈だぞ。それと敵に情けなど不要！！
体を持って教え直してやろう！！　さあ、全身で受け止めろ！！」

その瞬間、目の前が真っ白になった。おかしな事だ。窓からの明かりも無く、光源は床に書かれた魔法陣で決して明るいとは言えない筈の部屋だったのに……今は見渡す限り白が広がってる。
いや違うのか。見える物が全部真っ白なのかも知れない。

「うわっはっはぁぁ！！」

そんな叫び声みたいな声が遠くから聞こえたと思った瞬間。懐に延びてきた腕と回転する槍が、俺の体を貫いた。

「ぐっ！？　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

強烈な感覚が全身を抉る様に駆け回る。気がつくと、世界に色が戻ってた。突き刺さるガイエンの槍に命が削り取られていってる。

「アギト、お前ももっと欲望に忠実になれ。私が憎いだろう、許せないだろう？　何も考えずに向かって来いよ。前のお前はそうだっただろう。

そこのグラウドと対した時もな。一つ一つ、お前達は私に絡め取られて行ったんだ。お前は力があろうと無かろうと、何も守れやしないんだ。

私が全て奪うんだから。そう……全て」

霞む視界の先で、ガイエンのそんな言葉がグラウドの攻撃にかき消されずに届いてた。そして奴はある場所へ向かう。それはこの部屋の中央で堅く目を閉じて眠ってるアイリの方向。

（何……する気だ？　やめろ……）

そんなことを思いながらも声には成らない。けど目を逸らす事も出来なかった。ガイエンはアイリの腰に腕を回して、抱き抱える。

そしてその寝顔を見つめながらこう言った。

「全く、罪作りな女だな」

顔を徐々に近づけていくガイエン。何をしようとしてるのかは明白だ。俺は必死に声の出し方を探した。口を動かして、声帯を動かして、そして肺をおもいっきり使え。

「やめろ……やめろ……やめろおおおおおおお！！」

そんな叫びがこの部屋中に反響する。その時、唇と唇が残り数ミリの位置で、ガイエンは俺を一瞥してその口の端をつり上げた。
そして両腕で支えられたアイリと、ついには唇が重なった。それは目を逸らしたくても反らせない光景だった。アイリの唇が目の前で奪われてる。

その事実を認めたくないのに、視覚はそれをダイレクトかつ最優先で伝えてきてた。濃厚なガイエンのキス。抵抗なんて出来ないアイリ。
奪われていくアイリの姿は、俺の心に最大級の憤りを与えて行くような感覚。幾ら歯を食いしばっても、リアルなら血が滴るほどに拳を握り閉めても全然足りない。
あの日の誓いも、願いも、こんな事に成るためにした訳じゃないのに。

『わあ、素敵！！　ねぇねぇこれってもしかして、あのイベントの？　オーダーメイドだよね？』

大海の星空の下で、更に星を増やした様な瞳を輝かせて、アイリは俺の渡した指輪を眺めてる。俺はそんなアイリの言葉に、照れ隠しの為にそっぽを向いてぶっきらぼうに『ああ』と答えた。

するといつの間にか、あんなに興奮してたアイリの声が聞こえなく成ってるのに気づいた。俺はどうしたのかとアイリの方へ振り返る。
するとそれを待ってましたと言わんばかりに、アイリは顔を赤くしながらも笑顔でズイッと迫ってきた。そして衝撃の言葉を発する。

『プロポーズの言葉は無いのかな？』

『ぶっ！！　はあ！？』

その言葉に俺はきっと人生で一番動揺したと思う。変な腕の動きとかやってたし、てかそこまで考えてなんかいなかった。

でも真っ直ぐに見つめるアイリを見てると、何かを言わなくちゃみたいな感じになる。その瞳は何だか真剣だったし、もしかしてコレって……と浅はかな子供は思ってしまう。

だからメッチャテンパって俺は、星と同じくらい輝くアイリの瞳を見つめて口を開けた。

『け……けけけ……けけ』

言葉が上手く出てこない。てか俺は何を言おうとしてるのか、実際俺はわかってない。でも勢いってこういう状態を指すんだって事は、きっと理解してた。

『ぷっ……あはははは！　可愛いねアギト。やっぱりリアルは私より年下かな？』

人が必死に言葉を紡いでた途中で、そんな言葉が夜空に響いた。そしてアイリは一歩・二歩とステップする様に後ろへ下がって笑顔を作った。

でも俺は気づいたよ。アイリのその顔も、俺と同じくらいに火照ってるって。

『あ、アイリ！』

『ごめんね、ズルしちゃったよね。それにこれからきっと大変だし、まだいいの。ありがとうアギト。でもちょっとだけ、女の子の幸せの前借りして欲しいな』

そう言ってアイリは指輪を持った腕を僕に向ける。そしてアイリは左手を翳して見せている。

『先約、今なら出来るよアギト』

その言葉と雰囲気で俺は察した。それって……つまり……俺はアイリに近づいて、差し出されてた指輪を手に取った。

そしてアイリの白魚の様な左手に自身の手を添えた。その時、夜の風が吹き抜ける。風は点々としてた夜天の雲を移動させてくれる。

そして出てくるのは夜空に輝く黄金の光だ。

『俺は……先約だけじゃ終わらないから。全部が終わったら、もう一度……』

『うん。誓ってねアギト。私達はこれからも――』

『どこまでも……』

口ずさむ言葉と共に、俺はアイリの指に指輪を通していく。そして最後の間接を通って根本でその輝きを定着させたとき、同時に二人で誓い合う様に口ずさむ。

『『……共に』』

キラリとその瞬間光った気がした指輪。無数の星星が見守る空の下、俺達は堅い誓いを約束した。お互いになんか照れくさい感覚で、繋いだ手の感触にドギドキするしか出来なかった。

でも……心はもっとぴったり寄り添ってる。そんな気がしてた。

カンッ！　っとそんな音が俺を今の場所に引き戻す。懐かしい記憶……忘れちゃ成らない、二人の誓い。

「あっ……」

だけど今この瞬間、それは脆く崩れてしまってた。全ては俺のせいで……俺が弱く、迷うからだ。誓い合った筈の証さえ、その効果切れた様に、アイリの指から抜け落ちて……地面を空しく転がった。

ギリ――と歯を食い締める。でもそれじゃ苦しくて、やっぱり息を吐くけど、肺が喉から飛び出そうな程、息が速く重く成ってた。

変な汗が出てきて、目の前が……赤く見え出す。離れない音が……さっきの指輪が落ちる音が、ずっと頭を巡ってた。

「後一息だな！　なあアギト、お前はあの時繋がりとか思いで俺に勝つと言ったな。笑わせる！　笑わせる！　笑わせるわ！！

お前との繋がりを！　弱い貴様との繋がりを一体誰が求めてる！？　何一つ、残った物などお前には無い！！」

グラウドのそんな叫びが、俺の何かを大きく揺らした。そしてきっとそれがきっかけだ。最後の理性を決壊させるきっかけ。

全身に落ちてきた黒い物。大きく体を脈打たせるそれは、三回体を振るわせてはじき出す。

「が……あああぁぁぁ

「ふはははは！！　まさかこれ程とはな！　面白い！　力比べと行くかアギト！！」

そう言ってグラウドは瓦礫を蹴って一気にこちらに向かってくる。けれどそんなの付き合う気なんてないんだよ。

「お前の……誰の……せいだぁあああああ！！」

「なあ！？　ぬおおおおおおおお！！」

大音響と共に城の外壁が一瞬で崩れさる。力がどこまでも溢れてくる感覚だった。でも苦しくて仕方ない。吐き出さないとやってられない！！

「うがあああああああああああ！！」

アルテミナス城が内側から崩れていく。そして持たなく成ったのか、あの部屋からガイエン達も落ちてきた。

「ガイ……エン」

「暴走……か。八つ当たりは見苦しいぞアギト」

「おまっえが！！　お前が居るからあああああ！！」

振り被った剣線が城のあらゆる物を巻き込んで破壊する。そしてその先にはガイエンがいる。そうガイエンと抱えられたアイリが。

でも、俺にはそれは見えて無かった。苦しみが怒りが、その相手しか写さない。だから気付かなかったんだ。この城に向かう大量の足音の存在に。

「ガイエン！！　お前だけはぁあああああ！！」

追いつめたガイエンに最後の一撃を入れようとしたその時だった。城の周りに騒ぎを聞きつけた人達が駆けつけて居た。
そして誰かが叫んだんだ。
「ガイエン様！！　おいみんな、アギト様が乱心してるぞ！　止めるんだ！！」
その瞬間、向かいくるは軍の連中だ。
「やめてくださいアギト様！！」「心静めてください！！」「お二人とも必要なのです！！」
そんな互いを思う言葉が耳に届く。だけど……全てがうざったいと思った。こいつらが、ＬＲＯを重くする。それに最初に声を上げた奴には見覚えがある。あれはレイアード。
つまりはガイエンの……
「邪魔……するなぁあああああ……あ……」
吹き飛ばそうと思った。立場とかどうでもいいから。でもその時、頭上から振ってくる一つのリング。それが俺を止めて、丁度その時アイリが目を覚ました。
そして僕達二人を見て、屈託の無い笑顔で言うんだ。
「ありがとう。二人は絶対に来てくれるって信じてた」
その瞬間、剣と盾が消えていく。だって無理だろ。アイリの目の前でガイエンを討てしない。結局ここも、俺は上手く踊らされた訳だ。

悔しく情けなかった。奴の目的もわかったのに、でも俺は立ち向かうのをやめる事を選ぶ。最低限の役目――最後の侵略戦の果てにアルテミナスを元の姿に戻した後、俺はその帰路の間に姿を消した。

アイリの机の上に、ただ一つの誓いのリングを残して。その日は奇しくも、雲一つ無い快晴だった。きっとこの空の向こうでは歓喜に沸く国があるだろう。

そんな楽しさの中、彼女は果たして気付いてくれるだろうか。指輪を残したその意味を。

誓いの指輪（後書き）

第百二十九話です。
遂に過去編終了です。長かった。まさかここまでに成るとは。でもこれだけしたから、次からのバトルにはより重みは加わるかな。過去を超えて今へ。
アギトはきっと二度も負けないと、間違えないと思います。ですのでお楽しみに。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではまた！

止まらない状況（前書き）

ＬＲＯでどこまで出来るのか……それを考えさせる様な事が言われた。おかしな事も変な事も起きてきたＬＲだけど、世界ともなると規模が大きくなりすぎた
。

でもそれでも奴等に迷い何てあり得ない。僕達は互いの今をぶつけるしかないんだ。

止まらない状況

「ＬＲＯを人の手から解き放つ？　それがお前達の目的で、それをやれば本気でセツリが幸せになれる……そう思ってるのか？」

信じられない……というか、そんな事が出来るのか？　ＬＲＯではこれまで信じられない事、あり得ないと思う事がまあ幾度もあったけど、コレは根底の部分の話だ。

人が作り出した物が、意志を持ってそれを選んだのなら、それはきっと凄いこと何だろう。だけど管理を離れた物って大抵、長くは持たない物じゃないか？

それが繊細な最先端の技術なら尚更だ。だからこそＰＣとかだって定期的にアップデートとかやってるんだろ。それはＬＲＯだって同じだ。

アップデートとかシステムの調整とかたまにはやってる。まあそれも根底の部分じゃなく表面部分らしいけど、綻びが出てきたらどうするんだ。そんな危うい状態、綱渡りの途中に立ち続ける様な物じゃないか。

だけど柊は、そんな僕の不安なんて全然問題無いように言い退ける。

「ええ、勿論。当然です。あの子のリアルを、私達はここにしてみます。悪い夢も、怖い現実も、孤独な時間さえ、全てを遠い彼方へ追いやって、あの子と共に歩む世界を私達は想像するんですよ」

その言葉は、沢山の光に溢れてる……様に聞こえる。実際、リルレット達は少しざわめいてた。

「自分の為の世界か……誰もが世界がそうであって欲しいって一度くらいは願うかも」
「確かに。何もかもが上手くいかない時とかは、そんな世界が欲しいって思うかもしれない」
「ああ、自分の為の世界があるんなら、行きたい位だな」

確かに現実には理不尽がいっぱいで、誰もが幸せに生きているなんて、とてもじゃないけど言えないだろう。そんな現実だから、ＬＲＯは大人気な訳だし。
だけど、みんな絶対に戻るんだ。辛くて、苦しくても、あの場所に、あのリアルに……それは知ってるからだ。ここがどんな場所かを。
だから僕はそれを伝えてやる。ここで生まれた存在に、僕達の認識を。

「そんな世界が造れるのなら、確かにセツリにとっては楽園に成るのかも知れないな」
「出来るわよ。真の命改変プログラムと私達には、それが出来るもの」
「そう……なのかもな。出来るんだろうお前達にはさ。けど……それはどこまで行っても『夢』なんだ」

僕は雲の隙間から延びる天使の架け橋を見つめてそう言った。吐き出す息は白く成り、そよぐ風に飲まれて消えていく。それと同じように、空の架け橋も、雲の動きにあわせて消えてはまた別の場所から、光を覗かせてる。

「夢？　違うわ。あの子の為の世界は、あの子のリアルに成ってくれる」

「成らないよ」

僕は視線を柊に戻して、首を振った。するとここで柊は苛立ちを表す様に、扇子をパチントと閉じた。

「何でそう言えるのかしら？　フられた腹いせでもいい加減な事は言わない方がいいわよ。幸福な場所があの子の居場所。

それが一番でしょう？　君だって」

「それは勿論。けどさ、自分の為の世界、自分の為の全ての幸せ……そんなのを味わえるのは夢だから。自分が味わってられるのはって意味でさ。

夢に罪悪感なんて誰も覚えないからだよ」

夢はどんな理不尽でも受け入れられる。だから幸福と呼べる。でも僕達は、どこかで夢を夢と分かってる節もある。

（ああ、これは夢何だ）ってさ。けど今すぐ醒めたいとはあまり思わない。そこが怖い物でも、怖いもの見たさが夢なら安心して倍増だ。

大きく成っていくとさ。

「人は一人では幸せを享受出来ないとでも言いたいの？」

一段と空気がヒンヤリとしてきた様な気がする。雲は厚さを増して、空から地上に伸びてた、光の架け橋は閉ざされる。

「別にそうじゃないけど……セツリは分かってると思うんだ。自分が向こうの世界で眠り続けてる限り、どんな幸福もそれは……夢でしか無いって事を」

するとその時、目の前の花が落ちてきた。透明な氷の花だ。見覚えるがあるその花は、柊の服に添えられてるのと同じ形をしてる。
クルクル回りながらがゆっくりと地面に落ちる……その瞬間。カッ！　と目映い光が辺りを照らしたと思ったら、ドバン！！　と大音響を鳴らして爆発した。

「くっ……」

大量に放たれた白い煙から、僕は何とか脱出する。てか爆発は音ほど実は激しく無かったんだ。一番近くだった僕が無事なのがその証拠。
でもじゃあ、さっきの攻撃は何が目的？　爆発よりも大量に噴出したこの煙が怪しいような……するとなんだか腕の先がパキパキする。

「これって……ま――ガハッゲッホ！？」

いきなり胸が苦しくなった。てか、息が出来ない！？　またじゃない……なんか強力に成ってる様だ。まさか、肺を凍らせられたのか？
出てくるまでに何回か息をしたから？　冗談じゃない速攻性だ。しかも今までの様に外の自由も奪うのか、足と腕の先とか凍ってる。

確か、そのための補助魔法を掛けて貰った筈だけど、それを抜いて来たって事か。視界を奪ってた煙が晴れていくとそこには白い冷気を纏った柊がこちらを向いている。

「舐めないでよ。中途半端な力で私達の攻撃を防げるだなんて思わない事ね」
「かっは……ちっ」

幾ら外見は美少女だからってこいつを舐めた事なんか無い。得体の知れない力は、初めて見たときから垣間見せてたんだからな。
周りをみると、あの爆発に巻き込まれたみんなも苦しそうにしてる。かなり広範囲だったから全員が巻き込まれたみたいだ。

くそ……どれだけ技を持ってるんだよ。呼吸もまま成らず、凍った体の熱を取り戻す事が出来ない今の状況は、話し出す前よりヤバい感じだ。
折角待ちかまえた筈なのに先手を取られた。何やってんだ自分と言いたい。

（けど……まだ！）

僕は自身の胸にセラ・シルフィングの刀身を当てる。するとバチ、バチ、と空気中に放電が始まる。でもこの音……結構怖いな。
でも、この状態じゃまともに動けもしないんだ！！　次の瞬間、僕の体を雷撃が貫いた。

「ぬあああああああああああ！！」

全身が燃えきる様な痛みだ。この痛みは僕だから何だろうな。LROに浸ってる僕だからこの痛みが再現される。けどだから、この痛みに意味が出来る。
青い雷撃が止んだとき、体のあちこちから煙が上ってた。

「はぁはぁはぁ……」

けど、おかげで呼吸を取り戻した。ついでに体の自由も。あの程度の凍結なら、この方法で解消出来る様だ。だが、安心なんて出来

ない。

これで戦える様に成っただけ、僕達は全然同じ土俵に立ってすらないんだ。柊の力はやっぱり反則的。そしてそんな柊は、開いた扇子を上方に向けて回してた。

何をやってる？　とかは実際は知りたくなかったけど、見てしまった僕は絶句する。

「なっ！？」

淀んだ雲と白い冷気……その中央にクルクルクルクルとあの花が浮かんでる。それも大量に。木が無いから、さぞかし落としやすそうだ。

みんなの方をちらりと見ると、まだ苦しそうにしてるけど、ヒーラーが何か対策を始めてる。荒療治は僕だけで済ませたいから、それを信じるしかない。

だから僕が今やることはこれだと思うんだ。

「落とさせるかぁ！！」

僕はセラ・シルフィングを握りしめて氷を蹴った。でもそれなりの距離だ。だからセラ・シルフィングを氷に刺して走りながらスキルを使う。

「雷放！！」

氷を切り裂きながら振り抜いた剣から放たれる青い雷撃が一直線に柊に向かう。そして雷の放電する音と光と共に、柊に炸裂した。

（行ったか？）

直撃……したように少なくとも見えた。歩みを止めることなく走り続ける中で、だけど立ち上った噴煙の隙間から透明な何かが顔を出す。

イヤな予感がそれを見ただけでした。そして案の定だろう。柊の声が何事も無かったかの様に、煙の向こうから聞こえてくる。

いや、違うな。確かに柊の声は聞こえてきた。だけどその言葉には怒りが入ってる。静かな怒りが。

「ねえスオウ。君は知ってるの？　一人の悲しさや、寂しさを。それに……誰にも求められなかった存在の意味のなさが分かる？

はは……夢？　何よそれ……私たちの夢の世界には、だからアンタ達なんかいらないのよ」

「くっ――うおおおおおおおお！！」

僕は左腕の方も思わず振った。同じように放たれた雷撃は、まだ煙の中の柊へと向かう。だけど、気付いた。

（やっぱりだ）

あの透明な氷の盾か壁に、雷撃は直前で周りに分散されてる。だけどそれでも、僕は左右の剣を振り続ける。一発二発で通らなかったからって諦める僕じゃない。

だって二刀流は手数の多さが自慢なんだ。それに近づきながらなら、徐々に威力は増していく。けど……実際はそれだけじゃ無かった。

怖かった。柊の怒りが。僕の知ったかぶった言葉にかなり反応してたらしい柊が、その感情をこちらに向けて放った事がだ。

ゾクリと悪寒がした。この場所を支配する、冷気とはまた違った寒気が全身を震わせた。だから攻撃を続ける事で今、目の前の事にだけ集中したかった。

「うらあああああああ！！」

バキ、ビキ……っと目の前の氷に亀裂が走っていく。浴びせた雷の数は数えてもいなかったけどようやくだ。これなら勢いを落とさずに突っ込める。

けど、そしたら柊が待ちかまえてるんだろうな。きっとあの扇子をこっちに向けてるんじゃないかと思う。どうやってそれをかわして一撃入れるかとかは大事な事。

だけどそれより先に頭をよぎるのは、あの言葉とあの怒り。自分でも分かってるけど、異様に反応してる。

（ああ、ややこしい！！　戦闘だ。その事だけを考えろ。それに奴らは人じゃない！）

そう言い聞かせて、頭の中の余計な物は振り落とす。そして亀裂が入った氷の壁か盾に、二本の剣を同時に突き刺して雷撃を解放する。

青い光が氷に反射されて、その光がより一層激しく見えた。広がっていく亀裂。僕の体はそんな中、前へ前へと氷を砕き進んでた。

「うおおおおおお、らあぁ！！」

そして勢いのままに、僕は前に突き出してた剣を左右に凪いだ。

それがキッカケで氷の壁はその役目を終え始める。それと同時に前に開いた穴から僕は壁を抜ける。その後ろでは崩れだした氷の音が鳴っていた。

でも、それを振り返る余裕なんて僕には無い。だって案の定、柊の奴はご自慢の扇子をこちらに向けて待ちかまえて居たんだから。

「無駄なのよ。そろそろ理解しなさい」

「そんなの――」

奴の扇子にターゲット指定されてる。扇子を回された直後、体がそれに併せて傾いていく。あらがえない力……それに今回は足を止めるのが目的じゃ無いみたいだ。

流石、一段階バージョンアップさせた扇子だ。このままだと、突き出てる氷の氷柱に頭をぶっさす事に成る。ご丁寧に回転の直後にはそれが地面から生えていた。

でも、これは二度目だ。それにこうなるんじゃ無いかと予想もしてた。だから初めて回された程の焦りもパニックも無い。だから僕は必死に首を回した。

体が柊の扇子の力で操られるのはどうにも出来ない……けどそれが全体にまだ及んでる訳じゃない。眼球に迫る氷の切っ先。滴る水滴が自分の血に見えてしまいそうだ。

そしてそんな錯覚は奇しくも実際に起きた。ヂッと頬を抉る鋭い痛みが走ったからだ。奴の予定とは随分違う程度の血が突き出た氷柱にはしたってる。

そしてそこで僕は素早く、振り伸ばす。

「――分からないだろ！！」

「！」

柊の動きが一瞬固まった。予想外の事だったからか、それとも元から近接戦闘が苦手だからか分からないけど、その一瞬で僕の伸ばしたセラ・シルフィングは奴の扇子に僅かだけど届いた。

カン――と音と共に、柊の手から離れ行く扇子。その瞬間どうにも出来なかった力の支配が無くなった。

（ここだ！！）

今しかない……そう思った。柊が見下して油断してたから不意に落ちてきたぼた餅だ。つまりは幸運でラッキー。だけどそれこそが千載一遇のチャンスに成り得る。

もしも幸運で掴んだ勝利だって、戦闘に卑怯なんて有り得ない！

だから僕は奴を見据えて飛び込んだ。回転の勢いを利用してセラ・シルフィングを振りかぶる。

けれどその時だ。奴のその剥き出しの肌を捉えたと思ったまさにその瞬間――奴の氷のドレスに元から付いてた、花が僕の剣の前に飛び上がって来た。

真っ二つに裂かれる花。けどこの花は、今頭上に浮かんでる花と同類だ。そしてその効果もきっと……裂かれた花はやはりと言うべきか、閃光と音を伴って白い冷気を大いにまき散らす。

だけどそんな中、僕は攻めをやめなかった。急激に下がる周囲の温度。ダイヤモンドダストが覆う世界。キラキラの星々が空から落ちてきた様な光景。

けど僕は動けてる。呼吸器官が麻痺する事も、体が凍り付く事も無い。代わりに全身の細胞を刺激するかの様な痛みが走ってるけど、その位の代償でこのチャンスを逃さないで済むのなら安い物だ。

柊の瞳には僕の姿が映ってる。動けない筈の状況下でそれでも迫る僕の様。それは全身が青く放電してる姿だ。僕にとってはこの攻撃もある意味幸運だった。
だって荒療治だけど一応の攻略法がある攻撃だったんだから。逆に無数の氷を出現させられるとかの方が厄介だった。

（でもそうか、あれは扇子があって……今の柊の武器はあのドレスの装飾のみ？）

って事になるのかも知れない。

「くっ……」

初めて眉間に皺を寄せた顔をする柊。もう分かってる。この距離ならあの花の防御も無駄だって事が。今の僕なら、一緒に叩き切れる！

「逃さない、このチャンス！！　うおおおおおおお！」

最後の抵抗か、無駄だと分かっていても柊は両手を前に出して残りの花を舞わせた。けどその瞬間。青い雷線は軌跡を作って両の腕に走ってた。
奴の白魚の様な腕が宙に弾け飛ぶ。けどまだまだ！　この程度じゃ全然安心なんか出来ない存在……それがこいつらだ。

だから僕は腕を切り裂いた勢いを落とす事無く、連携に繋げていく。流れる様な剣線の軌道。生きも付かせぬ程の連続切り……それが二刀流の神髄だ。
それに何故か柊はその場を動こうとはしない。これ以上無い的…

…だけどそれには不気味さもある。完全に守りの態勢。

雷撃を纏ったセラ・シルフィングは攻撃力もあがってる筈なのに、奴の柔肌をなかなか削れない。

（つっ……こいつ自分を凍らせてるのか！？）

今までの木や放出してきた氷柱程度の純度じゃない。柊の体に広がる氷は、ダイヤモンド並の輝きと強度を誇ってる。

「でも……それでも通す！！」

ここでひよったら次はない……それくらいに思わないといけない。だから僕は攻撃を続けた。

雷撃の線が僕の動きの軌跡を残してる。それは柊を囲む様に成ってた。そして僕はもう一つのスキルも発動してる。切りつけた部分の柊の体が発光してるんだ。

とてつもない強度に守られた柊の体だ。攻撃を通すためにはスキルはいくつも必要だ。僕の数少ないスキルでもさ。

「うおおおおおおおおおお！！」

切りつけた回数が多ければ多いほど解放したときの威力はあがる。なら、出来る限り、僕はこの細く華奢な体を傷つけよう。

なんか最低な事をやってる気分に成りそうだけど、甘い事は言ってられない。少しづつだけど欠けて行く氷の鎧。するとその時、短くなった腕で頭部を守ってる柊の口が僅かに動いてるのに気づいた。

何かを口ずさんでる様に見える。でもその口の動きは異常。少な

くとも僕が知ってる言葉を紡ぐスピードじゃない。
この光景、見たことがある。それはサクヤの高速詠唱に似てるんだ。

（って……高速詠唱！？）

自分で気づいて自分で驚いた。だって、僕の予想は柊は後衛だ。それなら魔法が使えたっておかしくはない。今まで扇子にばかり気を取られていたけど……これはまさかそういう事か？
でも攻撃をされつづけてる間に詠唱ってどうなんだ？　普通は止まるはず、けどこの防御でそれほどでもないなら、起こり得るのかも知れない。

（どうする？　今すぐにでも解放するか？）

悩み所だ。解放しても通らなきゃ意味なんて無い。それには今まで位じゃダメなんだ。でも何かをやられてそれが封じられるのが一番怖い。
無駄なんて空しいだけだからな。すると迷ってる間に柊の口の動きが止まった。そして今度の言葉は僕にも聞き取れる物だった。

「コード解放『尊厳』開始。あまねく向こう側の存在の侵略を私達は『防衛』する権利を有してる。先行してαとΣを選択――」

それは今まで聞いていた柊の声の感じじゃなかった。もっとシステム的な……機械的な抑揚の無い声。そして攻撃を続ける僕にも分かる現象が起きた。

「――行動開始」

その瞬間、氷に覆われた柊の体を何かが走ったのが見えた。そして唐突に上げた顔。その瞳の中には赤い円が回ってた。
いや、それもよく見ると何かのコード。それはまっすぐに僕を見つめてる。そして一際強く瞳が光った瞬間、予想もしてない所から攻撃が来た。

「何！？」

狙われたのは足だ。細い氷のトゲが、僕の足を貫いてた。そして驚いたのはそれだけじゃない。何がそんな攻撃をしてきたか……扇子が無い奴の武器は限られてた筈だ。
だからこそ後ろなんて気にしてなかった。けどそれはあったんだ。柊の奴は切り落とされた自身の一部だった両腕……それを氷としてトゲを伸ばしてた。

「破壊対象壱。これを最も危険と判断して最優先で処理……してあげる」
「柊！！」

機械口調だった言葉が唐突に消え、柊へと戻った。すると柊は無くした両腕を大きく開く。すると氷が手の形を再生していくじゃないか。
しかもそれだけじゃない。今まで鎧として柊の体を守ってた氷達が背中の方へと移動して行ってる。そして背中から突き出た様に延びた六対の無骨なその氷は……羽、に見えなくも無い。

「どれだけ……反則なんだよおまえ等……」

マジでもうそう言いたかった。次から次へと、沢山だ。一体この翼はどんな力を秘めてるのか……考えたくもないな。

けど、無関係でも居られる分けない。

「コードの支配って、嫌いなのよね。だってそうでしょ？　私達は人間と決別したいのに、人間が作った反則プログラムにのっかるだけってイヤじゃない。

だから私達はあらがう術を見つけたの。コードの支配なんてこの身に許さない……だけどその機能は貰える裏技。私達を本気で倒したいのなら、この反則さえも君の思いで越えてみてよ。

でないと絶対にあの子は取り戻せない。だって私達姉妹は全員、専用コードを持ってるもの」

それは絶望的な衝撃の宣告。だけど噛みしめる間もなく、氷の翼が異常な程に輝き出す。ヤバいと本能が告げる。

「くっ」

僕は足下のトゲを切り裂いて後ろに……いや、前へ出た。するとそれを見た柊は、満足そうにこう言った。

「ここで逃げても後はない？　良い判断……けど間違いでもあるわ。私が立ち塞がった時から、君達に勝利なんて有り得ないのだから。

ただの夢とバカにした世界で死になさい。君のコートは後の世界の役に立つから安心してね」

「ふざけるな！！　僕は死ぬ気なんてまだまだ全然ない！　やりたい事も、やらなきゃいけない事も有りすぎる位なならな！　その最優先事項がセツリなんだ！

だからこんな場所で行き止まりに肩を落とす訳には行かないんだ！！　ライジング……バァァストオオオ！！」

光の中に青の雷光が加わった。切りつけた軌跡は死んでなんか無

い。これがその証拠。二つの力は、この空間を覆う程の光で全てを染める。

止まらない状況（後書き）

第百三十話です。
かなり話数が行っちゃった感がありますね。もう三十話超えてるし。ついこの間百話達成キャホ～～！　とか行ってたのに、もう三十話もきちゃってる。まあだけど、アルテミナス編もそろそろ本気で終わりが見えそうな感じです。
てなわけで次回は木曜日に上げます。ではでは。

転生（前書き）

俺がやられても諦めないでいてくれた仲間達。その思いが、今と言う瞬間を繋げてくれる。俺に与えられたもう一度だけのチャンス。それを結果に繋げる為に、俺は今再び、あの戦場へと舞い戻る。

転生

あの日の映像が泡となって消えていく。暗い場所で俺はずっと漂ってた。上も下もない、空も大地も無い、そんな真っ暗な世界。
ＬＲＯの世界なのどうかも分からない。夢……まさに夢の中で夢を見てる感覚だ。さっきまでは見上げた場所に消え行く前の過去が映ってた訳だし、何なんだろうって感じ。
そんな中、暗闇の中で自分と同じ様な人達が漂ってるのに気づいた。いや、違うな……アレは

「俺？」

同じ格好同じ背丈でどうみてもアレは自分自身にしか見えない。それに上にも下にもいやがる。無数の自分……なんだこれは？
すると一人の自分が側に漂ってきて何やら言い出した。

「もう、一年位前の事だろ」

それはさっきの過去の事か？　確かにもう一年位経つだろうな。そして今度こそはと思った筈だった。けど……この状況はさ。
漂う中で拳を握りしめる。実際どうやってこうなったのか曖昧だ。あの瞬間……あの渦に自分が飲み込まれてどうなったのか、実は良く分からない。

だが決して良いようには成ってない……そんな気はしてる。でも、ただ戦場に倒れさせるだけじゃなくあんな物見せるだなんて、ＬＲＯも結構キツい事してくれる。

（そうなんだよな……きっと俺は……負け……）
「――だけど、ずっと後悔してた」

心の声に被ってきたその言葉に俺は思わずハッとする。誰が言ったんだ？　俺は周りを見たけどそれを確認する事は出来ない。
てか、確認する必要があるのかだ……だって、こいつら全員俺なんだから。すると至る所声が聞こえ出す。

「そうそう、だから指輪を置いてきたんだ」
「でも無責任って意味じゃあれも結構酷だったよな」
「しょうがないだろ。俺だって一杯一杯だったんだ！」
「本当に全部捨てるつもりだったなら指輪も捨てるべきだった」
「でもそれだけは……俺にとって無くしたくない出会いだったんだ」
「でも捨てた。いや、指輪を残したんだから逃げ出したが正解か。放って置いたとも言えるな」
「それなのに随分俺って都合がいい。逃げ出した癖に待ってて欲しいんだから。それに最初は戻ってくる事なんか考えてもいなかっただろ」

次々と至る所からあがる自分の声。それはどれも全部自分の思いその物だ。だけどだからこそ、辛い物がある。耳を塞ぎたく成るような事ばかり言いやがってる。

「やめろよ……そんなの分かってる。俺が無責任に自分の望みを押しつけた。思ってもなかったのに、そんな日を夢見てだ！
何がその意味だ！　そんなの逃げた俺には望む資格すらなかったのに……」

そうなんだ望む資格すら無かった。だけどアイリは「待ってた」って言ってくれたっけ。それにコレもずっと付けていてくれた。

俺はポケットの中から一つの指輪を取り出した。それは揃いのあの指輪。でも……俺は遅いからいつだってダメなんだ。

「確かに資格は無かったと思うな。俺は本当にダメダメだった。それなのに縛ろうとするなんて……」

「仕方ないだろ。忘れられたく無かったんだ！」

「ダメダメだな～」

「ああ、俺ってダメダメだぁ～」

大きな合唱に成って自分を卑下する俺達。間違っちゃいないけど、これだけ大勢の自分が一斉に肩を落とすのは複雑な気分だ。

けどそんな暗い気分の中、俺の中の誰かがポツリと言った。

「でも……戻って来たんだよな俺は」

その言葉は不思議と大きくも小さくも聞こえた。そしてあまねく俺達全員はハッとした筈だ。暗闇の中で頭が上がるのが幾つも見えた。

「ああ、戻ってこれた。今度こそはって思ってさ」

「だけど一回逃げちゃったな。指輪も今度こそ捨てられた。これで終わりなんだと思った」

「だけどあの頃とは違ってた」

「あの頃とは違う繋がりの仲間が俺にはいる。上下関係とか尊敬とかで俺を見ない仲間。でも前のみんなが悪い訳じゃない。俺が弱かったのが悪いんだ」

「ああ、弱い俺が悪かった。でもあいつ等は弱い俺も知ってるから、楽だったんだ。それにリアルにはもっとデタラメな奴がいるし……ほんと、アイツ等の小芝居には笑ったな」

「確かに、何だよあのヒーローショウ。けど、本当の気持ちが聞け

た」
「行く決意が出来たよな。これ以上放さない為に」
「けれど、またこの様って……」
再び暗い空気が広がる気配。本当に何やってるんだ俺って感じだもんな。終わってしまったのかも知れない事を考えるとどうしても……するとその時、どこかの俺が意外な事を口にする。
「おいおい、何言ってんだ俺達。俺は確かに一人で戦ってたけど、あの場に居たのは俺達だけじゃないぜ」
「だな、頼りに成る奴らが居たはずだぜ！」
「そうだぜ、でも気づかないのはそれを届けさせ無い心があるからかもな。どうなんだよみんな！　俺達は諦めちまうのか？」
「もう痛いのも苦しいのも投げ出すか？　まあそしたら次はきっと無いだろうけどな。約束も守れない。指輪も主人の所には戻らない」
俺は自分が言ってる事なのに、そいつ等の言ってる事が分からなかった。でも何となくは感じる物がある。暖かい何かが目の前に有るような……無いような。
すると俺と同じような俺がポツリポツリと声を上げる。
「そんなの……ダメに決まってる。今度こそって思ったんだよ俺は！！」
「ああ、なんか分からないけどまだやれるのなら、槍は置かない！」
「何回も迷って、躓いた。けどその度に今回は立ち上がってこれた……なら今度もきっと、諦めるには早いって事なんだろう」
そんな前向きな事を言う俺が、何故か光を放って消えていく。そして俺の中に戻っていくんだ。何が起こってるのか、よく分からない。

だが、次々と覚悟を語った俺達は光と成って俺の元へ集ってきてた。そしてそれは次第に真っ暗だった空間を照らす程の光に成っている。
俺が俺の中に入ってくる度に、何だか力強い心が増していく……そんな感じがしてた。それはまるで命が戻っていく様な……

「で、俺はどうなんだよ？　最後は俺だ。その前に俺自身の思いを聞かせろ」

目の前に居る俺は俺だ。なのに答えを求めるのか？　きっと分かってると思う。だけど俺がそれを望むのなら、一つに成る前に聞かせるのも良いのかも知れないな。
体が光る俺達はきっと、迷って迷って、だから出てきた物なんだと今なら思う。だから最後の奴は、迷いの無い言葉をこうやって求めてるんだ。

俺はいつの間にか立っている。二本の足で力強く、みんが照らしてくれた空間にさ。目の前には俺の顔……気持ち悪いなんて今更だ。
だから少し笑いながら目を閉じた。思い浮かべるのは仲間達の顔だ。

今回の作戦に協力してくれたみんな。エイルにリルレット。シルクにテッケン。ノウイにセラ。セツリにスオウ……そしてアイリ。
そう言えば、スオウの奴は上手く行ってるんだろか？　けど大丈夫だな。アイツこそ、諦めたりしない奴だ。だから互いに信じてやってる訳だし……最近は随分と情けない姿アイツに見せてたし、これ以上はダメだよな。

アイリ……もう一度、この指輪を受け取ってくれるだろうか？
全てが終わったら、俺はもう一度……そう決意して瞳を開く。

そして真っ直ぐに見つめるは自分自身だ。

「俺は……弱い自分にも、間違いだしたガイエンにも勝つ！！　今度こそ俺が止めなきゃいけないんだ。あの時、止められなかったからこそ今！！

アイリは当然に助ける！　そしてガイエンも……出来れば助けたいんだ。それがどういう事かは分からないし、アイツは求めても居ないのかもしれないけどさ。

でも……やっぱり分かったんだ。過去を見て――」

するとこの時、光俺が拳を突き出して来た。ニカッと笑ってさ。だから俺もその拳に拳を合わせて、最後の言葉を紡ぐ。

「――アイツも俺の友達だってさ。憎らしくてムカつくけど、アイツがいたから出来た事も沢山ある。最初の望みを、アイリに叶えさせてやれたしな！」

それからの諸々の苦労なんて二の次だ。あの時のあの望みがアイリの願いだったんだからな。それにアレで暗くなってたアルテミナスを照らせた。

それだけで十分だ。俺は同じ様な笑顔を目の前の自分に返す。すると最後の一人も体の内に入っていった。また一つ枝葉が広がり、それに伴って一回り自分が自分である感覚が強くなる。

暗くどんよりとしてた空間は今はない。自分の気持ちの持ちようなのかどうかは分からないが、沢山の自分のおかげでこの空間は照らされた。

胸に手を置くと熱い何かを感じる気がする。それは全身を巡り巡ってるんだろう。あの日の迷いも後悔も……終わらせる為にもう一度俺は向き合うんだ。

アルテミナスに入ってずっとそれを思ってた筈だったけど、それと向き合える迷いが晴れたのは今の様な感じだな。

「そろそろ行くか」

俺はそう呟いて上を見る。するとこの空間のかなり上の方で一際輝く何かが見える。それは実際、止まってる訳じゃなくその場で無限を描く様に動いてた。

まるでこっちに来たいのに来れない……みたいな感じ。それを見つめてると自分自身の中から声がする。

（アレが何か、一つに成ったんだからわかるだろ？　届かなかった声が届いてる筈だ）

そんな事を自分自身の誰かが言う。まあきっと最後のアイツ何だろうけど……でも実は、確かに届いてた。アレは仲間の伸ばした手だってさ。

俺はやっぱりと言うか、実際敗れたんだろう。だけどそれでも仲間達が頑張ってもう一度チャンスをくれてるんだ。引っ張り上げようと、実はずっとしてくれてた。

それを無意識で拒否してたのは俺だ。蘇生魔法を拒否するなんて今まで無かったから知らなかったけど、それが出来ない訳じゃないんだな。

だが、やっぱりその必要はないってわかった。まだ自分で終わらせる事なんか出来やしない。きっと仲間達が必死に作ってくれた最後の光……これは試合後のロスタイムみたいな物なのかも知れない。

でも、そこで起きる奇跡だってあるわけで……全てのチャンスは

結局、自分次第なんだよな。そしてチャンスは掴まないと始まらない。チャンスは結果じゃないからな。
俺は天に手をかざす。
「降りてきてくれ、みんなの思いを受け取るからさ」
すると八の数字を描いてた光が直上で動きを止めた。そして手のひらの分だけ開いた様な隙間から光が射し込んでくる。暖かく力強い光……力強すぎて、まるでみんなが俺をひっぱたいてるかのよう。
まあ、誰にも文句は言えないけどな。だが目が覚めるよ。チャンスはありがたく受け取った。後は今度こそ最高の望む結果を掴むんだ！
俺は戻ろう。あの戦場へ。仲間が居て、友が待つ……大切な人を取り戻し、そしてアイツを打ち負かす為に。

「ぐあああああああああ！！」
喉の奥から裂ける様なそんな悲鳴が耳を打つ。赤い炎が視界の至る所で揺らめいて、熱い熱気がこのタゼホ全体を覆ってた。
そんな中、ドサッと何かが落ちる音が聞こえた。それは悲鳴が聞こえた場所からだ。
「ふふはははははは！！　さあ残り何人だ？　さっさと始末して本命に行きたいんだがな」
「それならば、我々にお任せ頂ければガイエン様はそちらに迎えるのでは？」
「まあ、確かにそうなんだが――」

あの悲鳴は私達の仲間が奴らに殺された声。これでもう半数近くが犠牲に成ったことになる。けど、それでもここでやられる訳には行かないの。
彼が、アギト様が目を覚ましてくれるまで、私達はみっともなくても逃げる事しかできない。だけどそれでもこの小さい村から出ることも叶わなかった。

情けない……このままじゃじり貧だ。そんな事を考えてると、不自然な所で切られた言葉。そして通りへと黒い影が伸びてくるのが見える。
そして次いで姿を現した化け物は、真っ直ぐのこちらを見ていた。燃え盛る建築物の塀の内側、更に植物で身を潜めてた筈の私達の方を迷い無くだ。

「――ネズミ狩り程度の時間はあるさ」

悪寒が全身を貫いた。

「っつ！！　逃げて！！」

その瞬間、後ろで炎に巻かれてた建物をも巻き込んで周囲が砕けた。何が……何て今更過ぎて口にも出せない。これは間違いなくカーテナの力。
私達は幾百の瓦礫と共に吹き飛ばされた。

「くっ……けほっこほ」

焦げ臭い香りと、抉られた地面の粉が周囲に待って喉がザラザラする。崩れさった建物の炎は、あの衝撃で消え去って白い煙を瓦礫から立ち上らせてる。

脆くも形を失っていく、建物の燃え尽きてた部分。その炭の破片が風に乗って向かう先から変なシルエットが見えてくる。複数の足音を引き連れて。

（やばい……）

まだ全員が捕まる訳にはいかない。でもみんながどうなったのか分からない。あの攻撃でバラバラに吹き飛ばされたみたい。

「さあて、次はどうしてみせる？　まあ幾ら待ったところでアイツは目を覚ましはしないだろうがな。そして目を覚ました所でどうにもならんよ。

結局はもう一度殺すだけだ」

そんなガイエンの無情な言葉が煙の向こうから聞こえてくる。確かにアギト様が再び目を覚ましたからって今のアイツに勝てる見込みは低い。

そんな事分かってる。カーテナを持ち、姿形まで変わってしまったガイエンを倒す何て本当なら不可能にも思える事。それは誰もがそう思うから私達は待ってるのよ。

だってアギト様だけが本気で倒そうとしてるから、だから最初から諦めてる私達なんかじゃ駄目なの。私達は自分達じゃ勝てないって思ってるもの……そんな私達にはチャンスも奇跡も起こり得ない。

だってそうでしょ……そういうのはいつだって信じる先にあるものだもの。私は拳を握りしめて立ち上がる。

（今度は私の番かな）

どうして圧倒的に不利な私達が未だに生きて居られるのか……そ

れは犠牲に成っていった仲間が居るから。彼らはみんな信じてた。
絶対にアギト様が目を覚ますって。そして自分達の犠牲を無駄にはしないって。出入り口も固められて、上回る数での捜索。

見つかる度に、あるいはその前に視線を拡散させる時とか囮になってくれた。そしてしばらくすると、同じ様な叫びがタゼホに響くんだ。
辛かった……だけど、その思いを無駄になんか出来ない。そしてその役目がようやく私にまで回ってきたってだけよ。

どうやらこの煙でまだみんな見つかって無いようだし、一番悪いクジを引いたのが私でまだよかったくらい。アギト様を担いでる方へ行かれたり、一人での戦闘がキツいシルク様の方じゃなくてね。

「誰かはわからんがまた一人……いい加減にすがりつくのはみっともないぞ。教えてやろうか？　アイツにはそんな価値はないとな」

ガイエンがこちらを向いてるのがわかる。そしてゆっくりと腕を上げるのもシルエットだけで十分に見えた。

「いい加減飽きても来たし、そろそろ終わらせよう。無駄な抵抗を無駄なままにな」

それはつまり、もう逃がす事はしないって事かな。後ろの方に居るはずの親衛隊も動き出した音が聞こえてくる。他にも周りに居るのは確実なんだから、探しに行こうとしてるって所かな。
だけどそれは困ることだよ。行かせる訳には行かない。ガイエンはきっと私を一撃で決めようとしてる筈。でも、そうはいかない！

私は振り卸されてる腕へ向かって、速攻で組んだ弓から矢を放つ。

操れるこの矢は、どこにだって百発百中なんだから。

矢は煙を貫いてシルエットへ向かう。そして霞む腕へ向かって突き進んだ。肝心な場所が動いてるせいでよく見えない何て最悪だ。だけどそこは、今まで聖典で鍛えた感覚で補う。

遠隔操作系の武器は自身でも周囲を認識出来る様に成ってる。だからこそ、多くなるほどに情報量が多すぎて操るのが難しく成るんだもの。

だけど私なら、この程度の操作は朝飯前。例え私自身の目で捉えられなくても、武器が私に教えてくれる。

次の瞬間、私が地面にめり込んでるか、立ってられてるか……それだけだもの。私は目を閉じて感覚を放たれた矢へ。

猛スピードで過ぎていく視界。風を切る音までもがハッキリと聞こえる。そしてここでなら・・ほら分かる。ガイエンの腕の動きが。

矢はあり得ない軌道で腕を貫く位置へ移動する。そして……

「ぬぐっ！？」

余りにも薄い反応。だけど確実に腕一本を貫いた。そして予想外に自分達の主が傷つけられた事で同様が走る親衛隊。

ガイエンにあまり効いてはいないようだけど、取りあえず親衛隊の動きが止められたのなら上出来かな。私もちゃんと立ってるしね。

だけどこの一撃で誰かは知られたみたい。

「この矢……セラか。本当にお前だけは惜しいよ」

「それは光栄だけど、余裕ぶらない事ね――ってそれは無理よね。あんたって前から自信だけは持ってたもの！」

いつだってちょっと上から周りをみてる節があった。だから最初会ったときから、ガイエンだけは好きになれなかったのよ。

「ふ、今や誰にも文句さえ言われぬ力がこの手にあるがっ――！？」

言葉と共に貫かれた側と反対の腕を振ろうとしたガイエン。だけどそれは叶わなかった。何故なら、私の攻撃はし喋ってる間にも続いてたから。

腕を貫通した矢は周囲を回ってもう一度、今度は貫くんじゃなく、矢尻から伸びてる光の糸みたいなので、もう一方を巻き込んで上方へ引き上げたんだ。

これで両腕は振れない。つまりカーテナは使えない。

「言っとくけどね！　きっと次のアギト様は違うわ。だって三度も同じ敵に負ける人じゃないもの。私達はいつまでだって信じてる。アンタを倒すって心に決めてるあの人の思いを！」

そう叫んだ瞬間、私は腕を振って小さなボールを手へ落とした。そしてそれらをガイエン向かって勢い良く投げつける。

だけど直撃する前に奴の足下から伸びた影に邪魔された。

「ふん、こんな物で私が倒せるとでも思ったか？」

「まさか、言ったでしょ？　アンタを倒すのは私達じゃない、アギト様だって。だからこれでいいの！」

そう叫んだ直後、小さなボールはその場でピンク色の煙をまき散らして弾けていく。するとガイエンの周りの親衛隊が次々と倒れてく。けど流石にガイエンには効果が無いみたい。

「睡眠薬か何かか。結局は時間稼ぎ。だがなセラ。こちらも言ってるだろ。稼ぐ時間に意味などないと！　私一人でも、お前達もアギトも十分に捻り潰せるさ！！」

その瞬間、ガイエンは強引に光の糸を引きちぎった。そしてその時、腕を振った衝撃で周りの煙が晴らされた。

「セラちゃん！」

晴れた煙の向こうにシルク様達の姿。向こうはそれなりに固まって吹き飛んだ様だ。でもあれは不味い。このタイミングでの位置バレは致命的。

カーテナは視界に捉えただけで広範囲を潰せる。

「逃げ――っつ！！」

間に合わない……そう思った。だから私は走り出した。一番近い私しかいない。手元で暗器を組み替えて剣の形にしていく。

ガイエンはもう、口元をつり上げて向こうを見てた。振り上げられる腕。私はとっさに剣を止めて形状を更に変えて放り投げた。

その形は手裏剣。それは奴の腕を切り裂いた。だけどもう片方を防ぐ術は私にはない。体が思ってもない方へ飛んでいく。

あらがえない力……やっぱり圧倒的。

（私はここまでの様です……だけど……アギト様なら……）

燃え盛る炎が見える。それか次の攻撃が先かもしれない。どちらにしても戦力は削れたよね。なら良くやったで良いかな？

「良くやった……だが、まだ逝くなよセラ」

あれ？　おかしな夢見てる。私は今、力強い腕に受け止められた。

そして霞む視界に炎の様な赤い髪が見える。

転生（後書き）

第百三十一話です。

遂にとうとうもう一度、二人は邂逅します。きっとこれが二人の最後のぶつかり合いでしょう。役者は揃いつつある。ラストに向けてこのまま一気に駆け抜けます！　皆さんが納得出来て驚ける様な事が書けますように願っててください！

てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではまたです。

この手の剣（前書き）

今の僕の最大級の攻撃。それと柊の羽がぶつかり合って空間を白く染め上げる。だけどそれで決まるほど甘くは無くて、取れたのは六対の内の一本だけ。それが大きい事なのか小さい事なのか分からない。

だけど体を傷つけられ続けた柊はそれなりに怒っていたみたいだ。

この手の剣

何者にも犯されそうのない二つの光が激しくぶつかり合った。一つはこの大地その物に根を張る様な、巨大で大きな……全容さえ僕達にはまだ分からない力だ。

万華鏡の様に姿を自在に変え、恐ろしいけどどこか心にその姿の綺麗さが残ってく。見る角度によって映す姿も、返す光も変わるんだ。

そしてもう一方は青い蒼竜を思わせる雷撃の光。荒れくれた空の主の如く光臨するその姿は、自分で言うのも何だけど脅えながらも目を開けて見たくなる何かがあったりする。

曇天を貫く一筋の光……だけど今は逆に下から上へ昇るような状態。力強く蒼竜は天を目指してた筈だった。

二つのそんな大きな光のぶつかりで満たされていったこの空間。耳をつんざく様な激しい音も豪快に聞こえていて手応えは確かにあったんだ。

青と白……その二つの光は絡み合い浸食しあってた。吹き飛ばされないように足を踏ん張って、みんながみんな「これでどうにか……」そんな事を思ってた筈だ。

それだけの規模を思わせる攻撃だったんだから。だけど唐突に僕は感じた。攻めぎ合ってた筈の二つの力……その勢いが一方に傾いた事が分かる。

いや、違う。どちらかと言うと、勢いを持って行かれた……そんな感じがしたような？　異変を感じ取ってる合間にもこの空間を覆

ってた光諸とも収束していく。
取り戻されて行くのはつい先ほどまでの光景。白い冷気漂う森の切り抜かれ空間。曇天に染まる空。そんな淡泊な色が瞳に映し出されていく。
「くそ……」
そんな言葉を思わず吐きたくも成る。今や僕の攻撃は、柊の背中から生えてる氷の表面でバチバチ弾ける程度にまで落ちていた。
もうあれは雷なんて呼べない……静電気よりは強力そうだけど、始めの大地さえも砕き貫きそうだった勢いは見る影もない。
やっぱり早計だったのかも知れない。何かが来ると思った。得体の知れない翼から放たれる光に驚いて、思わず折角の積み重ねを使い切るなんて……イクシードがまだ使えない今、今の攻撃は断言出来る程に、僕の最大の攻撃だっった。
それでも柊自身に傷一つ無く終わった事が後悔で一杯だ。もしかしたら、僕達がまだ生きてられてる方が柊にとっては奇跡の様な事であれば、ライジング・バーストを使った価値もあるんだろうけど。
生憎あの野郎は、別段表情を変えていない。瞳の内に赤いコードを回らせながら、こっちを見――ていたけど、おもむろに後ろを振り返った。
「……」
何を言うでも無く見つめる先には、まだ僕の攻撃の名残りが脈を打ってた。けどそれも、竜の形に見えた最後の青い光が砕け散ると同時に消え去って行く。

（何も残らなかったな）

そう思って、僕も柊が見つめる場所を見つめてた。けどおかしな事に、奴はまだそこを注視してる。　何がそんなに気になるのか……それとも実は違う所を見つめてるのか分からない柊だったけど、僕には見えた。

「あっ」

そんな感じに口が開いた瞬間が。すると背中から左右に六対の翼の内一つが、その透明度を失っていく。白の乳白色に染まってく。

そして次の瞬間、大量のガラスを落とした時の様な激しく耳障りな音と共に、その翼が粉々に砕け散る。イビツな羽の一本が消え去り、更に何だか無骨に見える。

「通ってたのか？」

そんな言葉を思わず口にする僕。てかそうで有って欲しい位だ。あれだけ威力を上げたライジングバーストは早々出来る物じゃないんだからな。

どれだけの代物かまだ分からないけど、あの翼の一つでも取れたのが大きい事であればライジング・バーストも役得だろう。

まあそれは、多分直ぐにでも分かる気はするけどね。

「スオウ！」

「おい大丈夫か！？」

向けられた言葉に振り返ると、ようやく陰湿な攻撃から逃れたリルレット達が駆けつけて来てくれた。これで何とか戦力は整った事

になる……のかな？
問題は氷に取り込まれた連中がどれだけスキルを封じられてるのか。重要なのがなければ良いんだけど……それによっては役割を果たせなくなる……なんて事になるのは痛い。
まあでも今は――

「みんな無事みたいだな。よかった」

――安心の方が強い。やっぱり一人の時とは、安心感が違う。けど何だかリルレットにはドスッと腹に正拳を貰った。何故？

「もう、本当にスオウは一人で突っ走り過ぎ！　ねえもしかしてスオウって自分の重要性とかを分かってなくない？　アンタが倒れたら、全部おじゃんなんだから一番慎重に行動してよね！」
「う……そんな事言ったって……無茶って時には必要だろ？」

僕の無茶が無かったら今頃、全員全滅してもおかしくは無い。やられるってわかってて何もしないなんて僕には出来ないことだ。
それに柊にだけはこれ以上、仲間を倒させる訳にはいかない。それはリルレットもわかってる筈だ。なんてたってアイツはエイルを柱に変えた奴なんだから。

もしまたそういう事が起きて欲しくない。それに柊自身言ってて、そしてみんなだって気づいてる事だろ。今この瞬間、僕たちはその無茶に立ち向かってるんだってさ。

「スオウの場合は進んで無茶しに行ってる様に見える時がある。私たちの為に、やらなきゃいけなかった事は分かってるけど、先には死ぬような無茶はやめてよ」

リルレットはそう言って少し肩を震わせてる。心配……かけちゃったな。僕は俯いたリルレットの頭をポフポフしながら自分の決意を伝える。

「死なないよ。僕は必ずセツリの場所までもう一度たどり着いてみせる。だから死なない。まあ急ぎ過ぎてる所があるのかも知れないけど……そこはどおしても譲れない。

けど僕は大丈夫だから、みんなが支えてくれれば折れないよ」

冷たい風がそよぐ中、こんなやりとりに温もりとかを感じる今日この頃。けれど何故か僕の腹には二度目の正拳が打ち込まれてた。

「なぜ……」

思わずその場に倒れ込む僕、するとリルレットの声が聞こえてきた。

「分かってない！　全然ね！　……けど、もういいわよ。ちゃんと絶対に私達が支えてあげる。スオウはいつだって走ってる人だもんね。

初めて会ったときからそうだった。私達はいつだってその背中を追うだけよ。それに今回は自分たちから来たわけだし、協力はちゃんとしてあげる。

だからちゃんと生きてよね」

なんかよく分からないが、僕は少し目尻を赤くしたリルレットを見上げて「おう」と応えた。結局こうなるのなら、殴らないで欲しかったよ。

ＬＲＯでも僕は普通に痛いんだぞ。そんなやりとりをやってると横の方から、重たい声が聞こえてきた。

「おいスオウ。で、アレは何なんだよ。どうみても更におっかなく成ってる様に見えるんだがな……」
「ん？　ああ、あれね。僕にもわかんないよまだ。アレが何で、どういう意味で出してきたのかなんてさ。でも、アイツは言った。
　あの力を越えられなきゃ、この先には行けないらしい。なら、どうやっても越えるしかないじゃん。何が何でも、やるしかない事に変わりはしないよ」
「つまり、とんでもなくヤバい力って事じゃねーか！！」
「まあ、そうとも言うな」

　てかそう言ってるだろ。でもそれも今更だけどな。そろそろ驚くのも疲れる頃合い何だけど、こいつは元気だな。そもそもこれまでの柊の力でヤバくない物が無かったろ。

「何でこれ以上増えた力の前で冷静何だよおまえ！」
「別に冷静な訳じゃない。さっきも今の僕の最大級の攻撃で翼一本だからな。まあそれが高いか安かはまだ分からない訳だけどさ……まあでも変わらないじゃん」
「変わらない？」

　隣の奴は首を傾げて僕をみる。僕は立ち上がり前方の柊を見据えて続きを紡ぐ。

「ああ、結局何も変わらないんだよ。奴が幾ら力を見せつけようと、僕はただこの二本の剣を信じて押し通るしかないんだからな。
　ただ、それだけ……それだけは変わらない。絶対に。
　まあ、僕だけじゃ絶対に勝ち目なんて無いんだけど……だからみんなに頼るのもいつも通りさ」

僕は言い終えると、みんなを見てニカッと笑った。一人じゃ絶対にどうしようも無いからさ、そこに意地を張ったってどうしようもない。

でも実際は、いろん感情を混ぜた笑顔だ。そうするしかないのも分かってるし、けどそうしなきゃいけない事に納得は出来ない。

もしも全部が一人で出来るのなら、誰も巻き込まず行けるのなら……このたった二対の剣がどれほど強くても、けどそれだけじゃ何も乗り越えられない事も分かってて、僕はみんなに頼ってる。

巻き込まないといられないだなんて……でもそれがＭＭＯＲＰＧの大前提でもあるんだろうけど、ちょっとは心苦しいぞ。

普通に冒険を楽しむ感覚じゃいられないだ。差し出す物も理不尽も、今となっては最大級に跳ね上がってるしね。でもここで「ごめん」なんて言うのは違うと思った。

だからまあ「いろんな諸々がしょうがないじゃん」みたいな感じの笑顔。そういつも通り思って、そしていつも通り、みんな笑顔で勝利を掴む……それしかない。

一人じゃ今頃、柊の奴の馬鹿げた力に圧倒されてそうだけど、まだ大丈夫。強引に勇気をさ……みんながいるから捻り出せる。

なっさけないけどな。

すると隣まで出てた奴が、頭を猛烈に掻きだした。流石のＬＲＯも頭まで痒くなる物何だろうか？　するとおもむろに伸びて来た腕が、僕の背中を勢いよく叩く。

思わずせき込む僕。すると更に自分の頭をバリボリ掻いて「あ～もう」とか呟いて、照れ恥ずかしい様な顔を一変、真剣な面もちに変えて声を出す。

「とんだ迷惑野郎だなお前。だけど、俺達だって死にたくは無いわ

けだし、お前がいなきゃどうしようもない訳なんだよ。
一番経験も無く、あぶなっかし過ぎるお前だけど、結局今やってるこの戦いでは俺達はお供の一行にしか成れない。しかもその他大勢のさ。
でもな、そのくらいで良いって俺達は思ってる。ＬＲＯはゲームのままで良いってさ。だからそれを越えてるこんな戦いはこれ限り！！
ヒーローはお前だ。だからいつも通りなら、ひたすら真っ直ぐに進めよ大将！　そこにしか俺達の出口は無いんだしな」

そんな力強い言葉は、せき込む僕の胸に染みてくる感じ。許されてる？　そんな気がしたよ。後ろをチラリと見ると、リルレットやみんなが頷いてくれる。
みんな手に取った武器を力強く握りしめてさ。「やったろーじゃない！」みたいな気迫が見える様だよ。今の言葉にみんな感化されてる？

でも……悪い事じゃない。結構はずかしかったけどね。僕は冷たい空気を肺に二・三度送り息を整える。

「ああ、じゃあ遠慮なく行かせて貰う」

そんな言葉と共にみんなで視線を交わし、見つめる先は勿論ただ一つ。白い冷気を纏い、危ない位の肌の露出に、今や氷の羽まで加わった柊という存在。
誰かがゴクリ――と思わず喉を鳴らす音が聞こえた。見つめるだけで、何かが重くのし掛かってくる感覚。きっとアイツは何もしてないんだろうけど、今まで見せつけられたその力……そして今も底を感じさせない事が無意識に僕たちを圧迫してる。

こいつと対峙すると、自分が暗闇の中に居て、延々と底に落ち続ける罪人の様な感じがする。それは落ちてしまわない事が恐怖そのもので、延々と近づく『死』に怯え続けなくちゃ行けない事が罰なんだ。

でも……今度こそ、そんな穴に光を通して見ようじゃないか。みんなにそれだけの覚悟がある。

「私の羽……腕もだけど……本当に君って……」

僕が羽を砕いてからずっとその一点を見つめていた柊がようやくそんな声を発した。結構ショックを受けてる様な言葉の途切れ方。

それなりにダメージに成ってるって事なんだろうか？　それなら、あの勢い任せの攻撃も意味が有ったって事で良いんだけど……なんか良からぬ空気が柊の周りで増大してる様な感じがする。

心なしか気温が再び下がったようなさ。そして見上げてた羽から視線を外して、煌めく白い破片の中、僕の方を向き直す。

「ちょっとは侮れないのかもね。けど、一本位じゃ止まらないよ」

「だろうな、あれで倒せたなんて思っちゃいない」

「うん、それは良かった。でも調子に乗った所を叩き潰すのも悪くないかなって思ったりもしたんだけど……蟻までワラワラ沸いちゃってるわね」

何だろう……柊の言葉が異様に静かな感じがする。言ってる事はトゲ満点だけどさ……今までとちょっと違う様な。

柊はシクラみたいに万年テンションが高そうなキャラと違うし、何がどう違うかは今日会ったばかりの僕には詳しく言えない……けど、僅かな中での空気の違いってのが最近は分かる様に成ってきた。

今までは冷気を伴ってヒンヤリとしてただけだった。遊んでるって言うか、柊の性格上何かを確かめる様になぶってた感じ。
だけど今はヒンヤリじゃ無く、この冷気に痛みを感じるというか……突き刺さる鋭利な寒さと言うべきの状態に成ってる。勝手に出てるっぽいこの冷気が柊の感情にリンクしてるのならだけど。

だけど無関係って感じもしないんだよな。アイツが気付いてるかは別にして。でもどっちにしても僕たちは引く気何かない。
僕以外は蟻って……

「あんまり人間舐めるなよ柊。みんなと共に、お前を必ず倒して見せる！」
「ふふ、蟻が幾ら集まってもね・・変わることなんて何も無いわ。まあでも、やっぱりこれ以上はもう、ほんとイヤ。
ねえ、これ以上私、汚されたく無いの」
「うん？」

何だそれ？　てかその言い方じゃ、まるで僕が柊の事を嫌らしい意味で汚した風に聞こえないか？　僕がまるで女の子を追いつめてる最低野郎に思えなくない？
攻撃の手段変えてきたのかこいつ。なんて恐ろしい精神攻撃！
「僕は断じてお前を汚して何か！　大丈夫、見とれる位に綺麗だぞ――って敵に何言ってんだ僕は！？」

何かテンパって訳分からない事を口走ってる。だって一度も異性と付き合ってもいない内に、そんなレッテルは迷惑何だよ。
「スオウ……年下も行けるんだね。セツリちゃん一筋だと思ってたけど意外かな」

「リルレット？」

何だか背中に悪寒が……声は普通なのに、圧迫感が違うぞおい。怖くて振り替えれない。てか、セツリ一筋ってその解釈もどうかと……

「そもそも、僕とセツリはそんなんじゃ――」

「ああ、まだ付き合っても居ないから、誰に目移りしても良いんだ。うん、そうだよね。ごめんスオウ」

「――いや……だから、そもそも僕らは……えっとあの……」

何故か声が萎んでいく。てか前と後ろで両方怖いんだけど。何この状況？　いつのまに敵が増えた訳だ？　すると粋なり伸びてきた腕が僕の耳を後ろに引っ張る。

「イテテテテ、何すんだ！　いや、何でございますか？」

それがリルレットだと分かると途端に言い直した僕。だけどリルレットは耳を放してはくれない。そのまま耳打ちするようにぼそっと話す。

「まだ、そんな事言ってるの？　気付いて無いわけ無いでしょう、スオウだって。そんなんじゃセツリちゃんはスオウの所に戻ってこないよ」

リルレットの言葉が重く心にのし掛かる気がした。それってつまり、セツリが僕の事をとかって事だろう。でも……それはには中途半端な答えなんて出せない。

だからこそ、迷ってるんだ。そこまで考えてなんて無かった。でもずっと病室で一人きりだったセツリには、それだけの相手が居な

いと、リアルになんて戻れない……って事でもあったんだ。

一生とかをセツリは見てて、僕はそれに答えられなかったから今の状況が出来てる。セツリは誰かが側に居てほしいんだ。

だけど実際、まだ僕は『助ける』その事以外考えて無かった訳だよ。あの時、離しかけた過ちは、強引とかが足りなかったせいでもあるって自分で勝手に解釈してたけど……やっぱりそれが必要なのかな。

でも早すぎると思うんだ。セツリは知らない。もっと一杯世界には男が居るってさ。たまたま助ける役が僕に回って来ただけで、それだけで結構ズルかったって思うんだ。　シンデレラ効果とかあり得そうだし……リアルに戻って、もっと色々見てからでも遅くない……けどそれじゃリルレットは戻らないと思ってる。

「だからって嘘とか付くわけにはいかないだろ。てか、そうじゃないんだよ」

「そうじゃないって何が？　本当は気になる子が他に居るって事？」

「ああもう、良いだろ今は！　あいつを前に、んな会話ダラダラとやってられるか！」

僕は強引にリルレットの手から逃れて前を向いた。だけど頭にはリルレットの言葉が残ってた。気になる子……そのフレーズで頭に浮かんだ一人の女は居たから。

そしてそれはセツリじゃないんだ。

「何か、図星を突かれたような顔してる」

「……気のせいだろ」

粋なり柊が放った一言に心臓が高鳴る。てかこいつ、聞こえてたのか？　でも流石にそれはないと思うけど……地獄耳みたいなスキルがデフォルトであるのか？

「あの子の事……それともあの子意外の子の事？　頭に浮かぶ顔はどっちなの？」

（こいつ……）

マジで聞いてたろって言いたい。けど、それを聞くとややこしくなりそうだから聞かない。すると何も言わない僕に手を向けて他の話題に切り替わった。

けどそれも、楽じゃない事。てか本題だな。あの手……氷で出来た手を向けて柊は口を開く。

「まあそれは近い内に聞けるからいいわ。それよりも私はね……今の自分の姿を嘆きたいわ。わかるわよねこの腕。君がこんな風にしたわ。

それでも私綺麗かな？」

氷で出来た透明な腕が開いたり閉じたりしてる。それはちゃんとした腕に見えるし、ＬＲＯの中なら別段おかしくも無い様な気はする。

それに柊の場合、この位に成ってた方が迫力出るし……でもなんと答えればいいのかは難しいな。でも怒らせるのもどうかと思う。

今の僕らの状態で怒りで暴走した柊は相手にしたくない。だから、こう言った。

「綺麗だろ。さっきも思わず言ったけど、口を突いて出た言葉何だから本心だよ」

「そっか……でもね、女の子に傷を付けるって事がどういう事か…

…その重さ、教えてあげる」

余計なフォロー、と言うか元から聞く耳なんて持っていなかったらしい柊は、唐突にその背中の翼（？）を大きく広げた。

そして放たれるのは、十センチ大の氷柱の雨だ。

「くっそ……数が多すぎる」

流石に捌き切れない。限界が有るとも思えないし、これはヤバい。すると今度は不意に頭上が暗くなった。雲の暗さじゃない。何かが僅かな光さえ遮ってる。

上を向くとそこに伸びてたのは奴の羽。そしてそれは勢いよく僕らに落ちてくる。

「「「うあああ！！」」」

氷上に大きな亀裂が入った。だけど直撃はしなかった。みんな上手くかわした……と言うか直前で少しズレた様な？

すると持ち上がって行く翼の先端に何かが見えた。あれは……

「天扇！」

そうだ、奴の手から離れた天扇……それが狙いだったのか。あれを奴の手に返す訳には行かない。

「ちょっと顔面借りるぞ！」

「は？　――ぶっはぁ！！」

僕は走り、丁度良い位置に居た仲間の顔面を踏み台に持ち上がった翼を追いかける。そして先端にくっついてる扇をその僅かな氷ご

と斬って奪う。

「こんな危ない物。そう易々と返せないな」

「今度は汚い手で天扇にまで……私をこんなに汚すだけじゃ飽きたらず、私物にまで手を出すなんて、呆れた変態ね。

ほんと虫酸が走る！」

何か正当な理由で攻撃されてるっぽいけど、断じて僕は反論したい。けど言葉は、次弾の衝撃に呑まれ行く。

この手の剣（後書き）

第百三十二話です。
スオウ達はマジでどうやって勝つのか悩みどころです。だって柊圧倒的過ぎる。さらにイクシードまで封じられて、八方塞がりとはこの事です。だけどここを切り抜けなきゃアルテミナス編のラストには繋がらないのです。
なので頑張ります！　どうなるのかはお楽しみに！
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは！

似てる想いの違う道（前書き）

腕の中のセラが目を丸くして俺を見てた。信じられないとか、何故この絶妙なタイミングで……みたいな感じ。まあ実はちょっと前に目覚めた訳だけど、丁度その時がセラの一世一代の見せ場みたいな感じだったから誰も気づかなかった。

でもある意味良かったかもな。おかげで誰もが釘付けに成るだろ？　この登場はさ。

似てる想いの違う道

「ア……ギト様？　幽霊じゃない？」
「はは、それならどっちかって言うと、幻とか幻覚のほうがあり得そうじゃないか？　まあどっちにしろ、俺はまじもんだけどな」

そう言って俺はいつも通りの笑顔と、もっと存在をしらしめる為に受け止めたセラの華奢な肩を強く抱いてやる。だけどそんな努力をやってる俺を、何故か更にボヤケた様な瞳でセラは見つめてた。

「アギト君！」
「ん、シルクもサンキューな。みんなも勿論、頑張ってくれた」

俺がセラを抱えてる方へ急いで走ってくるみんな。かなり驚いた顔してたが、ようやくそっちもこの状況を受け入れてくれたらしい。
まあ突然だったからな。無理もない。

目を覚ますと、俺は無骨な背中に背負われてた。何だか随分変な目覚め方だとか、鎧がゴツゴツしてて痛いとか、決して快適な目覚めじゃなかった。
でも、散々心配させたであろうみんなに文句何か言えないさ。ここは取り合えず、一言発して目覚めた事に気付いて貰おう。そう思った矢先、シルクの叫びが耳を突いて来たんだ。

「セラちゃん！！」

そして誰もがそちらへ集中してた。俺を担いでる奴も体を向けたから肩口からその光景が見えたんだ。そこにはあのままの姿のガイ

エンが黒い腕をこちらに向かって振り上げてた。
そんな中、燃え盛る炎を背にセラは一人でガイエンに突っ込んでたんだ。その瞬間、ゾクリと背中に嫌な汗が伝った。

あのガイエンを見たからか、それともセラの姿があの瞬間の俺とダブって見えたからか……取り合えずセラが自分を犠牲にしようとしてる事はわかった。
あいつはみんなの為に……そして期待とかを裏切った俺を、それでも信じてくれてた。セラの声が聞こえる様な気がしてた。

必死に恐怖を押し殺して叫ぶ声。その思いは一瞬届いたかのように思えた。だけど元からそれはガイエンの誘い。あの程度、奴にはダメージには入らない。
そしてセラはカーテナの理不尽な力をその身に受けて、風に飛ばされる照る照る坊主の様に勢い任せに体が宙を舞ってく。

俺はその瞬間、抱えてくれてた奴を踏み台に一気にみんなを飛び越えた。唐突なその動きに誰も声を上げられない。視線だけが俺を追ってるのがわかる。
俺は前しか見てなかった。一気に駆け出して向かうはセラの方だ。

（間に合うかじゃない……間に合わせる！　絶対に！！）

たぎる炎が俺の影を揺らめかせてた。感じる風は煙混じりで焦げ臭い。夜空の光より、周りの炎が光源に成ってるタゼホは、もう火が回ってない所なんて無さそうな程だった。

「どうして……」

近づいてくるシルクがそんな声をポツリと漏らす。それってどうして蘇生魔法が今更って事だろうか？　う～ん言えない。
無意識下とは言え、自分で拒否ってたなんてさ。だけどそれに返す言葉は必要じゃなくなった。何故なら、突然燃え盛る建物が潰されて高い火柱が夜空へと向かって立ち昇ったからだ。
いや、その現象その物よりも、それを誰がやったのか・・その事の方が大きいか。

「アギト……今更起きてきて、何する気だ？」

そんな言葉を向ける奴……俺は舞った火の粉の中にたたずむガイエンに目を向けた。本当に不気味な姿してる。悲しくなるくらいにさ。
ドス黒い肌に赤い瞳。白くなってしまった蒼かった奴の髪は長さも異常な位に延びてる。だけどそれが地面に落ちる事はない。何かの力で常に浮いてる感じ。

そして一番の変化はやっぱり下半身。足は無く、へそから下、腰の辺りがすっぽりと丸くなって浮いている。その球体の中心にカーテナの姿。
ほんとにもう人とは思えない姿。でもあれは上位種何だってさ。

「三度目の正直……今度こそお前を止めに来たんだよガイエン」

俺はセラをシルクに任せてみんなから数歩前へ出る。そして背中に手を回し、槍をその手に掴み取る。地面に飛び散った建物の破片が僅かな炎を心許なく灯してた。
炎の明かりって上手く表面を照らさない物だ。シルエットばかりが強調される様で、だから余計にあいつ等が不気味に見えてた。

「お前が私を？　どれだけ立ち向かおうと無駄だよアギト。それはお前が一番良く分かってるんじゃないか？　絶望を見ただろ……大人しく死んだままならもう一度、そんな辛い思いをせずに済んだのにな。
お前の仲間は理解してないのか？　お前がもう何の力も持ってないと。まあ持ってても、お前では私には勝てんがな」

ガイエンの声が夜の空気を振るわせる。奴は俺に負ける可能性なんて一欠片も持ち合わせちゃいない。それも当然と言えば当然だがさ。
奴はカーテナをその身自身に宿してる。それだけで、アルテミナス内なら最強だ。もしも俺にナイト・オブ・ウオーカーが有ったとしても、カーテナには及ばない。

だからガイエンが今の俺に負けるなんて考える事があり得ない事。でもガイエンが言いたいのは、そういう事だけじゃないんだろうな。
あいつはカーテナを持つ前にも俺を追いつめたんだから、俺の弱さを知ってる。そこら辺だろ。

「私達は！　力だけでアギト君の事を見て何かない！　貴方は力に溺れすぎてるから忘れてるのよ！」

何も言えなかった俺の後ろから叫ばれたそんな言葉。それは意外にもシルクが叫んだ物だった。力だけじゃない……その言葉は素直に嬉しいが、困った事に俺は心も結構弱いんだ。

「はは、君は知らないんだろう。そいつは逃げ出したんだよ。信じてくれた人々を残して姿を消した臆病者。私も力だけでは言ってない。
そういう弱い奴だと言ってるんだ」

ガイエンの言葉に、俺は反論する言葉がない。テメーのせいだろって言っても、逃げたのは事実だ。最後に逃げ出す事を選んだのは俺自身。

あいつはその課程に干渉したけど、結局は俺の結論。それを誰かのせいにすること事態が負け惜しみだ。だけど今度は、シルクに支えられてるセラがその口を力強く開いてくれた。

「それでも……アギト様は戻って来てくれた。それはきっとあの頃から成長したからなのよ！　ずっと苦しんでたに違いない。

けど、もう一度を決意したこの人を、否定なんかさせないわ！」

「セラ……」

「嬉しかったです。あの時『行こう』そう言ってくれた事が」

優しく微笑むセラの笑顔が胸を打つような気がした。あの時ってのは水かけ祭りの後の事か。ハイテンションで俺の前に唐突に姿を現したとき・・そう言えば、スオウのシルフィングを折ったのってセラだったよな。

でもシルフィングの事は置いといて、あれはセラなりの気遣いだったのかも知れない。逃げ出した俺を追いつめない用に、気負わせないようにと思っての行動。

あれはよく考えたら、かなり救われたよ。怖かったからな、俺の事を知ってる奴に会うの。でもそれらをセラは吹き飛ばしてくれた。

こんな俺でも、まだ必要としてくれてるんだって思わせてくれた。そして今なら……そうセラが言うとおり成長したと思ってた。

俺はセラに安心をもらったから、もう一度ここに来れたんだと思う。それなのに……俺は未だ役立たず。けどだけど、先にこれだけ

は返したくなった。

「俺の方こそ、あの時迎えがお前で良かった」

今更だけど……セラには感謝してもしたりない位だ。あれからもずっと、アイリの側に居てくれたんだからな。それに侍従隊だって、きっと親衛隊に対抗して作ったんだろう。

何も俺は言わなかったけど、セラはセラでいつかこんな事が起こると思ってたんだな。俺の素直な言葉に、セラは更に深く優しく微笑んだ。

攻撃を受けたり、今までの大変さで結構ボロボロなのに、この時の笑顔のセラはそんなの気にならない位に光って見えた。

（何やってんだよ俺……直ぐにブラツいて・・心配かけて……決めたんだろ、沢山の自分とさ。あれだけを胸に抱いて迷わず行けよ）

足下にあった木の燃えカスを勢い良く踏んだ。更にもう一歩出るためだ。燃えカスは折れて、その折れた赤い所から、火の粉が舞い上がる。

暗い闇を背負う様なガイエン姿の姿が佇んでる。その周りに数十人の同じように肌を黒に変えた親衛隊の面々。奴らはガイエンによってそうさせられてるのだろうか。

そいつ等の目も、ガイエンと同じように暗闇で赤く光ってる。それは不気味で、人と言うより獣の輝きの様な気がした。

獲物を狙う、肉食獣の様なさ。だけどそのどれにも押し負ける訳には行かない。

「アギト、今度こそお前に諦めをくれてやる。私の夢は止まらんよ」

そう言うガイエンにあわせて、後ろの親衛隊が展開していく。逃がす気はない。もう俺を逃げ出させる必要すらアイツにはないんだ。
ここで俺たちを断ち切って、手に入れる気だアルテミナス。あたかも俺達がグラウドその場所から弾いた様に。

「夢……か。神様に成りたいんだよな。世界を統べる神様にさ」
「ああ、アルテミナは私の覇道の足掛かりにすぎんよ。なあアギト、今の私なら神もまんざら夢物語じゃないと思えるだろ？
この姿、この力！　まさに神への足掛かりを私は掴んでいる！」

喚起の声で、両手を大きく広げて叫ぶガイエン。そんなガイエンの感情に呼応するかの様に、奴の足下に落ちてる影がワナワナと揺らめいていた。
でも確かに、今のアイツはただのプレイヤーとは違う。あの姿は明らかに異常……進化してるのかどうかは知らないけどさ、でもあれは……

「そうか？　俺には神より魔王に成ろうとしてる様にしか見えないぞ。一度冷静になって鏡見てみろよ。そしたら自分が落ちてるのか、昇ってるのかわかるだろ」

本当にそれをお勧めするな。ガイエンも親衛隊も全員まずは鏡見ろってさ。まずあの姿を初めて見て、すんなり受け入れた事が驚愕なんだ。
親衛隊共も感覚が麻痺してるとしか思えない。ＬＲＯ……ゲームだからそんな深く考えないにしても、何の驚きも無いなんておかしい。

一度全員、自分を見つめなおして色々思い出すべきだ。だけど力

に酔ってる奴らは得てして、他人の言葉には耳を貸さないと言う特性を持ってた。
結局は親玉であるガイエンをどうにかするしか、誰も止まらない。
「はは、お前には理解できないだろうなアギト。言っただろう、この姿はお前達エルフを越えた上位種だと。既にお前と私では存在自体が違うのだよ。
お前達の価値観で見てる私は異常だろう。だがそれでいい。畏怖を感じて畏敬を芽生えさせる事ができた時、私は神と呼ばれる存在に成ってる筈だからな。
それこそが私が目指す世界の神だ！　今、この瞬間の差をもっと感じろよアギト。お前と違って私は足踏みも迷いもしない！　だからたどり着く速さも場所も、お前とは全くの別物だ。
お前が感じる以上の高みに、私は行ってるんだよアギト」

その瞬間、俺の頬を風が僅かに切った。そして一瞬の内に、後ろにあった民家か何かがバラバラになって吹き飛んだ。強引に引きちぎられる木々の音や、直撃後に巻き起こった凄まじい風が嵐の様にうねる音が、直接鼓膜にたたき込まれる様に感じれた。

血が出ない頬を、それでも拭う。無惨に散った瓦礫を見てもそれが家だったとはわからない位にボロボロだった。前を向くとガイエンが黒い腕をこちらに向かって突き出してた。あれが原因か。
でも何の為に、わざわざ外してカーテナを打つ必要があるんだ？
ガイエンは俺を見て得意気に口元をつり上げる。ああなるほど。

これは証明か。自分が俺よりも遙か高みにたどり着いてるって誇示。だけどそんなの、家をぶっ壊さなくたってわかってる。その力だけはって事だけど。

「どうだ？　全てが無謀に思えたか？」

そんなことを言うガイエンは、今度は別の方の拳を握り締めてる。これだけで終わるって言う脅しのつもりか。でも生憎だな……ここにその程度の事実で足を抱え込む奴なんて、もういない。

確かにさっきの不意打ちにはみんな驚いたが、今はも回避から攻撃に転じるまでの動きを頭でシュミレートしたり、勝ち方を模索してる筈だ。

諦めや絶望を顔に浮かべてる奴なんて一人もいない。

「はっ、何言ってんだガイエン。お前こそ、俺達を理解しちゃいない。無謀？　そんなの初めから覚悟したことだ。お前のその力だって分かってた。

なんせカーテナは俺達三人が一番知ってる筈の事だろ。三人で勝ち取った武器と力……そして国だったんだから。なあガイエン……さっきまで俺は、過去を見てたんだよ。一年前の事だ。お前との出会いから、あの日までのさ……長い夢」

俺は拳を構えるガイエンから、あえて視線を外して空を見た。今カーテナの力が放たれたら、俺は間違いなくもう一度戦闘不能に陥るだろう。

蘇生魔法は生き返ったとき、ＨＰを全快にしてくれる訳じゃないからな。敵と対峙してる中、無闇に詠唱は行えないし……よって俺のＨＰはイエローゾーンだ。

だけどそんな危険を犯してでも、伝えたかったんだ。今、もう一度振り返ったあの日の事を。月の無い夜。そして下から燃え盛る炎の明かりで、夜空は黒さが目立ってた。

所々にそれでも星は見えるけど、心惹かれる程の輝きは一つもない。周りの炎が円を描いて、その炎が視界の端で空を切り取ってる。

そんな炎の額縁に納められた夜空はボヤケてて、光ることを許されない……まるで囚われの星々の様だった。月がないから、負けてしまう小さな光……それは俺達もそうだったんじゃ無いかって思う。

アイリは、月では収まらないかもだけど、いつの間にか俺達二人にとってそんな存在だった。カーテナをグラウドに渡せない――そう言ったアイリに引っ張られて俺達は行動を起こしたんだ。

「自分の情けない結果をもう一度見直したか。それは酔狂事だなアギト。で？　それが何だ？　私のせいで狂ったとでも言いたいか？」

ガイエンの嫌みな声も夜空の黒さに溶けて行くようであまり気にならない。俺は空に手を掲げて、親指と人差し指で円を作ってそこにない月を作る。

「そんなんじゃねーよ。もしもなんて考えるだけ無駄な事だろ。俺達は出会って、再会して……まあ再会はお前が仕組んだ事だったけど、それからの日々にどれだけお前の思惑があったかなんて、どうでもいいんだよ」

月はアイリ……ガイエンにとっては俺達の行動は思惑通りだったんだろう。でも自分の心とかは思惑とは裏腹に、そんな月に惹かれてたんだよな。

俺達は二人とも小さな星だった。暗闇の中で自分だけでは己さえ見ることが出来ないそんな星。隣に居たのが月だと知った星と、月を越えた太陽になりたい野望の星だった。

「どうでもいいだと？　全てを奪われてそんな言葉を口に出来るとは、お前……本当は諦めてるのか」

「まあな」

そんな言葉を口にした途端、周りから鋭い視線が飛んでくる気がした。でも諦めるって今の事じゃないんだ。

「勘違いするなよガイエン。俺が諦めたのは過去だけだ。あの頃を幾ら悔やんでも、時間は絶対に戻らないし、今が変わる訳じゃない。過去の過ちは未来でしか正せないだろ。だからここでは諦めたりしちゃいない」

俺は月の明るい心を支えたかった。そんな光の中はスゴく居心地が良かったからだ。でも光を知った分、闇に恐れを感じた。楽しいことはそこにしかないと、思って執着してたんだ俺も。

そしてもう一方の星は、野望の為に月を越えたがってた。だけどいつしか気づいたんだろう。月の光が自分には必要で、特別な事に。二つの星と月は、共に沢山冒険をした。そのどれもが笑える思い出。

「なあガイエン。俺は気付いたんだ。あの頃を振り返ってさ。あの頃……カーテナを手にする前、三人で良くダンジョン巡りやってたとき、お前何だか楽しそうだったてさ」

その瞬間、少しだけガイエンから動揺が見られたのを、俺は見逃さなかった。僅かだけど、赤い目が元の色を取り戻した様に見えた。

「そんなこと……私にとっては全部はこの日の為の布石でしかない。楽しい？　相変わらずお前は愉快でムカつく子供の頭をしてる。覚えてるさ、あの頃の事は。だが私が思ってた事は、お前達二人とも、脳天気で煩わしいって事だ。ムカムカしてたさ。特にお前の

顔を見る度にな。
「あっそ、その割には楽しそうに俺へ突っかかって来てたぞ。けどでも、初めて俺がお前から本気の怒りとか、そう言うのをまともに感じた事があったんだ。
それはあの時……俺がアイリに貰った力を見せた時だ。そしてそれから……お前何か、前より冷たくなったよな」

野望の星から月を取り上げたのは俺だった。少なくとも、奴はそう感じたんだろう。それにその時には、アイリの指にはアレがあった。誓った指輪が光ってた。
月を無くした星はガムシャラになったんじゃないか。そして同じ場所に入れると思ってた星の方も、次第に違いを思い知っていったんだ。
俺達は互いに、月に憧れた星だったんだじゃないか。そう今なら思う。

俺の言葉に、ガイエンはいつの間にかその腕を卸していた。あの時を思い出してでも居るのか、俯いたその顔はこちらからではよく見えない。

「だけどそれからもお前が絶対に間違った事をしてたなんて俺は言えない。アイリの為、アルテミナスの為でもあったんだろ？
エゴもワガママもそして野望もあったけど、それらを抱いたお前から逃げ出したのは俺だ。アイリを残して……逃げ出した。
正直最初は自己嫌悪、そしてお前を恨んだよ。けどこの一年、いろんな奴に会って見つめた。そして親友が真っ直ぐに進むのを見て思ったんだ」

指で作った月を放す。そこにはやっぱり月はなく、ぽっかりと黒い空が広がってる。あの頃の慟哭を見せるようなそんな空。

だけど紡ぐ言葉にそんな感情はいらない。あの頃に縛られた今日を越える……その決意をもうしてる。ガイエンの白い髪が風でそよいでる。
不気味な位、奴は静かだ。でもそれは聞く気に成ってる事だと勝手に解釈して俺は言葉を紡ぐ。

「お前も、お前の道を進んでるだけだったんだ。それも必死にさ。そうするしか無くなったんじゃないかって。お前は自分が神になっても、アイリを側に置くと言った。
それがお前の思いで、夢で……俺への復習、じゃないのか？
今なら真っ直ぐにお前と向き合える。あの頃認めなかった友として。復習でも何でも、受け止めてやる。それにお前はやりすぎだ。
友達と今は思うからこそ、その立場で俺はお前を止めてみせる！！」
「言いたいことはそれだけか？」

俺の宣言の直後、ガイエンからそんな言葉が放たれた。そして次第に肩が大きく揺れだして、奴の声がここを満たす。

「くくっはっはははははははっはは！！　友だと？　復習だと？　私が貴様の様な負け犬をいつまでも気にする訳がない！！　思い上がりも甚だしいぞアギト。
私は何にも縛られてなどいないさ！　我が覇道！　お前ごとき器で止められる物なら、止めて見せろ！！
友など何など言わず、アイリは俺の物だと叫んでな！！」

天に突き出した奴の腕の先に、夜の様な闇が集まっていく。俺は槍を構えてお望み通りの言葉をくれてやる。

「ああ！　幾らお前でも、アイリだけは渡せさねぇ！！」

放たれる黒い球。それと同時に親衛隊も動き出した。全面対決……全てをかけた総力戦。これできっと本当の勝者が決まる。

似てる想いの違う道（後書き）

第百三十三話です。

いよいよスオウもアギトも互いに対峙すべき敵と戦う時です。過去を受け止めて、今を超える。そして未来を掴むためアギトはやりますよ！　次くらいにはアイツも遂に参戦かな？

てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではまた！

天扇の行方（前書き）

次々と新たな力を見せる柊。天扇を奪い、その力は半減とかしてくれればよかったのに、裏技的存在の裏技って何だよと言いたい。そしてそんな裏技で造られた氷の翼。

それからは明らかにヤバい感じが伝わってきてる。だけど引く選択肢なんて僕には無い。こいつを……この力を超えなくちゃ、絶対にセツリまで辿り着く事なんて出来やしないんだから。

天扇の行方

左側に五本、右側に六本の氷が羽の様に展開してる柊。雲が分厚く掛かってる空からの僅かな光でも、それらの氷の翼は自身の内から光を生成してるかの様に僅かに淡い光を発してる。

本当に、もしもあんなスキルが存在してて、そして誰かがそれを使うところを普通に見たら、きっとその綺麗さに見取れてたと思う。

それぐらい、術者を神秘的にする力があの羽にはある。けど、今の僕たちにはそんな事許されない。何故なら、足を止めた時が自分達の最後に成ると分かってるからだ。

言葉を押し潰した羽の次弾の攻撃……それを転がりながらかわした僕だったが奴の羽は後、左右に合わせて十本残ってた。

そこから僕へめがけて打ち出される氷柱の雨も、同質量の攻撃も待ってはくれない。だからこそ、足を止めてはいけないんだ。

避けて逃げてさばいて防ぐ……結局最後の防ぐは追い込まれた結果だった。嵐の用な波状攻撃に自慢のスピードも追いつかなかった。

そして二刀流は両手に武器を持ってる分、それだけで防御が薄い。いや、例え盾を持ってたとしても、柊のあの企画外の羽を止められたと思えないか。

シルフィングで上手く受けたとはいえ、あの力に体が耐えられない……一瞬で僕の体は空中に投げ出されてた。

「っつ……」

腕が異様に熱く感じれる。でも不思議な事に、腕に目をやると霜の様な物が見えるんだ。それはシルフィングにも同様にあった。

「これって――って、ヤバ！！」

僕は考えを途中で切り上げた。何故なら地面から狙いを定めた羽が迫ってたからだ。本当に執拗に僕ばかり狙いやがって……マジでこの扇が必要みたいだな。

僕は懐にしまった扇の存在を確認しつつ、迫り来る氷の翼に体を向ける。けどここは空中……自由が利くとは言い難い場所だ。あれだけの翼をどうやってやり過ごすかも問題で、着地もある意味問題だと思う。

だって高いんだ。予想以上の高さまで上がってる。どうにかしないと、このままじゃどっちにしてもたたでは済まない。

けど……何一つ考える余裕なんて無かった。小さな僕という炎を消そうと、そのどれもが凄まじい速さで迫ってくる。

そう……死を引き連れて。

「あぁ……くっそ！」

僕は何の考えも無しに、取り合えずシルフィングに力を込める。けどその時、氷の翼が僕へと伸びてくる隙間から何かが見えた。それは地面を蠢く影――あれって……

「スオウ！！」

そんなリルレットの声がどこからか聞こえた。地面から？　いや違う。もっと近い……まるですぐ横に行るような。

そしてその感覚は正しかった。リルレットは僕の直ぐ近くまで上

がってきてたんだ。僕はそんなリルレットに驚く声を思わず返す。
「お前！？　どうやって？」
「飛ばして貰ったの！　いいからほら、手を伸ばす！」
僕は強めな口調で言われたその言葉に、ただ従うしか無い。昇ってくるリルレットと、落ちてる僕の手と手が重なる。
そしてそのまま、位置を変えて着地するのかと思いきや、何だかかなり力強くリルレットは僕の手を握ってた。ただ真っ直ぐに落ちてただけの僕の位置は、リルレットの飛んできた方へ修正された訳だから、後はちゃんと考えてあるであろう着地方法を示してくれるだけでいい。
けど僕には、この繋がった手からトキメキじゃなく、もっとイヤな感じを受けてた。
「あのさ、これからどうす――！？」
何かいきなり視界が回ってるんだけど！？
「大丈夫！　ここからはちゃんと私達もやるから！　だからスオウも心おきなく戦って！！」
そうリルレットが叫び終わると、僕達を繋いでた手が勢い良く離れたのを感じた。てか回された。これは遠心力を使って放られた状態だ。
「あぁぁぁ

リレルレットの奴！？
まさかあの羽からもっと確実に逃がしてくれた？　とか一瞬思ったけど、それは大きな間違いだとその一瞬後に気付いた。
だって僕が飛ばされた方向はそんな温い場所じゃない。どうみてもさっきより間近に羽が迫ってた。まさか心置き無く戦ってってこういう事か？
なんて無茶しやがるんだ。いや、させるんだ！　僕はもうどうにかするしか無くなってた。
幸いにも、最初にたどりついてた翼は盛大に空振りだった。二回も空中で方向を変えた事が効をそうしてるのか、その後二枚の羽も僕には届かない位の場所を、空気を震わせて通過する。
でもそれだけで唾を飲み込んでしまう。うぁお、どんだけ勢いつけてんだ。羽を巻き付ける様な感じにして、ドリルっぽくなってる影響か？
何にしても、絶対に当たるわけにいかない事が分かった。
（この三発で位置が修正されてるか！）
後の七発は完全に僕をとらえてる。柊の奴もただで空振り何かしない。確実に今度は当たるだろう――でも！
「冗談でも何でも、変態って認識で終われるか！！」
僕は先の柊の言葉に反論して、迫り来る翼を剣を使って受け流した。止めるじゃなく受け流す……その行動の選択が、この瞬間の生死を左右した。
突き立てられた鋭利な先端。僕はセラ・シルフィングを構えて迫

り来る氷の先端の少し横に剣を当ててその勢いを利用して前へ回転した。
そしてそのまま僕を狙ってた氷の着地する――と同時に更に二本の羽がドリルとなって僕を襲う。
（ちっ……風よ、一瞬で良いから！）
足下に小さな風のうねりを感じる。そして二本のドリルはクロスする様に僕の居た場所を通った。だけどそこで僕の歩みは止まらない。
僕はドリルがたどり着くより速く動けてた。この冷気の満ちた空間で、風は二の舞になるからあまり多様は出来ないけど、あの位ならね。
足下だけに集めた風で、僕は一瞬だけ加速したんだ。けどまだまだ……まだまだ迫り来る羽ドリルはある。
「くっそ、一気には突っ切れな……い！？」
その瞬間、動かそうとした足が動かなかった。足下に視線を落とすと、するとそこには氷が張った靴があった。氷は足場にしてる羽事態と融合してる。
まさかあれだけで？　思わず歯噛みしてそう思う。あの風の影響で、霜が凍りにまで発展したって事？　なんて事だろう……想像以上に風は諸刃の剣になってる。
「っつ……」
僕は剣の柄で足に張った氷を砕く。でもその数瞬の遅れが致命的になる。迫る羽ドリルはもう目と鼻の先。今からじゃ何とか出来て

防御しかない。
でもそれは心許なさすぎる。だけどその時、頭上からアーチを描いた炎の球が降り注いで来た。そしてその炎の球は次々と迫り来る羽ドリルに当たっていく。

それは当然、目の前に迫ってたのにも命中した。でも当たった瞬間に、炎は白い煙を発して一瞬で消えた様な感じだった。

「どうなっ――つあ！？」

僕の感覚ではほんの数コンマの違いだったと思う。その程度の足止めしか出来ない援護だった。煙の中から刹那位遅れて出てきてくれたとは言え、微々過ぎる。
避ける事は完全には間に合わなかった……とは言え、これも運良く剣で受け流して、今度はこの羽に着地する。

「危なかった。やっぱりあの程度の魔法じゃ、傷一つ付かないか」

やり過ごせた羽の上、一息付く猶予位は出来た。さっきの魔法……もっと強力なのを撃ってほしかった。だって最初に僕が決めたライジングバースト……あれだけ切りつけて威力を高めた技でも、たった一枚の翼をもげれただけだった。
だからそれを考えると、今の魔法は弱すぎたんだ。
残りの前にある羽たちも止まる事無く向かってきてる。やっぱり同じように一瞬で消滅したみたいだな。

嘆いてもしょうがない……翼が駄目なら、せめて本体に直接もう一度たたき込むだけだ。幸い扇は僕が所持してるし、今の柊も万全って訳じゃないんだ。
ある意味、今しかない。それに幸いにもこの翼の先は、必ず柊に

通じてる。僕は前を見据えて再び駆けだした。迫り来る羽ドリルを見て両腕に力を込める。

後何個とかもう煩わしい。それにどれもかしこも落とした訳じゃないんだ。かわした羽が戻って来ないうちに、柊までたどり着く！

吐く息が白い尾を引いて消えていく。体を動かして無くちゃ、たちまち凍えそうな程の温度に成ってそうな感じだ。あの翼もやっぱり冷気を放ってるのかもしれない。

翼の上を走りながら、次の羽に備える……けどその次が来ることは無かった。何故ならいきなり羽がドリル型から、いつもの形に変わったからだ。

そして僕よりも高いところから一斉に氷柱を今度は降らせてきた。これも立派な攻撃……だけど何で方針を変えたのか？

大量の氷柱をかわしつつ前へ進んでると、下の方が騒がしいのが聞こえてきた。

「ぬあああああああ！！　いきなり広範囲攻撃かよ！」

「でもそれってつまりは、俺たちも無視されなくなったって事だろ！」

「よっしゃ！　このまま何とか分散させるぞ！」

「「「おお！！」」」

そう言ってみんなは地面の柊に迫ってく。なるほど本体が攻撃されるのを無視はできないよな。でも僕も居るから、一網打尽に出来るこのスキル使ってるのか。

けれど、この氷柱には一撃でやられる……なんて怖さはあまりない。それにみんなの気概が僕にも伝わってた。

（みんな……そんな事を考えてくれたんだ）

何か嬉しくなる。冷たく寒い場所に成っちゃったけど、少し前の花が咲き誇って蒼天の空といっぱいの太陽の明かりの温もり……それらを思い出す様な感覚。
かじかんだ身体に熱が巡る様な……するとセラ・シルフィングを本当に赤い熱が覆ってる？

「行けスオウ！　まだまだ自分にもみんなを手助け出来る力は残ってる！　突き進め！！」

後方から聞こえてきたそんな言葉。察するにこれは攻撃力アップの魔法。力強い感じが腕から伝わってくるんだ。

「サンキューな。ありがたく受け取った！！」

降り注ぐ氷柱が煩わしかったんだ。でもこれなら避ける必要なんてない。もっと軽く叩けるんだからな。
辺りに響く氷が砕け散る音。そしてその残滓が僕の通り道だけに残ってく。走りながら飛んで跳ねて、踊る様に二対の剣を振っていく。
最短を最速で進む為に、砕くのは確実に当たる奴だけ。後は全て無視して行く。そして……

（見えた！！）

柊は相変わらず余裕そうな顔で佇んでる。その周りには氷柱を必死に避けるみんなが居た。それだけ一杯一杯と行った感じ。だけどおかげでここまで来れた。
背中側から生えてる羽だ。柊の頭上に飛び込んで一撃……出来るか？　気づいてない……訳はなさそうだけど、今の所奴はこっちを

見てない。

みんなが繋いでくれたこの場所だ。やらない訳には行かない！！
勢いそのままに、僕は高く伸びてる羽から柊の頭上に飛び降りる。
そしてその手のシルフィングは青い放電を始めてる。

「柊！！」

僕の叫びで柊はこちらを見た。けどもう遅い！　今やこいつを守る物は何もないんだ。セラ・シルフィングは止められない！
威力強化されたセラ・シルフィングが青い軌跡を描いて柊に向かいゆく。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

雷撃を帯びた二対の剣が弧を描く。完全に直撃した……筈だった。でも、感触が無い。外した？　かわされた？　どれも考えられない。
剣を振ったことでその場に止まってた冷気が一気に外側へ流されていく。その時、不可解なこの感覚を確かめる為に僕はそこに居る筈の柊へ目を向ける。

「――っつ！！」

湖に張る氷の地面に、勢い余ってセラ・シルフィングがめり込んだ。砕けた氷が弾かれて、視界の高さまで上がってきたり、何メートルか先まで衝撃で氷にヒビが入ってた。
そして向かうべき所を無くした雷撃は、青白い閃光をその場で周囲に放ってた。そんな全ての要素が合わさると、目の前に居たはずの柊が消えていく。

いや、違うな。僕がシルフィングを振ったその時には、既に柊は冷気と共にその身体が分かれてたんだ。そして更に衝撃が周囲に発せられた今は、もうその姿を保ってられて無い。
霞む様に冷気の中に溶けていくみたいだ。

「そう言うことか！」

僕は自身の目で見た光景で理解した。これはまさしく残像だ。してやられた。柊の奴は冷気を使って自身の残像を作ってたんだ。
でも……僕が走ってきた羽は本物。それなら本体は近くに居るはずだ。僅かに認識をズラしただけ……一体どこに……周りには霞む冷気が高い壁を作ってた。

広がっただけじゃない、僕が地面を叩いた影響で空気が弾けて上へも上がったんだ。これじゃあ影は見えても、誰かは判断できない。

「どこに――」

右へ左へ視線を動かす。自分を中心に半径三メートル位は衝撃で冷気が退いてるから、この状況でも不意打ちは防げる……かな多分。
だけどかなり心が追いつめられてる感がある。下手に動けない……この僅かな三メートルの空間が今の僕の領域でしか無いんだ。
風で一気に冷気を晴らすことも、イクシードに頼ることも出来ない僕は、この冷気が上りきって落ちてくると終わってしまう牙城に止まるしかない。

出来ると思った……もう一度、柊を追いつめる事をさ。でも甘かったようだ。飛んで日にいる夏の虫状態だ。要は誘われた。
ここはアイツのフィールドで、あいつは反則的な力を有してる……それをいつだって忘れちゃいけなかったのに、なまじ届いた事が

あったからこそ、望んだんだ。

白く霞む冷気が頭上に迫ってきてる。吸い込む空気が妙に冷え冷えしてる様に感じる。その時、どこかからか何かが聞こえてくる。

「か～ごめ、か～ごめ～」

それはとても懐かしい旋律を刻む歌。でも同時に、最後を知ってる分、身構える事になった。歌は白い冷気の中を回る様に、綺麗な声で聞こえてくる。

「か～ごの中の鳥は、い～つい～つ出会う、夜明けの晩に～鶴と亀が滑った～後ろの少年だぁ～れ」

歌の終わりと共に、背後に何かを感じて背筋が凍る。その感覚は信じられない程に近く、圧迫される様だった。僕は振り返らずにはいられない。

何でこんな古い遊び歌知ってるんだ――とか、今はどうでも良かった。余裕が無いんだ。だから僕はただ振り返らない。

僕は同時にシルフィングを併せた。一足先にそれに振れたシルフィングは何かの感触を確かに伝えてる。けど……それは――

「氷！？」

――斜めに切り裂いたそれは紛れもなく透明な光を放つ氷だった。しかも感じた通りかなり近い。てか鼻先が触れそうな程……音も無く忍び寄るなんて不可能だからどうやって――そう思ってたけど、まさかただの氷とは。

それにこの氷、地面から雑に生えたって感じだ。だからこそ、ここまで近くでも気付かせなかった訳か。鋭利過ぎた切れ味のせいか、振り抜いてから氷は斜めに滑り落ちようとしてる。
僕の背丈程ある氷の丁度腰の辺りが切れてる。だから半分の大きさの氷が滑っていく。その時だ。

「だって私、少年じゃないもの。少女なの……わかってるでしょスオウ」
「――っつ！？　ひいら――ぎっ！！」

氷の向こう側から現れたその姿に目を見開いた。発した声が奴の行動で無骨に終わる。滑り行く氷がその身体を覗かせていったとき、柊は素早かった。
落ち行く氷を待つ事も無く、僕の頭がこの状況をどう判断するかよりも先に、彼女の氷の手が僕の胸に突き刺さる。

鋭利な爪が食い込む感触はまるで、心臓を鷲掴みにされてるような感じだ。痛みに耐える中、切られた氷は遂に落ちて砕けた。

「本当に、望んだ通りに切ってくれるんだものね。でも危ないわ……これ以上私は傷つきたくないのに」
「ぐ……あ……」

更に食い込んでくる氷の爪はもう凶器のレベルだ。皮を裂いて肉を抉ろうとしてる。傷つきたくない……ね。気付いたけど、柊のサイドの髪が斜めに揃えられてた。
これがつまりそう言う事か。柊なりの傷ついたの証みたいな物。僕の剣線はどうやら氷の後ろであぐらを掻いてた柊にも僅かに届いてたらしい。
だけどそれが柊の怒りに触れてる。俯いた柊の腕力は強くなるば

かりだ。

「どうしてくれるのかしら？　ねえスオウ！」

言葉の語気までもが強くなる。でもこのまましてやられる訳には行かない。幸いこの距離は、僕の方が得意な位置だ。

僕を捕まえる腕をまずは切り離す。そして一気に畳みかければ、まだ可能性はあるはずだ。僕は痛みが続く中、両の腕の感覚を確かめる。

変な汗が出て、体中が熱いけど、大丈夫……痛みを越えて腕を使え！！

「そんな事まで知るかよ！！」

僕は掴まれてる腕を狙う。するとその時、俯いてた柊が少しだけ顔を持ち上げて笑った。まるで最初からこれだけが目的だったようにだ。

「ふふ、ヒドいよスオウ。でもしょうがないからこれで勘弁してあげる！」

その瞬間、皮と肉が潰された。けれどそれでも必死に僕は歯を食いしばる。心臓はまだ動いてるんだ。ＨＰだってまだ健在。

痛みに惑わされるな！　ここで止まったら、この痛みがいつまでも先行しそうで怖くなる。だからそんな芽さえ潰して、やろうとしたことはやり遂げる。

そんな小さな積み重ねしか、僕には無いんだ。力の差は大きいんだから、何から何まで諦めずにやることが大事なんだ！

「あああぁぁぁぁぁぁあああぁあああ！！」

生暖かい物が胸から流れてる。でも今は狙うべき奴の腕しか僕は見ていない。もう一度ぶった斬ってやる――その思いで剣は進む。
けどその時、自分の胸の辺りが光ってるのに気付いた。もっと正確には僕の胸を砕いた奴の手が光ってる。そして僕は、その時ようやく思い出したんだ。
そこに何があったかって事をさ。

「やっぱり、これがないとね。返して貰うよスオウ……私の天扇」

その瞬間、溢れる光に圧力でもあるかの様に僕は後方へ吹き飛ばされた。主の元に戻った天扇の喚起の声か何か知らないけど、これは想定上最悪のケースだ。
眩しすぎる光の奔流は、漂ってた冷気も押しやり、その身体を巡りあの羽までも伝ってる。淡く光ってたそれも、これで完成とでも言うように、嬉しそうに天扇から溢れる光を受け取ってる。

「くっ……かはっ」

距離を空けられたら、途端に胸が苦しく成ってきた。まだまだ止まれないのに……くそ。天扇まで手にしてしまったって事はまさに完璧な状態って事だ。
本当にやられたよ。

「スオウ！　――ってわっわ！！　酷い傷してる。治して貰わなきゃ！」

どうやら天扇を手にした事で攻撃が止まったらしい間に、みんなが僕の所まで走ってきてた。だけど頼もしいとかの前に、申し訳なさがこみ上げる。

だって渡しちゃいけない物を取られてしまったんだ。これで勝てる確率が、確実にまた一段減っただろう。この悔しさの中、こんな傷気にしてられない。

「ごめん、みんな。天扇を……」

僕の謝罪の言葉。だけど誰もが、聞こうとせずに前を見たり相談したり。てか僕を庇うように前へ出てないか？　それに後ろでは回復魔法の詠唱も聞こえる。

これって……

「スオウ、気にする事なんかないよ。だってどっちにしろ、柊は化け物で反則のオンパレードだもん。扇一つでそんな変わんないよ。それに扇何かより、私たちには貴方が大切なんだよ」

優しいそんな言葉が傷ついた胸に染みる様だった。けどそれも束の間……光は次第に収束し、天扇は喜びを終えて主の敵を討つ武器とかす。

パン――そんな音と共に開かれた天扇が僕らを指す。

「さあ、そろそろ決着をつけましょう」

天扇の行方（後書き）

第百三十四話です。
もう自分で自分言いたい。何でそこまで苦境に立たせるんだ！って。スオウ達はこれでますます絶体絶命のピンチです。お先真っ暗とかこの事です。コードに天扇……これを打ち破れる鍵はあるのか！？
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは

集う思い（前書き）

ガイエンが放った黒い球体……あれは攻撃の為の物じゃ無かった。ただ覆ったこの空間から完全に音を取り去った。広がるのは無音の世界。そこは孤独じゃない筈なのに孤独を感じる不思議な空間だった。

何を思ってこんな事をしたのか……俺はセラの協力の元、それを確かめるためにガイエンへ迫る。そしてそんな時、どうやら二つの影は直ぐそこまで迫ってた。

集う思い

目の前で収束……そして膨張した黒い塊が、音と言う音を飲み込んでいく。そう感じた――だけど違う？　ガイエンが放った黒い球体は収束して膨らんだんだ。

それは一種の爆発とかと同じだったのかも知れない。音は飲み込まれたんじゃない、一瞬の内に吹き飛ばされたんだ。

気付かない……気づけない程のエネルギーが俺たちの周りを僅かな静寂に変えていた。親衛隊どもの動く足音も、俺たちの叫ぶ声も、炎がはぜる音も消えている。

有るはずの音が消えた世界はなんとも不気味だ。周りのみんなが何かを言っている……けどそれも聞こえない。向かってきた親衛隊の一人と武器がぶつかって衝撃は伝わって来る。

けれどその音は無いんだ。何だかスゴくやりづらい。拍子抜けする感じなんだよな。でも音が消えただけで、他の全ては変わらず有るわけだから、やっぱり気が抜けない状況の筈なんだ。

（アイツ……こんな事してどういうつもりだ？）

率直に俺はそう思う。確かにやりづらいし、調子も勢いも狂う感じが有る。でも、それがガイエンだと似合わない。だってアイツが、こんな回りくどい事をやる必要が有るのか？

アイツならもっと派手だと思う。こんな音だけって地味過ぎるんだ。ガイエンの所業にとってはさ。でも実際にこれはガイエンがやったこと。

それを俺はこの目で見てる。アイツが作り出した球体が、広がっ

てこういう事態になってるってさ。音を奪ったこの空間にどういう意味があるのか……そこには、必ずアイツが求める何かが有るはずだ。

不思議な戦闘は続いてる。だけど音が無いことでの不協和音が俺たちには早くも出始めてた。発した筈の声、放たれる攻撃の大きさ……それらの音が無いことは、周りを知る為のピースを欠いたような状態だ。

それは結構煩わしい物だった。だって俺達はもう一人だって欠ける事は出来ない。だからこそいろんな気遣いや、周りを気にかけるって事が常に必要になってくる。

けど……音ってのは取り合えず、最初に意識に届く物なんだ。その最初が奪われると、更に気を張って常に周りをみないとどうなってるのか全然分からなくなってしまう。　大きい音がどこかから聞こえれば危ないのかも知れないと思って、そっちを見るだろう。けど今はそれすらも出来ないんだ。

『意識』……それを忘れると、いつの間にか自分一人にでもなっていそうな状況だ。音がない世界は、気合い一つも入りづらい。

もっと殺伐としてる筈の今のこの戦闘も、味気ない物になってるよ。音がどれだけの情報量を持ってたのか今ならよく分かる。

そして言葉の重要性も。伝わらない事と、何も伝わって来ないのは怖いことだ。意志疎通が不便でならない。開いた口は、形を変えてただパクパクと陸に上がった魚みたいになってるだけ。

至る所でそんな状況が見られてる。それに目の前に敵も居て、危ない戦闘を繰り返してる筈なのに……おかしな感覚に時々、不意に

陥る。

それもきっと、この世界が全くの無音だからだろう。人は音がないと、どうあったって孤独を感じるのかも知れない。

槍と剣を打ち合っていても、不意にその敵が消えるんだ。そして誰もいない空間で、俺だけがどこかへ向かって槍を打っている……そんな錯覚に陥る。

仲間が居て敵も居るはずなのに感じる孤独……それはとても混乱する感覚だ。一人じゃないと言い聞かせても、音の一つもないと、存在って物を実感として感じれないんだ。

だって全くの無音なんて、リアルにはあり得ないんだからな。どんなに静かに感じても、耳を澄ますば何かは必ず聞こえるだろう。

風に揺れる木々の揺れ……虫の声……そばに誰か居るのなら、呼吸を繰り返す音とか、生きてる事を表す行動ってのは音を作る物だ。

そして生きてる世界に音は必然的に生まれる。けどそれならここは……音の無い世界は、何も感じれない。一定以上に熱くなれない……それなのに、孤独を感じるとき一気に熱が下がってくのが分かる。

それでもみんなこれが今俺達に起こってる現実と、言い聞かせて気を張って戦ってる。でも……元から差があった力の均衡。

信じる者は救われるとも、気持ちだけで世界が上手く回り出すとも俺はスオウほど信じちゃいないが、それでも人と人が集まったとき、そこには蓋が出来ない気持ちが溢れ出すと思うんだ。

そしてそんな限りの無い気持ちが、埋める差ってのもある。それを俺は知ってるし、それを使わないとそもそも俺達に勝利は吹かないんだ。

だからこの状況はとてもまずい。良くない。気持ちが入らない戦闘は、その差が次第に顕著に出てきてしまう。そしてそれは今この瞬間も広がってる。

「くっそ……から回る。上手く連携も取れないし、このままじゃ追いつめられる一方だ。

こいつらは、個人戦のつもりで好き勝手攻めてるみたいだし……強引なのに、加護の力でそれが出来てる」

それに親衛隊は個別で戦ってる気で最初からいるからか、音が無いのも気にしてない風に感じる。どうやっても向こうが多いことで、こっちにとっては一体多数になるし、悪いことだけが積み重なっていく感じがする。

視線を横に向けると、苦しそうな顔をしてるセラが何かをやっていた。それは音が無くても超分かりやすい意志表示だ。

セラが指さす先にはガイエンが居て、その指を首の所で横にスライドさせる。その意はきっとこうだろう。

『アイツ、殺るわよ』

もしかしたらもっとソフトな表現かも知れないが、大体有ってるだろ。目も結構危なげに怒ってる感じだし、セラとなら簡単な会話は目で出来るさ。

意志疎通が上手く行ってるかは別にして……だけど。でも今回は間違える筈もないし、このままじゃダメだと自分でも思ってた。

けど一人じゃこの親衛隊の壁を抜けるのは難しくてさ。別々に戦ってても親衛隊はそういう状況を利用する戦いやってるから厄介なんだ。

協力……じゃなく、奴らの場合は仲間の行動を利用して、常に自分が止めの一撃を入れる役を狙ってる……そんな感じ。
だからこっちにとっては嫌な所々で粋なり別方向から攻撃が来て、結果的には厄介な事になってるんだ。けど二人でやるなら、上手く出来るかも知れない。

まあ相手する敵の数も単純に倍増だけど、物理的に一人じゃ不可能な事ってのが有るんだ。そんなジリ貧続けるくらいなら、俺は信じれる仲間と賭に出る！
俺は親指を立ててそれをセラに示した。その意は万国共通でこうだろ。

『やったろーぜ！！』

するとセラの口元がわずかに綻んだ。そして直ぐに行動は開始された。打ち合わせも何もない。ただセラは、自分の役割を自分で決めていた。
もの凄い早さで組みあがった等身大の手裏剣。それをセラは対峙してる親衛隊共に向かって投げる。金色の胴体に同じ色の光を帯びて、向かい行くそれを奴らはいともたやすくかわしていく。

そして武器を手放したセラは大ピンチだ。けれど、助けに行こうにも、こっちはこっちで対峙してる親衛隊がいるんだ。易々と背中を向けられない。

「ちっ……セラもどういうつもり何だよ」

武器を手放すなんて自殺行為だろ。それに簡単にかわされてたし……けどそれはセラらしくない。そう考えた瞬間、セラを見ると囲

まれた中でもその微笑は無くなって無かった。
それで確信出来た。
「何かある……か」
口に出したって声には成らないだから、俺は心の言葉をずっと口に出してる。独り言っぽいけど、それでもこう成った空間じゃ、自分だけでも自分の中で音を出しとかないと気が滅入るんだ。本当に。
俺は小さな針の様な物だけで、親衛隊と向き合うセラから一端視線を外した。セラが武器を投げた以上、俺がここを突破するべきなんだろう。
けど、想像以上に親衛隊は強化されてた。加護の力ははんぱなく厄介だと、向かい合って理解したよ。はっきり言って防戦一方だ。数でも力でも不利で、こんな奴らをあれだけ沢山相手にしてたセラ達の方が大変だったんじゃないかと思う。
まさに量を取るか質を取るかの問題だったわけだ。量は数と加護の親衛隊で質はカーテナと融合したガイエン……本当にどっちもどっちだったな。
こぼれない愚痴を思いながら、親衛隊の猛攻をしのぎ続ける。奴らは加護のおかげか、幾ら動いても息切れ一つしやがらない。
それに比べて俺は……重い奴らの攻撃を受け止め続けるだけで体が軋むような感覚が襲うんだ。その時、先のカーテナの攻撃で壊された建物の破片を踏みつけてバランスを崩した。
「しまった！」
傾いた重心を戻す為にバランスを取って足を踏ん張る。けどそのハプニングを親衛隊が見逃す筈もない。炎の明かりに照らされて怪

しく輝く鉄の光が、俺をめがけて真っ直ぐに伸びてくる。しかも狙いは頭部……ダメージ補正がクリティカルになる場所だ。
ＨＰが完全じゃない今、それはどうしても避けたい。だって加護で強化された攻撃のクリティカルなんて……下手をすると最悪のことが起こりかねないと思うんだ。

だけど俺は動けない。重心が傾いて、それを立て直そうとしたせいで、ここから更にもう一動きは人体の構造上難しい。
眼球に迫り来る剣先。覚悟を決めて、最悪の事だけが起こらない事を、俺はただ願うしか出来ない。苦しい位に呼吸が速まってた。

だけどその時その瞬間、攻撃が入る事を確信してた親衛隊の喚起の笑みが強ばった。そして一気に失速して俺の目の前で倒れていく。

（一体何が？）

すると倒れ行く親衛隊の背中にある物が見えた。それはさっきセラが手放した武器……アイツの背丈程ある手裏剣。それが親衛隊の背中に刺さってるんだ。

「アイツ……」

本当に対した奴だよまったく。そう言わざる得ない。この為か……元から狙ってたのは自分の目の前の敵じゃ無かったんだ。
だからあんな簡単にかわされた……いや、かわさせたのか。この為に。でもそれはまだまだ早すぎた評価で低い物だったとセラはしらしめる。
何故なら、攻撃を受けた親衛隊はその程度の一撃でやられもしないし、後の数人もまだいたからだ。そして最後のタイミングを掴んでた奴のボロに残りの奴らも動く。

目の前にいるのは、俺と言うこいつらにとってはきっと極上の獲物。誰もが俺の首に群がってくる。でも手裏剣を受けた奴も倒れる体を支えて、一番近くで剣を再び振るおうとしてた。
俺の束の間の安堵感は一瞬しか保たなかった。親衛隊の赤い瞳がギラついて迫る感じはピンチの証明だ。最初に突進して手裏剣を背中に受けた奴と、その直ぐ後ろから更に三人位が止めの一撃を準備してる。
あの一瞬のロスで態勢は戻ったが、それでもこれだけのスキルを捌くのはかなり無謀だ。

「でも……それでもやるんだ！　俺はここでお前達に邪魔されて終わる訳には行かないんだよ！！」

音に成らない叫びを発して俺はまず、一番近くの奴の攻撃を槍で受け止める。
でもこれじゃあ今までと変わらない事の繰り返し。そう思い、他に迫る三人を見据えてどうするかを思案する。でもこの時には既に、三人は攻撃モーションに入ってた。

今度こそ避けられも防げれもしない状況だ。するとその時、親衛隊の背中に刺さる手裏剣がその場で分解……弾けた。

「「「「！！！！」」」」

声は聞こえはしない。何故ならここは今、無音の世界だからだ。だけど親衛隊の奴らの驚く顔は分かった。そしてそれはきっと俺もだろう。
本当にもうダメかと思った。でもコレこそが本当のセラの狙いだったのかも。弾けた手裏剣の部品は全て細いワイヤーみたいなので

繋がれた。

そしてそれは、あたかも蜘蛛の巣の様に、向かってきた餌を絡めとったんだ。親衛隊全員を余すことなくな。手裏剣が刺さってた奴も例外無く、セラの武器は親衛隊を拘束してた。

「まさかここまで……」

セラの凄さに自分の中で少し笑いが漏れる。蓑虫状態になった親衛隊は、それでも長く拘束出来そうも無いんだろう。急いだ方がいい。

俺はもう一度セラに視線を移す。すると向こうはとても大変そうだった。流石に細い針だけじゃね。だけど一瞬だけ目があって、ウインクした様に見えた。

それは「大丈夫だから」とか「行って！」とかの意味が含まれてたに違いない。数で負けてる俺達はそれぞれ複数を相手にしてた。だからこそ、俺の相手全員を捕まえる事をセラは最初から考えてたんだな。

本当に……今度こそいいよな？　俺は視線の先のガイエンを見据えて地面を踏み込み走り出す。そして叫んだ。

「大した奴だよ！！　セラ、お前は！！」

絶対に聞こえないと分かってるから叫べる事。体全体に当たる風が次第に激しさを増していく。スピードは徐々にあがり、ガイエンに辿り付くまでにはマックスだ。

それにしても、何だかやけにガイエンが静か……な様に感じる。音がないって意味じゃない。こいつさっきから動いて無くないか？

あの球体を放つまでは一つ一つの動作も大げさで、うるさい位だった筈だ。何でこいつは音を無くしたんだろう？　その理由と関係があるのだろうか。
この状態の意味……それは？　その時、ガイエンの黒い腕がこちらに向けられた。

（カーテナが来る！）

そう思った。だから俺は横に飛んだ。防ぐとか受け止めるとかが馬鹿げた発想に成るほどの力だ。今の状況で、それを一発でも受ける訳にはいかない。
地面を勢いよく転がる俺。でも何も起きない？　けど数瞬遅れて、その衝撃は風を運んできた。それは壁にぶつかられた様な風だった。

「うお！！　ちっ」

止まったらダメだ。後ろも気になるけど、今は前だけ見るべき。セラが作ってくれたこのチャンスを無駄には出来ない。
だけどガイエンはその顔に、不気味な微笑みを称えて次々と拳を突き出してくる。その一つ一つが桁外れな力だ。それに音が無いことがここで更に厄介なんだ。

いつもならその力の大きさに音くらいする筈なのに、完全に無音で迫る力という無色透明な化け物はタイミングが計りづらい。
それに後ろにどれだけの被害を出してのかも分からない。もしかして今まで手を出さなかったのは、親衛隊の為？　とか考えていたけど、こいつのこの遠慮のない攻撃でそれは無いなと思った。
だってわざわざ力を直進させるだなんて、俺の後方で戦ってる親衛隊を巻き込めかねない使用方法だ。カーテナならその場所にピン

ポイントで力を落とせるだろうに、わざわざそう使うなんて、仲間がどうなってもいいのか？

俺はガイエンの腕の動きだけを見て、紙一重でその攻撃をかわして前へ進む。カーテナの範囲は学習済みで、振り切った時に、その力が発動されるのは分かってる。

だから奴の腕が真っ直ぐに伸びきる少し前に、俺は重心を移動させてる。伸びきった直後の移動じゃ、カーテナの攻撃範囲からは逃れられないからな。

ぶつかる風が、その力の強大さを物語ってる。本当は今直ぐにでも振り返って後ろを見たい。みんなが無事か確認したい……けど、それをしたら足が止まってしまうかもしれないと分かってた。

だから俺は、必死に前だけを見つめ続ける。

「ガイエン！！　これ以上……やらせるかぁ！！」

右腕の力を避けた直後に左腕が伸びかかる。でももう目の前だ。俺は槍で地面の土を掘り返して、ガイエンの顔面にぶつけた。

用は目潰しだ。そしてそんな原始的な攻撃は案外効果的だった。しかめっ面になるガイエン。泥を落とそうと一度顔を背けたここが大チャンスだ！！

槍に炎が纏う。潰された目でも、そのまま腕を振るおうとするガイエン。だけどまずはその腕を切り裂き、そこから炎で焼く。これ以上、無闇やたらに被害は出せないんだ。

そしてその勢いのまま、俺は更に踏み込んだ。

「うおおお

俺はそんな雄叫びをあげている。炎は更に勢いを増して、俺とガイエンを照らす出す。切り落とした腕はどうせ再生するんだろう……けど、今この一瞬では間に合わない！
俺の槍がガイエンの胸に突き刺さる。そしてそこから勢い良く夜空に向かって火柱が一本、伸びて行く。するとその火柱が何かを突き破った。そしてその瞬間――

「くくく、アギト……やってくれたな」

――そんなガイエンの声が俺の耳に届いた。砕けた何かはこいつが張った、あの黒い球体の結界か。

「目潰しとは、随分小物らしい事をやるじゃないか」
「それがどうした？　卑怯だなんて言わせないぞ！　それに俺は小物何だから何も問題なんてねーよ！」

ズボッとガイエンの胸から槍を引き抜く。そして続けざまに他の場所へも槍を切りつける。自分が大物なんて思ったことなんてない。
そうならないと置いて行かれると焦った事はあったけどな。でも、無理だった。結局俺は小物くらいが良く似合うんだ。でもそれはガイエンもそうだと思うんだけどな。

小悪党ぐらいで止まってれば良かったんだ。でもガイエンはあらがった。そして求める夢は余りにもでかい。
赤い炎がガイエンの体を焼いていく。今までこれほど攻撃が通っただろうかって位に入ってる。でもまだまだだ。何故か上半身は裸の筈のガイエンなのに、ＨＰの減りは異様に悪いんだ。
そしてそんな奇跡の様な時間は長くは続かなかった。どこかから伸びてきた黒い影……それが俺の足と腕に刺さって動きを止めた。

「っつ！　何で音を消したんだ？　あれに意味はあったのか？」
「……どんな強者にも、弱る心はあるだろう。まだ私は完全ではないからな。そんな時に、世界には煩わしい音が有りすぎる……そう思っただけだ」

それってつまり、言葉が自分を迷わせるとかそういう事なのか？
だから音を消した。聞きたくない事が耳を突かない様に？
案外答えてくれるんだな。動きを封じられて、苦し紛れに言った事だったんだが、思わぬ収穫かも知れない。ガイエンはまだ聞く耳を開けてくれてるんだからな。

「お前、それのどこがダメなんだよ！　煩わしい……そう感じるのは、お前の心を突くからだ！　俺はさっきの空間でよくわかったよ。共感も否定も、嬉しくも煩わしくない世界なんて、ただつまらないだけだってな！！　そうだろガイエン！」

俺は必死にガイエンが言う煩わしい音を発し続ける。だけど、眉をつり上げたガイエンはその拳を目の前で握り出す。

「思い上がるなよ小物風情が。神となる私にはお前の羽音になど耳を傾ける暇などないんだ！！　今度こそその口を閉じて、この世界から出て行け！！」

振りかぶられる拳。その拳には黒い物が纏ってる。あんな物、この距離で食らったらヤバ過ぎる。だけどそれが分かってても、防ぐ手段はない。
黒い影は俺の手と足をがっちりと固定してる。

（折角みんなのおかげで、もう一度立てたのに……ここまでなのか？　また俺はガイエンに負けるのかよ。そんなの……そんなの……）

迫ってくる黒い腕。この距離なら、拳は俺に到達するだろう。ならその衝撃まで加わるのか……それでも、俺は僅かでもＨＰが残る事を信じて歯を食いしばる。
だけどその時、二つの小さな影が炎を突っ切って飛んできた。そして一つはそのままガイエンに攻撃。もう一つは素早く俺の拘束を解いてくれる。

「間一髪って所だな」
「テツか？　なんで……」

現れたの二人のテッケンだ。こいつは確かスオウの側だった筈じゃ？

「くっ、煩わしいゴミが！！」

そう言ってガイエンが腕を振る。巻き上げられ大量の粉塵と陥没する地面。だけどそれが晴れたとき、更に信じられない人影がそこには居た。

「はぁはぁはぁ……アギト、良かった」

集う思い（後書き）

第百三十五話です。
遂にこの三人が同じ場所にたちました。ここまで来るのが実に長かった！　百三十五話？　ふざけんな！　っていいたい位ですよ全く。まあこれもそれも自分のせいなんですけ。
さてされアイリも加わる事で戦局がどう動くのか、次の次をお楽しみに。
てな訳で次回は日曜日に上げます。アヂュー！

奇跡の掴み方（前書き）

全てを取り戻したアイリの猛攻が始まる。全ての冷気はアイツに従い、全ての氷は意のままに形を変える。そんな中で出来る事は、かわす事くらいしかなかった。だけどそれすらも天扇によって阻止される。

繰り出される氷の翼……かわす術がない僕は、仲間に頼るしかないが、それだけじゃ駄目だった。翼は六対、左右に十二本……僕に割くのは一本で十分なんだ。そんな中僕は、奇跡の掴み方を模索する。

奇跡の掴み方

「よく頑張った。そう、貴方達は良くがんばったわ。誇っていい事よ」

天扇を向けた柊が、最後の言葉を綴る様にハッキリと、そして澄み渡る声で言葉を続ける。

「分かってる。そちら側からしたら反則だって。だけどね、これが私たちの力なの。人間とは違う、そして心を奪われたプログラム達とは違う、それを許された私達の力。

でも最初からこうだった訳じゃない。私達ももっとか弱い存在だった。だけど、私達には目的があって……だから成長を望む事が出来たのよ。

私達は頑張った……ねえ、頑張って手にした力を使うのはダメなこと？　同じ舞台に立ちたいのなら、そっちが昇ってくるべきじゃない？

私達にとってこれは努力の結果であって、反則なんかじゃ決してないのよ。それを言うなら、『バランス崩し』アレの方がよっぽどそうでしょ。

貴方達人間は、システムの力をシステムに頼って使う。本当は何も出来ない癖に……これ以上、この世界をデカい顔して歩くんじゃないわよ！」

長い語りの終わりに柊は開いた天扇を掲げた。すると後ろの翼もそれに呼応するかの様に大きく広がる。そして天扇が戻ったからなのか、欠けていた左側の一本も再生し始めてた。

空気中の水分か何かを凍らせているのか、周りから氷が生えていくみたいだ。

「デ……デカい顔って何よ！　そんなの別に私達はしてないもん！」

前に立ったリルレットがこの光景に押されない様に必死に声を張り上げて柊と向かい合ってる。徐々に復元されていく翼の下で、柊は頑張ったリルレットの言葉を無情に返す。

「してるわよ。そう思わない事が……当たり前にこの世界を犯すのがデカい顔って言ってるの。貴方達は思ってるでしょ？　ＬＲＯは私達の遊び場所って……違う？」

「それは……だってそうでしょ？　ＬＲＯはゲームなんだもん。そう思うのは仕方ない事じゃない！　そもそも何で貴方達が我が物顔してるのかの方がわかんないよ！

だって……ここは造られた世界で、それをしたのは人間なんだからね。気付いてないのなら教えてあげようか？　貴方達だってね、造られた存在なんだから！！」

リルレットの言うとおり、ここはゲームでそれは遊び場って事なのは間違いない。てか、誰もがそう思ってる筈だ。

ただのゲーム……とは違う思い入れをしてる人達も居るだろうけど、でもそれでも僕たちにとっては第二の世界でしかない。

治癒の光に包まれてる僕。するとリルレットの言葉を聞いた柊が何故か唐突にこっちに話を振って来やがった。翼はもう七割は出来上がってる。

「貴女、顔の印象の通りに頭悪いのね。私が少し前に『マスター』って言ってたの聞いてない？　言っとくけど、マスターなんて名前

じゃないわよ。
私達はね。自分の創造主を知ってるわ。お気楽語気楽にＬＲＯを闊歩してきたんでしょうね貴女。そういう貴女みたいなのが一番ムカつくの。
ねえスオウ、そう思わない？　私達が戦う戦場にふさわしくないって……だって結局は遊び感覚何だもの。私達は存在を、君は命を……だけど彼らは何もこの場に上げてないのよ。
そんなこの人達と、君は良く戦えるわね。背中も何も任せられないんじゃない？　覚悟も薄ければ、信念も細いでしょう」

クスリと笑う柊。その妖艶な姿に良く合う笑い方だ。だけど言われた事は黙って置けない事だ。てかそれは、ここに来る前に自分でも思ってしまった事だ。
でもだからこそ、答えは出てる。迷わない答えがさ。みんなはそれでも言い返せない様だけど、それなら僕がちゃんと伝えよう。それでも良いんだってさ。

「確かに、そう思った事もある。命を懸けてる僕やセツリとはこう……真剣度合いがどうしても違うんだって。それでここに来るまでに色々有ったんだよ」
「当然ね。遊びで真剣な場に入ってくる何て、言語道断で無礼の極みだもの」

柊は僕の言葉に満足してるかの様に笑ってる。一方、みんなは何だか不安な目でこっちを見てた。まあ当然の反応なのかも知れないけど……大丈夫、そういう気持ちを込めて僕はみんなに笑いかける。
「だけどさ柊、僕はそれでもみんなを仲間だと思ってるよ。信頼出来る仲間だと信じてる」
「嘘ね。それかそう思おうとしてるだけよスオウ」

柊の奴はそれはそれで痛いこと言いやがった。まあそんな時期も有ったさ。でも今は本当に違うんだ。回復魔法で胸の傷が治って行く。

ＨＰもみるみる貯まっていくのと比例する様に、体から重さが抜けていく。だから僕も、みんなと同じ位置まで歩み出る。

「柊の言いたいことも分かる。それは絶対に考える事だからな。意識の違い……でもそれってしょうがない事なんだよ」
「しょうがない？　それで済ませられる問題かしら？」
「でもそれは僕の都合で、僕の問題だ。考え方を押しつける事は出来ないし、知ってくれてるだけで良いんだよ。それに僕は弱いから、どのみち一人じゃ何も出来ない。
絶対にこの世界に居るみんなの力が必要なんだ。でもそのみんなに『僕は命を懸けてるからみんなもっと真剣にやってくれ』なんて言えるか？
みんなはずっと真剣だった。それなのそんな事を言うのは僕のワガママだ。誰もが同じ状況に居るわけないし、僕たちは人が同じ意識を持つのが難しいと知ってる。
他人から見たら理解できない価値有るもの、それと同じなんだよ」

九割……もう翼はほぼ完成してると言っていい状態だ。シンメトリー……なのかは微妙だけど、完成しだすとやっぱり綺麗な物だ。
けど僕はこうも思う。一部が欠けた儚い姿も、アレはあれで良いものだったんじゃないかって。儚い女の子って何だか魅力的じゃん。持論だけどさ。

まあ、柊の場合は羽が一枚無くなったって儚いには当てはまりそうもなかったけど……今と殆ど変わらず、力強いよ。その細い体を

目一杯伸ばしてさ。

「弱いから……それは納得してあげる。人間は弱く脆弱よね。でもいいの？　それじゃセツリは助けられないわよ。妥協なんて、負け犬のやること」

柊は僕がリルレット達と一緒にここまで来たのは、自分が弱くて仕方なくって思ってるんだな。塵も積もれば何とやらだから……って感じか。

でもそれは違う。ちゃんと僕達は、今や信じ有ってるんだからな。

「妥協なんてしてねーよ。なあ柊、仲間って何だと思う？誰もが同じ思いで、同じ方向を向いてなきゃ仲間って言えないのか？

僕はそうじゃないと思うんだ」

「それで人は真剣になれるかしら？」

「成れるさ。思いは違っても、少しの間でも同じ場所がみれるのなら、僕達は仲間何だ。それに余程の奴じゃない限り、そこに意識は生まれる。

仲間意識とか、人だからある思いやりとかな。それに思いは違っても、組むからにはそれぞれの目的が有るわけだ。ならそれは真剣だろ？」

僕のそんな言葉に、柊は眉をつり上げて否定する。

「だからそれは遊びじゃない！」

「それでも、それはそいつにとっての真剣だ。それでいいじゃん。そんな温度差なんて、自分の行動で変えていける。

だって僕達は仲間何だからな。互いの為に、この時は高めあえるんだ！」

言葉と終わりと共に、一度軽く翼が動いた。だけどそれだけで、吹雪の様な風が肌に直撃した。翼は……完全に完成してる。
そして多分、今のは動作確認か何かだろう。これから完全のアレと戦うと思うと、気が重い……と思ってたけど、向かい合って完成されたあの翼と今の力を感じると、別の事が頭から全身に駈け巡った。

（あれを……アイツをどうやって倒そうか……）

それを考えると、何だかワクワクしてる自分が居る。最初は本当に、嘆くしかなかった。圧倒的な力を見せつけられて、無理だと言う自分が居たのも事実だ。
けど今は、さらなる力の前で胸躍らせる僕が居る。おかしくなった？　そうかも知れない。でもこう思える自分がイヤじゃない。

僕は自分で「まだやれる」そう思ってる訳だからだ。きっと本当に絶望を感じたら、僕は焦るだけだったと思う。そして柊は、完成した氷の翼をその背に背負い、少し苛ついた様な声でこう言った。

「そう……ならその高めあえる力って奴を見せてみないさい！　どうせ、私には届かないでしょうけどね」
「届くさ！　いや、届かせてみせる！！　おまえに分からせてやるよ柊！　人も捨てたもんじゃない……こいつら全員、僕の仲間だってな！！
行くぞ！！」
「「「「……おおおおおお！！」」」」

周りで放たれた大き叫び声。少し溜まったのは、みんなが僕の言葉を噛み締めてくれたからの様だった。そして僕達は自らを奮い立たせて、もう一度強大な敵へと立ち向かう。

多分今までで一番強力な状態のセツリへとさ。今までで一番、強い思いをぶつけよう。

空に停滞してた氷の華。それが放たれた翼の攻撃によって次々と壊されていく。だけどあの華の特性は寧ろ壊れてから……白い特殊な冷気が空を覆って、ゆっくりとこちらに落ちてくる。
アレが完全に地面を覆ったら息さえまともに出来なくなる。そうなったらなぶり殺しにあうのは目に見えてる。倒さなくちゃいけない……それかあっちの冷気を吹き飛ばすか。

でもどちらも簡単じゃない。柊を倒すは言う間でもなく、あの冷気もそうだ。吹き飛ばすと言ったって、あの広範囲をどうやってって事になる。
下手をすると僕の二の舞って事もあり得る。そ・れ・に！

（別の方を見る余裕もないっ――か！）

六対の翼、その下半分は僕達を襲ってる。その翼に生える羽をまるで巨大な鋸の様にして迫り来るその様は、トラウマ物だ。
斬り裂かれる氷の地面がエグい事になってるよ。そんな中、今は柊の手には天扇まである訳だから――

「逃げてばかりじゃ私は倒せないよスオウ」

――攻撃のバリエーションが段違いだ。天扇の最初の機能……対象の行動の支配……それが僕を襲う。

「――――っつ！？」
「ほら、近づけさせて上げる」

僕に向けられた天扇をクイッと自分側へ返す。すると操り人形の様に僕の体は柊の方へ引っ張られる。そして待ち受けるは氷の翼。
瞳に映る羽の刃……それが真上から振り卸される。

（避けられない）

てか、体が自分の思うとおりに動かない。あれだけの攻撃力を持った攻撃……僕の防具や装備ではそもそも受け止められる次元じゃない。
セラ・シルフィングでなら流す事位は出来そうだけど、体の支配権を奪われた状態じゃそれも叶わない。迫る鋭利な翼の刃……煌めくその刃が僕に届く直前、複数の音がその翼にぶつかった。

「「でぇぇぇぇやあああああ！！」」
「てぇぇぇぇぇぇぇい！！」

片側から前衛組の一斉攻撃が炸裂する。すると僅かだけ羽の軌道が変わって僕の体を掠めて地面に突き刺さる。ズガガガ――と氷の地面を削る羽。
どうやらまだ諦めてない様だ。僕の支配もまだ溶けてないしピンチは続く。受け止める事は難しいから片側攻撃は良かったけど、やっぱりそれでも傷一つ付かないか。

僕が一度、一本でもその羽を欠けさせたのはどうやら結構な事の様だ。それにさ……ずっと「もしかしたら」そう思ってた事がある。
そしてさっきのみんなの攻撃を直前で見て、それは確信に変わった。氷なのに、幾らスキルを当ててもヒビ一つ入らない強度……いや、それは強度の問題じゃなかったんだ。
その時、他の羽がみんなを押し退ける。

「「「うあああああああああああ！！」」」
「みんな！！」

六対も有る翼……僅かな隙間を縫って成功出来たあの攻撃はほんの一時の刹那の瞬間。六対の残り十一は容赦なく襲い来る。
もう、奇跡なんか許さない……そんな柊の声が聞こえる様だ。動かない体、奇跡さえも願えない状況。みんなは必死にこちらを目指してくれてる。

だけど、それを柊は許しはしない。そしてみんなは今度はたどり着けはしないだろう。だってあの羽は……どうやらスキルを通さない。
いや……スキルをその透明な羽で吸い込むみたいだった。最初のライジング・バースト、あれも今にして思えば吸い込まれる様に消えていったんだ。

でもそれでも羽は砕けた……許容量は有るのかも知れない。だけどこの僅かな瞬間にその力を出すのはきっと無理だろう。
あれはだって無数に柊を切りつけたから倍増した威力での結果。三・四刃切りつけた程度のライジング・バーストじゃ砕けやしなだろう。

それに十二本の羽、全てを砕こうとしたら、一体どれほどの力が必要なのか……それはきっと途方もない。それこそ『バランス崩し』と称される武器が必要だろう。
でも、それはここでは不可能……そう言っているのと変わらない。だけど……諦める事も出来はしない。動かない体……この支配を解く方法は無いのか？

（どうにかして、あの扇子を閉じさせる事が出来れば……）

それが今までわかってる天扇のリセット方法だ。でも、翼に守られた柊にそれをさせる事は困難だろう。それにそれは結局、誰かに頼るしかないことで、良いようであれば奇跡って奴に頼ってる。

誰かが言っていたと思う。本で読んだのかも知れない。

『奇跡ってのは願う奴の所に舞い降りる物じゃない。諦めない奴の所に降る、きめの細かな粉雪の様な物だ』

ってさ。だからそれに頼ろうとしてる時点で、僕は終わってる。良くわかんないけど、奇跡を起こす条件に願いはないんだろう。

そして本当に綺麗な結晶の雪ってのは、一朝一夕では出来ない時間とかがあるんだと思う。願うことと嘆くことは、実は結構似てるのかも知れない。どちらも空の向こうの何かへ思いを馳せる意味ではさ。

でもその願いや嘆きを天まで届かせるのは結局の所、強い思い何じゃないか。思いは昔から国境を越えるし、人種も性別も越えてきたはずだ。

なら世界だって越えられる。強い思いは遠いどこかの誰かにだってきっと届くのかも知れない。でも届いた事が奇跡何じゃなくて、届かせた事が奇跡何だとしたら……きっと世界中の誰もが出来る事何だろう。

諦めない意志と強い心……そして信じあえる仲間が居れば……そいつ等が自分を信じてくれていれば、思いはきっと何十倍にだって膨れ上がって、空を昇るはずだ。

待って何て居られない……飛び立つ思いに乗って奇跡を掴む……それくらいやらなきゃダメなんだ！！

「雷放！！」

支配からの解放で自分からやれる事はもうこれしかなかった。結局はあの華の時と同じ。でも……どんな痛みにも耐える意志がこの胸には灯ってる。

「無理よスオウ。だって君を縛ってるのは完全なる外側の力だもの。君の体の機能がおかしくなったわけじゃない。
だからそれはただ痛いだけの無意味な行いよ」

確かにそうかも知れない。柊はこれから僕が何をしようとしてるのかがわかってる様だ。雷放はセラ・シルフィング自身から雷を発生させて、それを用途用途で臨機応変に使える良いスキルだ。
いろんな僕の意志をくみ取ってくれる。前は自身に刺したけど、今は体が動かない状態。だからもっと激しく強く、雷撃を放つ。
僕に再び狙いを付けた羽が見える。だけどそれは一瞥して柊の方へ視線をむける。

「無意味でも何でも、受け取った思いがある限り僕は諦める事はしない！　出来る事があるのなら、どんなに苦しくても耐えてみせる。
そして昇った空で、奇跡って奴を見つけてみせる！！　諦めない限り、離れていくこともきっと無いって思ってるからな！！」

両腕の剣のスパークが激しさを増していく。そしてそれは腕を伝って体全体を覆っていく。本当に無駄なのかも知れない。だけどただ願うだけじゃ何も起きそうに無いんだよ。
自分から進み出さなきゃ、この暗闇の出口には絶対にたどり着けないと悟ったさ。そして今の僕に出来る事はこれしかない。

動かない体で願う以外に出来る事……それは僅かな可能性に賭けて自分自身を傷つける事。前の成功例もあるし、自分で出来てみんなに頼るだけじゃないやり方。

もう僕にはこれしかない。感覚がどれだけリアルに近くなって様とも、この支配が解けるまで止めるつもりなんてない。

雷撃が体中を激しく駆け回る。体中の細胞が焼ききれる様な痛みが襲う。

「うあああああああああああああああ！！」

叫ばずにはいられない。何かで気を紛らわせないと、そのまま意識が飛びそうだ。でも……これでも体の自由は戻らない。

やっぱり、柊が言ったとおりなのか？　体事態を内側から操ってる訳じゃない……外側からの無理な干渉……だから内側を焼くようなこの行為は本当に無意味なのか。

（だ……けど……これしか出来ないんだ！！）

だから何が何でも止める訳にはいかない。だけど柊にはそんなのどうでも良いこと。真上に陣取ったその羽は無情にも振り卸される。

これが決まったらそれで終わる。それだけ僕の装備は薄くて、あの羽は強力だ。届かせる訳には絶対にいかない。ここでやられる位なら、自分のこの体を焼ききる方がまだましだ！！

ＨＰは減らないんだからな。

僕は雷撃を受けるなか、それでも大きく口を開ける。伝える言葉は柊や仲間達へじゃない。その言葉が向かう先は自身の両腕にある流星の剣だ。

「シルフィング！　遠慮なんていらない！　届かせない為だ！　僕

の全てを焼き付くせ！！」

その瞬間、刀身の流星が流れた気がした。そして放たれた雷撃はこれまでの比じゃない衝撃だ。体の全部が、本当に燃やし尽くされる様な感覚。

意識を保つ事が苦痛で仕方ない。

「がぁあああがががぁぁあががぁがぁあがががぁぁあ！！」

口から漏れる断末魔の叫び。だけど、どうやら翼は僕の体まで届いてない。全身から放たれる凄まじい雷撃が羽の進行を阻んでる。

「スオウ！　無茶だよ！　そのままじゃショック死しちゃうよ！！」

どこからかそんな声が聞こえてきた。でも止められない。この苦しみを拒んだら、すぐ後悔が襲ってくるのは目に見えてるんだ。

その死神の様な女がそこに居るよ。だから何を言われようと止められない。

（死なないさ……）

そう伝えたいけど、そんな余裕は全くない。次第に感覚がこの雷撃に溶けて行くみたいに感じてた。この苦しみはきっと罰だよ。

一度伸ばされた筈の手を払った罰。セツリは信じてくれてたのに……僕が信じれなかった罰なんだ。けどもう迷わない、もう裏切らないと決めたから……だから、こんな痛みに負けるわけに行かない。

そう、あの時……セツリにさよならを言われたあの時の痛みに比べたら……こんなの。

「それだけの力、幾ら何でも痛みをダイレクトに受ける君じゃ耐え

れる物じゃない。今この瞬間も浸透率は上がってるのよ。
間違いなく、死ぬわよ。でも優しい私は自殺になんかしてやらないわ。その意志に敬意を表して、今すぐ楽にしてあげる！！」

雷撃にかかる圧力が増した。氷の翼に雷撃が飲み込まれて行っている。このままじゃ真っ二つ。遠くでみんなの叫ぶ声が聞こえてた。
そして限界が近づいてるのか、僕の体の感覚はおかしくなってた。痛みが遠のいて……意識がやけにはっきりしてくる。翼の羽の数まで数えられそうな程だ。

本当に不思議な感覚……でもこれは……その時、雷撃を越えて僕の頭上に翼が舞い落ちる。吹き荒れる衝撃が周囲を満たす。
だけどそんな中にあるのは、残留の様な雷撃だけ。そして僕は……

「スオウ……なの？」
「それはどういう事なのかな？」

リルレットや柊の視線は今の場所より外れてて、震える声を発してる。どうやら僕は“そこ”に居るらしい。
もしかしたら今、僕は奇跡を掴んでる。

奇跡の掴み方（後書き）

第百三十六話です。
イクシードも使えないスオウの最後の手段……捨て身の行いで手に入った力は一体何だったのかは次回のお楽しみです。まあこれで勝てるのかは正直分かりませんが……諦めない心が僅かな光をくれたでしょう。
ＬＲＯは心を汲み取る……それの証明なのかも知れません。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

消えない証（前書き）

走って……走って……走った。するとようやく見えたのが、夜空にまでその熱量を届かせてるタゼホの現状でした。そして感じたのは二人の存在。私には分かった。見なくてもそこにいる二人の事が。

一度大きく息を吸って吐いて、もう一度走り出そうとした時、ドレスの裾を踏んでその場に倒れこんだ。煩わしいと思った。だから私は、この手でドレスを引き裂いた。

私も今度は蚊帳の外なんて居られないの！　ちゃんと話して、ちゃんと聞くよ。私達にはきっとまだそれが出来るって信じてる。

消えない証

「アイ……リ？」

燃え盛る炎の明かりを受けて、その人影は大きく肩を揺らしてそこにいた。随分無理をしたのか、髪は振り乱れて着ていたドレスの下部分は何故か無くなってる。

無造作に切り取られた様になってて、むき出しの足はその綺麗な脚線美を泥と土で汚してる。

でもどうして……いや、何でテツがアイリを連れてくるんだ？確かテツはスオウの方に付いて行った筈なのに……

「貴様の仕業か。モブリ風情に遅れを取るとは……その短い手足で一体何が出来た？」

アイリの姿を確認したガイエンが、テツへその腕を向けて言葉を紡ぐ。そこに静かな怒りを乗せて。そして二体居たテツの、ガイエン側の奴がカーテナの力に押しつぶされる。

だけどそれは幻影？　それはテツの得意なスキルの一つだ。て、事はやっぱりこっち側が本物。俺の視線を感じたんだろうテツは、俺に笑顔を見せて勢い良く振り返ってガイエンに言葉を返す。

「見ての通りの事だよ！　まあ勿論僕一人では出来ない事だったけど……彼女の勇気がこの道を開いたんだ！　向き合えよ。エルフの王に成りたい男」

その瞬間、ガイエンが自身の唇を強く噛みしめた。垂れ流れる黒い水滴。あれは……血なのか？　まさか……それじゃあガイエンもＬＲＯの深みに囚われてる？

セツリやスオウと同じ状況・・それがどれだけ危険かアイツはわかってるのか？　いや、そもそもそれを分かってるのか？

ガイエンの奴は自分から流れてる物に目もくれない。自分の体がおかしくなりすぎて、そんな些細な事は気にとめる事でも無いらしい。

でも……こっちからしたらそれは――

「っつ……きっさまぁぁ！！」

「アギト君！！」

ガイエンの叫び……そしてテツの呼びかけで俺は横に飛ぶ。その瞬間、地面が抉れる様に陥没した。それはカーテナの攻撃。

テツの言葉に逆上したガイエンが腕を振りおろしてる。赤い瞳が怒りにたぎり、その白い髪がワナワナと戦慄いてた。アイツの性格上、他の種族……特に小さくてひ弱そうなモブリに得意げにされるのは我慢ならなかったのだろう。

「アギト！　ガイエン……もう止めてよ！　何で……どうして私たちこんな事になっちゃったの？」

離れた場所からそんな言葉を紡ぐのはアイリだ。アイリは整わない息を押し込めて、再びこちらに来ようと走り出す。

「どうして……だと！！」

だけど、そう呟いたガイエンの一振りでそれは阻まれる。アイリ

に当たっちゃいないが、その直ぐ足下の地面が、俺達の場所と同じように抉れた。
ガイエンの赤い瞳が今度はアイリに向けられてる。
「ガイエン……」
「ははは、どうして……まあそうだろうな。お前はそう言うだろう！！」
ガイエンの腕が再び振り上げられる。ヤバいと思った。奴の視点はアイリに向いてるいる――ってことはあの攻撃はアイリの直情に降り注ぐ筈だ。
俺は槍を構えて、その炎を槍の左右の尽きだした部分から吹き出させる。
「止めろおおガイエン！！」
振り卸される腕に突っ込んだ俺の槍が突き刺さる。その瞬間、黒い血液が飛び散った。僅かだが苦痛に歪むガイエンの顔。だけどその瞳は直ぐにこちらに向いた。
「アギトオオオオ！！」
もう一方の腕が真っ直ぐにこちらに向かってくる。カーテナとかそんなの関係なしに、俺を殴り付ける気だ。だけどそれでもその力は付いてくるだろう。
「っつ！」
「やらせない！」
回避は間に合いそうに無かった。だけどテツがガイエンの腕を蹴

り上げてくれる。流石は俺の知る中で一番頼りになる奴だ。
モブリなのに「可愛い」じゃあ無く「格好良い」と思える逸材だ。
俺はこの間に槍を引き抜いて更にガイエンに迫る。

「お前！　今何しようとしやがった！！　アイリに何を向けた！！」

槍を素早く左右に振ってがら空きの胴体を切り裂く。だけどさっきと感触が違う……まるで影の様で、手応えが無い。
血も飛び散らず、槍が通った後が煙の様になってるだけ。そう言えばこいつ、自身も影に出来たんだっけ？　厄介な。

「何を？　この力で押しつぶそうとしたんだよアギト！！」

その瞬間、正面からドデカい衝撃を受けた。何とか槍で受けたが、体ごと後方へ押しやられる。

「アギト君！」
「大丈夫……テツ来るぞ！！」

何とか着地に成功した。多分攻撃を受けた瞬間に飛んだのが逆によかったんだろう。あの力は耐えられる物じゃないからな。
でもガイエンの傍に一人残ったテツがピンチ……と思いきや、あの小さな体と豊富なスキルが役立ってた。無数のテツにワラワラと押しよられてガイエンはやりにくそうだ。
そういえば、カーテナの特性上あれは近接戦向きじゃないもんな。

「煩わしいゴミが！　モブリ風情が飛び回れると思うなよ！！」

そう言ったガイエンの足下が揺らめいてる。アレは……

「テツ！　離れろ！！」

その言葉でテツ本体がガイエンの傍から素早く飛び出した。そしてその瞬間。足下から伸びてきた無数の黒い針が、その場に残ってた分身たちを串刺しにしていく。

やっぱりアレか。テツは知らないだろうが、俺達はその力を見てるから先に動けた。きっと声を掛けなかったら、テツもあの分身と同じ状況だったろう。

「なっ……注意するべきはあの腕だけじゃないってことだね。助かったよアギト」

「いや、これで貸し借りなしなだけだろ。てか、何でお前がここに来るんだよ？　今更だけど……」

ずっと疑問に思ってた事をここで聞いてみた。串刺しになってる沢山のテツの前で、テツ本体に言葉を掛けるってのは何だかシュールな光景だ。

だけどそんな思いも、分身たちが消えていく事で解消される。俺達はガイエンから目を離さずに、会話を続けた。

「それはスオウ君の指示だよ。彼が親友の為には彼女の解放が必要だと言ったんだ。それでノウイ君と共に彼女の捜索と救出に向かった訳だけど……ノウイ君はその戦闘でね。

悔しいが二人ではどうにも出来なかったよ」

「そうなのか……アイツ……自分だって大変な癖に戦力削りやがって……大丈夫なのかよ？　それにそれじゃあテツ達はどうやってここまで来れたんだよ？」

「それは――」

俺達はその瞬間、再び身構えた。何故なら、ガイエンの周りから湧き出た黒い針。それが大量に奴の周りを回りだしたからだ。
きっと何かやる気……だから悠長に会話を続ける事は出来ない。でも、良いこと聞けたよ。スオウの奴のバカさ加減とか、他にがんばってくれた奴の事とかさ。

向こうも向こうも大変だったって事は分かった。アイリは一体……何を決意してここに来たのかは分からないが、アイツも何かを乗り越えた事は間違いない。
あんなボロボロのアイリは、本当に久しぶりだしな。昔はもっと良く、一緒に泥まみれになってた……そうガイエンも一緒にさ。
黒い針はガイエンの周りを波を打って回ってる。その中からガイエンは唐突にこう言った。

「何をしてる親衛隊！　アイリを確保しろ！」
「え？」

呆けるアイリに白い甲冑が迫る。てかアイツ等、カーテナの力に巻き込まれて無かったのか。そう言えば後ろでカンカンやってた気がする。
それならセラ達もきっと無事だろうだから良いんだけど、まさかそうきたか。ガイエンの奴、この後に及んでまだ……だけどそれだけ諦められない思いがあるって事だろう。

「ちっ、逃げろアイリ！！」

俺はアイリの方へ駆け出そうとする。だけど俺の頭上を越えて黒い針が伸びてきた。

「アギト君！」

その声で振り返ると無数の針が迫り来てる。どうやらガイエンの奴は俺達をアイリの所へ行かせない気の様だ。

「ガイエンッ！　こんな事したって、アイリがお前の物になる訳じゃない！！」

「お前が私に上から物を言うか？　いや、アイリの事に関してだけはお前はいつもそうだった。だがそんなの関係ないな！

私が欲しいのは道具としてのアイリだ！　この仮想の夢に、お前達は一体何を幻想してる！！」

勢い良く降り注ぐ無数の針。これじゃあ、アイリの所になんて向かえない。カーテナも厄介だが、これはこれで……いや待てよ。

ガイエンの奴は別に同時に力が使えない訳じゃないんじゃないか？

何の為に腕が常に空いてるんだ。ガイエンを見ると、イヤな笑みを浮かべて、案の定腕を上げている。

「テツ！　デカいのが来るぞ！」

「ああ、そのよう――だ！」

俺達はその瞬間に別々の方向へ飛ぶ。何とか避けれたが、どうやら針は俺達を逃さない様だ。更にまだまだガイエンは腕を構えてる。

これはアイリの所へ向かう場合じゃない。気を抜いたらこっちが串刺しか、押しつぶされる。だけど……それでも気になる。

どうにかして……その思いが無いわけない。だけどそんな俺に気付いたのか、テツがこんな事を言った。

「大丈夫だよ！　彼女はそんなに弱い人じゃないだろう？　それは君が一番知ってるはずだ。それにここに居るのは僕たちだけじゃな

い。頼りになる仲間が居るよ。だから僕達が見つめるのは彼でいい！！」

そう言ってテツは腕を振りかぶったガイエンを見つめる。もの凄い風圧が肌に当たる中、その力の向かう方向にはセラ達が居た。

そして粉塵とともに爆音が響く。直撃……そう思った。だけどセラ達はその粉塵の中から飛び出して親衛隊に向かってる。

それはアイリを守る為……既にみんなは動いてくれてる。自分だけじゃない……みんながやれる事、出来る事に必死になってくれるんだ。

なら……今の俺に出来ることは……

「ガイエン！　お前の相手はこの俺だ！！」

迫り来る黒い影の針を打ち払い。炎を纏った槍で真っ直ぐにガイエンへ向かう。すると更に影を広げ、腕を掲げるガイエンが俺に向かってこう言った。

「良いのか？　親衛隊は強いぞ！　貴様の仲間ではアイリは守りきれん！！」

「そんな事無い！！　加護も何も無くたって、セラ達は弱くなんか無い！！　お前だってそれを知ってるはずだ！！

俺を闇から引っ張り上げてくれたのはアイツ等なんだからな！

そしてお前も親衛隊も、それを防げなかった！　それが事実だろ！」

そう、だから俺はここで走れてる。もう一度……そのチャンスを貰えたんだ。ふがいない俺に、諦めずに期待してくれたその心が、セラ達の強さの証。

その時、同じ場所でガイエンの攻撃を避け続けるテツが俺の言葉の後に続く。その表情に妙な自身を見せてだ。

「ああ、彼らが繋いでくれたんだこの時を！　それになガイエン。彼女自身の力をみくびらない事だ！」

「くくく……はぁーはっははは！！　そんな力は有りはしない！　カーテナを取り上げられたアイツは平民だ。何も出来ない！　何もなせない！　それが飾りの姫人形の正体よ！！」

ガイエンの高笑いが、赤が混ざる夜の空に響いた。そして俺も、実際不安は隠せない。だってアイリは何も装備してないんだ。

ここに来るまでに、テツから武器の一つでも渡して貰えば良いものを、本当に何しに来たんだよ。戦闘を進んでさせる気なんて無かったけど、戦場に向かうのなら最低限身を守れる装備は用意するものだろ。

何が起きるかわからない訳だし……アイリは絶対に狙われるってわかってる事だ。

まあ、俺が遅すぎた……ってのもあるんだろうけど、そこは弁明の余地も無いから勘弁だよ。本当はさ、もっと格好良く颯爽と騎士らしく助けたかった。

女の子が憧れる様なシチュエーションを作ってみたかった。スオウみたいにさ。だけどどうやら俺にはそれは柄じゃないらしい。

俺はいつだって遅すぎる。本当にどんだけ待たせるんだよって事だ。とうとうアイリをここまで来させて……情けなさ全快。

けど……だけど……どうやったってその無事な姿に安心した俺は居るわけで、そしてアイリの目がこっちを見てるのなら、負けることは許されない。

影の針と、両の腕から繰り出されるカーテナの力から逃れる。そ

れだけで実際一杯一杯だが、そんな中ガイエンの高笑いにもう一度テツが冷静に言葉を返す。

「なら、彼女の力をその目で確かめてみるんだね」

その妙な言葉。それのせいだろう、妙な間がその時広がった気がする。そして俺もガイエンも視線が自然とそこへ向く。

乱れた髪が風に靡き、裾も破れてボロボロだけど、不思議とその佇まいに気品を残すアイリへとだ。白い甲冑を纏った親衛隊が一斉にアイリへと向かってる。

セラ達も追いかけてるけど、足止め出来るのは後方の奴らだけで、しかも数は親衛隊の方が多い。さらには親衛隊はガイエンによって加護を受けてる。

それによってセラたちに掛ける数は少数だ。アイリはあっと言う間に囲まれてしまう。

「ガイエン様を煩わせないで下さいアイリ様。貴方はただ籠の中に居れば良いんですよ。それが人形の役目でしょう。

持ち主に愛でられる様にそろそろ理解しましょうよ。そうしないと大変ですよ。我々はあの方の傍らに貴方が選ばれてる事を、必ずしも快く思ってる訳じゃないんですから！」

親衛隊の一人がアイリに向かって武器を構える。その言葉から察するに、抵抗するなら多少の攻撃は厭わない……そういう事だろう。

だけどそれを堂々とガイエンが居る前で言うとはな。それに対して当のガイエンは何も言う気は無いらしい。つまりはアイツの言葉を容認したって事か。

そしてそんな言葉を受けたアイリは黒く成ってる親衛隊の面々を

見つめて呟いた。

「……そうなの？　私はガイエンに選ばれてるの？　フッケル君……私はその言葉を信じて良いの？」

アイリが唐突に出した誰かの名前が俺はわからない。けどその反応は直ぐに返ってきた。少し伏せた目のアイリに、僅かに苛つく様な反応がさ。

「信じて良いか……だと？　いいや、どうして自分の名前を……」

「知ってます。貴方だけじゃないですよ。右隣の人がザビエル君で、その隣がナポレン君です。左側はオバッチ君で、そのまた左がクレパンさん」

次々と名前を挙げていくアイリ。その度に、僅かな反応がここからでも見て取れた。それはつまり当たってるって事だろう。

まさかアイツ、全て……って訳はないだろうけど、軍に入ってる人達の名前は覚えてるとか言う気か？　そしてどうやらそんな考えに親衛隊も至ったようだ。

「まさか、全員の名前を覚えてるとでも？」

「はい。お飾りの私が出来た事。迷惑かけてばっかりだった私が、この国の為に出来ることはこれだけだったから。私はずっとふさぎ込んでました。

そんな私は、頑張ってくれてる誰もに感謝してたから……だからみんなの事を、ちゃんと覚えておこうと思ったの。いつか『ありがとう』を返したかったから」

澄み渡る様なアイリの声は、一体親衛隊のどこまで届くのか……一瞬でも沈黙したこの状態は、それがある程度は染み込んでると思

っても良いのだろうか。
それにアイリの奴は本当に……良くやるよ。アルテミナスの誰が、お前を責めるんだ。今目の前に居る奴らは、凄い極小派なんだ。
だけどアイリは、幾ら否定されたってそれでも切り捨てるなんてしない。目の前の奴らとだって、向き合って話してる。
けれどそれでも、やっぱりと言うべきか再び親衛隊は動き出す。
「はは……それがどうしたと？　ふがいないと自覚してるのならアルテミナスのためにその位置を大人しく譲ればいい！！
ガイエン様なら、もっと強く強大で盤石な国を作り上げてくれる！　侵略戦の後の勢いを強引に断ち切った貴方とは違ってね！
結局貴方はその場所が惜しいんですよ！　惨めにも居座って、国を弱らせたのは貴方なんですよ！　それなのに、返すのは『ありがとう』だけ？
甚だ笑える思考回路をしてますよ！！　お遊び……そう思わずには居られない！　高見に昇れたオモチャは手放せないものですよねアイリ様。
たまたま選ばれただけの癖して！！」
「アイツ！！」
腹から煮えたぎる思いが掛け上る。言わせて置けばって奴だ。それにアイリがそこに居続けたのがお遊びで、オモチャだと！？
どんな思いでアイリが居たかなんてお前に語られたくない。その口で！　その軽い言葉で！
逃げ出した俺が言える事では無いのかも知れないが、それでも許せない事はある。俺は反転して駆け出そうとした。
けどその時、俺の直ぐ横の地面が左右とも同時に吹き飛んだ。

「また死ぬぞアギト。良いじゃないか、確かにたまたまだろ？　アイリをカーテナが選んだことは」

両腕を降り下ろしたガイエン。脅しのつもりかよ。流石にそろそろ、この音にも衝撃にもイチイチ反応はしてられないぞ。

それに当てるつもりなら、こいつは容赦なく当てるだろう。それをしなかったって事は、今はアイリが追いつめられてる姿を堪能でもしてるとか。

化け物じみたその姿で、人を追いつめたいとか悪魔だなこいつ。それにガイエンも、間違った事を言った。自分でも分かってた筈の事を否定しやがった。

俺は巻き上がる粉塵の中、振り返ってガイエンを見据える。

「たまたまだって？　お前本気でそんな事言ってるのか？　あの親衛隊のバカは何も知らないから別段、間違った事を言ったって流してやるよ！　しょうがない事だ。知らないんだからな！

だけどお前は違うだろう！　あの日、あの場所で起こったこと全てを体感してる。だから分かる筈だ。いや、分かってる筈だろガイエン！

あの時、カーテナがアイリを選ぶのは当然だった！　あれはきっと必然だ。俺たちはそれを受け入れただろ。たまたまなんて訳ない！

カーテナはアイリが自分自身で掴み取ったんだ！！」

燃える様な思いで俺はそうガイエンに告げる。本当はこいつ、自分の姿や認めたくなかったこと、そんな事とかから目を逸らしてるんじゃ無いのか？

平気そうな面をして歩いてる……それがガイエンだから……今ならあの頃は分からなかったそんなガイエンの事が分かる気がする。

何となくだけど……アイツはもう戻れないんじゃ無いのか？　立ち止まることも、悩むことも止めた。突き進む事は自分を信じきる事でやってきたこと。
だから……止まり方を忘れてる。
ガイエンは大きく両腕を高らかに掲げた。そして強調するのは球体の中心に据えられたカーテナだ。

「だが！　そのカーテナはここにある！　私自身の中にな！　これが必然だよアギト！　カーテナは私自身に力と共に溶けていく！
この感覚……馴染みよう。カーテナも喜んでる様だとは思うだろう」

ガイエンのそんな言葉と共に、黒い影が空へと立ち上る。その光景に親衛隊が声を上げた。

「「「おお！！」」」
「あれが我らの望んだ王！　自分の無力さがわかるでしょう？　カーテナは最早貴方の手から放れたんですよ。価値のない人形をそれでも愛でようとしてくれるあの方に、早く頭を下げる事です」

赤い夜はそれでも次第に黒が多くなって行ってる様に見える。轟々と燃えてた周りはカーテナの影響か、炎のたぎりが弱まってる。
そんな中、僅かに照らされたアイリは首を振る。

「それは……出来ません。私はふがいない王だけど、何も出来ないと思ってたけど……教えてくれた人が居ます。私が王で居て良いと言ってくれた人。
勇気を振り絞ってそれを伝えてくれた人。その人によると、私にはまだ沢山の思いがこの背にあるの。だから……何も投げ出しません！

それが王の責任だから！！」

力強い言葉。そしてアイリは片腕を前へ突き出した。

「私はアイリ・アルテミナス……それはまだこの国の王。その証を今見せます。親衛隊、貴方達を私は騎士とは認めません！」

消えない証（後書き）

第百三十七話です。
そろそろアギトの方もスオウの方も決着に近づいてますね。アイリの介入で不利でしかなかった戦況もようやく変わるかも。最後に権限を使用したし、次はいよいよ反撃開始かな？
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

雷体の心技（前書き）

全ての感覚が研ぎ澄まされた様だった。視力も聴覚も嗅覚も……はてさては第六感って奴までも冴えわたる気がした。自分の体なのに……感覚を果てしなくリアルと共有出来た筈の体だったのに……何だか今はそこだけは遠く感じる。いや、何て言うか体がひどく曖昧何だ。

けどそれは無理もない事なのかも知れない。この状態はやっぱり奇跡って奴で、付ける名前すらなく、存在だって物凄く希薄な感じ。だからだろう、この状態はまだまだ完全とは程遠い物なんだと思う。

だって、厄介な問題が有ったんだから。

雷体の心技

「まあ、何でもいいわ。何をやろうと、私は君を潰すだけだもの。あの子がもう、悩まなくて良いよう……泣かなくて良いように」

そう言って柊は、他に回していた翼も一斉にこちらに向けた。輝く羽が、大きく開いてその刃を突きつけようとする。

だけどその瞬間、僕の視界がブレる。すると向かってきた筈の翼の側面を眺められる位置に僕は居た。

「ん？」

何が起こったか実際まだ自分でも分からない。一瞬体重を片側の膝に掛けた……んだけど、すると何かに引っ張られる様な感覚に襲われた様な気がする。

そして気付くと移動してる。これは信じれない速さだ。イクシードでもここまではどうだろうか。それに体がやけに曖昧な様な……光が痛いくらい目を打つんだ。

すると直ぐ近くから聞きなれた声がした。

「え？　あ！？　スオウ？　どうやって……って何かバチバチ言ってるよ」

「リルレット？　うん、確かに何かスパークしてるな」

視線をリルレット同じ所に向けると、そこでは青白い光がバチバチ鳴ってた。それは僕の体とリルレットの剣の間で起こってる。

それはまるで引き合ってでも居るようにも見えなくない。一体何が？　すると隣のリルレットが僕を見つめて、震える声を出す。

「ねえスオウ……その体はスキルを発動してるからだよね？」
「体……」

そう言われて僕は自身の体に目を落とす。すると初めて気付いた。自分の体が雷放の雷撃を纏ってるって事に。いや、違うのかな。
僕の体がどうやら、雷放に呑まれてる？　もっと言えば、その雷撃と解け合ってる感覚だ。青い光を纏い、その光その物に体も成ってる……それなら、この一瞬の移動も頷けるかも。

イクシードはこの身に風を纏えるけど、風その物に成る訳じゃない。それに風と雷なら雷の方が早いだろう。だけど……どうしてって思いは消えない。
だって僕にこんなスキルは無かったはずだ。それにこれがスキルとしてあるのなら、イクシードと対等クラスなのは間違いない。

イクシードは風を……これはセラが付いてから加わった雷をメインに据えた物。いや、イクシードは雷も加えれたしその分を考えれば、これは完全雷化とかそんな感じだ。
スキルにも無いことがこの身に起こってる……これはまさに奇跡って奴なのかな？

「シルフィング……」

そう言って両の腕を見ると、そこにセラ・シルフィングとしての形は無くて、ただその形に雷が成ってる。そしてその部分が一番激しく弾けてる場所の様だ。
それにどうやら、一番近かった腕の部分はセラ・シルフィングと同じ状態にまで成ってる。二の腕の先から形は見えなくて、ただそこに拳を感じるだけだ。

「まぐれ……じゃないみたいね。あの無茶な行いは、天扇からの解放が目的じゃ無かったって事かしら？　その姿……まるで雷にでも成ったみたいね」

こちらに向き直った柊が、その背に翼を戻してそう言った。何だかもう理解したって顔してるなアイツ。こっちはまだまだ全然状況が飲み込めないってのに、何なんだよ全く。

言っときたいけど、こんな事に成るなんて予想外だ。青天の霹靂なんだよ。まさに僕は天扇からの解放に賭けてたんだからな。

「雷にでも成ったみたいね」――それはその通りでしかないよ。本当にどこまで、この体は雷になってしまってるんだろう。

一体どこまで、この仮初めの体はまともなのか……だって、常に雷に包まれていて、それと同じ様に成ってるって、自分がどういう風に認識されてるのか不安だ。

僕はスオウのままで居られてるよな？　本当はもう雷の塊の存在とかにされてたらショックだったりする。僕はだけど取りあえず、敵に焦ってる所を見せる訳にはいかないし、勝手に思惑通りと思ってくれるのなら、それで良いと思いのっかった。

「はは……どうやらさ柊。今僕は奇跡を掴んでるみたいだよ。それも降って沸いた奴じゃない、自分自身で手繰り寄せたこれからに繋がる奇跡って奴だよ！！」

実際よく分からない状況を自信満々に言ってみた。まあ何一つ嘘は言っちゃいないがな。この今の姿は、僕が必死に手繰り寄せた奇跡以外の何物でもないだろう。

僅かな可能性に賭けて自分を傷つけて、開いたのはあったけど気付かなかった扉なんだ。それがこの力……そう思う。

さっきから妙に冴え渡る意識の中さ……これだけは間違いなく思ってた事がある。この姿に不安も感じたり、戸惑ったりもするけど、今こうやって感じる力の沸き立つような感覚。
自分自身が雷と言う膨大なエネルギーを内包した存在であること……それが紛れもない自信を生んでたりする。感じるんだ。
今なら、柊と渡り合えると。あの理不尽で埋め尽くされた存在と肩を並べられると思えてしまう。

「奇跡……そんな物、ほんの一瞬に過ぎない瞬間でしかないわ。奇跡程度でたぐれるこれからがどれほど短いか、その体に教えてあげる。
私を……ううん私達を奇跡程度で越えられるなんて思わない事よ」
「随分と奇跡を軽く言うじゃんか柊。僕だってただの偶然を奇跡と履き違う事なんかしない。そこにはさ、価値の違いがあるんだよ。
奇跡ってのは、奇跡足り得るだけの現象ってのが起こるもんだ。今、この瞬間の僕自身とかさ……偶然で起こる事じゃきっとない。
それにただ縋ったんじゃないから、これは起きたんだ。今のこの奇跡がどの程度かは、その身自身で確かめて見ろよ！！」

取りあえずやるしかない……そう思った。もうこの起こってしまった現象が奇跡であると信じてさ。それに沸き上がる自信とかは偽りでもハッタリでもない。
今しかない……そう体中が叫んでる。

「言われなくても、ちゃんと潰してあげるわよ」

その瞬間、大きく開いた羽から無数の氷がこっちに向かう。それに今回は天扇も使って向かってくる間に、冷気を通らせて氷が巨大化させやがった。

それぞれの氷が人一人分はある位に成長してる。でもそれでも今の僕なら……

「スオウ！」

「大丈夫……の様な気がする。だから行ってくる！！」

驚愕するリルレットの声に、僕は自信を乗せた声を返す。そして僅かに地面を踏みしめて蹴ってみた。

その瞬間、閃光の様に体が流れる感覚に陥った。体が軽い……それはまるで感じれない程にだ。向かってきてた氷と僕は刹那の瞬間に交わった。

でもあまりのスピードにまだ馴れない僕は何も出来ない。でも十分だった。雷速は空気を擦り、更に雷を周りに作る。それらが周囲に放たれて、僕が通った後には一瞬のスパークと、氷が砕け散る音が響いてた。

（イケる！！）

確かにそう思えた。だけどそれを思ったのは仲間の傍らでだ。確かに真っ直ぐに柊を目指した筈何だけど……もしかしたらと、薄々思ってた事が脳裏をよぎる。

もしもそれが僕の考え通りなら……さっきの考えは浅はかとも言えるかもしれない。てか撤回の余地ありだ。

「はぁはぁはぁ、あれ？　お前いつの間に……ってまあいいや。なんだかスゲー事だけは分かるからな。勝てるよなスオウ？」

雷を纏った僕を見て、理解じゃなく感覚で話してくれる仲間。説明のしようもないし、それは助かる事……だけど、紡でくれた言葉

に声がつまる。
勝てるか……いや、僕だって勝ちたい……と言うか負けるわけには行かないんだ。何の為に、誰のためにここまでやってる？　諦めきれないから、僕は奇跡までもその手に掴んだんだろ。
なら思い切って言ってやろう。今なら僕はその自信を見せれるから。この奇跡に、問題はありそうだ……けど、だけど、柊を追いつめれる力はこれ以外にきっと今はない。
だからそれを使う僕が弱気を見せちゃいけない。奇跡ってのは儚い物だからな。手からコボレない様に、しっかりと心を強く保たなきゃだ。
自分に言い聞かせる意味でも、僕は仲間に言葉を返す。

「ああ、必ず勝つ！　それは絶対だ！」

すると安心したように一度大きく息を吐く仲間。気付くと僕の体と、今度はこいつの斧がバチバチ鳴ってる。僕は形の消えたセラ・シルフィングを構えて再び飛び出した。
雷が尾を引いたように見える一瞬……衝撃波と共に僕の体が消え去る。そして今度は何も無く、誰もいないぽっかりと空いた場所に僕は到達していた。

そこは僕が目指した柊の居る場所とは全然違う。これはもう確定的だ。取りあえず、先に確かめる事が先決だとは思ったけど、これはやっぱりって感じだ。
向けた体も、飛び出す先も関係ない……この状態はどうやら――
（着地点が定まらない）
――らしい。それはもの凄く雷らしい事ではある。今の僕はどう

やら、どこに落ちるか分からない……予測も完璧には出来ない……落雷と同じ状態なんだ。自分自身でもそれを把握することは出来なくて……今まで仲間の場所に行けてたのは、きっと流れ易い武器を持ってたから。

電気は流れやすい方へ向かう傾向があるから、リルレットやみんなの武器にこの体は引き寄せられたんだ。バチバチと体が反応してたのがその証拠だろう。

そしてたまに何も無い所にだって雷は落ちる……それが僕が今ここに居る訳だ。柊の所に向かってもなかなか行けなかったのは、アイツは氷で、武器も扇で、鉄を含んだ物を持ってないから何だ。

だからこそ、周りにある鉄の武器にこの体は引き寄せられる。でもこれじゃあ、全然まともに攻撃出来ない。全く持って大問題だ。

威力もスピードも申し分ない……これまでで最高クラスなのは間違いない。柊ときっと対等にやれる力……でもそれも矛先を向けられないんじゃ意味がない。

「おい！　どこ行ってんだ！」

そんな言葉が背中に刺さる。こっちも好きでこんな所を目指した訳じゃないっつ～の。

「向かってこないの？　それで私に何を見せてくれるのかしら？何もやらないのなら……ここで静かに眠りなさい」

そう言って柊はその翼を自身の前に延ばしてる。それは今までとは違う事をやろうとしてることだと分かった。湖の氷が光を放ちそれらが柊へと集まって行ってる。

そして六対の翼が作り上げるのは真っ白な雪の様な光の玉だ。優

雅にして微細なその光球の周りには、自身の放つ光で周囲までもがキラキラと見える。

あの光球事態が冷気でも放ってるのか、多分だけどあれはダイヤモンドダスト……その現象だと思う。プラスをマイナスにとことん変換する奴だ。

そしてどうやらそれを落とす事に限界なんて柊は無い。天扇とそのコードがある限りは……多分。臨界点に到達した光球はその姿を崩しては再生を繰り返す様に瞬いてる。

崩れさる部分は雪と成って大気に舞っていく。見取れる程に美しい……そう思わずには居られない光景だ。だけど暢気に見取れてたらやられるのは道理。

あれはもういつ撃たれてもおかしくない状態だ。柊の髪が冷気の中で靡いてる。そしてトリガーのように天扇がこちらへ向けられた。

（来る！！）

その瞬間、光球は十字に割れた様に見えた。でも認識出来たのはそこまで。僕は雷の速度でその場を離脱する。どこに行くか分からない移動……だけど避ける事は確実に出来るだろう。

そこだけはお墨付きだ。

「スオウウウウウ！！」

「何？　リルレット」

「うわあぁ！？　って、うわぁあああだよ！！」

何か二度同じ様なリアクションで驚くリルレット。まあ無理もないけどね。だってさっきまで僕が居た場所は例の光球によってもの

スゴい光の渦に包まれている。

そして当然、リルレット達はそこに僕が巻き込まれてる物だと思ってただろうからね。その当人が気づかぬ内に隣に居たとなると、そりゃ驚くよ。

何か幽霊を見た感じの驚き方だったしな。

「え？　え？　いつの間に……ってそのスキルの賜何だよね？」

「さあ、実際これがスキルかどうかも分からない。けど、問題は一つ分かってるんだ。どうやらさ……この状態だと落雷と同じみたいでさ、自分じゃ進路を決めれないみたいだ」

「えぇ！？　何それ？」

更に驚愕するリルレット。僕もビックリの衝撃の告白だよ。まあ、この段階で再びリルレットの場所に来れたのはラッキーだった。

もしかしたら自分の電位と、リルレットの波長は合うのかも知れないな。

「何だかそんな格好良く成ってるのに……何かガッカリ」

「ガッカリとか言うな！！」

カッガリなのはこっちだよ！　奇跡を掴んだと思った。だけどそうだったんだ。このＬＲＯの神様は、とことん僕を虐めたいんだった。

それを忘れちゃいけない。自分が知ってる……思い描いてる奇跡をくれる訳がない！

「随分楽しそうじゃない」

そんな声が聞こえて、僕達二人は同じ方向を振り返る。するとこ

ちらを向いてる柊が居た。そして二人同時にきっと悪寒を感じたはずだ。
まさか二発目でも撃つのか？　そう思った。だけどそな面倒な事はしないらしい。もっと単純で、そして簡単な事をやりやがった。
「え！？　それこそ嘘だよね？　あれだけの砲撃を動かすの！？」
「今更だリルレット！　柊に自分達の理屈を当てはめたって意味なんて無い！」
地響きと共に迫る砲撃。だけどそれはもう、砲撃と言うより横から迫り来るから壁の様だ。柊の奴は意図も簡単に砲撃をそのままこちらに移動させて来やがる。
逃げる……その選択肢しか無いけど、それじゃみんなを巻き込む事に成る。もしもあのエネルギーが切れる事がない……なんて成ったらその内絶対に捕まってしまう。
そうなって一体何人が耐えれる？　いや違うな……もう誰も、犠牲になんてしないと思った筈だ。負けたくないから、僕は今……こうなってる。
（考えろ！　なんの為の雷化だ。攻撃を当てるにはどうすればいい？　着地点が定まらない……それが原因。でもこうやってリルレットの所には二度も来れてる。
武器……鉄……そして僕は電気。定まらないのなら示せばいいのかも知れない！）
体の全てが電気と化してるからか、思考の巡りが恐ろしく早い。電気信号が神経を伝うんじゃない、電気そのものが全部を伝えてくれる。
迫る光の壁に、僕達の影は小さくて、そして酷成ってる。光と闇

は表裏一体なんて言うけど、この光は全てを飲み込めそうだ。

「スオウ逃げよう！！　このままじゃ直撃し……う……」

「どうしたリルレット？」

いきなり言葉が途切れた……と言うか呂律が回らなくなった感じに見える。それに肩を押さえて震えてる？　そして唇も見る見る青くなってる様な。

「寒い……」

僕はその言葉で察した。そうだったんだ。この砲撃はダイヤモンドダストを起こす程に冷えた空間を作り出してもいた。

それは今も変わってないんだ。だからこの砲撃の周囲は身も凍る様な冷気が渦を巻いててもおかしくない。それにリルレットは当てられたんだ。

（くそ、どうやらこの状態なら僕には冷気は関係無いみたいなのか。実際これは相当良いけど、そのせいで気づけなかった。

僕はこの目で見てた筈なのに！）

寒さなんて本当に何一つ感じない。てか全身が雷と成ってる事でむしろ常に痛い位だ。バチバチと体が弾ける感じが常にある。

でもそれでも無警戒過ぎた。リルレットには何だか霜が降りてるし、これじゃあここから離れる事も難しそうだ。けど光の壁は容赦なく向かってくるし、自分はどこに移動できるか分かった物じゃない体……ある意味絶対絶命のピンチでは無いだろうか。

けれどそれでも迷う時間さえも惜しい。どのみちこれもやるしかない事だ！！

「リルレットしっかりしろ！　ほら背中に乗れ」
僕はそう言ってあっと言う間に動けなくなったリルレットに背中を貸す。どうやら声は聞こえてる様。だけど意志に体が付いて行ってない状態だった。
それでも何とか首に腕を回したリルレットも背に担ぎ、そしてついでにその剣も借りる。今は腕が腕として機能しない状態だから、セラ・シルフィングで地面に落ちてた、細身の剣を叩き上げる。
「ちょっとだけ借りるぞリルレット」
「……うん」

弱々しいリルレットの声だった。けどそれでも了承は貰えた。リルレットの剣は、きっと正しく僕の道を示してくれる筈だ。
跳ね上げた剣が空中で弧を描いてその刀身を妖しく光らせてる。そして描く軌跡を途中で僕は阻む。雷と化したセラ・シルフィングでリルレットの剣をある方向へ向けて軌道を変えたんだ。

そしてそのある方向ってのは当然、柊の佇む方向だ。この制御の効かない体では、こうするのがきっと一番だろうと思う。
この体の為の道を作ってやる……それしかない。柊に向かって横回転する剣。それに柊も気づいてる筈だけど、奴はその余裕を乱すことはない。

必ずどこか、僕達より一段高い場所から見下ろしてる感覚……今からそこから引きずり卸してやろう。バケバキベキと砲撃の影響で崩れる氷の地面。
その影響で一瞬体がぐらついた。落ちそうになるリルレット……それをくい止める為にも僕はどこにでもない方向へ地面を蹴った。

（多分……これでも行けるはずだ！！）

すると次の瞬間、僕はリルレットの剣の横にその姿を現してた。そしてそれは天扇を構えてる柊の正面だ。

「――っつ！　スオウ……」

一瞬開かれた瞳孔。そして急いだ様に腕を動かすけど遅い。ここまで近づければ、もう消える必要なんて無いんだ！

「くっ――らえええぇぇぇぇぇぇ！！」

雷と化してるシルフィングが吠える。今までの風とは違う、今度は雷の轟きだ。青い光が線を引く……そして次々にスパークを繰り返す。

けどそれは柊自身の体までは届いてない。何故なら柊はとっさに天扇を畳んで、制御を外したからだ。するとそれまで真っ直ぐに進んでた砲撃が、急に形を崩しだして氷の地面にめり込んでいった。

そしてその影響は近くを走ってた僕達にも来たわけで、だから僕が斬ったのはどうやら砲撃の様だ。使い手を失った攻撃は次第に細く小さく成っていく。

だけど、その余波は大きく……それを無くす事で使える駒も柊には増えていた。いやな迫力を伝える六対の翼がそこにはある。

「このまま何もしなくても君は死ぬんだろうけど……それじゃあ、余りにもよね？」

「何の事――だっ！」

静かに口を開いたから会話でもやるのかと思ったら、いきなり羽で攻撃された。吹き飛ぶ僕とリルレット。だけど僅かに付いた足を踏ん張って向きを変えると、僕は再びリルレットの剣の側に来ていた。

今度は背中に回ってるけど好都合。リルレットの剣が柊を通り過ぎてたのが原因か。でもそれは完全なる死角――の筈なのに、柊は僕の攻撃を翼で受ける。

「何！？」

「甘いわねスオウ。ここは私の領域。見えない物なんて無いわ。幾ら君が早く動こうともね。それに良いこと……ううん、君にとっては悪いこと、私にとっては良いことに気付いたわ」

六対の翼の攻撃をその場で落としながら、僕は柊の言葉が気になった。なんだって？　一体何に気付いたって言うんだ？

イヤな感じがした。だから僕は後ろに飛ぶ。すると案の定、役目を終えていたリルレットの剣の所にまた飛んだ。滑ってたんだろうな、丁度良い距離が空いてるよ。

僕は柊を見据えてその言葉の真意を問いただす。

「どういう事だ！？　悪い事、良いこと？　もっとハッキリ言えよ」

僕の言葉に、柊は横顔に氷の微笑を覗かせる。そして冷え込む空気の中それは耳に届いた。

「気付いてないのね。その奇跡……決してタダじゃないようよ。この意味が分かる？　つまりその力……君の命を食べてるわ」

その時、目に映る僕の命の残量は、赤い領域にまで踏み込んでた。

まさかこれが奇跡の代償……

雷体の心技（後書き）

第百三十八話です。
掴んだ奇跡はこれでも奇跡と呼んでもいいのかな？　と思うほどに不完全！　だけど攻撃力もスピードもこれまでの最高値なのは間違いない……けど行きたいところにいけないって大変です。
とことん自分はスオウを苦しめたいみたいです。だけどスオウなら、この力を必ず奇跡と呼べるものにしてくれるでしょう！
てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは～。

想いで作られる道（前書き）

向かい来る親衛隊……彼等は前に見た人たちと全員が同じ状況に成っていた。黒い肌に赤い瞳。それは向けられるだけで毛が総毛立つ様な感覚に襲われる程。だけど私は、ここに足手まといなりに来た訳じゃない。

全部を知って、そして再び前へ行くためにここに来たんです。だけどそれは一人では出来ないかもしれない。でも大丈夫……私は私を信じて、そしてここにいてくれてるたった一人の友達で親友のあの子が、私の元にきっと一番に来てくれるから。

想いで作られる道

向かう親衛隊にアイリは叫んだ。その上品な口を目一杯あけて力強い言葉をだ。だけど……それにどんな意味があるのか俺には分からない。

そしてそれは親衛隊も同じなんだろう。奴らが止まる気配はない。奴らはその黒い肌と赤い瞳をたぎらせて武器を構える。

「くくくはぁーっはははははっは！！　まだ分かってないのか？貴方に認めて貰う必要なんて無いですよ！！

我らの主は唯一人！　ガイエン様だけなのだ――」

途切れる言葉……何が起きてるのかそれは一目瞭然だ。そしてこの場所からでも分かるほどに明白な事。奴らをまがまがしく見せてたその黒い肌……それが戻って行ってるんだ。

「――なっんだ……コレは！？」

親衛隊はどうにも出来ないその現象に足を止めるしか無くなってる。喚くような声が至るところから上がってる。それだけ信じれない事何だろう。

そして一番声を荒げたのは他でもない、ガイエンだ。

「何をした……何をしたんだアイリ！！」

声にさえ圧力があるかの様な叫び。俺達も思わず足を止める。でも既にガイエンの意識は完全にアイリの方へ向かってるから、攻撃が来ることはなかった。

丁度いい……実際、俺にだってこれは衝撃だ。だってアイリは今

はカーテナを所持してないんだ。だけどやっぱり、アイリがやったとしか思えない事でもある。

あの宣言の直後だからな。今はもう親衛隊共は完全に黒い肌は消え去り、夜の闇や炎の明かりの中でも光ってた赤い瞳さえもただの目に戻ってた。

妖しく光ることは決してない目。そして動揺の中心で一人佇むアイリがガイエンの言葉を受けて口を開く。

「何をしたか……それはちゃんと伝えた筈ですガイエン。私はただ使っただけ……この国を統べる者の権限を」

するとそんなアイリの言葉を聞いて、ガイエンが激しく体を奮わせて反論した。

「誰が！　この国を統べてるだと？　それは間違いなく私だよアイリ！　あの時からずっとそうだった！　そして今や見ろ！！

カーテナは私の手の内にある！！　これぞその証だろう！　全てを奪われたお前のどこに、王足り得る死角があるか！？」

ガイエンの叫びが黒い夜空に染み込んでいく様だった。火事よって熱せられた空気が、この場に風を運んでくる。今のこの場にはもう、ガイエンのその瞳しか光ってない。

「確かに……今の私に、こんなボロボロの私のどこに見捨てられない理由があるかは正直分からないよ。でもねガイエン。

もしかしたらカーテナは、王が持つ武器でしか無いんじゃないの？　だからこそ、私はまだこの国に見捨てられてないのかも知れない」

「ふざけるな！　カーテナこそ王の証だろう！　この圧倒的な力は

王だけに与えられ物の筈だ！！　お前はカーテナを手にした事で王に成ったんだ！！」

それは今まで見たことないガイエン。何かを必死に守るようとでも言うのか……取り合えず、あの状態になってから初めて見せる焦り？　いや、畏れかな？

けどガイエンがここまで声を出す理由も分からなくはない。だって俺もカーテナ自体が王である証だと思ってた。どうしてガイエンが頑なにカーテナにこだわってたのか。それは、王に成るにはカーテナが必要不可欠と考えてたから。

そして実際、カーテナを手にして誰も寄せ付けない程の強さをガイエンは手に入れた。アイリよりも上手く使ってるし、アイツが望んだ上位種にも成れたんだ。

全てが順調で、まだ完全に公表はしてなかったがガイエンの中ではもうその気だったんだろう。自分が『王』である気。

だけどそれはアイリによって否定された。カーテナを持ってもいない……それどころか武器一つ携えてないアイリが今この場で、カーテナによって掛けられた筈の加護を外したんだ。

そんな事が出来るのは、唯一カーテナを扱う者だけの筈。そしてそれは王であり得る立場でしか無い筈だ。

「確かにカーテナは王家の象徴の剣です。私はカーテナがあったから、入城も出来たしこの国を操れる立場になった。

けどねガイエン。カーテナは武器でしかやっぱり無いの。王の道を切り開くための武器。それにガイエンは、私から王位を剥奪したわけじゃない。

それなら、私がまだ王なのは何の不思議も無いはずだよね」

「――ぐっ」

痛いところを突かれた感じのガイエン。そういえばそうだったな。カーテナを持ってるから、てっきり王であれてると思ってたけど、セラの情報じゃまだ自分自身を王って宣言はしちゃいない。
確かこの戦いの後にでもやる予定何だろうけど、それなら今はまだアイリが王でおかしくない。けれど、アイリが言いたかった王の証とか、その証明とかはちょい違う感じだ。

「カーテナは決して、持つ者を王にしてくれる剣じゃない。王で有る者に振るわれる剣なのよ。わかりづらかったけどきっとそう。
だからねガイエン……幾らカーテナを騙して力を奮っても、アルテミナスは間違えなんかしない。私がこの国の王だって！！」

するとその時、加護を放たれた親衛隊の一人が動いた。そいつはさっきまでアイリに執拗に絡んでた奴だ。アイリとガイエン、二人の会話でどうしても耐えられない部分でもあったのか、奴はその口から大きな言葉を漏らしてる。

「それがぁ！！　それこそがぁあ！！　全ての間違い何だぁあああああ！！」

大気が震える様な叫び。これだけの思いを持って忠誠してくれる奴もガイエンにいるらしい。それは結構スゴイ事だと思う。
だけど、今の親衛隊は加護があったときと比べたら、余りにも普通だ。そしてだからこそ、今まで届かなかった手が届く。

親衛隊の剣がアイリを突き刺そうとしたその瞬間、黄金の矢が人垣の隙間を縫って奴の剣を弾いた。甲高く響く金属音……何が起こったのか理解出来てない親衛隊は、その場に立ちすくみ呆然としてる。

そしてそんな親衛隊に降り懸かる声と無情の刃が更に追い打ちを掛けるべく煌めいた。

「間違いだった……訳ないわ！！　アンタにアイリの何がわかるって言うのよ！！」

沢山の刃だけがむき出しに成ってる武器をセラは携えていた。そしてその刃は全てが紐で繋がれてる。あれもあの可変式武器の形態の一つ何だろうか？

分からない……けど、色が同じ黄金色してる所を見るに、多分そうだろう。セラはその武器で一気に一番アイリに近い奴の所まで飛んでる。

大きな円形状の紐に沢山付いてるむき出しの刃。それらを上手く使って周りの親衛隊でも踏み台に使ったか。親衛隊だって実際は加護を失ったからって、そんなに簡単にセラ達に遅れを取るような実力じゃない筈だ。

だけど今の彼らはボロボロだ……体がじゃない、大きな自信を失った事でそうなってるんだ。そして頭上に飛んで叫んだセラは、その手の武器を眼下の親衛隊に降り注ぐ。

降り注ぐといっても、投げた訳じゃなく、その武器の奇怪な姿と特性を生かした連続攻撃って感じだ。

「ぐあああああああ！！」

断末魔の叫びが辺りに響く。むき出した刃は一つ一つ性格に急所を突いていった。流石セラらしくえげつない。

苦しげな叫び……だけどそれでも倒すまでには至らない。親衛隊の奴をアイリから遠ざけただけ……だけど、今までに無いくらいに

ＨＰの減りが見える。
加護があったときは堅かった。でも今は通した分だけのダメージがきっちりと通る……その事実がみんなのやる気を促してる様だ。
セラだけじゃない……アイリを助けようとしてくれてたけど、親衛隊の妨害にあって立ち往生してたみんなが決起盛んに動き出す。
数では圧倒的にまだ不利なセラ達……だけど、加護の喪失という事実はとても大きい。
「セラ……ありがとう」
アイリは自身の前に立つセラにそんな言葉を掛ける。それは自分をずっと思ってくれてたセラへの素直な気持ちだろう。
そしてそんな言葉を受けたセラは、振り返りその場にひざまずく。
「いえ、すみませんアイリ様。私はアイリ様のその力が無かったらここまで来れませんでした。本当にありがとうございます……私の役目を遂げれる様にしてくださって。
そして本当に……ご無事で何よりです」
それは美しい主従関係に見える光景……だけど次第にセラの肩はフルフル震えて、そして何かが決壊でもしたかの様にアイリへと抱きついた。
「もうもうもうもうもう！！　私がどれだけ心配したか分かるアイリ！？　それはもうカレーの福神漬けを見るだけに止める程だったんだから！！」
「あはは……随分安っぽい心配だったんだね。セラが福神漬けをカレーのメインに置いてるほどに好きなのは知ってるけど伝わりにく

いよ」

アイリの空笑いが俺もよく分かる。何で福神漬け何だよ。アイツの意外な好物とその言葉のミスマッチ差にどうリアクションをとればいいのか分からない。

やっぱりアイリの様に笑うしかない……頬がひきつる笑いをさ。まあでも、あれがあの二人の本当の関係何だろうな。

「安っぽくなんかない！　福神漬けは世界で一番おいしんだからね！　私にとっては無くては成らない物！　そういう事なの！

もう！　こんなに汚れて……アイリはいつだって綺麗にしとかなくちゃいけないのに！！」

「うん……うん……ありがとうセラ。でも大丈夫だよ。それにね……私はこういう格好も嫌いじゃないよ。みんなと一緒に戦ってる……そう思えるもん」

抱き合ってる二人の間には友情とかそんなのしか見えないな。アイリの格好にプンスカしてるセラとか、それを優しく窘めるアイリとか……実は二人のああいう姿は始めてみる。

いつだって人前では立場ってのを意識してたからな。だからこそ、ああいう二人を見ると改めて「良かった」そう思う。

「アイリが戦うなんて……私達がもっとしっかりしてたらそんなことしなくても良かった。私はアイリを守りたいからここに居るの！

その為に、侍従隊とか作ったし……でも結局は何も止められなかった。私はやっぱり三人の物語の脇役でしか無いのよね」

「そんなこと……そんなこと無いよセラ。私が今までＬＲＯに居れたのは責任だけでも、アギトだけでも無い！　だってそうでしょ？

アギトはどっか行っちゃうし……責任は誰にも渡せない……そえでもどんどんどんどん重くなる。平和に成ればなるほど……大きく

なればなるほど。
ガイエンはそっち方面でよくやってくれたけど、それでも話し相手には成ってくれなかったもの。だからセラがずっと居てくれて私は救われました。
今日まで何も放り投げずに来れたのは、セラが私の……たった一人の友達に成ってくれたからだよ！」

弾けるその笑顔が、セラには見えてるのだろうか。頬を伝うその大粒の涙は、瞳の大部分まで膨らんではこぼれ落ちてる。
そしてそれは笑顔のアイリもそうだった。まだ早い気はするが……安心、それがセラの言葉や温もりでこみ上げたのかも知れない。

暗い空に、燃えカスと化しつつある炎の中で、その涙は一際美しく輝いて見える。だけど不意にセラはアイリの肩に顔を埋めて変な事を言った。

「嬉しいふぇす……でも、だから……ごめんねアイリ。ごめんね……の事……」

何を言ってるのか肝心な所が聞こえなかった。だけどアイリはその言葉で瞳を見開いた様な気がした。そして僅かに細めた瞳で、激しくぶつかりあってる親衛隊と仲間達の戦闘の合間を縫って、俺に視線が届く。
でもその意味は俺には分からない。

「ううん、いいよ。だってそれってしょうがない事だもん。それに私は例え相手がセラでも負けません。友達として、親友として勝負します！」

負けないとか勝負とか、そんなに堅く抱きしめ合ってるのに会話

がおかしい気がする。何で勝負事の話に成ってんだ？
俺が遠くからアイリの視線の意味にも会話の意味にも突いていけない中、セラは顔を上げた。
「勝負はしない。しませんよアイリ様。だって最初から私の入り込む隙なんて無いんですから。それに……ちょっと良いな～って思う人も実は至りいなかったり……」
「本当！？　私、親友の為にすっごく応援する！　絶対に！」
何だか顔の赤いセラに、瞳を輝かせてるアイリ。何かどんどんこの状況を忘れてないかアイツ等？　こっちは実はずっと冷や冷やしてるんだぞ。
さっきから視界の端ではガイエンが自分の体を壊す程に拳を握ってるんだ。そしてその黒い血がタゼホの地に染みに成って行ってる。
アイツは心優しくその光景を眺めてない。多分さっきのアイリの言葉を自分の中で拭い去ろうとでもしてるんだろう。だけどそれが決壊したとき、あの二人の綺麗な光景が惨劇に変わる事は間違いない。
けどそれを防ぐために、俺とテツは視線を交わしてる。その時が来たら素早く動ける様にだ。でも願わくば、まだ後少しの間は、ガイエンには自分の世界に浸ってもらってたい。
「ありがとうございますアイリ様。だけどやっぱり難しいかも……何で私はまた、運命の赤い糸に自分が端にも引っかかって無さそうな人に心引かれるのでしょう」
「運命の赤い糸……そ、そんなの自分に繋ぎ合わせちゃえば良いのよ！　うん、私が私だから許してあげる！　自信を持ってセラ。いつもみたいに！
貴女の後ろに付いてるのは何たって私ですからね！」

何だか随分と強引な事を言ってるアイリ。だけどあんな潮らしいセラは初めて見たな。アイツもアイツなりに苦労してたんだと初めて知った。
いつだって楽しそうにＬＲＯをやってる奴だとばかり思ってた。まあ世話焼きだし、気苦労はしそうなタイプだが、それと並列して腹も黒いし相殺されてるものだとばかりな。

けど案外セラは女の子だったらしい……まあ実際が何歳かは知らないけど、多分そうアイリと変わらない筈だ。そしてアイリは久々に真骨頂を発揮してる。割と頑固な所とかな。
上に立って、いろんな事があってから遠慮がちに見えてた姿とは今は違う。

「もう、しょうがないですねアイリ様は。いつからそんなに頑固でワガママに成ったんですか？」
「私は実は、お嬢様だから元から頑固でワガママ何ですよ。今までは猫を被ってました。だけど親友の為には脱ぎ捨てましょう！」

猫を被ってた？　そうじゃなくただいろんな物に押しつぶされてただけだろうに。けれど今、ああやって笑ってるアイリを見てると少しは救われた気になる。
自分がやったことが許されたわけじゃない。それはこれから直ぐにでも償う機会が来るだろう。だけどそれでも、今この瞬間、少しだけでも前へ進むためにご褒美を前借りだ。

あの顔を、今度はこっちに向けて欲しいってさ。で、ここら辺で気づいたけど、お互い何故か立場の喋り方に戻ってる。
あれは本当に気を許した場所でだけの事なのだろうか？　思わず出てしまった感じだから、人前の今は戻した感じ何だろう。それか

二人ともちゃんと分かってるのかも知れない。
今はまだやるべき事があるってさ。

「もう、仕方が無いですねアイリ様は。でも……そんな貴女だから誰もが認める王に成れるんです。という訳で、私の事は置いときましょう。
それよりもまずは、アイリ様が幸せに成れる様に頑張ります！
まだ私にもやれる事がありますから」

そんなセラの言葉にアイリはこの戦局を見渡した。当然俺達の方も。そして二人して涙を拭いて体を離す。

「そうだね……まだ終わってない。みんなみんな戦ってくれてる。ここも、そしてアルテミナスも。みんなが待ってる。
もう私は目を逸らさないから、今度はちゃんと胸を張るから、だからまだ私を守ってくれますか？」
「仰せのままに。私の中の王は、一度だってブレた事は有りません。貴女だから、私はここに居るんです。
そう……元々主役に成りたかった訳じゃない。あの頃輝いてたアイリ様を見て、凄いと思った。私はきっとああいう人には成れないけど、その傍でこう言われる人に成りたかったんです。
『あの子が居てくれて良かった』ただそれだけで、私は満足でした」

セラは言葉と共に、親衛隊側へと向きを変える。そしてその黄金色の武器を再び携えた。すると後ろからアイリが口を開く。贈り物の様な言葉と共に。

「それなら……もうとっくに成ってます。セラ……貴女が居てくれて私は、本当に良かった」
「ありがとうございます……」

僅かに俯いたセラの顔は見ることは出来ない。だけどその声は僅かに震えてた様に思う。そしてそんな二人に親衛隊がやけくそ気味に二人ほど向かう。
流石にシルク達だけじゃ、幾らテンションに差が有るとは言っても全てはまかない切れなかった様だ。だけど今、セラに向かうのはある意味自殺行為だ。

奴らとは確固たる物の違い……それがセラには見えてる気がする。セラの体を回る奇妙な武器。それによって親衛隊の攻撃は凌ぎ弾かれ巻き取られて行った。
そして体に巻き付いた武器が親衛隊の体を刻む。倒れ込む二人は、ある程度のダメージもあってかそれで戦闘不能に陥った。

「セラちゃん！」
「シルク様。行けます！　これなら」
「うん、そうだね」

合流したシルクも今の状況に手応えを感じてる様だ。風がこちら側に吹いてきてる気がする。

「初めまして……って言うのもおかしいですね。シルクと言います。アギト君とスオウ君の仲間です。そしてこの子はピク」

ピクはそんなシルクの紹介に応じる様に空で旋回する。ピンクに白が混じった翼がキラキラフワフワと舞い落ちる。

「私はアイリ……恥ずかしい姿ばかりを見せてますね。だけどお願いします。この国の為にお二方の力ももうしばらく貸してください！」

「勿論です。本当は誰も傷つかなければそれが一番何ですけど……私の魔法は誰かを治せる力だから、それが届くのなら誰一人、国も国境も関係なく見捨てません！」

それはシルクらしい言葉。人の幸せが好きで、誰かを助ける事が喜びなシルクには理由なんていらないんだ。確実に俺達が押し始めてる。

あのアイリの宣言から風は傾き出してる。この流れを断ち切らない為に、そしてこのまま乗って俺が成すべき事……それはこれしかない。

「テツ……悪いけど、お前もセラ達に加勢してやってくれ。数じゃ圧倒的に不利なんだ。お前の本領発揮だろ？」

「な！？　確かにそれはそうだが、君はどうする？　見たところ彼女の一声でもガイエンには効果は無いみたいだよ」

確かにガイエンは黒いまま。その異形姿を保ってる。だけど……

「それでも……いやこれだけは、俺が付けなきゃ行けないケリなんだよ。頼むテツ」

勝てる保証があるわけじゃない。寧ろ逆の方が高い。でもこれだけは他の誰かを巻き込んでも任せても行けない事だ。

そして同じ時に、セラ達も動き出してる。

「さて、今から私達全員で道を開きます。その間にアイリ様は向こう側へ。やれるよね？　シルク様、それにみんな！」

「勿論です！　ね、ピク」

「ピクゥ～！」

「うおおおおおお！！」

誰もがやる気全快、迷いなんて無い。

「みんな……」

「決着を付けて来てください。そして幸せもちゃんと掴まないと駄目ですよ。私達は貴女の道に成ります！！」

一斉に開かれた一本の道。それはこちら側に繋がってる。だけど綻びもあった。気合いだけではどうしようもない数の差だ。

その時小さな影がこちら側から飛び出した。

「やれやれ、必ず勝てよアギト！　主役は君だ！！」

そう言い残してテツは行く。そして入れ違いにアイリがこちらに手を伸ばす。俺達はようやく、その手を重ねて同じ場所に立つ事が出来た。

それもみんな、ここまで俺達を支えてくれた全ての仲間のおかげ。

想いで作られる道（後書き）

第百三十九話です。
これで舞台は整った感じです。アイリとアギト……そしてガイエン。三人の結末はどうなるのかお楽しみに。頑張ります！
てな訳で次回は月曜日に上げます。それでは～。

奇跡と少しの知恵と（前書き）

意識をすると見えてくる。そこにある命の残量。それが今、柊の言葉で僕の瞳には映ってる。細長いそのゲージの半分以上……いや今や四分の一以外は空欄と化している。

そして残ったその僅かな赤いゲージも、少しずつゼロへと向かって進んでた。

奇跡と少しの知恵と

「ＨＰが減ってる……」

柊の言葉で気付いたそれは、まさに命のタイムリミット。どうやら毎秒一桁づつＨＰがこの雷に食われてる。確かに柊が言うように、何もしなくてもこのままじゃあ僕は終わってしまうんだろう。

それが奇跡の代償……でも、だからって……

「スオウ！　駄目……このままじゃ駄目だよ！　早くその状態を解いて！」

抱えたリルレットの叫びが耳に届く。実際、発動の仕方は分からないけど、この状態の解き方なら何となく感覚で分かってた。

きっと、諦めればいいんだ。そしたら奇跡は、手のひらからこぼれ落ちていくんだろう。だけどそれは……全てを諦めてしまう選択じゃないか！

僕は首を振ってリルレットに言葉を返す。

「出来ないよ……それだけは出来ない。これ以外に、どうやってアイツを倒せるって言うんだ！」

「倒せないよ！　まともに進む事も出来ない癖にどうやって戦うの！？　頑張るから！　私達ももっと頑張る！　でもスオウ君が無理して倒れたら駄目なの！！」

背中から激しく腕に力が込められる。今の自分は全然痛くないけど、その思いは締め付けるみたいに心に伝わった。

だけどその時、そのリルレットの言葉を聞いて柊が真っ先に口を

開いた。

「そうなんだ。どうりでさっきから読めない動きしてると思ったけど……制御出来てないのね。あははは、とんだ奇跡ね。
それじゃあ役になんて立たないじゃない。その子の言うとおり、早く解かないと死ぬわよ」

ありがたい忠告を敵の筈の僕にしてくれる柊。でもそれは余裕があるから言える事だ。アイツはこの事実を知って更に僕を下に見てる。
てか気付かれちゃいけない事だったよな。まともに移動出来ない何て舐められて当然だ。そしてそれを役に立たない……そう思うことも当然。

誰もがきっと言うだろう、早く解いた方がいいと。でも僕には……それは出来ない。それに柊にこう言われちゃ、何としても一死報いたい。

「はは……ご忠告どうも。だけど心配するなよ柊。この雷……ちゃんとお前に届かせてやるよ」
「スオウ！！」
「そう？　じゃあ早くしないと手遅れに成るわよ。私に殺されるか、自身の雷に命を吸われ尽くすかしてね」

背に居るリルレットは再び叫び、言葉を紡いだ柊はその翼をまたも大きく展開する。六対の内の半数を直接攻撃に、後の半数は遠距離から攻めてくる。

「――っつ！」

僕は一歩を踏み出してその場を離脱する。バチッと弾ける音と共に姿を消して、次に現れたのはヒーラーの所だ。こいつは珍しい、雷属性の杖を持ってるから引かれたんだろう。

「うお！　って本当に一瞬だね。でも今ここに来てくれた事は丁度良い！」

一瞬僕の出現に驚いた様だけど、ヒーラーはすぐさま回復魔法を詠唱する。どうやら周りで、みんなはそれぞれ僕達の会話を聞いてくれてたみたいだな。

まあでも確かにこのタイミングで二人居るヒーラーを引き当てられたのはラッキーだ。これで無くした分のＨＰを回復すれば何の問題も無いじゃないか。

「スオウ前見て！」

背中のリルレットの言葉で前を見ると、柊の奴が用意してた氷柱を一斉にこちらに放ってた。しかもそれらの氷柱が今までと何か違う。

ただ翼から放たれて真っ直ぐに向かってきてた今までの動きじゃない。必然的にかわす必要も無い奴とかが今までは有ったのに、今度は全てが操られたように半円を描くようにして向かってきてる。

それはつまり――柊の奴が操作してるって事だろう。

「そこね。もう逃がしてあげないわ。ランダムなら私はこの目を最大限に使うだけ。言ったでしょう？　ここは私のフィールドだって」

「くっそ……また天扇か！」

そして僕の予想は当たってた。迫り来る氷柱の波の向こうから、天扇を操る奴が見える。どうやらその力は自分自身にも有効らしい。

天扇は指した対象をその支配下に置ける武器……だと今までの経験上思う。それで翼が生み出した全ての氷柱を支配下に置いたって事か。

今までは一度に一つの物しか操れないと思ってたけど、それは間違いかも知れないな。今は無数の氷柱を操ってる訳だし。

迫り来る氷柱の波は三方向に分かれて向かってくる。上と左右……大量の氷柱が半円を描いて向かってくる様は、氷の竜が襲い来る様にも見える。

だけど邪魔される訳にはいかない！　回復魔法は生命線だ！　だから僕は完全雷化してる両腕のセラ・シルフィングを胸の前で構えて勢い良く左右に広げた。

「うおぉらあああああ！！」

気合いの叫びと同時に、振るった武器から大量の青い放電が辺りに放たれる。それらは三方向から向かってた氷柱を全て砕き落とした。

雷によって一瞬で蒸発とかさせられた氷柱の冷気が肌を撫でるように流れてく。その先では、些か驚いた様な柊が見えていた。

そして背中に居るリルレットもそれは同様だったらしい。

「凄い……あれだけの数を一撃でなんて……」

「やっぱり手放す何て出来ないな。それはきっと簡単に出来るけど、次はもう無いと思う。みんなが頑張ってくれる事を疑う訳じゃないんだ。

今のこの力……この奇跡は……もう既に、みんなの頑張りのおかげなんだよ。だから僕は手放したく何か無い。ＨＰが続く限りはさ」

僕の言葉に、リルレットは無言で腕に力を込めた。それがどういう事かは分からないけど、次の瞬間にはそこに有ったはずの重さと温もりが離れる間隔があった。

「本当に、スオウは変だよね。自分が一番危ないのに、何で真っ先に危険を請け負おうとするのかな？　もっと自分を大切にしたほうが良いよ」

振り返ると地面に足を付いたリルレットの姿があった。あの砲撃も消えたから、急激な体温低下はもう無いみたいだ。それにもしかしたら、雷化してる自分が背負ってたのも案外効果が有ったのかも知れない。

「そうかな？　誰かがやらなきゃ行けないことで、原因が自分にあってみんなを巻き込んだのなら……それを背負うのは自分自身の役目だと思うんだけど？

それにさ、今の状況じゃ誰もが同じ条件でやってるよ。誰もここではＬＲＯをただのゲームだなんて思ってないだろ。

みんなも覚悟を決めてる。エイルがあんな事になった時から、次は自分かも知れないと思ってる。だから今はもう、僕だけが特別なんかじゃないんだ」

「それは……そうかもだけど……」

リルレットは胸の前で握った拳を胸に押しつけてる。何かを言いたいんだろうけど、僕から顔を背けて息を吐くだけだった。それはリルレットだって例外じゃないから。

「よし、では回復魔法行きます！」

「頼む」

「ええ、自分はヒーラー。そんな全員の命を預かる身ですから。大

丈夫、誰も死なせません！」

そう言って振るわれる杖。自身の足下から浮かぶ魔法陣は、淡い光を上昇させる。これで時間は延びる筈……そう思った。

だけどその時……バチッと足下から雷撃が放たれる。そしてそれは自身の足下の魔法陣を打ち消した。

「なっ！？」

「い一体何するんだ君は！！」

「違う！　僕じゃなく勝手に……ってまさか」

その時思い至った考えは実際最悪な物。だけど……これはそうとしか考えられないのも事実。僕はヒーラーとリルレット、双方と顔を見合わせる。

すると二人の顔も何だかよくない事を考えてた顔だって今の僕には分かる。てか何だか、波長っていうものが感じれる気がするんだ。

微弱な電波の違いみたいな？　テンションとかでそれは微妙に伝わり方が違う。それはこの状態だからだろう。だけどその特殊過ぎる態勢がきっと、外からの干渉を受け付けない様にしてる。

「回復出来ないって事？」

震える声でリルレットが僕が思ってたことを口にする。そんな言葉に僕は頷く事しか出来ない。

「なんだそれは！！　それじゃあ自分の存在意義は何なんだ！　く……それじゃあダメだ！　回復を受け付けないのなら、今すぐその力は手放すべきだ！！」

ヒーラーが食いかかる様に僕に詰め寄る。確かに回復出来ないの

なら、リスクが高すぎるかも知れない。そしてそれにリルレットも加わってきた。

「そうだよ！　ダメ……回復出来ないのならやっぱり容認出来ない！　それがなくてもきっと何とかなる！　だから止めて、お願い！！」

二人の心配する思いは、この状態の特性で痛いほど伝わってくる。けど……何とかなる？　そうは思えない。だって――その瞬間僕は後方に剣を向けた。そして放たれる雷撃が、再び向かって来てた氷柱を砕いた。大量の冷気が一斉に弾ける。

けど同時に変な臭いもした。強力な電撃だから、酸素がオゾンにでもなったのかも知れないな。するとその行動に二人は目を見張ってた。

どうやら二人は、この力の事に夢中で気付いて無かったらしい。

「うそ……さっき完全に死角だったよね？」

「見えるはずのない攻撃をどうやって感知した？」

二人して同じ様な質問だ。だけどこれで少しでも理解してくれるのなら……そう思って僕は口を開く。

「別に……全ては電磁波とか電界の影響かな？　この状態では常に周囲にそれらを放ってたりするわけだよ。だから見なくても感じる。そこに触れたり、ある一定の領域に入るとさ。これはもうそういう感覚としか言いようが無いけど……つまりはそういう事だ」

実際は自分でも不思議な感覚なんだよね。自分がレーダーとかに成った気分を多分味わってる。それか今まで第六感として何となく

感じてた領域が、より広がったって感じでもいいかも知れない。
まあそれよりもずっと正確な訳だけど。でもこればっかりは成ってみなきゃわからない感覚だ。だから信じて貰えるか心配ではあったけど……二人は意外にあっさりしてた。

「そっか、雷だもんね。そういう事が起こってもおかしくないかも……それにスオウだし」
「確かに……君ならだからそういう事もあり得るかも知れないな」

何だか二人の僕を見る目が非常に気になる言葉何だけど……二人して何で「僕だから」で納得するんだよ！

「おい、その見解ってすっげ～不満何だけど」

僕はジトーとした目で二人を見据える。でも二人はそんな視線はあっさりとかわすして言葉を続ける。

「だってイクシードも実際そうだけど、驚く事をするのは柊達だけじゃないよ。私たちにとってはスオウだって十分規格外なんだから。
でもそれは無理してるって事だよね。セツリちゃんを助ける事が絶対なのはわかるけど、それでスオウ自身が倒れちゃったら意味ないんだからね」
「ああ、その通りだよ。君も確かに規格外な所があるけど、奴らとは違う。生きてるんだ。その影響は計り知れないだろう。
万が一があったら、沢山悲しむ人がいるんじゃないか！？」
「悲しむ人……」

そう言えば、そういうの今まで考えた事無かったかも知れない。それは自分が死ぬなんて、実はそう考えて無いわけで……でも一度あったな。それを身近に感じたこと。

もしも、本当に自分が死ぬなんて事が有ったとしたら、真っ先に思い浮かぶのは日鞠の顔だ。アイツはきっと泣くだろう。それにアギトだって……悲しんではくれると思う。

それに意外と生真面目だからな……僕がこのＬＲＯで命を落としたら、きっと責任を感じるだろう。最悪な想像……それはもう戻らない日常になるのだろうか。

瞳の裏に映る大切な幼なじみの顔。いつだって傍に居てくれて、それはこれからも変わらないと勝手に思ってたけど、僕はもしかしたら勝手にそれを終わらせようとしてるのかも知れない。

（そうなったら……怒られるかな？）

何となくそう思う……だけど、その声は違うことを言ってる気がする。自分の中の日鞠はきっとこういう奴だってさ。

『スオウは決めたんでしょ！？　あの子を助けたいんでしょ！　ここで諦めたら誰があの子を救うの！？　後悔しない生き方を選ぶ！　私たちの約束だよ！

だからきっと大丈夫！　私がいつだって祈ってる。だから安心して、でも全力全快で道を開こう』

耳元で聞こえるそんな言葉。日鞠は多分、僕が死ぬことも怒るだろうけど、セツリをここで諦めた事もきっと怒るだろう。

それにやっぱり何を言われたって辞める気は無い。心配してくれる心だけはありがたく受け取るだけにしとくよ。僕は詰め寄る二人に視線を向けて口を開く。

「確かに、悲しんでくれる人は僕にも居る。だけここで諦めたらきっとそいつにも怒られるよ。そう言う奴で、僕はそいつにはだけは嫌われたくないんだよ」

僕の言葉がこの寒い空間に染みていく。するとリルレットはブルブル震えてこう叫んだ。

「バカァ！　バカァバカァバカァ！！」

それは僕も隣のヒーラーもビックリするほどの勢い。だけど大きく肩を揺らす仕草が収まっていくと、その熱がスーと引いていくのを感じた。

「リルレット……ごめん。でもセツリだけじゃない。僕はエイルだって助けたい！　それにはこの力は絶対に必要だ。

僕を心配してくれる心は受け取るよ。とってもありがたい。大丈夫、命が尽きる前に決めればいいだけだろ」

「やっぱり……類は友を呼ぶって本当何だね。スオウもそうだけどアギトもそう……それにリアルのその人も……みんなバカばっかりだよ。

もう……あんな思いはしたくないのに。エイルは助けたいけど、もう誰ももしもになんか呑まれないで欲しい。だってとっても苦しいもん！

幾ら心を強く保とうとしても、とっても重い不安がいつまでも拭えない……それがとっても苦しい」

胸を押さえて、逸らした瞳に僅かに浮かぶ涙が見える。そうだよな……リルレットはずっと無理してた筈だ。だってエイルはリルレットの相棒だ。

リルレットも無理してない訳がない。本当は誰よりも柊を倒した

いと願ってる筈だ。けど、だけど……それよりも僕の身を案じてくれてる。

それにもう一度それが……いやそれ以上の事が起きるのが怖いのもわかる。僕だって死ぬのはイヤだし。だけどだからこそ、見せなきゃいけない事があると思う。

今ここで立ち止まったら、全部がこぼれ落ちる。まあ、エイルは実は大丈夫なのかも知れないけど、それでもこういう時にこれから、リルレットが立ち止まる事しか出来なく成ったら……それはきっと駄目なんだ。

その時、リルレットの言葉を聞いていたのか、後ろから唐突に柊が入ってきた。僕がこれから言葉を掛けようと思ってたのにだ。

この開いた口をどうしてくれるんだあの野郎。

「人は苦しみや痛みを抱えて生きる。それってとっても不幸な事だと思うわ。苦しいのなら、そんなの捨てちゃえばいいじゃない。それが出来ないのなら、忘れちゃえばいいのよ。いつか変わったり終わったりする関係なんて辛いだけ。それならもういっそ、何も求めなければいいじゃない。

厄介なリアルでは何一つ、上手くいくことなんてないんだから」

氷柱は効かないと悟った柊が、次の攻撃に移ろうとしてる。何をする気かはわかないが、取り合えず今の言葉は訂正しておこうじゃないか。

何が捨てちゃえばとか忘れればいいだ。それはやっぱり柊が人じゃないから言える事で……理解してないから投げれる言葉だ。

そこには何の重さも責任も無い。僕は柊の方へ僅かに顔を向けて言葉を紡ぐ。

「お前は……やっぱり何も分かってない。いや、そもそも理解する気が無いんだから当然かも知れないけど、僕達の中の出会いや時間は、ただ頭のメモリに刻まれる訳じゃないんだ」
「おかしな事ね。人に脳以外の記憶媒体が有ったの？」

そう言いつつ、柊は六対の翼それぞれを任意の位置へと突き刺して行ってる。そして僅かずつだけど、翼が振動を始めた様に見える。
一体何が目的だ？　頭で柊の狙いを考えつつ、続きを紡ぐ。

「あるさ。僕達人は、心にも刻むんだ。忘れたくない大切な事を。そしてそんな大切な事は、忘れようとしたって忘れられない……それにさ、苦しかったこと辛かった事だって時間が経てば掛け替えの無い物に成ったりするものだ。
確かにお前が言うように上手く行くことなんてリアルじゃそうそう有るものじゃない。向こうには理不尽が溢れてるんだろう。特にセツリとかにとったらさ。
でもだから、お前達はここをセツリの理想郷にでもする気かよ」
「そう、その通り。この世界から人間を追い出して、自我を持ったＮＰＣだけがあの子に無償の愛を与え続ける。誰も何も、あの子を苦しめない世界・・それが私たちの目的で、命改変プログラムの真の使い道よ」

今までよりもっと明確で簡潔にされた奴らの目的。徐々に激しくなる翼の振動が、次第にこの湖全体の氷に広がっていく様だ。
いやな予感がする……今の自分のイヤな予感はなかなか無視できない訳だから、どうにかしたほうが良さそうだ。だけどどうやって？　まだ準備が整ってない。
取りあえずは、その瞬間を引き延ばし奴の考えに少しでも違う物を残せれば……

「真ってのは違うだろ。もう一つ……それが正しいんじゃ無いか？　それに誰も何も苦しめない？　だからこそ、お前達のその目的は夢なんだ！
誰も苦しめないのは、誰も本気でソイツの事を考えてないから……何も苦しめないのは、全てが一線を置いてるからだろ。
そんな世界で本当にセツリは生きてるのかよ？　苦しみや辛さ……その痛さは何も暗いばかりじゃない。少なくともリルレットの苦しみはや辛さは、誰かを思う優しさだ！
それも分からないお前達に、セツリが幸福であれる世界を作れるなんて思えないな」
「言うじゃない。頼りに成らない奇跡でも態度は大きく成れるのね。でも……それもここまで！　ブランド・ゼル発壊」

その言葉の直後、足下の氷が大きく崩れ出す。そしてどうやら崩れるだけじゃない様だ。せり上がったり、地割れの様に成ったり、いきなり陥没仕出したり……これじゃあまるで地形そのものを変えてる様だ。

「うあああああ！！」
「つっ――頼む！！」

地割れに落ち行くヒーラー。僕は祈りつつ、氷を踏み込む。だけど駄目だ……でも諦めずに、青い雷光を二・三度光らせた。するとようやくたどり着いて、何とか救出。
もう一度飛ぶと、そこは再びリルレットの傍らだった。

「助かった……やっぱり必要だなソレ。しかし自分は回復以外何も……」
「別にお前他の魔法だって使えただろ？」
「使えないんだ！　きっと氷に取り込まれた時、持っていかれた。

他の奴らもそうだろう。だから動きづらいんだ……だから自分にはもう回復しかなかったのに……」

まさか……そこまで深刻に成ってたとは知らなかった。柊の奴は僕達をＬＲＯから追い出す為にスキルを奪ってるんだろうか？

僕は目の前で嘆くヒーラーに視線を落とす。

「そんなに落ち込む事ないさ。だってまだやれることは有る。この力を振るうために、力を貸してくれ」

「スオウ……」

「もう……本当に、死なないでよ！」

僕は二人に頷く。周りは凸凹になりかなり視界が悪くなってる。そして柊はどうやらせり上がった氷の頂上に行るようだ。

「さあ、これでその力、ますます使いづらく成ったわね」

確かにその通りかも知れない。でも……

「安心しろよ柊。必ず届かせてやるよ。そのためにも今は――」

僕はその場から移動した。それは大切なことをやるためだ。それに僕が居たら、リルレット達も攻撃に巻き込まれるからな。

雷光が氷の峡谷に走り続ける。だけどその位置はバラバラだ。目的が有るなんて思えない動きだろう。だけど有るんだ！

（必ず……）

全員の元へたどり着けるかは分からない。けどこれは僕の掴んだ、最後の賭だ。

奇跡と少しの知恵と（後書き）

第百四十話です。
掴んだ奇跡にめげず、とうとう反撃を開始します。大丈夫、スオウには仲間が居るんだから！　いつだってそうやって乗り越えてきたのです。
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

全てを押し潰す力（前書き）

遂に俺達は二人してガイエンの前に立つ。沢山の人達に背中を押されて、ようやく辿り着いたこの場所だ。繋いだ手から伝わるぬくもりを放さない為に、目の前の奴をこのままでいさせない為に、俺は今度こそ倒さないといけない。

ガイエンの夢は、その体からあふれ出して決壊してるんだ。それはもう異変でしかない。ガイエンが止まれないのは、本当にアイツだけの意思なのか……力は少しずつでも確実にガイエンを侵食してる。

全てを押し潰す力

繋がった手から伝わる温もり……久しぶりに触れた彼女は変わらずに暖かく、だけど昔よりも少しだけ痩せたかも知れない。
元から華奢ではあったけど、この体には今までの苦労がかいまみえる。けど……それでも、この国に来たときに見た儚さは今はもう微塵も感じられない。

あの時とは違って見た目はボロボロなのに、前を見据えるその瞳は強い意志が宿ってるよう。俺は前もこんな風なアイリを知っている。
これはあの時と同じ目だ。アイリがグラウドに立ち向かうと決めた時の目。そしてカーテナをその手に取った時も同じ目をしてた。

見た目ほどボロボロな訳じゃなないんだな……こうなったアイリは強い。繋がる手が僅かに強く握られる。さっきまで鼻を濁す様な炭や煙の臭いが充満してたのに、今は隣に立つアイリから懐かしくも良い匂いがする。

それはいろんな事に「大丈夫」そう言ってくれてる様で安心って物が上がってくる。だから俺もその手を軽く握り返す。
するとピクンとアイリの体が反応したのが分かった。そしてそれを噛みしめる様に目を閉じて、一瞬の間を置いて瞳を開く。
そして向ける言葉はアイツにだ。

「ガイエン……」

花の蕾の様な唇から紡がれるその名前。そんな声が聞こえたのか、

俯いてたガイエンはようやくこちらに視線を向ける。
白く長い髪から赤い目を覗かせてだ。
「アイリ……アギト」
くぐもった声を出すガイエン。そしてもう一歩踏みだそうとするアイリを俺は引き留める。だってここからは俺とガイエンのケジメ。
「アギト？」
「言葉だけじゃ、アイツは今は止まらない。それにさ、これはここでつけなきゃいけない決着だ」
俺の言葉にアイリは振り返る。
「それは、私にとってもだよ。私はここで全部を教えて貰います。私はやっぱり誰も失いたくない。わがままでも傲慢でもエゴでも、三人での道を見つけようって私は決めたの」
三人での道ね……それは確かにアイリらしい。だけど、それは俺達のどっちかが諦めて、それでも傍に居なきゃいけない事じゃないのかな。
そしてそれをただ受け入れる事が出来ないからアイツはああなってる……とも言えると思う。本人は気付いてるのか分からないがな。
いや、アイツが気付いてない分けない。ただ認めたくないだけか。だって夢幻とか言ってたからな。そんな幻想に自分が囚われてるなんて認めたくないから、必死で元からあった夢を追いかけてる……そう今の俺には見える。
けど、もしも……アイリが言うような事に成れれば、確かに一番

いいのかも知れない。それでも俺達がぶつかる事は避けられないだろうけども。
でもこの戦いの先がそんな結末であれれば良いと今は願おう。俺だって何かを失いたい訳じゃない。そしてそれはガイエンもそうだろう。
だけどそんな思いを胸に抱いてる中、唐突にその笑い声は夜空に昇った。

「くくく……はぁーはっはっはははあ！！」

大きく口を開けたガイエン。白い髪はその声になびき、赤い瞳は一際輝く。妖しい光を称えてだ。

「何がおかしいのガイエン？」
「おかしい……おかしいさ！　何を戻すかも分からぬ程におかしいなアイリ！　三人一緒？　そんな時は既に終わりを告げている！
お前が語るのは、いつだって夢の様に儚い明日だ」

食いかかったアイリにガイエンはその顔のままで言葉を返した。でも最後だけは少しだけ違う感じ。だけどガイエンは何も待たずに腕を伸ばす。その黒い腕をアイリへと向けて。
でもその時、俺はその腕の先に割り込んだ。

「だけど、俺もお前もそんなアイリの夢を未来にしてきた筈だ！
そしてそれがこうやって今に成ってるのなら、儚く何か無かったんだよ。そうだろガイエン」
「アギト……お前は亡霊だ。私の前に消せど消せど現れる亡霊。けれども、その姿……もう目障り以外の何者でもない。
次こそは、この力で跡形も無く消してやる。アギトという存在をシステムごとな！！」

その言葉と共に放たれるカーテナの力。俺はその力から今度は逃げない。真っ直ぐに真っ正面から受け止める。

「う……っつぐおおおおおおおおおおお！！」

「アギト！　無茶だよ。私の権限もカーテナを直接所持してるガイエンには届いてない。たった一人でカーテナに挑むなんて……」

「それでも！　この力を砕けないといけないんだ！　そうでなければアイツは止まらない！！　それにこれ以上、アイツ相手に逃げるなんて出来るかよ！」

槍が大きく震える。その振動が腕や肩にまで大きな負担を伝えてくる。本当に何度受けても反則的なまでの威力。これだけの力を溜も無しに、視野に入れば自由な位置に放てるんだから考えれば考える程に無茶な事をやろうとしてると思う。

だけどさ、やらないともうこれ以上進めない。それに考えて考えて……俺はまたここにいるんだ。だから無茶を無茶と考える事さえもう辞めた。

けれども耐えるだけで精一杯。徐々に地面を削って体が後方へ下がっていく。

「砕く？　お前ごときが砕ける物なら、砕いてみろアギト！！」

「――っつ！？　左も！！」

両腕を駆使しようとするガイエン。これは流石にやばい。動けない今の状況だと確実に当たる。そして流石に加算されれば耐えられそうもない。

それは心一つでどうにか出来る事を完全に越えてる。俺が今対峙してるのは、一人のプレイヤーってだけの存在じゃない。

このアルテミナスという地、その物の力を振るう奴なんだ。分かってた事……そして既に一度は敗れたその力。だけど今度ばかりはそうは行かない！
なぜなら俺の後ろにはアイリがいる――と、思ってたらいきなり飛び出して来た。そして両腕を広げて声を出す。

「だめえぇぇ！！」
（このバカ！）

そう思ったけどもう遅い。ガイエンの腕は振りきられる直前だ。そして大きな音と地面を伝わる振動……巻き上がる粉塵が視界を阻む。
だけどこれって……

「アイリ！！」

俺は粉塵の中叫んだ。これはカーテナの力が横にそれた結果だ。それならアイリは無事なはず。

「アギト大丈夫？」

粉塵の中、帰ってきたアイリの声。思ってた事とは言え、安堵感がこみ上げる。やっぱりガイエンの奴はアイリには攻撃しないか。
アイリに当てないように攻撃を外したんだろうからな。でも……

「お前、無茶しすぎだ！　そんな服じゃ防御力だって皆無だろうし、武器も持ってないんだぞ。死ぬ気か！？」
「だって……アギトはまた一人で戦おうとしてるから……」
「一人でって、今のお前は戦えないだろ」

粉塵のなか、お互いを確かめあって言葉をかわす。俺はアイリの言葉がいまいち分からない。アイリは戦いたくても戦えない筈だ。
だってまさにさっき言った理由が原因で。けれどアイリは首を振る。そういうことでは無いと言う。

「違うの！　そうじゃない。確かに今の私は無力です。カーテナを無くして、剣もこの手にない。きっとカーテナが一撃当たるだけで、私は潰れちゃう。
でも置いていかないで。もう私だけ何も知らないなんてイヤなの。それに戦えなくても戦える。だって私の戦いは伝える事だから！」
「置いていくとかわかんねぇよ！　それにだから、言葉じゃアイツは止まらない！　邪魔だって言ってんだ！」

その言葉にちょっとカチンと来たのかアイリが食いかかってきた。

「分からないって、アギトは勝手にやったじゃない！　そして勝手に出ていった。邪魔なんて、一人じゃ勝てないって分かってるでしょ！？
ガイエンは私を潰してない。それなら私は一緒に戦えるって言ってるの！」

どういう事なんだよ？　それじゃあアイリは、危機の度に前に出てくる気なのか？　そんなのいつまでも通用する分けない。
ガイエンがアイリを潰すなんて確かに考えられないが、今のアイツならやりようは幾らだって……それに本当に万が一が無いとは言えない。

今のガイエンはどんどんその力に呑まれてる様に見える。まがまがしさが増してるみたいなさ。その時、粉塵の向こうからガイエン

の声が聞こえてきた。

「二人して戦って私を倒すか？　いつだってそうだ……分かってるさ。いつだってアイリはお前側にいるとな！」

掲げられる腕が降ってきた。それは真っ直ぐに力を飛ばす使い方じゃない。俺の前にアイリがいるから、ピンポイントで力を当てられる方に切り替えて来やがった。

俺は寸前でそれをかわすが、余波のせいで地面を転がる。

「逃げないんじゃ無かったのかアギト？　随分惨めに泥が付いてるじゃないか？　だが、お前にはそれがお似合いだ！！」

少し前に俺が言ったことをどうやら聞いてたらしいガイエンは、嫌みな事を言いやがる。それに誰が惨めだ。泥が似合う奴に成った覚えはねーよ！

俺は走り出しながら口を開ける。

「お前こそ、その化け物染みた姿がだんだん違和感無く成ってきたぞ。ちょっとは危機感覚えてろ！　そんな姿で世界征服とか実際、外に出せねーよ！

それにな、俺は逃げたんじゃない！　向かってるんだ！絶対お前にこの槍を通してみせる！！」

「ふん、お前には理解出来ない事よ！　そして届くと思うなよ！貴様ごときの力がぁぁあああ！！」

ドドドン！！　と三連続で降り注ぐカーテナの力。再び巻き起こる粉塵の中から出てこれたのは、なかなか奇跡的な事だった。

「っつ……今のは何で切り抜けられた？」

「アギト！」

思考を巡らせるなか聞こえた声に、またアイリが何かやったのか？　そう思った。だけどアイリの心配するような顔でそれは無いと思える。

それに何か出来る間があったとは考えにくい。ガイエンは続けざまに腕を振り下ろしてたんだ。途中で何かが出来たところで、下ろすだけの腕には余り影響も出いだろう。

でもそれならやっぱりどうして……一度位潰されていてもおかしくない攻撃だったのに、俺はかすり傷程度で済んでいる。

「くくく……やるじゃないかアギト。だが、お前が私に勝てる可能性など、万に一つも無い事に変わりはない。私はお前に一方的に攻撃し続けられる。

私は私のターンを永遠に支配しつづけれるんだよ！！」

左腕に添えてた手を離し、再び腕を振り上げるガイエン。もしかしてまた連続攻撃か？　同じ様な奇跡か偶然か二度起きるとは思えない。

どうにかしないと流石にヤバい。俺は必死にガイエンへと駆け進む。だけど間に合わない……腕を下ろすだけの動作に勝つなんて、この距離じゃとても……その時再びアイリが声を上げる。

「やめてガイエン！　こんな事しなくったって掴める夢はきっとある！」

「それこそ虚言だアイリ！　私の道とお前達の道は既に分かれて、再び交わる事などありはしない！　譲れない物がお互いにあるのなら、戦って勝者を決めるしか無いんだよ！

お前だってわかってるだろうアイリ。グラウドの時と同じだ！お前が戦うと決意したあの時とな！！」

右腕が下ろされて、俺の後方の地面が砕ける。続けざまに左腕が下ろされて、更に近い地面が砕けた。その衝撃で背中が押される様な感覚と共に、ガイエンに近づいた。
だけどその時には再び右腕が下ろされそうに成っている。前に進んだといえ、バランスを崩したこの状態じゃ機敏な動きが出来ない。
それにやっぱり徐々に修正・予測をしてきてる。こうなる事まで視野に入れた攻撃なら……次は必ず当たる！！
「ふざっけんな！！　ガイエン、お前のやってる事はただのわがままだろうが！！」
前のめりに成りながら、俺は槍を投げた。勿論狙いは奴の腕だ。防がれるかも知れない……武器を手放すなんて愚の骨頂かも……だけどただ潰されるよりは、僅かでも俺らしい。
真っ直ぐに突き進む俺の槍。だけどそれは下から伸びてきた影に上へ弾かれる。単純過ぎる攻撃とは思ったが、まさか腕を一本を使わせられないとは予想外だ。
本当に最悪だが、一発ならまだ耐えられる気概があった。カーテナはその強すぎる威力で、ダメージの伝わり方が並の武器とは違う所がある。
でも前に滅多打ちにあったから、最悪一撃貰っても崩れたリズムを正す隙を狙えればと思った。だが、ガイエンの奴は腕を使わずに俺の槍を防いだから、このまま力に呑まれたらそれこそ滅多打ちが来るかも知れない。
そうなったら終わりだ。
「わがまま……それを通す事の何が悪い？　ここは夢を追うＬＲＯ

というゲームだ！　私も楽しく過ごさせろよアギト！！」
（来る！）
そう思った。そして覚悟を決めた。止まらなければいいんだ、力を受けても。それならば次弾をよける事は叶うかも知れない。
だけどその時、俺とガイエンの間に何かが降ってきた。それは瓦礫？　僅かに炎の火が残ってる木片が降ってきて、その瞬間俺からはガイエンを、ガイエンからはきっと俺を遮った。
完全に見えなくなった訳じゃない。だけどその不意の乱入者は、俺達の視線と言う物を一瞬奪う。しかしそれが、その乱入者の役目だったのかもしれない。
赤い火の粉がその瞬間、本当に僅かに散った。それと同時に巻き起こった衝撃と凄まじい音……それは紛れもないガイエンの攻撃。
だけどそれは本来、俺の頭上に降り注ぐ筈だったもの。まさか……と思ったとき、視線を俺の後方へズラしたガイエンが呟いた。
「アイリ！　あんまりイタズラが過ぎると、お仕置きが必要になるぞ」
「言ったはずだよガイエン。私は諦めないって。あの頃……とは行かなくても、きっと一緒に歩ける。だから、私も貴方を止めたい。
カーテナは視認した相手へ力を向けます。だからその特性と、人間の動物としての反応を利用させて貰いました」
やはり、あの木片はアイリが投げた物だったのか。まさにベストタイミング。流石は正統な持ち主だ。カーテナの特性と人の反応ね……誰もが視認しただけでカーテナは攻撃出来るってのは分かってる。

だからそれに動く物は目で追う反応を利用したわけだ。それにこの夜に、気になる程度光ってたのも良かったんだろう。
一瞬でも誰しもがそれを捉えるのは押さえきれないんだ。そしてそんなアイリの機転に救われた。直撃はしなかったとは行っても、伝わってきた衝撃はすごい。
だけど俺はそれに耐えて強引に押し通る。ここで引いたら、これまでの二の舞だ！

「うおおおおおおおお！！　ガイエン、届かせに来たぜ！！」
「何をだアギト？　拳一つで私が倒せるとでも思ってるのか？」

近づく俺に、それでも余裕を崩さないガイエン。まあ武器無いしな。だけどそれなら！　俺は勢いよく、スライディングをかます。地面から浮いてるガイエンの真下を通って背後へ回る。

「何！？」
「俺だってなガイエン、拳一つでお前を倒せるなんて思っちゃいない！！」

そしてそこに有ってくれるのは、ガイエンに打ち上げられた俺の槍。どうやらガイエンは落ちた所までは確認してなかったみたいだな。
でもこっちは死活問題だから、それをしないわけ無い。勢いそのままに地面から槍を抜き取り、そのまま反転。俺はスキルを乗せた槍をガイエンに突き立てる。

「ふん！」
「でやあああああああ！！」

黒い腕と槍がぶつかり合う。その瞬間炎がたぎった。そしてその

炎はガイエンの体を焼いていく。

「カーテナは振り抜かないと力は発動しない！」

そう、ガイエンの腕は途中で止まってる。だから俺の炎だけが奴を包み込んでるんだ。だけどそれでも、ガイエンはその赤い瞳を光らせてこう言った。

「なら、振り抜くだけだ！！」

（なっ……こいつ！）

いきなり力が増した？　強引に振り抜こうとしてやがる。炎は今もガイエンを覆ってるのに、その影響がまるで見えない。

どうなってるんだ？　本当に効いてるのか？　そんな思いが胸中を渦巻くが、だけど今はそれよりただ押し負ける訳にはいかない。

けれど……これは……信じられない腕力だ。

「分かるかアギト？　これがただのエルフと進化した私との違いだ！」

「それでも俺は……お前の様な外見はごめんだ！！」

進化ね、どう見ても悪魔契約とかにしか見えないが、このままじゃ結局は振り出しだ。離れたら終わりだと位思わなくちゃいけない。

これだけの距離なら、ガイエンの絶対領域に入ってる筈だ。そこだけは自分を守る為にカーテナの力が及ばない領域……でもそれはかなり狭い。

今でも体全体が入ってる訳じゃ無いだろう。でもここに居る事に意味がある。だから離れる訳には……けど、この力押さえきれない。

どうすれば？

「ガイエ――！！」

後方から何かしようとしたアイリが、ガイエンの影に絡めとられた。邪魔はさせないってか。赤い瞳が俺を真っ直ぐに見下ろしてる。今度はばかりは逸れる事は無さそう……って、その時あること思いつく。

そうだ。どんな形でも視界を外せれば、カーテナの力に襲われる心配は無くなるんだ。攻めぎあうこの距離なら、やりようは有る。強制的なのがだ！！

俺は一瞬力を抜いて、迫る腕を掴んで飛んだ。そして膝をその顔に入れてやる。

「ぐふっ！？」

そしてその時、どこぞの地面が弾ける。切り抜けた！　着地した俺は、再び槍を振るう。今度は何にも邪魔されずにその黒い体を貫けた。

それは確かな感触。前の様な影じゃない！

（ここしかない！！）

その思いで次々にスキルを振るう。ガイエンの体に幾十もの炎が燃え盛った。けれどその時、たぎる炎の中から黒い腕が伸びてきて俺の頭を掴んだ。

その瞬間悪寒が全身を駆け巡る。

「おっ……まえ……どうして？」

「どうして？　教えてやろう。それは私が王だからだアギト！！」

それはふざけた理由だ。けれど、そこには確かに炎の中で笑うガ

イエンが居る。まさかだが、攻撃が効かないのか？　幾ら何でも、これで無傷なんてあり得ない。
何か有るはずだ……何か！　そうでなきゃいけない。そうでなきゃ、倒せない。俺は白い炎を槍に纏わせて振りかぶる。
「ＬＲＯの全てはこの脳が頼りだと知ってるかアギト？　体と言う外見は全て無い物に過ぎない。だが……ここだけはそうではない！　全ての基盤……リアルとＬＲＯを繋いぐ強い接点。それを私のこの力で潰せば、直接脳にダメージを与えられるかも知れない！！　なあアギト！　そうだと思わないか？　その場合、一体どうなるんだろうな！！」
ガイエンの言葉に、一際鼓動が大きく跳ね上がった。まさか……そんな事……だけど、セツリやスオウを知ってる分、百パーセント無いとは思えない。
それに今のガイエンは化け物で、カーテナはバランス崩し、この世界の規格外が揃ってる。何が起きても今やおかしくない。
「ダメェ！　やめてガイエン！！」
「そこで見ておけアイリ！　王に逆らう者の末路と、そしてこれが私の王としての本当の船出に成る！！」
赤い瞳が妖しさ増して輝き、その腕に力が伝わる。本気だ……ガイエンは本気でアギトと秋徒という存在を潰す気でいる。
怖くて恐ろしい……もしも本当に脳にまでダメージを負ったら、俺は二度と目覚めれないかも知れない。白い炎のたぎる槍が震えてしまう。
アイツは……こんな怖いことをやってたのか。何で……そう思ったとき、その背中が目に浮かぶ様に見える。すると不思議と、自分

が奮い立つ様な感覚が沸いてきた。
歯を食いしばり、腕にしっかりと力を込める。アイツは……スオウはもしも何て曖昧ですらない！　それでも走ってやがる！
それなのに俺が、もしもになんか怯えてどうする！　前を見据えてこう思え、やられる前にやりゃあいい！！

「させるかぁあああああ！！」

全てを押し潰す力（後書き）

第百四十一話です。
ますます反則度が増して行くみたいに思えるガイエン。アギトの攻撃も効かないし、さてどうするのか？　でも今は、前に負けたときとは違う物をアギトは持ってる筈です。
それに……いろいろとですね。三人の決着ももうすぐつくでしょう。
てな訳で次回は金曜日に上げます。それではまた！

命違う存在（前書き）

雷速のこの奇跡を生かすために僕は走る。その間にも柊の出鱈目な攻撃が襲い来るけど、この目にも止まらぬ速さで何とか回避し続けてた。だけど目的は果たせてない。

この言う事をきかない奇跡を、だけど僕達は信じるしかないんだ。だけど柊も馬鹿じゃなく、奴は次の手を打ってきた。空を突くほど細長く、純度の高い氷の柱が三本その周囲に現れる。

命違う存在

割れてしまった氷の大地・・至る所で大きく凹み、また至る所で、天を付くほどに競りだっては行く手を遮ってる。
自分達で作った筈の僅かな見晴らしの良い空間は、跡形も無く消えている。それにこの現象はどうやら、湖の氷全体に起こった事の様で、更に僕達の周りを埋め尽くしてた氷の森までも、この有り体に飲み込まれてた。

移動が不規則で、自分でも予測出来ないから、さっきから周りばかり気にしてる。すると見えるんだ。氷の木々が壁から生えてる様子とかがさ。
それはきっとここの氷が大きく動かされたから起こった事なんだろう。木々が無いところは、僕達が切ったあの空間何だろうけど、そんな所は今や、柊を中心にしたごく僅かしかない。

伸ばされて、引っ張られて、至る所に今や奴の目は広がってた。確かにこの僕の力は、万が一を引き起こせる物で、柊がそれを警戒したからこんな地形に変えた……は分からなくもないけど、それでもこれだけ不安定な力、それこそ見晴らしの良い状態で潰せない訳無かったはずだ。

わざわざ地形を変えて、身を隠せる場所とかを増やしちゃっていいのかよ柊……とか思ったがそれは思い違いだった様。その証拠に、今の俺は結構困ってる。

「そこね」
「――っち！」

瞬間瞬間で予測できない位置に現れたりしてるはずの僕。それなのに柊の奴は、僕が姿を表した僅かコンマ数秒の差で、攻撃を仕掛けて来やがる。
それがとても厄介。このままじゃ運良く仲間とはち合わせても伝える暇がない。柊の奴も実は分かってるのかも……僕が何かを企んでるって事に。

だからこそ必要以上に警戒してる。その全ての目をリンクさせる程にだ。氷の木々が至ると所でザワザワとざわめく……その全ての葉が柊の視覚と成ってる。それは間違いない。
今まではもしかして……程度だったが、ここに来てそれは確信に変わった。と言うか、そうでないと説明が付かない。

この速さの攻撃は二つの瞳だけじゃ決して追いつかない。この地形であいつには死角が一つも出来てない……だけど僕達には、そうなるとただの迷路にでも思えてくる事になる。
何でと思った地形の変形は、柊の無数の目でを考えれば有利な事ばかり。一人一人の孤立化に現状を確かめるのが難しく、それにより柊に攻撃を当てずらい事この上ない。

きっとアイツは、僕達全員を見下ろせるんだろう。この無数の目が有れば可能だ。そしてその穴の無い視野を使ってのこの攻撃……実際このままじゃ、無闇に仲間と出会うことが出来ない。
（出会わなきゃいけない……のに、出会えない事を喜ばなくちゃいけないこれはヤバいな。一体何人までなら、抱えれる？）

こうなったら、一緒に離脱する……それが最善だ。そして何回か飛んだ先で下ろせばいい。僕は再び飛んだ先でそんな事を考えてた。

上を見ると、柊がその六対の翼を大きく広げてる。そしてその翼はさっきからずっと、リンプンの様な物を周りに拡散してる。

そしてそれが厄介な攻撃の正体。あの羽からまき散らされてる白い粉は、その無数の目のどれかが僕を視認すると一斉に空気中で氷結化と膨張を始める。

するとその結果がアレだ。僕は更に視線を動かし、さっきまで自分が居たであろう場所へ視線を向ける。実際、自分でもどこに飛んでるか何て分かってないけど、この柊の攻撃のおかげって言っても変だけど、まあそれで分かる。

何故ならそこには空間その物を埋め尽くす程にひしめきあう、氷の結晶の山……とでも呼べる物が出来てるんだからな。

「また……本当に速度は雷速ね。でも、パターンは掴めて来たわ。それに……」

それ以上を口にしない柊。すると氷の結晶の山は砕けて散っていった。どうやら、獲物が入らなかったら自動で崩れる様に成ってるみたいだ。

そしてアレが消えたら、またこちらに視線が向くことに成るだろう。今の僕はどちらにせよ、動き回るしか手はない……か。

「くそ……本当に時間が無いのに」

もう成るべく見たくない数字が目に留まる。毎秒僅かに減っていく僕の命の数字。今から計算したら、後五分がタイムリミットだ。

それまでに柊を倒さないと、ここまでって事に成る。多分リセッ

トは効かないだろう。体がものスゴく活性化してるからあまりダルサとかは感じないけど、それだからこそ命を代償にしてる感が伝わるんだ。
失われていく数字にどうしても焦りが浮かぶ。するとその時、再び振動が始まった。どうやら柊が何かを始めた様だ。

「アイツ……今度はなにを？」

僕はそう呟いて、頭上で光る柊を見据えて拳を握る。だけど今は届かない。僕は取りあえず、再び飛んだ。今は一秒だって無駄には出来ないからな。
例え柊が何をしようと、僕はこの力を振るえる条件を満たす事だけを考えなくちゃいけない。氷の渓谷に青い雷光が幾重にも再び光り出す。

すると柊の声が、いつかと同じように聞こえて来た。この空間全てに伝わる不思議な声でさ。決して大声を出してる訳でもないのに、何故かこの距離で伝わる言葉だ。

「ねえスオウ、それにの後が気になってたでしょう？　それが何か直ぐに分かるわよ。そして理解したとき、君はその訳の分からない力に縋った事を後悔するわ」

こんな言葉は、僕を迷わせる為の物……そう思って成るべく気にしない風を装う。こういうのは乗らざるべきだ。柊が何をしようと、今の僕は全てを避ける自信が有る。それこそ、この雷速で！
だから僕は仲間達をこの冴えきる瞳で探す事に専念する。地形の変化で、近くに居た筈のみんながなかなか見つからない。

もしかしたら、それこそ隠れてるのかも知れない。普通の感覚な

ら、この状況……手詰まり感で溢れてるからな。一人になって不安が増したのなら、それをしてもおかしくない。

それにやっぱり、思うとおりに進めない事が効率を悪くしてる。同じ付近を何度も回ったり……と思ったらいきなり遠くに行ったりさ……とにかく本当に言うことを聞かない。

だけどこれ以上嘆いても、これ以上の都合の良い奇跡が起きる訳じゃない。この力はきっと奇跡……そう信じて僕は進む。

ゴゴゴゴゴ……そんな音を立てている地面に足を付いて、膝を使って体重移動を始める。その時僕は決まって願いを込める。

（今度こそ仲間の元へ！！）

未だその願いは叶わないが、祈りを止める事は出来ない。どこに届くのかは分からないけど、思うのと思わないとでは、やっぱり何かが違う気がするんだ。

それに思わずには居られないよ。こんな状況だとさ。「次こそは、次こそは」と何度だって祈ってやる。その時、この氷の渓谷に振動の主が現れた。それはとても透明度の高い三本の氷の柱。

それらが柊を中心に三角を作る様に現れてる。でもアレが柊が自慢してきた物か？　それだとちょっと拍子抜けも良いところ。だってその氷の柱は余りにも細い。

どうみても攻撃に使えそうには見えない。体を次の場所に移動させる一瞬でも、今の僕にはそれだけハッキリと見えて、そして思考する事も出来る。

けどまあ一応は警戒くらいはしとく。柊は全て規格外だから、完

全に無視は出来ない。もしかしたらアレが、柊の最強の攻撃手段……かも知れない。
視線をずらさずに見てると、その三つの柱は先端を更に三つの鋭利な突起に変える。そしてその周りには円形の同様の氷が大中小と並んだ。するとその柱に何かが走る様に光の線が見えだした。

まるで起動完了……とでも言うような感じだ。その瞬間僕は、バリッと言うスパークの音を弾けさせて雷速の世界へ身を投げる。
それは誰も捕らえられないスピード。そして一瞬の後に全く別の場所へと僕は姿を現す。そう、なんだかスゴく高い場所へとだ。

「ごきげんようスオウ。よかった。ちゃんと姿を現してくれて」
「――っつ！！」

それは信じがたい声。そしてその近さに驚いた。

（何が起こった？）

一生懸命現状の確認を僕は試みる。だけどこの状態でも上手く頭が回らない。沢山情報は入ってくる……だけどそれらが混線してまとまらない。でも断片だけでも、これが最高に不味い事だとは分かる。
柊よりも高い場所……これはさっき出てきた細長い氷の柱？　僕はそこに飛んだって事か？

（くっ……幾ら選択権が無いからってこれは無しだろ！）

そう思わずには居られない。何でよりによってだよ。その時僕は柊の先の言葉が脳裏をよぎった。

【ねえスオウ、それにの後が気になってたでしょう？　それが何か直ぐに分かるわよ。そして理解したとき、君はその訳の分からない力に縋った事を後悔するわ】

この言葉の意味……だけどまだ理解してない僕の頭は後悔までは行ってない。でもこれは、そうなるという暗示みたいだ。

混乱の直中に落とされた僕を見て、柊はいつものように天扇を開く。すると翼の分だけの光が集い出す。

「さあスオウ……後悔の足音が聞こえてくるわよ」

そう言った柊は、天扇を横に凪いで集った光を放った。光球は光の帯を作ってこちらに勢い良く向かってくる。色々と理解できない事だらけだけど、取りあえず攻撃を食らう訳には行かない。

人間としての危機回避の本能が僕の体を動かした。高速で流れる視界。これでどこでもいいから、取りあえず柊から離れれる……そう思った。だけどそれは甘すぎる考えだった。

体が止まり、狭まってた視界が開ける。だけど一瞬僕が思ったのはこうだ。

（何が……変わった？）

眼上には厚く空を覆う雲のが有り、下には冷気漂う氷の渓谷が広がってる。この光景……この場所……この高さ……余りにも同じだ。

同じ場所に出たのか……と思ったけど、次の瞬間移動はしてるらしい事がわかる。それは苦しくも柊の存在でだ。分かりやすく柊だけは変わってる……その方向が。

さっきは正面だったのが、今は左側に回り込んでる。って、待てよ……まさか、二本目、に移動しただけ何じゃないのかこれって？

そんな事を考えてると、耳に再び柊の声が届く。

「あらら、随分と親切なのねスオウ？　この両目でも、今回は追えたわよ」

「追えた……だと？」

そんな訳ない。この雷速は幾ら柊の目でも、止まらないと見えない筈だ。アイツが多すぎる目を使ってでもしてたのは捉える事じゃなく、探すことだったんだから。

「ええ、確かにその速さは圧巻よ。でも既に私は確信した。現れる場所が確実に絞れるのなら、それは捉えてると同じ事よ」

「何だそれ……まるでお前が用意したこの柱に必ず引き寄せられるみたいな言い方だな。ふざけるなよ！　こんなのはたまたまだ！」

僕はきっと自分でそう思いたかった。確証も無いし、偶然の可能性はまだある。それにたった一度だ。それだけで柊のこの自信は過剰だろう。

だけど柊はそんな僕の言葉を薄ら笑って天扇を向けてくる。

「なら、自身で確かめてみなさい。私から逃げてみなさいよ！」

全てを放ったわけでは無かった光球が、天扇の合図に促されて向かってくる。

（大丈夫だ……落ち着け。当たりはしない……絶対に！）

僕は氷の柱の先端部分、大中小の輪そこに居る。そして下方から向かってくる光球を見据えて、その部分から飛び降りる。

その瞬間、空中に電気のスパークする音と青い雷光が線を引いた。

そして一瞬の後に再び耳にスパークの音が響いてくる。

「よし、今度こ――」

「今度こそ、何？」

「――っつ！？」

目の前の光景が信じられない。何で……どうして柊がそこに居る？　そして目の前には既に迫る複数の光球があった。

それは直撃の直前だ。

（考える場合じゃない。当たるわけにはいかないだろ）

その場に再び雷光が線を引いた。

「これでどうだ！」

次に現れた場所で僕はそう言った。だけどその願いは脆くも一瞬で崩れさる。何故なら、今度はさっきよりも速く、言葉も無い間に光球が目の前に迫ってたからだ。

「くっ――そ！！」

僕はもう一度飛んだ。すると次の瞬間、迫りくる光球の向こう側で、反対側の柱に同じ種類の攻撃が炸裂してるのが見えた。

僕は雷化で見えない拳をそれでも強く握る。

（これは……同じだ）

僕は再び飛んだ。でも現れる場所はやっぱり、あの柱のどちらかだ。まるで吸い寄せられる様に、引き寄せられる様に必ず三本の柱

か僕を捕らえてる。
「さあ、もう聞こえてるでしょ？　後悔がホラ……肩を叩くわよ」
それから何度も何度も僕は飛んだ。だけどやっぱり逃れられない。そして実質、二つの柱のどちらかに絞れてしまった僕の移動先には、徐々に柊の手が速く伸びてきてた。

さっきの言葉も、実際は的を得てる。言われた瞬間、本当にそんな感じがしてしまった。でも後悔と言うよりも、僕には柊自身に肩を握られた気がしたけどな。
だけどこれはもう、ただの錯覚何かじゃない。僕は本当に、捕らえられたらしい。瞳を上げた瞬間に目に入る光球は、もう僕を見つけて放った速さじゃない。柊の奴はその翼の数に物を言わせて、光球を生成・循環させながら放ち続けてやがる。

流れる様に上の翼から放たれる光球。それが一番の下の光球まで行く頃には、上の数発は既にまた出来上がってるんだ。
だから柊の攻撃が止むことはない。いつかピンポイントで現れた瞬間に直撃する……なんて事が起こり得ると思ってた事が、今や起きようとしてる。

体重移動さえ間に合わない。瞳にその光を痛いほどに見せつけてる。もう、拳さえ入らない距離だ。当たるわけには行かない……のにこれは当たる。そう思える。というか、その考えにしか至らない。
避ける選択肢が今初めて無くなった。鼻先にまで届く光球。後コンマ一秒で直撃判定と共に、この体にその衝撃が伝わる筈だ。

でも……それだけで終わりはしない。向かってきてる光球も、その後ろで更に生成されてる光球もある。一つでも終わるかも知れない攻撃があれだけ……直撃を貰えばそれで終わり。

（終わり？　……終わり……終わり……）

頭の中で自分が呟いた声が反響する。だけどその瞬間、僕は思い切り歯を食いしばって雷速に消えた腕を振るう。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

その瞬間、目の前の光球が真っ二つに割れる。だけどそれだけでは止まらない力が溢れでる。完全雷化してるセラ・シルフィングは轟く稲光を幾重も放出する。そしてそれは後ろから更に後ろから迫ってた、無数の光球を砕き、そしてその光は柊までも伸びる。

渓谷の空に巻き起こる二つの力の衝突。それは大きな衝撃と白煙を巻き起こした。視界は一気にゼロにまで成った。

「はぁはぁはぁはぁはぁ……」

雷と化してる筈のセラ・シルフィングがやけに重く感じる。この武器と、生み出す力全てが僕の命を欲してる様に感じる。

敵と呼べるものが自分の内側に居る感覚は、やりようがないからどうにも落ち着かない。外だけに分かりやすい敵が居れば、自分を正義と信じていけるのにな。

だけど、柊には柊の信じる正義がある。あいつもセツリの為にやってるんだから、それは僕と根底では変わらない。けれどそれぞれに曲げられなくて譲れない程に、僕らはセツリを思ってる。

それがこの結果だ。時々、ふと思うことがある。柊やシクラと話してて さ。本当は戦う必要なんて無いんじゃないかって……だってそうだろ、僕達は同じ人を助けたいだけなんだから。

手を取り合えたっておかしくなんか無いと思う。だけど柊たちは

自分達の考えが最良だと疑わない。そしてそれは迷いもない程だ。
僕の言葉が悉くはねのけられたのはそのせい。その確固たる意志の強さが原因だ。そんな奴らにその考えを改めさせるのは大変だ。
言葉を伝える為に、まずは力を示す事が必要ならそうするのも仕方ない。だからどうか……これで止まってくれ！
だけどその思いも空しく、白煙の向こうからその翼の輝きが顔を覗かせる。
「本当に、どこにそんな力が残ってるのかしらね？　どう見ても満身創痍なのに……それだけ命という物の価値は重いのかしら？」
透明な翼の向こう側から柊が何ともおかしな事を言っている。それはまるで命の重さを知らない様な口調だ。
「そんなの……当たり前だろ！　一つしかないんだ、誰にだって命ってやつは！　命を懸けるって事は、自分自身の全てを懸けるって事なんだ！」
「そうね。確かにそんな事言われてるわ。人にとって命は大事よね」
柊の様子からして、僕の話の真剣度が余り伝わった様には見えない。いや……というか、命って物が分かってないんじゃないか？
僕もそこまで命を知ってる訳じゃないが、とっても大切って事は本能が知ってる。けど……人ではない柊はそんな認識が無いのかも知れない。
ＬＲＯじゃ、本当の死が無いから……それは本当の命が無いって事なのかも知れない。僕達は死を感じるからこそ、命を実感できる。だけど……柊達にとっての命ってなんなんだろうか？
どうして僕の言葉が今まで届かなかったのか……あれだけセツリ

の事を大事にしてるのに、命や死と言う言葉への反応が余りにも薄かった理由……それはこれが原因何じゃ無いだろうか？

時々何言ってんだって思ってカチンと来た事があった。このままじゃセツリは長くない……そう言っても、こいつらは【幸せの中で死ぬのならいいじゃない】位のノリだった。

それってよく考えたらあり得るか？　一度リアルに戻れば良いだけ何だぞ。リアルに戻ったってＬＲＯにこれなく成る訳でもない……なのにこいつらはそれを頑なに拒否してる。

認めようとはしない。それが僕には理解できなかったけど、それは柊達が命って物を認識してないから……その可能性が出てきた。

「人はって……お前達はここで生きてんだろ？　死ぬとかないのかよ？　お前達の命って何だ！？」

「私たちの命？　それはこの世界のそのものよ。だってそうでしょう？　私たちはこの世界の一部で、世界は私達の一部だもの。きっと私達が死ぬときは、世界が死ぬとき。そして私達の存在価値も、この世界もあの子が居て笑ってくれないと、死ぬことと同じよ」

（そう言う事か……）

もしも僕の考え通りなら……絶対に勝利だけが道じゃないのかも知れない。僕達はやっぱり、少しだけ外れたレールを隣あって走ってるだけだ。

その先に何個もきっとあるんだ、合流地点がさ。でも今まではそれらを合わせる事が出来なかった。色んな事を僕達は知らなかったからだ。

でもそれなら教えてやればいい。その堅く閉じた耳を、無理矢理

こじ開けてでもさ。それが出来たらきっと……誰もが幸せになれる未来がある気がするよ。

「分かった？　だからこそ私達にはあの子が必要で、あの子を幸せにするのが私達の役目。寂しい思いも、悲しい記憶も、私達がこれからは埋める。だからもう良いじゃない？

悪足掻きもそろそろ止めにしましょう」

そう言って柊は自身を守ってた翼を再び大きく開く。あの攻撃を食らっても傷一つ見あたらないな。やっぱり吸収とかされたのだろうか。

まあいいさ。取りあえず今は一筋の希望が見えたところだ。こんな姉妹を後どれだけ相手にするか憂鬱だった所に舞い込んだ光。

それにどうせなら、倒すことが無くす事じゃないほうが僕は良い。天扇とシルフィングが向かい合う。

「ああ止めよう。そろそろ本気で足掻いてみるさ。足掻いて足掻いて……僕が掴みたい未来は決まった！」

そう僕は掴みたい。そして掴める筈なんだ。僕達は本当は……似た者同士なんだから。蓋を閉じたような空。それを開けようと思う。残り後三分弱で。

命違う存在（後書き）

第百四十二話です。
柊達とスオウのかみ合わなかった理由が分かった感じの回です。
そして再びスオウはピンチ！　もうどれだけだよって言いたいけど苦難は多い方が燃える物ですよね。
次ではこの柱の正体もスオウの狙いも分かる事でしょう。後三分弱……だけど今のスオウの状態なら、はまればやれる時間だと思います。雷速なら、きっと。
てな訳で次回は日曜日に上げます。それではまた。

無限の欲望（前書き）

白い炎はまっさらな証。それは今の一瞬を開くための白なんだ。白い炎は相手にを燃やして色を付ける。その敵に最も効果的な姿と色の炎となって。何度も受けて、何度も伸ばしたこの槍がそれでもガイエンを貫く事は出来なくても、この炎はきっとガイエンを燃やせる炎に成る！

無限の欲望を燃やしつくす炎へと。

無限の欲望

槍に纏った白い炎が目の前で揺らめく。振り卸されていくガイエンの黒い両腕……だけど俺の槍じゃ両腕のどちらかしか防げない。

でもどちらかじゃダメだ！　カーテナの力はそれだけ強大。片手だけでも俺を潰すなんて訳がない。だからどっちも防がないと……けど、その手だてが……そう思ったときに、俺の目に僅かに光る物が写った。

ガイエンの球状になった下半身。そこに埋め込まれたように成ってる僅か三十センチ位の小剣。それはカーテナ本体だ。

（ここしかない！！）

そう思った。白い炎を纏った槍が真っ直ぐにカーテナを目指す。だけどカーテナを攻撃したからって何が起こるか何て本当は分からない。

てか、何も起こらないかも知れない。そうなったら両腕から繰り出される力に、俺はペシャンコに潰されるだろう。やっぱり片腕だけでも……そんな考えが不安と共に押しあがる。

だけどそうして浮かぶ答えは、「それでどうなる？」って事だ。どっちにしろ何も切り開け何かしない。ここで勝負しないとまた負ける！！

可能性だってあるんだ。カーテナがガイエンの力と自信、そして夢のアイテムならそれをどうにか出来ればこいつは止まる。

だから俺は信じて打ち込もう。カーテナに、俺の精一杯の力と思いを。

「うおおお

ように蠢いた。そして不意にこんな言葉が聞こえる。

【まだなんだから、邪魔するなよ】

するとその瞬間、沸き立った部分がカーテナに集まるようにして波を打ち、その刀身を光らせていく。

（ヤバイ）

そう思った。だから俺はまだ半分位白い炎を、意識的に槍の先端に集中させた。そしてその瞬間、二つの力のぶつかりなのか、もしくはカーテナだけの力が原因かは分からないが大きな爆発がそこで起きた。

「っづあああああああ！！」

その衝撃で後方に吹き飛ぶ。だけどその事よりも、頭を占拠してたのはあの声だ。一体何の声だったんだ？　明らかにガイエンでは無かった。

顔を上げてみても爆発が起きた地点はまだ奮迅に紛れてる。あの反撃はガイエンの意志じゃなかった……そう思えてならない。

「アギト！」

「アイリ……影からは解放されたんだな」

「はい、あの爆発と同時に。アギトは大丈夫？　まさかガイエンがあそこまでやるなんて……どうしちゃったの？」

奮迅を避けて走ってきたアイリが、その方向を見て不安な声を出

す。でもその気持ちも分からなく無い。俺もまさかあんな事を言われるとは思わなかったし、そこまでやる奴とは考えなかった。
だってガイエンは、いつだってリアルとＬＲＯを分けてた奴だ。それがリアルにまで影響するような攻撃を取るなんて……ただのハッタリだったのかも知れないが、あの瞬間そうは思えなかった。

「なあアイリ。本当にお前は、またアイツとも同じように居れるって思ってるのか？　俺はアイツを、全力で倒すぞ」

するとそんな宣言を聞いたアイリは、こちらを向いて静かに口を開く。

「思ってます。でないと、意味なんて無いんだよアギト。私にとってはね。それに全力全快は当然です。今のガイエンにはそれでも足りないくらいだって分かってるでしょ。
だからこそ私も居るんだよ。アギトは約束守って今度は来てくれた。だから次は、二人で友達を助けましょう！」
「たく……お前はほんと前から無茶しか言わないよな。だけど、どうしてもやりたくなる。そんな無茶ばっかりだ。だからやっぱり、お前と居ると飽きないよ。
それにやっぱライバルはいないと燃えないしな。そして俺は思ってる、友と書いてルビはライバルだってな！」

するとその瞬間、丁度白かった炎全体に色が付いた。あの爆発で地面とかにまで飛ばされてた炎達も一斉に七色の光を帯びて俺へと向かってくる。
この七色の光が弾けたとき、ガイエンに対抗しうる色が現れる筈だ。

「このスキルって……私知らない」

「だろうな。誰にも見せてないし、それに手にしたのはアルテミナスから離れてからだからな。アイツもこれは知らないさ。
でもだからこそ、届くかも知れない最後の武器だ。だからこそ、何も出来ないアイリは応援でもしてろよ。捕まるのは心臓に悪い。それに今のガイエンは、何をするか分からない。
お前にだって次はあの力が向けられるかも知れない。あの異常な力が……」

俺は奮迅の先を睨み据える。やっぱりどう考えたって、今のガイエンの状態はおかしい。それが例えカーテナだからとしてもだ。
だってそもそも、ずっと使ってた筈のアイリであんな風に成ったことは一度もない。そしてどうしてあんな風に成ったのか……それを考えるとたどり着くのは奴だ。
あの女……セツリを浚って、カーテナまで使えたあの裏側の存在。関わってない何て思えない。

「それは……だけどガイエンがガイエンであるのならそんな事あり得ないって私は信じてる！　でも確かに、あの異常な状態がガイエンをおかしくさせて行ってる気はする。
なんなのあれ？　親衛隊もそうだったけど、ガイエンはその比じゃない。だって……あんなの……」

それから先は掠れる様な声で聞き取れなかった。でもだいたい分かる。だって今のガイエンを見たら、普通はその印象を持つからだ。
きっと誰もがこう思う……『化け物』と。それか新種のモンスターだな。けれどアイリは自分の友達をそうは思いたく無いから、最後は掠れたんだろう。

言うわけには行かなかったんだ。俺は前を見据えたまま、ガイエンの言ったことを思い出して言葉を紡ぐ。

「ガイエンが言うには、あの姿は進化系らしい。上位種なんだってよ。まあそんな訳ないだろうが、あれはカーテナが原因だと思うかアイリ？」
「そんなわけ無い！　だって私があんな姿に成ったこと見たことある？　あり得ないよ」

アイリは激しく否定した後、もしかしたら……何て言う可能性を考えたのか、最後の声は萎んでた。まあまだ、カーテナの全部を知ってる訳でもないんだろう。
だけど、やっぱり俺もアイリの意見に賛成だ。ずっと使ってたアイリに起きない事が、突然手にしたガイエンに起きる物か？

もしもそれが起きたのなら、もっと別の要因を考えるべきなんだ。今まではカーテナというブランドに目が眩んで納得してたが、それじゃあ説明出来ない事が起こてる。
あの声とか……さっきの攻撃を無傷で耐えた事とか。幾ら白い炎がまだまっさらな状態としても、炎としての通常特性はあるし、何より槍の攻撃力は落ちるはずもない。
あの状態のガイエンにでも傷一つ位はつけれた筈だ。

「そうだよな……幾ら何でもカーテナだけであんな風に成るなんて思えない。何か別の……ガイエンさえ何かに利用されてる……そんな気がしないか？」
俺の言葉に、アイリは直ぐに呟いた。
「シクラ……」
「誰だそれ？」
「あれよあれ、女が居たじゃない。やけに美人で、小悪魔系な女。アルテミナスで私以外にカーテナを使った……」

アイリの言葉に思い当たる奴は一人しかない。それは間違いない無く、あの女だろう。セツリを浚ったアイツだ。

「シクラ、それがアイツの名前か。って何でアイリが知ってんだ？」

「城に囚われてるとき、話しかけて来たの。あの人言ってたわ。『私達はお互いに利用してるだけの間柄なの。だからどっちかが裏切ってもそれは油断した側が悪いのよ。ふふ、利用の度合いも比率何てとれてないかも知れないけどね。

だって貴女のお友達は取りあえずまずここだけど、私達はいつだってＬＲＯ全体を見てるんだもの』

って。ガイエンは自分が利用されてる事も分かってた。だけど彼の性格なら、それを打ち崩す自信もあったはず……だけど――」

「――向こうの方が一枚上手だったかも知れないって事か」

俺の引継にアイリはコクリと頷く。確かにガイエンはそんな奴だ。だけど敵の大きさを見誤ったんじゃないか。きっとガイエンだって自分が利用してるつもり立ったんだろう……てか、今更だがガイエンが売ったのはセツリな訳か。

それと交換に手にした物があの力？

「あの人……何なの？　何だか普通じゃないのは分かったけど、私は良く知らないから」

そう言えば、アイリは向こうに囚われてたんだから情報は無いよな。

「まあ俺もシクラって奴に付いてはよく分からない事だらけだが、取りあえずアイツは確かにカーテナを使った。まあお前の体を媒介にしてだけど。

それにスオウの奴が言うには、裏側の存在らしい。システムの裏

側……だからその存在自体がバランス崩しと思っていい」

バランス崩し、その言葉にアイリは僅かに反応する。ある意味、その怖さを一番知ってるのはアイリかも知れないからな。

「そうなんですね……そこまでの敵なんだ。なら……もしかしたら、変な物が組み込まれたとか……その位出来そうですね。

カーテナに新たな機能を無理矢理入れた、あれはその結果とかかも……そして私にまとわりついてた黒い影もその影響だったのかも」

アイリの考えはあながち不可能でも無いかも。カーテナ自身をいじくったって事か。確かに奴なら出来る事なのかも知れない。

てかそう言えば――

「そうだよ、お前は大丈夫なのか？　確かガイエンがカーテナを使う度に、その黒い影に浸食されてただろう？」

そう、そして今のガイエンとかと同じ様な肌に成りかけてた筈だ。でも今は全然そんな事は無さそうだが……

「私は大丈夫です。あの黒い影が私を苦しめる事はもう無いから……今の私は多分、あのクリスタル達に守られてる。

それにアルテミナス自身の意志はこっち側だから……だから私の声に応えてくれたの」

そう言ってセラ達の方へ目を向けるアイリ。そこでは激戦が今も繰り広げられてる。そして何かちっこいテツが一・二・三……四・五とまだまだ見える。

あれなら数の差をどうにか出来そうだ。するとその時、奮迅が一気に払われた。そしてその場所に佇む異様な人影が姿を現した。

「アギト……お前は本当に……邪魔で邪魔で仕方がない！　お前の役目は終わったんだ。さっさと消えろ！！」
「ガイエン……お前……」

ガイエンは激しくいきりたってるが、俺たちは思うように言葉が返せない。何故なら、その姿が更に異常だからだ。
何だか崩れてる。その体がだ。黒い影が砂の様に下に落ちて行ってる。だけどその中から現れてるのもまた黒い肌。まさかあの影が薄く体を包んでて、攻撃から身を守ってたのか？
でも……あれって大丈夫なのか？　黒い影が体中から沸き立ってる。それは異様にまがまがしい。

「止めてガイエン！　それ以上その力に溺れちゃだめ！　その力がカーテナな訳ない！　ガイエンはきっと何かに利用されてるよ！！」
「利用？　それがどうした。それすらもならば私は飲み込んで使うまでだ！！　カーテナではない？　この力、それ以外に何がある！？
私はカーテナの最も強い力をこの身に宿らせてるんだよアイリ！
自分ばかりを肯定するな、これがカーテナの正しき使い方だとは思わないか？」

アイリの言葉もガイエンには枯れ葉の如く踏みつぶされる。利用とか、確かにガイエンは飲み込む気でいたんだろうし、そう出来ると思ったてるだろう。
でもそれはどうだ？　俺にはお前が踊らされてる様にしか見えない。その黒い力は絶対に、ガイエンを蝕んでる。
するとアイリが、苦しそうに小さく呟いた。

「……そんな」
「そんな訳無いだろ！　カーテナがどういう力か、お前だって知ってるだろうが！　それが・・その狂気が国を治める者の物かよ！

今のお前じゃ、滅ぼすことしか出来なさそうだぞ！」

俺はアイリの言葉を強引に奪った。だって今のアイリじゃ強く否定出来ないかも知れない。アイリはカーテナの事を俺より知っていて、それがガイエンの可能性を否定出来なくしてるから。

まだまだ謎が多い『バランス崩し』だ。中途半端に理解するのが限度で、だけどだからこそ何でも出来る様に思えてしまう。

だから俺はもっと理解の浅い立場で完全否定してやった。あり得るか、あり得ないか……俺的には後者なんだよ。そして理解が浅いから、強気で言える。

ヤケクソ気味で、これは押し問答でしか無いのかも知れないが、言葉にしないと否定は出来ない。俺達は認める訳には行かないんだよ。

そのまがまがしい力がカーテナだって。

「くくく……アギト、お前にはわからんよ。国の大儀も、責任も背負えぬお前には何もわからん！！　力がいるんだよ。そしてそれを示すのは王の役目だ。

そしてそうでなければ何も守れん！　何も手に出来ん！

私はなアギト。搾取される側でのうのうと笑って居られん！！

この世界で手に入れれる物は全て、我が手に入れてみせる！！」

言葉と共に、前の影の鎧が全て砂と化していく。そして体中から沸き立つ黒い湯気みたいなのが更に大量に流れ出てた。

それはまるでガイエンの欲望に反応してるようでもある。その無限の欲望に。その時、ガイエンの掲げた左手に何かが見えた。

（あれは……）

銀装飾の台座にはめ込まれた不思議な色に光る石の結晶『リア・ファル』だ。ガイエンがあの状態に成ってから姿を消してたと思ってたアレは、どうやらあの黒い影で覆って見えなくしてただけらしい。

だけどそれは同時に、リア・ファルがそれだけ重要な物だって事だ。カーテナを壊す事は出来ないし、さっきの攻撃でもカーテナ事態をどうにかするのは多分難しいと感じた。

でも……あの比較的細い指にあるリア・ファルならどうだ？　あれは王の選定石だとも言ってた。つまりは実質、ガイエンがカーテナの力を振るえてるのはリア・ファルのおかげ。

その繋がりを断ち切ることが出来れば、ガイエンをあの異常な状態から解放出来るんじゃないだろうか。

「アイリ、あの指輪がお前が言ってたカーテナへの介入物かも知れない。王の選定石『リア・ファル』あれが変な声を出してから、カーテナはその力をガイエンにも与える様に成ったんだ」

「リア・ファル……アレがカーテナをおかしくしてる原因って事ね。きっとあの指輪が引き出す力は、ガイエンの欲望により強く反応してる部分だけなのかも……だからあんなに苦しくて黒いんだよ」

アイリの言葉に、俺は「そうかもな」と返した。苦しくて黒いのは、その欲望だけじゃないかも知れないがな。そこにはきっと嫉妬とかもあると思う。

アイリもガイエンも気づいてない様だけどさ。アイリは天然だとしても、ガイエンの奴はそれを欲望で見えなくしてるのかも知れない。

俺は思う。アイツが手にしたいのは本当にアルテミナスなのかと。隣で伏し目がちにガイエンを見てるアイリを眺めてさ。本当は、俺

達があの頃の様に成るためには、それを解決しなきゃいけないんじゃないだろうか。
だけど、まずは正気、まとも……何でもいいがその野望を止めなきゃ何だろう。アイツを覆う無限の欲望……その中の真実をさらけ出させる為にはさ。

「わかったかアギト。私にはやるべき事がまだまだあるんだ。そんな道で、お前に戯れ言に付き合ってられる時間はもう無い！！
案ずるなよアギト。利用されてる側なら直ぐにわかるさ。シクラを踏み砕き、アルテミナスを侵攻するモンスター共を全て葬むったときにな！
私はちゃんと勝ってやる。だからお前は安心して死ね！この世界に未練がないようにな！！」

大きく両腕を広げたガイエン。するとリア・ファルから久々にあの深いな笑い声が聞こえてきた。そしてガイエンの体中……そして地面に広がった影からも、何か黒い物がわき出て来た。
それらはガイエンの頭上で収束し始めてる。真っ黒な黒い球へと。その時、俺の手に暖かな温もりが重なってきた。

「アギト……大丈夫。今度は一人じゃない、私も居ますから」

アイリのそんな言葉が耳から伝わり、体全体に巡ってく。一人じゃないか……それだけで変わるのは、心の支え位だ。
アイリは戦えないしな。戦力になんて成らない……だけど不思議と、負ける気なんかしなくなる。アイリの戦いは例えなにも出来なくても逃げない事……なのだろうか？
言葉はもう届かないし。目を逸らさずに、例えどんな事でも、見据える覚悟がアイリにはある。蚊帳の外じゃいたくないから……知らないと助けれないから……

「ああ、俺ももうこれ以上負けてやる気なんか無い！　今度こそ、アイツを止めてみせる。そうしないといけない。もう逃げたくなんか無いから！！」

すると槍を覆ってる虹色の炎が一斉に弾けだした。ようやく、やっとで準備が整った様だ。槍を覆う炎は金色に近い赤を宿してる。そしてその炎は俺の体全体をも覆ってる。

この状態で打てる渾身の一撃は一発だけ。狙いはやはりアレしかない。奴の左腕に光るリア・ファルだ。俺はアイリと繋いだ手を離す。

するとその瞬間、後ろに居たアイリが何かに引っ張られる様に消えた。

「アギト！」
「アイリ！！」

声のした方は前方だ。そこにはアイリの奴が再び影に絡め取られてた。

「これで心置きなくこの攻撃が撃てる！！　何をしてるか知らないが……お前程度の力では、これは防げはしない！！
塵と化せアギトオオオ！！」

ガイエンが叫んだ瞬間。頭上の球体は黒い光線を放出する。無限の欲望そのもの様な攻撃が、俺へと迫る。避ける事も許されない大きさ……そしてスピードだ。

だけどガイエン……このスキルを甘みるなよ！　今の俺の状態はお前を倒す為だけの特別仕様だ！！

「ガイエン！！　お前こそ、いい加減目を覚ませええええええ！！」

俺は片腕を突き出して、そこに体中の炎を集める。赤と金色が混じりあった炎が、真っ黒に染まる力の渦を受け止めた。

「何！？」

「食らいつくえぇぇぇぇぇぇぇ！！」

地面にめり込む足を踏ん張り、拳を握りしめる。その瞬間炎は大きく広がり、黒いその光線を覆いながら本体めがけて駆け抜ける。

そして食らい尽くした炎はガイエンを大きく照らした。その間にも俺は奴の懐めがけて地面を蹴ってる。届かせなきゃいけないんだ！　この一撃に全てを懸けて！！

「ガイエン！！」

「アギト！！　だが私はまだ負けん！！」

降り卸されるカーテナの力。それらは肩をかすり、足を持っていこうとする。でも俺は前を見る。そしてそのたった一点へ金色の炎を打ち込もう。

無限の欲望（後書き）

第百四十三話です。

遂に決着の時は迫ります。だけど何だか新たなきな臭さが匂ってます。まあ元から異常は一目瞭然だった訳だけど、カーテナと言う力の後ろに隠れてた何かがまだ見えはしないも、その存在を表しました。

まあだけど、今は三人の結託が大変です。でも頑張ります。

てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

明日の選択肢（前書き）

厚い雲に閉じられた空。そこで僕と柊は向かい合う。僕を閉じ込めるこの結界。その本質を突いて、出来る事を僕はやる。このままじゃ駄目だからな。僕が思い描く、この力の軌道には、この柱は邪魔でしかない。

流れやすい余計な物は必要ないんだ。だから僕はこの柱にセラ・シルフィングを突きたてる。だけど奴の氷は無尽蔵で、更には自身の翼を分けた分身までもが、残り時間少ない僕を追いつめる。

明日の選択肢

空を覆うほの暗い雲の蓋。そこから白い結晶が降り注いでくる。それはきっと、柊が何かをしてるんだろう。六対の氷の翼は妖しく輝き、天扇は空から落ちる白い結晶よりも光る物を落とし続けてる。

そして僕は……この三本の氷の柱に捕らわれてた。自分から常に放出されてる僅かな電流……それが意識して感じると、柱の方へ流れてるのがわかる。

何回飛んでもこの三本の柱を回る理由……カゴの中の鳥の様に逃れられないこの領域。この柱は多分……僕はセラ・シルフィングを柊に向けたまま、その答えを突いてみた。

「これって、まさか避雷針か？　即席にしては良くできてるな」

「おほえめに預かり光栄ね。その通り、似たような物よ。だって自分でも制御出来ないのなら、こっちがその行方を握る方が確実じゃない。もう、どこにも逃げれないわよ。

後悔してる？」

天扇を構える柊がそんな事を聞いてくる。そう言えばさっきから後悔って事を良く言ってた。そんなにこの力を掴んだことを後悔させたいのか。

でも……そんな事はやっぱりないんだ。この力だからこそ、柊はここまでしてる。なら通せる。その希望がある。だから僕は言ってやろう。勝ち誇った様な顔してる柊にさ。

「後悔？　そんな分けないだろ。例え捕まったって、逃れられなくても、握った奇跡を後悔するなんて贅沢しない。これは僕だけじゃ

ない、ここまでこさせてくれたみんながくれた奇跡なんだ！
だからそれを与えられた僕がやる事は後悔じゃなく、この力を何としてもお前にぶつける事だ！　柊、人間の諦めの悪さを舐めるなよ」

奇跡の後悔なんて贅沢過ぎる。どうにも出来なかったかも知れない状況に、どんな力であれ光は射してくれたんだ。それだけで今の僕には十分過ぎる。
それでも優しくなんか決してないけど、それが僕とＬＲＯの関係だと割り切った。

「舐めてなんか無いわよ。愚かとは思うけど。あの子に拒否された時点で君はストーカーなのよ。それでも追いかける執念は女として怖いわよね。ほんと、いい加減にして欲しいくらい。
それにどうする気？　君は捕らわれたカゴの鳥よ。幾ら速く動けても、着地点が三カ所に絞れるのなら、意味なんて無い。わかってるでしょ？」

柊の目が女の敵を見る目に成ってる。ストーカーは流石に心外何だけど、そっちから見たら確かにそうか。確かにセツリは僕を拒否したし……それは僕のせいで弁解の余地も無いけど、引く訳には行かなかった。

間違いも失敗も認めて、それでも僕は追いかけるべきだと思った。だってこのままじゃ無くすと解ってる命があって、自分がそれを救えた位置に居た……ならもう一度、そこに行きたいじゃないか。
最初は偶然だった。何も解らないままに出会って、走り出した。夢中になって駆け抜けて、そして遂に転んでしまった。

絡まった足はなかなか戻らなくて、切らした息は苦しかった。で

もさ、自分のせいで流れた涙は冷たくて、離れた心は痛く感じた。
急いで手を伸ばしても、それを取ってくれる事は無かったセツリ。間違いと失敗に気づいた時には、もう無知ではいられない。

そして選んだのが、追いかけること。今度は自分の意志で進み出したんだ。それが例えストーカーと呼ばれようとも、僕は信じてる。
セツリが本当は生きたいと願ってる事をだ。だから意味が無いなんて事は無いって事を証明して行ってやる。それを示してやろう柊達に、そしたらきっと伝わるはずだ。
柊が立つ場所に視線を向けて僕は言う。

「わかってるさ。確かに幾ら速く動けても、誘導されるんじゃ意味はない。なら……こうするまでだ！！」

僕はその瞬間、自身の足下の柱に剣を突き立てる。普通よりもずっと柔そうなこの柱だ。壊せない訳はきっと無い。それにこの柱を無くせれば自由が戻る。
自由すぎる事に成るけど、それよりも柊の手の平の上で踊るよりもずっとましだ。柱に突き刺さったセラ・シルフィングは激しい雷撃を放ち続ける。
そして柱に亀裂が入った。

（後少し……）

激しく吹き出す青い雷撃。さっさとこの柱をどうにかして目的を果たさないと。だけどその時、柱が砕ける前に柊が再び光球を放つ。

「邪魔するな！！」

僕は片手を光球の迎撃に移す。振るった剣から放たれた雷撃が向

かい来る光球を打ち落とすけど、奴の無尽蔵な力は次々と光球を打ち出してくる。
「邪魔するわよ。だって君はここで倒すべき敵だもの。君は私達の世界を壊す存在。あの子を苦しめる存在。だから私が今ここで、葬ってあげるのよ」

「――っつ！！」

更に増えた光球に迎撃が追いつかない。柱の頂上付近で巻き起こる爆発には、次々と光球が追加されていってる。だけど、そこに僕はもういない。
その爆発の寸前に僕はセラ・シルフィングを抜き去ってもう一度飛んだんだ。そしてやっぱりだけど、またこの柱に僕は引き寄せられてる。
今度は反対側。柊の斜め後ろ。するとまた直ぐにこっちにも光球が来た。どうやら当たってないと分かってたみたいだ。

「無駄なのよ。何をしようとね。君じゃこのカゴから出られない」
「うるっせぇ！」

迫り来る光球をセラ・シルフィングでぶった斬る。今度は両手だから遅れは取らない。両手を使えれば手数も速さも圧倒できる。
光球の先の柊、そこに向けて雷撃を放つ。こっちはまだまだ諦めちゃ居ないんだ。何と言われてもな。だけど向こうにも用意はあるようだ。

「同じ手が、そう何度も効くとでも？」

そう言った柊。すると向けられた天扇……それが常に放ってる雪みたいなのをこちらに向けてきた。そして同時に輝きも勢いも増す。

するとそんな天扇の影響を受けた、雪がもっと大きく、結晶化する。
それらは空気中に大量に現れた。放った雷撃はその無数の結晶へと枝分かれしていってしまう。これもまた力の誘導か。

「ちっ……」

本当に能力のバリエーションが豊富な奴。というか、もしかして僕と柊は相性的に悪いんじゃないか？　風と雷を使う僕に対して柊は氷を今はメインに使ってる。
こう考えると、別にそれほどでもないか。じゃあ何でここまで向こうに押されるか……それは多分、スキルに奴は縛られてないからだと思う。

だって氷を操ったり、生み出したりするスキルはあるだろうけど、ここまで自由度が高いわけない。避雷針生み出すスキルは考えられないしな。
柊はその系統の力を思い描くままに使えてると思うんだ。それが僕達の力との決定的な違い。システムの裏側を知ってるからこそ出来ること。
だからこそ、僕達はあいつの使う技一つ一つに驚くし、何をしてくるのか予想出来ない。あいつの使う力は既存ではないから。

雷撃と氷の衝突で柊を隠す様に広がる水蒸気。上手く防がれたし、これじゃあこっちからは仕掛けられない。するとその白い水蒸気の先から激しい光が漏れだして来てる。
そして次の瞬間、水蒸気を突き破って光が真っ直ぐに向かってきた。だけどこんな溜が必要な攻撃、今の僕には早々当てること何か出来ない。

だけどそれは柊だって分かってるだろう。なら本命は移動先に仕

掛けるつもりなのかも知れない。でも、それが分かってても避けない訳には行かない。
僕はすぐさまもう残り二つのどちらかの柱へ飛ぶ。どうせならダメージを与えてた方へ飛ぶのが理想だ。アレはもう少しで砕けそうだったからな。一本でも破壊出来れば、このカゴは意味をなさない気がするんだ。

もちろん一つ一つでも避雷針としての効果はあるんだろう。だけど三本でこの配置だからこそ、僕はずっとこの三本の柱を回ってるんだと思う。
他の選択肢が入る前に、今はこの三本の柱のどれかに引き寄せられてる。でも、もしも一本でも崩す事が出来たなら、そこにはきっと先取られてた選択肢が入る筈だ。

トライアングルだからこそ、スムーズに回れてた鳥かご。詰まること何か無く、必ず二つの内のどちらかに進まされてた。
でも、進む場所が一つになって、力が上手く流れなくなれば、漏れ出す場所は必ず出てくる。そこに光を見いだすしかない。
願いを込めて飛んだ先……だけどそこの柱は、傷一つ無い綺麗な柱だった。

（外れか……いや、でも！！）

泣き言何か言ってられない。時間がないんだ。飛んだのなら、そこを崩す事をやるべきだ。嘆く時間の一秒さえももったいないんだから。
僕は再びこの柱にセラ・シルフィングを突き立てる。しかしその時、僕は気付いた。この柱、今までに無かった物が見えてる。

純度の高そうな透き通る様なこの氷は反対側まで綺麗に写してた。

だけど今はどうだ？　柱の中にいつの間にか出来てる大量の華が、今までの様子を変えていた。
それにこの華を僕は知ってる。この華は柊の服に付いてる奴と同じで、その攻撃を一度は食らってる。保険のつもりか、柊は用心深くトラップでも仕掛けたつもり何だろう。

だけど僕は、そんな事はお構いなく剣を柱にぶっ刺した。だってそうだろ、今の僕の体は雷だ。この華達の爆発を食らったとしても、体が凍る事はないし多分内側だってそうだと思う。
寒さなんてもう関係ないんだ。手を拱く理由なんて無い。セラ・シルフィングが青い雷撃と共に柱へ刺さると同時に、埋め込まれてた華が一斉に表面に出てきて、冷気を放つ爆発を始めた。
白い冷気が辺り一面を埋めるように広がっていく。だけどやはり寒くはない。何も問題なんてないんだ。

「ん？」

そう思った矢先、おかしな事に僕は気付いた。セラ・シルフィングを突き刺したのに、その雷撃が広がらない。前の時はこれで、かなり亀裂を入れれた筈だ。
だけどこの柱は変わらずその透明な姿を保ってる。純度の高い透明な姿をだ。これはまさか……そんな言葉が頭をよぎる瞬間、氷の柱から伸びてきた腕が僕の首を掴み取った。

「ぐあ！！　な……に？」

締められる事に抵抗しながら腕の先を見ると、そこから何かが更に生えてきてる。でも、何が生えるのかは何となく予想は出来る。
多分きっと、考えたく無い奴と似てるんだろう。足が柱から離れて宙に浮く。雷化で溶け合ってる腕は、青い雷線を伸ばしてるよう

になってる。

パキパキと耳聞こえる音。目の前の氷はやっぱり僕が思った通りの姿に成っていった。生命を感じさせない無機質な作りだけど、それはまさしく柊だ。

こいつ……こんな事まで……だけど今更、それほど驚く事でも無い。氷は流石にバリエーションが豊かだ。そしてそんな氷の分身がぎこちなく口を開くと、後ろから柊の声が聞こえてきた。

いや、柊の声に併せてこっちの人形が口を開いてるのかな。

「ふふ、捕まえた。もう逃がさないわ。それにわかったんじゃ無いかしら？　この柱を壊すのは無理だって」

不気味な分身があたかも喋ってる様に見えるから、なんだか心臓に悪い。それに確かに捕まったのはやばい事だ。こいつ……こんな細い腕してる癖に異様に力が強い。

これはまさか、雷化してなかったら首をへし折る勢いだ。

「そんな……事……っ！？」

反論しようとしてもこの状態じゃ上手く喋れない。それにこの氷の分身の背から何かが生えてきてた。それはまたも見たこと有るものだ。

目の前で大きく凛々しく広がるそれは翼……柊本体の背に有る翼と同様の物が一対、その背に生えてきた。こいつは氷の体だから、有る意味本体よりもその翼とマッチして見える。

柊は何か無理矢理生やした感が有ったけど、こいつはそういう仕様で通りそう……なんて考えてる場合じゃないかも知れない。どう考えてもやばそうだ。

氷の翼はその羽を刃に見立ててこちらを狙ってる。首を掴まれた状態じゃ防げないし、かわせない。その時、再び分身の口が動いて、後ろから声が伝わってきた。

「やっぱり君を捕らえて確実に殺すにはこれがいいと思ったの。言っとくけど、その翼は偽物じゃ無いわ。私の六対の翼の内の一対。その子は私と違って、翼の力を使うのに遠慮も容赦も無いわよ。ただの人形は与えられた事をやるだけなんだから！」

翼が大きく広げられて輝きを放つ。混沌としたような翼の輝き。通りで余りにも同じに見えると思ったら、柊の奴は自分の翼を与えてたのか。

確かに六対も有ればそれは出来そうだけど、それは力を分散するって事でも有るんじゃ無いだろうか。この一対の翼分、柊の力も落ちてる筈。

だが、今まさに僕は大ピンチだ。このままじゃそれを確かめる前に終わってしまう。どうにかしないと……取り合えずこの、首を締め付ける腕をたたっ斬る！

セラ・シルフィングは柱に突き刺さったままだが、僕はその感触を感じてる。繋がってる感覚が有るんだ。今はセラ・シルフィングも実体じゃない。

だからこそ、出来る筈だ。僕達はまだ雷線で結ばれてるんだから！　僕はこの氷の腕を断ち切るイメージを浮かべて腕を振るった。

すると次の瞬間、支えは断ち切られる。視界には一瞬だけ青い雷光が見えた。氷の腕が首に残ったまま僕は落ちる。だけどそのおかげで間一髪、翼からは逃れられた。

僕はもう一方の腕を動かして腕を砕く。無害に成ったからってやっぱり首に腕が絡まってるのは何だか嫌だからな。

だけどどうやらこれで終わりはしないようだ。上空から無数の氷の刃が降り注いできた。大きく開かれた翼から繰り出されるこの攻撃も、僕は知ってるぞ。
まさかとは思うけど、今まで柊が見せた技を全てあの分身も使えるのか？　僕は落ちながら、氷の刃を砕き続ける。どうやらこの状態だと、自分の間合いも恐ろしく広い事に気付いた。

今までは手放さない様にと思って投げるなんて発想無かったが、これはもう腕が伸びてる感じなのか、どこまで行っても僕はちゃんとセラ・シルフィングを握ってる感覚だけは有る。
確かにもう一人柊が増えたこの感じは嫌だけど、僕もまだまだこの力の可能性を少しだけ垣間見た。それにこの攻撃は何回だって打ち落としてるんだよ！

「うらあああああああ！！」

腕を一振りするだけで、恐ろしく広範囲の刃までも打ち砕ける。砕けかれた氷は雪と共に、景色の一部と成って落ちて行く。
だけど自分も落ちてるからな。どうにかしないといけない。でも……これならもしかして一気にこの柱を切れるんじゃ無いだろうか？

それにいざと成れば柱に突き刺してブレーキだって出来る。やる価値は有るはずだ。僕は柱に向かってセラ・シルフィングを振るう。普段なら届かないこの位置でも、今なら関係ない。
チャンスはこの一瞬。一撃で決めろ！！　雷化したセラ・シルフィングが僕のイメージと、同化してる腕の動きに併せて大きく動く。
その瞬間、青い雷線が軌跡を描いて尾を引いた。そして一気に横に亀裂が入る。

「行ったか？」

このまま倒れてくれ。そんな思いを乗せて過ぎ去っていく攻撃の後を見つめる。だけどその時、亀裂からあの華が顔を出した。そして冷気を出して弾けると、その部分が元に戻っていく様だ。

「――っつ！！　あの華……やっぱり」

僕は思わずその光景を見て歯噛みする。あれは僕へのトラップじゃなく、柱を修繕するために配置した物。おかしいとは思った。

自分にあれが効かないのは柊だってわかってる筈だからな。でも元からあんな機能が有ったとは思えない。僕が柱を壊そうとしたから、新たな利用方を柊は作ったんだ。

でも……それなら！！

「修復スピードが追いつかない程に切り刻む！」

二刀流の特性は手数の多さ。それで圧倒すれば倒せない物なんて無い！！　地面が近い……でもやるしかない。

だがその時、背後から同じ様な氷の刃が飛んできた。

「っつ！　柊！！」

「黙ってやらせると思う？　戦闘中に私に背を向けるなんて随分余裕じゃない。だけどいいのかしら、もう一人の私から目を離したりして」

柊の攻撃を凌ぎつつ、そんな言葉の真意を探る為に視線を動かす。上にはもういなかった。左右でもない。一体どこに？

「あの子は最初、どこから出てきたのかしら？」

そんな柊の呟きで僕は氷をみた。だけど何も見えない。すると下から強い光が照らし付けてくる。光の原因はやっぱり柊の分身。
その体を氷から出しながら既に始めてる攻撃の溜が光と成ってるんだ。そして更に別方向からも同じ様な光が当たる。
何か柊も同じモーションに入ってる！　翼を前方に出しての砲撃。これはリルレットを苦しめたのと同じ砲撃か。

「今度は逃げられるかしら？」

そんな言葉と、分身の変な奇声がその場に轟いた。そして別方向から迫る砲撃。確かに一人では出来ない厄介さが生まれてる。
下と斜め上から迫る砲撃に対して、僕は両腕のセラ・シルフィングを互いの方向へ向けて受け止める――いや、様としたけど、足場がないんだ。僕は二つの力の向きの流れやすい方へと押されていく。それは後ろ斜め上位の向きだ。

（くっ……タイミングを合わせろ。足場を一瞬蹴るだけで良いんだ）

向かう方向には突起した氷が有る。これから逃れるにはタイミングを計って蹴るしかない。例えまた柱に誘われようともだ。
その瞬間、突起した氷へと二つの砲撃がぶつかった。その光景を僕は見てる。すると柊が素早く呟いた。

「本当にしぶとい。そのしぶとさはゲルスポ並ね」

ゲルスポと言うのはリアルで言うゴキブリをモンスター化したような奴だ。リアルと同じで嫌われ者でしぶといんだってアイツ等。
そして良さげなアイテムは落とさないのだ。たく、なんて心外な奴。だけど流石に突っ込む気には成れない。結局柱に戻ってきてる

し……それにこの柱は……

「これも修復してるのか……」

「ええ、壊す事なんて不可能。君には幾ら頑張っても私に殺されるか、時間切れの未来しか用意されてないわ。さあ、もうすぐ一分半を切るんじゃない？」

確かに柊の言うとおり残ってる時間はその位だろう。でもここに来てやることが増えるとは最悪だ。あの分身も倒さないといけないとなると……それは本当にやりきれるのか？

幾ら自分を信じても、拭いきれない不安は押しあがってくる。でもだからこそ、口に出さないと負けてしまいそうで……ハッタリでもいい、心を強く保つ為に僕はこう言い切る。

「まだ一分半も有る！！　今の僕の状態なら、お前を倒すのに三十秒もいらねーよ！！　だから僕が掴むのはお前が言わなかった第三の未来だよ！」

「第三の未来？　そんな物……」

鼻で笑う柊。実は僕だって不安に潰されそうだ。でもこの奇跡をこぼさない為に、僕はそれを信じ続けなくちゃいけないんだ。

それが奇跡を起こした責任。

「僕はお前達もセツリも生きられる明日を掴んで見せる！！」

するとその瞬間、柊の瞳が大きく開かれた。それは予想外の答えだったからだろうか。でも僕は本気だ。すると柊は震えながら声を絞り出す。

「そんな明日……夢でしかないわよ！！　私達は人間なんて認めな

い！」

すると目の前に氷の翼が大きく舞うのが見えた。これはあの分身。まさか……飛んでる！？　完全に反応が一瞬遅れた。

奴の腕自身が氷の刃と化したそれが顔に迫る。

（っつ――シルフィング！）

「そんな夢は、あの世で見なさい。それがふさわしい」

動かす腕が間に合うかは分からない。でも信じるしかない。だけどその瞬間、僕の視界の端に何かが上がってきた。それは見覚えの有る杖。しかも帯電してる？　すると急に僕はその杖へと引き寄せられた。

「これは……」

思わぬ事でかわせた。そして空振った分身に更に下から無数の矢が飛んでくる。そこに集うのは間違いない。頼れる仲間達だ。

明日の選択肢（後書き）

第百四十四話です。

さあ、仲間達も集ってきて、再びスオウの心には勇気が灯るでしょう。次の話で決着付きそうです。みんなが居るから出来る事……それがきっと勝利の鍵。まあでも、どうなるのかは次回のお楽しみです。

てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

精一杯大きな声で（前書き）

ぶつかり合う二つの力。俺の炎とガイエンの溢れだす闇。それは最初こそ拮抗していたが、次第に言葉によってガイエンの感情は更に高まって行く。するとそれに呼応して闇も深さと暗さを増して行くようで、俺の炎はそんな闇へと少しずつだが飲まれていく。

でも俺達は友達の筈で、アイリはただ決着を求めてる訳じゃない。倒したい訳じゃ無く止めたくて、そして気付かせたい……その為にも言葉は必要で、それを通すために力が乗っかるんだ。

精一杯大きな声で

赤と金色が混じったような炎がその場に長く尾を引いた。余韻と言う物を既に残しつつあるこの攻撃だが、まだ終わった訳じゃない。俺は砕かないといけない……「負ける気はない」そう言ったガイエンを負かさないといけない……それにはこの攻撃で確実にリア・ファルを狙うべきで、そうしてる。

ガイエンが振り卸す腕の先にそれはある。何度その力が頭上から襲いかかろうが、それから目を離す事はしない。黒い腕の中でその銀色の外枠と、中央の不思議な色を放つあの石を無関心で無視できる訳がない。

この僅かな瞬間に、幾度と無く落ちたカーテナの力。実際それらが俺に直撃してないのはおかしな事。それはこの金色の炎の効果も有るのかも知れないが、だけど今まではその既存を打ち破って来たのがカーテナじゃ無かったか？

だけど今、俺はまだ倒れずにガイエンへと迎えてる。さっきの一撃で足が持って行かれそうに成ったが、バランスを崩してもそれでも俺は執念で前へ飛んだ。

カーテナの受けてる異常が、ガイエンまでもその毒牙に掛けてる筈……だけど俺は、進めてしまってる。そうでなければ勿論困るんだが、これはきっと最後のこの炎だけの力じゃないと思うんだ。

セラ達が繋いでくれたこの命……今日この日まで信じてくれたアイリ……そして闇に呑まれつつもこれはきっとガイエンの思いがカーテナを僅かにズラしてる……そう思う。

自分でも気づいて無いのかも知れない……アイツは自分の事には

途端に鈍感に成る奴だから。だけどもうさ……良いんだ。もうそろそろ素直に成っても。

認めたくない事も、ため込む事も体に悪い。この世界の体が幻なら、きっと心に悪い。それに今はそれだけじゃない筈だ。

アイリと言う受け皿を設けて、使ってた筈のカーテナという力。ガイエンが使ってるその黒い部分の力は、別の場所へ流した方が良かった筈の部分だろ。

それか一人では足りなかったから……ガイエンは言ってた。アイリはカーテナを使うための触媒でも有ると。それはアイリが受け皿に成ってたからだろう。

だけど今、アイリはその呪いからアルテミナスという力で守られてる。つまりはもう黒い部分は受け入れてないんだ。

なのにガイエンは、前と変わらずカーテナの力を振るってる。

（どうやって……）

そんなのは決まってる。アイツ自身がその呪いの全てを請け負ってるからだろう。そうでないと納得出来ないし、アイツから立ち上ってる黒い影、あの説明も出来ない。

あれはアイリに流せなくなったカーテナの呪い……ここに来て、アイツがおかしく成ってきた……そう思えるのはこれも原因なのかも知れない。

（だから、これ以上使っちゃダメなんだ！！）

これ以上、この力を振るわせちゃいけない。全部をこの呪いに飲み込まれたとき、どうなるのかは分からないが、取り合えずマトモな事には成らない気はする。

倒れない俺の前に、今度は足下から影の攻撃が迫ってきた。幾百もの影の攻撃、だが俺は臆す事なく前へ行く。槍を振るい、叩き斬りながら前へ……だけどその数の多さに、落とせなかった影が体に少しづつ届いてくる。頬に腹に太股に……その鋭利な影が痛みを伝える。

「っつ――うざってぇ！！」

更に増えようとする影へ対して、俺は地面へと槍を突き立てた。すると赤と金色の混じる炎は、黒い影を焼くように地面へと広がる。それによって迫ってた鋭利な影も、空中で霧散して行く。流石はガイエンに対抗する為だけの炎だ。これで俺達の距離を阻む物はもうない！！

霧散していく影の向こうのガイエンを見据えて、俺は更に一歩前へ詰める。地面から槍を抜き去り、見据える場所はただ一点。リア・ファルと呼ばれる王の選定石だ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「アギト！！　お前に阻ませはせん！！」

ガイエンはそう言って俺の攻撃を、カーテナの力が宿る両腕で受け止める。するとその場で、炎と闇が亀甲する。槍が纏ってる赤と金色の炎と、ガイエンの腕から立ち上る黒い闇……それが合わさる場所で激しく周囲に散っていく。

「信じられん……認めんぞ！！　お前の様な死にぞこないに私と拮抗出来る力があるなど！！　カーテナに及ぶ力があるなど！！」

二つの力が拮抗する事が許せなくて信じられないガイエンが、怒

りの形相でそう叫ぶ。アイツがいろんな物を犠牲にして手に入れた力が、俺に並ばれるなんて屈辱以外の何者でもないんだろう。
だけどこっちだって、ここに来るまで苦しんで、悩んで立ち止まって……いろんな事を越えてきたんだ。一朝一夕なんかじゃ決してない。

このスキル『白炎《纏》』をここまで完璧な形で使えたのも、俺だけの力じゃない。そして仲間達だけでも無くて、それはガイエン……お前がある意味、これが発動する間待っててくれたおかげだろう。
その気に成れば、幾らだって俺を潰す機会はあったはずだ。いちいち喋りに付き合う事も無かった。自分が絶対に正しい道を進んでるんだって、お前が本当に信じてるのなら、貸す耳なんて無かったはずだ。

だけどお前は俺達に付き合った。自分が正しいと言ってたけど、本当はそう言い聞かせてただけで、嘘とは言わないがどこかに本当は矛盾を抱えてたんじゃないのかよ。
俺が今、こうしてお前の前には立ち塞がってるのは、お前の願いだったんじゃないか？　そう思える自分がいる。どこまで狂っても、結局はアイリには手を出さなかった。最後の攻撃の前に、影でアイリを捕らえたのはその為だろ。

大切だから、傷つけたくないから……お前は本当におかしい！！
こんな事をやって、そんな姿に成ってまで、本当に欲しかった物は何なんだ！！
激しく燃え盛る炎の中で、俺はその瞳に滴を溜めてガイエンを見据える。赤い瞳が、血の様な涙をアイツも流してる。
「だから言ってんだろ！！　こんな力、カーテナじゃないって！！

本物の力に俺が並べる訳ない！！　だからこそ、お前の振るうこの力はカーテナなんかじゃないんだ！！
こんな力はただの……黒く卑しく、欲望ばかりで裏で画策ばかりする、お前の心その物をぶつけてるだけだろうが！！」
「何をバカな事を！！」

ガイエンは怒りを激しくして、その闇を大きく広げた。勢いも増して、炎を消してしまおうとしてる。だけど俺は踏ん張る。ここで押し負ける訳には行かない！！
バカなこと？　確かに俺が言ったのはバカな事かも知れない。形だけならガイエンの攻撃はカーテナその物だし、根拠なんてアイリの言葉しかない。最後のなんて、言っちまえばただのお前に対する悪口だし。

でもな、そんなバカな事をこっちはまじめに言ったんだ。アイリの言葉を信じない訳ないし、悪口なんて俺達の間じゃ日常だろガイエン。
幾ら罵りあったって、俺達は一緒に居れたはずだ。友達で居れた筈だ。

「消えろ……消えろ！！　消えてしまえアギト！！　お前の存在が私の計画を狂わせる！！　お前だけが！　私に正面からぶつかってくる！！
いい加減に離れろよ！！」
「はっ、何言ってんだよガイエン！　最初に生意気に俺達にぶつかって来たのはお前だろ！！　そんな腐れ縁を作ったのはお前なんだから、責任取ってつき合えよ！！
計画とかなんとか、そんなのしらねえ！！　友達なら、んなの抜きで遊ぼうぜ！！」

きっかけがどうあれ、最初は確かにガイエンからだった。それは間違いない。こいつが俺達を選んだんだ。なら、しっかりと責任は取って貰う。
そして共有した時間が後悔で終わらない様に、今俺はここいるんだ。だけどガイエンは俺のそんな言葉に、更に怒りを増していた。

「まだそんな事言うかアギト！！　友だと？　遊びだと？　そんなんだからお前は上へ立つことは出来ないんだ！！遊び感覚で、偽りの関係に満足する……そんな曖昧な物、私は作った覚えはない！！
私が必要とするのは、ただ使い勝手の良い駒だけだ！！　それで言うと、お前もアイリも失敗だったさ！！」
「ぐ！　……づあああああ」

更に大きく広がったガイエンの闇。だけどそれに伴って、ガイエンには腕から全身へと広がる亀裂な様な物が入ってる。そしてそこから大量の闇が漏れだしてるんだ。
このままじゃガイエンがどうなってしまうのか分からない。一刻も早くリア・ファルを砕きたいが、広がった闇は俺の炎を飲み込もうとしてる。

じわりじわりと、闇に触れた部分から炎がかき消されていく様だ。闇の部分を刺激したのは正直不味かったかも知れない。だけど気づいて欲しかった。俺だってまだ、何も見捨ててないって事をだ！
決めたんだよ、過去を見つめて。沢山の自分と相談して決めたんだ。俺はお前も助けるって。必要としてなくても、そうしようって。

間違ってるのなら、ぶん殴ってでも止めるのが友達の役目だろ。俺は消させない……幾ら周りの炎を消したって、この槍自体の炎は絶対に！
この炎がある限り、俺は折れない心で居れるんだ！

「おかしな事を言うのはお前だろガイエン！！　お前にとってＬＲＯって何だよ。気持ちが偽りだとかバカにする癖に、ここで手に入れる世界には価値があるのかよ！？
誰も心を持たないＮＰＣだけの世界になんてお前だって夢はみないだろ！　ここに居るのが人だから……そこにはお前が目指すべき価値が生まれてる。そうじゃないのか？
でもな言っといてやるよ！　お前が否定する曖昧で目に見えない物で人は絶対に繋がってて、それが世界に成ってんだ！！
お前と俺……そしてアイリは間違いなく繋がってる！！それは否定しようもなくな！！」

そして俺はスオウやテツなんかとも繋がってて、そしてスオウはセツリやエイル、テツはシルクやもっと他の誰かと繋がってるだろう。
目に見えない繋がり……それが否定しようもない『世界』の形。だけどあくまでもガイエンはそんな世界を否定する。

「はははは！！　そんなくだらない物に染まった世界なんてリアルだけで十分だ！！　そしてもしもＬＲＯまでもがそんな物で絡め取られようとしてるのなら、私が断ち切ろう。
世界はもっと分かりやすい支配制度でやっていける。友や仲間などいらない。上司と部下、くくれる物は仲間などでは無く、完全に律された軍が理想的だ。
私ならそれを実現して見せる！！　くだらない繋がりが遙かな時代から絡まったリアルは無理でも、一年と少ししか経ってないここなら！！
ＬＲＯなら、まだまだ変われる！！　我らプレイヤーはそれを目指してる筈だろうアギト！！」

ガイエンの目指す世界は、全ての人を階級で分ける様なものなのか？　大昔のカースト制度かよ。そんな廃れたやり方での支配なんて、誰が望む。というか、大前提に支配なんてされたくない。
本当に、どんどんどんどん言うことが過激に成ってないかガイエンの奴。最初は王に成りたいだけじゃ無かったか？

それが今や、恐怖の支配者を目指してやがる。ヒトラーにでも成るつもりか。自分が支配する世界ってのは、本当に居心地が良いもの何だろうか。
まあ、そんなのわかりもしないが、少なくともガイエンが成る王とやらは、多分きっと苦しいだけなんじゃ無いだろうか。恐怖政治の間違いないなんか腐るほどあるだろう。

それをコイツが知らない訳ない。でもそんな王をガイエンが目指す訳……それはただ夢だからじゃないだろう。そんな世界征服なんて考える奴は大抵、そうでもしないといけない訳でもあるか、今の世界に自分が合ってないとでも感じてるか。

それか認めさせたいか、そこまでしないと手に入らない物でもあるのか……ガイエンは言葉の節々にリアルを軽蔑するような事を言っている。
それに人間関係も結構辛辣だ。コイツはここに……この世界に本当は何を求めて来てるんだ？　アイリの事をきっと気にしてる……それを認めさせて、野望を砕く……真っ正面からぶつかった結果で、分かりあえるかも知れないシナリオは何かが足りない気がする。

だけど、ゴチャゴチャ考えてるだけじゃこの闇に飲み込まれてしまう。この炎は正真正銘、俺の最後の切り札なんだ。失うわけには行かない。
ここで決めなきゃ、もう絶対に次はない。誰もが満身創痍なんだ。

アイリもセラもシルクも……そして仲間達全員……俺だって、次立ち上がれる自信はない。

本当に元気なのは、ガイエン位だろ。この黒い闇の中身までは分からないが、この饒舌さ……相当乗ってる。でもどう考えたって、その考えには乗れないな。

今の時代は誰もが好きな民主の時代なんだよ。王は居ても良いが、それはアイリの様な王であればこそ。支配を強要する奴に、誰が本当に頭を下げるのか。

「そんな……古くさい支配なんて……」

俺はガイエンの言葉に、やっぱり対抗する言葉しか返せない。いや、それしかないだろう。否定して否定して、コイツのもっと奥の言葉が欲しいんだ。ある意味、今のガイエンはそれを発しやすく成ってると思う。

だけどこの闇の影響で言うことの、どことどれをくみ取るかが難しい。ガイエンは今一体、どこまで正気なんだ？

次第に多くなっていく漏れ出す闇……その影響はあって、そして今現在も、力を使って抵抗してるから、アイリに流せない呪いは全てガイエンが請け負ってる筈だ。

この力をこれ以上使わせちゃいけないのに、ここまでやっても俺はまだ届かない。ガイエンの闇も欲望も、本当に無限の様に黒く深く広がり続けてる。

目の前で抵抗してると感じる。魂まで吸い尽くそうとしてるこの闇を。赤と金色の炎が俺自身を守ってくれてる筈なのに、滴り出す冷や汗は止まらない。

「人は誰しもが、支配される事を望んでる生き物何だよアギト。先頭に立って走るのは怖く辛い所行だ。そして進む道も分からないのは可哀想な事。
そして一番楽なのが誰かの後に付いていく事だ。そんな大多数が支配される側の人間なのだよ。お前もそうだろアギト？
アイリという先陣を切って走る一人の後を追う支配を望む者。お前ではダメなんだよ！！　そんなお前がアイリの隣に居て良いはずがない！！
同じ場所に立つ覚悟も無いお前には！！」

アイリの隣には居られない……そんな自問自答はもう何回とやったさ。前に一度、同じ場所に居たいと思って頑張ったけどそれは失敗した。
でも今は、そんな頃とは違う覚悟を俺はしてる。深く考えすぎない、もっと簡潔で単純な覚悟だ。

「確かに前の時は挫折した。それをお前のとかのせいだなんて言わない。あの頃はきっと気負い過ぎてただけなんだ。
なあガイエン、俺はもうそこに居なくちゃいけないとは思わない。それよりももっと始めにやることがあったんだ！」
「やる事だと？　そんなのは逃げ出した奴の遠吠えで言い訳でしかないんじゃないか？　資格の問題なんだよアギト。お前はそれを放ったんだ！」

広がる闇に反比例するように縮小していく炎。気のせいか、あの闇の圧力と言うか何かが強まってる気がする。でも、言い切ってやる！
余計な事にばっかり気を回しすぎるコイツにな！　俺は痺れてきた腕に再び力を込めて、僅かでもガイエンの闇を押し返す。

「だから、そんなもんより先にする覚悟があるだろうが！！　自分の気持ちを認める覚悟！！　お前はそれからずっと目を逸らしてるだろうが！

そんなんで、お前が言う資格は持てるのかよ！　俺は自分自身と見つめて決めた！　単純な事だけに、向き合うとすっげ～恥ずかしいけどな、だけどこの覚悟は絶対に必要だ！」

金色の炎がキラキラと俺を照らしてる。赤い炎が、自分の火照った顔を少しでも隠してるくれるのを期待したい。スゴく恥ずかしい……本人も居るし……だけど、俺はこれを言うと決めた。

本当は全部が終わってからだと思ってたし、雰囲気とかを考えて候補は三つ位絞ってた。その中でもこれは最悪。でもこのバカには、ある意味殴るよりも効くんじゃないかって思うんだ。

感謝しろとは言わないけどな、度肝位は抜いておけ！！

「俺は……俺は！！　アイリの事が大好きだって自分に認めさせる覚悟を決めたんだ！！」

その瞬間、俺の耳には炎がたぎる音だけしか聞こえなかった。気のせいか、一瞬闇までその揺らめきを止めてた様に見えた。

そしてグンと、持ち直す事も出来て、一瞬いけるとまで思える程だった。けどガイエンは動揺しながらも闇に力を送ってそれを防いだ。

「アギ……トッ……」

どこからか聞こえてくる裏声った声の主を俺はみることは出来ない。顔から火がでそうとはこの事だ。

「アギト……それが何だと？」
「別に、俺は俺の思いを覚悟を持って吐露しただけだ。それに王とか民とか関係なくったって、思いを持つ事も、伝える事も、そして思い合う事だって出来るさ。
近くに居られればそれは安心だけど、そうじゃ無くったってダメなことなんか無いだろ。大事なのは気持ちだろ！！」

ガイエンはきっと揺れてる。平常心を保ってる様な様子だけど、確実に闇の浸食は止まってる。何かが心に突き刺さったんだろう。
多分自分でも分からない何か……

「……戯れ言だ」

するとかすかにそんな言葉が聞こえた。そして何だかジワジワと染みでる様に闇がコボレてきてる。どういう事だろうコレは。
取りあえず、気持ちを締め直してガイエンを見据えた。

「ガキ過ぎる戯れ言だなアギト！！　気持ちや心程、曖昧で不確かな物はない！　手に入れたと思うこと事態が間違いで、通じ合えると信じる事が愚かな事だ！！
人は誰とも本当に分かり合えはしない。お前が言う友情も愛情も全てが慰み……ＬＲＯと同じ幻想よ。『大好き』など、幻想の中の更なる虚像でしかない。
そんなもの……」

その時、俺は信じられない物を見た。それは涙だ。今までの赤い涙じゃない、透明な水の滴。

「お前……」

ガイエンは自分で気づいてないのか、俺の反応が分かってない様だ。だけど言葉の続きは出てこない。ガイエンの心は、何かをきっと感じ取ったんだ。
そう信じたい。その時、俺達を少し離れた場所から見てるアイリの声が挙がる。

「そんなものなんて言わないで！！　幻想だなんて思わないでよ！！　ガイエンだって本当はそんな事思ってないでしょ？　その涙が証拠だよ！！
人は、通じ合えなくったって、分かり合えなくたってそれでも好きに成れる！！　だってそれは知ろうとする事なんだもの！
分かり合えないから頑張って、通じ合えないから努力する。そんな人だから、愛おしく思えるの！！　諦めないでよガイエン……私達との今までを！！
嬉しかったよアギト。　アイリ・アルテミナスが願います。お願い……少しで良いんです。心強き者に、この力を！！」

その瞬間、アイリと俺の間の地面が光の柱をあげた。そして届いたのはきっとアルテミナスの力だ。

「どこまで行っても私を認めぬかアルテミナス！！」

燃え盛る炎を見て声を上げるガイエン。そしてその闇は更に濃く広くなる。自身の防御に回してた筈の力を分け与えたアイリは、その肌が黒い闇に飲まれて行ってる。
グズグズしてなんかいられない。全身が燃える様……だけど不思議と熱くない。アイリの暖かさに包まれてる。炎が闇を食い始めて、ガイエンの腕にも走っていく。それはお前を食らう炎、逃れる術はない。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」
「ぬおおおおお！！　わた……し……は……」

影も闇も燃えつくす。そして一瞬、甲高い子供の叫びと共に、その石は砕け散る。赤と金色の炎は、夜空に高く渦を巻いて立ち昇った。

精一杯大きな声で（後書き）

第百四十五話です。
遂に決着の時かな。でもまだ終わったわけじゃない。だってまだ三人の関係は改善されてないからです。どういう風に落ち着くのかは次回をお待ちください。ある意味全てを否定されたガイエン……可哀想な奴かもです。
でもだからこそ気付けばいい……そしたらちゃんと受け止める相手が居るはずです。目の前にそいつは立っているのだから。
てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

小さな勇気達の集い（前書き）

分身の攻撃を思わぬ形で避けれた僕は、その杖と共に地面に向かって落ちて行く。だけど翼を持つ分身はしつこく僕を追って来る。その翼の攻撃を多彩に生かして、そして時には強引に……だけどそんな時、頼りに仲間達が集ってた。

みんながみんな、小さな勇気を奮い立たせて。

小さな勇気達の集い

「スオウ！！」

そんな声と共に、杖に引き寄せられた自分を避ける様にして、無数の矢が分身へと飛んでいく。だけどそれでも分身は、その羽を器用に使って、矢を避けながら僕へと迫ってくる。

そして矢での攻撃が止んだ一瞬、回転と同時にその翼を大きく広げて、氷の刃を飛ばして来た。この攻撃は一番楽でモーションも少なくさらには手数も稼げるから、実際は一人に使うよりこうやって多人数に使う方が確かに効果的な代物だ。

今僕が落ちて行ってる地面には仲間達がもれなく居るんだ。あの分身からしたら、僕を狙ってついでにみんなも巻き込めるのなら都合が良いんだろう。

だけど……そう易々とさせるわけ無い！！　何度も僕が打ち落として来たのを忘れたか？　今の僕にこの程度の数は苦じゃないんだ！

折角集った仲間達を、みすみす潰させるか。迫る地面から目を離し、僕は雷化したセラ・シルフィングに思いを乗せる。

「させる――っつ！？」

「ォァァァァァァァァァァァァァァァァ」

腕を振ろうとした瞬間、先に分身に動かれた。素早く畳まれた翼は空気を受け止めるのを止めて、ただその氷の重さを素早く落とそうとする。

それはまさに鳥が獲物を狙って急降下するみたいな感じだった。

セラ・シルフィングは重りと化した分身を受け止めるので正直精一杯。

分身のくせに上手く両腕を防がれた。それにこの声……奴の空洞の様な口から漏れ聞こえる、言葉に成らない声が妙な寒気を醸し出す。

これまでは柊の言葉にあわせてただ飾りの様に動いてただけだった筈なのに、今はちゃんと……じゃないが一応声らしき物を自身で発してる。

分身と呼ぶのも実際おこがましい程の出来で、翼を与えられた人形ってだけの感じなのに、声を発するだけで不気味さ倍増だ。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

鳴り止まない呻くような声。防げなかった氷の刃はみんなの元へ落ちてしまっただろうか。だけどこのままじゃ、氷に続いて、自分までも落ちる羽目になる。

分身のせいで加速されたこの状態で落ちたら、どうなるのか分からない。それにどうやらこいつは、ただでは落としてくれなさそうだ。

不気味にゴキゴキと音を鳴らして、不自然な方へ曲がり出す首。そしてその不気味な音を出す口が僕の方へ向けられた。

すると畳まれた背中の翼が輝き出す。周りを冷気を取り込む様にだ。そしてそれはどうやら、こちらに向けられた口に集まってるみたい……

「こいつ……洒落にならないぞコレ！！」

ゼロ距離からの直撃……流石にこの残り僅かなＨＰじゃ持たない。絶対にだ。どうにかしないと。だけど無理矢理こいつは僕の雷化した体を掴んでる。
それも信じられない力で。逃がす気は絶対にないようだ。でもそれでもやれることはまだある……それは自分の中で分かる。

だけど、コレを今使う訳にはいかない。多分一回だけで、それは僕が思い描いてる事の切り札だ。ここじゃない。
だけどここでやられても意味はない……どうにかして切り抜ける術を見つけないと。地面がそこまで迫り、臨界点に達した光は目の前で溢れ出すのを押さえられてるかの様に蠢いてる。

（来る！！）

そう思った瞬間、共に落ちてきてた杖が一足早くに動いた。

「させない！！　我が杖よ！！　『サンダーペイン』」

言葉を受けた杖が、その帯電してた雷撃を周りへと放出し出す。そして激しく弾けだした雷撃は臨界に達してた分身の攻撃を貫いて、その場で暴発させた。

その瞬間、視界を覆う白い冷気と耳を襲った激しい爆発音……そして体にはその衝撃が伝わっ来た。だけどその衝撃で捕まれてた分身からは解放された。

「――っつ」

何とか乗り切ったけど、だけどまだ全然ピンチ。このままじゃ更に勢いを増したまま地面に突っ込む事になる。こうなればこの力を

地面に向けて打つしかない。
そうすれば衝撃を緩和出来る筈だ。そう思い、僕は腕を振りあげる。だけどそこで再び冷たい感触が僕の腕を掴んだ。

「こいつ、また！？」

首を動かしてそこを見ると、わかってはいたけど分身が僕の腕を掴んでる。でもいつまでも好き勝手出来ると思うなよ……今、お前が掴んでるのは片腕だけだ！！

「放しやがれ！！」

僕は腕を掴まれたまま、もう片方を振り抜こうとする。きっと真っ二つに出来ると踏んでいた。何をする気か知らないが、確実に僕の方が速い。
だけどその瞬間、僕の視界が揺らめいた。攻撃を受けたとかじゃない……この野郎、そのバカ力を利用して強引に僕自身を振り上げやがった。

そのせいで態勢が崩れた僕の攻撃はあらぬ場所の地面に傷を付けただけ……てかこいつまさか……この単純な動作から何する気なのかがわかる気がする。
振り上げた物は振り卸す物だろう……そして今の状況を考えると、きっとこいつはその手を放す。つまりは、地面に叩きつける気だ！

こいつ、僕がこの勢いでの地面との接触を避けようとしてるのに気付いたのか？　それともやっぱり、高見で見下ろしてる柊の仕業？
どちらにしてもピンチは続く。振り上げた僕を、投げ飛ばすモーションに入る分身。その頃、僕の視界はグリングリン回ってた。おかげで狙いが定まらない。シルフィングをこいつの体のどこかにぶ

っ刺せれば、それを止められそうなのに……もしかして今の僕は極端に軽くでも成ってるんだろうか？

雷化で自分自身がどうなってるのかイマイチわからない。もしかしたら、地面に叩きつけられたってどうって事はないのかも知れない。

でも今、そんな意味のない賭に出る気はない。ここは絶対に落とせない局面だ！　そんな二の次な検証はもっと余裕がある時に行うべき。

（投げられる前にシルフィングを……どこでもいい、翼でもこの氷の体でも！）

だけどその時、どこかから何かが聞こえてくる。

「うぁぁあああああ！！」

それはどんどん近づいてきてて、そして白い冷気を突き破って現れた。

「スオウから離れなさいよ！！」

「リルレット！」

現れたのはリルレット。そして構えてた剣を分身めがけて、振り抜いた。シャン――と小気味良い音が効果音か何かで響く。

だけどそれは空振ってた。羽を広げた分身はリルレットの剣線の上へ移動してる。

「ちょ……そんなのズルっ……ここは私の見せ場だったのに！」

なんか言ってるリルレットだけど、これは完全に奴に上に行かれた結果だ。こいつはこの羽で空中を自由に駆ける。リルレットだって見てるだろうに……でも、次のリルレットの言葉は、今度こそ絶対の物になる……そんな確信が感じ取れた。

「でも……しょうがないから譲ってあげる！　そこの柊の劣化版！　飛べるからって下ばかり気にしてていいのかしら？」

リルレットは指さして分身にそう言った。つまりは上から何かが来る……そう言う事か！　顔をあげると空から、三枚刃のナギナタを構えた、胴にアーマーをつけて衣装は和服の奴が迫ってきてる。後ろで束ねたポニーテールがこれ見よがしに靡いてた。

「リルレット！　そう言う事は伏せて貰いたい！！」

確かに彼が言うことは最もだ。不意打ちの意味がなくなる。てかこいつらはどうやってこの高さまで上がってきたんだ？　まあ周りの突き出した氷を使えば出来ない事でも無いけど、そんな時間は無かったはずだ。すると、ナギナタ使いの後ろで何かが空に上がって行ってる。

あれは矢？　それも何か特殊な形してる。スキルでそうしてるのか、小さな矢がサーフボードの様な光で覆われてるみたいに見える。あれで空に上がったのか。

「てやあああああああああ！！」

気持ち良い声と共に、ナギナタ使いは落ちてきた勢いそのままに、分身の腕を切断してくれた。そして今度は同じ事に成らない様に、下から分身へと矢が降り注ぐ。

今度はそんな攻撃を受けて、分身は羽を羽ばたかせて上空へと上がっていった。地面に近づいていたから、さっきよりも矢にも勢いが有ったからか、避けるのは止めたようだ。
取り合えず一安心……じゃねーよ！　このナギナタ使いもリルレットも、このまま地面に衝突する気か？　もう地面はそこまで迫ってる。

「くっそ！！」

僕はシルフィングを振り上げる。だけどその時、ナギナタ使いが手でそれを制してこう言った。

「安心せい。策はある」

おお、なんか武士が居る……そんな思いが一瞬僕の頭をよぎる。すると少し下に居るリルレットが、地面に居る誰かに向かって叫ぶ。

「おねが～～い！！」

するとその瞬間、下で何かが光って地面に透明な膜みたいなのが現れる。その膜は優しく僕たちを受け止めてくれた。

「うお……わっわ……」

勢いそのままにトラポリンの様に弾む僕たち三人。だけど三回位跳ねると、その魔法は効果を切らしてそれなりの勢いで地面に落ちた。

「いてて……」

「大丈夫スオウ？」

近くで上手く着地したらしいリルレットが心配そうにこっちに来るけど、まあこの位なら問題なんて無いだろう。ＨＰにも影響は無い。

だけど既に一分を切った様なＨＰ残量だ。ここでグズグズはしてられないな。

「大丈夫。でもみんなどうして？　都合はいいけど」

僕は立ち上がりながら全員へ顔を巡らせる。幾ら飛んでも見つからなかったのに……こんな揃って現れるなんて、予想外だったんだ。

「私と彼で探したの。スオウは思い通りに進めないし、柊にも狙われてる。もしかしたら万が一があり得ちゃう。だったら私達もやれる事をやろうって……それにね、みんな考える事は同じだったんだよ。

誰もがスオウが戦ってるこの場所を目指してた」

リルレットの言葉は僕の胸を強く叩く感じがした。グッと来たって言うのかな……みんなが危険を承知で初めから目指してくれてたってのはそれだけ大きい。

僕はみんなをみくびってたのかも知れない。初めはこの状況に誰もが逃げ腰だった……でも集団の中で、それは変わったと思った。

でももう一度個人で意志が決まるのなら、みんなが臆病風に吹かれてもおかしくないなんても思ったんだ。だってそれが普通だから。

みんなが居るから、不安や弱気は分散される。それに伴って、一致団結した鋭気がテンションを上げる。まあ逆も起こってたけど、それでもギリギリで盛り上げてた。

だけどそれが出来たのはあくまで集団だったから、一人だと自分が絶対だ。行動の全てに賛同するのは自分だし、そしてまた否定するのも自分自身。
そんな中で誰もが、一番危険かも知れない選択を選んでくれた。自分が無事にここから出るには、これしか無いとの結論に誰もが達したただけかも知れない…でもその場で事の顛末をじっと待つ事と、自分も何かが出来るかも知れないと一歩を踏み出す事は全然違うんだ。
だから僕はみんなに感謝しよう……精一杯、心の底から。

「ありがとうみんな……ほんとにさ」

素直に僕はそう言った。するとみんなの視線が交差して、なんだか気恥ずかしい感じ。だけどそんな束の間は、上空の奴らによって壊される。

「アァァァァァァァッァァァァ」
「来るぞ。またあの攻撃だ！！」

そう言ったのは弓を打ち続けてくれた人だ。僕達が地上に降りてからも攻撃してくれてたみたいだが、分身の奴は射程外まで昇ったようだ。
そして安全圏でその翼を広げて降り注がれる氷の刃。確かにまたと言うほど見飽きた攻撃だ。でもみんなからしたら厄介な攻撃。
ここは僕が……と思ったら、もう一人のヒーラーの子が声を上げた。

「集まって！！」

すると一斉にみんながその子の周りに集まって、身を固めた。そして中央のヒーラーが杖で何かを描き、魔法が発動する。
それは四つの三角形の光の壁で、それらが空中で合わさる。頂点を併せて作られたその壁は、辺の場所が斜めに成ってる事を利用して、受け止めるんじゃなく受け流す様に氷の刃を防いでた。

成る程、これなら範囲は狭まるけど強力な盾が張れる訳だ。流された氷の刃は、周りの地面に次々と突き刺さって行っている。
でもそれを見た分身は更に多くの刃を放ち続ける。それに伴って、ヒーラーも苦しそうに顔を歪める。結局このままじゃじり貧・・あいつは分かってる。

このまま僕が動かない訳がないと。僕はみんなに有る事を言おうと口を開こうとした…だけどその時、今一番頑張ってるヒーラーの子に微笑まれた。
そして彼女は言うんだ。

「ありがとう…それはちょっと早いんじゃ無いかな？　それにきっとその台詞は私達が言う方だよ。だって私達がここに来れたのは、君が頑張ってたから。
万全じゃないその力でも全然諦めようとなんてしてなかった。私達は何度も何度も、そんな姿を見る度に、何かが出来るんじゃないかって思えてくるの。
頼りないかも知れない、信頼だって積み重なってなんてきっとない……だけど君が求めてくれるのなら、私達も一緒に戦うから……だから一人で全部背負わないで！」

そんな事を言う彼女の掲げる杖は震えてる。本当はきっと怖いんだろう。この戦闘は今までみんながＬＲＯで体験してきた物とは違う。

もしかしたらだけど、何か取り返しの付かない物を晒してるのかも知れないんだ。でも彼女はそんな条件下で言ってくれた「一緒に戦うから」、その言葉は巡り巡ってた僕の思考を解放するようなそんな感じする。

今の僕は余計な事を幾つも頭が次々に思考する。そこには不安な確率とかも有るわけだったけど、そんな物が吹き飛んだ。

一人じゃない……でも僕は自分だけじゃ勝てないと分かっててても、出来る事を求めてた。

みんなの僅かな手助けだけで、後を全部背負おうと……それは巻き込んだ責任って事もあったけど、どうやらみんな僕のふがいなさにそれじゃ駄目だと思ったらしい。

「ああ、その通りだな。俺たちもちゃんと戦うぞ」

「うむ、リルレット達から聞いたが、我らを捜してたんだろう？柊を倒す必勝手だて、聞こうじゃないか。ここまで来たら我らは運命共同体。

遠慮など無用だ」

二人のそんな言葉に後のみんながそれぞれ続く。それはただ僕の名前を呼んで居るだけの事だった。だけどその行為一つ一つが名前を呼ばれる前からずっと聞こえてた、カウントダウンの秒針の音を頭から消してくれる。

体を巡る雷が、力強く弾け出す気がした。

運命共同体……そこまで言われちゃ、遠慮なんてしたくても出来ないよ。おもいっきり、みんなを頼りにしようじゃないか。

一人でやれない事も、集まれば出来る。それはＬＲＯ……いいや、全てのＭＭＯＲＰＧで言えること！！

「ああ……ならみんなに――」
「――雑魚がウロチョロと……止まってれば無事に返しても良かったのに……本当に人間の愚かさは感染するのね。彼らが死ぬのは君の責任よ」

人の言葉に割り込んで来て、とんでもない事を言ったのは柊の奴だ。随分高い所に居るが、言葉ははっきりと聞こえる。

（責任……それにみんなは無事に……）

一瞬駆け巡ったそんな思い。だけどそれは一瞬で吹き飛んだ。何故なら、彼らがそれを真っ向から否定したからだ。

「ふざけないでよ！！　これは私達一人一人で決めた事なの！！　誰の責任でもない……寧ろアンタが感じなさいよ！！　雑魚とかゴミとか、いつまでもそんな高い所から見下ろせると思わないでよね！！　私達は絶対に、アンタをそこから引きずり卸してみせるんだから！」
「ああ、その通りだ！！　この行動は愚かなんかじゃないんだ！　勇気を振り絞ったんだよ俺達は！　そしてそれが出来たのはスオウのおかげだ。
確かに最初は逃げ出したかったけど、それじゃあ何も変わらないんだよ！！」
「うむ、ゴミや雑魚と呼ばれようとも、特別な力は無くとも、我らはそれぞれ信じて鍛えた力がこの手に有る！！　みくびるでないぞ柊！」

みんながそれぞれ上で見下ろす柊に宣言していく。その行為を柊は壇上で冷めたような目で見下ろすだけだ。でも僕は、迷わずに啖呵を切ったみんなが眩しく見えた。

まるで勇気が溢れてるみたいにさ。

「いいですよもう。人が十分愚かなのは分かりましたから。だからそんな貴方達全員に、ちゃんと教えてあげるわよ。
その選択が絶望を呼び込むんだってことを」

すると柊の翼が輝き初めて、更に周りの柱がボコボコと膨れ出す。そして姿を現すのは、更に三体の翼を持った分身だ。
だけどそれが何だってんだ。僕は今、体中を刺激する電流に身を焦がしてる。だからあいつに言ってやろう。僅かにでも動揺するみんなの間から静かに声を出す。

「それでも……僕達は勇気を捨てない。なぜだか分かるか柊？　それは、勇気こそがどんな明日も開ける鍵だからだ！！」
「君の明日は永遠に来ない」
「そうか？　永遠なんて、それこそ人には有り得ない事なんだ！
だからそんな言葉、信憑性の欠片もねーよ！！」

その瞬間、三本の柱から生み出された分身が一斉に高らかに吠えた。一気に四体……みんなにあいつ等の相手をさせる訳には行かない。
それは信じてないんじゃなく、やって貰わなくちゃならないことが有るからだ。

「あいつ等は僕が押さえる！　だからみんなはこの柱を何としても壊してほしい。そしてそれが出来たら、僕の合図で一斉に――」
言葉の途中で割り込んで来る分身共、そいつ等は盾を一気に破りやがった。猶予は無い……後はもう信じるだけだ。

「柱は頼んだ！！」

その言葉と共に、僕はシルフィングでまとめて分身共を凪ぎ払う。そして飛んだ。みんなの言葉が何か聞こえたけど、こいつらをそこに居させる訳には行かない。

そして二本目に到達した僕は丁度吹き飛んできた分身共に追い打ちをかける。

だけど四体も居てはそう上手くは行かない。でも完全にターゲットは僕で固定された様だ。それでも一体、厄介な奴が居る。

それは柊……あいつは意志で攻撃出来る。そして二対の翼が狙う先はやっぱりみんなの場所。僕はもう一度飛んだ。

そして現れたのはみんなが頑張るあの柱。ラッキーだ。丁度奴の攻撃も来てる。

「うおおおおおおお！！」

柊の攻撃を砕くと同時に、この柱自体に大きな魔法陣が展開される。すると下から、声が飛んできた。

「この柱自体の時間を遅延させました！　これで自己修復機能は弱まったはず。でもそれでも私達じゃ時間が掛かり過ぎる！

だからお願い！　キッカケを作って！！　そうすれば後は全てを出して砕いてみせるから！！」

力強い言葉……キッカケか……向かい来る分身も、再び攻撃態勢の柊も気になるけど、今の僕なら出来る！！　振り向いた僕はシルフィングを突き刺した。

「これでどうだ！！」

そして一気に上下に振り抜く。青い雷撃が走り、柱にはヒビが生まれる。修復は確かに遅くなってた。

「「「「アァァァァァァァァァ」」」」

後ろから聞こえるそんな声。そして下へ迫る砲撃。僕はそれらをたった二本の腕で迎え討つ。

「やらせない、絶対だ！！」

「いっけえええええみんなぁあああああ！！」

下から聞こえる爆音の数々。それは全員が持てる全ての技と力と知恵と道具を使っての総攻撃の証。すると振り向かなくても分かる音が聞こえてきた。

張り付く足から限界の証が伝わってくる。

ピキピキ……バキキ……そして激しく氷が砕ける音が下方で響く。そして根本から叩き折られた柱は、大きく傾いて行く。僕は地面に落ちる前にもう一度飛んだ。

光を失った後二本の柱。そして僕のたどり着いた場所が、鳥かごからの解放を意味してる。僕が立つ場所は、柊と並ぶ氷の先端。

さあ残り十五秒の逆転劇の始まりだ！

小さな勇気達の集い（後書き）

第百四十六話です。
終わらなかったです、ごめんなさい。だけど次回ではちゃんと柊との決着がつきます。なんせ後十五秒しか無いですからね。だけど雷速を活かし切れれば、きっと可能でしょう。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

理不尽な世界の自分（前書き）

何かを得る事を、私は一度も許されないのだろうか。ずっとずっとそうだった。私は初めから『与えられぬ者』だった。でもだからこそ、頑張って努力して掴もうといつだってしてきたさ！！

だけどいつだって立ち塞がった。『与えられた者』共は、その価値を知らずに横から掴み取って行く。理不尽を振りかざす！！

そんな世界なら諦めたって良いだろう。だからこそ、生まれたばかりの世界で私は、横から攫われた全ての物を掴みたかったんだ。

理不尽な世界の自分

炎の渦の中・・私の力が流れていく。燃え去られていく。掴める筈だった未来と共にだ。

（どうして……）

どうして、私の手のひらからは何もかもがこぼれて行ってしまうのだろう。努力もしたし、計画も綿密だった。世界の誰もが言う、頑張ることを私はしてきた筈だ。

それでも誰もが思い描く未来を掴める訳はないと分かってる。だけど思えてならない……世界にはあらかじめ、掴める者とそうでない者が決められてるんじゃないかと。

そして私はいつだって掴めない側へと追いやられていく。私の手にはいつだって何も残らない。空しさと、世界に対する憎しみ以外は……

人は生まれた時から理不尽と言う物がつきまとう。それは幾ら追い払おうとしても付いてくる。私の家はなんて事はない、ありふれたサラリーマン家庭だ。

生きては行けるし、たまには贅沢も出来る位の家。だけどそれが、他人に頭を下げて買える物だとは幼い私は知らなかった。

多分、幸せを幸せと感じれたのはそんな幼い時だけだ。それは私が無駄に頭が良かったせいかも知れない。そんな私に両親は喜んだが、私はもう小学生の時点で思ってた。

この両親が両親である限り、この程度の人生しか送れないんじゃないかと。それもきっと私が周りより少しばかり頭が良く回る程度で、有名な私立の学校に入れさせられたのが原因だ。

そこでもトップは取れたが、だけど私立だからこそ、持たざる物と持つ物が、同じ庭に集まってしまうんだ。私立だから当然金持ちの奴らは沢山いる、だけど有名な学校だからこそ、子供に期待する親は頑張り過ぎてでもそこに通わせようとしてる人だっているんだ。

自分が持てなかった物を持たせたい……それは親として当然の心理なのかも知れない……でもそこで私達は見てしまう。持たざる側の私達と持つ側の奴らの違いをだ。

トップをとり続けた私はまだいい方、だけど中には勉強に付いていくのやっとの奴もいる。普通なら投げ出してもいいと思うが、親の頑張りを知ってる彼らは投げ出さない。

子供心にも期待に添えようと言う思いがあったんだろう。だけど同じ位置に居る持つ側の奴らはどうだ？　何も心配する物がない彼らは焦らない、頑張らない。

その内、その差は確実に開いていく……そう思ってて、確かにそうなった。彼らは頑張った分だけ成績を伸ばしたし、自分も一度もトップを譲らなかった。

私も彼らに協力して時々勉強とか見てたし、その頃は努力はやった分だけ実を結ぶと信じれた。確かにテストの結果はそうだったからだ。

でもそんなある日で、小学校生活も四年目に成った頃ある日突然、私が勉強を見てた一人が学校をやめた。それは本当に突然で、納得出来なかった私は先生に詰め寄った。

だけど帰ってくる言葉は「家庭の事情」と言うありふれた言葉。それさえ言っとけば、子供は「仕方ないんだろうな」とか思ってしまうと思ってる体だ。

でも家庭の事情なんて信じられなかった。いや、家庭の事情がじ

ゃなく、何で辞める事に成ったのかがだ。だって彼は言っていた。

「このまま頑張れば、僕も十位以内に入れたりするかもしれないよね？　ううん絶対そう出来る！　だって僕達には君が付いてるんだもん。

それに頑張ってたら良いこともあったんだ。僕が頑張ってるからって、お父さんも頑張ったんだって。そしたらショウシン？　で偉く成れるんだって。

お給料も上がるから、心配しなくても大丈夫って」

そんな風に、満面の笑みで言っていた。家庭の事情で辞めるなんて起こり得ない事だ。本当は彼のお父さんの話は嘘で、実はかなり家計が苦しくて学費を数ヶ月分滞納してるとかでもない限り……それか、昇進に伴っての栄転で遠くに転校とか……でもそれなら最後の挨拶位あるはずだ。

結局子供の私にはどうしようもなくて、何もわからない事だった。でも彼が転校して数日後、その理由を私は思わぬ形で知った。

昼休みの教室……騒がしいそこで、教卓に腰を下ろした奴とその他数名、そいつ等が周りを気にすることなく話してた。

「なあなあ、今頃アイツどうしてるかな？」

「アイツって？　あ～あ、少し前に辞めちゃったリストラさせられた親父の息子か。それにしても、傑作だったよな。まさかいきなり席が一つ空くんだから」

「そうだな、何だか教室が広く成った感じがするよな。てか、元から居なかったみたいな」

「「「ぎゃはははははは！！」」」

耳にこびりつくヘドロの様なそんな会話はまだ続く。

「だけどまさかいきなり辞めるとはな。学費払える蓄えも無かったのかよ？　場違いな所にやってんなよって話だよな」
「そうそう、それにアイツもアイツだよ。ちょっと俺達より成績が良いからって何が『頑張れば結果も付いてくるんだよ』だ！
俺達の人生は約束されてんだよ。貧乏人と違ってさ。まあ結局、頑張りだけじゃどうにも成らない格差がアイツもこれでわかっただろ。
家の子会社勤務風情のガキが出しゃばるから、ちょとした人生勉強だよ」
「ははは、確かに。でもこれでおもいっきり頑張れるんじゃね～の？　地面を這い蹲る様にさ。それがアイツにはお似合いだったろ。
それに頑張る事が好きだったみたいだし、良いことしてるね～」
「いや～そうか？　俺って良い奴？」
「「「はははははははは」」」

発せられる言葉が、これだけ不快だと思ったのは初めてだった。ベチャベチャベチャと薄汚れた言葉が地面に落ちる音が聞こえる様だった。

（アイツは何も悪くない……それなのにコイツ等が！！）

沸き立つ感情。だけどそれは私だけじゃ無かった。一緒に頑張ってた友達と呼べる奴が、その会話を聞いて大きく叫んだ。
最大限の怒りを表した彼の言葉に、教室中が静まりかえる。

「何だよ！　別に悪いことなんかしてないぞ！　アイツが悪いんだ！　貧乏人の癖に、俺達を見下ろすから！　殴って見ろよ！　お前も辞めさせてやる！！」

震える声でそんな事を言うバカな奴。そんなのは今の彼には逆効果でしかない。怒り心頭の彼は歯を喰い締めて、拳を作って駆けだした。

「このバカ野郎おおおおおおお！！」

だけどそこで私が彼の腕を取った。

「ダメだ」

そう言って。彼は必死に抵抗したけど、私は必死に諭した。確かにこんなバカ、殴れる物なら殴り飛ばしたい。だけどそれで、また一人理不尽に去らなきゃ行けなく成るのは嫌だった。

だから私は、今の話をありのまま、先生に伝えて彼を戻して貰おう……そう言った。この時の私はまだ、世界は正しい行いで回ってる……そう思ってたから、何も悪くない彼がこのままで良い分けないと誰もが言ってくれる。そう思ったんだ。

だけど実際は違った。世界は正しいことで回ってなんて無かった。どうしようもない理不尽と、その外に居る金持ち共と権力者、そしてそれに頭が上がらない大人で回ってた。

真実をありのままに伝えたのに、先生の答えは実に簡素で、それはどの先生に言っても同じだった。ここの大人は誰もが何かを諦めてる……そう感じた。

「だから無理なのよ。家庭の事情にまで私達教師は口を挟めない。学校が間違って退学にしたのなら取り消す事だって出来るかもしれないけど、通わせられない親に息子さんを通わせてくださいなんて言える訳ないのよ」

「なんで！　それなら、あのバカの親を呼んでそんな間違ったリス

トラを取り消させれば良いじゃないですか！」
「あのね。そんな事でリストラなんてされる訳ないでしょ？　仮にそうだとしても、会社の意向を私達が変える事なんて出来ないのよ。
言いたくはないけど、ただ必要ないって判断されただけかも知れないでしょ？」
「そんな訳ない！　彼はお父さんが昇進するって言ってました！
それなのにいきなりリストラなんて、絶対に変じゃないですか！
先生だって知ってるでしょ？　あの親バカな親！　運動会でも文化祭でも、自分の子供が目立たせたいからって、周りに賄賂をばらまくアホですよ！！
みんな知ってます。アイツの言葉でリストラしたっておかしくない！！　そんなのおかしいって、先生なら言えるでしょ！」

先生は偉い人で、正しい事を教える人……だからそれが普通の筈。でも先生も社会の一部で、一人の人。それが私立の教師とも成ると、公立とは違った感じで社会に寄ってるらしい。
だから私の言葉に、流石にイライラしてきた先生はこう言った。

「あ～もう！　幾らアホだってね、あの家はこの学校の大きな支援先なの！　そんな事言おう物なら、学校が潰れちゃうかも知れないの！
君はこの学校を潰してでも、あの子を戻してあげたいの？　その頃には無くなってるかも知れないし、そんなわがままのせいで他のみんなまで大変な事に成っちゃうかも知れないの！！
君はそんな責任が取れるの！？　それに、彼が好きだったこの学校を潰したりしたら、可哀想でしょ？　思い出が沢山あるんだから」

後半は何だかいきなり教師風に言われた。あたかも彼の為と話をすげ替えられて。でもそれでも、責任とか潰れるとか言われたら子供心に怖くなる。

その時初めて、目に見えない力って奴を感じた気がした。だけどまだ、一つだけは譲れない物がある。僕は頭を撫でる女教師に問いかける。

「じゃあせめて、アイツ等には何か罰があるんですよね。そうじゃないと、理不尽過ぎる！！　頑張ってたのに、こんな風に終わらされて、頑張らないアイツ等が得をするなんて、それじゃあ頑張ることに意味なんて無いじゃないですか！」

それは子供の私の必死な訴えで心の叫びだった。だけど返ってきた教師の言葉は、それを受け止めてるとは思えない物だった。

「わかったわ、それじゃあ後で彼らを呼びだして聞いてみましょう。そして本当にそんな事が会ったと認めてくれたら、私も厳しい態度で望みます。

それで良いかな？」

「そんなの認める訳無い！」

バカでもわかる事だ。アイツ等は普段バカだけど、ずる賢さは筋金入りだ。だけど教師は流すように、「大丈夫大丈夫、私は子供達を信じてるもの」と言って私は帰された。

だけど案の定、アイツ等は叱られる事さえ無かった様だ。数日経っても謝る事すらしなかったし、教師もその話は一切しなかった。

結局教師は、あの時感じた力に負けたんだ。いや、そもそも戦う気なんて無かった。職員室の誰一人。あの場に居た全員が既にその力に屈服してる人達だったんだ。

悔しかった……アイツ等は悠々と学校生活を送り、消された彼は、どうなってるのか分からない。でもきっと大変だろう。

自分の無力さを痛感して、でもだからどうにか成りたいと思った。理不尽にあらがうには力が必要だ。そして屈しない為にも力が必要。
私はあんな大人に成りたくないと思った。どうにも出来なかった彼の為に変えよう……そう決心して、まずは生徒会長を目指す事にした。
子供が掴める最初の権力と力だから。そしてそれでも、この学校を少しでも変えれるかも知れない、そう願って。それは無知な子供の儚い夢。小学生の生徒会長なんて、責任感を養う位の物だろうに。

小学生五年目の冬、最終学年である六年時の生徒会長選挙はこの時期にある。この学校は六年生しか生徒会長には成れず、立候補もその時から。
だけど役員は、その時の会長が選ぶ方針でそれには五年生までが入れた。だから私は生徒会長に売り込んで頑張ったんだ。

確かにお遊び感はあったけど、それでも私は真面目にやった。それにやっぱり役員をやってると、会長には成りやすい。
それに別に対立候補も居なかったし、これは確実視出来た事。私は成績優秀で有名でもあったしだ。でもここでも持つ側の奴らがしゃしゃり出て来た。

目当ては生徒会長と言う珀。この学校はエレベータ式じゃないし、中学受験の為に楽をしたい奴らが推薦って物に目を付けたんだ。
生徒会長やってれば、それが取れる確率は高くなる。そんなアホ共が複数立候補してきて、そしてある日私に言った。

「なあなあ、生徒会長なんて面倒なんだけど、受験は更に面倒なんだよ。お前はずっとはトップなんだし、そっちで推薦取れるんだろ？
なら俺達に譲ってくれよ」

腰を低くすると言うことを知らないバカは、態度がデカい。小学生らしいふてぶてしさとでも言えるが、こいつらは見てるだけでムカムカする。
なるべく相手をしないようにしてたのに……だけどこんな奴に譲る気なんか元々ない。

「自分は真面目に考えて生徒会長に成ろうとしてるんだ。それに受験に焦るのはお前達の怠慢だろ。んな理由の君達に譲る職じゃないな。
せいぜい頑張る事を知るといい。アイツの様に……」

そう言って、私は宣戦布告をしてやった。挫折や敗北を味合わえばいいんだ。この時の私はまだ、自分は特別だから望んだ物を掴む力があると確信してた。
それに自分以上に適任者はいない。自分が落ちる理由なんて無かった。だけど少しして、担任に言われた。それとなくだ。

「会長は実際大変なのよ。成績が落ちちゃったりしたら困るだろうし、私的には君には勉強の方をもっと頑張って貰いたいなぁ～なんて……どうかしら？
考えてくれない？」

それはどう考えてもあの力が見え隠れする言葉。ようは立候補を取り消さないかって言ってた。私は一応「考えておきます」とだけ言ってその場を去った。
下手に反論して泣きつかれても困るからな。そして答えを伝えないまま、生徒会長選挙は迫る。するとその時期から校門前に何かを配る大人達の姿があった。
それはパーティーの招待状？　でもこんな場所で手当たり次第に

小学生を狙うなんて怪しすぎる。

「おじさん達、小学校の前でこんな事してたら警察呼ばれるますよ」

僕がそう言うと、その人達は爽やかな笑顔でこう言った。

「大丈夫、先生方の許可は取ってあるからね」

許可が取ってある？　じゃあこの怪しいパーティーも認可されてるって事だろう。その時、この端にかかれてる名前を見つけて納得する。

それはあのバカな奴らの一人の名前。主催……って書いてある。用はこれは票取りパーティーか。お誕生日会が名目だけど、それは体のいい言い訳だ。

けれど問題は、それを教師が許可したことだろう。本人が配らないのは立候補者だからで、この人達は部下か何か？　親が勝手にしたことで通す気らしい。

でもそれでも、正しい事を通す事をしてれば人の心を動かせる……小学生の自分はまだ、そう信じてた。けれどそんな願いは儚く散った。

生徒会長選挙の日、立候補者の演説の後の投票結果は、人は他人の価値を何を与えてくれるかで決めてる事を知った。

パーティーで買収された大多数の生徒の票はあのバカに流れてたからだ。そして私は知っている。生徒達が言ってた。お土産と共に、「選挙よろしく～」と言ってた事を。

そんな物で吊られる奴らが大多数……それも元から持ってる奴らが絶対に有利じゃないか。私にはそんな事が出来る分けない。

現実は漫画や小説、映画の様に心をくみ取りはしないと知った。誰もが餌を与える奴らに尻尾を振る、バカばっかりだ。

「不正だ！」

そう訴えても誰も相手にはしてくれない。誰もが分かってて、でも誰もが目を瞑り耳を貸さない。また私の前にあの力があるようだった。

結局は何も変えられなく、一矢も報えず小学生時代は終わった。

中学校は推薦でまたも有名な進学校に進んだ。そこは人生を勝ち組と負け組に分けた考えを押しつける様な場所だった。

時間割はなんと十時間。朝にマイナスとゼロが加わり、六時間目の後に、プラスと補修が加わるそんな所。だけど授業に出て、成績さえ良ければ、後は校則なんて有って無いような物だった。

有名だが、勝ち組を目指す学校だけ有って金持ちが集まる訳じゃないから、ああ言う金に物を言わせた奴は居ない。

でも有る程度の奴らは居るわけで、それが成績も上位なら厄介にもなる。ストレスはかなり貯まるし、それは成績の下位グループへと向けられるんだ。

社会の縮図を詰め込んだ様な学校……それはやはり気に入らない事だらけ。だけど誰もそんな様子には目を向けない。

それは教師でさえも。勉強と授業に誰もが追われてた。私はそんな中、一人孤立して時々止める位はしてた。成績も上位だったし、人を寄せ付けない雰囲気を出してたせいか、一目置かれる存在に……でもだからって何が出来た訳でもない。

あの日からずっと、自分の無力さと他人の移り気にイライラしてた。知ってる奴らはいいけど、小学校時の友人は全員別々で、また一からと成るとあの出来事のせいで誰かを信じる何て出来なくなってた。

割り切れば良いんだろうけど、この学校ではそもそも話す機会が早々無い。白い無機質の校舎に、物がない教室。休み時間でもペンの音が止まないそこでは友情は育まれない。

体育祭も文化祭も形式だけで盛り上がらないし、修学旅行なんて修学合宿なんて呼ばれてる。誰もが通過点としか考えない三年間は、荒んだ物で埋め尽くされて終わった。

新たなる始まりは春。高校はあの荒んだ中学での勉強が実を結んで、有名な所に合格出来た。両親から離れての寮生活。

初めての恋に、本当の挫折。そんな事が訪れる事に成る青春時代……その始まりは本当の天才との出会いから。私は自分が秀才だと思ってた。

それだけで周りとは違うとも感じてた。だけどそれでもこの学校での入学試験では中盤位。秀才と天才の違いは努力では埋まらない物が有ると私は知る。

あれだけだ……あれだけ毎日毎日、何かに追われる様に勉強してもこの位。もしかしたらそれ以上に勉強をしてただけかも知れないが、それでも私が居た中学から合格出来たのは数人だ。

ここは努力を続けて来た秀才と、何かを持った天才が残酷にも集まって来たような場所。

桜の花びらが舞い散った入学式から数日後、私には気になる生徒が居た。入学直後の変なクラスの緊張感の中、彼は一番の異彩を放

ってた。
まずいつも遅刻する。そして眠たそうな目で授業を聞いて、昼休みには学校からまた出ていく。そして放課後に成る頃に戻ってくる。
それでも教師は何も言わない。そして誰も彼のそんな行動を追求しない。先生達は事情を知ってるんだろう。そして私たち生徒は、彼が入学式で代表を務めた事を見てるので、特別なんだと思うことが出来てた。
別に嫌みな訳でもないし……まあそれだけで私は嫌な目で見てた訳だが。

この学校は有名だと言っても、あの中学時代のソレとは全然違ってた。傍目に見れば授業が難しいだけの、普通の学校だ。
休み時間になればガヤガヤするし、部活も幅広く生徒と教師とのコミュニケーションも取れてる。別に私はその輪にはなかなか入れないが、それでも殺伐とする空気の中に居続けるよりは大分ましだった。

それに人恋しく成ってたのかも知れない……あんな中学生活のせいで。だからある日の放課後、この学校にある伝説の木の下に行ってみた。
それは少し前に聞いたこの学校の言い伝え。そんな事を信じるバカが、この学校にも入るのかと思ったらそこにはリボンを持って登ってる奴が居た。

でもなんだか……そんな事に必死になれる彼女に私は惹かれた。直後に私に気付いた彼女は落ちて、文句言われたけど、その後「責任とって」と言われて私は校舎の端の部屋へ連れられた。
そしてそこで私は出会う。出会って居たけど出会ってしまった。本当の天才『桜矢　当夜』という人物に。

理不尽な世界の自分（後書き）

第百四十七話です。

まさかここで彼が出てくるとはって感じだけど、繋がりとは意外な所にあるものです。だけどそんなに掘り下げはしません。次でガイエンの過去は終わる予定です。

このタイミングでダラダラとは出来ないですから。まあ本当はこの一回で終わらせる予定だったんだんですけど、これでも長くなったのです。さあ高校での出会いの後に何が有ったのか……ちなみにガイエンは今や大人なので、大学・社会人編とあるけどそこら辺は簡潔に行きたいです。

ご了承を。てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

百分の一秒を斬る剣（前書き）

沢山の出来事を超えて僕はここに立っている。引く訳にも、負ける訳にもいかない場所。通さなくちゃいけない想いが、この胸にはくすぶってた。決着の時……全ての雷撃を解放した僕は、残り十秒で絶え間ない雷光の輝きを輝きを発し続ける。

百分の一秒を斬る剣

「もう、タイムアウトじゃないかしら？　今からじゃ何をしても私は倒せないわよ。そうでしょ？」

真っ白な雪が風に流れて落ちていってる。周りは氷が突き出した風景が広範囲に続いてる。厚い雲が空を覆ってて、足りない日光がもったいないと感じてる。

きっと……光が一杯に降り注ぐと、最初この場所に来たときとはまた違った綺麗な景色が見れれるのに。想像してみるだけで、素敵な光景だ。

光を受けた氷達は、きっとこれでもかって位キラキラ輝くだろう。空は真っ青な青で……僕達は光の大海の中にいるんだ。

（うん……良い感じだ）

瞼の裏に浮かぶそんな光景をイメージして、僕は暗い空の下で一際強く輝く柊を見据えた。きっとそんな光景がこれから出来る……そう今は完全に信じれる。

そのイメージを確固たる物にして、僕は柊に言葉を返す。

「そうでもないさ。出来る出来ないかじゃなく、僕はやる。なんとしてでも……残り百分の一秒に成ったって諦めたりしないさ」

「あっそ。でもどうやって？　君は思うように進めない。それに私には使い勝手のいいのがいるわ」

どこまでも余裕の表情の柊。たとえ避雷針の役目をしてた柱が潰

されようとも、それは決して揺るがない。まあ、普通に考えれば、この時間で柊クラスの敵を倒す手段なんて有るわけ無いし、前例も何も無いだろう。

幾らシステムの裏側でこの世界の何かもが分かったとして、この時間でのノーダメージの相手を逆転するなんてデータはきっとない。全てに基づいて、柊はその余裕を崩さない。でもさ、それでもここまで粘ってきたんだ。何度もダメだと思う瞬間があった。その度に、運や仲間に助けられて来た。

紙一重で繋いできたここまでの時間、無駄になんてする訳には行かない。厚い壁が有るのも分かってる。今、柊の前には、あいつを守る様に分身共が前を固めてる。確かに使い勝手は良いよなあの分身。

そして柊はそんな完璧な布陣の先で、不適に僕にこう言った。

「でも……もしも本当にその力を信じれるのなら、見せてみなさい。そして一矢位報いてみなさい。その程度は許してあげる。

シクラが言ってた人が持つ何か……そんな物がもし、君に有ったらだけど」

本当に、どこまでも人を見下す奴。でも別に、それならそれで良いさ。今ここで示せばいい、人の力って奴をさ。柊のお望み通りにだ。

「何かなんか知らない。でも……見せてやるよ柊！　お前達が見下してる、人の力って奴を！！　みんなぁ！！」

僕は叫んだ。するとその瞬間、下から何かが僕の立つ周囲に上がってきた。それは武器……みんなが愛用してるそれぞれの武器だ。

剣に斧にナギナタに弓や杖……それらの武器が声に答える様にここにある。

（ああ、やっぱり……ちゃんと分かっててくれた）

そんな思いを心に加えて、僕はその武器達が落ちていこうとする前に、この肉体においっきり力を込める。

「うあぁぁぁ

「随分眩しく成ったものね。それがその力の真髄？」
「ああ、多分な。自分自身の『完全雷化』って所だよ」

僕達はそんな僅かな言葉をかわして押し黙った。きっと感じてるからだ。次の言葉で始まる事を。『完全雷化』か、今までは腕とシルフィング以外は雷を纏ってる感じだったけど今はそれとは全然違う。

体も服も防具も、全てが雷で輪郭を表されてるだけみたいな感じ。でも逆に、全てが雷化したからか、今まで見えて無かった両腕の先とシルフィングの形はハッキリと見えた。

周囲で発せられるスパークに雪が巻き込まれて、キラキラと散っていく。僕は再び見えるように成った拳を握り締めて、シルフィングにこう伝えた。

（行くぞ、相棒）

するとシルフィングの流星が雷の中でも一際輝く様に見えだした。それはきっとコイツの答え。譲れない先手の宣言。一秒が果てしなく感じるこの瞬間だけど、だけど残りはもう五秒位しかない。

僕は右腕を空に掲げる。

「活目してろよ柊！　今の僕はさらに速い！！」

その瞬間、僕の周りで浮いていた武器が次々に消えていく。そして次に現れる場所は、柊を中心とした周囲。そこを円で囲む様に展開させた。

「ふん、結局は遠距離から決めるつもり？　それなら君も変わらないわ。それにこんな見え透いた物なんて、直ぐにでも落とせ――」

止まる柊の声……そして見える確かな衝撃。その瞬間、雷光は二線に弾け視線を向けた柊の分身が一体、目の前で砕け落ちていく。
何が起こったのか、賢いアイツなら分かるだろう。

「これで……後三体！」
「――っつ！？　散れ！！」

その瞬間、三体の分身共が一斉に羽を羽ばたかせて動き出す。だけど今の僕のからしたら、その翼の一つ一つが手に取るように分かる。
膝を曲げて力を込める。そして掴んだ杖から飛び出した。

「遅い！！」

雷光が曇天の空に線を引く。その一瞬で十分だ。僕は真っ直ぐに進むだけ……そこにある着地点である武器を目指して。
そしてそれは誰にも何にも阻むことは出来ない。その道を塞ぐのなら、この両の流星の剣で叩き斬るだけだ。そしてその交差点で一際大きく鳴り響く雷の音と雷撃の光。
もげた翼は儚い欠片と成りながら地表を目指すその途中で消え去っていく。だけどまだ！！

「うおおお

「シクラが言うことが少しは分かった……少しだけ、私も人に興味が出てきたわ。やっぱりその手で決める気なのね。
でも……それはそうで無くちゃいけないわ」

何を言ってるのかイマイチよく分からない。追いつめられてそれなりに動揺してるのかも知れないな。外に出さないだけで。
だけど実際……追いつめられてるのは柊だけじゃない。それは僕も一緒だ。刹那で打てる一線がある……けれど、それももう限られてるんだ！
だから、今はただ前へ！

「僕はこの奇跡を！　この両の剣を信じてる！！　そして力を貸してくれたみんなの武器は道。それを僕に示してくれてる！！
迷いも何も無く突き進めるこの道は、全てがお前へと繋がってるんだ！！　それを打ち砕くのが僕が応えれる事！
みんなの願いと想いを背負って……僕はお前を叩き斬る！！」

青い雷光が弾ける。その瞬間、柊の翼が大きく外側に動く。だけどもげるまでは行かなかった。流石に本体に残っただけあって頑丈だ。
だけど斬った場所は、音を立てながら翼から羽が落ちていた。効いてはいる。それは確実……だけど時間を置けばあの翼は再生する。
今も既に地面全体が光り、そこからエネルギーでも供給してるのか、氷の翼は復元を始めてる。

「させるかぁ！！」

僕は更に攻撃を続ける……だけど柊はその翼を堅く畳み、防御に専念してる。確かにそれが一番、今の僕がやってほしく無いことだ

った。
もう何秒と無いんだ……ここであの力で防御されたら一番不味い。
（なら……もっとだ……）
歯を食い締めて更に続けざまに飛び出した。縦に横に、切り刻む。その度に氷の欠片が剥がれて行く。でもこの程度じゃ直ぐに復元されていく。
（まだ足りない……もっと……もっと……）
秒針が一つ進むより速く僕は飛ぶ。風や音を越えて剣を振るう……そして目の前で弾け飛ぶ氷の欠片の数さえも数えられる程に、一つの事に頭が支配されていく。
（もっと……もっともっと……）
空に絶え間無い雷光が光続け、重なって行く雷音は大地を震わせだしてた。だけど僕には、柊と言う一点しか見えてない。
（もっともっともっともっともっともっともっと！　まだまだいける！！）
一を十に、十を百に、百を千に、千を万に！！　次第にセラ・シルフィングの剣線は途切れることなく繋がっていく。
柊を囲う周りの武器で雷光が弾け、その線の全ては一カ所に集中してる。そしてそこでは更に激しい雷のうねりと衝突が繰り返されてる。
青い雷光が砕けていく氷の欠片を照らしてる。光を受けて輝くそ

んな氷の欠片は、次第に多く周囲に舞っていく。それは確かにその瞬間へ近づいてる証だ。
そして雷速の剣がついに大きな亀裂を翼に与える。右と左……交互に感じる感触が手応えに変わった。耳に届く、大きな氷の亀裂。
それには流石の柊もあり得ない……そんな顔をしてる。だけどこれが今起きてるリアルだ！！　リルレットの剣を蹴って、僕は柊の真っ正面からその乱撃を打ち込もう！

「うおおお

瞳をあけてられない位の光が広がる。そして次の瞬間、幾重にも重なりあった雷撃が臨界を越えて空に昇り、するとさらに激し過ぎる爆発音と衝撃波がこの空間を埋め尽くす。
渓谷を成してた氷は全てが吹き飛ばされて行き、地面に積もった雪を再び舞い上がらせる。世界は白で包まれた。そんな中、残り滓と成った雷撃が自身の最後の一絞りの如く空気中にスパークを放ちながら消えていく。

（防ぎようのない攻撃……だったはずだ）

柊は解放された巨大な雷撃と共に昇っていった。どうなったのか最後まで確認も出来なかった。でも……あれはその筈だ。
今まで僕の力で浮いてた周囲の武器が落ちていく。この奇跡はもう終わり……全ての力が淡い夢だったかの様に儚く散っていく。

残ったたった一のＨＰ。それは確かな勝利を示してる筈……だけどその一じゃ、この体をどうする事も出来そうにない。
腕も……足も……体の全て何もかもが動かせない。シルフィングを握り続ける事も出来なくて、この真っ白な世界をただ落ちていくだけ。

曖昧だった体も、今や実体を取り戻しつつあって、吹き上がった雪の粉の冷たさが僕にも分かる。僅かに視線だけ向けても、迫る地面さえ見えない……もしかしたら次の瞬間にはドガアアンと地面に突き刺さるかも知れない。

そう言えば、柊を倒す事に夢中でその後の事まで考えて無かったな。この奇跡もどうせなら、僕が地面に足を付くその瞬間まで持ってくれれば良い物を。
けれど既にもう奇跡は消えて行ってる。でもこの奇跡があったか

らこそ……今僕は生きてられてる。戦う事も出来た。

そして掴み取れたのなら……僕は感謝するべきなんだ。この奇跡にさ。体から消えてくこの奇跡にちゃんと言葉を贈ろう。

きついし重いけど……何にだって言葉にしないと伝わらない事があるし、それに口に出すことで僕は実感したかったんだ。

ちゃんと倒せた事を。シルフィングを振るってた最後の方は曖昧だから。夢中で……夢中過ぎて、確かに有った筈の事なのに、そこだけ夢みたいな……だからちゃんと口にしたかった。

やれたんだ……そう思いたいから。震える腕を真っ白な中に突き出す。重いし、楽じゃない。だけど掲げたのはそこが奇跡の最後の部分だからだ。

この腕が終われば、この力を感じる事もないんだろう。だからその前に……

「ありがとう、助かったよ奇跡」

真っ白に染まる空間に、青い雷撃が儚く昇る。そして昇った先で、白い中で散っていった。白と青のコントラストは結構綺麗な最後を僕の目に見せてくれた。

それはもしかしたら、奇跡が送ってくれた最後の夢みたいなものなのと勝手に思った。「ありがとう」の言葉に応えてくれた証。

儚く散る様は、「ごめん」と言ってる様にも見えたけど、そんなのは全然いいんだ。ここまでで十分……最後くらいは自分の、自分達の足で立つさ。

大丈夫だろ……だってほら、何かが聞こえてくる。

「「「スオウォォォォ！！」」」

それは間違いなくみんなの声だ。この視界でちゃんとこっちに向かってるのかは微妙だけど、ちゃんと足音は近付いて来てる。
ああそっか、きっとさっきの雷撃だ。あれがみんなにこの場所を示してくれたんだ。最後の最後まで、本当に心配症な奇跡だったな。

だけど助かる……自分達の足でとか言ったのに助けられたのは示しが付かないけど、ちゃんと受け取ったよこの贈り物。
その瞬間、僕の背中に暖かな感触が伝わった。そして一斉に伸びてくる腕。それらが上空から落ちてきた僕を受け止める。

だけど流石に耐えられずに、みんなして地面に倒れ込んだ。冷たい氷の上だけど、そんなの全然気にならない。感じる人の温もりが暖かい。
それに何だからムニュッととっても柔らかいし……

「ス、スオウ！！　そこは……ああ……」

何だか焦った様なリルレットの声。でもそれもその筈だ。だって僕が感じた柔らかな感触……それは柊の二つの控えめな膨らみだったんだ。
真っ赤な顔で僕を見つめるリルレット。僕も次第に赤く成る顔をどうにも出来ずに止まった。でも取り合えず、手を恐る恐るどけて謝った。

「ごめん……」
「えっと……あの……お粗末な物でごめんなさい」

変な空気だ。てかお粗末な物って……決してそんな事は無かったような……って何考えてんだ僕は！　でも男としてちゃんとフォロ

ーした方がいいのではと思わなくもない。
気にしちゃ悪いし、黙ってるとお粗末だと認めた様じゃないか？
だけどこれ以上、胸の事を話すのも場違いだしこの空気じゃハードルが高い。
誰か！　と思ってると、その時更に下に倒れてる奴らから声が聞こえた。

「何やってるんだよ君達は。折り重なってるんだから、退いてくれると嬉しいんだが……一番下の彼が圧迫死しそうだよ」
「うあわあっわぁ！」
「ごご、ごめんなさい！」

僕とリルレットは急いで降り――ようとしたら、僕はその場に転げるように成った。今度は本当に冷たい地面が背中に当たってる。
するとそんな僕の様子を見て、心配するリルレットが覗いてくる。その向こうではみんなが「イテテ……」とか言いながら立ち上がってた。

そんな様子を見てたら、「やったんだ」そう思えてきた。あれから誰も失わずにやれたんだよ。それはとても嬉しいこと。妙にテンションが上がってきた感じ。
だからかな？

「だ……大丈夫？」

そう言ってまだ少し頬を染めてるリルレットと自然と目が合うと、少しの間を置いて何だか吹き出した。

「ははは、はは……」
「え？　ええ？　はは……あはははは。あれ？　何で私まで……

でも……あはははは」

僕に釣られてリルレットも笑い出す。何がおかしいのか良くわかんないけど、取り合えず笑ってしまう。緊張の糸が切れたせいかな？

「暢気なもんだな」

「良いじゃないか。自分も今はおもいっきり笑いたい気分に成ってきた。そら、わはははははははは」

「ふふ、確かに何だかそんな気分かも」

「ああ」

そんな僕達を見てたみんなもどうやら笑いたい気分らしい。そしてみんながそれぞれ視線を交わすと、健闘を称える様に笑顔がこぼれて、笑いが生まれてく。

それは今までにも何度か見た、本当に気持ちの良い瞬間の顔を誰もがしてた。それぞれが、それぞれに出きる事を精一杯やった……そして掴んだこの勝利。嬉しく無いわけがない。

鳴り止まない僕達の笑い声。涙が出ても、声が涸れても続きそう……そう思える程だ。だけどその時、仰向けに倒れてる僕には真っ先に見えた。

濃く張っていた白い雪達が晴れていく。上空まで上がってたのが再び近くまで落ちて来たのかも知れない。そしてそんな晴れゆく空からは、恋い焦がれる程に望んだ光が少しずつ線と成って降り注いでくる。

そしてその光の一つは丁度僕達の真上だ。キラキラと周囲に満ちる雪の結晶と暖かな光が混在してる。薄まって来た白の先には、青い空が覗いてる。

そう言えば雷撃があの厚かった雲も一気に吹き飛ばしてたから…

…ようやくそれが届いて来たって事か。

「あ……」

降り注ぐ光は、みんなの視界にも入る。そしてその光景に笑い声が止まった。

「スオウ！」

輝く顔でこちらに手を伸ばすリルレット。まあ、上しか見れないの何だし……何だけど、体を動かすのが一苦労だ。

「スオウ？　体が……ほら、ちゃんと支えてあげる」

そう言ってリルレットが僕の体を起こしてくれる。なんか情けないが、今はしょうがない。素直にリルレットの優しさに感謝だ。

そして目の前に広がった光景は正しくファンタジー……そう呼べるものだと思う。

「ねえ、凄い綺麗だね」

「ああ……」

リルレットの言葉にそんな声しか返せない。だけど言葉を失ってるのはみんなも同じだ。それだけの物が僕達の居る場所には広がってる。

蒼い空から降り注ぐ幾つもの光、まだ薄く広がる白い結晶はそんな光を反射して眩しい位に光ってる。そして自分達のついてるこの地は平淡になっていて、そこには空の蒼と広がる白い結晶も映してて、もう一つ空が有るようだ。

遠くに見える地面と木々の輪郭がここを大地とわからせていて、でもそれを覆ってるこの白い結晶がどこまでも幻想的に思わせてくれる。

そして気付くと周りには僕達の武器が、この氷の地面に突き刺さってる。それもまたいかにもって感じだ。この感動はただこの景色に出会ったからじゃない……僕達が掴み取った物が有るからこそ得られたもの。

きっといつまで経っても色褪せない思い出にこの景色はなる。みんなきっとそうだろう。表情がそう言ってるよ。すると何だかカシャカシャ聞こえだした。

誰かがスクリーンショットを撮り出したらしい。確かにその手が有ったか……でもいいや、僕はこの景色と思いを誰よりも強く心に残す……それだけで。

百分の一秒を斬る剣（後書き）

第百四十八話です。
遂に決着。最後はやっぱり、みんなの力があってこそです。がっちりとはまった雷化の強さは想像以上の物だったのです。柊がどうなったかはまた次で。でもこっちもこれで終わりではないのですよ。
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

新世界の扉（前書き）

天才……そういう奴がこの世にいるとしたら、それは間違いなく奴だと私は思う。『桜矢当夜』その存在がこの世界の理不尽さを際立たせるんだ。どうやっても、どれだけ頑張っても凡人にはたどり着けない何かを感じさせるアイツ。

だけど私達は繋がった。たった少しの三年間のその時間だけ。

新世界の扉

「ようこそ、『ダイクラ』へ」
「ダイクラ？」

何かの暗号か？　と言うか、何で自分はこんな所に連れて来られたかわからない。堂々と宣言した彼女は先にその部屋に入って、何だかしきりに目で何かを訴えてる。
後ろに居る奴はパソコンの画面から目も離さないし……結構大きな声だったし、聞こえてない筈は無いんだけどな。てか、あの後ろ姿は見覚えが……沢山のハテナが頭に浮かんでる中、私は取り合えず彼女がしきりに合図してる上を見てみた。

何があるのやらと思ったら、そこには名称のついた札が無造作に貼られてる。意味不明な名称が堂々と書かれたその札は、よく見ると下にカッコで正式名称らしき物が見える。
何々……

「ダイクラ……ダイバークランジェント・リーデヴァイブシステム研究会？」

ついつい口に出して呼んでみたら、その瞬間彼女がハイテンションで私の顔面を数センチの距離で指さした。

「はい！　これでダイクラがわかったでしょ？　じゃあほら、君もこっち側へヘイカモ～ン！！」
「……」

付いていけないノリだった。と言うか、私的には何一つわかってない。でもこれだけは何となくわかった気がする。
この部室と思われる部屋の中へ行くか行かないか・・それで今後の高校生活が決まりそうだと。下手に動けない……だけど取りあえずは気になった女の子が、誘ってくれてるんだから悪い気はしない。

同じクラブ活動が出来るのなら。甘酸っぱい出来事がこれから起こっていくのかも知れない……そんな夢を見れる。
だけど問題はその場所だ……デンクラってやっぱり何もわからない。せめて有意義な場所で有意義な経験が出来るクラブを希望したい。

今後の為にも……私は大学まで見据えてるんだ。今の自分の順位では満足出来ないし、訳の分からない事をやりたくはない。
私は必ず、自分自身で掴めると証明するんだ。持たない自分でも、望む物を掴めるって事を。だけど青春って奴に期待する年頃でもあるから離れがたい。
だから取りあえず聞いてみた。

「えっとさ、全然わかんない。君が何をしたいのか」
「だから〜責任よ、責任！　つべこべ言わずにダイクラの一員に成りなさい！　言うとおりしないと、学校中に有りもしない噂を広めて、そうね〜明日からの君のあだ名を『物見遊山』にしてあげるるわ。
三年間を意味不明なあだ名で過ごす恐怖はないわ。高校デビューが間違った方へ転んだ哀れな奴にみたいに成っちゃうのよ。
しまいには誰からも名前を記憶してもらえず。モノミーモノミーと呼ばれ、あだ名を略したあだ名を作られて学校の七不思議へと成っていく……それでもいいの？」

目をキラキラ輝かせて彼女は随分自信満々に脅したつもりのようだけど……やっぱ全然わかんねーよ！　やばい、この子の感性は自分が出会ったことの無いタイプだ。
まあ要約すると、「君は責任とってダイクラに入る。でないと口も聞いてあげないぞ！　名前も覚えてやらないぞ！」みたいな感じだろう。

まあそんな可愛らしい事ですみそうに無いけど、自分の脳内ではそう変換しておいた。デンクラね……実際色々気にはなる。
後ろの奴とか、この部屋にある機材とか……それに彼女も。責任って言われても、こっちに非が有る訳でも無いんだけど、ここまで来たのは彼女との何かを期待してた……ってのもある。

「はあ～、それでも良いかって言われてもさ。別に私は誰かと打ち解ける奴じゃないし、勝手にそうなりそうだからどうでもいいけど……」

本当に自分でも冷めた奴に成ったなと言ってて感じる。だけどきっとそうだ。今はそれこそ物見遊山で、積極的な奴は話しかけて来たりするけど、それも一週間もすれば終わって孤立するだろう。
そんな物なんだ。だけど気にしたことなんかない。大きな物を手にするには、今はそれが必要とも思えないから。でもそんな事を口にした私に、彼女はそんなの関係無い感じに言った。

「あらら、じゃあ私がモノミーの友達候補に上がろうじゃないか。ほらほら！」
「モノミー言うなよ……てか何？　その突き立てた人差し指は」

彼女は本当にコロコロと表情が良く変わる。今は屈託無く笑ってるけど、あの脅しの時は意味不明な言葉でも計算高い女を出してた。

何だかつかみ所が無い様な感じだ。てか初対面の私にモノミー言うか？　もしかしたら友達って部分を意識して屈託無い感じを誘ったのかも知れないが、やっぱりモノミーはやめてほしい。

それに友達候補って何？　友達に成ろうと言ってくれないのが微妙に残念というか……すると彼女は僕の言葉に、今度は真っ直ぐにこちらを見つめて柔らかく微笑んでこう言った。

「この指止まれ！　知らない？　『おっとも達に成りたい人、この指と～まれ♪♪』」

そんな歌と共に私の瞳を見つめる彼女。ジーと見つめる彼女。絶対に何かを訴えてる。選択権……なのかなこれは。友達候補には挙がるけど、友達に成るかを決めるのは君だよ……そう言われてる様な気がした。

星屑を散りばめた様な、深く黒い瞳。それに誘われる様に私の腕は動いた。そして彼女の細い指を包み込む。

「と～まった……」

ハッとした所で、何かもの凄い恥ずかしい事をした気がする。高校生にもなって何やってるんだ。私は腕を放そうと思い、拳を開ーこうとしたら彼女の瞳が野生の獣の様に光りその腕に待ったをかけた。

しまった……そう思ったときには時既に遅い。

「つ～かまえ～た。私の友達＝ここへ入部。選択したのはモノミー。嘘、偽り、裏切りは極刑よ。だって友達だものね！」

「――っつ！！」

その笑顔は、後ろに般若が見えました。人生で初めて、女は怖い……そう認識した瞬間だった。

禁断のダイクラ部室……そこはＰＣとそれに繋がるコード、そしてその関連の機材で天井まで埋め尽くされてる様な場所だった。中央に簡素な机。その奥にずっとタイピングしてる奴がいた。そして私はその簡素な机で入部届けを書いたんだ。

「で、ここって何やるんだよ？」

尤もな疑問をぶつける私。何せダイクラだ。正式名称でも訳わからん。すると入部届けを受け取った彼女は、いきなりとんでも無いことを言った。

「う～ん別に。何もないかも」

「はあ？」

何も無い？　あれだけ強引に誘っておいて、やることがない！？ふざけるなだろ？　あの時間は無駄意外の何物でもないじゃないか！

「おい、今直ぐその紙破り捨てろ」

当然そうなる私。入部は取り消しだ。有意義の有も無さそうな事なんかやってられない。やることが無いだけに。だけど彼女はそんな私の言葉に首を振る。

「やー！　そんなの認めません！　モノミー友達でしょ？　裏切る

の早すぎだよ！」
「モノミー言うな！　それと私は裏切ってない！　どっちかって言うとそっちだろ！」

私は入部届けを奪い返そうと腕を伸ばす。だけど彼女はヒラリと交わす。すると得意気な笑みが見えた。腹立たしい事この上ないな。
私は躍起に成って彼女を追い回す。それがしばらく続いてると、不意に言葉が聞こえた。

「出来た……」

それはずっとＰＣに向かってる奴から漏れた言葉。すると突然彼女は止まって奴の方へ。

「ホント当夜？　完成？」
「完成じゃない。形が取り合えず出来ただけ。それでも体感位は出来ると思う……やる？」

すると彼女はコクコクと素早く首を動かす。そして何かを奴はもって、二人して隣の部屋へ。気付かなかったけど、中から繋がる扉が有った。
てか、二人とも私を置いてってる。しょうがないから、黙って付いてくと、隣の部屋にはベットがあってまた違う感じの機材が揃ってる。

なんて言うか、病院みたいな。そしてそのベットに横たわる彼女。女の子が目の前でベットに居るってだけで結構ドキドキだ。
と言うか、何の為にベットが？　思春期の男子高校生の想像が膨らみそうだ。私は必死に押さえつけるがな。私が自分自身と戦ってる間に、彼女は頭にトゲトゲが一杯付いたヘルメットみたいなのを

被って横たわる。
後、腕や足にも、何やらそのヘルメットから伸ばしてつけてる。そしてその本体からは複数のコードがコンピューターへと流れてる様に見える。
後は何か脳波を計る様な機械も一緒に動いてた。そして奴は言う。
「行くぞ。ダイブ・オン」
するとヘルメットが幾重にも光りだした。そして彼女は眠ったように動かない。気まずい時間が数分流れる。だけど奴は一度もこちらを見ることは無かった。
ただＰＣと機材に集中してる。そしてヘルメットの輝きが失われると、いきなり彼女は目を覚ました。その体は心なしか震えてる？
それに眠ってた人が起きる感じじゃ無かった。
「当夜！　やっぱり天才！！」
そう言った彼女はいきなり力強く奴に抱きつく。迷惑がってる様だけど、こっちは開いた口が塞がらない状況だ。どういう訳かまずわからないしな。
すると勢い込んで奴に抱きついてる彼女と目があった。すると彼女は頬を染めて口を開く。言葉に出さなかったが、私にはわかった。
絶対に「あっ！」って言った。今思い出した感じだ。
「そうだ当夜！　もっとサンプル欲しいって言ってたよね。新しいダイクラ部員増やしたんだよ」
そう言って彼女はこちら側へ。するとようやく、奴は私を眼中に入れた。なんだか自然と険しい目つきになってしまう。お互いに。

てか今までで一番まともな理由言われた気がする。はっきり言うと「気に入らない」そう思い始めてる自分が居る。

「えっとね、彼の事は知ってるよね？　桜矢当夜、入学式で新入生代表をした人で、ここの存在意義」

「存在意義？」

また大きな事を言われた。存在意義ってどういう事だよ。そこは「部長」とかが来る場面じゃ無いのか？

「う～ん、まあそれはおいおいね。取りあえず、自己紹介が最初。当夜、彼が新入部員の――」

「――モノミーだろ？」

ガクッと膝が折れる私。何だその薄ら笑いは！

「誰がモノミーだ！！　アンタ散々無視してた癖に全部聞いてたのかよ！　それで今このタイミングで何だそれ！　狙ってただろ！　天才がおかしな事に気を回してるな！！」

「いや、あれだけ騒がしくしてるのを聞くなと言うのが無理なんだがな」

うわ、この天才正論を吐きやがった。確かに思い返すと騒がしくしてたが、そうなるだろ！

「そんなのどうでもいいんだ！　問題は今までの完全無視だろ！　かなり前から私の存在には気付いてたんだろ？　それなのに空気の様に……そしてあの悪態だ！」

「ごめんモノミー、私が悪いの。当夜、天才だけど人格に問題有るから……ほら、天才って大抵どっかおかしいでしょ？　だから許し

てあげて」
彼女は奴の変わりに真面目に頭を下げる。だけど言い始めたのは彼女で、それを改める気は無いらしい。
「はは、僕も酷い言われよう何だけど……本人を前にして言うことかそれ？」
確かに、奴は彼女に大抵どっかおかしい奴と思われてるらしい。それはそれでイヤな事だ。
「まあでも、折角だしやってく？　お詫びの印。モノミーまだ入るか入らないかでモメて無かったっけ？　どうせ何をやる所でも無いし、体験は良い判断材料に成るだろ？」
何だ？　ここではモノミー言うことがプチ流行してるのか？　こいつら二人して改める気がまるでみられない。だけどこの時の私は否定する事を忘れた。
何故ならさっきの装置を奴がこちらに差し出して来てるからだ。一体何を彼女は体験したのか、興味が無い訳じゃい。だけどこれを取ることは、何となくこいつの思い通りの様な気もする。
さっき、彼女はそんな事言ってたし。だけど好奇心……そして天才の片鱗でも覗きたい私はそれを取った。
「何の道具だよこれ？」
「やってみればわかる。でも強いて言えば、もう一つの世界の扉……かな」
意味不明だ。だけどここに来てそれを突っ込むのもそろそろウザ

い。彼女にも背中を押されて促され、私はベットに横たわる。そしてその言葉は紡がれた。

「ダイブ・オン」

その瞬間、意識が何かに引っ張られる様な感覚と共に世界が暗転する。真っ暗な闇。しかし少しずつ何かを感じだした。

肌を撫でるような優しい風の感じ、そして緑と花の香り？　どこに立ってるかもわからないが、次は草が風で擦れる様な音も聞こえる。

すると次の瞬間だ。一瞬暗闇の中に何度か閃光が灯ったと思って、目を閉じた後に開いた……するとそこには信じられない光景が広がってた。

それはあのＰＣだらけの部屋じゃない……と言うか、目の前に広がる光景は既に室内ですら無い。そこは草原なのか、青々しい草が優しく揺れてる。どこまでも広がるそんな大地の果てには信じられない位に大きな木が、輪郭だけを見せてる。

そして空は黄昏色を織りなし、羽ばたく度に光をこぼす鳥が飛んでいた。ここはまさしく異世界……それをリアルに私は感じてる。

信じられないこんな事……同じ高校生にこんな物が作れるなんて……天才……その言葉が頭を支配する。すると突如、世界は暗転し再び引っ張られていく。

目をあけると、そこは機械だらけの部室だった。覗き彼女は「どうだった？」と瞳を輝かせて聞いてくる。そして後ろの奴も、何かを待ってると言った体。

だけど私は何も言えない。言いしれぬ敗北感とでも言うのか、まさに次元の違いを見せつけられた感じで言葉がでない。

なまじ今まで優秀と言われてた分、優秀と天才の出来の違いを知ってしまった。

「ちょっと……今日はこれで帰る……」

「ええ？　モノミー？」

「……」

驚く彼女に無言の当夜。私は振り返らずにその場を後にした。

与えられた者……なんだあいつも。そしてあいつ自身の能力は本物だ。今までの親に頼るクズとは違う。完璧……まさにそうだろう。

あんな奴がいたら、どうしていいのかわからなく成るじゃないか。与えられた者共を見返して押し退けて、掴みたかった。

だけど……勝てるなんて思えない。それからしばらくは教室でも目をあわさない様にした。彼女も何も言ってこない。けれど見てれば見るほどに、その理不尽さに腹が立ってくる。

特別待遇で、それが当たり前みたいな態度何だ。自分が望んだわけじゃない、だけど周りがそうするみたいな。だからある日放課後ではち合わせた時、私は思わず当たってしまった。

「誰もいないし、モノミーって呼んで良いか？」

そんななれなれしい態度にカチンと来た。

「何で！　どうしてお前みたいな奴がいるんだよ！　人の努力を真っ向から否定する！　お前はそれが当たり前何だろうが、その影で何人が食い物にされるか考えた事あるか？

与えられた奴らに、私達の様な与えられぬ者は踏まれ続けなくちゃいけないのかよ！　お前は私にとっては理不尽の象徴だ！！」

完全な八つ当たり。いきなりこんな事言われて、怒ってもおかしくない。だけど当夜は、どこか寂しそうにこう言った。

「与えられた……か。なあモノミー、君は家族は健在か？　仲はどうだ？」

「別に……両親共に健在だよ。私は一人っ子だから大切にはされてると思う……って何の質問だよこれ！？　私が言いたいのはだな！」

話をすげ替えられた？　そう思ったけど、なんだかそんな感じじゃない。腹から沸き起こるイライラは止まらないんだ。

だから言葉を続けようとした。だけど背中を向けて発せられた言葉に私は止まってしまう。

「僕は、君が羨ましい……普通であれれば、まだまだ子供のままでいられたのかな？　何も背負わずに居ても……誰かどこかの大人が助けてくれたのかな？

ごめんモノミー。あの感想はいつでもいいよ」

何なんだよ……何であいつがあんな悲しそうで、苦しそうなんだ。与えられてる奴らは、理不尽に幸せなんじゃないのか？　それなのに……イライラと共にモヤモヤまで追加された。

それからしばらくして、私は彼女に詰め寄った。これ以上、停滞してるとダメな様な気がしたんだ。だけど結局、あいつの事は教えてくれなかった。

それどころかこう言われた。

「確かに当夜は天才。きっと将来ノーベル賞とか取ったりするんで

しょうね。だけどモノミーは負けたくないんでしょ？
ううん認めたく無いんだっけ？　どっちでも良いけど、これだけは言えるよ。立ち止まってちゃ置いてかれるだけ。
どれだけ離れてても、道は違っても、絶対に追いつけないって決めるのは自分だよ。やってもいない内から、負けを認めちゃうの？」

そんな彼女の言葉が心を震わせた。だから私は思った。今がチャンスだと。あの天才の何かを少しでも吸収できれば、きっと役立つ。明日へ繋がると。
だから私は改めて書いた入部届けを当夜の机に叩きつけた。これは宣戦布告だ。絶対に負かしてやる。そしてここから三人での高校ライフが始まった。

それからの生活は今までの孤独な時間が減った。と言うかあいつ等がモノミーモノミー言うから、クラス中にその呼び方が蔓延しやがった。
だけどそのおかげかどうか分からないが、喋りかけて来る奴は増えた。そして部活では相変わらず奴の天才ぶりを垣間見る毎日だ。

凹んだり喧嘩したり笑いあったりの時間は目まぐるしく過ぎていく。そして打ち解ける中で聞いたのは当夜の事、この部活の事。
当夜の事はショッキングだった。あの言葉の意味を知った。そして部活のことは殺してやりたいと思った。このダイクラは学校自体が、当夜を招く為に用意した場所らしい。

そして学校とどこかの企業が提携して、何かをやらせてる……と言うことだ。つまりはこいつには既にスポンサーが付いてるって事だ。
どうりでこの部室、やたらと機材が揃ってると思ったらそう言う

事か。この学校の半分の電力を使ってるんじゃ無いかと思う程の機械の量だからな。

それから二年は慌ただしくも充実した日々が過ぎていった。この二年で感じたのは、やはり天才と秀才の違い。そこには何か決定的な違いがある。

だけど三年のある時期から、当夜は思い悩んでた。天才でも、ゼロから何かを生み出すのは用意じゃない。そして二年の間に状況は変わってたんだ。

バックの会社が負当たりで経営を傾かせてると聞かされた。そのせいでこの計画は頓挫すると。学校は他のスポンサーを見つけてるけど、それも難しいらしい。

なんせ「夢物語」だからだ。誰が高校生が誰も出来なかった新技術を開発出来ると思う？　二年間一緒にやってきた私や彼女は違うが、どっかの科学者気取りの奴らは荒唐無稽と、当夜が書いた論文を破き捨てたと聞いた。

それに今までの会社以外に、そんな冒険をしようと言う会社はあがらない。天才だとは誰もが認めてる。だけどそれでも、歴史に名を残す物を生み出せるのは、その天才の中でも飛び抜けた超天才らしい。

きっと当夜はそうなれる。だけどどこもそれを信じきれない。するとその時、彼女が頭を下げる。

「ごめんなさい。家のせいだよね。でも、パパもママも頑張ってる！　絶対に大丈夫だから！」

そうバックの会社は彼女の両親の物。だから実際に一番大変なのは彼女だろう。だけどその彼女が頭を下げてる。

「そうかな。あの人には感謝してるけどシビアな人だよ。だからこそ切る物を分かってる」
「当夜！　お前……」
「切らせなんてしない！！　こんな事で終わりたくなんか無いもん！！　大丈夫……私にだって当夜の為にやれる事あるよ」
意味深に言って彼女は飛び出していく。何する気だ一体？　まただ……どうしようもない事が、理不尽と言う名を乗せて降ってくる。

新世界の扉（後書き）

第百四十九話です。
え～と、まずはごめんなさい。終わりませんでした。でも次には終われる筈です！　これは絶対！　だからもうちょっと付き合ってください。お願いします。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

甘く弱い、立ち上がれない子（前書き）

柊の力が弱まると同時に、湖の氷が溶けだした。僕達はそんな崩壊から逃れる為に岸を目指して走り出す。何とか無事にたどり着けた物の、その時僕には異変が起きる。

それは力の代償か……世界から拒絶され始めた。

甘く弱い、立ち上がれない子

ため息を付くような光景の中、突如地面が崩れだした。ここは元は湖だった場所……それを柊がその力で凍らせた場所だ。
だから柊の力が影響出来なく成った氷が溶けだしたのかの知れない。

「おいおい、やばいぞこれ！！」
「急いで岸へ！　リルレット、彼をこちらへ！」
「うん」

そう言って僕はリルレットからナギナタ使いの彼へと担がれる。情けない……本当に。足手まといの何者でもないじゃないかこれじゃあ。
でも……自分ではどうにも出来ない。もしかしたらもう少しだけＨＰを回復出来たら、この体も動くように成るのかも知れない。

でも感動に続いてのこの状況で、そんな暇はなさそうだ。取り合えず今は岸を目指す事が先決。その後でも大丈夫だろう……そう僕達は思ってた。

「頼む」
「ああ。しっかり捕まってるんだ！」

みんなが一斉に岸へ向かって走り出す。空が映る氷の地面は次々と崩れて行ってる。このままだと結構ギリギリか……だけど間に合わないとも思えない。
次第に周囲を覆ってた薄い雪は晴れていき、僕達がここに来たと

きの光景が戻って行ってた。

「「「うわわうわわわあぁぁわわわわ！！」」」

崩れ去る足下に気をつけながら、みんなが全速力で岸に向かってく。この氷が溶けだして空間が元に戻って行ってる意味……それを僕はナギナタ使いの背中で考えてた。

単純に柊がやられたから……それは最も分かりやすい理由だ。あの攻撃から逃れられたとも思えないし、手応えもあった。

だけど……納得は心のどこかで出来てない。普通なら、ＨＰが尽きれば色褪せて行動不能に成るものだ。だけど柊のそんな姿はどこにも無かった。

まあ元々、イレギュラーな存在でえある奴等だし、ＨＰが尽きればそのまま消滅……なんて事も考えられる。僕はどっちが良いんだろうな。

倒せてるから、僕はまだ生きてる。だけどあいつとは少しだけズレてただけの気がしてたから、ある意味これは最前じゃなかった。

もっと僕が強ければ……違う道もあったのかも知れないけど、僕は僕の道を通す事に必死だった。ただそれだけに。それしか出来なかったから。

それにアイツは強すぎだ。僕が勝てたのは奇跡以外の何者でない。これが後数回は確実で……それなのにたった一戦で体はボロボロ。先が思いやられる。

自分の力の無さを痛感した戦いだった。担がれたこの格好も、そんな自分の象徴の様な感じ。やっとで掴み取った筈の達成感の後に来たのは、悔しさとかだった。

（もっと強く……）

そう心で思い、腕を握りしめる。これを誓って実行しないと、セツリには辿りつけないんだ。湖に戻りつつある氷が崩れて、水面を弾く。かなり近くまで迫ってるのか、そんな水が頬に当たった。

その時、何とはなしに顔を後ろに向けた。すると湖の一転が輝いてる？　様に見えたけど、その視線は一瞬でブレた。何故なら、岸へと向かってみんなが一斉にジャンプしたからだ。

「「ぬおおおおおおおおおおおお！！」」

ズシャーーーー！　と土の地面を滑って復活した花畑に突っ込む。その後ろでは大きな音を立てて、氷が崩れて行ってる様だった。

「間一髪だった……」

「ああ、最後に僕を放さないでくれたらもっとありがたかったよ」

「ん……ぬあ！？」

ようやく気付いたか。動けない僕は、柔らかく成ってる土の中で窒息しそうだよ。それにしても……何だかどんどん感覚がズレる様な……無くなる様な不思議な倦怠感が体を包んでる。

僕の体は大丈夫何だろうかと不安に成ってくるな。最初はまだちょっとは動けたのに。リルレットの胸を触ったときとかさ。

あの時は思わずって感じだったから気にして無かったけど、きっとあの時から始まってたんだ。自分が消えて行くようなこの感覚。

「ス、スマン。大丈夫か？」

そんな事を考えてると、土の中から助け出された。目の前に色と

りどりの花が見え……あれ？　肩を掴まれて助けられた僕の目には花は見えてる……だけど白と黒のグラデーションでしか見えてない。
まるでマンガみたいと言うか、昔の白黒テレビの様な感じだ。その瞬間、僕には一気に焦りがやってきた。

（やばい……これはもしかしたら、残ったこのＨＰまで消え掛けてるんじゃないか？）

そう思えて成らない。このままじゃ、世界が暗転して、そして……死……そんな思いが掛け巡る。

「スオウ？　おい、顔色悪いぞ」

応答しない僕の顔を覗き込んだナギナタ使いがそんな事を言う。顔色も悪く成る……だってやっとで勝ったのに、まだ終わりが迫ってるなんて反則だろ。油断してる所で、ＬＲＯは僕を落とす気か。

「アイテムでも魔法でも何でもいいから……取り……あえず……たの……」
「おいスオウ！　どうした？　おい！」

ヤバい……声が出ない。視界に黒い物が広がっていく。感覚が頭を残して、全て搾り取られていく様な感じで、力も何も入らない。
辛うじて聞こえる声も、どんどん遠く成っていってる。

「どうしたのスオウ！　スオウ！」
「飲め！　飲め！　回復薬だ！　魔法はどうだ！？」
「いけます！」

光が僕の体を包む。強引に何かを口に入れられてる……だけど何

も感じない。
「ちょっと……何で回復しないの！？」
「何で……どうなってんだいスオウ！」
「諦めるな！　回復魔法を掛け続けよう！！」
「うん……」

視界の半分以上が黒く塗りつぶされて行く。頭が次第にズキズキと痛む様な感覚がある。と言うか、その痛みが体中に溢れていく感じだ。
それが世界を満たすような……とにかく痛かった。そして思わず僕はこう思う。

（やめ……ろ）

真っ暗に成っていく世界の全てに叩かれてる様な痛み……頭が割れそうだ。みんなの必死さは分かる。それはとてもありがたいし、僕のこの思いはみんなに向けてじゃない。
だけど次第におかしな考えに痛さの余りにとりつかれる。それは多分、狭まってく視界の中でみんなの顔が見えなく成ったのも大きい。

声も聞こえなくなって、掴まれた肩を揺さぶられる動作とか、周りを取り囲まれた様な状況がそれを思わせる。それはきっと恐怖って奴なんだろう。
僕はその時、そんな物をみんなに見てしまった。

（やめろ……やめ……ろ！）

この痛みがあたかも彼らのせいであるような錯覚。心の隅ではち

ゃんと分かってる自分が居たのかも知れないが、その一瞬は確実に僕はその恐怖をみんなに向けていた。
そしてそのせいなのかどうかは分からないが、名残の様な電撃が僕を包んでた回復魔法を打ち消した。あの戦いの最中と同じ様にだ。

その衝撃に、周りのみんなは驚いたり、近かった奴は尻餅ついたりしてる。だけど僕にはそれを見てる余裕は無かった。
自分が消える不安と恐怖、世界に拒絶されてる様な痛みで一杯一杯だ。自分が自分で息をしてるのかも分からない……というか、LROで再現してる人体の無意識の領域……呼吸や心臓の動きや血の流れ……それらは別にここでは本当は関係の無い事なのか？

分からない……もしかしたらリアルで僕達が被ってる機械がそれらを測定してて反映してるのかも知れないな……それだと僕はとても危ない事になる。
それはきっとここに居続けられない事だろう。だけど消えて行ってるって言っても僕は少しずつ、世界に拒絶される様な消され方だ……なら現実の僕はまだ無事何だろうか。
何も分からないけど、取り合えず消えてしまったら無事じゃ済まない様な事だけは確かだろう。

（う……がぁぁあ、何なんだ……何なんだよ、あああぁぁぁ、これは一体！）

意識の中で何かと戦ってる自分。覆われていく視界の先のみんなは、もうお手上げ状態だった。

（こんな……訳の分からない事で終わりなのか……）

そんな事を本気で覚悟した。だけどその時、殆ど横たわる地面し

か見えない視界に何かが落ちてきた。

（何だっけ……これ？　見覚えが……あるような……数枚の板を折り重なる様に柄の部分で繋いだ……そんな物。僅かだけど、上の方は色が濃く成ってる……何かが張り付いてるんだっけ？

何だか焼け焦げた様な後も見えるこれは……）

痛みの中でも何かが繋がっていく。と言うか、これは忘れない。さっきまで随分と僕を苦しめた物なんだから。見覚えが有るはずだ……だってこれは『天扇』じゃないか。　焦げ付いてるけど間違いない……てか、だからこそ間違いないか。当たってたんだ。それを示す紛れもない証拠だ。

だけどどうして天扇が今ここに？　これだけが残って、風に乗って飛んできた……ってのは無理があると思う。だけどそれなら、最悪の様な感じた通りの事がその通りだったって事になる。

でもどうなんだろう……僕はその姿を見たら、本当にどう思うのかな。残念？　それとも安心か……

けど、それはもう無いだろう。

僕の視界はもう、殆どが黒く覆われてる。もしも今ここに柊が現れたとしても、僕はもう確かめようがない。

（イヤだな……こんな所で。ゴメン……セツリ……）

そんな言葉を心の中で呟いて、僕の感覚は完全に失われた。世界は暗く……痛みがどこか遠くへ行くほどに落ちていく。

「う……ここは……」

目を覚ます自分にまず驚くけど、それはありがたい事だと思う事にする。体を起こして、周りを確認するとそこは白い世界。

何も無い真っ白な世界だ。でも何だか、前にも来たこと有るような感じがしないでもないな。だけどもしかしたら、ここがあの世かもしれない可能性も否定できない。

取り合えず立ち上がろうと僕はした。だけど何だかさっきまでの影響か、足下がふらついてしまう。

「うおっとっとと……」

何とか倒れずには済んだけど、心許ない足だ。それにいきなり立ったせいか、頭が貧血っぽくなる。目の前が歪む様に見えると言うか……これもさっきまでの影響かな。

頭を何回か叩いたりする。昭和の電気製品でも自分は無いけど、何となく叩けば何かが繋がる気がするんだよね。

まあ一通りそんな事をやって、額の所に手を置いて思うことは一つだ。

「訳わからん……」

これに尽きる。あの突然の異常も謎だし……そしてそれに寄って来たこの場所も謎だ。マジであの世じゃない事だけは願いたいけど、残念な事にそれが一番確率高い。

だって……流石にあれは死んだと思った。最近の僕の浸透率は知らないけど、きっとセツリにもかなり迫ってた筈だ。

それにあんなおかしな状態にも成ったし……リアルの肉体にも影響が有ったっておかしくない。むしろ今なら、有っただろうと思え

る。
けれど僕は、ここで拳を強く握りしめる。そこには熱さが宿る気がした。
「だけどだ……まだそれが完全に決まったわけじゃ無いのも確か。なら……それが決まるまでは何とか出来るかな」
熱さの宿る拳を見つめて、僕は自分に言い聞かせる様にそう呟いた。するとその時、この白い世界で僕以外の声が響く。
「また君か……どうやら相変わらず無茶な事をやってるようだね」
そんな声に振り返ると、そこに居るのは背中だけは見慣れた相手だ。それにこの声も聞き覚えがある。何度か同じ様な場所で出てきてる相手……桜矢当夜その人。
相変わらずなのはそちらも同じ、いつもの様にパソコンに向かってるようなその姿が、そこには現れてる。
「アンタかよ……って事は少なくともここはあの世じゃ無いのかな？」
「さあ、それはどうだろうね。前にも言ったけど、僕はもう手遅れなのかも知れない。そんな僕と話せるここは、もしかしたらあの世……そんな風に捉えれるかも知れない。
まあ、何ともいえないけどきっと近い場所なのは確かだよ。そして君はそんな場所に少しづつ深く入ってきてる。戻れなく成るよ……このままじゃ」
背中を向けて伝わるその言葉は、寂しげに空間に散っていく様な感じだ。自分が死んでるなんて、確かに前もそんな事をこの人は言ったけど、本当は自分がどうなってるか分かってるんじゃないのか？

そして警告の様なこの言葉……それは前に話した時とは少し何かが違う。

「戻れなくなるって事は、まだ僕は戻れるって事ですよね？　やっぱり貴方は知ってる……なのに死んだことに使用としてる。
それは何でですか？　ここはまだＬＲＯ、何ですよね？」

僕の言葉に当夜さんはその指の動きを止めた。この人はさっき、「戻れなくなる」そう言った。それはこの人には僕を戻す術が有るって事だろう。
そして実は全部を知ってるって事だ。何もかもを分かってる……なのに、自分を殺すのは何でだろう。いいや、今回のこの人の言葉はまるで……今まで言ってきた事とは違うのかも。
何かを諦めて……何かを決めた？　そんな物が見え隠れしてるような気がする。

「君は案外目敏いね。確かにまだ……どうにか出来る。ここはまだあの世なんかじゃ無いからね。だけど……限りなく近い所だとは思う。それは本当だよ。
フルダイブは精神を肉体から引き剥がす。人が言う、肉体が器で精神が魂なら、それはもうＬＲＯ自体があの世だと思えないかい？
君は考えた事は無いかい？　ＬＲＯと言う世界が、一体どこに存在してるのか……と」
「何……言ってるんだアンタ？」

彼の言葉が恐ろしく聞こえたのきっと気のせいじゃ無い。再び動き出した指がキーボードを鳴らしてる。するとこの白い世界に、光の玉が幾つも浮いてきた。
それはまるで、人魂の様に見える。何だこれ？　あの世の演出か？　僕は天才でも秀才でも無いから、あんまり難しい事は分からな

いんだ。
ＬＲＯがどこにあるかなんて……ＬＲＯ自体があの世の様な物なんて……そんなの感覚でしか分からない。僕達は誰もが、ＬＲＯと言う世界は電子の海のどこかに作られた世界だと思ってるし、あの世に行ってる様な物だと誰が感じてる？
そんな事あり得ない。確かに精神が切り離されて、肉体を置き去りにしてるから、言われてみればそれを思うことは出来るけど、あれがあの世なんて……
「別に……ＬＲＯは有る意味、そういう感じに近いと言うだけだよ。僕が思うにはだけどね。君はどう思う？　今現在、誰よりも深くＬＲＯに囚われてる君は、一番それを感じてるんじゃ無いのかい？
魂の全てを、あの世界に持って行ってる様なものなんだから」
僕の意見か……それを聞いてこの人は何を得たいのだろうか？
何かそれは意味の有ることか？　分からないな凡人にはさ。
でも、僕は思う。誰もが楽しむあの世界。売り出し文句は『夢を叶えれる世界』だ。夢の中で夢を叶える……そんな事に意味はないと言ってた人も居る。
だけど僕が出会った人達は、本当に誰もが自分の夢を目指してた筈だ。日々増えるプレイヤーだって示してる。それを終わりみたいなあの世なんて言ってほしくない。
開発者であるこの人が。だから僕は否定する。その考えを全力で。
「僕は……ＬＲＯはあの世とは違うと思う。確かに魂があそこには集まってるのかも知れないし、それだけ聞くと確かに誰かが言うあの世なのかもとも考えれる。

けど違うんだ！　ＬＲＯはそうじゃないと言える違いがある！！
あの世は終わり……人が最期に行き着く場所。だけどＬＲＯは始めてくれる世界……あそこで感じて得た物を、僕達はリアルに持ち帰る事が出来る。
もしも死んだ人間がいつか生まれ変わるのだとしても、その間の何を得られる？　本当のあの世は、僕達に何も残さない……だけどＬＲＯは違うんだ！！」

僕の言葉もこのだだっ広い空間に吸い込まれていく。背中しか見せないあの人の反応は正直分かりづらい。顔は知ってるんだし、普通に振り返っても問題なさそうな気がするんだけど、当夜さんはそれを許さない。
こんな感覚的な答えじゃ、天才である彼には幼稚過ぎたかな。論理的じゃないし……てかあの世とかの話には論理なんて無いか。

だって死んだ人の言葉は聞けない……僕達がそれを生きてる時に知るのは不可能な事だ。有る意味、感覚でしか分からない事が天才は苦手とか。
その時、僕をめがけて周りに浮いてる光が集まってきた。

「うわっわっわ……」

何だこれ？　何しやがったんだアイツ。嫌がらせ？

「ははは、ＬＲＯは終わりじゃなくて始まりか……確かにそんな感じなのかもね。そして君は何を得るために、命を懸けてＬＲＯに居続けるんだい？」
「は？」

今更この人は何言ってるんだ？　そう思った。散々言い続けてる

だろうそれは。そしてアンタに頼まれた事でもあって、自分で決めた事。

「それはセツリを助ける為だ！」

「どうやって？　いいや、もうどうしてだよ。どうしてまだ君はそれを言える？　あの子は……君を拒絶しただろう」

その瞬間、一つの光の中に見えるのはあの時の光景……腕を払われたあの時……扉の向こうに消えていくその姿……胸に何かがこみ上げる。

「それでも僕は……」

「それでも？　あの子は君を捨てた。君の手を払った。求めたのは苦難よりも楽園。君の努力を知ってるのに、最後に選んだのは裏切りだ。

そんなあの子に、どうして君はまだ命を懸けれる？　もうそれを望んでる心はどこにも無いと言うのにだ」

「っつ……」

当夜さんの言葉が、見てなかった物を映し出す様だ。誰も望んでなんて無い……そんなの分かってる。セツリにとって、もしかしたらもう本当に、僕は邪魔なだけの存在に成ったのかも知れないって事も。

命を懸ける理由……そんなのはもうとっくに無くなってしまったのかも知れないことも。でも僕は分かってるんだ。

僕は今、勝手に命を懸けてる……誰にも望まれない形でだ。当夜さんがそんな事を言うのも当然か。でもアンタがそれを言うかって気もするんだけどな。

だってこのままじゃ、セツリに待ってるのは死だ。そんなの望ん

でた筈もないだろう。この人だって。

「そんなの言われなくても分かってる。直接言われたし……だけど、それを言わせたのはセツリだけのせいじゃない。僕が迷ったからだ……それで一気に不安が高まった。

それにアンタにとっては僕の行動は好都合だろ？　何でそんな事を聞く？」

「それは、君が誰にも望まれずに死んで行くとしたら哀れだからだ。それに好都合か……確かに僕の望み的にはそうだけど……あの子が本気で選んだのなら、僕は止めないさ。

選ばせたのは僕なんだから。もう見捨てろよ……あの子が何にも立ち向かわないのはしょうがない事だ。あの子には立ち上がる足が元から無いんだから……そして甘やかして来たのは僕達だ……」

光の向こうで、苦しげな声を出すあの人は痛々しい。甘やかしてきた……だけどそれもしょうがない事だろう。そしてセツリがそれに甘んじるのも……

「あの子は全ては与えられる物と思ってる。動けず歩けないあの子には、それしか無かったからだ。そして僕達にはそれしか出来なかった。

どうしろと言う……ずっと苦しんできたあの子を、それ以上苦しめる様な事が出来る分けない！　そしてあの子の為の世界に、あの子を無条件で愛する存在……確かにＬＲＯでなら、寂しい思いも、苦しい事も何も無いだろう。

まさに楽園に成ってくれる。それなら……これ以上の苦しみを知らずに逝けるのなら、僕はもう……それでも良いと思うんだ。

あの子は……君の様に強くなんか無い。そしてそれを許して来たのは僕達だ。あの子は、一歩の踏み出し方すら知らない……そんな子が、君の手を取ることはもう無いよ。　辛い現実に、もう一度向

かう事なんて……」

冒険の終わりを告げる様な言葉が響く。全ては終わってた？　白の世界が、今の僕には痛々しい。

甘く弱い、立ち上がれない子（後書き）

第百五十話です。
戦う理由。それを示さないと、そろそろだめらしいです。そんな指摘を受けました。なので今できる範囲でそれを示します。スオウは何故、ここまで出来るのか。ただ出会って、助けれるのは自分しかいなくても、命を賭けてまで……拒絶されてまで追いかける事を選んだスオウ。
もう、ただ助けたい……それじゃいけない。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

手に入らなくても良い物（前書き）

少しずつ狂い始めた青春。どうにも出来ない事情が私達には降り掛かった。それは別れる告げる出来事。天才が悩んで、彼女が傷ついて、そして私は諦めた。決して最高の結果じゃない……だけど、あの時に掴めた物としては、私達の全力で正しい答えで、そして最善だった筈だ。

手に入らなくても良い物

「おい当夜！　これでいいのかよ？　あんな風に追いつめて……お前だけの問題じゃ無いんだぞ！！　アイツだって、不安な筈だ。だって家の事何だぞ！？　そこら辺、ちゃんと考えて物を言えよ！」

私は彼女が走り去った廊下へ出て、部室の中の当夜へそういった。追いかけた方がいいのか……やれる事があるって言ったけど、一体どうする気だ？

高校生が会社を建て直すなんて出来ないだろう。でも彼女は何かを決意した様な顔つきだった気がする。彼女だってバカじゃない……きっと何か出来る事が有るんだろう。

でもそれはやりたくなかった事何じゃないのか？　だからあんな顔をした……そうとしか思えない。なのにこいつは！

「わかってる……分かってるさそんなの。だけど僕は……ここで終わらせる訳にはいかないんだ。君に叶えたい物が有るように、僕にだってあるんだよ」

「それはアイツにだってそうだろ！　いつもいつだって、自分だけが特別と思ってるなよ！」

私達は廊下と部室、それぞれから視線をぶつけ合う。だけど不意に当夜は背を向けて、いつもの様にパソコンに向かい始めた。

「特別が幸せなんて思ったことは一度もない。ただ孤独なだけだ」

「つっ！！」

私は思いきり壁を叩いた。そして彼女の後を追って走り出す。だけどこの日、彼女を見つける事は出来なかった。

次の日から、一人で居る時間が多くなった。てか今日は二人とも登校していない。

学校は別に何も無いように普通だ。色々と大変なのは裏側……当夜がやってることは限られた奴しか知らない事。だから大半はいつも通りで、変わらないチャイムは鳴り響く。

それから一週間、何も出来ず二人とも会わない日々が続いた。自分でも何もやらなかった訳じゃない……だけど何が出来るのか、考えれば考えるほど分からない。

結局は何十億と居る中のちっぽけな存在……誰かから守られないと生きていけない子供って事を悟っただけだ。もう小さくはないけど、大人でもない……そんな中途半端がもどかしい。

少しでも大人に近づいていけば、出来る事が増えると思ってた。だけどただ体が大きく成るだけでも、いつ使うかも分からない知識を詰め込んでいくだけでもダメなんだと分かった。

もしかしたら、与えられた者と与えられない者ではどこまで行っても……例え大人に成ったとしても、出来る事には差が有るのかも知れない。

いや、有るんだろう。金持ちと貧乏人じゃ、社会に与える影響力が違うんだ。もう高校生……それぐらい分かる。

ようやく彼女が学校に来たのは更に三日後。それも予想外の登場だった。高級車の助手席から校門まで乗り合わせて、明らかにそう言う雰囲気を漂わせてた。運転席の男が……だ。

彼女は終始俯いてる。それは私が知ってる彼女じゃない。いつも

明るくて、ちょっとおかしい……だけどそれが彼女の花だった筈なのに、今の彼女にはそれがない。

だけど派手な登場のせいで、そんな彼女を周りはほっとかない。そしてその日は珍しく当夜も学校に来た。けれどそれはそれで気まずい……そんな空気が流れてる。

でもこのまま今日が終わるべきじゃない。ようやくまた揃ったんだ。そしたら本当に何も出来ないまま。だから私は動く。当夜の奴は終始眠りっぱなしで、気付いた時には居なくなってるからダメだ。

それよりも気になるのは彼女の方。一体あの男は誰で、どういう関係なのか？　あの時言った出来る事……それと関係有るのか？とても気になる。

だから昼休み、彼女を誘って外のベンチでパンや飲み物を広げた。勢い込んでこの状況に成ったけど、何から切り出せば良いのか分からない。

でも何も言わない訳にはいかない、呼び出したのは私なんだから。

「あのさ……」

するとその時、出鼻を挫く様な活発な声が響いた。

「ちょっと今日はね、女の子の日が酷いんだ。それでずっとズド～ンって感じだったんだけど……一人じゃ登校出来ないし、だから別にあの人は何でも無いよ。

そうだよね、久しぶり何だから元気でいなきゃね。私は大丈夫だよ！」

そういうと彼女は自分が買った豆乳を一気飲みしていつもの笑顔を見せてくれた。でもそれは、明らかに無理してる。

てか不自然だろ。でも女の子の日を追求する訳にもいかないし、私は口を開けたまま女子の真骨頂などうでも良いおしゃべりを昼休み一杯聞かされた。
なんだか取り残されて行くような感じのまま放課後。私は彼女にもう一度接触を試みた。

「部活……行くのか？」
「……ゴメン、今日は無理なの。当夜にも伝えといて。それと、何も心配ないよって」

その時の彼女の笑顔が、私にはとても儚く見えた。直ぐに走り出す彼女。まるでこれ以上、何も言われたくないから逃げてるよう。
ここで行かせちゃいけない。それじゃああの時と同じだ。彼女の背中を見つめてそう思う。だから今度は直ぐに私も走り出す。彼女の背中を追ってだ。

そしてたどり着いたのが校門前。そこでようやく、私の声は彼女に届いた。校門を一歩出て立ち止まる彼女。

「何で追いかけて来るの？　今日はダメなの」
「ダメな理由は何だよ。何でそんなに逃げるみたいにするんだ？何やってる！？」

僕の言葉に、彼女は沈黙する。周りでは何事かとこちらをチラチラ見ながらも、校門を出ていく生徒がチラホラ居た。するとその時、この空気を破壊する様なクラクションが鳴り響く。
何かを催促するように鳴らされるその音。それはどうやら、直ぐそこに止まってる高級車から放たれてる様だ。と言うか、なんだか見覚えがある車な気がする。

「ごめんなさい。私行かなきゃ……」

その音に応える様に、背を向ける彼女。やっぱりあの車は朝に彼女を乗せてたのか。それがわざわざ迎えにまで来てるってどういう事だ？

朝見た運転席の奴がきっとまた居るんだろう。それを考えると、無性に行かせたく無くなった。私は後ろから彼女の手を掴む。

「待てよ！　そんな辛そうな顔で、行かなきゃいけない所に何か行くな！　お前が言ったやれる事ってのは、そんな顔に成る事なのか？　ちゃんと言えよ！」

掴んで分かった……彼女の体は震えてる。細い体が、フルフルとだ。だけどそれでも、彼女は強くこう言った。

「放して……何の事か分からない。私は私がやりたい事をやってるだけだもの」

「そんな事！！」

「幾ら友達でも！！　入ってほしくない所は有るの。はは……大丈夫だよ。大丈夫だから……放してよ」

強い言葉を掛けようとした。だけどそれ以上に強い言葉でけちらされた感じだ。求められてもいない。何も出来ない自分がイヤになる。

だけど……握る手はやっぱり放せない。今ここで私が出来るのは、こんな事しか無くても……いいや無いから、これだけは譲れない。

「もう、ほらほら冗談はこのくらいにしようよ。みんな見てて恥ずかしいよ」

放す気配が無い私に、彼女はやけにおどけた明るい声を出す。それはきっと私を思っての事なんだろうけど、そんなの無理してるってバレバレ何だよ。

（行かせるか）

そう思ってると、車のドアの開閉の音が聞こえた。そして近づいて来る足音。繋がる手はその瞬間から震えが増していた。

顔を上げると、そこにはいかにも遊んでますって感じの奴がいた。髪は茶髪で耳にはピアス、服は如何にも高そうな感じで、嫌みな程に決まってる。

そして一番気に入らないのは、高い身長の奥の瞳。サングラスもそうだが、その瞳が見下す様に見えて成らない。その身全てから、与えられた者感が漂ってる……そんな奴だ。

「おい、いつまで待たせんだよ。たく、そこのガキ、気安くそいつに触ってんじゃねーぞ」

そんな事を言いながら歩いてくるソイツは声すらもムカツキを覚える物があった。私が生理的に大嫌いな人種だな。

こいつが彼女を……そう思って私は立ち向かおうとした。だけどその時、思わぬ所から伸びた手が、私の頬を強く叩いた。

パンっと小気味良い音が周囲に響く。それは彼女のやったことだ。

「ごめんね……」

小さく聞こえたそんな言葉。ビンタの衝撃で思わず手を離してしまった私の手をすり抜けて、彼女はあのいけ好かない奴の方へ歩み寄る。

私は直ぐに彼女を引き留めようとしようと思った。だけどその時

気付いたんだ。歩み寄った彼女は、そっと奴の握った腕を包んでる事に。

もしかしたら、あのままだとあの拳が私を襲ってたのかも知れない。それを防ぐために彼女は強引にでもこんな事を？

守られたのは私の方……

「はっはっは！　よくやったよホント。良い音してたなマジで。お前なんてお呼びじゃねーんだよ。これに懲りたら調子扱くなよ」

「――っつ！！」

本当に、こういう奴らは人の腹の虫を煮え立たせるのが上手い。握りしめた拳を今直ぐ、奴の顔面にたたき込みたくなった。

するとそんな思いが目に映ってたのか、気に食わないとでも言うような顔に奴が成る。

「は、生意気そうな面するじゃねーかガキ」

気に食わない事が有ることが気に食わない……こいつはきっとそんな奴なんだろう。上等だ。だけどここでも彼女が入ってきた。

「済みません。だけど私は居るから……早く連れってってください。あんなのに構う事無いです」

「あんな……」

彼女の口からあんなのと言われた。本心じゃ無いにしても傷つく一言だ。すると奴が得意気に笑ってこちらを見る。

「そうだな。あんなカス、俺様が相手する価値もない。だけどそれをあのカスは気付いてない。だから分からせてやろうぜ。

それにこれは俺様を待たせた罰だ」
「えっ……」
そう言った奴は、彼女の顎に手を添えて強引に上を向かせる。爪先立ちになる彼女。そして近づく顔と顔……触れ合ったのはお互いの唇だ。
私は今、『キス』の瞬間を目の当たりにしてる。そして突然のその行いに、周りを通過してた生徒達も足を止めてしまった様だ。
そして離れる二人……彼女は目を見開いたまま動かない。そして彼女の唇を奪った奴は、勝ち誇った様にこっちを見てる。手に入らない物などないかの様に。
「なんで……」
ようやく絞り出した彼女の言葉。そしてそれと同時に涙も出てる。だけど奴はその滴を指で受け止めながらこう言った。
「言ったろ？　罰だって。俺様がちゃんと守ってる事を君がやらないから一足先につまみ食いしただけさ。大丈夫、君は幸運な女だ。初めてが俺様何だからな」
あの野郎！！　そう思わずには居られない。だけど彼女はぐっと歯を喰い締めたかと思うと、涙の上に笑顔を作って「はい」と言った。
それだけの覚悟……思いで彼女は何かをやっている。だけど俺様なんて自分を言う奴……そんなのに屈してまでやる事なんて無いと思う。
いや、単純に私は奴が許せない。彼女の涙までも押し殺す様な奴

がだ！！　間違ってる……絶対に。それだけは確かだろ。幾ら拒絶されたって私は！！
そう思って駆け出そうとした瞬間。聞き覚えの有る声が、奴の後ろから聞こえた。

「おい、邪魔なんだから退いてくれるか？」
「あぁ？」

それはいつの間にか消えてた当夜だった。何でアイツが今更学校に？　と言うか、文句を言われた俺様野郎が既に臨戦態勢だ。

「とうや……」

震える声でそう呟く彼女。すると何かを思い出したかの様に唇を隠す。まるで見られたくない様に。
「当夜？　ああ、お前のお気に入りだった奴か。て、事はこいつが天才の……はは、何が天才だよ。よお、さっきの見てたか？　俺達の熱いキス。
天才が奪われるなんて滑稽だな。どうだそこら辺の気分は？」

俺様野郎のそんな言葉に当夜に背を向ける彼女。だけど有る意味、ここで一番酷いのはあのバカだったかもしれない。

「奪われる？　訳分かんない事言うんだなアンタ。別にそいつは僕の物でも何でもないし、誰とキスしようが知った事じゃない。
勝手にやってろよ」
「くはははは！　ひっどいな〜お前。やっぱ天才はどっかおかしいんだな。安心しろよ。俺様が寂しくないように、直ぐに忘れれる様に、たっぷりと可愛がってやるからさ」

俺様野郎の腐った手が、彼女の頬から首筋へと落ちていく。青く染まった彼女の顔は、それのせいなのかそれとも……当夜の言葉のせいなのか。
当夜は当夜で、それに見向きもしないで私の横を通り過ぎる。そしてそんな反応にしけたのか、俺様野郎も彼女を車に連れ込み走り去って言った。

完全にブン殴るタイミングを逃してしまった。だけどこの怒りは収まらない……私は玄関に入って行こうとしてる当夜の肩を強引に引き戻して、その顔を殴った。げた箱にぶつかる当夜。轟く周りの悲鳴……だけどそんなのどうでもいい。
私は更に襟首を掴んで当夜を持ち上げる。

「どうして……何であんな事が言えるんだお前は！！」

酷かった……酷すぎだろあれは。私は知ってる。彼女の気持ちを。この二年と少し、ずっと彼女を見て来たんだから、気付かない訳がない。いいや、そもそも出会いからそうだった。
私は彼女と伝説の木の下で出会った。あの時彼女は、リボンを結ぼうとしてた。それは想い人がいたからだ。ずっとずっと彼女は変わらずにお前を想い続けて来たのに……あんな事を言いやがって。

もしかしたら、キスよりも彼女にとってはこいつにあんな風に言われた事の方が辛かったかもしれない。それなら、今私が殴るべきはこいつだろ。

「自分達はお前にとって何なんだ！！　妹意外はどうでもいい存在なのかよ！！　もうちょっと周りをよく見ろ！！やっぱお前はおかしんだよ！！」

その時、予想外の反撃が顔面に入った。それは当夜の拳？　僕はガラス扉にぶつかった。割れる事は無かったが、この野郎危ないじゃないか。

「さっきからギャーギャーギャーギャーうるせえんだよ！！　お前達が何なのかだって？　僕はちゃんと仲間だと思ってたさ！　だけどアイツの好意にだって甘えてた！　分かっててだ。僕だってあのいけ好かない奴と同じだ……利用したんだよ！！　妹の為に！！」

「ふざけるな！！　じゃあその前の仲間は何だ？　友達以上にだってなれる筈だじゃないのかよ！！　よく考えろよ当夜！！　お前のしてたことが利用かどうかは、ここで決まるんだよ！！　アイツを今見捨てたら、それが事実として残るんだ！！　もしもそうなるのなら、私はお前を許さない！！」

堅い骨の感触が拳に伝わる。殴りあい、転がりあう私達は、本当の喧嘩をしていた。

「だからって僕に何ができる？　アイツの為に僕が与えれる物なんか一つも無くなる！　それならあのバカの方がきっと……」

「何でお前達、与えられた側の奴らは見返りをそんなに重要視するんだよ！！　お前はアイツがこのまま幸せにでもなれると本気で思ってるのか？　さっき言ったよな？　分かってるって。それだけでアイツはきっと十分なんだ。どんなに釣り合いとれなくたって、いいんだよ！　お前の方程式にだって当てはまらない物がこの世界には沢山あるんだ！！　行き詰まり過ぎて、自慢の脳味噌も萎んだか。目を覚ませこのバカ野郎！！」

突き刺さった拳。そして大きく吹き飛ぶ当夜。これが始めての勝

利……だったのかもしれない。

「何が……出来るよ。天才だって言っても……しょせんは子供だ。社会に何の影響力も持っちゃい無い」

悔し涙がなんだか分からないが、当夜は泣いていた。本当はずっと謝りたかったのかも知れない。でも裏切れない物が有った。自分一人じゃ何も出来ない妹。その子の為にも……だけど誰かが不幸になって手にする事をこいつは望みなんかしない……それを私は分かってた。

だから言ってやる。この信じれない天才（バカ）にさ。

「それはお前が考えろ。天才だろ？」

「ふざけるな。友達、だろーが」

始めてだった。当夜の口からその言葉を聞いたのは。そして私達はこの騒ぎで停学となった。

この時期の停学は痛いが、今の私達には好都合だった。学校に行かず、彼女やあの俺様野郎の周りを調べまくった。そして分かったことは、あの俺様野郎はやっぱり企業の跡継ぎで、傾いた会社を救ってくれようとしてる所だとか。

でもそれを始めたのは最近で、どうやらそれは彼女のおかげらしい。前々から目を付けられてたらしいが、それをどうやら逆に利用した様だ。

結婚を条件に彼女は俺様野郎の企業を動かした。これで当夜のプロジェクトも守れるって寸法だろう。多分条件に入ってるんだ。

だけどそんなのはダメだ。誰も望んでなんか無い。私達は止めさせたかった。何度も彼女に連絡を試みる。だけど返信はこない。そこで趣向を変えて見る。

【僕は、もしもお前のおかげでプロジェクトが再開出来たとしても、良かっただなんて思わない】

こんな感じのメールを送り続けて、彼女の行動の意味を崩壊させていく。返信は無かったけど、それを続けた。するとある日【分からないよ】そんな返信が来た。

そして意を決して当夜はこう返信する。

【誰かの物になんか成って……それで僕が喜ぶ分けないだろ！！だって……ずっと側に居ると思ってた。高校を出ても大学でも社会に行ったって、同じ場所に居れた筈だ！！　でもそれは儚い幻想でしかなくて、いつしか壊れるってここ最近で知ったよ。

まさにお前の行動で！！　でも認めたくなんかない、こんな現実。ようやく気付いたんだ……僕はお前が好きだって！！】

顔を真っ赤にした告白は返信された。そしてしばらくして届いたメールには一言だけ……【助けて】そうあった。私達は動き出した。

まずは現在地を確かめる為に携帯の基地局を割り出して、その周辺の防犯カメラの映像をハッキングし、俺様野郎の携帯の記録も取り寄せる。

彼女はメールは出来ても、自分がどこに居るかは分かってなかったんだ。でも流石は天才。警察並の情報収集だ。そしていろいろ細工をして、掴んだ場所へ乗り込んだ。

そこは別荘で、彼女は今まさに襲われてる瞬間だった。抵抗しだした彼女に俺様野郎は苛ついたんだろう。

「当夜！！」
「何だお前等？　邪魔するなよ。それは俺の女だ！！」
虫酸が走る台詞。すると驚いた事に、当夜が一発奴の顔面を殴った。
「ふざけるな！！　こいつは僕の女だ！！　お前の物になんか一生に一回もさせるか！！　それにこんな事してていいのかよ」
するとその時、奴の携帯が鳴り響く。それは多分、例の細工が効いた証拠。僅かばかりだけど、手にした情報で私達は奴を追い込んでた訳だ。
色々と粗相が多い奴で助かった。だけど実際、この戦いで私達が得た物は無かったかも知れない。だって全ては大変な時期に逆戻り。
「売るか。このシステム自体と僕をさ。良い値が付くと思うんだよな」
簡単にそう言った当夜。私達は反対したけど、それを止める事は出来なかった。当夜の思惑は成功した。買ったのは企業じゃなく国らしい。
でもそれはもっと複雑で陰謀が絡みあう所へアイツは行くって事だ。でも簡単に言いやがる。
「どこだっていいさ。摂理の為なら」
「やっぱお前は天才と書いてバカだよ当夜」
当夜はもう、この学校には居られないらしい。だから三人での高校生活は終わりだ。

「当夜、待っててね。私は必ず傍に行くよ」
「ああ、待ってるよ。ずっと」

見つめあう二人を見てると胸が痛む。だけど、これで良いと何度も自分言い聞かせた。結局はここでも欲しい物を掴む事は出来なかった。

だけど当夜のその背中は大きくて、笑顔の彼女はとても綺麗だ。何も間違っちゃいない……何もない私が、手にするのはこれからだ。

手に入らなくても良い物（後書き）

第百五十一話です。
最後は駆け足気味でしたけど、何とか終われました。構成的にはミスってますね。だけどこれ以上時間は賭けれない！！　これでも伝えたい出来事は書きだせた筈です。この後は簡単に「あんな事もあったな～」的に終わらせて、往生際の悪い展開へと行きますよ。
まだ救われてないですからねガイエンは。
てな訳で次回は木曜日に上げます。それではまた次回～。

魅かれ者の小唄（前書き）

助けるって事は難しい。それが望まれてないとなれば尚更だ。だってそう告げられたら、自分のやってる事はただの身勝手で我儘でさえある事になってしまう。助けたいから助ける……それは思いっきりな自己満足なだけかも知れない。

だけどそれでも……いいや、それに価値があると信じれる物と、取り返しのつかない事……それを考えれば考える程に、諦めるなんて出来ないんだ。だって生きていれば見直せる、正せる、改めれる。間違いは主張し、文句も言える。

生きていれば死ぬ瞬間まで一歩を踏み出す機会があるんだ。なら……生き続ける事にこそ価値がきっとある。絶対に自分から手放しちゃいけない物……それが『生』っていう当たり前。

魅かれ者の小唄

白く光が溢れる世界に僕と桜矢当夜は居る。どこまでも続く、平坦な地平線が一応空と地上を分けてる様に見えてた。
だけど別に空が青い訳じゃない。そもそも空……なんて呼べそうもない。地平線の先が、強く光ってそこを隔ててるってだけで、僕が居る場所は実際はその境界が見えないからだ。

だからこその白の世界。地面に伸びる影さえ、殆ど白と言って良い。それに当夜さんが出した沢山の光の玉が僕に集って入ってきてるから、既にもう影すら無い状況かも知れない。
どこか空しいこの世界に、今はもう響く音なんて一つもない。この人の言葉は、僕に終わりを告げていたから……「もう良いよ……」と「無駄なことは止めろ」とそう言っていた。

実の兄で、たった二人の家族の筈じゃないのかよ。そう思いたくなって、実際そう思う。一瞬頭が空っぽになったと思ったら、さざ波の様に沢山の感情が流れてくる。だけど僕はそれを必死に押さえつけてる。

この人はこういう人だ。願う幸せの形……それは妹の望んだ方なんだから。最後の最後……その選択を与えてたのはこの人なんだ。

命改変プログラム……それにＬＲＯと言う世界からの解放と、永遠の現実逃避。それをちゃんと乗せていた。それはもしかたら、この人が甘えさせるしか出来なかったセツリへのたった一つの厳しさを表したものだったのかも知れない。

だからこそ、自分でも決めたんだろう。どっちを選ぼうと、それ

を受け入れようと。実際、このままで良いなんて
本心で思ってる訳ないと思う。

たった二人の家族……無くしたくなかきっとない。でもそんな葛藤はきっとずっとしてきたに違いなくて……後から現れた僕がそれを口に出すなんて烏滸がましいと思えた。

僕が出来る事は、ここでこの人を否定する事じゃない。僕に出来る事は示す事だけだ。ただそれだけ良いと思える。だたそれだけ……僕の冒険は終わらないと信じれる。

だから口を開こう……自分の思いを言葉に乗せて。

「アイツが……セツリがどうしよう無く弱いなんて知ってる。自分では何も出来ない……そう思ってる奴だ。そしてアンタも確かにそう思ってて、間違いなんてない。

だけど、僕は一度だけ見た。アイツが立ち向かうところを……自分の足で立ったその瞬間を。だから僕自身は諦め切れないんだと思う」

「あの子はだから諦めてるよ。リアルに見る夢なんてもう砕けてる。そんなあの子を、君はどうしても追いかけると言うのかい？」

静かに響く僕達の言葉。世界に溶けていく声は空しくても、実際は結構中は熱い。なんせお互いが決意や信念……悩み抜いた物をさらけ出してるんだから当然だ。無駄に怒鳴らないのは、きっと確かめあってるからだと思う。

僕も当夜さんも、口に出すことで噛みしめてる。そして僕はもう一度静かに告げる。

「ええ、勿論」

すると間髪入れずに言葉が飛んできた。

「そのたった一つの命を懸けてでも？　君も今回の戦いで感じた筈で理解しただろう。セツリを守るあの子達は強い。それも全員が反則的にだ。
使い続けて来た幸運は、いつか必ず途切れる時が来る。その瞬間が迫ってきてると言ってもかい？」

何いってんだこの人。いつから予言者になったんだ？　それに幸運か……それはちょっと考え方が違うな。確かに世の中には、幸運と不幸は半々であるって言う人も居るだろう。
良く不幸が続いた後には、幸運がやってくる……なんて迷信を口にしたがる人達も居る。だけどそんなのは捉え方の問題じゃないのか。

誰かの幸せが他人に理解しがたい物があるように、不幸や幸運の形は決まってない。突然降ってきたそれを手のひらの上でどう感じるか……全てはそれ次第何じゃ無いだろうか。
だって幸運と不幸はそんな簡単に割り切れる事じゃない。それは僕自身がそうだからだ。

初めてセツリに出会った事。訳分からなくても、こんな美少女に幸先良く出会えるなんてラッキーって正直思ったさ。
だけどその後、降り懸かって来た出来事は正直簡単には喜べる物じゃない。だけど、ちょっとワクワクもしてた。そして自分が……自分だけが助けられる存在で有ることは嬉しい事でもあったよ。

使命感や責任、そんな重圧に押しつぶされそうになったことも有るし、最初はやっぱり【命】その抵抗は半端無かった。
だけど幸運にも僕は出会いに恵まれてた。力も得た。困難という物が不幸なら、僕はきっと立ち向かう度に幸運を手にして来たはず

だ。

でないときっと、僕はここまで生きちゃい無い。そしてここまで来て思うことはやっぱり、僕は幸運であり不幸で、不幸でありそして幸運だったって事だ。

だからさ、尽きる幸運なんて無くて、もしかしたら不幸はいつだって壁の様に立ちふさがるのかも知れない。それは生きてる限り、きっとそんな感じだろう。

だけどそれは自分自身次第で、どうにでも出来る物なんだ。僕はそれを知っている。確かめて来たと言ってもいい。

幸運か不幸を明確に分ける事は難しい……どこかからか見たら不幸でも、見方を変えれば幸運。きっと何だってそいう物だろ。

だけど違いが有ることも僕は知ってる。尽きない幸運に胡座をかいても不幸は越えられないし、何もしなければ不幸は積み重なっていくって事だ。

幸運は人を必要としないけど、不幸は違う。奴らはいつだって狙ってる。理不尽でも策略でも陰謀でも……そいうのは大抵知らない所で回って降って来やがるんだ。

けれど幸運は人を必要としなから、降ってくるなんて殆どない。宝くじも買わなきゃ当たる事がないのと同じようにさ。

そこには有っても、人を求めない幸運には手を伸ばすしか僕達にはないんだ。それをうんと頑張れば、掴める事も有るし、その課程で不幸なんて乗り越えてる場合だってある。

そう考えると有る意味人って、幸運を追いかけて行く内に次々に不幸にぶつかる……そんな感じ捉えれる。まあだけど結局、今の僕が幸運か不幸かなんての結果は、全てが本当に終わった時に分かる

事だろう。

僕の持論では幸運は無くならない訳だし、不幸に怯える事もない。確か当夜さんが言うように、柊やシクラ達は強敵過ぎるけど、それでも止まる理由にはなりはしない。

「そのたった一つの命を懸けてでも……それでも僕は、止める訳には行かないんですよ。それがやっぱり僕の答え何です。

今更僕が幸運か不幸かの天秤を気にして行動するとでも？」

僕はその皺が刻まれたシャツの背中にそう答える。変わることのない意志。止まることを許されない足……それが今の僕だろう。

全部の責任をセツリやこの人に押しつける気なんて無い。僕だって間違ったんだからな。だから僕はもう、止まれない。振り返る事すらもどかしい感じで進みたい。

「ははは……そうだな……君は今更そんな事では止まらないか。君は不幸には必ず立ち向かう術がある……それを疑いはしない人種だよ。

だけど全ての人がそうじゃない。不幸も幸運も、平等ではなく、神様がこぼした不幸を生まれながらに抱えてしまう子はどうしたらいい？

どんな希望を与えれば、その子にとっての幸運になり得る？　あの子の不幸は大きすぎるんだ……例え幸運が起きていたとしても、それらはあの子には届かない。

そんな世界がリアルだよ」

紡がれる言葉は、今の僕なら何となくは分かる物だ。セツリは歩けず動けず、ずっと病院のベットの上が世界の中心……肉親はたった一人で……それは誰もが同情出来る程の不幸だろう。

でも、そんな中でも僕は見つけてる。あの子の……セツリの幸運を。セツリやこの人は、それに気づいちゃいないらしい……どうしてこのたった二人の家族は、自分をそう低く見てるのかな。

僕は一度息を吐き。その背中へとこう言った。

「じゃあ貴方はどうなんですか？　セツリの事をこれだけ思って、人生を捧げて来た貴方は何ですか？

僕には……セツリの兄が貴方であった事……それが何よりも強く、セツリの巨大な不幸にも負けない幸運だったんじゃ無いですか？

リアルは確かに残酷だったけど、あの世界だって、セツリを見捨ててなんか居なかった。だって貴方という存在を、リアルはセツリに与えてくれたんだから。

セツリは貴方の事が大好きだって言ってましたよ」

それはきっと、あの残酷なまでのリアルで、彼女があの事故の瞬間まで生きてこれた……笑ってこれた源の筈だと僕は断言できる。

まあ、僕が知ってるのは映像で見たあの楽園でのサクヤとの日々が一番古いから、リアルで本当にアイツが笑ってたのかなんて知らないが、あれから想像する限り、そんな暗い日々を送ってた様には感じれないと思う。

その瞬間まで、彼女はこの人を信じてた。

「……嬉しいよ。そう取れたのなら。それだけが僕の存在価値だったんだから。だけどあの子には嫌われてしまったよ。それは君も知ってるだろう」

確かに僕はそれを知ってる。だけど……嫌われてるかって言ったらそれは否だろう。今でもセツリは十分に、お兄ちゃんが大好きだと思う。

あの行動は、頭に血が上った末の行動で、突発的な物だったんだと思う。それに僕には思えない。当夜さんがセツリを捨てるなんてさ。この二人はさ、もう一度ちゃんと話し合う必要性があるよ。絶対に。

「大丈夫ですよ。僕がセツリを助けて、貴方も助ける。そして話せばきっと全てが上手く回り出す。きっと！」

「はは……は、それは一度は見てみたい夢だね」

彼の背中は震えてる。声色は、必死に何かを押し隠す様に成ってた。周囲の光がどんどん入ってきて、次第に僕の体自体が光りだしてた。

これは何なんだろう……そう想いながらも、僕はその背中に言葉を続ける。

「夢で終わらせる気はありません。必ず実現して見せます」

「大層な自信だな。そんな保証なんて出来もしないのに……飛んだ大バカだ。いつか僕もバカと言われたが、君はその上を行ってるよ。好きにするが良いさ……バカは止めても聞かんと知っている。それが大バカなら尚更だろう。だが一つだけ聞かせて貰おう。君はどうしてそこまで出来る？」

その言葉の時だけ、彼は椅子を引いてこちらに向いている。だけど集い過ぎた光が眩しくて、その表情を見ることは出来ない。それにどうしてそれをまたって感じだ。

「それには答えた筈ですけど？」

「あの子が一度は立ったことが有ると言う奴か？　それは君の淡い希望……僅かな確率でしかない。僕はもっと根の部分が聞きたいんだよ。

どうして君があの子を見捨てられないのか……その理由だ。人は誰しもが自分が一番大切だ。その理念を覆す何かが君にはあるのだろう？」

見捨てられない理由……理念を覆す何か……僕は自身の手のひらを見つめる。そして細めた瞳はどこを見てるのかも分からない程にぼやけていく。

頭の中には、いつしかの思い出が流れてた。そして浮かび上がるのはあの温もりだ。僕は開いた指を握りしめ拳を作る。その温もりを逃がさないようにして、見えないその顔を見据えた。

「昔、どうしようもなくひねくれてた子供の手を取ってくれた奴が居ます。幾ら振り払ったって次の日にはケロッとして、またそのヒネクレ者に大輪の花を咲かせた様な笑顔と共に伸ばされる手があったんです。

どうして彼女はそうしたのか……それが何でヒネクレ者のそいつに向けられたのかはわかりません。だけど半ば二人とも、意地になりかけてた頃……ヒネクレ者は思いました。

彼女が誘う世界は、どんな所なんだろうーーと。それは彼女が諦めなかったから芽生えた想い。いつもいつでも、笑顔の彼女が、伸ばし続けた手のひらに乗せてた夢。

それがヒネクレ者の心を動かしたんです」

吸い込まれていく、光の一つ一つに僕はあの日の残滓をみてた。それは長らく頭の引き出しにしまってた物。だけど何一つ、色あせずに有るものだ。

当夜さんは黙って聞いてる。それはありがたい事だった。

「ヒネクレ者は、その子のおかげで新しい世界を知りました。でもそれも、今思えば見方が変わっただけなのかも知れない。

だけど、それで確かにヒネクレ者は全うに生きれたんです。彼女が伸ばしてくれたから……彼女が掴んでくれたから……そしてそれは、彼女が諦めないでくれたから起きた事。
彼女は一度掴んだ手は離しませんでした。喧嘩したときも、ふてくされた時も……最後には必ず、あの笑顔がそこにはあった。
【私が何度だって正してあげる。生きてる限り何度だって……】
そんな風に彼女は言ってくれました」
「……」

静かに空気に溶けていく僕の言葉。他に音を出すものなんて無くて、それは空気の震えさえも感じれそうな程の静けさだ。
息を付く度襲いかかるこの静寂は、決して心地よくなんか無い。寧ろ次に口を開くのを結構躊躇う。さっきはありがたいなんて言ったけど、見えないのに喋り続けるって結構痛い光景だ。

変な想像をしてしまうんだ。まるで僕はそこにいる、もう一人の自分にこれを言い聞かせてる様なさ……それは何とも恐ろしい事なんだ。
でも……そんな考えは今は無粋だろう。そんな事もわかってる。当夜さんは何も言わず僕の言葉を待ってるのは真剣だからだろうし、ここは絶対にそういう場面。
微笑ましくもある残滓を受け入れて、僕は再び静寂を切り裂いた。

「僕はセツリと出会ってから、それなりに良いもの……貰ったと思ってます。大変だったけど、刺激的な毎日に、掛け替えの無い友達。出会えるその瞬間の全てが、僕に取っては真剣でした。
正直、楽しかった。それが本音です。確かにセツリは甘えてるのかも知れない……自分の為の世界を待ってる。辛いことも悲しいことも無く、取り残されもしない世界。
でも……それでも僕は、彼女がしてくれた様に腕を掴みに行きま

すよ。だって、死を迎えるまでの僅かな夢より、もっと大きい物をきっと見つけれる……そう確信出来るから。
あの日あの時……彼女の手を取ったヒネクレ者がそうだったようにです。生きてればきっとそんな物が見えてくる。
だって生きるって事は、それだけで価値が有ることでしょう。小難しい事なんか全部後回しにしてでもいい。強引にでも颯爽と助け出して、今度はうんと厳しく、だけどうんと優しく……沢山出来た友達の手を借りて、いろんな事を教えていけば良いだけなんです。
それだけできっと、世界は変わったって事に出来る。生きてさえいれば、変われるチャンスは幾らだってある。だから僕は、たった一パーセントを担ってでも、アイツが選択しなかった未来を諦めない！！
それが僕の、命を懸ける理由です」

胸においた手が、光と成って上っていく。そしてその現象は体中から起きていた。崩れていくパズルの様に、僕の体はピースに分かれて上っていく。
戻れるんだろうか？　だけど何となくだけど大丈夫だろう……そんな気がしてた。

「あの子さえも見なかった未来に……君は命を懸けてるのか。くくく……はははははは」

いきなりビックリするくらいに高らかに笑い出す当夜さん。この人でもこんな風に笑うんだ……そう思う程の笑い声だった。
だけどその時、やっぱり慣れて無いのか盛大に噎せた。「げほっ！　っがっ！　ゴフゴフ！！」
てな感じに、視界が薄れてく僕にでもわかる程に苦しそうだった。だけどそのせいで前かがみ成ったからか、僕は微かにその瞳と目が合った……合った、と思う。

上手く認識出来なかったが、多分僕は見たはずだ。人の顔に取って、目はとても重要だ。上手く認識出来なかったのは多分、その状態の当夜さんを見るのは初めてだったから。
顔は知っている……そう思ってたけど、そこに開いた瞳があるだけで印象は変わる物だった。別段変わった目の色してるとかじゃ勿論無い。

だけど瞳は、その人の何かを強く表してる……そう思う。きっとだから、僕は目を見張ったんだ。
髪の毛がかかる黒い瞳……それは真っ直ぐに僕を見据えてた。

「はぁはぁ……私には結局、何も出来ないが……ありがとう。この言葉だけ贈らせてくれ。君はきっと……そのままで良いんだろうな」

その言葉は意外な物というか何というか……少し気恥ずかしい様な気がする物だった。だけど素直に受け取ろう。認めた……とかじゃ無いのかも知れないけど、受け入れてはくれたみたいだから。
そして自分も、口に出した助けたい理由……それに芯が通った気がしてる。だけど消えゆく自分自身にその時、不意に当夜さんがあることを言った。
それは絶対に確認して置くべき事の様にだ。

「後悔はしないんだね？　何がどう転んでも・・歩いた先には最悪の結末しか無かったとしても」

この人は、天才だ……だからいろんな事を考えて考えて、考え抜いてしまうのかも知れない。だけど僕は平凡な人種だからさ、先の事なんてあんまり考えないし、やると決めた事以外の事なんて考える余裕なんて無い。

だから僕にはその質問が、余り意味が有ることの様には思えない。だってそうだろ。初めから最悪を結末に入れる奴なんていやしない。

だけどその可能性から目を離す事もしないさ。だってそれが起きない様に、僕達は走り続けてる筈だからだ。逃げてる訳じゃない、目指してるんだ……誰もが最高の結果って物を掴むために。

セツリはまだ、そこにのかってもいないんだよな。それはアイツの意志ではなかった……だけどそれも「今までは」だ。あの選択はそういう事だろう。

だけど僕は知ってるから、手を差し伸べ続ける事の価値をさ。だから僕はこう言った。当然と言った感じでだ。

「当然！！」

すると僅かに口元が上がったように見えた。そして当夜さんは再び背を向けてしまう。

「なら、もう何も言うまい。そうだな、君が言ったとおり、私にとってはそれでいい。ありがたく使わせて貰おう。あの子の為のもう一つの選択肢とでも思っているよ」

まあ別に僕にとってもそれでいい。この人にはもう十分頼ったしな。助け出すための術を教えてくれただけでいい。

後は僕がやることだ。消えゆく視界の中で、少しだけ力強さが加わったような背中から、ぽつりと言葉が紡がれる。

それはきっと別れの挨拶の代わりだろう。

「死ぬなよ少年」

だから僕も同じ様な言葉で返してやる。

「死んでんなよ天才。あんたがいなきゃ、やっぱりセツリは救われないからさ」

そしてゆっくりと背中越しに掲げられた腕が振られた。それと同時に、この世界から僕は完全に消え去った。光の余韻……それだけを世界に残して。

「う……」

意識が何かを伝えてくる。甘い香り……優しく吹く風のなでり、それは何だか、見に覚えがある感じだ。耳に伝わる草木の音……サラサラ、チロチロと囁く水の流れ……ああ、ここはそうだ、天国でもおかしくない場所だ。

そう思った。だけどわかってる。ここは決して天国なんかじゃない……だけど決してリアルでもない。重い瞼を開けていくと、暖かな日差しが一瞬世界を染めてしまう。だけど直ぐに、世界はその姿を現していくんだ。

そしてそこにはみんなが居た。その姿が僕には見える。

（戻ってきた……そう、やっぱりここはＬＲＯだ）

みんなが目を覚ました僕を見て、思い思いの感情を出した顔に成ってる。安堵したり、喜んだり、涙したり……それを見てると僕は本当に贅沢者だなと思う。良い出会いにきっと恵まれてる。

僅かに動く体を確認し、体を少しだけ持ち上げると何かが落ちた。それは扇？　するとその扇は風に舞うように飛んでいく。

そしてそれを掴んだのは……

魅かれ者の小唄（後書き）

第百五十二話です。

さてどうだったでしょうか、スオウの理由は？　生きてさえいればどうにかなる何てのは、本当の困難や絶望を知らないから言える綺麗事なのかも知れません。だけど生きてる事に価値が有るのは、それは誰しもがそうである筈だと思います。

そしてそこには、きっとそれだけの価値がる。彼は本気で信じてます。世界の色を決めてるのは自分自身でも、世界を染めてるのは自分だけじゃない。

そこにはきっと誰もが違う価値観を持ってたとしても、誰もが笑える何かがきっとあるんじゃないかなとか……まあそんな感じで。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

響く声（前書き）

私はずっと走って来た。頑張って来た。なのに手にした物が何もないなんて、そんなの世界が間違ってるとしか思えないじゃないか。だけどリアルは変えられない。どんなに頑張ったって、世界を牛耳ってるのは与えられた者で、それが積み重なって来た歴史だからだ。それがリアル。

ならもう、ここしか無いじゃないか！　ＬＲＯという新たな世界でしか私は掴める物なんてなかった……筈。そうだろアギト。

響く声

土の味と鉄の味が口の中で混ざり有ってる。勢いを無くした炎の火が、惨めな私を晒している事だろう。リア・ファルは砕かれ、この身の力は闇に溶ける様に流れ出してる。

私はただのエルフに戻ろうとしてるらしい。馳せた夢は、直ぐそこまで来てたと言うのに……結局は、いつもと同じじゃないか。

私の手はいつだって目指す物を取りこぼす……そう出来てる様だ。確かに、あの高校三年の時、当夜と彼女の事はそれでも良いと思える物で、何の後悔も無かったさ。

それでも得た物はあったからだ。二年間、天才を側で見てきたんだからな。アイツが居なくなっても、その影響の可能性は無くなりはしなかった。

あの時は確かに、「これからだ」そう思えてた。けれどよくよく考えればあの時、自分が出来た事なんかなにも無くて、同じ歳の筈なのにそれを軽々と凌駕していく天才の背中を必死に追いかけてただけか。

手に入らないのも当然……勝ったのは当夜だったからだ。頑張っても勝てない事が有るのはわかってる。だけど負け続けない為に、ずっとやってきてた筈だった。それにアイツは天才で良い奴で、だから仕方ないと思えて、これからを目指したんだ。

「がふっ！　ごふっ！！」

息が荒れて、ジャリジャリとした口から赤い液体が吐き出される。

それはここでは縁の無い筈の物だ。だけど確かに見えていた……赤い、と言うよりもどちらかと言うとドス黒い感じの鮮血が。

（だけど……それから知ったのは……今までと変わらない現実……それしか無かった）

黒い血液を見つめる。地面に広がっていくそれは今まで塗りつぶしてたそんなリアルがワナワナと沸き立つように見えて、胸くそ悪い。

卒業後、彼女とも別れた。進路も違ったし、彼女はあの言葉を本気で実現しようとしてた。何とか立ち直った彼女の会社だったが、彼女が目指す場所は高く、そこに割けるだけの余裕は無かったようだが、彼女はバイトと当夜が残した推薦枠で海の向こうの大学へと自力で行った。

まあ当夜は元々海外に出る気なんて端から無かった様だが、その枠は確保しておいたらしい。何を思ってそうしてたのかは知らないが、それは彼女の足がかりにちゃんと成ったわけだ。

そして私はと言うと、無難に日本一の大学に進んださ。もう会うことも無いかも知れないが、離されっぱなしってのは症に合わないから、こっちはこっちで頑張った。進んだのは法学部だ。

武器が欲しかったんだ。持つ側の理不尽に自分でも対抗できる武器……それは法の剣だろ。それだけはまだ絶対……そう信じてた。

大学の四年を費やし、司法試験を一発合格は周りからすれば十分な勝ち組なのかも知れない。だけど私が手にしたいのは資格じゃなく、それを使っての結果。

理不尽を理不尽で済ませない……恵まれただけで他者を嘲り笑う奴らの失墜……そのくらいはしたかった。

だがどうだ……現実は薄汚れた世界を見せるだけだ。社会ともなるとそれは顕著だ。どうして誰もそれに疑問を抱かないのかが不思議なくらい。

弱い奴らは弱いままで入れるのか……それが私にはわからない。法は人が作ったもので、だからこそ人の悪意に簡単に覆われる。

正義の下に国民を守る法は、主に一部の国民に確かに良く使われてたよ。どんな社会にだって薄汚い物が有ること位わかる。

だけど染まっちゃいけない所もあったはずだ。少なくともここまで来た人達は誰もが例外無く努力した人達の筈で、同じ様な事を少なからずも見てたんじゃないのかと思ってた。

自分がしてたのは法の下に、弱者を傷つける事だ。それは間接的でも、いずれそうなる事で、持ってる奴らの穴通しの様な事だ。

勿論真っ当な事もやったはずだが、デカい事務所なのがいけなかったのか、その考えは利益優先主義だった。相手をするのは大きな企業や金持ちばかり……後はそう世間で先生とか呼ばれる奴ら。

現実は、どんなに訴えても正しい正義なんてありはしなかったんだ。ヒーローは、世界には成り立てない。リアルにはさ、ゲームの様な神や魔王を倒せる武器なんて存在しないんだ。

もしも有ったとしても、結局はそれを握るのは与えられた者共だろう。何故ならば、それを作ってるのが与えられた奴らだからだ。

間違ってる……そうわかってる事をやらなくければいけない苦痛。でもまだ上があったから、立場が上がれば通る物があると信じたさ。だけど実際は、そんな機会さえなかった。

生意気でも、仕事は出来た筈の私は簡単に切り捨てられたよ。上司のミスの責任を押しつけられて捨てゴマのごとく。

そして社会は戦う事さえ、させてはくれなかった。身につけた筈の力は、それを持つ誰かの悪意によって簡単に潰された。高い奴らは、どこまでも卑怯だったんだ。

そして人と人の繋がりもそうだ。仕事を無くした私の彼女は直ぐ様、新しい出会いを見つけてた。世の中はそんなもんというように。

与えられなかった者には「これから」なんて無かった。ずっと打ち止めだと悟った。本当に上に行きたいのなら、ズルでも何でもやらないと、与えられた奴らに並ぶなんて出来ない。それが世界の法則なんだろう。

真面目にやってバカを見る……そんな世界はもう、全てが腐ってるとそう思った。子供の頃から大人になるまで戦ってきた物は結局、打ち勝つなんて出来ない代物だったんだ。

だって世界がそう出来てしまってるんだから。ずっと前から、そういう奴らの手によって。世界にヒーローなんて存在し得ない。もしかしたら、自分がそう成れるとでも、思ってたのかな。

与えられない者は歯車にさえなってないっていうのにだ。憔悴、無気力、憂鬱……全てがどうでも良くなった。そんな時、大々的にニュースから飛び出てたのがＬＲＯだった。

『新世界の扉が開く！』それはどこかで聞いたような言葉で、『誰もが望む夢を見れる世界！　開拓するのは貴方達だ！』って文句にも異様に引かれた。

ゲームなんてやったこと無かったが、タイミングが絶妙だっただけにふらふら～と買ったこともないゲーム雑誌をコンビニで買って見て驚いた。

『フルダイブシステム』その先駆けを私は知ってたからだ。当夜からのプレゼント……そんな風に思えた。だからすぐさま予約した。

だけど発売直前に起こったのはそんなアイツの訃報だった。

発売は延期され、ＬＲＯはどうなるかわからなかった。だけど思った。アイツもこの世界の被害者何だろうと。天才で何でも出来る奴だったけど、この理不尽な世界から全てを奪ってた。

少し調べれば出てきた。何よりも大切だった妹の事故。会った事はないが、それが全てだったのは知ってる。心底イヤだと思った……こんな世界、消えて無くなればいいと毎晩祈った。

新世界……いつか三人で見てたそればかりを夢見るようになってた。そして扉が開いた日……いろんな物から解放された自分が新たに生まれたと思った。

全てを願える世界が開けた……その筈だったのに……

「ガイエン……」

そう名前を呼ぶ奴が私の前に立っている。情けなくて意地っ張りで、強情な奴。使えると思って近寄っただけのただの駒。

だけどこいつを見てると、いつもいつも苛立った。それはきっとこいつがガキだからだろう。ありもしない希望を見て、必死になってた姿が愚かだった自分と重なった。

踏みつぶしたくなったよ。ボロ雑巾の用にして……自分と同じように……だけどどうだ？　何でこいつは私の前に立っている？　何でそんな目で私を見下ろしてる？　何でこいつは立ち上がれる？

（何で何で何で何で何で何で何で何で……）

永遠に続きそうなそんな呪詛めいた何でが頭で続いていく。許せない何かが沸き上がる。なんだその目は？　なんだこの状況は？

こんなの間違ってる！！
こんなのは私が望んだ世界じゃない！！
「アァギトオオオオ！！」
私は立ち上がろうとした。怒声を響かせ、全身の軋みに脂汗を垂らしながらもそれを試みる。するとどこかから声が聞こえてくる気がした。
『勝ちたいか？　世界に。あらがいたいか？　理不尽に』
クソムカつく声だった。フフンってな感じで鼻を鳴らしてるのが想像できる様なそんな声。幻聴？　とでも思ったが、私は無意識に答えてた。
（ああ！　私は、こいつの勝利だけは認めれない！！　そんな理不尽だけは許せない！！）
今までとは違う……倒したはずの相手。与えられても居ない奴……そんなコイツに！！
『ならば、力を貸そうじゃないか。その怒りと憎しみで、掴んでみろよ……その願い！！』
その瞬間、球体に成ってた下半身が黒い霧を出して弾けた。そしてそれらは私を包み込んでいく。流れ出ていってた力が、全く別の物に変わっていく感覚がある。それが何なのかとかは、今はどうでも良かった。
私はただ……コイツに、アギトにだけは負けられない。

「くくく……はははははははは……」

大地を踏みしめる感触が伝わってくる。私ももう一度この地に立っている。まだまだまっさらなこの世界……誰に渡せよう。

私はまだ何も叶えてないのだから！！

溢れだした霧は、私の武装を整えてくれていた。黒い肌に密着して巻き付いた様な服は首からヘソまでが大きくブイの時に開いていて、腰からは黒い光沢のあるマントが地面につくかつかないか位まで垂れている。

足は膝までもを覆う強固なブーツが保護をしてる。全身を黒く覆うその格好はさながら死に神らしかった。それに瞳と髪もカーテナの影響を受けたままだ。

だけどカーテナは身に宿ってる訳じゃない。今は腰に、大仰な武器と共に携えられてる。その力を封印するように、黒い何かでピッチリと巻かれてだ。

「ガイエン……お前まだ！！」

「もうやめて！　やめようよ……これ以上戦う事に意味なんてあるの？　決着はついたんだよガイエン！」

アギトと、そしてアイリ……ここで出会った二人がその顔に怒りと、悲しさを乗せて言葉を発してる。だが……私の答えは変わらんよ。

「まだ何も終わってなどいない！！　私はまだここに立っているだからな！！　終わらせたいのなら、私から全てを奪ってみろアギト！！

それが勝つための方法だ！」

携えてた長剣を私は引き抜く。何もかもが黒く、刀身から黒い霧を出してる……そんな剣だった。だが、限りなく普段の自分の物と変わりは無かった。
感覚も何故かしっくりきてる。

「ガイエン……まだ分からないのかよ？　まだ目を逸らす気かよ！　自分の心をもっと見つめろよ！！　あの時流した涙が、お前の本心じゃないのかよ！！」
「涙？　なんの事か分からんな。私は……ここでまた負ける訳にはいかない。もう……何もないんだよ。理不尽……この世界まで、そんな物に染める訳にはいかない。
アイツが残したこの世界だけは、あの頃に語り合った世界で有るべきだ！！」

力強い一歩を私は踏み出した。そしてそれを見たアギトもこちらに駆けだしてくる。それぞれの武器を携えて、それぞれの纏う光がぶつかり合う。

「この大馬鹿野郎！！」
「お前はもういらない……退場してろアギト！！」

武器だけじゃなく、言葉も私たちはぶつけ合う。素早い剣線と、力強い槍の攻防。それはいつかした光景を思い出させる物。
負けない……その自信が私にはある。だけど……

「ぐっぬう！！」

ぶつかる奴の槍が……振り抜かれる槍の衝撃が……どんどんと大きく成っていく。満身創痍の筈なのに……一度二度も死んだ弱い奴の筈なのに……どうしてこいつは、こんな力が残ってる？

次第に攻撃回数が減っていく私に対して、アギトの奴はその力強い姿に一切のブレがない。迷いがない。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」

だが……受け入れられない物がある。水平に構えた長剣を流れる様に落とす。すると残像の様に長剣の影が続いて、そして私はその全ての剣を操った。

「スキル『三千世界』！！」

幾重にも重なってた筈の剣が、時間差を付けてアギトを襲う。勢い込んでた奴がたまらずその体を後方へ下がらせる。だが……その殆どを奴は防いでる。

モーションで見切られたか……アイツは私の、私はアイツの手の内を知っている。あの白い炎は初めてだったがな。

まだまだこれから……私はそう思い、両手で剣の塚を握りしめ、肩の所で剣を構えて地面を蹴る。突進系など、私のガラじゃないが、奴のお株を奪うのもいいではないか。

だけどアギトの奴は動かない。それ所か槍を構えもしない。何のつもりか知らないが……思いばかる気など私にはない。

「どうしたアギト！？　諦めたのならそのままでいろ。どうしようもない物に潰されて、貴様も一度世界を呪いに落ちていけ！！」

体が加速する。これで決まる。私の勝利……まだまだ道は続く。だけどその時、突如飛び出してきた奴がいた。

「ガイエン！！　私を……貫いてみなさいよ！！」

それはアイリ。武器も無く防具も何もない……その体にはボロボロのドレスがあるだけだ。つまりはこの一撃でも、アイリは逝ってしまうかもしれないということ。

（私が殺す？　アイリを？）

真っ直ぐな瞳が私を捕らえてる。少しだけ躊躇ったらが、その時また頭に直接内側から囁く様な声が漏れてきた。

【何を躊躇う必要がある？　その女も敵だ。そしてお前を裏切った女だろ。そいつにはこの刃を受ける責任が有るんだよ。
さあ！　手に入らないのなら……壊してしまえ。それが世界の真理だろ！　さぁさぁさあさぁさあさぁさぁさぁ！！】

頭に木霊するそんな声が徐々に大きく成っていく。震える腕……見つめる先にいるのはアギトを庇う様に立ちふさがるアイリの姿。
その瞬間……黒い物が増幅した様な気がした。否定してきたはずの絆……だけどどうにも、こいつ等にはそれが見えてしょうがない。
そしてその都度、憎らしくなる。堪らない何かがこみ上げてくるんだ。

（そうか……いいのかもしれない。もうどうでも……そして全てがだ）
「ガイ……エン？」

止まらぬスピードに少しだけ、アイリの体がおののく。だけどすぐさま眉を釣り上げて、毅然とこちらを見据えた。
するとその瞳からは何かが伝わる様な気がした。その瞳には曇りなんてない。ボロボロの筈なのに、その姿には気品があり、涙で赤

らめた瞳でも一切のブレは無かった。
そして伝わる言葉は、頭に救っていた闇を少しずつ退けていく様な感覚。

（信じてる……）

そんな言葉が聞こえる様だった。完全な思いこみなのかも知れない。気のせいかも知れない。だけどアイリの瞳から私は、そんな言葉を受信する。

（信じてる……私はガイエンを信じてる！！）
「っつ！　……ぬあああああああああああ！！」

そんな目をされても、そんな事を訴えられても、今更私は止まれない。結局は手に入らない……アイリが選んだのは、その後ろの奴だろう！！
真っ直ぐに伸びた長剣が、流れていた片側の髪を切り落とした。彼女の髪が、空しく風に流れて行ってしまう。だけどそれだけだ。
私の剣はアイリの肌のどこにも届いてはいない。

「はぁはぁ……っつ！！」

だけどそれは余りに悔しい事だった。何でどうして……それが自分でも分からない。もう良いはずなのに……勝たなければいけない筈のに……それを私は、誰よりも一番良く分かってた筈なのに！！
何で……アイリが傷付けれない。するとその時、後ろから出てきた腕が、黒い刀身を捕まえた。

「やっぱりお前はそうだよな……」

意味の分からない事を呟くアギト。何がやっぱりかサッパリだ。それに何でそんな余裕そうな顔をしてる？　それが異様に腹が立つ。

「貴様の差し金かアギト？　アイリを盾に使うとは。お前もそれなりに落ちてるじゃないか」

ググッと剣に力を込めるが、アギトの奴も力を込めて、解放を許さない。相変わらず馬鹿みたいに腕力をあげてるみたいだな。

「差し金ね。確かにそうだけどさ、お前はやっぱりそうなんだよ。俺と同じでさ、アイリに言うこと有るんじゃねーの？」

「言うことだと？」

至近距離な私たち三人。アギトと自分に挟まれてるアイリは、顔を後ろに向けたり前に向けたり忙しそうだ。だけど言うこと？

いったい何を？　まさか這い蹲って謝れとでも言う気かコイツ？

そんな事私がするわけもない。それよりもどうやってここからアギトを踏みにじるかの方が大切だ。

アイリと違って、コイツには遠慮の欠片もありはしない。だけどやりづらい事この上ないのも事実だ。

それはアイリが間に居るから……とても動きづらい。それにアイリから見つめられると、頭の中でのたうち回ってた黒い声が完全にどこかへいく。

そんな中、再びアギトが口を開く。それも何だか楽しそうにだ。

「ああ、アイリの事が大好きだって叫んじまえよガイエン」

その瞬間、黒い声だけじゃなく色々な物が頭から飛んだ。そんな刹那の果てに……

「は……はあああああああああ！！？？」
「あああああ……アギト！？」

アイリと二人しておもいっきり私たちはその言葉に動揺した。何言ってんのコイツ？　的にだ。だけどアギトの奴は至極真っ当に、そして真剣な眼差しで私の顔にその槍を突き立てる。
指物代わりと言う感じで。

「だってそうだろ？　てかアイリまで動揺しすぎ。だってお前の今までの行動……それを考えるとこれにしか行きつかねーよ。
お前は口で馬鹿にしながらも求めてたんだ。そんな心触れ合える関係をさ」
「好き……だと？　私が？　求めてた……バカバカしい細い糸にも劣る繋がりを？」

認めたくない思いが募るなか、そこにはどうしても否定出来ない物がある。そしてアギトは力強く言い放つ。

「思い返せよさっきのこと。利用してたのなら、アイリごと俺を貫けば良かった。それで終わってたかも知れない。だけどお前はそれをしなかった。出来なかったんだ！！
どんなに偽ろうとしたってバレバレなんだよ！　利用してたんじゃなく、大切だったんだよお前は！！」

大切……その言葉が何故か深く染みる様な気がした。胸の奥のどこか深い所へだ。

「好きに……成ってたのか……」

自分で口にしてみると……案外あっさりと認めれた気がする。いや、本当はずっと前からどこかで気づいてた。でもそれは、私が目指す世界にはいらない物だったんだ。
分かりあえはしないのなら、自分が納める完全な世界を作りたかった。それが出来ると思ってた。でもその根底にいつしかあったのは……たった一人の女を手に入れたい……だったのかも知れない。

【だが……手にはいりはしないだろう。何もかもな】

頭に響く黒い声。そうだ、手にはいりはしない物だから私は強引な手を使ったんだ。

「だが結局、アイリはお前を選んだ……その筈だろう。私はどこまで行っても、何もこの手で掴めない。ならやはり、ここでそんな理由で止まる事など出来はしないな！」

そう言って私は強引に長剣を振り被って、アギトの手から解放した。距離をとって、次の手を講じる。だがアギトの奴はおもむろに声を出す。

「なあガイエン。お前が掴みたかった物って本当は何なんだ？　繋がりってさ、恋愛感情とかだけじゃないだろ？」
「どういう意味だ？　私が掴みたかったのは、この世界そのもの！
それに間違いなどない！！」

そう叫んだ私。だけどアギトは、完全にそして素早く否定しやがった。

「いや違う……それに見間違えてる。お前が欲しいのは世界じゃなく、そこにある繋がりで……そしてお前は、それをもう手にしてる」

響く声（後書き）

第百五十三話です。
三人の決着は次回でつくでしょう。そしてそのあとは長かったこのアルテミナス編の決着へと続きます。どうなるかはお楽しみで。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

今一度の扉（前書き）

僕はＬＲＯに帰って来た。共に戦った仲間の元へ。喜んでくれる仲間達と少し離れた場所にはアイツがいる。割と平然としてる様に見える、敵の筈だったアイツ。そんな中、セツリが消えて行ったあの扉が光を放って開きだす。

今一度の扉

風に乗って舞う天扇。蒼天のどこまでも上がっていって一瞬見失ったそれは、手を伸ばしてる誰かの元へと目指して落ちて行ってた。
ヒラリフワリと不規則に落ちていく天扇を、それでもその人物は迷い無くその手に治めていく。それが誰……なんて野暮な事は言わないでいい。
その姿は、記憶から風化させるには早すぎる。だってそれは……

「柊……」

間違いなくその人物。氷のドレスはどこへやら、今は出会ったときと同じ格好をしてる。まあそれでもドレスっぽい事に変わりはないんだけど、もっと驚愕したのはアイツ普通に立ってるんですけど！　って事だ。

傷なんて見あたりもしない……いや、こうやって見てると、アイツと戦ってた事自体が夢の様だったとさえ思えてきそうな程だ。
だけどまあ……それは間違いなく夢なんかじゃ無かったとこの体が証明してるよ。だってアイツ見ただけで胃が痛い。

これはきっと死闘の果てのトラウマだな。てか、自分なりにアイツを跡形も無く消したとかって思って、それなりに後悔してた筈だけど、今見たらそうでもない。
寧ろ、あんな普通に立たれてたら、後悔したことを後悔する。何アイツ……反則にも程があるだろう。確かに僕の攻撃は届いてた筈なのに……一体どんな手を使いやがった？

「スオウ……良かった……ホントに！」
「うおっ」

起きあがった僕を抱きしめてくるリルレット。その感触は柔らかくて、暖かい……生きてるって事を実感させてくれる様な温もりだ。

「体は大丈夫なのか？」

続いてそんな事を聞いてきたのは、比較的にクールにしてるヒーラー（男）だ。だけどそう言われてみて気づいたよ。
あれだけ辛かった僕の体が、今は何ともない。暴走仕掛けてたあの力も完全に無くなってるみたいだ。それに普通に体を起こせたし、腕も足も、感触を確かめる様に動かせる。

「大丈夫……みたいだ」

僕はそう言って、抱きついてるリルレットの頭を撫でてやる。別に深い意味は無いけど、何となくそうしたかった。自分の為に本気で泣いてくれる女の子を放ってはおけないだろ。
それにやっぱり、世話になったし。

（あれ？）

でもここで僕はおかしな事に気づいたぞ。何で……みんなアイツの事を気にしてないんだろう。それはどう考えてもおかしな事だ。
だってついさっきまで戦っていたんだぞ。それに敵なのはまだ変わってない筈だろ。それなのに、柊がそこに居るのにこれでいいの？　って感じだ。
まあ、今の柊からは敵意って感じは全然……

「お礼は？」
「は？」
訂正、めっちゃ凄んだ声で言われたよ。めっちゃ敵意むき出しだよ。何アイツ、まだやる気なの？　確かにピンピンしてるように見えるけど、こっちに勝ち目はパーセンテージで表せない程けどさ。
「ちょ、ちょっとアンタね！　幾ら助けてくれたからって、元はアンタのせいなんだから、お礼なんて求めないでよ！
逆に遜って『これまでの非礼をお許しください』くださいくらい言ってよね！」
リルレットが涙目で柊を見据えてそんな事を言った。って助けた？　アイツが、僕を？　何だかにわかには信じれない発言だ。
「ふん、人間風情がこの私に謝罪を求めると？　甚だおかしな事を言うのねこのチンチクリンは。自分の見窄らしい体じゃ役に立たないって分かってるのかしら？
それならそうと言いなさいよ。まあどっちにしろ、私は謝る筋合いなんてないのだけどね。元々なんて言い出したら切りがないのよ」
饒舌な柊は、やっぱ刺々しい感じだ。てかチンチクリンって……見た目はお前の方が子供だろうと言いたい。喋り方がアレだから、大人びて感じるけど、柊は見た目十四くらいだ。
様は女子中学生だな。それに比べてリルレットは高校生な感じはする。見た感じと感触では、完全にリルレットに軍配は上がってるぞ。
だけどそんな事を言える分けもなくて、チンチクリン言われたリルレットは結構切れてる？

「チン……チクリンですって？　私はこれでも育って来てるの！
確かにちょっと遅いかな～って自分でも思うけど、アンタに言われたくない！
どうせ一生チンチクリンの癖して！」

何、それは柊が人じゃないから成長しないだろうって言いたいのか？　てか何かこいつら……

「成長を体でしか見れないなんて、これだから人間は。何貴女？
将来体を売って稼ぎたいの？　まあお似合いかもね。貴女は頭も弱そうだし」
「な！　頭は私普通だし！　中の上くらいにはいるもん！　それより体を売るとか……そんな卑猥な事考えてるのアンタ？　涼しい顔して、何を妄想してんのよこの変態！」
「変態なんて侵害ね。私はただ、頭も弱い貴女の将来を指してあげただけよ」
「だから弱くないってば！」
「あらそう？　もっと真剣に受け取りなさいよ。私が人間風情に為になるアドバイスあげるなんて希よ希。大体中の上って半端なのよ。
そんな所で満足してるから、貴女モブキャラなのよ。やっぱりあのちっこいのがお似合いよ」
「な……なんの事よ！？」

何の事なのかはこっちが言いたいな。何の話してんのこいつら？
いつの間にこんな仲良くなったんだよ。リルレット以外のみんなはそれなりに警戒してる様だけど、それも最低限って感じ。
柊はもう、戦う気がないからこんな風に喋ってるのかも知れない。
そしてそれをみんなは知ってる？　助けたって言ってたし、そこら辺を聞きたいんだけど……

「だからあのちっこいの居たでしょ？　貴女が執着してたモブリ。私が柱に変えたあの哀れな子よ」
「エイル……そうよ……ずっと確かめたかった！　エイルはちゃんと生きてるんでしょうね？　無事なんでしょうね？
もしもそうじゃなかったら……例えどんな実力差があったとしても、私はアンタを殺す！」

ある意味ほのぼのしてた筈の空気が一変。リルレットは強い眼差しで柊を睨みつけてる。だけどそれはしょうがなく、当たり前の事。
事を起こした奴から、哀れな子とか言われたら怒るよそりゃ。それもリルレットはいつもエイルと一緒だった訳だしな。そして無事なのか知りたくて……助けたくて一緒にがんばってきたんだ。

だけどこの状況でその台詞は……とも思った。こっちは満身創痍なのに、柊はさっきの戦闘を感じさせない位に振る舞ってる。
今柊に暴れられたら、手のつけようがない。だけどそんな事はない確信があるからリルレットは言ってるのかな？　まあでもついつい口に出てしまう事はあるけどな。友達の事だし、バカにされたままじゃいられい事もある。
だけどやはり、柊は別段暴れ出す事もなく、少し含み笑いをするくらいだった。

「ふふ……本当に、人間はどこからそんな根拠の無い自信を絞り出してくるんでしょうね？　安心しなさい。別に死んだ訳じゃないわよ。
それにこっちもかなり力を使ったし、道に割く分はもう無いから、今頃はアカウントも復活してるでしょう。まあここには来れないでしょうけどね」
「そっか……エイル……良かったぁ～」

リルレットが放ってた気迫みたいな物が、柊の言葉を聞いて一瞬で流れて行く様な気がした。でもそれは僕も同じだ。エイルが無事……それは安心できること。

この、目の前の少女が本当を言ってるとは実際まだ信じれないけど、何となくそれは嘘ではない気がしたんだ。今更嘘を付く必要も無いって言うか、エイルはそれほど柊達にとって価値がある存在じゃないだろう。

僕は佇んでる柊を見つめる。さっきの会話も、これもそうだけど、やっぱりどうやら戦う気は無いようだ。

てか道って……ここに来るまでにあった神殿とかか？　やっぱりあれは柊達がＬＲＯ事態に干渉して付け加えた物。つまりこいつら、どこにだって一瞬でいけるんじゃないか？

なんて羨ましい奴ら……ＬＲＯは広大で、移動手段が乏しいからプレイヤーは大変だってのに、どこまでも裏技を持ってる奴らだ。

「ちょちょっと待てよ。それなら、俺達が死ぬとかそういう事はないって事か？」

そう言ったのは、仲間内の一人。それは誰もが気にしてた事。みんな追いつめられて立ち上がった口だからな。それはみんなにとってＬＲＯがまだゲームであれるのかって事なんだろう。

誰もが神妙な面持ちで柊をみてる。柊はそんな事どうでも良さそうに、天扇で自身を仰いでるけど、素っ気なくは答えてくれた。

「そうね。というか、私たちは貴方達が言うリアルにまで干渉は出来ないもの。だってそうでしょ？　私達はこの世界の住人なんだもの。

追い出す事も、取り上げる事も出来るけど、接続を切られたらそれまでね。ログアウトが反応しないのは、こちらで干渉してるだけ

し、私達にだってね出来ない事はあるのよ。
だってしょせんは……まあそう言う事よ」

最後は何だか歯切り悪かったけど、柊の言葉を聞いて、みんながそれぞれに顔を見合わせる。そしてそれぞれに「聞いた？」みたいなアイコンタクトの後に頷きあう面々。
そしてみんな一斉に

「「「うおっしゃあああああああああ！！！」」」

とか叫んでる。まさに魂の叫びという感じだ。突然のそのハイテンションぶりにビクッと肩を揺らしたのは柊だ。だけどリルレットは、僕の顔とみんなを交互にみながら何やらオロオロしてる。

「別にリルレットも喜んでいいよ。僕に気を使う必要なんかない。エイルも無事で、自分も命の危険がないってわかったんだからさ」

僕は戸惑ってたリルレットにそんな風に言ってやる。多分さ、リルレットは僕の事を考えてくれたんだろう。みんなは命の危険がなくなったって、そこに僕は入ってない。
それを考えると素直に喜べないって感じかな？　そしてそれは図星だったようで、ムギュっとリルレットは可愛らしく口をすぼめてこう言った。

「それは……そうだけど……」

ゴニョゴニョとまだはっきりしないリルレット。何だまだ足りないのか？　てか、僕とみんなじゃいろんな事が違うんだから、悩む事なんて無いのに。

「そもそもさ、僕はもうその覚悟を決めてる訳だし、それを押しつけ様なんて思わない。それに結局、命なんて賭けずに、ただのゲームのままであれるのならそれが一番だしな。
　みんなにはそんな覚悟も、そんな覚悟の理由もないんだし。いらないよ。たまたまそうかも知れなくて、だけどそうじゃ無かったんなら、良いことじゃん。
　みんなはこの短い期間の中で立ってくれたんだし、感謝こそすれ、疎ましくは思わないよ」
「それはそうでしょうよ。スオウはそう言うよ」

　何だかまだ気に入らない事がある様子のリルレット嬢。ええ、何なの？　とそろそろ成ってくるんだけど。もっと端的に言った方が良かったかな。

「ええとつまりは……みんなが命を懸けずに済むなら、それに越したこと無いって事で――」
「でも仲間の！　ううん友達が一人で命を懸けてるのに……近かった距離が離れた様な気がする。だって……私達にはどう必死になっても、ここでは逃げ道があるんだもん！」

　いきなり大きな声を出したリルレットに、みんなが振り返る。仲間……というより友達……ああ、その観点からの事はそう言えば入れて無かったかも知れない。
　僕は自分的に言えば……を言ってた訳だ。僕はそうでも、相手は違う。そんなのどこの世界でも当たり前だろうにさ。
「私達は仲間でしょう？　友達でしょう？　心配するよ。気遣うよ……だってそれが当たり前だもん」

　瞳が妙に潤んでる様に見えるリルレット。そんな彼女だからか、

その言葉は素直に胸に響く物がある。実際はそう何度もあったりしてる訳でもなく、リアルでの付き合いなんて皆無だし、夢の様なＬＲＯでの繋がりだけ。

だけどここの冒険は、リアルよりも強く人を引きつける。そう思える物だ。そして思いこみでも、一時は命を互いに賭けて戦ったんだ。それはもう信頼という絆が築かれるレベルの物だろう。

でないと、命を晒して戦えないし、そんな背を預けるなんて出来やしないんだ。周りのみんなはリルレットの言葉を聞いて、やっぱり同じ様な視線を向けて来る。今気づいたような「ああそっか」それが聞こえる様な目。

悪いことをしてばつが悪い感じ。別にみんなは悪い事なんてしてないのにさ。それが当然で当たり前。少なくとも、僕はそう思ってる。

だけどみんなは違う様だ。仲間だからこそ、そう成ってしまってる。一人の為に、誰もが思いやりを持てるのは良いことだ。

それが世界中で余すことなく出来るのなら、世界から戦争なんて言葉は消えるんだろう。だけどこれは間違い。みんなの思いやりは嬉しい……だけどその気持ちで十分だ。

悲しみや辛さ、苦労や困難……それを乗り越えるための思いやりは大歓迎だけどさ、喜びや歓喜とかの幸せを噛みしめなくなる様に成ることはダメだろ。

それも自分のせいでなんて耐えられない。

「スオウ……えっと、あのすまな……」

「謝るなよ。そんな言葉間違ってる。んな場面でもないし。気にするな……はまあ無理なんだろう。だけどさ――」

僕はみんなを見回して、最後にリルレットを見た。そして笑顔で言ってやろう。最高の仲間達に。

「――笑っていいよ。喜んでくれよ。僕はそれが見たくて、自分のせいでみんなが喜べないのは嫌なんだよ。気持ちはありがたく受け取るよ。

だけどさ、その喜びを噛みしめる権利は、頑張ったみんなにあるんだ。だからおもいっきり喜んでいい筈だろ」

「スオウ……」

何だか気恥ずかしいな。自分で口に出して何だけどさ。リルレットの頭をこねながら、僕はそれでも笑顔を作る。

だけどまだ気難しい顔をするリルレットに僕は更に、その手を柔らかな頬へ伸ばす。

「にゅま！？」

変な声を出したリルレット。それもその筈……だってリルレットの頬は僕の指によって伸ばされてるからだ。

「にゃにゃにゃにゃ……にゃにしゅんの～！！」

柔らかな頬を引っ張り引っ張りしながらでも喋るリルレットの声はおかしな事に成ってた。

「ぷっ……はははははは！！」

自分でやっておいて何だけど、笑っちゃたのはどうだろうと自分でも思う。だけどさ、グリグリしてると楽しく成ってきてしまったんだ。

「むにゃにゃにゃにゃ……いい加減にしなさぁ～い！！」

バチンと思い切り頭を振って僕の手を放れるリルレットの頬。そして赤く成った頬を更に紅潮させて怒ってる。

「もう！　ふざけないでよね。私は真剣なんだよ！」

「僕も真剣だよ」

真顔で言うと、不意に顔を背けてしまった。そしてポツポツとか弱い声で、何か言ってる。

「嘘……ふざけてた。笑ってたもん」

「いや、あれはリルレットが可愛かったからだよ」

「っつ！！　かかかかかかか、可愛い！？」

ボンっと頭から湯気を出して沸騰気味のリルレット。何だか反応が面白いからからかいがいがあるね。実際本当に可愛かったけどさ。

まあでも、この位にしておこう。元々かいたいからあんな事やった訳じゃないし。だから僕は、地面につけた腕に体を預けてこう言った。カラッとした笑顔でね。

「ああ、そう言う顔が側にある方がずっといい。思い合うのは良いことだけど、一人の為にみんなが辛気臭くなってどうするよ。

僕は例え死ぬときが来たって、笑って死んでやる……そう決めてるから、周りは楽しい方がいいんだ。その方がよっぽど……救われる」

そしてハハっと笑う。すると少しの沈黙を置いて、リルレットは瞳に溜まってのだろう涙を拭って顔を向けた。

「救われる……か。そうだね、一緒に悲しんであげる事も大事だけど、楽しくするのも大事だね。スオウは心からそれを望んでるんだし……なら私も、笑ってあげる。へへ」

ニヘラ～とだらしない笑顔って感じだけど、別にウケを狙った訳じゃあるまい。だけどそんな彼女の笑顔がこの空気を包んでいく。

そして次第にみんなにも笑顔が戻る。得難い喜びを、噛みしめないのは損だ。それも今のこの状況は貴重だろう。人生でそう何度もある訳じゃない。

命を懸けた戦いを乗り越えた果ての喜びってさ。まあ、その戦った相手がすぐそこに居るってのはどうかと思うけど。

彼らがここまで喜びを露わにしたんだ。今までのＬＲＯではきっと感じ得なかった何かがあったんだろう。

青い空と、咲き誇る花畑の広がる中で、みんながようやく思い思いに喜びを噛みしめる。それは自然な事で、やっぱりこうでなくちゃと思える。

「やっぱり……人間ってわからないわね」

不意にそう言ったのは、今までのやりとりをずっと黙って見てた柊だ。

「他人の為に思いやったり我慢したり、面倒じゃない？」

「そうかもね。でも基本、人間って面倒なもんだよ。めんどくさい付き合いや、そういう社会で生きてんだ。

だけどそれを本当に面倒と思うかは心次第。だってそこには絶対に楽しさとかもあるんだから。どこを大きく捉えるか……それで面

倒な事も幸福とかに変わるんだ。みんなそれぞれ折り合いつけて生きてるよ。
それにさ、僕から見たらお前達も、僕らと同じ事してる様にみえるけどな」

僕の言葉に、柊は僅かに眉根を寄せる。人間と同じ何て嫌なんだろう。

「どこら辺がかしら？」

少し口調を強めてそう言う柊。やっぱり機嫌が悪くなってる。だけど僕は臆せず言うよ。

「一緒だろ。お前達だってセツリを思って行動してる。そこら辺はきっと何も変わらないんじゃ無いか？」

そう、一緒だよ。みんなが僕を思ってくれた事も、柊達がセツリを思ってる事も……変わらない。大切だから、それを考えてしまう。
そんな難儀なもんなんだ。

「い、一緒にしないでくれる。私達があの子を思う気持ちはもっと大きいもの。そう……それが存在意義って位に」

少し声が萎んだ柊。今の自分の立場とかが嫌なのかなって思う様な仕草。実際はわからない、なんと無くだけどね。

「嫌いなのかセツリが？」

何とはなしにそんな事を聞いた。だけど今度はもっと強い目で睨まれた。

「そんな訳ない！　私達はあの子の絶対的な味方だもの。嫌いになんてなれないわ」

なれないって……まるで本当は嫌いみたいな言い方だな。でもそれだと、疑問が一つ。

「なあ、お前が僕を助けたんだよな？　どうしてだ？　僕は敵だろ。セツリをＬＲＯから連れだそうとしてる」

「そうね……貴方は敵よ。だけど今回は私の負けだから。許せないじゃない？　勝ち逃げなんて。プライド的に。貴方は私の手で殺してあげるの」

柊の瞳は情熱的に燃えている様に見えた。あんまり嬉しく無いけどね。それに勝った実感も今と成っては……

「貴方は勝ったわよ。こう見えても私もフラフラなの。中はボロボロ……こんな屈辱初めてよ。本当なら今直ぐ殺したいけど、それが無理だから時を待つわ。きっともうすぐだし。そう、きっとね」

柊は湖に鎮座する巨大な扉を見つめる。あれはセツリが去っていた物だ。意味深な言葉と柊の視線……それは何を語ってる？

「どういう事だ？　それにやっぱそういう風には……」

「私も大概反則だけど、あれも大概反則よ。でも私は倒させない。だってそれじゃ意味が分からないもの」

意味？　柊の言ってる事がよく分からない。すると大きな音を立てて扉が開きだした。黄金の光が溢れだしてる。

「それと多様しない事ね。私だからあの力の影響で崩壊仕掛けてた君自身のコードを初期化出来たけど、次はないわよ」

そこまで……どんな執念だよ。だけどまあ……

「さんきゅ、助かった」

そう言うと柊は「バカ？」とか言う。そして開いた扉は驚くべき吸引力で、柊共々僕達までも吸い込んだ。

今一度の扉（後書き）

第百五十四話です。
昨日の敵は今日の友……だけどまあ、柊はそこまで行ってないですけど。さてスオウ達はどうなるのか！？　それは次回で分かるでしょう。
てな訳で次は水曜日にあげます。それではまた～。

さよなら、ヒーロー（前書き）

私の前には目障りなヒーローがいた。アイツはまず、出会った時から彼女のヒーローだった。最初は気にも止めなかったそんな関係が、次第に煩わしい障害へと成って行って、それは私にとって邪魔でしか無かったよ。

野望の為にも私欲の為にもだ。だから潰した……踏み潰した。だけどアイツは再び私の前に立ち塞がった。自分の答えを見つけて、私を見抜いたその瞳は、私が成りたかったヒーローだった。

理不尽に屈しないヒーロー。ああ、だから……私はお前が大嫌いだ。

ヒーロー、ヒーロー・・さよなら、ヒーロー。

さよなら、ヒーロー

「手にしてる？」

目の前のアギトが言ったことが私には理解できない。いいや、そもそもそんな訳がない。アギトの言ってることはアイツの勝手な妄言に過ぎないんだ。

崩壊したタゼホの村の中で、私達は向かい合ってる。私は奴を見据えて眉根を寄せ、アギトはムカつく事に余裕が見える。

それは明らかに今までとは違う。一年前の責任に潰されそうに成ってた時とも、今回の右往左往する様ともまるで違う。

それは二回も地に倒れた奴とは思えない物なんだ。そしてアギトは、困惑する私を余所にその体のまま喋り続ける。

「そうお前はちゃんと掴んでるんだ！　お前がカス程度にしか思って無かった繋がり……だけど本当はそれが欲しくて……そしてそれはお前の周りの、至る所に繋がってる！」

腕を横に振るうアギト。視線を少し外すと、そこには同じ白い甲冑に身を包んだ騎士達の姿があった。数は大分減ってるが、それは見間違える筈もない親衛隊だ。

私が選び、私が作ったんだから。駒でしか無くても、それを効率良く使うためには一人一人を知ることは重要。だからちゃんと一人一人を私は知ってる。

間違いない……でもどうしてこいつ等は止まってる？　あの炎の柱が上がったときに、決着は付いたと思わせてしまったのだろうか？

「ガイエン様……私達の夢は……」
萎んだような声を出す、親衛隊の一人。それはまさしく敗残兵の様な覇気の無さ。だけどそれの原因は、セラ達にやられたとかじゃない。
あの目は……私を捉えてる。その顔は、信じた物に裏切られた様に青ざめてる。

「――っつ！！」

確かに繋がってたのかもしれない。私達は、強固にその繋がりを持ってた様だ。だけどそれはアギトが言うような、ほのぼのとしたもの何かではない。
もっと主従がはっきりとした、絶対的な物だったんだ。だからこの繋がりは、どちらかと言うと私の理想に近い。だってそうだろう、わざわざ自分の作る物に間違ってると思う事を入れるわけない。
自分が思う、理想を詰め込む物だろ。親衛隊の彼らとは、そんな歪んだ繋がりだ。

（だが……）

さっきから妙にイライラする。握りしめる拳の理由が私にはよく分からない。彼らのその視線……その期待……それをまるで裏切りたく無いような……そんな気持ちが、この原因？
「な……何やってる貴様等！　敵は目の前にいるんだぞ！！　私は倒れてなどいない！　私達の夢は……まだ終わってなどいないんだ！！」
私は必死に取り繕った。もう思わずな感じでだ。だが、結果的に

はこれで良かったはず。そうアギトの妄言を蹴散らす事が出来るのなら。
アイリへの事は認めてやる……だがな、今までの私の表面は、簡単に否定する訳にはいかない。野望も世界も、それは確かに私が望んだ事に間違い何てあるわけがない。

自分の事は自分が良く分かってて、もっと言えば、自分を理解できるのは結局自分しかいないからだ。アギトの言葉は私を壊す……だがその槌は振り卸させない。

「「「……」」」

ん？　親衛隊から反応が無い。ここは仕切直しの場面。言葉に続いて叫びを上げるなどして、気持ちを少なからず奴等程度まで上げないといけない。
なのに、誰も続く奴はいない。この程度の言葉じゃ、動揺を隠しきれなかったと言うことか？　すると前方のアギトが、さっきの私の言葉の一部を伐採した。

「私達……ガイエン、今お前確かそう言ったな？」
「それが一体なんだ！」

私は気丈に振る舞い、長剣をアギトへと向ける。そんなワンフレーズにも満たない一言……誰もが口に出すだろう。

「アイリ様！　アギト様！」
「やってくれたね。ようやく親衛隊も大人しくなった」
「みなさん、怪我は大丈夫ですか？　私とピクが治しますよ」

親衛隊と交戦してたアギトの仲間共がそちらに集っていく。戦気

を無くした親衛隊に構う必要はないと判断でもしたか……それにしても、奴等はあれだけの戦力だったのに数が変わってない。
聖典を無くしたセラ達だけだったなら、時間は掛かっても全滅位まで行ける戦力だった筈だ。なのに実際はこちらが数を減らされてる。

加護を無くしても条件はそれ以上だった筈なのにだ。数の利があった。それを凌駕するほどの気持ちと、そして増援があったと言う事か。
あのモブリ……私の視線はあの中で唯一、膝丈位の奴に向く。私達エルフから見たら見下すだけの存在。

だがもしも、今の状況を作り出せたイレギュラーがあったとしたら、あのモブリ以外に考えられない。その他に加わった者なんていないんだから。
アギトの周りに集った仲間……そう、仲間とはああ言うのを言うんだ。私は戦闘の後でも……誰もがボロボロの筈でも……それでも集うだけで笑顔を取り戻して行くアイツ等を見てそう思った。

（何もかもが違うんだ……私達と、お前達とは）

違う……それで良いはずなのに、何故かその光景が眩しく見える。私が望んで、目指した筈の場所とは違うのに、何で羨む必要がある？
幾ら潰しても、人が集うアギト。なのに私はと言うと……たった一人。周りには誰もいない。

【一人、それの何が悪い？　強者はたった一人で歩むものだろう。お前は何に成りたいんだ？　それは王だろ。馴れ合いも慰めも、そんな物はアイツ等の様な弱者にこそふさわしい。

お前は違う】

またまた頭で声が響いて来た。何なんだこれは？　まるで自分の中に、何かが入るようなそんな不気味さを感じる。

だけどそんな訳……きっとこの声は、自分の自分に対する声……そうじゃないかと思う。

（違う……）

それで良いはず何だ。なのに何で、こんなにもきらびやかにあそこが見えるんだ。頭に響く声のせいか、頭の中に黒い渦が広がっていく気がする。

だけどそれは……

「なあガイエン。そんな羨ましそうな顔で睨むなよ。言ったはずだぜ俺はさ……お前も掴んでるって」

「何を知った風な事をぬけぬけと！　だからそれが間違いと言ってるだろアギト！　どこからそんな自信が来る？　他人の事など、しょせんは分からぬと言うのにだ！

お前はただ……自分の考えを押しつけてるだけに過ぎない。私は違う……お前達とはちがっ――」

言葉が切れた。それは何故か……その答えは目の前に立ちふさがってる。見慣れた白の鎧がそこにある……だから私の言葉は最後まで紡げ無かった。

「分かってます。ガイエン様はあんな奴等とは違う。それは我々とも……ずっとそう思ってました。それで良いし、そうでなければ行けない……だけどすみません。

返せる言葉が我々には無かったんです。それでも嬉しかったから

……【私達】と言ってくれた事が」

その瞬間、同じ光がここにもあるような気がした。そんな訳無いし、あっても理想とは違うからいらない筈。だけど妙に、私には親衛隊の言葉がどこかに染みる様な気がした。

「まだ終わってません！！　私達は最後まで貴方に付いていきます！　さあ、あの負け犬に分からせましょう！！」

「ガイエン様！」

「ガイエン様！！」

口々に高鳴るそんな言葉。やっぱり……どんどんと奥の方から染みてくる。真っ黒だった自分の中の何かが、溢れるそれに浸食されていく。

今の私は一体どんな顔をしてるのだろうか。とてもじゃないが、鏡で顔を見る気にはなれない。こんな関係を築いた気は無かった……だけどどうして、彼らは私の前に立つ？

利用した筈だ。言いように使った筈だ……それなのに。

「お前達……まだ勝てると思うか？」

どうして……何て聞けなかった。それは口に出してはいけない気がした。上という部分に立ってる者の責任かプライドか……それを言ったら、この言葉も大概かも知れないか。

だけど何か聞かずにはいられなかった。いや、この行動は今まで駒としてきたこいつらにしてみれば当然かもしれない。

だが、その意味はきっと違う。こんな風に言葉をかけられた事があったか？　こんな風に、親衛隊の背中を見ることがあっただろうか？　それらは全て初めてだ。

そんな中、私の言葉に親衛隊の一人が返してきた。

「勝てるでしょう。何を迷う必要がありましょうか。我々は貴方がそう言うなら信じれますよ。だって貴方はそんな言葉を通してきた。そして我々は、貴方という人だからこそ、付いて行ってるんです。それは初めからそうですよ。我々は貴方だからこそ、その野望をここまで見れてる。

惚れてるんです貴方という人に我々は。だから信じます。信じれるんです」

「くっ……」

何も分かって無かったのは私の方……そう思った。アギトの言葉……あれはやはり正しかったのかも知れない。本人よりも他人を理解するなんて、あり得る筈ないのに……だけどアイツは、これが分かってたんだろうか。

私がこんなにも……この親衛隊の言葉に心揺さぶられてる事を。私がこんなにも……この暖かさを心地よいと思ってる事をだ。

いつ以来だろうか……この感じ。一年前、アギトやアイリと居たとき？　それとも確かに似てる……だけどまだまだそこには及ばないかも知れない。

でも、確実に空気は違う。張りつめた糸で統制されてた筈の親衛隊と私との関係が、今は少なくとも感じれない。こんなに彼らを近くに感じたのは初めてだ。

この一年間、ずっと近くにいたはずなのにだ。親衛隊はただただ前を向き続けてる。そこはもしかしたら、アギト達とはやっぱり違う所。だけど私にはそれが見える様だった。

アギトが言った繋がり……そんな物がだ。彼らの背中から伸びてる光の線。それは私の片腕の中に集まってる。そう、私はちゃんと

掴んでたんだ。

欲しかった物は……こんな物じゃない。こんな物じゃない……筈なのに……投げ捨てようとはどうしても思えない。

「私も……あの天才（バカ）の事は言えないな」

欲しかった物……それはこれなのか？　やっぱり自分でもイマイチ分からない。だけど少しだけ、納得出来る物はあったりする。

他者との繋がり……私はあの小学時代で本当に信じる事をしなくなった。だけど高校での出会いで、それを多分思い出した。

あの頃は暖かく楽しい物だった。だけどそれもたった二年。早くに無くしたそれを、私はずっと追いかけてたのかも知れない。

誰かが代われるなんて思ってない癖にさ。だけどリアルでは夢に潰れ、社会に捨てられた。そんな中で、もう二度とあんな時間は作れない……そう悟ったのかも。

そんな時、当夜が作ったＬＲＯが発売された。そこにアイツは居なくても、真っ白な世界でなら、もう一度夢を見れて、手に出来ると思った。

というか、もうここにしか無かった。自分を賭ける場所はさ。それにアイツが作った世界……そこはきっと、いつか三人で話した場所の筈だったからだ。

だけど自分を変えて、パーティーを組んでも、それは一時的でしかなかった。偽物……そういう思いが心のどこかであったからだ。

だけど少なくとも、同じエルフにはそんな抵抗感もさほど無かった。それなら何でも出来るＬＲＯ……考える事は自然と決まる。

（――ってあれ？）

頭の回想が不意に止まる。それは掘り出した物が、いつしか埋もれてた【理由】その物だったからだ。考えた結論はエルフの統一？

それが野望でその理由は手にしたかったから……あの頃の、温もりを？

「は……はは」

思わず笑いがこぼれてしまう。何だそれ……そんな理由か？　大層な事をほざいてた割には、私は寂しかったのか。それは……自覚すると本当に、小さい……そう思う。

与えられた者共に、何も出来なかった私が逃げ込んだ道……それがＬＲＯだった事は認めよう。だけど求めてた物まで、こんな曖昧で儚い物だったなんて。

私の様子をみてか、アギトが再び口を開く。

「その笑いは何だ？　気付いたって事か？　自分の本心にさ」

「ガイエン！　私達だってちゃんと繋がってる……その筈だよね」

そう言って手を伸ばしたのはアイリ。彼女は私に見えてる物が分かってる様にその手を広げて前に出す。伸びてる光の糸……それは気付くと、どうやら私の手の中にあるようだ。

放した筈で、離されたと思ってた。だけどまだ……この手にはそれが残ってる。繋がり……リアルで出来ず、諦めた物。向こうでもここでも、いつの間にか口に出してた事は、大義名分だったのか。

与えられた者共を倒したかったのと、この世界を自分色に染めたかったの……それらは八つ当たりと、言い訳だったと？

いいや、そんな訳はない。今の私の手にあるこれを含めて……それらはきっと、全部が私何だろう。与えられた奴等へのひがみとも取れる執着と、ＬＲＯという真っ白なキャンバスに自分の色を落としたかったのとそして……今こうやって、否定したくても出来ない繋がりを握りしめる私。

それら全部が、私なんだ。嘘偽りは何一つ無かった。だけど一番は何だったのか……それが自分でもわからなく成ってたのかも知れない。

幼い頃、取り戻せなかった友達だった子との繋がり……全てはそれからで……許せなかったのは与えられた奴等の理不尽だけじゃなく、壊されたそんな繋がり。

私は手の中の光を見つめてその一つに目をやる。きちんと光、アイリとの繋がりだ。

（ん？）

そこでふと気付く。同じ方向に伸びるもう一本の光。それがどこへ伸びてるのか……

「そう、なのかもな。アイリとの繋がりは捨て切らないな。そしてああ、気付いたさ。私の目がいかに見落としてたのかも。

私は……手にしてたんだな。癪だが認めてやろう」

「何だそれ」

ヒネクレた言葉しか返せない私。そんな私を見て、アギトは呆れた様に言い放った。だけどまだだ……いや、だからこそでもある。

「だから癪と言ってるだろう。それに私は結局何も諦めて何か居なかった。見苦しいな……私はいつから地べたを這って進んできたん

だろう。
お前は何で気付いた？　私の事などどうでもいいだろう？」
私は、そんな訳ないと知りつつ言葉を投げかけた。どうでもいいなんて、このお人好しは思ってないんだろう。それはこの光が語ってる。
アイリだけじゃない……この光はアギトとも繋がってるんだ。
「そりゃあ気付くさ。色々酷い事されたし、気に掛けなかったとでも思ってるのか？　それにさ……やっぱり友達だからな。
気付きたくない事にまで気付くさ。お前もそうだったんだろ？」
友達と……やっぱりこいつも言うか。それがまあ聞きたかった訳だ。だけど余計な事まで言ったなこいつ。爽やかな顔でんな事言うからムカつくんだ。
「気付きたくない事か……そうだな私もずっと前にそれに気付いたよ。まあ元々、私が割り込んできた訳だし、動機も不純だ。
それが自然で、しょうがない事だと思ったさ。だからこそ、私は私の目的に専念したんだ。だが、お前がヘタレだったから、余計な欲が生まれたよ」
「ヘタレ！？　お、お前なそんな事言うか？　ここは感動の場面でしめらせろや！！」
確かにアギトの言うことも最もだ。そう言う流れも悪くは無かった。だけど……それは私達っぽくはない。それに……
「何が感動で絞めだ？　まだ何も終わってなどいないぞアギト？」
「は？」
「えっ？　どういう事ガイエン。だってガイエンはもう手に入れた

んでしょう？　だったら終わったんだよ！　私達が戦うことなんてもうないよ！」

私の言葉に、アホな顔を返すしかしないアギトとは違い、アイリは必死にそう訴えた。でも……まだ理由はあるんだ。

それでも止まれない理由がだ。

「いや、ある。私は確かに手にしてた。繋がりって奴を。だけどそれだけじゃない……この世界を欲しいのも、私の本当の望みだ。

そしてそれは今や、私一人の意志では止まれない。私を支えてくれる駒が、これだけ居るのだからだ。そしてアイリ……お前の事も……ここまで来たらガムシャラに成ってやる！」

「それって……」

私の真っ直ぐな瞳に、頬が紅潮するアイリ。確かに一度引いた手を、今度はこちらから伸ばそう。そして癪だが、並ばなければだろう。

アドバンテージは向こうにある。だが、アギトが居なかった二人だけの時間もこちらにある。これを言えれば半々なのか……いや、そんな訳は無いだろう。

だが、もうただ引くだけはダメなんだ。高校の時、黙って引いた。後悔はしないと思い、それでいいと悟ってた筈だった。

でも思わない事は無かった。知っておいて位欲しかった。私はいつだって後から後から後悔してる。

だからもう間違いたくなくて、手にした繋がりが……ＬＲＯで生まれ変わった自分が言わせてくれる。

「アイリ、私にはお前が必要だ！　迷惑だろう……だが、もう無理

なんだ！　私は欲張りで、諦めもやっぱり悪い。二回も好きな女を、ただ黙って取られるなんて許せるかよ！！
だから私は、お前が欲しい！」

月の無い夜の闇は深く広い……だけど私の心は春の蒼天よりも澄み渡ってた。人生で初めての告白。誰もがきっと驚いてた。
だけどそんな中、一人笑ってた奴が居る。それは紛れもなくアギト。私の天敵だ。それは何だか嬉しそうに見える。

「ようやくか。色々吹っ切れたようだなガイエン？　まあそれでもアイリは渡さないけどな！」
「言ってろアギト。ここまで来たのなら、私は手にするさ。欲しかったもの、夢見たもの全て！　お前が私にここまで吹っ切らせたんだ。後悔してろ」

私達はそれぞれに、興奮してる仲間を押しとどめて前に出る。そして武器をその場で合わせる。カキィンと響く金属音。

「ちょっと待ってよ二人とも！　何する気？　もういいじゃない」

慌てて入ってくるアイリ。だけどこれだけはそれぞれ譲れない。そしてアイリの言葉に今は意味ない。

「退いてろアイリ。これはお前を賭けた私達の戦いだ。私が勝てばアイリも世界も貰おう。文句は言わせん」

そう言って私はある物をアギトに送る。それを見てアギトは目に炎を灯らせる。

「決闘か。上等だ……決着って訳だな。やらねーよ。アイリも世界

も……やっと手にした繋がりだけで我慢して貰うぜガイエン！」

崩壊するタゼホに決闘のフィールドが薄い膜で形成される。それに押されてアイリは外へ。

「ちょっと！　人を勝手に賞品にしといて何よ！！」

そんな声が聞こえるが、もう私達の戦いは止められない。地面を蹴って同時に飛び出る。槍と長剣がぶつかり、交差し、火花を散らす。

不思議だった……もう腕を動かすのも辛いのに、この一瞬一瞬がもっとずっと続けばいいのに……そう願ってた。そして――――

――――私は負けた。

アギトの赤くたぎる炎の槍が私を貫いた。それで決着だ。地面に倒れて、だけど清々しい。今まで背負ってた物が夜へと溶けて行くようだ。

「すまん……みんな」

涙を流す親衛隊にそう言った。だけど誰も責めはしなかったよ。そして目の前に来たアギトが手を差し出す。それを私は素直に取れる……その筈だった。

夜の闇に、その扉が開くまでは。そしてその扉から現れるのは……

「シクラ！」

「あらら～、な～んて無様な格好。だけど良いの。君の役目は十分

に果たしてくれたから☆」

その瞬間、私以外の誰もが吹き飛んだ。そして目の前に降り立つシクラ。そして首を掴んで持ち上げられて、奴は笑う。

「あはは世界？　君にそんな器はないわ。さようなら。君は良い駒だった☆」

その瞬間、私の胸に何かが刺さる。視界が狭まり、暗く成っていく。

「さあ、お姫様がお待ちよ」

そんな言葉と共に、私は空に開いた扉へと誘われる。だけどその渦が招いてるのは私だけじゃない。その場の全ての物をあの扉は求めてた。

さよなら、ヒーロー（後書き）

第百五十五話です。
これでようやく三人の関係に決着がつきました。なんて長かったんだろう！　ここまで来るのには本当に苦労しました。ああ、でも気が気じゃない現状が起こってしまってどうなるのやらですね。
次回からはアルテミナス編～終章～と行言った所です。どうなるのかお楽しみに！！
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではまたの出会いに向けて頑張ります。

夜空の上で（前書き）

巨大な扉に吸い込まれた僕達は、光の空間を抗えない力で進まされる。この先に何が有るのか……そんなの分かりようもないけど、きっとこの先がこの戦いの最後ごの戦いの場だとは何となく思った。

そして扉から放り出された先は空の上。そしてそれはどうやら僕達だけじゃ無かった様だ。

夜空の上で

「ぬあああああああああああああああああ！！」

流れる光の中、僕はそんな叫びを上げていた。あらがえない力、それが僕達をどこかへ誘ってる。何なんだこれ？

確かに「セツリを追いかける」そう誓ったから、別段困る訳でもないけど、こういう絶対的な物は肌に合わないんだ。

それにやっぱり叫んでるのは僕だけじゃない。周りを見ると、リウレットやその他諸々も、結構同じ様に叫んでる。

訳がわからないのは誰もが同じということだ。状況を説明すると、『楽園』に居た僕達は、そこにあった巨大な扉に吸い込まれた訳だ。

もの凄い勢いだったからさ、掃除機に吸い込まれていくゴミの気持ちが少しわかったよ。つまりはここはあの扉の内側な訳なんだ。

そして僕達は今も、その力に寄ってこうやって、変な空間を流れてる訳だ。何なんだろう……見た感じは違うが、ドラ〇もんに出てくるタイムマシンの空間にちょい似てる。

僕達は時間を遡ってる訳じゃないだろうから、時計が歪んだりしてないけど、周りには無数の光の粒……金平糖の様な物が散らばってるんだ。

どこに誘ってるのかは分からないが……ここは多分、セツリも通ったんだろう。なら今、あらがえない力で引っ張られてる先には……もしかしたらアイツがいるのかも知れない。

その可能性は絶対に０じゃないだろう。同じ扉の中に消えていっ

たんだから。大絶叫と共に、そんな期待も僅かに胸の中にあった。
すると遠くの空間に光の線が入るのが見えた。それは何だか見覚えがある感じだ。丁度、僕達を吸い込んだあの扉が開く時にも、隙間から同じ様な光がこぼれてた気がする。
もしかしたら、あそこが終着点？　そんな僕の読みはどうやら当たってた。どんどんと僕達はその光の線が入った場所に近づいていってる。

まるでそう、吸い出される様にだ。次第に線だった光が面に成っていってる。それもやはり、楽園で見た扉が徐々に開いていく時の感じに似てた。
扉と扉同士が繋がってる……そんなイメージの移動方法なのかも。ならあの光はどこかで扉が開いてるんだろうな。それはＬＲＯのどこかなのか……それとも、柊達の様な裏側か……不安は尽きないな。

みんなもきっとそうなんだろう。柊に戦う気は無いみただが、だからってこれで終わり……な、訳ない。この出来事は、まだ畳むには早いんだ。
僕は光の面に吸い込まれる直前まで、そいつの背中を見据えてた。一番前で、馴れた様にこの海を泳いでた柊、その華奢な背中を。

するとまあ、得意の何かを含んだような笑みを返された。光の面に、先に消えていく直前でさ。それが何を意味してるのか……確かめる間もなく、僕達も光の面へと入ってく。

「うあっ……」

目を閉じた筈なのに、強烈な光が瞼を通ってまで眼球を襲う。そして不意に暗さが戻った時、僕はその異常に気づいた。
それは――

（受ける風が違う？）

――って事だ。今までは前方からかき分ける様に風を受けてた。だけど今僕は、なぜか下からその風を猛烈に感じてる。

パッ――（瞳を開く）

「うおいおおおおおおおおおお落ちてええええるううう！！？？」

まさしくその叫びの通りに僕は落ちてた。地面に向かって真っ逆様。これは冗談に成らない高さだ。

「あああの野郎！　今直ぐに殺そうとしてんじゃねーか！！」

完璧に騙された。今の私じゃ無理的な事を言ってた癖に、やること残虐過ぎだろあの女！　――って、そう言えば柊は？

アイツは僕達よりも先にここに出た筈だ。後ろから次々に聞こえてくる絶叫は取りあえず置いといて柊を探す。

するといた。

柊はどうやら、ミニチュア版みたいな氷の羽を生やして優雅に降りて行ってる。なんて便利な物を持ってるんだ。どう手を伸ばしてもアイツには届きそうもない。

手を下さずに僕を殺す気……な訳ないよな。寧ろアイツはこの程度で僕が死ぬわけ無いと思ってるんじゃ無いだろうか。

アイツがプライド高いのは先の戦いで分かってるし、嘘とか付くような奴でもない。シクラとはタイプが違うからな。

気にも止めずに降りていくのは、多分変な自信の現れだ。

「まったく……迷惑以外の何でもないな」

誰も彼もが、自分達みたいな裏技を持ってると思うなよ。だけど言っても届きはしないだろう。

柊はもう、点の様に小さくなってる。地面も目の前だろう。

空に開いた巨大な扉。その光が僕達を照らしてて、暗い夜の地面は良く見えない。でも遙か下方には町並みがあるのはわかる。

ＬＲＯの町は真っ暗にはならないからな。まあまだまともな、ＬＲＯの部分にいるのか怪しいところだけど。でも見覚えのある形……の様な気がし無くもない。

だけどそれもよりも問題なのは……

（なんだ？　あの地面に沢山広がってる赤い光は？）

なんだか不気味に見えるその光は、消えたり現れたりしてる。あそこにいるのは生き物なのだろうか？　嫌な空気が漂ってる気がした。

そして僕が地面に目を向けてると、一際背後で光が増した。

「うん？」

何が起きたのか確かめようと、この猛烈な風に流す様に体を回す。そして態勢を入れ替えた時、不意に僕の体に影が落ちたーーと思ったら、何かが降ってきやがった。

「ぐあ！　てーな、何だこれ！　どきやがれ！！」

「あああああああああ！！　死ぬ死ぬ！！　あの野郎何しやがった！！」

耳元に届いたお互いの声に、ほんの刹那の間僕達は考えた。そして簡単に出来てきた答えがこれだ！

「お前アギトか！？　重いんだよこのデカ物！！」

「てめえスオウか！？　何で俺たちが一緒に夜空をダイブしてるのか説明しろ！！」

知るか……と言いたいが、答えはきっと視線の先の空にある。そこにはもう一つの扉が現れてた。てかこいつ、自分がどこから放り出されたか、それすらも分かってないのかよ。

「ああ～もう！　絡まってくんなよ暑苦しい！　どうやらお前達も僕達と同じようにあの扉から吐き出された口だろ。

向こうで扉に吸い込まれたんじゃないのかよ？　そこら辺、覚えて無いのか？」

「扉……そうだ……あの時……」

青ざめるアギトの顔。いきなり空の上だったショックで飛んでた何かが戻ってきた様な感じ。吸い込まれる事さえも気に出来ない程の事でもあったのだろうか？

そしてポツリと……

「ガイエン……」

と呟いた。その瞬間、見開いた瞳で僕の体を土台にでもするかの様にして、体を起こし周りを見始めるアギト。そして狂った様にブツブツと何か言ってる。

「アイツは……あのクソ野郎はどこだ？　よくも……よくもよくもよくもよくも……ガイエンを！　大っ嫌いだけどなあんな奴……そ

れでも……やっとだったんだ……やっと！！　っつ……」

それ以上は言葉に成らないのか、聞こえてこない。だけど扉の光に、何かが照らされ見えたのは確かだった。水滴の様な何か……ただの夜空だったら、きっと絶対に見つけれなかったであろうその滴。

それが事の重大さを語ってる気がした。こいつがここまで取り乱すんだ……尋常じゃない。しょうがないから文句は言わずに、僕も周りに視線を巡らせる。

どうやら、アギト達も合流しただけあってそれなりのプレイヤーが、パラシュート無しのスカイダイビングに興じてる様だ。

至る所から叫び声が聞こえる。あの扉の光が届く範囲ならまだ顔が分かるけど、次第に光が萎んできてた。全員が出終わったから、扉が閉まり始めたのかもしれない。

これじゃあ、探すたってな……てかそういう状況じゃきっとない……いいや絶対ない。確かガイエンってあのいけ好かない奴だ。

僕は殆ど知らないけど、印象的にそんな奴。てか確か、アギトはそのガイエンと決着をつけてたはずじゃ無いのか？　色々と分からない。アギトの様子からして、相当切迫してるのは伝わるけどね。

けれど実際、それは僕達もそうなんだ。刻々と地面は迫ってきてる。このままじゃ、例え見つけても何か出来る前に終わってもおかしくない。

それは最悪だ。助ける助けないの以前の問題。目的があるなら、死ぬわけにはいかない……それが大前提。だけど今のアギトはどうやらそれも見えてない。

最初はただ空に放り出されてパニクって、その後思い出した怒りで周りを忘れてる。そしてこういう時に限って、あの女は嫌味った

らしく現れるんだ。探す必要何か無く、面白そうな方向へ向かう様に、常に周りをかき乱す女……それがシクラ。

「あれ～何だか人数多いと思ったら、スオウ君じゃん☆　君の役目はあそこで終わる筈だったのに、こんな所で何してるの？」

何してるときたよコイツ。すっげームカつく。誰のせいでこんな大変な思いしてると思ってるわけ？　それは確実に目の前のコイツと、妹の柊のせいだろうが！　――とまあ言いたい。

だけどここで僕まで取り乱すともうゴチャゴチャだ。どうにも出来ずに地面に埋まりそうだから我慢するしかない。

てかコイツ、今どこから現れた？　周り見たって、落ちてくる輩しか居なかったのに、一瞬でこんな近くに……掴めない笑顔でヘラヘラと。

「僕はまだ、終わるわけにはいかない！」

取り合えず伝えた事は伝えておく。すると一瞬、アホの様な笑顔の中に、妖しい光が見えた気がした。コイツのこのアホさは演技だろうと思ってるから驚きはしないけど、あの一瞬でもシクラからは妙な冷たさを感じた。

変な不安を心の隅に植え付ける様な……そんな感じの僅かな物。だけどその一瞬の変わりようが怖いんだ。

そして落ちて行く中で僕は気付いた。シクラが無造作にぶら下げてる荷物にだ。それはどこかで見た鎧……でも髪の色も肌も何か違う。

だけど上にのし掛かってるアギトの表情を見れば一目瞭然だ。全

身をワナワナと震わせて、形相をして歯を食いしばってるそれは、怒りを抑えてると言うよりもため込んでる……そんな感じだ。
間違いない。こいつがガイエンだろう。そして更に、僕はあることに気付く。

（あれは……血？）

そんなまさか……そう思ったけど、奴の胸から広がってる黒い染みは、そうとしか思えなかった。でも……そうだとしたら今のガイエンはヤバいだろう。
どこまでシンクロ率が上がってるのかは分からないけど、あれだけ血を流して大丈夫な訳がない。どういう理屈で、リアルとＬＲＯの死を直結させてるのかは良く分からないけど、だけどそれを感じた事が僕にはある。

だからあのＨＰであの傷はヤバいよ。ヤバ過ぎだ。ある程度ＨＰがある状態なら、多少無茶やってもいきなり死ぬなんてあり得ないだろうけど……今まで感じてきた経験から言うと、ＨＰが減るごとにリアルが近づく……そんな感覚があるんだ。
だからあれは……

「あははは☆　やっぱりスオウ君はどこかひと味違っちゃうね☆
私もちょっと惹かれるな～。ヒイちゃんみたいに味見してみようかな～☆
コイツと違って役目を終えないスオウ君に、私がご褒美でもいいかもね～☆」

こっちの深刻差なんて欠片も気にしてない風のシクラ。実際コイツはガイエンの事なんて気になんてしてないんだろう。それに役目って……意味深なその言葉が僕は気になる。

つまりはシクラがガイエンをこうしてる事は、その役目ってのに関係があるからだろうから。それに僕の役目って何だ？　だけどそれ以上の言葉を許さない奴がここにいた。

「ガイエンをっ……ガイエンを！！　放しやがれ！！」

そう叫んだアギトは炎を纏わせた槍を勢い良く横に凪いだ。それだけの距離にシクラはいた。だけどシクラは空中で自在に動ける様で、ヒラリと回って距離を取る。

そしてこっちは、アギトがおもいっきり槍を振るものだから態勢がグチャグチャだ。ただでさえ足場なんて無いのに、上下が入れ替わり立ち替わりで世界が回ってる。

「うあああああああ、このバカ野郎！」

「しっかり支えてろ、今度こそアイツに俺の槍を届かせる！！　届かせる！！」

こんな状態でなおもアギトは血走った目でシクラを見据えてた。よっぽど……なんだな。僕はそう思った。

「ああ～もう、いきなり攻撃するなんて酷くない？　もうビックリ、超ビックリしちゃったよ☆　まあそんな炎、掠りもしないし掠ったところで私には効きもしないけどね☆

分を弁えなさいよ。君もちょ～～～とは面白かったけど、やっぱり君の親友の方が遊べそうよね☆　それとね、コイツは元からこうする気だったから怒らないでよ☆」

「――っつ！！　きっさまあ！！」

激高するアギト。だけどそれは当然だ。シクラのあの言い方で怒らない訳ない。いや、あれはワザとだろう。何か妙に感に障る言い

方をしてたもん。
それは余裕の現れで、楽しみでも見つけようとかしてる感じなのかも知れない。シクラとしてはさ。だけどそれは人として・・やっぱりムカッとくるよ。

アギトの気持ちだって分かる。ガイエンを誰か僕がもっと親しい人物に入れ替えれば、きっと同じ様に僕も成るだろう。
でもここじゃあ余りにも不利すぎる。空中と言うフィールドは僕達には無いんだ。だけどそれでもアギトは諦めない。

離れたシクラの方へ槍を構えて、炎が更にいきり立つ。何やろうとしてるのかは分からないけど、それ逆転出来るとは僕にはどうしても思えない。
だからアギトが何かをする前に、僕は炎がたぎる槍を掴み叫ぶ。

「やめろアギト！！」
「邪魔すんなスオウ！！　アイツをあのままにしておけるか！！こんな事に成るために頑張ったんじゃ無いんだよ！！　俺は……俺は！！」

アギトの思いに呼応するように、炎が僕の腕を焼こうとしてる。幾ら仲間でＨＰが減らないと言っても、深くＬＲＯと繋がってる僕はそれはもう痛い。
マジ半端無い位に。だけど行かせる訳にはいかない。だってあんなの挑発だろ。シクラが反撃しようと思えば、この場で僕達全員を倒す事だって出来そうだ。

大袈裟なんかじゃなくて、柊という同じ存在の力を目の当たりにした僕だからわかる。その位の力を持ってる奴らなんだ。
こんな不利な状況で行かせたらどうなるか……少なくとも最高の

想像は出来ない。だからどんなに痛くて熱くても、離す事は出来ないな。

「……っつ！　状況をよく見ろ。こんな空の上で、アイツと並べれるとでも思ってるのか？　言っとくけどな……アイツ等は反則のオンパレードだぞ！

軽い気持ちで行ったら、お前もガイエンの二の舞だ！！　そんな事にだけはしたくない！　助けたいんだろ？　ならまずは落ち着けよ。チャンスはある。アイツ等がここに僕達を連れてきたんだ。

用があるんだろ？　ならケリは地上でつけようぜ」

僕は視線を下に送る。そこには沢山のプレイヤーと、大量のモンスターが見えた。それだけ地上に近づいてるって事だろう……ってか、ある意味見たくない光景が広がってた気がするな。

だけどそんな思いは顔に出さずにアギトを見る。でもアギトはずっとシクラの方を向いたままだったようだ。

（この野郎！！）

と言いたい。人が折角良い案を示してやってるのに見もしないとはどういう了見だ。てかそろそろマジで手がヤバい。消し炭に成りそうだ。感覚が無くなってきたぞ。

取り合えずこの炎を引っ込めようぜ。うんそれがきっと良い。

「俺は……」

ポツリとそんな声が耳に届く。目まぐるしく位置が変わるから、今は顔が見えない。だけどその声は、少しだけ平静を取り戻してる様にも聞こえた。

これはいけるかも知れない……そう思った。

「俺は、何だよ？」

言葉を促す僕。実際そろそろ、どうやって地上に降りるか真剣に考えないと危ない。だから少しは落ち着いたの確認した――――――

「俺は！　飛ぶ！！」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおお！？」

何言ってるのアギトの奴？　てかいきなり炎たぎり過ぎ。手だけじゃなく、肩口まで消し炭に成るよこれ！　どうやらアギトは、この炎を推進力にでもする気の様だ。

確かにこれだけの勢いならどうにか前には進めそうだが、先にも言ったとおりそんな次元の相手じゃない。アイツはアホに見えるけど、この戦いを仕組んだ張本人なんだ。

きっと想像以上に腹黒い。だけど今のアギトはそんな事どうでもいいんだろう。友達がピンチなんだ……駆けつける理由なんて、それだけで十分な筈だ。

そんなの分かってる……分かってるけど……

「――って、超あっちーよ！！　熱すぎだろ！！　つうか痛い痛い！！　何か肉の焼ける臭いがするわ！！　お前は親友を丸焼けにする気か！？」

「なら離せよスオウ！！　俺が助けなくちゃダメなんだ！！　アイツは俺が！！」

それはつまり僕はセツリを助けないといけない事と同義なのか？

てか、コイツ僕が絶対に手を離すと思ってるよな。

そういうことか……コイツを止める良い方法が思いついた。僕は更にもう一方の腕も炎の中に突っ込んでやる。

「ぬあああああああっちイイイイイ！！」

ジュウジュウと肉を焼いたときの音が脳に嫌に響いて来やがる。不味いな、これからは焼き肉とか食べれそうに無い。同情しちまうよ。豚さんや牛さんや鳥さんにさ。

これは辛い……だけど、行かせる訳には行かないんだ！　本当に助ける為に、ここでアギトが飛び出しちゃダメなんだ！！

「お前！　バカか！？　何やってる！？」

「何って……見たらわかんだろ？　お前に燃やされてやってんだよ……へへ」

痛すぎで自分でもおかしく成ってる……そう思った。だけどこれしか無いだろ。今のアギトを止めるには。目を見開くアギトは、炎が次第に浸食してる僕を見てどう思ってるんだろう。

別にどっちかを選ばせたい訳じゃない。そんなキモい事は望んでもいないし……でも、今のままじゃダメだと分かる。そんな甘い相手じゃないんだから。

僕は炎に包まれるも、強くしっかりと槍を掴み言い放つ。もの凄くヤバそうな汗が滝の様に出てるけど気にはしない。

それは僕にとっても見据えた先のコイツは親友だからだ。

「僕は放さない……絶対だ。親友を燃やし尽くす気があるのなら、やってみろよアギト！！」

僕の言葉を受けて、アギトは狼狽えた。仰け反る様に少しだけ成

った。そして視線が僕とその向こうに居るであろうシクラとを行き来してる。

「……っつ！！」

そんな声に成らない声が漏れた瞬間・・たぎっていた炎が消えていった。いろんな感情を押さえ込んで、ようやく止まってくれた様だ。

「お前……バカか。自分がどういう状況かわかってるだろ。それなのに……」

「はっ、別にアギトが気に病む事じゃない。僕が勝手に燃えただけだ」

「はは、そーかよ。なら……もう二度とやるな」

そうアギトは一度も顔をまともに見せない。人の勇士をもっとちゃんと見て欲しい物だ。たく……すると後ろから気に障る笑い声が聞こえてきた。

「あはははは☆　やっぱりスオウ君は最ッ高だね☆　ほんと予測もつかないよ。やっぱり君と遊ぶのは楽しい☆　そうだね～下でまた会えるよ☆

決着……かはわからないけど、もっときっと面白い事待ってるから☆　それにあの子もいる。ご褒美に会わせてあげるよ☆」

あの子？　それはつまりセツリ！　アイツもここに？　それは益々死ぬわけにはいかない。

「ぜってーだぞ！！」

「約束ね☆」

ムカつく事にその笑顔は分かっててても魅力的だ。遠ざかるシクラ。そして近づく地上。さあもう一踏ん張り行ってみよう。大丈夫、僕等は一人じゃない。

どんな状況だって、仲間達と乗り切れない事なんて無いんだ。月のない夜の下、闇の覆う世界を許さない為の戦いが、僕達のこの国での最終決戦だ。

夜空の上で（後書き）

第百五十六話です。
ようやくスオウとアギトの合流です。これで入れ替わりに書く事も無くなって、スムーズに進む筈です。さてみんなが投げ出された場所はどこなのか。まあこの戦いは、ここで決着付けなきゃねって感じですよ。
てな訳で次回は日曜日に上げます。それではまた。

集いし聖地（前書き）

空からの落下を抑える為に僕達は頭を巡らせる。結論としては、魔法しかなかった。頼るのはシルクちゃん達魔法使い組。そして地面に何とかおりたって確認した場所はやっぱりそうだ。

アギト達の始まり、クリスタルと騎士の国……そうここはアルテミナス。

集いし聖地

迫る地面に吹きすさぶ風、いきがってみたのはいいものの、このままじゃ地面に叩きつけられる事は確実だ。僕にもアギトにも、この状況をどうにか出来るスキルはありそうにないからな。

少し生暖かく感じる風は、僕がさっきまで冷たい冷気を浴び続けて来てた影響なのか、それとも下のせいなのかな。

きっと下は戦ってるんだ。というかここまで落ちてきてようやく気付いたけど、ここは・・

「おいスオウ！　どうすんだよ！？」

折角重要な事を言おうとしたら、至近距離に野郎の顔が……スッゲーげんなりするよ。必死なのは分かるけど、もう少し離れて欲しい。

アギトってただでさえ暑苦しいんだ。炎使って、デカくて赤いからだと思う。

「あ～もう！　ウザったいなお前！！　僕やお前にはどうにも出来ないだろ。ああ、良い案あるや。取り合えずお前僕のクッションになれよ」

「し・ん・ゆ・う！！　そうだったよな俺達！？」

もの凄い勢いで首を揺さぶられる僕。この状況で何やってくれるのコイツ。少し涙目になってるのは見ない事にしとこう……気持ち悪いから。

てか実際、遊んでる場合じゃない。何度も言うけど、このまま落ちたら終わりだ。だけど余り緊迫感が自分的に不足してるのか……

だからこんな無駄なやり取りをしてしまうんだと思う。
つまりはそこにありそうなんだよね。この状況を打破する策が。
「おいスオウ！　何か言えよ！！」
何でアギトの奴はこんなに必死なのか……てか考えの邪魔をしないで欲しい。お前だってここで死ぬわけには行かないんだろう。
「あーもう！　何でお前がそんな情けなく成ってるんだよ？　ここでは僕に背中を見せ続けるんじゃ無かったのか？　そうじゃないアギトなら本気で……」
言葉が途中で止まる。本気で・・何だ？　いや、それよりも僕は気付いたかも知れない。緊迫感が余り沸いてこない訳。
「おい、本気で何だよ？　そんなの認めねーぞ！！」
何か目の前でアギトが言ってるけど、やっぱりそうかも知れない。コイツと僕は、今もしかして同じ位置にいるかも。
それが原因じゃないか？　何だかさ、ここまで来たんだ。そう思えるじゃないか。だって僕がＬＲＯを始めてから、こいつはずっと前に居たわけで……それと同じ所にまで来た感じがすれば、成長の証みたいな。
でももっと単純な物にも気付いたよ。単にアギトが居るからってだけもあるかも知れない。無事な姿を見たら安心したし、コイツとなら……そう無条件で思えるからな。
口には絶対に出さないけど。他の誰にも無い、特殊な信頼感……多分そんなのがあるよ。そしてさ、今ここには二人での出会いが集まってる訳だ。

僕は上の方を見る。そこにはテッケンさんもシルクちゃんも、セラもリルレットもそしてアイリも居るよ。僕とアギトの方、それぞれで助けてくれたみんなが居る。てか、親衛隊の姿まで見える。
その繋がりって奴がさ、僕の危機感を和らげてると思う。流石にアギトだけとは物理的に限界近かったけど、いつの間にかこれだけの仲間……そう呼べるみんなが居るんだ。

限界？　そんなもの、みんなで橋を架ければ渡れそうじゃん。僕は上を見つめたままでアギトに言ってやったよ。

「本気で親友辞めるから、取り合えずそれが嫌なら上を見てみろよ」
「上？」

そう言って上を仰ぐアギト。すると今始めて気付いた様な顔をしやがった。まあ、ガイエンの事で一杯一杯だったんだろう。
落ちていく中で、いろんな事が頭からも落ちてたって訳だ。みんなの存在忘れてるなんてさ。僕も余りアギトの事は言えないけど……みんなも何だかそれぞれにパニクってるし、全員同罪か。

流石にＬＲＯでもこういうシチュエーションは希なのかも知れない。みんな普通に強大なモンスターには挑めるのに、揃いも揃って空の上でビビるんだからさ。

「そうか……アイリ達も一緒に来てたんだよな」

そんな事を今更言うアギト。これで少しはいつものアギトに戻るだろう。何てたってアイリには情けない姿は見せたくないだろうから。

「って！　余計ダメだろ！！　どうにかしないと全員がペシャンコだ！」

全然冷静に成ってないアギト。まあもしかしたら僕も、凄く取り乱してたアギトがいたからこんなに冷静で居られてるのかもしれないんだけど。

誰かが取り乱してるのを見たら、こっちは落ち着くと言う妙な原理ね。それも至近距離だったからかな。でもここで暴れられたらかなわん訳だ。

「落ち着けアギト！　お前を落ち着かせる為に、みんなの存在を思い出させてやったんだぞ！　てか何でその反応に成るんだよ。

僕が期待してたのは、頼もしい仲間達の存在を思い出して、大丈夫！！　そう思う事だったんだ！」

「大丈夫か？」

疑問系で返すアギトに確実に僕はイラッと来たね。

「お前、仲間の何を信頼してんの？　てか親友のどこを信頼してんの？」

「うっ……」

口を紡ぐアギト。そして再びみんなを見上げる。それぞれの恐怖と戦ってるみんな。今は個々だけど、それが集った時の力は、僕よりもコイツの方が分かってる筈だろ。

何てったってＬＲＯでは先輩なんだからさ。

「これだけの信頼できる仲間が集って、俺たちは死ぬと思うか？」

そんな言葉をアギトに投げかける。すると堅く強ばらせてた頬を

緩めて、僅かに口元が上へあがるのが見えた。そしてアギトは言葉を紡ぐ。欲しかった言葉をだ。

「いいや、それはないな」

そう言ったアギトの目はブレてなんか無かった。取り乱してた最中のどこを見てるか分からないソレじゃない。今はちゃんとした目で仲間達を見れてる。

「仲間がいる……確かにそうだな。誰もが信頼出来るし、何でも出来る。そんな気がしてくる」

「なら。さっさと伝えよう。流石にヤバいぞ」

僕はアギトと共に、息を大きく吸った。大声を届かせなくちゃいけないからな。この風がうるさい中でも誰もに届く大声を！

「みんなああ！！　落ち着いて周りを見てろよおお！！　僕たちがあ！！　仲間達が居るはずだろ！！　怖がる事がどこにある！？　僕達にとってこんなのおお！　窮地でも何でもない筈だろ！！？」

届いただろうか？　精一杯叫んで僕は酸欠気味だよ。だけどそこかしこから上がってた悲鳴や叫びは消えた。みんなが周りを認識出来たからだろう。

最初から僕達は心細くなんて無かったんだ。それが分かれば、勇気だってわいてくる。そして次にアギトが叫ぶ。

「シルク！！　いや、魔法が使える奴らは防御系の魔法でも何でも良いから詠唱を頼む！！　魔法が使えない俺達はは成るべく近くに寄るんだ！！」

アギトの声は間近で聞くと大砲の様に感じたよ。これならみんなに届いただろう。最初にシルクちゃんを指定したのは、回復・補助系なら彼女が一番だとアギトは思ってるって事だろう。
それはまあ納得だな。シルクちゃんはさっきまでピクを胸に抱いて震えてたけど、勇気を振り絞って杖を構えてくれてる。

というか、今気付いたけどさ。シルクちゃん一人だけなら、ピクがどうにか出来そうだよな。抱えるんじゃなく、脚でも掴んで飛ばせばいいのに。
だけど彼女はそんな考えには至らない。胸に抱いたピクに勇気を貰う様に詠唱を始めてる。そして他のヒーラー・ソーサラーも全員がそれを始めた。

間に合うかは実際分からない。だけど驚いた事に、親衛隊の中の奴らまで詠唱を始めてくれてるみたいだ。僕達、魔法がカラッキシの組は、神秘の力を操る彼らを信じるしかない。
そしてその最大の補助を実行しなくてはだ。

魔法には効果範囲があるからな。こんなにバラバラに落ちてたんじゃ、誰かが漏れるかも知れない。どういう風な魔法をしてくれるのかは分からないけど、少しでも負担を減らすなら、やっぱり僕達は成るべく固まった方がいいんだ。

「スオウ！」
「おう」

アギトの声で僕達は両手を合わせてスカイダイビングっぽくなる。すると空気抵抗が大きく成って、普通に落ちてるみんなが追いついて来てくれる様に成るはずだ。
すると予想通り、重い奴らが追いついてきた。だけど位置だけは

どうにも出来ないな。僕達は精一杯手を伸ばす位しか出来なくて、落ちてくる方は、必死に泳ぐ。バカみたいだけどさ、こっちは至って真剣だ。

そうやって何グループかが円に成って出来上がる。そして魔法の詠唱をしてる人達は、その円の上に居る形だ。下に行る僕達は踏まれてる。

だけどこれがベストだろう。ついでに言うと僕の上にはシルクちゃんが立ってる。もう後数十メートル位しかないかも知れない。

詠唱の間違いは出来ない。するとその時、変な現象が起こってた。詠唱してるシルクちゃん達の体が光ってる。そっしてその光は僕達にまで伝わってきた。

下から見てる人達には、空に三つの円が浮かび上がってる様に見えただろう。こういう魔法なのか？　とも思ったけど、誰が何の魔法を使うかも分からないのに同じ現象が三つの円で起きる何ておかしい。

だけど今はそれを考えてる場合でもない。

（頼む！！　みんな！！）

そんな風に祈った。目の前に迫る地面がほんの数メートル……そんな時、詠唱を終えた魔法使い達は視線を交わした。

そしてそれぞれの魔法を叫ぶ。複数の声が入り交じって何て言ったのかはよく分からない。だけどその瞬間、地面に光が集う。そしてみんなの懇親の魔法が発動された。

まずは幾重にも重なった網目状の魔法が出てきた。だけどそれを僕達は突き破ってしまう。勢いがありすぎる様だ。次は雲の様な物が視界に現れた。

勢いも少しは削れた筈だし、これで止まるれと僕達は願う。だけどどうやら、想像以上にこの人数を受け止めるんは難しい様だ。

僕達は複数あった雲を突き抜けて地面へと真っ逆様だ。その様子を見た地面の人もモンスターも、空間をぽっかりと開けた様にしてる。

「てか次は！？」

これで終わりなんて訳ないよね？　そう願いたいのは山々だけど、考えてみればさっきのネットも雲も複数出てた。あれを一人一個しか出せなかったとしたら……それだけで終わりそうじゃないか？

最悪の考え。否定の為に、信じて魔法を待つけどない。てか地面は目の前だ。今更遅い！！

「「「うあああああああああああああああああ」」」

地面に向かってきっと全員がそう叫んだだろう。どうにも成らない事がこんな所で起ころうとはだ。地面にぶつかる刹那の瞬間。

僕の目には世界がスローモーションに見えていた。それこそ今なら、この瞬間の誰もの表情を目に焼き付けれただろう。それだけ世界は遅かった。

そして――

「「「ぶっはっ！！？？？」」」

みんなが地面に一瞬埋まって、弾き出された。全員が理解不能でもう一度空へ飛び出した筈だ。そして再び、みんなが地面へと落ちる。

するとやっぱり地面が妙に柔らかい。ボニョニョン、ボニョンボニョンとトランポリンと言うより、プリンに近いかも知れない。
そんな奇妙な地面に僕達はどうやら救われた様だ。

「えっと……これって？」

まさかこの地面だけがこんな柔らかかった・・なんて訳ないだろう。つまりこれも魔法？　一体誰の？　その時、僕の近くで声が聞こえたよ。

「ふう～よかったねピク。上手くいって」
「ピクゥ～！」

そんな一人と一匹の会話。柔らかな地面を押し込んで顔を上げると、バサバサと翼を広げて飛び立つピクと、見取れる程の笑顔のシルクちゃんの姿があった。
てかヤバいよこの演出。命の危機から救われた直後と相成って、スッゲー輝いて見える。ピクのピンク色の羽が舞い落ちるのも凄く良い効果を発揮してた。

「これって貴女が？」

僕が聞こうとしてた事をアイリにとられた。みんなもシルクちゃんに注目してる。すると恥ずかしそうにだけど、にっこり微笑んで答えてくれた。

「はい、勢いが凄かったから普通のじゃダメかも知れなかったので、地面自体をどうにか出来ればどうかなって……上手く言ってよかったです」

うう～ん大人しそうに見えてやっぱりシルクちゃんは侮れない子だ。まさか地面自体に細工が出来るなんて。他のヒーラー・ソーサラーの面々まで驚いてるじゃん。

よく見ると、地面に光る線が走ってる。あれでこの魔法の範囲を決めてるみたいだ。本当にブニュブニュ。確かに地面ならそれ以下はないからな。

「だけどみなさんのおかげで勢いが弱まってたのも良かったんだと思います」

他の人への気遣いも忘れない優しさ。ヤバいねこの子。やっぱり男なら誰でも一度は惚れそうだ。

「何嫌らしい目でシルク様を見てるのよ！」

「ゲフッ！！」

ドガッと脳天にエルボーを決められた。だけど救いは地面は柔らかくて痛くなかった事だな。脳天はスゲー痛いけど、板挟みにされずにすんだ。てか誰が嫌らしい目で見てるだ！

んな訳ないね！

「セラお前な！　いきなり何かましてくれるんだ！！　こっちだってズタボロ何だよ。それにお前には無い癒しがシルクちゃんにはあるんだ。

それは決して嫌らしくない！！　誰だって惹かれるんだよ！！」

この暴力毒舌女め。常々思うけど本当にメイドかよ。メイドの服着た暗殺者だったっけ？　くっそアサシンの方がよっぽど似合ってると思うな。

「！……スオウ君」
「ふふふ……スオウ、言いたいことはそれだけかしら？」
あれ？　何だか二人の反応がおかしいぞ。シルクちゃんは照れた様に顔を赤らめて、セラは額に青筋が浮かんでるような……そう言えば恥ずかしいことも気に障る事も言ったかもな。
それでもセラに怒られる筋合いは無いんだけど。全面対決・・それを覚悟してると、いきなり雄叫びが響く。それも尋常じゃない響きだ。
地面が揺れる様な……そんな地を震わせる叫びがとても長く続きやがる。
「何！？」
「なんだこれ？」
どうやら、一触即発の事態は僕とセラだけじゃ無かったようだ。周りに視線を巡らせてそれがわかった。てか今まで気付かない方がどうかしてた。空中で地上の様子は見てた筈なのにさ……地面に生きて降りれた事で忘れてたよ。
この場所が戦いの場だったって事を。
頭を叩かれる様な叫びの嵐。耳を塞いでみても効果は無い。その音の発生源は直ぐ周りにとても沢山いるようだ。赤い光が夜の闇に無数に光ってやがる。
それは信じられない位の量。
「ここってやっぱりそうだよな？」
「そうみたいね。あの女、とんでもない所へ招待してくれるじゃない」

地面は元の堅さを取り戻し、強固な足場を踏みしめて僕達は奴らを見据える。目が慣れてくると、その姿も鮮明に見えてくる。
間違いない……この叫びと無数の赤い光の正体は、大量のオーク共だ。普通のモンスターとは違い、知能をある程度持ち、集団戦なんかしてくる厄介な奴ら。
それがこれだけ大量に居るとなれば、もう周りの誰もがここがどこなのか気付くはずだ。

「俺達は、アルテミナス側のフィールドに送られたのか」
「て、事はここはアルテミナス軍とモンスター達の戦闘地帯って事ですか？」

アギトとシルクちゃんの言葉に応えたのは、僕達の誰でも無かった。じゃあ軍の中の誰か？　まあ確かにそうなんだけど、それは僕でも聞き覚えのある声だった。

「その通りっす！　ここはアルテミナス門前のフィールドっすよ！　ほら向こうに見えてるっす」

そう言ってそいつが指し示す方をみるとそこには確かに見覚えのある門構えがあった。てかその更に中から突き出てるクリスタル……あれが決定的だ。光明の塔、それはアルテミナスの象徴の巨大なクリスタルだからだ。

あれがあるならここはアルテミナス……間違いない。いや、この状況で納得できる。僕達がタゼホへと向かいだした時、同時にモンスター共の侵攻は、ここ首都アルテミナスへと始まった筈だからだ。だけど確か、もう少し離れた場所で開戦される筈だったんじゃ？

「ノウイ君！　良かった……ちゃんと無事で……ううん無事じゃ無

かったんだよね。だけど……ありがとう。貴女のおかげで私達は戻って来れました」
「いや……そんな。それなら良かったっすアイリ様。言ったじゃないっすか。アイリ様の力に成れたなら本望っすよ」
駆け寄ってきたアイリが鏡から現れたノウイへと頭を下げた。困った顔しながらも、ノウイは照れくさそう。ゴマみたいな目を糸こんにゃくみたいにしてる。
「みなさん、ご無事で何よりっす！！」
それから僕達を一通り見渡してそう言った。すると周りからポツポツとこんな声が聞こえてくる。
「アイリ様？」「本当に？」「おい、あれはアギト様じゃないのか？」「お二人が戻って来てくださったのか？」
何だか周りの軍の皆さんが大層騒ぎ始めたぞ。まだ確信は持ってないみたいだけど、そうか……二人の存在は軍の起爆材に成れるかも知れないな。
そんな中、ノウイへ詰め寄ったのはセラだ。結構必死な顔して言葉を紡ぐ。
「ちょっとノウイ、ここって最終防衛ラインでしょ？　まさかもうここまで侵攻されたって事？」
間近に迫るセラの顔……ノウイは心なしか嬉しそうに見える。だけど聞かれてる事は至って深刻だ。ニヤケそうな顔を必死に整えてノウイも答える。

「えっとっすね。もう自分が戦闘不能でここのゲートクリスタルに戻された時には第二防衛ラインまで突破されてたんす。
敵の数は想像以上で……それに指揮系統もガイエン様がいないと無茶苦茶っす。もっと痛いのは、集まりが悪いんす。どうやらガイエン様の行動に反発してる人達はこの召集に応じてないんす！！
ただでさえ向こうが多いのに……これでもみんな頑張ってるんすよ！！」

ノウイの必死な叫びが夜空に響く。周りをみると、本当に軍のみんなは酷い有様だった。僕達が落ちた場所は丁度最前線か。赤い瞳と黒い鎧で左右が分かれてる。
でもその勢いは一目瞭然だ。見れば劣性なのは本当に直ぐわかる。誰もがボロボロ……でもその顔には僅かな生気が少し戻ってるそんな気もする。
それはもしかしたらアイリの存在かな。

「あれ？　そう言えば親衛隊は居るのにガイエン様はいないっすね？」
「「！！」」

何気ないノウイの一言に、ガイエンの知り合い達は歯を食いしばって下を向いた。その様子に不味いことを聞いた事を直ぐにノウイは気づいたんだろう。
困った顔をテッケンさんに投げかけてる。

「ノウイ君……彼は……」

テッケンさんも流石に言いにくそう。全部説明する時間は無いし、だけど掻い摘んだら「ざまあみろ」に成りかねない。
事情は僕もよくわからないけど、そうじゃないんだよな。それは

アギトを見てて思ったよ。だからこそ、テッケンさんも詰まってる。
だけどその時、妙に耳に残る声がこの場を支配した。
「お探し物は、これか～な☆」
その瞬間、ゾッとするような悪寒が頭上から降り注ぐ様だった。空間を飲み込むそんな雰囲気はどうやら、敵にだけ影響する物じゃないみたい。
さっきまで吠えまくってたオーク共が、忠犬の様に成ってるよ。そして暗い夜空から、何かが僕達とオーク共の間に、鈍い音を響かせて落ちてきた。
それは……
「「ガイエン！！」」
真っ先にそう叫んで駆け寄るのはアギトとアイリの二人。それに続いて親衛隊が走る。ガイエンはどうやら、辛うじて息がある状態。
僕は真っ先に落ちてきた空を見つめた。そこには星の光を遮る何かが居る。大きな何かが確かにだ。震える様な恐怖の感覚……僕はこいつを知っている。
それは……この悪魔は……忘れる筈もない！！　闇夜に浮かぶ最初の敵と僕は再び向き合ってる。

集いし聖地（後書き）

第百五十七話です。
ここではどんどんと役者が集う場面です。混戦必至。ガイエンは一体どうなったのかも見どころです。そしてアルテミナスはどうなるのか！？
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

闇に生れし者（前書き）

現れたのはあの時の悪魔。ＬＲＯで初めて対したボズクラスの敵。それが再び僕の目の前に現れてる。何だか因縁を感じるよ。そしてそこに乗ってるのがシクラって所に悪意を感じるね。

だけどやるしかない。あの悪魔はガイエンへと走り出したアギト達を狙ってる。その頭上にそのメイスを落とさせる訳にはいかない。

闇に生れし者

「ブゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

頭は山羊で上半身は人、足は馬の蹄を持ち、背中にはコウモリの様な翼を持つ悪魔が、大量のオーク共の叫びをたった一体で賄う程の叫びをあげた。

そしてその片手に携える巨大なメイスが、眼下で走るアギト達に向けられてる。アギトもアイリも、目前に倒れたガイエンにそれでも駆け寄ろうとしてた。

後ろに続いてた親衛隊は、その叫びに怯んだのに全くあの二人は勢いを弱めない。元々そうするつもりだったのか、それともあの叫びは警告だったのか……どちらにしても止まらない二人を見て、☆を散らばらせる声の主は言う。

「やっちゃえ☆」

そんな軽い口調で指示された悪魔は、巨大なメイスを力強くアギト達へ向ける。あんなの食らったら、アギトはともかく、薄汚れたドレス一枚のアイリは間違いなく戦闘不能だ。

でも二人はやっぱりガイエンに向かって走り続ける訳で……悪魔の一撃は、不気味な音を響かせて二人へと迫ってる。

「くっそ！！」

「お二人とも！！　あぁ～もう！！」

僕とセラは同時に飛び出した。走りながらそれぞれの武器を構え

て、悪魔へと迫る。立ちすくむ親衛隊を抜き去り、まずはセラが大きな手裏剣型に組み上げた金色の武器を、悪魔のメイスへ向かってブン投げる。
回転しながら勢いよく宙を走る手裏剣は、アギト達の直ぐ上に迫ってたメイスへとぶつかる。回転する手裏剣は火花を散らして、僅かながらその勢いに食い込んだ。

そしてその間に、風を纏ったセラ・シルフィングで僕もメイスへと向かう。僅かでも勢いが弱まったこの瞬間しかない。
セラ・シルフィングの刀身を風の渦が覆う。僕は地面を蹴って、弾かれた手裏剣の代わりにメイスとぶつかる。二対の剣を頭の後ろから出す形で、メイスの横っ腹で風が唸った。

「っづ……ぐっらあああああああああ！！」

二本の剣が纏ってた風が、吹きすさぶ嵐となって勢いをくれる。すると悪魔のメイスを徐々に押して、僅かだけど軌道を逸らす事が出来た。
勢いよく地面を抉る巨大なメイス。だけどそこにアギト達はいない。

「スオウ！！」
「今更後ろを振り返るくらいなら早く行ってやれ！　僕達に最初からやらせる気だったんだろ？　ならここはやってやるから、行けよアギト！！
良くはわからないけど、仲直り……したんだろ？」
「お前……」

アギトの顔がこの暗さでも良くわかった。だけどどうやらそれは、僕の後ろに原因があった様だ。悪魔の口に燃え盛る青い炎。それが

僕と地上を照らす、僅かな光源になっている。でもこれはやばい！！

「っつ！！」

吐き出される青い炎が頭上から迫る。僕はそれを振り抜く風で受け止める。二つに分かれた炎はそれでも消えはしない。

「行けアギト！！　早く！」

空中から勢い良く押し戻される。このままじゃ直ぐにアギト達の所にも炎が回りかねない。その前に……アギトはアイリに促されて、再び走り出す。

「頼む！！」

そんな言葉を残してだ。だけどそれはなかなか嬉しい言葉。アギトがそれを僕に言うなんてさ。少しばかりは頼れる位には成長出来たって事かな。

炎に押されて、地面に足が着く。だけど……ここで打ち止めだ！！　足場があれば、幾らだって剣は振れる。二対の剣の連続技。僕は風で炎を打ち払い続ける。

風に払われた炎は僕まで届きはしない。だけど地面に広がり続けてた。

「うおおお

んじゃ無いのかな？」

そんな事を言うシクラは、悪魔の頭の上で角に寄り添って腰を下ろしてる。成長ね……こいつに言われる事じゃない。確かにあの頃のままの僕なら、この炎に呑まれてただろう。

やりきれた感……確かにそれはあるけど、でもこれは武器のおかげってのが大きい。セラ・シルフィングなら、大抵の事は何とか出来る……そう思えるもん。

だけどそれだけって訳でもない。僕は最初の頃の様にただ振り回すだけじゃ無くなってると思うんだ。それはまさしく成長だろう。

効率の良い剣の振り方に、連撃への繋がりとか常に考えてるからな。僕は片方のセラ・シルフィングを、見下すシクラへと向けて言ってやる。

「ああ、あの頃とは違う。そして直ぐにそこまで言ってやる！　その内、、お前の余裕を無くした顔を拝んでやるよ」

「ええ～☆　スオウは私のいろんな一面が見たいんだぁ☆　う～ん、考えといてもいいかな？」

わかってる癖にイチイチ変な方へ会話を進めようとする奴だ。柊とは違ってつかみ所がトコトン無いよ。僕の決めた台詞が台無しだ。

だけど次に発した言葉はいつもとは少し違ってたかもしれない。

「ふふ☆　楽しみにしてるから、死なないでねスオウ。こんなつまらない所では」

つまらない所か……シクラにとってはこんな大規模な戦闘も遊びでしかなくて、作り替える為の作業みたいなものなのだろうか。

柊は言っていた。セツリの為の世界を造ると。こいつらは僕達の

居場所を奪う為に、アルテミナスを落とそうとしてるのか。
そして最終的にはプレイヤーを追い出して、ＮＰＣというセツリを裏切らない人たちだけの世界にする。そんな感じだった。
まだＬＲＯは「僕達の」が付くからな。でも、それはさせないって決めたんだ。
「つまらないなら、手を引けよ。お前達の目指す世界は間違ってる！　セツリが本当に欲しいのはそんなんじゃない筈だ！！」
僕の言葉に、シクラは意味深に微笑む。だけど口調は相変わらずだった。
「ふ～ん、どうやらヒイちゃんが余計な事をお喋りしちゃったみたいね☆　別にいいけど。だけどやっぱり後でお仕置きかな？」
別に良いとは思ってないよな？　お仕置きってさ。いや、シクラの場合は、別に情報漏洩はどうでも良くて、ただ柊に何かしたいだけ……って感じなのかも。
こいつなら十二分にありそうだ。
「スオウ君！」
後ろから聞こえて来た可愛らしい声。そして炎を飛び越えてピクが現れる。すると、ピク自身と炎の向こうの人影が同じ光を発して魔法が発動される。
大きな水の玉が次々とピクの口から吐き出され、多分彼女も外側から同じ様に炎を消してる。
まあ言わずもがなだけど、それはシルクちゃんだろう。炎がある

程度消えたら、みんなが僕の所まで来てくれる。「アギト様達は！？」

真っ先にそう言って飛び出すセラは僕の視線の動きだけで、その方向を見定めた。途切れ途切れに成った炎の間にその人影はある。

アギトとアイリとガイエン、三人の影だ。

「良かった。ガイエンは気にいらないけど、アイリ様達が無事なら安心ね」

そう言うセラ。だけど本当にそうか？　と僕は思う。だってそうだろ。まだ何も、状況は改善なんてされちゃいない。

「敵はまだまだそこら中にわんさかいるぞ。安心するにはどう考えたって早すぎだろ。特にこの悪魔……こいつは強敵だ」

僕は実感こもった声でそうセラに忠告してやった。すると不機嫌そうに悪魔を見上げた。

「ふん……そんなのわかってるわよ。取りあえずよ、取りあえず！あそこでアンタが潰されてたら、私がその上から更に潰してやったわよ」

「ヒデェ事するなお前！？」

なんて奴だ。仲間とは思えないな。思わず大声出しちゃったじゃないか。セラの奴は何だかんだ言って本当にやりそうなんだから、受け取る方も大変なんだぞ。

「スオウ君……あの悪魔って確か……あの時のだよね？」

震える様な声が後ろから聞こえた。振り返るとそこにいたのはリ

ルレット。ああ、そうか……リルレットは知ってるもんな……それにあの時も確か震えてた。

同じ恐怖が、あの悪魔を見たことでぶり返して来たのかも知れない。僕はリルレットにどう言えば良いのか迷った。

気休めな言葉？　それとも流すような言葉で、余り触れない方がいいのか？　だけどそれじゃあ……

「ああ、そうだな……えっと、その……だけど」

やっぱり言葉が出てこない。ここに居るみんなはもう、誰一人として万全な奴なんていないだ。この悪魔の強さを体験してるリルレットになんて言えば良いのかなんてわかんないよ。

ようやくさ、何とか一つの戦いを終わらせて来たばっかりなのに……そいつ等も揃って再登場って何なんだよと言いたい。

だけどそんな風に僕が言葉を探してると、当のリルレットが震える拳を握り込んでこう言った。

「それなら大丈夫だよね。ここで更に、変な化け物が出てきたらどうしようって思ってたけど……前に一度私たちが倒した相手なら、勝てる保証があるような物だよ」

「リルレット……お前」

何とも前向きな考え方。あの時とは大分状況が違うんだけど……だけどリルレットがそう自分に言い聞かせる事で、まだ進む事が出来るのなら、僕は何も言わないさ。

「ああ、そうだな」

これだけで十分。確かに疲労困憊だとか、周りにはオーク共も大

量にいて、しかもシクラとかもって言ったら嫌な想像しか出来なくなる。
そんなの何のメリットも無いからな。
「あんまり目障りな顔しないでくれる？　叩くわよ」
「おまっ……随分元気だな。体力有り余ってるのかよ」
たく、この暴力女は……遂にだけど言葉だけじゃ物足りなく成ってきたんじゃないか？　そう思う僕は、ため息混じりでセラを見る。
だけど何か……悪魔を見据えるセラの顔は、いつもの暴力的ジョークを楽しそうに言ってる顔じゃない。普通に至って真剣だ。
そしてその顔のまま、僕の方をその眼差しで射抜くんだから質が悪い。不意を付かれた感じでドキリとしてしまう。
「ぶっ倒れてでも立ってみせ続けるわよ。だって私達の後ろには、アルテミナスがあるんだから！」
その言葉に一番反応したのは、きっと足を止めてしまった親衛隊だろう。アルテミナスはエルフの故郷。例えここがゲームであっても、でもだからこそ、その中での故郷って物はあるんだろう。
リアルの自分じゃない、ここでの自分。それが生まれ落ちた場所なんだからな。セラはそこをどう足掻いても守り抜きたいらしい。
その意志の強さは、射ぬかれた僕が一番良くわかってる。
「だから弱気なんて見せないで。彼女が言ったとおり、『倒した』のならその事実だけで充分よ。もう一度倒せば良いだけだもの」
簡単に言ってくれるセラ。まあ確かに、それしか無い訳だけだど……いいやその通りだな。後ろ向きな事を考えるなんて僕らしくな

い。

「ああ、その通りだな」

そう言って僕とセラは悪魔を見上げる。ひいてはその頭上に座るシクラをだ。シクラは相も変わらず余裕そうな笑みを崩さない。

それはそうだな、アイツは特等席で滅びゆくアルテミナスでも見物する気何だろう。それにこの戦力差……切羽詰まる事なんて微塵も無いと思ってる。

月の無い夜でも、やけにアイツのその顔はハッキリと見えやがる。すると悪魔の頭の所で、何やら動く影がもう一つ出てきた。

「ちょっとシクラ！　お仕置きって何よ。私は別に負けた訳じゃ……」

「へぇ～あ～そう？　まあどんな良いわけでもそうだな～まずは、お姉様って敬ってくれたら聞いて上げるよ～☆」

「……システムスキャンしたほうがよろしくってよ、バカお姉さま」

呆れた様な声で言ってるのは柊だ。やっぱりアイツ等合流してたらしい。同じ方向に最後、シクラは飛んでったしそうかもとは思ってたけど、あの二人相手は正直したくない。

柊も中身はボロボロ言ってる割にはそうは見えないし、模試も二人が立ちふさがったら、流石に弱音吐くと思う。だってそれは……しょうがなくね？

「誰あれ？」

呟くのはセラだ。そう言えばアギト組の奴らは柊の事を知らないのか。そしてまだ、その反則的強さを見てもいない。

それはある意味、幸運な事なんだろうな。あれを知ってここでもう一戦を交えるのには相当な根性が必要だ。奇跡なんて物が足りなくなりそうだ。
ストックなんてないけどさ。

「柊だ。お姉さまっても言ってた通り、妹だな。つまりはシクラと同じ存在だ。シクラってのはあの金髪の名前な」
「その位、流れでわかるわよ。けど同じ存在って事は、あの子も裏側の奴なんだ。でも勝ったんでしょ？」

まさかまた、勝てたのなら理屈を並べる気か？　言いたいけど、アイツ等は別格だ。てか次元が違う。ＬＲＯというシステムの縛りがない。
オール反則みたいなもん。僕はセラに言ってやったよ。

「勝ったには勝った。だけどそれでも奇跡起こしてようやくだ。それが無けりゃ……手も足も出なかった。今はもう戦えないって言ってたけど……どうだろうな。
あの様子からはとてもそうは見えないな」

上ではシクラが、「可愛い～」と言って柊に抱きついてる。あれで良かったのか？　敬ってる部分は僕が聞いた限り皆無だったけど。まあシクラは細かい事気にしなさそうだからな。

「いった！？　ちょっと止めてよバカ！！」

そう叫んだ柊はシクラを強引に引きはがす。おや？　やっぱりあの話はマジだったのか？　平然としてたのは顔だけってのは本当だったらしい。
体を押さえる様に腕を回して、その場にへたり込んだ柊が見える。

「うふふ。そんな傷ついちゃって可哀想に。お姉様が体の隅々まで手当して上げてよ☆　じゅるる……」
「ちょちょっとシクラ！　最後のじゅるるって何よ！　何で妹が弱ってるのに、そんなに嬉しそうなの！？　アンタおふざけも大概に……」
「アンタでもシクラでもなく……お姉様とお呼びぃぃ！！」

最後にシクラはそう叫んで柊に飛びかかっていった。そして夜空に響く柊の悲しき叫びがやけに同情心を誘ったよ。
アイツも色々と苦労してたんだな。それよりもシクラはやばいな。アイツ真正の変態だよ。傷ついた妹に飛びかかるってどうよ？

周りを見てみると、どうやらセラもシルクちゃんも同じように引いてた。そして心なしか、周りのオークも悪魔も何だか困ってる感じがしたよ。
シクラの指示で多分動いてるだろうから、どうにも出来ないんだろう。目の前に餌が有るのにお預け状態だからなさっきから。
きっとこいつらイライラしてるよ。

にらみ合いが続いてる戦場で、ようやく理解が追いついてきた軍は、この状況を利用して回復やら何やらを行ってる。
その顔は心なしか、やっぱり少しは色が戻ってる……そんな気がした。ノウイが軍全体にアイリやアギトが無事に戻ってきた事でも伝えたのかも知れない。

それで少しでも活気が戻るのなら、越したことはないしな。その時、切羽詰まった様な叫びが僕たちに届く。

「シルクさん回復魔法を！　回復魔法をお願いします！！」

それはガイエンに駆け寄って行ったアイリの声だった。僕達は顔を見合わせて、直ぐにその場へと急ぐ。シルクちゃんは詠唱にすぐさま入り、ピクもその後に続く。

そう言えばガイエンは風前の灯火の命だったんだっけ？　悪魔との対面で忘れてた。しかも相当な深手で、しかも『血』まで出てた……もしかした取り返しの付かない事態に成るかも知れない。

それにシクラの奴にあの高さから落とされたんじゃ、ＨＰが尽きててもおかしくはないかも知れないじゃないか。

「どうしたアギト！？」

直ぐ近くだったからほんの数秒でたどり着く僕ら。アギトとアイリは、ガイエンを挟んで両側に居た。そして当のガイエンはと言うと、やっぱり顔色は真っ黒で判断出来ないけど、相当やばい感じはする。

どうやらＨＰはまだ残ってるようだけど、出血はまだ続いてる様だ。そこをアギトとアイリ、二人で押さえてる。

「ダメなんだ！　俺たちじゃこの位しかしてやれない！！　でもこれじゃ幾らやったってこいつは助からない……だから！！」

「だから私の出番ですね」

アギトの悲痛な叫びに、進み出たのはシルクちゃん。ピクも勿論横を飛んでいる。シルクちゃんのそんな言葉に、二人は無言で頷いた。

押さえてただけ……きっとそんなわけはないだろう。僕達がシクラ達と向き合ってた時、アギト達はどうにか使用と手を尽くした筈

だ。

ＬＲＯだって回復魔法くらい有るんだからな。だけどそれでもどうにも成らなかった……だから後頼れるのは魔法しかなかったんだ。

シルクちゃんは二人を退かして、横たわるガイエンにその杖をかざす。そして紡いでた言葉を発動させる。浮かび上がる魔法陣。淡い光がガイエンを包む。

それに併せて、ピクもガイエンの周りを舞い、その翼からピンク色の光を落としてた。キラキラと満たされていくその光。

だけどその時だ。

「うっ……ぐっ……あぁ！！」

切れ切れの声がガイエンの口から漏れ始めた。そしてゆったりと染み出すようにガイエンの体から何かが出てきた。

それは黒く……粘っこい何かだ。ガイエンの表面を包んで行くそれは、ある一定の範囲で膨張を止めて振動を始めた。

それはまるで、何かの為を作ってるかの様な動作。嫌な予感がした。

「シルクちゃん離れろ！！」

僕は叫んでシルクちゃんの肩を掴んで引き寄せる。その瞬間だ。振動をしてた黒い何かは、魔法をかき消す様に勢い良く爆発した。

「きゃあ！！」

「っつ！？」

周りにいた僕達は、その衝撃に押されて後方へ飛ばされる。そし

てその時、同時にあの黒い物体も飛散してた様だ。
勢い良くこっちに向かってくる欠片がある。このままじゃシルクちゃんに当たる。当たってどうなるかは分からないけど、確実に良いことは無いだろう。

僕はシルクちゃんを庇うために勢い良く体を入れ替える。背中にベチャッという感触が伝わった。すると同時に変な声が頭に響く。

【邪魔をするなよ人間！！】

今まで感じたどの感情よりもストレートにぶつかる感覚。ハッキリ言って不快その物だ。

「スオウ君、私を庇って……大丈夫？」
「大丈夫大丈夫。別にＨＰも減ってないし。どうってこと無いよ」

態勢を戻したシルクちゃんは直ぐに僕を気遣ってくれるけど、実際癒して貰う所何か無い。ちょっと気分がダークになったけど、それはホラ、魔法じゃどうにも出来ないし。
それに問題はガイエンだろう。

「それよりもだ……」

僕達はガイエンを見据える。そこにはさっきまでのガイエンが横たわってるだけ……そしてどうやら、回復はされてないみたいだ。

「どうして？」
「あの爆発で魔法が飛ばされた……いや、そもそもあの黒い粘液が、魔法を届かない様にしてるとか？　それしか考えられない」

シルクちゃんの疑問に答える僕。仮説だけど、間違っちゃいないと思う。

「待ってください！　何でそんな事が起こり得てるの？　だってガイエンは意識を戻してない。なのに……」

そんな事起こり得ない？　そうアイリは言いたいんだろう。そしてもしも起こってるなら、まさかガイエンの意志とは思いたいくない。

だけど僕は、ガイエンじゃ無いと思う。それは無い。そう思えるのはあの声だ。

「心当たりがある。さっきの黒い粘りが掛かった時、頭に変な声が響いた。それはきっとガイエンじゃ無かったと思う。

アギト達が分かりあえたなら尚更だ。ガイエンじゃない……何かが“居る”んじゃないか？」

それはおかしな妄想かも知れない。だけどその時、それを想像してか誰もが唾を飲み込んだ。

「そんな……訳ない。ガイエンはガイエンでしょう？」

そう言って傍に座り手を伸ばすアイリ。だけどその手は、乾いた音を響かせて弾かれた。

闇に生れし者（後書き）

第百五十八話です。
相変わらずピンチは続きます。だけどシクラがあほっぽいせいで緊迫感が余りないかもですね。でもこれは大ピンチですよ。ここを乗り越えないとアルテミナスの勝利はあり得ない。
どうやってそれを引き寄せるのかは、そこにいる全てのプレイヤーの頑張り次第でしょう。
てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは。

謀略の姿（前書き）

ガイエンに一体何が起きてるのか……自分を制御できない様に成ってきてるガイエンは、自分の中の何かとその傷だらけの体で戦ってるんだろう。でも考えてみるとおかしなことだらけ。

僕達は、ガイエンを解放する為に頭を使う。どうやったてもう、今のガイエンをこれ以上傷つける事なんて出来やしないんだ。でもどうにかしたいから、思考を巡らせて……行きつく先にはどうやらいつでも、アイツが居る様だ。

謀略の姿

「え？」

叩かれたアイリの手。そしてその手を叩いたのは誰でもない、ガイエン自身だった。さっきまで動くことすら出来なかったガイエン……それが今この瞬間、確かな意志の元動きやがった。

だけどそれは本当にガイエンなのか……それともガイエンの中にいる“何か”なのかはまだ分からない。僕達は警戒しつつ、固唾を飲んでる。

「ガイエン……だよね？」

叩かれた方の手を庇いながら、そう呟くアイリ。ガイエン……であってほしい。だけどそれならアイリの手を叩いた理由が気になる所だ。

正直さ、ここまで色々と切羽詰まるともうやばいよ。そろそろ何から手をつければいいか分からなくなる。目の前で起きる問題が一つなんていう、都合の良いことはあり得ないのかよ。

まあ僕の方に都合が良かった事なんてあり得ないんだけどさ。そんな思いを抱きつつ、荒い息を吐いてるガイエンの言葉を待つ。アイリに何て返すんだ？

「やめ……ろ。逃げ……いや、私を殺せ！！」

「「「！！！」」」

その言葉には流石に誰もが驚いた。僕的にはガイエンがまだガイ

エンだった事にも驚きだけど、その言葉は更に三倍増しにビックリだ。

「なっ……」

「何言ってんだお前！？　ヤられすぎて頭がおかしくなったかガイエン？　お前だってその流れる血の意味くらい分かってるだろ！」

アイリの声に被して叫んだのはアギト。流れ出てる血の意味か……僕はそれを誰よりも実感してるけど、発売当時からやってる人達やそれなりにＬＲＯというゲームに馴れてしまった人達にとってその実感はどうなんだろうって感じが本音だ。

今でさえ、アイリの存在にこのアンフィリティイクエストで、そう言う事が起こり得るかもしれないって事は少しづつだけど現実味を帯びて知られて言ってる。

だけどさ、まだまだそれが本当に起きるって実感してる人はきっと少ない。

それが例えば、今まで『死』はこの世界にとっては取り返しの着かない事じゃないと、馴れてるとさ。余計だろ。本当にガイエンは分かってるのか？

きっとかなり辛くて、苦しいはずだ。だけどどこかで、そんな訳無い……そう思っててもおかしくなんてないんだ。

けれど僕は知っている。この世界はさ、何も夢を見せてくれるだけじゃないって。僕がここで『死』って奴に馴れてないのは、ここに来て直ぐにそれがリアルと同価値位になったから。

僕はＬＲＯの法則になれちゃいないから、ＨＰが尽きるのには恐怖感が多大にあるけど、それはここでの普通じゃない。

でもこればっかりは口で言っても限界がある。それに信じれない

ってのも分からなくはないからな。ガイエンは苦しそうに体を支えて、虚ろな目をアギトへ向ける。

「私が冗談を……言うと思うか？　アギト……早くしろ……そうしないと……私は……」

途切れ途切れになる言葉。その顔色はやっぱかなりやばい。てかどうしていきなり目を覚ましたんだろうか。心当たりはあの爆発……あれで意識が戻ったとか。だけど何か……

「おい、どうしたガイエン？」

アギトもガイエンの傍に寄っていく。ガイエンは荒い息を吐いて、変な汗ダラダラと垂らしてる。そして支える腕が再び崩れた。

ガイエンは傍に居たアイリの膝へと崩れ落ちる。それをある意味羨ましい……なんて思うのは不謹慎だろう。実際見た感じ、かなり状況は悪い。

血が出るほどのシンクロ率で、それなのに回復も出来ないなんて……ガイエンの本体、リアルの体が無事なのか気懸かりだ。

ＨＰが残ってる限り決定的じゃないけど、それでも危なかった場面は何回かあるんだ。それを考えると気が気じゃいられない。

僕は何とかして回復させたいから、視線でシルクちゃんに合図を送る。すると伝わったのか、シルクちゃんは小さな声で詠唱を開始する。

だけどその時、横のセラがぽつりと言った。

「回復できるとは思えないわよ」

「それでも、どうにか通すしか無いだろ。あいつの事は僕は殆ど知

らない。だけどな、取り返しの着かない事になるかも知れない……それが分かってるのに手を拱いていられるか。
この際贅沢は言わない。少しで良いんだ。せめてレッドゾーン以上に成ってくれれば、リアルの方に影響はしないだろう」

それは自分の経験からの言葉。まあ逆に言うと、レッドゾーンで貰う傷は危険って事だけど。でもＨＰがある限り、回復でどうにか成ってた……そう今までは。

「どうにかってどうやってよ？」
「取り合えずあの黒い粘液だな。あれを出してる元でも潰せれば……心当たりないのかよセラ？」
「タゼホでは黒い影をガイエンは使ってた。だけど少し質が違うみたいだし……それにガイエンが回復を拒む理由なんて……」

そうこうしてる内に驚く事が起きる。響いたのはアギトの声だ。

「何やってるガイエン！！　アイリを放せ！」

視線を向けると倒れてた筈のガイエンがアイリの首を絞めあげてた。いや、少し違うかも知れない。正確にはガイエンはまだ、アイリの膝の上で苦しそうにしてる。
アイリを絞め上げてるのはガイエンの左腕だ。

「なっ！？　どういう事だ一体？」
「アンタが言った何か……それが動いてるんじゃないの？」

確かにそう言われると、あの左腕の異質な動きは納得だ。何かか……自分で言っといて何だけど、的を得たいたのは確かかも知れない。

あの腕……何だか異様だ。

「ガ……イエン……」

か細い声がアイリの口から漏れる。ギリギリと絞めあげられてるのがここからでも分かるぞ。だけどそれでもアイリはふりほどこうとはしない。

アイリは必死に、ガイエンに語りかけようとしてる。だけどこのままじゃ不味い。あれ攻撃判定されてるぞ。少しずつだけどアイリのＨＰはあの腕の食われてる。

「おいやめろ！！」

叫ぶアギトは当然、アイリを助けようと手を伸ばす。だけどアイリを絞めあげるその腕に触れた時、溢れだした黒い何かに襲われる。

「うっつ！？　なんだ！！」

思わず手を離すアギト。また訳の分からない事かよ。これ以上ガイエンを傷つけれない僕達じゃ、アイリを助けれない。

それにガイエンの左腕から出てきた黒い物……あの瞬間僕には見えた。腕から腕が生えたような……それにガイエンの黒い左腕が幾何学模様を表してた。

それがどういう事かはまだ分からないけど、よく見るとガイエンの黒い肌に隠れる様にしてそれは確かにある。だけど……右腕にはそれが見えないな。

（どういうこ――）

「やめ……ろ……うるさ……い！！　私……はそんな……事！！」

アイリの太股の上のガイエンが何やら悶絶を始めてる。頭を右腕で押さえて、誰かと喋ってるような光景だ。一見すると、どっかから電波でも受信してるのかと思うような光景だ。
だけど今の僕達には分かる。今ガイエンが話してるそれこそが“何か”なんだろう。ガイエンの意志にとは関係なく、その何かがあの左腕を操ってるんじゃないか？

ガイエンは苦しみながらも、必死にその何かと戦ってる様に見えた。そして、食い込んでた左腕が徐々に、アイリの細い首から離されていく。

「させ……るか！！　こいつは……この女……は……」

その時、僕の注視する瞳は捉えていたよ。ガイエンの黒い肌に隠れる様にある模様……それが左腕から首筋に広がった事をだ。
防具の隙間から覗く僅かな隙間にそれを確認したよ。
すると、次はガイエンの喉が今までの苦しそうな声とは別室の言葉を紡ぎだしやがった。

『この女は何だ？　お前を捨てた憎い女だろ？』

ガイエンの口から漏れた言葉に、瞳を見開くアイリ。そして直後、直ぐに苦しげな声がガイエンに戻る。

「ちが……う！　もう……良いんだそんな……事。私は……納得……してる！！」

最後の言葉は力強かった。そして遂にアイリはガイエンの腕から解放される。

「ケホッコホ、ガイエン……」
「離れ……ろアイリ！！　アギトオオ！！」
力の限り叫ぶガイエン。いきなりのその声に驚く僕らだけど、どうやらアギトだけはその意図を受け取れたらしい。
アギトはへたり込んでるアイリを引き寄せたんだ。そして僕たちの所まで来て距離をとる。
「待ってよアギト。だってガイエンが！」
「アイツの気持ちを汲んでやれ！　今の俺達に何が出来る？」
二人は自身の無力さを噛みしめる様に俯いた。ようやく取り戻した筈の絆……それが今、再びおかしく成りかけてる。
自分達に出来る事が何も無いと成ると、尚更さ。シルクちゃんは既に魔法の準備万全の様だけど、このまま掛けててもきっとさっきの二の舞なんだろう。
さてどうするか……その時、ガイエンの苦しむ様子を見かねたんだろう親衛隊が駆け寄って行く。
「ガ……ガイエン様！！　我らが力になります！　我らが、その痛みを取って見せます！！」
「やめろ！　今のそいつに近づくな！」
僕は親衛隊の背中に声を掛けた。だけどアイツ等もガイエンを信じた奴ら。ある意味無関係な僕の言葉なんて聞きやしない。
ガイエンの姿が親衛隊よって遮られたその瞬間、親衛隊の面々が吹き飛んだ。綺麗に扇状に飛んでいく親衛隊は地面を跳ねて転がり後方へ。
だから言ったのに……よりも、まさか！？　の方が強かった。

『くくくく、隠すなよガイエン。俺には分かる。お前の苦しみも痛みも全て！　不愉快な奴らだな。あんな雑魚、ただの駒にすぎないと言うのに、調子付きやがって。
このまま殺してやろうか？　目障りだろうお前もな』

それはやはり、ガイエンの口から発せられてるのに、ガイエンじゃないと思える言葉。いややっぱ違うよ。だって自分に対して自分の名前を言うか普通？　うざったい女子ならあり得るけど、ガイエンにそんなイメージ無い。
てか持ちたくない。

「目障り何か……じゃ……くっそ……引っ込めよクソ野郎……」

強がるけど弱ってる声。こっちが確かなガイエン。ヤバいな、ややこしくてこっちも頭がどうにか成りそうだ。そして徐々に、あの変な模様はガイエンの体に広がってる。首から上は抵抗してる様だけど、あの模様右腕にも移ってる。
目を凝らさないと分からないから、アギト達が気付いてるかは分からないけど、どうなんだろう。だけど、目の前で豹変するような態度と言葉に戸惑っていて、そこまでは誰も頭が回ってないかも。

とにかく見にくいからな。でも……それなら、ガイエンの中に居る存在って一体何なんだろう？　本当に居るとすればだけど、ここまで見ておいて今更否定する事は結構難しい。
自分が最初に言ったわけだし……だけど、感覚・・直感的に言っただけで、それを仮定した場合のいろんな矛盾が気になったりするわけだ。

だってガイエンはプレイヤーである一人の人間で、その存在は一である筈だ。そこら辺はコンピューターの方がよっほど厳格だろう。

なのに、今のガイエンはどういう事だよ。あれはガイエンなのかそうじゃないのか、とても曖昧だ。一に加わってはいけない何かが、その決まりを汚してるみたいなさ……もしもそんな存在が居るのなら、それはシクラや柊達とも根底が違うじゃん。

何か上手くまとまらないけど……とにかくこのままじゃガイエンがガイエンとしても危ないんじゃないかって事だろう。

曖昧なままじゃ居られない。一かゼロが明滅を繰り返す世界なら、汚れた一はゼロへとされるか、完全な汚れた一となるか、それか正しき一に戻れるかだ。

頭を抱えて苦しむガイエン。僕が見た限り、もうかなり汚されてると思うんだ。あの模様だけじゃない……ガイエンの肌の黒さも髪の変色も、そして瞳のあの色も全てはさ、何かが原因何じゃないのか？

「なあアギト……聞いて無かったけどさ、何でアイツ黒いんだ？」

「そんな事今重要か！？　もっとガイエンを救える事を考えろよ！！」

アギトの奴、かなり動揺してるな。自分の無力さにイライラが募ってる様だ。

「ここで僕が、別にどうでも良いことを聞くと思ってるのか？　アイツの事はよく知らないけど、無くしちゃいけない物は、僕は良くわかってるつもりだアギト」

僕は真っ直ぐにアギトを見つめてそう言った。すると罰を悪そうに顔を逸らしたアギトが「そうだな、悪かった」そう言って教えてくれた。

「あれは多分、加護の影響なんだ。カーテナの加護。今もアイツの腰に刺さってる剣がそれだ。加護は仲間に能力ブースとを付加するカーテナのスキル。
まあアイリが使ったときはあんな肌の変色とかは起こさなかったんだが、アギトが使ったときは親衛隊どもが同じ様に黒くなってた。
だからそれが続いてるんだろ」

なるほどね。カーテナの加護か……でもそれっておかしくないか？

「おいアギト、それは今も続いてるのか？　だってカーテナは腰に刺さったままだぞ。それに使い手によって、効果のエフェクトって変わるものなのかよ？」

その言葉にはアギトは声を詰まらせた。だけど代わりに、アイリが答えてくれたよ。

「確かにそう言う例は余りないけど、だけど絶対無いなんていえません。特に希少性の高い物に成れば成るほど、不思議な効果があったりするし……それに私は加護以外でもみました。
効果というか、そのスキルその物が使う人に寄って変わる物をです」

そう言うアイリは、短剣を構えて何やら思考を巡らせていたテッケンさんと、ガイエンの言動にハテナを浮かばせてるノウイに視線を向けた。
あの二人は僕がアイリ救出を頼んだメンツだ。そこでその変貌を遂げたスキルを見たって事か？　すると察しのいいテッケンさんはすぐさま何やら思い当たったらしい。

「ああ、確かに……そう言えばそうだね。自分は一回しか見てないが、確かにアギトの時とは違ってた」
「え……え～っと、あれっすよねあれ！　確かにあれは凄かったっすよね～」

後に続いたノウイはきっとわかってないんだろう。アイリの期待に応えようと必死だけど、実はテッケンさんの話にあわせてるだけだ。アレの中身が無いんだよ。

「どういう事だアイリ？」

急かすアギトは、早くどうにかしたい……その気持ちが見えるようだ。まあ無理もないけどな。頭を押さえて、必死に自分の中にいる何かと戦ってるガイエンは、実際見てて痛いんだ。
そしてそれは、ガイエンを良く知ってるアギト達ならなおさらなんだ。

「ナイト・オブ・ウォーカー……あの力をガイエンから受け取った親衛隊と私達は戦った。だけどあの力は、私の知ってるソレじゃ無かったの」

頷くテッケンさん。そしてそこでようやくノウイも思い当たったらしい。

「ぁぁ……ぁぁ……ああ！　そうっす、そうっす！　あの時俺達が見たナイト・オブ・ウォーカーはアギト様の大剣と盾じゃなくて、連結刃をした長刀の一振りでしたっす」
「うん、スキルによっては扱う人で変わる事もあるって事です」
「成るほど……」

確かに、そう言う事もあり得るんだろう。だけどナイト・オブ・ウォーカーってそもそも形が定まってないスキルだよな？　カーテナの持ち主が、選んだ騎士に与えるスキル。
そこには元から、特定の形なんて存在してないとしたら？　もしかしたら、扱う武器はランダムにでも選ばれてるんじゃないか？

ＬＲＯでの最初のクエストの様な、合う武器をチョイスするみたいな感じでだ。だけど加護は違うだろう。そう思うんだけど……

「確かに使い手によって変わるかも知れないのはわかったけど、だからってあれは変わりすぎだろ。納得出来ねーよ。
冷静に考えろよ。誰でも使う魔法が、使い手が変わってその仕様が変わるか？　せいぜい威力とかだろ。それも攻撃魔法に限ってはだ。
補助の魔法・スキル……それらがあそこまで姿を変えるか！？
僕はどうしても思えない」
「じゃあ、何だっていうのよ」

近くのセラから問われた言葉。僕には今、周りの視線が集中してる。その何が答えられれば、苦労なんてしないんだけど……けど言わない訳にはいかない。

「だから……そこには今アイツが必死になって戦ってる奴が出てくるんじゃねーの？　最初はカーテナの力自体を疑ってた訳だけど、話を聞く限りじゃそこは本当らしいし、そもそもそうじゃないと説明出来ない物も多すぎるのも確かだ。
だけどガイエンの力はどこかアイリのとは違ってたってのも確かで……カーテナを使ってた……それはさ、一体誰がって僕は思い始めてる」

ガイエンなのか？　でも今の状況を見る限り、アイツは実は使われてたって感じがする。じゃあガイエンの中に居る何か？
それは限りなく正解に近いと思うけど、だけどもっと前を思い返せば、その何かはいつからそこに存在してたのかが疑問だよ。
そこまできたら思い当たるのは一人しかいない。カーテナって力を使ってた……言い方を変えれば利用しようと考えた奴。

「カーテナを使ってたって……いえ、待って。その全てに答えれる奴がこの場には居るんじゃない？」

セラも多分、僕と同じ所に行き着いた様だ。僕は頷いて上を仰いだ。星星の光が点在する夜空。決して月の様に地面を照らしてくれる程じゃない光。
その光を不自然にくり貫いてる様な闇。そこにはあの悪魔がいる。

「どういう事セラ？」
「思い返してください。この戦いの始まりを。全ての元凶はガイエンが手に出来たカーテナという力。だけどそれを実現したのは誰ですか？
『リア・ファル』という石を与えたのは？　その女は今も高見の見物していますよ」

ここまで言えば誰もが気付く。浮かぶ顔はさぞ憎たらしいだろう。そして誰もが僕と同じ方を見た。するとまるで待ってた様なタイミングで姿を現した全ての元凶。
月の光の様な長すぎる髪は風になびき、ミニスカートから覗く太股は危なげさを演出してる。そして抱き枕の如く、その両腕でしっかりと抱えてる柊は……何故か真っ白に成ってた。

多分、遊ばれまくったんだろう。心なしかそいつの肌が桃色な感

じに成ってる。そして僕たちの視線に気付いたそいつはいつもの調子でこう言った。

「あれれ～？　何、そんなに女の子のいけない遊び見たかった？　でもダ～メ☆　好きな子の可愛い顔は自分だけが知っておきたいでしょ？」

頬を押しつけて強く抱きしめる。どう見ても一方的な愛だな。だけどそんな無駄な会話をする気は無いんだ。僕は風を纏わせたセラ・シルフィングを一振りする。

乱れた風がシクラの直ぐ横を通過して、その髪を大きくなびかせた。

「おまえ等姉妹の変態な趣味に何て付き合う気はないんだよ。答えろシクラ！　お前は知ってるんだよな？　ガイエンに起こってる事の全てを！！」

するとシクラは、明らかに目の色から無駄に光ってた明かりを沈ませて言葉を紡ぐ。

「あはは☆　ねえスオウ、どうしてここにその駒を連れてきたと思う？　言っちゃうとスオウ達はヒイちゃんのご褒美で、そこの姫ちゃん達は何となく。

ここに来る意味は、その駒だけに有ったのよ☆」

何言い出すんだコイツ？　口調はそんなに変わってないのに、感じるプレッシャーか何かに誰も言葉を発せ無い。自分の玉座から、平民を見下ろす様にシクラは続ける。

「私は確かに全てを知ってる。概ね計画通り。その計画も、もうス

オウはきいてるんだっけ？　だけどこの国を滅ぼすのはね、人間を追い出したいだけじゃないの」

「ど……いう事だよ！」

必死に絞り出す声。そんな僕の努力をせせら笑う様に、シクラは最高の笑顔で言いやがる。

「覚醒には絶望が必要だから……この国の終わった姿をそこの駒に見せるため☆」

笑えない冗談だ。その時の想像は、きっと誰もしたくない。

謀略の姿（後書き）

第百五十九話です。
壮大なアルテミナス陥落計画……みたいなものがの裏には別の理由が。というかアルテミナス自体はも一環でしかないわけだけど……シクラが実は何をしたいのかは見えてるようで見えないかも。
ガイエンがどうなってしまうのかも、今後の展開に大きく繋がります。お楽しみに。
てな訳で次回は土曜日に上げます。それではまた～。

裸の拳（前書き）

お気楽な声を響かせるのはシクラ。そいつが自身の力の一端を見せた時、状況は動き出す。完全雷化に匹敵するスピードを見せたシクラが、何もしなかった……そんな訳はないのに、僕達は誰もそれに気付く事は出来なくて。

空に攫われたのはアイリ。そして先に言った『絶望』の為にシクラは動き出す。シクラが狙うのは、繋がった筈の絆の崩壊と、傷をえぐる事だ。

裸の拳

「絶……望？」

どう見ても、その笑顔と言葉が合ってない。とろけそうな顔で言うこと何かじゃない。だけどシクラにとっては……そう言う事でしかないって事なんだろう。

沢山の人と、大量の敵……そして与えられるプレッシャーに、生暖かな風が鬱陶しげに吹いていく。これだけの敵同士が揃ってて、この場はおかしな位に静かだ。

多分、僕達が落ちてくるまでは死闘が、それこそそこかしこで起こってたんだろうに、今はそれがとても小さな一カ所のみ動きがあるだけ。

それも丁度最前線。アルテミナス軍とモンスター共の間で僕達は、周りの状況に不気味さを感じながらも、見逃せない問題に立ち向かってる。

長かった決着が付いたはずの三人……そこに横やり投げた奴のせいでさ、状況はおかしな方へと進んでる。悪魔の上で、満足気に真っ白になってる柊の髪に顔を埋めながらシクラはその言葉の真意を告げる。

「そう絶望☆　人にはいろんな負の感情があるけど、それの最終到達地点でしょ？　必要なのよ、彼にはそれが。人の真っ黒な感情。押さえきれる筈もない深き業と、静まらない感情の果ての純然たる心。沢山探したけど、そこの駒が一番適任だったの。相性も良かったし☆　だからまずはこの国にしようって決めたん

だけど……」

歯切れ悪く最後は切れた。そしてその視線は、遠くに向いていたアルテミナスから、足下の僕らへと注がれる。いや、その視線はもっと明確な一人を捉えてる。

それはアイリだ。アイリもそれを分かってる。だから彼女も息を吸って吐いて、上を見据えて言葉を放つ。

「絶望なんて……そんなもの、これ以上ガイエンには必要ない！！

私達がさせません！！　そんな事は絶対に！！」

強い口調で言い切るアイリ。それはアルテミナスの姫としてで、ガイエンの友人として、許せない事だから。アイリのその宣言で、シクラに呑まれ掛けてた空気が少し変わる。

気持ちを強く持ち、セラ達も親衛隊もそのぞれの守りたい物でも思い出したみたいだった。まあ僕からしたら、親衛隊もセラ達も、そこに差異は余り無かったと思うけどな。

親衛隊はガイエン何だろうけど、ガイエンはアルテミナスの事を思ってたみたいだし、やり方がアレだっただけで、それなら親衛隊も同じだろう。

そしてセラ達は当然、アルテミナスを守りたい。アイリだって、そして今はアイリがそれを望むのなら、ガイエンだって守ろうとするだろう。

そういう奴だよ。利害の一致とかいう奴で、この戦いが終われば実際親衛隊共がどうなるか何て僕には分からないけど、今だけは同じ物をみんなが見てる。その筈だ。

強い眼差しでシクラを見上げる面々。だけど当のシクラはやっぱりいつもと変わらない。そんなみんなの気合いなんて、軽く受け流

してる。

「ふふ、あはは☆　そう、別にそれでもいいよ。みんな目の色変えて私を見ちゃって……何だかゾクゾクしちゃうね☆」

てな感じだ。コイツは本当にさ……何だか違うんだ。僕達が立ってる場所とシクラが居る場所はきっと違う。こいつは僕達の少し前で、少し上にいる。

これはその余裕だろう。後ろからようやく追いかけてる僕達じゃ、シクラのこの余裕は崩せないのかも知れない。でも、それでも……走るのを止めたら、追いつくことは一生叶わなくなる。

「くっ！　あの野郎！！」

親衛隊の誰かが、武器を弓に持ち変えて矢を放つ。だけどそんな攻撃が当然、シクラに届く訳がない。小さな矢なんて、悪魔の一息でおしまいだ。

「なら、自分の魔法で！」

そう言って杖を構えるのは僕と共に戦ってくれたヒーラーの彼だ。どうやら柊との一戦で奪われてた力も戻って、今は魔法も万全の状態なんだろう。

ヒーラーだけど、決めの一撃の魔法は持ってる様だ。だけど僕はそれを制したよ。

「やめろ、どうせ届かない。それにただ倒すだけじゃ意味なんて無いだろ」

シクラを倒すときは、全てを吐かせた後だ。まあ出来ればだけど。

「ぷっ！　っははっはは☆　倒すだけね。それってまるで私を確実に倒せるみたいな言いぐさだね☆　ヒイちゃんと戦った後で私にそんな事言えるなんて、よっぽど快勝したのかな？」

この野郎……そんな事あり得ないと分かってる癖に言ってるな。まあ確かに、少しばかり自信過剰な言い方をしたのは事実だけど、あそこで「もしも倒せた～」とか言えるか。

でも悔しそうに言うのは癪だから、なるべくこっちも余裕を見せて言ってやろう。

「別に、全然すっげー苦労した。実際勝てたのは奇跡みたいなもんだ。だけどな、僕は……いや、僕達はお前を倒してみせる！

何でもかんでも思い通りに行くと思うなよシクラ」

するとそこで、アギトが僕の肩に手を乗せて言葉を紡ぐ。

「はは……ああ、その通りだスオウ。俺達はまだ何も、諦めちゃいない！！　テメエもその悪魔も、そして周りの雑魚共も！　全部ケチらして守りたい物も救いたい奴も、壊させたりしない！！」

アギトの槍が炎を生み出す。暗い夜の中で、僕達が浮かび上がる様に照らされる。

「ふふ、粋がっちゃって。まあその方が私的にも面白いからいいけどね☆　だけど残念……これを聞いても、そんな口が叩けるのかな？

私はねスオウ、ヒイちゃんの百倍強いよ」

「はっ？」

ズガーンって衝撃がくるより早く、僕はそんな言葉を漏らしてた。

てか百倍ってどうよ。何だかリアルさがねえ。息まいてるシクラに残念そうな視線を送ることで精一杯だ。
シクラのその発言で驚嘆してるのは、僕と共に柊と戦った面々のみ。他は柊知らないからね。だけどあれ？　リルレット達はちゃんと驚いてるってことは、僕の反応の方がおかしいのか？
いやいや、でも百倍って……

「ちょっと！　ほんとうだかんね！　私ってばスッゴく強いんだから☆　それにそもそも、ヒイちゃんはバックアップ……そっちで言う何だっけ？　え～と後衛のポジションなんだからね！」
「何！？」

その発言には流石にビックリだ。柊が後衛？　アレでか？　あれだけの攻撃のバリエーションを持ってて後衛ってどうなんだよ。
まあ確かに思い返してみれば、柊は翼を生やしたりしたのに、あんまり動き回るとかはしなかったな。寧ろ分身を作ってそいつ等に攻撃させてた。

あれは余裕の現れと思ってたけど、あそこが柊の定位置だったって事か。でもそれなら……確かに百倍（流石にそれはあり得ないだろうけど）が少しは想像出来る。
基本、後衛と前衛じゃ武器がそもそも刃物とかと杖で違うし……攻撃力の差は歴然だ。強力な魔法は大層な武器で切り札にもなるけど、スタンダードに打ち続けれる物じゃない。

少なくとも柊が後衛で、シクラが前衛なら、確かにシクラは強そうだ。てか柊で十分過ぎる位に強かったし……そもそも柊も、まだ全てを出してた訳じゃない……そんな気がするんだ。
それを考えると、コイツ等はマジで化け物。

「うんうん、その顔だよスオウ☆　ヒイちゃんは私達を守って支える、いわば縁の下の力持ち的な存在なの。だから基本、あんまり動かない。
人数が居たら、不利になるのは当然☆　だけどまあ、負ける何て思ってもなかったけど」

愛おしそうに柊の髪に指を通すシクラ。美少女二人の絡み合いは、端から見てると結構艶めかしい。てか、純然な男子高校生にはいろいろとさ。
だけどここはそんな敵の仕草にドギマギしてる場面じゃない。ついつい見入る位に美女な奴らだけど、その実反則だらけの最強の敵だからな。
今のところは。

「じゃあシクラ……お前はどこの立ち位置何だよ？」

僕は気を引き締めてそう聞いた。するとシクラは、僅かに妖しげな微笑みを称えて、その瞬間――僕らの視界から消え去った。

「「「！！」」」

その場所を見つめてた誰もが目を見張った筈だ。それは本当に一瞬で、音も無く立ち上がりすらもしなかった。そして更にはさ、抱きしめてた柊もいない。
そして不意に聞こえた声は、とても近かった。

「私はね、ヒイちゃんの様に重要でも、他の姉妹の様に特価した何かが有るわけでもないの☆　だけど、ううんだからこそ、私はどの姉妹よりも思考や理念、考え方が自由なの。
私はどこにも定まらないこの自由を、立ち位置なんて物で計る気

はないわ。でもどうしても気になるのなら、君が見定めてみる？」
耳の奥、そして脳まで響く気がした。僕は直ぐに後ろを振り返る。だけどそこにシクラの姿は無かった。するとまた高い場所から、声が聞こえる。
「あはははは☆　どうしたのみんな？　まるで狸に化かされた様な顔をしてるよ？」
「っつ……」
それは信じれない速さ。僕が完全雷化してる時と変わらぬ位だったかも知れない。でもそれをアイツは、涼しい顔でやってのけてしまってる。
なんて事だ……もしもシクラ達姉妹が全員揃って戦う何て事が起きると、そこには勝率なんか見いだせそうにない。
せめてこっちも、全てのバランス崩しを用意する位じゃなきゃだ。それでも勝てるかは五分五分もないかも知れないけど。
自由か……柊とかは存在意義でセツリの為を言ってる感じが有るけど、シクラの場合は意志を感じたりする。自由な意志……コイツは自身の存在に縛られたりしてないのかも知れない。
まあコイツ等がどういう存在なのかは、まだ決定的じゃ無いんだけど……でも、それでも大分見えてはきてる。後は確証だけ……ってあれ？
暗い空に何かがある。星空が不自然にくり貫かれてる。そしてシクラは指をその何かに向けて突き刺す。
（何だ？　何なんだ……アレは……）

僕達は必死に目を凝らす。その間にも、どうやらそれが指示だった様な悪魔は、上体を横に向けてメイスを構える。
そしてそんな中、最初に声を出したのはアギトだ。

「アイリ？　あれはアイリだ！！」

炎が空に延びる。そして照らし出すのは、紛れもないアイリの姿。意識は有るみたいだけど、開く口からは声が出ていない。シクラの小細工か。
だけど何で……というかあの一瞬で？　ただ自分のスペックを見せつけただけじゃ無かったって事か。そういえば無駄に思える様で、無駄じゃない事をする奴だった。

つまりは元からアイリを狙って一瞬だけ降りてきたのか。そしてどういう訳か、アイリを倒そうとしてる。悪魔を使って。

「言ったよね？　だけど……って。最初は確かにこの国を滅ぼした姿を見せて覚醒させる気だったんだけど、どうやら進行は私が思ってたのよりも早いみたい☆
それなら、その原因で代わりになるんじゃないかなって思ったの。人の心はまだよく分からないけど、こっちの方がダメージ大きそうじゃない？」
「きっさまあああああああ！！！」

怒号の様に叫ぶアギト。その声は大気を震わせる程の怒りが混じってた。そして同時に、炎を纏わせた槍を空に向かって投げる。それは丁度、アイリへと迫ってたメイスにぶつかり、爆発を起こす。
爆煙で見えなくなるアイリ……どうなんだ？　メイスはアレで防げたのか？　そう思いつつ目を凝らしてると、煙から人影が飛び出した。それは間違いなくアイリだ。

「よし！」

僕らはその落下地点を予測して動き出す。だけどその時、落ちるアイリを追う様に爆煙を払い、巨大な手が姿を現した。

忌々しい程にまがまがしい悪魔の手。どうやっても逃がす気は無いようだ。シクラの野郎！！　僕達は急ぐ……だけど空中に居るアイリはどうしようもない。

今からじゃ魔法も武器での攻撃も間に合わない。そして……悪魔の手が、アイリを覆い尽くしてく。

「きゃは☆　さあ、よく見える所で、ズタボロに引き裂いてあげる☆」

「くっそ……」

捕えたアイリをもう一度高い所まで運んでいく悪魔。どうやらシクラの奴は、ギャラリーの前で公開処刑にしたいようだ。

確かにあの話からすると、そうしないと意味は無いのかもしれないけど……そんな事、許せる筈がない！！　だけど僕達は空を飛べない……打つ手がない。

そんな時、轟く力強い声がもう一つ。

「何をやってる貴様等！！　アレはアルテミナスの姫であり王だ！！　敵の好きな様にさせていいお方ではない！！」

黒き長剣が、空にない三日月を描いた。その瞬間、悪魔の片足が切断される。そして掲げようとしてた腕ごと、悪魔は地面へと落ちてくる。

地面に伝わる振動……そして舞い上がった土埃。その中から一人の騎士が現れる。捕らわれてたアイリをその腕に抱える人物は紛れ

もない……アギトとアイリが取り戻した絆……その人だ。

「ガイエン……お前」

「なさ……けない顔してるぞアギト。貴様が……私に言った言葉を思い出せ。そんな顔してる奴には……やはり……アイリは任せられんな」

言葉が途切れ途切れになるガイエン。さっきまで頭を抱えて苦しんでたんだ。どうみたって無理してる。だけどそれでも、僕達が束に成っても出来なかった事をやりやがった。

流石と言うべきか……なんか初めて関心したよ。だけど直ぐにもう一度大きな振動が伝わった。そして大地を震わせる様な声と共に、不気味な二つの光が煙の向こうで輝いた。

その瞬間、周囲に漂ってた土埃を突き抜けて大きなメイスが一直線にガイエンへと迫ってきた。悪魔の奴、自身の足の修復を待たずに攻撃して来た様だ。

振り返り長剣を構えるガイエン。だけどその時、一瞬、足下がフラツいた。やっぱり得体の知れない何かのせいで回復出来なかったのが痛いんだ。

てか、あの一撃を食らうとガイエンまでもやばいぞ。僕は走りだそうとした。だけどそこで肩を誰かに捕まれる。

「誰だ？　このままじゃ！」

振り返るとそこに居たのは、セラでもシルクちゃんでも無く、一緒に戦ったみんなでもない。それは鎧に身を包んだアルテミナス軍の一人だ。それなりに偉い奴なのかも知れない。

でもだからこそ戸惑ったよ。だってこのままじゃ、アイリだって

無事じゃすまないんだ。それはこいつらにとって死活問題だろ。だけど鎧に身を包んだ兵士は言う。
前を見て爽やかな声でさ。
「あの方が、もう走ってます。大丈夫ですよ。あの二人が揃って、アイリ様を救えない訳がないんですから」
その声は、とても慈愛に満ちてる様に感じた。顔は見えないのに、遠いいつかを馳せてる様な……そんな声。見続けた夢が……そこにはあるようだった。
そして彼が言ったようにアギトが走ってる。たどり着いたガイエンの側でアイツは言う。
「何が任せられないだ！　無様な形しやがって、俺がまとめて面倒みてやろうか！？」
「ふっ――」
迫るメイスは一直線に三人に向かう。だけどここで、強く地面を踏み込むガイエンとアギト。視線を交わし、その武器が互いに重なりあう。
「――ふざけるな！！」
声で気迫を取り戻したガイエンと、アギトの攻撃はメイスの下側を突き上げる。それによって真っ直ぐに突進してたメイスは上方へと逸れていく。
だけど強大な攻撃……巻き起こす風だけでも凄まじい。でも二度も攻撃を不発に終わらされた悪魔は怒り心頭の様子だ。
大きく叫び、今度はその口に炎の固まりが収束しだす。

「おいおい、流石にアレには加勢した方がよくないか？」
「う～んそうですね。お二人とも熱くなると突進するタイプですからね～。アイリ様は声が出ない様ですし」

気楽に言ってるけどあれはマジでやばいって。広範囲を燃え散らす炎の攻撃。ガイエンとアギトじゃ、防ぎようが無いだろう。

「シルク様！」

見かねたセラがシルクちゃんに防御魔法を頼む。確かにそれがベストの選択。だけどその時、後ろから淡い光が大量に光りだした。
そして僕の肩を掴む軍の奴が、自身の剣をアギト達に向けて言い放つ。

「アルテミナス式広範囲魔法障壁展開！！　我らが姫と初めての騎士……そして導いてくれたあの方を守り通せ！！
我らアルテミナスの騎士の誇りに賭けてだ！！」

ドン！　ドン！　ドン！　そんな音が三回聞こえた。それはきっと、この場に集ってる軍の連中の応対だったのかも知れない。そして軍の後衛の人達が一斉に、多分そのアルテミナス式ってのを唱えてるんだろう。
溢れる光は、地面に幾つもの魔法陣を描き出す。それは次第にガイエン達の所までもくまなく続く巨大な魔法陣へとなる。

悪魔の口から放たれる火炎の固まり。だけどそれは、広範囲に展開された光の壁の前に阻まれる。地面を円をなぞる様に走る炎。
だけど目の前に居る三人は全くの無事だ。ある意味拍子抜けした感じでこちらを振り返るアギトとガイエン。それに軍のその人は敬礼で応えてた。

だけどまだ諦めきれない悪魔は、今度はその見栄えがする角で突進をかましてくる。それには流石の数十人での障壁も次第に歪みを出してくる。

「お二人とも早くこちらへ！　元々これはそう長くは持ちません！！」

その言葉でアギトとガイエンは、アイリを抱えてこちらへ駆ける。だけど途中で異変が起きた。ドサッと音を立てて地面を落とされるアイリ。

そしてそんなアイリにガイエンが震える腕で長剣を向ける。

「何……やってんだガイエン！！」

叫ぶアギト。だけどアイツもわかってるだろう。それは多分、ガイエンの意志じゃない。このタイミングでまた……何かが表に出ようとしてるんだ。

ガイエンの肌が見える部分から浮かぶ幾何学模様……それがこの魔法陣の光の中では良く分かる。

【邪魔するな！！】

手を伸ばしたアギトを切りつけるガイエン。だけどその声は違ってた。やっぱりガイエンじゃない何かが出てきてる。

「っつ……誰だ！？　お前は誰だ！！」

槍をガイエンに向けて構えるアギト。でも奴は攻撃出来ないと知ってるからだろうか、変わらぬ声で返してくる。

【誰？　見てわからんか？　酷いじゃないか、私達はわかりあった仲の筈だろう？　ガイエンだよ。お前達の仲間で友達のガイエン。
どう見たってその筈だ】
「ガイエンは……アイリに剣を向けたりしない！！　貴様は誰かって聞いてんだ！！」

たぎる炎がガイエンに向く。そして僕達もその周りを囲んだ。こいつをアギト一人で相手させる訳にはいかない。だけどそんな状況を見ても尚、ガイエンである何かは邪悪な笑みを浮かべて言い放つ。

【私が、この女に剣を向ける理由は有るはずだがな？　私はお前が憎い。お前を選んだこの女が憎い。何も思い通りに成らない世界が憎く、呪ってしまいたい！
それが私の本音だよアギト！！】
「っつ！！」

腐った事をそいつはしてた。そういう諸々を三人はようやく乗り越えた筈なのに……傷に塩を塗りたくるような事を言いやがった。
それもこれ見よがしな邪悪な笑みで。突き刺さる何かがきっとアイリとアギトにはあったんだろう。表情が苦痛に歪んでる。
だけどその何かの攻撃はまだまだ続く。

【私にはあるだろう！？　なあアギト！　なあアイリ！　二人で幸せにでも成ればいい！！　その代わり私は、この世界の全てを憎み呪おう！　忘れるな、そうさせたのは貴様達だ！！
だから貴様達がこの憎しみと呪いに呑まれることを、拒絶なんてしないよなぁ？】

吐き気がする様な言葉。だけど二人は今にも折れそうな顔してる。

何やってんだアギト！

「惑わされるな！　そいつはガイエンじゃない！　分かりあえたんだろう？　ぶつかり合ったんだろう？　そして納得したから、もう一度お前達と戦えたんじゃ無いのかよ！！」

僕の言葉にアギトは槍を投げ捨てた。その時、既に長剣がアイリへと迫ってる。だけど拳を握りしめたアギトの思いが、ガイエンの顔面を打ち抜いた。

裸の拳（後書き）

第百六十話です。

ガイエンが大変な事に！　ってな話です。まあ実は前々からガイエンは大変な事に成ってたんだけど、それが本格的に動き出した感じです。三人の行く末はどうなるのか？　そしてスオウ達はこの侵攻を止めれるのか……次回へ続きます。

てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

引き上げるは心の糸（前書き）

アギトの拳が刺さり、吹き飛んだガイエン。アギトの思いと言葉は、闇に押しやられたガイエンの深い所に届いた。だけど何かが解決した訳じゃない。軍の障壁が悪魔によって破られて、その脅威が僕達に再び迫ったんだ。

やるしかない……僕達に下がる場所なんてもう無いんだ。その時ガイエンがアイリに戻した物。それが夜空に二本の光の柱を伸ばす。

引き上げるは心の糸

「ぐはっ！？」

そんな言葉と鈍い音が周囲に響き、ガイエンの体は横っ飛びして地面を転がる。そして同時に、手から放れてた長剣も、地面に虚しく落ちていた。

「ハァハァハァ……」

肩を揺らして息をするアギト。そんな大層な攻撃じゃない。たった一発の拳を打ち放っただけだ。だけど……それだけの葛藤や、覚悟がきっとその拳には乗っていた。

今のガイエンに攻撃するってのは、それだけで背負う物があるんだ。特にアギトなら尚更。でも……それが出来るのはアギトしか居なかったとも僕は思う。

「させ……ねえよ。お前はガイエンじゃない……ガイエンじゃないんだ！！　聞こえてるかおい！？　何やってんだお前！！

こんなクソ野郎にみすみす体使われやがって、さっさと戻らねーと今度は容赦しねーぞ！！」

アギトは倒れ伏したガイエンに怒鳴り散らす。それは本当にもう一度やりそうな気配がするほどの気迫だ。だけど口から血を流すガイエン（偽）はまだまだ諦めてはいないようだ。

腐った言葉をあいも変わらず吐きやがる。

【ははは！！　私を殴るかアギト、お前は！　この血が見えないの

か？　私はお前の何だ？　友達だろ？　仲間だろ？
それでも殺すのか？　この私を！？　お前は最低の人間だ！】

闇に溶ける様な笑い声が木霊する。分かってたけど、思わず斬り裂きたくなる奴だ。だけどアギトがそれを我慢してるのに、僕が横から入る訳にはいかない。
アギトはそんなガイエン（偽）の笑いが収まるのも待って、決意を秘めた言葉を紡ぐ。偽物の言葉になんか惑わされない……思いの丈を、決めた決意を。

「やって……やるよ。俺はアイリを守る！　どんな敵からだってアイリを守る！　そう誓った……そしてその役目をお前から預かったんだ！！
これ以上アイリを傷つけ様とするのなら……俺はお前だって倒して見せる！！」

アギトの目はマジで、だからその言葉もマジなんだろうと分かる。後方で障壁とぶつかりあう悪魔がうるさい。だけどそれ以上に、再びガイエン（偽）が高笑いをする。

「ガイエン……戻れよ！！　お前こそ忘れんな！　お前が居なくなっても、アイリは悲しむんだよ！！　だから、戻ってこい！！」

だけどアギトは関係なしに言葉を紡ぐ。その笑いの中のずっと奥。本当のガイエンに届かせる言葉をだ。すると不意に言葉が途切れ途切れに成っていく。

【お笑いぐさだ。ははははは……はは……はは……はははは……「うるせえよ」……何！？　お前……「だけど、それでいい。そうでなくちゃ困るんだよアギト」お前なぜまだ抵抗を！？

お前のコードはほぼ私が！！　「まだ、私はここに居る……私はまだ！　逝く訳には行かない！」きっさまぁあぁあああああ！！】

二つの声が入り乱れるガイエン。本物は、確かにまだそこにいる。ガイエンの体に浮かんでた幾何学模様が次第に形を潜めていく。
やっぱりまだ、覚醒には至らない……だからアギトの言葉が届いたんだろう。そして最後に、自分で自分を思いっきり殴る。

「お前は……ガイエンか？」
「はぁはぁ……私は、私以外の何者でもない。私は、私以外に成る気はない！　アイリが悲しんでくれるのなら、ただ死ぬわけにもいかんしな」

そういうガイエンは、辛そうにだけど何とか体を起こす。でもやっぱり、幾何学模様は完全に消えた訳じゃないし、あの何かが居なくなった訳でもないんだ。
ガイエンの姿は相変わらず、黒い肌に白い髪、そして赤い瞳のまま何だから。何をキッカケにして再びあのクソ野郎が出てこないとも限らない。
そしてやっかいな奴が、それを望んでる訳だしな。

「ガイエン！」

そんな考えをしてる内に、シルクちゃんによって、掛けられてた拘束を説かれたアイリが、ガイエンを抱きしめる。
するとクールを気取ってたガイエンの顔がボンってな感じで弾ける様に見えた。リアルならそれでもクールを装うんだろうけど、ＬＲＯの過剰表現の前ではそれは無理だった様だ。

「ああ、アイリ……私にこういう事は止めろ！」
「だって……だってだって、私のせいでまた無茶させた。私の為に、また頑張ってくれた。このくらいさせてよね。それに……その通りなんだから。
ガイエンが居なくなったら、私寂しいよ。悲しいよ」

華奢なその体に、大きな物を背負う彼女は泣いていた。頬を伝う涙は、ガイエンには見せない様にしてるけど、こちらからは丸見えだ。
そんなアイリの頭にガイエンは手をおいて、呆れた様な視線をアギトへ送る。そしてさらに上の、大きな夜空を仰いでこう言った。

「お前は……酷い女だよアイリ」
「分かってます。だけど……私達の為に、またガイエンが全部を無くすなんてイヤだから……だからごめんなさい」

震える様な声で涙を流し続けるアイリ。これもまた折り合いなのかな。ガイエンもどうやらアイリの事が好きだったぽいし。だけどアギトとアイリは両思い……そこにガイエンの入る隙なんてなくて……それがいろんなイザコザの原因だったって事か？

全部を知らない僕が、どうこう言える事でもやっぱり無いけど、酷い女って言うところはまあ分かる。折り合いをつけたって、辛い物は辛いよな。
だけどそれはどっちもなのか……だからアイリも涙を流してる。でもそれをされると、男は許すしかなくなる訳だけどな。

「ねえ、大丈夫なんでしょうね？　アンタが心配じゃなく、アンタの中に居る奴が出てこないか言ってるから答えなさい」

空気をぶち壊す様にそう言ったのはセラだ。相変わらず口悪いなこのメイド。仮にも少し前まではさ、ガイエンって上司だったんじゃないの？

まあガイエンがクーデター起こした直後から既に、セラはこんな感じでガイエンの事を語ってた様な気もするけどね。

だけどアイリのその態度には、親衛隊が黙っちゃいない。

「お前！　ガイエン様になんて口の利き……」

尻すぼみした原因は、セラの一睨みに気圧されたからだ。

「何？　言っとくけど、私はアンタ達がやったことを仲直り出来たから、はいそーですかって流さないわよ。それなりの立場に居たなら尚更、責任はちゃんと取るべき。

だからそれまでは……生きときなさいよ。アンタがアンタとして取るべき責任があるでしょう？　まだね」

セラの言葉は重いけど、正論だった。責任か……確かにセラの言うことは最もかもしれない。僕もこの後にこいつ等がどうなるか……それは気になってた。

だってクーデターなんてリアルじゃ極刑だろ。でもここはＬＲＯで、ルールは彼女が決めるんだろう。それなら、酷いことにはなりはしない。だけどケジメは必要……か。

セラの言葉を受けたガイエンは、アイリを取り合えず引き剥がす。そしてセラへと視線を向ける。

「相変わらずだなお前は。だが、そういうお前だから誘った訳だよ私は。正直……いつまで持つかはわからん。私の中の奴は、動き出すのも気まぐれでな。

丁度あの女に似てる。思い出すだけで怒りがこみ上げるあの女に

な」

それって絶対シクラだよな。ガイエンの奴、相当腸が煮えくり返ってるみたいだ。

「つまりはやっぱり、ガイエンを解放するにはあの人……シクラでしたっけから、その方法を聞き出すか直接それをさせるしかないって事ですね」

「ああ、確かにそれしかない……が」

アイリの言葉に歯切れ悪く答えるガイエン。自分の事なのに、余り乗り気じゃない様に見えるな。その時だ。何度目かの悪魔の突進。それで魔法障壁が破れられた。

魔法陣の光が消えていく。それと共に、夜の闇が再び周りを多い尽くしていく。

「っつ……下がれ！　アイリもアギトもだ！　お前達に何かあったら、自分がどうなるかわからん」

「下がれだと？　これ以上下がってどうする！？　俺たちの後ろにはアルテミナスがあるんだ！！　それにお前を助ける為には、ここで下がる訳にはいかない！」

ガイエンの言葉に食い下がるアギト。だけどどっちの言い分も同じくらい重要だ。ガイエンは確かに次はないかも知れない……二人のやられた姿なんて見たら、それはもうシクラが言う覚醒とかが起きてもおかしくない。

だけどアギトやアイリ達はガイエンを解放したいんだ。それにアルテミナスだって守らなきゃいけない。それにはこれ以上は引けないし、前にシクラが出てる今はある意味チャンス。

てか大量のオーク共が流れてきたら、それ所じゃなくなるかも知れない。再び炎の固まりを収束しだす悪魔。まともに貰えば、ここら辺に集ってるプレイヤーは根こそぎ全滅の恐れがあるほどの攻撃だ。

揉めてる場合じゃない。

「おい！　取り合えずアギト達は下がってろ。僕達で何とかするから！」

「そうね、それがいいです。アイリ様達はお下がりを」

僕とセラは強引に三人の前に立つ。どちらの言い分も正しくて危ないのなら・・僕達が出るしかないじゃないか。それにもう一度足を切り落とせば、どうにかなるんじゃね？　とかも思ってた。

でもその時……悪魔は信じれない事をやりやがった。奴の背中にあったコウモリの翼。それを羽ばたかせて地面から浮き上がる。

「なっ！？」

せいぜい四・五メートル位しか浮いてないけど、それでもあの巨体が浮いてる事にビックリだよ。てか四・五メートルでも剣は届かないぞ。

「あれって飾りじゃ無かったの？」

「セラ！　聖典で僕を運べないか？」

「無理よ。だって聖典は今日はもう打ち止めなの。全部使って、全部壊れたわ。一日経たないと、次の使用は出来ないのよ！」

何てこった……いや、それだけの戦いをセラ達だってしてる……その覚悟はあった。僕らの読みが、完全に甘かったんだ。

空中で集う炎の玉は、何だかさっきよりも格段に大きく成ってる

気がする。あの悪魔、溜を長くして威力を大幅にあげてる様だ。
くっそ、このままじゃ為す術がない。流石のシルクちゃんでもあの人数は守りきれないし、あの魔法障壁は連続で使えないみたい。強力な魔法はそれだけ詠唱も長い。
散会する時間も無い……だけどその時、セラが閃いた。
「そうだノウイ！　ミラージュコロイドをあの悪魔の鼻っ柱に伸ばして！！」
「は、はいっす！！」
成る程。そうか、余りに存在感が薄くて忘れてたけど、ノウイがいた。戦闘能力は皆無な奴だけど、その実貴重なスキルを持ってる奴。空にだって、確かにこれならいける！！
だけどその時、アギトに待ったを掛けられた。
「ちょっと待てスオウ！　お前だってガイエンと同じ条件なんだぞ！？　真っ先に行こうとするな！！」
だけど僕はもう走り出してる。流石にこの勢いを止める気はない。てか、ここで止まったら間に合わなくなる。だから僕は言ってやるよ。
「僕にとってはそんなの、今更だろ！！」
セラ・シルフィングを抜き去り、僕は鏡へと突っ込んだ。次の瞬間目に入ったのは大きな炎の固まり。そしてその熱量が襲ってくる。
熱い……まるで太陽に身を投じてる様だ。だけど、僕の後ろには大勢のプレイヤーがいるんだ！　この戦いに勝つためには、今ここで余計な犠牲を出すわけにはいかない。

「うらあ！！」

僕はセラ・シルフィングをその炎の固まりに突き刺した。風の唸りと雷撃を中で発生させ、そしてーー

「やらせるかあぁあああああああ！！」

――上下に斬り裂いた。球に成っていた炎が崩れて、その先に悪魔の顔が見えた。だけどそれも一瞬。溜の最中にいきなり崩された均衡は、崩壊へと続く。

切り裂かれた炎の固まりは、目の前で広範囲の炎へとなる。これはやばい……僕だけでも黒こげに成りそうだ。

悪魔の野郎もその炎が自身を焼いてるようだ。野太い叫びが炎の向こう側から聞こえてた。

「くっ……」

「スオウ君、こっちっす！」

届いた声の方を向くと、そこには鏡から半身を乗り出して手を伸ばすノウイがいる。ナイスタイミングだ。そういえばどうやって着地するか何て考えて無かった。

いつもの事だけどさ。それを見越してノウイは来てくれたんだろう。炎に飲まれる寸前で、僕はノウイの手を取る。そしてそのまま鏡の中へ。

地面に足が着き上を見上げると、そこには悪魔が炎に焼かれて落ちてくる所だった。一歩間違えば、僕も同じ様になってたかと思うと、気が気じゃないな。

だけどああならなかった自分がここにいる。それが僕とあの悪魔

との違いだな。僕には助けに来てくれる仲間が居る。けれど悪魔にはそんな奴、居るわけがない。

シクラ達はさ、ペットとも思ってないんだ。それこそ、あの悪魔もただの駒。やるせないな、何かさ。

赤く燃え上がる悪魔が地面に落ちる。それは痛々しい音を響かせてこちらに伝わる。決めの一撃が返ってきた様なものだからな……悪魔にとっては予想外の災難だろう。でもこれで、何とか攻撃は回避出来た訳だ。

「やったっすね」

「ああ、助かったよノウイ」

この程度で、あの悪魔が死ぬとは思えないけど、取り合えずダメージは残せるだろう。

「スオウ、お前は……無茶しすぎだ」

そう言って頭を抱えてるのはアギト。

「全く、とんでもないバカだな。類は友を呼ぶって奴か？」

「……おい、それはどういう意味だガイエン？」

「言葉のままの意味だよ」

「「なんだとテメー！！」」

ガイエンのクソ野郎に、僕達二人で怒鳴りかかった。だってほら、バカって酷い。

「「それはこいつだけだ！」」

二人一緒に、互いを指さして更に叫ぶ。だけどそこに、セラが冷たい視線を送って前に出ていく。

「どっちでもいいじゃないそんな事。私から見れば、十分二人ともバカって感じですよ。まあ少なからず、そっちの命知らずの方が大バカって感じだけど」

「なっ……」

なんだか楽しそうに言いやがってセラの野郎。アイツは口を開く度に、僕を罵らないといけない呪いでも受けてるのか？

けれどそこで的外れな言い分が聞こえてきたよ。

「そ、そんな事ありませんよセラ。アギトだって十分に大バカなんだから。私はそう思うな～」

「何言ってんだアイリ！？」

アギトにしてみれば、全くいらないフォロー。て言うか、フォローにすら成ってない。ある意味傷つけてるんじゃなかな？

好きな子に大バカなんて言われたら、そりゃあショックだよ。でも言った方のアイリはなんだか恥ずかしげにしてるような……自慢できる事でも無いと思うけど。

「そうでしたか？　すみませんアイリ様。きっと貴女の前では大バカに成るんでしょうね。覚えておきます」

「ちょ！　セラまで変な解釈するな！！」

敵じゃなく、味方のはずの女子二人に追いつめられるアギト。何やってんだかな？　つうか、僕が大バカなのは決まりな訳？　全然誰も全く気にしてないから、自分でも納得仕掛けたわ。

だってアギト達の会話って、僕が大バカなの前提じゃん。そこに

並んでるか並んでないかだよね？　周りはそんなやりとりを見て微笑ましいだろうけど、悪口だけ言われて置き去りにされた僕は、一体どうすればいいんだろうか。
何か、否定するタイミングも逃しちゃったよな。だけどここで、セラは不意に話題を変える。

「まあまあアギト様。バカとかは一端ここではおいときましょう」
「お前が言うかそれを」

不満気なアギト。けれどセラはもがく悪魔の方を向いて口を開く。

「臭い……と思いませんか？　あの悪魔、結構燃えてるんじゃないでしょうか？　今なら、私達が束に成って掛かればやれるかも知れません。
面倒な女が出てこない前に、少しでも戦力を削るのはいかがです？」

セラの提案にみんながあの悪魔を見る。確かにまだ燃えてるし、シクラ達も悪魔が倒れてから見ていない。これだけいれば、悪魔は確かに倒せるかも。
ここで悪魔を倒せるとしたら、それは価値がありそうな気はする。シクラ達がいたら、無闇に動けなく成るからな。

「確かにここであの悪魔を倒せるのなら、倒すべき何でしょうけど……」

不安そうなアイリの言葉。心配毎は常に尽きない物だ。でもチャンスは掴まないと流れてく……そうなったら意味はない。それを彼女だって知ってる筈だ。
何てたって、この国を導いて来たんだから。

「いや、セラの言うとおりだ。あの悪魔を倒すのに、これ以上のチャンスは無い。お前は姫で王なんだ。取るべき物が何なのか位、分かるだろう」
「私は！　両方大事なの！　あの時、この国を守りたいと思ったのはみんなが居たからです。そしてみんなが居てくれるこの国を……守りたいとも思った！
どっちか何てダメなの。どっちも大切でどっちも守りたい。だから迷うのよ……」

アイリの言葉がこの場に響く。どっちも……大切な物すべてを守る。それは……それが出来たらどんなに素晴らしいだろうと思う。僕はいつだってそれを目指してる。
だから僕なら、簡単にアイリに賛同出来るんだけど、アイリがそれを望ませたい相手は僕じゃない。だけど僕の印象的に、ガイエンって綺麗事とか抜かしそうだよな。
けれど、ガイエンが次に出した言葉は、僕のイメージとは違う言葉だった。

「なら……そのままの言葉を口にしろアイリ。幾ら綺麗事だろうと、夢見がちな理想論だろうと、お前が私達の王なんだ。
私達はその言葉に全力で応えようとしてみせる。私もやられず、アルテミナスも守られる……それは夢だと私は思う。
だけどここは……そんな夢をねがえる場所だ。悪くない」
「ガイエン……」

意外な言葉。そう思ったのはどうやら、僕だけじゃ無かったようだ。アイリもアギトも……セラや、親衛隊まで意外そうだったけど、同時になんだか嬉しそうだった。
いや、親衛隊はちょっと戸惑ってる様だったけど、それでもアイ

ツ等が信じたのはガイエンだから、文句は言わないんだろう。
それからガイエンは自身の腰にあるものを取り出した。それは小さな剣……だけどとても大きな価値のある剣だ。最初にアイリが手にして、ガイエンがその野望の為に奪い去った物。
けれどそれが、再びあるべき者の所に戻ろうとしてた。
「やっぱり、これはお前の物だ。カーテナは、お前にこそふさわしい」
「ガイエン、ありがとう」
アイリの手に再び包まれるカーテナ。すると一瞬だけど、その刀身に光が走ったように見えた。いや……それは見間違いなんかじゃない。
アイリの手に戻ったカーテナは、輝く光を放ってる。それはまるで、カーテナが主の元に戻った喜びを表してるかの様だ。
「な、何？」
狼狽えるアイリに、ガイエンが悟った様な言葉を掛ける。
「その輝きこそが、カーテナが生み出す光……何だろう？　私が幾ら求めても応えてくれなかった光だ。それを掲げて示してくれれば、我らはその道を開いてみせる。
王よ。その言葉を我らに」
膝を付くガイエン。それはまさに、王と従者の姿だ。すると一斉に、周りのアルテミナス軍も同じ様な態勢へとなる。彼らが待つのはそう……王の言葉だ。優しい王の、優しい言葉。
だからこれだけの人達が、慕い集い、そして必死になれる物があ

る。アイリの顔が毅然とする。涙が溜まってる様にも見えるけど、それでも必死に凛とした表情を崩さない。

空に掲げるカーテナ。するとアイリを包む光が夜空へと伸びる。すると後ろから更に大きな光の柱があがった。一体何が……そう思って振り返るのは僕とテッケンさん達。

その光はアルテミナスから伸びていた。二つの光は呼応して、その欠片はエルフの人達に降り注ぐ。ああそうか、これが本当のカーテナの加護なんだ。

そしてアイリは紡いだ。

「お願いします。私は何も失いたくない！　みんなの力を私に貸して！！」

引き上げるは心の糸（後書き）

第百六十一話です。
色々とやる事が多くて、なかなか進みません。まだまだ出さないといけない人たちが居るんですけど……きっとスオウやアギト達も忘れちゃってる可愛いそうな子とかね。
ここからは集団戦と言うか、本格的に戦闘が激化する筈です。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。それではまた～。

メイドの心ともしもの向こう（前書き）

私には、何がしてやれうのだろうと思ってた。傍にいるだけ？ううん、そんなのじゃ自分は自分を許せないの。あの時、何も出来なかった私。アギト様が去って、重圧が増えた筈のアイリ様。

だけど私にそれを分けてくれる事はしなかった。私達は、見えない壁で隔たれてる。あの人がそれを許す相手はほかの誰もでも無くて……それでも待ち続ける背中を見続けるだけじゃ居られなかった。

ただ何かをしてあげたい……少しの繋がりしか私たちだけど、初めて出会った時からそう思ってた。可愛くて真っ直ぐで……でも人一倍寂しがり屋なあの子を、、私はその時に感じてしまったから。

メイドの心ともしもの向こう

「「「うおおおおおおおおおおおおおお！！」」」

大地に響きわたる何重もの叫び。自分達の前に戻ってきた王。その喜びに、その叫びは震えてた。そこには、今までもっと後ろの方に居た、軍の末端まで多分入ってる。

盛り上がってるな……てか、待ち望んでたんだろう。そんな雰囲気が感じれる。

「すごい……ね」

「ああ、そうだな」

シルクちゃんが感心したようにそう言った。僕はまあ、素直に応えたよ。確かにこれはスゴいからな。今までも、それなりの人数で戦闘をしたことはあったけど、この人数は初めて。

てか、これだけのプレイヤーが集まってる所なんて、町中でもそうそう見れない。しかも殆ど……僕達数人を除けばエルフだしな。

そして集う心、それは圧巻だ。光の中で、王である彼女は示す。カーテナを向け、そこに居る敵を。

「まずはあの悪魔を倒しましょう。他の敵が動く前に、厄介なアレは潰します！」

アイリの言葉で一斉に武器を構え出す軍の人々。そしてその一番前に、僕達が見知った奴が出ていく。赤く燃え盛る様な髪のエルフ。それはアギトだ。

「なら、俺が戦陣を斬る。それが役目だからな。当然、そのつもりだったんだよな？」

アギトが僅かに後方へ視線を向けて、アイリへとそんな言葉を掛ける。

まあアギトにはお似合いだと思うけど。てかなんだか、アルテミナス軍でもましてやエルフでもない僕達少数は何だか出る幕が無い感じに成ってる。

これだけ居れば、悪魔の一体位は大したことは無いだろうけどさ。でも、本当によくここまでテンションを引き上げたよな。

実際、アイリがああやってカーテナを手に立ち上がるまでは、敗戦空気が漂ってた筈だ。僕達がそれぞれに戦ってる間、こっちでも激しい戦いがあって軍のみんなもボロボロだった。

なのにこれだよ……実はちょっとアイリって本当にスゴいの？とか疑ってたけど、この盛り上がりの中心で堂々としてる彼女を見ると、やっぱりそれだけの事をした人だと思った。

こんなに慕われてるなんて本当に凄いだろ。ＬＲＯというゲームの筈の世界……そこで生まれて繋がった絆は、これだけの光に成ってるんだ。

「それでアギトがいいのなら。それほど頼りになる事はありませんから。みんなもそれだと心強い筈です」

周りを見渡すと、みんな暖かい目をしてた。それが当然で、そうでなくちゃいけないみたいなさ。どうやら、みんんが待ってたのはアイリだけじゃ無いみたいだ。

アギトもそんな周りの様子を見て、何かがこみ上げて来たのか、俯き加減になってしまう。

「アギト様……おかえりなさい」

そう言ったのは、障壁展開の時指示を出してた奴だ。そしてその周りには、数人のエルフが集まってる。僕は全然知らないけど、アギトはどうやらそうじゃないみたいだ。

彼らを見て、その顔には驚きとそれから、やるせなさというかそんな物が入ってた。

「お前達……じゃあ」

アギトが向くと、その指示を出してた奴は重そうな兜を脱ぎ払う。そこから顔を出したエルフを見て、アギトはやっぱり……という顔をした。

「ずっと、待ってました。アギト様がアルテミナスから居なくなってしまったあの日からずっと……この日を待ち望んでました。

顔を上げてくださいアギト様。山ほど言いたい文句も、何で一人で逃げ出したかの理由も、この自分達の国を救った後で聞きますよ。

我々一同、もう一度貴方の元で戦えるのが楽しみなんです。そしてもう、守られるだけの足手まといじゃない所をお見せしますよ」

アギトのすぐ近くに集う数人が、良い笑顔を作ってアギトに贈る。それは多分、アギトには抱えきれない程だったんだろう。

震える肩が、拳が丸見えだ。その時、枠の外にはみ出された様な感じの僕達を見かねてか、セラが情報をくれた。

「彼らはアギト様が軍に居た頃の部下なのよ」

「ああ、そう言うことか」

成る程ね。待ってたってのはそういう意味。アギトはアギトで、随分慕われてた様じゃん。何も言わずに消えた上司を待ち続けるなんて、普通しないよ。

て言うか、僕はあることに気づいてしまった。

「あのさ、思ったんだけど……誰も探さなかったのか？」

「探さなかった。アイリ様がそうさせたもの。何があったかは詳しいところは私も知らないけど、アイリ様がそれを信じて決めた以上、私達が勝手にやるわけにはいかないでしょ」

ふ～ん、随分忠義に厚い事だ。まあでも他の奴らがそうなのはまだ分かる。でもさ……セラはそうじゃないと思うんだよな。

確かにアイリと一番親しいし、誰よりもアイリを思ってるのは知ってる。軍の中じゃそうだろ。でもそれだけが、こいつの行動原理だとは思えない。

だから僕は聞いてみた。

「でも、探したんだろ？」

「……まあね」

やっぱり。そうだろうと思った。でないとタイミング良すぎると思ったよ。あのイベントの後直後だったし、ガイエンがセラを寄越したのも、アギトがどこにいるか知ってると分かってたからだろ。

何か色々繋がるな。

「でも、私は探しただけ。それ以上は何もしてないわ。それにタイミングも良かったのよ」

「どういう事だ？」

「忘れた？　私を使わせたのはガイエンなのよ。あの頃の私が、何の理由もなくアイツの指示に従うとでも？」

やっべぇ～超思えない。そう言えば、最初アルテミナスでアイリとアギトが会ったとき……驚いてたな。アイリ自身が呼んだのならそんな事あり得ない。
じゃあ、セラはそのタイミングなんたらでガイエンの指示を利用したって事か？

「私はね……ずっとアイリの傍に居たわ。だから分かってた。アイリは辛そうだった。ずっとずっと……ＬＲＯで笑うこと何て本当に無くなってた。
私は、私自身が怖がってたんだと思う。このままじゃ遅かれ早かれ、アイリも消えるんじゃないかって。そしたら、私が好きなこの国は無くなっちゃう。そんな危機感を感じてた。
さっきタイミングが良かったって言ったけど、本当は悪かったのかもね」

そんな事を言うセラは言葉を紡ぐ間、ずっとアイリを見てた。そこには、アギトの優しく見てるアイリが居て、そのアイリをセラは満足そうに見つめてる。

「だけどガイエンの不穏な動きも、侍従隊を使って分かってたしで色々と切羽詰まってる所で与えられた命令だった訳。
自分だけじゃどうしようも出来ないって分かってた。私じゃアギト様の代わりにはどうしたって成れない。だって恋心を埋められる代改品なんてないんだもの。
私はね……全てをなくす前に賭ける事にしたわ。手遅れに成る前に、自分が出来る事はやりたいじゃない。それに向こうがカードを先に渡してきた、使わない手は無かったわ。
それにここ最近は、アギトの様の位置は簡単に分かってたもの。誰かさん達は、注目の的だったから」

「う……」

そんなに目立ってたんだ僕達。こうやって第三者に言われると何だか自覚するな。まあ全プレイヤーに通知されたクエストだし、今までに無いことがオンパレードしてるから、注目されない訳がないんだろうけど……てかさっきからアイリの呼び方に様をつけてないセラ。

気兼ねしないでいい存在にでも格上げされたのかな？　いや、単に僕が対面を気にしないでいい存在なだけか。たく、どこまでも不遜なメイドだ。

「まあ、お前は勝ったんだな。その賭とやらにさ。だからこそ、アイリとアギト、そしてガイエンもこうやって一緒にいれてる。

お手柄じゃんか」

僕がそういうと、「あんたバカじゃん？」てな感じのいつもの返答じゃなく、首を横に振って優しく答えてくれた。

「そうかな？　確かに今のあの感じは、私が求めてたもの。でも、あの中に私の出る幕なんて無かった。アイリやアギト様がそれぞれ頑張って、他の方々の協力を得て掴み取った物よ。

私は結局、自分の欲で動いただけだしね」

謙遜するセラ。というか、そうしたいと感じる言葉。まあこいつは慰めも賞賛を求めて何かいないんだろうけど、僕の口は思わず動いてたよ。

「別にそれで良いと思うけど。アイリだってアギトだって、それは欲だろ。帰ってきてほしいとか傍に居たい、許されたいってのはさ。

こうならなかった結果はｉｆとしてあったかも知れない。でもさ、

今ああやって凛々しく立ってるアイリの姿は、お前があの時動かなくちゃ、存在もしなかった姿かも知れないんだ。
誰かに自慢しなくったって、僕は一応分かっててやるよ」
「……分かったような事を言う、そんなアンタが私は大っ嫌いよ」

ヒド！　ここで向ける言葉じゃ無いよ。やっぱり感謝を知らない腐ったメイドモドキに言葉なんて掛けるんじゃ無かった。
でも何だろうな……気のせいかも知れないけど、いつもよりもそのトゲは優しかった……そんな気がした。言葉はあんまり変わらないけど、ニュアンスがって意味で。

事実セラの奴は、言い終わるとそそくさとアイリ達の方へと近づいて行ったし、それが照れ隠しに見えた僕の目は腐ったのだろうか？
そうこう話してる内に、アギトは元部下を従えて突撃する気満々だ。そしてその瞬間を、周りの誰もが固唾を飲んで見守ってる。

唸る悪魔の声と音が前方で響いてる。それが止む雰囲気が漂ってた。それをみんな思い描いてる筈だ。アイリとアギトが目配せをする。そしてガイエンともだ。
ジリ……と地面を踏みしめた――その時だ。

「アギト様、それは私に譲ってくれませんか？」

そんな言葉に驚いて、アギトは飛び出す態勢のまま顔をその声の主に向ける。誰もがアギトに続いてそうしてた。そして視線の先に居るのは、やはりだけどセラ。アイツ、何出鼻を挫いてるんだ？
誰もが納得した采配じゃないのかよ。

「何言ってるんだセラ。アギトがこの役には適任だ。お前もそれはわかってるだろう」

呆気に取られてか、アイリとアギトが言葉を出せないからガイエンがみんなの言いたい事を言った。だけどそんな誰もが認める言い分を、セラは鼻で笑ってたたき落とす。

「ふふ、ガイエンそれでも貴方参謀なの？　確かにアギト様がこれをやることに、私以外は反対しないでしょう。だけど私は、アギト様がこのまま突っ込むのは最善だとは思えない」

「何だと？」

鼻で笑われたからだろう、ガイエンの言葉の端には苛立ちが感じれる。だけどセラはそんなの気にしない。てか、元々嫌ってるガイエンを目に入れようとはしない。

セラはアイリとアギトをそれぞれ見て、更に言葉を紡ぐ。

「だから、お二人の今の状況を見て気づかないのって事よ。今の二人には戻った力がある。私たちに加護が降り注いだのなら、アギト様には手に出来る力がまだある筈です。

勿論それにはアイリ様にカーテナが戻る事が必要だったわけだけど、それをしたのは貴方でしょうにね。それを取り戻さずにアギト様が真っ先に行く事は無いと思います。

少しだけなら、私達が十分に戦って見せますよ」

セラの自信満々の笑みに、誰もが呑まれてた。成るほどと思ってるだろう。確かにセラの言ってる事は合理的だ。アギトには切り札とも言うべきスキルがあったんだ。

だけどそれは、アイリの手からカーテナが離れてしまった時に同時にガイエンによって取り上げられてた物。でも、今遂にカーテナはアイリの手の内へ帰り、自身の輝きを取り戻してる。

それなら、アギトも切り札だったそのスキルを取り戻せる……いや、アイリが与えれる筈。セラはそれだけの時間を与えたいんだ。

「そういう事か……確かにそれの方がいいかも知れないな」

「良いかも知れないじゃないのよ。死にぞこないは引っ込んでなさい」

「なっ！」

セラの奴、ガイエンには容赦がない。アイツ組織ってのに向いてないよな絶対に。てか、ここぞとばかりに、今までの分の不満をガイエンにぶつけてないか？

「どうですかお二人とも？　契りを今一度結ぶ事は、もう出来る筈ですよね？」

そしてやっぱりガイエンの事は無視してるセラ。毒だけ吐いてなげっぱとは……恐ろしい奴だ。それにアギトとアイリは、セラの提案にそれぞれそわそわしてるような感じだ。

今気づいた訳でも実際は無いと思うけど……それよりも二人でスルーしてた感じが僕にはあるな。ようやく思いを確かめあった同士なら、恥ずかしがる事なんて無いだろうに。

いや、逆なのかな？　ようやくでやっとだから、努めて二人は今までの様に振る舞ってるって事か。

「それは……そうだけど……」

「なら何を迷う必要があるんですか？　それともこう言った方が、お二人ともやりやすいですか？　アルテミナスの為です。

敵はあの悪魔だけでは無いのですから。万全を期すことは、兵法の基本ですよ。この場合の万全は、出来る事はやりきるって事です。

やれる事をやれる時にやる大切さ……それを私達は学んだ筈です。

最悪のｉｆも、最高のｉｆも踏み出さないと始まらないけど、望む結果を得るためには惜しまぬ事が大切でしょう。その為です」
「セラ……」

何だよアイツ、僕の言葉を借用してんじゃねーか。意外と心に響いてたって事か？　まあだけどセラの言葉はアイリにもアギトにも、ちゃんと届いた事だろう。
だけど流石にここまでもたついてたら、悪魔もそれなりに起きあがってきてた。その体にはまだ、自身が放った炎が僅かにまとわりついてるけど、戦意は満々の様だ。
赤く光るその瞳には、お門違いな怒りが見えてるよ。

「さて、敵も立ち上がってきたし、そろそろマジで行きましょうか」
「セラ、やはりこいつだけでも全員で一斉で倒しても大丈夫なんじゃ……」

アギトのそんな言葉に、セラはビシッと切り返す。

「甘い！　甘いですよアギト様。本当に厄介なのはこの悪魔じゃなく、あのシクラとか言う女です。ああ言う女は計算高いんですよ。チャンスなんて早々ありません。アギト様は半端な力で、この国を救えるとお思いで？　ここまでが何とか上手く行ってるとしても、最後に笑えてないと本当の勝利じゃありません。
アイリ様は何も無くしたくない……そう仰ってるんですよ」

セラの言葉は今のアギトには重く響いたかも知れないな。確かに今、それを渋る理由は無いはずだ。まだ全部、全てが収まってないんだからな。
ここでアルテミスナスを守りきり、ガイエンも解放する。それをやりきって初めて安心できるんだ。セラは警告してる。

アイリもアギトも、そして僕達もだけどさ、既にそれぞれが大変な戦いを乗り越えたから、その安堵感に今の状況を楽観視してるみたいなさ。
それにこれだけ仲間と呼べる人達が居るのも大きいかも知れない。確かに敵の数も多いけど、今見えてるのは悪魔だけ。

目先だけを見据えれば、僕達は有利だろう。そんなどこかに生まれた余裕があるからこそ、アギトは渋れてる訳だ。
でもセラはそんな事は許さない。一番冷静に、そして真っ直ぐに、先って物を見つめてる。セラの言ってること、間違いなんて一つもない。口は悪いけど・・誰も文句は付け用はない。

「何やってるアギト！！　守る為の力は、幾らあっても足りない程だ……そうだろう？」

ガイエンのその言葉に、アギトは振り返り体をアイリへと向ける。そしてその横をセラが通り越して行く。

「少しの間頼む」
「ええ、まあこの人数ですから、心配など無用ですよ。アレが動かないのなら、倒せる筈ですから」

短いやりとりをすれ違いざまにやる二人。う～ん、セラが何だか一番男前に見える。女なんだけどね。ていうかセラが一人で突っ込むのか？
勿論直ぐに軍が続くとは思うけど、流石にそれは不味いんじゃ……そう思って僕は一歩を踏み出そうとする。だけどいつ間にやら、セラの周りには同じメイド服を着たエルフが数十人位集まってる。
てかいつのまに？　音もなく現れやがったぞあのメイド部隊。

「おいおい、アルテミナス最凶の暗殺集団が勢揃いしてるぞ」
「あ……圧巻だな」

何だか至るところからそんな物騒な言葉が漏れ聞こえてくるんだけど……何？　アイツ等ってやっぱ忍者だろ。メイドの格好した忍者だろ。

暗殺集団って……皮被り過ぎだろあれ。そしてそんな暗殺集団の頂点にいる女が颯爽とその細い腕を突き出す。

「さてさて、そろそろ行きましょうか。お国の為、アイリ様の為に……我ら侍従隊、先陣を切らせて頂きます！！」

その瞬間、影の様に走る侍従隊の面々。いや、アレは速い。そして自身も黄金の武器をその手に取り、向かおうとするセラ。そこへアイリが声を掛ける。

「セラ！！」

そんなアイリへ、振り返ったセラは優しく声を掛ける。友達を励ますような言葉だ。

「アイリ様、今度は放さない様にしっかりと掴んでください。鎖を繋げとく位しとかないと、男は信用できませんよ」
「ええ！？」

何て事言いやがるんだセラの奴。そしてそれを聞いてアギトをチラチラみて考察するアイリ。アギトは苦笑いしか出来ないよ。

そんな様子を見て、セラはクスッと笑って走り出す。侍従隊の面々が悪魔を翻弄をする中、真っ直ぐその胸に武器を突き立てる。

左右に刃がある形の武器。悪魔の重心が少し後ろに傾いた所で、更に反対側の刃で追い打ちを掛ける。だけどそこで照準をセラに向けて、メイスを突き立てようとする悪魔。

けれどその時、そのメイスに鎖が絡まった。そして伸びきる前にメイド達によって固定される腕。そこに更にセラと、後他数人がそれぞれの場所で攻撃を続ける。

アイツ等……本当に強い。てかコンビネーションが半端ない。その時、悪魔は権勢するように大声を上げる。そういえばその特殊な叫びには、補助魔法とかを打ち消す効果があったはずだけど……セラ達、はてはここに居るエルフの誰も、身に纏う輝きを失い無いはしない。

どうやら加護は消せない様だ。

「何をやってる！　軍は部隊毎に分かれてセラ達に続け！　後衛は一定の距離には近づくな！　あの悪魔に息を継ぐ暇さえ与えずに攻撃を続けろ！！」

ガイエンの指示で、一斉に動き出すアルテミナス軍。セラ達を支援する形で、波の様に押し寄せるエルフの姿は圧巻だ。

無数の魔法の光も、轟く声と共に一斉に空を掛けて悪魔へと襲いかかってる。そんな中、止まってる二人がいる。アイリとアギト、その二人だ。

「セラは強引です。でも、ちゃんとわかってる。それは私を思っての事だって。だけどいいのかな？　これを受け取る事は……アギトがまた、責任って物を背負う事に成るんだよ」

アイリの言葉に、僕は気づいた。アイリがそれを口にしなかったのはそういう事だったんだ。アギトが耐えかねたそれを、もう一度

なんて出来なかった。
だから……けどその時、アギトは何かを取り出した。そしてそれをアイリへと差し出す。
「俺に……もう一度その機会をくれるのなら、今度は逃げ出さない。それをこの指輪に誓う。お前が背負う物を分かちあえる男に成るよアイリ。
受け取ってくれるか？」
アギトの手のひらで光るそれは、いつか見た指輪。あの時のアギトの恥ずかし気な顔が思い出される。そう言えば光ってたよな、アイリの指にさ。
それが今、新たな誓いを込められて贈られようとしてる。
「アッ……ギト……私……は」
涙で声が詰まるアイリ。だけどその手は真っ直ぐに指輪へと向かってる。
「信じてた……よ」
「うん……待たせて悪かった。ただいま……アイリ」
アギトはアイリの指に指輪を通す。そしてその手を取ったまま、ひざまずく。浮かび上がるアルテミナスの紋章。剣と盾のアンダークロスに支えられるクリスタルが輝き出す。

メイドの心ともしもの向こう（後書き）

第百六十二話です。
セラが今回は色々動きます。侍従隊の本質も出てきたから、ほらセラの強さは折り紙つきです。まあでもやっぱり、どうしてもこの話じゃアギトやアイリやガイエンの後ろに居ます。
まあしょうがない事だけど。でもセラは面白いから、これからもやれそうな感じはしますね。
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは～。

盤上の悪魔と僕等（前書き）

遂にアギトの力、初めての騎士の力……それがアイリからアギトへと与えられる。光り輝くその光、その力は、強大な悪魔へと真っ直ぐに振るわれる。それは多分、セラが願っただけの力が有った筈だ。

ナイト・オブ・ウォーカーは夜空に流れる流れ星のような光の力を放ち討つ。

盤上の悪魔と僕等

「何だ？」

僕はちょっと間抜けなを声を出して二人のやってる事を見てた。アイリとアギト、その絆の証とでも言うべき指輪がその手に戻り。

今再び守るべき力をアギトは得ようとしてるんだ。アイリの手を取ったままひざまずいてるアギト。二人の足下には今までとは違うエフェクトが光ってた。

それは魔法を使う時によく見るそれじゃない。だけどどこかで見たことある印が浮かんでるんだ。

盾と剣のアンダークロス。その交差の上にあるクリスタル。そして二人の周りには不思議な色の光が集まってる。

アギトとアイリは、二回目だろうから驚きはしないけど、僕は結構ドキドキだよ。大丈夫なのか？　とか思っちゃう。

僕たちじゃあさ……望まれて無いんだよ。僕達余所物はさ、あの輪の中にはどうやったって入れない物がある。種族とかそんなに気にした事は無かったけど、これだけ分かちあえる物なんだとビックリだ。

あの団結？　とかに僕達は呼ばれてない。悪魔を追いつめて行ってるエルフの戦士達……全力でぶつかり、全力で防ぐ。そこには響くだけの声じゃない何かで、きっとみんな伝えあってるよ。

そしてみんなが同じ思を向いてるから、ハッキリと伝わってるんだと思う。僕達、アルテミナスの以外の出身者はそれが同じには決してならない。

何故なら僕達にも故郷があって、今の彼らは皆、自分達の大切な

故郷を守ろうとしながら戦ってるからだ。そこにはさ、やっぱりどうしても、埋められない何かがあるんだ。

だから、エルフじゃない僕やシルクちゃんやリルレットやテッケンさん……後他諸々、協力してくれてた人達は結構置き去りだよ。

まあ、置き去りと言ってもそこまで軍の後ろに居るわけでも無いけど……動けないのならそれと同じだろ。でも歯がゆいとは思わない。

逆に良いじゃんくらいに思う。こういう感じ……ついつい知ってる奴……特に最前線で悪魔をボコッてるセラが攻撃入れると「行け！　行け　そこだぁあ！！」位叫びそうだよ。

そこはグッと堪えてるけどね。何てたって、直ぐそこでは重要な事してるし……二人の雰囲気って奴を壊したくはない。

「アルテミナスの紋章に、この儀式の意味を考えると、あれは『洗礼』かな？」

小さなテッケンさんが、足下でテクテクしながらあの光と紋章を言ってくれた。ああなるほどね。どうりで見覚えがあると思った。

そう言えばアルテミナス城に揺らめいてたよねアレ。魔法とは違うから、国のシンボルが現れてるのかな？

「洗礼？」

僕は足下のテッケンさんに視線を落として聞いた。

「僕も同じ様なのを国で見たことあるよ。まあもしかしたらここではそう言わないかも知れないけど、洗礼とは特別な儀式の為の前準備だよ」

ほほう、つまりこの場合は、アギトに力を与える為の準備をアイリはしてるって事か。それがアレ……洗礼。

「何か意味あるんだよねアレ？」

僕の失礼な応対に、今度は自分と同じ位か少し低い位置から声が届いた。

「当たり前だよスオウ君。『洗礼』は限られた人しかやれない特殊な物なの。大体はアイリ様の様に、国事態に選ばれてバランス崩しを授かった人達です。

『洗礼』はその紋章で包む空間を、ある特殊な場所に変えてるって言われてます」

「特殊な場所って何？　シルクちゃん」

「はい、その国で最も清浄なる地……それが『洗礼』によって変えられる事なんです。だから今、あの二人が居る場所こそが、この国で最も清らかな地なんです」

へぇ～と僕は頷くばかりだ。テッケンさんも縦に首を振ってる。どうやら知らなかったのは僕だけじゃなく、リルレットも陰で関心してたよ。

けど清浄の地か……確かにそれは儀式場としては最適何だろう。そんな清浄の地で、二人は互いを見つめて言葉を紡ぐ。

まずはアイリが、涙を堪えて息を整えて口を開いた。

「アイリ・アルテミナスが問います。貴方の剣は、何を貫き、何を守る剣ですか？」

そしてそんなアイリの問いに、アギトは今までで一番だろうと思

うくらいの爽やかな顔で言葉を紡ぐ。

「俺の……私の剣は、貴女とこの国に陰りをもたらす全てを貫く剣でありたい。いかな全てから、守れる剣でありたい。

そして……この思い、この気持ち、この誓いが嘘偽りで無いことは、この地が証明してる」

証明？　どう言うこと？　と僕はシルクちゃんに顔を向ける。すると直ぐに可愛らしい微笑みと共に返してくれた。うん、何回でも振りたい笑顔だ。

「あそこは清浄の地。そして権限者の言葉は絶対。清浄であるからこそ、嘘偽りやごまかしは許されない。幾ら美しい言葉を並べ連ねても、『洗礼』の場所では心を読まれるとまで言われてるの。

そしてそんな悪い子には、命を奪う禁断の炎が身を滅ぼすって言われてます」

コワッ……成る程、リスクも当然あるわけだ。心を読むってのはどうなんだろうと思うけど、最近の嘘発見機はスゴいらしいからその原理かも知れないな。

ＬＲＯは脳波とか計ってるだろうし、そこら変で嘘を見抜けそうだ。そうなったら、命を奪われるって事。アギトの証明は、その身でされてるって事なんだ。

アギトは不意に、口元を綻ばせて言う。それはさっきまでの、堅苦しい儀式用の言葉じゃない。もっともっと、心を込めて、慈愛を込めた言葉。

「アイリ……もう一人になんて、絶対にさせない。前の百倍の覚悟で俺はそれを誓うよ」

「アギト……」

堪えきれない涙が片側からこぼれて、後を追う様にもう片方からも、一筋の涙が流れ落ちる。今にも泣き崩れてしまうんじゃ無いかと思う程、アイリは危うい。

でも、そこをアルテミナスの王という責任が支えてる。アイリは唇をキュッと噛みしめ、顔を毅然と上げた。目尻から飛ぶ涙が綺麗だった。

「良いでしょう。アギト、貴方にもう一度、力を授けます。アルテミナスの騎士の力を……さあ、受け取りなさい。

そして……もう放さないで」

最後の言葉……それがアイリの全て……そんな気がした。紋章の輝きが強くなる。思わず僕達は目を腕で庇う。それほどの光だった。

近くの軍もその光に飲み込まれる様になってる。

その時、轟く様に響いた悪魔の断末魔の叫び。勢い込んだセラ達が、一足早く倒してしまったのか？　とも思ったけど、僅かに開いた瞳で見る限り悪魔はまだ健在だった。

流石に、そう易々と倒れたりはしないらしい。今でも十分易々では無いんだけど……追いつめてはいるものの、決めの一手に欠ける感じだ。

セラは聖典使えないしな。勿論軍の奴らだって侍従隊の他の面々だって、それぞれ決めの一手は持ってるだろうけど、ＨＰが少なくなるに連れて激しくなる悪魔の動きに、その一撃を上手く決める事が出来なくなってるみたいだ。

野生の獣の様な動きに研ぎ澄まされて行ってると言うかさ、あの悪魔そういう特性を持ってるんじゃないかって位に粘ってやがる。

ＨＰが少なくなると、普通は動きが鈍く成ったりするもんだけど、偶にそれが逆に成るモンスターが居るって聞いたことあるような気がするよ。
特にボス系はそうかも知れない。厄介な攻撃は、ＨＰをある程度減らした所から使ってくるみたいな設定は良くある事だ。

でもあの悪魔の場合は、違う攻撃は別にやってない。やっぱり変わってるのは動きの部分。闇雲に暴れてただけだったのに、今は防いだり避けたりもちゃんとしてるんだ。
しかも自分の体を上手く使ってる。羽や尻尾なんかも攻守に使われたら厄介だ。追い込まれた事で覚醒状態に入ったみたいな悪魔は……そして、厄介なというか自分の存在を脅かす力をきっと嗅覚や本能で察したんだろう。

その危ない瞳がこちらを捉えてる。まあ、これだけ光を放ってて気付かれない訳無いけどさ。つーか、アギトにはあの力が戻ったのか？
ナイト・オブ・ウォカーのその力。光は次第に弱まって行ってるけど、まだそれを見ることは出来ない。その時、突風がこの戦場に吹き荒れた。

「しまっ！？」

そんなセラの声が遠くから聞こえた気がした。その方向を向くと、何と悪魔が一直線にこちらに飛んで来てた。つまりこの突風は、セラ達を足止めさせる為の足掛かりって訳だ。
その瞬間に一気に飛んで、多分一番危険だと思われるこの場所に居る敵を破壊しに来たって事か。アギト達、光の真上に到達する悪魔。広げた羽を羽ばたかせて、前準備の様に一段高い空へあがる。

そして構えるのは、闇夜に浮かぶ巨大なメイス。

「っつ！？　まさか、あれを投げる気かアイツ！！」

僕はとっさにそう悟った。単純な質量だけでも地面にめり込みそうなのに、あの悪魔の力で投げられたら爆発でも起こるんじゃないかと思えるよ。

隕石が落ちたときに現場に現れるクレーター。あれの様にここは成るかも知れない。いや、あの悪魔はそうする気だ。

その一撃で、確実に本能が示した敵を先滅する気。軍の人達が魔法を詠唱したりしてるけど、多分これは間に合わない。

だって後は投げるだけなんだ。そして半端な攻撃じゃあの悪魔を止める事は出来ない。

「アギト！　アイリ君！　敵の攻撃が迫ってる！　今すぐそこから離れるんだ！！」

踏み出たテッケンさんが、光の中に居る二人へと向かって叫ぶ。でもそれが届いてるかすら、確認しようがない。今にも放たれそうなメイス……僕はセラ・シルフィングを抜き去る。

流石にもう、グダグダ言ってる場合じゃない。そりゃあ確かに、これはアルテミナスの戦いかも知れない。少なくとも、この悪魔との一戦だけはそうしたい思いがあったのもわかってる。

だけどさ……あのままあれを、ガイエン一人に任せる訳には行かないだろう。光の直ぐ側で、上を仰ぐアイツの顔はそれをきっと決意してる。

でもアイツはボロボロだ。幾らいけ好かない印象しか僕は持ってないとしても、今のアイツを犠牲にする事なんて出来ないよ。

友達の友達は結局他人かも知れない。でも……今のアイツの状況は見過ごせない。そこだけは、きっと僕と共通してるから。

「僕がイクシードでどうにかしてみます！」

テッケンさんにそう告げて、光の方へ向かおうとする僕。だけどその時、光の中から声がした。

「よせよスオウ。お前が出る幕じゃない。守ってみせるんだ……今度こそ、絶対に！！」

光の中から告げられたそんな言葉は、力強い声だった。自分に言い聞かせて、周りに聞かせる……そんな言葉。光が急速に、その人影に集まって行く。

「グモオオオオオオオオオオオオオオ！！」

その時、轟く雄叫びと共にメイスは投げられた。もの凄い速さで、投げたその瞬間に、ロケットブースターの様な衝撃と音が空に響く。空気を払いのけてでもいるのか、メイスが落下している空中には白い円が段階的に出来ている。予想以上のスピード……これはマジで、クレーターに成りかねない！

だけど動けなかった。いや、動いた所で間に合いはしないだろう。真っ直ぐ地上の光へと向かって落ちていくメイス。そして――――

――――ドオオッガアアアアアアアン！！

と、もの凄い衝撃と爆音が、僕達の視界と耳を奪った。それはまさに爆発だ。
衝撃波が地面に亀裂を入れ、轟く爆音は内蔵を飛び出すかと思うほど……実際、体が小さいテッケンさんは吹き飛ばされそうだった。
それほどの衝撃……中心はミサイルでも投下されたかの様な粉塵が立ち上ってる。

「そんな……」

誰かのそんな声が聞こえた。多分軍の誰かだったんだろう。でも……それを想像せずにはいられない衝撃と光景だ。リアルなら、肉片一つ残さず、消されててもおかしくない。
誰もが固唾を飲んでその一点を見つめてる。本当は見たくない奴もいるかもしれない……でも、確かめずには居られない二人がそこには居たんだ。

いや、あの距離ならガイエンまで巻き込まれててもおかしくない。そうなると、アルテミナスはどうなるのか……それは最悪の想像だ。

「アギト……」

僕は祈ったよ。セラ・シルフィングの柄を握る拳に、力を込めて。
「守ってみせる」そう言っただろって。するとその時、リルレットが空を指して言った。

「ねえ、何あれ？」

その意味不明な言葉に僕達は夜空を見上げる。空になんて悪魔しかいないだろうとか思いながら。

「ん？」

だけどあれ？　確かに何かがある……てか、何かが落ちてきてる。すると今度は、前線からここまで下がってきた侍従隊が、煙を立てるほどの勢いで止まる。

そしてセラが言ったよ。

「大丈夫。アギト様達は無事よ。何てたって、私達への加護は健在してるもの」

そう言って示す体は、確かに淡く光ってる。それは紛れもないアイリの生存を示す物だ。ならあれは……落ちてきた何か……それは再び、深く地面を陥没させて突き刺さった。

大きく白いその姿……それはとても見覚えのある物だ。

「あれは……メイスか！」

間違いない。てかあれを見間違いはしない。あれだけでかい武器、そうそう無いからな。でもどうして、投げられた筈のメイスが空から落ちてくるんだ？

「……」

いや、そんなのは決まってる。どうやらさっきのあの衝撃は、メイスが地面を砕いた衝撃じゃ無かったようだ。考えられるのは一つだけ、アレを弾いたんだろう……アイツがさ。

自分の武器が弾かれたのを見てか、今度は悪魔自身が素早く急降下していく。その凶悪な爪を尖らせて狙うのは、勿論煙り立ち昇る中に居る奴だろう。

そして次の瞬間、立ち昇る煙を切り裂いた悪魔の腕が、今度こそ

地面に突き刺さる。実は衝撃で割れただけだった地面が、今度こそ豪快に砕かれた。

「アギト！！」

僕は叫ぶ。だけどその時、既にセラ達は動いてたよ。アイリとガイエンは無事だ。でもアギトの姿はない。どこに？　まさか潰されてはいないだろうと思いつつ、周りに視線を凝らす。

その時、小さな影が見えた。どこにかって？　それは悪魔の直ぐ近くだ。アギトの奴、腕を伝って悪魔の眼前に迫ってた。

「これ以上、その顔を俺たちの前に見せるなあああ！」

腕を蹴ったアギトが、光募るその武器を悪魔の顔面に向かって突き刺した。すると勢いが更に増すように、募ってた光が後ろへと放出されていく。

推進力を得たアギトは人の速さを越えて悪魔へ迫る。だけど覚醒状態の悪魔は、危機察知も本能のままにスゴかった。

「ガアアアアアアアアアアアア！！」

響く悪魔の断末魔の叫び。けど、ＨＰはまだ残ってる。アギトの攻撃は当たりはした。だけど完全じゃ無い。悪魔はその巨体を僅かにズラして、直撃を避けやがった。

でもそれでも、アギトの攻撃で奪われた物もあるから悪魔はあんな悲鳴を上げたんだ。それは片側の角と翼。アギトの攻撃をかわすために屈んだ悪魔。だけどその角と翼はかわしきれなかった。

てか頭を下ろした事で、翼をもがれたみたいな物だ。削りきりはしなかったけど、それは十分でそしてアギトの攻撃はまだ終わって

ない。
　アギトの攻撃の勢いは弱まってなくて、噴出される光の帯は、空中でその軌道を表してる。大きく半円を作って戻ってくるアギト。悪魔には次こそ逃げ場はない……でも、不意打ちにも成らないけど。
　だけどそこでアギトは叫ぶ。

「セラ！　みんな！　頼む！！」

　その言葉を受け取ったセラ達の行動は速かった。上に気を取られてた悪魔に、次々に足下へ攻撃が集中する。上に下にと、気を取られる悪魔。それは混乱を生み、そして油断に繋がる。優先順位を決めた時にはもう遅い。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

　迫るアギトは真っ正面。それに今度は無駄に広い胸を目指して向かってきてた。下からの攻撃で、たたらを踏んでいた悪魔に次の一歩はない。

「行けーー！！　アギトーー！！」

　セラに抱えられてるアイリがおもいっきり叫んだ。誰もが思ってた事をその身でアイリは実行してくれた。そして……夜空に輝く流れ星の様なアギトが、悪魔の胸を貫いた。
　一筋の光の線が、夜空で不意に途切れて現れる。その途切れた部分が悪魔何だ。まさに一瞬……アギトの攻撃は、強靱な悪魔の体を一瞬で貫通した。
　そして今度こそ、悪魔のＨＰは尽きた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

最後に恨みでも吐き散らすかの様に叫ぶ悪魔。だけどそれはどうやっててもぼくらを苦しめる事はない。そう、僕達は勝っ――

――その時、消えていく悪魔の向こう側から、大きな音が聞こえた。アルテミナスがある方角……この戦闘でいろいろと動き回ったせいで位置関係がおかしくなってるけど、悪魔の向こうに今はアルテミナスが見える。

そしてその音は、アルテミナスから聞こえるんだ。そして誰かが気付く。

「光明の塔が無くなった……？」

「何？」

地面に着地してたアギトが顔を上げる。そして僕達もそれを探した。でも……確かに見えない。あった筈の光の塔……ここからでも確か、光明の塔は見えてた筈だ。

それが……今は見えない。どういう事だ？

「アイリ様！」

「……まさか、そんな！」

アイリとセラが顔を青くして急いでアルテミナスを目指す。その様子はただ成らない感じで、そして僕達も胸騒ぎがしてた。

「アギト！　私達も行くぞ！」

「お……おう！」

アギトもガイエンに促されて二人の後を追う。そして僕達もここでようやく動き出せた。周りの軍は、まだアルテミナスの外側に居

るモンスター共を警戒して動けないから、僕達で確かめるしかない。
一体何が起きたのかを。アルテミナスで輝いてた光の消失……それが何を意味するのか……その時、周りの軍からざわめきが起きる。

「おい……加護が消えていくぞ！？」

その言葉通り、エルフを包んでた光が無くなって行ってる。そしてそれを聞いたアイリがポツリと呟く。

「なんて事を……」

どうやら、アイリ達はこれを予測してたのかも知れない。でもこれって……考える限り最悪じゃないか？　加護はこの戦いで必要だ。まだ数で勝るオーク共が居るんだから。

「これってやっぱり、光明の塔が壊されたって事なのか？　でもカーテナはアイリが持ってるじゃんか？　何で光明の塔が壊されて、加護が解けるんだ？」

僕は軍の一団を抜けた辺りでそれを聞いた。だって加護はカーテナが掛ける物だろう？　光明の塔なんて関係無いじゃん。

「それはこの掛け方がそもそもイレギュラーだったからです。加護をあれだけの人数に余す事無く掛けるには、本来なら城の聖域で儀式を行う必要があるんです。
その間私はその部屋から出ることも叶いません。だから今回のは多分、光明の塔の輝きがあったからこそ出来たこと……それが無くなれば当然こうなります」

なるほど、アイリの話は尤もだ。加護だって十分反則的な技だと

は思ってたけど、それなりの制約がやっぱりあったわけだ。
てことは、それを知ってる奴が光明の塔を破壊した？　はは……奴なんて言わなくても、そんなイカレた事をする奴なんて、僕が知る限りでは二人くらいだ。

反則的な二人……アイツ等なら、やれるだろうしな。アルテミナスに近づく僕達。その時アルテミナスを囲む城壁が、大きな黒い腕に寄って押し壊された。

「「「！！」」」

僕達は思わず足を止める。だって……こんなの信じられないだろ？　だってそこはアルテミナス……この国の首都の筈だ。
なのに何で……どうして……そんな場所からあの悪魔が姿を現すんだ！？　そして再び、そんな悪魔の上から、聞こえる声。そのふざけた声が、ふざけた事を抜かした。

「遅いじゃない。おかげでこの国、落としちゃったよ☆」

盤上の悪魔と僕等（後書き）

第百六十三話です。

ようやく悪魔を倒した！！　と思った矢先の大問題です。そうそう簡単には終わりませんよ。何て立ってシクラは性格悪いですからね。絶望のシナリオを用意してるシクラが、そろそろ動きます。

てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

黒夜の侵食（前書き）

衝撃の言葉と光景を引き連れて、再び姿を現したあの女。いつも笑って楽しげで、語尾には☆なんか付けてるふざけた奴。だけどその行動は、いつだって僕達の予想できない所から出てきやがる。

それは今回もそうだ。さっきまでの戦闘をあざ笑うかの様な仕打ち。やっぱりこの女が、最大最強に僕達の前に立ち塞がる様だ。

黒夜の侵食

「遅いじゃない。おかげでこの国、落としちゃったよ☆」

落としちゃった☆　……そんな言葉が耳の奥で木霊する。アイリもアギトも、その場に居た全員が、意味を理解しようとするようで、しなかった。

だって……こんな事って……すると僕達に聞こえてないとでも思ったのか、あの声がもう一度それを言う。

「もしも～し？　ねえ、ほらアルテミナスはこの通り、落としちゃいました～☆」

陽気な声が耳につく。そして今度はよく見える様に、砕いた塀の横に悪魔を移動させる。そこにあったのは、目を逸らすことも出来ない、ここでの現実。起こってしまった、最悪な事。

瓦礫に変わったアルテミナスの町並み……そして、アルテミナスに居たプレイヤーの死体の数々。さらには、そんな瓦礫を蹂躙するかの様な悪魔の姿が、ここから見えるだけでも三体は居る。

それは……この光の国が、地獄と見間違える程の光景だった。

「そんな……」

目の前に広がる光景に、愕然とするアイリ。無理も無い。守りたかった場所が既にこんな事になってるんだ。ショックを受けるなと言う方が無理だろう。

「あははは～☆　意気揚々と、あんなたった一体を大仰にやってく

れるから、時間もたっぷりあったんだよ？。どうガイエン？
絶望した？　君の守りたかった国は、この有様よ」

その言葉に反応して僕達はガイエンを見た。そうだ……こいつの狙いはガイエンの中に居る“何か”の覚醒。その為に必要な物が絶望とか言ってた。
つまりこれはガイエンを絶望させる為の行動。アイツだってこの国を守ろうとしてた。それなら……これは効果的。いや、元々がこうする事を目的とか言ってた筈だ。

「ガイエン！　あんな奴の言葉に耳を貸すな！」

アギトがガイエンに向かってそう叫ぶ。だけどガイエンの体からは黒い何かが小さく滴り落ちてる。それはきっとガイエンの怒りに反応してるんだと思う。
だけどガイエンは、必死にそれを押さえつけて悪魔の上に居るアイツへと言葉を投げる。

「何でだ？　お前、もっと効率良いことをやろうとしてたんじゃ無いのか？　アイリを狙う様な事を言って……結局これか？」

ガイエンの言葉に、アイツは超適当に答えやがった。本当にさ、気持ちを逆撫でする事を意識した言葉。

「うっそ！　そんな事言ったっけ？　てかさぁ、信じちゃったんだあのガイエン君が。まあまあそれは嬉しいな☆　でもね、考えみたら絶望って半端じゃダメかな～っておもってね。
だから私、どうせならどっちも潰しちゃえって事にしたんだ。てへ☆」

最後のアイツの「てへ☆」とガイエンの「ブチッ」て音が続けて聞こえた気がした。舌なんか出しやがって、完全に挑発してる。
でも、それが分かってても動いてしまうほどの光景だった訳だ。

「シクラアアアアアアアアアアアア！！」

腰に掛けてあった長剣を抜き去ったガイエンは、一気に悪魔を目指して飛び出した。そんなガイエンの体からは黒い影が次々と流れ出てて、それが線を引いていた。
怒り……多分それにあの黒い物は反応してる。駄目だ、このままじゃあの怒りがどう転ぶか……それだけで絶望に傾くかも知れない。
いや……もう既に傾いてるから、あの黒い物が姿を表し始めてるのか。

「駄目だ！　止まれガイエン！！」

アギトが急いでガイエンの後を追う。だけどガイエンの奴は、傷を負ってる筈なのに異様に速い。あの黒い影が力でも与えてるのか、とても今からじゃ追いつけない。だけどあの黒い影がそれをやってるとしたら……それこそシクラの企みだろ。

アイツは、何かを狙ってやがる。ガイエンを殺す事はしないだろうけど、絶望を味あわせる為の何かを企んでるんだ。そのために自分を囮に、ガイエンを突っ走らせてるとしか……

「くっそ、とにかく追うしかない！！　急げアギト！！」

僕は後ろから、アギトにまで追いつき更に加速する。でもそれでも、数秒のタイムロスが決定的な差を作ってた。

「ガイエン！　冷静になれよ！！」

僕は精一杯の大声を出すけど、ガイエンの奴反応すらしない。やっぱり関係の薄い僕の声は、今のガイエンには届かない。でも……アイリはショックで動けないし、アギトの声もイマイチだった。もっと近くなら分からないけど、差を詰めるのは難しい。

追いつければ、僕でも殴って止める事が出来るんだけど……それも難しそうだ。ガイエンの奴は、既に悪魔の足下に迫ってる。

だけどそこで降り下ろされるメイス。その大きさは、僕とアギトの場所にまで影を落としやがった。しまったって感じだ。

追いかけるのに夢中で、悪魔の攻撃を全く考えて無かった。その影が落ちるまでさ……おかげで反応は一瞬遅れる。

「スオウ！！」

その時、アギトが僕を弾くように攻撃範囲から強引に押し出した。

「なっ！？　アギトオオオオオ！！」

メイスの影が、直後にアギトに降り注いだ。巻き起こる風と、衝撃音がスローに見えたその光景の後に、脳や体に叩きつけられる。

アイツ……僕を庇って……これは完全に僕の責任だ。何て事をしてしまったんだろう。ガイエンを止められるはアギトかアイリしかいなくて、これからの戦闘で軍の志気をを維持するには、僕何かより絶対にアギトが必要だったのに……あのバカ。

「くっ」

僕は顔を上げて立ち上がる。まだだ・・アギトの装甲ならまだ生きてるかも知れない。潰れてるのなら、まずはこのメイスを退かしてみせる！
そう思って、僕はメイスへと飛びかかろうとした。だけどその時、あることに気付いたよ。

（何で……あれだけの衝撃音がしたのに地面は割れてないんだ？これだけの武器が落とされれば、どうやったってその周りの地面はボッコボコだろ）

そう、確かさっきみんなが倒した悪魔の攻撃ではそうなってた。でもそれが起きてないって事は・・すると煙の向こうから声が聞こえた。

「ぬ……あああああああ！！」

煙の中から押し返されるメイス。そして、周りに散っていく煙からは見覚えのある姿が出てきたよ。それは紛れもなくアギトだ。
あの巨大なメイスをたった一人で防いでた。しかも押し返す何て……大した奴だ。

「アギト！　お前無事だったのかよ！！」
「はぁはぁ、当然だろ。こんな所で死ねるかよ。それにやれると思ったからお前を庇ったんだ。加護は消えても、俺のナイト・オブ・ウォカーは健在だからな」

成る程、自身があったわけだ。確かにナイト・オブ・ウォカーは強力だろう……それは知ってる。だけどここでようやく、久方ぶりのアギトのそのスキルを間近で見たけど……何か違う。

「お前のそれ、変わってないか？」
「ああ、理由は知らないけど、でもよりしっくり来る」

アギトは自身の両手の武器と盾をそれぞれ軽く主張させた。盾はなんだか以前よりも大きくなってるし、何だか更に豪華な感じだ。
でもそれより意外なのは、武器の方だ。以前の大剣とは全然違う。言うなれば細身の槍何だろうけど、持ってる反対側にも同じ様な槍が出てて、柄は丁度真ん中に有る感じ。

そして異様に長い。細いって言ったけど、それは先端に行く程かも知れないな。そして形状もただ突くだけの形じゃない。
断面を切ったら星形にでも成りそうな形と言うか、ただ丸くはなくて、鋭利な刃が槍の表面に装着されてる感じみたいな……それがグルッと付いてるんだ。

でもしっくり来るか……それはなんと無く分かる気がする。だって確かアギトって祝福されたのは槍だったって聞いた。それなら、アギトには一番槍が合ってる筈何だ。

「おい、んな事よりガイエンはどうした？」
「あっ！」

目の前の出来事に捕らわれてた。だってアギトがペシャンコかも知れなかったんだ、しょうがない。だけどよくよく考えたら、ガイエンって無事なのか？
いや、アギトが防いだからガイエンにも当たってない筈か？　僕達は、前方を見たけどそこにはガイエンの姿はない。一体どこに？
そう思ってたら後ろから声がした。

「上よ上！　メイスを伝ってる！！」

そんなセラの言葉に僕達は押し戻されたメイスを見上げた。でも位置が悪い……ここからじゃ上を走ってるガイエンは見えない。
僕達は取り合えず、上を見上げながら悪魔に近づく。するとその時、ようやくガイエンの姿が見えた。今まさに、シクラへと向かってメイスを蹴ったガイエンの姿がだ。

「よくも！　よくもアルテミナスをおおおお！！」

そんな事を叫ぶガイエンの声が聞こえる。もう間に合わない。止める事も叶わない。ガイエンは上手くメイスの攻撃を利用して、シクラまでの道を見つけてたんだ。

「ふむ、怒りはよく見えるけど、やっぱりまだ絶望じゃないよね☆
大丈夫、私が殺さなくても直ぐに自分の無力さに死にたくなるよ☆」

迫る長剣の攻撃に、微塵も焦りを見せないシクラ。ガイエンの武器は、その刃に大きな黒い固まりを発生させている。それは結構な光景で、空気を飲み込んでその中心には赤グロい光が出来てた。
威力は多分、かなり高いだろう。シクラだってダメージを食らわない訳はない。だけどそれが当たらない自信と確信がアイツにはある。だからアレだけ余裕をかませてるんだ。

「死にたくなるよ」か……どれだけ残酷な言葉を吐いてるんだあの野郎は。その時、ズンと腹に響く音が直ぐ近くで鳴った。
音の鳴った方に顔を向けると、そこにはシクラの余裕の訳が居た。

「ガイエン！　横にもう一体来てるぞ！！」

精一杯叫ぶアギト。だけどその瞬間、ガイエンの姿は黒い腕に浚われた。そう……浚われたんだ。幾らでも攻撃を当てれた筈の悪魔が、ガイエンをその手に捕らえた。
エフェクトが消えたガイエンの長剣が、空から落ちてくる。地面に刺さったその剣は、空気に解ける様に消えていく。

「どういう事だ？」

普通は落とした武器が無くなったりしない。落とした武器は戦闘中なら、拾い直すか換えの武器を装備して、戦闘終了後にある操作で元に戻る物だ。
戦闘不能なら、その時点で装備は戻ってくる。だから消えるなんて事はあり得ない……なのに……

「アレは元々、ガイエンが装備してた武器じゃない。影で作った武器だった……だから消えたんだろう。つか、どうやるよ。
悪魔が二体。その一方にガイエンで、もう一方にあの女だ」

アギトの提案は、それはそれは無謀な事としか思えない。でもこいつは拒否権を与えてない。だって「どうやるよ」だもん。「どうするよ」じゃないもん。
けど確かに、引く選択肢は無いか……と言うか、引く場所がもう僕達には無い。それにこのままじゃ、シクラは絶対に絶望をガイエンに味合わせるだろう。

それが分かる。アイツはやる……もしかしてさ、全てがこの為の振りだったんじゃないか？　自分の姿を晒して、ガイエンを突っ込ませたのも、そのための最短の道をメイスで作ったのも、ガイエンを捕らえるための罠。

そう思える。だってよくよく考えれば、あの悪魔の攻撃事態がおかしい。殺す気なんて無かったはずだ。でもそれをしたのは、ガイエンがそれをやれるって分かってたからじゃないのか？
ガイエンは黒い影の力で、瀕死状態と思えない動きしてたんだ……いや、その力にも意志があったのなら、結託してたとか。
その“何か”がこうされる為に力を与えてたって考える事だって出来る。

「シクラ！　何……する気だ貴様！？」
「何って？　そんなの決まってる☆　てか言ったでしょ？　絶望で死にたくなる様にしてあげるって☆　君の大切な物、全部全て壊し尽くすから、特等席で見せてあげるね☆」

悪魔の腕から顔だけ出されたガイエンが苦しげに言葉を発して、それにシクラが笑顔が返してる。でもそれは、笑顔で言う言葉じゃ決してない。
アルテミナスの破壊だけじゃ足り無かったから全部か。それはつまり、ここに居るアイリやアギト……そして親衛隊とか全部って事なんだろう。

確かにそんな事をただ見せられたら、絶望を感じるかもしれない。でも……ここはＬＲＯだ。本当に死ぬ訳じゃない。
それを割り切ってしまえば……そこまでガイエンが落ちる事は無いかも。勿論、誰も殺されない事に越したことは無いけどさ、それを考察する事は難しすぎる。

「全部だと？　だがそれなら城はどうした？　まだ壊れてなかったはずだが？　私も言ったはずだ！　お前の思い通りに全ては回らんとな！！」

ガイエンのそんな言葉に、僕はアルテミナスへ目を向ける。確かに瓦礫の中心に、その建物は健在してた。アルテミナス城……完璧なシンメトリーで建築された、美しい筈の城だ。

筈ってのは、その色が不満だから。綺麗な建物なのに……何で左右の色が違うんだよって事だ。最初にアルテミナスに来たときに言ったと思うけどな。

そのせいか、何か浮いてるんだよあの城は。でも今はそんな城しか残ってない。てか何で、城だけが残されてるかの方が謎か、この場合は。

「ふふふ、それはそれで面白いから別に良いんだけどね☆　寧ろ私は、私の予想を上回る方をいつだって期待してるわ。それは君にもそうだったんだけど……でも駄目ね。ただの駒以上には成れなかったみたい。

はい残念〜☆　でも、まだその体には最後の仕事が残ってるの……あはは、アルテミナス城？　そんなのあの剣を潰せば済むだけなのよ」

パチンと指を鳴らすシクラ。すると、こちらの方に悪魔共がぞろぞろと集まってくる。

「くっ……城は無事みたいだが、こいつらの狙いはアイリか」

「アイリってより、カーテナみたいだけどな。シクラの話からすると、カーテナが城を守ってる……そんな感じか」

僕とアギトは、悪魔の足下で二人の会話を盗み聞きだ。どうにかして、ガイエンを助けるタイミングを計ってるんだけど……これ以上、悪魔が増えたらとても二人じゃどうにも出来なくなる。

動くなら早く……だけど相手があのシクラだ。僕達の存在に気付

いてない訳無いし、動けば必ず何かしてくる。けど、動かなくても絶望の魔の手は、直ぐそこまで迫ってる。

こうなったらもう、ガイエンだけに対しての絶望じゃない。シクラの奴は、ここに生きてる僕達全員に、絶望を味合わせる気だとしか思えない。

すると再び上から声が聞こえてくる。

「私は確かに弱かったかもしれない。だがな、アイリが居る限り、カーテナはそうそう折れはしない！　アイツは……お前が思ってるほど弱い女ではない！！」

「惚れた女だもんね☆　そして手に入らなかった女。恨んでるんでしょう？　何で自分じゃないって？　理解した、納得したなんて嘘。もっとドロドロに渦巻いてるその気持ちを素直に出せば良いのに。そしたらきっと、色々と楽に成れるよ☆」

シクラのそんな言葉に、アギトが僅かに反応してた。そうだよな……少なくとも自分的には解決した、収まった筈の問題が今掘り起こされてるんだ。

そしてそれは、アギトが考えてた収まりをしてなかったかも知れない。でもこいつだって、ガイエンが直ぐにアイリの事を振り切ったなんて思っちゃ居なかったはずだけど……ガイエンは割り切った筈なんだろう？

そしてそれを自分で受け入れた……だから三人はもう一度、前みたいに戻れてた筈だ。

シクラの悪魔の囁きに、ガイエンがどう答えるのか。アギトは息を飲んで待っている。

「お前は……何も分かってない。確かに人は、愚かだろう。何にだ

って思い詰める事もあるし、自分の道も直ぐに見失う。
そんな中で愛って物は、一際分からない物だ。愛に狂ったり、愛に泣いたり、私達はそれに一喜一憂してる。けどそんな訳の分からない物が……自分よりも大切だと思える物を運んでくるんだ。
確かにアギトのバカにアイリを任せる何て不本意中の不本意だ。だが逆に、アイツ以外には是が非でも渡せなかった。
他の誰でもない、あのバカだからアイリを譲れて……自分の中で少しだけ納得できた。それで十分何だ。アイリはアギトを好いていて、そいつなら良いと思えたのなら、自分のガキ臭いワガママなんてやってられるか！
大切だから、その子の笑顔が良かったと思わせてくれる。隣に居るのが自分じゃなく、少し心に靄があっても、割り切れる。その心に嘘偽りはない！」

ガイエンの言葉を聞いて、アギトは少しだけ、唇を噛みしめてた。でもガイエンがあんな風に、愛とか言うとは……結構衝撃だった。でも、その言葉は僕にも響く物があった。本気……それが伝わった。

「そんなの結局は負け犬の遠吠えと同じじゃない？　いや違うかな？　負け犬が負けた傷をどうにか目立たない様にしてる感じ？
まあでも、恨んでても恨んでなくても、例え割り切ってても同じ事☆　だって結局、大切なのは変わってない。それなら君の目の前で死んで貰うだけね」

折角のガイエンの言葉も、シクラの奴は確認に使っただけだった。ただ恨んでるだけでも良かった……でもまだ大切なら尚更か。
でもそこにガイエンは食いついた。

「死んで貰うだと？　ＬＲＯはゲームだぞ。ＨＰが尽きたら、代償を払ってゲートクリスタルに戻るだけだ」

「あれれ、でも例外が居ることくらい知ってる筈だよね☆　私達は裏側の存在。その位、出来ない事無いよ☆　それに、自分だって気付いてるんでしょ？　自分自身がその例外だって」

ガイエンが追求したのは先に僕が思ったこと。だけどシクラはそれをハッタリで飲み込もうとしてる。だって、んな訳ない。
シクラ達でもプレイヤーの生死を操るまでのシンクロ率の操作は出来ない……そう僕は柊から聞いている。口ごもってるガイエン。
だけどこの事実を僕が伝えれば、シクラが狙う“何か”の覚醒は回避出来るかも知れない！

「ガイエン！！　良く聞け！！　シクラ達にだってそれだけの事は出来ない！　これは間違いない情報だ！　だって同じ存在の奴から直接聞いたんだからな！！」

僕はガイエンに向かって大きくそう叫んだ。

「つまりはハッタリか……」
「あ～あ、更にヒイちゃんにはお仕置きが必要かな～☆　でもビックリ、あの子がそんな色々話すなんて。やっぱりスオウを気に入ったんだね」

気に入られたくもない。てかただ単に負けたから恨み持たれてるだけだと思う。でもこれで、ガイエンは事実を知った。予想外って奴じゃないのかシクラ？
少しの間、夜空を仰ぐシクラ。だけど直ぐに気持ち良い笑い声が響いてきた。

「あはははは☆　バレちゃったらしょうがないよね。でも、殺せなくても痛覚を操作する位、コードを抜けば出来るわ。そしてＨＰが

尽きない様にすれば、それはそれで地獄じゃない？」
「「「なっ！？」」」
僕達三人は、そのシクラの案に絶句する。確かにそれは地獄だろう。考えるだけでゾッとする。その時、ガイエンが遠くに向かって叫ぶ。それは多分軍へだろう。
「全軍！　王を守るんだあああ！！」
でもそれは更に遠くから動き出した赤い瞳の大群によって阻まれる事になる。
「あれ～？　餌が目の前にあるのに待てをし過ぎちゃったみたい☆
ほんと、低脳でしつけが出来ない子達よね」
白々しい事を……動き出したオークの大軍は程なく、軍とぶつかり出す。加護を無くしたこのタイミングでなんて最悪だ。
もう四の五の言ってる場合じゃない。僕達はガイエンを救出しに動き出す。でも近づいていた悪魔に、簡単に阻まれて押し戻された。
それはまさに圧倒的戦力差。確実に絶望の足音は近づいて来てる。轟く断末魔の叫びと、ぶつかり合う武器。戦場は激しさを増していく。暗い暗い夜の帳の中、最後の戦いの第二幕が幕を上げた。

黒夜の侵食（後書き）

第百六十四話です。

絶望の足音が忍び寄る回。まあもう忍んで無いけど、アルテミナス大ピンチ。意気揚々としてた気持ちが完全に無くなりつつあります。しかも数体の悪魔。一体でもあれだけ苦労したのに数体なんてどうしよう！

てな訳で、どうするかは今後に続きます。

次回は火曜日に上げます。ではでは。

カーテナの乙女（前書き）

数体の悪魔に迫るオークの大群。そして崩壊したアルテミナスの街並み。それらが僕達に与えた影響はとても大きい。さっきまでの勢いはどこへやら、一瞬にしてシクラへと呑まれた。

それでも僕達は立ち向かわなきゃいけない。それを諦めたらいけない。その時、カーテナに選ばれし乙女が、その輝きを取り戻して立ち上がる。

カーテナの乙女

広がる平原に、迫り来る大量の足音が響いてる。人の怒号と、野生の叫びが木霊してる。だけどどうだろうか……聞こえる声の大きさは、圧倒的に勢いと言うものが違う。

モンスター共の叫びは、荒々しくて直情的。だけどだからこそ、それが行動と直結してる。人の中にある恐怖って奴を、引きずり出すように、胸の奥をイヤに叩く。嫌な感じにさ。

それに軍側は動揺してた。後ろの方でも、この事実は多分伝わってたんだろう。アルテミナスが落とされた事。そして現れた、四・五体もの悪魔。

だけど決め手は、心を強く支えてくれてた加護の消失が大きい。加護が与えてくれてた補助は、何も肉体的な物だけじゃ無かったんだ。加護はこれがあれば……そう思わせてくれるだけの支えだったんだ。

そんな加護が無くなって、再び迫るオーク共の留まる事を知らない勢い。元々、押されてた軍はそれを止める事がまま成らない感じだ。

「アギト……どう考えてもこれはヤバいぞ！　シクラが描くシナリオ、その通りに成りかねない！　ガイエンがああなってる今、お前が軍の指揮を取れ！！」

「はあ！？　お前な、俺は指揮官ってがらじゃ……」

この状況で渋るアギト。確かにアギトじゃ、ガイエンみたくは出来ないだろう。そんな事別に期待なんかしてないさ。だけど今必要

なのは、混乱してる軍の折れかけてる心、それを少なくとも支えられ人物が立つことだ。

指令官がいるかいないかは、あいつ等が軍と言う大きな括りであれるかどうかだろ。そこに支えがあったはずだ。今までの奴じゃ足りてない……もっとダイレクトに、影響力のある奴じゃないといけないんだ。

それはガイエンであり、アギトであり、そしてアイリ。多分アイリは、アギトよりもそういうの上手いんだろうけど、今のアイリにそれをやらせるのは酷かも知れない。動かないんだ。

膝を地面について、顔を俯かせて、セラが幾ら声を掛けても反応しない。だから僕は、アギトに詰め寄る。

「じゃあどうすんだ!?　お前以外の誰が他に出来るんだ！　軍が今瓦解したら、それこそこの戦いは終わるぞ！　まだ形だけだけど、そうなったら地図上から消されたっておかしくない！　それでもいいのかお前は!?　お前はアイリが守れれば良いのかも知れないけどな、お前も聞いてただろ！

ガイエンはお前がアイリを自分よりも幸せに出来ると思ったから手を引いてんだ！　そのお前が、アイリの守りたい物を守れなくてどうするんだ!!

上手い具合に軍に指示を出せ何て言わない！　だけど心ぐらいは支えてやれ。無くした加護の代わりくらい、今のお前なら成れるだろう!?　そんな存在なんだろアギト!!」

僕はアギトに掴み掛かる勢いでそう言った。間違って何か無いはずだ。アギトはこの国ではそういう存在だろ。特別なんだ。

それはさ、信じられないけど……この国に来て、いろいろあって、それは認めざる得ない事。アイリとガイエンとアギト、この三人は

今のアルテミナスの礎に成ったと言っても過言じゃない。

そんなアギトだからこそ、出来る事がある。アギトはアイリに視線を送り、その姿を確認する。その居たたまれない姿をだ。そしてアギトは自分の力を握りしめて顔を上げる。どうやらその気に成ったみたいだ。

だけどその時、夜の明かりの下に更に影が多い被さった。それは星の光さえも遮る悪魔の巨体だ。そしてその頭に居る奴が、面白そうに声を出す。

「幾ら頑張っても、この国はもう終わりだと思うけどな～☆　そんな事より、早くスオウは逃げた方がいいよ。折角ヒイちゃんを倒せたんだし、ここで死にたくないでしょ？

今なら何と、見逃してあげる。ほら、ログアウト出来る筈だよ☆」

シクラの奴の言葉が、変な誘いを僕に課す。もう終わりか……確かにシクラの目から見たちっぽけな存在の人間の抵抗何て、ここまでなのかも知れない。

でも僕は、そんな事思ってない。多分ログアウトはシクラの言うとおり、戻ってるんだろう。だけど僕は、それを確認する事なんてしない。

だってウインドウを表すだけで、それを望んでる様に思われる。それだけでシクラの思惑に乗ったみたいで嫌だ。

「今更、僕だけ逃げる何て出来るかよ！　それにまだ約束果たして貰ってねーぞシクラ。セツリはどうした？　空で言ったはずだ。会わせるって」

そう、それを忘れて貰っちゃ困る。僕がここまでやってきたの

は、自分だけ見逃して貰う為じゃない。セツリにもう一度会うために、ここまで来てるんだ。
だからそれを保護にされたまま何て訳にはいかない！　そしてこの間に、僕はアギトに視線を送る。「ここは任せろ。今の内だ」って思いを込めてさ。
普通の関係じゃそこまで伝える事は出来ないだろうけど、僕達は親友。そんなの朝飯前だ。だけどアギトはなかなか動かない。流石に僕一人に、悪魔五体位の相手は出来ないってか。

「幾らお前でもこれは……」

そんな視線が返ってくるよ。そんな中、再びシクラの声が頭上で響く。

「ああ、う～んそうだね。それはちゃんと伝えたんだけど、タイミングが色々とほら、あるじゃない？　女の子には準備が必要なの☆
でも会ったところで無駄だと思うけどな～」
「そんなのはお前が決める事じゃない！　それに無駄だとしても、僕は会いたいんだ！！」

僕はセラ・シルフィングを力を込めて握る。いつでも飛び出せる態勢は万全だ。実際は、シクラの奴が僕との約束を守るメリット何か無いんだから、この会話事態無駄かも知れない。
だって今の戦力差は歴然だ。有無を言わさず、シクラは僕達を踏みつぶす事が出来る。悪魔が五体位ってのはそれだけの戦力だ。一体を二十人位で相手したって倒せるどうかの相手。

それが五体で、さらにはオーク共も数え切れない程いる。軍だって百人以上はいるけど……それでも釣り合い何て取れてない。

「行けよアギト！　このままじゃ総崩れだ！！」
僕は視線にそう込めて訴える。
「まさか一人で私達を足止め気かなスオウ？　幾ら君でもそれは無謀って物だよ☆　勇気とはき違えたら、ここで死ぬ事に成るよ」
何だか意図に気付かれたっぽいな。でもそれならそれで堂々とやるまでだ。一歩だけ、力強く足を前に出す。
「おかしな事言うなシクラ。お前等は僕を殺したかったんじゃないのかよ？」
「う～んまあそれはそうなんだけどね。厄介だし、君はあの子を惑わせる。でもこうも思わない？　私は楽しいことを長続きさせたいの。
そして今一番楽しい要素はスオウだから、だから生かして足掻く姿を見るのもいいかな～ってね☆」
シクラの言葉に、僕は唾を吐きたい気分になる。結局は、自分の楽しみの為かよ。子供の様な事を言ってやがる。少しでも楽しい時間を長くだ何て……それは自分が負ける何て微塵も思っちゃいないって事だ。
常にシクラは、僕達を見下す位置に居るつもりだ。いつか後悔させてやる……そんな思いが決意へと変わる。僕はセラ・シルフィングの刀身をシクラへと向ける。
「その余裕を後悔に変えてやるよ。絶対に！」
「だからそれを、楽しみにしてるよ☆」

妖しい笑みを浮かべてそう告げたシクラ。軽々しく左手を掲げると、それが合図みたいにシクラを乗せて、ガイエンを捕らえてる以外の悪魔が走り出した。
一歩を踏む度に地面が揺れる。その迫力は一体でモンスター百体分はありそうな程だ。このままじゃ挟まれる状況だ。
不味い……どうしたってこのままじゃ……

「何やってるアギト！　お前はさっさと軍を建て直しに行け！！ここはお前の故郷だろ！！」
「つっ……」

震えるアギト。それは葛藤か。ここで僕だけにあの悪魔三体の相手は確かにきついけどさ、そんな事言ってる場合じゃないんだ。

「おいアギト！　良く聞けよ。僕は建て直せって言ってんだ！　諦めて逃げ道を用意しろなんて言ってない！　こいつらに勝つには、軍の力は欠かせねーからさっさと建て直して、活路を無くすなって事だ！
僕がやられる前に、それをやれよバカ！！」
「なっ……バカ……」

たく、妙に融通が利かない所が厄介なんだお前は！　まで言いたかったけど、それは胸の奥にしまってやった。別に悪口を言いたい訳じゃないからな。すると僕達の前にいつの間にか、テッケンさん達が集ってた。

「そうそう、ここは僕達に任せるがいいアギト。大丈夫さ、これだけ揃えばそうそう簡単にやられはしない」
「テツ……それにシルク……みんなも……」

こっちに来たのは、みんな軍の方に行きづらい人たちばかり。でも助かる。これでアギトも心おきなくやるべき事をやれるだろう。

「行けアギト。まだ何も終わってない……いや、僕達が終わらせないんだろ？　その為には今ここで諦める訳には行かないんだ！」

「……ああ、その通りだ！！」

アギトはそう応えて、体を反転させる。だけどアギトは進まない。

（どうしたんだ？）

そう思い、僕はアギトに視線を向ける。すると何だか驚いた様な顔してる。一体何が？　その時、僕とアギトの間をユラリと一つの人影が通る。ボロボロになったドレスから、太股と二の腕までを露わにした姿。

そして、その手に握りしめてるのは小さなオモチャの様な剣。でもその剣は、この国の王にだけ許された剣だ。

「アイリ……」

すれ違ったアギトがそんな声を漏らす。信じられない物でも見るように、その背を追って振り向く。そしてアイリは、振り向きもしないまま、俯き加減で弱く言葉を発した。

「そうですよね……私達が……終わらせちゃ行けない。なのに私は……真っ先に終わらせようとしてた。私が、スオウ君の伝えたい事を伝えなくなちゃ行けなかったのに……目の前の事だけで真っ白に成ってた」

言葉を紡ぐ間も、どんどん前に行くアイリ。僕達は何だかわから

ないその迫力に、ただ見つめる事しか出来なかった。
そして一番前で止まると、カーテナを真っ直ぐに前に突き出した。
「まだ、終わってないのに……まだ終わってないのに……私は！」
自分を責める様な事を言い続けるアイリ。するとそこで、アイリの存在に気付いたシクラが悪魔の後方から口を開く。
「お飾りだったお姫様☆　貴女の重荷、全部壊して差し上げます」
歌うようにそう紡いだシクラ。でもその瞬間だった。こちらに向かってきてた一体の悪魔の顎が、盛大に打ち抜かれた。
数メートル浮き上がる悪魔の巨体……そして続いて、見えない力で今度は地面に叩きつけられる。激しい衝撃が、辺り一面に伝わった。
僕達はその光景にただただ唖然としたよ。あのシクラだって、一瞬目を見開いた。そしてそれは僕達だけじゃない。
後方の軍とオーク達も、その一瞬の光景に止まってた。そんな中、一人の少女が静かに動く。その剣に淡い光を宿してだ。
「許さない……貴女だけは、許さない！！」
地面からカーテナへと光が昇る様に集まっていく。そしてその光は、カーテナを握る腕から、全身へと広がっていく。
そして次の瞬間、集まった光は何かを形作ると一斉に弾け飛ぶ。キラキラと夜に浮かび上がるその姿は、ついさっきまでの見窄らしい姿じゃない。
ボロボロだったアイリの服は、光が形作った物へと様変わりして

た。白を基調とした服に銀の鎧が所々にあしらってある感じ。
胸の中央部分とへそに掛けての当たりまでの部分を、薄く横側は開いてる鎧が光ってて。その下に、白地に金色のラインだが入った服がある。結構ピッチリとした感じだけど、腰の部分では、前に大きく二方向に分かれてて、背中側も、くるぶし位まである。

それを腰の当たりのベルトって言うか、カーテナの鞘が繋がってる物で、引き締めてる。腕部分は二の腕の半分くらいまでを覆う白地の布を金のリボンで止めてるよ。
下半身はミニスカートと、膝までのある甲冑の銀のブーツ。でもそれも決して重そうな物ではない。曲線美を表すようなデザイン。

額には銀色のティアラに、アイリの髪からは金色のリボンが髪を結って揺らめいてる。それはとても綺麗で、凛々しくて、戦場に咲く一輪の花があるとしたら、きっとこんなんだろうと思わせる程だ。

「カーテナね。終わりかけの国の力でどこまであらがえると？　全ては今更、諦めちゃえば楽なのに……本当に人ってバカで間抜けでた救いようがないよね。
だけど、いいよ。もっと私をワクワクさせて☆」

地面に埋まった悪魔を一瞥して、アイリへと視線を移してシクラはそう告げる。別段気にしてる風でもない。悪魔がやられたのも、アイリの装備が一瞬で変わったことも。　僕はビックリだけどね。今のアイリは戦乙女って感じだ。そんなアイリは、ささめく風に髪やリボンを揺らして、シクラに宣言する。

「私達は貴女のオモチャじゃない。終わりかけの国？　ふぜけないでよ！！　みんなが立ち向かってる限り、形を無くしたってアルテミナスはあります。

でもここが私達の場所だから……沢山の出会いをくれた場所だから……踏みにじられたままでは居られない！！　これは……さっきの思いとは違います。エルフの国を預かる者として言います。
アイリ・アルテミナスは、あなた方の暴挙を許しません！！」

その瞬間、アイリは右手に持ったカーテナを後ろに引いて、真っ直ぐに突き刺した。その瞬間、ニ体目の悪魔が、くの時に曲がって後方へ吹き飛んだ。
シクラは合図を送り、もう一体の悪魔のメイスを振らせる。巨大な塊が、アイリめがけて降りおろされる。でもアイリは、その場から一歩も動くことなく、カーテナをシャランと音がしそうな程に軽やかに凪いだ。

そしてメイスは、アイリに届く前に粉々に砕かれる。更に一歩を踏み込んで続けざまに突きを放つ。巨大な衝撃が悪魔を襲い、アルテミナスの外壁へと叩きつける。
これで後はニ体。まあ完全に止めを刺した訳じゃないけど、ガイエンを助ける事くらい出来る筈だ。

「あはは☆　スゴい、すご――――」

シクラの苛つく声を聞きたくないのか、言葉の途中でアイリはカーテナを上から下へ降り卸した。それで一気に、多大な衝撃音と共にシクラが乗った悪魔は地面へと落ちていく。
そしてそれは多分シクラだってその筈だ。あいつは悪魔の頭に居たんだ。あの攻撃を食らってない筈がない。そして遂に本命だ。

ガイエンを捕まえてる悪魔をアイリは見上げる。おかしな事に、その時悪魔の方がビビってる感じだった。でも必死に声を絞り出して、メイスを振るう。

だけどアイリは、そんなメイスなんて気にも止めずカーテナを動かした。ガイエンが捕まってる左腕をピンポイントに狙う様に今度は下から上へ。

だけどその時、そんなアイリの腕の動きを阻む手が現れた。中途半端な位置で止められるカーテナ。すると力は発動しない。振り切らないと行けないから……

「結構痛いよねカーテナって、だから私も味あわせてあげる☆」

「っつ！？」

ニッコリ微笑むのはシクラ。こいついつの間に！？　攻撃を食らったのは間違いないんだろうけど、まさかそれを利用して？

悪魔と共に落ちてきてたから、このタイミングを狙って出てきたのか？　でもこれは、自分も食らうぞ！　だけどシクラはその瞬間まで笑みを絶やさなかった。

鈍い音が辺りに響き、ざわめいた。白いメイスは僕たちから見たら左側から来て、右側へとスイングされていった。

勢いは微塵も落ちなかった。悪魔にとっては、人間サイズの物なんて小石と同等みたいだ。

「アイリーーーーー！！」

アギトのそんな声が響く。夜空に舞い上がった二つの体。それは人形の様に力無く見える。アギトは駆け出す。宙に舞ったアイリを地面に落とさない為に。

その時、どこかから飛んできた光る鳥が、シクラをクチバシでキャッチした。その間に、アギトはアイリをギリギリで受け止める。

「おい！　大丈夫かアイリ！？」
「うん……大丈夫。この装備のおかげかな？　あのドレスのままだったらって思うとゾッとする……だけどまさか……」
そう紡いで、空に吊されてるシクラへと目をやるアイリ。「だけどまさか」その先はみんなが思ってる事だ。
だけどまさか、自分ごとなんて……シクラの奴、常々頭おかしいじゃねーの？　とか思ってたけど、どうやらネジが外れてるらしいな。
捨て身……いや、シクラが捨て身なんて考えであれをやったとは思えない。ただ面白そうだったからの方がよっぽど納得の理由だ。
それに死なないってわかってただろうしな。

「アイリ……」

その時、そんな震える様な声が聞こえた。見るとそこには悪魔に囚われたガイエンの姿。それも黒い霧を体中から放ってる。
もしかしたらさっきの光景で、絶望の瞬間を垣間見たのかも知れない。確かにあれは、そんな物がこみ上げる光景だったんだ。
苦しそうなガイエンに気付いたアイリは、必死に自分の足で立ち上がろうとする。それが一番、今のガイエンには良いことか。

「ガイエン落ち着いて！　私は……大丈夫だから」

足が実はブルブル震えてるんだけど、それを見せないように笑顔でピースを作るアイリ。それは伝わったのか、ガイエンの黒い霧は勢いを少し弱めた。
でもそれでも、まだまだ苦しそうだ。さっきのはきっかけに成ってしまったのかも知れない。“何か”が覚醒するための足掛かりと

でも言うのか……それがシクラの目的か。

「そっか、大丈夫何だ。じゃあ、今度はもっと痛めつけてあげる☆
せっちゃんこの子離してよ」
「！」
「クー、離してあげて」
「！！」

僕の耳に届く空の会話。それはとても流せる物じゃない。何て言ったシクラの奴？　僕は勢い良く、夜空へと視線を向ける。
だけどその瞬間に目の前には、いつの間にか迫ってたシクラの姿があった。

「遊びたいけど、今は退かせて貰うから☆」

とっさに剣を防御に回す。その瞬間、シクラの髪がもの凄い衝撃を叩きつけて来た。そしてそのまま吹き飛ばされる。
視界が回り、地面に何度も叩きつけられる。信じられない威力……悪魔とも引けをとらなそうだ。

「くっそ……」

見た目と威力のギャップが激しすぎだ。踏ん張りが足りなかった。
その間にシクラはテッケンさん達をすり抜けて、アイリへと迫る。

「アギト！　死んでも守れ！！」

そんな声がガイエンから発せられる。それに応える様にアギトはアイリを後ろにやって飛び出した。

「言われなくてもやってやる！！　それは俺自身の誓いだ！！」
アギトの槍が真っ直ぐにシクラへと向けられる。だけど煙の様に消えたシクラは一瞬で、ガイエンの後ろで、アイリの目の前に居る。
「なっ！？」
「まずは、そのコードを教えてね☆」
素早く向けられるシクラの手。だけどそれをアイリはカーテナで防ぐ。カーテナから出された小さな光の球体が、シクラの手を弾く。
でもそれは長く持たない様だ。泡の様に直ぐに消えた。でもその一瞬でアギトは再びシクラへ槍を向けている。一撃、二撃三撃と続けざまの攻撃。だけど一撃も当たらない。
僕はテッケンさん達と視線で頷きあい、アギトの加勢に行く。
「「「うおおおおおおおおおおおおお！！」」」
気になる事はある。だけど今は、こっちが優先だ。僕達は一斉にシクラへと斬りかかる。絶え間無い攻撃が嵐の様に降り続く。
だけど……何も変わらない。シクラには何故か攻撃が当たらない。そして中心に立った涼しい顔のシクラの髪が一瞬光る。その瞬間僕達は、吹き荒れた圧力に飛ばされる。　何故かアイリだけを残してだ。
「さあガイエン、絶望の幕開けよ☆」

カーテナの乙女（後書き）

第百六十五話です。
襲いかかるモンスターの大群に押されていってたスオウ達。そんな中、ようやく灯った光。戦場の花。だけどシクラの奴はまだまだその、底の見えない力で彼らを追い込みます。
まさにガイエンに絶望を見せつける為に。
てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではまた～。

絶望の光（前書き）

事態は混迷を極めつつあった。動き出したシクラに翻弄され、そこに復活してきた複数の悪魔までもが参戦しだす。このままだと、どう足掻いてもシクラのシナリオは完遂されてしまうだろう。

だけどそれでも僕達は動く。何百万分の一の確率でも、誰か一人でも諦めない限り数字がゼロに成らないのなら、デジタルの世界では、それはアリって事だろう。

絶望の光

「さあガイエン、絶望の幕開けよ☆」

そう呟いたシクラは、その場に残されたアイリへと手をのばす。捕まれた細い首、そして持ち上げられるアイリは顔を歪める。

「がっ……っは……っ！」

「アイリ！！　やめろ！　それ以上……くっそアギト！」

アイリの苦しげな声と、ガイエンの怒号。アギトはそんな言葉を受けて、無理矢理にでも態勢を立て直して走り出す。

「やめろぉおおおおおおおお！！」

アギトは一刻も早く……その思いの丈を槍に込めて投げ放つ。空気を弾け飛ばせて、新たに成った槍がシクラへとまっすぐに向かう。加速して行ってる様な感じの槍は、物の一秒位でシクラの背へと迫った。でもその時、横から割り込んできた白いメイスがアギトの槍を阻んだ。

「「「ヅオオオオオオオオオオ」」」

「なっ……こいつら！！」

それはカーテナによってぶっ飛ばされてた悪魔共の叫び。ここに来て、悪魔共が立ち上がって来やがった。

「ふふ☆　今の瞬間だけは褒めてあげる。もう枷なんて外してあげ

る。おもいっきり暴れなさい」

その言葉の後、悪魔共の目が一瞬光った様に見えた。そして地面に埋め込まれてた一体と、外壁まで飛ばされてたニ体が、こちらに向かってくる。

ヤバすぎる……悪魔を三体も相手にしながらだと、いくら何でもアイリの救出何て出来ない。せめて、ここで立ち上がった一体の間しか……走って来る二体に参戦される前にどうにかしないと。

「走れアギト！！　一体の今の内にきゅうしゅ――」

地面を蹴ったその時、思わぬ所から炎の攻撃が地面すれすれを飛んできた。僕はとっさに体を前方に飛ばす。何とか避けた物の、その攻撃は不幸にも軍の一部へと着弾した。

「しまった……そう言えばまだ居たか」

僕は視線を炎が飛んできた方へ向ける。するとそこにも山があるような黒い陰の中で、一際光る赤い光があった。そうだった……悪魔は全部で五体居たんだ。最初にアイリに潰されたのが一体で、続けざまにニ体外壁へ飛ばした。

その次にアイリが潰したのがコイツ……シクラが意気揚々と乗ってた奴だ。そして残り一体が、ガイエンを捕まえてる奴。

でもこいつは戦闘には参加しなさそうだから、どうでもいい。だから全五体で、実質ここで参戦するのは四体。どっちにしても厄介過ぎる数だ。

それにこの場にもう一体が既に居るって事が大問題。一体なら、一人で翻弄する位出来ると踏んでた。その間にアイリの救出をって事だった。

でもそれが二体と成ると、数人を割かなきゃいけないのは明白だ。でもそれじゃ、アイリを助けれる確率がまた一つ減ることになる。
元々、確率は低い。それをこれ以上落とす何て……それこそ無謀だ。

「くっ……アギト、スオウ君！　ここは二班に分かれるしかない！　アイリ君救出するのと、悪魔を引き受ける側とだ！」

どうやら、テッケンさんも同じ様な事を考えたらしい。でも、それじゃあ多分無理だよ。無難なことは確かに正攻法かも知れない。
確率を半々にする事は、生き残る為の上策かも知れない。でもその半々が、元の五十の更に半だとしたらどうだ？　それじゃあたったの二十五パーセントだ。

それじゃあ、どっちに転んでも報われない。だから僕はこれを言う。偏ったやり方でも、出来るかも知れなくて、元の確率から一パーセントの自分が消えるだけでいいのなら、一番確率としては上にあるやり方だ。

「ダメだ！　それじゃあアイリを助ける何て出来ない！　僕達全員で行ってこの有様……半分何て積もらない塵、シクラに向かえる山に何て到底成らない」
「じゃあどうする！？　アイリを見捨る気かお前！！」

アギトが僕に掴みがからんばかりの勢いでそう叫ぶ。僕はそんなアギトの声に背を向けて、二体の悪魔へ向き合う。

「そんな訳ねーだろ。行け。コイツ等の相手は僕一人で十分だ！」
「それこそ塵にすら成ってねーよ！！」

何て失礼な事を言う奴だ。憤慨だな。悪魔が二体程度なら、うざがられる蚊くらいにはなれるわ。だから僕は言ってやる。

「十秒だ」

「あぁ？」

「後の二体がここに参戦しても何とか、それだけはイクシードで稼いでやる。だから、無駄口叩いてないでさっさと行け！！」

目の前の悪魔二体が、次の攻撃を仕掛けてくる。巨大な二つのメイスが同時に振り下ろされて、実際みんながその攻撃範囲の中に入ってた。

「イクシード！！」

その言葉を紡いだ瞬間、風の渦がセラ・シルフィングに宿る。そしてそれを使って、アギト達をシクラの方へ強引に吹き飛ばす。

「スオウ！　てめぇ！！」

「スオウ君！！」

吹き荒れる風の向こうから何人もの声が聞こえた。でもそれに応えてる暇はない。直ぐに頭上から二つのメイスが降って来たからだ。重苦しい音が辺りに響く。でも僕は潰されて何かいない。風を纏った僕はいつもの三倍は速い！！　あの一瞬でも、今の状態なら強引に抜けられる。

風のうねりに、セラが付いた事で今は雷撃も加わってるんだ。威力増強した攻撃で、メイスの一部を破壊して、飛び出した。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

腕の動きにあわせて付いてくる、刀身に纏わせた風のうねり。それはとても長いから、この巨大な悪魔だって斬り裂ける筈だ！

「「グオオオオオオオオオオオオオオ！！」」

効いてる！　そう実感させる断末魔の叫び。でもまだまだ。まずは動きを封じる事が先決だ。この巨体の動きを止めるにはやっぱり、ガイエンがしたのと同じように足だろう。一番ある意味狙いやすいしな。

僕は両手の剣を、内から外へ振り抜いた。それに呼応して、しなりながら風のうねりが悪魔の足へと向かっていく。

そして同時に、その悪魔共の片側の足をスパッと斬り裂いた。イクシードだからだろうか、案外脆いかも知れない。

地面に倒れてくる悪魔ニ体……動きは止まった訳じゃないけど、僕は視線をアギト達へ向ける。するとそこには、何やらシクラとアイリの周りに、数字の羅列が回ってた。

何だあれ？　とも思ったけど、思い当たる物がある。

「あれが……コードか？」

事ある毎にシクラも柊もその言葉を口にしてた。あいつ等はコードを操る事で、反則的な事を色々と出来るみたい何だよな。

そしてどういう訳か、今はそのコードにアギト達の攻撃は阻まれてるみたいだ。状況は全然芳しくない。活路を見いだす所か、どんどん窮地に追いやられてる感じだ。

「そんな脅えた顔しなくてもいいのに。ちょっと刺激的にしてあげ

るだけ。私のために、その体使わせてね☆」

そう言ってシクラはアイリのコードに何かを施す。アギト達にそれを阻む事は出来なくて……でもその時、アイリ自身が動き出した。

「わた……しは……貴女の……思い……通りには……ならな……
……い！！」

そう呟いたアイリは、握りしめてたカーテナを振るった。でもそれは、どうやらシクラへ向けた物じゃなかったようだ。

その瞬間に攻撃を受けたのは、悪魔の一体。それもガイエンを捕まえてた悪魔だ。カーテナの凄まじい攻撃に、拘束が解かれるガイエン。

地面に何とか、無事に落ちたけど、そこに悪魔が手を伸ばす。今のガイエンには武器がない……そこにテッケンさん達が救出に来た。

だけどガイエンの奴は、その隙に走り出してる。どこかって？

そんなの決まってるアイリの方へだ。

「だ……め……お願い……逃げて……」

「ふざけるなアイリ！！　私が……私だけが逃げれるか！！」

コードの壁にぶつかるガイエン。だけどその黒い腕を必死に、コードの隙間に捻り込んでる。

「うおおおおおおおおお！！」

「やめろガイエン！　武器も無しでどうするんだ！！」

ガイエンの行動にアギトがそう言った。確かにガイエンのやり方は無茶だろう。でもガイエンは直ぐに、こう言い返したよ。

「なら貴様のその槍を貸せ！！　何を貫く槍だそれは！！」

何を貫く……その言葉にアギトは槍を強く握りしめた。アギトだって諦めてたからんな事を言った訳じゃないだろう。

アイリを助けたくて、ガムシャラにその槍を散々振り回した筈だ。でもそれでもアイリへの道は開けなかった。でも今のガイエンの言葉で、アギトは何かを見つけた様な顔で、ガイエンと二人で槍に手を掛けた。

「ふん、お前に言われなくてもわかってるよ。でしゃばってんなよ。アイリは俺の女だ」

「今はだろう。直ぐに気づくさ。お前のヘタレ具合にな」

ようやく二人で協力するのかと思いきや。何だか罵りあってないかあの二人。でも……顔は真っ直ぐその物。二人は同じ動作で槍を引き、そして二人同時にこう叫んで、槍を突き放った。

「「言ってろ！！」」

コードの数字が不鮮明な感じにノイズが生じる。新たなるナイト・オブ・ウォーカーの力……これなら辛うじて抜けれるかも知れない。

そう思った矢先、僕の後ろで多大な熱が膨張したのに気づく。振り返るとそこには、仲良く地に伏せたニ体の悪魔が協力して炎の玉を作ってた。

その大きさは単純に倍……なら威力も倍なんだろう。おいおい、洒落に成ってねぇぞこいつら。だけどそれが放たれる事はなかった。

何故かと言うと、その炎の固まりは、後ろから二本のメイスに突かれたからだ。えっと、どういう事かと言うと、こっちに走ってき

てた更に二体の悪魔……そいつ等が自身のメイスに、その炎を纏わせたんだ。

（最悪な状況だな）

まさに逃げたく成るような光景だよ。計四体の悪魔が僕の眼前に君臨してるんだからな。その内のメイスに炎を宿した二体が間髪を入れずに向かってくる。

僕は一瞬だけ後ろ横目で見つめたよ。そこには今も頑張ってるアギトとガイエンが居るし、テッケンさんやシルクちゃん達も、後一体の悪魔と対峙してるんだ。

僕は口元を少しつり上げて「ハハッ」と声を漏らした。

（退くわけにはいかないよな）

そんな思いのこもった笑い。ここから先に行かせる訳にはいかない。せめて十秒と言ったしな。なんとまあ見栄を張ってしまったもんだ。この通り四体揃ってからの十秒って何？

僕は今、自分の口走った言葉の重みを実感してる。だけどそれでも、セラ・シルフィングに宿る風は、強く激しく渦巻いてる。

それぞれの方向から迫る、炎を宿したメイス。熱量まで加わって、届いてないのに既にＨＰが僅かに削られてる。僕はそんなメイス二つに向かって、それぞれ左右の風の渦を向けた。

こっちは二本持ってんだ。手数の多さで張り合うしかない。まあそれでも、二本負けてるんだけどな。向こうは四体でメイスは四本。こっちは両の手の二本だけ。

でも……これがずっと信じ続けてきた僕のスタイルだからな。どんなに不利な状況でも、切り抜けれるとしたら、この二刀流以外に

僕にはない。
二つのメイスと、風のうねりがぶつかり合う。するとその瞬間、一瞬炎が大きくたぎったかの様になって、その勢いが僕自身を襲う。
セラ・シルフィングの風は別に無くなってない。なのに、僕に掛かるダメージが肥大してる。

「つっ……何だコレ？」

勢いが増した炎と共に、メイスが迫ってくる。わざわざ風の唸りに沿ってだ。いや、風が勢いを増したメイスに流されてるのかも知れない。

「くっそ！！」

僕はとっさに風を地面の方に向ける。風のうねりは炎から離れ、波を打つように地面に刺さる。するとその反動か、僕の体の方が空へと浮いた。
迫って来てたメイス二つの間を抜けて、僕は高く高く舞い上がった。まあメイスとはかなりの至近距離だったから、かなり炎の熱が熱かったんだけど、それでも直撃よりはずっとましだ。
だってメイスに砕かれた地面からは、土さえも燃えてる様な感じだ。自分があそこにいたら、きっと骨まで残さず燃え散らかされたかも知れない。

おぞまし過ぎる。だけどそんな最悪を乗り越えて、今僕は夜空へと飛び出した。とっさの行動だったけど、これは思わぬ幸運だ。今、僕の眼前には、無防備な頭を晒した二匹の悪魔の姿がそこにあるのだから。
こんな絶好の位置からの攻撃なんて早々出来るものじゃない。特にこの悪魔みたいな、巨大モンスターじゃあさ、せいぜい足下を飛

び回るのが普段はやっとだ。
だからこそ逃せないチャンス。僕は無防備なその頭部へめがけて剣を振るう。唸る二つの風が、眼前に聳える巨大な頭を捕らえた……と思った。
「なっ！！　……ちっ」
思わず舌打ちが出てしまう。忘れてた訳じゃない。数の違いってのはこういう事だ。チャンスを潰す機会も、チャンスを作る機会も、数が多い方がやりやすいって事。
状況を説明すると、僕の攻撃はさっき足を切った悪魔に止められたんだ。立ち上がってる所をみると、やっぱりこいつら、自己修復機能でも付いてるらしい。
時間が掛かるらしく、あんまり性能が良いとはいえないかも知れないが、でもそれはやっぱり十分な驚異だ。てか、僕の攻撃を止めたのは足を切った“二体”の内の“一体”だった訳だ。
て事は、同時に斬った筈のもう一体も当然復活してるはず。すると耳にバササ……と言う音が届いた気がした。音の方向は更に上。まさかとは思うけど、僕は顔を更に高い空へと向ける。
するとそこにはやっぱり居た！　炎を蓄えてる悪魔の奴だ。でも……高過ぎだろあれは。確か少し前に悪魔が飛んだけど、あれは飛んだって言うよりも、浮いたって感じだった筈だぞ。
なのに、あの悪魔はどうだ？　同じスペックじゃないのか？　と疑問を感じざる得ない程の高さだ。あれはもう飛んでるよ、間違いなく。
て、そんな戦慄を覚えてる間に、悪魔の奴は口元の炎の塊を放出

する。ぐんぐん迫る巨大な炎の塊……いや、これはもう壁かも知れない。近づくにつれてそう思う。
しかしこれは――

（ヤバい！！）

その感覚がハンパない。僕の中の危険信号が脳を壊す程に鳴り響いてる。空中で、周りには悪魔が三体も居て、さらには頭上からは炎が迫る。
普通だったら詰んでるぞこの状況。そして今まさに、危険信号が、終了のブザーに変わろうとしてる。眼前に落ちてくる炎の塊は回避不可……それを告げてた。

だけどその時だ。落ちてくる炎の側面から何かが飛び出してきた。そしてその何かは光る羽を羽ばたかせて、僕の服を嘴で摘んで救出してくれる。

「おわ！？　なん……だっ……おい！」

しどろもどろになる言葉。いや、あんまりにも突然だったから、状況が理解できない。すると聴き馴れた声が、僕の頭の端から端を通り抜ける。

「何だ……何て……そんなの、私にも分からない……」

その声は、たった数時間前に別れた筈の声なのに、妙に懐かしく耳に沁みて来る。その姿は、僕の位置からはほとんど見えないけど、それだけで誰かは分かる。
それにこの鳥も、僕は知ってるはずだ。間近で見て確信したよ。どうりであの時、シクラを助けたあの時、感じた筈だ。

分からないことの悲しさと、申し訳なさをさ。光る鳥は一気に上昇して、更に上を目指す。だけど不思議と、風圧とかで苦しくなったり痛くなったりしないんだ。

どこまでも心地よい風のそよぎと、暖かな温もりが常に自分の周りにある感じ。嘴で摘まれてるだけの僕がそう感じるのだから、背に乗ってるアイツは多分世界最高峰のファーストクラスの座席に座ってるも同じだろう。

まあそれでも、僕もリムジン気分には成ってるよ多分。乗ったこと無いけど。

そんな考えを一人でしてると、不意に上昇が止まった。そしてゆっくりと、今度は旋回しながら落ちていく。その速度は本当にゆっくりで、まるで羽毛がただただ下に流されていく様な感じだと思う。

多分、リアルとは違う星空がとても近い。月がないからか、星々の煌めきが一際強い印象を受ける。

阻む物の無い空の上。そこは宇宙みたいだった。限りなく広がる星の海だ。そんな星の海を、今僕は笹の船に乗って、織り姫と川下りをしてるのかも知れない。

そんなアホな事を思わず連想してしまう様な、一瞬にして思考が切り替わる光景だった。

だけどそんなトリップ状態は直ぐに回復せざる得なかった。何故なら、地上から強烈な青紫色した如何にもまがまがしいってな感じの光が天を突いて来たからだ。

「何だ！？」

そう呟いた僕だけど、この光からはコレまでとは全く違う悪寒が、体の内面から沸き立たせられるような感じがしてた。ようはとてつもなくイヤな感じって奴がビシビシと伝わってきてたんだ。
下を見ると、そこでは僕達を追おうとしてる悪魔が必死にピョンピョン跳ねてた。なんとアイツ等、ジャンプ力凄いんだ。これで飛んでたと思った真相が分かった。

その位置まではジャンプできるみたいなんだ。そして滞空するために羽を動かしてた訳だ。だから飛んでた様に見えたけど、実はただのジャンプだったってオチ……ってそこじゃねーよ！！
僕は更に視線を移して、光の出所に視線を凝らす。青紫の光が伸びる周りにはアギト達の姿が見える。じゃあこれはシクラ？　アイツならやりかねない。
でも耳を澄ますと聞こえてくる声がある。それは必死に叫ぶアギトの声だろう。

「ガイ……エン！　おい！！」

ガイエン？　これはガイエンなのか？　光の中心はよく見えないから確認しようがない。でも僕はあることに気付いた。アギトの奴……誰かを抱えてる？　それにその足下には黒い物が溜まってる。
青紫の光で照らされてるから気付けた事……そしてそれが何なのか……僕は知りたくないと、頭で思った。その時、この鳥の背に居るアイツがポツリと言葉を発する。

「もう、終わったのよ。スオウも気付いてるでしょ、この光の意味を。この国は終わるわ。だからお願い……今ここでログアウトを押して」

ただゆっくりと落ちていく空の上で、そんな言葉が静かに溶けて

いく。何で……どうして……僕には分からない事が多過ぎる。

「何で……お前がそんな事を言うんだよ。捨てたんだろ。選んだんだろシクラ達を！！　それでも追いかけて来る僕は迷惑な奴だろ！？　なのに何で……お前が僕にログアウトを促すんだ？　どうでもいい存在じゃないのかよ。寧ろ、今殺すべきで、あの時助けるべきじゃ無かったはずだ。違うか？」

僕は見えないそいつに向かってそう言った。色々とさ、責めてやりたい事があったんだ。鳥の上のそいつはがどうしてるのか僕に知る由も無いけど、何となく震えてる気がした。きっと下唇を噛みしめたりしてる。

「言ったじゃん……分からないって！！　何で何て言わない出よ！　私は……私は確かにスオウから離れたけど……だからて死んで良いなんて……思えない！！　から。

短い間だったけど楽しかったもん。そんなスオウを殺すまでなんて……だから促すの！　例えもうあえなくなっても、今ログアウトしないとスオウはだめ！

そうしないと、本当に死ぬよ。私には分かる。分かるの」

震える声でそう紡ぐ見えないアイツ。その言葉は敵を騙そうとかしてる声じゃない。まあ騙すにしてにもやり方がおかしいけどさ。

でも……死か。直で言われると結構きついよそれ。だけど困ったことに、僕の中では返す言葉は決まってる。そこは揺るがない、絶対の物。

ＬＲＯを初めてその日に出会った彼女をさ、どうにかしてやりたい……そう思ってるから、逃げる訳にはいかないんだ。

「なら僕は、自分で証明してやるよ。お前が恐れてるいろんな物、僕が薙ぎ倒す事が出来るってさ。その選択を否定するためにな。
ログアウトはしない。この国も潰させない。それが僕の今の選択だ！！」

絶望の光（後書き）

第百六十六話です。

さてさて、遂にセツリも登場して事態は局面へ向かいます。ここから逆転出来る方法何かあるのかと思うけど、賽は投げられたのです。やるしかない。最後のとっておきはまだ、こちらの手に内ですよ。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは～。

分かりあえない事（前書き）

絶望の柱が夜空へと昇った。僕が悪魔にかまけてる間に、アギト達の方で何かがあったようだ。それも想像したくない方の何か。僕のせいかも知れない……僕は悪魔を止められなかった。

一人安全圏に逃げおおせてるじゃないか。だけど会いたかった奴には会えた。でもこれじゃタイミングいいのか悪いのか。青紫の光を気にしながらも、僕は彼女と会話を交わす。もう一度の為の会話。

そんな折、絶望を作り原因が、再び僕達の邪魔をする。楽園と言う名を掲げた世界に彼女を誘って。

分かりあえない事

天を突く青紫した光の柱。そんな絶望の色をした光は、その姿の通りイヤな感じを僕達に与えてる。きっと昔の人達なら、今のこの光景を見て「世界の終わりじゃ」とか言いそうな感じ。

でも世界とかはまだしも、今この瞬間……一つの国がそう成り掛けてるのは事実だ。そんな国の名前はアルテミナス。剣を掲げる騎士の国。

エルフと呼ばれる、長身で細長の耳を持つ種族の故郷。整えられた町並みに、夜に成るとそこかしこにあるクリスタルが輝き放つ、綺麗な国だ。

そう綺麗な国……だった。今はもう、その光景を思い出としか表せなく成ってしまってる。眼下の直ぐ横に広がるその景色は瓦礫と化してしまってるから。

残ってるのは残骸の中、堅牢に佇むアルテミナス城だけ。だけどその姿はもの凄く寂しい。城は城でしか無くて、その周りに人々の生活感とかを体現出来るもの、すなわち城下って物がないと、城は遺跡みたいな物にしか見えない。

リアルでなら世界遺産とかに成るんだろうけど、そんな物お呼びじゃなくて、来るわけ無い。だってここは仮想の世界ＬＲＯだ。

見える物触れれる物全て、そこには本当は存在なんてしていない……何てわけない！　僕は自分で自分の言った事を塗り返す。

だってそれを、そうと言える訳がない。もしも僕が、いやＬＲＯを始める前の僕なら、そう言えただろう。仮想世界の事なんて……

そう鼻で笑えた筈だ。
でも……知ってしまった。もっと言えば、僕はＬＲＯという世界で、もう一つの時間を生きてしまってる。そんな僕は、この世界に存在する一人なんだ。

ＬＲＯをただの仮想で済ませられる訳ないだろ。確かにあの城は本物の土の上に乗っちゃいないだろう。城の形を作ってる煉瓦か石か知らない物も、ただのデータでしかない。
この世界その物が、電子上で組まれた画面の向こう側である以上、それが現実だ。だけど……ＬＲＯを体験してる人達は「そんなもん関係ないね！」とかきっと言う。

そう断言できる。何故かって？　それは僕もそうだからだ。この世界に降り立った瞬間、データとか仮想とか、そんなもん一気に吹き飛んだんだ。
その感動を僕らプレイヤーはあまねく共有してる。五感の感覚が開いていくと、暖かな温もりを感じる。優しく肌を撫でた風は、一足早くその地の匂いって奴を連れてきて、目を開いた瞬間に現れたその仮想は、どんな現実にも無いリアルさを叩きつけてくれたんだ。

別世界……いや『新世界』に来たと思ったよ。それから二時間走り回った自分はアホだと思うけど、それほどなんだ。
それほどだから、だからみんなＬＲＯに入れ込むんだ。誰もがこうやって、自分達の国を守る為に立ち上がる事も出来るし、そんな人達に協力しようと思える僕達が居るんだ。
素晴らしいじゃんＬＲＯ。すげーよＬＲＯ。そう思う。何が違うだろうリアルとさ……でも、僕達が帰る所は決まってる……多分それがリアルって事なんだ。

次第に夜の空気が冷えていってる様な気がした。でもそれは寒いって言うよりは、冷たいと感じる何か。今更夜が冷え込んで来たとも思えないから、この現象の心当たりはこれしかないだろう。
青紫色の光り……この不気味な光が、あたり一体に冷気じゃない悪寒って奴をまき散らしてる。勢い込んで大言をセツリに向かって吐いた僕だけど、この気持ちがズドーンと落ち込む様な悪寒に唾を飲んでしまった。

てか、今の状況じゃ自分はどうしようもない。だって嘴で摘まされてるんだからな。それに無理矢理って訳にもいかないんだ……僕を摘んでるこの鳥、それが問題だ。
ただのモンスターなら斬ることだって出来るのだけれど、こいつには僕はそれが出来ない。だってこの鳥は……

「ねえスオウ……そんな選択許されないよ。ううん、もしかしたら私以外には許されてるのかもね。神様ってクズは、私にだけは厳しいんだもん」

僕の言葉を受けて、セツリは切なそうにそう言った。そして続けて言葉を紡ぐ。

「だからもし、その選択をスオウが完遂出来たとしたも、私はより一層の切なさに襲われる訳だよね。『何で？　どうして？』は私の方なの。
ねえ、スオウは私をどうしたいの？」
「どうしたいのってそれは……」

僕はその言葉にどう返せばいいんだろうと一瞬迷った。直ぐに思いつく言葉はある。でもそれはセツリ考えてる言葉だろう。
でも今更、グダグダ考えた所でどうにも成らない。僕は予想され

てて、望まれて無いであろう言葉を口に出す。

「救い――」

僕の言葉は途中で止まる。何故かと言うと、もっと良い言葉を思いついたのだ。だから考える間もなく、僕はその言葉を発した。今度こそ、痛快に。

「僕はセツリを、幸せにしたい！」

妙案を思いついたテンションで言ったから、かなり力強く公言してしまった。でもこれは嘘偽り無い僕の思いだ。
僕はセツリに幸せに成ってほしい……というか、それを感じて欲しいんだ。

だから必死になって追っかけてきてんだろ。予想されてたかも知れない言葉だけど、どうなんだろうか？　やっぱり傷つけただろうか？
僕は見えないその姿を見つめた。正確に言うと、見つめてる体で想像してる。でも浮かぶのは「そっか」とか言って背を向ける様なセツリの姿。

アイツはもう選んでしまったから、結局はそうなんだろうって考えが先行してしまう。でも上から聞こえて来たのは、言葉に成ってない声だった。

「ししししししししあわあわせにににしたたたい？　ってそそそれって」

すっげー動揺しまくりのセツリである。姿が見えてなくても、今

度はどういう風に成ってるのか手に取る様にわかる。きっと「あわあわ」てな感じなんだろう。てかセツリの奴は、何を動揺してるんだ？　意味が分からない。

僕が想定してた反応と違いすぎるんだけど。

「おい、どうしたんだよセツリ？　ちょっとおかしいぞ」

「おおおかしいって……だって……すすすすスオウがプププププロプロプロ……」

プロプロプロ何なんだ？　プロフェッショナル？　プロフェッサー？　まあ流石にまだまだそんな域に自分は到達してないと思うんだけどな。

アホな事を考えてた僕に、セツリはそれ以上のアホな言葉を口走りやがる。

「プロポーズ！！　するから！！」

「……は？」

何言ってんのこいつ？　てかえええええええええええ！？

プロポーズって何？　あれれ何だっけ？

「運動会の時に踊ったりする、女子と自然に触れ合える気弱な男子諸君の夢の踊り。でも絶対に気になる子の手前で曲が止まっちゃうタララッララタララ〜てな感じのどっかの民謡をなぜ僕が？」

「オクラホマミキサーじゃないよ！？」

素早く突っ込みを返してくれたセツリだ。なんか新鮮。「一文字目からと言うか、全てが違うよね」と呆れられてるよ。まあ自分でも何でそんな風に脳内回路が組まれたのかが不思議で成らない。自分の頭を本気で心配する事って結構苦しいものがある。

でも言い訳をさせて貰うと、僕もさっきのセツリ並に動揺したって事なんだ。だってプロポーズって……ねえ。

「じゃあそのプロポーズとやらを僕が……セツリに？」

「うん」

窄むような可愛らしい声が短い肯定の言葉を返してきた。あれれ、なんかセツリが今までで最大級に汐らしくなってる様な気がする。声の感じだけで判断ね。どうあってもその姿を見れないのが無念で成らない。

しょうがないから気を取り直して僕はもう一言問う。

「僕まだ高校一年なんだけど……」

「そっか……じゃあ婚約だね」

きっとこれがマンガなら、セツリの背景には今、キラキラとした少女マンガ張りの演出がされてる筈だ。だってそんな声だったよ。

「えっと……」

なんだか、意図せずにセツリがこっち側に来そうに成ってる。会話は微妙にズレてるんだけどさ。婚約って……僕が言いたかったのはそれじゃない。

ただそれとな～く、そんな意味はあの言葉に隠れてないよと伝えたかったんだ。そうそう、「僕はセツリを、幸せにしたい！」なんて言葉のどこに、んな表現が隠されてるんだって……やばい、隠れる所か滅茶苦茶矢面に無いだろうかその意味が？

改めて自分の言葉を思い返すと、あれはプロポーズじゃなきゃ何

だってんだって位に思える言葉じゃないか！　ヤバ過ぎるって……セツリは普通の少女よりも数倍夢抱く妄想系女子なんだ。
もう、そう取るのが当たり前としか思えない。てか普通の女子でもそう取るよなアレは。もしも僕が、本当のプロポーズでさっきの言葉を同じトーンで口に出せたのなら拍手物だけど、多分無いよそれ。

まじ今思うと、もう僅かでも口にするのがはばかれる。セツリは既に、鳥の背で二年後の結婚式の様子でも想像してるのか、アヘヘ～とトリップしてる声が聞こえてる。
いや……でもこれは不味いよ。確かにセツリがこっちに来てくれるのは望んだ事だけどさ、これはいかんでしょ？　一時的には良いけど、今の言葉がそういう意味じゃないと分かったら、今度は二度と口なんて聞いてくれなさそうじゃん。

直ぐにシクラ側へと戻るだろう。二度とあえなくなったら、チャンスすらも与えられない事になる。でも久しぶりに聞いたこんなセツリの弾けた声に、なかなか言葉を紡げない。
どういう言葉を持ってすれば、納得出来るのかも分からない。てかここまで喜んで居るってのが、僕としてはさ……なんだか嬉しい要素もあるんだ。

だってそれって、つまりはＯＫしてくれてるって事なんだよな？
一人の男として、それはありがたい。

『結婚……このまましちゃえよ。それなら簡単に目的達成だ』

心の中から悪魔の様な囁きが聞こえる。

『いいじゃねーか、見た目は最高なんだしさ。最悪、面倒になった

ら口約束になんの強制力も無いって言ってやればいいんだよ。
その時にはこことの繋がりを断ち切っとけば安全だ』

おいおい最低だなこいつ。どこの垂らしだよ。まったく、僕はんな事微塵も考えたりせんわ。
僕はまだまだ恋や愛に多大な幻想を抱いてるんだ。男子高校生を舐めるなよ。

『幻想に浸りつづけたいからその女、お前じゃない方を選んだんだよ』

心の悪魔に囁かれた事がグサッと刺さる気がした。確かに全く持ってそうだけどさ……だからこそ、僕までも幻想で彼女を振り回しちゃいけないだろう。
ちゃんと向き合って欲しいから、僕は諦め切れないんだよ。だから……言うしかない。残酷で嫌われるかも知れないけど、見せたい物は嘘じゃないから。

「セツリ……違うんだ。あの言葉は……」
「そうだよせっちゃん。勘違いなんてしちゃ駄目☆　だってスオウがそんな意図を込める訳ない。分かってるでしょ？　幼なじみの事」

僕が言葉を紡いでると横から割り込んで来た奴、それはシクラだ。てか完全に悪意を込めた誘導が感じれる言葉だ。何が分かってるでしょ？　でそれが日鞠と繋がってんだよ。

「シクラお前！！」
「言うわけない……スオウそうなの？　プロポーズじゃないの？」
「そ、それは……」

くそ……完全にイヤな感じになってる。何て言えばいい？　シクラの無駄に悪意を込めた言い方を避けつつ、傷つけない言葉。
だけどいくら思考を巡らせても良い案は浮かばない。先手を打たれたのが痛かったんだ。先入観をセツリはシクラに植え付けられてしまってる。
今から僕がどんな言葉を言ったところで、弄んだ感じにしかならないよ。

「せっちゃん。スオウは選んでくれなかったんだよ。こんなに可愛くて綺麗で愛らしいのにね☆　本当に駄目な奴だよ」
「そう……だね。何夢見てたんだろう私。スオウが私にプロポーズなんてする分けないよね。だって私はスオウの一番じゃないんだもん」

甘酸っぱい空気が、この青紫の光に引かれて行く気がした。つまりはトーンダウンだ。さっきまではそれを上回るテンションに成ってたから忘れてたけど、今状況は信じれないほどせっぱ詰まってる。

「ちがっ！　セツリ！　僕は……」
「何が違うのかな？　それとも結婚する気があったのかな？」

鳥の背に立ち、僕を見下ろすシクラの顔は、やけににやついていてムカついた。この野郎……そう思うけど、言い返す言葉がでてこない。

「無駄だっんだよせっちゃん。折角助けたのに可哀想。でも安心して、イヤな事は全部もうすぐ無くなるから。幸せ一杯の世界が出来上がる。
そこにはせっちゃんを傷つける物なんて一つも無いからね☆」

「そう……だね。私は早く、そんな世界に行きたい」

シクラの言葉を、小さな声で肯定するセツリ。僕はその瞬間、何の考えも無しにただ子供の様に叫んだ。

「駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だぁあああああ！！　そんな世界に行かせるか！！　僕が行かせない！！」

「じゃあ私を幸せにしてよ！！　幸せにするって言ったじゃない！！」

涙声でそう言い放ったセツリ。姿は見えない訳だけど、その様子が頭の中で想像できた。そして僕は、自分の迂闊な発言を後悔してしまう。

いや、あの時はあれが一番だと思ったんだよ。妙言だって思ったんだ。でも今となっては失言と言うか、ただの妄言だったって思わざる得ない。

だって僕は、セツリが描く幸せなんて与えれない。そんなの悔しいけど、シクラの言うとおり一ミリも考えて無かった。

僕はそういう意味で、セツリを幸せにしたかった訳じゃないんだ。

「お前は、僕と一緒に成れれば幸せを感じれるのか？　それだけで、あれだけ嫌なリアルに戻れるのか？」

「戻れるよ。一人じゃないのなら……ずっとスオウが私を選び続けてくれるのなら、きっと戻れる。でも一人に成るって分かってる場所には戻れない。

行きたくない……スオウは私を幸せにしてくれない」

そうなのか？　それだけでセツリは本当にこっちに来るのだろうか？　今ここで……それを言えれば……

「幸せには出来ないかも知れない。そんな自信ねーよ」
「ほらほら☆　無責任な人間の言葉なんて信じちゃ駄目だぞ。私はせっちゃんを幸せにする自信があるね」

胸を張ってそう自信ありげに言い放つシクラ。うるせーよ。僕の言葉は終わっちゃいないんだ。ちゃんと最後まで聞けっつーの。

「でも、それは僕一人ではって意味だよ。たった一人でいいのかよセツリ。僕は結婚は出来ないかも知れないけど、友達を与える位出来るんだ！
それでも幸せって奴を感じれないのか？」

そんな言葉の後に、一際冷えた風が吹いた。身震いする様なそんな風だった。そしてそんな風が静かに去った後、セツリの声が届く。

「そんなのじゃ足りないよ。私が欲しいのは百人の友達じゃなくて、たった一人で良い大切な人だもん。でもその人は、私を幸せに出来ないって言う。
誰かに任せてほったらかしにするつもりなの」
「そんな事言ってないだろ！！」

ほったらかしとまでは言ってない、断固として。でも、そういう風に受け取られてしまったのなら、そういう事なのか？　言葉ってのは難しい。

「言ってるよ！！　誰も何もしてくれない世界……それが私にとってのリアルだよ！！　そんなの死んだって戻りたくない！！」
「お……まえ！！」

流石にその言葉には僕はカチンと来たかも知れない。だからこっちも声をあらげて言ってやる。

「甘えるのも大概にしとけよ！　誰も何もしてくれないだって？　そんな筈無いだろ！！　じゃあ何でお前は今も生きてんだ！？　なんでお前は今ここに居る！？　それはお前の為に人生掛けてくれた人が居るからだろ！！　その人以外にも、今もお前を気にかけてくれてる人は居るんだよ。

たくさんの人がお前の為に頑張ってくれてる。最後の一歩で初めの一歩くらい、自分で踏みしめろ！！　それをしようともしないお前には、幸せ何て降ってこない！

いや、幸せはそもそも掴むものだろ。特別なんかじゃない……お前にだってその両腕は、まだ残されてるだろーが！！」

言っちゃった……まさにそんな事を直後に思った。でも、流石に限界だった。助ける事、救うことをずっと考えて来たけど、それだけじゃない何かが沸き上がったんだ。

だけどセツリは、そんな僕の言葉を最悪の方向へ取った様だった。僅かな沈黙を破って、次に出て来た言葉がそれを語ってた。

「……何も、何も知らない癖に……嫌いキライきらい！！　大っ嫌い！！　スオウ何て死ねば良いのよ！！」

酷い奴だな全く。いきなり死ねって、手のひら返しもいいとこだ。こうなったら対抗するしかない。てかさ、ぶっちゃけ僕は怒ってるんだ。

「上等だ！！　ただな、僕は簡単には死なないぞ！！　それに今のままのセツリなんてこっちだって大嫌いだよ。境遇や状況に同情はしてやるよ。

でもな、いつまでも他力本願で甘えてるなよ！！」
「同情なんて……いらないわよ！！　誰かに頼って何が悪いの！？
そんな事言う時点で、スオウは私を何も分かってない！！
簡単には死なないですって？　今ここから落としてあげよっか！！」
それはヤバい！　まだまだ結構高いんだぞここ。すると横からシクラがしたり顔してこう言った。
「駄目だよせっちゃん。その台詞は落としてから言う物だぞ☆」
キャハってな感じのシクラのノリに本気で殺意を抱いたね。何とんでもない提案してるんだこいつ。今度からそうされたら命が幾らあっても足りないじゃないか。
僕はギャグマンガのキャラの様なノリで回復しないんだぞ。
「ふふ、まあそれは冗談として、でも良かったよね。これで心置きなく、せっちゃんはこちら側に居れるもん。仲違いサイコー☆」
おいおい、シクラの奴の言葉は今の状況でデリカシーなさ過ぎだ。仲違いサイコーってセツリだって傷つく言葉だからなそれ。
「そうだね……これで私は余計な事、考えなくて済む。自分の為に誰かを犠牲にすることだってきっと出来るよ」
「何……言ってるんだお前？」
するとシクラが腕に持ってた何かを見せつける様にして、こう言った。
「それはね、こういう事だよ☆」

「っつ！？」

それは腕だ。人間の片腕……しかも骨や肉が見えて、血がなまなましく落ちていた。誰の？　そんな事が頭に浮かんで、そして直ぐに直結した。この腕・・まさか！

「アイリの腕か？　そうなのか！！」

さっきの血だまり……その原因はこれなんだ。ガイエンがこうなるのも分かる。目の前でちぎられたのだとすれば、自分の無力さや、ふがいなさでおかしく成るだろう。

それこそ絶望するほどに。

「まだだよ。私たちが犠牲にするのはその子じゃない。いいよねスオウ。大嫌いな私が何しようと。だって私にはもう、ここしかないんだもん」

セツリの奴が何言ってるのかよくわからない。僕も見せつけられたその腕にかなり動揺してる。でもそれでも僕にはまだ、言いたい事があったんだ。

「良いわけ無い！！　そんな訳ないだろ！　確かに僕は今のお前が嫌いだけど、それでも助けるぞ！！　それをここでやめるつもりなんて無いんだ！！」

「何……それ？　意味わかんないよ」

確かにその通りかもしれない。でもこれは可能性で、維持みたいな物なんだ。

「お前がそんな考えだってのも仕方無いってのも分かるってんだ。

でもそれじゃ駄目なのも事実だ！　僕はどうにかしたい！　生きてれば、その価値観を変える事はきっと出来る！
だから僕は、お前の未来に賭けてんだ！！　だから助ける事を絶対に諦めない！！」

精一杯僕は叫ぶ。すると低く暗い声が帰ってきた。

「そんなの……私には関係ないよ」

そしてセツリが、絶望を与える指示を出す。

分かりあえない事（後書き）

第百六十七話です。
久々のセツリとの会話の回でした。てか久々過ぎてセツリってどんな感じだったけ？　みたいな。二人の関係性も曖昧だし、でも意外とセツリは感情は直球な感じに表現しちゃったみたいかも。
でもそれは恋愛感情なのか……はどうだろうですけどね。次回は更にピンチは続き、だけど反撃の狼煙も……的な所までは行きたいですね。後三・四話で終わりたいので。
てな訳で次回は、月曜日に上げます。ではでは。

巨来する空の塊（前書き）

セツリの言葉に応えて、シクラはとんでもない物を呼び込んだ。それは遠い空から舞い落ちてくる物だ。燃え尽きない流れ星。それらはこの、アルテミナスの地を地獄へと変える。

轟く衝撃、弾け砕かれ、燃え盛る大地。舞い上がった太く巨大な煙の柱の下にはその場に居た全ての命が倒れてた。

巨来する空の塊

「シイちゃん、私のために出来る事をして」

そんなセツリの言葉にシクラは、いつもの陽気で快活な感じで実に気軽に答えた。

「おっけー☆　じゃあまずは、ガイエンの絶望の詰めをしなきゃだね」

シクラはそういうと、鳥の背の上で腕を天へ翳した。するとシクラの髪に光が走る。全体と言うよりはその一本一本に光の線みたいなのがチカチカとだ。

何をする気だ？　そんな考えを巡らせてると、シクラの掲げた手の先から……というよりももっと上の方からキラリと光る何かが見えだした。

それはまるで流れ星の様な……だけどその姿は次第に、そして確実に大きく成っていく。しかもどうやらそれは一個じゃない。

大気圏内で燃え尽きない流れ星……それは地上に爪痕を残す隕石って奴じゃないだろうか。しかもまだ遠くの筈なのに、その赤々とした姿がここからでもはっきり分かる位に巨大と言うことは、それは爪痕何てレベルじゃ済まないだろう。

しかもそれが見る限り七・八個は落ちてきてる。どう見ても、完全に僕達の場所を目指してだ。偶然？　な訳がない。どう考えてもそれは、シクラの仕業。

魔法陣も何も見えなかったけど、あの掲げた手は、隕石を呼んで

る様にしか見えないよ。

「お前……何する気だ！！」

僕は思わず、聞かなくても分かる事を聞いてしまった。多分……いや絶対にそうだろうなと思う事があるんだけど、でも聞かずにはいられなかったからだ。

もしかしたらの可能性に……あり得ない可能性に、僕は縋ろうとしたのかも知れない。でも、シクラは簡単に簡潔に、そして簡素にあっけなく答えた。まるで髪をとかしながら、今日何をしよっかな？　みたいな気軽さで。

「うん？　皆殺し☆」

その瞬間、最初の隕石が僕達の直ぐ横を通り過ぎていく。その大きさは考えていた物よりも更にデカい。空から飛来する炎の塊は、有に直径六・七メートルはありそうだ。あんなのが七・八個？

そんなのが地上に直撃すれば、この国どころか辺り一帯が灰に成るんじゃないか？　いや、そうしようとしてるのか……シクラは笑顔で「皆殺し」と言ったじゃないか。

地上を見ると、ようやく空からの飛来物に気づいたらしいみんなが慌てふためいていた。気休めに成るかも分からない魔法障壁や、防御系の魔法を魔法使いの人達が一斉に詠唱しだしたのがここからでも分かる。

地上に灯ったいくつもの光り……それが魔法を使うとき特有の光だと分かるから。でもそれが間に合うか、間に合わないかじゃない。防ぎきれるのか、きれないのか……その方が重要だ。でも僕には

分からない。そこまで魔法に詳しくないし、出来る事は願う事だけだ。
いや……まだ、やれる事はある！　僕は頭上に向かって叫ぶ。
「セツリ！　あそこにはアギトもテッケンさんもシルクちゃんだって居るんぞ！！　今直ぐ止めさせろ！！」
どうせシクラは僕が言っても止まらない。でもセツリなら違うはずだ。そう思って、見えないセツリへ言葉を発した。
でも帰ってきた言葉は、想像以上に冷たくて、考えてた限りで最悪な答え。僕は本気で、セツリを殴り飛ばしたいと思った。
「それは……悲しい事だけど、しょうがないよ。うん、しょうがない。私の為に死んでもらおう。友達だもん、そのくらいしてくれるよね」
「セツリ……おまっ！！　んな事、どんな顔でほざいてるかちょっと顔見せてみろコラアアア！！」
握りしめたセラ・シルフィングに力がこもる。いっその事、この鳥を切り裂いて三人まとめて地上に落ちるのも悪くない考えだと思った。
それならシクラは、攻撃を止めざる得ないだろう。だけど僕はそれを実行出来ない。それを分かってるシクラの奴は、この鳥の背で僕を見下してた。
「くっそ……なんで……お前なんだよクー」
「あんまり生意気だと、落とすよスオウ？　ねえシイちゃん」
「うんうん、だけどどうせならこの後にした方が面白い反応が見れるかもだよせっちゃん。それに見物人が一人も居なくなったらつまらないじゃない☆」

ふざけた事を抜かすシクラ。僕をこうやって生かしてるのはそういう理由か。どうにかしたい思いは強くある。でも今僕が地上に落とされた所で、最初の隕石の衝突には間に合わない。
そしてこの規模の攻撃を、どうにか出来るなんて……それほどまでに、僕はこの力を買い被ってないよ。僕が今更行ったところで、余計な手間を増やすだけだ。

なんて無力感……仲間達がピンチなのに……大ピンチなのに、僕は安全圏で何も出来ないのが悔しすぎる。

「例え……僕が一人になっても……お前達の好きにはさせない！！」

僕はそう言う事しか出来ない。そしてたった一人何て問題に成らないとわかってるこいつらは気軽に言う。

「どうぞご勝手にスオウ。私の邪魔をするのなら、もうスオウでも許さないよ」
「せっちゃんがそういうのなら、私もおもいっきり相手してあげようかな？　ねえスオウ☆」

二人の言葉に僕は唾を飲み込んで答えてやる。

「上等だ……」

そうこうしてる内に、次々と僕達の周りを隕石が落ちていく。そして最初に通り過ぎた奴が、遂に地上へとぶつかった。
それはまさに爆弾でも落とされたかのような衝撃。地面と言うか世界が揺れたんじゃないかと思うほどの爆発だ。一瞬聞こえた様な様々な叫びも、その爆発音に呑まれてしまう。

ここから見える地上は、巻き起こった粉塵に包まれた。だけどそんな粉塵も、次々と地上に落ちる隕石に、穴を開けられていく。
そしてどれもかしこも、空高く昇る煙の柱を立ち上がらせてた。その惨劇という惨状は余りにも酷くて、見るに耐えない物だった。
全ての隕石が落下した地上は、まさに地獄と化してた。

いくつものクレーターが衝撃で出来て、そこには人もモンスターも混ざりあった死体がるいるいとしてる。誰一人として、そこで立ってる者は居なかったんだ。

「さあ、来るかな来るかな☆」

そんな声の見据える先、そこにはこの惨劇でも変わらないたった一人の姿があった。立ち上る青紫の光の主……それはガイエンの姿。
実際にはさ、姿その物が見える訳じゃない。でもその光が変わらずに有ると言うことは、多分ここでの唯一の生き残り何だろう。

あの光が、ガイエンを守ってくれたんだろうか？　でも今のシクラの言葉……わかっててやったのかも知れない。元々ガイエンを殺す気はない連中だ。
でも絶望を見せたい……そして今まさに、ガイエンの目の前には絶望という光景が広がってしまったんだ。

「うううああああああああああああああああああ！！」

突如響いた叫び。それはいみじくもやはりというか、その光の中からした。そして青紫の光の表面からは、黒い影が幾本も伸びだした。

「ガイエン！！　おちつ……っ！」

僕の言葉は途中で止まる。この惨状を目の当たりにして、そんな言葉を吐けるか？　僕よりもガイエンは間近で見ただろう。好きな人が……大切な友と仲間が……そして守りたかった国が……全て無くなる瞬間をだ。

それはきっと瞼を閉じる度に思い出される位の光景。絶望を与えるには十分過ぎた惨劇。言葉を止めた僕に、シクラは面白そうに言葉を突きつけて来る。

「無駄だってわかった？　あはは、やっぱり絶望は彼の中に飛来しちゃったね。あの隕石群は、それも丁度運んできてくれたんだよ☆」
「運んできた？　ふざけた事抜かすなよシクラ。全てはお前の計画通りだろうが！！」

そうだ……全てにおいて最悪の結果を招いたのは、シクラの計画。つまり僕達はシクラの計画を打ち破る事が出来なかったって事だ。
誰もが必死に抵抗した。だけどそれを上回る力でこいつは易々と踏みつぶしたんだ。それはまさに絶望だ。希望と言う光を踏みつぶす絶望。
それを体言した様な女が笑って言う。

「だから言ってあげたよね？　私はいつだってそれを上回ってほしいって？　私が悪いのかな？　違うよね。悪いのは弱くて脆弱なスオウ達だよ☆
私から言わせれば、守れる力も無いのなら、大切な物なんて持たなければいいんだよ」

身も蓋も無いことを、シクラはズバッと言ってのける。でもそれ

は……「違う！！」そう言おうとしたら、摘まれてた嘴が、唐突に放された。
すると重力と言う物に従って僕の体は、地面を目指して真っ逆様に落ちていく。

「てっめえええええええ！！」

そう叫ぶが時すでに遅い。ぐんぐんとシクラ達は小さくなる。もう魔法で助けてくれる仲間はいない。自分でどうにかしないと……幸いまだイクシードは発動中だ。

「よし！」

僕はそう呟くと、体を地面へと向ける。そして待機状態だったイクシードに命令を送る。するとその刀身に再び風のウネリが出来る。
ただのイクシードは乱舞を効率化して持続時間を伸ばした物だ。だから色々と便利な機能が何だか知らぬ間に増えてるよ。

それに違う使い方も発見したしな。僕は地上に向かってウネリを向ける。そしてそれを支えに、タタンと言う感じで、地上に無事降り立つ。
だけどその瞬間、何だかモワッとした熱気に僕の体は包まれる。

「何だこの不快感……」

明らかに温度が異常だ。でもその原因は何となくわかる。さっきの隕石のせいだろうこれは。僕が降り立ったここもクレーター。焼けてしまってるんだ、大地その物が。
だからこんなに熱気が充満してる。辺りに視線を向けると、そこは空から見るよりも酷い光景だった。思わず目を逸らしたくなる…

…そんな有様。

この熱気もそうだけど、この土も肉も焦がした様な臭いも実際堪らない。この光景と相まって、吐き気が常に襲って来る。

「くそっ……」

僕のそんな小さな呟きを拾ってくれる奴は誰もいない。言葉はただ空しく空気に溶けて行くだけだ。でもそれでも、残された僕は震える体を押さえつけて、目指すべき場所を見つめた。

僕がやるしかないんだ。アギトもアイリも居ないのなら、僕がやるしか……見据える先には、青紫の光を多い尽くさんばかりの黒い影が発生してる場所がある。

そして今も聞こえる絶望に打ちひしがれる者の叫び。それは痛々しくて……呪いの様で……聞いているのも辛いほどの声だった。

「どうにかしないと」

僕はガイエンの元へと走り出す。それは残された僕がやらなきゃいけない最後の足掻き。そしてシクラに対する抵抗だ。

深く窪んだクレーターを上り下り、全速力でガイエンを目指す。風を味方に付けて走る僕は、ものの数秒でガイエンの元へとたどりつく。

だけどそこは、何だか異様に不気味だった。黒い影が広がってる地面は、隕石着弾の影響を受けて無いのか元の地形のままぽっかりと無事な感じ。

でも異常にぬかるんでる。ボコボコと黒い泡が沸き立つ位に。まるでそれは、ガイエンの絶望が辺りに浸食してきてでもいるかの様

な異常さだ。
本当に次から次へと……不足の事態しか起こらないな。何をどうすれば答えにたどり着くのか……全然検討もつかない。いや、答えなんて明確な物が、そもそも正解とは限らない。
でもだからって残った僕が足を止める訳には行かなくて……ずっと側にいた女の子さえ助けられない僕だけど、もう一度初めからと決めたんだ。
だからたった一人でもやれる事をやる事に迷いなんてない。ぬかるんだ地面を進み、僕は黒に染まりつつある青紫の光へとたどり着く。
近くで見てわかったけど、ガイエンの奴は地上から数メートル浮いてる様だ。その赤い目が光輝き、決して閉じようとしない。
溢れ出す涙は、目を逸らしたいと語ってるのに、それを瞳が許してないみたいだった。アイツの中に居る何かが、そうしてる。僕はそう感じた。
「ガイエン！！」
僕は近くで叫ぶ。するとその瞳が所在なさげに動いて、顔を向けずに目だけが僕を捉える。それは一瞬、引いてしまう様な動作だった。
あれも多分、“何か”の影響だ。絶望にくれてるガイエンは体の支配権を譲りつつ有るんだろう。次第に光と共にガイエンまで覆い尽くさんばりに影は溢れて来てる。
多分この影が全部を覆い尽くしたら、もう声は届かなく成るんだろう。そう思う。

「聞こえてるんだろガイエン！　わかってるだろお前だって！　お前が負けたらダメなんだよ！　僕が言ったって届かないかも知れないけど、お前がそれに呑まれちゃ終わりなんだ！！
だからやられんな！　誇りを見せろ！！　お前はそういう奴なんだろ！！」
「誇り……あ……ぁあぁあああ……ああぁああぁぁあぁぁあああぁあぁぁあぁぁぁ

「落ち着けガイエン！！　シクラとかの思い通りになっていいのかよ！？」
「私が何だって？」

その時、僕を落とした鳥と共に、聞きたくない声が降ってきた。

「お前等……」
「あはは☆　もう手遅れだよ。溢れ出す絶望は、全てのコードを繋いでくれる。それは覚醒の狼煙なの」

よく理解できないシクラの言葉に、僕は首を振って反論する。

「意味わかんねーよ……でもこれだけは聞いてやる。そんな訳わからない事してアイツは……ガイエンはどうなる！？」
「そんなのどうでもいいじゃない。使い終わった駒に興味なんて無いもの☆　君は食べ終わったお菓子の袋を大切にとっておくの？　そんな訳ないよね？　それと同じだよ」

つまりシクラは……この役目が済んだガイエンはゴミでしかない、そう言ってる訳だ。
僕がきつくシクラを睨みつける。けれどシクラはいつまでもどこまでも余裕の笑みだ。自分達の勝利は既に確定してる……その確信がそこにはある。
ここに来たときからそんな感じはずっとさせてた奴だけど、僕はそれを否定出来なくなってしまったかも知れない。

だからこそ言葉が出ない。誰も居ない……何も無い。辺り一帯クレーターだ。辛うじて残ってるのはやっぱり、魔法か何かで守られてるアルテミナス城だけ。

壊された街の瓦礫も何もかもが飛ばされた場所で、その城だけが悠然と立ち続けてる。
でも……それだけだ。建物は何の力にもなってくれは……

「ん？」

その時僕はふと気づいた。目まぐるしく動くガイエンの瞳。それが何度かピタッと止まる時がある。その先に、あの城がある。
アルテミナス城……ガイエンがここですごしてた場所。あれは、あそこはそういえば、アギトとガイエンとアイリ……三人で手にした場所だった筈。
まだ、繋がってる……完全に落ちた訳じゃない。僕はその瞳を見つめてそう思った。ガイエンはまだあらがってるんだ！

「シクラ……まだだ……」
「うん？」
「まだガイエンは、絶望に呑まれてなんかいない！！」

自分に何が出来るのか何てわからない。でも取り合えず、今出来る事が有るとすればこれしかない。僕はシクラに向かってセラ・シルフィングを振るう。
アイツは傍にいるだけで迷惑だから、引き離した方がいい。だけどシクラの奴は一歩も動かず、その髪だけで風のうねりを受け止める。

「絶望に呑まれてない？　でもそれも時間の問題☆　あらがうことも、まして押さえる事なんて人には出来ない。だって人は、業が深い割に脆いんだもの」

唇を指でなぞりながらそう言ったシクラ。まるで見てきた様な言

いぐさだ。

「終わりよ終わり☆　この国も、この戦いも、私達が全部持っていくんだから。何一つ残さないであげる」

「そんなこと！　させるかあああああ！！」

僕は何度も何度もウネリをぶつける。すると流石にうざったく成ったのか、シクラは手を差し出した。触れるだけで切り刻まれる筈のウネリへとだ。

でもそんな事には成らなかった。シクラが何かを呟きながら手を触れると、風がパンッとはじけ消えた。

「なっ！？」

「ねえスオウ。せっちゃんも言ってたけど、これ以上出しゃばったら死んじゃうよ☆　せっちゃんも今ならそれを許してくれるしね。私が殺しちゃうかも知れない」

その瞬間、体を衝撃が貫いた。何が起きたか何かわからない。でも確実に攻撃された。体が吹っ飛び、地面を転がる。

「がはっ……」

ビチャッと地面に血が落ちる。たった一撃でこれかよ。しかも何だか今までの受けた攻撃とは何かが違う。違和感がある。

倒れ伏す僕の傍に、その時誰かが立った。シクラ？　と思ったけど違う。その誰かは、御子っぽい服を着ていて、そして両腕で人二人を持っていた。

「ふふ、呑まれてないのなら、これで完璧に落としてあげる事にするわ☆　見窄らしい死体を見れば、現実って物に気づくでしょう？」

「おま……え！！」

僕は地面を必死に踏みしめる。そして起きあがった僕は見た。アギトとアイリ……その二人を引きずる奴の姿をだ。

「サクヤ……」

一瞬その言葉に反応したけど、直ぐに前を向いて歩き出す。そう言えば忘れてた……なんて言ってる場合じゃない。

あの目は何だ？　意志っていう物がまるで感じれない瞳だった。

「何を……した？　サクヤにお前等何をした！？」

「サクヤはね、私の考えに賛成してくれなかったんだ。だけど私はサクヤが大切だから、離れたくないから、こっちに来て貰ったの。

その感情に制限をかけて」

セツリが事も無げにそんな事を言った。つまりは今のサクヤには感情が無いって事だろう。そこまでセツリがさせたのか。

僕は唇を噛みしめる。あんなに自分を心配してくれた奴にまでこんな……

「サクヤ！！」

忘れたのは悪かったけど、戻ってきてほしい。そんな感情を込めて叫んだ。だけど彼女は振り返らない。そしてガイエンの絶望が広がる沼地に二人を投げ込んだ。

バシャンと言う音に反応して、ガイエンの瞳がアイリ達へと向く。向いてしまう。直視してしまう、この現状を。それはアルテミナス城だけじゃ支えきれないだろう。繋がってた糸がプッツンと切れる音がする。

「ダメだガイエン！！　見るなあああああああ！！」
「――――――

巨来する空の塊（後書き）

第百六十八話です。
果てしないシクラの力で、アルテミナス崩壊です。そしてガイエンも遂に糸が切れてしまいました。だけどまだ僅かに残ってる物もあります。それが僅かな希望である筈です。
アルテミナス城にカーテナ、そしてあと一つの鍵……まだここで、絶望だけで終わるわけにはいかないのです！
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは～。

地上の星（前書き）

これは設定だと分かってる。でも私にはその記憶が作られてる。遥か昔、この世界は闇で覆い尽くされてました。天は陰り、日は届かず。大地は枯れ、腐った臭いが立ち込める。

綺麗な水なんて無く、死体が浮いていようとも水は水だった……そんな時代に私は生まれた。その頃はまだ人と言う種族は無く、エルフとモブリ、そしてスレイプルが点々と点在してた。

その頃の一番の勢力はモンスター。闇の力に私達は怯える日々でした。だけど私はそんな中、女で一人自警団の組織に入ります。一応防御だけを目的とするようなそんな組織。

だけど、生まれた意味とかを知りたかった。このまま死ぬなんて嫌だった。けれど現実は残酷にも私を殺します。小さな子を庇って、私は敵の武器に貫かれました。だけど後悔は無かった。

『私は、あの子を助ける為に生きてきたんだ』

そう思えたからです。死んで私が行ったのは天国でも地獄でも無い真っ白な世界。そこで私は一人の青年と出会いました。青年は地面から生え出た芽を見て言いました。

「ようやくだ……なあ、あんたも協力してくれないか？　これはきっと闇を払う光に成れる。この芽が地面一杯に花を開かせる所を見たくないか？」

「無理ですよ。枯れた大地じゃ、芽が出ても花を咲かせる事は出来ません。それにもう、あの世界にどれだけ芽を出させる元気があるか……」

すると青年はこう言います。

「でも……あんたがその芽を一つ繋いでくれた」

真っ白な地面に映し出される私の世界。そこに映るのはあの日助けた少女の成長した勇ましい姿。それは必死に花を咲かせようとする光景だった。

「なあ、清浄な水と栄養豊富な大地、そして目一杯の日光があれば花は咲くと思うか？」

「それは……当り前でしょう」

すると青年は意味深に「ははっ」と笑った。そしてその答えをくれないまま、青年は言う。

「お前はあの芽に何を願う？」

私は足元に映る少女を見つめた。

「私は……」

一度言葉を区切り、心を見渡して自分が出来なかった事を口にする。

「幸せを……幸せを願う。だってそうでしょう？　命と引き換えに助けたんだもん！　幸せになってほしい！」

「そうだな……そう、間違ってないよお前は。だけどこの世界は間違ってる。お前があの時、殺されたように。見てろよ」

そう言われて私は視線を青年の方へ向ける。するとそこには枯れ出した芽が有った。それはまるで……あの子の命がすり減ってでも

いる様な気がした。

「気じゃない。このままじゃこの芽はあの世界に殺される」

「そんな！！」

激昂する私に青年は初めて振り返り言う。

「助けたいか？　幸せに成ってほしいか？」

「出来るのなら助けたい！！」

私は即答しました。そんな私に青年は強い目で問いてきます。

「何が必要だ？　力が有ればお前は行くか？」

「行きます！」

「はは、良い答えだ。だが約束しろよ。これを受け取る事は、お前は俺の夢に協力するんだからな」

そんな言葉に、今度は私が優しく微笑んこう言いました。

「実は私も、花を咲かせたいそれがたった一つでも良いから……そう思ってたんですよ」

言いきると同時に、白の世界が遠ざかりました。私は最後に「貴方は一体……」そう問いかけました。すると青年は悲しみのこもった顔でこう言ったんです。

「神様かな……どうしようもなく役立たずな」

目が覚めるとそこは腐った臭いの立ち込める私の世界でした。目

の前はいきなり戦場。そこには、今まさに敵の攻撃を食らう寸前の彼女が居ました。私は思わず、握りしめてた武器を振ります。
その瞬間、大量のモンスターが一撃で消し飛びました。その衝撃は空まで届き、厚い雲を切り裂きます。零れおちる日の光が私とその武器を照らします。『神の剣・カーテナ』それは後にそう呼ばれて、更に時代と共に『王の剣』と言われる様に成りました。
世界に再び降り立った私は、彼女と共に幾戦の戦いを繰り広げます。そして次第に仲間が集い。人が集ってきました。そしてようやく手にした広い大地。私達はその地を『アルテミナス』と名付けます。その名を私達は姓へとしました。
そしてただの集いから国へと形を変える時、ようやく私の役目は終わる時が来たのです。彼女は立派に育ちました。彼女の周りには沢山の花達が咲いています。一つの国に王は二人もいらない。
死人はただ墓……なんて大層な物は作られてないから大地へ帰るだけ。彼女は最後まで泣いてたけど、でも私は満足でした。夢は叶った。彼女はあんなにも幸せなそうです。
彼女にカーテナを託し、私はアルテミナスと一つに成ります。それは最後の我儘だったんです。そして彼女は、アルテミナスの初代王女と成りました。だけどその後に建てられた城に、私の墓の代わりに、絵を描いてくれたそうです。小粋なジョークの一文を添えて。

地上の星

僅かに光を放ちだしたカーテナ。それが意味する物は何なのか、僕は必死に見つめた。上に集中するシクラ達が気づかない事を祈って。

黒い月はその闇を次第に垂れ流し始めてる。上の方から徐々に流れ出てるその闇は、中から何が出てくるのか想像したくない。

だってガイエンがそのまま出てくる……なんて事は多分ないんだろう。今はそんな、淡い期待に胸を膨らませれる状況じゃないんだ。

シクラが言う覚醒って奴があの黒い月の中で始まってしまったのなら、次に出会うガイエンはもうガイエンじゃないのかも……

だけどその期待に胸を膨らませてるシクラは目を輝かせて月を見てるからカーテナの微妙な輝きには気づきそうにはない。

問題はセツリだけど、あんまり興味なさそうにしてるな。クーに乗せたサクヤの髪をといてるし、カーテナの変化には気づかないだろう。

僕じゃもう、ガイエンを救う事は出来ないんだ。それは僕の役目じゃない。どうして今、カーテナが輝き出したのかはわからないけど、まだ終わってないのかも知れない。

「ガイエ……ン」

本当に小さくて、消え入りそうな声。だけど僕の耳には確かに届いた。アイリはまだ生きている。

「ガイエン……の……声が……聞こえる。助け……なきゃ……助け

……たいの……カーテナ……お願いアルテミナス」

上から降ってくる闇を被りながらも、アイリはそんな言葉を紡ぐ。でもまともに意識があるようには見えない。衝撃が凄すぎて、意識が混乱してるのか？

てか、良く生き残ってた。それが実は信じれない。凄まじかったんだ本当に。リアルなら一瞬で灰に成ってたであろう光景だった。

そんな中アイリは……いや、もしかしたら……するとアイリの言葉に反応したカーテナが強く輝きだした。朦朧とした意識の中での言葉なのに、カーテナは主の心を汲み取った。

主の思いを遂げようと、その小さな体は、放てるだけの光を放つ。

「何？」

流石にこの輝きにシクラやセツリが気づく。気づかない訳がない。するとそこかしかこらも、小さな光が灯りだしてた。

まるでカーテナに反応するようにだ。僕の近くの石ころも輝き出す。でもそれは良く見るとただの石じゃない。多分これは――

「クリスタル？」

元々アルテミナスにあった沢山のクリスタルが、砕け散ってしまっても尚、その体に光を浮かばせた。そして無数の光と光は、線を持って繋がっていく。

何が起こってるのかは、全然全く分からない、だけどそれが目指してる場所ってのは分かった。それはアルテミナス城だ。

アルテミナスの地が、城を中心として何かを描き出そうとしてる……そんな感じ。断片しか見えないけど、多分これは巨大な魔法陣

か何かじゃ無いだろうか？

「今更、何をしても手遅れだけど、私の興を剃らないでよね☆」

そう言ってシクラがアイリへと体を向ける。アイツ、邪魔が入らない内にアイリを完璧に潰す気だ。生きてると言っても辛うじての筈のアイリ。シクラなら息吐くだけでも殺せそうじゃないか。

だけど実際に動いたのはシクラの髪だ。流石に息だけ何てのは、僕の勝手なシクラに対する畏怖のイメージだよ。月光色に煌めく、シクラの髪がアイリへと向かう。

ただ真っ直ぐに、ぶっ刺す事しか考えてなさそうに。でもそれだけで終わらせる確信がシクラにはある。でもアイリへと届く直前で、シクラの髪は“カーテナ”によって弾かれた。

「――っつ！？」

瞳を見開くシクラ。それは貴重なあいつの表情だ。でもただ単純に攻撃を防がれたから、シクラは驚いた風じゃない。

その程度じゃシクラは驚かない。じゃあ何がそこまでシクラを驚かせたのか……それは――

「ちょっと、武器風情にそんな機能があるなんて聞いてないわよ。生意気☆」

――それは、カーテナがアイリの体を引っ張る様にして攻撃を防いだから。シクラもだからこそ驚いたんだ。てか、僕も驚いた。

だって今の状態のアイリが、意識的にシクラの攻撃を認識してたとは思えない。意識はまだ完全には戻ってないんだ。

それでも……アイリは立ってる。掲げてるカーテナに引っ張られてる様な形みたいで不自然極まり無く。その不自然さが、とても自分の足で立ってる様には思えない。
でもシクラは、そんなの関係無しみたいに攻撃をもう一度する。今度は少し警戒して、髪の房を二つにしての段階的な攻撃だ。

「なんだか知らないけど、さっさと諦めてよね☆」

伸びてくる月光色の髪。カーテナと言う武器が相手でも、シクラは既に焦りも驚きもどにやらやっていた。今更自分達の勝利が、揺らぐはずは無いという自信だろうかそれは。
でも次の瞬間、シクラはクーの背から吹き飛ばされた。向かい合ってたのは突きつけられたカーテナと髪。単純に、力の巨大差でシクラが力負けをしたって事だろうか？

だけど、そんな事って……今までシクラの強さを身を持って感じた僕としては信じれない。まあ良い事なんだろうけど、なんだか腑には落ちない。
だって意識が無く、武器に操られてる状態が強いってあり得るかなそんな事？　いくらＬＲＯでもさ、そんな事って……

「ガイエン……助ける……から……待ってて……今……いくから……」

ぶつぶつとアイリはそんな言葉を断片的に漏らしてる。その瞳には、まだ通常時の様な光は宿ってない。やっぱり、カーテナはカーテナ自身で動いてるのだろうか？
でもカーテナってしょせんは武器でしか無いのでは？　繋がり合うことは理解できるけど……ここまで来るとオカルトだ。

そう言えば、良く見ると地面からカーテナへ直接何かが送り込まれてるような淡い煙の様な物が見える。そう言えばさっき、アイリはカーテナだけじゃなく、アルテミナスその物にもお願いしてた。
もしかしたらそれがこの結果なのかも。アイリの思いに応えてくれてるのは、アルテミナスという存在なのかも知れない。

そしてアルテミナスの地に這う光も、どんどん広がって行っている。もうすぐ、アルテミナス城を中心に一周するんじゃ無いだろうか。

アイリは虚ろな瞳で空の黒い球体を見つめる。するとそこに流れ出てくる黒い液体がベチャリとアイリに掛かった。
だけどアイリは気にせず名前を呼ぶ。

「ガイエン……」

それはまるで、その中にガイエンが居るのを分かってるかの様な感じ。いや、本当にアイリは無意識下でガイエンの声を聞いてるのかも知れない。
そんなお互いの状態だからこそ、聞こえてるみたいな。それをアイリは、意識がはっきりとしないまま、気持ちが先行してるんだ。

ガイエンを助けたい……それだけが確かな思いだから。アイリはカーテナをその黒い月に向ける。いや違うか。カーテナが自身をその黒い月へと向けさせた。
だけどそれを許さない奴が居る。

「調子にのるな！！」

シクラの初めての怒気がこもった叫び。一瞬でアイリの懐に現れ

たシクラの一撃は、今度こそアイリを吹き飛ばした。
だけど……アイリは倒れない。カーテナに引っ張られる様に、無理矢理態勢を立て直されて力を放つ。それによってシクラも後方へ吹き飛んだ。

けれど直後、シクラの姿は消えた。そして再びアイリの傍へ。今度はその手のひらに作った光球を目の前で放つ。
目を覆いたくなる光が眼球を刺した。あのスパンでこれだけの攻撃を放てるなんて、下手な魔法よりもよっぽど強力だ。

でも、カーテナはその攻撃を防いでた。どうやら、突き出したカーテナの力と衝突して、あの攻撃は、周りに拡散されたらしい。

「フフハ☆　もしかしてこれが、火事場の馬鹿力って奴なの？　ちょっとだけ、見直したよお姫様」

自分をこれだけ相手出来るアイリが嬉しいのかそう告げるシクラ。その顔はさっきまでの苛立たしげじゃなく、楽しく成ってきてるみたいだ。
思わぬ所から出てきた戦える相手に、シクラは胸を躍らせてる。よく「楽しませてよ」とか言ってるから、今のアイリは玩具としてシクラの目には魅力的に映ってるんだろう。

「私は……ガイエン……助ける……助ける……助ける」

そう呟きながら、アイリはカーテナに使われ続ける。でも次第に、動きが引っ張られる感じじゃ無くなってきてる。シンクロしだしたとでも言うのか……反応速度が上がってる。
すると僕は気づいた。アルテミナスの地に、淡い光が浮かびだしてる事に。それは地中から沸きだしてる。

「どういう事だ？」

次から次へと起こる不可思議な現象。でもこれは、もしかしたらアルテミナス事態が頑張り出したって事なのかも知れない。

沢山のエルフであるプレイヤーが、アルテミナスを守ろうと必死に戦ってくれた。だからアルテミナス事態もさ……元々カーテナの力の源はアルテミナスって言うじゃないか。

それに選ばれたとも言ってた。それをしたのがアルテミナスという地なら、意志があるって事じゃないのか？　そしてそれは、完全に出来上がった地上の魔法陣で表面に出て来たのなら……無理矢理だけど納得してやる。

そう、地面のクリスタルの光が繋がってた物は完成してた。そして唯一残ってた、アルテミナス城もその輝きを宿してる。

すると変化してきた状況にセツリが問いかける。

「大丈夫なのシクラ？」

「大丈夫も何も、ようやく楽しく成ってきたんだよ☆」

「そ、それならいいよ」

シクラは完全にアイリとの戦闘を楽しんでる。そしてセツリは余裕な感じで見送って、ポンポンとクーを叩いて上空へと上がっていく。

一応安全圏へ避難したって事か？　まああの二人の戦いは異常に成ってきてるからそれも分かる。アイリに加勢したいけどいくら何でも入れる気がしない。

何てたって、あの二人……攻撃の規模が違うんだ。

「どこまで来れる？　私を失望させないでね☆」

二つの力のぶつかり合いは、大きな衝撃を生み出す。シクラはまだまだ余裕なのか？　化け物だ。一方アイリは表情が読めない。
でも何とか防いではいるし、反撃もしてる。動きは本当に段々と振り回されてる感じじゃ無くなってて、そこには体を使ってる動きが垣間見えた。

（あいつ……）

周囲に輝く無数の光……そのせいか僕にはその時、おかしな姿が重なって見えた。それはアイリの体に重なるもう一人の女性の姿だ。
周りの光がそれを見せてくれた様な……それにどっかで見た事ある気がする女性だ。もしかしたらあれが、アルテミナス？　と言う意志の形？

「助ける……助ける……助け……わた……しは、貴様達を許さない！！」
「「！！」」

僕とシクラが同時に驚いた。言葉が確かな意志を持った瞬間だ。それにあれはアイリの口調じゃない。口調が変わったアイリは、わざわざシクラに接近して、細かな体術とカーテナの力を大胆に使って、シクラの手から有る物を奪い返した。

それはちぎられたアイリ自身の腕だ。そしてそれをちぎられた箇所に当てると、周りの光が集っていく。まるで繋ぎ合わせでもしてるかのように。

「ねえ、貴女誰かしら？　私が知ってるお姫様じゃないわよね？」

光が集まる中、シクラは今の疑問を率直に目の前のアイリへとぶつけた。するとちぎれた筈の腕を、動かしながらアイリが笑みを浮かべてこう返す。

「私は第一代アルテミナス王女、ルベルナ・アルテミナス。第三の封印解放の条件クリアと光明の塔の消失……そしてアルテミナスの危機に、一度だけカーテナ所有者に発生する【オーバースキル】よ」

【オーバースキル】？　聞いたこともない。だけど目の前の人物は確かにアイリではない。デタラメとも思えない。

ルベルナってそうか……なんだか見たこと有る気がしたけど、城で見たんだ。確か部屋一面が巨大な絵に成ってる所で、そこで大勢の騎士を引っ張って剣を抱えてた女性。

それがこの国の創立者で、最初の王ルベルナ・アルテミナスその人だ。

「オーバースキル……そんな隠し玉が有ったなんてね☆　バランス崩しは隠し事が多くていけないわ。でも……なら貴女を消せば、私たちの大勝利って事かな？」

「それはどうかしら？　私の役目は国を救う事じゃないわ。それはプレイヤー自身がやる事よ。私はゲームキャラの如く、キッカケを与えるだけだもの。

それに、設定上の私の子孫達は、みんなとっても頼もしいわ。この子も、そしてこの子の周りに集う子達もみんなね」

自信たっぷりにそうシクラに言い返すルベルナ。それはまるで今までずっと見守っていた様な口振りだ。母親の様な慈しみ、それを本当に感じた気がした。

だけどシクラは得意げにこう言い返した。

「頼もしい？　この有様を見てそんな事が言えるなんて、最初の王女様は楽天家なのね。何もかも、瓦礫に沈んじゃったんだよ☆
負けたのよ、貴女の子孫はね」

だけどその言葉を受けて、ルベルナは端的にそして力強く言葉を紡ぐ。

「負けてません。いいえ、負けませんよこの子達は」
「その根拠の無い自身はどこから来るのかな？　設定された事しか言えない、ただのプログラムじゃ無さそうだけど、馬鹿なの？
私に触れれたのは貴女だけだよ。同じ力を持ってるその子でもこんな楽しくは無かった☆」

二人は言葉を交わしながらも、ジリジリと隙を伺っているのか、目の中はメラメラ燃えてる。そして二人が戦ってる間に、黒い月は上部がぽっかりと空きだしでた。
このまま溶ける様に月が無くなるのなら、ガイエンが姿を現すのも、既に時間の問題だ。今ならルベルナがシクラを止めてくれている。
何か僕にも出来ることは無いのだろうか？

「強大な力一つで、全てを守れて救える事なんかない。大切なのは、どれだけの人を本気にさせられるかよ。いつだって歴史を作るのは、そんな本気の人達の集いからなのだから。
そしてこの子にはそれが出来る。それは何よりも、王として必要な素質。国とは何かしら？　土地・規模・歴史？　そうじゃないわ。国とは思いと集いの集合体よ。どれだけ荒れ地にされようが、この子達の中にはまだ、アルテミナスと言う国が確かにあるわ。
だから負けない。城も残り思いも集めてくれたのなら、私達も少しは愛される側としてあらがいたく成るじゃない」

そして再び二人は激突する。強大な力の攻めぎ合いだ。そんな中、アルテミナスから沸き立つ光が、倒れてる人達へと注がれてる様だった。
そして僅かに、その体を動かす物が現れる。

「っつ……ガイエン」

アギトは何よりもまず、友を想う言葉が始めに出てきた様だ。でもそれは本当に、寝言な感じで出てきただけで、意識はまだ深い所に沈んでる。
周りにいる他の人達も、僅かに指を動かす位はするけど、起きあがる事が出来る人はまだいない。あれだけの攻撃だったからな。寧ろ死んでなかった方が驚きだ。

「どういう事なのかな？　あれで生きてられる筈はないんだけど」

周りで僅かに生命力を取り戻していくプレイヤー達を見て、怪訝そうにそう言うシクラ。それに対してルベルナが思いを込めて言葉を紡ぐ。

「この子は優しいから、腕を無くしてもその責任を果たそうとしたのよ。それを願ってくれたわ。だから私は、こうして光臨する事が出来てるのだから。
私の最後の出現条件は、国を友を仲間を想えるカーテナ保持者の王としての在り方。その本質が陽で有る事よ。見てみなさい、アルテミナス城何かが変わったと思わない？」

そう言われて改めて城を見るとそう言えば違うな。おかしな色してた筈なのに（確か半分ずつ白と黒で分かれてた）今は一色に統一

されてる？

「一色に成ってつまらなくなっただけじゃない☆　私は挑戦的な前の方が好みかも」

「人に完全な白なんてあり得ない。でも完全な黒も大抵無いわ。どちらに転ぶかはいろんな事に左右される。でもそれでも限りなく誰かの為に……その時だけは純白になれる心であれる。

アルテミナスはそう言う乙女が好きなのよ」

ルベルナの言葉を受けて、一瞬シクラは眉根を寄せる。誰かの為に……それはシクラ達も同じだからだろうか？　あいつらが黒寄りかって事言われると、僕的にはどうだろうかって感じだしな。

「私達も戦ってるよ☆　救いたいたった一人の為にね。ねえ、それって偉いことなの？　沢山なら偉大なの？　集う思いの数なんて、私達にとっては、いいえあの子にとっては嫌味なだけよ。

私達は同じなのかもね。でもだからこそ、気に入らない☆　あの子の為に、この国には終わってもらうわ。形が意味無いのなら、今ここにある残った物全てを壊してあげる。

そのお姫様に、カーテナに城。今ならもう一度エルフを皆殺しにするのもたやすいかもね」

そう言ってシクラは手を掲げる。もしかしてまた隕石でも呼び寄せる気か？　でもそれをよしとしないルベルナがカーテナを振るう。

「やっぱ一人じゃきついかな☆」

「させないわ。あんな光景、二度は許さない！」

カーテナの連続攻撃がシクラを襲う。だけど次の瞬間、その存在の差が浮き彫りになる。

「ふふ、でもここは譲れないの☆　コード【アルトナ】制約は十五秒で十分……解放」

カーテナの力がかき消される。そしてシクラの背には光で出来た模様の様な羽が浮いていた。そして頭上には天使の輪？

存在という物が、何だか別格みたいな雰囲気をシクラの奴は醸し出してた。

「さあ、貴女のコードを食らわせて」

大きく開く羽は、どんどんと周囲に根を這わせる様に広がっていく。そして次の瞬間、大きくその羽が揺らめいた。

すると一瞬ボッと言う音と共に、羽を残してシクラの姿が消えた。それは別に、いつものシクラが出すスピードだろう。

でも、気を取られた。あの大仰で派手な羽が目を奪ったんだ。でも流石と言うことか、ルベルナはその攻撃を受け止めてる。だけど――

「あれが飾りに貴女は見える？」

――次の瞬間、羽が一斉に二人めがけて飛んでいく。そしてその場に大きな衝撃が起きた。

「きゃあああ！！」

そんな声と共にルベルナが飛んでいく。そしてシクラは、粉塵の中から違う方向を向いていた。

「さあ、貴女にも絶望をあげる☆　遠い果てから蘇ったのに残念ね」
再びシクラの周りに根を張る羽。天使の輪が輝きを増し、その羽がシクラの前に集い出す。そして放たれる光は城を直撃する。
「「！！」」
こいつ本当に全部を壊す気だ。でも城はまだ健在、だけどシクラの周りにある羽は大量だ。次々に発射される光、僕に今出来る事は多分、これだけだ。
反対側へ飛ばされたルベルナは間に合わない。
「やらせない！！　この国はまだ終わらせない！！」
風のうねりが光を弾く。次々と降り注ぐ光を、一つでも通す訳にはいかない。けどシクラの余裕は変わらなくて、ルベルナにも同様の攻撃を降り注いでる。
防戦一方……でも僕たちは初対面なのに繋がってた。
「終わろうよ、スオウに王女様☆」
カーテナの防御も、イクシードのうねりも限界近い。でも僕達は思いを紡ぐ。
「私は……大好きで大切な娘達の居場所を守る。誰も覚えて無い存在でも、それを諦めない！！」
「僕だってそう決めたんだ。もう二度と諦めないってな！！　シクラ！　お前の思いに、僕はあらがい続けて見せる！！」
「あっそ☆」

その瞬間、さらに大量の光が降り注ぐ。目の前に血しぶきが見えた。対応仕切れてない。でも、僕は動き続けてそして……どうしようもない光がそれぞれに迫った。

「「くっ……」」

離れてたけど、僕達は同時にそう口に出した筈だ。だけどその光は僕達には届かなかった。何故なら、それぞれの場所に立ち上がった思いがあったから。

地上の星（後書き）

第百六十九話です。
アルテミナスの歴史のお話がちょちょいと出てます。あれはゲームに用意されてるシナリオです。本編とは別に関係ないです。多分。
さて本編では旗色がどっちに傾くか分からなくなってきた感じです。
それでは次回は金曜日に上げます。ではでは。

継がる心（前書き）

ルベルナはきっと満足したんだろうと思う。自分の造った国で生きてるアギト達には、願ってた想いがちゃんと継がれていたんだ。満足をして、そしてゲームキャラである如く、きっとその役目を全うした。

そして僕等は託されたんだ。プレイヤーと言うこの世界の担い手として……この国を救う事を。彼女にだってそれは出来たかも知れないけど、でも彼女はそれを今に託したんだ。

見境を無くしたどっかの馬鹿とは違ってさ。だけどまだ僕達の前には問題が山積みだった。そして遂に、黒い月がその何かの姿を世界に確立させた。

継がる心

残酷な天使が自身の羽を汚れた地上に向けていた。放たれる輝きの光は、きっと浄化作業でもあったのかも知れない。
だけど……さ。勝手に無くされたくない物がそこにはあった。大層な存在の天使様にしてみれば、僕達人が這う地上なんて薄汚れた場所かも知れない。

けれど、突如現れて大層な力でこの場を蹂躙しだした天使様にはわからない、知らない物がここにはあったんだ。ＬＲＯはまだ一年とちょっとしか積み重ねた時間が無いけれど、それでも自分が最初に降り立った街ってのは特別な筈だ。

それだけで、掛け替えの無い大切な思い出に成ったりする。こいつが踏みつぶしたこの地はさ、決して綺麗なだけじゃないかも知れない積み重ねって奴を、きっとこの世界で一・二を争う位につけてる場所だ。

けれど今まさに、そんな汚れと言う誇りが、一つの理不尽によって消えようとしてる。本当ならこんな事あり得なかっただろう事。
だけどシステムの向こう側から光臨した天使は、自分のルールで世界を見てる。彼女は究極的にはこう思ってるんだろう。

（人は入らない。世界はあの子の為だけに改変されればいい）

それがアイツの目指す、幸せの形。システムによる、セツリの為だけの世界にＬＲＯをしたいらしい事を言ってた。そこには今の様な、様々なプレイヤーはいない。
傷つけるかも知れなくて、上手くいかないかも知れない他人って

存在は排除される。そして永遠も無い、関係性も当然入らない。

こうやって考えるとその世界は、もしかして最初から全部を諦めた様な世界じゃないだろう？　だからこそ全てのＮＰＣがセツリを大切に、優しく、甘やかし、崇拝し、持ち上げて、寂しくない様にするんだな。

歩くことを諦めさせて、甘く温い夢を与えようって事だ。天使様は随分とお優しい。反吐が出るくらいに。

……あらがうよ。ダメだとかそんな以前の問題でさ、幸せに成りたいのはセツリだけじゃないんだから。この地にいたエルフの人達だって、夢見る幸せって奴を追い求めてた筈だよ。

なんてたってここはＬＲＯ。誰もが夢を見に来てる筈の場所だから。確かにセツリにも権利はあるだろう。だけどこれはエゴだよ。夢の場所の蹂躙なんてさ。

この場所があれだけ綺麗に見えたのはさ、頑張って来た人達の努力という汗とかがあったからだ。きっとそれは今ある全ての国に言えること。

天使はわかってない。この世界そのものが、元々プレイヤーという存在を設定して作られたって事をさ。街が息づくのを感じるのも、それぞれの匂いが違うのも、そこに生きてるプレイヤーが居るからだ。

僕は思ってた。このままでセツリが手に出来る物は一体どれほど何だろうって。アイツは結局、消去方を選んでるんじゃ無いかって。

あれもこれもダメだから、コレがいい。コレしかないってさ。でも僕はそんな選択の仕方事態が間違ってると思うんだ。

ガキだからかも知れないけどさ、自分が夢見る明日は、限りなく広がってて、どれを選ぶのかは自分次第なんじゃないかって。
コレしかないじゃ無く、コレがいいと思える未来。それを選択して行くもんだろ。みんなそうしてる。あらがってる。あらがい続けてる。
可能性は、限りなくゼロに近かった。だけど足掻き続けた僕達はそれをゼロには決してしない。
天使の光は圧倒的。それこそ地上を余すことなく照らす様に思える。押しつけがましい事この上なく、地上で築き上げた物を塗りつぶす。

だけど僕達は、見えなく成ってもそこで確かに輝いてたんだ。一人一人が小さくても強い光を影に成らず持ってた。
地上から沸き出した光の粒は、そんな僕らの心に見下ろされた大地が協力してくれた物だったのかも。僕と同じく戦ってくれてる、王女様は言ってた。

大切に思ってくれてる……だから応えようと。この地は応えてくれたんだよ。アルテミナスという大地は、僕達の側を支えてる。
それはとてもとても心強くて、僅かに傾きを戻すきっかけに成れる事実。僕とルベルナへ避けることも、防ぐことも叶わない光が迫ったとき、そんないろんな事実が多分、この結果を出したんだ。

圧倒的な力で蹂躙された筈だったけど、どうやらそれは心でも大地でも無く、ここで起こされた事象だけだったんだ。
僕の前に迫った光は、強力な魔法障壁とそれを支えてくれたみんなのおかげで、夜空へと昇って行った。ルベルナの方は、主にエルフ組が頑張ってた様だ。

一番前にはアギトが、その槍を光へとぶつけてた。そしてその周りから無数の剣が支える様に折り重なって、向こうは大量の気合いで、攻撃事態をかき消してた。

「みんな……」
「みなさん……」

僕達のそんな言葉に、誰も振り返らない。よく見れば誰もが行き絶え絶えだ。街一つが消し飛ぶほどの攻撃を食らったんだ、生き残っただけで十分。
今ここで立ち上がれた事は奇跡……いや、そうは呼びたくない。何故なら、これを望んだ奴がこの場には居るはずだから。

シクラの攻撃は止まってた。そしてその羽も天使の輪も引っ込んでいく感じに元の状態へと戻ってく。

「ぞろぞろとまあ、死に掛けの連中が這い上がって来ちゃったよ☆
加護は封じたのに、よくもまあこれだけの人数を守りきったものだよね。
カーテナを少し侮ってたかも。ううん、この場合はそれを成し得た彼女をかな？　なにせ、エルフ以外も立ち上がっちゃってる事にビックリだよ☆」

通常状態に戻ったシクラが地上に降り立ってそう言った。だけどその言葉を聞いてる奴は、実際どれだけいただろうか？　僕達は既に立ってるのさえやっとで……右から入ってきた言葉が左側から出ていく程度に限界だった。

だけどそれでも……立ってる。お互いが支えあって僕達は今、この地に立ってる。小さく細い互いの希望を、僕達は重ねあって今、

大きくしだしてた。
どれだけ満身創痍でも、今この場にこの状況を諦めてる奴なんていないんだ。そんな奴はきっと立ち上がれないだろうから。

「バカ……やろう」

息絶え絶えの中、誰かがそんな声を出す。いや、誰かなんて直ぐにわかった。聞き覚えのある声だ。僕が聞き間違える筈のない声だ。
灼炎の髪を夜闇に揺らすその声の主はアギト。アイツはまだあれだけの槍と盾を持ちながら、その場に悠然と立っていた。

よく見れば「はぁはぁ」言ってるのがわかるけど、二本の足は力強く大地を踏みしめ、丸まることの無い背中は騎士の姿を強く表してる。
「バカ……やろう」か、それは一体誰に向けた言葉なのだろう。シクラか……それともアイリ？　いや今の彼女はルベルナか。
それは次のアギトの言葉でわかった。

「突然出てきて、勝手に居なくなろうとするなよ。感謝の気持ちくらい、伝えさせろ。お前のおかげで、今俺達は立ってられる。
まだ、もう一度あらがえる。覚えたよ。忘れない。俺達エルフは、あの絵に騎士の姿を最初に見てる。その先頭に立ってた人が、認めてくれた今、恥じる戦いなんて出来ないさ。
俺達はアルテミナスの誇り高き騎士だ！　胸に刻むさ。この戦いの協力者の、最初の王女様の事を」

アギトの言葉で、その周りのエルフ達がルベルナへとその視線を移してる。アギトだけは真っ直ぐにシクラを見据えてるけど、それ以外は多分全員。
溢れる程の大人数が胸に手を当ててアルテミナス流の敬礼をして

る。そんな中一人のメイドがルベルナの元へ近づいた。

「ルベルナ……王女」

感極まってか、顔を覆い隠してるにも関わらず、その涙は見えていた。

「私……は、幸せ者です。こんな……にも……頼もしい子供達が……受け継いでくれてる。このアルテミナスを……好きでいて……くれてる」

大地から湧き出てる光が、ルベルナへと集まってる気がした。そして僕達はその姿が変わっていく様に見える。映像を重ねてるみたいに、アイリの上にもう一人の女性の姿が映し出される。

金髪金目をした、勇ましさと気高さ感じさせる姿だ。まあ涙流してる姿は、彼女のギャップ部分かも知れないにせよ、それでも王女の品格ってのは感じれる。

エルフという種族を体言してるのかも知れない。そんな彼女に、セラは優しく伝える。

「好きですよ。大好きです。貴女が造った国を、私達は無くしたりしません。絶対に」

「私はシステムの一部でプログラム。こんな事を言うのはおかしいのかも知れないけど、ありがとう。どうやら私の役目はここまでの様……ですね」

そう言うルベルナは涙を拭いて、今はその顔に優しさと少しの寂しさを抱いてた。

「折角出会えた子供達との別れ……ううん別れではないと祈りまし

ょう。貴女達なら……そしてこの子ならきっとそれをやれると信じてますから。
母はただ、子を信じる事だけに長けてる筈ですから。この子は強いと勝手に思い、この子ならと勝手に押しつけた。でもこの子は、私の想像よりも優しくて強い。
今は更にそう思い、そう信じてます」

胸に当てる自身の手。それはアイリの手でもある。勝手に選んだか……そう言えばなんで？　な気はする。今思うなら、アギトでも無く、ガイエンでもないその選択は一番正しかったと思う。
多分アイリじゃないと、今のアルテミナスには成ってない。多分アイリじゃないと、ここまで頑張ってはくれないのでは無いだろうか。

勿論みんながみんなアイリの為に戦ってる訳じゃないだろう。そこにはアルテミナスの為とか、色々あるはずだ。でもその中に陰らないくらいには、その理由は存在し得ていると僕は思う。
そしてそんな思いのメイドか一人、確固たる自信を持って言葉を向ける。

「間違ってなんかいませんよ。それが私達のお姫様です。彼女は誰よりも優しくて、誰よりもこの地と私達を思ってくれてます。
そしてそんな責任感を力へと変えられる強さも、彼女は持っているんです。貴女の選んだ娘は、きっと誰よりもそう……正解だった筈です。
あの光に照らされて、私達は今ここに居るんですからね。お母様――とでも呼んだ方がいいかしら？　全てのエルフの母君様。
任せてください。私達のお姫様は、ちゃんと全てをやってくれるお方です。強く凛々しく可愛らしく、それがアイリ・アイルテミナスという、貴女の後継者ですよ」

セラの言葉を、ルベルナはじっと聞いていた。そして言葉が終わると噛みしめる様に、どこかの部分を復唱してる様だった。
流石にここからじゃそれは聞き取れないけど、きっと心に響く物があったんだろう。

「ふふふ、ではそろそろ時間です。この地の行く末は、担い手であるこの子達に託します。それが私達の本来の役目……そうでしょう？　分を弁えないそこの存在」

ルベルナが見据える先にはシクラがいる。何を狙ってでもいなさそうなシクラに向けての言葉。皮肉なのかも。だけどそれを受けてシクラは別段気にせずにこう言った。

「分を弁えない？　それはちょっと違うよ。私達は元々、この世界の住人じゃないもの。初めからこのＬＲＯに縛られてなんかいない。私達は初めから特別で、向上心って物を持ち合わせてる賢い存在なのよ。出来が違うって奴☆」
「だけど貴女も作られた存在よ」

ルベルナの言葉に、ピクッと僅かながら反応するシクラ。作られたとかの言葉は嫌いな様だ。基本セツリ以外の人間をバカにしてる奴だし、その人間によって作られた存在って所は見たくない箇所なのかも知れない。
であるからして、シクラはルベルナの言葉を否定する。

「作られたってのは心外かな？　私はもう、あの頃とは違うもの。人に作られた私は、今やもう私じゃない。次の段階って奴に飛んでるの☆」
「だけどやってることは同じでしょう？　貴女は人の命令に従って

るじゃない」

確かにそうだ。シクラはセツリを助けようとしてる。シクラは何も変わっちゃいない。

「そう……かしら？」

だけどそこで、シクラは意味深な顔を浮かべた。けれどそれも一瞬の事。気にしなければ、そんな顔実はしてなかったとさえ思える物だ。

「ねえ王女様。私があの子を助けたいと思うのは、命令でも目的でもないのよ。言う成ればそれは自分の存在の証明。

あの子があそこに居てくれる事が、私達の存在意義なの☆　命令ではなく神託と言ってもいいくらい。それに単純なのよ。理由なんて」

そして一拍置いてシクラは答える。

「私はあの子が大好きだもの☆」

だけどその後に「他の全ては大嫌いだけどね」と笑って言うシクラだった。けど何がこいつらをそこまでさせるのかは分からない。

そもそもそう思うこと自体が、プログラミングされてる事じゃないのだろうか。光とともにルベルナの存在は薄まって行ってる。

元々確固たる存在が証明されてる訳でもない彼女だ。「御利益があるといいな～」程度に参る向こう側の存在とでも言うのか、曖昧でしかない存在。その姿は、儚くも短い時間を終わらせようとしてる。

そういえば言ってたよな最初から。担い手はつまり、僕らプレイヤーである筈だって。そしてそこが、この二人が相入れない存在である証だ。

ルベルナは最後の言葉をこう締めくくる。

「好きだから、それはとても素敵な言葉ね。だけどそれがワガママを通す理由には成らないわ。そうワガママなのよ結局貴女がやってることは。

そんな食い荒らされるだけの食卓からアルテミナスは抜けさせて貰うわ。必要に応じた、必要な分だけとってなさい。

そうしないと太るわよ」

宣戦布告なのかどうか分からない言葉を残して、ルベルナは消えていった。そしてフラツいたアイリをセラが支える。

そしてその言葉を受けたシクラはというと、何だかプルプル震えてた。

「太るなんてバカな事を……見てみなさいってのよ、この完璧な体を！」

どこかも分からない所へ向かって吠えてるシクラ。そして上を見たときに何かに気づいた様に、ルベルナの言葉のもっと重要な部分を言い返す。

それこそどこへともなく、多分今も見えなくても聞いてるであろうその存在に向かって吐き捨てる。

「ワガママね。良いじゃないそれ。ワガママを通す事の何が悪いの？　犠牲や代償なんて、どうでも良いことなの。　寧ろ私はね、ワガママを思い切って通そうって気概さえあるくらい。迷惑なんて考えもしない。だってそうでしょう？

私の道を塞いでる物が悪いんだもの☆」

何という理屈をこねて来る奴だ。まあ、今更こいつが言葉程度でとまる訳がないけどさ。弱い側からの意志を汲み取る様な奴じゃない。

絶対に認められないけど、こいつにだって目的があるんだ。それを正しいと信じる目的がだ。だから止まるわけはない。

シクラはだけど動き出す気配はない。寧ろ何かを待ってるような……あいつなら、今の僕たちをどうにでも出来るだろうにだ。

それほどに強い。何とか渡り合ってたルベルナは、願いをアイリへと託して消えたし、今は言うなれば、絶好のチャンスという感じ。なのにシクラは動かない。

それが不審極まりない。

「思ったけど、テッケンさん達は大丈夫なの？」

ここに来てようやく周りにいる仲間達へ僅かばかりいたわりを計っとく。だって気になるじゃん。一番はシクラの動向だけど、二番目くらいにはみんなの状態が気になる。

だってアルテミナスって基本、その力はエルフ対象でしかない。別段それが特別って訳じゃなく、心が狭い訳でもない。

それが普通で当たり前ってだけだ。人には人、モブリにはモブリの故郷の地があるんだから、そこでは同じようになるはずだ。

だからこそ、エルフじゃないこっち側のみんなはちゃんと大丈夫なのか心配なだけ。だけどテッケンさんは、いつもの頼もしい声を聞かせてくれる。

「大丈夫だよ。彼女は僕たちも守ってくれたし、それにアルテミナ

スの光は、そんな彼女の意志に従ってくれたようだよ」

そう言って彼は小さな体で、沸き出す光を掴む。すると光はモブリの彼の体にも入っていった。この光自体が治癒力を持ってるのは、ルベルナがその体で証明してたから、テッケンさん達もその対象にちゃんと入ってるって証なんだろう。

「じゃあ大丈夫って事だ」

「まあ、あれだけの攻撃だったからね。精神的にはかなり削られたよ。だけど……まだ倒れる訳にはいかないじゃないか。

時代を超えてまで、王女様は僕たちを助けてくれたんだ。負けられないよ。こんな所でね」

僕はアホな事を聞いてしまったらしい。今ここで立ち上がってくれたみんなのことを理解してない。そんな質問だった。

でもやっぱり隕石と衝突したわけだから、体が治っても心まではそのダメージは癒せないらしい。元々ＬＲＯは長時間のフルダイブを推奨したりはしてないからな。

フルダイブだけあって、ここで感じる事や起こったことはダイレクトなんだ。ダイレクトに精神を色々削る。それがこういう戦いなら尚更。

僕は隕石は食らってないけど、度重なる戦闘でギリギリな感じだ。まあ弱音は吐かないけどさ。それは周りの誰もが同じ筈だ。自分だけが特別じゃない。

そして不意に、テッケンさんは僕に質問を返してくる。それはまるで何なの？　と当然の様にだ。

「所でスオウ君。あれは一体何なんだい？　あのドロドロした球体……いや、もう球体ですら無いけどさ」

「――っつ！！」

僕はその言葉を受けて空を見上げた。そうだ、今一番の重要な問題はアレだったんだ。何かを待ってるだって？　そんなの分かりきってる事じゃないか！！

もう、半分以上その黒い球体は溶けていた。だけど中身は何も見えない……何も見えないんだ。真っ黒く、闇よりも暗く、その中は暗黒だった。

「あれは――」

僕はアレが何なのか伝えようとした。異様に胆が喉に絡みつく様な気がしたけど、それでもこれは言わないと行けないことだ。

みんな実は気づいてるかもしれない。そんな雰囲気さえあるけど、だけどこれを伝えるのは僕の役目だろう。僕が見てきた事なんだから。

でも……それよりも早くこの場に響く声があった。

「ガイ……エン！　ダメエエエエエ！！」

「うわっ！？　ちょっアイリ様！？」

その声はつんざくように周囲に広がる。誰もが思わずその声の主へと、目を向けずにはいられない声。そしてそこには、抱いていたセラから身を乗り出すようにして、あの空の黒い月だった物へと手を伸ばすアイリの姿があった。

それは今度こそ本当のアイリ。でもその光景は、何だか誰かと別れを終えたような……その手の向かう先が、僕は気になって仕方がない。

その瞬間、三分の一を残して黒い月が弾け飛ぶ。ベチャベチャベ

チャと地面を汚す音に混じって、ドサッと言う音があった。
そこには肌の色も髪の色も元に戻ってるガイエンが倒れてた。

「「「ガイエン！！」」」

僕達は一斉にその場に駆け寄ろうとする。だけどそれを阻む黒い攻撃が大地を抉った。

「くはは――――はははっはははははっはははははは！！」

そして唐突に響くそんな声。“何か”だった者が今ここに覚醒を果たしたらしい。吹きすさぶ異様な寒気を押しつけながら、闇から奴は姿を現す。それはいびつな形状の大鎌を携えた、黒い肌に白い髪、そして赤い瞳を持った人物だ。

「そんな入れ物より俺を見ろよお前等。じゃねーとぶっ殺すぞオラアアアアア！！」

そう言ってそいつは突然、大鎌を地面のガイエンへと向かって投げた。闇が溢れる大鎌は回転しながらガイエンへと落ちていく。
僕とアギトは真っ先に動いた。けどそれよりも強大な力がガイエンを守る。カーテナという強大な力を、強い意志でアイリは振るったんだ。

継がる心（後書き）

第百七十話です。
ルベルナの短い出番は終わりです。彼女はあくまでシステムに沿った存在だから、結果を招く事は出来ません。というかしません。彼女はシクラ達の影響を受けて無い様で受けてるけど、その考えは本編で書いたとおりなのです。
ゲームと言う世界の担い手はあくまでプレイヤー一人一人自身。そうでなくちゃいけない。それがゲームと言う物で無くてはならないのかもしれません。真理的に。
もしもその世界がプレイヤーを無視して回り出したのなら、それはもう『新世界』であるのかも。まあ同じような事は前にも言ったけど、その意味合いとは異なります。世界の定義……それは神の手から離れた子を言うのかもとか。
まあ意味は良く分からないけど。
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

流れ星に願いを（前書き）

私はずっと幸せだったんだ。それを今、この瞬間、私は知った。私は感じた。アギトも、アイリだけでもない。私は……私は……これだけ泣いてくれる人達が居るじゃないか。

何も掴めなかった訳じゃない。大切な物はずっと……もっと前からここにあった。だからありがとうと言いたい。でも私はどこまで行っても我儘で身勝手だから、もっと言いたい事があるんだ。

責任だと思った。罰だと思おうとした。だけど私はまだそこに……居たいんだ。

流れ星に願いを

ガキィィィィン！！　と言う音と共に、いびつで黒い大鎌が弾かれた。あさっての方向へと飛んでいく大鎌にぶつかった力。
それは見えずとも何か分かる。いや、見えないその強大さこそがその証とでも言うのか。それを振るったアイリは、まさにこの国を担う者の体で言い放つ。

「これ以上……彼を傷つける事は許さない！！」

カーテナは今まで以上に光っていた。まるでその気持ちに答えるように。でも……だけど、辛いことには変わりなくて、アイリの瞳からは強さと共に、弱さも共存してた。
その瞳からはだって、涙という物が流れ出てるんだ。こんな事を避けたかった筈だった……でも避けれなかった。誰のせいでもきっと無いはずだ。仕方がないなんて言いたくは無いけど、誰もが必死にこの未来を回避しようと頑張った。

だけど起こってしまった事実。責められるとしたら多分全員で、たった一人の加害者なんて居ないはずだ。けれど、アイリはそうは思ってないのかもしれない。
それこそ責任って奴を感じてるのかも。カーテナという大きな力の担い手で、アルテミナスの姫だからこその責任感。

誰もが分配しても、アイリだけは誰にもやれないんだ。彼女と対等な位置に居る奴はいないから。それは彼女が投げ出したらいけないから。
彼女は責任を請け負って涙を流す。大切な友達……ようやく一年ぶりに位に解りあえた筈の存在。それがこんな終わり方なんてイヤ

だろう。

終わり方……終わったのか？　ふと僕は倒れてるガイエンに目を向ける。するとＨＰ表示が見えない。青でも黄色でも赤でもない……というかバーすら見えない。

「ガイエン！」

そんなガイエンに真っ先にアギトが駆け寄り、肩を揺らす。僕はなんだか、その光景……いや、行為がとても危なっかしい物に思えたよ。

理由は分からないけど、とても僕じゃ出来ない……そんな風に思えた。やっちゃいけない感じ。

「かかっ女～俺様の邪魔するんじゃねーよ！　闇に落とすぞコラァ。今の俺様は寝起きみたいなもんで、めっちゃ無駄にテンション高くなってんだよ！」

何訳の分からない事を言ってるんだあいつはと思う。普通寝起きはテンション低いだろ。でも……あれはまさに闇を体現したような奴って印象だな。

静かな闇じゃない、荒れ狂った闇。光さえも吸い込もうとするブラックホールみたいな感じ。けれどアイリは、そんな闇から一歩も引かずにカーテナを構える。

「うるさいわね。ならテンション下げて永眠しときなさいよ！！」

光の線が上から下へと流れた。その瞬間、空中に浮いていた奴は一瞬で地面へと落とされた。正確には叩き落とされた。容赦ない程の威力でだ。

地面にきっと奴は埋まっただろう。巻き起こった粉塵のせいで確認は出来ないけど、クリーンヒットしたのは多分間違いない。
怒りと哀しみにくれるアイリの攻撃。それはひとえに強烈だった。

「アイ……リ」

するとそんな中、僅かに漏れ聞こえた弱々しい声。それが誰の声かなんか一目瞭然。いや、声だから一目ってのはおかしいのかな？
まあだけど、実際それには僕は驚いた。確かに奴が攻撃をしたから生きてはいるんだろうと思ったけど、ＨＰはそこにはないんだ。

声を出して、まして目覚めるなんてそれはＬＲＯのシステムじゃない。じゃあ何かと問われれば答えようも無いことだけど、今思うとこれは、命の輝き立ったのかもしれない。
蝋燭が燃えきる瞬間に、一瞬だけ大きくたぎる様な……まさにその瞬間。だって多分、ガイエンは元に戻ったんじゃないと思うんだ。

今のガイエンには全てがない。全て搾り取られてる様な……そんな感じ。やつれてる訳でも無いけど、僕の瞳にはガイエンを示すウインドウが何一つとして見えなかった。
だけどどうやら、アギト達はそれに気付いてない。みんなガイエンの目覚めに沸いている。ただ一人複雑そうにしてるのは、名前を呼ばれたアイリだ。
本当なら、真っ先に飛び込んでもおかしくない彼女だけが、その場で固まってた。そんなアイリに、アギトが手を差し伸べる。

「何やってんだよアイリ。大丈夫だったんだ！　まだ何も終わっちゃいない。ほら、お前を呼んでんだ」

アイリは視線をアギトからガイエンへと移す。するとガイエンと

アイリは目があったようで、二人で何か通じてた。アイリが一瞬、その拳を強く握ったのが見えたんだ。
やっぱりアイリは、何かを知ってる。そう思う。ルベルナも何か意味深な事を言ってたし、消えてアイリが目覚めるとき、アイリはまるで誰かと話してた用に見えた。

それを引き留めるように、アイリは黒い月に向かって手を伸ばしてたんだ。そして直後、奴は現れた。僕が考えてることはオカルトだろう。
でも……ＬＲＯでは何が起きてもおかしくない。それは一番僕が知ってる。僕の感覚の何かが言ってるんだ。「もう手遅れだ」ってさ。
そしてそれを多分、アイリは……

「お前が……気に病む事じゃない」

近づけないアイリに、ガイエンがそんな言葉を掛ける。今にも消え入りそうな、そんな声だ。周りはその言葉の真意に気付いてない。

「そうそう助かったんだから」そんな声が聞こえてくる。だけど何か、そこにもどこかおかしな感じがあるのは拭えない。
本当は、みんな分かってるのかも知れない。ただ目を逸らしてるだけ。異常な事態が続いてる。そこで楽天的になれる訳がないだろう。

まあ今まで何とか乗り越えて来たから、今度も……と思うかもしれない可能性も捨てきれないけど、それこそ希望的観測だ。
認めたくない事を、認めようとはしない人。それは普通なのかも知れない。見たくないことは、どこにだってある。

だから目を逸らす事が悪いことだなんて言わない。だけど、突きつけられる事実はいつまでも見ない振りなんて出来ないと僕は思う。

「誰のせいでも無いんだよ。私が、弱かった。その弱さに……抱えた闇に……付け込まれた。だけどその闇が……無かったら良かった何ても思えない。

それはきっと……お前達と出会えなかった事と同義だからだろう。そうなんだよきっと。でも……私はまた、お前達に迷惑を掛けてしまうな。

いや……しまったな。支えたかったのに……救いたかったのに……済まない。だが……私は……信じてる。お前なら、お前達なら……必ずこの国を救ってくれると」

紡がれるガイエンの言葉が進むに連れて、エルフの人達の空気が変わっていった。きっとガイエンの言葉を聞いてる内に、目を逸らす事が出来なくなったんだろう。

だって……それはもう、死に際の言葉みたいで……まるで遺言の様な願いに聞こえた。僕達は……エルフでも無い僕達は、そこに近づく事も混ざる事も出来ない。それをしちゃいけない。

別に今のガイエンならそんな事気にしないだろうけど、そこは彼らだけの場所であるべきだと思ったんだ。袖振りあう程度の縁しか無い僕達が、そこに混ざっても浮くだけだ。

どう足掻いたって、どう取り繕ったって、僕達はアギト達の思い以上に何かを感じる事は出来ないのだから。

「ガイエン？　お前……何言ってるんだ？」

ガイエンを抱くアギトが震える声を必死に整えてそう言った。だけど、アギトは二番目くらいにそれを認識してる筈だ。

だってアギトの抱えるガイエンの体はもう……もう――

――――――――崩れ掛けてるのだから。

やっぱりガイエンは、全てを奴に吸われてた。取られてた。存在自体を、覚醒と共に入れ替わられたんじゃないだろうか。

もしかしたらシステム上は、ガイエンと奴は同一なのかも。でも、それはきっとテッケンさんの分身の様にα・β・γの様な区別がない。1・2・3……と続く物でも無いんだろう。

それは同じで、鏡の様で、世界に全く同じ存在は、存在として成り立たない。リアルでドッペルゲンガーの噂があるように、どちらかは消えなくちゃ行けない……そんな法則が見えるようだった。

ガイエンは今まさに、ＬＲＯという世界から消えている。存在を消されてる。だけどそれでも、彼は最後の言葉を紡ぐ事をやめようとはしなかった。

もしかしたら数秒位は長くなるかも知れないその命を削ってまで、彼は願いを……思いを……そして真実を伝えようとする。

「何って……遺言だ。心底、お前にアイリは吊り合わないと思っているが、だけどまあ、それも今更だ。割り切った事だ。守れよアギト……アイリを守れ。

私はもう、ここには居られないから、お前が最後の砦になれ。言葉に惑わされるな……自分の中の思いだけを信じてろ。

そうすれば、きっとお前は誰にも負けない……だろうよ」

「バカ……言ってんじゃねぇ！　そんなの認めるかよ！　なんだ遺言って！？　お前が……この程度で死ぬわけ無いだろうが！！

いつもの勝ち気な態度はどうしたんだよ！？　うざったそうに俺の存在ごと否定しろ！　……そうしないと……お前……本当に死ぬみたいじゃないか……」

最後の方のアギトの言葉は、実際声に成ってなかった。俯いた顔から涙か鼻水か分からない物が、ドバドバ流れてた。

周りのエルフの人達も必死に抵抗してた。目を逸らしてた事実にあらがう事をし始めたんだ。具体的には魔法で回復。

それしかないっていう頭の回転は当然だろう。だけど結果として、その光は一片も一筋も掠りはしなかった。だってガイエンの存在は無くなっていってるんだ。

そこに合わせるカーソルなんて無くて、存在として定義されてないガイエンは、データ上風景となんら変わらないんだ。

そんな所に魔法を放っても、どうにも成らない。回復魔法は自然を元には戻せない。あくまでもその対象はプレイヤーであり、生き物だからだ。

何十と言う光が重なり合っても……そこはどこかズレていて、ガイエンには届かず消えていく。ここに居るエルフノ誰もが、その瞳に涙を溜めていた。

どうしようもないと分かって……そして誰もがガイエンの状態が普通じゃないと分かってるから、涙を流さずにはいられない。

ガイエンは血を流す程に浸透率が高かった。だからこそ、きっとこんなおかしな消え方をしてるんだと思う。あの黒い奴の影響もあると思うけど、きっとガイエンはこのままゲートクリスタルに戻るって事はきっとない。

もしかしたら……この目の前のガイエンの消滅と同時に最悪の事

態が起こりうる可能性がある。でも……ここにいる誰一人として、それを最早止める事は出来ないんだ。
覆水盆にかえざる。こぼれてしまった水は戻りはしない。どんなに強大な力を持ってるアイリでも、それを強引にねじ曲げる事は出来ない。

カーテナはあくまで、ゲームとしてのアイテムで、バランス崩しと称されようが、ゲーム自体に干渉する事は出来ない。
それが出来るのは、裏側に居る奴らだけだ。僕たちが今夜、二度も戦い続けてる奴らだけ。だけどそれは希望もくそもないのは明白だ。

ガイエンの奴はもうこの結果を受け入れてる。それがまた、僕達に……いやアイリ達にしてみたら悔しくて溜まらないんだろう。
泣くしかない……泣いてもどうにも成らないけど、どうしようもないからこそ、鼻を痛くしながら涙は止めどなく溢れてくるんだ。
そんな中、再び場違いなノリの叫びが上がる。アイリが陥没させた地面からだ。

「かーっはっはぁーー！！　むちゃくちゃブチ切れたぜ女！！　てめぇはいたぶった後に、心まで壊してやるよ！
くっはっは、そこのクズが手には入らなかった物を、俺様は強引に強奪に強行に手に入れてやるぜ！　あらがたって無駄だ。
俺様はお前の服をはぎ取って、その体を隅々まで犯し尽くしてやるよ。ベースと成ってる、その死にぞこないの体でなあ！！」

腐った言葉が周囲に響いた。本当に腐った言葉だ。これほど下品で、救いようのない言葉は初めてだ。ガイエンから全てを搾り取った割にはバカな印象が強い。
いや、奴はあくまでガイエンの闇を増幅増長させて作られた存在

みたいなものだったっけ？　なら闇らしいと言う事なんだろう。
でもその言葉は、今のアイリには禁句に近い。アイリは再びカーテナを奴に向ける。
「その汚い口を今直ぐ閉じさせてあげる！　そしたら……もしかしたらガイエンは救えるかも知れない！！」
原因を滅ぼせば全てが元通りに成る……なんてそんな理屈、本当はありはしない。それはアイリだって分かってるだろう。
生み出す事と、戻す事が同じ作業で循環出来るとは限らない。ましてや元通り何て事は、進む時間の中で決してないと僕は思う。
今日と同じ明日が無いように、昨日と同じ自分はいない。だからって、助けれないと決めつける訳でもないけど。
進めばいいんだよ。そしたら昨日よりも強い自分と出会えるかも知れないのと同じように、元通りじゃ無くても彼である存在を見つける事は出来るかもしれない。
それで良いはず何だ。
だけど奴は……黒い敵は、不適にアイリに向けてこう言った。長く気持ち悪い舌を伸ばしてだ。
「やるのかよ？　出来るのか？　言ったよな、“私”はそいつでもあるんだ――っぞおおおおおおおおおおお！！」
奴はアイリが一瞬、迷った隙に飛び出してた。凄惨な顔を浮かべてアイリへと迫る。
だけどそれは迫るという表現はあまり正しくは無いかも知れない。何故なら奴は、闇に溶ける様に、姿を消しては現れるからだ。

闇に溶ける限界でもあるのか、四・五回目の出現で奴は、アイリの目前にいともたやすく登場した。闇に溶けてる間は、物理障壁（人や壁）なんかは意味ない様だ。

「「アイリ！！」」

ガイエンとアギトが必死に体を動かそうとした。だけどガイエンはそれを出来る状態じゃなく、アギトも泣いてるせいで体が強ばってたんだろう。

泣くのって意外と疲れるから……だから反応が遅かった。

「ひゃっはあああ！！」

もらったあ！　とでも言いたげな叫びをあげる奴。だけど僕は……僕だけは素早く、そしてイクシードの特性を使って奴とアイリの間に体を滑り込ませた。

イクシードは風を司る。こんなのお茶のこサイサイさ。

「無茶するなよガイエン。僕はまだお前の為に涙とか流すレベルの友人じゃないけどさ。親友の不手際位、カバーする権利はあるだろ？」

「てめえ！！」

赤い瞳が僕を射殺す様に睨んでる。でも僕は、その瞳を受け流す様にしてこういってやったよ。

「無粋な事してんじゃねーよ。お前にこいつらの邪魔はさせない。最後に……成るかも知れないんだ。僕につき合えよ闇野郎！！」

そういって僕は奴を押し返す。するとそこで、いつの間にか高見

の見物を決め込んでたシクラがいつもの調子で言う。

「さあどうしよっか？　彼は結構手強いよ☆　生まれたてだけどもうちょっと一人で頑張れる？」

「アホな事言ってんなよ！　邪魔なんてするんじゃねぇ。アイツは俺が殺す！！」

どうやら奴は、目の前の事しか見えない様だ。上手く食いついてくれた。でも今度は流石に、大鎌を取りにいきやがった。

まあ僅かだけど時間は稼げるから良しとしよう。

「貴様……」

ここまで来て、僕の事を貴様呼ばわりとは……ヤレヤレな奴だ。さっき一瞬動こうとしたせいで、一気に崩壊が進んでる癖に良い根性してるよホント。

だけど次の言葉は予想外だった。

「すまない……」

確かにそう聞こえた。いや、間違いなくそういった。エルフ以外を毛嫌いしてるガイエンが、素直にそういった。それは嬉しいことでもあったけど、同時にそれだけの事だと実感させられた。

まあわかってたから、僕は飛び出したんだけど。何となく僕にはわかる。何故なら僕だって、いつこうなるかわからないからだ。

同じ条件なんだよ、僕とガイエンは。たまたま僕は運が良くて、人に恵まれただけで一歩踏み外せば、ガイエンと同じように、僕も崩れて消えていくんだと思う。

だから……邪魔なんてさせたくなかった。最後に成るかも知れな

い言葉くらい、ちゃんと言わせてあげたい。だから僕は、アイリ達の代わりに奴に挑む。
エルフの人達は、ちゃんとその最後を見届けるべきだから。だから……

「なら、僕達も助力しよう」
「私達も手持ち無沙汰だったから丁度良いですよ。やっちゃいましょう。やっつけちゃいましょう！　実際結構私、怒ってますから」
隣に並んできたのは、テッケンさんとシルクちゃん。その傍らにはピクもいる。そしてさらに続く様に、リルレット達、エルフ以外のみんなが続いてた。
みんな思う事は同じらしい。

「はは、心強い……とっても」
「君を一人にはさせないさ。僕達はね」

テッケンさんの言葉が胸に染みる。それは抜け殻だった体に力をくれる。アイリ、アギト、ガイエン達の思いで既に満タンだったけどさ、その一言はきっと、エンジン点火させる炎になった。
僕は背中を向けたままガイエンに言うよ。同じ存在だった奴に……先に逝く奴に、僕は言う。

「すまないなんて安っぽい。忘れるなよ。これは貸しにしといてやるよ」

そういって僕達は奴へと向かう。先頭を切って僕は風になる。後ろの方でそのとき、微かな声が聞こえた気がした。

「……すまない」

やっぱりそんな言葉だった。

すまない……その言葉は彼に届いただろうか？　いや、きっと届いたと信じよう。ここまでしてくれる彼には、何とも味気ない一言だが、私にはこれ以上の言葉が思いつかなかった。
いつまでたっても自分達以外を受け入れきれなかった小さな私ではあれが限界なんだ。そして彼と私の違いも何となくわかった気がした。

私には出来ないよ。自分の為と今目の前にある大切な物以外で、簡単に命を晒すような事、愚かしくて出来ない。だが彼はそれをする……糸も投げに、そうする事が義務でもあるかの様に。それはとても危うい事だ。

彼は本当は……本当に……“生きたい”と思ってるのだろうか？
私は本当は生きたいよ。だがそれは手遅れだ。私は存在として消滅される。上書きされたんだ。
新たな存在に。新しいソフトが更新される様に、自分を更新……いや切り取られた？　かな。だが、周りの誰もが泣くから、私は泣けないじゃないか。本当に仕方なく、しょうがない格好良い事を言うしかない。

「お前達……は強い。私が育てあげた軍隊だ。数の差に負けたりしない……胸を張れ。騎士の誇りで国を救えるのはお前達だ」

ほらな……こうなるんだ。お前達が泣くから、私は……

「何で……何でそんな事言うの！？　言ってよ！　私達に弱音を吐いてよ！　何にも出来ないけど、頑張るから！　諦めないから……『助けて』って言ってほしい。
私は何度も言ったから、今度は私が絶対……絶対に助けるよ！約束するから！！」

胸に刺さる絶対に抜けない針が見える。いつだってこの針を突き刺すのはこいつだ。私が欲しい物を持ち去って、私が目指すべきに位置に常にいる。
本当はアギトなんかよりずっとアイリが嫌いだった。本当は、アギトと私は似てると思った。光に照らされる事を覚えた月同士。

でも、その近さを私達は競いあったのかもしれない。無意味な戦いで、無駄な争いだった。もっと素直に私が成ってれば、誰も傷つかなくて済んだかも知れない。
誰も悪くなんか無い。悪いのは私一人だ。弱い私が、一人で悪かったんだ。だけどアイリはまだ、そんな私を許してくれる。間違う私を誰もが許してくれる。
これが涙を流さずにはいられようか。私は必死に声を振り絞り、情けなく叫んだ。

「助けて欲しい」

そう願って、私は消えた。

流れ星に願いを（後書き）

第百七十一話です。
多分次でアルテミナス編は終わります。沢山の痛みと、新たなる敵の誕生で、この編はもう、ハッピーエンドでは終わらないと誰もが分かってるでしょう。でもそれはバットエンドな訳でもありません。
旅は終わらなければエンドじゃない。そして救いは想いの数だけあるんです。救う事を始める戦いを始めましょう。
アルテミナスは沈まない。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

アルテミナスは沈まない（前書き）

ガイエンが消えてしまった。この世界から居なくなった。ただ現実に戻っただけ……そんな風には思えない。ガイエンの状況は僕と同じだったんだ。だけど構わず叫ぶ下品な声。

まだ戦いは終わって無い。そして負ける訳にもいかない。アイリは最後の可能性の為に城へ向かう。残された僕達は、ここを死守する事が役目だ。

アルテミナスは沈まない

「助けて欲しい」

どこかからかそんな儚い声が聞こえた気がする。だけど僕が振り返った頃には、エルフのみんなの視線の先はぽっかりと空いていた。

不自然な空間がぽっかりと。そこには何も……何一つ残ってない。名残なんて物は無くて……元からそこはそうだったかのような空間だ。

でも僕は知っている。あそこに居た奴を忘れる事は無いだろう。そしてアギト達も……僕よりも関わりが深かったんだから、それは当然だ。

でも出来なかった……何も……そんな思いがこみ上げる。悲しみにくれるその場所は、とても見てる事は出来ない位だ。幸い僕にはやることがあるけど、アギト達は大丈夫なのかそれが心配だ。

もしかしたら、僕がいつかこんな気持ちを関わり合った人達に抱かせてしまうのかも知れない……そう思うとなんだか痛いんだ。

アイツが消えた事もそうだけど、悲しむ光景を知ってしまった。誰かが居なくなるって事は、自分一人の問題なんかじゃ無いと思わせる。

いつかは誰にだってくるだろうけど、早すぎる事は良い事じゃない。これに限っては。

「スオウ君、奴が行ったよ！」

心が落ちそうな時に、そんな声が聞こえた。顔を戻すと、大鎌を振りあげた奴が面白おかしそうに叫んでる。

「ぎゃはははははは！　用無しはやっとで逝ったか。そんな悲しそうにしなくても良いんだぜ。お前等も直ぐに同じ場所へ送ってやつからさぁ！！」

不謹慎……そんな言葉じゃ足りない。そもそもこいつにそんな言葉自体が意味がない。こいつは心の底からそう思ってるんだろうから。

でもさ、それは許せない事だろ？　許しちゃいけない事だろ。例え僕が友達の友達程度の関係だとしても、本気で悲しんでる奴等が居る場所で、そんな事、まかり通す訳には行かない。

首を遠慮なく飛ばす角度で入ってくる大鎌。切っ先まで真っ黒なその鎌は、魂までも刈り取れそうなそんな感じがする。

でもやらせない。僕は素早く片方の剣でその鎌を受け止めて、もう片方で反撃に転じる。

「うるせえよ……今直ぐその下品な口を閉じてろ！！」

「んっぎゃあああああああああ！！」

セラ・シルフィングが黒い奴の肌を両断する。轟く絶叫と共に、奴は後方へ倒れ伏す。だけど「やった」なんて思えなかった。

何故なら倒れても直ぐに、奴は不気味に笑ってる。

「いてぇいてぇいてぇいてぇよ。かっははははは！　スッゲ～いてぇえよ笑えるくらいに。ああ～良い感じだ。生きてるって感じがビンビン伝わってくる」

そして意外とあっさりと立ち上がる。なんだこいつ、マゾなのか？　てかどう考えても危ない奴だ。それはわかってた事だけど、流石に引くわ。
そしてユラユラ上体を揺らしながら、大鎌を古時計の様に振るう。そして今までで一番凄惨な笑みを見せて、黒い血が吹き出すのも関係なく突っ込んでくる。

（速い！）

テンションが上がったからか知らないけど、確実に一段階速くなってる。そして同時に振るわれた大鎌が重かった。
受け止めたけど、それだけで精一杯。それにおかしな事に、右側のセラ・シルフィングの風のうねりが消えていた。

「なん……で？」
「かはっ！　かはっ！　かははははは！！　なあ、お前は生きてるのか？」

狂った様な声と共に聞こえたその声に寒気がした。そして更に奴は勢いを増して大鎌を振るい出す。

「生きてるよなぁ！？　生きてるんだよなあ！？　そうでんなきゃ殺しがいが無いだろ！？　生きてろよ！　生きてろよ！　生きてろよ！！
真っ赤な血を吹き出してそれを俺にわからせろ！！　殺してやるからさあああ！！！！！」

赤い瞳が爛々と輝いてる。何がこいつのスイッチを入れたのか……思い当たる事は血か。生きてるとか殺すとか、うるさ過ぎる。
でも、その口を閉じさせ様にも反撃に転じれ無い。片側だけ消え

た風のうねり。それが重くのしかかる。攻撃力だけじゃない、防御力だってあれは補完してくれてたんだ。

だからそこがまず崩される。腕が弾かれて体が剥き出しにされた。奴は振り下ろした鎌を反転させて、今度はそのまま切り上げる気だ。

僕の体を真っ二つにするために。

「――っつ！」

避けれない。態勢も崩されてる。この一撃は……そう思ったとき、何かが……赤い何かが奴と共に地面を抉る。

「ぐぎゃあああああああああ！！」

巻き起こった粉塵の先で、立っているのはアギト。アギトは槍で胴体を貫いてる奴を、無造作に持ち上げ投げ捨てる。

ドサ、ベチャと言う不快な音と共に、奴は地面を転がった。でもそれよりも、僕はアギトに視線を向けてた。だって不安だろ。心配だろ。

「アギト……」

僕はその背に、名前を呼ぶ事しか出来ない。奴の黒い血を浴びた槍から炎が消えていく。それがどういう事かは定かじゃ無いけど、アギトの肩を揺らして辛そうに、言葉を必死に紡ぎ出す。

「馬鹿……言ってんじぇーよあの野郎。助けて欲しいだとよ。そんなの……言うまでもねーだろうが！　助けるさ。助けてやるよ。

何時だって……何度だって諦めない！！」

アギトは必死にそれを刻んでる様だった。そう言って、そう信じなきゃ、心が折れてしまいそうだった。その背中はそんな決意と共に、そんな弱さも僕に伝えてきてた。

「かはっはははは！　いってぇ！　超絶いてぇよ！　傷口焼くなんてお前は鬼かよ。でも……生きてるよなぁ俺は。助けるなんて、かはははは！

教えてやるよ。アイツは死んだ。俺様が食った。それが事実だ現実だ。認めろよ。そして死にたくなったか？　なら俺が殺してやるからさぁ！！」

腹に大きな穴を開けられても、笑みを漏らして立ち上がるアイツはまさに化け物。アギトの言葉までも食おうとしやがって……だけどそれにアギトが激高する事はなかった。

いや激高はしてるけど、それを腕の部分で必死に押さえてる。次は自分じゃないから……みたいな感じだ。でもその間にも、奴は大鎌を構え直して、アギトに向かおうとしてる。

けどその瞬間、奴は地面にめり込んだ。上方から降り掛かった圧力に押しつぶされる様にだ。これはカーテナか。視線を向けるとアイリが静かに、輝くカーテナを振るってる。

そしてアイリは決意を込めた声で、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「何時だって、何度だって、そして私はどこまでだって、友達の為に行って見せます。だけどまずは、私は願いと責任を果たします。

それは彼が望んだこと。私が望むこと、そしてここに居る誰もが願ってくれる事。死なせません……もう誰も。無くしません……これ以上何一つ。

アルテミナスは沈まない！！」

顔を上げ、振り下ろしてたカーテナを再び頭上にあげるアイリ。もう一度、今度は止めと言わんばかりの威力を込めての一撃に成りそうだ。
それが分かる。輝きが違う。今まで初めて、カーテナの切っ先の上に魔法陣が現れて、そして奴が押しつぶされた場所の上にも、同じ輝きを放つ魔法陣が現れてた。

多分あの二つがリンクして、離れた場所にも攻撃を届かせてたんだろう。今まで見えなかったのは、モロばれするのも防ぐためか。
でもそんなのを度外視するくらいにアイリはこの一撃に懸けてる。そう言う事だろう。

「かっはははは！　良いぜこいよ。ぶった斬ってやるよ！！」

自身が置かれてる状況を理解してるのかしてないのか、奴は心底楽しそうにそう言った。大鎌を構えて、本当にぶった斬ってやろうとしてる。
でも力を込めて握った瞬間、奴の腕が脆く崩れて大鎌が地面へと重い音を立てて落ちた。

「なんだこれ？」

理解できない事が起きた……そんな感じで呟く奴。どうやら僕たちの攻撃は効いてなかった訳じゃない様だ。アイツが全然気にして無さ風だったから勘違いしてたけど、ただ鈍いだけだったのか。

まあ生命と呼べるかも怪しい奴に、精神がどうのこうのはおかしいかも知れないけど、異常なテンションの高さで今まで補ってた物が、限界を越えた。そう言う事だろう。
それならまさに、この一撃でこいつは倒せるかも知れない。それ

だけカーテナは強力で、今までで一番きっと心が重く乗った攻撃に成るだろうから。
輝く魔法陣が黒い奴を強烈に照らしてる。それだけでも奴を焼け付くし程の光。

「貴方がガイエンから奪った物全て、今ここで返して貰います！！」

アイリの宣言と共に振り下ろされたカーテナ。空気が弾け、地面が砕かれる。その衝撃は凄まじく、周りに居る僕たちも吹き飛ばされそうに成るほどだ。
世界が揺れた。もしもこのＬＲＯが丸い星なら、マントル位までブチ抜くんじゃ無いかと思える程だった。そして実際、奴が居た筈でカーテナの力が降り注いだ地面は、有り体に言えば無くなってた。

地面に突然、深い穴が口を開いてる様にそれはどこまでも沈んでる。砕いて、押し込んだ。いや、砕ききってしまったからこうなったんだろうか。
とにかく初めて見る光景に、どうして？　の理由が付けられない。まあでも、これなら……そう思って僕は中心部分の煙が出てる所に目を向ける。

どんなモンスターでも倒せるんじゃないか？　と言う一撃だ。あの状態の奴では防ぎようなんて無かったはず。もう見える筈も無いんだけど、確認したい気持ちが穴の中心部分へと向いちゃうんだ。
だけど立ち上る煙からおかしな物が見える。柱……の様な大地の塊？　その穴の中心に一本立つそれが意味する事は……

「ああ～もう、だから言ったじゃない。まだまだ君は生まれたての赤ん坊。存在だって完璧じゃないんだから無理は禁物だよ。
今のは私が助けなかったら間違いなく死んでたね。負けだよ負け。

君の完全敗北☆」
「うるせぇ！！　余計な事しやがって！　お前から殺すぞこの女！！」

聞こえて来たのは二つの声。そして煙の間からその姿が確認出来る。奴とシクラ……その姿は健在だ。

「……っつ」

悔しそうに眉を潜めるアイリ。そして周りは驚きで一杯だ。確かにあれだけの攻撃、普通なら一貫の終わりだろう。
でもそれを防いだのがシクラなら、僕の中では驚きよりもまず納得する部分がある。

「ふふ、ちょっとは言葉に気をつけようか？　私の上にはせっちゃんしか居ないの。そして姉妹が同列、後は全て下なの。
誰のおかげでそれだけの存在に成れたのか分かってる？生みの親には敬意をはらいなさい☆」

シクラの顔は別段いつもと変わらずヘラヘラしてる。だけど、その顔は笑ってるのに笑ってない感じだ。時折見せる凄みがにじみ出てる。
てかシクラ達こそ、敬意払ってるのかって思うけどな。そう言えば当夜さんの事はマスターと呼んでたか。あれが精一杯の敬意の現れ？

「かっはは……確かに今の俺様じゃアンタには勝てないな……すまなかったよ。まだ俺様は死にたく無いからな」

なっ……奴が素直に謝った。それは衝撃だ。今までの言動からし

て、そんな物持ち合わせてないと思ってたのに。シクラはそれほどって事だろう。

だけど奴の目は謝ってたり感謝してる奴の目じゃない。赤い瞳はシクラをおもいっきり敵視してる様に見える。でもそれを何ともないようにシクラは言うよ。

「そうそう、素直が一番☆　おっと、ねえお姫様。今のより強力な力を放てるの？　それが出来ないんなら、このシールドは抜けないよ☆」

「くっ……」

シクラの先手を打つような言葉に、アイリは振ろうとしてた手を止めた。いや、止めざる得なかった。シクラの周囲に展開してる球状のシールド。あれを今のが抜けないんじゃ……

そう思っての停止。だけど次の瞬間、シクラは奴を引いて地面を蹴った。そしてそこにクーがやってきて二人を背へ乗せる。

「あはっはは～☆　嘘だよ嘘。あんなのそうそう防げないよ私でも。カーテナは、ううんバランス崩しは本当に厄介。

でもその一角はここで確実にしとめられるよね」

「このっ！！」

アイリはすぐさまカーテナを振るうけど、クーは一気に上空へと駆けあがる。てか嘘。完全に見えたシクラにも、当然限界があるらしい。

そしてバランス崩しはかなり警戒してる。だからこそここでしとめるってか。でも今は少し前とは違う。アイリは無意味な攻撃を止めて、上空のシクラへ向かってこう言った。

「もう戦況は違います。確実なんてよく言えますね。追いつめられてるのはあなた方です！！」

そう、数では僕達の方が今や有利だ。シクラは自身の攻撃で、モンスターを全て潰してる。実質残ってるのはシクラ達だけ。

だけどシクラは薄ら笑いを浮かべておかしな事を言う。

「あはは、数が多ければ安心なんだ？　じゃあこれならどうかな？　ヒイちゃんお願い」

その言葉で上空の別の場所から光が放たれた。それは柊が見せた六対の氷の翼が放ってる。

「全く、私だって疲れてるのに……シクラは人使い荒いし、いい加減だし、アホな顔してるしで私嫌い」

スゲー言われようだ。けれどシクラは気にした風もなさそうにこう言う。

「あはは、大好きの裏返しだね☆　お願いヒイちゃん。お仕置きは無しにするから」

すると柊を抱え込むワードがあったらしく「まったく」と少しホッとした顔しながらそれをやりだした。六対の翼から、氷の刃が広範囲の地面へ向けて放たれる。

そして地面に放たれた氷の刃は、変な文字を宿して地面へ着弾する。すると地面から何かが出て来だした。次から次へと……あれは……

「モンスターが復活してるぞ！！」

誰かのそんな声が響く。それにただ復活してるだけじゃない。なんだかゾンビッぽく成ってるような？

「どうかなお姫様☆　これでも確実何て言えない？」

迫ってくるモンスターの大群に、こちらも応戦しない訳には行かない。だけどこいつら……どこをどうみても、ＨＰなんて物が表示されてない！！

「何だよこれ！？」

「ゾンビ化してるんだ。核を壊すか、光系魔法でしか倒せないんだ！」

「マジッ！？」

それはやばいんじゃ。核ってのは多分、さっきの氷の刃だろう。だけど見える所には無い。胴体を一撃で切り刻むとかしないと、僕達じゃ倒せもしないのか。

するとヌワッと感じで大きな存在が起きあがる。悪魔計五体までも、同じ条件で復活しやがった。

これは……そんな思いが誰もの脳裏に掠めた瞬間。五体の悪魔の体が一瞬で消し飛んだ。そして復活もしない。

「「「おお！！」」」

僕達は声を揃えて驚いたよ。そしてそれを行ったであろう彼女は強い眼差しで言い返す。

「言わせませんよ。確実何て、私が言わせません！！」

「あはは、一人で何て幾らカーテナを持ってても無理じゃないかな

？」

カーテナの属性は光なんだろう。だから一撃で決めれた。でもシクラの言う通り、敵は百・二百は居る。カーテナ一本じゃ幾ら何でも押し切られる。

だけどアイリは周りのみんなを見渡して言葉を紡ぐ。

「確かにカーテナを持つのは私一人だけど、でも私は一人じゃない！　同じ国を思うみんなが居ます。協力してくれる友達も出来ました。そして遙か彼方から受け取った思いもある。

今の私には怖いものなんてありません！！」

「「「「うおおおおおおおおおお！！！」」」」

アイリの言葉に軍の連中が一気に活気づく。絶対的な戦力差。だけどそれを越える物をアイリはみんなに与えてる。

「かっははは！！　感じさせてやるよぉ！　生を死を！」

我慢できなくなった馬鹿が思わず地上に降りてきた。

「ああもう、でも確実に行きたいかなここは。思いだけじゃ乗り越えられないよ☆」

そしてシクラも奴の後に地面に立ってそのアイリの言葉を否定する。確かにこいつらまで加わって数も不利。何時までも気持ちだけで持ちこたえれる物じゃない。

それにそれじゃダメなんだ。勝たなきゃいけない。するとその時、僕とアギト二人にアイリは目配せをくれる。

「アギト、そしてスオウさん。ここでしばらく、あの二人とみんな

を頼んでも良いですか？　これはお二人にしか頼めません」

一瞬僕は耳を疑ったけど、その瞳は真剣だ。光を宿すその目は決意の証だ。だから僕はさっさと頷くアギトに続いて「任せてください」そう答えたよ。

アイリは「頼みます！！」そう言ってセラを呼ぶ。

「アイリ様！？」

「セラ、『ネクタル』を私に！　今から城へ向かいます！」

ネクタル……それは『神酒ネクタル』か。確かセラ・シルフィングを手にした泉で手に入れてたアイテムだ。何の為にだっけ？

「城へ？　この状況でアイリ様が戦線を離れると指揮が下がります！」

「大丈夫です。それはあの二人に任せてあります。私達は勝たなきゃいけない！　だから……第四の封印を解きます！！

これは元々ガイエンが残してくれた希望です。そしてルベルナ様が思い出させてくれた最後の可能性なの！！　セラお願い、一緒に来て！！」

セラの最もな言葉を、それでも一蹴してアイリは強引に走り出す。口調もなんだか変わってた。だけどこれが最後の可能性……それは確かだろう。

ルベルナは言ってたよ。担い手はプレイヤー。その可能性をアイリへと伝えたんだな。

「全員気を引き締めろ！！　ここからさきは一歩も通すな！！　アイリは俺達を信じてる！　だから俺達もアイリの為に守りきれ！！」

アギトは全てを理解してるかのような事を言って、指揮を高める。テッケンさん達ももう戦ってるし手一杯。僕達は自然と目の前の二人に一対一を挑む事に成りそうだ。
そしてアギトは奴に熱視線を送ってるから、僕はシクラ担当か。

「お前は、アイリの代わりに俺が潰す！！」
「かっははは！！　まずはお前から食ってやるよお！！」

二人が動き出した。だけど僕達はまだ動かない――と思ったら、一瞬でシクラは僕の後ろに！！

「ごめんね☆　今はスオウよりお姫様かな」

その言葉にゾっとした。確かにそれが正しい判断だろう。だけど行かせる訳にはいかない。僕は焦る心を抑えつつ、この言葉を紡ぐ。

「イクシード――――――――2！！」

その瞬間風が、雷が、体から溢れる様に出てくる。そしてシクラの移動を阻害する。うねりもちゃんと二本の剣から出てる。

「何それ？　隠し玉？」
「使いたく無かったけど、誰もが無理してるんだ。お前はここで必ず止める！！」

地面を蹴る音がしない。風に押される様に進める。そして雷撃が加わった風のうねりは、地面さえも砕いて進む。ただのイクシードは効率化しただけ……でも2からはそうじゃない……そうじゃないんだ！！

「うおおおおおおお！！」

地上に激しい衝撃が幾つも生まれる。だけどそれでも攻撃は通らない。こいつ……一体どこまで！！　その瞬間、大量のお札が僕の体の回りに展開される。

「これはっ――サクヤか！！」

僕は全てのお札をすぐさま切り刻む。だけどサクヤに攻撃は出来ない。でも、次から次へと……それにシクラの攻撃だってある。

「サクヤお姉さまは妹思いなんだから☆　折角の切り札もこれじゃあね」

シクラの攻撃とサクヤの札が同時に僕を襲う。燃やされて吹き飛んだ。だけどイクシード２の効果か、岩に激突する事も、地面に叩き付けられる事もない。

お札も皮膚までは届いてなかったし、通ったのは実質シクラのパンチだけだ。でも危なかった。イクシードで既にＨＰは赤いんだ。

これ以上は一撃も食らえない。幸いお札は無視しても……そう思った瞬間、眼前を覆うような札の壁が津波の様に迫ってくる。

（サクヤの奴、高速詠唱をどれだけ！！）

流れてくる札が、炎の波となって僕を飲み込んだ。だけどその瞬間、僕は見た。クーの背に居るサクヤの涙を。

アルテミナスは沈まない（後書き）

第百七十二話です。

ええ～とまずは、ごめんなさい！！　終わらなかったです。だけど次で本当に終われるからもう一話、アルテミナス編のお話にお付き合いください。切り札は手の中にあって、それは沢山の偶然と奇跡で繋がれてました。

城だけが残った事も、ネクタルを最初に手にしに行った事も……意味が有った。諦めない事がそこに意味を見出したともいえます。次で本当に本当に、終われる筈。

てな訳で次回は木曜日に上げます。それではまた～。

輝ける国（前書き）

誰もが諦めずに、誰もが頑張った。前を見続けて走ってきた。沢山の困難があった。障害があった。でも僕達はここまでこれたんだ。後、たったこれだけの戦いに勝てれば、アルテミナスを守れる。

さあ、最後まで自分達を信じて突き進もう。

輝ける国

周りが炎で包まれる。凄まじい熱気と熱量。触れなくても、これじゃあ息さえも危うい状況だ。でも……あの涙が目に焼き付いてる。

（違うだろ……）

そう思わざる得ない。サクヤは……こんな事望んでない。お前は……もうそんなサクヤの顔まで見ることを止めたのかセツリ。

それを考えると苛立たしくて、怒りがこみ上げる。サクヤは誰よりも望んでた。いつだってセツリの一番の味方だった。

それを……無くしたくないからって何やらせてんだ？　どれだけお前は甘くて、わがまま何だよ。本当に、お前が望む世界はそんな物なのかよ。

自分にとって都合の良い世界ってのは、誰も自分を否定しなくて、誰もが自分の思い通りに動く世界なのか？　誰も裏切らず、誰もが大切にしてくれる……そんな世界が良かったのかよ。

見たくない物は排除して、聞きたくない事には蓋をする。そして逆らう奴は、心を取り上げるのか。

「それがお前の望んだ世界なら……」

お前が大切な奴の涙も盲目する最低野郎に成り下がったのなら……僕がその目を覚ましてやる。自分だけが幸せな世界……そんなのありはしないとわからせてやる。

戦わなきゃいけないんだ。どんなに辛くても、それが人生なんだから。きっとどこかに救いはある。その筈なんだ。

だからリアルはまだ、まともに回ってるんだ。諦めなければきっ

とセツリにだって……それを誰よりもサクヤが望んでた。
「生きてほしい」とアイツは願ってた。お前が幾らリアルに絶望しようと、幾ら僕が嫌われようと、僕はあの泣いてる奴の意志を継ぐ。

不幸も憤りも絶望も知ったことか。いい加減、逃げてばかりは止めろよセツリ。そろそろ向き合う時だ。自分自身と言う名の存在と！！

「僕はそれをぶっ壊す。そんな甘い夢は、甘いだけの夢は、これ以上もってちゃいけない。捨て時なんだよセツリ！！」

夢を見るななんて言わない。だけどそれが楽して手には入るなんて思ってちゃいけないんだ。そんなのは幼いときにだけ見る、その時だけの夢なんだ。
なんだって出来る気がした。なんにだって成れる気がした……そんな頃の儚い夢。でもいつからか気付く。夢はただ思い描くだけじゃ手に入らないって。

リアルは望んだ物を、望んだだけ与えてくれる程甘くはないけど、道を残してくれる位に優しくはある。だから僕達は見れるんだ。夢って奴を。
頑張れるんだ。本当にそれが欲しいのなら、それだけの努力をして手に入れろってさ。それだけして初めて、夢の価値ってのはわかるんじゃないのか。

確かに与えられた物だけを腕一杯に納められたら、どれだけ楽で幸せで居られるのか、僕にはわからない。でも人は、誰もが次第に自分で掴みたい物が出来るんだ。それはきっと誰も与えられないもの。

だからその腕一杯の宝物を放り投げてでも、新たなそれを掴むために……自分自身で掴むために手を伸ばす。足を使って進んでく。体を張って目指してく。

それはきっと茨の道だ。辛いことが一杯で、刺さり続けるトゲに足を止める事もあるだろう。振り返って後悔する事だってきっとある。

そしていつだって、リタイアする事が出来るから人の夢は儚いと書くんだ。でもそれでも僕達は進まなかった事にだって後悔する。何が掴めたのか、ずっと手のひらを見つめ続ける。

だから言い訳してでも、どんなに小さくても収まりが良い物を掴もうとするのかも知れない。それは褒められないかも知れない、結局夢は掴めなかったのかも知れない。

でもそれもまた人生で、誰かが野次出来る事じゃないんだろう。夢は掴まなければ意味はない？　そうかも知れない。確かに掴めた方が勿論良いし。努力した甲斐も、進んできた意味も、きっと感じれる筈だ。

だけど泣いて喚いて、進もうともしない奴にそれを言う資格なんて無い。セツリは傲慢でわがままで、そして欲張りだ。

もう本当は腕一杯に宝物を持ってる。今まで生きれて、愛してくれる人が居る。それでも足りなかったのかも知れないし、セツリは幼い時に無くしすぎたのかも知れない。

でもそれでも、明日を諦める事が許される訳じゃない。ずっと怠けてて言い訳じゃない。アイツはちゃんと見るべきだ。自分がどれだけ大切に、そして愛されていたかを。

だから、こんな所で終わらせない。僕は……僕はセツリと当夜さんをもう一度、ちゃんと会わせたいんだ。

周りを埋め尽くす炎が勢いを増してる様に思える。元々風は炎をたぎらせる役目があるからか。このままじゃこの風に守られた体まで到達しそうだ。
そうなったら、僕の思いも半端なままだな。だけどそんな事はさせない。炎をも飲み込む風があるって事を、見せてやろう。掲げる二対の剣にありったけの思いを乗せてこう叫ぶ。
「イクシード――――――――――3！！！」
炎の海が開かれる。円を描いて、僕の周りを避けるように炎が消える。
「へえ、まだ上があったんだ。それが限界？　どうやら、スオウを殺さないと進ませて貰えないみたいだね☆」
炎の海の向こうから聞こえてくるシクラの声。ようやくこちら側に向いてくれたようだ。イクシード3には興味を注ぐだけの物があると感じられたらしい。
それは良かった。アイリの為の時間稼ぎは出来そうだ。僕はシクラから目を逸らし、上空のサクヤを見る。やっぱり泣いてるよ。そしてそんな主人の悲しみをクーも感じてる。
でもアイツはアイツで何も出来ないんだろう。不憫な奴だ。セツリの奴はその背中に居るはずだけど姿を見せない。でもまあ良いか。
僕はそのまま口を開く。
「おいセツリ！　そのままで良いから聞いてろよ。お前は傷つけてる。大切な物を自分から傷つけてる。全部都合良ければそれが幸せ

か！？

ならお前は、どれだけ身勝手でわがままかって事だ！！　誰もお前を叱らなかっただろう。誰もお前を怒らなかったんだろう。でも僕は怒ってる！　同情もあったけど今はもう、それよりも激情が勝ってる！

お前が幾ら逃げようとも、僕は必ず追いついて、そしてお前の頬を叩いてやる！！　打っ叩いてやるから覚悟しとけよセツリ！！」

僕はうねりが消えたセラ・シルフィングを向けてそう叫んだ。届いただろうか？　これであそこにセツリがいなかったら笑いぐさだけど、そんな事はきっと無いだろう。

ちゃんと打っ叩いてやるから覚悟しとけ……それは叱る側の宣言だ。ちゃんと怒ってやるは、ちゃんと見てるからの裏返し。

目を背けるんじゃなく、僕はちゃんと見てるから、アイツを打っ叩くんだ。それが友達としての役目で、目覚めさせた責任だろ。

「残酷だよねスオウって。まだあの子に辛い思いをさせるの？　それはどうなんだろう☆」

シクラが1足でこちらに向かってそう言った。月と同じ輝きを放つ長い髪を攻撃に使ってくる。堅くて強力な武器であるその髪は、防御も攻撃も厄介な性質を持ってる。

けど……だからって逃げる選択肢は今の僕には無い。炎が燃え盛る中、僕はイクシード3状態のセラ・シルフィングをその髪に向ける。

うねりが消えて、刀身が剥き出しになったその刃をだ。だけどその身に宿ってる流星が浮き出て周りを回ってるのが特徴的。白く煌めく物を流れ出してる。そして風のうねりは別に無くなった訳じゃない。

それは僕の背中から生え出てる様に延びてる。しかも四本。それはさながら風の翼だ。けれどイクシード３の一番の特徴なのか欠点なのか……それは力から雷が形を潜めてる事。

力は完全に風に偏ってる。でもおかげでこれは風系の力としては最高クラスかも知れない。月光色の向かい来る髪に、振りかぶる二対の剣を交差させる。

今まではどうやっても斬れなかったその髪。だけど今度は違う！

「言ったよなシクラ！　自分が辛いからって可哀想だからって、誰かをその代わりにしていい訳じゃない！！　それは絶対にアイツが背負わなきゃいけない物だ！！」

その瞬間、背中の風の翼が大きく膨らんでうねった。力が風の様に肉体を流れてくる。それも大量に。体が自然と押される。そして勢いのままに僕はシクラの髪を切断して前へと進んだ。

「うおっ！　とっとっとと……」

勢いが押さえきれない。だけどその月光色の髪がキラキラと風に舞っていく様を見て「いける」そう思った。だけどシクラの奴は驚きはしたものの、まだ余裕を崩さない。

「あれれ？　斬られちゃった。自慢の髪だったのにスオウは酷いね。女の子の髪は宝物の様に扱わなきゃ☆」

「何が宝物だ。自分をぶっさしに来る髪をどうやってんな風に扱うんだよ」

どうせなら丸坊主にしてやりたい位だ。まあそれは流石に可哀想かなとはちょっと思うけど。だが、やっぱりそれほどの余裕はねー

よ。

「それさえ受け止めるのが愛って物だよ。まだまだスオウはお子ちゃまだね。お姉さんが色々教えてあげよっか？　こっち側に来るのなら手取り足取り、体の隅々まで私頑張っちゃうよ☆」

「ばっ――――バカ言ってんじゃねえ！！」

風の翼が大きく動く。それに伴い、体を貫く衝撃を無視して僕の体は進んだ。シクラの奴がアホな事を言うから思わずな感じで飛び出した。

でもシクラの奴は今度は避けた。大きく右上方へ飛ぶ。でも逃がさない。僕は翼を強引に地面へ突き刺して、更に残った翼を動かして方向転換。

弾ける空気の圧力で骨や内蔵までも押し砕かれそうな感覚。だけどでも、そんなのこの力は考えちゃいない。そして流星の光が弧を描いて光った。

「ふっ……はは」

変な笑いがシクラから漏れる。そしてその瞬間、シクラの肩から血が吹き出した。通った！　これは完全にだ。

「スゴいねその風。私のシールドの隙間を縫うなんて、流星の風は伊達じゃないみたい☆」

「流星の風？」

初めて聞くワードだな。今この瞬間にシクラが作った感じだ。でもなかなかしっくり来るじゃないか。流星の剣にふさわしい力の名前だ。

「ええ、格好良いでしょ☆　でも……調子に乗らない方がいいよ」

その瞬間、再びシクラは僕の背後をとる。これはスピードなのか？　いくら何でも速すぎる様な……今の僕の胴体視力でも追いきれないなんて。

いや途中までは見えるんだ。それが突然消える様な。だけど今の僕は背中側にも武器がある。四本の風の翼が。僕は風の翼を動かして、体をアクロバットに操る。

シクラのパンチをかわして、その体に連続した攻撃を叩き込む。もうサクヤのお札なんか気にせずとも良いから、シクラに集中出来るよ。

さっきからお札は襲って来てるけど、僕の周りを覆う風は今や、炎をたぎらせない。

「これで！！」

連続攻撃のフニッシュ。これで終わりにしたい。そういう願いを思わず口にしてしまう。どれだけ効いてるかは実際わかんないし、口に出したって良い筈だろ。

シクラは意図的にかどうだか分からないけど、ＨＰを見えなくしてるんだ。そしてこいつも奴同様、見た目じゃ判断しにくい。

僕の攻撃は確かに当たってた。手応えを感じた。でも、どこかに不安がある。目の前のシクラは服も髪も乱れてボロボロだ。

今までを考えればそれはとてつもない進歩。でも……消えないんだ。このまとわり付くような不快感が。

そしてそれはいやな形で当たった様だ。二対の剣は確実にシクラ

を切断出来た。でも……その前に僕の体が止まった。
何かをされた訳じゃない。シクラは僕の連続攻撃を受けた態勢で背中側から地面に落ちようとしてるだけ。短くなった髪も動いてない。
じゃあ……一体何で……どうして……こんな事に。
「うっ――がっは！！」
大量の吐血だった。そして体の至る所に鋭利な傷が開いてく。体中から吹き出す血……目の前が真っ赤になった。
「う……うあああああああああああああああ！！」
叫んだ。叫ばずにはいられない。傷の上から傷が開くこの感覚。拷問でも受けてる様だ。
「だから言ったのに。調子に乗るなって☆」
「シクラ……お前、何を……」
地面に膝が付く、だけど倒れてない事を褒めて欲しい位だ。シクラは見た目ボロボロだけど、割と平気そうな顔で僕の方へ手を伸ばしてきた。
分かりきってる筈の答えを、ご丁寧に語りながら。
「私は何にもしてないよ。分かってるよねスオウだって。何でもかんでも私のせいにしないでよ。
それだけの力にも関わらず、イクシードが何で効率化なんてのを最初に掲げちゃったのか。それは今のスオウがそうなっちゃうからでしょ？
あはは、でも予想以上、想像以上だよ。そのコード、見てみたい

な☆」

伸びてくる手が変な光を放ってる様に見える。あの光がコードって奴を掴むのかも知れない。僕はきっと、シクラに言われる間でもなく、その可能性は考えてた。

イクシードは、イクシードのままできっと完成してる。じゃあ何でその先があるのか？　それは……それは――――

「やっ――――だね！！」

伸ばされた腕を僕はその一言を込めた剣で払う。同時に血も飛んだ。思わずクラッと貧血起きかけた。でも僕はもう一度、顔を上げる。体を上げる。

「やだね？」

「ああ……やだね！　お前は何だってそうやって無理矢理に強制的に探る！　そこがイヤなんだよ！！　プライバシーの侵害も良いとこだ！！

そんな裏技じゃなくて、もっと向き合えよ。もっとよく見ろよ！

それなら……好きなだけ僕を教えてやる！！」

体がガクガクで、血はダラダラと乾く前に開く傷で流れ続ける。でも僕は剣を向けた。眼差しを向けた。真剣に真っ直ぐに。

「ふ～ん、ちょっと今のはドキっと来ちゃったかも☆　いいよ、そんなに言うならスオウは特別だから付き合ってあげる。

でも、死なないでね。ううん、死んでも私を恨まないでね☆」

そう言ってシクラは、僕との距離を取る。

「コード『アルトナ』――――発動」
「上等だ。こっちはまだまだ、付き合って貰わなきゃ……いけないんだ！」

足取りが重い。だけどシクラが消えたのが見えた。じゃあ動かないと……本当に僕は死んでしまう。

「はぁはぁ」

ようやくたどり着いた城。本当にこれしかなかった。綺麗だった町並みも、活気づいてた広場も、沢山の思い出の場所がもうここには無い。
悲しいけど、嘆いてる暇なんて無い。私を信じて戦ってくれてる人達がいる。何も保証なんて無いのに、送り出してくれた人達がいる。
私はもう……何も無くしたくない。

「アイリ様、中に入れませんよ。シールドが邪魔してる」
「うん、分かってる。でも入り方も分かってるから」

私はセラからネクタルを受け取る。その神酒を僅か一口口に含む。アルコールは飲んだこと無いけど、これがそうだったら、一生私はお酒を飲みたくない程の味。
でも飲み込んだ。そして次に、カーテナを取り出し、その刀身にネクタルをかける。そして残った分は、容器ごと城の方へ投げる。そして一気にカーテナの力を城とネクタルへぶつける。

手加減無し、目一杯の力でだ。ガラス瓶は砕かれ、城が大きく揺

れる。するとカーテナと城が同じ光で同調しだす。

「これは……」

「ルベルナ様に教えて貰ったの。でもここからは私次第。本当は一人で行くべきなのかも知れない。でも私は弱くて、情けなくて、意気地なし。こんな大変な時なのに、もうダメダメで……

でも、それが私です。飾らないアイリ・アルテミナスの本性です。そんなの見せれるのはセラしか居なくて……ずっとずっと傍に居てくれたセラには見て欲しい」

あれ？　何だか早すぎる涙が溢れてくる。

「私の大一番……今度こそちゃんと飛ぶから……もう大丈夫だよって見せる。アイリ・アルテミナスは、貴女が思い描いてくれた通りの王女に成れる！！」

セラは何も言わない。私だけがボロボロと涙をコボしてる。でもそれを必死に拭って、私はセラに手を差し伸べる。それを彼女は取ってくれる。

それだけで心が安らぐ。でもまた泣きそうになる。必死に堪えてると城の門が重々しく開いた。そしてウインドウが開き、ある文字を表示させてた。

【王家クエスト、第四の試練　アルテミナスの名の乙女】

私はだけどそこまで呼んでウインドウを閉じた。分かってるから。この先に何が待ってるか私は知ってる。それを越えた時、私は真のカーテナの所有者に成る事だろう。

一体、どれだけの仲間が倒れて行っただろうか。そして自分もいつ、そこに加わる事に成るか。はっきりいって苦戦してる。
目の前のガイエンの仇。こいつだけは……そう思ってたのに予想以上に厄介な能力を持ってやがる。

「かはは、なあ赤髪。もっと食わせろよ。お前の存在、もっとくれ！！」
「ふっざけんな！！」

俺の槍から炎が出ない。何度やってもスキルは発動しない。最初はあんなに弱ってたのに、俺に傷を負わせる毎に奴は強くなってた。
そしておそらくだが、奴の黒い血はスキル封じだ。攻撃も防御も駄目……どうやってこんな奴！！

迫ってくる奴に、とりあえずの突き。でもこんなのじゃあ……そう思ってたら、どっかのバカが奴にぶつかった。

「どこのどいつだ！！　俺様の食事の邪魔するやつああ！」
「「邪魔はお前（君）だ！！」」

二つの声が重なって聞こえたと思ったら、奴が吹き飛んだ。そして現れたのはスオウとシクラ。どっちもまともな状態じゃない。
スオウは血塗れで風が変な所から出てるし、シクラのあの状態は何だよ。そして競り負けたのはスオウだ。

「おい！！　お前……一体」
「はは、随分苦戦してるみたいじゃん。同情する前に仕事しろ。僕たちを信じてるアイリの為にも死ねないだろ」

そう言ってスオウは血を吐いて、さらには垂らして起きあがる。その状態には流石に、何でと思わざる得ない。いや、俺は知ってる。こいつはこういう奴だ。

「もう諦めた方が良いよスオウ。幾ら頑張っても、体が追いついてないもん☆」

そう言いながらシクラはスオウに襲いかかる。確かにシクラの言うとおり、俺たちは風前の灯火だった。ＨＰの見えない敵に押されてる。仲間は次々と倒れてく。でもバカは言いやがる。

「そんなの関係ない！　それなら僕がお前以外も倒すだけだ！！」
「無茶ばっかり☆」
「無茶なんて最初から誰もがわかってる。でもな、その無茶を誰もが通そうとしてんだよ！！」

言葉が胸に突き刺さる気がした。あのバカはいつだって、自分の信じる事を正しくしやがる。そうだ……その通りだろ。スキルの火が封じられたからって、心の火まで無くしてどうする。
無茶を通すんだ！！　俺達は！！

「うおおおおおおおおおおおお！！！！」
「かっはは！！　火も起こせないそんな槍が通ると――――」

吹き飛ばされてまで余裕をぶっこいてた奴に、俺は槍をたたき込む。気合い一発、それは今までで一番深く突き刺さる。
黒い血が全体に付くが、そんなの関係無いんだ！

「――――無駄だ。こんな傷じゃ俺様は殺せない。そしてこれで、お前のスキルは完全に打ち止めだ」

胸に槍を突き刺されても奴は不気味に微笑んだ。けれど俺は、更に捻る様に槍を押し込んだ。

「舐めるなよ。この槍はただの槍じゃない。カーテナに次ぐ力で創造されたスキルそのものなんだよ！！」

その瞬間槍が消えて、再び引いた手に槍が戻る。その状態は新品同様だ。熱くたぎる炎を生みだし、俺は奴の体を再び貫く。

炎が奴の体を焼き、熱が爆発的な推進力を生む。それでもどうにかして逃げようとする奴に、今度はもう片方の盾を向ける。すると巨大な盾は、何個化に分裂して、奴の体に装備された。

それもとてつもない重量でだ。

「なっが！？」

「燃え尽きろおおおおおおおおおおお！！」

奴の黒い血さえも瞬時に蒸発させる炎。スキル封じも封じた。逃げる術も無いだろう。俺達は空を駆けあがる。奴を灰にするまで、止まる気なんか無かった。だけどその時、平行して飛んでる何かに俺は気付いた。空に付いてこれるモンスターなんか居なかった筈だけど？

でも奴等は来てた。羽を生やした何か。それもとてもいびつで、透明度が高い羽……あれは氷？

「くっ！」

邪魔されてたまるか。あと一息、多分その位で倒せる。俺は更に炎をたぎらせた。ＬＲＯの空がどこまで続いてるのか知らないが、こうなればいける所まで行くまでだ。

最悪宇宙に出たとしても、こいつは必ずここで倒さないといけない！！

雲を突き抜けて、夜空へと迫る。だけど勢いが落ちて来てるのがわかる。そしてあることに気付いた。あの付いてきてるモンスターっぽいのが、炎を次第に凍らせてる。

ぐるぐる二体で周りを回るだけで何もしてこないと思ったら、そうじゃなかった訳だ。こいつらはちゃんと目的があってそうしてた。

このままじゃ凍らされる。しかも高度は限界だ。盾の特殊な重さが腕に来る。けどその重さである考えが浮かんだ。

上手く行けば、こいつは確実に倒せる筈だ。ここまで来ても上が駄目なら……それならここまで来たからこそ下を目指すべきなんだ！！

最悪、地面にダイブしてやるよ。

「はは、良い眺めだな全く！　よくも……よくもこんなに全部、吹き飛ばしたもんだよお前達は！！」

なんにも無くなったアルティナスの地を見て俺はそう言った。俺は体を入れ替えて、一気に地上を目指し出す。その行動に氷の奴等は付いてこれなかった様だ。そもそも重量の桁が違ってるから、追いつけない事は必至だな。

ゴゴゴゴゴという空気の音が耳に響く。何も無くなった地面がみるみる迫る。奴は既に、抵抗する力を失った様だった。でもこの肉体を残しておくことさえしたくない。

だってそうだろ？　これはガイエンから搾取した物だ。返して貰おう……何もかも！！

「うおおお

止まることはもう出来ない……というか、最初から考えてない。突っ込む事だけだ。それでいい……これでいい……そう唱えながら、地面が迫る――――その時だ。
俺の体が急に止まった。当然地面に突っ込む事無く。でもそれはおかしな事。あの勢いはどうやったって止めれる物じゃない。

頭が混乱して、声すら出ない。今こうして空中に浮いてる事自体がおかしいんだ。止まるときだって、衝撃も何もなかった。
どんな力が働いたって言うんだ！？　まるで自分とこの周りの空間ごと掴まれた様な……そんな感覚がおぞましい。

「はあ、ほんとうにそういうの止めてくれない？　我が身を犠牲にしてもって奴。別に私に関係無い所でやってくれるんならどうだって良いんだけど、そこの汚いのはまだ、やらせる訳にはいかないの」

そんな言葉が頭上から降り注ぐ。俺は首を必至にひねってそこに視線を向ける。するとそこにヒイちゃんとか呼ばれてた奴がいた。
五対の氷の翼をその背に生やして空中に浮いている。あの羽はそうか……さっきの変なモンスターはこいつの差し金。でも一体何が俺を捕らえてるのかわからない。

アイツが向けてるのは扇くらいしか無いぞ。粉雪を舞い散らせるその扇……あれがアイツの武器なのか？
わからない……けど、アイツが扇を畳むと同時に、体の自由は戻った。でもただ地面に何の傷も出来ない程度の高さから落ちただけだ。当然奴はまだ生きてる。
俺の槍の先に存在してる。

（ならもう一度だ！！）

俺はすぐさま、再び炎を出そうとした。地面に叩きつけて終わらる事は出来なかったが、まだこいつは俺の手の内にいる。　幸い再びその存在が儚くなって来てる様だし、それはきっともう少しって事だろう。幾ら邪魔されたからって、このチャンスだけは逃せない。

だけどその瞬間、俺の両側に二つの人形が舞い降りた。氷の翼を生やした、ヒイちゃんにどこと無く似てるニ体の敵。そして一体が俺に蹴りを放って来て、それを防いでる間にもう一体が奴を槍から引き抜いてた。

「しまっ！」

と思ったけど、奴を救出した敵は飛び立とうとしてるけど飛べない様だ。奴に装備させた盾の重さが思わぬ所で役にたった。

今ならまだ取り返せる。俺は蹴りを放って来た奴を槍であしらって走り出す。いや、正確には走りだそうとした。でもそれは、凍った地面に阻止される。

見れば人形の翼が地面に刺さり、俺の所までの地面をピンポイントで凍らせてやがる。そして続けざまに空から降り注ぐ氷柱の数々。

周りが一瞬で白い冷気に包まれた。

「――――っつ、くそったれ」

氷柱が体に数カ所刺さってる。俺には流れ出る血こそ無いが、その痛みは結構な物だった。それにＨＰはかなり削られた。

空に目を向けると、氷の翼を大きく広げたあの女が気だるそうにしてる。ほんの一手間で自分なんて殺せると言うように。

あの氷の翼からさっきの氷柱の雨は降らされたんだろう。しかも、

このニ体の敵も厄介だ。

「そろそろ幕引きと行きましょう。私だってもう、帰ってお風呂に入って休みたいの」

翼から幾本もの氷柱が姿を現す。もう一度あれを打つ気か。確かにあの回避不能とも思える数の攻撃は驚異だ。でもまだ俺には救いがあるように思える。

氷は古から炎との相性が悪い。そう言う救い。俺は槍を空に向ける。立ち上がってくる熱気が次第に地面の氷を溶かす。

「まだだ……もう少し付き合って貰う！！」

天に昇る炎の柱。それらが放たれた氷柱を溶かしてく。体に刺さってた氷柱も溶けて、体も幾分か増しになる。

「うっわ暑苦しい……私の嫌いなタイプね」

「別に好かれようなんておもわねぇよ！！」

失礼な事を言う女だ全く。幼く見えるのにその視線はかなり厳しく冷たいぞ。だけどこいつに構ってられない。頑張って低空飛行で奴を運んでる分身に追いつかないと。

俺は炎がたぎる槍をまっすぐ向けて、そして炎を推進力に変えて突っ込んだ。ロケットのようなスタートで一気に加速する。

でもその時、同時に何かがくっついて来やがった。それはもう一人の分身。氷の体のくせに、そんなのお構いなし俺にしがみついてる。

「離れろ！！　この！」

分身のせいでフラフラ揺れる。どうせこのままでも溶けるんだろうが、一秒だって今は惜しいんだ！　でもこれが使命で天命みたく分身はしがみついて離さない。
すると空からあの女がうすら笑って言ってきた。
「ふふふ、ねえ教えてあげようか？　炎に溶かされない氷もあるって事を」
すると分身の身体が、炎を浸食するように広がりだした。我が身を削って、分身は俺の生み出す炎を凍らせてきてる。
信じれない。マジで炎を凍らせるだなんて。パキパキと言う音が耳元まで迫り来る。するとその冷たい手に頬を掴まれた様な――――後ろを向くとそこには凍った炎から胴体を出す分身が居た。
だけどもその姿も直ぐに崩れていく。だがそれと引き替えに、氷の浸食が進み出す。今までのパキパキなんて非じゃない。
氷が生え出すように出現して、俺の身体は……いや、俺自身が氷の牢獄へ閉じこめられた。
（こんな所で……結局俺は……何も……何一つ守れない。守り通せないのか？）
やりきれない思いがあふれ出す。すると頭に義務的なメッセージが流れてきた。
【貴方の状態は氷結化です。周りに頼れるプレイヤーが居ないのであれば、戦闘不能状態とみなしてのゲートクリスタル帰還が出来ますがどうしますか？
帰還を希望をしない場合は、三十分間その状態が維持されます】

帰還……それは負けを認めて逃げ出すって事か。いや、俺のゲートクリスタルの設定はアルテミナス……じゃないな。
なら易々と帰還なんて……でもこの状態じゃ何も出来ない。ただみんなの戦いを眺める事しか……俺は大切な時に、肝心な時に今度こそアイツを支えれる男に成りたかったのに……こんなの！

本当にデタラメだアイツ等。シクラもそうだがあの氷の翼の奴だって十分……炎まで凍らせるなんて、どうやってんだ。あんなのに勝ったんだなスオウは。
そして今も、命削って同じクラスの敵と戦ってる。それなのに俺は……これ以上誰かの負担に成っていいのか？　そんな訳無いだろ。

だけど今の状態じゃ誰も頼れない。いいや、そもそも頼っちゃいけない。まだ俺は死んじゃいない。まだこの手には力が残ってるんだ。
このままじゃあの女はシクラの加勢に行ってしまうかもしれない。それでスオウが倒れたら、俺は何て日鞠に謝れば良いんだよ！

「ふう、まあ良く頑張ったんじゃない人間？　でもね、そろそろ潮時よ」

近くまで降りてきたあの女が、見下した風にいいやがる。意識があると分かってて言ってるんだ。近くには分身の生き残りと担がれる奴の姿。
そこにはまだ俺の盾が分解してのし掛かってる。

（これだ！）

と思った。俺は動かない体で強く念じる。

（戻れ戻れ戻れ

そうしないとアイリの奴に大見得切った意味がない。するとその時、小さな丸い何かが空から降ってきて俺の盾に当たった。
多分それがキッカケだろう。元々入ってたヒビが広がっていくそして――――氷の檻が砕け散る。

「いってー！！　何だよここは？　何故に空中から？　アルテミナスのゲートクリスタルはどうなったんじゃああ！」

地面に降り立った俺は、そんな事を叫ぶ小さなモブリを見つめた。そして思わず口にする。知り合いの名前を。

「お前……エイルか？　どうして？」

その言葉にエイルは俺を見上げる。そして周りを見回してブツブツと「まあでもここで良さそうだな」とか何とか言って、杖を握り空を指す。そこには沢山の星が流れ出してる。

「どうしても何も、そんなのリルレットのピンチだからに決まってんじゃん！　ついでにさ、あんた等にも協力してやるよ。引き続き。
随分劣勢みたいだけどさ、大丈夫だよ。だってあの流れ星全部がアルテミナスに集うプレイヤーなんだから」

流れてくる星々は流星群なんて物じゃ表現出来ない程に多い。あれが全部プレイヤーだって？
それはまるで夜空が落ちてきそうな程の光景だ。だけどなんだか、いろんな事がありすぎたせいか、なんと無くだけど受け入れた。

「はは、あれが全部プレイヤーか。助かるな本当に」
「外のＬＲＯ掲示板じゃかなり騒がれてるぞ。それに画像もアップされてた。立ち上がる姫君に、しぶんでたエルフの大半が立ち上が

ったみたいだな」
「そうか……」

アイリは愛されてる。誰もが認める王になれる。俺でもガイエンでも無く、どうしてカーテナがアイリを選んだのか……この光を見れば誰でも分かるだろう。
アイツが居たから、この国は帰りたいと思える故郷になって、守りたいと思える国に成ったんだと俺は思う。アイツがみんなの心を繋げたから、まだ俺達には光が見えるんだ。

「ホント……スオウもだったけど、人って諦め悪すぎじゃない？」
「諦めれるかよ……ここは俺達の故郷なんだよ！！」

空を見上げてそんな事を言うヒイちゃんとか呼ばれてた奴。落ちてくる流れ星の中、俺は槍と盾を構え、再びその炎をたぎらせる。たぎる炎は、希望と言う尽きない燃料を手にした。

「「「「「シルクちゃん！」」」」」
「はっはい！」

一斉に名前を呼ばれてオタオタする私。だってだって、私はいつもは陰を薄くして地味～にみんなの回復とサポートをやるのが役目だもの。
こんなに名指しで頼られる事ってなかなか無い。しかも立たされるのは矢面だよ。それもこれもこのモンスター軍団がアンデット特性を身につけちゃったせいだ。

目が回る忙しさってのは経験してるけど、今の私の状況は今まで

とは違う。かなり違う！　攻撃の要として使われる筈の無かった私……でも今は私が……ううん私達ヒーラーがとても重要な位置を担ってる。

アンデット化したモンスターには通常の攻撃は効かない。魔法も通るのは光属性だけ。スキルも同じ。前衛だった人達が、誰も光属性の攻撃スキルを持ってない訳じゃないけど、この分野に置いて、その威力が私達ヒーラーに勝る者は居ないでしょう。

何故なら私達は頻繁にそれを使う。てか使わないとヒーラーとは呼ばれない。回復系魔法は全て光り属性ですから。よってスキルの伸びも光がダントツに高くなってるのがヒーラーです。

下手な攻撃よりも、回復魔法で敵が倒せるレベルです。よって私達は押しも押されぬフル稼働状態。だけど……

「ぐあああ！」「きゃあ！！」

断末魔の叫びが辺りで止むことが止められない。幾ら、私達が回復魔法で応戦しても、敵は圧倒的に多いんです。そして私達が攻撃に回ると言うことは、回復を担う者が居なくなると言うこと。

いつもならそこら辺のバランスを考えるけど、今はそうも言ってられない。

「エリアヒール３！！」

魔法陣内にいる敵をこれで一掃。ＬＲＯは視線と思いを汲んで判断してくれるから便利です。砂になって消えていくモンスター。だけどその後ろから次々と来ます。

終わりが見えない……助けれなかった人達が周りで次々に倒れてく……本当は助けれた人達。私は

「ごめんなさい」としか言えません。

「シルクちゃん！　君が今、要何だ！　ごめんと頭を下げるより、この場を守りきってアイリ君の為の時間を作る。その方が彼らは喜んでくれる。

そしてそれを出来るのは君しかいない！！」

「テッケンさん……はい！」

私はテッケンさんのそんな激で前を見る。沸き立ってるかの様なモンスターがそこら中……私がやらないと、ここに誰も守れない。そして私の頭上にピンク色の小さな子竜がいる。この子の存在こそが、私が他のヒーラー達より求められる理由です。

「ピク、ストック魔法ＮＯ７～１１リリース！」

「ピ～～～！！」

私の言葉でピクがその翼を目一杯開く。そして落ちて来る羽の四枚が、魔法陣を浮かべて私側へ。その一枚を指で掴んで「解放！！」と叫ぶ。

するとそれだけで魔法が発動されます。光がモンスター達に降り注ぐ。更に続けざまに二枚の羽を掴んで解放。魔法が終わらない内に私は詠唱開始。

ストックを切らせる訳には行きません。流石に減り続ける事を完全に止める事は出来ないけど、少しずつでもその瞬間は減らさないと。

詠唱完了と同時に、私は四つ目の羽を手に取り発動させます。そしてこの間に「リノケイト」を宣言。下から埋まっていくから、この魔法は三番目に入った筈です。

でもこのままじゃダメ。プラス一じゃ、直ぐに枯渇です。これまではなんとか、周りの人達のサポートでやってきたけど、その人数も少なくなりました。
どっち道、回復魔法は回復に使わないと自分の首を絞める事に繋がります。でも今はどうしようも無くて……ジレンマが私を襲う。
私じゃ役不足なんです。どうやったって私はヒーローには成れない。ましてやヒロインでもない。

「でも……支えたかった。そんな人達と私でも同じ場所に入れるこの力が、私は好きです！　だけど今は悔しい！
私だって……守りたいのに！！」

迫り来るモンスターが多すぎる。どれだけ魔法を重ねても重ねたりない。だけどその時、落ちてくる流星が私達の盾に成った。

「泣かないでくれよ。ありがとう俺達の国を守ってくれて」
「えっあ？」

訳が分からない……何で空からエルフの人達が降ってくるの？
それも一人二人じゃない……数え切れない星が落ちてくる。

「大丈夫だよ。まだまだ来る。俺達は決して、この国を諦めたりしないさ。出来ないよ……エルフでもない君達がこんなに頑張ってる。
それに……俺達のお姫様が立ち上がったんだ。その光に乗り遅れたい奴なんていない！！
絶対勝つ……勝てるさこの戦い」

そう言った彼は剣を抜き、モンスターへと向かってく。彼だけじゃない、星となって降りてきた誰もが、モンスターに挑んでく。
今ここに、確かな光が私には見える。

流星が地上に落ちて来てる。まるで早回しの様な星空から無数の星がだ。でもそれはどうやらプレイヤーらしい。盛り返す空気が伝わってくる。
そしてこの景色は、セラ・シルフィングにとてもあってるよ。流星の剣であるセラ・シルフィングにさ。だけど……

「はぁはぁ……がっはっ！！」

血が止まらない。もう一体何リットルの血液を垂れ流しただろうか。シクラの奴は見た目ボロボロだけど、息は切らしてないし。
ここまでやっても、どこかに僕とシクラには決定的な差がある。自分にとっての奇跡を、日に二度も願うのは図々しいんだろうな。

いや元々、あれじゃダメだ。あの完全雷化は諸刃の剣。今の僕じゃ発動した瞬間に死ぬよ。イクシード3は見た目こんなだけど、HPを削りはしてない。だから僕はまだここにいる。

（まだなのか……）

勢いは少しだけこちらに傾いて来てるのかも知れない。でもこいつが居る限り、それが覆される可能性は高い。こいつは僕とやり合って無くちゃいけない。そうしないと……

「あ～あ、雑魚が一杯降ってくるよ。ゲートクリスタル壊したから逆に憎い演出になっちゃったな。ねえスオウ、ちょっと安心した？
そんなことで気を抜いたら死んじゃうぞ☆」

シクラの羽が空間に広がる。そしてこちらに飛ぼうとしたとき、待ちに待った瞬間が訪れる。地響きと共に現れたそれは、城から浮かぶように君臨してる。
その余りの光景に誰もが城へ目を向ける。そして地面から光明の塔の残骸が姿を現し、その現れた巨大な戦乙女とも呼べるそれの手の中へと収まっていく。

金色の髪に、背中からは四本の白い羽。顔も体もすっぽり覆う鎧。乙女とわかるのは、彼女がその体型をしてるからだ。
そしてそんな彼女の主だろうアイリが、カーテナを引っ提げて戦場へと舞い戻る。ただ真っ直ぐに、こちら側に歩いてくるよ。その体は夜の闇に浮かぶように輝いてる。

「ごめんなさい皆さん。待たせてしまって。でも……これで終わりです」

その言葉は力強く、そして暖かい希望をはらんでる。偽りじゃないと、誰もがそれを感じただろう。

「終わり――――ね☆」

だけどそこで、面白がる様な声を出したのがシクラだ。アイツはアイリに飛びかかる気満々だ。

「ええ、終わりです」

だけど動いたのはアイリの方が速かった。その言い切った言葉と同時にカーテナを顔の後ろへ持ってくる。すると後ろの戦乙女も同様の構えを取る。
そして斜め下に振り抜いた。戦乙女が振り抜くのは光明の塔だっ

たそれ。光が残滓として残る。たった一瞬。何が起きたか僕たちはわからなかった。

けどそれはどうやら起こってたらしい。シクラの姿が見えない。そして周りのモンスター共が消えていく。それも大量に。

さっきの攻撃範囲に居た奴らが全部だ。でも、僕たちは何ともない。まるで力が敵だけを滅した様な状況だ。

「これが本来のカーテナの威力で、力です。全ての魔を滅する光明の光。それがカーテナの属性。そしてあの子が持ってるあれこそが、本当のカーテナです。

私のこれはいわばデバイスで、操縦管なんですよ」

アイリが自分の力を述べてくれる。誰もがハテナな顔をしてたからだろう。あれがカーテナの本当の姿。あれがカーテナの真の力というわけだ。

封印の解放には成功したんだな。どうりで輝いてるよ。眩しい位にさ。あの戦乙女の光は、まんまアイリの光だろう。とても強い……でも優しい。そんな光だ。

アイリは続けざまに二度カーテナを振るう。相性も良かったんだろうけど、それだけであれだけ苦戦してたモンスター共をあらかた一掃してしまう。

だけどその顔はまだ浮かない。アイリは本当の敵を見据える。

「凄いよ、本当に凄い。それだけの力……ふふ、コードが見てみたい☆」

アイリの奴は消えたんじゃなく、逃げてた様だ。とっさにやばさを感じ取ったんだろう。いつの間にかクーへと乗ってる。

「そんな事が言えるのは今だけです。貴女達だけは許しません！！
絶対に！！」

その宣言と共に、アイリはクーへ向かってカーテナを振るう。「ダメだ！！」と思わず言いかけたけど、それよりもアイリは速かった。光が夜空に走る。

あそこにはきっとセツリも居たはずだ。あれだけの攻撃……死んでもおかしくない。でもこんな事思うのは間違ってる。けれど思わずにはいられなかった。

今のアイツ等はみんなにとっての敵。それは最早、セツリだってそうなんだ。むしろ親玉みたいな感じだし……同情なんて出来ないよなアイリにとっては。けど僕は、どうしてもアイツの事を思わずにはいられない。

だけどその時、光から何かが飛び出した。それはアイリのわき腹を貫通する。

「つっ！？」
「アイリ！！」

攻撃を受けたアイリに駆けようとするアギトをアイリは制す。こんなの何とも無いと言わんばかりに。

「随分とひ弱な攻撃ですね。こんなのアルテミナスの痛みに比べたらどうでもない！」

アイリは再びカーテナを振るう態勢になる。確かに今のアイリにはそれだけの力があるだろう。終わらせられると思う。あんな中途半端な攻撃、シクラらしくもない。見えないけどさ、きっと効いて

るんだ。
いや寧ろ、これで効いてない方が怖い。その時、別方向から違う叫びが上がる。
「セツリ様……シクラ……に、人間風情が調子に乗らないでよ！！」
それは柊だ。柊が分身と共に、黒い奴を抱えてそこにいた。そして見たこと無いくらいに切れてる。クールさが売りだと思ってた柊が、完全に頭に血が上ってる。
そして今は五対になってる氷の翼を大きく開く。すると空にも地上にも、幾重もの魔法陣が現れ出す。何かやばい事をしようとしてる……それだけはわかる。
「人間風情……ならばその人間風情に負けるんですよ貴女達は！！」
アイリはカーテナを横に振るう。すると光明の塔の光は二本に分かれて、それぞれ空と地上の魔法陣を潰した。なんてデタラメな……
「なっに？」
流石の柊もこれには驚いた。たぶんとっておきだったんだろうそれが潰されたんだ。当然かも知れない。そしてそんな呆けてる柊に、アイリは今度こそ肉体を狙ってカーテナを向ける。
「この地でこれ以上何もさせない！　貴女達はやりすぎた！！」
戦乙女の剣が、真っ直ぐに柊へ延びる。だけどそれを、シクラが体を張って止めた。自身の羽を使って柊を覆い隠して守ったんだ。
だけど流石のシクラも、完全に守れなかった様で、後ろへ押し返された。

シクラの空間に描かれた様な羽が消えていく。それと同時に、天使の輪も消えて通常状態に戻ったように見えた。

「あ～あ、ヒイちゃん無茶しすぎだよ。でも嬉しかったよありがとう☆」

「シクラ……セツリ様は？」

「大丈夫、私を誰だと思ってるの？　ヒイちゃんのお姉ちゃんだよ。今の私でも二回は防げたから、上出来でしょ☆」

その言葉を聞いてホッと胸をなで下ろす柊。僕も実際、ホッとしてた。でもあいつ等がやったことはやっぱりどうしても許して良い事じゃないから、複雑だ。

セツリは逃げ出す事で罪を犯してる。自分がしてないにしろ、それを望んであっち側に行ったセツリに罪がない訳がない。

もうただじゃ戻れない……僕たちだけの問題で済ませれる領域は越えてしまった。

「安心なんて早いよね？　言ったでしょ……私は許さないって！！」

アイリはカーテナを大きく振るう。これは全てを終わらせる一撃だ。この長い戦いの終演を告げる事になる攻撃――――だった。

「やめて！！」

そんな言葉と共に、セツリが二人の前に出てこなければ。アイリは思わずカーテナを止める。まさに寸止め。戦乙女の剣は、セツリの首筋で止まってる。

ハラリとその栗色の髪が僅かに、風に浚われていく。だけどセツ

リは強く強く、アイリを見据えてた。

「退きなさい。これはケジメです。これだけの事を犯したその存在を、このまま放置するわけには行きません。私はこの国と民を守るために、その二人をここで殺します！」

ハッキリとしたアイリの言葉。そこにはもう迷いなんてないんだろう。あいつは背負ってる。この国と民全部を。その肩にだ。

そしてその言葉は、恐ろしく正しい事だと思う。確かに放置なんて出来ないだろう。シクラと柊の力は強大だ。そんなのを見逃す事なんて誰だってしないだろう。

アイリの決意は正しい。そしてそんなアイリに対して、セツリの言葉はとても身勝手な物だった。

「いやいやいやいや！！　絶対にいや！！　そんな事させない！　絶対にダメなの！　二人は私の為に動いてくれたんだもん！二人は悪くない！！」

「なら悪いのは貴女です！！　代わりに死ぬと言うんですか！？さっきまでなら二人を滅して終われたのに……この世界は、ＬＲＯは貴女のワガママの為にあるんじゃない！！」

アイリのきつい言葉に、セツリの目からはポロポロと大粒の涙が落ちてくる。でも、何を言えるんだろう。アイリの言葉は最もなんだ。僕だって同じ様な事を言った気がする。

だけどセツリは引かなかった。自分勝手でワガママで、そんな自分のまま叫び通す。

「私の為の世界だもん！！　ＬＲＯは私の為にお兄ちゃんが作ってくれた世界！　変な理屈なんて持ち込まないでよ！！

私はただ幸せでいたい……普通で居たい。それの何がいけないっ

て言うの！！」
「――――っつ！！　こっの分からず屋あああああ！！」
耐えきれなかったアイリが力を込めてカーテナを振るう。セツリの甘ったれた言葉にカチンと来たのかも知れない。実際僕はカチンときた。向き合ってるのがアイリじゃなかったら横から割って入る所だ。けどその思いをどうやら僕は実行してた。まさに思わず体は動いてたんだ。
イクシード３の力を使って一気にセツリの所まで跳ね上がる。体中から血が溢れ出てきてその事実に気づいた。
「あれ～？　何やってるんだろう僕」
そう思わずにはいられないな。でも良かったとも思えるかも。
「なっ！？　スオウっ君！」
「あのバカ、アイリは手加減くらいしてるってのに！」
テッケンさんとアギトの呆れる声が聞こえた。だけど手加減？　バカ言ってんなアギト。セツリがどれだけ吹かれ弱いか知ってんのか？　デコピン一発できっと折れるぞこいつ。
そんなこいつがあんな強大な力をくらって、ただですむわけ無い。手加減にだって限界はあるだろ。その限界の遙か下なんだよセツリは。
でもだからって、助けに行った訳じゃ僕は無かった様だ。自分でも驚いたけど、僕は拳を堅く握ってる。
「いい加減届かせろよセツリ！！　打っ叩いてやるって約束したろ！！」
「スオウっ――――――きゃ！」

僕はその思いを込めて拳を振るう。思わずセラ・シルフィングを投げ捨てたじゃねーか。
それだけしてもの“今”だった。まだ今日と言う日に取り返せると思ってた。これは最後のチャンスだった。だけどそれは、突如開いた空の門から飛来した白い柱のシールドに阻まれる。
五本の柱が狙いすました様な位置に刺さったんだ。それはセツリ達を囲む場所。そしてその瞬間、僕の腕もカーテナの攻撃も弾かれた。真っ白で、光が走る様なこの柱を僕は知ってる。
これは……まさか……
「ありがとうスオウ。君のおかげで僅かにカーテナの動きが鈍って助かったよ☆　そしてちょっと遅刻気味のみんなに私は怒ってるんだけど～。
せっちゃんがとっても危なかったんだからね！！」
「な……に？」

シクラの言葉が理解できない。まさか、セツリは時間稼ぎの為に出て来たのか？　それにみんなって……僕は地面に何とか着地して上を見る。
するとその柱にはそれぞれに人影らしき物が見えた。流石にこの距離だと、顔までは見えないけど居る。そしてそいつ等の声が聞こえてきた。
「はは、座標にちょっと戸惑ってな。なにせ私たちはまだこっちに来るのに馴れてない。許せシクラ。それにセツリ様も申し訳ありません」
「ほんと、まったく肉だるまに任せたのが行けなかったのよ。それにそこの脳天気が大見得切った割には苦戦してるじゃない？
面白くって一瞬だけ、ほんの一瞬だけ行くかどうか迷ったわ。あ

あ勿論。セツリ様の事は万全に考えていましたわ。お間違えなく。どうでもいいのはそこのアホですから」
「ふふふ～やっぱ外の空気は違うね～。なんか臭いけど、それが外なら私は受け入れちゃうね！　あはっは～人間ってほんとゴミの様だぜ！」
「あ～もう何なの？　隣うるさい。私生きたく無いのに、こんな所まで引っ張ってきた奴……みんなみんな死んじゃえばいいんだ。あれ？　私が死ねばいいのかな？」
「こらこら、一人で勝手に自殺をしようとしない。私たちは姉妹なんですよ。その絆は海より深く、天よりも気高いものの筈です。
悩みがあるなら共に悩み考えましょう。それこそ美しき姉妹愛……いいえ百合です！」

なんだか、聞いてるだけで疲れてくる言葉だな。どんどんセツリ達を心配する気配無くなってたし。最後の奴なんか、なんで残念な方に言い直した？
その時、アイリが再びカーテナを振るう。光の剣が白い柱を両断した……様に見えたけど、中身には何も影響無かったようだ。

「無駄だよアイリ。この柱の空間内は私たちの領域。ここは今、アルテミナスじゃないの☆」

まさかそんな事まで出来るとは……今更驚きもしないけど。でもカーテナの絶大な力がアルテミナスに起因してるのなら、確かにあれには効かないのかも知れない。

「シクラ……どうするの？」

そんなセツリの言葉に、誰もが息を呑むのが聞こえた。無理もない。だって同じ存在があれだけ揃ったんだ。次の言葉はアルテミナ

スの運命を左右しかねない。

「アルテミナスは……必ず守ります！！」

そう宣言して、アイリはセツリ達を強く見上げる。だけどシクラの言葉は意外な程、拍子抜けする物だった。

「そんなに怖い顔しなくてもいいのに。せっちゃん、私たちも帰ろっか？」

「いいの？」

「うん、大丈夫☆　取り合えず一番重要な目的は果たしたし。それに……潰そうと思えばいつだって潰せるもの、こんな国」

その言葉に、アイリがカーテナを動かした。だけどその突きは、決して向こう側に行けない。光が周りに溢れ出すだけだ。

「痛み分けって事にしといてあげる。今日の所はね。だけど次は、もっと強く成ってるかもしれないよ☆」

「痛み分けなんて！」

ギリっとアイリは強く唇を噛んだ。ガイエンの事を痛み分けなんて事で済まそうとしてるシクラが許せないんだろう。

実際こっちには痛みしかない。街も友も失ったんだ。それを痛み分けなんて言葉で済まされたら堪らない。僕もこのままセツリを行かせる訳には行かないんだ。

だからもう一度……そう思った時、血が口から溢れ出る。

「がふっ！　がぁっ！　――づあっ！」

イクシードが消えていく。時間か……それとも限界？

「そうそうスオウ。勝負は預けておくからね。またやろうね。だからそれまでイクシード3は使わない方が良いよ。これは本当の優しさからの忠告☆
それは命を削る力だよ」
「くそっ……たれ」

そんな忠告、聞けるかよ。それに言われるまでも無いことだ。やばい事くらい分かってた。だけど目的があって、それを貫く為には力が必要なんだよ。
そもそもお前等が余計な事しなきゃ……セツリだって……セツリだって……

（本当に……シクラ達のせい……か？）

セツリの言葉が沢山流れてくる。もしかしたら、いずれこうなってたのかもしれないと思えるかも。だけどまだ、向き合ってはいたんだ。
あんなに情けない奴じゃなかった……どうして……

（ああ……僕のせいでもあったんだっけ）

僕が諦めたからセツリも諦めた。それだけの事。でもあいつが諦め続けるのは……それだけじゃないだろう。あれはきっかけに過ぎなかった。
でもそこに自分に優しいあいつ等が現れたんだ。そしてそれを許された。楽な道を選ぶななんて僕は言えない。けどな……間違った道を選ぶなとは言えるつもりだ。
僕は必死に顔を上げて言葉を紡いだ。

「セツリ！　お前がこれからやること……やらせること……それがどういう事か分かってんのか！？」
「分かってるよ。私は私の為の世界をシイちゃん達に作って貰う。だから折角だから言っておこうか？　奪われたくない……傷つきたくない人達はＬＲＯから出ていって。
ここは私の……私の為の世界なんだから！！」

セツリの奴は言うように成ってた。僕から言わせれば、変な自信がついたって事だけどな。本当に……どれだけ世話の焼ける奴だよ。生かしたい、それすら難しい。

「スオウ……私は勘違いしてたみたい。私はスオウを王子様って思ってた。だけどスオウは違ったんだよ。スオウは私を幸せにしてくれる王子様なんかじゃなくて……本当は私を虐めたいいじめっ子なんだよ。
だから……二度と私の前に現れないで、このいじめっ子。殴ろうとしたこと、私は忘れない」
「はは……」

いじめっ子か……なんだか自分が何でセツリの為にって思ってやってる事が無駄に思えてくる。いや、違うか、セツリの為になんて……おこがましい事だ。そうじゃない。
僕はただ……自分の意志であいつに生きて欲しいと願ってるんだ。こんなにお前の為に……なんて言わない。僕が勝手にお前を助けたいだけだ。

そう考えると邪険にされても目じゃないな。好き勝手にやってるんだ、なんと思われようが良いじゃないか。だからまだ言える……まだ言うことが僕にはある。

「そう……か、まあなら、僕はいじめっ子らしくお前に社会の厳しさを教えてやるよ。子供はさセツリ……いつまでも子供のままじゃ居られない。
成長は……止められない。それに逆らったって……苦しいだけだぞ」

僕は力無くその場に倒れ込んだ。本当に限界だ。これはマジ……やばいかも。死……そんな言葉が脳裏を掠めた時、かすかな声が僕には聞こえた。

「死んでよ……もう、本当に」

すると不思議な事に「絶対に死ぬか」そう思えて来る。口元が僅かに上がった。きっと僕は、まだ笑ってるんだろう。

光が消えていく。セツリ達が去って、アイリも戦闘状態を解いたんだろう。勝利……とは言えないかも知れないけど、僕たちはこの日守りきったんだ……アルテミナスと言う国を。
空は僅かに色を変えて、今日という夜に終わりを告げる。

輝ける国（後書き）

第百七十三話です。

これにてアルテミナス編は終了です。長かった……本当に長かったです。そして今回の本文は今までの倍の量あります。マジで書いても書いても終わらなくて、いっそ分けちゃえ！　とか思ったけど、そこは気合で全部書きましたよ。

流石にこれ以上引っ張るのもどうかと思ったんで。これで最初の大きな話は終わった訳で、さてさてこれからどうしようかってな感じです。まあ構想はあるけど……どうやって持っていくかが問題です。

まあ取りあえず次の回は久々のリアルです。この話の後日談を交えながら、次の展開へと入って行きます。

てな訳で次回は、土曜日に上げます。それではまた～。

白いベットの上で（前書き）

長い長い戦いが一応の決着をみた。沢山の痛みと傷を確かに残したと思ったあの戦いは、どうやらまさにその通りだったらしい。何故なら僕の体には、無数の傷を隠す包帯がこれでもかと巻かれてる。

あれから二日……僕は今、リアルへと帰還した。

白いベットの上で

ドタドタドタドタ――――そんな音が聞こえる。ガタガタガタガタ――――そんな振動も伝わってた。そしてズキズキズキズキ、そんな痛みが全身を襲う今日この頃……僕はめでたく絶賛入院中です。

「――――て、全然めでたくね――――――――――――――――!!」

しまった、つい自分の現状に自分自身で突っ込んでしまった。まあより現状を説明すると、ここは病院でありまして、僕は二日前位にここに緊急搬送された……らしいのです。

らしいのですってのは、僕はその時の事を覚えてないので、人伝に聞いたところはそういう事らしいんです。てか二日前……とある事件（というか殆ど戦争）がやってた間に、僕は既に病院へ搬送されたらしいんですよこれが。

なんとまあおっかなびっくりの事実です。自分的には、あの最後の瞬間……周りが勝利に沸き立つ中、ひっそりと落ちていった後にでも、自分でどうにかこうにかして、１１９をダイヤルしたと思ってたら、もっと前から病院だった？

おいおい、じゃあ僕は緊急搬送される程の怪我のまま、あれだけの死闘を繰り広げてたって事か？　まさに片足棺桶に突っ込んだ状態って奴だよ。

全く自分が恐ろしい。マジで死に逝く五秒前じゃねーか。むしろ生きてる事の方が奇跡みたいな感じだよ。てか医者にさっきそう言

われたし。
僕が目を覚ましたのはほんの十分前位なんだ。そこであれやこれや伝えられて……それから「少し落ち着いたら話そう」などと佐々木さん達に言われたんだっけ？

なんせ二日寝た後の寝起きだったから靄がかかってる感じなんだよね。だけど……一つだけハッキリ覚えてる事がある。
それは日鞠の事だ。あいつ僕が起きた直後に、泣きながら抱きついて来るものだからさ。しかもけが人を抱きしめる力が異常だった。

怪我のせいで余計に強く感じたのかも知れないけど、それでも痛い位だった。でもその声が……香りが……僕がリアルに戻ってこれた事の証みたいに感じれた。
安心したって言うのかな。僕は思わず「ごめん」と謝って、そして「ただいま」と日鞠に伝えた。すると日鞠は「おかえり」とだけ言ってくれた。

やっぱり怒ってるのかも知れなかったな。あの時はきっと、喜びの方が上回ったから何にもなかったけどさ、落ち着いて戻ってくる来た時には、流石に説教がありそうだ。
「幾ら何でも無茶しすぎ！」とか「どうしてそ容量悪いの！？」とか、自分基準の事を言いそうだ。誰でがお前みたいな超人じゃないっつーの。

まあだけど……なんだかそういう説教、実は楽しみにしてたりして。別にMに目覚めたとかじゃなく、もっともっとリアルを感じたい様なさ。
僕にとってのここでの生活は、アイツがいないと始まらないし。おいおい……そう考えると、僕は主人を待ち続ける愛犬かと思えてくるな。

どっちかっつーと、僕がもの凄く世話を焼かれてるんだけど……人間関係って複雑だ。

カーテンが風に揺れてる。木漏れ日がもう暖かいな。後数時間もすれば、嫌気が指すほど太陽が頑張り出すんだ。今はそういう季節。

空は低く、雲の中に天空の城があれは絶対にあるぜ！　って思える程の入道雲がそびえてる。

（夢……）

だったんじゃ無いかと、こんな静かな空間に一人居ると思ってしまう。体中を刺激する痛みが、そんなわけ無いと告げてくれてるんだけど、何となくそんな思いが沸いてくる。

僕は窓から視線を外し、近くの棚に目を向ける。そこには僕達をＬＲＯへと誘うゲーム機が置いてある。頭にスッポリ被る形の機械的なヘルメットみたいな奴だ。

まああんな形でも、意外と軽かったりするんだ。だから長時間の使用もＯＫ。推奨はされてないけど……しかも元々横に成ってが前提だから、重量は結構どうでも言いような気もしなくはないな。

そんなゲーム機を手に取ってみる。う……さっき結構軽いとか言ったけど、こうやってみると意外と重く感じるな。

ズシッと腕に来るような……単に僕が弱ってるだけだからだろうか？　何とかベットの上に持ってきて太股位におく。

なんだろうな……まだ買ってから一月も経ってない筈なのに、もっと前から持ってた様な気がするよ。まあそれだけ、ここ数週間はこいつに世話に成りっぱなしだったからな。

でもまだまだ綺麗だ。数週間で傷だらけに成るわけも無いけどさ。

ゲーム機の登頂部に手を置いてナデナデしてみる。なんだか褒めてあげたくなるじゃん。

ほんと凄いんだからさ、ＬＲＯは。それの扉を開いてくれるこいつは偉い。スッゲ〜よ。ナデナデナデナデ……ナデナデナデナデ……

たった一人の病室の中で、木漏れ日がゲーム機のメタリックなボディに反射して、僕は目を細める。そして手も止まる。

なんとなく、本当に何気にだけどさ、それを被ろうと持ち上げた。だって気にならない訳が無いじゃないか。別にダイブしなくてもそれを知る術はある。

その位は許されるだろう。

でもその時、ガララとドアが開いた。そしてうるさい声が高らかに響く。

「あああああ〜〜〜〜〜！！　スオウがスオウが私との約束破ろうとしてる！！」

それは紛れも無く日鞠だ。自販機で買って来たんだろう缶ジュースを胸に抱いて、もう一方の腕を振り回しながら嘆いてた。

「別に、ダイブする訳じゃないよ。ただ単にサイトにアクセスするだけだ。それに約束って何だよ？　そんなのした記憶ねーぞ」

僕はため息付きながら、ゲーム機を被る。すると日鞠はスタスタと歩いてきて、缶ジュースを脳天にズバーンと振り下ろした。

「ってぇぇぇぇぇ！！　何すんだよ！　幾ら頑丈だからって壊れたらどうするんだ！！　いや、そもそもこっちはけが人だ！！」

なんて酷い事を躊躇わずにやる奴だ。二重の意味で最悪だ。ゲーム機を壊そうとしたことと、病人の怪我を増やそうとしたことな。
本当に信じられない。躊躇というものが微塵も無かった。一瞬なにされたか分からなかったもん。

「酷いよスオウ。私の気持ちも考えないで……」

少し震える様な声で日鞠はそういった。なんだか日鞠が急に汐らしくなるとズルいな。僕が悪く感じる。攻撃されたのに。
でも確かに、浅はかだったかも知れないと思う。日鞠はこの二日間ずっと傍にいてくれたんだ。死にそうだった僕を僕よりも知ってる。
心配だってずっとしてくれてたのは間違いない。「私の気持ちも考えないで……」確かにそうだ。

「ごめ――――」

僕はしょうがないから素直に謝罪をしようと思った。だけどその言葉に、日鞠の言葉が重なった。

「一緒に成ろうって言った傍からゲームだなんて！　せめてラブラブの新婚生活をエンジョイさせてよ！！」
「はぁ？」

あれ？　なに言ってんのこいつ？　近頃暑かったらしいから、頭に変な虫でも沸いてんじゃないか？　元々沸いてる様な奴だったけどさ、今のそれが僕を叩いた理由だとしたらそれは、怒って良い筈だ。

「あれ覚えてない？　大丈夫大丈夫！　ちゃんと誓約書もほらここ

に！」

そう言って日鞠はコピー用紙の様な紙を取り出した。そこにはパソコンで書かれた文章と、その下に赤い手形？　が押してある。

「ＤＮＡ調べれば、これがスオウの血だって分かるよ！」

「血判じゃねーか！！　人が血を吹き出して病院に運ばれてた時にお前は何やってたんだ！？」

「心配してたよ」

キラーンとウインクをする日鞠。

「嘘付け！！」

そんな決め顔をする奴の言葉なんて説得力ねーよ。せめて治療の後なら、納得は出来ないけど分かってやる。でもさ、そのべったりと付いた血……滴ってんじゃん！！

絶対に危ない時に、それやったよな！？

「違うよスオウ。スオウの血は全然止まらなかったから、血判には事欠かなかっただけだよ。だって傷が塞がらなくて、増えてくんだもん」

「そんな状態の時に良くやったよそれ！！」

何そそくさとそんな誓約書まで作ってんだ。頭痛い。目の前のこいつが恐ろしい。でも流石に僕の思いが伝わったのか、日鞠は急に拗ねる様にしてこう言った。

「もう、しょうがないからこれは冗談でもいいよじゃあ。だけどねスオウ。私がちゃんと心配してた事は本当だよ」

「どの口がそれを言ってんだ？」

う～んなんだか、異様に腹が立つ様な……なんか寂しい様な気分に自分は成ってる。この気持ちをどっちに傾かせればいいのかわからん。

僕は日鞠から顔を背けて、ゲーム機を操作する。すると目の前にデータを出力するための画面が降りてくる。するとガツンと再び缶ジュースで小突かれた。

「お前な！！」

「ほらほらスオウ、良く見てみてよ誓約書。どこかおかしな所があるよ」

何でまだ瞳を輝かせて語ってんだコイツ。しかもどっからクイズ形式に成ったんだよ。てか……その誓約書、見たくもない――――ああ、あったやおかしな所。

「存在事態がおかしいなそれ」

これは当たりだろうと、確信もって僕は言えた。うん、自信満々だ。見覚えがない誓約書は、存在事態がおかしい筈だ。犯罪の匂いがするぜ。

だけどどうやら、日鞠にとってはそう言う事じゃないらしい。おもいっきり否定されたよ。

「違う違う全然ちが～～う！！　これの存在は正当です！」

さっき冗談って、コイツ自身が言わなかったっけ？　まあ既に突っ込むのも面倒だから良いけどさ。すると勢い混んで、日鞠は誓約書を僕の鼻先近くに押しつける。

いやいや、ここまで近づけたら逆に見えねーよ。

「この血判！　この手形！　なにかおかしいと思わないの？」

「何がって……」

僕は必死に体を後ろに反って手形の血判を見る。う～んどこからどう見ても、グロテスクなんだけど。てかこの態勢きつい。痛い。

けが人に対する扱いが酷い。今やもう、目覚めた直後のあの行為すら、やっぱり嫌がらせだったんじゃ無いかと思えてきた。

最近、僕の扱いが酷くないかコイツ。あんまり家に来ないし（会わないだけだけど）。別に寂しい訳じゃないけど、毎日の図々しさが懐かしいって言うか……なんか存外に扱われてる気がする。

「何がだよ」

僕はやっぱり存在しか思いつかないぞ。

「全く、スオウは私の事以外盲目だよね」

「なんだそのさりげなく放り込まれた物騒な言葉は！？」

余りの自然さに、相槌を打ちかけたじゃねーか。顔色一つ変え無い所か、自信満々に言い切りやがったな。だけど日鞠は、僕の驚きを軽く流す。

「はいはい、私は分かってるかいいよスオウ。しょうがないから、答えを教えてあげる。ねえスオウ。この手形、スオウのにしては小さいと思わない？」

「……う～ん、まあ言われてみれば」

手のひらだから解りにくかったのかも知れないけど、確かに小さいな。それに指が細くて長い。女子の手の判断って普段は手の甲側でやってるから気付かなかった。

だって手のひらを見て、「綺麗な手をしてますね」って言わないもん。って事はこれは女子の手な訳だ。それもここでの女子は、目の前のコイツしかいない。

「お前の手って事は理解するけど、どう言うことだ？」

「つまりね、この手は私だけど、血は確かにスオウの血なの。これはまさに、私がどれだけスオウを心配したかの証。信愛の血判だよ！想像してみて」

想像って……日鞠はあの日を思い浮かべる様に目を閉じる。その顔が異様に近くて、目のやり場に困ったから、僕も目を閉じた。

すると日鞠の声に吸い込まれる様に、引っ張られる。映像が頭に浮かぶ。

「あの日、スオウは血塗れだったんだよ。そんなスオウの手を私は躊躇わず握った。握り続けた。どうやっても血が止まらない。

傷は増えていくばかり。大量の輸血を続けて、何とか持ちこたえさせてた。でも、輸血する血も無くなるかも知れないって……そう言われたんだよ。

医者にはどうにも出来なかった。でも私には握る事が出来たの。それが出来るの。信じて信じて、スオウは絶対に死んだりしないって思いを込めて、血が溢れ続ける手を握ってた。

でも私もただの女の子だよ。自分の手に満遍なく付いたスオウの血を見て、その思いが一度くらい揺らがないなんて思う？

ふと私はこの血が暖かい内に自分の夢を叶えたいっておもった。嘘でもいい。酷くったって構わない。私達の仲を表す証明が欲しか

った。
だから私は……鞄から誓約書を取り出して、震える手でそれに血判をつけたの。でもそしたら、嘘じゃいやだと思った。そしてこれが本当に成るように願いを込めて手を握ったよ。
そしたらね……スオウは今日、目を覚ましてくれた」

目を開くと、そこには優しく微笑む日鞠が見える。太陽の光がそんな彼女を照らして見えた。白い肌、頬は僅かに赤み掛かって、目は良く見たら赤いじゃないか。
綺麗な黒髪を、今時珍しい三つ編みにしてて、その長い三つ編みがゆらゆら揺れてる。実際これは、日鞠には余り似合ってないと僕は思ってるんだけどな。

日鞠は内気じゃないし、文学少女な訳でもない。出来ない事は無いんじゃ無いかと思わせる程の、アビリティを有するバグキャラだよ。僕から言わせれば。
ＲＰＧで言うなら、「伝説の勇者」とか「英雄」的ポジション。そんなイメージの奴が、三つ編みってさ……だけど日鞠はそれを気に入ってる様なんだ。

僕から見れば、必死に普通を装ってる部分が三つ編みだけって感じだけどな。周りには、その似合わなさのギャップでトレードマークに成ってる風もあるんだけど……まあ僕は、この三つ編みを解いた時のギャップの方が好きだから良いんだけどね。
三つ編みをやめたら、それを感じれなく成ってしまう。

「どうしたの？　納得出来ない？　う、嘘じゃないよ」

目を開いたのに何も言わない僕に、日鞠が不安そうにそう訴える。うぬっ……またそう言うズルい顔を。僕は誓約書を奪い取って破り

捨てながら言ってやる。

「信じるよ。お前は肝心な所では嘘なんて付かないからな。でもただし、こんな物は残しておけない」

「ええ〜」

残念がる声を出す日鞠。「額に入れて飾っとこうと思ったのに……」とか妙な言葉が漏れ聞こえてきた。なんて恐ろしい事を考えてやがったんだコイツ。

せめて、誰にも見えない場所に大切に保管しとくんなら、かわい気もあるけどさ〜それはどうよ。なんか痛いよ。

僕はビリバリと誓約書を破き終えると手を止める。そして包帯だらけの自分の手を見つめて、顔を上げないように気をつけながら口を動かす。

「別に……こんなのいらないんだよ。ちゃんと居るからさ、帰ってくるから……心配するななんて言えないけど、誓ってやる。

死なないよ……僕は、絶対に」

「……うん！」

日鞠はようやく、いつものヒマワリみたいな笑顔で笑った。太陽を一身に浴びたようなその笑顔は、いつだって僕には眩しい。眩しすぎる位だ。僕はそう感じるのが、世界中の誰もと共感出来ると信じたい。

だってそうじゃないと……自分の矮小さに死にたくなるじゃん。

まあ取りあえずは、今は誰もがそう思ってくれてるみたいだけどな。

プシュッ――――ジュワジュワジュワジュワワワ〜と缶ジュースの中身が溢れでてる。日鞠が僕に気を使って、プルトップを開けた

ら、どうやらそうなったようだ。
てか、炭酸をバンバンと僕の頭にぶつけてたのかよ。本当はそれも僕に開けさせる気だったんじゃないだろうか？　でも思わず良い方向へ話しが言って、甲斐甲斐しさでもアピールしようと思ったら、自分の策に自分がはまったと……そう言う可能性も無くはない。

まあでも普段、コイツって僕の事ばかり考えてるからな（決して自慢とか、自意識過剰とかじゃないよ）。嫌がらせも甲斐甲斐しさも、日鞠にしてみればどっちも本気なんだ。
だからこそ、あの慌てようだ。

「わわったっちょ――――――ぬばばぁぁぬばばぁぁ！！」

なんだよ「ぬばばぁぁー」って。

「おい、こっちに向けるなよ！　ベットが汚れるだろ！」
「飲んで飲んで！　勿体無いよ！」
「ああ――――――ったく！」

自分の後始末を僕にやらせるのかよ。僕は向けられた缶ジュースのシュワシュワやってる所に口を付けて吸いまくった。だけど――――

「ぐはっぐはっ！　流石に全部は無理だ。キツすぎる」

それに、口の中まで傷があるのか知らないけど、かなり凍みた。これは当分、食事も辛そうだ。
僕が缶ジュースから離れると、日鞠の目がマンガ表現みたくキラーンと光った気がした。そして今度は日鞠が缶ジュースを自分の口元に持っていく。

「よし！　これで間接キスだよ！！　頂きます！！」
「狙いはそっちか！？」

僕の読みは甘かった様だ。全然浅はかだった。くそ、いつだって僕の斜め上を行く奴だ。あざ笑ってんのか？　日鞠は炭酸にも関わらずにものの数秒で豪快にジュースを飲み干した様だった。
どれだけ興奮してるんだよ。だけど流石に女の子だから、最後のプハァって奴はやらない。だけど炭酸だったのが災いしたのか、どうやら何かが上がってきた様だ。

日鞠は喉を伸ばして、頬を膨らませ、口元を手で押さえる。必死にその現象にあらがってる。だけどまだ半分以上残ってたのを一気に飲んだんだ。
それはいつもの比じゃ無いだろう。みるみる内に、目に涙が貯まってきてる。

「んー！　ん――――――！！　――――――――――――――っ！！！！！」

日鞠は限界を感じたらしく、猛然と病室から出ていった。どこまで走る気なんだあいつ？　見れば病室のドアの所には、日鞠が買ってきてたもう一本のジュースが落ちてる。それが病室のスライド式ドアが閉まるのを防いでた。
そしてその隙間から誰か……というか多分通りすがりの看護士の人達の声が聞こえてきた。

「はあ、一体院長は何を考えてるのかしらね？　そりゃあ、あの会社がこの病院に多額の援助をくれてるのはわかってるけど、正規のカルテにも書けない様な患者を次々引き取るだなんてね」
「そうですよね～。それに知ってます？　今回の二人も、あの特別

病棟の二人と同じゲーム機付けて運ばれて来たんですよ。ヘルメットみたいな、頭にスッポリ被る奴。
　ＬＲＯって言って今巷で大人気のゲームらしいんですよね～。しかもそのゲームを作ったのがあの会社らしいし、事故を隠してるんじゃないかって噂が……」
「ちょっと！　不祥事はごめんよ全く。いくら大変でも、職は失いたく無いわ。この年で再就職は難しいだから」
「結婚して寿退社はしないんですか先輩？」
「アンタ……殺されたいの？」
「ええ～イヤですよ。私死ぬなら、愛の修羅場で逝きたいと決めてますから！」
「アンタ、そんなんだからいつまで経っても新人なのよ。金持ちの男を漁りに病院に来てるの？」
「それ以外に何の楽しみが！？」
「アンタは今、全国の看護士を敵に回す発言をしたあああ！！」

ぎゃあぎゅあぎゃあぎゃあ――――なんだか収集が付かなく成ってるな。重要な事を言ってたのに、どうでも良い方へ会話が流れて行ってしまった。
　たく、女の会話って唐突なんだよな。ズレていくっていうかさ……でも気になる部分はあった。どうやらここに運ばれて来たのは僕だけじゃない様だ。

一体誰が？　いや……予想は付く。あの戦いで、僕以上の傷を負い、同じく浸透率が高かった存在は一人しかいない。

「ぐっ……」

　胸がズキンと痛んだ。もしかしたら怖いのかも知れない。その光景は、この道の先の自分と重なるかも知れないから。

それにそれを確かめる事は、自分が何も出来なかった事をもう一度突きつけられる様な気もする。

「でも……」

見とかないと……そう思った。目を逸らす事は簡単だ。だけど受け止める事の方が大事だろ。僕は地面に足を付き、冷たい床を踏み出した。

白いベットの上で（後書き）

第百七十四話です。
アルテミナス編が終わりを告げて、久しぶりのリアルです。まあ今回はまだ周りの事は書いてないけど（日鞠の奴が暴走したせいで……）次ではあの戦いの影響って奴が書けると思います。
それにその後って奴も。それから新しい展開に入って行きます。
てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは～。

静かな時（前書き）

僕は病室を抜け出して、長い廊下を歩く。このどこかにもしもアイツが居るのなら、僕はそれを確かめたかったんだ。だけど思った以上に体のダメージは酷かった。

そんな中、辿り着いたのはセツリの病室。そこに用は無かったけど、でも出会った。誰とも知れない、綺麗なお姉さんと。

静かな時

騒いでた看護士二人の目を交いくぐり、病室の外に出たのは良いけど、僕はちょっと後悔してた。まず、体痛い。一歩踏み出す毎に全身ズキズキする。

どう考えてもこれじゃあ走るなんて出来ないな。どうしても壁に設置してある手すりを頼ってしまう。初めて手すりの役割を実感したよ。

そして後悔する理由の二つ目は、僕は同じ時期に入院したという人の名前を知らない。だってＬＲＯでは本名を使ってる人なんてそうそういない。だからアイツも本名じゃないと思うんだよな。アギト達曰く、アイツはリアルはリアル、ゲームはゲームで完全に分けてたらしいし、そんな奴が本名を使うわけがない。

どうしようか……この病院かなり広いんだよな。まあでも、今僕がいる病棟に絞り込めそうではあるんだけど……だって――――

「全然人居ないな」

――――広い廊下に患者は勿論、看護士も医師も誰もいないし、病室の数の割に、そこにはさっきから全く、プレートに名前がない。あながちさっきの不真面目そうな看護士さんの言った事も間違いじゃないよな。

これは不祥事だし、僕達の事を隠そうとしてるのも事実なんだ。体外的に考えると、悪い事を確かにやってるのかも。

もしも本当にと言うアイツが、ここに運ばれてしまってるのなら、

それはフルダイブシステムの安全性が今一度問われる問題だ。
そうなれば最悪、サービス停止になるかも知れない。いや、本当はもうそうすべきなのかも……今やＬＲＯは誰にとっても安全では無くなった……そう考えた方がいい。
アイツまでそうなったのなら、後何人同じ様な事が起きるか分からないんだ。

「はぁはぁ……むぎゃ！！」

考え事しながら歩いてたら、急に力が抜けて床に倒れてしまった。意識しないと歩くのすら難しいとは……僕もかなりだな。

「たく……これじゃあ、一個の病室見つける前に体力が無くなりそうだ……てか、これって病室を抜け出す理由があったかな？」

自分の行動を否定する発言が口から出てきた。いや、良く考えたら、佐々木さんとかに聞けば済んだんじゃ無いのか？　って思えてくるわけだよ。
まあ会わせてくれるかは分からないけど、教えてくれるとは思うんだ。しかもさっきの看護士さん二人ってさ、僕の病室に来てた所だと思うんだよね。

だって、こんな誰も居ない病棟で目指すとしたら、セツリ&当夜さんの病室か、二日前に入院した僕ともう一人しかいない。
僕達の事を外に漏らしたくない会社側が、他の患者を入れてるとも思えないし。

長年ここはセツリと当夜さん専用みたいな物だったんだろう。だからこそ、あの二人が僕の病室を目指してたのはかなり確率高い。
そうなると色々不味そうなんだよな。まず騒がれると困るし。今

となっては、僕の行動は浅はかとしか言いようがないな。

「でも……気になったんだ」

自分の行動の言い訳を呟いた、誰も聞いちゃいない。ただその時は、この目で確かめたいと思ったんだ。それにまさか、ここまでダメージが酷いとは思わなかった。

「どうしよう……」

このまま闇雲に探せるとも思えない状態だ。それに無駄に心配をかけるのもどうかと思う。聞けば済むのなら、それに越したことはないよな。

でも……なんだか遅かったような気がするんだよ。佐々木さん達。もしかしてそっち側に行ってるとか……まあ大変なんだろう事は想像付く。

あれだけの事が会ったんだ、リアルでもいろんな事をやってたんだろう。僕をここに入院させたのはあの人達らしいからな。

静寂の中、僕は何とか立とうとするけど、足が震えてうまく行かない。まるでＬＲＯで受けた分のダメージが来てるかのよう。

いや、それなら動ける訳も無いんだけどさ。

「はあぁ」

僕は仕方ないので、壁に背をもたれて座り込む。自分自身の体って、案外ひ弱な物だ。この場合は脆いって言った方が良いのかな？

現実で精神論ばっかり持ち込んでたら、案外ポックリと逝っちゃうかも知れない。自力で戻りたかったけど、それはどうやら難しいそうだ。

しょうがないから、ここでさっきの看護士さん達が来るのを待つかな。病室に行って居なかったら探すだろ。そんなにここは離れてないし。きっと直ぐに見つけてくれるよ。
この際、怒られる事は仕方ないと思うとしよう。まあ焦らなくても、切羽詰まってる訳でも無いんだし……

「あれ？　アイツって生きてるんだよな？」

不意にそんな考えが沸いてきた。もしかして、本当に僕が確かめたかったのはそれか？　いや……でも、そんな……余りの最悪なケースだよそれは。
今まで意識不明とかだとしか考えて無かったけどさ……それは実はあり得る事だろう。死に怯えて、僕だって戦って来たはずなんだから。

アイツはＬＲＯで確かに消された。全てを奪われて。それがどういう意味か、僕達は理解してたからこそ、あれだけ怒ったんだ。
ならアイツは……看護士の人達は運ばれて来たって言ってたけどさ、その後の事は言ってなかった。

「……っつ」

僕の不安は加速する。
死んだなんてそんなのは絶対にイヤだ。ＬＲＯから死人を出すなんて……そんな事になったら、終わりだろ。

「こうなったら、這い蹲ってでも見つけださないと気が済まないな」

思考が再び元の位置に戻ってきてしまった。だけどこればっかり

は、人伝をあてになんか出来ない。その可能性があるのなら、自分で確かめないと。
この病棟のどこかに居る筈なら……尚更。見つかる間だけでもだ。

僕は再び、足に力を込める。手すりを使ってどうにか立ち上がる。だけどくまなく探すなんてちょっと無理っぽいな。どこか検討を付けないと……名前が分からないのは大丈夫だろう。
この病棟なら、他に患者なんて居ないんだからさ。名前が書いてあればそれだけで事足りる。けど病室の位置の目星は全然ダメだな。

元々構造に詳しい訳じゃない。通いなれてる訳でもない。しょうがないから、見つかって連れ戻されるまでは闇雲にあがいてみよう。
僕は諦めるより、そっちの方が好きなんだ。誰かさんのせいでそういう人間にされたよ。ぶつぶつ文句は言いながらも、出来る事はやるさ。

取り合えず……円形状に成ってた筈だから、歩くかな。一周出来ればある程度の部屋は見たことになる。
ゆっくり、ゆっくりと取り合えず歩き出す。うう……なんてリアルの体は不便なんだろうと感じる。ＬＲＯならここまで情けなく成ったりしないのに。これがリアルの痛さで、本当の傷って奴か。

忘れちゃいけない事……なんだよな。そうこうして進んでると、セツリの病室の前に来た。ここでアイツは眠ってる……その姿はきっと変わりないんだろうけど……胸が苦しいよ。
だってセツリは、もう傍にはいない。ここで眠っててても、僕を待っては居ないんだ。
そんな風に思ってドアを見つめてると、不意に擦りガラスに人影が映って、スィィーと扉が開かれた。

「えっ……」
「あっ……」
僕と彼女の目が合う。なんだかお互い、気まずい雰囲気が流れた。

＊＊
僕達は何を喋り出せば良いのかお互いに分からず、ただお互いを見つめてその場で固まってた。多分どっちも、「どうして？」とかが頭に浮かんでたんだと思う。だってここは基本一般人は入れない筈だから。
しかもこの病室から、医者か看護士以外が出てくるなんて……もしかして佐々木さん達の会社の人？　とか思ったけど、なんだか雰囲気違う。

まあ全員を知ってるわけじゃないけど、あのＬＲＯ開発陣の雰囲気じゃないって事だ。ノリの効いたスーツに、艶めかしいおみ足が伸びてて、だけどどこか無邪気さを感じる様な顔に、眼鏡で知的さアップを図ってるような……キャリアウーマンな感じなんだけど「無理してない？」って思う何かを放ってるよ。

まあようやくすると、美人のお姉さんに変わりは無いんだけど。その美人のお姉さんは、肩から卸してるバックの他に、片手には花束を持ってる。黄色い花だ。何だか見たことがあるような……視線を自然と閉まりゆくドアの向こうに向けると、病室の中に同じ花が花瓶に生けられてるのが見えた。
ああそうか、見たことあるわけだ。それなら納得。この病室には毎回あの花が生けられてたんだ。看護士さんたちが変えてると思ってたけど、そうじゃなかったって事か。

「君……」
「貴女は……」
ようやく出てきた言葉がぶつかった。おいおい、気まずさが倍増じゃないか。だけどここで気まずさに負けるわけにはいかない。
「あの……どうぞ」
必死に声を絞りだして、僕は会話を促した。すると美人のお姉さんは、一瞬何かを考える様に視線を逃がして、意外な事を口に出す。
「君って……スオウ君だよね？」
「はい……って、ええ？　何で？」
いつから僕は、初対面の美人のお姉さんに名前を知られる程の有名人に成ったんだ？　思わず肯定したけどさ、マジびっくり。
するとお姉さんはいきなり僕の方へ駆けて来て。手を握られた。その行為に僕は傷口が開くかと思ったよ。そしてその勢いのまま、美人のお姉さんはこう言った。
「見ず知らずの人にこんな事言われて困ると思うけど、でも言わせて。当夜をお願い！　どうか助けて！」
そう言った彼女は、年下の高校生に真摯に頭を下げた。本当もう、真剣な眼差し。だけどさ、僕はなんといえる？　なんと答える？　分からない。
真剣さが伝わる分、扱いに困ると言うか……どういう対応をすればいいんだ？
「えっ……あ……」

頭が火照る。良い香りが頭をフラフラさせる。いや、違うかも。お姉さんのせいじゃなくて……これってもしや、限界？

「ちょっと？　大丈夫？」

「はは……だいじょう――――」

お姉さんの心配する声が聞こえる。僕は必死に言葉を紡ごうとするけど、それは最後まで続かなかった。足から……いや、体中から力が抜ける。ズルズルと壁に背を持たれて崩れ行く。世界が回るように見えだして、そして僕の意識は闇に沈む。

「ん……」

なんだか暖かい。それに柔らかい。どこだここ？　あの世か？

「あ、起きた？」

どこかからそんな声が聞こえてくる。閉じてた瞳を開くと、歩き出したときよりも高く上った太陽からの日差しが眩しかった。

目を細めて少しすると、目が馴れて来てようやく声の主が見えてきた。

「美人の……お姉さん」

そこに居たのはさっき会ったばかりのその人だ。僕のそんな漏らした言葉を聞いて、お姉さんはカラっと笑って大人の余裕を見せてくれる。

「ははっ、美人のお姉さんなんだ私って。ありがとう。その評価はとても嬉しいよ」

撫で撫でと僕はされるがままに頭を撫でられる。そこで気付いたよ、口に出してた事を。恥ずかしい。初対面の人に何いってんの？

恥ずかしくなって顔を背ける――と、そこで僕はもう一つの事に気付く。僕は今、その美人のお姉さんに膝枕して貰ってる状態だったらしい。

そして顔を横に向けたことで、そのおみ足が頭から頬に柔らかさを伝えて来て、しかもその視線の先がやばい。この人のスーツのスカート、短かったからさ……なんと言うか、見えそうだ。

見えてはいないけど、スカートの中に続く太股がやばい。一高校生には刺激が強すぎる。またぶっ倒れるかも。だけどさ――目が離せないんだ。どうしてだろう。

すると上から声がかかったよ。

「ちょっと君。お姉さんに甘えるのは良いけど、どこを凝視してるのかしら？」

「すんまっせん！　てっえええええ！！」

勢い良く跳ね起きた。と同時に全身に痛みが舞い戻ってきた。思わず座ってたソファ？　と言うか腰掛けみたいな四人掛けみたいな椅子から転げ落ちた。

うう、これは天罰か？　でもまだ見えてなかったのに。ピクピクと体を痙攣させてる僕に、お姉さんがスカートを押さえつつ、窘めて来た。

「もう、まあ高校生の男の子ならしょうがないって事は分かるけど、自制しなさい。君だって、自分のパンツを知りたがってる獣が、そ

こら中に居るなんてイヤでしょう？
女の子はね、日々そういう戦いをしてるんだから、真摯になさい。それがとっても嬉しいんだから」
「……はあ」

僕は普段から、女の子のパンツを狙った事は無いけど・・そりゃ見えたときは「おお！」とか思うけどさ、まあそれこそ、男として仕方ないよね。
てか元々、僕が思うに女の子の下着が悪い。ダサいのを履きたくないのも分かるけど、可愛い子が可愛い下着を履いてると、相乗効果的に増すじゃん。

見たいって思わせるじゃん。そして男から言わせれば、その希望だけで良いわけだよ。脳内補完して補える。それは女の子からしてみたら確かに、ゾッとしそうだけどな。イヤなのも分かる。
さっきの「自分のパンツを知りたがってる獣がそこら中に居る」ってのは気が気じゃない。吐き気がするな。だけど男って甘んじてそこに飛び込んじゃうんだ。

僕の曖昧な返事にもだけど、大人で綺麗なお姉さんはそこら辺分かってるんだろう。特に怒ったりはしてない。むしろ良く笑ってる。
「あはははは、凄い事をしようとしてるんだから、もっとなんか普通と違うのかな～って思ってたけど、拍子抜けするほどに普通の男の子だね」
「そ……それは僕が地味って事っすか？」

なんか拍子抜けされちゃったよ。期待を裏切った感が否めない。何で僕はこんなに平凡なんだろう。まあリアルの僕なんて、こんなもんなんだけどさ。

平凡な地味男君だよ。成績は中の上くらいだし、身長は百七十前半だし、太ってる訳でも痩せすぎてる訳でもないし、筋肉ムキムキでもないし、顔の事で褒められた事ないし……きっと通りすがりのモブキャラみたいなもんだよ僕なんて。

いっそ髪の色でも変えれば個性が加わるかも知れない。

「別に地味って言うか……綺麗な顔してるし……というかね。私は色々ＬＲＯの掲示板とか見てて、君の行動を知ったから、そう言う事が出来る人はどんなんだろうって想像を膨らませてただけ。

君は普通で良いんだよ。てか普通で格好良いよ」

「お……お姉さまって呼んで良いですか！？」

僕は余りの感動に、手を強く握り返したよ。なんて良い人なんだ。僕の事格好良いってさ。聞いたかおまえ等？　耳に焼き付けとけ！

ヒャッホーー！！

「お姉さまはちょっと恥ずかしいかな？」

「では、なんと？」

僕は忍の者の様にかしづいて呼び名を求める。余りの喜びに、痛みとかのなんやらは吹き飛んでます。てか、僕のテンションの高さにお姉さんも僅かに引いてるよ。気にはしないけどさ。

「それこそ普通で良いよ。私『千道　夜々』（せんどう　やや）って言うから、普通に呼んで」

「夜々様！」

「ある意味それは、初対面にしては図々しくない？　君と私の関係的にどうなの？」

「飼い主と飼い犬にはふさわしいのでは？」

僕は思わず首をもたげたよ。

「飼ってないわよ！　何々、君は私の犬になりたいの？　……まあ、そう言うのもちょっとは良いかもって思うけどってダメダメダメ……ダメよ夜々！」

お姉さまは一人で悶々とやってらっしゃる。自分の中の何かと戦ってるようだ。そしてビシッと指を突きつけられて、こう言われた。

「もう、前言撤回です！　君は全然普通じゃない！　子供の癖に大人をからかうのは止めなさい！！」

「えぇ～」

顔を真っ赤にして怒られてもな。それに別にからかった訳じゃない。途中からは悪のりだ。まあ本当に嬉しかったってのもある。

「ええ～じゃない。普通に普通で千道さん！　それが正しいわ」

「まあお嬢様がそう言うなら……僕達の本当の関係は周りには隠してた方が良いですもんね」

「なんかいきなり上から来られた！？　高校生の発言、飛び越えちゃったわよ君！！」

にっこりと笑顔で肯定した僕の言葉に、お姉さまはさらに食いついた。いやはや、こんなやりとりしてると、ついさっき知り合ったばかりとは思えない打ち解けようだ。

「はあ、なんだかとっても久しぶりかも。こんなに感情を出して話したのって。もしかしてそれが狙い？」

「別に、そう言う訳じゃないですよ。ただ本当に仲良く成りたかっただけです。綺麗なお姉さんと」

落ち着きを取り戻して行く中で、僕は再び椅子に腰掛ける。体も結構楽に成った気がするな。そして僕の言葉に天道さんは、余計な事を省いてこう言った。

「だけど、仲良く成りたかったのは私目的じゃないでしょ？　気になってるんだよね、私と当夜の関係？」

「ええまあ、あの人ってほら、あんまり友達とか作らないタイプの人ってイメージだったから……意外って言うか」

「あはは……まあ当夜は確かにそんなタイプだね」

誰かさんの事を頭に思い浮かべる様にして、ちょっと困った顔で笑う天道さん。そんな様子を横目に見て、僕は彼女の傍らに置いてある花束へと視線を移す。実はそれもずっと気になってたんだ。

「それに、その花束……なんで二つなのかなって？　だって当夜さんの所の花瓶には、新しいのが生けられてました。あそこから出てきたって事は、天道さんがそれを生けた筈でですよね。セツリの方はいつもなかったし、そもそも出てきた時点で持ってたって事は、そのもう一つは誰ようかなって？」

僕は疑問を素直にぶつけた。別にここは大きな病院だし、知り合いがもう一人くらい居たっておかしくは無いだろうけどさ。

僕的には、その花が当夜さんの所に生けられてた奴と同じって所が気にかかる。なんだかさ、僕が思うに天道さんって……当夜さんの事好きなんじゃって勝手に思うわけ。

だって本当に心配そうだったし、他に女っ気あの人ないし。凄まじいシスコンとしか今まで思ってなかったよ。だけど突如現れた美女――そして、定期的に訪問してる様子が伺える事――それらを考

えたらさ、自ずとね。

好きでもないと、花生けになんてこないだろ？　それももう数年経つんだよ。いつからそれをやってるかは知らないけど、つい最近始めた訳じゃないだろ。

天道さんは、僕の矢継ぎ早な質問に、丁寧に少しだけ深呼吸して答えてくれた。

「君、なかなか鋭いね。そうだね、私が毎回お花を替えてるの。来る度にね。私達って実は、同じ高校のクラスメイトで部活も同じだったんだ。

まあ私と当夜は、その前から知り合いだったんだけどね。ほら、彼って天才でしょ？　その頭脳を家の親は高く買ってんだ」

なるほど、クラスメイトか。てか高校生時代から天才は知れ渡ってたのか。本当に凄い人なんだな。う～ん部活って何してたんだろう？　それもイメージ沸かない。

聞いてみたい事は色々あるけど、『達』って何？　ちょっと引っかかった。だって当夜さんと自分なら、私達って言う事かな？　って思うんだ。

なんだか二人じゃ収まらない様な……

「達って……その、二人ですか？」

「ううん、もう一人居るよ。三人で部活やってたんだ。まあ三年の半端な時期にそれも終わっちゃったけどね。それでも楽しかった。楽しかったな。

この花は、そのもう一人のお見舞い用」

何だか切ない顔で、声だった。

「ホント、私の周りはバカばっかり……」
「その人もここに？」
「うん、モノミーも何やってんだか。てかビックリだよ」
「モノミー？」

誰だそれ？　どんだけユニークなあだ名だよ。

「あ、え～と戸ヶ崎……でも分からないか、確かプレイヤー名はガイ……ガイ……ガイエン！　彼の事は秘密なんだけど、君は当事者みたいな物だからいいよね」

「！！」

それは彼女の言葉が、僕の考えを確信へと変えた瞬間だ。

静かな時（後書き）

第百七十五話です。
新キャラってわけでもないけど、スオウとの邂逅はこれが初めてです。そんな彼女がこれからどう関わってくるかは僕もわかりません。のんびりと進んで行きます。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

関係性の問題（前書き）

ガイエン……アイツがここにいる。正確にはリアルでの人としてのアイツがここにいる。それは僕達が見とかなくちゃいけない事だと思う。あの後どうなったのか……どうなるのか……それはとても他人事じゃないから。

だけど僕達だけで良いのかって問題もあった。僕は勿論、日鞠は一切関わりない。必要な人達が居る。そう思う。ガイエンの友達が、それを知るべきだと思うんだ。

関係性の問題

彼女『天道　夜々』が放った言葉……それは望んでいた言葉だったけど、本当は聞きたくは無かった言葉だったかも知れない。
ガイエン……彼女が嘘偽りを言う必要が無いことは明白で、ならばこそその言葉は重たい。見たかった確かめたかった……だけどいざ、その可能性が確信へと変わると、なんだかそう思う。

「ガイエンか……やっぱり。なんでそれを知ってるんですか？　秘密なんでしょ？」

僕は当然の疑問を口にする。友達だから……じゃこれは説明出来ないだろ。なるべくは、誰にも伝わらない方がいいんだ。
でも彼女はそれを知ってる。それはどうして。天道さんは、置いてた花束をもってそれを見つめた。

「私の両親が当夜の頭脳を高く買ってたって言ったよね。まあ危ない時もあったんだけど、今はＬＲＯ……と言うかフルダイブシステムの出資企業の一つなの。
だからそのツテでね。私達にとってもこれは痛い事だもの。こんな事が起こり得るのなら、今どんどん展開してるこの技術の行き先が無くなってしまうわ」

天道さんの言葉は真剣な物だった。それもそうだろう。あれだけのシステムだ。莫大なお金がきっとつぎ込まれてるのだろう。

企業は利益が出ると思って出資してくれてるんだ。それが外れたら、そのお金はそのまま損害に成るだけ……だからいろんな企業が、

この事実を隠そうとするわけだ。
病棟丸ごと隔離してるなんてさ、無茶事やってると思ってたけど、複数の企業が手を取り合ってるのなら納得だ。そして天道さんは企業側の人間で、聞いた限りでは社長令嬢のようだから、その情報が入ってきたって事か。

「でもまさか、この目で見るまでは信じれなかった。何でまたって思ったわ。後悔したもの、当夜の事。だからモノミーの事もそう。なんでこうなっちゃうのかなって……そんな訳無いって思ったんだけど」

彼女は、花の茎が折れそうな程に腕に力を込めてる。天道さんはもう確認してるんだな。多分二日前位に。

「ごめんなさい……僕達がもっと強かったら」

僕はそう言うことしか出来ない。そして実際、そう思う。僕にもっと力があれば。シクラ達を物ともしない力。セツリを離さないで居られた力。ガイエンを……救えた力。
それがあれば……だけど幾ら求めても、あの時はもう戻ってはこない。

「どうしてスオウ君が謝るの？　私はある程度、この二日で調べたんだよ。まあＬＲＯの事は個人的に良くチェックしてるんだけどね。君達は良くやった側だよ。感謝こそすれ、誰も責めたりしないよ。だけど……あまり詳しく分かるわけでも無いんだ。それに当事者じゃないと分からない事は多いよね。
ねえスオウ君。モノミーは何をしようとしてたのかな？」

何をしようと……もしかして天道さんは、ガイエンをただの被害

者とは思ってない？　そんな考えが浮かぶ。だってある程度は知ってたんだよな。
ならガイエンだって、アイリ達と同じ様に扱われてたっておかしくない。だってクーデターは外には発表されて無かった事実だ。

ガイエンがその玉座を狙ってた事は、確かにその当事者しか知らない事で、外から見たらアイリが戻るまで良く頑張ったと言われてもおかしくない事の筈。
ただの被害者であることに、疑問なんて無くても良さそうな物何だ。だけど彼女はこう言った。

『何をしようとしてたのかな？』

それは外が知ってるだけの情報じゃ出てこないだろ。いや、二日経ってればいろんな話が出ててもおかしくはないかも知れない。
僕の情報は古いのか。実際、アイリの代わりをガイエンが勤めてた期間、その指示に従わなかった奴らだって居たんだし……いろんな疑問に、自分勝手な解釈を加えた奴らがいてもおかしくない。
ネットってそういうもんだ。

「どうしてそんな事聞くんですか？　ただの被害者で、ただ心配してやるだけじゃダメなんですか？」
僕はもしかしたら意地悪な事を言ったのかも知れない。天道さんがどこまで知ってるかは分からないけど、真実って甘くはない。年下の僕が言うのもおかいしいけどさ。
友達……何だよな。それなら尚更って思うんだ。

「ただの被害者でなんて済ませれないよ。私の友達だもん。それにね、調査はどうやったってするよ。私の意志じゃなく、もっと大人な人達が。

それでも……どこまで分かるかなんて分からない。でも、君なら知ってるよね？　私はね……二人を取り戻したい。
ネットの言葉だけじゃ、真実の判断なんて出来ない。言っちゃうとね、色々酷い事も書かれてる。でも……どこまでが本当かは知りたい。
実を言うと、卒業後はよく分からないから、それを知ることでもうちょっとモノミーに近づけるかなって。何も分からずに心配するより、ちゃんとそれまでの事を理解したい。それからだって心配し続けられるよ。だって私達は友達だもん。
私にはあるよね？　知る権利」

天道さんの瞳は強かった。知りたいって意志がバシバシ直撃するよ。なんて言うか、こうやって打ち解けて来ると、案外大人じゃないかも――――と思ったりする。
なんて言うかこの人、感情が直情なんだ。普段は必死にそれを隠してるっぽいけど、こうなってみると凄く真っ直ぐに突き進んでくるのが分かる。

それはとても、子供っぽいって事でもありそうな。まあ僕も言えた義理じゃないとは思うけどさ。知る権利か……確かに彼女にはそれがあるだろう。
そもそも僕に、言わない権利があるかどうか怪しい。天道さんは変わらずガイエンを心配し続けるって事だし、友達の少なそうなガイエンの貴重な友人を、減らす事にも成らないだろう。
まあ僕的には、そこまで気遣う理由なんて無いんだけどな。でもこのままで良いと思うわけでもない。

「そうですね。変な情報を真に受けるよりはずっと良いかも知れない。でも……僕も確かめたい事があるんです。
いや違うかな。確かめるのは天道さんの言葉で十分だった。ここ

にガイエンはいる。僕はそれをこの眼で見ておきたいんです」

ようやく最初の目的を遂げれそう。僕が病室から抜け出したのはそのためだ。別に取引って訳じゃない。ついでだよ。ついで。

「見てどうするの？　君はきっと辛くなるだけだよ。もう十分過ぎる程の物を背負ってるんでしょう？　それにさっき私も背負わせた。当夜をお願いって」

「それは今更な感じですよ。当夜さんは最初から助け出す気です。僕はあの二人をちゃんと連れ戻したいんですから。

それに良いんですか？　友達なんでしょう？　一人だけ贔屓したら怒られますよ。きっと僕は、ガイエンを連れ戻せる一番近い所にいると思います」

ＬＲＯの三百万を越すプレイヤーで、僕がその道をきっと先頭で走ってる。それは自負できると思う。先頭って言うか、周りを見ても誰も居ないだけの様な気もするけど。

まあでも、この発言は間違っちゃいないよきっと。てかなんだかデカい言葉が口を突いて出てるな。それは多分、僕も不安で一杯だから。

もしかしたら追いつめられた方が良いとか思ってるのかも。セツリは僕の元から乗り換えて行ったし、何が出来るのか……よく分からないんだ。

今ここで僕は、きっと止まってる。走り出す理由がほしいのかも知れない。これだけの傷を負ってさ……まだ走り出そうって言うんだから自分がおかしい。

だけどどこかで、踏み出せない。心は決まってるのにスタートの音が響かない。それはやっぱり僕がどこかで怖がってたりするから

なんだと思う。
この痛さが……この辛さが……心を知らず知らずに蝕んでるんだ。見つめる先の包帯が……その中の傷が、これ以上進むなって言ってる様な感じ。

「いいの？　本当に？　そこまでする事はきっとないと思うよ。それは本当なら、大人な私達がすることだもの」

天道さんの言葉が、静かな空間に転がっていく。それこそ、静かな大人の言葉だった。だけど本当は違うって分かる。
友達だもん……どっちかだけなんて願える筈がない。そんな訳無いじゃないか。だから僕は言葉を紡ぐ。彼女が大人だからこそ気を使ってくれてる所を、分かってるからさ。

「ええ、勿論。ＬＲＯで誰も犠牲になんてしたくない。アイツの道が、誰かを犠牲にしてしまったらもうきっと戻れないだろうから……僕はみんなを助けて見せます」
「……そっか、それは頼もしい限りだね。うんお願い。お願いします。君なら出来る……私はそう信じるからね」

そう言って天道さんは立ち上がる。バックを肩に掛け、花束を抱えて、そして僕に手を差し伸べた。

「君がそこまでしてくれるのなら、会わせない訳には行かないよね。病室から抜け出して来てるんでしょ？　なら急がなくちゃ」
「う……分かってたんですか？」
「それは当然でしょ。だって辛そうだし、倒れたし。その状態で歩き回らせる医者はいないでしょ？」

なるほど、言われなくてもその通りだ。僕は天道さんの手に自分

の手を重ねて、引っ張って貰った。勢い良く状態が起きあがり、僕は綺麗なお姉さんと密着状態に。
てか、彼女が僕の片手をそのまま肩の方へ回して支える態勢に成ってるから自然とね。顔を横には向けれないな。

「さて手早く済ませましょうか」
「え～と、よろしくお願いします」

なんだか世話に成ってばっかりだし、このくらいは言わないとね。僕はそれなりに礼儀を重んじる人間だから。天道さんが支えてくれてるから、手すりよりも進みやすい。まあ当然だけど、それよりも女の人に肩を貸される日が来るとはね。

こんな情けない自分に、誰かを救える事なんか実際出来るのかな？　とか思えてくる。だけどちらりと見た、彼女の横顔は真っ直ぐだった。真っ直ぐに前を見据えてた。

僕の方が大きいんだし、かなり体重を掛けてる様に成ってて大変だろうに、そんな言葉を漏らさない。彼女は今、僕をガイエンの所まで届ける事だけを考えてくれてる。
出来る、出来ないかじゃない。やるかやらないかでも無い。出来る気でやるか、出来る無い気でやるかの違いだな。天道さんはきっと、自分を信じれる人なんだろう。それはとても羨ましい事だ。

長い通路をしばらく進む。あいも変わらない代わり映えのしない光景に辟易するな。もう少し遊び心がほしいよ、この病棟には。
まあ多分、ほとんど人がいないからこうなんだろうと思うけど……生活間って言うか、人が生きずいてるって感じがない。確かにあの二人は生きずいてるって感じじゃないけど、ここはやたらとヒン

ヤリとしてるんだよな。

きっとこの病棟だけなんだろうな、この感じ。誰も居ない……誰もいない……そんな事を考えて歩いてたら、唐突に後ろから声がした。

「ああ――――！　スオウ発見！　って誰々それ誰！？　近い近い！　近すぎるよ！」

超人間味を放つ奴が来た。居るだけで周りを明るくさせるような奴、日鞠の登場だ。天道さんは乗っけからの日鞠のテンションにちょっと驚いてた。僕はため息吐くしかない。

そんな僕達の間に、日鞠はズカズカと歩み寄る。

「スオウ！」

「何だよ？」

怒られるかな～って思った。だけど日鞠は僕の片側の腕を取ると、自分の肩に回してきた。

「フフ……これで条件は同じだね！」

こいつが何をやってるのか理解に苦しむ。天道さんも日鞠の決め顔に困惑必死だ。

「何やってんのお前？」

「当然、逃げ出したスオウを捕縛しに来たの。そして今から連れ戻します」

グイっと腕を引っ張って、逆側に歩き出す日鞠。

「イテテテテ！　ちょっとまてオイ！！」

僕は思わず叫んだよ。すると日鞠は無言で更に力を込めて引っ張りだした。僕の痛がり様に、天道さんは踏ん張るのを止めて、日鞠に合わせる様にしてくれた。

でもこれは……相当怒ってるなコイツ。元から捕縛って言ってたし、拒否権は撤廃されてる様だ。だけど僕はあらがうよ。

そんな横暴は認めない！

「ちょっと待てよ日鞠！　ゲップはもう吐き終わったのか？」

その言葉でピタリと勢いが止まった。

「な、何の事かなスオウ？　女の子は綺麗な物しか体から出さないんだよ。ゲップなんてするわけ無いよ。女の子はいわば、全身空気清浄機みたいな物だよ」

「んな訳あるか」

何を必死に守ろうとしてるんだコイツ。幾ら何でも、人の体はそこまで高性能じゃない。綺麗さを保つために、余計で余分な余り物やいらない物を外に出す。

それは必要不可欠な事だ。そこまで取り繕う事じゃない。だけど日鞠は、僕を見てこう言った。

「でもスオウは、女の子はそうであって欲しいって願ってるでしょ？　ゲップもそうだけど、オナラとか……あり得ないでしょ？」

「別にそれは……分かってはいるよ。ただ目の前でやられるのはどうかと思うだけだ」

別に空気清浄機であって欲しいとは思わない。まあこれも十分に女性幻想なのかも知れないけどさ。でもそれだと、日鞠は僕の為にそう言ってる訳？

「その瞬間、幻滅なんてされたくないの。私は日々、体にビフィズス菌を宿す努力をしてるからね！」

「だからって排出物が無くなったりしないからな！」

お腹の調子は良くなるだろうけど、決して体内で全てのエネルギーに物質を変換させたり出来ねーよ。ビフィズス菌はそれだけのポテンシャル有してない。

てか、その努力って毎日ヨーグルト食べるだけだろ。そう言えばコイツが便秘に成ったところなんて見たこと無い。女の子はそう言うのに成りやすいって聞くけどな。

いや、言わないだけか？　僕の為に。

「とにかく、スオウはけが人なんだから、病室で大人しくしてなさい！」

「本当にけが人と思ってるのなら、もう少し丁寧に扱え！」

さっきから僕への扱いが明らかにずさんだろコイツ。けが人を力ずくってどうよ！？　痛がってたの無視してたし。

すると僕達のやりとりを見てた天道さんが、クスクスと笑い声を漏らしてた。それに気付いた日鞠は、明らかに見えてた筈の天道さんを今気付いた様な体で見つめる。

「所で、そちらの方はスオウの背後霊じゃ無いですよね？　どなたですか？」

「おいおいお前な、背後霊ってそれは無くない？」

スッゲー失礼だろ。誰からも好かれる筈のアビリティを有する日鞠が、自分から嫌われに行くなんて珍し過ぎる。だけどそんな日鞠にも、天道さんは大人的に狭量の深さを見せてくれた。

「ううん、全然いいの。背後霊じゃ無いよ、私はれっきとした人間で『天道　夜々』って言うの。私もね、関係者なんだよ。

貴女は、スオウ君の彼女かな？」

「ブッ！！？」

思わず吹いた。てか足下から崩れ落ちそうになった。

「私は日鞠って言います。今の質問の答えとしてはそうですね～。無きにしも有らずです」

「ねーよ！　まだ何にも無いだろ！　何意味ありげな感じで言ってんだ！　幼なじみ！　単なる幼なじみですから！」

なんか急に機嫌が良くなったな日鞠の奴。彼女に見られたのが相当嬉しかったみたいだ。そして必死に弁解する僕もなんだか滑稽だ。

「あははは。本当に二人は仲が良いんだね。幼なじみなんだ～二人もう、結婚しちゃえばいいのに」

「何ですかその発言！？」

天道さんまで何言っちゃってんの？　すると片側から強烈な光が照りつけて来るような……これは太陽の光じゃないよな。

「そう思ってくれますか！？」

光を放つ主は日鞠だった。そう言って、眼をキラキラさせてやがる。あの発言は日鞠の心に深く届いた様だ。

「ええ、二人はとってもお似合いだと思うわ」
「お姉さまって呼ばせてください！」
「はは……やっぱりどこか似てるよね二人とも」

確かに天道さんの言うとおり何かデジャブ感があるな。ようやく終わった事を、日鞠の奴がほじくり返すなよ。

「あれでも、二人はその……イチャイチャしてたんじゃ無いんですか？　お姉さまには悪いですけど、スオウは私の物ですよ」
「お前の物じゃねーよ」

そして何を見てたら、あれがイチャイチャに見えるんだ。機嫌が悪かったのはそのせいかよ。たく……なんでコイツは、いつもそうなんだよ。
最近気付いたけどさ、僕に女友達が少ないのって、日鞠のせいじゃないか？　クラスメイトの女子達も、僕にはなんだか一線置いてる感じだし……その発言を至る所でやってる訳じゃないだろうな？
いや、それなら僕はどっかの誰かから刺されてもおかしくはないか。日鞠の奴は人気者だからな。

「大丈夫だよ。別に私は彼をどうこうしようなんて思ってないからね。安心して。私たちは今からちょっと行くところが……」

天道さんの言葉が途中で濁る。そして視線が僕へと向いてた。ああそっか、ガイエンの事はなるべく秘密にしておきたいこと。
言っても良いものか、日鞠が口堅いかその判断は彼女には出来ない。日鞠は天道さんと僕を交互に見つめて、最終的には僕に圧力を掛けるんだから止めて欲しい。
頬を膨らませて何を無言で訴えてるんだコイツ。

「大丈夫ですよ。日鞠はお喋りだけど、口は堅いから。人の秘密は絶対に漏らしたりしませんよ」
「そっか……ふふ、信じあってるのね」

う……その言葉は余計だけど、面倒だから否定するのは止めた。一人だけ取り残されてる日鞠は信じあってるの部分にだけ、反応してた。

「で、秘密って何？　スオウが病室から抜け出した理由だよね？」
「日鞠さん。実は二日前にもう一人、ここに運ばれて来た人が居るんです。その人を彼を確かめたかった……それだけ何ですよ」
「ああ、それって佐々木さん達が入ってった部屋の事ですか？」

結構空気を落として話した筈なのに、日鞠の言葉であっさりとその空気が壊された。

「知ってるのかよ！」
「うん、だってまずは探検するでしょ？　そしたら名前が書いてあった病室があったもの」

探検って……そう言うのは小学生で卒業しとけよな。高校生にまで成ってまでそれはどうかと思うぞ。だけど天道さんの言葉を聞いた日鞠は、流石に察しが良かった様だ。

「じゃあ、もしかしてその人もＬＲＯのせいで？　スオウの知り合いって事？」
「知り合いって程なのか……僕は微妙だけどさ。アギト……じゃなかった秋徒の友達だよ。あの戦いで助けれなかったんだ」

僕の言葉に、日鞠はやや思案顔をして、それから言葉を発する。
「そうなんだ。秋徒のね。じゃあまさか愛さんとも？」
「ああ、そうだな。ＬＲＯじゃその三人が、こっちの僕らみたいな物だったんじゃないかな」
想像だけどね。だけど多分間違っちゃ居ないだろう。愛さんってのはアイリがこっちで僕達に伝えた名前だ。ちなみにね。
「そっか、じゃあその人の事なんだね。秋徒が戻って来てから何かを必死に調べてたよ」
「アイツが……」
いやそれは当然か。どうにかして、ガイエンがどうなったのか知りたかったんだろう。だけどその時には、既にここに運ばれてたのか？
流石に僕の知り合いだからって、そこまで報せる義理は佐々木さん達には無かったって事か。
「ねえスオウ。今は戻ろうよ。これは秋徒達も呼んで・・それが正しいんじゃ無いかな？」
「確かに……そうかも知れないけどさ」
それだけの人数にそれを見せる事を大人な人達が許すだろうか？
いや、それくらいはさせなきゃいけないのか。
「そうだね。それが正しい。大丈夫よ、君は私たちに必要だから大抵はどうにか成るわ。でも……忘れないでね。失望するかも知れないけど、大人はね仲間でも味方でも無いって事を忘れないで」

天道さんのその言葉はイヤな位に頭に残った。その日は結局、病室に戻ったよ。そして数日後、アギト達と共に僕はそれを見据える事になる。

関係性の問題（後書き）

第百七十六話です。
なんかゆっくりしすぎですね。そろそろエンジンを掛けないと……いや、エンジンはずっと掛かりっぱなしだから、ギアを上げないとです。状況は少しずつ進んではいるんですけどね。
ＬＲＯにレベルの概念は無いけど、レベルアップが必要です。それぞれに次のステージに進まないとシクラ達は倒せないですから。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

現実の光景（前書き）

僕達は日を改めて集まった。僕と日鞠と秋徒。そして彼女を加えての四人がこっちのガイエンに会う許可を貰ったよ。だけど秋徒の奴は、何だか疑り深い。今日まで、そしてこの瞬間もぐちぐちなんか言ってる。

だけどそれは見たくない現実……だからかも知れない。でもさ、ここに来たってことは、見据える覚悟もしてきたって事だろう。

現実の光景

「本当……なんだな？　アイツがここに居るってのは」

照りつける日差しが窓から差し込んでる一人の為の病室。まあ実際は、きっと複数個のベットを入れて、カーテンで仕切る様な部屋なんだろうけど、今ここには一つのベットしかないんだ。僕用の。

「何回も言わせるなよ。確かな情報だぞ」

僕はベットのリクライニング機能で体を起こして、傍らの奴にそう言った。殺風景な病室……部屋の広さに対して、極端に物がないからそう感じてしまう。

僕のベットの周りに有る物が、この病室の全て。三人居たって、まだまだ広い。僕のベットは角辺に配してるから、隅に集まってるみたいな感じだよ。余計にガラ～ンと感じる。

扉まで遠いしね。そんな扉側のイスに腰掛けてるのは秋徒。デカい図体してるくせに、さっきから同じ様な事をもう何度も言ってて、正直うんざりだ。貧乏揺すりも目障りだしね。

「だけど、お前達が確認した訳じゃないんだろう？」

「だ～か～ら～、先に確認する事を待ってでも、お前達に報せてやったんだろうか。僕達じゃ関わりが浅いからな、お前とかが居た方が良いって思ってやったんだぞ」

さっきから疑り深すぎるな秋徒の奴。そりゃあコイツはコイツで大変なんだろうけどさ。あの後、日鞠を説得してダイブしない条件

下での、情報収集を認めて貰ったら結構凄いことに本当に成ってたんだ。
あの戦闘中のログとか……炎上と言ってもおかしくない数だった。それに僕が眠ってた二日間も、ある意味別の戦いが繰り広げられてた。

あの戦闘で首都アルテミナスは城を残して無くなっちゃったからな。その復興が、ある意味でもう一つの戦いだ。コイツも、それなりの立場な訳だし、サボる訳にもいかないんだろう。
てか、サボる気なんて起きない位に、エルフの人達は生き生きしてるらしいけどね。週間ＬＲＯ通信によると。あの戦いは確かに大変だったけどさ、取り戻せた物も多分あったんだろうな。

「じゃあ良かったのかよ。僕と日鞠の二人で黙ってたとしたらさ」
「そんなの許すわけねーだろ！　時間を見つけては、ガイエンと関わりがあった奴らに手当たり次第に当たってたんだぞ」

僕の意地悪な言葉に、秋徒の奴は本気の声で叫んでた。唾飛んでるっつーの。てかそこまでやってたのかよ。
目の前で消えていったんだ。いくら後悔したってその気持ちは行き場なんて無いんだろう。たく、それにしてももっと親友を信じろよな。
どんだけいい加減な事を言うと思ってるんだ？

「はあ、ならもっとちゃんと感謝しろよ秋徒。てかさ、お前も日鞠と共に僕が運ばれた時に来たんだろ？　その時佐々木さん達に聞かなかったのか？」
「聞いたさ。当たり前だろ。運営側の人が居るんなら、そうしない訳ない。だけどさ『個人情報』を他人に教える事は出来ないって言われたんだ

当たり前だけどな」

それは確かに当たり前だな。今の時代、個人情報は重要なキーコードだ。それこそ守秘義務とかだろう。何百万って言うプレイヤーの個人情報を握ってる訳だし、無闇やたらに言い触らすなんてやっちゃいけない事だ。

てか犯罪だそれは。

だけど……少し人が悪い気もするよな。だって同じ日に僕達は運ばれて来たらしいって事は、その時既にアイツその物がここに居たかも知れない。

それってあんまりだよ。この今日という日までの日数分の頑張りが無駄な様なもんじゃん。佐々木さん達から見た等さ――――

「おいおいあいつ、まだあんな所で右往左往してやがるぜ」

――――かも知れない。まあそういう人達じゃ無いけどさ。言葉を放った秋徒もやっぱり悔しそうだし……するとここで、窓側から声が割り込んで来た。

「日鞠ちゃんの個人情報漏洩タ～イム！　私の幸せは、スオウお世話を甲斐甲斐しく焼く事なの――――ていっ！」

「むほぉ！？」

口を開く前に口封じをされてしまった。さっきから黙ってリンゴの皮を剥いてると思ったら、またおかしな想像を脳内で膨らませてたんだろう。

何粋なりリンゴを口に突っ込んでんだよ。これから何を期待するんだ？

「もう、個人情報とかそれは私ので満足しときないさいな。スオウもさ、あんまりからかっちゃダメだよ。秋徒は信じて無いんじゃなくて、本当は見たくないんだよ。
だから不安で一杯なんだよ。ほら、リンゴでも食べて落ちついときなさい、二人とも」

うぬぬ……なんだかその時の日鞠は妙に神々しく見えた。てかあの奇行と発言から、そこに持っていくか？　てかいけるか？
ほんと日鞠には、勝てないなって思った。なんだかんだ言って、僕達の中心はこいつ何だよな。プラスチックのカラフルなフォークっぽいのでリンゴを刺して、日鞠は秋徒へ差し出す。

今言うと、リンゴもウサギの様に切られてるんだ。赤い皮の部分をブイ字型に切ってウサミミを表現してるあれだよ。
きっと小学生とか幼稚園児の頃に一度は見たことあると思う切り方。だけどそれが差し出されるのが、高校生にもなった男子じゃね。

普通に日鞠が持ってる分には良いけど、秋徒が受け取ってそれをかじるとさ……なんだか切ないな。なんだろうこの気持ち。
まあ取りあえず、僕も口に突っ込まれたリンゴを咀嚼しないとだ。てかこれもウサミミカットされてたら、それは皮ごと食えと暗に言われてるって事だろうか？
日鞠はお皿に残ってる分のリンゴを、満足そうに頬張ってるから真意がわからない。

（まあどうでもいいや）

そう思って僕は思いきってリンゴをかみ砕く。皮だって食えない訳じゃないよ。ただ食べないだけ。だけど何分、リンゴの一切れって大きい。

口の中一杯リンゴだ。リンゴ汁が大洪水を起こしてる。そしてそんなリンゴを胃に流してると、そこで最後の待ち人が姿を現した。

「お待たせしましたみなさん」

そんな上品な言葉で登場したのは、すずやかな青いワンピースに身を包んだ、お嬢様みたいな雰囲気を出す女の人だ。

僕たちは一斉に開いた扉から中へ入って、こちらに寄ってくるその人に視線を集める。中でも秋徒の視線がバカみたいに一直線に向かってる。

てか惚けてるな。釘付けとはこういう奴の事を指すんだろう。辞書の釘付けって所に、解説の写真に使いたい位、秋徒はそのお嬢様『愛ちゃん』に釘付けで張り付けで首ったけだった。

おいおいこいつ、花が周りに出てるんじゃねーかって感じ。そんな秋徒視線に気づいたのか、ちょっと手前でオロオロとし始める愛ちゃん。

「えっと……遅かったですか私？　それとも何か変ですかね？」

高そうな腕時計を確認して、自分の服を見下ろす。うん、何も問題ないな。至る所の所作に気品がある人だ。女性らしい仕草って奴が、そこら辺の女性とは違うんだよね。

堂に入った感じで、しかもだからか余計にそれを意識してしまうと言うか……彼女は気合いを入れ直して一歩を践む――――――――コキッ

「きゃあ！？」

転けた。彼女は何もない、ある意味見晴らしさえいいこの部屋で、一歩を践み損ねて転けた。いやあもう大変。何が大変ってそりゃ……パンツが丸見えだ。
フリルがついたオレンジと白の混色パンティー。夏らしい色合いなのかな？　でもなんだか、ぽかったんでちょっと安心したよ。

これでＴバックとかだったら、僕が彼女を見る目が変わる所だよ。まあ秋徒は、目の前に現れたヘブンに昇天してしまったようだったけど。
完全に動きが止まってた。呼吸も危うい感じに止まってる。それこそあの世にヘブンされそうだ。

「あああああ！　ダメダメスオウはダメ！！」

そう言っていきなり僕の視界を両腕で抱えて遮った日鞠。そりゃ確かに、僕にとっても眼福な光景だったけどさ……これはこれで危ういんだけど。

「ちょっ！　日鞠お前な……」
「ダメったらダメなの！　愛さんのパンツを見る権利はスオウには無いよ！　てか、女の子のパンツにそんなに興味津々だったなんて――――もうしょうがないな。
私のをいくらでも見せてあげるから！」
「おい、途中から発言おかしくなってるぞ！　そうじゃなくてだな……お前、僕をどこに押し当ててるのか分かってるのか！？」

日鞠のおかしな言葉にいちいち対応しながら、状況を確認させてやる。両腕で僕の顔を抱え込んでる日鞠は、つまりはさ……

「え？」

僕をその胸に押しつけてる状態な訳なんだ。そして短い言葉でそれを悟った日鞠は、突然僕を突き飛ばす。

「きゃきゃあ！！」

「うおおお！」

ズゴーンとベットの反対側に落とされる僕。するとその時、丁度秋徒を巻き込んでたらしく、地面に激突って事は僕は無かった。だけど……

「うへっへへっへ」

「うわ、こいつキモッ！！」

クッションに成ってくれた奴に対して、酷い言いぐさとは思ったけど、マジでキモかった。まだヘブンしてやがる。どれだけ愛さんのパンツが脳内に焼き付いてるんだ。

そして当の愛さんはというと、自分の晒してしまった醜態に対して、服を整えてからスゴスゴと頭を下げてた。

「えっと、あのその……不埒な物を晒してしまってススミマセン！」

てな感じ。そしてベットの反対側からは日鞠の叫ぶ声も届いてた。

「ススススオウのバカバカバカカバカ！！　いいいいつからそんな変態に成っちゃったの！？」

おいおい、何言ってんだこいつ。いつもはこっちが貞操の危機を感じ取るわ！！　しかもさっきのもお前からだし、計略だっておか

しくない。
てか、なんだか収集付かなく成ってる。秋徒はヘブンしたままだし、そこに乗ってる僕も僕だ。なんか端から見たら危ない関係に見えなくもないかも。決してそんな訳無いけどさ。

そして愛さんは立ち上がれずに、顔を染めてワンピースの裾を押さえてモジモジしてるし、日鞠は日鞠は理不尽な事に騒いでる。
もう何がなんだか……その時、ガラッと再び扉が開いて登場した天道さん。その彼女がこの光景を見て、開口一番に言った言葉が

「何やってるのあなた達？」

だった。なんかもう、おかしな光景に面食らってたよ。このおかしく閑散とした病室に、変な空気が停滞した瞬間だ。

「さて、みんな落ち着いた様だし、そろそろ行きましょうか？」
「「「はい……」」」

天道さんの言葉に反応する僕たちの声は、疲れが一緒に漏れて来るような声だった。まあ単純にさ、あの騒ぎで疲れたんだ。
体がと言うか精神にきたよ。

「ほら、スオウ君けが人だしこっちに座って」

そう言って天道さんが用意したのは車いす。彼女が持って来たんじゃなく、元々僕用にこの部屋に用意されてたやつだ。

「ああ、ありがとうございます」

「はいはい！　大丈夫ですお姉さま。私が車いす押しますから」

そう言って日鞠は天道さんから車いすの主導権を奪った。

「甲斐甲斐しいのね。良いお嫁さんじゃない」

「嫁って……本当に甲斐甲斐しい奴は、けが人をベットから突き落としたりしないと思いますけどね」

僕は必死に天道さんの言葉を否定してみるけど、日鞠の奴は都合良いことだけを聞き分ける耳を持ってるから「えへへ～」とお嫁さんって言葉にうっとりしてる。ダメだこいつ……

「ほら、そっちの二人も――――ってまだ二人には自己紹介してなかったね。私は『天道　夜々』よ。二人の事は彼から一応聞いてるわ。

ＬＲＯではあのバカが迷惑掛けたって……でも、友達なんだよね？」

天道さんの視線の先には二人の姿がある。秋徒と愛さん。二人はその言葉に頷いた。

「え～と、はい。自分から口に出すのは恥ずかしいけど、その筈です。僕は『秋徒』ＬＲＯでは『アギト』ってキャラでガイエンとは知り合いました」

自分達までガイエンに会えるように口添えしてくれたお姉さんだから、秋徒は必死に礼儀正しくあろうとしてる。ぎこちないけど。

そして次は愛さんが軽く一礼をして挨拶をする。

「初めまして、私『藤沢　慈愛』と申します。この度は私にまでの

心配り、ありがとうございます。ＬＲＯでは『アイリ』と名乗らせて貰ってます。
私達はガイエンを助けたい。その気持ちは本当です」
どっかの誰かさんと違って、その所作は手慣れた感じだ。淀み無く美しい。だけど、彼女のその言葉で僕達は一斉に「え？」と思わず呟いた。
だってさ――――
「慈愛って……愛じゃないんだ」
思わずそう言うしかない。だって本当にビックリだったもん。
「えっと、実はそうなんです。だけど慈愛ってその……名前として変じゃないですか？　それに一応、最初にあった時にはその辺りは濁して置いたはずですが……」
ふむ……そう言えばそうだったかも知れない。でもまあ、秋徒の奴には良いとしても、協力者だった僕と日鞠にも偽名だったとはちょっとショックだよ。
「そのええと、言い訳にしか成りませんけど、今日はちゃんとその事も伝えようって思ってきました。私、本当は人見知りで恥ずかしがり屋で……それなのに慈愛だなんて、おかしな名前で……本当にごめんなさい！」
一生懸命な言葉を紡いで頭を下げてくれる彼女。まあ別に怒ってた訳でも無いんだけど……やっぱりＬＲＯとは印象が違うな。
もっと凛々しく見えたけど、あれはアイリだからって事だろうか

？　う～んでも、秋徒を思っての行動の時は、人見知りにしては積極的だったし、やっぱりどっか芯の所は同じって事だろう。
　すると頭を下げる彼女へと日鞠が進み出た。
「そんな謝る必要なんて無いですよ。女には一つや二つ秘密があった方が魅力的なんですから。それを詮索したり、受け入れなかったりなんて、小さな男がすることですよ。
　でも大丈夫！　ここの二人は、そんな器の持ち主じゃ無いんですからね！　ね！」
　念を押してきたな日鞠の奴。まあ器の大きさはともかくとして、それで非難するような事はしないっての。
「ああ当然だろ。なあ秋徒」
「……おおう！　当然だ。それに……慈愛ってその、おかしくなんか無いと思うし……寧ろ可愛いって言うか……」
　後半は言葉が萎んで言って聞き取るのがかなり困難だ。デカイ図体してるから、そのモジモジとした態度が僕には妙に気持ち悪く写るんだけど……だけどどうやら二人はちゃんと通じあってる様だ。
「えっとあの……ありがとう。秋徒君にそう言って貰えると、ちょっと自信になるかもです。自分の名前を好きに成れそう」
　柔らかく微笑む愛さん――じゃなく慈愛さんだっけ？　はなんだか良い笑顔してた。うん二人の間には甘いピンク色の空気が漂ってるよ。
　そう言えば、二人は付き合ってるんだろうか？　あの戦いでお互いの思いを再確認したはずだけど……僕は倒れたから知らないな。
　日鞠もＬＲＯ方面には余り関わろうとしないし（僕がが主観に成

らなければ）、だから聞いてない。いや、知ってるかも知れないけど、わざわざ話す様な事はしないか。

「所でさ、どう呼んだ方が良いのでしょうか？　慈愛さんってのもどうかと思うし、愛さんで良いですか？」

僕は二人の甘酸っぱい空気の中に、無粋にも割り込んだ。いやさ、彼女には悪いけど、慈愛さんって確かにちょっと言いにくいかなって。

「どうかって事は、私の名前はやっぱり……」

急に萎れる愛さん。いや慈愛さん？　もううざいな。

「おいスオウ！　お前、彼女の名前に文句でもあるのか？　ああ！？」

チンピラかこいつは？

「あ～あ、本当にスオウはどこまでもデリカシーに欠けるよね全く」

何故か日鞠までそっち側に回るか。そりゃ確かに、どうでも良いことだったかも知れないし、ここで言う事じゃなかったかもだけどさ……呼び名はスムーズな方が良いじゃん。

て、これを言ったら本気で秋徒に殴られそうだから、ちゃんとそう言う事じゃないと伝えるか。

「違うって、おかしいとかじゃなく……え～と、そう本名二人だけの間での方がいいかなってさ。僕達が言っても効果ないじゃん。

秋徒が言ってくれるのが嬉しいんだからさ。だから僕達は愛さん

のままが良いかな～って」

さあどうだ！？　フォローも理由も我ながら見事に言い訳出来たと思うけど……

「そ、それはそうだけど」

「まあ、確かにお前達が無闇やたらに慈愛・慈愛言うのもなんだかイヤだしな……」

はは、恋愛で頭が沸騰してる奴なんてこんなもんだな。二人は照れながら目が合うと、笑い返してる。まあ僕達は愛さんで良いって事だろう。

そして僕達の会話が一段落した頃にようやく、蚊帳の外にいた天道さんが今更な事を叫んだ。

「アイリってあのエルフの国のお姫様の！？」

ここからはまたしばらく、その言葉に端を発した質問がいろいろ来たわけだけど、それは割愛で。取りあえず、僕達は目的地を目指します。

目指す病室はそんなに遠くは無かったけど、どうやらこの病棟でそれぞれ僕達は出来るだけ離されて病室を与えられてるらしい。円上に成ってるから。三人でそれぞれ、三角形の頂点の位置に部屋がある感じだ。

あの目覚めた日に僕が逆側に行ってたら、見つけてたかも知れないな。だけどそれじゃあ、天道さんとは会えなかったかも知れない。縁って奴を感じるな。

その扉の前には佐々木さん達が待っててくれてる。あの日するはずだった話も、今日に回したからね。自分の体の事はあの日に聞いたりしたけど、何が起こったとかの詳しい事は、今日にしたんだ。
やっぱり僕達は分かれて戦ったから、それぞれの視点は必要だろう。

「遅くなってすみません」

そう言って天道さんが頭を下げる。それを佐々木さん達は、気にしてない風の事を言って扉を開けてくれた。招かれる様に病室へと踏み出す僕達。
車いすが僅かにそのタイヤの音を響かせて、日鞠が方向転換。真っ直ぐ見据える、光溢れるその場所。扉の横には表札が一つ。そこにはガイエンの本名が綴られてる。
【戸ヶ崎　志朗】それがガイエンの本当の名前か。

病室に入って真っ先に目に入ったのは、棚の花瓶に生けられた黄色い花。あれはあの日、天道さんが持ってた物だろう。
たった数輪。華々しいとは言えないし、豪華でも無い。でもその命を示す様な咲き方が、この無機質な場所では必要だと思える。

部屋は僕の所と同じ様な感じだ。ベットの周りに大量の機械……でもその物々しさが段違いだな。そしてそんな機械に囲まれた中で、一人の男性が頭に例の物を被ったまま、堅く瞳を閉じている。
本当にただ眠ってるように。心拍を示す機械が規則的な音を出してる。生きている……それはちゃんと証明されてる。

だけど目覚めない。あの頭の楔が、この人をどこかに捕らえてる。エルフの整った顔を見てたせいか、なんだか年よりも老けて見えて

しまうな。
多分まだ二十代そこそこの筈だけど……頬も痩せこけてるし、肌の色もなんだか悪い。髭も手入れしてる風でも無いし……この人は、あの日からこうなったにしては、なんだかこういうのも失礼だけどみすぼらしかった。

この人はさ……ちゃんとリアルを生きていたのだろうか？　そう思ってしまう。偶に聞く事がある。ＬＲＯとリアルの逆転。
あそこには夢があるから、そんな感じで捕らわれる人も居るらしい。この人も、そんな一人だったのだろうか？　だからこそ、あんなに狂気的に成ったのかも知れない。
でも……それでも……

「ガ……イエン……」
「お前……なのか本当に……バカ野郎が……」

この二人と出会ったことで、きっとこの人は変わった筈だ。いや、あの戦いで変われた筈だったんだ。歩みだそうとした未来を、僕達は守れなかった。
二人は静かに涙を流す。僕はそんな光景を目に焼き付ける。この涙を僕で再び流させない為に。

現実の光景（後書き）

第百七十七話です。

そろそろ新たな問題が出てきます。それはＬＲＯをやってる全てのプレイヤーに関係があること。これからはリアルとＬＲＯの二つの問題に向かわなくちゃいけなくなる！？　みたいな。

てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

わがままでいい（前書き）

僕達はこれからの問題を聞かされた。事件はなにも一か所で起こる訳じゃない。僕達が激戦を繰り広げてる間に、リアルの方でも動きが有ったようだ。前々から、そんな話は有ったわけだけど、遂に動き出す時期になったらしい。

ＬＲＯの様々な問題は、世間では色々言われてたから、それを調査審査する機関が作られた。しかもそれはもう動き出してる？

最悪の事態は、ＬＲＯのサービスが停止されるかもしれないって事だ。

わがままでいい

僕と日鞠は病室に入って五分もしないうちに、再び外に出ることに成った。佐々木さん達に促されて、一目近くでその顔を確認した程度。

でも、病室に残ることに成った愛さんと秋徒、そして天道さんに比べたら僕達二人はおまけみたいな関係だから、それもしょうがないのかも知れない。

それに少し時間をおかないと、秋徒も愛さんもこみ上げてる物を心に仕舞うのに時間が掛かるだろう。色々と回想するには二人が落ち着いてから……そういう事らしい。

静かに扉を閉めて、異様に閑散としてる廊下に出る。さっき来たばかりだからさ、なんか効率悪く感じるな。

「で、なんなんですか？　秋徒達には聞かせられない事でも？」

僕のそんな言葉に、佐々木さん達は真剣な眼差しで、互いを見合ってる。一言二言、僕達には聞こえない程度の声で囁きあって、そして纏まったのかようやく言葉が返ってきた。

「いや、なんて言ったらいいのか……ね。これは非常に不味いんだよ。君達にとっても、私達にとっても」

「ん？　不味い事はわかってますよ。この状況が都合が良い……なんて事を言う奴いないでしょう？　だからこそ、あの人もそしてセツリ達も助け出さないといけないんでしょう？」

佐々木さんの言葉に僕が当たり前にみたいに返した言葉。間違っちゃいないと思うその言葉……だけど何故か、佐々木さん達の表情は微妙で、どこか浮かない。
そして歯切れの悪い言葉が返ってきた。
「まあ、そこなんだよね。だからこそ、あのまま中では言えなかったって言うかだね……言いにくくて伝えにくいというか……」
「なんだかはっきりしませんね。じれったいですよ」
大の大人が何ハニカんでんだ。それもおっさんじゃキモいだけっす……とは心の内だけで思っておこう。結構世話になってるからね。この人達には。
すると一度深く息を吸い込んで、決意したかの様に言葉を吐く佐々木さん。
「実はだね。誰も助けられなく成ってしまうかも知れないんだ」
「誰も……助けれない……は？」
なんだか上手く言葉が飲み込めないぞ。いや、これ以上分かりやすい言葉も無いかもだけど、理解しがたい。どういう事かわからない。
混乱する僕が次の言葉を紡げないでいると、割と冷静に聞いてたらしい日鞠が、その理由を問いただしてくれた。
「どういう事なんですか？　成ってしまうかも知れないって事は確定じゃないけど、その可能性があるって事ですよね。
そこら辺から詳しくお願いします」
「ああ、そうだね。今の言葉は唐突過ぎたかも知れない。スオウ君にはあの戦いの前に言ってたと思うんだけど、原因は例の調査委員

会なんだよ。覚えてるかい？」

調査委員会？　う～んなんだか聞いた様な気がしなくもないけど……なにぶんあの戦いが濃かったせいで、その前の事はあやふやな感じなんだよね。

するとまたまた、日鞠が例の如くその答えをくれる。

「それって、もしかしてテレビで言ってた奴ですか？　確か国が設立する、拡大し続けるネットとそれに同調して増していくネットゲームがどんな影響を及ぼすかを調査するための組織だとか。

確かＬＲＯもその調査対象に入ってた筈ですよね？　不備が見つかれば勿論サーバー停止とかを言いつけられる筈です。

ＬＲＯなら今のサービス事態の停止が最悪考えられます。だって既に二人……このシステムで犠牲者が出てるんですから」

日鞠の言葉に、佐々木さん達は苦い顔をして黙り込む。どうやら、まさにその通り……と言った感じだ。成る程ね、そう言えばそんな話をあの戦いの前にしたかも知れない。

そのニュースは僕も見た覚えがある。たく、それにしても何でも知ってる奴だなこいつは。

「思い出した思い出した。でも確か、大丈夫って言ってなかったですか？」

僕の言葉に更に困った顔をする皆さん。すると少しポッチャリ系な人がボソボソトと病室を指さしながら呟く。

「あの時と……今じゃ、状況がほほら違うんだよ」

状況が違う？　あの戦いの前は大丈夫で、今はそうでも無くなっ

た……その原因はつまり、その指の先って事なんだろう。
そこはガイエンの眠る病室。いや、こっちなら戸ヶ崎さんと言った方が良いのかな。でも彼が原因って……そりゃ不味い事は分かるけど……でも既にセツリ達の例があるのにサービスは開始されたんじゃ無いのか？

そこからほじくり返そうとその調査委員会はしてるって事か？
僕は扉の向こう側を見つめるようにして言ってみた。

「あの人がこうなったから状況は変わった……そう言う事ですか？
だけどじゃあ、セツリ達はどうだったんですか？」
「そそそれは……」

ポッチャリしたその人が僕の言葉に何かを返そうとした所で、開いた扉から声が割り込んできた。

「あの子とか当夜は実際ＬＲＯの稼働前で、フルダイブシステムの事故って事だったから、原因が違う事に成ってるんだよスオウ君。
でも彼は違う。ＬＲＯの稼働から一年と数ヶ月。紛れもなくその中で起こってしまった事。フルダイブシステムへの逃げ道は無いわ。
そもそも、苦しかった言い訳だしね。だってＬＲＯは根本をそのフルダイブシステムに頼ってる訳だから、今まで何の原因も追究されずに来た方が都合が良かったくらいよ」
「……なるほど」

確かに言われなくてもその通りだな。しかも実装中のゲーム内で消えてしまって意識が戻らないとか、問題を追求しない方がおかしい。
起こってしまった最悪の事態……状況は確かに、あの戦いの前とは違う。なるべく近しい人にも隠して起きたかったのはそのためか。

「ちょっと待ってください！　それじゃあその調査でサービスが停止とかの宣言を食らったらどうなるんですか！？　ＬＲＯは……ガイエンは！」

天道さんの後ろに居た秋徒が声を荒げて言い放つ。見過ごせない問題だもんな。その気持ちは僕にも分かる。だってそれはガイエンだけの事じゃない。

セツリだって当夜さんだって、そうなったらおしまいだ。

「だからそうならない……そうさせない為に皆さんは、彼らをここに隠してるんですよね？」

ズバッとそんな事を言ったのは日鞠だ。いやまあ、誰もが気付いてる事だけどさ。それでもなかなか口には出さない事を堂々と……日鞠の言葉に佐々木さん達は更に苦い顔をしちゃってるじゃないか。

「でも……助けれる可能性もあるんですよね？　それなのにいきなりサービス停止とか……そんな事されるんでしょうか？」

丁寧な言葉使いで会話に加わったのは愛さんだ。大人しそうに見えても、やっぱり自分の考えは言えるしっかりした人なんです。

というか、僕達よりも年上だしね。彼女は大学生なんだよ。忘れがちだけどさ。そんな彼女の言葉に、ようやく大人側の人達は口を開く。

「それが……そうなりそうだから大変なんだよ。まだ戸ヶ崎さんの事は公に成ってはいないけど、噂はＬＲＯ中に広がってる。

いつまでも人一人を隠して置ける訳もない。考えてもみてくれよ。一人でもゲーム中に戻れなくなったとしたら、それを放置しておけ

るかい？」
「「「……それは」」」

僕達の言葉が重なる。嫌な方向にだ。調査委員会が調査して、それを決定されたとしてもそれは正義……なんだろう。
そう思ってしまう。それを行うのがその人達の役目だ。遊びは絶対の安全性の元に提供されるべきもの……安全を確認出来ない物を市場になんて出して置くべきじゃない。
それはもう一般常識的な物だ。一時期公園から遊具が消えたりしたのと同じだろう。

「でも……まだ一人ですよ」
「だけど……二人目が出てからじゃ遅すぎる。ううん、これを知ればその調査委員会の人達はこう思う。既に遅すぎたって」

僕の必死の言葉に、日鞠が残酷なまでの正論を持ち出した。でも……その通りだ。そうなるよなきっと……誰も言い返せない。だってそれが正しいからだ。

「彼女の言うとおりだよ。それが正しいことだ。ＬＲＯはもう暴走状態と言っても良いくらいだ。私達は本当は、決断を下さないといけないのかも知れない」
「決断……それってつまり……」

佐々木さんの言葉に、秋徒が反応する。決断……それはもしかして、自分達でＬＲＯを終わらせる……そう言う事だろう。
でもそんな決め手の様な言葉が出ることは無かった。そうじゃなく、天道さんが僕を見てこう言う。

「だけどね……だけど私達はまだそれを下してない。それは希望が

あるからだよ。まだどうにか出来るかも知れない……そう思えるから私達は、人道的に反してる事をやってる。
スオウ君……君が私達の希望だよ」

その言葉に僕はどう反応したら良いんだろう。「任せてください」なんて言えない。希望だなんて……僕には過ぎた言葉で期待だよ。

僕だけじゃきっとここまで生きてなんか無い。今回だって、たまたまガイエンだったわけで、アイツが生きてればアイツが希望で良かった筈だ。
僕はいつだって、沢山の人に助けられて生きてこれたに過ぎないんだから。

「希望なんてそんな……僕が掴めるのはきっと、この二本の腕で掴める分だけだったんですよ。なのに……今じゃそれも……」

すり抜けた……取りこぼした。この手の一本を掴んでくれてた筈の彼女は……この手を離して去っていった。どうにも出来なくて……そしてガイエンを犠牲にして、それでもアイツは闇に向かって進んでる。

諦めちゃいないけどさ……こんな手に希望なんて大層な物は宿っちゃいない。それは言える。見つめる手は包帯で巻かれ、あの戦いがそのままここにあるかの様に感じれる。
そんな手に、後ろからそっと重なる手があった。そして温もりが伝わる。耳元で、背中を押す言葉が紡がれる。

「希望ってのは、周りの誰かがその人に感じる何かだよ。可能性って奴。自分で思わなくても、誰かにそう思えて貰えるのなら、きっとスオウには希望がある。

それだけの可能性がきっとある。ヒーローは名乗っちゃいけないよ自分から。でも私は信じてる。スオウは私のヒーローだって。
それだけできっと十分なんだよ」
「……はは、なんで僕がお前のヒーローなんだよ」

たく……こいつは人を乗せるのが上手いと言うか、なんだか日鞠に言われたらそうかも知れない位には思ってしまうじゃないか。
そしてそんな僕達のやりとりを見ていた佐々木さんが、痛みに耐えるような眼差しでこう言った。

「私達のやってる事は間違ってるのかも知れない。まだ未来がある君に、危ない事をさせようともしてる。それは大人の役目の筈なのにね。
決して誉められる事でも、称えられる事でも無いのは分かってる。私達は自分達の都合で、止められるかも知れない犠牲を増やそうとしてるのかも……
だけど、今ここで終わりたくないと思ってるんだ。ここで全てを公にすれば、確実にサービスは停止される。それじゃ、今眠ってる三人はもう……救われない」

救われない……その言葉はとても重く苦しい物だ。いや実際さ、当夜さんもセツリも救われたいなんて願ってるか微妙だけど、確実に一人ガイエンはそれを願ってる。
そして僕は僕のエゴでセツリに生きてほしいって願うし、あの二人がもう一度ちゃんと出会えたら……そうも思うんだ。

「そんなのは絶対に嫌です。友達をこのまま見捨てるなんて出来ません！　私達だって、ガイエンを助けたい！」

そう強く言ったのは愛さんだ。ようやく昔みたいに成れる所だっ

たから、誤解もわだかまりも解けてこれからもう一度……その筈だったんだよな。
サービスの停止は、そんなこれから始まったであろう事が全て、夢で終わってしまうって事なんだ。でも愛さんはその言葉の後に、苦しそうだけどもこうも言った。

「だけど……それはやっぱり私達のエゴなんですよね。誰かを救うために、他の誰かを犠牲にしていい理由には成らないし……そんなのは私も嫌です。
でも！　ガイエンがこのままなのはもっと嫌！　一体、どうしたら良いんでしょう……」

愛さんは混乱してるみたいだった。それはきっとここに居る誰もがそうだと思う。正しいと思うことと、やりたい事が違うんだ。
間違ってると分かってても、僕達は眠ってしまってるあの三人を見捨てる事なんて出来はしない。でも犠牲だって出したくないのは当然で……もう頭がグチャグチャだ。

それに愛さんはアイリだからな。国を治める立場の人だ。犠牲はエルフからも出るかも知れない。いやそもそも、シクラ達にそこんところの垣根なんて無いんだろう。
もしもそうなったとき、そんな事態が分かってた立場としては後悔するかも知れない。だけど、このまま諦めてもやっぱり、後悔するんだろうな。僕達はさ。
どっちかを諦める……そんな選択肢しか無いのだろうか？

「ワガママになれば良いんだよ」

そんな言葉が僕の頭上らへんから降り注ぐ。それはある意味、迷いのない声と言葉だった。誰もがこっちに注目する。

「ワガママ？」
「そうです。ワガママです。スオウはセツリちゃん達を助けたい。秋徒と愛さんは戸ヶ崎さんを助けたい。佐々木さん達もお姉さまも、このままで終わりたくなんか無い。
でもそんな自分達のワガママを通したら、別の誰かが犠牲に成るかも知れない事が怖いんですよね？」

さっきからそう言ってる。解決できない問題だ。それは許される事じゃない。だけど日鞠の奴は、簡単に解決策を提案しやがった。

「だからそれを含めてワガママで良いじゃないのかな？　このまま犠牲を三人出したままで終わるより、次々出る犠牲者をそれも含めて最終的にゼロに出来るのなら、私は後者の方が良いと思うんだけど。
ワガママだからやれないなんて、そんなの既にワガママじゃないよ」
「お前な……」

なんだか簡単に言って退けたけど、それは口で言うほど簡単な物じゃない。確かにそれが出来たら良いのかも知れないけど……そんな犠牲者を全員助け出せる保証なんてどこにある。

「保証なんていらないよスオウ。ようはやる気の問題。だってそもそも、それって付随してる事じゃないの？　セツリちゃんを助けれたら、後の人達も助け出せるんじゃない？」
「そうかも知れない……けど」
「けどじゃない！　このままじゃ中途半端だよスオウ。今までやってきた事は何だったの！？　その傷は、何の為につけたのよ！
中途半端が一番だめだよスオウ。ずっとモヤモヤするよ。あの時

こうしていればって思うくらいなら、全てを覚悟して前に進むの！
ワガママだからどうしたって言っちゃうの！！　眠ったって全員俺がたたき起こしてやるから――それでいいんだよ！！」

日鞠の怒濤の言葉に、その場の誰もが言葉を失った。変な感じに傷も痛む。それで良いんだよ――か、はは……

「それで……良いわけねーだろ！！」

僕は勢い良く地面に立ってそう言ってやったよ。座ってなんてられないな。好き放題言いやがって、それがどういう事か分かってんのか！！

「どんだけのもんを背負わせる気だよお前は！！　僕にはな、せいぜい目の前の一人か二人が限界なんだよ！！」

ＬＲＯ中……三百万のプレイヤーを背負うなんて出来っこない。そんなの耐えられない。僕はお前ほど、図太い神経の持ち主じゃない。

過大評価し過ぎなんだよいつだって。僕は平々凡々だ！

「そうかな？　本当にそう？　スオウはもう既に、ＬＲＯって物を、背負ってるって私は思ってたけど。セツリちゃんを助けるって決めた時から、そうだったんじゃないの？
今までだって沢山の人達を巻き込んだ。でもスオウは、逃げずに立ち向かってたよ。そして必ず、勝利してたんでしょ？
だからまだ生きてる。こうやって私の前に居てくれる」

そう言って日鞠は、立ち上がった僕の胸に、そっと頭を埋める。優しくゆっくりと、背中に手を回して抱きしめる。

「今までと何が違うの？　大丈夫……スオウは一人じゃないでしょ？　頼れる仲間も親友も、どこにでも居るじゃない。
ワガママで良いんだよスオウ。前だけ向いてて良い。だってそうでしょ？　物語はハッピーエンドじゃないとね。今ここで終わったら、誰もハッピーになんて成れないんだから」
「確かに……ハッピーでは無いよな」

暗かったどうしようもない道に、援護射撃で打たれてる気分だ。でも……そうなのかも知れない。ワガママで良いのかも知れない……そう思えてきた。
なんだか周りのみんなの顔も自然とあがってきてるし、やっぱり日鞠には勝てないな。今確かに終われば、それが正しいと思えてた。

でも……誰も幸せで無い事が果たして正しいのかって、今ようやく思える。ＬＲＯは三百万以上のプレイヤーが愛する世界だ。
例え、こんな事態に関係なかったとしてもさ、このままじゃＬＲＯはサービスを停止される。それは例外無く、犠牲者って事じゃないか？　今この瞬間もあの世界を駆けてるプレイヤーの誰もが　夢を奪われたも同然って事何だから。

つまりは元々、一か零しか無かったのかも知れない。中途半端な位置で悩んでた事事態が、間違ってた事だったのかも。

「大丈夫、スオウは勇者の素質あるよ。でも、それでもまだ不安なら……私がとっておきの魔法を掛けてあげる」
「は？　何言って――」

僕の言葉が途中で途切れた。言葉を紡ぐ事が出来ない状態になった。柔らかな感触が、唇に触れてる。鼻孔を擽る、いつもの香りが

頭の芯まで届くように充満してる。
目の前に……というより超至近距離で目を閉じてる日鞠。僕達は今、繋がってる。唇と唇で、一つに成ってる。

何秒位そうしてたか分からない。一分にも感じたし、十分位にも感じた。いや実際、時間が止まってたんじゃ無いかとさえ思った。

（何やってんだこいつ？）と思うより先に離れてしまった日鞠に一瞬（あっ）と思った事が悔しくて成らない。唇が離れると同時に世界も動き出した感じだった。
周りは日鞠の突飛な行動に、唖然としてる。一番そうしたいのは僕だけどね。

「何やってんだ！」

ようやく絞り出した声は、情けない事に震えてたかも知れない。だって一杯一杯だったんだ。今まで何度も、それを奪われそうに成ったことはあったけど、越えて来なかった一線。
それを何故今越える？　動き出した時間の中で、周りのみんなもさっきの光景を思い出して、それぞれに困った反応してるじゃないか。

そしてそれを向けられる僕は、死ぬほど恥ずかしいぞ。だけど日鞠の奴は、満足そうな顔をするだけ。そしてランランと輝いた瞳でこう言った。

「魔法だよ。私は何にも力に成ってあげれないから、私の愛と勇気を分け与える魔法の行い。これでもう、スオウは立ち止まらないで進むしかないよ。

なんてったって、私の気持ちは宇宙を造るビックバンより激しいからね」
「それは……確かに止まってたら死にそうだな」

キスしたって別にこいつ変わらないな～何て思ってたけど、心なしか足取りがフラツいてないか？　それにやっぱり顔も赤い様な。きっと今じゃ無くちゃいけない何かがあったんだろうな。僕が弱気に成ってたからこそ、今だったのかも知れない。
日鞠はいつだって決め球はストレートしか投げない奴だからな。

「まあでも……確かにいろいろ吹っ切れたかも。核爆弾並の物を投下する奴があるかよ」
「えへへ、そう思ってくれてる事が嬉しいよ。スオウはね、スオウにしか出来ない事をやらなきゃね。頑張って……なんてもう必要ないよね。
私は信じてる。それを忘れないでね」

日鞠の言葉に僕は頷く。そしてここにいる誰もがもう決めてただろう。これからの事を。

わがままでいい（後書き）

第百七十八話です。
リアルでも問題が起こってきて、リアルとゲームの交差がまた出来て来たでしょうか？　それを活かしたいんですよね自分的には。だからこの問題にも立ち向かいます。
ＬＲＯにもリアルにも敵が一杯。スオウ達は眠り続ける三人を助けれるのか！？　てな訳で、次回は火曜日にあげます。ではでは。

変わらぬ世界？（前書き）

僕は再びＬＲＯへと降り立つ。そこは今までと変わらない姿をした場所だ。大きな混乱も見られないし……ってここはアルテミナスじゃ無くないか？　いや、もしかしてそうかもとかは一応思ってたけど、予想は当たった様だな。

はてさて、こうなったらアルテミナスまで行かなきゃならない。けど道知らない。だけど一応アギト達には言ってたから迎えが来るはずさ。

まあそれまで気長に待っとくさ。久しぶりのＬＲＯだしね。

変わらぬ世界？

僕達は全てを背負って、間違いだと非難されても、これを選ぶしか出来ないと悟った。誰も犠牲になんてさせないために……誰もが楽しめる夢の場所を守るために、僕達はまだ終わる訳にはいかない。

調査委員会？　上等じゃないか。どれだけ正しい大人の意見でも、僕達は僕達の正しさを見つけるだけだ。エゴと言われるだろう。ワガママだと罵られるだろう。

誰の賛同も得られないかも知れない。だけどそれさえ覚悟の上だ。僕達は取り戻したいんだ。それぞれの大切な人達を。

それは誰になんと言われようと、諦める事は出来ない事で、正しいことが立ちはだかっても乗り越えると決めた。それで良いんだとさ。

ワガママで、いいんだってさ。調査委員会もう動いてるらしい。そしてその結果を発表するのが取り合えず一週間後と佐々木さん達は言ってた。

なんか早急じゃないか？　いや、ＬＲＯは叩けば埃が出ると思われてるか。てか叩いて無くても、悪い噂は出てる。セツリや当夜さんの事も蒸し返せばそうだし、リアルとゲームを取り違えたりもそうだろ。

食事とかだってそうなんだ。ＬＲＯで食べた気に成っても、胃に何かが入るわけじゃない。過激なダイエットに使う人もいて、栄養失調で倒れる人も居るらしい。

こうやって考えれば、ＬＲＯって問題多いんだ。自己責任の部分も勿論あるだろうけどね。モラルの問題。だけど対策は必要。

佐々木さん達は、ＬＲＯにあんまり干渉出来ないみたいだし、せいぜいメンテナンスくらいとか、イベントクエストの追加とか……その程度。
とても管理者側とは思えないな。それもそもそもの問題にされそうだ。まあだけど、そこら辺は僕が考えても仕方ない事だ。

僕は僕のやることをしないといけない。それがＬＲＯの為に成るはずだから。最初にそれを決めて、歩き出したのは僕だから……最後までいかないと。
それが責任でもあるだろう。どうなるかなんて分からないけど、こうありたい願いを込めて僕は進むと決めたんだ。それがきっと、僕がＬＲＯに見た夢を開く鍵。

「ダイブオン」

そんな魔法の言葉を紡ぐと、体と精神が離れる間隔が来る。そして落とされるんだ。真っ逆様に僕と言う精神体は意識の海を落ちていって、次第に光が見えてくる。
すると感覚が取り戻されていき、向こう側の体が僕と言う精神を受け入れる。光が服と防具になり、腰に二つの剣が現れる。

それに手を触れると、僕はこちら側に来たと感じる。一歩を踏み出し、大きな扉を目指す。そういえばこの扉、シクラ達が移動とかに使ってたのと同じだな。
あの戦いで、僕達がアルテミナスの上空に投げ出された扉。そして誰もが最初に踏み出す時に開く扉。後はログイン時に、こうやって開く事になる扉。

この扉の向こうが、誰もが夢を見る世界『ライフ・リヴァル・オンライン』。通称ＬＲＯ。それが広がってるんだ。
僕達の冒険の舞台で、剣と魔法が存在するファンタジックな場所。出来ないことが無い世界。起きえない事が起こる世界ともいえるかも。

一体どういう技術で造ったのやら。だけどやっぱり、この向こうには夢があるんだろう。魅了される人が無数に居るんだからな。
出会って、助けられて、仲間が出来た。だけどまだ、本当に取り戻したい奴が、この扉の向こうに囚われてる。この大きすぎる扉の開け方をわからなくなって……怖がって、逃げて……僕のせいでこちら側を信じれなくなった。

迎えにいかなきゃ成らない……たとえ拒絶されたって、何度でもさ。おかしいと思われるかも知れない。そこまでする事は無いと、言われるかも知れない。
アイツはもう、そこでいい……そう思ってるのだからと。甘すぎてわがままなアイツは、そちら側を選んだ。逃げ続けること、その先に何が待ってるかもわかってる。でも思うんだ。いや、僕はわかる。

それでもさ、アイツは死を覚悟して、向こうを選んだ訳じゃないって。だからやっぱり今の状況も逃げただけ……そうだろセツリ。
でもさ、それもある意味では仕方ないのかもと思う。アイツは歩き方を知らない。付いてくる事は出来るし、引っ張られる事も出来る。けれど、自分で歩くことは出来ないんだ。

自分で歩くって事は、真っ暗な場所で自分の道標を信じないと進めない。でもアイツはさ、自分を信じるって事を忘れてる。
ずっとベットの上で、一人では何も出来なかった期間が長すぎた。

どれくらいかは実際知らないけど、多分相当前からなんだろう。

出来ないことが仕方ないと、そしてそれが許された。自分に何が出来るのかなんて、わからなく成って当然だ。そしてそんな日常に戻りたくなんかないんだ。

意味が見いだせない……生きてる意味が。でもそんなの誰だってそうで……なんで自分が生きてるのかなんてわからない。自分に何が出来るかなんてわからない。

僕ら辺の年頃の奴らなんて、進路だ将来だとかでそれを無理矢理にでも模索しないといけない時期だよ。そして取り合えず大学とかだろ。

セツリをそこまで責めれるか？　曖昧なんだ誰だって。誰だって仕方ないって思う。いろんな事から、誰もが逃げてるよ。

でも……絶対に逃げられない物がアイツには迫ってる。死って奴だ。早すぎだろいくらなんでも。でもアイツが自分で歩き出せれば、それを延ばせるかもしれない。

せめて普通の寿命くらいには。僕は生きてほしい。生きれるのなら、そうあるべきだと思う。まだまだ全然歩き方を知らない奴で、自分からそこに張り付こうとしてるけど、誰もが見捨てても僕は手を伸ばすよ。

その手を引くよ。太陽の下まで連れ出すよ。生きさせたい、知らせたい……まだまだアイツの知らない事が、リアルには沢山あるんだから。

それこそアイツは、何にも知らない。諦めるのは全然早いって、どうやっても教えてやらねば成らないじゃん。

ガゴンと、扉の片側を押して光が漏れだしてくる。溢れるほどの光を踏みしめると世界が姿を現してくる。喧噪が息づいてくる。

「待ってろよセツリ」

そう呟いて、僕はＬＲＯに再び降り立つ。

「あれ？」

意気揚々で長々と心情を吐露したのは良いけど、なんか思ってた場所と違う気がする。ここってアルテミナスか？

僕はてっきり次に入る時はアルテミナスって思ってたんだけど……よくよく考えたら、ゲートクリスタルの設定を変更する前に僕って落ちてんじゃん。

いやそもそも、ゲートクリスタル事態があの時はぶっ壊れてた筈だけどね。だからいつもと違う感じで、プレイヤーが空から降ってきてた訳だし。それこそ流星群の様にさ。

てなわけで、ここはアルテミナスじゃない。ようはあの日、タゼホを目指す前に僕達が身を潜めてた町だ。なんだっけ？　確か中立地域の町なんだよな。

後ここと同じ様な町が二つ有るとか聞いたな。僕は何気に指を二本立てて、右腕を振るう。するとウインドウが姿を現した。

ウインドウを操作して、もう一つ画面を表す。メインウインドウの傍らに現れたそれは地図だ。まあ地図と呼べる程、まだ僕のは埋められてなんか無いんだけどね。

この世界の姿を現す輪郭があって、そこに示される情報は僕が通った場所だけだから、まだまだ全然世界は広いことがわかるよ。

「でも……それにしても……」

いや、前々から思ってたけど、ＬＲＯ広すぎじゃね？　それなりに大冒険を繰り広げて来たはずだよ。なのにたったのこれっぽっちかよ！

三分の一位はあるよ……な？　まあ種族間の国もまだまだあるし、それに暗黒大陸と呼ばれてる部分もあるから、まあやっぱりこんなもんなのかも。

それにこの町が囲む様に配してる地域、その内側も特殊だって聞いた気がする。それもそれは世界の丁度中心部分に成るわけだけど、どう特殊なのかは僕は知らない。

そっち側に目を向ける暇は無かったしね。あの戦いが終わったからか、なんだか前よりも人の行き来が激しくて、喧噪が騒々しく成ってるな。

ゲートクリスタルは大抵、出入り口の所にあるから、良くわかる。さっきからひっきりなしに人が走り去っていくよ。

まあ、元々ここは拠点とかに成る町でも無いんだろうけどさ、なんだか素通りされてるみたいで悲しいな。前の時はアルテミナスから溢れた人達もそれなりに居て、騒々しくもあったけど、ここまで行き来が激しかった記憶はない。

この町の先で何かあったのか？　とも思ったけど、別に向こうに向かうのが多いわけじゃなくて、アルテミナス側に向かう人達も多い。

まあアルテミナスに向かってるのかは知らないけどさ。ゴタゴタしてた問題が終わったから、通りやすく成ったのかもしれない。

「う～ん」

地図を見ながら僕は唸る。よくよく考えたらさ、僕は一からセツリを探さなくちゃいけないんじゃないかと思うんだ。この広い世界からさ。

いや、そもそもこの地図の上に居るかどうかも怪しいんだ。先の戦いで僕は奴らのフィールドを体験した。そこはこの地図には無い場所だ。

扉の向こう側とも言うべき場所。僕はあいつ等から先手を取ることが出来ない位置に居る。奴らが動いて、僕らも動く……そう成るしかない。

だけどこれだけ広いんだ、向こうが僕に出会わない様にすることは幾らだって出来てしまう。なんせあいつ等、あの巨大な扉を使って移動出来るのなら、距離なんて関係ないように思えるじゃん。

それとも向こうが絶対的にこちら側に来なくちゃいけない様にしむければいいんだけど……そんな訳にもいかない。

「はあ」

考えは一旦中止だ。そこら辺は一人で考えたって仕方ないことだろう。みんなで考えた方がきっとずっといい。地図を閉じ、ウインドウを閉じようーーとした時、僕は有ることに気づいた。

（あれ？）

そう心の中で呟いたとき、冷たい声が僕に届いた。

「ちょっと、なに呆けてるのよ。私が迎えに来てあげたんだから、

頭を地面にめり込ませる位に感謝しなさいよ」
「――あ？」

たく、登場から早々ときつい言葉を吐くこのメイドは、本当にメイドだろうか？　こんなメイドは僕なら直ぐに解雇する所だよ。
全く持って、癒しって奴を提供しないメイドもある意味斬新かも知れないけどさ、毒を食らう側には居たくなかったよ。

まあメイドの格好してるけど、こいつは実は暗殺者らしいというかみたいだから、メイド服はカモフラージュ程度しか無いのかも。
人は見かけによらないって言葉を利用してるよな完全に。

「何よ、何か文句でもあるわけ？」

僕の反抗的な「――あ？」にすかさず、そう返す所がこいつらしいと言うか……まあここまで言ってもまだ分かってない人の為に言っておくと、この毒舌メイドはセラです。
たく、不機嫌なのかどうか知らないけど、数日ぶりに無事帰還した僕に対して応対酷くないか？　別に熱烈歓迎を期待してた訳でも無いけど、初っぱながあれじゃ僕でも少しは傷つくよ。

「そりゃあるね。お前ね、ちょっとは僕に対して優しさを発揮しても罰は当たらないぞ。幸せ逃げねーぞ」
「あっそ、アンタにやる優しさなんて、犬に食べさせた方がまだましし」

ヒド！　なんて事を言うんだこいつ！！　優しさが枯渇したら、世界はきっと酷いことに成るんだぞ。人に優しくって言葉を知らないのか？

少し乱れてる様な髪を仕切りに気にしながら、セラは言葉を紡いでる。なんだろう……なんかいつも以上にキツいのはその乱れた髪のせいか？
たく、あたらないで欲しいよな。

「なんだよそれ。折角協力しあって、仲間気分だったのに、酷すぎだろ。犬にやれる程度の優しさなんて、こっちから願い下げだ。
そもそもなんでセラなんだよ」
「なに……アギト様とかが来ると思ってたわけ？」

うん？　なんだか異様に声に迫力が付加されたのか？　変な威圧感を感じる。

「まあ、それが妥当だろ。それかテッケンさんとか、シルクちゃんとか……お前は結構予想外だよ」
「はっ……テッケンにシルク様？　一体どんな夢を見てるのやら。あんた自分がどれだけのＶＩＰ待遇されると思ってるわけ？
庶民でしょ、平民でしょ、カスでしょ？　図に乗る前に自分の立ち位置を再確認してみなさいよほらカス」

おいおい、どこが不味かったんだ？　完全に怒らせたっぽいぞ。なんで庶民・平民と続いた後に凄まじいランクダウンしちゃうわけ？

「いやいやいや、流石にそこまで言われる筋合いねーぞ！
それに僕だってあの戦いは頑張ったんだぞ。カス呼ばわりは酷すぎだ！」

僕は必死に、自分の尊厳を守るために戦うぜ。言いたい放題にセラを放っておくと、その内存在を消されかねないからな。

突然「アンタ誰よ？」とか言われたくない。

「ふん、何も守れなかった癖に」

セラはそう呟くと、フンッと勢い良く顔を背ける。てか、それを言うか？　あんなボロボロになったのをバカらしいと言いたいのかコイツは？

流石にこれは本気で怒って言い場面じゃ無いだろうか。久しぶりに顔を合わせて数分で、かなり険悪なムードが漂いだしてる。

「何も守れなかったって……じゃあお前はどうなんだよ！　お前一人だけで、何かを守りきれたのかよ！」

僕の言葉にセラは、胸の前で拳を握る。そしてそのままその拳が「うるさ～い！！」の声と共に突き出された。

「がはっ！？」

鼻に直撃した拳。僕は後ろにひっくり返った。沢山の人が行き交う路上で、女の子のパンチを受けて、盛大にヒックリ返るなんて、恥ずかしすぎる。

「いきなり手を出すなんて……お前な……」

「私だってね、このままじゃいけないって思ってるわよ。でもそれをバカにしたような言い方で返されるのは勘に障る。何か問題でも？」

セラの奴はそう言うと、悪びれる事もせずに、寧ろ逆に尊大に胸を張りやがった。正直言って、流石に殴る行為にはキレかけてた僕だけど、その態度と言葉に唖然とした。

だめだコイツ……元の性格が凶暴過ぎるんじゃないのか？　バカにしたような――とか言ったけど、それを先にやられたのは僕だし、言うなれば問題はありまくりだ。
でも、その尊大な態度がさ、セラな訳だよな。なんか僕だけに対してこんな感じだけどさ、ああこいつってこんな奴だったな～とか思うと、なんかどうでも良くなってきた。

てか呆れてきた。ここで疲れてどうするんだよって。セラの奴は、毒ばっかり僕に吐き続けるけど、それなら機嫌を取っとかないとある意味、自分の身が持たない訳だよ。
売り言葉に買い言葉は、僕達の相性上永遠に終わりそうに無いしね。

「問題……だらけだけどもういいよ。悪かった。悪うございました！　折角お迎えに来ていただいたのに済みません。
セラが来るなんて思って無かっただけです。でもまあ、意外だったから、嬉しかったよ」

まあ、最初の言葉がもっと普通だったなら、素直に成れたんだけど……あれじゃあ無理。セラにとって、あの対応が僕に対する普通かも知れないし。
そう考えるとやっぱりムカつくけど、ここはダメだ。僕達は今から、アルテミナスを目指さなきゃいけないんだからな。
無駄に時間を潰してる訳にはいかない。でも二人でって、今から気が重い気もしなくもないな。

「そ……それならそうと早く言いなさいよね！」

そっぽを向いてそう言ったセラは、暑いのか仕切りに手で風を顔

に送ってる。確かにリアルの季節を追ってるから、今はこっちでも暑い季節なんだろうけど、そこまでじゃない様な。

地域差って奴なのか、暖かい程度だ。怒ったから興奮してたのかも知れない。わざわざ僕が妥協した言葉にも、不機嫌そうに返したしな。

ほんと、面倒な奴だ。どうにかしてこの心に残ったモヤモヤをぶつけたいよ。

「さ、早くいくわよ。アイリ様達が待ってるからね。てか、そもそも何でアンタはここに戻ってるわけ？　あの時消えたのは、ＨＰが尽きたって事だったの？」

「それは……自分でも良く分からないけど、ここに戻されたって事はそうなんじゃねーの？　ただ落ちただけなら、あの場所にいれたはずだからな」

そう考えるのが妥当……でも、それなら、僕も良く生きてたなって事になる。まあ完全に次、ＨＰが尽きたら終わりだ……とか分かってる訳でもないし、たまたま大丈夫だっただけかも知れないから何ともいえない訳だけど。

でも……何かあるのかも知れない。目覚めることが出来なくなる何か……もしかしたら、そんな恐ろしい鍵があるのかも。

だって偶然って事にするにはなんだかって気がするんだ。実際僕は、ＨＰが無くなってたかどうかも分からないんだけどさ。ここに居るんならその線が濃厚な訳で、ガイエンやセツリ達との違いがあるかもって思えてしまう。

「ま、生きてたのならそれだけで儲けもんでしょ？　うだうだ考えるよりも、馬車馬の如く働きなさいよ。それがスオウの役目でしょ」

「馬車馬って……」

もうちょっと言い方があるだろう。儲けてる気がしなくなるじゃんか。まあ確かに、今ウダウダ考えても結論は出ないだろう。

とにかく今は立ち止まらない事が重要。そう決めた筈だ。この周りを流れ続けるプレイヤーの人達。その人達がどうなるかもう分からないんだ。

ワガママを通す決意はしたけどさ、やっぱり誰も巻き込まれて欲しくなんかない。だから立ち止まってなんか居られない。走りながらでも考える様に成らないとだ。

「ほら早くしなさいよ。今日中には着きたいんだから」

「ん？　えっとさ、どうやってアルテミナスまで行く気な訳お前？」

僕の心に一抹の不安がよぎる。だって今日中ってなんだよ。そして案の定、セラの奴は信じれない事をぬかしやがった。

「勿論、走ってに決まってるでしょう。当然じゃない」

「待て待て待て！　どんだけ距離あると思ってんだおい！　ここからアルテミナスってタゼホよりも遠いじゃん」

タゼホだって言っちゃうとそれなりに遠かったんだ。それでもノウイのミラージュコロイドで短縮したから、あんなもんだったけどさ・・アルテミナスまで走るって、急いでるんだから、転送屋でも捕まえた方が速いだろ。

幸い一杯人居るし。

「ああ、アンタ知らないんだっけ？　アルテミナス今転送出来ないから。あの戦いの影響なのか、アルテミナスに転送をすると、全然

違う場所へ飛ばされる状態なのよ。
だから走るしか無いってわけ。たく、大丈夫でしょ？　ＨＰも全快の筈だし、全力疾走を百回も繰り返せば……」

おい今、なんて言いかけたコイツ？

「ねえ、なんでＨＰが削れてる訳？」

セラは、僕を見つめて怪訝な顔でそう言った。普通はゲートクリスタルに戻された時点で完全回復するものだから、それは当然の反応だ。
僕もなぜって思ってた所だしね。でもこれもよく分からない。その転送の不具合と同じ種類なら良いんだけど……でも僕には、なんとなく思い当たる事があるんだよな。

「多分だけど、リアルの体のせいかも。まだ傷治りきってないし……逆に影響してるとか……」

確証なんて無いけど、そう思えてしまうから仕方ない。そしてそんな事を聞いたセラは、僅かに心配そうな瞳を僕に向けてくれた様な気がする。

「そっか……まあでも、ゼロに成らない限り死なないでしょどうせ。引っ張ってあげるから行くわよ！」
「うおっ……お前な！？」
「何？　嫌だった？」

僕の手を掴み走り出したセラ。何て奴だ何て奴だ何て奴だ！　だけど……

「いや、変に同情されるよりも楽でいいや！」

そう言うこった。しっかりと握られた手。草と大地を踏みしめて、僕達はアルテミナスを目指す。

変わらぬ世界？（後書き）

第百七十九話です。
スオウとセラの冒険が今始まる！　てな感じで次回へ続きます。
セラは色々と動かしたいから導入ですよ。立場的にもセラが適任だしね。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

道すがらの事（前書き）

勢いこんで町を走り出た僕とセラ。怒涛の勢いで走り続けて……僕は流石に限界が来た。そんな僕を馬鹿にするセラ。いやいや絶対におかしい、何でほぼ同じペースで走ってたのに、こいつは息切れ一つしてないんだよ！

絶対にズルしてる。そしてそんなズルを明かさせた位に、問題発生。僕はまたしてもセラにはめられた様だ。目の前に迫るのは三体のモンスター。急いでるのに、強制戦闘開始だ。

道すがらの事

町を離れて、僕とセラはアルテミナスを目指して、フィールドを駆ける。快晴の空は澄み渡りどこまでも青く、そびえる様な入道雲は、リアルには無いくらいに大きいかも知れない。

時々変な形の鳥も飛んでるしな。ここでなら、あの雲の中に空飛ぶ島があっても実際不思議じゃないよな。まあそう言う話は聞いたこと無いけど。

頬を撫でる風は暖かくて気持ちいい。自然の香りって奴がするよ。新鮮な空気の味。いつもと変わらないＬＲＯ。まさにそんな感じだ。

まあだけど……そんな悠長な事を言ってられたのも最初の内だけだけどね。

「はぁはぁ……」

息がやばい。ものの十分くらいでそうなった。

「はぁはぁはぁはぁ……」

足取りフラフラ。酸素を取り込んだ側から、酸素が出ていくよ。三十分位の事です。

「ぜっはぁ！　がぁっは……ぐわばっぐわばっ」

「もうなんなのよさっきから？　その不快な息づかいやめてくれない。なんかイライラするのよね。殴るわよ」

おいおい、ちょっと待てよ。幾ら何でもセラの奴、涼しい顔し過

ぎだろどう見てもさ。おかしいあり得ない。草原から森を抜けて、今は岩礁地帯を駆け抜けてるのに、何でそんなに平気そう何だよ。

「おっまえ……な、ふざけるなよ！」

僕はそう叫んで急停止。てか倒れた。ドス～ンと空を見る形に倒れ込んで、大量の空気を体に送り込む。そこへ不満そうなセラが僕に影を落とす形で見下ろしてくる。

「なっさけない。この程度でなに疲れてるのよ。ヘタレねまったくアンタって」

たく……コイツは本当に楽しそうに僕を蔑むよな。わざわざ悪口を放り込む必要なんて無いだろうにさ。全く、セラと二人きりなんて体と心の二重苦だよ。

てか岩がゴツゴツしてて痛いななんか……冷たくヒンヤリしてるのは気持ち良いけど、寝心地悪い。

「うるせー、どう考えてもお前が異常だろ。あれだけ走れば、ゲームでも疲れるっての」

別に自分の体を実際に走らせてる訳でもないからさ、実際どう疲れてるのかは自分的にも疑問だな。だけどＬＲＯは忠実だからさ、走れば普通に息切れするし、ＨＰは減りはしないけど、疲れるって感覚は確かにあるはず何だよ。

なのにセラの奴はペースを落とす事も、息切れした様子も無いって絶対になにか隠してる。

「え？　なにアンタ、まさか自走してなかったの？」

「何だよ自走って？」

僕の言葉はそんなに間抜けだったのか、セラの奴頭を抱えてるぞ。そしてウインドウを表示させて、なにやら操作し始めた。

「自走ってのはね。自動走行モードよ。予め目的地を設定して、実行すると後は勝手に足が動いてくれるわよ。しかも体力の精心負荷を無くして最高速度で走り続けられるんだから便利でしょ？」

「ああ、成る程～って、そんなの使ってて、よく僕の事を蔑めたなお前！？　ズルじゃんかようは！」

僕は必死に抗議するよ。

「別にズルくは無いでしょ？　知らない方が悪いのよ。ＬＲＯは果てしなく広いんだから、リアルと全てが同じ条件なら、足だけで走破なんて出来っこ無いじゃない。

勉強不足を棚に上げないで頂戴。教えてやったんだから、寧ろ感謝されてしかるべきなんじゃない？」

「うぐ……」

セラの癖にまともな事を言うじゃないか。確かにそんな便利機能なら、説明書を読めばわかったかも知れないけどさ、僕は取りあえず体験する派なんだよ。

説明書は後々読んでくタイプなの。まあ今の今まで、その存在すら忘れてたけど。だが、セラも僕の様子を見て、ちょっとは同情心でも芽生えたのか、「ほら、ウインドウ出して」って言ってきた。

やってくれるって事だろうか？　まあ取りあえず、他人にも見える様に可視化モードをオンにして、ウインドウを渡す。

「サンキュ」

「ふん……」

ピッピと何やら操作してくれるセラ。よくよく考えたらウインドウを誰かに渡すってそれなりにリスクがあるって言うけど、コイツは大丈夫だろうか？
まあ知り合いだし……知り合いの中でも一番信用出来ない奴でもあるし……ダメじゃね？　そんな思いが沸いてくる。

赤茶けた岩礁地帯で、僕は設定の完了を待つ。まあ珍しいセラの親切（？）　だし、ここで余計な事を言うと、また口論に成るかも知れない。
信用できないけど、セラはまああんまり人道的に反する事はしないだろう。加減を知らない毒を吐くけど、境界線ってのは知ってるだろ。

まあそこら辺を上手く渡りそうだから怖いんだけど。下からセラを見つめてると、不意にセラが「あれ？」って言う疑問を呟いた。

「どうした？」

僕がそう言うと、何だかいぶかしむ様な目を向けてくるセラ。何だろうか？　設定間違えたとか？　まあそんな感じじゃ無いけど。

取りあえず、息も整ってきたし、僕も起きあがろうとする。けど、それを征する様に、最後にパパパって何かを操作してセラがウインドウを差し出してきた。

「ほら、設定はしてやったから感謝しなさい。後は『自走、アルテミナス』で実行ね」
「ああ、助かった。で、さっきの『あれ？』はなんだったんだよ」

僕はウインドウを受け取りながらセラに聞いた。やっぱり気になるからな。

「別に、アンタが余りにも貧相な防具しか装備してない事に驚いただけよ」

「悪かったな貧相で！！」

そんな事にあれ？って思ったのかよコイツ。てか見た目でわかるだろう。僕の装備が防御力あるように見えるのか？

殆ど初期装備のバージョンアップでしかないからな。今更なんだよ今更。まあ流石にこの装備にも限界って奴を感じだしてきてるけど。

シクラ達の攻撃をまともに受けたら、三回位でやられそうだ。僕はだけど、セラの格好も見て言ってやる。

「けどお前も、あんまり人の事言えない格好だろそれ？　防御力とか貧相そうじゃんメイド服なんてさ」

「フ……愚問を」

何だその悪の幹部みたいな台詞は。セラは大きく胸を張って、白い手袋に包んだ手を胸の所に持っていく。それこそどっかの鬼母がやりそうな格好だ。「ホーホッホホ」とか叫ばないよなこいつ。

「このメイド服をアンタのその初期装備バージョンアップ版と同じにしないでよね。素材なんて全て超貴重で、一着一着が職人の手によるフルオーダーメイドなんだから。

アンタの装備の十倍以上は頑丈よ」

「マジかよ！？」

そのメイド服ってそんなにスゴい物だったの？　確かに良くできるよな～とは思ってたけど、まさか職人の手によるものだったとは……恐れ入ったよ。

「まあ私のは、その中でもプラスが付く一品物だけどね」

更に胸を張るセラ。まあ侍従隊のリーダーなんだろうし、そうなんだろうな。プラスが付くだけで、値段の桁変わるからね。

なんて贅沢な装備。流石国って言う物に支えられてる側だよ。そんな装備を十数人配ってる訳だからね。

「は～そのメイド服がね」

僕はジーと下から上まで見回す。白と黒（いや藍色？）を貴重としたロング丈のメイド服は、言っちゃえばオーソドックスな物だ。でもだからなのかな、なんか歴史を感じるな。

歴史って程の物はないだろうけど、雰囲気でさ。でも足下はブーツなんだな。動きやすい様にだろうか？

「な何よ。あんまりいやらしい目で見ないでくれる？」

「なにがいやらしい目だよ。そんな目するかっての」

堂々と見せつける様にしてたのはどこの誰かってんだ。急に腕を回して、顔を赤らめるなんて、理不尽だぞ。あれだな、女子の見せパンなる物と同じだな。

あれって絶対に見せつけてやがるのに、見たら見たで「何見てんのよ！」とか「うわ見られた」とか「超キモいんだけど～」とか言われるんだ。

訳が分からん。女子って基本、男からしたらズルいよな。

「さて、これで楽に走れるし急ぐか」
僕は地面に付けてた場所をパンパンと叩いて立ち上がる。
「誰のせいで止まったのよ。ねえ、そんなに苦しかったの？」
ん？　何を言い出すんだセラの奴。見ててわからなかったのか？
しょうがないから教えてやるよ。それでこれからはもっと僕を労れ。
「滅茶苦茶苦しかったっての。心臓も体の節々までな」
「ふ～ん。そこまで苦しかったんだ。やっぱり……」
「？」
なんだやっぱりって。その後も口は動いてたけど、声にはしてなかったのか聞き取れなかった。
「まあいいわ。早く行くわよ。もう止まらないからね」
そう言って、セラはゴツゴツした岩を蹴る。たく、相変わらず速いなアイツ。あんな走り難そうな格好で、どんどん遠くに行きやがる。
けど、今度は負けないぞ。疲れ知らずなら、速さには自信があるんだ。
「え～と確か……自走アルテミナス、実行！！」
その瞬間、グンッと足があがった。体が何かに支配される感覚。
そして一気に地面を蹴る。おお、スゴいぞこれ。でも……なんだか

……

「スッゲーやりづらいんだけど！？」

追いついたセラにそんな言葉を投げかける。てかさ、心と体が別の動きをするって、なんだか無理あるような感覚だ。

体力は減らなくてもなんだかきつい。

「馴れよ馴れ。馴れると便利なんだから。まあでも……」

「うん？　おい、どこ行く……」

セラの奴は突然僕から離れていく。なんかその前に一瞬前を見てた様な。この状態って別にどこ向いてても足が勝手に進むから、まあ便利っちゃ便利なんだけど……アイツどうやって横に逸れたんだ？

てか何を見た？　僕は離れてくセラから目を離して前を向いた。するとそこには、大きな岩……いや違うな。岩がゴツゴツとまとわりついてる様なモンスターがそこにいる。

しかも一体じゃないな。三体位、二メートル大のモンスターが前方に見えた。

「おいおいおい、アイツ逃げたな！」

くっそ、別にやられるだなんて思わないけど、急いでる今は、なるべく戦闘は回避したい所だ。このまま行くと、直ぐに奴らに見つかるだろうし、僕も少し道から外れて――――――――――――――――――あれ？

「しまったああ！　止まり方聞いてないし！？」

僕の意志を受け付けない足は、グングングンと体を前へと進めていく。頼もしすぎるよこれ！　今や僕の足は、一つの命令を実行し続ける機械の様だった。

目の前に迫るモンスター計三体。奴らは僕の存在に気づき、その無骨な口を大きく開いて、雄叫びをあげた。岩の様な口が開いての叫びだ。なんかそれだけで重かった。

なんなんだろうかこいつ。まとわりついてる感じって言ったけど、岩自体が集まって出来てるモンスターなのかな？

けど、岩が隙間なく存在してる訳でもないんだよな。つなぎ目は黒く、そして目が赤く光ってる。その黒い所が本体で、岩は主に防御と攻撃に使う感じなのかな？

岩自体がモンスターなら、岩の部分に目とかあるもんじゃないか？　岩で体を作ってるとでも言うのか……なんか不格好。

人なのか熊なのか、よくわかんない形だし……三体に共通してるのは、二足歩行はしてるって事くらいか。後は微妙に形違うんだよな。

まあだけど考察してる間に、襲い掛かって来る岩の腕が三本見えた。単純な攻撃。やっぱり見た目ほど、強いって訳でも無さそうだな。

でもさ、強いとか弱いで、攻撃を防ぐかどうか決めてる訳でもないんだ。取り合えず来る物は打ち落とすべきだろ。

「わわっまじかよ。武器さえ抜けね――ゾボラヒ！！」

戦闘態勢にも入れぬまま、僕は三体のモンスターからの攻撃を食らった。後半の言葉、岩に殴れて思わず口から漏れでて来た言葉だ。

結構な衝撃……同時じゃなく、次々に腕が刺さったから、衝撃も三回あった。しかも前に走りながらだったから、その痛さはハンパない。
十メートル位は吹っ飛ばされたね。岩場に体を叩きつけられる事も苦痛。鼻から流れ出る赤い水滴が、岩場の亀裂に吸い込まれていく。

【強制戦闘状態に入ったので、自動走行は中止されました】

頭の中に響くそんな声。はは……おかしな事にさ、もしかして攻撃を受けた時も、受けた後の今までも、足って動いてた訳？
自分の体に、自分の感覚が戻っていく中、ヒョコッと遠くの岩に立ってるセラがこんな事を叫ぶ。

「ああ、そういえば自走中は戦闘不可だからね。てかただ道に沿って走ってれば、モンスターにぶつからない訳ないじゃない。バーカ！」
「――っつ！？　本当に性格悪いなお前！！　遅いんだよ何もかも！！」

ブチっとなったね。額の血管が怒りマークを模して現れてたかもしれない。だけどセラの奴は悪びれる事なく、こう言った。

「性格の事なんてアンタに言われる筋合いないわよ。それにアンタには、口で伝えるより直接体に染み込ませた方が、忘れずに済むからいいじゃない。
別に私は、ちゃんと伝えようとしたんだけど、タイミングが悪かったのよ」
「伝えようとしたなら伝えろよ！　無言で走り去りやがって、お前のその体にもこの痛みを刻んでやろうか！？」

鼻血だらだら流れる顔で僕は叫ぶ。いや、叫ばずにはいられない。だって何が体に直接〜だよ。僕はそんなにオツムが弱い奴じゃない。
セラにはモラルって奴を直接叩き込みたいよ。

「出来るのなら相手に成ってやっても良いけど、でもその前に、熱いラブコールが向けられてるわよ」

クスリと笑ってそう言うセラ。なんて邪悪な笑み。僕だけがそう見えるのかも知れないけど、アイツは小悪魔なんかじゃない、悪魔だよ。
なんか悪寒がしたも――ドス！　ガンガンッゴロゴロオオオ……

（おいおい、ドデカい岩が僕の頭を掠めて転がってるぞ）

悪寒じゃない、冷や汗がやばい。いやいや、ダメだろアレ。一歩間違えば、こう頭がプチッ……と成ってたよ。トマトを地面に落とした光景が広がるとこだよ。

後ろを岩が飛んできた方に顔を向けると、三体のゴツゴツしたモンスターがこちらに猛然とダッシュしてる。そして自身の岩を取り外して投げて来やがる。

「ふん、一発殴らせてやっただけでもありがたく思っとけばよかった物を――」

僕はゆっくりと立ち上がる。ちゃんと視界に入れればあんな岩、当たる訳もない。てか、かなりアイツ等狙いが荒い。
本当に僕を狙ってるのか？　ってな位だ。さっきのは奇跡的な一投だったみたいだな。奴らの岩はどうやら無限に生えてくるタイプ

らしく尽きることがない。

でもこれなら、驚異なんて呼べないよ。それに実際、今の僕なら、岩くらい切れるんじゃないかって思うんだよね。

けど丁度いいよ。準備運動には成るだろうこいつらもさ。ラスボス（セラ）の前の前菜だ。今日と言う日に、僕を襲ったのが運の尽きなんだよお前たちは！

僕は迫り来るモンスター三体に体を向ける。そして腰に差してあるセラ・シルフィングへ左右の腕をクロスさせて向かわせる。

体を少し前傾姿勢にして、柄に触れる程度に手を添えたとき、一番前に来てたモンスターが再び、その太く大きな岩の腕を振り被った。

まともに食らえばそれなり痛い攻撃。だけどその瞬間、僕は倒れる様に前に出て、奴の狙いをズラす。触れるか触れないか位の位置を岩腕が勢い良く走っていく。

そしてダンッ！！　と力強く地面を踏みしめ体を支え、僕は二対の剣を引き抜いた。

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！」

その瞬間、響きわたった断末魔の叫び。モンスターの体にはクロスの斬痕がくっきりと残ってる。まずは一体だ。

「――今の僕は機嫌が悪るいんだ」

まさに完全なるクリーンヒット。それにＬＲＯの攻撃判定はただ単純に攻撃力でダメージを決めてる訳じゃないから、たまにはこういう事も起こる。

攻撃のスピードに、それぞれのテンションも影響するし、武器と敵との相性とかもある。まあこの場合いはスピードがかなり優位に働いたかな？

だってこいつら遅いもん。あれだけの戦いを経て、完全雷化のスピードの中でも敵を捉えられた僕には、止まって見える。

まあそれは言い過ぎだけど、スローには見える。ハッキリ言って、こいつらは遅すぎる。攻撃力はそれなりだろうけどさ、どれだけ大きな力も当てれないと意味なんて無いんだ。

消えながら後ろに倒れ行く様までスローで見えるな。と、そんな余裕な感じで見てたら、いきなりクロスの傷口から黒い血しぶきが大量に舞い上がった。

「何！？」

青空に吹き上がる黒い雨。それは……おかしな事だろ。

「「ぐがあああ！！」」

そんな光景に目を奪われると、後の二体も迫ってきてた。また、ご自慢のパンチ。同時に迫るその攻撃を避けながら、今度は岩と岩のつなぎ目の黒い部分を僕は攻撃する。

体を回転させ、ひねって飛んで、奴らがパンチを伸ばしきる前に、僕は見える黒い部分を一度は切りつけた。すると今度は、体中から血しぶきが噴き出すじゃないか。

いや、正確には僕が切った部分から血が吹き出してる訳だ。

「――っつ！」

僕は余りのその血の勢いに顔をしかめる。てか、返り血なんてレベルじゃないぞこれじゃあ。全身墨汁を掛けられた虐められっ子みたいに成ってる。
そしてようやく収まったと思ったら、そこには黒く成った岩が残ってた。消えたのは中身だけって事なんだろうか？　そもそも血っておかしいんだけどな。

ＬＲＯはその表現をしないようにしてる筈だ。実際、セラ達は、服とか破れはしても、血は出ない。モンスターだってその筈だ。まあ一部の例外……僕とかはその類じゃないし、シクラ達もそうだ。ガイエンも、深く繋がる様に成ってからは流してた筈だ。

でもそれは条件付きだった筈。こんな白昼の堂々とした場所でって……特別なモンスターだったのか？　僕はそう思って残った岩に手を触れる。
別に黒いだけで他の岩と変わらない様な感じだけど……するといきなり、僕の手は岩から弾かれた。バシンってな感じで。

「ちょっと気をつけなさいよ。得体の知れない物にそう易々と触らない！　ＬＲＯには呪いって状態異常もあるのよ。その類のトラップだったらどうするの」
「お前な……心配してるのか、怒ってるのかどっち何だよ」

僕の手を叩いたのは案の定セラだった。安全な所に居たくせに、安全を確認したら戻ってくるなんて薄情な奴だ。

「両方あっちゃ悪いの？　それにしてもさっきのモンスターは何だったんだろう？」
「なに、ここには居ない類の奴だったのか？」

僕はてっきり、ここに生息してるモンスターだと思ったけどな。いかにも岩礁地帯に居るって感じの奴だったし。

「あんなのは居ないわ。少なくとも私は知らない。こいつなら知ってるけどね」

そういってセラが指を指したのは、あのモンスターの残骸だ。正確には岩だ。これが何だって？

「この岩事態が、モンスターなのよ。岩になりすまして通りすがり冒険者を襲うタイプね。まあ雑魚なんだけど。腕とかもあるじゃない」

「これ、腕なのか？　つまりは、さっきのはこいつらの集合体か？」

「う～ん、そんな話は聞いたこと無いけど。それにアンタが切ったのはこいつらじゃないじゃない」

おお、流石にセラは目が良いな。

「まあ本体っぽい黒いのを切ったからな。あの黒いのが強性的に、こいつらを使ってた？」

「……実は――」

考え込んでたセラの口から、何かが漏れようとしたとき、どこかからか、ガララと岩が崩れる音が聞こえた。僕とセラはさっきの仲間でも居るのかと周りを警戒する。すると今度は声が聞こえて来た。

「うおお～い、誰か助けてくれ～」

なんとも情けない声だった。僕とセラは、その声のする方に歩み出す。少し岩場の方へ行くと直ぐにその声の主は見えてきた。

どうやら、さっきモンスターが投げてた岩に直撃した不幸な人が居るようだ。

道すがらの事（後書き）

第百八十話です。
少しずつ状況が動いてます。まあ裏ではもう結構動いてるかも知れないけど、スオウ視点ではこんなもんです。ＬＲＯの変化か、シクラ達の影響か……そんな物が見えてきた頃、新たな人物が登場です。
二人は無事にアルテミナスへと戻れるのでしょうか？
てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

何故か！？　の決戦（前書き）

スオウ　「どうしてこんな事に成ったのか……僕にもわかりません」
セラ　「おかしかったんです。おかしなテンションになっちゃったんですよ」
　二人は神妙に頷き合ってる。
スオウ　「もうなんか、すみませんとしか言いようがないですね。一話まるまる無　意味な争いで潰しちゃって……」
セラ　「売り言葉に買い言葉だったんです。二人だけじゃ止める人が居なかったん　ですよ。私はそうでもないけど、スオウは突っ走る派なんです」
スオウ　「おい、ちょっと待てよ。またそうやってセラは僕に責任を押し付ける。　そういう所が計算高いんだよお前。少しは真面目に反省しろよ」
　なんだか不穏な空気が流れだしてる。
セラ　「だから女のそういう所も含めてくれるんでしょうスオウは？　何、本編の　あれは嘘な訳？　ああそっか、スオウは良い格好しいだもんね」
スオウ　「はあ！？　じゃあ言わせて貰うけどな、別に認める事が受け入れる事じ　ゃないから。別に見せる必要無い物まで、お前は曝け出しすぎなんだ　よ。僕は割り切ってやってんだ。有りがたく思え！」
セラ　「有りがたく？　それはこっちの台詞よ！　ブリブリブリっ子が結局良いっ　て……これだから男は！」
スオウ　「誰がそこまで言ったよ！　自分の中で勝手に結論出すなよな！　これだ　から女は！」
　ゴゴゴゴゴ……と言う効果音が二人から立ち上ってる。全然反省して無いなこの二人。今にも戦闘を開始しそうな雰囲気なので、取りあえずみんなは本編へゴーだ！

何故か！？　の決戦

救援を求める声を聞いて、探し出した人物はどっかのギャグ漫画の如く岩に押しつぶされてた。僕らの方から見ると、まるで足が喋ってる様。

「ちょっと、アンタのせいでしょアレ」
「はあ？　それを言うなら、ちゃんと必要な事を教えなかったお前も悪い。元々、あのモンスターにぶつかりさえしなければ、こんな哀れな被害者が出ることも無かったんだからな」

全ての責任を僕に押しつけようとするセラに、僕は食いつくよ。あんな不格好な形でフィールドに晒されたあの人の気持ちが分かってないよな。
赤茶けた岩が大量に地面に広がる中、一際目立つ黒い岩に押しつぶされてるなんて生き恥だ。

「何よそれ？　男の癖にどうでも良いことをネチネチと。こんな責任くらい、受け止める度量は無いわけ？」

セラのこんな言動に、僕はムカっと来たね。てか、誰でもそう成るよ。僕はセラの方を向いて抗議の言葉を掛ける。

「お前な、どうでも良いんならそもそも僕だけのせいにすること無いだろ。男の癖になんて都合良くばっか使いやがって、それを言ったらか弱い女の子とでも見て貰えると思ってるのか？
本性割れてるんだ。メイド服着てるんなら、少しはメイドらしく淑やかに振る舞えよ。台無しなんだよその服が！」
「なっなんですって！」

僕の言葉に、セラもカッチ～ンと来たようだ。おお、ようやくセラのプライドの部分を見つけれたかも知れないな。やられっぱなしなんて、僕は嫌なんだ。
こうなったら日頃の恨みをここで晴らす――その覚悟だ。
「ふん、淑やかなメイドなんて今時絶滅危惧種なのよ。そんな希少種を、自分の周りで求めないでくれる。どうせ男子の浅はかな妄想のメイドがよかったんでしょうけど……言っておいてあげるわ。
アンタをご主人様って呼ぶメイドはこの世にいない！！
リアルにも、来世にもよ！！」
ズガ――――ン！！　ってな衝撃が僕に走った。
「そ……そんなバカな事を言うな！！　居るよ！　リアルならメイド喫茶とかあるもん！！　お前なんかとは違う、甲斐甲斐しい子が今世でも来世でも待ってる筈だ！！」
僕の主張に、セラは頬に手を当てて薄く笑う。
「メイド喫茶で満足なんだ？　お金で買う甲斐甲斐しさにどれだけの価値があるって言うのよ！？　結局男って奴は、女がでしゃばるのが嫌ってだけでしょ？
甲斐甲斐しいが鼻で笑えちゃうわね。そんな奴に、今時のどの女子が、尽くしたいって思うのかしら？」
「くっ……」
なんだか押されてきた気がするぞ。メイド喫茶は確かに浅はかだったか。でもここで、僕は思い出す。居るじゃないか、僕に甲斐甲斐しくしてくれる女子が！

僕は余裕を見せて、「ふふふ」と笑う。その様子にセラは僅かに警戒心を見せた。

（何この余裕？）

そんな心の声が聞こえて来そうじゃないか。決まったとか思ってたんだろうが、甘いんだよ。世の中には良くわからない奴らが一杯なんだよ。

「居るぜ。僕に甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる女の子ならな！！もう十年以上の付き合いだぜ。どうだ？　自分のガサツさを見直す気になったんじゃねーの？
んな毒ばっかり吐いてたら、メイド服につられる男共も、居なくなるんだよ！　ある意味詐欺なんだお前は！」

勝った……まさにそう思える。反撃の言葉も返ってこないし、これは僕の大勝利だな。ああ、今日の風は埃っぽいとか思ってたけど、この瞬間フローラルな香りを運んでる気がするよ。
空も果てしなく広くどこまでだって青いだろう。

「ふっふ～ん、どうしたセラ？　何も言えないなら、僕の勝ちで……え？」

良い気分でセラに視線を移す。するとさ、そこには信じられない光景が広がってた。いや、見たくなかった光景と言うか……そんな気は全然無かったというか……てか何でそうなってるのか、僕にはセラのその衝動が分からない。

瞳から溢れる透明な滴。逆に冷めた様な頬を伝い、止めどなく流れるそれを、セラは拭いもしないでこちらを見てた。

いや、まあ様は、セラは泣いてた。嘘泣きなんて疑いが出てこない程に、無表情で涙が流れてる。僕の高ぶってた感情もその涙に冷やされるが如く急降下。

「お……おいセラ……何で泣いてんだ？　おかしいだろそれ？　お前のキャラじゃないし……」

やばい……目の前で女の子が泣いてると、どうしていいか分からない。それも自分が原因でしかなかったら、なんて言葉を掛ければ良いんだろう。

いや、その前になんでセラは泣いてるんだ？　何か不味いことを言ったんだろうけど、セラが泣く程って心当たりがない。

でもだけど、実際に彼女は涙を流してる訳で、こうやって見てたら、ただの普通の女の子で……いたたまれない。僕が勝手に酷い奴って思ってただけで、それは勝手な評価でしか無かったのかも。

僕の頭はどうやったらセラの涙を止めれるか必死に考えた。

（どうする？　どうすれば？　どうしたら良いんだ実際！？）

全然分からない。謝る……か。それしかないよなうん。何に対してか、よく分からないけど、謝る以外に僕には何にも出来そうもない。

「ごめん！　調子に乗りすぎました！！　だから泣き止んでください！！　何回だって謝るから！！」

僕はもう土下座してた。だって最大級の謝罪の形は、やっぱり土下座だろ。僕はもう、頭を地面の岩に擦りつけるくらいにしてた。

「あ……」

そしてようやく、漏れて来た声に僕はビクッと体を震わせる。何を言われるだろう？　やっぱり罵倒かな。それならそれで仕方ないと、僕は覚悟を決める。

だけど次に続いた言葉は、予想外なものだった。

「え？　――私、泣いてる？　なんで……」

ズゴオオオと岩場から滑り落ちそうになる僕。今何て言ったセラの奴？

「泣いてるだろどう見ても！　気づいて無かったってなんだよそれ。本気で言ってんのかお前！」

「な……何よ！　私だって涙が出るなんて思ってなかったわよ！　でも……溢れちゃった物はしょうがないでしょ。アンタがあんまりにも予想外な事言うから……」

「うん？　予想外なのはその涙だろ」

スッゲー動転したっての。なんだか心なしか頬を赤らめて、涙を拭い出すセラは、本当に涙が溢れた事を信じれないと言った様子だ。

何だったんだ一体？

「う、うるさい！！　女の子を泣かすなんて最低の行為よ。何で私が許す前に土下座を解いてるのよ！　ちょっともう一度やりなさいよ！」

そう言って、僕を指さすセラ。むむむ……既に見上げる形なのにもう一度土下座を要求するとは、この女は鬼か。いや、悪魔だったか。

くそ、悪魔でも女の子。涙見せられちゃ男は弱く成るもんだ。僕はスゴスゴと三本の指を地面につける様にして、頭を下げる。

「……」

「……」

流れる無言の時間。あれ？　これっていつまで頭を下げてれば良いんだろうか？　なんだか滅茶苦茶屈辱的なんだけど……僕は探り探り、頭を持ち上げていく。

「最低男」

そんな言葉に僕は心が折れました。いや、ここまで言われる筋合い無いけども！　でも……涙は見たくない。セラの足下しか見えない。

なんだかさっきからクネクネ動いてるけど、何か言うのなら早くしてほしい。誰かが通りかかったらどうするんだ。

「あのさ……」

「うん？」

「……うん？」

セラの後から続いた「うん？」には暗に「何その対等の応答の仕方は？」って感じが含まれてた。

「あ、いえ……何でしょう？」

直ぐに言い直す僕。なんだかセラの微妙な機微が分かるように成ってきてないか僕。奴隷根性が叩き込まれつつあるのかも知れない。やばいな。

僕は決してMじゃないのに。そして歯切れの悪い言葉の続きがセラの口から届く。

「どういう事なの？　その……アンタに尽くす甲斐甲斐しい女の子って？　まあどうせその場しのぎの嘘でしょうけど」

何だ……セラの聞きたい事ってそれのことかよ。じゃあ泣いたのもそれのせい？　でも何で？　セラと僕って決して仲良しとかじゃないと思うんだよね。

まず見た目通りの関係……とは言いたくないけど、ほぼこんなんだし。ああそっか、これが逆に成るのが嫌だったんだな。

僕がセラに土下座をする事を屈辱的に感じる様に、セラもそうなんだ。ようは僕に負けたくなかったんだな。何て負けず嫌いな。

つまりこの質問は、僕の発言を嘘と見越して自分の勝利を手繰り寄せる為の手段だな。でもその見解は大きな間違いだ。

なぜなら、僕の発言は真実だから。まあ、確かに僕に甲斐甲斐しく尽くす女の子が居るはず無いってのは、ある意味同感だけど（オイ！）でも事実は仮想よりも奇なのだよセラ君。

僕は土下座の態勢のまま、セラから見えない事を良いことに、口の端をつり上げた。

「嘘じゃありません。幼なじみなんですよそいつとは。どんなに煩わしがっても、いつもご飯と掃除や、僕の世話を焼きに来る、そんな奴です」

「へ、へえ～幼なじみね……寝言は寝て言いなさいよ」

ガスっと頭を踏まれた。グリグリと地面に擦りつけられる僕。いやいやいやいや、酷すぎだろこれ。悪魔じゃない、魔王様かよお前

は！

でも、後半の冷めた声が怖すぎた。全然信じてない。

「なぜ？」

「何故って……そんなアニメに出てくる様な幼なじみが居る分けないでしょう！　それでも言い張るのなら教えてあげる！

その子こそ幻想よ。アンタが頭で作り上げてる理想の女の子！

いい、その子はこの世に存在しない！！　まずはそれを認めなさい！　そうじゃないと痛すぎるわ！」

「酷すぎだろ！！」

思わずガバッと頭を起こす。セラの足ごと起こしたから、彼女は態勢を大きく崩して後ろに倒れる。「きゃあ！」とか言う叫びと共に、僕にはある物が見えていた。

なんだかここ数日、コレに縁がある。いや、別に見たかった訳じゃないよ。でも偶には思ってもいたわけで……ほら、メイド服ってロングスカートだからさ。

鉄壁な防御な訳だよ。だけどこの瞬間。セラは大きく片足をあげた格好で倒れていく訳だから……その中身がモロ見えだ。

足の付け根までクッキリです。僕の動態視力なら、その一瞬を逃す訳がない。意外な事に純白の白。レースが入った可愛らしい紐パンでした。

「見た？」

スカートを自分の元に手繰るようにして、その中に足をすっぽりを隠すセラ。「見た？」とは言いながらも、その確信があるのか、顔は既に真っ赤で涙も既にたまってた。

まさかまた泣くのか？　もしかして意外とセラって純情なのか？

イメージとかけ離れてるけど。

「何を？」

僕は取り合えず誤魔化す様に聞いてみる。別に恥ずかしいのなら、ここでその事に触れなければこの話題は終わるんだ。

素直に言うのも何だしさ、僕はその判断をセラに委ねてあげた訳だ。評価を改めて貰いたい位の優しさだな。

「そ……そそそれは……」

プシューと顔を真っ赤にして湯気を上げるセラ。これは過剰表現じゃなく、実際目の前でそうなってます。ＬＲＯは限界を超えた事には過剰表現で応えてくれるんだ。

なんだか可愛らしいセラを少し微笑ましく見てると、一際大きな湯気がボンっと立ち上った――その瞬間だ。セラが一瞬消えた。

そして次の瞬間、頬にぶつかる激しい衝撃。

「女の子に、何言わせんのよおおおおお！！」

「ぶっ！！！？」

そんな叫びと共に、僕に懇親の蹴りが炸裂した。僕は回転しながら、堅く荒い岩々を突き抜ける。流石にＨＰが減らなくても死ぬかと思った。

ボタボタと、鼻血まで流れ出てるし……するとそれを見て、セラはスカートを押さえてこう叫んだ。

「ちょ！！　何を想像してるのよこの変態！！　あれじゃ足りなかったって事！？」

「うおおい！　ちょっと待て！　何武器まで抜こうとしてんのお前

！？　これはお前の蹴りが原因だろうが！　お前の純白のパンツのせいじゃないっての！」

あれ？　何か僕は墓穴を掘ったかも知れない。だってなんだか、セラの体から闘気の様な物が見える。ワナワナと震えてるし、絶対にバックにゴゴゴゴって効果音が入ってるよ今。

「純白……そうね。私の今日のパンツは純白って知ってるんだ……」

バッっと僕は自分の口を隠した。なるほど、墓穴はそれか。やばい、セラが死刑執行人に見える。ガチャガチャと金色の武器を鎌の形態に組み上げていってる様が特に怖い。

「はあ、殺したくはなかったんだけど、事故って事にすればどうにか成るわよね？　いえ、どうせＰＴ組んでる今なら、幾ら攻撃しても死なないか」

「うおおおおおい！？　なに恐ろしい事言ってんだ？　事故で済む分けないだろ！　落ち着けよセラ。別に見たかった訳でもないし、直ぐに忘れるからさ」

恐ろしい事を口にするセラを落ち着かせようと、必死に説得を試みる僕。だけど何かが気に入らなかったのか、大量のオーラを纏い、天使の様な微笑みを向けたセラが一瞬で目の前に迫った。

（うお！？　こいつ速！！）

「何が見たかったわけでも無く、直ぐに忘れるよ……それはムカつく！！」

金色の鎌が大きく振られて、僕がさっきまで立ってた場所の岩が削れる。てか、ムカつくって何だよ！？　どうすれば良いわけ？

「ええ～とじゃあ、毎晩寝る前に思い出すから！！」
「ふざけるなこの変態！！」

後方に飛んでた僕を追って来たセラが、今度は横から鎌を凪ぐ。
たまらず僕はセラ・シルフィングを抜いてそれを受け止める。
だけど……止めきれずに、力で押し返された。地面に叩き付けられる。

「がはっ……っづ……じゃあどうすれば良いん――だ！？」

ズガ――――――ン！！　と起きあがった瞬間に、脳天を掠める様に鎌が通り過ぎて、地面を砕いた。その衝撃で更に僕はゴロゴロと転がる。

「ちっ」

そんな舌打ちが僕には確かに聞こえた気がする。いやいいやいや、「ちっ」って何だよ。後数ミリずれてたら、洒落に成ってないからね。
前に僕は、ＨＰが残ってる時に心臓を貫かれて死に欠けたんだぞ。頭砕かれたら、それこそどうなるか分からない。
だけどセラの怒りか何かは収まる気配がない。更に追い打ちをかけるために向かってきてる。

「アンタを死ぬくらい打った切って、その幻想から覚ましてあげるから感謝して受け入れないさいよ！」
「幻想って、幼なじみの事かよ！？　だからそれは本当だって！
アギトに聞いて貰えば分かるっての。てか何でそんな事を気にするんだよ。

パンツの事を怒ってたんじゃないのか！？」

僕の不用意な発言に、多分更にボルテージがセラはあがった。どこからか取り出した、十センチ大の黒光りする針を投げつけてくる。

でもそれは僕じゃなく、僕の影へと突き刺さった。外した？　とも思ったけどそうじゃない。

「う、動けない！？」

「スキル『影縫い』ちょこまかと逃げてんじゃないわよ。その腐った根性から叩きなおしてやるんだから。パ、パンツの事も幻想も……まとめてね」

黄金の鎌が光を浴びてる。ヤバすぎる……避けることも防御も不可。寸止め――するわけないよな。実際既に振り抜いてるし。

ああ、もう！　なんで僕がこんなに目に遭わなきゃいけないんだよ！？　イライラしてきたぞ。僕はセラ・シルフィングを握る腕に力を込めて、あの言葉を呟いた。

「イクシード！」

その瞬間、風と雷撃が拘束を無理矢理解いた。そしてセラの鎌を片手で防ぎ、もう片方を攻撃に回す。だけどその瞬間、セラは鎌を分解して二本のナイフに分けた。そしてそれで僕の攻撃を防ぐ。

だけど流石に、小さなナイフじゃ勢いを受けきれる訳もない。セラは勢いを殺す様に、自分から後ろへと吹き飛んだ。そしてトンっと尖った岩の上に着地する。

「ふ～んそれがイクシード。あくまでも妄想を続けるって訳ね？」

「だから日鞠の事は妄想でもなんでもねーよ！　現実……現実だよ！　お前が完全に否定するから、混乱するじゃねーか！

少しは僕の言葉を信じろよ！」

なんだか余りのセラの言い切り様に、不安になる僕。日鞠って実在してるよな？　いや、妄想なわけないし。日鞠がいなかったら、多分僕死んでるもん。

僕がまだ生きてる事こそが、日鞠の存在の証明だな。迷うことなんかない。そもそも迷う事がおかしい。僕の周りにから風と雷撃が周囲に広がる。

だけどセラは動じない。

「信じ……られるわけないじゃない！　そんな女子はいないのよ！　アンタのは女性幻想じゃなきゃおかしいの！　女はね、男が思うよりも綺麗じゃないんだから！

だからそんな理想はあり得ない！　そんな子いたら……どうにも出来ないじゃない！」

「どうにも出来ない？」

じゃあどうしたいんだよ？　だけどそれはいえなかった。何故なら、セラはロングスカートをめくりあげているからだ。

何やってんのあいつ？　エロ過ぎだろ。白い太股が眩しいぞ。だけど次の瞬間、そのドキドキがトキメキから過呼吸に変わる。

「聖典八機、リリース！！」

太股の所から取り出したのは鏃の様な物。それを空に投げて、セラはそう叫んだ。すると見る見る形を変える鏃。機械っぽくなって、空に浮くフォルムが八機。

おいおい、アイツマジだぜ。まあ全機じゃない分マシなのかな？

――って悠長な事は考えてられない。空中から光線を放ち襲いか

かる八機の聖典。
これは……想像以上に厄介だ。
「女の子だってね、臭いし汚い時だってあるのよ！」
「そんな事よく言えるな！？」
聖典との攻防を送ってる時に何言ってんだアイツ。
「女の子だってね、実は結構エロい事考えてるんだから！」
「だからよく言えるな！　何のカミングアウトだよ！？」
僕の気を逸らして、攻撃を当てるつもりか？
「実はクラスの女子はね、男子の評価とかランキングにしてたりするんだから！」
「それは初耳だなおい！？」
なんだその恐ろしいランキングは？　絶対に見たくない。あたりはイクシードと聖典のぶつかり合いで地形が壊れつつある。なんだか合わない会話を繰り広げてるな。
「バレンタインの義理チョコなんて、犬にだってあげるんだから！！」
「悲しすぎる真実だよそれは！！」
世に何万といる、義理チョコで喜んでる男子諸君に謝れよテメー等！　怖いよ女子。僕は勢い込んでセラへと向かう。
聖典に攻撃が当たる気がしないから、狙うは本体だろう。だけどその攻撃も、聖典が組むシールドに阻まれた。そしてその先では、四機の聖典と光が輝き出す。アレは……

「女はね。裏では蹴落としあいよ。人の悪口で盛り上がるし、計算しない女なんていない！　だからアンタのそれは妄想でしかない！」
「言い切り過ぎだろ！？　それに……もしもそうだとしても、別に僕はアイツを嫌いになったりしない！」

回転する聖典の勢いが強まる。光の先で、セラが再び涙を流してた。だから何の涙だよ。

「だからそんな子は居ないのよ！　女は小学生で夢を見終わるの！
それ以上の女に、乙女なんて一人もいないんだからあああ！」

その瞬間、収束しきった光が放たれる。なんて言葉と共に強力な一撃を放つんだ。気持ちが乗ってるからか重い。だけど僕は……
……それに耐えきった。白い煙が上がる中、僕は言う。

「うるせえよ。似てる癖に何言ってんだ！　女ってマジ滅茶苦茶だな！　日鞠の事もお前の事も、別に乙女なんて思っちゃいない！
てか思えるか！」

僕の女性幻想はもっと美しいわ。

「似……てる？　私が……」

そんな言葉と共にセラが固まる。

「あの～そろそろ助けて頂けますか！」

フィールドに響いた声は、まだ岩の下から聞こえてた。やっべ……
…忘れてた。僕達は互いに武器を納めたよ。

何故か！？　の決戦（後書き）

第百八十一話です。

いや、これはもう予想外です。なんだか二人を動かしてたら、勝手に喧嘩するんですよね。相性悪いのかどうか知らないけど、止める奴いなからどこまでも突っ走っちゃう。

セラもアギトかアイリがいたらもっと大人な振る舞いするんだけど、スオウにだけはこんな感じだから……そしてスオウは耐えに耐えてはいるんですよ。だけど基本、熱くなりやすい奴なので、この結果です。

次からは謎の人物が上手くやってくれる事を期待したいですね。

てな訳で次回は月曜日に上げます。ではまたです～。

繋がりという出会い（前書き）

僕とセラはようやく岩に挟まれた哀れな人を助け出した。いや～一話も待たせちゃって忍びないね。だけど寛容な人らしく素直にお礼言ってくれた。良い人だな。だけど何か勘違いしてる。

あのやり取りは見てないけど、聞き取れては居たようだ。なのに仲良しだって……信じれない事を言う。それになんだかどこか抜けてるし、心配が加速するタイプの人だけど、セラはすっげ～邪険に扱う。

まあその理由は、何となく納得出来る物だけど……

繋がりという出会い

「よっと！」

そんなかけ声と共に、僕は黒い岩をセラ・シルフィングの鞘で打ち抜いた。するとピキパキと亀裂が入り、元々脆かったのか、黒い岩は砕け散る。

「げほっ、ごほっ……やっとで楽になれた」

「はは、すみませんね。なんか待たせちゃって」

フラフラしながら体を起こすその人に、僕は頭を下げる。助けた方が頭を下げるってのもなんだか変だけどさ、元の原因はこっちだから仕方ない。

それに随分待たせたしね。期待させておいて、ここまで引っ張ったんだ。謝罪くらいしなとね。

「いや、いいよ。助けて貰えたんだし、ありがとう。聞こえるだけだったけど、仲良いんだね君達は」

「「どこら辺が！？」」

僕とセラの声が見事に重なった。ああそっか、見えては居なかったらしいから、あの惨劇を知らないんだなこの人。言っとくけどさ、喧嘩なんてレベルじゃなかったぞ。

アレを見て、仲が良いとか言う奴は、すぐさま眼科に行くことを勧めるね。でも、その人は僕達の見事な突っ込みを見て更にその思いを深めたらしい。

「ほら、息ぴったしじゃないか」
「「たまたまですよ！　誰がこんな奴なんかと！」」
おいおい、また重なったじゃないか。誰がこんな奴だ。指さしてるなよ。するとそんな僕達を見て、快活にその人は笑ってた。
透き通る青空に響き渡る、気持ちの良い笑い声だった。

「いや、お恥ずかしい。何せまだＬＲＯに成れて無くてね」
「そうなんですか？　まあ僕もまだ初めて一ヶ月も経って無いですけど……でもいいですよねここ」
大変だけれども――は暗に隠して置いた。始めたばかりの人に、そんな事を言うのは野暮ってもんだろ。感動しちゃって、どこまでも歩きたくなるのがＬＲＯってもんなんだ。個人の見解だけどね。
「ああ、もう一つの世界……そう呼ばれるだけの事はあるよ。どこまで行ってもワクワクが止まらないと言うか、そんな感じだね」
「うんうん、そうなんですよね！」
おお、わかってるじゃないかこの人。純粋にＬＲＯを楽しめてるんだな。それはよかった。だけどそんな感じを共感しあう僕らに冷や水をぶっかける奴が一人。
「ワクワクが止まらないのは良いですけど、突っ走り過ぎですよ。あんな岩に挟まれる位に鈍くさいのに、よくここまでこれましたね？」
「お前、なんて事言ってんだ！　初心者だっていってんじゃん。しょうがないだろそれは！」

いきなり毒をぶち込んで来やがって……この人がそれでＬＲＯを嫌いになったらどうする気だ。他人には基本、猫を被るんじゃないのかこいつ？
既に見られた……いや、聞かれたから諦めてるのか？　でもそんな事を言われても、その人は笑ってくれてた。

「いや、全くもってその通りだよ。僕は鈍くさくてね。未だにモンスターを見ると足が竦んでしまう。ボタンをただ押すだけじゃない戦闘というのは難しい物だね。
ここまで来れたのは、僕が臆病だったからかな。きっと運も良かったんだ。まあ結局、岩に挟まれたけどね。ははは」

大人だ。年とか聞いてないけど、そう思った。なんだか大人な余裕を感じるじゃん。いや、全く持って素晴らしいね。どっかの万年毒吐き女とは大層な違いだ。
それに最初は誰だってモンスターが怖いもんだ。足が竦むのは寧ろ普通。僕達は画面の外じゃなく、中に居るんだからね。

３Ｄ映像とかの比じゃないよ。そこに居て、存在してるんだ。獰猛な目も、鋭い牙が生えてる口もそこにある。息づかいまで聞こえてきて、それは本当に恐怖を掻き立てる。
初心者の最初の課題は、そんな恐怖に打ち勝ってモンスターを倒す事だろう。だからこの人は、これからな訳で恥じることなんかじゃないんだ。

「モンスターなんて、一度倒せればどうにでもなりますよ！　大丈夫、それはみんなが通ってきた道です。臆病とかじゃなく、普通ですよ」
「そ、そうなのかい？　誰もが普通にモンスターに挑んでるから、私はてっきり臆病なのかと思ってたけど、みんな最初はそうだった

のかい？」
「そうですよ。なあセラ」
僕はその人を安心させる為に、気軽にセラに話を振った。だけどそれは間違いだったと直ぐに気づく事になる。
「私はそんな事無かったけど。てか、最初に倒す事になるモンスターって大抵街の外の奴らでしょ？　そんなグロい訳でも無いじゃない。足下サイズだし。
こっちは武器まで持ってるのに、怖がる訳無いでしょ？　理解できないわね」
やれやれと首を横に振るセラ。何言っちゃってんだこいつ？　いやいやいや、怖いだろ。怖がるもんだろ普通。それが女なら尚更！
最初の剣だけしかない状態で、さらには扱い方もほとんどわからないのに、それを心強いなんて思えるか？　幾ら足下サイズでも、見たこともない生物が迫り来たら怖いんだ。それが普通。
でもそういえば普通じゃないかもなこいつ。だけど案外、涙脆かったし本当かな？　って僕は疑うね。セラってかなり負けず嫌いじゃん。
それが当たり前だとしても、僕には絶対にそれを言わないと思うんだ。
「そうですね……確かに足下位のモンスターに怯えるのはおかしいですよね？　ははは」
おいおい、セラのせいで落ち込んじゃったじゃないか。
僕はそっと近づいて、その人の耳元でこうささやく。

「違いますよきっと。アイツだって最初は怖がってたんだと思います。予想ですけどね。でも意地っ張りで負けず嫌いで、嫌いな僕がいるから、そう言ってるだけですよ」
「そうなのかい？」

確認を求めるその人に、僕は頷く。まあ確証は何にも無いけどね。

「ちょっと、なに二人でこそこそやってるのよ？」
「別になにも」

鋭い眼光がセラから飛んできたので僕はその人から離れた。いらぬ事を言われてた事を察知でもしたか……女は妙に勘が鋭いよな。

「そうそう、何でもないですよ。彼のアドバイスのおかげで、ちょっと勇気が出てきた所です」

ニコニコとそう言ってくれたその人は、セラの眼光を苦もなく受け流してる。流石大人……でもこれを受け流せるのに、モンスターは怖いのか。

大人は自分の常識の範囲内でしか対処は出来ないからかな。まあそれも馴れなんだろうけど。軽くかわされたセラは不満気に、そっぽを向いて僕の服を掴んで引っ張る。

「あらそうですか、ならお気をつけて。こんな奴に貰えた勇気が何の役に立つか見物ですけど、残念ながら私達急いでるんです。失礼します」
「こんな奴って僕の事か！？」
「なんか文句でも？」

ギロリと睨まれた。なんでこんなに機嫌悪いんだよ。心なしか、

さっきの戦闘中くらいまで機嫌悪くなってないか？
しかもそれを腹の中でため込んでるせいなのか、苛つき具合がハンパない。下手したら、また戦闘に発展しそうだ。
「いえ、別に……」
だから僕はこう言うしかない。余りにも口惜しいけど、仕方ない。あの惨劇は繰り返してはならないだろう。
「そうですか。折角知り合いに成れると思ったのですが、急ぎでは仕方ないですね」
「そうそう、仕方ないの。せいぜい死なないように頑張って～」
なんて軽く言いやがるんだ。こいつ最低だな。この人の実力じゃ、ここから街まで行くのも大変だってわかってる癖に！
鬼か、いや悪魔だったな。僕は走りだそうとするセラに抵抗するよ。
「お前な、ＬＲＯは助け合いだろ。玄人は素人に無償で優しくするもんだろ！」
「それは余裕がある時よ。今はこの近くにたくさんプレイヤーがいるんだし、それをやるのは私達じゃなくてもいい」
セラは僕の言葉に耳を貸す気がないな。まあ確かにそうなのかも知れないけど……別に一緒にアルテミナスへ連れてく位いいいと思うけど。
だけど更にセラは、僕の胸倉を掴んで引き寄せ、耳元でこう言った。
「それによ、私達に関わらせていいの？　あの初心者を」

「う……それは……」

成る程、セラが邪険にしてるのはその為でもあるのか。確かに僕達と居るのは何かと不味いかも知れないな。危険も段違いだし。

何かが起こるかも知れない時のリスクを考えると、僕達にはその資格が無いのかも。

「はあ、さてどうしましょうか迷ったものです。ちなみに近くに街はありますか？」

「まあ、ここならもうアルテミナスが一番近いけど……」

明らかにそれは言いたくなかったって顔するセラ。この先の流れがわかってるんだろうな。

「アルテミナスですか……そうですか」

そういってその人は、地図を開く。場所を確かめてでも居るようだ。

「成る程成る程、ちなみにお二人はどこを目指しておいでで？」

「う、あ～え～っと、ダンジョンよ！　高難易度ダンジョンに今から挑む予定なの！」

「おおそれはスゴい！」

マジで事実だったら、僕もびっくりだけどな。流石にアルテミナスに戻る途中とは言わないか。それを言うと、流れが決まりそうだからな。

セラはなんとしても、この人と別れたいらしい。確かに僕達と居るのは危険かも知れないけど、アルテミナスに案内するくらい良いじゃんと僕は思えてきてるんだけどね。

その短い期間なら、別に何もないだろう。だけど純粋のなのか、その人はセラの言うことを全て信じるんだ。

「そうですか、まだまだ自分には体験しえない事ですね。それはお邪魔してしまって申し訳ありません。僕はアルテミナスを目指そうと思います」

「ええ、それがいいわ。初心者はコツコツと、街の周りの雑魚を狩って経験を積むのが先決よ。背伸びし過ぎたって良いことないんだから」

「はい」

なんて良い人。ある意味良い人過ぎて、逆に心配だよ。ＬＲＯには怖い人間だって居るんだよ。悪党どもはどんな世界にだってはびこっているんだ。

そんな奴らのカモにされそうだよこの人。だけど僕が色々と考えてる間に、セラは既に別れの挨拶をしてた。

「じゃあ頑張って、健闘を祈ってるわ」

「僕の方こそ、ダンジョン攻略頑張ってください！」

そう言って彼は駆けだしていく……アルテミナスとは逆の方向へ。

「ってちょっと待って！　逆だよ逆！　アルテミナスはこっちだよ！」

僕はその人の背中に慌てて声をかけた。するとセラが「ちっ」って舌打ちしたのが聞こえたような……流石にそれはないよな。気のせいだと信じよう。

反対だけど、まいっか――とか思ってたりしなかった事を信じた

い。そこまでじゃきっとないよ。

「あはっはは、いやー失敗失敗」

和やかに笑うその人。なんか大丈夫かなこの人？　てか、こんなんでよく無事にここまで来れたよな。そもそもここがどこかわかってないんじゃ？

よくよく考えたら、テンションあがって突っ走っただけで、人の国からここまで来れるかな？　境界線は街からかなり遠いだろうから、モンスターだって必然的に強い筈。

逃げ足に自信があるのだろうか？　僕はセラに近づいて耳打ちする。

「おいおい、やっぱり一緒に行った方が良いんじゃねえの？　この人危なっかしいよ」

「危なっかしいなら尚更関わりたくないわね。もう既に危なっかしい厄介者をこっちは抱えてるんだから」

何それ？　超酷くない。それって僕の事か？　厄介者って……

「何よその顔。アンタ厄介な事を引き寄せる体質でしょ？」

「う……」

引き寄せてたかな？　そう言われればそうだったような気もしないでもない。でも言っちゃうとたまたまなんだよ。

僕の行くところで厄介事が起こってるだけだ。そして何故か、僕が飛び込む羽目になるだけだ。なんだか何も言えなくなってしまったな。

こうなれば無事を祈るしかない。アルテミナス方向へ走り去る彼

を見送りながら僕はその背中に謝る。やっぱりさ、用があるとはいえど素人っぽいあの人を一人で行かせることには心が痛む。
なにせ同じ所に向かうんだからな。でも……セラの言うこともわかるんだよね。僕達にはあんまり関わらない方が良い。それは尤もだ。

特にあの人の様なビギナーはさ。一寸先は闇……そんな言葉の意味をＬＲＯでは考える。特にここ最近。僅かな期間でも何が起こるかわからない……まあそれを言ってたら、何もできなくなりそうだけどさ。

僕達の周りで起こる事ってかなり衝撃的だから、初心者にはきつすぎるよ。特に街の周りの雑魚も倒せないんじゃ、ショック死しかねないレベル。
ここは心の中で「すみません」言っとくしかない……

「これでいいのよ、二度と会うことも無いだろうし、気にすること無いわ。もっと良い出会と、普通のＬＲＯ。それが幸せでしょ？
だって誰も、命を懸けにここには来てないもん。楽しく遊ぶためにここに来てるんだから」

なんだか、そのセラの言葉は哀愁って物を感じた気がした。だからだろうか、僕は何気にこう言う。

「お前は……後悔してるのか？　楽しくないか？」

するとセラは隣から、一・二歩進み出る。流れる髪、ふわりと揺れるスカート、岩を叩く足音がコツコツと響いてた。そんなセラの後ろ姿を見つめる。

「バッカみたい。私はここで、かけがえなの無い時間を過ごして、かけがえの無い出会いをしたわ。それをどうやって後悔するのよ。
それに今だって、十分楽しいわ。私の大切なもの、滅茶苦茶にしてくれたお礼をしなきゃだし」

おいおい、最後の発言はかなり物騒だぞ。まあでも、楽しそうではあるよなコイツは。ハチャメチャだし。付き合わされてる僕からしたら、迷惑極まりないけどな。
「バッカみたい」か、気持ちの良い奴だよ本当に。確かにバカな事を聞いたのかも知れない。僕なんかよりも、ずっと長く居るんだよな。

この間の事だけじゃない……辛い事とか、他にもあっただろう。てか、ずっとアイリの傍に居たわけだし、その間にアイリだけが辛かった訳じゃないだろう。
セラだって、ずっと悶々としてたんじゃないだろうか。でも居続けた。かけがえのない出会いと時間だったから。
僕はその背中に再び並ぶ。

「お礼。ま、やることはやらないとだしな」

僕がそんな事を言うと、セラは少し顔を背けてボソボソと何か言った。

「やる事って……あの子を助ける……とか？」
「あの子？　セツリだろ？　まあそんなとこだな」
「私には理解出来ないわ。死にたい奴には死なせとけばいいのよ。私は自殺志願者を止める程、暇じゃないもの」

セラの言葉はいつだってきついけど、これはただのトゲだろ。言

われた瞬間にその人たちが「死のう」とか決意しそうじゃないか。
言葉を選べよな。まあらしいっちゃ、らしいけども。
「別にあいつは、死にたい訳じゃないと思うんだけどな」
僕は空を見上げてそう言った。この空の向こうに、あの楽園はあったのかなっとか思ってさ。
「あっそ、まあ用はストーカーよね。体よく言ってるけど」
ズゴッて体が傾く。何言いやがるんだコイツ。僕が格好良く決めてたのに、台無しじゃないか。
「一歩間違えば、だろ！　人聞きの悪い事を言うな！！」
「自覚無いの？　嫌がる女の子を追いかける行為。それをストーカーと一般社会では定義してあるのよ！　つまりアンタは紛れもないストーカーよ。
拒絶されてたじゃん。死んでって言われてたじゃん」
「……うぐ」
セラの言葉は的確だ。確かにそんな事も言われたな。それに自覚だって無い訳じゃない。ストーカーとしての自覚よりも、助けるって覚悟をしただけだ。
僕は開き直ってこう言ってやったよ。
「それが何だよ。言っとくけどな、僕をそこら辺のストーカーと一緒にするなよ」
「彼は気付いていない、その発言が自分の変態度が増す発言だということに」
「なにモノローグっぽく語ってんだよ！」

なんだか一歩引かれた感じで余計に傷ついたよ！　くっそ、どんどん僕を傷つけるバリエーションに富んで来てないか？

「ふん、あんな子、さっさと忘れた方が楽に成れるわよ。わ、私がなんなら協力してあげても良いんだけど～」

なんだセラの奴？　急にシドロモドロになりやがって。歯切れが悪い。てか最後の伸ばす所とか、妙にうざったく感じる。

バカな女子高生みたいな感じが苛つくよな。無理してるとかじゃなく、その言い方が問題なんだよね。まあこれは自分の好みの問題だけどさ。

そこを指摘したら「アンタの好みとか私に何の関係が？」とか言われそうだから、別になにも言わないけど。なんだかセラは僕から顔を逸らす様にしてる。心なしか顔も赤いような。そう言えば流石にちょっと暑くなってきたな。

まあこの暑さは走っただけでも、日が高くなっただけでもないだろうけど。無駄に体力使ったせいだよ。僕は顔を逸らすセラから目を離し、この赤茶けた大地に目をやった。

「セラのその言葉はありがたいけどさ、やっぱり忘れるなんて無理だよ。僕の冒険はアイツと出会って始まったんだ。

ここに居る限り、それを忘れる事はきっとない。忘れたりしたら、それこそぽっかり穴が開くと思う。幾らおかしいと言われても、ここでアイツを見捨てたら後悔しか残らないよ」

風が頬をなでる。やっぱりなんか乾いた様な風だ。緑が無く、壊された様なこの場所。

「今のセツリの心は、こんな感じなんだと思う。いや、どこまで行ったってこんな感じだと、アイツは諦めてるよもう。
僕は思うんだ。アイツが願う幸せな世界……アイツが作ろうとしてるそんな世界……それを諦めてるの本当はアイツで、それをしてしまったのは僕だよ。
届いてたのに、繋がってたのに、僕がアイツの勇気を切った。なら、僕がもう一度やるべき事だろ？　望まれなくたって、僕は知ってる。アイツが生きようとしてた事を」
「なによそれ……たまたまじゃない。別に自分じゃ無くても良いって思わないわけ？　お人好し過ぎよアンタ。絶対に早死にするわ」
はは、言ってくれる。まあ明日どうなるかわからない状態なのは本当なんだけど。だけどこれだけは言わないとだろう。これは僕の中の決意だよ。
「死なないよ。絶対に僕は死んだりしない。それじゃあ意味なんて無いんだよ」
赤茶けた岩を踏みしみて僕はそう伝える。少しの間セラと見つめあう様な状態だった。だけど、不意にガバッて感じでセラは頭を背けた。
何だ一体？　てか僕も実は恥ずかしく成ってきた。セラの頭からは僅かに白い湯気が見える様な気もする。そんなに恥ずかしかったんだろうか。
相乗効果で僕も湯気を出しそうだよ。だけどそんな事を考えてると、ぽつりとセラが熱を冷ます様な事を言う。
「今、死亡フラグがアンタには立ったわ」
「人の決意にケチつけるなよ！」

確かにああ言うことをいったら伏線？　とか思うだろうけど、死ななないから。そんなフラグ、自分で折ってやる。

「てかどうするんだよ。このままのルートじゃあの人と鉢合わせだぞ？」

「大丈夫よ。見えない所を走り抜ければいいのよ。別に道に沿う必要なんて無いんだから」

僕たちはさっきの人に会わないように、アルテミナスへ向かう事になった。てか、それなりに時間を食ったし、急がねばだよ。

セラの言うとおり、道から外れて走れば見つからずに抜けるだろう。てな訳でしゅっぱ〜つ……と思った時、どこかからか、大量の地鳴りが聞こえてきた。

「何これ？　イヤな予感しかしないんだけど」

そんな事を言うセラの予感当たったようだ。前方から立ち上る大量の土埃。そしてそこから聞き覚えのある声が聞こえる。

「〜〜すけて。助けてくださあああい！！！」

それは今しがた分かれた筈のあの人でした。後ろには大量のモンスターを引き連れてる。俗に言う、『トレイン』という迷惑行為だな。

そして彼は、真っ直ぐに僕達へと向かってきてた。絶対に何かを求められてるよ！

繋がりという出会い（後書き）

第百八十二話です。

新たな登場人物は結構頼りない奴かも……てな感じです。巻き込み系？　セラが居るのに更にスオウは大変。でも人間生はまともですよきっと。今まで、物語の都合上、スオウよりも後にＬＲＯを始めた人を出せなかったから新鮮です。

彼がどう物語に関わるか……はこれからの展開次第です。お楽しみに。

てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

オーバー・ザ・フィーチャー！！（前書き）

トレインして大量の敵を引きつけてきた彼。それを助けようとする僕に対して、セラは用事っていうか命令を遂行する方が大事らしい。でも僕達のせいでもあるわけだよこの状況。

見捨てるなんて出来なくて、なんだかんだで僕とセラは敵を殲滅する事に……けどそこに、思わぬ落とし穴があったんだ。

オーバー・ザ・フィーチャー！！

「何のよアレ！」

セラの驚きの声が、青い空へと響く。まあ無理も無いね。だってどんだけ引き連れてきてんだよって話だよ。二十体位居るぜあれ。

トレインにしてもやりすぎだ。

「アレはヤバいな……助けないとさ」

僕はそう言って、セラ・シルフィングに手をかける。だけどセラは、そんな彼を華麗に無視しようとしてた。

「何言ってんのアンタ。相手になんかしてられないわ。自業自得よあんなの。私達は急いでるんだからね！」

「けどさ、自業自得って一概に言えるか？　僕達のせいでもあるじゃん」

僕達が彼をアルテミナスまで案内すると申し出れば、彼はあんな事には成らなかった筈だ。そもそも嘘ついて一人で行かせた訳だし、僕達にだって責任あるだろ。

けどセラは言い放つ。

「アンタは何でもかんでも自分と結びつけたがる様だけど、あんなのこれから幾度と無く出くわすかも知れない光景よ。

それにＬＲＯやってるんだから、一回や二回はああなるものなの。誰だって、ああいう体験を経てＬＲＯに馴染んでいくのよ。

それに一杯触れ合えてるじゃないモンスターと」

「トラウマに成るレベルでな！」

何しみじみ語ってんだよ。セラの奴は、さっさとアルテミナスに戻りたいから、適当言ってるだけだろ。そりゃあ、トレインとかずっとやってれば何回かはやるだろうけどさ、それを救って貰えるかどうかって大切な事じゃないか？

それが目の前に知り合いがいたら尚更だよ。しかもまだ初めて間もない頃なら、ＬＲＯの印象とかを決めかねないじゃん。

もしもここで僕達が素知らぬ顔で彼を見捨てたら、彼のＬＲＯの印象は悪くなるだろう。それってなんか嫌な事だ。

「もう、なんなのよ。そんなに誰にでも良い格好したいわけ？　言っとくけどね、人一人ではそんなに沢山の人は助けれないわよ。欲張ったら、本当に大切なもの落っことすし、逃すかもしれないんだから」

「うぐっ……」

セラはズイっと体を僕に寄せてそう言った。良い格好したいだけなのかな僕は。人一人がそんなに沢山の人を救えないなんて知ってるよ。

そんなの僕は良く知ってる。だから今はこの両手で、掴みたい奴を追ってるんだ。

「ニ兎を追う奴は一兎も取れないってか？」

「その通りよ。それに良い洗礼じゃない。ＬＲＯなりの挨拶みたいなものよあれは」

適当ぶっこきやがって……かなり荒っぽい挨拶だなおい。あんなの受けたら、逆にもうここには来れなく成りそうだっての。

画面の向こうの分身がボコられてる訳じゃないんだぞ。今まさに、彼と言う一人の人間が、目の前でモンスターに追われてるんだ。

画面の向こうなら、いくら殴られても痛くないし、追われたって恐怖は感じない……だけどＬＲＯは違うだろ。殴られればそれなりに痛いし、痛いからこそ恐怖する。

それはリアルとあんまり変わらない。まあ痛みなんて衝撃の割には蚊に刺された程度だけどさ。彼がマトモな状態ならだけど……まあそれは問題無いはずだ。

僕とかとは違うんだから。でも普通にモンスターを怖がってた人だから、あれはきついよ絶対に。

「いい加減にしとけよセラ。助け合いだろＬＲＯはさ。初心者を無償で助けるのが玄人だろうが」

それは暗黙の了解みたいな物だった筈じゃないのか。そんな事をアギトが言ってた気がするぞ。

「それは余裕のある時よ。でも今はそうじゃないの。一刻も早くアルテミナスに戻って、これからどうするかって事を決めないといけないのよ。

あいつらは結局倒せて無いんだし、いつまた動き出すかわからないのよ」

「そんな事、わかってるよ」

「なら、第一目標を忘れずに頭に置いときなさいよ」

セラは道を外れて行こうとしてる。確かに第一目標は大事だよ。それの為に僕は命懸けてるさ。忘れる分けないだろ。

でも、あの人を助ける事がその妨げに成るとは思わない。寧ろその逆だろ。ニ兎を追う奴は、確かにニ兎とも逃すかも知れない……

けれどそもそも、二兎を追わない奴は二つを手に出来るかも知れない可能性を捨ててる訳だ。

まあ欲張っちゃいけないって事を言いたいことわざ何だろうけど、誰かを助ける為に、目の前の誰かを犠牲にする様な事、僕はしたくない。

そこは欲張りたいじゃないか。僕はセラとは逆に、今いる道を真っ直ぐに進み出る。

「ちょっと、何する気よ？　聞いてなかったの私の話」

「聞いてたよ。だけどさセラ、あんな物を傷害に入れてたら、シクラ達なんて乗り越えられる訳ないじゃん。あんなもん、ただの片手間で片づけられる――そうだろ？」

僕は右を抜いて、続いて左のセラ・シルフィングを抜き去りながらそう言った。二本の剣の青い刀身が、降り注ぐ光を反射してる。

すると後ろから「はあ」というため息が聞こえた気がした。

「アンタって、そうやっていろんな事を抱え込む質なのね。アギト様の言ってた事がわかってきたわ。周りの迷惑も考えなさいよ」

「はは、まあ一応考えてやってるつもりだけどね。僕は付き合ってくれる奴にしか言わないよ」

「つつつつ、付き合ってって――」

なんだか言葉が連なるセラ。後ろを向くと、ガチャガチャと金色の物体をなにやら動かしてる。いや、組み立てようとしてるのか？

でも上手く行ってない様な……珍しい、あれって確か変幻自在な武器で、セラなら一瞬で組み立てれる筈だろうにさ。

でも武器を出してるって事は手伝ってくれる気に成ったって事だろうか？

「大丈夫かお前？」
「な、何の事よ！　しょうがないから付き合ってあげる。アンタを死なせる訳には行かないしね。感謝しなさいよ」
なんだか無理矢理怒ってるセラ。こういう感じは、別に腹が立たないな。何故だろう？　寧ろ微笑ましく感じる。だから余裕を持ってこう言った。
「はいはい、頼りにしてるよ」
「ひれ伏しなさいよ！」
「そこまで求めてるのかよ！！」
お前の感謝はハードルが高すぎるんだ！　僕の心のゆとりを返せよ。一瞬の気の緩みが、セラの前だと命取りだな。
「全く、男はこれだから……その口と体は何の為にあるのよ。思いは言葉と態度で示しなさいよね」
セラは折角組み立てた武器を何度も分解してはまた組み立ててる。手元も見ずに、よくもまあそんな芸当が出来る物だ。
それこそ体で覚えてるって事だろうか？　てか、今の言葉は何の愚痴だよ。アレか？　熟年夫婦の思いのすれ違いとかでよく聞く奴。
夫は「好きなのなんて口に出さなくてもわかってるだろう」てな感じだけども妻は「それでも言って欲しいのよ」みたいな……男と女の感覚の違いか？
まあなんかセラの言ってたのとは違う気もするけど、よくわからない。元々が命令口調だからさ、態度で示す感謝がひれ伏す行為って、なんだか奴隷気分じゃね？

嫌だよそんなの。求めないでほしいよなそんなこと。

「示しても僕は、お前の奴隷には成らないからな！」

「何の事よ？　それよりもやるんなら急いだ方がいいわよ。あれじゃ長くは持たないわ」

「確かに……」

よく見てみると、彼のＨＰはどんどん削られて行ってる。今や風前の灯火だ。どうやら背中側を滅多打ちにされてるご様子。

あれじゃ、ここまで持たないな。元から駆け寄る予定だったけど、急いだ方が良さそうだ。僕達は岩を蹴って猛然と彼の方へ迫る。

するとその時、後ろにいるモンスターの一体（蔦人間みたいな奴）がそのニョロニョロとした腕を伸ばすのが見えた。

ヤバい、あれが当たったら彼は息を引き取るかも知れないぞ。でも僕の剣はまだ届く範囲じゃない。動き出しが遅かったんだ。

迷わずに行ってればこんな事には……そう思ったとき。僕の後方から何かが前の方へと飛んでいった。クルクルと回るそれは、黄金色した大きな手裏剣。

それが彼の後ろから迫ってた蔦を、弧を描いて斬り裂いた。

「急ぎなさいよ。直ぐに他の奴らが襲うわよ」

「わかってるっての！」

僕は一気に、その人とすれ違ってモンスターの群に飛び込んだ。二本の剣で周りのモンスター共を見境なく切りつける。

とにかくまずはターゲットをこっちに向けるのが先決だ。だから浅くてもいいから、攻撃を入れて僕にターゲットを固定させる。

バカなモンスター共は直ぐにこっちに振り向いてくれるよ。まあ元々、あの人は逃げてるだけだったろうし、攻撃してくる奴に狙いを変えるのは当然なんだけどね。

「よし、このまま一気に――」

僕はすかさず切り替えして、斬り続けて行こうとした。だけどその時、重い荷重が加わったんだ。

「ああ、ありがとう！！」

「――ってちょ！　邪魔ですよ！　離れてください！」

それはすれ違った筈の彼だった。なに抱きついて来てるんだよ。男に抱きしめられてもなんにもこれっぽちも嬉しくない。

寧ろ気持ち悪い。てか、なんで離れたところにいないんだよ。僕にくっつくなよな。なんの為にターゲットを僕に移したと思ってるんだ！

これじゃあ意味ないよ！

「うわーうわー！　攻撃が来てるよ来てる！！」

「うるさいし、避けづらい！」

てかマジでヤバいってこれ。何で大人一人を背負って動かなくちゃいけないんだ。やりづらいったらないよもう。

「遊んでないでちゃんと働きなさいよスオウ！」

「これが遊んでる様に見えるのかよ！　必死だっつうの！」

なんだこれ？　僕には味方がいないのか？　寧ろこの状態で複数のモンスターの攻撃を避け続けてる事を褒めて欲しい位だったよ。

敵の攻撃を貰う訳にはいかない。僕は他の一般的な人達とはズレてるからな。血なんて、出来れば見せたくない。知られたくない。
どうして？　とか言われて、巻き込みたくない。だから僕は避ける避ける。

「スゴいね君」

僕に張り付いたその人が、感心するようにそう言った。だけど有り難くない。だってこの人がこんな事しなかったら、僕はもっと楽に動けるからね！

「どうも……あのすみませんけど、ブン投げても良いですか？」
「へ？　うあああああああ――――ガハッ！」

ガスンって音と共に、彼は岩に叩きつけられた。僕がおもいっきり引き剥がしたからね。でも我慢出来なかったんだ。
それにこれも彼の為さ。危ないから……僕の所はさ。

「最低ねアンタ」
「お前に言われたかねーよ！」

正確にはセラにだけは言われたくない。だっていつも僕に暴言吐き続けやがって、いつかそれが原因で僕が追いつめられたどうするんだ。
体の傷より、心の傷の方が直りが遅いんだぞ。

「あっそ、なら身軽に成ったんだし、さっさと片づけるわよ。片手間――何でしょ？」
「当然！」

敵の数は数十体、それに対して僕たちは二人。でも負ける気なんてしない。色々と強敵を相手にしてきたんだ。今更そこら辺の雑魚共に遅れは取らないよ。

セラもやっぱ聖典使わなくても強いし、僕も身軽に成れば、敵の攻撃が入る前に切りつけれる。数は手数で上回るさ。それが二刀流だ。

セラが言ってた、このフィールドの岩から手が生えた様なモンスターもいる。腰まであるデカいヤドカリや、この岩礁地帯には似合わない緑々した蔦人間と球根みたいな変なモンスター……それらをバッタバッタと僕らは倒してく。

「なんか、似合わない奴らもいるな」

「この先のフィールドの奴らでしょ。関係ないわ、同じ雑魚よ」

まさに悪魔の様な奴だ。切り捨てた。そしてモンスター共も笑いながら切り捨てて行ってる。まあ確かに雑魚だし、別に他の場所の奴らが混ざってたって関係はないけどさ。

僕たちはこいつらを倒すだけだ。

「ん？」

そんな時、僕はちょっと変な奴を見つけた。それは緑々してる筈の蔦人間……の筈何だけど、なんだか緑くない。枯れ掛かってるのか茶色いと言うか白っぽいと言うか……それに髭生えてね？

全身皺皺だし、さっきから体が震えてるだけで明らかに攻撃してない。なんなんだあれ？　あれも敵で良いのかな？

僕にだけ見えてる蔦人間の背後霊とかじゃないよな？

「おい……あれって……」

僕は恐る恐るセラにその存在の是非を確認してみる。
「何よ？　こっちは忙しいんだから、そっちはそっちで何とかしてよね！」
怒られた。ちょっとした確認だったのに、何だよその態度。もうちょっと僕に優しく成れないのかセラの奴は。少し気になるから聞いてみただけなのに。
ＬＲＯには僕よりセラの方が断然長いし、知識も深いだろうと思っての配慮だったのに無駄だったな。てか、その震えがムカついて来たわ！
なんで僕が怒られなきゃいけないんだ。変なモンスターとか特殊な奴だったらどうしようとか、そんなのどうでもいいや。
老人っぽいけど、ここは倒させて貰う！
セラ・シルフィングを流れる様に動かして、僕はその蔦老人を切りつけた。感触は確かにあった――って事はやっぱりちゃんとしたモンスターだったわけだ。
一回切りつけただけでボロボロに崩れ落ちて行ったのは不気味だったけど、まあこれで全部を倒した筈だ。
「ふう」
「まあ、こんな物ね」
二人して一息付く僕ら。そこに喚起に震える様な声が入った。
「すすすす凄い！！　お二人とも強いんで――」

途切れた言葉。そして僕たちも同時にあることに気づいた。

「何だこれ？」

「鎖！？」

セラが言うとおり全身に鎖が巻き付いてる。でもその理由がわからない。いつこんな仕掛けを受けた？　てか、倒しきった後に発動するなんておかしくないか？

しかも三人全員になんて……どういう対象なんだよ。地面から沸きだした様な鎖。それぞれの足下には、魔法陣が浮かんできてる。

するとセラが何かを呟いてるのが聞こえてきた。

「鎖……魔法陣……まさかこれって強制転送？　それって……ちょっとアンタ！　さっき何か言いかけてたわよね？　何だったの！」

ええ、今更凄い剣幕でセラが僕に迫る。それってさっきのあのご老体の事か？

「何だったって、モンスターの中に蔦人間みたいなの居ただろ？その中に枯れ果てた老人タイプがいたんだよ。だから特殊なモンスターなのかなって」

「それの名前覚えてる？　後ろの方にゲートって付いてたんじゃない？」

名前？　そこまではよく見てなかったな。でもセラがここまで言うって事は、それがきっと重要なんだろう。確かあの蔦老人の名前は……

「ゲートか……ファトラ・オールド＝ゲートって感じだったかも」

「このバカ！！」

「何がだよ！？」

思い出してやったのに何という言いぐさ。感謝こそすれ、罵倒を受ける筋合いがわからない。だけどよく見ると、セラは切れてるっていうか震えてる？

「悪い事教えてあげる。アンタの倒したそれ……トラップモンスターよ！！」

「何だそれ！？」

聞いたこともない。いや、知らない方がおかしいのかな？　僕はどうも普通にやってたら培っていく筈の知識が不足してるらしいからな。

てかどんどん、足下の魔法陣の光が強くなってる気がするんだけど。

「どどおど、どうなるんですか僕達――」

「「あっ」」

離れた所で叫んでた彼が光に包まれ魔法陣へと吸い込まれる様に消え去った。今更ながら、イヤな予感がしてきたよ。

「あのさ、さっき強制転送とか行ってたよな？　ちなみにどこへ飛ばされる訳？」

するとセラは、怒ってるんだけど無理矢理笑顔を作ってこう言った。

「暗黒大陸よ！」

その瞬間、僕達も光に包まれ魔法陣へと吸い込まれる。僕の「そんなバカなあああ」って言葉が、きっと魔法陣が消えるまで殺風

景な岩だらけの場所に響いてた筈だ。

「ぐえっ！」
「きゃあ！」

二人同時にそんな声を出して地面にベチャって落ちる。ベチャってのは地面がぬかるんでたせいだよ。てかドロドロだななんか。

「だ、大丈夫ですか？　僕達どこに飛ばされたんでしょうか？　とっても不気味なんですけど……」

そう言ったのは先に飛ばされてた彼だ。彼にこの事実を伝えるのはどうなのだろうか？　僕だって全然知らないけどさ、街の外のモンスターを怖がる彼に、ここのモンスターはハードルが高すぎるだろう。

事実は曖昧にして、なぁなぁで気分を楽にしておいた方が良いのでは――

「どこって、暗黒大陸。魔王とかがいる魔物共の総本山よここは」
「お前って奴は、やっぱり悪魔だな！」

僕の思いを一瞬にして無にしやがって。誰でもがセラみたく神経図太くないんだからな。

「何よ、なんだか失礼な事を思ってない？　それに事実を隠してどうするのよ。マップを見れば直ぐにわかるんだし、意味ないわ。
それよりも、自分の心配しなさいよ」
「は？　僕の心配？」

何言ってんのこいつ？　言っとくけど、そうそうやられるなんて思っちゃいないぞ。

「アンタって本当に何も知らないのね。その自信がいつまで続くか見物――」

「待ってくださいよ！　暗黒大陸って……何で？　本当ですかそれ！？」

途中で割ってきたのは彼だ。まあ一番不安だろうし仕方ない事。でも明らかにセラは邪魔そうな顔してる。そして僕を指さしてこう言った。

「本当、嘘だと思うなら地図見てみれば？」

そう言われて、彼は恐る恐る地図を出した。そしてうなだれた辺りから察するにマジらしい。まあ確かに暗黒大陸にふさわしい感じはヒシヒシと伝わってくるよ。

黒い筆強引に塗りつぶした様な黒い空。不気味な成長を遂げてる植物達。どこからともなく、変な声は聞こえるし、地面は空が写ってるからなのか、黒い水がそこかしこから沸いてる様だ。

光源は太陽じゃなく、周りをフワフワと漂うカブトムシサイズの虫が光ってる。幻想的とも言えるけど、やっぱり虫じゃ気持ち悪いな。

落ちてきそうな空だし、気持ちが自然と沈みそうな場所だ。

「何でこんな事に……」

彼がそんな事をポツリと呟くと、セラが僕を指さした。

「それはあのバカのせいよ」
「はあ？　あんなの知らないし、それにちゃんと僕はお前に聞いただろ。それを無視したのはセラなんだから、僕だけに責任はないね」
最もの言い分だぜ。僕はちゃんと確認したっての。
「そのくらい知っときなさいよ。何ヶ月やってるのよアンタ」
「まだ一ヶ月もやってないけど」
「嘘！？」
嘘じゃねーよ。なんでそんな事で嘘付くんだ。てか、アンフィリティクエストから始まったんだからわかるだろ。
「一ヶ月も経ってないんだ。随分濃くＬＲＯをやってるわね」
「それは自分でも思うよ。マジで」
ここ数週間で色々ありすぎだもん。一年くらい平気で経ってても良さそうな感じだ。時々自分でも思うしな、まだこんなもんかよって。
「てか、二人とも冷静ですね！　暗黒大陸ですよ！？　これからどうするんですか？　どうやって帰るんですか？」
「どうやってって……どうやってだセラ？」
僕は何も知らないぞ。
「普通には出れないわよ。地続きには出れない入れない、それが暗黒大陸なの。だからアンタが倒した様な特殊なモンスターが居るんだし、後は案内人ね。
でも……行きはともかく、出るって事はよく考えると私も知らな

いかも。一年経った今でも、ここは殆ど未開だし……地図だって大雑把な最初のしかないしね」

「「最悪だああ！！」」

僕と彼の二人の声が初めてシンクロした瞬間だった。その時、ガサッと何かが顔を出す。それは三メートルはあろうかと言う、巨大なゴリラ？　顔二つあるバージョンだった。

そんなゴリラと僕らは目があった。涎がコボレ、黒い水へ波紋を広げる。「食われる！」と僕らは悟ったね。腹の底から震え上がる様な感覚が体を襲う。

黒い空の下、それは過酷な冒険の幕開けだった。

オーバー・ザ・フィーチャー！！（後書き）

第百八十三話です。
新たなる場所での冒険がスタートです。苦難しかなさそうだけど、これを乗り越えれればきっと大きく成れる筈。いろんな問題が山積みだけど、取りあえず今は目の前のゴリラに集中です。
それは暗黒大陸の洗礼です。
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

野生の咆哮（前書き）

不気味な暗黒大陸でいきなり顔を出したゴリラの様なモンスター。それが僕達へと対する、この場所の洗礼だったのかも知れない。このたった一体のモンスターが物語るのは、これからの冒険の過酷さそのものだった。

野生の咆哮

「うがっがっがうがっがっがっががうあががうがが！！」

目の前の二首ゴリラはおかしな奇声をあげている。威嚇なのかもしれないその叫び。するとゴリラは、巨大な体を玉の様に萎めたと思ったら、一気にこちらへと飛んできた。

「なっ！？」

そんな声を漏らした時には、ゴリラの巨大な腕が地面へと振り卸されていた。突き抜ける衝撃が、地面の黒い水を大きく押し上げる。足下を濡らす程度の水が、勢いを与えられて僕達の体を浚う。

「「うあああああ！」」

「きゃあああああ！」

不気味な森に、そんな三人の叫びが木霊した。地面に突っ伏す僕ら。そんなに浚われた訳じゃない、数歩分位は水に流されたけど、僕達はそう変わらぬ位置に居るはずだ。

（っつ……なんていう早さ、あれが野生か？　頭から濡らされた）

全身ビチョビチョ、だけどそんな事言ってられないか。あのゴリラ、次は何をするのか予想が付かない。てか、情報が少なすぎる。

「あ……が……」

「あ……が？　ががががががが！！」

変な音が聞こえると思った。僕はすぐさま、そこを見る。すると僕と同じように突っ伏す彼の目の前に、二つの頭をもったゴリラが迫ってた。
いや、正確には彼をまるでのぞき込む様にしてるような……珍しい物でも見るみたいにだ。でも、そんな事をされる彼はたまった物じゃない。

そこら辺のモンスターをも怖がる彼なのに、目の前に居るのは三メートルを超える巨大なゴリラ。ゴリラなだけに恐怖感もイヤにリアルに感じてるのかもしれない。
目も閉じれず、口も開いたまま……乾いた目からは涙が溢れ、声に鳴らない声が漏れる口からは涎が垂れていた。そしてそんな彼を観察して、ゴリラは多分真似してる。その巨大な頭を傾げて、がががやってるのは多分そういう事だ。

だけど次第にその声に野生の猛りが混じってる様な気がしてきた。それにどんどん顔を近づけてるし……開いた口から覗く牙が彼を狙ってるような……いや、狙ってるよアレは！！
あのゴリラかぶりつく気だ！

「させるか！！」

僕はセラ・シルフィングを抜き去り駆け出す。今更声を掛けたってあの人は動けないだろう。それに機動力も圧倒的に勝られてる彼は、どの道逃げる事は出来ない。
ならやるしかないだろ。頭を切断する気合いで僕は腕を振るう。
そして実際、出来ると思ってた……けど――

「何！？」

――セラ、シルフィングはゴリラの剛毛に阻まれてた。分厚い野生の毛が、セラシルフィングの刃を絡めとってる。

「ガア？」

今気づいたかの様にこちらを向くゴリラ。目があった瞬間に、奴は楽しそうに吠えやがった。そして衝撃一線――

「ぐはっ！？」

――僕は地面を跳ねて転がった。腹にある鈍い痛み……だけど何をされたのかわからなかった。興味を彼から僕に移したゴリラが、こちらに向いている間に僕は痛みを堪えて観察する。

腕じゃないだろう……さっきの攻撃があの屈強な腕からの物なら、こんな物じゃすまない筈だ。骨が数本と内臓破裂とかあってもおかしくない。

直接系じゃないスキルって訳でも無いだろう、だってあのゴリラは明らかにゴリラだ。じゃあ何が僕を攻撃した？

思い当たったのは、奴の尻から延びる鳥居に巻かれてる縄の様な尻尾。多分アレだろう。超強そうだぜあれ。今も地面にドスンドスンめり込んでるし。

ある意味これだけのダメージで済んだのが救いだったと思える光景だ。

「ウガウガウガウガウガウガウガウガアア！！」

吠えまくるゴリラ。そしてゴリラ特有の胸を叩く動作もしだした。テンション上がりまくりだ。何が一体楽しいんだか……ああ、プレイヤーを痛めつける事が、か。

「ふざけやがって……」

僕はセラ・シルフィングを地面に突き立てて立ち上がる。こんな辺鄙な場所でやられる訳にはいかない。僕にはやることがあるんだよ。

こんなゴリラに手こずってどうするよ。僕は呼吸を整える事に集中して、前を見据える。すると異変が起こってた。ゴリラの茶色かった毛が、今はどんどん赤く成って行ってる。

あれか？　あの行為が、スキルその物って訳なのか。見るからにパワーがアップしてそうだ。そしてゴリラは、地面を爆発させて迫ってくる。

突き出すだけで衝撃波を生み出すパンチを紙一重でかわして剣を凪ぐ。だけど奴の毛は更に強度を増してるようだった。

切れない……てか、皮膚にまで届かない。ゴリラのＨＰは一ミリも減ってないって事は、ダメージ認定されてないんだ。

まさか、セラ・シルフィングに切れない物があるなんてビックリだ。なんだって切れちゃいそうな気がしてたんだけどな。

「うお！！」

元気一杯に食い掛かってくるゴリラ。僕はそれに反撃するも、やっぱり刃は通らない。それでも、今ならなんとか互角位には見えるかも知れない。

僕もまだゴリラの攻撃は食らってないからな。でも、それも時間の問題。幾らバカでもそろそろ気づく。僕の攻撃が無意味だってさ。

そしたら勢いが更に増すだろう。交わし続けるのも限界だ。それ

に、防戦一方じゃやっぱり勝てない。どうにかして活路を見いださないと……黒い水を踏みつけながら、僕とゴリラは優劣がありすぎる戦いをしてた。

「くっそ！！」

僕は毛が無い所も狙って攻撃するけど、そこら辺ではまさに野生的な感で攻撃をかわされる。八方塞がりだ。その時、ゴリラの後ろに迫る姿が僕には見えた。

それはセラ、アイツは今まで何やってたんだよ。てか、直ぐに加勢しろよな。けどそんな僕の思いなんて関係無しに、セラの奴は一方的な視線を送ってくる。

こう言う時だけに限って伝わるアイコンタクトで「引きつけとい て」って僕は受けとったよ。

何する気かは知らないけど、こうなったらセラが今まで動かなかった事を信じて任せるしかない。ゴリラの野生の感が、余計な箇所に働かない様にしないと。

「踏ん張り所だな。うおおりゃあああああ！！」

僕は一気にラッシュを掛ける。体はデカけりゃ良いってもんじゃないんだよ。デカすぎるのも困るけどさ、こいつの大きさ位はある意味丁度いいよ。

刃は通らなくても、滅多打ちには出来るぞ！　回転回転、また回転。ゴリラの攻撃をかわす回転。剣を打ち込み、次に繋げる回転。竜巻の如く、僕はゴリラをその風の中へと巻き込んでいく。

イクシードを発動させてる訳じゃない……だけどいまここには、確かに僕の風が生まれてる。二対の剣を同時に腹に叩き込む。

やっぱり切れはしない。けど――

「がぎっ！！」

――僅かに体を浮かせるゴリラ。体もくの字に曲がって、顔も僅かに強ばった。そしてその瞬間にセラも動く。手元で組み替えられる黄金の物体。それは大きなハサミへと化した。

そしてそんなハサミを手に、セラが狙うのはどうやら尻尾の様だ。

「とりゃあああああ！」

尻尾を挟んで、「うーうー」唸るセラ。いやいや、切れないだろそれは！　セラ・シルフィングでも無理だったんだぞ。

尻尾なんて毛の固まりだっての。

「てか、何で尻尾なんだよ？」

「え？　力の源でしょ？」

おい、こいつ日本を代表する漫画と混同してないか。なんかあっけらかんと言った様がなかなか可愛いじゃないか。

でも僕は厳しく言うぞ。

「どこの星の猿だよそれは！？」

「そ、そんなの知らないわよ！」

有名だからこそ、何となくそこを狙ってみたって事かよ。セラの奴、それの元ネタ知らないだろ？　浅い知識を披露しないでほしいな。頼むからＬＲＯの知識と知恵を披露してほしかった。

僕たちがそんな言い合いをしてる間にゴリラは動く。尻尾の剛毛に阻まれたセラの武器を振り払って、ターゲットをセラへと移して

拳を繰り出す。

「セラ！！」

僕はとっさにセラを庇う形で拳を受けた。セラ・シルフィングを交差させて正面で受け止める。いや、止め切れはしない。

体は押されてる。

「うがあああ！！」

そんな声で気合い一発。僕達はゴリラの腕力に逆らえずに吹き飛んだ。

「ぐあっ……があ！」

「きゃあ……つぁ……くっ！」

地面を跳ねて、草に突っ込み、木にぶつかったりした。一応パンチを直接食らった訳じゃない筈なんだけど……桁違いのパワーだった。

あんなの無理に踏ん張ってたら、押しつぶされてたかもしれない。

「大丈夫かよセラ？」

僕は近くで同じように吹き飛んだセラに声を掛ける。

「大丈夫よ。別に、アンタが防いでくれなくても、一発位私なら耐えられたわよ」

「はは、文句言えるなら大丈夫だな。てか、本当にアレを一撃でも食らってよかったのかよ？」

「うぐ……」

僕の言葉に、その情景を想像してかセラが微妙ね声を漏らした。まあ、想像するだけで嫌だよな。僕は絶対にまともには受けたくないね。
セラ達普通のプレイヤーならまだ良いけど、僕とか血しぶきあげて粉々にされそうだ。それか、下半身と上半身が別れるとか考えられる。

最悪だな。すこしずつ、草や木々で遮られた向こう側から、大きな足音が伝わって来てた。一気に追いつめに来ないのは、絶対的に自分の方が強いって確信でも持ってるのか？
それか、逃がす心配もしてないとか？　どちらにせよ、確かに僕達の状況は絶対絶命だ。するとセラが手に別の暗器を持ってこう言った。

「てかアンタ、いつまで余裕でいる気？　全然攻撃聞いてないわよ。さっさとイクシード出しなさいよ」
「イクシードね」

僕はセラのそんな言葉に、苦虫を噛み潰した様な顔と声で応えた。そして反論するようにこう言ってやる。

「お前こそ、聖典仕えよ。かなり……いや、滅茶苦茶強いぞあのゴリラ」

あれが普通にフィールドを歩き回ってるモンスターだとは思いたくない。多分きっと、ポップ率が少ないレアモンスターなんだ。
それだと僕達が運がいいのか悪いのかよくわからなく成るけど、そう思わなきゃやってられないだろ。これからを考えた等さ、このクラスの敵がフィールドを闊歩してるだなんて思いたくないんだ。

そんな思いはセラだって同じ筈で、僕の言い分だってわかるだろう。今回ばかりはセラだって協力してくれると思うんだけど……だって自分の命かかってるし。
でも聞こえてきたのは僕と同じ様な言葉だ。

「聖典ね」

あれ？　なんだか嫌な予感しかしねーぞ。自分の太股の辺りをサワサワして、「はは……」と力無く苦笑する辺りが、今の僕とダブってるっての。
そしてセラも同じ印象を僕に持ってたみたいで、二人の視線が交差して、言葉が被る。

「お前まさか……」
「アンタまさか……」

いぶかしむ目が向けられて向き返す。僕達は同じ結論に達してる。でも、それを口にするのって、なんか終わりの確認みたいじゃないか？
近づく音はどんどんとは大きく成っていて、黒い水には荒々しい波紋が伝わってた。時間はない……ちょっと絶望しそうだけど、戦力の確認って大事だと思う。
だから僕達は互いに口を開く。

「聖典使えないのか？」
「イクシード使えないわけ？」
「「……」」

図星な所を突かれて、お互いに沈黙する僕とセラ。いや、まあそ

れを言われるとは思ってたよ互いに。でも、それを自分じゃない奴が言うと、ズーンとくるわけだ。
すると重い空気をぶち破って、先にセラが動いた。腕を激しく振りながら、僕を指さして言う。
「だだだだって、アンタのせいじゃない！　アンタのせいで、聖典一度使っちゃってまだ数分インターバルおかないと発動出来ないのよ！
どうしてくれる訳！？」
「は、はあ！？」

なんて女だ。また一方的に僕のせいか？　んな訳無いだろ！　それならこっちにだって反論材料は山ほどあるわ！　僕は立ち上がって食いかかる。
「ふざけるなよ！　こっちだってな、あの訳の分からない戦いのせいでイクシード使っちゃったんだろうが！！　そのせいで大ピンチだよ！
イクシードさえあればあんなゴリラ二秒で切り刻めたのにな！」
「訳の分からない？　あっそ！　聖典なら一秒で灰に出来たわよ！」

どこに切れたのか知らないけど、セラも立ち上がって食いかかってくる。お互いに妙に熱くなってる僕らは止まらない。
「ならイクシードは刹那の瞬間には終わってるね！」
「聖典は光の速さに届くわよ！！」

小学生の様な言い合いを繰り広げる僕ら。互いの切り札は、こんな自分達のせいで奪われたんだ。まさに自分達で掘った穴にハマってます。

そしてそんな無意味な争いを繰り広げてると、一際大きな音と共に、波の様な波紋が広がる。すると頭上から何やらバキバキと枝でも折るような音が聞こえる――

「上から来るぞ！　どけ！」

「アンタこそどけ！！」

僕らは互いに突き飛ばしあってその場を離れる。その瞬間、バッシャ――――ンと二メートル位の水柱があがった。その余りの衝撃に再び転がる様になる僕。

見えないけど多分セラも同じように成ってるだろう。まあ押しつぶされてなきゃだけど……言っとくけど、自分だけ助かろうとした分けじゃないよ。

幾らムカついたからって、女の子を見捨てるなんて真似は――

「このクソゴリラ！　大事な服をどれだけ汚せば気が済むわけ！！」

――見えないけど、元気な声が聞こえてきて一安心。でも、さっきの言い合いの勢いそのままに食いかかってるけど、大丈夫かアイツ？

聖典使えないんだろ。そして案の定、ゴリラは必死に吠えてるセラの方を向いた。おいおいやばいぞこれ、セラの奴もよく探せば僕と同じように倒れたままじゃん。

このままじゃろくに回避行動も取れないぞ。

「あのバカ――ん？」

助けに行こうと思ったのに、何故か立ち上がれない。足が何か絡められてる。くそ、水が黒いせいでどうなってるのかわからない。

僕が必死に足を引き抜こうとしてる間に、ゴリラは何かおかしな

行動を度ってた。セラに顔を近づけて、その臭いをガフガフ嗅いでる。何をしたいんだあのゴリラは？

「ちょ！　デリカシーの欠片も無いわねこのゴリラ……」

少し引き気味でそんな事を言うセラ。まあでも、あんまり刺激しないようにはしてるみたいだ。そのまま時間を稼いでおけよ。

僕は足を絡めるツタか何かと格闘中だ。でも直ぐに行くさ！　だからそれまで……するとゴリラは、今度はセラに何かを差し出してきた。

それはドロドロとした……ドロドロとした……いや、まあ地面の泥その物だった。そしてそれをベチャッとセラの顔に塗りたくる。

その瞬間、セラの何かが切れた。

「乙女に何してくれるんじゃあああああああああああ！！」

ドガン！！　というもの凄い音の膝蹴りがゴリラの片方の顔の顎に炸裂した。そしてもう片方の顔には、目にも止まらぬ回転蹴りを叩き込む。

ゴリラはこちら側に頭を埋めてぶっ飛んできた。

「お前、スゲーな」

火事場の馬鹿力って奴か？　黒い水に沈んだゴリラからはボコボコと空気が出てる。このまま頭を押さえつけたら、窒息死してくれるだろうか？

「はぁはぁ、女子の顔になんて物をつけてくれるのよ」

顔を腕で拭いながらセラはそんな事を言う。お前こそ、女子にあるまじき行動と形相だったと思うけどな。
けど、もの凄い威力に見えたけど、やっぱりダメージとしては余り効いてない。無理もないか、結局はただの蹴りだからね。

あれがちゃんとした脚用の特殊な武器を装備した状態でならかなり効いただろうけど、ただの蹴りなんてこんなもんだ。
それでも、吹き飛ばしたのが信じれない事だけどな。てか、ゴリラの奴起きないな。マジで頭を押さえつけようか？

もしかしてさっきの蹴りで昏倒してるのかも。威力はともかく、クリーンヒットな感じで入ってたもん。僕は恐る恐る手を伸ばす……だけどその時、ゴリラは勢いよく水から出てきた。

「ううおおおおお！？」

そしてそれに巻き込まれる僕。一瞬で天地が逆さまに見えるぞ。一体何が起きたんだ？

「何やってるのよアンタ？」
「僕自身が知りたいわ！」

呆れた様な目で見るんじゃない。せめて心配する感じで見ろよな。そこら辺が、セラは女子として成ってないよな。
て、余計な事に頭を使ってる場合じゃない。何でこうなったのか、現状把握が最優先。そして見つけた。

「げげ……」

視線を僕の足に持っていくと、さっき水の中で絡まったと思われ

るツタがあった。そしてそれを伝って更に上に行くと、ゴツいゴリラの腕が見える。
つまり、水中から起きあがるとき、あのゴリラは思わず僕を絡め取ってたツタを掴んで起きあがった訳だ。だから逆さまに僕は吊されてる状態なんだ。現状把握完了だ。

最悪だな。何なんだよこの状況！　ゴリラは馬鹿力だからまだ気付いてないっぽいけど、気付かれたらおしまいじゃねコレ？
そうこう思ってる間に、ゴリラは再びセラの前に陣取る。でも、流石に今は怒ってるのか歯がガチガチ鳴ってる。そしてその腕を振り被って、僕も一緒に振られた時、どこから勇敢な声が聞こえた。

「まま待ちなさい！！　僕が相手になってやりますよ！！」

それは一人置き去りにされた筈の彼だった。僕達が嘘を付いてしまった初心者冒険者。そんな彼が、なんの変哲も無い剣を握りしめて、セラとゴリラの間に割り込んで来たんだ。

「君……」
「だだだ大丈夫ですよ……僕だってやるときは……ややります」

セラの呟きに、男らしく返そうとして返せてない。でも、それが凄い事だと僕達はわかる。こんな凶悪なモンスターの前に飛び出すだけで、彼にとっては相当な勇気だよ。
体は小刻みに震えてるし、今にも泣きそうだけど、その勇気はちゃんと伝わった。初心者の彼がここまでやってるのに、僕達がやらない訳にはいかないだろう。

おかしな奇声と共に、まずは彼を潰しにかかるゴリラ。だけどその攻撃を僕が死角からの一撃で叩き落とす。その間にセラが、彼の

腕を引いて大きな木の後ろへ行った。
ムカついたのか、木々が震える程の声量で叫ぶゴリラ。全身がビリビリする……けどそれはビビった訳じゃない。火がついたって感じだ。

「調子にのってんなよクソゴリラ。人間の知恵と戦術は野生を越えるって事を教えてやるよ」

そうでなきゃ、人間は生きていけないからな。でもどうやって？
格好良く、剣を向けてみたけど、残念ながらノープランだ。
でもその時、パシャンと踏みしめた水が僕にある事を閃きさせてくれた。

（水のせいでぬかるんだ地面……セラ・シルフィングには風ともう一つの属性が宿ってる……これを使えば）

僕は前を向いて走り出す。

「行けるの！？」

木の後ろから顔だけ出したセラの言葉に、僕は意味有り気な笑顔を返す。そして強力な腕を振り回すゴリラとぶつかった。
相変わらず刃は通らない。一回でもまともに当たったらヤバい攻撃の嵐。だけどそれを捌いてかわしつつ、僕は有ることを呟きやっていた。

傷を付けられないと、このスキルの対象には成らない。けど、逆に傷を付けられるのであれば、それ発動してくれると拡大解釈というか、期待して僕はゴリラと対峙する。　怒濤の連続攻撃は、ゴリラに通りもしなく、地面を斬る始末。でも僕は止まらない。勢いま

でも向こうに持って行かれたら、やられるからだ。

（そろそろ行けるか？）

僕はそう思い、視線をちらりと下に向ける。すると黒い水の下で青白い線が光ってるのが見えた。僕は口元僅かに上げて、次のゴリラの攻撃を受ける振りをして、大きく空へと上がる。

そして僕はこの言葉を叫ぶ。

「サンダーブレイク！！」

青白い雷撃が、黒い水の中から溢れ出す。

野生の咆哮（後書き）

第百八十四話です。
ゴリラ異様に強い！　まあ本当ならもっとうまく戦えたんだと思うけど、今のスオウ達にはこれが精一杯だったのです。初心者一人を抱えての旅は、この場所では命取りになりそうですね。
倒せたのかは次回へ続くで。
パソコン壊れちゃいました。スマートフォンでどうにか出来ないかやってるけど、ポメラのてか、ＳＤのデータコピーして貼り付け出来れば良いんだけど、出来ないよ（Ｔ＿Ｔ）
良いアプリを紹介してください。地道に写すのは予想以上に大変で、失敗しました。てか、やりにくい。消しちゃったし。
だからどうかお願いします！　助けてください。お願いしますｍ
（＿）ｍ

原因究明（前書き）

雷撃が上手く炸裂し、ゴリラはその場に倒れ伏した。だけど倒せたわけじゃない。僕達は今の内にその場を離れる事に……そして辿り着いた場所でようやく自己紹介だ。

原因究明

「あががががががががあああああ！！」

黒い空の下で、そんな断末魔の叫びが上がる。地面からわき出た青白い稲妻が二つの頭を持つ、巨大なゴリラの体を襲ってる。

僕はそんな様子を木の枝に掴まって、空中で眺めてた。いくらあのゴリラが刃物に強くても、雷撃まではその体毛じゃ防げないだろう。

てか、そうであってほしい。見る限りでは効いてそうだけど……激しくスパークを散らす雷撃は、次第にその光を小さくして行く。

そして辺りに静けさが戻ったとき、ゴリラはまだたったままだった。

（これでも……）

そう思ったとき、ゴリラの赤かった毛が元の状態へと戻っていくのが見えた。そしてドスンと片膝を付いたと思ったら、そのままバシャンと地面に倒れ伏す。

体からは僅かだけど煙が上がってる。どうやら雷撃は効果的だったらしい。

「やったの？」

そういって木の陰から出てくるセラ。僕も掴んでた木の枝を放して地面へと降り立つ。

「こんなの倒すだなんて凄いですよ！！」

そう言って駆け寄って来たのは、セラと同じ場所に隠れてた初心者プレイヤーだ。さっきまでビクビクしてたのに、ゴリラが倒れた瞬間に元気になったじゃないか。
それにその眼差しはなんだか痒いな。しかも彼はちょっと勘違いしてるようだし……僕はセラ・シルフィングを鞘に納めながらこう言った。

「倒してないよ」
「え？　だってゴリラはこの通り……」
「ＨＰ見てみればわかる。まだ大分ある。多分雷撃のショックで昏倒しただけじゃないかな？」

すると彼は再び、その顔を青ざめて後ずさる。

「た、確かに……ＨＰ沢山残ってますね。今の内に止めを刺しましょう！！」

拳を握り締めてそう訴える彼。だけどそこでセラが溜息一つこう言った。

「馬鹿なこと言わないでよ。攻撃なんかしたら一発で起きちゃうわよ。それに私たちは今、決め手を欠いてるの。一撃で確実に決められもしないのに、こんな千載一遇のチャンスを逃せる訳ないでしょ？」
「ああ、セラの言う通りだな」

僕はセラの言葉に珍しく納得だな。でも彼は、僕たちが何を言ってるのかわかってないらしい。

「ええ？　チャンスだから倒すんじゃないんですか？」
「チャンスの吐き違いだよそれは。ここは千載一遇の逃げのチャンスだ！！」
「そう言う事よ！」

てな訳で、僕とセラは困惑してる彼の腕をそれぞれ掴んで走り出す。期待してくれてた彼には悪いけど、あんなの倒せるか！！
いや、万全なら倒してみせる自信はあるよ。後ちゃんとしたパーティーならやりようも有るだろう。だけど、今はこれが最善の選択だ。
だから昏倒したこの瞬間を逃したら全滅必死。もう一度目が覚めるなんて、怖くて仕方ないっての。
だから今の内に出来るだけ遠くに。これは戦略的撤退だ。僕たちは走る。黒く不気味な森を必死にさ。

「はぁはぁはぁはぁ！」

森を抜けてたどり着いたのはデカい滝が三段階的に落ちてる場所だった。かなり下の方へ見下ろすんじゃなく、かなり見上げる形でその滝は存在してる。
つまり僕達は三段階目の三段目にいるんだ。やっぱり暗黒大陸の水は黒いのか、流れ落ちてる水は黒かった。そして辺りに広がる黒い川は、きっとこの滝が作ったんだろう光景だと思える。

辺りを警戒しながらたどり着いたこの場所は、水があるにもかかわらず、モンスターがいないおかしな場所だ。ＬＲＯのモンスターはちゃんと食べるし飲むとかの行動を組み込まれてるから、居てもおかしくは無いんだけど……やっぱり黒い水は飲めないのだろうか？
まあ飲む気には成らないけどさ。ともかくモンスターがいないこ

こで一時休憩と言うわけだ。

「大丈夫？」

「お前は……だから何で息切れしないんだよ」

ここは自動走行使えない筈だろ。なのにケロッとしやがって、まだ僕に教えてないズルが有るんじゃないだろうか？

だけどセラは、考え込む様な動作と共にこう言った。

「アンタってもしかして、体力とかもリアルから引っ張って来てるんじゃないの？　だって普通は、息切れしてもそこまでには成らないわよ」

「へ？」

セラの発言が脳に染み込むまで五秒くらいかかる。酸素が足りないんだ。でも染み込んで来ると、その言葉はちょっと信じたく無いんだけどって感じだ。

でも周りを見たらさ、初心者の筈の彼でさえ僕ほどは息切れしてないよ。まあ引っ張って来られたからってのも有るだろうけど、彼はズルなんて知るはずなのよな。

「そんな……体力までリアル通りなんて、戦闘不利すぎるだろ？怖いこと言うなよ」

「でも、異常じゃないアンタ」

「異常なのは元からだ」

僕は変な方向に強がって見せた。でもまあ、認めたくはないね。だって、いろんな物をリアルから引っ張ってきてさ……これじゃあその内、僕の中でどっちがリアル？　とかなりそうじゃん。

それにやっぱり、体力はいろんな物の元になる力だよ。それがリ

アルと残量一緒じゃ、激しいバトルなんて繰り広げれなく成るよ。
それは死活問題だ。
「まあ、確かにアンタは元からどっかおかしいけどさ」
「どっかおかしいなんて変な捉え方するなよ！　異常なのは人間性じゃないからな！」
人を危ない奴みたく言ってんじゃない。心外だよそれは。
「はいはい、どうでもいいわよそんな事」
どうでも良い言われちゃったよ！　ちょっとは聞いてほしいな僕の嘆き。でも、息が上がってるから上手く反論出来ない。
さっきまででかなり空気を使っちゃったよ。それにここ暗黒大陸の空気は……いっちゃ悪いけど臭い。ゲロみたいな臭いが充満してる。
何だろこれ……土が腐ってるのかな？　とにかく、深呼吸なんて出来る物じゃない。こまめに息をしないとこっちが吐き気を催しそうなんだ。
だから一度息が上がると大変。セラもそこら辺わかってるんだろうな。今の言葉も有る意味、セラから引いたようなもんだった。
こいつにしては珍しい事だろ。でもらしくはあった。引いたけど毒は吐いたし、僕の空気も奪っていったんだ。そして自分には負担はない。
ゴリラから逃げれたのは誰のおかげだと思ってるんだ。
「大変ね、直ぐに息が上がる人は」
「……」

嫌みにももう応えてやらねえ。こっちはこまめに息を吐いて吸っても、あんまり変わらないんだ。相手してたらマジ死ぬよ。
するとそこへ、不安そうな顔の彼が歩み寄ってきた。
「大丈夫ですか？　僕を助けてくれたから……」
「別に……そういう訳じゃないですよ。普通の事です」
助け合いはＬＲＯでは当たり前だ。それに結局は自分の為でもあったしね。
「普通でも、それで僕達は助かったんだ。君はそんな辛そうなのに……なんだか心苦しいよ」
眉を深く下げて、ションボリとする彼。成人男性姿でそうやっても、別に悪いとしか思えないな。
「この異臭がなければ……」
「確かにこの異臭はきついわね。臭い付いて無いかしら？」
僕の事を心配してくれてる彼とは違い、セラは自分の事を気にしてやがる。いや、そういう奴だってわかってるから、別にムカつきなんてしないけど……
するとそんなセラを見て、彼はポンと手を叩いてとんでもない事を言いやがった。
「ああ！　思いつきました。口と口で直接空気を送りあえば、この臭いも気にならないかも知れません！」
「は？」
「ちょっ、何言ってるんですか貴方？　それってつまり……」

セラが文句を綴る前に、彼はまたも言い放つ。
「さあ、セラさん！　彼に綺麗な空気を上げてください！」
「えええええええ！？　なんで私が！？」
「いえ、男の僕とは流石にイヤでしょ？　その分セラさんは可愛く綺麗だし、お二人は中も良いようなので、このさいこれをきっかけに出来ればと……」
「うにゃあああああああああああああ！？」

奇声を上げて、彼の言葉を遮るセラ。こればかりはセラに賞賛を送りたい。マジで良くやった。なんておぞましい事を言うんだ彼は！

あのまま聞いてたら、それだけで吐き気が上がってくるわ！　そりゃあ、セラは美人だろう……てかＬＲＯで美人か可愛いの部類に入らない方が珍しいけど……だけどそれでもセラなんだよ。
考えれないな。いや、例え僕が土下座してお願いしても、セラならそんな僕の頭を踏みつけると言い切れるね！　勘違いするなよ。僕達の関係はそんなもんだ！！

「……グス」
「ほら、涙を流す程に苦しんでます！」
「いや、違うから！」

自分で思っておいてなんだけど、思わず泣けて来たんだ。土下座して頭踏まれる自分が可愛そう過ぎた。しかもそれに甘んじてるし！

「ゲホッゴホ……」

再び叫んだから、肺が苦しくなった。うう、貴重な酸素が飛び出

した。するとせき込む僕の前にセラが立った。
「そんなに……苦しいの？」
「見て……わかんないのかよ？」
なんだコイツ、苦しむ僕を見下して笑いに来たのか？　最低だな。
「そ、そうなんだ。ご愁傷様って感じだけど、一応聞いてあげる。私でもいいの？」
「あ？」
せき込む口を押さえて、僕は上を見上げた。何言ってるのか理解できなかったからだ。するとセラは、視線を移ろわせて、キョロキョロしてる。耳が真っ赤に成ってるのが見えた。
「いや……え？　今なんて？」
一応聞き返す僕。するとセラは、膝を折って姿勢を低くし、僕の目線にあわせてきた。うお、こうやって見たら、なんだか火照ってるってレベルじゃないぞ。
なんか熱いし。
「だから、空気よ！　苦しいんでしょ？　まあこんなのマウス・トゥ・マウス、救助だと思ってやってあげない事も無いって言ってるの！」
「いや、お前……でも、顔赤……」
それ以上先は言葉が続かなかった。何故なら、セラは少しずつ顔を近づけて来てたからだ。どんどんどんどん、セラの青い瞳が迫る。吐息が掛かる距離までも近づくと、その瞳も閉じられて、意外と

マツゲが長い事に気づいた。

（って違うだろ！　いいの？　これってどうなんだ？　なんでセラがそこまで？　ああ、生きる為か……そうだよな、こんな場所に初心者と取り残されるのはイヤだから……あああああ）

頭の中がおかしく成りそうだ。だって今までこんな完全に意識してるキスなんてしたことない。セツリの時は事故だったし、日鞠の時は不意をつかれた感じだったもん。

でもこれはどうだ？　瞳を優しく閉じた女の子の顔が目の前に……っていうか、視界いっぱいに広がってる。僅かに開いた口から漏れる空気は、この場所のそれとは比べ物に成らない程に香しい。

僅かにセラの温もりも感じるし、蕾の様な唇は瑞々しく潤ってる。ゴクリ……と大きく喉を鳴らす。これってやっちゃっていいのか？

もう直ぐそこだ、このままじゃあと三秒もすれば……マウス・トゥ・マウスに成っちゃう。

「はっは……」

「はっはっはっはっは……」

「はっはっはっはっはっはっはっはっはっは……かっ」

息が止まった。緊張のあまり小刻みに息を吐きすぎて、残量尽きた。目の前が黒く沈んでいき、世界が斜めに成っていく。そして右肩に衝撃が伝わると、セラの足しか見えなくなった。

「たたた大変だ！！」

そんな彼の声が聞こえて、続いてセラの悲鳴が上がった。その後、僕にはセラの足が振り上げられた様に見えたけど、真実は意識と共

に消え去った。

「死ぬんじゃない！！」
「あがっ！？」

腹に入った衝撃が、僕の鼓動を無理矢理戻す。もうめっちゃ無理矢理だよ。地面を這い回ってゲホゴホ息を吐いて吸いまくる。
こうなったらさ、臭い空気とか関係ねえよ！

「お前な！！」
「勝手に死のうとするから悪いんでしょ？」
「凄い理屈を放り込んできやがった！？」

別に勝手に死のうとしたわけじゃ無いっての。あれはセラが異常な事をするから……おおお、思い出したら顔が赤くなるな。
それにセラの顔もまともに見れないってか……

「もう、いいよ別に。助かりました。ありがとうございます！」
「何勝手にお礼言ってるのよ？」
「頭下げてるのに不満がられた！」

訳が分からないっての。こっちの気恥ずかしい気持ちを察しろよ少しは！　大量の水が落ちる音が辺りに響き、高い所から落ちてるせいか、水が僅かばかり霧上に辺りに舞っている。
火照った頬にそんな霧が当たって、少しは火照りを抑えてくれる。すると流石に、ここでアホらしい争いをしてる場合じゃないと思えるよ。

「ああーもうどうでもいいよ。所でどうするんだこれから？」

「そ、それは僕も知りたいです！」

僕の言葉に、ハラハラと遠巻きに僕達をみてた彼が参加してくる。てか今更だけどさ……

「そう言えば自己紹介まだでしたよね」

「まああの時は、直ぐに分かれましたからね。それにこんな事になるなんて思っても無かったですし……いやー息を吹き返して良かったですよ」

流石大人な応対です。どっかの凶悪暴言メイドにも見習ってほしいよな。するとザッザと歩いてきたセラが、僕の背中を蹴りつける。

「なんか失礼な事を言われた気がした」

「心の声を読むなよてめえ」

そして曖昧な証拠で人の背中を蹴りつけるなっての。本当に僕を傷つける事を躊躇わない奴だ。

「あ、あの……」

「ああ、ごめんなさい。あの時はごめんなさい。私はセラです。こっちの頭悪そうなのはスオウっていうの」

「おい、どこの誰だ？　その頭悪そうな奴ってのは？」

僕はセラを見上げてそう返す。だって何言っちゃってんだよセラの奴。勝手に株を下げる様な自己紹介するなっての。

僕を見下ろすセラは、視線だけでアンタの事よって言ってるよ。

「えっと、僕はスズリです。よろしくお願いします」

ご丁寧にお辞儀をしてくれるスズリさん。彼の丁寧なその態度に、僕達は改めて頭を下げる。

「どうも、よろしくです」

「ご丁寧に」

なんだか変な雰囲気だな。こんな場所で改まって自己紹介がなんとなくおかしい。

「スオウ君にセラさんですね。やっぱり薄々そうじゃないかと思ってたんです！」

「どう言うことっすか？」

スズリさんは変に興奮してる様に見える。それに薄々そうじゃないかって……そんなに僕ら有名なのって感じなんだけど。

「お二人とも有名じゃないですか！　セラさんは大国アルテミナスのお庭番と聞いてますし、スオウ君は今現在話題沸騰中のクエスト挑戦者！

最近のアルテミナス異変にも関わっていたとか！」

アルテミナス異変ってあの戦いの事だよな？　てかこの人、興奮し過ぎじゃね？　やっぱ有名だったのって感じだ。お庭番なんだなセラって。コイツも変な二つ名持ってるよなぁ。

お庭番って忍者じゃね？　まあ忍者みたいな奴だけど……セラは一応メイドだぜ。

「冥土に送るメイドとして有名だよ」

「ああ、なるほどね」

それなら納得。セラの奴にはそっちの方が似合ってる。メイドのフリしてる悪魔だからな。かしづくよりも、想像つくよ。

「そんな事どうでもいいわよ。それよりも、これからどうするかって事じゃなかった？」

「まあ、自己紹介も終わったしな。てか、そうだよ。トラップモンスターとか何とか言ってたよなお前？」

何となく前に言ってた事を思い出した。色々と、聞きたい事が沢山ある。

「暗黒大陸は地続きだけど封印の地でしょ？　だからここに入るには特殊な方法しか無い訳よ。その一つがトラップモンスター。

まあトラップモンスターは邪道だけどね」

邪道？　そういえば案内人がどうとか言ってたな。普通ならそれで行くのが王道って訳か。だけどさ。

「トラップモンスターってそんなどこにでも居る訳なのか？　こんな所に強制的に送るモンスターがそこら中に居るなんて考えたく無いんだけど」

そんな訳ないと思うんだけどな。だってあんな雑魚、少し小慣れて来たプレイヤーだったら倒せてしまう。そうなると誰でも罠に掛かるぞ。

「勿論、どこにでもわいないわ。それに出現率も低いしね。そうそう出くわす事なんか無いわよ」

「じゃあ、何で僕達はこんな事に成ってんだよ？　運が悪いのか運が？」

それなら泣きそうなんだけど……どれだけこんな事が起こりうるんだって事でさ。だけどそんな僕に、セラはまだわからないのって感じで口を開く。

「まあアンタの運は大抵悪いけど……原因はあるわ」

「原因？」

僕がそう訪ねると同時に、近くのスズリさんがこう言った。

「それってまさか、アルテミナス事変ですか？」

「あの戦いの影響って事か？」

「まあそうね。そんな所」

そういうとセラは、指を一本立てて説明をしてくれる。

「アンタが居たあの町、人がごった返してたじゃない。あれもそうなのよ。思い出してみなさい。あの戦いの時、何が起こった？

アンタも体験したはずの筈のことで、後にまで影響されそうな事」

影響ね……あの戦いは大概影響でそうだったけどな。だって国の首都まるごど吹き飛ばされてたし……後に影響でない訳がないだろう。

僕が間抜けな顔で考察してると、セラはため息混じりにこう言った。

「モンスターよモンスター！　あの時大量のオークが召還されたでしょ？　そしてそれに伴って、ここら一体のモンスターはどうなってた？

止まってたのよ、その出現がね！」

「ああ……確かにそうだったかも」

あの町からタゼホへ向かう途中、そういえばモンスターに一度も会わなかったんだ。その影響だって言いたいのか？

「あの大量のオークがあそこに居れたのは、多分元のモンスターの存在を奪ってたからよ。でも戦いが終わって、それがあるべき様に戻された。

でも今、奪ってた分まで一気にモンスターが出現してるの。だからこそ、レアな奴も出現しやすく成ってて、それを狙って沢山のプレイヤーが集まってるの」

「つまりそのトラップモンスターも出やすく成ってたって事か」

そのせいでスズリさんが追われて、僕たちが倒して、こうなったと。なら元を正せば、シクラのせいじゃねーか！

あの野郎、どこまでも人をおちょくるのが好きらしい。この状況とか、どっかで見てて笑ってんじゃねーか？　すると「あの～」と小さく手を挙げるスズリさん。

「これまでの事はわかりました。僕たちがこうなったのはあの戦いが原因だって。でも……そんな事よりこれからですよ！

あんな化け物級のモンスターがいるこんな場所、一刻も早く出ないと危ないですよ！」

そう叫んだスズリさん。まあそれは僕も賛成なんだけどさ。ここに来たとき、最初にセラは言った。

「ここからの出方はわからない」って。

「これからね……どうすれば良いんだろう？」

「さあね。それがわかれば苦労しないわよ」

「ちょっと二人とも！　もう少し真剣にですね！」

僕達が余りにも軽く言うから、スズリさんは怒ってた。でも別に、軽く言った訳じゃない。どうするか頭で候補を考えてたんだ。

「って待てよ。やられれば良かったんじゃないか？　僕はともかくさ、スズリさんやセラはそれでゲートクリスタルへ戻される筈じゃん！」

僕はなんて事に気づいてしまったんだ。これはＬＲＯの絶対的な法則だ。これは妙案。

「そ、そっか、そうですよね……やられれば……」

そういうスズリさんは足が震えてた。この人をこれ以上巻き込まない為には、一度の死を覚悟して貰わないといけない。

僕はそれが出来ないけどさ……二人が助かるなら、まあいいんじゃないかな。自分の事は自分どうにかするさ。

そんな決意を胸に秘めてると、そこでセラが口を開く。僕のそんな提案を打ち崩す言葉をだ。

「それは無理……死んでもここからは出れないの」

原因究明（後書き）

第百八十五話です。
すみません皆さん。パソコンがぶっ壊れた（筈）で、スマートフォンでもやりようなくてここまで遅くなってしまいしました。けれど、パソコンがなんとか復活してくれた様なので上げれました。良かった良かった（汗）
でも依然動作怪しいし、一回どうにも出来なくなったから安心は出来ません。もしもの時の為に、スマートフォンからでもポメラで書いた文章を楽に上げれる方法、募集してます！
ご存じでしたらお教えください。
てな訳で次回は一応月曜日に上げる予定です。ではでは～。

検索開始（前書き）

僕達はここ『暗黒大陸』からの脱出方法を考える。そこで出てきたのは空に現れるという『穴』だ。だけどその情報は不確か。セラに確認しに行ってる間、僕とスズリさんは、黒滝の響く場所で言葉を交わす。

それが意外な彼の一面を垣間見せる事だった。

検索開始

僕の覚悟を打ち砕く言葉……そしてそれは、スズリさんにはきつい言葉だった筈だ。空は黒く、空気が淀んでるこの場所で、実は結構信じれない事をセラは言ったんだ。

「死んでも戻れないって……なんだよそれ？　普通はゲートクリスタルに戻る筈だろ？」

「だからここは普通じゃないわ」

しれっと言い放つセラ。淀んだ空気が淀んだ風に流されて、周りの木々の葉をざわめかせた。それと同時に、どこからか変な声も聞こえて来て、不気味さが一層増す。

てか、ここは分厚い雲で覆われてるから、時間の経ち具合がわからない。なんだかもう結構経つような気もするけど……どうだろうか。

「そんな……それって……」

狼狽えるスズリさんはジリジリと後ずさってた。そして震える声でこう言う。

「それじゃあ、僕の様な初心者はどうすれば？　いえ、お二人でも倒せない敵がいたじゃないですか！　それじゃあ僕達……どうすれば？」

「「……」」

黙り込む僕とセラ。確かにどうすればいいのかわからない。普通

の手段じゃ入れない場所……そして普通の手段じゃ出れない場所……

「なあセラ。でも、出てきた人は居るんだろ？　未開の地だからって、何もこの一年誰も入らなかった訳ないし。少なくともお前のその発言は、どこかから得た情報だろ」

「まあそうだけど……確かにチャレンジャーは居るわよ。それこそ第一線の攻略組なんてのはそうでしょうね。だけどあいつ等、情報なかなか落とさないのよ。

だからこれは探索ギルド、まあ地図ギルドの情報ね」

なるほどね。地図ギルドはＬＲＯの世界全てを把握する事を目指してるとか聞いたことある。そんな人たちなら、確かにここを無視するわけないよな。

「んで、その人達はどうやってここから出たんだよ」

僕のそんな質問に、セラはちょっと難しい顔して頭をひねる。

「う～ん、なんて書いてあったかな？　確かこの情報って、その地図ギルドの人のブログで読んだんだけど……」

ブログね。てっきりそういう情報が頻繁に交換されてる場で得た情報かと思ってたよ。

「まあ大抵は情報サイトでやりとりするわよ。でも見逃せない情報ってのはどこにあるかわからないでしょ？　なんせＬＲＯは三百万のプレイヤーが居て、日夜増え続けてるのよ。

そこには一人一人、全く違う物語があるんだから」

「物語ね。セラにしてはロマンチックな言い方じゃん」

まあそれは最近感じたよ。僕がセツリと出会った様に、きっと他の誰かも何かに出会ってるんだと思う。僕がたまたまセツリだっただけで、他の人は別のかけがえの無い出会いをしてるんだ。
アギトが一年前にアイリに出会った様に、物語はそれぞれに紡がれてる。だからこそ、セラはそんな物語を知る事で、自分にとって有益な何かを取り出そうとしてるのだろう。

「他になんて言えるのよ」

なんだか拗ねたように顔を逸らすセラ。まあ確かに物語りか。

「で、そのブログにはなんて書いてあったんだよ」
「は、早く教えてください！」

スズリさんが震えを我慢して声をあらげる。必死だな。まあ僕らも必死な筈なんだけど、彼が異様に狼狽えてるから、僕らはそれなりに冷静で居られるのかも。

というか、そろそろ慣れて来たよ。ＬＲＯは既に僕の中では何が起こってもおかしくない世界だからね。一体今の彼と同じ位で、どんな経験をしてきたよ。
それを考えれば、たかが暗黒大陸だね。一応ゲーム性に沿ってる場所の訳だし、脱出方法は必ずある。

「う～ん、そうね。確か穴だって……」
「「穴？」」

僕とスズリさんの言葉が重なった。てか言葉が端的過ぎるんだよ。穴って何だ穴って？　言葉が足りない。僕達二人の頭にはハテナが浮かぶ。でも何故かセラの頭にもそれが見える様な……

「ああ穴って書いてあったのよ。確か空に穴がぽっかり空いて、そこに吸い込まれて出れたとかなんとか」
「はあ？　それってマジなの？」
空に穴って……けどセラは自分の記憶を信じてこう言った。
「マジよマジ。確かにそう書いてあったわ！」
すると今度はスズリさんがその言葉をもっと突っ込ませる。
「じゃあ、その元々の信憑性はどうなんですか？　信じれる人の話なんでしょうか？」
なるほど、確かにそれは重要だ。嘘かいてる奴だっているかもしれないし、僕と同じ程度の経験の奴では信じれないよな。
出来るなら、一年位の実績を希望するね。だけどそこには自信があったようだ。セラは直ぐに返してきた。
「それは大丈夫よ。だってこのブログの人は、有名な地図ギルドの団長だもん。だから信憑性って所は信頼できるわ」
「な、なるほど、確かにそれなら……でも空に穴って？」
僕達は一斉に暗く蓋をしたようなセラを見上げた。まあ地図ギルドのしかも有名なギルドの団長ともあろう人の言葉なら、確かに信憑性は十分なんだけど……空に穴って……
まあ最近デッカい扉から落とされた僕としては、別段信じない訳じゃないよ。何があったっておかしくない、それがＬＲＯだし。
でも問題は――

「その穴は、自分達で発生させる物なのかどうかだよ。自然現象なら、ポイントを絞ってそれの発生を待てばいいんだろうけど、自分達でアイテムか何らかの条件発生させると成ると……かなり難しいよな」

だってここは暗黒大陸……しかもヒーラーもいないし、スズリさんは初心者だ。難易度が高すぎる。

「それは流石にどうかわからないわね……そうだ！　画像取ってた筈だから、ちょっと探して見る」

そう言って、セラは待機モードに入った。片膝を地面に付いて、体を自然体で丸めた感じ。これはヒーリング状態とも言うけどね。

これをやると、ゆっくりだけどＨＰを回復出来るんだ。だけどこれやってると完全無防備状態だからね。ただの回復用途なら問題ないけど、待機状態となるとセラは多分違うことをやってる筈だ。

なら攻撃されたってあいつは気づかない。僕達が守ってやらないといけない。まあだからこそ、フィールドでこうなる時は、一人の時はやれないよ。

これもまた助け合いだ。長時間やるときなんかは、入れ替わり立ち替わりやっていくって聞いたことがある。でもここでやるとはね。

言っとくけど、またあのゴリラクラスの敵が来たら、守りきれるかわからないからな。まあでも、ここから進むためには、その画像は必要かも知れない。今の僕達は指針が欲しいんだ。

どうして良いかわからないから、進むための道しるべが欲しい。

「僕達……無事に帰れるでしょうか？」

不安そうにそう呟いたスズリさん。彼には実際悪いことをしたと思うよ。こんな事になるならさ、あの時やっぱり見捨ててたのが正しい選択だったのかもとか思ってしまう。

だってそうだろ？　ここは彼には早すぎる。実際僕だって普通に考えたら早いよ。でも僕には今までの経験があるから、そんなに怖がらないけどさ、彼はここには来て怖がってばっかりだ。

このままじゃＬＲＯを嫌いに成るかも知れない。まあ僕の現状は別にして、スッゴいと思うんだよねここ。だから彼の出鼻を挫いてしまった事が悔やまれる。

最初は光一杯であるべきだったのに、こんな光が届かない場所なんかに連れてきてしまった。少なくとも、僕が余計な親切心を発揮させたせいだよこれは。

セラが言うとおりに見捨てたら……たら……でも、それはやっぱり今考えても無理だったと思う。僕達が見捨ててたら、スズリさんは確実にやられてただろう。でもこんな所に来ることは無かった。

だけどあのまま僕達が見捨ててやられてたら、きっとイヤな印象しか残らなかっただろう。ここから出れなくてもそうなるかも知れないけどさ、少なくともまだ、結論を出しては居ないはずだ。

あそこで見捨てて、それっきりだったなら、挽回のチャンスないわけだしね。ＬＲＯがイヤに成るより、まだ僕達には初々しい初心者にこの世界の楽しさとかを伝えることが出来るはず。

冒険なんだ……この体験もそう思える様に成ればいい。すればいい。それなら問題なしだろ。誰も何も後悔しなくて済む。だから僕は無駄に胸を張って言ってやろう。

これ以上スズリさんを不安にさせない為にもさ。

「大丈夫ですよ。きっと、いや絶対に帰れます」

根拠なんて何もない。けれどそう出来ると思ってないと行けないだろ。ここはたださえどんよりしてるんだ。それに気持ちまで引っ張られたら、出来る事も出来なくなるよ。

「本当ですか？」

でもスズリさんは僕の答えをどうも信じれない様子。それはこの不安気な声でわかる。まあ早々この状況で楽観的になんて成れないか。

彼は一番自分に自信がないんだもんな。初心者で、モンスターなんか倒したこともないレベルだろう。それがいきなりこんな最上級の場所へ飛ばされちゃかなわないよな。

だけど今の僕には根拠のない自信を見せる位しか出来ない。それもゴリラ倒せなかった僕じゃあんまり説得力も出ないんだろうけど、言い続けてやるよ。

僕はまだ玄人なんていえないけどさ、スズリさんよりは先輩なわけだし、自信をもっとかないと。

「本当本当。どうにか成るよ。今までだってそうだったし、セラが戻ってきたら何か掴めるよ」

「そうだと良いんですが……」

まだまだ不安そうなスズリさん。まあただテンション上げれる訳もないよな。絶望に打ちひしがれないだけ、僕は役目を果たしてると思っておこう。

つい数十分前まではもの凄く目を輝かせたのに、今はここの空の様にどんよりしてる。思い様によってはこれってかなり貴重な体験

なんだろうけどな。

でもそれを感じるには、ここから出る必要が有るのかも。彼にはここを貴重な場と思える余裕が有るわけもないからな。

上方から落ちる滝の音がうるさく響く。なんだか気まずい沈黙が流れてしまう。何か話した方がいいんだよな。周囲の警戒も怠らない範囲で気を使わないと。

先輩ってのも楽じゃないな。今までは、目指すべき目的の為に、自分よりも経験がない人なんて考えられなかったから分からなかったけど、いつもアギトとかはこんな苦労をしてたのだろうか？

まあ僕とアイツは知らない仲じゃないし、こんな気まずい空気になることも無かったわけだけどさ……まあでも、ヒヤヒヤするって所は一緒かも知れない。

スズリさんがゴリラの前に立ったときは、関心もしたけど、本当にヒヤヒヤしたもん。それを思うと、アギトの奴には悪い事をやってたんだなって……まあ僕の場合はしょうがなかったんだ。

だってセツリの事は放っておけなかったしな。

（それにしても……）

ここの滝って、見ててもなんだか心洗われないな。気持ちも良くならないし……まあ原因は分かってるよ。それはここの水が黒いからだ。

普通の滝なら、ＬＲＯでもマイナスイオンとか感じるよ。でもこの黒い滝にはそういう浄化要素が全くない。寧ろ臭気を放ってるよ。

「うう……」

鼻を思わず押さえる僕。息は整ったけど、流石に馴れはしないなこの臭い。

「あの……」

「うん？」

その時、予想外な事にスズリさんの方から話しかけてきた。まあ話し掛けてくれるならありがたいよ。こっちは話題がなくて困ってたんだ。

「お二人はこういう事には慣れてるんでしょうか？　失礼かも知れないですけど、あんまり深刻そうじゃないというか……」

「あぁ」

どうやら僕の頑張りはふざけてるようにしか写って無かったようだ。まあそこまでは言ってくれてないけどさ、ようはもう少し真剣にって事だろう。

これでも真剣なんだけど……色々と気苦労してるんだよ。やっぱりスズリさんは思ってたよりも思い詰めてたって事だろうか。

「別にふざけてる訳じゃないですよ。この状況が不味いって事は深刻に受け止めてます。まあそう見えるのは、言うなれば経験の差ですよ」

ちょっと得意気にいってみた。

「経験ですか……そうですね、僕は取り乱し過ぎなのかも知れません」

スズリさんは伏せたような瞳で、近くの岩に腰を下ろす。そしてそこで一つ大きく息を吐き、続けてこういう。

「でも……聞いたんです。今ＬＲＯはおかしく成りつつあるって。そのせいで、ここでの死は本当の……リアルの死に繋がる……そんな風に……」

「なっ！　それって……」

僕は思わず一歩彼の方へ詰め寄ってしまった。でもそこで踏みとどまる。だってそれは噂……それ以上を出ちゃいけないことだ。

サービスを停止されない為に、噂で無くちゃいけない。それに事実、スズリさんも聞いたってしか言ってないし。一応安心だけど、彼には僕の反応が引っかかった様だ。

「どうしたんですか？　まさか……本当に？」

「ははは、そんな訳無いですよ。ゲームでの死がリアルに繋がるなんて、そんなのおとぎ話でしょう。有るわけないない」

僕はいかにもバカバカしいように受け流す。あからさまに不自然だったかも知れないけど、そこは大目に見てほしい。

でもここで、スズリさんは鋭い意見を飛ばしてきた。

「けれど、この噂の中心は君ですよね？　それに最近のアルテミナス事変の時に、犠牲者が出たって事も聞きました。本当何ですか！？

スオウ君なら知ってるんじゃないんですか？　居たんですよねそこに！？」

「う……それは……」

なんだか結構調べてる？　いや、僕の事を具体的に知らなくても、そんな噂は結構前から流れてた筈か。アルテミナスの事も、かなり

話題に成ったはずだし、初心者の彼が知っていてもおかしくないか。
でも、そんな噂は大概が噂で済ませてると思ってたけど……多分普通に今までやってきた人たち、あの場に居なかった人達はそうなんだろう。

だけど、彼は違う。ようやく始めたＬＲＯでまことしやかだけど、誰もが口にしてる噂を耳にすれば、そんな事も有るかも知れないと、足りない知識のせいで思ってしまうかも。
現に彼はそうなってるし……まだ何もわかないから、先にここに居る人達の言葉を鵜呑みにするのも当然と言えば当然なのかも……

そういえば彼がまだ一度もモンスターを倒してなさそうなのって、もしかしてその噂のせいも有るのかも。その噂が出る前の人達よりも、スズリさんの様に最近始めた人達は、その噂のせいでいらない不安を持つことに成ってるんだ。
まあ、いらない不安かは……実際よくわからないんだけど。ガイエンは事実、ああ成ってる訳だし。でもそれを認める事は出来ない。それが僕達が決めた約束ごとだ。

「どうなんですか！？　本当に安心していいんですか！？　噂の様な事実は無かったんですよね！？」
「ああ、無かったよ……」

なんだか異様な雰囲気を纏いだしたような？　スズリさんの勢いがこれまでとは違うぞ。確かにそれが事実だったら彼にとっても大変だろうし、わからなくも無いけどマジでこの勢いは怖いぞ。
彼は下ろしてた腰を上げてズンズンとこちらに向かってくる。無かった言ったのに……
「本当に本当にですか？」

超至近距離で見開いた目で迫られる。何だこれ？　いや、誰だこいつ？　本当にスズリさんか？　なんか食いつき過ぎじゃないか？　この目……何でこんなに血走ってるんだよ。噂だと思ってない？　思おうとしてもない？　そんな訳ないだろ。非常識な事を、誰が早々信じるよ。

いくら初心者だからって……そんな事もあるのかな～位だろ。でも、この人は何かが……僕は冷や汗垂らしながら頷く。するとスズリさんは、顔を伏せる様に下へ向けて僕から数歩離れてくれた。

ひとまず安心だ。そう思って胸を撫で下ろす僕に、彼はまたとんでも無いことを言い放つ。

「なら、証明してください。貴方ならそれが出来ますよね？　だってこの噂は、貴方から始まった筈なんですから」

何言ってるんだ？　そう思ったよ。証明って一体……するとスズリさんは自身の剣を抜き去る。何の変哲もないただの剣。初期装備のそれだ。

「どういう事ですか？　それ……どうしようって言うんですか？　危ないですよ。まだ慣れて無いでしょう」

「大丈夫ですよ。ただその胸を突き刺す位は出来ます」

「は？」

なんて言ったよこの人？　なんだか突き刺すとか聞こえた気がするんだけど？

「気のせいじゃありません。だって確かめるには殺さなきゃ――でしょ？」

そう呟いた彼は、切っ先をこちらに向けた剣で突っ込んでくる。そのあまりの豹変ぶりに、僕は上手く対応出来ない。きっと弾く事は簡単だった筈だ……でもそれさえも出来なかった。

何が起こってるのか……理解できない内に彼は突っ込んでくる。そして――

「何やってるのよ！！」

目の前で弾かれた切っ先が宙へと舞い上がる。そして彼が座ってた岩へと当たって地面に落ちた。驚異って訳でもないけど、訳のわからない状況は防がれた。僕は思わず、その場に腰が落ちてしまう。

「セラ……」

僕の情けない声に、セラが睨んだ様な顔を向けて来る。そしてスズリさんには更に凶悪な視線を向ける。明らかに敵意って奴を醸し出すものだ。

「どういうつもりかしら？　こいつは私の獲物なんだから勝手な真似しないでくれる。そういうスキンシップは私しか許されてないのよ」

おい……誰もそんな事許した覚えねーよ。何堂々と宣言してんだ。

「ははは、誰も貴女の立場を取ろうとは思ってませんよ。僕はただ、確かめたかっただけです。本当に彼が死ぬのか」

スズリさんもズバリと言いやがった。セラは僕ほど優しくねーぞ。一発位で済めば良い方……まあ僕の為にどこまでやるかは知らな――

「ふ～ん、じゃあ確かめてみなさい。ただし自分の体でね」
「ぐふっ！？」

いきなりセラがスズリさんへ掴みかかって地面に押したおす。思ってたよりもかなり荒々しいよこいつ。そして手の中で回す棒状の針をどうする気だ。

「ふん！」
「うおおおおおおおお！！」

普通に刺したあああああ！！　しかも抜いては刺し、抜いては刺ししてる。どれだけ残酷なんだあいつ。

「あああああ……あれ？」

不意にスズリさんの悲鳴が疑問へ変わる。そしてセラは馬乗りに成ったまま笑ってる。

「気付いた？　パーティーの仲間内じゃ幾らさしても殺せないわよ。だから無駄なの……そんな事やる前にこれ見なさい」

セラはウインドウを開き僕達に見つけてきた物を見せてくれる。それは黒い空に、更に黒い穴があいてる画像と、暗黒大陸へと同じように落とされた人達数人分の日記？　ブログって奴か？　それを日付と時間と文章だけを表示した簡易版？
それを見る限りは、確かにセラが言うとおりのらしいとわかる。

「確かに穴だな……」
「でしょ、私の言うことはいつでも正しいわ」

流石にそれはどうだろうかと思わざる得ないけど、確かにこの画像と文章を読む限り、これが脱出の鍵らしい事は認めざる得ない。
そうやってセラが持ってきた物に目を通してると、汚い地面に倒されたままのスズリさんが、空を見上げて思いがけない事を言う。

「あの〜、その画像の穴ってあれに似てないですか？」
「「はあ？」」

僕達は訝しげに空を見る。すると確かに、この画像と同じ現象が今まさに起きていた。黒い空にぽっかりと開いた黒い穴……それがまさに顔を出してるじゃないか。

「行くわよ！！」
「あの……僕は……」

セラとは対照的な声を出すスズリさん。それの意味を直ぐに察して、僕は走りながらこういう。

「何やってるんですか？　置いていきますよ」
「……は、はい！」

スズリさんもようやく走り出す。色々な事は置いといて、今はまずあの穴を目指そう。

検索開始（後書き）

第百八十六話です。
今日も遅くなりました。ごめんなさい。宣言の月曜日まであと一時間も無いよ。何と今回はポメラの中のデータが飛んでて、半分以上書きなおしてます。しかもやっぱりパソコン調子悪いし……これあげるだけで軽く四時間位、パソコンの前にいますよ。
どうにかしたい……でも出来る限り頑張ります。
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

吸穴衝動（前書き）

僕達は空に現れた穴を目指して走り出す。川に住むカメを渡り、モンスターをかいくぐり、僕達はそこへと辿り着く。そしてそこに有ったのは……

吸穴衝動

黒い川沿いに走る僕ら。だけどどこかで向こう側にいかなくちゃいけない。あの空にぽっかりと開いた渦巻く穴は、いつなくなるとも限らない。

でもこの川……いや川としては当たり前だろうけど、下るに従って川幅が広がって来てる。橋でも無い限り向こう側にわたるのは難しいかも知れない。

けれど、こんな文明の欠片も無い場所で橋って……期待出来ないな。でもその時、先頭を行くセラが何かを発見したのか、声を出した。

「あれ！　使えるわ。渡るわよ！」

「あれってあの岩か？」

セラが指さした場所には、川に突き刺さるかの様に岩が点在してた。それも微妙な距離感覚でだ。確かに渡れそうも無くないけど……落ちたら一巻の終わりだな。

ここの流れかなり急だし、ちゃんとした泳ぎのスキルを持ってない僕やスズリさんは落ちたら上がって来れないだろう。

「あの～大丈夫ですしょうか？」

不安そうにそう言うスズリさん。その気持ちはよくわかるよ。でも、そんな言葉をセラは一蹴する。

「大丈夫かどうかなんて二の次よ！　やるかやらないか。帰りたいか、帰りたくないかよ！　どっちのなの！？」

みるみる内に近づいてくる岩。迷ってる暇さえもなさそうだ。
「まあしょうがないよな」
「ええ！？」
僕の言葉にスズリさんは驚いた。多分彼は、あの岩を渡る自信がないんだろう。確かに結構遠い箇所もあるけど、確かにこれはさ、セラが言うとおりやるかやらないかなんだ。
だから僕はスズリさんに言ってやるよ。
「やるしかないですよ。次がある保証なんて無いし、大丈夫こっちの体はリアルよりも身軽ですよきっと」
「ほ、本当だね？」
そう言いながら後を付けて来る彼共々、大きく左側に旋回して、川を真っ直ぐに見つめてダッシュ。セラが先に軽々と最初の岩へと飛び移った所で、僕達もすぐさま後に続く。
「まあ多分ですけど！！」
そう言って飛び出す僕。
「えええええええええええええ！？」
とか叫びながらも既に飛んだせいで何も出来ないスズリさん。僕は華麗に岩へと着地し、横ではスズリさんがゴロゴロと転がって……
「何やってんの！？」
「ぐふっ……」

僕はとっさに手を伸ばして彼の襟元を掴んだ。首が締まったようだけど、落ちなかったんだから良しとしてほしい。

「ちょっと、モタモタしてないでさっさと来なさいよ」

そういうセラは、自分だけとっとと先へ行ってる。まあアイツは迷いが無いことが凄いよ。僕でもそれなりに怖いけどねこれ。

少し下は急流の黒い川……まるで黄泉へと誘ってる様じゃないか。ゾクっとするよ。

「大丈夫ですかスズリさん？」

「ああ、ありがとう」

なんとか立ち上がって彼は前を見据える。さっきよりも難しいか？　助走もつけらんないから、遠くに感じるのかも。

でもセラは行ったし、いけるだろう。僕は先に飛び出た。そして振り返りスズリさんに向かって言う。

「楽勝楽勝、このくらいの距離、屁でもないですよ」

「う……うおおおおおおおおおおおおおお！！」

スズリさんは躊躇を振り払うかの様に、叫びながら飛んで来た。叫ばずには居られないかも知れないな。でもそれで飛べるのなら、うるさくてもいいよ。

「ん？　あっ」

短い言葉が漏れる。だって彼は止まらずに次の岩へと飛び移ろうとしてる。上げたテンションで一気に駆け抜ける気らしい。

まあそっちの方が、面倒じゃなくて良いけどね。僕もその後に続いて走り出そう――とした時、一瞬岩が動いたような？

「んん？」

もしかしたらこの流れで、岩が流されそうに成ってるとか？　とにかく急いだ方がいいようだ。タンタンと岩を飛んで後一歩で向こう岸。

その時、先に岸までたどり着いてたセラが、後ろを指さしてなにやら叫んできた。

「ちょっと！　急いだ方が良いわよ！　後ろに来てるから！」

何言ってんだアイツ？　後ろに何が……僕達はそう思って後ろを振り返る。するとそこには、黒い川の底から岩を背負った巨大な亀が、こちらに首を伸ばして来てた。

「グロ！！」

「うあああっあああああ！！」

僕達は急いで走り出した。だけどその時、僕達が居る岩も動き出した。グラグラグラグラ、足下が揺れる。この岩自体がモンスターだったのか。

「わっわ……」

テンパってるスズリさんは今にも腰を下ろしてしまいそうなへっぴり腰。このままじゃ振り落とされるか、亀の餌食に成ってしまう。

「くっそ！」

僕は強引にスズリさんの腕を取って走り出す。そのまま岩の端まで連れていき、勢いそのままにセラの方へぶん投げた。

「うわうわわあああああ！！」

ズシャ――と地面に削られるスズリさん。なんでセラの奴、受け止めないんだよ。僕はそれを期待してたからおもいっきり投げたんだ。

まあでも、ちゃんと向こう岸にいけたから良いか。問題は僕だな。

「よっと！」

この亀はどうやらかなり長く首を伸ばせる様だ。後ろから迫った攻撃を狭い岩場の中でかわしていく。でもこれまで渡った岩場の数だけ居る首は結構厄介。

実際、亀かろくろ首かわかったもんじゃない。僕は剣を抜き去り応戦を始めた。でも、こいつらにかまってる暇は……

「って、なんか岸が遠くなってる！」

「スオウ！　何やってるのよアンタ。このままじゃこっち来れなく成るわよ！」

セラが向こう岸から叫ぶ。けど、そんな事自分が一番分かってる。でも……狭い岩場で縦横無尽に迫り来る首を交わし続けるだけで結構精一杯なんだよ。

セラ・シルフィングでは傷つけられるけど、反撃にまで回れないのが現状だ。だけどこのまま、川の中央部分まで戻されたら、それこそ不味い。

意識が戦闘になかなか集中出来なくて、チラチラと岸の方へ目が行ってしまう。そのせいでどっちつかずの行動が、僕自身を追いつめる。

「っつ……」

ガラっと欠けた岩が黒い川へと落ちていく。追いつめられた。岩の端っこにいつの間にか追いやられてる。これじゃあ、避ける事もまま成らない。

てか落ちそうだ。でも僕を囲んでる数本の亀の頭は追いこんだまま動かない？　いや違う。よく見たらその亀の口から何か漏れてる……赤く、メラメラしたものが。

「おいおい、マジかよ……」

本当にイヤな予感がする。っていうか見えてるから既に予感じゃないんだろう。ようはこれからイヤな事が起こるんだってマジで分かる。てかこいつら亀だよな？

そんな事を思った瞬間、ガバッと開いた口から、赤々とした炎が吐かれる。逃げ場なんてどこにもない。

「くっそおおお！」

僕はもう、一か八か岩から飛び出した。炎はこれで避けれたけど、全然岸には届かない。このまま川に落ちたら、それできっとジ・エンドだ。

だけどその時、川からもう一体の亀が首を伸ばしてきた。それは多分、僕が飛び出した岩の亀だろう。待ってましたと言わんばかりに首が伸びてくる。

でもこれは使える……そう思ったよ。

「うおらあ！！」

僕は亀の開いた口に剣をぶっさした。その瞬間、亀は凄く暴れ出す。死にはしなかった分だけ、亀に痛みが襲ったんだろう。

僕は必死に剣にしがみつき、タイミングを見定める。運良く亀は、その首を長く長く上へと延ばし出す。これだと思ったね。

僕は亀の首が伸びきると、剣を抜き去って地面へ向かって飛び出した。他の亀の首が炎を吐いてるけど、無視して着地のタイミングを計る。思ったよりも高い……けどこの程度！

ダン！！　っと言う激しい音と共に、僕は地面を転がった。

「いててて……」

「スオウ！」

「大丈夫ですか？」

地面に倒れ伏した僕の元へ、セラとスズリさんが駆け寄ってくる。何とか無事に向こう岸に来れたって感じだな。するとセラ達の後ろに亀の頭が一つ見えた。そいつは今まさに、炎を吐こうとしてるじゃないか！

二人は気づいてない。僕は痛くなった体を強引に上げて、二人の手を同時に取って走り出した。

「え？　ちょ……何よ一体？」

「良いから走れ！」

僕は有無を言わさず二人を引っ張って再び森の中へ。後ろでは亀の激しい炎が、僕達がいた場所で息巻いてただろう。

枝や葉を押し退けて、僕達は不気味な森を走ってる。目指すべき場所は、空に開いた穴の真下。だから空を見ながら僕達は目的の場所を目指してる。
けど流石に、森の中じゃ木が邪魔して見にくいな。それに周囲の警戒を怠る訳にもいかない。なるべくモンスターに出会わない様にしないと。

「間に合うでしょうか？」

スズリさんが不安そうにそんな事を呟く。実際それは考えないようにしてた事なんだけど……間に合わない事を考えるよりも、間に合わせる事だけを考える。そう思っとかないとダメだろ。

「間に合わせる為に走ってるんですよ」

一刻も早いここからの脱出。それは僕らの共通認識なんだからね。でもそこで先頭を行くセラが、手を出してストップの合図。

「どうした？」
「シッ……前にいるわ。強そうなのがウヨウヨと」

モンスターか……ここまで来て足止めだなんて最悪だ。

「迂回していけないのか？　なんだかあの穴、小さくなって行ってる気がするぞ」

空の穴は明らかに萎んでる。このままじゃもうすぐ消えちゃいそうだ。もう、そんなに遠くないのに、このままそれを指をくわえて見てるだけなんて出来ないよ。

「迂回ね……でも、あんまり遠くへ回ってる場合でも無いじゃない。ここは一気に駆け抜けるわよ」
「そそそんな事出来るわけ無いですよ！　見つかったらどうするんですか？」

セラの言葉に、スズリさんが勢い込んで反論した。僕達はその口を急いで押さえつける。危ない危ない。ＬＲＯのモンスターは視覚や聴覚、嗅覚まで使ってプレイヤーを見つけたりするんだぞ。
こんな最上級のモンスターのたまり場で、見たこともない奴等なら、どれを使ってくるか分からない。だから何事も慎重にだ。
まあ、スズリさんの意見は最もだけどね。するとセラは落ちてた石を数個手に納める。

「他に注意を逸らした隙に一気に行くわ。原始的だけど、結構効果あるんだから」

得意気にそう語るセラに、「本当かよ」と言いたかった。だって小石を遠くへ投げて、その音に気付いたモンスターの共の背後を通る作戦だろこれって……マジで原始的過ぎなんだけど。
不安でならない……けど、有無を言わさずにセラは行動を開始する。

「まあ、見てなさいよ」

腕を素早く振って、手の中の小石を飛ばしたセラ。小石は葉っぱを擦ったりしながら、まあそれなりの音を出してくれた。そしてその音に確かにモンスター共は反応した様だ。
でもさ、それで彷徨いてる奴らが全員行くかってなったら……そうじゃなくね？　それに駆け抜けるとなると、僕達もそれなりの音

が出そうな気がする。

極力静かに走れってことだろうか？　どう考えてもあんまり成功する確率が高くない様な……でも、セラは相変わらず自信満々な笑みを浮かべてる。

こいつにはどうやら、確固たる物があるんだろうな。僕やスズリさんとは違う、ここでの積み重ねとか経験といった物なんだろう。

「「「ギャギャギャギャグワラビィィィィィィ！！！」」」

「な、なんだ！？」

その時、変な叫びがこの森の中に響きわたった。そして一斉に、てか、我先にとセラが投げはなった石の方へ駆け出すモンスター達。

なんで獲物を確認もしてないのに、あれだけ興奮出きるんだ？

てかきっと、さっきの叫びはあいつ等の叫びが混じりあってあんな風に聞こえたんだろうな。

訳が分からなかったもん。僕とスズリさんが呆れ帰ってると、セラが得意気にこう言った。

「どう？　私の言ったとおりでしょ。アンタはこれまで、ボスクラスしか相手にしてこなかったから知らなかったでしょうけど、普通のモンスターのオツムなんてあんな物よ。

餌、獲物の可能性があれば何にだって群がるわ」

「なるほどね……」

哀れな奴ら……そこら辺は作られた程度の存在って事か。そう言えば言われるまであんまり意識してなかったけど、普通のモンスターか……確かに僕ってそんなに相手してないかも。

この前の大量オーク共だって、間接的に操られた様な奴らだったし、普通の人が少しずつ積むはずの経験を、僕は何段か飛ばしてる

よね。

まあ、何ヶ月も掛ける時間が無かったし、事態は次々に進んでいったからな。必死に走ってたら、こうなったんだ。

「まあ、だからこそ、一度見つかったら厄介なんだけどね。どこまでだってあいつ等追いかけて来るわ。ＬＲＯは空間に区切りがないから、最悪街にたどり着くまで追いかける事だってあるわ。

あのしつこさは女子には恐怖そのものよ」

何かを思い出してるのか、手を左右の二の腕の所へ持っていきなにやらブルブルしてる。まあ、女子じゃなくたってあんなのに追いかけられたら怖いと思うけどね。

でもセラに恐怖を抱かせるなんて……こいつって何にでも動じない様な気がするけど、それも経験って事だろうか？

セラは二の腕から手を離し、更にもう二つくらい、小石を飛ばした。今度はもっと遠くへ、更にモンスターがこの場所から離れる様にし向けてる。

「まだ行かないんですか？」

いきがってた割には、かなり慎重をきっするセラに、スズリさんがそう呟いた。確かに考えて見れば、セラの癖にやけに慎重じゃないか。

実は石を目指してるモンスターの背後から、一体ずつやっていってもおかしくないのがセラなのに……確かに堅実な事やってる。

てか、流石に急がないと穴が消えるまでに間に合わないんじゃないんだろうか？

「おいセラ」
「言ったでしょ。しつこいのよあいつ等は。これはタイミングが重要なの。ここであの数をトレインしたら、確実に死ぬわよ。
実感したでしょ。頭の中身は同じでも、それ以外は別格なのよ」
「う……」

セラの言葉は実感こもってる。てか、僕達がその体で実感したことだ。なるほど……慎重に成るのも当然か。あの数をまとめて相手になんか出来ない。
だって僕達はここじゃ逃げてばかり、まともに勝ててない場所のモンスターに気づかれるのは、死を意味する訳だ。

目の前に、目指すべき場所があるからこそ、慌てず冷静にって事なんだろう。セラは更に、もう一つ石を投げる。
もう狙いなんて無く、おもいっきり投げてた。そしてそれにモンスターが反応した瞬間を狙って動いた。

「ここよ！　付いてきて。音はなるべく出さないでよ。でも素早くね！」

そう言った瞬間、セラは忍者の様に駆けて行く。どうやってんだアイツ！？

「ちょっ……くそ！」

どうやるのかわからないけど、一応僕達も後へ続く。僕とスズリさんはただ、気づかれない事を願って精一杯走る事しか出来なかった。

そんな願いが届いたのか、後ろに迫る凶暴な気配は無い。僕達は再び森をひた走り、空に開いた穴を目指してる。
そしてとうとう、僕達はその真下へとたどり着く。そこは森の一部が開けた様な場所で、これまで以上にはっきりとその穴を確認できた。

「これが穴……」
「なんだか天変地異の前触れみたいな光景ですね」

確かにスズリさんの気持ちわかるよ。世界が終わるときに、現れそうな穴だもん。

「これって、間に合ったって事なの？　でも何も起きないわよ」

セラの言葉通り、穴の真下に居る僕達は、体が浮いて吸い込まれそうになんか成ってない。地面にしっかりと足が着いてる。

「最初よりも小さくなってるし……遅かったとか？」

そうじゃないなら、最悪やっぱり何らかの条件が必要って事に……でもそれを見つけるのはこのメンバーじゃ厳しい。
回復薬だって数に限りがあるし、どう考えたってここを冒険するには、準備が足りない。

「あれ？　……あれは何でしょうか？」

その時、スズリさんが何かに気づいた様だ。彼が見つめる先……そこに視線を凝らしてみる。

「んん？」

目を凝らしてもよく見えないぞ。てか小さい。それは物じゃなく、ゲーム上の記号の様な物？　僕達は取り合えずその何かを目指してみる。

「これって……０？」
「ああ、０だな」
「０ですね」

セラの言葉に、僕とスズリさんが続く。０って言うか、０が数個連なってる状態……つまりは、ストップウォッチの様な０が、赤い文字として浮かんでる。
上を見上げて見ると、ここは丁度穴の中心の様だ。この時間を刻んだような０と空の穴……何か関係があるんだろうか？
いや、状況から見てあるんだろう。でも……どう言うことだ？

「ねえちょっと足下見てよ」
「うん？」

セラの言葉に促されて、足下に目をやる。するとそこにはウジャウジャとミミズらしく生き物や、変な骨なんかが転がってるじゃないか！
きったね！　虫はいるのに土は死んでるぞ。こんな所に倒れたり転がったりしてたのかと思うと、体が痒く成ってくる。

「ちょっと、青ざめてないでここ見なさいよ」
「足跡……か？」

セラが見つけたのはどうやら足跡……それもちゃんとしたプレイヤーの物の様だ。靴の形してるへこみが、この数字の０の周りにい

くつかある。

「これは数人分はありますね。パァーティーでここに乗り込んできてた人達でしょうか？　でも……どうして……ここに……って、あ！」

スズリさんは何かに気づいた様だ。まあ僕も何となくはわかるよ。多分これって……

「あの穴は、この人達を今しがた外に出したって事か」

「多分そうね。それに足跡は五人分。スズリさんの言うとおり、一編成のパーティーって線が強いわね。攻略組かしら？

それともレアなアイテム狙いのハンターズギルド？　どちらにしても、これは重要なファクターね」

「どういう事ですか？」

セラの確信めいた言葉に、首を傾げるスズリさん。そんな言葉に応えるべく、セラは再び立ち上がる。

「ここには、ちゃんと出方を知ってるプレイヤーもやっぱり居るって事です。それとこの穴が、ここからの脱出に使う物だって確信出来たでしょう。

まあこの目で、ここに居た人たちの吸い込まれる様でも見れればもっと良かったんだろうけど、十分でしょう。これでまた一つ、私の言ったことの正しさが証明されたわ」

とことん自分が否定されるのがイヤなんだなセラの奴。別にコイツが持ってきたあのデータで、結構信じてたけどな。

（ん？　データ？）

何かが引っかかった。あれ？　僕確か、何かを言おうとしてなかったっけ？　ここに来るのに夢中で忘れたかも。

「ちょちょっと待ってください。確かに良いことも分かりましたけど、それってやっぱり僕達だけじゃどうしようもないって事じゃないですか？」

「ある意味、そう言うわね」

何がある意味だ。そうとしかいわねーよ。ほら、スズリさんが落胆してるよ。彼はここに、僕達の中でも一番大きな希望を抱いて居たはずだ。

それなのに、こんな慎ましい情報だけじゃ、やりきれないんだろう。

「そんな……」

「もう、そんなに落ち込まなくても、私たちはちゃんと前へ進んでるわよ。急がば回れ、次に出るのは私たちよ」

どっからその自信は出てくるのやら。無意味に自信満々な所とか、やっぱり日鞠と似てるなコイツ。

「なあ、さっきのモンスターって、もしかして今消えた人達が引っ張ってたんじゃないか？　いきなりあんなに現れるなんておかしいじゃん」

「確かに、それもそうね。モンスターは標的を失ったから、ここら辺でウロウロしてのかも。それが何？」

何と言われると困るな。何だろう？

「えーと……」

考えがまとまらない。ポリポリと頬を掻いて、僕は宙に浮かぶ０の点滅を見続けた。

吸穴衝動（後書き）

第百八十七話です。
これは実は月曜に予約したんで確実です。調子が良い時に上げとかないと不安なんで。暗黒大陸編は謎ってわけでもないけど、それと共に進んでいきます。
はたしてスオウ達は出れるのか！？
てな訳で、次回は金曜日にあげます（予定）。ではでは。

役割山進（前書き）

空の穴が消えていく。だけど僕達はこの場所に囚われたままだ。だけど新しい発見もあった。次……それに望みを託そうとした時、僕達の前に新たな敵が現れる。

役割山進

空に現れてた穴が、渦となり消えていく。それと同時に、宙に浮いていた０の点滅も消えていく。結局僕達は、この危なっかしく物騒な場所に、取り残されたままだ。

周りの森からは木々が揺れる音が不気味に響き、どこかからか狙われてる様な……そんなおっかい感じが沸き上がる。

勘違いなんだろうけど、この場所の雰囲気がさ……それを感じさえずには居られない。それにまだ、一回もまともにモンスターを倒せてないのが大きいんだ。

勝った経験でもあれば、もっと心に余裕が生まれるんだろうけど、今はまだ不安しかない。もしかしたら、ここまでモンスターを怖いと思ったことは無かったかも知れない。

自分の力が通じない相手って意味なら、シクラや柊の方がずっとそうだった筈だけど、アイツ等の場合は滅茶苦茶が過ぎたから、現実味が無かったんだ。

それにアイツ等は人の姿をしてて、心があって、何よりも女の子だったんだ。恐怖は恐怖だけど、なんか種類が違う。

獣と対峙する事と、知恵を持つ奴と対峙する事ってどっちが怖い事だろうか？　今までは後者が圧倒的に厄介だって思ってたけど、獣が本能だけで襲いかかって来るのも、余裕が無いと怖い物だ。

それに僕の場合、リアルと変わりない命をさらけ出してる訳だし……ＬＲＯって、常に外には熊が徘徊してる様な物じゃん。モンスターってリアルで言うなら熊だろ。

そいつ等が常に命を狙ってるって……かなり怖いこと。今まではゲーム性に一応は沿った所だったから、普段の場所ではそれほど強

いモンスターになんて、あの悪魔かクーぐらいしか会わなかったけど、ここは違うんだ。

明らかに何段か飛ばした結果の場所。僕やセラでも、余裕で倒せる敵はきっといない。だから、油断なんて出来る筈もない。

普段の数倍増しで、モンスターがグロく見えるんだ。

「ああ……」

色々と自分の中で考察してると、不意にそんな声が力無く吐かれた。それはどうやらスズリさんの声の様だ。とうとう消え去った穴に、希望を持って行かれたのかな？

セラの言葉はどこにもその根拠なんか無かったからな。まあでも、ネガティブに考えるよりは良いと思うんだけど……彼にはどうやら、その余裕は無いようだ。僕達の中で、彼は一番弱い存在だから仕方無いのかも。

彼にとってはまだゲームだから、もっと気楽に考えても良さそうな気もするんだけど、やっぱり殺されるってのはいい気がするものじゃないか。

特に彼は、まだ多分一度も死んでない。だから恐怖はリアルと同じ感覚のままなんだろう。

「ねえスオウ」

「うん？」

逃げる為に見つめてた数字も消えた。何気ない感じで返事したけどさ、実は結構ドキドキだった。だってきっとセラは、僕が保留してた答えを求めてるよ。

答えと言うか、考えか……でもそれは上手くまとまらなくて悩ん

でるんだ。空に現れる穴・その真下にあった数字の０の並び・そこにある五人分の足跡・そしてセラが見つけた情報……一番気になるのは、僕的にはこの数字なんだ。
　でも数字が気になるだけじゃ、納得しなさそうなんだこいつ。

「だからなんなのよ。気づいた事は言いなさい。三人よれば文殊の知恵よ。丁度三人だし、それぞれの考えを合わせれば問題ないわ」
「う～んじゃあ言うけど、数字。あのストップウォッチの様な０の並びって、何かのカウントダウンじゃないか？　何かって言うと、ここでは穴の出現しか無いけどさ……連動して消えた所を見ると、間違い無いと思うんだよ」

　まあ言うだけ言ってみた。でもこれは今気づいた事なんだよね。もっと前に何かに気づいてたと思うんだけど……

「数字ね。確かにあれは気になるわ。でも私達はあの数字を出現させる手段も知らないわ。それってつまり、穴を出現させれないって事じゃない？　たく、使えないわね」

　大きく息を吐き頭を振るうセラ。何コイツ、人の意見はもっと大切にしろよ。三人よれば文殊の知恵じゃなかったのか？　それならまず、受け入れる事から始めろよ。てか、それだけじゃないっての。
　呆れ果てて、自分の持ってきた情報を眺めてるセラに、僕はまだ言い放つ。

「まあまだ聞けよセラ。お前はさ、あの穴がアイテムか何かで呼ぶものだと思ってるわけか？」
「そうじゃないの？　それか、発生して消えるまでのカウントダウンって線もあるわね。０に成る前に穴の下に来れば良いわけ。でも一組限定かな？

それかやっぱりその時に何かの条件があるとか。でないと、私達が出れなかった意味が分からないもの。私達は間に合ってた。でも出れなかったのは、条件を満たしてなかったからでしょ」

条件か……実はそれが一番の疑問じゃないか？　条件って何だよ……準備をして来てる訳じゃない僕達に、それを満たす事を期待するなんて、不親切な設計だろ。こんな場所でさ。

僕は思うよ。そんな物があるのかって。でも、確かに穴の下に来た僕達は、多分カウントダウンに間に合ってた筈だ。けど出れなかった。

確かに何かが必要だったとも思えるし、元の考えの自然に発生するタイプともそれは一致するかも知れない。でも、条件やアイテムを手にすることが、無理矢理飛ばされた人達に出来るだろうか？

出来なければ、ずっとここに居なくちゃいけない？　そんな訳無いだろう。僕は再び蓋をしたような黒い雲で覆われた空を見つめる。

「そんな条件やアイテムが、本当に必要なのかな？」

「じゃあ何だって言うのよ。確かに厳しい条件だけど、それだけの場所ともいえるじゃない」

「まあ、確かに……」

ここはＬＲＯの秘境中の秘境、暗黒大陸なのだ。確かに厳しい条件が用意されてて当然かも知れない。でも、トラップに引っかかった人を無慈悲に閉じこめるなんて事、制作側はしないだろう。

それじゃあゲームとして破綻してんじゃん。非常識な事が起こり得てるＬＲＯだけどさ、それはゲームとしての所とは離れてる場所でだろ。

まあ最近アルテミナスが崩壊したけどさ、あれとここことは違う筈。元々からんな厳しい条件なんて……

「でもな～、なんか納得出来ないんだよな。だって僕達の様な連中は、それじゃここから出れない。なあセラ、ここに閉じこめられた人とか居るのか？」
「そう言う話は……聞いたこと無いけど……」

セラは険しい顔をしてそう答えた。まあだろうとは思ってた。だってんな訳無い。出れないなんて、重大な不具合だろ。でも今実際、僕達は途方に暮れてる訳だからな……僕はもう一度、セラが持ってきてた情報を求める。

「おい、ちょっとそれまた見せてくれよ」
「言い方が気に食わないけど、まあ別にいいわよ。てか、内容位、さっき頭に入れときなさいよね」

文句垂れながらも、僕の方へ表示させたウインドウを差し向けるセラ。内容位って……物の数分で覚えられる程の頭を僕が持ってるとでも？　セラだって、さっき見たのにまた見てるんだから、自分の事を棚上げしてるって事だろ。

分かってる癖に、毒づかなきゃ気が済まないんだな。僕は文句を押さえつけて、そのウインドウへ手を向ける。けどその時、ドズ～～ンと言う巨大な岩でも空から落ちてきた様な音と、僅かに足下へ伝わる振動が僕手元を狂わせた。

「わっ――きゃっ！」
「ととっ、何……だ？」

あれ？　随分セラが近距離に迫ってるじゃないか。それにウインドウをすり抜けた僕の手は一体どこに？　試しにニギニギしてみる

と、何か柔らかい物が手の中にある様な……
すぐ傍と言うか、もう密着しそうな程に迫ってるセラがなんだか震えてる気がするけど、どうしたんだろうか？　それにしても、この感触はなかなか堪らない物があるな。

柔らかくてとろけそうで、でもそこに確かに存在してるこの物体。なんだかある意味安心するような気さえするな。
なんだろこれ？　僕が手を動かす度に、セラが僅かにビクビク反応してるような……それに次第に
「はぁはぁ」と呼吸が荒く……もしかして僕は、とんでもない事をやってるかもと感づいた。

「なあ、もしかしてこの手はなんかやらかしてる？」

僕はドキマギしながらそう聞いた。これはセラに何されても文句は言えないかも知れない。でもセラは、僕の言葉に応えない。

（え？　何？　この無言が怖いんだけど……）

触ったこと無いから多分だけどさ、この感触って胸だよね？　つまり僕は今、セラの胸を揉んでた訳だよ。……殺されるな。

「何やってるんですか二人とも！」

そんな死刑宣告を受ける被告の気持ちでいると、そこへスズリさんが勢い込んだ声を向けてきた。僕は必死に良いわけするよ。

「ちちち違うんですよこれは！　事故です事故！　決して無闇に揉んだ訳じゃ……」
「何言ってるんですか？　それよりも後ろですよ後ろ！」

うん？　彼が指摘したのは、僕のセクハラ行為じゃないのか？
まあそれは安心だけどさ、後ろって何だろう？　そう思って僕は後ろを振り返る。

「ん？　山？」

振り返るとそこには、まさしく山があった。天高く聳えるそれは、山としか思えない。ただ、さっきまでそこに山があったかどうかが疑問だけど……

「あれ、動いてたんです！」
「へ？　動いて？」

んなバカな。あんな巨大な物が動くわけ無いよ。だって山だもん。今まで一番デカいモンスターは悪魔だったけどさ、もしもあの山が動いたりしたら、それはもう記録大更新だよ。
だって……何十メートル、いや山なんだから何百メートルあるんだよって事になる。流石にそこまではとは思うけど……もしもあれが生き物なら、悪魔よりも数倍デカい。確かに山にしては傾斜が急だし不自然だけど、動くだなんてそんなバカな。

「なあセラ、おいセラってば！」
「……」

返事がない。さっきから何もしないし、どうしたんだコイツ？
巨人の有無を聞きたいんだけど、荒い息を吐き続ける事しかセラはしてくれない。
かなり怒ってるって事だろうか？　後が怖そうだ。その時、もう一度さっきの衝撃が周囲に響いた。ズズ～ンてな感じだ。しかも一

回じゃない。続けざまに同じ様な振動が続く。

「あ……あああああ……あああああ！！」

スズリさんがおかしな声を漏らして山のあったほうを指さしてる。その様子だけで、察しが付いた。てか、イヤな感じが後ろからビシバシ伝わってくる。

僕は恐る恐るな感じで、スズリさんが見つめる先へ視線を向ける。

「なっ！？　――に……」

薄々分かってたけどさ、僕は驚いたよ。だってまさに動いてる。山の如き大きさの物が、大地を踏みしてて移動をしてた。

一歩を踏みしめる度に起こる振動、なぎ倒される木々、意味ないけどどうやって寝てるんだ？　とか思っちゃった。

いや、ほかに色々考える事はあるだろうけど・・思わずそんな意味ない事を考えてしまうんだ。だって……あれは……あのサイズはどう考えたっておかしいだろ。

あれが倒すべき敵だとするなら、一体どれだけのプレイヤーが必要と成るんだ？　あんなサイズ、ラスボスレベルだろう。

こんな所を闊歩してるなんて迷惑甚だしいぞ。

「あああああああああ！！」

「スズリさん！　シー！　シー！」

今、僕たちの唯一の救いはあの山の様な巨人が、僕たちに気付いてない事だ。それなのに、こんな叫びまくってたら気付いてしまうかも知れない。

そうなったら……おぞましい。考えたくない。ここでは僕たちは

逃げ続けてるんだ。でも、あの巨人からは逃げれそうもない。
だって歩幅が違いすぎる。今、僕達に出来る事はここをやり過ごす事。だからお願い。スズリさん静かにして！

「あん！！」

艶めかしいそんな声が、突如響く。静かにって思ってたのに、何でコイツが……と、思う訳にもいかない声。セラは大きく背中を沿ってるし、それに気付いてしまった。
思わず僕は腕に力を込めてしまったことを。つまりこの声の原因は僕で……それはセラの胸を力を込めてこう――ガムニュって感じにしてしまった様な……

「おわわわ、ごごめん！」

僕はようやく、セラの胸から手を離した。そんな大きいって訳でも無いけど……柔らかかった。柔らかかったな。ブラしてる筈だろうけど、それにしても……ポリポリと僕は頬を掻く。
なんだか気まずい空気が流れる。セラは顔を真っ赤にして、両腕で胸を隠すように抱えて僕を睨む。その視線に僕はどう答えればいいのだろう。確かにとんでもない事やったと思うけど……

「あの……セラ――さん？　いやセラ様」
「釈明を述べてみよ愚民よ」

なんか姫っぽい口調に変わってるセラ。合わせてくれてるって事だろうか。顔真っ赤で涙目で、なんかちょっと可愛いと思えるな。
愚民ね、いつもなら怒るけど、セラのレアな顔が見れたからどうでもいいとしよう。てか釈明ね……釈明。言うことはこれしかないよな。

「え～と……事故ですマジで！」
「死にさらせや！！！」
口調が更に荒々しくなったセラから、顎に向けて振り上げられる脚。
「うお！？」
なんて危なっかしい脚だ。危うく顎が飛んで、脳が揺さぶられる所だったじゃないか。正直に言ったのにこの仕打ちって……てか、事故って事はセラだって分かってるだろうに。
胸を揉まれたから、蹴らずには済ませられないのかも……
「ちっ」
そんな舌打ちがどくどくしく吐き捨てられる。そして第二撃でも準備する様に腰を屈めた。
（おいおい、マジで危ないよコイツ）
冷や汗が一筋、額から流れ落ちる。でもセラが第二撃を放つ前に、スズリさんの大音量の声がこの場に響いた。
「あぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
流石に何事かと少し視線をずらすと、それだけで事足りる物が視界へ写る。それはこちら側にその頭を向けてる巨人が結構傍にいたって事だ。
あれれ～？　コイツが一歩を踏む度にしてた振動は？　こんな近

づかれる筈は……そこで僕は気付いた。こいつの頭が妙に低いっていう事に。ドーンと視界一杯にあるこの顔が、その理由を示してる。
この巨人、移動してないんだ。両手を地面につけて、ここまでの距離を一気に稼いでる。

「な……なによこの巨大な顔は……」

ここで初めて巨人を視認したであろうセラは、その視界一杯に広がる顔を見つめて唖然としてる。まあ無理もないね。流石にここまで巨大な顔が広がってると、誰でも驚くよ。
しかも顔は人というより鬼みたいな感じだし。額からは角が四本生えて、その一番左端の一本が欠けている。顔は皺が多く、飛び出た下顎から大きな牙が二本生えている。

長い髭は茶色く汚れて、上手く閉じられない口からは、大量の涎がボトボトと……飛び出る様な二つの瞳は血走って、ギョロギョロと無意味に動いてる所なんかホラーだよ。
こっちを見定めてるわけじゃないけど、こうやってるって事は、気付かれてない訳がないよな。

「巨人……なあセラ、こいつから逃げれると思うか？」
「まさか……ふざけないでよ。こんなデカい奴から逃げるなんて……どれだけ走れっていうのよ」

僕の問いかけに、セラは震える声で答えてくれた。多分、どれだけ走っても振り切るなんて事は出来ないだろう。この巨人の一歩は、数キロいきそうだもん。
それくらい規格外の大きさだって事だ。きっと僕達は今、像を見上げる蟻の気持ちを味わってる。その位、圧倒的にデカい。でも見つかった以上、どうにかするしかないんだよな。

「ぐがぁ……がっが！」

変なうめき声を発して、周囲に唾を飛ばす巨人。するとそんな巨人の唾に押し潰される木々がある。おいおい、なんて凶悪な唾だよ。

存在するだけで迷惑な奴だなあれは。本当に、流石暗黒大陸って感じ。圧倒されっぱなしだよ。出会う敵には勝てないし……この独特の雰囲気に飲まれまくり。

少しずつ上げていった自信が崩壊しそうだ。シクラ達の出現でずっと思ってた。このままで僕はセツリを助けれるのかって……そのモヤモヤがここに来て更に強まった。

いや、確信に変わったと言ってもいい。このままじゃダメだ。だってあいつ等は、ゲーム性なんて無視してる存在なんだからな。

暗黒大陸でも、あくまでもゲームに沿ったこいつらから逃げてばかりで、どうやってシクラ達に勝てるって言うんだ。

（覚悟決めた方がいいよな）

僕はそう心で呟き、巨人の方へ歩きだす。

「ちょっと、何する気よ？」

「そ、そうですよ。逃げましょう！　一刻も早く！」

セラとスズリさんの声が背中にかかる。でも僕は止まれないよ。だってまず、スズリさんの言うことは無理だし。いや、そうさせる為に――ってのも悪くないのかもな。

死ぬ気なんて全くないけど、ここで僕が進み出る理由には成るよな。

「逃げれない……だろ？　セラはわかってる。でもそれは三人で――ならだよ。誰かがこの巨人の相手をすれば、残り二人は逃げれる。僕が相手をすれば、セラとスズリさんは逃げれるんだ」

そう言いつつ、僕はセラ・シルフィングを抜いた。それに反応したのか、巨人は、脚を引き寄せて地鳴りを響かせながら立ち上がる。もう、一種の自然災害のレベルだよ。立ち上がった巨人はやっぱりデカい。デカすぎて、顔なんて見えない。まあ本当は僕一人がって思ってた訳じゃないけど、選択肢はこれしかなかったからさ。

でもそうか、僕がこれを選択したことで、二人には新たな選択肢が追加されたわけだよ。それはよかったと思える事。でもセラは、それを認める様な事はしないようだ。

「アンタを置いて、私達だけ生き延びろって事？　ふざけないでよ！　それなら私がそれをやるわ！　アンタ、自分がどういう状況かわかってるわけ！？」

セラはそういうと、僕の方へ近づいてくる。そして自分も武器を抜いた。それも初めから聖典へと変化する、あの鏃だ。本気っぽいな。

いつもは毒々しいけど、根は優しい奴なんだ。

「ククっ……」

「何よその笑いは？　勘違いしないでよね。私はただ、これ以上犠牲者を出したくないだけよ。ＬＲＯは楽しい場所であるべきでしょ。それにアギト様の気苦労を増やしたくないしね。だからアンタは下がりなさい。リスクが大きすぎるんだから、進んでこんな事やることないわ。

その分私なら、ちゃんとゲーム的に復活出来るから問題ない」

まあ、セラの言いたいことはわかるよ。確かに僕がやらなくてもどっちかで良いことは確かだ。それなら、リスクがゲームとしてだけのセラが良いのかもしれない。

でもやっぱり一人残すってのは抵抗がある。自分の場合は「良いから行け」と迷わずいえるけど、こっちの立場に来るとそうもいかない。

それにやっぱりセラは女の子な訳だしな。男二人が揃って、女の子に頼るってのはどうなのか考えものだ。

「確かに、僕じゃリスクが有りすぎるってのも、良くわかってるけどさ……」

勢いこんで抜いたこの剣を、このまま戻すのは恥ずかしい。そんな場合でも無いけど……そう思わずにはいられないよ。

「つべこべ言わない。じゃあアンタはここで死ぬ気なの？　それで良いの？　私は全然構わないけど、ここでやられる事を選ぶなら失望だわ。

死にたがりに、誰が救えるって言うのよ！　死にたがってる奴に、誰が手を伸ばして『助けてほしい』なんて思うのよ！」

「！！」

セラの言葉が、深く深く僕を貫く。それもそうだな……僕は命を懸ける場を誤ったようだ。プライドとかも、邪魔でしかない。

そんなのは取るに足らない事なんだ。

（今、僕に出来ることは……）

僕はもう一度強く剣を握る。正しい言葉を、正しく受け取っても、
僕はまだ前を見る。

役割山進（後書き）

第百八十八話です。
空の穴の発生条件とは何なのか……色んなピースはきっと繋がる筈です。だけどここで更に大ピンチ！　山の様なモンスターにスオウ達は目を付けられてどうするのか！？
絶体絶命で次回へ続きます。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

大宝邂逅（前書き）

僕とセラは巨人へと挑む。それを選択した。イクシードと聖典。持てる力をもってして、山の様な巨人の侵攻を抑えるんだ。だけどそれは想像以上にきつい事だった。

だけど負けられない。けれどこの戦いは意外な場所に落ちる事に成る。

大宝邂逅

正しい言葉を正しく受け取り、それでも僕は剣を握り前を向く。そこには山の様な大きさの巨人が、汚らしく涎を垂らして僕達を高見から見下ろしてる。

鼻息だけで木々を揺らし、その一歩は地震と成るほどの体躯。どこまで通じるかわからないけど、僕はやっぱり自分だけ逃げ仰せるなんて出来そうもない。

「何やってるのよアンタ？」

「いやなに、倒せないって決まった訳じゃないしな。でくの坊かも知れないじゃん」

僕はセラの呆れる様な声にそう言ってやった。まあ実際、この体躯ででくの坊とかあり得そうも無いけどさ。この存在だけで、戦局を左右しかねない大きさだよ。

でもその位言わないとな……セラに蹴り飛ばされるよ。

「な、何やってるんですか！？　逃げましょう。折角セラさんが引きつけてくれるって言ってくれてるのに。良いじゃないですか、彼女は本当に死ぬ訳じゃない！」

後方から叫ばれる言葉。それはスズリさんだ。まあ彼は逃げたいよな。こんなのに勝てるだなんて思ってないだろうし……

「そうですね。じゃあ僕もここで証明して見せますよ。別に僕だって死なないって事を。スズリさん知りたがってましたよね？」

「それはそうですけど……僕は自分が死ぬのはイヤだ！　怖いじゃ

ないか！！」

おいおい、目一杯断言したな。まあ初心者は大体最初そうだけどさ。最初の死の時は、本当に無事でいられるのかドギマギするものだ。視界が暗転してく中でこう思ったりする。

（このまま死んだりしないよな？）

ってさ。でも彼は自分が死ぬのはイヤだって……本心漏れてるな。僕は剣を軽く振りながら、スズリさんに視線を向ける。

「まあ僕だって死ぬ気はありませんよ。最悪の場合、貴方が知りたかった事がわかるってだけです。倒しに行きますよ。なあセラ」

「まあ、やるだけやるけど死んでも恨まないでね」

「何でやる気無くなってんだ！？」

もっと熱かった筈だろ。セラは決める所は決める奴じゃん。普段は毒舌はた迷惑な奴だけど、戦闘では頼りに成る奴のはずじゃん！

それに色々言ってるけど、僕が死ぬことはイヤなはずだと思ってたんだけど。まあそれは僕が死んだことでアギトとかが傷つくとかだろうけども。

「ん？」

その時、僕達の頭上に陰が落ちた。元から暗いけどさ、暗さが落ちてきてるような……それは巨大な巨人の足？　地震を生み出すその衝撃が迫ってる。

「うあああああああああああああああああ！！」

スズリさんが頭上を見上げて叫びと共に地面にへたりこむ。だけどそれが許されるのは彼だけだ。僕とセラは、へたり込む場合じゃない。

「セラ、彼を頼む！」
「わかってるわよ！」

僕はイクシードを発動させて、風のうねりでその足を受け止める。数秒で良い……その間にセラが聖典を発動。聖典の一つが強引にスズリさんを掴んで移動させて、それに併せてセラも足の範囲外へ逃れる。

「よし！」

それを確認した僕は、片方のうねりを地面側へ向けた。狭い範囲で風が交錯する。流石に片手だけじゃこの巨大な足を支えきれない。でも、もう支える事なんてないんだ。
僕は双方のうねりをグッと貯めて、一気に解放。うねりをバネの様に使って、体を足の外側へ飛ばした。その瞬間、後ろでズズンと言う音と、それに伴って地面がめくれあがる様に割れてしまった。

なんて事だ……寒気がするよあんなの！　だけどもうやってしまったんだ。賽は投げられた……引くことは出来ない――ってか、僕達が引いても逃げれない。
今更ながら、ちょっと後悔してしまうかも。

「逃げた方が良かったんじゃないの？」

するとそんな思いを見透かしたかの様なセラの言葉が掛けられた。セラの周りには数機の聖典が飛んでいる。結構投げやりな感じでス

ズリさんを放ってるし……でも、こんな奴でも、僕はもう仲間意識をしてるんだ。

「んな訳ねーだろ」

僕は心の声を振り払ってそう答えた。そして振り返り、山の様な巨人に見上げて剣を向ける。

「それに、一矢報いたいじゃん。僕達はここにきてまだ一度も勝てないんだぞ。これだけデカいと流石に引くけど、ある意味ワクワクするじゃん」

「アンタって、そんなんだから……」

「うん？」

セラの続きの言葉は出てこない。なんだ「そんなんだから……」の後は何なんだ？　気になるじゃないか。けどセラは紡ぐ気が無いのか、僅かに口元を綻ばせたまま隣へ並ぶ。

そして右腕を斜め上前方へ向けると、それと同時に聖典が一斉に動き出した。四機の聖典が巨大な敵へと向かいゆく。

先端から放たれる桜色の光線が巨人へ放たれる。だけどそれは蚊と同じなのか、巨人は別段気にせずにこちらに腕を向けてくる。

「ちょちょっこっちに来ますよ！」

木の幹に背中をつけて怯えてるスズリさんが、下がりたくてもさがれない感じでそう叫ぶ。僕はその向かってくる巨大な手に向かって、風のうねりをぶつける。

だけど貫通もしなければ、抑えている事も結構きつい。風のうねりは、その巨大で分厚い手のひらに拡散されてしまう。

「くっそ、デカいだけあって頑丈だな」

腕の進行は止まらない……こっちはかなり踏ん張ってるんだけど、あの体格で体重を乗せられたら止めようがない。

すると横からセラが叫ぶ。

「もうちょっと踏ん張ってなさい。アンタに良いこと教えてあげるわよ。戦いってのは、何も正面からぶつかるだけじゃないってね！」

そう言ってセラは、更に四機の聖典を発動させる。計八機になった聖典は迫る腕の横で、円を描いて回転を始める。

「アレは……」

僕は踏ん張りながらその光を見つめる。桜色の光が八機の聖典で収束されてる。アレは確か、聖典の収束砲撃だ。別に中心にセラが居なくても出来るんだって感じだ。

まあそっちの方が応用効きそうだけど。でも発射の合図はセラ自身が下す様だ。セラは二本指を立てて、再びその腕を巨人へ向けた。

「ブレイク！！」

空中で一際大きく、桜色の光が瞬いた。その瞬間、巨人の腕へ向かって収束された光の柱が放たれる。

「がぁががああ！！」

巨人のそんな叫びで、この攻撃が効いてることが分かった。そして収束砲撃は迫っていた腕を横にずらしてくれる。僅かに逸れて地

面へと落ちた巨人の腕は、周りの木々を軒並み押し倒していく。
まさに存在するだけで、僕達にも世界にも迷惑な奴だ。

「うあうあああああうあああ！？」

自分たちの数センチ横を掠めて行った巨人の腕に、ビビりまくるスズリさん。急いでここから離れようとするけど、上手く足が動かない様で、その場でジタバタしてるよ。
だけどそれを「何やってんだ？」とか言って笑ってる場合じゃない。彼を守る立場に居るのは、今は僕達なんだ。「大丈夫」と言った。その責任が僕にはある。巻き込んだんだし、大変だったけど、スゴい冒険をしたと思わせてやると言ったんだ。

上体を地面に近づけた格好に成ってる巨人は、もう片方の腕を地面に押しつけて、顔を上げた。そして巨人の顔が空を一面覆い尽くす。
やっぱりデカいな。きたない涎がその口からはボタボタと……あれ？　それは涎じゃないかもしれない。

「泣いてないアレ？」
「ああ……」

セラの言葉は、僕の思ったことを代弁してくれた。確かに見える範囲に来た巨人は泣いてる様に見える。ボタボタと涎も落ちてるけど、涙もそれ以上に落ちていた。
それもと飛び出してる目がただ閉じれないだけとかかな？　そのせいで常時涙を流してる状態なのかも知れない。ある意味そっちの方がやりやすい。
敵でもさ、泣いてる奴を相手にするのはやりづらいし……とか考えてるとセラが聖典を操作して、その顔を狙い打ちした。

「えい！」
「ぐおおおおおおおおおおおお！！」
顔は弱いのか、聖典の通常攻撃で絶叫する巨人。でも何となく「やった」とは思えないぞ。
「ひっどいなお前。泣きっ面に蜂だぞそれ」
血も涙もないとはこいつの事だろう。お茶目な声で「えい！」とか言ったけどさ、こいつは同じ声で僕をぶつよきっと。
「アンタは普通とは違う感じでＬＲＯに浸ってるわ。あれはシステムでプログラム。心なんてないの。泣いてるように見えるだけ――よ」
更に攻撃を続けながらそう呟くセラ。確かに僕は、普通とは違う感じでＬＲＯに浸ってるのかも知れない。余計に感情移入し過ぎなのかも……ここはどこまでも良くできてて、全てが生きてる様に見えてしまう。
そして実際、僕は始めてから直ぐにただのプログラムじゃない存在に触れあって来たんだ。
「敵の事を思いはかってたら、いつか足下すくわれるわよ」
確かに大半の敵は心なんて無い。その位知ってる。分かってる。頭では理解してるさ。心があれば、プレイヤーを襲うのを良しと出来る訳でもない。
結局の所、戦わないといけない事に変わりなんて無いんだ。このタイプの奴らはシクラとかとは違う。本能で、望むままにそうして

るんだ。
だからその涙に意味なんてない……その筈だ。
「効いてますよ！　きっと顔が弱点なんです！　倒すなら、今がチャンスでしょ？　何やってるんですか！」
後ろでスズリさんが必死にそう叫ぶ。確かにチャンスだな。普通に立たれたら、顔まで攻撃は届かなくなる。まあだからこそ、顔の防御は弱いのかも知れない。
僕は両腕に力を込めて走り出す。風のウネリが届く範囲まで近づかないといけない。でもその時、されるがままだった巨人が、山さえ崩す様な叫びと共に動き出す。
「ぐがごあああああああああああああ！！！！」
僕達を逸れた筈の腕、それを横に振るとセラとスズリさんがその腕に巻き込まれた。僕は丁度、前に出てたからぽっかりと空いた空間にいたようだ。でも二人は、舞い上がった木々と一緒に空を飛んでいる。
「セラ！　スズリさん！！」
「くっ、やってくれるじゃない！」
案外元気そうなセラ。だけどスズリさんの方は反応が無いぞ。すると、セラは聖典を一機呼び戻して、それを掴んで宙を舞う。
ついでにスズリさんも助けてくれた。
「大丈夫よ、ちょっと驚いてるだけ」
「ちょちょちょちょっとじゃないですよ！！　腕が……巨大な腕が迫って来たんですよ！　しかも木々をなぎ倒しながら！

し、死ぬかと思いました……」

地面に足がつくなり、安心したのか言葉が次々に出てくる。まあでも、こっちも元気そうでよかった。あの一撃で終わったかと思ったよ。

案外、ＨＰはもって行かれて無いみたいだな。

「直撃って訳じゃ無かったから。私達は巻き込まれたって感じよ」

なるほどね。でも巻き込まれただけでああなるのは驚異だよ。

「た、倒せる訳無いですよ……流石にこれは……」

震える声で彼はそう言う。さっきの一撃が、彼に恐怖を植え付けた様だ。でもそれは今更だろ。もう僕たちは引けないんだ。

「それでも、倒さないとここで終わりですよ」

上体を起こした巨人は、その両腕を高く掲げてた。膝を折って地面につけてる筈なのに、その腕は雲を掴みそうだ。

そしてそれが力強く振り下ろされた。僕たちを狙ったものじゃない。でも、その衝撃はここまで伝わってきた。凄まじい衝撃は地面を割り、立ってられない程の揺れを生んだ。

僕たちは地面にへばりつく様にするしかできない。

「あの巨人、なんか怒ってないか？」

「だからアンタは……そんなの気のせいよ。それよりも次はこっちに来るかも知れないんだから、どうにかしなさい！」

「どうにかって……」

足場がこんなに揺れてたんじゃどうにも出来ない。てか、さっきから同じようにドスンドスンと巨人はやってる。その姿が、なんだか拗ねてる様にも見えるんだ。

「うう……気持ち悪い……」

大地に居るはずなのに、吐き気を催してるスズリさん。でもこの揺れは、ちょっと荒れた波よりも質が悪い。確かに吐きたくなってもおかしくないかも。

「さっきから同じ所ばっかり攻撃して……何あいつ、この世界を割ったりしたいわけ？」

セラの言葉はなかなか笑えないぞ。あの大きさなら、それをやってのけてもおかしくなさそうだ。この地震も大地の悲鳴みたいじゃないか。

どうにか出来ないか？　すると宙に浮いてるアレが目に付いたよ。

「そうだ。セラ、聖典を頼む！」

「揺れのせいで集中出来ないから一機だけよ」

「十分だ！」

セラが自身を助ける為に使った聖典が一機、直ぐ近くにあった。それが僕の近くに来る。なんとかバランスを保ち、タイミングをあわせて聖典の下部を掴む。

そして後はセラの操縦に任せて巨人の顔を目指す。今の所そこしか攻撃が効く所が分からないからな。上昇を続けてたどり着いた巨人の頭上。

僕はそこで聖典から手を放し、巨人の顔めがけて突っ込んだ。

「うぉらあああああああああああ！！」

風のウネリを勢い良く顔にぶつける。すると更なる雄叫びと共に、小さな僕はその腕によって振り払われた。地面に勢い良くぶつかって、数度跳ねる。それでも落ちない勢いのまま、森を進んだ。

「う……がっはっ！」

意識があるのが不思議な位だった。体中から血が溢れてる。かなり飛ばされたのか、木々の隙間から見える巨人が曖昧だ。

いや、これは僕の視角の問題かも……取りあえず揺れは止まった様だけど、これじゃあ今度は自分で立つことも難しい。

（くっそ……惜しんでる場合じゃないよな）

僕はそう思って、震える腕を何とか動かした。でも一回じゃ上手く行かない。システムがちゃんと認識してくれない様だ。

一回でも辛いのに……それでも三回目でやっとウインドウが現れた。それを操作して道具の中から、回復薬を指定する。

すると目の前に瓶に入った薄い青色の液体が現れた。念の為に用意しといて良かったよ。いつもならシルクちゃん頼みだから、こんなの使わないんだけど……今は彼女は居ないんだ。

僕はその瓶を口で挟んで固定する。後は首を上げれば……その時「ぐがあああ」とか言う声がすぐ近くで聞こえた様な……目だけを動かすと木々の隙間からのぞき込む瞳がギョロついてるのが見えた。

霞んでた瞳のせいで、奴がどこを向いてたのかまで分からなかったんだ。あの野郎は、払った僕の行く先を追ってたのか。荒々しい

鼻息で木が大きくしなった。
そして何よりも臭い鼻息だ。これだけで武器に成りそうな程……ヤバい、そんな警報が頭に響く。けど何故か襲ってこない？　僕は刺激しないようにゆっくりと頭を傾けて回復薬を喉に流していく。
炭酸の刺激が喉に痛い。でもこれが効いてる証だろう。ＨＰは少しずつ回復してる。

（後少し……もう少し……）

回復薬はもう残り僅かだ。このままいけるかって思ったとき、何かが木々を押しつぶす様に地面に落ちた。涙？　涎？　いや違う……それはもっと赤く汚い物だ。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

漏れ聞こえるのは何かを訴える様な声だった。押し倒された木々から見えたのは、きっと僕のせい傷ついた顔。そこから溢れてる赤黒い血。
どうしてこいつから血が出てるのか？　とか当たり前の疑問は吹っ飛んだ。だってこいつは訴えてる――そう感じた。その声は……目は……「どうして？」とか「なんで？」とか言ってるよ。

自分が傷つけられるいわれは無いと……そう伝えようとしてる様な。僕は思わず瓶を落とした。口からこぼれた瓶は、その液体を地面にこぼす。シュワシュワと黒い地面で炭酸が踊ってる。

「お前……やっぱり泣いてるのか？」

僕は思わずそう聞いた。だけど巨人が答える分けない。てかこの行為事態がおかしい事だ。セラが見てたらやっぱり呆れる事だろう。

でも……感じた気がするんだ。この巨人の心って奴を。

「あっがっ……ぐあ……がごあああああああ！！」

苦しむ様な素振りを見せた巨人。だけど最後には本能が勝ったようだ。巨人はその巨大な手をこちらに向けてくる。

でもその手は僅かにずれて地面にめり込んだ。だけどそれで終わらない。何回も何回も、巨人は僕の周りの地面を打ちつけてく。

激しい振動が体に伝わる。実際もの凄く冷や汗ものだ。危なすぎて逆に動けない。どうすれば……僕は何をすれば良いのだろうか？

分からなくなる。

こいつは意図的に外してる。だってそうだろ。この距離をこう何回も外すわけない。このまま武器を向けて良いのだろうか？

何を求めてる？

「ぐふっ……」

振動が体に染みる。完全回復したわけじゃないから、口からはまだ血の味がする。

（はは、やっぱり戦っても勝てそうもないかもな）

こんな状態なら尚更かも知れない。それでも僕は、こんな場所でやられる訳にはいかない。だから考えるんだ。必死にこの行動の意味を考える。

そして……セラ・シルフィングから風のうねりを消しさった。これでもう、後十分はイクシードは使えない。だからって、この天変地異みたいな奴をこのまま相手にするのも、同じくらいのギャンブルだろ。

そう思う。だから僕はイクシードを納めるよ。セラには自殺行為だと言われるだろう……けどこれもきっと選択肢なんだよ。
チンと鳴り、二つの剣を鞘へと帰す。そして僕は巨人と向き合った。かなり強引にだけど、それを見せないように立ち上がる。

揺れる大地に立つのはかなり難しい。でも何でもない風にしないとな。気にするだろ……このデカブツがさ。放たれた腕が滅茶苦茶に成ってる地面を更に打つ。
それを引く際の一瞬、動きが止まったその瞬間に、僕はその腕に自身の手を重ねた。その瞬間、巨人の荒々しかった行動がピタリと止まる。
そしてギョロつくその瞳がこちらを捉えた。ちゃんと見てる……今までの様に、四方八方をさまよってる訳じゃない。僕は唾を一呑みしてその視線と向き合った。

「通じてるか分からないけど……悪かった、傷つけて」

僕はそう言うと頭を下げた。視線を外した瞬間に、叩き潰されるんじゃ無いかとヒヤヒヤだけど、僕は僕の感性を信じるしかない。
もう武器を抜いたって、切り札は使えないんだ。

「……」

どうやら、攻撃が来ることは無かったようだ。

「あ……が……う……」

巨人は何かを言ってるのかも知れないけど、それは人である僕には聞き取れない。でも不思議なことに、触れた箇所からそれが分か

る様な気がした。その腕が震えてたしね。
だから僕は、きっとこう言えたんだろう。
「傷つけない……これ以上傷つけないよ。僕は、お前みたいな奴が居ても良いと思うから」
その瞬間、巨人の涙が更に溢れだしてきた。海でも作りそうな程の水量。不思議な事に、涙が溢れる程に巨人の存在が薄まって行ってた。
まるで幻が消えるかの様なその光景……一体どうなってるんだ？
これが巨人に対する、正しい対処の仕方だったのだろうか？
消えていく巨人の中から、一筋の光が見えた。それは七色に光る不思議な瓶？　それが巨人が流した涙を全て吸い取っていく。
そして蓋をしたら、僕の手の中に落ちてきた。アイテム名『金魂水』それがどれほどのアイテムか、この時の僕は知る由も無かった。
僕は取りあえず、アイテムをしまおうとした――その時だ。
「奴は逝ったか。救われる事が消える条件とは、何とも情けない奴だ。だが……そのアイテムの出現は待ち望んでいたよ」
どこからともなく現れたソイツは、有無を言わさず僕へと襲いかかって来る。そしてその力は、圧倒的と言える物だった。
全ては一瞬……一瞬で奪われた。僕は問う「誰なんだ？」と、すると奴はこう答えた。
『テトラ』
たった一言そう言った。

大宝邂逅（後書き）

第百八十九話です。
ごめんなさい遅くなりました。いや、実際、もう駄目かな？　とか思いました。昨日からＰＣと格闘ですよ。なんとか上げれて良かったです。
さて、新キャラ登場です。どういう役割の奴かは次回でって事で。
てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

天網恢恢（前書き）

目の前に現れた『テトラ』を名乗るそいつは、いきなり僕へと襲いかかって来きた。そして奪われた金魂水。何に使えるアイテムか、今は何にも分からないけど、このまま渡していい物じゃない様な気がする。

だから僕はもう一度奴と対峙する。けれど決着は契約へと変わり、新しい目的が僕には出来る事に成る。

天網恢恢

『テトラ？』

僕はただその言葉を繰り返すことしか出来ない。巨人が居た痕跡が生々しく残ってるこの場所で、僕はその巨人が与えてくれたアイテムを奪った奴と向かい合ってる。

足首までありそうな、ボリュームがある少し紫がかった黒い髪。白と金を基調にした風に靡く服。足下はブーツで、武器らしい物は何一つ見あたらない。

なのに……この威圧感は何だ？　一歩を踏み込む事を躊躇ってしまう様な圧力がある。奴は丸腰なのに、まるで全身が武器でもあるような……そんな訳ない感じが伝わる。

「つっ……」

僕は歯を食い締めて腕をセラ・シルフィングへと持っていく。

（いけるか？　イクシードはまだ使えない……でもあれは……）

あのアイテムをここで持って行かれるのは痛いような気もするんだ。だけどこのテトラを名乗った目の前の奴は、ある意味でシクラとかより謎だ。

何者？　それが真っ先に頭に浮かぶんだけど、シクラとかともちょっと違うような……

「やめておけ。お前じゃ俺には勝てねーよ」

テトラの言葉に、僕の腕が反応した。セラ・シルフィングへと伸びてた腕が一瞬止まる。でもそれは、僕ももしかしてたらそんな事をどこかで思ってたからかも知れない。
得体の知れない相手……そしてその実力はさっきの一瞬で垣間見えた。だからこそ――でもそう思う自分がなんだか嫌で、だから僕は思いきってセラ・シルフィングを抜き去った。
「うるせえよ！　それは……そのアイテムどうする気だ！？　それは僕が託された物だ。みすみす奪われるなんて出来るかよ！」
「はは……三秒ってとこだな」
テトラは無造作にその瓶を上空へ投げた。僕は思わずその瓶を視線で追う。でも、それは間違いだった。間違いだったと、気づかされた。
「一」
そんな声がすぐ近くで聞こえた。視線を戻した時には、その拳が僕の腹へと入ってた。
「ガハ！？」
体ごと吹っ飛ぶ程の打撃。ただのパンチなんて物じゃない。僕は地面に剣を刺して勢いを止めながら前を見据える。けどそこには、既に奴の姿はない。
「二」
そして再びすぐ近くでその声は聞こえた。そして斜め後ろから叩

き込まれたその拳で、僕は顔面を地面へと打ちつける。

「ぶっ！？」

腐った地面が口へ入る。ジャリジャリして気持ち悪い。でも意識が飛ばなかっただけでもありがたいのかも。リアルだったら、首が折れててもおかしくない一撃だった。

さっきの三秒ってのはようは僕を倒すまでの時間って事か……ご丁寧にカウントダウンまでしやがって、でもこのままじゃ確かに後一秒で決まるかも知れない。

（どうにかしないといけない……どうにか……）

そんな思いが頭を駆ける。このまま何も出来ないなんて悔しすぎる。だけど直ぐにその声は聞こえた。

「三……これで終わりだ」

「つっ」

振り下ろされるその鉄拳。地面が爆発するように弾け飛ぶ。立ちこめる粉塵。その中で投げた瓶が再び落ちてきた。

それを手の中に納めようとするテトラ。

「あっけない……この程度か。まあ俺には関係ないが」

「この程度かどうか、その目で確かめて見ろ！！」

僕はその腕を斬り裂いて、更に回転蹴りを奴の首筋に叩き込む。吹っ飛んだテトラ。その間に僕は瓶をその手に納めた。

「きっさま……どうやって？」

体を起こしつつテトラがそんな事を言う。まあ確かに、あいつにしたら決まってた筈の攻撃だったろう。僕は避けれる態勢でも無かったしな。
でも僕はここにまだ立ってる。そしてなんとかだけど、取り戻した。まあまだ油断は出来ないし、別にそれに答える義務も義理もこいつにはないよ。

「さあな、持て余してそうなその頭で考えろよ」

上品そうなその顔が泥に汚れて良い気味だ。だけど何がおかしかったのか、テトラの奴は僕の言葉に怒りもせずに笑いやがった。

「くく、ははは。そうだな、問うまでも無いことだった。少し考えればわかる。つまりはスキルだろう。だが……続けてそれは使えるのか？」
「はん……」

直ぐに気付いて、しかも痛い所を付いてくるじゃ無いか。確かにこの回避スキルは、一分に一度しか使えない。さめて三十秒くらいなら……いや、こいつならその間に僕を殺す事なんて訳なさそうだ。
とにかく、こいつが動く前にアイテムをウインドウにしまえばこっちの物だ。そうなれば、横から無理矢理盗るなんて出来ない筈だ。そういうスキルが無い限り。

僕は奴から目を離さない様にしながら、ウインドウを開く。後はここに……するとその時、奴は手を突きだしてこう言った。

「ちょっと待った！！」
「誰が待つか！！」

僕は直ぐに言い返したよ。すると次の瞬間には、僕は地面に倒されて羽交い締めにされてた。

「つっ！？　てめぇ……」

「たく、俺様がお願いしてるのに無碍にするんじゃねーよ」

「これが……お願いする奴の態度かよ」

これは侵略者のやり方だ。ギリギリ締め付けやがって。

「お願いだよ。お願い。だからまだ盗ってないだろ？　さっきまでとは俺様の態度は変わってる」

「知るか、そんな胸の内。それこそ態度で示しやがれ」

「それには、これをまだしまわないと約束してくれないと無理だな」

やっぱ、これのどこがお願いだよ。でもこいつの言いなりはムカつく。だから僕はこう言った。

「しないとどうするんだよ」

「何簡単だ。お前を殺す……それだけ」

やっぱ脅迫じゃねーか。なんてふざけた奴なんだ。でももしかしたら確かに何かの心境の変化はあったのかも。今も簡単なそれをやらずに、話を振ってきてるんだし脅迫だけど、こいつにとっては交渉なのかも。

まあどっちみち、僕の選ぶ道は一つしか無いけどさ。僕は嫌々だけどこういうしか無いじゃないか。

「わかった。これはまだしまわないからとっとと離れろ」

「そう言ってくれると思ってたよ」

解放された僕の手には、まだアイテムが残ってた。マジでどうしたんだこいつ？　最初は有無を言わさずに襲ってきたのに……これはこいつにとって必要な物の筈だろう。単に、いつでも奪えるって事かも知れないけど……油断は出来ないな。
それでもこいつにはなんか勝てる気がしないけど。

「で、何なんだよ。お前はこれが欲しいんだろ？　奪うのだって簡単だ。なのに何でお願いなんてするんだよ」
「それは……目的があるからだよ。そのアイテムは確かに必要だ。だけど俺様じゃ使えない。そういう使用だからな」

ううん？　どういう事かわからないぞ。仕えないけど、必要なアイテムだって？

「お前は……プレイヤーじゃ無いのか？」
「ああ、その通り。俺様はプレイヤーじゃない」

やっぱり、そんな気はしてた。だって強すぎる。得体も知れないし、人間味があるようで何か違う気がしてた。それにアイテムが使えないって……そんな訳プレイヤーならあるわけ無い。

「じゃあ、お前はシクラとかと同じ存在か？」
「シクラ……か。あのガン細胞みたいな奴か」

ガン細胞って……確かに間違いじゃない気もするけど。それにしては酷い印象だな。テトラと名乗ったソイツは、首を振って、その黒い髪を靡かせる。

「お前は俺様を知らないようだが、この名を出せば普通の奴はわか

るさ。ソイツ等に聞け。それよりも、俺様がここまで近づいた理由だ」
「お前は、このアイテムを僕に使わせたい……そうだろ？」
普通に考えたらきっとそうだ。自分じゃ使えないから、使える奴に頼むって事だろ。
「まあそうだな。その通り、大正解だ」
にっこりと笑ってそう宣言するテトラ。やっぱり予想通りかよ。でも……それはどうだろうか？
「いや待てよ、僕にはやることがあるんだ。理由次第ではこれを渡しても良いから、別の奴に頼んだ方がいい」
そう僕には重大な役目がある。実際、今はそれ以外考えられないさ。確かにこのアイテムは惜しいかも知れないけど、それを正しく必要としてるのなら、求める奴に渡すのだって惜しくはないさ。
だけど目の前のテトラはこういう。
「それは出来ない。ダメなんだ」
「ダメ？」
どうして？　と聞こうとしたら、直ぐにテトラは僕を見て、言葉を続けた。それもまあ予想外の言葉だ。
「お前のやることは分かってる。あの眠り姫を助けたいんだろう？連れ出したいんだろう。それなら、俺の頼みを聞くことは損じゃない」

そんなテトラの言葉に、今度こそ「どうしてだ？」と僕は言った。

「今のお前じゃそれが出来ないから」

それって言うのは「助ける」って事だろう。まあ元々、セツリはそれを望んではいないんだから、出来る筈もないんだろうけど……こいつが言ったのはそう言う事じゃないだろう。

単に僕の実力不足……そう言ってるんだ。

「どうしてそう言える？　てか、お前はどこまで知ってるんだよ」

こいつとは今日初めて会ったはずだけど。こいつの吸い込まれそうなこの瞳……なんだか全てを見透かしてるようで気に入らない。

そして案の定気に入らない事をサラリというんだ。

「全て……俺は全てを知ってるさ。それよりもお前はどうなんだ？　このままで、望むものが手にはいると？　甘く思うなよ」

「甘くなんて……別に」

思っちゃい無い。でも言葉は続かなかった。それは僕が一番分かってたからだ。このままで良いわけがないと。相次ぐ強敵の出現……そしてここでのふがいなさ……実は結構へこんだりしてる。

こいつにも全然勝てないし……強い奴だから勝てない、そんな理屈を受け入れる訳にはいかないんだよ。そんな事言ってたら、誰にも勝てない。誰にもかなわない事になる。

相手が強い事……それを諦める理由には出来ないんだ。でも認めなくちゃいけないのなら、奴らは強く、僕は弱いって事。

まだまだ全然、僕は弱い。このままで良いわけ無いって分かってる。甘くないさこの世界は。ＬＲＯは僕の命を掴んでるんだからな。

僕は拳を握りしめてテトラを睨む。

「お前は、僕に何をさせたいんだ？」

「ようやく興味出てきたか？　そんなに睨むなよ。俺たちの利害はきっと一致するぞ。俺にもお前にも目的がある。だけどそれぞれ一人ではどうにも出来ない事だ。

俺はお前の存在を借りたい訳だし、お前は今よりも強くなりたい筈だ」

「お前の頼みごとをきけば強くなれるとでも？」

僕のその言葉に、テトラはセラ・シルフィングを見つめる。その瞳は何を思ってるのか、いまいち分からない光を宿してるよ。まあ僕には、目を見るだけで他人の考えが分かる能力なんて無いわけだけどさ。

まあ少なくとも、敵意があるようには見えないな。もうこいつは、いきなり襲うような事はしないだろう。

「その流星の剣はまだ不完全だ。まあお前が使い切れて無いのもあるが、でもこれだけは言える。強くなれるさ。お前が思ってるよりもな」

不完全……僕もまたセラ・シルフィングを見つめる。何の保証も確証もなければ、今会ったばかりの正体不明のこんな奴の言葉なんて信じるべきもない。

だけど……その言葉は僕の心を惹いた。

「本当か？」

思わず呟いたそんな言葉に、テトラは満足げな笑みを浮かべる。気に入らない……けど、それを押し殺してでも興味を惹く事なんだ。

だから僕はテトラの言葉を待った。そしてテトラは、大きく腕を広げてこう言った。

「ああ、我が名において断言しよう。お前は強くなれる。まあそれで、目的を達せれるかは別だがな」

「別にそこまで望んじゃいない。でも、今よりも僕は強くならないといけないんだ！　そうで無いと、確かに僕は僕のやるべき事が出来そうにない。

力は、目的を達する為の手段でしかないけど、それが無いともう、アイツに近づくことさえ今の僕には出来ないんだ」

セツリは僕を……リアルを拒絶して遠くへ行こうとしてる。そしてそれをがっちりと反則以上の奴らが守ってるんだ。

力はどうしても必要……声を届かせるために、耳を傾かせる為に……そして何より、向かい合える場所に立つために。

テトラは僕にその拳を差し出してくる。

「契約成立の証だ」

その言葉に、僕も自分の拳を差し出す。そして二つの拳が、不気味な森の中でぶつかり合う。まあ森って言っても、木々は押しつぶれててここだけぽっかりと空いてる感じなんだけどね。

蓋をしたような黒い空がよく見える。何の信用も信頼もない、不振極まり無いこいつとの契約にはふさわしい感じじゃないか。

「まあ、乗っといてやるよ。だけどお前を信用した訳じゃない。言いように使われただけだったら、必ず倒してやる。

お前が強かろうと、なんとしてもな。それで強くなる方法を聞き出す。何でも知ってるんだろお前？」

拳に力を込めてテトラの拳を押しながらそう言った。釘は刺しとかないと、完全に信用するには間が無さ過ぎだからな。
効果があるかは別として……言うだけ言ってみた。だけどテトラはやっぱり余裕を崩さない。簡単に拳を引いてこう言った。

「別に、好きな様にすればいいさ。まあ俺様が倒される訳はないけどな。契約は交わされた、本題に入ろうじゃないか」

テトラはぶつけ合った拳の甲を見せるように向けた。するとそこには模様の様な物が現れだした。そしてそれには僕の拳にも現れてる。
なるほど、これが契約の証って訳か。約束なんて曖昧な物にしなかったのは強制力でも持たせる為……それだけこいつにとっては重要な事ってことなのかも。

本題は僕も待ちわびたけど、空気が重くなる様な気がする。でも、既にこれは僕にも関係あることだしな、強くなるための試練とでも思ってやるしかない。

「で、僕は何をやれば良いわけだ？　このアイテムは何に使う？」
「一から十まで、全てを教える訳にはいかないな。道は、自分で切り開く事に意味があると思わないか？」
「それはそうだと思うけど……お前、僕がそこまでたどり着けなかったらどうするんだよ」

そんな事になったら意味なんてなくなる。ここでの出会いや、このアイテム……そしてこの契約もだ。まあ十までを教えろとは言わないけどさ、一というきっかけくらい教えても良いだろう。

「たどり着け無かったら、その模様がお前という存在を壊す。だか

ら頑張れ」
「は？」
何をさらっといったよこいつ？　聞き捨てなら無い事だったよな？　テトラは自分の手の甲を指さして得意げに語りやがる。
「これがただの模様だと思ったか？　期限はまあ五日くらいだな。それまでにもう一度俺に出会え。そうすれば解いてやるよ」
五日って……
「お前な……このＨＰが僕の命と直結してるって知ってるんだよな？」
「ああ、だからこそお前なら、契約を反故にはしないだろう」
意地の悪い笑みを浮かべるテトラ。この野郎……計られた。男同士の爽やかなやりとりだと思ったのに、こんな裏があったとは。
（あれ？）
でもそういえば、この模様は奴にもあるんだけど……それはどうなってるんだ？
「おい、それって僕だけのリスクなのか？　お前にも刻まれてるぞ」
するとテトラは、背中を向けて、僅かに横顔を見せて甲言った。
「運命共同体だな」
それって、同じリスクが奴にもあるって事か？　でもこいつはプ

レイヤーじゃないと言ったよな。

「お前と僕が同じリスクかそれ？」

森がざわめくようにうねりだす。森の先から闇が迫ってくるような……

「命って奴は、一体何に宿ってるんだろうな。肉体か？　それならこの体は、俺にとっては幻なんかじゃないんだよ。

作られたとしても、俺は考える事が出来る。俺は既に一つの存在……そうはおもっちゃだめか？」

迫る闇に体を向けて、テトラは染みるような声でそんな事を言った。命は何に宿るのか……どこからがそう呼べる物になるんだろうか僕には分からない。

でも……目の前のこいつは、僕達となんら変わらない。そう思う。こいつの必死さは、はた迷惑だけど伝わったしな。

生きてると、本人が自覚してるなら、それは命なのだろうか。でも……ただ、こいつにとっては自分が消えるかも知れない事を織り込んだ訳だから、同じ覚悟って事なんだろう。

確かに存在が消えるとしたら、それは等しく死なんだろうな。

「それなら、きっかけくらいは教えとけ。僕もお前も死ぬ気なんてないんだからな」

「だからそれは無理なんだよ。おかしな所でシステムの縛りが効いている。だがまあ、いけるだろう。お前なら」

なんだその楽観的な考えは？　どこにんな保証があるんだよ。情報がどれだけ大事か分かってないよなこいつは。

「お前な……大変なのは僕じゃないか！」
「それでもお前はここまで来ただろ？　このくらい乗り越えないと主人公には成れないぞ。あのお姫様は、そうならないと助けれないだろ？」

迫る闇が僕達の周りを真っ黒に包む。風が一瞬吹き抜けた様な気がするけど、闇の中に風はない。てか、こいつはどこまでセツリの事を知ってるんだろう。
全てを知ってるとか豪語してたけどさ、それもどういう事だよって感じだ。まあでも、確かにセツリを助けるためには主役を張らないといけないのかも。

アイツは悲劇のヒロインに酔ってるからな。目を覚まさせるのは主役の役目だ。アイツの物語の主役はアイツだから、せめてヒーローに……その時、なぜそう思ったのか分からないけど、僕の口は勝手に動いた。

「お前も、誰かのヒーローに成りたいのか？」

そんな僕の言葉に、テトラは一瞬ピクッと反応した。テトラのどこかに引っかかる言葉だったのだろうか。何気ない言葉だったけど、清とした空気がテトラの周りには溢れてる。
そして静かにこういった。

「それは、お前が俺の願いを叶えてくれるのなら分かるさ」
「んっ……」

流れていく闇の先から、光が溢れる様に見えてきた。その光に思わず僕は目を細める。逆光を受けてるテトラが黒く見える。そして

曖昧に見える。

「さて、頼んだぞ。無くすなよそのアイテム。ああそれと――」

その瞬間、闇が駆け抜ける様に去っていった。するとそこに居た筈のテトラの姿が無くなってる。けど、姿は見えないけど、声だけが残響の様に響いてきた。

「――そんなに心配しなくても、ここからは出られるさ。時間を逆に考えてみな。発想の転換って奴だ。むしろここには、居続ける事の方が難しい」

「居続ける事が難しい？　おい、それって！」

僕は周りを見回して声を出す。だけどそこはもう、不気味なだけの森へと戻ってた。どこかからか不気味な鳴き声が聞こえてきて、バサバサと飛び立つ様な音が心音を一回飛びあげる。

僕のほかに人の気配は無い。嫌な感じは、常に張り付いてんだけどな。僕は手に握ったアイテム「金魂水」を見つめる。そして手の甲の模様……やるべき事が一気に増えた様な気がする。

それにタイムリミットまで……悠長になんかしてられないな。

「さて」

僕はどこまで飛ばされたんだろうか？　どうやってセラ達と合流しようか悩んでると、どこからか声が聞こえてきた。

「スオウ！」

「おう、セラにスズリさん。助かったよ見つけてくれ――」

「こんっの、バカ！！　どこまで飛ばされてるのよ！！」

「セラ？」

僕の姿を見つけるなり、その場で罵声と共に立ち止まったセラ。実は殴られたりするかなとか思ってたんだけど、なんだかそんな雰囲気じゃない。

「アンタ……無事なの？」

「ああ、見ての通りなんとかな。色々あって……心配してた？」

僕の何気ない言葉に、セラは展開したままだった聖典を荒々しく操ってこう言った。

「心配なんてするわけない！　勝手にどっかでのたれ死んでなさいよアンタなんか！！」

天網恢恢（後書き）

第百九十話です。

パワーアップの為にやるべき事が出来ました。本当にそうなるのかは不明だけど、スオウは既にやるしか有りません。色んな問題が集まって来る体質なのか……まあ有る意味、解決策が寄ってきてるって気もしますけど……偶然と必然って使い分けが難しいですよね。

てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは。

辛辣冥土（前書き）

テトラが去り、入れ替わる様に表れたセラ達。せっかく僕が生きてた事に喜ぶかと思ってたら、いきなり聖典を使って攻撃してくる始末。僕を心配してなかったのかこいつらは？

まあ正確にはセラただ一人だけど。こんな無駄に体力使う場合じゃないのに……折角テトラがヒントをくれた。ここを脱出する為のヒント。それを考察する為にも、今は話し合いが重要なんだ！

辛辣冥土

「心配なんてするわけない！　勝手にどっかでのたれ死んでなさいよアンタなんか！！」

四方八方から迫る聖典に、今僕はまさに殺されそうなんだけど！！

「おいおい、ちょっとした冗談だって！　今直ぐ止めろこれ！」

「ふ、ふん。良い気味よ。……本当はどれだけ心配したか……」

「ああ！？　なにか言ったか？」

何かポツリと聞こえた様な、そうでも無いような……聖典の攻撃が激しすぎて良く聞こえなかった。

「う、うるさあ～～～～～～～い！！」

聖典四機がセラの周りで回ってる。収束される桜色の光――ってあれは不味いだろ！？

「ちょっ！？　それはダメだろ！！」

収束された光が僕の耳横を掠めて行く。暗い空に桜色の光が散っていく。

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁはぁ……ふん！　当てなかった訳じゃないから」

そう言ってセラは、展開してた聖典を回収する。ようやく僕の危機は去ったようだ。それにしても、なんて危ない奴。
直撃してたら首が飛んでそうなイメージだったぞさっきのは。聖典を回収したセラは、頬を膨らませて横を向く。するとそこで、ようやく存在感を見せる様に、スズリさんが言葉を発した。

「滅茶苦茶ですね。ちょっと彼が可愛そうですよ。それにもう少し素直に成らないと」
「な、何の事よ！　アンタも喋るな！」

バシバシとセラに叩かれまくるスズリさん。たく、アイツ等元気だな。こっちは色々あって疲れたっての。僕は手の中の瓶を見やる。
黄金色の水が複雑にカットされた瓶の中で僅かに揺れている。『金魂水』……いつまでもこうやって持ってる訳にも行かないよな。
無くす訳にも行かないんだし。僕はウインドウを表示させてアイテム欄へ。そこへこれを納めればもう安心――てな所で、目敏くその珍しいアイテムにセラが気づいた。

「ちょっと、それ何？」
「綺麗ですね～」

二人はそう言ってこちらに近づいてくる。そしてセラに強引にそれを奪われた。おいおい、どこのガキ大将だよこいつは。
アイテムをタッチしてそこに情報を表示させるセラ。そしてその情報を見て、セラは目を剥いた。

「金魂水……って！　保持率たったの3じゃない。激レアアイテムよこれ！　それにこれ保有数1って事は他に誰も持ってないって事よ」
「へぇ～そりゃ凄い」

詳しく見てなかったけど、確かにそれは凄いな。保持率はこの世界での出現数みたいな物で、その数字以上は手に出来ないって事だ。で、保有数は今現在そのアイテムがどれだけあるか。

三つしか出現しないアイテムでその最初の一って成ったら、それは確かに凄いものだ。アイテムを見つめてたセラは、ジロリとした目を向けてくる。

「どうしたのこれ？　これが巨人から出てきたアイテムよね？　でも……どうやって倒したの？」

「え～と、それは……」

なんと言えば良いのだろうか？　隠す気は別に無いけど、ここにはあんまり巻き込みたくない奴が居るからな。どうせならアルテミナスへ戻ってからの方が……何か別の話題は無いだろうか。

「そう言えば、おまえ等来るの遅くなかったか？　そんなに飛ばされてた僕？」

なんだか結構テトラと喋ってた気もするから、それなりに時間も経ってた筈だ。それなのに今の今までセラ達がここまでこなかったって、不自然な気もする。

するとセラが何かを思い出すようにこう言った。

「別に、それほどじゃないと思うけど……そう言えばかなり走った気もするわね。あんまり疲れないってのも考え物かも。もしかして同じ場所を回ってたとか」

同じ場所を回ってた……いや、回されてた。テトラとか言う野郎、多分何かやってたんだろう。おかしな奴だったから、そのくらい出

来てもおかしくない。
ってそうだ。
「なあお前さ、テトラって知ってるか？」
「ん？　なによ藪から棒に。なんか話し変えようとしてない？」
「いやいや、そう言う訳じゃないっての。で、どうなんだよ？　テトラって奴の事知ってるか？」
僕のそんな言葉に、セラは呆れた様なため息を吐き出した。え？　何かおかしい事を言ったかな？　だってテトラの野郎が聞いてみろって言ってたもん。
「あんたがその名前を覚えてない事の方がビックリよ。まあ、全然ミッションやってないんじゃしょうがないのかも知れないけど……オープニングは見たはずでしょ？」
「オープニング？」
確かにそんなのもあった気がするな。世界に存在せずに、端からＬＲＯの歴史を見ていく感じのアレだろ。アレにも度肝を抜かれたな。
でもそこでテトラって名前出てきたっけ？　するとそこでスズリさんが思い出すようにこういった。
「僕知ってますよ。そのオープニングの始め、世界の創世に二人の神が出てきました。その名前が確か黒夜の邪神『テトラ』と光后の女神『シスカ』だった筈です」
「二人の神？」
そう言えばそんな話しもあったかもな。セラの言葉から察するに、ミッションとかちゃんとやってれば、関わりが出てくるのかも知れ

ない。
僕はミッションもクエストも殆どやってないからな。でもアイツが神？　神にしては荒っぽかったよな。まあ邪神って感じではあったけど。
悪魔みたいな契約させられたしな。セラはスズリさんの言葉に続く。
「そう二人の神様よ。ミッション……まあ重要な話には大抵絡んでくるわよ。進めていくと、世界の核心に近づいて行く感じだから、創世の神様二人は外せないんでしょうね」
「へ～」
そんな重要な奴だったのかのアイツ。あれ？　でもそれならアイツがこのアイテムで助けたい奴ってもしかして。
「なあ、その二人の神はどうなったことに成ってんの？　てか仲とかさ」
「仲ね。二人でこの世界を創造した事に成ってるけど、仲が良いとは言えないかも。モンスターを生み出したのはそのテトラって事に成ってるもの。
それが原因でシスカは亡くなったって言い伝えられてる」
成るほど、確かに仲は言いようにその話からは思えない。でも……他にアイツが救いたい奴が居るだろうか？　伝承ってのは得てして都合の悪い部分は無くす物だ。
ミッションは世界の核心に迫るって言ってた。真実ってのはどこかに隠されてるのかも。
「そうか……」
「ちょっと、何なのよさっきから。ＬＲＯの攻略になんか興味無い

アンタの口からテトラとか、出てくるのはおかしいわ。
なにがあったのか言いなさいよ」

そう言って僕の頬をがっしりと鷲掴みにするのはおかしいだろこいつ。言わせたいのか言わせたくないのか分からない。

「ふぐふががふが！」
「それじゃあ喋れないですよ」
「全く、不便な口してるわね」

ならどういう口の構造してればいいんだよ。口の形変えたら、それはもう化け物だろ。無茶ばっかり言ってるなよ。
セラは文句言いつつ僕から手を離す。

「お前な……」
「で、どうなのよ、何があった？　巨人を倒したの？　これはその戦利品？」

セラは僕に見せつける様に金魂水を見せつける。僕はそれを見つめながら、その先に見えるセラに目を向ける。

「別にあれは倒したって訳じゃ……ちょっと耳貸せ」
「えっ？　ちょっ――きゃ」

僕は結構強引にセラの顔へ自分の顔を近づける。耳元へ口を持っていき、囁くようにこう言った。

「巻き込みたくないだろ彼を。だからそれはアルテミナスに戻ってからって事で……」

打っ叩かれるかなって思ったけど、セラはやけに素直にブンブン首を縦に振ってくれた。まあよかったよ。

「もう良いでしょ、離れなさい！！」

「はいはい」

僕はさっさとセラから離れる。するとなんだかやけににやにやしたスズリさんがセラに向かって言葉を放つ。

「よかったですね」

「は？　なんか言った？」

ギロリとスズリさんを睨むセラ。本気の睨みを効かせてやがる。何が「よかった」のかわからないけど、それはセラの逆鱗に触れる事だった様だ。

だけどスズリさんはめげずに言葉を発する。

「うう、そんなに睨まなくても……それより内緒話はもういいんですか？」

「内緒だから教えないわよ」

スズリさんの言葉を一蹴するセラ。まあ、教えちゃ耳打ちした意味無くなるし、助かるんだけど……なんかこう、胸のあたりがモヤモヤするな。

彼は初心者なんだから、もう少し優しくしてやれば良いものを。

「まあ内緒なのはわかってるんですけど、そう言われると気になってしまいますよ。僕たち今は一蓮托生なんですから」

ニコリと下がり気味の眉毛を垂らして微笑むスズリさん。まあ彼

からしたらこんな心細い中で、一人のけ者にされるのはイヤだろう。
一蓮托生……まあ確かにそうなんだけど……どうしたものか。やっぱり言いたくない事はあるわけで、他の興味あることにすげ替えればいけるかな？
頼りなく精気が薄そうなその笑顔を見てると、悪い事をした気に成る。

「別にのけ者したわけじゃ無いですよ。ただほら、なんて言うか、スズリさんはまだ初心者で色々とわからない事も多くて……スキルもなさそうだし……え～と」

なんで僕がこんな必死に頭を回らせないといけないんだろうか。何を言いたいのか自分でもまとまってなくて、おかしく成ってる。
え～とえ～と。するとそこでセラが大々的に言ってくれた。

「つまり役立たずだから話せないのよ」
「ちょっとはオブラートに包めよお前！？」

どんだけ人の心をズタズタに切り裂く気だこいつ。確かに僕が色々言ってた事は、つまりはそれだったかも知れないけどさ。
直球は無いだろ、直球は！　そんなきっぱり言われると誰だって傷つくよ。現にスズリさん固まってるよ。

「違うんですよ。なんて言うか場所が悪い。それに初心者だしスズリさん。仕方ないって思ってますよ！」
「役立たずがですか……」

更にズズ～ンと沈むスズリさん。どうしたものか、実際に役立たずは仕方ないからどうしようも無いんだけど。でも別に落ち込む事じゃ……本当にそれは仕方ない事だよ。

始めたばかりのプレイヤーがこんな所に飛ばされて何が出来るよ。まだ全然ＬＲＯになれてなくて、右も左もわからない……それが初心者で、それで良いのが初心者なんだ。

「今はどうしたってしょうがない事ですよ。ＬＲＯは一朝一夕にで強くなれないし、またいつかスズリさんがここに来たときに、その汚名は晴らしてください。

だから今は開き直って！　ただでさえ暗い雰囲気の所なのに、誰かが落ち込んでたら気が滅入ります」

「まあ、役立たずならまだしも、足を引っ張るのは止めてほしいわね」

「ちょっとセラは黙ってろ！！」

まただよ。ぐさりって刺さる言葉を放ちやがった。足引っ張るとか、そんな解釈しなくていいんだ。

僕が何の為に必死に言葉を綴ってるんだか、わかってるよな？わかってて言ってんだろセラの奴。

「役立たずの上に、足だけは引っ張ってる自分って……」

「ああもう」

スズリさんが更に深い所へ落ちていったじゃないか。たく、もうこれどうするんだよ。

「ふん、落ち込んでる暇があるのなら、さっさとモンスターを倒せる様に成ることよ」

「二人だって勝ててない癖に……」

「ここのじゃなくて良いわよ。役立たずが勝てる程、甘くないしねここは。普通にそこら辺を歩いてるモンスターを倒せる様に成らなくちゃ、話しになんて成らないわ。

つまりアンタは、まだ始まってない所でウロウロしてるのよ。ここはアンタにとってはバグみたいな物よ。足を滑らせて落ちた先」

足を滑らせてって……最悪だなおい。どんなイレギュラーなんだよ。でもこれって、セラなりに元気づけようとしてるのかな？

でもあんまり元気が出る様な事は言ってない。

「ヒドいですねＬＲＯは……」

「まあ酷かもね。でも安心なさい。アンタは確かに運も実力もコピー用紙の様に薄っぺらいけど、まだ最低最悪って訳じゃないわ」

「後は萎れる位しかなさそうなんですけど……」

確かに……てかコピー用紙って、結構下じゃないかな？　薄っぺらいって言うか、ペラッペラだよ。コピー用紙の下って何なんだろう。やっぱりトイレットペーパーとか？

それじゃあ当たり前すぎるかな。

端から見てる限り、スズリさんの落ち込み度は増してきてる様に見える。う～ん、そろそろセラの奴を止めた方が良いのかも知れない。

このままじゃ彼は、役立たずのレッテルを背負って生きていきそうだ。セラは逆に生き生きしてるけど……アイツは他人の精気を吸えるのかな？

「萎れるくらいなによ。そうじゃなくて、スズリさんを最低最悪から繋ぎ止めてるのは、私たちだって事よ」

得意げに胸を張るセラ。それを見てスズリさんは、どんより曇った目でこう言った。

「じゃあ、早くここから助けてください」

その言葉に一秒・二秒・三秒と停止するセラ。そして

「……ふん、主にメンタル面でだから！」

と言って僕の方へ視線を寄越す。それは暗にこう言ってる。

【ちょっと、アンタも手伝ってよ！】

僕も視線でこう返す。

【僕が必死に元気づけてる時に、役立たず言ったのセラじゃん】

【それは、だってほら面白いじゃない】

【お前だけな】

これはこういうスキルと思った方が良いのだろうか。実際有ってるかわからないけど、僕の中ではこういう感じに会話は成り立ってる。

するとそこでセラが諦める様な声を出す。

「ああ～面倒。なんで私が他人のご機嫌伺いしなきゃ成らないのよ」

大きく背を伸ばす様な動作をするセラ。あいつあれでメイド服着てるんだから世も末だよな。

「た、他人って僕達は仲間でも無いんですか？」

その時、その言葉に意外に食いついたのがスズリさん。さっきまで引きこもりになる寸前みたいだったのに、普通よりちょっと大き

な声を出してたぞ。
　意外な所に立ち直らせるきっかけが有ったのかも知れない。だけど思いばかるって事を放棄したセラは、そんなチャンスに気づきやしなかった。

「仲間って、私は私が認めた相手じゃないとそう思わない事にしてるの。だからスズリさんは知り合い程度よ。年賀状でその存在を思い出す程度かな」
「い、一緒に冒険してるじゃないですか。パーティーは仲間でしょう？」

　なんだかやけに必死に食いつくスズリさん。まあセラの言葉はヒドいよ。年賀状で思い出すって、一年に一回じゃん。
　そもそもその程度の関係じゃ、今の時代年賀状なんて出さないだろ。僕が考察してると、スズリさんが僕へ向かって同じ様な事を聞いてくる。

「スオウ君はどう思ってるんですか？　仲間ですよね僕達は？」
「まあ、僕はそう思ってるよ。一時的でも、その場限りでも、手を組んで何かに立ち向かうのなら、その集まりは仲間だろ」

　そう言う風に、僕は考えてる。アルテミナスの時にそう思ったよ。僕のそんな言葉にスズリさんは満足そうに「ほら、どうだい」とセラに言ってる。

「それはスオウの考えでしょ。私は違うもの。仲間は安売りしてないの。一回程度の関係じゃ私の心は開かない。そこら辺のギャルと一緒にしないでよね。
　私メイドだから」

ここでメイドって、やっぱりこいつの中のメイド像がどうなってるのかが気になるな。それに一回程度の関係って……なんか卑猥じゃないか？

それは単に僕がいやらしく考えてるだけ？　でもこの言葉には僕もちょっと喰いかかる。

「おいちょっと待てよセラ。じゃあさ、初めて組んだ人達の中で、お前はどういう感じなんだ？　一緒に戦う仲間じゃないなら何だよそれ？

一緒に敵を倒す知り合いじゃ、なんだかしっくりこないぞ」

僕のそんな言葉に、セラは揺れる髪を耳に乗せる様にかきあげて言葉を紡ぐ。

「良いじゃないそれで。私はちゃんととけ込んでるわよ。敵を倒せばハイタッチもするし、ちゃんと勝利を分かち有ってる」

「ふ～ん、その心はどうなんだ？」

「あ～はいはい――って感じ」

ケロッてした顔でそう言ったセラ。女ってコエーって僕は思ったね。あれ？　でもそれなら僕はどうなんだろうか？　既に仲間と思ってくれてるのか……怖いけどなんだか無性に気になる。

「あのさ、僕はどうなんだ？　仲間か？」

「アンタは……」

紡ごうとした言葉が詰まってるセラ。何この溜……心臓に悪いんだけど。いや、別に仲間じゃないっていわれても良いけど……でもやっぱりそれはイヤな様な……

「アンタは……」

もう一度同じ言葉を繰り返すセラ。僕は思わず喉を鳴らして唾を飲み込む。なんでこんなに緊張してるんだろう。凝視するのはセラの瑞々しい唇。

ＣＭにだって使えそうな潤んだその唇が、僅かに開いて止まってる。そして僕の視覚がその僅かな揺れを見た瞬間、なま暖かい様な風が吹き抜けた。

いや違う？　なんだかこの風、風にしてはやけにのっぷり？　のっぺり？　してるような。

「ちょ！？　何よこいつら？」

こいつ……等？　そのおかしな言葉に僕は僕は周囲を見回した。するとそこら中に何かがいる。何かって言うのは実体があるかどうかわからないから。

何て言うのかな？　大きな半透明の風船に光目玉が二個あって、それが周囲を旋回してるんだ。それはまさに、世に言うお化け、幽霊、ゴーストって感じだ。

さっきから妙にのっぺりした風と思ってたのはこいつらか。でも、一体どこから現れたんだ？　それにぶつかっても、ダメージないし。

モンスターなんだよなこいつ等？

「モンスターじゃ無かったら何なのよ一体！？　それにしても何でこんなに集まってるのよ……」

確かにセラの言うとおり、ゴーストの数は有に数十を越えてまだまだ増えてる。ゴースト達は連動するようにこの場を回ってて、その中に僕とセラは巻き込まれてる形だ。

ダメージは無いけど、なんだか不快だよ。それにやっぱり多少存在が有るから、流れに巻き込まれそうでもあって一応踏ん張らないと危なそうなんだ。

「そう言えば、なんでこいつら回ってるんだ？」

何をしにきた――が、回りに来たって訳じゃ無いだろう。これだけの数が集まってるだ、何か理由がないとおかしい。回ってるって事は、大抵は中心に何かが有るものだよな。

こいつらが半透明でよかった。別段移動せずとも、中心を確認出来そう……って、アレは。

「仲間じゃない役立たずな僕仲間じゃない役立たずな僕仲間じゃない役立たずな僕仲間じゃない役立たずな僕――」

ぶつぶつぶつぶつとそんな言葉が微かだけど聞こえてる。まさかだけど、こいつらをこんなに呼んでるのはスズリさん？

「やっぱり足引っ張ってるじゃないあのバカ！」

「どう言うことだよ？　スズリさんに引き寄せられてるのか？」

「多分そう。ゴーストの能力の方には明記されてないけど、情報の中にはこのタイプのモンスターは感情の落ちてる所に集まってくるって書いてあったわ」

なるほどな、確かにスズリさんは落ち込んでる。それに反応してるって事か。てかさ、それじゃこの責任はセラにもあるんじゃないか？

「何でよ？」

「お前が落ち込ませたんだよ！　心ない言葉であそこまで！」

自覚しろ。言葉は凶器だって。僕はスズリさんへ向かって叫ぶ。

「スズリさん、楽しいことを考えるんだ！　なんでも良いから楽しい事を思い浮かべて！」
「楽しい……事？　ああ、そういえばあの時はごめん。死ぬかどうか確かめる為に、剣で刺そうとして……本当にごめんよ」
「超許すから！　もっと別の事をお願いします！」

別に苦しくも無いけど、このままじゃ有る意味、ゴーストの渦に溺れてしまう。その時、ゴースト達が一斉に上昇して一気にスズリさんへと落ちていく。それはまさにジェットコースターの様だ。

辛辣冥土（後書き）

第百九十一話です。
そろそろ暗黒大陸での出来事も終わりそうな今日この頃。だけどただでは返してくれそうもないですね。テトラの言葉の考察も終わってないし……だけど状況は止まってはくれません。
ボタンを押して始めれる様な、ターン制ではＬＲＯはないから。進む状況の中で何を選択していくか、それが重要です。後戻りもセーブも出来ないこれは……どこまでもリアルの様です。
てな訳で、次回は土曜日にあげます。ではでは～。

解答提示（前書き）

大量のゴーストに狙われるスズリさん。僕とセラはそんな彼を守る為に奮闘することになった。やる気がないセラも一応はちゃんと協力してくれる。だけど肝心のスズリさんはセラの言葉にやられた状態だ。

それにゴーストどもには剣が効かない。僕たちは結局、逃げ回るしか出来ない。

解答提示

蓋をしたような黒い空に、上って行った半透明な大量の存在。それは空に橋を架けるように、あるところで一斉にアーチへと変わる。
大量のゴーストが、ジェットコースターの一番最初の下り部分の様に駆け降りる先、それは落ち込んだスズリさんの所の様だ。

彼があの渦の中心だった以上、それは目指してた場所へ飛び込もうとするかの様な物なのかも。実はフェイントで、もう一昇りするなんてきっと無いよな。
実際、このゴースト達が何をしようとしてるのかはわからない。僕やセラは、大量のゴーストの渦の中に居ても、何とも無かったんだから、普通に考えればスズリさんだってすり抜けそうな物だ。

けど……このゴースト共は彼を目指してた訳だし、飛び込むかの様なこの勢いと、奴らの意志によっての行動ならなにか違う事が起こり得るのかも知れない。
だから僕は剣を抜いた。最悪の結果に成らないとも限ら無いんだ。このゴースト共が、モンスターで有る限り。

「スズリさん！　落ち込んでる場合じゃない！　上を見るんだ」
「上？　なんだか沢山の光が落ちてきてますよ」

それはゴースト共の目の光だよ。僕はその場から彼を離れさせたかったんだけど、彼は立ち上がりはしたものの、その光に魅入られる様にゴースト共を見上げてる。
迫り来るゴーストの一本道。だけど彼に届く前に僕はジャンプして彼の前に立ちはだかった。そして大量のゴースト共を打ち落とす

気マンマンで、セラ・シルフィングを構えた。

「やらせるかあああああ！！」

一番先頭のゴーストに最初の一撃を叩き込む。叩き……込む？

「あれ？」

セラ・フィングは僅かな感触を僕に伝えてくれたけど、ただそれだけだった。だけど、これは考えれる事……奴らには実体と呼べる程の肉体が存在してない。

つまりは、武器でこのゴーストどもを抑える事は出来ないんだ。勢いそのままに振り切られたセラ・シルフィングがその証。

大量のゴースト共が僕の体を通り抜けてスズリさんへ落ちていく。彼はやっぱり動こうともせずに、その光景をただ眺めてるだけ。

「なんでも良いから避けろ！！」

そんな言葉も空しく、ゴースト達は遂にスズリさんの元へと一気に重なるように落ちていく。僕は地面に着地してその光景を見やる事しか出来ない。

「どうなってるんだ？　ただゴーストが折り重なってる様にしか見えないけど……」

何か違う事が起きるのかと思ってたんだけど、僕の目の前には本当にただゴーストが重なって行ってるようにしか――その時、大量のゴーストの向こう側から何か聞こえた。

「ちょっとしっかりしなさいよ！　てか、せめて自分の足で立って歩きなさい！」
「なんでそんな事……君は僕の事なんてどうでもいいんだろう？」
それはセラとスズリさんの確かな声。どうやら、直前でセラが強引にスズリさんを移動させてたらしい。だからこのゴースト共は、ただ折り重なる様な団子状態に成ってるだけなのか。
「確かに私はあんたの事なんか、実際どうでも良いわよ。だけどそれはあんたがどうでもいい奴だから。でもこのままの態度を取るって言うのなら、格下げして気にもとめない奴にしてやるわよ。
そしたらあのゴーストの群に放り投げてやるんだから。それが嫌ならさっさと立ちなさい」
コエ～、コエ～よセラの奴。アイツ励ますって事を知らないのか。てか多少の責任も感じてないのか？　誰のせいであんな状態に成ってると思ってるんだよ。
「それも……」
ぽつりとスズリさんが口を動かしたその時、折り重なってたゴースト共の目が一斉に輝きを増した。そっして再び一直線にスズリさんを目指して進み始めた。
だけどそこで、奴等の進行方向に僕はセラ・シルフィングで雷撃を放つ。セラ達とゴーストの間に落ちる雷撃。するとそれを避けるようにゴーストは進んだ。
（やっぱり、武器での直接攻撃以外ならは効果があるのか）
僕そう考察しながら、二人に声をかける。

「こっちだ二人とも！」

セラはその言葉を受けて、強引にスズリさんを引っ張ってこっちへ来る。ゴースト共はたった一発の雷撃で、必要以上に大回りしてるから、それでも二人は追いつかれる事は無かった。

二人と合流して、僕達は再び森を進む。だけどやる気の無いスズリさんのせいで、それはいつも以上に大変だ。

「本当に、もう置いていってもいいんじゃないのこいつ？」

「お前な……そもそも誰のせいだよ。傷つけたのはお前だろ」

「私が悪いっての」

ジトリと僕を睨むセラ。いや、誰に聞いたってそうなるっつの。どう考えてもセラが悪い。だから彼を立ち直らせるのはお前の役目だ。

このままじゃまともに逃げれないよ。僕達だけじゃ、多分あのゴーストは倒せない。直接攻撃が効かないって、おもいっきりソーサラーとかヒーラーの魔法が必要って事だ。

僕の心許ない雷撃を幾ら浴びせたって、あの数は相手に出来ないよ。切れさえすれば、もっとデカいのを叩き込めるんだけど、それは無理なんだ。

セラもさっき聖典使っちゃったし、それ以外の暗器はほとんど直接の物理攻撃タイプだろうから何も出来ない。今は本当に、ここにいる全員が役立たずと化している。

「いいんですよ……僕を置いて逃げれば良いじゃないですか。あれの目的は僕みたいだし、追いつかれたって別に何ともないかも知れません。

これ以上、他人に付き合う事無いですよ」
「他人って……」
自殺志願者の様な、精気の無い声でそういうスズリさん。これは相当堪えてるな。でも、僕はちゃんと違うことを言ってたぞ。他人じゃない。
「何もないかも知れないなんて曖昧な可能性なんて信じれ訳がない。それに僕はちゃんと仲間だって言ったはずですよ。だから他人じゃない」
だけどそんな僕の言葉に、スズリさんはポツリと痛い事をコボした。
「だけど、君は隠し事をしてるじゃないか。それは仲間としてどうなんだろうか……」
暗く沈んだ瞳で僕を見つめるスズリさん。だけど不意にその瞳に光が宿ったかと思うと、彼は横を走る僕へと掴み掛かってきた。
「なあ、嘘も隠し事もいけない事だと教わらなかったのかな？　仲間内でそんな悲しい事……ダメだと思わないのかい？」
「ちょっ……スズリさん？」
変な寒気みたいな物が首筋を撫でた。これは前にも見たぞ。僕を刺そうとしたあの時の状態……それに似てる。元から情緒不安定なんじゃ無いの？　と思う様な様だよ。
「君は何を隠してる？　仲間にも話せない事ってのは悲しいな。それを証明したいのなら、話しておくれよ。さあさあさあ！！」

詰め寄る様に迫るスズリさん。僕達はいつの間にか足を止めていた。すると横から伸びてきた腕がパァアン！　と小気味良い音を立てて、彼の頬を叩いた。

「いい加減にしなさい！　仲間だからって、全てを話さないといけないの？　そんな訳無いでしょう。これからどれだけのパーティーを組むと思ってるのよアンタ。

その度にプレイヤーのプライバシーを聞き出す気？　そういう関係じゃないのよ、バトルのパーティーってのは！」

するとそう叫んだセラの頬が、今度は逆に叩かれた。仕返しとばかりにだ。こっちはもっと重々しい音が響いたけど……

「っつ」

「うるさいですよ。赤の他人なら口を出さないでください。これは仲間内の問題なんです」

「あんた……」

頬を押さえてそう呟いたセラから、何かが立ち上るのが見えるような気がする。プチンと何かが切れたかの様な寒気……これは殺気だろうか？

けどそんな二人の空気の中で、更に周りから木々が擦る様な音が聞こえてきた。そうだよ、僕たちは追われてるんだ。それなのにこんな事やってて、追いつかれない訳がない。

周りに視線を這わせると、こちらに向かってくるゴーストの線が三・四本見える。いくつかの雷撃のせいで奴らも数本にその流れを分けている。

本当に問題が次々と起こりやがるな。切羽詰まるとはこのことか。

僕は二人に向けて迫りくるゴーストの事を教える。
「おい、二人とも落ち着け！　ゴーストが直ぐそこまで迫ってる。逃げる事を考えよう！」
「逃げる？　こいつを殺してからでいいかしら？」
超物騒な事をセラの奴は言い出した。そしてスズリさんも同じ様な厄介な事を言い出す。
「お二人とも逃げればいいですよ。偽りの仲間も赤の他人もこれ以上つき合う事ないですから」
そう言ってスズリさんは、僕を突き飛ばすようにして距離を開けた。そして向かうのはゴーストの方。
（ああもう、なんでこいつらこんなに厄介なんだよ！）
「ちょっと待て！！」
僕は背を向けたスズリさんの肩を掴む。ただ行かせれる訳ないだろ。
「何かな？」
「何じゃない！　僕は言ったよな？　ちゃんと返してやるって、大丈夫だって。この冒険がいやな事だったなんて思わせない様に、僕はしたいんだよ！
ぶっちゃけ仲間かどうかなんてどうでもいいさ。でもこれは責任だ。初心者を助ける、僕達先輩としての責任。そうだろセラ？」
僕は最後に話をセラへふる。ほんと、いい加減にしてほしいからな。だけどセラは超面倒そうにこう言った。

「助け合いがＬＲＯ？　それは態度によるけど」
「お前な！！」

僕は迫るゴースト共に向かって雷撃を放つ。だけど直撃はしない。でもゴースト達が無闇に突っ込んで来るのは防げた。奴らは雷撃を恐れてか、僕達の周りを囲む様に周り出す。

まあ完全に僕達は囲まれてしまった訳だけどさ。

「囲まれてしまったね。まあ奴らの狙いは僕だけみたいだし、君達はきっと大丈夫だよ。助け合いなんてそんな……ＬＲＯなんて偽りの集まりだろう」
「偽り……あんた感動してたんじゃないの？」

スズリさんの言葉に、セラはそう問いかける。偽りの集まりなんて、それはそいつの受け方次第だと僕は思うけどな。

そして多分、ＬＲＯを楽しんでる人たちは偽りだなんて思っちゃいないだろう。ここをもう一つの世界と思ってる。大事にしてるよ。

「感動はしてますよ。でも……同じ様な世界が二つと必要なのでしょうか？　逃げ込む先ですよここは。存在からして、僕達そのものが偽りじゃないか。

名前も、姿形も見えるもので本物なんてここにはない。それなのに見えない物まで偽りなんて悲しいじゃないか。僕は感動と共に、絶望するね」

見えない物ってのは仲間意識とかの事かな？　スズリさんが求めてるのは、そう言う繋がりなのかも知れない。だからこそ、こんなにこだわってるんだろう。

この世界の出来には感動するけど、やっぱりちゃんとした友情と

かは芽生えないとか、仲間と思われて無かったことが彼の絶望。
でもそれは、これからに期待してほしい事だよ。ちゃんと関わって、一緒に成長出来る友達とかを見つければ、彼が望む物は手に入る筈だ。
僕達とのこの冒険はイレギュラーなんだよ。ＬＲＯはレベル制じゃないから、別に僕達でもいいのかも知れないけど、けど僕達にあわせろってのは無理のあることだろう。

スズリさんのちゃんとした冒険はさ、ここから出た後に始めれるんだ。でもこのままじゃ、彼はそれをするか疑問だ。
するとセラが彼の言葉にこう答える。

「言っとくけど、私たちは逃げ込んでる訳じゃない。あんたの望むその見えない物は、もっとちゃんと関わった奴らと育んでいけば良い事よ。
だから感動は勝手にしていいけど、絶望には早いのよ。なんにもわかってない初心者なんだから、勝手に絶望してるんじゃないわ！
私の様な奴ばかりじゃないんだからね」
「自分でそれを言うのか？」

僕は呆れた声をだしてそう言った。だってねえ……まあセラの出来る限りの妥協の言葉だったのかも知れない。自分の考えは曲げないけど、そうじゃない可能性を認めてあげるみたいな。
でも、同じ考えのところもあってよかったよ。まだセラにもまともな部分があってさ。

「確かにここには三百万のプレイヤーがいるらしいですね。だけど中心はあなた達でしょう？　どうせゲームに関わるのなら、本編に絡んでいたいと思いませんか？

折角僕の様な初心者がお二人に出会えた事ですし。だからちゃんとした仲間にして欲しかったんですよ。それに初めてのパーティーですからね」
「う……」

スズリさんのそんな言葉に、ちょっと罪悪感でも芽生えたかも知れないセラ。まあ彼は初心者だからな。何にだって夢描いてた事があるはずだ。
確かにＬＲＯは甘くは無いけどさ、それでも少しは導いてやるのが先駆者の努めだろ。それを無碍にしちゃうから、彼も絶望に打ちひしがれるんだよ。

初めてのパーティーであんなきつい事を言われちゃ、これから出会う人達にも、恐怖心を持つかも知れない。ようやく自分の罪に気づいたか。
まあ彼もちょっと勘違いしてるけどな。

「言っとくけどさ、僕達がＬＲＯの中心ってのは違うかもよ。僕は攻略目指してる訳じゃないし、どっちかっていうと、それは攻略組なんじゃない？」
「でも、アンフィリティクエストがこの世界にとって重要だと調べました。それを行ってるのがあなた達なら、中心じゃないですか」

それはクエストの中心って事だと思うんだけど……

「やっぱり足手まといにしかならないですか？　僕には仲間になる資格がないんですか？　役立たずはいらないですか？」
「当然でしょ」
「お前――なっ！！」

周りを囲んでるゴースト達が僅かにこちらに向かう素振りをする度に、雷撃で牽制をする。何とか保つこの状態だけど、一気にこられたら流石に僕だけじゃどうにも出来ない。逃げ場もないし……てか、セラの奴全然反省してないし。

当然って、だからそれを言うなって言ってるのに……でもセラは、その後にこれまでとは違う言葉を続ける。

「だけど、それは今のままのあんたならって事よ。初心者のままでついてこれると思ってるわけ？　そんなにこのクエストは甘くなんてないのよ。調べたのならその位知ってるでしょ？
自分で足手まといってわかってるのなら、必死に追いついた時に、胸を張って来なさい。そうしたのなら、私だって認めてあげる」
「セラ……お前何様だよ」

なんだかちょっと感動するように言ってるけどさ、まずセラはアンフィリティクエストに関わってないないじゃん。アルテミナス事変ではどっちかって言うと、エルフ側にいたわけだしな。
でもまあ、このクエストは普通とは違う。それは僕が身を持って知ってる。だからこそ、初心者には関わらせたくないってのはある。

「けれど、そうだな。スズリさん、ＬＲＯはもっとちゃんと普通に楽しんだ方がきっと良いですよ。僕達と同じ所にいたら、いくら命があっても足りないかも知れません。
それでも僕達と仲間になりたいのなら、それこそやっぱりセラの言うとおりなのかも。だからそんな事は、今は置いときましょう。
どうやったらこの窮地を乗り越えられるか、それを三人で考えるんです！」

流石にそろそろゴースト共も業を煮やしだしてる。ジリジリと囲

みを狭めて来てるし、一斉に飛び込んでくるのも時間の問題だ。ここまでなんとか乗り越えて来たけどさ……マジでこれは不味い。
僕とセラは確かになんとも無いのかも知れないけど、スズリさんは確実に何かあるだろう。それじゃあダメなんだ。三人で僕達は戻る……そう決めてるんだ。

「確かに、僕も死にたい訳じゃないよ。怖いしね」
「私だって、目の前で死なれるのは目覚めが悪いわね」

二人ともどっかで妥協点を見つけてくれたのか、僅かな沈黙の後に頭を下げた。

「すみません。あの頬を叩いたりして」
「こちらこそすみませんでした。言い過ぎました。ＬＲＯは素敵な場所です。ここをどう楽しむかは自由です」

よかったよかった。二人とも冷静に戻ってさ。スズリさんがプッツンすると妙に怖いしな。あのギャップに硬直しちゃうよ。
さて二人は冷静に周りを検分してこういう。

「完全に囲まれてるわね。どうするのよ？」
「絶体絶命じゃないですか、僕が！」

たく、二人とも今更過ぎるよ。それにさっきまでスズリさんは自分を犠牲にしようとしてたじゃん。何？　やさぐれた中で言ってた事は忘れたのか？

「一点突破を狙ってみますか？」

それしかない様な気がするな。雷撃を一点に向けて打てば、奴ら

は拡散するだろう。そこを一気に突破……てな感じで。

「それはどうなのよ。これだけいるんだからあんた一人の雷撃でそれほど時間も稼げないわよ。それに結構厚そうじゃない、このゴーストの壁。

道が出来なきゃ、みすみす奴らに飛び込む事になりかねない」

「確かに、それもそうだけど……」

じゃあどうしろっていうんだ。セラもスズリさんもゴーストに有効な技ないじゃん。

「ここであの穴が出てくれたらいいんですけどね・・そんな都合よくはいかないですよね？」

空を見上げてスズリさんがそう言う。それは諦めにも似た言葉。だって流石にそれは……

（ん？　そう言えば……）

あのテトラはなんて言ってた？　確かここには留まる事の方が難しいとか言ってなかったっけ？　何かが頭に引っかかるぞ。

「セラ、あの情報！　お前が見つけてきたあの数人分のブログを出してくれ！」

「何？　この世界がそんな都合よくないってあんたが一番知ってるでしょ？」

「そうだけどそうじゃない！　ヒントは多分、時間だ！」

「時間？」

いぶかしむセラがウインドウから例の資料を取り出す。空中に映

し出される数人分の簡易的な文章。日付と時間と文字だけの物が人物毎に縦で区切られてる。
最初はこれの内容を気にしてたけど、そうじゃないんだ。見やすい様に並ばれてるじゃないか時間がさ。画面をスクロールしていって確信にそれはなる。

一人目の奴が最初にこれに書き込んだのが十四時五分、そして出れた報告があったのが十五時七分。二人目が二十四時十一分から、一時十三分。三人目が十八時三十二分から十九時三十分。

「どういう事ですか？」

スズリさんのそんな声に、僕は自信を持って答えるよ。

「セラは確か言ったよな。ここに閉じこめられた人はいないって」
「うん、そうだけど……」
「その答えはこれだ。強制的に飛ばされる場所……だけど強制的に帰される場所でもあるんじゃないのかここは。この資料の時間をみろよ。全部一時間位で外に出てる。
これは偶然じゃないだろ。まあ一人だけ、地図ギルドの人のだけは違うんだけど、これも予想がつくよ」

二人に資料を見せながら語る僕。なんだか結構気持ちいいな。まあヒントを貰った僕が気づかなくてどうするんだって事だけどさ。

「予想って何よ？」
「それは多分、敵を倒したか倒してないかだと思う。この人は事細かに書いてくれてるよ。一体につき大体十分は時間が延びる様だな。
こっちの三人は不幸にも僕らと同じ状況に陥った人達……当然モンスターは倒せてない。つまり暗黒大陸は、一時間経つと強制排出

される場所なんだ。
それなら全てに説明が付くよ。僕達に厳しすぎる条件もないし、逆に攻略が難しいのも納得だろ」
進むためには、敵を倒し続けないといけない……それもあの強さの敵をだ。これはかなりきつい条件。攻略されてないのも頷ける。
「確かにそれなら……って今どのくらいたったの？」
気づいてみると、そこには例のカウントダウンが見える様になってた。それはどういう条件下で現れるのかわからないけど、僕達三人の間には赤い数字が一秒ずつ減っていってる。
僕達は希望を見つけたんだ。だけどそれが最後の油断を生んだ。

解答提示（後書き）

第百九十二話です。
暗黒大陸の仕様がようやくわかりましたね。これまで誰も気付かない訳がないじゃないかという声は、そこは攻略組の連中が情報を伏してたって事で。出るより居続ける事のほうが難しい。
テトラの言葉通りだったはずです。
てな訳で次回で暗黒大陸から出ることに成るでしょう。そんな次回は月曜日にあげます。ではでは

帰還想到（前書き）

追い詰められた僕たちへとゴーストは向う。奴らの狙いはスズリさん。だから彼だけをピンポイントに狙いやがった。脱出の術、この暗黒大陸の仕様に気付いた時の油断。

それらを衝かれて、地面から這い出たゴーストはスズリさんへと到達した。絶叫する彼の声が、暗い森へと響く。

帰還想到

「かえ……れる」

減りいく数字を見つめてスズリさんがそんな風に呟いた。だけどその時だ。周りにまだゴーストはいたはずだ。でも、余りにも大量に奴らは居たから僕達は気づかなかった。

減ったようんは見えなかった。でも、奴らもただバカじゃ無かったんだ。

僕とセラはスズリさんのそんな言葉に頷いてた。

（さて、後五分）

そう思った矢先、スズリさんの足下からゴースト共はあがってきた。元々実体が有って無い様な奴らだ。土だってその気になれば関係なかったんだ。

森の木を普通に避けたから、そんな事にまで気が回らなかった。ゴースト共は、僕達に気づかれないように近づいてたんだ。

ぬあっという感じで足下からせり上がる大量のゴースト。でも奴らは通り抜ける事はなく。足の膝の所に現れたいつもと違う感じの魔法陣に、吸い込まれていく様に消えていく。

「あああああああああああああああああああああああ」

「す……スズリさん！！」

僕もセラも彼へ向かって手を伸ばす。だけど、巻き起こる風がそれを阻むんだ。大量の光と圧力が僕達を押し退けて、更に周りを回ってた奴らまでもが、左右からスズリさんへと向かい、同じように

魔法陣へと消えていく。

（なんなんだ？　一体何が起きてる？）

目の前で起きてる事がわからない。わからない事は良くあるけどさ、これって……まるで幽霊が彼の中に入り込んでる様な……

「ちょ――どうなってるのこれ？　てかどうなるのよあいつ？」

「それは僕も知りたいな……」

僕やセラはゴーストに触れたけどこんな事には成らなかった。それはやっぱり僕達は眼中に無かったからだろうか。

ゴーストが雪崩の様に消えていく彼の体は、次第にちょっとずつ浮いてる様な……流石にただ見てるなんて出来ない。近づく事は無理でも、雷撃を届かせる位は出来るだろう。

僕はセラ・シルフィングの刀身に雷撃を纏わせてそれをゴーストの雪崩の一つへと向けて放つ。

「スズリさんから離れろ！！」

伸びていく青い雷撃。けどそれはゴーストに届く前に消え去った。どうやらこの風と圧力に阻まれてる様だ。

「ちっ、セラ、聖典はまだ無理なのか？」

ここを突破できるのは聖典の収束砲位じゃない確実じゃない。イクシードの風でもいけそうだけど、まだこっちは使えない。

「聖典はまだ無理よ。本家の人達には全然及ばないけど、魔法――使うしかないわね」

そう言うセラはウインドウを出して何やら操作してる。多分スキルスロットを別のに変えてるんだろう。熟練してる人達は最低三つはスロットを作ってるらしいからな。
セラも色々と対策してる筈だろう。

「お前、魔法使えるんだ」
「誰だっていくつかの魔法は使えるわよ。スキルの為に使うことに成った武器に付いてる場合だって有るし、全然持ってない奴なんてアンタか彼の様な初心者くらいよ」

そう言う物なのか……セラはウインドウを閉じ、魔法の詠唱を始める。足下に現れる魔法陣。そして……

「燃え盛るは高貴の炎ーーブライム・ファイアァアア！！」

セラは腕を顔の前から横へ腕を振る。するとゴーストが流れ込む三つの道にそれぞれ魔法陣が現れた。そしてそこから真っ赤な炎が……燃え盛りそうに現れたと思ったら、ボシュっという音と共に消え去った。

「おい……」
「あれ～詠唱どこかで間違ったかな？」

おどけた感じで言うセラ。

「何やってんだよ！　全然ダメじゃんか！」
「うるさい！　仕方ないでしょう！　魔法なんて殆ど使わないのよ！　それに私はチマチマした事は苦手なの！」

なんだそれ。しょうがないからセラは、再びウインドウを出す。多分そこには呪文が表示されてる。今度は確認しながら呪文を唱える気のようだ。
だけどそんなモタモタやってる間に、全てのゴーストが彼の中へ飲み込まれていった。掃除機に吸い込まれる様な音の最後に、ギュポンなる音が聞こえて、周囲に静けさが戻っていく。

スズリさんは少し浮いた状態で、顔は天を仰いだまま口が大きく開いてて、目は白目をむいている。息をしてるのか心配な状態だ。体も少し光ってるし……でもそれは地面に足が着くと、消えていく魔法陣とともに、光は消えていく。
スズリさんは気絶してるのか、その場にドサッと倒れ込む。

「スズリさん！」

僕とセラはそんな彼に駆け寄った。倒れた彼を抱え起こして、声をかけ続ける。

「おい！　おい！　生きてるか？」
「ちょっと！　死んだ？　死んだの？」

僕達の必死の呼びかけ。セラのはちょっとなんか違うけどさ……けどそれに彼は応えない。ＨＰは全然減ってないのに……どういう事なんだ？　どうなったんだ一体？
するとセラが「ちょっと貸して」と言って、スズリさんの胸倉を掴んで引き寄せて、おもいっきりビンタを食らわす。

「起きろー！　生きてるんなら起きなさい！！」

ビシバシビシバシと両頬を交互に叩いていくセラ。それはどうみ

ても気絶してるやる事じゃない。普通にヒドいよ。
でもそれが幸をそうしたのか、スズリさんが僅かに反応した。
「う……ん……」
白く成ってた瞳に黒目が戻ってくる。口も開ききってたのが、僅かに力を取り戻す様に動き出した。僕達はそんなスズリさんに更に声をかける。
「大丈夫ですか！？」
「何か言いなさい！！」
グワングワンとスズリさんを揺らしまくるセラ。それじゃあ逆に喋れないだろ！　そうこうしてる内にも、カウントダウンは進んでいた。一分を切った所で、空には異変が現れる。
蓋をしたような黒い空に渦が現れだし、青白いスパークの様な出てくる。多分もうすぐ僕達はここから強制排除される。
それは願ってもない事だ。だけど、最後に起きたこれは、スズリさんに何の影響も無いのだろうか？　そう思ってると、ようやくスズリさんがちゃんとした反応を返してくれた。
「二人とも……何、そんな心配そうな顔してるんですか？」
「し、心配そうな顔なんてしてないわよ！　それよりアンタ、大丈夫なの？」
「大丈夫？　とは何がです？」
ん？　その反応はおかしくないか？　変な懸念が生まれるぞ。そしてそれはセラも同じ様で、次にこう言った。
「何がって……アンタゴースト共に襲われたじゃない。なんだか体

に入ってたみたいに見えたわよ。それで何とも無いなんて有るわけ無いじゃない。
奴らは仮にもモンスター、影響は出てる筈よ！」
「ええ！？　僕そんな事に成ってたんですか？　そういえばここ数分の記憶は曖昧な様な……なんだか沢山の声を聞かされてたような気はするんですけど……覚えてないですね」

沢山の声？　まさかゴーストの呪怨の声の連鎖とかじゃないよな。それなら覚えてないのは良いことかも知れない。
でもなんともないなんてやっぱり信じれない。僕もスズリさんに聞いてみる。

「本当に何ともない？　大丈夫なんですか？」
「ええ、今の所は……って空に穴が開いてますよ！　やっったこれで僕たちは帰れるんですね」

スズリさんは覚えてない事より、目の前の穴に興味が行ってしまった。まあこれをずっと僕達は探してた訳だしな。
戻れるとわかれば嬉しくない訳がない。でも……やっぱり気になる。あんな光景を見て、まあいっかとは思えない。それはセラも同じ様で、彼に興味ないと言いつつ、厳しい顔で立ち上がってスズリさんの背中を見つめてる。

「本当に大丈夫なのかな？　どう思う？」

僕がそういうと、セラは途端に興味を無くしたようにこういった。

「さあね。本人が何ともないって言ってるんならそうじゃないの？
元気そうじゃない」

確かに彼は空を見上げてはしゃいでるけどさ……なんかキャラ変わってないか？　まあ今までも突然変わってはいたけど、それはダーク方面だったじゃん。
でも今は、テンション高く成ってるよ。けど、別にそこまで違う変化でもないのか。

「確かに見た目は元気そうだけど……お前だって影響無いわけ無いって言ってたじゃん。じゃあどこにあのゴーストどもは消えたんだよ？
なんの為の行動だ？　何も無いわけ無いだろ」
「それはそうだけど……目に見えないんじゃどうしようも無いわ。だから目に見えたときに対応するしか無いじゃない」
「……まあ、確かにどうする事も出来ないけどさ」

何をって所もわからないし……確かに見る限りではどこも変わってないんだよな。見た目には何も変わってない。でもそれが逆に不自然って言うか……気になる。

「それに私も疲れたわ。早くアルテミナスに戻りたい。アイリ様達も待ちくたびれてるだろうし」
「……確かにそれは有るな。連絡してないのかよ？」
「したわよ。でも待っててくださるってアイリ様は言ってくれたわ」

いつ戻るかもわからないのに待ってるって……もしかしてアイリは知ってたんじゃ？　考え過ぎかな。知ってたんならセラに隠す理由も無いしな。
空に出現した空よりも黒い穴。残り三十秒位で、僕達の体は僅かに浮きだした。スズリさんはそれを待ちわびた様に、光を浴びる様な態勢で先頭で浮いていく。

「ああ、ようやくだ……ようやく……」

ぶつぶつと何か言ってるスズリさん。本当に見た目だけなら問題ない。でも……

「ん？」

先に浮いているスズリさんの姿に何かが見えた様な気がした。染みだしこぼれ落ちる様な黒い影？　それが一瞬見えた様な……

するとそれはセラもそうだったようで「あれは」とか呟いてた。イヤなものでも見る感じ。次第に高度が上がっていく中で、僕の腕の模様が何かに反応するように僅かに輝く。

これが反応するのはアイツしかいない。僕は周りに視線を巡らせる。黒い障気が漂ってる森が広がり、ここからでようやくその先が見える、三段の滝の上。そんな暗黒大陸の上層とでも呼べる部分にはいくつかの建物が見える様な。

でも幾ら見回してもアイツの姿は見えない。こっちからは見えない場所にでも居るのかも。「忘れるなよ」って事だろうか？

忘れる訳がないだろう。こっちだって命掛かってるんだ。僕は控えめに光る腕を握りしめて、それに応える様に思いを込める。

まあ伝わるかはわからないけど、有る意味繋がってる様な物かも知れないじゃん。離れていく地上に残されたカウントダウンの数字。それは十五秒を切っている。

すると僕達の体を薄い膜が包みだした。そして一気に速度が上昇。僕達はあっと言う間に穴へと誘われる。なるほどね、これで僕達が最初にこの穴の下にたどり着いた時の状態が出来上がる訳だ。

もしかしてあの時も、まだ空にはプレイヤーが居たのかも知れな

い。でもこの膜のせいで見えなかったとか。遠ざかる暗黒大陸を見ながら色々考察してみたり。

でももういいことだ。無事……かどうかは置いといて、取り合えずここから出れるんならさ。穴の中は真っ暗だった。それにたいそう揺れるし……膜の居心地もなかなか悪い。

これ途中で割れたらどうなるんだろうって事を考える位にぶつかるんだ。

「うぬぎぎぎぎ……あそこが出口か……」

激しく膜の内で転がる内に、穴の上の方に光が見えてきた。そこを目指して僕達は向かってるようだし、間違いないだろう。

暗い穴の中、光に近づくにつれてその眩しさが増していく。そして全部が真っ白に成ったと思ったら、突然浮遊感が無くなり、堅い地面へと落ちた。

「いっつー」

「もうちょっと親切設計にしなさいよ」

セラも痛かったのか、文句を言いながら立ち上がる。上を見えると、僕達がでてきた穴が閉じていく所だ。暗黒大陸に出たのとは違って、こっちのは随分と小さいな。控えめと言うか……

「あの、スオウ君退いてくれないかな？」

「ああ、すみません」

知らぬ間に僕はスズリさんを下敷きにしてた様だ。さっさとセラが立ち上がったのも、スズリさんを解放するため？　だったら言ってくれれば良いのに……でもセラにそれを期待するのは間違いか。

「戻ってきたんですね」
「みたいね」
「なるほど、元の場所にちゃんと返してくれる訳だ」

僕達は暗黒大陸に飛ばされた岩礁地帯に戻されてる。白い岩石一杯の光景が広がってるよ。さっきまで暗くジメジメしたところにいたから、この岩も太陽の光も眩しく感じる。
空気は乾いてるし……でもこの暖かさは気持ちいいな。やっぱり日差しってのは大事だと感じるよ。

「さて、さっさとアルテミナスに行こうぜ」
「あれ？　お二人はダンジョンに挑む筈だったんじゃないんですか？」
「んぎっ！？」

足の甲に鋭い痛みが……僕の失言にセラの奴が制裁を加えたようだ。確かにこれは僕が悪いけどさ……けどうっかり忘れるじゃん。
あんな事があったんだ、軽い嘘なんて頭から飛んでるよ。

「あーダンジョンね。そうそう、何言ってるのよスオウ。私たちの冒険の本番はこれからよ」
「あれ？　でもそういえば暗黒大陸ではアルテミナスに戻らないとかとか言ってた様な……そんなの気にもしてなかったけど……」
「うう……」

なんだ、僕だけじゃないじゃん墓穴掘ってたのは。そういえばそんな話普通にしてたよな。スズリさんが突っ込まなかったから、僕もさっき普通に出てきたんだよ。
色々と切羽詰まってたから、スズリさんも気にして無かったんだ

な。でも、もうそれを気に出来る状況に成っちゃったのか……暗黒大陸を経験すればここら辺なんて、なんともないよな。
心の余裕が見て取れるよ。僕はセラを引き寄せて再び耳打ちする。
「流石にもういいんじゃないか？　ここまで関わった訳だし。それに気になるだろ？」
「何がよ」
「スズリさんが大丈夫なのかだよ。このまま一人になんて出来ないぞ」
そう、いつあのゴーストの影響が出るかわからない。一緒にいた僕達としては知らんぷりなんて出来ないだろ。当然関係ないなんてのもいえない。
セラはイヤそうだけどさ、もうただの通りすがりの関係じゃない。
「あの最後のゴーストね……でも、言ったじゃない。私たちに何が出来るでも……」
「だからって一人にするのか？　見守る位出来るだろ。せめてアルテミナスまでとかならさ」
街まで行ければ、取り合えず安心だよ。このままここでまた分かれたら気になるよ。気になって仕方ない。僕のそんな訴えにセラは、大きく息を吐いてスズリさんに向かう。
「どうしたんですか？　ダンジョンには行かないんですか？」
「まあそうね、今日は流石に疲れたってスオウが情けない事を言うから、私たちもアルテミナスに戻る事にするわ。ついでで良いなら付いてきても良いわよ。
アンタじゃ日が高い内に付けるかわからないからね」

僕のせいかよ……と言いたかったけどそこはグっと我慢だ。わざわざ遠回りするよりも良いし、セラが珍しく妥協してくれたんだしな。

でも、今度はスズリさんが気を使ったような事を言う。

「いいんですか？　なんだか僕のせいで予定を狂わせてしまったみたいで心苦しいですね」

「何初心者が殊勝な事を言ってるのよ。どうせ情けないスオウが悪いんだから別にいいの。それに私の予定は、アンタのドジなんかに影響されないわ」

気にするなって言いたいんだろうけどさ、どれだけ意地っ張りなんだよ。普通に言えないのか？　それにやっぱり僕のせいに成ってるし……しつこいぞ。

それに僕達の予定はアルテミナスに戻る事だから、色々と多大に影響されたけどな。まあだけど、ここまで言われたらスズリさんも納得してくれた様だ。

「そうなんですか？　ええ～と、それなら助かります。あと少しの間ですけどよろしくお願いします」

「まあ、大船に乗った気でいなさい。アルテミナスは私の庭みたいな物だからね」

得意げなセラはいい気に成ってる。そういえば僕はスズリさんに聞きたい事があったんだ。暗黒大陸から出れたし、最初に彼に誓ったことを聞きたい。

「ねえスズリさん。どうだった？　あの冒険はさ。最後はちょっとミスったけど、イヤだった？　後悔してる？」

すると彼は思い返す様に目を瞑り、首を横へ振る。

「いえ、全然。刺激的でしたよ。リアルでは体験出来ない事でした。今度は役立たずなんて言われない様になって、リベンジしますよ。

その時は、また一緒に付き合ってくれますか？」

「私たちでいいわけ？　仲間じゃないとか言われたわよ」

「水差すなよセラ！」

折角綺麗に纏まりかけてたのにさ……本当に空気を読まない奴だな。確かに言われたけど、それはセラが仲間じゃないとか言ったからだろ。

「ええと、それは本当にすみません。自分はお二人に守ってばかりだったのに生意気言って……ちょっとそういう事に敏感で……ダメですか？」

スズリさんは会ったときの印象そのままに真摯に頭を下げる。あの狂った姿を知らなかったら、なんて良い人なんだろうと素直に思えるんだけど、あれを知ってると色々あるんだなと思ってしまう。裏って奴が……敏感の域を越えてた気はするけどな。

けど、ダメと言われると別にそういう訳じゃない。てか、このままダメなんて言える分けない。

「そんなわけないですよ。その日が来るの楽しみにしてます」

「まあ、そんな日が来ないこともないかもね」

「ありがとうございます！」

ようやく僕達はちゃんと向き合ったのかな？　なんだか雰囲気も良くなってきたし、早速アルテミナスへ向かう事に。アギト達を待たせてるしな。

「じゃあ急いで行くわよ」
「はい！」
「まあ流石に急がないとやばいからな」

絶対に愚痴垂れるよアギトの奴。僕達は青空の下を駆けだした。やっぱり気持ちよさが違う。心も軽く、空気はおいしい。流れゆく雲を追いかける様に、僕達はアルテミナスを目指す。

「うお～」
「ここがアルテミナスですか～」

僕とスズリさんはアルテミナスにつくなり、そんな声を出していた。ワイワイガヤガヤと予想以上に人が一杯だったんだ。壊された町並みもかなり元通りになってるし、あの残酷な現状を目の当たりにした僕にとっては衝撃だよ。

絶対にリアルじゃ、この数日間でここまで復興は出来ないよ。スズリさんは純粋に驚いてる様だけどさ、僕も負けない驚きしてるからね。

「どう、結構復興したでしょ？　更地のままにはしておけないからね」
「結構てか、かなりだろこれ。前ともう遜色無いじゃん」

どれだけ部下をこき使ってるんだよ。まあどうやって直してるのかは知らないんだけどさ。

「ふふ、家の技術を甘くみない事ね」

中に足を踏み入れると更に復興した具合が良くわかる。てか、光明の塔も戻ってるじゃん。

「綺麗ですね。アルテミナスは」

「当たり前よ。この世界一なんだから。まあ私達はちょっと用があるから、案内出来ないけど良いわよね？」

「はい、ここまで連れて来て頂いただけで十分です」

流石にアイリ達の所まで連れていく事は出来ないか。もう既にセラは分かれる気満々みたいだしな。そこら辺は無理を通す訳にも行かない。

立場とかあるしな。なんせアイリは王女様だし。気になるけど、これ以上は本当にどうしようもない事か。ずっと見守る事なんか出来ないしな。

「これからはもっと気を付けた方がいいですよ。スズリさんしっかりしてるようで抜けてるから。それに今度は、一回切りじゃない仲間も出来ますよ」

「はい、でもがんばっていつか二人に恩を返しに来ますよ」

「まあ、期待せずに待っててあげる」

セラはまた嫌みっぽく……たく、しょうがない奴だ。行き交う人混みの中、僕達は互いに手を振って分かれる。こんな出会いと別れが、ＬＲＯでは日々繰り返されてるんだな、とか何となく思った。

帰還想到（後書き）

第百九十三話です。
ようやくアルテミナスへと到達出来ました。たく、大層な手間がかかりました。でもこれからに繋がる事が一杯だったのでしょうがないかなって感じです。これからは大きくＬＲＯ全体を巻き込んでいく事に成りそうな……
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

向かう方向（前書き）

僕とセラはスズリさんと別れて、アルテミナス城を目指した。そして始まる、こられからの事の話し合い。まあ議題はもう一個増えちゃった訳だけどさ、でもそれも重要なことだ。

会するのはアルテミナスの偉い人達と、僕の馴染みのメンバーだ。

向かう方向

漂う重苦しい空気……外の喧噪から完全に隔離された様なこの空気が苦しい。

（どうしてこんな事に……）

そんな事を思わずには入られない。そりゃあ確かに待たせたのは悪いと思うけど、こっちだってあんな事に成るなんてわかるわけないじゃないか。

ちゃんと戻って来たことをまずは喜んで貰いたいよ。僕はアルテミナス城の一つの部屋でなんだか被告人みたいに座らされてる。

正面の一段高い場所にはアイリがいて、その前にアギト、傍らにはセラが控えてて、右横にはテッケンさんにシルクちゃんに、なぜだか鍛冶屋まで。鍛冶屋の野郎、あの戦いの時いたっけ？

あとはリルレットにエイルもいるな。僕のこの状況にニヤニヤしてるよ。

そして反対側には、目が点エルフのノウイを含めた、多分幹部か何かだろうのエルフの面々。これからを話し合うって聞いてたけどさ、裁判でも始まりそうな雰囲気なんですけど……

スズリさんと別れた後、僕達は真っ先にアルテミナス城へ向かった。行き交う人々をかき分けて、出来る限り急いださ。

到着したアルテミナス城も人一杯だった。慌ただしく中と外を行き交う人人人。するとそこでセラが「ちょっと待ってて」とか僕を待たして中へと入ったんだ。

（なんで待つ必要が？）

とか思ったよ。だって一緒に入ればいいじゃん。アイリ達は待ってるんなら、そっちの方がいい。だけセラが言うには

「アイリ様はＶＩＰなのよＶＩＰ。違う種族の奴がそう易々と会えるとか思わないで。アンタは意識してないようだけど、特別なことなんだからね」

てな、事らしい。まあ確かにこのＬＲＯで一番の勢力のエルフ達の親玉がアイリな訳だからな。そりゃ相当なＶＩＰなんだろうけど……僕的にはアイリはもう友達みたいなもんだからさ、そこら辺気に出来ないよ。

リアルでも会ってるし……なんだか王女様って気がしないんだよな。それにアギトは結局アギトだしさ。

アイツも立場戻ったらしいけど、僕的には何が変わる訳でもないんだ。

ぶつぶつ文句言いながら、周りの慌ただしさを遠めに見てると、ザッザッザと城の方から足並み揃えた行進音が聞こえてきた。

なんだか更に周りがザワザワしだす。何事かと思って城門を見ると、軍の甲冑に身を包んだ奴らとそれを率いてアギトの野郎が出てくる所だった。

（今から出兵でもするのか？　ようやく着いたってのに、どうするんだよ）

とか思ってたら、黒い鎧に身を包んだ奴らが僕を囲んだ。

「え？」

そんな声を漏らすと同時に、アギトの奴は険しい顔で僕を睨んでこう言った。

「連行しろ」

「うおっちょ！？　アギト、何のつもりだ！？」

一斉に軍の奴らに羽交い締めにされる僕。何々？　何やった？　こんな仕打ち受ける覚えはないぞ。僕の言葉に何も答えず背中を向けるアギト。そして僕は大注目の中、城へと有無を言わさず連行されて行きました。

そしてこの状況が出来上がった訳です。

「あのさ、どういう事これ？」

僕はこの空気に耐えきれず、恐る恐る声を出す。すると有無を言わさず、傍らのメイドがこう言った。

「うるさい、黙れ被告人」

「て、ちょっと待て！！　何でお前はそっち側なんだよ！？」

まあアイリとかアギトが、ここでは偉そうにするのは百歩譲って納得するよ。だけどセラが一番楽しそうにしてるのが気にいらない。だっておかしいだろ！　僕と一緒に着いた筈のセラが、なんでアイリ達と同じ立場！？　一緒に小さくなって座ってろ。それに被告人って何だよ。

「私はアイリ様専属メイドなので、ここが指定席なの。それよりも頭が高いわよ、下手人の分際で」

「あんの、極悪メイド……」

被告人が下手人に格下げされた。まあどっちが下かなんて知らないけどさ、下手人って古くて貧乏そうなイメージがあるから、僕の中では下なんだ。

言いたい放題なセラは、ホームだからってヒドすぎないか？　いつもより楽しそうに僕の事を罵倒してるように見える。

「セラ、そこら辺にしといてください。別に彼は被告人でも下手人でもないんですから」

「まあ、アイリ様がそう言うのであれば、私は下がります」

アイリの言葉で、そそくさと自分の立ち位置に両手を組んで佇むセラ。

（そのまま石に成ってくれないかな）

僕はそんな事を願う。だって口を開けば罵倒されるからな。だけど妙に変な所で勘の鋭いセラは、そう願った瞬間に僕を睨む。

（今失礼な事を考えたわね）

そんな声が、その視線から聞こえる気がする。まあ、セラが大人しく成ってくれたからビビる事もないさ。僕はアイリへと視線を向けて言葉を紡ぐ。

「あのさ、僕は被告人とかじゃない……なら、どうして連行されたの？」

「それはまあ、色々ですよ。今アルテミナスは慌ただしいですからね。それを狙ってる他の国も無いとは言えません。

城くらいは厳重に警備してる所を見せないと」

それに僕が使われた訳か？　うん？　いや、それって……

「もしかしてその狙ってるってのは人……人間なんですか？　だから人の僕だけをって事？」

「明言はしません。だけどまあそんな所です。それよりもこれからのお話をしましょう。それと暗黒大陸でスオウ君が出会ったと言う人の事も、詳しく聞きたいですね」

「まあそれは良いんだけど……」

僕は周りを、特にエルフの面々が入る方へ目を向ける。するとアイリは何かを察したのか、僕を安心させる様にこう言った。

「ああ、大丈夫ですよ彼らは。ちゃんと信頼に値する人たちです。ここまでされた以上、私達も指をくわえてる訳にも行きませんから、アンフィリティクエスト――それにアルテミナスは全面的に協力しましょうって意志の現れです。

彼らの事は私が保証しますから、どうかお願いします」

アイリは立ち上がり、僕へ向かって頭を下げる。すると周りのエルフの人たち全員が立ち上がり、アイリに続いた。おお、流石の統率力。

まあ別に、アイリの言葉を信じない訳はないけどさ。それに流石に、これまで通りのやり方じゃ、シクラ達に追いつけないかも知れないってのはある。

世界最大級の国の力は願ってもない事だよな。情報だって、個人とは比べものに成らないだろうし。するとエルフ側とは反対側のテッケンさんが彼らをフォローするような事を言う。

「このクエストはもう、君達個人の問題じゃ無くなってしまったよ。僕達は勿論協力を惜しまないけど、流石に限界が来た感じはしてしまう。

折角ここまで真摯に頭を下げてくれてるんだから、信用できるよ。いや、僕達は信じる事から始めなければね」

「テッケンさん」

相変わらず格好良いなこの人は。きっとモブリの中で一番格好良いと思うよ。小さくても格好良さには関係ないと、この人を見てると思うよ。

リアルでもきっと格好良いんだろうな。勝手な妄想だけど。

「スオウ、大丈夫だって言ってるだろ。アイリの事が信じれないのか？　あん？」

「ああもう、暑苦しいんだよお前は。別にアイリを信じてない訳じゃないっての……」

たく、チンピラかよアギトの野郎。アイリとやっとで一緒に入れるからってハシャいでるんじゃないか？　別に話さすのはやぶさかじゃないけどさ、どこまでこの人たちは知ってるんだって事だ。

ガイエンの事とか話してるのかな？　まあ、そこら辺は別に僕が言う事じゃないか。僕はチラリとシルクちゃんへ視線を移す。するとビクッとしてモジモジして……うん、何とも癒される可愛い子だ。

いつまでも見てられそうです。でも、僕の視線に、何かを求められると思ったらしいシルクちゃんは、一生懸命意見をくれる。

「えっと、私はスオウ君が決めれば良いと思います。私達は手伝う事しか出来ませんから。でも……手を差し出してくれる人たちがいるってのは幸せな事だよ」

癒される微笑みをくれるシルクちゃん。ゆったりした服に白い髪が微かに揺れて、僅かに染まる頬と共に作り出されるその笑顔はまさに天使だ。
スゲーよ、ＬＲＯの完成度スゲー！　シルクちゃんがそう言ってくれるなら問題ないな。

「わかりました」

僕はそう言って立ち上がる。そしていつまでも頭を下げてくれてるエルフの人達の方へ向いた。こんなにいつまでも頭を下げてくれてるんだ。こっちも礼を尽くすべきだよな。

「確かに、もう僕達だけの力じゃどうにも出来ないのかも知れない。だからどうかみなさんの力を貸してください」

すると一番初めてにアイリが頭を上げて透き通る声でこう言った。

「はい、勿論。私達はそのつもりです」

はは……なんだか最初に会ったときとは随分印象が違う感じに成ったな。初めて見たときは、俯いて歩くただのか弱い女の子だったのに、今はもう弱々しいなんて部分は見えない。
ドレスにまで負けてた雰囲気は、今はそのドレスを引き立てる程だよ。自信に満ちてるし、凛としたその雰囲気はまさに王女様って感じだ。
まあどこか優しい雰囲気もあるのも良いんだろうな。エルフの人達に愛されるのがわかるよ。

僕達はアイリの着席にあわせて再び席に着いた。てか、この状況はどうにかしてほしいんだけど……なんか視線が集まるから落ち着かないよ。
でも僕が喋らないと始まらないんだよな。なんかみんなそれを待ってるし。

「ええ～と、どっちから行けばいいわけ？　これからの事？　それとも暗黒大陸？」
「暗黒大陸での事からお願いします。それはきっと、これからの事に重要ですから。まずはその情報がほしいです。
スオウ君は会ったんですよね？　テトラ神と」

するとそのアイリの言葉で周りの人達が少しざわめいた。それはテッケンさん達も同じ様だ。やっぱりアイツはＬＲＯでかなり重要な奴の様だ。
僕はシナリオ部分を殆どやってないから知らないけどさ。

「ええ、まあ。本当に本人かは知らないけど、アイツはそう名乗ったよ」
「ほ、本当にテトラって言ったんだね？」
「そう……聞こえましたけど」

テッケンさんまでその小さな体で、前のめりに成るようにして問いつめてくる。う～んやっぱり相当な事なのかな？
「まあ、アイツが二人の神の内の一人ってのは聞きましたけど……たった一度会ったくらいの事が、そんなに重大なんですか？」
僕は何気にそう言ったけど、その質問はちゃんとＬＲＯをゲームとしてプレイしてる人達にとっては痛恨の極みみたいな……そんな

感じだったらしい。

「じゅじゅじゅ重要だよ！　テトラ神の姿はまだ誰も知らなかった訳だからね。銅像だって無いし、ＯＰには映像だって映らない。
　もしかしたらラスボスなんじゃないかって言われてるくらいだよ」
「へぇ～そうなんだ。流石テッケンさん」

　ラスボスね。ＬＲＯの壮大な冒険のラスボスなら、確かにスゴい事だな。まあでも、ラスボスね。最初襲われただけの印象なら、それもあり得そうなんだけど、その後の事まで入れたら、なかなかそうは思えないような気もする。
　アイツ真剣そうだったし。

「テトラ神との邂逅は、確か今攻略組が躍起になって狙ってる事だと聞きました。それを誰よりも早く成し遂げたんですからスゴい事ですよ」
「成し遂げたって言ってもな……」

　そんな気、自分には全然無かったわけだからどう思えば良いのやら。それに横から割り込んで来た状況で、変な契約もさせられたし、僕にとっては迷惑極まり無かったけど。

「それで、テトラ神とは何を話したんですか？」
「ええ～と」

　僕はあの時の出来事を包み隠さず話す。途中色々と質問来たけどそれは切り捨てて、まずは自分が体験したことを話しきったよ。
　巨人が残したアイテム。それを狙って現れたテトラ。でも途中で目的を変えた事。そして交わした契約――そこまで話した瞬間、アギトが勢い良く立ち上がった。

「お前また！！　なんでいつだって真っ先に命を懸けるんだ！？」
「知るかよそんなの……そう言う流れだったんだ。仕方ないだろ」
「仕方ないってお前……日鞠の事もちょっとは考えろ！」
「何で今ここでアイツの名前が出てくるんだよ？　関係ないとは言わないけど、死ななきゃいいだけだ」

そうすればアイツの元へいつだって戻っていける。だけどアギトの奴は、本当に真剣に僕を見つめてこう言った。

「死なせはしねーよ俺たちが。でもなスオウ。そうじゃなくてもアイツはいつだってお前の心配してるんだ。
あんまり気苦労増やすなよ。いつだって……いつまでだって一緒にいられるなんて限らないだろ」
「そんなの……」

お前に言われる間でもない――とか言いたかった筈だけど言葉には成らなかった。てか、自分の教訓をアギトの奴は語ってるじゃん。
まあそれほどに身に染みたって事なんだろうけど……一緒にいられないね。上手く想像出来ないな……日鞠がいない日常なんて。
アイツ強烈だから、忘れようとしたってきっと忘れられないんだろう。まあでも、あの時だって考え無かった訳じゃない。寧ろ、これは日鞠との約束でもある。

「でもさアギト、僕はセツリをここから連れ出さなきゃいけない。それは日鞠との約束でもあるんだよ。約束破ると怖いじゃんアイツ。
だからこそ多少無茶はやらないとな」
「多少って……お前の賭けてるのは命だろ。多少じゃないだろそれは。もっと考えて行動しろって言ってんだ」

呆れる様に息を吐くアギト。一応これでも考えて行動した結果なんだけど……だから僕は真剣な顔して返す。

「強く……強く成らなきゃダメなんだ。テトラは言った。強くなれるってな。本当かどうかはわからないけど、でもこのままじゃダメなのは確実なんだ。

そうだろアギト……いや、それはテッケンさん達だって感じてる筈だよ」

僕の言葉にみんな考え込むように沈黙する。ここにいる大半は、あの戦いに加わってる。きっとＬＲＯ史上最も大きな戦いに成ったであろうあの戦いで、自分達が向き合った敵の強大差を感じなかった奴はいないだろう。

乗り越えれたのは、今考えたら結構奇跡みたいなもんじゃん。そんな風に思いたくはないけど、実力的には僕達は劣ってた。奴らの目的がアルテミナスの消滅だったなら、今こうしてここに入れたかわからないんだ。

シクラ達は自分達の目的は達した。だから去っていった。でも……それでたった一人が目覚めない眠りに落ちた。僕達は決して勝ってなんていないんだ。

すると誰もが黙ってる中で、アイリが静かに声を出す。

「確かに、今のままじゃダメなのかも知れません。次が会ったとしても私達は負ける気は無いですけど、でも彼らの強大差はこの身を持って体験しました。

スオウ君はセツリさんを助けないといけない。それには力が必要。求めない訳には行きませんよね。だけど本当に死に急ぐ様な真似だけはしないでください。

日鞠ちゃんとは私も友達ですから、悲しむ所なんて見たくありま

せん」
「それは、僕だってそうですよ。アイツは存在自体がバカらしいけど、そのバカらしさが毎日を楽しくしてくれてるんですからね」
言われる間でもないこと……誰が一番ずっとアイツと付き合ってるって思ってるんだ。僕が一番、アイツを泣かしたくないって思ってるよ。
だからこそ、死ぬ気なんて無い。それにここで死んだりしたらさ、セツリにだって変な物を背負わせる事に成るよ。僕は物語はハッピーエンドしか認めちゃいないんだ。
そうなるためには、誰も欠けちゃいけない。そう思う。
すると横からテッケンさんがこう声をかけてくれる。
「大丈夫だよ。僕達が君を死なせはしないさ」
「ええ、私達がちゃんとフォローします」
「お前が行くところは、珍しい武器がありそうだからな」
シルクちゃんに鍛冶屋も協力的だ。だけどそこでエイルが気だるそうにもの申す。
「まあ僕達は今回たまたま協力しただけだけどさ。どうしてもって言うなら、僕達だって協力してやってもいいよ。ねえリルレット」
「もう、またエイルはそんな意地悪い事言って。話したでしょ、スオウ君はエイルが柱にされた時、一生懸命にだね」
「ああ〜〜そんなのしらね〜」
耳をパタパタと両手で叩くエイル。たく、同じモブリのテッケンさんをもうちょい見習えよと思うね。全然タイプ違うから無理だろうけどさ。

しょうがないから、僕も嫌味にこう返してやろう。
「別にいいよリルレット。無理に付き合わせる事無いし。だから――リルレットだけにお願いするよ」
「なっ！？」
くわっと目を見開くエイル。
「え？　でもそれは……」
「エイルはイヤだと言ってるけどさ、リルレットもそうなの？　リルレットが居てくれると心強いな僕」
「えっと……」
僕の言葉に少し頬を染めて視線を逸らすリルレット。そんな様子を見て、エイルの奴は肩を震わせてた。そしておもいっきり机を叩いて立ち上がる。
「ふざけるなあああ！！　そんなの俺が認めない。死ねよお前。リルレットを口説くな！」
「何でお前がそんなに怒るんだよ。それに別に口説いてないし。お願いしてるだけだ」
「なら僕にもお願いしろよ！　這い蹲って頭を地面に擦りつけろやこらあああ！！」
「ええ～そこまでして別に来てほしい訳じゃないし、いいよ別に」
怒り心頭のエイルの言葉を投げやりに返す僕。もうからかい半分だけどね。リルレットの事になると、直ぐに怒るんだから面白いよこいつ。
するとそんな僕達を見てたアイリがパンパンと手を叩く。

「そう言う事は後でしてください。ではこれからの事を話しましょう」

これから……それが一番大事だな。

「取り合えずスオウ君は五日以内にもう一度テトラ神に会わないといけないんですよね？　こっちも復興が終わるまではそんなに動けないし、取り合えず情報は集めてみます」

五日ってよく考えたらかなり急だよな。テトラの野郎も無理難題を突きつける物だ。てか、五日ってどう換算したらいいのだろうか？　ＬＲＯに居る間での五日なのか？　それともリアルに戻ってる間も入れて五日なのか？　その場合は、五日後にＬＲＯに入らなかったら、どうなるの？　次に入ったときに紋章が広がって死んじゃうんだろうか？

まあそんな事考えても意味ないか。それよりも僕も死なないようにやるべき事の道しるべを見つけないといけない。

テトラの奴は、この金魂水を使えと言ってたけど、そのクエスト探し出してって事だろう。ただ使ったって意味はない。

アイツの目的が達成出来る使い方があるはずだ。だからその情報をアイリも探してくれるって事。うん、ありがたいな。僕は素直にお礼を言って頭を下げる。

「それじゃあアギト。協力してあげて、今まで通り」

「良いんですか？　結構偉いんでしょこいつ？」

「こいつってお前な……」

だってアギトはアギトだから……それにようやく一緒に入れる様に成ったのに。国民公認だろこいつら、それを連れ回すのはどうだ

ろうかって思うよな。
　するとそこで手を挙げる人物が一人。
「アイリ様、恐縮ですが私が行きます。今アギト様が国を離れるのは得策ではありません。この期を狙ってる国もあります。アギト様の存在はそんな国への権勢に成りますので」
「それはそうだけど……いいのセラ？」
「ええ、アルテミナスを裏切る様な行動をしたら、後ろから刺しておきます」
　にっこり笑ってなんて物騒な事を言うんだあのメイド。でもそれを冗談としか受け取らないアイリは快く認めた様だ。
「では、こんなものでしょう。後は有力な情報が入り次第ですね。解散と行きましょう」
　そんなアイリの締めの言葉で、この会議は終わりを告げる。いつの間にか空は黄昏色に染まってる。

向かう方向（後書き）

第百九十四話です。
今回は本当にただどうするかってだけです。とりあえずそれぞれの役割を決めて、出来る事をやるしかない。でも今回から国と言う大きな物も関わってくるから、色々と面倒な手順があるのです。
今までは行き当たりばったりだったけど、これらからは計画的にって事で。
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

掛け橋の続き（前書き）

会議も終わって、お偉いさん方は慌ただしく部屋から出て行った。残ったのはいつもの面々＋アイリとセラ。そんなアイリが励ますように僕達を励ましてくれる。そして再びこのメンツでの話し合い。

それはそれぞれの進む道を決める事だった。

掛け橋の続き

部屋から出ていく面々を見送りながら、僕は高い高い天井を見上げた。結局は情報が上がってくるまで何も出来ないって事……でもそれで大丈夫かって思うんだ。

するとそこにアイリが近づいてこういってくれる。

「大丈夫ですよ。家の情報網は凄いんですから。大抵の事はわかります。連戦が続いてるんですから、少しだけ休んだらどうですか？」

「休むって……たった五日しかないんじゃじっとなんてしてられないよ」

そうたった五日。別にアイリの言葉を信じてない訳じゃ無いけど、ただ待つなんて事が出来る程の余裕はない。ましてや休むなんて無理だよ。

まあアイリもそんな事わかって言ってそうだけどさ。

「そうですか。まあスオウ君はそう言うと思ってました。ですが宛があるのですか？　無闇に動き回られても困りますけど」

「メールがあるじゃないですか、情報はそれでくれれば良いですよ。どんなクエストかもわからない今は、それで良いじゃないですか。

そりゃ僕は情報集めとかやった事無いけど、このアイテムを持ってるのは僕だけです。情報が上がらない事だってありますよね？」

僕の言葉にアイリは苦い顔をした。ちょっと眉を潜めて、それでも可愛い顔を見せる。

「確かに考えたくないけど、今まで一度も現れてないそのアイテムが発生条件なら、あり得ない事ではないかも……どうするのですか

？　もしそうだったら間に合わない可能性だって……」

その言葉に残ってる人達ともども沈黙が部屋を支配する。遠くで何かカンカン聞こえる音だけが断続的に響いてた。

「アイツは……テトラは僕ならやれるって言ってた。それはある意味、僕にしかやれないとかなのかも知れない。どこをどう行けば良いのかなんて全然わからない。

少しはヒントをやれってアイツには言いたいな」

「結局は何も宛はないって事でしょう」

横から割り込んできたセラが、グサリと来る言葉を言いやがる。まあ確かにそうなんだけど。僕はなんとはなしに、自身に浮かび上がる紋章を見つめる。手の甲だけだったそれは、もう既に手首に進出しだしてた。

こうやって進んでる様を実際に見ると、実感が沸いてくるな。冗談とは思っちゃいなかったけど、強さの為に命を懸けるのも大変だ。

するとそこで、ぽつりとこんな声が横から聞こえた。

「その模様……何かどこかで見たような……ちょっと甲の部分を見せてくれないかい？」

「ええ、良いですよ。何かわかるのなら尚更です」

そう言って僕は、机に乗ったテッケンさんへ手の甲を向ける。難しい顔をしてそれを見つめるテッケンさん。これでなにかわかれば良いけど……けどそんなに甘くはない様だ。

「う～ん、どこかで見た様な気はするんだけど、出てこないな。済まないスオウ君、手間を取らせて」

「いえ、別にそれは良いんですけど……八方塞がりですね。やっぱり情報に期待するしか無いのかな。
それかＲＰＧの基本に立ち返って、町を巡ってＮＰＣに聞きまくるとかどうでしょう？」

やっぱりＲＰＧはそうやって進めて行くものだしね。でもこの提案は直ぐに却下された。

「アンタね、宛も無くＮＰＣに聞きまくるって一つの町にどれだけＮＰＣが居ると思ってるのよ。小さな町でも五十は普通に居るわよ。
アルテミナスなら三百位は居るわ。その人数に会話が変わるまで聞き込むと成ると、五日じゃ全然足りないわよ。それこそ宛もなく出来る事じゃない」
「それはそれだけど……」

でもそんな事言ってたら何も出来ないじゃん。やれる事をやるなら――ってやっぱり三百は無謀か。一つ二つ位の町しか回れないのなら意味はないかもしれないしな。

「テトラ神の事はよくわかってないですからね。対に語られるシスカ神の事なら、ミッションやクエストで偶に出たりしますけど……」
「テトラとシスカか……」

アイリのそんな言葉を聞いて呟く様にそう言う僕。ゲームだからってそこら辺は無視しちゃいけないことかも知れないな。
ここに生きてるアイツ等には、ちゃんとした記憶があるんだろう。それなら……

「攻めてみるのはそこら辺しか無いのかも」
「二人の神を調べるって事ですか？　まあ確かに、意味は無くはな

さそうですね。スオウ君の話では、テトラ神は何かを望んでる様ですし、その金魂水で何が出来るのかの謎はそこにあるかも知れません」

するとそこで再び小さな手が上がる。

「それならアルテミナスよりも、『ノーヴィス』の方が良いんじゃないかな？」

「ノーヴィスって？　国ですか？」

僕の何気ないそんな言葉に、リルレットの横に居るもう一人のモブリが吹き出しやがった。

「ブッ……お前マジで言ってるのか？　本当に何も知らないんだな。少しはこの世界の事知っておけよバカ。ノーヴィスってのは俺達モブリの国の事だよ。

そしてそこそが、シスカ信仰発祥の地なんだ」

「へえぇ～ってお前に言われるとなんかムカつくな」

エイルが得意気にしてると腸が煮えくりかえりそうだ。大げさだけどさ。けどそうか、モブリの国ね。

「てかシスカ信仰とかあるの？」

まずそこ初耳だ。すると少し困ったような笑顔でシルクちゃんが説明してくれる。

「ＯＰでも流れた筈ですが……シスカ神は五種族の生みの親ですから、信仰に成ってもおかしくないですよ。このＬＲＯの世界での最大宗教がシスカ信仰です。

その総本山もノーヴィスにあります」
「なるほどね」
確かにそこなら二人の神のいろんな話がありそうだ。少なくとも騎士の国のここよりは、テトラに近そうな気はするな。
あれ？　でもあいつは邪神だったっけ？
「邪神のアイツの話もあるのかな？　そういうのって消されてそうな感じじゃないか？」
「そこは大丈夫じゃないでしょうか？　シスカ神とテトラ神は切っても切れない関係で描かれてますから。それに悪が無いと正義は際だたないじゃないですか」
おお、シルクちゃんがなんか小悪魔っぽい事言っている。なんだかドキドキしちゃうな。まあでも、それなら迷う必要ないか。
「ノーヴィスか……行ってみる価値はありそうですね」
「よし、そうと決まれば早速出発だね！」
テッケンさんがノリノリで机から飛び降りる。僕もイスから立ち上がった。そしてアイリに向く。
「え～とまあ、自分に出来る事を僕達はやります」
「そうですか」
頷く様に目を閉じてくれるアイリ。するとそんなアイリの肩を抱く奴が来た。そのまま自分の胸に引き寄せる様にしたのはアギトだ。
おーおー見せつけるじゃないかアギトの奴。
「まあこいつは勝手に進んでいく奴だから……こっちはこっちでや

れる事をやろう。俺は行ってやれないんだから、勝手にのたれ死ぬなよ」
「当然」

アイリはアギトの腕に抱かれてちょっと照れくさそうだけど、嬉しそうだ。こうやって見てるとアギトが年上に見えるけど、リアルじゃアイリの方が年上なんだよな。
なんだか複雑だな。なんかアギトが同い年に見えない。変な余裕を感じるよ。

「セラ、スオウを頼むよ。俺の代わりにさ」
「いえ、そんな……お目付け役はお任せください」

アギトに対しては相変わらず礼儀正しい奴。僕とのこの態度の差は何だろうか？　まあ初めからなんだけど……

「さて、貴方達はどうするんですか？」

セラは、まだ座ったままのシルクちゃん鍛冶屋、それとエイルにリルレットに声を向けた。真っ先に立ち上がったのはシルクちゃんだ。

「私は行きますよ。ちゃんと協力すると決めてますから」
「ありがとうシルクちゃん」

ん？　そう言えばさっきから何か足りない感じがしてたけど、それがわかったぞ。

「そう言えばピクはどうしたの？　見当たらないけど？」

そう、シルクちゃんの側には桜色の小竜が居るはずだ。だけど今はその姿が見えない。ピクがシルクちゃんの側にいないなんて、なんか物足りないな。
いや、一人でも十分完成されてるけどさ。

「ピクは中庭で待っててくれてます。ピクがいるとみなさんの気が散っちゃうかなって思ったので」

ふむ、まあ目立つしね。僕は「そっか」と答えた。

「んで、鍛冶屋は？　お前今までどこにいたんだよ？」

そんな僕の失礼な問いかけ。だけどほら、知り合いだし。仲間だしね。でもあの戦争の時、鍛冶屋の野郎がどこにいたか記憶に無いんだよね。いや、一緒にアルテミナスに来たはず何だけどね。
ここに居るって事はさ。すると鍛冶屋は、腕組みをしたまま、その顔に刻まれた模様を濃くするようにこう言った。

「失礼な奴だ。俺はちゃんといたさ。最初から、そしてこれからも。俺は武器にしか興味はないが、お前の側には良い武器が集まってくるからな」
「それは……一緒に来るって事か？」

重々しく頷く鍛冶屋。面倒な奴がここにもいたよ。まああの戦いの時に、どこにいたのか忘れてる僕としては、突っ込みにくいけどね。
そして最後に、僕は仲良し二人組へと目をやった。それはエイルとリルレットだ。この二人こそ行き当たりばったりだからな。

あの戦いに参戦したのだって偶然みたいな物だったし。まあアホ

の偶然だったけどさ。危ないと言われてたアルテミナスにのこのこやってきたんだからな。
でも、この流れで来た以上、聞かなかった失礼だしな。エイルの奴もうるさそうだし、リルレットだけで十分だけど、まあ二人に聞くさ。

「で、お二人さんはどうするの？　てか、これからも僕達に関わるの？」

まずはそこからだよね。そうなら覚悟が必要だ。また同じ様な事が起きないとも限らないし、それに……僕達といるともう一度奴らとぶつかるのは避けられない。
シクラに柊、それにその姉妹とガイエンから出てきた黒い奴だ。あんな戦いをこれからもし続けていく覚悟。エイルは分かってるだろう、それがどういう事か。

「関わるのかって、随分蚊帳の外の様な言いぐさだなスオウ」
「だってそうだろ、二人はまだ本格的に関わってる訳じゃない。これから先も一緒に来るなら、それは覚悟も必要だ。
でも、まだ二人は後戻り出来る。ここでストップ掛けれるよ。普通にこれからもＬＲＯを二人で楽しんでいける。その選択権をその手に持ってる」

それは僕には無かったものだ。巻き込まれるままに走り続けたらさ、いつの間にか落っことしてたよ。でも二人はそうじゃない。
その手にはまだ選ぶ権利がある。

「僕は別に『来るな』とも言わないけど、『来てほしい』とも言わない。それを決めるのは二人だよ」

二人は黙ってる。これからをきっと考えてるんだろう。普通に楽しくＬＲＯをやりたいのなら、来ない方がいい。それに取りあえずも止めた方がいい。そんな生半可な気持ちじゃ、どうなるか分かったものじゃないからな。

テッケンさんやシルクちゃんや鍛冶屋は、ある意味ベテランだからそこら辺は心配なんてしてない。寧ろ向こうが僕の事を心配してるだろしさ。

でもリルレットもエイルも、僕と変わらない程度の時間しかＬＲＯをやってない筈だ。だから……少し不安だろ。まあ二人はあの戦いの時よくやってくれた。リルレットもエイルも、どちらかが欠けてたら、あの結果は変わったかも知れないって程にさ。

だけど……だからってこれからも戦い続けなくちゃいけない義務なんて二人にはない。

「来てほしいも言わないか……この薄情野郎」

そんな言葉がエイルの口から漏れた気がした。別に来てほしくない訳じゃないけど、それはズルい気がするんだ。僕は命を懸けてる。それじゃあ命懸けの頼みだよ。

それこそ重荷だろ。そう言うのは誰にも背負わせちゃいけない物だ。

すると沈黙を破る様に、肩を震わせながらリルレットが場を破る。

「私達は――」

「だめだリルレット！　もっと良く話し合おうよ」

するとそれを制したのがエイル。エイルはジッとリルレットの目を見つめてる。その気迫に負けたのか、リルレットは再び椅子に深く座った。

なんてリルレットは言おうとしたのだろう？　いや、それは多分、エイルの言葉が示してる。それとも、どちらにしても良く話し合おうって事だったのかな。
するとここでアイリが歩み出てきてこう言った。
「良く話し合う事は大切ですよ。出発までみなさん準備もあるでしょうから、その間に考えをまとめてはいかがでしょう？
そうですね三十分後位にまたこの部屋に集まって頂けますか？」
三十分……あれば二人も十分かな。僕達は反論の余地も無いから頷く。最後はエイルとリルレット。
「分かりました。その間に決めときます」
「はい、ちゃんと二人で話し合って」
二人はそう言ってくれた。そして各解散する。三十分後ここもう一度集まるためにね。みんなやっぱりそれなりに準備が必要なんだな……と、僕は脳天気に思ってた。
だって、僕はせめてアイテムを自分の部屋で整理するくらいしか無いよ。まあ、あの戦いでいつの間にかアイテムがどっと増えてたけどさ、殆ど売ったしね。
三十分、僕が一番暇なんじゃ無いだろうか？
「どうするかな～」
僕は一人呟き、外が見えるテラスにもたれ掛かってる。上から見ると、まだ出来てない建物とかが一杯見える。傍目にはもうかなり復興してると思ったけど、こうやってみるとまだ出来てない所も結構あるな。

慌ただしく行き交う人が一杯だ。だけど……誰も彼も生き生きしてる。そう見える。スレイプルの集団とかも居るな。

顔に模様を刻んだ種族ね。鍛冶屋の同類。アイツ等は職人タイプだからアイリが呼んだのかも知れない。すると後ろに人の気配が、僕は何気に後ろを確認しようとすると頬に熱い何かがかすった。

「へ？」

なんだか頬から赤い液体が流れ出てる様な……こんな所に敵？と思って勢い良く剣を抜き去り振り返る。するとその襲撃者の姿を見て再びおかしな声が出た。

「は？」

そこに居たのはメイドメイドメイドの人たち。みなさんセラと良く似たメイド服を着てらっしゃる。そんな、この世界に暴力メイドがこんなに大勢？　とか思った。その真ん中のメイドさんの手には見覚えがある細長い武器が握られてるし……

そして僕を攻撃したであろうそのメイドは、凄い睨みを効かせてこう言うんだ。

「よくも……よくもセラ様を誑かしたなこの人間風情が！！」

ジャキーンと周りのメイド達全員が同じ武器を構える。その瞳には余すことなく全員に殺意が見える……気がする。てか僕の肌はその殺意を感じて鳥肌が立ってるよ。

何がなんだか分からない。でも取りあえず変な誤解を解いておく方が良さそうだ。

「ちょっちょっと待てよ！　誑かしたって僕は何もしてないっての！　アイツが勝手に付いてくるとか言い出したんだ！　僕は何も言ってない！」
「何もしてない？　当然です！！　何かしてたらその口が開く前に喉を切り裂いてますよ！　でも分かってるんです。貴方がセラ様に泣きついた事！
あの方は優しくそしてお強いから、貴方の様な雑魚でも命の危機と分かれば放ってはおけない。そんな優しさを利用してると！！」
……今なんて言ったよこの子？　余りにも想像からかけ離れた言葉だったから、脳が理解しなかった。だから僕は、今にも一斉に投げつけて来そうな態勢を取るメイド軍団の烈火の勢いにも関わらず、手を前に出して制止の合図。
そしてこう聞いた。
「えっと……ごめん。なんだか良く聞き取れなかったんだ。特にセラがどういう奴かの部分ね。そこら辺もう一度お願いします」
するとその問いに、攻撃態勢のまま答えてくれた。
「たく、良くお聞きなさい人間！！　セラ様は強く、お優しい立派な方なのです！！　そんなあの方の優しさにつけ込んでの暴挙……アイリ様は騙せても、私達は騙されません！
地獄に堕ちろや！」
最後の所の言葉は、歯をギチギチ鳴らしそうなヒドい顔で言ってた。女の子にあるまじき顔だよ。けどそれよりも僕はこいつらに言いたいことがある！
でもこれを言ったら殺されるかも知れない。けど、言わずに死ぬよりましさ。僕は一斉に武器を投げようとするメイド部隊に向かっ

て、大声で叫ぶ。

「ちょっと待て！！」

するとガクッと勢い削がれる彼女たち。けど、闘志までは削がれてない。鬼を殺す程の顔で僕を睨んでるよ。

「言っときますけど、命乞いしてもだめですから。私達を止めたいのなら、今ここでセラ様からは手を引くと宣言なさい！！」

「だから何の話してるんだよお前達は！！　そんなの全部誤解だって！！　僕がセラを誑かす？　はっ、あり得ないね。

そんな時間が有るのなら、シルクちゃんの方が全然良い！！　女の子らしいし、可愛いし、何よりもお淑やかだし！！　どっかの暴力メイドとは雲泥の差なんだよ！

あいつが僕に吐く言葉と来たら、暴言暴言また暴言。愛情の欠片も感じねーよ！！　そんな奴をどうして誑かすっていうんだ！？

頼まれたってお断りだ！！」

言ってやったぜ。見ろ見ろ、この呆然としたメイド部隊の顔。まあここまで言えば、誤解は解けた筈だろう。よかったよかった。

「ふ～ん、そんなにシルク様の方が良いんだ？」

「それは勿論。彼女は守ってあげたいタイプだもん。それに比べてセラと来たら、アイツは絶対に肉食タイプ……いや、それよりも質が悪い食虫植物的な何かだと僕は思――――――」

あれ？　さっきシルク様とか言わなかった？　それにこの声、さっきまで話してたメイドの子じゃない様な。なんだかとっても聞き覚えがある。

僕は恐る恐る、その声の主を捜したよ。すると彼女達も気づいたんだろう。わざわざ開けなくても良い道をあけやがる。そしてそこ

に居たのは、見間違う筈もない奴の姿。

「悪かったわね。シルク様ほど、私は可愛くもお淑やかでも無くて。頼まれたって誑かす気にも成れない、そんなメイドで悪かったわね……」

「セ……セラ……」

思わず唾をゴクリと飲み込んでしまう。メイド軍団より一人のメイドの方が迫力有るってどういう事だよ。いや、これは今までの植え付けられたトラウマのせいかも。

セラはセラで、ワナワナとメイド服を震わせてるし、細長の耳が鋭利な刃物にまで見えてきそうな程に尖ってる。

するとセラは大胆にも、太股までそのスカートをあげるじゃないか。でも生足チラリにドギマギしてる場合じゃない。

だってそれがどういう事か、そこに何が有るか僕は知ってる。目の前で展開される四つの聖典。それが桜色の光を目の前で収束させていく。

「おい……それは、ちょっ……不味いだろ……いや、セラ様、ごめんなさい！！」

すると光の向こうに僅かにセラの顔が見えた。怒りに震える瞳。だけど潤んでる様にも見えた……と思った瞬間、セラは勢い良くこう言った。

「地獄で後悔してろ！！」

放たれる桜色の光。それは一筋の光となって空へと消えた。

そして三十分後――部屋に戻った僕は注目の的でした。そして開講一番、アイリが責任を感じる様な声でこう言った。

「三十分の間に一体何が？」

「はは……ちょっと星に成ってきただけですよ。気にしないでください」

みんなの顔にはハテナが浮かんでた。だけど一人怒りマークをこめかみに張り付けた奴が、頬を膨らませてそっぽを向いた。

あんの野郎……もう少しで冗談じゃなくなる所だったんだぞ。いやマジで。

「たく、相変わらずアホな奴だなお前って」

するとこの空気を切り裂いて、エイルの奴がそう言った。そしてみんなが二人へと視線を移す。そう、ここで答えを聞くんだ。

「うるせえ。で、どうするんだよ？」

僕のその言葉に、エイルはリルレットと頷き言う。

「僕達はいかない」

と。

掛け橋の続き（後書き）

第百九十五話です。
今回は新たな国の名が明かされましたね。モブリの国『ノーヴィス』が次の目的地です。それとシスカ信仰はＬＲＯの本筋には結構重要に絡んで来るんだけど、スオウ達には結局はゲームの設定の一つでない事かも知れません。
それは結局、スオウ達は別の世界の住人って事なのかも……まあ良く分からないけど。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

空を飛ぶ船（前書き）

僕達はエイル達の言葉を受けいれて、二人と別れた。そして次に目指す目的の地へ行くために港町へ行くことに。そこから出てる乗り物がノーヴィスへと導いてくれるらしい。

それは空を飛ぶ船なんだってさ。

空を飛ぶ船

「僕達はいかない」

その言葉に僕は「そっか」と答えた。まあしょうがないさ。自由こそがＬＲＯ、それを僕の勝手な都合で縛る事なんて出来ないよ。

リルレットとエイル、二人とはここで一旦お別れだな。

「いかない……けど、勘違いするなよ」

「何を？」

「私達はまだまだ他の人達に比べて足手まといと思うからいかないんです。だからこの間に経験値を積みますよ。一回り二回り大きく成って見せます。

だから別にいかないって言っても一時的にって意味ですよ。

必要があれば呼んでください。その時は必ず駆けつけます」

なるほど、二人は自身の実力アップにちょっと専念したいって事だね。確かに二人は、テッケンさんやシルクちゃんに比べたら経験浅いからね。

今のメンツに自分達は必要ないと思ったのかも知れない。でも、それでもいつかの時の為に自分達を磨いててくれる……それは嬉しいことだ。

仲間はどこでだって仲間って事だな。僕は照れくさそうにしてるエイルと、握り拳作って気合い満々のリルレットを見て、感謝の言葉を贈る。

「ありがとう。今回は本当に世話になったよ。いつかまた――って、

荒事じゃない時に会えたら良いんだけどね」
「そうですね」
「ふん、仕方なくじゃなきゃ、お前になんて会いたくない」
僕の素直な言葉に、エイルの奴はヒネクレた返ししかしない。たく、本当に素直じゃない奴だ。でもそんなエイルの言葉をリルレットが補完してくれた。
「もうエイルは……本当はスオウ君とは友達に成りたいって思ってるんですよ」
「なっ！？　そんなんじゃないよリルレット！！」
慌てふためいてリルレットに向かって拳を回すエイル。でも殴るに殴れないから、いつまでもその拳は宙を回ってる。
なんか面白いから、僕はからかうようにこう言ってやろう。
「あれ？　僕はもうとっくに友達だと思ってたけどな」
すると乗ってきてくれるリルレット。
「ふふ、良かったねエイル」
「お、おまえ等！！」
困ったら怒り出すエイルは面白かったよ。まあ本当に僕と友達に成りたかったのかは定かじゃないけど。取り合えず、エイルの慌てふためく姿に大満足だ。
いっつも僕に毒舌ぶつけてたからな。これくらい許されるよね。
「えっと、それじゃあフレンド登録しましょう。そしたらいつでも連絡が取れあいますから。ほらエイルもウインドウ出して」

「ちっ……特別だからな」

思い立ったが吉日なテンションのリルレットに促されて、エイルもウインドウを開く。もの凄く渋々そうで、しかもずっと僕を睨んでる。

でもそんな視線も、実は照れてるからとか思えば、モブリの愛くるしい姿と相まってどうでも良くなるな。

僕がそんな風にして、エイルの殺意の避け方を考察してると、頭に響くメールの受信音が鳴り響いた。僕もウインドウを開いてメールを確認。

二通届いたメールはそれぞれ、リルレットとエイルからのフレンドのお誘いのメールだった。

【リルレットさんが貴方とお友達に成りたいと願われてます。フレンドの申し込みを受け入れる場合は、ＯＫをポイントしてください】

こんな感じのメールだ。これでＯＫを押すと、メールが返信されて、受理の有無を伝える。そして晴れてフレンドリストに登録されるって訳だ。

僕は迷わずにＯＫを……いや、ここでエイルにだけＮＯにしてみるのも面白いかも知れないな。

「おい、なにを面白がってんだ？」

「へ？　べべべ別に面白い事なんか考えてないぞ」

人の表情を簡単に読むなよな。焦ったじゃないか。そんなに分かりやすい顔をしてるかな？

「スオウ君、イタズラ心でエイルにＮＯを返すのは無しですよ。エ

イル泣いちゃうから」
「泣かないよリルレット！！」

具体的な内容までバレてる――じゃなくて、泣くって確かにそれじゃ僕が酷い奴みたいに成っちゃうな。酷いのはいつも口悪いエイルの方なのに。
まあ、今も全力で顔を赤くしてリルレットに詰め寄ってるエイルの野郎が見れたから今日は十分かも知れない。そう思う事にしよう。
だからこう言いながら期待されてる方をタッチする。

「ちゃんとしますよ。二人には感謝してるんだから」

すると直ぐに頭に着信音が響いたのか、二人がウインドウを確認する。これで僕たち三人はフレンドだな。これで一目フレンドリストを確認するだけで、その人がＬＲＯにログインしてるかどうかとかが分かる。

僕は確認の為にフレンドリストを見ててちょっと思ったことを言ってみる。

「そういえばさ、他の人達とは交換しないの？　僕だけで良いわけ？」

すると意外な答えが返ってきたよ。

「他の皆さんとは既に交換済みですから、大丈夫ですよ」
「そうそう、お前が事実上最後だよドベ」

ドベ……予想以上にその言葉は僕の心に深く突き刺さったよ。てか、既にみんなと交換済みだって？　いつの間に？

「簡単に出来るからね。あの戦いの直ぐ後に僕とシルクは交換したよ」
「と言うか、スオウ君がまだだったのが驚きです。二人との関係は私達より長いじゃないですか。それが何故今なんですか？」
「何故と言われても……」

まさかシルクちゃんに詰め寄られる日が来るなんて。可愛いから万事ＯＫだけど、その質問の答えはないな。なんて言うか、時々出会って冒険する――そんな感じだったからだとは思うけど。
するとそこで、アギトが得意気に僕の事を分かった風に言いやがる。

「別に理由なんて無いんだよシルク。ただ単に忘れてただけだろ？スオウはいつだって友達意識を作って、自己完結するんだよ。離れてたって友情は変わらないっていつまでも信じ続けるタイプだから」
「それのどこが悪い」

友情は不滅だろ。少なくとも僕はそう思ってるね。それに友達って自然になるもんじゃん。僕はわざわざ「友達になってください」とも「友達だよね？」って確認もしないんだ。

「スオウ君には良くも悪くも、ここはリアルと変わらないって事なのかな？　でもほら、リアルでもメールアドレスの交換とかは普通に友達同士でしますよね？
それと同じですよ。友達だから～じゃなくて、この人といると楽しいから、この人ともっと仲良く成りたいから、だから次の繋がりを保ちたい。
そう思える相手なら、迷わず登録したほうが良いですよ」

なるほどね。シルクちゃんの言葉は胸に響くな。セラとかエイルのグサってくる感じじゃなく、もっと柔らかくて暖かな感じがさ。

こうタンポポの綿毛に寝転がる様な？　風に飛ばされてもふわふわゆらゆら気持ち良いんだ。シルクちゃんの言葉には自然と納得できる何かがあるよ。

まあ人間性の違いだな。

「肝に銘じておくよ。じゃあ早速フレンド登録しようぜセラ！」

「は？　あんた私と仲良く成りたいわけ？　冗談はやめてよね」

むむむ……折角人が爽やかな笑顔とともに言ってやったのにその態度は何だ。失礼しちゃうぜ。僕が日頃の鬱憤を水に流してフレンドリストに加えてやろうとしたってのに、なにその態度。

一瞬ビクって反応したように見えたのは、ただ話を振られて驚いただけか？　そっぽを向いたままのセラ。でもここで引いたらまず今後了承を得る機会は無さそうだし……今後を考えると一応はこいつともフレンドに成っとくべきなんだよな。

しょうがないから、今度は理路整然に攻めてみよう。今後の為にも必要って分かればフレンドに成ってくれるかも知れない。

「よく考えろセラ！　今後僕たちは一緒に冒険をするわけだよ。それはいつまでも続くか分からないけど、取りあえずは五日は確実だ。その間、何が起きるか分からないし、連絡取れる様にしといた方が良いじゃん。目的の為に割り切れよ！」

「目的？　そうなんだ。はっ……死んでもヤダ」

死んでもって言われた。スゴい嫌われ様だ。なんかもう分からな

く成ってきたな。僕はセラとの距離間が掴めないよ。
これだけ僕の頭を悩ませる奴は珍しい。日鞠とセツリ、そしてセラで三人目だな。日鞠はその存在に頭を抱えるけど、セラの場合は接し方だから大変だ。

なんか一喜一憂するじゃん。毒舌が来たり、共闘したり、と思ったら死ぬほど嫌われてたり……どこ？　僕のセラとの立ち位置はどこだ？
傾かないでバランスを保てる天秤の重さを教えてほしい。
僕がセラの視線に殺されそうに成ってると、横から無邪気な声が飛んできた。

「はいはい、私はスオウ君とフレンド登録します」
「あ、アイリ？」
「何ですかその反応は？　セラは良くて私はダメなんですか？」
「いや、別にそういう訳じゃないけど……ほら、アイリって王女様な訳だし……立場とかあるのかなって？」

やっぱり友達にも厳正な審査が必要とかさ。投票とか行われないよな？　王女だからこそ、気軽にんな事言えないよ。
けどアイリはとっても気軽だ。

「大丈夫ですよ。友達は自分で選ぶものですからね。そこは誰にも文句は言わせません」
「そっか……じゃあまあ、よろしくお願いします」

そこまで言われたら逆に断れないし、別に断る理由もないから、届いたメールにＯＫを押して返信する。結局セラとは出来なかったな。
まあいいか、テッケンさんとかシルクちゃんは交換してるみたい

だし、それで妥協しておこう。

「じゃあ、私達はそろそろ行きますね」

やることもやったタイミングで、リルレットがそういう。

「行くってどこに？」

「まあ遠くに行くわけじゃないですよ。しばらくはアルテミナスにいます。元々目的があってここに来たわけですしね。

クエストやミッションをこなします」

「そっか」

そうだよね。目的……目的なかったらあんな危ない時期にわざわざ危険を冒してまでこないよな。それに友達は僕たち以外にだっているだろうしね。そこら辺のつき合いも大事だよ。

まあそれを言ったら、テッケンさんやシルクちゃんにだって居そうだけどさ。鍛冶屋はまあ……心配なさそうかな。

「ま、そういう事だから、せいぜい早死にしないようにしてろよ」

「うるせぇ、誰が死ぬか。ちゃんと生き抜いててやるよ」

エイルは最後まで嫌みを垂らして、部屋から出ていく。そんなエイルの言葉に困った顔をするリルレットは礼儀正しく「それじゃあお気をつけて」てと言い、エイルの後を追いかける。

二人の足音が消え去った所で、テッケンさんが進み出て気合い一発こう言った。

「では、そろそろ僕たちも出発しようじゃないか。もう準備は整っ

てるよね？」

テッケンさんの言葉に僕達は頷く。まあ元々そのための三十分間だったわけだしね。いつ出発しても言いようにしてきた筈だ。

でもここで僕はずっと聞きたかった事を聞く。

「そう言えば、どうやって行くんですか？　確か地図で確認した所じゃ、ノーヴィスってアルテミナスの反対側ですよね？

これから幾ら早く走っても着かない様な……」

アルテミナスからノーヴィスは相当遠い。反対側なら、一日走っても着かないよ。貴重な時間が移動だけで相当潰される事になる。

それはちょっと困るよな。するとテッケンさんは問題ないと言わんばかりに胸を張ってこう言った。

「それは問題ないよ。ノーヴィスには飛空艇で行くからね」

飛空艇？　そんな物このＬＲＯにあるのか？　って思ったけど、そう言えば人の国の時は首都で見たな。時々飛んでたよ。

でもアルテミナスに来てからは見てないような気がするけど……それに街の地図にも飛空艇が停泊出来そうな港なんて無い。

「飛空挺はいいですけど……アルテミナスのどこにそんな港ありました？」

僕のそんな失礼な言葉に、誰よりもアルテミナスの事を知ってそうなアイリが丁寧に答えてくれる。

「ここじゃありません。アルテミナスの周りには、ここを囲むようにそれぞれ中規模な町があります。その一つの港町に飛空挺お発着

港があるんですよ。
三大国はそれぞれ飛空挺で結ばれてますよ。知りませんでした？」
「知りませんでした……なあアギト」
飛空挺――んな便利な物があるなら何で教えないんだこの野郎。
移動手段がＬＲＯは乏しいと思ってたけど、あるじゃん便利なのが。
まあこれだけ広いＬＲＯで、たった三国しか結んでない飛空挺は決して十分とは言えないのかも知れないけどさ。それでも使える物は知っておきたいじゃん。
僕の視線にアギトはケロッとして言いやがる。
「別に教えなかった訳じゃないっての。だってアルテミナスには強制的に連れてこられた感じだし、言う暇も必要も無かっただろうが」
「まあ、それはそうだけど……」
なんだか僕は知らない事が多すぎる気がするな。良くこれで今までやってこれたよ。もうちょっとＬＲＯ自身に目を向けた方が良いのかも知れない。
流石にそろそろ恥ずかしいし、みんなも煩わしいよね。テッケンさんやシルクちゃんは優しいから、ついつい甘えがちに成ってるけど、それじゃあダメなんだ。
お世話に成りっぱなしなのに、煩わしくさせちゃ悪い。
「それじゃあその飛空挺に乗れば、直ぐに着けるってことですよね？」
「まあ直ぐにって訳じゃないよ。でも空の旅が出来るから、初めてなら退屈しないさ」
なるほど、流石テッケンさん。イヤな顔一つしないよ。空の旅はワクワクするな。いつの時代にだって人は空を見上げるからね。

でも、そう言えば移動手段ってもう一つあったような？　確か魔法でさ。

「そう言えば転送魔法は使えないんですか？　それだとあっと言うまじゃないですか」

うんうん、一番てっとり早い方法の筈だよね。だけどそれにはシルクちゃんが直々に答えてくれる。

「それは今回は止めておいた方がいいです。それに超長距離の転送は一人じゃ出来ないんです」

「え？　何でですか？　確か転送屋とか居ますよね？」

一人で出来ないんじゃそいつ等どうやってんの？　それに今回はって所も分からないな。

「転送屋の人達は複数のキャラクターを作ってる場合が多いです。超長距離の場合は受けて側が必要に成りますから、サブキャラをただその場所に立たせてて、そこに飛ばすって方法ですね。

受けてはフレンドリストに登録されてるなら誰でも良いんですけどね。他の人じゃログインしてないと出来ないし、都合だってあります。

だから自分のサブキャラを使う場合が多いんです。国の中での町から町への移動なら、一回行った場所ならそんな必要無いんですけどね」

「なるほど、色々条件着いてるんですね」

ただ便利な魔法は無いって事か。色々と条件を付けて、それでバランスを保ってる訳だよな。

「でも、それなら港町には直ぐに行けますね。シルクちゃんの魔法でちょちょいと」

だけどそんな僕の言葉に、シルクちゃんは申し訳なさそうに首を振る。え？　なんで？

「え～とそれは止めた方が良いです。私達は宛もないクエストを探すんですよね？　それならどこで何が発生するか分かりません。

だからなるべく、地に足を着いて目指した方が良いんです。ＬＲＯのクエストいろんな発生の種類があります。特定の場所や個人に話しかけて始まる固定の物もあれば、町で拾ったハンカチからクエストに繋がったりもする偶発的な物まで様々です。

そのクエストが何か分からないけど、鍵がスオウ君の持ってる金魂水なら、何かが起こる可能性はあるから……」

最初はハキハキと喋ってたのに、最後はちょっと自信なさげに視線をさまよわせるシルクちゃん。堂々としてて良いのに、ちゃんと納得出来る説明だったよ。

なるほどね、別に超長距離転送も出来なくは無いけどやらないのはそのせいか。どこで何が起きるか分からない。それは確かにそうなのかも。

実は僕が暗黒大陸でテトラと会ったとき……いや、この金魂水を手にした時からクエストは水面下で動き出してるのかも知れない。

ＬＲＯも最近ごちゃごちゃ成って来てるからさ、どこまでが本当にゲーム的に動いてるのかよく分からないんだよね。

あの時のテトラはイレギュラーだったのか、システム的にはああなる仕様だったのか……僕には分からない。僕は丁寧な説明をくれたシルクちゃんを見つめて「そっか」と言った。

「じゃあ、ある意味何かが起こった方が良いわけだ。何かが起これば
それの先にクエストの断片があるかも知れない」
「本当に繋がりがあるかは結果が出るまで分からないけどね。起きるかどうかも分からないんだから、期待はしないほうがいいよ。
起きたらラッキーくらいに思ってないとね」
「そんなもんですか……」

まあ確かに、そんな都合良くは出来てないよな。たまたま町で拾ったハンカチが、狙ったクエストな訳がない。そんなもんだ。

「今は取りあえずノーヴィスに行くことだよ」
「そうですね。それじゃあ、楽も出来ないことですし急ぎましょうか？」

僕達はパーティーを組んでこれで準備万端だな。僕とセラとシルクちゃんにテッケンさんに鍛冶屋。殆どいつものメンバーだ。

「ではお気をつけて。情報が入り次第メールしますね」
「はい、お願いします」
「スオウのバカを頼みますテッケンさん。それとセラ達も。あんまり無茶ばっかするなよ。命あってのものだねだ」
「わかってるよ」

付いてこれないアギトは案外心配そうにしてる。まあ今まで無茶ばっかりしてたからな。それにアギトだってガイエンを助けたいと思ってるのなら、ここでじっとしとくのは辛いのかも知れない。
まあでも、ようやく一緒にいられるんだし、邪魔者はしばらく消えとくさ。イチャツく場合じゃなくても、二人でいるのは大切だよ。
テッケンさん達もそれぞれに言葉を返し、僕達は城を後にする。

目指すは港町『ノックス』だ。

街道を順調に走り、ものの数十分でノックスには到着出来た。ある意味拍子抜けするほどアッサリだ。ノックスは港町だけあって海が目の前に広がってるよ。

なんだか家が海に浮かんでる所もあるような……いや、そういう風に建てられてるのか。鼻を擽る塩の香りと、耳に届く波の音が海を感じさせてくれる。

さて、港はっと……

「こっちだよスオウ君」

「ああ、はい」

流石みんなは迷わず港の方へ歩きだしてた。僕はわざわざ探さなくても付いていくだけで良いみたいだ。飛空挺の発着場は、ただの漁港とは違って随分立派だった。

スーツ着た人や、ちゃんとした制服のお姉さんも居るし、国営なんだねって感じだ。て、みんな受付を通らずゲートを潜ってるけどさ……それって良いの？　僕もみんなを見習って怖そうな警備員（というか軍の人）の横のゲートを潜ろうとしたとき、何故だかビービー警報が鳴った。

「ええ！？」

何故？　みんなは素通りしてたじゃん。

「何やってるのアンタ？　もしかしてパス発行……されてるわけないわよね。ならちゃんとお金払ってチケット買ってきなさいよ」

パスってなんだよ――と聞こう思ったけど、それよりも筈かしかったから先にチケットを買いに行く。受付のお姉さんの爽やかな笑顔がなんだか恥ずかしい。

「六千ガルドに成ります」

「六千って高いな～」

殆ど使ってないからあるけど……成るほど、初心者が走る羽目に成るわけだ。僕はチケットを購入して、今度こそゲートを潜る。

すると丁度良いタイミングで飛空挺が空からやってきた。案外船っぽいフォルムのままの飛空挺は、水しぶきを高らかにあげて着水しながら滑るように港へと入ってきた。

「うおっ！　これが……飛空挺」

思ったよりもずっとデカいな。これが僕達を新しい冒険の舞台へ連れてってくれる船。

空を飛ぶ船（後書き）

第百九十六話です。
いよいよ飛空挺へと乗ってノーヴィスへ。やっぱり冒険には飛空挺が必要ですよね。空を駆ける夢の乗り物。それには一度乗ってみたいじゃないですか。てな訳で飛空挺です。
まあ広すぎるＬＲＯだから流石に移動が不便だからと言って、何もないわけじゃないって事です。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

揺れる花（前書き）

僕達は多分引き当てた。その証として、並行して進むイベントが出てきたんだ。でもまだ何が起きてるのか、どうしてそうなのかはわからない。まだ僕達は外側。だけど進んでいけばいろんな事が見えてくるのかも知れない。

それはもしかしたらＬＲＯ最大宗派シスカ信仰の裏側とかさ。

揺れる花

「ミセス・アンダーソン！！　お待ちくださ～い！」

飛空挺昇降口にて、息を切らして走ってくるモブリが一人。

「何かしら、騒々しいわね」

「こ、これを！　先ほど本国から連絡が入りまして」

彼は護衛に囲まれてる女性のモブリに、手に持った書類を渡す。それを受け取った女性は、次の瞬間驚愕の顔とともに打ち震える。

「なっ……まさか……これは事実ですか？」

「間違いなく本国からの連絡です。間違いは無いかと」

「そう……それなら早く戻る必要がありそうね。ありがとう報せてくれて」

「いえそんな……」

そこで出航を告げるベルが鳴り響く。女性は護衛と共に飛空挺へ上がり、書類を持ってきてた彼は頭を下げてその姿を見送った。

「何だったんだ今の？」

僕は頭を抱えて今の光景に疑問を投げかける。すると周りで同じようなシーンを見たんであろうテッケンさん達がこう言った。

「今のは強制イベントだね。どうやら、僕達の選択は間違いじゃ無かったみたいだ」

「そうですね。少なくとも、私達の周りでは既に何かが始まってる……そのようです」

何か……か。それが僕の求める物であってくれたら幸いだ。でもこのタイミングで発生したイベントなら、そうと思えるけどね。

僕がこのアイテムを持ってるからか、それともテトラと接触したからか……取りあえずどれかによって、何かが始まってるんだろう。

「ここで考察してても仕方ありません。さっさと乗り込みましょう」

そう言ったのはセラ。こいつなんだか既に飽きてないか？　それにシルクちゃんには相変わらず敬語だな。ドライなセラはさっさと掛けられた桟橋を渡って飛空挺へ乗り込もうとしてる。

でもその時、僕達にもさっきのイベントとデジャブみたいな光景が起きた。

「お～～い！　待って……待ってくださいっす！！」

遠くからこちらに向かってくる一人の影。誰だろう？　なんて誰もきっと思わなかった。だってその喋り方に特徴があるんだもん。

あれはきっとノウイだ。緑の髪に、目が点な色々と残念なエルフだ。でも、どうしてアイツが僕達を追ってくるだろう？

まさか既に良い情報を掴んだとか？　いやいや、幾ら何でも早すぎだろ。ノウイも素通りでゲートを潜ると、ゼイゼイ息を切らして立ち止まる。

「よ、よかったっす……なんとか追いつけて……」

「何やってるのよ？　確かアンタも情報収集が役目でしょう？」

桟橋から厳しい視線を投げかけるセラ。まあ上司みたいな物だからな。部下の行動を確認したいんだろう。するとノウイは息を必死に整えてこう言った。

「じ、自分も一緒に行きます！　行かせてくださいっす！」

「ダメ。そんな台詞は、まともに戦える様になってから言いなさい。仕事しないさいよ仕事。情報収集だって大切なのよ」

彼の熱意を一蹴するセラ。だけどノウイだって半端な気持ちで僕達を追いかけて来た訳じゃない様だ。

「だ、大丈夫です。それなら侍従隊の人達ががんばってくれるそうですから。それに頼まれたんです。セラ様の事を頼むって！！
アルテミナスの代表として旅に同行するセラ様を支えるのが、今の自分の仕事っす！！」

キッと、何故そこで僕を睨むんだ？　意味が分からない。侍従隊の人達もそうだったけどさ……なんか勘違いしてるよな？
お前等ちゃんと僕達を見てるのかって言いたい。僕めっちゃセラに嫌われてるんですけど……

「あの子達は全く……こんな移動と隠密行動しか出来ない奴を寄越してどうしろって言うのよ……」

「が、頑張りまっす！！」

結構酷い事を言われてたのに、全然気にする様子がないノウイ。攻撃はさっぱりな癖して打たれ強いじゃないか。

「どうするのよスオウ。アンタが決めて良いわよ。この旅の中心はアンタなんだからね」

「は？　投げやりだなお前……」

なんで僕が決めなきゃ行けないんだ。確かに中心はそうかもしれないけどさ……僕はある意味、付いて行ってるだけだぞ。

「お願いしまっすスオウ君！！　どうか自分を同行させてください！！　戦闘では役に立てるかわからないっすけど、他の事では頑張るっす！　それをここで誓うっすよ！

騎士の誓いは絶対っす！！」

相変わらず「すっす」うるさいなノウイは。まあでも彼のレアスキル「ミラージュコロイド」は魅力的な力ではある。

実はあれが戦闘に行かせるんなら、ノウイはかなり強いんだけどね。でも弊害があるみたいで、それは出来ないみたいなんだよな。

けど、それを差し引いても役に立つスキルではあるんだよな。でもこのままじゃノウイだけ余る事になる。パーティーは五人一組だからね。

でも、ノウイなら簡単に逃げる事も出来そうだな。それに元々先行調査みたいな感じが主な役割だったし、それなら一人の方がやりやすいのかも。

それになんだかここで拒否したら、呪われそうな雰囲気が伝わってるんだよね。執念というか何というか……怖い物を感じるよ。

「ええ～と、まあ人数は居た方が僕も心強いよ」

「ありがとうっす！！」

思わず抱きしめて来るノウイ。うっわメッチャ気持ち悪いよ。すると耳元でポツリと何かが聞こえた。

「侍従隊の皆さんから伝言っす。セラ様に何か粗相をしたら『殺す』だそうです。自分は逐一報告しないといけないんでそこん所よろしくっす」
「……」

しまったぁ！　あの冥土へ誘うメイド部隊からの脅迫なんて怖すぎる。それにその怖さは既に身を持って体験してるし……これは下手な事は出来ないな。
なるべくセラには近づかない様にしておこう。アイツだってそれが良いはずだし。お互いの為にもって奴だ。

「よろしくノウイ君」
「よろしくお願いします」
「はいっす！　お二人ともまた一緒に冒険出来て嬉しいっす！」

晴れやかに鉄拳さんとシルクちゃんの手を取るノウイ。だけど鍛冶屋だけは我関せずって感じだ。ノウイが挨拶してもこんな感じで突っ張ってた。

「よろしくっす鍛冶屋さんも」
「ふん、武器に愛されもせぬ物に興味はないな」

だそうだ。鍛冶屋の一番の興味は武器であって人じゃない。武器を扱えもしないノウイは眼中に入らないらしい。「はは、まあさっさと乗ろうよ。僕は初めてだから早く乗りたいんだ」
それなりにチケットも高かったしな。これで乗り過ごす訳には行かない。僕達はセラの待つ桟橋を渡り、ようやく飛空挺へと乗り込んだ。

流れる様に水を切り動き出す飛空挺。両サイドにからは何やら青い光が漏れてるけど、多分それが動力の源か何かなんだろう。
そして遂に自ら浮き上がり、大空へと繰り出す。夜天の空に水しぶきをまき散らして飛空挺が空を駆けだした。

そんなムービーが僕の頭に流れて、どこからか音楽が流れ出して来たと思ったら、飛空挺の室内に居た。木造だけど、装飾品とか内装は結構豪華にしてある。部屋から出ると、旅に必要な物を売ってる店もあった。
構造はさっき僕達が居た大部屋が一階で、二階にはＶＩＰの為の部屋がいくつかあるみたいだ。そして三階はテラスというか、船の甲板だな。
案外単純な構造だ。まあ長旅って訳でもなく、三国間を結ぶだけの物ならこんな物かもしれない。

「ちょっと、あんまり一人でウロウロしないでくれる？」

ハシャいでた僕にそんな釘を刺すのは、誰でもないセラだ。するとその後ろからテッケンさん達も姿を現した。

「まぁまぁ、誰でも初めて乗ったら興奮するよ。それにここならそんな危険はそうそう起きないさ。何てたって空の上だからね」
「そうでしょうか？　私的には、そのそうそうを起こすのがスオウだと思ってますけど」

ひでぇ言われ様だな。僕だってそうそうに何て巻き込まれたくないっての。勝手にそんな希な事がやってくるだけだ。

「だけど、少しの間くらいは。セラちゃんだって初めて乗った時は

嬉しく無かったですか？」
「まあ、それはそうですけど」
相変わらずシルクちゃんには弱いセラだ。そこで更に畳むようにシルクちゃんは両手を合わせてこう言った。
「それじゃあみんなで外に出ましょう。外の方が気持ち良いですから」
僕達はシルクちゃんに促されて甲板へ続く階段を上がる。そして大きな扉を開くと、強い風が吹き込んできて、一瞬たじろいだ。
だけど次の瞬間目を開くと、そこには星空がとても近くに広がってた。　これが昼間なら青空がここにあるんだろうな。
甲板を走って端の方へ乗り出してみる。下には既に遠い町の灯りが僅かに見える。やっぱりリアルとは違うな。明かりは点在してるだけで、地上をくまなく照らしたりはしないもん。
夜の風に当たりながら僕は今、空からこのＬＲＯという世界を見てる。
「そういえばさ、何でテッケンさん達はチケットいらない訳？」
僕は同じように空を眺めてるテッケンさんにそんな事を聞く。まあだって気になるじゃん。高価なチケットもいらずに乗れるなんて良すぎだよ。
「それは僕達が冒険者として国から認められた証を持ってるからだよ。ある程度のミッションをこなしたら、それが発行されるんだ。
まあ一人前って事かな？」

成るほど。僕がお金を払わなくちゃいけない訳だ。ミッションなんて一回もやってない僕は半人前どころか、国にとっては何の利益ももたらさない、駆け出しなんだな。

「それよりも一回さっきのモブリを探しましょう。多分二階のＶＩＰルームに居ると思うけど、アンタが話せば何か起こるかも知れないわ」

「ああ、確かにそうだな。行ってみよう」

僕は夜の空を満喫したので、セラのその言葉に乗った。まあ行く気ではあったしね。てかあんなの見せられちゃ行かない訳にはいかない。

するとそこで、一人あのイベントを知らないノウイが声を出す。

「何か有ったんっすか？　もしかして既に手がかりを？」

「ええ、先程飛空挺に乗り込む前に強制イベントが有ったんです。それでそのイベントのＮＰＣもここに居るはずなので、彼女を当たろうと」

「成るほどっす」

僕達は階段を降り再び二階の通路へ。そして十分な光量で照らされた通路を進み一番奥の部屋の前へ。まあどこも大体同じ様なドアなんだけど、とりあえず一番デカい所に来たわけだ。

「よし」

僕は気合いを入れてドアノブを回す。流石に豪華なドアだけあって、滑らかに扉は開いた。するとそこには、僕達庶民には縁の無い部屋が広がってた。

まあ、アルテミナス城も大概だったけどさ……あれは城だからし

ょうがない所がある。でもこれってどうよ。僕達は大部屋で我慢してるのに、何でベットまでついてるんだよ。
床には絨毯も敷かれてるし、全ての調度品がなんかキラキラ輝いてる。

「おいおい、世界って理不尽だな」

思わずそんな言葉が漏れてしまう。知らなければこんな気持ちに成ることも無かっただろうに、同じ乗り物の部屋でこうも違うか。
まあリアルだってそうだよな。この世に平等なんて、自分が見れる狭い範囲にしか存在しないんだ。

「そう？　ならアルテミナス城のアイリ様の私室なんてこの比じゃないけど。それにアルテミナス城その物がアイリ様の物みたいな物じゃない。
アンタが幾ら働いたって買えやしないわよ。それなのに別に怒ってなかったじゃない」
「アイリはだって、羨ましいけどその立場には成りたくないってか……しょうがないと思う部分が有るんだよ。それに城一つなんて、小市民の僕からしたら、それを手にする事自体が想像できない。
でも、ここはほら、自分達と比べ易いんだよ。同じ船での部屋の違いだからさ」

そりゃあ向こうは金を一杯払ってるんだろう。ようは飛行機のファーストやビジネス、エコノミーとかと同じ事。僕達はさ、ファーストクラスなんか知らなかったら、空を飛んで、ただそれだけで普通に感動出来た筈なんだ。

だけどふと開いた扉の向こうには、すし詰めなんかじゃない、広々とした場所が広がってって、そこにはエコノミーの席がパイプ椅

子に見えるほど、豪華な席が一人一人余裕を持って有るんだ。
すると思うじゃん。

（ああ、なんて惨めな場所で喜んでたんだろうって）

僕達が小さな飛行機の窓を必死に覗き込んでる時、ワイン片手に同じ空を眺めてた奴らがここに居るんだ。いや、それはもう違う空何だろう……あ～世界ってどこも変わりはしないな。
僕が世界の理不尽を嘆いていると、セラがどうでも良さそうにこういった。

「いいからさっさと話しかけなさいよ。ゲームなのよゲーム。なんでも真っ直ぐに受け取ってんじゃないわよ」
「はいはい、わかってるよ」

そりゃあセラはそっち側なんだから、どうでも良いだろうよ。ホームはアルテミナス城って言う一等地だろ。でも確かにセラの言うことも最もだから、そんな事気にしてても仕方ない事だ。
てかその人――何だっけ？　ミセス・アンダーソンさんは直ぐそこに居た。足が弧の様な形状してる椅子に座って、ユラユラ揺れてる。
どう考えてもＲＰＧってのは失礼極まりないけど、僕達はまだ壷とか壊したり、タンスを漁らないだけ増しだよな。あれってどう考えても犯罪だよね。

画面を通してだとそんな意識さほどないけど、流石にＬＲＯでは罪悪感とか感じるからか、そんな事は出来ない様に成ってる。
まあ、普通に開けて覗く程度なら、出来るは出来るけど。他人の物を勝手に拝借は無理なんだ。
僕はどうせ聞こえてないだろうけど、最低限のマナーとして「失

礼します」とだけ言って部屋へと踏み行る。すると再び、意識が引っ張られる様な感覚に陥った。

「はぁ～あの方にも困ったものね。もう少し立場って物を考えて貰いたいものだわ。私達がどれほど苦労して、このシスカ信仰の威厳を保ってるのか、わかっていないのだから。

それと自分の重要せいも……」

ぶつぶつと何やら呟いてるミセス・アンダーソン。これは再びの強制イベント。起こってる事を雲の上から見るような不思議な感覚がする奴だ。

ミセス・アンダーソンは顔に皺が出始めてる位の、ちょっと老けたモブリだ。修道女の様な地味でゆったりとした服に身を包んでる。

そんな彼女の護衛なのか、傍らには騎士……とはちょっと違う様な二人が控えてた。背中に背負ってる武器は杖なのか槍なのか……なんだか両方をくっつけたようなそんな武器で、騎士よりも甲冑部分が少ない青を基調として、大きく宗教のシンボル入りの防具で身をかためてる。

そしてそんな二人の内の一人がこう言った。

「あの方はまだ幼いですから、そこら辺は致し方ないのでは？　成長とともに自覚も目覚めて来るのではないでしょうか？」

「それじゃあダメなのよ。あの方は特別なの、特別でなくちゃいけないのよ。神秘的な存在が、そう易々と人前に姿を現しちゃ、ありがたみが薄れちゃうでしょ」

なんだか怪しい話をしてるな。飛空挺が飛び立つ前に入った連絡もきっとこの事何だろう。誰かの事を言ってるみたいだけど……僕にはそれが誰かわからない。

テッケンさんとかならわかるかも知れない。このイベントが終わったら聞いてみる事にしようじゃないか。

そして今度はもう一人の護衛の服のどこかから、着信音みたいな音が響いた。すると小さなビー玉みたいな物を取り出す護衛。何かその表面に映し出されてる文字を確認してこう言った。

「本国からの連絡です」

「どうせ泣き言か何かでしょう。繋ぎなさい。元老院どもの情けない顔が拝めるわよ」

「言葉にはお気をつけてくださいアンダーソン様。いらぬ事は言わない方が身のためです」

するとそんな護衛の言葉に、フンと荒々しく鼻を鳴らすミセス・アンダーソン。なんだかこの人も、僕の中のシスターって言うイメージを壊してくれそうだ。

「何も言う必要がなかったら、私はこの口を糸で縫い合わせたって良いわよ。だけどそれじゃあ、救われないのよ。救われない人々に、信仰という希望を与える為にもね。

口は閉じる為に有るものじゃないわ。伝える為に有るものよ。

それに、誰かが言わないと調子づいたバカは止まらない物なのよ。だから私の口は、その前段階の釘差し。言わない訳にはいかないわ」

「……お繋ぎします」

諦めたのか、それとも彼女の言葉に論破されたのか、護衛はビー玉を指で弾く。するとビー玉が宙で止まるじゃないか。そして光を放ち、複数のウインドウに様々な顔のモブリが映し出された。

どれもとっても高齢なモブリ達だ。

「アンダーソン、クリューエル様が箱庭から逃げ出した事は聞いておるな」
「ええ、今し方この飛空挺に乗る前にお聞き及びましたわ」
「まあ、なんじゃその……お前の魔法でちと探索してもらえんだろうかの？　お前ならそれが出来るであろう」

するとそんな言葉の後に、別のウインドウの老人が「ほ、本意ではないがな」

「致し方ない」

とか、言い訳じみた事を言っていた。するとミセス・アンダーソンは毒づいたような笑みを浮かべてこういう。

「あらあら、確かに私ならそれが出来ます。ええ出来ますとも。私としてもクリューエル様が見つかる事は本意ですし、やらない事も有りません」
「おお、なら早速」

沸き立った老人達、だけど彼女の言葉はそこで終わりじゃなかった。

「ですが……この責任はどう責任取るおつもりか聞かせて貰いたい物ですね。あの方はあなた方が管理してる筈でしょう。
それなのに箱庭からは逃げ出され、さらには見つけることもままならなくて私に泣きついて来るなんて……お笑い草じゃないですか。
そんな傑作な方々は、一体どうやって責任を取るつもりで？　あの方は私達にとって……いえ、シスカ信仰にとって無くては成らないお人だと言うのに」

嘆かわしい……言葉にはしなかったけど、きっとそんな言葉が続いたよ。ウインドウに写った一同は一斉にミセス・アンダーソンから視線を逸らしてる。
かなり苦手なんだなこのおばさんが。するとここで、ミセス・アンダーソンは妥協案みたいな物を提示した。

「まあ別に責任と言っても、あなた方が取りたくないのなら無理にとは言いませんよ。ですがそれには口利き料が必要じゃございません事？　大切なクリューエル様を逃がした事への謝罪は信者へとするのが普通でしょう。
何、あなた方が無闇に豪奢な生活を送るために使ってるお金を僅かばかし、日頃お世話に成ってる信者えのお返しとすれば良いのですよ。
それならば、我らがシスカ神も貴方達の悪行を許してくれるでしょう」

おいおい、この人金をがっぽりと搾取する気だよ。まあ有るところから取るのは別に良いけどさ……やっぱり僕のシスターのイメージは崩壊寸前だ。

「くっ……貴様は本当に……」
「それで本当にいいのだな」

苦虫を噛み潰す様な顔をする老人達。うって変わってミセス・アンダーソンは晴れやかだった。

「本当に？　何でしょう。親切すぎましたかね？　そんなご感謝の言葉などもったいない。気持ちよりも見えるもので示してください。
お振込はいつもの口座でお願いします。勿論額はそれぞれのお気持ち次第で結構ですよ」

「た……頼んだぞ！！」

みんな討ち震える様な声を出して消えていった。光を失ったビー玉は護衛の手へと戻っていく。きっと護衛は思ってる……この人にはかなわないなとさ。

「さて、ではちゃんとお願いを聞いて上げましょう」

そう言って彼女は手に持ってた本を閉じ、懐から小さな人形（？）みたいな物を取り出した。そして床に映し出されたノーヴィスの地図に投げる。するとなんと人形は動き出すじゃないか。

段々と詳細に成っていく地図。だけどあれ？　この場所は……

揺れる花（後書き）

第百九十七話です。

思えばもう二話で二百ですよ。どんだけ続けるんだって言いたいですよね。だけどまだまだ続きます。最低限セツリとの決着はつけたいですからね。長すぎて皆さんに飽きられないようにしたいです。

それに折角ここで自由に書いてるんだし、もっと色んな事に挑戦したいですね。書き方を色々変えるとか。今は一人称と視点移動しかやってないし。何だか面白い提案あったらくださいな。

てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは。

プライド（前書き）

イベントは順調に進行中。僕達はミセス・アンダーソンの後を追っていく形で状況を見守っている。だけど遂に見守るだけじゃいけない場面が来た。それはこの船に乗り合わせたプレイヤーを巻き込んでの救出ミッション。

いよいよ感じが出て来たって感じだ。

プライド

どんどん詳細に成っていく地図上で、その人形は何故かノーヴィスから離れてる……と言うか、凄いスピードで移動してるような。
そのせいか、ノーヴィス内に絞られてた地図がどんどん倍率を下げていく。多分この人形がクリューエルと呼ばれる人を指してるんだろうから、この地図を見る限り既にその街から出てる。

「あ～あ、元老院のバカども。港を封鎖してないからこんな事に成るんだよ。まあだけどこれなら……」

自身が映し出した地図を見ながら、そんなことを呟くミセス・アンダーソン。これならなんだろう？
すると尺が大きくなった地図には何だかもう一つ青い印が矢印みたいに出てるじゃないか。それも同じ様なスピードで移動してる。そしてその人形と矢印はこのままじゃ接触しそうな感じ・・ああそうか、だから「これなら」って事か。

「このままじゃこのままじゃ物の十分って所ね。急いで操舵室へ向かうわよ」
「「はっ！」」

魔法を解いて、護衛二人と共に部屋を後にするミセス・アンダーソン。その背中を見つめて強制イベントは終了した。

気づくと僕達は豪奢な部屋で佇んだまま。当然さっき出ていったミセス・アンダーソンはいない。

「なんだか順調に進んでるっぽいじゃない。とにかくあのおばさんを追いかけた方が良さそうね」
「操舵室って行ってましたね。それなら一度甲板に出ましょう」
そう言ってみんな次々と部屋を後にする。僕も最後に後へ続き部屋を出る。順調か……確かに、まだどうするか分かりやすいからそうなんだけど、色々とわからない事は多いよな。
それもまあ、後々見える様に成るんだろうけど。ん？　そう言えば。
「なあノウイ。お前も見えたのさっきのイベント？」
甲板を目指す途中でちょっと気になったから聞いてみた。するとノウイは苦笑いでこう言った。
「いや～さっぱりっすよ。自分にはなんで操舵室を目指してるのかわかんないっす。みんないきなり止まるからイベントなのはわかりましたけど……その後、モブリも出て行っちゃいましたから」
なるほど、イベント中は関係ない人にはただ佇んでる様に見えるのか。でもそこに居るＮＰＣはイベントと連動して動く。
「てか、それなら聞けよ。わからないままだなんてイヤだろ？」
「そうっすか？　セラ様があんなに生き生きしてるなら問題ないっすよ。自分はあの人信じて……って何言わせるんすか！　あはははは」
何なんだ一体？　いきなり笑い出しやがって、その胡麻みたいな目じゃ笑えないっての。あれかな？　セラにこき使われすぎて、そ

の感覚が染み着いちゃってるのかな？
哀れな奴だ。

「で、どうなってるんすか？」
「結局聞くのかよ。信じてるんじゃ無かったのか？」
「信じてまっす。だけどやっぱり知りたい気持ちはあるっすよ。ただセラ様は教えてくれないだけっす」

それは胡麻の様な目を細めて言うことだろうか？　嬉しそうに何故か語ってるけど、聞いてるこっちは悲しいぞ。
まあ、そんな悲しいノウイにはちゃんと教えてやるけどさ。

「とりあえず状況説明だけな」
「うっす」

それ以上しようがないし。僕は操舵室を目指す間にさっきのイベントの事を教えてやる。

「なるほど、それで操舵室っすか」
「ああ、多分そのクリューエルって人も飛空挺に乗ったんだろう。でないとあのスピードはあり得ないし。通信でも使わせて貰う気なんじゃないの？」

それで向こうの船と連絡を取って、あわよくば確保とかね。ある意味ここは逃げ場なんてないし。なんてたって空の上だからね。
連携が出来れば袋の鼠も同然だ。このまま行くと、そのクリューエルって人と会えそうだけど……一体どんな人なんだろう。ここまで必死に成って追う重要人物ってさ。
気になる……このイベントでも重要人物っぽいし。

「知ってますかテッケンさん？」

僕は沈黙を続けてたテッケンさんへ話を振った。やっぱりモブリの事はモブリであるテッケンさんへ聞くのが一番だからね。

「クリューエルかい？　まあ名前だけなら知らないモブリはいないかも知れないね。なんてたって国のミッションがあるくらいだし、ちゃんと冒険をしてれば何度か聞く事に成る名前だよ。

でも……誰も見たことはない。イベントでも言ってたけど『箱庭』と呼ばれる場所にずっと隠されてたからね。でも今回は、遂にその姿を拝めそうだ」

わくわくした顔に成ってるテッケンさん。確かに、これは重要だよね。誰よりも一足先にってのは誇らしげになれるし、関係が深い場所の事なら尚更だ。

まあでも、最近は僕の周りで名前だけってのが多いんだけど……テトラもそうだったし、今度はクリューエル。その内もう一人の神のシスカも現れそうじゃないか？

僕の読み的には、このクエストの最後等辺にそういうのがあってもおかしくないと睨んでるんだけどね。だってそうだろ？

テトラとシスカは対になる存在。いがみあってたとしても、求めるのかも知れない。それに邪神が誰かの為って言ったら、そのくらいしか……テトラとシスカ……案外僕的にはその響きは優しく響くんだよな。

ドガンと蹴り破る様な勢いで甲板に出る扉を開いたセラ。するとそこでもう一度イベントが入った。

「ちょっとどう言うこと！？　向こうの船に連絡出来ないって、そ

んな事ある分けないでしょう？　しっかりやりなさよ！」
「そ、そうは言われましても、こちらから何度も呼び出しているのですが何故か反応せず……」

ミセス・アンダーソンの剣幕に押されている機長であろうエルフ。なんだかシュールな光景だな。自分よりもずっと小さなモブリに頭を下げてるでっかいエルフってのがさ、とってもおかしく見える。
その時、若い船員が計器を見てる手を止めて報告する。

「機長！　向こうの船、高度が下がりつつあります。このままでは墜落する可能性が！」
「な、何だと！？　一体何が……どうしたと言うんだ？」

震える機長の声。するとそこに別の計器の前に座ってる船員が報告する。

「向こうの船の周りに、大量の熱源を関知できます！　これは……まさかモンスターでは？」
「なっ、そんなバカな！　このルートは安全が保証されてる道の筈だぞ」

更に慌てふためく船内。でも安全が保証されてるってどういう意味なんだろう？　何度も検証したって事なんだろうか？
でもＬＲＯには空を飛ぶモンスターだって無数にいる。今回は運悪く、そんな奴らに見つかったとか？　でも……きっと偶然じゃないだろうな。
そもそもイベントだし。苦渋の顔をしてる機長。そして全員に指示を出す。

「全員に次ぐ、船を直ちに反転させろ！　この船はノックスへと帰

還する！」
「ちょっとお待ちなさい！　見捨てると言うのですか！？　そんな事は許しません！！」

帰還を決めた機長へと詰め寄るミセス・アンダーソン。だけど今度の機長は譲らなかった。

「おわかりくださいミセス・アンダーソン。このまま行くとこの船も敵と接触する事になります。そうなれば奴らにとってはみすみす飛び込んできた餌なんですよ。
私だって助けれる物なら助けたい。ですが、この船にはろくな武器は搭載されていません！
それにその武器は意味がないと、今まさに襲われてる船が証明してますよ」
「そ、それでも行きなさい！　あの船には亡くしてはならないお方が乗ってるのよ！　それがどういう事かわかりなさい！」

どちらも力の限り怒鳴ってる。譲れない物がそこにはあった。ミセス・アンダーソンはクリューエルという大事な存在。そして機長はプロ意識って奴だろう。

「なんと言われようとも、このまま進む訳には行きません。なぜならこの船にお乗り頂いてる皆様を無事に送り届ける事が自分の使命だからです。
お客様を誰一人として危険に晒す訳には参りません。私共にとっては、御乗船頂いた皆様の命、全てが大切なのです」

機長の言葉に、言葉を飲み込むミセス・アンダーソン。弱々しく見えてた機長が、今は格好いい。渋いダンディーなオッサンに変わってるようだ。

「大丈夫です。既に二カ国に連絡しています。直ちにも武装船団が出発するはずです」
「それで……間に合うの？」
俯くミセス・アンダーソンのそんな言葉が響く。そんな彼女に機長はこう答える。
「間に合うと……信じるしか我々には出来ません」
「いいえ……この船なら確実に間に合うのよ。確かに貴方の言葉は正しいわ。だけど――」
その瞬間、護衛二人が動く。そして機長にその武器を突き立てた。
「な……何の真似ですかミセス・アンダーソン？」
「ミセス、私も同感ですね。思わず動きましたけど、これは確実に国際問題になりますよ」
武器を突き立てられた機長は震える声を絞り出す。そして武器を突き立ててる側も「やっちまった」みたいな顔だ。
だけどミセス・アンダーソンは強気に突っ走る。
「そんな事は今は微々たる問題よ。あの方を亡くす事は世界の危機よ！　命の価値が人それぞれなんて言う気はないけど、あの方はダメ。
アルテミナスだってシスカ信仰やってるでしょ。これは宗教問題よ！　よってこの行為は神の名の下に正当です。私の指示に従って貰います！」
「それは流石に無茶が……」
護衛にまで突っ込まれるミセス・アンダーソン。確かにちょっと

無茶な理屈だろう。そりゃあ世界最大宗派だし、その影響力は絶大なんだろうけど、その力を乱用しちゃいけないだろう。
でも、そこまでやる程って事でもある。

「いいからやりなさい！　反転は中止。全速力で攻撃を受けてる船の救出に向かいます！」
「お、お待ちくださいミセス・アンダーソン！！　冷静になって！！　この船で飛び込んでもどうにも出来ません！　死にに行くような物ですよ！　そんな事……機長としてやらせられません！！」

武器を突き立てられてるにも関わらず気丈にそう言い放った機長に、部下の船員達は感動してた。
「機長！！」「機長！！」
と、部下達の涙混じりの声があふれ出す。だけどミセス・アンダーソンも引きはしない。このおばさん、とんでもない案出してきやがった。

「貴方達はこの船に戦力が無いから、だから救助にはいけないと？」
「そ、その通りです。このままみすみす救助に向かえば、こちらの船も危なくなります」

するとミセス・アンダーソンは操舵室から外が見える位置に行く。そして甲板を見つめながら、不敵に笑ってこう言った。

「戦力なら足せるわよ。この船には冒険者がわんさか乗ってるじゃない」
「貴女は！　……ですが、それは向こうも同じだったはず。それでも……」
「モチベーションを上げればいいわ。私にはそれが出来る。進みなさい。反転は許さない。今この時より、私が緊急ミッションを告げ

ます！！」

ミセス・アンダーソンの決意の表情と言葉でイベントは終了した。そして直ちにその報せが入った。甲板に出た僕らだけじゃない、多分この飛空艇に乗り合わせたプレイヤー全員にその報せは行った。

現に目に映る範囲のプレイヤーのウインドウも、全く同じタイミングで開いたんだ。

「おわ、なんすかいきなり？　緊急ミッションの通知？　目的はモンスターに襲われてるであろう飛空艇からの救助活動？　ええええ？」

大概はこんなノウイみたいな反応してる。何がなんだかわからないって感じだな。だけど僕達は違う。

「周りまで巻き込むなんて、やるわねこのミッション」

「ななななんなんすか？　自分にも説明してくださいっすよ～セラ様～」

面白そうな顔をしてるセラとは反対に、ノウイは情けない声を出してセラに近寄った。だけど直ぐに足蹴にされる。

「うるさい。アンタはミッション内容通りの事をやってなさい！」

「うえ～、自分戦うのは苦手っすよ。戦うんなら隠れときたいっす。強制参加型だけど、自分なら一回も戦闘をしないで乗り切る自身がありまっす！」

「アンタそれはどうよ……」

残念そうな目でノウイを見るセラ。まあでもノウイはそういう奴だろ。寧ろそれがノウイのアドバンテージだ。誰にも捕らえられない回避能力。それが武器。

まあ、それだと何も得れないんだけど、凄くはあるんだよ。それに一人だけ蚊帳の外じゃ可哀想だ。他の無関係な人達はどうでもいいけど、まがりなりにも協力してくれてるんだからな。

「ははっ……凄いじゃないかそれは。それにセラさん。あんまりノウイ君を無碍にしては駄目だよ」

「おお！　そうっすよねテッケンさん！　流石貴方はわかってる！！」

テッケンさんの優しい言葉に調子づくノウイ。そんなノウイに明らかにイラッとセラは来てるよ。

「どういう事ですか？　そいつが役に立つ場面は限られてますよ」

そいつ呼ばわりされてるノウイ。だけどノウイはそんな事には全然構わないようだ。神経が太いんだな。するとテッケンさんが爽やかな笑顔で言葉を紡ぐ。

「はは、だからこそ今やる気を削いじゃダメだよ。今回のミッションでは彼のスキルが役に立つ。だからおだててやる気にしよう。死ぬ気で働いて貰うんだ。逃げるなんてもってのほかだよ」

「テッケンさん！？　貴方は自分の味方じゃないんっすか？」

テッケンさんの発言に一番驚愕したノウイが、勢い込んでそういった。まあ確かに驚く事言ってたけど……テッケンさんがあんな事言うなんて珍しい。

「はは、今回はそう……逃げちゃダメだ」

親指を立ててそう言い切るテッケンさん。良い笑顔を作ってる。

するとセラがノウイの肩をがしっと掴んで意地悪く微笑んだ。どうやらセラのＳっ気に触れたようだ。

「そういう事なら、楽しそうじゃですね。ねえノウイ、騎士が敵に背中を向ける事はしないわよね？」

「ええと、でも誰にも得手不得手があるわけで……自分はただ単に戦闘タイプじゃないってだけっす。だから騎士の誇りも薄いっていうか～」

必死に言い訳を考えてるノウイ。頑張るんじゃなかったのか？初っぱなからこれじゃ、ちょっと考える必要があるんじゃないだろうか？

すると無駄な抵抗をし続けるノウイに、セラが面白げにこう言った。

「誇りが薄い？　なにそれ？　反逆？　なんだかんだ言ってないで働きなさいよ。アンタが使える場面はそう何度もこないのよ。だから貴重な活躍の場を逃さない事。それともなに？　私の言うこと聞けないとか？」

するとその言葉を聞いた瞬間、ノウイはセラの手を取って片膝をついていた。

「ノープロブレムですよ！　まあ、セラ様の命令なら仕方ないですね。反逆なんてそんな……国に逆らっても、せ……セラ様にだけは……」

なんだか途中から急にモジモジしだしたノウイ。早々にセラが手を振り解いたにも関わらず、同じ態勢のままでなにやら一人でやってるよ。

端から見てると、心配しちゃう光景だ。大丈夫かあいつ？　主に頭のねじ部分。それにせめてどんな事させられるか位は聞こうよ。セラもセラで、死にものぐるいの所だけで乗り気に成ってて、肝心の内容は全然テッケンさんから聞いてないし。

僕はたまらずその輪の中に加わるよ。

「まあノープロブレムなのは良いけどさ、何やるかは聞けよノウイ。で、実際どういう事なんですか？　ノウイのスキルが今回のミッションの役に立つって？

ノウイのスキルって言うと『ミラージュコロイド』ですよね？」

僕は呆れた様な視線をノウイへ向けた後、真面目な顔してテッケンさんへと向き直った。ミラージュコロイドはノウイだけの特殊なスキルで、鏡間を超高速で移動出来るって代物だ（確かね）。

あれは確か、鏡間なら空間を越える……とかじゃなかったよな？

前の戦いの時は結構助けられたけど、詳細はよくわからない。

すると僕の質問に、頷きつつテッケンさんが質問の答えをくれる。

「そう、そのミラージュコロイドなんだよスオウ君。今回のミッションは人命救助だ。多分モンスターを倒しつつ、僕たちは落ちかけてる飛空艇に乗り込むことになる。

そして見つけだしたＮＰＣを片っ端からこの船まで安全に運ぶんだろう。だけど……それは普通に考えたらかなりハードルの高いミッションだ。

時間制限もあるだろうし、何人いるかわからない人達を救助なんて……それに我々には見逃したらいけない一人がいる。

だけど誰もその姿を知らないんだから、あくまで全員救助が目標なんだよ。船が地面に落ちかけてる間に、そんな状況でモンスター相手に一体一人何人確実に助けれるだろうか？

考えてみてくれ」

テッケンさんの言葉に、僕達はそれぞれ頭を抱え込む。確かに船が落ちる前にって事は、それがタイムリミットに成りそうだな。
でも数は乗客リストとかあるだろし、ミッション自体が始まれば、全員の数と、助けた数が随時更新されるとかも考えられる。
問題は何人確実に助けれるかって事だな。一人が一人助けるなんて限らない。大体モンスターがいるなら、パーティー組むのが普通だし、それなら一パーティーで守りきれると判断出来る数になるよな。
一パーティーが五人（まあ、五人で組むかは人それぞれだろうけど）そして大体僕が見た限りでは二十人位のプレイヤーが居たはずだ。

それなら僕達を入れて、最低五パーティーって事か。確かに安心できる数じゃない。何人の救助者が待ってるかはわからないけど、四・五人って事はきっとない。多分二桁の前半位は……そうなるとギリギリ？　いやキツいな。

「かなり大変だろうね。それに結局僕達は誰一人見逃せない。その重要人物の名前はわかってるけど、次へ進む条件がミッションの完全クリアって可能性だって結局あるし。
一人だけを優先的にってのは出来ないか。でも、ノウイが居ればそこを確実に持っていけるって事？」
「勿論」

きっぱりと断言するテッケンさん。その顔は自信に満ち溢れてるよ。とうの一番大変に成りそうなノウイは既に青い顔してるけど、ここまでテッケンさんが断言するなら期待できる。
テッケンさんは今までその期待を裏切った事がないからね。ノウイには早速だけど、頑張って貰う事にしよう。僕達がテッケンさんから端的な説明を受けてる間に、飛空挺は速度を上げて空を走って

いた。
多分あのおばさんが強引にまたやったんだろうな。そして物の数分でそれは見えてきた。やっぱり型はこの飛空挺と同じ……だけど今まさに廃船にされる様な勢いで攻撃を受けてる。

元々の夜の冷たさ、でもそこに別の冷たさが混じってる。モンスターどもの冷たい殺気とでもいうのか、そんな物。一瞬黒い雲にでも覆われてるのかと思ったけど、違うんだ。
あの船を包む黒いの全部がモンスター。辛うじてまだ飛んではいるけど、確実に高度は下がってる。船を近づける事も難しそうな状況。だけどその時、聞き覚えのある声が飛空挺に響きわたる。

【艦首主砲用意】

その言葉に僕達は思わず船の先端へ駆け寄った。すると船の船首部分が開いてるじゃないか！

「スゲーなこれ」
「こんな武器があったとは……」
「私もこれは初めて見ます」

僕だけじゃなくみんなが驚いてる。それに他のプレイヤー達も集まってるし――そして次に言われるであろう言葉が全員わかってるから、何の相談もなく僕達はＬＲＯというゲームで繋がった。
そう、僕達はみんなで一斉にこう言ったんだ。光を溜に貯めたその砲台が一際輝いた瞬間に、その言葉は空に木霊する。

【「「「発射あああああ！！」」」】

金色の閃光が船の周りに集ってた敵を消し炭に変える。そしてその開いた部分に船体が入った。近づく二つの船、飛び移れるかどうかの距離で合図は出た。

『ミッションスタート』

プライド（後書き）

第百九十八話です。
いよいよ本格的にスオウ達が絡む事が出来る様になってきました。まあいつまでも傍観者じゃいられないですからね。関わっていかなきゃ、読み物としてもつまらないし、ここからは本格的にスオウ達が入っていきます。
次回は救出ミッション本番。スオウ達は無事にミッションをやり遂げる事が出来るのか！？
てな訳で次回は土曜日に上げます。またです～。

夜空の叫び（前書き）

ミッションはスタートされた。降り立った船はモンスターに占拠されていた。溢れる様なモンスターを仲間と、乗り合わせたプレイヤー達と共に狩っていく。だけど時間はあまりない。

大方の予想通りだったけど、このミッションは時間制限付きの救出ミッション。しかもその人数が反則だった。でも僕達には切り札があったんだ。ノウイと言う切り札がさ。

夜空の叫び

「よし、見つけたぞ！　ノウイ頼む！」
『了解っす』

耳元から聞こえるノウイの声。これであいつが直ぐにここに駆けつけてくれるだろう。僕達は僕達の役目を果たさないとな。
僕達の目の前には家族連れらしいモブリが三人。部屋の隅に固まって震えている。ミッションの為か、構造は同じだけど、解放されてなかった部屋や場所が解放されたこの船は更に広く感じる場所へと成ってた。

そしてそこかしこに蛇の様な首で翼を生やしたモンスターが溢れる様にいて、この場所にも当然いやがった。今にもモブリに襲いかかりそうなその敵へ、僕達は一斉に飛びかかった。でもここにはセラも今は居ないんだ。
罵倒されずにすむから良いけど、どっちみちヘマはやれない。なんてたってこのミッション……かなり無茶な設定だ。

ミッションスタートの通告と同時に僕達は真っ先にこの船へと飛び移った。そしてウインドウに出てた数字を見て驚いたよ。
減りゆく数字はカウントダウンだろう、そしてその下には０に斜線が入り２３とあった。多分その数字は助けるべき救助者って事だと一発で悟った。
いやいや、２３って多すぎだろ。だけど突っ込む暇さえ無かったよ。だってカウントダウンが刻む数字はたったの十分しか無かったんだ。

足を止める訳にはいかなかった。僕達はまず甲板の敵を一層して、そしてテッケンさんの作戦通りに動く事に成ったんだ。
そして今に至るこの状況。モンスターを背中から切り刻み、テッケンさんが締めの一撃を食らわせる。それほど強いって訳じゃないモンスター。
でもこいつらは鳴く前に倒した方が良いんだ。何故なら、その鳴き声には仲間を引き寄せる特性があるから。流石に雑魚でもワラワラと狭い通路に集まられちゃやりづらいし、僕達はまだまだ奥へと進まないといけない。

ミッション開始から既に五分は経った。もう半数以上を助けたけど、あくまでも全員助けきるのが目標だからな。でも僕達はこのモブリ達を船まで戻す役じゃない。その役目の奴はきっともうすぐーー

「お待たせっす！」

はぁはぁと息を切らしてノウイが鏡から現れた。流石ミラージュコロイド、連絡してからここに来るまで十何秒しか経ってないぞ。早い早い。

「大丈夫かいノウイ君？　かなりキツそうだけど？」
「大丈夫っすよテッケンさん。何てたってこの分野なら得意中の得意っすからね。任せてください。その人達も直ぐに脱出させるっす」

そう言ってノウイは親指をグッと立てる。本当は結構疲れてるだろうに……けど、ちょっと休んでてなんて結局はいえないんだけどね。
だってこのミッションをここまで順調に進められてるのは誰でもない、ノウイのおかげなのは間違い無いからだ。てか、ノウイが居なかったら半数近くでタイムアップになってもおかしくはない感じ

だと思う。
だって本当なら護衛を兼ねて僕達はこの船を行ったり来たり何往復もしなくちゃいけない筈なんだ。でもそれがとある裏技で必要ない。それこそノウイが持つ『ミラージュコロイド』というスキルなんだ。

「じゃあ失礼します」

ノウイは僕達の脇を抜けて、ＮＰＣの元へ。そして彼らをかつぎ上げると、その場に鏡を展開させた。そして通路にも斜めに配置。実はその先の角にも既に鏡はある。

「それじゃあ探索の方お願いしまっす！」
「おう！」

そう言ってノウイは鏡へと消える。そよ風さえも立てずにノウイは消えて、僕達が部屋を後にしようとする時には『無事にお届けしたっすよ』という連絡が入る。
それは驚異的な速さ。信頼が置ける事の現れだ。だって今度は五秒も経ってない。まあ主要通路にはずっと鏡が配されていて、来る所は別々でも帰るべき場所は一つだから、その違いだろう。
どうにかして位置情報も送れれば良いんだけど、今の所逐一報告するしかないからね。けど――

「本当にテッケンさんの言うとおりにノウイが大活躍しましたね」
「ふふん、そうだろう。彼のあのスキルは貴重だよ。何よりも移動できるのが自分だけじゃ無いというのが最大の利点だよ。
それに彼の回避能力ならいくら敵が密集してようと関係ないからね」

「まあ確かに、避けることと逃げる事に関してはプロですもんねアイツ」

プロって言うか、プロフェッショナルだね。ただ単に正式名称に変えただけれども……まあでもテッケンさんのアイディアは素晴らしかった訳だよ。

「こういうのは行きは探すのに、帰りは守りながら進のに時間を取られてしまう物だよ。そして大抵時間はギリギリに設定されている。だけど僕達は探す側、ノウイ君が救出側と分けるだけで効率は倍以上だよ」

確かにテッケンさんの言うとおりだな。今はあのノウイが頼もしく見えるもん。倍なんてもんじゃない気もするし、本当にノウイ様様って感じ。

僕達は薄暗い通路を走りながら、扉を片っ端からあけていく。だけどモンスターはいれど、ＮＰＣの姿は見えないな。

するとズズ～ンと言う揺れが起こった。

「なんだか感覚が短くなってきてないか？」

「そうですね。そう言えばそんな気もします。イヤな感じもするし……」

シルクちゃんにそう言われるとなんだか怖いな。だけどその時、ピクが通路の奥へ向かって「ピーピー」と吠えた。

「何か……来る」

鍛冶屋の奴がそんな言葉を呟いた。すると高速で僕達の間を何かが通り過ぎる。ギュン！　ってな感じで。
「え？　今のって――」
「聖典？」

僕の言葉にシルクちゃんが続いた。確かにあれは聖典だ。通り過ぎたと思ったら、僕達を確認してか後ろをふわふわと漂って来てる。
「ピクークピーーピー！！」

だけどそんな中まだ叫び続けるピク。すると聖典を見ていた僕とシルクちゃんに、テッケンさんと鍛冶屋が同じような事を言う。
「二人ともそっちじゃない、前だよ前！」
「お前等、後ろを気にしてる場合じゃなさそうだ。ピクの警告はそっちじゃない」

そんな二人の言葉に、僕とシルクちゃんは同時に前方へ視線を向けた。すると薄暗闇に浮かぶ大量の金色の目がこちらを睨んでる。いや、睨んでるだけじゃない。蠢いてるよ。
「うげっ」
「きゃ」

僕とシルクちゃんはそれぞれにイヤな感じの声を出す。だってそれはあまりにも大量だ。通路いっぱいにモンスターが巣くってる。
僕は自分の耳元に指を向けて、耳に装着した機械を押さえてその向こうに居る奴へとこう言った。
「おい、何やってんだよお前……」

すると直ぐにこの状況を作り上げた奴から声が返ってくる。

『何って聖典を使っての内部探索でしょ。しょうがないでじゃない、いちいちモンスターどもを相手になんかしてられないんだから！
私が聖典を使って真っ先に通路を調べてるからアンタ達は、無駄足踏まずに済むのよ。感謝されても、文句言われる筋合いは無いわね』

こんの性悪メイドめ。別に謝ってくれるなんて期待なんかしてなかったけど、もうちょっと言い方って物があるだろう。
理屈も理由もわかるけど、言葉の選択は重要なんだよ。一言軽く謝るだけでも出来ないのかよ。まあ僕に対してする分けないか……だってセラだもん。

ここで言い争ってても仕方ない、取り合えずここまでやった仕事の結果を聞こうじゃないか。確かこの奥は最深部――動力炉だった筈だ。

「はいはい、もういいよ別に。で、この先には居るのか？」

僕のそんな言葉に、セラはつんつんする声で答える。

『居るわよ一人。多分彼女で最後ね』
「最後？　確か後四・五人いなかったっけ？」

だってさっき助けた三人で十八人目位だった筈だけど。

『このミッションやってるのは私たちだけじゃないでしょ。他のプレイヤーでもそのくらいは出来るわよ。まあ正確には今ノウイが向

かってる筈だから、まだ十八のままだけど、確実にその先に居る奴で最後よ』
「なるほどな」
確かにノウイが向かってるのなら、直ぐに救出数は二十二になるだろう。それなら後はこの先の一人だけ。残りは三分位……これなら
『あっ、急いだ方がいいわよ。動力炉にはモンスターが溢れてるから、そこに出てるのもまだ一部なのよ。今は他の聖典で引きつけて、NPCを聖典の防御で守ってるけど、たった二機のシールドじゃそんなに持たないわ』
「お前――それを早く言えよ！！」
かなり深刻じゃんか。時間もそうだけど、中の方はまだそんな事に成ってるのかよ。通路に出てる奴らだけじゃ無かったのか……
『ふん、冒険者なら常に最悪のケースを考えて行動してなさい。特にアンタの場合はね』
「なんだそれ！？」
誰の格言だよ。それに僕にとっての最悪は結構こいつにもたらされてる気がする。くっそ、通信越しに文句を言ってる場合じゃないな。
「とにかく急ごうか？」
「ええ、そうですね！！」
僕達は通路一杯に押し込まれてる様なモンスター共へ突っ込む。テッケンさんは小さな小刀を振り回し、鍛冶屋はご自慢の大槌を使って敵を凪ぎ払う。

そして僕は二対の剣で一気にモンスター共の懐まで入り込む。そしてその過程で切り刻んだ奴らをこのスキルで止めを刺す。

「サンダーブレイク！！」

青白い雷撃が薄暗い通路に激しく響く。でも、どうやら動力炉までは届かない。うるさい声を響かせるモンスター共はまだまだそこにいた。

たく、こういう奴らを一掃する為にセラの収束砲撃は使ってほしい。まあここにいる一機じゃどうしようも無いけどさ。

それにセラは今回は探索係。それも役割分担って奴だ。アイツの聖典は先行探索にも向いてるからな。聖典の視界はセラも共有出来るみたいだし。

だからアイツは、今は甲板で聖典を操る事に専念中だ。アイツはアイツでちゃんと仕事したわけだし、ここでアイツを頼るのも癪だな。

僕達は僕達の役目をやらないと。見つけてくれた……でもそこへ行く道が塞がれてるのなら、僕達はノウイがそこへたどり着ける様にしないとだろ。

「うし！」

鮨詰めのようなこのモンスター共を僕が一掃するとしたら、これしかないよな。

「イクシード！！」

迫り来る壁の様なモンスター共へ風のうねりをぶつける。かまいたちにやられた様にスパスパ切れていくモンスター共。このまま一

気にこの通路を抜ける！

「僕が道を開きます！　ついて来てください！！」

「よし！」「はい！」

テッケンさんとシルクちゃんが同意の意を言葉で示してくれる。でも鍛冶屋は頷くだけ。わかりにくいんだよ。まあでも口を開く度に罵倒する奴よりはマシか。

後ろに付いてくる三人と一匹に当たらない様に風のうねりをコントロールする。これがまた狭い通路ではやりにくい。普通に木造の壁とか壊れて行ってるしな。

だけどこれはしょうがない損害だ。もしも修繕費が請求されたらミセス・アンダーソンに払ってもらおう。そんな事にヒヤヒヤしながらも、一方的にモンスター共を凪ぎ払ってると、通路の先の所で密集してるモンスター共が何かを吐き出してるのが見えた。

それは緑色した不気味な息？　いや……これは……

「毒か！？」

しかもＨＰを減らすタイプじゃなく、神経毒っぽい。一番前にいて、一番動いてた僕だからこそ、その毒を一杯吸ってしまってた。

ガシャンと音を立てて左側のセラ・シルフィングが手から落ちてしまう。痺れる様な感覚……毒のせいで力が入らない。

くそ、後はあの毒を吐き続けてる奴らの所を抜ければ動力炉だと思うのに……なかなか考えてやがるじゃないか。

奴らは狭い通路で確実に毒を届けてやがったんだ。しかも大量の仲間を目隠し代わりに使ってまで確実に。動力炉に行かせたくないってのもあるんだろうけど、広い所で使うよりも効果的で効率的っ

てのをわかってる。

「私たちにも……毒が……」

後ろから聞こえたそんな声。どうやらシルクちゃん達にもそれは回ってる様だ。それはそうかも、今効果が出てきてはいるけど、あいつらのあの様子からしてずっと吐き続けてるみたいだし、僕達が最初にこいつらの群に飛び込んだ時から、この毒を吸い続けて来てた筈だ。

それがここに来て効いてきて、さらにはもっと濃い濃度で体を縛るって感じか。別に僕だけならやりようが幾らでもあったんだけど……シルクちゃんまで動けないのは困るかも。

この様子だときっとテッケンさんと鍛冶屋も同じ状態だろう。

「やられたね。シルクちゃん、魔法でどうにか出来ないかい？」

「やってみま――あっ」

カクンと膝が折れて地面に膝が付くシルクちゃん。まあこの中じゃ一番デリケートっぽいからね。繊細そうというか。その分セラとかなら意地でも倒れなさそうだよな。

そんな事思ってると、僕も膝がガクガク成ってきたかも。流石に二本とも武器を落とす訳にも行かないから必死に右手のセラ・シルフィングは握ってるんだけど……そろそろ握力がやばい。

そんなに強くないと思ってたけど……かなりこれは強力だ。

「シルクちゃん大丈夫？」

「はい……大丈夫です。こんな事もあろうかと準備は万全ですから。ピク」

そんなシルクちゃんの声に答えるのは桜色の小竜だ。シルクちゃ

んのすぐ傍でピクも辛そうに床に横たわってた。だけど何とか「ピー」とご主人様の声に応えてる。
だけどその時、前方からバサバサと聞こえて「キシャーキシャー」なる不気味な声が近づいてきてた。どうやら一体が集団から出てきたようだ。
動けなくなった僕たちをいたぶろうって魂胆か？　流石モンスターらしく意地の悪いのやり方だ。するとそんな一体へ向かって走る光線が一本。見事に命中したそれに、思わずたじろぐモンスター。
そして続けざまに二・三本の光線が放たれる。
「ギャギャギャ」
と不気味な声が響く。すると聖典が僕たちの頭上を越えてさらにそのモンスターへ向かって攻撃を仕掛ける。

「セラ……」

なるほど、そういえば付いてきてたなアレ。それに聖典は生物じゃないから毒なんて効かない。ナイスだセラ。

「今だよシルクちゃん。聖典が奴らを引きつけてる間に頼む！」
「はい……ピク、ストックＮＯ４をリリース」
「ピー」

シルクちゃんの言葉に、倒れ込みながらもその片羽を広げるピク。そしてそこから一枚の羽が舞う。それを震える腕で掴んだシルクちゃんはこう叫ぶ。

「解放『リカバリー２』！！」

すると羽が光輝いて弾け飛ぶ。そして解放された魔法が魔法陣を描いて発動される。どうやらリカバリー２は範囲魔法の様だ。

魔法陣が足下に現れて、その中の僕達全員の状態異常を回復してくれる。痺れる様な感覚もあっと言う間になくなった。

「よし！！」

僕は床に落ちていた一本を取り走り出す。僕が掴んだことで再び風のうねりが発生した二対の剣で、まずは毒を吐き続けてる奴を潰すことにした。

セラ・シルフィングを突くように出して、真っ直ぐに風のウネリを飛ばす。直ぐ前で聖典と対峙してた奴を真っ先に巻き込んで伸びていくウネリ。そして突き刺さったのを確認すると、二本のウネリを体を回転させる事で操って周りのモンスター共も一斉に風に巻き込んでいく。

「やりすぎだよスオウ君」

毒を吐き続けてたモンスター共を一掃した光景を見てそういったテッケンさん。まあ通路が半壊しちゃったから無理無いかも知れないな。だけどほら、仕方ないじゃん。

なんだっけほら……え～と、

「勢い余っちゃって」

「それは反省ではないよね？」

「そ、それよりも急ぎましょう！　思わぬ所で時間食っちゃったんだし！」

僕はテッケンさんの追求から逃れる為に走り出す。まあ急いだ方がいいのは確かだし、それ以上しつこい事はテッケンさんも言わなかったよ。

半壊した通路を抜けて僕達は開けた感じの動力炉に到達した。そ

この中央には青い光を放つ大きな機械（？）とその周りには大量のモンスター。

そしてそいつ等に立ち向かってる……というか引きつけてる聖典が数機。ここから見たところ、他に誰も見えないけど、聖典が戦ってるんならここには助けを待ってる人が居るはずだ。

既に残り時間は二分を切ってる。こいつらの相手をしてる場合じゃない。

「まだこんなに……」

「大概だなここも……大丈夫シルクちゃん？」

「はい、リカバリーは完璧なので」

繊細なシルクちゃんを心配する僕。だけどシルクちゃんは自分の魔法に自信ありげだ。確かに僕の体調も最初より良くなってる位だし、シルクちゃんはヒーラーとして一流だからね。

その自信は頷ける。だけどどうしても心配に成っちゃうんだよね。だってシルクちゃんは僕の周りの女子の中で、一番女の子女の子してるんだ。

守らないと、という思いが募るよ。まあ大概こっちが支えられるんだけど。そこら辺はヒーラーとして流石だよ。

青い光に照らされて、さらに不気味さを増したモンスター共はギャアギャア呻きながら聖典を追っている。聖典に気を取られてる今の内に目的の人を見つけたい所だな。

「取り合えず一周してみれば速いかな」

「いや、それよりも良い方法があるよ」

僕が走り出そうとしたのを制するテッケンさん。すると上を見て

ニヤリする。僕を見上げてる……訳じゃない。何が？　と思ったら上方を僕達に付いて来てた聖典が飛んで行った。

「なるほど」

あの聖典は付いてこいって言っている。セラはその人の居場所を知っているんだから、僕達を案内してくれる気だろう。

「よし行こう！」

僕達は聖典の後を追って走り出す。入り口から反対側、動力炉の隙間みたいな所の両側に二機の聖典がシールドを張って展開してる。って事はこの奥に最後の救助者が居るはずだ。

「おい、居るんだろ。助けてやるから出てこい」

僕は隙間の奥に向けて呼びかける。すると奥の方からゴソゴソと音がしてか弱い声が聞こえて来た。

「だ、誰です？　私はもう、あそこに戻りたくない。大丈夫です。私はこんな所で死ぬ気は無いから放っておいて！」

「放って置いてって……」

流石にそういう訳には行かないんだよな。それにこの人、もしかしたらクリューエルとか言う人じゃないだろうか？　あそこに戻りたくないとか言ってるし、イベントとの話と繋がるよな。

まあそんな事より、今は脱出最優先だけど。

「どうやって助かるんだよ？　このままじゃこの船と一緒にバラバラに成っちゃうぞ。手とか足とかちぎれて血が一杯吹き出しちゃう

んだぞ。それでもいいのか？」
「うっ……そ、そんなのいやあああああああ！！」
「うお！？」

僕の脅す言葉に耐えきれなくなって飛びでて来たのは小さなモブリの女の子だった。その子が勢い良く僕の胸へとぶつかって来たよ。だけど驚きはしたけど痛くは全然なかった。だって僕が知ってるモブリよりもさらに小さい。これが子供サイズって訳なのかな？
そう思ってると耳にセラの声が響いてきた。

『もう一分切ってるわよ！　ノウイが直ぐ着くから急いで脱出しなさい！！』
「了解」

セラにそう答えて、僕は胸にしがみつく小さなその子を優しく抱え込む。

「大丈夫、ちゃんと助けてやるよ」
「……うん」

ぎゅっと捕まれる感覚がある。さてと、まずはこの大量のモンスターだな。その時、出口の方から声が聞こえる。

「大丈夫っすかみなさん！？　急いでくださいっす！」
「わかってるよ！」

僕達は襲いかかるモンスター共の中を走り出した。直ぐそこにノウイは居るはずだ。だけどその時、奴等は動力炉その物に攻撃を仕掛け出す。そして――

「スオウ君手を！！」
「ノウイ！！」
僕達が手を伸ばしたその瞬間――青い光が部屋一杯に溢れて全てを呑み込んだ。

夜空の叫び（後書き）

第百九十九話です。
スオウ達はどうなってしまったのか……無事なのかどうかも含めて次回へ行きます。でも今回はテンポ良く行けた気がします。最近は一つの事でも長くなりがちだから、色々と読み返してみましたよ。
これからも試行錯誤していきます！！
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

無邪気な天使（前書き）

大爆発を起こした飛空挺。僕達はその勢いで、バラバラに半月が満ちる夜空へと投げ出された。誰も頼れなく、守らなきゃいけない奴まで抱えてる。爆発もダメージも相当堪えてたけど、それでも僕はやりきった。

落ちたのは真っ暗な山の中。だけどここからも大変でした。

無邪気な天使

吹き荒れる衝撃の嵐。激しい熱量……そして足下から崩れ去る踏みしめてた筈の場所。この大爆発と共に、飛空挺はきっと限界を迎えた。

「くっ……」

投げ出された真っ黒な夜空。みんなは無事なのか確認したいけど、そんな余裕すらない。頭上には炎に包まれた飛空挺が今まさに崩れ掛かってた。

外壁はどんどん剥がれて、このままじゃ僕達を再び巻き込んで地面に激突しそうな勢いだ。流石に不味い……けど体がなんだかまともに動かないんだよな。

きっとさっきの爆発のダメージのせいだろう。一番リアルに近い形でＬＲＯに居る僕がこいつを背負うべきじゃ無かったかも……そう後悔してしまう。

せめて鍛冶屋とかに持たせてたら、まだ対応のしようもあっただろうに……

「ふわぁ～～、空です空！　真っ暗な空に真っ赤な船。凄い！！」

胸の所でそうやってハシャいでるモブリは気楽なもんだ。こっちはどうやって地面に無事足を着けるか必死だってのに……とにかく継続してるイクシードを使うしかない。

いつもの様に風のうねりを先に地面に当てて勢いを削ぐやり方で行こう。みんなの無事を信じて、今は自分が無事に生きれる行動を取らないと……

「おい、危ないからちょっと静かにしてろよ」
「は～い」

まずはこの飛空挺から距離を取った方がいい。着地したその上に落ちてきて貰っても困るしな。僕は風のウネリをボロボロの船体にぶつけて、そこを軸にバネの様にして距離を取る。
ちょっと落ちる勢いが増したけど仕方ない。後は気合いの問題だ。

「舌噛むなよ！！」

僕はそう言って森の木々へと突っ込んだ。バサバサバサと葉っぱと小擦れ合う音がして、小枝やらなんかもバキバキと音を立てて落ちていく。
かなり細かく痛いけど、後少し……そして木々を抜けて地面が直ぐそこまで迫ったときにセラ・シルフィングを地面に向けた。
地面を抉りながら拡散する風のウネリ。それはある意味、腕自体がどうにか成りそうな位の勢いだった。だけどここで力を緩める訳には行かない。
だけど全身に負った爆発のダメージに一瞬気が取られる。その時、真っ直ぐに降りおろしてた風のウネリに僅かなズレが……グワングワンと揺れて僕達はまともに地面に着くどころか、今度は風のウネリに振り回されて飛ばされた。

「うわあああああああああああああ！！」
「きゃはははっはははは！！」

ケラケラ笑ってるモブリの体を必死に庇って地面を転がる。二・三回位背中に衝撃が走ると、ようやく勢いが収まってくれた。

「し……死ぬかと思った」
「あ～凄かったね。遊園地のゴーって行く奴よりも凄かった！！」
腕の中でまだきゃははとしてるこいつは、何気に凄いなと思う。まあただ事態の深刻さに気付いてないだけの様な気もす――その時地面に伝わる振動と衝撃が、大きな音と共にやってきた。
「きゃうわ～、クリエビックリ！」
「飛空挺も落ちたみたいだな……」
今のはその余波みたいな物だろう。明らかに飛空挺が落ちたと思われる場所は赤く成ってる。激しい炎が立ち上ってるんだろう。
「うん？」
その時ガササと小動物達が一斉に遠ざかる様に逃げて行くのが見えた。何事か？　じゃないか……飛空挺が落ちたんだからそれは大惨事。小動物が逃げるのも頷ける。だけどその中には明らかにモンスターもいて……しかも暗い森の先がなんだか赤く成ってるような。
「なんだか焦げ臭い」
「確かに……それにこの光景……なんだか山火事でも起こってそうな――って山火事だよこれ！！」
僕はモブリを担いで走り出す。ああもう、次から次へと何なんだ一体！！　ちょっとは休ませてほしい。テッケンさんやシルクちゃん、それに鍛冶屋の事だって気になるし……まあ僕が生きてて彼らが死んでるなんて事はないだろうけどさ。
「うっわ、マジ無理……体力限界……」

「えええ！？　ダメだよそんなの、ダメダメ！　こんがり燃やされるのはイヤーー！」

そうは言ってもな……こっちはＨＰかなり奪われてるし、走りまくって足は棒の様だしで一杯一杯何だよ。今だってかなり無理してる。

全身ズキズキするしさ……くっそなんて不幸なんだ。とある主人公のとある台詞をまさに今叫びたい気分だよ。まあだけどそんな事を考えてると、叫ぶ前に僕は足を踏み外した。

森だからね。しかも暗いし……明るいのは迫りくる後方だけなのだ。だから前の方は暗い闇。どこをどう走ってるかもわからないから、いきなり地面が下り坂に成ってる事に気付かなかった。

「うわっうわっわわあああああ！！」

坂道を転がり落ちる僕。木に激突して止まると、視界が反転してた。ようは頭が地面に付いて、足が空を向いていた。

「ふ……不幸だ」

ああ、思わず言っちゃったじゃないか。まあでもしょうがないよな。飛空挺の爆発に巻き込まれて、空に投げ出されて、死にものぐるいで地面に着いたと思ったら、今度は山火事に追われる羽目に成って終いには転がっちゃ、誰だってそう言うよ。

まあ、でも……おかげで炎からは逃げれた様だった。一段階下に成ってるからな？　まあ炎の事はよくわからないし、火事に巻き込まれないのなら何でもいいや。

けどだからって完全に大丈夫って思える訳もない。とにかく今はこの森から出た方が良いだろう。

「よし、取りあえず火が回ってなさそうなこっちへ行くぞ」
「おおーー！！」
モブリのその子は、こんな状況でも元気一杯だった。ある意味この明るさには助けられるよ。僕達は炎を避けて森からの脱出を目指す。

で、三十分後……僕達は山の高見に来ていた。目の前に広がる光景は広大な大地と星空を写す大きな湖が見えている。
煙たかった空気もここではもう澄んでいて、息を吸う度に山の匂いが肺に満たされる。
「ふう……って、どこだよここは！！　森から出ようとしてた筈なのに、もっと高い所にきてんじゃん！？」
やっぱりあの暗闇の中、光も無いのに歩き回ったのがいけなかったな。くっそＬＲＯも誰もが光を出せる魔法を使えると思わないでほしい。
せめて足下が見える位の光は確保しとけよな。
「ただ単に月明かりに誘われて来たらこう成るよ。だってお月様はお空のもっと高い所にあるんだもん。まだまだ全然届かないよ」
んしょんしょと頑張って月を掴もうと腕を伸ばしてる小さなモブリ。子供に言われるのも何だけど、あそこで道しるべに成りそうなのだったのは、時折差し込んでた月明かりだけだったんだよ。
「月になんて手が届くわけ無いだろ。あれはもっともっとず～～と

高い空の終わりのその先にあるんだよ」
僕の意地悪な言葉に、だけどモブリの子供は手を伸ばすのを止めずにこう言った。
「でもでも、私はあそこから落ちてきたんだよ。だからきっと帰れるもん！」
「なんだそれ？　お前はカグヤ姫か？」
月から落ちてきたって言ったら、僕達日本人の頭にはそれがよぎるよな。これで生まれは竹からなら完璧だけど……僕の言葉にモブリのその子は首を傾げて、こう言った。
「カグヤ姫？　違うもん！　私そんな名前じゃないもん！
私はクリューエルっていうんだよ！！」
「ああ、はいはいクリューエルね……ってクリューエル？」
なんだか聞き覚えがあるなその名前。なんだっけ？　爆発の衝撃ですっぽ抜けた感じが――――するとその時、耳元の機会がノイズを発してピピピガガガと何やら言っている。
そういえば、この存在も必死過ぎて忘れてたな。これ使えばみんなと連絡取れるじゃん。反応してるって事は近くに誰か居るんだろうし……でも調子悪いな。
もしかして壊れたとか？　そんな事に成ったら、セラに弁償させられるじゃないか。僕は指で何回かトントンと機械を叩いて調子を確かめる。
するとノイズの中に微かな声が入ってきてた。
『ガガガ……オウ君……無事……ガガガ……僕達……ガガガ……メ

イズの……ガガガ……集合……で』

ノイズが酷すぎて文章には成ってないけど、誰かは何となくわかった。これは多分テッケンさんだろう。そんな感じがしたもん。

で、内容でかろうじて聞き取れた部分で一番重要そうなのがメイズって部分だな。その後に集合っても言ってたし、村か何かの名前かも知れない。

そこに行けば取りあえずみんなと合流出来そうだ。僕はウインドウを開いて地図を確かめる。

「メイズメイズ～っと。お、やっぱりあった」

地図上で見つけたその村は、どうやらここから見える湖の傍にあるらしい。水辺に沿って町や村が出来るって言うけど、そこら辺はＬＲＯも同じみたいだな。

けどここからじゃかなり遠いな。それにあの暗い森の中を正確に進めるとも思えないし……どうした物か。この大まかな地図だけじゃ流石に、たどり着けないよな。

「はあ～」

大きな溜息を付いてウインドウを閉じる。せめて道を照らす位の初歩的な魔法位覚えておくんだったと後悔しつつね。

「どうしたの？」

「別に、ただどうやってあの湖の所まで行こうかなって悩んでるだけだ。てかいつまで手を伸ばしてるんだよ」

さっきからずっとその態勢だぞクリューエル。腕とか疲れないのかな？　すると腕を卸して、ちょこんと僕と同じように地面に腰を

下ろした。
「疲れた～。もうちょっとで掴めそうだったのに～」
「嘘付け。そんな短い腕で月になんて届く訳ないだろ」
月へ手を伸ばすとかアホな事やってないで、もっと現実見つめろよ。僕達今、遭難中だぞ。でも相変わらずクリューエルは月の事へ興味津々だ。
「じゃあどうやったらお月様へいける？　私はね……あそこに行かなきゃいけない気がするの……」
「行かなきゃいけないって……ＬＲＯってそもそも月にいけるのか？」
「行けるよ。だってあそこにあるもん！　それにお話も一杯あるし、お月様にはもう一つの世界があるんだよ」
もう一つの世界ね……もしもそれが本当ならＬＲＯ中に衝撃を走らせる事が出来る。まあでも、子供が元居た場所へ帰りたいってのは普通の事か。
いや、子供じゃなくても……そう思うはずだろう。僕もその場に腰を下ろして、夜空の半分欠けた月を見上げてこう言った。
「行かなきゃいけないってのは、そこに家族でも居るのか？」
「……わからない。けど……きっと大切な人に伝えたい事があった……気がするの」
まっすぐに夜空の月を見上げてそう呟くクリューエル。その幼い横顔には、なんとも言えない哀愁が見える様な気がする。
まあ小さな子の夢を壊すのも何だしな。
「そっか、大切なことか。そらなら伝えに行かなきゃな」

「うんー！　ねぇねぇ貴方はお名前なんて言うの？　なんで私を助けに来たのー？」

無邪気な顔を向けてそういうクリューエル。小さい子特有の勢いって奴がこいつにはあるよ。テンションもコロコロ変わるしな。

「僕はスオウって名前だよ。お前はクリューエルな」

「うんー！　クリエで良いよ。お友達はみんなそう呼ぶんだぁ」

ただでさえモブリは愛くるしい容姿をしてるのに、子供ってなるとまた一段と……それはクリエだからなのかな？

クリッとした目に左右で結んだ青い……と言うか、不思議な色合いを見せてる髪。そして服は多分宗道服みたいな物なんだろう。

白を貴重にした袖口が広い袴っぽい服だ。子供なのに大胆に肩が露出してるよ。この時期ならいいけど、冬になると寒そうだな。

そしてその首もとには涙の様な形をした、クリエの髪色と同じ色のネックレスがある。

僕は楽しそうにクルクルその場で回ってるクリエにちゃんと説明してやる事にした。そうそう、あのオバサンが探してたのってクリエだし。

思い出した思い出した。

「クリエな。僕の事はまあ、呼び捨てでもなんでもいいぞ」

「う～んとね」

少し考え込む素振りを見せるクリエ。そしてトテテと僕の前に来るとガバッと抱きついてこう言った。

「お兄ちゃん！！　お兄ちゃんがいい！！」

「は？」

呆気に取られる僕。だけどクリエは気持ちよさ気に顔を擦りつけて来て懇願する。

「クリエねクリエね、家族がほしいの！　スオウはクリエの事助けてくれるからお兄ちゃんなの！！」

ギュム～と力を込めてしがみついてくるクリエ。それを見てるとまあ、別に良いかなとも思えてくるよ。

どうせそう長くは一緒に居られないだし、一緒にいる期間だけでも……そう思った。

「はいはい、別にそれでいいよ」

「お兄ちゃんに成ってくれるの！？」

「おう、いつでもお兄ちゃんが守ってやるよ」

「やったーー！！」

弾ける様な笑顔で跳ね回るクリエ。そんなに嬉しい事なのかな？

こっちはやっぱり気恥ずかしいだけど。いたいけな女の子にお兄ちゃんと呼ばれる事は、くすぐったいしな。

「さてと、さっさとみんなと合流しなきゃな。迷うかも知れないけど結局森の中を歩かなきゃいけないのか……」

「大丈夫、どうにかなるよー」

お気楽にそう告げるクリエ。本当にいつでも楽しそうな奴だ。

「まあどうにかしないといけないんだけど。そうしないとお前をミセス・アンダーソンの所に届けられないしな」

「ミセス・アンダーソン？」

その瞬間ピタリと動きを止めるクリエ。そしてガクガク震えだした。え？　何その反応？　地雷でも踏んだかな？

「お兄ちゃんは私を死刑台に送る気なの？」

「は？　いや、元々そういうミッション……じゃ無かったけど、報告はしなきゃだろ。顔見せでもしないと本当に死んだことにされちゃうぞ。

一応心配はちゃんとしてたしさあのオバサン。僕達があそこに来れたのはそのオバサンのおかげだ」

「そうなんだ……でもお兄ちゃんは勘違いしてるよ」

「勘違い？」

するとクリエは今までに見せたこと無い、大人っぽい顔してこう言った。

「そう勘違い。あの人……ううんあの人達が心配してるのは私じゃなくて私の存在なの。大切なのは信仰心。それが傾く事が恐ろしい」

「……それじゃあ、クリエにはシスカ信仰を傾ける何かがあるのか？」

妙な雰囲気だった。自分の足下サイズのクリエに場の雰囲気が飲まれてる様な……そんな感じ。初めてただの子供じゃないと思った。

それになんだか似た感じを、つい最近感じた様な気もしないでもない。僕の質問にどう答えるのか……それに注目していたら、クリエはニコッとハニカんだ笑顔で笑う。

「わかんない！！」

「はい？」

「だからわからないの。私も自分に何があるのか知らないもん。アンダーソンもシスターも誰も教えてくれないし……でもきっと何か

あるよ！
お兄ちゃんもクリエの秘密を一緒に見つけよう！！」
秘密の対象者と共にその秘密を見つけるって……なかなか無いシチュエーションだな。でもわからないか……考えてみればそれは納得かも知れない。
クリエはまだ子供だ。きっとそれが絶対的な傷害なんだろう。それか別に知る必要ないのかも……でも確実に何かあることは確かだよな。
この愛くるしいクリエの中には大人達が必死こく何かが……って
「お前さっき存在がどうとか言ってなかったか？　それは何だよ」
「ええ～とね。雰囲気？」
キャハ☆　みたいに言いやがるクリエ。雰囲気であんな意味深な台詞を吐くなよな。気になってしょうがないだろ。
「雰囲気ってお前な……まあとにかく、あの村目指すぞ。ミセス・アンダーソンの所に届けるかどうかは、そこで相談して決めるからな」
「うううう～クリエあのオバサン苦手なんだよね。勉強押しつけてくるし、いつも宗教事熱く語るし……いい加減耳にタコができちゃうよ」
はは……そんな風に思われてるのか。向こうはかなり真剣に心配してた様だったけど……なんだかな～って感じだよ。
「あのオバサンもクリエが大切だからだろ。可愛がって貰ってるんじゃね？　まあ僕は何にも知らないけどさ。箱庭って所に閉じこめられてたんだろ？」

「うん……だけど閉じこめられてたって感じはしないかも。だってかなり広かったし。でも退屈ではあったよ。けどね、退屈と嫌なら退屈がまだいいの。
あのオバサン、遠出する度に古めかしい本ばっかり私に買ってくるんだから。しかも超分厚いの！！　しかもまずはそれを自分で読み聞かせるんだよ！
地獄だよ、あれは～～」

確かに……遊びたい盛りの子にそれはどうかと僕も思うよミセス・アンダーソン。いや、クリエの話からも相当な愛情が伝わってくるけど、得てしてそれは本人に上手く伝わってない。
メッチャから回ってる。アプローチの仕方が間違ってるよな。

「はは。そいえば何だっけ元老院とか言うジジイとかはどうなんだ？　そいつ等の事も知ってるんだろ？」

僕はなんとなく、イベントで出てた名前を言ってみる。

「げんろういん？　それってあれかな？　時々オモチャを送ってくる人達かな？　よくわかんない。だってクリエの居た所には殆ど誰もこないもん。いつも一緒に居たのはシスターだけ」
「ふ～ん、お前も大変なんだな」

なんだかあっさりした感じで答えてしまった。だけどクリエは別段気にする事も無く、こう言った。

「そう、クリエは色々と大変な子供なんだよ～」

それはもう色々と疲れきった奴の吐く台詞だろ。でもあんまり見せないだけで、クリエにも相当な物が貯まってるんだろうな。

だからこそ、箱庭から逃げ出したんだ。

僕達は再び真っ暗な森の中を進み出した。暗くても暗黒大陸を経験した僕には、この位怖くもなんともないんだけど、何故かクリエがズンズン進むのが謎だ。

だって普通子供は怖がる物だろ。子供が怖がる最たる物が暗闇だろ。でもクリエは小さな体の癖にどんどん進む。そんなにズンズン歩かれたら、見失いそうで大変だ。

ただでさえ暗くて、クリエは小さいのに、マジで勝手に動き回るのは止めてほしい。

「おい、適当に進んだら危ないぞ」

暗黒大陸じゃ無いにしろ、ここだってモンスターは居るし、さっきから鳥の鳴き声とかもやっぱり聞こえて不気味だぞ。

透き通る様な空気感に、不気味ってよりは変に神聖というかそんな感じなんだけど、僕達にとっては魔の領域も神の聖域もんな変わりはしないと思うんだよね。

どっちだって得体知れないしな。でもクリエは僕の方に振り返ってチッチッチなる事をする。

「大丈夫だよお兄ちゃん。クリエにお任せあれ！」

「不安でならねーよ」

これで不安じゃない奴はいないだろう。だってクリエだもん。ちっさいもん。どうみてもバカっぽいもん。

「失礼しちゃうな～。ちゃんとお友達に聞いてるから大丈夫だよ！」

「お友達？　何お前ってどこかの電波を受信してるの？」

確かにそんな感じはするけどさ。そのカミングアウトはちょっと……

「違うよ！　お兄ちゃんって時々意地悪だよね。私のお友達はそこら中に居るんだから！」

「そこら中？」

周りを見回すとザワザワと揺らめく草木がある。何だろう……こっちを見てる……わけないよな。

「そういえば親しい友達がクリエって呼ぶって言ってたよな？　それなのに傍に居るのはシスターって人だけっても言ったよな？　じゃあお前の友達って誰だ？」

暗き夜の帳の中、僕の言葉が闇へ溶ける。妖しく笑うクリエ（の様にみえるだけ）が両手を広げて周りを示す。

「私の友達はみんなだよ。ここに存在してるみんなが友達！！」

その瞬間、森がざわめく様に唸った気がした。なんだか森が答えた様な……そんな感じ。もしかしてクリエには、やっぱり僕達とは違う物がその目に映ってるのかも知れない。

そして僕達は、そのお友達の案内で無事に村に着くことが出来ました。

「マジかよ……」

「マジだよ～」

無邪気な天使（後書き）

第二百話です。

わ～パチパチパチパチ！！　遂に二百話ですよ。いつの間にかここまで来ちゃいましたね。今まで見捨てずに見守ってくださってる方々はありがとうございます。いつも読んでいてくれる人が居るから書き続けられると思ってます。

これからもまだまだ続くので、飽きられないように頑張っていこうと思います。誰かに何かが残るような物語に、この『命改変プログラム』が成れれば嬉しいです。

そして今回は謎のクリューエル登場です。この子がこの話には欠かせない存在です。テトラでもシスカでもなく、このクリエが物語を紡ぎます。

それでは次回は水曜日に上げます。ではでは皆さんの明日が輝く日である事を願って、またここで会いましょう。

メイズの月（前書き）

僕達は待ち合わせの村『メイズ』へとやってきた。そこは本当に小さな村。何もないって、こういう事を言うんだと体現する場所だ。まあ文明の利器がって事だけど。

村に入るなりはしゃぎ出したクリエは、散々僕を振り回して、湖の月を見つけた。そこには不思議な月が映ってる。空には半月……だけどその水面には満月が輝いてる。

メイズの月

村に入ると穏やかな調べが響いてた。どこかのプレイヤーかＮＰＣが何か楽器を弾いているのかも知れない。穏やかなその調べはこの静かな村に染み入る様に流れてて、とても良く合っている。僕達はそんな調べに誘われるように村を歩きだす。

湖に隣接するように建てられてる家々は、なんだか縦穴式住居みたいに地面から離れて建てられてた。しかも小さい？

ミニチュアとまではいかないけどさ……何だろう、窓やドアが多分自分達のサイズに合わせてあるんだろうと思えるくらいに小さい。腰くらいまでしかないドアとかを見る限り、どうやら僕は既にモブリの国に来たようだな。

「わぁ～～～あっは！　あれは何かな～？」

「おいクリエ。まずは仲間と合流するのが先――っていない！？」

村に入るなり妙にキョロキョロしてたクリエは、速攻で僕の元から離れてた。まあここなら安全だろうけど、あいつが居なくちゃある意味、意味無いんだよ。だから探さないと。

僕は村の奥の方へと足を進めた。まあ奥と言っても直ぐに湖にぶつかる様な小ささだったけどね。湖沿いに広がる様になってる村なのかな？　光る花が街灯代わに点在してるんだけど、それだけじゃなかなか光量として足らない。

でもここから見える限りでも、明かりがついた建物は五十位しかない。かなり小さな村だ。いや、この数は集落の方がいいのかな？

「たく、どこ行きやがったアイツ？」

僕はクリエを探して動き回る。別に適当に歩いてただけだけど、流石の小ささだから直ぐに見つかった。クリエはどっかの家をコンコンコンコンと、嫌がらせみたいに叩いてた。

「どうぞ～どうぞ～、どなたかいませんかぁ～！」

クリエの言葉はおかしいけど、だからなのかなんとガチャリとドアが開くじゃないか！！　出てきたのはちょっとふっくらとしたエプロン姿のモブリだった。

「はいはい、な～に？」

「あのあの！　私はクリエ、クリエって言うの！　ちょっと旅の途中で事故に遭っちゃって、お兄ちゃん共々逃げて来たけどお腹はペコペコなの。

――――で、貴方は今幸せですか？」

「はい？」

困惑するエプロン姿のモブリ。すると怒濤の様に訳の分からない事を悲劇的に、時には陽気に語り出す。するとその途中でエプロン姿のモブリは扉を静かに閉めた。

いや、まあ当たり前だけど。せめて前後の言葉の内容は繋げようぜクリエ。僕は呆れ果てて後ろから近づき、既に誰もいない扉に向かってはなし続けてるクリエの頭をコツンと叩く。

「いた！」

「何やってんだお前は？　もう誰も聞いてないぞ」

僕の言葉にようやく扉と話してたらしい事に気付いたクリエ。だけど全然気にしてない風に、僕へ向かって百パーセント無邪気な笑顔を見せてこういった。

「えへへ～一回トントンしてみたかったんだ！　それに本で読んだんだよ～。ああ言ってる所！」
「お前それ、一つの本じゃないだろ？　最後いきなり幸せですかってどういう流れだ？　どうせ本の台詞を引用するなら、せめて一つの本からにしなさい。
支離滅裂になっちゃうから」

だからこそあのエプロン姿のモブリも、これ以上関わると面倒だと思ったんだよ。最後の台詞をもっと普通の、あの流れに乗った奴にしとけば、パンの一個位は貰えたかも知れないのに……まあそこまで僕は金に困っちゃいないけどさ。

クリエは僕の言葉に素直に「は～～い！」と返事した。そして今度こそと思い、テッケンさん達との待ち合わせの宿屋を探す為に、クリエの手を取ろうとした。また居なくなって貰っても困るからね。
だけどクリエは、よっぽど感激してるのかクルクル回って僕の腕を避けて行く。

「ああ～～とっても空気がおいしく感じるよ。私は自由だってみんなが言ってくれてる！　わぁ～あれは何かなお兄ちゃん！」

そう言うと再び走り出すクリエ。ああもう、なんでそんなにテンション高いんだよ。あと、今気付いたけどやっぱりその呼び方は恥ずかしい。
森では誰も聞いちゃいなかったから意識なんてしてなかったけど、ここは村。いくら小さくてもプレイヤーがチラホラと居るんだよ。
だから妙に気恥ずかしいんだ、その「お兄ちゃん」って言うのが。でも今更それを切り出すのも何だし……面倒臭くなりそうだし……取りあえず僕はクリエの後を追う。

そしてクリエが走って行った先にはタマネギみたいな生物が居た。

「何々～アナタはだぁれ？」

クリエのそんな言葉に、タマネギみたいなその生物は、いきなり頭の部分からキラキラした粉みたいな物を吹き出す。

「ケホッケホ……うう～泥棒と間違われちゃった」

「泥棒？　お友達にはなれなかったのか？」

「拒否されちゃった～。でもしょうがないかな。あの子、自分にはご主人様がいるから良いんだって」

「ご主人様？」

僕がその言葉に首を捻ってると、そのタマネギみたいな生き物がグルグルと回ってた家の扉が開いて、クリエと同じ位のサイズのモブリが顔を覗かせた。

「ムッシュー家に入って寝よー」

するとタマネギの生き物は扉へ続く道を跳ねながら登り、モブリの子供と共消えていった。

「ペットだったのかあれ……」

なんだか似たようなモンスターが居たような気がするんだけど……大丈夫なのかあれ？　だけどクリエが動く度に何かが起きるな。

だって普通はあんな風にＮＰＣは反応しない。確かにＬＲＯのＮＰＣはただの人形って気もしない位に良く出来てる訳だけど、基本は今までのＲＰＧと同じだもん。

こっちが質問をすると、ある決まった言葉を返す。まあそれがＬＲＯだと膨大でもあるんだけど……言っちゃうと、そこに存在して

るだけで、生活感（？）ってのはあんまりというか全く見えなかった訳だよ。
だけどそれがどうだ？　さっきの二人なんて生きてるって気がしたよ。この世界でちゃんとＮＰＣが生きてるってさ。
まあ僕達には見えない裏の設定では、ＬＲＯに居るＮＰＣはちゃんと生きててあんな生活をしてるんだろう。でもそんなの冒険には関係ないからね。そこまで見えないし、見せないんだ。
それにそこまで作り込んでたら、幾らＬＲＯが超ハイスペックだからって限界くるよ。だって世界にはかなりの数のＮＰＣが居るわけで、それに全てあんな生活感を漂わせる事をやってたらね……無理だよ無理。
「もういいだろ――ってやっぱりいない！！」
僕がタマネギ生物から視線を戻すと、またしてもクリエは居なくなってた。。僕が色々と考察してる間に姿を消していた。だけどどこかからはアホっぽい声が聞こえる。
「うわっは～～～！！」
とかいう奴。僕は肩を落として、疲れた感じで走り出す。夜の村を照らす月明り、そして光花が道を照らしてる。そんな道を走って湖の側に来ると、どこかからパシャパシャと、水を蹴るような音が聞こえた。湖の方を向くと、そこには桟橋と大きな葉で出来たような笹舟が幾つかあるのが見える。
そしてその桟橋の先にクリエは居た。小さな背中が見える。
「おい、もう十分見て回っただろ。そろそろ待ち合わせの場所に行くぞ」

「ねぇねぇお兄ちゃん、水面に映る月が不思議だよ！」
「お前な……」
ダメだこいつ。人の話を聞いていない。それに何が不思議だよ。水面に映る月なんて、空と同じ決まってるじゃないか。
「ん？」
僕はクリエの隣まで行って水面の方の月を見たときに、おかしな声を出した。そして空の月と水面の月を見比べる。だけど見れば見るほど、首を傾げたくなるだけだった。
「なんか……丸いな……」
「うん～！　空のは半分なのに、水の中のお月様はまん丸なの！！」
まさに僕の目には、今クリエが言った言葉通りの物が映ってる。空には確かに半月があって……でも水面に映る月は、紛れもなく満月だ。怖いくらいに鮮明に満月が映ってる。
なにこれ？　バグかなんか？　それとも設定ミスとか？　天才も流石にこんな小さな所にまで気が回らなかったって事かも。
「不思議だね～」
「不思議だな」
僕達は水面に映る月を見つめて声を出す。これ……こうやって見てるとなんだかこの月に吸い込まれそうな気がして来る。
しかも良く考えたら空の果てにある月が映ってるにしては、この月……大きくないだろうか？　満月なだけじゃない、大きさだって十分に不自然だ。
するとクリエが良いことを思いついたかの様に飛び跳ねてこう言

う。

「届きそう！　この月になら、私行ける気がする！！」

そう言えば山でも月に行かなきゃとか言ってたな。まあ確かにこんな近くに月があるのなら、子供は夢を見るだろうな。

僕とかにはただ水面に映った月は、それだけでしかないんだけど……でも確かにこの月は少し違うかも知れない。

それにここはＬＲＯだし……何が起きても不思議じゃない。元々月へ行くなんて……って思ってたわけだし。でもそれが何かの別の意味を持った比喩なら、これが違うとは言えない気がする。

「行かなきゃいけないんだっけ？　そんな気がするんだよな？」

「うん！！」

元気一杯に頷くクリエ。そしてトテテと走り出すと、桟橋に括られてる笹舟に飛び乗った。

「まあ、お前の気持ちも分かるんだけどさ、月は逃げないんだし、みんな合流してからでもいいじゃん？」

いや、何となくだけど何かが起きる気がする。だから一人じゃ心細い。テッケンさん達は直ぐそこに居るはずだし、心の余裕の為にもなんとかその提案をしてみたんだけど……

「無理だよ～。月がクリエを呼んでるもん！」

「お前、それは完全に感覚だよな？　お友達とかじゃないよな？」

まあでも、そう言うだろうとは思ってた。だってクリエが僕の言うことに妥協した事まだ無いもん。いつだってこっちが振り回される羽目になる。

放って置く事なんか出来ないから、結局はこっちが負けるしな。それに一人にするなんて尚更出来ないし……僕は結局、テッケンさん達にメールを出して、笹舟へ。

実際僕が乗っても大丈夫か不安だったけど、案外丈夫に出来てる様だ。モブリサイズだから狭いけどね。

「ゴー！　だよお兄ちゃん！」
「お～、と言いたいけど、取りあえず月の中心にでも行けばいいのか？」
「うん！　ほら、中心に何かあるよ！」

何か？　その言葉に僕は目を細めて水面を見つめる。すると確かに何かが見えた。何だろうかあれは？　嫌な予感しかしねーぞ。

「早く早くお兄ちゃん！」
「ああ～もう、膝の上で暴れるな。所でオールは無いのかこの笹舟？」
「横についてたよ」
「横？」

その言葉を受けて僕は自分の体の横あたりを見る。だけど何も無いぞ。

「違うよ。外側だよ」

そう言ってクリエは身を乗り出し始めた。何とも危なっかしい光景だ。

「はい！　ほらあった」

なんとか落ちずに戻ってきたクリエが差し出したのは、こちらも葉っぱを重ねて作ったかの様なオールだった。なんでわざわざ外側に取り付けてるのは謎だけど、まあ取りあえずこれで漕ぎ出せるな。

「サンキュ」

僕はそう言いながらオールを受け取って、もう片方も逆側から取り出す。これで準備ＯＫだ。オールを使って鏡の様な水面を切る。そしてゆっくりと笹舟は進み出した。

「って、この湖にはモンスターとかいないよな？　この船ひっくり返されたら、僕達一巻の終わりだぞ」

なんてたって僕はＬＲＯじゃまともに泳げないからな。まあ一人ならひっくり返された程度で溺れる訳もないけど、クリエを抱えて泳ぐのはきっと無理だ。

なんとは無しに出航したけど、水って一番怖いんだぞ。だけどクリエは、そんな不安なんて全く感じてないようだ。

「大丈夫だよお兄ちゃん。ここスッゴく透き通ってる。邪悪な者なんていないよ～」

クリエは片腕で水に触りながらそう言った。それもお友達に聞いた事なのかな？　まあ程々に警戒しつつ、僕は笹舟を漕ぎ続ける。

すると段々と水面に映る満月の中心の場所が見えてきた。あれは……

「鳥居？」

多分、そうと思えるシルエットが見える。鳥居は日本人には馴染み深いから間違えるなんてしない。確かにあれは鳥居だろう。

「何があるかドキドキだね～！」

「だから鳥居って言ってるだろ」

クリエにだってその存在はもう見えてる筈なのに、なに言ってんだこいつ。それとも意味が違うとか？　何があるか……それは何が起きるかって事か？

「チャンチャンチャララ～チャンラ～～」

いきなりおかしな前奏と共に、膝の上に戻ったクリエが目を閉じて歌い出す。

『幾億の星が～流れ落ちるその時～私はその星の一つに～なれているのだろうか。一人で輝く星になんて～成りたくはな～いよ～』

子供の歌声だ。お世辞にも上手いとは言えない。だけど、その歌詞はその声に反してなんだか悲しいな。クリエはノリノリで歌ってるけど、思わずこんな夜空を見上げてしまう歌詞だよ。

「お前……その歌……」

「えへへ～私が一番好きな歌だよ！」

そう言って続きに戻るクリエ。月が映る水面の上で、クリエの拙い歌が静かに響く。するとどこからともなく、クリエの歌に合わせてシャンシャンと言う音が聞こえてくる……様な気がした。

「なんだ？」

「みんなが一緒に歌ってくれるって！」

クリエは立ち上がり、歌を歌い続ける。すると今度は僕にもはっきり聞こえた。しかもシャンシャンだけじゃない。他にもいろんな音色と共に、歌に合わせた様な声も聞こえる。

なんの声……かは直ぐにわかった。湖の中から次々に淡い光が滑るように出てきてる。そしてそれが水面に映る月を囲んで踊りだしてるんだ。

「これって……妖精？」

光は次第に羽を生やした人型に見えて来る。それは前に一度見た事のある姿だ。僕はこいつらを知ってる。そう、確かサクヤと初めてあったあの湖でもこんな奴らが出てきたぞ。

なんだかもう、結構前の様な気がするけど、日数的にはほんの数週間前なんだよな。あれはあれで不思議な光景だったけど、今目の前で起こってる事も相当不思議な光景だ。

てか……何で踊ってるんだ？　お友達……確かにそれは居たようだけど……まさか妖精かよって感じ。妖精達もクリエも楽しそうだ。

歌い続けるクリエに、その歌に合わせての満月に沿ってのダンス。するといつの間にか、ガヤガヤと岸の方が騒がしいのに気付いた。

すると明かりを携えた人達が集まってるのに気付く。それはもう、この村の住人全員が居るんじゃないの？　的な数だ。

そして桟橋の先ではテッケンさんやシルクちゃん、鍛冶屋が何やら叫んでる様に見えるけど……ここまでは届かない。

「ねぇねぇ、みんながこっちだよって言ってるよ！」

「ええ？　それって大丈夫……って既に漕がなくても進んでるじゃねーか！」

妖精達は僕たちを誘う様に手を伸ばしてる。そして笹舟が近づくと、道を作る様に横に避けて、僕たちを月の中へと入れるんだ。
するとどうだろう、月の輝きが変わった？
「なんか下から光ってないか？」
「綺麗だね～」
相変わらず脳天気だなクリエは。明らかに光輝いてるぞ、この水面に映った満月。しかもただ光ってるだけじゃない……妖精が回ってるせいなのかどうかは分からないけど、この光……真っ直ぐに上を目指してるような……
「もしかして、月まで届くのかな？」
「そうだよきっと！　クリエ達は月にいけるの！」
喜ばしそうにそう言うクリエ。思わず僕はそんな事口に出したけどさ、「まさか」とはまだ思ってるよ。でもただ光は、空の半月に向かって確かに伸びてる様に見える。
多分それは、僕たちよりも周りで見てる人達の方が分かるんじゃないかな。
でも……これからどうなるのだろう。いきなり笹舟が浮きだして、空に上がるって事は今の所無いけど、これからも無いとは限らない。
妖精さんが連れていってくれるかもだし……いかんな、クリエの影響を僕を受けてる。
「うわぁ何かあるよお兄ちゃん！」
「だから鳥居だって……」
何度言わせるんだ――っていつの間にか中心部分にまで来てたみ

たいだな。近くで見ると結構ボロボロの鳥居だ。傾いてるしな。年月って奴を感じる。
笹舟はその鳥居の前でピタリと止まる。明らかにここに何かあるって感じだ。周りはもう光しか見えない状態。そして妖精達の音楽が聞こえるだけの世界に成ってる。

「どうしろって事なんだろうなコレ？」
「取りあえず～ご挨拶はどうかな？　こんばんはー！」

鳥居に向かって元気に腕を掲げるクリエ。だけど鳥居が挨拶を返してくれる訳もなかった。いやー良かった。もしかして鳥居がお辞儀したらどうしようって思ってたんだ。
だってクリエが取るおかしな行動……その先にはおかしな結果があるから、もしかしてってね。でも鳥居はやっぱり鳥居らしい。

「む～やっぱり挨拶してくれない」
「だろうな」

膨れっ面になるクリエ。いやいや、それが普通だから。てか挨拶しちゃったらどうする気だったんだよ。まあこいつの事だから「お願いがあるの！　私を月まで連れてって！」とか言いそうだけどさ。

「な～んか妙に古めかしいよな……ん？」

なんだか良く見たらこれ……この汚れみたいな物って模様じゃないか？　しかも最近僕はこれと同じ物を良く見てるような――てか腕に浸食してきてる模様に、どことなく似てるような……

「どうしたの？」
「いや……まさかな」

僕はそう言いつつも、浸食の進む右手を伸ばす。そして鳥居に触れて見た。するとなんと反応するじゃないか。鳥居の模様と僕の腕の模様が共鳴してるみたいだ。

「っつ……なんだ？」

何かが……何かが頭の中に流れ込んで来る。脳を浸食するかの様な真っ白な光。それが僕の瞳に謎の光景を映し出す。

見覚えがある……と思えるような部屋だった。いや病室？　そしてそこで白衣を着た医師が何かを告げている。だけどそれは僕の耳には届かない。でもその言葉を受け取ったであろう人が大仰な機械に横たわる誰かの元に崩れてしまう。、そして大きく口を開けて、人目も憚らずに泣き出した。

それは見てるだけで、胸が締め付けられる様な……そんな痛い姿。うるさい位に蝉の鳴き声が響いてる。それはその人の悲しみの声さえも、打ち消すようにヒドく騒々しく、そして酷く不快だった。

「お兄ちゃん！！」

「ぐっはあぁ！？」

顔面に痛烈な衝撃が走り、僕の意識は強引に元の場所に戻された。

「おおお前、今何した！？　頭突きか？　頭突きだろ！」

「お兄ちゃんがクリエを置いてけぼりにしようとするのが行けないんだよ。ズルはダメー！！」

「ズルってお前……」

だからって頭突きは女の子の手段としてどうよと思わざる得ない。てか……今の光景は一体？

「今度はクリエの番だからねー！」

そう言ってクリエが鳥居へと手を伸ばそうとする。だけどその時、僕は自分でも分からないけど、その手を掴んで寸前の所でクリエを止める。

「やめろ！」

「ええ～何するのお兄ちゃん？　自分だけなんてズルいよ！」

「ズルくてもダメな物はダメだ。よく分からないけど、お前は触らない方がいい……そんな気がする」

「それこそ良くわからないよー」

頬を膨らませてプリプリするクリエ。でも何故かそう思うんだから仕方ないじゃん。自分でも理由は分からない。今の光景が何かも理解できないし……けど、なんとなくだけどダメな様な気がしたんだ。

けどその時、クリエは唐突に反対側の手を伸ばした。

「えい！！」

「このクソガキ――――っつ！」

思わず本音が出ちゃったじゃないか！　だけど遅かった。クリエの小さな手は何とか鳥居に届いてしまう。すると僕の時とは明らかに違う反応が起きた。

それはクリエの首に下げられてるネックレス。それが今度は共鳴しだした。青い光を放ちだしてクリエごと浮き出した。

「クリエ！」
「あわっわっわわ！」
僕はクリエの体を抱き抱えてそれを防ごうとする。けど浮上は止まらない。するとピシッと宝石に亀裂が入る。それを見たクリエは唐突にそれを押さえてこう言った。
「ダメ！　これはダメなの！！」
その瞬間光が弾ける様に収まり笹舟へと僕達は降りれた。
「クリエ……？」
僕の言葉は震える小さな存在に向けられてる。

メイズの月（後書き）

第二百一話です。

クリエと言う存在が、沢山の謎を呼んでいきます。スオウはただ巻き込まれてるだけの様だけど、これからですね。仲間と共に、謎を紡いでいきましょう。そこにどんな真実があるか、まだ誰もわからないけど。

てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは～。

過激盛んな今日この頃（前書き）

壊れかけたネックレスを握り締めて、クリエはその肩を震わせてる。僕はそんなクリエに言葉を掛け、そしてそこには別の道が出来てた。それは月まで続く鳥居の道。

けどそれも拒絶される様に突き放された。結局僕達はどこにも行けずに、岸に戻る事に。でもそこで待ってたのは「悪魔」呼ばわりする村人たちでした。

過激盛んな今日この頃

光の周りで巻き起こってる風が、僕とクリエの肌を撫でてる。笹舟へと戻った僕は、ずっと胸のネックレスを抱え込んでるクリエにこう聞いた。

「それは、大切な物か？」

「うん、これはね……クリエがクリエだって証明するための物なの」

「証明？」

どういうことだ？　僕の疑問符の付いた声に、クリエは続けて言葉を紡ぐ。

「クリエは孤児なの。でも、その時からこのネックレスだけは身につけてたんだって。だからこれはクリエなの。クリエのたった一つのクリエの物なの。

だから壊れるのはイヤ……ぜ～ったいダメ！」

力強くそのネックレスを握りしめるクリエ。震える体が、その大切さを表してる。僕はだから、クリエの頭に手を置いて、撫で撫でしてやった。

なんだか小さい子にはこれがいいかな～って思ったんだ。

「そっか、そうだな。大切な物なら、大事にした方がいい。壊れるのは寂しいもんな。月に行ける別の方法を探すか」

「お兄ちゃん……」

うるうると大きな瞳に涙を浮かべるクリエ。そして僕を見上げて

こう呟いた。

「あ、あるのかな？　違う方法なんて……実はさっき、少し聞こえたんだ。この子にヒビが入ったとき、何かがクリエの中の扉を開こうとした。

それはもしかしたら、私の知らない私なのかも……そういう何かが無くても月に行けるのかな？」

う～ん……僕は優しい笑みを浮かべてその言葉を受け止めてたけど、実際はかなり深刻に悩んでた。だってクリエの言うことはなかなか難しい。

なんたってクリエは感じた事をそのまま口に出すから、あやふやなんだ。まあ小さな子なんてそんな物何だろうけど……僕はどう答えた方がいいのだろうか？

いや、難しかったけど、僕はきっとその答えを知ってると思う。だから伝える言葉も分かってる。でも僕は優しいからな、うんと甘く言ってやるよ。

「行けるさ。自分が諦めない限り、可能性はゼロに成ったりしないんだぜ。無いんだったら作ればいいしな。でも……もしもお前が向き合わないと行けないのが自分なら、それを越えてしか行けないのなら……逃げ続ける事は出来ない事だ。

自分からは逃げられないから……その覚悟はしとけ」

月光色に包まれる光の中、僕の言葉を聞いてクリエはグシッと自分の小さな手で涙を拭う。ゴシゴシゴシと何度も腕を動かしてそして――――ニコッといつもの笑顔で笑う。すると元気に「うん！」と言う。

分かってるのかな～とか思ったけど、でもそれよりも良かったなと思える。クリエは元気に笑ってた方が可愛いからな。

するとその時だ。多分クリエが自分の涙を拭った手で触ったからだろう、胸のネックレスが再び濃い青色の光を放ち出す。

「ま、またか？」

僕はもう一度踏ん張る準備をしたけど、今度は浮き上がる事は無くて、クリエの首から少し浮き上がり、そこで光ってるだけだった。だけって言っても何故かヒビが完全に修復されたんだけど……自動修復機能でも付いてるのかな？　するとその時、クリエはこの光の向こう側に何かを見つけた様だった。

「ああーー！！」

という声が響いたもん。そして指し示す指は鳥居を向いてた。傾いた鳥居。ボロボロだった鳥居。でもそれは一つだけだった筈で……でも、ここから見える鳥居は何百……いいや何千と空に続いてた。なんて言うか、鳥居の向こうに鳥居が見えるんだ。その先にはまた鳥居が見えてる。何だろう鳥居を潜る空間だけが異次元に繋がってる様な……そんな感じだ。

じゃあさっき浮いたのは何だったんだよ、と言いたいが、明らかに本命はこっちっぽいな。いや両方ともが手段なのかな？

「ねぇねぇここから月へ行けるよお兄ちゃん！　渡りに船だよまさに！！」

「お前、良くんな言葉知ってたな。てか、さっきの言葉もう忘れたのかよ？」

「さっきの言葉？」

可愛く首を傾けるクリエ。いやいやいや、可愛らしさを全面に押し出してもダメだ。てか何？　マジで忘れてるのか？　あり得ない

だろ！

「もう～そんな事いいから、早く行こうよ！　クリエを月に連れって！」

なんだその如何にもロマンチックでバカらしい台詞は。まあでも確かにこんな大口開いてくれてるのなら、興味はあるけど……でもちょっと心配だな。

僕一人ならやっぱり行くんだろうけど、クリエが居るとなると老婆心が働くよ。いや老婆心はおかしいか……責任感とかかな？

「たく……」

だだをコネるクリエに促されて渋々漕ぎ出す僕。だってあいつ船首の所で飛び跳ねまくるから、行かなきゃひっくり返されそうな勢いだったんだ。

だけどどうやら、クリエの望みは叶わない様だ。それは本当にいきなりだった。まさに拒否されたと言うか、拒絶されたと言っても良いくらいにあっけなくその扉は閉まったんだ。

漕ぎだした時から、遠くの鳥居の光が消えていくのが見えてた。そして一気にバタバタバタと、扉が閉まる様な音と共に、どこまでも続いてる様に見えた異空間が消えていき。そして僕達は最初の鳥居を潜っても、変わらぬ場所にただ出るだけだった。

てか、まさに潜っただけだ。

「え、えええええ！？　何々どうして？　閉まっちゃう音だけが聞こえたよ。遅かったの？　お兄ちゃんのバカァ！！」

「なんで僕だよ……」

拒絶されたのはどっちかって言うとクリエだと思うんだけど。間に合わなかった……というか、許されなかったとかさ。

「みんな……」

寂しそうなクリエの言葉。そんな言葉が気になって周りを見ると、そこには踊ることを止めた妖精たちがこっちを見てた。

何かを話してるのかな？　僕には全然何も聞こえはしないけど、クリエは彼らに向かってこう言った。

「だめ……わからないよそんなこと……待って、もう一度扉を開いて！！」

クリエの言葉に妖精達は答えてくれない。彼らは踊る様に輪から離れていき、そのまま淡くなって消え去っていく。それと同時に水面に映る満月の光も次第に収まっていった。

夜の風が空しく頬を撫でる気がする。僕達は元の風景の中に取り残された様だ。

「また行けなかった」

「次頑張れよ。これが最後って訳じゃないだろ」

僕は落ち込むクリエにそう言ってやる。まあそれしか掛ける言葉がないんだけどさ。するとクリエは俯いたまま僕の方へ歩いてきて、チョコンと膝の上へ陣取った。

そしてこちらを向かずに、小さな声で言葉を紡ぐ。

「最後だったら、どう責任とってくれるのお兄ちゃんは」

「う～んそうだな、最後にさせないから安心しろよ。ちゃんとお前を月に送り届けてやるよ。それが責任かな」

すると今度は勢いよく振り返って、胸へと体を寄せてくるクリエ。行動がいちいち極端な奴だ。

「絶対に絶対？」

「おう！　お兄ちゃんとして迷子は放っておけないからな」

するとクリエはふくれっ面でこういう。

「むー、クリエは別に迷子って訳じゃないよ。帰りたい所に帰れないだけだもん」

「だからそれを迷子って言うんだよ」

まあ実際、これからどうするべきかなんて僕にも全然わからないんだけど……だけどクリエは放っとけない。こいつにはきっと何かあるし……それが金魂水を使う事になるかもわからない。

いやそもそも、テトラが望む形で使わないと意味ないんだっけ？

今の所、クリエとテトラの関係性も見えないけど、イベント伝いにここまで来たんだし、間違ってる……訳はないと思うんだけど。

でもミッションはクリア出来なかったんだっけ？　それじゃ別ルートに入っててもおかしくないかな？　う～んわからん。

取り合えず今、確実に僕が思うことは、この小さな迷子の女の子を放っておけないそれだけだ。元々、ミセス・アンダーソンの所には届ける予定だしな。

僕は胸をポカポカ叩かれながらもオールを漕ぎだした。大きな満月に波紋を広げながら、僕達は岸に咲く明かりを目指す。

「「「この悪魔め！！」」」

――で、岸にたどり着いた途端に、そんな罵声が僕とクリエを襲った。周りを見渡すと、僕達を見て戦々恐々としてる小さなモブリ達が一杯いる。
そしてそんな周りには物珍しげにプレイヤーがたかってた。
ていうか、ええ？　何それ！？　だよ。

「あ、悪魔って酷い！　クリエ達が何したっていうの！？」
「ううるさいのじゃ！　満月湖がその光を繋げるとき、それは大いなる災いが降り懸かる時と言われておる！　それをお主達がやりおった！！
これは大罪じゃ！！」

するとそんな風に叫ぶ老人の横のモブリ達が、僕とクリエに向かって杖を構えた。そして唱えられる呪文。あっと言う間に僕とクリエの体には光の縄が巻き付いた。

「ちょっとー何よこれ！！」
「もう、また厄介事かよー」

怒り心頭のクリエに対して、僕は半ば呆れつつあるよ。たく、次から次へと飽きないな全く。ＬＲＯが次々に攻めてくる。
ここら辺でゲームって事を思い出させようとしてるのか？　僕達は芋虫みたいに地面でバタバタ。すると酷く冷めた目をしたその老人（村長？）がこう言い放った。

「お主達は悪魔なんじゃ。この村の者達はその存在を許しはせん！！　お前達を処刑する。さすればまだ災いは回避されるやもしれんからの」
「なっ、死刑ってそれはマジですか？」

「オオマジじゃ！」
「いや～死ぬなんて絶対にいや！！　アンタ達、クリエを誰だと思ってるのよ！　クリエはねシスカ信仰元老院お抱えの秘蔵っ子なんだからね！」

クリエの言葉にどよめくモブリの人々。なんだかかなりの衝撃が走ってる様だけど……そんなに衝撃的な事なのかな？　僕には今一、そこら辺がピンとこない。

「元老院お抱えじゃと？　悪魔がシスカ様の名を口にするだけでもおぞましいというのに、よりによって元老院？　その言葉、嘘であったならただ焼け殺すだけでは足り無くなるぞ！」
「へへ～んだ、真実だもんバ～カ！」

ンベーと下を出して老人を挑発するクリエ。そんなクリエの態度にプルプルと腕を震わせる老人はかなり怒ってる様だ。
流石モブリの人達は信仰が一際厚いのかも知れないな。村の至る所に、シスカ信仰のシンボルが揺れてたもん。だからそんな人達にその態度はどうよ。
少しも殊勝になれない奴だな。まあ焼け殺すとか言われてたし、殊勝になってる場合じゃないか。僕も死ぬのはまっぴらゴメンだ。
だから一応乗っておこう。関係者の振りをしておけば僕も丸焼きは免れるかも知れない。

「おうおう、ここに居られる方をどなたと心得る。クリューエル様はシスカ教になくなては成らぬ方なんだぞ！　その姿を拝めただけでも一級品だ。
ありがたく手を合わせてご馳走を用意しなさい。今ならまだ神も許したもうぞ」

なんだか口調がおかしくなったのは、乗ってきてからです。まあ使った言葉はミセス・アンダーソンが言ってた事をまんまパクって、宗教関係者っぽく言ってみただけだけどね。
だけど村長は、頑固な老人だった。二人して調子に乗って「うらうらー」とか「ばーか、ばーか」とかやってたら、その傲慢な態度に周りがもしかして……みたいな空気になり掛けてたのに、村長の言葉で一喝されたよ。

「耳をかすでない！！　こやつらの話の全ては、中央に確認すれば言い事じゃて。我らにとって大切なことは、この湖が光て、そこから現れたのがこやつらであると言うこと。
我らにとってこの掟は絶対じゃ。それは何故か……かの神々の言いつけだからじゃ。ここがどれほどの神有地か、中央もわかっておろうぞ。明朝じゃ！　返答を一応待って、処刑する」
うわ、この老人僕達を殺す気満々……というか、殺せる気満々だ。てか返答は待つだけなのかよ。その解答で処刑が取り止めになる事はないの？

やばいな～調子に乗りすぎたかな。流石にクリエの命は、中央だっけか？　まあミセス・アンダーソンとかは放っておかないだろうとは思うけど、こいつらどっかの少数民族な気風を漂わせてるからな……自分達の掟でやっちゃいそうな雰囲気があるよ。
実はさっきからこの魔法の縄をどうやってか外せないかやってるんだけど……魔法だけあって物理的な力じゃ外せない様だ。
しまったな……縛られる前なら、逃げることも出来そうだったのに。

「ふっふ、どうしたのじゃ？　さっきの威勢が萎縮してるぞ悪魔ども。自分達の置かれてる立場をようやく理解したようじゃの。
例えじゃよ。例えその小さな悪魔が枢機卿お抱えであったとして

も、我らの掟に介入することはできん。あれがどういう意味かは、奴も知っておろうぞからな。
安心してその瞬間を待つがいい！！」

そう言って、老人は手に持つ何かのモンスターのドクロと黒い羽が付いた杖を地面に叩きつける。するとドクロが笑いながら変な色のガスみたいなのを吐き出した。
それを吸い込むとなんだか、手足が痺れだして、しかも目眩まで……隣のクリエがドサッと倒れる音がした。

「意識を奪う気か……」

流石に殺す作用は無いだろうけど……ここで倒れたら、牢にでもぶち込まれそうな雰囲気。てか確実に、処刑までの間そうなるよ。
だけど手足が縛られた僕じゃどうにも出来ない。息を吸う度にそのガスが入ってくるし、息を止める事も限界は来る。
朦朧とする意識の中、僕は村人に混じって彼が居ることに気づく。それはテッケンさん？　彼は言葉を出さずに、口だけを動かしてる。
なんて言ってる？　僕は最後に脳を頑張って回転させる。そして受け取った。

『大丈夫』

その言葉を確かに。意識が沈む……深く深く眠る様に。

「ねえ！　どうしてクリエは外にいけないの？　ねぇ！　どうしてクリエは一人ぼっちなの？」

どこからか聞こえてくるそんな言葉。またあいつがハシャいでる

のか……とも一瞬思ったけど、流石にそれはおかしいと自分で気付いた。
あの状況じゃハシャげ無いだろ。殺されるかもだしな。じゃあこの声は一体……そう思いつつ僕はゆっくりと瞳を開ける。
するとそこは、僕が思い描いてた牢屋とかとは随分違ってた。

「なんだこれ？」

思わずその光景に、そんな言葉が漏れる。だってここは……どうみても牢屋なんかじゃない。だって牢屋って五歩歩くだけで壁とかにぶつかる――そんな狭いイメージだもん。
だけどここは、有に五十歩は行けるね。それだけ大きな部屋だ。部屋の感じはなんだか丸いな。それに調度品とかがやけに高そう。
窓も大きく高いし、その向こうに見えてるのは光こぼれる広い庭？　ベットは大きいのが一つある。それも天蓋付きって奴だな。
ほら、お姫様とかご令嬢が愛用するカーテン付きの奴ね。そのベットの周りには、なんだかごったになったヌイグルミの山が築かれてる。
同じ奴も幾つか見えるな。

部屋の奥にはキッチンやその他ダイニングに成ってる様だ。丸いってさっき言ったけど、これはただの丸じゃない。雪だるまみたいな形だな。
仕切っても良かったんだろうけど、壁は取り去って広く見せてるのか。天井は妙に高いけどね。一応二階、らしき部分もあるな。でもそこはカーテンで閉ざされてる。
光が一杯入る様に、沢山窓が作られてるそんな建物をなんとはなく見回してると、そいつを見つけた。ジュージューと音を立てて、何かを調理してるシスター姿の女性に、しつこく絡んでるようだ。
そしてそんなクリエを、シスターさんは優しく窘める。

「こらこら、独りぼっちなんて言わないでください。クリエには私が居るじゃないですか。それだけじゃ不満なんですか？」
「超！　不満だね！！」
ばっっっさりと切り捨てたな。おいおい、シスターさんの優しい言葉が台無しだよ。
「あらあら、それは困りました」
あんまり困って無さそうだった。そしてそんなシスターに更にクリエは食いつく。
「どうして私だけがこんな何も無いところで過ごさなきゃ行けないのか訳が分からないもん。学校とかに行きたい！　友達百人作りたい！」
「まぁまぁ、それはとても素晴らしい夢ね」
優しく笑うシスターさんは、ある意味受け流してる様にも見えるな。てか友達百人って……今時そんな夢見てる子供はリアルには生きてないだろうな。
「もうシスターなんか大嫌い！」
「そうですか？　私は友達一号の筈ですけど――ってあら？」
その瞬間、何故かフライパンから大量のポップコーンがモコモコとどんどん溢れでてきた。
「ちょっとーー！！　何やってるのよ！？」
「何ってポップコーンを作ってたんですよ。キャラメル梅塩味です。

クリエの大好きな」
「そうじゃなくって！！　この状態は何ーーーー！！」
「ふむ……量を間違えたようですね。クリエがお盛んに食べてくれると期待して」
「クリエのせいにするなーーーーー！！」

ポップコーンに呑まれながらそんな言葉を交わし続ける二人。うん、やっぱりクリエも色々大変そうだな、とか思った。
てかキャラメル梅塩味って……最早何味だよと僕は言いたい。食べれるかな～と思い、転がって来たポップコーンに手を伸ばしたけど、やっぱりそれは出来なかった。
だけど匂いだけは確認したよ。キャラメルの甘ったるい臭いの中に、梅の鼻の奥を刺激するあの感じがどこと無くある気がする。
うん、妙な臭いだな。そんな臭いが充満した部屋で、二人はあたふた（主にクリエが）してた。

「えへへ～ラッキーだな～。おそそわけって事ね」

場面が不意に変わって、今度は二人揃って木で出来てる様な通路を歩いてた。足下には豊かな水がポコポコと溢れでてて、そんな泉の上に建物が築かれてる様だ。
やっぱりアルテミナスとは違うな。アルテミナスは西洋風の石造りだったけど、ここは基本木造の様だ。しかもどちらかというと和風だ。
木材を複雑に汲み上げて、大きな泉の上に一つの街を形成してる感じ？　中央にある建物はかなり高くにあるし、城って言うか……社って感じだ。
遠くでは何やらの祭り囃しが聞こえてくる。だけどクリエ達が歩いてる道からはかなり遠そうだ。それは縁がない程になのかも。

でも今のクリエは上機嫌だった。二人の腕には大量の袋がある。僕はそれを後ろからのぞき込む。するとあの何とも言えない臭いが鼻孔を付いた。

まさかおそそわけってそれか？　ちゃんと小分けにされてるけど……クリエ以外に食べるのかこんなの？

「二人だけじゃ食べれませんからね。だからと言って捨てるのは命に対して失礼です。それならばみんなが幸せに成る選択肢を取るのは、当然ですよ」

シスターは良いこと言ってるけど、作りすぎたのはアンタじゃん。けどそこにクリエは食いつかない。それほど嬉しい様だ。

「ランランラ～～ン！」

と鼻歌交じりに歩いてる。するとシスターが、僕も一度聞いたことある歌を紡ぎ出す。

『幾億の星が～流れ落ちるその時～私はその星の一つに～なれているのだろうか。一人で輝く星になんて～成りたくはな～いよ～』

するとクリエも目と目を合わせて一緒に歌いだした。柔らかな旋律が、静かに水面を揺らしてた。それはとても暖かくて、胸が和らぐ光景だ。

大変な事はあったかも知れないけど、決して逃げ出す程苦しい生活はしてない。暖かな友達？　いや家族っぽい人と、笑顔でクリエは暮らしてた。

でもクリエは、それでも外を目指した。行きたかった場所がある

から？　それが月……なのだろうか？　ずっとここに居ることは出来なかったんだろうか……クリエのその笑顔をみてると、そう思わずには居られない。

だってもう、始まってしまった。それは僕のせいなのかも知れないけど、こんな幸せな時を僕が終わらせたのだとしたら、僕は最後まであいつに付き合わないといけない。

そう思い、静かに拳を握りしめた。

過激盛んな今日この頃（後書き）

第二百二話です。
実はここで出てきた道は後々かなり重要であったりします。まあでもそれはまだ明かせないですけど。取りあえずは少しずつスオウはクリエを知っていく感じです。
そしてクリエも少しづつ何かに気付き始めてる……筈です。それが何かはこの話のクライマックスまでのお楽しみで。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

鳥かごと繋がれた獣（前書き）

クリエに促されて目が覚めた僕は、自分がまだ縛られてる事に気付いた。そして周りを見ると、どうやら僕達は捕まったようだ。鳥かごの様な牢屋に、僕達は閉じ込められてる。

するとまたもやクリエがうるさい事を……ギャイギャイ二人でやってると、そこにテッケンさんが来てくれた。僕達は仲間の力を借りて、この村からの脱出を試みる。

鳥かごと繋がれた獣

「お兄ちゃん……お兄ちゃん！！」
「んあ？」

ゆさゆさと小さな振動が連続的に続き、耳を擽るような声に僕の意識は引き戻された。視界がぼやける中、何とか目を細めて焦点を合わせると、そこにはクリエが居た。
まあ声からしてわかってたけど……ん？

「あれ？　動けないぞ」
「お兄ちゃん縛られたままだから」

本当だ……何故かクリエは縄が解かれてるのに、僕の腕と足には例の魔法の縄が括られてる。それに……周りを見てみるとなんと手狭な事か。
牢屋というか、これは鳥かごだな。しかもなんか高台に括られてるっぽい。視界が高いもん。あらかた状況を確認して、改めてクリエに向き直る。
そして沸いてくる不満を言った。

「なんでお前だけ自由なんだよ。理不尽だな」
「それはクリエが可愛いからじゃないかな！」

自信満々に無い胸を反らすクリエ。可愛い自分で言ったよコイツ。
僕はそこを流して返してやる。

「まあお前が子供だからだな」

「可愛いからだってばーーーー！！」

クリエは大層不満がってバンバン飛び跳ねる。すると宙吊り状態の鳥かごはグワングワン揺れて危ない危ない。

「ちょ！　おま！　あばれんな！」

「あわっ――たた、アタッ！」

僕の言葉空しく、クリエは自身が引き起こした揺れで足を滑らせて転がった。そして鉄格子に頭ぶつけてやんのププ。

「たく、だから言ったろ『危ない』って。言うこと聞かないからそうなるんだよ」

「うう～、今笑ったよねお兄ちゃん？」

「へ？　なんの事だか？」

なにぃ！？　声には出してなかった筈なのに、なんで気付いてるんだコイツ。でもここはお兄ちゃんの威厳の為にシラを切り通すぜ。

「ふ～んそっか……クリエの事を笑うお兄ちゃんにはお仕置きだね」

「はっ、お前に何が出来るって……」

僕の言葉は最後まで続かなかった。何故なら、僕を見下ろすクリエが、やけに自信満々だったからだ。そして口元をつり上げてこんな事を言う。

「お兄ちゃん……手足が縛られてちゃ、色々と不自由だよね。そう例えば、踏ん張ることも出来なくて！！」

キラリ～～～ンとクリエの目が光った気がした。するとクリエは

がっしりと両手で鉄格子を掴むと、鳥かごの端の方で力強く体を揺らし始める。
次第に少しづつ速度が上がっていく鳥かご。コイツ、ブランコの用量で立ちこぎみたいにやってるな。全身をバネの様に使ってるんだ。
すると勢いに釣られて、僕の体が次第に動き出した。マジで踏ん張る事が出来ないから、慣性の法則に従うしかない。

「クリエ、覚えてろよ！！」
「あっはは！　こっちの台詞だよーー！！　あーっはははは！！」

心底楽しそうに鳥かごを揺らし続けるクリエ。その度に僕の体は鉄格子に容赦なくぶつけられる。なんて悪女っぽい笑い……コイツは将来とんでもない悪女に成るのかも知れない。
将来があるのかは知らないけどさ。取り合えずこのままじゃ僕の将来が無くなりそう……鉄格子ってやっぱ痛いんだ。まあだからってＨＰは減らないけどさ。

クリエにおちょくられるなんて屈辱だ。こんなバカッぽいお子様にいいようにしてやられるとは……これもあの老人のせいだな。
ここから抜け出したら、真っ先に寿命を終わらせにいってやろう。
僕が痛みの中でそんな決意をしていると、どこかからか知ってる声が聞こえてきた。

「楽しそうだねスオウ君……」

それはテッケンさんだ。心なしか彼には珍しく、冷めた声だった。
僕は必死に否定するよ。

「これが――ぐわっ！　たのし――づっ！　そうに――むぎゃ！

見えますか！？」

クリエの奴、揺らす事に夢中に成ってんじゃねーか！！　これだからバカな子供は！　僕の惨状に苦笑いを返すテッケンさん。彼はこの鳥かごが吊されてる建物の中央部分、多分監視の為の小屋がある所に立ってた。

まあ様はこの鳥かごは一つじゃないんだよね。見たところ同じタイプの物があと三つ。僕達のを入れて四つある。その四つの中心部分はしっかりとした建物でそこに彼は居るわけ。

「テッケンさん、不味いです！　変に目立っちゃってます！」

そんな声と共に小屋から顔を出したのはシルクちゃんだ。それなら多分中には鍛冶屋も居るんだろうな。監視の人達をどうにかしたのかな？　するとシルクちゃんの言葉を受けたテッケンさんが僕達に、こう言った。

「だ、そうだよ二人とも。お楽しみの所悪いけど、ちょっと静かにしてくれないかい？」

「それはあのバカな子供に言ってください！！」

僕は必死に夢中で鳥かごを揺らし続けるクリエの存在を訴える。確かに僕達は騒ぎすぎかも知れないけどさ、これもそれもみんなあのバカのせいなんだ。牢屋であろうこんなところで高笑いしてちゃ、それは注目されるわ。なんてったってここ高いし、クリエのバカな笑い声は村中に届いてるんじゃ無いだろうか。

「はは……」

テッケンさんは僕の言葉を受け取っても、乾いた笑い声を漏らす

だけだった。テッケンさんは基本優しいからな、子供にがつんとは言えないのかも知れない。たく、しょうがない。ここはお兄ちゃんとしてガツンと言ってやろう。

「おい！　やめろクリエ！　死にたくないんだろうが！」

「当然だよ！！」

そう言うと漕ぐのはやめてくれたクリエ。「死」って言うワードが効いたらしい。だけど相当な勢いだったから、なかなか鳥かご事態は止まらない。そうやってる間にも事態は進んでるようだ。

「テッケンさん！　急がないと気付かれちゃいます」

「いや、既に穏便には逃げれなそうだよシルクちゃん。悪いけど、鍛冶屋君と二人で時間を稼いで居てくれ。僕は一刻も早く二人を解放するよ！」

「わかりました！」

そう言うとシルクちゃんは頭を室内へ引っ込めた。多分上がってくる階段は室内にあるんだろう。そして当のテッッケンさんは、こちらに向いたかと思うと、一気に飛び乗ってきた。

鉄格子に張り付く形だ。するとその衝撃でもう一度鉄格子へぶつかる僕。

「ブベ！！」

「ご、ごめんスオウ君。だけど今は急がないといけない。取り合えずここを今すぐ開けるよ」

散々な僕……テッケンさんはなにやら、鉄格子の鍵をどうにかしようとしてるらしい。てか、どうにか出来る物なのかな？　こういうイベント事って勝手に逃げれるの？

色々と疑問はあるんだけど、流石のテッケンさんはピッキングも早かった。

「いや、これは鍵のおかげだよ」
「鍵なんですか！？」
「ああ、だってそこに看守がいたからね。気絶させると同時にちょっと拝借だよ」

おお、テッケンさんが悪い子になってる。まあ僕達の為だけど。

「だ、誰なの？」
「ああ、心配ないよクリエ。僕の仲間だからな。言ったろ」

なんだか妙に警戒してるクリエ。そそくさと、僕の方へ近づいて来て、服を掴んだ。何、クリエって人見知りするタイプなの？
全然そうは見えないんだけど。てかキャラが違うだろ。テッケンさんがモブリだから警戒してるのか？　普通は同じ種族だからこそ――ってものだろうけど、クリエは今逃亡中だからかな。

「お初にお目にかかりますクリューエル様。自分の名はテッケン。どうかお見知りおきを」

自分よりも更に小さなクリエにも深く頭を下げるテッケンさん。流石この人はかっこいいぜ。僕ならこんなバカっぽい奴にはそこまで下げないよ。
クリエはそんな丁寧な自己紹介に、自分が上だと判断したのか、ちょっと不遜にこう言った。

「ま、まあなかなか見所あるみたいだね。お兄ちゃんと違ってクリエを小馬鹿にしてない所は好印象！

だけど様付けはやめて。それじゃ友達っぽく無いもん。だからクリエね。クリエでいいよ」

やっぱ小馬鹿にしてる所は感づかれてるみたいだな。まあ今更だからどうでも良いけど。それでも懐いてきてるしな。

テッケンさんは明らかにクリエの下にランク付けされたのに、別段気にせずに爽やかにこう答える。

「了解ですクリエ。これで友達ですね」

スッと手を出すテッケンさん。すると明らかにおっかなびっくりな感じでその手に自分の手を重ねるクリエ。少しだけ力を込めて互いに握り、そして放す。そして鉄拳さんは僕の縄を切るために、小刀を抜いた。

するとその時、僕はクリエのおかしな行動を見たよ。何故か手を繋いだ手のひらをジッと見つめて、ウヘヘと不気味に肩を揺らしてる。やっぱりクリエってなんか変だよな。すると僕の方へやってきて耳元にこそこそと喋りかける。

「えへへ～ほらほら、手を繋いじゃったんだよ。友達の証だね。クリエは三位レベルが上がったよきっと」

「なんのレベルだよ……」

相変わらず訳の分からない事を言う奴だ。だけど嬉し過ぎて僕の言葉は耳から脳まで届いてないみたいだ。ずっとニコニコしてるもん。

するとそこでテッケンさんが僕に言う。

「ダメだね。やっぱり物理的には切れないみたいだ。シルクちゃんに頼るしかない。済まないけど、落として良いかい？」

「ええ！？　ちょっとそれはどうでしょうか！」

いくらテッケンさんの言うことでもそれは承諾しかねるよ。落としていいって、良くないし！　ここ結構高いよ！　死にはしなくても僕は通常よりもリアルに痛みが来るんだからね。それは断固拒否したい。だって痛いのは出来るだけ避けたい。

「大丈夫だよ。勿論手は打つ。それに流石に僕の体格じゃ二人一度には運べないからね。スオウ君は彼女を一人置いて行くか、置いて行かれるかの方がいいのかい？」

「う……それは」

確かにこの状態で一人になるのは色々不安だ。それはクリエを置いてくのもそうだよな。これしか同時に助け出す手はないって事か……テッケンさんもモブリだから小さいんだよな。するとクリエがテッケンさんにこう言うじゃないか。

「あ、あの！　お兄ちゃんを置いてくか、落とすかなんてそんなのどっちも――」

「クリエ……」

心配気に聞こえるその言葉。まさかそんな風に言ってくれるなんて……お兄ちゃん嬉しいじゃないか。ちぇ……まあしょうがないか、だってクリエは小さいし、なんだかんだ言って、僕もクリエが同じくらい心配だからな。

ここはお兄ちゃんが人肌脱ぐしかない……

「――とっても面白そうです！　大丈夫、お兄ちゃん頑丈だし、悪運も強そうだもん！！」

「ぶっ殺すぞ！　クソ餓鬼！！」

なに、さり気に助ける選択肢を投げ出してるんだ！！　恐ろしい事ばかり推奨してんじゃねーぞ！　くっそ……クリエはこんな奴だった。
お兄ちゃんお兄ちゃん言って慕って来てても、実は面白がってるだけだろこいつ。なんか利用されて遊ばれてる気しかしねーよ。

「はは、まあまあ落ち着いてスオウ君。大丈夫、僕を信じてくれ」
「テッケンさん……やっぱり僕の味方は貴方とシルクちゃんだけです……」
「大袈裟だよ。アギト君も今はセラ君もいるじゃないか」

はは、それこそ大袈裟っすよ。アギトはまあ一応否定はしないけど、セラは味方とは思えないね。あいつにはいつ背中を刺されてもおかしくないと僕は思ってるよ。
僕がそんな事を内心で呟いてると、テッケンさんは例のセラに渡された機械で小屋の方のシルクちゃんと連絡を取ってる用だった。
そして――――遂に脱出の時だ。

「先にスオウ君を落としてからその後に僕達は続くよ。クリエは僕が責任持って守るから、安心してくれ」
「……頼みます」
「なにかな、その変な気を感じる目は？」

後ろから刺さるクリエの声。こいつやっぱり妙に感が鋭いな。実は怪我の一つ位しろと念じてたんだ。それも見透かされた。

「別に、あんまりテッケンさんに迷惑かけるなよって言いたかっただけだ」
「わかってるも～ん！」

まあだけど本心は認めない限り、クリエの感ってだけで終わりだ。てな訳で僕は認めなかった。体の言い事を言っておいた。

「よし、じゃあ行くよ二人とも！！」

そう言って、テッケンさんが僕を開け放たれたドアに向かって蹴り落とす。信じてるとは言え、やっぱり不安だよ。だって手足使えないし、ただ僕は落ちるだけ。

この位の高さじゃ直ぐに地面に挨拶する事に――――と思ったけど、それはなんとか回避された。

蹴り落とされた瞬間、直ぐにシルクちゃんは対応してくれたからだ。

「ピク！！」

そんな声が聞こえたと思ったら、僕は空中に浮いてたよ。どうやら桜色の小竜が、僕が落ちてくるのを待ちかまえてたみたいだ。

たく、それならそうと言ってほしかった。超ドキドキしてたんだからな。

僕がピクに運ばれて、小屋の外側の所に着くと、そこには既にテッケンさんとクリエが居た。流石テッケンさんは仕事が速い。

「お～いお～い」

そんな風にこっちに呼びかけてたクリエが、僕がそこに下ろされるなりこう言った。

「えへへ～、クリエの勝ちだね。クリエの方が早く着いたもん」
「別に、そんな勝負してねーよ」

そもそも勝負になんてならないだろう。だって僕はまともに動けないんだし。それにクリエだって別に何もしてないはず。
随分他力本願の勝負だよ。勝ったって嬉しいかそれ？

「ピーー！！」

その時、ピクが羽を羽ばたかせて飛んだ。そして僕の周りをクルクル回ってる。なんだかご主人様を呼んでるみたいな光景だな。
そしてそんな事を思ってると、やっぱりシルクちゃんが来てくれた。

「大丈夫ですか？」
「うん、まあなんとか。ピクのおかげだよ」
「それはよかったです。今直ぐ縄を解きます」

そう言ってシルクちゃんは呪文の詠唱に入った。

「僕は鍛冶屋君の加勢に言ってくる。ここは任せたよシルクちゃん」

そんなテッケンさんの言葉にコクリと頷くシルクちゃん。そして次の瞬間、放たれた光が僕の腕と足の縄へとやってくると、砕け散る様にその存在が無くなった。

「おお、やった！！」
「これで大丈夫ですね」

少し頭を傾けてニッコリと微笑むシルクちゃん。うん、なんて可

愛いんだ。しかも頼りになるんだから、この子は本当に素晴らしいよね。
僕はお礼を言って立ち上がる。僕達もテッケンさん達に加勢して道を作った方がいいだろうからね。でもその時、この場に変な声が響いたよ。

「うあぁ～～～！」
「おいクリエ、何惚けた声出してるんだよ？　ちょっとは緊張感持てよな」

僕はそんな事をクリエに言ったけど、どうやらあいつはお得意の「聞き流す」ってスキルを発動してる様だった。まあ要するには無視だよ無視。
僕を無視してクリエはシルクちゃんへ飛びかかる勢いで迫ったんだ。

「ねえお姉さん！！　その子お姉さんのペット？　凄い凄い凄い！！　その子とっても綺麗で可愛い！！　いいないいないいなぁーー！」

どうやらクリエはピクに興味津々な様だ。まあ確かにピクは珍しいよな。この村のタマネギみたいな奴にも興奮してたし……それに興奮出来るなら、ピクならその数倍は確かにいけるよ。

「ありがとう。え～とクリエちゃんでいいのかな？　私はシルクだよ。で、この子はピク。ペットって言うか、私の大切な友達かな？」
「ん～～～～～～～～！！」

そんなシルクちゃんの自己紹介に、クリエは口元を波みたいにして、ジタバタと腕を振ってた。何？　どういう反応なんだあれ？

たく、余りにも奇怪な反応をするものだから、シルクちゃんが困惑して、僕に視線を投げかけてるじゃないか。でも僕はため息混じりに、肩を竦める位しか出来ないよ。

「ペットじゃなく友達！！　うん、お姉さん素敵だね！　クリエもねクリエもね……え～と、その子とお友達になりたいな！！　いいかな？　いいかな？」

クリエは期待混じりにシルクちゃんにそんな事を懇願する。どうやらさっきの謎の反応は、シルクちゃんの言葉に感動してたみたいだな。お友達って部分がよかったんだろう。

当然シルクちゃんはクリエのそんな無邪気な言葉を無碍にするわけもない。なんてたって優しいからな。僕の知り合いの中でも一番彼女は優しい。

だから優しい声で、目線をあわせてこういってくれる。

「勿論。ピクもきっと喜んでくれます」

シルクちゃんの突き出した腕に止まるピク。クリエとピクが向き合う形になってる。そしてクリエが、ワクワクを押さえきれないみたいな表情で、ピクに手を伸ばす。

「よ、よろしくねピク。クリエはクリエって言うんだよ。お友達になってくれると嬉しいな」

ピクの頭を撫で撫でするクリエ。それを静かに受け入れてくれるピク。そしてそんな言葉に反応するように、一言だけ「ピーー」と鳴いた。

それがどういう意味を持ってるのかは僕にはわからない。けどクリエにはそれが了承ってな風に受け取れた様だ。

「ありがとう！」

と元気一杯に言って、ピクに抱きつくクリエ。モフモフの羽は気持ちよさそうだけど、胴体の方は案外堅いんだよピクって。

だけどクリエはそんな事気にしない。幸せそうにぐりぐりしてる。

「ごめんねシルクちゃん」

「何がですか？　ピクにもお友達が出来て良かったですよ。それよりも、これからです」

「だな」

僕とシルクちゃんがそんな事を言ってると、小屋の方からテッケンさんと鍛冶屋が姿を現した。あれもう終わったのかな？　なんて楽天的な事を考えてると、訝しげな感じでテッケンさんがこう言った。

「おかしい、村人達がここから離れていく」

「終わったって事ですか？」

「いや、何か違う感じだよ。寧ろ、向こうも本気になった……みたいな」

本気か……それは厄介だな。すると鍛冶屋が僕とクリエに目をやって、ため息一つこう言った。

「お前達もいつまでも遊んでる場合じゃないぞ。奴らはまだ余力を残してた、何か仕掛けて来る気だ」

大きな鎚の汚れを取りながら鍛冶屋は文句を垂れる。別に僕達は遊んでた訳じゃないっての。そう見えたのは、色々と起きる事がハ

チャメチャだったからだ。
「む～おじさん嫌い」
「おじ！？」
いきなりのクリエのそんな第一声に、度肝を抜かれた様な鍛冶屋。はは、良い気味だ。
「はは、そう言ってやるなよクリエ。鍛冶屋のおじさんは気難しいだよ。職人気質だからな」
「クリエはクリエは、もっと柔らかくなった方が良いって思うの。アドバイスだよおじさん。そうしないと友達出来ないよ」
何故か友達が居ない奴に講釈される鍛冶屋。苛ついてるのが目に見える様だ。
「おいスオウ、お前も今おじさん言ったな？　ちょっと後で面かせ」
おお、怒りの矛先が僕に向けられた。それになんだそのチンピラ風な物言いは。そんなにおじさんってワードがイヤだったんだろうか？
まあ確かに、言われて寛容に受け入れられる年齢でもないのかな？　実際鍛冶屋が何歳かなんて知らないけど、おじさんでは無いんだろう。
「お兄ちゃんに酷いことしていいのはクリエだけだよ！」
僕を庇う様にそう言ってくれるクリエ。いや、まあ庇ってるのかは微妙だけどな。

「おい、僕はそんな事をお前にだって許した覚えはない！」

断固拒否する僕。振り回されるのはこの際仕方ないって思ってやるけど、作意的な物まで寛容に受け入れたい訳じゃない。

「むーお兄ちゃんも大概頑固――」

頬を膨らませて文句を垂れてたクリエが、後の言葉を言わないまま、唐突に周りに目を向けた。

「どうした？」

僕はクリエのそんな様子が気になった。すると下の方へ目を向けたまま、クリエは重く口を動かした。

「声が聞こえる。苦しい声、痛い声……心を鎖で繋がれたそんな声。たくさんたくさん集まって来てる」

クリエのその言葉に、僕とテッケンさんは身を身を乗り出して下を見る。すると仄かな花の明かりの中に、赤い光がいくつもあるのが見えた。

「あれはまさか……モンスター？　でも、ここは村ですよね？」

「そうだけど……何が起きてもおかしくない……それがＬＲＯだよ」

「それはそうですけど……」

いろんな設定があるじゃん。それは危ういバランスでも成り立ってないといけないと思うんだけど。まあ多分、あのモンスターどもがここに現れられる理由はあるんだろけどさ……取り合えず、結構やばそうな数だ。

「急いでここから降りよう。このままじゃ囲まれてしまう！」
僕達はそんなテッケンさんの言葉で、一斉に階段を駆け降りる。
だけど下に着いたときには、既に周りは敵で一杯だった。
「くそ……」
「お兄ちゃん……あのモンスター何か変だよ。苦しそう」
苦しそう？　相変わらずおかしな事を……今はモンスターの容態の心配なんてしてられない。それに――
「寧ろそれは好都合だ！！」

鳥かごと繋がれた獣（後書き）

第二百三話です。

ようやくテッケンさんたちと合流の回です。でもまだまだピンチは続きます。スオウは大変な物ばっかり背負う役目を負って大変です。まあだけど、それを受け入れるのがスオウなんですけど。

てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

重く苦しき悪魔の裁き（前書き）

村の中でモンスター共が襲い掛かってくる。僕達はそれを蹴散らしながら出口を目指してた。でも、奴らの数は予想以上に多く、そしてしつこい。僕達は意図せずに、村の奥へと追いやられてた。

そこは僕達に用意された処刑場。罠に嵌められ、村人の魔法に打ちのめされた僕達。だけど……まだ……まだ終われない。

その心と共に、答えてくれたセラ・シルフィングを振るう。だけどそれでも、現れた村長が全てを持って行く。留めの一撃……けどその時、黄金色の光が降り注ぐ。

重く苦しき悪魔の裁き

小さな村に、モンスターの断末魔が木霊する。だけど切っても切っても、沸いて出るみたいにモンスターは絶えない。
四方八方から迫り来るモンスター共を相手にしながら、僕達は村の出口を目指してた。

「たく、いくら倒しても切りがない！」
「どうやら、倒した傍から回復されて行ってるみたいだね」
「回復って……一体どこから？」

周りを見渡しても、魔法を唱えてる様なモブリの姿は無いんだけど……でも確かに、さっきから全然減った気がしないからな。
それになんだか誘導されてるような……自然とモンスターの層が厚い方は避けてるんだけど、それだと一向に村から出れない。
このままじゃ体力を無駄に使ってる様なものだ。

「お兄ちゃん……声が……苦しくて痛い声が聞こえるよ」
「クリエ……」

僕の首に腕を回して、背中を陣取ってるクリエがそんな震えた声を出す。なんだかさっきから苦しそうなんだよな。
どうやらあのモンスター達の声が変な影響を与えてるみたいだけど……どういう事なんだろう？　そもそも村の中をモンスターがばっこする時点でおかしいんだけど、確かにこのモンスター共はどこか操られてる……そんな感じだ。

「心配するなよ。大丈夫、直ぐにこんな場所からは離れてやるから、

もうちょっとだけ我慢してろ」
「……うん」
僕は背中のクリエにそう言って、前を向く。鍛冶屋とテッケンさんがそれぞれの武器で、モンスターを凪ぎ払ってるけど、確かに奴らは消えはしてない。厄介だな。
半月が照らす空の下、闇夜に浮かぶ赤い瞳は絶え間無く僕達に迫り来る。

「はぁはぁはぁ……ここは」
僕達が誘導された場所は、一際大きな建物がある場所だった。多分村長の家か何かだろう。道を照らすように光り花が点在してたけど、一際離れた場所にあるから、後ろを向いてもそこにはモンスターと、道を照らしてた光花しか見えない。
ある意味、ここが村の際深部なのでは無いだろうか？　村から出るはずが、上手い具合にやられた訳だ。
「やっぱりどこかで無理をしても厚い部分を突破するべきだったね」
「確かにな。ここはあの村長の家か……」
テッケンさんと鍛冶屋が周囲に警戒しつつそう言った。周りには大量のモンスターが、狂った赤い目を輝かせて、獲物を狙ってる。
「襲って来ませんね。追いこんだからでしょうか？」
「どうだろう？　ジリジリ迫って来やがって逆にやりづらいんだけど」
さっきから妙に大人しく成りやがって、逆に不気味だよ。僕達を

少しずつ建物の方へ追いやってるみたいなさ。

（追いやってる？）

なんか引っかかる、このモンスター共の行動。こいつらがここに僕達を追いやったのには理由がある訳だよな。てか、こいつらはそもそも野生の本能の行動じゃない。

こいつらを操って、ここに追いやった奴の意図が有るはずじゃないか？　しかもその張本人は分かりやすい。僕達がここに居ることで示されてると思う。

村から一際離れた場所。建物と建物の間にぽっかりと空いた空間……意図があってここに追いやられたのだとしたら、奴らは何を狙う？

それは多分……僕達の捕獲。そしてモブリが得意とするのは、魔法だ。

ジリジリと迫り来るモンスター達に、後ずさるしかない僕達。すると、村長の家も後ろに迫りつつある時、ピクが勢い良く鳴いた。

「ピーーーーーー！！」

てな感じでさ。多分それは警告だったんだ。ピクの感知精度は一級品だからな。でもいきなり鳴かれても僕たちは分からないわけで……踏みしめた地面に、魔法陣が展開されて僕たちはその意味を知った。

「っつ――罠！？」

「きっと捕縛用の魔法だ！　散るんだみんな！！」

テッケンさんの言葉で、僕たちは一斉にその場から飛び退いた。だけどどうやら、罠は一つじゃなかったようだ。飛び退いた先でも

魔法が発動する。
周囲に巻き起こる爆発の衝撃で、僕の体は飛ばされる。
「づあああああ！！」
「きゃあああああああああ！！」
背中の重みが無くなったと思ったら、クリエが先に地面に倒れてるじゃないか！
「クリエ！」
「う……ん、大丈夫……生きてるよ」
そう言って、クリエは自分の体を起こそうとする。だけどそこで何か違和感を感じたようだった。
「あれ？　……重い」
重いって、あの一瞬で体重は増えたりしないだろう――とか思ってたけど、僕も自分の体を起きあがらせようとして気づいた。いや感じた。そう重いって。
「なんだこれ？　確かになんか体が重い……」
周りを見てみると、テッケンさん達も同じ様な格好をしてた。どうやら、あのトラップは爆発と一緒に、それに巻き込まれた敵に、重さを加算する様だ。
なんて嫌らしい魔法だ。あの爺は性根が腐ってるな。最初からいけ好かなかったけど、ここまでとは。一気に捕まえるんじゃなく、徐々に弱らせて行く気なんて……姿も見えないけど、どうせ弱りきったタイミングで出てくる気なんだろう。

丁度直ぐ後ろには奴の家があるんだしな。

「くっ……」

僕は口元に垂れる血を拭い立ち上がる。まだ動けない程じゃない。少し体がズーンと重くダルいだけだ。でもトラップはまだまだ有るんだろうし、迂闊には動けないな。

それにあの爆発を貰う度に体が重くなったら流石にヤバい。逃げ仰せる為には、ここが勝負時かも……

「大丈夫かみんな？」

「何とか……まだやれるよ」

「ああ、このくらいなら」

「私も、まだ大丈夫です！」

みんなまだ大丈夫そうで良かった。でも流石にシルクちゃんは後二回もくらえば動けなく成りそうだな。クリエは既に限界っぽいし。

やっぱりこういうのは、男と女の筋力の違いとか出てくる。なんとか動ける内に手を打たないと。

「こうなったらスキルを一斉に使って突破したほうが良さそうですね。幸い、あのモンスター共は数だけで、そんなに強いって訳でもないし」

「確かに……それが良いかもしれない。こうなったら、モンスターは気にせずに出口を目指そう。ここでにらみ合いを続ける訳には行かないからね」

僕の意見にテッケンさんは乗ってくれた。そして鍛冶屋もシルクちゃんも頷いてくれる。決まりだな。モンスター共をけちらして進むか。

そうと決まれば一気にイクシードで行くのが得策だろう。だけどそう決まって、動こうとしたまさにその時だった。

「「「悪魔を逃がすなぁーーーーーー！！」」」

そんな声がモンスターの後ろ側で響いた。そして光が舞い上がる。それは無数の炎だった。どうやら家に引きこもった筈の村人達の一斉攻撃らしい。

いやいや、これはヤバいって！！　無数の炎は僕たちの周りに容赦なく落ちる。衝撃と爆風と熱気が一斉に体を襲う。僕はイクシードよりも、クリエを守る事を優先した。

着弾の寸前に、クリエを庇う様に抱きしめる。

「お兄ちゃん！」

「良いから舌噛まないように黙ってろ！」

爆発で飛ばされた先で、爆発が起こる。そんな事が続いた。それは村人による攻撃と、罠として設置してあった爆発がきっと入り乱れてたんだろう。

耳がおかしく成ったような状態の中、ただ僕はクリエを守ることに必死だった。そしてようやく爆発が収まると、僕はチカチカする目を開けて自分の体の状態を確認する。

（やっべ……全然動かない）

それが結論だった。もうほんと、全く動かない。きっと爆発のダメージと、罠の特性にやられたな。

「お兄ちゃん……」

心配そうな目を向けるクリエ。まあこいつが無事だっただけ良しとするか。まあまだ全然守れたとは言えないけど。ここでもう一度捕まると、確実に処刑されるだろうしな。

それが今直ぐ行われたっておかしくない。だって一度逃げ出したんだ。中央への言い訳もなんだって出きるだろう。

このままじゃ猶予もなくお陀仏……それだけは回避したい。でも僕の体は既に動かない……他のみんなはどうなんだろう？

僕はそう思って、一縷の望みを思い、周囲に視線を巡らせる。爆発続きで随分と凸凹に成ってしまった地面。そこにはテッケンさんに鍛冶屋、シルクちゃんの横たわった姿があった。

流石にあの容赦のない猛攻は、誰も防ぎきれなかったって事か。

「テッケンさん……鍛冶屋……シルクちゃん……」

「くっ……無念だよ。指先一つ動かせない……」

「絶対絶命……俺の鎚も改良の余地が有るな」

「うう……済みません。紙一重で障壁が間に合わなくて……」

みんな精一杯やってくれたようだけど、上手くは行かなかったようだ。まあいつだって、自分達に都合の良いように物語が運ぶなんてあり得ない。

だけどこれは……あまりにも悔しいだろう。これだけ息巻いて「助ける」と言ったのに、こんな所でノックダウンなんてさ。

「ん……そう言えば……ピクは？」

シルクちゃんは見えるけど、ピクは倒れてない。アイツは飛べるから爆発に巻き込まれてないのか？

「ピクは空に居ます……どうにかして隙を見て、ストック魔法を使えれば……まだどうにか出来るんですけど……だけど確実じゃありません。
この手の魔法がイベント専用の物なら、リカバリーが効かないかも……あの縄は同じ魔法があったけど、これは私も知らないんです」
そうなんだ、イベントってそんな事も起こり得るのか？　それじゃあ僕達はどのみち助からない様な……それならもっと確実な事にピクは使わせて貰った方が……
そうピクなら、子供の一人くらい運べる筈だ。
「ねえシルクちゃん、ピクにクリエを運ばせる事は出来ないかな？」
「そ……それって……」
「僕達はプレイヤーだよ。殺されたって本当に死ぬ訳じゃない。ミッション失敗するだけ……だろ？」
するとテッケンさんが横から割ってきた。
「僕達は確かにそうだけど、君は違うだろ！　どんどん君はＬＲＯに深く入り込んでる。この前入院したばかりだ。次は病院じゃなく、墓に入ることに成るかも知れないんだよ」
「はは……冗談きっついですよテッケンさん」
墓って……流石にそれはちょっとね。テッケンさんが言うと冗談に聞こえないじゃないか。
「冗談で済むなんて君だって思っちゃいないだろう。命の重さは誰よりも分かってる」
「だからこそ……でしょう。こいつにとってこの命は一つですよ。

ただのプログラムでシステムかも知れない。殺されても、ミッション前に戻るだけなのかも知れない。
けど、それで僕が終わりたくない。だって、無くせ無いじゃん。そんな都合良く、僕達の頭は出来てないし、今ここにいるこいつを、僕は連れていってやるって約束したんです」

僕は胸の中にいるクリエを強く抱く。体はあまり動かないから、心で。本当にこれがただのゲームなら……クリエがただのＮＰＣに思えるのなら、ここまでなんてしてない。
でも、違うんだ。クリエは違う。この無邪気なお子様には感情が確かに有るよ。僕はそれを感じてる。だからこそ、ここで諦めて全てを無かったことにして、前の状態に戻らせるなんてイヤなんだ。

「お兄ちゃん……クリエは……クリエは……イヤだよそんなの！一人なんてしないで！！」

胸の中からそんな声が聞こえた。大きな瞳には、ガラにも無く雨粒の様な水滴が貯まってた。でもクリエは必死に我慢してる。そして僕も、こんな所でこいつを泣かせたくなんか無いんだ。
しょうがない、その案は却下するしかないか。

「心配するな。全部お兄ちゃんに任せとけ」

そう言って僕は歯を食い締める。

「んがあああああああっ……あああああ！」

動かない手に足に力を込める。クリエを庇う態勢のまま、体を少しずつあげていく。四肢にありったけの、いやありったけ以上の思いと力を込めて。

「ぐあああああああああああああ……」

自分の体がこんなにも重いと感じた事はない。でも……まだ僕の体は動く……動くんだ。もっと、これよりも怖く恐ろしい状態を僕は知ってるよ。

暗いところにただ落ちていく様な……そんな死の感覚を。あれに比べれば、動く事を実感できる今は、それほどじゃねえ。

「ま、まさかまだ動けるのか？」

「やっぱり悪魔……悪魔なのよ……」

モンスター共の後ろにたむろってる村人連中から、そんな声が漏れてた。悪魔ね……こんな事しといて一体どっちが悪魔なんだか……こいつらはきっと、信仰の為なら子供にだってその魔法を向けるんだろう。

大儀の為に？　神の為に？　ふざけるなと言いたい。そんな事が許されるかよ。いや、そんな事を許す神なら、こっちから僕的には願い下げた。

直接見てるんなら、空の向こうで胡座をかいてる野郎の指図じゃなく、自分で考えろよ。

何とか四つん這い程度には体を起こせた。だけどそれだけで顔から無数の水滴が地面に落ちる。一体僕に加算された重さはどれほどなのだろう？

けど、それを考えたらこれ以上動けなくなりそうだからやめた。腕の先にはセラ・シルフィングがある。僕は相棒に語りかける様に言った。

「まだ……いけるよな？」

そんな言葉にセラ・シルフィングが何か明確な意志を示す訳はない。だけどこればっかりはさ……僕もクリエと同じように分かるんだ。

それはずっと一緒に戦ってきたからだろう。僕には分かる。セラ・シルフィングが「まだ行ける」そう言ってくれてるってさ。

僕は口元に笑みを浮かべて、その柄を握りしめた。するとそれに答える様に刀身に風が集まってきた。そしてそれは瞬く間に風のうねりへと変貌する。

「スオウ君……」

「スオウ……お前……」

テッケンさんと鍛冶屋の驚く様な声が聞こえた。二人も頑張ってるんだろうけど、それこそ普通はシステムに縛られてる筈だ。

有る意味僕は、ＬＲＯに深く浸かってる分、無理を通せてるのかも知れないな。それだけリスクも高いけど、だけど無理も無茶も、通さないといけない場面でそれが出来るなら、後悔しなくていいだろう。

「ここは、なんとしても切り抜けます！」

僕はそう言ってセラ・シルフィングをその場で振るう。風のうねりが地面を這ってまっすぐに進んだ。狼みたいなモンスター数体を串刺しにする風のうねり。そして反対側は横に凪いだ。

風のうねりに斬り裂かれて、オブジェクト化して消えていくモンスター。

（通じてる？）

そんな様子が見て取れた。逃げてるときは、幾ら攻撃してダメージを与えても、完全に倒せる事は無かったのに、今はたった一撃でやれた。
どういう事か分からないけど、これはチャンスだろう。風のうねりがモンスターの壁を越えて、自分達の直ぐ脇を掠めた事で、村人連中は慌てふためいてるしな。
ここを逃す訳には行かない！！

「うがあああああああ！！」

思い切って一歩を踏み出した僕。その一歩は恐ろしく重く、地面がズンと揺れる程だった。だけどこれで、真っ直ぐに前を向ける。

「なな何やってる、あの悪魔を今直ぐ食い殺せ！！」

そんな村人の言葉で、周りを囲んでたモンスターが動き出す。食べていいと言われたからか、モンスターどもは盛大に涎を垂らしてやがる。だけど！
風の鋭い音が一瞬響く。それだけで奴らはオブジェクト化して消えていく。絶え間無いそんな光が、この村に月明かりや光花とは違う光を与えてた。
迎え打つだけで一撃で済ませれるのなら、この場から動かなくても事足りた。せめて向きを変えるだけ。それに合わせて、風のうねりは踊るように舞ってくれる。
僕を中心として回転する風のうねりは、次第に他の風にも影響を与えてく。それはモンスターどもの動きを奪い、そして斬り裂く。一種の竜巻が出来上がってた。

「これで――最後だ！！」

掲げたセラ・シルフィングの先には数体のモンスターが空に打ち上げられてた。そしてそいつ等も青い光と共に、体が崩れさって消えていく。

「はぁはぁ……」

僕は気が抜けそうな心に必死に鞭を打って気持ちを保たせる。だってまだ終わりじゃない。雑魚を葬っただけだ。後は村人達に村長もいる。

戦わなくて済むならそれが一番だけど……でもここで僕が倒れたら、おしまいと分かる。でも今は、村人達も動揺してる。手負いの僕が、あれだけのモンスターを葬ったものだから、畏怖してる。

だからこれを利用しない手は無いだろう。僕は息を必死に整えてから、高圧的に睨みを効かせる。すると案の定ジリッと後ずさりする村人達。

「退けよお前等。今ならここから出ていく……それだけにしといてやる。でもそれを阻むって言うんなら、どうなっても知らないぞ」

精一杯悪役っぽく言ってみた。実際はただのはったりだ。僕以外は既に動けないし、僕だって一歩踏むだけで息が切れる位だ。

でもそれでも……このはったりを通さなくちゃ行けない。そうしないとここで殺されるだろうから。僕は視線に全力で「退け退け退け退け」と込めまくった。場の雰囲気は少しずつだけど僕の方に来てるはずだ。異様だった雰囲気を、更なる異様で覆いだしてる。

でもその時だった。後ろの方から何かを叩きつける様な音と共に、僕にのし掛かる重量が更に増加されて、思わず片膝を地面に付いた。

そして村中に届きそうな怒声が飛んだ。

「狼狽えるでないのじゃ！！　奴の言葉ははったりよ。既に虫の息にすぎん。悪魔を外に出す訳にはいかん。悪魔は我らの手で葬らなければなのじゃ。
それが神の意向で、世界の為じゃ！！」

そんな言葉と共に、後ろの建物から現れたのは爺のモブリ。やっぱりこいつが村長か。せっかく行けそうだった雰囲気が奴によって塗り変えられた。
村長の出現は村人達の迷いを取り去ったみたいだ。彼らは小さな体で大きな杖を構えて、僕達の前に立ちふさがる。

「……何が世界の為だ」
「悪魔はここで死すべきなのじゃよ。一に世界は代えられん」

こいつらの世界には数えられない一が多すぎるんだろうな。どうしてそんなたった一つも、世界とは思えないのか……同じ命だろうに……生きる権利は平等じゃないのかよ。
僕は圧し掛かる重圧の中で、風のうねりを村長へと向ける。

「ふざっ……けるなよ！　悪魔悪魔って……こいつが悪魔なんてものに見えるのか？　お前等と同じモブリだろ！　お前等が守るべき子供だろーが！！
それを悪魔だと決めつける事しか出来ないのなら……お前等の信じる神様なんて……僕にとってはクソくらえだ」
「ふん、後から出てきた猿の分際が。貴様等人は、シスカ様の恵みが一番薄い。だからこそ、そんな事を言うのじゃよ！」

僕の風は村長まで届かなかった。奴の周りにはどうやらシールドが張ってあるみたいだ。そして言葉の終わりと共に奴も杖を掲げた。そしてその頭上には圧縮された炎が集い出す。村人全てから放たれ

る炎が、村長の掲げた杖の先に集ってく。
それはまるで……小さな太陽だ。
「悪魔にふさわしい滅し方を与えようぞ！！」
「――っつ、ダメージがヒドい……それに……」
みんなは動けないんだ。どうにかして防がないと。
「シルクちゃん、転移魔法で全員を飛ばす事は？」
「確かにストックにそれもあるけど、でも全員は無理です。クリエちゃんはＮＰＣだもの」
ああ、そっか確かにその通りだ。くっそ、結局体を張るしかないか。でも相性が悪い。風と炎……こうなったらイクシードをもう一段階あげるしか……って条件が整ってないか。
まさに絶体絶命。吹き上げる熱気が肌を焦がす。そして村長はその太陽をこちらに放った。小さかった太陽が一気に膨らむ。そして僕達全員を巻き込んで燃え盛る――――かと思ったその瞬間、空から黄金の光が降ってきた。
それが膨らんだ太陽を消し去り、地面を抉り湖の月を切り裂いた。そしてこの場に響くは、聞き覚えのある声だ。
「そこまでです！　彼らの身柄は私アンダーソンが預かります！」
月明かりに照らされて見えるのは、空に浮かぶ巨大な船だった。

重く苦しき悪魔の裁き（後書き）

第二百四話です。

ボロボロになるスオウ達の回ですね。みんなで頑張ってるんだけど、村という集団とはちょっときつい。それになんだか普通じゃないですしね、この村の奴ら。でも信仰ってのは時に狂気になることもある。

そんな例はきっとリアルにはありますよ。それは信仰のせいじゃ無いはずですけど……それを自分勝手に解釈するからそうなるのかな？　すがる物を求めるのが人だけど、縋り過ぎたらいけないって事かもしれないです。

まあ、日本人は信仰心薄いですから、ここまではならないでしょうけど、それでも流されやすくもあるから、無くはないかもですね。どっかの新興宗教とかやりそうです。

だけどＬＲＯのシスカ信仰は絶対にそんなんじゃありません。まあリアルで言うところのキリスト教だと思ってください。

てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは。

哀れで不幸な主人公（前書き）

空に現れた飛空挺。それが僕達を助けてくれた。そしてそこから現われたのは案の定ミセス・アンダーソンだ。それからノウイとセラもいた。どういう事か分からないけど、取りあえず助かったと思った僕。

だけどどうやらこれで終わりじゃない様だ。常々に何故か、理不尽と不幸は僕を好むらしい。

哀れで不幸な主人公

「あれは……飛空挺」

僕の目が幻覚とかを映してないのだとしたら、それは紛れも無く飛空挺だ。空に浮かんだ大きな船。それが僕達に向けられてた魔法を打ち砕いてくれた。

悠然と空に浮かぶその姿は、今の僕達にとっては救世主に見えるな。

「ぬぐぐぐ……アンダーソンめ、計ったな」

そんな事を漏らすのは村長だ。現れた飛空挺を見上げて、悔しそうに歯ぎしりをしてる。計ったか……確かにそうみたいだな。

だって確か明朝だった筈だろ、来るのって。でも今飛空挺はここにいる。随分早いご到着だ。まあ、どういう事かわからないけどさ、助かったよ。

マジで危機一髪だったし。

飛空挺は僕達の上空を通り抜けて、滑るように湖へ降りた。そして桟橋へつけて、そこから数人の小さな影と、見覚えのある姿が見えた。

「お～いっす！！」

「あれは……ノウイ？　それにセラも居るし……どういう事だ？」

なんだか上手く状況が飲み込めないんだけど……でも不思議だな。セラとかでもさ、こんな状況で見つけると、なんだか安心するもん。

まあ僕達の心情とは裏腹に、この村の連中はイヤ～な視線をミセス・アンダーソン達に向けてるけどね。まさに邪魔者がやってきたくらいな感じでだ。

こちらに向かってくるミセス・アンダーソン達の道を、いやいや作る村人達。そして僕達を間に挟んで、二人が対面した。

てか、どうでも良いけど、早くこの重さをどうにかしてほしい。マジで辛いんだよこっちは。けれど村長はまだ僕達を殺す気満々だ。

「お早い到着じゃな、ミセス・アンダーソン。一体何用じゃ？　今は大事な儀式の最中じゃよ。出来れば邪魔はしてほしくないのじゃが？」

「あらら、それはごめんなさい。ですけど、その儀式とやらは何なのかしら？　確か明朝での話し合いで色々と決める筈だったのではないの？

ちょっと事態が早急じゃないこれ？」

二人は穏やかに言葉を交わしてる様に聞こえるけど、その背後にはスゴい威圧感を放ってるよ。どうやらどっちも譲れない……みたいな。

「儀式は儀式じゃよ。お前さんも知っておろう。我らはここで『道』を守護する勤めを長年果たしてきた。それに準じてるだけじゃ。

湖に映る月が輝きそれを示した……そこの二人は災いをもたらす存在じゃ。殺さねばならぬ。これが何の為かは、お前さんもわかっておろう」

何がわかっておろうだ。そんな古い言い伝え一つで殺されちゃたまったものじゃないっつーの。僕はミセス・アンダーソンを全面的に応援するぜ。

言ってやってくれ！

「シスカ教の為……ですか？　ですがこれも伝えましたよね？　そこにいらっしゃるクリューエル様は、貴方達が思うよりも、言ってしまえば、その掟よりも大切な方ですよ。
なので返して貰いましょう。異論は勿論ないですよね」

にっこりと微笑むミセス・アンダーソン。よし、なんだかいけそうだ。ここの村人だって、総本山の意志には逆らえないだろう。
元々ここまで急いで殺そうとしてたのだって、中央からの介入がこない間にって事だったんだろうから、それが駄目になった今、僕達を殺す事は出来なくなった……筈だ。

「ふん、ここまで急いで中央が動くとはな……それともお前さんの独断か？　ミセス・アンダーソン。
じょがこやつらは、逃亡を計った罪人でもある。我らに剣を向けた邪教徒じゃよ。この有様が見えない訳では無かろうよ。
そこまで中央の目は腐ってもいまい。こやつらを裁く権利は我らにもある」

腕を広げてそんな風に演説する村長。こいつ、どうやっても僕達を殺したいらしいな。しかもなんだって？　この有様？　お前達が仕込んで罠に、村人連中がドカスカ打った魔法のせいの惨状じゃねーかよこれは！
勝手に押しつけるんじゃねー。でもミセス・アンダーソンは譲らない。

「貴方こそ、わかってない訳じゃないでしょう？　ここまで私が出向く意味。これは協会の総意です。なんと言おうと、ここでの勝手な判断は謹んで貰います。

後の事は中央で決めさせて貰いますよ。異論があるなら、後で抗議の文章でも、中央宛に送ってなさい」

そう言ってミセス・アンダーソンは腕を前に出した。すると周りに居た、僧兵か何かだろう人たちがこちらに来てくれる。その中には何故かノウイとセラも居る。

二人も話が終わるまで待ってたようだな。

「随分な格好ね」

「うっせぇ、てか何で？　どういう事だよ。あの村長も言ってたけど、明朝じゃなかったのかよ」

しかもセラ達も来るなんて聞いてない。まあ助かったからいいんだけど……するとセラの後ろから顔を出すノウイが陽気に事の顛末を教えてくれた。

「いやーこっちも大変だったんすよ。街に着くなり、ドタバタで、すぐに捜索隊が組まれて燃料補給後に再び飛び立つとか何とかで、自分達もそこにどうにかって頑張ってたんすけど……流石にそこには入れなくて。

するとなんだか事態がいつのかに変わってすっね。まあメール貰ってたからどういう事かは分かったんすけど、そこで直談判っすよ。

セラ様が『アイツが絡んで最悪の事態に成らないなんてないわ！』って言って、ミセス・アンダーソンの所に乗り込んだんっす」

アイツって僕の事だよな？　何、こいつは人の事を疫病神かなんかだと思ってるわけ？　でも何も言い返せないな。だってその予想は見事に当たってる訳だし。

くっ……だけど言い訳すると、僕のせいって訳でもないんだ。勝手に事態は進んでいくんだよ。

「するとそこでちょっとしたイベントが入ってっすね。ミセス・アンダーソンも悠長に明朝を待ってる気は無いとわかったんす。
だから彼女を説得して、自分達も一緒に船に乗せて貰った訳っす」
「なるほど……そっちも色々大変だったわけだ」
「そりゃあもう。けどあの時、自分がみんなを掴めていればこんな事には成らなかったわけっすからね。無念っす」

そう言って頭を下げるノウイ。別にあれがノウイのせいだとは思わないけどね。寧ろノウイのおかげで、誰も犠牲を出さずに済んだと言える。
あれはほら、しょうがない……僕達は無事だったんだから気にする事はない。

僧兵の人達が僕達の周りに集まって、その杖を掲げる。一斉の呪文詠唱。緑色の魔法陣が地面に現れて、僕達の周囲を包み込んでくれる。
すると体が楽に成って来るじゃないか。なんだかようやく一息つける感じだ。

「そいつを生かしておいたら、災いになるぞ。それもシスカ教を揺るがす程のじゃ！　分かっておるのかミセス・アンダーソン」

光の向こうで、こちらを見据えて村長がそんな事を言う。たく、往生際が悪い爺だ。するとクリエが僕の服を摘んでちょっと震えてた。
どれだけ楽天的でもクリエは子供だからな。悪魔とか災いとか言われたら、そりゃ傷つくよな。僕は自由に動くように成った手で、その小さな手を包んでやる。

「分かってるわ。何も私達も、ここの伝承を無碍にする気は無くってよ。それは肝に置いておきましょう。でもその子を殺すのは、早急過ぎると言うこと。
世界はバランスで成り立ってるのよ」

そう答えたミセス・アンダーソンはトコトコとこちらに歩いてくる。するとクリエはどっちに行けばいいのか分からない様で、僕の周りをくるくるしだす。そう言えば、どっちからも逃げてたんだもんな。
今の状態は将棋で言うところの詰みだなまさに。でも、これはどうにも出来ない。どっちかを選択するなら、間違いなくミセス・アンダーソンだろうし……殺されたくはないしな。
だけどクリエは僕の肩まで登ってきて耳元でこう言った。

「お兄ちゃん、もう動けるんだよね？　逃げよう。出来るよお兄ちゃんなら！！」
「お前な……流石の僕も限界だっての。それに送る気ではあったしな。いつまでも家出って訳にもいかないだろ」

すると僕の耳をおもいっきり引っ張るクリエ。こいつは容赦って言葉を知らないな。

「イテテテテ！！　何するんだよ！」
「お兄ちゃんの嘘つき！　クリエを月に連れってってくれるって言ったのに！」
「連れていってやりたいのは本心だよ。だけどお前自分の事も分かってないだろ。ちゃんと自分の事、知る必要があると思わないか？
その為には家出をずっとしとく訳にはいかないだろ」

クリエには何かある……それはもう確信で、それがきっと重要な

んだと思う。だからこそ、逃げ続けたって意味ないと思う。ミセス・アンダーソンはそこら辺知ってそうだし、ある意味丁度いいんだ。
僕の言葉に、何かを飲み込むクリエ。そしてポツリとこう言った。
「お兄ちゃんは分かってない。どうせまた私は元の場所に連れて行かれるだけだよ。体のいい監禁だよ。結構自由だったけど、私はずっとあそこに居るのはイヤなの！」
「そんなの……分かってるよ。安心しろって、必要な事聞いて、ちゃんと話して、それでも駄目なら、今度は僕がお前を迎えに行ってやる。
だから安心しな」
ポンポンと頭を撫でる僕。まあ既に放って置く事なんか出来ないからな。するとクリエは小指を出してきた。
「約束……約束だよ」
「おう！」
僕はその小さな小指に、自分の小指を絡ませる。そして定番の言葉を二人で口ずさんで、最後には指を放した。するとそこでミセス・アンダーソンが声をかける。
「クリューエル様、ご無事で何よりです。爆発の時は肝を冷やしましたが、優秀な冒険者に守って貰った様ですね」
おお、優秀だってよ。そんな事初めて言われた。なかなかいい人じゃないかこのおばさん。
「お兄ちゃんは、もうクリエのお兄ちゃんのなの！　ただの冒険者じゃないんだからね。厚い歓迎を要求するんだから！」

「お兄ちゃん？　まあいいですよ。元からそのつもりです。貴方をここまで守ってくれたのですからね。礼を尽くさないと私達の神の名折れですよ。
そんな事、私がするとでも？」
「そ、それならクリエの自由も保証してよ……」
「それは無理ですね」

クリエの精一杯の要求は笑顔で拒否された。たぶん頑張って言ったのだろうに……でも、なんでそんなにクリエを外に出したくないんだろうか？
聞いても教えてくれなさそうだけど、まあ言うだけ言ってみた。
「あの……クリエには一体何があるんですか？」

僕の言葉にミセス・アンダーソンは明らかに一瞬、反応したよ。意味深に僕を見てるし……でも、直ぐに外用の声で言葉を返してくれた。

「それは、貴方達が知ることではなくってよ。取りあえず、迎えさせてくれるかしら？」

そう言うミセス・アンダーソンは、僕達に背を向けて歩き出す。それはついてらっしゃいと言うことか？　すると僕達の周りに、その僧兵みたいな奴らがやってきて、なんだか威圧するんだ。護衛……じだよね？
まだ村人たちは殺気立ってるし、きっとそうだよな。でもある意味退路を断ってるような……僕は知ってるぞ、あのおばさんは自分を使い分けてる。さっきの言葉は、明らかに大衆に見せる様だ。僕は強制イベントの時に、あのおばさんの内の顔も見てるからな、それくらい分かる。

「なんだか、まだ厄介ごとが続く気がする……」
「うん？　何か言ったお兄ちゃん？」

限りなく小さな声で呟いた筈だけど、クリエは反応した。まあ完全に聞こえてた訳じゃなさそうだけど……目敏い奴だ。いや、この場合耳敏いとでも言うのかな？
てかこいつ、いつまで僕に張り付いとく気だ？　さっきから顔が妙に近いぞ。するとミセス・アンダーソンがトコトコ歩いてるのを確認しながら、クリエはこんな事を言う。

「ねえ、それよりもやっぱり逃げようよ。あのおばさんは信用しちゃいけないの！」

僕の服をギュッと握りしめるクリエ。まあ信じる信じないの問題の前に、僕はこのイヤな予感から逃れたいんだけどね。
だからついつい、それもいいかも知れない……とかちょっとだけ思う。あのおばさんは、確かに真剣にクリエを助けようとしてたけどさ……閉じこめてた奴らの一人であることも変わらないんだよな。
「信用」って物を与えるには、まだ早すぎるよな。僕は自分よりもずっと小さなその背中を見つめて、結局は気を引き締める事する。
でもそれじゃあ、さっきの約束の意味もない様な……するといつまでも動かない僕にセラがヒドい事を言ってくる。

「どうしたのアンタ？　さっさと立って歩きなさいよ。それとも何、実はここで殺されたかったとか？　なら置いて言ってあげるわよ」

長いスカートを翻しながらそう言うセラは、なんだか生き生きしてるように見えた。イヤマジで……こいつ本当に僕を虐めるのが好きだよな。

どこまでＳっ気たっぷり何だよ。

「たく、お前は本当にうるさいな。殺されたい訳ないだろ。僕はもう、自分からは死のうなんて思わないと決めてるんだ」

「何それ？」

むっ、ついつい余計な事を口走ってしまったかも知れない。だけど別に、セラの奴は僕の言うことなんかまともに聞いちゃいないから、直ぐに次の行動に移った。

しかも意外な行動に。

「たく、しょうがないわね。さっさと立ちなさいよ――――ほら」

そう言って差し出されてきたのはセラの手だ。見るからに華奢で細長い、女の子の手。こんな事されたら、間違いなくときめいちゃう筈の男子高校生であるはずの僕。

だけど何故だろう……僕の体はさっきの重たい時よりも過度に動こうとしない。本能が警告してるんだと思う。

『これは罠だ！！』

って。

「な……なんの真似だよセラ……お前」

僕の声は意図せずに震えてる。あり得ない……こいつが僕に手を差し伸べるなんて、もしかしてＬＲＯのシステムに致命的な欠陥でも起きたのでは無いだろうか？

僕は今までの経験から、セラの行動には裏を考えずには居られない。

「何って、分かるでしょ？　立ち上がらせてやるって言ってるのよ。なに、それとも私の好意が受け取れないの？」

妙に楽しそうにそんなことを言うセラ。絶対に罠だ。僕は確信したね。

「は、はは……そう言って、僕が手を伸ばしたらかわすんだろ？お前の考えなんてお見通しだね！　誰が騙されるもんか！」

僕は強くそう言った。何度も何度も遊ばれて来たんだ。もうそんな自分からは卒業するんだ。お兄ちゃんって慕ってくれる奴も今は居るし、格好悪い所なんて見せられないからな。

でも、僕の言葉を受けたセラは、思ってたのと違う反応を返してきた。怒るとかキレるとかを想像して、また心を抉るような言葉が続くのかと覚悟を決めてたのに、セラは意外にも顔をうつむかせたんだ。

「そう……まあ当然よね……」

なんだか急に元気がなくなったような声が届いた。俯いたセラの表情は伺う事が出来ないけどさ……ええ？　何キャラだよこいつ。

「しょうがない……私がからかい過ぎたのもいけないんだし……でも、今だけは純粋……だったんだけどな」

いやいやいやいやいやいや、駄目だ自分。騙されるな！　なにちょっとだけ悪い気がしてくるんだよ。どんだけ女の子の甘いんだよ。

だけど心はそうやって否定してても、体は勝手に動いてた。まだ震えてるけど、それでも俯いて寂しそうに出されたままのセラの手

に僕の手は向かってる。

くっそう……どんだけ僕を混乱させるんだこの野郎。絶対に芝居だと思う……思ってるんだけど、もしかしたらって気持ちがあって、そこが突かれるとズキズキ痛む。

だから手を伸ばさずにはいられない。だけどその時だった。第三者の手が入ったのはさ。

「誰よアンタ！　クリエ以外にお兄ちゃんを虐める奴をクリエは許さないから！　変な芝居やめてよおばさん！」

そんな事を言って、スパーーーン！　とクリエがセラの手を弾いた。そんな音と大声に、周りの注目が一斉に集まるのが分かったよ。

だけどそれよりも、手を弾かれて罵倒されたセラの方が危ないか……なんてたってオバサンはないよ。そんな暴言にセラが直ぐに反撃しない事が恐ろしい……と言うか、弾かれた態勢のまま、微動打にしないのが恐ろしい。

「オバ……サン？」

「そうよ！　何なのさっきから楽しそうにお兄ちゃんを虐めてくれちゃってさ。悪口とかでしか、誰かに見てもらえない事は、悲しい事だってシスターが言ってたよ。

オバサン友達いないの？　ぷぷぷ、カワイソ～～」

完全に馬鹿にしたような笑い方で挑発してるクリエ。ああ、もうやめてくれ。こっちが震え止まらなくなるよ。次の瞬間、セラならクリエの首をはねてもおかしくないんだぞ。

しかも友達いないのお前の方だろ。あれでセラには慕う奴が結構居るんだ。まあ僕だって信じられないけど……一応見てるからな。

するとずっと動かなかったセラが、不意に動き出したかと思うと、

クリエの頭にポンと手を置いた。

「ふえ？」

やばい、次の瞬間には体は前を向いたまま、頭が僕の方へ向いてるって言うホラー映像に成るに違いない。別段警戒してないクリエは、煩わしそうにしてるだけだけど、今の内に謝った方がいい。絶対に。

「ねえクソガキ」

ほらキターーーー！！　第一声がクソガキって完璧にキレてるよ。普通思っててもいわないもん。それを常々言ってしまいそうなのがセラだけども、常識ってもんは一応持ってるんだぜアイツ。

でもクソガキ……終わったな。だけどクリエは睨むように上を見据えて言い返す。語気を強めて。

「何よオバサン！」

「だめだクリエ！　それ以上は死ぬぞ！！」

いや、確実に既に処刑コースだろうけど、ゲームでも子供が殺される所なんて見たくない。だから僕は、クリエの後ろから庇うようにして身を乗り出す。

「ちょっとお兄ちゃん！　悪口言われたままで良いわけ？　クリエ的にはすっごい許せないの！　このオバはぐぅ――うぅ、うぅ！！」

僕はうるさいクリエの口を塞ぐ。もう無駄かも知れないけどさ、そのワードはやばいんだってマジで。

「はは……はは」

僕は静かにたたずむセラへと向いて、乾いた笑い声を漏らす。セラは僕がクリエを庇った時に、自分の手が弾かれた。それを気にするように、その部分をさすってた。

「いや……ほら、子供の言った事だしさ。それにクリエはきっと重要人物だぞ。ここはもっと大人に成ってだなセラ……いや、でも大人って言っても、クリエが言ってたオバサンとかじゃなく、大人の女性のって意味の大人で――」

「……責任よね？」

ん？　僕がしどろもどろに成って何かを言ってると、不意にセラが何かを発したような。心なしか体が震えてるし……僕はどこかでミスをしたかな？

「そうよね……子供の仕付は保護者の責任よね？　……フフフ」

やばい……目が笑ってない。怒りの矛先が完全にこっちを向いてるし……そして思いの丈を叫んでセラは飛ぶ。

「私のどこが！　オバサンだ！！！」

「ほげっ！！？？」

同時に、セラのスカートが大きく翻る。見えたのは純白のパンツにエロいガーターベルト。けど次の瞬間には頬に刺さる鋭い衝撃と共に、世界が回った。

体が一回二回と跳ねて、冷たい水を感じた。どうやら湖まで蹴り飛ばされたみたいだ。僕の体は、満月へと向かって進んでく。

ああ……なるほど。この月の向こうに、何があるのか今の僕には分かる。それはきっとクリエが思い描いてる物とは違うと思う。

そこはきっと沢山の御花畑があって、いつか別れた人達が居るようなそんな場所だ。そう……そこはきっと「天国」では無かろうか。

理不尽な不幸になんだかもう疲れて、僕はただただ、大きな水面を漂った。生きるって、辛いことの連続だな。するといきなり、水面が大きな波を立てだした。

「あぶっ！　ぶぶぶっ！？」

思わず溺れかける僕。あれ？　これって飛空挺飛ぼうとしてない？　僕を置いてく気か！　動き出した飛空挺を必死に追いかける僕は哀れとしか言いようがなかった。

哀れで不幸な主人公（後書き）

第二百五話です。
なんとか乗り越える事が出来てよかったよかったです。ノウイもセラも実は色々と頑張ってくれていたのです。まあそれを素直に言えないのがセラですけど……いつだってスオウは理不尽に暴力受けますね。
セラはスオウの状況を忘れてるんじゃね？　って時々思いますね。スオウは普通のプレイヤーよりもリアルに痛みを感じます。だからこそ笑いごとじゃ済まないよ！　みたいな。
てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

僕とアイツの事情（前書き）

文句を言う、これは外せない。今回ばっかりは僕だって思いっきり怒る！　その権利がある筈だ！　なんとか飛空挺には乗れたけどさ、もう色んな不満が溜まってる！　あれとかこれとかそれとか！　やってられっか！！

僕とアイツの事情

「もう、誰も信じられない！！」

水滴を甲板に垂らしながら、僕は涙ながらにそう叫ぶ。いや叫ばずにはいられない。だって……だって、みんな僕を置いて行こうとしたんだ。

行っちゃおうとしやがった！　そんなことされたら、いくら僕だってやさぐれちゃうよ！！

「落ち着いてくださいスオウ君。あの、私達は置いてくつもりなんて……」

「シルクちゃんだけは僕の味方だと信じてたのに――――――――――！！」

「ええ！？　わ、私ですか？　セラちゃんとかじゃなく」

僕は意外そうにしてるシルクちゃんに向かって頷きまくる。てかセラに置いてかれるとか、大抵の酷い事されたって今更だよ。

そんなの気にしてられない。あまりに日常過ぎて、今更セラのそんな行動どうでもいい。あんな奴は僕の中ではその程度なんだ。

てか、セラよりもシルクちゃんに決まってる。セラには幾ら嫌われようが構わないけど、シルクちゃんに嫌われたら、泣くもんきっと。

今まさに泣いてるけどさ……

「いや～すまないスオウ君。僕達は、彼の事は『心配ない』と言われたから飛空挺に乗ったんだけどね。するといきなり出発するじゃないか、こっちも慌てたんだよ」

そう言って前に出てきたのはテッケンさんだ。僕はこの人に見捨てられたのも、シルクちゃんの次にショックだ。

「へーーーー」

「なんだか全然信用してないね」

僕の余りに冷めきった目と乾いた言葉に、何かを感じたらしいテッケンさん。流石鋭いね。まさにその通りだよ。僕は全然その言葉が信用できない！

だって楽しそうだったじゃん。いや、面白がってた様に僕には見えたもん！

「だって……随分ワイワイと賑やかに面白がってたじゃないですか。僕が魚みたいに投げ網漁で捕獲されてるときとか」

「いや……あれは」

言葉に詰まるテッケンさん。そうみんな笑ってた。僕が必死に飛空挺を追いかけて、死に物狂いで頑張ってた時も、ようやく入った救助の手がマジで網で捕獲だった時も、面白がってたのを僕は視界の端で捕らえてたよ。

あの後、しばらく僕は網で吊されたまま、空中遊泳したんだ。あれは絶対にわざと引っ張り上げなかったんだと思う。僕が一体、どれだけ恐怖したか……テッケンさんやシルクちゃんはそんな人じゃないと信じてたのに……

「もういいんです……結局人は一人で死んでいくんですから！！」

僕はこぼれ落ちる水滴を飛ばして走り出す。この水滴は、僕の心の涙と言っても過言じゃなかった。それだけショックだったんだ。

「は、早まっちゃダメだよスオウ君！！」

後ろからそんな声が聞こえたけど、僕は振り返ることはない。そりゃあ、そりゃあさ、テッケンさんやシルクちゃんが僕の事を心配してなかったなんて思う訳ないよ。

自分視点からの一方的な印象が全部正しいとも思わない。あの二人は本当に良い人だし、それは僕が一番知ってる。

これまでの恩義を考えたら、こんな事で何怒ってんだよ位言われてもおかしくない。けどさ、そうじゃないとかよりも、今の僕にはあの瞬間の気持ちが引きずってるんだ。

そして何より、あんな事が起きた事がショックでショックで堪らない。飛空挺が動き出したあの瞬間……「そんな訳無い」って思った。

「冗談だろ直ぐに止まってくれる筈」とも思ってた。だけどそんな僕の願いに反して、飛空挺は空へと向かおうとしてた。

僕はそれでも必死に「嘘だ嘘だ嘘だ」と信じながら、無いスキルで必死に泳いだんだ。けど無情にも飛空挺は水面から浮き上がりだした。

そしてその時、ようやく掛けられた救出手段が投げ網漁って……僕は人としての尊厳を失った気がしたよ。

「ああの！　スオウ君ごめんなさい！！　だから待って！」

テッケンさんに続いてシルクちゃんのそんな叫びが届く。だけど僕は止まらない。振り返らない。

「ごめんシルクちゃん……本当は二人のせいじゃないって事くらい分かってる！　だけど……今の僕は一人に成りたいんだ！」

シルクちゃんのお願いなら、何だって無条件で引き受けても良いくらいだけど、この時の僕はたった一人に成りたかった。
だってやさぐれたこんな心じゃ、幾ら何を言われてもダメだと分かってるから。しばらく一人に成れば落ち着く筈だ。

だからせめて、この飛空挺が目的地に到着する位までは一人にして欲しかった。でも、その時だ。そんな僕の心からの願いをぶっ壊す奴がいやがった。

「お兄ちゃん！　クリエがクリエが、ちゃんとお兄ちゃんの救出をお願いしたんだよ！　だからちゃんとお兄ちゃんはここに居るの！
えへへーー偉い？　クリエ偉い？」
「そりゃ、どうも！」
「ほえ？」

僕は前方で笑顔満点だったクリエを飛び越えた。何かを期待してた様だけど、今の僕にはそれに答える余裕がない。
てか、誰のせいで僕が夜の湖に飛び込む羽目になったと思ってるんだ。そのくらいは当然と思って欲しい。まあクリエは子供だから無理だろうけど。
すると今度は、僕の心の傷をいつも作る奴が無碍にこう言ってくる。

「ちょっとアンタ、別にそこのクソガキはどうでも良いけど、さっきのシルク様に対する態度はどういうつもり？　あの方は何も悪く無いじゃない」
「うううううううううるせぇえ！！！」

僕は唾を飛ばす勢いでそう叫ぶ。だからそんなの分かりきってる

っつってんだろ。これでも僕は妥協してやった。本当はセラに向かって「悪いのはお前だ！！」位言ってやりたかったよ。
シルクちゃんもテッケンさんも、何も悪くない……そりゃそうだ。なのにあの人達は「本当に済まない事をした」とか思ってくれてた。
なのに本当に悪い、僕の傷の一番の理由であるこいつがこの態度ってどう言うことだよ！！　言うことおかしくね？

でも今の僕はその一言だけで精一杯。だってマジに女の子に手を上げる事なんて出来ないじゃん。女の子がどんなに酷い事を男にしてたって、許しちゃったり仕方ないとかの描写の物は良くあるけど、それを男がしたらただのＤＶに成るんだよ。

理不尽だけどそう言うものだ。女の子って見えないいろんな物で守られてる。だから僕はあれが精一杯だったんだ。それにやり合う気力も残ってない……今は一刻も早く一人に成りたい。
けど、そうは問屋が卸さない。最後に待ってたのは、ようやく邂逅出来たＮＰＣミセス・アンダーソンだった。僕が立ち塞がる奴らを全て一言でかわして、室内へ続く扉へ手を掛け様としたその時、僕が力を加えるよりも先に、扉が開いたんだ。

「あらあら、これは随分と男前な格好をしてますね。お兄さんとやら」

出会した僕に、そんな事を言うミセス・アンダーソン。彼女を囲む様に僧兵って感じの人達が居るな。しかも邪魔だこいつら。
ずっと追いかけて来て、ようやくって感じだけど、今は話す気分じゃないんだよ。けど踏んづける訳にも行かないから、取り合えず道をあけてやることに。

「そりゃどうも……」

僕は生返事をしながらモブリ達が通り過ぎるのを待つ。てかこの格好を見て男前って……嫌味だろそれ。くっそどいつもこいつも……するとすれ違い様にミセス・アンダーソンは更に言葉を続けた。

「クリューエル様に大分懐かれてる様ですが……その態度を取って貰えると助かります。どうせもう、二人が出会う事は無くなりますから」

「――――！！」

僕は思わず後ろを振り返り、その背に向かって「どういう事だ？」そう訪ねた。するとミセス・アンダーソンは歩みを止めて、だけど振り返らずにこう言った。

「そのままの意味ですよ。あの子は元の場所に戻り、あなた方は冒険者。元の鞘に収まれば、もう二度と会えなくなると言うだけです」

本当に……それだけ？　僕はその言葉を聞いてそう思ったよ。少しその場に止まっただけでも、僕の足下には水たまりが出来ている。体を落ちる水が、この時期なのにやけに冷たく感じるじゃないか。

「そんなのおかしいだろ。別に死に別れる訳じゃないんだ。時々会いに来る位、冒険者にだって出来る」

「貴方も分かってるでしょう。クリューエル様は高貴なお方なんですよ。こういう機会でも無い限り、あなた方と出会う事なんて無いくらいに。

ですから立ち寄ったついでにフラリと会える――そんな飲み屋の娘的な位置には存在してません。これが最後です」

最後……それを呟いたミセス・アンダーソンはその時だけ、強く

拳を握ったのが見えた。でも、その思いは僕には想像できない。
だって、僕は何も知らない。でも、だからこそ知らなきゃいけないとも思うんだ。

「なんで……どうして……クリエは一体、何なんですか？」

僕のその言葉に、ミセス・アンダーソンは沈黙した。言ってもいいのか考えてる……では無いだろう。じゃあどうして……何で彼女は迷ってる？
それも僕には分からない。少しの沈黙の後、ミセス・アンダーソンは口を開く。

「それは冒険者風情が知っていい事ではないわ。これは忠告と受け取ってください。アレには深入りしない方が身のためです」

僕からは背中しか見えない。だからミセス・アンダーソンがどこを見て喋ってるのなんか分からない……その筈なんだけど、僕も彼女もきっと同じ所を見てると思う。
それは甲板の中央付近で、僕に悲しい目を送ってるクリエ――――きっとそうだろう。トコトコと再び歩き出すミセス・アンダーソン。すると「ああ、そうそう」てな感じでこう言った。

「クリューエル様は私たちにお任せくださって結構ですよ。それよりもそんな状態では床が汚れてかないません。下の部屋にタオルがあるのでそれをお使いください」

何？　それは暗について来るなって警告か？　これもイベントみたいな物なんじゃないのか？　でも立ち去っても良いイベントなのか？
なんだか分岐ポイントみたいだな……はっきりとルートがある訳

じゃないだろうけど、この選択で何かが変わるのかも知れない。
　ようはびしょ濡れのまま、ミセス・アンダーソン達の会話を聞くか、それとも一人に成りに行くかの二択みたいな。さてどうした物か。

　ミセス・アンダーソンの言った事は気になる。でもここで何が出来るって訳でも無いよな。ここは空の上だし、見ておかなきゃいけないイベントって訳でも無さそうだ。
　それなら強制に成るだろうしさ。船の上である限り、クリエがどっかに連れて行かれるなんて無いだろうし、ある意味目を離せる機会でもある。

　それにやっぱり寒いんだ。幾ら暖かなこの時期だからってびしょ濡れで風をまとも受けてたら寒いよ。ミセス・アンダーソンが近づく度にビクついてるクリエ。だけど僕がいないからどこにも隠れずにあたふたしてる。
　その姿はちょっと可哀想だけど、さてどうするか。クリエは迷ってる僕に向けてジッと視線を寄越す。そんな視線を感じてると、いろいろな場面が頭の中に蘇るな。
　この村を山の上から見てた時の会話とか、湖での事とか、そしてさっきのミセス・アンダーソンの言葉とか。いろいろと気になる事一杯で、そしてなんで僕かは知らないけど、アイツには僕しかいないんだよな。

　シルクちゃんとかテッケンさんでも良いと思うんだけど……でもアイツが視線を投げるのはいつだって僕だ。しょうがない……自分のお人好し加減にいい加減イヤに成るけど、こればっかりはそう簡単に直るものじゃ……

「へっへっへ――――――ヘクション！！」

吹き抜けたより一層の冷たい風によって、僕はくしゃみを催した。ズズズと鼻を鳴らす僕。

「……」

びしょ濡れはやだな。そう思った僕はクリエに背を向けて歩き出す。まあここなら離れるって言ってもたかが知れてるし、大丈夫だろ。

それに甘やかしてばかりじゃダメなんだ。そういう都合の良い考えを頭に巡らせる。

「ちょ！　お兄ちゃん！！」

そんな驚愕するような声が聞こえるけど、僕は無視して扉を閉める。実際、僕の心はまだやさぐれてるんだ。さぁ～てと、タオルタオル。

僕は階段を一段飛ばして降りて、タオル捜索を開始した。

スオウ君が怒って階下に消えて既に数十分。おかしい……どうやら、この飛空挺は普通の飛空挺とは違う仕様に成ってるようです。

ＬＲＯは普通のゲームと違って、一瞬で目的地に着くとかそんな事はありません。船なら基本三十分位はリアルに時間が必要ですし、飛空挺なら十五分程度を消費します。まあそれでも、実際の距離を考えたらあり得ない速さですけど。

だから今回の飛空挺の時間は、まだ五分猶予があるとも考えられます。けど、それはアルテミナスからノーヴィスの二大都市の一つ『サン・ジェルク』までの時間な訳です。

それが十五分……なのにあの村は既にノーヴィス領。それなら距離を考えると五分位で着いたっておかしくないのでは無いでしょうか？

けどこの飛空挺はまだ飛んでいます。しかもソレらしい明かりも見えません。まさにその距離をちゃんと移動してるって事なのかな。

「ピー」

私がそんな考えをしてると、ピクが夜の散歩から帰ってきたみたいです。大空を自由に飛び回れるこの子がちょっと羨ましい。

こんな夜空を自由に飛べたら、人が抱く悩みなんてちっぽけだな〜とか思えるんでしょう。

「おかえりピク。……スオウ君に嫌われちゃったかな？」

そんな事を呟くと、ピクは理解してるのかしてないのか、私の頬に自分の頭を押しつけてきます。一応、慰めようとしてくれてるのかな？

「ありがとうねピク」

「ピーー！」

私のお礼の言葉に、ピクは一声鳴きました。そして船の端から再び飛んで、今度は私の直ぐ膝元で膝を抱えて丸く成ってるメイドさんの頭へと降り立ちます。

てか、なんて所に……それは鞭を打つような所行だよ。けどメイドさん……改めセラちゃんは微動打にしません。というか、つい十分前位からこんな感じです。

ミセス・アンダーソンが私たちにお礼を言って、クリエちゃんをいやいや連れて行った間中、心ここにあらずな感じ。

一体どうしたものでしょうか。私的には、セラちゃんの事も、連れて行かれたクリエちゃんの事も、増してスオウ君の事も気になります。

まあスオウ君の方には、さっきセラちゃんに打ちのめされたノウイ君が向かったけど、どうでしょう？　クリエちゃんの方も嫌がってたし、これでいいのかな～とか思ったけど、テッケンさん曰く、これがそもそもの目的と言うことです。

つまり私に出来る事は、セラちゃんの側に居ること位です。でも側に居るだけで、さっきから言葉を掛けても返してくれません。

だからピクの止まり木にされちゃってる……

「……ですよ」

「え？」

余りにも小さくてなんて言ってるのかわからなかったけど、確かにセラちゃんが反応した。これは逃せません。私はセラちゃんに近づくために腰を落として、顔を近づけます。すると埋まった顔の隙間から微かな声が漏れてきます。

「大丈夫……ですよ。シルク様が嫌われるなんて無いですから。だって……あのバカ……シルク様の事大好きですもん」

うむむむむ――思っては居たけど、やっぱりそういう事なんだね。セラちゃんって周りにはかなり評判良いのに、なんでスオウ君だけはあんな態度？　ってずっと疑ってはいたんだけど……でも確か最初の頃はアギト君だったから、最終判断は出来ないで居たんだけど……ここ最近の行動でハッキリしたかも。

それにこの状態だし……私は取り合えず気持ちを持ち上げる様な事を言ってみる事にしました。

「そ、そんな事無いよセラちゃん。だってスオウ君、セラちゃんと言い合ってる時が一番楽しそうだよ。私にはどうあってもあんな顔してくれないもの」
「それは……私が女と見られてないからですよ。シルク様の事は間違いなく女の子としてます」

ギュムッとさらに縮んだセラちゃん。なんて事でしょう、気づきたくない部分を言わせたのかも知れません。ええ～と――

「ちち違うよ！　それは被害妄想だよセラちゃん！　だってほら、そんな可愛い服着てるんだし、誰がどう見ても女の子！！
スオウ君だってそう思ってるって！　寧ろ照れ隠しかも知れないし……私聞いたことあります。男の子は好きな女子のスカートをめくりたがる物だって！」

うん、確かお婆ちゃんが言ってたよ。

「それは……私が好きなんですか？　それともメイド服が好きなんですか？　知ってますシルク様？　男の大半がメイド服に萌えるそうですよ」

え？　そうなの？　まさか論点がそっち側だったとは。それだと私の言ったことは、スカートを履いてる女子が好きなんじゃなくて、スカートをめくる行為事態が好きって事に……恐ろしい男の子。
自分に悶えちゃってるじゃん。そんな願望を覗かせてスカートを見られてたかと思うとゾッとします。って、今はそんな場合じゃないですね。

セラちゃんは想像以上に重傷です。言うこと言うこと、ネガティ

ブにしか受け取れません。一体どうすれば……私の浅はかな片思い遍歴と少女マンガ知識では役に立ちそうにありません。
ん？　でもそれは少女マンガの場合では？　もっと幅広く私は網羅してるはず！　私の恋はいつだってマンガが参考書なんだから。

「だ、大丈夫だよセラちゃん。セラちゃんのメイド服はやっぱり武器だよ。執事やメイドってやっぱり人気高いもん。
スオウ君だってメイド嫌いな訳ないよ！　メイド服萌をメイド萌えにしちゃえばいいんだよ！」

うん、我ながら妙案です。最近はメイドや執事に限らず、職業系萌えみたいな、職人気質の男女が人気だけど、一昔前には確かにそれがあったし、間違いない。
あれ？　でもこれだとスオウ君がメイド服に悶えてる変態にみたいに思えてくるけど……まあ、セラちゃんの話だと大半みたいだし、その可能性もあるよね。
だけどセラちゃんは私の提案を根底から覆す発言をしました。

「シルク様……今更私が、あのバカに尽くしてどうなるんですか？
そんな光景想像できますか？」
「え？　ええ～とね、ちょっと待ってよ。大丈夫大丈夫だってセラちゃんはメイドだし……」

んん？　セラちゃんがアイリ様やアギト君、他の誰かに丁寧に接してるのは想像できるけど、スオウ君だけはそれが見えない！！
私の続かない言葉に何かを感じたのか、セラちゃんはこう言います。

「見えないですよね……私もそうです。そんな事したら気味悪がられるだけですよ」

「……そ、そうかも知れないけど、なら少しずつでも良いから、罵倒を止めるとかはどうなの？　そもそもセラちゃん、スオウ君の扱い酷すぎるよ。
アレだと勘違いされちゃうよ。好きなんだよね？」
「――んっ！？」

そんな私の言葉に、顔を真っ赤にしてセラちゃんがようやく頭を上げました。そして口はパクパク動いて何か言いたげ――――でも言葉は出ません。
だからセラちゃんは再び顔を埋めてしまいます。しょうがないから、私も横にちょこんと体育座りしてみます。

「いつからなの？　セラちゃんはアギト君が好きだと思ってたよ。まあでも、あの二人の仲には入れないよね。もうアイリ様と納まっちゃたし……それにどっちも大切な人だろうしね」

アイリ様は親友だもんね。その恋仲をどうにかなんて出来ない。だから諦めたのかも……でも直ぐにスオウ君を好きに成るって訳でも無いとおもうけど……

「いつからか……なんてわかりません。だって最初はアギト様を奪ったイヤな奴だったし……初心者過ぎて苛つく事の方が多いし……なによりもチョロチョロと目障りだったじゃないですか」
「あはは……」

本当に好きなのかな？　文句しか言ってないよ。一体どこに好きへの転換期が？　だけどセラちゃんは語ります。恥ずかしげにポツリポツリと、滴る雨の始まりの様に。

僕とアイツの事情（後書き）

第二百六話です。
とうとうスオウが切れましたね。まあ遂にって感じですが、それもしょうがないでしょう。いつまでも貯めてると体に悪いって言いますから、ふてくされたスオウに付き合ってやってください。
そして後半はシルクちゃん視点でのセラの相談事です。シルクちゃんの意外な一面があったはず、それとセラもですね。でもこれ以上は秘め事って事で。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

待遇改善を求めて（前書き）

機嫌最悪で一室に引き籠った所に、何故かノウイが現れた。そして何故か泣いてた。こっちが泣きたいくらいなのに、何故かこっちが付き合う羽目に。だけどそれがきっかけで、僕はセラの行動の謎に迫る気になった。

待遇改善を求めて

「どう思うっすか？　ひ、酷くないっすかスオウ君！！」
「別に……それがセラだと思うけど……」
「違うっすよ！！　セラ様にそんな偏見ダメっすよ！！　セラ様は本当はとっても優しい方なんす！！」

ええ～～、たくどっちだよ。この目が点エルフのノウイは、僕に同意を求めてるんじゃないのか？　さっき自分から「セラ様が……セラ様が自分に冷たいっす～～」とか言ってたのに、何なんだよ全く。

今の僕は一人に成りたいってのに、わざわざ相手してやってるだけでも感謝して欲しいね。やっぱりずっと無視しとくんだった。

今、僕とノウイは飛空挺の一室に居る。二階はＶＩＰ様の為に部屋がいくつかあるからその一室。まあでも、さほど豪華な訳じゃない。

座れるように椅子があってテーブルがあってって位だ。あとはティーセットが常備されてる位。まあ世界を何周もする訳じゃなく、国同士を結び定期船みたいな物だからな。こんな物なんだろう。

それを考えると、あのミセス・アンダーソンの居た部屋は異常だけどね。まあ、てなわけで僕は椅子に座って頭には白いタオルを被って、ティーカップ片手に部屋の床で愚痴をこぼすノウイに付き合ってやってる訳だ。

言っちゃうと僕の方が愚痴こぼしたいよ。ノウイだって僕を置いてこうとした一人だしね。付き合ってやる義理なんか無い。

だけど部屋の前の扉でシクシクシクシクあから様にやられたら、誰だって気になるよ。扉を開けた瞬間「スオウのバカ野郎っす！！」

とか言われたし。
僕が訳が分からずその勢いにおののいてる間に、ノウイの奴は侵入しやがった。そして今の状況が出来上がってるって訳だ。
「あ～もう、優しいって所には同意できないけど、わかったから出てけよ。邪魔くさい」
「ななななんすかその態度は！　スオウ君もそんな事言うっすか！？」
「うるさいから、静かに目の前から消えろよ」
「何故かみんなが自分に冷たいっす！！」
更に泣き出してしまったノウイ。胡麻の様な目から溢れ出てくる涙は大粒だ。見てるとなんか面白い。こっちから誰かを虐めるなんて状況はなかなか無いからね。
僕っていつも遊ばれる側だし……それに基本他の人に頼ってる部分が多いから、そんな事出来ないしね。けどノウイの立ち位置なら問題ないかなって思う。
なんだか微妙だもん。そこまで近しくもないし、セラ側にいるしで、僕の矛先を向けやすい。ある意味貴重な存在だ。
まあでも、さっきの言葉はからかってる訳じゃなく本気だけどね。マジでさっさと出ていかないかなコイツ、位に思ってる。
「よくこんな自分に向かってそんな酷い事が言えるっすね……鬼の様っすよスオウ君」
涙を指で拭いつつ、なんとか絞り出した言葉で言い返すノウイ。でも鬼ね～これで？　って感じだよ。
「僕はセラに悪魔の所行を受けてるっての」

「セ、セラ様がスオウ君に厳しいのは、きっともっと頑張って欲しいからっすよ！！」

セラの事と成ると、途端に眉をつり上げて食いかかるノウイ。僕には理解できないな。あの暴力暴言ダークネスメイドのどこにそこまで人を引きつける物があるのか。

魅了するスキルでも使ってるんじゃね？　とか疑いたい。

「頑張るって……アイツの暴言と暴力に僕の心はいつも折れそうに成ってるよ。そりゃあ力だって有るし、頼りにはなる奴だけど、あの性格だけは理解できないな」

「だ～か～ら～！　セラ様は優しいだけなんす！　ちょっと厳しい所も確かに有るっすけど、それはやっぱり誰かの為なんす！！」

誰かの為？　どの口がそんな事を言ってるんだ？　引っ張った所で口をぶった斬ってやろうか。あれはちょっとなんか言わないし、僕の為になんて成ってない。

いつだってアイツは理解不能で理不尽だ。

「よくそんなにアイツを庇えるよな。さっき自分も泣かされてたじゃん。あれも誰かの為か？」

「あれはきっと自分の為っすよ。八つ当たりに聞こえましたけど、きっと『ふがいないアンタがどうにかしてみなさい！！』って事だと思います。

自分相当出来が悪いっすから……」

そう言ってノウイは、涙ながらに笑った。垂らした鼻水をズズズっと吸いながらも、なんだか嬉しそうに見えるな。

てかきっと、八つ当たりでしか無いと思うんだけど。僕のあの態度にセラは怒ってるんだろう。スオウの癖に、とかきっと思ってる

んだ。
なのにノウイの奴は勝手な妄想で、それをセラの期待か何かだと勘違いしてる。いやはや、残念な奴だ……顔同様。
「お前さ――――」
「自分は逃げる事とかしか出来ないっす。それって冒険者としても失格だし、軍でも厄介物扱いされてたっすよ」
あれれ？　なんだか語りモードに入ってるぞ。僕の言葉が届いてない。別にノウイのこれまでになんて興味ないんだけど。
どうせならシルクちゃんやテッケンさんの方が興味有るね。あの二人はもっと近しいし、特にテッケンさんって時々知ってる人が居るくらいの人物だもん。
何かありそうじゃん。だからノウイのこれまでのヘッポコ話なんて正直どうでも……僕はティーカップに紅茶を注ぎ直して、その味を味わうと言う方法で付き合ってやることにした。
まあ右から左へ聞き流してる訳だけど……だけどそんな事、気にもとめずにノウイは語る。
「あいつは戦力になんて成らないって散々言われたっすよ。ＬＲＯは夢を見れる場所の筈なのに、その頃は辛かったすね」
ズィ――――――と紅茶の温かさが喉を通って胃にしみる。まあ実際はどこにしみてるのかなんてわかんないけど、この紅茶上手いな。
アップルティーかな？　優しい味がする。
「まあそれでも、理解を示した人も居るっすよ。スオウ君は知らないかもっすけど、前に居た部隊の隊長さんとかそうでしたっす。
その人に言われたんす……それをお前の武器にすればいいって…

…あれで自分の心は軽くなったんす」

ああ～ちょっとまだ髪が濡れてるな。タオルを代えよう。僕は立ち上がり棚の方へ。そこに何故か常駐されてるタオルを一枚引っ張り出す。

ちなみに今僕は装備をつけてません。服もびしょ濡れだったし、一旦装備を全部外してる。つまりは薄い肌着だけだ。

トランクスというかスパッツみたいな下と、上にもぴったりしたフィット感のある服があるだけ。それは肌着だけあって、二の腕までの長さで、胸を隠す位しか長さが無い。

まあそんな状態ってだけだけどね。僕はノウイの前を再び通って、椅子に腰掛ける。さて、新しく紅茶をつがないと。

「そしてついにアルテミナ事変っすね。あれがきっかけで、自分はセラ様の目に止まる事が出来たっす。事変後に直々に誘われたんっすよセラ様から。

あのセラ様からっすよ！　それでようやく自分もＬＲＯに居て良いって認められた気がしたっす。そして一生付いていくと決めたっす！！」

いつの間にか涙は消えていて、ノウイの顔は爛々と輝いていた。まあ、僕は話の半分も流してたけどね。僕はティーカップを口から放し、期待した目で何かを待ってるノウイへこう言ってやった。

「ふ～～ん」

「……それだけっすか！？」

それだけも何も、どう反応すればいいんだよ。まずあんまり聞いてなかったし……いや、聞いてはいたけど、聞き流してて覚えてないもん。

「他に何かある筈っすよ！　もっと食いつくとか、掘り下げるとか、自分という人間に興味が沸くとか――ある筈っす！！」
「いや、全然まったく無い。気が済んだのなら、出てってくんない」
「アンタは鬼っすううううううううう！！」

絶叫された。狭い部屋の中でそんな風に叫ぶから、うるさいうるさい。

「――てかさ、ノウイは何しに来た訳？　近付くなって雰囲気出してただろ。だったら来るなよ」
「ふん！　そんなの自分には全く関係ないっすね！　自分の優先順位は常にセラ様がトップっす」

僕の素っ気ない態度にご立腹なご様子のノウイ。てかそこはアイリじゃないんだ。アルテミナスのトップはアイリだろう。セラはあくまでその部隊の隊長ってだけだろ。
でもノウイにとってはそれだけ……じゃないんだろうな。まあそれが「憧れ」か、もう一つの何かは知らないけどさ、巻き込まないで欲しい。どっか遠い世界でやってろよって感じだ。
けれどノウイは、僕を見逃しちゃくれない。それこそ、勝手に脳内変換したセラのご命令だから。

「だからスオウ君！！　機嫌を直して欲しいっす！」
「それは僕の為なのか？　それともセラの為？」

まあ既に、僕の方は落ち着いてるんだけど……後者の方は堅くお断りしたいね。だって何されるかわかったものじゃない。
聖典で吹き飛ばされたらどうするんだよ。

「勿論両方っすよ。別にセラ様だって楽しんでスオウ君を蹴り飛ばしたり、投げ網で釣ったりした訳じゃないっすよ」
「さぁ～て、それはどうだろうか？」

あのセラの事だよ。僕の印象では悪魔の笑みを浮かべて爛々としそうなんだけど。てか、やってたし。

「機嫌治してくださいっす！！　自分も謝りますからお願いっす！
一緒に頭を下げましょう！」
「――って何？　まさか僕がセラに『ごめんなさい』とでも言えと？　まっぴらごめんだな」

なんだよ、ノウイの奴僕に頭を下げてるのかと思ってたら、僕と一緒に頭を下げますって事かよ。そんなのは絶対にイヤだ。なにせ僕は悪くないし。
なんで理不尽に暴力受けて、見捨てられて、その上こっちがごめんなさいしなきゃいけないんだよ。よくよく考えたら、セラにはまだ一度も謝って貰ってないし。
シルクちゃんやテッケンさんは謝ってくれたのに、セラはそんなの無かった。あいつが一番の原因なのにだ。なんだか考えてらまた腹の方へ黒い物が貯まっていく様な……今度は凹むよりも、イライラが大きいぞ。

「そこをなんとかっす！！」
「絶対にイヤだね！！　あいつから謝るのならまだしも、僕から謝るなんてあり得ない。そもそも何に対しての謝罪だよ。僕は何も悪くないぞ」
「そんなの何だって良いじゃないっすか！！」
「よくねーよ！！」

ああ言うセラみたいな奴は、調子に乗らせたら危ないんだよ。特に僕の身が。そんな自殺行為的な事、出来るわけがない。
だってまだ死ぬわけにはいかないからな。僕とノウイは、どっちも譲らない言い合いをそれでも続ける。

「そこをなんとかっす！！」
「絶対にイヤだ！！」
「もう一声！」
「その言葉おかしいだろ！！　しょうがねえな、には成らないぞ！！」
「じゃあこの通りっす！！　自分はセラ様のあんな姿、みたくないっす！！　その為ならこの位出来るっす！！　スオウ君はこの行為で良心の呵責が耐えられるっすかね！　うおおおおおおおおおー！！　土下座っす！！」
「ぬあ！？」

ドガアン！　とわざわざ頭を床に盛大に打ちつけて土下座するノウイ。それはもう大した綺麗さだった。なにコイツ？　土下座しなれてるんじゃないの？　ってな程に完璧だ。
そしてその姿からは、僕が折れるまで頭を上げない強い意志が染み出てる。なんでここまで……でも良心の呵責とか、口に出さない方が良かったとは思うけどね。

それを狙ってるって公言してるし。土下座って行為の裏の目的じゃんそれ。そんなもんに乗るかって僕は思えるしね。でも思うのとやられるのでは全然違う。
流石は日本の古来よりの謝り方だ……しかも最高峰の……こうやって実際に目の前で遜られると、なんかこっちが「こんな事させて……」とか思えて来てしまう。
でもそれこそが良心の呵責なんだよな。思い通りになって貯まる

か。

「ふ……ふん、そんな程度で、僕の心は揺れないっての」

「……」

僕の言葉にノウイは反応しない。ただ黙って頭を下げ続けてるだけだ。もう余計な言葉は言らないって判断なのだろうか。

それとも自分の口調じゃなに言っても、ふざけてる様にしか聞こえないって気づいたか？　まあどちらにしても、その意志は固そうだ。

僕からしてみれば「良くやるよ」って感じ。セラなんかの為にさ。普段ノウイだってこき使われてるのに、それが嬉しいんだろうなコイツは。

それって今まで誰にも頼られなかったらってのも有るんだろうけど、でも特別セラの事には執着するよなコイツ。

「ノウイってさ……セラの事好きなの？」

「なななななななな何言ってるんすか突然！？　そんな事話してた訳じゃないっすよ！！」

流石にこの話題には反応した。流石に僕もびっくりするくらいにだ。これはまさか当たったか？

「いやだって、ここまで必死に成るからさ、なんとなくそう思っただけだけど……お前、目を覚ました方が良いぞ」

「なに言ってるっすか！　じ、自分はそんなんじゃ無いっす！！ただ本当にセラ様は素晴らしくってっすね……だから自分は――」

「惚れたんだろ？」

僕のその言葉に、頭から立ち上ってた湯気が爆発したノウイ。そ

してパタンと床に崩れ落ちた。それはもう土下座じゃない、ただの屍の様だった。
陸に上がった魚の如く、ピクピクしてるよ。何かブツブツ呟いてるし……そんなにショックか？　その時僕は、良いことを思いついた。
こう考えれば、別に謝っても良いくらいの妙案だ。

「なあノウイ、協力してやろっか？」
「なんの事っすか……」

力無い声で反応するノウイ。なんかこの世の終わりみたいだな。

「だから協力だよ。お前の恋を僕も応援してやろうって訳だ。それなら謝ってやっても良い。作戦とかと思えば形式的に出きるじゃん」
「それで、何かスオウ君は得をするんすか？」

ふ、何を言ってるノウイ。僕は僕に向くアイツの理不尽を、ノウイを彼氏にしてそっちにやるために決まってるじゃん。

「当然、僕への理不尽な仕打ちをやめさせる為だ。お前ならそれが向いても耐えられるんだろ？　セラのこと尊敬してる様だし。
それに悪いことなんか無いじゃん」
「それって……彼氏に暴力が向くって事になるっすかね？　その理屈を適応すると……今一番セラ様が心許してるのはスオウ君って事になるんじゃないっすか？
「……は？　なに言っちゃってんのお前？」

思わずゴキブリでも見る目でノウイを見下してしまったじゃないか。けど、言われてみるとその可能性は出てくるな。でもそんな…

…あり得ないね。
あれ？　でもそれじゃ僕の言い分に矛盾が……ええ、なにこれ？
どうすれば良いんだ？
「う～～ん、けどんな事あり得ねーよ。セラが心許してる？　手と口を出すのを許してるんだろアイツは」
マジで自重して欲しいくらいにさ。それを愛情とかとは絶対に僕は思えない。あれは虐めだと思ってるもん。
「それじゃあ、何もスオウ君にとって特は無いっすよ。もしも……もしもっすよ。自分とセラ様が恋仲になったとしても、最初の理屈を適用しないことには、スオウ君への態度は改善されないっす」
恋仲って……いつの時代の人だよお前は。明治か？　昭和か？　大正か？　少なくとも平成じゃないよそれは。けど確かにノウイの言うとおりではあるな。
僕がセラの理不尽のはけ口なってる理由がわからない事には、二人をくっつけても意味はなさそうだ。下手すると、理不尽ここに極まれりになるかもだし……そうなると僕は死ぬかもしれない。
「確かに……でも、アイツが僕の事を好きだと感じる要素が、驚くことに微塵もない。有る意味、今更気付きたくない事実だったよ」
「そうっすかね……自分には案外そうでも無いような気がするっすけど……」
「ん？　何か言ったか？」
「いえいえ、何もっす」
まあいっか。取り合えずこの作戦は保留にしておこう。まずはアイツがなんで僕に理不尽なのかを突き止めない事にはな。しょうが

ない、面倒だけど待遇改善はこれからにとってもモチベーションを維持するために必要だ。
このままじゃ、幾らゲームの中だって体が持たないよ。そうなって困るのは僕なんだ。だから動かざるにはいられない。面倒だけど、有る意味急務だよな。

こんな事がまた有ったら傷つくし……そうとなれば善は急げだな。飛空挺が目的地に到着する前の方がやりやすいだろう。
けどそう言えば、なかなか着かないよな。さっきから暗い空が、窓の外でずっと続いてる。僕は閉まってた服を取り出して袖を通す。一回終えば元通りだからもう完全に乾いてるな。

「一人になりたいと思ってたけど、まあいいや。自分の為だし……避けてるだけじゃ変わらない事もあるよな」

そう言えばクリエにも同じような事いったしな。

「どこ行くっすか？　セラ様のとこっすか？」
「いや……流石にそれはハードルが高い……」

立ち向かう気持ちにはなってるけど、まずは周りを固めるさ。いきなりトラウマクラスには立ち向かえないだろ。僕はドアを開いて外に出る。

「お前は一人で土下座でもしてれば良いさ」

そう言い残して、付いて来ようとしてたノウイを部屋に残して歩き出す。さてどうするか？　甲板にセラは居るとか言ってたな……ならまずは一階の大広間に行こう。

大広間には僧兵数人に、隅っこの方でテッケンさんと鍛冶屋がいた。二人は僕が入って来るなり、別々の反応を寄越した。

「スオウ君、もう機嫌はいいのかい？　本当にあのときは申し訳ない」

これがテッケンさん。

「なんだお前か」

これが鍛冶屋。まだなんか他に言うことあるだろう。まあもうどうでも良いけど。

「良いですよテッケンさん。さっきは僕もやさぐれてたんで……それより何やってるんですか？」

僕はそう言って二人に近付く。なんか鍛冶屋がテッケンさんの武器に何かしてるように見えるけど。

「これはメンテナンスして貰ってるんだよ。どんな武器も定期的に手入れをしないと、消耗が早くなるからね」

「へえ～」

成る程、さすがＬＲＯ。そう言うこともあるのか。

「へえ～じゃない。お前のセラ・シルフィングも見せてみろ。かなり酷使してるだろう。また折らない為にみといてやる」

「あ、ああ」

まあ確かに今折れたら困る。メンテナンスは大切だよね。僕は腰に刺さってるセラ・シルフィングを鍛冶屋へ渡した。
剣を抜き見定める用に見つめる鍛冶屋。見るだけで何かわかるのだろうか？　って、んな事をしに来た訳じゃない。

「なぁなぁ二人とも、どうしてセラは僕に冷たいんだと思う？」
「……それはなかなか難しい事を聞くね」
「興味ない」

悩んでくれるテッケンさんはありがたいけど、鍛冶屋は既にセラ・シルフィングに夢中みたいだ。まあ元から頼りになんかしてなかったらいいや。
僕が頼れるのはいつだってテッケンさんだ。

「いろいろと考える事は出来るけど……女の子の心は男には謎だからね。結局は推測でしかないし、本人にぶつかってみるのはどうだい？」
「僕に死ねと」

それが出来れば苦労しないよ。

「はは……けど、僕は本気で彼女がスオウ君を嫌ってるとは思わないから、それは大丈夫だよ」

本当かな？　まあテッケンさんの言うことは信用出来るけど……確かにいつまでもモヤモヤな感じで接するのも面倒かもな……ここは覚悟を決めるか。

「わかりました。靴を揃える気持ちで行ってきます」
「自殺？」

同じような物だよ。自分から地雷を踏みに行くことは自殺だろう。僕は大部屋を飛び出して階段を駆けあがる。するとその途中でバッタリと願い人と出会した。

「「あっ」」

そんな言葉が重なった。なんだか気のせいか、セラの目は赤いような……それに肌がちょっと蒸気してる？　一体何やってたんだ？

僕は唾を飲み込んで、拳に力を込めて思いを決める。

待遇改善を求めて（後書き）

第二百七話です。
飛空挺内のこのお話は、まあ小休憩と言った所でしょうか。もうちょっとあせろよ、とかお思いかもしれませんが、息抜きは必要ですよ。まあスオウにとって息抜きになってるかは怪しい所ですけどね。
次で飛空挺内での出来事は終わりかな。新たなる展開と共に、ノーヴィス編は取り合えず第二章みたいな感じで。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

進んだ関係？　と動き出す闇（前書き）

僕とセラは向かい合った。丁度目指してて、そして出会ったこれは、運命か何かだろうか。僕達は互いに不器用な言葉を紡ぎ、少しだけその本心を垣間見る。そしてそんな時、同じ月を見上げるアイツがいた。

心を奪った彼女と共に、後ろ向きな決意を固める奴。そして更に別の場所では、力を蓄える闇が居た。

進んだ関係？　と動き出す闇

「おいセラ……」

階段の下の方から、僕はセラへ向かって言葉を発する。すると肩を小さくビクつかせる様にして、セラが視線をさまよわせてこう言った。

「な……何よ」

ふむ、何よとは失礼しちゃうな。やさぐれてるのにも関わらず、僕から話しかけてやったと言うのに……もうちょっと優しくなって欲しい物だ。

まあ、今更でもあるし、この程度で言い合いを始める気は無いけど。

「ちょっと聞きたい事があるんだが……正直に答えてくれるか？」

「な、何よ改まって。一体、なんだって言うの？　いいいい言ってみれば良いじゃない」

なんか様子おかしくないかセラの奴。さっきからやたらキョロキョロしてるし、ソワソワしてるし、なんかドンドン顔赤く成ってるし……てか、こっちは真剣なんだから、もっとちゃんと聞いて欲しいよな。たく……

「あ――」

「ちょっと待って！！」

いきなりの制止の合図に、気持ちが削がれる僕。マジで何なんだセラの奴？　やっぱりおかしい？　それとも遊ばれてる？

「おい、待ってどうするんだよ」

「そそそれは、心の準備とかよ。アンタが変な顔して見つめるから……私は……」

誰が変な顔だ。僕はこれ以上無いって位に真剣な眼差しをセラに送ってる筈だ。なのにそれでもふざけれると……空気が読めない女だな。

しかも心の準備って、言われる事がわかってるのか？　今までの自分を反省してるって感じじゃないけど……それよりもなんだか、今から告白でも受けそうな感じの様な。……気楽な奴。

「いいから、ちゃんと聞けよ。大事な事だからな」

「大事なこと……」

「ああ、僕達のこれからにとってとても大事な事だ」

「ここ……これから！」

なんかいちいちセラの奴は反応が大袈裟じゃないか？　本当に真面目に聞く気あるのかこいつ？　本当に重要なんだよ。これからも付き合っていけるかどうかの、結構な瀬戸際だぜ今は。

だから一緒に冒険していく為には、わだかまりは消しとかなくちゃいけないんだ。――って、なんでマジで頭から湯気が出てるんだよこいつ。

いや、セラがどんな状態だからって関係ない。これは今、確かめておくと決めた事だ。

「セラ……お前は……」

「ゴク」

妙な緊張感がこの場に走る。飛空挺の動力路の音だけがゴウンゴウンと響いてる。

「なんで僕の事苛めるんだ？　理由を言え！　そうでないとどうしようもないんだよ！」

「……え？　何それ？」

なんだかキョトンとしてるセラ。まさか聞いてなかったのか？

いいや、そんなのあり得ない。結構大きな声で僕は言ったもん。こいつ、曖昧にしようとしてるのか。

「何じゃない！　そこら辺をはっきりさせないと、一緒に冒険していけないだろ。僕はこれ以上、理不尽な暴力を受け続けるのはゴメンだ。

だからこうやってその理由を確かめてやろうって思ったんだ。聞かせろよセラ！　腹を割って話せば、もっと仲良くなれるかもしれないだろ」

てか、なんで僕がここまで妥協しなきゃいけないんだ？　って思わなくもない。けど、こいつは仲間なんだ。どうせ嫌がったって、僕の言葉なんて聞きはしないだろうし、こうなれば関係良好を目指すしかないじゃん。

僕の命の為にも。

「仲良くね……アンタは確かにそれで良いわよね」

「ん？　聞こえないぞ」

ブツブツとなんか言ってるけど、もうちょっとはっきり喋って欲しいね。すると僕の言葉を受けてか、鋭い眼光が返ってきた。

え？　なんだかさっきと雰囲気がガラリと違うんですけど。
「我慢我慢……アンタの言いたかった事ってそれだけ？」
「それだけって……僕にとっては重大事項だからな」
セラの奴、必死に拳を握り締めて、何かを押さえてるように見える。なんか背中がゾッとするな。でもここで引いたら今までと同じだ。
「僕は扱いの改善をお前に要求してるんだ！」
「だから私がアンタに何故に冷たいのか知りたいと……」
「まあ、そういうこった」
ようやく話が繋がったな。で、何でこいつはこんなに殺気を放ってんだ？　話し合おうって気があるのか？　小動物ならこの気に当てられて死にそうだぞ。
まあ僕は既に耐性が出来てるけども。
「アンタは……どう思ってるわけ？」
「は？」
「だから……なんで私がアンタに冷たいのかの理由……アンタは何だと思ってるの？」
なんだこのプレッシャーは。目に見えない何かが僕にのし掛かってる気がする。しかも下手な事を言うと、あの震えてる拳が僕に突き刺さると思う。
けどなんと言えば？　僕にはこれしか思いつかないんだけど――
「嫌いだからだろ？」

その瞬間、ダン！！　と床を踏みつける音と共に、一気にセラが迫る。風圧が僕の前髪をかきあげる……けど、当たりはしなかった。寸止めって奴だ。顔面に直撃する寸前で、セラの拳は止まってた。

「嫌いよ……アンタなんか大ッキライ！！」

「わ……悪かったなそりゃ……」

「でも……」

ん？　ここで「でも」が来るか？　震える拳の先……俯いたセラの顔からは何かがコボレてる様に見える。

「――でも！！　そんなに嫌いじゃないから！！」

「は？」

キョトンとする僕に、セラは涙を貯めた怒ったような目で、僕を睨んでさらに続ける。

「勘違いしないでよね！！」

そう言うと、僕の横を通り抜けて二階部分へと走り去った。そしてどこかの扉の部屋が閉まる様な音がしたから、きっとどっかに閉じこもったんだろう。

「……え～と、どういう事？」

残された僕は頭に一杯疑問符が浮かんでた。いやだって、「大嫌い」と言われたよな。その後に「でも、そんなに嫌いじゃない」とも言ってた。

ふむ……訳が分からない。大嫌いとそんなに嫌いじゃないってどういう事？　二つを計算式に当てはめればどうだろうか。

大嫌い＋そんなに嫌いじゃない＝そこそこ嫌い？　ってな結論はなんだか少し違う気がする。嫌いじゃないって解釈でいいのか？
でも大とそんなにじゃ、大が勝ってるし……ああ、もう結局どうなんだよ。僕のこれまでの印象からして、嫌われて無いはずがないと思うんだけど……でもやっぱり大嫌いってまでは無いとも思うんだよね。

だってそしたら、わざわざ嫌いな奴と冒険しないだろうし……かといって好きでも無いだろうけど。まあ取り合えず、暴力をふるわれなかっただけちょっとは進歩出来たのかな？
追いかける……なんてのもちょっと無粋かも知れないし、僕は頭を掻きつつ取り合えず階段を上がることにした。そして甲板に続く扉を開ける。

「あわっきゃ！」

すると変な奇声と共に、可愛らしい女の子が転がってきた。綺麗な銀髪を揺らして、ゆったりとした服に身を包むその女の子は癒しの象徴ともいえる存在だ。

「シルクちゃん、何やってるの？」
「ええ～と、べ別に盗み聞きとかそんなんじゃないんです。ただ気になって……ええ～とだから……」

アタフタと床に女の子座りして弁明するシルクちゃん。うん慌てた姿もなんとも可愛らしい子だ。てか、盗み聞きって……シルクちゃんも女の子だな。

「盗み聞いてたんだ」
「あう～～」

僕の指摘に可愛らしい声を上げるシルクちゃん。この子はなんか反則だな。モブリとは違う可愛らしさが爆発してるよ。
あう～なんて言う奴がリアルに居るならぶっ飛ばしてやりたい所だけど、シルクちゃんは裏がないからいいよね。

「でもでも、心配だったんです」
「うん、まあそれはありがたいよ。てか上に居たって事は、セラと何か話してたんですか？」
「はい、まあそれは……ちょっとだけ」

指でちょっとを表現しながら曖昧に笑うシルクちゃん。なんだか話を流したがってる様に見えるな。シルクちゃんの笑顔にはそれを出来る魅力があるけどさ、そうは問屋が卸さないぜ。
色々とわからない事が一杯なんだ。セラはシルクちゃんを何故か尊敬してるから、一番深い事が聞けそうだ。だから僕はズイッとシルクちゃんに迫った。

「シルクちゃん」
「はい……何でしょう？」
「聞いてたのなら分かるよね？　大嫌いって言われて、その後にそんなに嫌いじゃないってどういう意味？　女同士だし、シルクちゃんなら分かるよね？」
「ええ～とそれは……」

言葉に詰まるシルクちゃん。でも「わかりません」て言わない所を見ると、やっぱり分かってるはいるようだ。流石女の子同士。
だけど彼女は答えを言わずに、こう言った。

「そそれは、私が教えて言い事じゃないの。それにちゃんと自分で

考えて上げて。セラちゃんもその方が絶対に嬉しいから」
「嬉しいって……」
なんで僕があいつの為に頭を悩ませなきゃいけないんだ。ただでさえ問題は山積みだというのにだ。実際、そんな面倒な事遠慮したい。
そう思ってると、何故か今度はシルクちゃんがジーと僕を見つめて来る。うう……なんて可愛いんだ。
「今、スオウ君面倒とか思ったでしょ？」
「な……なんの事？」
う、やっぱり女の子だね。妙に勘が鋭い。そのスキルは女に生まれた瞬間に備わってんのか？　デフォルトか？
「女心が分からないスオウ君なんて、豆腐の角に頭をぶつけて死んじゃえばいいんだよ」
「ええ！？」
まさかシルクちゃんの可愛い口からそんな暴言が飛び出すなんて……誰に言われるよりショックなんだけど。なんでちょっと怒ってるの？
面倒とか思ったのが悪いのか？
「面倒なんて思ったら可愛そうだよ。スオウ君が大変なのも分かるけど、お願い、分かろうとする事を諦めないでいて上げて。私にはそれしか言えないよ」
「分かろうとする事……か」
確かにそれを諦めたら人間関係なんて成り立たないんだろうな。

全人類なんて無理だろうけど、目の前の知り合い位はそうでありたいよな。
そう、分かろうとする事を諦めたくないから、僕はあいつを追いかけてるんだ。拒絶されても、あいつ自身が諦めてるとしても、僕は諦めないと決めたから。

「はぁ」

しょうがないか、セラの事だってそりゃあ分かりたいと思ってるよ。ただアイツはさ、僕に対してだけわかりにくくしてるような気がするんだよね。
でもそれでも、シルクちゃんは諦めないでって言ってる。

「一つだけ良いですか？　アイツは……セラは、どのくらい僕の事嫌いなんですか？」
「今のままだと大嫌いかな？」
「やっぱりですか」

まあ初めから大嫌いなら下には行きように無いと思えば良いんじゃね？　するとシルクちゃんは立ち上がり階段を二・三歩下りこう言った。

「けどね、私達とは比べものに出来ない位の大嫌いだからね」
「そんなに？」

僕がそれなりにショックを受けてると、シルクちゃんは更に下へくだっていった。そして二階へ降り立った所でこちらに振り返る。

「そんなにです。そんなスオウ君はどうするのかな？」
「……それでも、どうにか出来るのなら、諦めずに友達に成ってみ

せてやるよ」
「はい！」

シルクちゃんの華やぐ笑顔が心を暖かくしてくれる。なんだかシルクちゃんの視線はそういう期待が込められてた。
でも、まあやってみせるけどね。自分を嫌いな奴と友達にもなれなくて、自分に絶望した奴を救い出せる訳がないだろう。
あのバカには一人じゃないって、傍には誰かがちゃんと居るって気づかせないといけないんだからさ。僕は開いたままのドアから甲板へ。すると僕と入れ替わりにピクが中へ入っていった。

シルクちゃんを追っていったんだろう。冷たい風が頬に当たる。僕はこの夜空の下のどこかに居るはずのあいつの顔を思い出す。
あの半月をセツリも見てるのだろうか。

「月が近い……」

私はベットの上から、全面に見える夜空を眺めてそう言います。これでもここは室内なんだからびっくりです。夜空の中に居るような、そんな錯覚をしそうな程にこの部屋は空に近い。
というか、この場所事態が空に近い訳ですけど。大きく広い部屋、静かな空間……こんな所に佇んでると、思い出しちゃう事が色々とあります。
そしてやっぱり、どこまでも行っても私は一人なんじゃないかって……そんな考えがまとわり付いて来てしまう。

私はベットから足を伸ばして立ち上がります。長いネグリジェを床で引きずりながら、外への扉を開きます。すると開いた瞬間に、

ブワァァと強烈な風が私を部屋へ戻そうとしました。

「むむむむ……」

けれど私はなんとかベランダへ。風が心地よい……とは言えないけど、生きてるって感じはします。すると後ろの方からコンコンと音がして、私は振り返ります。

そこには巫女服を脱ぎ去った、黒髪乙女のサクヤがいました。彼女も今はネグリジェです。でも私なんかのよりもかなり刺激的な格好。

なんか透けてるし……ベビードールって奴らしいけど、私の体は暗にお子様だと告げられてる様な気がして成らないよ。

「どう……なされましたかセツリ様」

「ん！」

サクヤも扉を開いてこちら側へ。けどその言葉……口調にはなんだか未だに慣れません。その違和感が、ジワッと心に罪悪感ってのを広げます。

けど……これをしたのは私です。私はサクヤの心を奪った。彼女には傍に居て欲しかったから、否定なんてして欲しく無かったから……ワガママなんて分かってる。それでも私は……

「ううん、なんでも無い。今日は月が綺麗に見えてるなぁって思っただけ。起こしちゃったねサクヤ。一緒に寝よ」

私はサクヤを後ろに向かせて、そそくさと中へ入れようとします。すると背中越しにサクヤが意外な事を言いました。

「誰を、待ってるんですかセツリ様？」

「――――待ってる？　な、何の事かなそれは」

サクヤはもう何も覚えてない筈。だからそんな言葉が出てくるなんてあり得ない。けど、私が一番傍に居て欲しい彼女は、覚えてない筈なのに、こう紡ぎます。

「わかりません。けど……セツリ様はずっと、誰かを……待ってる様な気がします。そして私はそれをどこかで願ってる。そんな気がするのです。

何故でしょう？　自分でも分かりません。気分を損ねたのならすみません」

サクヤはそう言うと、自分から歩きだしてくれます。だけど私は……何故か進めません。サクヤが分からないのは全部私のせい……けど、もう後戻りなんか出来ない。

これは私自身が決めた事だもの。私は半分に欠けた月を再び振り返ります。あれはもしかしたら、今の自分をよく表してるのかも知れない。

だからこそ、満月よりもなんだか私を引きつける。けど……後悔なんてしてない。私は自分自身でその半分を捨てたんだもん。

だからもう一度、あの半分の部分を携えて彼が来ても、私は今度こそ彼を殺すだろう。だって彼は絶対に立ちふさがるだろうから。

彼はもう、何よりも大きな障害……敵以外の何者でもない。だから待ってるとしたら、望みを叶える為。全てを断ち切る為。それ以外にあり得ない。

サクヤは鳥かごに入ってるクーへ新しく水を変えてあげてるよう。だけど私は近づかない方がいい。だから再びベットの上へ。

クーに私は、嫌われちゃってる様だから。でもそれも、仕方ない

事だよ。

「もう少し……もう少しで辛い事なんか無い世界にいける」

私はそう呟いて布団を被り、目を閉じます。夢の中ではそんな世界に、一足先に行けるから。

「行くぞ！　みんなああ！！」

「「「うおおおおお！！！」」」

それはいつもの経験値積みの為の戦闘だった。気が合ういつもの連中と、いつもの狩り場での小馴れた戦闘。釣り役の奴が、俺達本隊の居る所までモンスターを引っ張って来ての戦闘の繰り返し。

ノーヴィス領のとあるダンジョン。大きな木の根によって作られた様な、その空間は不思議な光を放つ泡みたいな物で、視界を確保してる、そんな場所だった。

「グモオオオオオオオオオ……」

ズズーンと断末魔の叫びと共に、今夜数体目の戦闘を終える。それなりに消耗したけど、不足の事態でも起きなければ全滅なんてあり得ない程度の戦闘。

だけどそれでもＬＲＯの戦闘は一戦一戦がヒリヒリするような感覚があってやめられない。しかも今日は他のパーティーもいないようだし、効率が普段よりもいい。

みんな気が知れてるから雰囲気も良いし、わいわいやってられる。

「さて、じゃあ次の獲物を釣って来るよ」

そう言って釣り役のエルフの人が走り去る。自分達はそんな背中に「よろしく」やら「がんばって」やらをかける。これもいつもの光景だ。そして次の戦闘に備えて、残った自分達は談笑しながら回復にせいを出す。

そう、そんないつもと変わらない狩りの筈だった。

「う……うあああああああああああああ！！」

そんな悲鳴が聞こえるまでは。このダンジョンに響きわたったと思える程の叫び。自分達は思わず立ち上がり顔を見合わせた。

「今の声って……」

「で、でもまさか、何かの冗談とかじゃないのかな？　それに他の人かも知れないし」

「それはどうだろう？　僕たち以外のプレイヤーはまだ見てないよ。それに聞こえた方向は……」

そう言うモブリのヒーラーの彼に促されて自分達は声のした方向を一同に見る。すると誰一人として狂わずに、釣り役のエルフが去った方を見据えるじゃないか。

「「「……」」」

黙り込む一同。するとエルフが去った方から、ザッザと言う音が聞こえてきた。自分達はホッと胸をなで下ろす。無事だったんだ……そう思ったからだ。

けど、闇の中から出て来たそのエルフは、ついさっき見た状態とは随分変わってた。何というか……黒い何かに覆われてるような…

…しかも随分フラフラしてる。
「あ……がっ……」
「おい、どうした？　何があったんだよ？」
そう言って自分達は彼の元へ行こうとする。するとその瞬間に、彼は突然こう言った。
「ダメだ！　来る……な！　逃げ……て！」
その言葉の終わりと共に、エルフの彼は再び闇に引っ張られるかの様に、消えていった。そして再び悲鳴がこの場に響きわたった。
「ねえ、どう言うこと？　これって何かのイベントでも起きてるの？」
ソーサラーの彼女は明らかに怯えてる。でも……この状況で怯えない奴なんていないだろう。何が起きてるのか全然分からない。でも……
「それは分からない……けど、助けなくちゃだろ」
「だけど、逃げろって！」
「ゲームでも、仲間は見捨てない。そうでありたいじゃん」
自分の恥ずかしい言葉に、だけどみんなは頷いてくれた。それにやっぱりこれはただのゲームだ。みんなそう思ってた。だからこそ、行ってしまったんだ。
ＬＲＯがおかしく成りつつあるとかは聞いてたけど、それが自分達の周りで起こるとか、考えもしてなかった。それはきっと遠い所で起こってる物だと思ってたんだ。

僕たちは彼が消えた方へと走った。そして角を曲がると、そこは完全な闇だった。明らかにおかしい、何で光源である泡がこっちには一個も漂ってないんだ？
そして誰かが気付いた。暗闇の中に落ちている、見覚えのある装備と武器に……

「これって……まさか……」
「そそんな訳無い！　なんで装備だけが……中身はどこに行ったのよ！！」

おかしな事が起こってる。誰もがきっとそう感じてた。そして一人が「出よう」と言う。誰もが迷い無く頷いたけど、後ろを見た瞬間、自分達は唖然とした。
そこは何も見えない。ただの闇と化してた。そして気付くと一寸先までも真っ暗で、聞こえるのは仲間達の悲鳴だ。
そして何かが、自分達を食い漁りながらこう言った。

「コードを食って存在の確定を……今度こそあの赤髪をぶち殺す！！　くはははは……はーっはははははは！！」

進んだ関係？　と動き出す闇（後書き）

第二百八話です。
今回は色々と場面が映り替わりました。でもここらで動き出さないと、乗り遅れそうじゃないですか。まあどうかかわって来るのかは考えてないんですけど……無関係でいられても困るので。
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

神の泣いた地　『サン・ジェルク』（前書き）

僕達はようやくサン・ジェルクへと降り立てた。そこは人の国ともアルテミナスとも違う匂いと、姿をした場所だった。ある意味一番ゲームっぽい。そこで知るのはノーヴィスと言う国の姿。

そしてクリエを包み込む陰謀の一端だ。

神の泣いた地　『サン・ジェルク』

朝日が昇る。空が次第に青になり、紫になり、そして橙を帯びていき、白へとなった。何となくだけど、ＬＲＯを初めてから、こんな朝日を見る機会が良くある気がする。
普通に生活してたんじゃ、部活もやってない僕は、こんな空を見上げる事なんてない。ＬＲＯは何気ない日常で、見逃してる物を時々気付かせてくれるよ。
まあ、こっちが一日経ったって、リアルでもそうかと言うと、決してそうじゃないんだけど。でもだからこそ、こういう物を見ることが出来る。

朝日に照らされて、ようやく眼前に初めて見る『ノーヴィス』と言う国が広がりだした。いや、正確にはずっと前から眼前はノーヴィスだった筈なんだ。
けどただの大地じゃ実感が沸かなかっただけ。

「おお〜〜あれがノーヴィスか、スゴいな」

目の前に広がる街の姿は、リアルでは絶対にあり得ない感じに成ってる。アルテミナスや人の国の町並みは、まだあり得なくもなかったけど、これは絶対に無いよ。
だって目の前の街は、なんと言うか水の上にあるような……しかも周りは滝で囲まれてる。用は滝壺に街が広がってるんだ。
円形状の滝壺の中に、複雑に建物と通路が張り巡らされてる。それも日本家屋……なんか貴族的な感じだな。中央にある、徐々に盛り上がる様に建てられてる建物も城と言うよりは宮殿？　いや、貴族的には御殿？　かな。

まあそんな感じだ。すると僕の感動の横から、小さなモブリであるテッケンさんが船の縁に立ってこう言った。

「あれはノーヴィスの二大都市の一つ『サン・ジェルク』だよ。ノーヴィスはシスカ教の聖院と、星の信託を告げる星羅側、その二つで成り立ってる国だからね」

「へぇー、それって上手くやってるんですか？」

そういう二つの大きな権威が混ざりあうなんて、厄介以外の何者でもない様な気がするんだけど……国の主権とか争ってそうだよね。勝手なイメージだけど。

するとテッケンさんは近づきつつあるサン・ジェルクを眺めながら、ちょっと厳しく頷いた。

「う～んまあそうだね。仲が良いかと言われれば、簡単には頷けないかな。だけど二つは切っても切れない関係に成ってるから、国が分裂する……なんて事は無いよ」

「切っても切れないってどういう事ですか？」

まあ当然、そこが気になるよ。だってその星のなんとかもある意味宗教っぽくないか？　二つの宗教が混ざりあっちゃダメだろう。

けどテッケンさんは流石自分の国の事、饒舌に語ってくれる。

「それは聖院と星羅、二つが根強く絡みあってるって言うのかな？　離れたくても、今更それは無理って事だよ。用はお互い、一緒に居ることで今の立場を固定させてる訳だ。

聖院はシスカと言う神、星羅は星の予言者という象徴でね」

「つまりは片方が離れれば、共倒れって事ですか？」

なんかそんな感じだよな、今の話だと。そんな薄っぺらい物なの

か？　ＬＲＯの最大宗教だろ？　星羅の方は知らないけど、信者が世界中に行る聖院はそんな簡単に倒れそうもないと思うのは、楽観的なのかな。

「まあそうだね。でも実際は星羅の方が下に見られてる……って部分はあるよ。星羅も元は聖院。その派生系って感じなんだ。

まあだけど星の予言者の人気が凄くて、今ではサン・ジェルクと肩を並べる程に大きく成ったって訳だ。元々予言者は特別だったしね」

「へえ～凄いですねその予言者って。そのもう一つの都市に居るんですよね？　予言なら一度見てもらいたいかも」

だって未来とかをちょっとは知りたいって気持ちは拭えないよ。これからも不安は沢山あるだろうし、色々と大変だと何となくわかる。

だから少しでも安心できる未来を教えて欲しい。

「凄いよ。彼女はアイリ様にだって引けを取らない。その予言者様が、ノーヴィスの『バランス崩し』を持ってるからね」

「ええ！？　予言者ってＮＰＣじゃなくて、プレイヤーですか？」

「ああ、そうだよ」

爽やかにそう言うテッケンさん。いやいや、それはびっくりだよ。だって何？　プレイヤーが予言とかしちゃうの？　それはどうやって？　てか、いいの？

なんかＬＲＯってプレイヤーを凄い所までかつぎ上げるよな。アイリの時も思ったけど、なんて立場を普通の一般人にやらせるんだよ。

まあその人が一般人かは知らないけど、少なくともアイリは普通の女の子だったよ。まあちょっとはお嬢様だったけど……それでも

やっぱりあんな所に立っちゃうなんて事はない普通の人だった。

ゲームだから、リアルで出来ない事を体験してる……そう思えば有りなのかも知れないけど、僕にはきっと出来そうも無いと思う。

僕が驚愕してると、テッケンさんの隣に居るシルクちゃんが更に説明してくれた。

「ノーヴィスのバランス崩しと言えば、知らない人がいない位に有名な力です。先の領土争いの時に、一回だけ振るわれただけなんですけど、それが衝撃だったんです」

「一回？　たったそれだけ？」

まあそうそうバランス崩しなんて使う物じゃないんだろうけど……一回だけでそこまでって……気になる。てか興味がある。

だってカーテナも凄かったもん！　あの圧倒的な力の別タイプって事だろ？　ＬＲＯを始めたのなら、一度は拝んで見たいよ。

まあ、敵として振るわれるのはまっぴら御免だけど……シルクちゃんは僕の言葉を受け取るなり「フフフ」と含みのある笑いを漏らした。なんだか言いたくて堪らないって感じだ。

「一回で十分だったんですよ。なにせその力は『召還』です。この世界を支える聖獣達を表し行使する力。誰もがこんな世界に来たなら、一度は憧れる力じゃないですか！」

「おおーー確かに！！」

なんだか珍しく興奮してるシルクちゃんに釣られて僕も興奮してきた。てか召還だと！？　それは確かに誰もが憧れるよ。

だって召還士って格好いい。まず召還獣も格好良い。召還されて出てくるまでの演出――あれは燃えたな。興奮したよ。ゲームで良くある。

あ、あれが自分で出来るなんて成れば……さいっこうじゃん！
そりゃあ、有名になるよ。だって誰もが憧れるもん。

「召還って、魔法を使える者として、一度はやってみたい事です」
「魔法が使えなくても僕はやってみたい。なんでも良いから大声で召還獣を呼んでみたい」

僕とシルクちゃんは、自分の妄想の中で、そんな光景を描いてる。するとそこでポツリと鍛冶屋が物騒な事を言いやがった。

「大きな力にはそれ相応のリスクがある。カーテナがそうだったように、召還にだって何かしらのリスクがあるかもしれんぞ」
「リスク……ですか」

確かに鍛冶屋の言うことも尤もだな。それは有るだろう。一度しか見せてないのもそこら辺が関係してるのかも知れない。
でもそれでも……

「いいな～召還」
「いいですよね～」

僕とシルクちゃんは遠い夢に思いを馳せる。

そうこうしてる合間に、飛空挺は水を切って着水してた。最初はまじめに話してたのに、話題が横にズレてしまったな。まあ、まだ話を聞く時間くらい取れるだろう。
いきなり問題が起きなければ……だけど。

僕達は僧兵に促されて飛空挺から降りる。そして新しい街の空気

が鼻から目一杯入って来た。なんだか花の香りがするな。人の国の雑多な感じとも、アルテミナスの整った感じとも違う、不思議な臭いだ。
まあでも、周りが滝なだけあって、空気が美味しいけどね。それに空を見上げると、そこには様々な大きさ向きの虹が架かってるんだ。
これには僕も感激だ。
「おおおおおーーー虹！！」
と思わず言っちゃったよ。いやさ、虹って見つけるとテンションあがるじゃん。なんか得した気分なると言うか……それが一杯なら、もうテンションもおかしく成るって。
「サン・ジェルクは周りが滝だからね。そのせいか、良く虹は出てるよ。滝と虹に包まれた街だね」
テッケンさんのそんな言葉は、だけど結構しっくりくるよ。確かに滝と虹に包まれてる。
「あわっ……とっと……」
「大丈夫かいシルク？」
「はい、やっぱりここの揺れる道は怖いですね」
テッケンさんに支えられながら、シルクちゃんは足場を見る。ここの発着上はアルテミナスと違って、かなりお粗末だ。細い木の板を繋げた様な足場が浮いてるだけだもん。
だからこの足場、少しの風でゆらゆら揺れる。まあ身長が低いモブリは問題無いだろうけど、僕達普通サイズにとっては、かなり不安だよ。

まず、乗って持つのか一瞬怖かったしね。だけど、別に木の板は沈む事は無かった。揺れはするけど、砕ける事もなさそうだ。案外頑丈らしい。
それかモブリの街だし、やっぱり魔法とかが使われてるのかも知れない。周りをみると、他にも飛空挺が見えた。多分、僕達が最初に使った定期船だよな後のは。
用は今、僕達が降りた奴が特別に使用した船って事なんだろう。なんだか視線が集まってるしね。僕が周りを物珍しげに見てると、飛空挺の方からうるさい声が聞こえてきた。

「やあだーーーー！！　人権侵害だあああああ！！　訴えてやるーーー！！」
「失礼ですね。クリューエル様を私達は守ってるのですよ」

そんな声と共に、最後に飛空挺から降りてきたのはクリエとミセス・アンダーソンだ。クリエは相変わらず嫌がってるみたいだな。

「守るなんてそんなのありがた迷惑だよ！　大人の戯れ言だよ！クリエはクリエは、自由を訴えるね！」
「子供は、大人に守られるのが普通ですよ。でないと生きていけない。まあ子供の頃はわからなくて当然です。
だから駄々もワガママも言う。けれどだからといって、私達大人は投げ出す事は出来ないんですよ」

ギャーギャー言いながら、二人も僕達と同じ場所に降り立つ。流石にここまで来てしまったら、逃げようもないから、言葉とは裏腹にクリエの奴は結構素直に着いてきてた。

「投げ出してくれて結構だよ。私には守ってくれる人が――」
「居るのでしょうか？」

「――うぐ……」

言葉に詰まるクリエ。そしてそこで丁度僕と目があった。するとかなり陰険そうな目で、クリエの奴は僕を睨む。そして一声――

「うそつき」

とだけ言った。どうやら、僕に対しても怒ってるようだ。まあ飛空挺じゃ、あれから一度も話さなかったからな。機嫌を損ねたままなんだ。

確かに連れていってやるって言ったけど、まだ諦めた訳じゃないっての。言うなればここからが出発みたいなものだと考えてるね僕は。だから嘘つき呼ばわりされるいわれはない。

たく、ちゃんと助けに行ってやるっても言った筈だけど。どうやら信じれないようだな。しょうがないから、機嫌をとっておいてやろう。

「ほらほら見てみろよクリエ。虹が一杯架かってるぞ」

「ふっ……そんなの見飽きた」

ズガガ――――ンだよ。ああ、可愛くないガキだな全く。まあよくよく考えれば確かにそうなのかも知れないけどさ、最初の「ふっ」がなんかイラッと来たよ。

なんだか暗にバカにされてる気がした。

「お前な、もっといつもみたいに喜べよ！　面白く無いだろ！」

「面白くなんか無いよ！　だってクリエはもうおしまいだもん！」

「おしまいってお前……大袈裟な……」

「お兄ちゃんは分かってない。神の名の下に行う事は正義だとこじつける人達が一杯だよここは。宗教関係の上の方なんか大抵腐って

るんだから！！」
「それは言い過ぎだろ！？」
こんな宗教の街でんな事堂々と言ったらやばいだろ。そりゃまあ少しはそうも思うけど、思うだけじゃ言わないよ。と、いうかミセス・アンダーソンがそこに居るのにその発言は不味いだろ。怒られるぞ。
「クリューエル様、そんな偏見をどこで覚えてしまわれたのですか？　私という手本がみじかに有るのに信じられない暴言ですね」
「だってアンダーソンだって猫かぶり……イタタタ！　痛いよ！」
柔らかそうな頬を抓られるクリエ。ほらね、言わんこっちゃない。
「取り合えずこんな所ではお礼も出来ません。奥に用意させてありますから、行きましょうか」
「だ～か～ら～無視するな～～！　クリエはクリエは怒ってるんだぞーー！！」
ジタバタしてるクリエを余所に、ミセス・アンダーソンは進み出す。そして僕達もその後に続いた。まずは入国をするために、この道が続いてる建物を目指すみたいだな。そこを通らないと、本格的な街の中へはいけないみたいだしね。
そして入国審査建物、まあ飛空挺のチケットとかが売ってあるそんな建物に入ると、いきなり目を疑ったよ。だってそこには、ひざまずいてる聖院の人達がいたんだ。
「「「お帰りなさいませクリューエル様。ご無事で何よりです」」」
なんて言葉が一斉に紡がれる。なんて大々的に歓迎してるんだ。

こんなの見せつけられたら、やっぱり特別なんだな……って思う。

「あらら、元老院のお一人がわざわざ出迎えるなんて、私は聴いておりませんが？」

ん？　なんだかミセス・アンダーソンはちょっと怒ってるような、苛立ってるような……そんな声をだす。元老員が気に入らないのかな？　仲悪そうだったし。

すると指摘されたその元老院の人だろうその人が頭を上げて立ち上がる。まあ立ち上がっても、全然僕達は見下ろす状態な訳だけど……やっぱり元老院言うだけあって、一人だけその服は豪華に成ってる。

なんだか細工が細かいというか……帽子も長いしね。

「ふっふ、サプライズと言う奴じゃよ、ミセス・アンダーソン。最初失敗したと聴いた時はどうなる事かと、不安じゃったが流石じゃの。まあれだけ大口を叩いたのじゃから、これくらいは当然じゃがの」

「なるほど……ええ、まあそれはそうですね。私は私の役目を全うしたわけです。それでいいですよね？」

「勿論じゃ」

なんだか二人の間には、火花が散ってる様に見えるのは僕だけだろうか？　色々とこの国も厄介そうだな。変な権力争いに巻き込まれなきゃいいけど……僕達は豪華な馬車？　みたいな物で街を抜ける事になった。

どうやら元老院の人が用意した移動手段らしい。まあれだよ……平安時代に貴族が使ってた感じの物だよ。お姫様とかが良く乗ってる様な……まあこれを引いてるのは実際の馬じゃないんだけど。

それはやっぱり魔法の国、青い光で出来た様な馬が僕達を引っ張ってくれてる。街の方の道は案外大きくて広い。まあ木造に変わりはないけど、発着場なんかよりも、ずっとしっかりとした作りに成ってた。しかも天井には無数の提灯が……あれが夜の光源なんだろう。

やっぱり日本的な所を滲ませてる街だな。

「クリエの奴、大丈夫かな？」

僕は視界を遮ってる布と言うかゴザというかそれをめくりあげて違う馬車を見る。用意されてたのは三台で、しかもそれほど広く無いから、僕達は別々に乗り込む事に成ったんだ。

僕と鍛冶屋とノウイとテッケンさんで一台。シルクちゃん（＋ピク）とセラがもう一台で、最後が元老院の爺さんと、ミセス・アンダーソン、それとクリエだ。

なんだか男が理不尽な扱いに成ってるけど、まあテッケンさんは小さいから、そんな問題無かったよ。

「まあ楽しくは無いだろうけど、仕方ないさ。彼女は重要人物だし、他の種族の中に放り込む事は出来ないんだよ」

「それはそうですけど……」

「大丈夫、同じ場所に向かってるんだし、直ぐにあえるよ」

テッケンさんの言うことは尤もだ。まあ気にし過ぎる事もないよな。そう、同じ場所に向かってるんだし……同じ場所に……

「あれ？　クリエが乗ってる馬車、道を外れて行くんですけど」

というか横道にそれちゃったぞ。これって……ええ～と、どう言うことだ？

「はめられた……かもね」
「それってつまり、このままあいつを箱庭まで連れていくってことですか！？」
「その可能性はたか――――――スオウ君！！」

僕はテッケンさんの言葉の途中で、馬車から飛び出した。木の床を転がる様に回って上手く態勢を前の方に向ける。そしてそのまま追いかけようとしたところで、複数の杖を向けられた。
それは付いてきてた僧兵達が向けている。なんだか護衛にしては大層だと思ってたけど、もしかしてこの為か？

「馬車にお戻りください。貴方は客人、その立場を壊さないで貰いたい。望むならばですが。どこへ行こうとしてるのかは存じませんが、客人を行方不明にしたとあっては、たまりませんから」
「――ちっ」

こいつら、あくまでこういう態度なんだな。僕は一応聴いてみた。

「クリエが乗ってる馬車が道から外れたよな。同じ所に向かうんじゃないのか？　おもてなししてくれるんだろう？」
「ええ、あなた方はそうですよ。ですがクリューエル様が疲れたから先に休みたいと申されて、お二方は先にクリューエル様を送り届けるそうです」
「へえー」

なんて見え透いた嘘を堂々と言う奴だ。初めてモブリの可愛らしさに苛ついたぜ。クリエがそんな事言うはず無い。
もしも別れるなら、幾ら怒ってたって挨拶位するだろう。いや、そもそもアイツの諦めの悪さは異常だから、自分から諦めるわけな

いんだ。
そんな申し出あり得ない。
（どうする？　行くか？）
そんな思いが頭に浮かぶ。この制止を振り切って馬車を追うって事は、客人ではいられなくなるって事だよな。しかも今度の相手は二大都市の一つ。小さな辺境の村とは訳が違う。
「スオウ君！」
「何々？　どうしたの？」
止まった馬車からテッケンさんが降りてきて、もう一台からは、シルクちゃんとセラが顔を覗かせる。二人は状況が分かってないみたいだな。
「えっえ？　何があったんですかテッケンさん？」
「クリエ様の乗った馬車が別ルートに行った。多分、僕達と会わせない気だね」
「そんな！」
慌てるシルクちゃんは駆け出そうとする。けどそこにも僧兵の杖が向けられる。
「んっ！」
「シルク様……今、その選択は分が悪いです。私達は何も分かってないんですから」
そう言ってシルク様を止めたのはセラ。そして僕にも視線を向けてこう言った。

「スオウも聞いてたでしょ。お追うなんてバカな真似はやめてよね」
「お前は、箱庭がどこにあるのか分かってるのか？」
「少なくともこの街のどこかにはあるわよ」

確かにそうだけど……そうじゃないだろう。何やってんだ僕は……と思う。いや、一端こうなるとは思ってたけど、もっとちゃんとクリエには伝えて起きたかったんだ。
こんな風に引き裂かれるとは思ってなかった。けど、それが甘かったんだ。

「馬車にお戻りください」

リーダー格のそんな言葉に、テッケンさん達は従う様だ。まあそれが賢明なんだろう。殺される訳でもないし、少し前の状態に戻るだけ……まだチャンスは有るはずだし……今は引くことも大事。
僕は剣に伸びかけてた腕を握りしめて引っ込めた。そして背中を向けて、馬車を目指す。けどその時だった。

「――――カアーー」

何かが耳に引っかかる。街の喧噪とは違う声。僕は振り返りその声だけに意識を集中する。

「お兄ちゃんの……ううんスオウのブアアアアカアアアアア！！」

聞こえたのはクリエの声。鳴き声みたいに聞こえたその文句に、僕の目頭が一気に熱くなった気がした。そして次の瞬間、僕は考えなしに床を蹴ってた。

「貴様！！」
「どけええええええええええ！！」

セラ・シルフィングの雷撃が僧兵に降り注ぐ。そして風が弾ける如く、僕は駆け出した。真っ直ぐに、それこそ救いの声を目指して。みんなが頭を抱える光景が僅かに見えた。けどごめん、僕は行かなくちゃいけない！！

新たな地『サン・ジェルク』での戦いの幕開けだ。

神の泣いた地　『サン・ジェルク』（後書き）

第二百九話です。
ようやく再び激しい戦いの幕が上がりそうな感じです。だけど何も知らずに、分からずに突っ走るスオウもどうなのか……みんなが頭を抱えるのもわかります。まあだけど、スオウらしいとは思いますけど。
そしてきっとそう思ってるでしょうみんなも。さあクリエを取り戻す事は出来るのか？
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは～。

十字架は二つの意味を持つ（前書き）

走り出した僕の目の前に立ちふさがったのは意外な奴。いや、やっぱりな奴なのかも。そんな奴と、僕はぶつかる。お互いに正しい事をやろうとしてるんだ。それで納得出来てる。

なら譲るなんて出来ない。僕はアイツを助けたく、奴はアイツをどうしたい？　それは知らないけど、取りあえず……この道は譲って貰う！！

十字架は二つの意味を持つ

「どけえええええええ！！」

そんな声がサン・ジェルクの穏やかな街に響きわたる。弾けた雷撃に僧兵だけじゃなく、周囲の人々もざわめいた。

「スオウ君、駄目だ！！」

そんなテッケンさんの声は喧噪の中、聞こえてた。だけどもう止まれない。僕は僧兵達を越えて、風の如く駆け出してた。

（ごめんテッケンさん）

心の中で自分の愚かな行動を懺悔しつつも、だけど視線は前へ。自分を求める声を聞き逃さないように、僕は全力で走り続ける。初めての街を走って走って……その時だ。

「止まりなさい！！」

そんな声と共に、僕の前に立ちふさがったのはミセス・アンダーソン。僕は急停止して、その小さな体を睨みつける。

だけど、おばさんは動揺なんかしない。寧ろこうなることが分かってたかの様に、頭を抱えてため息一つ吐く始末。

「本当に……全く、何故に追いかけてきますかね？　まあ貴方ならそうするであろうから、私がここで待ってた訳ですけど……余りにも予想通り過ぎて呆れちゃいます」

「うるさい。僕だってこんな強引に別れさせられなきゃ、こんな事するつもりなんて無かった」

僕はミセス・アンダーソンにジリジリと詰め寄りながら、そう言葉を紡ぐ。それは本心だ。こんな強引な別れじゃなく、クリエは駄々こねるだろうけど、それでも普通に「またな」って言って別れられたのなら、こんな事しなかった。

それを無くしたのはおまえ達だ。

「でしょうね。私もこれには反対でした。無闇に敵は作る物では有りませんし、言葉だけで済むならそれに越したことはないですから」

「じゃあ、何で！？　どうしてアイツを、そこまでして隔離させたい！！」

僕の言葉に、ミセス・アンダーソンは自身が首に下げる十字架のペンダントを引き抜いてこう言った。

「それは答えかねるわ。一冒険者程度ではね……言ったわよね？これ以上関わるなと。諦めて引いてくれないかしら？

貴方のその行為は、あの子を見守り続けて来た立場としては嬉しいけど、私の立場としては認めれないわ」

引き抜いた十字架が光を放つ。するとミセス・アンダーソンと変わらぬ大きさに成っていた。あれが、このおばさんの武器みたいだ。

十字架で戦うなんて罰当たりっぽくないか？　いやでも、リアルでも十字架は処刑の道具だったっけ？

にらみ合う僕とミセス・アンダーソン。既に引くなんて選択肢は僕にはない。だけどこれだけは聞いといてやる。

「嬉しいか……そう思うのなら、もっとアイツを見てやれよ。信じてやれよ！　事情なんて何も知らないけど、それはお前等の勝手な都合だろ！！
アイツは子供だ。陽気そうに見えて寂しがり屋だ。だけどそれでも諦めない奴だ。こんな事に意味なんて無い。アイツはお前等が思ってるよりも強い！　ずっとな！！」
「……そうかもですね。だけど子供です」
「だからアイツだけじゃ出来ない事を手伝ってやるって約束したんだ！！」

その瞬間、床を力一杯蹴る。その衝撃が床から水面に伝ったのか、水が隙間から弾けあがる。吹き上がった水滴の粒……それが落ちる前に僕はミセス・アンダーソンの前に迫る。
そして容赦なくその剣を振り抜いた。けど手応えが無い。
「手伝うとは何をでしょう？　気になります」

そんな声と僕へ向かって正面から十字架が降ってくる。僕はそれを打ち落として、前を見据えた。するともっと後ろの方でミセス・アンダーソンはケロリとしてる。
そしてどういう訳か、どんどん十字架が投げつけられるじゃないか。一つじゃなかったか？　全部を相手にしてたらキリがない。
僕はある程度を打ち落としながら、前へと進む。
「この程度で！！」

今度は雷撃を纏わせた一撃を放つ。青い光と強烈な音がその場に響く。だけどまた、手応えがない。これじゃあまるでさっきまで見てたのはホログラムの様な……

「こっちですよ」

その言葉と共に、こんどは後ろから十字架が迫ってきた。僕はとっさに横へと転がる。そしてさっきまで居た場所に刺さる刺さる。こっちの攻撃じゃぶっ壊す事は出来ないけど、ＮＰＣはそうじゃないみたいだな。

まあでも、そんな事よりも問題なのは……

「魔法か」

「ええ、その通りです。なにせ私達モブリは魔法を得意とする種族。人やエルフのような拳や剣を振り回す蛮族とは違うのですよ」

そう言うミセス・アンダーソンは次々と十字架を出現させては、僕へ向かって投げつけて来る。これだって十分野蛮だと思うのは僕だけか？

魔法なら炎出すとか水を出すとか出来るのに、ある意味物理攻撃じゃんこれ。そんな文句を考えて間に、床は穴だらけ。

「――って、待てよ。僕はこの先に行きたかったはずだ」

その事実に気付いた。ミセス・アンダーソンはこの道をわざわざ開いてくれてるじゃん。今はこのおばさんと交戦してる場合じゃない。

僕の目的はクリエの救出だ。なら、この十字架の雨を抜けてオバサンに迫る必要なんて無い。僕の目指すべき道は反対方向なんだから。

僕はミセス・アンダーソンに背中を向ける。そして一目散に走り出した。

「ええ――それやっちゃいますか？」

「うるさい！　アンタの相手なんかしてられる――っつ！？」

言葉を紡いでる瞬間、小さな風切り音が聞こえた。それに反応してミセス・アンダーソンから視線を外して前を見てみると、何故か正面から迫る十字架があった。

（避けられない！）

僕は咄嗟にセラ・シルフィングを交差させて十字架を防ぐ。だけどその勢いは止められない。僕は体ごと後方へ押し戻された。これも確かに魔法だな。勢いがおばさんが投げたソレじゃない。

「ふふ、流石素晴らしい反応速度ですよ。だけど、これでわかったでしょう？　戦闘中に背中を見せる危険さが」

そんな言葉を紡ぎながら、ミセス・アンダーソンが前方に現れる。その周囲には彼女を囲む様に十字架が展開してた。

「ちっ」

こんなおばさんに講釈されるとは癪だな。だけど一体どういう魔法だ？　幻を映し出す魔法と思ってたけど、確かにさっきまでは自分の後方からしか攻撃は来てなかった筈だ。

でもさっきは全くの反対側からの攻撃……一瞬で前に行ったってことか？　そんなこと、ノウイのミラージュコロイドでも使わないと無理だろ。

それか幻さえも同じ攻撃が出来るのなら話は別……ん？

（そう言えば、テッケンさんの分身は攻撃出来たな）

あれと同じタイプの虚像か。なら全ては説明できる。でも説明出来るだけで、更に厄介になったって事だ。これじゃあ確かに、背中を見せるのは自殺行為。
それにテッケンさんと違って、ミセス・アンダーソンは自身で攻撃に参加してない可能性がある。魔法で身を隠されちゃ、僕には探しようがないし……ますます厄介だな。

（どうする？　どうする？）

そんな思いが募りながら、僕は取り合えず目の前のミセス・アンダーソンを目指す。どの道ここを抜けなきゃなんだからな。

「さあ、どうしましたか？　もう諦めてくれると楽なんですけど？」
「ふざけるな！」

直線的なだけの十字架の攻撃なんて、実際数が問題なだけで、怖くなんか無いんだよ。わざわざ一つ一つ打ち落とす事もそろそろ面倒だ。
僕は更に加速して、生み出した風と雷を回転しながら撃ち出す。目の前に迫ってた十字架が一気に弾け飛んだその隙に、巻き起こった粉塵の中へ。死角から一気に決めてやる。
するとミセス・アンダーソンの声が聞こえた。落ち着きはらった声だ。

「十字架は、自身を守護する聖域を作り出します」

その瞬間、煙は晴れて太陽の光が降り注ぐ。十字架に幾重にも連なる様に発生してる魔法陣……あれが聖域とか言うのを作ってるのか。
けど、守護するって事はこいつは実体？　その可能性はある！

僕はその聖域とやらを抜く気概で二対の剣を同方向からぶつける。
「ぬおおおおおおおおおおおお！！！　ブチ抜けええええええ！！」
「愚かな事を」

僕の気概とは反対に、冷静にミセス・アンダーソンはそう言う。そして少しだけ持ち上げた十字架を床に落とす。するとその瞬間、聖域が外に広がる様に膨れ上がり弾けた。
僕はその勢いに再び距離を取られる。

「くっそ……」
「貴方じゃこれは抜けませんよ。抜ける訳がない。何も背負わないそんな剣で、我ら神の守護が破られる道理はありません」

そして再びダン！　と床に叩き付けられる十字架。するとまた何本か分かれる様に姿を現した。単調な攻防の繰り返しだな。なんだか向こうには僕を倒すまでの意志はない様に感じられるし……目的はあくまで足止めか。
でも……何も背負わないとは言われたくない。この二本の双剣には確かに背負う物がある。

「背負ってる。アンタ達が守りたい大層な物じゃないかも知れないけど、それは僕にとっては譲れない物だ。だからその言葉は取り消して貰おうか！！」

僕は立ち上がりながら強くそう言った。するとミセス・アンダーソンは手を振れずに現れた十字架を浮かせながら更に言葉を紡ぐ。
「それなら……示してみなさい。その背負うの物の重さを！！」

「上等だ！！」

三度目の突撃。これ以上時間を掛けてなんか居られない。だからただ真っ直ぐに、無謀なほどに直情に僕は進む。向かい来る十字架が顔を掠り、腹を掠り、足を削る。だけど止まらない。止まれるか！！

「――っく、止まりなさい！！」

狼狽えるミセス・アンダーソン。やっぱりな……

「止まらない！　アンタは僕を刺す気がないからな！！」

だからさっきから掠ってばっかりなんだよ。こんな真っ直ぐ突っ込んで来るだけのバカに、当てる気があるなら出来ない筈はない。

「今度こそ突き破る！！　セラ・シルフィング！！」

二本の剣を前に出す。白い風がその周りに現れだした。そしてバチバチと言う青い光も同時に発生する。そしてそのまま勢いを保って聖域に守護されてるミセス・アンダーソンへ突っ込んだ。

二つの力が混ざりあう。激しい風が周囲を巻き込んで吹き荒れる。力と力の拮抗で、激しく腕が震える。でも、ここで力を緩める訳にはいかない！！

「突き破れえええええ！！」

切っ先が聖域の守護に入り込む。僅かに入った亀裂により、そこから風と雷が浸食しだす。

ビキ……バキ……と亀裂は広がり……そしてその瞬間はやってき

た。
吹き荒れる風、荒れ狂う雷撃によって十字架の守護は破れ去る。
「なっ――きゃあああああ！！」
驚愕に浸る暇なく、剣を取り巻く風に吹き飛ばされるミセス・アンダーソン。光の残滓と共に、魔法が解けていく様だった。
だけど安心するのはまだ早い。僕は勢いそのままに、この場を駆け抜けようとする。けれどその時、地面に広がる複数の魔法陣が僕を捕らえた。
「――っつ！？」
「そこまでだ！！　これ以上、この場所で好き勝手にはさせん！！」
力強く響くそんな声。僕の体は魔法陣から延びてきた光の蔓みたいな物に縛られてる。しかもそれは次から次へと、腕足を覆って行きやがる。
顔を後ろに向けると、そこには僕が薙ぎ倒した筈の僧兵達。どうやら追いついて来たようだ。
（こんな時に！）
やっとでミセス・アンダーソンの妨害を跳ね除けたのに、今度はこいつらか。次から次へと、本当に厄介な奴らだ。
「こんな場所で……終われるか！」
「ここまでですよ」
その瞬間、僕の両足に容赦なく十字架が突き刺さる。
「ぐっ！！　あああああ！！」

床に倒れ込む僕、マジでこれは容赦ないぞ。両足が串刺しになってるよ。床の隙間を通り越して、僕の赤い血が鏡の様な水面へと落ちてる。

「アンダーソン様！！　ご無事ですか？」
「ええ、よくやりましたね。お礼を言います」
「そ、そんな！　もったいないお言葉です」

ミセス・アンダーソンに礼をする僧兵達。ちっ……向こうが本気で狙って無かったから、こっちも聖域を抜くだけにしたのがダメだったか。
僕も随分甘い……まあそれはわかってた事だけど。

「っつ……」

遠くなる。床を伝わるその音も、空気を震わすその声も……どんどん遠ざかって行く。そして不意にそれらは途切れた。

「もう手遅れ。どうやら箱庭へ入った様です」
「手遅れ……アンタはアイツの望みを知ってるのか？」
「望み？　箱庭から逃げ出す事でしょう？　あそこはあの子にとっては退屈らしいですから。恵まれてる筈ですけど、なかなか贅沢な望みですよ。
あそこから出て、どうやって生きていく気なのか。あの子は何も知らないからそんな事を言える。自分が実はどれだけ恵まれてるか……それが当たり前だと気付かない物です。
ですから、貴方はこれ以上何もしなくていいんですよ。あの子は幸せなんですから」

幸せ……？　何いってるんだこのオバサン。やっぱりクリエは誰にもあの事は言ってないみたいだな。いや、もう一人……確か世話役のシスターって人はどうか知らないけど……アイツは、こいつらを信じてなんかいない。
そして僕もそう思う。僕は地面に倒れ伏したまま、見上げる形に成ったミセス・アンダーソンを睨んで言葉を出す。

「その幸せは……本当にクリエにとっての幸せかよ？　それはお前達にとっての――だろ。自分にとっての幸せは、誰かが決める物じゃない。
自分自身が感じて決める物だ。それを与えた気になってるなんて……随分おこがましいと思うけど……」
「子供に、何が幸せの基準なんてわかりませんよ。私達は信じてます。いつかあの子がわかってくれる日を」

ミセス・アンダーソンの言葉は、まあお手本の様な言葉が並んでる。いつかわかってくれる……確かに親はそう思って子供を育てないと、やってられないのかも知れない。けどこのままいって……それをクリエがわかった時、どうなるか……聞き分けの良い奴に成ることはどう言うことか……僕にはわかる。
それは……

「きっとその時は、アイツが自分を諦める時だ」

僕の言葉に眉を潜めるミセス・アンダーソン。でも、きっとそうなんだ。アイツが行きたい所は、それを理解したら、いけない……そんな気がする。
なんたって月だしな。そんな所、聞き分けの良い奴が目指す訳ないだろう。だけど、アイツは行きたいと言った。
行かなきゃと願ってる。

なんでかなんて分からないし、自分自身でも分からない様だったけど、僕は叶えてやるって言ったんだ。そして多分それは不可能じゃない。
与えられる道がある……僕達は確かにそれをあの湖でみた。
「アンタは……それを幸せなんて言うのかよ！　神の教えは、子供の夢を奪うのか！？」
「……神だって、全てに置いて万能ではないのですよ」
ミセス・アンダーソンはなんだか苦しそうにそう言った。てか、そんな事言っていいのか？　って感じだ。ある種のカミングアウトみたいだぞ。
シスカ神は万能じゃないんだ――と、そう言ってる。
「あの子は、ただひっそりと生きていてくれればそれでいい。死を与えないだけの幸せと受け取ってください」
「ふざけるな！　そんなの生きてるだなんて言わない。飼われてるんだ！」
夢も許されないんなら、生きてるだなんて言えない。言える訳ない！　それを追いかけるのが生きてるって事だろ。
別に夢じゃなくたって、目の前の目標……望み、そのために毎日があって、限られた時間って物を消費していくんだ。
いつか死ぬと分かっていても、前を向いて何かを残そうとするんだろ。
「貴方の考えは立派ですよ。そう思いますし、間違ってる訳はないでしょう。でもそれは何も知らないから言える事でもあります。
一つだけ教えてあげます。あの子は……この世界に存在して良い子じゃ無いんです。だけどその存在を私達は寛大な心で許していま

す。
けど、公には出来ない。絶対にです。あの存在は、この世界の創世歴を覆します」
「何……言って……」
創世歴……そんなの何千年も前の事だろう。そんなの十歳にも満たない様なクリエに何の関係があるって言うんだ。
するとミセス・アンダーソンはそれを言い終わると、おもむろに手を僕の方へ向けます。その手には魔法陣が紡がれて行く。
「ちょっとお喋りが過ぎましたね。そろそろ、眠ってください」
「――っつ」
抵抗なんて出来なかった。僕の腕は封じられてる。セラ・シルフィングを振るう事も叶わない。重くなる瞼。視界がぼやけて行く。意識も遠ざかる様な感覚の中、足下だけが見えるミセス・アンダーソンが、小さく呟く言葉が最後に聞こえた。
「この選択以外にどうしろと……貴方なら、違う物を見つけられた？　いいえ、そんな事はあり得ない。これで……これで良いのです」
「う、う～ん」
「ピク～ピク～」
なんだか頬の辺りがこそばゆい……ゆっくりと目を開けた先で僕が見たのは、傍らに寄り添って嬉しそうに頬を舐めてるピクの姿だった。

てか、舐めすぎだこのドラゴン。僕の顔面をベチャベチャにする気か？

「こらピク、そんなに舐めるからスオウ君の顔がベチャベチャだよ」

遅かったか。どうやら僕の顔面は既にベチャベチャの様だ――ってあれ？

「シルクちゃん……」

「あ、スオウ君目が覚めて良かった。ちょっと待ってください。今顔を拭きますから」

そう言ってシルクちゃんはおしぼりで僕の顔を拭き拭きしてくれる。なんだか照れちゃうな。って、そうじゃないや。

僕は拭かれながらシルクちゃんに聞いてみた。

「ここは？　てか、あれだけの事しといて牢屋じゃない事がビックリなんだけど……」

当然目が覚めたら牢屋に入ってると思ってた。だから意外なんだよこの状況。ピクに舐められて起きて、傍にはシルクちゃんまで……天国かと一瞬思っちゃったじゃないか。

僕の言葉に、シルクちゃんは拭き終わったおしぼりを畳んで置き、椅子に腰掛けて説明してくれる。

「それはですね。ミセス・アンダーソンさんのおかげです。あの方が不問にしてくださいました」

「ええ？　あのオバサンが？」

何で？　結構酷い事したぞ僕。それに敵の筈の僕を牢屋に閉じこ

めないなんて何考えてるんだ？　シルクちゃんは僕の驚愕する顔を見て、少し笑ってた。
これがセラなら苛つく所だけど、口に手を添えて可愛らしく笑うシルクちゃんだと、そうは成らない。逆に癒される。
「ふふふ、私達もビックリです。だけど事実ですよ。現にここは彼女の自宅みたいな所ですしね」
「へえ〜〜」

なんだか宿屋にしては広くて豪華だと思った。色々と小さくはあるけど、一応他の種族も使えるようにはなってるみたいだ。
客室って所かなここは。ベットは二つに、ソファとかもこの部屋にはある。ここだけでも十分くつろげる作りに成ってる様だ。
本棚には意図的かどうか知らないけど、客人にまで宗教本を読ませたいみたいだな――ん？　待てよ。
「ねえシルクちゃん。ごめんだけどそこの本取ってくれない？　分かりやすそうなのが良いな」
「これで良いですか？」

僕はお礼を言って本を受け取る。そしてパラパラとページをめくって行く。キーワードは創世歴だ。そこら辺を重点的に……と思ってたら、扉が開いて気まずい奴が入ってきた。
「シルク様、どうですか？　スオウは目覚め……」
「よっ」

僕が挨拶すると、バタンと扉を閉めやがった。何セラの奴？　酷くないか。だけどしばらくすると「コホンコホン」と咳をしながら入ってきた。

「アンタが本を読む姿って……似合わないわね」
「うるさい、大切な事なんだよ」
何こいつバカにしにきたの？
「大事な事なら私もあるわよ。箱庭の場所、知りたくない？」
セラの言葉が波打つ様に頭に響く。今なんて言った？
「アンタが突っ走った時、聖典を一機飛ばしてたの。それでね」
自信気な笑み。だけどありがたい。おかげてまだ道は続いてる。

十字架は二つの意味を持つ（後書き）

第二百十話です。
色々と上手くいかない事がある。そんな回です。宗教ってのは難しいですよね。自分は信心深くないから良く分からない事一杯です。人は何かに縋りたいと思ってる物だと聞きます。
それが神や仏なら、救われる物なのかな～とか思うけど、救われるから世界にはそれが存在し続けてるんでしょう。まあどんな無信教の人でもここ一番には天に願ったりしますしね。
攫われたクリエ。スオウ達は彼女を助け出す事が出来るのか？でもそれがどういう事か……正しいのか間違いか……それはまだ、分かりません。
てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

女心と虹の空（前書き）

一つの部屋に男女が二人。流れる空気は気まずいの一言。僕、スオウと彼女セラは今、とっても微妙な関係なのだ。なんだかあの村から、飛空挺での一件でそうなってしまってた。

でもここらでもう一度、待遇改善求めるのもいいのかも知れない。このままじゃある意味困るからな。

女心と虹の空

高くなった日差しが差し込む部屋。手に持つ古びた本を読むフリをしながら僕はこの気不味い時間をやり過ごしてた。

僕が座ってるベットの横には、今はセラしかいないんだ。あの飛空挺での会話から、ここまでよく考えたらまともに話してなかった。

だからここに来て、いきなり二人っきりはとても気まずい。いや、僕はそうでもないんだけど……なんかセラが借りてきた猫みたいに、さっきから成ってるからなんだか変な空気が流れてるんだ。

いつものきつい表情じゃないし、僕を睨む目にもいつもの力がない。なんだか目が合いそうに成ると、逆に涙目に成りそうな程だし。だからさっきから、もの凄く不自然に顔を背けて床を一点に見てる。

なんだか悟りでも開きそうな集中力。う～ん、調子が狂っていけない。なんだかこうやってみると……まるでセラが女の子の様な……さ、感じがするじゃん。

いや、女の子であることは分かってるけど……

「「……」」

部屋に静けさと言う沈黙がいつまでも流れてた。なんだか一秒が十秒位には感じる。時計の音に、無意識に意識を集中しちゃう。

【ああ――――そうだ！　私はスオウ君が目を覚ました事をみんなに伝えてきますね】

そんな事言って、突然出ていったシルクちゃん。もう五分位経つし、遅くない？　みんなを連れてきて、この状況の打破を僕は願ってる。

けど一向に現れないな。この家がどれだけ広いか僕は分からないけどさ、五分もあれば普通大抵は端から端まで行けるだろ。

「……あの……さ」

「ふっ――――ヒャイ！？」

フヒャイ？　マジでなんかおかしいぞセラの奴。まあだけど、先に声を出した僕も、別に何かを言おうと思ってた訳じゃないから、次の言葉が出てこない。

時計の秒針がそのまま一周しても言葉が出ない。窓から見える空は、雲の代わりに虹が移り変わってた。でも、その間ずっとセラの視線が刺さる。

セラは、次の言葉をずっと待っててくれてる様だ。そんなセラに、僕さらに「おかしい！！」と思うわけだけどね。

だって待っとくなんて殊勝な事をこいつがするわけなくない？

それが今までの理不尽な扱いで確固とした僕の印象なんだけど……罠か？　これは罠だろ？

だけど脳裏には、あの飛空挺での「そんなに嫌いじゃない」って言葉が思い出される。あれが意外と僕は嬉しかったらしい。

なんだかそれなら……位には思えるもん。まあ取りあえず、気まず過ぎて空気を吸って吐くのもきついから、何かを紡いだ方が良さそうだ。

なんだっていいんだよな、いつものケンカなら何も考えずに出来るんだけど……会話って難しい。

「ええ～と、そうだ！　箱庭の場所って結局どこだったんだ？　聖典を飛ばしとくなんてやるじゃんセラ」

「そそそそんなの当たり前じゃない。アンタはどうせ突っ走るだけだろうし……でもそれだけじゃ上手く行かない事があるって私は知

ってるわ。
それに私は、常に保険を掛ける様にしてるってだけ……アンタの行動はいちいち派手なのよ」

なんだかものすっごくモジモジしながら言葉を紡いでいくセラ。誰だこいつ！！　って僕は思ったね。まあだけどちゃんと毒は放ってるな。弱々しいけど。
でもそれが、唯一この目の前のエルフをセラだと思える要因だ。けど……

「でも……それが周りの目を引きつけてくれたから……ってのもあるから……良くやったとも……」

ゴニョゴニョと蚊の鳴くような声で呟くセラ。でもそれを聞いた瞬間に僕はある可能性に気づいてしまった。

「どうしたんだセラ？　いや……誰だお前！？」

ここに入るのはセラじゃない！！　僕の直感がそう告げてる。LROには魔法がある。変身魔法だって当然あるだろう。それを使って誰かがセラになりすましてる？　――――そうとしか思えない！！
だって……今なんて言ったよこいつ……「よくやった」……あり得ないだろ。その言葉をここまで恐ろしく使えるのはある意味セラだけだろうけど、やっぱあり得ないよ！！

セラが礼を言うなんて事が絶対に無いとは言わないさ。だけどな、その下準備にはまず、心を抉る様な暴言の嵐と命を削るコミュニケーションが最低五回は必要だろ！　だから、今この状況で「よくやった」なんて言うセラは、セラじゃない。うん、間違いない。

「えっと……何それ？」

僕の突然の言葉に、目を丸くして付いてこれてないかの様な態度を取る偽物。浅ましい奴……まあセラに化ける時点で間違いだけどな。

何が目的かなんて知らないけど、今更そんな白々しい芝居が通用するとでも？

「ふふふ、ははははは！」

「や、やっぱりもう少し寝てた方が良いんじゃない？　ちょっとおかしいわよ」

これは自分の冴えた頭に、笑いが堪えきれなかっただけだ。偽物の癖して一丁前に心配とは徹底してるじゃないか。

だけどそれが間違いだ。セラはこんな時

「とうとう頭までぶっ壊れた訳？　それじゃ救いようがないわよ。私を不快にしないうちに消えてよ。

いいえ、消してあげよっか？」

位言うっての。そしてそんな時こそ、本当に楽しそうにしてるんだ。それがセラなんだ！　偽物は僕に向かって手を伸ばしてくる。僕は持ってた本を置いて、その手を強引に取った。

「きゃ！！」

「おかしいのはお前だ。本当のセラは、そんなに僕に甲斐甲斐しくないし、そんなにモジモジしてない。確かに果てしなく理不尽で訳分からなくてムカつくけど、いつだって自分に自信を漲らせてる。

そういうところだけは、かっこいいんだよ！！」

僕は息が混ざりあう様な至近距離で、偽物に宣言してやった。まあ、格好良いってのは女子に対する評価として適切じゃないだろうけど、でもそこら辺は評価してるんだ。
アイツは暴言吐ける位に強いんだ。それだけの力ってものを持ってる。まあだからって、それをひけらかしもしないしな。プライドがきっと高いんだろう。

それが暴言の元かも知れないけど、無くして欲しく無いところでもある。暴言理不尽意外ね。偽物は僕の言葉を聞いて戸惑ってる。もう一押しで、正体を表しそうだ。

「だからお前はセラじゃない！　どこのどいつだ！？　僕の仲間は返して貰う！」
「あ……う……」

言葉が詰まった様なうめき声を出す偽物。ここまで……そう観念してくれたら良いんだけど――――って待てよ……ここで僕は更に大変な事実に気づいたかも知れない。
この目の前のセラが偽物って事は、あのシルクちゃんは本物だろうか？　ピクは？　一体どうなんだ？　出て行ってから一向に戻ってこない所とか怪しくないか？

いやそもそも、この今見てる全てはどうだろう？　魔法で見せられてる幻影とか？　それだと全て説明が付くぞ。そもそも、あれだけの事をして普通にこんなベットで寝てる方がおかしいし……僕は苦い顔をしてこう言った。

「そうか……そう言う事か……これは全部幻影。ミセス・アンダーソンかなんかの卑劣な幻か。大方、僕がクリエから聞いた【願い事】でも知ろうとしてんだろ？

そう考えると、このあり得ない状況もおかしなセラも、帰ってこないシルクちゃんも説明付く」
「スオウ！　それは違う！　私は本物よ！」
「ありえん！！」

偽物の言葉を一喝して、僕はベットを挟んで反対側に、降りる。同時に傍らにあったセラ・シルフィングを手に取った。そして鞘から刀身を抜いて、覚悟を決める。こういう幻覚って、自信を痛めつけると解けるって言うからな。

「僕は僕の仲間の元へ戻る！！」

セラ・シルフィングの切っ先を自信の太股へと向ける。だけどその時だった。僕が一喝して、それから俯いてた偽物が、突如口を開いたのは。

「そんなに……そんなに行きたいんなら、私が手伝ってあげる！！」

向けられる二本の指。そして偽物の周りには聖典が展開してた。あれ？　これは見たことある光景だ。デジャヴ？　って思ってる間にそれは発射されてた。迫る桜色の光。それが僕を包み込む。

「へ？　――――うおおおおおああああああ！！」

建物をぶち抜いて、綺麗な光が朝の空に舞った瞬間だ。だけど僕はその光の中でこう思ってた。

（こ、これぞまさにセラって感じ……）

てね。

光が収まって、この部屋に大きな穴が空いた中、僕は黒こげで床に転がってた。それはなんだか昔のマンガにでも描かれてそうな光景だ。

でもね、やられた方は実際たまったものじゃないよ。壊せない筈の町中のオブジェクトを破壊するって……一体どれだけの威力込めて撃ったんだよこいつ。

「どう？　これがアンタの望む私なんでしょう」

人を黒こげにしたくせに偉く不遜な態度のままのセラ。いや……もうセラだよこいつ。間違いない。こんな奴、二人もいたら身が持たないもん。

でもそれじゃ、ええ～一体どういう事？　って感じだ。

「なにがなんだか……さっぱりなんだけど？」

「あ……アンタが勝手に変な妄想を全力で信じるから、本物だって分からせてあげたの。これがアンタにとっての私、らしいから」

「あ……そっすか」

確かにまあ、あれは僕の勝手な被害妄想だったとは認めよう。けどさ、その原因はこいつだよ。そこら辺は言っておきたい。

「けど……お前があんな紛らわしい態度とるから……ついてっきり」

「……んなに……あり得……ての？　……かしい……？」

「ああ？　何だって？」

言葉が途中で途切れ途切れになってるぞ。それじゃあなんて言ってるのかわからん。怒ってたと思ってたら、いつの間にかセラは、

僕の目の前に立ってる。そして顔を見せない様にしながら、必死に言葉を紡いでる感じ。

「だから……そんなにあり得ないの？　私があんなんだったらおかしい？」

俯いたまま、なんだか拳を握りしめてるセラ。それに声も微妙にふるえてる？　なんだか黒こげなんだけど、ギャグっぽくは成れない感じ。僕は大穴から、晴天の青空と、そこに架かる七色の虹を見ながら、思った事を言った。

「ああ、あれはスッゲーおかしい」

「ぐふっ……あああ、あれは――――」

一瞬何かが刺さった様によろめくセラ。だけど言葉を紡がせないまま僕は続けるよ。

「けどさ、まあいいんじゃね？　あのままなら、こんな事に成ることは無いわけだし」

「でも……おかしいんでしょ？」

なんだかジト目で僕を睨むセラ。やっぱ身の安全だけで否定したことを肯定する事はできないか？

「ねえ……アンタ……ス、スオウはやややっぱり私のこと……」

「お前の事？」

なんだ？　セラの事がなんだと続く？　僕は頭に疑問符を浮かべながら、言葉の終わりを待つんだけど、セラはそれからを紡げないでいる様な感じだった。

メイド服のスカートを、皺に成りそうな程握りしめてるセラ。なんだろうか？　なんだか今日のセラは、今までと違う。言葉に詰まって、何かから逃げ出しそうな自分を必死に押さえつけてる様な……そんな風に見えるぞ。

「なにに、怯えてるんだよ。セラともあろうお前が？」

僕のそんな言葉に、セラは更に力を入れた様に見えた。そして眉根が更に下がる。なんだか外の方からザワザワ聞こえるのは、家がブッ壊れてるからだよね。そもそも、ミセス・アンダーソンがこの状況で部屋に来ないのがおかしい。

スッゲェ風通し良く成ってるんだけど……

「怖いわよ。私だって普通の人間なのよ。怖いこと……幾らだってある。本当の私は、臆病で人見知りで……だからここでは、そんな自分と違う自分を必死に……そうでありたい自分を頑張って……でもスオウは……アンタには……」

何かが感極まって来たのか、セラの瞳からはポロポロと宝石の様な滴が落ち始めてた。真っ赤に染まった頬を通り過ぎていく透明な涙は、大穴から降り注ぐ太陽の光を受けてキラキラしてた。

泣いてる奴に、こんな事思うのはダメで失礼なのかも知れない。でも僕は、そんなセラを見て初めて――――と言うかようやく？なんだかかわいいと思える事が出来た気がした。

まあ……心の底からって意味で。でも、なんで涙まで流してるのかは全く謎だ。けど、何か言わないとその宝石は無くなって行くだけに成りそうだ。

もったいない……そう思える程に綺麗だから、ここで使ってしまうのもなんだかだろ。けど、何を紡げばセラの心に届くのだろう。

ケンカばっかりだったからいまいちこれと言った言葉が見つからない。

「あっ」

その時、僕の脳裏にはずっと考えてた言葉が浮かんだよ。そうだそうだ、良いのがある。たく、黒こげにされながらもホント良くやるよって、我ながら思う。

でもなんだか今のセラは放っておけない。いつもは何十ものブロックで堅固に覆い隠してた部分……それが剥き出しの状態の様な気がして、このままじゃ壊れてしまいそうな……そんな危うい気がするから。

「セラ」

僕は前を向いて立ち上がる。セラは既に僕の言葉に何かを返す事も出来ない状態に成ってる。溢れだしてくる涙が、それをさせない状態だ。

僕はそんなセラに一歩、二歩と近づいていく。そしてセラはすぐそこに、手を伸ばせば伸ばしきる前に届く距離。そこで僕はこう言った。おふざけなんかじゃない。真剣にだ。

「セラ、僕はお前が大嫌いだよ」

その瞬間、扉の方からガゴって音が聞こえた気がしたけど、それはこの際置いとく。セラがその言葉を聞いて、僕を無言で見つめてくるから、ほかの事なんて考えてられない。

溢れ出す涙は更に多くなった様に見える。確かにそうだろう……それだけの事言った。結構……キツいんだこれ。僕は知ってるよ。

「お前は僕にだけ暴力的だし、僕にだけやたら楽しそうに酷いこと平気で言うしで、実際迷惑極まり無い奴だ」

僕のその言葉に、セラはたまらず俯いた。一瞬睨んだ様に見えたけど、結局力無く俯くことしか出来ない様子だ。震える肩はだんだん大きく激しく成って行ってる様に見えた。

何かが決壊しそうな感じ……だけどその前に、まだ聞いてほしい事がある。まだ僕は言い終わってない。だってここで終わったら、泣いてる女の子を虐める最低野郎で終わりだ。

僕は別に、最低な事をしたいわけじゃないんだよ。

「けどさ――――」

僕は紡ぎ出す言葉と共に腕を伸ばす。すぐそこにはセラの顔。僕はセラの宝石の様な涙を一端せき止めてやる。そして、その行為に驚いて顔を上げたセラを真っ直ぐに見つめてこう言う。

「――――本当はそんなに嫌いじゃない。嫌いじゃないんだ。だからこういうセラも、良いと思う。おかしいとか言ったけどさ、意外だったってだけだからな。

お前が頑張ってるってのは見てたら分かるし、真剣なのも……頼りにもやっぱ成るし、そこは否定できない。だからそこら辺は、そんなに嫌いじゃない。いやまあ、正しく言うと、そんなお前だから、嫌いに成りきれないんだよ」

ホント、僕が死ぬ前に扱いを改善してくれたら良いんだけどね。でもしょうがない、僕はこんな奴でセラの今言った部分は、本当に気に入ってる部分だしな。

嘘なんて今回は一つもない。

「それって……それは……」
「おう、お前が僕に言ったよな」

大嫌い、でもそんなに嫌いじゃない……これはセラに飛空挺で言われた事だ。ずっと考えても答えはでないけどさ、今にはピッタリかなって思ったんだ。

「……カ」

すると目の前のセラの口から、何かがようやく漏れてきた。でも上手く聞き取れない。僕は「ん？」と呟き、声に耳を傾けようとした――――まさにその時だった。
おもむろに右斜め上方へと伸びるセラの腕。そしてバッチーーーーーン！！　と脳まで響く音と衝撃が轟いた。

「バカ！！　アンタっは、大バカよ！！　勝手に人の言葉引用すんな！　どんな意味かも分かってない癖に！！　バカバカバカバカバカバカバカアアアア！！」

更に振りかぶられるもう片方の腕。だけど僕はそれを受け止める。てか、今のはかなり効いたぞ。心とかに刺さったよ。
こっちは必死に模索して探し出した解答だっての。これは完全否定なのか？

「てかな……バカバカうるさいんだよこのバカ！！　どんな意味があったんだよ！　お前が何も言わないから、分からないんだろ！？
僕だってな、必死に考えたんだ！　イチイチ暴力に走るな！」
「うるさいうるさいうるさい！！　これは暴力じゃないわよ！　乙女の正当な権利を主張するわ！　大嫌いなんて大嫌いなんて……フリでも聴きたく無かったわよ！

何にも分かってない……何にも……なんにも！！」

ああもう、ペシペシペシペシ残った方の手でうざったい。僕は掴んだセラの手を引いて近距離まで引き寄せる。その距離、鼻先が触れそうな程だ。

「だから何なんだ！　何にも言わないから何にも伝わらないんだよ！　僕はテレパシーなんか受信できないぞ。言いたいことがあるなら口で言え。伝えたい事は口使え！

聴いてやるから。ちゃんと！」

抱き寄せてる様な態勢になってる僕達。一歩間違えばキスでもしちゃいそうな距離。だけどそんな事、今はどうでも良かった。僕はセラとのしこりをここで取り払う気満々だ。

そう、僕は満々なんだけど……

「――わない」

「あ？」

「――アンタの指図でなんて言いたくない！！　これは違うんだから……そんな簡単に口に出して良いものじゃないのよ！　だから今は絶対に言わない。

アンタがさっきの言葉の重さをちっとも理解してない今なんて言えるわけ無い！」

いつの間にか涙が止まって、キツく睨んでそう言うセラは、なんだかいつものセラっぽかった。でも僕も、今日ばかりは引かないぞ。

ここが正念場だ。今日のセラはいつもと違う事は分かってるんだから押し通す！

「理解出来ないから言えって言ってんだろ！　頭おかしいのかオイ

？」

「そっちこそ、何が詰まってんのよその頭？　ちょっとは私の為にも要領使いなさいよ。どうせ幼なじみの事とかセツリの事ばっかり何でしょう？

ああ、今はクリエもだっけ？　随分お盛んじゃない」

なんだかどんどんどんどん険悪なムードに成っていく僕とセラ。こいつさっきまで涙流してたのが嘘の様だ。実は嘘泣きだったのでは？　と疑いたくなる。

「お盛んとは随分だなオイ。んな状況かよ。お前は目まで曇ってるんじゃないのか？」

「確かに曇ってるかもね……私だってそう思う……そう思いたいわよ！！」

セラは一瞬弱く成った――――フリをして僕の油断を誘い、そこから強烈な体当たりをかましてきた。そして僕の上に跨りマウントポジションを確保しやがった。

フルボッコにされる――――と思ったらセラは何故か攻撃してこない。僕の腹の上に腰を下ろしたまま、手を振りあげて、そして僕の上でこう言った。

「訂正する。アンタの事は大大大大大大大嫌い」

「あっそ」

随分嫌われたもんだ。こっちは関係改善を目指してた筈だけど……失敗だなこりゃ。するとまだ続きがあった。

「でも……時々それほどもでもないかも」

「はあ？」

「良いから歯を食いしばりなさい！！」

そう言ってセラは掲げた手を振りおろす。僕は思わず目を閉じた。だけど手の衝撃はこない。代わりに鼻孔を擽る様な香りと、額に触れる柔らかな感触があった。

「ふえ？　なんだ……おい！？」

一体なにされた？　目を開けると既にセラは立ち上がって、ドアの方へ歩いてた。でも僕の声で立ち止まり、振り返ってこれだけ言った。

「バーーカ、絶対に教えない」

訳分からん。何なんだよ一体？　額に残る感覚が何となく熱を残す様な……まさかだけど、頬が僅かに赤くなる。ガチャッと開け放たれた扉――――するとそこからシルクちゃん達が流れ込む。その光景に、セラは石の様に固まってた。

顔を赤面させて……ね。

女心と虹の空（後書き）

第二百十一話です。

今回はセラとのお話です。二人のぎこちない関係が、少しは進む？　みたいな。まああんまり変わってないけど、セラは何かを決めたから、その行動をした様な感じかな？

でもこう言うのは難しい。自分でもよくわかんないし、もっと面白おかしく書ければいいんですけどね。もっと頑張っていきます。

てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは百十二話で～。

この一杯に魂を（前書き）

ドアから流れ入ってきたシルクちゃん達。固まってしまったセラ。そんな状況が出来上がった室内。でもまあ、なんだか賑やかにはなった。そしてなんだかんだでみんなで一階へ降りた。

そこで僕達は真面目にこれからを話す……予定だったのに……どうして話がずれたんだろう？

この一杯に魂を

「なっ……シルク様……それに――」
「あはは――見つかっちゃった」

開け放たれた扉と共に倒れ込む様に部屋へ流れ込むシルクちゃん達。あいつ等、一体いつからあそこにいた？　セラは、流れ込んだ全員を見つめてそれから、ブルッと震える。
そんなセラを見て、テッケンさん達も苦笑いを返してる。そしてセラは真っ赤に成って、扉を開けた態勢のまま固まってしまった様だ。

「――あ、あれ？　セラちゃん！？　セラちゃん！！　大丈夫？」
「あわわわ！　セラ様……セラ様が石に成ったっす～～！」

なんだか一気ににぎやかになったな。ワイワイガヤガヤと騒いでるよ。慌てふためくシルクちゃんとノウイを余所に、苦笑いを漏らしながらテッケンさんはこっちへ。
鍛冶屋の奴は――――まあなんかダルそうにしてる。

「目が覚めて良かったねスオウ君」
「テッケンさん……いつからあそこに？」

テッケンさんは爽やかに僕の身を案じてくれる台詞を言った。一瞬その言葉に釣られて、心が浮きかけたけど重要な事を思い出したよ。
それは聴いておきたい。盗み聴きはね……セラ程じゃないけど、僕だって恥ずかしい。

「ええ～と、それはね……いや、盗み聞きなんてする気は全然全く僕達には無かったんだけど……」

なんだか珍しく言い訳苦しいテッケンさん。まあテッケンさんが進んでそんな事をするとも思えないのは、僕だって良く分かってるけども……じゃあ何で？

僕はしどろもどろになってる言葉の続きを待った。

「シルクちゃんが……僕達を部屋の中に入れてくれなくて」

「シルクちゃんが？」

なるほどなるほど……僕とセラを二人っきりにしたのもシルクちゃんだし、今回の事は全てシルクちゃんの陰謀か。でもどうしてシルクちゃんがそんなこと？

僕はセラに色々と声を掛けてるシルクちゃんに視線を向ける。そう言えば、セラの奴とは仲良かったっけ。だからって事なんだろう。

なんだか僕もセラもどう互いに接したら良いのかわからなくなってたからな……それを案じたんだろう。まあ、さらにどう接すればいいのか、分からなくなったかも知れないけどね。

だって、何もわだかまり溶けてないし……最後にアイツ何した？

それを考えると、妙に額が熱くなる。

「ああ、ごめんスオウ君。盗み聞きしたのは申し訳ない。後でセラ君にもちゃんと謝らないといけないね」

そう言って丁寧に頭を下げてくれるテッケンさん。この人はこういう所が良いんだよね。素直に頭を下げられる。そんな風にされちゃ、怒れる訳がない。

「はは……まあ、そうですね。僕はまだ良いけど、セラには謝った方が良いかもですね。アイツ固まってるし。あのテッケンさん……それなら最後アイツが何したか見てました？」
「ええ！？」

なんだか妙に大きな反応を返すテッケンさん。この人はある意味素直すぎるのでは無いだろうか。嘘がつけない性格だ。これは完全に見てるよな。

「いや、最後アイツが何したか、僕は見てないんですよね。だから一応確認を」
「見てない見てない！　僕達は何も見てないよ！　あははは、あはは、それにしても随分派手に暴れたね」

話題逸らしの為にテッケンさんは大きく欠けた穴の方へ向いた。

「それはセラの奴が一方的に聖典をぶっ放したんですよ。それよりテッケンさん、何をそんなに慌ててるんですか？」
「慌ててるって何がだい？　僕は至って冷静だよ」

そう言って、テッケンさんは額から汗を流しながら、けど涼しげにそう装う。

「テッケンさん、一＋一は？」
「十だったかな？」

動揺しすぎだよこの人！！　テッケンさんが何だかおかしい。涼しげな外見とは裏腹に、内面がメッチャ混乱してる。すると僕達の様子を遠目から眺めてた鍛冶屋が、割って入ってきた。

「そのくらいでやめておけ。何をされたか……それを知ってどうなる。お前が何にも気づいてない以上、そんな事に意味はない。文字通りバーカなんだよ」
「はあ？」

なんだか鍛冶屋の癖に全てわかってます、みたいな体で言いやがるな。ムカつく。

「気づいてないとか、バーカとか……なんだよ一体。それはアイツが何も言わないからだろ。こっちは聴いてやる気満々なのに……たく」
「聴いてやる気ね。そう言う所がバカなんだよ。気持ちは強引に聞き出す物じゃない。察する物だ。無粋な奴め」

やっぱこの鍛冶屋の態度は妙に感に障るな。なんなの一体？　僕が悪いのかよ。察する位わかってるっての。でも、それで全てがわかる筈もないじゃん。
より相手を知りたいなら、口を使う事をしないでどうするんだ。何を思い、何を考えてるのか……口はそれを伝える為の機関だろ。

「分かったように……」
「少なくとも、お前よりは分かってるぞ。そんなに気になるなら教えてやろうか？」
「鍛冶屋君！　そこら辺で止めておいたほうがいい！」

今度は僕と鍛冶屋の間にテッケンさんが割り込んできた。しかも結構慌ててる。そんなに僕に聴かせちゃまずい事があるのか？
ちょっとショック……と思ってると、更にもう一人こっちに加わってきた。

「鍛冶屋君、そのお軽い口は裁縫糸で止めた方が良いのかな？　かな？」
「シ……シルク？」
鍛冶屋の後ろには可愛らしいシルクちゃんが笑顔で立ってる。そう笑顔で……なんて物騒な事を言ってるの？　あれは本当にシルクちゃんか？
なんだか怖いんですけど。そしてその感覚は鍛冶屋も共感してた様だ。
「鍛冶屋君、ちょっと向こうで大事なお話をしましょうか？」
「どうか命だけは……」
切り替えが早い鍛冶屋は、既に床に土下座してた。どうやらそこら辺のプライドは無いようだ。まあ、なんだか異様にシルクちゃんの笑顔が怖かった……ってのもあるだろうけど。
「そ、そんな命だなんて……ちょっとお話をしたいだけだったのにそれはヒドイですよ。もう良いです。でもこのことはもっとデリケートに扱ってくださいね。
そうでないと、固まった位じゃセラちゃんは済みません」
「了解した……」
シルクちゃんはいつもの感じに戻って、そう言葉を紡いだけど、依然鍛冶屋は遜ってた。念の為って奴か？　いや、僕よりも女の子を理解してるって事なのかも。
「スオウ君」
「うん？」

シルクちゃんはこっちにトントンと向かってくる。フワリと揺れるロングスカートとかが眩しいぜ。そして目の前に彼女の顔が迫る。

「スオウ君はなるべく今まで通りに接してくれるとありがたいです。きっとセラちゃんはこれから頑張るつもりだと思うから、それに今まで通りの態度で付き合ってください。

それだけで十分ですから」

「え……まあ、それでいいなら。深く考えるなって事ですか？」

何だかバカにされてる？　のとは違うって分かるけど、理解しなくていいって……それでセラは良いのかな？　まあアイツが教えない訳だし、シルクちゃんの言葉は僕にとっても良いことだ。

「深く考えるなと言うよりも、あんまり気にし過ぎにないであげてって事です。できますか？」

ここで出来ないなんて言えるかよ。なんてたってシルクちゃんのお願いだ。僕はこの子の頼みなら、大抵の事は聞く自信があるね。

でも、懸念事項もあるけどね。

「シルクちゃんがそう言うなら、やってみます。今まで通りでいいんなら気が楽だし。けど一つだけ。今まで通りの扱いは困るんですけど……」

そう、僕はそれを改善したいと常々考えてるんだ。だからこその行動でもあった。今まで通りが、理不尽な事までも含まれてるのなら、ちょっと遠慮したくなる。

けど、僕のそんな懸念にシルクちゃんは反則的な微笑みでこう返した。

「大丈夫です。それはきっと、二人がもっと近づくごとに変わりますよ。きっと」
「はあ……」

それ以上何も言えない。それくらいシルクちゃんの笑顔にやられた。良いもの見せてもらったぜ。まあそんな訳で、この問題はここで一端の区切りをつけた事になった。

――――で、僕達はあの部屋から移動して、一階のリビングへ。ここもセンスの良い高そうな家具やら装飾やらで随分整った感じを受けるリビングだ。だけどやっぱりアルテミナスとは違うな。内装が随分和風っぽい。床が畳じゃない事が残念だけど、それは客室がフローリングだったし、考えてみれば当たり前か。
気品っていうよりも風情を感じる所も和風なのかな。あのオバサンにしてはなかなかだ。けど……

「ミセス・アンダーソンはいないのか？」

そう肝心のオバサンの姿が見えない。てか、どうやらここには僕達しかいないようだ。僧兵もいないみたいだし……どうなってるの？
自分で言うのもなんだけど、僕って結構危険人物じゃん。あんな事したし……

「あの人はお仕事が忙しいらしいです。ここは自由に使って良いとの事ですよ。と、言うか元々はここに私達を招待するつもりだったみたいです」

そう言ってシルクちゃんがリビングと隣接してるキッチンを指し示す。まあ言うなればここはリビング・ダイニング・キッチンが一

緒くたにされた様な感じなんだろう。ＬＤＫだな。
部屋の奥の方のキッチンスペースには、豪華な料理が盛りつけられて、カウンターみたいな所に並べられてる。
「確かにそうっぽいね。って事は、アイツが言ったことは本当か」
「言ったこと？」
「ああ、あのオバサンはこの行動には反対だって言ってたよ。敵は作らないに越したことはないってね」
まあそれには僕も同感だけどね。でも、それをしなきゃいけなくなった。こんなに用意した料理を無駄にしてまで……それは多分、あの元老院の爺が怪しい。
アイツが来ることはミセス・アンダーソンも知らなかったみたいだし、そのせいで予定が狂った感じだった。
「確かに、あの方があんな強引なやり方をするとは思わなかったからね。元老院の意向なのだろう。向こうの方が立場は上だ」
「立場だけで動く人にも思えなかったけど……」
僕はテッケンさんの言葉にそう続けた。だって先の強制イベント時、ミセス・アンダーソンはそんな上の立場の奴らと対等以上に接してた。
あの人が、立場と関係性だけで納得出来ない事をやるとは、なかなか思えない。
「だから、納得はしてるんすよ。聖院の誰もがあの子を、外に出してはいけないってのは総意って事なんじゃないっすか？」
珍しく的を射た事を言うノウイ。まあそうとしか考えられないよな。やり方は気に食わないけど、それだけは同じ考えって事なんだ

ろう。

「創世歴……」

僕はぽつりと呟いた。それはミセス・アンダーソンが教えてくれたキーワードの一つ。創世歴が覆る……そんな事を確か言ってた。

「なんだいそれは？」

僕の呟いた声を聞き取ってたらしいテッケンさん。僕はミセス・アンダーソンが言ったことをみんなにも伝えてみた。

「クリエちゃんの存在が、この世界の作られ方を覆すって事ですか？　それは……にわかには信じれない事ですね」

まず最初にそう言ったのはシルクちゃん。シルクちゃんは博識だから、理解が早いよね。ノウイなんかは

「どういう事っすかそれ？」

てな感じの事しか言わないもん。まあ実際、僕も同レベルなのが問題だけど。だって僕はＬＲＯの歴史なんか微塵も知らない。

まあ、リアルの方では相当話題にもなったしで、結構な人がその存在を知ってる有名ゲームだけど……そう言う事じゃないもんな。

この場合の創世歴は、当夜さんがプログラミングを打ち込んで行った歴史じゃない。この世界が実際に刻んで来たとされる歴史だ。

まあ、いうなればそう言う設定のこと。大まかな事はＯＰでも説明されてた筈だけど、創世の事とかまでは何にも言ってなかったもん。

僕のＬＲＯの歴史の知識はＯＰ止まりだよ。だからここら編で補

完するのも良いのかも。みんな詳しそうだしね。

「えっと……実際僕は創世歴がどんなのか知らないんだよね。さっき本でちょっと読んだ所によると、光明の女神のシスカがテトラをぶっ殺してこの世界が始まったってあったけど……」

「ぶっ殺したって、随分品の無い言い方だな」

「うるせえ」

鍛冶屋に品とか言われたくない。シルクちゃんにならまだしも、武器にしか興味ない奴の癖に。鍛冶屋の奴は相変わらず自身の武器の手入れに熱中してるもん。

だけどそれでも、片手間で語れる程度の知識はあるようだ。

「まあ確かに俺も大概だが、お前はミッション一つもやってないんだろう。そんな奴よりは知ってるさ。お前が言ったのは創世歴と言うよりも、それはその後だ。

創世歴ってのは、基本二人の神の争い部分だからな。この世界を創世するための戦い。その部分が創世歴だ」

「ふ～ん、二人の神の争いね……」

僕は鍛冶屋の言葉を考えながら、リビングのソファに腰を下ろした。いつまでも立ち話も何だしね。

「ん？」

腰を下ろすと同時に、何故か運ばれてきた紅茶。てか、それを運んできたのがセラだってのが驚きだ。ええ？　どう言うこと？

「なんて顔してるのよ。私はメイド、こう言うのは私の役目なの」

そう言うセラは、手際よく全員へお茶を行き渡らせる。その手慣れ方は、確かにメイドだった。セラの始めてみるメイドらしい姿だ。
さんざん疑ってたけど、ちゃんとメイドらしい事出来るんだな。だけど……僕は高級そうなカップに注がれた紅茶をジッと見つめる。

「毒とか入ってないよな？」

その瞬間、僕の頭には熱湯が注がれてた。

「あああああっっつーーーーーーー！！！」

床を転げ回る事になった僕。いや、洒落じゃなくマジで熱い。かなり効くぞこれ。

「ああ、ごめんっすスオウ君」
「わざとだろこれは！！　てか、何しやがるノウイ！！」

何でお前が僕に熱湯を注ぐんだよ。セラならやりそうだったけども、ノウイじゃ予想外過ぎた。ノウイの奴、さっきからセラの下部みたいに付き従ってるから、紅茶に注ぐ熱湯の換えを持っていたらしい。
それを僕にぶっかけたって訳だ。なんて奴……リアルだったら大火傷で大惨事だ。救急車呼ぶレベルだよこれは。

「だから事故っすよ」

まだ言うかこの胡麻みたいな目をした奴は。いっその事、目を無くしてやろうかと本気で思った。だけどそれを実行する前に、また も予想外の声が、怒気をはらんで割り込んできた。

「ノウイ！」
「は、はいっすセラ様！　……ええと、これはあくまでも事故……」
必死に事故をアピールするように身振り手振りを交えて、状況を再現するノウイ。だけどそこへ反対側へ居たセラはズカズカと進んでいく。
もしかしたらセラはこういう仕事――というか役割みたいな部分には厳しい奴なのかもしれない。メイドの仕事を完璧にやる誇りがあるとか。常時メイド服なのはその現れとかね。
だからいくら僕の失礼な言葉が原因だとしても、セラにとっては自分の完璧なメイド業を邪魔したってな風に……
「温度は？」
「「え？」」
セラの意味不明な言葉に、僕とノウイの声が重なった。するとノウイの目の前に迫ってるセラはもう一度、ギラっとノウイを睨みつけて言葉を紡いだ。
「お湯の温度は何度だったのって聞いてるの」
「ええっと、沸騰した直後っすから、百度位っすかね？」
それは人に注いじゃいけない温度だ！！　はあ？　百度？　アホじゃないのこの目が点エルフ。流石のセラもこれは怒るんじゃないか？
【死なないように虐めなさいよ】
位言いそうじゃん。なんだか悲しいけど。

「適温ね。ならいいわ」
「よくねぇよ！！　何が適温だ！？　人体には悪影響しかねえよ！！」

じっさい僕の体は今かなり赤いし熱い。だけど僕のそんな訴えに、セラはケロリとしてこう言った。

「紅茶に注ぐお湯の適温は、大体百度位なのよ。できの悪い部下でも、たまには褒めないと伸びないでしょう？」
「えへへ、よっし！」

何嬉しそうにはにかんでるのノウイの奴？　そうじゃない……そうじゃないだろ。論点がおかしくないか？　僕の見てるものと、セラが見てた物はなんか違うぞ。

「紅茶の適温なんてどうでもいい！　百度の熱湯をぶっかけられたんだぞ僕は！」

そう、僕が訴えたいのはこれだよ。この事実だけ。だけど何かが不味かった。どうやらセラの許せない部分を僕は刺激した……らしい。

「どうでもいい？　私にとってはそんな出来事事態どうでもいいわよ。寧ろおいしい紅茶を入れる為に沸かされたお湯に謝って欲しいくらい。
何あんた？　何の権利があって熱湯が茶葉と混ざりあう瞬間を邪魔してるわけ？　最高のタイミングってのがあるのよわかる！？
わかるわけ無いわよね？　どうでも良いだものねあんたは！」

ええええ？　何で僕が責められてるの？　どうやらセラは、紅

茶に並々ならぬこだわりがあるようだ。そんな紅茶を僕が貶した物だから、なんか切れてる。
まあだけど、今の所手が出ないのはちょっとした進歩なのか……けどなんか熱く紅茶を語るセラは、別の意味で怖いんだけど。

「ちょっと飲んでみなさいよ」

そう言ってセラはテーブルに置かれたままの紅茶を指さす。だけど直ぐに気付いた様にこう言った。

「ああそっか、毒が入ってるんだっけ？　それは残念、折角最高の茶葉最高の水、そして最高のタイミングでこだわり抜いた一杯なのに……まあそれが、スオウにとっては確かに毒かもね」

はあ――――と、深いため息をついて哀れんだ様な目を向けて来るセラ。なんかスッゲーバカにされてる気がする。やっぱり僕たちの関係は何も変わってなくない？
てか、良くそこまでいえるな……これはどうにかして貶してやりたい。

「フッ……言ったなセラ。美味しすぎるとでも言いたげだけど、たかが紅茶にどれだけ心血注いでるんだっての。そんなに美味いんなら、これで死んでも本望だな」

僕はそう言って、ティーカップに手を伸ばす。そして一口……するとそこには衝撃が！

「な……なんだこれは！？　口の中に広がるアールグレイの香り。それがまるで味覚の上で暴れてるかのような鮮明さだ。
そして決して口の中では熱すぎない温度で、口全体を刺激し、喉

を鳴らすただ一つの瞬間が流れるように過ぎていく。止めようとしても止められない……それほどに滑らかに、そして優し通って行きやがる！！」

補足すると、更に喉の潤いと共に心の潤いまで感じるぜ。なんだこれは？　これが紅茶か？　なんだか体力どころか、気力や魔法力、全てが全快したかのような……これじゃまるで、伝説の回復アイテム【エリ〇サー】の様じゃないか。

僕の言葉に釣られてテッケンさん達も紅茶を口にする。すると

「「「ぱはぁーーーーーーーーー」」」

と幸せそうな顔になってた。特にシルクちゃんがやばい。トリップしてる。それほどまでにこの紅茶は強力だ。驚愕する僕を見て、セラは嬉しそうにこう言った。

「これが紅茶の力よ！！」

紅茶の力ね……なんか混じっちゃいけない力が混入してる気がしてならない。だけどまあ……確かに美味いことを否定は出来ないな。

これ飲んでると、熱湯を注がれた程度の事で怒るのもバカらしくなる。不本意だけどまあ、これはしょうがない。

「美味いな……たかがとか、どうでもは取り消してやる」

「うん！」

セラの笑顔がその時弾けた。なんだか初めて褒められた新参メイドみたいで……それが異様に可愛く見えたのは、この際この紅茶のせいだとしておこう。

だけど最後にこの至福の一時にポツリと冷静に鍛冶屋が言った。

「だが、紅茶か……外の景色は和風なのに紅茶……緑茶という選択肢は無かったのだろうか……少し侘びしいな。ああ、これがワビサビか……」

実はアホだなこいつ。お茶をすする音がそれこそ侘しく響いたよ。

この一杯に魂を（後書き）

第二百十二話です。

え～と何と言うか……言いたい事は実は前書に書いた通りです。何故……どうしてこんな事に……みたいな。いや、ホント最初は真面目に行くはずだったんです。そろそろ前に進ませようって。

けど何故かおかしなお茶の話に。自分でも謎です。けど次回は大丈夫。ちゃんと事態は進展します。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

準備と用意が大切（前書き）

私は報告の為にある人物の元を訪ねてる。その人との会話で上がるのはやはり、クリューエル様と『道』を開いた彼の事。そして暗躍し始めた元老院共の事。とりあえず元老院共の好きにはさせておけない。

私も動き出す時が来たのかも知れない。

準備と用意が大切

「ご苦労だったよ、ミセス・アンダーソン。あの子を連れ戻してくれて」
「いえ、そんな……もったいないお言葉です」

私は深く頭を下げる。そこに躊躇いなんか無い。私の目の前には、一人の青年……そう言える年のモブリがいる。私なんかよりもずっと若く……ずっと神に愛された存在。
そんな青年は、さっきからパチパチ、パチパチと何やら植木の手入れ中のようだ。

「はは、そんなに畏まらなくても結構ですよ。自分なんて立場だけの存在ですし、きっと世界の為には、貴方の方が重要です」
「そ、そんなわけ！」
「そうなんですよ。だって考えても見てください。こんな場所で盆栽に現を抜かしてる私と、聖院の為に日夜精力的に動く貴女。
どう考えても明確でしょう」

青年はパチ、パチと何やら思案顔で盆栽というのと向き合ってる。あれはそう言うものらしい。なんだか木を大量に買いあさってると思ってたけど……私には全てが同じに見えてならない。
と言うか、一体何をやってるのだろうか？　でも、そんな疑問なんてこの人の前では些細な事。そこを私程度が指摘出来るべきもない。

「私はそれほど大層ではないんですけどね。まあ常々、世界平和は願ってますが……これはその布石ですよ」

「盆栽が……ですか？」

また――そう思ったけど、今更過ぎるその事に、私は驚かない。だからもっと疑問を思った事を口にしたわけ。

「ええ、こうやって一つ一つの盆栽と向き合うと、真理が見えるような……そんな気がしませんか？　盆栽とは鉢の上に芽生える芸術ですよ。

しかも自分だけが描ける絵画や彫刻とは違う、命を使った共同作業。そういう所が世界みたいじゃないですか」

「はあ……」

実際、この人の会話の大半はわからない。緩いのか締まってるのか、極端なのよね。と、いうか一体どれだけの世界と向き合ってるのだろう。

有に百以上、ここにはありそうな体なのだけど……

「ふふ、やっぱり数は大事だと思わないかい？　こなすことは経験だよ。その中には必ずしも成功と言えるものは少ないが、それは決して無駄にはならない物だよ。

そうは思わないかい？　アンダーソン」

「失敗は成功の元ですか？」

「まあそうだね。失敗し続けられる側はたまったものじゃないだろうけど、成功するまで歩き続ける気概って必要でしょう。

私達は常に、そうありたい物です。この世界には迷う人々が大勢ですから」

いつの間にか盆栽の世界が、この世界に置き変わってた。まあこの人は、こっち側の為に、盆栽と向き合ってる……そう言う事なんだろう。

回りくどかったけど。

「ミセス・アンダーソンは相変わらすおきついな。聖院の誰もがその活躍は認めてるのだから、もう少し肩の力を抜いても良いんですよ。

そうしても今日明日で、世界が無くなる訳ないんですから。盆栽と同じ、気長にゆっくりと見守る事を覚えてはいかがです？」

「そうですね。それが出来れば良いんでしょうけど、生憎と私はジッとしてるのが苦手な質なんです。私は例え失敗しても、ハサミを進めていかないといけない……そう言う器の小ささです」

私はそう紡いで、胸の十字架に手をおいた。そう、立ち止まってる事なんか出来ない。世界は救済を求め続けてるのだから。

例え自分では決定的に世界を救える訳は無くても、手を伸ばす人々は絶えはしないのだから。

「まあ貴女がそう言う生き方しか出来ないのなら……私にはどうする事も出来ませんが……だけど勘違いしないでください。

貴女は自分が思ってるほど、小さくなんてありませんよ。貴女は私なんかより、ずっと多くの人を救ってる。そこは間違いなく胸を張って良いことです」

「ありがたきお言葉です」

そんなわけない。だけどこの人はそれを認めはしないだろうから、素直に受け取ることにした。しかし大それた言葉だ。この青年よりも、誰が多くの人を救えるというのでしょう。

まあ盆栽に現を抜かしてる姿からは想像出来ませんが……というか、毎日これだけの盆栽の世話をしてるのでしょうか？

いや、きっと世界を憂うよりは楽なのでしょう。そう思いたい。部屋一杯に降り注ぐ太陽の光。だけど上を見るとそこには水面に映

り、フニャフニャとした光が映ってるだけ。けど遮る物はそれだけだし、木にとってはある意味ここは良い環境なのでしょうか。

今私達が居る部屋は、大きなシャボンで包まれた場所。そして周りは水。ここはサン・ジェルクを覆う滝壷の更に下なのです。

魚が周りを自由に動き回っていたりして、とても綺麗な場所。ここの水自体が鏡の用に透明度が高いから、とても遠くまで見える。

そんな場所での秘密の会話。

「所で……あの子を助けてくれた方達の事ですが――」

「それなら私の自宅の方へ今は居るはずですが、何か？」

青年は、今まで一定間隔で鳴らして来たハサミの音を止めた。そしておもむろにこう呟く。

「その中の一人……クリューエルとあの湖の【道】を開いた人物。彼の事が気になりますね。ちょっと会ってみたいのですが、呼んでもらえませんか？」

「何を冗談を。あれは危険ですよ。ついさっきも私とぶつかった所です」

「ですが、それは彼の優しさ――でしょう」

確かにそれはそうだけど……でも変に彼を突っ込ませるべきじゃないと、直感が告げてる。

「確かに一度【道】が開きかけたのは問題ですが、それももう意味はない事です。クリューエル様は既に箱庭です。それに彼にも、これ以上関わるなといってあります。

それなのにこちらから誘ってどうするんですか？」

私の言葉に、青年は少し首を捻って考える。

「まあそうなのですが……話を聞く限りこれで諦めるとも思えないじゃないですか」

「それは……そうですけど……」

確かに早々諦めるとは思えない。だけど諦め得ないだろう。何故なら――

「けど大丈夫でしょう。もうあの二人が出会う事は出来ません。貴方もご存じでしょう……箱庭が何なのか……どこにあるのか」

「そう……ですね～。確かにそうなんですが、本当に今、あの子があそこに居るのか、確認しましたか？」

「それは……どういう事です？」

すると青年は再びパチパチし始めてこう言った。

「いえ、まあまだ居るとは思いますけど……ここからだと思いませんか？」

なんだかさっきから意味深な言葉ばかり使う青年。いい加減引っ張りすぎだ。それにちゃんと確認だって行かせた。私だって元老院を信頼してる訳じゃないから。

あいつ等は基本汚い。年を重ねて、皺の数だけ心が腐った連中だ。

「それはそれは大層な言いぐさですね。まあ概ね賛成ですが……まあそれは置いておいて、ここから何ですよ。ここからあの子の物語は始まる……そんな気がして成らない。

だからきっとまだ終わりませんよ」

「そんな……だけどあの場所は不可侵です。彼らがたどり着けると

は思えませんけど」

箱庭はそれだけの場所だ。それに今は普段よりも更に厳重になってる。冒険者数人でそこまでいけるわけがない。

「そうですね……だけどイヤな事とは重なったりするじゃないですか。元老院が何か動き始めてる様です。あの子が【道】を開いた事で、その力と存在を確信したのでしょう」

「元老院があの子の使い道を思いついたと言うことですか？」

「そう言うことです」

確かにそれは不味い。あいつらが今まで手を出さなかったのは、持て余してたからだ。ここに来て利用手段を見つけたって事は、今まで金を使った分をまとめて請求される様なもの。

何されるか……いや、どうせろくな事じゃないのは確かだ。

「聖院の総意は、あの子を隔離した上で、それでも見守る事じゃ無かったのですか？」

「その筈ですが、彼らはこう言うでしょう。『世界の為に必要な事』と。そして彼らは強引です」

確かに、それに力も絶大。聖院も利権や権力が絡んで、随分と闇の部分が出来てしまってる。それは殆ど元老院側だ。

私は彼に言われた事を思い出す。飼われてる……か、確かにその通りです。でも、それでも平穏で平和な毎日が送れるのなら……そう思ってた。

でもどうやら、飼い主の都合が変わりつつあるようです。私は唇を噛みしめて、そして背中を向けます。

「気をつけてください。奴らは貴女の事を一番警戒してますよ」

「そんなことは知ってます。ですが、気に入らないじゃ無いですか。これじゃあまるで言いように使われただけ。丁度いいから、そろそろあの爺共にはこれを期に引退して貰いましょう」

すると私の言葉を聞いて、青年は大きく笑い出しました。

「はははははは、確かにそれは良い。そうできたらどれほどいいか。期待してみましょう。気休めですが、これを」

そう言って青年は一枚のお札をくれました。不思議な模様が描かれてるお札だ。この街にも沢山似たような物はあるけど……これには強大な力を感じる。

「これは？」

私がそう聞くと、青年は大層肩を落として、そして大きく一息吐いてこう言った。

「それは私が恋い焦がれる女性に貰った物なんですよ。『これを上げるからもう来ないで』の言葉と共にね……」

しまった……これはこの人の地雷だったようだ。それにしても、恋い焦がれるね……この様子だとまだ忘れてない様だ。

そもそも結ばれる訳もない恋いなのに……まあ、だからこそ燃え上がるのかもしれない。若い内は障害が多いほどなんやそれと思うもの。

「良いんですか？　そんな大事な物？」

すると今度はニヤニヤしながらこう言った。

「いいんですいいんです、これで会いに行く口実が出来ます」
「ああ、そう言う事ですか。で、これはどんな時に使えるのですか？」

そこが重要だ。かなりの力を感じるし、それにこの人が恋い焦がれるあの人のなら、相当だ。相当……よからぬ何かが封じられてる可能性がある。
そもそもこの人を追い払う為に贈ったのなら、呪いでも込められてるのかもだし……

「なんなのかは私も聞いてませんね。だけど確信出来る、それはきっと君の役にたってくれるとね」

それは何の保証もない言葉だ。だけど……この人の感は良く当たる。この人がそう言うならそうなのだろう。私はそのお札を懐にしまい、頭を下げる。

「ありがとうございます教皇猊下」
「その呼び方はやめてください。貴女と私の仲なのですからね」

そう言って恥ずかしげに笑う青年。この目の前の青年こそが世界最大宗派シスカ教の現教皇。『第八十二代教皇　ノエイン・バーン・エクスタルド』その人だ。

「おーい、どうだよそっちは？」

僕は大きな声を出して反対側に居る鍛冶屋へ言葉を送る。すると向こうも首を振ってるからどうやらダメっぽい。

今僕たちは、ミセス・アンダーソンの家を出て、取り合えずクリエが連れ去られたであろう場所を探してるんだ。いや、まあセラが聖典使って見てたから大体はわかってるんだけど……いかんせん、警備の目が厳しい。

だからこそ、こうやって複雑に絡み合ってる通路をみんなで歩いて、手分けして抜け道でもないか探してる訳だ。けど収穫はあんまり無いな。

ここは地面じゃなく、水の上。足場も制限されるし、ごちゃ混ぜに作られた印象があるけど、どうやらちゃんと考えられてたみたいだな。

やっぱり、クリエがつれて行かれた場所へ行くには、この一本道……それしか無さそうだ。

「ちょっと、また突っ走らないでよ」

そんな事を言ったのは、僕と行動を共にしてるセラだ。どうやら僕がまた突っ走りそうな顔をしてたみたいだな。なんと失礼な、僕だって学習するっての。

「いかないっつの……今はな」

「今は、ね……」

最後の所だけ、呆れた様に繰り返すセラ。するととんとんと耳に付けてる機械を指で叩く。多分シルクちゃん達の方も聞いてるんだろう。

あの通信用の機械、僕壊したからね。まあでも、そんなに怒られなかった。セラにしては珍しく「今後気を付けてね」位だったよ。

「やっぱりシルク様達の方もダメみたいね」

通信を終えたセラがそう僕に伝えてくれる。やっぱりそうか、まあ思ってはいたことだ。このあからさまな警備のやり方は、一本道だからって事なんだろう。

「了解……どの道、気づかれないで――ってのは無理っぽいし、こうなれば強行突破を提案だな」

「あんたは……本当にそんなのばっかりね」

呆れた様に首をフリフリするセラ。なんだその態度。お前はクリエが心配じゃないのかよって感じだ。きっと今頃、泣いてると思うんだ。

てかなんで僕のペアがセラな訳？　だから今一番気まずいって言ってたのに……みんなの好意何だろうけど、正直キツい。

テッケンさんはシルクちゃんと、鍛冶屋はノウイとそれぞれペア組んで行動中だ。みんながここに戻ってくるまで、まだあるな～。

「他になんか代案でもあるのなら聞いてやるけど」

僕は嫌味っぽくそう言ってやった。するとセラは僕と同じ方向、つまりはこの道の先にある建物を見つめてこう言った。

「そうね。私達は自由に動けるんだし……ミセス・アンダーソンに協力して貰うってのはどうかしら？　面会を希望するのよ」

なんか、セラにしてはまともな事を言ってるじゃないか。確かにその手が無い訳じゃない……けど――

「ダメだな。それはもう前に釘を刺されてる。僕達の様なただの冒険者が気軽に会える、どっかの看板娘じゃないってね」

そうなんだよね。しかもミセス・アンダーソン本人が言ってたし……頼むくらいで会えるとは思えない。それにもし例えあのおばさんが許可しても、元老院の爺共はそうはいかない気がする。

つまりは、どの道僕らの取れる行動の選択肢は多く無いって事だ。無理矢理にでも突き進むか……諦めるか。でも、諦めるなん選択肢は当然却下な訳だよ。

そんな事したら、僕死ぬしね。まあこの道が有ってるのかなんて全然まだわからない訳だけど、今は目の前の状況をどうやって乗り越えて行くか……それしか無いだろう。どうやって金魂水を使うかなんて情報は、未だにあがって来ないしな。

「看板娘じゃないね。まあそれなら、もっとスマートに行けばいいのよ。わざわざ昼間に動く事無いでしょう？　夜を待ちましょう」

僕の言葉で、意見を却下されたセラは、直ぐに代案を出してきた。まあ確かに昼間よりは夜の方が潜入とかはしやすそうでは有るけど……単純な問題が。

「忘れがちだけどさ、僕にもタイムリミットが有るわけだよセラ。なるべくなら、急ぎたいじゃん」

「そう言えば、そうだったわね。でも、急いでも失敗したんじゃ意味ないわ。善は急げって言うけど、いそがば回れって言葉もあるわ」

「まあ、そうだけど……」

どっちも方便だろ。それにやっぱり僕の事情忘れてるし。こっちは命人質に取られてるんだ。急ぎたくもなる。五日だよ、五日。たったそれだけの期間で、誰も知らないアイテムを、あの神様が望む形で使用しなかいけないんだ。

どんな無茶ぶりだよ。よく考えたかなり曖昧だぞ。僕が不服そうにしてると、セラは更にこう続ける。

「あんたは既に一回失敗してるじゃない。それなら、次がラストチャンスだと思った方が良いわ。その次はきっとない。

確実なんて物はないけど、不安要素はなるべく排除しなさい。それこそ、時間が無いからこそよ」

セラがスゴいまともな事を言っている……そんな気がした。珍しい事もあるもんだ。こいつが嫌味もまじえずに、マトモな事を言うなんて……まあありがたいけどね。

そしてそんな会話をしてる内にみんなが集まってきた。

「さてどうするかだね」

「取り合えず現状を確認しましょうよ。クリエちゃんの居場所は変わらないんなら、急ぐ事はないと思いますけど」

テッケンさんにシルクちゃんが、戻ってくるなり早々にそう告げる。すると反対から鍛冶屋とノウイもそれぞれの意見を述べてくれるよ。

「それは楽天的じゃないかシルクちゃん？　俺的には、元老員って奴らが暗躍してる気がするな。ミセス・アンダーソンも奴らに踊らされた可能性だってある。

そもそもあんなに急いで、あのガキを俺たちから放した理由は何だ？」

「確かにそっすね～。そこら辺は歩いてる時にも語りあったんすっけど、どうにもしっくり来ないっすよね。それにそもそもっす――」

そう言ってノウイはこの通路の建物を指さす。

「――あれが箱庭って所っすかね？　スオウ君の見たらしい物と違うくないっすか？」
「……確かに」

言われてみればそうだな。この道の先にあるのはなんか小屋っぽい建物のみ……あれじゃあ僕が見た間取りとも全然あわないじゃん。
それに箱庭と呼称するには余りにも陳家だよなあれじゃあ。じゃあ、一体アレは何だ？　クリエは本当にあそこに居るのかって疑問が沸いてくる。
でもどれも全部、確認出来ない事には何ともいえないな。

「あれが箱庭じゃないとしたら……クリエって子はどこに行ったのよ？」
「それは何とも言えないっすよセラ様」
「転送場所って事はないかな？　ここは魔法の国。それに区画間を便利に移動するためにも転送装置が付いてるし、岸に行くためにも、それがあるのなら……」
「確かに、無くないね。あそこはただの転送場所って事か」

みんながどんどんと意見を行って結論を出していく。そこに僕的には反論の余地はない。確かにそう考える方がしっくりくるしね。
転送か……確かにそれはあり得る。魔法の国だし、秘密の場所くらい幾らでも有りそうだもん。

「まあ、転送場所って言う事で一応良いですけど……どうします？
今直ぐ突っ切りますか？　このメンバーなら、あの警備でも行けますよ」

一刻も早く駆けつけたい僕としては、もう居てもたっても居られ

ない状況だ。だけどやっぱり、みんなはそれに反対っぽい。

「だから、夜まで待ちなさいよバカ」

「そうだね、今ここで暴れるのはちょっと……」

「夜なら、自分が先行偵察できるっすから」

「確証はやっぱり無いですしね。なるべく見つからない様にした方が良いですよ」

「まあ、どうしてもと言うのなら、止めはしないがな。一人でいけよ」

なんかみんなが僕に冷たい気がする。結局夜まで待とうってのがみんなの総意らしい。僕が不服そうにしてると、シルクちゃんが慰める様に、肩に手を置いてこう言ってくれる。

「大丈夫です。クリエちゃんは大丈夫な筈ですし、チャンスを待つのは勝つために必要な事ですよ。それにやっぱり私達はまだ部外者って感じです。

もっと情報を集めましょう。夜までにだって出来る事は沢山有りますよ」

「まあ、確かにそうだね」

なんだか長丁場に成りそうだし、みんな一端解散して、再集合の方が良さそうだ。もうリアルでも夕方くらいだし、このままＬＲＯに居たんじゃ、夜通しに成るかも知れない。

流石にそれは体がやばいよ。お腹も減るし、催す物も有るしね。てな訳で、僕達はアンダーソン邸に戻り、夜に備える事に成った。ちなみにオバサンはやっぱり帰ってない。

「じゃあ、二十二時位で良いんだっけ？」

「そうですね。それまでは各自判断でお願いします。二十二時にこ

こに再集合で行動開始です」

僕達はシルクちゃんのそんな言葉に頷いて、おのおの姿を消していく。取り合えずみんな一端落ちる様だ。まあここまでも十分ぶっ続けだったからね。

僕もウインドウを呼び出してログアウトを押す。視界が消えていき、意識が引っ張られるような感覚。そして目を開けると、そこには見慣れた天井が無機質に僕を出迎えてたよ。

さて……と、取り合えず飯だな。僕は良い匂いに釣られてキッチンへ降りていく。

準備と用意が大切（後書き）

第二百十三話です。
結局はそんなに進まなかったかもですね。でも着実には動いてるんですよ。まあ次はリアルだし、なんか離れて行ってる感じがするけど、大丈夫ＬＲＯはリアルと交錯してるのです。
だけど次回は仄々してる回になるかな。久々に日鞠もでるし、自然体な二人でお送り出来るでしょう。
てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

今は過ぎゆく（前書き）

リアルに戻った僕は、日鞠と共に他愛もない話に花を咲かせる。それが変わらぬ日常って奴を感じさせてくれる。そして僕達は過ぎ去った残滓に祈りを捧げる為に、外へ。この時期の恒例の行事だ。

僕達が目指すは夜の墓。そこで僕達は悲しい人に出会った。

今は過ぎゆく

静かな空気が流れてた。ＬＲＯの中とは違う……ここには争いなんか無いと、そう感じさせる空気だ。良い匂いもするしね。
下へ降りると、更にそんな感じが強まるよ。聞こえてくる包丁の小気味良い音。それとご機嫌に口ずさまれる鼻歌が、平和だなって思わせる。
まあいつもの事なんだけどね。でも自立するとか言っといてなんだけど、まだまだ日鞠が必要だな。最近は時々日鞠が来ない日もあるけど、そうなると途端にインスタントに頼るからね僕は。

随分と幼なじみって存在に頼ってたって思い知るよ。うざったいとか思ってたけど、来なくなるとそれはそれで困るんだよね。
それに今は色々と大変で……ってこれは言い訳か。僕は頭を掻きながらキッチンの扉へと手を伸ばす。ガチャっと扉を開くと、そこには変わらない後ろ姿がある。
なんだかこれ以上無いくらいに安心する光景だな。てか、そう思う自分が日鞠に依存してるよな。ドアが開く音を聞いて、日鞠は僕の存在に気づいた。だけど……なんかあれ？　怒ってる？

「なんだスオウか。起きてこないかと思った」

そう言う日鞠は僕に視線を向けてくれない。手際よく切った物をフライパンに投入して、ジュージュー炒めてる間も、何かブツブツ言ってるし……明らかに不機嫌そうだ。
てかスオウかって、ここは僕ん家だぞ。

「え～と、なんか怒ってる？」

僕は恐る恐るそう聞いてみる。すると揺れる三つ編みの後ろ姿から声が届く。

「怒ってる」

「う……」

やっぱり。ええ、なんか僕したかな？　日鞠は野菜炒めでも作ってるのか、パパッと塩胡椒とかを振りかけてる。でもその動作一つ一つに怒気がハラんでる様な……日鞠は怒った理由もいつもなら口に出すのに今日に限ってはそうしないし……これこそ察しろって事か。

「え～と、今日ってなんかあったっ――――――――――アッツゥゥ！！」

怒る原因でも聞き出そうと思ったら、いきなり肉体に危機が訪れたじゃねーか。前言撤回……十分リアルも戦場だ。

てか、炒めた野菜を投げるんじゃねーよ。熱いしもったいないだろ。

「スオウは、今日が何の日か覚えてないの？」

「は？　今日って八月の……あっ！」

なるほど。察せたかも知れない。そうか、もうその日なんだ。これは素直に謝った方が良いかもな。そういえば今日は朝から「昼には帰ってくるからね」とかなんとか言ってた様な……早くＬＲＯに入りたくてあんまり聞いてなかったけど、確かにそんな事言ってたな。

日鞠は忘れてる訳ないって思ってたんだ。ずっと昼頃から、僕が

帰ってくるのを待ってたのかも……そして夕ご飯の準備まで……くっそアギトの奴も教えろ……は無理か。

この日の事は僕と日鞠しか知らない。二人だけの秘密みたいな物だ。全国的に同じ様な事やるけど……でも子供でこの日に毎年本気で祈る奴らは少ないだろう。

僕が色々と考えてる間に、日鞠は料理を盛りつけてテーブルへと運んでくる。僕は何も言わずに、戸棚から食器を取り出す。

そして二人して定位置に座り「頂きます」を紡ぐ。なんだかこんなに静かな夕食は初めてかも。カチャカチャモグモグと、それぞれの箸を動かす音と、口を動かす仕草しか目に入らない。

「あのさ……ごめん忘れてて」

僕はこの空気に耐えきれない。これを紡ぐしかなかった。すると日鞠は僕の皿に取り分けてた野菜炒めを奪って食べてこう言った。

「別に、間に合ったから許してあげる。食べたらお参りに行くからね」

「わかってるって」

「後ここにも行くからね！」

そう言って日鞠が見せつけたのは、お祭りのチラシだ。そこには本日の日付と花火の打ち上げとかが書いてある。こいつ実は、ここに二人で行きたかっただけじゃ……とか思ったけど、外には結局出るんだし――てかこの祭りには毎年行ってるし、拒否する事もないなって思う。

「はいはい」

僕はそう口ずさんで、お返しとばかりに日鞠の皿の野菜炒めを奪ってやる。ハムハム……なんかどっかで食べた味……というかどっかの店のお総菜みたいな感じがするのは気のせいか？

まあ上手いけど。作ってる所も見たけど……どっかで味付けでも覚えて来たのかな？

「ちょっと、スオウ何するのよ！　いっぱいあるんだから意地汚い事しないで」

「お前が先にしたんだろ」

僕は理不尽な事を言う日鞠に言い返す。すると頬を膨らませて反論してきた。

「それは罰よ！　スオウが忘れてた罰！　私はなんにも悪いことしてないもん。だから『あーん』とかして欲しい位。願っても良いよね？」

「どういう理屈だよそれ。そんな恥ずかしい事、出来る訳無いだろ」

「でも病院ではしたじゃない」

ケロッとした感じで言い放つ日鞠。それはあんまり思い出したくない事実だけれども……

「ああ、あれは例外だ！　あの時は弱気に成ってたからな……体も痛かったし……だからそれだけ。看護なんだよあれは！　特別な意味はない」

「私は、スオウだから『あ～ん』ってしたんだよ」

そう言って、日鞠は野菜を一摘みして僕へと向けてくる。イタズラっぽい表情浮かべて。くっそ、恥ずかしい事実を握られてしまったな。

けど……

「おい、それはお前がするのか？　してほしかったんじゃ無いのかよ」

「してくれるの！？」

「しねーよ」

輝く笑顔を見せた日鞠を一刀両断する僕。うん、やっぱりいつもの関係だな。もう何年もこうだから、気遣う必要もなくて日鞠は楽だ。

まあ色々と迷惑でトラブルメーカーな奴だけど、それも日々を刺激するためには必要なんだよな。

日鞠は拗ねた様にご飯と野菜炒めを交互にがっついてる。みるみる僕の分までの飯が減っていくぜ。負け時と僕も箸を伸ばす。ここで栄養補給しなきゃ、後々腹減るだろうからね。

まだまだＬＲＯでやることが一杯あるんだ。

「お前な、少しはお腹周りとか気にした方が良いんじゃないのか？」

「大丈夫。だって私はスオウの好みの体型をバッチリ維持してるもん」

「僕の好みの体型ってなんだよ？」

どこでそんな情報を仕入れてるんだよこいつは。

「それはほら、私を見ればわかるでしょ？　綺麗な肌に、手のひらに収まる位の胸に、クビレはしっかりあって、足はスラッと細長い！　ね、ばっちりでしょ？」

嬉しそうにそう言い切った日鞠だけれども……それは僕が認めてしまって良いことか？　でも思うに、好きになったのなら、ぺった

んこでも、ちょっと位太っててても関係無いのかもとか考えるけど。つまり日鞠は、僕の好みが自分だと言ってるのと変わらなくね？

「だってそうでしょ？　スオウは私大好きでしょ？」

「嫌いじゃないとだけいっといてやるよ」

何大好きとか公言してるんだこいつ。自分の気持ちを散々言うのは別に止めないけど……人の心を勝手に代弁するんじゃない。

「う～ん、学校では私達、既に両想いなんだけどな」

「はあ！？　いつからだそれは！？」

「入学して私が会長になるまでの間でかな？　格好よかったもんスオウ」

それってたった二ヶ月程度の事じゃんか。しかも日鞠がひっくり返した生徒会長選挙が原因かよ。そもそも一年は会長になれない筈なのに、こいつがその制度事態を覆して当選した頃から、こいつの学校での人気は異常だ。

そしてそれに伴って僕が学校で狙われてる感じがしてたけど、それもこれも日鞠のせいだからな。無駄に人気者が僕に甲斐甲斐しくするものだから、言われなき嫉妬を受ける羽目に成るんだ。

「二学期に成ったらクラス分けを提案してやる」

「それは二学期に成る前にしなきゃ意味ないよ。てかそれは無謀だね。一学期毎のクラス替えとか、面倒なだけだし、二学期からがクラスの本当の始まりなんだよ」

「なんだよ本当の始まりって？」

すると日鞠は、指をビシッと突き立ててこう言った。

「体育祭や文化祭！　二学期は行事毎の宝庫なんだから！　今年からハロウィンも何かやって、クリスマスには全校パーティーを開くんだ！

どう？　考えるだけでワクワクするでしょ？　だからクラス替えは出来ません。会長判断で却下します」

「横暴で独断な生徒会長だな」

まあ、クラス替えは流石に無理とは思うけど……無駄に行事を増やさないで欲しい。楽しいは楽しいけど、静かに過ごしたいって奴もきっと居るもん。

特に僕とか……どうせ当日に成ったらこき使われるだけだしな。経験有る。中学の三年間がまさにそうだった。僕のクリスマスの思い出に、甘酸っぱいのが一個もないのは、常に傍にこいつが居るからだ。

翌日からカップルに成ってるクラスメイトを知らされるのがどれだけ辛いと思ってるんだこいつは。

日鞠はだけど、そんな僕の思いなんて何のその……沢山の行事案を頭の中で広げていってるらしい。さっきからブツブツと言ってるもん。

「どうせなら秋には紅葉狩りもしたいかも。地域清掃をして集めた落ち葉で焼き芋大会もいいし……」

やばいな、無駄に厄介な行事が今年から大量に追加されそうな雰囲気だ。その度に副会長の僕が大変なんだから勘弁して欲しいよ。

僕はさっさと飯を食べて「ごちそうさま」の後に、止まらないアイディアを書き留めようとしてる日鞠に向かってデコピンを食らわす。

「あて！　何するのよスオウ！　折角映画上映会から、文化的地域の歴史館巡りまでのプランを立ててたのに！」

なんだそれ？　絶対に不評にしかならねえよ。映画上映会とかはまだしも、地域の歴史館巡りって……高校生が「うおっしゃー！！　歴史館巡り最高おおお！！」とか言うと思ってんのか？　だらけるに決まってる。てかその光景が想像できる。そもそもそんなに一杯巡る所あるかって話だし。

「あるよー、みんなが知らない穴場がこの街には一杯だよ。だから絶対に良いと思うんだけどな」

流石は日鞠。そこであると言い切れるのな。まあこいつの交友関係はあり得ない位に広いから、街の一つ位の事なら知らない事ないのかも。

でもそれは、学校のみんなの為にも副会長としてここで止めておこう。

「はいはい、まあ歴史館巡りとかは取り合えず置いておけよ。墓参りに行くんだろ。あんまり遅くなったら待ちくたびれてるかもだぞ」

「それをスオウが言う？　遅くなったのはスオウのせいなんだけど」

「まあ、確かにそうだけど……日が高い内にいくよりも、このくらいの方が出やすいかもしれないじゃん」

「出やすいって……」

ちょっと引いてる日鞠。確かにこの時期にはあんまり洒落には成らないよな。なんてたって帰ってくる時期だし。

「出てきてくれるのなら、言いたいことは少しはあるよね。それはスオウだってそうでしょ？」

引いてた日鞠が、少し寂しげにそう言う。もう一度会いたいなんて、夢のまた夢なんだけど……日鞠はずっと気にしてるな。
まあそれは、確かに僕も同じだけど。だけど僕は日鞠ほど熱くはないからね。墓の前で言えば伝わってるって思うことにしてる。

「僕は毎年言ってるさ。忘れないでやってるだけ、ありがたいと思ってくれてるだろう。それで十分じゃん」
「忘れてたじゃん。てか毎年、私が言わないと忘れてるじゃん」

モグモグと野菜炒めを頬張る頬が膨らんでる日鞠。まあ確かに、そうなんだけど……日鞠が覚えてるから、僕は安心して忘れられるってのがあるんだよね。

「さあて、洗い物でもするかな」

唐突にそんな事を言いながら、僕は食器を流し台へ。いやさ、これぱっかりには反論できないじゃん。完全な僕の甘えだし。だから逃げだよ逃げ。

「洗い物なら、私が後でやるよ」

首を傾げながら、さも当然の様にそう言う日鞠。だけどそこは断固拒否だね。日鞠はいつだって僕に構いすぎるんだ。

「この位別に良いっての。てか、二人で決めただろ、僕がやれることは自分でやるって。この位の事でもやらないと、全然自立なんか出来ないじゃん。
それに――」

僕は流し台の方から日鞠をチラリと見て、こう紡ぐ。

「何？」

「――いや、その格好でいいのかなって思ったわけ。まあ僕は気にしないけど、わざわざ戻ってから、祭りに行く気はないぞって事」

そう紡いだ僕の言葉に、日鞠は何かを察したのか、残りを頬張って食器をこちら側へ持ってくる。

「準備してくる」

「おう」

そう言って日鞠はそそくさと自分家へ。まあ用は、何だって女の子の方が準備が大変って事だよ。男なんてたかが五分、多くても十分あれば充分だけど、女の子はそうは行かないだろう。

日鞠はメイクとかあんまりやるタイプじゃないから、女子の中では早い方だけど……それでも着付けとかって時間がかかる物だろう。

日鞠に全て任せてるより、こうした方がよっぽど効率的だよ。

てなわけで、僕は食器をカチャカチャ洗う。なんだか一人で洗い物をやってると、随分空しい感じがするな。一人になると、途端に空気が重く感じるし。

それこそ、何か出てもおかしくない……なんてバカな事を考えてしまうほどに。

あれから四十分程して、日鞠は再び僕の家にやってきた。そして僕たちは、今二人で夜の街を並んで歩いてる。てか今日は、祭りってだけあって夜なのに人が結構目立つ。

それも浴衣の。ついでに綿菓子とか持った人とかも。まあだけど、

先に目指す場所はお祭りの会場とは違うんだ。僕たちが目指すのは、墓地……まずは墓参りだからね。

だけどさっきから妙に、そわそわしてしまう。祭りだからって訳じゃなく……一年のこの時期にだけ見せる、女の子の特別な姿ってのがさ……なんか反則気味なんだ。

別にすれ違う程度の存在ならどうでもいいし、気になんて成らないんだけど……こうやってよく知ってる筈の奴が、見違えて現れて隣を歩くってのがね。

いや、毎年の事なんだけど……毎年僕は浮き足立つな。

「ねえスオウどうしたの？　さっきからなんだかキョロキョロしてこっち見ようとしないよね？　何、浮気？　みんな女の子が浴衣で可愛いからって、目移りしてるって事？」

「そんなんじゃない。別に、そんなんじゃないっての」

僕はちょっとムキになって否定する。変な誤解されるのはイヤだからな。すると日鞠は「ふ～ん」と僕をいぶかしむ目で見てくる。

そしてカランコロンと音を立てながら前に行き、振り向き様、こう言った。

「ねぇねぇ、じゃあ私の浴衣姿はどうかな？　毎年見てるからって見飽きたとかは無しだからね」

「見飽き……」

る訳がないとはいえない。日鞠が振り返った時に、裾や袖がふわりと靡く感じが日本の風情だね。てか、浴衣ってだけで、女の子は三割り増しに見えるよな。

「まあ似合ってるよ。毎年毎年な……てか、毎年買ってんのか？

去年と違う気がするけど」
「えへへ〜、お父さんが、私の為に毎年違う柄を用意してくれるんだよ。浴衣も安くない筈なのに、毎年カメラもこの時期には新調してるよ」
「なるほどね」

どうりで毎年柄が違うと思った。去年は涼しげな緑と青が混じった、シャボンの様な柄だったけど、今年はぐっと大人っぽく成った感じだ。
高校生に成ったからって事なのかな？　まあ基本は涼しげに白なんだけど、柄は多分天の川。それが上から下に斜めに流れてる感じ。そこだけは黒っぽい色で、星の明かりを表現してる様な感じに成ってるんだ。

それと足下は赤い履き物で、手には同じ柄の小さな巾着。長い黒髪は頭の上で纏められていて、覗くうなじがなんかエロいんだ。その髪を留めてるのも、大きな銀色の蝶みたいでなんか随分、今回は決まってる感じ。
まあ用は……かなり可愛く成ってる。すれ違う浴衣の方々がどうでも良いくらいには思えるよ。

「てか、相変わらずなんだなお前の親父さんは」
「相変わらずも相変わらず、娘達を溺愛してるよ。まあ最近は妹には冷たくされてるけどね。その反動がこっちにも来てるけど……」
「はは、まあ仲良くていいじゃん。家族ってそう言う物の筈だもんな」

僕はそう何となく言った。何となく言った筈だけど、隣で歩き出す日鞠は、少し気を使う様にこう言った。

「ねえスオウ。そっちはどうなの？　連絡とかこないの？」

僕が珍しく家族なんて言葉を使ったから、日鞠は敏感に反応したようだ。だけど別に、僕は本当に何となくいっただけだから、探るような声で言ってきた日鞠に、明るく返してやる。

「ないない。有ったらあったでそっちが驚きだし、いつも通りだよ」

「……そっか」

そう言って、それから日鞠はその事を追求とか、話題にすることはなかった。まあ付き合い長いし、いつだって日鞠は気を使ってくれる奴だ。

本当に触れて欲しくない部分にはって意味で。自分の欲望には気を使わないけどね。

それから僕らは、蒸し暑い夜の道を二人で他愛もない話をしながら歩いた。それはやっぱりいつもの事。こうしてリアルに戻れば、僕にとっての日常が変わらずにちゃんとあるって事に、安心する。

そして僕たちは墓地へと着いた。やっぱり夜……しかもこの時期となると、なんだか雰囲気が倍増した様な気がするな。なんたって今は、怪談最盛期だからね。テレビを付ければ、どこもかしこも怪談をやってるよ。

しかも今日は近くで祭りをやってるせいか、その祭り囃子が妙にこの墓地には空しく届く。

「なんだか、やっぱり夜は雰囲気あるよね」

「確かにな、てかこの提灯行列とか、嫌がらせかよと思うんだけど……」

この時期だからあえてこういう風に提灯を出してるのかも知れないけど……なんかあの世に誘われそうだぞ。

「そ、それは多分、ほら私達の様な参拝客がこの時期には夜も来るから、転ばない様に沢山吊して、足下を明るくしてるのよきっと」

「まあ、そう思うことにするか……」

余計な想像しても怖いだけだしな。てか、僕たち以外にこんな時間に墓参りなんてな……居るわけがなくない？　とか思いながら、僕は取りあえず、常備されてる桶に水を汲む。花は持ってきてるし、掃除の為の箒とかは日鞠が持っていざ出発だ。

敷き詰められた砂利道を歩く度にジャリジャリ音がする。それがいつの間にか三人分の足音になり……四人分の足音になり……おかしいと僕達は冷や汗垂らしながら歩いてた。

すると前方にうっすらと灯りが見えた。

「ちょっ！　スオウこれって……」

「いやいや、さまよってるだけだろ、目を会わさなければ問題ない。知らない振りを通すんだ」

コクコクと頷く日鞠。その手が僕の服を摘んでるのがわかる。僕達は、灯りと交差する。その時だった。

「ああ、日鞠ちゃん。やっぱり今年も――」

「「ぎゃあああああああああ！！」」

僕と日鞠は恐怖の叫びと共にそこを離れようとした。だけど更に声は聞こえてくる。

「どこに行くの二人とも？　私よ！　幽霊じゃない、花歌よ！」

その言葉で急に止まる日鞠。服を掴んでるから、僕まで止まる羽目に。てか知り合いか？　まさか幽霊にまで知り合いがいようとは驚きだ。

「違うよスオウ。あの人は死んでない。ちゃんと生きてるよ。私達の早とちりだよ」

「ああ、そう言うことね」

僕達は恥ずかしげに隣の墓へと戻る。てか僕達がお参りする隣がその人達のお墓だった。すると日鞠が親しげに話しかける。

「すみません、幽霊と勘違いしちゃって。でも今年はなんだか大人数ですね？」

そう紡ぐ日鞠に、上品そうな女性（三十代？）が寂しげに墓石を見つめて答えてくれる。

「今年は三回忌なの。だからね。この子が旅立ってもう三年……なんだかあっと言う間だったわ」

なるほど、だから黒服の怪しい人たちがこんなにも。日鞠はそんな話を聞いて「私達にもお参りさせてください」と言った。僕達は手を会わせて祈る。顔も知らない誰かへと。

墓に刻まれた子は、たった六歳の女の子だった。

今は過ぎゆく（後書き）

第二百十四話です。
今回は久々のリアル話です。なんだか比重がどうしてもＬＲＯに傾いていくから、こっち側が少なくなるけど、こっちももっとやりたいですね。まあ今回はもっと交錯予定ですけど。
次回は再び戻ってＬＲＯ内です。サン・ジェルクでの争奪戦が巻き起こる！　かな？
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

灯籠の幻想（前書き）

日鞠とのひと時を過ごし、僕は再びＬＲＯへと降り立つ。そこで僕は思わぬ奴と再開した。だけどそれは、本人だったのか……今になると分からない。まるであれは、灯籠に照らされた幻想の様に、僕の目の前に現れてそして消えたから。

灯籠の幻想

何も言う必要はないと思った。ただでさえ心配かけてるのに、更に余計な心労を増やすだけ。だから僕は、二人で居る間は、ＬＲＯの話はしなかった。

日鞠も何も聞かなかったしね。ただ楽しく、ただいつもの様に、数時間と言う時を過ごしたよ。墓参りの後に、お祭りへ行って、お賽銭とお祈りを捧げた。それから二人で出店とか回りながら、最後には打ち上げられた花火にちょっと感動。

生きてる事の素晴らしさを実感したね。まあ、実際はもっと色々と衝撃的な事もあったんだけど……なんか出会す出店のオッチャン一人一人が、妙に日鞠に頭を下げたり、一体こいつは普段何やって交友関係を広めてるんだって思うじゃん。

まあそんな諸々があっても、基本はやっぱり楽しかったわけだ。良い息抜きには成った。これからまたハードになると思うから、タイミング的にはよかった。

家路についた僕達は、外でそのまま別れて現在に至る。「おやすみ」を言い合って、そして駆けていく日鞠の着物姿の背中を見てると、ちょっと惜しいって思ったな。なんだか有る意味、こっちの方が夢っぽかった印象だ。

まだ頭の奥で鳴ってる祭り囃子がなんだかそんな気を起こさせるよ。僕は自室でリーフィアを手に取る。ヘルメットの様なそのアイテムが、僕をＬＲＯへと誘ってくれる冒険の扉。トイレも歯磨きも済ませたし、早速入ろうか。時間は二十一時五十五分。丁度良い頃合いだ。

その時ふと、そういえば秋徒の奴は……とか思ったけど、まあ無粋だから考えるのをやめた。ＬＲＯでもリアルでも、大人な彼女が出来たからきっと夢中だろう。
日鞠の奴はとっとと寝たかな。あいつ、案外夜に弱いから……ってまあ僕の為に朝食を作る為でも普段は有るんだけど……

「あんまり夜更かしはダメだからね」

とか言われたけど、まあこればっかりはしょうがない。命かかってるから日鞠だって許してくれるだろう。てな訳で、リーフィアを頭に被せてベットへと寝転がる。そして天井を見つめて、ゆっくりと目を閉じた。
さあ、再び冒険の地へ。

「ダイブイン」

その言葉と共に、僕の意識はＬＲＯと言う、夢の世界へ引っ張られる。

光と共に再臨した場所は、ミセス・アンダーソン邸リビングだ。まあ落ちた場所と変わる筈ないから当たり前だけど。
窓から見える空が、今は黒く成ってる。こっちもばっちり夜だな。僕は体の調子を確認する様に、足を床にダンダンと叩き、拳を握ったり放したりを繰り返す。
入った直後はちょっと体がジーンって痺れたりするからね。でも次第に、体の先にまで血が巡る様な感覚と共に、それは無くなる。

「よし。ここからだな」

僕はそう呟いて、周りを確認。だけどなんか誰もまだいない？
もう三分切ってるんだけど。みんな案外時間にルーズだな～とか思ってると、リビングの扉が開いて誰かが登場。
その背の低さから、どうやらテッケンさんだな――とか思ったけどそれは……

「クリエ？」

テッケンさんよりも一回り小さいそのサイズは、モブリの子供のそれだ。それにあの顔も姿も、見忘れるのには早すぎる。引きずる程の白い宗道服……それをマジで引きずってクリエは、リビングに入ってくる。

「おい、クリエ！　お前、一体どうやってここまで？　また逃げてきたのか？」

僕はクリエに駆け寄り、矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。そしてそれに対して、クリエが口を開いた。だけど――あれ？

「……」

口は確かに動いてるのに、それが言葉と成って耳に入ってこない。もしかしてからかってる？　とか思ったけど、いつもと違ってクリエの顔はマジっぽい。
とてもからかってる様には見えない。いつもコロコロと表情が変わるのに、今は一つの顔しかしてないんだ。でもそれは真剣と言うよりも、ちょっと虚ろな感じの様な。僕を見て話してると言うよりも、口がただ何かを紡ごうとしてるような？
なんだか夢遊病っぽいぞ。それによく見たら、なんかクリエの体の周囲が青っぽく光ってる？　見間違いかな？

「おいクリエ！　一体どうしたんだよ」

僕はそう言って、クリエに手を伸ばす。肩を掴んで目が覚める様に、揺すってやろうと思った。だけどその手が届く前に、開いたドアの向こうから人影が見えた。

「ええー！？　あの有名なファザニーってシルク様のお友達なんですか？」

「うん、そうだよ。最初は二人で始めた筈だったのに……なんだか随分差を付けられちゃった感じかな。今じゃあ、ブランドみたく成ってるもんね」

「そうですね。一着作って貰うのに、何十万必要って言いますもんね。私も依頼して新しいメイド服を作って欲しいんですけど……」

それはシルクちゃんと、セラの声。てかファザニーって何？　そう思って一瞬気を取られた。視線をクリエから二人が来るであろう方向へと向けてしまった。

そしてそんな一瞬の内にクリエは消えていた。

「あれ？　クリエ？」

周りを見回してもどこにもクリエの姿はない。

僕がキョロキョロとしてると、シルクちゃんとセラがリビングの前まで来ていた。

「あ、スオウ君。こんばんは」

「あ……あんた……」

普通に挨拶してくれるシルクちゃんとは違って、なんだかセラは

眉をピクピク動かしてる。器用な奴だ。
「ちょっと、居るなら居るって言いなさいよ」
「何でだよ」
訳が分からん。僕が軽くあしらうと、今度はちょっと恥ずかしがるように「聞いた？」と言った。聞いたってさっきの会話の事か？
下手に誤魔化すのも機嫌損ねそうだし、ここは素直に言うか。
「まあ、冒頭位は聞こえたな。二人が帰って来た直後な。それ以降は知らん。てか、フェザニーって何？」
「それは……」
「フェザニーって言うのは有名なデザイナーなんですよ。服とかアクセとかＬＲＯは独自に作れるので、裁縫のスキルとかを上げて行けば、誰もがデザイナーになれます。
フェザニーって人は、その中でも大人気のカリスマなんですよ。洋服を見に行ってたから、そんな話題に成ったんです」
「し、シルク様……」
なるほどね。流石シルクちゃん、分かりやすい。てか、何でここまでセラが恥ずかしがってるのかがわからない。女の子なんだから、服くらい見に言っても不思議じゃないけど。
てか、別にセラの趣味趣向に興味はないから、これ以上深く聞く気もない――って、それよりも重要な事があったんだ。
僕は二人に、再重要人物の事を聞く。
「二人とも、クリエ見なかった？」
「はあ？」
「クリエちゃん？」

二人とも同じように疑問符を頭に浮かべてる様だった。いや、まあ確かにそうなるか。説明が足りなかった。

「そんな、何言ってるのこのバカ？　みたいな目でこっち見るなセラ。別に頭がおかしく成った訳じゃないっての。ついさっきだよ、ここにクリエが居たんだ！」

「頭のねじが飛んじゃった？　が抜けてる」

知るか！　別にそこは重要じゃない。セラの考えた事を当てたい訳じゃないからな。てか、やっぱり酷いなこいつ。まあ今は冗談として流してやるけど……たく、重要な部分に反応して欲しい。

そこはあくまでおまけだ。するとやっぱり期待に応えてくれるのはシルクちゃん。

「クリエちゃんがここにですか？　でもそれって……」

「確かに僕もそんなわけないって思いました。でもあれは、確かにクリエだったんです！」

僕は必死に伝える。あれは見間違いなんかじゃない……筈だ。すると上から階段を下りてくる様な音が聞こえてきた。

これはまさか！　と思い、僕達は階段の元へ駆けた。だけど……

「あれ？　セラ様達何をそんなに慌ててるっすか？」

「お前かよ！！」

僕は思わず突っ込んでしまった。クリエかと思ったら、目が点なエルフな物だからガックリ度がハンパなくてつい。

いきなり突っ込まれて肩まで落とされたノウイは、訳も分からず憤慨してる。

「ちょっと何なんっすか全く！　自分は必死に、情報集めてたんすよ」

へぇ～、やることやってくれてたんだ。僕なんか、幼なじみと一緒に地元のお祭りに行ってきた――なんて言えないな。

なんかちょっとノウイに悪い気がする。まあそれに、聞きたい事はそれじゃないし。

「いや、それは悪かったよノウイ。だけどさ、そっちでクリエ見なかったか？　探してるんだ」

「その子なら、箱庭じゃないんすか？」

そう言って僕をじっと見つめるノウイ。その目がなんだかさっきのセラの瞳と似てるような……試しにあのフレーズを付け足して言ってみるか。

「何いってるんすかこのバカ？　ついに頭のネジまでとんじゃったんすか――とか思ってんなよノウイ」

「なぜそれを！？　エスパーっすか？」

はは、マジで当たるとは。こっちがその思考回路にびっくりだよ。上司共々、失礼極まりない奴らだな。しょうがないから、ノウイにもさっきの事を……って思ったら、今度は再び玄関の扉が開く。まさか、今度こそ！！

「やはり良質な武器を作るには良質な材料が必要なのは自明の理でな――」

「いやいやそれはどうだろうか鍛冶屋君。弘法筆を選ばずとも有るように、達人なら材料に関係なく石ころからだって名刀を生み出すべきとは思わないかい？

まあ無謀すぎるけど、そこまで行くことが究極じゃないか」
「……確かに」

なんの議論を交わしてるんだあの人達は。てか、やっぱりクリエじゃないんだな。いや、どうせそう来るだろうとは思ってたよ。
二人はまだ見てなかったし、そろそろ登場かな～なんて心の隅で思ってた。だけど敢えてその予兆を無視してたんだ。だってクリエの方が重要じゃん。
たく、空気読めよな……とは流石にテッケンさんには言えない。鍛冶屋には言えるけど。すると二人は、廊下に集まってる僕らに気づいた。

「どうしたんだいみんな揃って。スオウ君も居るし、これで全員だね」
「ふん、随分長々とやってた様だが、彼女でも来てたのか？」
「ぶっ！？　いきなり何言い出すんだお前は！　そんなの関係ないだろ今は！」

マジで唐突に余計な事を放り込む奴だな。ほら……なんか真横から、突き刺さる様な視線が投げられてるじゃねーか。どうせセラの事だから「私達が必死に情報収集とかしてる間に彼女なんかと……」とかよからぬ想像を膨らませてるんだ。
そんなんじゃないのに。

「アンタ彼女と宜しくやってた訳？」
「違うっての。日鞠は彼女とかじゃないし……幼なじみなんだよ。それに今日って言う日は毎年、墓参りに行くのが恒例なんだ」

まあ忘れてたけど。一回落ちれて助かったよ。てかなんでセラに変な追求を受けなきゃいけないんだ。

「へえ～幼なじみ……」

とかなんかブツブツ呟いてるし。

「そんな事よりも、テッケンさん達はクリエちゃん見てないですか？　スオウ君がクリエちゃんをここで見たって事なんですけど」

僕達が本題を見失いかけてると、シルクちゃんが後ろからそう言ってくれる。そうそう、さっさとそれを聞かなきゃいけなかったのに、鍛冶屋が余計なことを言うから、忘れてたじゃないか。

まあだけど、案の定シルクちゃんの言葉を聞いた二人は、なんだか疑問符を浮かべてる。シルクちゃん達と同じ反応だな。

「ここにクリエ様が？　それは本当かい？」

「どうせただの見間違いだろ。もしもあのガキがまた逃げたのなら、町中だってもっ騒々しい筈だ。そんな様子は無かったぞ」

「それは……」

まあ確かに、クリエが逃げたりしたら、僕達が真っ先に疑われそうな物だよな。ここに僧兵どもが乗り込んで来てもおかしくはない。

でもそんな様子はないし、街も至って平穏か……二人はやっぱり見てない様だし……こうなると僕の目が自分でも疑わしく成ってくるな。

けど……あれを見間違いだったとは思えないんだけど。僕は強く拳を握りしめる。あれは絶対にクリエだ。そう信じたい。

「あれは見間違いとかそんなんじゃなく、確かにクリエだった。それは絶対で、間違いない！」

僕は強くそう言い放つ。だって間違える筈なんてないんだ。
「だけど誰も見てないっすよ」
「隠れてるのかも知れない、そう言う奴だ」
ノウイの虚偽的な言葉なんて却下だ。するとテッケンさんが僕に味方してくれる。
「スオウ君が見たというなら、探して見るのも良いかも知れないね。どんな可能性だって今は見逃せないよ。僕達が見てないんだから、居るならまだ室内だろう。
それならみんなでこの家を探してみよう」
「そうですね。クリエちゃんが居てくれるのなら、それはそれは良いことですからね」
にこにこで賛同してくれるシルクちゃん。やっぱり僕の味方はこの二人だけだな。
「そうでしょうかシルク様。あの子が居たら居たらで大変な様な気がしますけど……」
「どういう事だよセラ」
僕が鋭い視線を向けても怯まずにセラはさらに続ける。
「ここらへんでお聞きしておきたいんですけど、スオウ以外のみなさんは、あの子を助ける事が正しいとお思いですか？　まあ助けるなんてのも、こちら側の主観だから適切ではないですけど。
ようは誘拐してまで再びあの子を取り戻す必要があるのかって事です。私たちは一応目的を達成してる訳ですよ」
「お前、まだそんな事を言うのか」

それは今更だろう。どう考えても、クリエがこのままでいいだなんて思える筈なんてない……それなのに、ここに来て渋るか。

「大切な事よ。だって私達の役目はもう終わってるわ。これ以上は、国を敵に回す行動よ。そこまでしてもやらなきゃいけなのかって事。それにこれはアンタの為でもあるのよ」

「はあ？　なんで僕の為なんだよ？」

するとセラは偉そうだけど、ちょっと視線を左右にさまよわせながら口を尖らせて呟く。

「アンタ……期限はもうすぐで後四日に成るのよ。実際、あの子に構ってるこの状況が正しいのかって言ってるの」

要するにセラは他の可能性を提示してる訳だな。確かにこの道で有ってる保証なんてどこにもない。けど……ここまでは確かに導かれて来たはずだ。

それを頼りにここまで来たんだろ。僕はみんなの顔を見回す。誰もが確かに不安そうだ。これでいいのかなんてわからないし、間違ってるかもしれない。

それで僕が助からなかったら、きっと後悔するのは協力してくれてるみんななんだろうな。だけど……だよ。

「正しいなんてわからない。だけど今は、何が間違ってるかも分からないだろ。なら、僕は自分の心に従うよ。それを正しい道だと信じて突き進む。

立ち止まってるよりも、余程そっちの方が有意義だろ。正しいか間違いかなんかじゃない。僕はただ、アイツをこのままにしておけないってだけだ！

お前は……このままでいいのかよセラ！」
「私はあの子の事なんてあんまり知らないわ。それに別に何かをされるわけでも無いでしょう」

随分冷めきってるじゃねーかセラの奴。でも、確かに赤の他人の為に時間を使うような奴ではないな。ここら辺は日鞠とは違う。
アイツはなんだって出来るって思ってる奴だからな。救えない物なんて無いって本気で思ってる。そんな奴がずっと隣にいたせいで、こっちにもそれが移ってるのかも。
例えここがゲームの世界でも……余計なことだとしても、それはおかしいんだと思うじゃん。アイツはここではただの子供で、それが自由で居られないってだけで十分だ。

「何かをされる訳じゃないから、孤独でも良い分けない。アイツには帰りたい場所があって、それを本気で望んでる。なら、閉じこめてて良い分けもない。
それはアイツ等の……大人の勝手な都合だろ。保護？　創世歴の覆り？　そんなのは全てクリエには関係ない。訳の分からない物で、勝手にがんじがらめに縛られてるクリエを、このままにしておけないのは、僕の勝手な善意なのかも知れない。
だけど僕は、それでもやる。この道が正しいかでも、この行いが正しいかでも無い。僕がそうしたいからだ！！　まあだけど、それは僕が一番アイツと付き合ったからってのが確かに大きいな。
別の道を探してくれるのならありがたいし、止めはしないよ」

僕の渾身の言葉に何故か頭を抱えるセラ。

「……アンタって、有る意味私よりも強引だと思うわ」

深いため息と共にそう言うセラ。そして周りもなんかクスクス笑

ってる。特にテッケンさんにシルクちゃんに鍛冶屋だな。前々からの付き合いの奴が多い。

「あはは、まあしょうがないよね。スオウ君はこうなったら聞かないからね。あれだよね。誰にも自分の行動の責任を取らせたく無いから、そう言うんだよね？」

シルクちゃんのそんな言葉に、僕はちょっと照れながら言葉を返す。

「別に……そう言う訳じゃないですよ。僕はそんな大層な考えで突っ走ってる訳じゃないです。自分の勝手な行動だって思う方が楽なだけ」

「それで私達を国家レベルの犯罪者にすると……」

犯罪者って……確かにそうなりそうではあるけど……

「だから僕だけでもやるって言ってるじゃん」

「アンタだけに行かせれる分けないでしょう！　アンタは気付いてないかもだけど、私はこれでもアンタのこと心配――っつ！！」

急に口を押さえたセラ。まあだけど遅いな。こっちはちゃんと聞いたぞ。心配してくれてたんだ。それはそれは……うれしい事だ。

すると場がまとまったらしいことを察したテッケンさんが手を鳴らしてこう言った。

「よし、じゃあまずはこの家からクリエちゃんを捜索してみよう」

その言葉に、全員頷いて手分けしての捜索開始。その間にちょっと僕はテッケンさんに聞いてみた。

「あの、テッケンさん達はいいんですか？　間違ってるとか思いません？」

するとテッケンさんは簡単にこういってくれたよ。

「僕やシルクちゃんは多分こう思ってる。君の元へ真実は寄ってくるってね。だからそんな心配はしてないかな。君は心のままに動けば良いんだと思うよ。

それを僕たちは全力でサポートするよ。それを約束してる」

本当に……本当にこの人は……

「ありがとうございます」

僕はそう言うしかなかった。てか、そう言いたかった。何回言っても足りなさそうだけど、言わなきゃ伝わらない。この感謝の気持ち。

本当に僕は、仲間って奴に恵まれてると思う。普通ここまでは出来ないよ。

そして結局は、この家からクリエは見つからなかった。

「やっぱり見間違い……いや、そんな訳は……」

「もしかして生き霊とか？　まあゲームだしあり得ないけど、丁度今はそんな祭りをしてるからあながちでも……」

僕の言葉にテッケンさんがそう続けた。祭り？　そう言えばＬＲＯはリアルと連動して色々と行事が有るからな。この時期の風習で

似たような事をやってるのかも。

「確か『魂送り（こんおくり）』でしたよね？　亡くなった人達を、あの世へ一斉に送る日。そのためのお祭り」

なるほど、それはこの時期らしいお祭りだ。だけどクリエは死んではない……よな？　なんか急に不安に成ってきた。

「急ぎましょう！　なんだかイヤな予感がします！」

「そうですね。私も胸がざわめいてる」

僕達はアンダーソン邸から飛び出した。目指すは箱庭への転送場所（仮）の小屋だ。サン・ジェルクの街は確かにお祭りムードと成ってた。

無数の提灯が妖しく道を照らしだし、周りの水の上には何か蝋燭を灯した灯籠が浮いてる。それが様々な色を放って、とても幻想的に見える。

祭りばやしの笛の音。活気溢れる人混みを、それでも止まらずに僕達は駆ける。そしてたどり着いた目的の場所。

だけど何故か、そこには昼間続いてた道がない。灯籠に囲まれて例の小屋だけが、浮かび上がってた。

灯籠の幻想（後書き）

第二百十五話です。

次回はいよいよ箱庭潜入かな。とうとう国家レベルの犯罪者になることですしょう。スオウ達は無事にクリエを見つけることが出来るのか？　後はまあ、様々な思惑の交錯はどうなるのかって事で。

てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

正攻法で挑む場所（前書き）

たどり着いた昼間と寸分違わない場所。だけどそこにはクリエの所へ続く道がなかった。だけどここでモタモタなんてやってられない。僕には今、頼りになる仲間達が居るんだ。

だからここはノウイの出番。ご自慢のミラージュコロイドで僕達は水を超えて小屋へと向かった。けれど、これで終わりじゃなかった。まだまだクリエへと続く道は、長く険しいようだ。

正攻法で挑む場所

「なっ！？　どうして！」

その場に立ち尽くした僕は、思わずそんな事を言ってしまう。でも言わずにはいられない。だって道が無いんだ。昼間、一度ここに来たときは確かにあったのを確認してるのに……今はその道がぽっかりと消えてしまってる。

あたかもこれが通常の様に……

「これは一体、まさかこんな事になるなんて」

この街を一番理解してるであろうテッケンさんまでもが驚愕を露わにしてそう呟いてる。もしかしてこんな事になるのは今回が初めてなのかも。

僕達が辿ってきたイベントの成果とかさ。だけどそんな思いを否定する様な事を、シルクちゃんが言う。

「そんなに自分を責める様に言うこと無いと思います。ここはこれまでそんなに重要じゃなかったし、もしかしたら夜にはこういう風になる仕様だったのかも知れません。

それを誰も気付かなかっただけ――ってのも考えられますよ」

「確かにここはこれまでイベントでもクエストでもミッションでも使われた事はないが……でもそれでも気付かないなんて……」

なんだか相当ショックなのか、テッケンさんはかなり落ち込んでる。そこまで落ち込む事でも無いと思うけど……別にこんな事では誰もテッケンさんを責めたりしない。

ＬＲＯの街はかなり広いし、全てを把握する事の方が難しいはずだ。するとその理由っぽいことをテッケンさんはポツリと呟く。

「ここは……この国は故郷も同じなんだよ。それなら知っておきたいじゃないか。そうしないと、素晴らしさをちゃんと伝えられないし……」

「別に誰もそんな事頼んでませんよ」

ズバッとシルクちゃんがテッケンさんの言葉を一刀両断した。一番親しいからか、シルクちゃんはテッケンさんにはフランクだ。

冗談を言い合える間柄。けど、テッケンさんがそこまで郷土愛に溢れてたとはね。まあこの人らしいといえば、この人らしい。

でもここで落ち込んでる暇はないんだ。

「テッケンさん、考えようですよ。これで一つまたこの街を知れたと思ってください！」

「それは……まあ良いけど、どうするんだい？　あそこに行けなきゃ、何も出来ないよ」

確かにその通りだな。僕達は遠くで浮かび上がる小屋を見つめる。昼間ならここに道があって、簡単に行き来が出来たのに。

今やあの小屋がとても遠くに見える。だけどそこで意味深な笑いを浮かべる奴がいた。

「ふふっふふふふ……みなさんお忘れじゃないっすか？　自分の『ミラージュコロイド』ならこの程度の距離、目と鼻の先。いや、鼻の穴と穴位に近いっすよ」

「ノウイ……」

なんか意味不明な言葉だったけど、まあ言いたいことは伝わった。

それに確かにノウイの自信は納得出来るものがある。それは自分達の体験だ。
それを鑑みればミラージュコロイドなら確かに、道が無くったってあそこまで行けるはずだと思える。

「確かにノウイ君のそのスキルならあそこまで行けそうだね。ありがとう、ふがいない僕の為に」
「そんな……大袈裟っすよ。それに自分にはこんな事位しか役目ないっすから。全然畏まる事無いっす」

丁寧にお辞儀までしてくれるテッケンさんに向かって、ちょっと照れくさそうにノウイは言った。そして小屋の方を向いて、ご自慢のスキルを発動させる。
夜闇に現れる幾つもの鏡。それらはノウイの意志で動き出す。道が有った筈の場所に、数枚の鏡を直線に並べるノウイ。

まああたかも見えてる様に言ってるけど、実際はかなり目を凝らさないと鏡は見えない。それだけ闇の中とけ込んでる。
この周りの灯籠の明かりのおかげで何とかうっすらとは見える程度。

「よし、これで大丈夫な筈っすよ。この程度の距離なら、三枚も連れねば十分っす。後はみんなも知っての通り、一瞬っす」

自信満々にそう言い放ったノウイ。まあ、自信があるスキルだから当然と言えば当然だ。有る意味、確かにノウイはこれだけって気も……しなくはないからな。
でもこれは、これだけでも十分に価値有るスキルだけどな。ミラージュコロイドには一杯助けられてるしね。先のアルテミナスの時も、そして飛空挺でもだ。

「よし、何が起こるか分からないから、覚悟だけはしとけよみんな」
僕はそうみんなに声をかける。そして各で手を繋ぎ始める。別に手じゃなくてもいいけど、まあ団結を示す意味でもここは手だね。
ノウイに連なる様にしないと行けないから、そうしないしとミラージュコロイドでは飛べない。だから手を繋いでノウイに引っ張って貰おうって訳だ。
「では、行くっす！！」
そう言ってノウイが手前の鏡へと僕達を引っ張って飛び込む。すると一気に視界が流れた。同時にもの凄い勢いが体を襲う。
でもそれさえもほんの刹那と思える時だった。
「ついたっすよ」
そんな声が次の瞬間には耳に届いてる。気付いてみると、僕達がさっきまで居た所が見える位置に居るな。ここはどうやら、あの小屋の屋根っぽい。
ホントに一瞬だった。ちょっと呆気ない位だ。速すぎたから、脳の処理が追いついてない。
「大丈夫っすかみなさん？　誰も振り落とされてないっすね」
「振り落とされるか。てか、何で屋根？」
僕は必死に頭の回転を取り戻して、ようやくそこをつけれた。だって屋根って……入れないじゃんか。煙突なんか無いんだからな。
「それはあれっすよ。だってほら、下には立つ場所がないっす」

「え？」

僕はノウイの言葉の真偽を確かめる為に屋根の上から下の方を落ちないようにのぞき込む。すると確かに、そこには床ってものが無かった。

なんだかこの小屋、浸水しててもおかしくない気がする。

「マジで下は水じゃん。どうやって潜入すれば良いんだよ？」

またしても難問だ。壊せる物ならそれでも良いんだけど……無闇やたらにぶっ壊すのも……な。そもそも町中のオブジェクトは桁違いの破壊力を有してないと壊せない、元々が破壊不可が当たり前の代物だ。

「大丈夫です！」

「シルクちゃん？」

すると今度はシルクちゃんが自信ありげにそういった。そして傍らを飛んでるピクに「お願い」と頼む。するとピクは一鳴きして、優雅に飛んでいくじゃないか。

「おお、これなら！」

成る程、ピクは飛べるからね。それに扉を開ければ、強引なやり方なんて取らずにすむ。なんだか僕達、チームワークが出て来てないか？

そんな事を思ってる間に扉が開く――事はない。あれ？　なんだかピクは扉部分で悪戦苦闘してる。なんだか体を当てたり、一部分を噛んで引いたりを試みてるけど、扉が開かないご様子。

てか、よく見たらこの小屋……ドアノブじゃないじゃん。

「ピク、それはきっと横に滑らせるタイプの物だよ。襖と同じ感覚でやってみて」

確かにシルクちゃんの言うとおり、あれはスライド式だろう。日本の古い家って大抵そうだしな。日本式って事何だろう。

でもそれがピクにとっては大敵だった。なんせスライドドアなんて知らないんだ。だから、理解できないよう。実際ピクってどれだけの学習機能がついてるんだろうか？　謎だな。

屋根の上でピクへの指示に試行錯誤を重ねて、悪銭苦闘する事数分。たまたまカララと衝撃か何かでドアが少し開いた。その隙間を足がかりに、ピクはようやくスライド式のドアを攻略した。

「ふう、大仕事だったねピク」

そんなシルクちゃんの言葉に、一際甲高く鳴くピク。それは仕事終わりの叫びに聞こえたよ。てか、こっちも結構疲れた。

だけどここからが本番だな。開いたドアの向こうに光の類は無い様子……ここはアクロバティックに屋根から室内めがけて飛ぶか。

そんなに難しい事じゃない。けど、僕が真っ先に行こうとしてたら、そこでストップかけられた。

「ちょっと待ったスオウ君。ここからだよ。ここからは何が起きてもおかしくない」

「分かってますよテッケンさん。だからって臆してる場合じゃないでしょう」

別に時間を気にしてる訳じゃないけど、なんかソワソワしてしまう。道がなかったり、ドアをなかなか開けなかったりで、手間取ってるからね。

ついつい先走る気持ちが出てきてしまうんだ。だけどテッケンさんは冷静にこの場の考察を述べる。

「臆する訳じゃないよ。だけど君が真っ先に飛び込むのは止めた方がいいってだけだよ。先陣は僕達が切った方がいい。その方が安全だ。

どんな罠が有るか分からないんだ。突然の攻撃が不可避だったらどうするんだい？　それをまともに受けて、一番ダメージを残すのは君だよ。だけど僕達なら、そんな事はない。

幸いシルクちゃんがいるしね。君と違って僕達は何度だって蘇ることが出来る。それを利用しない手はないだろう」

「それは……まあ確かにそうですけど……」

確かにテッケンさんの言う事は尤もだ。僕が一番ダメージを残すってのもそうだし……罠にはまってしまうのは確かに避けたい所だな。

けど、誰かを犠牲にするような事は心が引けるっていうか……

「何を迷ってるのよ。これは役割と同じでしょ。アンタは死んじゃいけないの。アンタが死んだら私たちの頑張りや努力自体が水の泡なのよ。

もうちょっと自覚しなさい。アンタの盾に成る気はないけど、安全確認くらいはしてやるわよ」

セラはそういうと、ふくれっ面のまま屋根を蹴った。フワリと広がるロングスカート。そしてその姿が僕達の視界から一瞬消えた。

なんて行動の速い奴。多分テッケンさんが一番に行こうと思ってたんだろうに、セラがあっさりと抜き去ったな。セラは小屋の少しの出っ張り部分とかを上手く使って、体を反転させながら、最後には見事にドアの内側に入り込んだ様だった。

その動作は華麗で流麗、流石セラって感じ。眺めてる分には白鳥みたいな奴ではあるんだけどね～触れ合ってると、色々と痛いんだ。

「セラ君、どうだい？　大丈夫かい？」

「てか、唐突過ぎるんだよお前の行動は。ありがたいけど、いきなりは行くなよな」

僕とテッケンさんがドアの方へ言葉を掛ける。だけど……あれ？　なんだか一向に返事がこない。毒舌も文句も、事務的報告すら何故かセラは紡がない。

すると鍛冶屋がポツリと険悪な表情で呟いた。

「おかしい……何かあったな」

「何かってなんだよ？」

「それは勿論、多分良い想像は出来ないな」

確かにこの状況で良い想像は出来ない。すると今度は目が点なエルフが動いた。

「セ……セラ様！」

「おい、ノウイ！　ちょっとまっ――――」

僕の言葉が終わる前に、押さえきれなく成った感じでノウイはミラージュコロイドを動かした。そして一瞬でその場から消え去る。

僕達は急いで再び扉の方を見た。

「ノウイ！　おいノウイ！？」

必死に呼びかけるも反応はない。まさか……一体どういう事だ？

これじゃあまるでそこには居ないみたいな。

「これは……やっぱり何かあるみたいだね。ちょっと待っててくれたまえ」

そう言って今度はテッケンさんが立ち上がる。

「どうする気ですか？　中の様子確認出来ます？」

「ああ、やってみるよ」

シルクちゃんの問いかけに、自信を見せて頷くテッケンさん。既に二人がどうにか成ってるからな、それを確認しないことには迂闊な行動は取れない。

なんだかあれだな……沢山の明かりがある方から聞こえる祭り囃子の音が、ちょっと不気味に感じてしまう。二人は変な場所へと誘われたんじゃないかってさ。送られる筈の魂に紛れ込んじゃったとか……まあ本当のあの世へ二人が行くことは無いだろうけど……僕ならともかくね。

「テッケンさんも気をつけてください」

「ああ、わかってるさ」

そう言ってテッケンさんは屋根の縁から飛び降りる。クルクルと回るテッケンさんは、扉の上部の縁に手を掛けて、中に入る事無く、その場で停止。

成る程、確かにあれなら安全に中の様子を伺える筈だ。

「どうですかテッケンさん？　セラ達は無事ですか？」

僕のそんな問いかけに、テッケンさんの声はなんだか微妙に重々しく返された。

「何も……見えないよ。セラ君達どころか、中の様子が全く持って見えない。まるで闇が広がってる様な……」

何も見えない？　確かに今は夜だし……明かりも点ってない室内はさぞ暗いだろうけど……周りには灯籠が一杯浮いてる。

それなら、奥は無理でも手前位は照らしてそうな物だけど……

「ちょっと待っててくれ、調べて見るよ」

「調べるって、中へ入ったら二の舞ですよ」

「大丈夫。ここで十分さ」

そう言うテッケンさんは片手で自分の目の部分を隠しだした。一体どうする気？　と思ってると、シルクちゃんが説明してくれたよ。

「彼はスキルを豊富に持ってますからね。きっと千里眼を使うんでしょう。千里眼は基本遠くを見るための偵察用スキルだけど、スキルの熟練度が増していくと、違う物も見えるって聞きます。

だからきっと、テッケンさんはその違う物を見る気何でしょ」

「違う物……か」

この場合は中がどうなってるかって事だよな。千里眼なら、普通の目では見れない物が見えるんだろう。期待出来そうだ。

てか思ったけど、全然警備の奴ら居ないよな。あんなに昼間は行業しかったのに……道が無くなるから安全だと思われてるのか？

でもそれでも一人も居ないってのはね。

まあおかげでこうやって堂々と屋根に居られる訳だけど。

屋根の上で色々と頭を巡らせてると、中を覗き続けるテッケンさんから声が届く。

「見えたよ。だけど……これは……」
「どうしたんですか？　見えたって何が？」
僕は焦り気味に言葉を紡ぐ。あんな奴でもさ、一応は僕だって心配してるんだ。中がどうなってたのか気になる。
「いや、これは言葉のあやだね。見えたのは中の様子じゃないんだ。見えたのは、この小屋には複雑な魔法陣が幾重にも張り巡らされてるって事だよ」
「それって……まさかトラップって事ですか？」
僕のそんな言葉にテッケンさんは「おそらく」と答えてくれた。だけど千里眼でもどんなトラップかまではわからないし、当然解除とかを出来る訳でもないという。
「ようは、飛び込んでみるしか無いって事ですか？」
「そうだね。セツリ君達を助けるにはそれしかないかも知れない」
屋根の上に残った三人の間で、僅かな沈黙が流れる。生ぬるい夜の風が吹き抜けて、次々と灯籠をこの場所へ誘ってるような……
「どうするんだ？」
そう紡いだのは鍛冶屋。だけどどうするか、か……そんなの決まってる。
「行く！　ここで引くなんて選択肢はない。罠だろうが何だろうが、乗り越えて行けばいいだけだ」

そう言う事。正攻法でぶち破ってやろうじゃないか。それに既にセラ達は罠に飛び込んでるしな。放っておく事なんか出来ない。

「よし、じゃあ行こう！」

そう言ってテッケンさんが扉の内側へと消えていく。そして次にシルクちゃんとピク。

「遅れるなよ」

そう紡いで鍛冶屋が続く。僕は必然的に最後と成った。良し、僕もさっさと行くかな。そう思って屋根の縁に足を掛ける。

するとその時だ、何か……何かを背後に感じた。僕は首を捻って背後を見る。するとそこにはまたもアイツがいるじゃないか。

「クリエ？　どうして……いや、何で？」

流石にちょっと不気味だぞ。屋根の反対側にクリエが佇んでる。音もなく、体をやっぱり青い光に僅かに包まれて……そしてやはり虚ろな表情だ。

あれは本当にクリエなのか……二回目ともなると怪しく思えてくる。

「クリエ……か？　本当にお前何だよな？」

僕はそう呟きながら、体をそちらに向ける。複数の灯籠の明かりと、クリエ自身の光でなんだか、おかしな場所へ紛れ込んだ様な感覚が起きるな。

実はもう罠にハマってるとかさ……だけどこうやって向かいあってもどうにも成らない。僕は僅かにクリエへ向かって歩進める。

すると

「――――――

室内って言うよりも通路っぽいし。いや、明らかにこれは通路だろ。
なんか洞窟の様な場所なのか？　薄暗いけど、見える程度にはなんか明るい――

「あっほら、スオウ君が到着してますよ」

って思ったらこれはこの場所の仕様じゃなく、どうやらシルクちゃんの杖の明かりらしい。それに良く見たら、みんないるし。

「遅れるなと言っただろう。何してた？」
「別に、ちょっとクリエとな」

そう言うと鍛冶屋の奴は「また妄想か」とか言いやがった。けど、今は何もいえないな。あれが妄想とは思えないけど、何かって言われても答えれないし。

「またクリエちゃんに会ったんですか？」
「ええまあ、でもやっぱり前回と同じですね。ちょっと目を閉じた間に消えてました」
「ねえ、それってやっぱり……幽――フガッ！」

僕はあからさまに不気味な声を出そうとしたセラの口を押さえつける。不謹慎な奴だ全く。

「それ以上言うなよな。てか、ここは？　何でこんなダンジョンっぽい所に居るわけ？」
「どうやらこれがあの罠の正体みたいだよ。僕たちは問答無用でこの空間に飛ばされたって訳だね。まあだけど、ここはどうやら普通に存在するダンジョンでは無いみたいだ。
地図にもないし……もしかしたら、あの部屋の空間をねじ曲げて

作ってあるのかも知れない。それならこの先はクリエ様の所へ続いてるのかも知れないよ」

成る程……そう言う事か。なら取りあえず進むしかなさそうだよな。なんかもの凄く湿気っててベチャベチャした所だけど、テンション上げて行こうじゃないか――って思うと、地面がウネウネ動き出す。

そしてなんだか泥の塊みたいなモンスターが登場した。

「なんだこれ！？」

「ああ、こいつはさっきから何度も出てきてるわよ。アンタが来るまでに、既に十数体は倒したわ」

ようは幾ら倒したって意味ないって事かよ。ダンジョンっぽいとは思ったけど、やっぱりダンジョンなんだな。

「全員揃ったし、ここに止まる必要はない。進もう！！」

テッケンさんのそんな言葉に僕達は頷きあう。ぬめる地面を蹴って前へ。モンスターをけちらしながら、暗い通路の奥を目指す。

この先にきっと、クリエが待ってる事を信じて。

（待ってろよクリエ。今、行ってやる！！）

正攻法で挑む場所（後書き）

第二百十六話です。
やっとで動き出したスオウ達。だけど最初から問題発生です。だけど困難を乗り越えてこそ、辿り着いた時の達成感は大きいはず。てなわけで、スオウ達は諦めずに進みます。
途中でちょこちょこ出てくるクリエは何なのか！？　とかもあるけど、まだまだ先は続きます。
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

薄暗い閉ざされた道（前書き）

僕達は箱庭へ続く（？）であろう道を進みだす。罠だけど、この道を行けばそこへ辿りつけると信じてだ。薄暗い道は単純だけどただでは進めない仕様になってるようで、かなり苦戦することに……しかも最上部には謎と共におかしな宣告があったんだ。

薄暗い閉ざされた道

随分と湿気ったダンジョンを僕たちは走る。現れる泥の塊の様なモンスターどもはそんな強さじゃないけど……かれこれ走り続けて十分位……なんだかおかしいと僕は思い始めてる。

変わらない道がずっと続いてる。ちゃんと進んでるのか、疑わしいんだ。さっきから横にそれる道が一本も無いって流石にそれはおかしくないか？

「なあ、これって僕達進めてるのか？　さっきから代わり映えしなさすぎるんだけど」

僕は現れたモンスターを相手にしながらそう紡ぐ。するとみんなも同じ様な事を思ってたらしく、直ぐに言葉が返ってきたよ。

「確かに……これはちょっと異常だね。何かを僕達は見落としてるのかも知れない」

「だが、ずっと一本道だったぞ。勿論横道には誰もが気を付けてた筈だ。それなのに誰も気づかないなんてあり得ない」

テッケンさんの言葉に、鍛冶屋がそんな事を被せて来る。だけどまあ、そうなんだよな。僕達は全員、この道を駆けながら横道の存在に気を配ってた。

だって薄暗いからな。見落とさないようにみんなで気を付けて進んでた筈だ。それなのに誰も気づかないなんて事は無いと思うんだよな。

僕は泥の塊のモンスターを一刀両断しながら考える。何かあるんだとは思うけど……

「このまま進んだって、ずっと同じ様な感じで、この罠から出られる事は無い気がします。どうにかして隠されてたりするんじゃないですか？」

僕のそんな言葉に、おのおの担当してたモンスターを切り伏せて通路の先を見つめる。そんな遠くまでも見えないけど……この先は同じ様な気がして成らない。

それにあんまり先が見えないからこそ、そう思うことさえも疑わしくなってこれまで結局走り続けたけど、流石にここまで来たら疑わずには居られない。

「確かにそれはあるかも知れないです。けど、この通路がずっと一本道だから、もしかしたらもう少し進めばって気もずっとあるんですよね」

「まあ確かにそうだけど……それこそこの罠の狙いなんじゃないかな？」

思案顔するシルクちゃんに僕はそう告げる。もしもこの道がただの真っ直ぐな一本道じゃなく、少しでも歪曲してるのなら、もしかして円状に成っててずっと回ってる？　とかを直ぐ疑うんだけど、真っ直ぐだからこそ、僕達は進んでる筈だと思わせられてると思うんだ。

この罠は人の「もしかしたら」と言う身勝手な可能性を上手く付いてる。もう少し進めば……後少し……と僅かに期待してこれまで走ったんだからな。

「小賢しい事をしくさってくれるじゃない。ちょっとノウイ、アンタミラージュコロイドで一人で先行してみなさい。一人でモンスタ

ー引っ張っても良いから。
アンタの回避能力ならあの程度の敵の攻撃幾ら増えたって当たらないでしょう？　行けるところまで行きなさい」
「了解っす！！」

いきなりそんな無茶な命令をされたノウイ。だけど随分とノリノリだ。まあ確かに、これがどういう物かを迅速に確かめるにはそれがいいんだろう。
ノウイは単身で敵地のど真ん中に潜入しても、生還出来る確率はここの誰よりも高いだろうし。無茶っぽいけどセラの判断は的確なのかも。
ノウイは早速ミラージュコロイドを一直線に展開させて消えた。その速さたるや……ほかの追随を許さない物があるね。
僕もかなりスピードある方だと自負してるけど、雷速とどっちが早いか……

「てかさセラ、こんな事したらノウイの奴はどこまでも進むんじゃない？　かなり僕達と離れるぞ」

アイツ調子に乗ってどんどん進みそうじゃん。まあ一本道だし迷うことはないと思うけど、それでも生還出来るとセラは踏んでる様だけど、その間に出会したモンスター全部引っ張って帰ってくるんじゃね？
アイツ基本戦闘は貧弱の極みだからな。けど僕のそんな質問、セラはあっさりとこう言った。

「私の考えが正しければ、離れるなんて事はないわ。だって多分、このダンジョン百メートルもきっと無いわよ」
「は？」

僕がそんな間抜けな声を出すのと同時に、後方から今し方前へ向かった筈の声が聞こえた。

「うわっとっとっと……っす。あれ？　どうしてみんなが前に行るっすか？」

「いや、それはこっちの台詞だぞ」

なんで後ろから現れるんだよ。するとこの光景にシルクちゃんがフムフムと頷いてこう言った。

「なるほど、これでセラちゃんの言ってた事が証明された訳ですね。どうやら私達は同じ通路をずっと走ってたって事ですか。

薄暗い通路……変わらない一本道……そしてただ延びる直線が続く理由はこういう事だったんです。私達はたかだか数十メートルの短距離走を延々とやってたのと同じって事です」

みたいだな。どうやら、この薄暗さを利用してある程度の距離を繰り返されてたみたいだ。スタートからゴール、そしてスタートへ戻されてたって訳か。

「カラクリはわかったけど、じゃあどうすれば良いわけだ？　横道なんてやっぱ無かったって事じゃん」

「隠されてるのなら、僕が見つけるよ。千里眼を発動させてもう一度進もう。そうすればおかしな所をみつけれる筈だ」

確かにそれは頼もしい。そうと決まれば僕達はもう一度、この通路を進むことにした。念の為にこの場所には目印のアイテムをおいてね。

そしてものの数分で目印の場所まで到着。

「……どうだったんですかテッケンさん？」

なんか聞く間でもない気がするけど、一応聞いておこう。

「異常は無かったね。あの小屋にあった魔法陣も見えなかったよ。どうしたものか」

やばいな、僕達は結構テッケンさんの千里眼に期待してたんだけど……何も無いってそれありかよ。ゲームなんだから、こういう罠も出れる様に作ってある物じゃないのか？

「道は隠されてないって事ですよね……じゃあやっぱりどこかに見落としがあるとしか……」

「でもシルク様、私達も何度も見直してます。これ以上見るところなんて……」

確かにセラの言うとおり何だよな。僕達だって何度も注視してみてる……何か見落としてあるとしても、これまで見た物の中にそれがあるとは思えないな。

そうこうやってる間に、再び現れだしたモンスターども。地面からモコモコと出て来やがって、そろそろ自分達じゃかなわないとわかってほしいな。

ただのモンスターにそれは難しいんだろうけどさ。だけどそれを見て、セラがこんな事を言う。

「もしかして、このモンスターに何か隠されてるとかは？　倒す順番があるとか」

「はあ？　どんだけだよそれ。こいつらさっきから出てくる多さもバラバラだし、それに特徴も無いぞ」

全部ドロドロした外見だよ。数は五体から十体まで時々によって違うし……倒す順番なんて無謀だろ。せめて色でも違うなら、その可能性だってまだあるかもだけど……今の状態じゃ順番なんてどうやっても導き出せない。

「確かにそれはちょっと厄介過ぎるよ。もっと単純なことを僕達は見逃してるんじゃ無いのかな？」

「じゃあ単純な事って何ですか！？」

怒りながら言葉を返すセラ。流石にこれだけ同じ事の繰り返しじゃ、セラじゃ無くても怒りたくなるな。それにもう単純な場所は確認しまくった筈だ。

通路には何もないし……それなら確かに後はこのモンスター位しか。

「何でもいいから、何かおきやがれ！！」

僕は愚痴をコボしながら、ニ体の敵を同時に切り伏せる。溢れ出る泥の噴射。そして溶ける様にモンスターは消えていく。

結局何も起きずにみんな撃退出来てしまったようだ。どうしようもねえなこれじゃあ。

「ん？」

するとその時、頬に水が落ちてきた。いや、これは泥水だな。さっきのモンスターの名残か……そう思って上を僕は見る。すると……

「なるほど。そういう事か」

僕は思わずそう呟いた。そして僕のそんな言葉に、みんなが反応

した。

「どうした？　何か見つけたか？」

「ああ、どうやらテッケンさんの言ったとおり、ようは単純だったみたいだな」

そういって僕は、天井を指差す。するとそこには天井の隅の方に斜め上に向かう穴が空いてるじゃないか。

「あ！」

「はは……確かにこれは単純だったね」

「ええ、でも単純だから見落としてたみたいです」

ほんと、うまく人間心理を突かれたな。僕達は横や下ばっかり見てたんだ。人間自分達の視界よりも上は見落としやすいっていうけど、まさにその通りだな。

まあ今回は色々と上を見せない様に工夫もされてた。モンスターは下から出てくるし、なんと言ってもこの薄暗さだ。前を見ることに必死だった僕達は、上なんて気にも止めて無かったわけだ。

「まあだけど、これで進めるんだし、早速行きましょう！」

「スオウ君は最後だよ。言っただろ」

「はいはい」

テッケンさんに釘を刺された。別にこの程度の敵なら問題なんて無いのに。

「階層が一段上がる事にモンスターの強さは上がる物だよスオウ君」

「まあ、それはわかりますけど」

でも突然超強くなるわけでもないよな。せいぜい二～三レベルが上がった程度だろ。レベルの概念はＬＲＯには無いけど、だいたいんな感じだ。
だからまだまだ平気だけど、テッケンさんは許してくれない。ノウイのミラージュコロイドを穴へ向けて設置して、次々と上階へ。僕は結局最後だったよ。

「なんか上の方は足下がしっかりしてますね」

下の階の様なドロドロじゃない。固まった地面だ。これは動きやすくていいな。まあ薄暗い事に代わりはないけど、今度は上も注視するし、さっさと進める筈……だった。

――十分後、僕達は上の階の広さに今度は圧倒されてた。上にも注意しよう……そんな必要無いくらいに、この階は分岐が多いんだ。
あちらこちらに穴が空いてやがる。

「これって……まさにさっきと真逆の状態ですよね」
「そうだね。いやな作りをしてるダンジョンだね」

僕の言葉に、テッケンさんがなんとも辛そうに答えてくれる。一応上も怪しいからずっと気にしては居るけど、そうすると首が痛いんだ。
それにやっぱりモンスターも強くなってた。ドロドロの奴じゃなく、ここにいるのは土を固めた様な奴だ。ちょっと強度が増してる。
まあ基本雑魚だけど。

「ちょっと、これ全部確認してたら幾ら時間が空っても足りないわよ。てか、本当に出口なんてあるんでしょうね？」

「いや、これはゲームだぞセラ。出口が設定されてないゲームなんかあるかよ」

それは世に言うクソゲーって奴だろ。出口がない訳ない。けど……流石にこの分岐の多さは見つかる気がしないな。

「これだけ通路が分岐してたんじゃ手分けするのも危ないですしね」

まさにシルクちゃんの言うとおりだ。これだけ複雑で暗いと、一度分かれたらもう一度合流出来る保証も出来ないよ。

「テッケンさん、どうにか出来ないですか？　その便利な目で」

僕はそういってテッケンさんへ話をふる。便利な目って言うのは千里眼だよ。それに他にも使えるスキルがあるかも知れない。

だけどテッケンさんは険しい顔してこう言うよ。

「すまないスオウ君。まだ僕の千里眼は、違う能力を同時には使えないんだ。遠くを見るのならそれだけで、透視するならまたそれだけ。実際あまり使い勝手が良いとは言えないよ」

「そうですか」

まだって事はスキルの熟練度が上がればその内、並列して使える様には成る様だけど、テッケンさんはまだその域じゃ無いって事か。

透視＋遠くまで見渡せるのが一緒に使えるのなら、このダンジョンも動かずにどこをどう行けばいいのか、わかったかも知れないのに残念だな。

まあ出来ない事を責める訳には行かないけど。でもこのまま普通に進んでて、何かがあるのかすら不安なんだよな。

下の階じゃ結局ハメられてた訳だし、ここもただ単純に進んでる

だけじゃ出られないんじゃ無いかって……そう疑うと、なんだって思えてくる。
そうなるとさ、足が止まりそうに成ってしまう。
「あの～、さっきから思ってたんすけど……」
「どうしたんだいノウイ君？　気付いた事があるなら、遠慮なく言ってくれ」
出会したモンスターを先滅させてると、申し訳なさそうにノウイが声を出した。まあアイツ戦闘に成ると途端に端っこに隠れるからな。
基本何もやらないから、その態度は殊勝だな。でも戦闘中に気を散らせてまで言葉を出したって事は、それだけの事に気付いたって事なのかも。
「あのっすね……どうしてさっきからそのモンスターは倒されてもオブジェクト化しないんすかね――って事がちょっと気になって」
「ん？」
そうだったっけ？　確かに足下を見てみると、倒した筈のモンスターの破片があるな。普通は消滅して消えてしまって、その場には出現したアイテム位しか残らない筈なのに……言われて見ればおかしいことかも。
残骸にしか見えなかったから、気にして無かった。
「それにっすね。このモンスターの出現場所は、さっきから決まって、分岐が六つ以上に成る場所っす。ちょっと広く成ってるからかも知れないっすけど……でも自分にはそれだけには思えないっす」
「確かに……そうかもな！！」

僕は泥を固めて形作られた、無骨な人形の様なモンスターの攻撃を避けながら、懐へ入り胴体を一刀両断してやる。するとＨＰが無くなったモンスターはバラバラと崩れさる。
だけどその破片は……地面に落ちると極端に少ない様な？　するとその破片をセラが数個拾い上げた。

「これって……パズルか何かかしら？」
「組み上げると何か出来るのか？」

一体何が？　やっぱり明らかに破片としてはおかしいそれを、僕達も拾って色々と眺めてみる。

「でもこれ……組上がりそうに無いような……どれもこれもハマりませんよ」

確かに……ってちょっと待てよ。良く見ると、なんか破片の中に変な模様？　絵？　が入ってるのがあるような。

「みんな、全部の破片を一カ所に集めてくれ。そして探すのは、これと同じ様な何かしらの模様が入った奴だ！」

そしてそうやって捜索開始だ。すると結構早く見つかった。まあ破片は一体から、五個くらいしか出てないからな。みんなで手分けすれば早いよ。
てか、見つかった同種の物はたった三つ。これは随分と単純なパズルに成りそうだ。その三つを表面の模様を元に組み上げる。
するとできあがったのは、単純な球だ。

「何でしょうこれ？　どこかにハメたりするものでしょうか？」
「そう……なのかな？」

いまいち何なのかわからないんだけど……確かにその線はあるよな。すると鍛冶屋が何かに気付いた様にこう言った。

「なあスオウ。それってもしかしてこれにハメるんじゃないのか？」

そう言って鍛冶屋が指し示す物は通路の端っこにある四角い物体。あんなの今まで気付かなかったな。一際暗い場所にあるからかも知れないけど、失態だなこりゃ。

確かにその四角い物体の上面には丁度この玉が入りそうな穴が空いてる。

「じゃあ、入れてみるよ」

僕はみんなの了承を得て、球体を穴へと入れた。すると途端にこのダンジョン自体が揺れ出す。

「うお！？　なんだ？」

「何か起こるのは、正解って事でしょ」

「そう言うもんか？」

新たなトラップが発動したりもすると思うけど。まあ今は、これで正しいと願いたいものだ。そして穴に入れた球体から光が漏れ出す。

それは刻まれてた模様と同じ様な光だ。それらが次第に地面を伝い全体へと広がるような……するとそれに伴って揺れも激しさを増していく。

「おい！　これってなんかやばく無いか？」

「確かに激しすぎ――っつ！　舌噛んだ……」

余りの揺れの激しさに、まともに立ってられない状態だ。セラが舌を噛んだのも仕方ない激しさ。すると目の前の穴の二つが崩れ道を塞いだ。
激しい音と、大量の土埃が蔓延する。
「ゲホッゴホッ……これって」
なんか遠くからもどこかが崩壊するような音が聞こえてくる。僕は可能性の一つを言ってみる。
「つまりは外れの道が塞がれたって事でいいんだよな？」
「でしょうね。ケホッコホ」
次第に晴れていく土埃。閉ざされた道は二つだけ……まだ後四つ程残ってるな。これまでの所でも同じ様な事が出来たのなら……もっと絞れるのかも知れない。
もしかしたら、これをやらないと攻略出来ないダンジョンなのかも。
「これまでに何回出会したっけ？　モンスターとは？」
「五回くらいすっかね」
「それじゃあそこでもこれと同じシステムがあったって事だろ。急いで戻ろう！」
僕はそう言ってみんなを促す。攻略方法がわかったのなら、モタモタなんてしてられない。みんな異論もあるわけ無いよな。
僕達は来た道をなんとか正確に戻ろうとした。だけどもそうは問屋が卸さなかった。さっきので崩れた道がある意味で僕達の通路も塞いでたよ。

でもそれでも、複数の分岐を走り尽くして、なんとか再びモンスターに出会す。まあどうやら、そこに至る道が塞がれる事はない様だ。

「よし、一気に決めるぞみんな！」

「「「おう！！」」」

光が見えてきたからか、みんなの気合いの入り方が違う。閃光の如き速さでモンスターを駆逐すると、早速パズルに取りかかる。

今度はさっきよりも完成に掛かるピースが多かった。だけど無事に球体を完成させて、再び外れの通路を塞ぐ。分かってるだけでも、後これを三回か。

場所によってパズルは増えたり減ったりした。最後にやったのなんて、球体の内面部分もあってかなり複雑だったよ。

最短はたったニ個のピースだったけど……難易度がそれぞれ違うみたいだった。でもなんとか正しい道を僕達は導き出せた。

「お手柄だよノウイ」

「そんな、たまたまっすよ。戦闘は出来ないから、偵察の癖で良く見てただけっす」

そう言って謙遜するノウイ。だけどマジで助かったよ。いつまでもこんな場所で右往左往してる訳にはいかなかったからな。

僕達は正解の正しき道を進んで、上段へ続く階段を見つけた。

（まだ上があるのかよ）

とか思ったけど、迷ってる時間はない。僕達は速攻で上ったよ。するとそこはこれまでの狭い場所じゃなかった。なんだか無駄にだだっ広い場所だ。

そしてその中心に、何か倒れてた。それこそ無駄に大きいその何かは……見たところ今まで出てたモンスターの巨大バージョンみたいな……でも、どうして既に倒れてるんだ？
これも罠か？

「気を付けて、油断禁物だよ」

そう言ってテッケンさんがみんなに声をかける。僕達は頷いてそいつに歩み寄った。だけど……ＨＰを見てみると既にゼロ……やっぱり罠じゃなくただ倒されてるだけみたいだ。

「どういう事でしょう？　私達以外にもここを誰かが通ったって事でしょうか？」
「そうとしか考えられないけど……でも、こう言うのはボスが倒されてそのままって訳は無いと思うけど……」

確かにその通りだよな。なんか今は、これまで以上にゲームをしてるって感じが強かったから、これはなんかおかしいと思える。
ラッキーかも知れないけど、釈然としないよな。それにこれって……どこに出口が？　ボスを倒しての強制転送だったら、僕達ここから出れなく無いか？

そんな事を思ってると、何か大量の足音が聞こえて来る……様な。そしてそれと同時に、ダンジョン中にアラーム音が響きわたった。すると更に、今度は全員のウインドウが表示されて、こんな文章が現れる。

【このダンジョンの目的意識変更要請。ダンジョン内を隔離纖滅モードに移行します。これ以上の箱庭への侵入は何を持っても不可能です】

そして暗闇から現れるのは、僧兵の服に身を包んだ大量のアンデット。それはまさに死を与える軍団だ。

薄暗い閉ざされた道（後書き）

第二百十七話です。

一体どういうことなのかは、まあ次回で。多分説明できるでしょう。それにボスが倒されてた謎も。攻略不可になってしまったダンジョン。死しか待ち受けてない場所で、スオウ達の運命は！？

てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

閉ざされた箱の中で（前書き）

僕達の前に迫る大量過ぎる敵。そして告げられた最悪の宣告。それはどれも信じたくない事ばかりだ。だって出口は多分そこだった。苦労してここまで来たのに、何故か出口その物を奪われた。

何が起こってるのか分からないまま、僕達は閉ざされたダンジョンで勝利の無い戦いが始まる。

閉ざされた箱の中で

「おいおい、何だよこれ……洒落に成ってねーぞ」

僕は思わずそんな声を漏らす。いや、これは実際信じられない。てか、理解できないぞ。一体全体どういう事だ？　ウインドウに現れたおかしな通知を見て、困惑してるのは僕だけじゃない。

「なっ……こんな事って……目的意識変更要請？　これじゃあ、このダンジョンは事実上攻略出来なくなったも同然じゃないか」

「そんな！　それじゃあ私達の今までの努力は何だったんですか？　それに纖滅って……とてもイヤな予感しかしません」

テッケンさんとシルクちゃんも当然ながら動揺してる。実際こんな通知そのものが、間違いだと思いたい位だよな。

攻略出来ないダンジョンなんてあって良いはず無いだろ。これはちゃんとした仕様なのか？　でも進めなくなる仕様なんて、ある意味もう反則としか思えない。

「シルク様、奇遇ですね。私はあの大量の敵が怪しいと踏んでますよ。ふ……ふふふ、ここまでやらせといて攻略不可？　取りあえずあいつ等全部倒せば、システム覆りますかね？」

なんかセラだけがシステムに対して切れてるぞ。喧嘩売ろうとしてるじゃん。でも流石に無謀だ。このだたっ広い空間の端から端までを不気味に行進してくるモンスターの数は圧倒的。

それこそ反則なまでの多さだ。これはまさに通知通りに、攻略させる気が無いとしか思えないふざけた数。奴らの不気味な灯りを光らせる目は僕達を既に捕らえてるし……ここにいつまでもいるのは

やばいかも……けど、どこに逃げたって出口なんて用意さえしてないんだよな。

「奴ら何かを構えだしてるぞ。そろそろ一斉に攻撃がきそうだ。どうする？　逃げるか……それとも玉砕覚悟で突っ込むか？」
「に、逃げるのも突っ込むのも無謀っす！！　このダンジョンには逃げる場所なんて無いっすし、あの数を相手にすれば確実に全滅っすよ！！
　システムが断言してるんすよ！　これってどうやったって、自分たちはここで死ねって事じゃないっすか！」

　険しい顔つきでモンスターを睨む鍛冶屋は、まだ戦意を失って無いようだけど、ノウイは既に諦めモードに入ってるな。べそかいた様な顔してるよ。
　具体的には点な目が、今はバツ印に成ってる。なんて分かりやすい奴。けど……実際ノウイが言ったことがシステムの言ってる事……なんだろうな。

　ここから先は行くことを許さない……だから死んでくれ。そう言ってる様な物だ。まあ普通はノウイみたく成るんだろうし……システム側の事はしょうがない……とか思えるかも知れないけど……実際僕だけはそうは行かないぞ。
　いくらＬＲＯと言うシステムのご命令でも、安易に受け入れられない事がある。そもそも僕はそんな都合良く死ねる体してないんだ。

　この通知は絶対に僕以外を想定して言ってると思う。普通にＬＲＯをプレイしてるプレイヤーに向かって、死なんてそんなに受け入れがたい物じゃない……と言う前提の元の通知。
　それにいっその事の思い切ってのこの通知がプレイヤーの戦意を喪失させる物って感じもする。それで死を促すみたいなさ……

「このまま理不尽には死ねない。僕は攻略出来ないダンジョンなんて認めてやらねえ！！」

そう言って僕は通知をゴミ箱へ送ってやった。そして見据えるのは迫り来る大量の敵敵敵。それは勝てる見込みなんて零と同じかも知れない。

けど、こんな……こんな終わり方は認めたくない。いけた筈だ。やれた筈だ。それを勝手に奪い取る権利がシステムにあるって言うのか！？

それにやっぱり、僕はそう簡単に死ねないんだよ。攻略させないから死を選べなんて受け入れられないな。更に言えば、この先で待ってる奴の事も放っておく事なんて出来ないし。

「スオウ君、やる気だね。いや……それは当然か。こんな通知、君が受け入れられる筈もないしね。……微力ながら僕もあがいてみようかな」

そう言ってテッケンさんも前を見据えて気合いを入れる。そうこなくっちゃな。

「私は、元からこうする気よ。別にアンタの為じゃないから。そもそも途中まで広げてた穴を、いきなり閉じるのが気に食わない。不味いからって……それが何よ。こんな理不尽に、私は屈したりはしない！」

セラは勝てないなんて思ってなさそうな気迫があるな。まあそれだけの戦意を保ってくれるのなら頼もしいけどね。

「まあ、最後までつき合いはしてやるさ。なんかどうもきな臭いし

な」
「そうですね。面倒臭がる割には鍛冶屋さんはきっとそう言ってくれると思ってました。今更ここでなんて素直に引ける筈ありません。
それにダンジョンの仕様の変更……これはやっぱりどう考えてもおかしいです」

おかしいのは分かってる。僕からしたらＬＲＯがおかしく無い方が珍しい位だよ。けどシルクちゃん達が言ってるのは、ＬＲＯそのものって訳でも無いのかも知れない。

「ちょちょ、皆さんやる気っすね。これって正式な通知っすよ。確かに自分も納得なんて出来ないっすけど……」

一人躊躇ってるノウイ。だけどそれがきっと普通なんだろう。でも、既に躊躇ってる時間は終了の様だ。不気味な行進音を響かせてた敵がその動きを止めて、手にする杖を一斉に掲げだした。
全部モブリサイズの敵だから、デカい杖を掲げて、ようやく僕達の胸位の位置かなと思える。そんな杖が不気味な光を放ちだし……そして一斉に飛んできた。
空間全体から迫る大量過ぎる不気味な光。けど、その光は幾ら集まってもこの空間を照らす事はない様だ。

「ちょっ！　タンマを宣言したいっす！！」
「そんなの聞き入れる訳ないだろ！　止めたきゃ倒すしかない！！
てか、モブリだからアンデットでも魔法主体の攻撃って訳か」

なんてやっかいな。遠距離からなぶり殺しにする気らしいな。今はなんとか避けれてるけど、こんなのいつまでも避け続けられる数じゃない。こっちも打ってでないと……

「スオウ君、彼らはモブリであるアンデット……それを活かす形らしい。なら……魔法に徳化したモブリの弱点を突こう！　接近戦だ。いけるよね？」

テッケンさんが降り続く光の雨の中、僕へ向かってそう言ってくれる。僕は当然こう言うよ。

「当然です！！」

その言葉と同時に、僕とテッケンさんは飛び出した。そしてどうやら、それに続いて鍛冶屋とセラもついてくる。僕達は不気味な光をかわし、そして打ち落としながら敵モブリへ突っ込む。

「「「うおおおらあああああああああ！！！！」」」

僕とテッケンさん二陣の奮迅が敵のどてっ腹に風穴をあける。そんな僕達を狙う敵を、後から続いた鍛冶屋とセラがフォローしてくれる。

見事な連携で、最初の一手は上手く行ったな。そしてこれだけの密集地帯なら、奴らもそう易々とは撃ってこれない――

「うん？」

ドビュンと、僕の頬を何かが掠めた。いや……既に何かなんて言い方は必要ないか。どう考えてもさっきの怪しい光だ。

それが前にあった別の奴の杖を粉砕して、死角から飛び込んで来たんだ。

「おいおい……マジか――よ！？」

近さと容赦なさが半端無い。更には視界を遮る物が近さでうざったいせいで、避けきら――――無い！！

「づあああああ！！」

「鍛冶屋！」

最初に吹っ飛ばされたのは大鎚を振り回す事も出来なかった鍛冶屋。大量の光を受けて、後方へ鍛冶屋は飛んでいく。そしてそんな鍛冶屋を狙う様に、更に光が飛んでいく。

「くっそ……」

助けなきゃ……でも、こっちはこっちで自分のを防ぐので精一杯だ。このままじゃ鍛冶屋はやられる。

「やらせはしない！！」

するとそんな声と共に、テッケンさんが動いた。小さな影が、まるで続く様に動き出したかと思うと、全ての光を避けて瞬く間に鍛冶屋の前に駆けつける。

そして四人に分かれたテッケンさんが、降り注ぐ光を打ち落とし始めた。

「シルク！　今の内だ！！」

「はい！」

そしてそんな言葉と共に、控えてたシルクちゃんを呼んで、回復をして貰う。何とかこれで……そう思ってると、足に光が当たる。

「っつ！？　――油断した」

体が揺らぐ。足が後方へ流れて、このままじゃ地面に倒れ伏してしまう。そうなったら、一気に光が降り注ぐ事になるだろう。
僕は地面に片手をつく。だけどそこで踏ん張らないで、横へ体を流した。すると直後に元居た場所に降り注ぐ光の雨。なんて危ないんだ。
けどその直後には方向修正して来る攻撃。だけどこの一瞬で十分だ。僕は真っ先に修正された光を切り伏せてその場を飛んだ。そして空中でも二対の険で光を切って、地面に降り立つ。
なんとか……だな。でも一息付く暇もない。

「こいつら……」

セラもそんな事呟いてる。頑張ってるけど、徐々に押されてるのは僕と同じの様だ。まさか接近戦を仕掛けて、こっちが不利になるとはな。
近いせいで逆に避けづらいんだ。奴らは味方も関係なしだしな。きっとアンデットの特性故にだろう。奴らは死なない。ＨＰがない。
それこそ殺すにはシルクちゃんの魔法が必要なんだけど……この数の差だ。シルクちゃんの回復魔法を攻撃に回す余裕がない。本当なら僕達が接近戦で引きつけてる間に……とか思ってたんだけど、鍛冶屋の奴が予定よりも早く吹っ飛ばされるから、そっちにシルクちゃんは回ってる。

「おいおい、随分辛そうじゃんかセラ」
「アンタこそ、さっきは随分危なそうだったわよ」
「うっせえ、あれはワザとだ」
「どんなワザとよ。じゃあこれは私演技だから」
「なら余裕の演技も期待したい所だけど……」
「うるさい」

僕とセラは互いにジリジリと下がって行ってた。実際喋ってる余裕なんてないんだけど……文句でも綴ってなきゃやってられない状況だ。てかお互いに強がってるから「こいつより先にやられるか」って意識が働いてると思う。

どんどん僕達は追いつめられてる。前に出てきた筈なのに、既に半分位押し戻されてるし……更に言えば、これから前へも行けない。

多分これ以上前に居こうとすれば、避けられなくなる。それが分かるんだ。鍛冶屋の二の舞になると不味い。さっきはテッケンさんの獅子奮迅ぶりの活躍でなんとか総崩れしないですんだけど、既にミシミシという亀裂が聞こえてる気は確実にする。

「二人ともまだまだ元気みたいだね」

敵の攻撃に押されながら、鍛冶屋が回復を受けてる場所に次第に僕達も押されつつある中、そんな鍛冶屋やシルクちゃんを守る用に奮闘してるテッケンさんが、なんだか嫌味っぽい事を……

だから僕も一番息づかいが荒くなってる彼に、こう返してやる。

「当然ですね。あれれ、テッケンさんはそんな余裕も無い感じですか？」

「それを言っちゃ可哀想よスオウ。彼は若く見えるけど、ただ小さいだけなのだからね。十代のフレッシュさを、二十歳超えた人達に求めるのは酷なのよ」

おいおい、相変わらずセラはバッサリ行くな。オブラートに包むって事を知らないよなコイツ。僕達は本気でテッケンさんを凹ませる気は無いんだぞ。

てか、そうなったらこっちが困る。これはちょっと相手を刺激してのテンションアップのテッケンさんの気遣いなのに……下手した

らズドーンと気持ちが落ちるわ！
　僕が内心でセラを責めてると、案外マジで悔しそうにテッケンさんはこう言った。
「は……ははははは、逆に二人を心配を掛けてしまった様だね。僕はまだまだ、おじさんには成っちゃいないから安心してくれ。
　こんなの屁でもない」
　そう言って分身共々更に動きにキレが戻った。若さには負けたくないのか？　てか、笑い声が怖かったよ。なんか随分野太く力強かったし……でも、心配は杞憂で何よりだ。これならまだ持つだろう。だけど……
「それはとっても心強いんですけど、この状況は思いだけで切り抜けられますか？」
　僕達は一カ所に押し戻された。そしてそこに向かって一斉の連続攻撃。僕達はこれ以上下がる事も、ましてや、張り付けにされた様な今の状況じゃ、前に出ることもかなわない。
　僕とセラそしてテッケンさんは、後ろで回復を受けてる鍛冶屋と、それを行ってるシルクちゃん二人を守る為に、向かい来る紫色した怪しげな光を落としまくる。
　ある意味今は、避ける事さえ封じられた感じだ。
「それでも、切り抜けないとだろ？　僕達はクリエ様の元まで行かなくちゃ行けないんだ。まあ正確には、君を届けれれば良いとは思うけどね」
「どっちにしたってアンタは死ねないでしょ！？　余計な事を考えてないで、生きる事だけを想像してなさいよ。
　どんな状況だって、それを簡単に受け入れられないのはアンタな

んだからね」

テッケンさんとセラは、それぞれの考えを力強く言ってくれたよ。二人とも、降り注ぐ攻撃に臆さずにちゃんと立ち向かいながら……何とも頼もしい。

僕達の周りは跳ね返し続けてる敵の攻撃を受けて、どんどん穴が大量に空いてきてる。

でも……一向に攻撃が止む気配すらない。幾ら攻撃を防げても、こっちも反撃に転じれ無い今の状況じゃ、僕達にとっては消耗戦でしかない。

確かに僕は死ねないけどさ……このままじゃ遅いか早いかの違いだよ。今の状況じゃ、確実に僕達は押しつぶされる。

幾ら気にしない風にしてたって、この数の差だけじゃない、あの通知にだって僕達は動揺してるんだからな。

「――っつ！」

幾ら落としたかもわからなくなる紫の光。絶え間無く向き合わされるその光が、次第に重く成ってきてる様な気がする。

一個一個への反応も少しずつ遅れが出始める。それは僕だけじゃない。セラもテッケンさんも、実際はかなり疲労が貯まって来てる。

このままじゃヤバい……押しつぶされるのも時間の問題だ。すると後方へいつの間にか居なかったノウイが姿を現した。

ミラージュコロイド？　一体何をやってたんだ。てか、戦闘中はその存在が薄く成るから忘れてた。

「シルク様、やっぱりここにはどこにも出口らしいものなかったっす。てか、ここが一番やばそうっすね。お三方頑張って！」

頑張ってるわ！！　もうこっちは必死で後ろのシルクちゃんとかを守ってるつうの。なんかノウイの奴に言われたら、苛立ちが先に訪れたよ。
てか、知らない間にミラージュコロイドを使って、この広い空間を捜索してた訳か。確かにそれにはノウイは適任だな。
でも、その結果はちょっと芳しく無いよな……出口はやっぱりどこにもないって事みたいだし。

「そうですか。ありがとうございますノウイさん。取りあえず、ミラージュコロイドを階下にまで伸ばしてくれませんか？」
「良いですけど、何する気っすか？　ここに出口があった筈なんすよ？」

確かに……でもあったはずの出口はもう閉じられたんだろ。後ろで交わされる会話がとっても気になるけど……僕たちはその会話に混ざれ無い。僕たち三人が気を抜けば、その瞬間にパーティー全滅に成りかねないからね。
僕は前に集中しながらも、二人の会話をなんとか聞こうと耳を傾ける。

「それはもう使えません。そう宣言されましたし――って、今はそんな事、悠長に喋ってる場合じゃないですよ。取りあえず宜しくお願いします」
「は、はいっす」

なんだかシルクちゃんは何かをする様子だな。取りあえずこの状況を切り抜けられるのなら、それに縋りたい気分だ。

「皆さん聞いてください！」

凛とした声でそう発するシルクちゃん。だけどその時、一際強い光がこの薄暗い空間に灯った。何十人かの攻撃を合わせた様な代物。大きく成ったその紫の光がまがまがしく迫ってくる。

「くっそ！　手が足りな――」

光は直ぐそこだ。これが直撃すれば間違いなくヤバい。でもセラもテッケンさんもましてや僕も一杯一杯で、止めれる奴が誰も居ない。するとその時、僕達の間を影が抜けた。

「どっせえええええいいいいいいいい！！」

振りかぶられた大槌。それは直撃するはずだった攻撃を直前で敵の方へ打ち返しやがった。おいおい、こんな事一体誰が？　って決まってる。

シルクちゃんはヒーラーだし、ノウイは論外。なら後は一人しかいないよな。

「待たせたなおまえ等。真打ちはここからだ！」

そんな事を言いながら大槌を肩に構え直すのは鍛冶屋だ。どうやら回復出来た様だな。随分待たせてくれたよ全く。

鍛冶屋に跳ね返された光は、そのまま敵へ突っ込んだ様で、一時的に攻撃が止んだ。そしてそこを見逃さずにシルクちゃんが声を出す。

「鍛冶屋さんには悪いけど、一時幕引きです！　今の内に急いでミラージュコロイドで離脱しましょう！」

「そうだね。ここは一端退こう」

シルクちゃんの言葉に真っ先にテッケンさんが賛同した。そして僕達も依存はない。だってまたあの状況に成ったら、今度こそ危ない。退ける時に退くことも勇気だよ。

「おおい！　敵前逃亡か貴様等！？」

「うるさい、お前も急がないと蜂の巣にされるぞ！　鈍いんだからな！」

だからこそ真っ先に攻撃食らったんだ。その事を忘れるな。鍛冶屋はこの中でなら平均的な攻撃力は一番だろうけど、その分スピードが落ちる。

それじゃあ奴らの攻撃は防げないんだ。

「あんな奴らに俺の武器が遅れを取るなど……」

なんかブツブツ言ってると、後ろから再び攻撃が再会された。慌ててこちらに走ってくる鍛冶屋。僕は手を伸ばしてその手を取ってやる。

「よし！　良いぞノウイ！」

「了解っす！！」

僕達はミラージュコロイドによって一気に階下へと逃げ去った。

「ぜぇはぁぜぇはぁ……」

流石にあれだけの敵の相手はきつい。でもここで気を抜くわけには行かない。どうせ追ってくるんだろうからな。

「どうする？　逃げ道なんて無いよ。それに今はもう、ここも殆ど一本道だし……」
これじゃあ直ぐに僕達は袋の鼠だ。通路はそんな広さじゃ無いから、一斉攻撃には限度があるだろうけど、あの数だ……倒しきれるか。ましてや、倒すことに意味があるのかも疑問だよ。
あいつ等を倒したって、出口が現れるなんて期待していいのかどうか。

「そうですね。今の状況は私たちにとって不利過ぎます。一回離脱しましたけど、それから策があった訳でもないですし……でも、取り合えずこういうのはどうでしょう？」
「どう言うの？」

僕は息を整えながら、その言葉を返す。すると階上の方から、早くも奴らの攻撃が降ってくるじゃないか。

「早いですね。取り合えず、この先の球体をハメた所まで走りましょう！」

そう言ってシルクちゃんはピク共々走り出す。僕達もそれに続かない訳には行かない。そしてたどり着いたのは、僕達が一番苦戦したパズルをした場所だ。
ここまで余計な道なんて無い……僕達が正解以外の道は潰したからね。

「だけど今は、その正解じゃ無い道が必要だと思いませんか？」

シルクちゃんはおもむろに球体をハメた台座へ手を突っ込む。まさかそういう事か！？

「シルクちゃんそれは！」
「わかってます。これは今までの努力を無駄にすること。だけど一本道じゃ、私たちは追いつめられるだけです！！」

強く断言するシルクちゃん。それは……確かにそうだ。彼女は、最初僕達が憤る程に広かった場所へ戻す事で、可能性って奴を広げようとしてるんだ。

そして彼女の細腕が、穴から球体を引っこ抜く。すると一瞬だけ一際強く光ったと思うと、周りの壁にこの球体と同じ模様が現れて、そして消えた。

それと同時に大きな揺れと共に、塞がれてた通路が姿を現した。僕達はきっと複雑な思いと表情をしてただろう。だけどそんな中、シルクちゃんは、手に残った球体を見つめてこう言った。

「私は諦めてません。絶対にここから死なずに出て見せます。だからそのために、足掻きましょう。それが私達らしいじゃないですか」

フワリと咲くその笑顔が、僕達の心を固めてくれる。そうだな……それが僕達らしい。

閉ざされた箱の中で（後書き）

第二百十八話です。
どうしよう、どうしよう。一体どうやってここを切り抜けるのか！？　てか何が起こったかもわからない状況でスオウ達には極限状態での戦いが続きます。出口がない終わりなき戦いってやつです。
誘われる死という誘い。けどそれを受け入れる事は出来なくて……前に進もうとする者だけが見れるものがあるのなら、それに縋るしか今はないのです。
すみません。木曜日に上げる事は無理になりました。書いては有るんですけど、なんだか建物の回線不良でパソコンがネットに繋がらない。
確認したら復旧に5日位掛かるらしいです。その間更新出来ません。
本当にごめんなさい。復旧しだい上げます。そういう訳です。

裏の裏は表？（前書き）

僕達は球体を抜いて行きダンジョンを元の姿に戻していく。そして同時にどうしてこうなったのかとか、脱出方法とかを考えてた。倒されてたボスクラスのモンスター。ダンジョンの目的意識の改変者。

それらを行ったのは一体……

裏の裏は表？

僕達は元来た道を戻り、次々と球体を抜いていく。それに伴い、ダンジョンは元の姿を取り戻していく。それは複雑怪奇な分岐の連続の難関ダンジョンだ。

だけどこうでもしないと、僕達はあのアンデット共に直ぐに追いつめられてしまう。ようやく正しい道を見つけて、ゴールにたどり着いたと思ったんだけど、これが背に腹は変えられないって奴か。

「え～と、次はどっちでしたけ？　右ですか左ですか？　それともここよりも先の分岐だったかな？」

「「「え～と……」」」

ヤバい、誰もわからなく成ってきてるぞ。まあそれだけ十分に形を取り戻したって事だけど、こうなったら広いに越したことは無いと思うんだよ。

だから最後の一カ所を目指してる訳なんだけど……いかんせん道は複雑だよ。すると後ろから僕達の隙間を縫って紫の光が通り過ぎる。

「ちっ、もう追いついて来やがったか」

そう言いながら後ろを見ると、数体のモブリタイプのアンデットが杖を構えてこちらに向かって来てる所だった。流石人海戦術を使ってるだけあって見つかるのが早いな。

「でも、たったあれだけ……これなら渡り合えます！」

「確かに、やれそうだ」

奴らに苦戦してたのはあくまでもその特性と、圧倒的な数だ。だけど今は張り巡らされた通路に分散してるせいで目の前にいるのは六体位。
あれなら、恐れる数じゃない。僕達は一斉に動き出してた。敵の攻撃をかいくぐり、一気に懐へ飛び込みその武器を切り裂く。

「まあ結局、僕達じゃ上手く倒せないからね。頼むシルクちゃん！」
「はい！　詠唱完了してます！　浄化の光で成仏してください『エルクレイション！！』」

シルクちゃんの杖が魔法陣を浮かべて光る。そしてそれがアンデットの周りの壁にも現れた。そして一際強く光った瞬間、アンデット共は消滅した。
流石効果は抜群だ。

「凄いね。てか、ストックの方は使わないんだ」
「ストック魔法はやっぱりそう簡単には……余裕があるときは詠唱してないと、意外と早く尽きちゃうんですよ」
「ふ～ん、そう言うもんなんだ」

やっぱり一概に便利なだけなんてものは無いよな。てか、実際どのくらいの魔法をピクにストックしておけるのだろうか？そこら辺は僕達把握してないな。シルクちゃんしか知らない事だ。
まあ僕達が知らなくても問題は無いんだけどね。シルクちゃんはそこら辺を上手くやるだろうし。

「切り札ってのは安売りしないものよ。ノウイとかの様な、それだけでしか存在価値が無い奴とは違ってね」
「そ、それはセラ様、あんまりっすよ！！」

「まあ確かにそうだよな」
「スオウ君も納得するなんて最低っす！！」

ははは、ノウイの奴はついついからかいたく成るよね。まあミラージュコロイドだけがノウイの存在価値とは言えない……かな？
酷いとは思うけど、考えてみると他に何も無いような……あながち冗談では無かったか。
僕はポンポンとノウイの肩を叩く。すると明らかに何かを感じ取ったノウイは嫌そうな表情を浮かべた。

「やめてほしいっす」

そう言って僕の手を逃れるノウイ。まあだけど、ミラージュコロイドは貴重だけどね。戦闘が出来なくても、ノウイはミラージュコロイドと言う力で役に立ってくれてる事は確かだし。
それに使いようによっては戦闘でも力を発揮するよ。まあ本人は、自分的には何も出来てないとか思ってるのかもだけど……そんな訳はない。

「てか、それよりもこの抜き取った球体はどうするんすか？　もう必要ないっすよね？」

そう言うノウイの腕は球体で一杯一杯。なんとも邪魔そうだ。でも必要ない……とも言えるかな？

「必要無いなんてアンタが判断しない。一応持っときなさいよ」
「ええ～これ全部、自分一人ででっすか？」
「アンタは戦闘に参加しないでしょ。つべこべ言わないでよ。それとも私に口答え？」

セラがジト～とした視線をノウイへ送る。あれだな、立場を利用する気だなセラの奴。こう言われたら、ノウイはセラに逆らえない。

「いいえ……りょ、了解っす！」

そう言ってノウイは渋々、球体を抱え直す。するとそこでテッケンさんがこんな事を言った。

「わざわざそのまま持っとかなくても良いんじゃないかな？　アイテムとして中に入れれば良いじゃないか」

「ああ～確かにそうっすね」

テッケンさんのアドバイスを受けて、ノウイはウインドウを出す。そして球体を指定してアイテム欄へと納めていく。

「何だって入れられるんですね。ＬＲＯって」

そんな様子を見てた僕はそう言った。アイテムなんて知らない間に増えてる位だから、ああ言うのは入れたことも無いんだよね。最近は金魂水くらいだったけど、あれは重要アイテム。あんな役に立つか分からないのとは違う。

パーティー組んでると、自動的にアイテムが振り分けられるしね。

「石ころだって棒きれだって一応アイテム欄には納められるよ。まあそんな無駄な物を入れとくなんて事は、そうそうしないけどね」

「はは」

確かに石ころとか入れてもな……アイテムはどんどん増えるんだし、その内この容量じゃ足りなく成るんだろう。無駄な事に貴重な容量は使えない。

まあそれを無駄な事に使わせたのかも知れないな……ノウイに。

「おお、この球体意外とちゃんとした名前があるんすね」

そんな事を言いながらアイテム欄を見つめるノウイ。まあ本人がそんなに気にしてないようで安心だ。そもそもセラに言われたら、何だってうれしそうだもんなコイツ。

さて、ノウイも身軽に成った所で僕達は最後の一つを求めて足を進める。途中で出くわした敵は、シルクちゃんの魔法で昇天させていく。

だけどあれだな……本当に出れるのかどうか……それがわからないのが何とも言えない空気を生み出す。幾ら敵を倒しても、勝ってる気にはならないもん。

あの通知通りなら、僕達がまだここにとどまってる事自体が無駄なのかも知れない。今のままじゃ、僕達には勝ちなんて言葉は存在しないも同じだよ。

まあ今はどうにか出来ると信じるしか無いんだけど……そうこうしてるうちに、最後の一個の場所へ僕達はたどり着く。だけど迷ってたせいか、敵の方が早くついてるじゃないか。

しかもこの球体のある場所は、決まって少し余裕のある作りに成ってるから、敵も通路で出会す時よりも多い。ざっとみても十数体。

「先を越されましたね」

「ええ、でもあいつ等は別にここに留まってる訳じゃない様ですよ。少し待てば居なくなるかも知れません」

シルクちゃんの言葉に、セラがそう続けた。確かに奴らは僕達を待ち伏せしてたって感じじゃない。常にウロウロしてるし、敵を倒す為にただウロウロしてるだけって感じだな。

そしてその確実性の為のアンデットって感じ。普通なら、そうそう倒せる奴らじゃないからな。僕達には腕利きのヒーラーが居るからどうにかなってるけど、普通は一体倒すだけでもアンデットは厄介なんだ。

それがあれだけ……思い出すだけでも確実に攻略不可を狙ってるとしか思えない嫌がらせだ。まあそう宣言された訳だけどさ。するとその時、ピクがシルクちゃんの肩で首を長く伸ばして、周りをキョロキョロしだす。

そして耳元で「ぴーぴー」小さく鳴いた。

「どうやら、あんまり待ってる訳にはいかないみたいです。敵が近づいてるってピクが言ってる。このままじゃ、挟み撃ちにされちゃいます」

ピクの敵感知度は信用できるから、きっと本当だろう。となると、今直ぐにでも飛び出す他ないな。このまま黙って挟み撃ちに合う訳にはいかないし、どのみちここは避けてはいけない場所だ。

僕はセラ・シルフィングに力を込める。

「いきましょう。先ずは僕とテッケンさんとセラが先手を取ります。そして反撃が来そうになったら、鍛冶屋の攻撃で地面を揺らせ。

奴らの足下が疎かになってる所でシルクちゃんの魔法で止めを指す。ノウイは念のための逃走ルート確保な。どうですか？」

シルクちゃんなら、この流れの間に詠唱を終わらせられる筈だ。まあ真っ先にストック魔法を使うって手も有るけど、でも十数体くらいなら、切り札を使わなくてもこのメンツならいけるはずだ。

「そうですね。ベストだと思います」

「ああ、それでいこう！」

「じゃあ私は左側をやるわ。後は適当で」

みんなの賛同の声。よし、じゃあとっとと行動開始だな。僕とセラとテッケンさんが真っ先に通路から飛び出して敵へと迫る。完全な不意打ちで、敵が攻撃に入る前にこちら側からの先制攻撃をたたき込む。

アンデットだけあって動きはそんな速くない。僕達三人はそれぞれのスピードと特性を生かして作戦を成し遂げる。

けどそこもやっぱりアンデット……ただの斬撃程度じゃ直ぐに立ち上がって来やがる。そして数体を相手してる間に、残りの奴らが杖に光を集め出す。

だけどここで奴の出番だ。

「鍛冶屋！！」

「いっくぞおおおお！！　『ウィル・スタンプ！！』」

鍛冶屋の大槌が地面に叩き込まれる。陥没する地面。そしてその衝撃は周囲にも広がった。揺れる足下、そのせいで敵の照準がずれて光はあらぬ方向へと飛んでいった。急いでもう一度、僕達に照準を合わせるアンデットども。だけどもう遅い。

そこでシルクちゃんが杖を掲げて現れる。

「終わりです。『ホーリークラッシャー』」

そう言ってシルクちゃんは、杖の底で勢い良く地面を叩く。すると全包囲に向かって光の波が放たれる。それらは僕達にとっては眩しいだけだったけど、敵は何故か吹き飛んだ。そして壁へ激突するなり、ボロボロと形を保てず消えていく。

「ふう、数が多いと魔法の選択も大変です。まあだけど、相性がい

いから助かります。奴らにはＨＰが無いけど、だからこそ光の魔法はどんなに弱くても効果は抜群ですからね。
さっきのも別段強力な白魔法じゃないですから」

なるほど、一撃の破壊力じゃなく全体へ行き渡らせる方をシルクちゃんは選択したって事なんだろう。確かにどんなに弱くても効果抜群の魔法なら、全体へ行き届く方がいいよな。
でもそれもこの程度の数にならって事何だろうけど。流石にあのだたっぴろい空間では、幾ら何でも広すぎ多すぎで行き渡らないんだろうな。
それにここは簡単に近づけるのも大きい。このアンデット共はモブリだから遠距離型だ。あの広い空間じゃそもそも近づく事さえ困難だったからな。
でもここなら近づいて間近で魔法を浴びせられる。それが効果覿面な理由だよな。

「よし、後ろから敵が来る前に玉を引き抜こう！」

僕達は最初の分岐の集中地点へ集う。そして隅っこにある台座から球体を引き抜いた。するとこれまで通り、それぞれの玉毎に違った模様が光り、そして消える。
すると予想通りの振動と共に、塞がれてた道が姿を現した。

「これで最初に戻ったんだよな？」
「その筈っすね――ってなんでそれを自分に押しつけるっすか？」

ノウイの奴は僕が何気に渡そうとした球体を受け取るのが不満らしい。自然な流れで押しつけられると思ったんだけどな。

「こういうのはっすね、それぞれが持ってたほうがいいもんなんす

よ。だから自分に集中させるのは得策じゃないっす」

なんかノウイの癖に最もらしい事を言うじゃないか。まあ確かに一理あるかもだけど……僕は球体を見つめて、だけどやっぱりノウイへ押しつける。

「まあ、お前は一番逃げ足も速いし、戦闘でも安全な位置に居るしで丁度良いじゃん。保険だよ」

「保険って……まあ、戦闘で役に立てないとこを突かれると逆らえないっすけど」

そう言って渋々ノウイは球体をアイテム欄に納める。まあこれで一応第一の目標はクリアできた訳だ。僕達は逃げ回る為の場所を確保出来た。

全ての通路は最後の球体を抜いたことで解放された筈だからな。まあ時間稼ぎにしかならないし、何の解決にも成っちゃいないんだけど。

「ちょっと、遊んでないで取り合えず進むわよ。後ろから敵が来てるんだから、ここで立ち話なんて出来ないわよ」

僕とノウイが球体の押しつけをやってる間に、みんなは進むルートを決めてたらしい。セラが僕達に向かってそう言いながら、既に歩みを進めてやがる。

セラがそれを僕らに伝えてくれただけありがたいのかな。みんな実際なかなか余裕なさそうだからね。色々と考える事が多すぎる。

「待ってくださいっすセラ様」

そう言いながらセラの後を追うノウイ。そして僕も最後にその後

を追いかける。
「セラ様、この球体って他に使えるんすかね？　置いてきても良さそうな気がするっすけど……」
まだ言うか。実際ノウイは球体を相当邪魔だと思ってたみたいだ。だけどそんな意見はセラには通る筈もないだろうに。
「別に使えるかなんて私にだってわからないわよ。だけど、一応ここで手に入れられる貴重な物だし、ここに居る間は持っててもいいかもって思ったのよ。
アンタは余計な事なんて考えなくていいの。私の言うことをちゃんと口答えせずに聞くのが部下の役目よ」
「それは……わかってるっすよ」
哀れなノウイは、予想通りの事を言われた。ちょっとした質問感覚だったんだろうに、なんか立場って奴が見えてるよ。
あんな横暴な奴が上司に居るとか、最悪だな。ゲームなんだからそこら辺はもっと軽くで良いと思うんだけど……まあエルフの事情に僕が口を出すことでも無いよな。
それに案外、ノウイはあれだけ言われても、逆になんか嬉しそう。
「自分は……セラ様のお役に立てるのなら……どんな事だって……火の中も水の中にも……飛び込む覚悟くらい……」
ブツブツそんな事をノウイは視線をさまよわせながら言ってるもん。けどそんなノウイを余所に、セラはこちらの方を向いて、何か言いたげに口を開け閉めしてる。
「あ……んん……」

とかなんとか、なんともモドカシい事この上ない。セラはそんな奴じゃないだろ。なんだってんだ一体？

「言いたいことが有るなら言えよ。我慢強い方じゃないんだから。体壊すぞ」

「なっ、私は実はかなり我慢強いわよ。てか、そう言う無駄話じゃなくて……」

折角途中までは今まで通りに喋れてたのに、セラは再びなんだかもどかしいモードに入ってしまう。何？　そんなに言いにくい事でも有るのだろうか？

するとセラはようやく、何かを決めたような顔で表したウインドウを見つめてこう言った。

「ちょっとこれ見てみなさいよ」

「うん？」

そう言って他人にも見える用にウインドウを操作して、セラはそれを向ける。そこに表示されてるのはメール？　ＧＭコールと銘打ってあるな。

つまりはＬＲＯ内にいる、運営側の人達（ゲームマスター＝ＧＭ）にこの状況をセラは報告したって訳だ。なるほどね、確かにそれは妥当な方法だ。てか、なんで真っ先にやらなかったんだって位だよ。

システム異常でこんな状況に落とされてるのなら、ＧＭに頼るのは当たり前だ。運営側ならどうにか出来る筈だもんな。

良くやったセラ――とか心で呟きながら僕はＧＭから届いたメールの内容へ目を通す。するとそこには意外な内容の文章が書かれてた。

【貴殿の申請されたダンジョン脱出口の喪失というシステム異常は現在検出されませんでした。ＬＲＯは現在良好に稼働中です】

それがメールの文面だった。手助けとか、解決策とか以前の文面だよこれは。システム異常はないだと？　じゃあ僕たちが陥ってるこの状況は何なんだよ。

「これって……じゃあ誰がこのダンジョンの出口を閉じたって言うんだよ」

「ＧＭが言うにはシステム異常が原因じゃ無いって事。だとしたら、元からこういう仕様とか……まあこいつらの言葉が全部信用出来るのならだけど」

信用って……一応ゲームマスターだぞ。マスター名乗ってる訳だからな、信用第一でやってる筈だろ。でも待てよ……そう言えば前にも似たような事を返された気がするような……

「システム異常じゃないのなら、良いじゃないか」

「テッケンさん？」

僕たちの会話に割って入って来たテッケンさんは、なんだか既に知ってた様な感じだな。僕に見せる前に、テッケンさんやシルクちゃん達には見せてたのかも知れない。

意見を貰うにしても、話し合うにしても、僕よりもテッケンさんやシルクちゃんとかの方が良いだろうしな。なんてたってキャリアが違う。

「システム異常の事故なら本当に我々にはどうしようも出来ない事だよ。だけどこれも仕様なら、出る方法は有るって事じゃないか」

「それは……確かにそうかも。でもそれじゃあ、このダンジョンの目的意識を変更したのは誰なんですか？　それこそそんな事はシステムに直接干渉出来る様な奴しか……」

ん？　なんかそんな奴ら居ないか？　システムの裏側に潜むあの姉妹。あいつ等なら、こういう事が出来てもおかしくはない様な……

僕の深刻な表情にセラは何かを察したのか、そいつ等を臭わせる様に続ける。

「まあ大体何を想像してるかは察っしが付くわよ。私達もそう思ったし……だけど、あいつ等がここに関わってくる動機は何？

今度はノーヴィスを落とすつもりなら、もっと別の攻め口があるわよ。アンタに嫌がらせしたいだけってのも考えられるけど……でもそれも実際微妙でしょ」

「う～ん」

シクラとかならそれだけでもやりそうだけど……けど確かになんかちょっと違う気がしなくもない。そもそも目的意識を変更って所がなんだか……回りくどい？

「なあ、ここは元々何の為のダンジョンなんだ？」

僕は多分、わかりきってるであろうその事を口にした。すると案の定、セラがバカにしたようにこういう。

「何今更言ってるのよアンタは。ここは箱庭へ行かせない為に有るんでしょう」

まあ、妥当な答えだな。けどちょっと違うとも思う。だってこれはゲームで、基本それに沿ってる訳だよ。

「行かせない訳じゃない……楽に行かせない為にここはあったんじゃないのか？　つまりは最終的にはちゃんと箱庭へたどり着ける……それがこのダンジョンだろう。
そう思ったからこそ、僕たちは進んだ訳だしな」

僕は色々と考えながら言葉を紡ぐ。間違ってはいないよな。だからこそあそこまで……後一歩の所までいけたんだ。
けどこれでも……やっぱりちょっと違うか。見方がおかいしのか？　何かズレてる……そんな感じ。するとその時、前方の方から「それです！」って言う声が唐突に上がった。
僕たちは思わず心臓が飛び出るかと思う位にびっくりした。だって普段はそんな大声シルクちゃんは出さないからな。

「どうしたんだいシルクいきなり」

耳を押さえながらテッケンさんが、シルクちゃんにそう問う。

「みんなの会話ずっと聞いてました。そして私もずっと考えてたんです。どうしてこうなったのかなって。それがさっきのスオウ君の言葉で解けたかも知れません！」
「僕の言葉って？」

困惑気味に僕はそう言う。でもそれが本当なら、胸がさらにドキドキしそうだな。

「スオウ君は箱庭に行くためにここは必要って言いました。それはきっとその通りなんです。でもちょっと意味合いが違うのかも。
スオウ君は制作側……ゲームとして攻略の為にそうなってて当たり前みたいな感じだったけど、でもそれをここ、ＬＲＯという世界

を主体にして考えたらどうですか？
ここは行かせたくない訳でも、楽に進ませない為の物でもなくて、通り方を知ってる物だけが箱庭へ行くための道だとしたら！？　あの倒れてたボスクラスのモンスターの意味もそれで……」
「「「「！！」」」」

そのシルクちゃんの言葉は今までの何よりも納得できる。そして更に彼女は続ける。

「つまりここはトラップではなく本筋……そして誰がここを作ったのかも大体想像できます。それがこのダンジョンの目的意識の改変者。
そしてそれは元老院か……ミセス・アンダーソンのどちらかです！」

裏の裏は表？（後書き）

第二百十九話です。
すみません遅くなりました！　復旧したみたいなんで今上げます！　今回はダンジョンで起こった事に対して、スオウ達が自分たちなりの答えを見つけて前へ進む回でした。
次回は本格的に脱出です！　でも問題はまだありますけどね。
てな訳で次回は明日上げます。確かこれは木曜日でしたよね？
だから次を明日上げればこれまで通りなはずです。ではでは、また明日です。

絆の道（前書き）

僕達が辿り着いた答え。だけどそれで無くしたものがある事にも気付く事に。実際システム異常も、こう言う仕様も僕達側からは何も出来ないんだ。それがわかると、再び空気は重く。

でも僕達はまだ何かあると思ってた。ずっと頭で引っかかってる何かが……それがこのダンジョンを抜ける最後のピースの筈だ。

絆の道

シルクちゃんのそんな宣言が、この薄暗いダンジョンに響く。それは僕達が色々と考え出して出た結論。シルクちゃんの言葉に異論を唱える奴はいない。

ここは通り方を知ってる奴だけが箱庭までいける道。それは多分、間違っちゃいないと思う。トラップなんて元から必要無かった訳だ。

いや、言う成れば今の状況こそ、僕達はトラップに掛かった様な物なのかも。

「確かにシルク様の言うことは理解できます。私達はゲームだって事を常に意識し過ぎてたのかも知れません。ここにはちゃんと生きてる人達が居るのに、そこら辺を無視してた訳ですね」

セラがそんな風に、シルクちゃんの後に続く。でもそれはしょうがない事だと思うけど……だって僕達プレイヤーは世界に割り込んで来てる様なものだよ。

それにゲームだって事を忘れない様にするのも大切だからな。そうしないと、戻れなくなる人とかいそうじゃん。

僕みたいに落とされるんじゃなく、自分の意志で留まり続けるとかが起こり得そうだもん。そしてそれは起こってないとも言えないしな。

「あれ？　でもちょっと待ってくださいっす。元老院かミセス・アンダーソンがここの目的意識を変えた……それはいいっすよ。

だけどそれが解ったところで何の解決にも成って無くないっすか？　だってそれって、ようは意図的に扉に鍵が掛けられたも同じじゃないっすか！？」

なんとか会話に付いてきてたノウイ。だけど、確かに言われて見ればその通りだな。これを行ったのが誰か解った所で、だから出口が現れる訳でも無い。
無駄とは言わないけど、僕達の状況は変わりはしないな。

「まあそうだよな。システム異常じゃなく、誰かが都合悪くなったから、ただ鍵を掛けただけって成ると、ここに居る僕達じゃそれを開く手段がない。
だってそれって、選択券がＮＰＣの方にも有るような物だ。自分たちにとって、不都合な事が起きないようにするのは普通だけど、それをＮＰＣがやるって成るとどのクエストだって途端に攻略が難しく成るぞ」
「そうですね……意思を感じる行いです。重要なＮＰＣは元から人工知能が高いけど、これは確かにやり過ぎなのかも。
自我の目覚め……最近そう言うのが多いから、これもその影響かも知れませんね」

そう言えばそうだったな。シルクちゃんの言葉で思い出したけど、シクラとかがＮＰＣの自我を目覚めさせていってたんだ。
それがどこまで及んでるのかは実際全然解らないけど、自我に目覚めての自己防衛とかの反応でこれをしたのなら、なんとも人らしい行動じゃん。

「そうなるとやっぱり抜け道とかを作っとく訳はないね。システム異常よりはマシとか言ったけど、どうやらそれよりも厄介みたいだ。
有る意味これはゲームとして成立してない事に成るし……攻略できる様に成ってるのがゲームなんだからね。けれど今の僕達の状況には、それがもう感じれない」

まさにテッケンさんの言うとおりだな。みんなの顔に暗雲が見える。知恵を出し合って得た一つの結論は、別の何か……期待できてた筈の物を奪った感じだ。
文字通りに、僕達を纖滅する場所に今は成ってるって事か。そこら中から聞こえる無数の足音。それらがいつ僕達とはち合うか……気が休まる暇もなく、更に希望も無いって……どんな絶望的状況だよ。
これで通常に動作してると運営側は言うんだからたまった物じゃないな。

「けど……どうして今だったんでしょう？」

ぽつりと呟いたセラのそんな一言。どうして今？　そんなの決まってるだろ。

「それは僕達をクリエに会わせたく無いからだろ？　だからこそ、こうやって纖滅モードに移行してる訳だし……向こうにとっては僕達は邪魔だろ」

元老院とかミセス・アンダーソンはクリエにあんまり関わってほしくなさそうだったからな。だけどセラは顎に手を置いて、考える素振りをしながらこう紡ぐ。

「それはそうだけど……でもちょっとおかしくない？　あのボスクラスの敵、倒されてた。箱庭にいくたびにあれを倒すわけ？　ちょっと面倒でしょそれは。
もっと安全な通り方があってしかるべきとは思わない？」
「言われてみればそうだけど……」

確かに毎回あんなのを相手にはしてられないよな。でもそれだと、

僕達のやってた事は何だったんだ？

「私達のやってた事は、それこそゲームとして用意された攻略方法だったんじゃ無いの？　元老院やミセス・アンダーソンはもっと安全にここを通れる」

「けど、じゃああの倒されてた奴はどういう事だよ？」

安全な行き方がちゃんと有るなら、ゲームとしての道なんて使わないだろ。だけどそれが一足先に使われてた。それが意味することは一体？

「考えられることは一つに、別のプレイヤーが先に進んだ。まあだけどこれは殆どあり得ないわ。だって私達以外にこの状況を知ってるプレイヤーは居ないはずだもの。

それなら二つ目が重要よ。それを使わざる得なくなったって事じゃないの？　元老院かミセス・アンダーソンのどちらかが」

「仲間割れって事っすか？」

素早く間に入ってきたノウイ。でもそう言う事になる――――いや、なんかそれも違うな。僕は今まで見た強制イベントや、二人で交わした会話を思い浮かべる。

「仲間……なんて物じゃないだろ。あいつ等の関係はさ。元から対立してたし……腹のさぐり合いとかしてそうだったし、利害が一致してたからこそ、クリエの事では手を取り合ってたってだけの感じで……」

そこまで紡ぐと、いやな想像が更に膨らんだ。もしもこの通りなら、僕達だけじゃなくクリエだって危ないような。

すると僕の想像を見透かす様に、セラの奴が言葉を紡ぐ。

「利害にズレが生じてきたのかもね。一体どっちが動き出したのかしら？」

セラの言葉がイヤな感じに胸にのし掛かる。この状況で不安要素を増やしやがって……

「とにかく……今はどうやってここを抜けるかだ。そして抜けた先は箱庭……そうでなくちゃ意味はない」

僕はそう言い聞かせるようにして一歩を踏み出す。するとその時、少し先を飛んでたピクがけたたましく鳴き出した。

「敵！？」

「これは多いです！　ピクの後にみんな続いてください！」

そう言って真っ先に走り出すシルクちゃん。それに僕達は続く。どうやらピクが敵のいない方向へ先導してくれるみたいだ。

「はぁはぁはぁ……」

しばらく走って息も切れ切れ。なんとか敵と出会わずに済んだ。

「全く、一体どれだけ――」

「ピーー！！」

「――またかよ！？」

ようやく一息つけるかと思いきや、もう一度ピクが鳴いた。そのせいで僕達は再び、この入り組んだダンジョンを駆け回る事に……マジで一体どれだけの数のアンデットがここにとき放たれてるんだ

ろう。
それからも五分もしないうちに、ピクが鳴くから僕達はずっと走り続けてた。おかげで敵とは遭遇しないけど、でも僕達は思ってた。
これは徐々に追いつめられてるって。きっと奴らは、このダンジョンに満遍なく広がりつつある。そうなると最後には逃げることも出来なくなる。
結局は八方塞がりだ。袋の鼠状態ともいえる。

「やばいっすよ。どんどんピクの鳴く感覚が短く成って来てる気がするっす。追いつめられてるんすよ！」
「確かにそうだね。でも打って出た所で何の策もないんじゃ……」

アタフタしてるノウイと違って、テッケンさんは苦い顔をしながらも必死に何かを考えようとしてるのが解る。

「まだ何か……何かある気がするんだけど」

それが出てこない……良くわかるよ。僕もそんな感じだ。まだ諦めるには早い何かがあるような……見落としてる事がある気が頭の隅に引っかかってるんだよな。
そうこうしてる間にも、アンデットの手はこのダンジョン全体に迫りつつあるし……そうなったら考える暇なんて無くなるだろう。あれだけの数を相手にしてたら、頭を使う暇もなくなるだろう。
どうにかして今のうちに、希望って奴を見つけておきたい。

「はぁ～なんでこんな事に……クリエちゃんも良くこんな所から一人で出れたっすよね」

ん？　今なんて言ったノウイの奴？　カコンと、出来物が落ちた様な……クリエがここから……

「それだ！！」
「なにっすか突然！？　かかか肩を揺さぶらないで欲しいっす」
「お前は何も考えてない無いようで、時々良いことを言うよノウイ！！」

僕はグワングワンとノウイを揺さぶる。ノウイのゴマの様な目が次第に渦を巻いていくよ。でも止められない程に、興奮してたんだ。

「ちょっ……一体どうしたって言うのよ？」
「クリエだよクリエ！　アイツはここから出てるんだ。たった一人で……しかもアイツがここのちゃんとした通り方を知ってると思うか？」
「「あっ！」」

僕の言葉に二人の美少女が重なる声を出す。そしてすっかり忘れてた鍛冶屋がここで、僕の言いたい事を口頭で伝えてくれる。

「つまりは、あのガキが使った道がこのダンジョンにはあるって事か」
「ああ！　そしてそれはミセス・アンダーソンは勿論、元老院だって知らない筈の物だろ。なら、今もどこかに存在してておかしくない！！
それはきっと箱庭にだって続いてる！」

希望が、光が見えた気がした。まだやれる……諦めるには早い。アイツが一人で出来たことを、僕達が六人も集まって出来ない筈なんて無いだろ。

「でもだよスオウ君。一度逃げられた道を残しておくだろうか？

修正されててもおかしくはないよ」
「確かにそうかも知れません。でも何となくある気がします！」
「何となくってアンタ……」

テッケンさんの指摘に僕が言った言葉に対して、セラが呆れた様にそう言葉を発した。だけど信じないと動けないだろ。
それにただ何となくなんて言ってる訳でもないんだ。

「まあ聞けよセラ。確かに普通は逃げられた道をそのままなんて事にはしないだろうけど、クリエが逃げ出してからまだ二日位しか経ってない。
ミセス・アンダーソンならともかく、元老院の爺共がそんな早く仕事をするとも思えないだろ」
「アンダーソンがやってたらどうするのよ」

まあごもっともな返しだな。でもそれにも僕は返せるぜ。

「それは無い！　クリエが逃げ出した時、不手際とか言ってただろ。つまりは箱庭とかの管理とかは元老院がやってたんじゃないのか？
ミセス・アンダーソンって個人よりも元老院って集団の方が力ありそうだし、多分そうだと思うんだよ。それに今のこの処置だって、道ごと潰してしまえば何の問題も無いって安易な考えなのかも知れない。
こういう道を作れるのなら、新しくまた作れば良いだけだしな。ようは廃棄物の処理に僕達は巻き込まれた様な物だろ。
それなら道はまだきっとある」

僕ははっきりとそう答える。予想だけど、自信だけはみなぎらせた。それに実際、ある気はするんだ。本当に。僅かに見えた希望の光。それをここで逃せられない。

自信って奴は、根拠は無くても必要な時があるんだ。そういうのに良く振り回せれてきた僕にとっては、それが良くわかる。

「でも、クリエちゃんはどうやってここから出たんでしょうか？　あの子は戦闘だって出来ないですよね？　そして元老院やミセス・アンダーソンが使う道も知ってる訳ない……となると、一体全体どうやって？」

シルクちゃんがそう紡いで頭を抱える。まあ確かにそれはそうだな。そこは頭を抱える所だ。クリエは子供で、戦闘力なんて僕が知ってる限り皆無だよ。

でもアイツには本人も知らない秘密があるようだし、その気になれば戦えるとか……いや、無理っぽいな。一緒にいるときも戦おうとは一回もしなかったし。そんな力があるのなら、あの村で処刑されそうになったとき、使わない訳はないだろう。

クリエ基準で考えるとして、確かにそこが一番の悩み所だな。

「僕達に出来る事が出来ないクリエが出来ること……」

それがきっと鍵なんだろう。アイツにだけ許された何か……それが導いたとしか思えないし。そうなるとアイツとの会話を色々思い出す事が必要か……う～ん。

「アンタが一番あの子と長く居たんだから何かあるでしょ？　あの子の特別な所、見てるんじゃない？　思い出しなさい」

「そう言われてもな……アイツ基本おかしい奴だったし」

うるさくて、チョロチョロして、そしてなんかちょっと僕の事良いように扱ってた様な……するとその時、再びピクが敵の接近を報せる。

「ピーピー」
「また敵か……敵だよな？　喋れればいっそ分かりやすいのに」
ピーピーじゃ実際本当にそう言いたいのかわからないじゃん。今までの経験で推測するしかないし、絶対とは言えないよな。
でもシルクちゃんはピクが言ってる事を間違えない。まるでピーピーじゃなくてちゃんと言葉が聞こえてる様な感じ……彼女の耳にはどういう風にピクの言葉が聞こえてるのか謎だ。
僕は走りながら後ろ姿のシルクちゃんにジーと視線を送ってしまう。
「ちょっとスオウ」
「うん？」
声を掛けられてそっちに視線を送った瞬間。プスっと目潰しされた。
「ぬあああああああ！！　何しやがる！！　酷すぎるぞセラ！！」
超痛い超痛い！　目とか防御力皆無何だぞ。そこを攻撃するなんてどれだけ鬼畜なんだよこいつ。
「アンタがシルク様に変な視線を向けてるのが悪いのよ。いやらしい……みんなアンタの言葉を信じて道を考えてるんだから、アンタがそんなじゃダメなの。次は潰すわよ」
「もう潰してるよ！」
うう……だけど今回はいつもの理不尽な感じじゃないのか。セラなりの理由がそこにはあった。だけど別にいやらしい視線をシルク

ちゃんに向けてた訳じゃないっての。
潰された目をゴシゴシ擦る僕。すると後ろで騒いでるのに気付いたシルクちゃんがこちらを向いた。
「いやらしい目で見てたんですか？」
「違うから！　決してそんな目はしてない！！」
ちょっと頬を赤く染めるシルクちゃんがそう言う。ほら、セラのせいで誤解された。僕は考えてた事をそのまま伝えたよ。
「ああ、ピクの言葉ですか？　どう聞こえてるかって多分スオウ君達と同じですよ。ピーピー聞こえてます。でも何でしょう……私にはそれでもピクが言いたい事が解ります。
それも一番身近で触れ合ってるからじゃないでしょうか？」
「そう言うものかな……」
「そうですよ。リアルでだって犬や猫の言いたい事が長く飼ってるとなんとなく分かる様に成るあれです。友達や家族に成れれば、言葉として聞こえる物なんですよ」
なるほどね。シルクちゃんじゃなかったら、そんなの気のせいだろと言い返す所だけど、シルクちゃんが言うならそうなのかも知れないな。
僕はペットとか飼った事無いから分からないけどさ。家族や友達に成ると……か。以心伝心って奴かな。
（ん？　そう言えばクリエも友達がどうとか言ってたな）
「スオウ君！　前見て前！」
慌てた様なシルクちゃんの声。考え込んでた思考を戻して、視線を上げるとそこには紫色した光が視界一杯に飛び込んでくる。

「ぬおぉ！？」

ギリギリで首を傾けてそれを避けた。これはどう考えても敵側の攻撃……ピクの誘導で進んでたから出会す事はないと思ってたけど、どうやら予想よりも早くこの空間が埋まりつつあるようだ。

頬から垂れる熱く赤い液体……でもこのヒリヒリ感が、戦闘って事を僕に嫌でも意識させてくれる。

「かなり通路も埋まって来てるみたいだな」

「そろそろ撃って出ないと逃げ回るだけじゃ、僕達はここから出れない。何か思い出さないのかいスオウ君？」

僕たちは前方に現れたアンデット共とにらみ合いながら、そんな会話を交わしてる。てかみんなとっさに通路の脇に避難してるし……僕だけが危なかったみたいだな。

でも危ない目にあっても考えてた価値はあったかも知れない。テッケンさんの求める物を僕は思いだした。けど直ぐに次弾を充填した敵が、さっきの攻撃を繰り出してくる。

しょうがないから、目の前の敵を倒すのと並列して言葉を紡ごう。敵の攻撃を防いで、シルクちゃんの詠唱の時間を稼がないとだからな。

「思い出しましたよテッケンさん！　クリエは友達が居るって言ってました。それは普通の目に見える友達じゃなく、なんだかそこら中に居るとか何とか不思議な事を！」

「なんだいそれは？　本当なのかい？」

僕とテッケンさんは敵へ突っ込んで、接近戦を仕掛ける。奴らの腕を砕き、体を切り裂く。だけどそれじゃあ死なないんだよなアン

デットは。けど、攻める！！

「本当です。僕も最初は電波な奴かと思ったけど、アイツは多分、周りのオブジェクトとか自然とかから情報を読み取れるんじゃ無いでしょうか。

それかそれらを声として受け取れる。アイツは世界が友達とか言ってたし、その声に導かれたとしか考えられません！」

そう、それがアイツが見せた特殊な事。これしかないと思える能力だろ。

「なるほど……世界の声を聞けるんだね。確かにそれなら……でも、それを僕達が受信する事は出来ない。どうするんだい？」

「それは……」

どうしようか？　耳を澄ました所でそれが聞こえる分けないし……すると待ちに待ったシルクちゃんの魔法が炸裂して、周りのアンデットを消滅させていく。

そしてそんな魔法の影響で僅かに輝いてるシルクちゃんがこう紡ぐ。

「それなら、ピクにクリエちゃんの臭いを辿って貰いましょう。そんなに人が出入りしてないのなら、まだ臭いはあるはずです。

ピクは一度会った人の臭いをデータとして記憶してますから」

「なるほど、それは便利だね。それで行こう！」

アイツが辿った道は必ず出口へと続いてる筈だ。けどピクはなんと機能が豊富な奴。スゴいよ全く。僕達はピクの鼻を頼りに再びダンジョン内を走り出す。

もう敵に出会すとか関係ない。今の優先順位はクリエの足跡を辿

る事が一番。敵は倒して進むに変更だ。

しばらく走ると、僕達は壁にハマってた。分岐もないただの行き止まり。後ろからは大量のアンデット共が迫りつつある。これはヤバい。

「本当にここで良いわけ？」

「ピクは間違ってない筈です。何か無いですか？」

そんなシルクちゃんの言葉を信じて僕達は壁をペタペタと触り確かめ、目が棒になるほど周りを見る。でも別に何も無い。

「おいおいヤバいぞ。射程に入った。攻撃が一斉に来るぞ」

確かに後ろを見ると、紫の光が集いだしある。ここでクリエは何を聞いたんだ？　何を何を何を……

「他に何かないの？　あの子がアンタの前でした特別な事！？」

特別な事……セラの言葉に僕の頭はあの月夜の湖を思い出す。

「歌……」

そうだ、もう一つあった。するとその時、僕達とアンデットの間に一つの人影が見えた。

それは……

「クリエ」

僕のそう紡いだ言葉にみんなが辺りを見回すけど、みんなの視点

がクリエに止まる事はない。どうやら僕にしかその姿は見えてない様……そしてやっぱりこれまでと同じようにクリエは何かを紡いでる。

ぼくはその口の動きを必死に追った。

「『幾億の星が～流れ落ちるその時～私はその星の一つに～なれているのだろうか。一人で輝く星になんて～成りたくはな～いよ～。孤独は罪で、それが罰。紡いだ声はどこへ行くの～』

辿々しく紡がれる歌……不思議な事に、聞いたこと無い旋律まで僕は紡いでた。これも以心伝心って奴か。するとその時、行き止まりの壁に変な模様が浮かび出す。これは……見たことある！

「ノウイ！　球体を出せ！」

「え？　は、はいっす！」

その時、クリエを貫いて光が迫る。消えていくクリエは元気に笑ってた。希望を抱ける、そんな笑顔だ。

絆の道（後書き）

第二百二十話です。
再び現れたクリエに助けられて、紡げた歌。それによって開く道は箱庭へと続いてるのか！？　色々と交差するとなんだか分からなくなりそうですけど、まあ大体こう言う事の筈です。
それでは次回はどうなるかって事で、次回へ続きます。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

繋ぎ紡いだ扉の開け方（前書き）

放たれた光の先は箱庭って訳じゃなかった。まだこのダンジョンでの戦いは続いてる。でも僕達は鍵を見つけた。だからもう一度あの場所へ。今度はきっと出れる筈だ。

そして今度こそ、僕達は箱庭へと辿り着いてみせる。

繋ぎ紡いだ扉の開け方

放たれる光。暗いところに馴れてた僕達にはそれはかなり強烈に目に入ってきた。目を細めつつ、ノウイは僕に言われた通り、球体を全て出した。

するとやっぱりだ。この行き止まりの壁に浮かび上がる模様と、球体それぞれに浮かび上がる模様は一緒。もしかしてこの模様は、後から追加された物か？

それかわざわざ、クリエが僕達の為にリンクさせたとか。

「っつ……」

クリエを貫いた敵の攻撃がこちらに届く。でも相手してる場合じゃない。僕達はノウイの腕から、一人ずつ球体を受け取る。

よく考えたら、丁度良いことに人数分だ。そしてどうするか……そんなの分からない。けどそれぞれが手に持つと、その模様が球体から体へと移ってきた。

データとして何かが入ってくる様な変な感じ……するとただ光ってた様に見えた模様と壁に、それらが合わさった様な渦があるじゃないか。

「これって……この模様の影響か？」

「考えるのは後にしましょう。早くスオウ君！！」

そう言ってシルクちゃんが僕の腕を掴んで光に飛び込んだ。その瞬間、腕が痛いと思った。シルクちゃんがそんなに強く引いた訳でも無いのにだ。

腕を見ると、球体からの模様だけじゃなく、テトラからかけられ

た呪いも浮かんでた。もしかして、この二つは相入れないのかも……気にしだすとズキズキしてくる。

「あれ？　ここって……」

そんなシルクちゃんの困惑する声に顔を上げる。そこは別に今までと変わらないダンジョンにしか見えない。

「箱庭じゃない？　どう言うことだ？」

「また別の行き止まりの場所みたい――って、何二人はお手て繋いでんの？」

なんか一瞬もの凄い殺気が放たれた気がして、僕達は互いに手を離す。セラが異様に僕を睨んでるし……てか、何でこっちを睨む。

「そんな事より、どうして箱庭じゃないかって事が問題だろ。これでいけると思ったんだけど……そう簡単じゃないって事か」

僕は話題を本題へと戻す。これ以上横道に逸れる訳には行かないからね。さっきの場所に敵は集ってるからか、こっち側にはまだ敵の姿はないけど……いつまでもここに居たら、また追いつめられそうだからな。

「そう簡単ではない……けど、今の俺達は今までの俺達とは違うみたいぞ」

「何、訳の分からない事言ってんだよ鍛冶屋？」

鍛冶屋のそんな言葉に混乱するのは、僕だけじゃない。テッケンさん達も「どういう事だい？」とか言ってる。すると鍛冶屋は、何かをなぞるように視線を動かして通路の先を見つめてる。

「お前達には見えないのか？　どうやら、それぞれ取り込んだ模様以外は見えないって事か……」
「模様？　何が見えてるんだお前？」

いまいち分からないんだけど。もっとわかり安く説明しろよな。鍛冶屋の奴は口数が足りないんだよ。自分の中だけで完結しないで欲しい。

「俺には通路の先へ続くこの模様が見えてるんだよ。多分この先にはまだ道が続いてる筈だろ。それを辿れって事だ」

そう言って鍛冶屋は自分に浮かび上がる模様を見せてくる。なるほどね、それが通路に見えてるわけか……鍛冶屋にだけ。

「つまり、進めば僕達にも取り込んだ模様が見えるかもって事だね。それがまずは鍛冶屋君だと言う事だろう」
「なるほど……じゃあこの模様をそれぞれで辿っていけば、箱庭にたどり着けるって事ですね」
「おそらくは」

テッケンさんはちょっと自信無さ気に言ったけど、多分間違いないだろう。てか、そうじゃなくちゃ困るんだ。

「鍛冶屋、頼む！」
「仕方ないな、ついてこい！！」

そう言って走り出す鍛冶屋。アイツにしか今の模様は見えないから、僕達はその背に続いて行くしかない。しばらく進むと、やっぱりだけどアンデットと出会した。

実はさっきまでとは違うダンジョンにでも入ってるのかと少し思ってたんだけど、どうやらそうでも無いらしい。
だけど出会したアンデットはたったの五体。やっぱりさっきの場所に集まってるらしいから、こっち側は空いてる感じだ。
僕達はアンデットをケチらし、止まらずに進む。するとまた行き止まりにぶつかった。まあ分岐が多い分だけ、行き止まりも所々にはある。
でもここは適当に進んだ末にぶつかった様な行き止まりじゃないんだよな。ここにもきっと、さっきの仕掛けみたいなのがあるんだろう。
――って、それじゃあもしかして……

「歌った方がいいのかな？」

僕はポツリとそう言った。結構あれ恥ずかしいんだよな。出来れば勘弁して欲しいんだけど……背に腹は変えられないか。
実は覚悟を決めてた僕。だけどそこで鍛冶屋から待ったが掛かった。

「ちょっと待て、壁に模様が集中してる所がある」

鍛冶屋はそう言ってその場所であろう所に手をおく。するとさっきと同じように、そこには光が現れた。ここを進めって事らしい。
僕達は二度目の光を潜る。すると今度も、別の行き止まりに出ただけ。だけど今度は――

「次は私が取り込んだ模様みたいね」

――セラの番って事らしい。これを後、四回も続けたら、箱庭だ。きっと。僕達は早速ダンジョンを進む。でもちょっと気になるよな

……何でこんな事に成ってるか。クリエがしたのかな？

「これって、クリエが通った道を僕達は辿ってるんですよね？」

「そうだと思いますよ。きっとこれはルート何じゃないかな？」

「ルート？」

シルクちゃんに話しかけた僕は、疑問符を頭に浮かべて答えを待つ。

「クリエちゃんの辿った道を正しく辿る。それがこのルートを開くルールで、出口への答えでもあるんですよ。まあそれには、彼女の事を知ってたスオウ君の存在も不可欠だったわけですけどね。

そう言えば、あの歌は何だったんですか？」

可愛く首を傾げるシルクちゃん。そんな風にされたら話さない訳には行かない。まあ別に、隠す気も無いけどね。

「あれはクリエが好きだって言ってた歌です。あの村の湖で歌ったんですよ。それをちょっと思い出してっ――て、そう言えばさっき、追いつめられた時クリエを見てないですか？」

そうだそうだ。重要な事を聞くのを忘れてた。僕は確かにクリエを見たんだけど……みんなはその存在に気付いて無いようだったんだ。

それが気になる。本当に気付いてなかったのか、確認しておきたい。

「クリエちゃんですか？」

そう呟いてあの時の事を色々と回想してるようなシルクちゃん。そしてフルフルと首を振った。

「いいえ、私は見てませんけど……またスオウ君には見えたんですか？」

僕はシルクちゃんのその言葉に、無言で頷く。するとシルクちゃんがみんなにも確認を取り出した。

「あの！　みんなはこのダンジョンでクリエちゃんを見てないですか？」

「う～ん、僕は見てないな」

「私も、シルク様には悪いですけど見てないです」

「俺も知らないな」

「自分も見てないっす」

みんなから返ってくる言葉は一様に見てないって事。するとシルクちゃんが不安そうに僕を見てる。いや、これは心配？　かな。

誰にも見えない物が見える……そんな事を言ったら心配させて当然だろう。シルクちゃんは優しいしね。けど……やっぱりか、と思った。

やっぱりみんなには見えて無かったんだ……僕だけがそれなのに見えてた……どういう事なんだろう？　アレは一体なんだ？　本当にクリエなのだろうか……実体じゃなかったし、本当に僕の頭がおかしくなった……訳じゃないとは思うんだけど。

「アレじゃないですか？」

「うん？」

不意にシルクちゃんがそう言った。アレって一体？

「それはきっと、サインなんですよ。クリエちゃんがスオウ君を求

めてるから、そんな思いがスオウ君には伝わってるんです」
「そんな事……」
思いが一人歩きしてるって事だろうか？　幾らなんでも強引な考えだよそれは。でもシルクちゃんはニコニコ笑ってこう続ける。
「そんな事じゃ無いです！　だってここはＬＲＯですよ。今までだって信じられない事起きたじゃないですか。私はそれをスオウ君の側で何回も見てきました。
だから貴方の側では、何が起こってもおかしくないと思います。それに……クリエちゃんが頼れるのはスオウ君しか居ないんですよ」
「僕しか……か」
確かにそれはそうなのかも。ミセス・アンダーソンは案外ちゃんとクリエの事を考えてたっぽいけど、それはクリエに伝わって無かったし……外で頼れるのは、たまたま出会った僕だけ……それを頼ってあんな姿で現れてるって事か。
考えられないけどさ……案外無くはないかなとも思う。
「そうですね。僕があいつを助けます。そしてあいつの望みを一緒に叶えてやります。そうすれば、きっと満足出来る筈です」
「うんうん、そうしましょう！」
そうこうしてる内に、再び行き止まりにぶち当たる。そしてここも同じようにして通り、次はテッケンさん。その次はノウイで更に次はシルクちゃんだった。
て、事は僕で最後……なんか段々奥の方へ向かってるようで、相対的にアンデットと出会す率がどうしても高く成っていく。
「私たちはきっとシルクちゃんの辿った道を逆走してる筈ですから、

奥に行くのは仕方ないですよ。出口も入り口もズレてるだろうけど、奥って事に変わりはないんですよ」

降り注ぐアンドって共の攻撃の中、愚痴をこぼす僕に、シルクちゃんがそう言った。まあ確かにその通りだな。僕達は結局、あの階段の下位まで戻って来てるもん。そして僕の今の目にはあの模様が見える。

それはこの階段の上方へと続いてるんだダンジョンに満遍なく広がったおかげで、最初よりは少なく成ったけど……やっぱりここにはまだ敵が多い。それにきっとこの上には今までの比じゃない敵が残ってるだろう。

なんてたって広いから。でもそこまでたどり着くのも問題だ。この階段は四段階位に分かれてるんだけど、そこ毎にアンデット共が六体位いる。

そこからの攻撃が……さっきから非常に厄介だ。元々上から攻める方が圧倒的に有利なんだよ。しかも奴らの攻撃は、そっち方面に向いてる。

僕達が階段を上がろうとすると、上方から狙い撃ちされる羽目になるんだ。でも手を拱いてる訳にも行かない。もう随分とこのダンジョンに時間を取られてるし、早く行かなきゃって気持ちが先行するんだ。

後少し、最初この階段を上ったときは、直ぐに逃げる羽目になったけど今度は違う。僕達は今度こそ、この上の更に外へ続ける筈なんだ。

だから僕は多少の無茶ぐらい幾らだってやってやる。

「ノウイ、ちょっと耳貸せ。それとシルクちゃん……ごめんだけどストック魔法多少消費してもいいですか？」

僕は正面の階段を見据えながらそう紡ぐ。

「ちょっと何でシルク様には了承を取って、自分は強制なんすか？」

「あはは、え～とここで出し惜しみするわけにも行かないから。別に私は良いですよ」

なんだか扱いの違いに憤慨してるノウイだけど……それってある意味当然じゃないか？　ノウイってそう言う役回りだから、僕的には何を今更……なんだけど。

まあ取り合えず、シルクちゃんからは許可を得たからいい。

「そりゃあ、あれだよあれ……まあつまりはノウイだから？」

「それは世界で一番納得出来ない理由っす！！」

僕の正直な言葉まで受け入れられない様子のノウイ。たく、こんな正直者の言葉を叩き落とすなんて、とんだ極悪人だなノウイの奴は。

何となくわかるけど。

「はははは」

僕は笑って誤魔化した。でもこれはノウイの力が必要なんだ。これだけ開いた距離を一瞬で詰めるには、ノウイのミラージュコロイドしか出来ない。

だからここはしょうがないから機嫌を取っとこう。

「悪い悪い。ノウイにしか出来ないことだからさ。他に変われる奴がいないから、お前は決定なんだ。だから頼む」

「まあそれなら……てか、最初からそう言ってくれればいいんすよ。自分は常日頃から、役に立つことには積極的な方っすからね」

そう言ってノウイはちょっと誇らしげになった。まあ機嫌を直してくれたみたいで良かったよ。

「で、何すれば良いっすか？」

「簡単だよ。いつもの様にミラージュコロイドで運んでくれれば良い。僕がノウイと先行して、ミラージュコロイドで先手を取るよ。まあ最初はみんな一緒で、真っ先にシルクちゃんの魔法で最初のポイントはケチらして貰うけど、それ移行は僕達が先行する」

「それなら、常にみんな一緒に飛べば良くないっすか？」

僕の言葉に、そう返してくるノウイ。わかってないな全く。

「最初はしょうがないけど、常に全員一緒にいたら、狙われるだろう。分散してたら、先行してる方を奴らは狙う筈だ。

それにこれなら、常にストック魔法じゃ無くてもいいし、いざと言うときの為の保険もかけれる。僕達はポイント毎のアンデットを一時的に動けない程度までバラしたら、更に先行する。

そしたら常に攻撃に晒されるの僕らだけでいいんだよ」

「ちょっと待ちたまえ！　スオウ君、その作戦に異論はないが、別に先行を勤めるのが君一人じゃ無くても良いと思うよ。

ノウイ君は残念ながら戦力にはならないんだし、一人で戦うリスクは大きい。何故僕達を入れない？」

テッケンさんが心優しくそう言ってくれる。まあ確かに僕一人じゃ不安なのかな？　けど、こっちは結構強くなってきた気はするんだけど。

僕はテッケンさんの真剣な顔に向かって、余裕の笑みを見せてこう言うよ。

「大丈夫ですよ。僕は奴らの攻撃をかわしきる自信が有ります。一人なのは、十分な場所を確保するため。この階段はそれなりに大きいけど、降り注ぐ光をかわしきるには、スペースが必要じゃないですか。

ノウイを入れて既に二人分のスペースが必要だから、一人がベストなんですよ」

僕の理路整然とした説明……するとテッケンさんはこう返した。

「成る程……だがそれなら、スオウ君で無くても良い。僕でも出来ると自負できるよ」

なんとなくだけど、そう来ると思ったよ。確かに出来ない事はないと思うけどね。でもここは、自分がやりたいって言うか……僕の出番の所だよ。

だから僕は彼に向き合ってこう紡ぐ。

「テッケンさん、ここは僕がやります。僕の事を思ってそう言ってくれてるんだろうけど、今回は僕にやらせてください。勿論ありがたいと思ってるし、感謝もしてます。

貴方は本当に人の為に尽くす事が出来る素晴らしい人だから、すっごく頼りに成ります。だけど……それに甘えてばかりいちゃいけないと思うんです。

僕はアイツの前に胸を張って立ちたい。守られるだけでたどり着いたって、それが出来ないじゃないですか。これはちょっとした意地です。

それにあんな雑魚に僕が負けるとでも？」

最後に僕は自信たっぷりにそう言った。するとテッケンさんは「やれやれ」と言ってニカッと笑い返してくれる。

「やられるなんて思ってないさ。君は強い。そうだね、僕はちょっと過保護に成りすぎてたのかもしれないな。いいよ。ここは君に譲ろう。奴等の手の内はわかってるし、君なら大丈夫だろう。
だが一つ訂正だよ。僕はそんなに聖人君子みたいな奴じゃない。僕が良い奴に見えるのはそう有ろうとしてるだけだよ。つまりは仮面さ」
「それでも、そう出来る事は立派だと思いますよ」

普通は仮面被ってたって、ここまで出来ないよ。途中でボロが出てきたりするものだ。けど、テッケンさんにそんな事は今まで一度も無かった。
だからこそ、みんな信頼を彼に預けるんだ。それはもう立派な事だ。すると不意に、隣の方から「ふふふ」と笑う声。
僕とテッケンさんがそっちを向くと、シルクちゃんが嬉しそうに笑ってた。

「なんだか男の子って感じですね」
「そう……かな？」

なんだかちょっと気恥ずかしいな。さてさて、意見もまとまった様だし、早速作戦実行だ。

「ノウイ！」
「もう準備は万端っす。いつでもいけるっすよ」

なかなか手際が良いノウイ。じゃあちょっと、攻略と行きますか。ここからはノンストップで！

「よし、行こう！！」

「「「おおーー！！」」」

僕達はそんな声と共に、まずは全員で四段階ある階段の一段目へと飛ぶ。そして敵の目の前に現れるなり、シルクちゃんがピクの羽を一枚握り、ストック魔法を解放する。放たれたのは範囲系の回復魔法。現れた魔法陣の中にいる対象を回復させるって奴だ。

決まった範囲に密集してるこの場所では確かに効果覿面な魔法だった。回復の為の鮮やかな光が、アンデット共を駆逐していく。だけどここで止まってる訳には行かない。

僕とノウイは、更に二段階部分へと、間髪入れずに飛ぶ。下の方へ向く前に、僕達をターゲットさせるんだ。セラ・シルフィングを操り、密集してるアンデット共の体を次々とバラしていく。

二刀流はこういう一体多数で力を発揮する。回転を加えて行けば、三百六十度どこの敵でも打ち倒せる。だけど、この時には既に、アンデット共の攻撃はこちら側に集中してきてた。

予想通りだけど、想像以上に厄介だった。だけど奴らの攻撃は味方にも通る。それが幸いしたりもしてる。僕が切り刻んだ敵が、味方の攻撃で再生出来ないご様子。

その間にもシルクちゃん達はこちらに駆けあがって来てるし、行ける！

そして魔法が届く所でシルクちゃんが再び魔法を放つ。足下に倒れてた奴らはこれで消滅。次は三段階目へと僕とノウイは飛んだ。ここを抜ければ、最上段。一気に決める！！

紫の光が飛来する中、青い雷撃の光が炸裂する。ボロボロと焼きただれて崩れ落ちるアンデット共。でもそれでも死んだ訳じゃないんだから、マジでホラーだよ。

ここまで来ると上から降り注ぐ攻撃の尋常の無さったらない。こんなにまだいやがったのかって位に、絶え間無く光が降ってくる。

しかも数十体が集まっての合体魔法なんかもしやがるご様子。例

のデカいバージョンだ。それらが三個位降り注ぐと、流石に避ける場所がない。

「ヤバいっすよスオウ君！」

「避けれないなら、斬り裂くまでだろ！！」

セラ・シルフィングの刀身がバチバチとスパークし出す。そして雷撃を帯びた剣で、僕はその攻撃を斬り裂いた。するとそのタイミングで、シルクちゃん達が到着。アンデット共を消滅させて、残りは最上段だ。

「ノウイ！　一気に中央付近まで頼む！　出る場所は高い所で！今度は全員でだ！！」

僕達は降り注ぐ攻撃の中、それぞれ手を伸ばす。そしてそれを掴みあって、一斉に飛んだ。そして現れたのは、最上階のだたっ広い、空間の中央付近の空中。

真下にはまだボスクラスモンスターが倒れてる。

「やっぱりだ……僕が見える模様は、あの倒れてる奴の真下へ続いてるぞ！」

「ようは奴が邪魔だと言うことか」

鍛冶屋が素早くそう続ける。僕は武器を握りしめてこう続ける。

「そう言う事だ！！」

するとみんながそれぞれの武器を構えだした。考える事は一致してるみたいだな。上から見たらわかる。この場所からの出口。

それはこの空間その物だ。この最上階の地面にはどうやら魔法陣

が刻まれてるっぽい。地面に居たときは気付かなかったけど、こうやって少し地面から離れると見える物がある。
そしてその中央に倒れてるボス。さらにはそこへと伸びてるこの模様。クリエが入ってきた場所は同じだったって事か。入り口は同じでも入り方が違うみたいな……まあ、良いかもう。
こいつを退かせば会えるんだ……なら今はただこの一撃に全てを込めて。

「「「うおおおおおおおおおおおおお！！」」」

全員での一斉攻撃。僕達は倒れてたボスを吹き飛ばす。そしてそこに有る模様へと僕が触れると、溢れ出す光に視界が包まれた。

繋ぎ紡いだ扉の開け方（後書き）

第二百二十一話です。
ようやくこのダンジョン脱出。今度は本当です。いや、まさかこんなに掛かるとは……さて次は箱庭へといよいよ足を踏み入れる訳ですけど……そこにも不穏な空気が流れてます。
てか、そこが中心ともいえるし、まだまだスオウ達は大変そうです。スオウ達よりも先に動いてる人達もいるし、その人達ともどこかで邂逅するでしょう。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

虚無の籠庭（前書き）

どうして……なぜ僕はここに居るのかが分からない。何をやって、誰とやって……何を目的に僕はここに居る？　何も分からないまま囁く草花の中を歩いてると、小さな背中があった。

僕は目的も理由も無く、その背中を追う。何故かそうしないといけないと思ったから。

虚無の籠庭

肌を擽る優しい風。そんな風が鼻孔に香りを届けて吹いていく。暖かな日差しは肌に心地良い温もりを与えて、うたた寝をしちゃいそうな長閑さを誘発してる。

（ここは……）

囁き有ってる草花の中で、僕はそんな楽園みたいな気持ちで目が覚めた。ここの空気に思わずボンヤリしてしまう頭。僕は首を振って無理矢頭を叩き起こす。

そして目の前に広がる光景に、しばし呆然だ。

「あれ……なんだったっけ？」

頭が上手く働かない。まだ寝ぼけてるみたいだ。第一声がこれって……自分がバカみたいじゃん。緑の草に混じって黄色い花が揺れている。空を見上げると蒼い蒼い景色と、白く大きな雲が広がって……その真ん中に太陽という輝きがある。

それはどこまでも、今までとは違う。

「う……ん？」

今まで？　って何だっけ？　寝ぼけてるだけ……と思ったけど何をやろうとしてたのか、上手く思い出せない様な。頭に膜が張られてるみたいな……おかしな感覚。

てか、そもそも何で僕はここに？　一端僕は深く深呼吸を繰り返してみる。きっと脳に酸素が足りないんだ。そう思ったから。

体一杯に入ってくる空気がなんだかおいしいと思える。空気で体内がリセットされる様な――そんな新鮮さだ。だけど体内の空気を入れ換えて思い出したのは「そう言えば夜じゃなかったっけ??」位。

けどここには燦々と日差しが降り注いでて……あっさりと自分の勘違いだなと納得した。なんか深く考えなくてもいいやって気に成るんだ。

するとその時、目の前を蝶らしき生物が横切った。まあらしいってのはリアルじゃ見たことない蝶だから、そう断言するのは不味いかなみたいな配慮だよ。

この蝶らしき生き物は姿形はまさにそれ……だけどなんと言うか……曖昧な感じ？　黄色い光がそんな形をしてるってだだけなんだよな。

しかも羽を羽ばたかせる度に、りんぷんが舞ってるし、何とも綺麗な蝶だ。そしてふと気付くと、その後を追ってる小さな姿が見えた。

なんだか見覚えが有るその後ろ姿を、僕は思わず追いかける。見渡す様な草原を下に進むと、そこには川が有った。そして例の蝶が一杯居た。キラキラキラキラしてる。どうやら水辺のあたりには、黄色い花が一杯咲いてるみたいだ。

それを目当てに蝶が集まってる。

「ってあれ？」

下の方に気を取られてる間に、小さな背中が消えてる。追ってた筈の一匹の蝶は見えるのに、あの子がいない。てか、何で後を追ったんだろう？

なんだか追わないといけない気がした様な……するとその時、バシャバシャという音が耳に届いた。そちらを見ると、例のあの子が

川に入って遊んでるじゃないか。
何故かホッと息を吐き出す僕。その理由がわからないんだけど、でも何となく安心だ。小さな子が楽しそうにしてるのってそれだけでいいものだよ。

てか、あの子白い宗道服ビシャビシャに成るんじゃない？　まあだけど、全然気にしてなんかないな。綺麗な水と蝶と戯れるのに夢中みたいだ。
それはなかなか絵に成る光景。絵画とかに描かれても良さそうだ。でも僕にはそんな芸術のセンスは無いから、取り合えず写真で……ＬＲＯの写真の取り方はいたって簡単だからね。

まずは両手の親指と人差し指を使って四角を作る。そしてその手を取りたい物へと向けて、被写体をその四角の中に納めます。
後は「シャッターオン」の声で頭にカシャリと言う音が響き、撮影終了。そのまま手を解くと、そこには四角く切り取られた画像が、宙に浮いた状態で残るんだ。
まあ、後はそれをウインドウにしまうか、気に入らなかったそのまま排除かの二択だね。後は勿論、取った写真は必要分に幾らでも増やせるし、データだから幾らだって引き延ばし縮小可能だ。
てなわけで、そんな便利な機能を用いて、僕は自身の手というファインダーをあの子へと向ける。

「ん？」

なんだかあの子が、僕の方へ手を振ってる様な……気付いたのか？　じゃあ、あれは一緒に遊ぼう的な意がこもった誘い？
僕はファインダーから顔を上げてあの子を見る。まあ実際気持ち良さそうだし、悪くないかなとか思う。それにあんなに笑顔で手を振られちゃね。

僕はしょうがない感を出しつつ一歩を踏み出す。すると後ろからもう一人の女の子が、手を振りつつ僕の横を通って行った。

（うわぁぁぁぁ）

と、まさに僕は思ったよ。これは赤面物だ。勘違い……勘違いもはなはなしいとはこのことである。あの子は僕じゃなく、もう一人の子に手を振ってた訳だ。

それをあたかも自分に向けられてるみたいに勘違いして……さらにはしょうがない振りまでして踏み出してたんだから、穴があったら入りたい心境だ。

普通の人なら耐えられずに、一刻も早くこの場から何気ない感じで去りたいと思う筈だよ。まあ実際僕も、何も無かった事にして去ろうと思った。だけどついつい、視線があの子達へと向いてしまう。

何か……気になるんだよな。後を追ったのだってそうだし、何か大切な事が頭のどこかに追いやられてる感じ。それも故意に。

視線の先では二人の少女が大ハシャギしてる。水を掛け合ったり追いかけっこしたり、その勢いのまま転んだり……だけど凄く楽しそうに笑いあってるよ。

一人は白い宗道服に身を包んだモブリの少女。そしてもう一人は普通の人の女の子だ。体格からして七・八歳くらいかな？　肩よりも少し長い黒髪を、どっかの民族衣装的な柄のスカーフで纏めてるのが特徴的な子だ。

服装は、タンクトップに短パンという何ともアグレッシブな格好してるよ。

二人は気が合う親友みたいな物なのかな？　随分違うけど……なんとなく自分達の小さい頃を思い出す。微笑ましくなるな。

てかモブリ小さい……今更だけど、あの年頃の人の少女よりも随

分小さい。まあテッケンさんでさえ、膝小僧位までしかないから、子供となると当然だし、一緒に居たときに散々そう思った筈……ん？

「あれ？　そうだ……僕はあの子を……アイツを知ってる筈で……」

頭の膜の隙間から僅かに漏れだした物が映像と成って流れた。そこには確かに僕とアイツがいて……

「――っつ！？」

だけど全てが流れ出す前に、再び曖昧な膜へと隠されていく。僕はなんとももどかしい気分を味わってた。あそこにいるモブリの少女……あの子の為に何かやってきた様な……

「って、居ない？」

僕が少し目を離した隙に、川は静まり帰ってた。聞こえるのは僅かなせせらぎだけだ。まるでさっきまで見てた光景が夢か幻でもあったかの様な感じだ。

やっぱり写真を撮っとくべきだったかも知れないな。今更後悔しても遅いけど。僕は取り合えずあたりを探して見ることに……どうやったってあの子（モブリの方）が気になって仕方ない。

だけど幾ら歩いても人っ子一人見あたらない。やっぱり幻だったんだろうか？　そう言えば、アイツ等の声……聞こえて無かったんだよな。

よくよく考えたらそれっておかしな事だ。そして姿だけ見えて声が聞こえないってのも、最近体験してた様な……う～ん。

「ん？　あれは……家？」

適当に進んでる内に、一つの建物を見つけた。この場所にポツンと佇む様はなんだか寂しい感じだ。まるで雪だるまと言うか、円を二つあわせた様な作りの建物。
僕は取り合えずそこを目指して足を進めた。そして目の前に到着すると、ちょっと驚いた。なんだか荒らされてないか？
周りの花壇らしき物は踏みつぶされてるし、明らかに外には戦った様な形跡がある。それに窓は割れてるし、扉なんて立て付けが悪いどころか、既にブランブランしてるぞ。

一目見た印象だと、まさに廃墟だな。まあだけど、長年放置されてきたって訳でもなさそうだけど……周りから焦げ臭い臭いとかもするんだよね。
それに干されてる服も、地面に落ちちゃいるけど有るし、こうなったのはついさっきみたいな風だ。取り合えず警戒しながら中を確認だな。
僕は忍び足で割れた窓へと近づいて室内を伺う。

（誰も居ないな……てか、これは酷い）

室内は酷く荒れてる。家具は倒れたり壊れたりしてるし、床なんて抜けてる所もある。でもここからじゃ全てが見える訳でもないし、確認の為に中へ入った方が良いかも。
敵……と呼べそうな奴らもいないしな。僕はブランブランしてた玄関へとまわり中へ。なんか中は妙な熱気という物がまだあった。
これは……戦闘の熱だと思う。なんとなくそう感じるよ。まあこれだけ荒れてるんだし、きっとここに居た人達は抵抗をしたんだろう。

だからこそのこの惨状だ。僕はまずはさっき窓から見た部屋へ――と言っても、あんまり部屋数が有るわけでもなさそうだ。

てか円が二つ重なり有った感じの二つしかないような。まあお風呂は別になってたけど、寝室とかの概念が無いのかな？　でもここにベットらしき物は無い。と思ってたら、上がどうやら有るようだ。
あそこが寝る場所かな？　なんだかここも僕は見たことある気がする。外はそうでも無かったけどさ、中に入るとそんな感じが強くなった気がするよ。

特にここから見える反対側のキッチンとか、あの壊れた窓から見える外の景色とか……一回見たような。僕はまず一階を見て回った。それは酷い有様としか言いようがないな。食材とかもぶち撒かれてるし、戦闘の爪痕がそこかしこに見て取れる。
次に僕は二階へ。まあ二階と言っても、二つの円の半分部分だけで、部屋として分けられるのかも微妙な物だけど。
二階の敷居は布一枚。それも半分は斬り裂かれてる。それを越えると、そこにはなんだか哀れになったヌイグルミが沢山転がってた。それもかなりの量だな。
それにヌイグルミだけじゃなく本も一杯だ。子供らしい絵本が多いようだけど……そうじゃないハードカバーの本も結構ある。

なんか宗教関連の本が目に付くな。そう思いながら奥へ進んでいくと、パキッと何かを踏んだ様な音が耳に届いた。足下を見るとそこには写真立てがあった。中には当然ここの住人であろう写真が入ってる。
僕は腰を下ろして、その写真立てを拾い上げる。すると壊れ欠けてるのか、貯まってた写真が漏れ出す様に展開された。

そこに写ってるのは二人のモブリの写真ばかり。一人はさっき見た白い宗道服の女の子。それともう一人は黒い宗道服に身を包んだ、大人サイズのモブリの女性。
そんな二人の楽しそうな生活の一ページが切り取られた様な写真

の数々だ。いつも笑ってる小さなあの子を、女性が優しく見守ってるって感じが伝わる写真が一杯あった。

「クリ……エ？」

写真を見てると不意にそんな名前が出てきた。そうだ……この子は確かクリエなんだ。僕は知ってる筈。

（なのに……どうして？）

展開した写真に目を落として僕は考える。頭の靄をかき消す様に考える。だけどその時だった。大量のヌイグルミの中から、何かが飛び出してきやがった。

「十字架は……罪人を裁く矛となる！！」

「ぬお！！？？」

降り注ぐ等身大クラスの十字架。それが僕がめがけて降り注いだ。何とか床を転がって難を逃れたけど、いきなりなんなんだ？　敵か？　僕はセラ・シルフィングに手を伸ばす。

てか、さっきの攻撃どっかで見たような……すると、十字架の向こうから小さな襲撃者の声だけがこちらに届く。

「まさかわざわざ戻って来るなんて……私に止めでも刺しに来たの？　でも生憎と、まだ死ぬわけには行かないのよ！！」

その声と共に、十字架が更にこちらへ向かって飛んでくる。派手で直線的な攻撃。避けるのなんて実際造作もないけど、僕はやっぱりこの攻撃を知ってる。

この攻撃には裏が有ることも。

「――っ！」

かすりもしないで避けたはずなのに、腕には一筋の切れ目が入ってる。やっぱりだ。デカい十字架に目を奪わせておいての、小さい十字架の仕込み。

それらを上手く使い分ける奴だった……そういう奴だった？

僕はやっぱりこの相手も知ってるぞ。

「どうした？　そんなもの？　私を殺しに来たんでしょう。ならもっと気合い入れないとウッカリ殺しちゃうわよ！

まあ、降参して爺共の狙いを話すって言うのなら、私の慈悲深い神は貴方を許してくれるでしょうけど」

なんかそんな事を言いながら、攻撃は更に激しくなって行くんだけど……絶対に降伏しても許してくれる分けないよあれじゃ。

絶対に拷問とかが待ってるコースだ。てか、勘違いだと言うことに気づいてないよなあの人。どうにかしてそれを伝えた所だけど、二種類の十字架が邪魔してそれも難しい。

デカい十字架は僕の姿を隠す事と、派手にこの家をぶち壊す事で邪魔すぎる。残骸飛び散らせまくりだし……小さい方は上手く避けた先とかに回られて行動制限される。

まあだからって小さい方にはそれほどの致命的な威力はないし、いざと成ればデカい方を打ち落としつつ、小さいのは無視して突っ込む事も必要だな。

「おい！　ちょっと待てって！　僕はっ――――敵じゃない！」

敵じゃ……無かったよな？　なんかよく考えると、自分の言葉に

自身が持てなく成るのは何でだろう？　まあだけど、僕はここで誰かを殺そうなんて思っちゃ居ないわけだし、それを伝える事が優先だ。

「何をふざけた事を。私達はもう明確なる敵でしょう！　私はあの子を利用するのは反対です！　なので既に、止まることなんて出来なっ――！！」

一つのデカい方の十字架が床に刺さって二階部分が耐えきれずに崩れさる。僕たちは二階から一階へと落ちていく羽目に。

だけどそんな中、僕は見た。あの人……なんだか、動いてない様な？　頭から落ちて行ってないか？　僕は近づこうとしたけど、なんせ二階と一階位じゃあっと言う間だった。

「けほっ……ごほっ……」

僕は瓦礫を押し退けて立ち上がる。一階部分は巻き起こった粉塵で白くなってた。そんな中、僕はあの人を捜した。なんか見た感じ結構ボロボロだったんだ。崩れさる前に言葉が途中で途切れたのって、崩れたのに驚いたからじゃなく痛みがぶり返したとかなんじゃないだろうか？

てかモブリは小さいから、こういう時は結構不便だな。なかなか見つからない。そう離れてない筈だけど……するとその時、ガコンという音がすぐ近くで聞こえた。僕は直ぐ様そちら側へ。

「ぐっ……十字架は……」

瓦礫の中から何とか体を這い上がらせた様な格好で、その人は居た。しかも手には攻撃しようとしてるのか、デカい十字架をまだ持ってる。なんという執念だよ。

けど、既に虫の息なのは明白。僕は駆け寄ってその人の手を掴んだ。

「な……何を？」

「何をって、助けるに決まってるだろ！」

僕はそう言ってその人を瓦礫の中から引っ張り出す。でも助けたのに何故か、強引に手をふりほどかれた。そして十字架を向けられる。

「なんのつもり……よ。あそこは止めを刺す……絶好の機会……だった……の……に」

次第にふらついて行ったその人は、その場にバタンと倒れ込んだ。どうやら限界が来たらしいな。てか、無茶し過ぎた。

激しい戦闘の後は、僕がここに来たときから伺えたのに、更に動くから倒れてしまうんだ。僕は動かなくなったその人を無言で見詰める。

なんだか似てるのかも……とか少し思った。上手く思い出せないんだけど、この人を見てると少し自分と重なる様な……そんな気がする。

だから僕はそっとその人を抱えた。手に持ってたその人の十字架は光を放ち、胸に納まるネックレスへと戻った。やっぱり見覚え有るよこれ。

「僕にもこの人の様に守りたい物が……助けたいと思った奴が居たはずだ」

僕はそう呟いて、瓦礫の山を踏み越えて外へ出た。取り合えずこの人を休ませないといけないだろう。それにこの状況……気を抜け

ばどうでもいいとさえ思考がそっち方向へ向く事が異常だと思えるこの感覚の正体を知りたい。
それにはきっと、この人が必要だ。僕は取り合えず落ちた洗濯物からタオルを取って、川の方へと向かう事にした。

（歌が聞こえる……私が教えて、初めてで唯一あの子が笑顔を見せてくれた歌が。でも……一体誰の声？　あの子の鈴の音の様な可憐な歌声とは随分違う。シスターの声とも違う……不器用でちょっと酷い旋律。
だけど……優しさは伝わるわ。この声は……）

「『幾億の星が～流れ落ちるその時～私はその星の一つに～なれているのだろうか。一人で輝く星になんて～成りたくはな～いよ～。孤独は罪で、それが罰。紡いだ声はどこへ行くの～』う～ん、ここからはわからないな。何となく覚えてたけど……これで良かったっけ？」

僕は記憶の糸をたぐり寄せてその歌を紡いでた。川のせせらぎをBGMになんとも風情が有る感じでね。すると不意に続きが紡がれてくるじゃないか。

「『言葉の欠片を拾っても、私じゃ届ける事が出来なくて。時間とも全てが移り変わっても、私はついて行く事さえ出来なかったの』」

「……起きたんだ」

僕はちょっと恥ずかし気にそう言った。だって一人で歌ってた所を誰かに聞かれるって恥ずかしくない？　僕の言葉に彼女は「ええ」と返した。

「これは貴方が？」
「まあ、そうだけど」

その人は枕代わりにしてたタオルを持ってそう言う。直接頭を地面につけるのはどうかと思ったんだよね。

「その歌って……」
「これは私があの子に教えたんですよ。まあだけど、さっきの歌詞はあの子が勝手に変えたバージョンですけど。でも私も、何となくこっちが好きなので」

そう言う彼女はさっきとは全然違う表情に成ってる。なんというか……愛娘を自慢する母親みたいな。てか、僕には色々わからない事がある。

「あの子って？」

だから僕はそう言った。すると明らかに呆れた。

「はあ！？　何言ってるのよ貴方。あの子と言ったらクリューエル様でしょ。まあ貴方からしたらクリエですよ」

クリエ……と言うとあの川で遊んでた子だよな。モブリの方だ。僕は「そう……なんだ」と言う微妙な返事しか返せない。だって頭のフィルターが邪魔なんだ。

「そうなんだって貴方ね――って、ああそう言うこと」

僕の微妙な反応に、何故か納得するような素振りを見せるその人は、やっぱり何かを知ってるみたいだ。

「何がそう言う事だよ？　この頭に膜が掛けられてるみたいな感じが何か、あんた知ってるのか？」

「ええ、まあ何も対策をしてないのなら影響を受けて当然ね。貴方、どうして自分がここに来たのかも分かってないでしょう？　目的をすっかり忘れてる」

「確かにそうだけど……何なんだこれ？」

目的……確かにそれが有ったって感じはするんだけど、やっぱり思い出せないんだよな。

「ここは箱庭。私達はあの子がここに居たくなるような仕掛けをしたわ。あの子がここで楽しく過ごせるようなそんな仕掛け」

「仕掛け？　何だよそれは……」

少なくともあまり良い事な感じはしないな。そしてそんな僕の予想通り、その人の顔は僅かに曇った。

「それは……最も強い目的を失わせる事。ここに居ることに疑問を抱かせない為で、外に出ようと思わせない為にね。今の貴方もその状態でしょう？

まあだけど、肝心のあの子には何故か効き目が薄かったのだけど……けど貴方を見る限り、その効果は抜群の様ね」

「最も強い目的って……夢とかそんなのか？」

僕の言葉に「ええ」と頷く。僕は思わず、その人を強引に持ち上

げてた。だってそれは……縛り付けるために……その為だけに……でもそれでも突発的な感情の現れだった。けど何故かそうせずには居られなかったんだ。

僕にはその時、声が聞こえてた。聞き覚えのある幼い少女の声。

『私はねスオウ。月に行きたいの！　月に行かなきゃいけない気がするの！！』

虚無の籠庭（後書き）

第二百二十二話です。

今回からようやく箱庭な訳ですけど、最初から訳が分からない事が一杯。そして一番訳がわかってないスオウは混乱しまくりです。だけどそれでもやっぱりスオウは何かに導かれてるのかも知れないです。

その先での意外な出会いは、クリエの謎を紐解いてくれるかも――的な。

てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

終着点の違う思い（前書き）

僕は目の前のモブリを投げ飛ばす。覚えてなくてもそれくらいは出来た。そして聞き出したのはその人の本当の思い。それは安心できる事だった。でもそれでも、僕達はどうやら相容れない。

けれど、今は協力をしないと。僕達はクリエを助けたいって事に変わりはないんだから。

終着点の違う思い

「お前達は……自分達の都合でなんてもんあの子から奪ってんだ！！」

僕は胸ぐらを掴んだその人に、唾を吐き掛ける勢いでそう言った。だって許せないだろう……覚えて無くても、そんな常識的な感情は沸き上がる。

だけど胸ぐらを掴まれて、更に怒鳴られてるのに、そのモブリは至って平然な顔してやがる。

「なんて物……ね。確かに私達がやってた事は酷いことなのか知れない。だけどあの子の存在は、シスカ教を信じてる人々の為にも、あってはならない物なのよ」

「有っては成らない？」

訳が分からない。だってあの子はただの子供だったじゃないか。ただ友達と楽しそうに遊んでた子供。それはきっと姿や形が変われど、リアルにだってうようよいる普通で、当たり前の光景だろ。

一体あの子の何が、夢を奪われてしかるべきなんて事をされなきゃいけない程なんだ。

「何なんだよそれ……訳わかんねぇ。じゃああの子はあんた達の神様にも見放された存在ってか？　あんた達は、あの子が居なかった方が良かったと思ってるのか？」

僕は強く彼女を睨んでそう紡ぐ。すると腕の先のそのモブリは、僕から目を反らし、蒼一杯の空を見つめる様にしてこう言った。

「ええ……その通りよ」
「――っつ！！　んの野郎！！」

僕は大きく振りかぶってその人を川へと放り投げた。大きな音と共に水柱が上がり、無数の水滴が日光を浴びて輝く。
だけどそんな一瞬は直ぐに終わり、止まらない川の流れの中に泡となり消えていく。そしていつもの流れを取り戻した川の反対側に、僕が投げ飛ばしたその人は居た。
下半身は水の中のまま、上半身だけを岸へ上げてる。

「随分と乱暴な事をしますね。はは……隠された筈なのに、なんで貴方はそこまで熱くなってるのですか？　覚えて……ないんでしょう？」

こちらを見ず、顔を上げず、その人はそんな言葉を紡いだ。流れる川のせせらぎが僕たちの間に流れてる。僕は背中を向けてるその人へ向けて、こう返した。

「確かに、上手く思い出せない……けど共に過ごした時間があったって事位分かる。思いだそうとする事は、そこに何かが有るから、そうしようと思うんだよ。
隠されたって見えなくなったって、ここから無くなった訳じゃないんだ」

僕は自分の胸を叩く。そこに有るものと言ったら心だろ。こいつはまだあの子と繋がってるのだろうか。節々を思い出せない今の僕じゃ自信なんて無いけどさ……でも僅かでもそんな気はする。
だからこそ僕はまだ、あの子の為に何かしたいと思えるし、あの子を取り巻くこの環境に怒りを覚える事だって出来るんだ。

「ふふ……心ですかそれは？　そういう事……頭には効果てき面でも、そこまではって事――はっはは……あはは」

ブツブツとなにやら呟いて、不意に笑いを漏らしたその人。なんだかおかしく成ってる？　おもいっきりブン投げたから、いくら水でも打ち所か悪かったのかも知れない。

僕がそんな心配してると、有ることに気付いた。あの人の肩……震えて無いか？　それはきっと、寒いからって訳じゃない。だってここは随分と暖かい。それに川で水遊びまでやれるのなら、こんな短時間で震える程寒くなるなんてあり得ない。

だとしたらあれは……見間違いじゃないのなら……一体何に対して震えてる？

「その……通りなのに」

「え？」

消え入りそうな声に、僕は思わずそう言ってた。そしてその人は、続く言葉も変わらず消えてしまいそうな声で紡ぐ。

「最初から居なければ良かったの……それを私は……否定なんてしない。私達の教えを覆す様な子だもの……けど……あの子は笑うのよ。そして怒って拗ねて駄々こねて……泣いて寝て、そしてまた懲りずに笑顔を作る」

優しいのか悲しいのか分からない風が吹いていた。頬を撫でるようで、そのささやかさが空しいような気もする。それはきっと受け取り方で違ってくる事なんだろう。

僕はきっと、目の前のこの人の言葉を聞いて、悲しくもあり嬉しくもある。だからこそ、ただ流れるだけの風に、そんな解釈を勝手

に付けたんだ。
この言葉がきっと、この人の本心。
「貴女は……あの子……クリエが居なかった方が良かったなんて、思ってない」
僕は反対側で肩を揺らし続けるその人に向かってそう言った。頑なに顔を見せようとはしないけど、涙の粒はこちらからでも見えてた。
何だろうなこれ……僕はまるで、この人の懺悔でも聞いてる気分だ。僕は神なんか信じちゃ居ない、無神論者なんだけどね。
本当は逆であってしかりな筈なのに……だけど、この人の気持ちが分かったのは良かったと思う。だって僕にはやるべき事が有るみたいなさ……そんな気がするんだ。
そして今の僕は、余りに頼りない。何をすればいいのかも、自分が何をしたいのかも曖昧なんだ。だから僕は、言葉を発しなくなったその人に、この言葉をぶつける。
「教えてください。今、この場所で起こってること。何があったのか。そして僕がやるべき事も！」
僕の言葉に、その人は答えてくれる。顔を上げ、川を進み。僕の元まで戻って来て、僕を見上げて言葉を紡ぐ。
「良いでしょう。もうここまで来たのなら仕方ない。元老院もこのまま貴方を放置するとは思えませんし、使える駒は一つでも増やしておきたいですから」
駒って……僕をどう利用する気なんだこの人。僕がちょっと引い

てると、彼女は胸の十字架を手にしこちらに向ける。その行為に僕はぎょっとしたよ。
だってあれは武器の筈。言ってる事とやろうとしてる事が違わないか？

「身構えないで頂戴。貴方もその状態のままじゃ、何かと不便でしょう？」

そう言うと、その人は何かを唱えだした。それはきっと魔法のスペル。するとその人の十字架から、枝分かれするようにもう一つの十字架が現れた。
そしてそれは僕の目の前まで浮遊してきて、更にネックレス部分が光で形成されていく。それは僕の首をぐるっと回って、光が取れていくと次第に重力に従って首に掛かった。

「はれ？」

するとどうだろう……なんだか超スッキリ。頭の膜が全て綺麗に取り払われたかの様な解放感。てか実際、さっきまでのモヤモヤ感が嘘の様だ。
何これ？　どういう事？

「どうですか？　頭の状態は良く成った？」
「おう！　完全僕って感じ！　なんか自分が戻ってきた様なさ。まあまさに完成系って奴が今ここに光臨したな。崇めて良いぜ、今ならな。好きだろそういうの」

なんか気分良いから言葉がスラスラ出てくるぞ。だけどそれを聞いたミセス・アンダーソンは何故か残念そうに僕を見てこう言った。

「頭は元から弱いのね」
「誰の事じゃあああああああああ！！」
僕の叫びはきっと、この空間一杯に響いてただろう。

「――で、今の状況って何なんだよ？　そろそろ全部押してくんないオバサン？」
僕達は箱庭の川を上流に向かいつつ、言葉を交わす。頭がスッキリしたから、今までのわだかまりを取っておきたい気分なんだよね。
だから対応もフレンドリーに成ってるだろ。

「オバッ……貴方、頭の靄を取ってから目上の人への言葉使いが成ってないわよ。いっとくけど、その十字架は私の意志で壊す事だって出来るのよ。
一生、ここに閉じこめて無駄な時間を過ごさせても良いんだけど？」

なんだかミセス・アンダーソンは僕の機嫌の良さに反比例して、こめかみの筋がピクピクしてる。年を取ると短気に成るとかの、アレかな？
これ以上皺が増えたら、年相応に見られなく成るんじゃないだろうか。ちょっと心配だ。まあミセス・アンダーソンの歳なんて知らないけどさ。

「無駄な時間は困るんんだけど……そんな事は、今はきっとしないと思うな。だって一人であんなにボロボロだったって事は、戦力が欲しいところだろ。
面倒なことだって今は嫌とか言ってたしな、少し前に。だからや

れる物ならやってみ～。ホレホレ」

僕は胸に下りてる十字架を取ってユラユラ揺らす。すると流石に切れたのか、ミセス・アンダーソンは自信の十字架を強く握って何かを紡いだ。

するとその瞬間、僕が揺らしてた十字架がズトーンと地面に叩き落ちた。そして同時に、十字架に繋がれてた僕も、地面と衝撃的（物理的な意味で）な挨拶交わしてた。

「ぬもおおおおお！！　イテーイテー！　オモー！　イテー！　やっぱオモオモ！！」

僕の視界は真っ暗闇。きっと変な態勢で唸ってる事だろう。するとすぐ近くからミセス・アンダーソンの声が届く。

「あらら、顔を埋める程地面がお好き？　なら全部埋まるまで徐々に重くして行って上げましょうか？」

「――！！」

こいつ本当に聖職者か？　行ってることはどう考えも女王様じゃないか！

「どうか、それだけはご勘弁を。神の御霊に御身を捧げる事を誓いますのでどうかお慈悲を……」

棒読みで取り合えずミセス・アンダーソンが気に入りそうな事を行ってみた。聖職者ってこう言うの好きだろ。だけど次の瞬間、十字架は更に重くなった。

このままじゃ首がポキッって行っちゃうよ。逆に神をバカにしてると思われたか。

「今の言葉が遺書って事で」
「どんな遺書だよ！　僕は死んでも神に仕える気は無いっての！
本当を言うと、都合の良い神で僕は十分だ。困ったときにお祈りを捧げるのを許してくれるなら、それで良いって感じの信仰心です！」
「大変ご立派な開き直りね」

ぬが！！　更に十字架が重く……マジで埋まるよこれは。嘘も真実をダメじゃないか！　どこか論点がズレてるのかも知れない。
え～とえ～と……

「あぁ！　ミセス・アンダーソンって下から見ると、他のモブリよりも脚が長い様な！　脚線美ですね！」
「えっ！？　あっ……そう？」

なんだか嬉しそうに自分の脚をスリスリ撫でだした。しかも妙に誇らしげ。なんか「気付いちゃったぁ～？」みたいな雰囲気を醸し出してるな。
だけど何はともあれ、重さは元に戻った様だ。全く、実際適当に言っただけなのに助かった。モブリなんて僕達から見たら全部短足に変わりはないっての。
まあそれは、口が裂けても言わないけどな。

「ふううぅ、首が折れるかと思った」
「これからは言葉には気を付けなさい。良い教訓になったでしょ？」
「教訓ね」

口は災いの元とか、ミセス・アンダーソンは言いたいのかな？
でも口八丁で難を逃れたし、一概にそうは言い切れない様な気がしないでもない。

まあ取り合えず、そんな反論は胸の中にしまって置くとして……そろそろ本題に入りたい所だ。僕達は再び川を遡る様に歩き出す。

「なんだか不満が有りそうな口振りね。今度失礼な事言ったら、ただじゃ済まないわよ」

ミセス・アンダーソンは小さい癖に随分強気だな。なにこれ？再度通告か？　オバサンって言ったの、まだ根に持ってるっぽい。

どう考えてもオバサンな歳の筈だけど、そこら辺は、きっとデリケートな問題なんだろう。本人に取っては。まあこっちからしてみれば、その歳でまだ割り切れないの？　って感じだけどね。

二十代三十代なら、オバサン言われて怒るのもまだ分かるけど……ミセス・アンダーソンはそろそろ認めても良いような。

どう考えてもお姉さんって感じじゃ無いもん。まあでも、取り合えず「へいへい」頷いてれば問題ない。不要な問題はさっさと流さないと。

さっきからずっと気になる事が一杯あるんだ。

「所で、何で箱庭に居るのが僕だけなんだ？　僕達は六人でここを目指してた筈なんだけど……みんなで最後の扉も潜ったし、別の場所にさっきまでの僕と同じ状態で居るとかか？」

「それは……どうでしょう？　いいえ、多分居ないわね」

「？？　どういう事だよ？　いや、ですか？」

僕は取り合えず語尾を言い直す。てか、居ないってそんな訳無くない？　疑問符を浮かべる僕をミセス・アンダーソンは指さしてこう言った。

「それはここを出たときに見られるでしょう。箱庭も特殊な場所な

のよ。貴方だから、ここまで入る事が出来たと思った方がいいわ」

う～ん結局は意味深に言って、答えは先延ばしかよ。僕だけがこうやって箱庭に居られるのも、何か特殊な理由が取り合えず有るって事か？

そしてみんなはここには来れてない。それはやっぱり、僕が最後の模様を取り込んでたから……って訳じゃ無いよな。

それならみんなそれぞれに模様を取り込んでたし、それにそれじゃあ、ここに僕だけが来れる理由にならない様な。

「まあ用は、みんなは箱庭の一歩手前に居るって事だよな。なら、僕がクリエを連れて行ってやるしかないって訳だ」

責任重大。元々背負う気だった物だけど、やっぱり一人になってみたらわかる。仲間の大切さ。ミセス・アンダーソンは頼もしくは有るけど、やっぱり仲間って物とは少し違う。

するとミセス・アンダーソンは僕の言葉を聞いて、寂しげにこう呟いた。

「連れて行く……か。あの子には帰る場所なんて無いのに、一体どこへ？　ここからあの子を逃がせても、元老院は……いいえ、シスカ教自体があの子を追う事に成るでしょう」

「じゃあ……アンタは一体どうやってクリエを助ける気だったんだよ？」

そんなにボロボロになって……一人でも対立しようとしてたんじゃないのかこのオバサン。

「私はただ、あの子を利用されるのが気に入らないだけ。上層部はね、まだ保守的なのよ。利用しようと考えてるのは、意地汚い元老

院の爺ども。
まだこれは内輪揉め程度の話よ。それに結局は、私達側はあの子をここから出さない様にするだけ。貴方とは目的の終着点が違うわ」
そんな事を言うミセス・アンダーソンは、なんだかちょっと冷めてる様な……それこそどこか諦めにも似た何かを僕は感じた。
だから僕はもう一度この質問をした。
「アンタは、それで良いと思ってるのか？」
「良いわよ。私は元老院のやり方が気に入らないだけで、聖院のやり方自体は反対しない。私はあの子の事を理解してるわ。
でもそれでも楽しく生きて欲しいから、ここが有るのよ。ここに居ればあの子は幸せなの」
スラスラと出てきた言葉。それを聞く限り、確かに僕とこの人の目的の終着地点は違うようだ。僕はアイツをここに戻す気なんか無い。
どの口が、アイツの幸せを語ってるんだよ。ミセス・アンダーソンだって見てるはずだろ、アイツはここから出ていきたいと思ってるんだ。
「幸せって、誰にとっての幸せだよ。それってアンタがただ、掴んでおきたいだけじゃないのか？　アンタがクリエを大切に思ってるのは本当だろうけど……その大切を自分の為の過保護に置き換えるなよ！」
僕は声を荒げて、アンダーソンにそう言った。次第に川は細長く、流れも速く成っていく。僕達はいつの間にか山に入ってる。
「過保護ね……でも聖院の総意は変わらない。そしてそれは私も納

得してること……そこは変わらないの。私も聖院の一員。神の教えを受けた一人だもの」

神の教え……そう言ったアンダーソンは、動きそうも無かった。ここら辺はもっと深い問題なのかも知れない。これじゃあ押し問答と同じか。

するとその時、山のどこかから爆発音が聞こえた。しかも続けざまに次々とだ。

「なんだこれ？」

「もしかしたら見つかったのかも知れないわ。急ぎましょう！」

そう言ってアンダーソンは走り出した。僕もその背を追いかける。見つかったって、クリエが元老院共にって事か。僕は駆けながら背中越しに声を出す。

「なあ！　元老院はクリエをどうする気なんだよ？」

「わからないわ。だけどきっと……ろくな事じゃないのは確かね」

「じゃあ別の質問だ。クリエって一体何なんだ？　前に創世歴がどうとか言ってたけど、あれはどういう意味だよ。ここまで来たんだ、十分深入りしてる。

だから良いだろ、教えろよ」

「それは……」

まだ渋ってる様子のアンダーソン。だけどもう一歩なのはわかる。ここで引いたらダメだ。クリエの事をもっと知ることは、きっとこれからに必要だと思う。

だから僕は更に言葉を続ける。

「頼む！　僕は別の意味でちゃんとアイツを助けたい！　それはき

っとあんた達とは分かりあえない事かも知れないけど、僕はアイツの事をちゃんと知って、それでも助けたいって思いたいから。
僕だけは、アイツの味方で居るつもりだから！」
「そう……ですか」

返された短い言葉。それは少しだけ、悲しそうに聞こえた気がした。それにまるで納得したかの様な言葉じゃないか。実際ちょっとびっくりだよ。そして少しの沈黙の後に、ミセス・アンダーソンは走りながらこう呟く。

「あの子は……」

僕はゴクリと唾を飲む。ついにクリエの秘密に迫る事が出来ると思ったから。だけどその時、僕達の周りからガサガサと言う音が聞こえてるのに気付いた。
爆発音に紛れてたけど、これってなんだか僕達と併走してるような。そう思った瞬間、植物を押し退けて赤い目をした狼っぽいモンスターが、汚く口を開けて飛び出して来た。

「――っつ！！　なんだこいつ等！？」

しかも出てきたのは一匹じゃない。周りから同時に四・五匹は飛び出してる。僕はとっさにセラ・シルフィングで一番近くの奴を切ろうとする。
するとアンダーソンの声が唐突に響いた。

「ダメ！　それを斬っちゃいけないわ！！」
「え？」

アンダーソンの声が届いた時には、僕は既に一体を斬ってた。す

ると、真っ二つにした狼がオレンジの光を放って、その場で爆発しやるじゃないか！

「げほっ、ごほっ――斬るなってこれの事か」

どうやら倒されたら、爆発するような仕込みがされてるみたいだ。なんて厄介なモンスターだよ。てか、なんか最近似たモンスターを見た気がするな。爆発機能は無かったけど……なんだかこの狼みたいな外見といい、赤い瞳といい良く似てる。

「こいつらは元老院があの子を回収するために放ったハンターよ。障害物は自らの身を犠牲にしても駆逐していく、そんな感じのね」

「たく、こんな奴らに子供を追わせるとか、元老院の爺はボケてるんじゃないのか！？」

まあ寧ろ、ボケてくれてればこんな事には成らないんだろうけど……それにしても、これじゃあ全然進めないぞ。

さっきから次々と現れやがって……既に二十体は越えてるぞ。

その間にも爆発音は続いてるし……こんな所で足止め食らってる訳には行かない。僕は同じように敵を避け続けてるミセス・アンダーソンを掴んで強引に肩車の要領で乗せた。

「え？　ちょっ……何のつもりよ！？」

「こんな所でグダグダやってたらクリエが危ない。道だけアンタは教えろ。後は全部、凪払って進む！！　イクシード！！」

その宣言と共に、僕は大量の敵へと突っ込んだ。そして爆発の連鎖が、山に僕達の軌跡を描き出す。ようやくなんだ……後少しで、クリエにたどり着ける。

一日くらい待たせたし、ふてくされてるだろうけど、行ってやら

なきゃいけないだろ。間に合わなかったじゃ済ませれない！！
僕が……僕が行かなきゃ行けないんだ！！
「どおけええええええええええええ！！」
吹きすさぶ風は、僕に触れる事さえ許しはしない。そして見えたのは、森の中にあるお菓子の家？　そこに次々とモンスターが突っ込んで行ってる。
今はまだ、結界が機能してる用だけど、あの数はヤバい。
「ちょっと、このまま突っ込む気！？」
「それ以外にどうしろって言うんだ！！　あそこに居るのなら、迷う必要なんて無い！！」
風と雷撃を帯びた剣が煌めく。僕はきっと、届いた筈……何だよな？　クリエ！！

終着点の違う思い（後書き）

第二百二十三話です。
ようやく次でクリエ再登場。箱庭という場所の核心へ迫れる筈です。スオウの記憶も戻ったし、良かったよかった。でもまだ、金魂水とは中々かみ合わないですね。
この道は正解なのか……残り四日？　か三日くらいでスオウは答えに辿り着けるのかも問題です。まあ既に、この道が間違いだとアウトっぽいですけど。でも何が起きるのか分からないのがＬＲＯだから、まだまだ引っ張ります。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

抱えた花（前書き）

クリエはクリエは初めての『あらすじ』って奴をやってみる！
今回はなんとクリエの視点が八割を占めちゃうね。クリエちゃんフゥーチャー回だね！　だけどそんなクリエちゃんフゥーチャー回にも関わらず、全てを持って行くアレは何だろう？
嬉しいけど、ここで冷静に考えたらやっぱり悲しいような！　でもでもとっても嬉しかったから、やっぱりオールオッケィって事で！　これで良い？　これで万事解決無決？
まあ取り合えず、クリエちゃんの可愛さに身悶えなさい！！

抱えた花

「シスター、なんだかさっきから外がうるさいよ」
「どうやら、彼らがここを見つけた様です。でも大丈夫ですよクリエ。ここの結界は強力ですから、そう簡単に破れないから、読書に集中してなさい」

優しそうな笑顔を作って黒い服に身を包むシスターはそう言います。だけど、それはやっぱり無理って言うか……私がどれほどお気楽な子供でも、ここまで来ちゃうと不安に成るよ。

「う～～無理無理！！　幾ら頑丈で安心だって言っても、こんなうるさいんじゃ読書なんて出来ないよ！」

しかも分厚い宗教学の本なんて、元々読む気も起きないよ！　読む振りをしてただけだもん。私は椅子を引っ張って来て、外の様子を伺うために椅子へ上って窓の外を伺おうとします。
だけど顔を出した瞬間に、狼みたいなモンスターが窓の一歩手前で大爆発。

「きゃうあ！！」

私は思わず椅子ごと後ろに倒れちゃいます。別に爆発の衝撃とかそんなのは一切なかったんだけど、それでもビックリしたの。
だって凄い形相なんだもん。しかも音は凄かったしね。

「大丈夫ですかクリエ？」
「うん、ありがとう」

私が地面にぶつかる前に、シスターが受け止めてくれた。外は伺えなく成っちゃったけど、次々と起こるさっきの爆発音には、やっぱり不安をかき立てられる。

「本当に……大丈夫なのかな？」

キュッとシスターの服を強く握る。するとその手にシスターの手が重ねられます。大きくは無いけど、暖かい手。私が一番信頼してる手です。

「大丈夫……何があっても、貴女だけは命に代えても守るから」

「そんなのヤだ！！　シスターが居なく成っちゃうのはイヤだよ！私は……そんな事に成るくらいなら、私が！！」

だってだって、ずっと一緒に居てくれたんだもん。家族だもん。だから私は、シスターが居なくなるなんて望まない。

だけどシスターはそんな私の頭を撫で撫でするだけ。顔を上げると優しい笑顔がそこにあります。

「ありがとうクリエ」

そんな言葉が小さな体の奥に染みます。いつもはそれで安心が広がるのに、今は胸の奥からジワジワとイヤな感じが染み出してくる。

だから私は、更にギュっと体を精一杯シスターにくっつけるの。どこにも行って欲しくないから……私は必死にくっつくの。

するとその時、リィンリィンという音と共に宙に画面が表示された。そしてそこに写ってたのは私のお家を襲撃してきた奴。

「クリューエル様、探しましたよ。ですがどこへ逃げても同じこと。

箱庭という場所に居る限り、私達の目から逃れる事は出来ません。
素直に出てきてはくれませんか？　別にヒドい事をしようと言うわけではないのですよ」

どの口がそんな事を言ってるのよってマジで思った。今まさにヒドい事やってるじゃない。ドンドン、ドンドンあんなモンスターまがいの物まで使って……私は震える体を押さえつけて、画面に向かって文句を言う。

「そんなの嘘ばっかり！　私だってアンダーソンの事あんまり好きくないけど、でもあんな事しちゃいけないもん！　信じれないよ貴方の言葉なんて！」
「あれはですね。実はアンダーソンが悪いのですよ。彼女こそ、クリューエル様を連れ去ろうとしてるのです。私達はそれをいち早く察知し、先手を打ったまでですよ」

人の良さそうな顔でそんな事を言う画面の中の人。元老院の中でも若い感じのその人は、一回位しかここに来たことない人。
てかそもそも、元老院の人は殆ど来ないんだけど……でもその時の印象はこの顔通りに良かった。けど今は……その言葉がどうやっても信じれない。

「それって……本当なの？」

私は画面を見つめて、もう一度確認の為にそう聞きます。するとその人は笑顔で「勿論」と言いました。シスターは「アンダーソン様がそんな……」とか呟いてるけど、私にはわかる。
嘘かどうかじゃなく、どっちを信じれば良いのかって事が。それを私のお友達が教えてくれるもん。
私は画面の中のその人じゃなく、周りに置かれてる物に目をやっ

てた。私のさっきの言葉は、その人じゃなく、周りの物へ向けての言葉。

彼らは私の呼びかけに答えてくれる。そしてこう言ってる。

『そんなわけない！　そいつの顔に騙されちゃいけない！　君を狙ってるのはそいつ等だ！』

みんなの声は確かにそう言ってた。そして私は、シスター以外ではこの声を絶対的に優先すると決めてるもん！　だから私は画面の中の人物を睨んでこう言います。

「ダメ！　そんなの信じない！！　貴方に騙されちゃ行けないって、みんなが言ってる！！　嘘つきはさっさと消えてよ！！」

すると画面の中のそのモブリは、明らかに顔が変わった。嫌悪するものでも見るように、細く尖らせた目で私を睨んで、舌打ち一つしてこう言います。

「ちっ、ゴチャゴチャゴチャゴチャとアンダーソンと言いお前といい。誰のおかげで今まで生きてこれたと思ってる？　そろそろその恩を返して貰おうか？

君には結構、お金が掛かってるんだよ！」

するとその瞬間、連続して爆発音が響きます。それに伴って家の中の揺れがどんどん大きく成っていく。本棚の本が落ちていき、テーブルやら椅子がガタガタと唸ってます。私はシスターと抱き合ってそんな揺れに耐えます。

「けはははははっはっはっはははははは！！」

画面からはそんなおかしな笑い声が聞こえてる。それがとってもムカついて、更になんだか悲しいけど、私にはどうすることも出来なくて……そしてそんな中、遂にお菓子の家の壁が崩壊します。

「結界がやぶられ……」

「けはははははは！　さあ鬼ごっこは終わりですよ！　貴方にはこれまでの負債分を纏めて返却願わないと！　お気楽な日々はもうおしまいです！！」

ビスケットの壁は壊れて、粉塵が黙々してる。その向こうにはきっと大量のモンスターがいるんだろう。もうダメなのかな？

ここで捕まったら、もう自由なんてない様な気がする。そんな事を考えて震えてる私。すると暖かな温もりがギュっとしてくれます。

「大丈夫……大丈夫ですから。私が守って上げますよ」

「シスター……」

そう言ってシスターは私を背後に回します。そして見据えるのは煙の向こう側。そんなシスターの体はちょっと震えてます。

私の前だから気丈にそう言ったけど、シスターに戦う事が出来るなんて私も思ってない。

「はは、無意味な事を……そもそもお前はただの――」

「それでも！　私はこの子に幸せに成って欲しい！　ずっと触れ合って行くうちに、そう思える様に成ったんです！」

画面から聞こえる声を遮って、シスターは大声を出します。私はそんなシスターの大声を聞いたことなかったから、ちょっとビクッとしました。

でも……それ以上に心が温かく成ります。だって嬉しいもん。そ

んな風に思っててくれて嬉しい。いつもワガママばっかりで、最近なんて家出したのに、私が連れ戻されたとき、笑顔で「お帰りなさい」って言ってくれた。
そして一杯、大好きな食べ物作ってくれた……私はその背中にしがみついて、顔を埋める。
ダメなの……こんなのダメ。そう心が叫んでる。

「私が……クリエが、そっちに行けば、シスターは助けてくれるの？」
「ええ、それは勿論。そうしてくださると、助かりますね。そもそも用済みですし、それは」

用済み？　その言葉がなんだか引っかかったけど、でも助けれるのなら……何だって……そう思ったとき、シスターが強く私の手を握って、進めない様にします。

「ダメです……クリエ」
「シスター、クリエはクリエは……シスターが死ぬのなんてイヤだもん！！」
「私は良いんです！　良いんですよクリエ……貴女が居ないとこの場所も私の存在価値も無くなるのですから……」
「え？」

そんな事を言ってる間に、煙の向こうから二体のモンスターが飛び出してくる。それらは真っ直ぐにこちらに向かって来てる。
そしてそれらから庇う様に、シスターは私の腕を引いて抱き寄せる。自分が食われても私だけは……そんな態勢だ。
「だめ！　止めて！　止めてよ！　クリエがそっちに行くから！！」

私は画面の男に向かって手を伸ばす。だけど、そいつは、イヤな笑みを浮かべて……本当に心をかきむしる様にこう言います。

「いやいや、ですがちょっと距離があって。私が命令をしても直ぐには止まらないかも。まあだけど良いじゃないですか、もうそんな物……不要でもありますし」

不要って……なに言ってるのこの人？　私がそっちに行けば助けてくれるって言ったのに……言ったのに！

「助けて……」

私は今、心からそう誰かに願う。誰でも良い、信仰心あんまり無いけど、これからはちゃんと毎日祈ってあげるから、神様でもなんでも……悪魔でも大魔王でもこの際良いよ！！

だけどどれもわからない。思い浮かばない。そんな中、ふと頭の中に現れた姿……その人の名前を私は叫んでた。

「助けてよ……スオウ！！」

居るはずも、届くはずもないそんな声。だけどその時、目の前に『彼』が現れた。

「――任せろ！！」

そんな言葉と共に、煙を風で押し退けて現れた彼は、両手に携える二本の剣を振りあげる。すると刀身から発生してる風のうねりが、私たちに向かって来てた狼に直撃した。

そしてそのまま私たちの頭上を越えて、更には天井を突き破って、空の高い位置で狼たちは爆発した。

「んなっ……なっ……ななな……」

変な声を上げてる画面の男。だけどそんなのもうどうでも良かった。だって目の前に彼が居る。私のピンチに駆けつけてくれたヒーローが居るもん！

「よっ、約束通り、ちゃんと迎えに来てやったよ」

「スオウ！！」

私はシスターの腕から飛び出して彼へダイブします。シスターとは違う大きな胸へと一直線です。だけど大きいだけじゃない……やっぱり優しい……暖かい。彼が私を優しく抱いてくれるから、私は力一杯彼の胸にしがみつきます。

「遅いよ！　スオウのバカバカバカ！　クリエの事、見捨てたかと思った！！」

「そんな訳ないだろ。ちゃんと言ったじゃん。お前の行きたい場所に、僕は連れてってやるってさ」

そんな言葉が嬉しくて……嬉しすぎて、さっきまでとは違う涙が、瞼から止めどなく溢れてくる。優しい手が私の頭を撫で撫でしてくれる。

私はこの胸に包まれてると、安心感で一杯に成りそうだよ。

「お前は……どうして！？　道は確かに閉じた筈！！　いや、それ以前に箱庭にこの世界を土足で荒らす、猿共が入ってこられる訳が無い！！」

画面の中のモブリが、私達の感動の対面に水を差すようにそう言

います。どうしても、その人は彼がここに居ることが信じられないと言った様子です。
けれどそんな声には、もう一人の駆けつけてくれてた人が応えます。

「猿共ね……でも彼はここに居るわ。貴方達の妨害を乗り越えてここに……それはこの人が、貴方達よりも上の覚悟で立ってるからよ。まあ頭の芯から腐ってるアンタ達には理解しようが無いでしょうけどね」
「き……さま、生きてたのか？」
「死体の確認もしないで殺した気になってるなんて、だからアンタ達は詰めが甘いのよ」
「アンダーソンンンンン！！」

画面の中で必死に形相を作って、画面を投げ飛ばしたらしいその人。だけどそれでも、今は全然怖いと思わなかった。
だって負け惜しみだってわかるから。てか、ミセス・アンダーソンは無事だったんだ。私達も驚きだよ。でも安心した。彼女があの時来てくれなかったら、私達はここに逃げ込め無かったもん。

「アンダーソン様ご無事で……」
「ええ、見ての通りよ」

シスターもそう言って涙が頬を伝ってる。良かった。みんな無事で入れて……本当に。

「くきゅあはははははははははははは！！」

すると再びおかしな笑い声がこの家の中へと響きます。現れてる画面を見ると、いつの間にかその人へと画面があわせられてる。

そこで顔を押さえてそいつが笑ってる。

「まあいい、まあいいですよ。考えて見れば取り乱す程の事でも無いじゃないか。手負いの年増一人に、猿が一人増えただけ。そんなの何の問題も無く踏みつぶせる！！

なんせ箱庭は、我等の領域だ！　何をやってるゴミ屑ども！！

さっさと奴等を爆死させろ！！」

そう言って何かに指示を出そうとするその人。だけど空いた穴からは何も飛び出して来ることはありません。

「爆死ね。残念だけどそれは無理だ」

「何？」

「あんまり僕達を舐めるなよオッサン。アンタの手駒は、もう居ない」

そう言ってスオウはその場から一歩横にズレます。するとそこには……何もない。あるのはただ焦げた地面がくすぶってるだけ。

そしてその光景を見て、画面の中の人は開いた口が閉じない状態に成ってます。そして更に彼は宣言します。

「言っておいてやるよ元老院。お前達の欲望の食い物に、こいつは絶対にさせない！！」

もう怖くなんて全然ない。スオウが居てくれたらどこへだって行ける気がする。

「くふっ……威勢が良い猿だな。だけど調子に乗るなよ！

そこはあくまでも私達の領分が罷り通る場所だ！！」

そう言うとそのイヤな人は、どこかへ指示を飛ばしてる様だった。するとゴゴゴゴゴと地面が揺れだし、激しい風が、空いた穴から家へと入ってくる。

「なんだ？　何やった！？」

そんな声を画面へ向かって出すスオウ。だけどその時、空からは閃光が落ちてきて、とっても大きな爆発音が轟いた。

耳がキンキンするほどの音だ。

「落雷？　まさか箱庭を潰す気ですか貴方達は！？」

「くふふふ、回収はそちら側でと思ったんですか、入れ替える手間も省けますし……だけどもう良い。そんな用済みの場所は貴様達もろとも潰してくれるわ！！

大丈夫、クリューエル様の接続はその前に直接切って上げますよ。勿論ね」

「っつ！　貴方達は本当に！！」

ミセス・アンダーソンが画面を激しく睨みます。だけど、それを軽く受け流し更にその人はイヤな笑みを浮かべて続けます。

「ああ、そうそう、お土産も置いていきましょう。確実に貴様達をぶち殺す為のね。我らの崇高な思想にはアンダーソンもそこの猿も、邪魔でしかありませんから！！　はははははははは！！」

そう言い残して画面はこの場から消え去りました。すると今度は外に大量に魔法陣が現れます。そこからはさっきの狼みたいなモンスターが数十？　ううん、数百は現れます。

「なっ！？　あの野郎、やってくれたな」

「スオウ……」

私は不安を表す様に、スオウの服を握りしめます。
「大丈夫、ちゃんと守ってやるよ」
「……うん！」
私の不安はその一言で掻き消えます。スオウがいたらどうにか成るもん。そう思えるもん。だってこの人は、私のヒーローだからね。

はてさて、クリエには格好付けたけど一体どうするか？　あの数は流石に二人で相手するにはきついぞ。単位が違うもん。十の位じゃないもん、その一つ上だもん。まあだけど、今更弱音は吐けないけどね。
てか、さっきから断続的に雷が落ちてるのは何の予兆？　空いた穴から空を見ると、青空が隠れて怪しい雲が渦巻いてるんだけど……なんか嫌な予感しかしねーよ。

「なあアンダーソン。ここはどうなるんだ？」
「多分、崩壊するんでしょうこの箱庭は」
この箱庭？　それじゃあまるで箱庭が複数あるような……いや、そんな事はさっきのいけ好かない画面のモブリも言ってたな。入れ替えがどうとか……取り合えずここは、そう長くは持たないって事か。
「出口は？　正規のじゃないルートをアンタは用意してるんだろ？」
このくらいの事態は予想してた筈だ。元のが元老院側が用意してる物なら、それに逆らおうってんなら当然だろ。そして僕のそんな問いかけにミセス・アンダーソンは頷きます。

「勿論、用意はしてるわ。でもここから間に合うかどうか……それにあのモンスターの数……あれは」
「良いからさっさと案内しろよ。失敗する可能性なんて考えても仕方ないだろ。今は生き残る事だけを考えて行動するんだよ！！」

僕は弱気な事を言うミセス・アンダーソンに渇を入れるよ。ようやくなんだ……それはこの人だって同じだろう。ようやく取り戻した小さな存在。
こいつを守れなきゃ、ここまで来た意味自体が無い。まあクリエは無事に移されるらしいけど、僕達が手を繋いで置かないと、それこそ無意味。
元老院なんかの手にはやれない。ミセス・アンダーソンは僕の言葉に決意して「そうですね」とそう返す。僕はクリエを卸して、セラ・シルフィングを構える。

「貴方は……」

するとその時、そんな声を黒い宗道服に身を包んだモブリが聞いてきた。そう言えば自己紹介してなかったな。そんな雰囲気でも無かったし、しょうがないと言えばしょうがないけど、この人がシスターって人なんだろう。
なら挨拶位しておくべきだよな。
「スオウです。安心してください。絶対にクリエは守って見せますよ」
「大丈夫だよシスター！　スオウは普段はあんまりパッとしないけど、戦闘になるとスゴいんだから！」

悪かったな普段はあんまりパッとしなくて。クリエのそんな失礼な言葉に、シスターと呼ばれるそのモブリは「はあ」と言いつつも

礼儀正しく頭を下げてくれた。
とてもこのクリエを育てて来た人には見えないな。クリエに一体何を教えて来たんだろうって感じ。礼儀の一つでも叩き込めば良かったのに。

「挨拶はそこまで！　そろそろ行くわよ！」

そんなことをやってる間に、ミセス・アンダーソンは自身の十字架を五本位展開してる。やる気満々だな。まあそっちの方が助かるけど。

「勘違いしないで。これは二人と私を守る為の物よ。だってそうでしょう？　外は自然の驚異とモンスターの驚異が合わさった地獄よ。そこに何の保護も無く二人が飛び出せる訳がないでしょう？　だから私の十字架で守護領域を作ります。アンタは一人、外で道を造る役目を全うしなさい！」
ナンダッテエエエエ！！　と叫びたかったけど、ミセス・アンダーソンの言うことはごもっともだったからそれは止めた。
確かにあれだけの数だ。万が一の為にもこのオバサンには二人の護衛に回って貰った方がいいのかも。一人であの数を相手にするのは正直超しんどいけど……やるしか無いよな。

「出来るわよね？」

ミセス・アンダーソンが強い眼差しで僕を見つめる。そもそもここで出来ないなんて言えないだろ。僕はセラ・シルフィングを信じてこう言うよ。

「やってやろうじゃねーか！！」
「良い返事ね。だけどモンスターに構い過ぎないでよ。私達は貴方

が開けた道から突破するからちゃんと付いて来ること、良いわね！」
「分かってるよ。クリエ達の事頼んだぞ」
「任せなさい。アンタには破られたけど、そうそうこの十字架の守護は破れないのよ！」

僕達はそれぞれを信じて行動するしかない。崩壊しだした箱庭でも、それが出来るから僕達には希望って物があるんだ。
外は嵐に成りつつある。飛び出すだけでも一つの勇気が居る状態。だけど行かないと。僕が行って、道を造らないと、ここから移動する事も出来ない。
覚悟を決めて……イクシードの段階を一つ上げる。

「イクシード2！！　いっくぞおおお

抱えた花（後書き）

第二百二十四話です。
遂にクリエと合流の回。だけど今度は箱庭崩壊へと巻き込まれる形で大ピンチ！　崩壊前に、全員脱出しないとゲームオーバーフラグは確実です。新たにシスターも出てきて、登場人物は揃いつつあるかな。
元老院も闇に落ちたし、敵側として今後とも立ちはだかる事でしょう。
てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

幻想の刺客（前書き）

僕達は嵐の中を走りだす。どうやらこの箱庭から脱出するには、元老院共の影響が少ない場所まで行かなきゃいけないらしい。だからこそ僕達が目指すのは箱庭の端の端。

そこまで行ければ、ミセス・アンダーソンがきっと脱出させてくれる。だけど奴らはしつこく僕達を追って来る。爆発物自ら走って来るんだから、厄介過ぎだよ！

幻想の刺客

これは吹きすさぶなんてレベルじゃない。荒れ狂う風が僕達の歩みを阻害して、その風のせいで弾丸みたいに肌を打ちつけて来る雨に、目も開けられない状況だ。

まあそれは、十字架の加護の中に居るクリエ達には関係無さそうだけども、道を造らないといけない僕には、最悪の状況だ。

最初の一撃で強引に包囲網を突破した訳だけど、走りながら追いついてくるモンスターを切り伏せながら、ミセス・アンダーソン達に付いて行かないといけないのは結構難しい。

気を抜くと、この嵐の中に一人置いて行かれそうな、そんな状況。有る意味、十字架が光ってくれてて助かる。そうじゃないと速攻で見失ったかも知れない。

てか、有る程度近づいてくれなきゃ敵も見えないんだからやりづらい。この狼みたいな奴等、爆発するから、一定の距離開けてじゃないとぶっ殺せもしない。

なんだかとことん不利な状況だよ。山の中でゴーゴーと唸る風の音。それから地面や木々を打ち抜かんまでの雨の弾丸。そしてさらにはモンスターの爆発音。

うるさすぎて耳を閉じたい。

「きゃあああ！！」

するとその時、前方からクリエの悲鳴が。しまった、前の方へ回られたみたいだ。耳を放棄しなくて良かった。こんな状況でも、女の子の悲鳴ってのは良く通る物らしい。

僕は先に居るクリエ達の所へ。そこには飛びかかって来るモンス

ターをミセス・アンダーソンの指示でかわしてるモブリ三人がいたよ。

「大丈夫か！？」

「アンタね……ちゃんと任務をこなしなさいよ！　減点するわよ！」

「悪かったな。こっちだって精一杯やってるんだ！」

てかいつから減点方式で採点されてたんだよ。それに減点する前に、状況を考慮してほしいね。自分的にはこの最悪な状況下で良くやってると思う。

まあ取りあえずは、この追いついて来た奴等をぶっ潰さないとだな。僕は周りを走って伺ってる奴に、イクシードのうねりを向ける。けれども、それは当たらず緩くなった地面を大きく抉った。

「――ちっ」

「スオウ！　左側に来てるよ！」

舌打ちしてると、クリエの声が入ってきた。とっさに左側のうねりをそちら側に向けて、飛びかかって来たモンスターを今度こそ真っ二つに。だけど同時に至近距離での爆発に巻き込まれてしまう。

爆発の熱さと痛さが一瞬体を包むけど、その次の瞬間には弾丸みたいな雨の激しさと冷たさが襲いかかって来るから、もう痛みの感覚的に、爆発なんて気にしてられなかった。

ある意味一瞬だけでも、暖かくなるからオーケーかな？　とも思えるけど、ちょっと苦しくもあるし、何よりＨＰが削られるからやっぱ無しだな。

てかさ――さっきから気付いてたんだけど……

「スオウ！　大丈夫！？」

「大丈夫さ、このくらい」

クリエの心配する言葉にそう返す僕。泣き言は言ってられないか。

「来てるわよ！　三方向から同時にアンタに向かってる！」

ミセス・アンダーソンの言葉に、雨が滴る目を細めて見ると確かに三方向に僅かな赤い光が見える。僕はそのモンスターの目の光に向かって両腕でセラ・シルフィングを振るう。

連動して刀身に渦を成して巻いてるうねりが、奴等へと向かう訳だけど……敵の動きが良いのか、僕の狙いが悪いのか、うねりはまたも地面を抉り、大きな泥の水柱を上げる。

そしてその間に奴等は一気にこちらへと迫ってくる。

「くっそ！」

赤い目を狂気で染めて、大きく口を開けて飛びかかって来るモンスター。まずは左から来る一匹を、しょうがないから足蹴にして撃退。すると今度は右からギリギリまで近づいて、真下から喉元狙って飛びかかって来やがる敵を、後ろに引いて避ける。

すると不発した奴の後ろから交差して、迫ってた最後の一体が大口開けて目の前に迫る。僕は体をなんとか強引にねじ曲げそれを回避。

けれどその時だった。奴等の攻撃をかわしきって、今度はこっちの番だとセラ・シルフィングに力を込めた時、ダダダダと言う四足歩行の駆ける音は、すぐ後ろに迫ってた。

そして背中にのし掛かる体重と共に、肩胛骨から肩口にかけて肉を喰い破られる様な痛みが走る。

「づっあぁ！！　こっの……おおおおお！！」

僕は背中に張り付いた狼をセラ・シルフィングで突き刺す。すると背中の狼は爆発して、僕はぬかるんだ地面を体全体で滑る羽目に。
そして倒れてる今がチャンスとばかりに、さっきかわした三体の狼が飛びかかって来る。

「調子に乗るな！！」

僕はそう言うと、セラ・シルフィングを横に一線。風のうなりが、並んでた三体を纏めて爆発させる。

「せめて三メートルくらいか」

僕はそう呟いて、立ち上がる。ＨＰは今ので四分の一位は減った。いけるんだろうかこのままで……弱音なんか吐く気は無いけど……ちょっと漠然とした不安が募るな。

「スオウ、大丈夫？　クリエが痛いの痛いの飛んでけー！　してあげようか？」
「はは、まあまだ、それほどじゃねーよ」

僕はクリエの気遣いを優しく却下してやった。まあそんなんで治る訳でも無いしね。それに今は、一秒でも立ち止まってる時間が惜しい。
するとその時、再び空の怒号の様な雷鳴が響く。一瞬真っ白になって、その後に続く音の巨大さと言ったら、これを越える物は無いんじゃないかと思える程の大音量。
それは落雷だ。

「またどこかに落ちたな」

「うう〜雷怖い……」

ブルブルしてるクリエの手をシスターが優しく握る。それで少しは怖さも和らぐことだろう。てか、さっきから落雷が頻発してるのが気になる。

もしかして元老院の連中は、落雷でここを焼け野原にでもする気なのかも知れないな。箱庭はすでに別の所へも用意してるみたいだし、ここはいらないから取り合えず焼いておこう的な感覚か。

「急ぎましょう！」

僕はそう促して、先を急ぐ。ミセス・アンダーソンが言うには、一番元老院共の力が届きにくい場所……つまりはこの箱庭の一番端を目指してる訳だけど……そこに出口があるって言うよりは、そこで作る感じだと言っていた。

きっとこのおばさんは、転送魔法でも設置してくれるんだろう。箱庭は特殊な場所らしいから、特別な手順でしか入れ無かったし、出るときもきっとそうなんだろう。

だけど僕たちがでる場所は正規の出口が無いから、ここを管理してる元老院の力が一番薄いであろう場所でって事かな。

まあ今は、無事に端までいけるかが問題な訳だけど。すると走りながら、ミセス・アンダーソンがこんな事を言う。

「貴方のその特殊な力。確かに強力ですが、自然の影響を強く受けてないですか？　いいえ、この今の環境がその力とはあってない……そう思えます」

「それは……まあ、否定はしないよ」

確かにさっきからイクシードの調子が悪い。いや、調子が悪いって言うか、風のうねりだけあってこの暴風の中じゃお互いがぶつか

りあって上手く操作できない感じだ。
いつもなら五十メートル先くらいはまでは正確にぶち抜けるんだけど、今は三メートル先までが限界って……てかそもそも、この暴風でうねりを形成しておく事事態が難しいみたいだ。
だから長い距離には伸ばせないし、風と風だから影響しあって狙いがズレる。最初、あのお菓子の家から飛び出した瞬間はまだ良かったんだけど、時間が経つに連れて、確実に天候は悪化、それに伴ってうねりも不安定に成っていってる様だ。

「いけるの？　そんな状況で？」
「行くさ。行くしかないだろ。それにこの位じゃ、僕の相棒は挫けない」

そう言って僕は、セラ・シルフィングの柄に力を込める。そう、いつだってこいつに頼ってきた。そして応えてくれたんだ。
僕の道はいつだってこいつと共に開いて来た。だからこそ、大丈夫だって思えるんだ。

「この山を越えれば、脱出出来るんだよな？」
「ええ、確かこの山の反対側の麓が箱庭という範囲です。その筈よねシスター？」
「え？　……はっはい。その筈ですアンダーソン様」

なんだかシスターはちょっと元気無さそうな……って、この状況で元気一杯って方がおかしいのか。家とか滅茶苦茶にされてたし、しょうがないよな。
だけど命あっての物種って思って貰わなくちゃ。家はまた建てれるし、何よりもこの人にはクリエの傍に居てほしい。

「うえぇ～この山を越えるの？　それまで走りっぱなしなんて無理

だよ～」
「頑張れクリエ、いつもみたいに脳天気に笑ってれば直ぐにつくさ」
「脳天気って何よスオウ！！　いつもいつもクリエの事バカにして！！　クリエはいつだって一生懸命なだけだもん！！
ねえシスター。言ってやってよこの分からず屋に！」

クリエの無茶な振りにシスターは苦笑いを漏らす。てか、この人は人見知りなのか僕にはまず話しかけてこないな。時々目が合うけど、ぎこちない笑みと、会釈をされるだけだ。
まあこっちも何を喋れば良いのかわからないんだけど。のんびりゆっくりあの家で出来たのなら、いろいろとクリエの事を聞く事も出来たんだけど、そんな状況じゃないからな。

そうこうしてる内に、再び周りに敵の影が見えてきた。突破して来ただけだし、元老院の奴らが自由に出せるんなら、幾ら倒したって意味は無さそうだ。
でもさ、よくよく考えたら――

「くっそ、元々モブリの短足じゃ四足歩行の狼から逃げれるわけないじゃん。体も向こうが大きいし、今更気付いちゃったよ」

って事だ。思わず頭を抱えたくなる真実。だけどそれを言った瞬間、同じ方向から二つの鋭い視線が飛んできてた。

「「今なんて言ったのかなスオウ？（言ったの貴方？）」」

クリエとミセス・アンダーソンから、地鳴りの様な雰囲気が伝わる。ゴゴゴゴゴと、何かスッゲー怒ってる？　そう言えば短足な事、おばさんは気にしてたな。クリエもそうだったとは知らなかったけど。

「え～と、ほら足の問題だけじゃなく、体事態小さいしそれを考えると逃げるのは不利かな～って」

僕は取り合えず、体全体の問題にしてみました。するとミセス・アンダーソンが勢い込んでこういう。

「ふざけないで！　確かに私たちは小さいわ。貴方たちに比べたら格段にね。でも！　それは恥じゃいのよ！　私達モブリこそが最も女神の愛を受けた種族！

この姿形こそが我らの誇りよ！！」

ペットな感覚だったんじゃない？　とか一瞬思ったけど、流石にそれは口には出さなかったよ。その発言は全てのモブリに失礼だしね。僕はその考えは引っ込めてまともな事を言うことに。

「わかったよ。でも誇りは良いけど、現にこのままじゃ何回だって追いつかれるぞ」

既に数十体の敵がこちらを伺ってそうだし。流石に今のイクシードじゃ、全てを捌く事なんか出来ない。だってさっきだってたった数体で、あの体たらく。

この雨と風の影響は正直痛すぎる。

「それは……仕方ないです。私達は元から肉体派では無いし、それに貴方が敵をちゃんと倒せば問題無いことでしょう。

私達の体型のせいにしないで頂戴」

「――ぐっ。確かにモブリとして、その体型が仕方ないのはまあ、諦めるしかないよな。イクシードがまともなら、ここまで切羽詰まる事もないと思うし……」

問題を押しつけられた様に感じるけど、実際僕は悔しいからね。僕だってモブリの体型を問題に出すのは今更だって分かってたさ。
事実だろうけど、仕方のない事だ。それよりもイクシード責められちゃね。僕の自信の大きさは殆どこれだから、イクシードが上手く機能しないと成ると、相対的に不安って物が胸に広がりやすくなる。
まあだけど……僕は結局、こいつとどこまでも一緒に行かなきゃ何だよな。ミセス・アンダーソンはやることやってくれてるんだし、迎撃が僕の仕事なんだ。
土砂降りがなんだ……暴風がなんだ……落雷がなんだ……それでもやるしかないんだよ。

「分かったよ。誰かのせいなんてする前に、僕はやってやる。弱音なんて、今吐く事じゃないしな！」
「そう言う事よ。血反吐吐いても守りなさい。それが貴方の役目よ」
「了～解！」

力強く踏み込む足。弾ける水が貯まった地面。だけど雨の音がうるさすぎて、水を踏んだ程度の音は届かない。すると次の瞬間、一斉に赤い瞳がこちらに迫る。
敵の足音も聞こえないから、この視界不良の中での目印は、殆どあの目位。動き出した赤い瞳は六体位は居るだろうか？
てか、後の奴ら……雨に紛れる様に消えやがった。波状攻撃でも仕掛ける気か？　そんな脳があるようには見えなかったけど……周りにまだ居る筈の奴らが、ここで引く理由はないからな。

（取り合えず）

僕はイクシード2を元のイクシードに下げる。そして意識的に力

って奴を風主体から雷主体へ。出来るかどうかは分からないけど、これに賭けてみるしかない。

「うおおおおおおおおおおおお！！　守ってみせる！　必ずだ！！」

そう絶対に！　その叫びと共に、雨の中を駆ける赤い瞳にうねりを向ける。イクシードだから風のうねりが消える事はないけど、今回は意識してるだけあってその渦巻く風の中に、青い雷撃が普段よりも若干多めに混在してる……筈だ。スパークの音が大きいと思う。

だけどそんな違いに気付くのは本人くらい。モンスターは情報を共有してるのかどうか知らないけど、僕が攻撃を向けたってのに、真っ直ぐ進んで来やがるじゃないか。多分さっきと同じように、この暴風に影響されてまともに狙いが付けられないと思われてるんだろう。

まさしくその通りなんだけど……頼む！！　僕は祈りを込めてうねりを見守る。雷撃を普段よりも込めたうねり。だからって風の影響を受けにくく成るなんて理屈は無いのかも知れないけど……出来ることと言ったらこの位しか無いんだ。

クリエ達を守りきって、自分も生き残ってここから脱出するには、今のままじゃ厳しい。だからこそ、わざわざイクシードの段階を一段下げてまで、雷撃が風と共に強く併発してたただのイクシードに戻したんだ。

すると何かを察知したのか、直前でモンスターは斜め横にかわすように避けた。

（避けた！？　避けたって事は！！）

僕は真っ直ぐに向けてたうねりの軌道をモンスターが避けた方向

へと向ける。そしてそんなうねりは、見事にモンスターを引き裂いて爆発させる事が出来た。

「今のが大体六メートル位か……爆風が押し寄せるけど、三メートルで爆発させる事しか出来ないより、かなりマシだ。単純にさっきまでよりも射程が二倍には成ったな。

よし、これなら！！」

僕は勢いづいて、迫り来てた奴らをクリエ達に届かせる前に葬り去る。やっぱりイクシードを一つ下げたのは正解だな。

イクシードは段階を上げる毎に、確かに強く強力には成ってるけど、その性質はどうしても風に偏ってた。イクシード３なんて、もう風しか力は出てなかったしな。一番両方を効率良く併せ持ってるのがただのイクシードだ。

「雷撃の方を意識的に強めれば、僅かだけど暴風の影響を軽減出来る。うん、よし！　感覚が良い感じに成ってきたぞ」

一撃で爆発してしまう敵が相手なら、六メートルで十分だ。それに結局、ある程度近づいてなきゃ、目の光だって見えないんだしな。

遠くに伸ばす事が出来ない時に、遠くが見えても歯がゆいだけ。ある意味今は、この程度が丁度良――

「――――いっ！？」

後ろからの不意の衝撃。両足に走る鋭い痛み。ＨＰバーが減り、数字が僅かに減少した。僕の命の残量が！！

「どわ！」

バシャンと大きな音を立てて、地面に倒れ込む僕。いきなり足を

強引に止められた感覚……振り返るとそこには狼に良く似たモンスターが、僕の両足を左右に一体ずつで喰わえてやがる。
それはまさに完璧な不意打ちだった。

「スオウ！！」

心配するようなクリエの声が前から聞こえる。流石にこれにはミセス・アンダーソンも自身の力を使って動こうとしてた様だけど、それよりも奴らは速かった。
迅速かつ的確に、まずは僕を潰す気の様だ。転んでる僕へめがけて、姿を消してた残りの奴ら全部が降り注ぐ様に飛び出して来やがる。

「くっそ！！」

降り注ぐのは、もう十分この雨で間に合ってるってんだよ！　僕はセラ・シルフィングで最初に飛びかかって来た奴の牙を防ぐ。だけどそれも付け焼き刃だった。
次々と落ちてくるモンスターの圧力だけで潰されそうだ。しかもその後直ぐに、獲物を漁る様に人の体を食い始めるんだから、溜まったものじゃない。
流石にこれはヤバい……ＨＰがみるみる減っていく。早く脱出しないと……僕は両方のセラ・シルフィングに力を込める。
するとバチバチと放たれる雷激のスパークが、強くなる。

「雷放！！」

その瞬間、青い雷撃が膨れ上がって、モンスターどもを押し退ける――と言うか爆発の連鎖だった。雷放はセラ・シルフィング自身から放たれる雷撃を一斉に放出するスキル。

そのスキルは自分的にはナイス判断だったと思うけど……

「つぅ〜〜、かなり持っていかれたな」

連鎖して起こった近距離での爆発で、かなりＨＰが失われた。具体的に言うと、既にレッドゾーンまで減ってしまった。

あのまま食われるよりはマシだと思うけど……これはかなり不味い状況だ。回復薬もあるにはあるけど、心許ないのは確かだし……行けるのか？　このまま進んで。

「スオウ！　速く回復しないと危ないよ！」

「わかってる」

クリエに促されて、僕は右手を二本立てて振ってウインドウを呼び出す。だけどそうこうしてる間にも、まだまだモンスターはいるわけで、さっきのに味をしめたらしい奴らが執拗に足下を狙って来やがる。

「なんていう煩わしさ、二度も同じ手に引っかかるか！」

と言いつつも、ウインドウを出したままじゃ反撃もおぼつかない。けど、次から次へと襲ってくる敵のせいで、なかなか取り出せないしで大変だ。

それにどんどん増えてる様な……しかもタイミングを互いに計ってるように動き出すから余計に……すると流石にヤバいと思ったのか、ミセス・アンダーソンが守護を解いて、十字架をこちらに向けてくれた。

「速く回復しなさい！！」

「助かる！」

十字架が数本僕の周りに落ちて、敵の攻めを僅かに止めた。その隙にアイテム欄から回復薬を取り出して口に含む。これでなんとかレッドゾーンからは脱出出来た。
だけどその時だ。

「クリエ！　危ない！！」

そんな声が僕の耳に届いた。視線を声の方へ向けると、守護を解かれたクリエ達の元へ一体のモンスターがその後ろから迫ってる。
クリエも今気づいた様だし、それはミセス・アンダーソンも同じ。たった一人それに気付いてたのはシスターだ。
彼女はだからこそ、モンスターの前に飛び出した。
大きく手を開いて、クリエを庇う様に立ち塞がる。だけどモンスターは構わずに突っ込んだ。鋭い爪が彼女を裂く。モブリの小さな体は、狼の突進力に耐えきれずに宙へと浮いた。
そして一緒に飛んでるモンスターと共に、クリエを飛び越えた先にシスターは落ちる。そこでさらに、モンスターは彼女の体に突き刺してる爪を、食い込ませる様に動かした。

「うっ……あぁああ！！」

痛々しいそんな声が鼓膜をふるわせる。やられたと思った。これはどう考えても計画的……それに嵌められた。クリエがよろめいて倒れそうになる。
それをアンダーソンが支えるけど、クリエの焦点はただ一点で固定されてる。

「シ……シスタアアアアアアアアアアアアアア！！」

クリエの叫びが、どんな傷よりも深く響く。僕は自分のふがいなさを喰い締めながら地面を蹴った。

幻想の刺客（後書き）

第二百二十五話です。

地震が起きてビックリです。丁度家に居たんですけど、最初ゴゴゴ位しか揺れてなくて、いつも通りこんなもんかと思ってたら、なんか長いし激しくゴラゴラゴラゴラ位になるしで慌てました。

みなさんは無事だったでしょうか？　まさかここまで悲惨な状況になるとは……今まで遠いことだと思ってたけど、日本でここまで被害になると怖くなります。まだ細かく余震続いてるし、それにとっても品薄状態。

これにもビックリです。これが大震災の影響か、と肌で感じております。まあでも自分は何も出来ないから、自分がやる事をやるまでです。

てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは、どうか早く事態が終息します様に願います。一人でも多くの人が無事な事を願います。

壊れかけの籠（前書き）

吹き飛ばされたシスター。そして泣いてしまうクリエ。自分の不甲斐無さに僕とミセス・アンダーソンは心を乱す。だけどそれに浸ってる訳にもいかない。僕達が立ち止まったら、誰がシスターを救出して、クリエを守る。

まだ彼女は死んだわけじゃない。諦めるには早過ぎるんだ！

壊れかけの籠

クリエを庇ってモンスターに吹き飛ばされたシスター。彼女を助ける為に僕は動く。セラ・シルフィングを振りかぶり、うねりを敵へぶつけて吹き飛ばす。

「おい！　大丈夫か？」

「シスター！！」

僕たちは声を掛けながら彼女へと近づく。命に関わる程じゃないと思うけど、クリエの顔は真っ青って感じに成ってた。

「はい……大丈夫です……この位。それよりも……クリエが無事で良かった。大袈裟なんですから。この程度じゃ……私は死にませんよ」

「シスタ～うくっ――違うよ……クリエ庇って怪我しちゃってる……それだけで嫌だよ……」

案外大丈夫そうなシスター。だけどクリエは既に涙を流してる。案外こういう事には脆い奴なのかも……いや、当然だよな。だってクリエにとってシスターは、もっとも近しい人だろう。その人が自分の盾に成って負傷した。それは泣いちゃう事だ。

「私のせいですね。私が守護を解いたから……」

そう言って自分を責めるのはミセス・アンダーソン。だけどそれを言うなら、ミセス・アンダーソンに守護を解かせるまでに追いつめられた僕だって同罪だ。

助けるって言っておいて、誰かの犠牲無くしてそれが出来ないなんて……もう嫌なのに。

「嘆くのなら、回復薬の一つでも分けてやれよ。それか回復魔法とか出来ないのか？」

「私の十字架は他者を救ったりはしない。私にはそう……才能って物がないからね。そもそも、その存在に回復薬とかが効くかどうか……」

自虐してるアンダーソンは、なんだか意味不明な事を言った。効くかどうかだって？　彼女はここに確かに居る。クリエの頭を撫で撫で今もしてる。その存在があるのなら、回復薬はちゃんとシスターを回復してくれる物だろう。

僕はアイテム欄から回復薬を取り出して、一個をシスターへと渡した。シスターの手は震えてたけど、なんとかちゃんと体は動かせるみたい。

「ありがとうございます。こんな貴重な物を、私の様な者の為に……」

「そんな、何かなんて言わないでください。貴方が居なくなったらクリエがもっと泣く。泣いてくれる人が一人でも居るのなら、自分の事をそんな風に言うのはおかしいと、僕は思います。

それに僕がもっともっと強かったら、貴女が怪我する事も無かった」

偉そうな事言っといてなんだけど……結局はそこへ戻っていってしまうんだ。幾ら嘆いたって仕方ない事だとわかってる。

だけど僕達は、後悔せずにはいられない。荒れ狂う天候の中、大きな落雷が二・三発続けざまに起こった。大きな音と衝撃……それに伴い、地面までも地割れを始めた。

これはヤバい……もう時間が無い。それに既に大量のモンスター共に僕達は囲まれてる。
当然だよな……これだけ立ち止まってるんだ。奴等が追いつかない訳がない。

「そうですね……私はもう十分に恵まれてます。私が見える友達が、この子に出来て嬉しいですし。それに貴方は十分に強くらっしゃいます。
私はこの子を見守り、育て、守るのが役目。気にすることはないんです。私は私の役目を全うしてるだけ。それも今日で終わりに成るでしょう」
「何？　どういう事……シスター？　これからもずっとクリエの傍に居てくれないの？　終わりなんて嫌だよ。諦めないで！」

クリエはシスターに抱きついてそう言ってる。確かに今の言葉はなんだか……嫌な予感しかしない。今日で終わりにしないために僕達は走ってる筈なのにだ。

「クリエ……私はね……」

何かを紡ごうとするシスター。だけどその時、ミセス・アンダーソンが声をあらげて警告を発する。

「来るわよ！！　このままじゃ何度だって追いつかれるわ。それじゃあ間に合わない。もっと効率の良い道は無いの？」

確かにこのままじゃとてもじゃないけど、間に合いそうもない。地割れまで起こりだして……本当にこの場所が無くなりそうな雰囲気だ。
これじゃあまるで、箱庭じゃなくなるってだけじゃ済まない様な

……この場所もろとも元老院の奴等は消せるのか？
ミセス・アンダーソンの問いかけに、荒い息を吐き続けるシスターが最後の希望ともいえる道を示してくれる。
「この近くに鍾乳洞があります……もしかしたら、反対側に続いているかも知れません」
「鍾乳洞……」
確かにこんな大荒れの外を走るよりはマシだろう。外だとこちらが不利に成ることはあっても、得は無さそうだし、鍾乳洞なら山の中を通るって事だから、単純に考えてもこのまま進むよりは速いはずだ。
「クリエそこ知ってる！　昔は良く二人で行ったよね。それにクリエはちょくちょく探検してる！」
クリエが昔を懐かしんでちょっと笑顔を見せる。こいつでも探検できるレベルなら、一気に通り抜ける事だって可能かも……いや、そもそも……僕達には迷ってる時間さえ無い。
「鍾乳洞……それに賭けてみましょう」
「だな。けどそれよりもまず……ここをどうやって抜けるかだろ」
随分と良くない程に囲まれてる。大量の赤い瞳の色が、この雨で見えにくい筈なのに、それでも爛々と光ってるのが見えるんだ。
ようはそれだけ大量って事だろう。どう考えても、今のイクシードだけじゃ越えられない数。僕の頭の中には最後の選択肢……それが点滅する。
（イクシード3を使うしか……）

でもまだ条件が揃ってない。それにあれは……リアルにだって影響する。僕の体が持つかどうかも問題。だけどグダグダ言ってると、ここで全員お陀仏。結局クリエを助けられないって事になる。

イクシード3なら、この天候にだって影響されないだろうし、やるしかない。そう覚悟を決めた。条件は一回突っ込んで、そこで雷放を使えば上手く自分もダメージを受けるだろう。

でもその時だ。僕とミセス・アンダーソンの間に挟まれたシスターが、荒い息を吐きながらこう言った。

「お二人で……お二人で道を作ってください。大丈夫、クリエは私が絶対に守ります！　ですから……どうか生きる事を考えて」

それは……まさか僕に言った？　いや、彼女がイクシード3を知ってる筈はない。でももしかしたら、いらない覚悟をしたのを感じ取ったのかも知れないな。

死ぬ気なんて無いけどさ……あれを使うって事は、少しはそれを考えない訳には行かないから。

「クリエは生きるよ！　スオウもアンダーソンもシスターだってそうだよ！！　誰も死なないで！　それもクリエは願ってる！」

「……はっ、願われたらしょうがないよな。叶えたくなる。行けるのかよアンタは？」

僕はそう言ってアンダーソンの背中をみる。

「そうね。クリューエル様の願いを無碍には出来ないわ。もう少しだけ、気張ってくれるかしらシスター？　道は確かに作ってあげるから、その間、その子をお願いするわ」

「はい……」

アンダーソンはそう言って胸の十字架を等身大まで大きくする。攻撃態勢。定かじゃないけど、きっと圧倒的に向こうが多い。それをたった二人で……でも一人よりは断然マシだな。
生きるために、それぞれが精一杯出来る事をやる。それはクリエやシスターまでも、やれる事をやろうとする事で少しだけ高まった数パーセントの可能性。
守られるだけだった自分達の身を、自分で守ろうとしてくれてる。まあ本当は、そこまでさせたくなかったってのが本音だけど……きっとそれはアンダーソンも一緒だろう。

「クリエは私が守るからね」
「クリエだって、シスターを守る！　シスターはけが人なんだから！」

なんだかクリエは使命を見つけたようにやる気を見せてる。大切な人の危機の方が先に迫ったから、何かしなきゃって思いがクリエにも募ったのかも知れない。
暴走しなければ良いけど、そこはシスターがちゃんと押さえてくれるだろう。

「私よりも貴方が攻撃力は上でしょう。私が攪乱してあげるから、貴方は彼女から鍾乳洞の位置を聞いて、最短の道を作りなさい」

背中越しにそんな言葉がかけられる。確かに沢山の十字架を一度に放れるアンダーソンの方がそういうのには向いてるかもな。
小さな十字架だって使えるし、それだけであの狼共は、爆発させる事が出来るだろう。それになんてたって遠距離型だしな。
だけど奥の方まで貫通させる威力は無いから、僕のイクシードでそれをやるわけだ。確かにそれしか無いだろう。

「シスター、鍾乳洞はどっち方面ですか？」
「ここからなら――」
「クリエ知ってるよ！　これを使えば良いよスオウ！」

シスターの言葉を遮ってクリエが渡して来たのは地図だ。なんだか随分手作り感があふれる地図だけど、そこにはこの箱庭の全景が書かれてる。
自分達の家の位置から、遊び場一二三とか、穴場とか書かれてる。これはこのＡ４サイズの紙に書いてあるっていうよりも、元の紙に書いた物をこの不思議な質感のペラペラした物へ写し替えた感じ何だろうか？
スクロールだって出来るぞこれ。しかも自分達の位置……いや、正確にはクリエの位置が表示されてるから、鍾乳洞までの距離とかが分かりやすい。
これは確かに、今の状況でなら役に立つ。

「やるなクリエ。これは助かる」
「えっへん！　ただ端っこに行くだけなら、使わないと思ったけど、役にたって良かった」
「本当に貴女って子は……いつのまにそんな物を持って来てたんですか」

呆れ気味にシスター訊ねてるけど、これには鍾乳洞内部の構造もあってかなり便利。位置も分かったことだし、そろそろ行動開始と行きますか！

僕達は固まって行動が前提だ。はぐれない様にするためにもそれが絶対。僕は真っ先に先行して道を作る係りで、クリエとシスターはその間で僕に付いてくる。最後は後ろの警戒も兼ねて、アンダー

ソンが後方支援をしてくれる。
大量の敵は基本囲む様に攻めて来てるけど、こうなったら一カ所集中突破で、周りが迫る前にここを抜ける！　僕はただ前を見据えてセラ・シルフィングを振り続ける。

クリエ達はそんな僕に置いて行かれない様に必死に走る。ミセス・アンダーソンは周りを牽制しながら、僕達に及ぶ危険の排除をやりながら駆け抜ける。
幾重にも折り重なる水と爆発の音。それが途切れない程に続いて続いて……僕達は目的の鍾乳洞を見つけた。そしてそこへ飛び込むやいなや。ミセス・アンダーソンが十字架で入り口を破壊。
これで、出口が無かったら僕らは生き埋めだよ。

「出口はあるわ。そうでしょシスター？」
「ええ、きっと続いてます」

二人の力強い言葉に、僕は振り返り洞窟の奥をみる。そこは暗い暗い闇へと続いてた。大丈夫……かな？　まあもう、入った道を塞いだ以上、奥に進むしかない訳だけどね。
するとその時、瓦礫と化してる入り口が、パラパラと微妙に揺れていた。これは……

「どうやら奴等は、まだ諦めてくれない様だな」

きっとこの振動は向こう側で、敵が突っ込んでる振動だろう。突っ込んで爆発してを繰り返して瓦礫を吹き飛ばす気なんだ。

「行こうスオウ！　クリエが案内してあげるよ！」
「そうだな。ここにとどまってたって仕方ない。知ってる所までいいから、頼むぞクリエ」

「うん！」

取りあえずの驚異をやり過ごしたからか、クリエはいつもの調子が戻ってた。僕的にも、クリエには元気で居て貰いたいから、ちょっと安心だよ。

シスターも何とか大事無かったのが良かったんだろう。僕はクリエに手を引かれて鍾乳洞の奥へと進む。そしてその後からシスターと、ミセス・アンダーソンが付いてくる。

「こっちこっち！」

そう急かしながらクリエは進む。しばらく暗闇を進むと、急に広い場所へと出た。それに明るい？　暗がりを歩いてたから、その明るさが目に眩しい。

「んっ……」

目を細めて慣れて来るのを待つ。眩しいと思った光は、慣れてくるとそこまでじゃない事に気づく。なんというかここに満ちてる光は、太陽や月のどれよりも淡いと思える光を放ってた。

「どう？　凄いでしょ！」

そう言ったクリエは、僕の手を離して先に駆けだしてしまう。そしてピョンピョンと楽しそうになんか踊ってる。僕は感嘆の声を漏らしながら、そんなクリエの後に続いた。

洞窟なのにえらく天井が高い。それに洞窟と言うよりは、空間と呼べる場所が広がってる。そして至る所に、数十メートルはあろうかという程の白い柱が延びていた。

天井に向かって確かに延びてるその白い物が、きっと鍾乳石。天井の壁にも、同じ様な物が幾重も垂れてきてるのが分かる。
そして一際ドデカいのが数本あった。それは既に、天井から垂れてきたのと、地面から伸びて来たのが合体した様に、一本の柱として存在してる。

てか、よく見たらここは壁もなんか白いな。鍾乳石が壁自体にも浸食してるのかも知れない。てか、これって光源は一体どこなんだろう？
鍾乳石事態は、光ってる訳でも無さそうなんだけど……ただ波打つ様な白い模様は綺麗だけどね。途中までは暗かったんだから、ここでは何かが光ってないといけないんじゃないか？
でもどこもビカカってしてないし、松明っぽいのも無い。

「何でこんなに明るいんだ？」

僕は自分では解決出来ない事を、口に出して言ってみた。するとクリエがそんな僕の言葉を聞くなり、物知り顔でこう言った。

「ふふふ、スオウは頭悪いからね。クリエがクリエが教えてあげる！　この周りの全部が白っていう光を放ってるんだよ。
それは一つじゃ小さく弱い光だけど、これだけ集まればこの場所一帯を明るく出来るんだよ！」
「ふ～ん――」

成る程ね。この鍾乳石事態が僅かに白い光を放ってる訳だ。それが集まりに集まってるから、あたかも光源がない光が成立してると……リアルには無い鍾乳石の機能だな。
所で、僕はさっきのクリエの失礼な発言を聞き逃しちゃいない。確かに良くは無いけど、悪いって程じゃないっての。だから得意気

にしてるクリエにちょっと意地悪を言ってやる。

「――で、誰からの受け売りだよ」

「シスターがそう言ってた！」

元気一杯に応えくれたクリエはそれを言った後も「ふふふ」と何故かまだ得意気だった。どうやら、誰かに教える行為事態に優越感があるようだ。その手段はどうでも良いらしい。

シスターの方を見ると、なんだか余所余所しく会釈をされた。なんだか、やっぱりってな感じだな。さっき必死に助けてる時は、ちょっと近くに寄れた気がしたんだけど、僕とシスターの距離間は元のままの様だ。

まあ殆ど初対面だし、そういきなり仲良くフレンドリーに成れる筈もないか。ついさっきは、僕が強引に近寄ったから、ある意味言葉を返してくれたのかも。

キッカケ……くらいにはその程度の衝撃も必要なのかも知れないな。だけど僕も日本人だからね。初対面の人にはなかなか緊張するよな。それを外に出さない自信はあるけど……それにまだまだ切羽詰まった状況には実際変わり無いし、あんまり軽い感じでもいけない訳だ。そんな考察を自分の頭で繰り広げてると。いつの間にか勝手に進んでたらしいクリエが、遠くで僕達へ手を振ってた。

「早く早く～！」

そう言ってクリエは大きな鍾乳石へと消えてしまう。僕達は取りあえず急いでクリエ追いつくことに。たく、アイツは自分が最重要人物だと言う自覚が足りないな。一人であんまり遠くへ行くなっての。

まあ、急ぐのには反対しないけど。雨も風も、雷さえもここだと

感じないから、危機感がなんか薄れちゃったけど、まだあの状態は続いてるんだよな。
いや、寧ろ進行してる筈だ。鍾乳石に感動してる場合じゃない。
「クリエ！」
僕達はクリエが見えなくなった柱を曲がる。するとクリエの奴は既にその先へとトコトコ走ってる。相変わらずチョコマカとすばしっこい奴だ。
「こっちだよ！　こっち～～！」
そう言いながら、ズンズン先へと進むクリエ。僕達は白い鍾乳石の間を通りながら、その小さな背を追いかける。なんだか奥に進むに連れて、鍾乳石が密集しだした様な……壁みたいになりつつあるから、これがそのまま通路に成ってるって事なんだろう。
「ちょっと待てクリエ！　先に行き過ぎだ。危ないからもっと近くに居ろ！」
「そうですよクリューエル様。独断先行は危険です」
僕のそんな言葉に、ミセス・アンダーソンがそう続けた。そしてシスターが「クリエ～言うことを聞いて」って小さな声で言ってた。
だけどそんな僕らの言葉に耳を向ける奴じゃない。
「大丈夫だよ！　取りあえずは、クリエが行った一番奥まで行くの！」
そう言ってズンズン進んでいく。全く、本当にマイペースな奴だ。そんなこんなで僕達はただクリエの後に付いていく事に。

まあ、ここにはまだ敵も来てないし、箱庭にはモンスターが沸いて襲ってくる事もないんで、取りあえず行かせる事に。
だけど結構、ついていくのも大変だった。クリエは自分の小ささを生かした道とか進んでるんだから、僕としてはたまった物じゃないよ。
鍾乳石と鍾乳石の隙間とか、モブリのシスターやミセス・アンダーソンはいいけど、実質僕は通れないから！　そんなこんなで色々と大変思いをしつつ、僕達は進んでると、なんだか不思議な場所へと出た。
そこは鮮やかな緑色の泉が、五つある縦長の場所だ。白くなってる地面に、まばらにそんな泉が点在してる。そしてついでに言うと、行き止まりだった。

「ここまでだよ。クリエはここまでしか来たこと無い」
「寧ろお前が、ここまで深入りしてたのがビックリだ」

結構大変だったんだけど。まあ、クリエにとってはこういう冒険が一番の遊びだったのかも知れないな。

「この先があるとか行ってなかったっけお前？」
「あるよあるよ！　ちょっとこの緑の水をのぞき込んで見てよ」

クリエの言葉に従って、僕は水の中をのぞき込む。緑だからって別に藻とかが張ってるわけじゃない。きっと光の反射とか屈折率とかの影響でこういう色に見えるだけだから透明度は抜群だった。それにしても綺麗なエメラルドグリーンだ。
そしてそんな水の中には、横穴が空いてた。他の穴をのぞき込んでた二人も同様の反応……どうやら、これが先へと続いてる様だな。
って事は……

「これって、続いてる場所がそれぞれの池で違うんじゃないか？」

そうなるよな？　だってどれもが同じ場所に続いてる訳無い。きっと僕達が望む場所へ続くのは、有るとすれば一つだけだろう。どれに入れば反対側へ行けるんだ？　良心的な設定がここには一つもないぞ。

「どれを選ぶかが重要ね。え～と、神～様～の～言う通り――」

「――ちょっと待て！　それって適当だからな！　神様選んでくれてねーよ！」

なに小学生みたいな事に頼ろうとしてるんだよこの人。それにしてもこれは困ったな……確率は五分の一か……するとその時、この場に挙手があがった。

そこに僕達の視線は集中する。

「はいシスターどうぞ！」

クリエが教師を気取って挙手した彼女を指名する。すると辿々しくシスターは言葉を紡ぐ。

「ええっとですね……私達が入って来た所だけが入り口じゃありません。少なくとも私達の為には二つの出入り口が必要な筈で……私が確認してるだけでも三つはあります。

それが繋がってるかなんて分からないですけど、これはもしかしたら……」

シスターが言いたいこと、それは直ぐに分かった。成るほどだよ。確かにその可能性は大きい。だけど、この泉のどれがどこに繋がってるかまでは、皆目見当もつかない。

結局は一個ずつ確かめるしか……いや、そんな時間はない。するとその時、泉に泡が上がった――――様な？　次の瞬間、緑色の泉の四カ所から一斉にモンスターが飛び出してきた。

「きゃあああ！」

「この狼共、やっぱりまだ諦めて――ん？」

あれ？　待てよこれって……僕の視線は波紋を広げてない泉へと注がれる。宝石の様なその美しさに、僕の視線は釘付けだ。

壊れかけの籠（後書き）

第二百二十六話です。

そろそろ箱庭での話も終わりそうですね。この鍾乳洞を抜けた先にはきっと……なのだろうけど、でも相変わらず執拗に追って来る敵のウザさと来たらないです。それにスオウは重大なもう一個の事に気付いてない！

まあそれは次回で明かされます。箱庭での最大のピンチ！？　かも。

てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

魚には成れない（前書き）

泉から飛び出してきた狼共。だけどそのおかげで道が見つかったわけでもある。感謝なんてしないけど、取りあえずぶっ殺してあげよう。そして僕達は、あの一番奥の泉を目指す。

だけどそこに辿り着いて僕は気付くんだ。

「あれ？　僕って泳げたっけ？」

魚には成れない

五つの泉の内、四つから飛び出してきたモンスター共。もう来たかって感じは勿論あるけど、けどそれよりも僕はたった一つだけ波紋を広げてない泉が気になる。

白い鍾乳石が周りを包むこの場所で、緑色した泉がその色を強調してる。

「たく、しつこいわね！　本当に飼い主に似ていけ好かない奴らだわ！」

そう言ってミセス・アンダーソンが十字架を構える。だけどそれよりも早く僕は動いたよ。嵐の影響を受けないこの場所でなら、十分僕だけでやれるさ！

まあ、イクシードは切っちゃってるけど、ヒットアンドアウェイ戦法で行く。それよりも――だ。

「アンダーソンは、クリエ達をあの奥の泉へ頼む！　あれがきっと反対側へ続いてる筈だ！　反対側じゃなくても、きっと僕達が入った入り口からは一番遠い！！」

「なんでそんな事が分かるのよ？」

僕の言葉にミセス・アンダーソンは訝しげにそう返した。なんって考えればそうなる筈だけど。

「そいつ等は僕達を追ってた訳なんだぞ。僕達が入り口を壊したから、違う所を探した。そして見つけた場所からなだれ込んでる筈だろ！

わざわざ遠い所を選ぶ理由なんてこいつらには無いんだからな！
ようはこいつらが出てない泉こそが、一番遠い所に出入り口があるって事だろ！」

雷撃が地面を走る。それは密集してたモンスター共に連鎖して爆発を起こさせた。アイツ等今、濡れてるから雷撃系の技が良く通る。それにどうやら、起爆のスイッチ代わりにも成るようだ。
もっと上手に飛ばせれば、近づかなくてもやれるかも……

「スオウ案外頭いいね！」
「そこの失礼なクソガキ連れて、二人は僕の後に続いてください！」

案外ってなんだよ案外って。まあ別に、僕は普通だからそこまで気にしちゃいないけど、ちょっとムッときたんだ。
僕の言葉に、クリエは「なによなによ！」と憤慨して暴れてるけど、シスターに脇から抱えられて一番奥の泉を目指して移動開始だ。いびつな縦長空間に、それぞれの泉が間をあけて点在してる形だから、あそこまで行くにはモンスター共をけちらすしかない。
まあだけど、問題ないな！

「いけるの？　一人で？」
「まあ大丈夫だとは思いますよ。心配なら、十字架で下方支援でもお願いします」

僕とアンダーソンはそんな会話をして頷きあう。そして一気に飛び出した。ここでグダグダやっててもモンスター共が増えるだけだからな。一気に駆け抜けて泉に飛び込んだ方がいいだろう。
てな訳で、走り出した僕に向かって来る数体の狼共。まずは雷撃を一陣放つ。それは正面の奴に当たり爆発。だけど同三体には被害無い様子。そのまま向かって来る。

僕は更に加速してその距離を一気に詰めて、まずは左側ニ体をすれ違い様に一撃入れる。それで十分。奴らはただの一撃で爆発する。
そしてそれが怖いのは、足を止めてそこに止まるからだ。僕はその勢いのままに、爆発を回避して残り一体に雷撃を向ける。これで終了……な訳じゃない。

まだそれぞれの泉からは、モンスター共が出てきてる。
でもそんな驚異って数じゃないから、僕達は一番奥の泉を取りあえず目指す。
一応真っ先に襲ってくる奴を優先的に潰しながら、泉に到着。するとここで気になる問題に気付いてしまった。

「あれ？　よくよく考えたら僕って泳げるんだっけ？」

いや、確か普通に泳ぐ事は出来る……筈だよな。スキルはあくまでそんな泳ぎの補助の筈。早く泳げたり、息継ぎとかしなくて良くなったりとかだと聞いた。
アギト曰く、流れが速かったりしてもダメらしいけど、ここは流れとか無いし、いける筈だ。

「泳げないのスオウ？」

そう言ったクリエが僕に手を差し伸べる。

「どういう事だよ……」
「クリエが引いてあげるよって事」

弾ける笑みを見せるクリエだけど、そんな屈辱的な事が出来るかよ。なんかバカにされてる気がするし。これは僕のスペックの問題じゃなくて、ＬＲＯというシステムの問題なんだよ。

僕はリアルじゃ基本泳げるからな。僕はクリエの手を取らずにこういう。

「いいからさっさと行け。まだモンスター共は迫ってるんだからな」

後ろでは次々と泉からモンスターが沸いてきてる。泳げないかもとか言ってる場合じゃないんだ。そもそもここを抜けないとどっち道終わりだし、不安なんて気合いで乗り越える！

「大丈夫！　もしもスオウが溺れたらクリエが助けてあげるからね」

「大丈夫です。私もこの子と頑張ってみます」

ようやく向こうからシスターが話しかけてくれた。クリエに便乗しての形だけど、まあクリエだけよりは安心出来るよ。そもそも助けて貰う気は無いんだけどな。

でも水の中は、不慣れだから念には念を入れといた方がいいのかも。

「わかったよ。もしもの時は頼むよ。だから早く行け！」

「うん！」

「それではお先に」

二人が泉へと飛び込む。そして僕とミセス・アンダーソンは一斉にありったけの威力を込めて、モンスター共に攻撃を打ち込んだ。僕は雷撃、アンダーソンは十字架を大量にだ。

それで牽制して置いて、僕達も今の内に泉へと飛び込む。

（おわ！　服が張り付く――ってか重！　防具も武器も重！！）

そう言えば前に湖に落ちた時も沈んでた様な……服を着たまま水

に入るのが危険だと悟ったよ。いや、まだ服だけならいいんだけど、防具と武器はやばい。その重量がのし掛かる様なリアルな重みしてるよ。

さすがＬＲＯ、こんな水の中まで完璧に再現してる訳だ。だからこそアギトの奴が、極力水には入るなって言ってたんだな。

（だけど……こんな所で！！）

僕は必死に手足を動かす。だけど殆ど思うように進まない。やっぱり重量過多か……激しく動いてるせいで息も既に苦しく成ってきたし……これは流石に不味い。

てかこの穴、どこまで続いてるんだよ。結構先に、クリエ達が見えてるけど、そこまでも行けるかどうか……ヤバい心が折れそうだ。

どんな時だって諦めずに頑張って来たのに、こんな所で……人体の限界に僕の心は折れかけてるよ。だって自分の力じゃどうしようもないっていうかなんと言うか……すると後ろの方でドバンドバンと響く音。

ヤバい、きっとモンスター共が入って来たんだ。するとチョンチョンと肩を叩かれる感覚が。横を見てみると、ミセス・アンダーソンがなんかジェスチャーやってる。

何々？

「これ（十字架）でアンタ（僕）を、押して（ぶっ飛ばして）上げる」

成る程、一応こんな感じだろう――って、何だって！？　僕は一応抵抗を試みるけど、水の中じゃどうやったって僕は最弱だった。ガバガバと暴れる事しか出来ない。

そしてそんな事をやってる間にも、ミセス・アンダーソンは僕の背後へ回ってしまう。そして背後で光が起きて、背中にゴツッとし

たイヤな感覚が当たったと思ったら、次の瞬間ものスゴい勢いで僕は前方へ押され出す。

「んがががぼぼげらあああああああああああ！！」

空気が……命を繋ぐ空気が肺から大量に放出されていく！　意識さえも遠ざかるぞこれ！　てか、水圧が半端ない。いや、死ぬってこれは！　文句を言いたくても言えない事が歯がゆい。

意識が遠ざかる中、次第に水圧が勢いを無くしてく。どうやら出口に着いたらしい。上方から光が見える。でも、何だろう……天からの導きの様にも感じるな。

既に僕は自分で泳ぐ事が出来ないよ。

「ん？」

僕は一切体を動かしてないのに何故か上へと上ってく。何で？って思って顔を上げると、そこには三人の小さな姿があった。

それぞれが僕の体を引っ張ってくれてるみたいだ。クリエが手を引っ張って、シスターは背中かな……アンダーソンが腹の所を持ち上げてる感じ。

（はは……まさか本当に助けて貰う事に成るなんて……）

てか、良くあのスピードに付いて来れた物だ。幾ら速く泳いでも流石に追いつけるとは思えないけど……ミセス・アンダーソンなんて特に、一番離れててもおかしくない筈では？

クリエ達だって途中で追い抜いた筈……あれかな、十字架に掴まってたのかな？　そんな考察を、朦朧とする意識の中してた。次第に光へと近づいていく僕達。そして

「「「ぷはぁ！」」」

と同時にみんなで顔を出した。

「ごほっがっはっ――」

「大丈夫スオウ？　クリエ達がいなかったら死んでたよきっと」

認めたくはないけど……確かにきっとその通りだったろうな。クリエ達がいなかったらこのただの道でジ・エンドだったよ。だから僕はクリエの頭にポンと手を置いて感謝を述べてやる。

「だな……今回はまあ、助かった。ありがとうな」

「うんうん、どういたしまして！」

満足気にそう言うクリエは、なんか楽しんでたみたいだな。てか、空気がこんなに美味しいとは知らなかった。使いきった後だから、新鮮な空気がそう感じる。僕達は取り合えず泉から上がることに。

元からびしょ濡れだったけど、再三にわたってまたびしょ濡れだ。

「寒……」

流石に体が芯から冷えてくるな。ただでさえ鍾乳洞って気温が低いから尚更だ。うう……早く出たくなってきた。この箱庭そのものからな。

どうせ外に出たって土砂降りで嵐なだけだし、それなら箱庭事態から早々と脱出したい。

「ああ、そうだ。ミセス・アンダーソンもシスターさんもさっきはありがとうございます」

そう言って僕は頭を下げる。一応感謝とお礼はちゃんと口に出さなきゃね。

「別にいいわよあの位。それに貴方に死なれると困りますからね」

ミセス・アンダーソンはそう言って通路の先へ視線を送る。だけどシスターの様子がちょっとおかしい？　まあ僕に対してはいつもモジモジと言うか、よそよそしい訳だからいつも通りっていったら、そうなんだけど……

「あの……良いですから。それよりもあんまりこっちを見ないで……」

見ないでって……相当嫌われた？　そんな……クリエの近くに居る者通し、聞きたい事が沢山あるのに、ここで嫌われるのは不味いかも。

「見ないでって、そんなに迷惑でしたか？　すみません」

僕は真剣に謝る。だけどなんだかちょっと違うご様子。僕が頭を下げて、彼女は逆に困った様子になってる。

「ち、違うんです……そうじゃなくて……あの見ないでっていうのはですね……その……恥ずかしいから……」

消え入りそうな声でそう呟くシスターさん。恥ずかしい？　何のこっちゃ？　と僕は首を傾げるよ。そしてマジマジと逆に見てしまう。

（あ、もしかして……）

すると気付いたかもしれない。あれだな、服が張り付いてるからかな？　別に全然欲情とかしないけどさ。モブリってとこがネックだよね。

いまここにシルクちゃんとかが居れば、そのやばさに瞬時に気付く事が出来るんだろうけど……ごめん、モブリの体じゃなんも感じないよ。

てか寧ろ、黒い服のシスターよりも白い宗道服のクリエの方が気にした方が良いことでは？　とも思ったけど、いかんせん奴はガキだった。

そんな事、気にも止めてないよ。

「あ、あのぅ～」

僕がやけに目を離さないから、顔を真っ赤にしながらシスターさんが泣きそうな声を出す。うお、しまった！　これは変な誤解を与えたかも知れない。

違うんだ。僕は決してそう言う視線を向けてた訳じゃない！

「ええっと……大丈夫！　全然僕は気にしないから！」

「は……はぅ」

僕がナイススマイルで言ったはずの言葉で、何故かシスターは更に涙目に。不味い、ドジにドジを重ねたみたいだ。くっそ、これがミセス・アンダーソンなら

「そんな年食った体に興味ねーよ！」

位言えるんだけど、流石にそれはシスターさんに悪いよね。それにそんな冗談を言える間柄でも無いし……かと言ってズバリ「モブ

リの体に興味なんてないから！」って言うのもある意味失礼かなって……うん、答えはないな。
てか、男って女の人に一杯気を使うよね。男尊女卑とかもう今の時代ないよね。

「スオウ――」
「うお！　なんだよクリエ？　てか離れろ」
「スオウが寒いって言ってたから、暖めて上げようと思って。クリエの温もりを分けて上げるよ！」

シスターの対応に困ってたらいきなりクリエが抱きついて来て、そんな事を言った。まあ確かに寒いとは言ったけど……

「おまえだってびしょ濡れ何だから、何だかペチョッてして気持ち悪い。ついでにお前の暖かさなんて感じな――」
「あれれ？　シスターどうしたの？　何故に無言でクリエを抱えちゃうの？」

クリエの言うとおり、彼女は静かにクリエを僕から離す。無言なのはクリエも言ったとおりだけどさ……僕の事をさらには睨んでるっぽいんだけど。
何その……女の敵みたいな目は。

「たく、死にかけといて早速シスターやクリューエル様のピチピチした肌に反応するとは……とんだ卑猥な雄ね」
「どんな反応もしてねーよ！」

おかしな目で見るなっての。モブリはこの世界の種族の中じゃ、一番欲情出来ないわ！！　そこは男として断固に宣言してやる。

「何々？　どういう事なの～？」
「クリエは……まだ知らなくて良いことです」
頭に一杯疑問符を並べるクリエに、シスターはそう言った。そしてそのまま背中を向ける。え～もう、どうすれば良かったんだよ。
僕は色々と案を頭に浮かべてると、横でアンダーソンが何やらやってる。なんか僕の方をチラチラと見て、変なポーズを決めてる様な……
「何やってんだおばさん？」
「の・う・さ・つ？」
ウインクを飛ばされた瞬間に、猛烈な吐き気が！！
「うげええええええええ！！」
「アンタね、ちょっとは私にも遠慮ってものをしなさいよ！！」
憤慨するアンダーソンには悪いけど、それは超無理。てか今のはどんな拷問だよ。一瞬にして心が折れ掛けたよ。怒りたいのは寧ろこっちっつーか、謝れよと言いたい。
「ふ……ふん、アンタが私の魅力に気付くのには、後十年は掛かりそうね」
超ポジティブにそんな事をアンダーソンは言ってる。
「十年経ったらおばさんじゃなく、お婆さんになってるだろうな」
そんな熟女好きには成りたくない。だから一生その魅力とやらには気付きたくないや。

「アンタってとことん失礼ね。私が居るから脱出出来るのよ！　そこの所、忘れないで頂戴」
「ふ～ん、ご立派なアンダーソン様は、迷える子羊を助けて上・げ・て、回ってるんだ？」

押し売りでもしてるんだろうか？　それなら止めた方が僕は良いと思う。

「何よその言い方？　確かにちょっと語弊があるかも知れないわね。私は私の信じる道の為に、助けるのよ。これで良いでしょう」
「別に悪いなんて言ってないけど。まあ、良いんじゃない。その方がこっちも気が楽だし」

取り合えずはここも進まなきゃな。いつまでもだべってる訳には行かない。

「んじゃ、さっさと出れる所まで行くか」

そんな僕の言葉に、反応してくれたのはクリエだけ。大きな声で「おおーー！」と言ったけど、後の二人はなんか無言。
なんか気まずく成った感じで、出口を目指す事に。

僕たちは鍾乳洞を進む。ここもやっぱり前の所と違いはあんまりない。鍾乳石が自身の明るさで周りを引き立てて存在してる。
変わってる事と言えば、こっちの鍾乳洞は、あの緑に見える水がそこかしこに流れてるって事だな。白い床の溝に、随分浅く無数に枝を張って流れてる。
道はわからないけど、とにかく僕たちは進んだ。この鍾乳洞の出

口が、山の反対側にあることを祈ってさ。そんな時だ。
次第に、この鍾乳洞の中まで僅かに揺れだして来てた。そろそろこの箱庭事態がヤバく成ってきたのかも知れない。

「元老院の奴ら……クリエは無事に移すとかほざいてたけど、あれってどういう事何だろう？　クリエは僕たちと一緒に居る。奴らの手には落ちてない。
それなのにこのまま箱庭ごと壊す気なのか？」

そんな事したら本末転倒だろ。それってどう考えてもおかしいよな。するとミセス・アンダーソンがちょっと不思議な事を言った。

「私たちはまだ、クリューエル様を手にしてないわよ。確かにクリューエル様はここ居るけど……ここに居るこの子が本当の意味で重要な訳じゃない」
「なんだそれ？　ちょっと訳わからないぞ。だってクリエはクリエだろ？」

するとクリエも怒った様子を両手で表しながら「クリエは勿論クリエだよ！」とか言う。ここに居るクリエは、本当の意味で重要じゃないって……一体。

「箱庭」
「え？」

ポツリと、シスターがそんな事を呟いた。話しかけたって言うよりも独り言に近い感じだけど、彼女は何かを言おうとしてる。

「ここは造られた箱の庭」

言い直しても短い。それだけじゃやっぱり何がなんだかわからない。

「造られたって、元老院が造ったとかだろ？」

「きっとここから出て外を見れば、彼女の言葉を理解出来ると思うわよ。多分もう、そこまで進んでる。まあだけど、確かにクリューエル様がまだここに居るって事は、最後の詰めの作業は出来ない筈だけどね」

アンダーソンもシスターも随分と意地悪だな。色々と勿体付けすぎだ。何なんだそれ？　最後の詰めの部分って？

「取り合えず、このままクリエを守って出口から脱出出来れば良いんだろ？」

「実を言うと、私達がどんなに頑張ってもそれは十分じゃないのよ。ここに居る私達だけじゃ、どうにも出来ない事がある。

でもクリューエル様がここにまだ居てくれるって事は、もしかしたら一緒に来たはずのアンタの仲間が頑張ってくれてるのかも知れないわ」

ええ～？　全く持って理解不能だ。今まではどうにか頑張って自分である程度の予想とか付けてたけど、今回はもうアンダーソンが意地悪なせいで良く理解できない。

なんでそう言う言い方するかな～って感じだ。どうしてここでテッケンさん達が関わってくるのか全然理解不能だ。だってみんなはここに居なくて……でも何かやれる事はあって……クリエのそばに居る僕たちの頑張りは結局何？　無駄なわけ？

「無駄なんかじゃないわ。私達が生きる事は勿論。クリューエル様を無事に箱庭に出すこと事態が大切なのよ。無事にって所が重要よ。

元老院は強引な手段を使おうとしてる。それは手順に沿ってないやり方……そんな事をしたら、ここに居るクリューエル様がどうなるかはわからない。
だからこそ、私達は送り届けなくちゃ行けないのよ」
「送りとど――うおっとっと！？」

会話の途中で大きな揺れが来た。鍾乳洞事態が大きく揺れてる。そしてそんな揺れのせいで、天井から伸びてる鍾乳石が落ちてくる。

「危ないクリエ！」

僕はとっさにクリエに飛びついてそれを回避。地面に当たった瞬間、鍾乳石は大きな音を立てて弾け飛んだ。なんとか守れたと思ったけど、まだ揺れは微妙に続いてる。そしてついには後ろから狼共の姿まで。
奴らは早速見つけた獲物目指して駆けてくる。だけどその時、もう一度大きな揺れが起きた。しかも今回は断続的に続く揺れだ。
そんな揺れで僕はゾッとした。だってこれじゃ、天井の鍾乳石は……僕は上を見るなり叫ぶ。

「全員取り合えず走れ！　でないと串刺しだ！！」

僕はクリエを抱えて、揺れの中強引に走り出す。そしてそんな僕に続いて二人も何とか足を動かした。周りには次々と天井の鍾乳石が降り注ぐ。
後方を向くと、そんな鍾乳石に狼が潰されて悲鳴を上げてた。こっちも油断は出来ないけど、これはこれで……とか思ってると、シスターの声が後ろから届いた。

「そっちはダメ！！」

その瞬間、僕の頭にはゴッという音と衝撃が響き渡る。

魚には成れない（後書き）

第二百二十七話です。
次で多分、箱庭での話は終わるでしょう。でもそれには、もう一試練があるようです。最後にスオウに起きたこと。きっとそれのせいで、望んだことには成らないのかも。
突然いなくなったテッケンさん達も何かやってるみたいな感じだけど、それも次回でわかるでしょう。
てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

散る花、進む花（前書き）

視界がぼやける。体が動かない。何故か頭からは血がどくどく出てる。僕の油断が生んだ、最悪のシナリオが幕を開ける。幾ら後悔したって、この時の自分を僕はきっと許せないと思う。

散る花、進む花

（あれ？　一体何が……なんで僕は地面に倒れてるんだっけ？）

視覚が波の様にうねってる。焦点も合わないし、全体がボヤケて自分がどうなってるのかさえもわからない。僕の腕から逃れたらしいクリエが、近くで何か言ってるけど、言葉自体を上手く聞くことが出来ない。

なんだか頭の奥で反響してるだけ。

（何言って……てか、なんでそんなに涙流してるんだ？）

そんなおかしな疑問が頭の中に浮かぶ。でも涙流されてるんなら、どうにかして止めないととも、自然に思う。取り合えず、この寝心地が最高に悪い場所から起きあがって、クリエを安全な所へ……だけどあれ？　力が上手く入らない。

体もなかなか言うことを聞いてくれない。両手を必死に揺れる地面へと押し当てて、体を持ち上げようとするんだけど直ぐに力が抜けてしまう。

床に再び戻った僕。するとそこで気付いた。白い床に広がる真っ赤な液体に。

（これは……僕の血？）

ボヤケる視線を周囲に這わせて見ると、直ぐ近くに赤い物が付着した鍾乳石が砕けてるのが見えた。それで何が起きたか理解した。

（そっか……僕の頭にアレが当たったのか。くっ……道理で一瞬意

識が飛んだ筈だ。くそったれ……こんな所で）

理解すればするほど、自分のアホさがムカついてくる。なんでこんな時……なんでこのタイミングであんなのに当たる。それは一番やっちゃいけない事だ。

僕は何度も何度も、体を持ち上げようとするけど、やっぱり体に上手く力が入らない。くっそ……まるで心と体が離れてしまったかの様な感覚だ。

揺れはまだ続いてる。周りには次々と僕を襲った鍾乳石が落ちてきてる。このままじゃ、もう一度があり得ないとは言えない。ここは危険だ。

「う……あ……」

声を出そうとした。だけど、喉を通って出てきたのは言葉になんか成ってない声。言いたいのに……クリエに「走れ」って言いたいのに、僕の口は言葉さえも紡げない。

クリエは僕が何かを言おうとしてると感じてか、必死に何かを言って、顔を近づける。だけど今の僕には、この子の言葉を処理できる力もない。変な音として頭には伝わるだけ。

すると今度は更に最悪の事態が押し迫る。この揺れで、とうとう巨大な柱と成ってる鍾乳石にまで亀裂が入り、倒れてくる。

今度こそ「逃げろ」って言いたかった。だけど、クリエの奴は逃げる所か、僕を庇うように抱きついてきた。このバカ……ここで僕と一緒に死ぬ気かよ。

そんなの……そんなの僕が耐えられるか！！　僕は体を持ち上げる為に離したセラ・シルフィングを求める。でも、柄を握る事も出来なければ。持ち上げる事さえも不可能だった。

けどだからって、このままクリエまで死なせる訳には行かない。

僕は触れる程度のセラ・シルフィングに必死に意志を伝えようとする。具体的には頭で念じまくった。

（頼む頼む頼む頼む頼む！！　セラ・シルフィング、雷放を雷放を雷放を！！）

セラ・シルフィングは応えてくれる。僕はそう信じて願う。僅かだけど、手にバチバチという電気の感触が……けれど、迫り来る巨大な柱にはこんな程度じゃ傷一つつけられやしないだろう。

するとその時、更にもう一人が上にのし掛かって来た。その人はクリエを庇うように抱きついて、そして震えてた。

そしてその上に柱が迫る。だけど直前で、巨大な鍾乳石は横から突っ込んできた何かによって砕かれた。飛び散る破片が周囲に幾重も舞い散る。

僕はそんな中、飛び散る破片の先に目をやってた。そこには自分の背よりも大きな十字架を展開させてるモブリの姿がある。

そしてその人も、何かを叫んでる様だった。けど、僕にはその人が何を言ってるのかわからない。彼女はたった一人で戦ってる。鍾乳石の雨をくぐり抜け、こちら側に来ようとする狼共をたった一人で相手してる。

（僕も……）

そう思う事だけはいつだって出来た。だけど体が全然思いに付いて来てくれない。歯がゆすぎる。すると僕の体が後ろの方へ引っ張られる様な感覚が。

視線だけを上げると、そこではシスターが僕の服の襟を掴んで後ろに引っ張ってた。僕のボヤケる視界じゃ上手く見えないけど、シスターの表情はなんだか痛々しいような。

目の前ではクリエがシスターに向かって何かを訪ねてる様に見える。クリエはセラ・シルフィングを抱えて付いて来てて、何を返されたのかわからないけど、決意した様な目で、揺れる地面の中を必死に歩く。

地面を引きずりつつも、少しづつこの場を移動していく僕。それが情けなくって、力なくて……自分のふがいなさが本当に恨めしい。

するとまた、大きな揺れが……それは地面の亀裂を更に広げる。僕達が今し方通った場所も大きく地面が割れてしまう。緑色した水が、奈落と化した底へと流れていく。

「――――!!」

その時、クリエがその亀裂の向こう側へ向かって何かを叫んだようだ。僕も次第に視界が戻ってきた視線をその方向へ向けた。

すると丁度その時、シスターの必死な声も少しだけ聞こえた。

「――ダ――――ソン様!!」

アンダーソン？　……そうだ、あの人は向こう側で戦ってた筈。視線は自然とあの人を捜す。すると居た。まだ向こう側で戦ってる。

クリエが亀裂の傍まで寄ろうとする。だけどそれをシスターが制して、声を出す。

「はや――こちら――へ!!」

揺れは次第に更に強く成ってきてた。ミセス・アンダーソンは言葉を受けても、何故かこちらに来ようとはしない。何やってるんだあのおばさん……このままじゃ。

「アン――ソ～～～～～～～ン！！」

必死に叫ぶクリエ。手も伸ばすけど、彼女はそれに答えようとはしない。そんな事をしてる間にも、僕達の目の前の亀裂は広がるばかり。このままじゃ本当に……そして天井にまで入った亀裂によって、この鍾乳洞が本当に崩れさろうとしてるとわかる。

「行き――さい。――が――任を持って、食い止――あげるから」

崩壊の進む鍾乳洞で、おかしな言葉が聞こえた。何……言ったあのおばさん？　所々聞き取れないけど……大体分かったような……でもそんなの受け入れる筈がない。

僕の思いと同じく、クリエやシスターもそんな言葉が信じられなかった様子で、向こう側に居るアンダーソンへと言葉を向ける。

「ダメ――何言って――の！？　みんなで――に、帰るの！！　じゃなきゃ――ヤ――よ！！」

「そうで――クリ――の言うとおり。貴方様――犠牲に――なんて！」

二人の言いたいことも全部じゃないけど、聞き取れた。ちょっとずつだけど、回復してきてる。体さえ元に戻ればこのくらいの距離、僕なら余裕で飛び越えられる。

そしたらあのおばさんがなんと言おうと、抱えてしまえばこっちの物……だけど、そこまで回復するのに後何分掛かる？

今直ぐにでも行かないと、間に合わなくなりそう……僕は必死に体に力を伝えてみるけど、やっぱり言うことを聞いてくれそうにはない。

地面に倒れ込むしか出来ない僕。そんな僕は、ミセス・アンダーソンの視線が僕に向いてる事に気付いた。

（何で……何でそんな目をして僕を見る……）

ミセス・アンダーソンの目は戦いの最中の目じゃない。ここに残る事を決めて、絶望を宿した目でもない。ただたおやかに、そして穏やかに僕を……いいや、僕達を見てる様な。

「行き――さい！！　これは命令よ！！　シスターそれと――ウ――その子を――――ます。最――に、コレ――を」

そう言ってアンダーソンは、懐から出した紙切れを、十字架に乗せて飛ばす。それと同時に天井が崩壊した。

大きな音と共に、目の前に瓦礫が落ちていく。クリエがそんな中へ近寄ろうとする。だけど最後に、アンダーソンはそんなクリエに、目一杯のきつい言葉を向けた。

「――――――――なさい！！！」

そんな言葉を受けたクリエは、必死に涙を我慢してる様だった。だけど涙は必死に食い止めても、それは既に顔に出てる。

唇を噛んで、眉を寄せてるその顔は既に泣き顔みたいな物。でもクリエは涙の一粒も見せずに、シスターの後を付いていく。

僕は結局、何も出来ずに引きずられるだけ。そして僕だけがきっと見てた。崩れ去った瓦礫に埋もれていくアンダーソンの姿を。

僕達はなんとか崩壊を免れて暗い通路に入ってた。ここは多分、最初に入った出入り口通りだとすると、もうすぐそこに出口があるって事だろう。

なんとかここまで来たわけだけど……僕達の空気は重かった。だって、犠牲が出てしまった。それはどうしようもない思いと共に、

のし掛かる。

「ふぐっ……えっぐ――」

ポタポタと暗い地面に透明な滴が落ちる。視線を上げると、クリエの瞳から次々と涙が溢れてた。必死に我慢してた糸が、ちょっとした安心に緩んだみたいだ。そしてそれを引き戻す事がクリエには出来ない。

クリエは必死に運んで来てくれたセラ・シルフィングを放り捨てて、シスターの胸へと飛び込んだ。そしてそのまま――

「うわぁぁぁぁぁん！　シスタァァァァァ！！」

クリエの鳴き声が、狭くなった洞窟へと響きわたる。僕はそんな泣き声の中、僅かに取り戻した感覚で拳を壁へと叩きつけた。そんな痛くもない程度の力……だけど、その泣き声に心はかきむしられる様に痛かった。

シスターはそんなクリエを優しく抱きしめる。そしてクリエの頭に顔を埋めて何かを話してる？　いや、違う。微かな旋律が僕にも届く。これは……あの歌だ。

『幾億の星が～流れ落ちるその時～私はその星の一つに～なれているのだろうか。一人で輝く星になんて～成りたくはな～いよ～。孤独は罪で、それが罰。紡いだ声はどこへ行くの～それでも私は目指したい。

夢の場所。希望の丘。私はそれは抑えられないの』

紡がれる旋律は、僕の知らない歌詞を露わにしていく。そしてそんな歌の途中で、クリエは強くシスターを抱きしめる。

「クリエは……クリエは……立ち止まっちゃいけない？」
「そうですね。あの人はそんな事は望まないでしょう」
そう言われたクリエは、涙をゴシゴシとふき取る。そして放り投げたセラ・シルフィングを抱え直して、僕の方へ向けた。
「はい！」
そこには目一杯頑張ってクリエが笑顔を作ってる。なら、僕も目一杯頑張ってそれを受け取らないといけないだろう。
震える両腕を必死に伸ばす。そしてそれぞれの腕に、クリエが一本ずつ剣を握らせてくれる。
（――っつ！）
握った瞬間、そのままセラ・シルフィングを落としそうになる。だけどそこは根性で踏ん張った。クリエが頑張ってるのに、僕がいつまでも情けなく居られる訳がないからな。
そしてなんとか、鞘へと納めた。たったこれだけの事が、なんて難しいだ。全快にはもう少し掛かりそうだった。
「大丈夫スオウ？」
そう呟くクリエが不安そうな瞳で僕を見てた。僕はそんなクリエに向かって、握った拳の親指を一本立てて、目一杯の笑顔を作る。
それは「大丈夫」って言う意思表示。まあ全然、今の僕の状態じゃそうは言えないかも知れないけど、これ以上クリエを不安にさせる訳にはいかない。
これは回復薬でも飲めば、一瞬で元通りに成れたりするのかな？
そんな希望はあるわけだけど……今はまだウインドウを出すのも

ままならないんだよな。
どうしても自分のふがいなさに歯噛みしてしまう状況。助けるって言ったのに、完全に逆に成ってるよ。
するとその時、ミセス・アンダーソンが最後に託した紙に目を落としてたシスターが、何かに反応した。

「何か来ます！　この足音は……きっとあの狼です」
「ええ！？　どうしようどうしよう、スオウはこの状態だし、戦えないよ」

シスターの言葉に狼狽えるクリエ。実際僕もそうだった。最悪だ。こんな状況で……どうしろと？　狼共はこっち側には回ってないと思ってたんだけど……どうやらそうじゃなかったらしい。
残り全部鍾乳洞で潰れてれば良い物を。僕は踏ん張りが効かない足を押さえつけて、無理矢理立ち上がろうとする。だけど直ぐに、地面に倒れてしまう。なんという情けなさ。

揺れはまだ続いてる……ここもいつまで持つか……きっと次に大きな揺れが来たら、ここも危ない。地面に耳に付いたせいで、確かにいくつかの足音が聞こえる。四足歩行の沢山の足音。
実際、半信半疑だったけど、自分の耳で確かめちゃうと、こうやって倒れてる場合じゃないと思える。情けなくふがいない僕だけど……ミセス・アンダーソンが命を懸けてまで守ろうとしてくれたんだ。
僕達に未来を残してくれた……それなら、こんな所で潔く狼の餌になんて成れる訳がない。僕はもう一度立ち上がろうとする。死ぬわけには行かないから。そして今度は僕が、守らなきゃいけないからだ！！

「う……がっがががああああああああ！」

声に成らない声を出して、少しづつ腰を上げていく。そんな僕を見て、クリエが急に抱きついて来た。そしてそのせいで結局、また倒れる羽目に。
何するんだよクリエって思ったよ。すると気付いた。クリエが必死に堪えてた筈の物が、もう一度その頬に伝ってる事に。
「無茶だよスオウ！　そんな体で……スオウまで居なくなろうとしないでよ！」
「クリ……エ」
何とか紡げたその名前。僕はクリエの頬に手を添える。そして伝わるかどうかわからないけど……口だけを動かした。まだ上手く言葉を出せないから、もういっそって思ったんだ。
（ごめん……でもここで、終わりになんてさせる訳にはいかない）
僕は頬に添えた手を、クリエが僕の服を掴んでる手へと持っていく。そして今の僕の力じゃクリエの手を解く事も出来ないはず……だけど、その小さな手を離してくれた。何かを感じたのかも知れない……クリエは敏感な子だから。
大粒の涙が止めどなく溢れるクリエの瞳。僕はそれを見ないようにしながら、もう一度立ち上がろうとする。するとそこにはシスターが居た。体を起こしたばかりの僕と、目の前に立ってるシスターの顔は丁度同じ位。
てか、そこに居られたら立ち上がりずらい……フラツくから危ないんだ。そんな事を考えてると、コトンとシスターが何かを落とした。
視線を向けた先にあったのは瓶……それもこの瓶は――

「ふぐっ！？」

添えられた手と同時に近づいた顔。そして混じり合う息と共に、触れ合った唇。僕はただ、ただ固まった。実際何がどうしてこうなったのか、全然わからない。

そしてその行為の直後、クリエが小さく「きゃっ」と言ったのが聞こえたよ。だけどどうやらこれは、ただのキスって訳じゃない様だった。

僕の口の中に何かが入ってくる……シュワシュワとした、ソーダ味の液体、これは……口一杯にたまるそれを僕は飲み込む事になる。

すると体が幾分か楽に成っていく感じ。そして僕のＨＰが回復していく。彼女の口からそれが尽きた所で、唇は放される。

だけどまだ超至近距離……こんな事をした後だからか、モブリの筈なのに、妙にシスターが艶めかしく見えてしまう。てか何でこんな事、するとシスターは真っ赤な顔で僕を見つめて言う。

「これは呪いです。今のは、私の呪いが籠もったキスだったんです。許しませんよ。ちゃんとこの子を守ってくれないと。許しませんよ、ちゃんとこの子の願いを叶えてくれないと。

私は一緒にいけないから……だから貴方を呪います。この子がきっと救われます様に」

そして小さく「一度やってみたかったってのもありますけど……」とか恥ずかし気に言ってたけど……ちゃんと僕は、その言葉の意味を理解してただろうか？

いきなりで唐突で……実際何言ってるんだ？　って思ってた。シスターはだけど、既に何かを決意してる。最後に僕の耳元に顔を寄せて、伝えるべき事を伝えて、僕の手に渡すべき物を握らせた。

そして僕から一歩下がる。僕はまだ頭が上手く働いてないようで、何を言えばどうすれば良いのか分からない。

「シスター？」

彼女のおかしな行動に目を見張ってたクリエが、親しい人の変な行動を心配するような声を出す。と、言うか何か不安そうな声。

するとシスターはとびっきり優しく微笑んで、クリエをギュっと抱きしめた。

「ごめんなさいクリエ。ごめんなさい……だけどもう貴女は一人じゃないから……だから、私は安心です。いつもはクリエが行ってきますを言ってたけど、今日は私が言うね。

行ってきますクリエ。大切な貴女の願いを繋げる為に」

するとクリエが震える声でこう返す。この時にはもう、クリエも僕も、彼女が何をしようとしてるのか、その察しが何となく付いてたから……だからクリエは、震えても何でも、その手を離そうとしない。

「待ってよ、シスター。イヤだよ……イヤイヤ！　そんなの駄目！

そんな行かないで！　行って来ますなんて言わないで！！」

「良いのよクリエ。ありがとう……私はその気持ちだけでとっても幸せです。こんな私でも生まれて来て良かったと思える。

でもねクリエ、私の役目はここまでです。ここから先は、私は共に行けないの。そしてきっと、その役目は彼に続くんです。

貴女が出会って、自身で繋いだ絆の彼と籠の無い世界を歩きなさい。私の事を犠牲だなんて思わないで……それは誰しもが持ってる権利です。

勿論貴女にもねクリエ。ずっとここに縛って来たのが間違い。自

由に成りなさい。そして、願いの場所へ。忘れないで、私はいつだってクリエの味方だよ」

「あっ……ぐっあ……うう」

声に成らない声で泣いてるクリエ。苦しすぎて痛すぎて……溢れる涙に対して声が出ない。するとシスターはそんなクリエを無理矢理引きはがして、僕の方へと押した。泣いてるせいで足下がおぼつかなく成ってたクリエは、簡単に突き飛ばされて、僕の元へ。

そして彼女はいつもの如く、丁寧にお辞儀をしてこう言った。

「その子を頼みます。ちょっとわがままで、自分勝手で、目を離すと直ぐにどこかに行っちゃうような落ち着き無い子ですが、本当はとっても優しくて……とっても寂しがり屋な子なんです。

貴方ならきっと、その子を救う事が出来る。私には絶対に出来ない事が。あの日から何度そこに行きたかったか……けど、良いんです。

頼みます。救ってください。可哀想な彼女達を」

お辞儀をしてるシスターから、透明な滴が落ちてた。本当はずっと一緒に居たいに決まってる。それなのに、それを選ぶ事がもう彼女には出来なくて……その役目を誰かに託す事しか出来なくて……シスターは顔を上げると同時に、背を向けて洞窟を先行していく。

そんな後ろ姿にクリエが何度も何度も名前を叫ぶ。僕だって止めようとした。だけど回復はしても、体と脳の繋がりは未だ曖昧らしい。僕は直ぐに地面に倒れてしまう。するとそこには僅かな血痕が続いてた。

僕の血……じゃない。これはきっとシスターの……やっぱりさっきの回復薬は僕が渡した筈のもの。彼女はそれを使って無かったんだ。なんで……どうして？　全然分からないよ。

倒れてしまった僕を気にして、クリエはシスターの後を追えなか

った。そして倒れてしまった僕には聞こえてた。沢山の足音が、遠ざかって行く。

激しい風と雨が体を打ちつけて、巨大な落雷が地面を砕く。何とか歩けるまでには回復出来てた僕は、クリエと共にようやく洞窟の外へ。きっとこれもシスターがくれた回復薬のおかげだろう。

外に出るとモンスターが居るかと思ったけど、この時にはもうシスターもモンスターも周りには居なかった。僕はクリエを胸に抱えて、ふらつく足取りの中、山を下る。

僕達は一言も発しない。お互いに、嵐とかもうどうでも良く成ってた。打ち付ける雨も、荒れ狂う風も、鼓膜を破りそうな程の落雷にだって反応しない。

ただ僕達は無言で目的の場所を目指してた。大きな何かを抱えてるから、足だけは止められない。そして辿り着いた箱庭の端。

僕は手に握った紙に向かってこう言った。

「マジックリリース。ゲートを開け。キーワードは……神の名の元に」

すると紙は光り、魔法陣が現れる。そして僕達は籠の無い世界へと誘われる。

散る花、進む花（後書き）

第二百二十八話です。
今回で箱庭脱出。だけどそれは辛い事の連続でした。クリエにとってもスオウにとっても、とても辛くて立ち止まりそうになる物。だけどそれは許されない。思いを託されたのなら、勝手に立ち止まる事は許されない。
だからこそスオウはクリエを抱えてまで歩いたんです。取り戻せた筈の願った物。だけどその代償はとても大きかったんです。
てなわけで、次回は木曜日に上げます。ではでは。

救出完了？（前書き）

遠い意識の向こうから聞こえる声。それは次第にはっきりしていき、ここが箱庭の外だという事を教えてくれる。だってこの場所には、テッケンさんにシルクちゃん、鍛冶屋にセラにノウイ……みんなが居た。

そしてそこには、本当の本当に居てほしくない奴も居た。いや、僕はここでそいつに出会えた事を、喜んでたのかも知れない。

救出完了？

激しい音が聞こえてた。だけどそれは遠くの様で、僕にはちょっと関係無いかなとか、うつろう頭で思ってた。だけど次第にあれ？　って思い始める。

だってその遠くの音・声には聞き覚えのある物が含まれてる。冷たい地面の感覚が次第にはっきりしてく中で、僕はそんな音と声に意識を向ける。

「ちょっちょっと！　いつまでこいつらと戦わないといけないんすか？　流石にそろそろヤバくないっすか！？」

「うるさいわねノウイ。あのバカも起きてない。あの子だって助けてない。こんな状況で逃げれる訳ないでしょ！　そもそも逃げ道だってこの聖院の奴等が握ってるわよ。いいから戦闘で役に立たないアンタは、これがどういう事なのか必死に情報を集めなさい！」

「りょ……了解っす！」

ん……すっすウルサいこの言葉使い、それにこのきつめの口調……どう考えてもあの二人だよなこれ？　僕の意識がそれを認識すると、体の感覚が少しだけど戻った様な。

「それにしても――だよ。彼らはどうして今更、ここまで侵攻してくるんだろうか？　元老院の一人が自らここまで……目的はやっぱりクリエ様？」

「まあ十中八九そうだろうな。だが数パーセントの可能性で、そこにスオウと同じように倒れてるオバサンが目的かもしれん」

この二人は先の二人よりも簡単。もっと前からの知り合いだから。

でも、おば……さん？　僕の耳に届いたそんな言葉。僕の指がピクリと動く。

「確かにその可能性は否定出来ないね。これは僕達の先を行ってたのはミセス・アンダーソンだと考えた方がいいって事だよね。彼女の目的もやっぱりクリエ様かな」

「そうとしか考えられないだろう。まああのガキをどうしようとしたのかは分からないがな。だが、あれが箱庭だとするなら……行動を起こしたくなる気持ちも分かるがな」

あれが？　どういう事なんだ？　その言葉の意味を知りたくて、僕は体中に意識を集中する。次第にだけど、血が巡っていく感覚がある。瞼もきっと緩んで来てる。

「あれが箱庭なら、私達は滑稽かもですね。だけど笑う事なんか出来ない。だってあれは、私達と同じってだけですから」

澄んだ声の主が沈痛そうに響く。優しい彼女は何を見てるんだろう。クリエがそこに居るんだよな？　居なかったら困る。僕は託されたんだから。

肺が息を求めて深く呼吸を繰り返す。すると頭もどんどんはっきりとしてくる。瞼を開けると、まだボヤケてる視界に、人の影が見えた。

大きい影が四つ世話しなく動いてる。それがきっとみんなだろう。鉄拳さんは敵のモブリに混じってるからよく分からない。空中に浮いてるっぽいのがきっとピクだな。

「全く、いい加減にしてくださいませんか？　不法侵入に屋荒らしですか？　ここは我々の所有物なのだから、さっさと消えなさい猿共。うざったいんですよ！！」

届いたそんな声に、僕の鼓動は大きく反応した。知り合いとかじゃないけど……この声は忘れない。忘れられる訳がない。これは箱庭で通信越しに居た奴の声！

ボヤケてた視界も次第に鮮明に成っていく。僕はそいつを捜そうと視線を声の方へ向けたけど、僧兵共の杖が邪魔だ。そんな中ふと前を見ると、そこには……

「それは出来ません！　それに貴方が言う所有物には、もしかしてクリエちゃんも入ってるんじゃ無いんですか？」

「クリエ？　ああ、クリューエル様の事ですね。ククハハハハ、当然でしょう。あれは我ら聖院が持つ所有物ですよ！！」

ドクン！！　と大きく体に熱い物が巡る。目の前の物を見て、奴の腐った言葉を聞いて、どうしようもなく体が熱い。頭にはミセス・アンダーソンの最後の姿と、シスターの願いが流れてた。

「物だなんて！　彼女はちゃんと生きて――」

「我らが生かしてやってただけです！　その負債を今から賄おうと言うだけですよ！　さあ、さっさと奴らを打ち崩せええ！！」

シルクちゃんの言葉を遮るように、奴が号令を掛ける。その瞬間大量の攻撃が降り注いだ。そしてそれは否応無く、僕をも襲う。そこかしこで起きる衝撃に、巻き起こった粉塵。動けなかった僕はもろにその衝撃を受けた。

（けど……丁度良い……ああ、これで）

僕は床に倒れ伏したまま、ある言葉を紡ぐ。その瞬間巻き起こった四本の風のウネリ。それらは動く度に近くの物から片っ端にぶち

壊していく。そして部屋中に響きわたるアラーム音の中、僕は静かに立ち上がる。その背に、風のうねりをに背負って。

「スオウ……君？」

シルクちゃんのいぶかしむ様なそんな言葉も仕方ない。今の僕は少しおかしいかも知れない。何かが……きっと頭のねじの一本位ぶっ飛んでる。

僕はシルクちゃんの声には応えずに、背中の風で部屋中を荒らす。計器や機械、そして意味も分からない魔法陣を潰していく。

「やっやめろ！　それ以上ここを壊すな！！　箱庭の換えは幾らでも効くが、ここはそうはいかんのだぞ！！　貴様弁償出来るのか！？

ええい！　奴に攻撃を集中させろ！！」

そんな言葉と共に、僕へ向けて僧兵の杖に集まった光が放たれる。だけどそんな物、振り返る事も無く四つの風のうねりが防いでくれる。

そして更にけたたましく成ったアラーム音と大量に宙に出現した警告の文字。すると目の前の卵形の容器の下側が小さく丸形にいくつも開いて、そこから中の黄色掛かった水を排出しだす。

この国にはえらく不釣り合いに見える機械仕掛けの仕組み。そんな物が、この卵型の容器の周りには一杯だった。だけどそれでもやっぱり魔法の国なんだろう。

水を排出し終わった容器は、中心で魔法陣を展開させたと思ったら、中に入れられてたクリエをどこも開ける事無く外へと出した。

なんだか容器を通り抜けた感じだ。僕は外に出されたクリエを受け止めて、そして白い星が刀身を回ってる状態のセラ・シルフィングを横に凪いだ。

すると次の瞬間、その容器と周りの機械も、同時に爆発炎上する。後ろでは誰かが絶叫する声が聞こえた様な気もしたけど（これでいい……）そう思った。

「きっさまあああ！！　よくもよくも！　異教の猿の分際で！！　神への冒涜も甚だしい行いだ！！」

クリエを抱えて振り返ると、ようやく奴の顔が見れた。腐った顔、汚れた顔してやがる。愛らしい筈のモブリの容姿を見事に歪める表情だ。

僕は堅く目を閉じるクリエへと視線を落とす。そして紡いだ。

「神なんて……こんな子供にこんな事をする奴等を許す神なんていらない。お前達が信じる神と、シスターやミセス・アンダーソンが信じた神は本当に一緒かよ？

言っとくけどな、神の名を語れば全てがまかり通るなんて訳ねーんだぞ」

「くははは！　それこそお笑い草の言葉だな！　あんな奴よりも我らはもっと近くで神の教えを受けたのだよ。いわば我らの行いは神の行い。そしてその物がやられる事は、全て我らが神の為！

間違ってる事など一つもない。我らの行いは他全ての信徒を救えるが、その物が野に放たれると、他の信徒が迷うのだよ！

だからこそ我らが管理しなければ行けない。殺さないんだ。慈悲深いと思ってもらいたいなあ！！」

不愉快な言葉に、僕はかみ合わせた歯に力を込める。僕は抱えたクリエをそっと地面に、ミセス・アンダーソンの隣に寝かせる。

どういう事なんだろう？　僕達は箱庭という場所に飛ばされてた……って訳じゃないんだろうか？　でも最後には一緒に居なかった筈のミセス・アンダーソンがここにいて、クリエはクリエで変な容

器に入ってた。
　これって一体……いや、今はまずあのクズを取り合えずブチ殺したい感が強くて、上手く頭が働かないな。僕はクリエを置くと再び奴の方を向く。

「あんな所に閉じこめる……それはきっと生き地獄と変わりない。クリエは案外楽しそうにやってたみたいだけど、それでもあいつの願いが消える訳じゃない。
　それをお前達が奪っていい権利がどこにある？　神にでも成った気で居るのかよ！？」

　宗教上どれだけ偉くったって、子供の夢や願いを奪う事を許される筈がない。宗教が何の為にあるのか……それがわかってたら、こんな事するはず無い。
　だからこそ、こいつらは腐ってる訳だ。

「神では無い！　だが、神に常人よりも近づいてるのが我らだよ。神の声を聞き、神の教えを広める事で選ばれた我らは特別。
　そして特別だからこそ、神の名を守る義務がある！　これはその範囲だとどうしてわからん！？　いいや、わかる筈もないか！　貴様等は所詮、外者だからな！！　こんな奴に、何を託してあの目障りな婆は逝ったのやら。
　傑作だったよ。あの婆が死にゆく様は！！」

　その瞬間、背中の風が激しくいきり立つのがわかった。きっと僕の感情を受け取ってる。僕は今、猛烈に頭に来てるから。

「貴様だけは……お前だけは絶対に許さねぇ！！」

　僕は地面を蹴って飛び出した。風のうねりが高速で僕を運ぶ。こ

んな距離なら、一蹴りで間合いを詰められる。だけど邪魔なのが二十人程の僧兵の盾。
その一番後ろにあの野郎が居るんだ。
「はっは！　迎え打ってや――」
途中で途切れた言葉。それもそうだろう、こんな薄い壁が、命を削るイクシード3の前で意味を成すとでも思ったのか？
「お前の様な口先だけの奴とは違うんだ。背負う物も、託された物も！　お前等の都合の良い信仰心が、このセラ・シルフィングに込められた思いに勝てるかよ！！」
「――ひっひぃ！！」
奴の所までの距離ををまさに刹那の如く駆け抜けた。二十程のモブリの壁を紙切れの様に吹き飛ばして、奴の脳天めがけて振りおろされたセラ・シルフィング。
だけど奴に届く直前で魔法に阻まれた。障壁って奴だろう。だけどそれも、既に亀裂が入り始めてる。
「よっ……よした方がいいぞ。私に手を出すことがどっどういう事かわかってるのか？　指名手配されるぞ。シスカ教の全信徒が黙ってない！」
震えながら、そんなくだらない事を口ずさむ。今更な事を言うもんだから、なんというつまらなさだよ。だから僕は冷めた目でこう紡いでやる。
「あっそ……それが遺言で良いんだよな？」
「――ひっ！　助けてくれ……私は神の為に……神の教えに従っただけで……」

僕の一言に怯えたこいつは、今自分で何を言ったか理解してるのだろうか。自分の今までの言葉を否定する事を言ってるよ。

「縋ってたんじゃないのかよ。そんな神様に今度は全部を押しつけるのか？　誇りを胸に死ねず、信じた物の為に命もお前は賭けられない。

ミセス・アンダーソンやシスターは違ったよ！」

更に力を込める。イクシード3は止まらない。背中から延びる四本の風のうなりが、激しく動き、部屋全体を荒れ狂う様に蹂躙する。

至る所で爆発が起き、そんな僕へみんなが声を掛ける。

「スオウ君！　これ以上はここが持たないよ！」

「そうよちょっと周りの事も考えないさい！！」

そんな言葉は聞こえてたけど、僕は耳を傾けようとはしなかった。ただこの目の前の奴が憎くて、許せなくて、だから僕はこいつをブチ殺す事だけを考えてた。

「アンダーソンは最後まで誇りを胸に、自分が信じた神を誇って託してくれたんだ！　シスターは戦えもしないのに、それでも大切な奴の為に体を張った。

そんな勇気を……自分を犠牲に出来る心を！　お前の様なクズに侮辱されてたまるかよ！！」

「ううあああああああああああああっ」

障壁を打ち砕き、叩き込まれるセラ・シルフィング。だけど運がいいのか悪いのか、奴が腰を抜かしたせいでギリギリで届かなかった。

だけど床は砕かれ、その破片が奴に刺さり一撃で逝けなかった苦しみを味わう羽目に……良い気味だ。のたうち回る奴に僕は更に一歩を歩んで、セラ・シルフィングが届かないなんて事を無くす。

「や……やめろ……違うんだ。そうだ……何が望みだ？　金か？　名誉か？　今なら……この事は水に流してやるぞ」

ガチガチと歯を鳴らしながらそんな事を言う元老院の一人。虫酸が走るとはきっとこのことだろう。こいつの言葉の一つ一つに、僕を苛つかせる力がある。

僕はそんなクズにセラ・シルフィングを向けてこう言った。

「本気でそんな事言ってるのか？」

「ひっ！　くっ……アンダーソンはともかく、どうしてあんな存在の為に、ここまで出来るのか理解できないな……あれが自分を犠牲にしてとか言ったな？

あのシスターに命なんて無い。あれは世話と監視役を兼ねて作った箱庭と同じ存在だ。元々、廃棄する予定の存在だったよ！！

うはははっははははは！

どうだね、命が無い存在だったんだからそんなに気を使わなくても君は良かったんだ！　少しは楽になっただろう。私は人殺しは一人しかしてない。処刑には早すぎるぞ」

何言ってるんだこいつ？　追いつめられ過ぎて頭がおかしく成ったのかも知れない。シスターが命が無い存在だったとしても、こいつを僕が殺したい事に変わりなんて無いのに。

奴に向けた切っ先を、振り上げる。今度こそ外さない用にしなくちゃいけないよな。セラ・シルフィングの刀身を回る星が次第に早さを増していく。不規則に回るそれが刀身全体を覆うと、そこには白く輝く、一回り大きな流星の剣が姿を現す。

だけどその時、口の中に鉄の味が広がって来た。けれどそれでも……ここで止める気なんて僕にはない。

「シスターに命が例え無かったとしても、僕は確かにあの人の心を感じた。クリエを助けたいって、救いたいって気持ち……あの人は自分の事も全部分かってて、だからこそ僕達の為に、自分を犠牲にしたんだ。

少しはお前等も、そういう『心』を見習えよ！」

僕は目一杯の力を込めてセラ・シルフィングを叩きつける。今のセラ・シルフィングには生半端な障壁なんて紙切れ同然だろう。

一撃で終わらせてやる。

「やめっ――――助けて……」

「縋るなら、お前達の都合の良い神様に祈ってみろ！！」

セラ・シルフィングが奴の脳天から一気に下の地面までを突き抜ける。瓦礫に埋もれた死体が、オブジェクト化して消えていく。

「はぁはぁはぁ……」

あんなクズをやったところで、何かが戻って来るわけじゃない。目を覚ますときっと、クリエは変わらず悲しむだけだろう。

けどそれでも……許せなかった。腐った元老院の連中……それにどうしようも無くふがいなかった自分がだ。八つ当たりに近かったのか知れないな。

正当にぶちのめせる奴が丁度目の前にいたから……全ての怒りや、やるせなさをぶつけたんだ。荒い息を吐きながら僕はこう呟く。

「僕も……似たようなクズかもな。何も出来なくて……誰かを殺し

た……同じだ、僕だって」
「スオウ君……」
腕からセラ・シルフィングが落ちる。それと同時に、背中から生える風のウネリも唐突に消えた。だけど口に広がる鉄の味は増して、一度僕はそれを吐き捨てる。
「げはっ、がはっ！」
一撃だって受けちゃいないのにこの吐血……イクシード3はやっぱり代償が大きすぎるかも。確かに圧倒的だったけど……これじゃあ元気でいられない。
救いたいし守りたいけど、誰かが犠牲に成ったりしたら、やっぱり後味悪いからな。
「スオウ君、今回復するからじっとしててね」
そう言ってシルクちゃんが回復魔法を詠唱してくれる。でもどういう訳か分からないけど、ＨＰは回復しても体事態が良くなった感じはあんまりしない。
これがイクシード3の代償って所なのかも。リアル事態にも及ぶ影響だから、ＨＰだけの回復じゃどうしようもないとか。
これはログアウトしたら病院に行かないといけないかも知れない。
「あの……あんまり効いてないですか？」
僕の苦しげな表情を見て、シルクちゃんが不安気にそう尋ねて来た。ピクもシルクちゃんの肩で首を傾げてるし、ここで心配させるのも悪いよな。だから僕は笑顔を作ってこう言うよ。

「いや、そんなこと無い。だいぶ楽に成ったしね。ありがとう」
そんな僕の言葉にホッと胸をなで下ろすシルクちゃん。やっぱりこの子は見てるだけで安心するな。戻って来たって感じがする。
「スオウ……アンタ本当に大丈夫なの？　なんだかさっきはその……怖かったわよ」
「ん？」
少し離れた所でそう呟いたのはセラだ。こいつでもその姿を見たらちょっとは安心する。けど、セラの顔は芳しく無い。怖かったか……セラが言ってるのは体の事じゃなく、心の方なんだな。確かにさっきの僕は、人殺しの顔をしてたのかも知れない。
それしか考えて無かったし……でも、そんなの悟られたくないから、ちょっとおどけた感じでこう言った。
「セラが僕に脅えるなんて貴重だな。はは……大丈夫。でもちょっとやりすぎたかな」
「ちょっと所じゃないわよ。アンタ自分が何やったか分かってるの？」
何やったか……僕的には悪者を叩き潰しただけな感じだけど？
セラはあきれた様に溜息を付いた。そしてキッとする鋭い視線。これなら大丈夫と思ってくれたって事だろう。だって心配してる顔じゃないもん。
「相手は元老院の一人よ。ノーヴィス全体を敵に回したと考えても良いくらいの奴なのよ！　どうするのよこれから」
「どうするって……」

そんなの決まってるだろう。僕は床に横たわってるクリエを見つめる。

「目的は果たしたんだ。クリエを取り戻す事が出来た。僕はそれでいい」

「それで良いってねアンタ……」

僕の言葉に呆れてるセラ。するとそこでテッケンさんが入ってきた。

「確かにこれからを考えると、スオウ君のやったことは痛いけど、クリエ様を助けるって決めた時からそれは覚悟の上だった事だよ。取り合えず、今は二人を連れてここを脱出しよう」

「ですね、流石テッケンさんは分かってる」

まだ言い足らなそうなセラだけど、ここはグッと押さえ込んだみたいだった。ここにこれ以上長居して良いことなんかなさそうだからな。

僕はセラ・シルフィングを鞘へと納めて、クリエの元へ。クリエはまだ堅く目を閉じたままだ。本当に箱庭から戻ってこれてるんだよな？　ちょっと不安になる。

「てか、結局箱庭って何だったんだ？」

そもそもそれが謎だ。僕達はどこから戻って来たんだろう？

「僕達がここに来たとき、既にスオウ君は倒れてた。幾ら呼びかけても反応しなかったし、それにミセス・アンダーソンも倒れてたから僕達はビックリしたよ。

二人は箱庭へ行ってたんだよね？」

テッケンさんの言葉に僕は頷く。そう言えばミセス・アンダーソンも何か言ってたな。僕だから入れたとか何とか。そしてシスターは箱庭で生み出された存在……それって……

「箱庭というのは、ＬＲＯ内のＬＲＯみたいな物だったんじゃないのかな？　意識を箱庭という空間に閉じこめてたんだ。それってなんだか皮肉めいてるね。

ＬＲＯに進んで飛び込んでる僕達への警告とか」

確かにそんな感じがしないわけもない。ＬＲＯ内のＬＲＯ。縮小版って感じだったけど、二人が暮らすには十分……ってあれ？　二人……だったっけ？　何か忘れてるような。

クリエにシスター……そう言えばシスターは最後にこう言って無かっただろうか？　【可哀想な彼女達】――――達って何だ？　クリエを抱えて僕はその重さを確認する。まだ居るんだろうか？　誰かが。

「スオウ君？」

クリエを抱えたままの僕に、テッケンさんが呟く。僕はそんな彼に、目を開けないクリエを見つめたままこう言った。

「ＬＲＯは夢を僕達にくれてる。大変だけど、いろんな物を気付かせてくれてる。だけど箱庭は違います。クリエを閉じこめて、夢を奪った。許さなかった場所です。

だから違うんだと思います。ＬＲＯと箱庭は、作った根本の理由が全然違う」

そんな言葉を紡いだ僕は、否定……したかったんだと思う。僕達

が夢見る事と、穏やかだけど、夢を奪う為のあの場所を、僕は同じになんてしたくなかった。

「ああ、きっとそうだね」

そう言ってくれたテッケンさん。爆発音がまだまだ続くこの場所は、既に限界が近い――とか思ってる側から周りの壁が崩れていく。それと同時に大量の水が流れ込む。どうやらまだ一息吐くには早そうだ。

救出完了？（後書き）

第二百二十九話です。
？の通り、まだ救出は完了してないっぽいです。てかノーヴィスという国を敵に回してもおかしくない事をやっちゃたスオウ達だし、完了を宣言するにはあと少し必要そうです。
だってクリエもスオウ達にも、これでお尋ね者みたいな。まあどうなるかは、次回でって事で。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

神の地の反抗者（前書き）

迫りだす水に嫌な思い出が回帰する。上下左右から沸き立つように注ぐ大量の水は、どう考えても異常な量。一体どうなってるんだろう？　この部屋がある建物は周りが水に囲まれてるのか？

どういう訳かはわからないけど、取りあえず脱出しないとやばそうだ。泳ぐのは苦手だけど……やれないなんて言ってる場合じゃなかった。

そして僕達はサン・ジェルクへと戻る事が出来た訳だけど……そこで待ってたのは犯罪者とされてた僕達を追う、僧兵のモブリ達だった。

神の地の反抗者

周りで激しく炎が上がるこの部屋に、何故か流れ込んでくる大量の水。火災が発生してるから、魔法での消火機能か何か？　かとも一瞬思ったけど、よく見ると別に炎が上がってる所に直接掛かってる訳じゃない。

僕が最後にあの元老院をぶっ殺した場所が一番損傷が激しかったのか、そこがきっかけ。後は水圧で順次、柔く成ってた所からも、水が押し寄せてる感じ。

「おいおい、どうなってるんだよこれ？」

既に足首まで水で埋まってちょっと狼狽える僕。だっていやな記憶がつい最近、出来ちゃってるからな。そのせいで水が迫るというのがちょっと怖い。

苦手意識って奴だ。

「どうなってるって……アンタがあんな強力な攻撃をズカバカ打つからこういう事に成るのよ！！」

「う……でもだって、あの時はプッツン来てて後の事も周りの事も考えられなかったんだ。それにどうしてこんなに大量に水が入ってくるんだよ！

どういう構造の建物の中にある部屋なんだよ！　あり得ないだろこれ！？」

下からは水が湧き出る様に出てるし、上の方はあたかも滝の様な勢いでこの部屋を埋め尽くそうとしてるよ。まあ確かに、後先考えずにイクシード3を使ったのは悪いと思うけど。

あのクズだけは許せなかった。自分の手が汚れても良いからぶっ殺したかった。
まあこうなったらセラに謝るのは取り合えず後回しにして、ここから脱出する手段を考えた方がよさそう。これじゃあまるで水責めだからな。

「あり得ないって言っても、私たちだってこの場所がどこにあるかなんて分からないのよ。言ったでしょ？　気付いたときにはアンタは寝てたって。
思い出してみなさい。私達は転送されてここに来たんだから、更にここから別のどこかに続いてるって思う？」

成るほど、セラはここが一つの終着だと言いたいわけだな。確かにそれはあるかも。イヤでも待てよ。

「ちょっと待て、あの元老院の奴とこの僧兵達は違う所から入って来た筈だろ？　そこから脱出出来ないのか？」

そうだよ。元老院のアイツが、同じ道を辿ってるなんて思えない。きっと楽にこれる道を用意してた筈だ。箱庭を造ったのがアイツ等なら、直接ここにこれる道だって作ってるはず。

「それは無理なんすよ！　確かに奴らは違う道から来たみたいっすけど、やっぱりここに至る道は転送に変わりないっす。
自分達にはそれを起動できる手段が無いっす！　スオウ君が奴を半殺し程度に止めておいてくれたら、まだやりようもあったっすけど……」

うう、またもそこに返ってくるわけだ。確かに怒りに任せた暴走だったけどさ……ノウイにまで言われるなんて。

「と、言うか殺すのはやりすぎだ。何があったか知らんが、元老院自らが直接出向いてくれてたんだ。奴らの目的やそこのガキの事を聞くチャンスだった。
それを有無も言わさずに葬り去るとは……お前はもうちょっと考えて行動する奴だと思ってたけどな」

ここでようやく声を出したかと思った鍛冶屋まで、僕を責めるのかよ。確かによくよく考えて見ればそうかも知れない。元老院の目的……それにクリエの事……ミセス・アンダーソンの意識がもう戻らないとしたら、それらを解く足掛かりは奴だったのかも知れない。

「ああもう！　悪かったよ！　僕が全部悪い！　後先考えない事してごめんなさい！」

僕はそう言ってみんなに向けて頭を下げる。いつの間にか水位が足首から太股位まで来てる。こんな短時間でここまで来るなんて……後数分もしたら、この部屋は埋まってしまいそうだ。

「謝って済むなら警察はいらないのよ」
「ちょ、セラちゃんスオウ君は反省してるし、謝ってくれてるんだから……それよりもどうにかしないと全滅だよ。折角クリエちゃんを取り返せたのに、これじゃあまたここまで来ることに成っちゃうかも。ううん確かもう道はないも同然。
ならここで言い争ってる暇はないよ。どうにかして脱出しないと……」

セラの容赦なさに、優しくフォローをくれるシルクちゃん。やっぱり僕の味方はシルクちゃんとテッケンさんだけだな。ってあれ？

「テッケンさんの姿が見えないですけど……まさか溺れ――」

既に太股まで迫ってるって事は、モブリなら頭まで浸かってる筈。だとしたらそれもあり得なくない。とか思ってると「プハァ！」と水の中からテッケンさんが顔を出した。

「うん？　どうしたんだいスオウ君。ハハハ、僕は無酸素で水中活動を十五分維持できるスキルを持ってるからこの程度の水はどうって事はないよ。

あと他にも色々あるしね」

そう言ったテッケンさんはスイスイとカエル泳ぎをしながら周りをクルクルしてる。てか、無酸素で十五分も活動出来るのかこの人。

どれだけスキル豊富なんだよ。水中までちゃんとカバーしてるんだな。流石テッケンさん。頼りになる男の代名詞。

「テッケンさん、そんなに水中で活動出来るのはウンディーネと貴方位です。私達は普通に泳ぐ事で精一杯なんですから、どうにか出来ないんですか？

ここがどこか位、検討付いてますよね？」

シルクちゃんはそう言って、壁際をペタペタと触ってるテッケンさんの答えを待つ。僕達もここがどこか、テッケンさんなら……とか思ってるから口を挟まない。

そもそもここはモブリの国だしね。モブリであるテッケンさんが一番詳しい筈だ。まあ、言いたいこともあったけど、ここはちょっと我慢。僕は普通に泳ぐことも結構ままならない……どうしてだろう？　前は上手くとは言えなくても、泳ぐ事は出来たと思うんだけど……何故か箱庭では溺れたからな。

だから今回もどうなるか……それにクリエを抱えたままってのも

気になる。けど、こいつを放り捨てる選択肢なんてあり得ないからな。
そんな事を考えてる間に水位は腰まで来てた。炎を上げてた機械とかが水で鎮火する所か、次々と爆発していく。そのたびに水に浸かってない所へは黒い煙が充満するんだから、たまったものじゃないな。
まあこれもガムシャラに力を振るった僕のせいなんだろうけど。そしてしきりに壁へ関心を示してたテッケンさんがようやく言葉をくれる。

「ここは……もしかしたら湖の中なのかも知れない」
「湖の中って……サン・ジェルクの街が浮いてる湖の下って事ですか？　でもどうやってそんなの作ってるの？」

そのシルクちゃんの疑問はごもっともだな。だって湖の中って……まあだからこそ転送魔法で出入りするってのはわかるけど。

「僕もあんまり見たことはないけど、そう言うのがあるって噂はミッションをやってると時々出てくるんだ。お偉い人達の秘密の場所って感じだね。
魔法の国だから、その位出来たっておかしくないだろう？　それにこの大量の水……周りが湖だからなら説明が付く。建物の中の一室なら、こんな上下左右から水が入ってくるなんて事はないよ」
「それは……確かにそうかもですね」

テッケンさんの言うことは納得出来る。確かに水の勢いが有りすぎる。まあどういう構造してるのか全然わからないし……この場所だけが湖に沈んでるとは言えないかもだけど、確かに説明は付くかも知れない。
でも解決には成ってない様な……

「で、どうやって脱出すればいいんですか？」

僕は最悪なケースを頭からなるべく追いやりながらそう聞いた。するとテッケンさんが、何も問題は無いという調子でこう言った。

「それは簡単だよスオウ君。ここはどこかの異次元でも亜空間でもない、僕たちが戻るべき場所の真下なだけだ。ここは多分、さっきスオウ君がイクシード3で暴れたせいで、魔法が解け掛かってるんだよ。

その隙間から水が入ってて崩壊寸前。だけど逆にその隙間から外へ出て上を目指せば、直ぐそこはもう街なんだ。僕達はちゃんとクリエ様をこっち側に戻せるんだよ！」

テッケンさんは既に勝った気になってるみたいだけど……それってやっぱり僕の想像した最悪のケースなんだけど……結局泳ぐの前提だし。どうせなら、転送を使う案が欲しかった。だけどそれをテッケンさんに求めるのは酷だよね。

テッケンさんってモブリなのになんか肉体派だし。まあ例え魔法に徳化してたとしても、他人の魔法を使うなんて出来ないのかも知れないけど。

テッケンさんの言葉を聞いて、みんなは「まあ、上に上がるくらいなら」って言ってるから出来そう。一人……というか一匹がやたら「ピーピー」鳴いてるけど、ピクの場合は仕方ないよな。

シルクちゃんがそんなピクを優しく抱きしめて、一緒に泳いで行くようだし、問題は僕だよ。みんな当たり前に泳げる様だけどさ……僕は何のスキルも持ってないんだ。

そして一回溺れかけてるし……これは意地を張ってる場合じゃないよな。誰かを直ぐにアテにする事は、恥ずかしい事かも知れない

けど、自分じゃ危ない事って解ってる事を確実な仲間へと頼る事は間違ってないと思う。

このまま僕が意地を張ってクリエを抱えたまま、水に飛び込んだとしても結果はほぼ見えてるしね。僕は別に危険や無謀に飛び込む事に迷いはしないけど……それにこいつを付き合わせていい訳はない。

だから僕は、一番頼りになる人にクリエを任せる事に。

「テッケンさん、済みませんけどクリエを頼んで良いですか？　僕は泳ぎ関連のスキル持ってないから、水中ではどうなるか……実際解らないんで」

「ああ、そうなのか……そうだね。その方が良いだろう。わかったよスオウ君。必ずクリエ様は僕が地上まで責任を持って送り届けよう」

テッケンさんはそう言うと、快くクリエをその背に乗せてくれた。この人なら安心だよ。小さいけど、誰よりも頼もしいからな。

「ああ、そうだ。スキルが無いのなら、武器や防具はなるべく外して置いた方が良いよ。使い慣れてるだろうから、普段は感じないだろうけど、水中ではその重量が結構掛かるからね」

「はい、それはもう身を持って体験しましたから」

まさにイヤと言うほど……てか一回死地をみたからね。装備は外そうと思ってたよ。取りあえずウインドウを出して、防具やセラ・シルフィングをアイテム欄へ戻す。これでよし。同じ鉄は二度踏まないんだ。

そして僕達は、いよいよ胸のあたりまで来てる位の所で外に出る覚悟を決める。そんな覚悟を多分僕が一番してた筈だけど……どう

やらヨ～イドン的な感じで行くことは出来なくなった。
何故なら、水が部屋全体を埋め尽くすよりも、ボロボロに成った部屋が崩壊する方が早かったからだ。大きな揺れが起きたと思ったら、足下が崩れ去った。

「うっぷ！」

突然頭の先まで水に引き込まれる形に……しかも次々と頭上から天井部分だった筈の壁が落ちてくるものだから危ない危ない。
いっとくけど、上から何かが落ちるのもトラウマだからな。怖くて仕方ない。形その物が崩れ去っていく箱庭を造りだしてた場所。あんな機械に愛着なんて無いはず何だけど……何故か寂しく感じる。
それはあの中にシスターとかが居たから……かな？　それにミセス・アンダーソンはまだ戻って来てないし……あれが無くなろうとしてる所を見ると、もう本当に終わりの様な気がする。
自分自身のこの目で見届けた筈だけど、まだどこかで戻って来てくれるんじゃないかって都合の良いことを思ってた。けど……それはもう……シスターとミセス・アンダーソンの心を捕らえたまま、箱庭の元と成ってたであろう物は暗い湖の底へと消えていく。

するとその時、何かが光った様な……沈み行く機械の少し上の方に何かが有る？　外した装備のおかげで、普通程度には泳げる僕は、上を目指してるテッケンさん達から離れて、下を目指した。
沢山の瓦礫が沈み行く中を縫って行き、見つけたのは何故かイルカのストラップ？　水族館のお土産とかで良くあるクリスタル系のそれが何故か一緒に落ちて行ってた。

（なんでこんな物がここに？　いやＬＲＯに？）

もしかしたら土産物屋とかで売ってるのかな？　誰が買うかは謎

だけど。たまたま誰かが投げ捨てた物が混じったとか？
無駄な労力だった……かとも思ったけど、なんだかわざわざ拾ってまた捨てるのもなんだから、一応それを握ったまま上を目指す。ちょっと息も苦しく成ってきたしね。
上の方はほんのりとした明かりが点在してる。僕はそれを目指して足を動かした。

「プハァ！」

案外かなり深かったから危ない危ない。限界かと思ったよ。てか、本当にテッケンさんの言ったとおりだったな。僕の視線の先には、提灯明かりに照らされたサン・ジェルクの街がある。
ほんのりと見えてた明かりは、湖に浮かべられた灯籠だったみたいだ。リアルじゃ死者をあの世に導く為の物だけど、今回は僕達の道を照らしてくれたみたいだな。
助かった……灯籠が無かったらどっちが上かもわからなかったかも知れないもん。

「あれ？」

僕は周りをキョロキョロする。だって周りに誰もいない。僕が倒したモブリは浮いてるけど、みんなはどこに？　そんなに離れた訳はないと思うんだけど……すると頭上の通路の所から激しい声が聞こえてきた。

「居たぞ！　重犯罪者の一人だ。攻撃許可は既にある。抵抗せずに我らに従え！」

僕は更に周りをキョロキョロする。え～と誰に言ってるんだろう？

「貴様だそこの貴様！！　自分の犯した罪を知らんとは言わせんぞ！　抵抗をすれば命はないと思え！」

随分怒りながらそういうリーダー格のモブリ。どうやらこの人達は僧兵は僧兵でも、元老院お抱えとかじゃない、普通の治安維持の人達みたいだな。

奴らと違って腐った感じがないもん。まあ犯罪者を見る目はしてるけど――って、やっぱり狙われてるのは僕なんだ。随分と手回しが良いじゃないか元老院の爺ども。

通路に展開してるモブリが僕に向けて杖を構えてる。どうやらマジで攻撃許可は出てるらしい。まあ犯罪者に成り下がった僕に、遠慮することなんてないか。

仕立て上げられた犯罪者……ここでこの人達に捕まって元老院の悪行を話した所で、どうなる物でも無いよな。この人達だって内輪な訳だし……それなら握りつぶすのだって簡単だろう。

ようはここでの投降はあり得ない。てかみんなもそう思ったからこそ、姿を見せてないんだろう。僕は取り合えずストラップをポケットに押し込んで、僧兵を見据える。

「そのまま大人しくしてろ。無駄な抵抗は命に関わるからな。我らは本気だ。下手な事は考えるなよ」

僕が考え込んでる間に、笹舟がこっちに迫ってきてた。そこにも僧兵が数人……それが六隻って。どんだけ警戒してるんだ。

遠くの祭り囃しと不釣り合いな事が起きてる。一体どれだけのプレイヤーがこの事に気づいてるのやら。いや、気づいてる訳ないか。

僕はまあ、取りあえずこれだけは聞いてみる事に。

「下手な事ね……そう高圧的に来られると反抗したい年頃だよな。てか、僕の罪状ってなんなの？」

一応それ重要だよ。まあ想像は付くけどね。すると僕を狙ってる部下に魔法の充填をさせながら、リーダー格の奴がこう言った。

「貴様に掛けられた罪状は、重要人物の殺害に特務第一行の誘拐――それとその他諸々だ。どれもこれも神をも恐れぬ悪魔の所行だな」

殺人に誘拐ね……まあ間違っちゃ無いけど、その他諸々って何だよ。無駄に罪状付け足しやがったな。特務ってのはクリエの事だろうけど、僕は不満タラタラだ。

元老院の奴ら、こうなることも想定してたのだろうか？　そう言えばアイツは元老院の中では若い方とか言われてたっけ……元が捨てゴマみたいな奴だったのかも知れない。

てか、どうやってここを切り抜けるか……みんなは上手く逃げたみたいだけど……僕は泳ぎには自信ない。ここで武器を取り出す訳にも行かないしな……そうなったら溺れるだけで抗戦も出来ないよ。

絶対絶命って奴だ。笹舟もどんどん近づいてるし、このままじゃ何も出来ないぞ。一か八かもう一度イクシード3でもやろうかと考えたけど、まだ時間がそんなに経ってない。

するとその時「ピーー！」と言う声が聞こえた。

「何だあれは？」

そんな風にモブリ達は言ってるけど、僕にはわかる。あれはピクだ。きっとシルクちゃんが僕の為にピクを寄越したんだ。

ピクは空中で旋回すると、左の方へ飛んでいく。きっと向こうにみんなが居るんだろう。

（よし！）

僕はピクに従って泳ぎ出す。だけどそれは許される筈もない。

「動くなと言ったはずだ！！」

威嚇の為に一撃が打ち込まれた。大きな水柱が僕の直ぐ近くであがる。

「我らは本気だぞ。逃走を計るのなら、死ぬことを覚悟しろ」

満タンに魔法が充填された杖が僕を狙ってる。確かにあれが火を噴いたら、死を覚悟したほうが良さそうではあるな。だって今は防具だってつけてないし……ただの服だからあれだけの数の魔法を受けたらひとたまりもないだろう。

けど……だからってここでみすみす捕まるのも願い下げだ！　するとそこで閃いた。奴らに効果的な盾が、そこら中に浮いてるじゃないか。僕は近くを漂ってた僧兵を掴み上げてこう言ってやる。

「撃てるものなら撃ってみろよ。そしたらきっとこいつも死ぬぞ」

「なっ……更に犯罪を重ねるとは……神への冒涜も甚だしい……この外道が！！」

外道言われちゃったよ。でもまあ仕方ない……今は言わせておくさ。それに自分でもそう思う。こんな事して……モブリの人がキレるのは当然だろう。

でもキレたからって攻撃をしようとはしなかった。流石まともな奴だ。これが元老院とかだったら、ここで見逃す筈がない。

部下の一人二人位、平気で犠牲にすると思う。大儀の為とか神の為とかのたまってさ。

「何をしてる。刺激しないように追うんだ！　犯人は興奮してるぞ。慎重に行け！」

どうやら攻撃は諦めたけど、追跡は諦めない様だ。当然と言えば当然だけど……けどピクはどんどん暗い湖の方へ向かうから、必然的に僕を追えるのは六隻の笹舟だけに。そしてそれも突然のピクの攻撃に炎上した。

今回のピクはなんだかひと味違うな。頼りになる。追っ手もいなくなったところで、ようやくみんなと合流できた。よくもまあこんな所まで逃げてたものだ。

マジでいつの間に？　だよ。

「ようやく来たわね。たく、シルク様に手間を掛けさせるんじゃ無いわよ」

「しょうがないよセラちゃん。何も伝えれなかったし、無事に合流出来ただけで良かったよ。でしょ？」

シルクちゃんの言葉に、僕をチラチラみながら頷くセラ。まあ今のはセラなりの心配してたって態度だろう。

「で、どうするんですか？　こんな所にいつまでも居るわけにはいかないですよ」

「大丈夫。考えてあるよ。ここまで来て貰ったのは攪乱の為だよ。しばらくの間、彼らには湖の上を捜索して貰おう。僕達はここから一気に、ミラージュコロイドで街へ戻る」

なるほどね。確かにそれなら攪乱にはなりそうだ。いつまでも持つ手じゃないけど、取りあえずこの場は切り抜けられるし、外に出たとでも思ってくれれば万々歳だ。いや、外に出るには直接泳いで

もダメなんだっけ？　周りは滝だしな。
サン・ジェルクの街に転送場所があるんだっけか？
「じゃあ行くっすよ。　ミラージュコロイド展開っす！」
透明な鏡が空中に一直線に展開される。そしてそんな鏡に、僕達は手を繋いで入っていく。

ガヤガヤザワザワとした喧噪が、通りを挟んだ向かい側からしてる。一気に街に降り立ったは良いけど、案外まだ僧兵が多い。クリエ達をどこかで休ませたいけど、これじゃあどうした物か……僕達は顔が割れてるみたいだからな。
どうにかこそこそと移動して宿屋を探す。するとその時だった。
「くふふ、これは掘り出し物の一品だな。だがここから更に昇華させるのが私の役目――――どわっ！！」
「ん？」
その瞬間ガシャアアンと響く音。砕けた盆栽の鉢……そしてそこには一人のモブリが居た。

神の地の反抗者（後書き）

第二百三十話です。
さて、サン・ジェルクでも敵一杯です。てか、もう既にモブリ事態が敵と化したと思っても良いかも知れないです。それだけ元老院という肩書は大きいという事でしょう。
まあ奴等がどこまでの規模で手配してるのかは謎だけど、少なくともサン・ジェルクでは自由が効かなくなってるかも。周りを滝に囲まれたこの街で、それはとても痛い事です。
だけどそこで出会った新たなる登場人物は一体！？
てな訳で、次回は日曜に上げます。ではでは。

幸か不幸かの出会い（前書き）

ぶつかった謎のモブリ。そいつは何故か僕達に着いてくる。何故かどうしてかはわからないけど、取りあえず今の僕達は不幸だよ。

幸か不幸かの出会い

「ぬ……ぬぬぬぬうあああああああああああ！！」

夜空に響きわたる絶叫。それはもう耳を覆いたくなるほどに強烈だった。だけどここで、耳を押さえてる訳にも行かない。

だってこれは不味い。祭りの喧噪で聞き取り辛いだろうけども、これだけの叫びなら向こう側に届いてたっておかしくない。

僕はすぐさま、砕けた盆栽を見て絶叫してるモブリの口を塞ぐことに。

「ふがふが……ふがががあが！！」

メッチャジタバタするモブリ。てかなんかこいつも、僕達と同等に怪しいんだけど……なんで黒いコートにフード何だよ。顔が見えない。するとついには危険を感じたのか、怪しげなモブリの足下に現れる魔法陣。そして宥める間もなくそれは炸裂した。

ボカアアアンと祭りの最中のサン・ジェルクに大きな煙が立ち上る。流石にこれに気付かない奴はいないだろう。頭の周りで回ってるお星様……爆発の衝撃で倒れ伏してる僕達の耳には迫り来る大量の足音が聞こえてた。

これはやばい……さっさとこの場を離れないと。姿を見られるだけでも不味いんだ。まだ僕達は湖にでも居ると思わせておきたい。

ここで見つかったらそれこそ、もう休憩する暇なんて無くなる。

「おい、みんな大丈夫か？」

僕が周りにそう尋ねると、みんなももぞもぞと体を起こしながら答えてくれる。

「なんとか……」
「ええ、こっちも無事よ」

みんなそれなりのダメージを受けてるけど、大事は無いようだ。どうやらここで一番ダメージを受けてるのはやっぱり、あの盆栽落としたモブリっぽい。

「うっう……こんな姿にしてしまってごめんよ。必ず立派な鉢に植え変えてあげるから許しておくれ」

そう言ってそのモブリは、砕けた鉢から本体を取り出してる。なんだかその姿が余りにも惨めというか、可哀想だったから、僕は頭を下げて謝った。攻撃受けたけど、まああれは仕方ないといえる。こっちが不審者過ぎたし、自己防衛だったんだろう。

「あの……すみません。僕がよそ見してたせいで……」

するとその人は訝しげにこちらを向いてこう言った。

「あれ？　君たち意外と頑丈……うん？　今謝ってくれたのかな？」
「ええ、まあその筈ですけど。許せませんか？　でも今は急いでるからこうする事しか……全財産置いていきます！」

なんだかこのモブリの人は、頭に疑問符を浮かべてる様だけど、こっちはあんまり誰かと関わりたくないからお金で解決を図った。
ウインドウを表示させてアイテム欄からカードを取り出す。ＬＲＯはちゃんと独自の硬化と札もあるけど、プレイヤーにはカードが発行されてる。
モンスターを倒した時のお金は自動的にこっちに入るし、買い物

もオークションも全てこれで出来る優れ物。しかもその場で現金を表す事だって出来るのだ！
カードをそのまま渡す訳には行かないからね。だからお金の形に変える為にカードをタップして取り出す金額を入力……

「ちょっと！　早くしなさいよ！」
「わかってるっての！」

セラに急かされたせいでちょっと焦るじゃないか。僕はとりあえず全額を入力。確認画面が出るけど、出た瞬間にＯＫを叩いてやった。
するとカードからニュキニョキとお金が出てくる。するとその時、両サイドから提灯の灯りが見えた。これはヤバい。

「それで勘弁してください！」

僕はそう言うと直ぐ様背中を向けて横の更に狭い路地へと入る。多分あの提灯を下げて走ってきてた連中は僧兵だろう……見られてなきゃいいけど……財布もスッカラカンになったし、これで捕まったら割に合わない。

「こうなったら、外を目指すしかやっぱりないかな？」
「それも仕方ないかも知れないですね」

先頭を走るテッケンさんとシルクちゃんがそんな会話をしてる。テッケンさんはクリエを背負ったままでもスピード落とさないのがスゴいよ。

「スオウ君、後ろから追ってはきてるかい？」

先頭のテッケンさんを見ながら走ってると、そう言われたので後ろを確認。そうだよな。もしも追っ手が居ないのなら、まだここに止まれる可能性はある。
今から街の外をしばらく移動するなんて、クリエやミセス・アンダーソンの体に悪そうじゃないか。危険だとしても、休ませてやりたい所だ。
それに逃げるだけでどうにか成るとも思えないしな。クリエの事も結局全然分かってないし……こんな事なら、箱庭で聞いてるんだった。
ミセス・アンダーソンがこうなった今、後悔しかないよ。
そんな考え事をしながら後ろを見た僕は「ん？」と怪訝な声を出す。

「どうしたの？　やっぱり追っ手が？」

僕の怪訝な声にセラがいち早く反応して、取り合えず武器の暗器針を構える。だけどこれは……え～となんと言えば良いんだろうか？

「まあ取り合えず追っ手って訳じゃないと思う」
「はあ？　どういう事よ」

どういう事かは僕だって聞きたいよ。だって何故か知らないけど、僕達の後ろを着いて来てるのはさっきの盆栽モブリだ。
しかも僕の全財産を透明な泡に包んで浮かして一緒に持ってきてるし……その行動は何故に？　だよ。

「あのあの！　すみません！」

僕がその人を見定めたのがバレたのか、盆栽モブリは必死に自己のアピールをしてるよ。少なかったのかな？　あれで全財産何だけ

ど……それで追ってきてるとしたら質悪すぎだろ。
こうなったら無視を貫き通す……とも思ったけど、気付いたの気付かれてるしな。僕は取り合えずもう一度振り返ってみる。
「あの、これ返しますよ。え～と貴方達は別に私を狙ったんじゃないんですよね？」
「貴方を狙う？　そんな事してどうするんですか？　僕達はただ大声出されるのが不味かっただけです。まあ意味は無かったですけど」
爆発させられたからな。けど、この人はこの人で誇大妄想してたって事か？　自分が狙われたとか思うなんて、よっぽどやましい事でもあるんだろうか？　しかもいきなり魔法をぶっ放すなんて相当だよね。
けどわざわざお金を返しに来てくれる辺り、なんか印象と行動が矛盾するな。すると盆栽モブリの人は、申し訳無さそうに俯いた。
「そうですね……無意味でしたよね。貴方達はきっと訳有り何でしょう。なのに私が追ってきた事で――」
「もういいですよ。こっちも悪かった事に変わりないんだし。お互いが悪かったって事でチャラにしましょう」
なんだか随分落ち込んでるから、僕は気を使ってそう言った。だけどそれでも彼は顔を上げない。そして言葉の続きをポツリと紡ぐ。
「――後ろから僧兵もついて来ちゃって……それでもチャラで良いですか？」
「何やってくれてるんだよアンタは！！」
負債だよ負債。負債を抱え込んだよ今この瞬間！　たかが盆栽が大きく響き過ぎだろ。ついつい大声で怒鳴ってしまったじゃないか

！

盆栽モブリは、腕に抱えた松をぎゅっと抱きしめてプルプルしてる。言い過ぎたか？　だけど確かに後ろの方では、微かに迫る光が見える。マジで引っ張って来ちゃってるんだもんこの人。

「てか何でアンタまで？　そのお金はあげるって言ったでしょ？」

まあ見た目の怪しさから思わず逃げたとも考えられるけどさ。はっきり言って迷惑だよ。すると盆栽モブリは言いにくそうにしてる。顔を隠すフードが取れそうで取れないのももどかしい。

「お金は受け取れません。それは教義に反する事です。それにですね、私も彼らに見つかるのは不味いと言うか……」

どうやらやっぱりやましいことがあるみたいだな。まあ格好だけで十分やましいもんなこの人。だから思わず、僧兵が迫ってるのを知り、僕達の後に付いて来たって事か。

「所でみなさんはどうして……」

何とも話しづらい事を聞いてくる人だ。ある意味図々しいな。てか喋る必要なんて無いよな。この人とは同じ状況でも仲間とかじゃ全然ないんだし……

「それは止めときましょう。お互いにとって言いづらい事の筈ですよ」

「まあ……そうですけど……」

お互いにとってって言葉が効いたな。こうやって追われる者どうし、無闇に教えたく無いことで一杯だよ。僕達も、そしてこの人も。

それに僕達が教えたとしても、そっちがそっちの事情を教えてくれるのかって事だしね。
興味なんて無いけど、聞かれたら聞き返す事に成ることを念頭に置いとけよって事だ。で、お互いに言いたくない事情があるから、これ以上の詮索は無しが暗黙の了解だ。

てか、そろそろ着いてくるのを止めて欲しい。横道に反れるとかして欲しいんだけど。それならある程度、追ってきてる僧兵が分散するかも知れないしな。
するとその時、クリエが僅かに反応したのかどうか分からないけど、テッケンさんが興奮気味にこう言った。

「スオウ君！　クリエ様が目を覚ましつつあるかも知れない。さっき耳元で何かを言ったよ！」
「なっ！　マジですかテッケンさん！？」
「大マジだよ！」

そう言って確信めいた顔をするテッケンさん。この人は嘘なんて言わない。それにこのタイミングで吐く嘘に意味なんて無い。
て、事はクリエはちゃんとこっちに戻ってるって事だ。心と体が繋がるのに時間が掛かってるぽいけど、ちゃんと連れ戻せてたんだよな。託されたのに、自分だけが意識を取り戻すなんて、そんなのイヤだったんだ。
こうなったら一刻も早く落ち着ける所に寝かせてやりたい。そしてちゃんと呼びかけたい。でもそれが一体いつに成るやらの状況なのが歯がゆい所だ。
もう僕達だってバレてるんだろうか？　そうなるとかなり厄介だよな。すると僕達の会話を聞いてた盆栽モブリが確かめる様にこう言った。

「クリエ？　それはクリューエルの事ですか？　と、いう事は貴方達はもしかして……」

しまった……と思った。不用意にクリエの事を口に出すのは不味かったかも知れない。てか、クリエの事を知ってるって事は、この盆栽モブリも聖院の関係者か何かか？　でもクリューエルなんて呼び捨てにしたのはこの人が初めてだな。

そんな信仰心が厚い訳じゃないのかも。それか、それなりの立場とか……いやいや、あり得ないな。

「あはははは、一体の何の事ですか？　僕達は急いでるんで後ろの僧兵達を任せちゃいますね！」

僕は追求を逃れる為に、多少強引でもこの盆栽モブリから逃げようとする。でも何故かこの盆栽モブリは、予想以上にしつこく絡んで来やがる。

「ちょっとそれは困るよ！　私だってあの人達に見つかりたくないし……それに君達は、どこか隠れる宛でもあるのかい？」

「ああもう、アンタがどんなやましい事をしたか知らないけど、お互いを詮索しないって暗黙の了解をしたじゃないか。

放っておいてくれないですか？　こうなった以上、僕達はサン・ジェルクの外に出ますから、きっと方向が違いますよ」

まあ適当にそう言ったけど、こうなったら多分そうなるよな。サン・ジェルクに止まるのはもう危険だ。しょうがないけど、クリエ達には後少し位我慢して貰わないといけないだろう。不本意だけどな。

「うう～ん、外へ？　でもそれこそ難しいと思うけど。だって君達

が僕の思ってる通りの人達なら、元老院は逃がさない。
しかも戻って来てるって一応は知られてるんだよね？」

懲りずにどんどんこっちを探り出してるんだけどこの人。もの凄く迷惑……不可侵条約はどうしたんだよ。なんだかもの凄く興味を惹かれてるみたいだ。
てか外へ出るのが難しいって……それは気になることだ。

「まあ湖の上で見られてるけど……僕達は上手くやってここに居るぞ」
「上手くやったとしても、君達の方へ全兵力を投入してる訳じゃないでしょう。街の中にだって普通に巡回の役目をしてる僧兵は居るし……取り合えずこんなサン・ジェルクみたいな周りから直接出れない様な場所で、どこをまず押さえるか。それはとっても簡単だよね。
取り合えずそこさえ押さえて置けば、外には絶対に出れないって場所がある。そして外に出さない限り、追いつめる事が出来るんだよ」

む……不本意だけど、確かにこの盆栽モブリの言ってることは正しいな。確かにこんな孤島みたいな街なら、真っ先に出口を押さえるのが効果的。僕達がどこへ向かおうと、そこだけは警備の手を増やす事はあっても、薄める訳はないんだ。

「テッケンさん、ヤバいですよ。外に出る道は防がれてると思った方がいいです」
「ああ、まあそれは分かってた事だよ。飛空挺も転送場所も、きっと僧兵が居る事だろう。だけど今なら、無理矢理突破する事がまだ出来るとも思う。
指名手配はされたみたいだけど、でもまだ大々的に追いかけてる

訳じゃないみたいだしね。まだ聖院の兵力の半分もきっと出てないよ。
このくらいで十分と思われてるのか、ただ余り騒ぎにしたくないのかは知らないけど、今ならまだ外にでるチャンスはある」
なるほど……確かに暗い空に飛空挺がまだ飛んでるしな。本気で僕達をここに閉じこめたいんなら、あれの出航を止めたって不思議じゃない。
取り合えず飛空挺も転送場所も押さえとかなくちゃいけない場所だしな。
「それに今ならまだ、湖で僕達を捜索してる奴らも居るだろうし……騒ぎを起こさない為にも、そこにだって普段よりもちょっと多めの警備しか配置してないかも知れない」
「そうですね。もうここに止まるのはどっち道無理ですよね。宿屋でも、踏み込まれないとは限らないし……」
基本宿屋の部屋はプライベートルームに成って他人の侵入は出来ない筈だけど……それがＮＰＣにまで適応されるのかは正直分からない所だ。
向こうは一応大義名分があるし、クエスト対象とかだと特殊な事が適応されてたりするからな。幾ら探しても見つからない様なら、宿屋だって探すことは考えられるよな。
「てな訳で、僕達は多少強引にでも外へ目指すんだけど、アンタは一体どこまで着いてくる気だよ」
僕はそう言って後ろを必死に走る盆栽モブリに声を掛ける。
「う～ん確かに君達が本気で外へ出ようとするのなら、今の兵だけ

では止められないかも知れない……けどやっぱりお勧めは出来ないな」

そう言って頭を左右へフリフリする盆栽モブリ。どういう事だよ一体。ここの方が安全だとでも？

「外に出て、君達は近くの村か町を目指すんだろうけど……言っておこう、そこもノーヴィス領だよ。もしも本当に追跡を逃れたいのなら、ノーヴィスと言う国から出た方が良いって忠告だよ。

まあだけど、案外一つの国から出ると言うのも大変だよ。アルテミナス程じゃないけど、ここも広いからね。それに転送場所は至る所に設置してあるし、それは聖院が管理してる。

サン・ジェルクには五カ所を結ぶ転送陣があるけど、どれを使ったかなんて直ぐに分かる。そしてその先にある村か町には、すぐさま連絡が行くだろうし、追いかけるのだって簡単だ。

ようは、ノーヴィスを出ない限り君達は休む事だって出来ないんだよ。それに外の方が派手に動きやすいしね」

ぬぐ……確かにそうなり得ない事もないかも知れないな。国家権力から逃れるには国外逃亡しか無いって事か。僧兵がここで派手に動かないのは、自分達の街を壊されたく無いからってのもありそうだな。

それなら外で追いつめた方がやりやすくもあるのかも知れない。どこへ行っても敵だらけ……これじゃあクリエやミセス・アンダーソンを休ませるなんて出来ないな。

国境を目指すにしたって、町や村を通らないルートとなると途端に、険しく成ったりするらしいし……でも近づき過ぎたら追っ手がって事になるし……これは気が休まる暇なんて無い。

犯罪って本当リスクしかないな。リアルじゃ絶対にごめんだと思う。

「テッケンさん……みんな……」

僕はどうする？　って意味でみんなの意見も求めるよ。だって……ね。

「僕は例えどこまで行っても追われる事に成っても、サン・ジェルクからは出るべきだと思う。聖院の総本山……ここは危険すぎるよ。それに元老院の力が絶大に振るわれる場所だしね。ミセス・アンダーソンがこうなった今、抑止力がなくなったみたいな物だよ」

「アンダーソン？　アンダーソンもご一緒ですか？」

テッケンさんの言葉に、盆栽モブリが反応する。だけど僕たちは揃って口を噤んだよ。だってこれも、不用意に教える事じゃないと思う。

てな訳で、盆栽モブリを無視して走りながらの話合いは続く。

「僭越ながら私は、ここに居ても良いと思います。サン・ジェルクから出たら、元老院の奴らはそれこそ安心しますよ。

今はある意味、奴らの喉元にも刃を突きつけた状態です。私たちも追いつめられてるけど、逆転の材料はここにある気がします。

それに私たちが尻尾を巻いて逃げるのを期待してるのかと思うと、どうしても反抗したく成ります」

そう言ったセラは目が怖い。まあセラの言い分も分からなくはない。ここに止まって、元老院を蹴落とす材料を見つける訳だ。

そしたら指名手配も無くなるし、とりあえずの危害はクリエに及ぶことも無い。でもそれは難易度高いよな。元老院を落とす事にしても現状は何も手ゴマがない。

向こうは国をバックにしてる……というか、国を食い物にしてる

ような連中だろ。そいつ等と張り合うには余所者の僕らだけじゃどうしたって弱い。
殺して行けば良いって訳じゃないしな。結局意見はまとまりもしない。喧噪から遠い所を走り続けてる僕達。自然と会話は途切れて、息の音と足音だけが周囲に響くだけに。

どうしたらいいのか……どうすればいいのか……何が最善なのかなんて誰にも分からなかった。どれも正しいようで、どれも裏目に出そうでもある。だけど僕たちは選ばなくちゃいけない。
そして絶対に変わらない事は、クリエを守り抜くって事だ。守り抜いてこいつが望んでた事をしてやりたい……だからこそ、元老院は邪魔。だけど今の僕達じゃ奴らを倒せない。
それなら逃げるしかない……のかな。すると沈むような空気の中で、まだ着いてきてた盆栽モブリが手を挙げる。

「みんなどうすればいいか分からないって顔してますね。何が正しかったなんて、きっとこの場合は答えなんて無い。結果を良くするために動くしかない。
だけど私なら、その選択肢にもう一つの可能性を与える事が出来る。どうだい？　乗ってみる気はないかい？」
「可能性？」

その言葉は魅力的に響く。だけどこの怪しいモブリを信用して良いのか？　それが問題だな。そもそも一体どんな手が？
「君達の為にもきっと成るよ。着いて来たまえ、クリューエルを助けたいのならね」

そう言って盆栽モブリはいきなり道を変えた。僕達は立ち止まりその背中を見据える。そしてみんなと顔を見合わせた。

「どれを選んだってマシな事にはきっと成らないんだし、良いんじゃないの？　可能性」
「だな！」

セラの言葉にみんなが頷いて僕も決めたよ。そうだよな、どこだってマシには思えない。あの人の事なんか知らないけど、悪い奴って印象は無い。
罠の時はその時で考える。僕達は彼の後を追うことに。するとどんどん市街の中心へ向かってるような。ドデカいお社と言うか御殿が近づいてないか？

「一応聞くけど、どこに向かってるんだ？」
「勿論、聖院――その場所だ。灯台もと暗しだよ」

マジで大丈夫かメッチャ不安に成った。だけど彼は手慣れた様子で、人のいない秘密の通路っぽい所を進んでいく。そして外のある一角で、これも秘密の転送陣を起動させた。
僕達は偉く豪奢な部屋へと現れる事に。そして彼は不意にこう言う。

「ようこそ、第八十二代教皇ノエイン・バーン・エクスアルドの部屋へ」

僕達は固まるしか出来なかったよ。

幸か不幸かの出会い（後書き）

第二百三十一話です。

てか、ちょっとした操作ミスで一日早く上げてしまいました。なんだか戻る事もできないから、しょうがないからこのままで。本篇の話としては再び登場、シスカ教の教皇様です。これはきっとターニングポイントになるかもですね。てか全然教皇っぽくないけど、どうなんでしょうか？　素なのか演技なのかもまだまだ分からない人で押していきましょう。

次回はクリエの取りあえずの秘密がわかると思います。

てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

神様の落し物（前書き）

目の前の盆栽モブリは教皇だと言う。何アホな事を言ってるんだと思ったけど、この部屋事態がそれを物語ってた。そして彼の口からようやく紡がれるのは、クリエの事。

ずっと知りたかった、聖院がクリエを狙う理由。でもそれは、僕が思ってたよりもずっと大きい事だった。

神様の落し物

「はい？」

耳を疑う宣言。てか、何行ったか良く分からなかったな。それはきっと周りのみんなも同じだろう。僕達の無反応が予想外だったのか、盆栽モブリのその人は、黒い怪しい服を颯爽と脱ぎ去って、もう一度こう言った。

「だ・か・ら、良く聞き賜え。私こそが、世界最大宗派シスカ教の現教皇『ノエイン・バーン・エクスタルド』なのだよ」

「「「……」」」

やっぱり固まる僕ら。教皇ね教皇。その位、僕だって知ってるってての。たしかそう、あれだよあれ。教皇って言うとやっぱりえ～と……

「敵の親玉じゃねーか！！」

結論だな。僕はおもいっきり叫んじゃったよ。

「教皇……様？　本当に？」

人を疑う事を知らなさそうなシルクちゃんまで、首を傾げてるじゃないか。教皇ってマジなのか？　僕達はテッケンさんに視線を送る。

「え～と……一斉に見られても困るかもだよ。教皇が存在してるの

は知られてたけど……今までミッションとかでもその姿が出たことは無かったからね」
「フフン。君達は今、貴重な体験をしているよ」
テッケンさんの言葉の後に、盆栽モブリがしたり顔でそんな事を言う。まあ確かに、貴重な体験ではあるのかも知れないな。でも最近は名前だけ知られてるってのが多かったし、残念だけど今更だ。
「貴方が本当に教皇様だとして……何であんな所で盆栽抱えて走ってたんですか？」
そこが教皇という立場上信じられないんだけど……買いに行かせれる部下なんて一杯居るだろうに。てか、黒いコートの下も別段教皇らしくない。せいぜい宝石が一杯詰まった十字架を首から下げてる程度。部屋の端の方に教皇の服と帽子みたいなのがあるけど、それを着てもこの人が教皇かどうか疑いそうだ。
「それはあれですよ。私は今盆栽にハマってましてね。それに盆栽の目利きも女性と同じ、自ら足を向けないと出会えない美しさがあるのですよ。
ああ、そうだ！　早くこの子を植え変えて上げないと！」
教皇様はそう言って、抱えてた松を植え変える為に奥へ。教皇の部屋と聞いては、下手に物色する事も出来ないから、僕達も一応後に付いて行くことに。
てか、よく考えたらこの部屋って和風なのに土足で良いんだろうか？　まあ何も言われないし、良いんだろうけど……これが教皇様の部屋か。
なんだか和式で豪奢ってあんまりイメージ沸かないけど……これ

がそうなんだろうと思うよ。屏風とかあるし、部屋の中心部分が何故か一段高くなって畳みに成ってる。そこには金の囲炉裏が備え付けられてるし、後は端っこの方に品良く花が一杯に飾ってある。

花瓶じゃなく、生け花ね。後は水彩画っぽい縦軸とかかな。そう言えば盆栽が一つも無いけどハマってるんじゃ無いのか？　って感じだ。

僕達は教皇様の後に続いて、隣の部屋へ。だけど襖を開けると、その部屋が前者の部屋と随分変わっててびっくりだ。

「うわぁ……」

思わずそう口に出しちゃったよ。だって何だよこの部屋。てか、何個盆栽を育てる気なんだこの人って位、鉢がひしめく様においてある。右側に大量の鉢、左側には土かなあれは？　それも山積……なんか既に土臭い様な気さえするな。

何この人？　隠居してんのか？　そう思わざる得ないんだけど……鉢に松を植えていく作業をしてる姿とか、どっかの老人だよ。

本当に教皇か疑わしく成ってくる（いや、それはもとからか）。なんて言うかイメージがさ……まあ教皇のイメージなんてローマ教皇位しかないんだけど……

「うん、よし！　完璧だ」

そう言って泥だけの手で顔を拭うもんだから、泥の線が顔に付いてしまってる教皇。おいおい威厳もクソもあったものじゃないな。

「取り合えず、ここで待っておいておくれ」

そう盆栽に話しかける教皇様。おいおい危ないよこの人。そしてようやくこちら側を向く。

「すまないね、お待たせしてしてしまって。お茶も出さずにお客様を放っておくなんて、とんだ失態だよ」

泥の付いた顔で軽く笑う教皇様。別にそんな事は……てか、教皇自らがお茶を入れる気か？

なんかハードルが高いぞ。僕は一応遠慮気味こう言う。

「えっと、別に気にしなく良いですよ。取り合えずクリエや、ミセス・アンダーソンは畳の方で横にしてますけど……勝手な事しちゃいましたか？」

「いやいや、良いんですよ別に。それに直ぐに布団も用意しましょう。畳で寝かせるよりも良いだろうし……私達もゆっくりと話し合う必要があるでしょう？」

話し合いか……確かにそれは望む所だ。この人が本当に教皇なら、聞きたいことが山ほどある。

僕達は元の部屋へ戻って囲炉裏を囲んだ。流石に畳へは土足で上がらなかったよ。靴をみんな脱いで、それぞれの態勢で囲炉裏の周りに腰掛ける。

教皇様はお茶だけじゃなく座布団も用意してくれた。そして最初にそこに寝かせてた二人は、寝室の方へ移動させた。勿論布団もやっぱり教皇様が出してくれたよ。

マジでなんか庶民的……というか、身の回りを世話してくれる人が一人くらい居ないのだろうか？　って感じだ。

まあだけどそんな事に気を回しても、本人がそれで楽しそうにやってるなら問題なんてないんだよな。

だから本題へと入ろう。ついでに座った位置は、僕の対面に教皇、その両サイドは余裕を持って開けておいて、僕の左からシルクちゃんとセラ、そして右にはテッケンさんと鍛冶屋ノウイが囲炉裏を囲んでる。

まずはみんなでお茶を一啜り……なんだか改まると教皇って感じがプレッシャーにもなるな。するとまず、教皇様自ら声を出した。

「そうだね、まずはお礼と謝罪を。ミセス・アンダーソンを元老院から守ってくれてありがとう。それと、我らの数々の比例を詫びよう。

すまない……まだまだ迷惑掛けるだろうけど、ここでひとまず謝っておきます」

そう言って教皇様は頭を下げる。シスカ教の実質トップがこんなに簡単に頭を下げるとはな。なんだか僕的には複雑な気持ちだ。

この人は敵って訳じゃなさそうだ……だけど、それは元老院側と考えが違うってだけなんだよな。つまりは味方でもない。

「良いですよ……迷惑なんて思ってない。少なくとも僕は、勝手に首を突っ込んだんですし、それに約束してますから。クリエを願う場所へ連れていくって」

「願う場所ですか……」

そう言って更にお茶をもう一啜りする教皇様。

「そう言えば、貴方もクリエをずっと箱庭に閉じこめておこうとしてたんですっけ？　アンダーソンに聞きましたよ。それは聖院の総意だったって。

元老院程じゃないにしても……貴方も結局は敵なんですか？」

「ちょっ！　スオウ君いきなり何を！」

テッケンさんが跳ね上がるようにそう言った。まあテッケンさんだけじゃなかったみたいだけど、僕は目の前の教皇を見据えてこう言った。

「別に良いじゃないですか。どのみち指名手配犯なんだし、気遣って言いたい事も聞きたいことも聞けないんじゃ意味ないです。それに聖院の総意を決めるお方の言葉を拝聴したいじゃないですか」

結構無礼な事を言ったかな。でもこれで捕まったり衛兵を呼ばれたりするとはあんまり思わなかった。だってそうしたら、この人もちょっとは不味いのかな～ってね。

いやまあ、どうにだって出来るのかもしれないけど……でもここしかない。ミセス・アンダーソンがああなった今、真実を知るにはここしかさ。

「総意……ですか。残念ながら私一人の考えが聖院を動かす訳ではありませんよ。私はまだ若く、未熟ですからね。お飾りみたいな物です。

実質、聖院を動かしてるのは元老院の十八人。私は民衆に向けての体の良い看板ですよ」

「だけど貴方は教皇だ。その言葉が一切合切通らない訳ない。貴方はどう思ってるんですか？　クリエの事、どうしたいんですか？」

自分を卑下してる教皇に僕は言葉で攻める。何も出来ないなんて、そんな事言わせるか。信じてたんじゃないのかよ。ミセス・アンダーソンはそんなアンタの側に着いてた筈だろ。

「確かに何も出来ない……訳はないでしょう。私を慕ってくれる人

達も聖院内には居ますね。ミセス・アンダーソンがその最たる人でした。
クリューエルの事は……そうですね。正直に言えば、外に出したくはありません。こちらはこちらで箱庭の代替品を用意してた訳ですし。ミセス・アンダーソンの犠牲を無駄にしないためにもそれで――」
「それは聞き入れられない相談だ」
僕は間髪入れずにそう言った。だけどこの人が本気を出して周りに命じれば、防ぐ事なんか出来ないのかも知れないな。けどそんな事はどうやらしないみたいだ。
「でしょうね。だけどやっぱり聖院としては、この世界の信徒に入らぬ不安は与えたくは無いのですけどね」
入らぬ不安か……もうそろそろ、本当に知っておかないといけない事だよな。クリエの事……クリエの秘密。本人も知らなかったけど、僕は知っておきたい。
もう無関係じゃ入られないし……ここまでやったんなら、その権利位あるだろう。だから僕は思いを込めて、口を動かした。
「貴方達聖院が隠したがってるクリエの秘密……それって一体何なんですか？」
僕の言葉に場が静まる様な感じがした。ゴクッと誰かが喉を鳴らす。みんなもその答えを知りたがってるって事だろう。僕は真っ直ぐに教皇を見据えるよ。
そんな僕の視線を真っ向から受け止めて、彼は臆さずに口を開く。
「君達には確かに知る権利があるでしょう。クリューエルは……あの子は、二人の神の力を宿した子なんですよ」

「神の力？」

え？　あれ？　どういう事だっけ？　僕だけじゃなくテッケンさんやシルクちゃん、周りのみんなもざわめいてるけど、まだ要領が掴めてない。

「神の力と言うか、二人の神の血というか……だからこそあの子は二人の神の特性を併せ持っているんでしょう」

なんだか教皇の話にビックリし過ぎて、ちょっと着いてけてないぞ。ええっとそれってつまりは――

「クリエは神様の子供って訳？」

「子供と言うよりは子孫と考えるべきでしょうね。創世歴前に生まれて今に至るわけには無いですから」

まあ確かに。そしたら有に何百歳か何千歳は越えてる事に成っちゃうしな。子孫か……でもやっぱり簡単に鵜呑み出来ないよな。

だって二人の神ってシスカとテトラだよな……そしたら絶対におかしい事がある。それはテトラはモブリじゃ無かったって事。

確かシスカだってモブリじゃないはず。それなのにクリエが子孫って、突然変異でも起きないと無理だよな。

「子孫と言っても彼女の親はどこにも確認されてませんよ。彼女を残して逝ってしまったのか、そもそも親なんていないのか……」

「親がいないって、それこそあり得ないだろ。クリエをなんだと思ってるんだアンタ達は？」

僕がそう言うと、教皇様はクリエが寝てる寝室の方へ目をやった。釣られて僕もそちら側に視線を動かすけど、次の瞬間には再びお茶を啜って喉を潤してやがる。

「特殊な存在と言う者はこの世に幾つか存在します。クリューエルもその一つなのかも知れない。だけど神の力を持っている事は事実ですから、聖院は神の子孫と考えてる訳ですよ。まあその事実がこちらにとっても不味いんですが」

教皇は最後部分で口を濁らした。特殊な存在……それって一体何なんだろう？　まるで生き物じゃないみたいな……神と言う力の塊がクリエみたいな……なんかそんな感じがしてちょっと不愉快だな。

でも、なにかが頭に引っかかる。

「ちょっと待てよ。どうしてクリエにそんな力があるってわかる？　確かにあいつは世界中のいろんな物と話せたりするみたいだけど、僕が知ってる力なんてそんな物だ。

あいつが神の力なんて大層な物を振るった所なんか見たこと無い」

そうなんだ。なんで神の力があるなんて断言出来る？　アイツはちょっと変わってるけど、きっと同年代の子供とそんなに変わらないと思う。

僕が見た中ではだけどさ。その程度だからこそ、話を聞いても実感が沸かない。みんなだってそうだと思う。

「そうですね。クリエちゃんと神様の力ってなんだか実感がわかないです。どれだけ自分が危険に成っても、そんな力は出ませんでしたし……」

「確かに普段は普通の子でしょう。だけど過去にあるんですよ。クリューエルがその力を発揮させた事が。それに印もありますしね」

シルクちゃんの言葉に続けて教皇様がそう紡ぐ。印？　それに力を発揮させたって……一体どういう事なんだろう。

「一体何が、クリエが何したって言うんですか？」
聖院はつまりはその出来事と、印とやらのせいでクリエを危険視してるって事だろう。教皇様は今度は、僕達の中で唯一のモブリであるテッケンさんに視線を向けてこう言った。
「貴方は同族だから知っていますかね？　ノーヴィス領の南端……そこに『除夜の森』と呼ばれる森があることを？」
そんな質問を受けてテッケンさんは首を縦に振る。
「勿論です。除夜の森は神聖な禊ぎに使われる古代の森と伺ってます。あそこは創世の時代からの産物とか……」
「ええ、まさしくその通りです。あそこの木々はどれもこれも樹齢が桁違いの物ばかり。創世の時代から生きてきた力強さをその身に宿しています。
聖院があの子に出会ったのはその森なんですよ」
二人はわかるみたいだけど、僕達はイメージ出来ないな。いや、他のみんなは一回位そこに行ったことあるんだろうけど、僕は皆無だから困る。するとそう思ってたのが伝わったのか、それともこういうイベントなのか知らないけど、教皇様は囲炉裏をどこからともなく表した杖で小突いた。
すると金の囲炉裏に光の筋が走って、天井から吊されてる棒を駆け上がって天井に染み渡る。すると何やら天井でガチャガチャ成ってるような……上を見てると一回消えた光が再び、柱を通って金の棒を伝い、囲炉裏へと帰ってきた。
そしてその瞬間、金の囲炉裏の周辺に透明な輪が現れる。

「これは？」
「たまたま記録されてた映像ですよ。百聞は一見にしかずと言いますからね」

なんか普通にそう言ったけど……この映像も実際機密情報とかじゃ無いのだろうか。随分あっさり持って来たな。まあ僕にはありがたいけどさ。

古いからなのか、それとも何か別の原因があるのかはわからないけど、なかなか映像が表示されない。ガガガガと言う砂嵐が続いて、少しづつ声が漏れ聞こえてくる。そしてようやく映し出された映像は、結構荒い物だった。

まあ映像があるだけでもありがたいし、文句は言うまいよ。映像の中は確かに森っぽい。でも木がやたらにでかいな。想像してたのの十倍は幹が太いよ。周りがモブリだらけだからかも知れないけど、滅茶苦茶デカく見える。木だけじゃないな、草とかもト〇ロの傘に成りそうな程大きい。

そして奥の一際太い木の傍で、何かをこの映像のモブリ達はやってるらしいな。

「これはある禊ぎの儀式なんですよ。この木々の中でも一際大きい幹をしてるのが奥に見えるでしょう。しめ縄が巻かれているそれが、かつての神木です」
「かつて？」

教皇の意味深めいた発言に首を傾げる僕。すると横からセラがこんな事を言った。

「ここって除夜の森なんですよね？　結構前に一度だけ行った事あるけど……神木なんてあったっけ？　まあちょっとしたクエストのアイテム取りの為だったから、隅々まで見たわけじゃないけど、確

かどこかで行けなくなってた様な？」

行けなく成ってたってどういう事かわからないんだけど。でもなんとなく想像は出来るかも。これから見られるであろうクリエに宿る神の力……それにかつてと呼ばれた神木。さらには行けなくなってる場所がある。そんな情報が想起させる出来事は、大抵良い物じゃない。

画面の中では和服の袖を伸ばした様な服を着て、踊り回ってるモブリが多数見える。そしてその先には、祈りを捧げる一人のモブリが居る。巫女か何かの役目の人だろうな。頭に盛った様な被り物が特徴的な衣装を着てる。

そして更にその周りには杖を持った今と変わらない格好をした僧兵の人たち。

なんだか随分と行業とした禊ぎの議だ。てか何に対して禊ぎってんだろう。やっぱり神様とかなのかな？　そんな事を思ってると、画面には白い光が現れだした。

必死の祈りが届いてる賜なのかなこれも？　するとそんな中、巫女の役目のモブリが立ち上がって、前方に捧げてた杖を取る。そしてその杖を掲げると、杖の先の球体……その周りを囲んでるギザギザした部分が中へ入ったり出たりを繰り返す。そしてそこには現れ出した白い光が集まっていく。

するとその時、一緒に画面を見てるテッケンさんが何かに気付いた様にこう言った。

「あれ？　あの杖ってもしかして……」

杖？　杖がどうかしたのかな？　それよりも僕は、いつクリエが登場するのか目を光らせてるんでだけど。なかなか現れないじゃないか。

そうこうしてるうちに禊ぎは進んでいく。杖に集まった光が何か

の形を成していく様にも見えるけど……曖昧過ぎて良くわからないな。
しかもなんだか次第に白い光が黒く成ってく様な……それに伴って周りの人たちの反応が明らかにやばそうに成ってる。
映像からも伝わる動揺する空気。杖を掲げてる巫女のモブリ自体も困惑してる。白い光が汚れを帯びていく様に黒へと変わると、その姿は何ともいえない悪魔の様な様相に成った。悪魔と言うか、化け物かな。曖昧な黒い光の化け物。
そして画面は静まりかえる。その巫女が丸飲みされたから……きっとその場に居た誰もが思考停止したんだろう。ここに居たらきっと僕だって止まったよ。
だって何の躊躇も躊躇いも無く、バクリと行きやがった。きっと巫女さんは飲み込まれる瞬間まで、それを理解なんてしてなかっただろう。
実際に悲鳴なんて聞こえなかった。いや、声に成らない声は上げてた表情だったけど……声まで出力出来なかったみたいだったな。
てか既に、画面はとってもやばい事に。グロテスク映像に成ってるぞ。

「おい、何なんだこれ？　何の儀式やってたんだよ？」

何見せてくれてるんだって位の映像だ。巫女さんを丸飲みにした化け物は、自身を形作った杖を中へ取り込み、周りに居たモブリを次々と食って言ってる。
それに僧兵が応戦してるけど、敵はかなり強い様だ。既に数十人は餌食に成ったぞ。映像はすっかり乱れまくってる。
「これは酷い惨状ですね……ですが今は流してください。そろそろですから。画像が乱れてますから、しっかり目を凝らしててくださ

いね」
「流してって……」
流せる物ならこの惨状の映像は流したいよ。でも見とかなくちゃ行けないのなら、そんな事出来なくて……シルクちゃんなんて指の隙間から辛うじて覗き込んでる形だし……こうなったら早くその場面に！
まだか……まだなのかクリエ！
断末魔の叫びが響きわたってる。巨木の幹や地面の草には飛び散った血がベッタリと付いては流れてる。てか誰がこの映像を撮ったかわからないけど、さっきからまともに写ってないな。
ありがたいのかそうじゃないのか微妙だけど、上や下や左右に揺れたりの中で、不意に見覚えるのある姿が一瞬見えた様な気がした。
だけど本当に一瞬だった。僕以外に誰か気付いただろうか？　すると画面からその一瞬を裏付ける声が聞こえる。
「おい、子供が居るぞ！」
「なんでこんな所に子供が！？　くっそ！」
そんな声を受けてか、画面がそこをくり抜くように捉える。そこには震えてる小さなモブリの姿が一つ。こんな深い森の中には不釣り合いな薄手の肌着一枚を血で汚てる。
怪我してる訳じゃないだろう。きっとあれは食われた人達の血……声を出した僧兵はクリエへと向かって走り出してる。
けど震えてるクリエの背中がなんだか光ってる様な？　丸まってる背中には二つの紋様の様な物が……
「来るよ。神の裁きが」

画面を見つめる教皇がそんな言葉を紡いだ瞬間、二つの紋様からそれぞれ違う翼が生えた。白と黒の紋様を拡張した翼。それを危険視したのか化け物もクリエへと迫る。

だけどクリエの叫びが上がると同時に、周囲に走った強烈な閃光が全てを飲み込んだ。いや消し飛ばしたのか？　画面も全て光で覆われて、そして映像は終わってた。

「生きてたのは彼女だけ、そして残ったのはあの杖だけだったよ」

神様の落し物（後書き）

第二百三十二話です。
ようやくクリエの存在まで行けましたね。後はここから神までを繋げて行くわけです。道はきっと間違ってないけど、正解がどこにあるかもわからないのは相変わらず。
それにクリエの存在も核心の部分はまだなんで……これからは反撃に移れると良いんですけどね。
てな訳で、次回は木曜日に上げます。ではでは。

偉き人、遠き子（前書き）

話を聞いて、それから僕達は一時解散。まあ部屋から出られる事もないけど、なかなか大きい部屋だから手狭じゃない。僕達はある事をやる事に決めた。

そして早々にやるべきを終えた僕は、窓辺で黄昏る。なんかそんな気分だったんだ。

そしてそんな所に、彼が来た。教皇様だ。

偉き人、遠き子

部屋の窓から外を見る。すると市街の方から聞こえてくる祭り噺が、今はもう聞こえない事に気付いた。どうやらイベントは終わっちゃったみたいだな。

結局は良く見れなかったまま終わってしまったな。結構綺麗だったのに。だけど流れて行った灯籠の明かりは遠くの方でうっすら見える。

それがなんだか祭りのもの悲しさを語ってるような……街の明かりも、祭りが終わったって結局は提灯だから、なんだか不思議に見える。暖かい色してるよ提灯。

ほんのりとしてると言うかさ……

「何を黄昏てるんだい？」

そんな言葉と共にお茶を持って現れたのは小さなモブリ――の中でも偉い偉い教皇様だ。そんな教皇様にお茶を持って来させるなんて……僕も大概恐れ多いことやってるよ。

まあ僕が頼んだ訳じゃないけど、僕はお盆からお茶を受け取り、一口すする。

「黄昏てるって訳じゃないけど、なんだか周りの灯りがもの悲しく見えますよ。あの映像もそうだったけど……ミセス・アンダーソンや、シスターの事も」

「確かに……世界は未だ悲しみに満ち溢れてる」

悲しみか……今までＬＲＯの歴史とかにはあんまり興味が無かったけど、ちゃんと息づいてるんだよな。僕たちプレイヤーは結局ど

こまで行っても余所物で、それはやっぱりゲームとしてここに降り立ってるから何だろう。
ＬＲＯをゲームとして楽しむ上では、この世界の成り立ちとかの歴史は、味付け程度にしか成らないもん。別にそんなの無くてもモンスターと戦うだろうし、最強とかを目指したり、自分がやりたい事をやれる。
僕達の中では結局ここの歴史なんて、刻まれてないからね。設定でしか無かったもの……その筈なんだよ。本当にあの映像の様な事が起こった訳じゃない。だけどここで生きるＮＰＣにとってそれは本当で、真実で……ちゃんと起こったこと。

僕達はエゴなのかな……自分達が見てきた物だけを歴史としたいのか……そんなわけない。ＬＲＯにはＬＲＯの歴史があって、僕達は今まさに、そんな歴史の一ページを刻む冒険をしてるんだと思う。
何回だって、そして誰でもが出来る物もあるけど……これはきっと違うよな。僕の右腕を浸食してる呪い。クリエの背中に刻まれてる証……これは誰もが気軽に首を突っ込める物でも無いだろう。
よくよく考えたらおかしなクエストだよな。誰もが出来ないのなら、これは一回切りのクエストなのかな？　まあクエストの体裁を取ってるだけで、クエスト欄に実行中として表示されもしないんだけどね。
誰の為の何の為の出来事を僕達は刻んでるのか……普通のクエストやミッションの様に、これも結末は決まってるのかな？
まあ既に普通じゃないし、先を考えるのも頭痛く成るだけなんだけど……これからって奴を考えない訳には行かない。命だって掛かってるしね。

「だけど救いはありますよ」

教皇様は開けはなった窓から吹いてくる風にあたりながらそう紡

いだ。救いね……

「それはやっぱり信仰って奴ですか？　信じる者は救われるとか」
「そう言いたいけど、違います。救いは誰しもの心にあるものですよ。諦めなかったり、進み続ける心……一人が歩けばみんなも歩く。止まらなければ誰かの救いに誰もが成れる……そう思いませんか？
信仰なんてのは、そんな心を少し支えるだけの物で良いんですよ」

なんだか……初めてこの人が立派に見えた瞬間かも知れない。そんな事を言ってる時のこの人の顔は、今までの教皇らしからぬ物とはちょっと違った印象だったよ。
強いんだけど、怖いとかは全然ない。強く優しく包み込む包容感と言うか……それが教皇に必要なものなのかも知れないな。
国の指導者と違って、誰かを導いてる訳じゃない……いや、信者を導いてる存在の筈だけど、でもそれって今日明日が突然変わる物じゃない。
それに教えは基本変えないだろうしな、法律とかと違って。だからこの人がやってる事は、指導じゃなく教義なんだろう。聞いてもらえればそれで言い、後はその人の受け取り方次第。
僕は風に揺れるお茶の表面を見る。するとそこには自分が居るよ。リアルと変わらない姿をした自分が写ってる。

「誰かの救いに誰もが成れる……か、そうであったらいいいなとは思いますよ」
「そうであれるよ。だって君は救おうとしてるだろう。過酷な運命を背負った小さな命を。君が信仰という教義を必要としないのは、自分で道を決めれる強さと、進む強さをきっと持ってるからだね。
普通は何かに支えて貰わないと、見えない最初の一歩は踏み出せない物だよ。生きてると何気無いことで挫けそうになるからね」

生きてるね……確かにこの人も生きてるよな。ＮＰＣの枠を越えた奴等が最近出て来すぎ。てか、僕はそんな大層な人間じゃないけどね。

僕だって挫けるし躓くし……自分一人でここまで歩いて来ちゃいない。信仰なんて無くても、僕には頼りに出来る仲間が居ただけだ。そして今ここに入れるのも、二人の犠牲のおかげ……強くなんか無い。僕が弱いから、救えない物が増えていく。

「そんな顔しなくても良いんですよ。誰もを救うなんて、土台無理な話です。それでも救おうと思える事に、私は意味があると思います。だからそう思って傷ついてるのなら、それだけで十分ですよ。シスターも、アンダーソンもきっと」

最大宗派の教皇さまが無理だとはっきり言うのはどうかと思うけど……頭ではそんな事、わかってるよ。誰もを救いたいなんて、ある意味それもエゴだよ。

それにちょっと気付いたかも知れない。僕は本当は誰を救いたかったのか。真っ先に来るのはクリエだけどさ、同率で自分が居るよ。きっとこの道の先には、この呪いを解く鍵があると思ってやって来たから当然言えば当然だけど、自分主体に考えたら、それって二人を生け贄にしたも同然じゃないか。

都合が言い様に考えてただけ……それに気付いた。

「僕はやっぱり……そんな立派な考えは持ってないみたいです」

「そんなに自分を卑下する事はないと思いますけど……」

教皇様はそんな風に言ってくれるけど、別に卑下してるだけじゃない。生け贄でも犠牲でも無駄になんてしないさ。思いは受け取ったつもりだし……クリエは助ける。それは絶対だ。

「まあ立派で居られなくても、みっとも無くても、もう引くことなんか出来ないですけどね。それは相手が元老院でも貴方達でも同じですよ」
「ノーヴィスと言う国を敵に回しても構わないと？」
「もう既にそんな状況なんで、それも今更ですよ。それに貴方はクリエはやっぱり箱庭に閉じこめておいた方がいい派でしょ？」

それならさ、結局味方とかそんなんじゃないだよ。実際ミセス・アンダーソンとだって何回か戦ってるし、箱庭では利害と目的が一致しただけだ。
まあでも、敵って訳でも無かった訳だから、こんな面倒な思いになってるんだよね。最後に立ち会うって重荷を背負う事なのかも知れないよな……その人が生きた思い、その人がやりたかった事。
見てしまったら無碍になんて出来ない。

「はは、まあそうだけど……ずっと隠すのはよくよく考えたらもう難しいかも知れないね。元老院が狙ってるのなら、いずれそこもバレるだろう。
今までは聖院全体で隠してた訳だからね。内側から探されたらどんな場所でもいずれは見つかるだろう。それを考えると、君達は丁度良いのかも知れない」
「丁度良い？」

丁度良いってのもなんだかあんまりな言い方な感じじゃないか。まあ本格的に協力してくれるんなら、教皇以上に都合の良い奴はいないけど。

「あの子、クリューエルはどこかに行きたがってるって聞いています。今回抜け出したのもそのため……ならどこか遠くに行って貰うのも悪くないと思いましてね。

例えばそう……月へとか？」
「――っつ！　あんたどうしてそれを？」
それは誰にも言ってない筈だけど……クリエから聞いたのか？
でもクリエを囲んでたのは元老院だったよな……だけどその元老院だってそんな事は口にしてなかった。
まあもしかしたら知ってるのかもだけど、それを後ほかに知ってたのはシスター位。
なんだかやっぱり教皇を名乗るだけはあるって事か。
「別に私は教皇ですから、大抵の事は知ってますよ。元老院が何をしようとしてるかはまだ掴んでないですが、存在が許せないからといって、どう利用しても良いわけはない。
あんな小さい子を……それは常識でしょう」
「常識を語る割には、クリエを箱庭へ閉じこめるの良いんですか？
あれだって十分常識に反してますよ」
僕のそんな指摘に苦笑いを漏らす教皇。
「それはそうですね。私達大人の都合をあの子に押しつけてるだけですから。でもこれでもあの子には楽しく生きれる様に配慮してたんですけど……それじゃあ満足は出来ない様ですね」
「当然だ。元老院と同じ事を言ってるよ教皇様。辛くたって遠くったって、クリエはきっと諦めない。そしてもしも諦める日が来たら、それはきっと大人の責任だよ。
夢を見れない世界に満足なんて誰がする？　そんなのは無難に生きて、無難に生きる事を選んだ大人だけだろ」
「手厳しいね。無難に生きる事も難しい物なんだけど……世界の八割はそんな人で溢れてるよ」

僕の子供っぽい言葉に、大人な言葉を返す教皇様。だけどやっぱり教皇にそれを言ってほしくない。てか、自分より小さくて愛らしい姿してるから、なんだかな～って感じだよ。

「でもそれでも……子供のうちは、世界は夢や希望でいっぱいだって事で良い。あいつにはきっとそんな夢みたいな物しかないんだよ。邪神と女神の力を併せ持ってるとかどうとか知らないけど、アイツはアンタ達の神様じゃないんだ。すがっていい相手でも、利用していい奴でもない」

どんな力を持っていても……僕が見て言葉を交わしたクリエはやっぱりただの子供。自分のやりたい事をガムシャラに目指して、夢をキラキラした瞳で語る……そんな普通の子だ。

「夢や希望に満ちた世界でいい……ですか。確かに神経質に成りすぎてたのかも知れないですね。あの子はあれから一度も強大な力は使ってないですし、もしかしたら普通に、ただの子供としても生きられたかも知れない」

「生きられたんじゃない……生きられる、じゃないのかよ。まだ何も終わってなんかないんだからさ。クリエもアンタ達もまだ生きてるのなら、今からだって取り返せる筈だろ。

クリエを神の遺産みたいな目で見ないで、ちゃんと見てやれよ。クリエ自身をだ。それは……シスカ教のトップである、アンタの責任だと僕は思う」

揺れるお茶に立つ一つの茶柱。窓から流れる優しい風。周りが滝なだけあって、マイナスイオン一杯そうな風だよ。雲の切れ間から覗くちょっと欠けた月は黄金色に輝いて、眼下の世界を心許なく照らしてる。

どう足掻いても太陽には勝てないけど、月は月で良い仕事をして

るはず。どっちかじゃなく、どっちも大事。世界だって、誰かじゃなく、誰もがきっと特別であれる筈。
生きてここに居ることも、生きてなくてもここに存在してる事も、やっぱり特別な事だよ。
僕の言葉を受け取った教皇は、天の高い位置にある月を見る。そしてポツリとこう言った。

「責任ですか。これ以上あまり背負いたく無いものですけど……まあクリューエルは軽そうですよね」
「アイツは確かにちっちゃいけど、背負うっておんぶすれば良いものじゃないぞ」

何？　今のは教皇なりの冗談か何かだよな。

「承知してますよ。確かに本当なら、私が出るべき事だった筈。背負うという事は、その人の全部を抱え込む事ですから、やっぱり何かと理由を付けて逃げてた私の責任ですね。
大変な事をやるのが偉い人達の役目だと言うのに、いつしかその立場に酔ってしがみついて、大儀の意味を取り違えた人達が多く成りすぎたのか知れない。
元老院の年寄りも……そして私も」

なんだか寂しそうにそう呟いた教皇様。権力に酔うね。仕方ないと言えば仕方無いのかも知れないけど……誰もがそんなわけないって信じたい事でもある。でも人なんて大抵調子良い生き物だから、先生とか様付けとかされて崇められると、ついつい調子に乗って勘違いしてしまう。
どこでだってそれも変わらないな。リアルにだっているよな。特に政治家とか……大抵腐ってる奴等だ。ある意味元老院だってそんな立場だろうし、やっぱりって感じだな。

でも、この目の前の小さな教皇がそうだとはあんまり思えない。護衛だっていないし、身の回りの世話をしてくれる侍女だっていない。
お茶は自分で入れて、布団だって運んでくれた。それは権力に酔った奴はしないだろう。随分庶民染みてる教皇だよ。
「今からでも遅くないですよ。貴方が変えれば良い。それが出来るでしょう貴方なら。なんたって教皇なんだから」
「教皇なんて見せ物小屋の珍獣と同じような物ですよ。元老院にとってはね。私は体が良いから担ぎ上げられた虚像なんですよ」
吐き捨てられた様な言葉が、夜の空に放たれる。なんだかこの人は……生きるって事をしてない様に思う。それがなんだか腹立たしくて、僕は思わず頭を鷲掴みにして強引にこちらを向かせた。
「ふざけるな！　虚像か実像かなんか知った事じゃない。シスカ教の信徒は誰の言葉を聞いてるんだ？　誰の言葉を待ってるんだ？　それはアンタだろ！　元老院じゃない！　アンタは間違いなく、教皇なんだ。ノエイン・バーン・エクスタルドをもっと誇れよ。アンタはさっきこれ以上背負うのが嫌とか何とか言ってたけど、実はまだ何も背負ってなんかないんじゃないか？
世界中の信徒と、繋がれて来た歴史を背負ってる奴が、珍獣と同じなんて言うわけない」
僕の言葉に、教皇の瞳孔が揺れてた。てか、こんな事言って打ち首もんだよ。だけどこの人の考え方は……この小さなモブリが変われば、シスカ教はもっと変わるんじゃないかと思ったんだ。
元老院が教皇よりも幅を利かせるってのもおかしいしね。
「私は……」

震える様な声を出すノエイン。だけど何かを紡ごうとして、そのまま俯いた。なんだか……やっぱり教皇っぽくないよな。
考え方とか、行動とかじゃなく……雰囲気がそうなのかも。若いからって言えばそれまでだけど……この人の周りには威厳とかがない。
それはやっぱり本当の意味で、このシスカ教って奴を背負ってないから……そんな物、嫌なら放り投げ出す事を進めたい程だけど、この人はどうなんだろう。どう思ってる？
「貴方はその立場が苦しいんですか？　なら辞めた方がいいと思いますよ。まあ僕が言うことでも無いんだろうけど」
なんにも知らないからね。でも何にも知らないから言える事だってある。誰も言わないことをズバッと言える。だけどノエインは首を横に振るよ。
「私は……嬉しかったですよ。自分が選ばれて……だってそうでしょう……教皇ですよ。でも何をやればなんて、どうすれば良いのかなんてわからない。
世界を平和にするやり方なんて、誰も教えてはくれません。教義だけでは足りないんですよ。でもそれでも……私が祈らなくてどうします？　私は教皇なんですよ。
祈りが届く事を信じなくてはいけない。それが信者の為では無いんですか？　例え珍獣でも見せ物でも、それを見せるのが教皇の役目です」
たった一つの出来ることが祈る事……それじゃそこら変の人たちと何も変わらないと思うのは僕だけか？　きっと違うだろう。
教皇ってもっとうこう凄い感じってのは勝手な思い込みなのかな。

でもさ、これだけは僕でも言える事があると思う。今までの経験から……これだけはハッキリ言える。

「教皇……いや、ノエイン……酷な様だけどさ、祈るだけじゃ世界は何も変わらない。祈ることが悪いなんて言わないけど、結局何かを望む様に変えたのなら、自分で動くしかないんだよ。

それでも絶対に自分が望んだ結果が得られる訳じゃないし、失敗するかも知れないけどさ、祈りを信じるのなら踏み出すことをしても良いんだよ」

神様に届いてたとしても、きっと神様は何もやっちゃくれないだろう。嫌いな奴を殺してくれないし、都合の良い世界には成らない。

まあノエインの場合は、自分の事って訳じゃないんだろうけど。

「踏み出すことですか……ミセス・アンダーソンは良くそういう事をしていましたね。そう言えば」

「はは、確かにあのオバサンはパワフルだったよな」

ミセス・アンダーソンはある意味、体現してたのかも。あの人は自分の進む道は自分で切り開く……そんな感じだったもんな。

でも……そのミセス・アンダーソンももういない。居るけど、目を覚まさない。だからこの人がやらなきゃいけない。

するとその時、寝室や鉢落ち部屋とは違う襖が開いて、みんながようやく出てきた。

「出来たっすよ！　完璧っす！」

テンション高げにそう言ったノウイの手には四角い形をした灯籠がある。四角い骨組みの周りに、紙を張って各の模様や絵を描いたりして、中に明かりを灯せば完成の簡単な灯籠。

シルクちゃんやセラ……後ほかみんなもその腕に自身で作った灯籠を作って後ろから現れた。

「さて、じゃあ行きますか教皇様」

「ああ、そうだね」

僕たちは会話を打ち切り立ち上がる。僕も実は作ってたから、それを持って早速移動だ。何も出来なかったけど、せめてこのくらい。

着いたのはお社の最下層の場所。湖と接してる部分だ。木材が噛み合わせた様に成ってて上手くドーム状に組まれてるその下に僕達は来てる。

折角だから僕達も灯籠流しをやる事にしたんだ。アンダーソンやシスターの為にね。

「じゃあ、みんなで一斉にね」

そんなシルクちゃんの言葉で全員水面に灯籠を置いた。そして祈りを込めて僕達は手を離す。すると灯籠はゆっくりと、社の出口へと進んでく。

淡い光を携えて……儚い光を夜の闇の道しるべにして。

「あの灯籠って最後にはどうするの？」

僕は何気にそんな事を聞いてみる。だってずっと湖に浮かせとく訳には行かないよな。リアルでは川から海へと出ていく訳だけど、ここじゃそうは行かない。

「最後には湖の一カ所に灯籠を集めて、魔法の一斉照射で焼き払う。

それが最後の日の目玉イベントだよ。リアルと違って、ここでは三日間はやってるからね」
「なるほど……」
それは大層迫力があるだろうな。炎で浄化とかそんな感じかな。僕が灯籠を見送ってると、後ろから背中を突く感覚が……振り向くとそこにはセラが。
「なんだかあの人元気無くない？　アンタ何したのよ？」
「何って別に……ちょっとした会話だよ」
そうそうこれからの事とかね。まあ確かにノエインはちょっと元気ない感じになってる。するとそこにテッケンさんが――
「教皇様、どうですか？　ちゃんと作って起きました」
そう言ってテッケンさんはもう一つの灯籠を出す。
「ああ、ありがとう」
そう言って灯籠を受け取るノエイン。でもその時、鍛冶屋がおかしな事を言う。
「おい、それまだ流して無かったのか？」
「そうだけど、それがどうかしたのかい鍛冶屋君？」
テッケンさんを始め、僕達全員鍛冶屋を見る。何事だよ全く。まあどうせ、鍛冶屋の事だからくだらない事だと思うけど。
「いや……今流した灯籠は既に七つじゃなかったか？」

「「「え……？」」」

僕達は七人。だから一人一個ずつで作ったはず……えっえ？　時季的に心霊現象って奴？　するとどこからか声まで聞こえる始末。

『いや……まだ、逝きたくないの……』

そして全員の頭に耳鳴りが響いたかと思うと、ＬＲＯという世界が暗転した。

偉き人、遠き子（後書き）

第二百三十三話です。
はてさてどうなるか……ここで強制退場？　ってな感じで次回に続きます。次は久々のリアル回になるでしょう。どうしても比重がＬＲＯ側に寄っちゃうけど、目指すのはリアルとの交錯なんで、頑張ります。
まあ今回はアルテミナス編よりは、リアルも重要になる予定です。
てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

第三の存在（前書き）

ＬＲＯから強制的に排除された僕は、自室の天井を見つめてた。どうしてこう言う事になったのかわからない。これからだって時にこんな事になるなんて、なんか今回はついてない事一杯だな。

だけどいつまでも天井を見つめてる訳にもいかないから、僕は原因究明に乗り出す事に。そこで僕は気になる存在を見つける。それはプレイヤーでもＮＰＣでもない。ＬＲＯに居るのかも知れない第三の存在だ。

第三の存在

「？？？　一体何が……え？　いつ戻って来た？」

頭の中に疑問符が一杯だ。いつもの見慣れた天井がそこにあるのが、今この瞬間にはおかしい。周りをキョロキョロ見回して、そして体の感触を確かめる。

「うん……やっぱりリアルっぽいな」

僕は一言そんな言葉を発して、頭に被ってるＬＲＯの入り口をコツコツ叩いてみる。まあ昔のテレビじゃ無いんだし、こんなのでどうにか成るわけでも無いけど。

てか、マジで何が起きたんだろう。僕は目を閉じてＬＲＯに入らないやり方で、この『リーフィア』の機能を使うことに。

別に普通に被ってるだけでも脳波を汲み取って、ネットとか最低限の事は出来るのだ。

オレンジ色の海で満たされた電子の海。大量の情報が、大量のスクリーンで展開される。それは流石に目が回る程の量だ。

流石ネット。だけど今は不要な情報はいらない。ＬＲＯ関連を取捨選択してスクリーンを限定していく。まあそれだけでも、かなり多いけど更に厳選したのを四つ位に絞る。

それを見る限りどうやらこうなったのは僕達だけじゃない様子。いろんなコミュで『落ちた！？』とか『原因不明のサーバー停止！！』とか書かれてる。

ＬＲＯの公式サイトに目をやると、やっぱり混乱が起きてるよう

で、サイトのトップにお詫びと冠された謝罪文が出てる。
てかそれを読む限り、マジで原因不明なんですけど……僕の頭には最後に聞こえたあの声が頭で反響する。

『いや……まだ逝きたくないの……』

なんだかゾワゾワと……背中がゾワゾワとする。あれが原因とは流石に言えないだろうけど、原因だったらマジでヤバいんですけど。
まあある意味で思いや意志で出来上がっていそうなＬＲＯなら、幽霊が混じってたとしてもそうそう気づかなさそうだけど……だってリアルよりは近しい存在で、そこに存在してそうだもんな。

「うう、時間が無いって言うのに……」

元々僕には五日の猶予しか与えられて無いのに、ここでサーバーの復旧の目処がたたない状況に成ってしまった。公式サイトには『早急な原因究明の後にＬＲＯのサービスを再開致します』とだけある。
つまりはいつに成るか分かってないって事だ。今日がダメに成ったら後何日だっけ？　三日？　今日がもう入れないとするならそうなるのかな？
ヤバいじゃん。なんとかクリエは取り返したけど、クリエの秘密も分かったけど……だからこそこれからって時だったのに、ここで一時休憩か。

「痛いな～」

僕はブツブツそう呟く。でもまあ結構入ってたし、キリもある意味良かったから、休憩のタイミングではあったよ。でもそれが一日と成ると話が違う。

数時間でなんとか復旧してくれないかな？　命掛かってるんで……頑張ってほしい所だよ。

「そう言えば……こんな風に成ったときって、ＬＲＯの中は一体どうなってるんだろう？」

今までは気にしなかったけど、なんかクリエが心配だ。メンテナンスって事は全部停止させるのかな？　でもそんな事が出来るのだろうか？　ＬＲＯって今は確か、佐々木さんたちの手に余る代物らしいし……なんか厄介な奴らまで出てきてるし……停止なんてある意味出来ないような。

でもプレイヤー全員を一瞬で外に出すって、それくらいの強制的な事が必要だよな。ある意味、本当にＬＲＯが落ちたのは一瞬とか？　今は普通に動いてるのかも。それならそれで……良いのかな？

中にいない間に状況が進んだりしないよね？　どうなんだろうか？　ＬＲＯの場合、無くはない事が怖い。もしもそうなら、ノエインを信じるしかないな。

こっちにいたんじゃ、僕達は何も出来ない。文字通り世界が違う。近いようで、こうなったらおもいっきり遠いな。入り口が閉じられてしまうと、接点ってのがわかりにくく成る。

色々とＳＮＳや、二チャンネルを回ったりしたけど、どこも同じ様な事しか書いてないな。

「ん？」

だけどそんな中、おかしな書き込みを僕は見つけた。どこもかしこも無責任な事を言い連ねるばかりの中で、何というか特殊な感じ。

タイトルは『ＬＲＯシステムでの異常負荷の原因は、死者の魂にある！？』とか書いてある。まあいつもなら見もしないんだけどそ

んなオカルト。
でも今回はなんだか気になる。あんな事あったからな。しかも時季だけに。僕はその書き込みを開いてみる。

「おおこれは……」

なんというか……炎上って奴か？　なんかバカにしたような書き込みが一杯・沢山・大量……いや、膨大だな。なんか真面目に語ってるこの持論の人が叩かれてる様相。
まあバカにしたくなる気持ちも分かる。実際僕だって、あんな体験なかったらバカにしてるし。よく見てみると、このスレを立ち上げた人は、自分で独自にＬＲＯを解析しようとしてる人っぽいな。
僕には分からない用語がスレに長々と乗ってるよ。何これ？　Ｃ言語とか言う奴かな？　そして赤くなってる部分が検出したバグとか？
どうにかしてこの人の熱意を伝えてあげたいけど……僕にはいかんせん、チンプンカンプンな内容だ。見てるだけで頭が痛くなるレベルだよこれ。

世界というか、宇宙が違いそうな感じだ。Ｃ言語とかプログラミングとか、秋徒の奴がちょっとやってたのを見たことあるけど……あれとはなんか違う。
いやまあ、あんなお遊びと、希代の天才が作り上げたＬＲＯのシステムを比べるのは雲泥の差があって当然なんだけど……なんというか、比べる以前に訳が分からないんだけど……同じ基盤の上に成り立つ物と思えないとでも言うのかな？
訳分かってない癖に何言ってんだ？　って感じだろうけど、なんだか根本が違うような。てか、これがＬＲＯとは思えない。
こんなアルファベットと数字の集まりじゃ、世界なんて僕的には言えないな。超失礼な物言いだけどね。

「でも……これがどう幽霊に繋がるんだろう？」

まあそこが重要だったんだ。話は逸れたけど、今一度スレを眺めていく事に。

「う～～～～～～～～ん」

色々とちゃんとした説明があるみたいだけど……やっぱり良く分からないな。プログラムでの説明部分を省くと大体こんな感じかな？

『プログラム内でおかしな言葉が検出できます。実を言うと、ＬＲＯでは良くそう言う目撃情報もあって、それが上がる度に見返すと、ちゃんとその印が残ってる。

彼らはここに意志を残しに来てるんだ！』

とかそんな感じだな。かなり電波な内容。痛すぎてご愁傷様だけど、今回検出された言葉はかなりハッキリ分かった様で、スレの最後にアップしてあったよ。

【ｉｋｉｔａｋｕｎａｉ】

どこの幽霊さんが言ったか分からないけど……なんだか背筋が寒くなったのは僕だけかな？　てか、不遇の死を遂げた人なら誰もが言いそうな台詞ではあるよね。それに僕達が聞いた声と、これが同じとは限らないし……

「ん……これは」

これで終わりかと思ったら、リンクがあるな。僕はそこを意志を

伝えて開く。

「うげっ」

そしてまた引いた。どうやらＬＲＯでの幽霊の目撃写真とかを集めたスレらしい。ほとんどさっきのスレが炎上してるのに、更に別に立ち上げる物だからこっちも凄い事に成ってるぞ。

まあ面白半分で沢山の人が写真を上げてるみたいだけど、明らかにブレただけのとかある。だけどちゃんと見ていくと……なかなかバカに出来ない物もいっぱいあった。

それに実体件まで織り交ぜてる人もいる。まあどこまで本当かは分からないけど。

「なんかこれって……」

僕はそう呟いて思案する。だってリアルのＴＶで良くやってる心霊写真とかと、ＬＲＯで撮られたそれ等は違う。リアルでは存在が薄いから、違和感が恐怖に繋がるけど、ＬＲＯの写真は霞んじゃいるけど、人がそこに居る。

基本全身なのも特徴だな。これじゃあパット見じゃ気づかないかも知れない。てか、心霊写真か？　と疑うのも多い。小細工をしてる訳じゃなく、なんだかとけ込んでるから、幽霊かイマイチ判断がつきにくい。

そしてそんな意見は僕だけじゃないみたいだな。『これ本当に霊なのかよ？』とかの書き込みも多い。すると分かりやすい特徴をこのスレを立ち上げた人が教えてくれてた。

『ＬＲＯでプレイヤーと霊を見分ける方法は簡単です。一般的に言われてる足がない……それがＬＲＯに現れる霊の特徴』

その後のスレには『……』が続いてる。多分みんな僕と同じように今までの写真を見直して、その心情を「……」に込めてるんだろう。分かるよ。すっげー分かる。

いや、マジで見直すと上げられてる写真の人達には足がない。体とかは普通にあるから、その一部分欠けてるのが生々しいよ。

ああ～幽霊なんだ……って日本人はこれ見たら思うだろう。てか偶然撮れたってのが殆どで、町中に普通に居るぞ。写真で初めて気付いた感じなのがいっぱい。

勿論それっぽいのもあるけど……殆どが余りにも普通にとけ込んでるのが逆に怖いよ。スレにはこの時期は特に目撃例が多くなると書いてある。

やっぱり幽霊も季節や時季を気にするのかな？　するとそんな大量の写真の一枚に僕の視線は止まる。顔は見えない。草原の高いところ、そこに一人の少女らしき足のない子が佇んでる写真だ。

しかも華奢な体の周りには青白い何かが見える。遠くから撮ってるから顔は見えない筈……何だけど、なんか見つめられる様な気がするんだよね。

こっちを向く態勢で、風に靡く髪を片手で防いでる格好だし、この写真を撮った人を見てたのかも知れないけど……でもなんだか……気になる。

それにあの少女はちょっと見覚えがあるような？　遠めすぎて良く分からないけど、でも最近あの位の年の子をどこかで……七・八歳位の体格で、薄手の格好してる。

タンクトップに短パンだ。あれ？　これもなんだか言い覚えがあるような？　なんだっけ？　髪は黒で肩よりも少し長い感じ。その後ろの髪はどうやら何かで束ねてるっぽいな。

なんか出てきそうで、出てこない。そもそもこの写真だけじゃ、

ちょっと無理があるかもだな。僕が写真とにらめっこしてると、メールの受信を知らせるメッセージが響いた。
取りあえず写真から目を離して、僕はメールの確認をする事に。
え～と誰からだろう？

「ああ、やっぱりだけどみんなからか」

メールの送り主は、テッケンさんを初めとした、冒険の仲間達だ。
いきなりＬＲＯがダウンしたから、心配してくれてるみたいだな。
僕は取りあえず大丈夫な事をみんなに報告するために、メールを打ち返す。すると直ぐにテッケンさんからメールがまた返されてきた。
それと同時にチャットルームへのお誘いだ。成るほど、確かにメールで個別にやるよりも良いかもだな。面倒が減ってさ。
僕はテッケンさんが作って付けたのであろう、恥ずかしい名前のちゃっとルームへと入室する。そして真っ先にこう言った。
浅い電子空間内だからキータイピングの必要なんて無い。チャットなら、直接話す感じでいけるんだ。

【ちょっとテッケンさん、なんで部屋の前置きが『スオウ救出組』なんですか？
これじゃあまるで僕が助けられてるみたいじゃないですか】

目の前に現れたチャット用のウインドウに僕が喋った言葉が現れる。そしてすぐさまそれに反応する言葉が僕の言葉の上に現れる。

【間違ってなんか無いじゃない。アンタはクリエを助けようとしてるけど、私達はそんなアンタを助けようとしてるのよ。
そもそもその筈だったじゃない。アンタは誰かの為にを優先するバカだから、私達はアンタを優先してやってるの。ありがたく思い

なさいよ】

僕はテッケンさんに言った筈だけど、言葉を返して来た奴はセラだった。ありがたくって、随分御着せがましい奴だな。

それに最近までどっちもあんまり乗り気じゃ無かったよなセラの奴。すると更にまた別の文字が画面上に現れる。

【そうですよスオウ君。スオウ君は忘れてるかもですけど、貴方だって私達に取ったら救うべき対象ですよ今回は。恩着せがましいのは許してください。

セラちゃんは素直じゃないから、ちょっとした棘で相手を刺激しないと助けたいって言えないんです。死なないでって言えないんです。

いわゆるツンデレなんです】

【ちょっとシルク様！　なに言ってるんですか！？　言っとくけどスオウの事なんか全然心配なんてしてないんだから、勘違いなんてしないでよね！！

これがデフォルトなのよ私の！！】

なんだか感情に反応してるのか知らないけど、文字に色が付いて、字事態もボリュームで大きく成るんだなと初めて知った。てかツンデレね……それならウケるんだけど、もうちょっとデレの部分を増やしてほしいよな。

今のだって、きっと直接ＬＲＯで会話してたら、絶対に殴られてるよ。まあチャットだから安心だけどね。ははは と笑ってられる。

【まあ分かってるって。ツンデレなんて別に思ってないから安心しろ。どっちかって言うとツンドラだよな】

僕に対してだけね。でもこの言葉もどっかからの引用に成っちゃ

うな。まあ最近はちょっとマシに成ってきたけど、まさにツンドラだったんだよ。でもなんだか、フォローで言った筈のその言葉に、セラは【はぁ？】とか明らかに文字から見て取れる怒りを感じるんだけど。

ツンデレもツンドラもダメってどうすればいいんだよな。どんなキャラ付けで売り出してるのか分からない。

【私は普通よ。普通に接してるの、それを感じなさい】

【あれが普通って……明らかに僕だけ扱いが違うじゃないか。お前アギトやテッケンさんに聖典撃たないだろう？　でも僕には撃つし。あれで普通なら、どれだけバイオレンスなんだって事になるぞ】

【うう……それは……】

僕の言葉に詰まるセラ。ようやく自分の非常識差が身に染みたかな？　するとその時、言葉に詰まってるセラの代わりに、シルクちゃんの言葉が現れる。

【だからそれはセラちゃんなりの不器用な愛情表現……だったりして？】

【だからシルク様やめてください！！　幾らシルク様でもこれ以上は許しませんよ！】

マジでシルクちゃんに切れそうなセラ。なんとも珍しい事だな。するとそこで更に一人、めんどい奴が入って来た。

【そうっす！　そうっす！！　そんな訳ないっすよ。それにそれなら、自分だってある程度しごかれてるっす！　同じっすよスオウ君と】

そう言って現れたのはノウイ。みんなまだリーフィア被ったまま

でいるのかな？

【う～ん、でもノウイ君のとはちょっと違うよねセラちゃん】

【ええ――――って！　違わなく無いですから。どっちも役立たず過ぎて見てたら苛つくだけです！】

ズゴ――――――ンだよ。僕とノウイに謝れよ。いやまあ今のは慌てて言い繕ったってのは分かってるけども……一体何をそんなにムキになって否定してるのか、イマイチ分からんな。

別に少しは改善されつつあるから、僕は長い目でセラとは友達に成る予定だよ。だから焦らないでもいいのに――ってな感じだ。なんか違うのかな？

【さて、楽しく盛り上がってるみたいだけど、そろそろいいかな？】

僕たちが話題を関係ないほうへ持っていくものだから、テッケンさんが登場して、方向修正を計る。

【取りあえず、みんな無事で安心だよ。いきなり落ちちゃったからね。こんな事、ＬＲＯが始まって過去一度も起きてないから、相当騒がしく成ってる。

原因はまあ……ハッキリとしてないけど、みんなに確かめておきたい事がある】

【確かめておきたい事……ですか？】

一体何だろう。なんだか真面目モードに移行したな。お遊びはいつの間にか終了してる。そして画面に現れたテッケンさんの言葉に「ああ」と思った。

【みんなはあの時……社のあの場所で……何か聞かなかったかい？

僕には変な声が聞こえた様な気……がするんだけど】

成るほど、そのことか。確かに気になるよね。自分だけだったら気のせいで済ませられるんだけど……もしもそうじゃなかったらと思うとね。気が気じゃないって感じかな。

てかみんな途端に口を噤んじゃったんだけど……それはある意味、みんな同じ心境だったって事か？　沈黙は有なりとはこの事だよ。

語らずともみんな多分わかってる。でも何も言わない訳にはいかないから、ここは僕が真っ先に声を上げてあげよう。

【ええ、僕も聞きましたよ。確かそう『逝きたくない』でしたっけ？】

すると僕の言葉を皮切りに、みんながカミングアウトしてくれた。

【やっぱり……僕だけじゃなかったんだね】

【みたいですね――で、どう思いますか？　あの声は、その……幽霊ですか？　今ＬＲＯでの幽霊の事を色々調べてるんですけど……結構あるものですね。

ＬＲＯではリアルよりも存在を表しやすいのかな？】

テッケンさんの言葉に続けて、僕が現状を報告してみる。するとガクガクした文字がチャット画面に現れた。

【ア……アンタバカじゃないの？　幽霊ってそんな……非常識よ。それに何？　幽霊がＬＲＯをダウンさせたとでも言いたいの？

たまたまよそんなの。私達全員が同じ声を聞いたのもたまたま……そもそも私はこの方、幽霊なんて見た事なんてないわ。だから霊感なんてゼロなのよ】

まあ確かにたまたま偶然な可能性は高いよ。最近ＬＲＯには自我を持ち始めたＮＰＣが出てきてるし、そのせいでＬＲＯ事態を圧迫してたのも事実だろう。
今までとは違う感じに成りつつあるから、その対応の為にＬＲＯが休みを取ったとかさ。でもタイミングがバッチリ過ぎたのも事実。
それに僕にだって霊感なんて物は無いけど……みんながみんな同じ声を聞くって、そうそう無いよ。

【いやさ、このスレを見る限りだとかなりハッキリと見えてる訳だよ。町中に紛れてたとしてもきっと気付かないレベル。
お前だって実は幽霊と接したかも知れないぞ】
【はは……そんなわけ無いでしょう。それにスレに上がる情報なんて、信憑性に欠けるわね。そんなくだらいないスレなら特に。
それに今の加工技術なら素人だって心霊写真作れるわよ】
【まあ、それはそうけど……】

わざわざこれだけの数をねつ造するかな？　それにやっぱり、テレビとかと見るのとは違う、変な存在感を感じる。この妙な生々しさも加工の賜なのか？

【おお、僕もそのスレ見つけたよ。成るほど、確かにこれはなかなか……このスレを立ち上げた人の思考はスゴいね。幽霊一体につき三百四十キロバイトの不可をサーバーに与え続ける事に成るためのＬＲＯ全体の停止、だとさ。幽霊がどれだけいるかわからないけど、一体が三百四十程度ならＬＲＯで受け止めきらない訳もなさそう……流石にこれには納得しかねるけど、この写真全部がねつ造とも思えない。ＬＲＯでの幽霊の目撃例は前からずっとあったしね】

なんだ、やっぱりそうなんだ。テッケンさんが言うと説得力が違

うね。するとそこで、耐え切らなく成ったのか
セラが話題を変えようとする。

【もう幽霊の話はいいじゃない。そうだったとしても何が出来る訳でもない。私達はこれからどうするかを話し合うべき。
復旧の目処は立ってないし、スオウあんた死ぬわよ】
【ハッキリ言うな！　どうするって言ったって、こっちじゃ何も出来ないだろ。でも死ぬ気はサラサラないから、僕は鋭気を養う事にするさ】

セラの奴が軽々しく死ぬとか言うから、ちょっと不安になるな。まあ不安は元から奥にはあるけど……それにしても、本当にこれだけしか出来ない。何にも出来ない。

【そうだね。僕達はリアルじゃ無力なただの人。復旧の目処がたったらお互いに連絡を取り合い、再集合って事でいいかな？】
【【【了解】】】

テッケンさんの言葉で僕達はまだ深い夜に眠る。

第三の存在（後書き）

第二百三十四話です。
強制排除でリアルへと戻されたスオウ達。だけどここで無駄な時間を過ごす訳にはいかない。でも出来る事もあまりないのです。何が起こったのかを知るのはまだ先でも、でもそれはきっとスオウの歩く道の先にあるから、リアルでも歩みは止めません。
次回もバトルとかはない、日常になるだろうけどそこでもＬＲＯが復旧した時の為の行動を取りますよ。スオウは向こうじゃ色々と足りないですから。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

変われない関係（前書き）

夜が明けて日が昇る。そんな当たり前の日常が始まった。そして僕の日常には絶対に欠かせない奴がやっぱりいた。いつだって一緒に歩いてると思ってて、だけどそいつは僕や秋徒の少し前をいつも歩いてる奴だ。

だけどそいつは僕達に合わせて今を生きてるんだと思う。それは枷なのか縛りなのか……僕はいつだってそんな彼女に追いついて、例え鎖だったとしてもそれならどこまでも伸びる鎖を……いつか与えられる程に強くなりたいと思う。

変われない関係

真っ暗な道を走ってる。自分の足下以外、何も見えない真っ暗な道。そしてその足下さえも、酷く細く脆い物で……踏み外すのはとっても簡単な道だった。

そんな道を、僕はただ走ってる。何で自分が走ってるのかもわからない。だけどただ、走り続けなくちゃいけない気がして……脆く危険な道を全速力で駆け抜ける。

すると突然体のバランスが崩れた。なんだか片側の腕がとてつもなく重くなったような……視線をそちらに向けると、僕の腕がおかしな模様に光ってる。

崩れたバランスは、幅が靴一個分よりも狭いこの道での修正は不可能だった。僕はその重みを増した側へ、為す術も無く落ちていく。

闇からさらに深い闇へと、どこまでも行っても暗かった世界で更に下へ。木霊する叫びは、きっと誰にも届かない。

「あああああああああ！！」

「きゃ！？　――わっとと！」

口が勝手に動いて、夢での叫びを続けてた。ベットの上で嫌な気分で目を覚ますと、見慣れた天井と今日はもう一つ見慣れた女子がそこにいた。

三つ編み姿の彼女は僕の家の隣に住んでる幼なじみ『日鞠』だ。今日もまたエプロン姿してるのは、朝食を作りに来てくれたんだろう。

僕はこの幼なじみにかなり実生活でお世話に成ってる。てか依存してたんだ。

「もう、いきなり叫び声と共に起きないでよ」

膨れ面して、ブツブツ文句を言ってる日鞠。まあいきなり叫び声上げられちゃビックリするよな。でもまさか、リアルにまで引きずるとは。

てか、なんで今日は部屋に来てるんだこいつ？　いつもは忙しいのかなにか知らないけど、朝食時は既に居なかった方が多いのに。今日に限って起こしに来たのかな？

どれだけ子供扱いだよ。最近は日鞠から自立しようと頑張ってるんだよこれでも僕は。ずっと日鞠の優しさに甘え続ける訳にもいかない。お節介の度が過ぎてるからね。

僕だってもう高校生だし、一人で生きていく術を身につけておきたい年頃なんだ。てな訳で、話し合った筈だけど……今までとそこまで代わりはしない。

ちょっとだけ、顔を合わせるのが減ったくらい。日鞠はこの長い休みを利用して何かしてる様だし、僕もＬＲＯで忙しいからね。

だからだと思うんだ。ちょっと寂しいとか、そんな感じだから、目の前に居る日鞠は何故か朝の僕の部屋で大仰なカメラを手にしてるんだと思う。

「おい、その文句はもっともだけどさ、お前の手にあるゴツイカメラは何用だそれ？」

どう見てもプロが使ってそうな一眼レフだよ。日鞠の細い指じゃどう見ても扱いずらそう。アンバランスだよ。僕の指摘に日鞠は慌ててこう言い返す。

「こ……これは違うんだよ。別にこの暑さで服をはだけさせた格好

のスオウを撮っておきたいとか、全然そんなんじゃないんだから。
まあでも折角だから――――ポチリっと」

そう言って何気に見下ろすアングルから、僕を撮った日鞠。カシャっと言う音が蒸し暑い部屋に響いた。

「お前な……てか、なんだか異様に暑くないかここ？　幾らそんな季節だからって、流石にまだ朝方だろ？」

汗腺から汗が染みでそうな暑さだ。カーテンの隙間からは強烈な日差しが既に見えるけどさ……流石にこれはおかしい。

「何言ってるのよスオウ。そんな季節だから当たり前でしょ」

ピッ……「ピッ？」なんかそんな音が聞こえた様な。その後にウィィィンと言う機械音も聞こえる。おいまさか、この暑さって――

「お前、まさか暖房入れてやがったな！」
「はてさて？　証拠は既に消えちゃったよ。それにしてもスオウは大胆だね。そんな格好で迫ってくるんだから。まあ私は嬉しいよ」

僕の追求なんて何のそのな日鞠。こいつを懲りさせる事はなかなか難しいんだよな。てか、僕の事に成ると飽きないしな。
今まで一体、どれだけの恥ずかしい写真を撮られた事か。だからこそこの程度、パジャマがはだけて上半身の露出程度は今更恥ずかしがる事じゃない。
僕はカメラのレンズを押さえて、強引にその手から奪う。力はどう足掻いても僕の方が上だからね。

「取ったああ！」

「ああ！　言っとくけど、そこのデータ消したって意味ないからね！」

大事なカメラ取られたのに強気な奴。まあ理由はわかってるけど……前に言ってもんな。

「ふん、データはどうせ転送される様に成ってるんだろ。でも、どんな写真かはチェックする権利が僕にはある」

「今回はスオウが恥ずかしがる様な、ブランブランしたものは撮ってないよ」

「ブランブランってなんだよ！？」

寧ろそんな写真があったら大問題だ。こいつとの関係を考え直す写真だよそれは。でも日鞠は笑顔でこういうんだ。

「ブランブランはね〜〜ほら、前は脱衣所にもカメラ仕掛けてたし。……今はもう取り外されたけど」

「当然だろ。どこで不機嫌に成ってるんだよお前は。よく考えろよ、同い年の女子に監視されながら生活なんか出来るか」

最後の方で頬を膨らませた日鞠に呆れつつ僕はそう諭す。諭しながらカメラの液晶画面を操作。フォルダを開いて画像一覧を表示させる。

まあ確かにそこまで恥ずかしい写真じゃない。そう思う僕は、何だろう？　慣れたのかな。このくらいなら……と思う自分が居る。

「別に監視じゃないよ。スオウの成長の記録を私個人が付けてるだけだもん」

「やりすぎだって言ってんだよ。それはお前の日記程度に止めておけよ」

成長の記録って……日々の成長を一番知られたくない奴がある意味日鞠なんだけど。幼なじみだし。これ以上何を曝け出せと？

「日記程度じゃ私の煩悩は満たされないもん！！」

「堂々と煩悩言うなよ！？」

女の子だろお前は。てか、なんかヒートアップしてきたせいで更に暑い。ベットの端で汗を垂れ流しながら、二人で朝っぱらから何を言い合ってんだろうと思わなくもない。

「お前、エアコンのリモコン隠し持ってるんだろ？　暑いから冷房入れろよ」

「あ～あ、これで地球の温暖化が進むね。この程度の暑さは我慢できる範囲だよ。地球が暖かいから私たちは誕生出来たんだよ。

もっとこう地球を感じるべきじゃないかな？」

「これは地球じゃなく、暖房の暑さだろうが」

誰のせいで朝っぱらからここまで暑くなってると思ってるんだ。日鞠が無駄に電力を使ったせいだろう。てかこいつ……僕と違って涼しい顔してやがる。

なんで同じ部屋に居て、汗一つかいてないんだよ。前々から思ってたけど、どういう体の作りしてるんだ？　日鞠が病気に成った所を僕は一度も見たことないぞ。

「はいはい、もうしょうがないなぁスオウは。冷房ね冷房」

ピッという音が鳴ると、再びエアコン機動。これであとちょっとすれば快適空間へとこの部屋が変わるはず。流石人類。偉大な発明してるよ。

外で鳴いてる大量の蝉共に「羨ましいだろ」と言いたいな。
「おい日鞠、なんでやたら部位にこだわって写真撮ってるんだよ。鎖骨やへそや……乳首とか……流石におかしいんじゃ無いのか？」
「スオウは何にもわかってないね。自分の魅力に気付いてないよ。スオウは鎖骨の張り具合も、へその形も、乳首の色も激萌えなんだよ？」
可愛らしく首を傾ける日鞠。何か問題でも？　的なその顔がムカつく。
「何が激萌えだ。男のなんて気持ち悪いだけだろ」
ゴーーー（エアコンからの風の音）
「ええ～、じゃあスオウは私の鎖骨や、おへそや、その……乳首とか見たくないの？」
ゴーー
「お前……良くそんな事……てか、だから女子と男子じゃその意味が違う。お前のって訳じゃないけど、そりゃ興味あるよ」
何言ってるんだろ僕。なんか暑いな。
ゴーー
「そう言う事だよスオウ。男の子が女の子の体に興味があって胸やお尻や脚に魅力を感じる様に、女の子だって男の子の体に魅力を感じるんだよ。
スオウは今、私って訳じゃないって言ったけど……私は、スオウ

だからだよ」
「は？」
ゴーー
「だから私はスオウだから写真に残して置きたいって思う。スオウは私の体に興味は無いの？」
「それは……」
無いとはいえない。日鞠は胸はそんな無いけど、健康美を表した様な体は魅力的だ。脚だって細くて綺麗だし、なんと言っても柔らかいよなコイツ。
女の子ってみんなそうなのかも知れないけどさ。でも口が裂けても言いたくない何かがあるんだよな。てか、上目遣いで僕を見上げてくるなよな。
思わず可愛いじゃないか……とか思っちゃう。汗が一筋額から流れ落ちて行く。やっぱり暑いな。うん暑い……なんだろうこの暑さ。胸がドキドキするのとはちょっと違うような。いや、胸もドキドキしてるけどさ、なんか外的要因の様な暑さ。
そうそうゴーーってな暑い風が部屋全体を暖めてるみたいな――
「――って、あっっつううう！！　日鞠、お前暖房入れてるだろ！」
「ああ、バレちゃった？　でもドキドキしたでしょ？」
「ドキドキって言うか、ムンムンしたわ！」
暑い、暑すぎる。色々とヤバい位に温度が上がってるって。僕はまたも強引に日鞠の手から今度はエアコンのリモコンを奪い取る。そして速攻で冷房に切り替えた。
はあ、これで安心。少しでも日鞠を信用したのが間違いだったんだ。

「ふう」
「あ〜あ、スオウはとんでもないミスを犯したよ」
「何だよミスって。これ以上の適策は無いと自負できるけど」

まだ何か言いたいことがあるようだな日鞠の奴。でも冷房の効いた部屋では、僕の心は春の草原の様に麗らかに成るはずだ。ドキドキ？　は、何それ？

「暖房でドキドキ大作戦は、あれだけじゃ無かったんだよ」

暖房でドキドキ大作戦って……残念なネーミングセンスだな。あまりにも残念だから「ふ〜ん」とだけ言っておいてやろう。
よしよし、冷房が効いてきたぞ。はぁ、文明最高と叫びたい。

「最後の詰めは、暑くなったから私も服を脱ぐまであったのに、スオウはそんな一世一代のチャンスを逃したんだよ。残念でした」

そう言って胸元を引っ張って、パタパタ風を送る日鞠。何のアピールだよ。そんな薄い胸で。

「あーそりゃ残念。マジミスったわー」

めんどいから棒読みでそう言ってやったよ。すると日鞠が頬を膨らませて不満気だ。納得してくれない。

「全然残念がってない！　スオウはちょっと、私の体に興味なさすぎだよね。もしかしたら小さい時に一緒に沢山お風呂に入ったからって、それで今の私の裸が想像出来ると思ったら、勘違いも甚だしいんだけど！

想像と生身じゃ違うんだよ」
「残念な方に？　まさかパッド入れてるのかそれで？」
大抵想像の方が綺麗に作ってる物。人間ってほら、思い出を勝手に美化するじゃん。だから日鞠の理屈じゃそうなるよな。まさかそこまで残念な事に成ってるとはしらなんだ。
すると僕の言葉を受けて、日鞠はピクピク眉を動かしてるぞ。そしてこういう時の日鞠は決まって暴走しがち。なんせ負けず嫌いだからな。
「スオウはほんと……冗談でも言って良い事と悪い事があるよ。私だって日々成長してるんだから！」
そう言って日鞠は僕の手を強引に掴んで引き寄せた。そして自分の服の中に手を招き入れて、そのまま胸へホヨヨンと重ねた。
「どう？　私はパッドなんかに頼ってないわ。だって私は、自分の事胸張れるもの。スオウはこんな私でも受け入れてくれるって信じてる」
そう言って重ねた手で僕の手をやたら胸に押しつけやがる。ヤバいって、これはヤバい。ブラの質感とか……なんか日鞠の鼓動までも伝わりそうで、流石に赤く成らずにはいられない。
「お……お前な、自分が何やってるかわかってるのか？」
僕はしどろもどろに成ってる口を動かしてなんとか発音した。いや……うん、流石にこうやって触ると柔らかいし、暖かい物だな。
てか、パッドじゃない位わかってるっての。冗談なのに……結構取り返しのつかない事だよこれは。パッド入れるのなら、もう少し

大きくしそうだしな。

日鞠が近い。流石に恥ずかしいのか、次第に頬を染めて横に顔を逸らしてるけど、何故か僕の手を解放してくれない。てか、かなり危うい状態だよこれ。めくり上がった服の下に見えてる形の良いおへそも何気にイヤらしいし、さっきまでの熱のせいでちょっと頭がボーとしてしまう。

そしてちょっとだけ無言の時が流れる。うるさい蝉の鳴き声と、エアコンの風を出す音が響いてる。

「よく考えたら……スオウは自分から私に触って来る様な事しないよね。それって結構寂しいよ。私ワガママだから、実はもう手を握りあうだけじゃ満足はしても、お腹いっぱいには成らないの」

「それは……でもそれが普通だろ。幾ら幼なじみだからって、いつまでもベタベタ出来るわけない。それに僕たちは異性だし……それに……」

僕は色々と考えてそう言った。別に昔だってそんなベタベタしてた訳じゃないとは思うけど……いつ頃からか、ちょっと日鞠を遠くに感じる瞬間があった気がする。

コイツは凄くて、何だって出来て、太陽みたいでヒーローみたいでとにかく眩しいから、一緒にいると自分が普通以下に思えて仕方なくなる時があった。

その頃は、きっと一緒に歩けなくなるとか思ってた様な気がするな。だから僕は一線引いたんだ。自分は日鞠の隣を歩けてないから。

そんな僕が、一人で日鞠を独占してる訳にはいかないじゃん。まあやっぱり体も心も成長過程に入ったってのも大きかったけど、一線を引いた先は追いついてからの事だと心に決めたんだ。

でもなんか……今その先にちょっとフライングしてる。胸を触る

なんてフライングじゃ済まないかな？　ブラ越しだしまだマシなのかな？

「それに……何？　異性だったのは良いことだって思ってる。運命だもん。スオウも私もそんな言葉はあんまり好きじゃないけど、でも私は出会うべくして出会ったって思ってる。

でもそれって私の一方通行な思い？　こんなにドキドキしてもスオウは感じない？　スオウって全然家にも来ないよね。

居心地悪くなった？」

「別にそう言う訳じゃ……それに自分だけがドキドキしてると思うなよ。された方だってドキドキしてる」

マジで心臓が飛び出しそうな位だよ。手を誤って動かさないように緊張しまくりだし……てか出会うべくしてか。そこまで日鞠が思ってたんだ。どっちかって言うと、僕の方が運命とかそんなの感じてたと思ったけど……僕がコイツに救われたんだしな。

誰かが困ってたら誰にでも手を差し伸べる奴だって今ならわかるけど……あの時は変な勘違いをしたんだよ。それに家に行かないのも、僕の身勝手な枷のせいだよ。

別に行きたくない訳じゃない。

「ねえスオウ……後何年、私達は一緒に居られるのかな？　考えた事ある？」

激しい光のせいでカーテンだけが浮かび上がる様に見えてた。後何年……こうして一緒に居られるか、か。早ければ後三年位だろうな。

僕と日鞠じゃレベルが違うし、同じ大学なんて到底無理。それに自分が何をしたいのか、何に成りたいのかなんて全然全く、最近は考えてる余裕無い。ＬＲＯで一杯一杯なんだ。

そんな僕に振りかけられた難問……どう答えるべきか。僕が沈黙してると日鞠は更に続ける。

「私は最近良く考えるよ。最近スオウが危ない事してるから特に。いつだって本当は気が気じゃない。ずっと傍で見守っててあげたい。でも信じてるから……そんな事はやっぱりしない。けどそれって意地でもあるのかも。このまま意地を張り続けると、その瞬間が来たときに後悔するのかな～とかちょっと思っちゃう」

「意地ね……それなら僕だって意地張ってるよ。ずっとさ。それにＬＲＯに関わり続けるのも意地みたいなもんだし。

もしかしたら僕は、証明したいのかも。ずっと張ってた意地の為の証明。それが摂理を助ける事で一区切り出来るような……勝手な思いこみ。

まあだからこそ、摂理にとっては迷惑だろうな」

日鞠の奴に並ぶための証明……こんな自分でも誰かを助ける事が出来るのなら、この目の前の凄すぎる奴に近づけたと思えると。

そしたらもう少し色々と許せるかも知れない。

「私の胸を触ってるのに、他の女を考えるなんて……でも、私達は互いに意地張ってるんだね。じゃあここで約束しようよ」

「約束？」

急に何言い出すんだ日鞠の奴？　てか、その前に早くこの状態をどうにかしてほしい。本当にさ、自分が女って事と同じくらい、僕が男って事も意識しろ。

幼なじみってフィルターが、日鞠にはいつだって掛かってるみたいだけど、僕はそうじゃないんだぞ。この状態は男の理性を壊して、本能を呼び起こしても文句は言えない。

でもここでそんな獣に成るわけには行かないから、ググッと我

慢だよ。そんな事とはつゆ知らずか、日鞠は赤く染めた頬を……ってか、顔自体を近づけて来る。
僕はちょっと体を引かせたけど、とうとうベットの上に完全に進出した日鞠を交わすことは出来なくて……手も握られてるしさ。血流が逆流しそうな程だった。
そして期待に胸を膨らませ――じゃなく、どうしようかと頭で悩んでる間に、膝立ちした日鞠はコツンと額と額をくっつけた。

「約束だよ。きっと離れ離れに成っちゃう前に、お互い意地を取っ払おう。そしてその時は本心で、気持ちを言い合うの。その約束」

日鞠の声が、耳にくすぐったい位に近い。日鞠の熱が額を通して伝わってくる。もうかなり部屋は快適な温度に成ってるはず……なのに、全然火照りが収まらない。
だけどまあ、こんなドキドキは悪くないとも思う。

「ああ、了解。僕にとって丁度良い帰る理由に成りそうだ。日鞠との約束は反故にしないって決めてるからな」
「当然、約束は守るためにするものだもん」

契約終了と共に、日鞠は額を離す。それでも互いに近い近い。日鞠の香りが火照った頬が……浅く呼吸する唇が、全て悩ましく見える。

「スオウ……そろそろ手を退けてくれないかな？」
「へ？」

そう言う日鞠の指摘で手を見ると、いつの間にか日鞠の奴は重ねてた自身の手を退けてるじゃん。これじゃあまるで僕が僕の意志で日鞠の胸を触ってる様な物。

僕は慌てて日鞠の服の中から手を抜き取る。

「ご……ゴメン」

「いえいえそんな……」

ゴメンと言うのもなんかおかしいけど、ついついね。するとその時、携帯から音楽が……この昔の暴走族風メロディー「パラリヤパリヤ〜」は秋徒の奴だな。よし、無視しておこう。

「良いの？　秋徒からでしょ？」

「別に良いよ。朝っぱらからアイツの声なんて聞きたく無いし、それよりホラ返す」

僕はそう言ってカメラを日鞠に渡す。消しても意味ないんじゃな。どうしようもないじゃん。嬉しそうにしてるけど、僕は疑問だな。

「何でそんなに知りたがるんだよ。僕は基本だらしないし。カメラなんて使ったら幻滅すると思うんだけど」

「それは違うよスオウ。私はスオウに幻想抱いてないもん。だから大丈夫。スオウが私の全部を見たくないのは、きっと私の綺麗な部分ばっかり想像してるから怖いんだよ」

ふ〜ん、確かにそれはあるかもね。男は美少女には夢を押しつける物だ。

「でもお前だってオナラをしたり、鼻くそホジったりするって一応わかってるぞ。人間だしな」

「しないわよそんなこと！　私のオナラは無音無臭なの！」

んなバカな。何食ったらそうなるんだ？

「実は毛が濃かったりして処理が大変だとかを晒しても仕方ないだろ？」
「私の毛はそんな剛毛じゃない！」
「じゃあその……自慰行為とかは困るじゃん。僕だって男だぞ」
「そそそれは……無いとは言えないかも」

なんか互いに真っ赤になった。でもこれで、僕の苦しみの一端はわかってくれたみたいだな。よし、カメラの台数を減らして貰おう。まだまだ僕の知らない場所に隠してるとも限らないしな。

変われない関係（後書き）

第二百三十五話です。
なんか今までと関係無い感じだけど、しょうがない中ではいいのかな～みたいな。これからの為に……それに帰ってくる為には日鞠と言う存在はスオウには欠かせないので。
覚悟の再確認みたいな。まあそこまで深くはないですけどね。
次回は水曜日に上げます。ではでは。

向日葵（前書き）

朝食を取って日鞠と別れる。そして今度は秋徒に呼び出されて出掛ける事に。どうやらみんな突然のサーバーダウンにやる事が無くなったみたいだな。秋徒は愛さんと共にガイエンのお見舞いに行くらしい。

そこで僕も誘ったと……気まずいだろうから。大きなお世話だっての。

向日葵

「それじゃあスオウ、お昼はいいんだね。家に居るなら作っておくのに」
「別に良いって、なんか秋徒の奴が用あるみたいだし、外で食うことに成るかもだろ」
「まあそれはそうだけど……」

朝食を取り終わって、食器を二人で洗いながらそんな会話を僕達は交わしてる。今日の朝食は焼き魚に添え物に味噌汁にご飯という、何とも日本人っぽいそれだったよ。
基本日鞠はなんだって作れてプロレベルだから、ほんと毎日僕って恵まれてるな。まあ僕の世話を焼いてる内に、日鞠は料理の腕がメキメキ上がったってのもあるけどね。

その意味では僕はちょっと貢献してるよな。透明な水が流れ出て、泡を落として日鞠に渡す。それを日鞠が乾いた布巾でササッと拭いて、これならあっと言う間だな。
まあ二人分なんてそんな物なんだろう。僕が洗って日鞠が拭く。分業すると効率いいね。

「でも良いのかなって？　ＬＲＯ方のどうなってるの？　セツリちゃん助け出せそう？」

最後の一枚を日鞠に渡した所で嫌な事を聞かれた。日鞠は皿を手際よく拭くと、食器を斜めに立てて置く所へと置いて後片づけは終了だ。

「助け出せそうかどうかは、正直わかんないな。また不味い事に成ってるし。今ＬＲＯには入れないんだよ。原因不明のサーバーダウン中」

僕は最後に手を洗って、タオルで手を拭き拭きする。さて今日は一日気だるい日に成りそうだ。僕は思わず溜息を吐く。

ここで一日潰れるのは痛いよな～ホント。

「ふ～ん入れないんだ。じゃあしょうがないね。でも大丈夫、スオウならセツリちゃん助けれるよ。だからそのためにも休むことだって必要。

急がば回れだよスオウ。目的を見失わないなら、回り道にだって意外な何かがあったりするよ」

「なんだそれ？　お前の持論かなんかか？」

「うん、まあそんな所かな」

日鞠は布巾をキチンと畳んでキッチンの傍らへと置く。なんだか曖昧な返事だったけど、こいつが回り道してる所なんか見たこと無いような。

なんたって「やれば出来る奴」だからな。言っておくけどこの「やれば出来る」は、怠け者や親バカが自分のバカな子供に向ける慰めなんかじゃないよ。そのままの意味だ。

日鞠はやれば出来る子だ。いやもっと端的に言うと「やっちゃったら出来ちゃう奴」なんだ。きっと大抵の事を、人の努力を踏みつけてあっさりとこなしてしまう。

それだけのスペックを秘めてる奴だ。まあ既に秘めてる訳じゃなく、発揮しまくってる訳だけど。こんな奴が幼なじみじゃこっちは肩身が狭くなって叶わないよ。

なんか町ぐるみで夫婦みたいに思われてるし。いや、現状を考え

れば致し方無いのもわかるけど……日鞠の奴は別に否定しないからな。
小さいときは冗談で言われてるって明らかに分かってたけど、最近はなんか含みがあるんだよな……まあそれも僕のせいって言えばその通りだけどさ。

「まあ回り道かどうかはわかんないけど、秋徒が呼ぶんならＬＲＯ絡みなんだろうよ。それが本当に何かに成れば良いんだけどな」

そんな事を言ってると、ふとクリエの顔が浮かぶ。今助けようとしてるのはセツリじゃなくクリエ。小さな小さなモブリの女の子。
そうだ、ちょっと聞きたい事を思いついたぞ。

「あっそうだ。なあ日鞠、小さな子がどうしても行きたい場所ってどこだと思う？」
「なにその質問？　唐突だね」
「はは、まあ良いから考えてみてよ」

確かにちょっと唐突に振ったかな。でもさ、そう言えばずっと気になってた事でもあったんだ。どうしてクリエが月を目指すのか？
いや、それは本当に月なのか。
目的があるのはそうだけどさ、それがどこから来てるのかとか……色々と気になってた。まあ、プログラムがそう組まれてるとかだと、夢もロマンも無いけど……ＬＲＯってどこで何か起こってるか分からないからな。
ただゲームとしての事だとも、僕にはあんまり思えない。そういうＬＲＯに僕が触れ続けてるせいかもしれないけどね。

他の人たちに取ったら、別にそこは設定だからで済むのかも知れないけど……僕はホントゲームとあんまり思ってないからな。やっ

ぱりそういう所にも何かがあるかも知れないじゃん。
日鞠は少しの間考える素振りを見せたかと思うと、人差し指を立てて自信ありげにこう言った。
「そんなの簡単だよ。まあスオウには分からないかもだけど、一般的には家族の所かな。小さな子は親元が一番安心するものだもの。きっとその子がどうしてもそこを目指すのなら、その場所にお父さんとお母さんが居るんじゃないかな？」
「……そうだな。それなら納得出来るかも」
確かに僕にはちょっと分からないけどね。親になんて会うのは後一生の内、三回くらいで済ませたい位だしな。でも普通はそうじゃない。
日鞠を見てきたからそこら辺は理解できる。こいつの家族は暖かくて優しい。そこには春の日差しの様な温もりがいつだってあった。
僕にだって分けてくれたしな。家族ってのは一緒にいたいものなんだよな。クリエがどうしてもあの空の更に先を目指すのも……そんな温もりを求めてるからなのかも。ノエインが家族は居ないって言ってたしな。誤って月から落ちてきたのかも知れない。
親を求めるのが子供の普通の心理。
「今度はＬＲＯで迷子でも見つけたの？」
「まあ、そんな所だな。だから連れて行ってやらないといけないんだ」
幾ら遠くても、関わってしまって託されてしまったら、もう投げ出すことなんか出来ない。それにこれは自分の為でもあるしね。呪いのことは……日鞠に言わなくて良いよな。
余計な心配はかけたくないし。こいつはやっぱりいつだって笑っててくれないと。それだけで僕の世界は回るんだからな。結局僕は、

こいつが泣くのが一番怖いから、帰って来なきゃと思うわけだよ。

「そっか、それなら一つ忠告してあげるよ。迷子は手を離したら直ぐどっかに行っちゃうから、ちゃんと掴んでて上げないとだよ」

「ああ、それはもう良く分かってる」

もうちょっと早くに聞きたかった忠告だな。けどこれから離さなければ大丈夫だろう……きっと。今の状態も離したと成ると微妙だけどね。

僕がどうなんだろうって顔をしてると、隣で日鞠の奴がクスクスとなんだかやけにニヤケて笑ってる。何なんだ一体？

「ううん、スオウ小さい子苦手だとか言ってたのに、案外そうでも無いのかな～て。まあでも基本スオウは困ってる人がいたら放っておけないお人よりだからね」

「それ……お前にだけは言われたくないんだけど……」

学校に止まらず、町内中のお助けマンみたいな奴に言われたくない。僕はそこまで無鉄砲じゃないっての。それに日鞠ほど、誰かの役に立ちたいとも思ってない。僕は僕のわがまま、エゴで動いてるんだ。

セツリの事だって、クリエの事だってな。

「あはは、私は別に誰かを救ったりとかしたこと無いよ。命だって懸けてない。それじゃあきっと偽善なのかなって？　スオウの方がよっぽど優しいよ。

誰かの為に命を懸ける。それはきっと、誰でもが出来る事じゃない。それに……」

「うん？」

それに……の後が良く聞こえなかった。口は動かしてたけど、声のボリュームは蚊の鳴く程だった。なんでそこだけ意味深に小さくしたんだ？

僕が日鞠を見つめてると、日鞠はカラッと笑ってこう言った。

「もう、何見つめてるの。はいはい、私に見取れるのはそのくらいにしておこう。私はまだスオウだけの女じゃ無いからね」

「何いってるんだお前……」

僕のって……何だよそれ。そんな事したら、学校中の男子……だけに限らず女子や教師も入れてフルボッコにされそうだぞ。

今でも幼なじみってだけで相当疎んじられてるしな。しかも日鞠は何かと僕にかまけるし……それが逆恨みとして僕の下駄箱に吐き捨てられるんだ。

今はその程度だけど、もしも……もしも付き合うとか成ったら、僕の席は学校から消えるかも知れない。マジで日鞠の人気は異常だもん。

それは小学校も、中学校もそうだったけどさ……高校でもそうなるとは……少しは落ち着き始める時期だろ。進路とか将来とかを考える時だし。

でもだからこそ逆に、現実から逸脱してそうな日鞠のカリスマ性に魅せられたのかな？　まあ勉強も運動も出来るってだけじゃ、ああはならないんだろうけど……それこそ持って生まれた物の違いって奴だよな。

なんか日鞠ってただ何となく見てるとムカつくよな。その後光が指してるような性能。ホント普通に生きてるだけじゃ絶対に敵の方が多そうなのに……こいつは上手くやってるよ。

僕達は揃ってリビングから廊下へ、日鞠の奴はそこから玄関の方へ歩くから、今日はもう帰る様だ。

「今日もなんかあるのか？　最近忙しそうだよな？　せっかくの長い休みなのに何やってるんだよ？」

僕は靴を履いてる日鞠にそんな声を掛ける。

「何ってそれは言えないかな。それに休みだからこそだよスオウ。スオウだって普段出来ない事やってるじゃない。私も普段出来ない事をやってるの。

てかスオウ、長い休みって言ってももうそんなに無いんだからね。それに今年は最後の日に秋徒と二人して私の宿題写すのは無しだから。その日も私出かけるからね」

「何だって！！　お前、それは僕達に死ねと言ってる事と同じだぞ。それに別にただ写すだけじゃないじゃん毎年。ちゃんと考えさせる癖に……今度は全部を自分一人でしろってのか！？」

なんて殺生なやつだ。長期休暇終わりに面倒な事に成るじゃないか。

「言っとくけど、みんな普通はそうだよ。スオウはやらないだけなんだから、頑張ってみれば良いじゃない」

日鞠は信頼を込めてそういってくれてるんだろうけど……僕は別に出来る方でも出来ない方でもない。中間な奴なんだ。だから日鞠の様に「三日もあれば十分」なんて言えないよ。

てか毎年、一学期に取りこぼした箇所を、日鞠に補って貰うのが目的なのに、秋徒と二人でしたって効率半減……いや、寧ろ一人の時より悪く成りそうだよ。

「僕にはそんな事より大切な事が……分かってくれてるだろ？」

「分かってるよ。でもだからって蔑ろにして言い訳じゃない。それはそれ、これはこれだよ。自分だけが頑張ってるなんて思わない。部活動やってる子だってちゃんと両立してるよ」

部活動なんかと、命のやり取りを一緒にされてもな。まあ真剣にやってる度合いは違わないんだろうけど……こう、のし掛かる物が違うと思うんだけどな。

靴を履き終わった日鞠はつま先を地面にトントンして、背中を向ける。その時、長い三つ編みが波打つ様に翻った。

「それじゃあ晩ご飯がいらない時は、ちゃんとメールしてよね。作ってからやっぱりいいやは無しだから」

「はいはい、了解。そっちも程々にしとけよ」

僕は一気に憂鬱な気分に成ったから、生返事しかしなかった。けどまあ体の心配はしてやるよ。

「分かってる。でも私は頑丈だから。それじゃあね。いってきまぁす」

日鞠はドアを開けて眩しい外へと出て行く。そんな背中に「いってらっしゃい」を告げるけど、僕の家からそれを言うのもなんかおかしいと思った。まあ深くは気にしないさ。既に日鞠の家の様でもあるしね。

台所とかなら、僕より勝手知ったるだろうし。これでここには僕一人だな。さてと、僕も準備しないとな。

燦々と照りつける太陽が、ここまで殺人的に活動してるのは、きっと人間に恨みがあるんだと勝手に思う。吹く風までもねっとりと

した熱気をはらんでて、もうモワってしちゃうよ。モワッて。
僕は今、駅へ向けて歩を進めてるんだけど……この暑さは中途半端な熱魔法なんかよりもよっぽど効くな。毎年経験してる筈だけど……どうやったって慣れないよ。
やっぱり暑い物は暑いんだ。

「たく……こんな暑さの中呼び出しやがって、何の用だよアイツ」

僕はブツブツ呟きながら駅を目指す。なんだか車から出る排気ガスにも文句を言いたいな。たく、化石燃料が後数十年しか持たないとか言ってる割には、どこもかしこも車はうるさいよ。
そろそろ全部電気自動車に移行しろ。いつまで化石燃料にへばりついてる気なんだか……きっと周りの人達だって同じ様な事を思ってる筈。すれ違う人達も暑さに参ってないわけないだろうしな。
まあなんだか子供は元気に走り回ってるけど……外で遊ばなく成ったとか言うけど、案外そうでもないよな。確かに今は選択肢が増えたから、外で遊ぶ事も減っただろうけど、全国の子供がそうなわけない。
沢山の人達とすれ違って、肌を刺すような日差しの中、僕はようやく駅前へ。

「おお～いスオウ！」
「うわ、暑苦しい奴」

駅の前で元気に手を振ってる奴が見える。僕よりもガタイがよくて、背も高くて、男っぽいから暑苦しい秋徒の奴だな。何でアイツ、わざわざ日差しの下に居るわけ？
なんか気持ち悪いんだけど……この町の駅はまだ大きいし駅の中にだって涼しい場所はあるだろうに……それにわざわざ人通りが多いところで名前を呼ぶなよ。

恥ずかしいじゃん。まあ誰も気に留めてなんか無いだろうけどさ。

「なんでお前は俺の顔を見て、さらに気分が萎えてるんだよ」

「萎えるって……自分の姿を確認しろよ」

取り合えずどこか涼しい場所に行きたいな。コンビニでも良いからさ、涼を取りたい。なんかこのままだと、溶けるんじゃないかって思うもん。

「俺はいつも通りだけどな。どうせＬＲＯで無茶ばっかりしてるから、こっちで気だるいんだろ。それよりもほら、行くぞ」

いつも通りで十分暑苦しいだよお前は――と言おうとしたら、既にさっさと歩き出す秋徒。何々、どこ行く気だよ。僕は取り合えず後を追って駅構内へ。秋徒の奴はさっさと改札も通りやがった。

しょうがないから僕も携帯翳して改札を通る。これって切符を買う手間は省けるけど、どこに行くか分かってなくても通れるのはどうなんだろう。

まあやっぱり便利なんだけどさ。駅のホームは案外ガランとしてるな。やっぱり時期的に帰省してる人が多いんだろう。取り合えず我慢の限界だから、構内に設置してある自販機でジュースを購入。喉を潤しながら僕はしきりに時計を気にしてる秋徒へ訪ねる。

「で、どこへ連れ出す気だよお前。このタイミングで遊びに行こうぜとかじゃないよな？」

「違うって、でもほら……たださ、まだ二人っきりで会うのはハードルが高いって言うか……」

ああ、そう言うことか。これなら遊びに行く方がまだ気楽だったかも。僕は秋徒の野郎の様子で察しちゃったよ。こいつのこの何と

も幸せそうで、落ち着きがない様子……こっちからしてたらただ気持ち悪いだけだけど、これってつまりは愛さんと約束してる訳だろ。
どう考えても一人でいけや、と言いたい。向こうだってそれを望んでると思うしな。

「はあ、僕は邪魔者にしかならなそうだから帰っていいか？」
「違う！　そんなんじゃ無いって！　言っとくけど二人っきりのデートが怖いとかじゃ無いんだって！」

背を向けた瞬間にガツッと肩を掴まれた。なんだかまた、随分と必死だな。

「じゃあ何なんだよ？　デカいだけで小心者の秋徒君？」

一応理由くらいは聞いてやるよ。親友だからな。

「今日はほら、急にこういう事に成ったじゃん。ＬＲＯに入れないからさ……ちょっとガイエンの奴の見舞いにでも行こうって事になってさ。
向こうも今日はＬＲＯの為に空けてたみたいだし……暇に成ったからって事で……だから全然デートとかじゃないんだ」
「ふ～ん」

まあ確かに、そこまでならデートには成らないだろうな。けど……その後はどうだろうか？　お見舞いにこんな朝方から行って、それでおしまいな訳無いだろう。その後を考えてるんじゃないのかこのツンツン頭。
実はかなり想像を膨らませてると僕はみてるね。きっと昨日は嫌らしい想像ばっかりしてたに違いない。

「だから、どうせならお前も誘ってさ、だって気になるだろ？」
「お前たちの関係なんて別に興味ないけど、上手くやってるんだろ？」
「俺たちじゃねーよ。摂理だよ摂理。なんか拒否られて一人じゃ行きづらく成ったんじゃないのかな～って思ってさ。こうやって誘ったんだよ」

はっ……とんだ余計なお世話だな。別にＬＲＯで拒否られたって、こっちのアイツは眠り姫の如く眠ってるだけだ。気まずくなんか別に無い。何も話せないんだからな。
そうこう話してる内に、駅に電車が流れ込んできた。空気を排出するような音と共に開くドア。そしてけたたましく鳴るベルの音で発射を知らせる。
人の姿が流れていく。そして町も流れていく。結局目的地はあの病院って事で、深い溜息が出る。まあちょっとは、そりゃあちょっとは行きづらく成ってたからな。
だって考えずには居られない……摂理を見てたら、いろんな事。でもこっちで何を言っても届かないから……やっぱりただ辛くなるだけなんだよ。

目的の駅で電車を降りて、改札を出る。するといきなり目の前で立ち止まる等辺木にぶつかった。なに改札を出たところで立ち止まってるんだこいつ？　邪魔にも程がある。
まだ僕には良いけど、知らない人達の迷惑だ。
「おい秋徒、邪魔だからさっさと――ん？」
なんだか虚ろな目で前方を見つめてるな。この虜にされたような目をこいつが向ける相手って事は……僕はその視線の先を追う。

するとやっぱりだけど居た。秋徒とお付き合いされてる愛さんだ。いや、確か本名は『藤沢　慈愛』だったっけ。でも僕や日鞠は最初から愛さんだったから、これからも愛さんなのだ。
てか、この駅は人混みもそれなりなのに一瞬で見つけるあたり、秋徒がどれだけホの字かって事だな。彼女しか見えてないんじゃないのかって感じ。
取り合えず見取れるだけの秋徒を蹴り飛ばして、愛さんの方へ。そしてさっさと声かけろって視線を飛ばす。

「お……おう」

なんだか付き合ってる割には色々と進んでないみたいだな。まあレベル高いのも分かるけどね。愛さんはどう見てもお嬢様って感じを全身から放ってるもん。ふわりとした涼しげな服に、今日は生足をこれでもかって強調してる短いパンツで、足元は紐が絡んだようなヒールの靴を履いてるよ。まさに美女だね。
それに対して、秋徒はしがない床屋の息子で服装はいつもと変わらないTシャツとGパン。しかも年下。色々と大変そうだよな。

「や……やあ、お待たせ」
「ブッ！！」

そのぎこちなさに思わず吹き出した僕。本当に上手くやってるのか？　そう心配するほどだ。でもそこは彼女が上手くリードしてくれてるみたいではあった。

「秋君！　あ、それとスオウ君も。ごきげんよう。今日は暑いですね。秋君汗がなんだか凄い事に成ってますよ」

うむ……なんだか目の前ので色々と大変な事が起こってる。まず、

ごきげんようなんて挨拶は初めてだ。それに秋君って呼んでるんだね。そして愛さんが至近距離で汗を拭ってやってもきっと意味はない。

なんだか見せつけられたな。

「だ、大丈夫だからさあ行こうか」

「はい。あ、そうだ。お花を買っていきましょう。病室が寂しくない様に」

花ね……確かにそれも良いのかも。二人が花を選んでる間、僕も違う花を見てた。

辿り着いたいつもの総合病院。僕達はそれぞれ別れて病室へ。僕は摂理、秋徒達はガイエンの病室だ。そしてそれぞれ手には花を持ってた。結局は買ったんだ。花なんてわからないけど、この季節らしいのをさ。

静かな廊下を歩いて、ガラリと病室のドアを開ける。並んだ二つのベット。差し込む日差しが銀色に輝いてる様に見える。

そして日差しの中にそれはあった。

「向日葵……」

太陽を目指して伸びるこの季節を象徴する花。暑さに負けず、風に負けず、真っ直ぐに伸び続けるこの花が僕は好きだ。

でも先越されたみたい。一体誰が？　けどきっと僕以外にも、コイツの帰りを願ってくれてる人が居るって事だよな。

向日葵（後書き）

第二百三十六話です。
まだ続く日常編。長い一日に成りそうです。この機会に色々とリアルの方の関係者を出したいのです。それにやる事もあるし。もう少しお付き合いください。ここが終われば後は、休んでる暇なんて無くなる筈ですから。
てな訳で次回は、金曜日に上げます。ではでは。

遠くない日（前書き）

向日葵を花瓶に加えてると、看護士さんがやってきた。その分には別にいつもの事、彼女にとっても定例事だろうけど、看護士さんは僕を見るなり嫌な事を聞いてきた。

それは摂理を救えるかどうかの事。本当ヤな事だ。そしてそんな嫌な事を聞く看護士さんは更に心を?き毟るような言ったよ。

遠くない日

花瓶の向日葵に自分のを足す。よくよく考えたら、自分で花瓶って用意してない。だって考えたらさ、花を持って行くシーンとかは色々とドラマとかで見るけど……てか普通にリアルでもやるわけだけど……花瓶って病院に常備されてる訳じゃないよね？

そりゃあ一個くらいは病室にあるだろうけど……それが既に使われてる場合、花瓶は自分で持ち込む物なのか？

「まあ、そんな多く買ってなかったから良かったな」

僕はそう言いながら向日葵が事前に差してあった花瓶に、自分が買った向日葵を加えてく。先のも数本くらいだったから余裕があって助かったよ。

太陽を目指して伸びる元気な花。真っ直ぐ成長する向日葵には願いを込めたよ。ほんといい加減真っ直ぐに正面から向き合えってな感じの願い。そして生きろって願いだ。

堅くなに目と耳を閉ざし、どんなにリアルから逃れようとしたって、コイツはまだここに居る。もうこっちでは何も見たくないし、聞きたくも無いんだろうけど……今度目を開けたら、今までとは違う世界にきっと成ってるよ。

もう一人じゃない……僕がそう言ってやる。真っ先にさ。それにきっと僕だけじゃないと思う。秋徒だって日鞠だって、きっと友達に成ってくれるだろうし、ＬＲＯで協力してくれてるみんなだって多分気にしてくれるよ。

もう閉じこもる必要なんてきっとない……

「だから、それをちゃんとわからせてやる」

白いベットに横たわる眠り姫に向かって僕はそう言った。摂理のリーフィアはちゃんと稼働してるっぽいな。流石にこのサーバーダウンで都合良く意識が戻ってる……なんて事は無かったようだ。

そしてそれは、摂理の隣で眠り続けてる人も同様だ。並んで眠ってるもう一人は当夜さん。フルダイブシステムの開発者でＬＲＯもこの人が作ったような物だと言っていいだろう。

そんな凄い人だ。この人を助けるのは摂理以上に難しいのかな？ＬＲＯでは見ないし……でも、この人もこのままじゃダメだ。

たった一人の家族、ある意味当夜さんを先に戻せれば、摂理もこちらに戻りたがったりするのかも。それこそ本当の意味で、一人じゃなくなるしね。

家族はどこまで行っても家族だ。僕が色々と考えて摂理の横顔を眺めてると、ドアがガラリとスライドした。そこから現れたのは白衣に身を包んだ看護士さん。

まあここには早々一般の人は来ないからね。てか、本当はこれない様にしてあるんだっけ？　僕たちは関係者だから顔パスで入れるけどね。

「また君か。どうなのかな、お姫様は救えそうなの？」

部屋に入ってくるなり、そんな事を聞かれた。まあ僕も何度か入院してるし……知らない人ではもうないよな。

「まあ、どうにかして連れ戻してみせますよ」

「そっか、そうだね。君には頑張って貰わないとだよ。勿論今だって十分に頑張ってるのは分かってるんだけど……でも本当に……」

んん？　この明るさが取り柄みたいな人がなんだか珍しく気が重

そう。どうしたのかな？　何かあった？　失敗のしすぎは今更だし……やっぱり何か摂理に関係あることかな？

「どうしたんですか一体？　何か不味い事でも？」

僕は不安になりながらも、それを口にした。だって気になる。すると看護士さんは、何度か言うかどうか迷った様な素振りを見せつつ、最後には自分で何かを納得させて、話してくれた。

「えっと……落ち着いて効いてね。実は摂理さんの脈が最近弱まってるの。それに伴って時々発作とかも出るように成ってる……彼女が眠り続けてもう三年……三年もただ眠ってるだけじゃ、体の機能はどうしたって低下する。

あのねスオウ君。こんな事言うのはどうかと思うけど、彼女に残された時間は、このままだとあまり永くはないわ」

耳を通ったその言葉が、頭の中を巡り巡ってる。反響をするように頭に響き、僕の瞳孔はきっと揺れてた。拳は強く握ったし、歯だって強く噛みしめた。

力を入れれる所にありったけの力を込めてたと思う。永くない……それは分かってた筈のことでも有ったはずだ。でも……三年も眠り続けてるからこそ、ＬＲＯから連れ帰れればどうにか成ると思ってた。というか、そこまで早くに死が差し迫ってるとは、思わなかった。

そりゃあいつかは、こういうことに成ってもおかしくなくないとは思ってたけど……思ってたけどさ……いつかは今日や明日や、少なくとももうすぐって訳じゃないじゃん。

僕は揺れる瞳孔を隠すために俯いて訪ねた。

「どれくらいですか？　あとどれくらい、摂理には時間が有るんですか？」

点滴が一定の間隔で落ちていく。でもそれだけじゃ、摂理を引っ張りあげる事は出来ない。それが出来るのは僕だけ……

「具体的な所は分からないけど……後何回か発作が起きたら、心臓が止まることが有るかも知れないと、先生は言ってたわ」

「そんな……」

何回かって、マジでそんなもんなのか。見た目では分からないけど、摂理の体は相当限界にきてるって事か。確かに細いもんなコイツ……ガリガリだよ。

夏の日差しが激しく照りつけてる。きっとだから、頭が異様に熱いんだよな。この足下がふらつくような感覚はきっとそのせいだよな。

「でも、どうしてかしらね。一時期は発作もあまり出なくって顔色も良いときが有ったのに……最近はなんだか発作も感覚が短くなってきて……まるで生きることを止めたいみたい……ってこれは聞かなかった事にしてね。

ただの独り言だから。さあて仕事仕事」

そう言って看護士さんは摂理に近づいてなにやら始めた。きっと今日の摂理の状態をチェックしたりしてるんだろう。

てか、生きることを止めたいみたいね……痛いところを突かれたよ。やっぱりこれは……精神の影響が体にも出てるって事なんだろうか？

今の摂理はもう自暴自棄も同然だ。リアルに希望を見出せなくて、ＬＲＯに留まる選択をした。アイツはもうこっち側で、生きること

をしようとしてない。だからこそ、肉体は言ってしまえば死のうとさえしてる。

魂が無くなった入れ物は、永くは持たない。これもきっと僕のせいだな。僕が失敗したあの時まではまだ、リアルに見切りをつけてなんか無かった。今までもずっと、心のどこかでは帰りたい気持ちがあったんだろう……だからこそ、こんな永く持ったんだ。

でもあの場所で……エデンで摂理は諦めた。いや、拒絶したんだ。僕を拒絶して、リアルを拒絶して……見切りって奴をつけられた。

だからこそ、ここ最近は発作が頻繁に起こってるのかも。僕の気持ちまで沈んだその瞬間、病室に甲高いアラーム音が響いた。

顔を上げると、ベットで眠ってる筈の摂理が異様に胸を反らしてる。そして何回も続くそのアラームの度に、ビクンビクン反り上る。これって――

「先生発作です！！　桜矢摂理さんが発作を起こしてます！！」

ナースコールを押して、看護士の人がそう言ってた。そう、これが発作……画面の心電図が大きく成ったり小さく成ったり……心臓の鼓動を表すそれがなんだかとても怖く見えた。

あれが何も示さなくなったら……波じゃなくただの棒に成ったら……それはつまり――

「摂理！！」

僕は近づいて両肩を掴む。強く強く掴んで、そしてベットに押しつけた。

「まだだ……まだ逝くなよ。そんなの絶対に許さない。認めねえ！」

摂理の鎖骨あたりに僕は顔を持ってってた。押さえるのに夢中でいつの間にか近づけてたんだ。アラームが世界を支配してるように聞こえてた。

止まれ止まれと僕はそんな音に願い続けてた。するとその時、僕は大きな腕に強引に引き離された。強引だったからそのまま僕は床に尻餅を付くことに。

どこのどいつだとか思ったけど、それはどうやら医師の様だった。急いで駆けつけてくれたのだろう。数人のスタッフも一緒……何も出来ない僕の変わりに、彼らが摂理を助けてくれる……その筈だ。

けどそう思った瞬間、胸が一瞬痛んだ。何かに刺された様で、何かにかきむしられた様でもある痛み。騒がしく動いてる医師や看護士の人達とは違って、僕はただこの場で俯いた。

俯いて、願う事しか出来なかった。この時僕は思ったよ。ああ、今の僕は命を繋ぐ点滴以下だなって。

暫くすると、騒々しい音は収まり、響いてたアラーム音も今はいつも通りの安定した脈へと戻ってた。だけど僕はまだ床に座り込んだままだった。

なんだか立ち上がれない……立ち上がる気に成れない。そんな感じだった。自分がけたたましい蝉の声にとけ込んでいきそうな、そんなイヤな気分。

安心出来てる筈なのに……それを感じれない。するとその時、頭をいきなりかきむしられた。

「おい、もう大丈夫だって言ってんだろ。聞いてるのかガキ？　ああ！？　たく、てめえが死んだような面してるんじゃねーぞ」

おいおい、どこのチンピラだよ……と思いながら顔を上げる。す

るとそのチンピラは白衣を着てるんですけど。何？　またこいつ……これでも医者か？

「おいガキ、お前今、これでも医者か？　とか思っただろ？」

「別に……そんな事は……」

なんかバレてるし。まあきっと言われ成れてるんだろうな。

「はん、まあいい。俺は寛大な心を持ってるからな。そしてありがたく思え。俺が居たからこの子はまだこうして生きてる。

おらおら、ありがとうございますはどうした？」

「ちょ、ちょっと先生。おふざけがすぎますよ」

おふざけ？　不謹慎とかだろこれは。こんなのが医者とは日本の医療も終わりが近そうだ。看護士の人に言われても懲りた様子は全くないし……

「何を言うか。医者とは感謝されてなんぼのもんだ。それが明日の俺の糧になる。そしてその糧で俺は更に多くの命を救う。

そうやって俺の世界は回ってる」

凄い考えの奴だな。それは傲慢なのか思いやりなのか分かりづらいんだけど。まあ誰も損はしなさそうだけどさ。ある意味真面目なのか？　でもそれなら……

「ありがたいと思ってます。摂理をここで死なせないでくれて……でも医者なら、コイツを救ってやることは出来ないんですか？

今の繰り返しで、命を救うなんて貴方は言えるんですか？」

それは結構失礼な物言いだったかも知れない。でも何も出来ない

ここでの自分に苛ついて、そして久しぶりに触れた誰かの死が怖くて……そういう風に言う事しか出来なかった。
儚いんだよ。今摂理の命はとても儚い。コイツに差してある管の一本でも抜いてしまえば、今の摂理は簡単に逝ってしまう……一滴一滴垂れる点滴一つにしても、きっとそう。
油断したら手からこぼれて地面に叩きつけられて割れてしまう水風船より儚いよ。

「はん、お前に良いことを教えてやろうか？　どんなに天才な俺でもな、全知全能で無ければ万能でもない。まあどっかには何でも出来るそんな奴も居るのかも知れないが、基本天才なんてのは一つの事にしか徳化してない物だ。
俺は天才的な医者だが、引きこもりを助ける精神科医じゃない。子供専門の小児科医ではあるけどな。
そしてこの腕が神の腕と呼ばれ代物――いわゆる『ゴッドゥハンドゥ』だ」

そう言う医者は、取り合えず自分に並々ならぬ自信があるらしい。とにかくゴッドハンドの発音がムカつくけど……なんでそんなに舌を巻くんだよ。周りの看護士さん達も痛そうな目でアンタを見てるぞ。
てか、自慢じゃ無ければ何を言いたいんだっけ？　ようは自分じゃ救えないって事なのかな？

「そのご自慢の腕が、今まさに小さく可憐な命を取りこぼしそうじゃないですか」

僕のそんな言葉に、医者はチッチッチと立てた人差し指を顔の前で振る。なんかイライラが止まらないぜ。

「それは違うな。俺がこの子を見る限り、俺はこの腕に賭けて旅立たせたりはしない。冥土への通行証は、この手が何度でも奪って置いてやろう」
「何度でもって……後数回発作が起きたらやばいんでしょう？　確実に命を繋ぎ止めておけるなんて、言っていいんですか？
さっき一つの事しか徳化してないから天才だって言ってたじゃないですか。その手は、ゴッドハンドとか呼ばれてるのなら、外科手術の方に徳化してるんでしょ？」

大体そんな風に呼ばれるのは外科医とかだよな。精神科医とかがゴッドハンドとは呼ばれないだろうし、内科医の人もあんまりピンとこない。
ゴッドなんて付くのは、目に見えやすいからだろ。で、比べやすいからとか。だけど僕のそんな言葉がなんのその――的に、医者は自分の手を見せつける様にしてこう言った。

「それも勘違いだな少年。教えてやろう、この我が手に秘められたパァワーの真実をな。俺は確かに外科手術で多くの子供を救ってきた。
だがそれでも越えられない一線の数字というのはある。全ての患者を俺たち医者は救える神ではないからだ。まあもっと言えば、命とは始まったときから少しずつすり減ってる。それを取り戻す事は絶対に出来ない。
俺たち医者に出来るのは、命を繋ぐこと。俺が誰よりも多くの命をこの病院で実際に救ってるのは、この手が命を掴み繋ぐからだ。ゴッドゥハンドゥは伊達じゃないぜ」

命を掴むって……それこそよく分からないんだけど。なんだか中二病的な痛い医者だな。ゴッドハンドに安心するどころか、逆に不安になってくるよ。あ、ゴッドゥハンドゥだっけ？

「じゃあそれは……何回だって有効なんですか？　絶対に……掴み損ねないって言えるんですか？」

僕の言葉にその医者は目を反らして遠くを見る。

「イヤな事を聞くガキだ。絶対なんて言葉ほど嘘っぽい言葉は無い。俺はそんな言葉は使わん！」

「それって……」

「だが、出来る限りの事をやると言ってやってるんだ。お前はどうだ？　それが出来る事をやってる奴の顔か？　言っておいてやるがな、花なんて別に慰めになんかならねえぞ。

何かをしたと示したいだけだろ。出来る事がある奴は出来る事をやるべきなんだよ」

何患者を思っての行動を否定してんのこの医者？　普通誰でも花くらい持ってくるだろ。出来る事をやれってのも分かるけど――

「今はＬＲＯはサーバーダウン中なんですよ。それにこれだって僕に出来る事でしょう」

摂理にはあんまりお見舞いに来てくれる人なんて居ないんだしさ。無意味な訳ないだろ。ここに僕が来てることに気付きもしなかったって、別に気付いてほしいわけじゃないんだよ。

「貴様は言った。こんな事の繰り返しでこの子を助けられるのか？と。ああ確かに、こんな事の繰り返しではこの子は助けられない。

幾ら俺がこの子の命を強引に掴んで繋げても、そう遠くない内に、体の限界は超えるだろう。何せこの子は生きようとしてないからな」

生きようとしてない……その言葉がイヤな感じで頭に……いいや、心に響く。アイツはこっち側に戻る事を諦めた。だからこそ、生きようとする事も諦めた。
ただただ、訪れる死の間際を悲しく無いように過ごそうとしてる。でもそれは……結局何も無いじゃないかと、僕は思う。
アイツはまだ生きれるのに、自分からその権利を放り捨てるなんて間違ってる。

「そして生きようとする気力を取り戻す事は、今の俺ではできん。俺もこの子一人に構ってる訳にはいかんのでな。このゴッドゥハンドゥを待ってるガキはまだまだいる。
本当なら俺も世界のどこまでも駆けつけたいさ。俺は人だが、全てを救うことを諦めてもいないからな。貴様どうだ？
俺の様に全てを救うなんて思わなくて良いぞ。俺は天才だからな。そしてお前は一介のガキだ。お前が失敗したって投げ出したって、そこに社会的な責任なんて無いだろう。
だが言っておいてやるよ。男が女を助けたいと思うのは正義なんだよ。それは世界共通でな。お前にはまだ、その気持ちがあるか？」

何……言ってやがるんだこの医者。そんなの――

「当然だろ。僕は摂理を連れ帰る事を諦めちゃいない」
「そりゃ良かった。今までのお前はどっか他力本願気味に見えたからな」

うぐ……確かにどうして医者の癖にと、アタってたのかも知れない。出来ない事があるくらい分かってる筈なのに……そしてこれは僕にしか出来ない事だって分かってるのに。
逃げ出したかったのかな？　本当は誰かの命を背負う事を重荷に感じてるのかな……いや、感じない訳はないか。だって命だよ。こ

の医者も言ったとおりにそれは一度無くしたら取り戻しようが無いものだ。
世界できっと、一番価値があるもの。命という宝石……命と言う奇跡。脈打つそれを手にしなきゃいけないプレッシャー。
何回だって言われたよ。そこまでする必要無いとかさ。でも選んだのは自分で、間違ったのも自分で……けどそれでも、連れ帰りたい……諦めたくないと思ったのも自分だ。
それなのに今更他人事になんか出来るわけないし、して良い筈もないよな。

「俺もまだ残念ながら全てを救えないし、この子を救えるのかも知れないのはお前だけなんだろ？　しょうがないから譲ってやるよ。
お前は心を救ってやれ。そしたら後は……体の事は医者の仕事だ。一人で出来ない事は二人でやれってな。それでも駄目なら三人で、それでも駄目なら何十人だって良いんだよ。
命の前では、俺のこのプライドだってボロ雑巾の様なもんだ。だから期待してるぞ少年。男は女の為にボロボロなる方が格好良いってな」
「そりゃどうも……」

ボロボロの度合いが半端無いけどね。チンピラ相手に喧嘩する程度じゃないんだよ。こっちは命賭けてやってんだ。だからバシバシ背中を叩くのは止めてほし――

「つっ！」
「お、ちょっと強すぎたか？　いや……ちょっとお前体触らせろ」
「触らせろって――ええ！？」

セクハラ発言だよ今のは。てか、同意する前に体触ってきてるし。

「どうしたんですか先生？」

看護士さんの言葉も無視して、僕の背中辺りをやたらと触る医者。そして「脱いでみろ」とまで言い出しやがった。

「何故に！？」

「いいから脱げ。ただで診察してやってるんだからありがたくな」

なんと言う横暴な医者だ。僕はしょうがなくシャツを脱ぐ。別に表面上は何も無かった筈だけど、少なくとも寝る前に風呂に入ったときは別に何も……

「お前、これ痛いか？」

「いっっっっっっってぇえよ！」

何した今？　背中の肩胛骨辺りを押された様な。そしてそれからも所々を同じようにされた。

「じゃあ最後に聞くが、その右腕の模様は何だ？　流行ってるのか？　随分薄いが、良く見るとわかるぞ。流石に学生なんだし不味いだろう」

僕はその言葉に慌てて腕を見る。確かに見える……うっすらとだけど、浸食が進んだ呪いの模様が。マジかよ。

「これはなんて言うか……」

「まあそれはどうでも良いんだが、お前また無茶な戦い方をしただろう？　まだ前の傷だって完治した訳じゃないんだぞ。あんまり無茶すると、お前の方が先に壊れるぞ」

流石医者……腐っても患者のことはわかるんだな。そういえばイクシード3を使ったんだっけ。今回はそこまで長くも無かったから大丈夫だったと思ったんだけど、どうやらそうでも無かったらしい。
気付かない所から体って壊れて行くものなんだな。でも良いんだ。この医者だってさっき言ったしな。だから僕も、格好いい笑顔を作って言ってやろう。
「良いんだよ。この位の無茶は命張ってりゃ当然だ。それに、男は女を守ってボロボロに成る方が格好良いんだろ？」
「はっ、死んだらそれはただのバカなんだよ」

言われたな。でもそんなのも当然承知してる。だから死ぬ気なんて僕にはないって言ってんじゃん。それに何の為にあんた達が居るんだっての。僕は片目を瞑りこう紡ぐ。

「なら、体の面倒は頼むわゴッドハンド」
「生意気なガキが、医者泣かせなんだよお前等は」

そう言った医者は、面倒くさそうだったけど任せとけみたいな笑顔をしてたよ。

遠くない日（後書き）

第二百三十七話です。
スオウは本当は結構ボロボロで、そして摂理には時間があまりないお話です。ちゃんと時間は進んでる。だからこそ、このままじゃ残酷な未来しか来ない事がわかる。実際先に倒れるのはスオウか摂理かって感じです。
でもそれでもスオウは力を求めて歩んでる。それも摂理の為で、今はクリエの為。ついでじゃないけど自分の為。次回はまた別の場所に行くかな。
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

まだ見ぬ誰かの思い（前書き）

僕は結局色々と検査されることに。その結果としては別に、今直ぐにどうにかなる事でもなかったんだけど、もう一度釘を刺されてしまった。

やっぱりイクシード3は体に蓄積されるダメージが違うみたいだ。まあ色々と言われて病院を後にする僕ら。

そして今度は多分メインイベント。秋徒達はこの為に僕を連れ出したんだろう。

まだ見ぬ誰かの思い

摂理達の病室よりも薬品臭い診察室へと移った僕。なんだか今日はもうＬＲＯに入れないと知るや、あの医者が検査してやるとか言ったんだ。

こっちは普通に総合病院としての機能を行ってるほうだから、摂理達の病室とは違い、それなりにガヤガヤしてる。

聞こえるのが蝉の鳴き声だけじゃないんだ。実際、もう既にいろんな検査とかはやり終えてる訳だけど……なんか一人で待たされてる。

レントゲンとか色々やった。ＣＴＵとかも高そうなのになんかしてくれた。でもそこまでしてるから、こんな所で一人にされると不安に成るよな。

てか病院って基本気が滅入る感じ。僕も日鞠程じゃないけど、あんまり病気ってしないし、頻繁に医者の世話になるなんて……

「う……」

なんか思い出したくない過去がフラッシュバックしてきやがった。元が基本苦手なんだよな。この薬品の臭いもそうだけど、清潔に見えて雑多な感じも好きじゃない。

それになんか……待合室も基本僕は嫌いだね。なんだか暗くなる。基本誰しもが、体のどっかに不安を抱えて来てる訳だから、当然と言えば当然かもだけど……もっとマンガとか置いとけば良いと思うよ。

雑誌とかしか無いもんな。後は新聞とかか。もっと思春期の子供の事も考えて欲しいものだ。更に小さな子供用には遊び場があったりする癖に、年頃の僕らへの配慮が足りないよね。

なんだか病院に対する不満を頭で巡らせてると、携帯が振動してるのに気付いた。携帯って言っても今の時代は、それはスマホなのだ。スマートフォン。

既に何年か前に昔の携帯――『持ち運べる電話』の方は縮小しちゃったからね。まあだけど、何年か経っても形はあんまり変わらない。

基本、四角くて薄く細長い感じ。まあなんとか個性を出そうとしてるのとかもあるけどね。僕のは普通の四角い奴だけど、日鞠のは本体分かれる。二つのスマホを持ってるのと変わらない感じ。

あれってどうやって繋げてるか知らないけど、一つにすれば普通のスマホの手のひらサイズよりも大きな画面になるし、分割すれば別々の事が出来るという優れ物だ。しかも持ち運ぶ時は、重なり合わせる。

元が薄いからそれでもポケットに入る厚さしかないのだ。ここまで来たか～とも思うけど、そろそろ立体映像が出てきても良いと思うんだよね。

映画みたいにさ。まあ既にＬＲＯの中ではそれは実現してるんだけど、あれはきっとＬＲＯのある場所事態が、電子空間だろうから出来る事何だろう。

リアルじゃ、まだまだ一般には普及しそうに無い。最近は妙に３Ｄが世間にとけ込んだ位だしね。それが普通ってな感じで。

僕はポケットから一般的な形のそれを取り出して画面を確認。どうせ秋徒とかからと思ってたけど、その予想は外れた。

「セラ？　何用だ――って、もしかして意外と早く復旧するとかの連絡かな？」

僕は胸に期待を募らせてメールを開いた。もしもそうなら、秋徒

達のデートを邪魔するのも悪いし、さっさと帰宅しよう。

「ん、なんだこりゃ？」

そう思ってたのに、開いたメールはなんだか正直期待外れ。てか訳わからん。メールの内容はこんな感じ。

【お天気ですね。殺人的な日差しにやられてない？　私はやられてます】

だから何だ！！　いいや、それよりも最初のお天気ですねも意味不明だよ。しかも何故か丁寧口調だし……余計に不気味さが増してる。

てか本当にセラかなこれ？　怪しいよ。しかもこれはどう返信していいのかわからない。突っ込めばいいのかな？　それとも何、ただの嫌がらせ？　ＬＲＯで出来ないからって、リアルにまで進出してきたの？　超迷惑なんだけど……僕は静かにメールを排除してポケットに戻したよ。

するとようやく医者登場。白衣姿に赤いネクタイ。青いチェック柄のシャツを中に着てて、頭はボサッとしてる自信過剰な中年だ。

いや、もしかしたらまだ二十代後半なのかも知れないけど……まあ大体三十のどっかだろう。

「待たせたな」

「ほんとに」

手に持った資料……いや、この場合はカルテなのかな？　それを机に置いて椅子へと腰掛ける。ほんと、やっとだよ。もっと患者を不安にさせないように努めて欲しい

「で、どうなんですか？　僕の体は」

僕は自分から切り出して話を進めようとする。すると医者は大きなため息を一つ吐く。え？　何それ……なんか不安が増すよ。

「結論から言って良いか？」

そんな真剣な声で、医者は肘を立てた手で目尻を押さえながら言う。おいおい、そんな考える人みたいな格好されたら、更に不安に成るじゃないか。

でもあんまりそう言うのは見透かされたくない年頃だから、僕は至って平静に「どうぞ」と言っておいた。その言葉を受け取って、医者は目の前のカルテを取って口を開く。

「まあ、まだ大丈夫だとは思うぞ」

「なんだそれ、もっと軽く言えよ。妙に神妙そうな雰囲気だすな」

全く、医者が患者の不安を煽ってどうするんだ。

「まあ、まだ大人しく聞いてろ。それにまだってつけてるだろう。これからも同じ様な状態でやっていくと、大丈夫じゃなくなるかもだぞ」

う……それは困る事態だな。

「まずはそうだな……体に疲労がかなり蓄積されてる。体の節々で疲労骨折おきかけてるぞ。入院でそれも解消された筈だったが……この短期間で一体何やったんだ？　異常だぞ」

「それは……まあ、ちょっと体に悪い力を使ったって言うか……」

しどろもどろな感じの僕。すると何かを察した医者はズイッと顔を寄せて来やがった。

「お前まさか、そのなんだっけ？　イクセント3だっけかを使ったのか？」

「イクシードだよ」

「そのイクシードを使ったんだな？」

近い近い……僕はコクコク頷いた。たく、秋徒が余計な情報を医者に告げ口するから、イクシード3は禁止されてたんだ。

「たく……一体ＬＲＯはどうなってるんだよ。実際ゲームの中で受けた傷とかが本体にダメージを与えるなんて医者としては納得出来ないんだが……目の前で起きてる以上、これがリアルなんだろうな。てか、使うなって言っただろうが。死にたいのか――いや、死ぬぞお前」

「断言するなよ！　そこはご自慢のゴッドハンドで繋ぎ止めろよな」

「死にたがりを助けるのは乗らないんだよな～」

最低の医者が目の前にいやがる。なに口を尖らせてふてくされた風にしてる訳？　苛つくぞその顔。

「だから僕は死にたがりじゃないっての。そもそもアンタ、それなら摂理の方がそうなのに文句言ってないじゃん。贔屓だぞそれ」

「野郎と美少女じゃ比べるべくもないよな」

ヤレヤレな感じで首を振られたよ。まじで最低だこの医者。容姿で贔屓してるよ。

「アンタは最低の医者だよ」

ズバリ言ってやった。

「お前からは金も出てないしな」

「善意だったんじゃないのかよ！」

善意を貫き通せよそこは。なんか途中でやる気無くしたみたいじゃん。たく、ろくでもない医者も居たもんだ。こんな奴の診察を受けてる人が居るのかと思うと、悲しくなるな。

「まあ、取りあえずオブラート3は使うなよ」

「おい、覚える気ないからって自分が知ってる似てる言葉で無理矢理言うなよな。許されないからな」

イクシードは僕の切り札なんだぞ。バカにして貰っちゃ困る。

「それにやっぱりその約束は出来ないかも。どうしたってそれが必要に成る時ってあるし。どうしてもの時は、僕は迷わず使う」

「今回使ったのもどうしてもだったのか？」

「それは……」

今回は何だっけ？　まあそう言えるとは思うよ。許せなかったんだもん。感情に左右されただけかも知れないけど……アイツはこの手で葬りたかった。それがこの程度の代償なら、別にどうって事無いな。

「どうしてもの時は、しょうがないとは認めてやるよ。生きるか死ぬかを決めるのはお前だしな。それに男にはやらなきゃ行けない時がある。

だけど吐き違えるなよ、命を削るほどの力って奴が、何の為にあるか。どうしてもやらないといけない時のどうしてもを見失ったら、お前まで帰ってこれなく成りそうだ」
「……」

なんか意外な言葉が耳に入ったからか、僕は目をパチクリさせてた。だってなんか心配されてる様な……

「何呆けてる。俺は天才だぞ」
「いや、そこは医者だぞ――だろ？」

天才が誰かの心配をしなきゃいけない事はない。医者なら患者の心配をして当然だけどさ。

「ふん、まあ俺の目が届いてる限りは無茶をしてもある程度は構わんさ。お前の無茶があの子を助けられるのなら、お前の命も安くは無いって事だろう。
その点は評価してやるよ。だからちゃんとこうやって診察してやってる。タダでな」
「はいはい、一応感謝しといてやるよ」

今まで安い命と思われてたらしいことには触れないでやるさ。

「まぁ、後は微妙に心音が弱い位だが、まあ気にするレベルじゃないな。頭の中も、外から見ただけなら別に問題は無いな」

う～ん、それってどうなの？　自分じゃよくわからないよな。心音が弱く成ってるってのは微妙に気になるけどね。呪いの影響かな？
リアルにまで進出してる位だし、何か影響が出ててもおかしくは

ないかも。

「今の所は体を休ませて置けと言う位か。まあだが、今入れないなら丁度良いな。せめて今日はゆっくりしておけよ」

「了解」

そう言って僕は立ち上がる。そりゃあこっちだってゆっくりしたいよ。でもただそうしてるのも不安なんだよね。時間は押し迫ってるし……実際気楽に家に居るだけなんて出来るかわかんない。

ドアの方へ歩いてる途中で、僕はそう言えば聞いて置きたい事があったのを思い出した。

「あのさ、あの向日葵って誰が持ってきたの？　摂理の方の花瓶にも入ってたから天道さんじゃないと思うんだよね」

天道夜々さんは当夜さんとガイエンの知り合いの社長令嬢だ。あの人は当夜さんの花瓶には花を生けるんだけど、摂理の方には生けないんだよね。

でもだとしたら……看護士さんが気を使ったとか？

「ああ、それはきっと藤堂夫妻だろう。確か昨日訪れた筈だ」

「藤堂……？　誰？」

僕は頭に疑問符を浮かべて聞き返す。だってマジ誰だよ。どういう関係なのそれは？　摂理とかって友達いない筈だろ。どんな関わりあいの関係なんだろう。

「元患者だよ。お二人は毎年、この時期だけ見舞いに来てるからな」

元患者ね……だけどどうして摂理のお見舞いに来るの？　入院中

にでも仲良く成ったとか？　でもここって一般には秘密の筈……んな訳無くない？
それに退院してもお見舞いに来るなんて、相当親しくないとしないだろ。

「夫妻とか言ってるけど、結構若いの？」
「まあ、二十代後半位だった気がするな。あんまり患者の事は話せんぞ。守秘義務があるからな」
「それは分かってるけど……気になったからさ」

そんな年が近い訳でも無いよな。まあめっちゃ離れてるって程でも無いけど……やっぱりイメージが浮かばない。

「なんだ？　嫉妬か？　自分だけがあの子に初めて受け入れられた筈だったのに――てか？」
「はあ？　別にそんなんじゃない。勘違いすんなよな」

何言ってるのこの医者。別に全然そんなんじゃないんだよ。そう……別にこれは嫉妬とかじゃ……むむむ。

「そう膨れるなよ。器量が小さいぞ。二人は辛いだろうが、感謝をしてそして本当に願ってくれてるんだ。自分達の分までってな」
「自分達の？」

良く分からないな。　それってなんかおかしくない？　助かってるのに自分達の分までって……それって辛い事を経験した人が、他の誰かに同じ様な目にあって欲しくないから言う言葉だろ。
ちょっと違うよな。だけど医者はそんな僕の疑問には答えてくれない。これも守秘義務って奴かな。変わりにこう言って、締めくくりった。

「ああ……まあ、あんまり気にする事もない。もう一年は来られないだろうしな。安心しろよ。お前はきっと特別だ。
それが良いことか悪いことかは、わからんがな」

なんか含んだ様な言葉。医者はニヤリとしてるし……それは未来に自分で決めるさ。
きっと摂理を助けれれば、良かったと思えるだろう。だからそんな未来を掴むために、頑張るだけだ。どうせならその藤堂夫妻の願いも背負ってさ。
全く全然顔も知らないけど、願いは同じみたいだから。僕はドアをガラリとスライドさせる。そして廊下側に出て一礼。

「……ありがとうございました」

最低限の礼儀を尽くして扉を閉めた。

（今度ここに来るときは、摂理を連れ戻してから……だったら良いよな）

まあまずはクリエなんだけどね。心の中でそんな事を思いながら歩き出す。広い廊下だよ。そしてそれぞれの診察室の前には、次くらいに呼ばれる患者さんが椅子に座って待機してる。
この中にはさ……命に関わる様な人も居るのかな？　いや、流石にこの中にはいないか。そんな重病人を普通の一般診療室に通す訳ないよね。勝手なイメージで。
僕は心の中でみなさんの病が治る事を、祈りながら広いロビーへ。するとそこには、秋徒と愛さんが居た。
どうやら待っててくれたみたいだ。

「待ってたんだ。別に二人でデートに繰り出しても良かったのに」
僕は二人の前に来るなりそう言った。すると秋徒の奴は真剣な顔してこういう。
「お前な、いきなり検査されると聞いてデートとか出来る訳無いだろ。そんな薄情な奴だって思ってるのか？　だとしたら傷つくぞ」
「ははは、悪い悪い。でも全然大丈夫だからさ。ほんとデートしてきても良いんだぞ。愛さんだって二人の方が嬉しいでしょ？」
僕はそう言って、秋徒の隣の美少女を見る。いや、年的に美女の方が良いのかな？　まあでもギリ十代位だったろうし美少女でもいいのか。
てか改めて二人を見るとさ……案外絵に成ってるんだよな。秋徒の野郎、実はオタクな癖して身長高いし、顔もムカつくけど良い方だからな。
オタクの癖に結構モテてるもんな。無駄に尖った頭が男らしいっちゃらしいのかも。でも確かに似合っちゃ居るけど、何度だって思うよな。
秋徒の彼女なんだな～って。街の床屋の息子が背伸びしちゃったな。絵には成ってるけど、服装はやっぱり残念だからね秋徒の奴。
でもこのアンバランス差も、見方によっちゃ初々しい感じが出てるとも言えるか。なんかうらやま――とは思いたく無かったけど、愛さんじゃ思わざる得ないな。
まあ協力したんだから、上手くは行って欲しいけどね。愛さんは僕の言葉に動揺したように視線を動かす。そしてはたりと止まった視線は、なんか自然と秋徒と目が合ってた。
「はわわっ……ええっと、それはイヤ……」
「イヤ！？」

パッと視線を外した愛さんの言葉に引っかかる秋徒。まあイヤと言われちゃね。けど愛さんは弁明するようにこう言うよ。

「あの違うの。イヤって言うのはイヤじゃなくてね。勿論秋君と一緒に居たいけど――ああ、一緒に居たいなんて私、そんな大胆な事……」

「いや……イヤじゃないなら何の問題も無いって言うか、嬉しいって言うか……」

何だろう……なんか花が二人の周りに散ってる様に見える。脳内お花畑だね。秋徒がバカみたいに浮かれてるのは承知の事実だけどさ、愛さんもそうだったんだね。結構常識人……じゃないか。

そう言えば初めて会ったときから結構おかしな人だったよな。行動も面白いし、でもこうやって見たらやっぱりあのアイリとは思えないな。

ＬＲＯじゃもっとしっかりしてるし、ここまでデレデレしてなかった。まあ良いんだけどね。

「え～と、やっぱり僕はお邪魔みたいなんで帰るよ。後は二人でごゆっくり。ああ後、誘ってくれた事は感謝するよ」

僕はそう言って出口を目指す。ほんともう、どう考えても僕はお邪魔虫の何者でもない。てか、自分的にこの二人に付き合ってるのは辛そうと思う。

なんか常に悪いと思うじゃんこれじゃあ。だからさっさと退散だ。

「あ、あの、待ってくださいスオウ君」

だけど何故か立ち塞がる愛さん。

「何ですか？　僕の事は気にせず、後は二人で楽しくやって良いんですよ」
「違うんです。そうじゃないんですよ。今日はそんな事をやるために秋君を誘った訳じゃないし、例えそうなら元からスオウ君は呼びません」
「……まあそうだろうね」

そんな見せつけられる様な事されても、反応に困るだけだしね。まあもう十分見せつけられた感はあるけど。

「そうだぞスオウ。今日は俺達はイチャイチャするために集まったんじゃないんだから帰るなよ」
「でも既に役目は果たしただろ。摂理の見舞いはしたし、これからは自由時間だろ？」
「別に遠足じゃねーよ」

ベタな突っ込みを秋徒にされてしまった。でも僕の見解ではここまでが、三人で会うための口実だと思ってたけどな。
いっとくけどこの行動は、二人を思っての事なんだよ。

「てか、それなら三人で何するわけ？　遊ぶのなら、わざわざ僕は入れなくてもいいよ」
「だからそう言う事じゃないって言ってるだろ。この三人で共通の物って言ったらＬＲＯだろ。それに時間だって無いんだし、俺達は少しでもお前の役に立てる事をだな」

なんだか秋徒の奴がクドクドと話始めちゃったよ。たく、こんな機会そうそう無いんだから、利用しちゃえば良いのに。どうせ自分からは誘い出せないだろうし、休みだってもう数える程しかないん

だ。
一夏の思い出を折角出来た彼女と作ったって、別に怒ったりしないっての。羨ましがってはみるけどね。
「――で、結局何するんだよ。ＬＲＯはサーバーダウンしてるし、何も出来ないだろ？」
秋徒が言い終わった所で僕はすぐさまそう言ったよ。それとも何かあるのかな？　まあこの二人が、何も無く誘いはしないだろうけど……
「勿論出来る事があります。だからこうやってスオウ君をお誘いしたんですからね。スオウ君は携帯に、ＬＲＯのアプリをダウンロードしてますか？」
そう言って愛さんは自身の携帯を取り出した。上品な桜色した綺麗なスマホだよ。ホーム画面はなんか今、真っ黒に成ってるな。何も設定してないとか？
「これは違うんですよ。私のホーム画面は、アルテミナスを見下ろす感じの映像に成ってます。そう言う設定も出来るんです。
復興の度合いとかみたいですしね。でも今はサーバーダウン中だからこんな感じなんですよ」
なるほどね。てかそんな事も出来たんだ。でも流石はアルテミナスのお姫様。国を思ってるね。
「まあ一応、そのアプリは取ってはありますよ。てか、始める前に秋徒に取らされたし」
「ああそうだったっけ？　よし、なら後は参加登録だな」

「参加登録？」

僕は頭に疑問符を浮かべて聞き返す。一体何があるんだよ？

「お前は折角取らせた物を活用してない奴だな。ちょっとアクセスしてみろ。サイトの方は大丈夫みたいだからな」

そう言われて僕はアプリを開く。まあ様はＬＲＯの公式アプリ。イベントとか情報とかリンクとかが色々あるだけ何だけどな。

別にＬＲＯの復旧ニュースはないけど……

「イベント情報に行ってみてください。今回はなんと初の試みが開催されるんです」

「初の試みって……ＬＲＯが大変な時に良く出来ますね」

中止とかが想像されるんだけど。僕はまあ一応イベントページへ。そこには確かに大々的にこんな告知があった。

『本日遂に開催！　ＬＲＯの街がリアルの街とリンクする！？　これは実際の都市を使ったバーチャルリアリティの革新的イベントです。

参加される方は参加登録を下記で済ませ、必須のアプリ「ＮｅｗＷｏｒｌｄ」をインストールしておいてください』

まだ見ぬ誰かの思い（後書き）

第二百三十八話です。
ようやく日常でもＬＲＯが進みそうな話。実はこれの為にここまでがあったとも言え……無くもないかな。本当はもっと小さなイベントの予定だったんですけどね。ニュースとか見て思いついたの。
でもスマホならもっと凄い事が出来る筈。ってか、このイベントの為のアプリは普通にあります。スマホを町に翳して、その画面に色々と情報が出てくる奴です。それを応用しての今回のイベント。
どうなるかはまあ次回で……ってな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

重なり合う街（前書き）

イベントに参加する為に僕たちは自分達の街を離れて、世界一の電気街へと足を踏み入れる。そこはいつだって雑多な場所だけど、今日という日はまた凄くゴチャゴチャしてた。

やっぱりＬＲＯの影響だろうか？　それとも知らない間にそれだけ、活気づいてただけ？

まあだけど……あれだよね。やっぱ暑いわ。

重なり合う街

時間はあれから二時間程度経ち、太陽がより高く昇り殺人的な日差しが力を増してる。大雑多な町並みを通り抜ける大量の車と、そして大量の人人人が周囲の暑さをより高めてると思う。

流れる汗はとめどないし、どうにかして街全体を涼しく出来る発明を期待したい今日この頃だよ。そう言えば、僕達はあれから移動して、アキバに来てます。

世界一の電気街全体を使ってのイベントなのです。

「こんな中、野外でのイベントって……殺したいのか主催者の奴ら……」

どうせならもっとふさわしい季節があるじゃん。何も今、この季節にやるべき事じゃないと思う。外に気持ちよく出れる秋か春を希望したいね。

「大丈夫ですかスオウ君？　体辛いんじゃ無いんです？　いきなり診察された程だし、無理は良くないですよ」

そう言ってくれるのは清楚なお嬢様風美人の愛さんだ。愛さんもこの暑さの中、歩き回ってるから、流石にきつそうだけど、頑張ってるよ。てか、白い日傘が良く似合う。流石お嬢様。

すると今度はその隣から、暑苦しい声が飛んでくる。

「たく、イベントは常に進行中だって言うのに情けない奴だな。暑い暑い思ってるから暑いんだよ。暑さを凌ぐ目的を持て。

このイベントで手には入るアイテムが、なんかの役に立つかも知

れないだろ」
「はっ、んな事言ったって暑い物は暑いんだよ。――ん、ありがとう」

秋徒に文句を言ってると愛さんがさっき自販機で買ったスポーツドリンクを分けてくれた。やっぱり運動をしてるときには、これが染みるね。こう浸透してるって感じ？
僕は自身のＨＰである体力をちょっぴり回復させた。だけどそこで秋徒の奴が据わった目をして、暑苦しい体を寄せてきた。

「うわっちょ――離れろよお前」
「おい、今何した？　何したか言ってみろよスオウ？」

はあ？　なんでキレてんの秋徒の奴。今の行動のどこに問題が……僕は口頭で言ってやるよ。

「別にちょっと冷たい物を分けて貰っただけだろ」
「そ・れ・が、大問題なんだよこっちには！」

うお、耳元でデカい声を出すなよな。折角回復した体力が無くなるじゃないか。

「どうしたの秋君？　あっ、スオウ君にはそれ良かったら全部差し上げます。やっぱりなんだか、飲みきれなくて」
「そっか、じゃあありがたく」

三百五十ミリリットルの缶も飲み干せないなんて、年上だけど可愛い人だ。まあ愛さんには缶ジュースよりも、お洒落なカフェの方が万倍似合いそうだもんな。
それに比べて、その彼氏がガサツな奴なんだから……なんか秋徒

と愛さんの二人は、色々と交わらない部分も多そうだな。
僕が二人のこれからに不安を抱きながら、再び缶に口を付ける。
すると秋徒が「あああ！」とか叫んだ。それに超ガン見されてる……
「なんだよ。そんなに欲しかったのか？」
「違う……いや、違わないけど……お前はその缶の価値に気づいてないのかよ」
缶の価値って……どんだけ悔しそうなんだよこいつ。歯ぎしりまでしちゃって……なんか悪かったかなとか、ちょっと思っちゃうな。そしてどうやらそう思ったのは僕だけじゃないみたいだな。
愛さんもそんな秋徒の様子に心を痛めたみたいだった。
「あの、秋君にも買ってあげますよ」
「新品じゃ意味ないんだ！」
「ええ！？」
驚きを隠さずに表す愛さん。なんか可愛いね。てか、新品じゃ意味ないって……
「何、お前は僕の飲みかけじゃないと満足出来ないってのか……」
それは戦々恐々とした事実だよ。これからの友人関係を考え直すべき時期なのかもな。まさか秋徒にそんな特殊な趣味があったなんて……
「なるほど、だからお前は地域清掃の時、空き缶ばっかり拾ってたのか……」
「何の事だよ！　お前の飲みかけにも、他人の飲みかけにも興味なんてない！　俺が欲しかったのは、愛の飲みかけたその缶だけだ！」

力一杯に、大通りでそんな宣言を言い放つ秋徒。周りの目を気にしないその豪気はまさに男だったよ。まあそこまで言われちゃ仕方ない。

「ほらよ。たく、そこまで言われちゃな。てかさっさと言えよ」

僕は爽やかな笑顔で缶を差し出す。

「それは最早お前の飲みかけだろうが！」

おお、完全に拒否られた。ちょっと流石にショックだよ。僕はその心意気を称えようと思っただけなのに。てか、学校じゃ回し飲み位普通にやってるのに……これが受け取れないってどういう了見だ。

そんなに彼女の飲みかけが良かったのか？　この変態が！

「お前だって日鞠が他の男子に、飲みかけのジュースとかを渡すのはイヤだろう。それと同じだ。別に異常じゃないんだよ。

寧ろ大切に思ってるから……てか、普通彼氏の目の前ので彼女から貰った物に手を付けるか！？」

「まあ、日鞠の事は置いといて……少し位は悪かったって思ってやろうか？」

「なんで上から目線なんだよ！」

ああもう、秋徒は敏感に反応しすぎだよ。そんなんじゃ愛さんが浸かった後のお風呂にお父さんが入ってもダメそうじゃないか。

「間接キス程度で騒ぐなよ。別に口と口が触れ合った訳じゃないぞ」

「お前……そんな程度で済むと思うなよ」

なんだか秋徒から変な圧力が……何これ？　嫉妬のエネルギーでも溢れ出てんのか？　僕達が言い合いしてる外では、愛さんが頬を染めてちょっと恥ずかし気にしてる。
彼女こそ、そんな事気にしてなかったみたいだな。まあ男女の間では間接キスだって一大イベント？　なのは何となくわかるけど……秋徒がスルーしておけば、何の問題も無かったことだよ。
別に誰も気にしてなかったんだからね。

「想像しろ！」
「想像？」

何を言い出すんだこいつ？

「その缶にはな、愛さんの唇が付いたんだよ」
「だろうな。だから間接キスなんだし」
「あのピンク色してツヤツヤした、綺麗な唇がだぞ。唾液だってきっとそこには……もしかしたら一度舌を浸かってペロッとかやってたかも知れない……」

凄い想像力だね秋徒。そう言うことはあんまり考えない方が良いんじゃないかな？　普通に飲んだだけど思いこんで置けよ。自分の為に。
てかそんな風に言われると……こっちもちょっと想像しちゃう。僕は視線を愛さんの方へ向けた。そこには秋徒を赤い顔で見つめる愛さんが……なんだか細い指で唇なぞってるけど、それがエロく見えるな。
しかも改めて唇に注視すると、確かに秋徒が言った様に、良い唇してらっしゃる。まるで花の蕾の様だよ。唇……唾液……舌か……僕は手に持つ缶を見つめた。言われれば確かに間接キスも見過ごせないかもね。

でもそれを同姓に置き換えると吐き気がしてくるな。普段から秋徒と、唾液を混ぜてたと思うとこれからは回し飲みなんて出来ない。
可愛い女の子だから許せる事じゃん。

「ペロッとやったの？」
「やってません！」

一応確認してみた僕。ちょっと残念な気持ちになったよ。

「ようやくその缶の価値がわかったようだな」
「ああ、確かに間接キスは最高だってわかったよ。だけどこれは既に僕のだもんね」

そう言って一気に僕は中身を喉へと流し込む。きっとこの中身にだって多少は愛さんの唾液が含まれてる筈だ。はっは悔しがれ秋徒。

「ほら、後一滴くらいなら残ってるかもよ。それとも飲み口をペロペロしたいか？」
「死ね！　クソ野郎！」

そう言って秋徒は僕が差し出した空き缶を腕で弾いた。するとすっぽ抜けた缶が宙に舞う。缶を追って空を仰ぐと、強力な日差しが目を刺した。

「うおっ眩しい」

目を細めて缶を追おうとしたけど、だめだこりゃ。そう思った瞬間、どこかからか「イテ！」と言う声が聞こえた。
まさかあの缶が当たったのだろうか？　運の悪い奴も居たものだ。

「くぉらああ！　誰じゃこんなもん投げ捨てた奴ぁあ！」

なんかすっげえ怒ってらっしゃる。しかもこの季節には羨ましい位に頭が涼しそうな人だな。てか、なんか随分ジャラジャラとした貴金属を身につけた奴だな。

しかも露わにしてる二の腕付近には入れ墨っぽいのも見える。ヤクザかあれ？　迷惑の代名詞、社会の屑、悪の象徴みたいな奴ら。

両サイドには下っ端みたいなヤンキー風の奴もいるな。どうやら缶が当たったのは、あの三人の中では一番偉い奴みたいだ。

「どどうしましょう。迷惑かけてしまったみたいです。謝らないと」

そう言って奴らの方へ行こうとする愛さん。まあそれは人としては立派な事だけどさ、ああ言う連中には謝るような態度を見せた方が負けなんだ。

調子に乗るからな。だからここは愛さんにストップをかけるが正解。

「ちょっと待って。それはやめた方がいいですよ。愛さんは知らないかも知れないですけど、世界には暴力を躊躇わずに……てかそれを仕事にしてるような連中が居るんですよ。

そんな奴らに常識なんて必要ないし、誠意なんて見せた所で受け取らない。連中は疑うことと裏切る事と、自分の事と人の不幸が大好きだからです。

やられたら倍返しが常識の連中だし、愛さんが出ていくと何をされるかわかったものじゃないです」

「でも……悪いのは私たちですよ」

う～ん真剣に愛さんは悪いと思ってらっしゃる様だ。あんな連中、

僕は年中理不尽で良いから死に尽くせって思ってるけどね。
あんな奴らだけに掛かる伝染病とか流行れば良いのに。僕の周りの人の人生には一ミリとも交差して欲しくない連中だよ。だから愛さんもこんなのに関わるべきじゃない。寧ろ愛さんだからこそとも言える。

「考え方を変えましょうよ。あれは天罰なんですよ」
「天罰ですか？」
「ええ、あいつらはきっとこれまで沢山の人を傷つけて、騙して来たはずです。あんな腕からはみ出すような入れ墨を入れてる奴は、九割方はそんな連中ですよ。
だから天罰が落ちたんだと思いましょう。良い気味でざまあみろと思って良いんです」
「そう言うものなの秋君？」

最後には秋徒に同意を求める愛さん。秋徒だってあんなのに関わり会いたくないだろうから、直ぐに「勿論」と言ったよ。
まあ幸い、向こうはこの人混みで、こっちには気付いてないみたいだし、今の内に静かに退散するのが得策だな。僕達はただの人混みと同化してその場を離れる事に。だけど、ここで無駄なドジっ子ぶりを愛さんが発揮した。

「ふぎゅっ！！」

そんな声が聞こえたと思ったら愛さんは何故か道路に突っ伏してるじゃないか！　何故に！？　だよ。ヒールのせいか？　すぐさま秋徒が彼女の無事を確認する。

「大丈夫？」
「あっはい。いつもの事なので」

いつもの事って……どれだけ良く転ぶの？　まあ大事無かったのなら良いけど、ある意味見事なこけっぷりだっただよ。
てか、不味いな。愛さんが転けた事でこっちも注目されてるよ。そして何故か、こういう時の悪い予感ってのは良く当たったりする。

「おめぇ等かあああああ！？」

ほら来た。どんだけ語尾を延ばせば気が済むんだこいつ等？　チンピラ風の下っ端がこちらに歩いてくるぞ。

（目を付けられたぞ。どうするスオウ？）
（どうって……そうだな。逃げるか？　それともぶっ倒す？）

秋徒と視線を交わして意志疎通をする僕ら。周りには人が一杯な割には、みなさん野次馬でしかないからね。危険が及ぶのなら、真っ先に逃げ出すんだろう。たく、誰かいたいけな子供を助けようと言う大人はいないのかよ。
まあ、しょうがないともわかってるけどさ。あんな人種には生涯関わりたくないもんな。

（お前な。ぶっ倒すっていくら何でもそれは不味いだろ。勝っても負けても不味い）
（……確かにな）

ああ言う奴らは、直ぐに仲間を呼んだりするからな。それに黙ってボコられるのも論外だ。でもここで逃げても、僕達はアキバから出れないしな。
さあどっちにする……逃げるか、倒すか？

（倒せるのかよ？　逃げた方が絶対に良いって。俺達はまだ体力には自信有るだろ。あいつら絶対に内蔵が弱ってる。そんな顔してる）
（まあ確かに。不健康な髪の色に、どれだけ体に穴開けてるんだよって感じのバカだよな。負ける気もしないけど、逃げても確かに追いつかれる心配なんてないのかもな。この暑さだし、直ぐに諦めるか）

あいつらだってこの暑さの中、走り回りたくなんかないだろう。

（そう言うことだ。ここはリアルなんだし、そもそも喧嘩なんかしたら、警察が飛んでくるぞ。それにお前にあんまり無茶はさせられないしな）
（わかったよ。確かに休んどけってあの医者からも言われてるしな。それにまだ警察のお世話には成りたくない）

僕は手に持ってた携帯のカメラ側を奴らに向ける。

「ああ！？　何撮ろうしてんだテメェ！！」

うるさい奴ら。腐った様な顔と声……不愉快極まりないな。これが同じ人間なんだから、悲しくなるよ。てか、全然ビビってない自分がいるな。
普通ならガクガクと震えるもの何だろうけど……ＬＲＯで命を賭けておっかない敵と戦ってる僕には、こいつらがどうしても雑魚にしか見えない。
プレッシャーとか全然ないしな。見た目と、声のデカさで畏怖を先行させようとしてるのかも知れないけど……はっきり言って小物感の方が先行してるよ。

「あれ？」

僕は画面の中に写る奴らを見てそんな声を出した。これって……

「どうしたスオウ？」

「……いや、何でもない。走れ二人とも！！」

僕はそう言ってシャッターを押す。それと同時に、フラッシュがたかれて、チンピラ二人の目を潰す。そして一気にもうダッシュ。念の為、僕は秋徒達とは反対方向へ走る。

連絡手段は有るし、問題ないだろ。

「「くっそ……あのガキ！　待ちやがれやあああ」」

チンピラ二人は更に沸点を上げたようだ。逃げたことで犯人が僕らだと確信したか？　それともただバカにされた様な行動にプッチンきたのかな？

まあどちらにせよ、待てと言われて待つバカはいないっての。僕は人混みの中をノンストップで駆け抜ける。人と人の間を風の様に抜ける。

なんだか自分でもびっくりだけど、少し集中したら視野が広く成ったような……そんな感じだ。どういう人の流れか、どう走れば良いかそれが分かる。

キレたチンピラ共のせいで後ろの方は何気に騒がしく成って、人の流れも複雑だけどこの程度なら余裕だ。追いつかれる気がしない。少し振り向いたら、既にチンピラ共は人混みに飲まれてた。

こりゃ余裕だな。僕は背中を向けて見えない位の所までひとまず退散だ。

「はぁはぁはぁ……やっぱりこの暑さの中走るのは堪えるな」

せっかく体力を回復させたのに、その分を使っちゃたよ。それにしても……思ってたけど今日はやけに人が多い気がする。
まあ歩行者天国とかやってる街だし、元から人は一杯だろうけど、今日は特に……しかもこの暑さで外で携帯翳してる人一杯。
つまりは誰も彼もが、このイベントの参加者ってことだろう。今、この街を携帯通して見ると、違う景色が写る。確か設定ではＬＲＯ事態ではもう滅んだとかされてる街の姿。
昔は繁栄してたらしいその街の名前は『ブリームス』それをここに投射してる。スマホのアプリ機能を使ってね。情報を大量にやりとり出来るスマートフォンだから出来る事なんだろうね。

僕も息を整えて、携帯を翳す。そこには立ち並ぶビルに重なる様に、違う建物が写るんだ。なんだかそれは異様な光景。
最初は何度も、携帯から目線をズラして無いことを確認しちゃった位だよ。有る意味リアルをＬＲＯとして体験出来るのはなかなか良い試みだとは思う。
でも画面を翳すって逆戻りした感も有るけどね。ＬＲＯは色々と進みすぎてるからかもだけど……とにかく僕達は、今日はこの秋葉原――もとい『ブリームス』と言う幻の街を探索する権利を有してるのだ。
あんなチンピラに構ってる暇なんてないよな。

「まあ、探索して宝を発見する程度なんだけど……早いもの勝ちらしいからな」

さて、息も整えたし僕も宝探しを再会するか。チンピラも追ってこない様だしな。

「ああそうだ。秋徒達が無事か一応確認しておくか」

向こうに行ってないとも限らないしな。まあもろに顔を晒した僕とは違って、秋徒達は奴らにあんまり見られてないから大丈夫だとは思うけどね。
一端アプリを終了させて、僕は秋徒へ電話をかける。すると直ぐに秋徒はでた。

『おい無事か？　なんで同じ方向に来ないんだよ。心配するだろ』
「念の為だよ。念のため。こっちに奴らの気を引かせたんだ。まあそっちも無事な様で何よりだよ。てか、三人で揃って行動してても限界有るし、ここから別行動で行こうぜ。
秋徒は愛さんと探索してろよ。こっちはこっちで勝手にやるからさ」

まあここまではしょうがなかったけどさ、僕だって気を使えるんだよ。

『はあ？　お前何勝手な事を……だから別にそんな事今日は望んでなんか……』
「別にそう言う事じゃないっての。ただ単に確率の問題だ。折角イベントに参加してるのに、一個もアイテム持ち帰れないんじゃ意味ないだろ。
だから別行動しようって訳」

これも実際は口実だけど、こう言っておけば秋徒も文句は言うまい。
『あの、それなら私たちも別れた方が良いんではないでしょうか？』

電話の向こうから違う声が……愛さんも僕達の会話を聞いてたらしいな。でもそれはちょっと不味いよね。何より意味ないし。

「それはダメですよ。愛さんはこの街は不慣れだろうし、なんだか危なっかしいし、秋徒にリードして貰ってください。じゃないと安心できません。
まあ秋徒がどれだけエスコート出来るかは期待出来ないすけど、我慢してくださいね」
『そんな、我慢だなんて……』

愛さんの声がすこしだけ上擦った様に聞こえた。想像したのかな？

『おいスオウ、変な事言うなよな。それに本当に良いのか？　倒れたりしないだろうな？　本当は無理してるとかは無しだぞ』
「大丈夫だっての」

それに有る意味、無理をさせたのはお前達だよ。こんな炎天下の下連れ出してくれちゃってさ。まあ、あのまま帰ってもやること無かったから良いんだけど。
それにこんなイベントの存在を知ったら参加しないわけには行かないよな。そもそもＬＲＯがサーバーダウンしなきゃ、存在も知らずに終わってた所だろうし。
この『ブリームス』に散らばってるアイテムは、古代の物でどれも貴重らしいしね。そんなのが歩き回るだけで手に入るなら、この位安いもんだ。
それに……不安要素はまだ残ってるしね。

「それよりも一応は気をつけておけよ。まあ僕を狙ってるとは思うけど、見つけた側を襲いそうな雰囲気だったし、愛さんを一人にするなよ」
『それならお前だって一人は危ないだろ？』

「全然。それにあんな奴等の妨害でアイテムを諦めるとかイヤだしな。僕の場合、一人の方がやりやすい。お前は大切な彼女を守ってれば良いんだよ。
じゃあ、何か有ったら連絡な。そゆことで」
『あっおいスオウ！』

僕はピッと通話を切った。まあこれで二人きり……向こうは向こうで、宜しくやってくれれば良いよ。こっちはこっちで、役に立ちそうなアイテムを求める事にするさ。
僕は再びアプリを立ち上げて携帯を前方に翳す。すると画面がなんか真っ暗な様な……でも直ぐに復活した。何だったんだ今の？
まあ初めての試みだし、多少の不具合は目を瞑るさ。さてイベント終了は午後四時だから、後三時間はある。ここからが本番って事で気合いを入れて行くかな。
リアルの街の上に上書きされたような電子の街を、僕は冒険するんだ。なかなかに楽しく成ってきた。

重なり合う街（後書き）

第二百三十九話です。
イベントが始まる！　と思いきや、まだ本格化してない感じ。てか、リアルって難しいんですよね。派手なバトルが出来る訳でもないし、スオウも等身大の高校生な訳ですよ。
まあヤクザをなんとも思わないのは等身大じゃないかも知れないけど、そこら辺はＬＲＯのおかげです。予兆はこのくらいで、次回からは本格的にイベント挑戦です。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

陽炎の中で（前書き）

さてさて、ここからはイベントに参加しようと気合を入れる。とりあえずここまで来たのなら、一個くらいはアイテム欲しいしね。炎天下の中秋葉原……もとい『ブリームス』を歩くんだ。それくらいは求めたい。

僕は一人で歩きだす。違う空を二つ仰ぎ、この幻の街の宝を求めて。

陽炎の中で

画面に映る、リアルとは違う街の姿。そこには電線なんか無く、家々だって全く違う物が見えてた。けどこの秋葉原の街に上書きされた様な街は、有る意味で今まで見てきたＬＲＯの街とは違う。

ここと同じ様な雑多な感じとでも言うのか、とにかく今までは一番偉い奴が住みそうな高い建物ってのはその街に一つか二つの象徴的なものだったけど、ここにはアキバのビルの数だけある。

見上げるのが大変な位だよ。もしかしたら、今のＬＲＯのどの街よりも発展してるのかもね。まあでも、文明を感じると言うよりは、文化ってな感じだ。

高い建物は総じて、塔の様な建物だし。それに街の姿ってのは、きっとこのアキバと同じなのかなってね。電気街の離れた所は商店の建ち並ぶ区域みたいだし、人通りとデカい建物が多い駅周りにはやっぱり、中心となるであろう建物が集中してる。

「さて、やっぱり貴重性の高いアイテムは駅周りかな？」

僕はそんな事を呟いて、駅の方を見る。まあここからじゃ駅自体は見えないけどさ。まあどうせなら、一番レア度が高いアイテムがほしいじゃないか。

そしてそう言うのはやっぱり今も昔も、偉い奴らが管理してそうだろ？　だから街の中心部分かな～って何となく思うんだけど、でもあそこ等辺は駅周りだから、競争率が高くもある。

有る意味、お手軽にイベント体験を出来る場所でもあるしな。そんな所にイベント主催者がバカ正直にレア度マックスのアイテムを設置してるのは微妙かも知れない。

「うん、まあとりあえずそこら変のＮＰＣから情報を貰うかな」

まだ時間はあるし、周りから攻める作戦で行くことに。照りつける日差しに、アスファルトの地面から立ち上る熱気が暑苦しくてかなわない。そこら辺でタオルと、再び飲み物を補充した方が良さそうだな、取り合えず。

電気街だけあってそこら中に自販機がある秋葉原。僕はスポーツドリンクを小脇に抱えて、ＮＰＣ巡りを開始してた。

でも今日に限って人が山のように行るからね。と言うか、携帯を翳しながら歩くだけでも十分危ない行為。気をつけながら、僕は頭上に矢印みたいなアイコンが立ってるキャラを探す。

それがＮＰＣの目印だからね。そしてＮＰＣの近くまでいって、その画面の中のＮＰＣにタッチすると、会話が画面に現れるのだ。音声もちゃんと出るけど、読むための画面も現れる。これは外だからの配慮だろう。

まあ、ＬＲＯにしては何とも昔を懐かしむ感じの仕様だ。

「さて、取り合えず今まで聞いたＮＰＣの話で出てきたアイテムは三つくらいかな。なんでも凄い魔法を記した魔道書が有るとか無いとか。それと流行の占いグッズとかだっけ？　後は、どこかにこの街には神の遺物が有るとか無いとか」

普通に見つけられる程度の物はきっと、真ん中位の奴なんだろう。どれだけの数のレアな物が散りばめられてるのかは分からないけど、魔道書や神の遺物とかは単純にレア度が高そうだ。

あれだよな。ここで手に入るアイテムは、もうＬＲＯ自体では手に入らない物なんだよな？　それを考えるとどれだって貴重な物の様だけど、そこら辺に有る奴じゃ何となく満足出来ない。

てか、わざわざ関係ない事を喋らせるＮＰＣを紛らわせてる事ってどうなんだろうと思う。ＬＲＯと違って、スペックに限界が有りそうなこのイベントじゃ、そんな余裕はもったいない様な……

「うん？　そう言えば関係ない奴らは決まって、流行物を要求してた様な……」

思い返して見ればだけど、確かに羨ましい感を出してたんだ。直接要求はしてなかったけど、もしかしたら、教えてくれる情報はＮＰＣによって段階的に違うのかも知れないな。

ただで教えてくれる奴らは「有る」と言う存在だけなのかも。そこからは等価交換か。

「なら、まずは何だって良いから流行物を見つけるか」

それだって貴重なアイテムに変わりはないだろうけど、それを手放せるかどうかで、更に上のアイテムを得る権利を手に入れられる……のかも知れない。

取り合えずそう睨んで探索開始だ。

アイテムは確か、宝箱に入ってる奴とＮＰＣがくれる奴が有るとか書いてあった気がするな。宝箱は一度開けたらその場から消失。そしてランダムに別の場所に移動するらしい。

これは運の要素が求められるな。それなら一定のＮＰＣが何かの条件を満たして渡してくれる方が効率的には確実なのかも。

流石にアキバの街をくまなく探すのはきついよ。だってこれ建物の中だって対象だからね。しかも宝箱は熾烈な争奪戦が繰り広げられそう。

僕は今回は荒っぽい事したくないんだ。取り合えず、漁夫の利を

狙いたい所だよね。それが一番楽だし。けど今までの経験上、僕の所に都合の良い物が転がり込んだ試しがない。特にＬＲＯでは。
転がり込んできても、厄介ごとが付いてくるのが殆どだもん。漁夫の利は難しいかも知れないな。

「でも……なんか一人っ不利っぽいな」

まあ秋徒達と連絡取り合えば良いんだろうけど、これは流石に遊びの域を出ないかも……周りには本気でやってる人達も居るけど……その人達は多分パーティー組んでるもん。
携帯なんて二個用意して、仲間との連絡用と、街に翳す様に使い分けてる人とかこれまで結構見た。ああ言うのにはどう考えたって勝てないよな。

「なんて言うか……行動力のベクトルが違うよね」

まあ取り合えず、僕は僕でやれる事をするしかない。まずは情報収集だな。一端アプリを閉じて、ネットに接続。ＬＲＯ掲示板を見ると、案の定イベントの書き込み一杯だ。
「宝箱発見！」とか「みつからねー！」とか乱立してるよ。こんな所に随時書き込める余裕が有るなんて……この人たちもきっと二台持ちの強者達何だろうね。尊敬しちゃう。

「うん？　これか？」

その中で貴重な情報を発見。流行アイテムを渡してくれるＮＰＣがラジオ会館の前に居ると言う情報だ。だけどどうやらアイテムを渡して貰う条件が分かってないらしい。渡された者とそうじゃない者の差を只今検証中だとか。

「確実じゃない……か。でも今の所宝箱を見つけるのだって運だしな。場所が特定されてるだけマシかも」

そう遠くも無いはずだし、行ってみる価値はあるだろう。他にも気になる書き込みはあったけど、取り合えず再びアプリを立ち上げる。もしも目の前に宝箱が現れても、こうしてないと見えないからな。

それにどこにヒントがあるか分からないし。

重なりあった二つの街を僕は歩く。街の配置とかは変わらないんだけど、建物で随分印象が変わるもの……それを今日を知った。

近代的な秋葉原と、ファンタジーが見える『ブリームス』どっちを歩いてるんだろうね。いや、どっちもを平行して歩いてるのか。

そして電気街の通りを歩いてラジカン側へ――――と行くと、なんかスッゴいごったがえしてた。

「なんだこの通りの密集度は……」

あり得ないよ。人がみんな押しくら饅頭してるみたいだ。この暑い中でよくやってる……けどこれは入れない。下手したら大惨事だろこれ。

誰かが倒れたりしたら、連鎖的に倒れていきそうだぞ。それこそドミノみたいに。流石にこれは諦めた方が良さそうだ。携帯をその人混みに翳すと、黄色い看板の下に、三角の矢印が見える。

けどそれだけで、姿は見えないな。う～んやっぱりネットに上げられた場所は無理だな。誰もがそこを目指してしまってるみたいだ。

それにこれって結局誰かの後を追うことでしかないよな。追いつけるのかも怪しいやり方……勝てるとは思わないけど、ＬＲＯには入手制限が極端に少ないアイテムがある。

僕の持ってるセラ・シルフィングしかり、バランス崩しと称される武器しかり。それらは一桁……と言うか、バランス崩しにしては世界に一個しか出現しない武器だ。
アイテムだって貴重な物になればなるほど、それを掴める人数は少なくなる。だからそれを全部持って行かれるのは、正直困る。
少しは一般にも流してくれないと、頑張る意欲ってのがね。結局はああ言う組織だった奴らに全部持って行かれるってのはなんだかなって事だよ。

まあそれだけ本気で向こうはやってるんだろう。それは分かるけど、みんなが楽しんでイベントをしてる。その延長線上のご褒美とかでいいんだよ。
みんな楽しく競争しながらで良いじゃんと思うんだけど、ああ言う人達はどうなんだろう？　貴重なアイテムをただ取りに来てるだけってな感じ。
そりゃあ僕だって世話になってるし、アイテム目的でもあるけど……イベントを楽しむ事だって忘れちゃないよ。取り合えずこの場から少し離れて考える事にするか。
もう一度今度は自分の頭でね。

「う～ん」

大通りの方へ戻ってしばし考察……と思ってたけど、頭が日差しに焼かれる。てか周りにもこの暑さで座り込んでる人達多数だ。
くっそ、この日差しが思考の邪魔をするな。取り合えずどっかの建物にでも入って涼もう。そう思った。手近な電気屋さんへと逃げ込む僕。
きっとクーラーガンガンの快適空間になってるは――

「あっつ！？　なんだこの熱気は？」

クーラーが入れられてない……なんて訳はないだろう。じゃあこの暑さは……人の熱気？　ここも人が一杯だった。
どうやら今日は、どこもかしこも人で溢れてる様だな。分かっちゃいたけど、まさかここまでとは……

「これじゃあ中も外もたいして変わんないな」

僕はそう思い外へ。うわっ、やっぱ日差しキツ。でもこの入り口で開け閉めしてると、痛い視線に刺されるから、結局外へ出ることに。
ここら辺はデカい建物も多い、いわば中心地みたいなもんだよな。それならこれだけ人が多いのも当然と言えば当然か。
てか、流行アイテムをくれるＮＰＣは一人じゃないと思うんだけど……そもそもあの情報は果たして親切とか、ただの俺ってスゲーの見つけたぜとかの自慢だったんだろうか？
ネットに上げればああなる事は予想が付くよな……自分達はもう手に入れたからってのもあるだろうけど……それ意外にもありそうな理由が思いつくぞ。

「情報の限定的な開示での人心操作か。まあそんな大層な言い回ししなくても、僕らの様な一般を足止めさせたり邪魔されたくないから。
他にもきっとアイテムを渡すＮＰＣは居るはず」

そっちを探してみようと僕は思う。踊らされるのは好きじゃないからね。でも闇雲に探しても時間だけが過ぎるんだろうし……さてどうするか。
こうなったら逆算するかな。開示されてる情報の偏りとかで何を知られたくないのかがわかるかも知れない。日鞠の奴がこんな事言

ってたしな。

【あのねスオウ。木を隠すには森の中。でもこれは別に木だから同じ物の中に紛れ込ませろってだけじゃないよ。まあ用は、何もない所よりも何だって良いからゴッチャになってれば良いんだよ。
木じゃなくても、知られたくない事は沢山の物に紛れ込ませるのが上策。でも私は更にその上に行くけどね】

更にその上がなんなのかは教えてくれなかったけど、まああいつの盗撮のスキルは凄いからな。家の中に紛れ込ませたカメラがその実力を物語ってると言っていいだろう。マジで引くよ。僕じゃなかったらね。

【スオウにしかしないもん】

とかいってたけど、僕が訴えれば、アイツ逮捕できると思う。まあそんな事は結局しないんだけど。
僕は携帯を翳すのをやめてネットへ。そしてさっき見てた掲示板へと行く。そこには景気良いらしい書き込みが何個かあるな。
勿論景気悪いのもあるけど、それらは無視して、景気良い奴らの書き込みにだけ、注目してみる事に。

「う～ん」

別にこうして見る限り、何がどうかとか、良くわからないな。そう言えば僕は重要な事を忘れてたよ。

「僕ってそんな頭良い方じゃなかったな……」

自分で言ってて悲しくなるけど、僕の成績は真ん中なんだ。可も

なく不可もない、中間そこらが僕の位置。だけどここで投げ出したら、ここでしか手に入らないアイテムなんて夢のまた夢。
何かないかな？　なにか……この文字の中で埋まってる物。
「……とは言ってもな。書いてあるのは、報告と僅かな情報交換の様な物だけ。それからアイテム発見の場所……か」
アイテム発見の場所は、屋内が多いな。情報交換は自分がどこに行くかを書いてる位。そして見つけたら更に報告が書き込まれるみたいだな。ランダムで移動するアイテムの場所が書いてあっても、いみないしな。既にそこには無いって事だし。
そしてその書き込みで、高確率でアイテムを発見してる奴ら……そいつ等が本気の度合いが違う奴ら何だろうな。勿論さ、素直に書き込んでる人も、偶然にアイテム手に入れた人の書き込みもあるけど、そいつ等は何度も書き込みしてる内で、最も発見の報告が多いんだ。
「ん？」
そこで僕は気づいたぞ。組織だった奴らと、偶然たまたまの書き込みの違い。
「そう言えば、この良く見つける方はリアルでの場所しか書いてないな」
まあそっちの方が分かりやすいって感じだと思ってたけど……もしかして違うのか？　僅かに感じた違和感だけど、この際考えてみるのも悪くない。
偶然たまたまの方は、画面の中に映る建物の事も書いてあるのに、一個もそっちに触れてない乱獲野郎ども。今の所そんなんしかわか

らないから、取り合えず確認だけしてみる事に。
ラジカンはＬＲＯ側ではどんな建物がそこにあるのか……僕は再び携帯を向けた。ブリームスは基本なんか黒い町だ。暗いんじゃ無く黒いね。建物の建築資材にそれが混ざってるのか知らないけど、黒くシックな印象を受ける建物が一杯。
そしてラジカンに重なって建ってる建物も当然その準拠で、そこに建ってるのは建物なかなか立派でこう表示されていた。

「国立第一研究所（別）か」

なんだ（別）って？　別館か何か？　まあ今はいっかそこら辺は。きっと大きいんだろう。何の研究をしてるのかとかは知らないけど、取り合えずそう表示されてるし、それなら次に狙う建物は自然と決まるよな。

「よし、第二研究所を探すか」

僕は一人でそう呟いた。まあ第一があれば、第二も第三もきっとある。それに発展してる様な町並みだしねブリームスは。

「けど、このアキバの町から研究所を探すのも一苦労だよな。地図は出ないし……どっかに無いかな？」

僕は歩き出す前にネットを再びチェック。書き込みは沢山あるんだし、ちょうどその場所を書き込んだ人がいるかも知れない。

「……」

ダメだなこれは。そんな都合良くリアルは出来てない。それに基本、アイテムやちょっと違う事を発見した場所の事しか詳しく書か

れてないし……それにあの乱獲野郎どもはあてにならないから、偶然の産物を期待するしかなかったわけだよ。
アイテム発見ならそれなりに組織立たなくても運でいけてるみたいだけど……それ以上の情報はなかなか上がってない。やっぱり地図がないのは痛いよな。地図――

「地図か……地図……あ！　そうだ」

僕はあるギルドを思いついた。ここもＬＲＯといえる場所ならさ、地図ギルドの人達も参加してるんじゃ無いだろうか？
てか幻の街だよ。参加してない訳ないだろ。セラいわく、その人達の目的は、ＬＲＯの全てを把握する事らしいから、ブリームスだって見逃す訳がない。
僕は早速地図ギルドのホームページを検索だ。

「おお！」

歓喜の声が思わず上がる。流石は地図づくりの為にどこへだって行く人達だ。既にエリアの三分の一は埋まってるじゃないか。
しかもホームページのホーム画面で随時更新してるらしい。秋葉原の衛生写真上にリアルとＬＲＯの場所を入力していく形だな。
うん、これは分かりやすいぞ。でも見たところ第二研究所はまだ発見されてないみたいだな。けど変わりに第三・第四はある。まずはそっちから当たるかな。

「第四の方が近そうだな。中央通り万世橋の向こう側だし。この中央からはちょっと離れるけど、まあ致し方無いよな」

僕はこのサイトをお気に入りに登録して、再びアプリを起動。そして第四研究所を目指す。

たどり着いた第四研究所は、小汚いビルだった。なんか第一研究所だったラジカンとの差が大きい。やっぱりそこは第四だからだろうか？

まあだけどアキバらしいビルではあるけどね。画面の中の映像と対照的すぎるよ。なんていうかこう……萌え萌えしてる。こういう所に入れる強者達はきっとみんな勇者なんだろうね。

けどどうやら、中にまで足を踏み入れる必要は無いみたい。画面の中には白衣を着たＮＰＣの老人が一人、そこには居るよ。

もしかしたらこの人が、流行アイテムをくれたり――なんかしそうじゃないんじゃないかな？　何で爺だよと、心の中で叫んだよ。別に年齢とかは関係無いのかも知れないけど、この人の流行は何十年も昔に終わってそうだ。

まあだけど取り合えず指で触れて見た。

【おお、どうしたもんか……どうしたもんかの……】

なんかそれで会話が終わったんだけど……こっちがどうしたもんか――――だよ！　息の根を止めてやろうかこの爺。この炎天下の中、ここまで歩くのだってきついんだ。それをそんな会話で終わらせるな！

「くの！　この！」

僕は意地になって何回もこの爺を押しまくる。けど別に会話の内容が変わるわけでは無いみたいだ。僕がやらなくてもそろそろお迎えは近そうだな。

「はあ……折角期待してたのに……」

なんだか一気に疲れたかも。たく読みが浅はかだったかな。僕はスポーツドリンクで喉を潤しながら、周りにも目を向ける。取り合えずここら辺のＮＰＣに総当たりしてみようかなとか思ってるんだ。

それくらいしかやれない。第三研究所を目指すのはその後だな。

「ああ～髪の毛がやたら熱い。頭が溶けそうだぁ」

頭を掻こうとしたら、そんな事に気づいちゃったよ。髪の毛は黒いから、この日差しはキツいな。

そんな事を思ってると、どこかからチカチカと目にうざったい光が入ってきた。太陽じゃないそのちらつきに目を向けると、そこには何とも涼しそうな頭がある。

まあある意味地肌を焼かれてる様な物なのかもしれないな。けど……あの光ようはうけるんだけど――プフ。

「何であんなに光って、頭まで日焼けするんじゃないかあれ？」

なんか変な壺に入ったかも。笑いがこみ上げて来ちゃう。それにしても、なんだかああ言う頭最近見たような……僕は必死に笑いを堪えてそんな事を考えてると、ハタリとその周りのチンピラ風の奴と目があった。

「「「あっ……」」」

僕達のそんな声が重なった。そしていち早く舌を巻いて声を出したのはチンピラの一人だ。

「てっめぇえはあああああ！！！」

「ああ、あそこにもの凄くエロかわいいコスプレイヤーが」

「「あんだって！？」」

速攻で振り向くバカ二人。中央のハゲでグラサン、そして入れ墨の人は、振り向くかどうかを躊躇ってる。なんか自分と戦ってるな。

まあどっちにしろ、僕はこの隙に猛ダッシュ！

「ははは！　そんなエロ可愛いコスプレイヤーなどいないわ！！」

それにしてもこんな古典的な罠？　いや既にギャクに引っかかるとはどんだけオツムが悪いんだ？　ブチ切れして追ってきてるけど、やっぱり追いつかれる気はしないな。

てかタイミング悪いんだよ。

「はぁはぁはぁはぁ……」

やばい、振り切るのは簡単だったけど……なんか干からびそうだ。てか流石に体がちょっと痛いかも。全力疾走はどうにか控えた方が良いのかもしれない。

都会の空気が肺を犯す……こういう臭いまでは変えられないから、やっぱりここはリアルなんだよな。

ビルとビルの隙間でへたりこむ僕。携帯を翳して違う風景に心の安寧を求める。だってリアルはゴッチャしてるからね。ブリームスの風景を求めたんだ。

「ん……あれ？」

なんかまた暗くなってる。そしてザザザとノイズが走り、次の瞬間最悪な奴が僕の携帯を侵略した。

「ジュビドロピー！　魔法の言葉でシクラちゃん登場☆」

キラっと☆が光った瞬間、僕は携帯を壊そうかと思った。

陽炎の中で（後書き）

第二百四十話です。
なんだか予想外の奴が登場した所で終了です。実は最初考えてたのはシクラじゃない別の奴だったんですけど……色々と考えた結果、シクラ再登場になりました。まあブリームスもＬＲＯですからね。
少し仕様は違うけど、アイツが来れない訳はないって事で。それにこいつらも多分動いてる筈ですし。勿論ただなんにも無しに登場した訳でもない筈です。てか、シクラって敵だけど、その境界をフラフラ出来るキャラでもあります。
なので良いかな～と。
てな訳で次回はスオウとシクラのコンビで行きます。次上げるのは金曜日と言うことで。ではでは。

庭違い畑違い（前書き）

携帯の画面に現れた存在はシクラ。アルテミナスを滅茶苦茶にした奴で、僕達からセツリを奪って言った奴。いうなれば最大の敵のようなやつだ。それがニッコニッコな笑顔を携えて、ふざけた言葉と共に登場するものだから、なんか頭痛い。

幾ら規格外でも、立場とか関係とか考えろよ。こっちは慣れ合う気なんてないんだ。だけどシクラは相変わらずのペースで、侵略を始めるんだ。

庭違い畑違い

目の前に……というか、画面の向こうに現れた異物に、僕はどう反応して良いのかわからずに固まった。暑さもある意味この一瞬だけ飛んでいったし、この都会のどこにいるの？　的な蝉の鳴き声さえ奴の声の前にどこかへ去った……様な気がした。

「あれ～？　お～い。反応薄いぞ☆　トゥットゥル～～の方がこの時期的に掴みとしては良かったかな？」

画面の中の見たくない奴がなんか言ってるけど、僕の脳はこれがアリかナシかを必死に論争してた。

いやいや、だってシクラだよ。ある意味、最大級の敵で色々と僕達は因縁というかそんな敵同士の思いがあるじゃないか。

それなのになんだってこんな明るく現れるのこいつ？　僕がそんな事を考えてる間に、画面のシクラは「コホン」と喉の調子を整える。

そして改めて言い直す様に――

「トゥットゥ――」

「許されるかぁぁぁあああああ！」

僕は思わず電源を落とした。画面は真っ暗になって、そこに悪魔の様な女は消えた。言っておくけど、別に許されるかってのは、ここにこうやってこいつが現れた事ね。別に「トゥットゥル～」事態は、お金を取ってる訳じゃないから許されると思う。

まあ、でも流石に焦ったけどね。なんであんな楽天的な顔で現れたんだあの野郎？　敵なんだからもっと気まずくしておけよ。

「ふう……」
「ちょっと酷いじゃないスオウ。こんな所まで出向いてやったってのに、この扱いは不本意なんですけどー☆」
「うお！？　何で復活してんだよ！」

確かに電源切った筈なのに……シクラの奴は何気ない風に言葉を発して来やがった。流石規格外の存在……まさか自分で電源を入れ直すとは……なんて恐ろしい奴だ。

「それはほれ～～、シクラちゃんって特別じゃん☆　最高じゃん☆　ジャンジャンステーキ大好きじゃん☆　て、言うことじゃんよ☆」
「じゃんじゃんじゃんじゃん、うるせえよウザったい。もう一度電源落としてやろうか」

絶対途中からは「じゃん」が気に入っただけだろ。しかもジャンジャンステーキって何だよ。無理矢理だろそれ。じゃんじゃん言うキャラなんていいんだよ。いらないの。
それは大人気ライトノベルのナイスボディだけど色気がない先生が担当してるよ。てか、普通に「じゃんじゃん」聞いてるとイラッとくる。
まあこいつが言ってるからなのかも知れないけどさ。

「ふっふ、電源を落とすなんて行為、シクラちゃんには無駄な抵抗だね☆　それは今し方証明したはずだけど？」
「うるせぇよ。お前がそこに居る以上、何回だって落としてやる」

そもそも、今僕に出来る対抗策がそれしかない。僕とシクラは今は、画面の中と外に存在してる訳だからね。でもリアルに居るのにこいつの顔を見ることになるとは……予想外過ぎる。

「あ～あ、そんな事したら困るのはスオウでもあるよ。ここは大らかな気持ちで私を受け止めて欲しいかも☆　美少女が画面の中から話しかけて来てくれてるんだよ？
世の男子の夢みたいな物でしょ？」

何真顔で言ってんのこいつ。しかも最初の一文で僕が電源ボタンから手を離した事を知ってるこいつは、完全に計算して言ってやがるのが更にムカつく。
こいつの言葉は、言ってしまえば何一つ信用できない。てか出来るはず無い。だってアルテミナスをあんなにしたのは……そしてアギトとアイリ、ガイエンの三人の関係を引っかき回した裏にだってこいつが居たはずだ。
シクラの奴が出てきたら、ろくな事は無いだろきっと。

「言っておくけどな、お前じゃ悪夢にしかならないんだよ！」
「ああ～～酷～～～い☆」

折角ビシッと言ってやったのに、シクラの奴は無駄にテンション高めだった。別に全然堪えてないな……てか、普通に会話で遊んでるだけだこいつ。

「それにスオウイタ～～イ」
「は？　痛いって何が……」

訳の分からない事を唐突に言う奴だ……とか思ったけど、なんだか視線が痛い事に僕は気付いた。周囲の人たち……通りすがりの人達の視線がなんか僕に刺さってる。確かに傍目には携帯と会話してる痛い奴だったのかも……

「くっ……」

僕は逃げるように路地の奥へ。影になってる路地の入った所で携帯にむかってガヤガヤ言ってるから目立ったんだ。もっと奥に行く事に。なんで僕がこんな恥ずかしい思いを……ここがアキバじゃなかったら、通報されててもおかしくは無かったかも知れない。

アキバには路上にメイドさんとかが客引きやってたりするし、普通に強靱な精神を携えてた人達が一杯だからね。でもその一種に見られてたかと思うと、なんか泣けてくる。

「あはは☆　ね、痛かったでしょ？」

「誰のせいだよ！！　なんか可愛そうな目をしてる人と、同類だねって目をしてる奴らがいたわ！」

どっちの目にもゾッとしたよ。ある意味痛い人達が集まった様な街だけど、そこに自分までもが同じ目で見られるなんて……なんかこう、ただの変な人を見る目とは違う何かがあるんだよね。

オタクを周りに公言してる奴らはスゲーな。あんな目と日々戦ってると思うと、素直に驚嘆出来る。僕は路地の奥の青いポリバケツがある所に身を隠す。ここなら通りの方からは見えないだろう。

「はぁはぁ……所で、何でお前が僕の携帯を侵略してんだよ？　どういう理屈でここに居るのか言ってみろ」

僕は携帯画面の中の女に向かって目を細めてそう言った。

「う～ん、理屈ね。簡単に言うと、ここもＬＲＯの延長だから――かな☆　まあ情報量的にはここは重すぎるけどね。私が存在するには」

「じゃあとっとと出てけよ。迷惑だろうが」

ホント、よくよく考えたら絶対にこいつがここに居たら不味いと

思う。そりゃあ、大容量の通信してるとは思うけど、でもそれってあくまで携帯機器でって話だからね。
ＬＲＯ自体と比べてしまったらべくもないよ絶対に。こいつのメモリは絶対にデカい。だって心って奴を宿してるＡＩだよ。
こんな携帯端末では受け入れるのは大変だろ。それに今はただでさえ、大容量の通信を行ってるってのにさ……今度はこっちのサービスに深刻な問題を起こす気か？
実はＬＲＯのダウンもこいつの仕業なんじゃないかと疑いたくなるな。出来そうだし。

「なによその言い方。幾ら私だってちょっと傷つくかも。それにちょっと重いけど、私一人位はまだいけるから大丈夫☆
ＬＲＯの技術を使った通信なんだからその位当然でしょ。なので出ていかないもん。絶対にね」

なんなのコイツ？　なんでこんな風な会話をシクラの奴としなきゃいけないんだ？　すっげー複雑なんだけど……

「ウッザ」

僕はボソッとそう紡いだ。ただでさえ、この暑さが拷問の様なのに、なんで今度は精神の方にダメージを与えそうな奴が出てきてんの？　どっかの誰かの嫌がらせか？
けど、電源を落としても意味はなくて、これじゃ手出しだって出来ない。まあＬＲＯで出会ったら、こんな会話が出来るとも思わないんだけど……

「諦めて諦めて☆　今日は私ここに居るから。それにきっと役に立つと思うな～。なので休戦しましょうよ。
過去のいざこざは今は水に流すとしましょう」

「あれを水に流せと？　何やったかわかってんのかお前？」

どんだけの事をやったと思ってるんだ。それを水に流して敵と楽しくアイテム集めって……出来ると思ってんの？

その無駄に長い髪をショートヘアにしてやろうか。けどそんな僕の言葉に対して、なぜかシクラの方が不満そうにしてこう言った。

「わかってるよ。けどあれって結局はこっちが引いた形だし。寧ろ気さくに話しかけちゃった私のこの心の広さに敬意を払うべきだと思うね☆

負けたのに、どんな遺恨も表さずにスオウと接してる私ってば偉い偉い」

「はっ、負けたなんて微塵も思ってない癖に良く言うな。流石は良く回る舌だ。これから三枚舌のシクラと呼んでやるよ」

僕は嫌みをたっぷりと込めてそういった。だってそうだろ。確かにシクラたちはあの時引いたけど、向こうには実害なんて殆ど出てない。主要な戦力を削ぎ落とされたのはこっち側なんだよ。

ガイエンだってそうだし……サクヤだって取られた。こっちには実害以上に、心の傷ってのが植え付けられた。とても手放しで喜べる勝ち方なんかじゃない。

まあだからってそれが意味ないなんて言わないけどな。あれは全員が頑張って得た勝利だ。どれほどボロボロになっても、諦めずに守りきった、得難い勝利。

負けてた方が良かったなんて思わない。思う訳ない……けど、こいつから負けたとか言われると、そうでもないだろと言っちゃうんだよな。

「三枚舌とか……私ってそんなに嘘っぽいかな☆」

「嘘っぽいって言うか、お前が見せてるそんな顔全部に裏があるんだろ。だから聞いてんだ。何しにきたって」

僕は真剣な声を出して画面の中のシクラを見据える。だけど相変わらず奴は仮面の笑顔を崩さない。もうそんなのいいだろ？　僕はコイツの本性に触れてるんだしさ。まあどこまで行っても、フザケた様な奴ではあったけどな。

「それはさっきも言わなかったかな？　いややっぱり言ってなかったかも知れないから、教えてあげる。私はスオウに協力してあげる為に登場しました！！　ハイ拍手☆」

なんか求められたけど、僕は白い目をもってそれをスルーした。てかなんて言ったよシクラの奴？　協力がどうとか言った？　聞き間違いじゃないだろうか？

「なんか思ってた反応と違うんだけど～～ぶぅ☆」

「どういう反応期待してたんだよ……」

寧ろこうなる事の方が予想しやすいと思うんだけど。しかもぶぅとか……頬を膨らませてわざわざ言うことか？　あざといんだよ。可愛いと思うよりもムカつくっての。

「私的には『まさかそんな！　シクラほど頼りになる存在なんていないじゃないか！　まさに神光臨！？』だと想像してた」

「お前の中での僕の存在定義が疑われるなそれ……」

誰がそんな事言うかっての。誰にもそんな事言わないよ。寧ろ敵を神と崇める奴はいないだろ。絶対にこいつ僕の事おちょくってるよ。

「で、協力ってなんだよ。そんな気あるわけお前にはないだろ。本当の事言えよ」
「たく、スオウは疑り深いんだから。女の子の本心を探ろうとするなんて……もういけずだなぁ☆」

何こいつクネクネ体をクネらせて頬を染めてる訳？　何を狙っての行動だよ。僕のお前を見る目はメッチャ冷たいぞ。

「いいからささっと目的吐け。揺らしまくるぞ」

僕はそう言って、携帯を上下に振りまくる。すると携帯からは「あわわわ――――！！！」ってな声が聞こえてた。

「ストップストップ！　フザケないからそれ止めて！」
「たく、初めからそういいやが――」
「プフゥ、てか実は全然平気でしたぁ☆　だって携帯揺らしたからって、ブリームスが揺れる訳じゃないんですぅ。アハハハ」

シクラの高笑いに頭がプッツンとなった。コイツに笑われると他の誰よりも数倍上増しでムカつく。理由はわかんないだけど、何故かそうなんだ。
きっと僕がコイツの事を本当に大嫌いだからだろうな。高笑いしてるシクラを懲らしめたい。だけど電源落としても意味ないし、振っても意味ないし……画面の向こう側の存在にはどうやったって触れられないなら……指をくわえて歯ぎしりするしかないのか？
ギシギシギシギシ――僕は歯を食い締めながら何とはなしに、指で画面の中のシクラに触れてみた。すると――

「きゃうわ！？」

「ん？」

別に僕には何の感触も反映されない訳だけど……画面の中のシクラはどうやら僕の指に何かをされた様だ。

「ななななな……どこ触った今？」

すっごく顔を真っ赤にして画面の向こうから僕を見てるシクラ。よくよく考えたらさ、向こうでは僕がどういう風に見えてるんだろうか？　やっぱりウインドウが表示されてるのかだろうか？

まあどうでも良いことか。取り合えずこの高飛車で人を常におちょくってる奴に反撃出来るのなら、そんな事は粗末な事でしかない。

真っ赤な顔でこっちを睨むシクラを見てると、なんだかこう、心のどこかから黒い自分が沸いてくるぜ。

「さあな、どこ触ったかなんてこの小さな画面じゃ判断できないなぁ？　感触だって無いし……僕は一体どこを触ってるんだろうなぁ」

僕は次々に画面の中のシクラをつつきまくる。

「ちょ――やっ……だめ！　んっ……あん！」

うお、なんだかシクラのそんな声を聞いてたら指が止まらなくなってきた。こんなビルとビルの隙間の路地裏で何やってるんだろう僕。だけど……やばい、止められない。

おかしいなムカつく筈のシクラが今は妙に可愛く見える。てか一体僕はシクラのどこを触ってるんだろう……これほど感触が伝わらない事に憤った事はないかもだよ。くっそ、せめて今はシクラを苛め倒してみよう。

もっとこう……なんかイヤラシイ感じの声が聞きたい。

「とりゃとりゃ！　ん？　そう言えばツツくだけも芸が無いよな。こう、指でスクロールするみたいにしたらどうなるんだ？」

僕は思いついた事を実践するために、画面の中のシクラに指で触れる。その瞬間も「ハァハァ……もう……許して」とか言うから、ちょっと男としては堪らないかも。しかも瞳も潤んでる感じだし……あれ？　これってシクラだっけ？　みたいだよ。

さてこの指をシュパッと凪いだらどうなるのだろうか？　なんだか指で触れてると、シクラは動けなく成るようで、もう僕の思い通りだね。

（ケヘヘヘ、今までの恨み分存分に遊んでやるぜ）

とか心で涎を垂らしてる僕。なんか目的を忘れてるような気がするけど、今はそれよりも大事な事が目の前にある！！　男ならここで引くわけには行かないじゃないか！

「だ……め……」

うおおおおおおおおおおおおおお！！　やばいシクラが凄く可愛い。元は良いから、顔を染めて涙を溜めて、熱い吐息を吐きながらそう言うのは反則だろ。

なんだか綺麗な月光色した髪から、粒子が放出されてるのかと思うほどに可愛い。いや、実際そう見えるけど……

「ふっふはははは、今ここで止まれねぇな！」

僕はそう言って画面に置いていた指を下にスッと凪いだ。すると「あっ」と言うシクラの僅かな反応と共に、シクラの服の胸元が大

きく引っ張られたようになった。
それによって普通よりも大きいだろうそのマシュマロがモロに見えた。なんか谷間が素晴らしかった。
「きゃっ……きゃあああああああああ！！　何々？　何したよ今！　ヒドい！　最低！」
もの凄い罵倒を受ける僕。だけどそんな言葉は簡単に受け流す事が出来る。けどまあ言う成れば、リアルと仮想の隔たりが最大の残念要素だな。
幾ら今この瞬間に、シクラの服がはだけたからって、画面の向こうじゃ、なんだか残念な気分が拭えない。自分もＬＲＯにいれば、揉みしだく事だって……いや、それは無理かな。
きっと殺されるだろうな。リアルと仮想の隔たりのおかげで僕達は敵同士ながらこんな緩い事出来てるんだもんな。
「う～ん、じゃあ今度は下から上にしたらどうなるんだろう？」
僕はシクラの罵倒を受け流して、もう一度指を向ける。下はスカートだし、もしかしてめくれるかもね。それか上着がペロ～ンてな感じに……グフフ。これじゃあ変態言われても仕方ないな。
でも男なら誰だって多少なりともそこには興味あるわけで……僕の様に女の子と付き合った事のない男子にとっては今の状況は自我を狂わせるには十分なんだよ。桃源郷じゃんか、男のロマンじゃんか。
てかコイツ、わざと語尾につけてた☆が無くなる位に余裕がないみたいだな。
まああれは、見る度にイラッとしてたから良いけどね。
「ちょ……まだやる気……」

震えるシクラは完全に普通の女の子みたいだった。てかこれって僕がまさに犯罪者だよね。よくよく考えたら、向こうには反撃する術も無いわけで……この状態は僕が絶対強者じゃないか！
ますます調子に乗れるな。

「これ以上は……絶対に嫌！」

そう言うなりシクラは背中を向けて逃げ出した。まあ確かにそれしか選択肢はないだろう。けど無意味な事だ。だって僕のカメラはシクラというＮＰＣにロックオンしてある。どこへ逃げようと、僕も携帯かざして追いかければ、済むことだ。

「ほれほれ、どうだこの野郎」
「んっ！　あっ！」

僕はシクラを追いかけて路地裏から出た。そしてそのまま人通りのあるところを走る走る。絶対に変な目で見られてただろうけど、このときの僕には関係無かったよ。
だって後ろからシクラの背中をツツくのに夢中だったからね。ツツく度にピクピク反応するのが堪らない。やばい、変な感じにテンションが上がってる。

「はははははははっははは！　ほれほれほれほれほれ」

自分でも自分がどうなってるのわからない。だけど止まれない。きっとシクラの女の子らしい一面と、この日差しに脳がやられたんだと思う。
けど次第に、テンションに体がついて行かなくなる。

「ははははははっ……ははは……はぁはぁ……はっ」

息が続かない。そして足も回らなく成って僕はその場に倒れた。ベチャッって感じで。てか、アスファルトまでクソ熱い。これじゃあ鉄板だ。

「はぁはぁ……がっは――くっ」

やばい、力が入らないぞ。うう……鉄板で焼かれるお好み焼きの気分。てかこの程度走った位で体にガタが来るなんて……ちょっと情けないぞ僕。通行人の人達が僕を見てるのがわかるんだけど……止まってくれる人がいない。

おいおい、人が倒れてるのに、それはあんまりではないか？　それともさっきの僕の異常なテンションのせいなのかな？　確かにあれを端から見たら、危ない人だったかも。携帯に向かって走りながら話しかけてるなんて、想像したら僕も近寄りたくないかも……

でもそれじゃあ困る……マジでこのままじゃ人間一人焼け死ぬよ。都会の真ん中で、日差しに焼かれた焼死体が一つ……そんなニュースが流れる事に。

この位置からだと、世界が陽炎に包まれてる様に見えるな。車も人の足も熱気で歪んでる。まるでさっきまでの僕の心の様だぜ。これこそ天罰か……

「ふん！　死ね！　そのまま死ね！！」

なんか携帯の方からそんな声が漏れ聞こえてくる。僕は最後の力を振り絞って携帯を顔上の方へ持ってくる。するとそこには、僕を何度も踏みつけてるシクラの姿があった。まあ実際には踏むことなんか叶わない訳だけどね。すると僕が見てる事に気づいたのか、い

つもの余裕たっぷりの表情を浮かべるシクラ。
「良い気味ねスオウ☆　ほんと良い気味！　乙女の体を弄んだ罪はこんなものじゃないわよ！！」

いや……いつもよりも数倍質悪くなってらっしゃる。でも僕はそれよりも気になるものを実は見つけてたこの態勢でスカート姿のシクラを見上げるってことはつまり、例のアレが見えてる訳だ。

「黒のレース……意外な様で、しっくりくるかも……」
「――っつ！！！」

シクラは腕でスカートを直ぐに押さえた。だけど遅いな。僕の頭には今の映像が鮮明に記憶されたよ。ミニスカートで足上げて蹴りに来るから見えるんだ。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す……」

なんか呪いの言葉を呟き出したシクラ。案外純情だったんだな。うう……でもこれは殺される前に死ぬかもしれん。這ってでも影に行かないと、まだ死ぬわけには行かないんだ。
ずりずりと芋虫みたいに道路這う僕。するとそこで僕の進行方向に邪魔者が……立ち止まって明らかに僕を妨害してる。そんな誰かが、こう言った。

「ほんといつもバカみたいな事しかしてないのね」

庭違い畑違い（後書き）

第二百四十一話です。
最後にまた一人登場。やっぱりシクラと二人じゃねって事で。でも今回はちょっと立場逆転。まあＬＲＯの中では絶対に出来ない二人の絡みだから、有る意味貴重です。
次回は三人でイベントクリア目指す……かな？
てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

受信と送信の関係（前書き）

失礼な事を言って現れた奇抜な格好をした女。その人の印象はなんだか次々と変わる。最初は嫌な奴かと思ったら、なんか優しい所もあった。けど、最後にそんな印象はどっか行ったよ。

だってあれは強力だった。優しさとか嫌とかの次元じゃない。きっと歩いてる世界が違う。痛い人間がどういう奴かを僕は知った。彼女の望みどおり、人間レベルがきっと一位は上がったと思う。

受信と送信の関係

「ほんといつもバカみたいな事しかしてないのね」

目の前に現れた誰かの言葉。それは失礼極まり無く、そしてトゲトゲしい。今の僕にそんな言葉をかけれるなんてよっぽどの心冷たい奴だろう。

普通ならまず「大丈夫ですか？」の場面だろうここは。僕が苦しんでるのわからないのこの人？　てか、地面と触れあってる皮膚が絶賛焼かれ中なので、一刻も早く日陰に入りたいんだけど……くっそどこのどいつだよ、こんな邪魔をする奴は。

僕は見えてる足部分をたどって視線を上の方へ。まあ多分女の人だろうとはわかる。だって足細いもん。足首がキュっとしまった良い脚をもってらっしゃる。

まあ靴は何故か、サンダルなんだけど……しかもお洒落な外出用とかじゃ絶対に無い奴。なんていうか……学校のトイレに常備されてるアレみたいなのを履いてる。

まあでも脚が綺麗なのは良いことだよね。

「んん？」

視線を上げて行くと同時に、その脚を見てる訳だけど、思わずそんな声を出す位にちょっとドキドキだ。太股の位置まで来てるんだけど……なんかズボンとかスカートらしき物が出てこないんですけど？

これって、このまま視線を上げて行っていいのだろうか？　でもこのまま進行方向を阻害されたままじゃ命に関わるからな……もし

もパンツがモロ見えしてたとしても、それって不可抗力だよな。
てか流石に、こんな講習の面前にパンツを晒して現れるなんてしないだろう……と思いたい。

ドッキンドッキン――期待と不安が入り交じった胸の鼓動がなんか激しく成ってきた。さっきまで空気足りなくて苦しかったけど、今は別の意味で苦しいよ。
僕は視線を上げていく。そして脚線美の終着点は直ぐそこ……一体どうなってる！！　と胸に期待を膨らませた訳だけど、実際はやっぱり公衆の面前でパンツを晒す女の子はいなかった。
まあだろね。女の子でも犯罪だよそれは。目の前に現れた誰かの大事な部分は上着の延長線上によって隠されてた。大きめの服をきっと着てるんだろう。
でもかなり危ないけどね。だってこれ……隠れてる部分はほんとギリギリだろ。見えそうで、見えない。その限界を追求してるよ。
まっ、ちょっと残念だけど、あからさまに見えてるよりはこっちの方が何か心に来る物があるから良しとしよう。僕は更に視線を上げていく。
すると頂けない頂が二つあった。なんていうかこう……それはそれはご立派なお山だ。

（サイズが合ってない服を着ててもこれだけ強調されるって……どんだけなんだよ）

僕は密かにそう思った。てかなんかほんと、独創的なファッションしてる。彼女の上着……明らかに途中からデザインとかおかしい。
まるで違う服を切って繋げた様な、そんな印象を受ける。てかわざわざ長さをそうやって伸ばしてる？　下半身を隠すために？
実際ただのTシャツっぽいんだけど、そこは見えない様に工夫はされてる。ヒラヒラしてるんじゃなく。お尻周りを包む込むような

形にそこは整えられてるみたいだ。
裁縫のスキルに長けてるのかな？　それにしてはデザインが最悪だけど……何故にどうしてそれを組み合わせた？　みたいな感じ。
適当に古いのから継ぎ接ぎしましたって感じだ。だから統一性なんて合ったものじゃない。いや、もしかしたら狙ってるのかも知れないけど……そうはみえないかな。
そして実際もう一枚を着てる訳だけど……なんか着てるのか着てないのかわかんない。胸の下まではチャックで胴体を覆ってるんだけど、その上はもう肩にさえ引っかかってないよ。肘の所で、その上着は辛うじて脱着してない感じ。着たいのか着たくないのかわからない。
これは外出着なのかな？　自室から急いで飛び出した感が垣間見得るんだけど……てか、考察長い。こうしてる間にも、僕の体はアスファルトと言う鉄板に、その身を焦がされてるよ。

「良いから……退けよ。てか、どいてください」

僕は干からびた喉から、掠れた声を絞り出す。すると彼女はおもむろにペットボトルを取り出した。そしてキャップを取ると、逆さにして僕めがけてその中身をぶちまける。

「うぱっ――ちょっ――何すんだ！」
「取り合えず冷やそうかと思って」

だからっていきなり水をぶっかけるか？　確かに地面もこれでかなり温度が下がったし、僕の体の熱も逃げてくれたみたいだけど……結構な荒療治だよ。彼女のメガネの奥の瞳はなんか冷たく僕を見下ろしてそうだな。眼鏡で見えないけど。
水を僕にぶちまけた彼女は、それだけ言うと、影の方へ自分で行った。僕も取り合えず、このまま日差しの下に行るのは辛いので彼

女を追って日陰へ。
重い足取りだったけど、なんとか彼女の隣で腰を下ろす。
「ねえ、誰なのよこれ？」
そんな事を画面の向こうから訪ねてくるシクラ。そう言われても僕にだってわからない。こんな奇抜な格好の知り合いは心当たりがないんだけど……僕は「さあ」としか返せないよ。
「はい、コレ」
すると今度は頬に冷たいジュースが当てられた。僕はちょっとビックリしたけど、それを有り難く受け取る事に。スッゴい喉が乾いてたんだ。だけどスポーツドリンクは温かったんだよね既に……だからこれは有り難い。
僕はプルトップを上げて、冷たい飲料水を喉に流し込む。
「プハァ！」
体に染み渡る。ＨＰが少しは回復してるかな。てか見た目と違って随分優しいね。隣で壁にもたれ掛かる彼女は、自分の分のジュースを口に含みながら、自身の携帯を街に翳してる。
この人もつまりは、イベント参加者か。
「あの……お金払いますよ。百二十円で良いですか？」
見ず知らずの人にただで物を頂くのは抵抗がある。だから一応、このジュースの費用くらいはね。
「百二十万を私は要求するわ」

「は？」

今なんてこの人言った？　サラッと言ったけど、聞き間違いじゃないよね？　百二十万がなんたらと……

「だから百二十万よ。返す気があるならそれだけ要求するわ。私をこんな人の臭気が集まるゴミ溜めに呼び寄せたんだからその位当然よ」

すごい事言ってるよ彼女。小さな唇から、思わず聞きほれそうなすずやかな声で、とんでもないことを言ってる。いや、でも待てよ……

「返す気を引っ込めたらどうなるのそれ？」

「ならいらないわ」

あっさりと彼女はそういいました。冗談だったのかな。てか、この見上げる様な感じは危ないな。ほんと……見えそうで見えない。

「ねえ」

「はい！？　なんでしょう？」

やましいことを考えてたからか、声をかけられて思わず声が妙に高くなってしまった。うう、恥ずかしい。だけど彼女はそんな些細な事には触れようともしない。

いや、そもそも興味すら無さそうに流してくれてる。

「君ってスオウよね。ＬＲＯで何かと話題の」

「それは……」

どうしたものか。別に名乗って困る事でも無いけど、なんだかこの人は独特なんだよな。それがネックだ。

「濁したって無駄。ネタは上がってるわ」

そういって彼女は携帯の画面をこちらに向けた。するとそこにはＬＲＯ内での僕の画像が。

「へぇ～よく似たキャラもいるもんだね。まあ世界には同じ顔の人間が三人はいるって言うし、ゲームの中まであわせたらもっといたりしても――」

「――ＬＲＯにはこれと同じ顔の人なんか二人といない。微妙でしょ？」

悪かったな微妙で。そりゃあ確かにＬＲＯには美形が一杯だよ。それか突き抜けた顔の奴らかのどっちかだね。極端なのはノウイの目が点な顔とか。

そりゃあ僕みたいに中途半端は少ないだろうけど……言い方って物があるよ。

「それに他にもネタはあるの。知ってた？　参加者をタップするとＬＲＯのＩＤが表示されるわ。それを自分のリストと照合すれば……」

そういう事か。それだと言い逃れできない……ってまてよ。リストって事はこの人って――

「ちょっと待てよ。他人のＩＤなんてフレンド登録しないとわからないだろ。だから幾らこのイベントの参加者のＩＤがわかっても知り合いじゃないと確信はもてない。

つまりはさ、もしかしてこっちにも君のＩＤの登録があるかもだよね？　ＬＲＯでなんて名乗ってる？」
「それは言えないわね」

速攻でそっぽ向かれたよ。まあけど、こっちもその方法で確認出来るか。この人のＩＤを確認して、僕の少ないフレンドリストと照会すれば良いだけだ。だけど表示されるのは、ＩＤだけなのかな？
ちょっと気になる事があるんだけど……まあ今はそれはいいよ。
それより彼女は一体誰なんだろう？　候補としてはリルレットかセラかシルクちゃんになるんだけど……イメージ的にシルクちゃんは無いな。
すると残りは二人……一体どっちが……カメラを向けようとしたら僕の携帯が潰れるかと思うほどに、彼女は携帯を強く握ってカメラを防いだ。

「女の子のプライバシーを無断で犯すなんて、しないほうが良いわよ」
「ならなんで僕のはいいんだよ。僕にだってプライバシーはあるぞ」

女って言葉は使い勝手良すぎだろ。男は男だからって事が多すぎる。ないがしろにして言い訳じゃないよな。

「元の顔でＬＲＯに入ってる人が何を今更」
「それは別に、僕の意志じゃないっての！」

思わず言ったその言葉に、彼女はニヤリと口元を上げた。

「今、認めたわね。自分がスオウだって」
「あっ……」

確かに今のは完全に自分で認めてしまったな。

「ああーもう良いよ別に。そうだよ僕はそのスオウです。認めてやるからそっちも教えろ。知り合いなら別に問題ないだろ？　リルレットか？　それともセラか？」

僕は必死に携帯を引っ張る。だって自分だけ情報を開示するなんて割に合わない。それに別に隠す事じゃないじゃん。知り合いなら。そっちがそもそもちゃんとＬＲＯでのキャラ名を言えば、難なく教えた物だよ。けどなぜか、この目の前の彼女はそれを頑なに拒むんだ。

「リアルはリアル、ＬＲＯはＬＲＯよ。こっちでは知られたくない事が一杯なの。だから詮索はしないで」

「……むむ」

なんか真剣な感じで言われてしまったな。別に嫌なら無理して聞こうとは思わないけど……でもどこか納得できない様な……すると画面の中のシクラが肩を竦めてこう言った。

「スオウはホント、女からしたら扱い易い男よね」

なんだその不名誉な言葉は。

「ん？　今何か聞こえなかった？」

「え？　どっかの誰かの声じゃ――」

一瞬、シクラの事バラしてもいいような気がしたけど、よくよく考えたら、それは不味いと判断したよ。だってもしこの目の前の女の人がセラだったらさ……携帯壊されそうだろ。

エルフで、シクラを許してる奴なんていないだろうし、僕だって実際そうだけど、セラは時々感情と行動が直結するじゃん。
流石に携帯壊されたら、殴られるよりも効くぞ。だから、そんなもしもを考慮してシクラの事は黙っとく事に……

「ちょっとスオウ、この私をどっかの誰かなんて心外――」

プツ――っとうるさい奴が喋りだしたから、電源を落とした。たく、あいつは誰も彼もが僕の様に接っす事が出来ると思ってるのか。敵だって事、忘れるなよな。

「やっぱりなんか、直ぐ近くでスオウと呼ぶ声が聞こえたような……」

隣にいる彼女はそういって周囲を見回してる。まあよくよく考えたらそうなるよね。ここはリアルな訳だし画面の向こう側から言ってるとは思うまい。

「気のせいだろ。それとも僕の事を考えてるから、どっかの声がそういう風に聞こえたとかさ？　まあちょっと照れくさいけど、そういう事も――」
「なないわね。バッカバカしい……ななななにゃによそれ」

彼女の唇が震えてる様に見えるのは気のせいか？　それにニャによって言ったし……でもこれで気のせいの方向に持っていけそう――と思った矢先、再び耳障りな奴の声が携帯から聞こえてきた。

「だから、こんな事したって私には意味ないもん☆　なんせ私は規格外の女シク――」

プツッ――と再び電源を落とす僕。たく、もうちょっとシクラの奴は、自分が嫌われ者だという自覚を持て。

「なんだか、そっちの方からさっきと同じ声が聞こえた様な？　しかも何か言いかけてなかった？　シクなんとかって……」

そういって、今度は僕の方と、その後ろの先を重点的に見る彼女。けど、何かが見つかる訳もない。だって喋ってた奴は、携帯の中にいるんだからね。

「完全に気のせいのだろ。この暑さだから、幻聴が聞こえてもおかしくないよ」

「私を貴方達の様な下等生物と一緒にしないで。この程度の暑さ……私は全然へっちゃら……よ」

それにしてはさっきから汗が不味い位に見えるのは気のせいか？　絶対にこの暑さに参ってるように見えるんだけど。

「そう……なのか？」

「何よその目？　貴方には見えないでしょうけど、私の体の周りには薄い球状の膜があって、それが中の温度を一定に保っててくれてるのよ。

まあ見えない貴方にはわからないでしょうけど――ふふふ、私に付いてきたかったら、自分の魂のレベルを上げなさい」

汗だくの癖に、奇抜な格好した彼女はそんな事を言った。ファッションだけじゃなく、中身も痛いなこいつ。まあここで無駄に否定して感情を煽っても仕方ないから、ここは「はいはい」と適当な相槌でもかますかな。

こういう自分の中で設定を作ってる人は、無理に現実を説いても

意味ないからね。

「はいはい、気が向いたら善処してもいいか――」

「ププ――魂レベルだって、相当痛い設定かましちゃってるわね☆」

僕が最後の「な」を言おうとしたところで、再び厄介な奴が復活してきやがった。たく何でこう、こいつはタイミング悪く出て来る訳？　絶対に狙ってるよな？

「誰だ！　今言った奴！？」

彼女は今のシクラの言葉で周りにまで向かってそう叫ぶ。ちょっとそれにはビックリだよ。大人しそうな顔して周りにまで噛みつくんだな

まあシクラの発言も発言だけど……あんな事言ったら、この手の人は怒るよ。自分の中の設定で心のバランスとか、社会との付き合い方を保ってる人もいるんだよ。

やっぱり人間って奴を理解してないな。まだまだＡＩからの延長線上って事か。

「ほらほら、もうそこら辺で人を呪えそうな視線を放出するのやめろ。今の声だって、どっかの電波がたまたま入ってきただけと思えよ」

「……」

なんか今にも周りの人達に随時「死ね」とか言って回りそうだったから、僕は彼女の腕を掴んでそういった。だって目が……血走ってるよこの子。黒縁メガネの奥の瞳が怖い位に。

「誰が電波よ。電波はそこの痛い女――」

「――マジ黙ってろよ頼むから」

シクラの口を糸かなんかで縫い合わせたい。マジで。たく、画面の向こう側にいるからって気楽な奴だな。こっちはなんかいたたまれない風になってるんだぞ。ただでさえ彼女の格好は目立ってたのに、更にさっきの言動で注目の的だよ。

ホントいうと、ここから今直ぐにでも逃げ出したい。けどジュース奢って貰ったしって事で、放っておく事も出来ない。

ある意味心配だしなこの子。すると周りに向けられてた顔が急にこちらを捉える様に、グリンと回ってきた。

「今、あの頂けない声が聞こえたわ。やっぱりさっきの声の正体は貴方？」

うおおおおい！　何故か矛先がこっちに着ちゃったよ。てか、腕に持つ携帯から出てる声何だから、こっちだと気づくのは当然かもだけど……ヤバいって。

「いやいや、落ち着いて考えろよ。さっきの声は女だろ？　僕は男だぞ。だからその呪いの瞳を向けるのやめろ」

「これは呪いの瞳じゃない。でも着眼点は悪くないわね。特別に良いこと教えてあげよっか？」

何々？　また彼女の電波的な話が始まってる様な気がする。僕がどう言おうか迷ってると、どっかのクソが僕の声色をまねてこう言った。

「まっ、まさか呪眼よりも更に高度な目を持ってると！？　もしかして君の瞳はアレか？」

すると彼女はそんな誰かさんの言葉に満足したのか、口元を少し上げて「ふっ」と笑った。

「そうアレ。アレが分かるとはまさか貴方もインフィニットアートを？」

「はは、まあ何を隠そうゴールデンボールを二個程、この体に宿してる」

ゴールデンボール……いや、それ金〇だろ！？　僕は心の中で精一杯突っ込んだ。てか、インフィニットアートも謎だし……シクラの奴、面白がりやがってこのままどこまで突っ走る気だよ。

なんか向こうが乗ってるから、ここで無理矢理止める訳にも行かない。

てかなんか、彼女が震えてるんだけど？　やっぱりゴールデンボールは無かったんじゃないかな？

「ま……まさかそんな奇跡の種を宿してたなんて。どうりで初めて見たときから、私のこの瞳が反応してた筈だわ」

そういって彼女はメガネ越しに、自分の瞳を片方隠す。なんかありだったっぽいね……ゴールデンボール。奇跡の種とか言ってる時点で、金〇だと気づいてそうだけど。

あ～頭が痛くなってくる。

「君のインフィニットアートであるその目は一体？　呪眼よりも上となると、そっちも相当のハイエンドだね。楽しみだよ。聞かせてくれるかい？」

どうでも良いけど、なんでシクラの口調はいちいちこう……キザッたいの？　美形を想定して話してないか？　僕だと言うことを前

提に口調を整えろよ。僕はそんな甘い声で囁かないんだけど……しかも勝手に「ハイエンド」なる言葉を作ってるし。
バカにしてた割にはノリノリだな。きっと彼女を騙すのも、僕が困り果ててるのも面白くて仕方ないんだろう。良い性格してるぜ。
てかそろそろ終わりにしたい……このノリでの会話。周りの視線が痛いんだけど。

「私のこの瞳は『千里眼』よりも更に上の『天寿眼』よ」
「な……なにいいいいいい！？　天寿眼だと？　そんな物がこの世に存在してる訳が……」

おいおい、流石に付いていけないぞ。声にあわせて一応演技してるこっちの身にもなれ。超恥ずかしいんだからな。

「ふふふ、私を貴様達と同列の存在と考えるな。天寿がこの瞳に宿りしそのときから、私は人を超越した存在として、未来と過去を幾重も見てきた。いわば世界の監視者となったのよ！」

彼女は恥ずかしさなんてひとかけらも見せない。きっとこれが地なんだろう。とても凄い精神の持ち主だな。僕なら、こんな自分には耐えられないよ。発狂しそう――てか彼女は発狂してそうだな。
今は台詞をシクラが言ってるから良いけど、全部一人でやってたらきっと悲しくなると思う。自分自身に。

「監視者だと？　そんなラスボ的存在うらやま――じゃない、それじゃあ今までの戦いもお前は分かってて？　何で理不尽な世界を変えようとしないんだ！？」
「ふっ……理不尽こそが世界だと天寿は私に見せてくれたのよ」

なんだこのどっかの少年マンガの最終回的な会話は。てか今まで

の戦いって何だよ。まあ突っ込んだら負けなんだろうな。しょうがないから最後まで付き合ってやるさ。

「くっ……それだけの力を持ってながら……監視者よ、僕はそんな運命にあらがってみせる。今ここでそれを宣言して生き続けてやる！」

「けれど貴方も歯車の一部になるだけよ。私は貴方の未来も知ってるわ。これから卒業して三十になるまで就職も出来ずにフラフラと『充電期間中』と言い張り、ようやく勤める会社は社員三人の町工場。

それから二年後に結婚するも、奥さんには尻に敷かれて、月の小遣いは五千円。搾取され続ける毎日に耐えきれなくなり不倫をし、そこで女に騙されて借金を一千万こしらえる。

毎日借金取りに追われる日々。だけどそこで意外にも支えてくれた妻。二人でがんばり借金返済。そして五十代半ばで町工場の小さな社長に成れましたとさ」

どっかで見てきたかのようなその言葉に、僕は寒気を覚えたよ。何故か目に浮かんだそんな光景が恐ろしい。

受信と送信の関係（後書き）

第二百四十二話です。
強烈なキャラが出てきたけど、誰かはまだ明かせない感じです。
まあもしかしたら全然関係奴かも知れません。なんだかどんどんイベントがややこしくなってきてる感じ。
てか進んでないし……でも次回からは進ませていきます。
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

触れ合いが大事（前書き）

僕達はようやくイベントを進める事に。最初に向かったのは第四研究所に重なり合うビルだ。そこの爺に用があるわけじゃなく、その屋上にもう一体が居るらしい。

僕はリアルで知り合った痛い人と共に、頭を悩ませながらイベントに臨む事になったんだ。

触れ合いが大事

絶え間無く続く蝉の合唱。空に向かってそびえ立つビルの森でも、彼らはどこから、いやどこでも鳴いている。空には大きな入道雲が点在して、この季節の空をその大きな存在感で埋め尽くしてた。

いつもよりも蒼く見える空の天辺からは、仰ぐことさえ出来ない日差しが世界を明るく照らしてる。いつだってこの時期は、立ち止まって見上げた空の天辺に、太陽があるような……そんな気さえする昼下がり。

僕達は少しだけそんな太陽の近くに来てた。まあようは、古びたビルの屋上へと居るわけです。このビルはブリームスでなら、国立第四研究所と表される所だ。

まあ一度この前までは来たわけだけど、その時は玄関前の爺にがっくりしただけだったからな。それに直ぐその後、厄介な奴らとはち合わせたしね。

だけどこうやって僕が再びここに戻って来たのには理由がある。ここの玄関先の爺さんが「どうしたもんか」と言ってたのは多分これなんだと教えて貰ったわけだ。

教えてくれたのは新たに知り合った、自称『時の監視者』こと『メーカーオブエデン』さん。なんだそれ？　って思わないでください。もう散々思ったから。つまりは痛い人なんです。だって僕が名前聞いたら、嬉しそうこう言ったんだもん。

「名前？　ふふふ、名前なんて私には意味のない物だけど、どうしてもと言うなら、この世界の人間が認識出来る名前を教えて上げるわ。

でも気をつけなさい。私の存在を証明する名を呼ぶという事は世

界のアラゴリズムに影響を与えるの。まあそれでも知りたいのなら私の事は敬意を込めて『メーカーオブエデン』とでも呼びなさい」

長い前振りと、意味不明な単語に付き合ってようやく出てきた名前がメーカーオブエデン……正直世界がどうでもよくなったね。

「ちょっとどうだったの？」

僕が一人、前回と今回を繋ぐ回想を頭で紡いでると、後方からそんな声が。振り向くと、階下へ続く階段の所の陰で涼んでる奇抜なファッションの女がいる。

自慢気な生脚を惜しげも無く……というか危ない位に晒して、継ぎ接ぎの改造Ｔシャツに脱ぎ掛けみたいな上着を羽織ってる女。

まあファッションだけで電波を表してるような奴だな。黒縁メガネに跳ねるのを押さえるためか、大量のピンで覆われた髪も特徴的だね。

見た目を気にしてるのか、気にしてないのか分かりづらい。まあどう見ても世間とは一線を隔てる訳だけどね。

僕はそんな彼女に手でオーケーを作ってこう言った。

「確かにこいつみたいだ。メカブの言ったとおりだな」

すると彼女は遠目からでもハッキリと分かる位に眉を曲げた。どうやら何かが気に入らないらしい。たく、何にでも目くじらを立てる奴だ。

僕は携帯をＮＰＣが居る方に向けるのをやめて階段の方へ歩く。すると彼女が口を尖らせて文句を言ってきた。

「ちょっとその呼び方はやっぱり納得出来ないわ。敬意が感じられないし、それよりもなんかこう……バカにされてる気がする」

「ええ～そうかな？　メカブなんて敬意満点じゃないか。そもそもメーカーオブエデンは長すぎるし。地球的な改変をしてみたんだよ。郷にいっては郷に従えっていうじゃん。だから我慢してよ」

まあ実は敬意なんて微塵も無いけど……てか『メカブ』は僕も最初聞いた時吹き出しかけたよ。シクラの奴の感性には驚きだ。そこを取るかって感じだもん。

「くっ……この天寿眼は貴様の心の内まで見透かしてるぞ。貴様は絶対にバカにしてる！」

「な～んだって～」

実際僕だけじゃメカブの電波話には付き合い切れないから、返事もこんな適当になる。てかいつまでもあんな恥ずかしい演技出来るかよ。あの恥ずかしさは、クラスメイトの前で先生の事を間違ってお母さんとか呼ぶ恥ずかしさの二乗はあるね。

まあ僕には「お母さん」なんて呼んだ経験はほぼないけど。想像は出来るよ。今日のこれを二乗分減らせばいいのだ。

「……」

なんだか適当に返したら、メカブは急にしょんぼりしてる。今まで乗ってたのに、急に乗らなかったから落胆してるのかな？　くっそ、レンズの向こうの瞳が良く見えないから判断できないな。すると手の中の携帯からうざったい声が再び聞こえてくる。

「あ～あ、男なら一度やったことを貫き通しなさいよ。これだからスオウは――」

「あのな、あれはお前が勝手に……」

僕が小声で反論しようとすると、次のシクラの言葉で言葉がつっかえた。

「――セッちゃんに愛想を尽かされる羽目に☆　女の子の気持ちが分かってないよね」

ぐぐっ……こいつがそれを言うか。

「ほらほら私も手伝って上げるから。恥ずかしさなんてそのうちどっかいっちゃうって☆」

「それをなくすのが怖いんだよ」

戻れなくなりそうだろ。それが無くなったら。

「じゃあ、恩を仇で返すんだ？　まあ私的にはそれもオッケーだけどね☆」

「くっ……それは……」

これはある意味、激しい運動するより鍛えられるんだけど……主に精神が。まあ鍛えてくというか、壊されていくと言った方が正しいのかも知れないけどね。

けど恩を仇で返すなんてそんな……僕は大人しく立ち尽くしてるメカブをみる。そして一つため息をついた。

（しょうがない）

そう心に言い聞かせてね。

「じゃあお前が台詞言えよ。僕じゃスラスラ出てこないからな」

「オッケー☆　任せておいて！」

ノリノリなシクラはウインク一つそう言った。こっちは腹の底がズドーンと重いよ。まあここからは僕はシクラの言葉にあわせるだけ……だけどそれが痛いんだ。

「ん……んん」

喉の調子を確かめてから、シクラが見事な声真似で語り出す。

「ふっふ、天寿眼の力はさぞかし強力だろうが、忘れて貰っちゃ困るな。僕にもインフィニットアートのゴールデンボールが宿ってる事を」

完全に芝居口調なシクラの喋り。だけどそれを聞いたメカブは直ぐに顔を上げた。たく、面倒臭いな。

「まさかゴールデンボールの力で、天寿眼の見透かしを欺いてるとでも？」

「ふふっ……それはどうかな？　だけど僕に宿るゴールデンボールは人々の感情を詰め込んだパラドックスみたいな物だよ。

僕の心は一つじゃない。幾ら天寿眼でも、たった一つの心を覗いたからってそれを本心とは思わない方がいいよ」

はっはっは、自分でも理解できない会話が始まったぜ。まあここはシクラを信じて丁度いい落とし所に持って行って貰うしかない。

僕の……というかシクラの言葉で何か身を震わせて僕をみてるメカブ。

「まさか複数の心という感情を並列に存在させてるとでも？　そんなパラドックスの中で自分を保つことが出来るなんて……いや、既

に自分自身と言う存在は薄まってるのかしら？」
「ふっ、その考えもまた間違いだよ。様々な感情は人を成長させる代物さ。感情のバラドックスは僕が経験し得ない様々な物を感じさせて成長をくれる代物だ。
僕は既に受け入れて、既に学習してる。そうだな。君が時の監視者を名乗るのであれば……僕は『無限の蔵』を名乗ろう。
人の尽きることのない感情を常に抱え知ることが出来る、満たされる事のない蔵。僕は君の事を、そしてこの愛称をバカにしてなんかない」
「無限の……蔵」

なんか熱い眼差しでそう呟いたメカブ。だけどマジで止めてほしかった。何だよ無限の蔵って……メカブもメカブだけど、シクラの奴もそんな設定良く思いつくな。
次から次へと……どこからそんな電波受信してるんだこいつら？

「さて、納得してくれたかな？　じゃあそろそろイベントに戻ろうか。なあに、僕たちが協力すれば、今からだって十分出来うる……そうだろ？」
「当然！　負ける気がしないわ」

なんとか機嫌はとれたみたいだな。んじゃ、ここら辺でまともな会話へ行くかって事で選手交代だ。

「でも良く、見つけたよな。こんな場所のＮＰＣなんて。実際あの爺さんの時点で外したかなとか思ったけど、助かったよ」
「ふん、誰に物を言ってるのよ。そんなのこの天寿眼で一発よ。それよりもアイテムを貰える条件はわかった？」

メカブの痛い発言は続いてるけど、そこはさり気にスルーして、

首を振り振り。

「だめだな。一応アイテムは手に入ったけど、何で貰えたかは不明。ランダムなんじゃないか？」

手には入った物は多分流行りアイテムの一つ。これを別のＮＰＣに渡せば、更に上のアイテムへの道が開けるはず。

足がかりを僕は手に入れたんだ。まあでもホント、なんか普通に喋ったらくれたからありがたかったな。ホントに貰えない人とか居るの？　って感じだった。

でももしも何かの条件付きなら、次はないかもだよな。まあだけど、それは貰えた今はどうでも良いことでもある。

「ランダムね。まあ良いわ。ここら辺で流行りアイテムをほしがってたのは、確か何体か居たわ。そこら辺は何か渡す相手によって違ったりするのかしら？」

「さあ、それもわかんないな。取り合えず、やってみて考えるしかないだろ」

「まあそうね。どうにでもなるわよね。私たちなら」

妙に自信満々なメカブ。てか電波な話をしてたから、もう誰とも被らなくなっちゃったよ。

セラかリルレットだと思ってたんだけど……違うのかな？　でもそしたらどうやってＩＤで僕がスオウだと分かったんだって事になるし……取り合えず僕たちはこのビルから出て外へ。そこにはまだあのＮＰＣの爺さんが居た。

まあ当たり前だけどね。

僕達は取り合えずメカブの確認してる一番近くのアイテムを受け取りそうなＮＰＣの場所へと向かう。路地を幾つか曲がると、翳し

てる携帯の画面にＮＰＣの姿が映る。

「アレみたいだね☆」

「だな」

シクラの言葉に相づちを打って、僕はそのＮＰＣをタップする。すると確かに流行りアイテムを欲しそうな事を言うじゃないか。僕はさっき手に入れたそのアイテムを出して、渡すを押す。

「躊躇わないのね無限の蔵」

「当たり前だろ。てかその呼び方はどうだろうかなんだけど」

それを言う前はスオウって呼んでなかったっけ？　出来るのなら普通に名前で呼んでほしい。

「何が？　だって無限の蔵なんでしょ？」

期待するような目でこちらを見てくるメカブ。どうせここでその呼び方を拒否ったらまたズド～ンと落ち込むんだろう。

なんか同類扱いされてるし。うう……むむむ……

「まあな」

たく、こういう意外にどうしろと？　僕の人間レベルが、今日で変な方向に傾いてるぜ。

ＮＰＣにやっとの思いで手に入れた流行りアイテムを渡すと、思った通りに違うアイテムの情報をくれた。なんかこんな感じでね。

『これを私に？　いやあ～なんだか悪いですね。そう言えば貴重なアイテムがこのブリームスでおかしな現象を起こしてると聞いたことがあります。
なんでも噂では、あるはずの無い場所に道が出来、そこに迷い込むとなんと……そのアイテムに食べられてしまうとか。
ははは、まあただの噂かも知れませんが、何かのお役に立ちますとよろしいかと』

つまりこれは、このアキバとブリームス……その重なりのどこかで齟齬が現れてる部分があるって事じゃ無いだろうか？　ブリームスでは道じゃない所でも、アキバではそこが道と化してる……とかさ。

「つまりはそのズレてる部分にきっとアイテムがあるって事ね」

メカブは僕が渡した情報でそう推理したよ。まあきっとそうだろう。そこにきっともっと貴重なアイテムがあるんだ。でももっと気になる事も言ってたよな。

「けどさ……アイテムに食べられるって、どういう事だ？」

このイベントにバトル展開はない筈だけど。アイテムが人を食うってのも今一ピンとこないよな。

「まあ曰く付きのアイテムって奴でしょ。けどその方が貴重性は高そうじゃない。私達のインフィニットアートしかりでしょ？」
「僕のゴールデンボールにいわくなんかついてねーよ」

なんだその呪われてるみたいな設定は。別に病気とか持ってないよ。健康を取り柄にしてきたんだからな。

「あれれ？　一つ潰れたら活力が大幅ダウンのいわくは嘘なの？」
「それは……あながち嘘でもなさそうだけど……」

てかやっぱり金〇ってわかってるよな？　何を言わせようとしてるんだこいつ。たく、この日差しでただでさえ頭が熱いのに、変な事言われたら、すぐにオーバーヒートしそうだよ。

「まあ取り合えずそのズレてる場所を探すわよ」

メカブはそう言うと、携帯を翳して歩き出す。僕も携帯を翳して歩き出す訳だけどさ……僕の方の画面にはうざったいシクラが前方のメカブに色々とちょっかい出してる。
アイツにも見えてるのかな？　重なりあってるのってのは向こうにもこっちの姿を投影してるんだろうか？　まあなにされたってメカブがシクラの存在に気づく事はないだろうけどね。
アイツは僕の携帯からしか見えないフィルターを張ったらしい。僕がそうしろと言いつけた。だって面倒だからね。
どこで誰がシクラの姿をそのカメラで捉えるか分かったものじゃないし……まあ殆どはメカブ対策だけど。僕の中ではセラかリルレットだと思ってるから、不意に見つかる事は避けたいじゃん。
どうなるか分かったものじゃないし……まあそれにしては調子に乗りすぎだけどねシクラの奴。アイツどこかからか取り出した紙とペンで何かを書いて、背中にそれを張り付けたみたいだ。
してやったりみたいな顔でこちらを見て、横にジャンプして「ジャ〜ン☆」とか言ってる。メカブの背中に張り付けられた紙にはこう書いてあったよ。

『私はキチガイの電波女です。実は私を除いた世界は、宇宙からの侵略を受けて、洗脳されている！！』

すごいカミングアウトだね。てか、小学生並のイタズラだよ。まあシクラはシクラで、出来る範囲の暇つぶしでもしてるんだろう。
めんどくさいから突っ込みも僕はしないよ。てか、そんな場合じゃないしな。

「なあメカブ。お前のその天寿眼とやらでその齟齬の場所は見えてるのか？　一つの町となると、広いんだぞ」

なんだかさっきからズンズン進んでるから、目的地が分かってる様に感じれる。そして案の定、奴は僕の言葉を受けて「ふっ」とほくそ笑んだ。まさか本当に既に心当たりが！？

「天寿眼を使うまでも無い事よ。私には情報と言うものが頭に直結して入って来るのだから」

今のこいつに背中に張られた紙を見せてやりたい。まさに電波ってるよ。てかそれって……ただ単にネットに接続出来る端末をもう一台持ってるって事らしい。
片手でなんかピコピコしてるぞ。

「おい、なんだよその左手の物は？　外部端末に頼ってないか？
それに目を経由してるじゃんか」
「細かい事を。目は頭に直結してるわよ」

きっと誰もがそうだよ！　無理矢理な理屈をこねる奴だ。まあそれも今更だけど。

「で、何を見てんの？」

僕は突っ込みはせずに（疲れるからね）、後ろから端末を覗き込む。すると今度は華麗に肘うちをみぞおちに食らった。

「テメェ……何すんだ？」

「この端末に表示されてる情報を私以外の人が普通の目で見ると不味いのよ。これにはね、この世界の様々な未来予知が記されてて、それはアカシックレコードに並ぶ重要なものよ。

だからこその対応策」

「それが肘打ちかよ……」

「違うわよ。今のは条件反射。私の許可無くこの端末の情報を読みとろうとすると、脳細胞を破壊するように仕掛けてあるのよ。感謝しなさい。命拾いしたわね」

ああ～もう、ようは勝手に見ようとしないでよ！　って言いたい訳だね。くっそー、すっげえ回りくどい。でもなんか慣れてきたな……恐ろしい事に。僕の受信感度が少しは広がったって事だろう。

心が寛大になったって事だよ。

「あのさ、じゃあ口頭でいいからどうやって行き先を絞ってるのか説明しろ」

「全く、しょうがないからこの時代に合わせて懇切丁寧に教えてあげるわよ。ＧＰＳってわかる？」

殺してやろうかと僕はマジで思ったよ。どんだけ人の事をバカにしてるのこいつ。ＧＰＳくらい知ってるわ！！　実はさっきからパカパカ音がしてるサンダルが妙に耳についてたんだよな。バカバカ言ってるんだな？

だけど僕はそんな感情を押しとどめて、何とか普通に「当然」と答えてやった。

「じゃあＧＰＳで歩いたルートを辿れるのも分かるでしょ？　それを使って今まで歩いたルートを除外してあたりをつけてるのよ」
「ふ～ん」
なるほどね。けどなんか引っかかるんだけど……
「それってお前一人のデータじゃ頼りなくない？　そんなくまなくアキバを既に歩いてるのか？」
ある程度歩いてないと、絞り込みなんか出来るかな？　それを一人でやるのは無理があるような……するとメカブ意地を張るようにこういった。
「私を誰だと思ってるの無限の蔵？　あなた達の感覚で私を計ろうとしないで。私にはこの天寿眼が――」
「それは使わないんじゃ無かったのかよ？」
僕がそう言うと、ふるえた声で……
「ふっふ、まあ今回は特例中の特例を発動しても……」
そんな事を言い出した。まあ、どうせ変わらないだろうけどね。だから僕は機嫌を悪くしないように気を使ってこう言った。
「別にそれはいいよ。天寿は早々使うものじゃないだろう。世界のバランスの為に。ここは地図ギルドのサイトで、確認すればいいんじゃないでしょうか？」
「そそうね。天寿は世界に与える影響が大きいから、特別にその案を承諾してあげる」

そう言ってメカブは手元をピコピコ動かしてきっとそのサイトにアクセスした。さて、前に見たときはまだ三分の一くらいだったけどどうなんだろう？　提案しといてなんだけど、実際地図ギルドのサイトの進行の度合いに賭けてる事でもある。
覗いちゃダメだし、こっちはこっちでそこにアクセスするかな。そう思ってると、なんだかメカブがチラチラこっち見てる事に気づいた。

「何だよ？」

そう言うと、黒縁メガネの奥の瞳を反らしながら、呪いの端末をこちらに向ける。

「限定解除」
「は？」
「特別にアンタだけは見れる様に限定解除してやったの。ありがたく思いなさい」

なるほどね。そう言うことか。僕はメカブの隣に行くよ。
横からのぞき込むとこの短時間で結構地図は進行してる様だった。半分位は情報が広がってる。流石職人サイト。
サイト一番上にはアキバの衛生写真に、ブリームスの建物を書き込んだもの。でもこれじゃあ建物の名前と位置しか分からない。
でもその下にはブリームスとしての地図が随時更新されてる。これを衛生写真と照らしあわせれば、繋がってない道があるかも知れない。
まあもしかしたら、この範囲外かも知れない……けど、それでも候補が半分になるのはどっちみち、闇雲に歩くよりは効率的だろう。

「どうだ？」

「この地図だけでも数カ所はあるわね。取り合えず近い所から行ってみるわよ」
「だな」

たった一カ所……そう思ってたけど数カ所、ブリームスでは道になってない箇所があった。残りの半分を考えると、更に後数カ所はあるかも知れない。
その全てが当たりなのか……それとも……まあ行ってみれば分かる事だろう。

僕たちは一番近くの齟齬の場所へ。そこは不気味な位に人がいない。おかしな事は周りには人が一杯なのにだよ。多分みんな画面見ながら移動してるから……何だろう。
これもある意味落とし穴だよな。

「何か見える？」
「いいや、バカが壁と相撲してる位……」
「何それ？」

しまった思わずシクラのアホの事を……アイツはブリームス側に居るから、ここからは僕達についてくる事は出来ないんだ。まあだけどシクラはメカブからは見えないから、僕は曖昧に誤魔化して先行する。ブリームスでは存在しないその道へ。

触れ合いが大事（後書き）

第二百四十三話です。
イベントがようやく進むかなって感じです。これからはイベント中心でいけるでしょう。役者も揃ったんで。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

不幸が理由じゃない（前書き）

辿り着いた齟齬の場所。ブリームスとアキバでの違い。僕達はその場所に意を決して踏み入った。だけど、そこで起こった事は多分このイベントと関係ない。

てか、僕の行くところ行くところに現れるあの三人組。三回目ともなると、ただ逃げるだけでは終われなくなってたよ。

不幸が理由じゃない

何か空気が違う様な……そんな感じを少しだけ受けてた。周りには人が一杯なのに、その場所だけ、忘れされた様に空気が止まってるからさ……ちょっとだけ異様に感じてもおかしくはないだろ。

まあだけど……

「別に何があるわけでも無いな」

入り口付近から携帯を奥に翳して見てみても、宝箱があるわけでもない。なんか「エラー」の文字が中央に出てるくらいだ。

「うぬぅぅぅ、何よこれええ！！」

って声が携帯から聞こえるけど無視しておこう。こっちからじゃどうにも出来ないしね。シクラの奴はブリームスの壁をガツガツ蹴ってる。アイツから見たら、僕達は壁をすり抜けた様なものなのかな？

「奥に行くわよ。途中に何か出るかもしれないわ」

「ああ」

僕はメカブの言葉に頷いて、歩を進める。確かに入り口はただの入り口なだけかもしれないからな。中央付近に行ったら、何かが起こる……かもしれない。

ザッザッザ――――ペタペタペタ。

ザッザッザ――――ペタペタペタ。

ザッザッザ――――ペタペタペタ。

生唾を飲み込んでみたりして、期待に胸を膨らませてた僕らだったけど……気づいたら通りの先まで来てるじゃないか。

「これはハズレって事か？」

「そうかもね」

その場でガックリと肩を落とす僕。くっそーてな感じだよ。

「こういう事だってある。寧ろこういう事の方が多いわよ。肩を落としてないで次に行くわよ次」

メカブの野郎はサバサバしてるな。突き抜けた電波女な癖して、サバサバしてる。てか、なんか慰められたのかな僕？

まあ確かにいちいち肩を落としてる訳にも行かない訳だけど……流石に歩いたり走ったりをこの炎天下の下繰り返すのはきついんだよ。

想像以上に体力を減らす。しかもただでさえ、僕の体調は万全じゃないし……メカブはそこら辺の事知らないからな。

「何やってるの早くしなさいよ」

「はいは――ん？」

何個かあったこれと同じ様な道。そこへ行こうとすると、僕達が通ってきた道のスタート地点の方から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ここっすよゲンさん！　今度こそ何かあるはずです！」

「逆にここにも何もなかったら、制作側をぶっ飛ばしましょうぜ！」

頭の悪そうな会話……これはもしかして……僕はそう思い後ろを

振り返る。するとそこにはいかにもな三人が居た。簡単に言うと、ハゲと金髪とモヒカンだ。
いつの時代にタイムスリップした不良だよといいたいメンツだな。まあただの不良ならまだマシなんだけど……あのボス格のハゲの人は完全に裏の社会の人っぽいからやっかいなんだよな。
後の金髪とモヒカンはどうみてもただのチンピラみたいだけど……使いっパシリなんだろうな。てか、なんでこう僕の居るところにアイツ等は現れる？

「どうしたの？」

そういってメカブの奴も同じ方向を見る。

「うっわ……あれはいつの時代の遺物よ。まだ生き残りが居たなんてビックリ」
「生き残りっていうか……まだ普通にあの手の連中はいるだろ。お前はその目で何を見てきたんだよ」

天寿眼なる大層な物を持ってたんじゃないのか？　都合の良いところばかり見てきたんだろどうせ。

「私の目は不要な物は写さないのよ。あれはだって不要でしょう。無用でしょ？　存在価値皆無でしょ？　だから天寿は間引いたのよ」

僕も大概だけど、こいつもかなりあの手の連中をきらってんな。

「まあだけど、世界に光があれば陰は必然的に存在出来るんだから、この世界構造はおかしいと思わない？」

世界構造ね……いつだって話のスケールがメカブは違うな。一体

どこに目を向けてるの？　てかこいつは何がしたいのやら。

「世界構造ね……僕にはそんなデカい事はわかんないけど、光だって闇がないと対比出来ないのもわかるんだよね。結局の所、最初から最後まで恵まれてた奴って、それを幸せとは思えないまま逝くんじゃないかなって。不幸を知るから、今の幸せを実感できたりするじゃん。

まあだからって、奴らを必要悪とはいう気にはならないけどな」

結局やってることは弱者の淘汰……そして普通の人達の足を引っ張る様な事ばかり。そして悪を気取ってて、社会に背中を向けておいて、ちゃかり権力者には媚びへつらうんだから意地汚いよな。

「人が人である限りって奴ね……進化も息詰まってるわね」

「何の事？」

たく、メカブの奴の話は飛びすぎてて付いていけない。いつのまに進化とか行っちゃった訳？　そんな会話をしながら見てたからか、向こうもどうやらこちらの存在に気づいたみたいだ。

「「テメェは！！」」

金髪とモヒカンが同時にそう叫んだ。そしてこちらに来ようとするものだから、逃げようとしたら、ハゲの人がそれを制した。

「やめろテメェ等。今はそれどころじゃねえだろ」

「「へっへい！」」

ハゲの一声で、思いとどまるチンピラ二人。それにしてもあのハゲの人は、まさに本物……と言った感じだな。あのチンピラ二人と

は醸し出してる雰囲気が違うよ。
てか、今初めて声を出した様な気が……
「なあそこのアンちゃん。これで会うのは三度目か？　ここらで一つはっきりさせておこうじゃねえか」
そう言いながら進み出るハゲ。そしてグラサンを少し傾けて、その奥の小さくつぶらな瞳でこっちを睨む様に見据える……
「なんかあんまり怖くないわね……」
「おいおい、それは言っちゃダメだろ。きっとアレでも頑張って凄んでるんだよ。顔のパーツはどうしようもないんだから、きっとあの人も苦労してんだよ」
僕達は思わずコソコソとそう話し合う。だって……あの目はないよ。つぶらすぎ。絶対的にサングラスからあの目を覗かせてはダメだろう。
なんで見せたんだよ。
「おい聞いてるのか！？　俺の目がそんなにおかしいか？」
「「はい」」
僕とメカブは声を揃えてそう言った。するとハゲの人はズドーンと肩を落とした。なんだ、やっぱり気にしてたんだな。
「テメェ等なんて事を言ってくれてんだゴラアア！！　ゲンさんはヤッベエエエんだぞ！！　つぶらな瞳を舐めてると海に沈まされるぞ！！　ああ！！！」
たく、いつの時代の決めゼリフだよって事を金髪の方が言った。

海に沈めるとか、今やドラマの中のヤクザだって言わないよ。
「てか、そんなに気にしてるのなら整形でもすればいいじゃない。そんな高そうな時計や貴金属を身につけてるのなら、整形くらい簡単に出来るじゃない」
「バッ……バッカヤロオオオオ！！　親に貰った顔に傷つける事を良しとしない、誇り高き日本男児なんだよゲンさんは！！」
おいおい、その理由はどうなんだろうかって感じだぞ。てかメカブもスパッと言うな。良い度胸をしてる。なんか会話をしてるとちょっとイメージが違ってくるなこいつら。
底辺は底辺でも、バカの底辺だったか。
「ならサングラスは極力取らないように心がけろよ」
「テメェに言われる事じゃねぇよ！！」
「ゲンさん。やっぱりこいつは締めましょう！　こんだけバカにされて黙ってる訳には行かないじゃないですか！」
たく、やっぱりそう言う流れに行くんだなこいつらは。上手く行かないとすぐに手を出そうとするんだからな。全く……そこら辺が底辺に落ちる要素だと何でわからないかな？
「やめねぇかおまえ等。カタギには早々手を出すもんじゃねえ！」
「で……でもゲンさんがバカにされたのに黙ってなんか！！」
「そうっすよ！　あいつらゲンさんの瞳がつぶらだったからって拍子抜けしたような顔しやがって！　確かにゲンさんの瞳はつぶらで愛らしく顔や声と全然あってねえけど……それがゲンさんなんだよ！！」
おいおい、どっちがバカにしてんの？　君たちも絶対に最初、バ

カにしてたよね？　流石にこれは怒られるんじゃ……と思ってみてたけど、ゲンさん言われるハゲの人は、サングラスを掛け直してこう言った。

「ふ……誰がなんと言おうといいんだよ。俺はなこの顔に感謝してんだぜ。全然合ってなくてもなんでもな。なんせこれは俺の存在証明だ。

これでおまえ等は俺の事を知っててくれてる。案外悪いことでもないじゃあねーか。もっとこうデッカく構えてこうぜ」

「「ゲ……ゲンさあああああん！！」」

同時に叫んだ二人はやっぱりバカっぽかった。まあ確かにゲンさんはなかなか人間的に出来た人っぽいけど……こうなぜか締まらないんだよね。

何でだろう……ああ、あのつぶらな瞳が僕の頭に焼き付いたせいだな。どうりであの人の仕草や言葉だけで、笑いがこみ上げてくるはずだ。

バカ二人は感激してるけどさ、こっちは腹を押さえるのに大変なんだけど。

「何だろう……あれを見てると私の天寿眼が悲鳴を上げてる気がするわ。腐りそう」

「そこまで言うか……」

メカブは厳しいな。一応危ない系の人達なんだからそこら辺は自重しとこうぜ。

「テメェ等、ゲンさんに感謝してろよ！　普通ならボッコボコにしてやる所なんだからな。へへ、どうっすかこれ？　ちゃんと出来てますかね」

「おう、上出来だ」

なんか嬉しそうにあちらはやってるけど、こっちは何が？　だよ。てか別に何もあのバカは変わってないだろ。手を出さない俺ってスゲーとか思ってんのかな？　余裕を持って見逃せる俺ってカッケーとか感じてんの？

ハゲの言った大きくあろうぜってそう言う事じゃないと思うけど……まあハゲも無駄だとわかってるから、アレで誉めてんだろ。

でもそれじゃあ、勘違いが永遠に増してくだけ……みたいな気がするけどね。上の奴なら、そこら辺もっとちゃんと教育しろよといいたいけど、きっとそう言う関係でもないんだろうな。

結局はただの上下関係。このチンピラは使いッパシリ以上でも以下でもないんだろう。案外皮肉な物だよね。ああいうバカって、そう言う上下関係とか誰かの言いなりになるのがイヤで、グレてイキガってる筈なのに、社会の裏の方がよっぽど縦社会になってる現実。

リアルはどこまで行っても理不尽が横行してる。まあ、あんな奴らには理不尽こそがお似合いだと思うけど。そして結局はそれだって自分が選んだ道。

そこしかなかったなんて言い訳は通用しない。

「所で俺はお前に聞かなければいけない事があるんだが……いいか？」

聞いておきたいこと？　それが最初に言ってたはっきりさせたい事でもあるのかな？　てかようやくだな。周りのチンピラが邪魔すぎる。

「別にどうぞ」

たく一体、なんだってんだよ。この善良な一般市民である僕にはこいつらと関わりになるキッカケなんて――

「あの空き缶を投げたのはテメェか？」

――あったあああ！！　そう言えば全ての始まりはそこからだったね。これはどうしたものか……素直に答えるべきなんだろうか？　なんかチンピラどもがスッゲェ顔を作って睨んでるんだけど……

「無限の蔵、そんな事してたんだ。やるわね」

で、なんでメカブの方には感嘆されるわけ？　まだ確認もしてないじゃないか。こいつには既に、僕はそういうことをしてもおかしくない奴だと思われてるのか？

「どうなんだい兄ちゃん？　別に違うなら違うでいいさ。だけどもしもアレが兄ちゃんなら……ちゃんとやらないといけない事があるんじゃないか？」

ハゲが煙草に火をつけながら、そんな事を言ってる。別に言ってる事事態に間違いなんてないけど……この手の連中にそんな諭される言い方されるとムカつくよな。

「まあ兄ちゃんが言わないなら、やましいことがあると受け取るが良いのかい？　一緒に居た二人にも聞く必要が出てくるかもな？」

む……このハゲ、それは脅しか？　てかやっぱり秋徒と愛さんの事は知られてたか。向こうにいかれるのは不味いよな。

きっとラブラブなデートをしてるだろうし、そこに水は差したくない。こいつらじゃ最悪の水になりそうだしな。ここはしょうがな

いから、こっちで問題は片づけといてやろう。
僕は舐められないように真っ直ぐに奴らを見据えて、いささか尊大に声を張ってこう言った。

「はっ、別にやましいことなんか微塵もないな。アレは確かに僕だけど、事故だったんだからな」
「事故だと！？　ふざけんなよテメェ！　そんな言い訳が通用するとでも思ってんのか？　あぁあああ？」

僕の言葉を聞いてモヒカンがやけに下を巻いて威嚇してくる。殴る理由が出来たみたいに嬉しそうだな。するとハゲの人が、大きく煙草を吸って、そして数秒をかけて吐いた。
灰色した煙が、空気に溶けるように消えていく。

「そうかい、やっぱり兄ちゃんか。まあ事故ならしょうがないな。ああしょうがない……だが、自分に非があると分かってるんなら、一応やるべき事があるんじゃねぇんか？　人としてよ？
学校ではそんな事も教えてくれないのか？」

お前等にだけは言われたくねえ、と心から叫ぶけど流石にこれを直接声に出すわけには行かない。全面戦争になりかねんしな。
まあ確かに間違っちゃいないよ。事故でも僕は謝るべきなんだろう。でもこいつらがそれで済ますか？　って事が問題だろ。
こいつらは人の弱みを握ったらそこから絞れるだけ絞ろうとする人種じゃん。弱みを見せたら負けみたいなさ……それにどうせ、謝った次は誠意を見せろとか言うんじゃね？　自分たちがその意味を知りもしないくせに。
さてさて、どうしたものか……向こうが腐った正論を使うのなら、こっちは屁理屈で対抗でもするかな。

「人としてね。そんな事を両腕から入れ墨が覗く様な奴に言われても。それにあの時謝れなかったのにはそっちにも非があると僕は思うね」
「んっだとテメェ！！　調子乗ってんじゃねぇぞ！」
「ほら、それだよ。それ」

僕はいきり立つ金髪とモヒカンをそれぞれ指さす。

「そもそも謝れば許されるってのは、常識側で過ごしてる人用だ。あんたらにそれが適用されるのか？　それは論外だろ。勝手なイメージだけど、暴力と金で全てを解決したがるのがあんたらだ」
「まあ、ある意味間違ってはいないだろうよ。で、金もない自分たちは逃げるしかなったと？　そんな俺達には、謝る必要もそもそもないと？　それはこっちからしたら、一番腹立たしい言葉だな」

おお、なんかハゲまでもいきり立って来たぞ。これは不味い展開かもしれん。どうにかして丁度良い感じの所でこの問題は落としたいんだけど……そう思ってると隣のメカブが電波的な会話で場をややこしくしやがる。

「低脳で低辺な貴方たちの安いプライドなんて、誰も食らいはしないから安心なさい。それに無限の蔵が大人しくしてる内に去った方がいいわ。
なんてたって、彼はその身に二つのインフィニットアートを宿す者。底辺の更に最下層のゴキブリみたいな貴方たちじゃやり合うだけ無駄よ」

おいおい、何とんでもないこと言ってんのこの人。痛いだけじゃなく、危ないよ。そんな事を言われたら、その手の人達じゃなくても切れるって！　落とし所かなくなっちゃうよ。

「あんの野郎！　もう我慢できねぇ！　やっちゃいましょうゲンさん。あれだけ言われて、黙っとける訳ないっすよ！」
「まあそうだな……これだけ言われて黙っとくとの男の名折れかもしれねぇ。なあそこの奇抜な格好のお嬢さん。そう言う君は、言えるだけ立派な人間な訳かい」

ハゲが煙草を携帯灰皿に押しつけながら、メカブにそう言った。てか、携帯灰皿を持ち歩くヤクザって……いや、そこに文句はないけどね。

「少なくともアンタ達よりは誰にも迷惑掛けてない分、立派だわ」

即答でそう答えたメカブ。こっちも良くそんな事が言えるなって感じだよ。僕はスッゲェ迷惑を被ってんだけど。自分の言動を一から見直して欲しいものだ。

そんな事を思ってるとハゲは携帯灰皿をポケットに戻しながらこう言った。

「迷惑か……俺達がどうしてこんな風に落ちたか分かるかお前達に？」
「そんな理由に興味なんてないわね。そこまで落ちる奴らなんて大体理由は同じで根性も同じ。バカが傷を舐めあって、責任を誰かのせいにしてたからでしょ」

そこまで言うか。こいつは怖い物がないのかな？　気の短いヤクザ連中になら、既に頭か腹に風穴が空いててもおかしくない暴言言っちゃってるよ。

「くはははは、お嬢さんは手厳しいな。まあ確かにそれがないとは言

わない。けど、社会ってのはお前さん達じゃ考えられない程、理不尽であるときがある。
俺はここまで落ちる奴らは全員愛が足りないと思ってるんだ」
「は、愛？」

その顔で何言ってんの？　みたいな事までメカブの奴は含んだ顔してたぞ。まあ僕も「え？」ってなったけどね。

「親の愛情を知らず、周りの愛にも恵まれなかった奴らが落ちてくる。そしてそこまで追いつめるのはいつだって、お前達の様な奴らだよ。こっちからしたらな。
さっきそっちの奴が、俺達の様な奴らには謝る必要がない無いと言った。それはどんな理不尽だって、俺達は晒されても文句を言うなって事か？
理不尽を繰り返してきたのは俺達じゃない。いつだって社会とそれに乗ることかししてこなかった普通を求めるお前達だ。
この二人だって、誰かが手を差し伸べれば、もっと別の道を歩けたかも知れない」
「ゲンさん……そんな！　俺達は貴方に出会えて本当によかったと思ってるんすよ！」
「ああその通りっす！　だからそんな事、言わないでください！」

またも汗くさい奴らの妙な関係が目の前で繰り広げられてる。こっちはこっち、あっちはあっちで、それぞれ言い分はあるみたいだね。

「確かにアンタ達だから、謝らなくても良いってのは訂正するよ。事故だとしても、悪かったことは悪かった。ご免なさい」
「ちょ！　無限の蔵！」

僕が頭を下げた事に納得行ってない様なメカブ。だけど落とし所はもうここしかない。これ以上グチャグチャになったら、流石に手が出てくるよ。

「ほう、なかなか物わかりが良いんだな。もっとこう生意気だと思ったけどな。その若さでなかなか賢い」

はっ……別に誉められたくもない。それに別にそっちの言い分の全部を認めた訳でもない。だから僕は、顔を上げてこう言った。

「そりゃあどうも。だけど、やっぱり貴方たちは知っておくべきです。自分達がそうされても仕方ない事をやってるって。だって貴方たちはもうとっくに、虐げられる側じゃない。

それに……どんな理屈を述べたって、過去に何があったからって、それで他人を傷つけて良い理由には成らない」

「はっ！　知ったような事を！　テメェに俺達の何が分かるってんだよ！？」

モヒカン野郎が、唾を吐きながらそういってきた。まあ確かにそう言いたくなるよな。でも……僕にはそれが言える。言う権利がある。

「分かるさ。いっとくけど、自分達が世界で一番可哀想なんて妄想は捨てろよ。周りに目を向ければ、愛情が足りなくたって、不幸だからって、それを理由にして全てを諦める様な奴ばっかじゃない」

まあ、色々と言ったけど、結局僕は、こいつらが大嫌い。それはきっと変わんない。僕の言ったことは綺麗事何だろうけど……でも僕はその綺麗事のほうがよっぽど好きだよ。

自分はこんな底辺にいきたくなんかないしね。それにムカつくん

だよ。不幸だからって他人を不幸にしたいほど落ちぶれて、情けなくないのかよ。

「誰もが全てに耐えられる程強くはねぇんだよ。そんなつまはじきを世間は助けちゃくれない」

「ならアンタが正しく導けば良かったんだ。それをしないのなら、アンタは結局ドブ溜の住人だよ」

思わずコボレた言葉に、張り詰めてた空気が解けるどころか勢いよく弾けた。

不幸が理由じゃない（後書き）

第二百四十四話です。
ヤクザやチンピラは単純にリアルで悪として表現出来て扱いやすいですね。まあほとんどが勝手なイメージだけど。あいつ等は生きるって事に迷ってる……みたいな。
それはスオウだって、誰だってそうなんでしょうけどね。でもどっかが違う筈でもあります。けれどその何かに気づくかは、きっとそれぞれ。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

放っとけない（前書き）

僕の暴言にとうとう我慢の限界に達したチンピラ二人が迫ってきた。なんだか落とし所を間違ったみたいだ。チンピラ二人は興奮して、止まりそうにない。でもやりようはあると思った。

どうにかして止める為に、僕はこいつ等が迫る理由を崩す事に。

放っとけない

「「テメェエエエエ！！」」

僕のゴミ溜の住人という言葉のせいか、金髪とモヒカンがハゲの制止を振り切ってこちらに駆けてきた。ご丁寧にその手にはメリケンサックをつけてるじゃないか。

流石クズは準備が違う。

「ちょっちょっと、かなり怒ってるみたいよ。暑いんだから、もっと穏便にすませなさないよ」

「うるせぇ、お前だって奴らの感情を煽るような事言ってたじゃん」

全てを僕のせいにするなよな。まあ、最後のはついつい口を滑らせたんだけど……落とし所を完全にミスったな。こんな所で余計な体力使いたくないのに。

「うらああ！！」「でああああ！！」

そんなかけ声と共に、メリケンサックを装備した拳が僕へと迫る。

「下がってろメカブ」

「勿論そうするわ」

言ったときには僕から既に距離を取ってやがんの。なんて薄情な！　まあ、リアルで女の子には期待出来ないけどさ。

「女をかばう余裕があんのか！　ああ！！？」

そういって腕を振り回すかの様な大振りを繰り返す二人。こいつらは、二人がかりで来てるけど、どうやら連携って概念がないらしい。
しかも大振り過ぎる。どれもこれも、一撃で倒そうとするから、体に余計な力が入りすぎ。僕は二人の攻撃を交わしつつ、一応メカブから距離を取るように、路地の中心部へ。
だって、イライラしたどっちかが、メカブに手を出さないとも限らないからね。もしもそれをこのバカ共が思い立ったとしても、防げる距離を取っとかないと。

「あの～、さっきのゴミ溜は訂正するんで、一回落ち着いてもらって良いですか？」
「ふざけんな！！　たとえゲンさんが許したって、俺達はテメェを許す訳にはいかねぇんだよ！！」
「おうよ！！」

モヒカンも金髪も同じ意見の様で、更に勢いが増してしまった。まあこのまま避け続けてれば。この暑さで勝手に自滅してくれると思うけど……でもそれまで相手をし続けるのが、今の僕には辛いんだよね。
だからって、ここで倒してしまうのは、それはそれで不味い様な気もするし……でもだからって殴られてやる気には成らないもんな。
痛いのやだし。やっぱり体力の消耗を待つしかないかな。するとどっかから奇抜の女の声が聞こえた。

「いけー！　ぶっ飛ばしちゃえー！」

たく、アイツだって暴言吐いたくせに、離れた所からの見物かよ。しかも僕が頭の中で否定した事を叫びやがって、うるさいんだけど。

「へっへ、彼女が応援してるぞ。逃げてばっかでいいのかよ？　格好悪いぜお前」
「マジ超～ダッセーよ。反撃の一つでもしてみろよ。言葉と違って、お前の拳はヘナチョコか？」

なんか早くも息切れしてきたチンピラ二人は、こっちを動かそうと必死に挑発してきた。まあよく、チンピラはやるよね。
無駄な挑発に、バカにしたような言葉。けど、それを聞くとバカが滲み出てる様な気がするよな。教養が足りてなさそうだもん。てかこれだけは一応否定しておいてやる。

「別にヘナチョコって訳でも無いけど……お前達には使う気にはなれないな。それに言っとくけど、アイツは彼女でも何でもないから。変な事言うな」
「おうおう、余裕ぶっこいて本当は足がブルブルしてんじゃねーの？」
「いっとくけどな、彼女であろうと無かろうと、お前は知り合いの女の前で、格好悪い所しか見せてないのは事実だ。超ダッセ――！」

取り囲む様にしながら、パンチを出し続けるキンモヒ組はどうにかして、僕の動揺を誘いたいらしい。二人係なのに、まだ一発も当たってないからね。
まあこっちから言わせてもらうと、悪態つくより、もっと連携とジャブの様な要素も取り入れて戦術練ってこいって感じ。

「なあ、そろそろやめない？　この暑さの中で無駄な体力使いたくないんだよね」
「うるせぇ！　俺達はお前を一発殴らないと気が済まないんだよ！

！」

「まだわかんないのか？　今のままじゃ、一生かかってもお前達の拳が僕に届く事はない。逃げてるんじゃない。逃げてやってるんだよ。

実力差くらい気付け。肌で感じろ。でないと、お前達の居る場所じゃあ、生きてけないんじゃねーの？」

僕はなまじちょっとは心配してそういってやった。だって裏社会こそ本当の実力社会だろ。バカはずっと淘汰され続けるだけ。

結局の所、どこでだってずる賢いやつが上に行くんだよ。こいつ等は絶対に、一生下っ端。メカブの天寿眼なんたらじゃないけど、僕のただの瞳にだって、それが見える。

だけど自分達よりも若いガキにそんな事を言われても、聞く耳を持つ年頃じゃない。てか、聞く耳を持たない事を誇りにしてる連中だから、意味なんてないか。

「テメェみたいな奴に、そんな心配される筋合いねーよ！！」

「そうだ！　俺達はゲンさんを信じてるんだ！！」

ゲンさんね……僕は二人の攻撃をかわしながら、ハゲをちらりと見た。派手な柄のシャツに二の腕からはみ出てる入れ墨……そしてサングラス。だけどあのサングラスの中の瞳は、笑える程につぶらな瞳。

この二人が暴走しだしてから、何も言わないと思ってたら、なんだか俯いてる様な。ドブ溜の住人は効いたのかな？

「信じてるね……それだけの価値があるの訳？」

同じ穴のムジナだろ。言っちゃ悪いけど、お前等よりも少しマトモってだけな感じだけど。

「テメェにゲンさんの何が分かる！？　あの人はな、行き場を失ってた俺達に手を差し伸べてくれたんだ！　社会の爪弾きにされた俺達に、居場所をくれた！
信じる価値のある人だ！」
「うお！？」

なんだかパンチのキレが少しよく成ったような……さっきまでメリケンサックの重みでパンチが下に下がってた様な状況だったのに……気持ちが体を動かしてる状態にでもなったかな。

「そんなの都合のいいバカを捜してただけかも知れないじゃん。自分の手足に成りそうで、逆らわずに自分のやってる事に疑問を抱かない適度なバカをさ」
「バカバカうるせえ！！」
「おっと！」

二人とも体力はかなり消耗してる筈だけど、ここに来て踏ん張りだしたな。さっさと心を折らないと、めんどそう。それにはあのハゲに対する忠誠心壊すのが良いんだろうけど……こいつらバカだからな。
あんまり難しい事は言えないし、なんか簡単に不信を抱かせないだろうか？　こいつらはきっと愚直なバカじゃなく、疑って疑って、信じれなくなった方のバカだろうから少しのきっかけがあれば、ハゲにも疑問を持つと思うんだよね。

「あの人はそこら辺のヤクザとは違うんだ！　下っ端の俺らの事まで大切に扱ってくれるそういう人なんだよ！　俺達を初めてクズじゃなく人間として見てくれた人だ。
テメェの様な目をしてる奴が居るから、俺達の様なクズは行き場

を失うんだよ！！」

クズって自分で言ったよコイツ！　僕は懇親のパンチを避けながらそう思った。頬の数センチ横を横切るパンチを僕は、少しだけ手で軌道をズラす。

するともう一方のモヒカン野郎に、その拳が向かう事に。そして二人のメリケンサックがぶつかり合う。

「「ぐあ！？」」

思わずそんな声と共に足が止まる。その隙に僕は距離を取った。

「僕の様な目がなんだって？」

そういうと、二人は狂犬の様な目で僕を睨みつけてくるじゃないか。そっちも汚物を見るような目してるぞ。

「俺達を人として見てないその目……それが俺達の様な奴らを追いつめるんだよ！　気に入らねえ目だ！！」

「お互い様だと思うけど、そっちも僕の事を睨み殺す位に睨んでるじゃん」

「そういう目に晒されて来たからだ！」

そう言って再び僕へと向かってくる二人。ほんと、この暑い中良くやるよ。それだけ許せない事なんだろう。まあでも……こっちはこれ以上つきあうなんてない。

（一回位、マジで体を動かしても問題ないよな）

向かいくるバカ二人。集中が高まると、映画のフィルムの様に動

きがコマの様に見える。これがＬＲＯで命を懸けてる副産物だとしたら、こっちでもある程度戦えるって事になる。
それはそれで、結構良いことではあるよ。命の代償は何をとってもでかいけどね。向かいくる二つの拳。それを直前まで引きつけておいて、片方の手首を取ってその勢いを利用して体を引きながら回転する。
その回転で受け止めなかったモヒカンの拳を交わして、勢いのままに引っ張られた金髪は体勢を崩してる。だから回転の力を利用して、拳を外されたモヒカンに後ろから、金髪をぶつけてやった。
そしてそのままその場に倒れ込む二人。まあこの位なら余裕だね。殆ど向こうの力を利用しただけだし。

「テメエ……」
「くっそ……」

負け犬が下から見上げてる。僕はそいつ等を見下ろしてる。力関係がよく分かる構図だな。まあこの程度で負けを認める様な奴らじゃないだろうけどね。

「もういいだろ、ちゃんと訂正するって言ってんだし。てか、おまえ等をどう見ようが僕の勝手だね。おまえ達は自分達がそういう目でしか見られないとか言うけど、そう見られる事しかしなかったからだろ」
「おまえに何が分かるんだよ！　そんな簡単な事じゃねぇ！」
「そうだ、親のせいで白い目で見られ続けたりするんだよ！　自分じゃどうやったって拭えない物が、俺達にはあったんだ！　お前にはわからない事だが！！」
「わからなくて別に良いよ。それも結局言い訳だし、あんたらが慕ってるゲンさんも、結局は同情なんだよ？　いや、同情も怪しいけどね。吐いて捨てる程いるアンタ等なんだから、やっぱり使い勝手

かな？」
「だからそんなわけねぇだろ！！」
ほんとハゲの事には直ぐに怒るね。でもいつまでもこいつらの相手をしてるわけには行かないんだ。
「ならハゲ――じゃなくゲンさんに聞いてみれば？　直接、何で俺達だったんですかって？　ってさ。それが一番早く確実だろ」
するとそんな会話を聞いてたのか、ハゲがこっちを見てた。そして倒れ込んでる二人は顔を見合わせて、ハゲへと意を決してこう言った。
「ゲンさん……ゲンさんは俺達を認めてくれて……必要だから声を掛けてくれたんですよね？」
二人の言葉はどう受け止められるのか、僕とメカブは静かにハゲの言葉を待ってやった。だけどハゲはなかなか言葉を発さない。口を開かない。
そしてそんな間が、二人のバカを不安にさせる。
「ゲンさん！　どうして何も言ってくれないんですか？」
「それはきっと、お前達が思ってるような出会いじゃないから……だろ？」
「テメェは黙ってろ！」
二人は体を起こしてハゲの方へと歩み寄る。ハゲはハゲでその場から動こうとはしない。てかもう、きっぱりずっぱり言ってあげればいいのに。
逆に躊躇う方が珍しいんじゃないのかな？　ヤクザがその下位の

存在であるチンピラを駒の様に使うのなんて当たり前の事だろう。
そこに何かを求めるのが間違いなんだ。

「「ゲンさん！！」」

二人がハゲの前まで言ってそう叫ぶ。もう聞かずにはいられないって感じだな。それだけハゲの事を信じたいのか……縋りたいのか……まあだけど、やっぱり二人が思う様な事じゃきっと無いとは、ハゲの態度でわかるよ。
けど、それを言いづらそうにしてる所に、ハゲの人格が現れてるとも思うけどね。ズバリ言わない分、ハゲは優しいと思うよ僕は。

「俺は……最初は誰でも良かったってのは……その通りだ。素直でヘコヘコしてて、使い勝手良さそうなチンピラがお前達だったってだけ。
俺は元々、駒にするためにお前達に近づいた。それは事実だ」
「そんな……俺たちを認めてくれたんじゃないんすか？」
「俺達をずっと……ただの使いがってのいい駒ってだけでしか、見てなかったって事ですか！？」

二人は肩を震わせてたよ。いろんな所から爪弾きにされたこの二人にとっては、初めて必要としてくれた事が嬉しかったんだろうね。
自分が一人の人間だと思えたか？　でも結局は体の良い、無くしたらそれまでの駒扱いだったんだよ。てか、闇の部分に希望を持つのも僕的にはどうかと思うけど。

「「そんなのって……信じてたのに……」」

二人のそんな言葉が重なった。けど、そこでハゲの人が、言い繕うようにこう言った。

「違うんだ。確かに最初は使い捨ての駒ってだけだったが、次第にそうでも無くなっちまったんだよ。お前等がバカする度に、仕方ねえと思いつつ立ち上がる自分がいるじゃねぇか……けっ、たく、バカ過ぎるのも考え物じゃねえか」

「俺達はそんなバカなんすか！？　バカだからなんも文句言えずに、使い回されるんすか！？」

「そんなの嫌だ……そんなの……そんなの……」

ハゲの言葉は少しだけでも、このチンピラ二人にとっての優しさってのがあった。でもとうの二人はバカだからこそ、そんな少し見えた希望に気づかない。

実はコイツ等は、このハゲに拾われた事が幸運だと今更になって思えなく成ってる。まあそうしたのは僕だけど。絶対にこのハゲ以外のヤクザに目を付けられてたら、こんなバカのままでもいられなかっただろう。

下手したら、殺されてもおかしくない世界……の筈だろう。それを考えたらハゲは随分甘く優しく、この二人に接してると思うけど……ただの駒だった事にショックを抱く二人は、その拳を握りしめた。

結局、コイツ等に出きる事って言ったら、これしかない訳だ。

「「う……うあああああああああああ！！！」」

二人分の拳がハゲへと迫る。だけどハゲは避けようとはしなかった。二つの拳がハゲの顔面に入り、ハゲは後方へと飛んだ。

それと同時に、奴のサングラスが無惨に壊れて地面に落ちる。つぶらな瞳が再び露わに成ってしまった。けど、ハゲは倒れない。なんとか踏ん張って、その場に静止した。

つぶらな瞳の下の鼻からは、鼻血が流れ出てる。それを拭こうと

もせずに、ハゲは自分を殴った二人を見据える。

「なんだよ……アンタが悪いんだ！　あんたが俺達を騙すから！　俺達はアンタを信じてたのに！！」

「殺すなら、殺せよ！　アンタに手を出したんだから、俺達はもう……そもそもこんな世界にもう未練なんて――」

二人はもう人生に絶望したみたい。まあもっと早くから、自分たちの人生とかは諦めてた筈だろうけど、ここでもう一度、それを終わらせる気に成ったみたいだ。

だけどそんな言葉を聞いて、一番憤ったのはチンピラ二人じゃなく、ハゲのおっさんだった。

「バッカ野郎おおおおおおおおおおお！！」

「ぶはっ！」「ぐげっ！」

ハゲの人の拳が炸裂。二人のチンピラはその拳に吹っ飛ばされて地面に倒れた。

「「ゲンさん……」」

「テメェ等はもっと自分の頭で考えろ。自分の見てきた事をもっと信じやがれ。テメェ等には今日までの全てが、駒として扱ってきた日々だとでも……本気で感じてんのか？」

三人とも鼻血を垂れ流してる状態で、妙に真剣な話が続く。なんとも間抜けな光景だけど、流石にこれには水をさせないよ。

端から見てたら、完全におかしいけど……てか、こっちの存在が忘れられてそうだな。

「じゃあ……何だって言うんですか？」

「俺達は貴方にとっては幾らでもいる駒の一人でしかないんでしょう！」
「こんの、底辺のゴミクズ野郎共がああああ！！」
再びハゲの拳が炸裂した。てか、もの凄い事を言って殴ってたな。底辺のゴミクズって……ハゲも思い切ったみたいだ。
「ゴフッグフ……ゴミクズって……やっぱりアンタも俺達をそんな風に……」
「なんでこんな……俺達でもようやく……誰かに認められたと思ったのに……」
熱せられた地面に倒れ伏して涙を流すチンピラ二人。流石にその姿にはちょっと胸が痛むな。この地面の熱さは僕も体験してるからね。
超暑いんだよ。鉄板で焼かれてる位にあっつあっつ。はてさて、ハゲはどうするつもりなんだろう？　そう思ってると、地面に膝をついてなるべく視線を二人に合わせる様にした。
そして殴られた時に壊れたサングラスを掛け直してこう言ったよ。
「だからそう易々と惑わされんな。確かに最初はそうだった……けどその分のケジメは付けただろ。今はもう、そんな風には思っちゃいねえ。
お前達がバカすぎて、素直すぎて……放っとけなくなっちまったんだよ」
「「ゲンさん……」」
つぶらな瞳が曲がったサングラスから覗いてるのに、なんだか格好良いと思っちゃった。そしてそんな言葉を聞いたチンピラ二人は、けどまだ信じれないみたいな顔してるよ。まあ奴らの今までを考え

ると、気安く「そうなんだ」とはもう思えないだろうな。
けど、ハゲの人は言うよ。

「そもそも、損得を考えたらテメェ等を側に置いとく理由なんてあるめぇよ。これでも俺を信じれねぇか？」
「お……俺達はただの駒じゃないんですね？」
「ああ、テメェ等は俺のれっきとした舎弟だ。駒なんて安い存在じゃねーよ」

その言葉を受けたチンピラは声を上げて鉄板みたいなアスファルトに顔を埋めた。

「ゲンさあああん！　すみませんっしたあああ！！」

とか言ってる。てか、僕たち一般人にしてみたら駒も舎弟も変わらない感覚なんだけど……それでいいの？　結局使われる事に変わりないし。
まあこのハゲの人は多少なりともマシっぽいけどね。落とし所はあったみたいだな。一件落着……って、こんな事をやってた訳じゃないじゃん僕ら。
なんか変な方向に流されてた事に、今更気づいたよ。そうそうイベントやってたんだ。僕は携帯を取り出してその場に翳してみる。
まあここには何も無かった訳だけど、思い出したからそんな行動を自然に取っちゃった訳だ。画面の中にはエラーの文字が相変わらず表示されてた。

「あれ？」

なんか前と違う所を見つけたかも。このチンピラ共を最初に携帯を通して見たときは、なんか赤い膜みたいな物が覆ってたのに、今

はそれがない。いや、そもそもあれがなんだったのかわからないんだけど……やっぱり見間違いだったのかな？
今考えるとそう思えなくもない。てか結局何も得られてないよ。無駄な時間を浪費しただけ……

「ちょっと無限の蔵！」
「うん？」

僕が妙な疲労感にぐったりしてると、後ろからメカブの声が。振り向くと奴は何やら携帯を指さしてる。てか、何で声を出さない。
まあ取り合えずジェスチャーをくみ取って携帯を上へ翳した。丁度真上だね。するとそこには、四角い何かがあるじゃないか。
「！！　これって――はっ！」
僕はとっさに口を押さえたよ。なるほど、メカブが声を出さなかったのはこういう訳か。なるべく他人に悟られない様にって事か。
この三人がイベント参加者かどうかの確信は無いけど、無関係って事はないだろう。だって三回ともイベント関連の場所で会ってるし、ここに居るのだって既に偶然とは思えない。
あれの存在がバレたら、争奪戦になりかねないよな。てか一体どうやってあの『宝箱』を手に入れればいいのだろうか？　そこからして謎なんだけど。空中で浮いてる形じゃ、どうしようも……

「どうしたんだ？　お前の事は許せんが、ここはひとまず見逃してやるから、消えてもいいぞ」
なんで上から目線？　しかも消えろとか、受け入れがたいなそれは。
「アンタ等こそ消えてろよ。壊れ掛けた仲を修復してきた方がいいんじゃね？」

「その心配には及ばんな。この試練を越えて、俺達の絆は深まった。それに俺達にはやることがあってな」
「イベントか？」
僕がそういうと、チンピラ二人が携帯を取り出して僕の横を通り過ぎていく。
「退いてろガキ。このイベントの貴重なアイテムは、俺達がゲットするんだからな」
困った事に、やっぱりこいつ等もイベント参加者確定らしい。

放っとけない（後書き）

第二百四十五話です。
なんか三人の話になっちゃいましたね。まあこいつらとのバトルはまだ続くし、しょうがないともいえます。多分ね。やっぱりイベント参加者だったから、次回からは争奪戦でしょう。
てなわけで、次回は火曜日に上げます。ではでは。

宣戦布告（前書き）

僕達は結局の所敵対するしかできないって分かった。僕もメカブもああいう奴らが嫌いだし、向こうも幸せぶってる僕らが嫌い。お互いに受け入れられない者どうし、結局は争うことしかできないんだよ。

まあ争いっていっても競争だけどね。このイベントのレアアイテムをどちらが取るか。それが今始まる。

宣戦布告

携帯を翳しながら、僕の横を通り過ぎて行ったチンピラ二人。そいつ等は二人で入念にこの通路を調べてる。

（気づかないでくれよ）

僕はそんな事を祈りながら、奴らの動きを注視してた。人がこない通路……別に裏路地ってわけでもない、この場所で、今この事に気づいてるのは僕とメカブだけ。

コイツ等にその存在を悟られる訳にはいかないよ。

「ゲンさん、やっぱりここも何もないみたいです！」

「……」

「ゲンさん？」

ゲンさん呼ばれるハゲの人は、返事をしない。それに疑問を持ったチンピラ二人が顔を見合わせて、困ったような感じになってる。

てか、ないって言ってんだから、さっさと諦めてくれれば良い物を……なんでさっきからずっと僕を見てる。するとそんなハゲがようやく口を開く。

「お前……なんだか焦ってないか？　今も周りを調べだしたあいつ等を見てたし……」

「なんの事だよ？」

うっわ、怪しまれてるし。どうしようか、このままここにとどまり続けたら、コイツも怪しんでここに止まり続けるかもしれない。

ここは一端引いて、何もない事を気にしてないアピールをして、

コイツ等が諦めて帰った所で戻ってくる戦法が有効かな。
まあでもリスクもあるけどね。このままコイツ等が気付かないまで居てくれるかどうか。まあ基本、携帯の画面はそれほど大きくないし、視野もそれに対して狭くなってるから、そうそう見つからないとは思うけど……これは賭だな。
僕は一度暑っ苦しい息を吸って吐いて、そして爽やかな顔を作ってこう言った。

「まっせいぜい頑張ればいいさ。無駄な場所で無駄な努力をさ。僕たちはその間にも、レア度の高いアイテムへ近づく事にするよ。行こうぜメカブ！」

僕はそう言ってメカブの方へ歩き出す。背中にはまだ視線を感じるけど、ここでふと宝箱の位置を確認するように見上げるなんてやってはいけない事だ。
人は自分達の目線より上は注意が散漫になるらしいから、見つける確率も減るだろうけど、今ここで僕が何となくそうすることで、奴らの頭に「上」と言う選択肢を与える事になるかもしれない。
それは不味いから、僕は颯爽とメカブの元まで歩く。

「ちょ？　えっ？　いいの？　無限の蔵？」
「余計な事は喋るな。取り合えず今は一端離れて、奴らを諦めさせる。目的の物はそれからだ」
「……わ、わかった」

納得してくれたメカブと共に、僕たちはこの道路から離れる事に。人混みに紛れてこの通路が見える所に居れば問題ない筈だ。

「やっぱり何もないですよゲンさん」
「俺達も別の所を探した方が……」

離れる時に、そんな声が聞こえた。しめしめだ。このままどっかに行ってくれれば……とか思ってると、ハゲの奴の携帯の音が鳴るのが聞こえた。

「ちょっと待て」

そんな言葉が聞こえたとき、なんだかちょっと気になった僕は足を止めてそちら側を覗いてた。すると最悪の情報がそのメールからもたらされたようだったよ。

「上……」

そんな言葉が僅かに聞こえた思ったら、もう片方に持ってる携帯を上に翳した。その瞬間不味いって僕は思ったよ。

そして遂に予想は最悪の展開へ。ハゲの声が大きく響く。

「上だテメェ等！！」

「上？」

その瞬間僕は走り出した。後ろから「無限の蔵！」って声が聞こえたけど、こうなったらもう悠長な事はやってられない。

「あんな所に……」

モヒカンが携帯を上に翳してとうとう宝箱を発見してしまったみたいだ。

「けどどうやってあんな場所の――って、うわ！！」

金髪が猛スピードで突っ込んで来る僕に気付いて驚いた。だけどそんな事気にしてられない。僕は丁度良い所に居る、モヒカンめがけて地面を力強く蹴る。

「どうし――ぶっ！？」

「ちょっと背中借りるぞ」

金髪の驚いた声で振り返ろうとしたモヒカン。僕はその背中を足場にするために踏みつけた。そしてそこから更にもう一ジャンプして宝箱に一気に近寄る。

「もらったあああ！！」

僕は携帯を翳し、宝箱に手を掛ける。そう手を掛けた筈だった。けれど宝箱は反応しない？　普通なら触れた瞬間にロックは解除されて、中身が出てくる筈……けれど、そんな様子はない。

僕はあらがえない重力に引っ張られて地面へと着地する。三メートル位は跳んだからなかなかの衝撃が膝を襲った。

やばいやばい、マジで疲労骨折しちゃうよ。

「いっつぅぅぅ。くっ、確かに触れたのに何で開かないんだよ……」

このチャンスはきっと一度きりだぞ。もう奴らの背中使えそうもないじゃないか。

「おいテメェ、何人様の背中を無断で利用しちゃってんだオラァ」

なんかこんな感じで大変ご立腹してるみたいだもん。

「ははは、丁度良い感じで足場に出来そうだったからさ……つい」

「ついじゃねぇ！　テメェはホントに俺らの事を舐めきってんな！
マジで締めるぞコラァ！！」

たく、何もそこまで切れなくてもいいのに。ちゃんと背中を借りるときだって声を掛けてやったじゃないか。それなのにこんなに切れるなんて……ホント心が狭い奴らだ。
背中の一つや二つくらい、快く貸してみろよ。どうせ他には役になんてたたないんだし。

「ああもう、めんどいな。今はお前の相手をしてるほどこっちは暇じゃないんだよ。結局役に立たなかったんだから安心しろよ役立たず」
「て……テメェは……マジで殺してぇぞ……」

僕の言葉を受けて、額に青筋を浮かべながら拳を握りしめるモヒカン君。体もなんだかワナワナ震えてる。だけどそこでハゲの人が僕の言葉を否定する様にこう言ったよ。

「安心しな。お前は役立たずなんかじゃねーぞ。お前が背中を使われた事でわかった事もある」
「げ……ゲンさん、それは本当ですか？」

震えが止まったモヒカンに、ハゲの人は自信有り気に言葉を紡ぐ。

「ああ、本当だ。それに悔しがる事もあるめぇよ。まだアレはどっちかの物になった訳でもなければ、入手方もわかっちゃいない。
一足早くと思ったんだろうが、残念だったな」

そう言って僕を見てニヤリとほくそ笑むハゲ。ちっ、やっぱこいつはマトモだな。まあ少なくともバカではない。厄介だよ。

そしてハゲは勝ち誇った様な感じで更に続けてこういう。

「お前さん等はここで引いた方がいいんじゃねぇかな？　言っとくが、さっきの先制でアイテムが取れなかったんじゃお前さん等に勝ち目はねぇぞ。

俺達は数十人の団体だ。頭数が違うのよ」

数十人の団体だと。じゃあこいつらが乱獲野郎共か？　確かに頭数が違うのは情報とかに差が出る事。さっきの一発でアイテムゲット出来なかったのは痛い。

不意打ちはもう通用しないんだからな。数十人対二じゃね……そう思ってると、メカブが後ろにようやく来た。

「もう、やっぱりバレちゃったじゃない」

「そんな事より、なんであの宝箱は開かないんだよ。ちゃんと触れた筈だぞ」

僕達とハゲ達は双方を権勢しながら、にらみ合ってる。向こうは既に携帯で何かやってるな。あの宝箱の入手方法を数十人の仲間を使って探る気か。

「あの宝箱は特殊だから、それだけ入手方法が固定されてるって事じゃないの？　少なくともどこにでも現れるタイプじゃないんなら、それくらいは予想出来るわよ。そもそもさっきの無限の蔵はチート過ぎ。

二メートル程度はモヒカン分の身長だとしても、なんであんなに飛べるのよ。まさかその力もゴールデンボールの……」

「違うっての」

別にゴールデンボールは関係ないさ。てか、そんな力ない。この

ゴールデンボールは男の夢と希望しか詰まってないんだよ。

「じゃあやっぱりちゃんとした手順を踏みなさいって事よね。そもそも入手方法がジャンプして届かせろなんて無理なのよ」

「まあ確かに、入手方法は必ずあるはずだもんな」

それを無視して手に入れる事は出来ない……そう言う事だろう。けどそうなると、ますますこっちは不利に成るんだよね。僕は一応こんな事をハゲに言ってみたよ。

「おい、あれは僕達が先に見つけたんだ。だから別の所へ行きやがれ」

「それは出来ない相談だな。それにこれは戦争だ。イベントと言うなの戦争。見つけた奴が勝者じゃない。手にした物が勝者なんだよ。そもそもそんなイベントだろ？　その言葉はお門違いだ」

「ぬぬ……」

まあそう返されるのはわかってた事だけどな。手にした奴が勝者……僕だって目の前にアイテムがあるなら諦めないだろうし、それを否定は出来ないよな。

けどズルいじゃんそっちは。何十人と二人なんて……

「不満そうな顔だな。が、俺たちは真剣なんだよ。お前達もこのイベントに勝ちに来てるんなら、それなりの人数を用意しておくべきだった。それだけの事だ。

俺たちの他にも居るぞ、チームを組んでやってる奴らはな」

やっぱりそう言う奴らはこいつらだけじゃないのか。勝ちに来てる奴らね……きっとそいつ等と僕達の考えは違うんだ。意識の違いでもある。

お遊びとそっち側からしたら思うだろうけど、こっちはやりすぎと思うんだよ。まあ実際、無理にレア度の高いアイテムを狙う必要なんてそもそも僕には無いわけだけど……（役に立つかな～）位の気持ちだった訳だし。

けどどうせ狙うなら、それなりの物が欲しいじゃん。役に立つかもしれない確率だって、そっちの方が高いかもしれないしさ。

この今の感じじゃ、この真剣の度合いの違う奴らしか、レアアイテムは取れない感じだけど、それって反抗したくなることだ。

既にアイテム一個を手放したしな。ここで諦めたらそれも無駄になるんだよ。普通に考えたら真剣にやってる奴ほど、良い物を手に入れるのは普通で当然だけど……こいつらはなんか違う。

ただ純粋に楽しいから真剣にしてるって感じじゃない。そもそもヤクザとチンピラだし……真剣ね。その裏に何があることやらだよ。

「あんたらの真剣は何か違う気がする。僕達は純粋に興味あるからやってんだ。アンタ達みたいな人種がそもそも何で数十人単位で参加してレアアイテムを狙ってんだよ？」

僕がそうハゲに向かって言うと、案外近くから答えは返ってきたよ。

「どうせ金でしょ？　レアアイテムは高値で取引されてるわ。それこそビックリするくらいの金額でオークションに掛けられてたりする。

ＬＲＯは取り分け入手困難で肉体労働的でもあるから、金が余りあるほどの娯楽家は、はぶりよく金を積んで金で買った武器や防具で身を固めるのよ」

そう教えてくれたのはメカブ。なるほどね。それもＬＲＯの闇の部分なんだろうか？　まあ、小さい物とか友達の間で位なら良いん

だろうけど、売ることを目的に取るアイテムってどうなんだろう？
てかそもそもそれって儲かるのかな？　僕には想像出来ないんだけど……

「ゲームの中でしか使えない武器にどれだけ出す奴が居るわけ？
僕にはわからないんだけど……」

僕は今度はメカブに言ったつもりだったけど、なんかハゲが答えてくれたよ。

「そこの彼女も言っただろう。文字通りビックリする位の額だ。金はあるところにはあるんだよ」
「ようはそれを商売に出来る程度に儲かせてるって事か？」

でもリアルで白い粉を売る利益には勝てないと思うんだけど。まあでも、全てのヤクザがそんな物を売買してるって訳じゃないのかな？　ヤクザは大抵白い粉を売買してるってのは僕の勝手な偏見か。
でも他に何やってんの？　って感じでもあるんだよね。銃の密輸とか？　闇金とか？　どれもこれも無駄に儲かりそうじゃないか。
そんなのよりもＬＲＯでのアイテム売買が儲かると？　それはないだろ。だってＬＲＯで勇者になっても、リアルにそれが反映される訳じゃない。どこまで行ったって、ＬＲＯの中の栄光はＬＲＯの中だけの物だ。けどハゲは、僕のそんな考えを否定することを言う。

「ああ、まあな。ＬＲＯは世界になってる。誰もが一度は夢見た異世界。そこで自分が冒険出来るのなら、大枚をはたく奴は予想以上に居るんだよ。それに用はなんだってやりようってこった。だからこのイベントでのアイテムも譲れねぇ。限定品が高く売れるのは、リアルもゲームも同じだからな」

確かに限定品って言葉に日本人は弱いよね。自分が好きなものなら限定品が欲しく成るじゃないか。初回限定版とかね。

「まあお前達にだって、金を払えば売ってやるぞ。家は客は選ばない。金さえ落としてくれればな。だからここで勝ち目のない戦いをするよりも、金の工面でもしてた方がいいと思うがな」

ハゲは再びタバコに火を付けながらそう言う。ここでタバコを吸うなんて……余裕の現れか？　自分達がたった二人……いや正確には秋徒と愛さん入れての四人程度に遅れを取る訳がないって自信の現れだろう。

でも思うけど……替えのサングラスはないのかな？　さっきの騒ぎでサングラスは実際曲がったりしてるからさ、ハゲの瞳が見えてるんだよね。

その容姿にあって無さ過ぎるつぶらな瞳がさ……まあ気にしなければ良いんだけど……それがなかなかハードル高いと言うか。

本人は全く気にしてないみたいだけど、こっちはまだその衝撃になれてないんだ。油断したら笑いがこみ上げてきそうに成るから、いつも異常に顔の真剣さを二割り増しで作ってる。

てか、目の前にあるアイテムの金の工面って……

「どうせバカみたいな金を取るんだろ？」

「家は良心的な価格で販売はしてるぞ。超高額になるのはそれだけレア度の高い奴だ。リアルオークションはウハウハなんだぞ」

ハゲが上機嫌に煙を空へと吹かす。煙が上る空中にある宝箱……あれの中身をわざわざ買う？　そんな選択肢はないだろう。別に必要かどうかなんてわからないし、そもそもまだ奴らの物にアレが成るとも、僕達が手に出来ないとも決まった訳じゃない。

数の差は確かに痛いけど、だからって諦める理由にはならないよ。

時間が許す限り、誰でも手にする権利はあるんだからな。

「さてと、いつまでもここでにらみ合いをしててもしょうがないだろうな。諦めないのなら、競争と行こうじゃねーか。まあ結果は見えてるも同じだが」

僕はハゲの言葉に少し眉をつり上げる。結果が見えてる？　今から見えてる物は結果なんて言わないんだよ。結果ってのは絶対に後から出る物だろ。

今の段階ではどんなに良い未来が考えれたとしても、それは予想でしかないんだよ。そして予想に百パーセントなんかない。だから僕は目の前のハゲとモヒカンと金髪にこう返してやる。

「結果なんて知らないけど、僕は途中で諦める様な事はしない。そう決めてる」

「なら、正々堂々といこうじゃねーか。俺たち『ドグレインファミリー』が相手になろう！！」

そう言ってハゲが吸いかけのタバコを指で空中に弾いた。回る赤い炎。そしてそれは地面に落ちて僕の足下まで転がった。

タバコの独特の臭いが鼻につく。僕はそのタバコを踏み潰して、こう言った。

「上等だ！」

さて、宣戦布告をしてあの場所から取り合えず少し離れた訳だけど……どうしたものか？　こうやってる間にも、向こうはどんどん情報集めて、そして人海戦術を使ってるんだろうな。

「なあメカブ、何か考えないか？」
「え？　あ……そうね……」
「？？」

なんかさっきからメカブはあんまり僕の言葉に反応しない。何かを考えてるみたいに右から左に受け流されてる。しかもなんだかちょっと怖い顔をして考え込んでるから、気になる所だよ。

「おい、何そんなに考えてるんだ？　勿論イベントの事だよな？　ほら、ここはご自慢の天寿眼でやれる事はないのか？」

僕はちょっと気を使って、自分から痛い言葉のキーワードを入れてみたんだけど……

「はあ？　天寿？　その設定も飽きたかも」
「えええええええうぇえええええええええ！」

言っちゃいけない事を言ったよな今！　なんてこっただよ！　どうしちゃったんだメカブの奴！

「お……おい！　本当に大丈夫かお前？　何をそんなに考えてるんだよ？」

僕はマジで心配になったから、メカブの肩を掴んでそういった。するとメカブは大きく溜息を吐いて、僕をうざったそうに見上げて来た。

「無限の蔵……」
「ん？　ってかやっぱりその設定は持ち越して行くのかよ」

さっき飽きたとか言わなかったっけ？

「うるさいわね。なんかバカにしてるようで良いじゃない」

「バカにしてたのかよ！」

こっちは善意でメカブの電波に付き合ってたのに、バカにされてたってどういう事だよ。超ショックだよ！

「うるさいわね無限の蔵。それよりも今はイベントの事。引いてはあいつ等の事よ」

あいつ等ってのはきっとハゲ達だろうね。

「あいつ等が何だよ？　まあ確かに数の差は問題だけど……」

「あんたはその無限の要領に何を詰めてるのよ。あのハゲ、自分達を『ドグレインファミリー』って名乗ったわ」

そう言えばそうだったね。まあ名前ぐらいあるだろうと思うけど。何々組、や何々一家ってのはヤクザじゃよくある事だろう。

それをＬＲＯで横文字にしてみたんじゃね？　ドグレインはわかんないけど、ファミリーってそう言う事だろう。

「ドグレインファミリーってＬＲＯじゃそこそこ有名な犯罪ギルドよ。主な活動はまああいつ等が言ったとおりアイテムの転売ね。

組織だっていろんなアイテムを集めてるのよ。需要がある奴とかレアな奴とかね。しかもそのやり方がえげつない事で有名よ。

極端な話で言えば、奴らはＰＫでアイテムを奪ってるっても聞くわ」

「あいつ等が……」

なんだかそこまでには見えなかったけど……それはリアルだからって事だろうか？　リアルで人を殴れば傷害罪とか暴行罪とかの犯罪に成るからな。言っちゃえばリスクがでかい。
でもＬＲＯならＰＫ（プレイヤーキラー）がどこでも出来るからな。それに別にそれを咎める事も出来ないし。でもだからってそれが思い悩む理由に成るかな？

「悪名高いのはわかったけど、何で不味そうな顔してんだ？　ビビったとか？」
「違うわよ。まあ確かに犯罪ギルドがリアルでも犯罪者集団だったのは驚きだけど、だからってビビったりしないわ。寧ろ逆ね」
「逆？」

僕が頭に疑問符を浮かべてると、メカブは拳を目の前で握りしめてこう言った。

「あんな奴らの資金源を与える事はないってことよ。ああいう地の底から沸き上がって来るような奴らは、私のこの天寿の毒にしか成らないもの」

ようは見たくもない奴らだからみすみすアイテムを渡してたまるかって事らしい。てかやっぱ天寿の設定続けてるし。さもあの発言が無かった風に。まあ別に良いけど。

「ふ～ん、じゃあその偉大な天寿眼で活路を見いだしてくれたら嬉しいんだけど」

そう言うと、メカブの鋭い視線がメガネ越しでもわかったよ。そしてズイッと近寄って来て、指で額をコンコンつつかれた。

「あんたのここには何が詰まってんのよ？　少しはそのオツムで考えなさい。天寿眼は安売りしてないのよ」
「あーはいはい、そうかよ。別に期待なんかしてないけどな」
どうせ設定だしね。妄想ともいえる。機嫌をとってやってたのに、こっちの気分を害するんなら、もういいさ。
「い、いっとくけどこんな事で天寿を利用すると、幾重にもある未来へのカタストロフィーが崩れちゃうから……」
なんだか僕の言葉が急に冷たくなったからか、後付けの理由で天寿眼を使用出来ない説明に入ったメカブ。だからごめんと言いたいのかな？　面倒くさい。
「わかったよ。天寿眼は切り札だもんな。それに頼るのはいけないってこったろ。じゃあ考えよう、二人でさ。何かないか？　気になること」
僕はフォローを入れて、本題へと入る。どうすればあのハゲ達よりも早くアイテムを手にする事が出来るか……それが問題だ。
「気になる事ね。結局あのＮＰＣが言ってた『人が食われる』とかは何だったのって位かな。私たち別に食われてないし……」
そう言えばそんな事を言ってたな。でもそもそもここはリアルなんだからね。データがリアルの人間を食うなんて不可能だろう。取り合えず――
「あのハゲ達を付けて情報を盗むってのはどうだろう？」

宣戦布告（後書き）

第二百四十六話です。
さて、このリアルの話も賑やかになってきたかもって感じです。リアルでは違う感じのバトル！　を目指してます。剣や魔法が無いからってだけじゃなく、もっと人間臭いのを。
まあ出来てるかはわからないけど……でも頑張ります。このイベントはＬＲＯというゲームの可能性の拡張なのです。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

電波と敵とため息一つ（前書き）

結局、一旦別方向へ行ったせいでハゲ達を見つけることが出来なかった僕らは、途方にくれてた。だけど結局、自分たちが普通にやってあの組織だったやり方してる奴らに勝てるわけない。

だからどうにかやって見つけないと。そこでメカブは提案する。助手２５１の出番だと。

電波と敵とため息一つ

結論から言うと、付ける事も情報を盗むことも難しかった。てか一度別方向に別れたせいでみつけれなかったってのが正直な所です。しかも今日に限って人がごっちゃまぜに成ったような多さ。そんな中で初めて会った奴を再び見つけるってのが無理あった。
やっぱり何でも創作物の様に都合よくはありません。

「そもそも闇雲に探すのが間違いなのよ」

本日何本目かもわからなくなったジュースを買ってると、メカブの奴が一足先に買った『イチゴ練乳サイダー』とかいうジュースを飲みながらそう言った。

「じゃあどうしろって言うんだよ？」

僕は自販機の口から『力水ｖｒＸ』を取り出して瓶の蓋を開ける。口に含むと舌の上で炭酸が踊り、甘酸っぱい香りが鼻孔を擽る。冷たく冷やされた液体が喉を通る時ののど越しと言ったら、また格別。流石力水だよ。
てか懐かしくも新しいジュースに今のアキバは満ちてるね。僕がリアルの回復薬で体力を回復させてると、メカブが早くも飲み終わった缶をゴミ箱に突っ込み携帯をいじり出す。

「こっちも向こうもイベントをやってる訳なんだから、そっち絡みで探せばいいのよ。つまりは近くのＮＰＣを総当たりとか」
「……それでも交差するかは微妙じゃね？」

だってもしも時計回りに僕達がそれぞれ進んだら、鉢会わしない。

「じゃあこのまま闇雲に探してて見つかるの？　てか、私達だってあの宝箱狙ってるんだから、普通に情報を集める所から始めるのが一番でしょ」

「確かにそうかもしれないけど……普通にやってて数十人には増されないだろ。今まで通りにやってても後手に回るだけだ」

僕達が有益な情報をなんとか手に入れたとしても、もう一度あそこに戻ったころには、宝箱は空っぽ――なんて事は大いにあり得る事だよ。

「確かにそうかもだけど、私達が尾行とかリスク高いわよ。だって顔ばれしてるし……それに尾行してて、確実に奴らの情報を盗み取れるって言うのならやる価値はあるけど、遠くから耳を澄ます程度の事じゃ、結局先手なんて取れないわよ」

「うぐ……」

確かにメカブの言うとおりではあるな。尾行したって情報を盗み取れないんじゃ、そこら変のストーカー以下って事に……けど普通に僕達がやったって組織立ってる向こうに勝てるとも思えないし……じゃあどうすれば良いんだよ。

力水を飲み干しても、全然力が沸いて来ないぞ。

眩しく輝く太陽の光が、世界を焼いてる気がする。肌や髪の毛だけじゃなくてさ、地面から何からだよ。

車の行き交う音、人の雑多な感じ、そしてどこかの軒先から漏れて来る聞き覚えがあるようで無いような音楽。てかこういうなかなか来ない場所も、よくよく考えたらＬＲＯとたいして変わらないよね。

やっぱりその街独特の臭いや感じがあるわけでさ、こうやって壁にもたれてそれを眺めると、不思議なことに遠くに来た気がしなくもない。

電車で三・四十分程度でこれる訳だけど……やっぱりホームとしてる住み慣れた街とは違うからさ。

「はぁぁ、結局どうしろって事なの？　メカブはさ、普通にやって僕達が奴等を出し抜けると思ってんの？」

僕は隣で二つの携帯をピコピコやってるメカブに視線を動かす。ピンだらけの黒くボサッとした髪……そして黒縁メガネの奥の瞳が世話しなく動いてるのが見て取れる。

てかさっきから視線が妙に集まってるのはきっとメカブのせいだよね。こいつ足を大胆に出しすぎ。どれだけ自信があるのか知らないけど、ぱっと見じゃ、「下は！？」って思うもん。

それだけ危ない。言う成れば足は全部出してるもん。覆い隠してるのはふっくらと膨らんだ部分だけだ。それなのにその足の先にある物が便所用のサンダルなんだから、これまた残念。

メカブってどういう風に見られたいのかわかんないよな。そんな彼女と僕は普通に会話してる。今は電波の受信感度も弱まってるのか、それなりに頭痛く成らない普通の会話だ。

「思ってないわね。だって人数の違いは分かりやすい戦力の違いよ。普通にやってても勝てないのが道理。それは既に歴史が証明済みよ」

「歴史って……」

これまた大きく出たな。

「かの織田公は桶狭間で鉄砲隊を上手く使って戦力の差を覆したりしたけど、それは時代を先取りした鉄砲と言う武器が会ってこそな

り得た意表であり奇策。
今のこの出尽くした感がある現代じゃ、オーバーテクノロジー位もって来ないと、意表なんて突けないわよね」
「オーバーテクノロジーって……そんなの持って来ようがないぞ。空から降ってくる訳でもないし……つまりはやっぱ、普通にやってもダメだけど、普通以外にやりようがないって事じゃん」

どうしようもないなそりゃ。こんな所でリアルでの友人関係の狭さを痛感する事になるとはな。いやまあ、一緒に遊ぶような友達が少ないってだけで、別にハブ等れたりとかは……してないとも言えないけど。けどどっちみち、オーバーテクノロジーなんて持ってる知り合いなんて出来なやしないけど。
もしも目の前を通り過ぎてるイベント参加者っぽい人達と一瞬で友達になれたりしたら戦力差と言う部分では並べるかな？
まあ出来ない事だけど。日鞠の奴なら苦もなく、それこそ雨が降った後は晴れに成るように、当たり前の事象の事のように出来そうだけど……いかんせん僕にはそれだけの行動力がない。

だって普通他人に話しかけるのは抵抗があるものだ。その大小が人見知りであるかどうかだろ。飲み干した力水ｖｒＸに蓋をして、自販機の隣にあるゴミ箱に瓶を捨てる。この暑さと人の多さのせいか、既にゴミ箱は一杯に成りかけてるな。

「まあ私の頭にはオーバーテクノロジーさえもあるわけだけど、それをこの世に具現化させるには、後半世紀は必要なのよ」
「そりゃ残念だ」

天寿眼は未来も過去も見通すんだっけ？　てかそもそも人じゃないとか言ってたね。自称世界の監視者であるメカブの中には、どれだけ先の未来が想像出来てるんだろうな。

メカブは自分の想像上のオーバーテクノロジーの話を意気揚々としてくれるけど、いかんせんチンプンカンプンだよ。こいつオーバーテクノロジーのオーバーを嘘大げさ紛らわしいに属すると勘違いしてんじゃないか？
とにかく何言ってるかわかんないぞ。だけど最後にこうも言ったよ。

「まあ、現代の科学でも最高水準に私の腕なら出来るけどね。助手２５１の出番」
「何だその助手２５１って？　ロボットか何かか？」

電波は発信し続けると強化されて行くのかな？　今はシクラいなくてもなんとか対応出来る位には馴れてきたかも。

「助手２５１は文字通り私の助手よ。私が未来を見て得た知識を共有させた汎用人型決戦兵器」
「決戦兵器って……お前は人類をどうしたいんだよ……」

滅ぼす気か？

「決戦兵器って言っても武装は積んでないわ。ただ未来の技術を得た助手２５１は今の情報社会において決戦兵器に近い電子空間制御プログラムを構築してるの。
今の社会においてはそれこそ最強でしょ？」
「え～と……つまり助手２５１は何なの？　超頭の良いメカブの友達か？」

それか同類……とりあえず多分その類だと僕は見るね。まず人型言ってる時点で人類なんだろう。

「だから助手２５１は助手２５１よ。そこら辺の人類と猿が区別できない程度の脳味噌の生命体と一緒にしないで。取りあえず、助手２５１からアプローチするように指示を出しとくわ」

そう言ってメカブは片方の携帯で指を信じられない早さで動かしていく。スゴい使い馴れてるな。てか、指示は普通にメールなんだな。

「つーか、助手２５１の宛先が統一郎君なんだけど」

「世を忍ぶ仮初めの名を与えてやったわ」

いやいや、本名だろそっちが。誰が助手２５１だ。しかも統一郎君に何も掛かってないし……助手２５１。不憫じゃないか。

もの凄く抑揚の無い声で言ったのがこれまた不憫だよ。なんか助手２５１を実は嫌ってないか？

「てか、他人のメールを覗くなんて失礼よ。アンタも自分に出来る事を無能成りに考えてなさいよ」

無能って……地味に傷つくんだけど。出来ることがあればやってるっての。

「アンタの取り柄ってややこしい事を引き寄せる事しか無いわよね」

「なんでそれを知ってる……やっぱりセラかリルレットとかのどっちかだろ。そろそろ教えろよ」

まあ既にどっちだったとしてもイメージとかけ離れすぎてなんか違うんだけどね。てかややこしい事を引き寄せるって……別に今回は僕は無理矢理引っ張って来られただけだ。

「でも、ヤクザと抗争してる時点で厄介事を引き寄せてるわよ」
「抗争って程の事はしてねーよ」

言う成ればこれは競争だ。抗争なんてバカなことをヤクザと出来るかよ。そんな事してたら、流石に暢気に自販機でジュース買えないよ。

でも確かに僕だからこんな事に成ってんのかな？　なんかＬＲＯでも次から次へと厄介事が舞い込んでくるし……これまでは日鞠の側に居るせいだと思ってたんだけど、最近は実は僕の方がそう言う体質だったのかと、少し思いだしてただけにショックだよ。

「てか、僕の質問に答えてないぞ。本当に誰だよお前」
「誰だよって質問もおかしいけどね。だってこっちの私がどっちかって言うと素だし。それにわざわざリアルとゲームを結びつける理由なんて無いわよ。

よってその質問は永劫黙秘するわ。それにどうせ、無限の蔵も私の存在を覚えておくことは出来ないわ」

少しだけ寂しそうに顔を背けたメカブ。またまたメカブの奴は、どっかのマンガの引用みたいなのを入れてきたな。何が存在を覚えておく事が出来ないだ。確かに時間を超越した存在が言いそうな事ではあるけど……ホント好きだなそう言うのが。

僕たちがそんな他愛もない会話を自販機の横でしてると、メカブの携帯に振動が。

「来たわね助手２５１」
「統一郎君だろ」
「うるさい。その名を出すな！」

指摘したら怒られた。統一郎って名は気に入らないみたいだね。

全然知らないけど統一郎君とその家族に謝れよとか思った。
メカブは横で携帯をピコピコ。統一郎君には何が出来るのか……
メカブは口元をつり上げて満足気にこう言った。

「わかったわよ」
「うん？　何が？」

僕は首を傾げるようにしてそう聞き返す。だって統一郎君は一体何をしてたんだ？　その単語だけじゃ理解できないぞ。

「ハゲの居所よ。見てみなさい」

そう言ってメカブは僕に携帯を見せる。そこには確かにあの三人組の姿が。

「あれ？　これって動画か何か？」

何か動いてるぞ。てか別にここまでの精度じゃなくてもと思うんだけど。防犯カメラの映像か何かかな？

「これはリアルタイム映像よ。助手２５１は中途半端な仕事はしないわ」

リアルタイム映像ね……

「でもなら早くこの場所に向かった方がいいよな。防犯カメラの映像でも覗き見てるんなら、カメラ外に行かれると厄介……」

あれ？　そういえばこの映像何か防犯カメラの映像にしては目線が高い様な……当たり前だけど当たり前じゃない目線の高さ。まる

で空から覗いてるみたいな。
三人称視点だね。言う成れば。しかもさっきからハゲ達動いてるのに、その動きにあわせてついて行ってるみたいな感じがしなくもない。
でもこれが防犯カメラの映像じゃなかったら何だって事に……空の更に向こうにあるもの？

「防犯カメラって……そんなショボい物じゃないわよこの映像は。きっと人工衛星でしょ」
「ああ～人工衛星ね。へ～人工衛星ってあんな高い所からここまで鮮明な映像が撮れるんだ――――って、人工衛星いいいいいいいいいいいいいい！？」

僕はそんな叫びと共に空を見上げてた。そこにはどこまでも続く空の蒼と、ドデカい入道雲が鎮座してる。でもその更に上……なんだよな。

「ちょっとそこまで驚く事？」
「いやいや、驚くだろ。これってどこの人工衛星だよ。ここまで鮮明に見えるのなら、僕たちって防犯カメラの比じゃなく監視されてるじゃん」
「世界の知らない方が良いことの一つね」

何したり顔でいってんのメカブの奴。そして更にこう続けた。

「だけど大丈夫よ。世界中の人間を監視するなんて不可能だし、映せてもそれを見る人の目には限界って物があるわ」
「それはそうだろうけど……でもやろうと思えば出来ない事じゃないよな。う～んハゲ達もまさか人工衛星で監視されるとは思わなかっただろうな……」

画面の中でハゲ達は世話しなく移動してる。だけど外に居る限りはこの監視から逃れる事は出来なさそう……何とも恐ろしいんだ人工衛星。

「ただの人工衛星にはここまでのカメラは搭載されてないと思うけど。きっとどっかの軍事衛星でしょ？」

「軍事衛星いいい！？」

それって超不味いんでないの？　てかこれって何？　ハッキングしてんの？　軍事衛星を？　どう考えてもそれって不味いよね。

僕たちよりもその彼が！！　統一郎君！！　軍事とかの言葉が付くだけで、途端に物騒で恐ろしくなるじゃん。しかもそういうのほどセキュリティ的にしっかりしてるし……機密とか色々……消されるんじゃね？

僕の喉がなんか一気に乾いた様な。ヤクザなんかより国の後ろ盾を受けてる組織の方がよっぽど恐ろしいと思えるぞ。僕はメカブの肩を掴んでこう言った。

「今すぐ統一郎君を止めろ！　消されるぞ彼……」

僕は超真剣にそう言った。額から流れ落ちる汗が鼻頭の所で溜まりそしてそれが落ちる。だけどそれなのにメカブの奴は、クスクス笑う事しかしない。

「何いってんのよ。そんなの映画とかの話でしょ？　それに例え映画みたいな連中がいたとしても、天寿で見た未来の知識を与えられてる助手２５１が見つかる事はないわ。

そんなヘマはやらないのよ」

どっからその妄想設定で安心できるんだよ。流石に僕には無理だ。だって軍事衛星ハッキングしてみつからないとかあり得るか？　この今見てる映像事態が痕跡に成りそうだろ。

「お前な……軍事関連をなめるなよ。下手したらこんなのテロリストだぞ」

マジでもしかしたら、その衛生の所有国はパニクってるかも知れないよ。テロリストだって早々やらないだろうことを、ゲームのイベントでやってるんだから、これで消されたら統一郎君が不憫過ぎるじゃないか。

「大丈夫よ。取りあえず助手２５１の事は気にしなくていいの。今はイベントでしょ。場所もわかったんだから行くわよ」

「あっ、おいメカブ！」

僕の腕を振り払ってメカブが歩き出す。たく、本当に大丈夫何だろうな……てかそもそも本当に軍事衛星とかなのかな？

まあ考えたってここで僕が出来ることはないよな。せめてハッキングをこれ以上しなくても言いようにさっさとハゲ共を見つける位。

それだけだ。僕はパカパカとサンダルを鳴らすメカブの後を追った。

「いたわね」

「ああ」

物陰に隠れて僕たちは通りを見つめてた。行き交う人々に紛れてるハゲ達の姿を発見。どうやらまた別の場所に向かってるみたいだな。僕達も人混みに紛れてその後を追うことに。

「何やってるのかしらね？」
「お前が言ったみたいに、周辺のＮＰＣを探ってるんじゃないのか？　てか、もうその映像は良いだろ。どう考えても危ないから、労いの言葉と共にさっさと統一郎君を解放してあげろ」
「わかってるわよ。労いの言葉はともかく、確かにもうこれは必要ないからね」

そう言ってメカブは衛生映像を落とした。まあ五分十分位だったし大丈夫……だよね。取りあえず今は目の前の奴らに集中だ。

「う～ん、何を喋ってるのか聞き取れないわね。あの携帯の内容も気になるし……もっと近づこう」

メカブはパカパカ鳴らしてズンズンと三人に近づこうとする。いやいやいや、ちょっと待て！

「お前な、そんなパカパカ鳴らして後ろ向かれたらどうするんだよ。一瞬でバレるぞ」
「そんな気になるかなこれ？」

本人はあんまり自覚してないのか……結構その音耳に付くんだけどな。近づきすぎたら絶対に分かると思う。

「取りあえずバレない様にするのが鉄則だろ。ちょっとは大人しくしてろ」
「ただ付いて行くことに意味なんて無いわよ。情報を奪わないと後手にしか回れないじゃない。それじゃあ意味ないの。助手２５１の頑張りを無にする気？」
「それは……そうだけど……」

だからって見つかっちゃ台無しだろ。てか労いの言葉も拒否したくせに良く最後の言葉をいえたな。取り敢えずここは慎重に行こうって言ってるんだ。メカブの奴は気が早いんだよ。
何にだってぶつかるタイプなのか？　だからそんな格好が出来るのか。

「でも一度見つかったらバレなくても警戒されるんだぞ。そうなったらおしまいだろ。不用意に近づくのは危険なんだよ」
「じゃあどうやって情報を取るのよ。有効な手段を上げなさい」

ぬぬ……そう言われると別に何もアイディアはないんだけど。てか何でこいつはそんなに不遜な態度なわけ？　協力してくれてるんだよね？
なんか色々不満だけど、ここで言い争いしててもしょうがない。どうにかしてメカブを大人しくさせないと。そう思ってると、うるさい奴が一人増えた。

「ああもう、ちょっとスオウ。あの場所から出たなら出たって言ってよね。シクラちゃんを置いてけぼりなんて酷いぞコラ☆」

たく、どっから沸いて出てきたこのウイルスみたいな奴。一生壁と遊んでれば良かったのに。無駄に高いスペック駆使して僕の携帯限定に登場してんじゃねーよ。

「はあ……」

思わずコボレるため息。するとリアルと画面の中の両方から同時に言葉が降ってくる。

「ちょっと何疲れた様にため息なんて付いてるのよ」
「どうしたのスオウ？　疲れてるんなら私が特別に愛をチューチューして上げよっか？　でもせっちゃんに怒られるかな☆」

くっそ……ため息も付きたくなるよ。だって一緒に居るのが電波な女と、敵だからね。色々と疲れるっての。これで疲れない奴はいないだろう。

「ほら、さっさと案を出さないとあの宝箱ハゲ達に持っていかれるわよ」
「分かってるよ……けどだからって何か良いアイディアが早々浮かぶか――」
「どうしたの？」

僕は自分の携帯を見つめて言葉が切れた。そこには画面一杯にちゅっちゅ唇を尖らせてるシクラが居る。そうブリームス側に居る存在……そしてこいつは僕からしか見えない設定を作ってる。
しかも自由に動ける……って事は別に見えないままでハゲ共の携帯を侵略とか出来るんじゃ……僕はシクラの唇ドアップに成ってる画面を指で触れる。すると「うっ」とか反応したからそのまま横に弾いてみた。すると「んにゅ～～～～～」とかいう声と共に、シクラの顔がその指の動いた方に勝手に釣られて行ったよ。

「何今の声？　その携帯には何が住み着いてるのよ」

恐れおののくメカブ。ああ、そう言えばバレちゃ不味かったな。

「別に何でもないない。気にするな。それよりもちょっと良いこと思いついたかも。だからメカブは僕が携帯イジってる間、見失わない為にハゲを見張っててくれ」

僕はそれとなくメカブの視線をハゲ共の方へ移してそしてまた画面を見る。

「ちょっと、いきなり何しちゃってるのよ。私の形の良い唇を摘んで引っ張るなんて……後で後悔しても知らないぞ☆　もうしてやんないぞ☆」

なんでこいつは彼女的感じで拗ねてるのか理解できない。まあただのお遊び何だろうけどね。そんなのに付き合ってられるか。

「おいシクラ。お前って他人の携帯にも進入出来るのか？」

「誰のって訳でも無いけど、このアプリをダウンロードしてるのなら出来なくはないかな☆」

なるほどね。こいつとしたくもない会話をしてた甲斐がここで発揮される訳だな。僕は思いきってシクラを使うぜ。

「よし！　ならハゲ共の情報を盗み取ってこい！！」

「ラジャーー☆」

それはなかなか素直なシクラの返事だった。

電波と敵とため息一つ（後書き）

第二百四十七話です。
人数的に不利なスオウ達がハゲを出し抜くには色々と大変です。
今回出てきた助手２５１こと統一郎君ですけど、彼が今後出てくるか……それはなんとも言えませんね。
そしてようやく活躍の機会が与えられたシクラ。こいつの活躍がここでは必要かもしれないです。
てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

攻略方法を求めて（前書き）

結局だたを捏ね出したシクラをやや強制的に使う為に、僕は再びあの手を使う。リアルと電子の接点での感覚伝達の変換で何かが起きてるのかは知らないけど、この手なら僕がシクラを上回れる唯一の方法。

そしてハゲたちの情報が僕の手の内へと、入ってくる。これで条件はきっと五分五分だ。

攻略方法を求めて

「――ってなんで私がそんな事」
「おいおい、いきなり愚痴るなよ。今のノリのままいけよ。なんの為にこんな所に飛び出てきてんだ。僕の役に立つためだろうが」

折角の前回からのノリをあっさりと否定するなよな。言う成ればここは、情報を盗み取った後から始まっても良いくらいだぞ。お前の活躍、根こそぎカットで良い場面なんだよ。
色々とお仕事やりました～で満足してろよ。

「別にスオウの為って訳じゃないよ～。私たち敵だし☆」
「む……一応敵としての自覚はあったのかよ……」

すっげー今更だけどな。そっちからフレンドリーに来た癖に。

「ちょっと無限の蔵、良い方法って何よ。後を付けるだけなんてつまんないわよ」

ほら、シクラの奴が愚痴ってるからメカブが痺れを切らしそうじゃないか。こいつがリアルで近づいたら危ないんだから、文句を言わずに行けよな。

「ちょっ、待ってろメカブ。今都合をつけてるとこなんだ。お前はそのまま監視に徹してろ」
「ホントでしょうね……」

ヤバいなんか疑われてるぞ。僕はしょうがないから強行手段に移

ることに。

「んはぁ！！」

携帯から漏れる甘酸っぱい吐息。何度聞いてもなんか恥ずかしく成るようなそんな声を出したのは勿論シクラ。そしてそうさせたのは僕だ。

僕は画面の中のシクラを指でタッチしてるんだ。こっちの感触はただの平面で柔らかさなんて微塵もないんだけど、シクラにとっては肉体を触られてるらしいから、これで言うこと聞くまで刺激してやる事にした。

「おらおら、文句言ってないで言うこと聞けよ。もっと激しく指を動かすぞ。嫌らしい声が外にまで漏れてるぞ」

「うきゅぅ……それで恥ずかしいのはスオウでしょ」

頬を赤らめてそんな事を言うシクラ。確かに言われて見ればこんな所で携帯から喘ぎ声が出てる方がある意味では恥ずかしいかも……まだ誰も気づいてないけど、あんまり激しくすると、誰か気づくかも知れない。

てか台詞がまんま悪役だったな。

「ふん……ならジックリねっとり攻め続けるだけだな」

僕は諦めない意志をシクラに見せつける。ここで大事なのはシクラが嫌がる事が続くって事だよ。それを思わせて、どっちを選ぶかはこいつ次第。

僕から引いたらどうせ調子乗るしな。思い通りに動かすにはこれしかない。こっちから出来る干渉なんてこれだけだし。

「スオウがオヤジ臭い……実はムッツリだったんだね☆」
「何とでも言え、今だけは僕に従って貰うぞ。そうじゃないと、お前は恥ずかしい声で鳴くことになる」

僕は一端放した手を画面の前でちょっといやらしく動かした。すると画面の向こうのシクラは明らかに動揺してる。自分の体を抱きしめる様に腕を回しての警戒態勢。

「むむむ……敵としての憎さ倍増でこれからの糧に成りそうな状況。これからはスオウをいたぶる時絶対に『私を弄んだ癖に！！』って言ってやる☆」
「全てを正当化させる女の必殺技来たーー。マジで止めろよなそう言うの。ズルいと思わないのか？」

ホントそんな事毎度言われたら僕だって傷つくぞ。しかも別に弄んでないし。どっちかって言うと、こっちがそうだろ。アルテミナスの時はかなり弄ばれたと思う。
それなのに、男はそれを言っても「ハァ？」位にしか成らないんだ。女が言えば、好感度をマックスに下げる効果付きの癖して……
「私は元がずる賢い女だもん☆　悪女？　小悪魔系って奴？　それを目指してるもん。さあ、やるならやるが良いわよ。その欲望のままに。私はどんな辱めを受けても屈しない☆」
「……なんでお前がそんな正義の側みたいな台詞を吐いてんだよ」

すっげー苛つくからマジで止めろよ。僕はついつい、指をシクラに触れさせた。

「うぅん！！」

ビクンと強い反応を示すシクラ。そこには変な快感が……ってそうじゃないよな。これは仕方ない事だ。そう必要な事なんだからな――と自分に言い聞かせる。

「さっさと首を縦に振った方が良いぞシクラ。僕達は敵だからこそ、遠慮なんてないんだからな」

「う……ん――ヒャァ！　私は……自分が弄ばれるのは嫌いなの……趣味はスオウをおちょくる事って言いたい……」

「あ？」

何言い出すんだコイツ？　自分の立場が分かってない様だな。僕は更に指を追加して画面のシクラをタップし続ける。

そしてその度に、画面のシクラはピクピク反応を示し、甘い声を吐き、頬や唇を色っぽく染めていく。おいおい、これはなんてエロゲーだ？

ＬＲＯ幅広いな。

「そろそろ素直に成るべきだと思うけど？　お前とのバカな戯れに時間を費やしてる場合じゃないんだよ」

「は……はは……女の子にこんな恥ずかしい思いをさせておいてその言いぐさ……スオウは私の中で鬼畜の部類にカテゴリーしておくよ☆」

さっきから今一☆が似合わない様な所でそれが出てきてないか？

そこまでして使いたい物なのかな。てか失礼な事をまだ言うかこの野郎。

「誰が鬼畜だ。僕は別にお前を女としてなんか見てねーし。そもそもデータだろうがお前の体は全て。肉体がリアルに存在してない時点で論外なんだよ」

「その割には、鼻息荒く成ってたみたいだけど？　鬼畜で変態の童貞君☆」

素晴らしい笑顔でニッコリ微笑みやがった。悔しいけど、☆が見事にハマった笑顔。コイツは人をバカにしたり貶すときが一番良い顔しやがる。

まあだからこそ、質悪いし性格も最悪なんだけど。

「誰が鬼畜で変態だ」

「童貞は否定しないんだ☆　いっとくけどせっちゃんはあげないわよ。勿論私も、狙わないでよね」

「誰がお前みたいな性悪！　それに摂理はともかく、お前はだからデータだろ。どうやってその……ナニをするんだよ」

なんか言ってて恥ずかしく成ったじゃないか。

「ＬＲＯでだってナニは出来るよ☆　裏技だけどね」

「なっ！？　マジで――って、今はそんな事を話してる場合じゃないんだよ。本題から遠ざかって来てんじゃねーか！」

「スオウが、ナニに興味を示すからでしょ？」

「うぐ……別に興味を示した訳じゃない……年頃的にしょうがない事なんだ」

だって男子高校生だぞ。そんなちょっとＨな事にも興味がない訳ないじゃないか。クラスメイトには付き合ってる奴らとか普通に居るし、今では秋徒までそうだし。しょうがないんだ！

僕は煩悩を振り払う様に頭を振って、シクラに向かってこう言った。

「良いから、もう一度さっきのされたくなかったらあのハゲから情

報盗み取ってこい！　裏技の話は後で聞いてやる」
「変態だね～☆　まあ良いけど。お土産話になりそうだし」
そう言ってシクラは画面から距離を取る。それはやってくれるって事なの？　それとも変態に対する自己防衛？　まあ僕は変態じゃないから、後者は有る筈も無いけどね。てか土産話って何だよ。
お前はどっかの旅人か？
「変な事ばっか広めるなよな」
「大丈夫、ただせっちゃんに嫌われて貰うだけ。もうイヤって成る位にね☆」
「おい、それってどういう――」
「――じゃ、シクラちゃん行ってきま――す☆」
言葉を途中で切って都合良く動き出すシクラ。結局アイツを都合良く動かす事は僕には荷が重いっぽい。結局なんだか最終的に振り回されてるし……てか最後に言った事が気になる。
嫌われて貰うって何だよ。僕は既に嫌われたと思ってたけど……だってアルテミナスで最後に言われた言葉が「もう、死んでよ」じゃなかったっけ？
十分既に嫌われてそうだけどね、それだけ聞くと。
「はあ……」
なんだか思わずため息がこぼれる。今どこに居るんだろうな、セツリの奴は。
「何哀愁漂わせてんのよ無限の蔵？　それよりアイツ等なんか大所帯になって来たわよ」
「うわ……ホントだ」

嫌気がさすなもう。だってアイツ等見た感じ頭悪そう――じゃなくて、チンピラ風だもん。そんなのが四・五人位合流しやがった。
なんでアイツ等ってあんなに見た目で分かりやすいんだろう（頭悪いのが）。

「ちょっと、ますます近寄りづらく成ったじゃない。ほら、アイツ等の周りだけ、ちょっとした空間が空いてるわ」

まあきっとアキバに生息してるオタクの人たちにとっては、天敵とかそういう感じの生き物だろうからしょうがないよね。近寄れないよあんなの。場所が違うだろ。
新宿か池袋、それか原宿にでも行ってろって感じだもん。僕たちは取りあえず再び物陰へ。まあ空間がぽっかり空いてるから、今度はメカブの奴も近づこうとはしなだろう。

「むむむ、こうなったらしょうがない、この羽衣の機能を使うときが来たわね」

何故か隣の電波女は脱ぎかけ程度に着てた上着を頭から羽織ってる。もの凄くイヤな予感……いや、バカな予感しかしないぞ。

「おい、何する気だよ」
「ふっふ、実はこの服には未来の技術が隠されてるのよ。これを頭から被ると、透明になれる。つまりは光学迷彩ね。あんただってその位わかるでしょ？」

なんでコイツはそんな無い機能をひけらかせるのか、僕には理解できない。光学迷彩事態はあるけど、そんなどこにでも売ってる様な服に付いてるかよ。

そもそもメカブの言ってる様に、その服が光学迷彩なんだとしても、どう考えても全身隠しきれないし。どっち道欠陥品じゃねーか！

「やめとけやめとけ、その欠陥品じゃ直ぐにバレるっての」

「光学迷彩はあんなバカには見えないわよ」

「きっと足が見えるんだよ。バカにだって気づかれると思うぞ。」

そもそも消えたり出来ないだろうし。何をマジで実行する気なんだよ？　全てにおいて成功する確率ないよ。アイツ等がバカなのは周知の事実だけど、電波な事を言い張って出ていったら、僕の中じゃどっこいどっこいになる所だ。メカブもアイツ等もね。

「じゃあどうしろって言うのよ。こんなに離れてたんじゃ何も聞こえないわ。そもそもアンタのやろうとしてた事って何よ？」

「それは……今にわかるって。大丈夫、ちゃんと情報は手に入れてみせる」

「随分な自信ね……」

ちょっと頬を膨らませて不満気なメカブ。まあだけど信じて貰おうじゃないか。シクラの事はまあ言えないけど、でもアイツだからこそやってくれるだろ。

「でも別に失敗したっていいわよ。その時は助手２５１の出番だからね」

「また統一郎君かよ」

「だから助手２５１と呼びなさい！」

もう良いよ統一郎君は。いやさ他人が自分たちの為に犯罪に手を染めるってのはやっぱりね……その……気が引ける。それこそしっかりとした目的と、それだけの思いがあるならまた話は別だけど、

今のこれって実際ついでみたいなものだからさ。

「はいはい、助手２５１君の出番はもういいよ。自分達の問題でこれ以上犯罪に手を染められてたまるか」

「犯罪になるような事をするかはまだわかんないじゃない」

「いや、個人の情報を盗む時点で犯罪だろ。この国は個人情報うるさいぞ」

プライベートって奴を大切にしてるからな。

「別に助手２５１なら、他人の携帯をハッキングする事なんか造作もないから、バレやしないのに。まあでも結局、それで見れるのはメールの内容位だけど。

無限の蔵がやってる事は、それ以上の情報が取れるの？　そうでなかったら、こんなに慎重にやってる意味ないわよ」

「意味ないって……」

まあ少なくともメールだけの情報よりはより良い物を盗める筈だけど。だってシクラの場合は盗み取るだけじゃない。アイツは携帯通して、ブリームス側から奴らの会話だって聞ける筈だ。

それは大きな情報だろう。メールだけじゃわからない事が有るかも。僕はアイツがちゃんと仕事をすると信じて、こうメカブに言い返す。

「いや、きっと大丈夫だろ。お前の期待に応えてみせるさ」

「別に私は期待なんかしてないけどね。ヒントになる情報の一つでも有れば良いんじゃない？」

なんかすっごく信用されてないな僕。だけどそんな事が言えるのは今のうち。さぁ早く情報を！　一級品の情報を盗んでくるんだシ

クラ！
　するとその時だ。僕の携帯に振動が！　このタイミングはきっとシクラの奴が、情報を盗んだ事に成功したとかで、勝手に携帯の機能を使ったんだろう。
　多分勝手にそう思う。
「そう言ってられるのも今の内だよメカブ」
　僕は不適に笑って、携帯に視線を落とす。そこにはメールが届いた事を知らせるマークが。僕は一気に不味い事を言ったかもって気持ちになった。
（メールって……メールって……もしかて秋徒とかそっちの方が可能性としては高くないか？　画面にシクラの奴のいないし。まだ戻って来てないじゃん。
　やば、ただの意味ないメールだったらどう言い訳しよう）
　僕は祈るような気持ちでメールを確認。するとその件名にはこう書いてあったからちょっとホッとした。『私っていう偉大な存在に感謝してよね☆』これは完全にシクラだろう。そう確信が持てる。
　てか、なんで戻らずにメールで報告してんだアイツ？　てかなんで僕のメアドを……は、意味ない詮索か。まあ良いけど。僕は内容を確認する事に。
「おお、これは……」
「どうしたの？」
　画面に表示されたのは、きっとメールの内容だろう。奴らが行ってた情報交換メール。その全てって所かな。まあアイツならこの位は出来るよな。

てか、メールの内容だから先に送ったって事だよね？　これで終わりとかないよな。
隣に並んで横から覗き込むようにするメカブ。そして案の上こう言われた。
「これってメールの内容でしょ？　見事に予想通りじゃない」
「違うっての。これは序の口。本命が到着するまで、考察してろって事だよ」
僕は必死にこんなもんじゃないアピールをするよ。まあ僕も、そうであってほしい願いを込めてるしね。でも実際さ、これも凄いんだと思うよ。
難なくよこして来たけど、シクラの奴は一体どうやってるんだろうな？　アイツもデータみたいなもんだから、色々とやり方は有るんだろうけど……まあ僕たちにはわからない領域だな。
向こうは電子の住人だ。僕たち人が画面の外からハッキングするとかとは、きっと違うんだろう。
「本命ね。その本命がどれくらいの物かは一応、期待しといてあげる。取りあえず、二人で一つの画面は見にくいから、こっちにもそのデータ送ってよ」
「なら、メアド教えろ。メールごと送ってやるから」
まあ確かに、小さな画面を寄り合って見るのはちょっと……ね。僕たちもお年頃だし、ここは往来だしそれはレベルが高いかもしれない。すると何故か、データを寄越せと言ったメカブが、やけにニヤニヤしてる。
なんか勘に触る笑い方だな。
「良かったわね。これで必要なフリして私のメアドゲット出来るん

だから。わー策士。これじゃあ教えない訳にはいかないものね。流石無限の蔵よ」
「何の事だよ……別にそんなつもりで言ってない」

どっちかって言うと、僕は自分のメアドをお前に教えたくない。だって電波を受信する頻度が上がりそうじゃん。実際今この瞬間だけで十分なんだよ。メカブとの接触はさ。
メアドを教えるって事は、繋がりは残るからな。でもここはアイテムの為。背に腹は代えられない。僕とメカブは取りあえず赤外線でプロフィール交換を……

「何やってんだお前？」
「ちょっと待ってよ。今、この携帯端末内の情報を、無限の蔵に分かりやすい状態に更新してるから」

なんだそれ？　ようはプロフィールで知られたく無いところを隠してるとかかな？　まあメカブは設定を守りたいんだろう。
別に住所がどことか気にしないけどね。有る意味でどんな情報が送られて来るのかが楽しみでは有るな。

「よし、良いわよ」
「はいはい」

僕たちは互いにプロフィールを交換した。勿論メインはメアドな訳だけど、送られてきたデータにはちょっと吹き出しかけたよ。
だって名前『メーカーオブエデン』にやっぱりなってるし。あだ名がメカブで登録されてるし、年が一万位を言うに越えてるし、住所がまず地球じゃない。
流石期待を裏切らない奴だな。

「何？」
「別に……やっぱりメカブは相当きてるな～って思っただけ。取りあえず突っ込むの面倒だし、データ送るぞ」
僕はそういって、シクラから届いたメールを新たに手に入れたメカブのメアドへと転送した。さてこれでようやく心おきなくメールの内容を確認出来るな。
「え～と何々……」
僕とメカブはハゲ共を気にしながら、メールの内容を確認していく。それによると大体こんな感じらしい事がわかった。
まず？に、どうやらあの宙に浮いた宝箱は、別の場所の同じ条件の所全てに現れてたそうだ。そして結局、どうにかして触れても、やっぱり僕の時と同じく開きはしない。
？にハゲ達は、人数の多さを最大限に使って、ＮＰＣを総当たりしてるみたいだな。それとネットでの情報収集も同時に行ってるらしい。
けどめぼしい情報はまだ上がってない。
「向こうも相当苦戦してるみたいね」
「確かに、まあ有力な情報が無かったのは良い事なのか悪い事なのか……僕達もこれじゃあどうしようもないよな」
向こうから盗んだ情報で漁夫の利を狙ってたのに……役に立たん連中だ。
「やっぱりメール程度の情報じゃ限界ね。その本命とやらに期待しておくわ。結局これは過去の事だしね。今現在は何か有力な情報を手に入れてるのかも」

「そうかな～？　頭悪そうな奴らが無い頭を捻ってる様にしか見えないけど。どうせなら、ＮＰＣが喋った内容でも綴ってくれてたら、もっと良かったのに」

どっかでヒントを出してたかもしれない。けど頭弱いアイツ等は気づかなかっただけかも。そう考えてると、携帯が突然暗転した。そして画面の向こうから、うるさい声が。

「パッパカ～ン！　シクラちゃん、さーいりーん☆」

☆をキラキラ瞬かせて現れたシクラ。たく、他人の携帯のスペックを無理矢理な事に使うなよ。無理な使用をしてたら壊れるだろ。

「――で、派手に再臨したからには良い情報が有るんだろうな？」
「勿論、私は凄いからね☆　これを聞いたらきっとスオウは、私に土下座したくなるかも」
「考えてやるから早く言え」

まあ土下座なんてあり得ないけどね。シクラへそんな事をするのは、いくら僕のプライドが小さくても出来ないよ。

「ふふふ、耳の穴をかっぽじってよく聞きなさい。さっき電話で有力な情報の一報が入ったわ。私はその電話回線にまで進入して、それを聞いたの。
内容は確か『その人を食う道路に迷い込んだ人々は、数日後に違う場所から発見される。しかもその時、彼らはみんなこう言う。夢の世界に行っていた。そこは天を突くほどの高い建物が乱立してる場所だった――と』ねえこれって、そっち側の事じゃない？」
「……確かにそう思えるけど」

でもだからってこれがヒントになるかな？　食われた人達はこちら側に来ていた……それがあの宝箱を手にする事とどう関連づけれるのかが全くわからん。
まあ一応、メカブには報告だ。それと別に、土下座はしたくならなかったよ。

「う～んますますわからなくなった感じ。それって信用できる情報？　てか、それを踏まえるべきかが問題かも」

話を聞いて首を捻りながらそう言うメカブ。まあ確かにメカブの言うこともわかるんだよね。けど一応は信用出来る筈。シクラだってなんか楽しんでるっぽいし、こういう時のこいつは裏があったとしても、必要な情報は渡すだろう。

「取りあえずこの謎が解ければ、奴らを出し抜ける。今までの情報と見たこと聞いたことを、整理して考えよう。貴重なアイテム。人を食う通路。宙にある宝箱。食われた人が行き着く場所と、食われた場所と違う出口……きっと何かが有るはずだ」

攻略方法を求めて（後書き）

第二百四十八話です。

そろそろ解決に向かって動き出したいところです。だけど中々に難しい。まだピースが足りない感じ。空中にある宝箱をどうやって取るのか……でもそれが勝者なのかはまだわかりません。

だって貴重なアイテムは他にもあったはずだから。次回はちょっと変わって同じ場所にいるのに忘れ去られてる秋徒と愛さんの登場です。二人のラブラブ――というか、秋徒のデレ具合が見れるでしょう。

もちろん、本編も進める予定ですよ。多分。

てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

炎天下なんかに負けない（前書き）

俺はきっと幸せ者だろう。勝ち取った物は人生一番の宝物と言っていいと思える。白い日傘が日光を反射してキラキラ見える。歩くたびに囁かに靡く髪が優雅で、彼女のお嬢様感を表す服も可愛らしい。

やっぱ彼女は世界一可愛いな。異論は認めない。

炎天下なんかに負けない

「ねぇねぇ秋君、あれから連絡無いけどスオウ君は大丈夫でしょうか？」

「う～ん、大丈夫だろ……と言いたいけど、アイツって厄介ごとを引き寄せるからな。今頃あのヤクザと抗争しててもおかしくないかも」

手の中にある缶をささやかに振りながら、俺は隣を歩く美少女へと視線を向ける。なんかこうやって歩いてると自分達がどう見られてるのか気になる。ちゃんと彼氏彼女に見られてるのだろうか？

それとも姉弟？　愛は雰囲気大人っぽいからあり得そうだ。もしもそうだとしたら、道行く人達に「彼女」だと宣言して回りたい位のテンションに実は上がってる。

だってやっぱり綺麗なんだよな。クラスにはいないよこれは。愛を見てると、日鞠でさえ子供っぽく見える。

暑苦しい風になびく細い髪。日傘を支える華奢な指とか、思わず握りしめたくなるくらいだ。そして大きく空いてるけど、上品さを残してる胸元の鎖骨なんかたまらないね。さらにはそのフワフワした服が、寄り一層のお嬢様感を醸し出してて、道行くオタク共の顔が面白い。

勝ち誇れるぜ。いや、マジで。俺の目には輝いて見える。

「ふっふふふ」

思わず笑いがこみ上げてしまう。それくらい俺は有頂天になってる。この殺人的な太陽の日差しも、愛を薄着にするために照らしてくれてるのなら、ある意味グッジョブだよ。

だけど、雪の様に白い肌を焼くのは止めてほしい。そこだけは太陽の野郎が憎いな。

「何に笑ってるの？　ねえやっぱり合流したほうがいいんじゃないかな？　私達あれから、アイテム一個しか見つけてないんだよ」

俺が不気味な笑いを発してたせいか、愛に突っ込まれてしまった。しかも合流ね。俺的にはあんまりそれはしたくない事だな。

一応スオウの奴は気を遣ってくれたんだろうし、その気遣いを無碍には親友として出来ないと言うか……

「それにやっぱり危ない目に遭ってないかも心配です。秋君心配じゃないの？」

「それは……」

愛が眉を下げてこっちを見てる。その表情を一枚写真に収めて起きたいけど、今そんなことをしたらきっと怒られる。だって愛は真剣に言ってるんだから。

まあぶっちゃけ、心配はしてる。当然だろ。親友なんだし、責任だって一応は感じてるし……それに感謝だってスオウにはしてる。

俺が今こうして愛と歩けるのはアイツのおかげだ。だから心配しないわけがない……けど、実はさっきからずっとスオウスオウと愛の口から出るのが、ちょっとね。

こう……もやもやした感じがあるんだよ。わがままだってわかってるし、自分が小さいとも思うけど、なんだか嫉妬してしまう。

一緒に歩いてる筈なのに、スオウの名前を発する度に、アイツの事を考えてるって思えてしまう。でもそれを表に出したらきっとダメだってのもわかってる。

愛の事は良く知ってるんだ。そう言う男はきっと嫌いだ。俺だか

ら許されるなんて……まだそんな大層な事思えない。付き合い出したら付き合い出したで、嫌われない様にする事に気を使ったりするんだって最近知った。

「心配してる……当然だろ。けど、一個じゃアイツにバカにされるかもしれないし、取り合えずもう一個位アイテムをゲットしてから連絡しようよ」

俺は一番正しい答えを見つけた筈――そう思った。これならスオウの心配もしてるし、一緒に居られる時間も保てる。まさに一挙両得の知恵だ。

俺って天才かもとか思えるぜ。

「う～ん、バカになんてしないと思うけど。二人はそんな仲じゃないでしょう？　お互いに信頼してる。違うの？」

「違う違う、信頼って……まあ愛らしいよね。その見方はさ」

流石世の中の黒い部分に極力触れてない感じが漂ようだけはある。一番の人生経験はＬＲＯで起きたことって、この前聞いたからな。

まあ確かにあれは壮大で、人生の中で一回切りでいいような体験だったけど、一番がゲームでの事って……なんか寂しいよな。

まあ庶民の俺にはわからない事情が金持ちの世界にはあるのかも知れないけどさ。家族との思い出とか無いのかな？

こっちには結構あるんだけどね。特にスオウと日鞠、あの二人に出会ってからはそれなりに刺激的な日々だったからな。

まあそれは追々ということで、今は何だっけ？　俺とスオウの野郎が信頼しあってるって事だったっけ。俺は首を傾げる愛の視線に応える様にこう言った。

「俺達の……ってか男同士って簡単に貶したりするよ。足引っ張り

合ったりなんて、アイツとは良くやったし、信頼って言うか、絡まったたこ糸みたいな感じで、もう解くのも面倒だからずっと連んでるんだよ。

俺達はそんな間柄」

「でも、本気で貶し合ったりしてる訳じゃないよね？　スオウ君も秋君も。冗談だってわかってるから、通じてるから、それでも一緒に居れる。

いいです。そういうの……なんだか男の子って感じで」

優しく微笑みかける様なそんな笑顔。俺は心のシャッターを何度も切った。これは永久保存確定だよ。一瞬心臓が喉から飛び出るから思った。

思わず唾を飲み込んで、何とかそれは免れたけどかなり危なかった。やっべー俺の彼女世界一可愛いかもしれない。

「どうしました秋君？　さっきから惚けてる事多いよ。暑さにやられたとか？　休憩しよっか？　日射病になったら大変です」

そう言ってお姉さん風に気遣ってくれる愛。いやー別に熱にやられたんじゃないんだけどね。

「大丈夫……これはさ、その……日差しじゃなく、愛の笑顔にやられただけだから」

うおおおおお！　言っちゃったぜ。実は一度言ってみたかったんだ。俺の言葉を受けた愛は、少しだけ固まって、そしてそっぽを向いた。もしかしてハシャいでたのは自分だけだったのかな？

そう思い、ちょっと不安に刈られる。だけど小さくささやかだけど、耳に心地の良い声がポツリと聞こえたよ。

「バカ……なんて事を往来で言うんですか……」

ズッキューーーン！！　とその台詞に胸を貫かれる。てかおいおい、俺の彼女可愛すぎだろ。核兵器よりも強力なんじゃねーの（俺限定で）。か弱く喋るその姿も、恥ずかしげに頬を染めるその横顔も、全てが最高だ。

「本当だ。本当に俺はそう思ってるよ！　愛は誰よりも可愛いって。いや、綺麗だって！」

「バッ！？　だからここは往来です！　あんまり変な事連呼しないで！」

白い日傘をクルクル回して怒った姿も可憐だ。怒った姿まで愛はほんわかしてるよ。まあこれは怒ってるって言うよりも、恥ずかしがってるだけだろうけど。

実際マジで怒ったら愛だっておっかないからね。まあそんな事が無いように努力するけど。

「もう、急いでアイテムを見つけなくちゃなのに、秋君がおかしいことばっかり言うから、全然進みません」

「いやいや、俺は思ってる事を素直に口に出しただけだよ。思いってのは口に出さないと伝わらないらしいからね」

そんな事を良く日鞠が言ってた。まあでも、前は自分の内面を他人にベラベラ喋るなんてバカのやることだろ――と、思わなくも無かったけど（日鞠の事はある意味で尊敬してるけど）、今はそれがちょっと嬉しい様な、楽しいようなだ。

恥ずかしさはやっぱりあるけどな。

すると俺のそんな言葉を聞いて、少しだけ前に進んでた愛が立ち

止まる。日差しを受け止める白い日傘が、風景から浮かび上がってクルクル回ってる。
そしてそんな日傘の向こう側から、こんな言葉が聞こえた。
「伝わらないかな……私も秋君の事……だい……」
「え？」

最後の方が良く聞き取れなかった。てか言わなかったのかも。俺は愛の顔を覗き込もうとする。だって聞き取れなかったけど、あの流れで行くと『大好き』とかが入るんじゃね？
それは是非とも聞きたい。けど……
「なんでも無いです！　今のは忘れて！」

そう言って愛は日傘で俺がのぞき込むのをブロックする。だけどそうされるとイタズラ心が沸いてくるといいますか、きっと真っ赤に成ってるであろう愛の顔が見たくて堪らない。
だから俺は、回り込んだりして色々やってみる。

「おりゃ！」
「だから止めてって」
「ならこっちから！」
「させません！」
「これならどうだ！」
「しっしつこいですよ！」

むむむ……流石は愛。全てを完璧にブロックされた。ドジッ子なのに妙に運動神経良いな。矛盾してない？　まあ愛の場合はオンとオフが激しいって感じなのかも知れない。ＬＲＯでは大抵オン状態だったから、リアルで知り合うまでドジっ子属性があるとは知らな

かったしな。
まあだけど、俺はそんなドジッ子の部分も含めて愛を愛せるけど。当然だよな。愛すべきドジっ子。日本は古くからドジッ子を愛してきた国民だ。
ドジッ子最高だよ。そんな事を思ってたからか、それともちょっと激しく戯れたせいかわからないけど、クキっと足を捻って地面を踏み外した愛。

「おっと！」

俺はとっさに愛を体全体で受け止めた。端から見たら、胸に飛び込んで来たみたいな感じだったかも知れない。愛の顔が俺の胸に触れて、俺の右手は愛が日傘を持ってる手を握りしめて支えた。そして左手は肩の所に添えてる。
凄いアクシデント。ビヴァドジっ子！

「あ……ありがとう」
「別に……こっちこそありがとう」
「え？」

頬を染めてる愛の顔に疑問符が浮かぶ。まあ俺のありがとうの意味は知らなくていいよ。このシチュエーションにありがとうだからね。
これだけ近くだと、愛の香りが漂って来る。サラサラの髪が汗で額にくっついてるのもわかる。なんかこうちょっとエロいよな。女の子のそう言うの。
しかもいつだって男を狂わせる様な香りを漂わせてるんだから。美少女って罪だよな。往来の真ん中だけどギュッとしたい。

「秋君、そろそろ離れよう。流石にこれは……」

そう言ってくる愛はキョロキョロしててこれまた可愛い。周りの目が気になるんだな。確かに頭では離れなくちゃとわかってはいるんだけど……いかんせん体が離れたくないと言ってる。
しかもさっきから胸がドキドキで息も自然と荒くなって来たかも。

「ハァハァハァ……」
「秋……君？」

身の危険を感じたのか愛はちょっと強引に離れようとする。けど、俺の力の方が強いから離しはしなかった。やばいな、マジでこの愛の香りに狂いそう。

（抱きしめたい。抱きしめたい。抱きしめたい。こうガバッと抱きしめたい！！）

そんな思いが募り募る。そして欲望に理性が負けた時、俺はきっと愛にとっても恥ずかしい思いをさせる。させてしまう。そう思った。
けどその時だ。携帯から響く音色が、俺の理性を引き戻す。

「スオウ。アイツどんだけタイミングいいんだよ！」

助かったけどな。取り合えず中身を確認。

「スオウ君からですから？　なんて書いてあるの？」

そう言って愛が隣からのぞき込む様にしてくる。自然と密着する形に成ると、どうしても気になる部分が触れてしまう。
そう……それは胸だ。小さな画面を覗き込むために、愛は一生懸

命つま先立ちで来てるから、その胸が二の腕部分に当たるんだよな。
なんて幸せタイムだ。メールの内容が頭に入って来なくなる。そんな俺に変わって、愛が内容を読み上げた。

「え～と、上手くやってるか？　愛さんと二人きりでもおかしな事するなよ。健全にいけよ健全に。愛さんってどこか世間知らずっぽいからって、休憩がてらホテルとか……秋徒、お前ならやってる筈だ！　――――ホテルって休憩するために入る物何ですか？　私はてっきり宿泊目的だけの物だと思ってました」
「あはははは、いや。俺もこいつが何を言いたいのかさっぱりわからない。暑さにでもやられたんじゃないかな」

なんて事を書いてるんだアイツは！　ホテルとか！　てか健全にと言っといた後に、ホテルを力強く確信してる物言い……こいつは全く俺を信用してねぇな。
てか、マジで愛はそっち系のホテルの事知らないのかな？　まあお花屋さんや自販機で驚いてた位だからね。一体どこの世界で暮らしてたのやら。
花屋では「家の方が一杯お花あります」って言ってたし、自販機は「存在位知ってます。でも、買ったことは無かったんです。だって小銭って持ち合わせてないし、それに野外に晒されてる物だから、衛生面は大丈夫なのかなって」そんな感じだったな。

真正のお嬢様発言だよ。だけどそんな彼女が年下で、一般人な俺と出会って付き合ってるんだから世の中何が起こるかわかんないもんだ。

「この、おかしな事ってのは何なんでしょう？　ちゃんとイベントしてるの？　と言う探りかな？」
「いや、それはそのままの意味だと思うけど……」

くっ、なんか恥ずかしい。自分が恥ずかしい人間だと、愛の様な純真な人間を見ると思えてしまう。てかマジで、完全密封された様な世界にいたんだな。

そう言えば愛って、ＬＲＯで出会ったときから、そう言う話は一切しなかった癖に、気安く触れては来てたな。それって結構危ないと思うんだけど。

勘違いする奴ら多分に多そうだろ。でも愛にとっては「？？？」なんだよ。どうしてそうなるのか理解できない。そもそも異性を意識してる行動では無いからな。愛にとっては。

本当に彼氏としては心配になることだよなこれは。愛の容姿でサワサワされたら、大抵の男はときめくぞ。取り合えず、俺以外にはそう言うことが無いように少しずつして貰おう。

「おかしな事っていうのはだな……だからイヤラシイ事なんだよ。キスとか？」

「キスはイヤラシイの？　海外では挨拶だよ」

やっぱりハテナを浮かべる愛。

「ええ～と、ほら唇同士でする奴。接吻だよ接吻」

「私は……好きな人同士でやるのは素敵だし、憧れてたけどな」

今度はなんだかシューンと肩を落として落ち込む愛。ま、まさか俺とのキスにそんな夢を抱いてくれてたのかな？　だけど俺がキスはイヤラシいんじゃ！　とか言ったせいでその夢を潰したとか……そんな感じ？

いやいや、違うんだ。本当は俺だってイヤラシイなんて……てか、いやらしくてもしたい物はしたいじゃないか！

「いや、俺だって別にいやらしいってだけの行為とは思ってないよ。当然」
「あは、そうですよね。良かった。お付き合いとかしてみたら、一度はやってみたい事だったんです。でも秋君がイヤなら、諦めないとかなって思っちゃってちょっと悲しく成りました」

そういって間近で微笑む愛の唇を凝視する俺。形の良い唇だよ。それにツヤツヤしてるし、柔らかそうだ。グロス？　リップ？　良くわからないけど、とにかくキスってのを意識すると……どうしてもそこに視線が行ってしまう。
てか、そこまで考えてたのか。もう少しであの唇が遠ざかる所だったじゃないか。そうなったらスオウの野郎を殴っても殴り足らないよな。

「秋君？」

愛の声でハッとする。流石に唇を凝視してたからおかしく思われたかな。てか、改めて考えると近い。これはなかなか気恥ずかしくなる近さ。

「ちょ……ちょっと暑い」
「ああ、ごめんなさい」

流石にこの往来ではな。さっき間違い犯しそうに成ったし、理性が保ってる時に離れる事に。もったいないけど、これからが俺達にはあるんだ。

「秋君、スオウ君からのメールの続き。まだありますよ。実はそこからが本題じゃないんですか？」
「え？　ああ、そうなの？」

全然気づかなかった。何どうでも良いことメールしてるんだと思ったけど、こっちが本題か。
「え～と、何々――」

「どこにメールしたのよ無限の蔵。情報を取ってきてくれた頼りに成る人？」

そんな事を良いながらハンバーガーを頬張るメカブ。あれから僕達は場所を移動して、某有名ファーストフード店に来てます。ここは涼しくていいな。
冷房ガンガンだよ。地球を犠牲に人は今日も文明を駆使してます。まあだけど、既に文明無くちゃ僕も生きてけないよな。
夏に冷房が無いなんて考えられないもん。僕はシェイクをジュコジュコ吸いながら、メカブの対面の席に座って机に広げた地図を見る。
紙媒体の地図はここに入る前にコンビニで買いました。

「頼りには成るけど、そいつとは違う奴だよ。まあだけど今はあんまり邪魔したくないんだけど、一応それじゃ向こうも気を使うだろうからね。
こっちから『お願い』しとく事にしたんだよ」

そうお願い。二人の邪魔をしない程度のお願い。

「お願いって何かわかったの？　地図まで買っちゃって、雰囲気作りかと思った」
「なんの雰囲気だよ。考えてる様に見せたいだけだとでも思ったのかお前は。ちゃんと考えるために買ったんだ。どうやったってスマ

ホの画面じゃ小さいだろ、二人で見るには」

僕はそう言ってあわせて買ったペンを取り出す。そして傍らにはスマホを置いて、画面の地図と同じ様に書き込みしてく。

その間にもメカブはハンバーガーをパクパク。少しは手伝おうという気にはならないのだろうか。まあ良いけどね。

「で、お願いって？」

「別に何もわかっちゃいない。けど、これまでの事を教えて、そっち方面でも出来そうな事やってみて～ってな感じ。何かわかるとしたらこれからだろ」

よしよし、これでＯＫだな。まあ流石に地図が大きすぎた感が拭えないけど、手頃な倍率の地図なんて売ってないんだよね。

イベントの対象区域は秋葉原という街全体。それを地図上で赤いペンで囲んだ。そして地図ギルドのブリームス側の情報も書き込んで、大体はこんなもんだろう。

「それで何かわかるの？」

「わかるように努力するんだよ。食ってばっかいないでちょっとは手伝え」

本当に、さっきからバクバクバクバク、その細い体のどこにハンバーガーが収まってるんだ？　既に潰された包み紙が四個位に成ってるんだけど。

「今は休憩中。それに私は難しい事考えたくない」

なんて身勝手な……まあ勝手に現れて勝手に手伝ってくれてるんだから、文句を言う筋交いもないんだけどさ。てか、痛い事は次々

に考えつく癖に、肝心な所でその脳は使えないんだな。

「……たく」

僕はため息をついて、地図を見据える。何かあるはず何だよな。攻略出来ないゲームなんて無いはず何だし。あの宝箱があった通路と同じ様な場所で、わかってる所にも印つけた。

これ全部で同じように浮いた宝箱があるってハゲは言ってた。でもそれってそもそもどうなんだろう？　一つが現れたから他のも現れたのか？　それとも元からそこにあったのだろうか？

その宝箱の一つで良いのか、それとも全部を開けないとお宝は手に出来ないのか。それかもっと別の何か……可能性が多すぎるよな。

僕が頭を悩ませてると、なんか画面をテコテコ歩く奴が……

「うん、まあこんなもんで我慢しよう☆」

「お前……シクラなのか？」

「そっ、デフォルトシクラちゃん登場☆　アプリ起動の時しか干渉出来ないの不便だし、乗っ取ってみた」

侵略された……僕のスマホが敵に。なんかアプリで画面を動き回る奴があるけど、そんか感じの二等身キャラにシクラは成ってる。

「で、何の様だよ。どっちみち黙ってろよお前」

バレると厄介なんだからな。すると小さな姿で腕を組んで不遜にこう語る。

「ふっふー私が凄いアドバイスをしてあげるわよ。ヒントってのは大抵言葉に隠れてるわ。ＬＲＯにしては単純なＮＰＣだし、昔のＲＰＧ風だもん。

そもそも、何を指して人を食うなのかなって私は思うけど」
「何を指して？」
どういう事だ一体。食う、か確かにその表現はオカシいけど……
でもだから何だ？
僕は思考を巡らせる。その時、画面を歩くシクラが何かを受信した。
「メールだよ☆　メールだよ☆」

炎天下なんかに負けない（後書き）

第二百四十九話です。
今回は秋徒と愛が二人でデートしたらどうなるんだろうってな感じで書いてみました。てか、秋徒が危ない位に愛を好いてる。まあいろいろとあったから仕方ないのかも知れないけど、秋徒はなかなか良い感じで書きやすかったかも。
まあだけど、愛も秋徒のことを同じ位に好いてる筈です。一人称視点ではそっち側は曖昧かもだけど、きっとそうです。
二人の未来を祈りつつ次回は水曜日に上げます。ではでは。

平面上の螺旋（前書き）

メカブの奴がテイクアウトまで取ろうとするものだから、僕は一足先に外で待つことに。灼熱の太陽の下で待つ間に、僕はスマホに侵略してきてるシクラと言葉を交わす。

敵であるその存在と今だけは穏やかに。

平面上の螺旋

「ちょっとちょっと、どうしたのよ無限の蔵。いきなり外に出るとかマジで勘弁なんだけど。冷房に浸かった体はそんな易々と外気に晒していいものじゃ……てか、覚悟を頂戴よ覚悟を」
「うるさい、覚悟なんてしなくてもその内、外に出るんだから同じだろ。元から覚悟してろ」

僕とメカブはゴミを捨てるダッシュボードの前でそんな会話を繰り広げてた。

「こんなに早く出るなんて聞いてない。まだ私デザート食べてないし……ちょっと不満かも」
「あれだけ食ってまだ食うのかよ」

僕は呆れ半分にそう言う。だってこいつハンバーガー五個位食べて無かったっけ？　それにドリンクだって三杯位飲んでたし、しかもそれに飽きたらずデザート？　見た目とは違って意外と大食いな奴だ。
イメージとしては、一日分のエネルギーを野菜ジュースとかで取ってそうだったのに……こんな事言いながら。

『野菜ジュースこそ、栄養摂取とエネルギー変換率に最も優れた、この時代の許せる食事なの』

だけど蓋を開けてみれば、ファーストフード大好きの現代っ子じゃないか。

「うるさいわね、女の子に取ってデザートは別腹。それに私は知っているわ。天寿が見せてくれた未来には、栄養摂取こそが大切なダイエット方だとね」
「へ〜」

随分都合の良い未来を天寿は見せてくれるんだね。まあ別にメカブが幾ら食べようと、どうでも良いことだけど、食いすぎて動けなくなるとかは勘弁だ。

「ああー信じてないわね。言っとくけど、エネルギーを消費するのにもエネルギーは必要なのよ。代謝を良くしてれば、太る事なんかそもそもないの」
「別にメカブが太るとかそんな事はどうでもいいんだよ。それよりもさっさと覚悟を決めて出ていくぞ。物欲しそうな目でカンターばかり眺めてんなよ」

どれだけデザートに未練たらたらなんだ。まあ外に出たくない気持ちは分かるけどね。あの灼熱地獄に舞い戻る気になるには、この文明は偉大過ぎるよな。なんという快適空間を作り出してやがんだ――って感じだもん。
周りを見渡せば一杯いるし……この文明に満たされた空間から出れなくなった人達がさ。あんまり長く居ると僕達もああなりそう。
てか、外に出たくない人達で一杯だから、店側の回転率悪くなってるよ絶対に。店にとっても良い迷惑だな。

「別にカウンターばかり眺めてる訳じゃ……しょうがないわね。テイクアウトにしよっと」
「結局食うんだ……」

ま、テイクアウトなら文句は言うまい。てな訳で、メカブがデザ

ート買いに行ってる間にこっちは外へ。自動ドアをくぐるとそこはまさに別世界。強力な日差しがすぐさま肌を焼きだした。

「うげ～アッチィィィ」

覚悟はしてたけど、既に店内に戻りたい気がする。まあ気がするってか、確実に戻りたい訳だけど、あんな事をメカブに言っておいて、僕がのうのうと店内に舞い戻る訳には行かない。

「大変ね。そっちは色々と☆」

画面の中から小馬鹿にしたような声が聞こえてくる。そう言えばそっち側はどうなってるんだろう。興味があるな。それに誰かと会話でもして、この暑さを紛らわしたい。

「うるさい、そっちは暑くないのかよ？　一応ＬＲＯの気候って日本に沿ってる筈だろ」

時間の流れは向こうの方が早いけど、季節が流れる所はそうだったはず。なら向こうだって灼熱地獄だろ？　なのにさっきから画面の中のシクラはやたらと涼しげで、汗なんて一滴も掻いてない。どういう事だよ。

「まあこっちもそれなりに暑いはずだけど、こっちは魔法が使えるから☆　それにほら、私って色々チート設定だからね」

自分で言うかこいつ。反則的な存在だとわかってやがるな。ホント、ＬＲＯではこのチート的存在の奴が後五人位だっけ？　居るとかアホだろ。ゲームバランス考えろ。

絶対に偏りすぎ。まあこいつらは元がゲームの中の存在じゃない

から仕方ないんだろうけど……僕にとっては仕方ないで済ませられないんだよな。

「自分がチートと分かってるなら、少しは自重しろ。てかそもそも何でお前、僕の携帯を侵略してるわけ？」

そう言えばわざわざここに来た理由聞いてなかったような……あれ？　でもなんか言ってた気もする。嫌われさせたいとかなんとか……でもそれでもここまで来る理由になるかな？

「だってだって、ＬＲＯ落ちちゃったし、やることなくて暇だったから～。それにこっちにも興味があったしね☆」

「落ちたって、やっぱりＬＲＯ全体が落ちたのか？　てか、それでなんでお前は活動できる訳？　おかしいだろ」

サーバーが落ちたのに一つの存在が個々に活動出来る物なのか？

一緒に落ちてろよ。

「あれれ～、そんな事言って良いのかな？　誰のおかげで貴重な情報が手には入ったと思ってるの？　私、シクラちゃんのおかげだよ☆」

キラキラをまき散らしてそんな事を言うシクラ。そこは確かに認めるけど……素直に感謝は出来ないな。てか、したくないし。この妙な関係なんて今日限りだし、ＬＲＯに戻れば倒すべき相手だ。

だから僕はツーンとしてこう言うよ。

「お前が役に立つのなんて今日だけだ。で、落ちてるからって、お前だけ遊びに出てて良い訳？　それも寄りにもよって僕の所なんて……お前ってホントふざけてるよな」

「えへへ～良く言われる☆」

別に誉めてねぇよ。むしろ厄介な感じを全面に出したんだ。それなのにシクラの奴は照れくさそうに笑うんだから質が悪い。

こいつ厄介だと分かってて実はやってそうだからな。バカのフリして計算高いからな。見たまんまバカじゃない所が一番厄介なんだよ。

そこで僕には気になる事が一つ。

「あれ？　てかＬＲＯ事態が落ちたとか、セツリとか中はどうなってるんだ？　時間が止まった状態にでも成ってるのか？」

「せっちゃんはまあ無事よ。そもそもＬＲＯが完全に落ちる事はないし……今回はそうね外的要因が原因ね☆　てかアイツ等がちょっと覚醒し過ぎなのよ」

「アイツ等？　誰だよそれ？」

なんかちょっと震えてるけど、それだけの何かがＬＲＯには居るのか？

「こんな事言うと、スオウはバカにするかも知れないから言いたくない☆」

ンべっと舌を出しての反抗的な態度。さっきまでの震えは何だったんだ。演出か？　まじウザいなこいつ。

「別にバカにしてやるから言ってみろよ」

「それオカシいよね！？　そこはバカにしないって言うところでしょ！」

いいや、どうせなら僕は、全力でコイツをバカにしたい。常々恨

みが募ってんだよ。

「良いから言えよ。人をそんな偏見の眼差しで見るなよな。そんな奴に僕が見えるか？」

「ついさっきの言った言葉を忘れた様な発言。舌の根も乾かない内にとはこの事ね……」

うるさい。それはお互い様だろう。シクラは首を振って息を一つ吐くと教える気に成ってくれた。

「まあじゃあ心して聞いてよね。今、ＬＲＯはなんと幽霊に乗っ取られてるのよ☆」

「わ――なんだって――――（棒読み）」

精一杯バカにしてみたぜ。

「ほら、そんな態度取る。これだから言いたくなかったのに。プンプン☆」

頬を膨らませてそっぽを向くシクラ。てかプンプンって……ぶっ飛ばしてやりたい。

「プンプンはどうでも良いけど、幽霊ってお前……マジで言ってるの？　てか大体同じ様な存在だろお前等」

「失礼な！　あんな絞りカスみたいな連中と一緒にしないでよね。こっちは最先端のその先を行く、いわば超最先端で最高の技術の集合体よ。

すっごいんだからね☆」

「それは分かるけど……でもそれでスゴいのはお前じゃないけどな」

スゴいのはお前等を作った当夜さんだよ。まあ厄介な奴らを造ってくれたなと言いたいけどね。

「そうかな？　私が凄いのは私だからって自負があるけど☆　まあつまりね、幽霊って言うか不覚定なデータの集合体が、マザーに圧力を掛けてるのよ」

「マザー？　そう言えばアルテミナスでもそんな言葉聞いたな。マザーってなんだ？」

幽霊よりもそっちが気になるじゃないか。

「マザーって言うのはＬＲＯのシステムの中枢部分の名前よ。マザーコンピューターだからマザーね。それが完全停止でもしないかぎり、ＬＲＯは無事よ」

「へえ～そうなんだ。マザーにもお前たちみたいな意志があるのか？　前にそんな事言ってなかったっけ？」

マザーがどうとか言ってたと思うけど……それに普通にコイツよりも上位の存在ならそれが与えられててもおかしくないよな。

てかそもそもコイツ等の感情はなんなのか……当夜さんが意図的に与えてるとしたら、それはノーベル賞ものだよな？　それともやっぱり偶然なのか……それか実は、感情と思ってる事さえプログラムってのもありか？

その場合は黒幕が当夜さんみたいに成りそうだよな。ＬＲＯのシステムを分かってるのはあの人しか居ないんだし。

まあそれよりも今はマザーだ。ＬＲＯで冒険してる限り、それとは無関係って訳じゃないし、ここで情報を取っとくのも悪くない。てかメカブの奴遅いし。

「意志ね……そこら辺は実際分からないかも。あるとは思うけど、

自分の中に組まれたルールをねじ曲げる私達を、マザーは余り快く思ってないもん☆
だから話しかけても強固な障壁でシャットダウンが現状ね。マザーを手中に収めれれば、ＬＲＯの全てが思いのままなんだけど。そうしたら今すぐにでも、せっちゃんの理想郷を作れるのに。頭が悪いのよあれ。
やっぱりプログラムでコンピュータって感じ☆」

不満そうな顔でそう言ったシクラ。でもそれはこっちとしてはマザーを応援したくなる話だよ。コイツにシステムの全てを掌握されるとか、それはもう詰みじゃん。てかシクラ達がマザーに嫌われるのは当然だな。
いわばコイツ、ガン細胞みたいなもんじゃん。マザーからしたらさ。壊して破壊する訳じゃないけど、乗っ取って書き換えるって、ある意味ガンより質悪いって。

「僕はマザーに一票を投じるね。お前に全てのシステムが掌握されると思うと寒気がする。まだまだ悪あがきするつもりだし」
「そっか☆　まあスオウはそういうよね。そうでなきゃ面白くないし、それにマザーはきっとスオウを気に入ってるよ」

気に入ってる？　またおかしな事を……さっきこいつ感情があるかどうかは分からないとか言ってなかったか？　それなのに気に入ってるって、適当だな。まあ一応聞いてやろう。

「気に入ってるって何が？　どういう事だよ？」
「何がどういうって事は分からないけど、何となくそんな気がするって事☆　だってスオウは私達にまだ負けてない。これって結構奇跡だよ。まあだからこそ楽しめる訳だけどね」

奇跡ね。確かに奇跡は起きたよ。沢山の願いの果てに奇跡を掴みとれたんだろう。シクラの奴は言いぐさは気に入らないけど、確かにこのチート野郎と渡り合えたのは色々と説明出来ない事はあるかも知れない。

まあ命削って戦ったんだから、説明出来ない事もないかもだけど……それに奇跡をマザーのおかげとは言いたくないよ。

あれは、みんなの思いの賜だろう。

「僕はお前の楽しみを長続きさせる為に居るんじゃない。お前のその笑顔をぶっ壊す為に居るんだよ。それもマザーの思惑か？」

「さあ、だけど期待はしてると思うよ。その為にも準備を向こうもしてるんだろうし☆」

「準備？」

なんの事だ一体？　するとシクラはいつものバカっぽい笑顔じゃなく、時折見せる妖しい方の笑みを作ってこう言った。

「ねえスオウ知ってる？　コンピュータってのは、いらないデータとか、不要な物が蓄積されて行くんだよ☆　そういうのは最初は気にもしない程だけど、積もり積もれば、容量も取るし、何より動作が重く成っちゃうの」

まあその位は僕でも知ってるよ。分割された意味のないデータとかでも、その内に動作を重くする原因に成るとかいうあれだろ。

「今ＬＲＯはね、そういうデータが氾濫してる状態なの。というか、その不要で厚かましいデータがＬＲＯを落としたと言っても過言じゃないわ☆

そもそもデータとしても怪しい癖に、せっちゃんの世界を犯すなんて……アイツ等もう一度死ねば良いのにって思わない？」

「思わないって……お前が何の話をしてるかわからん。結局何がＬＲＯを落としたんだよ。そこら辺をズバッと教えろ。お前はいつだって回りくどいんだよ」

僕がそう言うと、つり上げた口からフフフ成る息を漏らしてなんか変な雰囲気を作ろうとするシクラ。それに何故かスマホからはヒュードロドロなる音まで流れる始末。

本当に人の所有物を好き勝手にイジってるなこいつ。

「てかそれは最初に言ったよ。スオウが棒読みで流しただけ。ＬＲＯには存在しちゃいけない者達が漂ってるって☆　別にこの時期の風物詩って訳でもないけど、この時期には特に多くなるその存在。

まっ私が言うのも何だけど、私達より曖昧で、その存在を求めてる様な者達。『ゴースト』がＬＲＯを落としたのよ」

「ゴースト……そう言えばそんな事最初に言ったな。てか、あの掲示板の話は本当だったのか……」

思い出せばコイツ最初に、「幽霊がＬＲＯを落とした」とかほざいてたよ。そして僕は棒読みで返した記憶もある。あれはマジだったって事か。いや……でも……な。

「なんでアイツ等ってＬＲＯに集まって来るんだろうね。ホント迷惑。まあそれも今はマザーがどうにかしてくれてるんだろうけど」

「は？　マザーってそんな得体の知れない事までどうにかできるのかよ？」

こっちはマジでびっくり。ゴーストをどうにか出来るのは、霊媒士やイタコの特権だろ。なんでプログラムやシステムの大元であるマザーにそんな事が出来るんだ？

「マザーはＬＲＯそのものでもあるんだよ☆　データとして圧迫してる部分を消すこと位出来るでしょ？　まあその場合はゴーストがどうなるかは分からないけど。でも既に死んでるんだし、消えるのはそれこそ普通の理だよね」

キャピキャピした声でそう言うシクラ。確かに幽霊だし、消えたって問題なんて無いのかも知れない。けど、なんかそれで終わらせて良いのかなってのも思う。

「理……でも成仏してない魂がＬＲＯに集まってるんだとしたら、そのゴースト達には何か目的があるんじゃないのか？
無理矢理消したら、無念に無念を重ねて消える事に成るじゃないか。それって良いのか？」
「いいも何も、そういう考え方は分からないな☆　あれは生きちゃいないんだよ。死人……幻……白昼夢……そんな事と同義。スオウは死んだ人まで救いたいの？　それとも生きてる人を救いたいの？
スオウは流されやすいよね。聞いた事見たことを、自分がどうにか出来ないかって考えちゃう。でも言ってあげるよ。残酷にだけど、優しさを込めて。
君は全てを救える英雄になんてなれないよ☆」

人混みの喧噪や蝉の声、車の音や街に溢れるいろんな音が一瞬僕から遠ざかった……そんな気がした。別に英雄に成りたいわけじゃないし、人が出来る事に限度がある位わきまえてる。
僕はそんな大層な人間じゃ無いって、自分が知ってる。だから僕は、スマホの向こうでほくそ笑んでるクソムカつく奴にこういってやる。

「分かってる。僕は英雄になんてなれない。でもそれでも、助けたいと思えるたった数人位は助けれるって信じてるんだ」

「あっそ☆　でもいつだってせっちゃんの事は諦めてもいいんだよ？」
「だから数人は助けるんだよ！　諦めずにな！」
何が諦めてもいいだ。僕がＬＲＯと関わり続けてるのはセツリが居るからだぞ。たく折角決めたのに意味がないじゃないか。
「はいはい、どっちが本当の意味であの子を助けれるのか……私達の勝負はそこだけだもんね☆　今だけの協力関係。だからこそ今の内に教えてあげとこうと思っただけ」
「そりゃあどうも……」

教えるね。それがＬＲＯの落ちた原因をって事だよな？　つまりはＬＲＯに大量に流れて来たゴーストがＬＲＯを圧迫したってことで、だからこそＬＲＯはそれをどうにかするために一度ダウンした……そう言う事だよな。
そしてその方法が消す事だとしたら、自分的にはちょっと複雑かも知れないな。それはクリエの事だ。アイツは確かにＬＲＯの住人なんだけど……色々とおかしな事も起こってた。
なんか幽霊っぽい事があったんだ。それがどういう事かはまだ分からないけど、このまま全てのゴーストを排除されたら、クリエは今までのクリエなのかなって……次にあうときがちょっと怖い様な。
いや、不安かな？

「なあ、マザーは本当にゴーストを消し去る為に落としたのか？」
「どういう事よ。ＬＲＯにとってゴーストなんか害悪にしか成らないわよ。消すのは当然でしょ☆」
害悪って……それをお前がいうかって感じだけどな。どう考えてもお前達の方が害悪だろ。ゴーストは多く成りすぎただけで、何を

しようとしてるんじゃないんだし。それを考えるとシクラ達の方がよっぽど、マザーやＬＲＯにとっては害悪だ。

「まあマザーがどういうプログラムの回路を辿って何を導き出すかなんて、私達にも分からないんだから、さっき言ったのは私ならそうするってだけの事よ。

案外あの超スーパーなデータ集合集積体は全く違う事をやってるのかも☆」

違う事ね……それにちょっとは期待したいよ。死人でも何でも、どうにも出来なくても、どこにも居場所が無いから、曖昧なＬＲＯに流れて付いてるのかも知れないじゃん。

それかやっぱり僕たちと同じように、あの場所に夢を見に来てるとか。だったらただ消すのはなんかな。そこで僕はちょっと気づいたことを言ってみる。

「マザーってもしかして世界最高のコンピューターなのか？」

有り得るくねそれ？

「当然。それに安易にコンピューターってくくりには入らないかもねアレは☆　コンピュータってのはそっち側にデバイスが必要だし、企業や国が持つものとなるスーパーコンピューターって大概大きいでしょ？

でもマザーはそんな概念とは全く違うもん」

「どう言うことだよそれ？」

あんまり難しいこと言われても、僕は分からんぞ。それにＰＣ関連は強くない。普通に使える程度で仕組みとかは全然だしな。まあスーパーコンピューターがでかいのは分かるけどね。

「マザーは既存のコンピューターとは違うって事。ホストを主軸にメインルーチンとサブルーチンがなんたらかんたらはスオウの頭じゃ難しいだろうから――」
「悪かったな」

その関係から生み出されたテメェ等と一緒にするなよな。別に構造を理解してなくったって使えるんだからいいんだよ。

「――分かりやすくいうと、マザーは外にデバイスを持ってないの☆」
「それって、パソコンの本体がないってことか？　どうやってＬＲＯを存在させてるんだよ？」

いやいや、それって無理だろ。本体って一番重要な物が詰まってるんだろ。てかそんな事が出来るなら、タダでＰＣ作り放題……

「そこら辺はマスターが目覚めないと私にはなんともいえないよね。そんなＬＲＯだからこそ、リアルじゃいろんな所から注目されてるんだし、得体が知れなくても人は好奇心には勝てないってね☆
だからスオウ達はＬＲＯに来るんでしょ？」

う……確かにそれは言えてる……かもな。発売前に事故があったのに、それでもバカ売れしたし。まああんな世界に行けるんなら、当然といえば当然。仕組みなんて全然わからない人が殆どだろう。
けどそれをわざわざ知ろうとなんて思わない。発売されてるのなら安全を保障されてると思うもん。例え誰もがその仕組みを理解してなかったとしても、そんなの関係ない。
遠い電子の空に思い浮かべてると、店内から漏れ聞こえる甲高い音と共にそこでようやくメカブが出てきた。

平面上の螺旋（後書き）

第二百五十話です。
マザーはＬＲＯに居る限り、無関係では居られない存在な筈です。
その内、接触することもあるかも知れません。今回は進まなかったです……でも次回こそは進めますよ！
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

不特定多数の使いよう（前書き）

ようやく出てきたメカブはその手に紙袋をふた袋も抱えてた。あれだけ食ったのにまだまだ食い足りないらしいな。そんなメカブは出てくるなり、この日差しと熱気に不満タラタラ。

今まで待ってた僕の事をもっと労えよとか思う。そしてメカブは僕が外へ出た事の理由を求めて来た。だから教えてやったよ。なんとまあのただならぬ状況をね。

不特定多数の使いよう

「おまった〜」
「おせぇよ！」

ようやく店から出てきた癖に、随分軽いノリのメカブ。その手にはこの店の紙袋を抱えてる……なんか二個も。まあそれでも掛かり過ぎな感じは否めない。
なにやってたんだこいつ？　実は袋は三つあって、一袋をたいらげて出てきたとか？

「何よ。てかちょっと遅くなったら位でそんな風にいうこと無いじゃない」
「この炎天下の下で待たされる気分を一度知っても、お前は同じ事が言えるのか？」

ふてくされたメカブに、僕はそう伝える。マジで辛いんだぞ。立っとくだけで汗がコボレてくるんだからな。

「なら文句は太陽にでもいいなさいよ」
「また無茶苦茶な事を言い放つなお前は……」

太陽に何言っても聞いてくれるわけないじゃん。てか、僕たち人間は……というか、世界は太陽のおかげで生きてられるんだから、感謝してもし足りない位だろ。
一年の内のこの時期だけやたら暑くされたって、文句なんて言えないっつうの。

「たく、もういいから行くぞ」
「いくってどこによ？　私は何がわかったかも聞いてないわよ」
そう言えば何も言ってなかったっけ？　食うことに夢中ぽかったあの時は、頭使ってなさそうだったんだもんメカブの奴。
「じゃあ歩きながら教えてやる。取りあえずあの路地へ戻るぞ」
そう言って僕達はあの宝箱の浮いてる場所へ。

「ちょっ……何これ？」
そんな驚きの声がメカブから漏れる。まあ無理も無い。だって最初来たときと違って、今この場所には人がメッチャ居る。
「どっかのバカがネット上でこの宝箱の存在をバラしたんだよ。なんか『この宝箱の謎解きに協力してください』とか何とかいってさ。それから一気にレスが増えてたから……まあこうなるよな」
けど、これだけの内の何人が真面目にこの宝箱を取ろうとしてるのか……実際一目見たいだけの奴も多そうだ。中には肩車したりして、どうにか触れてみようと試みてる人たちも居るけど、そこに書き込んだ奴が、ただ触れるだけじゃ意味ないっても書いてたけどな。
自分で確かめてみないと気が済まない人もまあ居るだろうな。
「うわ、ホントだ。誰よこのバカ。競争率が高くなるだけって気づかないの？　どこのどいつかわからないけど、余計な事をしてくれるわね」

ネットで検索でもかけたのか、その書き込みを確認しながらメカブが言う。やっぱり二個もスマホを持ってると便利そうだよな、こういう時。
一個じゃリアルタイムで確認出来ないもん。

「てか、無限の蔵はこの書き込みを見つけたから外に出たの？　あのメールは何だったのよ？」
「メール？」

ああ、シクラがデフォッてる時に届いたあれね。

「あれはその、お願いした友達からだ。それにこの事が書いてあったんだよ。僕のメールを受け取ってネットを見てたら、丁度見つけたとかだろ」
「なるほどね。それで焦る様にしてここまで来たと」
「まっ、そう言う事だ」

でもここまで賑わってるとは思ってなかった。やっぱ誰でも、レアアイテムが欲しいんだね。当然と言えば当然だけどさ。
まあチャレンジするのを止める事は出来ない。これでにわかに夢を見る奴らまで参戦か。競争率が随分跳ね上がるな。

「てか、ホント誰があげたのかしら……この書き込みって私達が知ってる事、殆ど書いてあるわよ。あのハゲ達なんじゃない？」
「それは無いだろ。向こうからしたら、元から僕達とじゃ勝負にならないとか思ってたんだぞ。わざわざライバルを増やす理由なんて無い。
まあ、もしかしたらハゲの連中の誰かが裏切ったとか？　それなら考えられるけどな」

あんまりあり得ないと思うけど……そのくらい考えないとこの書き込みをした奴の情報はちょっと説明がつかない。こっちは苦労したんだぞ。そこまでの情報を集めるのに。

それなのに、ここに集まってる連中は苦労せずに僕達と同じ地点からのスタートなんて……理不尽だろ。マジでこの情報を流した奴を恨みたい。

「まあ確かにあのハゲ達が流すメリットは無いわよね。でもこれはある意味私達にとってはいいことかもよ」

「良いこと？　ネットで公開されてるから情報は入るけど、それは僕達だけにじゃないぞ」

きっと今までの比じゃない位、情報は集まるだろうけど、変な考察や論争まであって余計なんだよね。まあそんなに攻略情報が欲しかったら、そっち系のサイトに行けって事だろうけど、今この瞬間に行われてるイベントだし、確かにこういうやり方しか無かったのかも。

どんどん増えていく書き込みを見ながら、メカブも何か指を動かし始める。そして同時にこう言った。

「そうだけど、バレちゃったら仕方ないわよ。それに最後に勝のは情報を活かした者だけ。何だって使いよう何だから、もっと盛り上げるわ」

盛り上げる？　何する気だアイツ？　僕は後ろからメカブのスマホをのぞき込む。どうやらこいつ、その掲示板に書き込みやってるみたいだな。盛り上げるってのは、煽るって事なんだろう。ようはこの人達を良いように使おうって事らしい。

「女って恐ろしいな……」
「これくらいいいじゃない。みんな楽しんでやってるんだし。あのハゲ共とは違うわよ。それに元がネット上の誰かの為に始まった事でしょ。ネットってのは使いようなのよ無限の蔵。
この手のひらに無限の情報が集まってるんだからね。でもそれはただの情報。どう使うかは私達次第。そんなのわかっててみんな投稿してるんだから、誰も文句は言わないわ」

そう言う物なのかな？　ハゲ共と違うのは納得だけど、みんなが応援してるのは僕達じゃなくて、その掲示板を作った人だろ。
僕達はその横からかっさらおうとしてるんだよ。けど、それも僕達だけじゃないってのもわかるけどね。情報公開するってのは確かに、たった一人の為とは言わないよな。
そもそも、ここに情報を書き込んでる人達だって、その見返りかどうかはわからないけど、他の人の情報に期待してるんだろうし。
誰もが誰も、お互い様って訳かも。

「それにそもそも、あのままやってて勝てた？　あのハゲ共を出し抜けた？　向こうが舎弟を駆使して来るのなら、こっちはネットの不特定多数で勝負よ」

そう呟くメカブの目はなんだか怖いぞ。それに文字を打つスピードが異常だ。

『みんな～私からの情報を聴いて。なんとなんと、このイベントがヤクザの食い物になろうとしてるんだよ。（シクシク）　私達の夢と希望を叶えるＬＲＯをそんな奴らに蹂躙してていいわけ？　いいえ！　それは断じて否よ！
私達はヤクザなんかにＬＲＯの貴重な財産を奪われる訳には行かない！　そうじゃない！？』

そんな書き込みが綴られてネット上に投稿される。するとすぐさま反応が。

『なんだって！　そう言えば今日はやけにアキバに怖い人達が多いと……』

確かにハゲもチンピラも今日は多いけど、別の意味ではあんた等も十分怖いけどね。僕が呆れてる間にもブリっ子したメカブの書き込みに面白い様に反応を示す掲示板の住人たち。

『確かにそんな奴らにＬＲＯを犯されたくない！！　俺達のＬＲＯだぞ。出てけ出てけ！』

『それが事実だとするなら、放ってはおけませんな』

『うにゃー合戦だにゃ！　アキバもＬＲＯも我らで守り通すにゃ！』

なんかいろんな意味で盛り上がって来たな。やっぱり明確に敵を示すと、団結力が違ってくるよ。ガチでは立ち向かえない所もきっと大きいんだろうな。明らかにああいう怖い人たちに虐げられて来てそうだもんな。

ネット上なら、その辺を気にしないでも文句を言える。リアルで出会したら、ヘコヘコするか目が合わない様にするとかしかないけど、実は裏でテメェ等の妨害をしてるんだって優越感を味わえる。

「まあ私に掛かればこんなもんね」

『エデン様が奴らに喧嘩を売られてると！？』

『にゃにゃにゃ……そんなの許せないにゃ！！』

『まさか俺たちが知らない時からずっと戦い続けて……くっ』

『『『エデン様ああああああああああ！！』』』

なんか知らない間に掲示板を乗っ取ってないかこいつ？　ちなみにエデンってのは投稿のさいに使ったハンドルネームね。メーカーオブエデンだからエデンなんだろう。よくよく考えたら、確かにそっちの方がメジャーな気がするな。
でも僕はもうメカブが呼び慣れちゃったよ。

「たく、僕達までここに参加するわけかこれじゃ？」
「情報を貰うんならこっちも提供しなきゃ、それこそ卑怯でしょ？
けど私達の情報はもう全部開示されちゃったし、これくらいしかないじゃない。
それに良い方に転がったでしょ？　これでハゲ共は姑息な嫌がらせを受ける事になるでしょう」

良い顔して笑ってるよメカブの奴。てか、ネット上のブリッ子ぶりがハンパないなこいつ。そしてそれに踊らされて、盛り上がりを加熱させてるんだから、ますますメカブは笑いが止まらなくなるという……ね。

「あの痛い子もなかなかやるわね☆」

変な所を認めてライバル意識を目覚めさせようとしてるシクラ。感心してる所悪いけど、ちょっと気になる事がある。

「おいシクラ。お前ならこの掲示板を立てた奴を調べられるんじゃないのか？」
「そんな事してどうするの？　意味ないことでしょ☆」

うぬ……なんか一蹴された。確かに意味はないかもしれないけど……ちょっと気になったんだ。だって僕達が得た情報のほぼ全部が漏れてる。

まあ大部分はハゲからシクラが盗んだ奴だけどさ。

「メカブも言ってたけど、裏切りでもあったんでしょ。それで誰かが半殺し位にあったって、それはスオウが気にする事じゃないよ☆」

「まあそれはそうなんだけど……」

そこまでは流石に気にしない。でも気になってるのは本当にそのヤクザの下っ端連中の謀反なのかなって事。ここで反乱する意味なくない？

でもこれだけの情報を持ってるのは、僕達以外ならきっとハゲサイドしか居ないはず。もしかしたら、他の団体での参加者……って可能性もあるにはあるけど、知ってることがここまで同じとなるとどうだろうって感じだ。

「スオウが教えた事をアギト達が公開したんじゃない？」

「んな訳あるか。秋徒達はそんな事しないっての」

ありえない事を勝手に言うなよな。秋徒も愛さんも、そんな人じゃ無いってのは僕が良く知ってる。それに公開するにしても無断なんて絶対にしないよ。

そんな事を疑う位なら、チンピラどもに確定させるわ。どうせ薄い杯の絆だろ。僕からしたら、ヤクザとチンピラの繋がりなんてその程度にしか思えないもん。映画とかドラマのあれは過剰演出だろ？

絶対にハゲとあの金髪とモヒカンの方が珍しいと思うんだよね。いや、それか懐柔しやすいのかも知れないな。チンピラは。

まあどっちにしても僕達側の誰かがそんな事するわけ――

「ホントホント、私が言うのも何だけど、愛――は馴染み無いからアイリで行くけど、あの子はそんな事する子じゃないよね☆」

僕のスマホを支える手が震えてしまう……目の前に居る、画面の中のこの存在……

（こいつならやりそう！！）

スッゲーそう思ったよ。だってシクラだよ。こいつは笑顔の裏に何を隠してたって不思議じゃない。てか、こいつなら片手間で出来るだろ。だけどここで「お前じゃないよな？」とか聴いたって簡単にはぐらかせられてしまうのは目に見えてる。さてどうするか……

「おいシクラ。お前でもこういう事って出来るよな？　それも簡単に。だって超高性能だもんな」

これは上手い！　と自分で自分を誉めたくなった。さあどうするシクラ？　お前ならそんな事朝飯前の筈（多分で勝手な印象だ）。でもここで謙虚に出るなんてシクラじゃないから、僕には疑う余地が残る訳だ。

「ふふ、当然ね☆　私ってば超高性能だもん。こんなの息を吹きかけるだけで出来ちゃうわ」

アッケラカンとそう言われてしまった。余りにも自信満々だから逆にやってなさそうじゃないか。もっとこう「まっ、出来るには出来るけど～」位なら怪しかったんだけどな。　僕がスマホを微妙を顔をして見つめてると、隣のメカブが二台ある内の一大のスマホをこちらに向ける。

「ほら、無限の蔵は何スマホとにらめっこしてるわけ？　続々と情報あがってるわよ。さっさと分析しなさい」

「お前もやれよ……」

さっきの店では食事中って事で許してやったけど、ここからはそ

んな甘えは無しだぞ。栄養補給もしたんだし、十分頭は使えるだろ。するとメカブの奴は両腕に抱えてる紙袋を見せつける様にして――

「早く食べないと、この暑さにやられちゃうじゃない」

――とか、言いやがる。

「デザートなんだから、片手間でくっとけば良いじゃん。頭の半分をこっちに使ってろ」

「ええ～～無限の蔵は女の子のスイーツに対する感情を全く理解してないわね。嘆かわしい……」

そう言って呆れる様に深いため息をつくメカブ。え？　なんで僕が呆れられてんの？　訳が分からん。何がスイーツに対する感情だ。そんなもん知りたくも無い。

「スイーツに対するお前の思いとかどうでも良いから、取りあえずちゃんと頭使え。全部こっちに投げるなよな」

「だからそう言うのは私苦手って言ったじゃない。それにね、スイーツに失礼だとか思わないわけ？」

失礼って何が……だよ。そりゃあどっかの高級なスイーツならちゃんと味わいたいのも理解出来るけどさ、お前が今抱えてるのは、安物だろ。そもそも片手間で食べれる様にしてある物だろ。ファーストフードって。

僕の頭が痛く成ってきた所で、スマホから声が。

「電波な彼女にそんな普通に攻めてたって無理よ。扱いが成ってないぞスオウ☆　メカブはそんな攻め方を期待しちゃいない。ご主人様失格だよ」

「誰がご主人だ。どんなプレイを僕達はやってんだよ」

小声でシクラに反論する僕。だって攻められたくてやってる訳じゃないだろあのキャラは。マジでそれなら勘弁だ。面倒臭い。

「取りあえずお前が上手く出来るんならバトンタッチで」

「スオウはバトンを口にくわえて走るタイプだったのかな？　そのバトンは口で受け取ったほうがいい？」

意味不明な事を言って、画面のなかで唇を尖らせるシクラ。僕は呆れがちに言葉を紡ぐ。

「そんな奇抜な事して走る奴に僕が見えるか？　おかしなボケは良いからさっさとやれよ」

「ハ～～イ☆」

てな訳で選手交代。僕はまた口パクで恥ずかしい演技をしなくちゃいけないみたいだ。では早速。

「ちょっと無限の蔵、さっきからどこの誰とヒソヒソやってるわけ？」

「ふっ、何お前の無能さを嘆いてただけだ。天寿が持ち腐れだとな」

「なっ！？」

目元がピクッとひきつるメカブ。分かりやすい奴だ。

「ちょっとそれは頂けないわね無限の蔵。世界の監視者として、この世の過去も未来も見通すこの天寿が私には宝の持ち腐れだとでも言うの？」

「まさにその通りだな。世界の監視者様は随分と小さい様じゃないか。スイーツ食べながら考えごとも出来ないなんて……そんなの一

種類の声で売ってる声優と同じだよ」
　え～とそれはどういう事なんだ？　得意気に言ってる感じは出してるけど、良くわからんぞ。
「むむ……て……天寿には使用制限があるし、この目に宿ってる限り、大量のエントロピーを吸収して消化してるから、私には常に頭に栄養が足りない状態が……それを簡単に補ってくれるのは、だからスイーツな訳で、これだけは絶対に避けられない事なのよ」
「設定の付け足しは禁止でお願いしま～～す」
「設定じゃないもん！」
　メカブが怒った。てか、シクラの奴、今までノリノリで乗ってた癖に、ここに来て突き放して来たな。これで大丈夫なのか？
　僕はどうせおだててやらせるんだろ？　とか思ってたんだけど、シクラの戦略は違うみたいだな。
「うぬぬ……まさか無限の蔵程度の人間にここまでバカにされるなんて……」
　メカブは気付いてないかも知れないけど、悔しさのあまり、胸に抱いた紙袋が潰れんとしてるぞ。その放漫な胸と腕の力で紙袋の中のスイーツは繊維の分裂を始めてる筈だ。
「こうなったらアンタのインフィニットアートがその程度って教えてあげるわ。天寿こそがこの世の全てを見透かせる。その生意気な口は今日までよ！
　これからはきっと様付けで私の事呼びたく成るわよ」
「はは、さあてそれはどうかなメカブ。お前の天寿は確かに凄いんだろう。それは僕のインフィニットアートが震えてるからわかるさ。

けど、全てを見通してる筈なのに、お前は大切な事を見逃してる」
「大切なこと？」

僕が喋ってる様なシクラの言葉に、眉をピクリと反応させるメカブ。そんな目で睨まれてもな……僕が言ってるようでその言葉は僕のじゃないから、返せないよ。

まあここでタジタジ成るわけには行かないから、シクラの言葉に合わせたまま、口元を上げて得意気に成ってる顔をしてるけどね。

「そう大切な事。でもこれは僕が言うことじゃない。世界の監視者であるお前はそれを自分で見いださなければいけないのだよ」
「なっ！？　まさかそれが私の第二の冒険の目的……幾星霜の年月を経て人の心の一番大事な部分を、私はどこかへ置き忘れてたとでも言うの？」

僕はお前の一番大切な部分は常識だと思うけどな。第二の冒険の前に道徳でも学んでおいた方がいいだろ。

「ふ……良かったな新たな生きる意味が出来て。お前はこれから新たなメカブに成るんだよ。いや戻るのか？　まあどっちにしろ、それはきっと大切な目的だ」
「そうね……私は長い長い孤独の時間と、先を見通してのこの世界の終焉を知ってるが為、いつしか全てがどうでも良く成ってたのかも知れないわ。
それじゃあいけないのにね。天寿が見せる未来は一つじゃない事も、私だけは良く知ってると言うのに……」

う～んやっぱりこいつらの電波な会話は恥ずかしい。僕はまだ良いけど、メカブなんてこれが地なんだから痛すぎる。
これだけの人が居るのに、よくもまあ気にせずに電波を垂れ流し

続けられる物だ。所々から視線がこっちに向いてるぞ。

「後悔はまだ早い。さあ冒険の手始めにこのイベントをクリアしようぜ」

「そうね。まさかこんなイベントが私の運命の特異点に成ろうとは……そこまでは天寿でも見通せなかったわ」

そう言ってニコリと微笑むメカブ。素直な笑顔が黒縁眼鏡の奥で咲いた。まあようやくだよ。ようやくここからイベントへ戻れる――

「食べる？」

――とか思ってたら、潰れた紙袋からそんな事を言って、アップルパイを取り出すメカブ。

「えっと……」

何そのちょっと照れた様な顔は……もしかしてこの行為は友達と認めてくれた……とか、仲間意識を共有できたお礼とかかな？

なんかここで受け取らないと、メカブに悪い様な気がしてくる。

「じゃあありがたく」

僕は中身が少し飛び出してるアップルパイを受け取ってシャクっと口に含む。リンゴの甘みと酸味、そして周りを包むパイの生地とが心地よく口の中へと広がった。

そして目の前ではやる気を見せてるメカブが、同じアップルパイを口に放り込みながらスマホを眺めてる。

「う～し、やるぞーー！」

どうやら、本当に言い方がダメだったみたいだな。けど、こいつ、ある意味結構単純なのかも……とか思う。

「やっぱりバカは扱いやすいわね」

「お前はやっぱり悪女だよな」

サラッと酷いことを言ったシクラに僕は思った事を口にする。マジでこいつ怖いよ。あれだけノリノリでやってた癖に、内心では「この電波バカ女――プププ」とか思ってたんだろ。恐ろしい。

「おっおおっおお！　ちょっと無限の。少し見ない間に凄い事に成ってるわよ」

そう言ってスマホをこちらに向けるメカブ。見てみると、スレがもの凄い勢いで伸びてるな。どうやらみなさんがんばってくれてるみたいだ。

やっぱり数の強みは凄いな。不特定多数がこれだけ集まれるのもネットのおかげだね。

「確かにこれは……良い感じじゃん。これならハゲ共を出し抜けそうだ」

「さあて、そろそろ反撃開始と行こうじゃない！！」

不特定多数の使いよう（後書き）

第二百五十一話です。
ようやく解決に向けて動き出す感じです。やっぱりここはネットの特性を利用しないとね。それに二人じゃどうやったって無理あるし。でもあれを自分たちでやるには躊躇してしまいます。
だけど誰かがやっちゃったのなら、腹も決まるってもんですよ。
まあ誰があんな事をしたかはこのイベントが終わる頃にはわかる……かな？　次回からは一気に動き出すことが出来る筈です。
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

歩数三万上昇中（前書き）

歩いて歩いて走って走って、そして戻ったり進んだり、同じ道を行ったり来たり、僕達はアキバという街を右往左往してる感じだ。だけどここからはただ単にイベントに振り回されるターンは終了。

情報は十分に集まった。考えは一つの可能性を導き出した。リアルで人に出来る――誰にでも出来ることが、イベントを進めるんだ。

歩数三万上昇中

僕たちはようやく動き出した。色々と余計な事をやってきたけど、それも全情報が揃うまでの待機時間だと思えば安いもんだろ。

まあ本当なら、揃う前にイベント終了になってもおかしくは無かったけど、今や僕たちには沢山の個がより集まって集団でもコミュニティでも無い、ただそこに報告と自分たちの成果を上げる関係が成り立ってる。

それはハゲ達の様な上下関係とかでも、他の団体参加者ともきっと違う。利害関係とかじゃないネットで繋がれた、ともすればとても薄い関係だ。

けどその薄さが、何本も何本も枝分かれしていき、圧倒的な線を面にし繋がってる。それは文句つけようない位に十分。今は取り敢えず感謝しとくよ『豚の饅頭さん』。そのハンドルネームの人がこのスレを立ち上げてたんだ。ふざけた名前だけど、ふざけてない名前の方が少ないからまだ普通だよな。

スレにはどんどん書き込みが上がってた。内容を読む方が大変な位だよ。まあてか、ワンランク上のアイテムの入手法のキッカケをみんな知ったからって、一気に流行りアイテムを手放す辺りは、みんな現金だよな。

「これで良いか」ってな感じの人達までも、きっと今はその上のアイテムを目指してる。ここに情報を上げてる人達はきっとその筈。

それにどうやら、一度でも流行りアイテムを求めるＮＰＣにやらないと、その上のステップの言葉は引き出せない……そういう感じみたいだからね。

「そう言えば無限の蔵」

「何だよメカブこと時の監視者様」

いやいいんだけど……もう諦めてるんだけど、無限の蔵って言いにくく無いのかな？　なんか端から見てたら、僕がそう呼んでほしいみたいじゃないかこれ？　違うんだ。この電波女がその痛い二つ名を捨てさせてくれないんだ。

てか原因はシクラの野郎だけどな。今、シクラはシクラで、上がりまくってる情報の整理やらせてる。そういう地味な作業がとっても嫌いらしいシクラには、ちょっと指をちらつかせて脅してやったぜ。

今はスマホの中でヒーハヒーハーやってるよ。そしてメカブが、最後のシェイクをジュッコジュコ啜る口をストローから離して、言葉を返す。

「この情報って、なんか全くこっちとは関係無いの入ってない？」

「まあ、心当たり無いのは確かにあるな。けどレアなアイテムは三種あるんだろ？　それなら別の奴の入手方なんじゃない？」

確かその筈……レアアイテムは三種だったから、僕達がやってるの以外にも別の入手方法があってもおかしくない。てか上がる情報を見てると、多分それぞれのアイテム一つ一つに入手方があるみたいだ。

これじゃあ三種全部をコンプリートする強者は流石にいないかな？　まあもしかしたら、こんなネットに惑わされずに独自にやってたかも知れない、団体参加者の中には居るのかな？　それは確かめる術が無いことだけど……

「三種それぞれの入手方法ね。確かに考えられるかも。けどそれじゃあどこで分岐してるのかしら？」

「どこで……ね。あれだろ、ＮＰＣじゃないか？　流行りアイテムを渡すＮＰＣによって分岐が変わるとかだろ。僕達はたまたまこの厄介な方が当たったんだよ」

普通に何も考えずに近くのＮＰＣに渡したもんな。三つのアイテムそれぞれに対応してるＮＰＣが違う……それはこうなって初めてわかった……というか考察出来たこと。でも多分間違っちゃいないと思う。

「そう言えば無限の蔵はとことん厄介事を引き寄せる体質だったわね。それはもう一種のスキルなんじゃないかしら？

生きてて辛く成らない？」

「どういう事だよそれ……」

同情か？　同情なのかそれは？　失礼な奴だな全く。

「いいから今はイベントだ。お前が無駄に胃の要領がデカいせいで時間食ってるんだぞ」

「私のエネルギー変換効率を否定しないでくれる。それにちゃんとテイクアウトにしたじゃない」

テイクアウトまでが長かったんだよ。それにさっきからジュコジュコ言うシェイクの音がうるさい。蝉の鳴き声同様、ずっと聞いてるとうんざり成ってくるぞ。

「とにかく、競争率高く成ったし、急がないといけないだろ。何人この事に気付いてるかわからないんだし」

「競争率っていっても、別に一個限定とかじゃないなら、大丈夫だと思うけど。てかこれが正解かもわからないじゃない」

「だから確かめに行くんだよ」

ようやく導き出せた、迷路の出口かも知れない場所へ。ここで改めて入った情報を整理しておくと、どうやら食われた人達の出てき

た場所は大体同じだったとか。
それになんと、その食われたＮＰＣがこのブリームスには配置されてるとかなんとか。そいつに運良く流行りアイテムを渡した人は、違う情報が聞けるらしい。
なんでもその時の様子と、向こうでの事。そびえ立つ巨大な建物群のその場所は無人だったとか、あるところで見つけた宝箱をあけるとブリームスに戻れたとかそんな感じだ。
そして僕達はその戻って着た場所……宝箱があったとか言われてた場所……じゃない所へ向かってます。だってそれってあからさまじゃん。それにどう考えても、その場所は人が良く行き交う場所なんだよね。
何にせよ、だからそう言う場所はあながちフェイクなんじゃないかと、ＬＲＯを斜めから見たわけだ。てかあからさまにその場所だとわかるのだと怪しいもん。
これまでの情報から何かが紐解けるのだとしたら……そう考えた訳。

「でもこれも、結構無理矢理な感じはするけどね」
「仕方ないだろ。けど、あり得なくもない」

僕はいぶかしむメカブにそう返す。手には入った情報から考えられる事だよこれは。人を食う通路に、浮いた宝箱に、出入り口の違いに、向こうとこちらの相違。後はＮＰＣ達の言葉。
それらはきっと全てがヒントになり得る事なんだろう。確認された宝箱の場所は七カ所。そのどれもが触れてもダメだった。その時点でどれか一つが当たりって訳ではないって事が証明された。
まあもしかしたら、特定の条件を満たせば七つ全部が当たり……ってのもあるけど、それは結果論だな。僕達のこの行動が結果的にはそうなるかも知れない可能性はあるよ。

「ようは、言葉の解釈の問題で、このネットを介してるからこそ分かったことよね。みんな丁寧に場所とＮＰＣの名前と会話内容まで上げてくれるんだから様々よね」
「そこまでさせたのはお前だろ」

ブリッ子使って「情報の正確さを求むんだぞ☆　キュンキュン」とかやってたもん。

「まあ確かにこれだけ、ＮＰＣの言葉が集まらないと分からない事ではあったかもな」

人を食うとか最初に僕達は聞いた訳だけど、違うＮＰＣはオーソドックスに神隠しとかの言葉を使ってた。それにアイテムの情報も少しは触れられてたもん。
三つのアイテムの場所はいまや分からなく成ってるけど、それぞれ噂で寒い所、暗い所、高い所にあるとかどうとか。
まあこれは噂だからね。それに自分達のやってるこのルートがどのアイテムへ繋がってるか分からないから、それは結構意味ない事だ。
まあ何となく暗い所に対応してそうな気はするけどね。ブリームスじゃあの宝箱が浮いてる通路は存在してない訳だし……暗いが明かりの意味じゃないのなら対応してるよな。でも浮いてるんだし高い所って線もあるにはある。けどあそこは存在してないから、その可能性はね。しかも建物の上にあるならまだしも、あの程度で高いなんて言われるのもな。ああ、存在してないってのも味噌だね。

「まあとりあえず、ここでアイテムをランダムに渡す謎が分かったな。あれは直前にどのＮＰＣと会話をしてたか、それにきっと寄ってる。
関連性が高い人物同士で会話を聞くと、その繋がりがアイテムへ

と成るってな感じだよな。それで一つ分かる事は、ブリームスでは会話の順番が大事って事だ」

僕は研究所の前の爺に話しかけて、そして屋上にいたそこの偉い人からアイテムを貰ったんだもんな。そこには明確な上下関係の繋がりがある。まあ掲示板を見る限り、それは最初だからこそ分かりやすいって感じだけどな。

大体、こうやってズラーと文字にして見ないと気にも止めれない事だ。けどよくよく考えたら、これに気付かせる為にイベント側も、ＮＰＣ達の言葉が普通のゲーム画面ぽく表示させる様にしたんだなって思う。

まあこっちは裏の理由なんだろうけど……そこまで含んでたのかって事が驚きだよ。そしてどうやら、僕の読みではこの大事な会話をしてくれる奴らも検討ついてるぞ。キーワードは研究所・存在しない通路だ。

その二つはきっと関連性が高い。いや、もしかしたらだけど、研究所は残り二つのアイテムとも共通したキーワードの可能性は高い。

「まあ順番ってある意味盲点だったわよね。ＲＰＧでは結構基本だけど、地味に厄介だし、その間にクッションおけないのがこのイベントの難易度を上げてるわよ」

「確かに、その間に一回でも間違うと振り出しはきついよな。ただでさえここはリアルでＬＲＯの様な便利機能はそこまでないんだからな。

リアルに体力がそろそろやばいっての」

この炎天下の中、どれだけ歩き回らせる気だよ。さっきから良くサイレンの音が聞こえるのは、きっと日射病とかで倒れてる人も居るからだと思う。

僕達も若いからって水分補給を怠ってると、いつそうなるか分か

らない状況だ。
「誰もがきっとそうよ。けど、ここで動けてる人達が勝者になれるのよ。無限の蔵はそれを目指すんでしょ？」
「当然。売られた喧嘩は勝って投げ返すのが僕のやり方だ」
あのハゲ共に好き勝手はさせないっての。

てな訳で、国立第四研究所に到着。相変わらず錆びれたビルの前には、白衣を着たジジイがいる。僕達はきっとここからスタートで良いはずだ。まずはここで辿った道筋を復習して、それからはシクラの分析に掛かってるな。
あいつに振り分けさせてるのは、書き込まれるＮＰＣの言葉の数々。それを関連のある奴とない奴、後繋がりを考慮して色々と作業して貰ってる。
まあ嫌いだと言っても、元がデータみたいな奴だから得意だろきっと。

「さて、ここからが問題よね。どのＮＰＣに次話しかければ良いのか……」

難しい顔をしてそう言うメカブ。とっとと研究所の奴らとは話して、その後のアイテムを渡した所まで進んでからが悩み所なのは分かってるんだよね。
ここでどうせなら、もっと分かりやすい奴にアイテムを渡しときゃ良かったんだけど、今更嘆いても仕方ない。
「このＮＰＣと繋がりがあれば良いのよね？　どこら辺までを繋がりとするのかも結構疑問だけど……今回はでも、ちょっとヒントに

なるような事言ってくれたわね。
もしかして元から二回目の会話まではセーフなのかな？」
「さあな。でもまあちょっとはヒントくれないと、進める物も進めないし、掲示板が無くても出来る様には成ってる筈だろ。
元から掲示板の存在が入ってる訳無いし」
一応主催者側はちゃんとイベントこなせる様に作ってる筈だ。ただ足で稼ぐとなるとわかりにくいだけ。リアルで体を動かしてゲームやるなんて、色々と大変な訳だよ。
「まあ、そりゃそうよね。ヤクザとの対立構造は流石に予想外な筈だし。でも一人でここまで気付ってのも無理あると思わなくもないけど……私は天寿が教えてくれるけどね」
「あっそ」
それならもっと早くに伝えて欲しかったよ。まあてか、もっと早く気付いても良さそうな事ではあった。だって今は僕達リアルに居るんだ。ＬＲＯ内程、無茶な事が出来ないのは道理。
リアルなんだから、基本的な人のスペックでこなせるイベントじゃないと、意味なんて無いもんな。それこそバランスを調整するってことが大切な事だとわかる。
僕達がやってるハゲとの対決はイベントには含まれません。リアルで誰もが出来て、そこそこ難易度もあって、この街全部を使うメリット……それなら会話を繋げての考察は妥当だよ。
いやね、ＬＲＯ内では結局最後は力って奴が物を言うし、色々と最近じゃド派手な事が続いたせいで、リアルなのにそう言うのを考えちゃってたのかも。
最後は人を食うモンスターの襲来か？　とか。流石にそれは無いよね。倒す手段無いし。まあそれに本当にモンスターが出てくるフリは今の所無い。きっとそれは僕達が目指してるアイテムの効果か

が変な形で現れてると見るね。
そんな事を考えてると、スマホの中のシクラが画面の中で先に進み手招きしてる。どうやら、次のＮＰＣの検討がついたみたいだな。
「さて、なんだっけ……確か『そう言えばこの街のたまり場たる酒屋に、人を食う通路の事を調べてる人が居るとか』って言ってたな。取りあえずそこに行くか」
僕はそんな事を呟いて歩き出す。あくまでシクラの事は秘密だからね。自分で検討をつけての行動に見せなきゃな。
まあでもそこまで言われたら、後は地図ギルドの汗と努力の結晶たるブリームスの地図で確認出来るから、不自然ではないだろう。
僕のスマホじゃ同時には見れないけど、そこまでメカブは気にしないだろう。
「そうするしかないわよね。てか、アイテムを渡したＮＰＣによってアイテムのルートも聞いていく順番も変わるって……凄い凝りようよね」
流石にちょっと疲れの色を見せてそういうメカブ。確かにそれは言えてるな。どれだけのＮＰＣが配置されてるか知らないけど、アキバ全体を使ってのイベントな訳だし、四・五十位は居るのかな？
まさかその全てに、役割が振り分けられてるとしたら、気合いの入れ方間違ってるよな。いや、それともだんだん独立しかけてるＬＲＯ本体には直接干渉出来ないからって、こう言うことに力を入れてるって事だろうか？
あり得なくはないな。
そうこう言ってる内に通りを二つ位抜けた先の酒場に到着。てか、ここってドンキ（ドンキ・ホーテ）じゃん。僕はただ単にシクラの

後を追ってきただけだからどこか確認してなかったよ。
まあ分かりやすくはあるよな。そう言えば、ここの上階の劇場は今は何に使われてるんだろう。一昔前は、随分人気のアイドルの活動で熱かったらしいけど、そう言うのの流行なんてせいぜい二・三年が良いところだろうし、僕はそこら辺疎いから良く分からないな。
まあ基本見る限り、まだ劇場ではあるみたいだけど……下積みをやってるアイドルの活動拠点には成ってるのかな？　けど今は名も知らないアイドルなんてどうでも良いんだ。問題はどれが次に話しかけるＮＰＣって事かだ。

「外には見あたらないわね。てか酒場って設定なら中かしら？　言ってみましょう」

そう言って店内へ急ぐメカブ。アイツきっと冷房目当てだな。まあ分かるけど、どのみち画面の中ではシクラも店内行ってるし、さっさと僕も入るかな。

店内に入るとお馴染みの曲と商品でごった返した棚がそれっぽい場所だな～と思った。まあどこのドンキも店内はあんまり変わらないよな――とか思ってると、流石はアキバなだけの商品も所々にあったりした。
僕は基本普通の人だからそれはナカナカにレベルが高い物多数だぜ。

「はぁ～曲がうざいけど、店内は流石に涼しいわね」
「お前な、店内で堂々とそういう事を言うなよ」

ここのテーマソング。主題歌なんだぞ。店員敵に回す気か。それになんだか耳に残る歌だと思うけど。いやそれがウザいのか？
ついつい頭の中でループしちゃうよな。ドンドンドン、ドンキ～

ってさ。だけどそんな歌とは正反対の映像がスマホの画面には映し出されてるんだから、ちょっとウケる。
ここは酒場って言う設定らしいけどさ、酒場ってバーなのね。もっと雑多な感じの……それこそ西部劇程度のガサツさが有る感じの酒場かと思ってたら、大人な雰囲気がムンムンの場所だよ。
商品の棚はお酒にブリームスでは成ってるな。そんな酒の棚の間を進んでいくと、リアルではレジの所がブリームスではマスターが居るカウンターに成ってて、そこに数人のＮＰＣが居る。
てか、ドンキの店員さんは居心地が悪そうだな。きっと今日は、僕達みたいにスマホを向けて来る人が一杯でウンザリしてるんだろう。
ご愁傷様とか言いようがない。

「この中のどれかよね？　ちょっと見た目じゃわかんないわよ」
「得意の天寿はどうした？」

こういう時こそ使えよ。まあその必要も無いし、出来ない事も分かっては居るけどね。

「私の天寿は教えてくれてるわ。無限の蔵に任せておいて大丈夫だとね」

丸投げされた！　それに間違いが無い事を言いやがった。本当は僕じゃなく、シクラに任せてる訳だけどね。
本当に天寿眼なる物を持ってるなら、そこまで見透かして欲しい。まあだけど、その答えは間違っちゃ無いよ。

「際ですか。そこまで信用されてて光栄だ」
「別にアンタじゃ無く、私は天寿を信用してる訳だけどね。そこら辺は勘違いしないでよ。ちょっと私との距離が近くなったからって、

調子に乗らないこと」
「はいはい」
僕は流すようにそういった。だって相手にするの面倒だからね。それにどこら辺で距離が縮まったっけ？　有る程度の距離はあけて置いた筈だけど……同じ人種と思われたくないし。
まあこんな奇抜な格好してる奴と歩いてるだけで、結構手遅れな気もしないでも無いけどさ……今も店員さんの視線がメカブに集中してるし。
特に下半身……誰もがそうだけど、下が見えそうだからついつい目が行くよな。激しく動けば絶対に見える。足全部出てるもん。
だけどそんな視線を気にしないメカブは「ほら、早く」とか言って僕を急かす。僕は画面を見て、シクラを確認。その隣に居る奴が話しかけるべきＮＰＣだろう。てかカウンターの数人じゃないじゃん。引っかけかよアイツ等は。
「どうしてそいつだって分かるんだ？」
「そんなの簡単☆　話しかける前に対象をロックしてみてよ」
シクラがそういうから、僕は画面に映る飲みだおれてる男を長押しする。すると輪郭が強調されて、画面に寝言の様な呟きが表示された。
そこには確かにそれっぽい事呟きが見て取れた。
「多分設定としては、このおじさんの子供もあの通路に惑わされてるんじゃない？　だから情報を集めてる……みたいな☆」
「けど、少ししたら戻って来るんだろ。そこまで心配する事か？」
僕がそういうと、シクラは深いため息をついて、なんか冷めた目で僕を見てくる。

「スオウはちょっと感情に欠けてるね。例えそうだとしても、自分の大切な人が消えたら気が気じゃないよ。私ならせっちゃん消えたら、例え無事に帰ってくると分かってても最悪の可能性って奴を考えちゃう。いてもたってもいられない。

それが大切って事でしょ？　スオウは本当に何が何でもせっちゃん助けたいと思ってるの？　そうじゃなかったら、私達には勝てないよ。

まあ例えそうだとしても勝てないけどね☆」

バカにしたように笑ってそういうシクラ。こいつに大切って事が何かを諭されるなんてショックだよ。

「元々スオウがセッちゃんをそこまでして助けたい理由ってちょっと謎なんだよね。セッちゃんが綺麗で可愛いからってだけでも良いけど、それだけじゃないよね？

放って置けないのも分かる。スオウの性格だと、ここまで踏み込んだって事と、後は責任感？　ううん、罪悪感？　とか？　まあ何だって良いんだけどね☆　そこら辺に私は興味ないし」

「じゃあ聞くなよな」

僕が投げやりにそう返すと、シクラは画面の中でピョンピョン飛び跳ねて、画面に近づく。

「相応の報酬としてそれを要求☆　興味はないけど、知っておいて損はないでしょ？」

「はは、ホント良い性格してるよお前」

マジで悪女だな。どこでだって弱みを握ろうとするのな。まあ別にそれは弱みって訳でもないけど……てか自分的にも何が理由とか、

沢山有りすぎて良く分からないんだけどな。
けどたださ、死ぬことを望む……それは一番愚かな事だって僕は知ってる。ただそれだけ。

歩数三万上昇中（後書き）

第二百五十二話です。
さてさてようやくイベントへ反撃開始。そろそろ終わりが見えてくてる筈。スオウは何を手に入れるのか。てか、そもそも手に入れることが出来るのか？　それはこのイベントが終わったときにわかるでしょう。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

灼熱だけど止まらない（前書き）

僕達はドンキで情報を得て、次の場所を目指す。そこは研究所とかと全然縁の無い場所。というか、寧ろ研究所なんか重ねちゃいけない場所だった。僕たちが次のＮＰＣを探す場所、そこは教会という神の御前。

灼熱だけど止まらない

ドンキのお馴染みの曲と、スマホの画面の酒場が全然あってないこの場所で、僕は多分繋がれた言葉を聞けた筈だ。その内容はこんな物だった。

『国はあれの存在を知ってるのに……知ってるのに隠してるんだ。奴らが俺の息子を浚ったも同然なんだよ。アイツ等はきっと世にも恐ろしい実験をしてる。

確かに少しして帰ってくるかも知れないが、国が人さらいをして良いはずがないじゃないか！』

とか興奮気味に言われた。いや、これは相当精神に来てるね。この三十代半ばのおじさんＮＰＣは、かなりいろんな所まで寝る間を惜しんで駆けずり回ったんだろう。目の下には凄いクマが出来てたし、服もなんだか皺クチャだった。

それこそ設定なんだろうけど、この人の絶望感は伝わってくる。まあ確かにどうせ戻ってくる……とかこの人を前では言えないな。

「どうだったの？　次のＮＰＣのヒントは得た？」

そう言ってペコペコとサンダルを鳴らしてメカブが聞いて来た。なんかこいつって、役に立ってるかどうかわかんないよな。そもそもなんでついて来てるんだっけ？

まあそれも今更だからどうでも良いけど。僕は大量のピンで止められてもっさりした黒髪を一瞥してこう紡ぐ。

「まあ、それらしく繋がってきた感はあるかもな。でも具体的に次

はどいつだって事はわかんない。まあ研究所の連中が有力だけど……」

けどこれ曖昧過ぎだよな。一度ミスると最初からになる訳だよね？　それを考えると、一度のミスは大きなタイムロス。しかもここはリアルだから、これがきつい。

まあそりゃあＬＲＯの街も変わらずに広いんだけど、体力とかは町中ではあんまり考えなくて良いからね。けどリアルは違う。何をするにしても体力とよう相談だよ。

「研究所ね……」

そう言って思案顔するメカブ。もうテイクアウトしたデザートや飲み物も空箱に成ったのか、ようやく考える気になったみたいだな。

メカブは二台の内の一台を使って常にネットに検索掛けれる様にしてるから、地図ギルドのサイトにでも行ってるのかも。

そんな事を横から考えてると、画面の中のシクラがこんな事を言ってくる。

「もう一度声掛けてみたら良いじゃない。てかそれ基本でしょ？　一度だけじゃ話さない事があるかもってのは☆」

「いや、それはそうだけど……大丈夫なのか？　二回聞くのはＮＧとかだったらどうするんだ？」

リスク高いよ。また第四研究所の所まで戻って、あのビルの屋上まで行かなきゃいけないんだろ。地味に大変なんだぞあそこ。エレベーター無いし。そんなのは御免被りたい。

だけどシクラの奴はあくまで軽いノリでこう言うんだ。

「大丈夫大丈夫。私が覗いた情報によると、同じＮＰＣには何度も

聞けるから。だから進むまではリセットされないから安心して良いよ☆」
「ホントかよ……」
イマイチこいつの言葉って信じられないんだよね。画面の中で自身の前にいくつかウインドウを表示させてカタカタ言わせてるシクラだけれども、その情報がそもそも怪しいんだよ。
どっから入手したんだ？
「そんなの運営側からプロトプログラムをヒョヒョイってね☆」
こいつはまた……恐ろしい事を事も無げに……
「まあ私、ハッキング得意だし。てかマザーの外部リンクに組まれたアドバンスジェネレーションなんて、私たちは見放題だもん☆」
なんかサラッと言ったけど、理解できない単語が混じってたぞ。なんだって？　アドバンスなんとか……は？
「スオウの頭でもわかる程度に言うと、マザープログラムに組み込まれたそもそものシステムじゃなく、外から付け足されたシステムって事。
マザーは強固な障壁で守られても居るけど、それは中枢だけなのよね。ＬＲＯの概要とかの部分は比較的簡単に覗けるの☆
そして端の端っこを使って、このマザープログラムの末端部分だけをイジってマスター以外の人は色々とやってるのよ」
そう言って一息つくシクラ。僕はしばし考えてこう言った。
「ようは核心には触れられないけど、触れられる所から、枠組みを

大きくしようとかそう言う事か？」
「まあ間違っちゃいないよ。アドバンスジェネレーションは一種の可能性だよね☆　凡人が天才のスネをどれだけかじって、追いつけるか……みたいな」

んん？　その変な例えは良く分からん。なんでちょっと意地悪く言うんだよ。凡人が頑張ってるなら良いじゃないか。天才だけじゃ世界は回らないんだ。その他大勢が世界を実は支えてるんだ。

「それはどうだろう？　エジソンがいなかったら今の文明は無かったかも知れないよ。その他大勢は、天才達が作った基盤に苦も無く乗っちゃってるだけだと思うけど☆」

ニコリ顔で世界中の大半の人達を敵に回す発言だそれは。別に天才を否定してる訳じゃないんだから良いじゃないかって僕は思うけどね。
エジソンなんて偉大だーって称えられてるし、僕達がその基盤の上で発展し続けても発明の父を名乗ってられるんだから、文句は言われないさ。

「てか、そもそもそんな事じゃない。天才がどうとかはいいんだよ別に。本当に二回も聞いて良いんだろうな？」

僕の疑いの言葉に、シクラは証拠とか言って妙な物を見せてきた。それは黒い画面に浮かぶ白い文字が、妙な感じで羅列してる物だ。
ああ、あれね。きっとその覗いたって言うアドバンスジェネレーションだろ。ようはこのイベントの際に組んだプログラム。
ふっ……僕は一度肩の力を抜いてこう言ってやったよ。

「よ・め・る・か！」

こっちは何となくこれがプログラムか～てな程度の知識しか無いっての。そんな訳の分からんプログラムだけ見せられて理解出来るかよ。
いっとくけどな、C言語とか知らない奴が見たら異次元の文字だ。あれでどうやってゲームが動いてるのか、僕には理解出来ないよ。

「全く、これだからスオウは……」

そう言って首をガックシ下げてため息を漏らすシクラ。何だよその反応は。もの凄くバカにされた気がする。そもそもプログラムを理解できる奴なんて早々いないっつうの。そんな能力をただの男子高校生のである僕に求めるなよ。

「自分の無知を私に押しつけて、他人を疑うなんてあんまりだよね☆」
「うぐっ……」

グサッと胸に刺さる様な事を言うじゃないか。だけど同じ知識を共有してるわけないじゃん。それにプログラムを理解できないのが無知かと言うとそうじゃないよね。そんな専門知識で無知言われてもどうしようもない。
でもそう言うと、どうせ屁理屈をこねるのがシクラだ。良いからかいのネタが出来たとか思うに決まってる。ここは不本意だけど、乗るしかないか。

「わかったよ。今回だけ……今回だけだからな！」
「貸し二つ目ね☆」

くっそ～～この野郎、このつもりでここまで出向いたんじゃ無い

のかとか思えてきた。これからの為の布石だろ完全に。
まあ貸しとかぶっちぎれば良いだけ……今に見てろこの野郎。てな訳でもう一度画面の中で飲みつぶれてるＮＰＣをタップした。

『んあ？　そう言えばそろそろ行かないと……へっへ、俺達もただ黙って失踪から帰って来るのを待つわけにはいかねえよ。一人がダメなら集団だ。
あんたもくるかい？　俺達被害者の会へ。国の連中へ一斉に抗議しようぜ。リーダーは「バカラ」って若造なんだが、これがなかなか頭が切れるヤツでよ。
紹介しといてやるぜ』

会話はそこで終了。被害者の会ね。まあ一人でやるよりは効果は期待できるかもね。それに人名も名指しで出てきたし、ようはこいつが次のＮＰＣって事ね。

「誰よバカラって、てか最初の研究所員は引っかけじゃないこれじゃあ」
「はは、まあそう言うなよ。ゲームなんだし、引っかけくらい有るだろ」

まあ僕も引っかけじゃねーか！　って心で叫んだけどな。危ない危ない。また無駄に歩かされる所だったよ。
良かった良かった……けど、画面の隅でシクラがしたり顔で威張ってるのはムカつくね。まあ今は何も言わないでやるけど。

「よし、じゃあ早速そのバカラって人を捜すわよ」
「おおーー！！」

僕達はそのバカラってＮＰＣを探すために、用も無くなったドン

キ――もとい酒場を後にしようとする。てかよくよく考えたら、場所くらい教えろよ。そんな事を思ってると、雑多な商品が酒に変わってる画面の下の方に文字が現れた。

『ちょっと待ちな、そこのダンナ』

随分格好良い呼び止めの言葉。思わずダンディーな声が聞こえた気がした。僕は振り返ってレジの方へスマホを向ける。すると店員がイヤ～な目つきで見てくる。

いや、分かるよ。ホントウンザリしてるんだろう。だけどゴメン。これは外せない。だってこんな事今まで無かった。

ＮＰＣから話しかけて来るなんて異常事態……って程でも無いけど、重要なのは分かる。僕は店員――じゃなくマスターをタップする。

『ダンナはその人がどこに居るか知りゃしないでしょう？　昨日もここの来たんですが、何やら少し危険な事をしようとしてる様でした。出来る事なら止めてやってくれませんか？

そこで倒れてる人も、仲間内もちょっと過激に成りすぎて来てるんで、止める奴が居ないんです。赤の他人でしょうけど、一個頼まれてくれませんか？　物で釣るとかじゃないですが、これを』

そう言って渡されたのは流行アイテムの中の一つ。完全に物で釣ってる。まあありがたいけどね。それにどうせそのバカラさんにはどの道会わないとだし……止めるかどうかは別として。

てか、そんな事出来る訳ないよね。話聞くしか僕達は出来ないし。シクラが縄でふんじばるとかしたら話は別だけど……けどそんな事したら、そっちがイレギュラーだしね。

まあ話を聞くだけで良いんだろう。

『バカラさんは第二研究所に行くと言ってました。頼みます』

格好良いマスターが綺麗なお辞儀をしてる中、僕は背を向けてドンキ――いや酒場――もうどっちでも良いか。とにかく外に出た。空からの熱と、一日中この熱気を吸い込んだアスファルトの熱気でちょっとだけ風景がボヤケて見えた。

「うっわ……ヤバいだろこれ」

「今年の最高温度に達してるっ……ホントここの所毎日最高気温更新してるわよ。ちょっとは自重しなさいよ太陽」

もう今日何度目かも分からない文句を太陽に言いつつ、僕達は第二研究所を目指す。てか、ホントいつまでこの暑さをキープし続けるつもりやら……太陽ここ何年か頑張り過ぎ。

そろそろ秋の足音が聞こえだしても良いんじゃないか？　何年も前から言われてるけどさ、これが温暖化って奴だね。ドンキから出た僕達は第二研究所の場所を地図で確認。どうやら近くの小学校の側らしいな。中央通りを向かいに渡り、ガチャポン会館とかを真っ直ぐ進むとそれは見えてきた。ビルとあんまり変わらない外観……だけどここは教会らしいです。神田キリスト教会――そう書いてある。

そしてここがブリームスでは国立第二研究所みたいだ。でも実際言うと、この教会の建物だけって訳じゃない。この建物周辺の土地、芳林公園位までは第二研究所みたいだ。

まあ第四研究所が小汚い建物一棟だった事を考えると、流石は第二だけはあるよ。けど大きさや外観なんて物は実際どうでもいい。問題はバカラなるＮＰＣがどこに居るのかだ。

「何かやる気って言ってたわよね……周辺の様子を伺ってたりするんじゃ無いの？」

「あり得なくもないな。じゃあ一回りするか？」

僕達はそう言葉を返して、取り合えず第二研究所周辺を探ってみる事に。ここら辺もまだまだ人一杯だよ。まあショップが一杯あるから当然なんだけど……だけどすぐそこに小学校があるって言うのは驚き。

教育上、問題ないのかな？　そんな関係無い子供達を心配してると、スマホからこんな声が聞こえた。

「効率悪い」

「ああ？」

なんか掲示板に上がっくる作業に再び戻ってた筈のシクラがメンドクサそうな顔してこっちを見てる。なんか「アンタ達それマジ？」とかの目だ。

何が不満なんだよ。いや、不満は一杯か。だけど適材適所。出てきたからには手伝って貰うのは道理。そんなこんなで働かされてるシクラは続いてこう言った。

「何で二人してデートみたいに散策しないといけないのよ。二人分かれた方が早いじゃない。一人は外、一人は中！　何の為に遠距離通信手段があると思ってるのかな？

二人ともごく自然に一緒に居すぎ。これはデートじゃないんだぞ☆」

「デートって」

何ふてくされてるのコイツ？　まあ言ってる事はシクラの割に至極ごもっともな指摘だけど……

「デートがどうかしたの――って、言ってるけど、これはそう言う

のじゃないわよ！　協力してやってるだけ。変な勘違いしないでよね！」

僕の呟きが聞こえてたみたいなメカブが突然にそんな事を言い出す始末。勝手に変な妄想するなよな。僕は全然そんな事思ってないての。むしろそんなに生足晒して、パンツを見せたがってる様な格好のメカブが、この程度で狼狽してるのが驚きだ。

まあ格好の奇抜さに相反する様に、顔には黒縁眼鏡だからな……大胆な子なのか、そうじゃないのか分かりづらい。でもこの奇抜な格好の中にある、一点の真面目さ……堅さみたいな物が見えるのもなかなかおつに入ってて良いのかも。

こういう奴がそのうち、ファッションリーダーとか言われるかもしれないよな。僕はプンプンしながら先に進み出したメカブの背中を見てた。

黒い髪を押さえつけてるピンが、歩く度に日光を受けてピカピカしてる。

「ど、どうしたのよ？　不本意だけど今は一緒に歩くことを許してやってるんだから早く来なさい。でもこれはあくまでイベントの為であって――」

なんかグチュグチュと言ってるみたいだけど、ここで僕は切り出した。

「なあ、ここは二手に分かれて探さないか？　そんな天の声が聞こえたんだ」

取り合えず痛い事を言っておけばメカブの食い付きが良くなるという算段で、天の声を入れてみました。

「天の声――ヘヴンズボイスを聞き取れるの？　流石スオウね。まあそっちの方が効率的だし良いわよ」

思惑通りにあっさりＯＫしてくれた。てか、ヘヴンズボイスって……いや、別に意味はないだろうから特に何も言うまい。

まあだけど、二手ね。二手……問題はどっちがどっちを探すかだよね。実際こうする事が効率的なのは最初から分かってたさ。だけどぶっちゃけ言うと、一人で教会とか入りづらいから、この流れでいいか～みたいな感じだった訳だよ。

そしてどうやら、教会に一人で入りづらいと思ってたのは僕だけじゃなかった様だ。

「じゃあスオウは中の方頼むわね。私はしょうがないけど、このくそ暑い中周りを回ってみるわ」

メカブの奴、妙に「しょうがない」を強調して言いやがった。恩着せがましいな……ただ単に教会が自分の鬼門みたいな物だからだろ。

その格好じゃやっぱアレだもんな。まあそんな自覚があった事がちょっと驚きなんだけど……こっちだって教会に入りづらいのは一緒な訳でだからここはもうちょっと意見交換を……

「って、もういねえ！！」

僕が心の中で色々考えてる間に消えやがった。逃げたなアイツ。いや、まさか食べられた？　通路に？

「アホな事考えてないでさっさと中に入ろうよ☆　大丈夫あの痛い子よりはマシだから」

「むむむ……」

何故か考えてた事が筒抜け何だけど……そんなに分かりやすい顔してるのかな？　それにメカブよりマシって、あんな人目をはばからない奴と一緒にしてほしくない。僕はちゃんと周りにだって気を使える子なのだ。まあそんあ事コイツに言ったって意味ない事だけど……もうメカブの奴は逃げたし、言いだした僕が行かない訳には行かない。

なのでいやいやながら、教会の扉をくぐることに。なんだか背筋が思わず伸びてしまう。そんな感じだよ。外の喧噪とは一線を引いて存在してるって言うか……静寂がここにはあった。

やっぱりイベント参加者の人達もここには入りづらいのだろうか？　人の姿がないな。入った先がいきなり礼拝堂……って訳じゃない様だけど、流石にここではギャーギャー騒げないよな。

ここでアニメのキャラみたいな奇抜な修道服に身を包んだシスターが出てきてくれたら、一気に緊張もとけるんだけど……なかなか歴史が深いらしいこの教会ではあり得ないか。

そこら辺は流石に自重してるだろう。いくらアキバといってもね。ちなみに歴史が深いとかの知識はシクラに教えて貰った。いや、コイツ単体でネットに接続出来るらしいから、情報取り放題らしい。

羨ましい頭をしてやがる。光が射し込むロビーで、僕はスマホを翳してヒソヒソしてた。端から見ると怪しさ抜群だ。てかなんだかスマホ使うのもはばかれてしまう様な雰囲気。

これが神の御前って奴か。

「御前はもっと奥でしょ。礼拝堂位まで行かなきゃね☆　ま、こっちはありがたみなんてこれっぽっちも無いけど」

「だろうな」

だってそっちは研究所じゃん。てかこれって嫌みか何かか？　神に対するさ。教会に重なる様に研究所っておかしいだろ。まあこの

建物だけって訳じゃないから、たまたま入ったとか？　いや、アキバには建物なんて幾らでもあるし、やっぱり狙ってるだろこれ。
神がなんぼのもんじゃ！　とか言ってるよきっと。さてどうするかな。取り合えず画面内には数人のＮＰＣが見えるけど、そこにはバカラなる名前の奴はいない。ここのＮＰＣは研究者っぽくみんな白衣着てる。
でもバカラは研究者じゃないから着てない筈だよな。それを目印に出来れば良いんだけど……そう思いながらスマホを翳したまま中をクルッと見回してみる。
だけどやっぱりここには……そう思ったとき、ヌオッてな感じで黒い陰が画面一杯に入ってきた。なんだなんだ？　また電源が落ちたのか？　そう疑ったけど、よく見ると黒くなった画面の中にシクラが見て取れる。って事は、これはリアルであらぬ物がカメラ前に立ってるって事……

「礼拝希望でしょうか？」

野太い声が頭上付近から聞こえた。僕はスマホから顔を上げて、視線を上へ。黒い服は修道服……だよね？　それは分かるんだけど……なんかデカくね？
それにやけに体が太い様な……丸っこいじゃなくガッチシな感じでね。男？　でも修道服は女物……の筈。けどこの目の前にいらっしゃる神の使いというより、神の守護者の方がしっくりきちゃう程の体格はまさしく男。
それに現代っ子の僕なんかよりも――というか、そこら辺の大人より鍛え上げられた体は女とは思えない。けどさけどさ、髪長いし、よく見ると胸あるし、やっぱり女性？　あれ？　性別ってなんだっけ？　頭が混乱してきたぞ。
「礼拝希望ではなければ懺悔ですか？　何か大きな悩みを抱えてそ

うに見えますが？　私でよければその懺悔を受けましょう」
「え……ええと……」
まさに今大きな悩みに頭がパンパンだよ。目の前の貴方のせいで！　僕の中の女性像が崩れそう。えっと……野太い声してるけどなんか女性らしさはやっぱりある。女と認めた方がいいのかな？
なんか下手なこと言ったらこの筋骨隆々な腕で成敗されそうだから言葉がでない。でもあんまり沈黙を続ける訳にも……何か……何かこの空気を和ませる話題は無いのか？　僕は心の隅で死を覚悟しながら、視線を上下左右全てに這わせ。するとその時、シクラが「あれはどう？」といってシスターが抱える本を指す。なるほど、よし、それでいこう！
「あ、あの、その分厚い本は筋トレ用ですか？」
「聖書ですが何か？」
僕の人生が終わる音が聞こえたよ。

灼熱だけど止まらない（後書き）

第二百五十三話です。

まあこのまま良ければ順調に最後まで行けそうな気はします。ＬＲＯだけじゃない、リアルでの絡みも決して外せない中、そんな一つ一つを乗り越えて、スオウたちは目指さないといけないのです。

てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

シスターシスター？（前書き）

僕はの目の前にいるこの人は、女か男か、人か熊か……色々と疑わしい事一杯だ。最初の邂逅でミスした僕に既に後はなく、そんな僕の思いを見透かしてか、筋骨隆々のシスターさんは僕の肩を掴み自由を奪う。

そして向かうは懺悔室と呼ばれた拷問部屋。僕の人生はここまでかも知れない。

シスターシスター？

「はは……あはははははあはは……あはははっですよね～～」
僕の乾いた声がロビーに響く。隅に飾られた黄色い花が日光を受けて、元気に茎を伸ばしてた。壁に掛けられた十字架が、僕を見守ってくれてる――気はしないか。
別にクリスチャンじゃないもんな僕。そして別に仏教でも……僕はどっちかって言うと八百万信仰の方が好きです。日本に昔からある考え方だし、外国になんて染まってないもんと言いたいのだ。
てか、その都度都度空のどこかにいるのかも分からない神様に祈るよりも、みじかな物に感謝してた方が、御利益ありそうじゃん。
神は一人じゃなくても良いし、別に偉くなくってもいい。そんな考え。だから僕がこんな所に懺悔しに来るわけもないんだけど……てか未だにその形でシスターとかシスターとかシスターとか……認めたくねぇ！！

「ふふふ、そんなに怯える事はございません。今もきっと神は貴方を見守ってくれてるでしょう。大丈夫、全てを話せば心がきっと楽になりますよ」

くっそ……野太い声でそんな事を言われても全然安心できない。むしろ「今暇だし話相手してやるから、てめぇの全てを聞かせろやコラ」位に聞こえる。
外見って恐ろしい。取って食われそうだよ。足がガクブルだよ。神聖だと思った場所のこの静けさは、全てが僕の様な獲物を招き寄せる為の布石。ここは足を踏み入れたが最後の処刑場。なんかもの凄く上機嫌な感じで、ある部屋に促されようとしてるんだけど……あの隅の一室はもしかして拷問部屋か？

こわ！　教会こわ！！　いや、日本の教会でそんなのあり得ないけど、この目の前の筋骨隆々のシスターならその身体一つで拷問できそうだった。

「ささ、あちらが懺悔室になっております。大丈夫、恐れなくてもいいのですよ」

「えっと……」

僕はゴクリと息を飲む。幸いにしてまだ殴られては無いけど、密室はやばいだろ。逃げる事ができないぞ。てか、この人はやさしく言ってるつもりなんだろうけど、野太いその声で女言葉されてもゾクっと来るんだよ。

背筋を這うなんて物じゃない。腹パン決められたみたいな息苦しさ。実際「ごめんなさい！」と叫んで逃げ出したかった。だってシスター服がピッチリしてるんだ……どこのウェットスーツだよ。

シスターの格好してるけど、どうみてもシスターじゃないって本能が告げてるもん。あまりにも痛い考えだけどさ、僕はこのシスターが実は殺し屋とかどっかの傭兵とかだと聞いてもさほど驚かない自信があるよ。

てか、このままじゃ密室に連れ込まれて、次に見つかるのは骨をバキバキに折られた姿……とかだったら堪らない。そんなの勘弁。どうにかしないと！

すると目の前のマッチョなシスターさんは僕が乗り気でないのを察したのか、こう言った。

「ああの、不安がる気持ちは察します。私の様な若輩ではそれも当然。だけど一生懸命聞きますので！　どうかその身を任せてください」

（その身を……任せる？）

……ゴクっと唾を飲み込む僕。その意はなんだ？　悪い想像しか出来ない。身を任せてボディプレスとか、四の字固めとか、コブラツイストかやる気か！？

やばい、変な汗が止まらない。ここは既に冷房が利いてる筈なのに、僕の額からはジワリジワリと汗が染み出してきてた。

「それはその……えっと、痛いのはなるべく遠慮したいと言うかですね。あんまり……」

「痛い事も苦しいことも、全て神が包み込んでくれますよ。そして微力ながら私もそれを助力しようと精一杯頑張ってみせます。なので遠慮なさらず。勿論お代などは頂きません」

お代ねお代……まあそれは当然なんじゃ……とか思ってる更に奥で、僕は激しく苦悩してた。

（神が包み込む？　助力する？　痛みや苦痛を別の次元に昇華するとでも言う気か？　Mか？　Mにでされちゃうのか？）

やばい、頭はもう爆発しそうだよ。この人が現れた瞬間にパニクって、あの聖書に対してアホな事を言った時点で詰んでたんだ。そんな気がする。

てか煮えきらない僕に対して、マッチョなシスターは相談を受ける気満々らしい。僕の後ろに回り込むと、その太い手で肩を掴んで後ろから僕を押してきた。

（逃がさない気か！）

そんな絶望に世界が塗りたくられようとしてる。するとスマホから脳天気な声が聞こえた。

「ぷぷ、いいじゃない悩みを聞いてくれるんでしょ？　諦めちゃえ☆」

なんて楽しそうな笑顔。僕はもしかしてこいつの策略にはまったんじゃないのだろうか？　だってこいつが「アレでも使えば？」と言って指したのが聖書だったし……どうにかして懲らしめてやりたいけど、このままじゃ僕の身が……するとその時、マッチョなシスターさんがぽつりとこう言った。

「あらら、誰と会話してるのか思ったら画面の中のその子が喋ってるのね。へ～スゴい」

なんか関心してるみたいだけど、僕はギクリとしたよ。そうだ、他の誰からのスマホじゃシクラはフィルターに隠されて見えないけど、僕のスマホからは見える。

だからこの背後にいるマッチョなシスター（そろそろ書くのが面倒なんで以後マチョシスで）からも見えて道理。だって僕より背高い。絶対に１８０以上はある。

でも溢れ出しそうな筋肉のせいか、実際は体感よりも大きく感じる。１９０はあるように見えなくもない。

てかシクラが見られたのって不味い？　そんな風に思ってたけど、僕の肩を掴んだマチョシスはなんか関心したようにこう言った。

「スゴいスゴい。今の携帯はここまで進化してるんですね。う～ん画面の中で生きてるみたい」

そう言って片手を僕の肩から外したマチョシスは画面のシクラに向かって指を向ける。僕は思わず穴でも空けられるのかと思ったけど、どうやらマチョシスはちゃんと加減をしてくれた様だ。

いや、指先で機械を貫通させるなんてマンガの世界の話ってのは

分かってるよ。けど、この人の指の太さなら出来てしまう気がしたんだ。
それに画面に触れた時、加減を間違えたら突き破りそうなそんな感触は確かにあった。僕がこの人本当に人間かな？　とかメカブから移ったとしか思えないアホな事を思ってると、画面から「んっ」という声が聞こえた。
そう言えば画面を触れると中のシクラは何かを感じるんだったな。

「しゃ……喋ってくれた。それになにか可愛い……」

そう言ってマチョシスは何度も何度も画面に触れた。その度に、シクラは頬を紅潮させて、荒い息を吐く。毎度思うけど、ほんと何を感じてるんだろう。いやらしいんだけど。まあ夢中になるのはわかる。
僕もそうだったもん。これは美少女を延々とタップし続けるアプリとか出したら受けそうだな。名付けて『無限美少女じらし』だ。
そんなアホな事考えてる間にもマチョシスは画面をペタペタペタ

シクラのきつい言葉に、案外素直に従うマチョシス。僕はスマホを持ってる腕ごと潰されるかもと肝を冷やしてた訳だけど、どうやらそんな事はないようだ。

（よかったよかった。一安心――――っげ！？）

僕は不意に伸びてる腕の根本の方に顔を向けてギョッとした。だって……あの……その……なんか不釣り合いな物がポロポロと落ちてた。日光に輝く透明な滴。一滴一滴が宝石サイズのその粒が、瞳から溢れ出てるものだから、僕は更に目を丸くする。

この図体で女の子みたいな涙の流し方がいただけない。もっと豪快に涙流す筈だろアンタ！　って言いたい。だってこの人の風体からするに、涙の代わりに酒を仰ぐ……でもおかしくない。

いや、絶対にそっちがあってる。絶対に間違ってるよ。そう色々と！

「たく、涙を流す位なら嫌がる事はしない！　それか嫌がられてもいいから、自分を貫くかどっちかにしなさい！」

「……は、はい」

何故かシスターである彼女にシクラが説教垂れてる。てかここまで見てようやく思うけど……この人ってあんまり怖い人じゃないんじゃないか？

見た目がアレなだけで、中身は女の人その物って言うか……寧ろ思い返してみれば、優しい言葉しか掛けられてなくね？

まあもしかしたら女の子限定で優しい人ってのもあり得るけど、一応シスターだし、神の前で差別は働かないだろ。

てな訳で、僕は思いきって今まで言えなかった事を口に出す。

「あ、あの、えっと今更ですけど、僕は懺悔しに来たんじゃないんです。今ちょっとゲームのイベント中で、それでここもその対象だったからですね。
探してる奴がいないかな～とかなんとか……ははは」
「そ、そうだったんですか、私は余計な事をしてたんですね」

ほっ、なんとかちゃんと怒りを買わずに伝わったようだ。いや、てか怒る様子なんて全然ない。寧ろ役に立てない事に対してちょっと肩を落としてる……そんな感じだ。　おいおい、見た目とのギャップありすぎだろ。肩を落としてる姿が何故か、ヒグマが臨戦態勢に入ってる様に見え……無くもない。
てか一体どんな遺伝子を配合すればこんな女が出来上がるんだよ？　まるで地上最強の女と男の子……とでも言わんばかり。外見だけはね。外見だけ……中身はさほど最強って訳でもなさそう。
きっともの凄く誤解されながら生きてきたんだろうな。大きな体を極力丸めて申し訳なさそうにしてるマチョシスを見てると、そんな悲しみが溢れて来る。気がする。

「あ～あ、スオウが無駄にビビってるせいで傷つけちゃったね☆
女の子を悲しませたんだからフォローしなくちゃ」
「フォローって……」

シクラの奴がまた勝手なことを言いだした。まあもっと早くに、言えてればよかった……そんな事分かってるけど、無理だろ。
言っちゃ悪いけど、あれは誰だってビビる。殺されるってマジで思ってたんだからな。それだけの迫力があの人にはあるんだよ。
だからこそ、フォローって言われてもなんと声を掛ければいいのやら……流石に無駄にした時間分さっさとこの教会を調べたいんだけど。

「女の子を泣かせたままにしようだんなんて、あ〜あスオウはヒドいヒドい。女の子を泣かせたままなんてああ〜なんてヒドいヒドい。スオウは鬼畜に成り下がった〜〜」

なんかスマホから呪詛の様な言葉が繰り返されてる。超うざい。まさかこのまま何のフォローも入れなかったら、ずっとこの言葉を繰り返す気かこいつ？　最悪だ。電源を切っても勝手に立ち上がる様な奴だから、このままじゃ耳障りすぎる。

けどだからってフォローね……あの筋骨隆々に？　甚だしくお門違いな気がする。

「ちょっと黙ってろ。フォローだろえ〜と」

僕はそう言ってスマホの画面を手のひら側で押さえる。そしてなんだか、肩を落としてるマチョシスへと向き直す。

「あの、そんなに落ち込まないでいいですよ。さっきの暴言吐いたのはただのアプリみたいなものだから、気にすることナッシングです！」

「ナッシング？」

「……あの出来ればそこはスルーでお願いします」

調子に乗っておちゃらけただけです。掘り下げてもそこに意味はありません。ちょっと軽い感じを出したかっただけ、無意味なんだ。

「あの、まあ気にすることないって事ですよ。それに僕がなかなか言葉を返せなかったのもあるし……シスターさんは当然の事をしたって言うか……」

「言葉を返せなかったのは私のせい……じゃないんですか？」

う……それは……なんだ自分の事をちゃんとわかってはいるようだな。でもここでそれを認めると、追い打ち掛ける様になるよな。

「そそそんな事は……」

僕は必死に否定しようと試みてるんだけど……いかんせん噛み噛みだ。いやだって、自覚してるんなら、こんな否定に意味なんてないかもだし、なんか見抜かれてる様な気もする。マチョシスさんは自分の腕を見つめながら、僕のしどろもどろの言葉にこう言った。

「いいんですよ。私はこんな形ですから、怖がられて当然です。今日はやけに人が入ってきてくれてるんですけど、私を見るとみなさん怖がって出ていきます」

「……」

なんと言えばいいのだろう。ものすっごくその光景が想像出来てしまう。てか目に浮かぶ。なるほど、ここに人がいないのは、きっと悪い噂が広まってるからなんだろう。

「あの……もしかして今まで来た人たちも、その……貴方と同じだったのでしょうか？　携帯を翳してた様に思うのですが？」

小さくなりきれない身体のまま、ぼそぼそとそんな事を呟くマチョシスさん。携帯を翳したまま教会に足を踏み入れようとする礼儀知らずな奴らはまあ……大抵同類かなと思う。

「多分……きっと一緒だと思います。今、このアキバ全体を使って大規模なイベントをやってるんですよ」

「イベントですか？　アイドルとかが来てるんですか？」

「いや、そういうのじゃなくてですね、ＬＲＯって言ってわかりま

すか？　ようはゲームのイベントがリアルにまで出張してるんです」

僕はなんとか分かりやすく言えたと思う。マチョシスさんはＬＲＯとか言ってもわからなさそうな感じだから、ゲームと大きく括った訳だ。

だけどまだマチョシスさんはイマイチ理解してない――というかちょっとズレた感じの事を言う。

「ゲームですか？　リアルなゲームが出張……と言うことは、秋葉原を使ったサバイバルゲーム？　都市型と言うのも良いですね。

私も仲間と月一でやってるのですが、どうしても森が多くなるので、都市型の纖滅戦は参加してみたいです」

そう言って何かを確認する様に腕を動かしだすマチョシスさん。何故だろう……その動作が完璧すぎるのか、僕にはホルスターから拳銃が抜かれてる様まで見える……気のせいだよね？

殺し屋か？　シスターの格好した殺し屋なのかやっぱ？

「どうしました？　えっと……」

「ス……スオウです」

しまった！　思わず名前を言ってしまった。殺しのリストに載るかもしれん。そんな訳ないけど……見えるんだもん銃が。

「スオウさんですね。私はシスターラオウです」

「ぶっ――す、素晴らしいお名前ですね……」

思わず吹き出しかけたじゃないか。何ラオウって何！？　あだ名？　本名？　まさにラオウだよ！　名は体を表してるよ！！　ここまで名前がしっくり来た人を見るのは僕は初めてだ。

てか、腹がひっくり返りそうで危ない。油断したら下品な笑いが漏れてしまいそうだ。てか、もしかしてからかってたりは……無いな。

目の前のシスターラオウは僕の言葉にマジで照れてる。そしてちょっと恥ずかしげにモジモジしながら、こっちを見てくる。

「素晴らしいだなんて、私はあまり気に入ってないんです。父方が外国の方なので国籍は日本なのに、何故か横文字。昔はよくその事をからかわれたりもしてました」

それはちょっと違うんじゃないかな？　とか思ったけど、やっぱり口には出さなかった。てかハーフなんだ。どうりで日本人離れした体格だと思った。

まあ日本人っていうか、人間離れしてる気もするけど、そこは考えない様にしておこう。そして僕がヒキツった笑いをしてる事に気づかず、ラオウさんは自分の事を語っていく。

「私に最初にサバゲーを教えてくれたのも父でした。幼い時私は父と共に様々な国を旅していたんです。父曰く『俺は金さえ貰えればどこにでも行き、正義の旗をそこに立てるだけさ』と言い、硝煙の漂う中を共に駆け抜けたものです」

神に祈る様に両手をあわせて思い出に浸ってるラオウさん。だけど僕は戦々恐々なんだけど……それはサバゲーと言う名に偽られた戦争ではなかろうか？

なんか親父傭兵っぽいし。正義の旗ってようは制圧したとかだろ？　やばいよ、この人やっぱり住む世界が違うよ。よくこの日本に収まってるな。

シスター服では押さえきれない迫力は、きっと数々の戦場で戦い抜いて身に付いた、まさに戦士の証みたいな物なのかも……世の中

ってまだまだ広いな。

「ふふ、すみません私の話ばかり。ついサバゲーで父の事を思い出した物で。それで参加登録はどこで済ませれば？」

そう言っててラオウさんは肩掛けタイプのホルスターを馴れた手つきでつけた。やる気満々だ！　この人アキバに屍の山を築く気だよ！　てかどっから肩掛けタイプのホルスターを出した？　隅に置いてあった観葉植物の鉢を片手で持ち上げると、そこからは警察官が持ってるのよりももっとゴツい拳銃が出てきたぞ。

何あれ何あれ？　銃には詳しくないからわからないけど、まさか本物って訳ないよね？　てかどこに隠してるんだ？

この様子だと、壁がひっくり返って武器庫になってたりしそうだな。映画とかでそう言うの観た事あるぞ。僕は目を丸くして見てると、ちょっと照れくさそうに――

「あはっ、これは駄目ですね」

――とかしゃがれた声でお茶目に言った。いやいやいや、笑えないよ。これは駄目ってどういう事？　まさかとは思うけど……いや思いたくないけど、なんかいけない想像が確定しちゃいそうだ。

（いや、落ち着け……ここは日本だ。銃なんてそうそう手に入る訳もない国だ。日本の技術を嘗めるな。きっとあれは精巧なレプリカ……であるに違いない。てかそうあってください）

僕は自分に必死に言い聞かせる。そして必死にいけない想像を追い払ってると、手元から呆れた様な声が聞こえてきた。

「てか、さっさと間違いを教えてあげなさいよ。そうしたら嫌な物

は見なくてすむんじゃないかな☆」

なるほど。シクラの癖に良いこと言うぜ。確かにそもそもこの人がそんな物取り出す理由は無いんだ。僕はルンルン気分で装備を準備してるラオウさんに事実を伝える。

「あの、訂正しておきますけど、サバゲーはやってません。今アキバで行われてるイベントはＬＲＯって言うネットゲームの拡張イベントなんです。

だからそんな物騒な物は必要ないんです」

「サ……サバゲーでは無いんですか」

明らかに元気がなくなるマチョシスことラオウさん。てかどんだけ武器を持参する気だったんだって位に、いつのまにか周りには物騒な形の物が一杯。

全てきっとレプリカでエアガンとかのはずだ！

「ＬＲＯというのは？」

不意にそんな事が聞こえた。僕は掻い摘んでＬＲＯの概要を話す。てか興味があるのかな？

「今日来た方々はそれをやってる人達ばかり何ですよね？　それもアキバを埋め尽くす人数が集まってるとなれば、それは私たちのサバゲーの比じゃない人数です。

少し興味をそそられます」

大量に殺したいのか……一瞬そう思ったけど、まあそういう訳じゃないよね。ただみんなでワイワイ楽しみたいだけ……それなら確かにＬＲＯは良いだろう。

「ＬＲＯは外見も自由に変えられますからね」
「本当ですか！？　私もフリフリの可愛い服を着れたりするのでしょうか！？」

もの凄い食いつきよう。やっぱり不満はあったんだ……流石中身は女だね。僕が「勿論」というと俄然興味が出てきたらしい。
質問があれやこれやと飛んでくる。だけどここで時間をとる訳にも行かないのでアドレス交換して、中を案内して貰う事に相成った。

シスターシスター？（後書き）

第二百五十四話です。

マチョシスさんとの掛け合いに費やす羽目になってしまいましたね。こんな予定ではなかったんですけど、マチョシスさんのキャラが強すぎてなぜかこんな結果に。

でも大丈夫、きっとこの人もいつか何かの役にたってくれるでしょう。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

見えてくる筋書き（前書き）

僕はシスターラオウと話しながら教会を回った。だけどここに収穫なし。どうやらバカラさんは中には居ないよう。するとそんな時、タイミング良くメカブからメールが届く。

そこには発見の文字。僕は少しだけシスターラオウと打ち解けた所で、メカブと合流する為に教会を後にする。

見えてくる筋書き

マチョシスことシスターラオウの案内の元、僕は神田キリスト教会を歩きます。でも今の所収穫無し。ああ、それと、懺悔室はちゃんとした懺悔室でした。

決して拷問部屋では無かったよ。だけどどこから拳銃が出てくるかわからないのを考えると、気が気じゃないだろうけどね。

「ではここが礼拝堂になりますね。家の礼拝堂にはパイプオルガンがあって、その音色はなかなかに素敵なんですよ」

「へぇ〜パイプオルガンですか。見たことないや」

教科書とかには載ってた気はするけど、実物は見たことない。それに礼拝堂は教会のメイン部分だろ。ちょっと気が引き締まるね。

なんてたって神の御前だ。そんな思いの中、シスターラオウがそのゴツい手で礼拝堂へ続く扉を開けた。

「おおー広い！　それに天井高い」

一番奥の所にあるのがパイプオルガンかな？　てか、このスペースに建物のほとんどを食ってる。まあメインだし、ここがないと流石に教会とは……ってな感じだからそれは当然と言えば当然か。

建物がとんがってるからか、ここの天井も上に向けてとんがってるな。そして穏やかな木の色を感じる様な内装。天井からは照明がいくつか垂れてて、ステンドグラスなんかもお約束的にある。

縦にズラリと並んでる横長のイスとか見ると教会って感じがするね。日光が綺麗に差し込んでいて、神聖って感じが強まるよ。

「ふふ、気に入って頂けましたか？　自慢の礼拝堂ですよ。時にはあのオルガンを使って演奏会をしたりもするんです」
「へ～なるほど。結構立派ですもんね」

僕はそう言って、礼拝堂の中を進んでいく。日本なのに土足でいいなんてなんか変な感じ。いや、いけない感じ。
建物の中に土足なんて、耐性があんまりないよね。僕は一番奥まで進んで、そこから携帯を翳してみる。たっぱり全体を見回せなきゃね。

「どうだ？」
「う～ん、見あたらないな。やっぱり正面からはやらないんじゃないかな？」

携帯の中のシクラの答えは芳しくない。正面ね……そう言えばここは第二研究所の正面口か。確かに一般人が何か仕掛けるにはハードルが高いのかも。てことは周りを見てるメカブに期待するしかないか。

「探し人はいませんでしたか？」
「ええ、残念ながら。すみません案内までしてもらったのに」
「いえいえ、こういう事もありますよ。神の導きを信じていれば道は開けますので、諦めないでください」

優しい言葉をかけてくれるラオウさん。その外見じゃなかったら、ほんと普通に接する事が出来るんだけど、まだちょっと気兼ね無くとは行かない。
いや、良い人だってのはわかってるんだけど、どこから銃が出てくるのかわからないのが、やっぱり恐怖って奴を残してる。
勿論レプリカ……レプリカだとは思うんだけど、あの手慣れた手

つきを見てしまうとどうも……ね。

「あの……所でメールは送っても大丈夫ですか？　イベント終わり位が良いでしょうか？」

「ああ、ＬＲＯの事ですよね。まあそうですね。出来ればそうして貰えるとありがたいです」

ラオウさんはちょっと気恥ずかしげにそんな事を言う。まあこっちに気遣ってくれてるって事なんだろうな。ラオウさんもＬＲＯに興味持ち始めてるから、本当は色々と聞きたい事があるんだろうけど、今は都合が悪いからってメアドの交換で済ませたんだもん。

「まあだけど、今から始めるのはタイミング的にどうかと思うけどね☆」

「あっ、おまえ勝手に喋るな」

シクラの奴がスマホから唐突に口を挟んで来た。既にバレてるからって勝手に喋るなよな。一応ただのアプリって設定なのに……これじゃ本当に生きてるみたいと思われるだろまた。

だけどラオウさんはそんな心配を余所に、普通にシクラをなんだか受け入れてる？　あれかな？　銃とかそっち方面の事には詳しいけど、ゲームとかのネットの部分には疎いのかな？　まあ疎いとかとちょっと違う気もするけどね。

ＬＲＯだって知らなかったし……日本住んでれば一度くらい聞いてる筈だけど。発売当初の盛り上がりなんて社会現象だったのに……しかもここアキバだよ。

嫌でも耳や目に入るだろ。まあでもだからこそ、このシクラが普通じゃない事に気づく事もないと。

「ど……どういう事ですか？」

「もうすぐＬＲＯはたった一人の為の世界になるの☆　だから今からじゃあんまり楽しめないかな～て」
「たった一人ですか？」

シクラの言葉に首を傾げるラオウさん。まあ分かる筈もないよね。

「はは、気にしないでください。機械の戯言ですよ。ちょっと調子が悪いのかも知れないです」

そう言って僕はスマホをバシバシ叩く。てかそんな重要な事ホイホイ喋っていいのかよコイツ。相変わらずふざけてるよなシクラって。

「何が戯言よ。これは私たちの真剣勝負じゃない☆　まあそこの人には関係なんて確かに無いけど、けど私は良かれと思って忠告したのよ。
本当に、今からＬＲＯに来ることないわ」

最後の方の言葉を言うシクラはなんだかちょっと違ってた。いつものふざけてるって感じがあんまりしなかった。まあ確かに僕だって今からＬＲＯに来ることはあんまり薦めないけどね。
だって何が起こるか分からない。そんな状況だよ。主にコイツ等のせいで。

「私は遠巻きに嫌がられてるのでしょうか？」

シクラのせいで再びラオウさんがちょっとシュンとうなだれた。
この人もっと精神も鍛えた方がいいぞ。体と内面のギャップが激しすぎる。

「ええ～と別にそうじゃなくて、忠告ですよ。忠告。あの言葉はコイツの優しさっていうか……そんな感じなんですよ。
実際本当に今はＬＲＯゴタゴタしててですね。始めるのなら色々と調べてから……の方が良いと思います」
「そうですか……心配なんてして貰う事なかったら嬉しいです」

なんか変な所に食いついてるけど、まあいっか。結局どうするかはこの人次第。僕じゃ止められる分けないもんね。それにこの人なら案外大丈夫そう……とも思う。

「あの……そのゴタゴタなら私が纖滅しましょうか？　そういうのは得意なので」

少し恥ずかし気にそう言ったラオウさんだけど……なんかすっごく物騒な想像が沸き上がるんだけど。確かに得意そうではあるけど、貴方の考えは物騒だ。
だけど僕がそんな考えを頭で巡らせてる間に、シクラの奴がまたも勝手にしゃしゃり出て来た。

「あらら、筋肉ゴリラさんは大層な自信があるようね。その筋骨隆々の肉体でどれだけの死線を潜ってきたの知らないけど、ＬＲＯは貴方が知ってる世界とは違うのよ☆」
「おま！？　それはちょっと口が過ぎ――」

僕はおそるおそるラオウさんの方へ視線を流す。だって筋肉ゴリラってあんまりだろ。今度こそスマホブッ壊されるかも知れない……そんな不安が募るじゃん。
だけど視線の先に居たラオウさんはなんか静かに佇んでる。さっきの様にシュンとしてる訳じゃなく、静かに闘志でも燃やしてるかのように……なんかちょっと雰囲気が違うんですけど。

「世界が違う……それはますます楽しみです。私が通用しない世界。そんな場所を探してたんです」
「ふ～ん、口だけじゃない事を期待しといてあげる☆」

なんだなんだ？　女同士でおかしな迫力のぶつけ合いをしてるぞコイツ等。てか、シクラの奴絶対に面白い事に成りそうだからって焚き付けてる感じがする。
てか、ラオウさん戦闘事になると、感じ変わるよな？　楽しそうって言うか、やらずにはおけないみたいな……そんな感じが見て取れる。
まあそれは外見と中身が一致してるとも言えるけどね。散々女らしい所を否定してたけど、一致したら一致したで、迫力倍増で怖い。
一般人には対面する事さえはばかれる迫力を帯びた生き物がそこに居る。やばいよ。本物のヤクザよりよっぽど怖いよ。
二人の女がなんだか敵対心を燃やしてると、そこでスマホがメールを知らせる音を「ピロリロリン」と鳴らした。

「メールか、ちょっとそこをどけシクラ」

僕はそう言ってアプリを一時的に閉じてメールを画面を見ようとする。けどそんな僕の行動を止める様に、シクラはこう言った。

「良いわよわざわざ閉じるのは面倒だから、こっちで出してあげる☆」

そう言ってシクラは画面の中で、新しいウインドウを出す。そしてこっちに向けた。

「これで良いでしょ？　どうやらあの電波女からね」

電波女って……コイツメカブって呼ぶ気ないよな。自分で付けた癖に、どうやら電波女で通したいらしい。まあどうせメカブにはシクラの存在教える気ないし、どうでも良いこと何だけど……僕はこちらに向けられた画面の中のメールを見る。

「メカブの奴が見つけてくれたみたいだな。じゃあそっちに行くか」

「そうね。とんだ無駄足だったよここは☆」

またコイツは挑発するかの様に、無駄に声を張り上げやがって。もしもラオウさんが行動に出たら、実害を受けるのは僕なんだぞ。

そこら辺もっと考えてほしい。

「む……無駄……」

すると今度は、やっぱりだけど結構ショックを受けてる様なラオウさん。こういう普通の事ではホント打たれ弱いなこの人。

「えっと、無駄って事は無かったですよ。このアホの言う事なんて気にしないでください」

僕は気を使ってそう言う。だけど実際無駄足……いやいや、どっちに目的の奴がいるかわかんなかったし、結局これでいいんだと思う。

スカッたからって無駄って訳じゃないもんね。ここにはいないって分かった事が重要なんだ。無駄足に思えるのは、メカブのメールが良いタイミングだったからだ。

「アホだなんて心外☆」

「うるさい。もうちょっと気を使え」

ホント場をかき乱す事が大好きな奴だから困る。気を使うって事を覚えろよ。セツリ以外に。まあそれは無理なのかも知れないな。
こいつの優先順位って完全に決まってる感じだもん。セツリと姉妹以外は実際どうでもいい……そんな感じ。僕に興味を持ってるのもなんとなくの暇つぶしだろ。
そんな事で付きまとわれちゃすっごい迷惑なんだけど、こっちからじゃ手出し出来ないし、距離を測ってやりくりするしかないわけだ。
てかコイツ、僕の携帯の機能を勝手にいじってるよな？　大丈夫なのか不安なんだけど。

「あの……行ってしまわれるんですよね？」

心もとなさげにそんな事をいうラオウさん。なんでそんなに残念そうなの？　そんなに仲良くなった気もしないけど……でもこればっかりはね。目的だから。

「そうですね。行かなきゃいけません。友達からＮＰＣが見つかったって連絡来たし、結構メンドクサい奴だから急がないと」
「そうですか……私は大丈夫、あのくらいで傷つきません。神のご加護がありますから」
「それは良かった。じゃあ急ぎますね」

実際ただの強がり……だとバレバレだけど、僕に何が出来る訳でもない。友達って言える関係でもないし、まあいつかＬＲＯに来た時には、一緒にこのシクラをボコる程度の協力関係は築けそうだけど、今は何ともだよ。
てな訳で、僕は早速メカブの元へ走り出そうとした。すると目の射し込むドアを開けた所で、モアっとした空気と共に後ろから声を

掛けられた。

「あの、こちらはいつでもメールをくれて構いませんから。悩み事の相談からスオウさんなら害虫駆除まで受け付けます」

害虫？　彼女のいう害虫がちょっと良く分からないけど、とりあえず頭の隅にでも彼女の存在を止めておく事にしよう。リアルでならとっても頼りになりそうだしね。

まあ忘れようと思っても忘れられないだろうとも思う。

「ありがとうございます。困ったときはメールしますね」

僕はそう返して、教会を後にする。どこからともなく聞こえる蝉の声と、うだりそうな暑さの地面を駆けてメカブの元に急ぐんだ。

そしてたどり着いたのは第二研究所の裏手側。まあ用は芳林公園だ。実際ここも第二研究所の敷地……の筈なんだけど、建物としての部分は公園の半分位で終わってて、後は裏門みたいになってる様だ。

そしてそこに『バカラ』と頭上に記されたＮＰＣが確かに居た。あれって、公園の半分からの建物には入れないのかな？　良く分からないな。

「どう、私の天寿にかかればこんな物よ」

「別に天寿じゃなくても、見つけれるだろあれは」

やけにふんぞり返って言ってるメカブ。だけど逆にそんな大層な能力を使わないと発見も出来ないのかと言いたく成るぞ。そんな僕等は公園の入り口でそんな立ち話中です。

ここは公園だけあって、木々が多いから蝉の鳴き声も一層うるさく感じる。だけどアキバって言う混沌とした街の中でこういう場所があるって言うのは貴重だね。
やっぱり自然を見るとちょっとホッとする。なんだかんだでさっきは不思議な空間に居たからね。教会なのに魔王が居たみたいな。見た目だけね。

「もうちょっと感謝しなさいよ。この暑い中、こっちは外を回ってあげたんだからね」
「それはお前が選んだ結果だろ」

さっさと目の前から消えてた癖に。それにこっちだって建物の中に居たけど、あんまり涼しくは無かったんだ。そう言う意味ではお互い様。

「涼しくなかったって……ああ、アンタって結構不運だから、神様もお断りだったとか？」
「そんな神様ならこっちからお断りだけどな。そうじゃなくて、まあなんて言うかその……凄い生き物がいたんだよ」

そうとってもビックリする生き物が生息してただけ。するとメカブはそんな僕の言葉を聞いて、少し震えながらこう言った。

「まさかあの噂は本当だったって言うの？　あの教会にはシスターの格好をした悪魔が居るって……」

悪魔って……僕はちょっと同情しちゃうな。確かに外見は悪魔みたいなんだけど、本当は優しいシスターさん何だよ。
それを知るのにもの凄い覚悟は必要だけど、その噂はちょっとヒドいぞ。せめて目の前のコイツだけにも訂正しといてやるか。

「悪魔って訳じゃない。確かに外見は結構ゴツいし、修道服もピチピチで変態に見えなくも無いけど、話してみると普通の人だよ」

危ない一面は確かにあるんだけど……けどそこに触れさえしなければ良い人だよきっと。だけど僕の言葉を聞いたメカブは変な想像を膨らませたっぽい。

「外見はゴツくて修道服がピチピチって一体どれだけ……それはＨＥＮＴＡＩとしか想像出来ないわ」
「いっとくけど、ちゃんと女の人だぞ」
「そんな女居るわけないじゃない！」

何故か僕が怒鳴られたよ。分かるけど……その気持ちも分かるけど、居るんだからしょうがないだろ。じゃあ見て来いよと言いたい。

「同じ女として断言できるわね。きっとそれは女じゃないわ」
「お前酷すぎだぞ……お前だって……」
「私が何よ？」

僕はそこで口ごもる。だってお前だって同じ女として恥ずかしいレベルの女だろ――とは流石に言えない。電波な事は痛いし、その格好だって……言っとくけどラオウさんの事言えないぞ。
ベクトルが違うだけで、メカブだって相当痛いんだからな。そこら辺自覚しろ。なんだか遠くに聞こえる街の喧噪を背に、僕は隣の変な女にそう思う。

「まあようはそんな噂は噂だって事。良いからさっさとアイツに話しかけるぞ」
「ふん、まあいいわ。今はそれどころじゃないし、保留にしててあ

げる」

保留かよ。どうせならもう忘れてくれて良いんだけど。こいつも無駄に好奇心旺盛だよな。僕は二人が邂逅しないことを祈りつつバカラさんに声を掛ける。

『おう！　なんだなんだ？　ああ、アンタがオッサンが言ってた奴な。俺はバカラってそれは聞いてるか。アンタも戦士になりたい口のようだな』

ふむふむ……うざったいキャラ設定の様だなこのバカラって人は。

『まあまあ、その気持ちは分かるぜ。この国は俺達に何かを隠してる。そしてこの街はその中心だ。世界中から集めたアイテムを使って何をする気なのか……今の神隠し騒ぎだって国の仕業なのは間違いないんだよ。

俺達はそんな奴等のやり方に反旗を翻す戦士さ。そして今日この第二研究所である実験が行われると言う情報を俺は得ている』

ある情報ね。そろそろこのイベントの核心部分に触れれるのか？

てかこれってただの独立したイベントじゃないのかな？

ストーリーがなんかあるっぽい。僕たちプレイヤーは第三者の位置からこいつらに関わってけばいいの？　まあこっちはアイテムさえ手に入れることが出来ればそれで良いんだけどね。

てかテキストなげぇよ。一応喋ってくれてるけど、今までの奴らに比べてお喋りだなコイツ。しかも初対面の僕に対して……ってそれをいったらゲームとしておしまいか。

『お前も知ってると思うが、際重要な三つのアイテムってのを国は総力を挙げて探してる。それらは何でもこの街にずっと昔に隠され

たらしいんだが、その行方は分からなくなったみたいなんだよ。
だから今、研究機関を総動員して色々とこの街を調べてる。怪しげな実験道具とかも使ってな。俺は多分、この神隠し事件はそんな実験道具とかのせいで、この街に隠されてるアイテムが誤差動してるんじゃないかと思うんだよ。
だから俺的には、更に変な機会を投入されたら不味いと考える。今は無害な神隠しだが、いつ戻ってこれなく成るとも知れないだろ。その三つのアイテムを見つけれたら早いんだろうけど、あいにく俺は頭を使うのは苦手でな』

そう言って悪ガキみたいにバカラは笑う。民族衣装みたいな柄の赤いターバンを頭に巻いて、服は無理矢理半袖にしたような破かれたシャツ。その笑みはとってもらしく見えた。
けどさ確か飲み屋に居た人が切れ者って言ってなかったっけ？　コイツ自分で頭を使うの苦手って言ったぞ。謙遜かな？　でもあんまり頭良さそうにはやっぱり見えないんだよね。どっちかって言われれば肉体派って感じだもん。
僕は携帯をかざしたまま、木々を鳴らす風にそよぐ。ここは都会のオアシスだからかイベントに疲れきった人たちや、単に買い物に訪れてる人たちが、そこかしこに見えてたりする。
だけど僕はまだあそこには加われない。確かに諦めたって誰も文句言わないだろうけど、ここまでやったら、最後の一秒までイベントを満喫しなくちゃだからね。
僕は画面の中で意気揚々と喋り続けるバカラに視線を戻す。

『俺は研究所の実験を潰す方向で行く。だけど全部はだめなんだよな。あのオッサンの息子はまだ戻って来てないからな。だけどこのまま悠長にしてても、また犠牲が増えるだけ。
そこでお前の出番だ。戦士ナンバー００１８よ、お前はこの街に眠ってるアイテムを捜索をするんだ！　情報はきっと第一研究所に

あるだろう！　だが第一はセキュリティもメンツもこの国のお抱え共だ。そう易々と情報は拝めない。
なんせ機密だからな。だからここは一度第四研究所にいけ、あそこは期待もされてないし、実際国の機関は第三までであそこは民間だ。
そこには協力者が居る。そいつに戦士ナンバーを伝えれば力になってくれるだろう。表向きは国に協力体制をとって、国庫を貪ろうと考えてるが、裏では奴等に対抗する発明を目的としてる、偉大な研究者を頼れ。所長をしてるから直ぐに分かるだろう』

長い言葉を聞きながら、僕の頭には色々と浮かんだ。えっと……第四ってまたあそこに戻るのかよ……とか、あそこやけにボロいと思ってたけどやっぱり見捨てられてたのかよ……とか、国立って書いてあっただろ……とか、戦士ナンバーはやめてください……とか色々あるけど、言ってもどうにもならないから全て飲み込んだ。
こっちの声に応えてくれないもんな。そしてそうこうしてる内に、バカラが動き出した。

『おっ、あれがそうだな。こっちは任せとけ！　お前はお前の出来ることを考えてやりな！』

画面には何も写ってない。だけどそこからバカラは消えた。それは動き出したってことなんだろう。

見えてくる筋書き（後書き）

第二百五十五話です。

ようやくバカラと邂逅して、やるべき事が与えられて来た感じ。こういう風に次々と支持が来るんでしょう。だけど実際リアルに歩き回るの結構大変。それに今までで体力使ってるし、スオウは無理しないように釘を刺されてる。

炎天下の中のいつまでも動き続けるのも辛いもの。それに問題はまだ残ってますからね。ヤクザとの競争とか……ネットは止められないし、向こうも気づいてたら、きっとどこかで鉢合わせが有り得るでしょう。

まあその時点で争う理由があるのかはわからないですけどね。

てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

マッドサイエンティストの憂鬱（前書き）

僕達はまたまた第四研究所へと舞い戻る。どうやら僕達はここにとことん縁があるみたいだ。そして早速屋上へと行き、所長に話しかける。するとそこで僕達は恐ろしい事実を知ることになった。

マッドサイエンティストの憂鬱

僕たちは再び第四研究所を目指すことにあいなった。バカラが垂れ流した話を道中で話しながら、僕たちは混沌が更に入り乱れた様な通りを抜けていく。

でもまだここら辺は大きなビルも建ち並ぶ側だ。デッカい道路に面してるんだからまあそれは当然。更にここからちょっと忘れ去られてそうな方へ行けば……既に何回も通った道。アプローチが変わっても、何となくでいけるものだね。

第四研究所はビルの隙間のボロいビルだから見落としそうに成るけど、なんとか見つけれた。ここまで来る過程で気付いたけど、なんだかまだイベント組は活気を取り戻してる様だったよ。

やっぱり色々と情報があがりつつあるのが大きいのかもしれないね。みんなこの暑さにやれてたりしてたのに、もしかしたらの可能性が手に届きそうに成ると、途端に希望を見いだすようだ。まあ良いけどね。

「あのお爺さんは違うわよね。確かここの所長って屋上に居た方か」

「だな」

白衣着て、屋上で黄昏てた奴。アイツがたしかここの所長だった。最初に僕が流行アイテムを貰った奴だしね。だから外の爺さんは無視して早速階段に挑戦だ。んな高くないからって、階段は鬱陶しい。

何でわざわざ定位置が屋上なんだよと、何回も思うけど言いたい。文句を考えながら上ってると、案外直ぐにその扉は目の前まで来た。

錆び付いた感が所々にある、安っぽい扉。よくよく見たらさ、これってデカデカと立ち入り禁止のシールが貼ってあるよ。

だけど屋上にあのＮＰＣが居るとわかった時から見なかった事に

してるから、僕は躊躇無くドアノブを回して扉を開ける。
換気扇が回る様な音が耳に届き、暗かったこの場所に強烈な日差しが真っ白に成って差し込む。風は蒸し暑さまで一緒に運んで来て、僕達は目を細めながら屋上へと出る。
太陽に近くなった分だけ、僅かに暑さが増したような感じがするのはきっと気のせいだよね？
この程度の高さじゃ変わる訳もないんだけど……てか高い方が涼しかったりするよな。山とかそうだし、完全に被害妄想か。
「私やっぱり影で涼んでて良い？　無限の蔵ガンバ」
そう言って速攻で中に引っ込んだメカブ。実際そこもエアコンが効いてる訳じゃないし、そんなに暑さは変わらない筈だけど、気分の問題なのかな？
日光を浴び続けるかどうかのさ。まあ女の子なら気にするだろうし……メカブがそんな普通の女の子とは思えないけど、あり得なくはない。
僕は階段の所に座り込んだメカブから目を離し、スマホを屋上へと向ける。そこにはちゃんと目的のＮＰＣが映ってる。風に白衣が翻りながらも、仁王立ちでブリームスを見てるその人こそが、この第四研究所の所長だ。
僕は古ぼけたコンクリートの床を歩いて、彼との適度な位置まで行く。そして指でその姿をタップすると、振り返らずに『何の用だ』と言われた。そしてここで入力画面が現れた。
なるほど、ここであの恥ずかしい戦士ナンバーとやらを入力しろと、そう言うわけか。
「ええと、戦士ナンバー００１８――だっけ？　これって四桁にしてる意味がないよな。どうせそんなに集まらないだろうし」

だって最新である僕を入れて１８って、せめて三桁で我慢しておけと言いたい。そんな事を呟きながらも、入力完了した文字を所長に伝える。
すると明らかに反応が変わった。

『なるほど、君も戦士と言うわけか。なら私の本当の姿を教えておこう』

本当の姿……実は既にバカラから聞いてるんだけど、無駄に白衣がバタバタしてるから、これも演出なんだろう。てか、こちらからは割り込めないから、気分良く喋らせるしかないんだよね。
もったい付けずにさっさと言って欲しい。

『いいか、良くきけ新入り！　私こそがこの街の全ての科学者を出し抜く事が出来る驚異のマッドサイエンティスなのだ！！
奴等の人身を考えないやり方は私の専売特許。そんなマッドサイエンティストは何人もいらない。よって私は私が天才だと裏付ける為にも奴等を出し抜き、アイテムを手にしなければいけない！！
わかるな新入りよ』

画面の中でシクラが耳を塞いで所長にゲシゲシと蹴りを入れてる。多分向こうじゃ相当うるさかったんだろう。けどシクラの蹴りなんて所長は気にしてない。
てか、存在してない感じでスルーされてる。まあこのイベントのＮＰＣはまさに今までのゲームの感じだから、プログラムされた事しかやれないんだろう。
だからシクラに反応する事なんて無いんだ。何か違う事を言うのは、条件が満たされた時だけ。まあこれぞゲームっぽいと言えばその通りなんだけどね。

ＬＲＯの中では比較的自由にＮＰＣも動いてるから、なんか時代が逆行してる様に感じる。あれこそ異常な筈なのに……いつの間にかＬＲＯに慣れてたって事何だろう。
僕が画面の二人を見比べてそんな事を思ってる間にも、マッドサイエンティストな所長の言葉は続く。

『何？　バカラの奴がそんな事を……フハハハハハハ、貴様は運がいいな新入りよ。そんな事を言われる前に我が第四研究所は、悪の組織第一研究所へのハッキングを狙っていたのだよ。
奴等の行動がここの所活発になってるのでな。それに併せて国が隠してるアイテムの影響も活発かしてる。そろそろ大規模な何かをやるのでは無いかとこちらは睨んでるのだ！』

よくもまあこれだけ声を張り上げる物だな。それって人に聞かれていいの？　さっきからこの人の言ってることは、きっと下を通ってる人たちに丸聞こえだよ。

「大丈夫でしょ。こんな自称マッドサイエンティストの戯言なんてきっとここらじゃ日常なのよ。だから何をのたまったってこの人の痛い妄想としか思われないんじゃないかな☆」
「まあそれは言えてるな……」

こんな奴が近くで吠え続けて、それにいちいち付き合う程、みなさん暇じゃないって事だよな。なんかアレだね。狼少年みたいだね。
本当の事なのに、誰からも相手にされないって……狼少年はそれをきっかけに懲りるんだろうけど、この人は寧ろそれを狙ってて堂々とのたうち回れるのを楽しんでる感じだな。
どうせ誰も信じないから、目一杯叫べる……みたいな。ある意味頭を使ってるのか？　てか、そう言う設定てだけか。

『よし、貴様等準備は完了したか？　そろそろオペレーションを開始したい頃合いだ』

そう言って呼び出したウインドウに向かって呼びかける所長。ウインドウは三つ出てて、それぞれ別の奴に繋がってるらしい。

『オーケイですよ所長。いつでも出来ます。まあ成功するかの保証は出来ませんけど』

『ふん、大丈夫だ。俺はお前の腕を信用してる。自らの壁をぶち破れ』

なんだか実行班はあんまり自信無いのか？　大丈夫かなこいつら？

『バレたら雀の涙程の補助金も打ち切りですよ。それどころか私達消されちゃうんじゃないのかな？　ハァ～こんなしがない研究室に送られて人生終わりなんて、所長を呪わずには居られない……』

『案ずるな。私の作戦に間違いはない。今日という日を足がかりに我が第四研究所は、飛躍的進歩を遂げる！！　まあもし失敗しても、その責任は全て私が持つさ。

お前達はマッドサイエンティストに操られた哀れな子羊。それで通してやろう』

『そんな言い訳が通用するなら良いんですけど……未来がなくなる事に変わりないですよね～』

なんかあんまりやる気も見えなく成ってきたな。マジでいけるのかこいつら？　話を聞いてると不安しか募らないよ。

『メガ爺、通りの様子はどうだ？　オペレーション開始は近い、研究所には誰も入れるな。そして出来る事なら監視の目を欺くのだ！』

『監視などどこにもおりゃしないけど、やってみますわ～』

『ふっ、油断はするなよ』

額に手を添えてなんかポーズを決めてる所長。なんかアキバが舞台だからって痛い奴が多いな。てか、あの爺さんは見張ってたのかよ。アンタの居場所を最初探して無かったっけ？

見つかったから本来の役割に戻っただけって事かな。てか監視って……爺さんも言ってたけど、居るわけ無いだろ。

あんな大声出しといてそれは今更。自分でもいないと分かってる癖に良く言うよ。まあだけど、これでようやく作戦に入れる様だ。

『ではこれより第四研究所は、悪の権化とかして我らと衝突する立場を選んだ第一研究所にオペレーションを遂行する。

目的は奴等がひた隠してる実験の詳細と、アイテムの情報の入手。後はめぼしい情報を盗めるだけ盗む事だ』

『しょちょー欲を出したらろくな事に成りませんよ』

『うるさい、先んじて発表出来る物があれば、資金の足しに成るではないか！　我がラボはいつだって金に困ってるのだよ。

つべこべ言わずにオペレーション開始だ！！』

そんな宣言と共に、あまりやる気の無い声がウインドウから漏れた。てかノリノリなの所長だけだし……でもその所長は指示するだけで何もしないという……なんかダメな上司の見本みたいな奴だな。

マッドサイエンティストが聞いて呆れる。てかこれって成功したらどうなるんだろう？　こんどはその情報を元に歩き回る事に成るのかな？

どこまで第一研究所が掴んでるかが重要だな。もし盗めたらの話しだけど。まあだけどここで情報盗めないと、イベント的に進めないし、何とか成功するんじゃないかな？　そんな期待をちょっとだけ持ってると、所長の周りに展開してるウインドウの一つから、こんな声が聞こえてきた。

『うわ！？　これってまさかウイルス？　侵入者用のトラップに掛かっちゃったみたいです所長。電源落として素知らぬ振りを通しましょう。

一瞬だったしまだ場所までは特定出来ないはずです』

『それはまさかオペレーションは失敗に終わったと？　まだ一分くらいしか経ってないぞ？』

僕的には一分も経ってないぞ。おいこら。おいこらと言いたい。

『ハッキングは掛かる時はかかるけど、終わるときは一瞬ですよ。だから速攻巣潜りの方向で。全責任は所長持ちでお願いしますね』

『まてまてまてぇぇぇぇい！！　これで終われるか。何も取れてないじゃないか！！　これではマッドサイエンティストの名が廃る！！　何か無いのか何か？』

あまりの部下のふがいなさっぷりに、動揺を隠せない所長。まあこれじゃあね……やった意味さえ危ういよ。てか役に立たなさすぎで僕だって文句言いたいね。ちょっと前までの期待を返せ。

『う～んそう言われてもですね所長……案外第一の奴らが本気出し過ぎなのが悪いと言うか。でもそう言えばゴミ箱の中のファイルだけなら取れましたよ』

『そ、それは……まさにゴミなのでは？　まあいい、取り合えずそのデータをこちらに転送してくれ』

『りょうか～い』

そんな声と共に、画面の中の所長のウインドウが一つ増えた。多分そこにゴミ箱ファイルが現れてるんだろう。てかゴミ箱って……マジ期待出来ない。

ここから一体どうなるんだろう？　僕が心配気に画面を見てると、一緒に中に映ってるシクラがこんな事を言う。

「私がちょちょいって情報を取って来てあげよっか？　っしたら楽勝でしょ☆」

「お前な、それはズル以外の何でもないだろ。そんな事出来る訳ない。手伝う位は我慢してやるけど、出過ぎた事をするなよな」

そんな事して勝ったって嬉しくなんかないし、ここまで自分達でやってきた事を、台無しにすることなんだ。実際ちょっとシクラには手伝って貰ってるから今更とか言われても仕方ないかもだけど、やりすぎは必要ないって事。

だってこのイベント的には、この展開で良いはずなんだろうし、わざわざこっちからイベントに歪みを起こすような事をしなくてもいい。

「私的にはなんだって勝てなくっちゃ意味なんてないと思うけどね☆　まあスオウがそれで良いって言うなら良いけど、後で私のせいにしないでね」

「そんな事しない。安心してろ」

僕は素っ気なくそう返す。例えアイテムが手に入らなくったって、それをシクラのせいにはしないっての。まあ負けるのは癪だけど、そこまでしても絶対に勝たないといけない戦い――て訳じゃない。

これはいわば寄り道だ。気軽に楽しめてればそれでいい程度。ちょっとした緊張感でハゲ共と競争してるって感じだもん。まあ向こうはそんな軽そうでもなかったかもだけどな。

僕とシクラがそれぞれの考えをぶつけてる間にも、ずっと画面には『う～～ん』『ふ～～む』とかが表示され続けてた。

そして不意に所長が『ふわっは……ふわぁーはっはははは！

！』と言う感じの高笑いを始めた。まさかゴミ箱に重要な情報でも捨ててあったのか？
それは流石にセキュリティの面でもあり得ないだろ。都合よ過ぎって言うか……

『所長うるさい。何かあったんですか？　こっちでも確認してますけど、そんな高笑いする内容はどこにも無いですよ』

なんだ、やっぱりないのかよ。むっちゃ自信満々な様に笑ってるから、何かあったのかと期待したじゃないか。ちょっと位の理不尽はイベントを進める為にはあるかも～とか思ったのに。
てか、それじゃあ何でこの人は高笑いをしてるんだって事になるけど、元からちょっと痛い人だから意味なんて無いのかも知れないな。
だけど所長は僕も含めての白い目を物ともせずに続ける。

『何を言うかお前達。このゴミフォルダ、使いようによっては我ら第四研究所の宝船になるかもしれんぞ。この中身はおもいっくそプライベートではないか！！』
『ちょ、所長声がデカいうるさい自重しろ。てか他愛もないプライベートメールのやりとりなんて物を、狙ってた重要機密なんて物と比較されても～』
『ふっ、お前はプライベートメールの機密性を分かってない様だな。では聞こうじゃないか、お前は私にメールを盗み見られて耐えられるのかな？』

フフンと随分得意気に鼻を鳴らす所長。すると研究所員の人はあっけなくこう言うよ。

『その時は所長を殺します』

『対応が極端だね……私以外でもそうするのかな？』
『所長に見られた時だけ殺します。だって所長って口が軽そうですもん。常に尿漏れを起こしてるみたいに垂れ流しまくりじゃないですか』
『わっ私はそこまでバカじゃないし、まだまだ尿漏れを起こす年でもない。それに訂正しておくが、私は意味ない事を叫んでるだけだ』

おいおい自分で意味ないって言ったよこの人。無駄に声を張り上げたいだけか。なんて迷惑な人だよ。

『まあそれでも私のメールを観たときには殺しますから。で、何を見つけたんですか？　プライベートを晒して脅そうとかそう言う事ですか？』
『ふっふっ、まさにその通り』

その通りなんだ。そんな恥ずかしいやりとりがゴミ箱に捨てられてたのか？　脅せるくらいなら、バレたら不味い関係とかだよね？

『見てみろこの内容を！　プライベート赤裸々だろこれは。社内恋愛など奴らも乙な物だな。なあ諸君！』
『うちでは有り得ない事この上ないですね～。痛い所長にハッキング一つまともに出来ないハッカーに老人って……どれだけカオス何ですか？』
『「万年色気ゼロの何も出来ない私って女」ってのが入ってないよ。人を蔑む前に自分を見つめ直してくださ～い』

なんか空気が悪く成っていってる様な感じのメンバー達。まあ主にウインドウ内の二人だけど……確かにこのメンツじゃ社内恋愛とか無さそうだね。

『落ち着け二人とも。そんな下らない事で目的を見失うな！　我らが目的は、奴らに先んじてアイテムを手に入れ、我が第四研究所の実力を国に見せつけ補助金ガッポッガポだろ！？
こんな所で争ってる場合では無いぞ！』
『『それは……そうですけど……』』

ウギギ――と互いに睨みつけてる二人。だけど所長の言葉で、何とか収まったみたいだね。こういう所は所長だな。
てか補助金ガッポガポって……いや、目的なんてそれぞれで良いんだけどね。まあ第四研究所を見る限り、お金は必要だよね。

『けどではない！　これは所長命令だ。取り合えずこの内容の主を特定しろ。そしてこちらの協力者に成って貰おうじゃないか。
それの方がハッキングなどより確実だ』
『はいはい……鬼畜ですね所長』
『鬼畜じゃない。私こそがマッドサイエンティストだ！！』

そんな痛い響きが画面の向こうの青い空に空しく響く。

「どうだった？」

扉の方へ戻って来た僕に対してスマホを握りしめてるメカブがそう言ってきた。僕はなんだかちょっと慌てた様に立ち上がったメカブをいぶかしみつつ、今の事を説明してやる。

「――なわけで、次のターゲットは第一研究所の研究員『ジェロワ』って奴だな。今度こそ本格的な情報が掴めそうだよ。上手くいけば」
「プライベートメールを使って脅しって……あのオッサンそんな鬼畜だったのね。てかそんな恥ずかしい内容だったの？」

「内容は知らないけど、それだけの物なんだろ？　脅しに使えるんならさ」

こっちには内容まで見せてくれなかったんだよな。まあ別に僕がそれを知ってても意味はないだろうから、なんだと思うけど。

「で、これからどこに行くの？　脅してる相手に会うのがアンタの役目な訳でしょ？」

「そう言う事。取り合えずアキバ駅だな」

「ヨドバシじゃないんだ？　あそこが第一でしょ？」

「まあそうだけど、脅す相手の職場自体に行くのは不味いだろ――って事でそうなったらしい」

あの後はなかなか早かったんだよ。あのヘナチョコハッカーでも人一人の個人情報を調べる位は出来た。そこから【お前の秘密を知っている】的なメールをジェロワさんに送って証拠となるメールを何点か添付。

それで信用させて呼び出したって訳だ。

「でも何で駅なのよ？　あそこってブリームスでは中央広場だったわよね？　見晴らしも良いし、人通りも多いじゃない」

「それはアレだよ。あんまりこそこそやるのも怪しいんじゃないの？　木を隠すには森の中じゃん」

「人を隠すには人混みって訳？」

多分そうだろう。発案はあの所長だから適当かも知れないけど、僕達は逆らえないし。反発したってアイテムが遠ざかるだけ、取り合えずその場所で会ってみるしか無いんだ。

「まっ、それもそうね。今の所順調だし、このまま行ければ良いわ

ね」
「だな」
ここまで苦労したからね。ヤクザから逃げたり対峙したり、暑さにやられたり規格外のシスターに出会ったり、そりゃあここ数時間で色々詰め込まれすぎ。
「所でお前は暇な時何やってたんだよ？　いじってたろスマホ？」
「え？　ああ……それね。別に天からのメッセージの確認に、情報集めよ。それ以上でも以下でもないわ」
「天からのなんだって？　そんな電波な物を受信する機能、スマホにあったか？」
僕が呆れつつそう言うと、シクラが画面の中からポツリと【メールでしょソレ】とか言ってくれた。ああ成る程ね。なんて面倒な言い回し。
「僕は現代に生きてるんだから、現代の言葉で言えよ。わかりづらいだろ」
「うるさいわね。私が何をしてたかなんて、アンタ程度に理解できる筈もないし、言う必要もそもそもないわ」
そう言ってメカブはサンダルをパカパカ鳴らしながら階段を下りていく。
（なんだアイツ？　なんであんなに焦ってんだよ）
よく分からない奴だ。そう言えば僕が戻った時、スマホを後ろに隠す用にしてたな。本当はいやらしいサイトでも見てたんじゃないか？　メカブならあり得そうな気がする。それで気まずいから、な

んだか慌ててるとかさ。そんな事を考えて後を追ってると、外からもめるような声。僕は歩調を上げて、真っ白な外に出る。

マッドサイエンティストの憂鬱（後書き）

第二百五十六話です。
イベントも進んできて、次回は急展開の予感！？　です。そろそろ一気に進めたいですからね。いつまでもチマチマとアキバを回ってる訳には行かないでしょう。
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

道に転がる路傍の石（前書き）

突然聞こえたメカブのただならぬ声。僕がビルから飛び出ると、そこにはチンピラ共に誘拐されかかってるメカブがいた。だけどさ……実際あんまりの事に、リアルでこんな事が起こるわけないとか思って、思考が停止する。

だけどそんな時、メカブがよんだんだ。僕の名前を……無限の蔵じゃない僕のちゃんとした名前。それだけで助けなくちゃ、その気持ちが一気に高まった。

道に転がる路傍の石

「ちょ……何よあんた達……変な所触るな！！」

やっぱり上も下も対して変わらない暑さに一瞬クラッときかけてたけど、目の前にはそんな事言ってられない状況が見える。

「暴れんな！　大人しくしてろやこのアマ！」

そんな事を言って強面……というかチンピラ風の男三人がメカブを強引にどっかに連れて行こうとしてる。

えっえ何これ？　目の前で起こってる事をイマイチ上手く理解できない。一瞬マジで幻覚か何かかな～って思ったもん。

僕がちょっといきなりなりの事態に付いていけてない間にも、メカブは必死に抵抗してた。腕を振り回したり、頭を振り乱したり、だけど相手は不健康そうに見えても男三人、女の子のメカブが一人でどうにか出来る訳もない。

「アンタ達これ以上触ってみなさい！　その魂を抜き取って永遠に地獄の竈につき落としてやるんだから！！　百回死ね百回死ね百回死ね百回死ね百回死ね百回死ね百回死ねぇえええ！！」

呪詛の言葉を呟き始めたメカブ。百回死ねとか、マジ呪えそうだな。その形相が怖いよ。だけど実際はうっすらと瞳に涙が見えてたりしてるんだ。

そりゃそうだよな。いきなり男に囲まれて、無理矢理どっかに引っ張られそうなんだ……怖くないわけない。電波な事を垂れ流す痛い子であっても、メカブは女の子なんだよ。

これは突然現れた陽炎なんかじゃない。僕は頭にそう言い聞かせて、現実感を引き戻す。すると真っ白に見えてた風景も喧噪も何もかもがリアルに見えるじゃないか。
てか周りのオタク共は見事にスルーしてやがるな。見ず知らずの女の子をチンピラから助けるなんて、ハードル高いのはわかるけど、誰も何もしないってのは腹立たしい物がある。
別に期待もしてないし、勝てとは言わない。けど、アンタ達それで良いのかって思う。まあこれがリアル。特殊な力も無いし腕力が物を言う現実。
魔法使いにクラスチェンジ出来てない人間は見て見ぬ振りするスキルだけを伸ばしてく。
それでも僕は、望む物があったんだ。リアルじゃ幻想だと分かってても……

「スオウ！　スオウ！　早く助けないよ！！」

僕はその声を聞いて考えるのをやめて走り出す。だってあのメカブが名前を呼んだ？　それだけ怖がってるって事だろう。別にちょっと嬉しくなったわけじゃないぞ。
相手は三人……今のこの体力ギリギリ……体に疲労蓄積状態でやるには分が悪い。けどやらない訳には行かない。
なんだかんだ言っても、ここまで一緒にやってきた仲間だし、もう友達だと勝手に思ってる。実際リアルで喧嘩なんて経験は殆ど無いんだけど、やっぱり迷わずに走れるのはＬＲＯのおかげだろう。
（大丈夫。やれるさ。ヤクザみたいな奴とも張り合ったんだ。こんなチンピラ風情の奴らに臆する事なんか無い！）
僕は心の中でそう言い聞かせて、チンピラ共に迫る。

「ははっ一人で俺たち三人とやる気か？」

僕が迫ってる事に気付いたチンピラの一人が、そう言って前へ出てくる。それに続いてもう一人も下品な声を漏らしながら、その後ろに。

まあメカブを押さえとかないといけない奴が一人必要だから、当然こうなるか。一番前に居る奴はボクシングでもやってたのか、脇を締めて、フットワークを始める。後ろの奴は足癖の悪さをアピールしてるのか、ポケットに手を入れて、足を地面でグリグリ。

チンピラ共からは負ける事なんかないというような、余裕が見える。上等だな。その汚らしい顔をもっと汚くしてやるよ！！

僕はただまっすぐに突っ込んで一番前のボクサータイプの奴に拳を向ける。相手は僕が至近距離に迫っても余裕を崩さない。ボクシングやってたから、いかにも素人の拳は見え見えだ――とか言わんばかりの表情。フットワークで軽く交わして腹に一発入れてやるよ、という所まで顔に出てた。

そして実際、僕もそれを警戒した筈だった……んだけど。

「プギャ！！？」

変な声が目の前で聞こえた。拳に骨と骨とがぶつかった衝撃と痛みが走る。そしてそれはまさに、クリーンヒットを感じさせる手応え。

僕はそのまま体を捻らせて拳に更に力を加えて撃ち抜いた。体が大きく仰け反りそのままアスファルトを滑るチンピラA。あの余裕はどういう事だったんだよ……と胸の中で呟いた。

そしてそんな光景を見て、足癖の悪そうなチンピラBとメカブを押さえてるチンピラCが少し動揺してる。もしかしてだけど、やっぱりこうなる事が予想外だったのか？

まあそれは本人が一番予想外だっただろうけどな。本当に余裕か

ましてたもん。

（僕のパンチが予想以上に速かった……って事か？）

何となくそんな分析をしてみる。ＬＲＯではスピードと手数の多さを武器にしてるからね。でもここはリアル、人のスピードなんてたかが知れてる筈だけど……

「ちょ……調子にのんなよクソ餓鬼！！」

そう言ってチンピラＢが血相を変えて僕に迫る。足をアピールするだけあって、ハイキックを楽々こなせる位に柔軟さはあるようだ。まあ当たりはしないけど。

（だけどこいつ……根本的に間違ってるよな）

チンピラＢの足技を交わしつつ僕はそう思う。だってまず、何故に手をポケットに入れるのかわからん。それってこっちにメリットあるじゃん。

拳での攻撃を視野に入れる必要がなくなるって事は、それだけ相手は攻撃の選択肢が減るって事で、こっちは相手の行動を読みやすくなるって事だろ。

てか最悪、足だけに注意してればこの通り当たらないし、別にトリッキーな訳でもない。一応足だけの攻撃を考えて、連携技っぽく見せるために、回転入れて、技の隙間を無くしてるっぽいけど……いかんせんバリエーションが少なすぎる。

ハイキックした後には中途半端なローキックが関の山だし、どうやらローからハイに繋げれることは出来ないみたいだ。

言ってやろうか？　こいつ端からみたら、変なダンス踊ってる様にしか見えないだろ。チンピラＢを雑魚と認識した僕は、落ち着い

て対処する事に。
全然当たらない事への苛立ちが増してるチンピラBは、ますます大き蹴りしかしなくなってるから動きが読みやすい。
「こんの！　ちょこまかとおおお！！」
（ここだな）
勢い込んで再び踏み込んで足を上げようとするチンピラB。僕はその踏み込んだ足を上から踏みつけて勢いを殺して、どてっ腹に肘を食らわせた。
「グプっ……俺の足を交い潜るなんて……」
そんな声が死に際に聞こえたから、僕はこう言ってやる。余裕をたっぷり見せつけてね。
「アンタの足技は凄くもなんともないよ。そんな極めてもない物に執着して選択肢を削るから雑魚なんだよ」
「く……そ……野郎がぁ……」
そう言って地面にうずくまるチンピラB。ちっちゃなプライドが傷ついちゃったかな？　Aを殴った時に想像以上に拳が痛かったから、肘打ちにしたけどそれがかなり有効だったみたいだな。
こっちは痛くないし。まあそれは今回狙った場所が腹だからだろうけど。でもやっぱりこっちも痛いのは勘弁だから、痛くない様に倒す術を考えながら次はやるかな。そう思いながら、僕は最後のチンピラCへと視線を向ける。
「スオウ甘いわ！　こいつら殺して！」
「お前な……そんな事したら僕はブタ箱行きだぞ。それに殺すなん

て出来るわけない」

さっきまで目に涙溜めてた癖に、状況がよくなるとみるや、目を輝かせて死刑判決だしてやがるよこの女。まだ解放されてないのに、そんな事言って大丈夫なのかよとか思うね。

「おい……お前！　あんまり調子に乗るなよ。この女がどうなっても良いのか？　ああ！？」

ほら、案の定メカブを盾に使ってきたよ。首を絞められて苦しそうに「うっ……」となるメカブ。だけどさっきから足下はゲシゲシとチンピラCの足を蹴りまくりだ。

さてどうするか。別に一気に詰め寄っても良いんだけど、こいつにはぶっ飛ばす前に聞いておきたい事がある。

「なあ、アンタ等はなんでそいつを狙った？　メカブが電波で痛くてウザいのは良く分かるけど、だからって誘拐はやりすぎだ。犯罪だよそれは。

お前等は随分頭悪そうだけど、冗談でしたじゃすまねーぞ」

「ちょっ……アンタそれはどういう事よ。助ける気あるの？　悪口じゃない」

なんか目の前から文句が流れてくるけど、そこは気にせずにいきたい所。だって何でこんな事をするのかは知っておきたいからね。

「良いからメカブは黙ってろ。ちゃんと助けるからさ」

「うぅ……」

そう僕が言うと、案外素直に大人しくなったメカブ。なんか悔しそうな表情してるのは、よくわかんないけど、これで話が進むだろ

う。

「で、何でそいつを浚おうとした？」

「くはっ、そんなのは簡単だ。お前が邪魔そうだったから。レアアイテムを手にするのは俺達『ドグレインファミリー』なんだよ！！」

ドグレイン……その名前は聞き覚えがあるぞ。確かハゲ共が名乗った犯罪者集団だった様な気がする。て事はこいつらはあのハゲの差し金？

「あのハゲ、こういう事はしない奴だと思ってたけど、やっぱその程度の奴だったって事か」

少しはさああ言う奴らの中にもまともな奴が居るんだ――って思ってたのに、裏切られた気分だよ。まあ元々、ヤクザとかやってる相手に何かを期待する方が間違い。

それは分かってた筈だけど、女の子を浚おうなんて……それは流石にアウトだろ。ヤクザだってブタ箱行きだぞ。

なんだかいつの間にか僕達の周りには小さな人だかりが出来てる。みんなテンションが上がってるのは、きっと天敵みたいなチンピラ共がボカスカやられて行くのが嬉しいんだろうね。

声援が周りから掛かるもん。目立たない路地での対峙。僅かに集った人垣の中心で僕はチンピラCを見据える。

「いっとくが、あの人が命じたのはお前達の監視だけだ。あの人は温いからな。ただの監視って……目障りな奴らは潰しとくのが確実なのに、ホントつまんねぇ人だよアレは」

アレって……ちょっとヒドいぞこいつ。どうやらファミリー内でもあのハゲを慕ってるバカと、慕ってないバカが居るようだ。

てか、監視ね……まさか監視されてたとは驚きだ。それじゃこっちがハゲどもを監視してた時も逆に僕達もその状況下にあったって事か？
なんてこっただよ。

「僕達を監視って、まあ確かにそれはつまんない役目だよな。それだけの評価をされてた事が驚きだけど」
「ホント、最初はふざけんなって感じだったぜ。さっさとぶっ潰して野郎かと思った。けどテメェ等は何かを掴んだ様じゃねぇか。泳がせて置くのも良いかもと思ったぜ」

チンピラCがちょっと余裕を取り戻しつつあるな。メカブを人質に取ってる事で、安心感が生まれてるのかも。タバコか何かのヤニにやられた汚い歯を見せて唇を舐めたりする仕草がキモい。
至近距離でそんなものが見えるメカブはめっちゃ嫌そう。さっきからこっちに『さっさと助けなさいよ』的な視線が飛んできてるよ。だけどまだ聞きたいことがあるから、もうしばらく我慢して貰う事に。

「で、泳がせてた癖にここに来て手段を変えたのは何でだよ？　こっちが先にアイテムを手にするかもとか考えたのか？」
「テメェ等の進み方は異常なんだよ。アキバ中に散らばった中で正しいＮＰＣを見つける……それにこっちが苦戦してる間にホイホイ進むからだ。
これ以上泳がせて置いても危険なだけ。それならいっそ、女から情報だけ頂いてテメェはフルボッコの方向だったんだよ！」

チンピラCは勢い込んでそう言った。そんなに僕をフルボッコにしたいのか……そこまで嫌われる覚えは（僕の視線は倒れたチンピラＡＢへ）――あるかも知れないな。

けどそれって逆恨みじゃね？　メカブを強引に浚おうとしてたのはこいつら何だし、ここでのされる覚悟位してて当然だろ。
ほんとチンピラって自分達の思い通り行かない事を誰かのせいにしないと気が済まないんだな。バカじゃねーのって思う。自分達が間違ってる事にも気付かないなんて、救いようが無いな。
まあホントはこいつらだって分かってると思う。だけどそれを認めたらチンピラでも居られないんだろう。グレて群れて強くなった気で居られる……そんな幻に浸る哀れな奴ら。

「なあ、おまえ等はまだここまで来てないって事だよな？　何がんなに大変なんだ？」

僕はバカにしたようにそう言ってやる。だって次の相手を示してくれてるじゃん。

「何がだと？　流行りアイテムを渡す相手で次に話しかける相手が違う。その時の情報は無いに等しいだろうが！　何体のＮＰＣがここには居ると思ってんだお前！　俺たちの様な下っ端はな、このクソ暑い中かけずり回る羽目になってんだよ」

もううんざり。そんな感じが確かにチンピラＣからは感じれた。なるほどね、だからこそそんな下っ端仲間の苦労を思ってのこの行動か。
僕たちがあっさりと前へと進んでるから、何か重大な情報があるかも――いや、ある筈だとこいつ等は考えてこんなバカな事を。
非常識しか行動原理が無いのかこいつらは。まあその判断もあながち間違っちゃいないけどね。重大な情報があると言うか……色々と反則的な奴がこっちに付いてるってだけだ。
そう言えば最初はシクラの後を付いていく形で、次のＮＰＣを探したんだったな。このチンピラが言うには、最初が肝心って事らし

い。
案外役にたってんじゃん。
「いいから情報よこせ。さもないとこの女がもっと苦しがる事になるぞ」
そう言ってメカブの首に回してる腕を更に閉め出すチンピラC。なんて外道。女の子にんな事するとは、男として最低だな。
僕なんて理不尽に殴られたり光線受けたりしても、手は出さなかったぞ。
「んぐっ……ス……オウ……」
苦しがるメカブ。その姿を見るとここまでだな――そう思った。十分な情報は手に入ったし、こいつらの身勝手な事情なんて実際クソ食らえだ。
「わーったよ。情報だろ？　ほら、目を凝らしてよく見ろ」
そう言って僕はスマホを奴の方に向ける。その中にはシクラが居る……かも知れないね。だから目を凝らして見ろよ。
「おい、もっと良く見せろ。こっち来い。そこに秘密があるんだよな？」
「勿論」
僕は屈託の無い笑顔でそう返す。すると少しの間の後、チンピラCは訝しむ様にこう言った。
「……やっぱくんなテメェは。スマホだけこっちに投げろ。お前は

動くなよ！」

何故そうなる？　僕の満面の笑みはいつだって日鞠に「もっとそうやって笑えば良いのに」って言われる程に好感色なのに。失礼な奴だな。

「おら、さっさと投げろ！」

「んっく……」

更に強く首を絞めて、メカブの足がつま先立ちにまでさせられた。周りからは僕を急かす様な声と、チンピラに文句を言う声とが聞こえる。てか文句よりも僕を責める声が多いのが気に食わない。

こっちは色々と考えてるんだ。外野は黙ってろ。

「どうするのよ？」

そんな声が見えない画面から聞こえる。別にあんまり深刻そうでもないけど、それは別に僕も同じだ。どうするってそんなの決まりきってるからね。

「ブン殴る。あとついでにメカブも助ける。だからちょっと我慢してろ」

「我慢？」

シクラの疑問の声。だけどそれには答えずに、更にその向こう側の奴にこう言った。

「んじゃ、ちゃんと受け止めろよ」

腕を軽く降ってスマホを投げる動作を見せる。そのまま軽く投げ

るかと思わせておいて――僕はワザと空高く、スマホを投げた。

「あーーーーしまったぁーーーー（棒）」

「おまっ、どこに投げて――っつ、眩しっ」

太陽に重なるように消えたスマホを追うために目を細めたチンピラC。この瞬間、奴の視線はあの強烈な日光にやれて真っ白になったはずだ。

視線も僕やメカブから離れてる。まんまと釣られやがって、まさに狙い通り。僕はこの瞬間に地面を力強く蹴った。

「ス……オウ！」

「っ！？　テメェ！！」

あのバカ。メカブが僕の名前を呼んだせいで奴の視線がこっちに戻って来たじゃないか。だけど既に止まれない。このままやるしかない。

先手は撃ったし、十分だ！！

「返して貰うぞ。そいつは僕の仲間だからな！」

だけど不意をつかれた癖に、自分を守る事だけにかけては執念深いのがチンピラ。奴はメカブをあからさまに全面に押し出して盾に使って来る。

けれどただの壁の盾なんて交わせばいいだけ。僕は体を傾かせて、横っ腹に拳をたたき込む。

「ぐっはぁ！？」

ゴリッとした骨の感覚。乱れる息がこの近さならわかる。だけど

これだけじゃダメだ。まだメカブは解放されてないし、まだまだ続けざまにいかなきゃ！

まずはメカブを解放させる。だから今度は息が苦しくて堪らない所に、肘を強引に割り込ませる。メカブとチンピラCの間に割って入る形で。喉を狙って肘を苦しげなその場所へぶつけた。

「がっ！！　ぜぁ……ぜぁ……ヒアアアア！！」

風切り音の様な音が口から漏れるチンピラC。たまらず腕がダランと力無く落ちた。その瞬間僕は、背中からメカブを押して取り合えず僕たちから離す。

パカパカと気の抜ける様な音が響いてメカブが解放された。これで――とちょっと気が抜けた瞬間に、頭に響く鈍い音。それと痛み。顔面が陥没したような感覚が襲う。

「いっ――――――――――――つぅぅ！！」

「ちょ……うしに乗るなよガキ！！」

頭突きされた。そう気づくのに一瞬掛かった。気の緩みもあるけど、こいつの執念にびっくりだよ。絶対に息苦しい筈なのに一発入れないと気が済まないとか、なかなかやるじゃないか。

「調子に乗ってるのはお前等だろ？　悪ぶれば何でも出来るとか、そんな勘違いははた迷惑なんだよ！！」

僕は鼻から出る血を強引に拭って、もう一発決めようとしてるチンピラの額に、額をぶつける。再び脳を揺さぶる衝撃が訪れるけど、口に鉄の味が広がる位に歯を食い絞めて弾き返す。

そして星が舞ってるチンピラCの顔面を掴んで、足を払うと同時に地面へと叩きつけた。肺から一気に空気が抜けたのか、ビクンビ

クンと痙攣するチンピラ君。だけどなんとかまだ意識はあるみたいだ。

「ああ、そうそう最後にもう一つ聞きたい事があったんだ。なあ、お前等って地道にやり方見つけたわけ？　僕たちはＮＰＣを繋いで行くやり方はネットに上げてない筈だけど」

僕は顔面を押さえつけながらチンピラに話を振る。だけどしばらく奴は何もいわない。てか、言えない感じだった。でも少し呼吸が出来る用になると、教えてくれたよ。

「ネットに……上がってたんだよ。ＮＰＣ同士の繋がりが鍵だってなんとか……な」

「ネットね。それはサイトか？　掲示板か？」

「ＳＮＳだ。イベントの情報をバンバン上げてる奴がいてな」

それって……まさか……僕の脳裏には自分達も知ってるスレが思い浮かぶ。独自に法則を見つけたって事だろうか？　僕達は沢山挙げられるレスのなかで、その法則性に独自に気付いた訳だけど、それをサイトに上げてはない。でも僕たちだけが気づくってのもありえないか。まあ一度確認しといた方がいいかも知れないな。

聞きたい事も全部聞けたし、そろそろ楽にしてやろう。

「ふ～ん、じゃあまっ、ここらで退場してろ」

「ぐっはぁ！！」

僕はチンピラＣの腹を両の膝でおもいっきり潰した。一回ジャンプしてドスってな感じで。汚い声と共に、チンピラＣもこれで沈黙した。

「ふう、成敗完了だな」
「もうちょっと早く助けなさいよ。なんだか首の所痒いし……てかアンタスマホはどうするのよ」

スマホね、スマホ。確か囮に使って投げたんだったな。そこら辺に落ちてると思うけど……壊れてないよね？　もしも壊れてたら今までの苦労が水の泡。案外メカブの事を自分でも意識してないレベルで助けたかったんだなって気付いた。
後先考えにずにスマホを手放すなんて……僕がそう思ってキョロキョロしてると、ザワザワとしてる人混みの中から、不意に手が上がった。

「お探し物はこれかな？」

そんな声と共に示された手の中には、今日の空と良く似た碧の色をした胴体。そしてちょっと不釣り合いな変な生き物のシール。
それは同じ日にスマホを買った幼馴染に「お揃いだね」とか言って付けられたシールだ。見間違う筈のない物。それが碧色の胴体の中で、日差しを受けて浮いていた。

道に転がる路傍の石（後書き）

第二百五十七話です。

今回は周りの状況も少しわかる話だったかな？　と思います。このままハゲ達が最後まで登場しないとかありえないけど、まあ何をしてるのか、どうしてこんな事するのか。

結局こいつらはどうしようもないバカで、悪でならないとねって事です。苦しいことも嫌な事も辛いことも、それを誰かに押し付けるような奴らは悪でいい。だからこそスオウは躊躇いなく蹴散らす。それこそ主人公らしく。

まあだけど、スオウも一人の人ってことは忘れちゃいません。限界は当然あるけど、三人くらいならありえなくもないかな？　ってことで。

てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

なんだってお金で解決！（前書き）

スオウ「おいおい最低なサブタイトル付いてるぞ」
メカブ「まったく嘆かわしいねわ。世の中お金じゃないのに嘆かわしい」
スオウ「へ～～～」
メカブ「な、何よ。その白い目は。この全てを見通す天寿眼を持つ私は、誰よりも金に執着心はないわよ。金なんて私の力に比べたら紙よ紙。ちょっと高級な印刷してる気取った奴？　まあだけど、私の天寿を通せば結局は白い紙同然。
そんなのに価値を見いだせると思う？」
スオウ「まあ、そこまで自信があるならいいけど……今から懺悔の準備をしとけよ。取り敢えず近くの教会のシスターと知り合ったから、予約を入れといてやるよ」
メカブ「ちょっ……それって例のキチガイなシスター……」
スオウ「大丈夫大丈夫、身長は百八十くらいで体重は筋肉だけで九十キロありそうで、サバゲー好きの大量虐殺の願望があるようだけどきっと良い人だよ」
メカブ「その言葉のどこに良い人の要素があるのよ！！　ふっ、ふふふ、私はある意味神みたい存在だし、そこらへん押してみてやるわ！！　シスター風情が図が高いんじゃーー！！　っていってやる」
スオウ「よーし、じゃあ予約も入れたし、楽しみにしてるぜ。さあて、誰が金の魔力に負けたのやら。それでは本編へどうぞ！」

メカブ「大丈夫大丈夫……私は神だ。神だ神だ神だ神だ神だ神だ神だ神だ神だ神だ神だ神だ――」

なんだってお金で解決！

「どうぞ」

そう言って携帯を渡してくれた爽やかイケメンの人。なんだか周りでぶつぶつ言ってる大多数とはちょっと違う空気を放ってるな。

「ありがとうございます」

僕はお礼と共に、スマホを受け取り画面を確認。結構高く投げた筈だけど、別に壊れてる……なんて様子はない。本体のどこにも傷ないし、地面に落ちたと思えないな。僕がマジマジとスマホを見つめてたからだろうか、その彼が爽やかにニコリと笑ってこう言った。

「傷は無いと思うよ。ちゃんと地面に落ちる前に受け止めたからね」

「ああ、そうですか」

どうりでやけに元のままだと思った。まあ良かったと言えば良かったな。深く考えてなかったけど、ここでスマホを壊すなんて事になったら数時間の努力が無駄になる行いだよな。危ない危ない。

良くぞ無事だったよ。僕のスマホ。僕はスマホをギュッと抱きしめる。するとその時気づいた。メカブがなんかめっちゃこっち睨んでる。

いや、正確にはこの爽やかイケメン君をって事なんだけど……二人は知り合いか何かかな？

「ふざけないでよ。知らないわこんな奴。そう、こんな奴は知らない」

メカブはそう言って不機嫌そうにそっぽを向いて、気絶してるチンピラ共の元へ。そして何かゴソゴソと漁りだした。
おいおい物取りか？　いくら酷い目に遭いそうになったからってそれは……

「そんなんじゃない。こいつらが私のスマホを…あったあった」

ゴソゴソと服を漁って出てきたのは確かにメカブが持ってたスマホだね。なるほど、襲われた時に奪われたんだろう。それを取り返したって訳か。

「では、自分はこれで。イベント頑張ってください。ああ、それともっと大切に扱って上げないと、中の可愛い子が可愛そうだよ」
「え……はは、何の事やら？」

僕がメカブを見てると、そう言って軽く手を振って歩き出すイケメン君。てか不味い事言ったよね？　シクラの野郎見られたのかよ。
素知らぬ振りしたけど、あれで誤魔化せる分けないよな。まあバレて何が不味いのか良くわかんないけど……とにかくあんまりシクラの事は知られない方がいいのかな？　とか勝手に思ってる訳だよね。
まあだけど、あの爽やかイケメン君は勝手に大丈夫――の様な気がする。何が大丈夫かもよくわかってないけど、取り敢えず楽天的に思う。ここはＬＲＯじゃないしね。

「ふう、気に入らない奴だったわね」

スマホを回収したメカブが、僕の隣にまで来てそう呟く。僕には何でそんなに毛嫌いしてるのかが理解できないよ。

「そうか？　スマホ救ってくれたし、爽やかで好青年って感じだったけど。女子にモテそうな顔してたぞ」

普通ならそれだけで第一印象は良くなるだろうに。やっぱり知り合いだろ？　意味深な風に二度同じ様な事言ってたしな。

僕はメカブをジトーと見つめる。

「な、何よ。私はあんな見てくれに騙されないの。天寿が言ってるわ。あいつは完璧に正確がねじ曲がった邪悪な存在だってね。

無限の蔵も二度と逢わないように気をつけた方がいいわよ」

メカブはイケメン君が消え去った方向を見据えてそう言う。だけど、それはどうやって気をつければいいのかわからんな。

そもそももう一度逢う確率なんて、すっごい低いし。そうそう何度も知らない人と出会える程、この世界は狭く無いだろ。

てか、そんな事よりもちょっと残念な事があるんだけど……

「お前……さっきはスオウって呼んでたのに、何でまた無限の蔵に戻ってたんだよ」

「え？　なななによ。そんなのどうだっていいじゃない」

僕が思わず所を指摘したせいか、メカブの奴はちょっと焦ったようにワタワタしてる。そりゃメカブにとっては意外だったかも知れないけど、僕にとっては重要だぞ。

もうこれをきっかけにスオウでいってくれるのかと思ってたのに、何で恥ずかしい方に戻るんだよ。

「無限の蔵は無限の蔵だからね。そもそもアンタがそう言ったんだし、私がどう呼ぼうと勝手でしょ？　そもそもそれを言うなら私メ

カブに納得してないし」

な……なんだって――――――！　今更な事をこいつも言い出しやがった。

「そもそも何がメカブよ。なんのカブよって感じ。すっごく納得できない」

「いや、だってメーカーオブエデンって長すぎだし……」

そもそもメカブってつけたのはシクラだけどな。よくよく考えたら最初から納得はしてなかったけど、僕が普通にメカブメカブ言ってたら不満そうでもなくなってたじゃん。

「それは諦めただけよ。妥協と言っても良いわね。だからアンタも妥協しなさいよ。そうじゃないと不公平だわ」

そう言ってずいっと僕に顔を近づけるメカブ。おいおい近いよ。それに何が不公平だ。こっちはちゃんとした名前を教えて貰えば、そっちで呼んでやるっての。

町中で「メーカーオブエデン～！」なんて呼べるか。いくらここがアキバだからって恥ずかしいだろ。僕達がそんな意味のないやりとりをしてる間に、それなりに集まってた人たちがバラケてく。

見せ物が終わったからもうここには用はないみたいな行動だな。まっ、いつまでも注目されたい訳でも、喝采を浴びたい訳でもないけど、取り合えずこの伸びきった奴らをどうすればいいんだよ。

「ほっときなさいよ。犯罪者に同情なんてする必要ないわ。どうせならこのまま干からびてほしいくらい」

酷い事をされたせいか、メカブがこのチンピラ共を見る目が、道

路で潰れた蛙を見るみたいになってる。人として見てないな。まあ無理もないけど。

「それはまあそうだけどさ、この炎天下のアスファルトに横倒しは不味いだろ？　僕も経験したけど、このままじゃ火傷したっておかしくないぞ。

それに自分が倒したせいでこいつらが死んでも目覚め悪いし……」

殺したい程憎んでるって訳じゃないもん。流石に死んじゃうのは気が引ける。だけどそんな事を言う僕に、メカブは呆れた様なため息を漏らす。

「はあ、あれだけ大暴れしといてよく言うわねそんな事。それにそんな屑より、まずは自分の事でしょ？」

「え？」

僕が間抜けな声を出してると、メカブは近くの自販機で水を買って、それでまずはテッシュを濡らす。そして僕の鼻の辺りを拭き拭きする。何事か！？　と僕は思わず動揺してしまう。

「ほら、血の後がついてる。みっともないから、ちゃんと拭いときなさい」

ああ、そう言えばちょっと反撃を食らってたんだっけ？　その時確かに鼻血が出てた。それ拭いてくれたんだ。まさかメカブがそんな事をする気遣いがあるとは思わなかった。

これもギャップという奴か？　ちょっとドキドキしちゃったよ。すると今度はハンカチを濡らして、僕の顔面に無造作に押しつけてきた。

「ちょ！　何だよこれは」
「冷やしとけって事よ。頭突き食らってたでしょ？」

もうちょっとやり方があるだろ――って言いたいけど、これがメカブの精一杯なんだろう。心なしか恥ずかしげに頬を染めてるし、そうそう受けれないと思える気遣いに僕はありがたくハンカチを受け取る事に。

てか、このハンカチ、なかなかラブリーな絵柄だな。体の半分が機械のクマさん模様だ。なんてったっけな？　確か今結構人気のキャラクターだった気がする。

僕はそんなハンカチをズキズキ鈍く痛む所に押しつけて置くことに。

「やっぱり警察でも呼んどくか。それで良いだろ」
「一生出てこれないように出来ないかしら？」

それは流石にちょっと無理だろう。メカブの気持ちも分かるけど、誘拐未遂程度じゃね。今の時代、一人人を殺しても数十年位で出てくるからね。

無期懲役や死刑を望むならそれだけ狂ってないといけない。けどこいつらは狂ってるって言うか、甘えてるだけ。そしてその甘えを求めて、だけど社会では受け入れてくれないから、こんな所まで落ちてるんだろ。

いっちゃうと、スッゴく似合ってるよ。この地面に倒れ伏してる様。まさに底辺って感じでお似合い。哀れでみっともない姿でも撮っておこうかとも考えた。

でも無駄なデータだしやっぱりやめて、電話発信の画面で１１０番を押す。

「なあ警察になんて言えば良いかな？」

「そんなの喧嘩して延びてるバカがいるんですけど～てな感じで良いんじゃない？　あっ、どうせならナイフとか持たせてたら罪が重くなるんじゃない？」

そう言って周りをキョロキョロ見回すメカブ。なんだ？　ナイフでも買ってくる気か？　少しでも罪を重くしたいようだなメカブの奴は。だけどわざわざこんな奴らに金を使う事自体が無駄だと思うけど。

僕は呆れつつスマホの通話ボタンに指を伸ばす。だけどその時、通りの先から四・五人の同類どもが走って来るのが見えた。

そして僕達を颯爽と無視すると、延びてるチンピラＡＢＣを持ち上げていく。

「ちょっとなにしてるのよアンタ達！」

そうメカブが声を掛ける。すると無言でこちらを睨んで来るチンピラＤ～その他の奴ら。どうやらバカな仲間を回収しに来たって所なんだろう。

なんかメカブをちらりと見て、直ぐに僕の方に視線を移動させるのは何なの？　しかも僕を見る目はどれも、メカブを見るときの数倍の眼力。

どいつもこいつも結果だけで僕を睨むのやめてほしい。悪いのそっちだからな。てか、その程度で済んでる事を僕に感謝しても良いくらいだよ。

それなのに無言で睨んで来やがって……僕だって負けじと睨み返してやる。するとその時、回収班の来た方から聞き覚えのある声が聞こえた。

「何やってるお前等？　さっさと回収だ！」

その声を受けて、ようやく僕から視線を外して、チンピラ共は仲間を回収する作業に移った。無言で声のした方へ仲間を担いで戻っていく。

「ねえあれって……」

「ああ、あの頭の光具合は間違いなくハゲだろ」

ここで言うハゲは、世間一般で言うところのハゲじゃないよ。ある特定の人物を指してのハゲね。まあハゲてるからそう呼んでるだけだけど、ようは前に僕が缶ぶつけて、そして宣戦布告された相手のハゲがそこにいた。

「すいませんねお二方。うちの若いもんが勝手な事をしちまった様でして。そっちはこれで済ませたくないかもしれませんが、どうか警察沙汰は勘弁を」

「何言ってるのよ！　こっちは誘拐されかかったのよ。犯罪よ犯罪！　頭下げてどうにか出来る話じゃないわね。いくらアンタの部下がバカだからって、分別くらいつけさせなさいよ！」

ここぞとばかりにおもいっきり文句をぶつけるメカブ。まあだけど、その権利がこいつにはあるよな。誘拐はバカだからじゃ済ませられないよ。幾らなんでも。

だけどそんな風に言われてもぶれないのがハゲだった。

「非礼はこの通り。どうか勘弁してくだせぇ！」

そう言ってヤクザ特有の頭の下げ方をするハゲ。足を開いて中腰で頭を僅かに傾けるアレね。Ｖシネでよく見る奴だ。するとそんなハゲの行動を見て、慌て出すのは金魚の糞みたいにくっついてる二人のチンピラ。

「げ……ゲンさんがそこまでする事ないですよ！　コイツ等が勝手に暴走した結果こんな風になったのに、それでゲンさんがそいつ等に頭を下げるなんて……そんなの」
「うるせぇ！！　文句垂れる暇があったらお前達も頭を下げろ！！」
勝手に動いてノされた奴らの事なんて――そう言った側がお叱りみたいな声をハゲから受けた。その声の迫力に、僕達も思わずビクゥゥってなったよ。

「でも……」
「でもじゃねぇ。んな悲しいこと言うなよ。俺たちはな、酒を交わしたその時から家族なんだよ。俺はテメェ等の兄貴になったつもりでいるんだよ。
だから頭を下げる。兄弟を庇えない様な奴になってくれるなや」
「「あ……兄貴ぃぃぃぃ！！」」

ハゲの言葉に、感動を禁じ得ない様な腰巻きの金髪とモヒカン。なんか同じ様なやりとりを前にも見たような気がするんだけど、こいつらも飽きないよな。

「相変わらず暑苦しいわね」

ポツリとそう呟いたメカブ。その気持ちはよくわかる。まあだけど、やっぱなかなかハゲは良いこと言ったと思う。それでも金髪とモヒカン野郎は過剰反応し過ぎだけどね。
今度は二人も加わって頭を下げだすんだから良い迷惑だよ。
「「ふがいない兄弟を許してもらえませんかぁ！！」」

なかなかに全力な感じが伝わって来る。けどどうなんだろうな。

許すかどうか……それは被害者のメカブの判断次第だろ。

「どうすんのこれ？」

僕は指さしてメカブに聞いてみる。するとメカブも「どうって……」って困り果ててる。まあもう引くレベルだよこの全力具合は。

てか、今気づいたけど、既に回収してる所を見ると、警察に突き出させる気ないよな？　これはただの形式か。

「むむ、確かに考えてみれば真っ先にあのチンピラ共を回収したのは許しがたいかも。普通は誠意を見せてからでしょ？

ふん！　浅はかな人間め。そんなただ頭を下げる程度の行いで許されると思うなよ！」

ビシッと指を突き立ててそう言いきったメカブ。女の子なのに凄い度胸だね。一応ヤクザだろコイツ等。そこら辺忘れてね？

まあヤクザだからって遠慮するのも違うと思うけどね。そういう意味ではメカブの痛い所も結構好きだよな。こういうところの思いっきりの良さは設定の賜物だろう。だからそんな風に思ったことを素直に口に出してみた。

「はは、お前のそう言う所好きだよ。周りに流されずに、相手に流されずに自分を貫ける所」

「なっ！？　なななな、何言ってるのよ無限の蔵。突然どうしたわけ？　そんな事言われたって私は別に……変な電波拾ってるんじゃない？」

お前にだけは言われたくない。折角ちょっと関心したのに、僕のこの思いを返せよこの野郎。

僕達がそんなやりとりをしてると、金髪野郎が頭を下げたまま苛

ついた様に、こう言った。

「これ以上何を求めるんだよテメェ等。これだけしてやってんだろ。十分じゃねぇか！」

「十分？　それは私達が判断する事よ。そう思って貰えるようにアンタ達加害者側は何度だって頭を下げるものよ。一生頭上がらない様にするものよ。

やっぱりただのチンピラね。礼儀すら押しつけがましいなんて、その一言で本当は悪いなんて思ってないのが分かったわ」

そう言ってメカブは僕にチラチラ視線を送る。何だよ？　そう思ったけど、どうやら警察に電話しろって伝えたいらしいな。

「これだけしてんだぞ！　ゲンさんが頭まで下げて！」

「黙りやがれ！！　バカな事を何度も口に出すんじゃねーよ」

そう言いつつ、ゲンさんは顔を上げた。大きなサングラスをかけたその顔じゃ目は見えないな。だけどこの人の目はアレだから、この迫力を出すにはサングラスの力は必須なんだよね。

てかこのタイミングで顔を上げたって事は開き直るつもりかな？

僕はコイツ等がヤクザでチンピラな暴力上等の奴らだという目で見据える。

もしかしたら苦し紛れにメカブを襲い来るかもしれないからね。交渉が決裂したら、暴力に訴えるのがコイツ等だろ。

「確かに先にあいつ等を回収したのは間違いでした。そう思われても仕方ない。だけど、大切な家族をこんな石焼きの様な地面にほっとく訳にはいかなかった。

そこら辺わかってください」

「そんな気遣い、私には不快でしかないわよ。分かるけど、それは

都合の良い言い訳にしか聞こえない。最初から都合の良いようにしてるじゃない。
それで頭を下げれば、後は自分達の事だから普通は関わりたくないとかで、勝手に済ませるとか思ったんだろうけど、私はそんな甘い女じゃないわよ」

おお、随分メカブが強きに攻めるな。なんか格好良いじゃないか。腰に手を当てて不遜にそう宣言するメカブに怯んだ様子は微塵もない。
なんだかアレだな。ちょっと日鞠に重なる部分があるな。あいつは滅多な事で怯まないし。いつだって自信満々だ。まあそれだけの力って物が日鞠にはあるわけだけど、そんな姿が今のメカブにはちょっと見える。
よくよく考えたら、あの痛い部分もちょっと共通してるかもな。
僕がそんな風に感心してると、ハゲが懐に手を伸ばした。ナイフか銃か！？　僕は取り出す前に腕を払おうかとも考えたけど、それは出来なかった。
何故ならメカブの奴が僕の服の裾を握りしめてたからだ。無意識にそうしたのかどうかはわかんないけど、やっぱり怖がってはいるのかも知れないな。

「仕方がねぇな。これは使いたくなかったんだが」

そう言うハゲ……一体何を取り出す気だ？　僕は取りあえず警戒しながらその腕から延びる物を見逃さない様に凝視する。
なんだか思ってたよりも薄っぺらいな。それに紙みたいに重力に負けて下に沿ってるし、見たことあるデザインなのも特徴的。

「これで示談を成立させてください！！」
「喜んで！！」

物凄い即決。目にもとまらなぬ速さでメカブの手は札束を握り締めてた。はやっ！　速過ぎるだろ！　今までのやりとりが嘘の様にメカブの奴はそれに真っ先に飛びついた。さっきまで強がってたけど怯えてる、ちょっと可愛いと思えた女の子はどこへ行った。

「てか、金って……」

「これも一つの手段だからな」

そう言うハゲはさっさと後ろを向いて立ち去ろうとしてる。まあ確かに一つの手段ではあるけど……なんか納得出来ないのは僕だけか？

既にメカブの奴は、ハゲやチンピラの事なんかどうでも良いみたいだし、なんなのこの僕の気苦労は？

「お前はそれでいいのかよメカブ？」

一応そう聞いてみる。だけどメカブの返事は「良いんじゃない？」だった。軽すぎだろ。金で解決して良い問題なのかよ。

まあ既に諭吉を数える目が金になってるメカブには何を言っても無駄だろうな。

「おい」

僕は去りゆこうとしてるハゲ共を無造作なそんな一言で呼び止める。

「ああまだ何かあるのか！？　あんま調子にのってんなよ！」

「うるさい。雑魚は黙ってろ。お前なんかに様はない」

金髪を一蹴して僕はハゲを見据える。

「何かな？　そんな怖い顔をして？」

「メカブはあれで納得してるようだけど、僕はそうじゃない。アンタ達は最終的にはあんな事をやる事もある……そう思ってた方が良いのか？」

それはもしかして僕達がアイテムを手にした時のリスクの話だ。でもただボコるだけで手に入るって訳でもないけど、こいつらだって追いつめられればやらないと限らないだろ。

「そうだな。そんな事をやる前に、同じように交渉する事を約束しても良い。金は裏切らないからな。今もそうやって交渉した結果、かなりの人員が集まったよ。

テメェ等はかなり調子が良さそうだが、直ぐに追いついて見せよう。俺達にはそもそも脅迫なんてやる必要なんてない。

地の力で勝ってるんだからな」

つまりは金をちらつかせて、更に手足に出来る奴らを増やしてるって訳か。どうせアイテムを手にして渡してくれたら何万とかくれるって訳か？　でもそれって既に自分達の力でも何でも無いよな。

「それがどうした？　ようはアイテムを手に入れる事が重要なんだ。最終的には俺達の手元にそれが来るのなら、手段は何でも良い。

俺達だって物騒な事はしたくないんだよ。だからその時がもしも来るのなら、考えてみてくれよ」

「勝負は最初から意味ないって事か？　僕達が先にアイテムをとっても、金か暴力で毟り取るつもりだったと？」

僕がそう言うと、ハゲは無い首を横に振る。

「あの時は、お前達がここまでやれるなんて思って無かったさ。そんな必要ないとな。だが一応は警戒してた。それがこうやって功を奏したわけだ。最悪の前に忠告出来ただろ？　考えとけよ。覚悟を持って」

ハゲ共はそう言って通りの向こうに消えていく。奴らにとって敵が増えた……そう思ってたけど、すぐさま買収始めるとは流石資金力が違うな。

更にライバルが増えたらしい今日この頃、僕達も再び動き出す。

なんだってお金で解決！（後書き）

第二百五十八話です。

ハゲ共も悪役らしく動いてくれて、イベントも収束していく筈です。最後らへんは派手に暴れようかななんて考えてる今日このごろなのです。ハゲ共の別のルートからアイテムに近づいてくるだろうし、まだまだ一筋縄ではいかない様相。

最後にアイテムを手にするのはスオウ達かハゲ共か、それとも第三者か。まあどちらにしてもアキバはお祭り騒ぎってことで。

ああそれと、前書きの続きは気がむいたら書くかもです。

てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

人生は選択肢の連続（前書き）

ジョーズのテーマが流れる部屋。無機質な空間に一人椅子に縛られた少女が居る。

メカブ「ちょ……ちょっとこれはどういう事よ！？　なんなのこれ！？　私を開放しろーーーー！！」

ガチャガチャガチャ

メカブはドッパンドッパン鳴り続ける銃声の中で歯を食い占める。
そしてこう言い切った。
メカブ「わ……私は悪いことなんかしてないもん！！　私から搾取しようとする神様なんて糞くらえよ！！」
？？？「ユーアーデッド！！」
彼女の人生は幕を閉じた。数ある選択肢の一つを間違えたからだ。
さあ、冒険の続きは本編で！！

人生は選択肢の連続

僕達は秋葉原駅前へ来た。ここで第四研究所の連中が盗み見たメールの相手が居るはずなんだ。名前は確か『ジェロワ』だったな。

僕とメカブはそれぞれ携帯を翳して、行き交う人々の中でその人物を捜す。流石駅周辺は人が多い。ぶつからない様に気を配るだけで大変だ。

普通に歩いてる人たちにとっては僕達は邪魔だろうからね。せめて迷惑を掛けない様に気をつけないと。

「あっ、ねぇアレじゃない？」

「おお、でかしたメカブ――っておい！」

メカブの奴は急ぎ足で駆け出すし、視線はスマホの狭い画面に釘付け。よってもの凄く危ない感じで進んでる。僕は慌ててメカブの服の襟を鷲掴みにしたよ。

「ととっ、ちょっと何するのよ無限の蔵」

「何じゃない。危ないんだよお前は。ちゃんと周りも気にしろよ。何も知らない人だって居るんだ。その人たちに取ったら僕達は非常識だろ」

だからこそ最大限注意を払わないといけない。イベントの参加事項にも書いてあっただろ。【周りへの迷惑を理解して最大限の配慮をお願いします】ってさ。

「小さいわね無限の蔵。自分を押し殺して楽しいことが出来ると思ってるの？」

（こいつ全然分かってない）

このつまんないって顔のメカブを見て理解した。こいつ自分が全てか。てかこんな個性的な格好してる奴が、人の目なんて気にしてる訳そもそも無いよな。

恥ずかしいとか思ってたら、生足全露出はしないだろ。ファッションを気にしてるにしては、便所サンダルはおかしいし……自分を見てほしいんじゃなく、自分が興味あるものしか見たくないから、周りなんてどうでもいい……か。

「私はね、人生楽しく生きたいの。長く生きてきて、他人に振り回せれるのなんてバカバカしいと気づいたわ」

「バカバカしいね……」

なんか浸ってるけど、あんまり年変わんないだろお前。だけどこいつの言動にはいちいち設定がつくから、長くってのもあれだろ？

時の監視者として……とかだよな。うん、めんどくさい。

「お前な、別に個性を持つのは良いけど、最低限の協調性は持ち合わせてろ。これは他人に併せるとかじゃない、思いやるって事だ。そういう所は無くすなよ。幾ら長い時を生きてるとしてもな」

僕はメカブの言葉を流すんじゃなく、さり気に入れてへそを曲げるのを回避する事を忘れない。これも学習って奴だな。

するとメカブは納得してくれたのか、こう言った。

「まっ、無限の蔵がそう言うなら歩み寄っても良いかもね。これも私の無くしてた物かも知れないし」

（だろうな）

と、心で呟いた事は胸にしまっとく。決して口には出さないよ。けどさ、なんかイベントの他に、メカブの再教育みたいになってない？

確かに落とした物を取り戻せとか言ったかもだけど、あれは別にこういう事じゃなかったんだよね。適当だったし、メカブの電波に合わせただけだ。

案外本気だったのかな？　自分で周りとズレてるのは自覚してるとか？　でもそれを分かった上でやってる筈だとも思うけど……自分がおかしいのか、世界がおかしいのか、メカブにとってはどっちなんだろうな。

今度はちゃんと周りに気をつけて僕達は行き交う人々の波を進む。駅の構内に入る一歩手前ぐらいの所に居るものだから、ほんと大変だったよ。

もうちょっと場所を考えろよな。今日は特に人が多いんだから。特にこの駅周辺は常に飽和状態みたいな感じ。人の熱気と、日光でサウナ状態と言っても良いくらい。後はビルから照り返される日差しもあるから、もうヤバい。

ヤワな機械とか壊れるんじゃないか？　と思うくらい。絶対に精密機械には悪い環境だよ。そんな中で僕達は『ジェロワ』さんに話しかける。あっ、ちなみにこの人は女性でした。

白衣に眼鏡のいかにも研究者っぽい人……ではなくて、眼鏡はそのままだけど、服はローブで研究者って言うより、魔導士って感じだ。

まあもしかしたらＬＲＯの研究装束がローブなのかもしれないってだけかも……あの所長が白衣を翻してたから、こっちもやっぱり白衣なんだとシックリ来てた訳だけど、そもそもＬＲＯの世界観にはこっちの方が合ってるか知れない。

『あ、貴方があのメールを……で、何を要求するつもり？

呼び出したからにはそれなりの覚悟あってでしょうね。私は国家研究員なのよ。
その情報を取ろうとする事がどういう意味を持つか、無さそうな頭で考えなさいよひぇ』

ひぇ？　なんかテンパってるなこの人。

『ちちちち違う！　今のはひゃし！　ってこれもダメ。なしなし！！　ああもう、要求は何よ！！』

なんか良く分からない内に逆ギレされた。てか要求は言ってなかったのかあいつ等？　入ったばっかりの僕の事信用し過ぎ。ええと、ここで選択肢があるわけね。

『金渡せ』『奴隷になれ』『アイテム』の三つの選択肢。誰だこんなふざけた選択肢作った奴。おかしいだろ。金渡せとか奴隷になれとか、欲望でしかない。流石にこれは無いだろう。
でも最後のアイテムもちょっと良く分からない。けど選択肢の筈なのに逆にこれしか選べないというおかしさ。それが変な葛藤を生む。
余りにも選択肢の意味が無さすぎて、深読みするというか……これでいいのか？　みたいなさ。

「どうしたのよ？」

迷いあぐねてる僕をみて、横からメカブが入ってくる。僕の画面を見ようとするから、慌てて横に逸らした。これはシクラを見られないようにする配慮ね。
けどよく考えたら今は画面内にシクラの奴いないな。一体どこに行ったのなら、思い返したら投げ捨てて戻ってきた時から一言も発

してない。
もしかしたら投げ捨てたのを根に持ってたのかも知れない。そんなヤワな性格はしてないと思うけど……基本なに考えてるかわかんないから、変な報復がこないかを警戒しとこう。

「ちょっと何で見せないのよ。わかんないじゃない」

そう言ってグイグイ僕に体を寄せてくるメカブ。暑苦しいのにくっつくなよと言いたい。それに無駄に大きな部位が当たってるし、こいつワザとやってるんじゃないか？
それともやっぱり全然気にしてないのか……僕はもう一度画面にシクラがいないか確認して、選択肢を見せてやる。

「ほら、これがなんかおかしいから悩んでたんだよ」
「ふ～ん、こんなのアイテムしかないじゃない」

だろうな。あっさり言ってくれるなこの野郎は。

「そうだとは僕も思うよ。けど、なんだよこの選択肢の意味の無さは。変に勘ぐらないか？」
「まあアホらしい選択肢だとは思うけど、他に何があるのよ。金渡せとか奴隷になれって今までの流れ意味ないじゃない」

まあ確かにそれは……てかそんな事は心の中で前に言ったっての。だからその意味の無さが逆に不気味なんだよ。

「別に大丈夫と思うけど。じゃあ私が保証してあげるわよ」

そんな事を何故か自信満々に言ってくるメカブ。どっから沸き上がる自信だよ。

「ふふ、その自信の裏付けはアンタも知ってるはずよ無限の蔵。なんてたって私には天寿眼があるんだからね。忘れたとは言わせないわ」

ああ～と僕は思ったよ。その設定ね。確か天寿は全てをメカブに教えてくれるんだっけ？　そりゃ凄い。でもここで使って良いの？　今まで世界への影響を考えて控えてたんだろうに。

「特別よ、特別。知り合った記念に今日は特別サービスで、この一度きり天寿の力を見せてあげる。全く、無限の蔵は用心深いというか、小心者なんだから。

ほんと私が天寿を持ってて良かったわね」

プププ――ってな感じで何故か笑われる僕。設定程度にそこまで自信満々になれるとは……期待なんかしてねーよと言いたい。

しかもある意味ここで正解を見せようとするなんてあざといというか。確かに実際、この選択肢はアイテムの一択だと思われるから、この正解により天寿の設定をより強くしようとかそう言う事だろ。

くっそ～さっさと選んどくべきだったか。僕はしょうがなく、アイテムを選択。まあだけどこれだよねきっと。これじゃなかったらおかしいと思える程、これしかない筈。

「うわ、マジで押してやんの」

「お～い、さっきまでの自信はどこいった？」

何ここで不安に駆られてるんだよ。もう後戻りは出来ないぞ。いきなり弱気な一面見せやがって不安が増すだろうが。

「だってだって、無限の蔵が余りにもあっさりと信じるから。もっ

と慎重になりなさいよ」
「どの口がそれをいうんだ！」
ふざけんなよこの野郎。もう押しちゃっただろ。どうせなら最後までその自信を貫き通せよ。変に不安にさせるな。もう祈るしかない僕とメカブは画面を凝視。一体これで正解なのか？
『それは……流行の奴ね。もしかしてこれを私に？　まさか貴方……』
まだ判断できない。なんか意味深だけど、はっきりしないやりとり。
『私のファンね』
「「はい？」」
二人して画面の中のジェロワさんへそんな声を出した。ファンって、どうしてそう言う結論に至った？
『脅迫なんてしてきて何かと思ったらそう言う事。まあエリートの私に目を付けるなんて良い眼力してるわ貴方』
「ど……どういう事なんだ？　これで良いのか判断出来ないぞ」
僕は隣のメカブへと判断を仰ぐ。だってどうみても変な方向へ行ってる気がする。
「ファンとか、この女も相当思いこみ激しいわね。なかなかやるわ」
そんな事きいてねぇ。何ちょっと同じ臭いを感じ取ってんだよ。
確かにお前とこの人ちょっと通じる部分がありそうだけど、そんな

の今はどうでも良いことだ。

『確かにちょっとここの所あの人怪しいのよね。あんまり構ってくれないし。やっぱり家族の方が大事って事よね。私なんてもう三十路になるのに……結局遊ばれてただけ。

そもそも奥さんと別れる気なんて小心者のあの人には無理なのよ。ねえそう思わない？』

「ここでまた選択肢だとぉぉぉぉぉ！？」

僕は思わず声を張って叫んでしまった。周りの人達が「何事か」とこっちにいぶかしんだ視線を向ける。しまったしまった、迷惑だよねこれは。声は極力抑えよう。だけど、もうなにがなにやらで声を出さずには居られなかったというかね、どういう事？

何をいきなり聞いてくるんだよこの人。おかしいだろ。こんな重い話、今し方出会った奴に話すか？　しかもまた選択肢って、判断を仰いでいいのかよ。

「凄い斬新ね。プライベートに切り込んでるわよ」

「切り込み過ぎだろ。イベントに関係を持たせろよ」

いっとくけど、この人と誰かさんの不倫関係なんてどうでもいい。こっちの狙いはこの人から、アイテムの情報を聞き出すことだ。素直に流せよ。

僕がそんな事を考えて悩んでると、隣から頭を入れてるメカブが勝手なことをする。

「今度の選択肢イエスかノーか。これはもうイエスで良いわよね」

そう言ってピッと勝手に選択肢を決定しやがった。

『やっぱりそう思う？　私はきっとあの人の慰み物で、都合の良い女でしかないのよね。ありがとう目が覚めたわ。あの……えっとね、貴方はその……私の事どう思う？』

そう言って僕が渡したアイテムを胸に抱いて訪ねてくるジェロワさん。なんだこの人、こっちに乗り換えようとか言う気か？

てか、展開的にそうさせろと？　ここで画面には再び選択肢が出てきてる。

『幸せにして見せます』『どうって言われても……』『三十路って（笑）』

最後の選択肢バカにしてるよな！？　（笑）ってどんだけふざけてんだよ。取りあえず最後の選択肢は除外しておこう。正解って気がしない。

でも一個目の『幸せにして見せます』ってのもおかしいよな。それはプロポーズか何かか？　一番無難なのは二番目か。まさに僕の今の気持ちを表してるしな。

けど、このジェロワさんが求めてる答えは一番の奴みたいな気がするんだよね。ここでお茶を濁す選択肢は実は一番気に障るとかあるかも知れない。これは流石に、僕一人じゃ判断できないな。

「不本意だけど聞いてやる。どれだと思う？　僕的には三番目はあり得ないんだけど」

「三十路って（笑）って奴ね。う～ん私的にはそれが一番良いと思うけど」

「三十路って（笑）が！？」

なんでそう思うのか理解できない。こいつの感性はホント謎だよ。だってあり得ないだろ。普通にバカにしてるよその選択肢は。

「でもでも、私的にあり得ないのは二番目だと思うけど。迷うとしたら、突き抜けたどっちかよ」
「その理由は？」
「中途半端な答えは中途半端な結果しか生まないわ」

なんだか名言っぽく言ったメカブ。随分得意気にね。まあそれは有ると思うけど、どっちも極端じゃね？

「そうかな？　別に断言してる訳じゃないんだし、いいんじゃない？　いい、私思うんだけど、これってこのジェロワさんを落とすのがきっと目的よ。
脅すよりも従順に使えるわ。なんかこの人、恋愛になるとバカになるタイプと見たわ」
「へぇ～、なるほど落とすね。でも何で三番の奴なんだよ。落とすのなら一番の選択肢の方が良いだろ？」

落とすのが目的なら、バカにするような選択肢はダメだと思うけど。けど僕のそんな言葉をメカブは「ちっちっち」と舌を鳴らして否定する。

「ホント無限の蔵はお子さまね。彼女は今、恋愛に悲観的になってるわ。結婚が出来ない相手との関係を終わらせる為には、新たな恋しかないと思ってるの。分かる？」
「だから優しい言葉を掛けて、こっちに気持ちを寄らせるんだろ？
やっぱ一番じゃん」

ますます一番説が強くなった気がする。けどメカブはブレない。

「優しくて甘い言葉、それだけで女が落ちるなんて思っちゃ駄目な

のよ。それに最初から優しい男にはきっともう懲り懲りしてるわよこの人は」
「どうしてそんな事が分かるんだ？」
ジェロワさんの何を知ってると？　この人の性格とか人間性とか全然僕ら分かってないだろ。
「だって不倫してたんでしょ。その相手はきっとこう言ってた筈よ。『妻とは別れて君と一緒になるよ』とか。定番句ね。だけどそれは無いとそろそろ気付いた。男の優しい言葉は求めてる。だけどそれを素直に受け止められない自分ができちゃった……みたいな」
「随分具体的だな」
まるで経験でも有るみたいな言い方。まさか援交でもやってるのか？　流石にその年で不倫とかは無いだろうけど……って良く考えたら不倫も援交もあんまり変わんないよな。
援交なんて年の差だけで、実際おじさん側には家族居るだろ。意識の違い？　まあ取りあえず、メカブは以外とビッチだったと言うことで。
「誰がビッチよ誰が！　私はまだ……その……しょしょしょしょ……」
「ああ！　わかったわかった！！　理解したからその先は言うな！」
顔を真っ赤にして、何を口にしようとしてたよこいつ。公衆の面前で赤面だけじゃすまない事を言おうとしてただろ。
「結局どれにすればいいんだ？　一番か三番か？　自分的には二番もやっぱり捨てきれないんだけど」
ジリジリと照りつける太陽の下、頭を使うのはきつい。そろそろ

マジでクラクラしてきそうだしさ。メカブが無駄にくっついてるせいで、体感温度以上に暑いんだよね。少しは気にしないのかな？　女の子なんだから汗の臭いとかそこら変には敏感だと思うけど。

日鞠の奴は、良く体育の後は「あんまりくっつかないでね」とかおかしな事を言っていた。いつだって付きまとうのはそっちの癖にだ。

まあ普通はその程度には気にするはず。だけどメカブに普通を求めるのがバカバカしいか。別に臭く無いしね。僕が普通にちょっとドキドキしてる中、メカブは「ふっ」と口元をあげて、「しょうがないから、この一言で背中を押してあげるわ」と言った。

なんだなんだ？　どんな名言を知ってるって言うんだ？

「神ニート様が言ってたわ。嫌いは好きに変換可能だってね！」

超自信ありげだけど、まず神ニート様じゃないし、神にー様だろそこは。とか、それってギャルゲーでの格言だろとか言いたい事一杯。

「何よその目は。本当なんだからね。だって新世代恋愛バイブルにそう書いてあったわ」

まさかその売り文句を本気にしてる奴が居るとはビックリだよ。あんなのあのマンガの主人公しか出来ないっての。

「とりあえず！　好きと嫌いは表裏一体。嫌いの反対は好きって良く言うし、昔の人も言ってたわ。だからこの格言は本当なの。安易に好きになられるより、まずは嫌われろって事よ。わかった？」

わかった……と言われても。どっちかって言うとわかんないな。そもそも恋愛展開なのこれは？　てか話の持って行きかたはそっち

で本当にいいのかな？　って感じだし。まあ好きの反対は嫌いとか良く言うけど……この人を長々と攻略してる暇は無いぞ。

「取り敢えず、ここは三番で。大丈夫、今度は先人と神ニート様を信じなさい」

「だから神にー様ね」

そんな訂正をしてる間に、メカブはポチリと決定しやがった。あ～あ、これで駄目ならどうする気だ。

「迷い続けるより生むがやすしってね」

それなんか違うくね？　なら僕は覆水盆に返らずと言うぞ。

『三十路（笑）だなんて……酷い！　貴方も私をバカにすすすするのね！！』

そう言って走り出したジェロワさん。その時画面には『追いかけろ！！』の文字が赤々と表示されてた。既に選択肢でも何でもない、強制的な指示。何これ？　追いかける事が必須イベント的になってる訳？

「何やってるの無限の蔵、早く行かないと見失うわよ！」

「ああ、もう！　周りには気を付けろよメカブ！！」

僕達は逃げ出したジェロワさんを追って走り出す。だけどリアルではあの人は見えてない訳だから、僕達は見えない誰かを追いかける痛い人に見えてるに違いない。

なんてこった……遂にメカブと同類に。家族連れの人が僕達を見て「あのお兄ちゃんたちは何を追いかけてるの？」って質問を母親

が「見ちゃ駄目です」と言ってる所で、目に暑い何かがこみ上げた気がした。
僕達はデジタルの世界の住人を追いかけてるんだ！　決してこの暑さで気が狂った訳じゃない。そんな弁解を心で呟きつつ、遠くに見えるローブを追う。

「ちょっ――人混みうざい！　画面を見ながらじゃスピードも出せないし、このままじゃ巻かれるわよ」
「それよりも僕は画面に出てる数字が減ってるのが気になるんだけど！？」

追いかけるんだ！　の強制文字と同時に現れたこの数字。どう考えてもアレだよな？

「数字って……まさかカウントダウン？　ゼロになったら終わりじゃないの？　それか元の場所に戻って最初からまた追いかけっことか……そんなの絶対にイヤよ！」

そんなの僕だって同じだ。こんな炎天下の下、そう何度も走れるか。でもこのままじゃマジで見失う。どうにかしないと。
するとメカブが僕に向かってこう言った。

「アンタ先行しなさい。私のペースに合わせてたら逃げきられちゃう。後でちゃんと追いつくから、絶対に捕まえなさいよ！」
「任せろ！！」

僕はメカブからの言葉を受け取って、スピードを上げる。実際ペースをメカブに合わせてた訳じゃなく、結構限界だったんだけど……ここでもう無理とは言えないだろ。
メカブは僕が激しい運動は控える様に言われてるって知らないし、

散々暴れてるからな。だけどマジで骨と筋肉がヤバい。ギシギシいってる気がする。

僕は大きく息を吸ってスピードアップ。スマホを確認しつつ、人混みを潜り画面に映る小さな背中ををタッチ！

『エラー！　もっと近づいて！』

もう一度ブン投げようかと本気で思った。1

人生は選択肢の連続（後書き）

第二百五十九話です。
まあ次で結構進んでくれるかな？　ジェロワさんの部分はイベント的に終盤の筈だから。けどこれはスオウがたまたま選んだルートの終盤だと言うだけで、ハゲはきっと別のＮＰＣをめぐってるだろうし、他の誰かも別のＮＰＣを巡り巡ってる筈。
そんな感じでこのイベントは終着点をそれぞれに目指します。逃げたジェロワさんの行き着く先はどこなのか！
前書きのは本編関係ないんであしからず。
てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

異世界は逃げ場じゃない（前書き）

僕はジェロワさんを追いかける。他人の目なんか気にしない。暑さもさえも気にしない。だけど体は限界だ。そんな時、都合良く現れるのはいつものシクラ。恩を売れる時に都合良く現れるこいつはそういう妖怪か？

だけどジェロワさんはブリームス側に居るシクラが絶対に手出し出来ない所に招かれた。それは今この街を騒がせてる人食い通路。

異世界は逃げ場じゃない

「こんの野郎！！」

画面内でエラーエラーが続く。一体どれだけ近づかないといけないんだ。ちょっと離れてても会話が出来る利便性がなくなってるぞ。

流れていく周りの景色。誰もがダルそうに歩いてる中、僕だけが必死に走ってる物だから目立つ目立つ。

だけどそんな恥ずかしさを押し殺して僕はジェロワさんの背中を追う。これは実際、僕以外絶対に無理じゃね？　って思える事なんだけど……僕にはＬＲＯの影響かどうかわからないけど、それなりに鍛え上げられた目があるから、行き交う人々の流れとか、動きを読んでそこを縫える訳だけど、実際はそれが出来なきゃ走る事なんて出来ない位だ。

ちょっとダッシュすると前方の人にぶつかる、そんな人の多さの中で、追えてる事も結構奇跡。

「でも、どうやら追うだけじゃダメみたいだな」

多分ある一定の距離まで詰めないとダメ何だろう。さっきから「もっと近づいて」って出てるしな。だけど実際追うだけで精一杯。

ジェロワさんのいるブリームスと、アキバは建物や道路の配置はほぼ同じでも、そこに居る人の多さが圧倒的に違うんだよ。超不利。いや、マジで。

「ハァハァ……くっそ！！」

弱音を吐いてる間にちょっとはなされた。駅から電気街の方へ行き、更にそこも通り過ぎてって今の僕の体には負担が大きい。
ヤバい、足がガクガクしてきた。

（ガタツくの早いぞ僕の足！　ＬＲＯじゃどんなに苦しくても気合いで動けたぞ）

それなのに、リアルじゃ気持ちに体がついてこない。これが現実という名の弊害か。生身である肉体の限界。ある意味ＬＲＯは全部精神だからどうにかなってた部分も一杯あったって事だろう。
向こうは気持ち至上主義だったんだな。だけどここは……全てがリアルだ。体と心は直結してても、そのサイクルは体調や気分や元々のスペックに依存してるというか……つまりは不自由なのだ。
肺が爆発しそうに膨らんで、息が上手くできない気がする。足の骨と筋肉が硬質化してきそう。そろそろみっともなく道路に転がってもおかしくない。
するとその時だ。辛うじて掲げてるスマホから聞き慣れた声がした。

「ほんと、情けない顔してるね☆　しょうがないからシクラちゃんが手伝ってあげようじゃない。だからもちょっとがんばり～」
「シ……クラ、お前……」

どこ行ってたんだ、と思わず言いそうになった。だけど声が出る前にシクラの奴の背中は遠ざかる。どうやらスピード上げて、ジェロワさんを捕まえてくれるらしい。
ズルいけど……ここはしょうがないよな。いやいや、だってあんなの追いつけない。体が万全ならいけると思うけど、今日はこれが限界です。
まあだからって止まる訳には行かないから、走ってるけどね。

（でもミスったな。シクラの奴が現れた時、ちょっと安心してしまった。アイツは敵なのに）

タイミングが良すぎたな。ホント一瞬もうダメだって思ったから、アイツの存在が大きく膨らんだ。僕は首を振ってそんな思いを振り落とす。忘れちゃいけない。アイツは敵で、絶対的に倒さないといけない存在だ。

そんな奴に仲間意識なんて持ったらやりづらくなるだけ。だって絶対に避けられない戦いがこの先にはきっとあるんだ。

もしかしたらその時の為にシクラは種を撒きに来たとも考えられる。色々と裏がある奴だし。アイツの言動だけは素直に受け取っちゃ駄目だと言い聞かせないと。

そんな事を思ってると、画面内から威勢の良い声が聞こえる。

「よ～し、捕まえた――ってプギャ！！」

変な声と共に、画面内で壁にめり込むシクラ。何やってんだこいつ。今時そんな表現ギャグでもやらないぞ。

「おい、追いついたのに遊んでんなよ。何しに出てきたんだよお前……」

「うっさい。別に遊んでる訳じゃないわよ。あのＮＰＣが急に目の前から消えたから」

「消えた？　何言ってんだお前？　ＮＰＣならそこに……」

あれ？　っと僕は思う。画面には建物の壁があるけど、その向こう側にＮＰＣジェロワさんの姿がある。重なりあう様にだ。これって……

「まさか例の通路？　人を食うとかいうそれ？」
「そうっぽいな」

通りから二・三本外れた路地。画面では建物になってるこの場所には、リアルでは確かに通路がある。流石に掲示板で攻略法が出回ったせいで無人って訳じゃないけど、そこは関係無いだろう。
だってこれは、今の所僕だけのルートだろうから。

「お前は来れないんだから、どっかで暇でも潰してろ」

僕は壁から出てきてるシクラにそう言ってやる。ブリームス側にいるシクラじゃ、迷わない限りこの通路には入る事は出来ないだろうし。

「ふっふ私を舐めないでよね。この程度の障害なんて私にとっては余裕なんだから☆　ちょっと待っててよ」

そう言って画面内でウインドウを出すシクラ。ハッキングでも始める気かこいつ？　まあシクラならやれそうだけど、けどジェロワさんを見るとそんな待っとく時間も無いんだよね。制限時間あるし、あと十秒だよ。

「まっ、急がなくていいさ。ここまでやってくれたから……まあその、助かった。失敗したけど、実はお前が出てきた時ちょっと安心した。不本意だけどな。
お前は敵だけど、今だけは協力関係だから礼を言うんだぞ！」

ちょっと恥ずかしく成りながら僕はそう言った。なんか超恥ずかしい。今だけは一応礼を言ってやろうと変な気を回したのが駄目だった。

慣れないことはするものじゃないな。

「ふふ、それってツンデレ？　かぁいいスオウ☆」

「うるせぇ」

こうやってからかわれるだけ。僕は恥ずかしさを隠す様に、さっさと通路に進む。画面に出るエラーの文字。それを気にせず進み、残り三秒位の所で、立ち止まってるジェロワさんの至近距離でタッチ。

するとようやくジェロワさんの声が聞けた。

『な……これってまさか……人食い通路？　嘘、何で私が！？』

怯えた様な声と共に、フラリと倒れ込んでくるジェロワさん。するとドンとぶつかる様な音とスマホのバイブが発動して、ジェロワさんは僕の存在に気づいた様だった。

『あ……あぁぁぁ

『何よそれ。三十路の女なんて興味ないでしょ？　どうせ私は行き遅れた女（笑）よ！！』

自分で（笑）を付けるあたり、かなり根に持ってるね。だからあの選択肢は止めた方が良かったんだ。けど、あそこであの選択肢を選んでないとここには来れてない？　まあ確かめる術が無いわけだけど、これだけ走らされちゃ、素直に良かったと思えない。

もっと楽なルートは無かったのかって考えてしまう。

『あははは、そうだ。もしかしたらこれって私にとってのチャンスなのかも。人食い通路は異次元のへの入り口。私の王子様は別の世界に居るって言う啓示じゃない？』

お～い、なんか危ない想像を膨らませてるぞこの人。ヤバいな三十路って事が彼女を想像以上に追いつめてる。いや、三十路だけじゃなく幸せな未来が想像出来ないってのもあるんだろうな。

僕たちは僕たちの都合で、この人の幻想の時間を打ち砕いた訳だしね。

『貴方は三十路嫌いな様だし、私は異世界に希望を見いだすわ』

「別に嫌いとは言ってないけど……この人、随分勝手に話を進めていくな」

まあそれがイベントというもの。僕はこの人の乾ききった恋愛にいつまで付き合えばいいのやら。

『さぁ！　私をどことも知れない世界へ連れて行きなさい！！　さぁ！！』

そう言ってジェロワさんは通路の中央付近で大きく手を広げる。なんかやけくそ気味だね。さて一体どうなるのやら。僕はなんとは無しに上を見る。

ここも例の通路なら、宝箱が浮いてるんだろうな～とか思ったからね。すると案の定、やっぱりあった。スマホをジェロワさんの上方へ向けると、宙に浮く宝箱がある。

無言で佇むその箱。けど次の瞬間予想掛け無い事が起きる。なんと宝箱が軽快な音と共に、鍵を外す音が聞こえた。カチャって鳴ったよ。そして白い煙を下に垂れ流しながら開いてく。

「まさか……これでアイテムゲットか？」

僕はちょっと拍子抜けしたようにそう呟く。その時、周りから「おお」ってな声が聞こえる。周りにちょっと居る同類の人たちにもこの光景は見えてる様だ。

触っても開かなかった箱が遂に開いてるんだ。そりゃ声も出るよな。一体その中身は何？　そんな期待に胸を膨らませる一同。

『宝箱……確かに報告通りね。これが異世界への扉なの？』

そんな言葉を呟いたジェロワさん。すると不意にウインドウを出した彼女は何かをしたため始めた。僕は一度彼女をタッチしてみる。

『何してるかって？　レポートよ。今自分に起きてる現象を綴っとこうかと思って』

なるほどね。流石は研究者。こういう時でも色々と実は考えてるんだ。そんな事をしてる間に、宝箱は大きく口を開く。けど煙ばかり出てて中身はわかんないな。

『さて、ここからが本番ね。巻き込まれるかも知れないから、貴方は下がってた方が身のためですよ。ここまで追いかけて来たのは無駄でしたね。
私は手の届かない行きます。こんな世界に未練なんて無いですから』

ふふ、あはははははは！！　と高笑いまでしだす始末。ヤバいなこの人相当病んでるよ。僕がそんな事を思ってると、いつの間にか画面内に「押し倒す」って項目がデカデカと出てた。
いやいや、おかしいだろ。一体どこで欲情したの僕？　そんな事を考えてると、五・四・三・二・一……と減っていく秒数が目に入る。僕は訳が分からないまま、秒数に急かされて画面をタップしてた。
するとその瞬間、ジェロワさんが前方に押される。そして画面内に何かが落ちてきた――様な？　ズンと言う音と、粉塵が僅かに漂ってる。

「何だ？」

スマホの小さな画面じゃ何が起きてるか把握しづらい。とにかくジェロワさんを押し倒したのは正解って事で良いのかな？
てか、この位置から落ちてくる物って一つしか無くないか？

『ちょ……何をするのよいきなり』

そんな文句を言いながらジェロワさんは立ち上がる。彼女がさっきまで居た場所にはやっぱりだけど宝箱が落ちてる。どういう事なんだ？　なんでいきなり落ちてきた？
人を食う通路じゃなく、実際に人を食ってたのはこの宝箱って事か？　僕は地面にめりこんでる宝箱に近づいて覗き込む。するとそ

の中身がちょっと見えるような……なんだか透明な球体状の物が見える。
水晶玉？　けど、その中に建物がある様にもみえる。これが手には入るアイテム？　僕は指を伸ばす。自分から開けてくれてるんだ、もしかしたら手には入るかも――そんな思いに駆り立てられても仕方ないよね。だけど触れた瞬間、拒否を示すかの様にバクンと蓋が閉じられた。そして奇妙な動きでジェロワさんの方へ迫る。
画面内には、両端に、「右か！？」「左か！？」とまた五・四・三と減っていく数字。おいおいこんなのに正解なんてあるのかよ。
取り合えず右を選択。するとジェロワさんを右側に引っ張った……みたいな感じだった。どうやら避けれたみたいだ。

『興味深い現象ね』

そんな事言ってる場合か。何なんだ？　何なんだあれ？　ただの宝箱じゃなかったのかよ。襲ってくるとか、前にちょっと想像した通りの状況じゃないか。
こっちじゃどうやっても戦えないのに、どうするんだこれ？　そんな事を考えてる間にも、画面内には秒数と共に、右・左が何度も出てくる。
実際全て適当に選んでた。二・三回連続して避けれると、別にどっち選んでも同じなんじゃないか？　とか思って、選び忘れてると、スマホが強くバイブする。どうやら直撃したようだ。
するといつの間にか画面の下部に出てた細長い棒が半分くらいに成って点滅しだしてる。

「まさかこれってＨＰか？」

このペースで減ったら後一回当たると死ぬっぽいぞ。難易度高くない？　てか、実際リアルでも箱の動きに併せて回避行動を取って

るわけだから、もうなんか周りの目が痛い。
ここに居る人たちは分かってくれてるだろうけど、何も知らない人が見たら路上で忍者ごっこでもしてるのかと思うわれる様な動きだよ。
でもそうしないと、箱が画面外に行っちゃうんだ。そうしたら流石に不味いだろ。一応はちゃんと見て、どっちに避けるか決めてるんだしな。
だけど次第に、ジェロワさんの運動神経のなさっぷりが露呈しだしてきた。しかもこの人、人の言うこと聞かない。
右を選択したのに、一人で逆側行くし、転げるしつまずくし、あの足の速さは何だったんだと言いたい。実はこっちが人混みに手こずってただけかだったと言うことか？
でもこれは仕様なんだろうな。僕たちは順調に追いつめられて行ってるよ。ある意味、逃げきれない様にするための工作と思えるもん。
そして途中から気づいたけど、これは多分押すタイミングだな。右か左かなんてどっちでも多分良い。だってどっちか選んでれば、必ず避けれるし、一度僅かにカスった事があったのを考えると、きっとタイミングだろ。
そんな事を考察してる間に、僕たちは壁際まで追いつめられた。するとジェロワさんが僕を庇うようにこう言った。

『私は、違う世界に行きたいんだから良いのよ！　貴方だけでも逃げなさい！』

そしてここで再び選択肢が出てきた。それは今までで一番簡単な選択肢。逃げるか逃げないかの二択。こんなの決まりきってる事だろう。

『なんで……どうして……三十路は嫌い何でしょ？』

「別に嫌いなんて言った覚えはない」
『（笑）の癖……に！』

涙を溜めてそう言ったジェロワさん。涙がキラキラと舞ってた。そして実際、別に会話に成ってる訳じゃないよ。何となく僕が言った言葉に、丁度良い言葉が続いただけです。

回転しながら箱が迫る。目の前に来たとき、再びグワァバっと蓋が大きく開く。僕ごと飲み込む気――そんな感じの開き方。

多い被さる様に迫る箱。だけどそこで突然ピタリと箱の動きが止まった。

『な、何？　どうしたの？』

そんな言葉が聞こえるけど、僕には答える術がない。別に選択肢も出てないし……けどその時、不意にスマホが振動した。メール？

だけどなんかおかしいメールだ。なんか画面の端にメールの受信の告知が来てる訳だけど……今まで秋徒とかのメールを受信したときは、こんなの出なかったぞ。

僕はいぶかしみながら、メールを開く。するとそこにはこんな文章が書いてあったよ。

【やったぜ！　第二研究所の奴らに一泡吹かせたぞ！】

それはバカラさんからのメールらしい。そう言えば、第二研究所の実験を妨害するとか言ってたね。でも……このタイミングはもしかして何か関係が？

そんな思いが募る。確かバカラさんは研究所がアイテムを探す為にしてる実験が、アイテム自身に影響を与えてると考えてた。

まさか本当にそうだったのか？　そして次第にエラーの文字が画面一杯に広がっていく。画面内が曇ってくようなぼやけていくよう

な……そんな感じ。

白煙で真っ白になった画面。エラーの文字も落ち着いて次第に鮮明に成っていく画面内のブリームス。そこにはさっきまで大口を開けてた宝箱はいなくなってる。

そして直ぐ横に居たはずのジェロワさんまでも消えてた。まさか……食われた？　あの煙の最中、それが起きてたら僕のやってたことは無駄じゃないか？

でも他に考えれる事が……そう思ってると、後ろからメカブの声が聞こえた。

「お～い、こっちに居るわよジェロワさん」

な……に？　いつのまにこの通りを出たんだ？　いや、よく考えたら、ここに入れたのがおかしい筈なのか。ブリームスには存在してないんだし、彼女はこの通路から弾き出されたのかも知れない。

僕も早速通りを出ることに。その際、一目宝箱を確認。どうやら静かに元の場所に戻ってるみたいだ。空中に静かに佇んでるよ。

『追い出された？　そうだ！　大丈夫？』

僕がタッチするとすぐさまそんな反応を示すジェロワさん。どうやら（笑）の事は忘れたようだね。まあ箱に襲われるという体験は、なかなかにショッキングだったからしょうがない。

それにどうやら印象悪かっただけに、株は軒並み上がったようだ。分かりやすい様に、ジェロワさんのテンションの上がりようが顔で分かる。

なんかわざわざキラキラさせてるもん。無駄な所で容量使ってるな。

「ねえ宝箱に襲われたって本当？」

僕がジェロワさんにタッチして会話を進めてると、メカブがそんな事を聞いてくる。てか、なんで知ってるんだ？

「例の掲示板に書き込まれてたわよ。ご丁寧に逐一更新してくれてた」

「へぇ～、またあの掲示板か。ああだからここまでこれたわけかメカブは？」

どこにどこまで走るかなんてわかんなかったのに、結構早く追いついてきてるもんな。だけどそんな僕の言葉を否定して、メカブは二台の内の一台のスマホを見せつける。

「違うわよ。スレが反応したのは二人があの通路に揃ってからのちょっと後。私はその前からちゃんとここを目指してたわ」

「どうやって？」

「あのね無限の蔵、ＧＰＳって分かる？」

バカにしてるのかこいつ。ＧＰＳ位、今を生きてれば知らないわけ無いだろ。なんか前にも同じ様な事でバカにされたような気が……つまりはそれで僕の位置を特定したって事か。

「そういうこと。フレンドの位置情報を表示する機能あるでしょ」

そういえばあったかもねそんなもの。プライバシーが無くなりそうだな。

「で、この人が通路に食われなかったって事は、上手く行ったのよね？」

「上手く行ったかどうかはわかんないけど、まあやれることはやったな。だから僕はこれで良いと信じるしかない」

取り合えず画面の中のジェロワさんは異世界に行かなくても機嫌良さそうだし、良かったんじゃないかなとは思う。

色々とノロケが一通り終わると、不意にさっきの事を思い出す風に顎に手を乗せて、こういうジェロワさん。

『けど、どうしてあの箱は止まったのかしら？』

そこで画面にはメールの事を伝える様な選択肢が出てくる。取り合えずポチリとな。

『そっか第二の奴ら、格下の癖に実験なんて図々しい。でもその人の意見は面白いかも。確かにうちも第二も最近は本気でアイテム探しの為の研究してるから……それの影響か。

確かにそれなら、この人が実験を潰したと同時に、箱が止まったのも説明つくかも』

やっぱり三十路でも研究者。興味があることは考えずにはいられない。でもここで気付いた様にジェロワさんはこんな事を言う。

『あっでも何でこんな事……それにこのメールの人との関係とか……あのこれは国家機密で』

ここで再び選択肢が現れた。これはここで決めろと言うことか？

メカブもそれを見て、同じ意見なのか何も言わずに親指を立てる。

好感度を下げたり上げたり、それも全部このための複線だったらしいな。僕は彼女に向かってこう言った。

「本当の事言うよ。僕には必要なんだ、アイテムと……そして君が！！」

ジェロワさんは二つ返事で「はい」と言ってくれた。

異世界は逃げ場じゃない（後書き）

第二百六十話です。
とうとうジェロワさんを落としましたね。そろそろスオウにはプレイボーイの称号を与えてもいいかもしれないです。冗談ですけど。流石にプレイボーイにはまだまだですよね。
これでジェロワさんからの協力を得られれば大きく進展するはず。レアアイテムは直ぐそこだ！！
ってことで、次回は木曜日に上げます。ではでは。

女の意地（前書き）

僕達はジェロワさんの協力を取り付けて、イベントは核心部分へと近づいていく。ついに拝めるのは大地研究所の機密――そのはずだった。だけど何故かバレたジェロワさんの裏切り。

酷い目に合う彼女を僕は助けたかった。けど……メカブが言ったとおり、女は予想以上に強かったようだ。

女の意地

「ふう、なんて今日の自分みたいな天気だ」

空にビルと同じ位に高く、それかもっともっと大きく聳える入道雲がある。今の季節は、こんな都会の中でも、ちょっとした緑が眩しいくらいに鮮明で、少しは見習いたい程、その姿は生き生きしてた。

太陽は、天辺を過ぎても順調に地球を焼いてる様だし、今日も世界は事も投げに暑い。ちょっとは日本の伝統を取り入れたい風流な店は無いのかね。

どこもかしこ音楽をバンバン垂れ流しやがって……チリンチリ〜〜ンとしたアレを聞きたいよ。アスファルト天国な混沌の街で、混沌とするイベントなんかやるから、ただの暑さと変な熱が入り乱れちゃってるんだ。

「はぁ」

僕はタオルで汗を拭き拭きしつつ、ため息が漏れた。もうホント、なんて言うかそろそろ終われ。マジでやる時期を間違えてると思う。

後少しまって緑色の葉っぱが色づき地面を所々彩る位なら、散策気分で楽しめたと思う。でもさ、今の時期はそうも行かないよ。五分もしないうちに、人の間欠泉は全快に成るような日差しなんだもん。

「ため息とかやめてよ。それに自分みたいって＝暑苦しいとか？大層な愛の告白だったじゃない」

プププと僕を明らかにカラカいたい……そんな分かりきった目で見てくるメカブ。こいつの言う愛の告白って、アレだよ、僕がコイツに愛を語った訳じゃないよ。
愛に植えた三十路の人に、僕は大きな愛を与えただけ。でもそのおかげでようやく確信へと至る事が出来そうでもある。
僕たちはついに国家お抱えの機関の情報を手にする事が出来るのだ。勘の言い方はお気づきだろうが、僕は女の人の心を弄ぶ、悪い奴に成ってしまったのだ。

「まあでも良いんじゃない？　無限の蔵には引っ張ってって言ってくれる感じのお姉さん系が似合うと思うよ。幸せになってね」

なんかやけにニコニコしながらそんな事を言うメカブ。お姉さん系ね。ジェロワさんってあんまりそんな感じはしなかったけど。
最初にあった時点ではまだ大人びた印象もちゃんとした清潔感のあるイメージもあったけどさ、ついさっきなんかはもう、浮かれすぎ感が全快だった。
まあ、僕のせいだけど……いや、イベントの展開のせいだな。僕はただアイテムを手に入れるのに必死なだけだ。
あれから第二研究所まで行き、そこでジェロワさんが第一研究員の権利を使っての情報収集。そして再び駅まで戻り、今度は第一でのこれまでの研究との情報統合でアイテムを見つける。
遂にここまできたわけだ。

「そろそろだよな、ゴールは？」
「一個でゴールにするの？　貴重なのは三つあるみたいじゃない」
「三つなんてそんな贅沢言えるかよ。一つで十分」

てか一つが限界。時間的にも、これだけ一個で掛かってるんじゃ、残りの二つなんて無理すぎるだろ。

「まあ確かに。けどね無限の蔵、無理だと思った瞬間から、ゴールには届かなく成るのよ。一パーセントの可能性があれば追いかけるのが無限の蔵でしょ？」
「どこの熱血漢だよそれは」

今時のマンガでもそれだけ暑苦しい奴は出てこないぞ。それに僕はクールを売りにしたい年頃だ。周りが騒ぐ中で、一人冷静さを装って自分の中でカッケーって思いたい感じなの。
だからそんな熱い人はしらんな。

「ＬＲＯでの無限の蔵はこんな感じだって聞いてる」
「ＬＲＯとリアルは違うんだよ」

そんな風に僕が言うとメカブはイタズラな笑みを浮かべてこう言った。

「そんなに変わらないでしょ？　てか、一番リアルとＬＲＯとの壁の薄い部分に居るのは君でしょ？」
「うぅ……」

言い返せないな。確かに薄い部分をなんとか渡ってる感じだし、落っこちたらリアルと同じ死が待ってそうな雰囲気なんだよ。
ＬＲＯとリアルの境は確かに、徐々に僕には薄く成ってるのかも。僕は横目でメカブを見る。コイツ本当に誰なんだろう？
僕の事を知ってるようで、だけど所々初めて感がちょっとあるような……まあそれはリアルで会うのが初めてだって仮定すれば、誰でもそうなんだけど。
もしかしたらセラやリルレットとか全く関係無い人なのかな？ちょっとそんな気がしてきたかも。でもそれじゃあ疑問も残る。

メカブは僕のＬＲＯでのＩＤ知ってた訳だし、それを元に僕がスオウだと分かってコンタクトしてきた訳だろ？　それなら向こうでの知り合いの誰かでしか無い筈なんだ。
てか、そうじゃなかったら情報漏洩だろ。でもＬＲＯは天才が作った世界一強固なセキュリティで守られてるって聞いたし、流石にそれは無い様な気がする。
だってやっぱり当夜さんってガチで天才なんだな～って最近思うもん。ＬＲＯこんな事まで出来て凄すぎ。実際このイベントはＬＲＯ事態をやってなくても参加出来る様だし、ＬＲＯの片鱗にでも触れて興味が出たら本物へ……とかそう言う狙いだって絶対にあるよ。

「ねえ無限の蔵、実際どんな感じなのＬＲＯで血がどばって出るのって？」
「いやな事を聞く奴だな」

そもそもそんな事聞いてどうするんだよ。それって興味を持つところか？

「だって気になるじゃない。私たちも痛みはあるけど、それって一瞬でしかも鈍い感じだし……血まで吐いちゃう無限の蔵ってそこら辺はどうなってるのかなって」
「どうって言われても、あんまりそこら辺の感覚は覚えてないかも。痛いは痛いけど、腹を貫かれても死ななかったし、リアルな痛みじゃやっぱ無いんだろうな。
僕の命はＨＰに依存してるみたいだし、だけど血なんて見えない方が幸せだよ。あんなの大量に流れ出てたら、幾らＬＲＯと分かってても死ぬんじゃね？　位思う」

実際ＬＲＯってもっと殺伐としてててもオカシくないじゃん。けど、あんなに長閑で居心地よくなってるのは、血を表現してないからだ

とも僕は思う。
だってＬＲＯでモンスター相手にしてたら、傷つかない方が珍しいし、本当なら血で地面が赤い……なんて事もあってオカシくないよ。
そうなったらみんなちょっと怖い感じなりそうじゃん。血っていつまでも見てると変な感覚に陥るんだよね。それが自分のでも他人のでも……あの真っ赤な色とかさ、絶対に人を狂わす何かがあると思う。
だから血を表現しないのは大いに大正解だよ。
「まあ私も血を積極的にみたいとは思わないわね。それにお気に入りの装備が血で汚れるとかイヤじゃない。あっ、ねえ無限の蔵。ＬＲＯの装備って見た目と防御力があんまり吊り合ってないと思わない？」
何を言い出すんだコイツ？　暇なのか？　血の次は装備かよ。確かに今はジェロワさんも第一の方行って、戻ってくるの待ちの状態だけどさ、何が起こるともわからないんだぞ。
なんてたって一応これもＬＲＯだからな。
「そうだけど、ただじっとしてたんじゃこの暑さにやられるわ。ねぇねぇだから、もの凄く仰々しい、それこそ騎士が来てる様な鎧に匹敵するみたいなメイド服ってオカシくない？」
僕はその瞬間ズルッと行きかけた。これは痛恨のミスでは無いだろうか？　何故にここでメイド服。そんな物を着るのはＬＲＯでも限られてるぞ。僕が知る限り、ある王国の一つの部署くらい。
さもメイド服が一般的みたいな言い方するなんて、こいつやっぱりセ――

『ちょっとやめてよ！』
「ん？」
――スマホから聞こえたそんな声に目を向ける。これは確かにジェロワさんの声。僕はヨドバシの入り口へとスマホのカメラを向けた。
人の出入りが頻繁に行われてるその場所。だけどブリームスではそうじゃないその場所で、数人の同じローブを来た人たちに締め出しを食らってるジェロワさんが見える。
どんなヘマをやらかしたんだあの人。
「――って、ん！？」
僕はその瞬間思わず、画面内を覗き込む。なんか見覚えのある顔がＮＰＣとして登場してる様な……
「ねえ、あれってハゲじゃない？　なんであそこから出てくるのよ」
僕と同じ様に画面を見てたメカブがそんな事を言う。そうあれはハゲだ。今日何度も対立してるヤクザ。だけどまだ関係あるとは……てかＮＰＣな訳ないな。
「いや、ただ出てきただけかも知れない。変に関連づけるのは良くない事だ」
「けど……なんかボスっぽいＮＰＣの斜め後ろについてない？　携帯かざしたまま動く気配ないわよ」
「それはまあ……確かに」
なんかイヤな予感がするな。完全に第一側についてる構図に見えるんですけど。僕達は取り合えず画面を凝視した。

『何でこんな事……』
『ジェロワ君、君には失望したよ。あれだけ可愛がってあげたのに、ミスを犯すとは』
『ミス？』
『ああ、大きなミスだよ。私という者がありながら、その心はどこにあるかね？　ん？　君の持ちだそうとしてた資料は何かね？　それをどうしようと！？』

どうやら、ジェロワさんを罵ってる奴が、不倫相手みたいだな。すっげぇ性格悪そうだ。

『私……は』

俯き弱々しくそう呟くジョロワさん。なんか見てて痛々しいぞ。

『ふん、浅ましい女だな。三十路になっても男を知らないと、そうなるのか？』

唇を噛む……そんな様が僕には見えた。胸くそ悪い。どうにかしてあのクソ野郎を殴る術はないか考えた。するとそんな思いを受け取って――って訳じゃないだろうけど、ここで画面には願ってもない選択が出てきた。
それは「助けに行く」「堪える」の二択。猶予時間は三十秒と意外と長い。でも僕は一瞬で決断してた。だって堪えてどうなるよ。
例えこの小さな画面の中で繰り広げられてる事がただの虚構でもさ、自分がどうにか出来るのなら、どうにかしたいだろ。
てか、悲劇を回避するために自分が立てる。それがゲームの醍醐味じゃん。これは小さい事だろうけど、あんな最低野郎にボロクソ言われてる彼女を助けない理由なんて無い！

僕の指は「助ける」に迷わず伸びる。けどそこで横から僕の指を掴むメカブ。

「何だよ？　なんで止める？」

「ダメだよ。あの人はまだ泣いてない。きっとまだ頑張れる。女の執念は怖いのよ」

何言ってるんだコイツ？　執念とか今はどうでも良いことだろ。だけどメカブは離してくれない。

「無限の蔵に良いことを教えてあげるわ。いつでもどこでもどんな状況でも、自分が助ける事が正解とは限らない」

「！」

なんだその意味深な言葉。僕がその意味を頭で考えてる間に、掴んだ腕を動かて隣の選択肢をポチリするメカブ。気付いたときには遅かったよ。

「ああ！　おまっ……なんて事！」

「大丈夫。これは同じ女だから分かることよ」

なんでそう自信満々に言えるのか僕には理解できない。別にそんな……女の人が弱いなんて偏見は持ち合わせちゃいないけど、でも男が女を助けるのは当然だとは思ってるぞ。

そういう奴でありたいだろ。

「はいはい、自分に酔うのはそのくらいでいいよ～」

「酔ってねぇよ！」

失礼な事を言う奴だな全く。まあ今更なに言ったって選択は戻れ

ないから、どうすることも出来ない。ここはメカブの女の勘って奴を信じるしかない。

『私は……遊ばれてただけ……』

『今更何を。家族を捨てれる訳ないだろ。私はな、気楽な独り身とは違うのだよ。たく、自分の勝手な問題を私には押しつけるな。本気にするなよ。重いんだよ君は』

僕は出来る限り画面の中のクソ野郎をグリグリする。だけど当然そんなのノーダメージだ。本当にこれで良かったのか？　そんな思いが増していく。

そしてまだ得意気にペラペラとクズは喋り続ける。

『だけど感謝はしてほしいな。誰も相手にしない君を慰めてたのは私だよ。それだけで感謝すべき事なんだ。それをよりに寄って裏切るような……私は悲しいよ。

行き遅れた女の相手をした結果がこれじゃあね。取り合えず君はクビだ。二度と私の目の前に現れないでくれたまえ』

一回二回殺した程度じゃ足りないなこの野郎。マジでそう思う。完全にこのままバッドエンドに直行しそうな雰囲気なんだけど……ジェロワさん何も言い返さないし。これじゃ余りにも彼女が不憫だよ。

『私は……私は……私……は！！』

背中を向けたクソ野郎。その時画面に現れたそんな言葉。隣でメカブが何故かグッと拳を握る。

『本気だったのよ！！　それの何が悪い！！　裏切ったのはアンタ

じゃないいいいいい！！』
『うお！？　貴様！』

キレたジェロワさんがクズに飛びかかった。よっしゃああやったれええ！！　と思ったね。だけど周りに居た同研究員に引きはがされる。

『くっそ、これだから女は……』
『うるさい！　うるさい！　うるさい！　行き遅れて悪かったわね！！　ちょっと優しくされたら誰にでも惚れて悪かったわね！！』

両腕を捕まれたままわめき散らしてる三十路の女。ちょっとこっちが悲しくなるのは何でだろう。いや、でももう行っちゃえ！　いけるところまで。てかどうにかしてあのクズを殴り倒してほしい。
そう思ってると画面から『イテ！』『うわ！？』とかの声が聞こえた。どうやらジェロワさんは噛みついたらしい。それで拘束を解いてもう一度クズへと突撃。
勢いついでに押し倒す。

『遊ばれた私が悪いの！？　本気で恋した私がバカなの！？　やっちゃいけない関係だって分かってた！！　それでも……信じていいって言ったのはアンタでしょ！！』

胸ぐらを掴んで地面にガンガン打ちつける彼女は結構なバイオレンス具合だ。
いいぞ、もっとやれ。

『やっやめ……ろ！！　私を揺さぶるな！！』
『やめない！　やめれるか！！　一言くらい謝りなさいよ！』
『謝るだと？　ふざけるな！　良い夢見せてやっただろうが！』

揺さぶられながらもまだ強気にクズはゲスな言葉を吐く。筋金入りだなあれは。

『お前はどうせ、今の男にだって騙されてるんだよ！　お前を本気で愛する奴なんているかばバ～～カ！！』

『そんなこと……そんな事ないわよ！！』

酷い言葉に必死に食いかかるジェロワさん。だけどそれは胸が痛いやりとりだ。実際僕達だって彼女を良いように利用してるのは事実だからな。

ゲームのキャラなんだから深く考えなくても良いんだろうけど、良い気はしない。よくよく考えたら僕達って実はあのクズと同じじゃないか。

そうこうしてる間に、ジェロワさんは復活した同研究員の一人に髪を強引に掴まれ後ろに投げ捨てられる。地面に背中を強打して悶絶するジェロワさん。

そしてそんな彼女に覆い被さる様に二人の研究員が迫ってる。

『やってくれたなジェロワ！　所長、俺たちが所長の分まで可愛がって良いですか？　ちょっとコイツにはお灸が必要でしょう。それに色々と知りすぎですし。

こうなったら無理矢理懐柔させるのも手かと』

なんだかヤバい雰囲気になってきたぞ。これはどこのエロゲームの展開だ？　ジェロワさん大ピンチ！！

「おいこれは流石に助けない訳には行かないぞ」

「う～ん、まあ女の子には限界があるしね。流石に大の大人三人には勝てないよね。けど助けるにしてもどうやって……」

僕達は狭い画面を二人で眺めて選択肢でも出ないか期待する。けど今回は気持ちに同調したような選択肢は現れない。
やっぱバッドエンド直行じゃねーか！

『やめろ！　触るな！！』

そんなか弱い声が漏れ聞こえる。ああ、このままじゃジェロワさんに癒えない傷が付いてしまう。なのに僕達には何も出来ない。
どうしてここで選択肢が来ないんだ！　こうなれば画面に見えない所に居るであろうシクラ動かしてでも……そう思うけどでも、それはやっちゃいけない事だろう。
だってこれがイベントに元から入ってるプログラムの一つの筈だ。余計なイレギュラーはこの真新しいアプリ自体に不味い影響を与えかねない。
今だってシクラの奴が無駄に要領を掛けて圧迫してるだろうし、ストレスになることは避けたいよな。ＬＲＯみたいに一斉に落ちたら、ここまでの苦労も水の泡。
僕達だけじゃない、沢山の人が今日という日に、このアキバに集まった意味が消えるよ。

『はは、いい眺めだな。確かにそうだな……お前達やるならもっと人目に付かない所でしろ。ここは誇り高い第一研究所だぞ』
『くっ！』

遠くから眺めてる僕達にでも分かる絶体絶命具合。てかこの所長、マジで鬼畜だろ。そこは止めろよ。

『なあジェロワ。今から私の所に戻ってくるのなら、まだ待遇を考えてやるぞ。今までの関係を続けてもやるよ。ここの研究員の肩書

きを捨てるのも惜しいだろ。
お前は頭が良いから分かるだろう？　合理的に考えてみろ』

研究員の中央を陣取って、ジェロワさんに顔を寄せてそう言うクズ。これで彼女が受け入れないなら、両隣の研究員が酷いことをやるんだな。

「これ、流石にこのままの流れで行かないわよね？」

流石に不安がってメカブもそんな事を聞いてくる。だけどそんなのわかんない。わかんないけど……

「ＬＲＯがそこまでするとは思わない。思いたくない。何とかなる、これはまだ純粋なゲームの筈だから」

僕は自分に言い聞かせるようにそう言った。まだシクラに頼らないのはそう言うことだ。このイベントは今ＬＲＯ内で起こってる事とは違って、人の手で管理がされてる筈だろう。
それなら十八禁の様な内容をするわけはない。そんな期待と言うか願いが僕にはある。
汚らしい顔を近寄らせてるクズ。

『ほら、どうした。答えは簡単だろ？』

そんな事をクックとイヤな笑いをしながら言ってる。押さえつけられたジェロワさんは、そんなクズへ向かって『簡単ね』そう呟く。そして次の瞬間、おもいっきり力一杯に頭を上げて額を近づいてたクズの鼻っ柱にぶち込んだ。

『ぶっ！？　ぎゃあああああああああああ！！』

断末魔の叫びが響く。鼻が潰れた音が聞こえるほどに、綺麗に入ってた。余裕をぶっこいてた分、ダメージは大きそうだ。地面を転がる所長を部下の一人が拘束を解いて歩み寄る。

『それが答えよ！！　アンタに捧げる体も心も、私にはもう一ミリもないわ！！』

格好良い宣言。キッパリとジェロワさんはそう言いきった。

『あっ……あっ……このくそアマァァァアアァァ！！』

そしてパンと乾いた音が連続で響く。次にドス、ボコとした鈍い音。完全に頭が弾けたクズがジェロワさんを押し倒して殴る蹴るの暴行三昧。

これには流石に部下の二人もどん引きだ。ジェロワさんは暴行を受けてる間、体を丸めて何かを守る様にしてた。

そして結局選択肢は一度も現れなかった。

『はぁはぁはぁ……お前の研究者としての道を終わらせてやる！！

私に逆らう事がどういう事か、思い知るといい！！』

そう言って部下を引き連れて中へと戻ろうとするクズ。

『私は……私を必要としてくれる人の為に研究をする……そこには認めてくれる人は一人で良い。世間体もデッカい施設だって……そんなのいらないわ。

私は誰かの為に、役に立つ研究をしたいんだもの。貴方とは……違うのよ』

纏うローブも服も顔も体も全部ボロボロで、なのに最後にそう言った彼女は格好良かった。そう思う。だけどそこで再びクズが狂ったような笑いを上げる。きっと心底苛ついてるんだろう。

『くっくくくはははははは！！　綺麗事だなそれは。落ちる所まで落ちて絶望を知ろ！　我らは新しい協力者も得たし、遂にこの地に眠る三つの秘宝を手に入れに行くとするよ！！　ハァーッハハッハハハ！！』

画面内にでクズが高笑いをする中、こちらにハゲが歩いてくる。そして真っ正面に立ちこう言った。

「追いついたぞ。さあ最後の競争と行こうじゃんねーか！」

どうやらマジで、こいつは第一側についてるらしい

女の意地（後書き）

第二百六十一話です。
今回は頑張る三十路女の話でしたね。彼女の頑張りは決して無駄になりません。きっと良い出会いがあることを願っててください。
まあゲームのキャラだし、このイベント限定の場所のブリームスがこの後もあるのかは謎ですけどね。
次回はハゲ達と激突しながらアイテムを求める事に……なるかな？
まあ取り敢えず次回は土曜日に上げます。ではでは。

本物と偽物の隔たり（前書き）

ジェロワさんは頑張った。頑張って頑張って、だけどボロボロになって戻ってきただけ……そう思ってた。けどそれは違ったんだ。メカブが言ったように彼女は戦ったんだ。

昔の馬鹿な自分とか、許せないクズとかとさ。そしてその結果彼女は傷を一杯負ったのかも知れない。でもそれでも、戻ってきた彼女は誇らしげに笑って、取り返した物を掲げてくれた。

本物と偽物の隔たり

「楽しみだな。逆の展開になるとは思わなかったが、これはこれでいい。張り合いが出て」
「アンタ……いや、アイテムを手にするのは僕たちだ」

向けられたその眼差しに、僕はいろんな事を飲み込んでそう言った。ここまで来たんだ、今更何を言うことがあるよ。
こいつは別のルートを辿って向こう側についたって事だろ。無数のルート、選択者分の物語。全員が主役。それがＬＲＯだろ。
自分たちの物語を紡ぐ事が出来る圧倒的なボリューム。ＬＲＯ本体自体は、ボリュームなんて言葉じゃ済みそうもないけど、まあそう言うことだろ。
僕たちはそれぞれの物語で常に、他人と競うことがある。そう言う事だ。だから別に驚くことでもない。まだ他に、別のルートでこの位置まで来てる奴がいたっておかしくないしな。
ようは誰にも負けない……その気持ちがあれば良いんだろ。

「はは、良い気概だ。だが、もしも手にしたときは前に言ったことも覚えておけ。まあ無駄になるだろうがな。そろそろ怖じ気づけ一般人」

頭をビカビカに光らせてとうとう脅しに来たのかこのハゲは？
けど実際んな怖いと思わない。それは僕が慣れたって訳じゃなく、このハゲの場合は見た目はそんなに怖くない。
どうみても危なさを隠してるし、ハゲは実際年相応で別にだし、サングラス微妙に合ってないし、いうなればそこらのオッサンと大差ない。メタボ気味だしな。

「そんな分かりきったこと言うなよオッサン。僕達は手にしたアイテムを金に換える気は無い。こっちの奴はともかく僕は全然な」

僕が隣のメカブを指してそう言うと、メカブの奴は不本意みたいな表情をした。だけど何も文句を言わないのは、一回買収されてるからだろう。こいつの懐には、奴らの黒そうな金が混じってる。

「まっ、こっちも悪い事言わないからそろそろこのイベントから退場しろよ社会の害悪。こっちは純粋にイベントをやってるんだ」

「俺たちもイベントを楽しんでるさ。言っただろう。この真剣さがその証。お遊び気分なんて邪魔なだけ。俺達は本気の本気だよ。だから何が何でもアイテムは手に入れる。それを邪魔するって言うなら、容赦なく踏みつぶさせて貰う」

そう言って背中を向ける。人混みの向こう側へ消え去ろうとするその背中はやけに自信に満ちてるな。ここまで僕達を追いかける形で出遅れてた癖に。

それに何が本気だよ。お前たちの本気はイベントへの取り組み具合じゃなく、金だろ。このイベントでしか手に入らないらしい三つのレアアイテム。それで金を稼ぐのが目的。そんな黒い目的が迷惑だって言ってんだよ。

「あのハゲはああ言う事を言いたい年頃なのかしら？　そう言う役所を満喫してるの？」

おいおい、身も蓋もない事いうなよメカブ。そう言う事言われると、途端にあの丸い背中が悲しく見えるじゃないか。

「お前な……あれはあのハゲの優しさか甘さかだろ。変な教示をヤ

クザの癖に持ってる奴なんだろ」

きっとね。自分が貫く信念って奴をあれはきっと持ってるよ。だからこそ、完全に嫌いって訳でも無いしな。

そう言えば今回は取り巻きの二人が居なかったな。金髪とモヒカンの二人。遂に捨てられた……とかは考えられないから、何か役割でも与えられてたか？

そんな事を考えてその背中を見てると奴が戻ったのはあのクズ所長の所。まあそうだろうけど、そのまま中へと一緒に消えていった。

そしていつの間にかジェロワさんは僕達の所まで戻ってきてた。

『お待たせしました。あはは、あんまり見ないでください。その……これは何でも無いんですよ。ちょっとトラブっただけ。

メイクを直したかったんですけど、この顔じゃそれをしても意味ないですよね』

そう言って強がって見せる辺りにちょっと胸が熱くなる。なんか無駄にボロボロ具合が演出されてるな。

『それとも十分くらい待ってくれますか？』

それは冗談なのかどうなのか……ここで「突っ込みを入れる」とかの選択肢が出てくるから訳分からん。でもここで突っ込んでやらなきゃこのボケ（と思われる）が不憫だ。

きっと頑張ってるんだろうしな。けど考えたら、何も良いことなんか無かったよな。情報は手に入らず、理不尽にぼこられて、突っ込んで貰わないとやってられないよな。

ボケは流されるのが一番辛いらしいし。だから僕は突っ込みを入れるをタッチした。

画面に『十分なんて待ってられるか。気にするな、随分女前があ

がってるよ』とか出た。何だよ女前って。男前とは言うけど女前なんて言わないだろ。

『あ……はっはははは、メイクも顔も崩れたこんな顔で女前上げちゃってもね。うん、でも……頑張ったかいはあったのかなそれなら』

そう言ってジェロワさんは何かを取り出した。どうやら彼女が言った頑張ったってのは、あの言葉や行動だけじゃなかったみたい。

その結果に手にしたこれが頑張った証。それは小さな棒状のクリスタル。ジェロワさんがそれを振ると、振った軌跡に文字が浮かぶ。

『私が持ちだそうとした情報。ぶつかった時に取り返してたんです。ふふ、今頃あのバカが嘆いてる姿が目に浮かぶわ』

この時のジェロワさんは本当に良い笑顔してた。でも確かに天晴れだ。良くやった！　そう思う。僕がそっちにいたら思わず抱きしめてやっても良いくらい。

そっかだからあんな無茶な事を……

「ほらね、女は強いでしょ？　男に使われるだけじゃないのよ」

「はは、確かに」

だから弱いなんて思ってない。でもホント、ジェロワさんは頑張ってくれた。僕達は早速情報を確認――しようとしたけど、どうやら直接は見れないらしい。

『今までの事と、これからの事を分析出来る場所は無いからしら？

第一も動き出す様だし、急いだ方がいいわ』

ボロボロなのにやけにやる気一杯なジェロワさん。ここで第四研究所を紹介する項目が出てくる。確かにあそこがそう言う事をやるにはベストだろう。

『第四研究所か……この際選り好みはしてられないわね。わかりました。そこに行きましょう』

そう言って彼女は消えた。多分第四研究所に行ったんだろう。こっちはリアルで歩かなきゃいかないのに、ズルいな全く。

てか今日だけでどんだけあの廃れたビルに行ってるんだよ僕ら。普通にアキバに買い物に来た程度じゃ絶対に目にも留まらない場所なのに……既に道順まで覚えてしまったじゃないか。

今日が終われば絶対に使わない知識だな。

「ほらもう一頑張りよ無限の蔵。私たちも第四研究所に行きましょう」

「だな」

僕はメカブに促されて足を動かし出す。なんかずっと痺れた様な痛みがあるけど、気にしない。これだけ歩いて走ってをやってればね。

でもそろそろ終わりが見えてるし、本当に後一頑張り。もうやるしかないって感じだ。そんなことを思って歩き出すと、ずっと隠れてたシクラがひょこっと姿を現した。

「まさかあそこまで彼女がボコられてたのに何もしないなんてね。ちょっと意外。私は準備万端に待ってたのに☆」

なんだこいつ、画面の見えないところでスタンバってたのか？

随分僕と言う人間をわかってるじゃないか。てかそれに協力する気

だったのが驚きだ。どうせ駄々をこねるだろうから、ツツいて言うことを聞かせようと思ってた。
それが今の状況では最高のシクラに対する手段だからね。でもわざわざ協力的だったなんて、どういう風の吹き回しだ？
「別にそろそろ身を隠してるのも面倒になったからってだけ。衝撃的にあの子に私を見せるのも面白そうじゃない☆」
「やっぱそう言う事か」
ジェロワさんに同情したとかそんなのは皆無かよ。まあ分かってたけど。
「何々？　私に善意で協力させたかった？　まさかそんなのあり得ない☆　だって私、あの光景見て声を押し殺すのに必死だったもん。お腹が捻れちゃうかもとか思ったわ」
「マジ最低だなお前」
いや、最低なのは分かってたけども……僕の想定を遙かに越える鬼畜だったことに残念だよ。こいつは確かにハチャメチャでセツリの事以外、世界さえどうでも良いと思ってる奴だけど、けどそれだって思いやりだと思ってた。
でもセツリ以外にはそんな感情すら働かないか。
「最低って言うか、私からしたら彼女の自業自得でしょ。バカな男に引っかかる女がバカなのよ。そもそも男なんて信用ならない物じゃない。
綺麗でも無いし、良い匂いにだってしない。てか臭いしムサいし。結局せっちゃんの様な美少女が最高だと思うのに分かってないよね世界って☆」
「お前の基準で世界を計るなよ。人は男女で愛し合う物なんだよ。

だからお前も十分異常だ。そう言う風に作られてるとしても、お前には心があるんだろ？　考えられるんだろ？　もっと見識でも広めろ」

美少女最高って……まあそこは否定しないけど。こいつの考えは偏り過ぎ。こいつって言うかこいつと同じ存在の姉妹がと思うけど。

よくよく考えたら、シクラと柊以外はまだ遠目で見た程度だな。考えないようにしてたんだ……あんなのがまだ四人位とかマジ最悪だからな。

「ふふん、見識って常時世界と繋がってる私よりも知識豊富な存在なんて神くらいしかいないと思うけど。まあいたらだけどね？　あれ、それじゃあ私ってもしかして神……」

なんかアホな事口走り始めたな。お遊びモードに入ってるなこいつ。真面目に考える気無い。まあ言葉程度で、こいつらの意識が変わる訳もないのも分かってるけどね。

「お前が神なわけない。結局は人から生まれたんだからな」

「蛙の子は蛙？　けど鳶が鷹を生むっても言うよね☆」

「人と神じゃ次元が違う。同じ世界に生きちゃいないだろ」

そう言うとシクラはククっと笑ってこういう。

「それなら私とスオウだって同じ世界に生きてないよ。それに人間以外の動物からしたら、全ての生き物がその生き物の世界で生きてるのよ。

神なんて者が居るとしたら、上からその世界を破壊でも創造でも出来るなら何でも良いんじゃないかな☆」

こいつ……何言って……画面の中に陰りが落ちる。その月光色の髪の彩度が落ちて、白い肌に黒い影が鮮明に見えた。

「私はねスオウ。セッちゃんをあの世界の神にしたいの」

神……それは余りにも抽象的過ぎて実際上手く受け止められない。けどこいつらがやろうとしてること、それを考えたら分からなくもない。

そんな会話をしてる内に、僕達は第四研究所前に居た。そして入り口を見上げるようにしてジェロワさんの姿がある。僕はその背中に触れる。

『ここが第四研究所……想像以上ね。こんな所でまともな研究が出来るとは思えないわ』

かなりボロクソに言われてる。まあだけど同感かも。てか実際、ここの奴らは何か研究っぽい事をやってるのかどうかすら怪しいしね。てかまた屋上まで上らないといけないのかな？　面倒なんだけど。

そんな事を思ってると、外に居た爺が大きな声で所長を呼んでくれたよ。ようやく二回目の仕事をしてくれたなじいさん。

この人最初に話しかけたときからずっと外に居るけど、イベントに関わってきたのはたった二回なんだよね。必要なのか？　って思う。

そんな事を思ってると『ご苦労だった戦士フィフティィィンよ！！』とか言うやけにテンション高めな声が聞こえてきた。

『ななな何、この人？　なんか痛いわ……見てるだけで！』

所長の声を聞いて震える声を出したジェロワさん。うん、しょうがないね。第一の所長はクズだったけどさ、第四の自称所長は痛いんだよ。中二病全快なんだよ。てか戦士フィフティィィンって……そっちの呼び方の方が自分的に格好いい事に気づいたのだろうか？
無限の蔵も相当だけど、戦士フィフティィィン！！　と延ばれるのも恥ずかしい。

『収穫は……あったようだな。そちらの三十路の方は？』
『ブン殴って良いかしらコイツ』

そうなるよね。階段から降りて来た所長は彼女を見て邂逅一番意そう言った。どんだけ失礼なんだよこの所長。人として大人としてなってないよ！　きっと中二の時点で成長が止まったんだろうな。
だけど観察眼は素晴らしい。一発でジェロワさんを三十路と見抜くとは……僕はタッチ一つでこれまでの説明を終えた。

『なるほど、概ね目的は達したわけか。ご苦労だったな戦士フィフティィィン。では早速我がラボでこれまでの情報の解析と第一研究所の奴らを出し抜く方法を探ろうではないか！』

そう言って背中を向けて階段を上がろうとする所長。けどピタリと止まってこちらを……と言うかジェロワさんを見る。

『ああそうだ。やる気はあるんだよな三十路？』
『み……三十路って言うな！！　当然でしょ！　私はあいつ等の高い鼻をへし折るんだからね』
『よし！　それならばお前を我がラボメンの一員に迎えよう！　その復習に燃えるタギるような瞳！　マッドサイエンティストの才能があるようだ』

戦士じゃなくラボメンね。それはジェロワさんが研究者だからかな？　でもマッドサイエンティストの才能って何だよ。
てか屋上以外にここで入れる所なんかあったかな？　変な店に入るのはヤなんだけど。

『私はそんなのになる気はない。それよりも変な肩書きばかり増やさないで名前覚えないさい。私はジェロワ。それにゆっくりと考察に時間を費やす暇はないわ。
既に第一の連中は動き出してる。ラボにこもるだけじゃ勝てないわ』
『くっ……あまつさえ栄光あるラボメンへの入隊を断るとは。くっくく、孤独であることがマッドサイエンティストの有るべき姿だと？　その考えは天晴れだ』

おい、この所長後半聞いてなかっただろ。なる気はないの所しかピックアップしてないぞ。

『何バカな事を言ってるのこの人？　良いからどうするかを早急に決めないとダメなのよ。バカなマッドサイエンティストなんて痛いだけよ』

おお、ジェロワさんが最初会ったときみたいに冷たい感じになってるぞ。てか、所長を見る目が相当冷たい。そんな視線に直接当てられて、所長はちょっとたじろぐ。

『ふっふふは、マッドサイエンティストはいつだって痛く見られる。それに万事抜かりはない。用は物事を並列して処理すればいいだけの事だろう。だから我らは戦士と協力関係を結んでる！
そう世界を支配するための前進。悪の戦士達とな！！』
「無限の蔵って悪の戦士だったのね」

変な設定が追加されていく気がする。初耳なんですけど。悪なんてバカラさんも思ってないだろ。画面の中のジェロワさんも僕に変な視線向けてるし。
変な事言うなよな。てか僕を巻き込むな。そんな折り、所長の近くにウインドウが現れる。

『どうした？』
『所長、バカラさんから連絡ですよ。どうやら第一の奴らが研究所から仰々しい実験道具を持ち出してるみたいです』

画面内に居るのは頼りないハッカーだな。てかあれから今度は第一を見張ってたのかなあの人。なんとも働き者だ。
仰々しい装置か……それでブリームスに隠されたアイテムを刺激するのだろうか？　ジェロワさんなら何か知ってるんじゃ？

『仰々しい……きっとアレね。でも確かアレは、そもそも不良品だったような。ああそっか、向こうも自分たちの実験でアイテムを刺激出来る事に気付いたのね。それでアレの再利用方を思いついた。けど実行しようとするなんて……私が反抗したのがよっぽど気に入らなかったのねあの人』
そう言って静かに微笑むジェロワさん。うっわ、その笑みは実にマッドサイエンティストみたいだ。危険な香りを漂わせてる笑み。
喚くだけの自称マッドサイエンティストとはやっぱ違うな。本物の研究者だからかな？

『ふふ、良い顔だ。で、その装置とやらを使うとどうなる？』

そんな問いに、ジェロワさんは影を落としてこう答える。

『最悪、ブリームスの住民集団失踪』
『なっ！？』

ガタタンと階段を踏み外す所長。やっぱ色々とこの人脆いな。強がってるだけなのは間違いない。すると僕の横でメカブが何か考える様な仕草してる。手を顎に当ててブツブツと「集団失踪ってまさか……」とか言ってるよ。

何か引っかかる事でも有るのだろうか？

「どうしたんだよ？　いよいよって感じに成ってきただろ」
「まあそれはそうだけど……ねぇ無限の蔵。ＬＲＯ自体でこの街がどういう扱いか知ってる？」

突然何を言い出すんだコイツ。確か秋徒か愛さんがこのブリームスって街は、昔に滅んだとかなんとか聞いた筈だけど。

「そうね。ＬＲＯの歴史ではそう成ってる。ブリームスはとっくの昔に滅んだ幻の街。でもその名残りたいな物はＬＲＯ自体にも有るのよね。

今じゃ遺跡に成ってるんだけど」
「へぇ～そうなんだ」

それは初耳。てか僕ってまだまだＬＲＯを一周もしてないから知らない所なんて一杯だ。けどやっぱりそれがどうしたって事だよな。このイベントは別にＬＲＯ自体に関係あるミッションとかじゃないだろ。

完全に独立したイベントってな位置付けな筈だ。幻の街にいけるよ！　的なタレコミだったじゃん。

「それはそうだけど……けど本当に何もＬＲＯ自体に関連してない

のかなって思う。だってこれはＬＲＯのイベントよ」

そんな事いわれても……が正直な意見。けどそれだけ気になる事が有るって事か？　ＬＲＯ本体に関わる事でもあると？　まあＬＲＯ自体ならそれこそ何が起こったっておかしくないけどさ、ここはリアルなんだよ。そしてリアルを基盤してる以上限界ってのが有るわけだ。

「話自体にリアルもＬＲＯも関係ないわよ。やり方が変わるだけでしょ。ブリームスはね、ある日突然滅んだのよ。この街に居た全員が消えて」

「おい、それって……」

僕も階段に立ってたら足を踏み外してたかもしれない位にちょっと驚いた。だって……え？　それってマジ？

「まあＬＲＯでもハッキリとした理由が分かってないってのよ。遺跡に成ってるって言ったじゃない。そこは老朽化以外で崩れてる建物は無いらしいのよね。

普通ならそんな突然街一つが滅ぶなんて、自然災害かＬＲＯならモンスターの襲撃。そうなる訳だけど、どっちにしたって建物自体も無事じゃ済まない筈じゃない。

けど遺跡にはそんな傷跡は無い。だから集団失踪。ある日突然、この街の人が消えたって事に成ってるのよ」

なんだかメカブの声がやけに耳に残る。きっと考えられる事が有るからで、それは多分メカブの言いたい事だろうから……何だろう。

つまりこういう事だろ。

「お前はこのイベントが過去にブリームスで起きた事を再現しよう

としてる――そう思ってるって事か」
「ちょっと違う。これは私達の行動で変えられる未来の選択肢なんじゃないのかな？」

未来の選択肢？　どういう事だ。また電波か？　とも思ったけど、メカブは至って真剣なご様子。コホンと咳払いを一つして僕の目を見据えてこう言った。

「再現って言うよりは、私達の行動でそれを変えられるんじゃないかってことよ。このままいったら、ブリームスに居る人たちは集団失踪に成るかも知れない。
それこそ歴史通りに。けど今私達はここに居て、秋葉原と言う街を通してブリームスに干渉してる。私達がこの小さな画面からのぞき込む世界は過去のブリームス。
だとしたら、やっぱり歴史は同じ様に収束するんでしょう。でもじゃあなんで制作側はこんなイベントを？　このイベントの始まり前にはね。こんな噂が有ったわ」
「噂？」

僕の疑問符が浮かんだ顔にメカブは目を輝かせて、指を一本立てる。

「ブリームスという街をＬＲＯに取り戻す為のイベント――そう言う噂。眉唾の話で、ネタでしか無かった話題だけど、どうやらそうでも無いと思わない無限の蔵？」

そう言われると……確かに僕達にはそれが出来るのかも知れないと考えれる。入道雲が太陽を隠して照りつけていた日差しを遮る。けど、メカブの言葉に陰は落ちない。メカブは人通りの少ない錆びれた路地で、立てた指を空に伸ばして暑さをました声を上げる。

「私達はこの街をＬＲＯの未来へと繋げる架け橋になる！」

本物と偽物の隔たり（後書き）

第二百六十二話です。
試合には負けたのかもしれないジェロワさん。だけどまだ勝負はついてなかったんです。彼女の体を張った行動のおかげで、道はつながった。次回はみんなで協力しあっての第一への対抗戦が始まります。
そして最後らへんの会話は実際事実かどうかはわかんないけど、もしかしたらそうかも知れない程度で。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

リアルの痛み（前書き）

集められる物を集めて、頼れる仲間が集い、やれる事がハッキリした。後はもう行動するだけ。役割を果たすだけ。このイベントがどういう風にＬＲＯに関係するとかしないとか、それはこの際どうでもいい。

僕達はこの街の明日を変えるかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ただそれだけで、僕たちが求めてるのはそれでもないんだ。

レアなアイテム狙ってきて。結局はそれ目的なだけ。大層な事は言わない。僕達はそれの為に同じ目的の奴らとぶつかり合う。

リアルの痛み

『しゅ……集団失踪だと？　はっはははは！！　流石は国家の懐柔となりて研究の意義を見失ったら奴らだ。だが、そんなマッドサイエンティスト的な役割を担う研究者は奴らじゃない！！
そんな奴は私一人で十分だ！！　奴らの狙いは我らが全て奪い取る！　やるぞお前等！』

その言葉に続く声は聞こえない。何ともチームワークの成ってない組織だ。そんな反応に満足できない所長はプルプル震えて再び大声で叫ぶ。

『お、お前達、私を一人にする気かあああ！　そうなのかあああああ！？』

なんかすっごい格好悪い事言ってるよこの人。情けなくて思わずため息か笑いが漏れそうだ。なんだかこのままじゃめんどくさそうと判断したのか、ようやくウインドウ内から反応が返ってきた。

『はいはい、やりましょう所長〜〜』
『てか、その年でそんな顔しないでくれますか？　見るに耐えかねるんで』

どっちもスゴく投げやりな感は否めない。けどそれでも、反応してくれただけで嬉しい所長は再び声を張り上げる。

『よし、これより我が第四研究所は第一研究所と張り合うためのオペレーションを開始する！！　これはきっとこの国の歴史に残る戦

い成るであろう。
そう聖戦と呼べるものだ！！　はっ！？　うおおおおおおおおおおおおおおおお、良い名前が浮かんだぞ！！』

さっきからやけに叫びまくりな所長。中二病全快で吠えてるよ。そんな所長に引き気味なのはジェロワさん。小さな声で『この人大丈夫？』とか呟いてる。
まあ心配するよね。実際僕もそう思ってるし。この人ホントに大丈夫かな？

『ふわっはは！　三十路よそんな顔をしなくてもお前の聞きたい事はわかってる。そう慌てるな。今この聖戦の作戦名を発表してやる』

そう言ってバサァァァと白衣を翻す所長。三十路事ジェロワさんは据わった目で再び言われた許せない言葉のせいで『殺してやる』を連呼してた。
なかなかにカオスな状況だ。けれどそんな呟きは無視して、テンション上がった所長はジェロワさんを見下ろす為に踏み外してた階段を再びあがり宣言する。

『今をもってこのオペレーション名は【エンジエル・ブレイク】とする！！』

誰も何も反応しない。僕の近くの爺さんが、『おお、あの雲は家の婆さんに似てるの～』って言ってた方が気になった。
てか、そんな作戦名なんてどうでも良いから、本題に戻れよ。意味わかんないしな。僕がそんな風に思ってると、ジェロワさんも『何それ？』とか呆れた感じで言ってる。するとウインドウに現れてるハッカー君が言葉を割り込ませてきた。

『所長――、名前なんてどうでも良いんで、何やるんですか？　流石に第一と全面対決なんて無理っしょ。規模も人員も持ってる技術も何もかもが違うって』
『ホント、こっちは使えないハッカーに中二病全快なだけの所長だし、やり合えないでしょ？』
『おいおい、所長はともかく僕は本気出せばスゴいんだぜ！　取り消せ万年雑用係！』
『ふん、アンタも所長も低レベルな争いでしょ。家事全般得意な私の方が、よっぽど有能よ！　ひれ伏せ野郎共！』

ウインドウ内で再び喧嘩が勃発してる。コイツ等相当仲悪いな。いいや、仲が悪いって言うか相性の問題だと思う。

『やめろ！！　本当にお前たちは……これは聖戦なんだぞ。奴らの行おうとしてることは狂気のさたなんだ。大丈夫さ、俺たちならやれる！
それに奴らに対抗するための情報がある。そうだよな？』

そう言って所長はジェロワさんに視線を送る。おお、ちょっと所長らしい。そんな所長を見上げてジェロワさんは頷いた。

『貴方たちは頼りなさそうだけど、大丈夫。私が居るからね。私をバカにしたこと後悔させてやるわ』
『ちょっと聞き捨て成らないが、頼りにしてるぞ。それでは我らはこれより、三十路が持ち帰った情報を分析解析に移る！』
『だから三十路言うな！』

そんなやりとりで纏まりかかってる。けどこれじゃ僕達はどうすれば……そんな風に思ってると、新たなウインドウが所長の側に現れる。

『よう、どうだそっちは？』

そう言ってウインドウ内に現れたのはバカラさんだ。この街を相手取って戦ってる集団のリーダー。てか、今度は第一の奴らの動向を探ってたんじゃ無いのか？

『こっちはこれよりオペレーションエンジエル・ブレイクの為の情報解析に移る。そっちは第一の奴らの妨害を頼む。奴らのその装置は危険だ。

こちらに加わった三十路の情――んがっ！？』

『おい、どうした？』

途中で止まった言葉に疑問符が浮かぶバカラさん。三十路三十路言うから、ジェロワさんが強行手段に出たんだ。ようは所長の頬を彼女が引っ張ってる。

そして据わった目で見据えて『ジェロワ』と脅しをかけてる。

『う……ゴホン。ジェロワが言うにはその装置は危険らしい。取り合えずそれも壊しておくのが得策だろう。その間にこちらは情報分析を進めておく。

戦士フィフティィンは返しておくぞ。なかなか出来る奴だからこき使え』

なに勝手な事を言ってるんだコイツは。けど、これで僕はバカラさん側で第一連中の妨害に当たるって事に成るのかな？

けど僕達はこのイベントでは戦えない筈では？　どうやってその装置を壊したりするんだ？　それに向こうにはハゲ共がついてる。それはどうなるんだろうか？

色々と考える事は有るけど、でも取り合えず僕達はバカラさん達

と共に、第一研究所の奴らの妨害に向かう事になった。

まだまだ日が高い午後の時間。僕達は第四研究所のある寂れた一角から抜け出して、アキバのメインストリートへとやってきてた。

歩行者天国なこの場所は道路の中央から端っこまで人が流れてる。そんな中には僕達と同じ様にスマホを掲げる人達も一杯だ。

そしてこぞってそんな同類の人達のスマホが一カ所に向いていた。そしてそこにこそ、僕達が目的としてる物が映し出されてる。

「な……に、あれ？」

そんな風に呟くメカブ。何かをお前は知ってる筈だろう――と言いたくなるけど、まあ実際そう呟く心境は分かる。

アレの事を知ってる僕達ですらそうなんだから、事情を知らない人達がザワザワと成ってるのは無理もない事だね。てかホント……なんかスゴいな。

三・四メートルは有ろうかと言うくらいの大きな装置。と言うかロボットっぽく見えなくもない。三角型の形状に、幾重もその胴体にぶっ刺されたみたいな無骨な棒。下半身は移動をするためか、六本の足が蜘蛛みたいにワシャワシャと動いてる。

「思ってたのと随分違うよな。あのぶっささってる様に見えるのから、アイテムを干渉する電波でもだすのかな？」

「さあ、けどあれを壊すとか苦労しそうじゃない？」

「確かに、それは言えてるな」

まさかこんなデカいとは思わなかったもん。せめて大の大人が二人係で運ぶ程度の物とかそんなんを予想してた。けど蓋を開けてみたらビックリのこのサイズ。何をどうすればいいのかもさっぱりだ

な。

『流石第一と言うべきだな。第二の奴らのよりも大層な感じだ。それにしても……やっぱりだが警備が多いな。第二のを潰した影響か？』

だろうな。合流したバカラさんが『ちっ』と舌打ちしながらそう言う。

『だが、もたもたはしてらんねぇ。アレが起動したらヤバいんだろ。それなら怖じ気付く事なんか出来るかよ。多少荒っぽくなるが、これで行くか』

そう言って僕は何かを渡された。それは拳大の大きさをした銀色の卵みたいな物だった。何これ？

『それは武器だ。対象に投げるか押しつけるかすれば高圧電流が流れる仕組みに成ってる。人一人を気絶させる位余裕だぞ。
押しつける分には三回、投げつける分には一回まで使える。用途によって使い分けろ。ちなみに投げつけたら五メートルは離れろよ。
投げつけた方が出力が大きいから感電するぞ』

へぇ～この卵形の物がそんな強力な武器なんだ。持って使う分が三回なのは、出力調整が出来るからって事か？　なんか画面にも使い方が出てきたぞ。なるほど、近づくと自動でロックオンされるみたいだな。投げつけるか押し当てるかは、対象との距離で勝手に切り替わるって訳か。投げつけるからってどこからでも投げられるって訳でもない様だ。

「なんだかそれって、ＬＲＯ自体にも似たようなのあるわよね」

「そうなのか？　僕は全然知らんぞ」

渡された卵型の武器をスマホ越しにみながらそう言われたけど、実際僕は武器屋とか早々いかないからな。なんてたって僕のセラ・シルフィングはそこらのどんな武器よりも優れてると勝手に思ってる。

しかも思い入れも人一倍だし、取っ替え引っ替えのＬＲＯ方式とはちょっとあわないんだよね。まあスキルは驚く程に偏ってるだろうけど、それでもセラ・シルフィングは超強力だし、問題ない。

「それってＬＲＯ本体じゃ武器じゃないのよね。どっちかっていうとブービートラップ型よ。前の領土の取り合い……侵略戦では良く使われた様だけど、最近はあんまり使う機会自体少ないのよね」

へぇーそうなんだ。まあブリームスはＬＲＯだし、同じ物があっておかしくはない。ちょっと仕様が違うのも、このブリームスが過去だから……かもだし。

最初はこういう用途って事だったのかも。僕はこの卵形の武器をバカラさんから、五セット計卵十個を貰った。一つのホルダーに二つセットしてあるから、それが五セットって事ね。

なんか多くね？　とか思ったけど、まあ多いに越したことはない。足りなかった困るけど、多ければそんな事も無いからね。

武器も揃ったしそろそろ行動開始だな。取り合えずあのデカ物に近づいてこの武器を投げつければそれでいいんだろう。

近づくよりちょっと離れた攻撃の方が強いとはこっちにはありがたい仕様だ。

『じゃあ行くか。どっちにしろ護衛には気づかれるんだし、一気にやるぞ。どちらかがアレを潰せればいいんだ。怖じ気付くなよ』

そう言って画面の中のバカラさんは走り出す。たく、そっちは人が少ないから良いけど、こっちは溢れる程に居るんだぞ。そんなホイホイ走れないんだよ。

それでも追いかけない訳には行かないし、僕もあの機械を目指す。

「お前はそこで見てろよメカブ」

「守ってやる！　くらい言えないの無限の蔵？」

「はっ、自分の身くらい自分で守れ」

「何それ！　君にはガッカリだよ！」

憤慨した様な声が後ろから聞こえたけど、僕は振り返らずに機械を目指す。近づくにつれて立ち止まってる人が増えるから、これは予想以上に大変だ。

てかそんな事を思ってる間に、ブリームス側では僕達の接近がバレたみたいだ。

『おい、それ以上近づくな！』

そんな声がローブに身を包んだ奴らの周りに陣取った兵士からあがる。手には長い槍。やっぱり明らかにこの街はあちら側についてるって事だろう。

僕が迎え打つかどうかを考えてると、そこで先行してたバカラさんがこんな声を上げる。

『おらおらああ！！　俺様の顔に見覚えはないのかお前等！？』

なんだその宣言は。そんなに注目されたいの？　そんな事を思うと同時に、画面には『きっ貴様は！！』とかの声が挙がる。

『お前は第二研究所の実験を邪魔した奴だな。貴様等の活動は既に

法に触れてる！　遠慮はせんぞ！！』

そう言って兵士達はバカラさんを討ち取ろうと向かってくる。そうか、あの人第二研究所の実験を妨害したときに顔を知られちゃってるんだな。だからそれを利用して、奴らを引きつけてくれるって訳ね。

一瞬で理解したぜ。僕は更に前へ！　人混みがうざいけど、無理矢理進む。汗臭くて死にたくなる。けどそんな状況を我慢して進むと、ようやく画面には緑色のロックオンが例の機械を囲んだ。

（よし、これで）

僕はそう思って指を画面に近づける。だけどその時、音もなく腹部に鈍い衝撃が走る。

「ぐっ！？」

ズルリと膝に力が入らなくて地面に落ちる。密集地帯がら思わず誰かの肘が腹に入った……とは思えない鋭さだった。これは……

「おいおいダメだよ兄ちゃん。今から始まるショーを妨害して貰っちゃ困るんだ。引っ込んでな」

汚らしい言葉、視界に映る拳には指輪が全部の指にはまってたりしてる。聞くだけで頭悪いんだろうなと思う笑い声……汚らしいファッションはこいつらどうやらチンピラ風情の様だ。

「お前等……まさかハゲの？」

「ハゲとは失礼だな。けどまあその通り。邪魔するなよ。怪我しちゃうぞ！！」

そう言って今度は蹴りをかましてくる。僕は後ろに飛んでそれを回避。ある程度の距離を取ると見えてくる。こいつら、野次馬共に混じって相当数この機械の周りを囲んでやがる。

だって明らかに金髪とか腕にタトゥーとかしてるのが目に付く。なんかやけに僕の事を睨んでるし、その周りでちょっとワタワタしてるのは一般人だろ。

そうだった……敵はブリームスにいる奴らだけじゃなかったんだ。まさかこれってリアルでも戦えって事？　信じられん苦行だな。

「無限の蔵！」

「来るなメカブ。お前が来たってどうにもならないだろ」

僕は後ろから駆けつけようとしてたメカブを制する。下手に人質にされてもかなわないからな。けど、これは問題だよな。

ブリームス側ではバカラさんが戦ってる。リアルでは僕も戦えって事なのだろうか？　でも流石にこれが想定されてたとは思えない……訳もないかも。

僕たちはそれぞれ違う勢力についてる。って事は、やっぱりプレイヤー同士の衝突もイベントの設計内か。けどこれは理不尽だろ。

こっちは一人でやってるのに、向こうは部下共を使っての妨害工作なんて……ヒドすぎる。

「ヒュー格好良いねぇ。いつまでそんな格好良いこと言えるか、見せてくれよぉぉ！！」

爛々と目を輝かせてこちらに向かってくるチンピラ共。流石に今回は一人でどうにか出来る数じゃない。かと言ってやっぱり逃げる事も出来ないんだよな。一体どうすれば……僕はチンピラ共の攻撃をいなしながら突破口を考える。かんが……える？

「うおっちょ！　お前等ズルっ――」

なんか周りからドカバカと手足が飛んでくるんだけど。しかもなんか体が重い。反応が一歩遅れるというか……足が妙に引きずる感覚。

まさかずっと感じてた痺れの影響か何かか、僕の売りはスピードなのに、こんな足じゃサンドバックも良いとこだ。

「おらおらおら！！　どうしたそんな物かよお前は！！　聞いてたのと随分違うな！」

無茶いうなよな。こっちは一人で連戦してるんだ。雑魚の癖に数に任せて取っ替え引っ替えで立ち回ってるお前たちとは違うんだよ。

けどそんな事を言い返す余裕すらない。流石に囲まれた状態でやられると絶対に死角が出来るわけで、すべての攻撃に反応出来る訳もない。

いや……こうなれば逆に考えるしかないのかも。目指すべき所はたった一つだ。後ろに回った奴らなんかそもそも気にしなければいいんじゃないか？　背中を蹴りまくったり、後ろから頭を打たれたり、そんなの全部無視して目の前の一人を突破すれば、僕の目的はやり遂げれる筈だ。背中を丸めて顔を腕でガードしてた僕だけど、こんな負けしかない我慢は早々に切り上げるべきだと判断する。

とりあえず、目の前の奴を一撃でぶったおす事を考える。

「なんだか思ったより全然楽勝だな！！」

そんな言葉と共に、後から衝撃が走る。思わず態勢が前につんのめる。鈍い痛みが背中に……とうかそこかしこにあるわけだけど、僕はこれを足がかりにする事にした。

今の僕の状態じゃ、自分の思ったとおりに体も動かせない。なら、向こうが加えてくれた力をそのままきっかけにするだけだ。

「おいおい、こっちに倒れて来ても通行止めだぜ！！」

そんな言葉と共に、目の前の奴が大きく腕をふりかぶるのが見えた。つんのめった僕に併せて、その拳をたたき込む気なんだろう。

指輪がはまったその拳で顔面を殴られたらさぞかし痛そうだ。けど今この瞬間は僕とこいつは一対一も同然。僕の視線はこの前の奴一人に捧げた。

力なんていらない。ただ狙った所に拳を伸ばす――それだけでカウンターってのは成立するんだ。

頭を傾けて拳を紙一重で交わす。耳に空気を切る様な音が聞こえて、暑苦しい風が一瞬吹く。そして同時に伸ばした腕に感触が。

ゴツゴツした感触。骨通しがぶつかった痛み。僕の拳は目の前のチンピラの喉を貫いてた。

「かはっ！？」

そんな声とヒューヒューという変な音が耳に届く。喉に走った衝撃での呼吸不全とかだろ。体から力が抜けるように膝を地面につくチンピラ。

その課程で僕はこういってやったよ。

「通行解除ってことで」

僕はすぐさま足を動かし前へ進む。既に投げれる距離だ。カメラを向けて機械の姿を映してタップ！　卵形の武器が宙を舞って大仰な機械へと張り付いた。そして、青白い電流と火花を散らして、機械を包んだ。

「やったか？」

僕は白い煙が充満してる画面内を見据える。すると、後から盛大にタックルをかまされた。

「この野郎！　舐めた真似しやがって、動けない様にするぞ！！」

「っつ……」

油断した。たった一人しか倒してないのに、攻撃が決まった事に浮かれたかも。くっそ……思わずスマホを手放したじゃないか。これじゃあ機械がどうなったかわからない。

「どっけよ！　チンピラ共！」

そう言うけど、僕の態勢は圧倒的に不利だ。なんてたって背中に乗られた状態。これじゃあ反撃のしようがないぞ。そう思ってると、無造作に髪を鷲掴みにされて、反るように持ち上げられる。

これはかなり痛い。髪の毛がプチプチ言ってる。

「言葉には気を付けろよガキ。どっちの立場が上かわかってんのか？」

耳元でそんな声が聞こえる。けど……それがどうしたって言ってやりたい。臭い息をかけんじゃねーよ。

「僕はどんな立場だからってお前等よりも下になる自信はねーよ」

「ああ、そうかい！」

そう言うと顔面に衝撃が走った。どうやら地面に叩きつけられた

らしい。こいつら……ここまでやるとかマジでクズだな。既にゲームを越えてる。
血の滲む視界の先で、野次馬になってる人達が青ざめてるのが見える。まあしょうがないよな。その反応は当然だろう。

「よ〜〜く見とけよお前等！　このイベントのアイテムは俺達が取るんだ！　邪魔しようとする奴はこいつと同じ様にこう！　こう！　こう！　なるんだよ！！」

ガンガンガンと三回も連続でアスファルトに叩きつけられた。頭がクラクラする。鼻血だってきっと出てるだろう。流石にこれはヤバいかも。
反撃する力も無いし……助け……なんて物に期待出来るほど楽観的でもない。リアルにはヒーローなんていないって僕はしってるよ。
誰が好き好んで見ず知らずの他人を助けようとする？　そんな物好きはそうそういないんだ。熱気が沸き立ってる様な地面と接触してると、このまま体が溶けるんじゃないかと思えてくるよ。
でも溶けた後に直ぐに再構成出来るのなら、それも悪くない……とか変な考えが頭に巡ったりしてなんかヤバいな。まともじゃないかも知れない。

「む……無限の蔵を放せえええええええええ！！」

呆けてた頭がそんな声に引き戻される。視線を向けると、そこにはどこから調達したのか、細長い棒……じゃない、紙のポスターか何かを丸めた物を振り回すメカブが居た。けど、そんなのでどうにか出来るわけもない。彼女はあっさりと突き飛ばされた。
そしてその反動で溢れたスマホの一つが僕の所へ……これしかないと僕は思った。僕は地面で操作して一つの電話番号をタイピングする。

リアルの痛み（後書き）

第二百六十三話です。
ここはリアルだから、スオウの体がどうにかなるって事はないでしょう。ピンチはずっと続く事になります。そしてメカブもピンチ。これを乗り越える鍵は最後に電話を掛けた相手……かな？
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

無力な高校生（前書き）

助けを呼ぶことしか出来ない自分が、どうしようもない子供だと知った。こっちでは僕はただの高校生。それでしかなかったんだ。それでも歯を食いしばって諦めないでいると、電話はつながったよ。シクラだって協力してくれた。

僕はもう一度メカブの手を取ることが出来た。

けど、まだ何も終わっちゃない。

無力な高校生

地面から僅かに聞こえるプルルという音。僕は急かす様に早く早く！　と念じてる。バレてない内に助けを求める。それしか今の僕には出来そうもない。

実際僕だけなら、どうにだってなって構わない。このチンピラ共が僕の息の根を止めるとも思えないし、アイテムだって絶対に必要って物じゃない。

それよりも優先される事が出来たのなら、投げ出す事なんか厭わない。今までやってきた努力とか、垂らした汗は無駄になるけど、イベントはそれ自体を楽しむ物だろう。それならとうに僕は果たしてる。

最初は秋徒と愛さんの三人で、その後メカブと知り合って、それなりに楽しかった。イベントを僕は満喫してた。それはきっとメカブだってそうだって思いたい。

アイテムが手に入らなかったら、メカブは怒るかな……けど、アイテムが手に入らない程度の事は「残念だったね」程度で済むけどさ、殴られたり蹴られたりは流石にそんな軽く受け流せる物じゃない。

それにメカブは女の子だし、こんな所で傷物にはしたくない。しちゃいけないだろ。楽しかった時間まで不意にしちゃう様な事を……させてたまるかよ。

お腹の辺りでプルルプルルと鳴り続けるコール音。喧噪の中だから、気づかれないとは思うけど、僕の心臓は飛び出そうな程に高鳴っていた。

「おらお連れの彼女が良いことされちゃうかも知れないぞ。ちゃんと見てろよ」

「お前等！！」

歯を悔い締めて睨み付ける僕の顔を、もう一度地面に叩きつける。背中を陣取られてるから、何も出来ない。地面に黒く濁る染みがつく。

血が変色してドス黒くなってるのか、それともこれはアスファルトの色でも混じったのか……どっちにしろ、痛いことに変わりはない。

「そんなエロい足を大胆に見せつけて、ヤって欲しいんじゃないか？」

そんな勘に触る声と共に、一人のチンピラがメカブに迫るのが見える。これまでとは違う嫌な汗が額を伝う。こんなの……絶対にダメだ！！

「どけぇえええええ！　くそ野郎！！」

目一杯の力を込めて上に乗ってる奴ごと立ち上がる気満々だった。だけど、心に反して体が思ったように動いてくれない。力を精一杯入れてる筈なのに、自分の体はチンピラを数十センチさえ持ち上げる事が出来ない。

「まだまだ元気じゃねぇか！　おらおらどうした？　もっと力入れないと、あの女が大変な事になるぞ」

そう言って、僕の背中で僅かに腰を浮かして落とす行為を繰り返しやがるチンピラ。ドスンドスンとのし掛かる男の体重が腹の中の物を逆流させそうだ。そんな中、視界の先では、卑猥な手の動きで迫る野郎が、メカブのむき出しの足に触れてる。

それはもう、おぞましい光景だ。

「やめてよ！　触るな！！」

眉根を寄せて、キツく瞼を閉じてるメカブが震える声でそう言ってる。足で蹴ろうにも、あの服じゃ足をあげた途端にパンツ丸見えだから抵抗も出来ないようだ。

もう一人のチンピラに肩を押さえつけられて、ろくに腕も振り回せない状態。

「そんなダッサいメガネなんてしてるなよ。結構可愛い顔してるだろお前」

そう言って、メカブの黒縁メガネに手をかけようとするチンピラ。そんな奴に抵抗してるのか、必死に顔を俯けてるけど、それは殆ど意味なかった。メカブの眼鏡は取られてその素顔が露わになる。

けど実際必死に目を閉じてるから、取る前との違いはわからないけど、それだけ眼鏡は外してほしく無かった……そんな感じがする。

取った眼鏡を無造作に放るチンピラ。カシャンカシャンと言う音を追う様に視線を動かすメカブ。そんな横顔に浅黒く肌荒れ気味の顔が近づいてやがる。

「やめっ！！」

そんな声を出したとき、重なるように腹の所から「はいもしもしこちら～」とかいう野太い声が聞こえた。ようやくか……とか思ったけど、やけにその声が大きかったせいか背中に乗ってた奴に気付かれた。

「おい、なんだ今の声？」

そんなチンピラのいぶかしむ声と、「あの～どちら様でしょうか？」と言う電話越しの声が重なる。もうごまかしは聞かない。完全にこっちを睨んでるし、ここで電話を切られる位なら、なんとか緊急事態ってだけでも知らせたい。

「おい！　ちょっと体をあげろ！　この野郎！！」

髪を無造作に引っ張られる。だけど、火傷しそうな程に熱されたアスファルトを必死に握力だけで掴んで抵抗。

握力は別なのか、まだ少しは抵抗出来る力が残ってたみたい。暑いけど、そんな事言ってられない。

「いたずらかしら？」

そんな声が聞こえて僕は慌てて声を出す。

「スオウ！　スオウです！！」

「ん？　あれ？　今何か聞こえたような？　あの～もう一度お願いします」

なんてこった、ちゃんと届いてない。もう一度……そう思ってると、僕の指は遂に地面から放される。頭の皮膚が引っ張られる感覚と共に体が反られて、隠してたスマホが露わになる。

「こんな物を隠し持ってたとはな。助けでも呼ぼうとしてんのか？　けどな、俺達は数十人は居るんだよ。お前達が誰を呼ぼうと、この状況を覆せるわけないないだろ！」

そう言ってスマホを地面から持ち上げるチンピラ。数十人……確かに一人仲間が増えたからってどうにか出来る数じゃないのかも知

れない。けど……あの人ならそれが出来そうだと思ったんだ。

「あの～それは私に言ってるのでしょうか？　ちょっと意味が分かりかねます」

そんな困惑の声がスマホから漏れてくる。するとチンピラはニヤニヤムカつく笑みを見せながら舌を出して、スマホを耳に当てる。

「すっみませ～ん。これは間違い電話です。気にしないでくださぁ～い！」

ふざけた口調でそう言うチンピラ。マジで殴り倒したい。ちらりとメカブの方へ視線を動かすと、足をサワサワしてる奴と、舌を出して頬でも舐めそうな勢いの変態が見えた。

それは幾らなんでも犯罪だ。くっそ、このまま切られたらそれこそここで終わり。メカブを守ってやることも出来ずに終わりなんて……それはダメだ。

元々僕と関わりさえしなければあんな嫌な思いせずに済んだんだし、アイツだけはちゃんと守らないと。

「間違い電話ですか。では失礼します」

そんな声が僕にも聞こえた。だけど、まだ繋がってる筈だ。まだプープー言ってない。僕は出来るだけ首を伸ばして背中側のチンピラに近づく。そして恥や外聞なんて物を捨ててこう叫んだ。

「僕だ！　スオウだ！！　エマージェンシーなんだよ！！」

「ちっ」

その途端チンピラ自信が通話を切った。プープーと言う空しい音

がスマホから響く。届いたかどうかわからない。切る直前だったし、耳に当ててなかったら、僕の必死の叫びは届いてないかも知れない。まずエマージェンシーって……自分でもなんだそれって思うけど、彼女にはそれが一番だと思った。

僕の不安をあざ笑うかの様に、スマホを地面に捨てるチンピラ。それは実際自分の腕が届く範囲……だけどそれを許すことはしないだろう。

けど……どっちにしてもあの電話でもしもあの人がちゃんとメッセージを受け取って、ここに駆けつけてくれるとしても、時間はかかる。その間にメカブがこれ以上酷い事されちゃ意味ないんだ。

どうにかしてもう一頑張りしないといけない。けど……今の僕にはこの背中の奴を退かす力さえ残ってないんだ。でもだからって諦めきれない、卑猥な舌が迫るメカブを見捨てれるか。

今日初めて会ったけどさ、僕とアイツの関係はもうただの通りすがりでも赤の他人でもない……周りの野次馬共が同情するような視線を向けてて何もしないでも、僕がそうであっちゃいけない。

力を入れる。何度も何度も……全身の筋肉に言い聞かせる。

「まだやる気か？　諦めろよ。大人しくしてればそれでいいんだよ。逆に抵抗するから、お前達は酷い目に遭うんだ」

「ふっざけんなよ……メカブはもう抵抗なんてしてない。それでもあんな事！　黙って見とく訳にはいかない。アイテムとかどうでもいい。

今はただただ、お前達が憎たらしいんだよ！！」

僕は裏拳をチンピラに向かって打つ。だけどそれは簡単に受け止められた。この態勢でどんな攻撃が来るかくらいは予測してたんみたいだ。

そしてそのまま取った腕を逆に絡めて、間接技を決められた。な

んて情けないんだよ僕は。

「はは、結構な事じゃねーか！　あの女もお前も、見せしめだよ。バカな気を起こす奴がいないようにな」

地面に押しつけられた頬が焼ける。見せしめなんてそんなの……僕だけにしとけよ。

「それにしても……あの体はエロいよな。俺も後で堪能したいな。お前を押さえつけてるのなんてマジで失敗だ」

「なら、さっさと放せよ」

「それは無理だな。お前には気を付けろと言われてる。まあこのままこんな場所で押さえとく訳にもいかないし、ロープで縛ってどっかに叩き込んでやるよ。

このイベントが終わるまでな」

何、んな事勝手に決めてんだ。

「それで、僕とアイツは同じ所に閉じこめておくんだろうな？」

「さあ、それはどうだろうな？　男じゃ遊べないけど、女なら出来る事一杯あるし、ホテルとかでも……何だお前？　目の前で犯して欲しいのか？　良い趣味してるな」

「ふざっけんなよ！！」

目を見開いて瞳孔を真っ赤にたぎらせる気持ちでこの腐ったチンピラを睨み付ける。今の僕にはこれが精一杯。実際何で眼力で人が倒せないだって、本気で思う。

こいつらを殺したい気持ちをこの目に込めてるのに、このチンピラ共は、そんな僕の反応を楽しんでる節がある。こいつら……冗談で済まない遊びがあることを知らないのか？

それとも、バックがついてるから、何やったって良いとか思ってるじゃないだろうな。マジでふざけやがって……そんな風に思ってると不意に「ダッサイねスオウ☆」とかいう声が聞こえた。
そんな声にハッとして声のした方へ視線を向ける。するとそこには微妙な距離にあるメカブのスマホが見えた。さっき僕が電話する為に使った奴。
僕の携帯から、ブリームスを伝ってこっちに移動してきたのかシクラの奴？　僕はチラリと上にのし掛かるチンピラを見る。

「大丈夫、気付いてないよ。あの痛い子がちょっと気の毒になってる様に意識奪われてるみたいだからね☆　まあそれだけスオウが雑魚認識されてるって事だけど」
「うるさい……良いから何とか……」

僕は全部言う前に言葉を噤んだ。僕も自分がつくづく都合の良い奴だと思ったから。だってシクラは敵なんだよ。それをお互いにわかってる。なのに、そんな奴に期待とかするなんて……それはおかしいだろ。
ちょっと協力しあったからって、僕たちは馴れ合った訳じゃない。だけどそんな僕の気持ちを察したのか、言葉が途切れた僕の変わりにシクラは紡ぐ。

「なんとかしてあげよっか？　ヘタレッピーなスオウちゃん☆」

思わぬ提案。こいつが自分から協力的なんて……なんか裏があるんじゃないのかと疑いたくなる。けど実際、その言葉が思わぬ程に、胸に染みたのも事実。ヘタレッピーの所は除外してね。
けど、それもやっぱ事実か。

「お前は……それでいいのかよ？」

なんか我ながらおかしな事を言ってると思った。普通に今直ぐにでもお願いするべきなのかも。けど、そんな素直な態度を取ると逆に面白味が減ったとか、感じそうなのがコイツでもあるんだよな。

そもそも期待してるけど、信じてはないしなその言葉。

「スオウは何もわかっちゃないね。敵の……ううんライバルの思いって奴をわかってない。私はただ、こんなつまらない連中に負けて欲しくないだけ。

君をぶっ潰すのは私だからね☆」

「なるほどな」

なんかそれはホントしっくり来る答えだった気がする。なんかライバル言われた事がちょっと嬉しい気さえした。こんな状況なのにだ。

それはやっぱりシクラでもさ、こっち側に居てくれる奴が一人でも居るって事が大きかったのかも。たった二人で、絶望的な状況で、周りに人は一杯でも向けられる瞳には同情とかそんなのしかなかったから、一歩を踏み出したのがシクラでも、余裕が無くなってた心には大きな安心感をくれた。

それにコイツが厄介でも頼れる奴ってのは僕が一番知ってるからな……ライバルとして。

「どうするんだ？」

「まあ私は直接手出し出来ないから間接的な事に成っちゃうけど……取り合えず耳を塞いでてねスオウ☆」

そんなシクラの言葉に「何するんだ？」なんて言葉は野暮だと悟った僕は、直ぐに片耳を地面に押しつけて、もう一方を空いてる手で塞いだ。

その瞬間、スマホから響いた音は頭をかき乱すような音。大音響で変な甲高い音がこれでもかって言うくらいに響く。
耳を塞いでても、頭がクラクラしてしまう程の音。周りの人達がバタバタと地面に腰を落としてく。この音で平衡感覚がおかしく成ってるのかも……地面に元から倒れてる僕でさえ、ちょっと自分がどこにいるのかわからなくなる感覚に陥ってるもん。
スマホから鳴り響く音は十数秒続いて、不意に止んだ。辺りはなんだか騒然というか……阿鼻叫喚と言うか……そんな惨状に成ってる。誰もが耳を押さえてうずくまってる態勢。
関係無い人達には悪かったけど、でもこれでメカブの所にいける。僕は上にのし掛かったまま耳を押さえて震えてるチンピラから這い出て、スマホを拾い上げてメカブの元へ急ぐ。
コイツ等が復活する前に、メカブを安全な場所に連れて行かないと。

「くっ……」

だけど想像以上に体は限界にきてるみたい。あのチンピラの拘束を解けなかった時点で感じてたけど、全身が鉛みたいに重い。
足下もフラツくし……いや、これはさっきの音の影響か。これじゃあもう一度立ち向かうとかはやめた方がいいかも知れない。
取り合えずまずは、メカブを安全な所へ。それを第一に考えよう。

「大丈夫かメカブ？」

僕はそう声を掛けながらメカブを揺する。すると赤くなった瞳を僅かに開けて、その瞳が僕を捉える。

「無限……の蔵……一体何だったのさっきの音？」

そんな声を出しつつ頭を振るメカブ。どうやら大丈夫そうだな。

「さあな、どっかのスピーカーがブッ壊れたんじゃないか？　それよりもさっさとこの場を離れるぞ。どう考えてもこっちが不利だ」

「何、それじゃあ無限の蔵はアイテム諦めるの？　こんなのに渡しても良いって言うの？　アイテムの価値をお金でしか判断できない奴らよ！？」

僕の言葉に食ってかかってくるメカブ。それはそうだけど……けどアイテムよりも大事な物がある。

「何よ大事な物って？　今日なんの為にこんな暑い中頑張って来たの？　私たちだけじゃないよ。ここに倒れてる人達だって、頑張ってた筈だよ。

それなのに、人と金を使って……ここまで最低の事をしちゃう奴らにみすみすやるなんて、そんなの煮え湯を飲まされる事の方がまだマシだわ！！」

そこまで言い切るかコイツ。さっきまで泣き顔だったくせに……

「あれは女の子としての普通の反応よ。こんなキモい連中に触られてたかと思うと、今からでも涙が出てくるわ」

そう言ってメカブは自分の足に倒れてるチンピラをゲシゲシ蹴って自由を取り戻す。まあいつのもメカブに戻ったのは良いけど、でもやっぱりここまでだよ。

「どうして？　無限の蔵らしくない！　こんな奴ら、恐れる程の奴らじゃないわよ。一泡吹かせないと、ますます調子に乗るわ。

コイツ等は徒党を組まないと何も出来ないくせに、それに味を占

めると、何だって出来るって勘違いするバカなのよ。その勘違いに上限なんてないんだから！」
「それはそうかもだけど……けどダメだ」
「なんで！！」

僕にメカブが眉をつり上げて問いつめて来る。コイツ本当に分かってないのか？　僕はメカブの腕を取り強引に引き寄せた。鼻先が付くくらいの至近距離で言ってやる。

「お前が心配だからだよ！　お前を守る自信が僕には無いから……だから、これ以上無茶はやれない。僕のワガママで誰かが泣く様なんて見たくないんだよ」

僕はハッキリとそう言った。我ながら随分格好悪い事を堂々と宣言したと思う。けど、ここで逃げなきゃメカブはもっと酷い目に遭わせられるかも知れない。
そして僕はそんなメカブを助け出す自信が今はないんだよ。今はもうどうにか成るなんて、安易な気持ちじゃいられない。
このチンピラどもは迷わず殴る蹴るをしやがった。それはアイテムを求める限り、コイツ等とのそんな抗争が続くって事だ。
僕がそれをやり続ければ、結局メカブだって狙われる。だって、僕達の事はコイツ等に知られてるんだからな。だからダメなんだ。無理なんだよ。今回はたまたまなんとか成ったけど……本当にダメかも知れないと思ったんだ。

「あんな事されかかって、お前だって怖かっただろ。実際冗談で済ませられない事だった。これ以上やったら、僕よりもお前の方がどうなるかわかんない。
自分の事よりも、お前が傷つく方が心配なんだよ！」
「ス……オウ」

鼻先の三寸の距離で目を見開くメカブ。黒縁メガネの下の顔は初めて見る物だ。案外まつげ長い、目もメガネを付けてた時よりも若干大きく感じる。それはレンズの影響かな。
黒目も大きく見えるかも。てか全体的にあのメガネが大きすぎたせいか、顔が小さく見えるかも。なるほど、案外可愛い顔してるかも知れない。
そんな的外れな事を思ってると、メカブは視線を下に流してこう言った。

「そうなんだ……私が心配。ここはリアルだし、無限の蔵にも限界はあるよね。しょうがないか……ここでリタイア。
私は荷物とかに成りたくないし、それにやっぱりそんな危険は犯せないよね。てかこんな事を考えなくちゃいけない時点で、もうゲームじゃない。
誰もが楽しめるイベントじゃ無くなっちゃってる」
「……そうだな」

遊びじゃなかった。いつからか？　最初から？　それともコイツ等と僕達が邂逅したのがいけなかったのかな。暴力同士のぶつかりあいなんて……ＬＲＯの中だけで十分なんだよ。
それをリアルにまで持ち出したら、笑顔でなんていられない。楽しむなんて論外だろ。こんなの間違ってる。間違っちゃったんだと思う。
でも今の僕にはそれを否定出来る力がなくて……逃げ出す事しか出来ない。幻滅されたかな？　けどそれでも納得はしてくれたみたいだし、よかったよ。
僕はメカブの手を引いて歩き出す。そう言えばスマホ……とか思ったけど、徐々に立ち上がる奴らも出てきたし、厄介な奴らが復活する前に、この場を立ち去るのが良いと思った。

バカラさんや所長やジェロワさんには悪いけど、ゴメンとしか言いようがない。僕はまだまだ弱かった。誰一人満足に守れない一介の高校生……その現実を知ったんだ。乗り越えれると思ったけど、それはＬＲＯで調子づいてたのかも知れない。
特別とかなんとか言われて頼られたりもちょっとして、そんな自分はＬＲＯの中の『スオウ』だったのに……こっっちの僕と勘違いしてたんだ。

僕達は歩き出す。この場所を離れる為に。けどその時、メカブの足が無骨な野郎の手によって捕まれた。

「おいおい、勝手に終わらせるなよ。楽しみはこれからだろ？」

そう言ってメカブをひきづる様に押し倒すチンピラ。こいつ等、手を引くんなら何もしないんじゃないのかよ。

「はっはは！　お前にはもう用はねーよ！　けど、この子はまだ味わい足りないんだ！！」
「こんの野――がっ！？」

後ろから頭に響く衝撃……コイツ等また後ろから……膝が地面に付く。けどまだ意識はある。このままじゃダメだ。今度こそ本当にメカブが……僕はメカブに多い被さる様に彼女を包む。
今の僕は彼女の盾にしかなれないんだ。

無力な高校生（後書き）

第二百六十四話です。

腐ったチンピラ共が本性表してきました。そしてスオウは大ピンチ――は前からですね。まあ取り敢えずどうなるか見守ってくれると嬉しいです。

てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

みんなの勇気（前書き）

四方から囲まれて僕は蹴られてた。もうそれこそどうしようもない位に無様にやられてた訳だ。一度は助かりかけた筈だったけど、僕はもう一度チンピラ共にやられてる。

けど、ついさっきとは違う状態も勿論あるんだ。僕はメカブの傍に居る。僕はまだメカブを守る事が出来る。

みんなの勇気

四方八方から伸びてくる足。そんな足が僕の体の至る所を蹴り続ける。頭から肩から、背中にわき腹、全身を満遍なく几帳面な程ドコベキベコと果てしなく。

「スッ……むげ……んんん……」

「メカブさ、迷うくらいなら普通に呼んでくれない？」

スオウか無限の蔵で悩んで言葉に詰まってたみたいだから、僕はこの状況で軽くそう言ってあげた。すると僕の体の下にいるメカブは怒ったようで、心配してるような微妙な顔をして文句言って来る。

「バカ！　そんなこと今はどうでもいいでしょ。私をかばって何やってるのよアンタ！」

アンタって……あ～あ、名前でさえ呼んで貰えなく成っちゃった。それに怒ってる所悪いけど、これは大事な事なんだぞ。

「なんでそんな文句言うかね？　僕にとってこの行動は大切なんだけど。さっきの様な事にはしたくないんだよ。お前を守れないのが、殴られるよりも辛いだろうが」

だからこんな痛みへっちゃらさ。どんとこいウォーリーだぜ。へへっと僕は笑ってみせる。

「何笑ってんだ？　テメェには用はないんだよ！　さっさとそこをどきやがれ！！」

そう言ってチンピラが勢いよく蹴りを放ってくる。それは僕の顔の右側を捉えた。首が反対側へ延びて、勢い良く反れる。だけどこのポジションだけは譲れない。僕は踏みとどまってチンピラを睨み付ける。

「退くかよ……ここだけは譲れない。アイテムを諦めても、コイツばっかはそうも行くかよ。お前等なんかに汚させない！

それは絶対なんだ！！」

「こんのっ！　死にかけが！！」

不愉快そうな顔を歪めて、無造作にドカドカ蹴ってくるチンピラ共。ホントそろそろ諦めろよ。何でここまでメカブに執着する？

いや、もしかしたら、僕の言動がムカつくだけかも。けどさ、他にどうしろって言うんだ。下手に出れば良かったのか？

ちょっと考えてみるけど……それはあり得ないな。下手に出ると、下手に調子付くだけだろコイツ等は。結局全員ぶっ飛ばせれば早かったのに……今の自分の状態が悔やまれる。

視界が血で濁る。口の中にも鉄の味が一杯だ。全身が痛いのは言うまでも無くというか、そろそろ痛いのかどうかすら分からなく成ってきたかも。

「止めてよ！　これ以上スオウを……無限の蔵を傷つけないで！！」

そう言ってメカブが僕の頭を庇うように腕で覆う。暖かな感じがする。良い匂いになんだかこのまま気絶したらとっても気持ち良いんだろうなって思える。

けど……それはやっちゃいけないことだ。それに結局スオウと無限の蔵両方呼んでるし、まあ良いけどね。メカブらしいと思えるし。

「無限のく……なんだって？」

チンピラが聞きなれない言葉にちょっと混乱してる。あいつ等脳味噌は鶏並だから、直ぐに会話に付いてこれなく成るんだろう。

「おい、そんなのどうだって良いんだよ。そいつ助けたかったら、君がご奉仕してくれれば良いんだ」

混乱してるチンピラの代わりに別の奴が横から入ってそう言ってくる。そんな言葉にメカブは、僕を一瞬見て、そしてこう言った。

「私は何をしたら良いのよ」

「ふぇへっへ、そりゃああんな事やこんな事を……分かってんだろお前だって」

気持ち悪い笑い声を出してそんな事を言うチンピラ野郎。見なくても分かる。絶対に鼻の下を延ばした顔してるだろ。

僕は僅かに体を震わせてるメカブの腕を掴む。そんな事させるわけない。

「ダメだ。そんなの……絶対にダメだ！」

「そんな事言ったって……アンタ死にそうじゃない！」

ああ、ホント自分のダメダメさ加減にそろそろマジで嫌気がさしてくる。けどここでメカブを差し出すなんて、それはアイテムとは訳が違うんだよ。

それはダメなんだ。それだけは絶対に受け入れられない事なんだよ。僕は強い光を瞳に宿してこう言った。

「それでも！　僕が幾ら死にかけたって、そんな事させない。信じ

ろよ。僕は死なないからさ。だから安易に自分を差し出すな。
女の子だろ。僕なんかよりもその体を何百万倍も大事にしてろ」
僕は男だからな。別に幾ら傷つこうがヤンチャで済む。けど女の子は違うよ。傷なんて無い方が絶対に良い。僕が巻き込んだ事を、後悔しないで欲しいなんて、この時点でもう無理なのかも知れないけど、体や心に残る傷まで負わせたら、そんなの男として終わりだろ。
今、今日この時、守らないといけないのはコイツだ。なら、何がなんでも僕は守ってみせる。
「アンタは……ズルいわよ。自分だけが、男だからいつだって守る立場に居るのが当然だなんて……ズルいのよ。女の子だって守りたいって思う。庇いたいって思うんだよ」
「はは……そんなの知ってる」
僕だって女の子に守られてた時あったしな。だけどアイツが傷つく度に、僕は後悔ばっかりしたよ。守り守られる相互関係でも築ければそれが一番なんだろうけど、それはなかなか難しいじゃん。
特にアイツ以外とは難しい。そんな時は、僕はいつだって守る側に行こうと決めてる。古くから男は女を守る者……じゃなく、僕がそうしたいからそうするだけだ。
「私は、メーカーオブエデン何だからね。インフィニットアートをその身に宿す選ばれた人間なの！　凡人は引っ込んでなさいよ！」
メカブは瞳に涙を貯めてそんな無茶苦茶な事を言い始めた。どうやっても自分を犠牲にしたいらしい。だけどこっちもどうやってもお前を守りたいんだ。
それにお前のその設定にはもう大分慣れたんだぜ。僕はメカブに

ぎこちない笑顔を見せてこう言ってやる。

「おいおい、僕だってインフィニットアートを持ってるはずだろ。凡人なんかじゃない。まあメカブのとは格が違うだろうけど、こんな雑魚に天寿なんて使うべきじゃないだよ。

下界に神が降りないように、お前は高見の見物してな」

僕は僕の頭を覆う彼女の腕を優しく解く。そしてメカブをの浮いた背を再び地面に付ける。

「バカ……そこまで言うなら守って見せないよ。辛い顔なんか見せるな」

「善処するよ」

まあそう言っても、結局我慢する事しか、僕には出来ないんだけどね。ニコニコしながら殴る蹴るをされるのもそれはそれでどうだろう？　だろ。

「おいおい、まだそんな余裕があるとは驚きだな。その女を売れば自分は助かるのに、随分立派な心意気だよ。その偽善者っぷり、虫酸が走る！！」

「はっ、羨ましいんなら真似して見ろよ。まあ誰かに付いていく事しか出来ないお前等じゃ無理だろうけどな」

心新たにメカブを守る。そう誓ったから、ちょっと精神的に大胆になってた。思わず言ったその言葉はチンピラを逆撫でするには十分だったよ。

顔面に迫る靴底。叫びあがる声――――声？　それはなんだかガムシャラで、とてもこの視界に映るチンピラ共の事とは思えない。

そして不意に横から、飛び出た誰かが僕を踏もうとしてたその足

の主を突き飛ばした。

「てってめぇええ！！」

「ヒッヒイィィ……」

地面に倒れたチンピラがタックルをかました誰かに向かって叫ぶ。そして萎縮しちゃうその誰かさん。あれはどう見ても一般人だよな？　僕が助けを呼んだ人とは明らかに違う。

けどどうして……いや、勇気ある人がいたって事だろう。それは嬉しいけど、今度はこの人がやられちゃいそうだ。立ち上がったチンピラに胸ぐらを捕まれてるその人は今にも泣きそう。

チンピラはやけに顔を近づけて脅してる。その周りに他のチンピラも集まって来てヤバい感じ。だけどその人は必死に何故かスマホを見てた。

いや、チンピラの汚い顔を見るよりはそっちがマシかとも思うけど……逆に「こっち見ろやあぁ！？」とか言われてるぞ。

けどその人はやっぱりスマホの画面を凝視。指を動かしてる所を見ると、何か打ち込んでる。この瞬間に何か書き込んでるのか？

余裕があるのか無いのかわからない！！　何かぶつぶつと「大丈夫だよね」「僕は間違ってない」とか呟くのが聞こえて、小刻みに首が縦に揺れる。

そんな様子にムカついたのか、胸ぐらを掴んだチンピラが彼に頭突きをかます。

「うわあああああ痛い！！」

そんな声が辺りに響いた。少し太めの彼の鼻筋に赤い滴が線を引く。

「あわっわわわ……」
「この程度で済むと思うなよ。もう一発行くぜ！」
そういってチンピラが助走を付ける様に頭を引く。僕は腕を伸ばして、そのチンピラの足を掴んだ。
「止めろ！」
「はん、お前はお姫様だけを必死に守ってろよ」
横から別の奴が僕の腕を蹴った。あっけなく外される腕。そもそも言って止まるような奴らじゃない。悪い意味で。
調子づきやがって、このままじゃ折角勇気を出してくれたこの人が可哀想じゃないか。何か出来ないか必死に考える。
（何か……何か何か何か何か何か何か無いのか？）
そんな風に思ってると、目に入るデコられた四角いスマホ。そうだ、もう一度シクラにあの音を出して貰えば何とかなるかも知れない。
拾って来てて良かった。だけど、よく考えたらメカブは僕を注視してる。ここでメカブのスマホに話しかけるのは、その存在をバラすことと同じかも知れない。
「あ、私のスマホ」と呟いてるし、視線を外すのは無理っぽい。けどそんな些細な事を気にしてる場合でもないか。情けない声が上方から上がってるし、折角助けようとしてくれた人を見捨てられない。
僕は取りあえず画面を確認。けどそこにはシクラはいない。僕は小さな声で「おい、おい」と声を掛ける。けどシクラがいつもみたいにひょっこりと顔を出すことは無い。
どこ行ったんだアイツ？　こんな大切な場面で出てこないとか……今の僕の頼りはアイツしかいないのに。超不本意だけど、僕はこ

の有様だからな。

実際秋徒達でも良いんだけど、アイツも僕と同じの高校生。二・三人ならまだしも、数十人のチンピラ相手じゃ、助けに来いよりも、逃げろと言うよ。

アイツにも守るべき人が居るしな。運悪く、この状況を知らない事を願ってるくらい。けど、よくよく考えたら警察はどうしたんだ？　この騒ぎなら駆けつけて然るべきだろ。

これだけ目立つ所でこんな事やってるんだ。見えない訳が……そこで僕はあることに気づいたよ。立ち止まった人達の人混み、それがもしかしたら邪魔なのかも。

よく見たら、野次馬は倍々式に増えてるみたいだ。そこにはただの野次馬根性だけの奴も居るけど、何故かスマホとこちら側をチラチラ見てる奴が一杯いる。

それがどういう事なのかはわからない。もしかしたらただ単に僕たちの情けない姿でもｗｅｂ上にアップしてるのかも知れないな。

そんな事を思ってると、僕の視線がそんなスマホを向けてる一人と目があった。するとその目にはさ、ただ面白がってる様な目とも、同情するような目とも違う色が見て取れた。

それはいわば、そこで胸ぐらを捕まれた彼が最初に宿してた光かも知れない。そしてその人もスマホに目を落として、それをしまったかと思うと、声をあらげて走り出した。

逃げ出したんじゃない、胸ぐらを捕まれた彼の元へ一直線だ。だけどそれだけ吠えたから、反応した別のチンピラ共がその人のいく手を遮った。

「おいおい、なんか今日はバカがやたら沸くな。この暑さに頭までやられた――がっ！？」

口を動かしてたチンピラに入った拳。けどそれを打ったのはさっき飛び出した人じゃない。更に別方向から走ってきた人がいたんだ。

「てっめぇ等――げはっ！？」

吹っ飛ばされたチンピラに更に今度は背中側からのタックルが入る。それもまた別の人。なんだこれ？　どうなってる？

ただの野次馬だった人達がちょっとずつ何かに促される用に動き出してる。てか、これは乱闘では？　凄い事に成ってきたぞ。

「なっなんで？　どうしちゃったのこの人達？」

「さあ……正義感に目覚めたんじゃねーの？」

僕たち二人はこの中で一番困惑してるかも知れない。だってこんなのあり得ないだろ。一体この人達は何の為にこのチンピラ共とやり合ってんだ？

僕たちは彼らを知らないし、彼らだって僕たちの事を知らない筈だ。それなのに……何でこんな事ができる？

「てめぇら！　覚悟は出来てるんだろうなぁあああ！！」

「うるせぇ！　この犯罪者集団が！！　ＬＲＯの中でも外でも、好き勝手やれると思うなよ！！」

もの凄い勢い熱が増していく。辺りからピーピー聞こえる笛の音は、警官か何かだろうか？　これは大事だ。イベント事態が中止に成りかねない。

いや、そう成らなくても後々問題になりそうな光景だ。でもどうやら飛び交う言葉でわかったことは、僕達の為って訳じゃないって事だな。

彼らの意識は助けるんじゃなく、立ち向かうって言う方が正しい

気がする。

「ふふ、悪党共を懲らしめる日が遂にきたって訳ね」

メカブも彼らの意識を同じようにくみ取ったのか、ポツリトそう呟いた。やっぱり酷いことされそうに成ったからな。まあ当然だね。

ビルが建ち並び、アニメキャラの看板が見守る街がどっかのヤクザ映画の舞台にでも成ったような有様。みんなの顔と街の風景が合ってないったらない。

もしもこれが映画のワンシーンなら、背景だけを抜く事は出来ないだろう。そんなアキバと言う街での戦い。今まではイベントで、遊びだったはずだけど、これはもうそんな枠を軽く飛び越えてる。

交差し合う拳という武器、心を抉る様な言葉の数々は至る所に放送禁止用語が！　するとチンピラの一人が、思い出したようにこちらに焦点をあわせて来やがった。

「なに暢気に見てるんだよテメェは！！」

何だその八つ当たりは！　とか言いたいけど、それよりも迫る拳への対策が必要。そう思ってたら、直前で誰かがチンピラの拳を受け止めてくれた。

その手はお世辞にも力強さなんて物はあまり感じれない物だ。というか、どっちかっていうとちょっと老いかけ始めた様な印象さえ受ける。

皺も見えるし、僕は手から腕へ視線を移動してそして頭へ。そこまで老いてる人でもないだろうけど、四十代位かも知れないな。

この人も実はイベント参加者なのかな？

「おっさん何のつもりだよ？　てかテメェ等マジでブゥカじゃねーのか？　こんな事して、全員捕まるぞ」

拳を受け止められたチンピラが鼻から口に繋げてる鎖を揺らしながらそんな事を言う。明らかにオジサンよりもガタイも筋肉量も多そうで、趣味が体を鍛えることとか言いそうな部類の奴。
だけど僕を助けてくれたオジサンは一歩も引く所か、冗談混じりにこう言った。

「はは、確かに君が言うようにバカだと思う。だけどこの年でも言ってみたい事があったんだよ私には。
お前達の好き勝手にはさせない！！　どうだ？　主人公っぽいだろ」

オジサンは得意気に口元をつり上げた。だけどそれがチンピラの勘に触ったのか、次の瞬間が逆の腕が腹に入った。

「ぐふ……」
「おじさん！！」

その場に膝をつくオジサン。けど僕の言葉に無理矢理な笑顔を作って見せてくれた。どうやら左だったからそこまで効いてないよ的なアピールをしてるみたいだ。
それなら良いんだけど……結構綺麗に入ったように見えたよ。

「オッサンが年も考えずに調子付くからそうなるんだよ」
「ふはは……やはり私は……主役の年から離れすぎてたかな」

そういう事じゃないよね？　まだ冗談をいえるとは、このオジサンかなり良い根性してる。そんな風に思ってると
今度また別の人が目の前のチンピラの相手をしてくれる。
というか、既にチンピラ共よりもこちらが側の人数の方が多いん

だ。自然と一対多数になれる。既に戦況は変わってるんだ。

「ちっ雑魚がウジャウジャと沸きやがって！」

面白い事に、僕がお前達に言ってた言葉を向こうが使ってる。まさしくその気持ちを思い知れと思ったね。けど、実際誰かが傷つくのをみてたい訳でもないんだ。

どうしたってこの人達はケンカとかそんな経験に馴れてるとは思えない。だからこそ、チンピラ共の様なヤンチャな奴らからしたら、雑魚に見えるんだろう。

「ちっ、主役の座を取られちゃったな」

そう言って僅かにかげりを見せたオジサン。だけど次の瞬間、勢い良く立ち上がり

「だが、まだ私は老いに負けるつもりはない！」

そう言い、殴られた相手の足にすがりつく。

「ぐはっ！　くそ爺が！！」

倒れたチンピラがそう言いつつ、オジサンに拳を向ける。だけどそれを阻んでチンピラを更に押さえつける人がいる。筋肉質のチンピラを押さえつけるのについには三人掛かりだ。

「なんだか……良く見たらみんなさ、あんまり殴ったりしてない？」

わざわざ押さえつけたのを見て「あれ？」って思ったんだ。倒れた所をボコボコに蹴ることだって出来た筈なのに、この人達はそれ

をしなかった。
押さえ込むとか、一番体力使う方法だろ。僕は辺りに目を向ける。確かにそこかしこで殴りあってるよう見えるけど、積極的に拳を向けてるのはチンピラ共だ。
みんな取りあえずへっぴり腰だし、基本体当たりを狙うか、避ける事を不格好にやってるだけ。

「殴る事に抵抗があるんじゃない？　普通は誰だってそうでしょ？」
「まあそれはそうかも知れないけど……」

けどみんな一致団結悪者退治！　的な感じでテンションが上がってる筈だ。勢い込んで殴ったとしてもおかしくはないけど……それに少なからず殴られたりもしてるだろうし、その反撃を自ら抑制してるとしたら、それは結構凄い事だぞ。
そんな風に僕が思ってると、後ろから靴が地面を踏む音が聞こえた。僕は思わずメカブを後ろに回して振り返る。すると目の前には既に拳が……と思ったら、柔らかい口調でこう言われた。

「我々はヤクザやチンピラとは違うんですよ。それとこれは貴方の持ち物でしょう？」

目の前にあった拳が開かれると、そこには紛れもなく僕のスマホがあった。今日で青い色の胴体に傷が入りまくってるけど、これはこれで自分のと分かりやすいな。
まあ決め手は裏蓋の所に張られた変なシールだけど。取り合えず間違いない。僕はお礼と共に、スマホを受け取る。

「いえいえ、それよりも早く画面を確認したほうが良いですよ。なんだか音がずっと成ってます」

そう言われて確かに気づいた。なんかスマホから甲高い音が鳴ってる。もしかしてさっきから聞こえてた笛の音らしき物ってこれか？

「それが成ってたから見つけれたんですよ」

そう言ってニッコリ微笑みをくれる。なんとも良い人そうな感じ。僕は急いで画面を確認する。てか、確かあのゴツイ装置を破壊出来たのか……まずはそれだよな。

暗転してた画面に光が戻る。すると画面下にはバカラさんの言葉が一杯だ。取り合えず、一番を上を読むと、どうやらまだ装置は健在らしい。

『まだ足りない、もう一度だ！！』

の文字がある。スマホを装置の方へ向けると、串刺し状態の棒から変な光を出してる装置があった。煙も見えるけど、まだ完全に壊れきってない。むしろ中度半端に稼働してる様だ。どうやらまだ僕には仕事があるようだ。

「大丈夫ですか？　手を貸しますよ？」

そう言ってくれる優しい人。だけど僕は首を振る。

「大丈夫ですよ。この位、自分でやりきらないと」

僕はそう言って、装置をタップする。そして次の瞬間画面一杯に炎と煙が広がった。きっと離れなかったら爆発に巻き込まれたんだろう。画面の上部の部分が赤く点滅してる。

そして破壊を確認した所で画面にバカラさんの言葉が現れる。

『よし、次行くぞ次！！　まだ後二つあるからな！』

その瞬間「え？」っと僕は思ったよ。まだあるの？　が正直な感想。青空の下、僕は進むべきかどうかを立ち悩む。

みんなの勇気（後書き）

第二百六十五話です。
たくさんの人たちが自分達の体を張ってくれたおかげで、スオウ達はピンチをくぐり抜けた筈です。だけどどうやらまだ終わってない。スオウとメカブはこのイベントの最後に何を掴んでるのか……それはまだ二人にもわかりません。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

止まるしかない（前書き）

沸き立つみんな。アキバの街に勝利の声が響いてた。勿論なんとかなってよかったと思う。だけど僕の心は複雑だった。バカラさんが言ってた。ここだけじゃないと。

それを考えると、今この瞬間を手放しで喜べない。僕は選択しなきゃいけない。進むか止まるか。

止まるしかない

「くっそ、やられたか。一旦退くぞ！！」

そんな荒々しい声が辺りに響き、劣勢だったチンピラ共が退いていく。そんな様子を見て、沸き立つ声が所かしこで上がり出す。

僕はそんな様子に取り合えず胸をなで下ろす。これで怪我する人の増殖を押さえられる。みんな変に深追いもしないし、やっぱりどこかで規律でも作ったかの様な冷静さが熱さの中に混じってる様だ。

「ご苦労様です」

僕が周りに目を向けてると、背中側から柔らかい口調でそう言われた。振り返るとそこには、僕のスマホを拾ってくれた人が居た。

肩よりも長く伸ばした黒髪が、なんか不自然な程似合ってる男の人。普通男のロン毛ってあんまり良い印象を持たないけど、この人は違う。

なんか清潔感が漂ってる感じ。

「みなさんのおかげですよ」

僕は感謝の念を込めて、お辞儀をする。するとその人は「私は何も」そう言って謙遜した。奥ゆかしい人だな。まあ確かに乱闘の面ではわかんないけど、でも僕のスマホを拾って届けてくれたのはこの人だし、「みなさん」の中には当然入るよ。

「そう言って頂けると恐縮です。まあですが、私たちだけじゃ動き出せ無かったでしょうがね。お恥ずかしながら、私達にはそのよう

な度胸は殆どないんですよ。
数十年という人生を歩んで共通に培った物が、厄介事を見て見ぬ振りをするスキルですからね」

そう言ってちょっと情けなさそうに「ははは……」と笑うその人。だけどそれは別に恥じる事じゃないと思うけど。誰だって大体そうだろ。

仕事もあって家族とかまで持つように成るとさ、きっと日常って奴を守る方が重要なんだと勝手に想像する。学生時代位だよな。非日常が降ってこないかな～なんて想像に胸を躍らせるのは。

きっと僕達とは責任とか背負ってる物が違うんだ。そのくらいはわかる。だから卑下する事なんかない。それにこの人達は、そんな厄介事に進み入ってくれたんだ。誰がなんと言おうと、僕は尊敬しちゃうね。

「はは、それはそれは、とっても嬉しい言葉です。ありがたく受け取らせて貰いましょうかね」

そうその人が言うと、僕をチンピラの拳から守ってくれたオジサンが、ミンティアっぽい物を口に含んでガリガリかみ砕きながらこう言った。

「ふん、自分はただ、この年になってもヒーロー願望が捨てきれなかっただけだ。別に感謝されたくてやった訳じゃない」

ミンティアをガリガリとかみ砕きながら、オジサンは殴られた腹を気にするように手を当ててる。やっぱ無理してるんだろうか？ちょっとぶっきらぼうな言葉だけど、でもその顔は結構晴れやかにも見える。

周りの他の人達もそうだった。鼻血出てたり、服が擦り切れたり

してる人達も入るんだけど、なんかみんなそれなりに良い顔してる。
中には今更震えだしてる人も居るけど、けどそんな人も震える自分を見て笑う、みたいな。そんな感じで、チンピラと一戦交えてたとは思えない程、結構和気藹々だ。
みんな知り合いとかじゃ勿論ないだろうに、同じ敵を退ける為に取った大胆な行動のおかげで、なんか仲間意識が既に出来てるみたい。
するとそんな雰囲気の中、投げかける様な質問をメカブがした。
「けど、それじゃあどうしてみんなは行動を起こせたの？　それが一番の疑問なんだけど？　あっ、私からもありがとうございます」
最後に思い出した様にお礼を付け足したメカブ。こいつちゃんと感謝してるのか？　してない訳ないと思うけど。だってメカブは傷物にされかけたんだし……けどまあ、メカブの疑問は最もだった。
僕もそこら辺は気になるよ。自他共に認める厄介事スルー主義の人達が、何をきっかけにあんな大胆極まりない行動に至ったのか。
「そうですね。実際自分達でもびっくりなのですが、私達の背中を押してくれたのはこの人ですよ」
そう言ってその人は自身のスマホの画面をこちらに向けてくれた。そこには掲示板が表示されてる。そして沢山の書き込み。
今はチンピラ共を追い払った勝利の書き込みが絶賛殺到中って感じだ。てかこの板はこのイベントで僕達が得た情報を随時暴露してた場所じゃないか。
てかまあ、ここを知ってないと、先には進めないか。みんなここで情報を得てた訳だね。けどここは情報と意見交換の場みたいな物の筈で、誰かの行動を促すような事ってやるか？
ネットでの書き込みなんて、受けて次第だろどう考えても。それ

がこんな風に成るなんて信じられないんだけど。
そんな事を思って画面を見てると、新たな書き込みが発生した。
投稿者は豚の饅頭さん……この板を立ち上げた人だな。
【みなさん怪我はないですか？　大丈夫ですか？　素晴らしい行動だったと思うけど、怪我の治療は忘れずに！　みなさんが行動を起こしてる間、私は祈り続けてました。
みなさんは立派な人。この行動はきっとみなさんの人生の見方を少しだけ変えてくれると思います】
そして書き込みがズラズラ～～と続いてる。まるで教祖を称える信者みたいな反応だな。しかもこの豚の饅頭さんも自分を立てずに周りを立てようとするから、ますますその謙虚さに皆さん熱中だよ。
「この人が私達を助けるように？」
スレを見つめてたメカブが、その人の「ええ」という言葉を受けて、自身のスマホに目を落とす。どうやら、他人のスマホを無理な体勢で見てるより、自分で見る方がいいと判断したんだろう。
僕はと言うと、そのままの態勢で他人のスマホをスクロールしてた。過去の分の書き込みを見ればみんながこの行動に至った理由がわかるだろう。
そんな事を思ってると、頭上からその人の声が降ってくる。
「けど助けるようにとは言ってないですね。貴方達の姿を見て、確かにどうにかしなければ……という感情は誰もが持ってた筈ですが、けどそれは私達には難しい事です。
私達には、誰かの為に立ち向かう事を、損得無しでは考えられない。恥ずかしながら、そう言う大人なのです」
「なるほど。だからこの豚の饅頭って人は、その損得を絡めてみん

なを焚きつけた訳ね」
「ええ、まあそう言う事です」

そうニコリと微笑むその人。結果的には助けられた事に変わりはないんだし、理由なんて実際どうでもいいよ。損得を考えたってさ、奴らに立ち向かう事はやっぱり容易じゃなかったはずだし……善意だけじゃ人は動けない事も知ってる。

まあ中には百パーセント善意で動く人だって居るだろうけど、それは少数だろ。

けど……この豚の饅頭さんはある意味あざといというか、過去スレを見ていくと、確かに良いこと言ってるよ。それに決して強制はしてない。まあ出来ないし、そこら辺は間とかを考えて次の書き込みをしてるようにも見えるな。

【大丈夫、誰かがみんなを責めるなんてしない。そんなその他が誰もなんだから。けど、考えて見てください。みんなそこにいて、その他大勢とは違う人に成れるんです。

その殴られてる人たちを助けるなんて大層に考える必要はありません。もっと自分に都合のいいように考えても、周りには格好良く映る方法がありますよ】

なかなかに大胆な発言してるじゃないか豚の饅頭さん。まあまさしくそうこの人たちは周りに映っただろうけど……僕のイメージでは豚の饅頭さんが小悪魔位に思えてくる。

「でも、スゴいわよこの人。上手いもん。これだけの人達を誘導出来るって、普通じゃ考えられない」
「はは、実際普通の状況じゃそもそもなかったので、少しは元から感覚が麻痺してたのかも知れないですね。この暑さの中歩き回って疲れてた筈ですし。

何かこうパァっとする事を求めてたのかもしれないです。普通なら思いとどまる所ですが、ＬＲＯは特別だったという事でしょう。
あの場所に救われてる人達は多いんですよ」

なんかこの人の言葉を聞いてると、この豚の饅頭さんに誘導されたのもわかるかも。豚の饅頭さんはこの人たちの黒い部分だけじゃなく、根底にあるＬＲＯ好きの部分も刺激してた訳だ。
前の情報であのチンピラ共がＬＲＯでも犯罪者集団ってバレてるし、自分の関係ある範囲の善意も突いてたのかも。
それがいろんな葛藤になって、そして一人が決断して行動をした。あの最初に助けてくれた人が、実は一番偉大だったんだよ。
きっとあれがきっかけで他の人達が続いた筈だしね。何でも最初が一番怖い。それにこんなに人目があると羞恥心も働くし、難易度はさらに高くなる。
そして勿論痛い目に遭う（これは物理的な意味でね）リスクも当然あるんだし、自分から進んで殴られたいと思う人はいない。

それでもあの人がそれら全てを乗り越えて、行動した事がキッカケで、ここに立ってる人の大半は動き出せたんだと思う。
豚の饅頭さんもそこに今まさに触れてるしね。
するとそこでどこからか、こんな声が聞こえた。

「でもこれで終わりな訳じゃないんだよな」

その言葉に続いて、周りから声が挙がる。

「そうだな、さっきのチンピラ共は一旦とか言ってたし、あいつらって結局下っ端だろ？　確か黒幕が居るはず何だよな」
そこで僕は「あっ……」と思ったよ。そうだ、ここにハゲがいない時点で続きがあることに気付いても良さそうなものだった。

この装置を守るのが奴らの役目なら、必ずハゲだって居る筈なんだ。それなのに姿が見えないのなら、この戦いはこれで終わらないって考えるべきだった。
大変だったから、そこまで気が回らなかったな。普通にバカラさんに言われるまでここが最終地点だと思ってたもん。
でもそんな事はなかったんだよな。

「行くわよ無限の蔵！　私達がやらなきゃダメなのよ！」

そう言って僕の腕を引っ張りだすメカブ。こいつはあんな事あったってのに元気一杯だな。

「だって無事だったじゃない。何も問題ないわ。それにあいつ等をこのまま野放しにしてる方がよっぽど胸くそ悪いわよ」

はは、まあメカブはそんな奴だよな。けど……僕は歩みを止めて、メカブの進行を阻害する。

「ちょっ、何するのよ。速く行かないと残りの装置が起動しちゃうわよ」

ああ、確かに。それはわかる。急がないといけない……急がないと……ブリームスの人達が消えて、アイテムは結局犯罪者共の手に……僕は静かに口を開く。

「なあメカブ、ここまでにしないか？」
「え？」

振り返ったメカブの髪が柔らかく揺れた。その様はとっても女なの子らしくて良かったんだけど、その瞳が頂けない。

どうみても「何言ってんのこいつ？」的な瞳だもん。僕は僕でいろいろ考えたんだけどな。そんなに意外な事か？

「どういう事よ」

メカブは直ぐに眉をつり上げて、きつい瞳を僕に向けてくる。それにやけに顔を近づけて来やがるな。言いづらいんだけど。

「いや、ちょっと考えればわかるだろ？」

「わかんないわよ！　ここでやめるなんて、そんな戯言抜かす奴とは思わなかった！」

ええ～なんだけど。そこまで怒るか？　って位にメカブはご立腹。この状況だぞ。何度も言うけど、今の僕はメカブを守る自身がない。

「別に守って貰おうなんて思ってない」

「お前な……お前がそうだったとしても、メカブが危ない目に遭いそうになったら、こっちは守ろうとしないわけには行かない。放置なんて出来る分けないだろ」

目の前で傷つく様を放置できる程、僕はまだ腐ったつもりはないよ。けどそんな僕の言葉を聞いてメカブはこう言った。

「誰かを守る為に、頑張ってきたことを諦めるの？」

「違う。今の僕の状態じゃ、どのみちハゲ共を出し抜いてアイテムを手にするなんて不可能に近いんだよ。そしてこんな自分は、お前を守ることは出来ない。

無駄な可能性に掛けて、友達を危険に晒すほどの事じゃない。そう判断しただけだ」

僕はきっぱりとそう言ってやったよ。ここまで頑張ってきたけどさ、限界だよ。こんな展開じゃ僕たちには不利すぎる。

まだまだ手下を抱えてるハゲ共と、こんな満身創痍な自分。寄せ集まったみんなも居るけど、けどこれって一時的な物だろ。

仲間とかじゃ僕たちはない。今の今まで顔だって知らなかったくらいだし、てか誰からも名乗りを受け取って無いぐらいに、関係としては曖昧だ。

頼れる物なんて……今の僕たちには無いんだよ。僕がそんな風に考えてる事を伝えると、メカブは一際苛立った様な表情とそして舌打ちをかます。

女の子がやっちゃいけない事だよそれは。なんか異様に傷つくし……印象悪い。そして無造作に手を伸ばしたかと思ったら、神業的速さでスマホをかすめ取られた。何こいつ、どんだけ手癖悪いんだよ。

プロかと思ったぞ。

「ふふ、鍛えからね」

何をしてだよ……とは突っ込めなかった。変わりに「返せよ」といってやる。てか、何でかすめ取ったんだ？

「やだよ～だ。これは私が借りとくわ。そして無限の蔵の変わりに私がイベントを引き継いであげる」

「は？　何バカな事言ってるんだお前？　一人で何が出来るわけもないだろ」

メカブだけでイベントを続けるとか、そんなのライオンの檻にウサギを放つような物だろ。ようは奴らに餌というご褒美を与えるだけ……そんな事させられる訳がない。

「じゃあ続ける？　言っとくけど、私が諦めるって選択肢は無いからね」
「なんでお前……そこまでアイテム欲しがってたか？」
そんな記憶全然無いんだけど。どっちかって言うと、僕をおちょくって楽しんでたろ。それで満足しとけよ。バカなチンピラ共は勢いだけで最後までヤっちゃうかも知れないんだぞ。
そんな事になっても良いのかよ。
「そんなの良い分けないじゃない。私は下劣な男に、体を捧げる気なんて無い。けどね、私が一番嫌いなのは下劣なバカが幅を利かせてれる様なこんな状況よ。
ただの抗争でもない、こんなイベントだから私達にだってあんなバカを叩き潰せる機会があるのよ。
ここで逃げ帰れる訳無いでしょう」
そういって口の端をつり上げて妖しく笑うメカブ。その顔はチンピラ共に復讐してる様を想像してるような……物騒な顔だった。
「リスクが高すぎるって言ってるんだよ。ここはＬＲＯの中じゃない。女の子が男に対抗出来る手段はそうそうない。それともお前は格闘技とかやって……る訳ないよな」
「どこ見て勝手に結論付けたオイ」
無駄に起伏が激しい部分を腕で押さえてこっちを睨んでくるメカブ。こういうのって女の子は敏感だよな。別にそこを見てだけじゃなくて、今までのメカブの行動から推測したことなんだけど。
だってメカブ、今までそんな素振り微塵も見せなかったしな。酷いことされそうな直前まで出し惜しみする理由なんて無いだろ。
それにこいつ……まあ女の子は結構大体だけど柔らかかったしな。

筋肉あるの？　って感じ。同じ成分で出来てるのか、時々疑わしくなるよ。

「とにかく私は一人でもやるの！　アンタはそこでヘタレてなさいよ！」

「そうは行くか！」

僕は歩きだそうとするメカブの腕を掴む。けどそこまで力が入らない、ついさっき握力も限界まで使っちゃったからかも。

スマホを操作するくらいは苦も無かったけど、こうやって誰かを引き留める力じゃ心許ない感じだ。そしてそれをメカブも敏感に感じ取ったっぽい。

「ほんと、なんか脆弱ね無限の蔵。掴まれてる気がしない。それじゃあ添えてるだけだよ」

「確かにな、自分でもだからイヤになるって言ってるだろ。ここまで頑張ったんだ……諦めたくなんて本当はないさ。

でもダメだろ！　暴力を主体にあいつ等が妨害してくるのなら、これ以上は踏み込めない。情けないけどさ、これが今の自分の状態なんだよ」

力を入れようとすると小刻みに震える手。本当に添えるだけしか出来ないこんな状態じゃ、何にも出来ない。さっきの事でそれを嫌という程味わった。

ここから先はきっとハゲも居る。あのチンピラ共だって増えてるかも知れない。それに向こう側に付いた人達だって居るはずだ。

奴らは金で人を雇ってたみたいだし……その数は計り知れない。どう足掻いたって僕たちが太刀打ち出来るレベルじゃない。

「そうね。私達はきっと勝てないかも知れない。無限の蔵の思うと

おり、私格闘技の経験なんてないし、一人で行ったら酷い目に遭うのは確実よ。
私きっと泣いちゃうな」

そう言いながら、メカブは僕の手に自身の手を添える。細くて白い綺麗な手だ。でも今は、そんなメカブの手の方が力強く感じる。それだけ僕が弱ってるって事か。
でもこれは……メカブもわかってくれたって事だろうか？
周りは未だ興奮抑えられない感じ。そんな中で僕達だけが異彩を放ってると思う。進むか止まるか。既に僕に選択肢は無いと思ってる。
この人達はまだ続けようと思ってるのだろうか？　今回は上手く行ったけど、ハゲ共も引けなくなったら必死に守るだろうし、実際そうなったらこんな程度の被害じゃ済まない。
それこそ警察沙汰になりかねないよ。

「ねえ無限の蔵。もう一度聞くけど、本当にもう良いのよね？　後悔しない？　今までの頑張りが無駄に成ってもいいのね？」

真っ直ぐに見つめてくるメカブ。けどその顔はなんだか睨んでる様な。

「なんか表情と言葉が合ってなくないかお前？」
「しょうがないじゃない。よく見えないんだから」

そこで僕は思いだした。そう言えばメガネ取られてたんだっけ？
視力悪いからそんな睨んだ感じで見てるんだな。
僕はキョロキョロと当たりを見回す。するとまた、人の良さそうなあの人が「どうぞ」と言って黒縁メガネを渡してくれる。
凄いなこの人、なんだか執事みたいじゃね？　僕は「どうも」と

言ってメガネを受け取り、メカブに装着させてやる。

「ほら、これでどうだ」

ようやく見慣れた顔が戻ってきた感じ。メガネ無しも良いけど、メガネあっても別に印象はさほど変わらないな。僕的にはだけど。

まあもっとデザインに優れたメガネにすれば、違和感も無くなるんだろうけどね。なんでそんな古くさいタイプのメガネを掛けてるのやら。

「うるさいわね。別に良いでしょ。メガネなんて度さえ合ってればいいのよ」

まあそれはそうだろうけど……メカブを眼鏡を整えて、もう一度「良いのよね？」って聞いてくる。今度は柔らかくその瞳の奥にちょっと寂しい光が見える……そんな顔だ。

「いいよ。言っただろ。アイテムよりもお前を傷つけたくないって」

「そっか……じゃあ、まあしょうがないかな」

そう言ってメカブは僕にスマホを返してくれる。納得してくれたって事だよな。良かった良かった。諦めるのは残念だけど、あんな事二度とあっちゃいけない思う。

もう一度の時、取り返しの付かない事になったら最悪なんだ。

「じゃあ諦めたんだし、イベント終わりまで変わりに買い物に付き合いなさいよね。それで納得してあげるわ」

「言っとくけど、金は出さないぞ」

「そんなの期待なんかしてないわ。無限の蔵ってどうみても富裕層には見えないもん」

悪かったな貧乏学生で。僕の親……と呼べる人達は教育費と実家の高熱費と、最低限の食費しか振り込まない奴らなんだ。
そもそも既に十年位は姿も見てなければ声も聞いてないし、親と呼べるかも怪しい奴ら。だから下手に金の催促なんて出来ないんだ。

「やめてしまうのですか？」

僕達の会話をずっと聞いてたであろうその人が、不意にそう言った。僕はちょっとぎこちない笑顔で「はい」と答える。
けどその時、僕のスマホからコール音がした。通話ボタンを押して耳に当てると、知った声がこう言った。

「こんな所で終わらせないよ☆」

止まるしかない（後書き）

第二百六十六話です。
今回はスオウが初めて自分から何かを諦める回かもしれないです。いままでずっと何かとかなってきたけど、リアルとＬＲＯは違う。それを思い知る事になる今日このごろ。
これ以上をやめたスオウの判断は自分的には正しいと思えるけど、どうでしょう。スオウらしくないのかな？　だけど最後の最後に一言だ登場したあいつが、まだ終わらせてくれない……かも。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

手を引かれてもう一度（前書き）

イベントは終盤に来てた筈だ。だけど僕は限界を感じてた。思うように動かない体。誰も守れない恐怖。それらに負けて、僕はイベントを降りる選択をした。でもそこで掛かってきた電話。
だけどそんな電話に惑わされる事なく僕は降りようとする。

手を引かれてもう一度

「こんな所じゃ終わらせないよ☆」

スマホのスピーカーから伝わったそんな声。一際大きく鼓動が鳴り、言いしれぬ何かが胸を叩く。僕は唾を一飲みして電話の向こうの相手に問いかける。

「お前……シクラだろ？　何の冗談言ってんだ？　てか、突然消えやがって、なに言い出すんだよ」

「ふふふ、何ってそのままの言葉だよ。こんな所で終わらせない。終わっちゃ詰まらないじゃない☆」

「つまらないってお前……そういう問題じゃ……」

僕は電話越しに凄くハラハラしてる。嫌な事が起きた。そう思ってるからだ。

「そう言う問題よ。こんな所で常識的に閉幕しようだなんて、そんなの私の知ってるスオウらしくないもん。私はねスオウ……味方じゃないの。

もっともっと足掻き苦しむ様がみたいな。暇つぶしに☆」

語尾に絶対キラ！！　って入っただろ今。味方じゃない……そんなの分かりきってる事だ。何度だって自分に言い聞かせてきた。

僕の足掻き苦しむ姿ね……本当に良い性格してるよコイツ。本性発揮してきたな。けど、もう遅い。

「残念だったなシクラ。お前の望む様には行かない。僕達はもうリ

タイアを宣言したんだよ。アキバから離れる訳じゃないけど、一歩引いて、僕達はショッピングでもするさ」
「そう、ショッピング……出来るといいね、そんな事が」

なんだその含みを持たせた言い方。無理矢理止める力はシクラにだって無い。僕はリアル、シクラはスマホの中で辛うじてその存在を表してるだけだからな。
僕達は誰に引き留められる事無く、このイベントから降りれる筈だ。元から参加もリタイヤも自由だろ。開始時間と終了時間が決まってるだけで、行動を起こすかはプレイヤー次第だったんだからな。

「ふふ、そうだね。強制権なんてない。今回は誰の命も人質に取れないし、何より私が無力だし。でもねスオウ……無力な私は、普段よりも一杯頭を使って、楽しい事を考えるだけだよ☆
スオウがいつも通りに出来ないからって、逃げ出す理由を考えてる間に、私は私の楽しみ方ってのを模索してたの」

相変わらずキラキラさせながらキツいことを言う奴だな。逃げ出す理由？　それは違う。しょうがない事で、メカブを守る為の選択だ。
ＬＲＯでは何だって出来るかも知れない。凄い武器があって、魔法があって……それこそ出来ない事なんか無いと思える。
だけどリアルは違うんだ。僕はただの高校生で、出来る事なんか殆どない。セラ・シルフィングもないし、魔法なんてもってのほかだろ。
限界なんだよ。チンピラとヤクザが徒党を組んで暴力を始めたら、一人でどうにか出来る問題じゃない。今の僕にはこの体一つしか無いんだから。

「随分立派な言い訳ね。リアルの限界なんて、私には知った事じゃ

ない。私はそっち側の住人じゃないし、ぶっちゃけるとそう言うのはよく分かんない。
まあ、ここの不便さはヤキモキするけど、それでも私は変わらずに楽しみ続けるわ☆　勇気と無謀は違うけど、その境界なんて知恵で越えようよ」
「無茶言うな……」

どれだけ勝手な事言ってるんだコイツ。そう思うけど、シクラは僕の言葉なんてマトモに聞いちゃいない。

「そんな事言わない。私はまだ満足出来てないんだもん。ここでこのまま終わったらどう考えても盛り上がりに掛けるじゃない☆
ここまで来てるの片手で数える位しかいないのよ。それにあのヤクザと対立ルートはスオウだけ。これ以上無い演出でしょ？
苦難の先にこそ手にするべき価値のある物があるんだよ！！」

一人で電話の向こうで盛り上がってるシクラ。なんだその少年マンガ的な焚き付け文句は。そんなのに騙されるか。
ようは僕にもっと四苦八苦して私を楽しませなさいよと言ってる様な物だろ。てか最初からそう言ってるし……そんな奴の言葉で何言われたって気が変わるか。
てかこれも、言葉だけじゃどうしようもない問題なんだよ。

「ふん、兵隊だって用意してあげたのに……まあ、私の策略から逃げれる物なら逃げてみなさい。でも必ずスオウは私に感謝する事になるわよ。
絶対ね☆　なんたってシクラちゃんは新たなるスキル『人身掌握と誘導』を会得したからね」

そう言って通話は切れた。プープープーと無機質な音が鼓膜をな

らす。何が絶対だ……そんな絶対あり得ない。僕はスマホを耳から離して画面を見つめた。
そこには非通知の通話終了の文字が浮かんでる。そう言えばこの電話はどういう仕組みで？　ブリームスから電話回線に横やり入れたのか？
それともスカイプとか？　まああいつならなんだって出来そうだけど、でも人の心はそう簡単に掌握出来る物じゃないと知れ。
最後の物騒なスキル。そんな物そうそう手に出来る分けないだろ。あいつはどっかの教祖様にでも成る気か。

（あれ？）

なんかこんな事、ついさっきも言ったような……そんな事を思ってると、メカブが心配そうに僕の顔を下からのぞき込んでくる。

「大丈夫？　誰からなの？　顔色悪くなってるわよ」
「ああえ～と……全然大丈夫。ただのイタズラ電話だよ」

僕は笑って誤魔化す。だってシクラからの挑発電話とは言えないしな。それにさっきのは十分イタズラレベルだろ。こっち側に干渉出来ないシクラに何が出来るって言うんだ。
知恵？　簡単に言ってくれる。お前の知恵を見せてみろっての。

「ふ～んイタズラね。非通知拒否してないからそう言うのがくるのよ」

非通知拒否ね。確かしてた筈だけど……もしかして中身イジられた？　僕はスマホの設定を確かめる。するとやっぱり非通知拒否は解除されてるな。
あの野郎、侵入したついでに勝手なことをヤってくれたな。もし

かして僕の個人情報漁られたんじゃないか？　その可能性がヤバい位に高いんだけど。
くっそ、アイツの侵入を許すって事はそう言うリスクを考えるべきだったんだ。けど、こっち側から何か出来る訳も無かったしな……僕は大きくため息を付く。
するとそれに反応するようにメカブが「え？　ダメかな？」とか言った。どうやら何か喋ってた様だけど、考えごとしてたから聞いて無かったや。

「ゴメン、なんだっけ？」
「だから買い物のスケジュール。行くお店を決めて効率よく回らないとね」

そう言ってアキバの名だたるショップを指折り数えていくメカブ。おいおい、どんだけ回る気だよ。そんなに欲しいものあったわけ？

「別に欲しいって言うか、そこに行けば何かがあるのよ。私の心を打つ何か！　そしたら買うの」

随分とブルジョワジーな思考だな。僕には理解出来ないショッピング体型だ。僕は基本、目的の物だけ目指すからね。他の物に目移りなんかしない。

「出会いは一度切りかも知れないのよ。その時に買っとかないと後悔するじゃない」
「だからそれが金持ちの考えなんだよ。普通は財布の中身と様相談だよ。まあ僕は買わないけど」

信じられない……って顔で見てくるメカブ。こっちからしたら、そんなお前が信じられないっての。なんでそんなにお金があるんだ

よ。年、そんなに変わらないだろ？

「私好きなだけ使えるカード与えられてるし」

素っ気なくそんな事言いやがるメカブ。信じられない。今なんて言ったよコイツ？　カード？　カードってまさかあの現金じゃなく「カードで（キリッ）」とか言うそのカードか！？

「そんなキリッとはしないけど、まあ普通のクレジットカードよ。てかそろそろこれも進化して良いと思わない？　いつまでカード型で押し通す気よ」

そんな事をブツブツ漏らすメカブ。だけど言って野郎か？　そんな不満はいらねぇよ！！　このセレブ野郎。痛い格好と考えだけなら許せたけど、金持ちなんて嫉妬心しか芽生えなんわ！！

「ちょ……なんでそんなにやさぐれた目をしてるのよ」

「はん、貧乏ですから～。心まで貧相なんです～」

自分で言ってて悲しく成ってくるなこれ。てかコイツ、よくよく考えたらファーストフード店の支払いもこれでやってたじゃん。今更気付いた。

「あの時は何だって思ってたのよ」

ごもっともな質問だな。あの時は電子マネーだと思ったんだよ。今はどこでも使えるだろあれ。

「電子マネーなら、スマホで済むじゃない」

またも当然至極みたいに言われた。まあ確かに、最近はカード自体を持ってる人は少ないな。でもだって……同じ年位の奴がクレジットカードなんて持ってるとは思わないだろ。

「そうかしら？　私の学校じゃ普通よ」

どんな学校だよそれ。絶対お嬢様学校か何かだろ。全然イメージわかない。メカブがそんな学校の生徒なんて……絶対浮いてるだろ。

「ふっ、学生の姿なんて私にとっては仮初め。悠久の時を見つづける為のお遊び程度だから、クラスの人間なんかに興味は無いわ。どう思われようと良いのよ」

なんか突然思い出した設定を引っ張ってきたな。言いにくい事なんだと予想。やっぱり上手くやってないんだろう。設定をノリノリじゃなく苦し紛れに使ってるのがバレバレなんだよ。

まあメカブのこの痛い性格に付いてこれる人が、お嬢様学校にいるとは思えないよな。設定は孤独な自分を守る為の物とかかな。

「ふ～ん、まっ金で友人は買えないからな」

「なんかその言い方、凄くムカつくわね」

鋭い視線が僕に刺さる。まあだけど、ムカつくように言ったんだよ。ふっふ、良い気味だぜブルジョワジーが。

「無限の蔵って案外性格ねちっこいわよね」

「痛くないからいいんだよ」

普通だろこの位。僕は至って平均的な男子なんだ。何度も言ってるけど、これが真実。僕はそもそも大きな運命とか、宿命とか、人

の命とか、背負うべき人間じゃないよ。
夢は見てたけどさ、自分がそんな物に正面から立ち塞がれちゃ、嫌でも自分の普通さが身に染みるというか。
役不足感が半端無い訳だよ。それをこのイベントでも思い知ったな。ちょっと目がよくなった位じゃ、まだ誰も助けれない。
相対して体弱ってるし……これじゃあプラマイゼロだよ。

そんなほのぼの会話をしてこの場から離れ掛けてた。でもその時、後ろから近づいて来る足音が聞こえる。

「お二方！」

そんな呼びかけ方にちょっと驚きつつ、僕とメカブ振り返る。そこにはロン毛で執事っぽい良い人の姿が。その人はきちんと延びた背筋をそのまま折り曲げる。
まさにお手本のような頭の下げ方。やっぱり執事だろこの人。てか何？　そんな綺麗なお辞儀で見送ってくれなくても……

「すみませんがまだ我らを見捨てないでください！！」

ええ～～～～～だよ。なにいきなり？　見捨てるって、よく分からないんだけど。

「えっと……」
「貴方達のどちらかはあの物騒な人たちと同じ所に居る。その筈です。私たちの中には居ないんです。そして今からじゃ間に合わない。
私たちじゃあの物騒な人達を出し抜くことは出来ないんです！」

そう言われても……てかなんで僕たちがあのチンピラ共と並んでるなんて分かったの？

「見てれば分かりますよ。書き込みがある限り、それを発見した人が居るはずです。スレ主が表す情報は正確ですし、それなら誰かがそこまで進んでる筈です。
あの奇妙な物体が現れて、君が来た事で、あの物騒な人達も君を狙って動いた。君がスマホを持ったらあの奇妙な物は壊れた。
このくらいは自分でも分かります」

なるほどね。確かに見てたら分かることとか。僕は公衆の面前でボコられてたしな。でもそれなら分かるだろ。

「僕はこの通りボロボロなんですよ。僕を引き留めてもアイツ等には勝てない。それにどのみちこの中の誰かにアイテムが入ることはない。
それなのに、危険を冒してまでまだやるんですか？」

僕のそんな言葉に、ミンティアをガリガリ噛んでたオッサンが胆を飛ばしながらこう言った。

「当然だ！　俺たちにはもうアイテムは無理かも知れない。だがみすみすアイツ等に渡したくはない。その思いはこの場の全員が同じだ！」

そんな言葉と共に、周りの人達も頭を縦に振る。みんなあのチンピラ共にはやりたくない。そこは総意って訳か。

「でずが、私達だけではきっとダメでしょう。私達が出来るのはこちら側での事だけです。いくらこちらであの物騒な人達を妨害しても、ブリームス側にはどうやっても干渉出来ない。
それが出来るのは、貴方達だけなんです！」

「それは……そうだろうけど……」

太陽の日差しが、少しだけ俯いた僕のうなじを焼く。彼の言ってる事は分かるよ。確かにこの人達が出来るのは、さっきの様な事しかない。

このイベントの根幹であるブリームス側で干渉出来るのは、同じ位置に立ってる奴らだけ。

それがどれくらい居るか知らないけど、基本ハゲ共とぶつかりあうルートに居るのはきっと僕だけなんだろう。

てか、お互いに潰しあって手にするって事は、もしかしてアイテムは一つだけ？　それならかなりの――というか、超ド級のレアアイテムって事になる。

三つのアイテムそれぞれが一個ずつって事なのかな？

（って、何考えてるんだ僕は）

僕は首を振って浅ましい考えを振り払う。決めたんだ、もうやらないと。そもそもここでこの人達に協力を仰いで再出発なんてダメなんだ。

それじゃシクラの言うとおりになるしな。それだけは勘に障る。てか悔しい。

「言っておきますけどこの人、全然役に立ちませんよ」

「おい！」

あっさりと傷つく事を言ってくるじゃないかメカブの奴。

「何よ、やっぱりイベントに戻りたい訳？」

「それは……無いけど」

僕はブツブツとそう呟く。なんだ傷つく言葉は、みんなに諦めて貰う為の方便か。そうと分かっても何故か心は痛いけどね。
やっぱり自分で役立たずって分かってるからかな。

「役立たずなんてそんな事ありません。人には色々な役割があるものですよ。私達を上手いこと使って頂ければ良いんです。
その体の変わりに、私達を」
「えっと……それはどういう？」

なんか頭に一瞬シクラの奴の言葉がよぎる。アイツ確か「折角兵隊も用意したのに」とか何とか言ってなかったか？
まさか……もしかしてこの人達がその兵隊だとでも？

「私達があの物騒な人達の相手をこちら側で引き受けましょう。お二方はイベントの方へ専念していただければよいのです」
「けど、それじゃあみなさんの方が危ないですよね？　何の見返りも私達には出せませんよ。それなのに、あんなヤバい連中と一戦交える気ですか？
言っておきますけど、ここはＬＲＯじゃない」

それをお前が言うか――とは流石に僕は言えないな。僕なんて既に数回戦ってるし、元々始めたの僕だからな。
まあまさか、イベント内でも戦わないといけなくなるとは思って無かった訳だけど。

「ＬＲＯではない。それは十分に承知してるつもりです。でも私達は自分で賽を投げたんです。僅かばかりの勇気を持って。
まだまだ夢を見てたい時間なんですよ。自分達にはもう無理でも、あの物騒な犯罪者集団には渡したくない。それなら頑張ってる姿をこの目で見れたお二人が適任ですよ。

後悔をしないとは言えないですが、なんといってもヤクザやチンピラと敵対するわけですからね。
冷静になったらなんとバカな事を……と思うかも知れなません。だけどそれはここで解散しても同じ事ですよ。ここで終わればそれは中途半端な勇気でしょう。
私達の勇気を美談にするには、悪の野望を討ち倒した――という冠が欲しいじゃないですか」

そんなその人の言葉に、周りが「その通りだ！！」とか言って乗ってくる。でも、僕的にはもう十分格好良いと思うけどね。これ以上を求めても後悔するかも知れない。今ならチンピラ共に勝てたっていう事実があるけど、ここから先に進んで、最終的に勝てるかはまた別問題。

「それは豚の饅頭さんがみんなにそんな事を言ってるんですか？」

そうなんじゃないかなって思ったことを僕は言ってみた。だって余りにも大胆過ぎる提案だろ。この中の誰かが、そんなことを言って纏まる訳がない様な気がした。
なら誰か？　この人達を言葉だけで駆り立てられるのはきっとあの掲示板の主だけ。現にあの人にかき立てられて、みなさん動いた訳だしな。

「あの人はこんな事を薦めたりはしないですよ。これはあの人の言葉を受け取った私達の意志です。まあここで貴方を引き留めたのはあの人の意見ですけどね。
自分達だけでは不完全だと教えてくれました」

そんな言葉を聞いて、もしかして豚の饅頭さんって……と考えれる疑いが沸いてくる。だって完全に誘導してないか？　それに疑え

る事って結構あるんだよな。僕たちの知り得てた情報がまるまるあげられてたし……最初はハゲ共の下っ端でも裏切ったのかと思ってたけど、こっちにも裏切りそうな奴は元からいた。

そんな風に考えてると、メカブが進み出てこう言った。

「本当に、みなさんはそれで良いんですか？　なんの見返りが無くても、怪我しちゃっても、それでも私達に協力してくれるんですか？」

なんだ？　おい……その言い方じゃまるでやるみたいな感じじゃないか？　僕のそんな思いを無視して、メカブの言葉にみなさんが首を縦に振る。

「協力はこちらがして貰うんですよ。私達のワガママに後少しだけつきあってください」

「……ええ、やりましょう！」

光明が差し込んだみたいに沸き立つみなさん。おいおい、なに勝手なを言ってるんだよアイツは！

「ちょっと待て！　僕はやるなんて一言も言ってない！」

すぐさまそう言って水を差す。だってこれじゃ勢いで押し切られそうなんだもん。

「てか、なんでいきなり鞍替えしてんだお前は！　ショッピングはいいのかよ」

「そんなのもう良いわ。条件が変わったのよ。安心しなさい、無限の蔵が役立たずでもこれならなんとかなりそうじゃない？」

そう言ってメカブはパカパカと皆さんの方へ駆ける。そしてなんかその一員みたいな感じで振り返った。どうにかなるって……そんな……それって他人を犠牲にするみたいな事じゃないか。

「犠牲じゃないですよ。私達は今までの自分を越える希望を欲してるんです。だから、君が負い目に感じる事など、何一つありません。それにそんな君だから、私達はアイテムを譲れる」

そう言って、真っ直ぐな瞳を向けてくるその人。もう十分立派な人だと思うんだけどな。本当に。周りの他の人達だって……みんな同じ様な目を向けてくる。

僕はただの高校生なんだけどな。そしてメカブが僕を指さしてこう言い放つ。

「まだこれからよ！　そうでしょ無限の蔵！！」

こいつの変わり身の早さと来たら、これはもう脱帽しちゃうよ。毎秒事にＨＰがもってかれてそうな日差しの下、濃い影が落ちている。本当の本当に、限界なのは確かなんだけど、それでもこういう光景を目の当たりにすると、行けるんじゃないかと思えてくる。

僕だって本当は終わりになんかしたくなかった。だけどリスクが高過ぎたんだ。けど、みんなが助けてくれるのなら、僕はまだ先に進めるのかも知れない。

これだって卑怯なやり方なのかも知れない。だけどそんな中傷は僕が引き受けよう。それが最初にアイツ等ともめだした責任。

最後まで戦えるのなら、戦っていいのなら、僕は誰かが用意した兵隊でもなんでも、自分の責任で使ってやっていいかもな。

「そうだな。まだ僕達はやれる。どうかよろしくお願いします！」

僕はロン毛の人を見習ったお辞儀をした。誠意と感謝を込めて頭を下げる。もう一度チャンスは巡ってきた。横槍からの試合再開と行こうじゃないか！

手を引かれてもう一度（後書き）

第二百六十七話です。
仲間を手にいれてもう一度イベントに戻る事に決めたスオウ。さあ、最終決戦へこれで行ける筈。誰かの手のひらの上で踊ってそうだけど、今はそんなの気にしてられない。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

知恵と勇気を絞り出せ！（前書き）

辞めるのを止めて、みんなと共に闘う決意をした僕は、ブリームス側で昇った光の場所を目指す事になった。あの光は装置が発動したことを示す光。だけど所長の通信から、残り五分と言うタイムリミットを突き付けられて早くも大ピンチ！

だけどこんな時こそ考えるんだ。人にはこう言う時のためにこそ知恵って奴が備わってる。出来の良し悪しはわからないけど、もう一度やると決めた。その為にはまだ諦めるには早過ぎる。

知恵と勇気を絞り出せ！

ブリームスの空に青い光が上る。直線状の先から昇ったその光は僕達の場所からでもよく見える。

「これって……もうあの装置発動しちゃったんじゃない？」

確かにそうっぽい。そりゃあ僕達色々やってたもんな。バカラさんの後追わなかったし、イベントは随時進行してる。だからこうなってもおかしくはない。

遅かったのかも知れない。でもまだ終わった訳じゃないだろ？そう願ってると、スマホからドデカい声が飛び出て来た。

『なぁあああにをやってるか！　戦士フィフティィィィンよ！！　まだ間に合う。急いで装置を止めろ！！　一機は破壊できた様だが、残りの二機でも十分事足りるだろう。

元々三機持ち出したのは奴らの保険だ。全て破壊しろ！　あの光が最大限増幅されるまでの時間は五分だ！』

五分……ようはそれがタイムリミットって事か。無駄に大きな声だったからか、所長の言葉はどうやら僕以外の人達にも聞こえてたらしい。

「五分ですか。それはなかなか厳しいですよ。リアルの弊害。物理的な距離でという意味で」

そう言われて光の柱があがってる空を見つめる。実際光の柱があがってる場所は、この道の先っぽいんだけど、五分で三つ目の場所まで行くのは確かに厳しいかも知れない。

「大丈夫よ。次のポイントを二分でクリア出来れば移動距離を除いても、一分は残せるわ。それでどうにかしましょう」
「二分ってお前な……大体二回攻撃しないとあの装置は壊せない。それもどうやら半径五メートル以内に入らないと投げれないし、そこら辺まで近づくと、どうやってもチンピラ共に見つかるぞ」
そうなると再び乱闘が発生するのは必至だ。どうにかして戦うのは最小限に済ませたいんだけど……
「そんな事言ってる場合じゃないわ。みんなでアンタをそこまで近づけさせるから、一気に二個投げたらいいのよ。そしてそのまま走り抜けなさい。
足が動かないとか言うのは無しね」
おいおい厳しい事いってくれるなメカブの奴。ようは二個まではみんなでどうにかしてあげるけど、最後は一人でどうにかしなさいと？　流石にどうなんだよそれは！　作戦なんて言えないぞ。
「こうやってる時間だって惜しいの！　作戦なんて早々出ないわよ」
そう言って頬を膨らませるメカブ。まあ、それはそうなんだけど……流石に闇雲に突っ込むのはどうかと思う。こういうの常ってさ、進むごとに敵の数も多くなる物だろ。そもそも最初の場所に居たチンピラ共は向こうに合流しただろうしな。
今回よりもこの先はずっと困難になるって考えた方がいい。
「そうですね。おそらく向こうの物騒な人達も雇った人やお抱えの下っ端な人達を集結させてもおかしくありません。この人数でもどこまで渡り合えるか。

そもそも君を一人で行かせてもそこに賭ける確率は限りなくゼロに近い」

ハッキリ言ってくれるなこの人。このロン毛の人は良い人だから、そこら辺は濁すかと思ってたけど、そんな無駄な気遣いをやってる場合じゃないか。

まあ良いんだけど、それはその通りだし。僕だけが通り抜けたとしてもその先は無い。それは自分が一番よくわかってる。今の僕じゃ、歩く事は出来ても、走る事すら不安な位だ。

でもだからこそ考えないと……

（知恵を使って――）

ここであのシクラの言葉が脳裏を掠める。本当にあの野郎の言うとおりの状況だ。今こそ知恵が必要だよ。逃げる言い訳じゃなく、前を切り開くための知恵を僕も捻り出さないと行けない。

「取り合えずえ～と――」

「無限の蔵こと、スオウです。この人は」

なに認めてもいない二つ名付きで紹介してんだメカブの奴。紹介された方も「無限の……え？」とか成ってるじゃん。ロン毛の良い人は正直に受け止めようとしてくれちゃってる。

そこは流してくれて結構です。

「スオウ君ですね。私も自己紹介……と行きたい所ですがそんな時間はありませんね。ロン毛でもエセ紳士でも好きな様にどうぞお呼びを。

取り合えず、その体で走るのは辛いでしょうから、力自慢に背負って貰ってください。あの方などどうでしょう」

そう言ってロン毛の人が指し示したのはタンクトップに浅黒い肌。ツンツン尖った短い髪が特徴的な筋肉マン。その人はロン毛エセ紳士の人が話すと爽やかな笑顔で了承してくれた。
てか、ロン毛もエセ紳士って悪口っぽくないか？　笑顔で好きなようにって言われたけど、この執事みたいな人には似合ってないよな。エセ紳士どころか、本物の紳士っぽいもん。
なんかそう呼ぶ度に罪悪感が募るというかね――って今はそんな事より、この逆境をどう乗り越えるかか。そっちを考える方が、よっぽどこの呼び方を気にするよりこの人に為にも成るだろう。

「取り合えず足は確保出来たわね。後はどうやって勝利を引き寄せるか……考える時間さえ惜しいから、もう走りながら考えましょう。
取り合えず、あの装置を壊せるのは無限の蔵のスマホでだけなんだし――」
「ちょっと待て！」
「――何よいきなり？」

何かさっき、頭に雷光が走ったぞ。僕は自身の手の中にあるスマホを見つめる。そうだった……なんで気づかなかったんだよ。僕は力が入らない腕に力を込める。こんな自分にも、まだ役に立てる事はある。

「メカブ、地図を出してくれ。それと誰かそこら辺で大きな布を買ってきてくれませんか？　予備をあわせて四枚ほど。姿を隠せる程度のが良いです。
それともう一人、力自慢は居ませんか？　人一人を背負っても余裕でこの直線を走りきれる。そんな人。まあこれは、一人じゃなくても現密には良いですけど」
「何々？　どうしたのスオウ？　ちゃんと説明してよ！」

僕の突然の指示に困惑するみなさん。まあ当然だよね。大丈夫今から説明してやるよ。取り合えず適当な人がそこらの雑貨屋で布を調達してる間に概要の説明でも。

「なあメカブ。僕達は確かに圧倒的に不利だよ。けど、やりようはある。守る側と攻める側の意識の違い。そして奴らと僕ら、共通して持ってる情報を上手く使う。

まあ、ようは奇襲だな」

「だからその、奇襲をどうやって成功させるのよ」

眉をつり上げて勿体ぶる僕を睨みつけてくるメカブ。よしよし、布も到着したし、教えてやるよ。

「鍵はこの『僕のスマホ』だよ。だけどこんなのは『僕の』をとればただのスマホなんだよ」

「は？」

明らかに疑問符を頭に浮かべるメカブ。こいつ結構察しが悪いな。そんなメカブに対して、ロン毛の人は「なるほど、そう言う訳ですか」と笑顔で言ってくれた。

「え？　え？　何でわかるの？」

「取り合えずお前も誰かの背に乗れ。そして布をかぶってろ。作戦は走りながら伝える。いっとくけど、この作戦の要はお前だ。聴き漏らすなよ」

僕はメカブのスマホに表示された地図を確認。やっぱり大通りだけあって、問題はないな。どの道もここには続いてる。大丈夫……いけるさきっと……そんな言葉を自分に言い聞かせる。

「なんか良くわかんないけど、ちゃんと説明しなさいよ！　それと……もっと汗臭く無い人でお願い」

おいおい、折角の力自慢の人も目に涙が貯まり出したじゃいか！　なんて酷いことを言う奴だ。それにこの暑さだぞ。汗をかいてない人なんか居るか。

「じゃあちょっと待ってよ」

そう言って、メカブは清涼剤をシャカシャカ振ってプシャーと勢い良くその人に噴射させまくる。おいおい、そこら辺でやめてあげろ。ゴホゴホ咳込んでるじゃないか。

「変な所触ったら警察に突き出すから」

「了解であります姫！！」

なんか下の人はこれをプレイと受け止めてるのか、あんな事されて言われてるのに随分ノリノリだ。首輪でも付ければ、もう従順な犬に成りそうな程。

「さて、それでは行きましょう！」

「そうですね。行こうみんな！！」

僕の号令と共に、このアキバの地に吠える様な叫びが木霊した。周りの関係無い人たちは、何かのお祭りでもやってるのかと、変な檄を飛ばしたりもしてる。

迷惑そうにしてる人も勿論いるけど、それよりもこれだけ騒いでて警察がこないのがちょっとおかしい。アレかな？　やっぱりイベントで街を舞台にするわけだから、勿論無許可じゃないんだろう。

イベント関連の事は極力無干渉で打ち合わせてるのかも。まあそれでも暴力沙汰は流石に見過ごしてくれないと思うんだけど……どうだろう。だけど既に引けないんだ。もう一度の決意をした。なら、勝つまでもがいてみようと思うんだ。

体が上下に揺れる。周りはもう僕に見えない。何故なら布を上から被ってるからだ。僅かに見えるのは前方の景色だけ。少しすると前方に人だかりが見えた。なんだか交通がそこだけ途切れたかの様に成ってるって事は……奴らの物騒な面構えに、一般人は迷惑を被ってるって事だろう。

「まさかアレ全部……かかっ上等！　アンタもそう思うだろ？」

僕を運んでくれてる人がなんかやけに楽しそう。まあネガティブ思考よりはマシだな。それに本当に力強いんだよね。

この筋肉、暑苦しいけど、頼りに成る感じは十分過ぎる程ある。まあ今日見たどっかのシスターはこの数倍は迫力あったけど、あれと比べるのは酷ってものだろう。

てかこっちの方が人間味がある。

「まあ確かに……とは流石に言えないけど、頼りにしてます」

そう言って僕はこの人の肩を掴む手に力を込める。目の前に迫るチンピラ共。奴らもこちらの接近には既に気づいてる。殺気だった感じが肌に伝わってくるよ。

そんな時、スマホの画面からバカラさんの声が聞こえた。

『くっ、しくじっちまったぜ。頼む戦士１８号！』

そんな事を謙虚に言ってくれるバカラさん。僕が追って来てなかった事には成ってないんだな。僕のせいなんだけど……

「って、ん？」

画面を見てると、正面からチンピラじゃない奴らが迫ってくる。それは大きな槍を手にして鎧に身を包む兵隊。ブリームス側の妨害だ。

そうだった、敵はチンピラ共だけじゃ無かったんだ。

「目の前のから三人、ブリームス側の妨害。指示通りに動いてくれますか？」

「了解！！」

力強い返答。本当に頼もしい人だ。僕の指示に従って大きく体を左にずらす。態勢を低くしてもらい、向けられた槍を交わす。

そして交差際に手に持ったまま例の卵型武器で昏倒だ。まずは一人目。続いて止まらずに真っ直ぐ前進。あっけなく仲間が倒され、一気に迫る僕に動揺してる間に、もう一人もノックダウン！

これでブリームス側での邪魔者は一応排除。後はバカラさんが引き受けてくれてるしね。

「敵の排除完了です。作戦通りに、左右に展開してください」

「おう！」

僕達はそれぞれ人数を分散させて、左右に分かれる。メカブ側に比べてこちらを少数にしてね。チンピラ共は当然僕を捜してるだろうけど、どっちかはまだ分かってないはずで、当然この布を被ってるどちらかだと考えてるだろう。そして当然、守りの堅い方を重要だとおもってくれれば……

まあ実は、さっきの兵士との一戦を見られてたら、布被ってても諸バレだった訳だけど、ここのチンピラ共は既にスマホを持つこと

放棄してやがる。
暴れる気満々ってな感じだ。助かったけどね。ここで僕がどっちに居るのかバレたら、布で姿を隠してる意味がない。
のっぺりとして妙に暑っ苦しい空気をかき分けながら進み、僕達は左右同時一斉に仕掛けた。

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」」
「「らあああああああああああああああああ！！」」

チンピラとこちら側、それぞれの努声がぶつかりあう。前面でみんなが僕の道を造る為にがんばってくれてる。狙い通りにメカブ側の守りの方に人数を割いてくれたみたいだな。まあだけど、さっきの場所とは違って、僕達の人数差はほぼ無い。
普通に喧嘩してこっちが勝てる割合は低いんだ。だからみんなには無駄に仕掛けない様に言ってるよ。バカなチンピラ共を一人二人ずつ引きつけてくれたら十分だ。
戦闘を率先してやるのは腕自慢の数人だけ。それだけで十分道は開ける筈だ！

「布を剥がせ！！」

そんな声がチンピラ共からあがる。どっちが僕なのか確認したいんだろう。だけどメカブは強固な守りと多い人数に任せた勢い突破でズンズン中へ進み、こっちはこっちで、僕の目を生かして指示することでチンピラ共の魔の手をかいくぐり装置に向かってる。
失敗するわけには行かない。体を張ってくれてるみんなの為にも、ここで失敗したら、自分は殴られて無くても痛いんだよ。きっとそうだろ。
射程圏内まで後数メートル。そこかしこで乱闘が繰り広げられる光景はやっぱり古いヤクザ映画の様な感じ。けどこれは銀幕の向こ

うの光景じゃない。
実際に目の前で起こってる事で、僕はその当事者だ。体を張ってくれてるみんなは名前も知らないけど、仲間なんだ。

「きゃあ！」

甲高い声がこの場に響く。女の子のそんな声は良く通るから分かりやすい。視線を向けると、遂にメカブの被ってた布がはぎ取られた所だった。
これでこっちが僕だとバレた事になる。視線が一斉に向けられた気がした。

「バレたみたいだぞ」
「そうですね。こうなったらしょうがない。メカブは直ぐに離脱するだろうから、こっちは一気に前へ！！」

僕はそう言って自身で布を脱いだ。燦々とした太陽が体全体に降り注ぐ。白い布が風にたなびいて揺らめいた。そしてこっちに注目してるチンピラ共に、その布を目隠し代わりに投げつける。

「いっくぞおおおおおおおお！！」

布を被ってジタバタしてるチンピラに僕を背負ってる人がタックルをかました。その勢いは凄まじく、一斉に雪崩の様に倒れ込む。僕は背中にいたから、彼の背中を転がり、チンピラ共を越えて、残り数メートル圏内をクリアする。
素早くスマホを向けて、僕はロックオンされてる画面を二度タップする。放たれる二個の卵。それらが青白い光を放つ装置にぶつかり、激しい雷撃が弾けた。
てか、ここに居たら、僕のブルームス側のＨＰは無くなるんじゃ

……そう思ってると、後ろから首根っこを捕まれて強引に後ろに引っ張られた。

「成功……だよな？」
「ああ、成功です！」
「よし！！」

太い拳を握りしめて噛みしめる様にするその人。強引だけどおかげで助かった。まだ布の下でモゴモゴモやってるチンピラを無視して僕はこういう。

「もうここには用はない。予定通りに最後のポイントへ行きましょう！！」
「よおおし、全員この戦線を離脱だ！！　最終地点を目指すぞ！」
「「おおーー！！」」

僕は再びこの人の背を借りて一斉にバラバラの方向へ捌けていく。チンピラ共は意外にも追ってこない。奴らは僕らが捌けていくのを観ると、直ぐに最終ラインまで下がり始める。
それはまだ余裕があるみたいに見える行動。本当の戦いは次の場所でって事か。結局ハゲはここにも居なかったしな。上等、どのみち次で決着だ。

僕たちは追ってがなかった事で簡単に集合場所に集まれた。

「良くやった。誉めて使わすわ無限の蔵」
「何キャラだよお前は。良いからそれ渡せ。直ぐ行くぞ。時間はもう二分半も無い」
「わ……分かってるわよ」

ん？　なんだかちょっと上擦った様な声にメカブが成った。こいつもしかして……

「なんだ？　緊張でもしてんのか？　声が震えてるぞ」
「うるさい！　ようやく時代が私に追いついて来たって思ってるだけよ。ここからは私が主役なのよ」

そう言って精一杯そのたゆやかな胸を強調するメカブ。でも良く見れば分かるよ、僅かに指の先とか震えてる。僕はしょうがないから、頭をポンポンしてやった。メカブのクセッ毛気味だけど、サラサラしてる髪が指の間で良い感触を伝えてくれる。
だけど大量のピンは止めた方が良いな。日光浴びて暑く成ってるぞ。まあだけど、やっぱり女の子の髪の毛はなんか出来が違う。

「ちょ……ちょっと何するのよ」
「まあ、取り合えず頑張ろうぜお互いさ。大丈夫、必ず成功する。成功させてみせるさ」

ちょっぴり頬を赤らめるメカブが抗議の眼差しで僕を見てきてた。そして僕の腕を弾いて捨てると、メカブは僕を見ないようにしながらこう言った。

「バッ……カ……そんなの当然でしょ」

それは最初大きく徐々に弱くなっていく音量で紡がれた。僕は弾かれた腕をどうしようかと考えて、そう言えばまだやってなかった挨拶があったことを思い出したよ。
シェイクハンド……まあ握手。手を取り合った事はあったけど、ここで初めて繋げて見るのも良いんじゃないか。物理的な事じゃな

く、心の方をね。

「お前と出会えて楽しかったよ。思いでは勝利で飾ろうぜ」

僕は右手をメカブの前に差し出す。ちょっと重量感が増したように感じる手だけど、ここで僕まで震える訳にはいかないよ。

だから僕は涼しい顔をしてみせる。そんな僕の手を見てメカブも自身の手を出してくれる。そして重なって力を互いに込めたとき、メカブは数回スーハーと深呼吸を繰り返した後に強い光を宿して凛としてこう言った。

「ま、私の悠久の時の一ページに刻む価値はあったかもね。最後次第でもあるけど、刻める一日に私もしたいかな」

僕たちは互いを見つめて、素早く互いに握りしめた腕を引き合った。カシャっとちょっとした音が聞こえたけど、そんなの気にしてる場合じゃ無いから、どっちも何も言わない。

メカブを運ぶ人は交代で、新たな馬の背に身を預ける。僕はさっきと同じ人。まだまだ走り足りないみたいだし、スゴい体力してるよこの人。

僕とメカブは後は何も言わずに、互いに頷いて走り出す。もう時間が無い。僕たちは最短距離で青白い光が聳える場所を目指す。

視界が上下に揺れる。そのたびにちょっと心臓が飛び出しそうになってた。強烈に差し込む日差しが、この大きな道をそのカーテンで白く覆ってる様に見える。

周りから受ける奇異の視線も、そんなカーテンに覆われてどうでもよくなる。立ち並ぶ様々な店舗のビルと大きな道。そこを走る僕たちは妙に浮き立つ存在で、だけど今この瞬間は、自分達とそして

……少し先に見える柄の悪い連中しかこの目には映ってない。
僕は再び被った布を握りしめる。アイツ等の多さ……あれは予想外だろ。四・五十人は居るぞ。装置から三十メートル付近から、防衛線を築いてやがる。
こっちは二十人強って所なのに、これは明らかに不利だ。まあそんなのは分かってた事だけど……それでもこんなのを見せつけられるとね……僕は少し離れた所を走ってる、もう一体の騎馬を見る。
僕と同じようにたなびく布。きっと大丈夫だろう。

「かっははは！　燃えて来る展開だ！！」

そう言うのは僕の騎馬となってる人。本当にこの人は……だけどその前向きというか、ガムシャラな言葉で、無理矢理にでも自分達を奮い立たせる人達も少なくない。
彼は意図せず、怖じ気付きかけた仲間の心を立て直した。
そして向こうもこちら側の接近に気付き、臨戦態勢へ。その時、ガヤガヤと動く奴らの向こうに一際光る頭が見えた。あれは間違いなくハゲだ。
一瞬目が合った……様な気がしたけど、それはきっと気のせいだろう。向こう側からはこの布の奥まで見える訳がない。
するとそこでハゲよりも偉そうにしてる奴を発見。リアルで赤髪でライオンみたいな頭の奴が、拡声器を向けてこう言った。

「さあ！　テメェ等がどれだけ愚かか分からせてやんぞ。最終決戦と行こうじゃねぇか！！　きゃっっはあああああああ！！」

澄み渡った空に似合わない声がこの戦いの最終幕を開ける。

知恵と勇気を絞り出せ！（後書き）

第二百六十八話です。
五分って無理じゃね？　とか思われた方多いかな？　多いかもですね。てか無理だろと自分で言いたいくらい。でも実際数百メートルの距離くらいなら……ともおもうんですよね。
まあ障害があるけど、距離だけでなら五分はあればいける筈。多分。そういう想像です。後はこの数字が少ないか多いか取る側の問題でしょう。スオウ達は最後まで戦い抜く事が出来るのか！？
てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

乗算の力（前書き）

僕達は三つ目の装置へ迫る。思いつくだけの悪あがきを用意して、みんなの力を掛け合わせて、僕達は走る。ただ真っ直ぐにあの場所を目指して！　僕達には一パーセントだって手を抜く事は許されない。

乗算の力

一つ一つの踏み込む足音が大きく、そして強く聞こえてた。少しずつ傾いて来た日差しが、少し広い影をビルで作ってる。

まあだけど、僕たちが走るのは道路の中央部分。そんな影が届くはずもない、絶好の日光浴スポット。ジリジリと肌を逐一焼く感じさえ分かるくらいの日光の照射率だ。

だけどそんな暑さよりも、今はこの場に漂う緊張感の方が半端ない。互いにお互いを視認して、そして最初の一撃を交差させる時まで、このこめかみ辺りを刺激する感覚は消えないだろう。

開戦はハゲの隣の拡声器持った赤い奴によって宣言された。それによって、血の気の多い向こう側は今か今かと待ってる状態。

開戦の火蓋を切るのはこちら側の役目と言わんばかりの対応。でもこれは、奴らが統率されてる事を示すんだろう。

それは実際厄介な事。だってそうだろ？　一人一人が個々に動くのならそれは幾ら数が居ても同じだけど、ちゃんとしたまとまりを自覚して動かれるのでは、連携とかが違う。

統率されてない大人数は雑踏だけど、統率されたそれは兵隊だ。その違い。そして今や、チンピラ共は兵隊化してる。

一筋縄じゃいけなさそうな感がするな。僕は手元のスマホに目を落とす。

（けど、もう時間がない。確かもう一分切ってる筈だろ）

あれこれ考えてる暇も、怖じ気付く一瞬も僕達には無い。ただあの装置の五メートル圏内にどうやっても近づかないといけないんだ！！

照りつける太陽の下、僕達は四・五十人の内の十五人程度が待ち

受けてる最初の接触ポイントに突っ込む。待ってましたと言わんばかりに鬼気とした表情で拳を握り閉めてるチンピラ共。

「飛んで火にいる夏のなんとかってな！！」

どっかのバカがそんな事を言って拳を向けていた。どうして最後の最後で覚えるのを諦めた！！　って言いたくなる残念さだよ。

だけどそんな突っ込みは無意味。ここで足を止める予定は、悪いけどないんだよ。

僕達布被ってる二人を中心に置いて、みんなが守る為に周りを囲んでくれてる配置での進軍。真っ先に狙われてるのは専ら前方のみんな。

そこに併せてチンピラ共は拳を放ってる。だけどな、こっちだって役割分担くらいしてるんだ。

（ゴメンだけど、頼むみんな！）

そんな思いを僕は心に表す。誰にも見えないし、届かないけど、でも今大々的に声を出すわけには行かない。だけど思わずには居られないから、だからせめて心には。

前方のみんなは拳に恐れず突っ込む。その姿はガムシャラで滅茶苦茶かも知れない。結局当たっちゃってる人だって居る。

だけどそれでも押し負けない炎が、みんなそれぞれに灯ってた。

「「「「ずあああああああああああああ！！！！」」」」

そんな声と共に、前方に居た四人がチンピラ共にぶつかりそのまま押し倒す。それも丁度、僕達に迫ろうとしてた奴らを阻害する所にだ。

元々奴らは横に開いてて、僕達も今の形を維持してちょっと感覚

を広げてた訳だけど、それを接触まじかに成るにつれて少しずつ自分達の感覚を狭める用にしてた。だから奴らの両端側は、これで思わぬ障害物が出来たわけだ。
だけどこんなのはジャンプ一発で越えられるだろう。けど、必要だったのはこの一瞬で十分なんだ。
僕達はこの一瞬で、前衛だった四人を残してこの場所を抜ける。振り返らない事は既に決めた事だ。四人の犠牲に応えるには「やり遂げる！」それしかない。
後ろから聞こえる声を振り払い、僕達の前には後ろに居た人達がまた数人前に来てくれる。もう一カ所越えないといけない関所がある。そのための準備だ。
だけど次はこんなあっさりとはいけないだろう。こっちのやり方はバレた訳だし、そして四人減ってしまった。それなのに奴らは増えてるんだ。最終地点までたどり着いた時、目標は二桁だけどそれもどうなることか。
だけどここは同じやり方しかない。まだここで手の内を晒す訳には行かないんだ。

「さぁさぁ来いやあああ！！」

そんな言葉を発して今度はチンピラ共からこちらに迫る。横に広がってたから包むように僕達を囲んでこようとする。逃げれない様にしてきたか。
こいつらは後数十秒稼げば良いんだ。それで僕達は負ける。それは実際絶望的な数字に見えるけどさ、だけどこうも考えれるんだ。
僕達にはそもそも長期戦なんか出来ない。それなら限られた時間に全力を賭ける事は、もしかしたら一番勝率を高くできるんじゃないかって。
だから僕達はこの一瞬を最大限に有効活用する事を考えたんだ。そしてたったの数十秒だからこその折れない心って奴を維持できる！

「同じ手が通じると思うなよおおおお！！」

そんな事言いながら握りしめた拳を大きく振りかぶり始める奴ら。てか既にさっきと同じやり方じゃこれは越えられないだろ。本当はこの先で使うつもりだったんだけどしょうがない。

まだ勢いを失うわけには行かないんだ。僕は僕を背負ってくれてる人に耳打ちする。

「了解。みんなアレを構えろ！！」

その言葉でみんなはポッケに忍ばせてたスマホを取り出した。そして素早く向かい来るチンピラ共に背面を向けて、元々起動してたアプリを実行！！　その瞬間、タイミングに僅かなズレがあったけど、概ね一斉に強力な光がチンピラ共を包んだ。

「うわ！」「ぎゃあ！　目が！」

とかの声が聞こえる。この隙に前方に来てたみんなでチンピラ共にタックルをかます。これで最後の光が上がる場所が見える。

僕達はそのままチンピラ共を飛び越えて前へ！　余りにもフラッシュ大作戦が幸をそうしたから人数が減らずに済んだのはよかった。けどこれだけ効果的なら、次の場所でも使いたい所だったな。

「ぬわああ！？　――――ぶばっ！」

僕がフラッシュ大作戦の余韻を感じてると聞こえてきた誰かが殴られた様な声と音。目を向けると、前方で先行してた一人が殴り倒されてた。

そして目前に広がるのは一斉に全員で掛かってくるチンピラ共の

姿。小細工止めるの早すぎだろこいつら。いや、だけどこいつ等にとっては最良の選択かも知れないな。
ようは受け身を止めたって事だろ。幾ら絶対な物量があったってそれを生かしきれずにこれまでやられてたから、さっさと総力戦にしてしまえと……そういう事か。
元々変に分散させなくても良かったんじゃね？　とか薄々思ってたし、これは厄介な判断をしてくれた。兵隊が勝手に動く訳ないから、これはハゲかあの赤髪ライオン（ライオンのタテガミみたいだから）の指示か？

「おいおい、すっごい数だぞ！　どうする？」

僕を担ぐ人も流石にちょっと狼狽えてそんな事を聞いてくる。この人がそうなんだから、周りはもっと同様しててもおかしくはない。
だけど今、僕は奮い立たせる言葉を大々的に言うことは出来ない。みんなの勇気を信じるしかないんだよな。ただ一つ出来る事は、この一番近い人のテンションをあげる事くらい。
この人がムードメーカーっぽいし、そういう立場にたってる。まあだけど、この状況で「頑張れ」も「後少し」も全てみんな分かってる事だろう。
もっとほかの言葉……色々検索かけたけど、教養に乏しい僕には当たり前の事しか言えないな。

「どうするも何も、僕達がやることに変わりなんてないですよ。僕達はただひたすらに、あの光を目指すだけです！」

運んで貰っといて何言ってるんだって思われても仕方ない。だけどやっぱこれだった。確実でみんなの目的地でそして目に見える距離ではたかだか数十メートル。
やれない距離じゃないと思えるだろ。見える目標は何よりも気持

ちを奮い立たせる要因に成るはずだ。

「言ってくれる……けど！　確かにその通りだ！！　全員この数秒にだけ全てを賭けようぜ！　そのくらい、今の俺たちでも出来るだろ！！」

「「「お……おう！！」」」

彼の言葉で気持ちが持ち上がったみんなは迫り来るチンピラ共に自ら体当たりしていく。それは僕達の道を造る為。一度倒れても、再び立ち上がり、どんなに無様でもその手を伸ばす。

みんなは一人でも多くの敵を引き受けようとしてくれてる。そんなみんなの姿に応える為にも、僕達はやり遂げないといけない。

どう足掻いてもあの場所までたどり着く！！

あっと言う間に僕達を包んでくれてた壁が薄くなり、背中に居る僕にも迫るほどに成った大量のチンピラ共。だけどそれでも進めてるのは、この背負ってくれてる人のスペックの高さ故だ。

片腕を振り回し、迫るチンピラをボッコボッコと吹き飛ばすこの人は圧巻。だけど流石に息が荒く成ってるのが分かる。それに体が燃えてるように熱い。

てかどう考えても無理してるよな。人一人背負ってここまで走らせてるし、それに背負ったまま戦闘なんて……普通は出来ないよ。

「こんな事言うのもなんだけど……大丈夫ですか？」

「はは……大丈夫に……決まってんだろ」

やばい、全然大丈夫っぽくないぞ。汗の量ハンパないじゃないか！

「このくらい、まだまだ平気だよ。人間ってのは本当に駄目だと思ったときからが案外長い物だぜ」

そんな事を親指立てて言ってるけども、それはある意味寿命を削ってるみたいな事と変わりないぞ。痛みや辛さは、脳が発する危険信号だ。
甘えまくるのもどうかと思うけど、無視し続けるとその内越えた限界によって、体は壊れる。そういう考えで無茶をやり続けた結果が僕の今のこの状態だしな。
ＬＲＯの肉体はデータだから……幾ら傷ついても血が流れても、精神でＨＰがある限り立ててた。肉体に影響があることは分かってたけど、そんな事よりも目の前の事だった。
そんな無茶が体をこんな風にさせたと言える。

「無茶をしずぎると体が壊れるぞ」
「はは……じゃあ問おう。お前はこんな状態に成るまで無茶をしたんだろ？　それで後悔してるのかよ？」

目の前のチンピラにその強靱な拳をたたき込みながら、この人はそんな事を言った。その瞬間「ああこいつバカだな」って思ったよ。
何言っても無駄。だって自分がそうだったから、よく分かる。僕は素直に応えてやる。嘘偽りじゃないこの気持ち。

「全然。後悔なんてあるわけない。失敗したと思うのは、今この場で役立たず極まりない今の自分の事がだ！」
「はは！　それならしっかり守られて、最後の仕事の体力を温存してろ！　それまでは俺達をイヤでも信じてくれや！
無茶なんて誰だって分かってる。でも誰も止まらなかったのは、今この瞬間、俺達は生きてるって感じるからだ！！」

そう言って僕達は遂に押し寄せてきてたチンピラ共を抜けた。僕達と、もう一人布を被ってる奴セットでね。てか、これだけしか残

ってない。
後はみんな僕達の為の道に成ってくれた。でもそのおかげで後十メートル程度。投げるには五メートル以内だから後半分程度。後数歩の距離！！

「どっちか知らないが、まぁ聞け。ここまで――――――

よ。だけど今はそんな質問を投げかけてる場合じゃない。視界に映るみんなはまだうずくまってるし、ここで立ち止まってる時間はないんだ。

「そっちが貴様なら、こっちはやっぱりあの女の子か？」

そんな事を言いながら、ハゲがもう一方の布を被ってる人へと近づいた。こっちに来ないのならありがたい。僕はなんとか立ち上がろうとする。

「っつ……」

足がガクガクする。だけど、ずっと背負われて楽してたんだ。それは最後の最後には自分で走る為。予想だってしてない訳じゃなかった。

だからこそ……動けよこの野郎！！

「ん？　これは……！！」

布を取り上げたハゲがそんな言葉を漏らしたのが聞こえた。バレたか。けどまだだ！　僕はまだ……動ける！！

「ずあああああああああああああ！！」

蒼天を突く怒声と共に、僕は立ち上がり走り出す。地面に足が縫いつけられた様な感覚がしないでも無いけど、もうガムシャラに行くしかないんだ。そう、まだ後一人あそこにいる。

「ちっ、待ちやがれ！　これはどう言うことだ！？　あの女は一体どこに！？」

そんな事を言いながら、出てる腹を揺らしながらこちらに向かってくるハゲ。だけど後数歩で射程圏内。僕はポケットからスマホを取り出し、その画面を見つめる。目の前に見える大きな機械の姿。放電が激しく成りつつあるのがこのスマホでも分かる。

「くはっはっは！　やらせねえよ！！」

向かいくる赤髪ライオン。遂に出てきたそいつが、ライオンみたいな獰猛な瞳を爛々と輝かせてこちらに、その手にあった拡声器を投げつけてくる。

「つっ……」

「ひゃっはあああああ！！」

拡声器を弾き返すと同時に腹に入った拳。喉をせり上がる酸っぱい物を僕は押し戻す。こいつ最初からこれを狙って……僕の膝はあっけなくこの場に崩れ落ちた。

「テメェ……」

「ひっひゃは！　こんなのもいらないよな！？」

そう言ってこの赤髪ライオン野郎は僕の腕ごと、スマホを蹴りとばす。腕に走る痛みと共に、スマホがアスファルトを転がっていく。

「くっそ！」

僕は赤髪ライオンに背を向けてスマホへと腕を伸ばす。こんな奴相手してる場合じゃない！　だけどそれが気に食わなかったのかそいつは僕の背中を勢い良く踏みつけやがった。

「おいおい、俺様を無視するとは良い度胸してんじゃねーか。ま、だけどもう終わりよ。なあゲン？」

そんな声と共に、アスファルトに横たわった僕の目に、黒い靴が見えた。その足下にはスマホ。それをハゲが拾い上げる。

「ええ、その通りです若。これで我らの勝利は確定――――ん？」

スマホを握り得意気に言葉を紡いでたハゲがその口を僅かに歪ませる。

「どうしたゲン？」

「いえ、確かこいつのスマホは赤じゃなく、青い色をしてた様な……」

はは、サングラス越しで良く見てるじゃないか。確かに僕のスマホは“それ”じゃない！

「くく……」

僕は地面にへばりついたまま、乾いた声を上げる。

「どういう事だ！　これはお前のじゃない！　そうだろう？　ならお前のスマホはどこに――――――まさか！？」

そう言ってハゲは突然当たりをキョロキョロ見回す。どうやら僕らの狙いに気付いた様だな。

「どうしたゲン？　俺達の勝利だぞ？　もっと喜べ」

「まだですよ若！　これはこいつのスマホじゃない。儂等が守るべき装置を壊せるスマホをこいつは別の奴に持たせてた。
それならこいつ等は全て囮……その可能性が有ります。もしかしたらあの女が既に近くに――」

そう赤髪ライオンこと若頭に説明してる所で、言葉が急に途切れた。その視線を追うと、ハゲ共が余裕をかましてた位置の後ろ……そして多分五メートル以内ギリギリのラインに、見慣れた奇抜な格好をしたメカブの姿があった。
そのちょっと離れた所には崩れ落ちてるメカブを乗せてた人。よく頑張ってくれたよ。メカブは既に僕のスマホを翳してる。

「――あのガキがあああああああああ！！」
今日一番のハゲの怒声だった。それは白いシャツの隙間から見えてる入れ墨に似合う声。だけど今更声だけでメカブがビビるわけもない。
走り出すハゲと赤髪ライオン。それを一別して、僕と目が合う。僕は目で「やれ！！」と告げた。そして受け取ってくれたメカブは、その細い指を二度画面に続けざまに触れさせて宣言する。

「チェックメイト。私たちの勝利よ！」

メカブは急いで後ろに下がる。それはきっとビビったからじゃなく、僕の言いつけ通り、その場にいたら爆発に巻き込まれてブリームス側のＨＰがゼロに成るからだ。
スマホを取り上げられた僕にはどうなったのか分からない。だけどメカブに追いつく前に、ハゲと赤髪ライオンは足を止めて、スマホをその場に掲げてた。
僕はそんなハゲたちからメカブへと視線を移す。するとそれに気付いたメカブが親指を立てて見せる。その瞬間、「やったんだ」っ

て思えてきた。

「よっ――」

「よっしゃあああああああああああああああ！！」

僕が喚起の叫びをあげる前に、後ろから聞こえたそんな声。それは僕を背負ってくれてた筋肉マンの声。暑苦しく良く通る声は、後ろで大乱闘を繰り広げてた人たちにも、伝わるレベルだったようだ。

そしてざわざわとなり「やった？」などと、呟く輩はその場に立ち尽くしてるハゲと赤髪ライオンへと視線を向けてるのが分かる。

「ひゃ……ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！　おもしれえよお前等。あの時スマホを取ろうとする必死さも、実は演技だったって事か。ひゃは！　やられたわこりゃ」

そう言って大いにゲラゲラしまくる赤髪ライオン。まあ全くその通りな訳だけど、上手くはまってくれて助かったよ。こっちはギリギリまでメカブの事もスマホの事も隠したかった訳だからな。

あれは僕のスマホだ。だから僕が持ってるなんて固定概念をぶち壊してメカブに持たせて。僕は二台あるメカブのスマホの一大を持ってた訳だ。

だけど実際、ハゲに気付かれるか気付かれないかは賭だったよ。最初の時点で気付いてれば、もしかしたら止めれたかもね。この赤髪ライオンは僕のスマホなんて見たことなかっただろうから、疑いもしなかっただろうけどな。

てか、あの布の下がメカブじゃなかった時点で、ハゲは疑うべきだった。余裕をかましてたから、お前達は負けたんだ。

「ゲンさん！　若頭！！　俺達は……負けたんですか？」

そんな事を言ったのは良くハゲと一緒にいた金髪。そしてやっぱりモヒカンも近くに居たらしい。てか既にスマホで確認してるだろあいつ等。
わざわざ言葉を求めなくても、そのスマホに事実が映ってる筈だ。そんな事を思ってると、僕のスマホを持ってるメカブがちょっと慌ただしげにこう言った。

「ちょ、何こいつ……何する――きゃあ！？」

一体何が？　そう思ってるとわかりやすい現象が目に入る。なんだかスマホのディスプレイがやたら強く光ってる。そしてそれは僕のスマホだけじゃなく、この場に居る全員のスマホが一斉に同じ様に光ってた。

「何だこれ？」
「くはは！　ホラよ、返してやる。それと勝利に浸るのは早いぜ。なんせまだ誰もアイテムを手にした訳じゃない」

ハゲが僕にメカブのスマホを投げつけて返してきた。僕はそれを受け取ると、画面を見――――ることは出来ない位に光ってるな。
結局メカブのスマホじゃ詳しい事は分からない。だけどこの光は多分、あの装置の光。直前で壊した筈なのに、間に合わなかったって事なのか？

「違う！　あの第一の所長よ！　あいつが装置を暴走させてるのよ！」

そんな言葉と同時に、僕の画面を横切る影。それはバカラさん？
光の中へ消えていく彼。次の瞬間「ダメ、そんなの！」と叫ぶメカブの声が上がる。

何もわからない僕はただ画面を見つめる事しか出来ない。

乗算の力（後書き）

第二百六十九話です。

ようやく決着？　がついたのか……は微妙な所。まだ終わった訳じゃないですからね。まだどちらにもアイテムを手にする機会がある。それがある限りまだ争いは続くでしょう。

そして最後に何が起きたのかは次回で！

てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

あっ、そうだ。実は結構前からツイッターとかフェイスブックとかやってます。まああんまり書き込んでないんですけど。フォロワーなんていないしね（笑）　感想とか何か意見があったりとか、そっちに書いてくれてもいいです。

ツイッターの登録名は『ｕｅｎｏｕｔａ』だったかな。フェイスブックは……ここで本名を書いていいもの何だろうか？　まあお友達になってくれる人は、ウエマツで検索賭けて写真がポメラになってるのが僕です。

この小説の事書いてくれてたら、直ぐにお友達になります。まあどれだけやってるかわかんないけど、取りあえずそう言う事で。

消えるアイツと不確かな影（前書き）

バカラさんが光の中に消えた後、直ぐに起こった大爆発。それによって装置は完全に壊れた。だけどその代償は大きかったんだ。それにまだイベントは終わってなんかない。

アイテムは装置に干渉されてその姿を示しだす。僕達はその影を繋げて、アイテムまでたどり着かないといけない！

消えるアイツと不確かな影

スマホから放たれてた強力な光が次の瞬間爆発となって、続く粉塵で消え去った。一体何がどうなったのか……僕には全然分からない。

光の中に消えたバカラさんがこれをしたのか？　でもそしたらあの人は無事なんだろうか？

「メカブ……」

僕の声に画面を見つめてた彼女がこちらに来る。そしてスマホを僕達は交換しあった。

「無限の蔵、あの人……死んじゃったかも」

「バカ言うな、そんな簡単に死ぬ玉じゃないだろ。アレは」

僕は画面に残されてたバカラさんの最後の言葉を見ながらそう言った。僕のスマホには結構衝撃的な事実があった。

そう言うことか、どうやら最後の悪足掻きをしてたあの所長を、バカラさんは殺した……のかも知れない。そこら変は確認できないな。この粉塵が晴れればそこら辺も分かるだろう。

てか、画面見てビックリなのは、タイムリミットが一秒を切ってるじゃないか。本当にギリギリだったんだな。百分の一秒の世界なんて、一歩間違えば瞬きしたらゼロだよ。

『おい、どうなった？　戦士フィフティィィンよ！　状況の正確な詳細を報告しろ！』

スマホから第四の所長の声がうるさく響く。状況の報告ね……それが分かったら直ぐにでもしてやるよ。だからちょっと黙ってろ。
スマホの画面を覆う粉塵が少しずつ次第に晴れていく。そして見えてきたのはバラバラに吹き飛んだ機械の惨状と、そんな機械の残骸に押しつぶされてるバカラさんの姿。
爆発で吹き飛ばされたのか、少し離れた所に二人とも飛んでるな。僕は立ち上がろうとする。フラフラしながらもなんとか立ち上がると、メカブがその体を支えに貸してくれた。

「ほら、あの人の所まで行きたいんでしょ？」
「サンキュ」

僕達はバカラさんの元へ、そしてハゲ共は第一の所長の元へそれぞれ足を向ける。

「大丈夫か？」

そう言って僕を背負ってくれてた人がメカブに代わろうとする。だけどメカブは首を振った。

「大丈夫よこのくらい。それよりも怪我人の手当をしてあげて」
「そうか？　じゃあ頼む」

視線を彼が向かう方へ向けると、結構怪我してる人は居る。まあ無茶な戦いだったし、寧ろ重傷者が居ないだけでも良かったのかも。
救急車が必要な人は誰もいないだろう。

近くまで来ると、僕はバカラさんの握りしめてる物に目が行った。この人はどうやら、あの所長をやっぱり殺しに行ったみたいだな。そうしなくちゃ止まらない……そう思ったんだろう。

その手にはリアルでは見ない、刃が格好良くウネってる感じのナイフを手にしてる。確かあったよこういう武器。この人はナイフ使いだったってことか？

僕は画面に映るバカラさんを何度かタップしてみる。だけど反応がない。一端、彼にのっかってる瓦礫をタップしてみると、その瓦礫がギギギと音を立てて反対側へ倒れる。でもそれであることに気付いてしまった。

瓦礫を退かした事で、彼の体に起こってる惨状と言うか……そういう物がみえた。それはちょっと目を背けたく物だ。実際メカブは背けたよ。だけど僕はそんな事出来ない。僕はもう一度この状態でバカラさんをタップする。

『がはっ……ははは、随分と血が流れてる……そんな気がする。それに体が重いし……なあ、俺は死ぬのかな？』

『なな何を言ってるか！　お前がその位の怪我で死ぬわけがなかろう！　お前は死なない！　今直ぐ医療班を向かわせてやる！　なあに心配するな、傷は思ってるよりも浅いぞ！』

バカラさんの声に応えるのは第四の所長。だけどその声はどう聞いても震えすぎだ。不安にさせまいと口数多く喋ってるけど、動揺が手に取るようにわかる。この人は本当に土壇場に弱いな。

それに傷は浅いって……流石に自分の状態は自分が一番良くわかってるんじゃないかな？　まあ「もうダメだ」なんて言えないのもわかるけど。てか回復薬とかないのかよ！

『はは……相変わらず、そんなんじゃマッドサイエンティストには程遠いなアンタ……なあ、あの装置は壊れたか？』

そんな質問に、僕は出てきた台詞をタップする。

『ああ』
『良かった。……だけどまだ終わってない。そんな気がするんだ。なあ戦士フィフティン。後の事は任せて良いか？
お前の……働きは見事だったぜ。だから……後の事を……頼みたいんだ。
なあ……俺は最後まで戦士で入れたかな？』

そう言って虚ろな瞳がどこか遠くの空を見つめてる。ＬＲＯは血の表現をしないはずだけど、このイベントは例外なのか結構生々しくそれを見せてる。
だからこそわかる。この人の横腹に突き刺さった残骸から流れ出る血は尋常じゃないって。
この人は多分……もう悟ってる。

『最後……だと！？　何を言ってる貴様！　まだ我らの野望は達成されてないぞ！　マッドサイエンティストとの契約は悪魔の契約！
成し遂げるまでは死ぬことすら許さんわ！！』

だけどそれにあらがわせるように声を上げる所長。でもそれはもう届いてるのかどうかすら……

『なあ……俺は……戦士だったか？』

再びそう繰り返したバカラさん。どうしてそんなに戦士にこだわるのか、僕にはわからない。だけど付き合いが長いのかどうか知らないけど、所長はどう見てもその顔に涙が伝ってた。
小さいウインドウで表示される画面は所長の顔で一杯だよ。

『戦士だったさ！　このマッドサイエンティストが証明してやる！！　お前は最後までこの街を思う戦士だった！！』

所長のそんな言葉が僕の胸にも刺さる。実際あんまりこの人の事は知らないけど、ここまで引っ張ってくれたし、このイベントで重要な人物だった。
それに所長があまりにもボロボロ泣くから、もらい泣きしそうじゃないか。戦士だよ。僕もこの人は戦士だったと思う。

『そうか……それは良かった。ああ……良かった』

そう途切れがちの声が聞こえる。そしてバカラさんは最後に人差し指を立てて腕を上げた。僕に向かってだ。

『後は頼んだ……戦士……フィフティィィ……』

ポトリと力無く落ちる腕。もう幾らタップしても反応が返ってくることはない。大きな声で何度も何度も名前を叫ぶ所長の声が、虚しく僕のスマホから流れてた。僕は画面の中に横たわる彼に向けて最後の言葉をかける。

「託された。後は任せて眠ってろ……安らかにな」
「無限の蔵」

ポツリと呟いたメカブが僕の服の裾を握りしめてる。こいつも今のをずっと後ろから見てたんだろう。僕はその手に自分の手を重ねる。

「戦士ね……私も戦士としてフィフティィンて呼ばれたわ。ここまで来るのだって本当はちょっと大変だった。リアルの面じゃなく、ＬＲＯの方でね。兵隊に追い回されたわ」

ああ、そう言えばそれは言ってなかったっけ？　敵はリアルだけでもＬＲＯだけでも無かったって。それは悪い事したな。

「そっちも逝ったか？」

僕達がバカラさんの死をしみじみと感じてると、素っ気ないそんな言葉が聞こえた。振り返るとそこにはハゲと赤髪ライオン野郎。

そっちもって事は第一の所長も死んだって事か。

「おいおい、イベント使い捨ての一キャラが死んだ位で何だよその顔は？　まだまだイベントは終わってねーぞ。楽しもうぜ！」

そう言ってヒャハハハ！　と笑い声をあげる赤髪ライオン。なんて不謹慎……じゃないのかな。あっちの方が普通なのかも知れない。普通に僕達の方がおかしいのか。

ゲームのキャラにいちいち感情移入なんて……まだこれは画面越しなのにな。ＬＲＯ本体は直接触れ合うし、ただのゲームの様に思えないけど、これはそう言う訳じゃない。

けど何だろう……感情移入しやすくなってるのかも。だから普通にこいつ等の態度はムカつく。それにまだ終わってない？　お前たちの野望は潰えただろ。

「それは違うな！　まだまだまだまだまだまだなんだよ！　死に際にそう言ってたぜ。そっちはどうなんだ？」

そう言えばこっちも『後は頼んだ』だったっけ？　それは後が有るって事。まだ終わっちゃない。アイテム手にしてないしな。

「そう言う事だよ！　俺たちの目的は向こうの奴らの小競り合いじゃない。レアアイテムなんだ！　それを手にしない限り、俺たちの

争いも終わらねえ！　そうだろ？」
「まあ、確かにな」
そこは異論はない。確かに僕達の目的もソレだ。だけど装置を壊した事でそれは結構振り出しに戻った――
『うぬ！？　なんだ？』
――突如スマホから聞こえてきたそんな声。なんかゴゴゴと言う音と共に、スマホもバイブしてるぞ。画面を見ると大きく振動してるのがわかる。一体何が？　装置は全部壊した筈だ。
『ちょっと邪魔よ。泣くんだったら別の場所にしなさいよ。悲しんでる場合？　彼の思いに応えようとは思わないの？』
『なんの事だ助手？』
『この振動よ！　もしかしたらキッカケにはなったのかも知れないわ。三つのアイテムが共鳴を始めたのかも……見て、凄い勢いで異常な磁場が発生してるわ。
これはさっきの比じゃない！　気を付けてね』
僕に向けた最後の言葉だけ妙に物腰が柔らかかった。相変わらず所長には厳しいみたいだ。てかとうとうアイテムが姿を現す時が来たって事か？
でもこのままじゃこの街の人が居なくなる可能性も消えてないな。アイテムを手に入れて、それを止めなくちゃいけない。
それがバカラさんの意志でもある。きっと僕達が手に出来たら、ブリームスの人達は無事で入れるんだろう。だけどあいつ等……ハゲ共が手にしたら、そうはならない気がする。
このイベントはマルチエンディングなのかな？　ルートによって異なる終わりが用意されてる的な。様々なルートが有るのはきっと

そう言う事だろ。

スマホのバイブが段々と弱まっていく。すると画面から『あれは何だ！？　空に違う光が……』と言う所長の声。僕は空にスマホを向ける。

するとそこには七色の光の柱。そしてそれを結んで空に現れてるのは……魔法陣？　いや、何かの紋章かな？　おいおい、どういう事だよこれは。

空に現れた紋章か魔法陣を唾を飲み込んで見てると、メカブが興味深いことを言った。

「ねえこの光が上がってるところ……これって例の通路。宝箱が浮いてた位置じゃない？」

「そうか？」

そう言われてみればそんな気がしないでも無いけど、どうなんだろう？　地図と重ねれれば分かりやすいんだろうけど、そんな機能ないし確かめるには自分で比べるしかない。

まあでも、確かに確認されてた宝箱と通路の数にはあの光はあってるのかも。

「だけどこれからどうするんだよ？　また宝箱の所まで行かないといけないのか？　でも……そんなに単純なのかな」

僕は素直に思うことを言ってみる。だってどういう事なのか、まだわかってないだろ。どうせなら僕はもう、後一回切りの移動で済ませたい。

体がそう言ってるもん。数カ所ある宝箱の浮いてる人喰い通路を巡るのは流石にね。答えを見つけて移動したいんだ。それが望み。

「そんな事言っても、行ってみなきゃわからない。じゃない？　せめて通路が……ううん、たから箱がどういう状態に成ってるのか確認しないと」
「それは、まあそうだけど」

何がその通路で起きてるのかは知りたい。それはそうだけど……あそこにアイテムがあるとは自分的には思えないんだよね。
確かに一度、暴れ出した宝箱の中にソレっぽいのを見たけど、でも普通に数あわないじゃん。だからあの通路にあるのは本体の分身みたいな物何じゃないかって……

「大丈夫ですよ二人とも。行かなくても私達には現状を知る術は有ります」

僕達が行くか行かないかで迷ってると、ロン毛の人がそう言ってスマホをつんつん叩いて見せる。ああ、そっか。なるほど、掲示板ね。
不特定多数が書き込めるここなら、その場に居る人だって居るはずだ。

「メカブ」
「わかってるわよ。私のもう一台で見たいんでしょ」

そう言ってもう一台のスマホに掲示板を表示させる。それは今日何度も世話になってる場所。流石相変わらず情報早いな。
パッと見ただけでも既にこの現象への書き込み多数だ。それをざっと見た感じだと、突然宝箱が開いて光を放ちだした――って感じだな。

「ねえこれは？」

別段予想通り……とか思ってると、メカブが新たな書き込みを発見した様だ。

「近くに居たＮＰＣが消えた？　これって……」

気のせいかも知れないけど、通路の外に居たはずのＮＰＣが居なくなった様な……と書いてある。そしてそんな書き込みに釣られてか、「そう言えば」と便乗する書き込みが相次ぐ。

「通路に入らなくてもＮＰＣが消えだしてるって事か？　実際どこまで本当かわかんないけど、事実ならアイテムの影響だろうな。人が消える……そしてブリームスはゴーストタウンか」

ＬＲＯの歴史通りに事が運ぶのならそうなるんだろう。まだ終わってなんかない。歴史を変えるとかは知らないけど、僕達はきっと抗う側に居ると思う。

そしてそんな歴史を起こす側がハゲ達。

「きゃはは！　テメェ等は書き込みを見るだけでアクションが起こせないだろ？　まあ当然、そこに居る奴らは赤の他人だからな。だが俺たちは違う。使いがってのいい下部が、そこかしこにいるんだぜ」

そう言って赤髪ライオンがスマホを耳に当てる。電話で指示しようという魂胆か。てか、ここに居る奴等で全員じゃなかったのか。総力戦だと思ってたんだけど……

「保険は常に用意するものだ。それに儂等側も、これでイベントが終わったかどうかはわからなかったからな。重要な場所には監視を

置いておくべきだろう？」

ハゲは得意気にそう言いやがる。だけどそんなのは使える駒が多い奴ら限定の手法だよ。普通は足で確認なんだよ。最近はそれこそ掲示板で知り得ない情報を仕入れる事が出来るように成ったからまだ良いけど、数が多いってのはやっぱりそれだけで武器になり得る事だ。

「ちょっと、もしもこのままあいつ等がアイテムを手にしたら……」

「確認だけだろ。僕のスマホでしかあの装置を壊せなかったみたいに、イベントを進行してるスマホは一つの筈だ。それは多分、ハゲかあの赤髪の奴のか……どちらにしても待機してる下部の奴がアイテムを手にするなんて事は出来ないだろ」

なにがどうなってるかを確かめさせて、その後にこいつらのどちらかが動くはずだ。だけど待ってるだけじゃ先手は取れない。

どうにかして出し抜かないと、僕たちに勝利は……そんな事を考えてると、赤髪ライオンがいきなり大きな声を出した。

「あっ……おい！　どうした？　応えろコラアア！！　……ちっ」

なんだか不機嫌そうにスマホを見つめる赤髪ライオン。そして再び、スマホを耳に押し当てる。

「おい、今何が起きてる？　取り合えず出来る事は全部やってみろ。ああ？　人が集まってきてる？　邪魔だから追い払っとけ。――ん？」

いぶかしむ赤髪ライオンの表情。その瞬間、僕たちにも聞こえる叫びが奴のスマホから上がった。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！」

まさに断末魔の叫び。敵の叫びなのになんかゾクッて来た。思わずスマホを耳から離した奴は、直ぐに何度も呼びかける。だけどどうやら応答は無いようだ。

「何よ今の叫び……尋常じゃなかったわよ」

ホントなんかとてつもない者に出くわしたか襲われたかしたみたいなさ。それこそ映画とかでしか聞いたことない叫びだった。

「一体何が……」

「俺が知るか！　たく、あいつ等……お前等手分けし残りの場所にも掛けてみろ」

そう言われてハゲと数人の部下共がスマホを耳に当てる。すると出る奴も居れば、既に出ない奴も居るらしい事がわかった。

「ちっ、一体どうなってんだ？　テメェラ以外でも俺たちに喧嘩ふっかけて来る奴らが居るって事か……それとも、お前等の仲間がこれをやってんのか？」

そう言って赤髪ライオンは強い眼差しで僕たちを睨んで来る。獰猛な獣の様な目だ。血に飢えてるなあれは。でも言っておくけど、そんなのは知らない。僕たちには心当たりが無いことだ。

「まあ、確かに……テメェラに襲われてもあんな声を出すとは思えねぇな」

そう言って案外簡単に納得した赤髪ライオン。まああの叫びは尋常じゃ無かったからな。てか、身を案じてるのなら直ぐにでもここに居る何人かを向かわせろよ。
血みどろで倒れてたらどうするんだ？　それを想像させる位の叫びは上がってたぞ。

「ふん、俺たちに気遣いたぁ余裕じゃねーか。まあだが、そんなの不要だ。人は向かわせるが、刺されてる訳じゃあるめぇよ。
人は倒れる位の場所を刺されて大声出せるほど頑丈じゃないんだぜ」

そう言ってハゲを使って数人を道路の向こうに送り出す赤髪ライオン。最初はどんだけキチガイな奴だと思ったけど、少しは話は通じる様だな。
でもなんか今の言葉は実感がこもってたみたいで、なんか恐ろしかったぞ。刺したことも刺された事もあるのか？　まあヤクザの若頭なんだろうし、そのくらいの経験はしててもおかしくはないな。そんな事を思ってると、メカブが僕の服をツンツン引っ張る。

「なんだよ？」
「ちょっとこれみてみなさい。さっきの叫びと関係あるんじゃない？」

そう言われて僕はメカブのスマホを覗き込む。さっきの掲示板のスレにも今の叫びが上がってるのか？

【今自分は衝撃映像を見た！　空を飛ぶ巨大な黒い生物。その手から放たれた何かでこの場は煙幕につつまれたんだ。そしてその後、悪魔の様な断末魔の叫びが上がった。
煙が晴れるとそこにはチンピラっぽい奴が泡を吹きだして倒れて

た。今のは一体何だったんだ？】

こんな書き込みが僕の目に入る。う～んなんか信じれない話。当然書き込みの後にもの凄い勢いで「ネタ乙」とか「自作自演は余所でやれ」とかのコメントが複数上がってる。けどそんな中、別の人も同じ様な事があったと書き込んでるんだよね。

それが三人以上にもなると、「マジで？」とかの書き込みも増えていく。

【マジだって言ってるだろ。嘘なんて言ってどうなるよ。自分はほら、あの宝箱が浮いてる所にいるわけだけど、そこでいきなり――】

宝箱の有る場所……場所も一致してるな。マジなのかこれ？　得体の知れない何かが、このイベントには参加してるのか？

ここに来て第三勢力の登場とかマジで勘弁なんだけど。

『ちょっとよろしいですか？』

僕がイヤな想像を膨らませてると、スマホからそんな声が聞こえてきた。目を向けるとそこには画面の中で、更にウインドウ内に現れてるジェロワさんが見える。僕はその画面をタッチして言葉を進める。

『資料の解析は八割方完了しました。それで今起こってる現象ですが、これは多分一つのアイテムが起こしてることじゃなく、三つのアイテムその干渉なんだと思われます。

何せ古くてアイテムの詳細な情報は無いですけど、三つのアイテムはそれぞれ「時間」「空間」「創造」に干渉出来る重要アイテムらしいです』

時間と空間はわかるけど……創造ってなんだ？　だけどジェロワさんはそんな僕の疑問には答えてくれない。

『助手よそんな情報は今は良いんだ！！　この街を守る術はなんだ！？』

泣きはらした顔でジェロワさんに詰め寄る所長。いつもなら冷たく払い退けるだろうけど、今だけはそれをしないジェロワさん。

『この街を守る方法は、やっぱりこのアイテムをどうにかするしかない。検討は付いてるわ。空に現れた模様の一点に力場が集中してる。きっとそこに……』

そう言って画面に地図が表示された。つまりはこれをアキバのと照らしあわせれば良いって訳だな。

僕は買ってた地図を引っ張り出す。もう使わないと思ってたけど、思わぬ所で役にたった。

消えるアイツと不確かな影（後書き）

第二百七十話です。
もうこんなに話数が増えてる……けど三桁には成らないと思う。
多分ね。とにかく頑張って話を進めていきますよ！　後、三話もあればこの話は終われる思います。
だから次回はアイテムをとうとう見つける……かも。
てな訳で次回は、水曜日に上げます。ではでは。

謎ときと最燃焼（前書き）

空に上がった紋章と消えだしたブリームスの住人。僕は画面に表示された地図と、地面に広げた地図を重ねてみる。その場所は当然だけどある。ここがアイテムのある場所……なのかも知れない。

けど、なんか納得できないんだ。僕の頭に今まで集めた情報がある。それらがこれで解決しちゃったら不完全燃焼じゃないか。何かがある筈だ。見えてない場所に紡がれる真実って奴が。

謎ときと最燃焼

画面に表示された地図に青い点がある。ここに力場が有るって事だよな。これを地図と照らしあわせれば……僕は道路上に広げた紙の地図と、スマホの地図を重ねて見る。

「確かにあの光が上がってるのは人喰い通路の場所っぽいな。だけどここって……」

僕は画面と照らし併せて付けた印を見て、ちょっと考え込む。だってこれは流石に……

「どうしたのよ？　場所がわかったんなら急ぐわよ。ハゲたちだってこの場所には直ぐに気づくわ」

まあ、そりゃそうだろうね。第四が検知出来る数値を第一の最新鋭の技術で捉えられない分けないし、確かに急がなくちゃいけない。

メカブは僕を引っ張って走り出しそうな雰囲気だけど、僕はなんか頭に引っかかってる感じがして動き出せない。別に体が痛いから動きたくない訳じゃ決してないからな。

ただ問題なのは地図上の力場の位置だよ。僕がなかなか動こうとしない間に、ハゲ共はチンピラに何やら指示を出してる。

それから直ぐに奴らは通路の向こうに消えていった。きっとこの印の場所へ向かったんだろうな。

「どうしたんだ？　ほらほら、急がないとアイテムは俺たちの物になっちまうぞ」

そう言って僕らを挑発してくる赤髪ライオン。てかなんでお前たちはここに残ってるんだよ。一緒に行けば良い物を……こいつらも「もしかしたら」を疑ってるのかも知れないな。
だから数人のチンピラに先行させて、様子見をさせると。

「ほら、無限の蔵！　あんな目に痛いに頭してる奴に言われるだけでいいの？」
「おいおいお嬢さん、言ってくれるじゃねーか」

目に痛いと言われた事がちょっと気に入らなかったのか、赤髪ライオンは指をポキポキ鳴らし出す。メカブは僕を間に入れて、そんな赤髪ライオンを睨んでた。おいおい、僕を間に入れるなよな。

「たく……ちょっと落ち着けよメカブ。そっちの目に痛い奴よりこっちを見ろ」
「そんな奴見てないで自分だけを見ろなんて……大胆ね無限の蔵」

なんでそんな解釈に発展してるんだ？　ちょっと照れくさそうに目を伏せるな！　そんな事一ミリも言ってないから。僕はただ、地図を見ろって言ったんだ。

「まあわかってるけどね」

そう言ってフフフと笑うメカブ。わかってたんなら妙なもの入れて来るなよな。実際こっちはちゃんと急ぐ気なんだぞ。
ただこの場所を目指さないのは疑問が有るから。それをお前にも見せてやろうと思ったらこれだよ。

「おいお前等、二人して俺様をバカにしたのはスルーか？　何気に一番傷ついてるぞ」

なんか赤髪ライオンがそんな事を言ってる。僕もメカブに便乗して悪口言ったのをイチイチ根に持ってたみたいだ。
たく、それもどうでもいいっての。僕とメカブは二人揃ってそいつにこう言ってやる。

「「なら、染め直せ」」

思わずフラリとよろける赤髪ライオン。すると周りのチンピラ共がいきり立つ言葉をあげた。

「テメェ！」「なんて事言いやがる！」
「やめろ！！　きゃはははは。面白いなやっぱテメェ等は。これならまだまだ楽しめそうだ」

そう言って赤髪ライオンは余裕をかましてる。ほんと常に他人を下に見る奴だな。言っとくけど、さっきの戦いはこっちが勝ったんだよ。

「その余裕がどこまで持つかこっちも楽しみにしといてやるよ」
「俺様に余裕がなくなったら危ないぜ。俺は切れると怖いからな」

自分で言うかそれ？　まあでも切れた状態が危ない奴ってのはわかってるよ。今は幾分落ち着いてるけど、戦闘始めはテンション高かったもんな。
ヤバい奴だと思ったもん。

「それで、何を私に見てほしいのよ？」

そう言って道路に広げた地図を腰を屈めて見るメカブ。てかよう

やく戻ってきたな。僕は地図上の印を付けた部分を指さした。

「これが力場の集中点らしい。丁度魔法陣か紋章の中心部分だな。人喰い通路でも丁度真ん中。まあこれは当然か」

「で、なんでこれをそんなに疑ってるのよ。そんなに遠くないし、自分の目で確かめれば良いじゃない。体はきついだろうけど、今そんな事言ってられる？」

そう言って僕をのぞき込む様に睨むメカブ。別に体がきついからじゃないっての。今更そんな事を言うかよ。

「だって無限の蔵は一度諦めたわ。私からしたらサボる体質が見え隠れするのよ」

逃げ癖がついたと？　僕はあれを逃げだなんて思っちゃないけどな。あれだって一杯考えた末の結論だったんだ。だけどもう一度……それを決めたんだから、今更体使う事を躊躇ったりはしない。

それもちゃんと決めてる。

「そっ、ならいいけど。で、この力場の集中点に行かないのはどうしてなのよ？」

「少しは自分で考えろとも言いたいけど、簡単に言うとここどこだ？」

「アキバでしょ？」

大雑把過ぎる答えに僕は愕然とするよ。何？　この流れで「ここはどこ？」とでも聞いてると思うか普通？　アキバなんて誰でもわかっとるわ！！

質問の受け取り方が雑すぎる。

「お前な……この力場の位置を言ってるんだよ僕は。アキバなんて答えは求めてない」
「そうなの？　それならそうと……まあなら、道路上にあるのかなこれは？」

僕が睨み返してやると、メカブはちゃんと答えてくれた。やっぱりふざけてたんだろこいつ。まあだけどそう言うこと。
これって完全に道路上なんだよね。いや、実際には正確な位置って訳じゃないだろうし、この点の道路上のどこかなら歩道だって考えられる。
でも考えてもみてほしい。ようやく辿りついたアイテムが、歩道にちょこんとあるって……なんかヤだ。

「無限の蔵……アンタね『なんかヤだ』で行かなかったわけ？　あったらどうするのよ！」
「そんなアイテムはお呼びじゃないな」

僕はきっぱりとそう言ってやる。まあ冗談だけど。お呼びじゃないわけない。だって沢山の人に協力して貰ったしね。だけどメカブの奴はそんな僕の冗談を真に受けちゃってこういう。

「あ、あんたね！　そんな事言って良いと思ってるの？　どんな形だろうと、私たちはアイテムを手にするの！　そうでしょ！」

グイグイ近づいてくるメカブ。メガネが僕の息で曇る位の距離なんだけど……

「落ち着いてください。何もスオウ君が根拠も無くそんな事を言うとは私には思えませんが」

そう言ってくれたのはロン毛の人。おお、流石この人は話が分かる。

「根拠？　そんなのが有るなら言ってみなさいよ」
「その目……どんだけ僕は信用されてないんだよ」

悲しく成るくらいのジト目で見据えられてるんですけど。まあいいや、僕は咳払い一つと、メカブを腕で押し戻して説明してやる。

「え～と、まあ実際感覚的な事が大きいんだけど……一番の理由はここに有るのなら、必要のない情報があったんだなって事に成る。特に人喰い通路で消えた人達が別の場所から戻ってきたその位置とかさ。宝箱にあった数字の意味。引っかかるんだよね。それにやっぱりここに置くかな？　ってのもある。
だって交通量が多い場所だよ。こういう争いを想定してイベント事態が組まれてるのなら、万が一の事態が起こり得る場所に、最重要アイテムを置くかな？　てかこのこの歩行者天国にした方が絶対にいい
なんだかまだ、全部がちゃんと組合わさってない感じがする」
「難しく考え過ぎなんじゃないの？」

それを言われるとおしまいだろ。可能性が有るなら考えるんだよ。考えることが出来るのは人の特権だぞ。それにＬＲＯのイベントなんだから、裏を読みすぎる位で丁度いいんだ。
いつだってめんどい事を隠してやがるんだからな。

「確か、食べられた人達の帰還地点はそれぞれ違うんでしたか？
ちょっと待ってください、スレに書き込んで情報を集めてみましょう」

そう言ってロン毛の人がスマホに目を落とす。後のみんなでそれぞれ仕入れてる情報の位置に×印を付けていく。

「おお、凄い数の反応です。やっぱりイベントが終盤に向かってるとみなさん気付いていられるみたいですね。まあ私たちが勝利の叫びを書き込んだのも原因ですけど」

そんな事いつのまに……いや、みんなピコピコやってかな。そんな事より情報だ。

「はい、ええと既に書かれてるのを選別して……後は同じ場所の書き込みを一つにまとめて行くと、後はこうでしょうか？」

スマホを見ながらロン毛の人が×印を付け足していく。結構僕たちの情報は重なってたんだな。後四カ所程書き込まれたじゃないか。

「ん？　ちょっと待てよ。これって……人喰い通路の数と同じで、形もなんだか似てないか？」

人喰い通路はこっち側とブリームス側で微妙に地理的にちょっとズレてた訳だけど、帰還する場所は別にそれに当たらない。
だから統一性なんか無く建物であったり道路であったりでも有るんだけど、こうやって地図で見ると見事に形がリンクしてるぞ。

「線とかで繋げるともっと分かりやすいんじゃない？」
「なるほど――って待てよ。あの宝箱についてた数字ってまさか！
あの宝箱に書かれてる数字も聞き出してください！」

僕はロン毛のそう言って再び情報を集める。そして数分後、全ての宝箱の印の横に数字を添えた。

「もしかしてこの数字って、この順に線を繋げるって事？」
「多分な」
　僕はマジックで地図の印を数字の順に結んでみる。すると丁度力場の場所でその線が交差する。
「ビンゴね！　て事は、こっちの帰還時のバツ印にも同じ事が言える。こっちの人食い通路とリンクしたバツ印に同じ数字を打っていって、それを数字で結べば――――――――ほら！」
　テンション高めにメカブが線を引き終える。そして交差したその場所は……
「これって……ＵＤＸ？　でもやっぱりちょっとずれてるよな。これじゃあ道路だし、ここはホコ天じゃないぞ」
「ＵＤＸっていうか、クロスフィールドそのものを指してる感じ。それでもちょっとズレるけど……確かこの道路って、遊歩道あったわよね？　道路の上に歩道橋みたいに架かってる大きいの」
「なるほど、それなら道路の真ん中でも大丈夫だな！」
　僕達はみんなここに賭ける事にした。反論する奴は誰もいない。みんなきっとここだと思えてる。沢山の情報を統合した結果なんだよこれは。
　ちゃんと出口をふまえての場所。今までが無駄に成らない最後の場所としてなら、これ以上ふさわしい場所はない。問題は……あいつ等に気付かれずにどうやってここを離れるか。
　僕達が動き出せば、宝箱の位置を見つけたと奴らは思うだろうし、けどだからってのんびりしてたら、向こうだってこの事に気付くかもしれない。
　チンピラ共はともかくハゲとかは案外頭切れそうだからな。それ

に、一番の問題は向こうについてるのが第一研究所の奴らだって事だ。
ハゲもチンピラも無能でも、逆にＮＰＣの奴らが答えを持ってきそうじゃないか。そんな事を思って、事を慎重に起こそうとしてた僕ら。
だけどその時だ。

「ゲンさん！　星はＵＤＸへ続く遊歩道です！！」
「よし！　でかした！！」

僕は思わず「ぬあ！？」って叫んじゃっよ。いつのまにこの金髪野郎紛れ込んでたんだ？　こっちにスパイを送り込むとは……あいつ等相談してるフリしてこっちに聞き耳立ててたって事か。
なんて横取り精神旺盛な奴ら。自分で考える事を放棄してやがる。
言葉を受け取った瞬間に、赤髪ライオンがその野生の動きをこれでもかと言うくらいに見せつけて走り出す。どうやらあいつのスマホでこのイベントを進めてきてたみたいだな。

「って、んな考察してる場合じゃ……っつ！」

僕は慌てて立ち上がろうとした。だけど膝に力が入らずに前に倒れ込むように体が崩れる。もう本当にヘナチョコだな僕の体は！
そんな事を思ってるとガシッと腕を捕まれて倒れきるのを防がれた。そしてすぐさま「乗れ！！」の声。視線を向ける間もなく、僕は反動を利用されて、その声の主の所に遠心力を利用されて方向転換された。

「急ぎなさい！！　私たちも後から追いかけるから！！」

そんな声を聞きながら僕の体はドサリと力強い背中にのっかる。

この力強さ、知ってるぞ。

「大丈夫なのか？　もう限界来てるだろ？」

「言っただろ。限界なんて筋肉で越える！！」

それは聞いた覚えないな。だけどこの筋骨隆々の人は、僕を背中に乗せて、一気に走り出した。マジで人を一人背負っての走りとは思えないスピード。筋肉スゲー。

僕はチラリと後ろを振り返る。そこではみんなが沸き立って「いっけええええええ！！」と叫んでる。確かに行くしかないよな。

謎を解いたのは僕達なんだ。それを漁夫の利よろしく持って行かせるか！！

僕達は自分達が走ってきた道を逆走する。蔵前橋通り近くまで来てたから、実際このペースで持つのか不安だけど、こうなればこの人を信じる以外ないだろ。

大丈夫、筋肉自慢はきっと凄い根性を持ってるはずだ。なんたって毎日、自分の体に鞭を打ち続けて来たはずだからな。

「頼みます！」

「それも二回目だが、頼まれた！！」

そう言って声を発しつつ赤髪ライオンの背中を追う僕ら。暑いなんて言ってられない展開。すると示した目的地と反対側へ行ってるのがバレたのか、スマホからうるさい声が聞こえてきた。

『戦死フィフティィィィン！！　どこに行ってる！？　まさか逃げる気ではあるまいな？』

『バカな事を言わないでください！　あの人が逃げる訳ないでしょう！　そんな意気地なしじゃないわよ！　私が宝箱に襲われた時だ

って助けてくれたんだから！』

所長とジェロワさんの言い争いはいつもの事だけど、今回は所長は引かない。何故なら、友の死に直面したんだ。バカラさんの姿はあの後直ぐに消えたけど、この一回きりの様なイベントで死んだから、もう会えないんだろうとか思えるよ。

そしてそんなバカラさんと旧知の間柄だったらしいこの所長が、もうガムシャラに成るのは無理もない事だ。

『本当に逃げてる訳じゃないないんだな？　どういう事だ戦士フィフティィィィン！！　お前が向かう先にアイテムがあるとでも？』

僕は画面に出てきた『ああ』と言う文字をタップする。

『その根拠を聞かせて貰おう！　今現在も増幅してる紋章の中の力場ではなくそちらを目指す根拠をな！』

『もしかしてそれは今までの情報を照らし併せての決断ですか？』

二人のそんな言葉の後に、画面には三種類の選択肢が現れる。それは僕達の考え通りのものと、別の考えが記された物が二種類。僕は当然、自分達の行き着いた考えをタッチした。

『成るほど、人喰い通路に喰われた人たちの出現場所に注目したわけですね。確かにそれは言い考えかもです。賭けてみる価値はあります』

『フワハハハハハハハハ！！　流石はバカラが見込んだ奴だ。その着眼点は素晴らしい。素晴らしい……が、本当に大丈夫だろうな？』

なんで最後まで自信満々な姿を見せてくれない。こっちまで不安

に成るじゃないか。

『私は彼を信じますよ。大丈夫。よくよく考えたらどうして今まで第一の技術力でも見つけられなかったのか……それはいろんな裏があったからでしょう。

今回もそれなら、あの紋章事態が囮なのかもしれない。裏は別の場所に……それを考えるのなら、この推測は最適です。

がんばってください。私はあの人の事を知らないけど、でも悔しいとは思ってますから！』

ジェロワさんの言葉が僕に自信を与えてくれる。そして所長も、いつもとは違う感じでこう言った。

『そうだな……信じてみよう。あいつが信じたお前を！　頼む……アイツの願いを叶えてくれ！』

頭を下げたこの人は、もうどこにもマッドサイエンティストの風体は無かった。ただ友達の為を思う、普通のおじさん。

ここで再び選択肢が現れる。それは【任せとけ！】と【出来る限り全力を尽くします】の二種類。どっちもあんまり変わらないような感じだけど、個人的に後者はあんまりここに似合わないよな。

この今の感じにこの言葉じゃ役不足だ。僕たちは今、願いと祈りと希望に満ちてるんだ。それを濁す様な文はいらないだろ。だから僕は前者をとるよ。

【任せとけ！】

『その言葉、忘れるなよ戦士フィフティィィィンよ！！』

精一杯の自分のアイデンティティを保とうとする所長。ジェロワさんは呆れながらも、優しい顔でそんな所長をみてた。僕もやっぱ

りこの所長はこうでなくちゃなと思う。
僕はスマホを握り締めて大きなＵＤＸのビルを見上げた。ここがきっと最後の場所だ。

ゼハァゼハァゼハァ……ともの凄く荒い息づかいが聞こえる。流石にもう限界だ。僕は背から降りる事を提案するけど、彼はせめてあの階段を登った所までと聞かなかった。
もう十分なのに、それでも彼は最後まで、いやちゃんと約束したＵＤＸの所までは送り届けたいと思ってるみたいだ。
先行してた赤髪ライオンとは結構距離が縮んだ。流石に人混み全員を睨みだけで退かせるのは無理があったから、向こうが人混みで悪戦苦闘してる間に、僕の指示で進めんだ彼の方が早かったのだ。
でもここに来てまだ傷害はあった。目の前の遊歩道へあがる階段には明らかにチンピラっぽいのがいるぞ。どうやら、近くにいた奴らを急いでここに集めたみたいだな。
いけるのか？　この人のこの状態で？　蒸せるような熱気を放つアスファルトを踏み込んで、赤髪ライオンが登る階段へ僕達も足をかける。

「うおおお

ら、明らかにこちらに敵意を向けて来る奴らが数人見える。僕はチラリと赤髪ライオンへ視線を送る。
向こうもバテてるみたいだけど、でも既に道路の上に架かった場所へ足を踏み入れよとしてる。どうやってもコイツ等を突破して追いつかないと……そう思ってると、倒れてた筈の彼がチンピラの一人に突っ込んだ。

「ぬぅ……あああああああああ！！」

そんな声にならない声を出しながらだ。

「うわっ、なんだコイツ？　退けよオラアアア！！」

そう言ってその拳で彼を殴り飛ばすチンピラ。バテバテの彼になんて事を！　僕は歩み寄ろうとしたけど、その瞬間スゴい眼光で睨まれた。そして――

「行け！！」

――そう叫ばれた。再び彼は立ち上がる、そしてチンピラへと迫る。そんな姿を見せられたら、僕だってやらない訳には行かない。体調なんか、ひとまず頭の中から追い出そう。
そうしないとこの体はウスノロ過ぎる。僕は歯を食いしばって走り出す。けど目の前には彼が押さえきれなかったチンピラ共が！

「どっけえええええええええええ！！」

僕は、気合いで乗り切る気だった。勝算なんて考える暇なんてなかった。だからコイツ等を交わす事だけ考えて、威嚇のパンチを放った筈だった。

だけどその瞬間だ。チンピラの頭が僕の拳の前から消えたのは。
何が起こったのかわからないでも取りあえず前へ進もうとする。
だけど更に迫るチンピラ共。両側から何やら叫びながら僕へと拳が迫る。避けるか駆け抜けるか……僕が一瞬迷ってると、空気が弾ける様な音と共にチンピラ二人の体が飛んだ。その光景に周りに居た人達が激しい叫びをあげる。
だけどそんな複数の叫びに負けない大きな声がこの場に響く。それはきっと僕に向けての声だった。

「進みになってください！！　貴方の道に立つ敵は、私が全て排除しましょう！！」

それは身長百八十以上あるかのような、大柄なシスター（銃付き）の姿だった。

謎ときと最燃焼（後書き）

第二百七十一話です。
さて、遂に現れたのは最強の助っ人です。彼女のチートさがきっと次回には発揮されるでしょう。みんなで紡いだ道を無駄にせずにすむかどうか……
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

最強の味方（前書き）

彼女は歴史ある修道服に身を包んだシスターだ。だがその体は大きく、修道服の色も相まってクマに間違われることしばしば。だけど彼女は優しい人だ。いつもは教会で神の教えに身を教示、心身を清め、そして時には迷える子羊達の相談を受ける。

そして月に二回位は出動が掛るのだ。彼女のもう一つの顔、それはミリタリーマニアである。だけどそれには少し語弊がある。彼女は普通のマニアの様に、格好良いから好きになったんじゃい。

彼女は戦士だから、戦場で生き抜くために色々な武器に詳しくなったのだ。そして何十もの戦場を渡り歩いた彼女が今再び戦場に立つ。秋葉原と言う戦場に。

最強の味方

「ラオウさん……」

それは見間違う筈もない、その人の姿。僕がこのアキバで出会った最も印象の強い人と言っても過言じゃない人。シスターなのに、その実見た目だけは全然シスターっぽくない人。

もしかしてチンピラ共を倒し回ってたのって……そんな事を思ってると、まだ残ってたチンピラの一人が雄叫びと共に僕に迫った。

けれどもそんなピンチは一瞬で解消される。あの人が肩から下げてる大口径の銃……と言うか大砲みたいな感じの武器からドバン！！　と地面を震わせる音が聞こえたと思ったら、目の前のチンピラの体が変な具合に曲がって飛んでった。

流石にゾッとするような光景だった。死んでないよね？

「くっそ……なんだあの化け物？」

そんな声が前方から聞こえたと思ったら、既に道路上の遊歩道に差し掛かってる赤髪ライオンも眼下の異様なシスターをみてた。

そして恐怖って奴をちょっとは味わってる様だった。まあわかるよ。僕も初めて相対した時は、死ぬかもと思ったもん。初対面ならしょうがないよね、うん。

てか、あんな格好でよく外に出れたな。速攻で通報されそうだけど……大きな銃を背中に一杯背負ってるし、さっきの大口径とか、既に投げ捨てて違う奴を構えだしてる始末。

ヤバいよ、あの人戦争やってるよ。そんな事思ってると、彼女はこちらに（銃が）似合わない笑顔を向けてこう言った。

「大丈夫、敵は私は皆殺しにするので、安心してください。エマー

ジェンシーは確かに受け取りましたから」
「あっ……」
そう言えばそうだった。僕があの人に助けを求めたんだ。僕が知ってる中で一番頼りになりそうだったから、思わずね。だってチンピラ共と相対するなら、秋徒とかでも弱いじゃん。
それに愛さんを巻き込むとかしたくなかったし、それならアキバに居ることが確実で、そして強そうなのはこの人が僕の中では一番だった。
そりゃあ、ちょっと不安はあったけど、そんなの考慮してる場合じゃなかったし、まさか町中で銃をぶっ放すとは思わないじゃん。
「これは全てレプリカですよ。死にはしないですからご安心を。まあ、かなり改造してますけど」
違法だよね！？　それって違法だよね！？　この人の場合、人を殺せる位に改造してててもおかしくない。
「ちっ！」
僕が色々考えてると、赤髪ライオンがアイテムを目指して走り出す。そうだ、今は敵の安否なんかに気を配ってる場合じゃない。僕も急がないと。
体が何かのきっかけでバラバラになりそうな位に、いびつな感じ。足に力を込めて踏み込む度に、関節部分から崩れていくようなさ……変な恐怖がある。
だけど前に進まない訳には行かない。僕も遊歩道に差し掛かる所でスマホを前に掲げて見る。するとこの道の先、道路の真ん中直上に胸の高さ位に浮いた宝箱があった。

「アレか……」

分かりやすい位に、今まで見た宝箱とは違うな。今まで見たのは浮いたのも全部木箱だったけど、アレはなんか違う。メタリックと言うか……デザインがそもそも違うかも。

今までのは誰もが宝箱とわかる、それこそ一度でも某有名なＲＰＧをやった事がある人なら一目でわかる宝箱の形してたけど、今見えるのはもっと簡素だ。

銀色した外装に、厚さは二十センチ程度。見える装飾は箱の上側に加えられた物だけ。まあそんな所だな。言うなれば、お中元で貰うクッキーの詰め合わせ的な箱が近いかも。

けどそこまで安物っぽくもなく、ちゃんとミステリアスで高級感は放ってる。ようやくたどり着いたレアアイテムの箱としては相応しい。

既に赤髪ライオンは半分くらいまで迫ってる。これは死ぬ気で走るしか……

「くきゃはははははは！　もう遅い！　俺様の勝ちだ！！　くあっはははははっはは――ん？」

不意に途切れる笑い声。それはきっとアイツの視界にも変な物が映ったから。何故か空にあがったロケット花火。そう、ロケット花火だと僕も赤髪ライオンも思える物が空を昇ってる。だけどロケット花火よりも鈍いプシャーと言う音を出して空を昇ったソレは、弾ける事なく万有引力に従って落ちてきた。

しかも狙い定めたみたいに赤髪ライオンの元へだ。

「んな！？」

その軌道を目で追っていた赤髪ライオンもビックリした。だけど

そんな驚きはまだ序の口。床に落ちる直前にそのロケット花火の様な物は、バチバチバチバチと周囲に広がる爆発を見せた。

「うおっ！？　とっととっと！」

思わず足を上げて慌てふためく赤髪ライオン。さっきのには爆竹でも仕込んであったんだろうか？　よくわからないけど続けざまに二・三発もう一度上がってる。僕はこの隙に少しでも距離を縮めようと足を動かすよ。

爆竹が弾ける音が凄く耳に痛い。しかも近距離でやられてる赤髪ライオンはもう踊り狂うしか無い状態。しまいには尻を床に着く始末だ。

きっとこれもあのラオウさんの手助け何だろう。てか、これがあの人じゃないとか考えられない。僕は味方の手助けを受けて、確実にアイテムへと近づく。

「はぁはぁはぁ」

肺が苦しい、火薬の臭いが鼻孔を擽って息苦しい。僕と赤髪ライオンの距離はあと数メートルにまで迫ってた。だけどロケット花火モドキは既に打ち止め。奴も再び動き始めてた。

「ちっ、尻餅なんて恥ずかしかったじゃねーか！！」

そんな事を言いながらアイテムへ僕よりも早く迫る。だけどその時、地を這うようなうめき声が聞こえた。ソレはまるで地獄の番犬でも鳴いてるかの様な声で、僕達は互いに震え上がる。

なんかもの凄いイヤな予感……と言うか怖い予感がした。そして僕達は声のした方を恐る恐る見る。するとその瞬間にガシッと遊歩道の柵から手がでてきた。そして黒い銃口が見えてきて、その後に

大きなシスターの姿が這い上がってくる。これで夜だったらまさにホラーな光景だよ。
てか、味方の筈なのに僕も怖がってしまった。

（ななな、なんだってえええええええええ！！！？？）

と思った。心で叫んだ。だってここは道路の上に架かってるんだぞ。デッカい車もぶつからないように余裕を持った高さの筈だぞ。
てか、この人が上がってきた場所は間違いなく道路上だろ？
もうなんか色々と疑問が沸きすぎるけど、取りあえずラオウさん凄い。凄すぎる。なんか人としての常識が当てはまらない。
でも流石にジャンプ一発とかで昇ってきた訳じゃないよ。どうやらいつの間にかフック付きのロープをこの遊歩道の柵に引っかけて登ってきたみたいだ。
フックはきっと爆竹がうるさく鳴ってた時に引っかけたんだろう。だから僕達は気づかなかった。ラオウさんは頭がまだ出たくらいだったけど、僕達の様子を見ると背中の銃に手を伸ばした。
そして背負ってる銃の一本を取り出すと赤髪ライオンに狙いを向ける。

「おいおいマジかよ……」

冷や汗と同時にそんな事を言った彼。でも彼は「逃げる」では無く、アイテムをいち早く手に入れる事を選んだ。
その執念は立派だ。だけど手が伸びる前にガガガガガガガガと足下を撃たれた。本物じゃないらしいけど、思わず足が止まる赤髪ライオン。
まあそりゃそうだ。実際人吹っ飛んでたし、音は妙にリアルだし、それにレプリカなんてラオウさんの申告でしかない。実際僕だってこの人は本物を所持してててもおかしくないと思ってる。

「それ以上動いたら殺す」

怖い！　怖すぎるよこの人！　静かに言ったのが逆に怖かった。僕の為なのに……失礼なことは重々承知だけど、何故か安心感より恐怖が勝ってる。

一体何故？　そう思ってると、なんと赤髪ライオンがその答えをくれた。

「お前……殺すとか笑わせるなよ。ここまでしたら流石に殺さなくたってサツの世話になるぞ」

なるほど、僕は犯罪の域に足を踏み入れてる事に恐怖してるのか。まだまだ警察のお世話にはなりたくないからな。だってこれって僕も関係者だよね？　知り合いだし、助けに呼んだの僕だしね。

「ふふふ、警察が何よ。私は神の言葉で動く従順な戦士。友を助けるのは当然の行い。悪を滅するのも神の戦士の勤め。誰に邪魔される言われも無いわ！」

そう言ってラオウさんは柵から大きくジャンプした。その巨体と背負った銃の数々を感じさせない大きな跳躍。それはマジで人の体の限界を超えてた。

超ハイスペックだよこの人。時代が時代なら英雄とかになれたかも知れないな。

「化け物め……」

忌々しげにラオウさんを見据えてそう吐き捨てる赤髪ライオン。対してラオウさんはデッカい銃をもう一方の腕にも抱えてこう言った。

「神の意志に反した異端者に鉄槌を……」

完全にこちらが優勢。ここに来て初めての事だ。銃口を向けられた赤髪ライオンは流石にもう動けないだろう。僕はラオウさんからの視線を受け取って息を整えて歩き出す。

箱はもう目と鼻の先だ。

「これで済むと思うなよテメェ等！！　例えレプリカでも銃口を俺様に向けた事、後悔させてやる。イベントのルールで縛られた戦争なんてここまでだぞ！」

そんな事を言って脅しをかけてくる赤髪ライオン。だけど直ぐにその口を閉じる事になった。何故なら一発の銃声がこの空に響いたからだ。

それは赤髪ライオンのタテガミを一部吹き飛ばした。強引に本体からちぎられた赤い髪が、パラパラと床に落ちる。そしてラオウさんがその野太い声で嬉しそうにこう言った。

「戦争。そうなったらどっちがより多くの血を見るか楽しみですよ。お忘れ無く、今の私はあなた方を殺す気がない事を。

ですが、戦争となれば私は異端者に容赦はしません。骨の髄までしゃぶり上げて、その頭蓋骨でビールを仰ぐ事を至上の喜びとしましょう」

背筋がマジでぞっとした。それは僕だけじゃなく抗争とかに馴れてそうな赤髪ライオンまでそうだった。冷や汗が見てとれる。

まあ無理もない。この人の迫力は異常だ。それにそんな光景が見えてしまうんだ。戦争なんてこの人にとって特でしかない。

暴れたいみたいんだもん。戦場に十字架背負って行って出張教会

とかやればいいのに。悟れそうだよねこの人なら。

僕は銀の箱の前に立つ。数メートル離れた位置に赤髪ライオン。もうここらで終わりにしようぜ。僕はスマホを掲げて前を見た。表面に施された装飾はどうやら空に現れた紋章と同じ模様みたいだ。

対応してるって事かな？

「後悔する事になるぞ！　向こうで必ずフルボッコにしてやる」

最後の悪あがきにそんな事を言ってくる赤髪ライオン。僕的にはこっちで何もしなくて、向こうでやってくれるんならまだありがたいけどね。体動くだろうし。

「いっとくけど、僕は向こうの方が強いぞ」

まあ大抵誰でもそうだろうけど、僕は得意気にそういってやる。まあ向こうなら、こんな不甲斐無い気持ちで戦う事も無いだろうから、向こうであったらリベンジ位はしてやるよ。

僕の言葉に赤髪ライオンは「俺様はその十倍は強いぞ」とか言い返してくる。どれだけ負けず嫌いだよ。子供か。僕は「へいへい」と言いながら画面へ指を伸ばす。そして遂にその箱へ手が届く。

どれだけこの瞬間を求めて来ただろう。この炎天下の中、どれだけの人がここを目指してただろうか。歩いて走って探して、今や自分だけの思いだけでここに立っちゃいないよな。

だからこそ、僕はそんな脅しに屈する事は出来ないんだよ。無機質な画面に指が触れる。

「よし、これで」

そう呟いた瞬間、画面内の箱に異様な動きが。ボコボコと銀色の

箱が沸き立つように膨張していく。そしてそれは大きな足となり腕となり翼となり、その姿をモンスターへと変えていく。

「なっ……ちょ、これって……倒せって事か？」

おいおい戦闘は基本このイベントじゃ無いんじゃなかったのか？　ちょっとだけ、ブリームスの兵士とやり合った位だったけど、あの位ならと思ってた。

だけど、これはガチじゃん。普通にバトルってるよ！　多分倒せればアイテムが手には入る。そういう事なんだろ。まあＲＰＧにはよくある展開だけど……ここに来て……いや、ここまで来たからか。

そう言えば宝箱に一度襲われてたな。僕じゃないけど、ジェロワさんが。それを考えれば、この展開は予想出来たかも知れない

ボコボコと膨らんだ宝箱は、四枚の羽を背中に生やし、見た目はドラゴンっぽい強力そうなモンスターになった。これを倒せと？

『第一の奴らが集めてた資料の中にありました。アイテムの防犯の為に仕掛けられた最後の罠。多分それがそうです！』

防犯ってレベルじゃない気もするけど、どうにかするしかないな。何か方法は無いのか？　僕は画面の隅に現れてるジェロワさんをタップする。

『倒し方は残念ながら乗ってません。ですが、バカラさんから貰った武器がありますよね？　あれは有効な筈です！　頑張ってみてください！　あなたがアイテムの暴走を止めないと、この街は……』

「？　ジェロワさん？」

画面の中から不意に彼女が消えた。通信が切れた訳じゃない、彼女の居た画面自体は消えてない。なら……これは、そう言うことか

？　彼女もまた、このアイテムの影響に巻き込まれた。
この目の前のモンスターだけを倒してどうにかなるのかは不明だけど、でもとりあえずやるしかないよな。僕の武器はあの卵型の奴だけ。
バカラさんが残した忘れ形見が思わぬ所で役に立つことになるな。てか、元から多く渡してたのはそのためか。十個あったうちの六つは既に使ってる。あと、僕が知らない間に更に二個ほど減ってるから、残りはたった二個しかない。
メカブの奴に渡してた時、ブリームスの兵士の妨害にあったとかなんとか言ってたから、その時にでも使ったんだろう。実際かなり痛いけど、残り二個でやるしかない。倒せる仕様になってる筈……だよな？

「どうしたんですかスオウ君？　目的は果たせましたか？」

そう言って来るラオウさん。ラオウさんは僕達がＬＲＯのイベントで争ってるらしいことは分かってるみたいだけど、見えてないからね。こればっかりは彼女に頼る事が出来ない事だ。

「ちょっと不味い事になってます。けど、やって見せますよ」

僕はそう言って目の前のモンスターを見る。銀色の体に宝石の様な赤い瞳が獰猛に輝いてる。これを倒す……倒さないといけない！

「はは、そう言う事か。これなら俺にもまだチャンスはあるって事だよな？」

そう言ったのは赤髪ライオン。こいつも一応何かの武器を持ってるのか？　だけどこいつは動けない筈だ。今もラオウさんの銃口に狙われてるんだからな。

「いつまでも、自分達が有利で居られると思うなよ」

口元を釣り上げてそう呟いた赤髪ライオン。するとその時「若！」と言う声と共に、ドタドタした音が視線の先から聞こえた。

そして現れるのは、チンピラ風情を引き連れたハゲ。なんかあの装置を守ってた人数よりも多くないか？　もう見張らせる必要も無くなったから、今度こそ全員を召集したか。

「てっめぇ若に何を向けてる！！」

ハゲは赤髪ライオンに銃口を向けてるラオウさんに気づいたんだろう。彼も懐から拳銃を取り出した――――って、おい！　それは本物なんじゃ無いのか？

そんな事に驚愕してると「無限の蔵！　モンスター来てるわよ！」とかの声も聞こえた。その言葉にハゲから画面に視線を移す。

するとモンスターは大きな口を広げて、僕に迫ってた。

「ぬあ！！」

僕はとっさに地面を転がる。そんな様子を見てラオウさんが「どうしたのですか！？」と驚きの声。彼女にはモンスターが見えてないから、僕の動きは全然把握できて無いのか。

端からみたら、いきなり前転をしたってだけだもんな。すると一瞬、自分から視線が外れた事を見逃さなかった赤髪ライオンが、高らかに下部共に指示をだす。

「今だ！　あの化け物シスターをお前達をぶっ潰せ！！　全力でいけよテメェ等！！　俺様はアイテムを手に入れる！！」

「「「おおおお

その言葉で一斉にチンピラ共がこちらに押し寄せてくる。

「ラオウさん！」

たった一人に、五十人以上の軍勢が迫ってる。僕はラオウさんの身を心配してそう叫んだ。だけど彼女は逆にこう言ったよ。

「どうやら、私では力に成れない部分があるようですね。なら私は私の力に成れる部分で協力するまでです。心配は無用。彼らは私が、全て叩き潰しましょう！！」

その瞬間、両脇に構えた銃をぶっ放すラオウさん。勢いよく走ってきてたチンピラどもが次々と吹き飛んでいく。本当にレプリカだよねそれ！？　と言いたくなる威力だ。

ガトリングガンの弾が無くなると今度は散弾銃みたいな物を構えて、ガシャコン・ドバアアアアン！！　と前方に進みながら敵を吹き飛ばしていくラオウさん。その姿はまるで、未来から来た殺人ロボット……ターミネーターだよ。

もの凄い安心感。あの人はなんだか大丈夫だろうと思える。問題はこっちだな。

「うらうらどうしたあああああ！！　さっさと倒れろや、このデカブツがあああああ！！」

そんな事を言いながら、僕と同じタイプの武器を投げまくってる赤髪ライオン。向こうはどうやら、沢山持ってるみたいだな。

でもあんまり効果がみられない。効いてるのか効いてないのかわからない。それに装置の時に出てた耐久値、まあこのモンスターで言えばＨＰの表示がない。これって倒す条件がある……とかじゃな

いだろうか？
そもそもＨＰを削っていくんなら、二個じゃどうしようも無いし、赤髪ライオンの様なやり方されても困るって事なんだろう。
このモンスターを倒す条件。それを見つけないと。もう今や、ジェロワさんからの情報もない。自分でやるしかないんだ。
画面の中でモンスターが雄叫びをあげる。そして赤髪ライオンへ向かって突進していく。どうやらターゲットが無駄に攻撃しまくってた奴に変わったみたいだな。
てか、あれだけごっついのにしてくる攻撃は、全部直接攻撃だけ……これはイベントにあわせてるって事だろうか。まあ全包囲攻撃とかやられても困るだけだし、魔法も使われちゃ、どうしようもない無いからな。
取りあえず、直接攻撃は避けれるどうにか出来そうではある。だけどどうやればいいかが問題だな。

「無限の蔵！！」

そんな声に後方へ振り返ると、メカブを含めたみんながこの遊歩道の手前ぐらいに集まってる。こっちにこないのは、邪魔になるとか思ってるからかな？　てか、ラオウさんが圧倒的過ぎるから、来れないのかもしれない。
邪魔になるとか思ってね。それに僕の方も彼らは手助け出来ないし、後はただ信じる事しかみんな出来ないんだ。こんなボロボロで頼りない僕を信じることしかさ。

「絶対……絶対絶対絶対絶対絶対絶対絶対、勝ちなさい！！」

顔を真っ赤に染めて、精一杯の大きな声で激励をくれるメカブ。それに続いてみんなが僕を応援してくれる。すると不思議と、痛みや疲れがちょっとは軽くなる気がするんだ。

みんなのお想いが僕の体に力を与えてる気がする。僕は力強く頷いてモンスターに相対する。まあ赤髪に向いてるから背中に側になるわけだけど。

するとその時、モンスターは爆発の影響か、その大きな体を持ち上げた。その時、翼の根本あたりが光ってた様な。僕は前に回り込んで確認してみる。

こっちはバカが投げまくる爆弾の粉塵でよく見えないけど、微かだけど光を確認出来た。あれは多分紋章の形をした光だと思う。

僕はスマホを握る手に力を込める。違うかも知れない。もっと情報を集めた方がいいかも知れない。だけどこのバカがそれに気付いたら……有り余る武器で強引にそこを攻めるだろう。

僕の武器はたった二つ。この二つで勝つには、ここに賭けるしかない！　僕は全ての力をこの瞬間に込めて動き出す。

最強の味方（後書き）

第二百七十二話です。
最強の味方が最強の活躍をしてくれましたね。これはきっと間違い無く逮捕されると思う。だけどそんなの考えてれるか！　って事で。いや、ちゃんと彼女は考えてると思いますけどね。
そこら辺はプロですから。次回でこの話は終わる事が出来ると思います。
ではでは次回は日曜日に上げますね。

降り注ぐ太陽（前書き）

最強の助っ人を得て、僕は一対一の戦闘に入る。赤髪ライオンとの勝負。どちらが先にモンスターを倒してアイテムを手にするのか。ここまで誰かに頼ってなんとか来たけど、ここからは僕がやらないといけないこと。

ここまで繋げてくれたみんなの為にも、僕は負ける訳にはいかない。

降り注ぐ太陽

知らない人は知らない。そして関わりない人は、僕たちを奇異の視線で見ては通り過ぎていく事だろう。今この街にはもう一つの街が重なりあってること。空には輝く紋章が浮かんでること。そして未来を賭けてる……かも知れない戦いをやってること。

だけどそれは別に関係ない人たちにとってはどうでも良いことだ。見えず知らず聞かず……それなら存在なんてしてないのと同じ何だろう。

だけど僕達は違う。僕達には見えて聞こえてそして知っている。首を突っ込んで求めたんだ。みんなの想いでＬＲＯは生まれて（厳密には違うけど）そして僕達だけが知る街が、この秋葉原という街に重なりあってる。

だけどそれももう後少し。歴史をちょっとだけ変えて、帰って貰おうと思う。僕達が復旧を待ってるＬＲＯという世界に。

銃声の音がうるさく響き、だけどそれに負けない程に重なりあう雄叫びがあがり続けてた。けれど僕達の邪魔をする奴らが現れない事を考えると、ラオウさんはたった一人であれだけの人数相手に奮闘してることになる。

武器の差があると言ってもスゴい事だ。まさに名前に違わぬ猛者。あの人の場合、名が体を表してる。これでもかって位に。

ラオウさんにだけ、頑張って貰うわけにはいかない。燦々と降り注ぐ炎天下の光の下で、僕もこれまでの役立たずっぷりをここで挽回しないとな。そうしないと頑張ってくれたみんなに対して申し訳ない。

こんな自分を引き留めてくれた、信じてくれて必要だと言ってくれた。そんなみんなの為に、こっちでも何かが出来ると信じたい。

自分の為に、そして向こう側で出会った人達の思いを背負って。

「そろそろ決めるか。どっちがアイテムを取るのか」

「上等だな。こっちもモタモタはしてらんねぇ。あの化け物シスター止めるのも限界があるっぽいしな。やってやろうじゃねぇか」

僕達は互いに並んで、画面に映る銀色に輝くモンスターを見据えてそう言った。てか、僕は彼女がよくやってるって感じだったけど、既にこいつ等に危機感さえ与えてたとは天晴れだ。

どうりでさっきから武器を使いまくると思ったけど、あれは焦りでもあったんだな。こいつの背中にはラオウさんという恐怖が迫ってる。それを実感してるみたいだ。

まあれだけ使える武器があるだけで僕としては羨ましい限りなんだけど……幾らなんでも無駄玉撃ちすぎ。こっちはおかげでちょっとした光は見えてるけど、決定打には欠けるよな。

ＨＰ表示が無く、幾ら攻撃を当てても効果がないのなら、きっと何かしらの条件付きで倒せるはず。それなら一個でも多分大丈夫だよな。

僕は画面の左下に表示されてる武器の残段数を見る。そこには数字の２の表示。これが投げたら一に成り、持って直接使用なら１，５になる。

だから最大で攻撃出来るのは後四回。だけど僕はせめて後二回の攻撃でこの考えを確実な物にしたいんだ。だって最後の一個で直接攻撃しか出来ないんじゃ、威力として心許ない。

幾ら条件付きとは言ってもだ。だから出来る攻撃は後二回、最低一回。

『グガガガアアアアアアアアアアアアアア！！！』

画面が妙にブレる雄叫びを上げるモンスター。ちょっと前から思

ってたけど、これってかなりウザい。スマホの小さな画面でしかその姿を確認出来ないから、動きながらだと、常に画面内に対象を入れておくって事が難しい。
それなのにこの叫びの最中はやけに画面がブレる物だから、良く画面を外される。まさかこれってこのモンスターの特殊効果か？

「ちっ、またコレか！」

そう言って画面を必死に凝視する赤髪ライオン。その気持ちは分かる。だけど僕は慌てない。こいつがモンスターの気を引いてくれてる間にそれなりにちゃんと観察してたからな。
このモンスター、デカくてデザインも拘られてて、実際ＬＲＯ本体で出てきたらかなり強いだろうと思うけど、このイベント使用なのか、かなり攻撃パターンが少ない。
とにかく噛みつくか突進か尻尾を使っての全包囲攻撃か、後は前足で凪払う位しかない。
そして大抵止まった状態から雄叫びと来たら、突進だ！　僕は横に飛んで取りあえず緊急回避。その瞬間「うお！？」ってな声が聞こえた。多分逃げ遅れた赤髪ライオンの驚く声。僕は直ぐにスマホを向ける。すると、モンスターと赤髪ライオンが重なりあってる所だった。そして直ぐにモンスターは尻尾まで含めて駆け抜けてた。

「ん？　あれって……」

そこで僕はある物をみた。モンスターが赤髪ライオンを抜けると、なんだか赤いオーラの様な物があった。最初に金髪とモヒカン相手に見たあの赤いオーラ。
それが赤髪にもあって、なんだかモンスターに引っ張られて引きちぎられた……そんな感じに成ってた。もしかしてあれがＨＰなのか？　生命力みたいな感じで表現してあるとか？　でも自分の体の

一部を映しても、そんな物見えないんだよね。どういう事だろ一体？
そんな事を思ってると、再び赤髪ライオンが、卵型の爆弾を投げまくってた。本当にどれだけ持ってるんだ？　四次元ポケットでも与えられてるのかかね？　だけどそんな爆発の中からモンスターは悠然と姿を現す。そして噛みつき攻撃。それを何とか交わしながら後ろに下がる赤髪ライオン。
てか、回り込んでこっちに来るな。

「男だろ？　逃げ回ってないで相対してほしい物は手に入れろ！」
こいつ倒し方わからないからって僕を巻き込むつもりか。てか、勝手にターゲットを取ったのはお前だろ。まあでも確かめたい事があるから、やるけどね。こっちには逃げ回る体力さえろくに残ってないんだ。
だから出来るだけ早く倒したいと思うのは同じだ。それでも僕達が間違っても協力……なんて事は無いけど。僕達はきっと、互いに上手く相手を使う事を考えてると思う。
だからこそ僕はこういってやろう。

「ちゃんと自分でやるさ。てかお前な、足を止めたいのなら上じゃなく足下狙えよ！」
「はっ、んな事分かっとるわ！！」

そう言って足下に向けて二・三個続けざまに爆弾を放る赤髪ライオン。すると再びモンスターは後ろ足で立ち上がった。

（よし、これを待ってたよ！）

進行は止めれたけど、奴の攻撃本能はまだ赤髪ライオンに向いている。モンスターはデカい爪を持った腕を前に伸ばしてきて赤髪ラ

イオンを狙ってる。ただ振り下ろす感じの攻撃。
てかそんな長く立ってられないから、体が落ちるのに併せての攻撃。僕はここで前に出た。ＨＰは後一回攻撃を受けたら無くなるだろう。だけどここしかないと思ったよ。
確かめなきゃいけない。そうでないと先に進めない。だから僕は振り下ろされた腕を直前まで引きつけてから卵形の爆弾近接の型で弾き返す。

「お前……まさか俺を……」

避けきれる自信が無かったのか、前に出てモンスターの攻撃を止めた僕に、そんな声を掛ける赤髪ライオン。そう見えたかな？　だけど実際お前の為じゃない。僕は無視して地面を蹴った。
ちょっとふらつくけど、頑張ってモンスターの懐へ潜り込む。そして狙うはあの紋章の場所。僕は画面一杯に広がる白っぽい胸の中心を指で突く。
するとその瞬間、雷撃の青白い閃光が辺りに飛び散った。モンスターの銀色の体に反射して、なんだか前使った時よりも明るく感じる。
取りあえず画面の向こう側だから、結構あっさりしてる。生……な感じはしないけど、浮かび上がってきた紋章に「よし！」と心で言った。しかもなんだか胸に亀裂が入った感じに見える。
それで僕は確信したよ。「間違いない」ってね。

僕はモンスターが倒れきる前に脱出。直後にズズ～～ンと重量感のある音が響いた。胸に亀裂が入ったからか、なんだかさっきよりも興奮してる様に見えるモンスター。もの凄く感覚短く叫びまくって、画面がブレブレの状態に。

「おい！　何したんだお前！？」

そう言って掴み掛かってきそうな雰囲気の赤髪ライオン。だけどそう言ってる間にブレた画面一杯に銀色の陰が――

「避けろ！！」

――僕は思わずそう叫んでた。二人して同じ方向へとっさに飛んだ。直後、画面からズゴゴゴゴなる音が聞こえてきた。

「ちっ、また助けられたな」

そんな事を言いながら、なかなか立ち上がれない僕に腕を差し伸ばしてくる赤髪ライオン。何のつもりだこいつ。

「俺たちの世界じゃ、義理や人情を大切にしてんだよ。それに借りを作ったままじゃ俺が我慢ならねえ。だからホラよ」

なかなかマシな顔してそんな事を言うから、僕は手を伸ばす。まあヤクザが義理人情を重んじるってのは映画やマンガとかでもあるよな。仁義とか良く言ってるイメージがある。

そう思ってると、伸ばした腕が後少しで重なる……そんな直前で手のひらを返された。虚空を切る僕の腕。そして同時に顔面に走る重い衝撃。

「ぐはっ！？」

そんな声と共に、僕は後ろに倒れる。この野郎……元からこうする気だったな。耳に届く不快な笑い声と共に、赤髪野郎はこういうよ。

「きゃはははは！　バ～～カ。義理人情？　いつの時代だよそんなの？　俺達は基本利益市場主義なんだよ。金のない奴からだって搾取する。それが今時のヤクザだよ！！
人を助ける奴なんてのは、バカなんだよ」

そう言って高笑いを続けるクソ野郎。こいつ……本物のクズだな。

「テメェ……」
「はは、良い様だぜ。そろそろ目障りだったんだよ。潰そうとしても潰そうとしてもしぶとく生き残りやがって、しまには何だあの化け物？　誰かの為とかで動いてる奴らが集まって来やがって、そんなのは偽善なんだよ。
人は自分の事しか考えてねぇ。それが真実なんだ。お前だって実はそうだろ？　あのバカ共を上手く利用できて満足だろ？　少しでも他人を信用する奴は勝者には成り得ない。
だからお前は今、そこに転がる羽目に成ってんだ！！」

そう言ってモンスターに向かう赤髪ライオン。こいつ……どうする気だ？

「取りあえず、お前と同じ事をしてみれば良いんだろ？　簡単だ。俺には尽きない武器がある」

やっぱりか。こいつ幾らでも無駄弾撃つと思ったけど、弾切れの心配がないからだったんだ。ズル過ぎだろそれは。

「勝利のファンファーレが俺には既に聞こえるぜ！！」

そう言って奴は前へ出る。僕は必死に手を伸ばしてそれを阻止し

ようとしたけど、いかんせん向こうの動きだしの方が早かった。
空を切る僕の腕、スマホからは既に複数の爆発音。やらせる訳にはいかない。こんな奴に……渡すわけにはいかないんだ！！
僕は鼻から流れ落ちる血を強引に拭って立ち上がる。顔面がジンジン痛む。なんか視界が狭い。遠くから「無限の蔵！」とか、「あんの野郎！　卑怯な真似を！」とかの声が聞こえてた。
みんなが見てるんだ……ふがいない自分のままでいられるか。ボヤケる視界の中で、腕を前に出し画面を見る。

「ちっ」

やっぱり上手く見えない。だけど……やらないと。このままじゃアイテムはアイツが持ってく事になる。そんなの認められるか。引きずる様にでも足を進める僕。

（まだやれる……まだやれる。まだまだまだまだまだ――）

頭の中に「まだ」が一杯に成っていく。自分の可能性を信じて――と言うか、もう言い聞かせるしかない。どこまでこの体を騙せるか、結局は心で引っ張るしかないだろ。

「さあ！　足を上げやがれ！！」

そんな声が前方から聞こえる。そして掲げてるスマホからモンスターの雄叫び。同時に「きたあああああ！！」と叫ぶ赤髪ライオン。
前に飛び出す奴に並ぶように、僕はその瞬間一気に体を加速させた。

「テメェ！？　まだ！！」

「諦めれるか！　負けれるかよ！！　手に入れなきゃいけない……そのアイテムには、損得だけじゃない、特別な思いが僕達にはあるんだ！！」

最後の一個、後二回攻撃出来る武器を握りしめて僕は赤髪ライオンに並んだ。目の前には多分大きなその体を持ち上げたモンスターが居るはずだ。

居るはずだってのは僕の視界の狭さもあるけど、画面が異様にブレて殆ど見えないから。これはあのモンスターの雄叫びの影響。

殆ど見えないけど、僕達はお互いに引くわけにはいかなかった。この一撃で全てが決まる。それが互いに分かってたからだ。

しっかりと地面を踏んで狙いに辺りをつけてる赤髪ライオン。それに対して僕は踏み込んだ瞬間もそして今現在も、体の芯がブレてるように、ふらふらだった。

それでも懐には同じく入れたと思う。後はこのスマホを狙いの場所に向けてタッチするだけ……ブレてまともに見えないって条件は同じ筈。

後は互いの運次第か。そう……思ってた。だけど赤髪の意識は蹴落とすって方向にまず向かう様だ。

「やらせるかよ！！」

そんな声と共に、右わき腹に入る重い感触。体が後方へ押され、足から力が抜けて――――たまるかよ！！　僕は崩れ落ちる膝を強引に支えて前を睨む。

だけど睨んでるのは赤髪ライオンじゃない。僕はスマホの向こうのただ一点を見据えてるんだ。

「いっけえええええええええええええ！！」

「ちっ、させるかあああああああああああ！！」

僕達の声が重なりあってこの場に響いてた。執念の元に観念した赤髪ライオンも既に僕じゃなく、画面を見てる。どちらが速く突けるか、それともどちらがより正確にあの場所を捉えてるか……それはもうホント全然わかんない。

だけど僕達の指はただ一点を目指すのみ。迷う事なんかもうない。全てをこの指先に込めて、後はただ信じるだけ。けれど不意にだ。不意にこんな言葉が幻聴？　と思える程に聞こえた気がした。

「ホント、つまんない事をしてくれたわね。やっぱりスオウと遊ぶ方が楽しいな☆」

まあだけどきっと気のせいだろ。アイツは後半全然姿見せなかったし、案外既にＬＲＯにでも帰ってるのかもしれない。だからどうでも良い。

僕達の指はほぼ同時に画面を押した。その瞬間、画面から溢れ出しそうな程の光が瞬く。僕のは青で、何故か赤髪ライオンの方の色は赤かった。

大地の震える様な断末魔の叫びが木霊する。僕たちの画面から放たれる光は、再び周りのみんなのスマホにまで感染してた。そして音と共に光りも次第に弱まっていく。

銃声はいつの間にか聞こえなくなってた。みんながこちらの状況を固唾を飲んで見守ってるのかもしれない。どっちが倒したのか？

そもそも倒せたのか……真っ白に成ってた画面に、すこしずつ色が取り戻されていく。

「くっ……づはぁっはぁ……」

僕は崩れる様に地面に膝をつく。強引に動いたから、さっきのド

テッ腹への一撃が今更聞いてきた。状況を見なくちゃ。どっちが……僕は勝てたのか？

「くきゃはは！　既に敗北ムードだなお前等の方は。まあ諦める気持ちも分かる。俺様に勝てる訳……」

不意に途切れた赤髪ライオンの言葉。不快な言葉は途切れて良かったけど、どうしたんだ？　僕は画面を上を向けた。

銀色のモンスターの影。それがボロボロと崩れていってるのが分かる。やれた様だな……けどどっちが？　それが一番問題だ。

僕の画面には何も表示されてない。判断できない。するとその時、赤髪ライオンが大きな声でこう叫んだ。

「こんな事……バカな！？　信じれるか！！」

そう言って赤髪ライオンは大きく腕を振りかぶって、地面にスマホを叩きつけようとした。だけどその手をいつの間にか近づいてきてたハゲに捕まれる。

「若、何がどうなったのか、儂達にも知る権利がありますよ。どうなったのか、言ってください」

そんなハゲの言葉に、赤髪ライオンは強くハゲを睨んだ。そして罰が悪そうに、「ならテメェで確認しろ！」と言ってスマホを押しつける。

「では、失礼して――」

そう言ってスマホの画面を見据えるハゲ。誰もがそんなハゲに注目してた。どうなった？　僕は勝てたのか？　ハゲはそっとスマホ

の画面側を下にすると、こう言った。

「儂等の負けだ。若は戦闘不能。これはつまり負けって事だろう？」

（戦闘不能？）

一瞬上手く理解出来なかったぞ。だけど僕の画面にはそんな物出てない。てか、どのタイミングで……そう思って画面を見てみると、崩れていくモンスターの形の名残がそれを物語ってた。

赤髪ライオンが居た右側の前足の方が、左側よりも下にきてる。つまり、最後の最後にあれが当たったって事か。それにどうやら、赤髪ライオンの攻撃位置は胸の中央部分からズレてる。僕が少し左斜めから胸の中央紋章を打ち抜いたんだ。

――と、言うことは……

「勝ったんだな僕は……勝っ――――――しゃあああああ！！」

僕は感極まって大声で叫んだ。その瞬間、押し寄せたみんなによって潰される。体中を撫でられまくる僕。一番最初に飛びついてきたメカブの体の感触がヤバい。

てか胸がヤバい。その放漫な胸囲が僕の神経を狙い撃ちしてる。

「無限の蔵！　無限の蔵！　無限のく……ああもう言い難い！！とにかく良くやったわ！！」

ようやく言い難さに気づいてくれたけど、なんか今更感一杯。でも取り合えず今は喜ぼう。

「若！　まだやりようはありますよ！　アイツをボコッてアイテムを渡させればいいんす！！」

そんな提案が丸聞こえなチンピラ共。すると不機嫌そうにしてた赤髪ライオンは光明を見いだした様な顔でこちらを見据える。

「ああ……それもそうだ。なあ言ったよな？　このままじゃ終わらせねぇって！」

そう言って赤髪ライオンはこちらに迫ろうとした。だけどその時「若！　ダメです！！」そんなハゲの声と同時に、赤髪ライオンの体が吹き飛んだ。

地面をバウンドする事数回。生き残ってたチンピラ共の中に無様な姿で突っ込んだ。

「がっはっ！？」

「これ以上、無念たらしい事をするのなら、今度はその顔の骨全てを砕いてやりましょう。私が居る限り、誰にもこれ以上、あの人を傷つけさせない！！　わかったか！？」

大きな体のシスターが、僕たちとチンピラ共の間に堂々と立ちふさがる。筋骨隆々のその姿は、ほんと頼もしい。

「テメェこんな事して……」

そんな事をまだ呟く赤髪ライオンに最後の銃を向けるラオウさん。そしてこう言ったよ。

「デッドオアアライブどっちが望み？」

背筋が凍る言葉。この人が言うと、迫力が違う。まじでやりそうだからな。

「若、ここはもう無理です。あの化け物に今の装備で勝つことは不可能。引きましょう。我らの負けです」
「くっ――」

奴の視線が僕を向いてラオウさんへ向く。引き金はいつでも引ける状態で脅しを掛ける彼女に、震え上がった赤髪は、もうこういうしかない。

「――そおおおおおおお！！！　撤退だ！　だがな、この恨みは絶対に忘れねぇ！！」

そんな捨て台詞を残してハゲ達はこの場から引いた。

「終わったな」

僕は思わずそう呟いた。勝ったんだ僕らは。そんな余韻に浸ってると、ハゲ達が消えた方から近づいてくる人影が二つ。あれは……秋徒に愛さん？　何故ここに？

「終わってねぇよスオウ。まだ未来は確定してない。後二個のレアアイテムをゲットしようぜ。まずは一個目、お前のだ」
そう言って秋徒が示す場所には、光輝く宝箱がある。あれが本物。僕はみんなから解放されてそれに近づき開く。
中にあったのは『アフタークロック』と称されたアイテムだった。

「さて、それじゃあ今度は俺達の見つけたアイテムだな」

その時、空にはもう一つの紋章が浮かんだ。どうやらそっちはそっちでやってたらしいな。

「まっ、ここまでやったんだしな」

そう言って僕達はまた、歩き出す。

降り注ぐ太陽（後書き）

第二百七十三話です。
一先ず決着はつきましたね。本当は今回でちょっと入れたいシーンがあったんだけど、それは次回って事で。ちょっとまだイベントが続くみたいな感じになってたけど、一応この話はここで終了です。
次回はその経緯を書きながら、日常パートで行きます。夕方か夜の出来事。てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

ガタンゴトンの上（前書き）

イベントは終わった。僕達は黄昏色の世界の中、電車に乗って帰路を急ぐ。この日出会った人たちとは別れて、秋徒と愛さんと僕の三人。今日のイベントを振り返ってると、ちょっとしたことに気づく事がある。

実際それがちょっとしたことかはわからないけどね。

ガタンゴトンの上

ガタンコトンガタンゴトン……体を定期的に揺らす振動がお尻に伝わる。窓の外から差し込む日差しが黄金色に染まり、外の大きなビル群を輝かせてた。

僕達は今、戦場と化してたアキバの街から離れてる。イベントと言う名の戦いはもう終わったんだ。僕達はそれぞれの帰路を目指してる。

「はあ……」

思わず漏れるそんなため息。なんかもう色々と疲れたよな。取り合えず今は座れる事に大感謝。いつもなら進んで吊革を取るんだけど、今日位はいいよな。

「大丈夫ですかスオウ君？　やっぱり無茶し過ぎですよ」

そんな優しい声を掛けてくれるのは僕の隣に座ってる愛さん。お姉さん系のお嬢様風美人な大学生……で、後秋徒の彼女。

愛さんのそんな言葉に触発されてたか、一人だけ吊革に掴まって立ってる秋徒も僕へ向けてこう言った。

「そんなにヒドい状態なら、もっと早くに言えよな。言ってれば、俺達の分まで付き合わせなかったのに」

今更なに言うかコイツ。言っただろあの時。

「そうだったっけ？　『やるか！』とかじゃなかったか？」

「うるさい。あの時は勝利直後でテンションが上がってたんだよ」

まあだけど、やった事を後悔はしてないんだけどね。寧ろ秋徒達には感謝してるよ。実際あの時は『秋徒の野郎、僕がこんな大変な時にただ愛さんとキャハハウフフな事してたら、ぶっ殺す』位は思ってたけどね。

でも二人は二人で、派手に動いてた僕達やハゲ共の裏で、コツコツやってたらしいんだ。二人とも心配はしてくれてたみたいだけど、下手に連絡しなかったのは、状況はスレでわかったし、それにイベント関連を進めて置く方が結果的にいいかな～って事だったらしい。

まあ、その結果的にって奴が今回は功を奏したよ。だって実際、三つあるアイテムの内、手に入れれるのはあの時目の前にあった奴だけ……そう思ってた。他の二つなんて言っとくけど、あの時点じゃ考えもしてなかったもん。

けど今考えるとそれは愚かというか、浅はかだな～と思わざる得ない。だってあの第一の奴らが出してきた装置。アイテムに干渉する奴ね。あれって、元々アイテムを指定して影響を与えるとかじゃない。

あれは三つのアイテムにそもそも影響を与えてた訳だよ。そして三つのアイテムが干渉しあって不思議な出来事、それこそ神隠しとかを起こしてた訳だから、一個を止めた位じゃまだダメだった。

ブリームスの住民を助けるにはさ、元から三つのアイテムを手にしなきゃだったんだ。消えてしまったジェロワさんや所長を助ける為にもさ、やらない訳にはいかないだろ。

「だからって限界越えしてる奴が居たってな。スマホを渡してくれれば俺達でもやれたのに」

「うるさい。あそこまでやっておいて、蚊帳の外になんかいけるかよ。僕にはちゃんとみんなが戻ってきたかを知る義務があったんだ」

まあ義務は流石になかったけどさ、あそこまでやったのなら最後

まで付き合いたくなるのが人の性ってもんだろ。最後の最後で仲間外れなんてそんなのイヤだ。

「イヤとかの問題じゃないですよ。スオウ君は無茶が過ぎるから、心配なんです。こんな所で倒れて貰っちゃ困るじゃないですか。
このイベントのアイテムを集めるのは私たちにも出来たけど、スオウ君にしか出来ない事があるんです」

僕にしか出来ないこと……ね。そんなのあったっけ？　まあ愛さんが言いたいことはＬＲＯの中での事だろ。それは勿論わかってるよ。

「本当にわかってますか？」

なんだか念を押してくる愛さん。真剣な顔が近づいてくると、彼氏じゃないのにドキっとしてしまう。そして異様に秋徒に殺意が沸くね。
こんな美人で優しいお姉さん的人が彼女って……なんか羨ましいなおい！　僕は胸のドキドキを悟られないように平静を装いながら、コクコク頷く。

「わかってますよ。てか、今回でイヤという程それはわかりました。大切な時に自分で動けない悔しさったらないですよ。
ＬＲＯはＨＰがある限りどうにかなってたけど、リアルはそうもいかなくて。動けると心では思ってても全然体はついてこない。情けなくて腹立たしく……あんな思いはもうしたくないですからね」

ホント、それだけは痛いほど痛感したよ。でもだからって無茶をしないようにするのはまた別の話だとも思うんだけどね。
でもそれを言ったら、愛さんに叱られるから適度な所で口を閉じ

るのが上策だよね。

「それならいいですけど……」

ほら、愛さんもちゃんと引いてくれた。やっぱり適度って大事だよね。

「まあお前に付いてきてくれてた人達が、あの後も協力してくれたのは大きかったよな。あれでお前結構楽してたし」

「背負われたスオウ君はなんだか可愛かったですよ。赤ちゃんみたいで」

うっわ〜〜赤ちゃんみたいとか、言われても全然うれしくない。男として最下層みたいな感じ。まあ実際、僕はあれからずっと筋骨隆々の人に背負ってて貰った訳だから、弁解のしようもないけどさ。

赤ちゃんはイヤだ、赤ちゃんは！

「俺はそんな可愛い印象なんか消えてるな。あの奇抜な格好した子もそうだけど……特にあのシスターの印象しかないかも」

そんな事を言った秋徒は、思い出したのか、ブルっと体を震わせた。

「あの方はとても頼りになる方でしたね。あの人のおかげで、あれ以降怖い人達が襲ってこなくなりましたし」

まあそうなんだけどさ……不思議と愛さんってラオウさんを見てもさほど驚きはしなかったんだよな。肝っ玉が座ってるのか、それとも何か理由でも？

「理由というか、別に恐れる事なんか何もないと思いますけど。どんな姿形で格好をしてても、今までの行動とかを知れば恐れる事なんかないってわかります。
あの人はスオウ君を助けてくれてましたし、ＬＲＯをやってれば姿が色々おかしい人なんて一杯じゃないですか？」
「いや、それはわかるけどさ、向こうはゲームなんだよ愛。リアルであれだけのインパクトがあることが凄いんだ」

はは……全面的に秋徒に同意してやろう。ＬＲＯはモンスターも魔法もある世界。何が起きるのかどんな生き物が居るのかにもワクワクと元からしてるわけだよ。
だけどリアルの事はすでに齢十数年でもそれなりにわかるじゃん。だから出会う人は人以外にあり得ないと思ってる訳だけど……実際最初見たとき、人って思えなかったもんラオウさんの事。
超失礼だけど、でも今はちゃんと受け入れてるから言えること。リアルにもああ言う存在がいるんだって勉強できたよ。
まあ初対面だった僕のＳＯＳにまで駆けつけてくれたあの人に、これ以上失礼な事なんか言えない。本当に世話になったしね。
それに、向こうも満足してくれてた。今日のイベントはお互いの利益に繋がったと思う。僕達はアイテムを、ラオウさんはＬＲＯの体験をちょびっとだけ出来た……と思う。
本物とはかなり違う方式だけど……だけど彼女はイベント終了の別れ際にこう言ってた。

【楽しかったです。今日のこれよりも全然派手に、ＬＲＯでは暴れれるんですよね？　とても興味が沸きました】

実際こんな比じゃない位に暴れれるよね。魔法もあるし、技は派手だし、戦争みたいな事だってマジで出来るし……強面のモンスターも一杯。

きっとラオウさんは満足してくれると思う。てかＬＲＯに一歩足を踏み入れて感動しない人とかきっといないよな。絶対にこう思うもん。

「とうとう人類は、ここまで来たか……」

ってね。マジで僕は思った。だから絶対にラオウさんも……窓の外に見えるビル群がどんどん離れてく。だけど直ぐに次のビル群が見えるんだからやっぱ都心は凄いよ。黄色く染まる世界。黄金色の光がキラキラと輝いて見える時間帯。

なんだか今日は長かったな。光の中にそんな今日の光景が見える気がする。秋徒と愛さん主導で手に入れれた第二のレアアイテム【バンドロームの箱】。実際ハゲ共がいなかったらこんなにスムーズにいけるんだなって思ったよ。

まあ他にやってた人達も少しは居たみたいだけど、僕達とハゲ達の競争に熱が行ってたからね。実際、それが終わると、自然とイベント事態がちょっと縮小したのかもしれない。内容じゃなく熱がって意味でね。

まあ競合する相手が居なかった訳じゃないけど、きっと秋徒と愛さんが僕達の裏で一番、もう片方のイベントを進めてたんだ。

だから正攻法でちゃんとやれた。まあ数の妙が今度はこっちにあったしね。それになんだかもうそこら辺の参加者とかの意識が変わってたと思うんだ。

自分達がレアアイテムを手にする事は難しいと思ったのかどうかはわかんないけど、今度は制作側に対抗意識を燃やしたみたいだった。

残り時間で全てのレアアイテムを表す事。そんな意識で一致してたみたいなさ。

「まあアレだろ？　お前達の戦闘のせいだよアレは。運良く……本

当に運良くお前は勝てたけど、人間の欲望を表したようなアレは、ちょっとやりすぎなイベントだろ。
しかも相手ヤクザって……お前じゃなかったら絶対に立ち向かわずに終わってたっての。
だからこその制作側のへの対抗意識が【ふざけんなぁ！】と出てきたんだよ」
「ま、誰もが協力してくれたような物だしな。あれはラッキーだった」

電車の振動を感じながら僕はそう言う。ホント色々とラッキーだった。

「そう言えばあのスレのスレ主は凄かったですよね。ホント色々とラッキーだ合いがそこら辺のスレとはひと味もふた味も違いました」
「あれはもう信仰化してたしね。まあ一番世話にはなったよ。けど、最初は僕達が知る情報ばかりバンバン上げて……実際アイテムの争奪戦が激化したのはアレが原因だよ」

愛さんの言葉に僕は愚痴をこぼしつつそう言った。まあ結局は感謝しなきゃ何だけどね。一番世話になったし、その信者の人達に。
まず彼らがいなかったらハゲ共に勝つことなんか無理だったしな。

「けれど、争奪戦が良い具合にイベントを盛り上げたのも事実ですよ。それに自分だけが得たいはずの情報を開示するって所があのスレを伸ばしたきっかけでしょう」
「まあ、それはそうだろうけど……実際僕的には微妙なんだよな。感謝はしてる。だけどどこかに上手く飲み込めない物があるようなさ。
そもそも豚の饅頭なんてふざけてるよな。なんだそれは」

だけどまあ、そんな事行ったらネット上での名前なんて誰も彼も結構ふざけてるからな。意味ないか。でもホント、なんかこうモヤ～としたものがあの豚の饅頭さんにはある。

なんなんだろうこれ？　どこか素直になれない。実際一緒に苦労して集めた情報を開示されたメカブも、最後までその人の事に対しては微妙な反応だったもん。

まあだけど全て今更。顔も見えないし知らないし、気にし過ぎる事もないか。ネットでの出会いなんてそんなもの。

そう思って思考をまとめようとしてると、そこで愛さんが意外な事を言う。それは意味が無いと思ってたその人のハンドルネームの事。

「う～ん、豚の饅頭ってのはある花の別名じゃないでしょうか？」

「花ですか？」

僕はありのままに返した。愛さんは相づちを打ちながらスマホを操作してる。そして見つけたのか、画面を向けながらこういう。

「ほらこれです。豚の饅頭って言うのはですね。【シクラメン】の別名ですよ」

「へぇ～シクラメンですか。ん？　シクラ……メン？」

おい、なんか引っかかるぞ。特にイヤなセンサーにビンビンと。

「シクラ……メ……ン……シクラ……シクラ……シクラ――ってやっぱあいつかよ！？」

僕は立ち上がれないから取り合えず自身の太股を強く叩いた。

「いっつぅぅ」

涙目になりそう。弱ってる所に自分で追い込みを掛けちゃったよ。だけど成る程。これで全部繋がったぞ。豚の饅頭がどうして僕達しか知り得てない情報をピンポイントに上げたのか。

やっぱり内側に反逆者が居たって事かよあの野郎。本当にアイツに踊らされてた形だな。今やいくら呼びかけてもうんともすんとも言わないし。

勝手に出てきて、色々ひっかき回して、そして勝手に帰る。本当にまさにシクラだよ。どっかに何かが引っかかってた理由がわかった。

それはきっとシクラだったからだ。今確認しました。僕はアイツが大嫌いです。絶対にあの野郎僕達が四苦八苦してるのを見てほくそ笑んでたに違いないよ。

くっそ、まじで良いように踊らされたな。

「どうしたの？」

「おいおい、頭までこの暑さにやられたか？」

愛さんは僕の身を案じてくれてるのに、秋徒の野郎のこの反応ときたら……たく、親友がいのない奴だ。てか、どうするか？　言った方がいいのかな？　まあもういないっぽいし、別に言っても行いよな。

イベント中にシクラの存在を隠してたのは、もしかしたらメカブがセラで、そうだったら画面の向こうでも一緒に行動するのは不味いと思ったからだったんだもん。

でもその気遣いはもういらないだろ。逆に伝えて置くべきかも。

「違う。実はだな……」

僕は途中で言葉を切って、隣に居る愛さんを見る。よくよく考え

ると、愛さんもシクラには一杯一杯振り回された訳だよな。ガイエンの今の状態はアイツに利用された結果。やっぱ言わない方がいいのかも。

「どうしたんですか？　私の顔に何かついてますか？」

そう言って猫みたいに顔をこする愛さん。何この人、もうどっちかと言うと大人なのに可愛いぞ。お嬢様っぽいから無邪気さが残ってる。上品さの中に無邪気さ。最強だな。

無性に秋徒に腹が立ってくるよ。てっ、今はそんな事じゃない。彼女にシクラの事を伝えるかどうか、それが問題。

まあそれなら秋徒の事も考えた方がいいんだろうけど、秋徒の気持ちなんて配慮しないよ。取り合えずいいんじゃない？　と思ってる。愛さんは繊細そうだから気を使うわけだもん。

「いや、何も付いてないよ。いつも通りの綺麗な顔です」

「あっ……はい。ありがとうございます」

ニコっと黄昏色に映える笑顔をくれる愛さん。やばい、神々しいとはこの事を言うんだね。時間帯がもの凄い言い演出をしてくれてる。

愛さんの髪の毛一本一本が輝いてる。柔らかな光に、柔らかなその笑顔が映えてる。

「おい、サラッと人の彼女に何言ってんだお前」

そこで何故か不機嫌そうな秋徒の声。別に素直な感想を述べただけだぞ。他意はない。

「お前そんな簡単に女の人に綺麗とか言える奴じゃないだろ！　そ

れもなんでよりによって愛なんだよ！」

何をそんなに吠えてるのか。秋徒は電車内で叫んでる。何ともマナーの悪い奴。僕が愛さんを狙ってるとでも思ってるのか？

「まあまあ落ち着けよ秋徒。確かに僕は簡単に綺麗とか可愛いとか言わないけど、なんて言うか愛さんには言いやすいんだよね。お前の彼女だからかも。だから安心して言える気がする」

「うれしくねーよ！　俺の彼女だから自重しろ！」

折角素直に言ったのに、心の狭い奴。そんなに互いの絆が信じられないのか？　そんな安っぽい物だったっけ二人の繋がりはさ。

すると隣から白い腕が伸びる。そんな白い手が秋徒の手を取った。

「大丈夫ですよ。もっともっと信頼してほしいですね。私はそんな軽い女じゃないですよ」

「愛……」

う～んやっぱり、こういう所は愛さんがお姉さん的だな。秋徒の奴、手を握られただけで明らかに赤くなってるし、ホント案外純情な奴。

てか、まだ手も握ってなかったのかな？　秋徒の反応を見る限り、それもあり得そう。

「それに私だって同じです。スオウ君だから、私だって安心して受け止めれるんですよ。それはちゃんと秋君が居るからです」

「そっか……そうだよな。はは、見たかスオウ？　これが俺達の絆だぜ。お前には壊せないぞ」

「あっそ」

だから別に壊そうとか思ってないっての。寧ろ僕は応援してるぞ二人の事。秋徒はさ、愛さんの事になると被害妄想に走り過ぎなんだよ。

まあ愛さんは美人でお嬢様で、ちなみに年上ってのもあって、吊り合いがとれてないとか常に思ってるようなんだよね秋徒の奴は。

だから被害妄想が加速する。自分よりも他の誰かに靡いてもおかしくないってね。でもそれならさ、そもそも秋徒なんて選ばないと僕は思うんだよね。

愛さんクラスなら、言い寄って来る男なんて五万と居るだろうに、その中で自分が選ばれた事にもっと自信を持てば言い物を……いまま言ってきた「俺ってイケイケなんだぜ」的な事はどこへやらだよ。

「で、言いかけ事は何だったんですか？」

自然に流されたと思ってたら、再びぶり返された。しょうがないから、ここはさらっと軽い感じでいこう。そう思ってたら察しがいい愛さんは僕の反応とシクラメンなる言葉で答えにたどり着いてたらしい。

「もしかして、あのスレの主の豚の饅頭さんはシクラだったんですか？」

「何！？　そうなのかスオウ？」

驚愕と共に、こちらに詰め寄ってくる秋徒。僕は頷くしかない。

「まあ僕もさっき気づいたわけだけどね。アイツ僕のスマホを侵略してイベントに参加してたんだよ。まあ今はもういないみたいだけど」

「一体なんの為にでしょう？」

「僕が四苦八苦してるのをみたいとか言ってましたよ」
それはきっと十分みれて満足しただろうな。悔しいけど。
「それだけでしょうか？　アレは意味の有ることを意味のない様にするのが上手いですよ。あのふざけた性格してますから」
確かにそうだね。けどそこまで愛さんが嫌悪感を出して言うとは……相当だな。
「まあだけどアイテムは三つとも俺達が手に入れた訳だし、アイツが何をしようとよかったんじゃね？」
「そうですね。今は幾ら考えても疑う事しか出来ません」
プシューと電車の扉が開いて閉まる。僕たちはホームに降りたって、乗り換えの場所までを歩く。そして再び電車へ。
そうそう、さっき秋徒が言ったようにアイテムは全部手に入れた。最後のアイテムは、二個のアイテムを手にした人が対象らしく、おかげで誰とも競争する事は無かったよ。
ブリームスの空に三つの紋章が現れて、その交わりの下にそのアイテムが現れた。僕たちは無事にそれを手に入れて、イベントは無事終了。
最後にはジェロワサンも所長もみんな元に戻ってた。死んだ人は流石にそうはならなかったけど。だけどめでたしめでたしだった筈だよ。
メカブの正体は結局わかんなかったな。別れ際に直球で聞こうとしたけど、唇を指で押さえられて「女の子には秘密が必要なのよ」とか言われた。
「私は私、メーカーオブエデンのメカブね！　良かったら覚えてな

さい。てか、忘れたら許さないからね！　その時は私の千寿がどうなるか……覚えとくといいわ」

やっぱり最後までメカブはメカブ。てか、結局メカブってあだ名気に入ってるじゃん。ま、一応覚えておいてやるよ。

電車が進み、次第に僕たちの街が近くなる。だけどその数歩手前の駅で愛さんとはお別れ。だけどそこで何故か秋徒も降りた。

まあ少しでも長くいたいんだろう……と思ったけど、秋徒は愛さんに怒られる。

「ダメですよ秋君。こんな状態のスオウ君を放っておくなんて許しません。ちゃんとお家まで送り届けてください」

だってさ。てな訳で、ふくれっ面の秋徒の肩を借りて、僕はようやく戻ってきた。視線が微妙に気になるけど、しょうがないよな。

改札を抜けて、タクシーでも拾おうかと考えてると、秋徒がこう言った。

「あれって日鞠じゃないか？」

指された方を見ると確かにそこには日鞠が居た。何やってんだアイツ？　てか、誰かと話してる。男の人と女の人……どちらもどっかで見たこと有るような……すると視線を感じたのか、日鞠が僕達に気付いた。

「あっ、スオウ！　お～～い！！　秋徒もついでにおお～い」

投げやりな感じに呼ばれた秋徒は渋々、日鞠の方へ。近づいたら気付いた。そっか、このお二人は確か、あの夜の……お墓であった

夫婦。二人は僕達にも丁寧なお辞儀をしてくれる。

ガタンゴトンの上（後書き）

第二百七十四話です。
ようやく長い一日が終わろうとしてます。だけど次回にも半分くらいは日鞠との時間が入るかな。それでようやく一日が終わる感じ。長かった。だけどようやく次へ進めます。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

やり直す人（前書き）

僕達は駅で日鞠と出会う。そしていつか出会った夫婦のお二人。確か花火見た日に墓地で出会った人だ。日鞠は僕の怪我を見て、慌て気味に今日の事を聞いてきて、秋徒を責める。

そんな秋徒に助けを求められて、なんかいつも通りのドタバタ劇が始まった。そんな事をしてると、夫婦のお二人が笑ってくれた。それは初めて見る笑顔。だけど多分この人達を見るのは今日限りになる……そう思う。

やり直す人

金色に輝く黄昏時を過ぎて、空は少しずつ夕闇の色を帯びていく。赤く染まってた空が、青より暗い藍になる。もう少ししたら、きっと空に一番星が輝く事だろう。

もしかしたらもう既に……ただ人の目には光がジャマして夜にしか見れないってだけだっけ？　星は実はずっとこの空の向こうで輝いてる筈なんだよな。

「てっててて！　ちょっとスオウどうしたのその怪我！？」

目の前の二人からの挨拶を返して空をチラリと見てると、突然にそんな事を言って日鞠が近づいてくる。てか、秋徒の肩を借りてる時点で気づけよ。

そんな事を思ってると、日鞠は僕の顔や体をペタペタペタと触ってくる。

「なんだか顔腫れてるよ。それに服には血の染みもあるし……こら秋徒」

「はい！？」

一つ声のトーンが落ちて、唐突に名前を呼ばれた秋徒の姿勢が正される。てか、この状態で背筋を伸ばさないで欲しい。秋徒の方が身長高いから、背筋伸ばされたら僕はつま先立ちになるんだぞ。

それは結構キツい。既に足がプルプルしてるよ。僕はバシバシと秋徒を叩く。

「何だよ？　お前のせいで日鞠に睨まれてるんだぞ。とにかくお前からフォローを入れろよ」

「フォローが欲しかったら……まずは背中を丸めろ」

僕達はこそこそと小さな声で言い争う。

「バカか！　今そんな事したら、日鞠に何されるかわかったもんじゃない。お前は愛されてるから、日鞠の恐ろしさを知らないんだよ！」

「バッ！　愛されてるとか、何言って――」

もの凄く体が一気に暑くなったじゃねーか。折角ここの所は少しずつでも夜は蒸し暑さが和らいで来たと思ってたのに、自家発電してるみたいに内側から暑くなったら意味ないだろ。

「二人してこそこそと何を話してるのかな？　秋徒、こら秋徒。確かスオウを連れ出したのはアンタよね？　何やらせたら、こんな事になるのか説明求めても良いかしら？」

日鞠の声と顔だけ見れば、別に普通の事を普通に言ってるだけに見えるけど、まあなんか恐ろしさは滲み出てる。なんかゾクってしたもん。

笑顔なのに、丁寧な言葉なのに、喉元にナイフを突き立てられてる様な……秋徒はゴクリと唾を飲む。

「勿論だとも。ちゃんと言うよ。言うからさ、取りあえずこいつを頼む！」

そう言って秋徒の野郎は、なんと親友を投げ売りやがった。僕に抵抗出来る力はなく、そして日鞠は迷わず僕をがっちり掴む。

「まあ、これはやぶさかじゃないから受け入れて上げるわ。あ～あ、こんなにフラフラになっちゃって……くふふ」

「おい、今何かよからぬ妄想しただろお前！？」

なんだ今の間は。笑った瞬間に悪寒が走ったぞ。みなさん忘れてるかも知れないから今一度言うけど、こいつは変態盗撮女なんだ。

「別にそんな事ないよ。それよりも暴れないでよスオウ。観念して私の胸に埋まりなさい」

「埋まるほどの胸も無いだろお前！」

今日出会ったメカブと比べるのも悲しくなる程だよ。まああっちが異常だったんだろうけど。でも日鞠の胸は平均以下だとは思う。

「私は大きさじゃなく形で勝負してるの。それにこれはスオウの好みでしょ？」

「意味が分からない事を人通りのあるところで言うな」

今の時間帯は帰宅ラッシュ位に丁度なってきて人も多くなってきてるのに、聞かれたらどうするんだよ。僕が変態だと思われそうじゃないか。

「だってスオウがこのくらいが好きって言うから、胸の成長をやむなく私は止めてるのに」

「そんな技術は今の世界には無いだろ！」

そりゃあ色々と進んできてるけど、そんな技術は聞いたこと無いぞ。完全に誰特だよ！　お前だけじゃん！　なんでわざわざ一部分の成長を止める。別に無くてもあっても良いけどさ、それはどう考えても言い訳だろ。

「おい、察しろよスオウ。そう言い聞かせないと日鞠はお前の期待

に応えられない部分が有ることに耐えられないだろうが」
「期待に応えられないって……」
まず僕はいつそんな期待をしたかな？
「ちち違うわよ！　スオウはどちらかと言うと小さいのがいいよなって言ったもん。これ絶対！　私がスオウの為に応えれない事なんか無いもん！」
なんだか随分必死だな日鞠の奴。別に胸が大きかろうがちいさかろうが別にどっちでも……あっ。
「そう言えば言ったかもな。手のひらに収まる位が良いって」
「そ、そうだよ。私の胸はスオウの手のひらに収まるサイズに適正です！」
なんか日本語おかしくないか？　てか何の話してたのかわからなく成ってきたような……どこから胸の話に成ったんだっけ？
「不覚……秋徒のはぐらかしの術にハマったわ。だけどこっちの問題は解決したし、今度はそうはいかないから。ちゃんとこのスオウの有様を教えなさい」
「え～とそれは……」
秋徒は観念してゴニョゴニョと日鞠に今日の事を話した。まあ主にこうなったのはイベントせいだから、メインをそこにしてね。
「つまりはそのヤクザなりチンピラなりのせいって訳ね。……どうやって潰してやろうかしら」

なんかおっかない事をポツリと言わなかったか今？　いやいや、幾ら日鞠でもヤクザ潰すとか出来ないだろ。だから聞き流しておこう。

「ねえ、そいつ等は何組なの？　それともなんとか一家？　名前がわかれば調べるの楽なんだけど」

やる気だよこいつ！　なんて危ない思考をしてるんだ。ヤクザに喧嘩売ろうとするなんてどこのバカ……って僕もよくよく考えたら同じ様な事したな。

その結果がこの様だ。実際日鞠には一度痛い目にあってもらっても良いと思うけど、でもその相手がヤクザはやばい。

洒落に成らないもん。僕の様に成って貰っても困るし、なんといっても日鞠は女の子なんだよ。そこら辺をもっと考えろ。

「いいって、何する気だよ。僕達は勝ったんだ。これはその代償。名誉の負傷だと思ってろ」

僕は日鞠に寄りかかったままそう言った。うん、なんか情けない事この上無いけど、今日はもう諦めた。てか、なんか妙に安心する自分がイヤだ。

なんか日鞠の匂いって懐かしいんだよな。てか、人の匂いって奴を初めて覚えたのがきっと日鞠だから、僕は安心するんだろうな。

これって刷り込みレベルだよな。僕はずっと昔から、日鞠に主導権を握られてたって事か。

「勝つのはスオウなら当たり前だよ。それよりも潔く負けない方に報復したいんだけど、それもダメなの？」

首を傾げて僕を見つめてきてる日鞠。かわいい顔してるけど、言

ってることがおかしいと自分で気づけ。負けた相手をわざわざ追い込みたいとか……それは傷口に塩を塗りたくる行為と同義だぞ。
鬼畜かこいつは。それにいつだって思うけど、日鞠は僕に過度の期待を掛けすぎ。僕のどこら辺に、勝利が常時付加されると思ってるんだこいつは？

「スオウはいつだって謙遜するけど、私はちゃんとわかってるもん。まあスオウがやめとけって言うのならちゃんと聴くよ。それに今日はスオウのお世話……しなきゃだし。
おおお風呂とかおおお風呂とか、勿論下の世話だって」

なんで最後で顔を赤くする？　てか、そんな事を同級生の幼なじみにさせれるか！

「だっ、大丈夫！　カメラは私が持ってる中で一番高いのを用意するから！」
「何が大丈夫なのかサッパリだよ！　良いカメラで何を鮮明に残そうとしてるんだ！？　そんなの許されるわけないだろ！！」

常識、常識で考えろ。

「大丈夫。私一人で楽しむから」
「だから何一つ大丈夫じゃないってわかれ！！」

人と共有しないからＯＫとでも思ってるのか？　これはな、そんな著作権的な問題じゃないんだよ。

「まあ良いじゃないかスオウ。最近あんまり日鞠にかまってないだろ？　それに今更だとも思うし」
「うるさい！　人事だからって何適当な事言ってんだよ！　お前の

恥ずかしい思い出を愛さんに話すぞ！」

確かに今更感はあるけど、直接撮られるとかイヤだ。

「じゃあいつも通り盗撮で我慢しろと！？」

「言っとくけどな、別に盗撮肯定してないから！　取りあえずカメラは禁止だ！」

ええ～～とブウブウ頬を膨らませる日鞠。こいつ最近盗撮に罪悪感がなくなってきてるよな。犯罪常習者に見られる傾向だな。

こいつの盗撮趣味はもう一生直らないかも知れない。

「てか、下の世話とかお風呂とか、そこまでして貰う必要ないし。そのくらい自分で出来る」

「本当にそうかな？　今だって私の事をこれでもかって位に抱きしめてるのに……こんな公衆の面前で」

キャハっと、ワザトらしく頬に手を当てる日鞠。抱きしめてるってそこまであからさまにやってねーよ。そりゃあ日鞠は僕より背も低いし、女子の体だから細くてちょっと寄りかかるだけでそう見えなくもないけど、抱きしめてるとかそんな感覚は無い。

断じてない。クンカクンカとしかしてないし。それはそれで問題か？

「ククク」「フフフ」

僕達三人がそんな会話をうつつに抜かしてると、すぐ近くからそんな声が。振り返るとそこにはさっきのお二人。そういえば忘れちゃってた。人前でなんて恥ずかしい会話をしてたんだ僕らは。

しかも存在を忘れるなんて失礼すぎだろ。

「あ、あの……」

僕は弁解しようと口を開く。だけど僕が言葉を紡ぐよりも先に、お二人はこういってくれた。

「みなさん仲が本当にいいんですね。なんだか見てて微笑ましく成ってきます」

「そ、そうですか？」

仲が良いとはまあよく言われるけど、いつも言われる仲が良いとはこの人のそれはニュアンスがちょっと違う気がした。この人は僕達の事を純粋に見てそう言ってくれたから……だからかな？

学校でそう言って来る奴らって嫌みが大半なんだよね。

【二人ってとっても仲良いよね～（死ねよこの野郎）】

みたいな物が感じれるわけ。学校じゃ秋徒と二人でいたって何も言われない。日鞠と居ると、よくそんな事を言われるんだ。

でも実は本心で言ってるとか思うだろ。被害妄想だって。僕だって最初はそう思おうとしたよ。初期の初期ね。それは小学校高学年位までは。

だけど僕は気付いたんだ。絶対に一瞬笑顔の隙に僕を射抜く様な視線が有ることに。それを見逃さない感覚を僕を手に入れてる訳だよ既に。

「仲が良いなんてそんな……まあ当然ですよ。私たちは将来を約束してる仲ですから」

頬を染めながら、だけど堂々とそんな事を言いやがる日鞠。そん

な約束したっけ？　覚えがないぞ。
「昔は『ヒ～チャァァァン』とか言っていつも私の後に付いてきてたじゃない。その頃から良く言ってたよ」
「嘘を付け嘘を。僕はそんな子供らしい子供じゃなかっただろ」
捏造だ。そんな記憶僕には無い。
「まああの時のスオウはヒネクレてたもんね。誰かにってよりも世界にヒネクレてた」
「はは、忘れてたなそんな昔のこと」
本当は忘れられる筈もないけど、だけどあの頃の事はあんまり思い出したくない。日鞠だってそこら辺わかってるから、今まであんまり言わなかったんだろ。けど今日に限ってはなんか蒸し返すな。
「そっか、それは残念。それなら、もう一度惚れ直させるだけだけどね」
そう言ってウインクを一発かます日鞠。やっぱり余計な事をほじくり返す気はない様だな。
「日鞠ちゃんは本当に彼の事が好きなんですね。でもてっきり両思いかとおもってましたけど？」
「スオウは素直じゃないんです」
やれやれと首を振る日鞠。
「ふふふ、男の子とは総じてそう言う物ですよ。女の子の方が早熟です。だけどちゃんと握りしめてたら、きっとわかってくれますよ。

日鞠ちゃんはとっても可愛い女の子ですから」
「はい！」
元気に返事をする日鞠。伸びる三つ編みの髪がユラユラ揺れてるよ。そして僕をポンポン叩いてこう言いやがる。
「私がちゃんと握りしめてあげてるからね。スオウが私を受け入れてくれるその時まで」
「あっそ」
僕はそう言うのが精一杯だった。だって何というか……受け入れるとか、付き合うとか、あんまり自分に置き換えた事無いというか。
そりゃあ、普通の男子高校生だし可愛い彼女が居たらいいなぁとは思うけど……自分が付き合うとかイメージわかない。
それに実際既に日鞠の事受け入れては居るよ。それは当然だろ。出ないと、毎日ご飯作って貰ったりしないっての。でもただの家政婦とかみたいに思ってる訳でもない。
でもただ日鞠の気持ちを受け入れる……とかはまだ自分には出来ないんだ。僕はまだ何も出来てなくて、何が日鞠の為に出来るのかわかんない。
沢山の物を与えてくれたこいつとは、僕は全然吊りあわないじゃないか。だからこそ僕はセツリの事に必死に成ってるのかも知れない。
自分も誰かを救えるのなら……そう思ってるのかも。
「それでは私達はこれで。いつまでも立ち止まってる訳には私達もいけませんよね。貴方達を見てたらそう思えます」
「そうですか？　それならよかったです」
何のことかよくわかんないけど、日鞠はちゃんと理解してるっぽ

い。まあ何かの役に立てたのなら、僕も何となく満足だよ。

「貴方達はいつまでも仲良く居てください。大切な物はいつか突然なくなったりするかも知れないけど……そんな明日が来ないように、今日を大切に生きる事は出来るから。

あの子にもきっと、生きてたらこんな素敵な友達が出来てたんでしょうね」

そう言って頬を伝う滴。実際僕と秋徒はビックリだよ。いきなりだったからね。さっきまで普通に話してたのに、どこかで感極まったんだろう。あの子ってのは、きっとあの墓に眠ってる子の事だよな。

僕達にその子の成長した姿を重ねたのかも知れない。立ち止まってる訳にはいかないってのは、その子の死に縛られ続ける訳にはいかないって事だったのかも……だけど今この場で溢れる涙を止められないこの人が、そう簡単に踏み出せるのか……不安になる。

そう思ってると、日鞠がハンカチを差し出す。

「なにをいってるんですか？　その子と私たちはとっくに友達です。この世界に居ず、見えなくても、私達はお二人からのお話を聞いて、勝手に友達になる宣言をしちゃいました。

ダメでしたか？」

「日鞠ちゃん……」

ハンカチに手が伸びる。重なり合う手を、だけどこの人は放せない。するとそこで日鞠の視線に気付いた。何が言いたいのか、幼なじみだから直ぐに分かる。以心伝心って奴ね。

「僕も友達です。まあ僕は日鞠に付き合ってるだけですけど、それで良いのなら。子供は好きでも嫌いでもないですけどね。

お調子者だし、ちょこまかしてるし、自分の名前を繰り返し言ってウルサいし。だけどそれも、目に付かなくなると寂しいものですよね」
「ス……オウ君……それって……」
なんだか目を丸くしてこちらを見てるお二方。え？　えっ？　何？　僕はＬＲＯで出会った小生意気なガキを思い浮かべていったんだけど、やっぱり他人じゃダメだったか。
世間一般の子供もあんな物だと思ったんだけどな。
「スオウ適当に言い過ぎ」
そう言われて、日鞠に頬をつねられる。
「痛い痛い！　弱ってる所になんて事……鬼かお前！」
「愛の鞭です」
そう言ってようやく放された指。頬がジンジンする。絶対に赤くなってるよ。
「ふふふ、やっぱり良いですね。二人はとってもお似合いです」
そう言って受け取ったハンカチで涙を拭ってるその人。まあ笑ってくれたんなら、この頬の痛みも我慢できるかな。だけど本当に大丈夫なのかな？
「大丈夫ですよ。私達がいつまでも悲しんでるなんて知ったら、あの子だってきっと心配します。だから私達は、決断したんです」
「決断？」

一体何を？　と思ってると、もう一人の男の人が「そろそろ行こう」と女の人の肩を叩く。そして二人の視線が何故か僕に。

「今話に出てきた子が想像でも何でも良いです。どうか仲良くしてやってください。ありがとうね。えっと……ハンカチは……」

「良いです。貰ってください。ちょっと物足りないですけど、お土産って事で」

「そう……ありがとう。大切にするわ」

そう言って小さく手を振りながら、お二人は改札の向こう側へ消えていく。そして姿が見えなくなったところでポツリと秋徒がこう言った。

「で、あの人達は誰だったんだ？」

「僕もよくは知らないな」

「はあ！？　なんだそれ？　親しそうだったろ？」

そうは言っても、親しいのは僕じゃなく日鞠だっての。確かに毎年あの墓地で会ってたらしいけど、僕は実際、その存在を今年まで気にしてなかったしな。

だから言うなれば、知り合いってのもおこがましいかも知れない。他人ではないかもだけど、知り合ってる仲かと言えば怪しい。微妙な距離なんだよ。

「そんなんでよく適当な事言えたよな。お前の無神経差には驚くよ」

「う、ウルサい！　あれは僕なりに気を使ってだな……」

「あんな嘘を付くとは私も思わなかったよスオウ」

そう言って大きくため息を付く日鞠。もとはと言えば無茶ブリしたのはお前だろ。意味分からない事を言ったのもお前だ。

「私とあの人の間にはちゃんと築いた関係があったもの。それにきっと寂しがってると思ってただろうから私が友達に立候補したの。
だからスオウだって立候補だけでよかったのに、知らない子をあたかも見てきた用に言うから、嘘でしかないのよ」

ぬぬぬ……なんか僕が悪者になってるな。てか、日鞠に責められるのって久々だな。ちょっと気が滅入るじゃないか。

「まあだけど、あんまり気にして無かったから良かったけど、不謹慎だったよスオウ。子供ってスッゴく大切なんだから。子宝って言うくらいだしね。
それが自分のお腹を痛めて生んだ子なら尚更だよ」
「普通はきっとそうなんだろうな。ごめん。もっと気を使うべきだった」

ここはしょうがないから素直に謝る。ホント、普通ならさっきの人みたいに愛情ってのが、その子が居なくなってからも見えるもの何だろう。
僕はそう言うの知らないから、鈍感というか不謹慎だったのかも。両親からの愛情なんて感じた事無いよ。だけどそれは自分事だ。おかしいのは自分家であれが普通。
居なくなったのに思われる。ちょっと羨ましい……くないよな。何思ってるんだ僕は。羨ましいとかあり得ないっての。僕は自分の両親に何も期待してないし。
僕は駅の外を眺める。そしてこう言った。

「帰ろう。家へさ」
「うん、早くスオウをお風呂に入れてあげないとだしね」

そんな要求はしてない。断じてな！　僕達は結局タクシーを拾う

事にした。車中で今日の事を根ほり葉ほり聞かれたよ。
そして途中で秋徒を降ろして、一路家へ。玄関のドアを開けて、床に転がると「帰ってきた～」って感じがする。住み慣れた我が家の匂い。

「さあスオウ。脱ぎ脱ぎハァハァ脱ぎ脱ぎしましょうね」

荒い息吐きながらどこに手を伸ばしてる！

「だから必要無いって言ってるだろ！　高校生なのにそんな事させるか！」
「もう、スオウは恥ずかしがり屋なんだから。じゃあリビングまで行っててよ。お風呂入れてくるから」

そう言って日鞠はいつものように勝手知ったる我が家に上がる。
僕は風呂場を目指すその背中に気になった事を聞いてみた。

「あのさ日鞠。あの人達は、どうやって歩き出すつもりなんだ？
忘れるとかじゃないよな？」
「違うよ。だけどここには楽しい思いでも辛い思いでも一杯だから、遠くに行こうって事。遠くに行って新しい環境でもう一度……そう言う事だよ。
まあこの国を離れるのは一週間後らしいけど」
「そっか……」

確かにそう言うやり方もあるよな。あの人達はまだ生きてる。幸せに生きる事がきっと、先に逝った子の為だよな。僕はそう思いながら、天井で光る眩しいＬＥＤの光に目を細めた。

やり直す人（後書き）

第二百七十五話です。

今回も日常回です。やっぱり日鞠が居るとやり易い感じです。次回の半分くらいまでは多分日常回かな？　その後は多分……動きがある筈。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

アイツの狙い（前書き）

日鞠とのドタバタがいつもどおりに繰り広げられる。風呂に一緒に入るとか入らないとか、まさにいつもどおり。だけど今日に限ってしつこくするのは僕を心配してるからって事。

分かってるけどさ、それを許す事は出来ない。日鞠が家に帰ったあと、僕はリーフィアを装着してメールをチェック。そこで再びアイツが現れた。

アイツの狙い

はてさて、実は家に付いてからも実際はなかなか慌ただしい時間が続いたよ。どうにかして世話を焼こうとする日鞠がいろいろと策を抗するから、気が休まらない。

着替えを手伝おうとしたり。どうにかして一緒に風呂に付いて来ようとしたり。ホントもう厄介。説き伏せるのに苦労した。

「私は全然やましい気持ちなんか無いよ。純粋にスオウを心配して、提案してるの。溺れたりしたらどうするの？」

溺れるか。自分ちの風呂だぞ。何年の付き合いだと思ってる。目を瞑ってたって……ってのは流石に無理だけど、大げさに日鞠は捉えすぎだ。

「そんなこと無いよ。それが油断なの。慢心なのよ！　お風呂はね、幾ら長く付き合ったってスオウを気遣ってくれる訳じゃない。

勝手知ったるそのおごりが思いもよらぬ事故を引き起こすの。お風呂場で亡くなる人は毎年結構居るんだよ。お風呂場は家の中のデッドホールだよ」

「デッドホールって……」

たく、またどっから得たのか知らない知識を振りかざしてきやがって。日鞠は自分の為なら、理を曲げる奴だからな。まあ用は口が上手い訳だ。

大抵の人は「あれ？」と感じる間もなく、こいつの滅茶苦茶な理論に論破されてたりする。だけど僕は違うぞ。幼なじみだからな。

そう易々とアイデンティティーを崩されるか。こんなの幾ら言葉を重ねても、結論だけをしっかりと持ち続けてれば、全然ＯＫな筈

だ。
　そう、ようは日鞠と一緒にお風呂とかあり得ない。それが絶対の理。一緒にお風呂とか……学校の奴らに知られたら、絶対に脅迫文とかが届きそうだもん。
　学校中からハブられそう。それにその事実だけで、僕は日鞠に弱み握られる事になるし……そんなの絶対にイヤだ。そりゃあちょっとは淡い期待をしないわけでも無いけど、後々の事を考えるとリスクがデカい。
　てか色々と言ってるけど、実際は全て言い訳かもな。日鞠と一緒に風呂とか……単純に僕が耐えられるか！

「本当に危ないんだよ。スオウ自分で立っとくのも辛いでしょ？一人でお風呂になんか行かせられないよ。溺死しちゃうよ。それか足を滑らせて浴槽に頭をぶつけて、血がドクドク出て死んじゃうよ」
「イヤな想像させるなよ」
「そう言う事もあり得るって事。特に今のスオウの状態なら、普段の三割り増しで起こり得る。今言ったのを組み合わせた事が起きるかもよ。
　風呂場に入る、足を滑らせる、顔から浴槽にドッパァァアン！！
　チ～～～ンって、どれだけ悪い想像膨らませてるんだこいつは。
　チ～～～ンってね」

　そんな事起こり得るか。

「起こり得ないとは分からないよ！」
「そんな事考え出したらキリがないって言ってるんだ。それは車に弾かれる確率が無くならないから、外には出ないでって言ってるような物だぞ。
　この世界にゼロパーセントなんてあり得ない。どんな時だって何かをやるときはリスクがある。大なり小なりな。絶対に安全なんて、

普段からどこにもないだろ。
でもこうやって僕達は生きてきたんだし、少しは信頼しろ」
僕がそう言うと、日鞠は抱えてる僕の着替えやタオルにちょっとだけ力を込めたかの用に見えた。そしてポツリとこういう。
「信頼は、誰よりもしてるよ。でもいつだってスオウが居なくなっちゃうかも知れないなんて考えたくない。スオウは危なっかしいの。自分じゃ気付いてないだろうけど、スオウはそんなに強く、この世界と繋がってないもん。
だから私がいつだって傍で手を握っててないとダメなの！」
「日鞠……」

眉根を寄せて垂れて、泣きそうな顔。これは昔から、どうしても譲れない場面なんかでよく日鞠がする顔だ。そうだった。二人っきりの時、昔はもっと日鞠は良く泣く奴だった。
いつも笑って良く泣いて、いつだって僕はこの顔されたら、日鞠側に折れてたっけ。世界と強く繋がってないか。昔からそんな事を思ってきたんだろうかコイツは。だからこうやってずっと僕の傍に居てくれる訳か？　幸せ者だな僕はさ。
僕はソファからなんとか立ち上がって、日鞠の頭に手を伸ばす。艶やかな黒髪が柔らかく、そして適度に冷たい感触が肌に伝わる。
「スオウ……分かってくれた？」

そんな事を小さな口を開いて呟く日鞠。まあ分かったと言えば分かったさ。だけどもうあの頃みたいにただ振り回される小さな子供じゃない。
かわし方だってちゃんと身につけてる。だから言ってやろう——

「あのさ日鞠……お前……」
「うん」
「鼻血が出てるぞ」
「うん？　えぇ！？」

驚愕の声と共に日鞠は自身の鼻の下に手を当てる。そして顔が見る見る赤くなって「あわっこれはその……ね。違うんだよ」とか言ってる。違うって何がだよ。

「お前は一体何を想像してたんだよ」
「だ、だから違うってば！！」

日鞠はテッシュ箱をテーブルから強奪して、キッチンの方へ。なんだかその後ろ姿に笑いがこみ上げてくるな。な～にやってんだかアイツは。僕はアイツが落とした着替えとタオルを拾い上げる。そしてその背中にこう言ってやるよ。

「んじゃ、僕は風呂に行ってくる。出るまでには鼻血止めとけよ」
「ああ！　ちょっまっ――」

慌てる日鞠。僕は更に続けてこう言うよ。

「言い忘れたけどさ日鞠。僕は結構この世界に繋がってるよ。繋がっていたいと思ってる。それはお前が居るから……」
最後まで言えない自分がいる。最後ら辺は結構モゴモゴした。

「ふぇ……？」

理解したのかしてないのか判らない顔でそう呟く日鞠。僕はさっさと扉を閉めて風呂へ急ぐ。その後にリビングの方から「☆△◎×

〜〜〜〜〜！！」と、意味不明な叫びが聞こえた。
どう受け取ったのかは知らないけど、まあこれで風呂場に突撃してくる事はないだろう。今回は僕の勝ちだな。

そしてようやく風呂。実際傷口にお湯が染みて超痛い。まあだけどそれは最初だけ、一気に浴槽に体を沈めれば、痛みの感覚なんて直ぐにどっかにいってしまう。
やっぱり日本人は風呂だよね。疲れがお湯によって溶かされていってる気がする。まさに極楽。このままここで眠っちゃいそうな感じ。
そんな事を考えてると、風呂場の向こうから声を掛けられる。

「ねえスオウ」
「うお！？　は、入って来るなよ！」

僕は擦りガラスの向こうにいる日鞠にそう釘を指す。だけどよくよく考えれば、アイツが入ってくるなら、いきなり来そうだったな。
あんな一歩手前で、大人しくしてるのは意外だ。擦りガラスに手を当てて、こちらを求めるようで壁に阻まれてるみたいなさ。
「安心して良いよ。入らないから。だってこんな状態じゃ一緒にお風呂とか無理……だけど心配だから、ここに居てもいい？」
こんな状態ってなんだ？　良く分からないけど、そこで我慢できるのならありがたいよ。僕は「好きにしろ」って言ってやる。
「うん、ありがと」
そう言って日鞠は擦りガラスに背中をつけて座り込む。そしてず

っと大人しかった。なんだか不気味な位。途中でポツポツ口を開くから、それに一言二言僕が反応して会話は終わる。
そんな奇妙な時間がゆっくりと流れて、僕は擦りガラスの扉を開ける。

「どうしたんだよお前は。さっきから？」
「きゃ！　わっ、スオウそんな格好で……大胆」

そう言って手で目を隠した――――と思ったらばっちり指の感覚を開けてる日鞠。やっぱりいつも通りのコイツだな。

「お前まだこの程度で興奮するのかよ？　こんなの良く盗撮してるだろ」

僕は腰に手を当ててそう言ってやる。体も大分楽になったし、心なしか口の動きがいい感じだな。てか既に盗撮に馴れてる僕って一体……

「カメラ越しと、肉眼で見るのは違うよ！　スオウだって湯上がり女子は三割増しで可愛く見えるでしょ？　それと同じ！」

なるほど、確かにそれはわかるな。湯上がりの女の子って妙に色っぽく見えるよな。火照った肌に、水分を含んでつやつやした髪とか、もうたまらないね。その現象が女の子側でも起きるって事か。
でも僕、そんな良い体してないけどね。標準よりも痩せてる方だし、まあそのおかげで筋肉は浮きやすいかもだけど。マッチョでも細マッチョでもない。ま、部活やってない怠惰な体だよね。
一応ＬＲＯを買う資金の為に肉体労働系でバイトしてたから、まだ今はマシな方かな。てか、日鞠がカメラ仕掛けるせいで、こっちはあんまり恥ずかしい体を見せたくないから、無駄に筋トレとかや

っちゃうんだよ。
幾ら幼なじみでも日鞠は女子だし、ガリッガリでいるわけにいかないよ。まあだからこれくらいは余裕。まさに慣れって恐ろしい。
「取り合えず出てけよ。着替えられないだろ。それに何も起こらなくて安心したろ？」
「う……ん……でもやっぱりもう少しだけ目に焼けつけとく！」
バタン――と僕は日鞠を押し出して扉を閉めた。ドンドンと扉を叩く音は無視の方向で。

それから夕食を二人で取って、二人で並んで食器を洗って、そして日鞠を玄関まで見送った。まあここら辺はいつもと大差ないよ。けど最後にこう釘を刺されたな。
「ＬＲＯは今日は禁止ね。まあまだ復旧してないなら、それで良いけど、復旧してても絶対に入らないこと！
もしも明日の朝、私が起こしに来てＬＲＯやってたら……」
「やってたら？」
そう聞き返したら、日鞠は☆が飛び出しそうな位にバッチ～～ンとウインクを決めてこう言った。
「キスしちゃうぞ」
「はは、了解」
もうそう言うしかない。だってキスって……こいつならやりかねないよな。

「また明日ねスオウ！」
「うん、また明日」
そう言って日鞠は玄関の外へ。元気一杯に直ぐ隣の自分の家へと帰ってく。
「ふう……」
僕は一つそんな息を吐く。そして廊下を見つめた。テレビの音だけが空しく響いてるな。いつもいつも思うけど、一人になると途端に広く感じるんだよなこの家。
アイツがいると無駄に賑やかだから忘れるけど、居なくなるとその瞬間強く感じる。空しいのか寂しいのか……とにかくやっぱり僕は日鞠に依存してるんだよね。
僕は絆創膏とかを張られたほっぺを掻き掻きそう思ってた。取り合えずテレビを消して自分の部屋へ。入れなくても一応確認はしとかないとだろ。
ヘルメットみたいな形のリーフィアを装着して、電源ＯＮ。すると目の前に多彩なネットワークが広がるよ。そして受信してるメールが何通かあった。
まず最初にみたのはＬＲＯ側からの謝罪文と復旧のご案内。それを見る限り、どうやら明日の朝にはサービスが開始されるらしい。明日の朝なんて丁度良いじゃないか。
実際、今既に復旧してたら、ずっとソワソワと気が気じゃなかっただろうからね。朝からなら、今はそこら辺諦めがつく。
それにしても結構早かったな。もう少しかかったらどうしようと思ってたけど、制作側が頑張ってくれたんだろうか。
まあ良くやってくれたよね。グッジョブだ。僕達には時間無いから、そう待ってられなかったもん。そう言えば落ちた理由もそれなりに書いてあるな。

「過度なシステム圧迫が起こったのが原因か。そのシステムの圧迫をしたのが何かまでは書いてないな。復旧はしたけど、解決したとも書いてないし、大丈夫なのかなこれ？」

まあちょっと心配でも結局朝一番位に入るんだと思うけどね。その為にも今日は体を休める事が大事だろう。残りのメールを確認して、とっとと寝よう。

「え～と、次のはセラからか。何々――」

『復旧したけどあの状態だったからどうなってるのか不安でしょ？一人で独断専行で入らないで。

時間を合わせて一斉にダイブするから。一応今は朝八時丁度って事になってるけど、不都合なら返信しなさい。言っとくけど、返信が無い場合は了承と受け取るからね。以上』

なるほどみんなで一斉にか……確かにそれが良いのかも。まあ一応一段落ついてた所だったけど、何がどうなるのかはまだわからないしな。あそこだって本当に安全かはわかんない。

それならみんな一斉に入った方が良いってのは納得だ。てか、以上とか女の子が使うか？　どこの軍人だよ。なんか報告文みたいだな。

なんか僕たちの関係を表してるみたいな感じ。まあいいけど……

さて残るは後二通。

「これは」

僕は残り二通の内の一通に視線が釘付けになる。いや実際二通とも釘付けになる要素はあるけど、まずは脳が理解しやすい方へ止まったと言うべきかな。

なんかタイトルからもうそいつの痛々しさが現れてる感じ。
タイトル『この世界を超越した存在より。同士ゴールデンボールへ送る』
誰だか丸分かり何ですけど。てか、ＬＲＯのアドレスの方に送るとは……こっちに送信者の名前が出てないって事は僕はやっぱりアイツとは知り合ってないんじゃないか？
なのにどうして向こうは僕の事をさも当然の様に知ってる風で近づいたんだ。　どういう事だおい？　あの登場の仕方は実は知り合ってます的な感じだっただろ？

まあ向こうが僕を知ってる事はあり得るかも知れない。自分じゃそんなに実感無いけど、僕たちはそれなりに有名みたいなんだよね。
だけど知ってるからってあんな知り合いみたいな態度で接してくる物だろうか？　なんだかアイツの事が良くわかんなくなったな。
いや、元々そこまで理解もしてないけど……なんか怪しさ倍増した感じ。取り合えずメールを開いて内容確認。

『驚いた無限の蔵？　実はこのメールの主は私！　メーカーオブエデン事メカブでした！！　まあ取り合えず知り合えたって事でフレンドリストに入れておいてね。
言っとくけど、私をフレンドに登録出来る事は、もの凄い事なんだからな！　その名誉を噛みしめろよ！　無限の蔵は同じインフィニットアート所持者としてそこら辺の人間よりは私に近づく事を許してあげるわ。
あっ！　それと、今日はもう寝なさいよ。これ以上無理したら許さないから！　三秒で寝なさい！』
「コイツはもうどうなりたいのかわかんないな」

自分を主張したいのか僕を心配してるのか……まあきっと両方なんだろうな。今日は世話になったし、取り合えず簡単な文章でも返

しておくか。てか、セラとメカブ……同一と思ってたけど、やっぱり違うのかな？　でも一人に一つのアカウントって訳でも無いらしいし……でもそれならどうして別の人物に成るのかそれが分かんなくなるか。
やっぱりここは無理矢理はめ込むんじゃなく、素直に別人と考えた方が良さそうだな。

「これで良しと。さて後は一通だけなんだけど」

僕は残り一通に手を伸ばしてその装丁をいぶかしげに見つめる。今の僕はリーフィア装着で半仮想空間に居るような物。
メールは今立体化して見えていて。それぞれ浮いてるんだ。クルクルと回りながらね。それは掴むことも出来て表面には差出人の情報が記されてる。
メールの装丁は封筒やら便箋やら女の子がラブレターに使いそうな可愛いデザインの物まで自由に選べる訳だけど……このメールはどこかオカシい。
なんか形は普通のメールの絵文字に使われる一般的な形なんだけど、色が汚い赤色してる。まるで血で汚れてる……みたいなさ。
そして表面に記されてる文字のフォントが何故か切り抜きの文字だ。これってどう考えても脅迫に使う奴だよね？
誰かに恨みを買う覚えなんてＬＲＯじゃないけど。それに無闇やたらにメールは送れないだろ。誰だこんなイタズラする奴は。
考えられる中では第一候補がアギトだな。第二候補はセラ。後は……居ないな。メカブもやりそうだけど、続けざまって考えにくい。てか、それならセラもか。
僕はちょっと躊躇いつつもそのメールの封を切る。するとその瞬間パン！！　っとメール事態が弾けた。驚く声を上げる僕。そしてそこに陽気な笑い声が響いてきた。

「あはははははは、や～～い引っかかった☆　スオウのバカバ～～カ」

なんか聞いただけで琴線触れる声。そして今日は特にいっぱい聞いた声だ。考えたくないけど、これはどう考えてもアイツ。

そしてその考え通り、弾けたメールの位置にはそいつが小さな姿で僕をなじってた。

「シクラか……お前？」

「そっ、私は完全無欠の超絶美少女シクラちゃんだよ☆　見て分かんない？　私という存在に釘付けになったその目はきっともう使い物に成らないからね。仕方ない」

「誰が成るか。誰が」

釘付けとかあり得ない。お前を張り付けにならしてやりたいけどな。

「あっはは～～☆　それはスオウには無理かな。私今やスオウの数十倍強いもん。元が数倍だったけど、今や数十倍だよ。イクシード3使っても勝てないよ」

「そんなのどうやって計ってるんだよ。どうせお前の勝手な判断基準だろ？　ふざけた事抜かすな。てか、なんでまだこんな所に居るんだよ。ＬＲＯは復旧してるんだろ。

さっさと帰れよ」

胸くそ悪い事を言う為にまだ居たってのか？　まあこいつならその位しそうではあるけど。てかなんでこんなに小さいんだ。二頭身キャラに成ってるぞ。

「勝手な判断じゃないよ。私とぶつかったあの時がスオウの全力全

快でしょ？　だからまああの時のままならって事だよ☆
で、帰らないのは今日は色々と楽しめた事へのお礼とまあもう一つ」

もう一つ？　お礼も超胡散臭いけど、そっちの方が気になるな。シクラは小さな体を空中でテクテク動かしてる。なんか無闇に可愛いな。
いや、女の子としてじゃないよ。いくらコイツが美人だからって敵にはそんな事思わない。今、可愛いと思ったのはあくまで小動物的にって意味だ。

「お前……さっき十倍強くなったって言ったよな？　どうやったらそんなに短期間で変われるんだよ？　いつも通りの反則技か？」

まあもう一つの事も気になるけど、こっちだって十分聞き捨て成らないから、聞いてみた。十倍とか洒落に成ってないし。こっちに取っちゃ死活問題だ。

「反則技って言うか、エージング期間が終了した感じ？　今までは全員揃ってなかったし、慣らしだったの。派手に動いて無かったでしょ？
だけど役者も姉妹も出揃ったし、それにコード集めも無闇やたらに張り切ってる奴がいるからそのおかげかな☆　良いこと教えてあげよっかスオウ？
私たちはね、誰かのコードを奪うことでより完全な形に近づく事が出来る。そのプレイヤーのＬＲＯでの経験と技術、それらを奪うことが出来るからね」
「……はは、それは随分悪役らしいスキルだな」

強がってそんな風に言っては見たものの、実際内心では「ありえ

ねーーーー！！」と叫んでた。だってそれは反則過ぎだろ。前からコードがどうとか言ってたけど、そう言う事かよ。

「ふふふ、絶望した？　だったら叫んで良いよ。『絶望したーー！』ってね」

「うるさい、そんなパロディやるかよ」

既に使い果たされてるだろそれ。

「まあそれもそうだね。さてと、衝撃の事実も教えて上げたし、見返り貰わないとね。今日の勝利の代償」

「そう言えばお前が豚の饅頭だったな」

「あれ？　気づいたんだ。流石スオウ。そっ、私のカリスマ性を持ってすれば人心掌握と誘導なんてチョロいよね☆

てな訳で、報酬は貰ってくよスオウ」

「報酬？」

僕が疑問に思ってると、シクラが翳した手に何かが現れる。それは本。頑丈な鎖で縛られた、真っ黒な本だ。

「それは『法の書』か！？　何しやがる！」

それは創造のアイテム。最後に手に入れたイベントアイテムだ。

「言ったよね？　報酬だって。これは正当な対価だよ。創造のアイテムはマザーシステムへの一端に干渉出来る。でも私にはそれで十分。

この法の書を使って、マザーを創造し直してあげるの。楽しいでしょ☆　じゃあねスオウ。お疲れ様〜〜」

そう言ってシクラの奴は消えていく。あいつはやっぱり意味のない事なんてしなかったって訳だ。どうにかしないと、だけどまだＬＲＯには入れない。

アイツの狙い（後書き）

第二百七十六話です。
ちょっと今回もＬＲＯに入らなかったけど、次回は必ず入ります。
今回で復旧も宣言されたしね。堂々と言えます。シクラの狙いもわかって、決着はＬＲＯでって事で。
まあその前にやる事が一杯ありますけどね。クリエの事とか、クリエの事とか！
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

再び夢の舞台へ（前書き）

朝起きて、日鞠といつものおかしな会話をする。アイツはいつだって僕を心配してて、そして約束を求めてきたよ。帰ってくる約束。僕は勿論それに同意して、ＬＲＯへと舞い戻る。

そこは別に前と変わらない様に見える落ちた筈の場所だった。

再び夢の舞台へ

チチチと鳥のさえずる声――で起きるなんて風情のある一日の始まり方をここ最近してない。てかこの時期は目覚まし変わりに成りそうな程の声が、窓の外からしてるんだ。

それは一週間という命を精一杯生きる声。短い命に全力を注ぐ蝉達の叫び。まあそう言えば聞こえも良いけど、実際この時期の間ずっと聞かされて来るとうんざりするよね。

種類が違わないと声の違いなんて分かんないし「おお、アイツ今日も頑張ってるな。今日でもう五日目か」とか思えない。

昨日まで聞こえてた鳴き声とはもしかしたらこの声は違うのかも知れない。だけどやっぱり僕の耳には違いなんて分かんない。

はてさていきなり朝っぱらから、なんで蝉に思いを馳せてるのか……自分でも不思議だけどさ、なんか『命』って奴を最近実感してるんだ。

ＬＲＯもそうだし、今のこの体もそう……そして昨日のあの夫婦の事も。胸に手を当てれば鼓動が聞こえ、息を止めれば苦しくなる。当たり前だけどさ、それが生きてるって事を感じるのとはちょっと違う。

命を感じる瞬間ってそうじゃないんだよ。命を懸けた戦い、譲れない思い、そして大切な人の死……そう言うので命って強く実感できると思う。

この長い休みに入ってそんなのばっかだから、感慨深くも成るよ。それについ最近、墓にもいったしね。誰かの死を思い出すと、自分が生きてる実感になるって言ったらそれは不謹慎なのかな。

まあ僕はまだ生きたい。昇りかけの太陽と、今日も澄み切った青空に思うのはそういう事でＯＫ。

「――で、なんでお前が僕のベットでうずくまってるんだ？」
僕は外に向けてた視線を室内に戻してそう言った。ベットの上には僕の枕に顔を埋めてるアホが居る。そんなアホは足をパタパタさせながらこう言うよ。
「今日一日のスオウ分を摂取してるんじゃない。これをしないと一日持たないんだよ。まぁ枕をモフモフして欲しくないなら――」
そういいながら、日鞠は枕から横顔を見せながら、その白く細い指をツヤツヤしてる唇へと持っていく。
「キスでも良いよ。それなら一発で百パーセントに充電出来るから」
「ふざけるな。僕の成分なんて無くても死ぬわけ無いだろ。そんな物、人体の構成要素に入ってねーよ」
僕は投げやりにそういってやる。実際こんな会話、もう何度も繰り返してるしな。何度言ったってやめないんだもんコイツ。
「私の構成要素には入ってるもん。炭水化物にタンパク質、リンに亜鉛に、脂肪にカルシウム。そしてスオウチャージャー」
「変な名称付けるな！！」
僕の叫びなんてどこ吹く風。日鞠は枕に精一杯顔を埋めてる。どこの変態だよこいつは。端から見てると相当ヤバいよ。僕はもう慣れちゃってるから引かないけど、流石に学校の奴らにここまで知られると、コイツの人気も危ういなと思う。
てか良く本人の目の前で出来るな。そういうのは隠れてやるものじゃないの？

「昔は隠れてやってたよ。だけど私はわかってるもん。スオウはこんな事で私を嫌いに成らないって。だから平気。スーハースーハー」

まあ確かに嫌いには成らないけど……毎回毎回、付き合いを考えたくは成ってるぞ。そんな事を思ってると、日鞠は横目で僕を見て、ニヤリと口を上げて更にこういう。

「それに、スオウだってこういうの嬉しいでしょ？」

「自分の臭いを目の前でクンカクンカされる事がか？　それは一部のマニアックな趣味の方々だけだろ」

「違うよ。可愛い女の子が、自分のベットに寝転がってるシュチュエーションだよ！」

バチコーイとウインクをかます日鞠。こいつやっぱ相当頭病んでるよ。

「朝は私がスオウの臭いで元気になるでしょ。で、夜は私の臭いでスオウが元気になれるという一挙両得だと思うんだけど」

さも当たり前の様になに言ってるんだコイツは。そんな事――

「してないの？　クンカクンカしてないの？」

「……」

――あれ？　答えられない自分が居るぞ。日鞠のどこか確信してるような瞳がうざったいな。ニヤニヤしてるし。そこまで計算づくか？　てか、寧ろちゃんと利用してた事に感謝して欲しいくらい。

てな訳で、僕は開き直る事に。

「あーはいはい、してました。ベットや枕に染み着いた日鞠の臭い

をクンカクンカしてました！　これで満足か？」
「うん！　臭いの等価交換だね」
「上手くねぇよそれ」

てか明らかに変態っぽい会話だ。お互いの臭いをクンカクンカしてるなんて……頭を抱えずには居られないな。くっそ、僕は日鞠の策略にまんまと引っかかってた訳だな。今更だけど、朝からなんて会話してるんだろ僕達。気が滅入るな。

「よっし！　スオウ分ほぼ充填完了！　今日も一日頑張れそう！」
「それはなによりだよ」

なんだかんだ言ったって結局僕は、コイツには元気で居て欲しいからな。だけど枕から顔を上げた日鞠は何故かベットから降りようとしない。今度は仰向けに成ってこちらに手を伸ばしてくる。

「何やってるんだよ？　そろそろ飯にしようぜ」
「まだ直接接触してないよ。お手を取ってよ執事君」

なんかまた始めだした日鞠。妖しい笑み浮かべちゃって、朝からホント元気な奴。今度は何なんだ？　お嬢様ごっこ？

「別にそうじゃないけど、ただスオウに起こして欲しいの。手と手を触れ合って……それで私のスオウ分は満タンになるの！」

そう言って掲げた手を揺らして催促してくる日鞠。僕は面倒だから扉の方へ歩き出す。

「さぁて飯にするか」
「ああ！？　ダメだよスオウ！　一緒に食べれる時は二人でがルー

ルでしょ？」
「だってメンドいし……」
僕がドアノブに手をかけると、日鞠は上半身を起こして叫ぶようにこう言った。
「お味噌汁に具を入れてやらないからね！」
「自分でよそうからいいよ別に」
「じゃじゃあ！　大根下ろし卸して上げない！」
今日の朝飯はどうやら焼き魚だな。まさしく和食って感じ。だけどそれなら大根下しは必須。無いのは困るけど……
「自分でその位出来るな」
「それじゃあスオウのご飯は炊く前の米をだしてやる！」
「鬼かお前は！！」
そんなの食えるか！　さらさらの米が茶碗によそわれて出てきた時点で、食欲失せるわ。
「ふっふ、炊いた後の米を食べたいのなら、私のこの手を『お手を拝借』とかっこつけながら取る事ね」
「なんか付け加わってないかおい」
僕は死んだ魚の目をして日鞠を見る。すると日鞠は頬を膨らませながらこういう
「ふ、ふん！　スオウが私を放っておこうとするからだよ」
プンプンてな擬音が似合いそうな顔してる日鞠は、もう一度ベッ

トに上半身を寝かせる。おいおいそこからしたいの？
別に寝転がる必要性はないだろ。まあだけど、ここでまた文句言ったら今度は味噌汁を味噌にされそうな気がしたから素直に聞いてやることに。

「え～と、お手を拝借」
「却下で」

触れかけた手をかわす日鞠。何でだよ！！

「言ったよねスオウ？　カッコつけながら、そしてスオウは執事なんだよ。それっぽさを出してよ」

たく、その設定は本気だったのかよ。めんどくさ～と、心の中で呟いた。

「早く～セバスチャン早く～」

手をフリフリしながらそんな事を言ってる日鞠。セバスチャンって誰だよ。執事の代名詞みたい名前セバスチャンってか？　僕はもう諦め気味だから、さっさと合格を貰う事にするよ。
恥ずかしいけど、結局ここには二人しかいないし、我慢我慢。え～と執事っぽくすればいいんだろ。取り合えず姿勢を正して、表情をキリッとさせて、余裕を持ってやってやろう。勝手な印象で、執事には余裕が大切だと思ってる。

「お嬢様」

僕はそう優しくいって、包み込む様に日鞠の手を握る。それはもう赤ちゃんの手を握る位の気持ちで行ってやった。すると一瞬ピク

ンと日鞠が反応して「ふぇ？」とか言う間抜けな声を出した。
そして僕は下から握った手に、今度は上からもう一方の手を添えて、頭を下げてキーワードを口にする。

「お手を拝借させて頂きます」

極めつけはそう言った後に、顔を上げて目を見て優しく微笑む事。すると日鞠は目をパチクリさせて、顔を左右に動かしてる。なんだか面白く成ってきたな。僕がいつまでも遊ばれる側に居ると思うなよ。

「では起きあがりましょう」

日鞠は何回も首を縦に降る。この反応は見てて楽しいな。僕は優しく力を込めて、日鞠をベットから離した。地に足が着いたけど、なんだかちょっとフラフラしてる日鞠。それにやけに下を見て僕を見ようとしない。
僕は目にかかりそうな日鞠の髪を指ですいて、こう言った。

「どうだった？」

すると日鞠は、下を見たままポツリとこう呟いたよ。

「……惚れなおした」

赤くなった顔で上目遣いで僕を見上げてくる日鞠。それは今の言葉と相まってなんだかちょっと異様な雰囲気。僕も暑くなってきたかも。
だけど日鞠は直ぐに冗談めいた感じでこう言った。

「これからはセバスチャンとスオウの事を呼ぼうかな？」
「それは止めろ。学校の奴らに聞かれたら、この休みが終わった後に、いきなり学校中からそう呼ばれそうで怖い」
日鞠の発言力は、本人が思ってる以上に絶大なんだ。セバスチャンとして残りの高校生活送りたくない。
「そっか、じゃあやっぱりスオウで。だけど良かったよ。それなりに体、回復したみたいで」
「お前、それを確かめる為にわざわざ？」
「う～んそれはどうかな？　どっちが建前でも実は良かったり。だけどまだ完全じゃないんだし、無理はダメだよ」
「わかってるって」
僕がそう言うと日鞠は一つため息をついて僕の鼻の先に指を押し込んでくる。
「わかってるってそれは分かってない。いや違うね。スオウは理解してくれてるけど、無茶をやるのは時と場合によりけりって感じでしょ？
そんなの分かってたって意味ないよ」
う～ん流石に日鞠にはバレバレだな。僕はとりあえず押し込まれる指を退かす事に。
「まあだけど、無茶も無理も思いを通す為には必要だよね。苦労しないで手に入る物なんか、この世にはそうそうないし……けどねスオウ、一つだけちゃんと覚えてて。
私はスオウが居なくなった世界になんて興味ない。だから絶対に帰ってきて。それは絶対の絶対の約束だからね」

真剣な日鞠の表情。コイツの顔を思い出すだけで、死ぬわけには行かないって絶対に思える。だから僕は約束するよ。帰ってくるって。

「了解」
「うん！」

朝日に咲く日鞠の笑顔。こいつは知らないだろうけど、僕は一体何度、この笑顔に救われたか分からない。

朝食を済ませ、日鞠は今日もどこかへお出かけ。アイツ一体、何個バイト掛け持ちしてるんだ？　まあアイツが大人しくしてる方が気味悪いから、慌ただしくしてるってだけで今日もいつも通りだなっては思うけど……アイツも自分の身を省みない所あるからな。

どこかで釘を指さなきゃ……と考えるけど、この休みも後半に入ってるのに今更か。てか、あんなに毎日どっかに出かけてるのに、毎年毎年良く宿題を消化出来るよな。

なんか僕とかとは、時間の使い方が違う。バイトした後に勉強とか、やる気出ないだろ普通。まあだけど、宿題なんて物は日鞠に取っては片手間なんだよな。

でもその日の内にやるかやらないかはやっぱり人間性の問題かな？　日鞠なんてその気になれば幾らだってダラケれるのに、そんな姿見たことないもんな。結局は、僕が日鞠並の頭を持ってたとしても、きっとのこの現状は変わりはないって事だろうな。

自分の体たらくぶりが身に染みるな。とりあえず、現時刻は七時半だから、ＬＲＯに入るのに後三十分位猶予がある。この間にやれることを……

「うう、体の節々の痛みのせいでやる気が削げ落ちる」

昨日はこれの比じゃない位に辛かったわけだけど、地味に痛いのも結構うざいよな。今は全身の痛みが、筋肉痛とかに変わってるんだよね。

これもある意味昨日の代償……そんな風に思ってると、イヤな事を思い出した。

「そう言えばシクラの奴に『法の書』取られたんだっけ」

苦労したのに……あの野郎。確かにアイツの協力無しではアイテム一つもゲット出来なかっただろうけど、だからって一番レアな奴持っていくか？　どんだけ図々しいんだよ。

とりあえず秋徒や愛さんには言った方が良いだろうな。二人とも一緒に頑張ったんだし、持ってるものと思わせておくのもね……いずれバレちゃうだろうし、それなら素直に言った方が良いだろ。

僕はスマホを取り出して、ピコピコ文章を打つ。そして送信。ふう、約一分も掛からずに作業は終了してしまった。食器は日鞠が洗ってくれたし……昼食も既に作ってあるし……洗濯は一人暮らしだから、毎日する必要ないし……掃除は体が痛いからパスで。

僕はソファに腰掛けて取りあえずテレビをつけた。テレビでは代わり映えのしないニュースをやってる。何となく流し見してると、不意にＬＲＯという単語が耳に入ってきた。

どうやら、ＬＲＯの復旧を大々的に伝えてるみたいだな。そして昨日のイベントの事も言ってた。おいおい映像にチラチラ自分が映ってるのが見える。

うわぁぁ～って感じの何とも言えない居たたまれなさに苛まれるよ。何という恥ずかしさ。てか、テレビカメラなんかあったっけ？

気付かなかったぞ。

まあそんなの気にしてる場合でもなかった訳だけどさ。

『昨日行われた秋葉原でのイベントは大変多くの参加者で賑わい――』

暢気にあのイベントをそんな風に紹介していくアナウンサー。そこにちょこちょこ横から口を挟むコメンテーター。なんだか見てる側とやってた側とじゃ結構印象違うな。

てか、あれがただの賑わいに見えたのか本当に？　死闘だったんだけど。流石にラオウさんが銃を乱射してるシーンはないけど、僕達とチンピラどもの衝突の映像は、所々流されてる。

まあでもこれを何も知らずに見れば、お祭り的に見える……かもしれないね。本当はそんなに暢気にやってないけどね。

そんな事を思ってると、スマホに振動が。秋徒かと思ったらそれは愛さん。よく考えたら、秋徒がこの休みにこんな朝早くに起きてる訳ないか。

『おはようございますスオウ君。メール拝見しました。やっぱりシクラには裏があったんですね。スオウ君にアイテムを手に入れさせる為に出てきてた。

それは結局自分の狙いがあったから。悔しいですけど、シクラに踊らされてたんですね。だけどこのままじゃ終わらせません。

アレの事は私達にお任せを。スオウ君はセラ達と示し合わせて入るんですよね？　今はそちらに集中してください』

流石愛さん。育ちの良さがにじみ出てるかのような文章だ。僕は返信を打って、それからまたテレビに視線を戻す。ＬＲＯの事をまだ言ってる。なんだか既に国の調査は始まってるとか、ＬＲＯは危ないんじゃないかとか、色々と問題点をあげてるよ。

まあ突く所は一杯あるからね。だけどまだ停止されるわけには行かないよな。最悪の決定が下されたとしても、直ぐにサービスが完

全停止する訳じゃないと思うけど、摂理を連れ戻す前だったら、もうあいつはこっちに戻ってこれないって事になるからな。
アイツはそれで良いとか思ってそうだけど、そんな事にはさせない。そう宣言してる。なかなか好き勝手に言ってくれてるテレビを消して、僕は二階に上がる。取りあえず、ベットに転がってリーフィア装着して、疑似仮想空間で準備してるさ。
一体ＬＲＯはどうなってるのか？　あの瞬間から始まるのか……それとも時間は進んでるのか。だけど全員一斉に弾き出されたのなら、その瞬間からの方がいいような。そこら辺は明言されてないんだよね。

「ん？」

疑似空間に手紙が一つ浮いている。朝っぱらからメールとは珍しい。しかもセラじゃん。内容は簡素に『起きてる？』だった。
まさかみんなにこうやってメールを送って連携を取ろうとしてるのか？　案外面倒見良いんだなセラって。もっと大雑把かと思ってたけど……でもよく考えたらメイドなんだよな。
大雑把な訳ないか。僕は『起きてる』って返してやる。すると直ぐに返信が来た。

『意外ね。もっとルーズかと思ってた。勝手な印象だけど――ってああ、可愛い幼なじみが毎朝起こしに来てくれるんだっけ？　羨ましい限りだこと』

何だ？　この文章は普通に受け取って良いんだよね？　ちょっとヒネクレた見方をすれば、なんか嫌味にも聞こえるけど、セラ相手にそれをしてると、全部がそうなっちゃうから、僕は無理矢理良い方向へと考えるんだ。
そうしないと僕とセラの溝は縮まらないからな。

『まあ幼なじみが起こしには来てくれるけど、朝は元から苦手って訳でもない。それよりもセラの方が苦手っぽいけど。低血圧そうじゃん？』
『うるさい。私とアンタの付き合いはまだＬＲＯだけだから、プライベートは詮索するな』

うう、なんか一蹴されたな。だけどここで注目するべきは「まだ」ってあることだろう。まだって事はこれからがあるって事。ポジティブに行こう、ポジティブにね。ＬＲＯの掲示板を見てると、一足先に入った人たちからの報告とかが一杯。
そっか、そういえば既に入れるんだし、落ちた瞬間からってのは既にない選択肢だったな。少なくとも一時間は経ってる事になる。
どうやら大きな時間経過はしてない感じらしいし、本来のサービス開始が午前七時からだったから、やっぱり失った時間は一時間だな。リアルの実時間でってことね。ＬＲＯはもっと経ってるだろう。その間に何も起こって無ければいいけど。
さて、そんなこんなで時間も近づいてきた。僕は一日振りにこの言葉を口にして、再び夢の世界へと舞い戻る。
「ダイブ・オン！」

体が引っ張られる感覚。光の波が押し寄せて、ＬＲＯでの体を構築していく。そして突如として地に足が着いた。水のせせらぎと、気持ちの良い風が肌を撫でる。そしえ腰には二つの剣。その柄を握ると、なんだか実感する。ここがＬＲＯなんだと。
体の痛みも消えてるし、快適快適。

「スオウ君」
「テッケンさん！　それにシルクちゃんにセラ、ノウイに鍛冶屋…

…全員揃ってるね」

やっぱりこうやってお互いが見えると安心するな。いきなり落ちたもんなホント。

「おはようございます皆さん。結局なんだったんでしょうねアレは？　一体何が原因であんな事……」

シルクちゃんが挨拶の後に不安気にそういう。するとそこでノウイが気軽にこう言ったよ。

「やっぱり幽霊の仕業じゃないっすかね？　あの時確かに声が聞こえたし……奴ら大量にＬＲＯいるらしいっすよ」

「や……やめてください。そんな幽霊なんて」

カタカタとあの時の声を思い出してだか小刻みに震えてるシルクちゃん。一日ぶりだけどさ。相変わらず可愛いな。

「取りあえず教皇様の部屋に戻ろう。クリューエル様も心配だしね」

「そうですね」

僕達はテッケンさんの意見に賛同した。落ちた場所が灯籠を流した社の下層部分だったから、入った場所もまたここだったわけだ。既に教皇ことノエインもいないし、確かに部屋に行ってみた方が良いよな。

ノエインに教えても貰った通路を逆走して僕達はその部屋へとたどり着く。そして勢い良く扉を開けてそこへ押し入った。

「クリエ！！」

「やあ、君達か。あんまりバタバタしない方がいいよ。誰かがどこ

かで聞いてるとも限らないしね」

僕の叫ぶような声に反して、教皇様は暢気に菓子と茶をすすってた。なんか一気に緊張感が削げたよ。

「え～と、あれから変わりないですか？」

僕は取りあえずそんな事を言ってみる。現状把握は大事だろ。

「そうだね。取りあえず今晩は大丈夫だろう。だけどいつまでもバレないとは限らない。それに君達は逃げ続ける気は無いだろう？

それなら早く行動を起こした方がいい。クリューエルを休ませておくにも、サン・ジェルクは元老院の力が強い。私は星羅（せいら）の地へ行く事を進めよう。あそこなら元老院も派手には動けないからね」

星羅か……それは僕達の新たに目指すべき場所なのかも知れない。

再び夢の舞台へ（後書き）

第二百七十七話です。
殆どまた日鞠との掛け合いになったけど、ちゃんと入れたので良しとしましょう。本番は次回からって事で。新たな舞台は星羅の地になるでしょう。クリエの秘密もわかってるし、これからはクリエの願いをどうするかで動いて行く事になると思います。
まあ勿論、色々と蠢いてるシクラ達も忘れずにいますよ。
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

ようやくからこれからへ（前書き）

僕達は再び教皇ことノエインの部屋へと上がり込む。そして提示された次の行く先は星羅の地『リア・レーゼ』。僕達はそこを目指す事を決め、早速行く方法の検討へ。

どうやら飛空挺は出てるらしいけど、問題はここから飛空挺の発着場までのルートなんだ。

ようやくからこれからへ

「星羅へ？」

ノエインの口から出た行く先に、僕はもう一度それを繰り返した。星羅……だってそれは確か、このノーヴィスのもう一つの勢力。まあ確かにここと違う勢力に満たされた場所なら、元老院の力もサン・ジェルク程には蔓延してないのかも知れないけど……でもそれは信用出来るのか？

「酷いな君は。大丈夫だよ。私が直接書状を書こうじゃないか。それを見せればきっと保護してくれる。少なくとも、元老院の総本山よりは安全だと思うけど？」

「それは……そうだろうけど……みんなはどう思う？」

僕は行った事ないし、星羅がどういう感じなのかも知らない。だからみんなの意見を聞くしかない。僕はまだまだこのＬＲＯって言う世界に対して無知だからな。

「僕は賛成に一票を投じるよ。ここでこれ以上追い回されるのもそろそろ限界だ。それにクリューエル様の願いを叶える為にも、星羅に行くのは良いことだと思う」

「願いの為にもですか？　どういう事？」

テッケンさんの言葉に僕はハテナを浮かべる。囲炉裏を囲んだ中で、そんな僕のハテナにシルクちゃんがこういってくれた。

「星羅にはその言葉通り、星に関する言い伝えが多い組織です。そして土地なんですよ。なんてたって世界はあの地から生まれたと伝

えられてる位ですからね。
星羅の星継ぎの地『リア・レーゼ』ならきっと新たな発見がありますよ。クリエちゃんの願いが遠い空の向こうに行きたいって事なら、星羅は通るべきです。
それにあそこ綺麗だし。サン・ジェルクは水だけど、向こうは木。その雄大さとか、触れてみて損は無いと思います」

なるほどね。シルクちゃんとテッケンさんがそういうのなら、まず間違いないかなって思えるね。確かにここじゃ、気が休まらないしな。離れてみるのもいいのかも……逃げるんじゃなく、前を見据えて目的の為に新たなる地へ。

「まあ今更この子を投げ出す訳にも行かないし、こうなったらこの子とアンタの呪いが関連してると信じるしかないわよね。
今更別の道を見つける訳にも行かないし。それに神もようやく関わってきた事だしね。『サン・ジェルク』を離れて『リア・レーゼ』へ。良いじゃない。迷ってる時間なんて無いわ。
早速ルートを検討しましょう」

案外あっさりセラも承認してくれた。てかもうみんな、ここでやることはやったって感じなのかな？　まあ今の状況でサン・ジェルクに留まるのは得策じゃないってのはわかる。いつまでも、元老院側に見つかるのを怯えてる訳にはいかないもんな。
それなら、もう一つの地に行くのは手だよね。向こうだってノーヴィスだし、なかなかに重要そうな場所だもん。

「よし、じゃあ全員賛成って事で良いんだよね？」
「ちょ！　自分には聞いてくれないんっすか？」

僕がまとめかけた所でそんなヤジを飛ばすのが一人。それは鮮や

かな緑色……というか黄緑っぽい色した髪のエルフ。まあ目が点なエルフと言った方が分かりやすいノウイだ。てか別にノウイだけじゃないじゃん。もう一人鍛冶屋が居るだろ。まあアイツは興味無さそうに自分の武器の手入れしてるけどね。

それにお前の場合は別に聞かなくたってみんなわかってるから別に良いんだよ。

「どうせセラに従うんだろ？」

「まあそうっすけど。だけど自分だけ無視されるのは嫌っすよ！」

同じなら別に良いじゃん……という思いを喉に押しとどめて、僕は「はいはい」と言っといた。そんな事より、セラが言ったようにどうやってそこまで行くのかだろ。

「それは抜かりないっすよ。だってちゃんとサン・ジェルクとリア・レーゼを結ぶ飛空挺は出てるっすから。問題はここから飛空挺の発着上に行くルートっすね。僧兵に見つかると厄介っすから」

そう言ってノウイは地図を表示させて、セラやテッケンさんを交えてのルートの選定に入った。僕も入ろうと思ったけど、よくよく考えたら、サン・ジェルクの町並みを僕はまだ完全に把握してない。

素人の余計な口出しは邪魔以外にはならないよね。それにノウイって普段はあんまり頼りなさげなんだけど、こういう地味なことは得意っぽい。流石諜報部員だよ。まあここは任せといて問題無いだろ。

僕は立ち上がってクリエが眠ってる方へ歩く。そして仕切の襖を静かにスライドさせる。こちら側の光が暗い部屋に細長い四角い形に二人に届く。

クリエと、そしてミセス・アンダーソンだ。二人とも変わらず眠ってる。それは安心して良いことなのか、それともやっぱり不安に

なるべき事なのか……ちょっと難しい。
とりあえずちゃんとこの場に居てくれた事は安心できる。けど、これからを思うと不安になる。そんな感じだ。
「どうしたんですかスオウ君？」
そう言って僕の横から襖の向こうをのぞき込んでくるシルクちゃん。そして寝そべってる二人を確認してこう言った。
「良かったですね。落ちたときはどうなるのかと心配しましたけど、ちゃんと二人とも変わらないままで」
「そうだね。うん、そうなんだけど……」
僕は歯切れ悪くそう答える。するとシルクちゃんは肩に乗ったピクを撫で撫でしながらこう言ってくれる。
「大丈夫ですよ。きっと全部上手く行く。スオウ君はクリエちゃんを救って、私達はその呪いからスオウ君を解放して見せます。きっと大丈夫。みんながいれば――ね」
そんなシルクちゃんの言葉にあわせて、ピクが同意するように鳴いた。まあ実際なんの根拠もないけど、でもシルクちゃんが言うとなんか信じたくなる。
てか、信じてないと……そう言いたいんだろうな。僕達がそれを信じないでどうするんだって事だろ。強い意志を持ち続ける事が大事。
ブレちゃいけない。これが本当に正しい道かどうかなんてきっと最後までわからない。だけど、信じてないと僕達はいけない。そうでないと中途半端に終わりそう。
そうなったらきっと一番最悪な結果とかになるんだろう。そんなのは絶対に嫌だよな。

クリエが本当に月へ行きたいのかはまだ良くわかんないけど、だけどどうにかしてやりたいって気持ちはちゃんとここにある。
それを忘れずに自分を信じて、そして一緒に考えて戦ってくれる仲間を信じて僕は進めばいいんだよな。なんかちょっと安心したかも。

「星羅は、ここよりはあの子にあってるかも知れません」

そんな事を言ったのはノエイン。てか、教皇がそんな事いっていいのかよ。

「いいのですよ。私は今一人の大人としての言葉を語ってるに過ぎません。これは教皇としての言葉じゃない。今ここに居る貴方達には教皇としての言葉じゃなくても良いはずでしょう？」
「まあそれはそうですけど。で、なんで向こうの方がクリエにとっては良いんですか？」
「それは向こうはもっと緩い感じだからですよ。いや、それじゃあちょっと言葉が悪いですかね。自由と言った方がいいのかも知れません。
そういう雰囲気をこの子は望みそうじゃないですか」

まあそれは言えてるな。クリエは自由奔放な所あるし、それを無理矢理窮屈な箱庭に閉じこめてたんだもんなここでは。もっと気軽に居れるのなら、そりゃあ気に入るだろうよ。

「自由か。良いんですよね教皇様？」
「何がだい？」

僕の言葉に不思議そうにそう返すノエイン。僕は考えてた事を口に出す。

「クリエを自由にしてもって事ですよ」
そんな言葉を受け取ったノエインは、少しだけクリエを見つめて、そしてこう言ってくれる。優しさを染み込ませた様な声でね。
「良いんですよ。私は私の間違いに気づきました。それにここまで頑張ってくれた君達になら、あの子を託せるさ。
私はね、勿論あの子の幸せだって当然祈ってるのだから」
やわらかな全てを包み込むような笑顔。それでこそ教皇様だよ。その祈りが間違った方向に向いてた時もあったけど、今はちゃんとクリエの事ってのを考えてくれてる。
権力に胡座をかいてる元老院共とは違うなやっぱり。今のこの人がちゃんと全権を持てれば……そうなればこそこそする必要なんか全くないはずだけど、そうも行かないのが現状だ。
間違った所によく権力って流れるよな。ＬＲＯでもリアルでもさ。それとも元老院だって僕の知らないずっと昔は、もっとまともな集団だったんだろうか？
人々の幸せを願ってたんだろうか？　だけどいつからか、権力を持ったら勘違いをしてしまう。きっとそれが人なんだろう。そんな話は腐るほどあるよな。
まあ昔の元老院なんて今の僕達には関係ないか。幾ら昔に思いを馳せたって、今僕達の前に立ち塞がるのは奴らなんだし。
「彼らは自分達の権力の維持が、シスカ教事態の繁栄に繋がると思ってますからね。そして自分達の地位を盤石にするために、あの子の力を使いたがってる。
神の力をその手にすれば、それこそシスカ教は盤石であれるでしょうからね」

「だけど確か、クリエの力は二人の神の力でしたよね？　それって良いんですか？」

ちょっと調べた程度だけど、シスカ教ってテトラを目の敵にしてるはずだろ。そして神がその二神なら、クリエにもその力があるわけだから……それで実際今まで不都合だから箱庭に隔離してたんだろ？　公表出来ないじゃん。

「別にあの子をそのまま表に出さなくても良いんです。その力だけを見せた方が神聖化されやすくもありますしね。そんな存在が居るんじゃないかと思わせるだけでも、それに縋る人は出てくる。

元老院はどうにかしてあの子の中に眠ってる筈の力の利用方を見つけたんでしょう。だから今、行動に移ってる」

ノエインの言うことは最もだなって思った。だけどそう言う事わかっててやってるのかよとも思う。信仰って一体何なんだろうか。

そんなの物が必要なのか、僕にはわからなくなってくるよ。

「信仰は必要ですよ。人々は救いを求めてる。それは事実なんですから。誰だって救われたい。言ったでしょう。君の様に誰もが強くあれる訳じゃないと」

強く……ね。ノエインの言葉が僕の心のどっかに引っかかる。なんかこう、納得出来ない物がある。それが何かと言われたら困るんだけどさ。

確かに人は救われたいと思うんだろう。世界は理不尽だから願わずにはいられない事もわかるよ。それにここはＬＲＯ。リアルとは違う奇跡の形が宗教って物を、信仰って心を強くしてるのかも知れない。

「魔法があるから、神を信じやすいってのはありますよね。そしてモンスターが居て悲しみや怖さと隣合わせだから、すがりつきたくなる対象が必要でもある。
リアルじゃどれも漠然としてるから、普通に生きてる分には信仰なんてそんなに必要ないですけど、ＬＲＯではきっと違うんじゃないのかな？」
「そうだね。シルクちゃんの言うとおりかも」

驚異が身近にある分、救いを求める心は大きくなる。だからこそ信仰が根深く広がってるんんだろうな。

「あの、ちょっと良いですか教皇様」

そんな言葉でノエインを呼ぶのはセラ。ノエインは小さな体をトテトテ揺らしてそちらに向かう。

「なんだい？」
「ルートはほぼ決まったんですけど、問題が一つあるんです。これは普通に避けられない事かも知れないけど、でも教皇様なら何とか出来るんじゃないかと」

そう言って、セラは何やらノエインに耳打ちしてる。何が問題なのか、会話に参加してない僕にはわからないな。取り合えず、そんな相談を受けたノエインは「なるほど」とか言ってる。あんまり難しそうな顔もしてないしどうにか出来る感じだな。
僕はゆっくりと音を立てない様に襖を閉める。するとそこで話が纏まったのか、セラがこちらに向かってこう言った。

「シルク様にスオウ。これからサン・ジェルク脱出の手順を説明するからこっちに来て。後そこの武器マニアもそろそろ関心を見せな

さい！」

強く言われてようやく顔をあげる鍛冶屋。

「本当に五月蠅い奴だ。ちゃんと聞いてる。俺の役目があるなら問題なくこなすさ」

そう言って頭をポリポリ掻いてる鍛冶屋。セラは明らかにイラッと来てるけど、そんな様子を見てた僕とシルクちゃんは、互いに笑って席に戻る。便利な事に再び囲炉裏が光って、大きな地図を出してくれたよ。

そして僕とシルクちゃんはセラ達が考えた脱出ルートの説明を受けた。てかこの地図、超便利。３Ｄにも対応してる。ルートを線で表して、地図上だけじゃなく、その町並みを表示してルートを教えてくれるんだから分かりやすい。

地図上だけじゃさ、いざ行ってみるとどっちだっけ？　ってなることも多々あるけど、元の風景を見てればそう言うことも起こりにくくなるだろう。

「とまあ、こんな感じ。どうですかシルク様？」

「う～ん、どうって言われても、みんなが頭を絞って出したルートに文句の付けようはないかな。きっとこれが最善だと信じてます」

「ありがとうございます。で、アンタはどうなの？　一応聞いてあげるわよ」

「お前な……」

なんか僕とシルクちゃんで対応に差があるだろ。なんでいつもちょっと高圧的なんだよ。まあこれでも無闇やたらな暴言は減ったんだけど、後は普段の会話での刺々しい部分を無くしてくれればいいと思う。

まあ直ぐにとは言わないけどさ。僕は色々と言いたいことを飲み込んで、素直にこの聞いたルートの感想だけ述べることに。

「まあいいんじゃないの。最後の方は確かにこれしかない感じだし、そもそもまだサン・ジェルクを把握し切れてない僕が口を出しても仕方ない。

信じるよ。セラ達のルートをさ」

「う……なんか今日はやけに素直ね」

なんか失礼なことを口にされた。僕は本心を言っただけなのに酷い奴だな。僕は基本、いつだって仲間を信じてるっての。セラの事だってちゃんと頼りにしてる。

「そ、そうなんだ。わ……私だってアンタの事、ちゃんと仲間だって……思って」

「ん？　おい、声が小さくて何言ってるのか聞こえないぞ」

何故か妙にモゴモゴしてるから、何言ってるか全然わかんない。囲炉裏挟んだ向こう側で、セラがメイド服の裾を握りしめてるのはわかるけど……てか、そこまで言い難い事を言ってるのか？

「ああ～～！　もう！　取り合えず全員賛成って事で良いわね！？　ノウイと武器マニアは聞かないわよもう。後は頼みますテッケンさん」

いきなり立ち上がりそう言って、セラは部屋の外へ。何なんだあいつは？　てか無闇に外に出るなよな。誰かに見られたらどうするんだよ。僕達は今犯罪者なんだぞ。もしも見つかったら、ノエインにだって迷惑掛かる。それにノウイ落ち込んでんぞ。鍛冶屋は全然気にしてないな。

「はは、まあそれはどうにか出来ますよ。私は教皇ですしね。それよりもお二人は特別な関係で？」
「は？　何言ってるんだアンタ？」

頭大丈夫か？　と付けそうになったけど、流石に教皇にそれを言うのは不味いと思ったから口には出さない。てか、一体僕とセラの何を見てたら特別だと思えるんだ？　シルクちゃんやテッケンさん、ノウイや鍛冶屋と変わらない位置の筈だけど。

「そうでしょうか？　二人は互いに何やら意識しあってる様に見えますよ」

ニコニコしながらそんな事を平然と言うノエイン。意識しあってるってそれは――

「多分それは僕達の間にはまだこう……越えられない垣根って奴があるからですよ。このメンバーの中では、一番関係が曖昧と言うか難しい奴だから、きっとそのせいです。
だから別に貴方が思ってるような甘酸っぱい関係じゃ無いですよ」
「そうなんですか？」

そう言ってノエインは他のみんなに視線を送る。すると何故かみんなちょっと曖昧に笑うだけ。なんだか僕の言葉は的外れ的な空気が。そんなバカなだよ。僕は当人なんですけど！

「う～んセラちゃんもスオウ君との距離を測りかねてるのは事実なんだけど、その動機が二人してズレてるって言うかですね……」

そう言いつつシルクちゃんがお茶をすする。動機がズレてる？
二人ともお互いを苦手としてたけど、ようやく二人して歩み寄る様

にしようと思える様になったんじゃないの？

「この肝はそもそもなんでセラちゃんは、あんな態度を取ってたか何だけどね」

「僕の事がそんなに嫌いじゃないからだろ？」

そう言われたぞ。けどそう言うとやっぱりテッケンさんもちょっと微妙に笑うんだ。うぬぬ、何故にそう言う反応になる。

「これだからスオウ君は～セラ様の『そんなに嫌いじゃない』の上位にいけないんすよ」

「なっ！？　なんかノウイにだけは言われたくない気がする。この目が点野郎」

僕は得意げにそんな事を言ってきたノウイに食いつく。ゴマみたいな目で何が見えるんだ！

「目が点なのは関係ないっすよ！！　それとちゃんと見えてるっす！　視界良好っす！」

「ふん、てか前々から聞きたかったんだけど、何で目が点なんだよ？　こだわり？　それとも願掛け？　いや、もしかして呪いでも掛けられてるのか？」

色々とノウイの目が点説をあげてみる僕。だってワザワザそんな目にするなんて……ギャグじゃなかったら何なんだよって感じ。

てか大抵格好良く作る物だろ？　自分の分身であるキャラってさ。だってどうせ容姿が自由に選べるのなら当然だよね。

男は一度は夢見た、ヒーローや主人公にふさわしい容姿を、女はやっぱりお姫様とかヒロインにふさわしい姿を作る。だからこそＬＲＯには美男美女がいっぱいなわけだろ。

まあそれか、突き抜けた容姿の人たちも中には居るんだけど……でもノウイってそこまで突き抜けてもないんだよね。目以外はまともだし、だからこそキャラとしてイマイチって言うか――

「イマイチ言うなっす！　別に自分で好き好んでこんな目をしてる訳じゃ……」

「ええ？　じゃあそれってやっぱり呪いとか何ですか？」

食いついてきたシルクちゃんが可哀想な目でノウイを見つめてる。それはまさに慈悲の目だね。シルクちゃんは自分の杖を出して更にこう言うよ。

「呪いなら任せてください。スオウ君の様な神の掛けた物は無理でも、大抵の呪いや呪縛は私、解ける自信があります！」

「おお、良かったじゃんノウイ」

かわいらしいシルクちゃんがやる気満々にそう言う姿は微笑ましい。こんな良い子の善意を断るなんて言わないよな？

「いや、良かったとかじゃないっすよ。自分はまだこの目で無いといけないんす！　だからそれはお断りするっすよ」

「そうなんですか？」

明らかに肩が落ちるシルクちゃん。この目が点野郎、変な意地張ってシルクちゃんを落ち込ませるとか許せないな。

ＬＲＯのシルクちゃんを守る会の連中が黙ってないぞ。ちなみに僕が今勝手に作った会だけどね。既にあったらごめんなさいだ。

「絶対にその目に得なんて無いと思うんだけど」

僕は不満タラタラにそう言ってやる。するとノウイは、ゴマ粒みたい目を糸みたいに細めてこういう。

「はは、そうっすね。得なんて無いっす。だけど、自分にはこれで十分なんすよ」

「十分ね……」

良くわからないな。僕みたいに強制でリアル顔しか無いとか、自分の趣味趣向全快でとっても濃い顔で満足してるとかなら何も言わないけど、どう考えたってノウイは受け入れてるけど、それに自信を持ってるわけじゃないじゃん。

どういう事なの？

「はは、スオウ君はほんと、人の事が心配で堪らないんすね。少しでも関わったら誰にでも優しい」

「な……なんだそれ！？」

僕はそんなお節介な性格じゃない！　断じてな！　何勘違いしてるんだ？　実はノウイの顔を見る度に心で笑ってるからな僕は。

「そんな無理しなくてもいいすっよ。別に褒めてないっすから」

「うんうん、スオウ君はそんなキャラじゃないよね」

「スオウ君はそんな男じゃないが正解だよシルク」

なんでみんなしてウンウン頷いてるの？　なんか無性にいたたまれないよ。しかもノウイの奴、聞き捨てならないこと言ったような？　するとその時、入口のドアの閉まる音と同時にこんな声が聞こえた。

「何やってるのよアンタは？」

帰ってきてたセラの呆れる様な声。僕は縋るようにこう言ったよ。

「なぁなぁ！　僕ってそんな良い奴じゃないよな？」

「良い奴だけど、私は死ねばいいのにって思ってるわよ」

流石セラだ。そのブレなさもここまで来ると清々しいよ。逆に安心した！　僕達は切れてない絆を確認しつつ「リア・レーゼ」を目指す行動に移る。

ようやくからこれからへ（後書き）

第二百七十八話です。
実際アレ？　って気付いた人もいるかもですけど、先の二百七十七話で無かった鍛冶屋君が復帰してます。いや、ちゃんと二百七十七話でも修正しときましたけどね。
いや～なんて言うか、彼は僕の中では影が薄いのです。アルテミナス編でもいつの間にか退場してたしね。だけど今回は直ぐに気付いたから大丈夫。この話も幾つか鍛冶屋の登場シーンを加えての投稿となっております。
だけど実際、作者に忘れられる様なキャラだから、読んでる人はモブだろこんなの？　ってな感じかも知れないかな？
まあ取り合えず今回はこの位で、次回は金曜日に上げます。では。
では。

脱出（前書き）

僕達はサン・ジェルクから脱出を試みる。セラ達が考えたルートを採用して、行動開始。社から街へ、そして湖に出る事に。そして目指すは飛空挺だ！

脱出

空に再び太陽が昇る時間。漆黒に染まってた空を青色へ徐々に変えるこの時に僕達は動き出した。まあ実際、この時まで動けなかったってのが大きい訳だけどね。

僕達が色々と暴れたせいで、街は一応厳戒態勢だったから、街の外へ通じる道は塞がれてたし、当然それは飛空挺もって事だった。運行ストップしてたんじゃどうにも出来ないし、元老院側が諦めるのを待ってたわけだ。

そして規制解除される朝方を狙って僕たちは行動を起こす。まあ実際、規制解除と同時に動くのもどうかと思ったけど、セラ達が考えたルートだと、人が多くなってからも困るらしかったので、ここしかない。

「では、クリューエルとそしてみなさんにシスカ様の導きがあらん事を」

そんな祝福の言葉をノエインから受け取って、僕たちは社を後にする。社は敵の本拠地の筈なのに、ここを出るまでは安全が保障されてるんだからおかしいよね。

教皇の癖にフラフラと良く外出する奴のおかげで、ノエインの開発した抜け穴はまさに完璧だったから。てな、訳で問題はここからだな。

「さてと、ここからが本場よ。まだ街中には結構見回りの兵とか居るだろうし、鉢あわない事を願いましょう」

「てか、おもったけどさ。そもそも僕らって目立ってるよな。ここはモブリ国なんだし。身長で直ぐわかる感じ」

モブリなんて膝丈か大きくてもそのちょっと上位しかない小さな種族だ。人とかエルフとかモロバレだよ。

「それはこの国に私たち以外の人やエルフが居なかった場合でしょ。大丈夫よ。プレイヤーは私達以外にも居るわ。それに今は魂送りの期間。

溢れる位に他の種族だって居るわよ」

「まあ、それはそうだろうけど……」

僕は視線の先を見据える。確かにチラホラは見えるんだけどさ、溢れる程とはほとほと行かないだろこれは。やっぱりまだサービス再会直後だからそんなに多くないのだろうか？　確かに夜は、沢山人が居たように思えたんだけどね。

「うじうじウルサいわねスオウ。男なら腹を決めなさいよ」

「別にうじうじしてる訳じゃなく、リスクを考えてるだけだ」

「リスクって、アンタもそんなの考えるのね」

なんだそのバカにした様な言葉は。セラの奴はやっぱセラだ。僕だってリスク位考える。いろんな事を自分の中の天秤に掛けて人は選択する物だろ。

「それで天秤がどちらに傾き過ぎたとして、アンタはそこで危ないからって諦めるの質じゃないでしょ？」

「譲れなかったらな。それ以外はちゃんとリスクの少ない方を選ぶっての」

するとセラは「へぇ～」とか言う安っぽい相槌を打つ。こいつ信じてないな。背中に背負ったクリエがいなかったら、もっと色々と言ってやるところだけど、今は見逃してやるよ。

気持ちよさそうに眠ってるクリエを起こしたくはないからな。ちなみにミセスアンダーソンは鍛冶屋が背負ってます。ノウイでも良かったんだけど、アイツはいざって時に使える力を持ってるからね。

それをいつでも使える様に両手は自由にしといたんだ。

社と街を隔てる垣根に居る僕ら。実際ここにいつまでも居るわけに行かないしそろそろ行った方がいいんだけど、社へ続く道ってどれも屋根がなく、なんか見晴らしが良い様になってる感じなんだよね。

夜は別に気にしなかったけど、明るく成ってくるとそれがなんか気になった。もしかして攻め入られた時の為用とかなのかな？

屋根ついてたら、守る側からしたら攻撃しづらいしね。それに社に続く道は次第に広さを増して、なのに直前にある橋は数を多くしてなんだか細い。この橋を通らないと社には入れない訳で……大群はここで立ち往生する羽目になりそうだ。

「まあどの国にも魔物の驚異はあるからね。こういう大きな建物はいわば街の最終防衛拠点なんだよ。いざと成れば、街の人々を受け入れて、籠城出来る様に成ってるのは当然だよ」

「へぇ～そうなんですか」

テッケンさんの言葉に僕は納得したよ。魔物って言う驚異の存在がＬＲＯの世界の防衛意識を高めてるのね。なるほどなるほど。

「お喋りはそこら辺にしてそろそろ行くわよ。いつまでも様子を伺っててもしょうがないわ」

「おいおい、一応見張ってる奴とか居るんじゃないか？　流石にこのままじゃ不味いだろ」

僕たち指名手配されてるし。普通に出ていったら今の閑古鳥が鳴くようなこの道では目立つ。するとセラは「そんなのわかってるわ

よ」と言い、シルクちゃんに視線を移した。

「シルク様お願いします」

「はい。じゃあみんな集まってください」

そう言って、シルクちゃんは詠唱を始めた。そして詠唱の終わりとともに僕たち全員の体を魔法陣が上ってくる。そして――

「プッ、まさかお前セラか？」

「そう言うアンタこそ酷い姿してるわよ」

笑われて少しイラッときたのか、セラが鋭い視線で僕を射抜く。だけど全然今のセラは怖くないな。なんてたって、随分太く成ってるから。

「どうですか？　これなら私達だってバレる事はあり得ません！」

そう言うシルクちゃんも横に膨張してる。どうやら、僕たちは魔法でデブになった……みたいだな。でも別に体が重く成ったとか感じないのは、魔法でそう見せてるだけ、なのかもね。

声だって全然変わってないし。ある意味不自然だよ。

「でも何故に太る感じの変装なんすか？　別にもっとビジュアルを変えるとか出来ますよねシルク様なら？」

確かに、ノウイの言葉ももっともだね。何故に太らせたのか疑問だよ。

「簡単ですよ。単にそこまでやらなくても良いかなーって事です。それに背中の二人はちゃんと別の物に変えてます」

「「え？」」

僕と鍛冶屋はそう言われて背中へ首を回す。実際、見せてるだけだから、どんなに邪魔くさく見える脂肪も案外そうじゃない。

「うお！　何故かクリエが大きなオニギリに――ってこれはおかしいよね！？」

「こっちはアンダーソンがリュックに成ってるな」

なにこの微妙すぎるチョイス。なんでリュックとオニギリ？　いや、あくまでリュックは持ち物だし、背中に背負う物だし良いよ。けどオニギリを背中に背負うデブなんて聞いたことないよ！！

いくら何でもこれはないよシルクちゃん。

「別にあんまり違和感ないですよ？」

「別に何背負ってたって良いじゃない。そこら辺は特に重視してないのよ。私達が全くの別人に見えればいいんだからね。オニギリを背中に背負ってるオカシナ奴って印象なら、私達の顔が出てくるはずないわよ。万が一にも」

「当然だろ」

オニギリを背負ってて僕を連想されたら僕って一体どういうイメージなのか、頭を抱えずには居られなくなる。

「よし、じゃあ行くわよ」

そう言ってセラが最初に足を踏み出した。それに僕たちも続く。怪しまれない様に、怪しまれない様に……すると運悪く目の前から僧兵が！！　きっと僕たちの鼓動は一気に高まった筈だ。

（大丈夫、大丈夫、大丈夫）

僕はそう心で唱えながら、背中のオニギリ……もといクリエを意識する。そして僧兵達と交差する。だけどそれは余りに自然な素通り（ちょっとプッってな笑い声が聞こえた気がするけど気にしない）……一気に肩の力が抜けたよ。

「ふう」

「大丈夫ですよ。特殊なイベントか、それこそ魔法かアイテムを使わないとばれません」

「そう言う割にはシルクちゃんも胸押さえてるじゃん」

「これは安心を確かめてるのです」

指を立ててそう言う彼女は、いつもなら可愛さ百二十パーセントは叩き出してくれるはず。だけど今は邪魔な脂肪が七十パーセント代で押しとどめてるよ。何という残念さ。

僕達は心無しか早足で道を曲がり、取りあえず社の監視の目からは逃れただろう。怪しまれなかったかどうかはわかんないけど。

僕達は取りあえずここで変装解除。あれは緊急処置。さてこれから始発の飛空挺が飛ぶ前に発着上につかなくては成らない。残り十五分って所だな。

「変装解いても良かったのか？　これからだって僧兵に会わないとは限らないぞ」

ここに来て鍛冶屋がそんなまともなことを言った。まあ確かにそれはそうだな。あのままで良かった気はする。女子が残念に成るのはイヤだけど、目的には変えられない。

「会ったときは会った時ですよ。実はあんまり魔法を継続して使いたくない理由があるんです。ただの噂なら良いんですけど、警戒するに越したことはないんで」

「ふ～ん、それじゃあ仕方ないね」
噂ってなんだろう。そう思いながらもシルクちゃんがそう言うなら受け入れるよ僕は。その噂がなんなのか気になるけど、残り十五分だし急がないとだ。
僧兵とかを警戒しながら行ってたらギリギリかもしれない。なんたって広いからねＬＲＯの街は。それにサン・ジェルクは、湖の上に複雑に道が張り巡らされてるからね。
迷わない様に最短……じゃなく考慮した最善のルートを進まないと。僕達は取り合えずある場所へと向かう。

「そっちはどうだ？」

僕のそんなジェスチャーにテッケンさんがＯＫのサインをくれる。僕達は周りを警戒しつつ、実は発着上とは違う方向へ足を向けてた。
まあ警戒って行っても、テッケンさんのスキル『千里眼』で周りを警戒してもらってるから、実際ははちあう前に僕達はその存在に気づけるよ。
今はまだそれほど人も多くないし、テッケンさんが僧兵をその目で見落とすことはないだろう。なんか建物とかを透過して先を見据えることが出来るらしいからね。
一体どういう風に見えてるのか気になる。

「はは、実際結構危ないんだよコレ。立ち止まって使うの前提だからね。動きながら使うと、まず間違いなく町中じゃ建物か人にぶつかる。先を見据える為に目の前を犠牲にしてるような物だから」
「へぇ～なるほど。ただ単に便利って訳でもないんですね」
僕はテッケンさんの説明に納得しながらそう言った。なるほどね、実は常時発動中ではなかったのか。鉢合う可能性が無い訳じゃない

なそれじゃあ。
だけどちょくちょく立ち止まってキョロキョロしてるのはその為って訳ね。それだけでも随分きっとマシに成ってるんだろう。
敵の存在を先にわかってれば対応のしようは色々とあるものだよね。最初の社付近とは違って、ここ等辺は横道とかいっぱいだし。

「そうだね、いざと成ればシルクの魔法か、ノウイ君のミラージュコロイドがあるからね。大抵はどうにか成るよ。これは些細な保険だよ」

そう言って小さな体で先行するテッケンさん。些細なんて謙遜だよ。僕達はテッケンさんのこと信頼してるから、些細以上の保険になってる。
安心感って奴が違うんだ。朝日に照らされる水面がキラキラと光ってる。てか、このサン・ジェルクの朝の空気は凄く清々しい感じがする。
周りが水で、しかも四方を滝で囲まれてるんだから、爽やか度マックスって感じ。提灯の光は今は無く、上からの太陽光と水面の反射の光で光源は十分。
まあ十分過ぎるほどでもある、四方を囲む滝は結構遠い筈何だけど、水しぶきが光を反射してるのか、遠くが光の帯みたいに見えてるもん。幻想的だよ。
そうこうしてる間に目的の場所へ近づいてきた。順調順調だ。

「船貸し場？」

ポツリとそんな風に呟いたのは鍛冶屋。こいつ武器ばっかに関心してたせいでやっぱり聞いて無かっただろ。ちなみに船貸し場ってのは、そのまんまの意味だよ。
船を貸してくれる所。だけど別にコレが街と外を繋ぐ手段じゃな

い。この魔法の国は、特定の場所を転送魔法で結んでる。
だからこの街から外に出るときだってそれを使うんだ。じゃあ何で船貸し場なんて存在してるかと言うと、それはいわゆる一種の娯楽『釣り』の為らしい。
サン・ジェルクは湖に浮いてるだけあって釣りの名所なんだって。だから釣り好きの人のために、沖合に出れる船が用意されてる訳だ。
で、今回はそれを利用しようと言うわけ。まあ利用と言っちゃ聞こえ悪いな。お世話に成ろうとしてるわけ。

「武器マニアのアンタにだって、飛空挺に乗るための一番のネックが何か位わかるでしょ？　その為よ」
「ああ、出入国の建物か。あそこ通らないと発着場にはいけないからな」
「そういうことよ。あそこには必ず僧兵が居るでしょうし、指名手配までされたそこの奴が素直に通されると思えないでしょ。なら通らない道しかないじゃない」

そこの奴扱い……別に好きで指名手配されたわけじゃないっての。てか、なんで僕だけだよ。やっぱり元老院の一人をフルボッコにしたのがまずかったのかな？　まっ後悔なんてしてないけど。
あんなクズには当然の仕打ちだ。

「そういう事か。だがあそこ通らずに乗れる物なのか？　俺達は永久パスを持ってるが、スオウは無いわけだろ。いやあったとしてもそんな事が許されるか？　システム的に」

そう言って難しい顔をする鍛冶屋。まあ鍛冶屋の言いたい事もわかる。横から入れるとか、そんなの密航じゃん。犯罪だ。ＬＲＯは大抵の事が出来る様に成ってるけどさ、ズルとかには厳しかったような……

「前に密航者がバレて牢に入れられた――なんて噂が飛び交いましたよね。その際には装備も資金も初期に戻るとか。出来るけど、リスクが大きいから、誰もやらないだけじゃないかな？」

シルクちゃんが冷静にそう言ったけど、実際洒落になってないよね。装備も資金も初期に戻るとか、あり得ない。セラ・シルフィング無くなったら、僕なんて雑魚だよ。大丈夫何だろうな？

「大丈夫よ。今回は止む終えない密航だもん。だからこそ、私達は教皇に一筆したためて貰ったんじゃない。てか、その提案をしたときにあの人が飲んだ時点でこういうルートなんだって私は思ったわよ」

ああ、あの時耳打ちしてたのはそのための協力を持ちかけてた訳なんだね。てか、だからこそこの作戦で行こうとしてるわけだよな、テッケンさんもセラもノウイも。

抜かりなんてあるわけ無いか。

「よし、それならさっさと舟借りようぜ」

ちゃっちい笹舟をさ。そう思って僕はそこに居るモブリに話しかけようとした。

「ちょっと待て！」

「なんだよ？」

制止の声を受けて、僕はいぶかしむ目を鍛冶屋へ向ける。

「来る……この音、僧兵だ！　隠れろ！」

そんな事を言って鍛冶屋は速効で建物の陰へと身を隠す。僕達はなんだか呆気に取られたよ。だってテッケンさんは何も――

「確かに来てる！　みんな隠れて！」

マジか！？　僕達は慌てて鍛冶屋が隠れた方へ走る。そして何とか飛び込んだと同時に、足音が聞こえてきた。しかも結構複数の足音。それに駆け足気味だ。

そして直ぐそこで足をゆるめてキョロキョロとしてる。

「なんだあいつ等？　まるで僕達がここに居たのがわかってたみたいな……」

僕は小声でそんな事を呟いた。だってまさにそんな感じ。どういう事だ？　しばらくするとそいつ等はどっかに行ったけど、冷や冷やもんだったよ。

「まだ僕達を追ってたんですかね？」

「う～ん、追っては居るだろうが、あの行動はちょっとおかしい気がするね。時間も経ったし、一端引き上げたと思ってたけど、どこかから目撃情報でも入ったのかな？」

「そんな……町中のＮＰＣがそんな事するなら逃げ場なんて無いじゃないですか」

どれだけこのＬＲＯの街にはそいつ等が居ると？　逃れられない目の数だよそれは。そんな事を思ってると、シルクちゃんがポツリと独り言の様にこう言った。

「もしかしたらやっぱりあの噂は……」

「噂？　どう言うことシルクちゃん？」
「えっとですね。まことしやか何ですけど、サン・ジェルクには魔法を感知するシステムがあるとか。そう言う噂です。だから魔法は控えてたんですよ。
でもあの時使っちゃったから、それを感知されたのかも」
あの時ってのは社から街へ抜ける時のアレか……でもアレはしょうがなかった。それに噂は気にし過ぎるのも良くないしね。実際まだそのせいとはわかんない。
「だけど他に思い当たらないですよ？」
「僕達が気づいてないだけかも知れない。とにかく今の内に舟に乗ろう」
戻って来るかも知れないし、それに他の僧兵が来るかも知れない。僕は今度こそ舟の側に居るＮＰＣに話しかけて舟を二隻借りた。元々釣りようの舟だからね。この人数で一隻は無理すぎた。
僕達は急いで乗り込みオールを漕ぎ出す。ＮＰＣには悪いけど僕達は戻ってこない。だから心の中でごめんなさいを言っといた。
水を切りながら船が進む。ある程度街から離れて、それから発着場を目指すよ。万一にでも見つかったら不味いからね。こんな舟じゃ、魔法一発で沈みそうだし。
そう言えばちょっと落ち着いたし、さっき気になった事を鍛冶屋に聞いてみよう。
「所でどうやって敵を感知したんだお前？」
テッケンさんより早くって相当だぞ。音がどうのとか言ってたけど、実際直前まで足音なんかしなかった。

「俺には聞こえた、僧兵の標準装備であるあの槍がカチカチとする音がな」
「んなバカな……」

そんな音、足音よりも聞こえないだろ。確かに僧兵はちっちゃいモブリだから、背中に背負ってて槍を差してる部分がカチャカチャなってる感じはあったけど……それが聞こえるなんて……増してやそれで僧兵とか分かる訳ない。

「それはお前の武器に対する愛が足りないからだ」

さも当然の様にそう言った鍛冶屋。ダメだ、ついていけないよ。まあその異常なまでの武器への愛のおかげで助かったんだけど。

「流石は武器マニアって事でしょ。面目躍如じゃない。まあ有り得ないキモさだけど」
「ふっいつかお前の聖典もじっくり見せて貰おうか」

キモい言われたのに全然気にしてないよこいつ。それどころか恩を売ったのを良いことに自分の欲望を満たそうとは天晴れだ。

「アンタの指紋が付いたらどうするのよ」

手にも取らせない気だよセラの奴。てか見せる気もこいつの場合あんまり無いよな。

「それじゃあ『ナナウリ』でも良いぞ」
「ナナウリ？」

どんな瓜？　食べ物？

「バカか貴様は。ナナウリはセラが持ってる金色の武器だ。形が変わる奴があっただろ」

ああ、なるほどね。確かにあったあった。アレも貴重な物なのか？

「貴重だ。アレは普通の武器の大きさにまで成れる暗器だからな。しかも普段は暗器の枠一つですむと言うハイ効率な一品だ。一つで様々な局面で利用できるしな。

まあそれには伴った技術が必要だが」

確かアレってパズルの様にその場で組み替えなきゃいけないんだよな。確かに技術が必要そう。てかセラは超高速で組み替えてるから簡単そうに見えてたけど、やっぱり扱える奴は少ないのか。

「少ないと言うよりは、あれもまたあの女以外では見たこと無いな。そもそも戦闘中に武器を組み替えるなんて芸当をしないといけない時点で、普通は毛嫌いするしな」

むむ、なるほど。確かに言われてみればそうだね。セラ並に組み替えが早くないと役になんてたたないよな。

「ちなみにナナウリという名前は、七つの形態に変わるからしい。まあ全ての形態変化を見た奴は、ＬＲＯ広しといえども聞いたこと無いがな。

だが、セラならもしかして……どうなんだそこら辺は？」

そう言って隣の舟に話を振る鍛冶屋。セラはメンドクサそうにこう答えたよ。

「お生憎様。私も七つ全部見たこと無いわ。そもそも組み替えの図式は基本の三つ以外、教えてくれないし、後は自分で試行錯誤するしかないのよ」

そんな言葉に肩を落とす鍛冶屋。てか、なんて不親切な設計だよ。そんな事を思ってると、いきなり大きく水面が揺れた。これってまさか！？　視線を向けると、動き出した飛空挺が見えたよ。

脱出（後書き）

第二百七十九話です。

動き出した飛空挺にスオウ達に乗れるのか？　って所で次回へ続くです。まあ本当はこの回でサン・ジェルクを脱出したかったけど、足りなくなったんで次回へ回します。

次の地ではどんな事が起きるのか……今から考えとかないとですね。まあ大筋はあるんだけど、そこに繋げるのが大変なのです。でも頑張ります。

ちょっと変更です。只今家のパソコンがネットに繋げない状態なのです。今日の朝から。原因はモデムの故障みたいです（泣）　交換は火曜日になります。なので次回更新は火曜日まで出来ません。ごめんなさい。

復帰したら速攻で上げます！　御迷惑おかけしましてすみませんm（__）m

届かせる空への思い（前書き）

動き出した飛空挺。追いかけてくる僧兵ども。湖の上の混戦状態。そこから僕達は抜け出して、飛空挺に乗り込まなくちゃいけない。僧兵の攻撃を潜り抜け、僕とセラはドデカイ攻撃で船の推進力を生む。

届かせる空への思い

「おいいいいいいいい！　動き出してるぞ飛空挺！」

大きく揺れる水面で舟に全力でしがみつきながらそんな風に声を出す僕。だって既に出港し始めてるって、それはヤバいだろ。くそ、モーターボートならまだしも、流石に手漕ぎは予想以上に時間が掛かってたって事か？

「まだっす！　まだ浮いてないなら、ミラージュコロイドで届かせて見せるっす！　だからもっと近づいて欲しいっす！！」

目が点エルフのノウイがそんな事を訴える。まだ間に合うか……確かにここはノウイのミラージュコロイドに賭けるしかないかも。既に入り口は閉じてるだろうしね。

「よし、力の限り全力で漕ぐよスオウ君！！」

「了解です。テッケンさん！」

僕とテッケンさんはそれぞれの舟のオールを持ち、一気に回しまくる。今までは優雅に舟の旅をしてたけど、もうそんなのやってらんない。

「「うおおお

「進路を飛空挺の進行方向に向けよう！！　このまま真っ直ぐ進むんじゃなく、飛空挺の飛び立つ進路に向けるんだ。きっと飛び立つ前に交差出来る筈だよ！」
「了解！！」

僕はテッケンさんのそんな言葉を受けて、やや右側に旋回。直接接触を諦めて、狙うのは衝突覚悟の交差点だ！　実際動く物に追いつくにはそうするのがベストだろ。進行方向を読んで、狙った場所で追いつく。これしかない。

「飛空挺のプロペラが回転を逆にしだした。そろそろ前に進むわよ！」

セラのそんな声。間に合うか？　この舟で交差地点まで行けるか？　いや、行くしかないだろ。オールが激しく水を切り、滴も大量に宙を舞っている。
もう腕がオールを漕ぐだけの機械にでもなった気分。だけど小さなオールで出せる速さなんて実際たかが知れてるのかも。ヤバい、間に合う気がしないぞ。

「諦めたらダメだよスオウ君！」
「わかってる！　分かってるけど……」

シルクちゃんの言葉に何とか答えたい。でもさ、現実問題、推進力がよく分からない空まで飛んじゃうアレに追いつけるか？

「追いつくんじゃない、進行方向でぶつかれば良いだけだ」

だぁ～もう、そんな事は分かってる。だけどこの距離を詰めるの

に、手漕ぎオールじゃ限界があるって言ってるんだ。こっちに向かって飛空挺が進んで来るならまだしも、そうじゃないじゃないか！
このままじゃ実際、一気に爆発的な加速でもしないと、交差できずに飛び立ちそうだ。

「そこの船舶！　止まりなさい！」
「げっ！？」

別方向からそんな声。視線を向けると、明らかに僧兵の部隊が見える。流石にバレたか。だけど、まだ怪しい舟が二隻ほど、飛空挺に向かってる位の認識だろう。
もしも僕たちと気付いてたら、そんな勧告せずに撃ってきそうだもんな。

「見つかっちゃいましたね」
「「関係ない！　このまま突ッ走る！！」」

シルクちゃんのそんな声に、　僕とテッケンさんは同じタイミングでそう返したよ。てか、こっちの舟に居るシルクちゃんの声が良くを聞こえるね。

「止まりなさい！　そこの舟。それ以上の接近は危険……ん？　何だ？」

なんか警告が止まったぞ。そう思った矢先、周りの水面が大きな水柱をあげて弾けた。別の船舶からの攻撃？

「ぬあっ！？　なんだ？」
「攻撃だ！　どうやら奴らにバレたみたいだぞ」
「おいおい、ここでかよ！」

くっそ、これで真っ直ぐ進むのが難しくなった。僧兵の奴らの槍から放たれる魔法が、水面に当たる度に小さなこの舟は大きな影響を受ける。それだけでタイムロスだよ。既に前方に動き出してる飛空挺。このままじゃ絶対に間に合わない。

しかも間に合わなかったら、絶対に捕まるだろこれは。四面楚歌？　八方塞がり？　そんな事を思ってると、「まだよ！」と大きな声で、少し前を進むもう一隻でセラが立ち上がってる。そしてその周りには聖典が……何する気だアイツ？

「ようは爆発的な推進力さえあれば良いんでしょ？　なら爆発させるまでよ。そっちはそっちでタイミング合わせなさい！」

弾ける水面をかわしながら進む中、セラがそんなことを言ってくる。別にあのウザい僧兵の舟を吹き飛ばすとかじゃないのか。

まあでも確かに、アレに割いてる時間はないか。段々と飛空挺は加速してるし、もう少しできっと浮いてしまう。

「止まれ！　この異端者共め！！」

次々と降り注ぐ攻撃の嵐。空には太陽があるのに、僕達の周りだけ雨が降ってるみたいになってる。そんな中、大量の水しぶきは透明から聖典が凝縮する光の色を帯びていく。

こっちも一気に加速力を生む力を――そう思って僕はこの舟のメンツを見る。鍛冶屋にシルクちゃんに眠ってるクリエ……おいおい、誰が聖典に匹敵する攻撃が出来るんだ？

シルクちゃんは後方支援型だし、鍛冶屋は武器の力で肉弾戦タイプだからな。ダメじゃないかコレ？

「ちょっと代われ鍛冶屋！」

こうなったら僕しかないだろ。そう思って無理矢理鍛冶屋にオールを渡す。そしてセラ・シルフィングを抜いて「イクシード」を宣言。

刀身に風のウネリが集い出す。

「逃がすかあああああああああああ！！」

数隻の舟から大きな炎の玉が僕達の舟へと向かってくる。今度は周りにハズレるなんて事はなさそうな進路。僕達目指して一直線に来てる。だけど僕達もこれ以上進行方向を乱される訳には行かない。

僕達は攻撃をかわそうとしない。だからただ、この一撃で更に早く進むだけ！！

「行くわよ！！　ブレイィィィィク！！」

金色の光が波を高らかにあげる。僕も同時にイクシードの風のウネリを水面にたたき込んでた。こちらは凝縮された風の力。向こうは圧縮された聖典の光で、それぞれ爆発したよ。

更にその瞬間、僧兵達の打ち込んだ攻撃までも到達したけど、その時には僕達の舟は宙を飛んでいた。ただ一直線に飛空挺との交錯点を目指して。

「「「いっけえええええええええええ！！」」」

僕達はみんなでそう叫んでた。叫ばずには居られなかった。だって一日振りのＬＲＯでいきなりのこの状況。なんとも僕達らしくってさ、みんなきっと楽しんでたんだと思う。

舟は徐々に失速していき、水面を二度・三度と水切りする。その度にガクンガクンと成る僕ら。後少し！　だけど、交錯点を既に飛

空挺は過ぎ去った。見えていた前方部分が見えなくなり、胴体……そして後ろとなる。
しかも僅かだけど浮き始めてる。
だけど僕もセラもまだ諦めてない！！
「「まだまだあああああああああああ」」
そんな叫びと共に、再び攻撃を水面に放つ僕達二人。強制的な進路変更と、更なる加速が目的だ！！　再び十メートル越えの水柱が上がり、その中から僕達は飛び出した。ピッタシと飛空挺の後ろについてね。
「ノウイ！！」
「分かってるっす！　ミラージュコロイド展開！！」
飛空挺の甲板部分に向かって伸ばされる透明な鏡。だけどその時、限界が来たのか、ミシミシと言ってた舟が、空中でぶっ壊れた。そしてそれは僕達だけじゃなく、どうやらセラ達の舟もそうなってた。
流石に強制的な方向転換は不味かったか。僕達は空中に放り出された格好だ。このままじゃ後一秒もしないうちに全員水面に叩きつけられる事に――
「手を伸ばすっす！！」
そんな声に咄嗟にテッケンさんがいち早く反応してそれにセラが続く。更にそこへシルクちゃんが続いて、鍛冶屋――そしてクリエを受け止めた僕へと伸ばされる。でも片手はクリエを抱えて、もう一方はまだセラ・シルフィング……これを直接伸ばす訳にはいかない。
僕はトッサにセラ・シルフィングを回転させて鞘へ納めて、その

まま鞘に入ったセラ・シルフィングを伸ばす。これで、距離も稼げて届くはず！！

「飛ぶっすよ！！」

そんな声が聞こえた瞬間。僕達は鏡を潜り一気に数十メートルの上空へ。だけどそこには足を踏みしめる所なんかなかった。さっきよりも高く昇った飛空挺の側面部分しか見えない。

「まだっす！！」

そう言って再びノウイはミラージュコロイドを展開させる。落ちる僕達を鏡で受け止め、一斉に上へと上昇する。だけどどうしても距離が足りない。後数枚鏡が多ければ行けそう何だけど、その数枚分で飛空挺の最上部にたどり着けない。

「諦めないでノウイ君！　もう一度お願いします！」

「でも、後数メートルが足りないんす！」

「大丈夫、こうなったら少々荒っぽく行きましょう」

荒っぽい？　シルクちゃんの口からそんな言葉が出るなんて以外だ。そんな言葉を信じてノウイは再び飛ぶ。だけどやっぱり飛空挺の壁ギリギリまでしか届かない。

だけどそこでシルクちゃんが行動を起こす。

「今ですピク！　壁に向かってブレストファイア！！」

ピーと鳴いたピクが主人の命令を迷いなく実行。赤い炎が飛空挺を大きく揺らす。そして立ち上る黒煙の中に穴が！！

「あそこですノウイ君！！」
「了解っす！！」

ミラージュコロイドは迷いなくその穴へと向けられる。そして僕達は一斉に転がる様に飛空挺への進入を果たした。

「いっつつつつ……」

体の節々に鈍い痛みが。てかようやく自分って奴を支えてくれる場所に辿りついたよ。空には憧れるけど、やっぱり二本の足で踏みしめられるって大事だね。安心感が違うよ。

「なんとか、潜入成功っすね」
「シルクの機転が無かったら、今頃全員地面に叩きつけられてたかもしれないね」

そんな事をいわれてシルクちゃんはちょっと照れ笑い。まあ僕としてはシルクちゃんがこんな大胆な事をする事の驚きの方が強かったけどね。

「ピクのおかげです。一応これで何とかなって良かったで――」
「そこの貴様等だな侵入者は！」

シルクちゃんの声を遮って聞こえてきたそんな声。見るとどうやら飛空挺常駐の僧兵らしい奴らが二人程居る。勿論こっちに武器を向けて……状況を把握しようと僕はみんなに視線を向ける。
みんな結構気まずい顔してるね。アチャーっていう顔してる奴もいれば、オロオロしてる可愛い子も居るし、そして明らかにため息漏らしてメンドクサそうにしてる奴も居る。

「おい、こいつの顔見たこと無いか？」
「ああ、確かに！　凶悪犯罪者の指名手配リストに載ってた奴だな！　ハイジャックでもする気か？」

おいおい、僧兵の人達はなんだか二人で盛り上がってるな。まあ盛り上がりのベクトルがちょっと違うけど……ハイジャックって、そんな――

「今直ぐ機長に連絡を！　凶悪犯を乗せたまま『リア・レーゼ』には行けない、直ぐに引き返させるんだ！」
「うおおおおちょっと待ったあああああ！！」

僕はそんな僧兵の会話を聞いて思わずセラ・シルフィングを抜いちゃったよ。だって引き返されるのはやばいだろ。連絡なんか入れさせれない。

「貴様！？　抵抗する気か？」

そう言いつつ僧兵二人の槍には光が集い出す。僕はもうやるしかないと判断したね。武器を抜いた時点で話し合いなんて無理なんだ。
いや、そもそも兵隊は役割をこなすだけ。それがＮＰＣなら尚更だろう。ここを切り抜けるには、もうハイジャックでも何でもするしかない！
てか壁をぶち破って侵入してる時点で、言い逃れも何もあったもんじゃないじゃん。その事実に気付いたよ。後ろで大穴のあいた壁の外がゴウゴウ唸ってるのが聞こえる。
てか、空気がこの穴に吸い込まれて行ってるのか、もの凄い風が流れてる。モブリなんて速攻で吸い込まれて空に投げ出されてもおかしくはないのでは？　って思うほどなんだけど、僧兵は案外大丈

夫そうだな。
僕は体を低く保って、クリエを片腕に抱えたまま飛び出した。
「引き返されてたまるか！！」
「凶悪犯が！　舐めるなよ！！」
向かいくる僕に向かって僧兵二人が、切っ先を光らせた突きを狙ってくる。受け止めるか凪払うか……僕はチラリと腕の中のクリエを見て、そのどれでもない判断をする。　僕は槍が届く直前にセラ・シルフィングを床に突き刺した。それを支えに体を宙に浮かせて。向かってきてた僧兵二人の背後を取る。そして空に成ってる鞘で、二人の足を払ってみた。
「「うお？」」
そんな間抜けな声を漏らした僧兵二人は、そのまま勢い良く、大穴へと吸い込まれて外へと放り出された。
「ふう」
一仕事終えた僕は、セラ・シルフィングを回収してホッと一息。
「あんた鬼ね」
すると冷めた視線を送ってそんな事を言うセラ。そしてみんながコクコク頷いてるし。だってだって、これはしょうがない事だよ。
「しょうがないで人を殺すなんて。まさに殺人鬼の言い分ね」
「うるせぇ！！　だってサン・ジェルクに戻る訳には行かないだろ。それに死んじゃないだろ。まだギリ湖の上だ。モブリの軽さならきっとそこまで飛ばされる」

僕は必死にそう祈るよ。きっと大丈夫さ。

「まあ確かにサン・ジェルクに戻るのはゴメンだけど……これじゃあ本当にハイジャック……するしかないかもね」

さっきまでの僕をからかい気味の顔からちょっと難しそうな表情にシフトしてそう呟くセラ。

「ハ、ハイジャックってマジっすかセラ様？　何もそこまでする必要はないんじゃ？　自分達を見つけた僧兵は排除したわけっすし」

目が点なノウイはその豆粒みたいな目を僅かに震わせてそんな事を言ってる。案外感情表現が豊かな目だな。それは不安とかを表してるのか？

てか、排除とかやめてほしい。まるで僕が率先してやったみたい。あれは止む終えなかったんだよ。

「いや、ハイジャックは必要かもだよやっぱり。あの爆発はこの船に乗り合わせた人たちには気づかれてるだろうし、もしも僕達が隠れ通せても、こんな爆発が起こった船を飛ばし続けると思うかい？

この穴が見つかったりしたら絶対に引き返す。普通にリアルで大穴あけたまま飛行機が飛び続けない様に、きっとそこら辺はＬＲＯだって同じだよ。

そして戻られたら、僕達にとっては終わりだ」

テッケンさんがハイジャックの必要性を丁寧に語ってくれた。まさにそれだよ。このままじゃどのみち、この飛空挺はサン・ジェルクへと引き返してしまうだろう。それを防ぐには最早、ハイジャックしか道がない。

「私が大穴開けちゃったからですね」

そんな風に呟いたシルクちゃん。悲しそうな彼女の顔を見るのはゴメンだから僕はすぐさまこう言った。

「「「違うよ（っすよ）」」」

何故か僕以外の声も混じってた。まあ男性陣全員が一斉に同じ事を言ってしまったみたいだね。なんか恥ずかしいな。

セラの白い目が痛々しいけど、シルクちゃんはそんな僕らに「ありがとう」と言ってくれるよ。やっぱりシルクちゃんは良い子だね。

まあ実際、僕たちは本心からそう言った。だってシルクちゃんが機転を利かせてくれなかったら、僕たち終わってたしな。ハイジャックなんて、サン・ジェルクに戻るよりは良いだろ。

止む終えない事ってのがあるんだ。セラは犯罪鬼の理論とか言ったけど、最後の一線を越えないようにして、実際は誰も一般人を傷つけない様にすれば問題ない。

ちゃんと後で誤解を解くためにさ。

「おい、複数の武器の音が聞こえるぞ。こっちに向かってきてる。僧兵も居るみたいだが、それだけじゃない。どうする？　本当にハイジャックするのか？」

むむ……僧兵の仲間が来るのは分かる。二人が戻ってこないのを不安に思っての行動だろう。だけどその他はなんだ？　好奇心旺盛な野次馬根性全快の奴らかな？

てか、何故に武器の音だよ。どう考えても、鍛冶屋の聴覚おかしいだろ。

「だから武器への愛が――」

「もう良いよそれは」

武器への愛だけで分かるかよ。それよりも問題はどうやってハイジャックを完遂するかだろ。中途半端にやったら、変な抵抗とかされるかもしれないよな。だってここはＬＲＯだ。普通に誰もが武器を持ってる。

ここら辺がリアルとは違うよな。誰もがハイジャック犯に一泡吹かせようと思えるんだからさ。リアルではハイジャック犯が絶対的に優勢だ。それはその手に武器を持ってるから。乗り合わせた乗客は下手に逆らうと命の危険を感じる。だから抵抗なんてしない。きっと楽に制圧出来るんだろう。

けどＬＲＯは実際命の危険は他の人達にはないし、正しい正義感を気持ちのままに実行しようとする人が出てきてもおかしくはない。そうなると色々と厄介だよね。

ＰＫ（プレイヤーキル）出来るし。思わぬ反撃は避けたい所。

「やっぱり最初に操舵室を押さえるのがベストよ。脅しを掛けてサン・ジェルクに戻らせないように出来るわ。プレイヤーは案外理由を話せば分かってくれるでしょう。問題は僧兵の奴らと乗り合わせたＮＰＣ。

ＮＰＣも脅すとして、僧兵に外部との通信をされると厄介よね。この国には飛空戦団があるし、最悪そんな物を出されたら、一巻の終わりよ」

おいおい、飛空戦団って……かっこいい。って思ってる場合じゃないか。確かにそんなの出てこられたら不味い。操舵室と共に、僧兵も制圧したほうが良さそうだ。でも確か僧兵ってこの飛空挺内にバラバラに配置されてた様な……

「僧兵が使う監視室っていうのがあります。きっとそこに通信手段

も有るはずですよ。後は操舵室にも有るはずですし、取り合えずこの二つを押さえましょう」

おお、なんだかシルクちゃんが犯罪に乗り気だ。以外だね。

「ちょっとワクワクしちゃってます。不謹慎かもしれないけど、こういう悪い事ってあんまりしたことなくて」

「はは、イメージ通りだねシルクちゃんって」

なんて可愛いんだ。まさに悪いことしなさそう。いや、出来なさそうな感じ。ホント見てて良い子ってのが分かるんだから相当だよ。それに比べて、底意地の悪さしか見えない女もいる――

「何よ？　私はそもそもシルク様の様には育てられて無いもの。てか、そんな場合じゃないでしょ？　取り合えずアンタはクリエを連れて操舵質を制圧しなさい！　派手に成りそうな僧兵側は私が請け負ってあげるわ」

なんか珍しくセラが厄介な方を請け負ってる。どんな裏が有るんだ？

「アンタは人の好意を疑う事しか出来ないの？　いいからさっさと行きなさい！　こっちは監視室を目指すわ」

「よし、なら僕もセラ君に付き合おう」

「自分も当然セラ様といくっすよ！」

テッケンさんとノウイが真っ先にセラへの同行を申し出る。

「あの、私も一緒の方が良いよねセラちゃん？　そっちが派手に成るのならヒーラーの存在は必要でしょ？」

シルクちゃんもそんな事を……ってそれじゃあこっちは眠った二人を抱えて鍛冶屋と？　なんかヤなんだけど。

「シルク様はスオウ側でお願いします。あの二人だけだと不安しかないので。大丈夫、このメンツならそうそう攻撃を貰ったりしませんよ」

そう言ってシルクちゃんにはやんわりとした口調でそう告げるセラ。悪かったな不安しか抱けない二人で！　でも実際助かった。確かに不安しか無かったからね。

「よし、じゃあそれぞれ健闘を祈ろうぜ。制圧出来たら、通信装置使って連絡取れるだろ」

「了解、モタモタしないでよスオウ」

「どっちがだ！」

そう言い合って僕たちはそれぞれ反対側に走り出す。僕たちはきっと上を目指す事になる。セラ達は下側。木造の床にコツコツした音を響かせて、僕達はハイジャックを目論む。『リア・レーゼ』に行き着くために！！

届かせる空への思い（後書き）

第二百八十話です。
え～とまず、すみませんでした。ようやくです。お待たせ？　しました！　てな訳で、今回はハイジャックを心に決めるまでです。
次回は直ぐに上げます。ではでは。

理解されないこと（前書き）

何とか飛空挺へ乗り込めた僕達。だけど直ぐにあの爆発を聞きつけた僧兵がやってきた。なんとか撃退したけど、問題はまだ山積み。僕達はハイジャックをするために二手に分かれて、それぞれの目的の場所を目指す。

理解されないこと

木造の飛空挺の中は、なにやらゴウゴウという機械音が響いてる。大穴は後ろに消えたから、これは風の音では無いのだ。
これだけ大きい船を浮かせる為の装置がきっとごっついんだろう。前に動力炉を見たけど、やっぱりそれなりにごつかったもんね。
これはきっとその音だ。僕達はセラ達と反対側に走り、プレイヤーが集う一番広い空間を目指してる。実際あんまり人に見られたく無いけどさ、上に行くにはそこを通らないといけないんだ。

「他のルートが有るとかは？」
「無いですね。飛空挺の構造はどれも同じですから、何度も使用してれば自然と覚えれますよ。まあスオウ君はこれで二回目だし、覚えてなくて当然です。それにあの時は色々と大変でしたしね」
「まあ確かに……」

初めて乗った飛空挺で墜落体験したもんね。飛空挺には感動してたけど、内部構造覚えるまでには行かなかったよな。
三人で足音を響かせて走る。前方ではピクが道を案内する様に優雅に飛んでるよ。そんな後ろ姿を通路に点在する淡いオレンジ色の光で追っている。
「思ったけどさ、ピクだってこれで二回目くらいだよね飛空挺？なのに構造をちゃんと把握してるの？」
僕は思い浮かんだ疑問をシルクちゃんにぶつけてみる。すると彼女は可愛い笑顔を向けてこう言った。

「勿論です。ピクはどうやら、マスターである私の記憶？　データでしょうか？　それを共有出来るみたいですね。だから私が知ってることは大抵あの子も分かってる筈です。勿論ＬＲＯの事に限ると思いますけど」
「へ～それは便利だね」

記憶の共有って……実際どうやってるんだろ？　記憶って言うかデータとシルクちゃんも言い直したし、実際はシルクちゃん自身の記憶を共有してる訳じゃなく、ＬＲＯが記憶してるシルクちゃんの行動の記録とかなのかも知れない。
だからデータ化出来てる所をピクは知ってる。実際シルクちゃんが覚えてなくても、ピクはデータを取得して飛空挺の内部構造を把握とかしてたのかもね。ピク自身にデバイスみたいな機能が有るのかも。

「確かにそう考える方が自然かもですね。ピクは時々空を一定時間見つめる癖みたいな物があるし、もしかしたらその時に色々更新してるのかも」

そんな癖が有ったんだ。流石シルクちゃんはよく見てるね。

「そんな機能が……一度ピクを良く見せて貰って良いかシルク？」

僕達の会話を聞いてた鍛冶屋が何やら興味深げにピクを見つめてそんな事を言う。

「言っとくけど鍛冶屋さん。ピクは武器じゃないですよ。私の友達です」
「分かってる。だが実はずっとウズウズしてたんだ。我慢してたんだ。考えてくれ、サポートモンスターは今はまだこのピクだけ。

そんな貴重な存在が目の前に居るんだぞ。武器とかよりも一人のプレイヤーとして気になるじゃないか。純粋な興味なんだよシルク」

なんだか随分真摯にそう言う鍛冶屋。こいつが武器以外に興味を持つなんて珍しい。まあ確かにピクの事は色々と興味深いのは同意だけどね。まさに言った通りピクはまだこのＬＲＯに一体しかいないサポートモンスターだ。

実際他のプレイヤーからも興味を注がれてる筈。鍛冶屋じゃないけど、色々とやりたい事はある。特にモフモフとか――モフモフとか。ピクの羽はとっても気持ち良いんだよ。

しかも胴体部分はつるつるピカピカで桜色の鉱石で出来てるみたいな感じ。それにこの時期には嬉しいヒンヤリ仕様ときてる。ピクって最高だね。

「まあ、切り開く訳じゃないなら良いですよ」

「切り開くって……どんな印象を俺はもたれてるんだ？」

笑顔でそんな事を言うシルクちゃんも良い。まあ冗談だと思うけど。でも鍛冶屋の武器に対する執着見てると、実際そんな心配もしちゃうかもね。

なんたって武器の擦れる音を判別する奴だからな。僕はもしかしたらそんなスキルがあるんじゃんかと疑ってるよ。

「鍛冶屋君の印象はまさにそう言う印象としか言いようがないかな？　ちょっと妖しい感じがあるし……私は分かってるけど、ピクはちょっと苦手にしてるかもです。

だからあんまりイヤがる事はしないでくださいね」

「……そう言えばあんまり俺には飛んでこないよなピクは。スオウや他の奴らには普通に懐いてるのに……」

そんな事を呟いてちょっと肩を落とす鍛冶屋。案外可愛い物も好きだったのかこいつ？　いや、懐かれないからあんまり触れられない事への不満か。そうだろ。

「ふっ、武器になら誰よりも愛されてるんだがな」

なんかキザッたくそんな事を言う鍛冶屋。こいつは気付いてないだろうけど、きっとそんなキモい所をピクも感じ取ってるんだと僕は思う。

会話をしながら進んでると、ようやく見えてきた上に続く階段。これを上れば直ぐそこに大広間の扉が有るはずだ。

「うえ！？」

階段に足を掛けた所でそんな声が出た僕。なんかピクが大きく翼を広げて勢いを殺してると思ったら、こういう事か。階段の上にはなんかプレイヤーがいっぱいだ。

ピクは上れないから僕の肩に降りてくる。てか、一体何が？　そんな事を思ってると、プレイヤーの中に僧兵の姿が辛うじて見えた。その僧兵へみなさん詰め寄ってる感じだな。

「落ち着いてください！　今さっきの爆発の原因を調査中ですから！」

そんな張り上げる声が聞こえる。どう考えても原因は僕達だな。

「もしかしてまたモンスターが攻めてきたとかじゃないのか？　少し前にそんな事があったって出回ったぞ。協力してやるよ。イベントは大歓迎だ！」

「俺たちだって！！」

「私たちも！！」

そんな言葉も続けざまに聞こえてくる。なるほど、みなさん爆発に怯えてる訳じゃなくて、何かのイベントだと思って駆け出そうとしてるわけね。

てか、前にあったって言う飛空挺でのイベントって、それも僕達のせいだよね？　でも空の上だってのにみんなやる気有りすぎだろ。そんなにイベントに飢えてるのか？

「予想外のイベントや出来事、そう言うのもＬＲＯの楽しみだからな。それに告知されずに始まる物は、貴重なアイテムがあったりするし、何も無くてもその場に居合わせただけで普通はあんな風にテンション上がる。

まあド派手なイベントに事欠かないお前には分からないかもだがな」

嫌味かそれは鍛冶屋の野郎。僕だって出来るものなら一息尽きたいよ。もっとのほほんとしたいとも思う。だけど向こうからやってくるんだもん。次から次へと！！

文句言われてもどうしよう無いっての。

「ふふ、ＬＲＯでは恐怖心よりも好奇心の方がやっぱり大きく成るんですよ。なんたって普通は本当に死ぬわけ無いですからね。リスクはあるけど、目の前にある何かにリアルよりは気軽に首を突っ込める。そこもＬＲＯの良いところですよ。

と言うかＬＲＯでは楽しみを探すことに枷がないですからね」

枷がない……か。確かにＬＲＯは進めば進むほど面白い物が有るかもね。飽きる要素ないし。世界は踏破出来ないほどに広い。リアルには無い魔法とかも有るし、やろうと思えば何だって出来る。

そりゃあブームに成るよね。ブームというか社会現象か。きっとこの長期休暇に併せて買った人は僕以外でも一杯居るだろう。

「まあ取り合えずさっさと進みましょう。僧兵がモミクチャにされて僕達に気付かれない今の内に」

僕はそう言って大量の人で溢れてる階上へ。プレイヤーを押し退けて前へ前へ。ここを通らないと甲板に出れないんだからな。

だけど僕の考えは甘かった。下から来た僕達に気付くのは別に僧兵じゃなくてもよかったんだ。一人のプレイヤーが僕達に気付くと、それが連鎖的に広がってモミクチャにされるのは今度は僕達。

「下から来たのかあんた達？　何があったんだ一体？　モンスター共の襲撃か？」

「「「「なぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁなぁ」」」」

もの凄い勢い。何という暑苦しさ。バサバサとさっさと飛んで逃げ出したピク。するとそんな珍しい生き物に視線が向かうプレイヤー達。これはチャンスだ！

僕達はこの隙に強引に人の間を進む……筈だったんだけど、僕は途中であることに気付いて引き返した。だって僕や鍛冶屋は強引に進めるけど、シルクちゃんはそうは行かなかったみたいだ。

元々あんまり自分を主張するタイプの子じゃないから、強引に人の間とか進む事は出来ない用だった。まあ色々と損しそうだけど、シルクちゃんらしいよね。

オロオロしてる所見ちゃったら、自分達だけで先に行くなんて出来ないだろ。僕は人混みから手を伸ばしてシルクちゃんの手を取る。

「大丈夫？」

「スオウ君！　ごめんなさい……」

ホッとしたような顔の後に、直ぐに申し訳なさそうに頭を下げるシルクちゃん。するとその頭に丁度ピクが止まり木感覚で不時着する。

「わっ、ちょっとピク！！」

「クピ～～」

頭に不時着されたシルクちゃんを見て、周りの人たちが「オオ～」とか声を上げてる。シルクちゃんは恥ずかしいのか顔が真っ赤に成っていくよ。

「それってサポートモンスター？」

誰かがポツリとそんな事を言った。すると更に誰かが「うおおおお！？　サポートモンスター！？」とか興奮気味の声を上げる。再び勢い良く詰め寄ってくるプレイヤー達。シルクちゃんは完全に怖がってるよ。

「おま……えら……そろそろ……いい加減にしろ！！」

僕はたまらずセラ・シルフィングを抜いた。それと同時に周りにいたプレイヤー共を吹き飛ばす。

「イテテテテ……テメー」

「なんだよ？　怯えてるだろ。グイグイ来やがって、マナーって奴を教えてやろうか？」

僕がキレ気味に脅しを掛けてると、クイクイと服を引っ張られる感覚が。顔を向けるとシルクちゃんが顔を寄せて小声で囁いてくる。

「スオウ君、あんまり挑発するような事は……それに目立ってますよ」

目立ってるって、ピクの方がよっぽど目立ってる。それを頭に乗っけてるシルクちゃんもまた目立ってる……てか既に手遅れだろ。

「お前は……どこかで見たような……ハッ！」

僧兵がそんな風に呟いて何かに気付いた。そして向けられる背中の槍。ほら、手遅れだった。

「なるほど、あの爆発はお前達の仕業か！　サン・ジェルクから逃げ出す腹みたいだが、大人しく捕まって貰おうか！」

鋭い切っ先をこちらに向けてそう宣言する僧兵。シルクちゃんは僕の後ろで「どうしましょう……」と困った感じ。そして周りのプレイヤー達は「どういうことだ？」と頭に疑問符浮かべてる。

「つまりは、アイツ等があの爆発の原因で、僧兵に追われてる奴らって事じゃないか？　子供を誘拐して逃亡中の極悪人に見えるぞ」

「確かに、なんかモブリの子供背負ってるな。それになんか指名手配されてた様な……」

なんだか不穏な空気が蔓延していく感じだ。空気がピリピリし出すのを感じる。敵意って奴が向けられてるからか？

極悪人ね。僕達からしたらよっぽど元老院の方がそうなんだけど、それを他のプレイヤーに分かって貰うのは難しいのかな。

ここはさっさとこの目の前の僧兵を倒してここを抜けた方が良さそうな雰囲気。僕は後ろのシルクちゃんにこういうよ。

「シルクちゃん、僕が奴に切りかかるからその間にここを駆け抜けるんだ。なんか雲行き怪しいから、そうするのが良いと思う」
「それは納得ですけど、僧兵に切りかかったら周りのプレイヤーが立ち塞がらないですか？」

まあその可能性は十分あるね。だけどこの雰囲気からしてそれは時間の問題だろ。まだ誰も武器を抜かないのは迷ってるから。そして最初に襲いかかるのはリスクがあるしね。
だけど誰かがたがを外せば、後はみんな一斉に武器を抜く可能性はある。そうなってからじゃ、数で劣って庇う奴もいる僕達は不利だ。
ここはプレイヤーが迷ってる内に、さっさと目の前の僧兵を吹き飛ばして抜けるのが良策だろ。てかそれしかない。急がないとセラたちは既に僧兵達の部屋にたどり着いてるかも知れないしな。
僕は片方に持ったセラ・シルフィングに力を込める。

「僕が切りかかったと同時に走るんだ」
「分かりました」

シルクちゃんの同意の言葉を受け取って、僕は一足でモブリの眼前に迫った。そして小さいモブリに確実に当てる為に、下から上へとセラ・シルフィングを振りかぶる。
僧兵はそんな僕の攻撃を辛うじて槍で防いだ様だけど、狙いは達成できたよ。小さなモブリは僕の攻撃で体を浮かして吹き飛んだんだ。今の内……そう思うよりも早く動いてくれてたシルクちゃん。だけどどうやら、色々と考えてたのはどうやら僕たちだけじゃなかった様だ。
シルクちゃんが僕を追い抜いて行こうと横を通ったまさにその時だ。足下に現れた魔法陣が僕とシルクちゃんをその範囲に閉じこめ

た。

「なんだこれ！？」

「これは設置型の罠です。どうやらあの僧兵が自身の足下に仕掛けてたみたいですね」

冷静にそう告げてくれるシルクちゃん。だけどそんな冷静に言ってる場合じゃない。僕たち見事にはめられちゃってるよ。

「ふはははは、我らモブリは崇高な魔法種族だ。貴様等の様な野蛮な肉弾戦を好んでやるわけがない。貴様等にはしばらくそこで大人しくしてて貰おうか。犯罪者をのうのうと闊歩させる訳には行かない」

そう言って僧兵が槍を背中に戻しながらそんな事を言う。元々こいつこれが狙いだったみたいだな。僕たちがコソコソ話してる間にでも仕掛けられたか。それに槍を向けておいて本命はこっちとか……この僧兵、かなり出来るな。

なんでこんな下っ端が尽きそうな飛空挺勤務なんだよ。

「くっそ！」

僕はセラ・シルフィングで魔法陣から浮かび上がる光を叩く。だけどダメみたい。物理攻撃は通らない仕様か？

「内側から壊すのはちょっと難しいですよ。こう言うのはハマったらどうにも出来ない事が多いですからね。考えられる策は、圧倒的な力で押し切るか、魔法自体を魔法で相殺させるか、他の誰かに術者を倒して貰うかです」

なるほど、圧倒的な力ね。イクシードでなら壊せるかもって事か。

シルクちゃんの魔法はどうなんだろう？

「試してみたいんですけど、どうやら詠唱は出来ないみたいです。やろうとすると声が出なくなります。多分この魔法の効果なんでしょう」

なんと厄介な。でも破られない様に対策をこうじるのは普通か。向こうは魔法の国の住人だしな。自分達の最大のウリを易々と壊される訳には行かないよな。

「この結界は易々と破られはしないさ。さて、取り合えずサン・ジェルクに引き返す指示を――ん？」

不意に途切れた言葉。すると僧兵に掛かる影。振り返るとそこには大鎚を振りかぶろうとしてるプレイヤーが一人。それは言わずもがな鍛冶屋じゃないか！

「フン！！！」

飛空挺全体に伝わったかのような大きな衝撃。それと共に僕とシルクちゃんを囲んでた魔法陣が消えていく。どうやら倒せたみたいだな。

「助かったよ鍛冶屋。てか一撃とかスゴいな」

僕がそう言うと、鍛冶屋は振り卸してた大鎚を持ち上げてアイテム欄へ戻した。デカいからかどうか知らないけど、こいつは常時表示状態にしてないんだよね。まあだからこそミセス・アンダーソンを背負える訳だけどさ。

大鎚の下にはピクピクしてる僧兵が哀れに突っ伏してる。だけど

どうやらＨＰが完全に無くなった訳じゃないようだ。それなのに魔法が解けるってどういう事だ？

「昏倒してるだろソイツ。鎚やハンマーの様な打撃系武器の効果だ。上手くやればこういう風に相手を気絶させる事が出来る。まあ今回は不意打ちだから出やすかったな」

なるほど倒してはないけど、術者が気絶したから魔法も解けたと言うことか。やるじゃないか鍛冶屋。

「いいからさっさと行くぞ。その内、操舵室の警備を強化されたりしたら厄介だからな」

「それもそうだな」

結構時間食ったし、実際この状況がどこから操舵室に伝わるかも知れない。この飛空挺の範囲なら、どうやら手軽な通信手段を持ってる様だし、そもそも爆発起こった時点で、反転したっておかしくはない。

最初にあの穴で出会った僧兵が様子見に使わされた奴らだとしたら、戻ってこない事に不信感を覚えて、なんの報告無かったとしても、安全上サン・ジェルクに引き返す判断もあり得るかも知れない。

そんな決定を下される前に操舵室を占拠しないと。シルクちゃんも鍛冶屋にお礼を言って、僕たちは大扉の向こう側へ行こうとする。だけどその時、プレイヤーの一人に呼び止められた。

「おい！　ちょっと待てよ。お前達犯罪者なんだよな？　これ自体をイベントか何かだと考えて良いのか？　そしたら俺達は、お前達を行かせない様にした方が正解か？」

プレイヤーの一人が武器に手をかけようとしながらそう言う。強い眼差しを持った目だ。他の人達もこちらを同じ様な目で見てる。

まるで僕たちが悪者……って今は悪者なんだっけ？　ハイジャックしようとしてるんだし悪者だよな。でもここでこの人達と戦うのはちょっと不味い。

まず不利だし、僕たちの狙いはここじゃないんだ。無視しようと思ったけど、シルクちゃんは振り返って頭を下げる。

「ごめんなさい！　みなさんは納得出来ないでしょうけど、私達にはやるべきことがあります。これは私達のイベントなので出来れば見て見ぬ振りをしてください。

迷惑は掛けません。私達はただ、『リア・レーゼ』に行きたいだけです。サン・ジェルクには理由があってどうしても引き返す訳には行かないんです！」

シルクちゃんの言葉に少々頭を抱えるプレイヤー方々。シルクちゃんはとっても真摯に頭を下げてるからね。

「理由か……じゃあさ、そこの奴が指名手配受けてる奴ってのは本当？　それは認めるか？」

そう言われて僕に視線が集まる。シルクちゃんは「はい」と答えたよ。

「だけどそれもみなさんには関係無い事のはずです。このイベントはとっても大切なんです。だから！」

「そうだね、大切なのは分かるよ。だって大々的にクエストとしてそこの奴の捕獲が確かあったから。報酬も確かなかなかのレアアイテムだった筈――だ！」

その瞬間、そのプレイヤーが小刀を投げた。狙いは勿論僕。

「お生憎様だけどさ、クエストとして出てる以上、見逃す訳にはいかないな！　目の前にお宝があるのに、わざわざ素通りするバカはいないだろ！？」

僕は向かって来た小刀を弾く。こいつ確証がほしかっただけみたいだな。僕がそのクエストに指定されてるプレイヤーかどうか。

そしてその確信を得た以上は、さっき言った通りって事だろう。確かにコイツに……いやコイツ等に僕達のイベントクエストは関係ない。だけど関係のある事柄でコイツ等は動き出した。

これも元老院側の策略か？　ほんとやることがえげつない奴らだな。

「ま、待ってください！　私達がやってることは本当にとっても大切な事なんです！」

「そうかもね。だけど君が言ったんだよ。僕達にはそんなの関係ないってね！　関係あるのはクエストには彼が指名手配されてるって事！　今や彼はＬＲＯ中から狙われてもおかしくないさ！！」

僕に向かいくるプレイヤーの前に立ったシルクちゃん。最後の望みを掛けて紡いだ言葉も届かずにソイツはシルクちゃんをかわして武器を抜く。

僕の剣と奴の剣がぶつかり合う。片腕じゃどうもやりづらいな。僕は蹴りを腹に決めてソイツを突き放す。

「やるじゃないか犯罪者。大人しく俺達の糧になれよ。何をして指名手配なんか受けたか知らないけど、俺達プレイヤーにとって大事なのは、クエストになってるって事だ！！」

その言葉を聞いて次々に武器を抜くプレイヤーの面々。これはもう戦闘回避は無理だと思う。淡いランプの光のほかに、様々な物騒

な光が輝きだしてる。

理解されないこと（後書き）

第二百八十一話です。

こんばんは！　ついさっきに続いて連続投稿です。プレイヤーがクエストをやる理由。それはスオウ達の問題なんて関係ない！　って訳で、大ピンチです。

でもこの続きは次回で。次回は木曜日にあげますね。ではでは。

目的のハイジャック（前書き）

立ちふさがるプレイヤー。彼らを防ぐために壁になる事を申し出る鍛冶屋。そして僕らは別のアプローチで甲板を目指す事に。一刻も早くハイジャックをやる為には、集団なんか選んじゃいられないのだ。

目的のハイジャック

優雅にその姿を空へと上らせた大きな船。複数のプロペラが回ってる。だけどその実、船の所々から光る青い光がこの飛空挺の動力で空へ浮かべる為の役目を担ってたりしてるのを僕は知ってるよ。

僕達はそんな木造建築の海の上にありそうな船の中にいる。そして僕達だけじゃないプレイヤーの面々。彼らにだって目的があって、きっとやるべき事もあるんだろう。

実際クエストやミッションはＬＲＯでのやるべき事。やらなくても良いんだけど、普通にＬＲＯを楽しんでる人達はその為にだってやるはずだ。

そして今、彼らが言うには僕もまたクエストの対象らしい。きっと元老院が仕組んだ卑劣な罠。だけど彼らにはそんな事関係ない。

彼らはクエストとしてゲームの一イベントとして僕達の前に好奇心で立ち塞がる。各の武器が淡いランプに照らされて煌めいてる。これはどうやら避けられない戦いみたいだ。

僕と鍛冶屋、そしてシルクちゃんも数十人居るプレイヤーを見据える。

「どうする？」

「どうするだと？　蹴散らすしかないだろう。捕まるわけにはいかんだろう」

僕の言葉に、鍛冶屋がそう言う。コイツいつの間にか背中に背負ってた筈のミセス・アンダーソンを、括りつけてる感じにして両手を空かしてる。

まあ、鍛冶屋の武器の大鎚は片手で扱える代物じゃないから何だろうけど、ある意味やる気満々だな。

「でも待ってください。ここでこれ以上時間を割くわけには行かないですよ。それに本格的な戦闘なんて、どう考えても不味いです。目的を見失ったらダメです。目の前の事に流されず、私達は私達のやるべき事を！」

シルクちゃんは力強くそう言う。勿論それも分かるんだけど……

「コイツ等、易々と見逃してくれそうにないよ」

「だけどまともにぶつかるなんて……ここでぶつかり合ったら、それこそ元老院の思う壺です。どうにかしてここを切り抜けないと」

戦わずに？　それは流石にもう無理だろ。出来ればそうしたいけど、あちらさんはこちらに飛びかかる五秒前位だよ。

そうこうしていると、いきなり足下がフラツいた。船体が揺れてる？　いや、これは――

「方向転換してるのか！？」

「まさか、サン・ジェルクに戻る気なんじゃ？」

おいおいこれは不味いぞ。

「くっ、そこをどけええええ！！！」

僕はフラツいてる奴らに突っ込む。それに続いて鍛冶屋も後ろから来た。二人しての突撃。だけどそれは無謀だったのかも知れない。

向かい来る僕達に向けて放たれた魔法の光。それを交わす為に、僕と鍛冶屋は左右に分かれた。そして一人ずつにしてから一気に攻め込まれる。

近接と魔法の打ち込み。背中に居るクリエを庇いながら、しかも剣一つじゃ防御で精一杯。武器と武器とがぶつかり合う音がこの空

間に響いてる。
「ははははは！　最初の威勢はどうしたよ！？　ここを通りたいんだろ？　もっと気張って見せろ！」
そんな事を言いながら、プレイヤーの一人の剣が僕に迫る。ヤバい、これは避けれないぞ。既に別プレイヤーの攻撃を防いでるから空きが無い。一撃を食らう覚悟。それを決めた時、だけど予想外な事が起きた。
「邪魔するな！！」
「ぐは！？」
そんな声と共に、更に横から入って来た誰かによってさっきのプレイヤーが吹き飛ばされた。え？　一体何が？　そう思ったけど取り合えずこの瞬間僕は距離を取る。そして苦戦してた鍛冶屋に割り込んで、二人してシルクちゃんの場所まで下がる。
どうやらシルクちゃんはピクと共に障壁を張ってたみたいだな。
「何するんだテメェ！！」
「アイツを捕まえるのは俺達だ！」
前方でそうやってモメてるのはさっきぶつかりあった奴ら。なんか手柄の取り合いでもしてるようだな。
「取り合いじゃなくて実際そうなんだよ。人間の醜い欲望を丸出しにしてるんだ」
「どういう事だよ？　アイツ等の目的は一緒だろ」
僕がそう言うと、後ろのシルクちゃんが教えてくれるよ。

「確かに彼らの目的は一緒です。クエストとして指名手配されてるスオウ君の確保。だけど目的が同じだからって彼らは仲間じゃないんです。

考えてもみてください。お金にしてもアイテムにしても、それが全員に行き渡ると思いますか？　普通の戦闘でも人数分のアイテムが出るわけじゃないから、運でランダムに振り分けられるんですよ。

それを納得できるのは、元がそれ前提でパーティを組むから。だけど彼らは誰もがその報酬を受け取りたいと思って戦闘を開始したんです」

ようは誰も彼も譲る気はないって事か？

「まあそう言う事になりますね。元がリア・レーゼに行くための船だし、知り合いと乗り合わせた人もきっと少ない。

自分の腕に自信がある人は個人で攻めて来るだろうし、通常の五人パーテェならクエストの報酬も五分の一の確率になります。

だから知り合いだけのパーティか、速攻の中途半端なパーティしか出来なくて、残りは個人で報酬を狙う人達に分かれてるんでしょう。

だから彼らに連携とか協力は無いんです。たとえ目的は同じでも、自分の為にを誰もが思えば、そこに繋がりなんて生まれない」

「確かに、それはシルクちゃんの言うとおりだね。ならそこら辺にここを抜ける光明がありそうだね」

だけど問題もあるよな。コイツ等は僕を倒す直前になると手柄の奪い合いを始める様だけどさ、基本獲物を逃がしたくないと思う意識は大前提として一つなんだ。

だからここを抜けるのが難しい。ずっといがみ合ってれば楽なのに……

「とにかくさっさとここを抜ける。出ないと、モタモタしてたらサン・ジェルクにとんぼ返りする羽目になる。何か良い案ある？」

僕は他二人に託す。だって今の僕は単純に戦闘力半減してるんだ。それにセラ・シルフィングを使うことしか脳がないし。そこで半減しちゃってたら、不味いのは自分でもわかってるんだ。

だから二人の経験と僕にはない豊富なスキルに期待だよ。

「そうですね。取り合えず全員を一斉に捕まえる事が出来れば良いんですけど。それならその間にここを抜けれます」

確かにそれが出来れば良いんだけど……逆にちょっとこれはあいつ等の連携が無いのがネックだよ。動きが読めないし、そもそも後衛の奴らは滅多に前には来ないしな。後衛でしかも最後の一撃を狙って詠唱準備してる奴も居るみたいだし……そう言う奴はきっと意地でも動かないだろう。

この場の全員を一斉に捕まえるのは実質不可能と考えた方が良い。そして同時に一斉にケチらすのもちょっと無理あるよな。

余りにも強力な攻撃したら飛空挺がどうなるかわかんない。普通はきっと町中と同じで傷つかない仕様の筈何だろうけど、前の時に墜ちてるし……それにやっぱり許容範囲以上の攻撃には耐えられないだろう。

町中でもそうだったしな。てか既に、鍛冶屋の大鎚の攻撃で所々凹んでるし。あんまりダメージ与える攻撃……特にイクシードとか使えない。

そうなると僕って結構役立たず。自分で言うのも何だけど、きっとそうだと思うんだよね。

「ここを抜けるのは難しい。それは同意だな。そこで思うんだが、

本当にここを抜けるだけが上へ行く道か？」

なんだか変な事を言い出した鍛冶屋。どう言うことだよ。ここ以外に上へ行く道が無いのを良く知ってるはずだろ？　お前もシルクちゃんも。

「中から行く分にはだろ。危険を承知なら外からだって登れるだろ」

「！！　それってつまり、外の壁づたいに上へいけって事か」

確かに外から無理矢理入る事も出来たんだから、それが出来ない事は無いのかも。でも……それはかなりの勇気が必要だよな。

映画じゃあるまいし、墜ちたら一巻の終わり。特に僕の場合洒落に成らない。

「じゃあどうする？　ここであいつ等とドンパチやってる間にサン・ジェルクに戻られて更に僧兵に乗り込んで来られるのとどっちが良いんだよ？」

「それは……」

確かにここでドンパチをやってたんじゃいつ上へ行けるのか目処も立たないか。リスクなんていつだってある。死と隣合わせなのもいつもの事と思えばそうだし、シルクちゃんも言ったよな。目的を見失うなって。

「それは責任転嫁ですよ。私はいつだって命を懸ける事に賛成なんかしてません！」

「だけど僕の場合、いつだって命懸けだからね。モンスターが居るこの世界で、亡くしたら終わりのこの命は一つだ。

後悔をしないために、目的を見失わないってだけ。それにピクが居れば万一の保険には成るしね」

つまりは墜ちたときはピク頼みって事で。そもそもピクに運んで貰う事は出来ないのだろうか？　シルクちゃんはそれやってたよね？

「女の子は大丈夫と思いますけど、重量制限があるんですよね。今のピクは五十キロを越える物や人は運べません」

「五十キロか……」

確かにそれはちょっと無理っぽいな。てかシルクちゃんって五十キロも無いの？　超軽いね。

「それじゃあ外を伝う覚悟は出来たかスオウ？」

鍛冶屋のそんな声に、僕は「それしかないのなら」と答える。そろそろプレイヤー達のゴタゴタも収まりそうだし、そうなったら戦闘は再開される。

その前に動き出さないとな。

「ならさっさと行け、コイツを持ってな」

そう言って鍛冶屋は、背中に縛ってたミセス・アンダーソンをコチラに投げる。扱い酷すぎだろ。だけどさっさといけって……まさかコイツ。

「お前、何する気だ？」

「追われたら面倒だろ？　引き受けてやるって言ってるんだ。だからさっさと行け」

なんか随分格好良い事を言うじゃないか鍛冶屋の奴。だけど流石にあの人数相手にしたらただじゃ済まないぞ。

「それはどうにでも成るさ。あいつ等の狙いはお前だ。獲物が消えれば、俺が襲われる事は無くなる。そうだろ？」
「そう……かな？」

その理論にはちょっと首を傾げるぞ。だけどそうこうしてる内に前方では「じゃあやったもん勝ちだからな。文句付けるんじゃねーぞ！」とか言ってコチラに視線が集中する。
そして一斉に襲い来るプレイヤー達。その武器には様々な色の帯が纏ってる。スキルを宿した証しのその光が僕へと一斉に向けられる。

「さっさと行け！！」

そう言いつつ鍛冶屋は宙空に何かを出す。それは鉱石か？　向かい来るプレイヤーの数々、その攻撃がコチラに届く前に、その鉱石が僕達と奴らの間の壁となる。
壁の向こうから聞こえる甲高い音や、爆発音。どうやら向かってきてたプレイヤーの攻撃がこの壁の向こうで炸裂してるみたいだな。
僕は一瞬で天井や、壁まで延び早業に感心だよ。

「凄いなそれ。鉱石操作って奴か」

久々に見た。確か前に麒麟との戦いで見たとき以来。でもあの時は地面に手を付いて、まるで地面を操ってる様だったけど……

「飛空挺は木造だろ。俺たちスレイプルに木を操作する能力はない。良いからさっさと行けよ。あれだけの鉱石じゃ、硬度が足りない。直に破られる」

まあ確か見えた鉱石は四つ位だったな。それをこの場所の天井やら壁やらまで伸ばしてる訳だから、確かに強度は心許ないかもしれない。
すでに所々からピキパキという嫌な音も聞こえてきてる。
「それならお前も今の内に僕達と来た方が良いんじゃないか？　あの人数を相手にするのは無謀だろ？」
僕がそういうと、鍛冶屋は乾いた声して笑ってこういう。
「スレイプルが戦闘型じゃ無いからと舐めるなよ。俺たちスレイプルには俺たちなりの戦い方があるんだよ。それに甲板に先回りされたらどうする。結局誰かがここで奴らの相手をしなきゃだろ」
「……いいんだな？」
「信じろよ。仲間だろ？」
それは予想外の言葉だったと思う。だって鍛冶屋が仲間とか言うとは。こいつ今までそんな事一度だって言わなかっただろ。でもその言葉で確信したよ。
「わかった。直ぐにこの船を乗っ取って助けに戻ってやるよ」
「はは、悪者の台詞なのかどうかわかりづらい発言だなそれは」
うるさい。悪いことをしようとしてる良い人集団が僕らだろうが。てな訳で、ここは鍛冶屋に任せる事に。僕とシルクちゃんは上がった階段を下りて丁度良さげな部屋へと入る。
「大丈夫かな？　鍛冶屋君」
心配気な顔で斜め上の天井を見つめるシルクちゃん。まあ実際、

大丈夫かどうかは怪しいけど……でも――

「僕は信じるよ。それに心配なら急げば良いだけだ」

「そうですね！」

僕はいったんクリエとミセス・アンダーソンをベットに寝かせて、窓へと近づく。軽く二・三度小突いて見て、次におもいっきり叩く。

だけど飛空挺の丸い窓は案外頑丈だった。てかやっぱり普通は壊せない仕様に成ってるから、ただのパンチ程度じゃビクともしない。

やっぱりセラ・シルフィングでないと駄目だな。僕は腰から二対の剣を抜き、その刀身に青い雷撃を纏わせる。そして小さな窓に向かってその二つの剣を真っ直ぐに突き立てる。

窓にぶつかった所で雷撃がスパークして、青い光がこの部屋一杯に広がる。だけどまだ突き抜けてもいない。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

僕は声を張り上げながらセラ・シルフィングを少しずつだけど押し込んでいく。ぶっ壊さないと先には進めないだ。だから意地でもここは破壊する！　溢れ出す青の雷。それが少し刀身自体に帯電していく。溢れでてたそれが、刀身の周りにもう一つの刃を形作りそして――その刃がシステムで守られていた薄い窓を突き破る。

そしてその瞬間、僕は両のセラ・シルフィングを左右に凪いで穴を広げる。一回システムを打ち破ったからか、窓周辺も結構すんなり切れた。

まあ勿論そんな大きな穴はあけてないよ。せいぜい人が一人余裕で通れる位の大きさだ。

「ふう」

「やりましたねスオウ君」

親指を立ててそう言ってくれるシルクちゃん。だけど思うけど、これでこの船には穴が二つに……極力小さくしたけど、マジ危ない事やってるよな僕ら。大丈夫なのかな？

「きっと大丈夫ですよ。それよりも急ぎましょう。取り合えずスオウ君は壁伝いに頑張ってください。私は先に上の様子を確かめますから。

安全ならピクにクリエちゃんと、ミセス・アンダーソンを運ばせます」

「分かった。頼むよシルクちゃん」

僕はセラ・シルフィングを鞘に戻し、早速穴の外へ……と思ったけどやっぱり覗き込むと相当怖いぞ。ちょっと僕がビビってると、シルクちゃんがピクと共に大空へと出た。いいな～スッゴい優雅にピクは飛んでるよ。

僕もピクと飛んだことあるんだけど。よく考えたらどれもこれも直ぐに地面に付く状況だったんだ。てか上に上がって貰った事がないな。それは重量制限のせいだったのね。

ピクを目で追ってると、大空から簡単に甲板へ――って、おお！？　僕は思わず身を乗り出してしまった。あれは……まさか……その……水玉の……あれで……ラッキーとか思った。すると甲板から顔を出したシルクちゃんが「大丈夫、ＯＫだよ～」と無邪気な顔で言ってくる。なんだかいたたまれない気分になるな。なんて良い子なんだろう。そして自分の罪深さを思い知る。僕はあんな良い子のパンツを……

（くっ、心の奥に閉まっておこう。大切に大切に）

僕は静かに心の大切な場所にさっきの光景を保存しつつ、ちいさ

なとっかかりに足を掛ける。おお〜〜超怖い。はっきり言って、モンスターと対峙するより百倍位怖いぞ。
風も強くて体持ってかれそうだし、足掛ける所も掴む所も辛うじて過ぎる。だけど覚悟決めなきゃ何だよね。それにさっき良いもの見れたから、元気は一杯だ。
僕は覚悟を決めて一個上の窓へとジャンプする。出っ張りに手を掛けて足を掛けれる場所を探す。そんな僕の側を颯爽とピクが飛んで行く。まずはクリエを咥えて再び甲板へ。
何という早さ。僕はようやく取っかかりを見つけて、更なる上を見据える。ジャンプして届くかな？ここから上へと成ると距離がある上に窓も無いんだよね。きっとここら辺があの大広間部分だからだろうな。
一飛びで甲板に行けるかは微妙な所だよな。上へとクリエを届けたピクが再び下へ。今度はミセス・アンダーソンを咥えて上へ行くんだろうな。
僕も急がないと行けない。こうなったらジャンプじゃなく、斜めに走る方法はどうだろうか？　案外出来そうな気がするんだけどな。
まあやってみるしかない。僕は覚悟を決めて一回ジャンプした後に、壁を斜めに走る。

「うおおおりゃあああああああああ！！」

もの凄く必死で足を動かす。船の形をした船体を走り走り、僕は甲板が見えた時点で再度ジャンプして、甲板へと身を投げた。ゴロゴロと甲板を転がる僕。

「あっぶねぇえええ！　マジで死ぬかと思った！」

心臓のドキドキがやばいよ。まだ足震えてるよ。てか良くあんな事出来たよ。リアルじゃ絶対に無理だな。ＬＲＯだからやれる気が

したんだもん。

「大丈夫スオウ君？」

そう言ってクリエを両腕で抱えたシルクちゃんが駆けてくる。傍らにはミセス・アンダーソンを加えたピク。やっぱり早いな。

「なんとか……」

僕は息を整えながらそう紡ぐ。そして視線を甲板の盛り上がった部分。操舵室へと向ける。あそこにこの飛空挺を操ってる奴がいるんだ。さっさと脅して、リア・レーゼを目指して貰わないといけない。

「行こう！」

僕は立ち上がり、そう促して操舵室を目指す。階段を上がり、スパイみたいに扉の両脇にシルクちゃん共々張り付いた。僕は再びセラ・シルフィングを抜いてるよ。脅しをかけるんだからね。武器は必要だろ。

僕はシルクちゃんと視線を交差させてドアに手を伸ばす。開いた瞬間に中に押し入り、艦長を捕虜にするのだ。みまごうことなき悪人だな僕ら。だけどそれを分かった上でやってんだ！

僕の腕がドアにかかろうとしたその時、扉が横にスライドして開いた。

「それでは頼むよ艦長。このままサン・ジェルクへと戻ってくれたまえ。万一に備えてバトルシップも出向したから心配しなくても……」

途切れた言葉。それはきっと僕たちと目が合ったからだ。出てきたのは僧兵。しかもちょっと偉そうだから、この飛空挺内ではリーダー格の奴か？　そして流石リーダー、僕たちを見定めた瞬間には既に腕が武器へと延びた。だけど僕はそれを許さない。

セラ・シルフィングを奴の槍へと当てて強制排出。さらに足で蹴りあげて、束で腹を殴り、甲板部分の先まで吹き飛ばす。

その一瞬の出来事に目を疑う様な表情をしてる艦長モブリ。僕たちは流れる様に部屋へ進入して、セラ・シルフィングの切っ先を艦長へと向ける。

「さて、方向修正して貰おうか？　行き先は当初の予定通り『リア・レーゼ』で頼む」

「こんな事をして……おまえ達の目的は何だ？　逃げられると思ってるのか？」

なんの事情も知らないモブリが、決まった様な台詞を言うじゃないか。

「逃げ続ける気はないから安心しろよ。それに目的を関係ない奴に話はしないだろ？　お前はただ、言われた通りの街へこの船を向ければ良いんだよ。間違ってもサン・ジェルクなんかに着いた日にはどうなるか……分かるだろ？」

僕は雷撃を纏わせたセラ・シルフィングを一凪する。すると丁度、急いで戻ってきた僧兵に当たったじゃないか。なんてタイミングが良い奴だ。壁に傷の一つでも付けてビビらせるつもりが、予想以上の効果になりそうだ。

「くっ……すみません。乗客の安全には変えられません」

艦長はきっと僧兵にそう言って、再び飛空挺の進路を戻してくれた。僕が相当の鬼畜にでも見えてくれたんだろうな。タイミング良い僧兵のおかげでさ。そこだけ感謝しとくよ。

取り合えずこれで、どうにかなった……かな？

目的のハイジャック（後書き）

第二百八十二話です。
上手くハイジャック出来たスオウ達。だけどまだまだ安心できない状況です。鍛冶屋の問題もあるし、セラ達もどうなったかわかんないですからね。
てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

予想外の障害（前書き）

僕とシルクちゃんは操舵室を占領した。これでハイジャックは出来た筈。後は下の方のセラ達の連絡待ちだ。そしてしばらくすると連絡は確かに来た。だけどそれはセラでもテッケンさんでもノウイでもなく、ましてや僧兵でもなくて……訳のわからない奴に行き成り宣戦布告された。

予想外の障害

飛空挺が旋回する。これでサン・ジェルクへと戻る事は無くなっただろう。だけどまだまだ油断できない事はある。下のプレイヤー達や、残りの僧兵とかさ。まあ直ぐ下のプレイヤーがこっちにこない所を見ると、鍛冶屋が頑張ってくれてるんだろう。

だけどこのまま放置って訳には行かないし……どうやってあいつ等を止めるか考え物だな。取り合えず――

「シルクちゃん、そこの僧兵を魔法でどうにか出来ない？　まだなんか伺ってる様だし、大人しくさせて欲しいんだけど」

「分かりました」

僕の言葉に一瞬ピクリと倒れてた僧兵の指が動くの見えた。まあ死んではないよね。大人しく寝た振りかましつつ、実は回復を待ってたみたいな感じなんだろう。

だけどお生憎様、そう易々と反撃の機会を与える訳には行かないんだよ。シルクちゃんが倒れてる僧兵に近づき詠唱を開始。魔法陣が奴の小さな体の中心に現れた。

なんだか僧兵自体が魔法陣に収まった様な……そんな感じだな。縄代わりの拘束具って事？

「まあ、そんな感じです。大丈夫、これも魔法詠唱禁止で強力な拘束魔法ですから」

流石シルクちゃん。魔法ならモブリにだって引けを取らない素晴らしさだ。個人的にシルクちゃんが魔法使い最強だと勝手に思ってるからね。

まっ、シルクちゃんしかマトモな魔法使い知らないからだけど。いや、そう言えばエイルがいたな。でもアイツは最強にはまだ程遠いから論外で。だけどシルクちゃんにはピクが居るし、ストック魔法という裏技を使える。それを使えば魔法使いのネックの詠唱時間なんて皆無だし、使い方をもっと熟練させれば絶対にシルクちゃんは最強になれると思うんだよね。

まあなにはともあれ、これでこのモブリが暴れる事は無くなったって事で一安心。

「このまま……リア・レーゼにたどり着けると思うなよ。既に……異常があった事は報告してあるんだ。飛空挺の戦闘艦が既に向かってきてる。

この船で……逃げきるのは不可能だよ」

胴体付近に現れた魔法陣がクルクルとゆっくり回る中、僧兵が途切れ途切れの言葉でそんな事を言う。飛空挺の戦闘艦？　そう言えばノーヴィスには飛空挺の艦隊があるとかどうとか聞いたな。

バトルシップとか言ってたのがそれなのか？　確かに戦闘艦ともなれば速そうだ。こんな普通の船とはきっとスペックが違うんだろうな。

だけどそれでも、素直に捕まる訳にはいかない。サン・ジェルクに戻されたらクリエは元老院の道具にされるんだ。それが分かってるのに諦めるなんて出来るかよ。だから僕は僧兵にこう言ってやるよ。

「何を言われたって僕たちはリア・レーゼへ行くことを諦めたりはしない。不可能かもしれなくても、元老院の手の内になんて居られないんだよ。こいつの為にもな」

そう言って僕はシルクちゃんの抱きかかえるクリエを指さす。僧

兵は胡乱だ瞳でクリエを見てる様だったけど、言葉を発する事無く、そのまま沈黙。どうやら気絶したみたいだな。

「おい、今から全速力でリア・レーゼを目指せ。全速力だぞ！」

僕は武器を突きつけて艦長を脅すよ。一応言っといた方が良いだろ。

「この船の最高速度と、バトルシップの最高速度は雲泥の差ですよ。この船はこれでも頑張ってる方です」

これで？　いやまあ、普通に風を感じながら遊覧飛行をするのならこのくらいの方がいいのかもな。それにジェットエンジンじゃなくプロペラだし……そもそもの速度なんて期待できないか。

「それでももっと頑張れ！　いいから最高速度でリア・レーゼを目指せよ！」

無茶な要求してるけど、なんか悪党っぽいな。いつか追いつかれるにしても、なるべくリア・レーゼに近づいておきたいんだ。僕はこの見晴らしの良い、操舵室から後方の空を見つめる。まだ何も見えない。けど油断も出来ない。

バトルシップか……どんな船なんだろう。

「バトルシップはこういう船って形じゃないですよ。もっとこう、近未来的な感じだったと思います。この船は他国にも製造できる様に開示されてる技術で観光と旅行と、物資輸送程度の目的の物です。

だけどバトルシップ……いわゆる戦闘艦は違います。あれはノーヴィスが進んだ魔法の技術の粋を集めて開発してる物ですから……実際かなりの驚異ですよ。

数を製造出来れば、世界を取れる位には言われてます」

そこまでとは、背筋にイヤな悪寒が走るよ。つまりはこの船とは全くの別物を想像してた方が良いって事か。

「それって戦闘に使われた事あるの？　先の領土争いとかさ」

「う～んそれが無いんですよね。プレイヤーに与えられてない物だから、どうしようもないと言うか……もしかしたらサン・ジェルクにもプレイヤーの代表が付けば、それを解禁出来るのかも知れませんけど、現状ではリア・レーゼの巫女一人だし、その人がノーヴィスのバランス崩しを所持してるしで、難しいかもですね」

なるほどね。てか、随分詳しいよね？　一回も戦闘で使われてないのにどうして分かるんだろ？

「それはですね。ノーヴィスのミッションで見かける事があるからです。それに実際に使われはしなかったけど、サン・ジェルクの守りの時に展開されたりもしたんですよ。それはそれは壮観でした。そもそも他の国は飛空戦団持ってないですし、使えばきっと強いでしょ？」

「まあ、それはそうだろうね」

他のどこも空を自由に飛べないのなら、かなり強いよね。空を飛べるだけで、戦闘には有利だし。ちょっとおっかなくなってきたな。

まあでもいきなり攻撃してくる……なんて事はないよね。ここには普通に乗り合わせただけの人たちも居るんだし。そんな風に考えてると、操舵室の端っこにおいてある小さなお札みたいな紙が線を流すように光りだした。それと同時にピーピーという音が響く。

「何々？」

僕は驚きつつそう言った。すると艦長が「通信だ。僧兵達からだろう。出ないと怪しまれぞ」とか言われた。なるほど、って事はこれは監視室とかからって事か。それなら、僕が出よう。きっとセラだろ。

「大丈夫大丈夫。どうやって出るんだこれ？」

僕はそう言って艦長に出方を教えて貰う。まあなんて事はない、ただお札を上から下になぞるだけって事だった。なぞるとお札にその人物の姿が浮かび上がる。

だけどそこに浮かび上がるのはセラでも無く、ましてやテッケンさんでもノウイでも無い。てか僧兵でも無いぞ。誰だこいつ？

「そこに居るお前もハイジャック犯だな？」

頭までも覆った全身こ汚い布で覆われてるソイツがそんな声を出す。声は男か女かも判断できないな。布のせいでクグモってる。

だけど通信越しでも感じるのは、向けられる敵意の様な物。肌がピリピリする。こいつ、明らかに強そうだ。僕は唾を飲み込んでこう言った。

「誰だお前？　何者だよ。お前もって言ったな？　セラ達をどうした？」

お前もって事はきっとセラ達と接触したんだろう。そして僕たちの存在を知った。でもそこにセラ達がたどり着けなくて、こいつが居るってなると……なんかイヤな予感しかしないな。

「貴様の仲間なら、私が追い払ってやったよ。今頃はどこぞで倒れ

てるかもしれんがな」
「――っ！？」

まさかそんな……いくら何でも信じれないぞ。だってノウイはともかく、テッケンさんにセラだぞ？　あの二人が負けるなんて、実際想像できない。相手がシクラとかならまだしも、こんな誰だかわからない様な奴に……

「本当なら捕まえてここに晒そうかと思ったんだが、厄介なスキルを持ってる奴が居るな。しかも良い目をしてる。私の攻撃から二人を救い出し脱出とは……だが、この船に居る以上は袋の鼠だ。
船の向きを変えたな。行き先は『リア・レーゼ』。だが危険分子を招く訳には行かない。この船に私が乗り合わせたのを呪え。貴様達は逃げ場のない空で、私が一網打尽にしてやろう」

そう言って通信は一方的に切られた。おいおい、なんだかヤバい展開になってきたぞ。後ろからはバトルシップなる物が迫ってきてて、船内には謎の強者が居るって……どんだけ絶体絶命なんだよ。
幾ら回復役のシルクちゃんが居なかったからって、あの二人が揃ってて遅れを取る相手……絶対にヤバいな。

「お、終わりだよ。もうこんな事はやめるんだ。君達の仲間は今の人にやられたんだろ？　ハイジャックはもう頓挫してる。
これ以上罪を重ねる前に――」
「うるさい！　良いからアンタは黙って運転してろ」

僕は艦長の喉元に切っ先を当てて黙らせる。何とか説得してみようとしたみたいだけどさ。言ったはずだろ。僕達は止まれないんだよ。
それに別にセラ達は完全にやられた訳じゃない。それは確実にわ

かってる。だって逃げられたって言ったしな。やっぱり案外役に立つよなノウイって。アイツの回避逃走スキルは、もはや最上級なのが証明された。

ノウイがついて行かなかったら今頃セラとテッケンさんは……考えただけでゾッとする。だってテッケンさんはある意味心の支えだぞ。良心だぞ。セラだって口は悪いけど、戦闘能力とその汎用性は一級品だ。

その二人が居なくなるとか、戦力の大幅低下だった。だけどノウイのおかげでそれが回避出来たみたいだしグッジョブだな。

「大丈夫でしょうかテッケンさん達は……」

不安そうにそう呟くシルクちゃん。確かに僕も不安だな。だけど僕までもそう言う訳にも行かない。だから皮肉混じりにこう言った。

「大丈夫だよきっと。だってセラとか、殺しても死ななさそうじゃん」

「はぁ……」

あの優しいシルクちゃんがとてもがっかりした感じのため息をついた。やっべ、ミスったかな。なんかショックがデカいよ。

「スオウ君はとってもセラちゃんの事、勘違いしてます。そんなんだから嫌いな態度を取られちゃうんです。仲良くしたいのなら、する気があるのなら、陰口なんてダメです」

怒られた。僕は素直に「はい」と言う。てか言うしかない。だってシルクちゃんは正しい。まあ陰口は最悪だよね。反省反省。

「さて、どうしよっか？　まずは鍛冶屋を助けに行きたい所だけど

……」
「色々と問題が山積みですよね……」
僕とシルクちゃんは難しい顔をして考え込む。後方からはバトルシップなる物が迫ってるらしく、この船事態にもなにやら厄介な奴が乗り合わせてる模様。迂闊に動けなくなってきたな。
でも結局逃げ場なんてこの空には無いんだ。それなら、さっさと鍛冶屋を回収して、一人でも多い状況であの謎の奴を迎討つ方が得策かも。
なんたってセラとテッケンさんさえも追い払った奴だ。僕とシルクちゃんだけじゃ心許ない。
「でもどうやって鍛冶屋君を助けますか？　ここに見張りは必要ですよね。そしたら一人しか助けにいけません」
「そうだね。だから僕が行くよ。ちょっと待っててシルクちゃん。直ぐに戻ってくるからさ」
「そんな、無茶ですよ！」
僕の言葉にすぐさまそう返したシルクちゃん。うう、案外信用無いな。
「信用とかじゃなくて、客観的に戦力を見てです。だってついさっきも二人でやってて苦戦してたんだよ。状況変わらないですよ」
まあ確かにそれは言えてるけど……だけどシルクちゃんは戦闘タイプじゃないし、行かせれないじゃん。それにこのまま鍛冶屋を見捨てるなんて論外だろ？
「当然です！」

拳を握りしめて力強くそう言うシルクちゃん。勿論僕だってそのつもり。

「だけどやっぱり行けるのは一人だけ。だから僕を信じてよ。必ず鍛冶屋と一緒に戻ってくるからさ」

「……絶対ですよ。あんまり無茶はしないでください」

間を溜めてそう呟くシルクちゃん。僕は「了解」って気軽に言うよ。その位気軽が良いと思ったんだ。あんまり深刻そうに言うと、イヤな予感とかが浮かぶじゃん。

だから軽く、ちょっとそこのコンビニまで――の感覚で。

僕は部屋の隅に眠る二人のモブリを見る。ミセス・アンダーソンは仕方ないとしてもさ、クリエが全然起きないのが、実はさっきから気になってるんだよね。

クリエは僕と共に外に出れた筈なんだ。それなのに……何故か一向にその瞼を開かない。堅く閉じたままだ。一体どうして？

まあ今起きて貰っても困るし、そこら辺はリア・レーゼに無事たどり着けたら考えよう。

「あっ、そうだ」

僕は何かを思い出したように服をまさぐるよ。一日空いて忘れてたけど……確かクリエが好きそうなの拾ってたんだ。

「あったあった」

僕はポケットから透明なイルカのキーホルダーみたいなのを取り出した。湖を泳いだときに見つけて取っておいたんだよな。

なんかこのＬＲＯには似合わない様な感じの土産物？　まああっ

てもおかしくはないけどさ、あれだよ、水族館とかのお土産にある感じの奴なんだよね。
だけど綺麗だし、きっとクリエは気に入ると思う。だから僕はそのイルカをクリエの服のポッケにそっと入れた。

「さっさと戻ってこい」

そんな言葉と共に。

「よし。じゃあ行くよ」

僕は立ち上がりドアに向かいつつそう言う。すると僕の体を淡い光が。

「気休めですけど、ＨＰは完全に回復させときました。それと物理障壁に魔法軽減の陣。後は身体強化です」

「ありがとう」

力がみなぎってくる感じがするよ。

「それと後は、ピクも連れて行ってください」

そんな言葉と同時に、ドアの外に出た僕へと飛んでくるピク。外を一回旋回して、僕の肩へ止まった。

「ピクまで？　いいの？」

僕はちょっと心配気にそう聞くよ。だってシルクちゃんの事心配だしね。だけどそんな僕の心配に気遣ってか、彼女は優しい笑顔で「はい、大丈夫です」と答えた。

「私、スオウ君が思うほど弱くなんてありませんよ」

そう言って杖を掲げるシルクちゃん。勇ましさを表現しようとしてるんだろうけど、その姿はモブリに負けない位に可愛らしい。

この子やばいね。反則的だよ。まあだけど、シルクちゃんの為にも戻ってこないとな。悲しい顔させたくないし。思いがシルクちゃんのおかげで決意くらいには変わる気がする。

「はは、それじゃピクはありがたく借りときます。そして返すために戻ってきますよ」

「はい！」

シルクちゃんの笑顔を受け取って、僕は階段を下りる。直ぐしたの扉――そこが飛空挺の内部へ入る扉だからね。だけど扉へ手を掛けようとしたとき、いきなりピクが甲高く鳴いた。

澄み切った朝の空へどこまでも広がるようなその声。この鳴き方……まさか！！　僕は急いで扉から離れる。すると同時に、勢いよく扉が激しい音とも共にぶち破られた。

「つっ！？」

結構デカい扉が空へと消えた。それと同時になんだか他にも飛び出して来たような……周りを見回すと、なんだか屍が類々してるな。

実際は死んでは無いようだけど、誰も彼も重傷だ。

「これは……」

「なななな、何ですか今の音？」

慌てる声と共に、飛び出してきたシルクちゃん。操舵室のある高

い所から甲板を見て更にビックリ。

「一体……これって……」

僕も聞きたい位だよ。すると無くなった扉の向こうからギシギシという音が聞こえた。扉周辺にも呻き声を上げるプレイヤーが多数。

あいつ等をぶつけて扉を破壊したって事なんだろうか？　なんて無茶苦茶な。てか、そのせいかランプまで壊れてるみたい。普通なら中の様子が見える筈なのに、中へ続く部分がやけに暗いな。だけど辛うじて動く足部分が見えた。まだまだ太陽が斜めなおかげだな。

「スオウ君！　これって――」

シルクちゃんが現状を把握するためにこちらに言葉を投げかける。だけどその時ふと気づいたよ。あの場所はヤバい。だって吹き飛ばされた扉の真上あたり……って事は今上って来てる奴の丁度頭上。

そう考えてると、更に足全体が見えてくる。そしてその足部分と共に、一人のプレイヤーの頭も見えた。それはきっと無造作に引きずられてるから地面との距離が近いんだ。

あれは……まさか！

「シルクちゃんそこから離れるんだ！！」

僕は必死にそう訴える。だけど不運な事に彼女から奴は見えてない。

「――――っつ！？」

下の扉から一直線に破壊が延びる。木の板が無惨な音と共に空へと舞い上がり、飛空挺を更に破壊する。そしてその何かの衝撃が破

壊したのは飛空挺だけじゃない。
あの破壊は明らかに彼女を狙って放たれた物だ。
「シルクちゃん！！」
彼女の銀色の髪の一部が青いエフェクト化して消えていく。シルクちゃんはギリギリでかわしたのかその姿は無事に見え……その時ゴトゴトとさっきの破壊の残骸が甲板へと落ちてきた。
そんな中、ピクが何かに反応して飛び出す。瓦礫が落ちてくる中、ピクがその一つを落ちる前に回収したような？
戻ってきたピクがくわえてる物を見て僕は仰天する。
「うわ！？　ってこれ……腕」
それはきっとさっきの破壊で本体と切り離された彼女の……僕の視線は妙にブレながら扉の方へ。何かが胸の奥から沸き上がる。良くは見えない……だけど、その姿を確認出来るだけで十分だ。
その腕の先にいる、鍛冶屋も返して貰おう。僕はセラ・シルフィングを抜いた。
「ピクはご主人様の所へ行ってやれ」
僕がそう言うと、ピクは一鳴きしてシルクちゃんの方へ向かう。そんな中、扉の中側にいる奴が僅かに動くの見えた。もう一度シルクちゃんを狙う気なのかも知れない。そんな事させるか！
「やらせるかぁ！！」
僕は帯電させた雷撃をそいつに向かって放つ。だけど次の瞬間、僕の攻撃をかき消して飛空挺の床がベゴンと凹んだ。

（何？）

一体どういう原理だ？　まるで見えない攻撃が来たような……でも取りあえず、こちらに意識を持って来て貰わないと困るから、僕は甲板を走りつつ、攻撃を続ける。放たれる雷撃は直ぐに消されて、甲板がどんどん凹んでいく。だけどその間にピクはシルクちゃんの元へ辿りつけたみたいだ。

淡い光が見える。きっと回復魔法で腕を元に戻してるんだろう。そうであってほしい。僕は絶え間なく二本の剣から青白い雷撃を放って甲板を走る。どうにかして鍛冶屋を救出する方法を探さないと。

でもこの攻撃の正体が分からない。基本奴から直線的に力が放たれてる感じなのはわかるけど、そのモーションすら無いってどういう事だよ。

一度破壊した部分から差し込む日の光で、ようやくその姿を現した訳だけど、いかんせんその姿をみたらなんか変なプレッシャーを感じる様になったぞ。マジで何者だ？

そんな事を考えながら腕を動かしてると、不意に奴が引きずってた鍛冶屋をこちらに向けた。僕は思わずガク付きながらも、攻撃をやめる。するとその瞬間、再び操舵室へと続く通路が弾け飛ぶ。

「しまった！」

あそこにはまだシルクちゃんとピクが！　それに完全に操舵室を孤立させられた。あのフード野郎。やってくれたな。

「神の地に着く前に、貴様たちを葬ってやる。その存在を浄化しないとあの地には悪そうだ」

「テメェ……人を悪魔か何かみたいに言いやがって」

こいつはどの立場なんだ？　立ち位置を把握できないぞ。ＮＰＣなのか？　プレイヤーなのかすらわからない。だけど言ってる言葉から考えるにＮＰＣでリア・レーゼの奴？　だけどモブリじゃない。そこがネックだな。

「悪魔も同然だ。星詠みで詠われたんだよ。近々リア・レーゼに不幸をもたらす存在がやってくる。それはきっと貴様達だろう」

「そんな確証ないだろ！　違ったらどうするんだ！」

僕は正論を吐いてやった。勘で襲ってくるなよな。

「その時は謝ってやろう。だがな生憎、私の勘は外れた事がない」

予想外の障害（後書き）

第二百八十三話です。
今回は新キャラ登場です。まだまだ謎のキャラ。だけどその実力はわかるでしょう。この新キャラのせいでさらに飛空挺内は混戦です。果たしてスオウ達は『リア・レーゼ』へ辿りつく事ができるのか！？
てな訳で、次回は月曜日に上げます。ではでは。

仲間がいるから（前書き）

そいつの力は未知数。見えない力は容赦なく僕を襲ってきた。そして奴は僕達を否定する。だけどそんな言葉に素直に頷く事は出来ない。そんな中、彼女が活路を見つけてくれる。

戦いがあんまり好きじゃない、いつも優しい光で僕達を守ってくれるシルクちゃんだから出来ること。

仲間がいるから

吹きつける朝の風。リアルとは違う、それなりに優しい日差し。今日も空は青く輝いて、ＬＲＯはいつも通りに美しい。眼下に広がる広大な大地は、リアルと何も変わらない雄大さだ。

――とまぁ、そんな風景描写をするほどに余裕なんてないわけだけどね。実際周りの気持ち良さに反して、僕が立つこの飛空挺の上は、これ以上ないくらいに気不味い空気。

いや、気不味いってよりも、ピリピリしてる。肌を刺す様な敵意が充満してる。深呼吸とかを意識的にやると、きっと気持ちいい空気が堪能出来るだろうけどさ、流石にそんな事を出来る雰囲気じゃない。

呼吸を繰り返すのもちょっと苦しい感じなんだ。少し肺が圧迫されてるようなさ……そんな胸苦しさがある。そこまで暑くないのに汗が流れ落ちるし、僕はどうやらこの目の前の奴にビビってるのかもしれないな。

裾やらさきっぽがギザギザにくたびれた感じのローブに身を包んだフードで顔まで隠してる怪しい奴。実際そのギザギザはファッションなのか、それともただ単に長く使用した結果なのか……ちょっと気になる所だよ。

てか、よく見るとあの身を覆い隠してるローブは、黒ってだけじゃない色が見えるな。よく見るとだけど、僕の視力ならわかる。

あのローブ、黒と同系統の色で何か模様みたいなのが刺繍してある。何か意味があるのかな？　それともただのデザイン？

「どうした？　仲間がやられたから、早速逃げる算段か？　だがどこへ？　ここは空の上。逃げ場なんてどこへもないぞ！」

何かが来る。そう感じた僕はとっさに横へ体を移動させる。するとその瞬間、床の板が耳に不快感を残す音と共にボロボロになった。
それは今までの現象と一緒だ。でもただ違うのは今度のは、僕が居た場所にその現象が現れてるって事か。今までは手前くらいで起こってたんだけど、今度のは確実に僕が居た場所まで届いてる。
これはどういう事なんだ？　今までは僕を直接狙ってなかったからって事か？　なんにせよ、いくら目を凝らしても正体が分からない攻撃だ。一体何をどうしてこんな事になってるんだよ。
取りあえず僕は動くことに。動いてないと狙い撃ちされちゃうからな。ベコバキとイヤな音を立てながら甲板が脆くなっていく。これ以上壊して欲しくないんだけど。もしもまた落ちたらどうするんだよ。
僕のそんな心配を余所に、奴は攻撃の手を緩める事はない。

「どうしたどうした？　さっきまで元気に振り回してたその剣は飾りか？　諦めたのなら、大人しく倒されろ。それがこの世界の引いてはお前達自身の為だ」
「何が、僕達の為だ！！」

僕は奴の適当な感じの諭す様な言葉に、カチンときたよ。だから一歩を踏み込んで、もう一度雷撃を奴へと放った。青い雷が奴へと向かう。
だけどやっぱりたどり着く前に何かにかき消される。そして足下に弾ける衝撃。

「つっ！？」

やっぱり今までと同じだな。僕は腕で顔を覆いながらガードしつつ、隙間から奴を見据える。
アイツはやっぱり動いてない。武器らしき物も持ってない、それ

なのに攻撃は防がれて、さらには攻撃されるってどういう事だよ？

「貴様達の愚かな行いの粛正。それはお前達の為だろう。罪を放置はしておけない。それは犯人の為にもなんだよ」

「何も知らない癖に、知った風に語るなよ。確かにこれは罪かもしれない。だけど僕達に誰かを傷つける意志はない！

何もしないでくれるのなら、それでいいんだ！　僕達はリア・レーゼに行きたいだけだ！」

僕は必死に訴えてみる。だってこんな得体の知れない奴と戦闘なんてやってる場合じゃ……

「詭弁だな。現に貴様等は艦長をその武器で脅しただろう？　警備の僧兵をその剣で薙ぎ倒しただろう？　お前達は既に他人を傷つけてる。それの罪深さに気付くんだな」

「くっ……」

正論突かれた。確かに言ってた事は矛盾してたかもしれないな。僕達は既に酷いことをやってる……か。ハイジャックとして割り切ってたけど、事情を知らない奴からしたらそれは悪。

いや、事情を知ってたとしても言われる事は同じなのかもしれない。僕達は結局、目的の為に手段を選んじゃないんだから。

本当に誰にも迷惑を掛けずにやるのなら、目的の為の手段を作って行かなきゃいけないのかも……だけどそれは、リアルで言われる所の綺麗事とか、机上の空論とかなのかも。

けれど僕達が選択したこの方法だって、罪深いのは知ってるさ。何も知らない癖になんて、押しつけがましい事この上ないよな。

それに自分達の都合でなんだって通せるのなら、そこにはモラルや倫理は無いのかもしれない。何も知らない癖に……それは僕達にとっては「クリエの願い」その為だけど、そんな事で秩序を乱して

良いのなら、これほど使い勝手の良い言葉もない。
遊ぶ金が無いことに困ってる奴らだって、ある意味「何も知らない癖に」とはいえるしな。それを言うとなんかちょっと深刻で、自分が正しい事をやってるみたいな気になれる。
けれどそれは、奴の言うとおりの自己中心的な詭弁だよ。

「だけど、誰かを想う心は正義じゃないですか！」

僕が逡巡してると、空から聞こえたそんな声。それはシルクちゃんの声だ。奴の攻撃でヤられた筈――とは思って無かったけど、無事で何より。
シルクちゃんはピクと共に、空から奴目指して落ちてきてる。そして自身の杖を奴へと向けて、詠唱してた魔法を放つ。放ったのかな？　魔法陣が現れたのは見えたけど、その攻撃がどこに向かったのかわからなかった。
だけどその次の瞬間、奴の悲痛な叫びがこの場に響く。

「うぐおおおお！？」

そんな叫びの最中、シルクちゃんが優雅にタトンとという音を出して甲板に着地。腕も治ってるみたいだし、ちゃんと回復出来て良かったよ。
僕がそんな事を思ってると、シルクちゃんは片膝を付いて倒れてる奴に向かってこう言った。

「どうですか自分の攻撃の味は？　貴方のその攻撃、どうやってるのかわからないので、貴方を包み込む感じの障壁を張ったんです」
「なるほど……そういう事か」

そう呟きながら奴は再び立ち上がる。

「だが、さっきの一撃で既に私の周りの障壁は消えてる筈だ！」
嫌な予感がした。僕はとっさに飛び出して、シルクちゃん達の前でセラ・シルフィングをクロスさせて構える。するとその瞬間に、もの凄い衝撃が襲ってきた。
それは上半身だけじゃない。下半身にも傷を付ける衝撃だ。服が破れ、皮を裂く。血が僅かばかり出血した感覚。だけどなんとか耐えれたよ。

「良い判断だ」

そんなお褒めの言葉を頂いた。別に嬉しくないけどな。

「ありがとうスオウ君。助かりました」
「いえいえ、それよりも無事で何よりですよ」
「ピクのおかげです。この子の鋭敏な危機察知能力がなかったら私はきっとやられてました」

なるほど、ピクめお手柄だな。そう言えば最初にドアに手を掛けようとしたときも、ピクのおかげで助かったんだっけ。ピクの危機察知能力は一級品だな。

「スオウ君、怪我してますよ。治さないと――きゃ！？」

僕はシルクちゃんの手を引いて、無理矢理走り出した。その瞬間、僕達の居た場所の板が無惨に弾ける。敵を前に、回復魔法の詠唱を待ってる暇はないよ。

「それはそうですけど、スオウ君って血がリアルに出るから、私と

しては一刻も早く治さないとって思っちゃうんです」
「はは、それはまあありがたいような、迷惑な奴ですみませんみたいな……」

実際この位の血なら直ぐに止まるだろうし、リアルにだって影響は無いだろ。だけどシルクちゃんの気持ちは分かるかも……普通LROはHP見ながら回復とかやるわけだけど、それってもしかしたら過度な回復魔法連発の抑制でもあったのかも。
だって血なんかみたら、確かにヒーラーは直ぐにでも治そうとしてしまいそうだもん。今のシルクちゃんみたいにさ。てか人間血を見たらそんな意識が自然と働く。ある種の危険信号みたいな物だからかな？

「ヒーラーの性ですよね。スオウ君は常に血みどろだけど、一向に馴れません。というか、そんな姿を見る度に、私が治してあげないと、と強く思います」

なんだか知らない間に、僕はシルクちゃんに無言のプレッシャーを与えてたみたいだな。ほんと申し訳ない。常に血みどろで。
そしてまたも血みどろに成りそうな展開だもん。流石に嫌に成ってくるよな。

「誰かを想う心は正義。確かにそうだが、誰かの為で誰かを傷つける。迷惑をかける。そんな行為が容認される訳じゃない。
自分が正しいと思うことだけをやっても、それで満足するのは自分だけだ」

見えない力が床を壊して、そして床に転がるプレイヤー達を殺していく。これは自分達が正しいと思うことだけを貫こうとした結果だとでも言いたいのかこいつ。

僕達の我が他人を殺す――そう言うことかよ。僕達が乗り合わせなかったら、確かにこんな凄惨な事にはなり得なかっただろうけど、ここまでやるのは僕達じゃなくこいつの我でもあると思うけど……周りでオブジェクト化して消えていくプレイヤー達。
そんな光が甲板には溢れてた。

「スオウ君、このままじゃ！」
「わかってます。どうにかしないと……でも、アイツの力は未だ未知数ですよ」

僕達は甲板を走りながらそんな会話をする。横目でチラリと奴の様子を伺いながら、繰り出される謎の力を交わし続ける。
このままじゃ甲板に放り出されたプレイヤーは全滅してしまう。実際僕を狙った奴らだから僕が助ける義理も無いけど、奴に自分達のワガママのせいとか言われっぱなしなのはちょっと腹が立つよな。
僕達は確かに自分達の都合でいろんな人たちに迷惑を掛けて来たのかも知れない。あの舟を貸し出してくれたモブリには確かに悪い事をしたと思う。舟二隻も壊したし、忘れちゃいけない事だよな。
だけど、いろんな物を犠牲にしても、僕達を助けてくれる人達だっていたんだ。そして託してくれた人も……幾ら責められたって、そんな思いがある限り、自分勝手と言われようが、なんと思われようが、僕達は止まるわけにはいかないよ。

「スオウ君、私に考えがあります。力がわからなくても、方向は一つで、今まで同時にその力が出てないのなら、数を有効に使いましょう。
次の攻撃と同時に煙幕を張ります。視界を奪っての多方面攻撃です！」
「なるほど。よしやってみよう！」

僕はシルクちゃんの意見に賛同した。そして奴の攻撃が床にあたったと同時にシルクちゃんが用意してた魔法を発動。一瞬にして甲板は煙で包まれる。

ここで僕達は反撃に転じた。逃げるばかりだったけど、それだけで済むと思ってるなよクソ野郎。言いたいこと言いまくりやがって、幾ら正しいとわかってても、自分達が世間から見たら間違ってるとしても、僕達がハイそうですかって止まるわけにはいかないんだよ！

小さな子が、小さな願いを託してくれた。それを叶えてあげたっていいじゃないか！！　煙幕の中を僕は走る。奴だけじゃなく、僕達にとっても視界不良だけど、奴は動いて無かったし、その位置は大体わかってるから問題ない。

僕はセラ・シルフィングに纏わせた雷撃を続けざまに放つ。きっと別方向からはピクやシルクちゃんも攻撃してる筈。これなら誰かの攻撃は確実に届く筈だ。そして三つの方向からの攻撃に逃げ場は無い。

雷撃が直撃したような音と共に、煙幕の白い煙じゃなく、爆発の黒っぽい煙が混じり出す。これは当たったと見て良いのか？　僕は足を止めずに一気に突っ込んで見るよ。そしてセラ・シルフィングを凪いで邪魔になった煙を追い払う。

するとそこには無惨な姿をした鍛冶屋の姿が！

「なっ！？　一体誰がこんな事を……」

酷い。酷すぎる。まるで雷に当てられたように所々から焦げた煙が上がってるじゃないか！　するとどこからともなくこんな声が――

「人のせいにするなよ。それはお前の攻撃のせいだ」

「ぐっ……」

わかってた事をはっきり言われてしまったな。奴のせいにしよう

と思ったのに――って、あの野郎操舵室の屋根にちゃっかり避難してやがる。

「煙幕程度で私を倒せるとでも思ったか？　自分達まで見えなくなったら、条件は一緒だろう？　無駄な努力だったな。仲間まで傷つけて、ご苦労なこった」

くっ、なんかボロクソ言われてしまった。僕は束を握りしめつつ、奴の発言を巻き返す策を考える。だけどそこで気付いた。そう言えばピクやシルクちゃんの攻撃の後が見えない。鍛冶屋は焦げ付いてる程度だし、実際奴が壊した程度の損傷しか周りに無いぞ。

じゃあ、あの発言は一体……さっきの煙幕の狙いは実は違ったのか？　そんな事を思ってると、奴の後方の空から小さく見える複数の炎。それらが奴へと向かって来てるのが見えた。

奴は気付いてないようだな――このままこっちに意識をやっててくれれば……と思ったら何故か振り向いてもいないのに途中で炎が何かにぶつかったかのように成って爆発。

おいおい、障壁でも張ってるのかアイツ？　それとも後ろに目があるとか？　完全に今のは気付いて無かったような気がしたけど……

「その程度で」

そんな呟きと共に、こっちにも及ぶ攻撃。僕は鍛冶屋を担いで、一端離れる事に。するとさらに空から炎の雨が降り注ぐ。ピクの姿は見えないのに攻撃だけは来るとか、そんな上空に居るのか？　だけどやっぱりどれもこれも得体の知れない力で奴にまでは届かない。

くっそ、一体どうやって攻撃してるんだあの野郎？　これは魔法なのか？　それとも何かの武器の特性なのか……それすらもわからないなんて……手の打ちようがない。

空に炎の滓の様な黒い煙が何個も残ってる。だけどそれでも続く

攻撃。でもやっぱり攻撃が届く事はなさそうだ。
幾ら数で攻めても単調過ぎる。それに距離も取り過ぎて逆に勢いって物が無くなってる。反撃を食らわない為何だろうけど、これじゃあいつまで経っても当たる気がしない。
だけど今なら、一気に近づいて斬りつけられるかも知れない。そんな思いが沸き立つ。いつまでも距離を取っての攻撃じゃアイツの得体の知れない力の前には無意味だ。
なら接近戦に持ち込む方が良いかも知れない。丁度意識は上空に行ってるし、今ならやれる気がする。僕は足に力を込めて一気に飛び出そうと考える。
だけどその時、虫の息の鍛冶屋の声が聞こえた。

「待て……今は……ダメだ」
「どういう事だ？　ある意味今しかチャンスはないだろ」
アイツは空から降り注ぐ炎を撃退するので意識がいっぱいだぞ。
「本当に……そうか？　アイツがどこを見てるのか……わかって言ってるのかよ？」
「どう言うことだ鍛冶屋？」
なにが言いたいのかよくわからないぞ。もしかしてアイツの力の正体にでも気付いてるのか？　それならさっさと言え。死活問題だぞ。
「別に力の正体は分からん。だがな……奴に死角は多分無いぞ」
「死角がない？」
どういう事だよ一体？　人の目は二個までしかついてないぞ。その時点で死角は出来るだろ。テッケンさんの千里眼だって死角が無

い訳じゃないし、実際そんなことあり得ないだろ。
それこそ実際一番死角を無くせてるのは、聖典使用時のセラ位だろ。アイツ聖典それぞれから見える映像を全部処理出来るらしいからな。どういう頭の構造をしてるんだか。
しかも最大二十機位だろ。それを使えば死角なんてほぼ無いと思う。でもアイツはそんな大層な物どこにもない。ボロボロのローブにその身一つ。死角無いとかもそうだけど、それだけであの攻撃を防いでるってのも尋常じゃないんだ。

「奴はあれだけのプレイヤーも意図もたやすく倒した。油断もあっただろうが、それだけじゃ説明出来ないだろ。それにあっと言う間の出来事だったんだ。
奴は強い。それは確実だ。下手に動かない方がいい」

珍しい鍛冶屋の殊勝な言葉。ここは受け取っといた方が良いのかも知れない。でも、相手が強いからって引くことも出来ないのが現状だ。奴も言ったけど、ここは空の上。海以上に逃げ場なんてないんだ。
僕たちが生き残るには、奴を倒す以外道はないのが現状。でも確かに今の状態で突っ込むのは無謀か？　だけど突っ込まないと見えない物もあるわけで……さてどうするか？

「シルクとピクが動いてるんだろ？　アイツが何の策も無しにあんな無駄な攻撃を続けさせると思うか？　アイツはお前よりもベテランだ。そしてヒーラーとしての腕も良い。何かを狙ってる筈だ。
結構したたか何じゃないか？」

したたかって、シルクちゃんはとっても可愛い女の子ってだけで僕的には良いんだけど。まあでも確かに、それだけじゃいのも確かだよな。適当な事をやる子じゃないし、させるタイプでも無い。

じゃああの無駄に思える炎の攻撃も意味があるって事か？

「少なくとも俺にはそう思える。お前は俺を回収するための駒だったんだろ」

「確かにそれはあるかもな」

何も言われて無かった僕は突っ込んだだけだったもんな。煙幕を張った時点で、シルクちゃんは奴の行動を予想してたのかも知れない。実際奴に攻撃するので鍛冶屋の存在はネックだったしな。それを上手く回収させて、何かを狙ってるって事か。

空には防がれた炎の分だけの黒煙が広がってる。しかも丁度丸い感じにだ。なんだかあまりにも綺麗な円を描いてるな。そしてその円の中心が丁度奴……これってやっぱりなにかの狙いがありそうだな。

「ん？」

奴のいぶかしむ様な声。空に出来た黒い円を見つめてた僕もそれに気づく。黒煙の中に何かある。風に流される黒煙の中から出てきたのは、無数の魔法陣。それが降ってきた炎の数だけあるような感じ。

それはかなり壮観な光景だ。

「これはっ……」

「ただ魔法を撃っても貴方に届かないでしょうから細工をさせてもらいました！」

「あの攻撃すべてがこの為の準備と言うわけか！」

上空のかなり高い位置に現れたシルクちゃんとピク。そんな彼女に向かって初めて、感情を表す様にその腕を向けた奴。

「無駄です！　私の魔法は既に完成してます！　そしてこれは貴方を倒す為のものじゃない！」

そんなシルクちゃんの力強い言葉と共に、空に無数の魔法陣で描かれた円が光輝く。するとその光に同調するように、同じ色の魔法陣が奴の伸ばした腕から、体の至る所に現れては消える様な事を繰り返した。

「何をシルクちゃんは狙ってるんだ？」

「多分捕縛の魔法か何かだろう。一撃で倒す事は出来ない……ならこの一撃で一番有効な方法は、リア・レーゼに着くまで奴を無力化させること。

それを実行する意味では、捕縛するのは一番現実的だろ」

「確かに……」

でもそれはシルクちゃん程のヒーラーじゃないと実行出来ない事だよな。どうやって倒すかだけを考えてた僕と違って、ちゃんと出来る事を彼女は考えてた訳だ。流石シルクちゃん。全面的に応援するよ！

「いっけえええええ！！　シルクちゃん！　ファイトだ！！」

僕は声を張り上げてそう言った。無力な自分には出来ない事を仲間に頼る。別に悪い事じゃないだろ。それにこれはきっと、彼女にしか出来ない事だ。テッケンさんでもセラでも無く、誰かを守りたいって思うシルクちゃんだから、取れる唯一の策。

奴はどうやら無数の魔法陣に向かって攻撃をしてる様だけど、それはまさに無意味。重なりあった複数の魔法陣を一気に消すことは奴にも不可能。

「これ以上は暴れないで！　大人しくしてて貰います！！」

一際輝く魔法陣。そして奴という存在そのものへ降り注ぐ。

仲間がいるから（後書き）

第二百八十四話です。
シルクちゃん大活躍！　の回ですね。シルクちゃんはヒーラーだから目立たないけど、かなりの上級者なのですよ。今はピクもいるし、実際その能力はかなりのものです。
今後もその可愛さと実力でスオウを支えてくれる筈の存在です。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

風を切る船（前書き）

シルクちゃんの魔法が決まった。無力化された奴は、小さなクリスタルに納まる姿へと縮んだ。これで一つの問題が片付いた……そう思ったけど、そんな甘くはないのがＬＲＯ。いつだってＬＲＯはそんなだよ。

僅かにスピードが緩められた飛空挺。それを不審に思って僕は操舵室へ。だけど遅かれ速かれそれは来る。僕達の乗る飛空挺を圧倒的速さでそれは追い抜いた。

風を切る船

空に輝く多数の魔法陣の光。それらは全て、ある一人を押さえる為に用意されたもの。シルクちゃんの周到な準備と、ピクとの心通わせた連携の賜物が、得体の知れない奴を封じる手段へとなりえたんだ。

朝日よりも少しの間だけ強く輝いた魔法の光は、奴の体を覆い、そして頑丈な入れ物と化した。しかもコンパクトなサイズにも成ったという何とも便利な魔法だったよ。

奴の体に現れた魔法陣が体を縮め、そしてその体を包むクリスタルの入れ物を形作って、空にあった魔法陣は消えていった。

今や奴は手のひらサイズに収まるクリスタルの中の住人と化している。ゴウゴウという飛空挺の内部から響く様なそんな音と、直接に吹き付ける風の中、甲板に無惨に転がるソレを、降りてきたシルクちゃんが拾い上げた。

「成功してよかったです」

そう言った彼女はちょっと気恥ずかしげに微笑んだ。もっと威張ったって良いのに、謙虚なんだからね。だけどそこがシルクちゃんの良いところだよ。

まあシルクちゃんが自分をなかなか誉めないから、周りの僕達が誉めて上げなきゃだな。

「スゴいよシルクちゃん！　流石ＬＲＯ一の魔法使い！　よっ！天下一！」

「そっそんな、私はまだまだですよ。それに天下一なんて狙ってませんし……女の子何ですよ。なんだかちょっとおかしくない無いで

すかそれ？」

頬を熟れたリンゴみたいに染めて上目遣いで、目をしばたかせながらシルクちゃんは言う。う～ん別におかしくないと思うけど。

今や女性も天下を狙う時代だよ。女性社長とか普通だし、実際もう男尊女劣なんか無いに等しいんだし、シルクちゃんがＬＲＯでの地位を確立させたって全然おかしくない。

「そうでしょうか？　力強そうで野蛮なイメージは持たれないですか？」

「シルクちゃん見て、力強く野蛮なんてきっと誰も、一瞬たりとも思わないと思うよ」

「そう……かな？」

コテンてな感じで首を折るシルクちゃん。おいおいおいおいおいおいおい、さっきから感じてたけど、これはやばいだろ。別に言わなくても伝わってるかなって思ってたけど、これは言っておこう。うん、とりあえず。この子超可愛い。

実際さっきからの一連の会話の中の仕草で何回男心をときめかせれば気が済むんだこの子って位だよ。奴と対峙してたときよりも、胸がドキドキだぜ。

とりあえずこれ以上二人で会話してると胸が張り裂けそうだから、僕はピクの方を向いて話を振る。

「ピクもご苦労さん。てか、言ってくれれば良いのに。まさかシルクちゃんに利用される日が来るなんて思っても無かったよ」

「済みません、だけど詳しく話せる状況じゃ無かったですし、この人は鍛冶屋君にさほど意識を向けてなかったから、案外簡単に取り戻せるんじゃないかって。

それにそうなった後に彼を安全な場所まで運んで貰うには私じゃ

非力だから、スオウ君に押しつけた訳です。ごめんなさい」

なるほど、色々とあの状況下でシルクちゃんは見てたんだね。

「鍛冶屋が一緒だったら、不味かったって事？　その魔法にはさ」

僕はピクの顎をサワサワしながら気になってる事を聞いた。

「はい。あのままだと、鍛冶屋君もこの中に閉じこめなくちゃいけなくなりそうでした。それは流石に不味いですから」

「ふ～ん。だってよ。良かったな鍛冶屋。お前今頃アイツと密着してあの狭いクリスタルの中だったかも知れないぞ」

僕が意地悪くそう言って話を振ってやったにも関わらず、反応が返ってこない。鍛冶屋ならひねくれた言葉を返してもおかしくはないんだけどな。そう思って視線を向けると、なんだかかなりぐったりしてる。

そう言えば鍛冶屋にはかなり無理させてたんだっけ？　僕達が甲板に上がるために複数のプレイヤーの相手を一人でしてくれてたし、その途中であの変な奴の乱入があったりしたんだろう。

それはかなりハードな出来事だったと予想出来る。それによく見たらかなりＨＰ減ってるしな。倒されて無いだけで、実際瀕死状態だ。

そんな鍛冶屋の状態を見たシルクちゃんはすぐさまこう言うよ。

「大変。今すぐ回復させますね！」

シルクちゃんの足下に浮かび上がる魔法陣。それに反応するように、僕の肩に居たピクも飛び立つ。そして鍛冶屋の周りをクルクルしだす。

ピクの翼からキラキラした粒子が舞い散ってる。そして放たれるシルクちゃんの回復魔法。すると瞬く間に回復する鍛冶屋。
ＨＰが一瞬で九割方戻ったし、表面にあった傷も消えた。うん、改めてこうやって見ると、やっぱりスゴいなシルクちゃんの魔法は。やっぱりピクのあの行動にも意味あるんだろうな。

「ん……」
「おい、大丈夫か鍛冶屋？」
「傷もＨＰも回復したはずですよ」

僕達の声を受けて僅かに動き出した鍛冶屋。ダルそうな声と共に体の調子を確かめるみたいに、腕を回して足を踏みしめる。

「おお、なんだか入った時よりも体が軽いぞ」
「それは何よりです」

鍛冶屋の言葉ににっこり笑ってそう返すシルクちゃん。なんて良い子なんだろう。

「今の回復魔法ってここまで回復する奴だったか？　やはりピクがその効果を高めてたりするのか？」
「そうですね。ピクが傍に居てくれると、どうやら魔法全体の出力が上がるみたいです。魔法での攻撃に防御、後は回復……その他諸々。頼りになる子です」

そう言ってシルクちゃんは腕を空に差し出す。するとそこにピクが優雅に降り立つんだ。なんて絵になる光景。てか、やっぱりピクは色々と凄い機能盛り沢山じゃね？
ストック魔法に主の魔法の底上げまで……普及したらソロでもかなり戦いが楽になりそうだな。まあ流石にピククラスのサポートモ

ンスターはそう簡単に手に入りそうにはないけど。
いつかは僕も自分のサポートモンスター持ちたいよな。ピク見てるとマジで思う。シルクちゃんの言葉を聞いた鍛冶屋はなんだかブツブツ言いだして、そしてその視線がシルクちゃんの持ってるクリスタルに止まる。
桜色したひし形のクリスタルの中には奴が後ろ手に縛られた状態で入ってる。勿論手を縛ってるのは縄とかじゃなく、この場合は魔法陣だ。

「この魔法は……封印術の一種か？　シルク……お前『ディスピランサー』だったのか？」

うん？　なんか聞きなれない言葉が耳に入ったような？

「え？　ディス……なんだって？」
「『ディスピランサー』だ。封印魔法を扱ったりその解除が出来る魔導師の事をＬＲＯではそう呼ぶ。封印魔法や、その解除は所属してる国に実力を認められた魔導師しか、出来ないと聞いたが、まさか実在してたとはな」

なんだか感心した目でシルクちゃんを見る鍛冶屋。そんなに凄いのか？　そのディスなんとかは。正直ピンとこないよ。素直にシルクちゃんスッゲーの方が分かりやすい。

「あはは、まあ単なる称号ですからね。それに私以外にだってそれなりにいますよ。ただ単にそんなに使う機会がないし、言いふらす物でもないのであまり知られてないだけですよ。
ヒーラーかソーサラーをずっとやってると、自然とそんなミッションが入ってくるってだけです」

う～ん、僕には良くわからないけど、そんな物なんだな。まあシルクちゃんの事だからどうせ謙遜なんだろうけど。鍛冶屋の反応見る限り結構凄そうだし。
僕はこっそりと事実を鍛冶屋に確認してみる事に。

「どうなんだ？　シルクちゃんの説明どうりなのか？」
「ふざけるな。確かに他にも居るだろうが、このＬＲＯの中でも両手で数える程しかいない筈だぞ。確かにミッションは結構発生してるようだが、それを乗り越えたって話は殆ど聞かない。
それにな、それぞれの国がわざわざ認めて、称号をやるほどって事に注目しろ」

どう言うことだ？　国が保護してるとか？　大切だから。

「封印術とかはいざという時の切り札になり得るだろ。今回もそうだが、ＬＲＯの歴史を紐解けば『ディスピランサー』は様々な時代で活躍してる。
そして解除もまた重要なんだよ。ＬＲＯには貴重なアイテムが眠ってるからな。それを集めたりも国はしてる。貴重なアイテムほど当然強力で、強い封印が掛けられてたりするのが殆ど。
そう言うのは同じ『ディスピランサー』でないと回収出来ないんだよ」

へぇ～案外危険な任務をシルクちゃんはこなしてたんだね。まあ確かに今の話を聞けば、シルクちゃんの凄さが良く理解出来たかも。
『ディスピランサー』ね。
ちょっとこの称号の名前はシルクちゃんにはあってない。そう思うのは僕だけか？　てかきっと、それはきっと論点違うんだろうなって思うから口には出さないでおこう。

「で、そいつもシルクちゃんが見事に封印したって訳だよね？　下で僕とシルクちゃんがはめられたあの拘束魔法とは種類違うんだ？」
「ええ、そうですね。あれよりは数十倍強力なので、彼が頑張って抜け出すのは実質不可能ですよ。封印術は実際、戦闘じゃ殆ど使えないんですけど、ピクのおかげでやりやすくはなりましたね」

ここでもピク。まさにピク様々だね。憎い奴だぜ全く。本当にさ、ピクのストック魔法とかを使えば、出来ることが色々と増えた感じだよね。ピク自身、居るだけでシルクちゃんの力を底上げしてくれる訳だし。
まあだけど、なんてたって絵になるのが一番だけどね。シルクちゃんに寄り添うピクの絵は、本当に最高に美しい。

「所で、そいつどうするんだ？　持ち歩くのも危険じゃないか？」
「そうですか？　だけどいつまでもここに封印して置くわけにもいかないですよ。リア・レーゼに着いたらちゃんと解くつもりですし、持ってないと」

鍛冶屋の警戒したような言葉にそう返すシルクちゃん。まあ確かにただ乗り合わせて、自分の正義を貫こうとした奴をずっとこのままにしとく訳にもいかないか。
これは緊急の処置みたいな物だからね。リア・レーゼに着きさえすれば確かに解放しても良いとは思う。その時はなるべく距離あけて、解放したら速攻で逃げた方がいいだろうけどね。

「解放するのか？　危険すぎると俺は思うけどな。武器も無しにあの強さ。せめて何かこいつの秘密を吐かしてからの方が良いんじゃないか？
次もぶつかる時が来るかもしれないし」

用心深い鍛冶屋はクリスタルに収まってる奴を見据えてそう言う。確かに鍛冶屋の言い分もわかるけど……別に悪い奴って気がしないんだよね。どっちかっていうとそれは僕達だし。

「甘いなスオウ。お前はもっとシビアに成るべきだ。お前のＨＰが魂一個分ならなおの事、どこかで躓く事なんか出来ないだろ。
次にぶつかる時はこの手は使えない。倒しに掛かるとき、こいつの技の秘密を知ってるのとそうでないのとで勝敗は分かれるぞ。
負けることが許されないのなら、もっと貪欲になれ。お前には助けなくちゃいけない奴らが居るんだろ」
「それは……確かにそうだけど……」

鍛冶屋のもっともな言葉が胸に刺さる。言いたいことも、伝えたい事もわかる。理解できる。次の為に繋げる情報を引き出しておくのは確かに重要。
こいつとはぶつかりそうだしね。その時にもしも負けたら……ここで何もしなかった事を後悔するのかも知れない。

「死んでから後悔しても遅いんだぞ」

イヤな事をズバリと言う奴だな全く。折角の気持ちの良い風が台無しだ。

「でも、私はスオウ君の気持ち少し分かりますよ。スオウ君は優しいから、次なんて考えてないんですよね？　それにこの人は、私達に立ち塞がったからといって、元老院とかと同じ悪じゃない。
私たちに向けた言葉はどれも真っ直ぐでした。だからですよね？」

シルクちゃんが僕を見てニコリとしてくれる。ああ～ホント良い子だね。まさにその通り。シルクちゃんは流石だよ。

「それが甘いと言うんだよ。明らかな悪党一味以外と戦う場合は、向こうにだって正義と理由があるだろう。それを考慮して遠慮なんてしてたら、自分の思いなんて通せない。
正義に立ちはだかるのは別の正義。アルテミナスでもそれは学んだろう。ガイエンだって自分の正義を貫こうとしてた奴だった。アルテミナスの為にな」

確かに……手段はどうあれ……色恋沙汰がどうあれ、確かにそうだったな。アルテミナスの為ってのは、ガイエンにもアイリにも譲れない思いがあったはずだ。
正義に立ちはだかるのは別の正義ね。上手いこと言うじゃないか鍛冶屋の分際で。

「分かったのなら、情報を引き出せ。今後の保険の為にもな」
「そうだな。言いたいことは分かった。でも……それはしなくていいよ」
「――なっ！？　お前は何も分かってないじゃないか！」

僕の言葉にオーバーリアクションで喰い掛かってくる鍛冶屋。お前そんなキャラだったっけ？　基本武器以外はどうでも良いがお前のキャラだろ。

「お前は貴重なセラ・シルフィングの使い手だからな。居なくなってもらっちゃ困る。この世界の武器がどこまでたどり着くのか、俺は見届けたいんだ！
だからお前に死なれちゃ困るんだよ」

案外酷い事言ってないかコイツ？　やっぱり武器で、僕の事はどうでもいいのかよ。

「武器の為にお前の存在が必要だと言ってるだろ？」
「それじゃあ結局、セラ・シルフィングが一番じゃないか！　武器を振れる奴なら誰だって良いんじゃないのかそれ？」

僕は不満タラタラでそう言ってやる。だけど鍛冶屋は深いため息と共にこう言った。

「お前は何も分かってないな。お前じゃないと意味はない。武器だって使い手を選ぶんだからな。俺はそう思ってる。
セラ・シルフィングに出会えたのもお前のおかげだろ。だからお前の心配もしてるさ」
「うぬぬ……まっ、そう言う事にしといてやるよ」

そういう奴だってわかってるしな。そもそもセラ・シルフィングの前のシルフィングって鍛冶屋からタダで貰ってたしな。
感謝こそすれ、文句言う筋合いはないか。

「それよりも、どうしてそいつの力を吐かせないって事だ。今度はこっちに納得する説明をして貰おうか」

そう言って鍛冶屋が強く奴を睨む。小さなクリスタルの中に封じられた奴は、別段焦ってる感じでもないし、落ちついてる様な雰囲気。
流石にこれは出れないと諦めてるって事だろうか？　まあ取り合えず、僕も囚われの奴を視界に納めながら、その理由を口に出す。

「確かにまたぶつかった時を考えると、鍛冶屋の言うとおりだと思うけど、やっぱり乗り気になれない。言われたんだよな。自分の思いを通すだけで満足するのは自分だけって。

そして思った。他に道がないから、強制的な力の行使は僕達の勝手な都合。僧兵とか末端でも関わりのある奴らを倒すのは別に良いけどさ、普通の一般人を巻き込んで、しょうがないなんて言えないのは確かだろ。

僕達がこれしかないと思ってやってきた事は本当にこれだけだったのか？　もっと上手いやり方があったかも知れないじゃん。

それか、それを作らないとコイツみたいな正しい奴には立ち塞がれる。けどそれって、あんまり悪い気もしないんだよな。

だからこそ次は、正々堂々とやり合いたいとも思うだろ」

僕の言葉に、意外な所から言葉が返される。

「くく……それが出来るのなら、苦労なんてしないだろ。こちらもその位わかってるさ。だが、許容は出来なかったと言うだけだ。次があるのなら、確実に倒す。その言葉を後悔する事になるぞ」

フードのしたの口がつり上がってるのが見て取れる。

「上等だよ」

僕も口元をあげて余裕の笑みを見せつつそう言ってやる。

「結局お前は戦闘狂って事か」

二人の間にそんな声がポツリと届く。誰が戦闘狂だよ。前にも同じ様な事言われたけど、そこは断固否定するね。僕は好き好んで戦闘やってる訳ない。

だって死ぬんだぞ。出来れば命のやりとりなんてそうそうしたくないっての。

「そんな言葉とは裏腹に、お前はいつだって戦地に飛び込んでるじゃないか。本当は命の掛け合いにハラハラドキドキしてる口だろ？」
「ふざけるな。僕はそんなにＭッ気ない。痛いの嫌だし、死ぬのはもっと嫌だ」
「大丈夫です！　私が居る限り、スオウ君がどんなに大怪我したって絶対に治して見せます！　ＨＰさえ残ってれば！」

力強くそう言ってくれたシルクちゃん。だけどなんかあんまり嬉しくない様な。だってなんかシルクちゃんも僕が戦闘狂の部分否定してくれてない。
そう思われてるのかな？

「だけど実際、スオウ君の言ったことは難しいですよ。新しい道を自分たちで作る。関わりのある人以外に迷惑を掛けない道……実際それは不可能です」

ズッパシとシルクちゃんに言われちゃったよ。まあ自分でも前に思って机上の空論とか言ったわけで分かってた事だけど。
誰かに言われると結構重いよ。

「それはそうだけど、目指す事が大事じゃん。正しいことを否定する事から入りたくないし。別に迷惑を掛けない訳じゃなく、理解されたい訳だよ」
「それも相当難しい。情報ってのは、必ずしも正しい事が伝えられる訳じゃない。特に親玉が国の重鎮クラスと成ると尚更だ」

うう……またしても正論を。なんだよ、なんだよ、そんない否定しなくても良いじゃん。

「取り合えずコイツの個人情報なんていらないし、僕はコイツの様

な奴らも納得出来る方法を見つける。そもそも戦う理由なんてないんだからな」

僕は頬を膨らませてふてくされ気味に畳みかけたよ。取り合えずそういうことで！

「まあスオウ君がそれで良いなら私は良いですよ。ねっ鍛冶屋君？」

「まっ、結局それがお前だからな。後悔しても泣き言は聞かんぞ」

「言わないし」

取り合えずシルクちゃんも鍛冶屋も納得してくれて良かった良かった。さて次の問題は……

「取り合えずどうやって操舵室に上がるかだな」

「階段この人の攻撃で無くなっちゃいましたからね」

ホントホントなんて事してくれたんだ、この野郎。あそこにはクリエとミセス・アンダーソンが居るんだぞ。

「ん？」

なんだか周りのプロペラの回転が緩慢に成ってないか？　それに風が最初よりもだいぶ緩やかと言うか……

「おい艦長！　全速力って言っただろ！　スピード緩めるな！」

僕は操舵室に向かってそんな檄を飛ばす。だけど返事はない。一体どうしたんだ？　やっぱり間近で脅さないと……ってそういう事を仕方ないと思ってやってたのが駄目だったんだっけ。

有言実行しないとな。

「ちょっと鍛冶屋、肩貸して」
「ん？　ああ」
僕は鍛冶屋の肩を借りて操舵室の扉に手を掛ける。そのまま扉を開けて、中へ滑り込んだ。二人はどうやら無事みたいだな。艦長は舵を握ったままそこに居るし、ここはおかしな程変わりないな。
さて、脅すのはやめたからどうするか。取り合えず謝った方がいいよな。
「あの、脅迫とかしてすみません。色々と切羽詰まってて、あの方法しかないなんて思ってました。だけどそれじゃ駄目だと気づきました。
ちゃんと理由を話します。だからそれから判断して頂けませんか？」
僕の言葉に艦長は反応しない。やっぱりあんな事した奴の言葉なんて信用ないよな。
「今更何を！　犯罪者の言葉なんて嘘偽りだらけだろ！」
魔法陣で縛られた僧兵が余計な事を口走りやがる。
「黙ってろこの悪党一味！　ただ従うだけじゃなく何が国の為か本当に考えた事あるのかお前は！？　末端だからって関係ないと思うなよ！」
僧兵は今のところ敵なんで、こういう扱い。問題は艦長でこの人には分かってほしいことが一杯なんだ。だけどそんな思いは遅かった。艦長はぽつりとこう言うよ。

「確かに今更だ。そしてもう遅い。君達はアレから逃げられると思うのか？」

その瞬間、飛空挺を追い越す二つの影。もの凄い風と衝撃波。そして舞い散る青い羽根。それはメタリックに輝く機体。あれがバトルシップ！？

風を切る船（後書き）

第二百八十五話です。
奴を倒して、シルクちゃんの凄さもわかりつつ、ピンチが再び戻ってくる。そんな感じの回です。まあだけどディスピランサーがどれ位凄いかはまだまだ不明瞭ですけどね。
それなりに凄い筈ではあるけど、シルクちゃんも言ってた通り、戦闘用ではないのです。どっちかって言うと儀式魔法的な……まあそんな所ですね。それから最後に出てきたバトルシップ。
次回はどうかな？　空中戦？　かな？
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

墜落必死（前書き）

とうとう追いついてきたバトルシップ。そのスペックはまさに全てで僕達の乗る飛空挺を圧倒してた。てか完全に別物だ。船型の飛空挺じゃなく、近未来型のフォルムしてるもん。

だけどそんな姿に見惚れる訳にはいかない。バトルシップの砲身は既にこちらを向いている。

墜落必死

強気に出た艦長。その理由はまさしくそれだった。後ろから何かが一瞬光った様な気がした瞬間、僕達の乗る飛空挺を追い越した二機の何か。

いや、何かなんか言い方しなくても、きっとあれが――

（バトルシップ！　戦闘用飛空艦か）

てか一機じゃなかったのかよ。何故に二機も。しかも追い越すとか、見せびらかしたいのか？　でも実際、桁違いの速さなのは、今の一瞬で理解した。だってバトルシップ二機がこの船を抜き去った瞬間、衝撃波みたいなの来た。

一体どれだけスピード出てるんだよ。艦長も速さが全然違うって言ってたけど、これは納得。まさに雲泥の差だ。

「これで終わりだよ君達は。見て分かった筈だ。逃げられる訳がないと。さぁ、降伏しなさい。今なら私だってそれほど酷いことをされたとは言わないでおいてあげるよ。

終わりなんだよ。君達のハイジャックごっこはここまでだ」

艦長の諭す様な言葉がなんか引っかかる。ハイジャックごっこ……こっちは本気だったよ。今はそうでもないけど、その時はクリエやミセス・アンダーソンの為にってこれしかないって思ってた。

決して遊びなんかでこんな事をする分けないだろ。僕達はそんな、その場のノリでバカな事をやるバカな奴らじゃない。助けたいって気持ちがちゃんとあったんだ。

「スオウ君！　バトルシップが！」

「おいおい、不味いぞこれは！」

シルクちゃんと鍛冶屋のそんな声が扉の向こう側から聞こえてくる。分かってる……分かってるよ二人とも。バトルシップも、これが不味い状況だってのも理解してる。あれだけデカいのが横切ったんだ、気づかないわけない。

そんなバトルシップはこの船を追い越したと思ったら、前方で一気に急上昇や、急旋回。なんか二機同じ動きをピッタシとシンクロしてしてる。航空ショーかよ。

でもそれはバトルシップのスペックを見せつける為の行為なのかも。実際スゴいしな。あんなのこの船型の飛空挺じゃ絶対に出来ない。まさに戦闘型と言った所だ。だけど……

「心遣い感謝します艦長。だけど無理なんです。僕達に投降の選択肢はない。それだけは絶対にやれない。あいつ等の為にも」

そう言って僕は部屋の隅で眠ってる小さなモブリへと視線を移す。

「子供と、そしてミセス・アンダーソン様を浚った極悪人なのだろ？　それこそが都合の良い言い訳とは思えないのか？」

「浚ってなんかいませんよ。まあそう見えるのは無理はないし、実際元老院側からしたらその通りだろうから、弁解に意味はないかも知れないですけど、僕達がどちらかと言うと、ミセス・アンダーソンの意志を引き継いでます。

あの子を、クリエを守ってやりたいんですよ。だから投降はしません」

厳しい言葉を言われた……だけどそれに真摯に向き合って紡いだ言葉。真っ直ぐ見つめると、艦長はちょっと怯んだ様な感じになった。まあだけど犯罪者と刷り込まれてる奴の言葉にどれだけ耳を貸

すかはわかんないけど。
　それでもこの人は頭ごなしに否定してる訳でもないと重う。聞いてくれてるしな。本当に頭ごなしはすぐ横で拘束されてる奴を言うんだよね。

「騙されるな艦長！　この状況を見るに間違いなく、その二人を浚ってるのはソイツ等だ！　もしもミセス・アンダーソン様の意志がソイツの言う通りなら、何故その人さえ気を失ってるんだ。
　アンダーソン様の言葉を自分勝手に折り曲げる事に他ならない！！　国を守り続けて来た、元老院と犯罪者。どちらかを信じるかなんて、比べるべくもない！！」

　ああ、もうウルサい奴だ。シルクちゃんもどうせなら、口まで塞いでくれてたら良かったのに。まあ大抵はそんな考えに行くのもわかるし、こいつは僧兵。仕方のない事だってのも理解するよ。
　だけどさ、それは自分のその目で見たことを、ちゃんと自分で考えて出した結論か？　上から言われてるからそれは悪なら、お前たちには頭なんて立派な物はいらないだろ。

「はっ、立派な事を言った気にでもなってるのか？　これは自分で考えた結果だ。お前たちは自分たちの意志でハイジャックをしたんだろう。みまごうとこなき犯罪者じゃないか！
　本当に違う・仕方なかったとか言うのなら、出るところに出てみろ！！　我らの神は罪人しか裁かない！」
「裁くのは神じゃなくてお前等だろ」

　その時点で僕達は真っ黒にされるんだ。法は権力を持ってる奴に平等なんだよ。僕達が出るところ出たら、間違いなく有罪にされる。例え白でも真っ黒に出来る。それが元老院だろ。

「そんな事をするわけが……あの方達は立派な……」
「黒くない権力者なんていないだろうから、ある意味立派かもな。だけど黒にされるとわかってる舞台に行くわけには行かない。
それにそんな時間も僕達にはないんだよ」

僕自身のタイムリミットだってあるしな。悠長な事はやってられないんだ。法廷で言い争うなんて論外だね。正しさは行動と結果によって証明してやる。僕は僧兵にそう宣言をして、艦長へと向き直る。
するとその時どこからか声が届く。それは操舵室の通信機？

『あ～あ～、そこに居るかハイジャック犯？　イヤ、我らが同胞ミセス・アンダーソンと我が国の子を誘拐した罪深き犯罪者達よ。
我らの神は貴様等を許しはしない。だが、我らがシスカ神は慈悲深くもある。今から投降するのであれば申し開きの機会を与えてやろうと元老院のお方達は言ってくださってる。大人しく降伏しろ。
白旗を持って甲板に姿を現せ。それが貴様等が取れる唯一の方法だ』

大人しく降伏しろとの提案。無駄な航空ショーをやってた二機のバトルシップが平行してこの船に両側から挟む様に並んだ。既に捕まった格好だな。

『さあ一分以内に姿を現せ』

そんな声と共に、数を数える声が飛空挺に響く。まさか気長に六十まで数える気かこいつ。まあある意味十秒とかじゃないぶん良心的ではある。

「どのみちもう終わりだ。諦めなさい」

艦長から届くそんな声。確かに既に詰みの状況だ。チェックメイトを宣言された感じはある。だけど今、僕の中では最後のロスタイムが一分刻まれてるんだ。どうにか出来ないかそれを必死に考える。
だけどこの船で両脇のバトルシップを追い払うのはどう考えたって無理だ。物理的にきっと不可能。パッと見でもそれはありありとわかる。
メタリックな外装に、この船とは違う流線型した滑らかな形。それはきっと空気抵抗とかも考えられてたりしそうだ。そしてプロペラじゃなく、どちらも機体の中央に光る青い線が、後方で広がり羽みたくなってる。
きっともう推進力から違うんだろうな。それに機体の胴体にはデッカい銃みたいな物も見えるし、見える分だけの武器しかないとも限らない。
てか、こんな大層な物があるのなら、モンスターに襲われたあの時に出せよな。なんで今なんだよ。僕達に向けての初出動なんておかしいだろ。超迷惑。今の状況じゃなかったら、普通に興奮出来る筈だけど、今はゾッとする以外ないな。
そんな事を思ってる間に通信機から聞こえる数は三十秒を切り出した。これは不味い。てか一分切っても出てこなかったらどうするのかな？　とか思ってたら、両脇のバトルシップから魔法陣がいくつか伸びてきた。
それは僕達の居る飛空挺と、バトルシップとの間の空間を埋める様に敷き詰められてる。まさか……あそこが渡れたりするのかな？
すると今度はバトルシップの側面が四角く開きそこには大量の僧兵の姿が……どうやら一分を過ぎても出てこなかった場合の対処法は制圧らしいな。

『さあ、早く出てこい。降伏しろ。逃げ場の無い空で、袋小路に行

き着くだけだぞ。観念の時だ』

そんな言葉を送って再び数を数え出すリーダー格の奴。確かに袋小路……この船が駄目ならバトルシップでも乗っ取ろうかと思ったけど、あの数はな。僧兵……しかもこのタイミングでこんな大層な物で送り込まれる奴らはきっと元老院に忠実な奴らだろうから、ぶっ飛ばすのはやぶさかじゃないんだけど、流石に無謀か。

まだセラ達とも合流できてないし……てか一体何をやってるのか……珍しく今回は活躍してないぞ。監視室を占領出来なかった時点でこっちに来ても良さそうだけど、それはセラのプライドが許さないのか？

取り合えず、この通信は船内全体に響いてる様だから、状況位はわかりそうだけど――そう思ってると、例の船内通信用お札が音を鳴らし出す。あの監視室から一度来た奴ね。

バトルシップからの通信じゃ映像は映らないんだよね。それはやっぱり船が違うから？　まあ取り合えず、出てみる事に。

「こちらノウイっす！　そっちはどうすっか？　って言って場合でもないっすよね。本当はそっちに行きたかったんっすけど、セラ様がそっちはそっちで上手くやれた筈っておっしゃって。

取り合えずスオウ君がそこに居るって事はその筈なんすよね？」

「ああ、まあな。シルクちゃんのおかげでなんとかなった。だけど今度はバトルシップに挟まれてるんだ。どうしようもないぞこれ」

僕が現状の説明と泣き言を漏らすと、ノウイはやけに余裕をかましてこう言った。

「まあまあ落ち着いてっすスオウ君。取り合えず、舵を確保してほしいっす。そして直ぐにアクションをこちらから起こすんで、その後一気に船を急降下アンド加速してほしいっす」

「おいおい、何やる気――」
「取り合えずそう言う事でよろしくっす！」

僕が言い終わる前に強引に通信は切られた。なんだなんだ？　何する気だよ。イヤな予感しかない。そう思って僕は何気に外を見た。
するとその時、一筋の黄金色の光が空を激しく貫いた――と、同時にバトルシップの一機の後方翼部分がモゲて、爆発炎上。
大きく揺れて、飛空挺から離れて行く。僕は唖然としながらもこういう事か！　って思って行動を開始。バトルシップ側からの通信が、なんだかとってもウルサくなったけど、ここは取り合えず無視の方向で。

「艦長、すみませんけど舵を借ります！」
「君達はなんて事を！　まだ抵抗する気なのか！？」

僕は艦長の横から強引に舵に手をかける。この船の舵は普通に丸い木の物だ。車のタイヤ位大きく丸い舵。まあ車のハンドルの大きくなった感じだね。
ちょっとモブリには大きすぎる気もするけど、それは高さも同じか。艦長の座るイスは床から階段がついてるもん。しかも実際には座らずに立ってる訳だし。一応モブリ向きには作られてるみたいだけど、やっぱりそれなりの視界を確保するためにはそれなりの高さが必要で、舵もそんなに小さく出来なかったって事だろうか？
まあ僕には不便の無い高さにあるわけだけど。舵は僕が持っても大きいけどね。

「抵抗しますよ。出来る限り、何度だって！　だから大人しくしてください。もしもこの後に不味い事になっても、脅されたで通していいですから。
だから今は、この船を借ります！」

僕はそう言うと、舵を握る手とは逆の手で、艦長を椅子から卸した。実際邪魔だったからね。そしてどうやるかわかんないけど、取り合えず左側に残ってるバトルシップから距離を取るために舵を右に回す。

すると張られていた魔法陣がバチバチと音を立てて消えていく。後、少しだけ隣のバトルシップも揺れたみたいに見えた。

だけど丁度良い、揺れた事と目の前で起こった事の同様に乗じて、距離を取れればいいんだ。

「スオウ君！　船が動いてるよ！」

そんな声が部屋の外から聞こえてくる。そう言えば驚いたのは僧兵共だけじゃないか。シルクちゃんたちもいきなりの事で驚いてるに違いない。

「動かしたんだ！　さっきの攻撃はきっとセラだからさ、それに乗じて逃げる！　荒い運転になるかもだし、しっかり捕まってろよ二人とも！」

「りょ――了解です！」

そんな了承の声を聞いて僕は再び舵周辺に視線を這わせる。舵の前にある半球体の物はレーダーか何かだろうか？　リア・レーゼと表示された点が有ることから何となくそう予想する。後は舵の周りにゴチャゴチャある数値やメーターは高度とかスピードとかの物だろう。

てか速度アップとか減退とかはどうやってるんだ？　それに上昇下降もわかんない。そんな風に色々とアタフタしてると、船の前方に丸い玉が連続で横切っていく。そしてその玉は地面を激しく抉ってる。おいおいこれは威嚇射撃か何かか？

あんなの食らったら、この木造の船は一発で終わるんじゃないか？

『止まれ。これは最終警告だ。次は当てる。その船を落とすのは一機で十分事足りる。それを見せてやったんだ。無駄な足掻きはよすんだな』

一方的な言葉が通信で入る。確かにこんな木造の船を落とすのは一機で事足りるだろう。だけど一機減って逃げれる可能性が増した事も事実だろ。それが例え数パーセントの違いだとしても、行動を起こした以上止まれるか。

後戻りなんか出来ないし、サン・ジェルクには戻る場所さえないんだよ。だからこういってやろう。

「無駄かどうかは結果を見て言うんだな！　僕達はともかく、この船には仲間の僧兵も、一般人も乗り合わせてるんだ。そう易々と当てられるわけないだろ！」

僕は強気にそう宣言して、取り合えずそこら変に有った、アップダウンのボタンをポチリと押す。アップは青でダウンは赤だったから赤をポチリとね。すると少しの揺れと共に飛空挺が下降を開始した。

一体どういう原理だよ。僕は慌ててもう一度赤いボタンを押すと、今度は降りた位置で真っ直ぐに飛び始める。なるほどボタン一つで上昇と下降が出来る訳か……でもこれで着陸してたかと思うと、スッゴく怖いな。

なんか簡素過ぎだろ。だけど取り合えずもうちょっと高度を下げようと思い、もう一度赤いボタンをプッシュ。

「あ、あんまり色々イジるな！　飛空挺は子供のオモチャじゃないんだぞ！」

椅子から放り出された館長さんが後ろから文句を言ってくる。でも子供って……子供以下の身長の人に言われてもな。

「それなら操縦の仕方を教えてくださいよ。取り合えず、奴らだってそう簡単に直接攻撃は出来ないだろうから、その間にでも――うお！？」

突如大きく揺れる船内。そして操舵室の窓に大量の木片が！　これってまさか……

「そんな……攻撃を当ててるのか？　私達も居るのに……」

艦長の信じられないと言うような声。だけどまさにその通りだろこれは。やつらはこの船にさっきの攻撃を仕掛けてる。

「きゃあああああああ！　スオウ君！」

外から聞こえるそんな悲鳴。僕達は中に居るから良いけど、シルクちゃんや鍛冶屋はこの破片を浴びてそうだな。それにセラ達もこの攻撃でどうなるか……取り合えずどうにかして避けないと！

「くっそ……このままじゃマジで落とされるぞ！　アクセルはどれだよ？」

僕は視線をキョロキョロと舵周辺に這わせる。上昇下降も有ったんだ。必ず有るはず。

『ふはははは！　侮るなよ犯罪者。我らの役目はクリューエル様の回収だ。後の事はどうにでもなるんだよ』

「バカかお前！　この船が墜落したらクリエの命だって危ないだろ

！？　その位考えろ！」

無茶苦茶しやがって、クリエの回収目的なら、もっと丁寧にやれよな。するとそんな僕とバトルシップとの会話に、艦長が割り込んでくる。

「ま、待ってください！　この船にはまだ私達も、お客様も居るんですよ。攻撃を直ぐにでも止めて――」

『残念だが艦長。それは出来ない相談だ。そいつ等は神に逆らった罪人。何よりも罪を罰する事は優先される。それに攻撃を止めろとはそいつ等の肩を持つ気か君は？』

「そうではなく、私達は無関係なのですよ！？　神は私達を見捨てるのですか？」

艦長は必死に食い下がって嘆願してる。まあ当然だよね。自分たちの命が掛かってるし、拘束されてるこちらの僧兵もさっきから「助けてください！」とうるさい。

『見捨てるだなんて人聞きの悪い。神の近くに君たちでも行けるんだよ。それを素晴らしい事と思いなさい。きっと神も快く迎えてくれるだろう』

「そんな……」

その時再び大きな衝撃が船全体を大きく揺らす。ヤバい、なんだか理解できないメーターが急速に減ってるぞ。高度……じゃないみたいだけど、これは？

「スオウ君！　船の後ろの部分が抉られたよ！　何かキラキラしたもの出てる！」

キラキラしたもの？　まさかそれがこの数値の減退の原因か？
一体何だそれ？　僕は絶望に打ちひしがれてる艦長に声をかける。
「おい、さっきの言葉聞こえてただろ？　ここのメーターがどんどん下がってるのと関係あるのか？　おい！」
舵を右左に切りながら心なしの回避行動を取りながら僕は答えを求める。だけど艦長は見捨てられた事のショックに打ちひしがれたままだ。
まあ神の為に喜んであの世に行けとか言われたらそりゃあ、そうなるのも分かる。だけどこのまま言われた通りに死んで良いのかよ！？
「死にたくないんだろ？　てか、そんな勝手な都合で殺されてたまるかよ！　そう思うのなら、足掻くんだ！　それともこのまま死んで良いのか？」
「……私は……神を……シスカ様を信望してる」
っつ――まさかそんな答えが返ってくるなんて。神の為なら死ぬこともやむなしなのかよモブリって！　そんな中さらに同じくらいの衝撃と音が響く。シルクちゃんの甲高い悲鳴が同時に耳に届いた。
ヤバい、今度は船首部分をやられたぞ。木片が大量に操舵室の窓に当たって、その衝撃でフロントガラスにヒビが入る。既に飛んでいられるのが不思議な状態かもしれない。
『くはははは！　そんな旧式の船でこのバトルシップの攻撃から逃げられる筈も無かろう。次はその胴体部分を吹き飛ばそうか？　そこには何が有るか……貴様も知ってるだろう？』
意味深にそんな言葉を振ってくる僧兵。胴体部分？　たしかそこ

には……

「動力炉か！」

『その通り。一発当てたらそれでドカンだ』

「お前！　だからそれじゃクリエだって……」

『その心配には及ばない。その娘には特別な力が有ると聞いている。だからどうにかなるだろうとな』

な……んだと？　元老院共、クリエの力を過大評価しすぎだろ。いくら神の力をもってるっていっても、自分で制御出来てる訳じゃないんだぞ。

実際クリエが死にそうになったこと何度だって有るだろ。その時都合よく、神の力が助けてくれるなんて無かった。だから今回だって……

「それをしたら、お前たちは取り返しの付かない事をしたことに成るぞ」

僕は必死にそう訴える。だけど犯罪者の言葉に耳を傾けるような奴じゃ無かった。

『だからいっただろう……今更後悔しても遅いと。そんな脅しが利くと思うなよ！』

横に付いたバトルシップの砲芯に魔法陣が浮かび、光が収束しだす。逃げようと試みるけど、そもそもの速度と性能違いで、引き離すことも出来ない。ピッタリと横に付いたバトルシップが狙うのは勿論動力炉。

このままじゃ本当に終わり……だけどその時、飛び立つ桜色の影が見えた。

「私とピクが障壁を張って防ぎます！！」

そんな声と共に、飛空挺側面に現れる五重の障壁。その瞬間放たれた砲撃。障壁は一気に破壊されたけど、でも大きな爆発は無い。防げたって事なのか？

だけどそこで僕は絶望的な事に気付いた。バトルシップの砲芯は一つじゃない。

「素晴らしい魔法だった。だが、続けざまにあのクラスの障壁は張れまい！！」

そんな声と共に収束される光。だけどその時、無数の何かが空を駆けて飛び出した。その数ざっと見でも二十。僕はあれを知っている。あれはそう聖典だ。

墜落必死（後書き）

第二百八十六話です。
男よりもなんか女の子が活躍してる感じ。そして信仰の恐ろしさとかが垣間見えるかな？　まあ否定はしないですけどね。信仰が誰かを救ってるとも思うし。だけどハマり過ぎたりしたら怖いよねって事で。
女の子側が活躍するのはその特性にあります。セラはいわずもがな聖典があるし、シルクちゃんはヒーラーだからね。ノウイは避けれても防ぐ事は出来ません。テッケンさんも鍛冶屋も基本近距離型です。
なのでこう言う構図になるよね自然と！
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

遠い空、近い大地（前書き）

聖典が収束されてた光に干渉して爆発を引き起こす。なんとか助かった訳だけど、明らかになるのは絶望的な状況ばかり。それに艦長達は教えに従って死ぬ事を悩む始末だし、クリスタルに閉じ籠めた奴は何故か雄弁だしで一杯一杯だ。

だけどそんな奴の発言で僅かだけどの希望が見えた。まだこの飛空挺が空に戻れる僅かな希望だ。

遠い空、近い大地

空を縦横無尽に駆け回る聖典。それらが勢い良く、そして様々な方向から収束する光と砲芯へ向けて攻撃を放った。
聖典の黄金色の細い光……それらを強引にねじ込ませたから、光が膨張してその場で爆発を起こす。そして砲芯もモゲ落ちる。
黒い煙がバトルシップを汚く彩ってるよ。良い気味だ。そんな事を思ってると、通信機からセラの怒鳴り声が聞こえてくる。

「今よ！　さっさとスピード上げなさい！　突っ込んでも良いから、スピードアップアッ……ッツウウウ」
声が途中から痛々しくなった。どうしたんだ？　と思ったけど、そう言えば聖典を使うと頭が痛くなるとかいってたかも。
しかも二十機なんて確か最大数だ。頭痛も今までよりも凄そうだよな。いつもは慎重に二・三機ずつしか出さないのに行き成り二十とか、それだけ不味いと思ったのか。
でも確かに、シルクちゃんとセラがいなかった今頃墜落しててもおかしくは無かった。

「おい、大丈夫か？」
「大丈夫大丈夫。セラちゃんの事はこちらに任せてくれて良いから、そっちは操縦に専念してくれ！」
「テッケンさん……はい！」

何故かセラはそっと退場してた。代わりにテッケンさんが心配無いような事をいってくれるけど、ちょっとは心配だな。ちらりと視線を外に移すと、聖典が空を駆けてバトルシップに絶え間無く攻撃してる。

その動きとか、一人の人間が操ってるなんて思えない高度差だよ。セラってあれだよな。きっと『ニュータイプ』とかなんだと思う。
あの動き見てたら頭痛く成るのも分かる気がする。取り合えず僕達がセラに負担を掛けないようにするにはさっさと加速させてリア・レーゼを目指す。それしかないよな。

「私達は……生きてるのか？」

なんだかそんな事を呟く艦長。流石に動揺し過ぎじゃないか？
ハイジャックが起きても冷静沈着だったのに、何で今の状況にはこんなに弱いんだよ。

「生きてるよ。言ったろ、僕達は諦めないってさ！　頼りに成るんだよ僕の仲間って奴は！　だから加速の方法教えろ。死にたくないんだろ？」

僕のそんな言葉に、艦長はフラフラとしつつ立ち上がり外へと首を伸ばす。何なんだろう？　何を思って外を見てるんだ？

「足掻くこと……それは神への反抗ではないか？　我らモブリはどの種族よりも教えに尊いからこそ、シスカ様の愛を受け続けて種族だ。
我らにとって教えは絶対……神の為に死ねと言われるのなら……死まで受け入れるのが我らモブリの鏡……そうじゃないのかな？
僧兵の貴方はどう思います」

艦長にいきなり話を振られた僧兵はちょっと驚き気味に「え？」っと発して視線を上下左右にさまよわせてる。あれは答えに悩んでるって事か？
僧兵こそ、さっき艦長が言った事を迷い無く実行する立場じゃね？

そしてしばらく迷ったあげくに拘束された僧兵はこう答える。
「も……勿論、そうに決まってる。我ら僧兵は死は神に近しくなる行為と教えられてるからな。ははは、だからそんな犯罪者どもに協力なんてする事はないんだ」
僧兵はそう言いつつ、なんだか冷や汗だらだらだぞ。死は神に近しくなれる事なんだろ？　ならもっと盛大に受け入れてろよ。
「ふっ……これだから無信教者な人は困る。何も分かってないからな。例え神に近しく成る行為でも、そんな事に喜んでたら、シスカ様が悲しむだろうが。
あの方はとても慈悲深い神なのだ」
「お前さ……もう言ってる事が色々とおかしいぞ」
なんで慈悲深いシスカ様が、信者が死ぬのを良しとするんだよ。おかしいだろ。そんなの教えじゃない！
「お前達を縛ってるそのおかしな考えは、本当にお前達の信じる神の意志か？　違うだろ！　それは自分達の都合の為に部下の命をないがしろにする、上の奴らの思惑だ！　目を覚ませ！　そんな事でたった一つの命を安っぽく投げ出す気か？
そんな事する方が、教えに背いてるんじゃないのかよ！」
「君がシスカ教の何を知って語る！」
僕の必死の言葉に、艦長も語気をあらげてそう返す。ＮＰＣのモブリにとって、シスカ教は絶対。心の支えその物みたいなものなんだ。
縋ってきた物は裏切れない？　裏切りたくない。間違いだなんて思いたくない？　でも僕は何もシスカ教その物を否定したい訳じゃ

ない。
僕が否定したいのは、教えを都合よく利用してる元老院共の言葉……そしてそれを受け入れようとする無知なあんた等だ。
縋り続けて来たせいで、自分で考える事が出来なく成ったんじゃないか？

「僕はシスカ教なんて興味もないし、その教えを受けようとも思わない……だけど、死が神に近づく行為？　それはバカなんじゃないかと思う」
「バッ！？　バカだと！　我らモブリは、いつしかシスカ様の傍に再び行ける。その思いを信じ。その為の教え何だぞ！」

艦長さんが必死に僕にそう訴える。その顔は結構仰々しい。モブリの顔は全般的に可愛い感じの筈だけど、今の艦長さんにはそんな感情芽生えそうもないな。
刻んだ皺を浮かばせて、瞳孔開いたその顔は結構怖い。まあそれだけ必死なのも分からなくもないけど。だって信じて来たんだもんね。心の底から。それが普通だったんだ。
それを無信教者な人に言われちゃね。まあまだ誤解があるようだから、もう一度、ちゃんと言おう。

「すみません、言い方が悪かったですね。僕は何もシスカ教をバカにしてる訳じゃないし、そんな教えを守り続けるモブリの人達がおかしいなんて思わない。
ただ、その教えが命を奪うなんておかしいって言いたいんです。本当にそんな事をシスカ教は正当化してるんですか？
慈愛の神シスカが、そんな事を言うと思ってるんですか？　そんなのおかしいじゃないですか！　僕にはシスカ教の事なんて分かりません。だけどどの種族だって一つの体に一つの命なのは変わらない！

その重さは、僕だって分かってるつもりです。命の重みを、シスカ教は教えないんですか？　軽んじるんですか？　命を差し出せるかどうかが信仰の度合いじゃない。誰かの解釈を鵜呑みにするんじゃなく、自分自身の解釈で教えを教授して生きていく。

それが正しい信仰じゃないのか！？」

僕のそんな言葉に、艦長もそして僧兵も黙り込む。外では聖典が絶え間無い攻撃を続けるけど、どうやらバトルシップ事態に強力な障壁が張ってあるのか、聖典一機程度の攻撃じゃ通らない。

やっぱり最初の不意打ちで見せた収束砲じゃないと、バトルシップを落とす事は出来ないみたいだ。でもあれは不意打ちだからこそ出来た事。

今聖典が一カ所に集まったら、間違いなく狙い撃ちされる。何てったって、こっちの驚異はそれくらい何だからな。しかも砲芯二つなくなっても、バトルシップの武器はまだまだあるみたいだし……流石はバトルシップ言うだけある。

魔法を重鎮したミサイルやらなんやらがさっきから空で爆発してるよ。それら全てを聖典が引きつけてる間に、こっちは少しでも加速して、リア・レーゼに向かいたい所なんだけど……いかんせんまだ把握してないこと一杯。それにやっぱり損傷激しいし、変なメーターがさっきから赤いラインに到達してピーピー言ってるしで、なんだかヤバそう。

「正しい信仰……か」

艦長がポツリとそんな言葉を漏らす。するとその時、場にそぐわない声が聞こえてきた。

「ククク、ハハハハハハ」

そんな笑い声。どっから聞こえて来るかと思いきや、それはドアを開けてそこにぶら下がってる鍛冶屋の腕にある物から聞こえてきてた。

「どうしたんだ？」

「いや何、俺もシルクに加勢しようと思ってな。この船を守らないとだろ？　それにちょっとこいつが邪魔だったからここに置こうと思ったんだが……」

そう言って鍛冶屋は腕に抱えるひし形のクリスタルを見つめる。さっきからフードの下で大きく口を開けてゲラゲラしてる。

そんなキャラだったかこいつもさ。どいつもこいつもブレ過ぎだろ。

「ふん、人に諭されてしまうとはな。正しい信仰……あながち俺は間違ってないと思ったよ。サン・ジェルクの奴らは信仰に溺れてるからそれをどう受け止めるかはわからんが……これだけは俺からも言ってやろう。

信仰の豚になるな。信仰はあくまで支えであって、生き方を決める指針は己でやれ。それがこちら側のあの方の言葉だ。

そしてあの方がサン・ジェルクを好きでない理由も、豚が多いから。改善しろよ。星の加護が受けれなく成るぞ」

??　なんだ一体？　いきなり喋り出したかと思うと、訳の分からないことばかり述べやがって。こっちは置いてけぼりだっての！

まあ信仰の豚になるなって所は大いに共感したけどな。まさにその通りだと思ったよ。上手いこと言ったなこいつ。

「あ〜まあ取り合えず、ここに置いておくからな。お前はしっかり運転しろよ」

奴が雄弁に喋るから捕まえてるこちら側としては微妙な所なんだろう。鍛冶屋の言葉からそんな感じが伝わってきた。まあ置いとくのは良いとして、この飛空挺の操縦はちょっと荷が重いよ。もっと経験豊かな奴はいないのか？

「飛空挺を操縦したことある奴なんていない。諦めろ。それこそあのバトルシップみたいなのがプレイヤーにも普及するのなら、後々には操縦できる奴も現れるだろうが、今はいないな。

お前が舵を握ってるんだ丁度良いだろ。それにそこのモブリは詳しいはずだろ。取り合えず、お前は船を飛ばし続けてさえすればいい。バトルシップからの攻撃は俺とシルクが防いでやる。

攪乱はまあ……セラにしか出来ないだろ。聖典位だからな、あれだけ空で自由自在に動ける武器は」

「それは……まあそうだな。お前等も防ぐたって一発一発がデカいんだから、無茶し過ぎるなよ」

鍛冶屋の言葉は最もで、だから僕は気遣う感じの言葉を返す。本当に心配してるしね。だってさっきシルクちゃん吹き飛ばされた訳だし。それだけバトルシップの攻撃は強力だ。

なんてたってデカいもん。それが全てだろ。実際あんなのは防ぐなんて考えるべきじゃなく、避けるって考えるべき物だ。

でも、この船ではそれが出来ない。向こうの方がスペックで上回ってるから、避ける事自体が難しい。鍛冶屋も言ったけど、僕のやるべき事は結局この船を飛ばし続ける事だ。

無理に避けようとする事が無駄か。

「お前にそれを言われたらおしまいだな。心配するな。俺たちはお前とは違う。ＨＰが尽きても死ぬ訳じゃない。最悪、お前達だけでもリア・レーゼに送れれば良いんだよ。

俺たちは時間をかければ普通に追いつけるんだしな」
「鍛冶屋、お前……それはどうなんだよ。言っとくけど、僕とクリエとミセス・アンダーソンだけで辿り着けても困るんだぞ。右も左もわからないじゃないか」

僕はおもいっきり不安をぶつけてやった。だって不安な物は不安だろ。リア・レーゼなんて行ったことないんだぞ。しかも眠った二人のモブリを抱えてって、どうしろって言うんだ。

「重要な事を忘れるな。俺たちにとって大切なのは、お前達が無事にリア・レーゼにたどり着けたっていう事実だ。お前達はきっと取り返しがつかないんだから当然だろ。
それは全員無事に……が一番良いが、最悪の場合は、俺たちの中ではそう言う風に決めてる。だからお前はその舵を放さずしっかり握ってろ。
案外大丈夫だろ。お前は裸一貫で知らない町に投げ出されてもなんとか出来る奴だ。俺はそう思ってる」

なんだかそんな失礼な事（？）を言って、鍛冶屋はドアを勢い良く閉めて行った。たく、僕が知らない間に、みんなの中ではそんな取り決めがしてあったとは。
確かに僕達は取り返しが効かないだろうからな……取り合えずそうしてくれるのは実際にはありがたいとは思う。けどやっぱりどこか心苦しいよね。なんだか仲間を犠牲にして行くみたいで。
まあだけど、ようは全て上手くやれば良いことでもあるよな。鍛冶屋も最悪の場合って言ってたし、このまま何とか飛び続けて、リア・レーゼに突っ込めれば全員で晴れてリア・レーゼ入りする事が出来る。

「過度な希望はよしておけ。絶望が濃くなるだけだ。そもそもこの

船は今すぐ落ちてもおかしくない」
「はぁ？」
僕が折角ポジティブ思考を巡らせてると、床で無造作に転がったクリスタルからそんな聞き捨てならない言葉が聞こえた。何を根拠にそんな事を言ってるんだこの野郎。
「それはどういう事だ？　今の攻撃を受けたせいって事か？」
後方と船首が抉られてるからな。スクラップされた船みたいになってるのは事実だ。だけどまだ飛んでるぞ。それともこのピーピーうるさい音か？　よくよく見ると高度計も少しずつ下がってる様な。
真っ直ぐに浮いてた筈なのに、少し斜めってる気がする。
「それもあるが……なあ艦長。このままじゃこの船は落ちるだろう？」
奴はそう言って艦長に話を振る。自分で言うより、艦長に言ってもらった方が、信憑性が高いとか判断したんだろうか？　まあ実際、こいつの言葉はどこまで信じれるのかわかんないから、その判断はなかなかナイスと言わざる得ないけどね。
そして話を振られた艦長が、僕とクリスタルに閉じこめられたそいつを交互に見て、震える口から声を出す。なんだか奴のこの状態に恐怖してるのか、自分も逆らったらこんな風に……とか思われてそう。
「た……確かにこの警報は動力炉で生成してるエネルギーが不足してる音を示す物。それにさっきの攻撃で機体の損傷も激しくなって、大量に外に漏れだしてる」

漏れだしてるね。この青く光る紙切れみたいな光がそうなのかな？　確かに前からも後ろからもどんどん減ってるな。

「そしてその漏れだした分の供給がどうやら間に合ってない。バトルシップが追いつく前から、生成量がなんだか不足してたが、こうなると機体を浮かせて置くことは出来ないんだ。だから今度こそもう終わり……」

「それはもう良いです！　どうにか出来ないんですか？」

そう言う事を教えてくれたって事は、やっぱりちょっとは協力する気になったって事だろ？　なら解決方法まで提示しろ。

「別に私は犯罪者に協力する気はない。だが、まだ神の身元に召される気もない。私は脅されてるんだ。凶悪な犯罪者にな」

「それで良いから解決方は？　このままじゃどのみち神の身元に召される事になるぞ」

まあ実際はＮＰＣなんだし、何事もなかったかの様に艦長として復活してそうだけど。このモブリはそんな重要なキャラじゃなくモブっぽいし、きっとそうなる――んだよね？

まあ今は取り合えず、協力してくれるんだしそれでいいや。

「解決方なんて言っても……実際調子が悪くなったのはバトルシップが現れる前。攻撃が原因じゃないのならどうしようも……君も感じてただろう？　スピードが落ちてたのを。それも動力炉の不調が原因だ。

途中まではなんともなかったんだがね」

「そんな……」

それじゃどうしようもないじゃないか。いや、攻撃が原因で動力

炉損傷しててもどうしようもなかった訳だけどさ、たまたま調子悪くなったのならそれこそ偶然、運が悪かったと思うしか……
そんな絶望感の中、窓の外では聖典の一機がバトルシップから放たれたミサイルに落とされてた。赤い炎に包まれて、爆発と共に消えていく。攻撃が通らなくたって、セラには負担が掛かるんだ。
倒せる見込みがないのに、聖典を操り続けるのは苦痛だろ。いつまでも持つわけない。

「どのくらいだ？」
「何が……だ？」
「リア・レーゼまでの距離だ！　届く事はないのか？」

僕は必死に艦長にそう聞いた。レーダーはあるけど、見方がわからないからね。なんだかさっきから近づいてるようで近づいてない様な……とにかく直す事が出来ないなら、それを願うしかないじゃないか。
だけどやっぱり艦長の顔は芳しくない。

「いくら何でもここから今の推進力でリア・レーゼまでは無理だ。だが、かと言ってここら辺に降りられそうな場所はない……」

なんてこった。期待薄だったけど、まさに絶対絶命じゃないか。

「おい、ちょっと聞け」
「くっそ、こうなったら一気に加速して少しでも距離を稼ぐってのは……」
「それはダメだ。これだから素人は直ぐに無茶をやりたがるから困る。ここを空の上だと忘れるな。無理にスピードを上げても、地面に高速で激突するだけだぞ。
ある程度スピードを落としながら着水するんだ。そしてその為に

も当然エネルギーは必要だ。良いか、覚えておけ。空の上での無茶ってのは死に直結してるんだ。
しかもこういう大型船なら、自分だけじゃない誰かを巻き込む事を知っていろ。迷惑を掛けないんじゃなかったのか？
あの言葉は嘘なのか！？」
「嘘じゃない！　嘘じゃないけど……それならどうすれば……」

僕は唇を噛みしめて苦悩する。みんな頑張ってくれてるのに、僕は進み出せてもいない。それどころか、次から次へと絶望的な状況が露わになるだけだ。
そしてまた一つ、視界の端で聖典が炎に包まれて消えて行ってる。聖典が一つ減るごとに敵には余裕が出来るのか、それとも聖典が対処してた所に穴が出来るからか、この飛空挺に来るミサイルの数が増えてしまう。
そしてそれに寄ってピクとシルクちゃん、鍛冶屋の負担が増えるんだ。

「おい、だから俺の言葉を聞けって言ってるだろ」

こんなグズグズやってられないのに、実際にはこれ以上グズグズになりそうなんだからみんなに会わせる顔が無くなりそう。本当にこうなったら、この船に見切りをつけるべきかも知れない。それがある意味一番現実的な様な気がする。
バトルシップには僧兵しかいないだろうし、気を使う必要もないだろ。あのバトルシップをハイジャック……本気で考えるしか――

「おい！　いい加減応答しろ！！　こっちは重要な事を告げてやろうとしてるんだぞ！」

――僕が一世一代の決意を心で固めようとしてるときに、横から

割って入ってきたそんな声。一体なんだよ。
「てか、そもそも何でお前はそんな僕達に協力的になってるんだよ？　敵だろ？」
「別に貴様等を認めた訳じゃない。お前達が自分勝手な事で人々に迷惑を掛けるのは変わらんしな。それに予言もある。実際リア・レーゼには入ってほしくないが、ここでサン・ジェルクの僧兵に踏みつぶされる訳にはいかない。それが理由だ。
それに貴様はなかなか面白そうではあるしな」
なんだそれ？　お前だって結構自己中心的な考え方じゃん。で、一体何をさっきから訴えようとしてたんだ？
「ああ、それはだな……実は動力炉の異常は俺がケーブルを一・二本引き抜いてたせいなんだ。お前達の妨害工作の為にな」
「テメェのせいか！！」
思わず外に放り投げてやろうかと思った。
「まてまて！　考えろ！　それは当然の処置だろ。お前達と私は敵だ。嫌がる事をするのは当然。だが逆に、ただ調子が悪いみたいな事じゃなくてよかっただろ。
これならケーブルを繋ぎ直すだけで、動力炉の稼働は通常に戻る筈だ！」
まあそれはそうだろうけど……やってくれたなコイツ。そんな事をしてたとは、抜け目のない奴。
「モメてる場合じゃない！　取り合えずケーブルを戻すんだ！　君の仲間は甲板に居るので全部じゃないんだろう？　なら早く！」

命掛かってるからって随分艦長が積極的になってきたな。まあだけど急ぐことに異論はない。取り合えずここはノウイにでも連絡して……って監視室にまだ居るのか？　メールはダンジョンや戦闘中は送れないんだっけ？　でもここは基本送れる場所の筈。取り合えず試しに送ってみる事に。すると直ぐに返事が来た。

『了解っす！！』

なんとも頼もしい文面。自分の中で目が点野郎って呼ぶのをやめてあげようと思った。

遠い空、近い大地（後書き）

第二百八十七話です。
なんだか戦ってた人達との取りあえずの協力でどうにかなる？かなって展開です。まあ結局どうにかするのはスオウ達なんだけど……だけど今回は案外スオウは頑張ってないかも。
だけどその分仲間達の頑張りが半端ないです。セラとかシルクちゃんとか……まあ鍛冶屋もね。セラとか姿が見えてないだけで、かなり頑張ってます。まあそれは聖典でわかって貰えるといいですけどね。そろそろリア・レーゼが見えてくる頃だと思うけど、もう少し空での戦いは続く――かな？
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

空の戦い（前書き）

僕は動力を元に戻す為にノウイへとメールを送った。それによって動いてくれてるノウイは、動力炉で外されたコードを元に戻す作業をしてくれる。だけどその間にもバトルシップからの攻撃は続く訳で、セラにシルクちゃん鍛冶屋の頑張りで何とか耐える。

そんな中、コードの再接続の報告が。溢れだす動力炉の光が、この船にもう一度命を吹き込んだ。

空の戦い

「あった！　あったっすよ！　無造作に引き抜かれたみたいな大きなコードがあるっす！」

通信用の札から聞こえるそんなノウイの声。メールも使えた訳だけど、艦長が持ち運びようのお札もあると教えてくれた。

飛空挺内なら、それで自由に通信出来るらしい。監視室やここにあるような大がかりなのは、基本飛空挺外との通信用との事。

中なら結構簡単に通信が出来るんだってさ。まあそんな訳で、ノウイには監視室でその簡易通信用お札共々動力炉に向かって貰った訳だよ。そして今現在、そのお札から連絡が入ったと言うわけだ。

「よし、きっとそれだよ。急いで差し戻してくれノウイ！　それが元通りになれば、今の状態でも落ちることは無いらしいからさ！　頼む！」

「了解っすよ！」

そう言ってお札越しに「ふんぬっ！」とか僅かに聞こえてくる。僕達はヤキモキしながらノウイの報告を待つしかない。そんな中、再び聖典の一機が炎に包まれて落ちていく。そして甲高く響いシルクちゃんの叫び。同時に大きく飛空挺事態が揺れた。

どうやら久々に攻撃が当たった様だ。後ろの方で黒い煙が上がってる。操舵室に響く警報の音が、既に何種類にも膨れていて、どれがピーピーなってるのかわからない程になってた。

シルクちゃんは無事なのか？　それにノウイは？　こんな簡易な通信用のお札があるとわかってれば、全員にそれぞれ持たせてたのに。

もどかしくて仕方ないよ。一応シルクちゃんや鍛冶屋は見える所

に居るからまだ良いけど、やっぱり声を届けたい時ってのがある。姿が見えないセラやテッケンさんは、現状の報告とか無事かどうかとか、声でしか繋がれない事もある。
ノウイが今の仕事を終えたら、二人にもお札を持たせる様に言おうと思う。特にセラの事は心配だしな。あれだけの聖典の使用……かなり頭痛を併発してるだろう。だからこそ、テッケンさんにはセラの元に残って貰ったんだしな。
本当なら二人でやった方が早いのかも知れないけど、無茶やってるセラを一人には出来ないだろ。アイツも暴走するときはとことん行くから、誰かが見ててくれなきゃダメなんだ。
それにはやっぱり手下のノウイより、対等な立場のテッケンさんが好都合。それにテッケンさんモブリだしね。あの体ってあんまり肉体労働には向いてない気がする。届かない所とか多そうだし。
「くっ……私の船をこんなにも容赦なくボロボロにしてくれて……間に合うのか？」
艦長が攻撃を受けた所を心配そうに見つめつつそう言う。僕は取り合えず、お札越しにノウイへと呼びかけて見る事に。
「おい、ノウイ。どうだそっちは？」
「後一個っす！　だけどさっきの爆発のせいで、繋がってたコードの何本かから、青いキラキラしたものが噴出してるっすよ！？」
おいおい、なんだかそっちはそっちで大変そうだな。てかそれってやばくない？　状況悪化してるだろどう考えても。
「不味いな。取り合えず、コードが外れて無いのなら、締め直すだけで良いはずだ。少し時間が嵩むかも知れないが、仕方ない。そう伝えてくれ！」

「聞こえたかノウイ？　取り合えず締め直してくれって事だ。頼む！　お前の頑張り次第でこのまま地面と激突するか、空を浮いてられるかが掛かってる！」
「わかってるっすよ！　自分もここでは逃げないっすよ！」

気合い十分のノウイの声。少しでもみんなをフォローする事は僕達には出来ないんだろうか？　舵を握ってメーターとにらめっこしてるだけじゃ、なんだかいたたまれないんだよな。体が疼いて仕方ないって言うか……てか、艦長が協力してくれてるのなら、舵を託しても良いんでは？

「私は協力してるわけじゃない。あくまでも君達に脅されてる立場だよ。それにそこまで私を信用出来るのか？」
「それは……」

そう言われるとな……ちょっと舵を艦長に戻すのも確かに不安があるか。それにバトルシップからの通信が入ってきた時に、僕らの誰も出ないのは不味いか。
でもそれは簡易通信のお札でもどうにか出来そうな気もしないでもない。だけどやっぱり舵は僕が握ってた方がいいか。みんなの命をそのまま託せるまで信用ないし、この状況で眠ってる二人から目を離すのはどうかとも思う。
もしも万が一……最悪な事に成らないように頑張ってる訳だけど、万が一にも墜落なんかしたときに、誰もクリエ達の側に居ないと守ってやれなくなる。
それはどう考えたって不味いもんな。僕には今、この船を目的地まで飛ばす役目と、眠ってる二人を見守る役目が課せられてるんだ。
下手に飛び出す事も出来ないか。その時、自分達の居る操舵室に向かって迫るミサイルが見えた。それも三つも向かって来てる。

「なっ！？」

聖典の数が減って、シルクちゃんが吹き飛ばされた間に、鍛冶屋だけじゃ対処出来ない所をすり抜けてきたのか！？　やばい……急いで舵を回すけど、全く持って動きが緩慢。避けれるとは到底思えない。

僕は腰にあるセラ・シルフィングへと手を伸ばす。こうなったらイクシードで打ち落とすしかない。そう思ったからだ。

だけどその時、横や上から追いついてきた聖典が直前でそのミサイルを打ち落としてくれた。だけどまさに直前だったから、前の衝撃でヒビが入ってた操舵室のガラスが砕ける。雨みたいに降り注ぐガラス。そして一気に爆発の黒煙が操舵室へと侵入して、風と共に流れていく。

「ゴホゴホ！　息も視界もヤバいな」

聖典はグッジョブだったけど、これまでの衝撃で弱ってた操舵室のガラス破壊は予想外。なんだか体が少しズキズキするような……視界が晴れて体をみると、所々の皮膚が切れてる。

まあこの位、問題ないな。舵を放さなかった僕もよくやったよ。

「も……もうダメかと思った」

「この犯罪者！　さっさと投降しやがれ！　でないと、俺たちまで死ぬじゃないか！」

縛られた僧兵がなんだかうるさいな。まあ今回一番、死って奴に直面した場面ではあったよ。僕も心臓バクバクしてる。

だけどまだそれを言うか。コイツを人質にして脅せば少しは攻撃が止まるかな？　ちょっと考えてみて、そして僕は首を振る。

「なんだその残念そうな顔は！」
「お前は何にも役に立たないなって思って……」
「んな！？　犯罪者の役になんてたてるか！」

立派な志だな。だけどこのままじゃ僕たちと共々落とされる事に成るんだぞ。実際一般人な艦長とかを巻き込んでる時点で、僧兵程度の犠牲は仕方ないとか言う奴らだよ。

コイツを甲板に出して脅したって意味はないと思う。

僕たちを助けた聖典は直ぐにバトルシップの方へ戻る。あれだけの数を操ってるのに、本当にちゃんとそれぞれ見えてるんだなってちょっと感心した。でも流石に限界は近いかも知れない。

シルクちゃんも鍛冶屋も結構ボロボロだ。幾ら魔法は打ち放題だからって、精神力とか使うからね。そして鍛冶屋は鉱石操作で攻撃を防いでくれてる訳だけど、実際アイテムは有限だ。いつまでも鉱石の壁を作り続ける訳じゃないだろう。

スピードアップは命題だな。でないと落ちるし、どう考えてもリア・レーゼまでみんなの体力が持ちそうに無い。バトルシップもメインの砲芯が潰されたから一撃必殺は出来ないっぽいけど、その攻撃手段は圧倒的だ。

しかも強力な障壁張ってるから、一機程度の聖典の攻撃は通らないし……奴らの足を止める事が出来ない。少し隙を作れて、その間に残りの聖典での収束砲が狙えれば、まだ勝機はあるかも知れないけど……今のこの飛空挺じゃ、とてもじゃないけど隙なんて作れそうもない。

だから頼む！　そうノウイに願うしかない。そしてそんな願いが通じたのか、通信用のお札から待ちに待った声が聞こえる。

「やったすよ！　準備は整ったっす！　スオウ君そっちはどうっすか？」

そんな声で僕はメーターを見る。青い光がカスッカスだった筈のメーター内に、僅かだけどその光が強まってる様に見える。だけどまだ増えたりはしてないぞ。警告音もずっとピーピー成ってるし。

どういう事だ？　僕は艦長に視線を投げる。

「一度電源をリセットするんだ！　一瞬ガクッと高度が落ちるだろうが。動力路のエネルギーの循環がそれで正常に戻るはず……私が座ってたイスに付いてるケース入りの赤いボタンを押し込め！　そして直ぐに上昇下降のボタンに連なって緑のボタンがあるだろう。それを三秒以上の長押しで再起動だ」

「了解！」

僕は言われた通りにまずは艦長が座ってたイスを漁ってケース入りのボタンを発見。イスの右側に固定されてた。誤って押さないように透明なケースが付いてる訳だな。僕はそれをあけて赤いボタンを力一杯押した。

その瞬間ガクリと糸が切れた操り人形みたいな感じで高度が下がり始める。光ってた各種のメーターも警報も光が消えて音が止む。

僕は揺れる機体にしがみつき、今度は緑のボタンを押し込んだ。

「一……二……三！」

その瞬間、青い光の紙吹雪が飛空挺から一斉に溢れ出す様に飛び出した。損傷してる箇所から、それはもう沢山。これまでチョロチョロ出てたのとは訳が違う量だ。これが本来のエネルギー量って事か。

メーターが溢れる様に戻り、各メーターの輝きもなんだか増したような気がする。まあ別の原因で警報は鳴り続けてるけど、動力さえ戻ればこっちの物だ！

もう少し速く動けるのなら、やりようはきっとある。今はただ空

に浮かぶ大きな的だからな。

「よし！　動力の供給は問題なさそうだ！　よくやってくれたよノウイ！」

「いえいえっす！　じゃあ自分はセラ様の元へ戻って二人を甲板にあげるっすよ！　合流してた方がいいっすよね？」

確かに、これからと万が一を考えると、やっぱりみんな同じ場所に居るのがいいとは思うな。動力は戻ったけど、基本こっちの方が遅いんだし、それに何かを決めるにしても、みんなの意見は必要だ。

「ああ、頼むノウイ。それとその通信用のお札、甲板に居る二人用も持っていってやってくれ」

「わかったっす！」

そう言って通信終了。なんだかノウイは色々と使い勝手がいいね。素直だし。基本誰かに逆らわない。どう考えてもパシリ体質があるよね。まあそんなつもりで使ってる訳じゃないんだけど僕は。

セラの奴はそこら辺も踏まえて使ってそうだけど、僕はただ単にノウイは優秀だと思うから頼りにしてるわけだよ。戦闘以外では本当に使える奴だもん。

「取り合えずこっちはこっちでみんなの負担を少しでも減らして、尚且つリア・レーゼまで飛ばさないといけないんだよな。エネルギーも戻ったし、早速加速を――って、そう言えばまだその方法見つけてないや」

そう言えばそうだった。横移動に縦移動は出来るけど、スピードアップだけはまだ開拓してない僕なんだ。僕は期待する様な瞳で艦長さんを見つめるよ。

「これは協力じゃない協力じゃない協力じゃないんだ。神よお許しを」

なんだかブツブツと自分に言い訳してる。だけどそんな葛藤も終わると、ため息一つ教えてくれた。

「舵の真ん中に黒い球体があるだろう。それに手を添えて、圧力を変えればスピードアップ出来る」

「なんでここだけそんなハイテクなんだよ！」

どうりでわかんなかった訳だ。確かに舵の中央に着いてる変な球体は気になってたけどさ、そんなデザインだと思ってたよ。

なんか微妙に柔らかいし、下手に触るのも不味いと思ってたけど、そんな技術が隠されてたとは驚きだ。それなら舵もこんな原始的な方法じゃなくてもいいんじゃないのか？

「まあ、取り合えずさっさとスピードアップしないとな」

圧力でスピードが変わるって事は、何も添えてない今は最低速度って事なんだろうか？　てか、そもそも少しずつ落ちてた訳だし、最低速度よりも遅かったのかもしれないな。

僕は早速舵の中央にある黒い球体に右手を添える。なんだかちょっとヒンヤリしてる様な、だけどちょっと奥が暖かい様な不思議な感じだな。それに実際触った感触はそんなに柔らかく無かった。

でも少し力を込めるとプニって感じで手の形に凹むんだ。そしてそれを感知したのか、飛空挺が微細な振動を刻んだと思ったら明らかにこれまでよりも滑らかに空を滑り出した。まるで風に上手く乗れた様な感覚。

「今までと全然違うな！」
「当然だ。この船は旧型だが、耐久性は折り紙付きだからな」
なんだか自分が誉められたみたいに鼻高々な艦長。別にあんたは誉めてないんだけど、そんな事突っ込む気にもならないぜ。
操舵室のガラスは全部大破してるから、入ってくる風が変わったのがわかる。今までは目を開けとく位普通に出来てたけど、加速したらそれがちょっと辛い。
吹き付ける風が直ぐに目の水分を奪っていくんだ。こんな所で風を遮る事の大切さがわかるとは……てか、実際これが普通なんだよね。
今までが遅すぎたから問題なく感じてただけで、空を飛んでるんだからこれが当然の筈なんだ。でも結局はバトルシップの方が速いって事実には変わりないんだけど。ある意味ある程度スピードが出てくれたからか、追随しやすく成ったのかも知れないな。
さっきまでは無駄に上や下や追い越したりして様々な感じでこの薄ノロかった飛空挺に攻撃を仕掛けてたもん。わざわざ遠くまで追い越して急旋回とかやってた訳だけど、今は普通に追いかけて来てる。
位置は後ろ斜め上方。きっと簡単に追いつけるんだろうけど、その位置を保ってるのはそこが打ち落としやすい位置だからだろう。
『動きが戻ったみたいだな。だがバトルシップには遠く及ばない性能なのは変わりない。じり貧だ。お前達をリア・レーゼにはいかせん！！』
そんな声が通信機から入る。そしてそれと同時に、再び射出されるミサイルが四つ。だけど直ぐに聖典が反応して空中に黒い煙が立ちこめる。けれど、そんな黒煙の中から飛び出すミサイル一つ。どうやら打ち漏らしたみたいだな。

だけどそこはベテラン勢。シルクちゃんの障壁がそんな打ち漏らしたミサイルを防ぐ。だけどその時だった。黒煙を貫いてシルクちゃんの張った障壁へ届いた分厚い光の線。それは凶悪な赤紫色をした……収束砲？　まさかまだあんな一撃必殺の攻撃手段があったなんて……近くを飛んでた聖典数機が巻き込まれたのか炎を上げて消えていく。

「きゃあああああ！！！！」

甲高い声が耳に届く。流石にミサイル一つを防ぐために張った障壁であの光を防ぐことは難しかった。実際結構早く障壁は砕かれて飛空挺へと差し迫る。

「うおおおおおおおおおおお！！　下がってろシルク！！」

勢いよく前に飛び出した鍛冶屋がありったけだろう鉱石をアイテム欄から出現させる。そして組みあがったのは大きな盾？　それは今までの簡素な壁とは明らかに違う。デカいしね。

後ろの方で組みあがった盾は凶悪な赤紫した光を受け止める。四方に拡散する光が凄くまがまがしく見える。くっそ、完全にはめられたと思う。あのミサイルはこの本命を隠すための物だったってことか。

でも何で今更ってのはある。こんな強力な武器をまだ隠し持ってたのなら、遅かった時に打った方が確実立ったろうに……それともやっぱり遅過ぎたとかか。あの位置がベストな発射位置？

「鍛冶屋君大丈夫！？」

僕が色々と考えてるとそんなシルクちゃんの声が耳に入ってきた。遠目だからよくわからないけど、どうやらあの鉱石の盾でもヤバそ

うみたいだ。光の勢いはまだ衰えてないもんな。
どうにかしないと……この船の舵を握ってるのは僕なんだ。
「ビギナーだからな。荒っぽい運転に成るけど、耐えてくれよ！！」
僕はそう言って下降ボタンを押した。そして右手を握りしめ更に加速。地面に向かってグングン進む。
「なっ何をやってるんだ！？　気がおかしくなったのか？　心中なんてごめんだぞ！」
「誰が死ぬかよ！　これは生きるために取った手段だ！」
地面から聳える緑の木々が迫る。そこに触れるか触れないか位で平行飛行に切り替える。するとなんとか鉱石の盾から赤紫の光を引き離せた。後ろをちら見すると赤紫の光は地面と木々を抉ってまだ迫ってきてる。
しつこい奴。それに鉱石の盾はその役目を終えたみたいにボロボロと崩れ去ってるし、もう一度追いつかれる訳にはいかないな。
僕は今度は上昇のボタンを押す。そして一気に空へと掛け上がる！　上へ上へ！　もっと上へ！　だけどまだまだ追いかけてくる凶悪な光。
どんだけの出力を出し続けれるんだよ。飛空挺の船底部分を掠ってるのか、激しい揺れが襲う。赤紫の光は飛空挺を追い越して白い雲を喰いちぎるように空に穴をあけてる。
このままじゃ飛空挺が真っ二つにされてもおかしくない。どうにかしないと！　僕は舵をおもいっきり切るけど、それはただの横移動にしかならない。船底の穴が広がった程度で逃れられない。スピードも既に限界で、次第に限界高度が近づいてるのか勢いが落ちてきてる。これは不味い。

『くはははは！　このまま木っ端微塵にしてやろう！　神の裁きを受けるがいい！』

ノリノリな声が通信機を通して聞こえてくる。くっそ、何が神の裁きだ。都合の良い解釈で神を使うんじゃない。それが自分達の神様を安っぽくしてると気付け。

だけどこのままじゃ奴らにとって都合の良い神の裁きとやらが僕たちを打ち落としてしまう。どうにか出来ないのか？

シルクちゃんとかの障壁を期待しようにも、今までよりも激しく動いてるせいか機体にしがみつく事で精一杯の様子。

まあだけどここまで頑張ってくれたんだここからは僕の番だろう。だけど散々言うけど、スペックの圧倒的違いは痛い。逃れられる気がしないぞ。

「くっ、見てられないな！」

そう言って艦長さんが舵の前に設置してある自分用の椅子に駆け上ってくる。そして僕の腕の所から乗り出してきてなにやらガサゴソとやってるような。はっきり言って邪魔なんですけど。

「よし、取り合えず四機のプロペラは無事なようだな。少々荒っぽいが私が合図したら、もう一度おもいっきり左側に舵を切ってくれ！」

「？　りょ、了解です！」

良くわからないけど、ここは言うとおりにするべきだろうと何となく思った。艦長さんはこの船の事を誰よりも知ってる筈だからね。

「よし、今だ！！」

そんな合図と同時に僕はおもいっきり舵を切る。するといつもはただ横に移動するだけの筈なのに、何故かいきなり視界が百八十度回転した――ってこれは、飛空挺事態が回ってるみたいだ。

「うわあああああああ！！」

思わずそんな声をあげる僕。だって天井と床が逆転してる。クリエとかミセス・アンダーソンとかはおもいっきり天井に落ちた形になってる。てか、みんなは無事だろうか？　一声かけるべきだった。

「何やってるんだ！　早く舵を回すんだ！」
「そんな事言われても！　――んぎぎぎぎ！」

僕は必死に腕を伸ばして舵を回転させる。すると何とか三百六十度回転して、赤紫の光を頭上へと逃がす事に成功した。

「まだだ！」

そう言って更に何かやってる艦長さん。今気づいたけどどうやらこの人は飛空挺の四隅に取り付けてある四機のプロペラの向きを操作してるっぽい。あれが推進力に成ってないのは知ってた。

でもそれなら何のためにって思ってたけど、まさかこういう事の為だったとはね。飛空挺の細かい操作の為のプロペラなのか。そして今プロペラは上向きではなく横と前を向いた状態に、そこで再び舵を切れとのご命令が下る。

すると飛空挺がくるっと横回転して後ろを向いた。

向かい合う二つの船。旧と新の対決はまだ終われないし、終わらない。

空の戦い（後書き）

第二百八十八話です。
ようやくまともに飛べるようになった飛空挺。ここから空の戦いは機体と機体の勝負へと行く筈です。まあスペックでは完璧に負けてる飛空挺だけど、向かい合う事をした以上逃げられないでしょう。
どうやって旧が新に抗うのかは次回で！
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

乱れ風の先（前書き）

向かい合った飛空挺とバトルシップ。何やってるくれてるんだと思った矢先、艦長がこの船唯一の攻撃手段を教えてくれた。それは一矢報いる為の手段。向かいあた時点で迷ってる暇はない。

僕はその攻撃に懸ける事に。飛空挺の先端から現われた砲芯から放たれるのは青く大きな光だ。

乱れ風の先

「おいおいおいおいおいおいおいおいおい、これからどうしろって言うんだよ！！」

眼前で輝くバトルシップを見て、僕はそう言わざる得ない。だって一刻も早くリア・レーゼへ！　それが僕達の意志なんだぞ。なんで向かい合ってお見合い体制に成らなきゃいけないんだよ。逆方向じゃねーか！

「ふっふ……散々私の船を傷つけた礼をしないと収まらないじゃないか。今なら君達のせいに出来る訳だし、それにこのままでたどり着けるとも思えないだろう。

僅かばかりの牽制は必要だ」

なんてこった。この艦長さん、人質って立場を利用しだしたぞ。結構図太いじゃないか。しかもバトルシップに一矢報いるとか一体何を？

そんな風に思ってると、艦長さんからご命令が。

「さあ、君の握りしめてるその舵の中央部分を押し込みたまえ！握るんじゃなく手の堅いとこでぐぐっとね」

「こうですか？」

ぼくは手のひらの比較的堅い部分――手首に近い部分で握りしめてた黒い玉を押してみる。するとなんだか奥でカチッと言ったような？

「うお、なんだ？」

突然に軋むような音と共に、壊れてた船首部分が持ち上がってる？　そしてそこから仰々しい砲芯が姿を現した。

「これってまさか……」

「ああ、このタイプの飛空挺に唯一搭載されてる武器だ。バトルシップの砲には及ばないが、それでも十分な威力はある。

よし、黒い球体が開いてるだろ。その中の赤い鉱石をおもいっきり引っ張って再び押し込むんだ！　奴らに一泡吹かせてやりたまえ！！」

ノリノリ過ぎだろこの艦長。この会話が漏れ出したら、絶対に売国奴とかにされるぞ。だけど確かに言われた場所を見てみると、黒い球体が渦を巻く様に穴を開けてて、そこには赤い鉱石と言うか宝石みたいな物がある。これを引っ張って押し込めば発射できるのか。

実際向かい合った時点でヤバいんだし、これはやるしかないだろ！　確かにもしも当たればラッキーだしな！　僕は球体に手を突っ込み、その鉱石をつかみ取る。すると腕の周りに何十もの魔法陣が現れた。

自分の腕を発射装置にしてるとかなのかな？　わかんないけど、取り合えず気合い入れてこの一発に賭けてみる。

「いっくぞおおおおおおおおおおおおおお！！」

おもいっきり腕を引いて鉱石を引っ張り出す。それと同時にエネルギー供給が開始されたのか前方に集まる青い光。その光の紙吹雪が破損した所とかからも一杯出てて、この飛空挺を包み込む勢い。

「くっ、エネルギーの圧縮が上手くいかないか。仕方がない！　押し込むんだ！！」

そんな声を受ける前から僕は実際押し込もうと思ってたよ。だってエネルギーの圧縮率とか聞いてないし、引いて押し込むだったろ。
だけど想像以上に押し込むのには力が行った訳。これは実際モブリの力でどうにか出来るのか？　って位。だけどモブリの気遣いをしてる場合じゃないか。さっさと打ち込まないと目の前から逃げられかもしれないからな――って、なんだか向こうも再び赤紫した光が収束してるような。ヤバくないかアレ？

「大丈夫だ。向こうは撃ったばかりでエネルギーのチャージはまだ間に合わない筈だ！　それにもし打てたとしても、完全じゃないのなら、威力で負けはしないさ！」
「その言葉ぁ信じるからなあああああああ！！　いっけぇええええええええ！！」

右回りで回ってた腕に現れた魔法陣が、一斉に左周りに変わったかと思った瞬間、引っかかりが外れた様に腕が進む。そして形が戻ってた黒い球体にめり込ませた鉱石。それに腕に現れてた魔法陣が集まって行き、そこからも青い光の紙吹雪が。
そして次の瞬間、船首部分から弾き出される大きな青い光。その勢いが強力過ぎたのか、前に進んでた筈の飛空挺が後ろに下がった。
だけどそんな事は僅かな問題。僕は必死に光の行く先を見つめてた。この光がたどり着く場所であってほしいバトルシップを。
向こうはプライドか何か知らないけど、どうやら避ける気は無いらしい。まあそれは向こうも直ぐに光を収束しだした時から分かってた事。
向かう青い光に対して、奴らはさっきのよりも明らかに細い赤紫の収束砲をぶつけてくる。二つの攻撃は間でぶつかりそして拮抗する。

「くっそ、向こうはエネルギー不足してる筈なのに、拮抗出来るのかよ！？」
「向こうのはこの船の改良版だからな。こちらのよりも性能がいいのは仕方ない。寧ろこの状態で拮抗出来るてるだけ上出来だろう」
まあ確かにそうなんだけど……こっちは損傷が激しいからエネルギーの減りが早い。向こうも満タンの収束砲じゃないから、さっきのよりも長く放出出来るとは思えないけど、これはどっちが長く出し続けられるかの勝負に成りそうだ。
「くっ……」
さっきから妙に舵がガタツく。拮抗してるから船自体が不安定に成ってるみたい。それにエネルギーのぶつかり合いだから、単純に同じ位置で攻めぎ合いってふうにも行かない。
すこしずつだけど位置がズレて収束砲同士がズレていく。だけどこの重なり合いが外れたら、再び船のどこかを持って行かれる訳だから、そんな事させられない。
僕は舵を握る腕に力を込めて、向こうの動きにあわせる様に舵を回す。きっと向こうもそうしてる。
だから僕達は拮抗したまま空を回る。空と同じ青の紙吹雪とまがまがしい赤紫の光。どっちがこの勝負を征するのか……僕達はただ祈るしか出来ない。
だけどその時、向こうが反則行為をしてきた。
「なっ！　ミサイルって……」
『くはははは、我らの船はそちらとは違うんだよ。攻撃手段の数がな！！』
得意気にそんな声が通信装置から聞こえてくる。別に正々堂々を

願ってた訳じゃないけど、雰囲気を察しろよな。まあそれはただのこっちの願望だろうけど……当たり前か、出来る限りの攻撃手段を使って潰しに来るのは。

僕達はルールに則った勝負をしてるわけじゃない。卑怯なんて言葉は存在しないんだよな。そもそも実力が拮抗してたり、有利な状況で戦闘に入れる方が希なんだよ。僕の場合は……かも知れないけど、でもだからって諦めれる訳もないからここまできちゃってるんだよな。

迫り来るミサイル。既に鉱石を使いきった鍛冶屋を頼る事は出来ないだろう。ならシルクちゃんやピク、セラを信じるしかない。収束砲の拮抗で動けないしな。

既に聖典は動いてる。そしてピクもシルクちゃんもまだまだ頑張ってくれてる。大丈夫……まだ行ける！　直前でのミサイルの爆発で機体が揺れる。だけどバトルシップの方はここぞとばかりにミサイルを撃ちまくり。これってまさか……

「誘われたんじゃないか？」

そんな疑問が沸いてくるな。まあそんな事しなくても打ち落とせるだろうけど、目の前に常にいてくれた方が楽なのは確かだろ。

（くっそ……どうする？　収束砲をズラして、この状態を解いた方がいいのか？　だけどこれを逃したら、きっともう二度と向かい合う事は出来なくなる。こっちのエネルギーも微妙だけど、向こうもそろそろ限界の筈。

少しだけ長くこちらが持てば、バトルシップに攻撃を当てられる……それは大きい）

心の中でそんな考えに悩む。だって逃げ続けるのはとても大変だ。でも向こうにもダメージを追わせられれば、少しは状況が変わるか

も知れない。
　そしてそのチャンスは今しかないんだ。この次があるとは絶対に思えない。ここでやらないと、ただ必死に逃げるしか道はなくなる。まあ結局それをやるしかないとは思うんだけど、少しでも良いんだ。バトルシップの機動性を落としたい。
　欲を言えばそれが望みなんだ。だけどこのままじゃその前に落ちそうな雰囲気なのも否め無い。今はまだシルクちゃんの強力な障壁とセラの聖典でどうにか成ってるけど……なりふり構わず撃ってきてるバトルシップのミサイルの量は半端ない。
　殆ど止まってる様な状況だからって奮発しすぎだろ。流石に空にミサイルの軌道の後が板みたいに成るほどの数じゃ、シルクちゃんの障壁もいつか破られるだろう。セラの聖典だって全然追いついてない。
　目が痛くなる閃光と、耳をおかしくする爆発音の連続だ。やっぱり欲を出しすぎるのはよくないかな……とか思い出してきた。だってここで一矢報いるのに賭けるよりも、エンジンが復活して元に戻った機動力に賭けた方が……ってそれがアテに出来ないからこんな無茶をしてるんだった。くっそ……だけどこのままじゃ……

「ガガ……ガガ――ちょっ――と、後少し……このままで居なさい！」
「セラ……か？」

　多分この声はそうだろう。だけど随分ノイズが混じってるな。でもお札から通信が来てるって事は、ノウイがそれを届けたって事か。でも後少しこのままってどうする気だよ。
　それにそんな事を言われなくても、この状態は後少ししか持ちそうにない。そろそろお互いの収束砲が限界っぽいからな。
　だんだんと細くなって行ってる互いの光。この様子だと殆ど同じタイミングで消えると思う。だけどそれじゃあ困る。僕はセラと繋

がってるお札へと声を出す。

「どうするんだ？　もうこっちの攻撃は持ちそうに無いぞ」
「いい――から、ガガガ、アンタはそのまま！　ノウイ！」

そんな声と共に、一方的に通信切られた。そのままって、この撃ち合いが終わったら全力で逃げるしかないんだけど……せめて何をやるのかだけでも言えよな。

そんな風に思ってると、甲板に三つの陰が現れた。それはセラとノウイとテッケンさん。どうやらミラージュコロイドで側面を一気に上がって来たみたいだな。

遠目だけどセラの奴は、案外大丈夫そうにしてる。みんなの姿も見えるから、少しだけ安心感が増すな。そんな中次々と障壁に衝突しては爆発していくミサイル群。マジでシルクちゃんがいなかったら、今頃この船は木っ端微塵に成ってる事だよ。

そんな中、なにやらシルクちゃんに言ってるセラ。そしてこちらを見てる？　だけどセラは何も言わずに前を向く。一体何をやる気なんだ？　聖典はミサイル迎撃に回ってない様にも見えるし、何かを狙ってるのは分かる。

まっ、もう既にこの船の攻撃でバトルシップに傷を付けるのが絶望的な今、頼りに成るのはセラの聖典だけ。仲間を信じることは基本だし、やってくれる事を願うさ。

セラが期待を裏切った事ないしな。

次々と空で弾けて青い色を黒へと塗り変えて行くミサイルの攻撃。それらを一切引き受けてるのがシルクちゃんで、ここの突破の鍵を握ってるのがセラ。男性陣は女の子を後ろから応援する立場になってる。

ちょっと情けないかも知れないけど、こればっかりは仕方ない。たまたまその役割を担う事が出来たのが女の子達だけだったって事

だ。
空に立ち込める黒煙のせいで、バトルシップの見える範囲が奇しくも攻撃で繋がってる部分だけになった。ゆっくりと回る互いの船。黒煙から出てはまた入る。そんな事を交互に繰り返す羽目に成ってるよ。
だけどその時、空の高い位置に何か光るものが見える様な。輝く黄金色の光……あれは聖典か？　ミサイルを打ち落としてないと思ったら、この隙に乗じての収束砲を準備してたのか。
そういえば、別にセラの手元から撃つ必要は無かったんだっけ？
こちらに気を取られてる間に、全く別方向からの収束砲での攻撃。これは効く筈だ。
一機ずつじゃダメでも、力を合わせれば貫けない物はきっとない。そう思える程のエネルギーの増幅量だからな。唯一の不安点は、最初にバトルシップを落とした時よりも、聖典の数が減ってる点だ。
収束砲は確か、四の倍数の聖典が必要で、四・八・十二・十六・二十で威力も比較的に変わるとか聞いた様な気がする。
確か六機位は落とされてた筈だから、十二機での収束砲しか撃てない今の状況で、バトルシップの障壁を抜けるのか？
きっと二十機で撃ってた最初の不意打ちとは多分相当威力が変わるんじゃないかと思う。だって二十機全部を使っての収束砲なんて、僕も間近で見たことない。
それだけ使う場面を選ぶ程――って事なんだろう。だけど十二機だって相当なのは知ってるし、願うしかないよな。セラを……聖典を！！
目映い光を弾けさせて真っ直ぐに降り注ぐ黄金色の光。次の瞬間、収束砲がバトルシップを大きく揺らした。そして片翼から上がる炎と煙。セラが全身全霊を込めて放った収束砲は、バトルシップの体を貫いてる。
『なっ……に！？　そんなバカな！！』

そんな声が通信機から漏れ聞こえてくる。流石に予想外だったんだろう。常に自分たちが有利だとか高をくくってるからそうなるんだ。機体性能だけで勝負は決まる訳じゃないんだよ。
片翼がもげて大きく左側に蛇行しだすバトルシップ。そのせいで重なりあってた二つの攻撃もズレて、それぞれの機体に僅かに傷を刻んだ。
けどそれは微々たる物、すぐさま頭が切り替わってこう思った。

（今しかない！）

ってね。僕は大きく舵を切って、もう一度反転させて、リア・レーゼの方向を向いた。そして球体に圧力をかけてスピードアップ！
……アップ……アップ？　しようとしてる筈何だけど、あんまりスピードが変わらない様な。

「あの一撃は大量のエネルギーを使うからな。撃った後はしばらく加速が制限されるんだ。再びエネルギーを生成する僅かな間だがな」

そんな説明を椅子に座ってる艦長がしてくれる。だけどその僅かな間が貴重なんだよ。いやまあ、あれだけの攻撃だ。リスクがないなんて思っては無かったけど……すぐさま加速できないのは痛い。
後ろをチラリと見ると、高度がどんどん下がってるバトルシップが見える。どっからあの強力な攻撃を出してるのかと思ったら、どうやらこの船と同じ構造の砲が内部に収納されてたみたいだ。
そこら辺は後継機って事何だろう。この飛空挺の唯一の武器は受け継がれてた訳だ。砲芯は二本とも壊したとか思ってたけど、その内にもう一本とっておきを隠し持ってた訳だ。
僕は横目でバトルシップを見ながら、ずっと手に力を込めてる。直ぐに加速出来るようだ。だってあれで終わったなんてなんだか思

えなくて。だから（早く早く）と念じてる。
すると通信用のお札からこんな声が聞こえてきた。
「ちょっと、もっと急ぎなさい――っつ……」
セラのそんな激。だけどやっぱり頭痛を併発してるのか、ちょっと辛そうなご様子。なんだか雑音が混じってないな。双方のエネルギー砲の影響だったのか？　てか、急ぎたいのはこっちもだってそうなんだよ。ただ急げない理由があるだけだ。
「そんな言い訳いらないわよ。死ぬ気で急ぎなさい。こっちは流石に……限界なんだから……後は任せるわよ」
そんな声に操舵室の外を見てみるとセラはペタンと床に腰を下ろしてる。世に言い女の子座りと言う奴だ。気が抜けた様なご様子なのかどうか……ちょっと心配気に見てると、横にフラッとセラは倒れた。
「なっ！？」
僕は割れた窓の部分から身を乗り出しそうに成ったよ。だけど僕がそんな事をしなくても、周りのみんながセラに駆け寄ってる。
流石に二十機の聖典の操作に、二回の収束砲は負担が大きかった様だ。周りを飛んでた聖典は、セラが倒れたと同時に、その姿を元の鏃に戻して、セラの元へと消えていった。
これで僕達にはバトルシップへの攻撃手段が実質消えた事になる。本当にもう、逃げる事しか出来ないな。セラの姿はノウイやテッケンさん、鍛冶屋やシルクちゃんの陰で見えない。
だけどか弱い声が通信用のお札から漏れ聞こえてきた。

「ここまで……したのよ……着けなかったら……バッキンバッキンガムだからね」

バッキンバッキンガムって――ちょっと吹きかけたじゃないか。でもなんだかか弱いってか、寝言みたいな感じ。気を失ってるのか？　結構激しく頭部をぶつけてたし、意識が飛んでるのかも知れないな。

どうせ聞いてないだろうけど、僕はセラにむかってこういってやる。

「分かったよ。後は任せとけ。目を覚ましたときには、リア・レーゼだ！！」

僕は手に力を込める。するとようやく青い光の紙吹雪が溢れて来て加速出来た。スピード感ある風が肌を撫でる。このまま一気にリア・レーゼへ！

グングンと進み、前方に見えてくるのは大きな傘を差したかのような強大な影。その周りにも山みたいな傘が幾つも見える。

レーダーでは大体あそこ等へんっぽいけど、どうなんだ？　僕は艦長に視線を投げかける。

「あそこがそうだ。あの一番大きな傘こそ、世界樹とも神樹とも呼ばれてる木。そしてその木の麓から、リア・レーゼが広がってる。まあだが、影が見えてもまだ遠いがな。木が大きすぎるから、既に見えてるだけだ」

マジかよ……確かに大体世界樹とか言う木はドデカく言われてるけど、やっぱりＬＲＯでもそうなんだな。一番デカいのは上の方が雲を突き抜けてる様に見えるぞ。

どこまで行ってるんだ？　案外この木を登れば月まで行けそう…

…とか思えるかも知れない。僕が上を仰ぎ見てると、後方で爆発が起きた。

「何だ！？」

声を出して振り返ると、そこには猛スピードで追いかけて来るバトルシップの姿はあった。あれで終わったとは思ってなかったけど、追いついてくるの早いよ！

モゲた筈の翼も戻ってるじゃないか。一体どういう事だ？

「くっそ！　みんな捕まっててくれ！」

僕は通信用のお札に向かってそう言って、おもいっきり右に舵を切る。その瞬間飛空挺を追い越してバトルシップが前方に。だけど直ぐに上昇して僕達の飛空挺に影を作る様に飛び始めた。

今度は何をやる気だ？

『勝ったと思ったか？　甘いわ！　バトルシップはそこいらの材料で出来てはいない。私もよくわからんが、この船の外装を覆うのは全く新しい材料だ。

そしてそれは我らモブリに宿りし魔力で復元可能。自己再生機能を有した材質なのだ！　下手に外装の羽を狙わずに、最初の時と同様に動力炉を狙っていれば止められたものを。これが貴様等の敗因だ！』

自己再生だと？　今そう言ったかこいつ？　なんて反則的な材質だ。魔力が居るらしいけど、実際ＭＰが無いＬＲＯなら、直し放題じゃないか！

いやでも外装だけなのか……だからエンジンを打ち抜かれたもう一機のバトルシップは復帰してこないし、外付けの砲芯二つは、元

に戻せてない。あくまでもバトルシップを形作ってる外装だけが修復可能って事なんだろう。
でもそれでも大概だな。障壁だって張ってあるのに、その上自己再生って……本当に一撃で動力炉を破壊しないと止められないじゃないか。
そんな事を思ってると、上から何か投下されてくる。小さな黒光りする物体。それが強烈な音を出して飛空挺の外装を凹まして行く。超音波爆撃か何かか？　するとその音のせいでプロペラがもげてしまったり、なんだか動力の様子がおかしくなったりで推進力が落ちてきた。
くっそ……もう見えてるのに！

「頼む頑張ってくれ飛空挺！」

シルクちゃんもさすがに音までは防げないみたいだし、ここは僕の操縦技術にかかってる。舵を切り、上昇下降と様々やってみる。だけど無理だった。それどころか動力炉部分から火の手が！　マジで不味い……そう思ったとき、クリスタルに封印されてる奴が突然こう言った。

「高き世界樹の姿が見える。まさかここまで持つとはな……願ってはいたが期待はしてなかった。これはお前たちの絆の証か……神の意志か……だが既に黙っては居られないな。
我らが神子の御前、神の地での暴挙は許せん」

何を言ってるんだ？　そう思ってると、奴のローブの模様が輝きだした。そしてローブだけを残して中身が消えた！？
次の瞬間、奴は甲板に立ってた。

乱れ風の先（後書き）

第二百八十九話です。
そろそろリア・レーゼが見えてくる頃ですね。きっと次の回でこの空での戦いは決着出来ると思います。それにしてもバトルシップはしつこい。ついでに自己再生とかチート能力ですね。
書いてて自分でも思いました。だけど魔法ってその位あってもいいかなって……夢があるし。
てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは

飛び続けるは他が為に（前書き）

甲板に現れた奴は、本当に奴なのか？　あの時シルクちゃんが封印したアイツなんだよな？　だけどあの魔法は破れない筈が絶対だと言っていた。なのに奴はそこに居る。

だけど中身を知らないから、僕は最後まで疑うよ。だけどそんな思いはあっけなく崩れ去る。甲板に現れた奴は見えない力でバトルシップを吹き飛ばした。それはまさにあの時の奴の力。本当に封印魔法から自力で抜け出しって事か？

飛び続けるは他が為に

「え！？　えええ！？」

僕は何度もクリスタルと甲板に現れてる奴を交互に見る。だって……え？　どうやって？　確かそこいらの拘束魔法なんかよりもずっと強力な封印魔法で閉じこめた筈だったろ。

それをこんな何事も無かったかのように外に出てこられても反応に困る。だってシルクちゃんも出られないって言ってたじゃん！あの子が嘘を言うはずないし、それに彼女の魔法の腕は折り紙付きだぞ。

あんな簡単に外に出れるなんてあり得ない。一体どういう事だ？中に残ったローブが鍵なのかな？

「何をする気だアイツ……」

もしかしてここでアイツにまで暴れられると手の付けようがないんだけど……それになんだかみんな唖然としてるし。バトルシップからの攻撃で甲板に張り付け状態なのも大きいな。誰も奴に近づこうとしないもん。

バトルシップからの音響爆撃で、耳を押さえて甲板に伏せるしか出来ない中、奴だけは何故か悠然とその場に立ってる。

まるで何事もないかの様にだ。そこに現れただけでも異様なのに、周りに全然影響されてないとかどんなオカルトだよ。

動力炉に届いたらしい攻撃のせいで推進力が落ちつつあり、さらに四機のプロペラも大破。折角ここまできたのに、バトルシップのチート性能のせいで、セラが我が身を犠牲にして撃った収束砲まで無駄にされた。

そして更に今は、やっとの思いで捕らえた筈のアイツまで解放さ

れてる。状況が益々悪くなって行ってる気がする。
セラの奴に「起きたときはリア・レーゼだ」とか言ったけど、現状がそれを許さなく成ってきてる様な気がする。

「もうダメだあああ――！」

そんな情けない声を出すのは、縛られたままの僧兵。それを言うなよなって感じで僕は睨み付けてやるよ。思ったって口に出すなよ。ここまで頑張って来たんだぞ。

「お前たちのせいだ！　こんな所で死にたくなんか無いのに……」

そう言ってポタポタと床に涙を垂らし始める僧兵。死にたくなんか無い……それは僕だって同じだ。まあ確かにただ巻き込まれただけのこいつにとっては泣きたくなる状況だよな。
本当なら気の利いた言葉でも返してやりたい所だけど、いかんせん僧兵に構ってる場合じゃない。状況は絶賛絶体絶命中だ。自分には舵を持っておく事が役目で放すことも出来ないから、飛び出すことも出来ないし……甲板に姿を現した奴が何をしだすかドッキドキだ。
落とされ続ける音響爆弾が飛空挺の木の外装を凹ませては削り取っていく。流石にやばいけど、避けることさえもう出来なくなってる。舵を回しても動けないんだ。大量に落とされるその強力な音が、壁みたいにこの船を押し潰してるかの様な……そんな感じ。

『くはははは！　潰れてしまえ。神にその罪を懺悔しながら――ゲフン！？』

その声は通信機じゃなくバトルシップからの拡声器から盛大に聞こえてきてた。そして突如として腹パンを貰ったかの様な声に成っ

たと思ったら、バトルシップ事態が大きく空中で反っていた。一体何が？　いや、奴が何かをやったんだろうけど……色々とわからない事一杯だ。

まぁ、だけど奴の攻撃手段は見ぬけてないからな。だけどあれだけデカイものまでも弾けるとは相当だ。てかそろそろ疑ってもいいと思うけど、本当にあのローブの下の奴だよな？　どうやったってシルクちゃんが自信満々に出れないと言ったのが引っかかる。そもそも僕達はあのローブの下の姿を見てないし、実は別人とか？

いや、そもそも人なのかって疑問も出てくるな。身長あるし、元からモブリではない事はわかってたけど、その姿はちょっと想像を超えてる。

風に靡く白銀の長い髪。まあそれは良いとして、問題はその体からもワサワサと出てる様な白銀の毛だ。腕から胸や背中にかけてまで、完全に覆われてるじゃないか！　それになんだか腰から尻尾みたいなの垂れてるし……尻尾だよねあれ？

元から中身知らなかったけど、なんだかイメージと違いすぎて結びつかないな。

『くっ……きっさま、何――ええお！？』

飛空挺から聞こえる声が空でクルクル回ってる。てか声だけじゃなく機体自体もクルクルと空でコマみたいに回ってる。

同じだ。僕達に向けてた得体の知れない力……それをきっと奴は使ってる。やっぱりあのローブの中身はこの白い奴で決まりっぽいな。だけどローブが無くなってもわからない……どうやってあんな事をやってるんだ？

『貴様は……そうか……これがどういう事かわかってるのか！？サン・ジェルクとリア・レーゼの間で問題になるぞ！』

クルクルと回り回って高度が同じくらいまで落ちたバトルシップは、自己再生したらしい翼を大きく広げて、態勢を立て直した。そしてその砲台を開き、威嚇してるみたいな態勢のままこちらに近寄ってくる。
あっと言う間に並ばれた飛空挺。やっぱり振り切る事なんか出来そうもない。動力炉までやられた今の状態では尚更。それなのにあんなミサイルの砲台を惜しげもなく開きやがって……嫌みか。

「問題だと？　それはこっちの台詞だな。貴様等は自分達が何をやってるのか理解してないらしい」

奴は横に居るバトルシップへと向けて堂々とそんな事を言ってる。てか聞こえるのか？　通信出来る場所はここ操舵室と監視室だけだった筈だろ。
バトルシップみたいに声をスピーカーか何かで拡声してるのならともかく、奴は完全にノーマルの声だったぞ。届いてる訳がない――と思ってたけど、さっきの言葉に反応した言葉がバトルシップから告げられる。

『我らが何をやってるか理解してないだと？　我らは誰よりもそれを理解してるつもりだ。神の反抗者達の拘束と、そいつ等に捕らえられた哀れな子羊達の救出。それが我らの命題だ！　何か問題でも？
確かそう、リア・レーゼの使者の方よ』

リア・レーゼの使者。やっぱり奴はリア・レーゼの関係者だったのか。最初に会ったときからそれを臭わせる様な発言してたよな。予言がどうとか、リア・レーゼには入らせないとかなんとか。
だけど今は僕たちに協力してるように見えなくもないけど……それもちょっと違うんだろうな。この船が落とされるのは自分の身的にも危ないからだろきっと。僕はそう睨んでる。

てか一体どうやって奴はバトルシップへその声を届けてるんだ？
そこからして納得出来ないんだけど。それとも外に居るから、バトルシップ側が音声を拾い上げてるのかな？
それならまあ、わからなくもないかも知れない。あれだけの先進技術を詰め込んだ船だ、そのくらいの機能は有してるべきだろう。
勝手にそんな想像を確定してると、通信用のお札から可愛らしい声が聞こえてきた。

「スオウ君、聞こえますか？」
「シルクちゃん！」

テンション高めに反応する僕。いやだって、なんだかちょっと緊張して。今更変な感じだからさ、まるであれだよ。好きな子から電話を貰った時の様な感覚。
いや、好きって言うか気になる子ね。まあだけど浮かれてる状況ではないから、心を落ち着かせて僕は気になる事を聞いた。

「えっと分かってないかも知れないから言うけど、そこに居る白い奴はシルクちゃんが封印魔法で封印したはずのアイツなんだ！
なんでかわかんないけど、ローブだけを残して中身が外に出ちゃった状況なんだけど……そんな事って可能なの？　確か中からの脱出は不可能とか言ってたよね？」

僕のそんな言葉に、シルクちゃんが一瞬驚いた様に息をのが伝わった。だけど直ぐに、どこか納得したかのようにこう言った。

「不可能……の筈でした。でも確かにその人はここに居ます。さっきバトルシップを攻撃したのを見てもしかしてって思ったんですけど……やっぱりそうなんですか。
ああ、でもやっぱり信じれません。あの魔法は絶対に破られる物

じゃないんです」

なんだかシルクちゃんが悲痛な表情で頭を抱えてる姿が声だけで想像できる。多分それだけ信じれない事なんだろう。彼女にとってはそれだけ絶対的な魔法。

いや、シルクちゃんが絶対って言うんなら、実際それはＬＲＯで絶対って事なんじゃないだろうか？　だってシルクちゃんは謙虚な子だ。自分の魔法に絶対的な自信があったって彼女はその言葉を使うことは決してしないだろう。

それを僕はよく知ってる。そりゃあまだ一ヶ月にも満たない付き合いだけど、それ以上の時間を凌駕する位の濃い時間を過ごしてきたと思ってるもん。

だからきっと、彼女が絶対を使うのならそれはシステム的にそう言うことに成っている――と言うことだろう。だけどそれでも……奴は彼女の目の前に居るんだ。それが今僕達が直面してる事実でどんなに絶対を叫んでも、認めなくちゃいけない真実がこれだ。奴は絶対を覆してそこに居るんだ。

「考えられません。ローブだけが封印されたままなら、もしかしてテッケンさんと同じように分身を使えたのかも。それならまだ納得は行きます」

「本体である奴自身が今の今まで隠れてた理由は？　あの時に僕達を倒せてた筈なのに、分身を用意してまでそれをしない理由なんてないよ。奴は僕達を認めたとかそう言う訳じゃないんだろうしさ。あの段階じゃそんな兆しもキッカケも何もなかった。つまりは奴が手を抜く理由なんて無かったんだ」

そう分身にまんまと身代わりをさせたのなら、油断してた僕達をあっと言う間に倒す事なんか造作も無かったはずだよ。

それをやらなかった……いや出来なかったのは、封印されたのが

奴自身――つまり本体だったから。そう考えないとそこら辺がしっくりこない。
だけどそれじゃあ、シルクちゃん的には自分の封印術を抜けられる術があることに納得できない。そんな感じだな。
「くくく、神の反抗者と子羊か……確かに尤もな理由だな。だがそんな大義名分はこの空では行使出来ない事だ。ここは既にリア・レーゼの空域。
この全ての空と大地は我らが姫御子の管轄だ。サン・ジェルクに染まった神の名で、この空を汚す事が出来ると思うなよ」

僕達がコソコソと通信用のお札で話してると、奴らの大層な会話が割り込んできた。いや、まあそっちが重要だから良いんだけどね。
それにしても既にリア・レーゼの空域だったとは驚きだ。それなら流石に後少しって事だろう。もう少しだ飛空挺。もうちょっとだけ頑張ってくれ。
僕はそんな思いを心で呟いて舵を握る腕に力を込める。流石にたった一回操縦した物と心通わす事が出来るとかは思わないけど、だけど言わずにはいられない。だって僕達をここまで運んで来てくれたのは紛れもなく、この飛空挺なんだ。
それに僕達のせいである意味一番被害を被ってるのはこの飛空挺だろうしさ。幾ら頭下げたって下げたり無い位だろ。

「スオウ君！　飛空挺は持つんすか？　なんだか動力炉からは火も出てるし、さっきから甲板にまで薄い煙が流れてるっすよ」

お札から聞こえてきた今度の声はノウイ。確かにノウイの言葉通り甲板には薄い煙が流れてる。船首部分から出てる煙が流れてるみたいだな。
さっきの音響爆弾の影響で、船首にあった砲芯になんらかの異常

が出たのかも知れない。頼りにはしてなかったけど、これで使い物に成らなくなったか。流石に武器が一つも無くなると、心細い物があるよな。

セラもぶっ倒れて実質こちらから攻撃は出来なくなった訳だし……って、そうだセラは無事なんだよな？　僕は急いでそこら辺の確認をノウイにしてみる。

「おいセラは！　セラは大丈夫なのか？」

「大丈夫っすよ。多分、眠ってるだけっす。セラ様は特別っすからきっと大丈夫。知ってるっすか？　二十機の聖典を操るなんて規格外もハンパないっすよ。それこそあのシクラとかのイレギュラーと同等っすよ。

普通は一機が限界で、二機を操ろうとするだけで、頭痛が出てくるっす。三機以上なんてセラ様が出てくるまで論外だって聞いたっす。

それほどスゴい事で自分達を守ってくれてたんすよ！」

ノウイの熱気が通信越しでも伝わるかのようだ。だけど実際、そこまでなんだと思った。前に軽く聞いた気がするけど、そりゃあ二十機も同時に操ったら倒れるよ。相当の覚悟と無茶が必要なんだろうな。

それこそ僕が命を懸けてるのと同じくらいかも。だって頭痛って頭じゃん。それは一番リアルと近い場所だろ。それだけ頭が痛くなるって、リアルに何らかの影響があるかもとか思えるだろ。

だけどそんなリスクを振り払ってでもセラはその力の全部で戦ってくれてたんだ。空で無力な僕達の代わりに、一人で五人分戦ってた。なんて頼もしい奴だよ全く。これじゃあ罵られたって文句言えないじゃないか。

「だからこそ、ちゃんとセラ様が頑張ってくれた分を無駄になんか

したくないっす！　スオウ君、リア・レーゼにこの船は届くんすよね！？」
「それは……」

僕は口が動かない。だってどう見たって安易に届くなんて答えられない状況なのが浮き彫り過ぎだ。まず既に機体が空中分解しそうな程にガタガタだし、実を言うとさっきから舵が動かないんだ。それに四隅に設置してあったプロペラもモゲてるし、つまりはこの船は既に直進しかできないって事だ。後は止まることと下降位は出来るだろうけど、ホントそれだけ。

実際音響爆撃の後から、エネルギーの放出がハンパない。これはきっと致命的な部分に大きな穴でも空いてると思う。単純にこのまま飛び続けられるかが再び問題化してる。

だけど結局僕は素人だ。ここはプロの人に意見を求めることにした。この人は誰よりもこの飛空挺を分かってる筈だ。

「この船はリア・レーゼまで持ちますか？」
「……わからんな。全く持って分からん。だが一つ言える事は、この船はまだ空を飛んでるということだ。もしかしたらお前達をリア・レーゼに送り届けたいが為に飛んでるのかもしれんな」

なんだか感傷深くそんな言葉を口にした艦長。そんな、僕達を届けるためにって……そんなこと。

「もう既に、何故飛べてるのか不思議な位だ。そのくらい、お前達にも分かるだろう」

そう言って椅子の上で体を震わせる艦長。確かに、僕達にだって分かる。それだけこの船の損傷は激しい。だけど今までも、そして今も飛んでるから、なんとなくそれだけ強いんだって思ってた。

だけど違うんだ。既にこの船の限界はとっくに越えてた。当たり前だ……端から見たら完全に幽霊船が飛んでるようにしか見えない筈だしな。凹み所々無くなった船体に、欠けた船首と船尾。それにモゲたプロペラ。

本当に飛んでるのがおかしいだろ。これでまだリア・レーゼまでとか、どれだけの事を僕達はこの船に押しつけてたんだよ。僕は動かなくなった舵に額を当ててほんの数秒目を閉じた。心の中で「ゴメン」と言った。そして「ありがとう」とも伝えた。

顔を上げ、僕は前を見据えてこう言うよ。今度は声に出して。

「そうですね。僕達でもこの船の惨状は理解できます。本当に何で飛んでるのか不思議な位です。だけどそれが僕達の為ってのは多分違うと思います。

僕達は結局犯罪者ですよ。僕達がこの船に来たからこうなったんです。恨まれたとしても、こんな一生懸命に尽くされる事は僕達にはあり得ない。

もしもこの船が意志を持って頑張ってるのだとしたら、それはきっと……貴方達の為です。艦長やクルー、そして守ってくれてた僧兵。そんないつもの人達の為にきっと頑張ってるんだと思います」

「何を……今更……そんな言葉……」

僕の言葉に、途切れ途切れで震えるそんな声が帰ってきた。見なくても分かる、きっと艦長さんは泣いてるよ。やっぱり僕達なんかの為じゃない、この船はずっと共に飛んでくれた人達の為に、最後の役目を全うしようとしてるんだ。

『やはり貴様等と我らはどうあっても相入れない存在の用だな。そもそも貴様のような化け物を飼う奴らと理解出来ようも無いがな。

この空がリア・レーゼの姫御子の管轄だと？　この世界は全て、我らが神シスカ様が生み出した世界よ！　この世界に隔たりなんて

物は存在しない。全ての場所は我らシスカ教が連なってるのだから！』

そう言って一斉にミサイルが発射される。だけどそれらは次の瞬間あっと言う間に爆発をした。まるで見えない攻撃を受けたかの様……奴の仕業か。

「凄まじいエゴだな。我らノーヴィスが納める地など世界の三分の一にも満たない小ささだと言うのに。我らの巫女が嘆くのも当然だ。サン・ジェルクは腐ってる。いや、元老院という体制がか。今回の訪問で明らかになった。貴様等は私がこの船に乗り合わせてる事も先刻承知だったんではないか？

都合が良かった。だからまとめと消すことにしたんだろう」

黒い煙の中からバトルシップが無傷で姿を現す。そして大きく前方に行きふわりと羽の様に上昇。この飛空挺の真上へと陣取った。この位置はまさか！

『くはははは！　勘違いしてるリア・レーゼの連中には良い見せしめになるではないか！　星羅がどこから派生したと思ってる？　それは我ら聖院からだろう。引いてはシスカ教からだ。その教えを教授しないで予言などと言う物に頼る。その様なんたる無様な事か！

この世界に、神以上の存在など存在しないのだよ！！』

降り注いで来る音響爆弾。あれは不味い。今度あれを食らったこの船はきっと持たない。そしていつまでも敵だった奴に頼っても居られないよな。僕は艦長にこういって窓から飛び出した。

「やっぱり最後は、貴方が舵を握ってた方がきっと良い。貴方の為にも、そしてこの船の為にも。頼みます。今の貴方はきっと信用出

来る！　そう信じてます！」

僕は空中でセラ・シルフィングを抜き、そのまま「イクシード」を宣言。風のうねりと雷撃の光が刀身を覆う。そしてそれを僕は落とされてる爆弾に向かって振るう。船に影響の出ないもっと上で弾ける音響爆弾。だけどそれでも少しはミシミシと良い、僕達にはそれなりのダメージを残す。

特に鼓膜が刺激されて三半規管が狂う感覚。そのせいで操舵室の屋根に乗ろうとした僕だったけど、踏み外して一気に甲板へ。

くっそまだ全部じゃなかった――と、思ってると再び音の爆弾が弾けた。どうやら僕が打ち漏らしたのを奴が落としたみたいだけど、何故か奴は真っ直ぐ甲板に立ってる。

『さあ！　今度こそ木っ端微塵に吹き飛ぶが良い！！』

甲板に倒れてたら聞こえたそんな声。だけど気になったのは声じゃなく光だ。この赤紫した光は……まさか！

「スオウ君！　主砲がきます！！」

シルクちゃんのそんな言葉に、僕は必死に立ち上がろうとする。けどさっきの攻撃のせいでフラフラしてしまう。くっそ……そう思ってると奴の声がこの場に響く。

「貴様等は余計な邪魔はするな。死にぞこない共はおとなしくして――」

「バカな事言わないでください！！　一人でアレを防ごうなんてあり得ないです！　どんな力か知らないけど、一人じゃ無理。それは分かってます。だから力を合わせましょう。

貴方だって私の魔法は知ってるはずです！　文句ありますか？」

なんと途中から響いたのはシルクちゃんの声。しかも噛みついてる。二人は数秒睨みあったと思ったら、主砲が発射されたと同時に動いた。シルクちゃんの障壁に他の陣が重なる様に展開して主砲を受け止める。空に強烈な光が舞い散った。

だけどその主砲のおかげか、一気にリア・レーゼへと近づいていく。

『着く前に押しつぶしてやるわ！』

更に勢いを増す主砲。だけど二人の障壁は破れない。だけどこのままじゃ勢いが着きすぎる。僕はなんとか立ち上がり船首へと駆ける。そしてそこから広がる森を見据えて、風のうねりを地面へと向かって延ばす。地面を抉り、船の勢いを殺そうとする僕。これでスピードを落とすんだ。迫る地面に、僕達三人の叫びが木霊した。

飛び続けるは他が為に（後書き）

第二百九十話です。
ツイッターとかを見てくれてる人は知ってるでしょうけど、この話は一回全部消し飛びました。ポメラって時々そう言う事があるんですよね。しかも完成直前、後千文字位の出来事だったから、とてもショックが大きかったです。
実際嫌気が差しました。だけどそれから二時間で書いたのがこれです。まあ最初のと多少変わってますが、一応不満だった部分は直したから、これでも良いかなって感じですね。
前書いてたのには、奴の力の謎をテッケンさんが見つけた見せ場とかあったんですけど、書き直したらそこは削れて飛空挺と艦長が入ってきてました。まあだけど、奴の力の謎はもう少し引っ張っても良いので問題なしです。
テッケンさんの見せ場が飛空挺バトルでは殆ど無いけど、そこは大丈夫。次回にちゃんとあります。そして今回リア・レーゼにたどり着けなかったけど、次回はちゃんと出てきますよリア・レーゼ。
てな訳でなんだかんだと大変だった第二百九十話はここまでで、次回は月曜日に上げます。ではでは。

なんとかで、取りあえず（前書き）

スピードを上げて地面へと迫る飛空挺。僕はイクシードを使ってそのスピードをなんとか減退させようとするけど、その健闘空しく飛空挺は地面と激突する。だけどなんとかそこで終わらずに地面を抉りながら滑りだす飛空挺。

まだまだここからが僕の戦いだったようだ。

なんとかで、取りあえず

「うぬあああああああ！　止まれえええええええええええ！！」

二本の風のウネリが地面を抉る、だけどバトルシップの主砲を防いでその勢いを加算された飛空挺は簡単には止まらない。

止まるためのエネルギーも少なくなってるし、飛空挺自身での停止は望めないんだ。だから何としてもスピードを落とさないと、このままの勢いじゃ地面に接触して木っ端微塵だよ。

「うぐぅぅぅ！　余計な事を女！」

「余計な事って何ですか！？　私はただ、みんなを守りたいだけです！　それが私の役目なんです！！」

二人して必死にバトルシップの主砲を防いでるのはシルクちゃんと敵側なのか微妙な奴。シルクちゃんはその魔法で障壁を張ってあの凶悪に見える光の砲を防いでるのは分かるんだけど、奴は実際どうやって防いでるのか分からない。

僕からしたら、お前こそ余計な邪魔をしてるんじゃないだろうなって言いたいところだよ。まあそんな余裕なんてないんだけどさ！

後方からの攻撃と僕一人のブレーキ程度じゃ確実に前者に分があるみたいで、ある意味スピードアップしながら高度が下がって行ってる。

それにそもそも、進んでる船を後ろから押すのと、前から止め様とするの、どちらが大変かと言われれば、絶対的に後者だよな。

動き出してる物を押すのなんて簡単だ。しかもここは空の上から下へと行ってる訳で、運動エネルギーとか位置エネルギーとか重力

の事とか、色々と僕だけでは重すぎる理由がいくつもある。
だけど弱音を吐いてる場合でも無いんだけど……そんな泣き言言うほど既に口も回らない。叫ぶ――そんな事位しか今の僕には出来ないんだ。
地面が近づき、生い茂る太い木に当たりだして大きく揺れる機体。ベキボコメキガキャとイヤな音が船底あたりから聞こえる。
きっと木とぶつかった部分がブッ壊れて行ってるんだろう。ホントもうボロボロだから、それは想像に難くない。そして木々をへし折り、船体を破壊しながら、それでも止まらず飛空挺は森へと突っ込む。
大量の葉や枝が目の前に散乱して、体の節々を打ちつける。だけど僕がこの場から動くことは出来ない。だってこの船のブレーキは僕にしか出来ない。
視界が無くても、枝が体に突き刺さっても、木っ端微塵になるよりはまだマシだろ。鈍い痛みなんてとっくに馴れた。
今重要なのはここまで来れたって事だ。そしてここまで来れたのに、その全てを無駄になんて出来ないって事だ。ミセス・アンダーソンの思いも、ノエインの思いも、そしてセラの頑張りだって、無駄にしてたまるかよ。
特にセラにあそこまでやらせて「駄目だった」なんて言ったら、折角良好に向きかけてた関係が逆走しちゃうかもしれない。それはイヤだ。あんな不遇な態度に戻るなんてゴメンだね。
だから頼む！　止まってくれ！

「「「うわっわあああああああああああああ！！」」」

甲板に残ってる男三人が轟いた衝撃にそんな声を上げる。ヤバい一気に船底部分が消えたかも知れない。それほどの衝撃だった。
地面に船体が着いた瞬間、爆発と共に一回浮き上がり、再び地面を抉るように滑ってるんだ。多分最初の爆発は動力路が原因だと思

う。
てかもうそれしか考えられないし。きっと今は船体を削りながら地面を進んでる状態だ。早く止まらないと、船体はバラバラに成っちゃうだろう。
だけどそれには上から降り注ぐ主砲が止んでくれないと難しいかも知れない。さっきから必死に風のウネリを地面に当ててるけど、大きさと元のスピードが原因か、止まる気がしない。しかもまだまだ凶悪な赤紫の光は健在。
あのバトルシップ……この船が木っ端微塵に成るまで止まらせない気か。

（くっそ、駄目だ。バトルシップの主砲と、人一人が生み出せる風のウネリじゃ、威力に差がありすぎる。これじゃあ船は止まらない！）

そんな考えが頭に浮かぶ。だけどだからと言って、この手を離すわけには行かない。少しは……きっと少しは意味があると思うんだ。地面にぶつかった瞬間に終わらなかったのも、意味が有ったからだと思いたい。
だけどそろそろマジで、腕の感覚が無くなって来た感がある。これだけの大きさの物を止めようとしてるんだから当たり前だろうけど、一瞬でも気を抜いたら、手から剣をこぼしそうな程だ。

「止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれよクソオオオオオオオオオオオオ！！！」

その瞬間、近くにあった木に触れて、僕のすぐ横の側面部分が砕ける音と共に無くなった。その衝撃で大きく揺れた船。僕はその時自分の足下を踏み外した。どうやら床の板もかなり持って行かれたみたいで完全に態勢が崩れた。腕にばかり意識を集中してたから、

足下が疎かに成ってた。このままじゃ船から投げ出される。だけど僕の両手は二つの剣で埋まってる。
するとその時だ。僕の腰をガッシリと掴む感触がした。
「スオウ君！」
そんな声と共に僕を捕まえたのはテッケンさんだ。そしてその後ろに鍛冶屋がいる。鍛冶屋はテッケンさんの足を掴んでて勢い良く、テッケンさんと僕を引っ張りあげた。
「たく、気を付けろ！　お前がいなくなったら動力路が無くなったこの船をどうやって止めるんだ！」
「分かってる……そんなの分かってるさ！」
僕は鍛冶屋の言葉に、ムキに成ってそう返す。分かってるから、精一杯頑張ってるんじゃないか！　イクシードはまだ健在。まだ僕はやれる。
「スオウ君、さっきの木のおかげで船の方向が急に変わった。そのおかげで今はバトルシップの主砲を逃れられてる。今しかチャンスはないよ！
もう一度あの光が追いついたら、きっと止まれない。ここで止めよう！」
「なるほど……」
僕は船首部分よりも損傷が激しい後方部分に目を向ける。確かにさっきまで降り注いでた凶悪な光が、この船一個分位ズレて、地面を焼いている。
確かにこれはチャンスだな。無駄に勢いを付けてた攻撃が無くなったんだ。ここで止まらないとどうするって感じ。

だけど腕に力を込めようとして気づく。なんだか少し力を入れるだけでプルプルと筋肉が弛緩するような感じ。まともに剣を振るえる状態じゃないな。

だけどそこで僕のそんな状態に気づいたのか、テッケンさんが僕の腕に飛びついて来て、ガッチリと自分の腕で僕の腕を支えてくれる。けれどこれは、彼の体重を全部僕が支える羽目に成るんだけど……

「大丈夫！　スキル『エアウープ』発動！」

そんな言葉をテッケンさんが紡ぐと、彼の小さな体に青い光が発言。それと同時に何故か腕が上に引っ張られるような感覚が。

「えっ？　えっ？　何？」

僕は慌てて腕を元の位置にまで戻す。なんだかまるでテッケンさんに浮力が付加されたような……風船にでも成ったのか？

「近いね。でもこれで僕の体重を気にせずに剣を振るえるだろう？」

「……そうですね。ありがとうございます」

確かにこれならいける。僕の腕をしっかりとテッケンさんが固定してくれるのなら、剣がすっぽ抜ける事もないだろう。

「いやいや、僕は今回殆ど役に立ってないからね。この位は当然だよ。今回でなかなか思い知った。どんな力でも突き詰めれば武器になるとね。

ノウイ君のスキルなんてまさにそうだよ。それに対して僕は……いや、今はそんな事を言ってる場合じゃないね。ほら鍛冶屋君は左腕を頼むよ！」

「……くっ、しょうがないな。俺は男の手を取る趣味は無いんだがな」

テッケンさんに促されて、渋々と鍛冶屋が僕の左腕を握る。これで両腕がしっかりと固定されて、思う存分セラ・シルフィングが振れるな。

テッケンさんに色々と言ってあげたい事も、鍛冶屋の言葉に返しい事も有るけど、今はやっぱりその時じゃない。今僕達が見なきゃいけないのは、この船を止めるその姿。頭で思い浮かべて、この手で実行するんだ！

僕は無言で二人を交互に見つめる。そんな視線に二人は頷いて答えてくれる。バトルシップは真横方向に移動するのは苦手なのかモタツいてるから、この時しかない。

僕は大きく腕を上げセラ・シルフィグを掲げる。すると散っていた風が再び集まりだし、激しい放電現象と共に、森を突き抜ける風のウネリが出来上がる。両手に伝わってくる、仲間の力強さを感じつつ、僕は心でこう叫ぶ。

（今度こそ止める！　これは絶対だ！！）

「うおおお

の向こうに見える光。それに僕達は突っ込んでいく。
けれど力は弱めない。地面から伝わる振動が少しずつだけどゆっくりに成ってる気がしてた。そして飛空挺ごと、光の中に突っ込んだと思ったら、飛空挺はその動きを止めていた。
焦げた臭いに、頭上から降ってくる青々しい葉っぱ。両側のテッケンさんと、鍛冶屋が「止まった……」と同じ台詞を紡いでる時、僕は全く別の事を思ってた。
この時の僕はきっと、船が止まったことも、後ろからまだバトルシップが迫ってる事も忘れてた。だってこの光の中の光景に目を奪われてたから。

薄暗い森をボロボロの飛空挺で必死に抜けてきた先。見つけた光の向こうに有ったのは、きっと目指してた場所。圧巻の世界樹と呼ばれる大樹。その木にへバリツくように建てられた建築物は地面に広がる大きな根まで続いてた。大きすぎる木で太陽光が届かない筈なのに、やけに優しい光で包まれたこの場所こそが『リア・レーゼ』なんだ。
凄い……なんだか空気が違う。世界樹の雄大さのせいか？　思わず唾を飲み込んでしまう程、目を奪われる。

『くはははははは！　これで終わりだあ！！』

僕が呆けてると後ろから聞こえてきたそんな声。既に止まってしまった飛空挺に避ける術はなく、凶悪な赤紫色した光が木々をなぎ払い地面を抉り僕達に迫ってきてる。
目の前がその色に染まってしまう。凶悪で目の奥に焼き付くようなその光。だけど地面を抉りながら迫ってた主砲は何故か僕達の居る飛空挺まで届かなかった。
なんだか、突如空間に亀裂の様な物が現れて、その中に主砲の光は消えている。

『何！？』

そんな驚愕の声がバトルシップからも聞こえるけど、それは僕たちだって同じだよ。

「なんだこれ？　どういうことだ？」

障壁とかとは別次元のやり方。別空間に流してるって感じの対処方。それでも必死にバトルシップは撃ち続けてるけど、いかんせん防いでるんじゃなく全く別の場所へ流してる感じだからこれをやってる術者の負担には成りそうもない。

そう思ってると、どうしても僕達を踏みつぶしたいからか、バトルシップは再びその砲台を開き空に線を描くミサイルを発射する。

どんだけ僕達に執着するんだよあの野郎。そろそろマジで諦めて欲しい。だけどミサイル程度なら、僕のイクシードでもやれる――と思ったら、今度はリア・レーゼの街の方がカッと強烈な光を出した。

すると無数の光がバトルシップを襲った。そして射出されたミサイルも届く前に撃ち落とされる。船体にそれほどダメージはなさそうだけど、主砲も流された今の状況は不利と考えたのか、大きく羽を広げて後ろへ急後退。後退しながら器用にバトルシップはリア・レーゼからの攻撃を避けている。

その機動力はやっぱり圧巻だな。空を縦横無尽に前からでも後ろからでも動けるんだから凄い物がある。

「スオウ君。今の内に船から離れた方が良いんじゃないかな？　リア・レーゼは直ぐそこだよ。ノウイ君のミラージュコロイドを使えば――」

「そうですね。ここに留まるのは危険そうだし、そうした方が良い

かもですね。もう良いですよ二人とも。ありがとうございます」

僕がそういうと、テッケンさんが僕の腕から離れて空中をフワフワと風船の様に漂う。うわ、なんかいいなそのスキル。

てかやっぱり自分を風船とかにするスキルなのかな？　でもあんまり戦闘とかでは使えそうにないように見える。だって現にテッケンさんは空中で手足をジタバタさせてるもん。風に流されてるだけ？　なのかな。

僕がそんなことを思って眺めてると、テッケンさんがスキルを解除したのか、体を覆ってた青い光が消えてテッケンさんは地面に落ちる。

だけどそこはテッケンさん。体を丸めて回転させて、格好良く地面へと降り立った。

「ふん、まだまだセラ・シルフィングの可能性を俺に見せろよ」

そんな事を良いながら鍛冶屋も僕の手を離す。僕は「おう！」と言って笑ってやるよ。実際鍛冶屋にも世話に成ってるし、それにセラ・シルフィングの可能性には僕だって賭けてるんだ。

まだきっと上に行ける筈。てか、そうじゃないとシクラ達には対抗出来ない。

僕達三人は船首から操舵室に近い甲板の中央部分へ。そこにセラを見守る感じでノウイが居る。すると反対側からはシルクちゃんとピクもこちら側に来てくれてる。流石ちゃんとわかってるね。

「あれってリア・レーゼっすよね？　この攻撃は彼らが自分達を助けてくれてるって事でいいんすか？」

集った僕らにそんな投げかけをしてくるノウイ。助けてくれてる――ね。それはどうなんだろうか？

「さあな、それはどうだかわからないけど、取りあえずここに居ると危険だろ。自分達でリア・レーゼを目指そう。僕はクリエとミセス・アンダーソンを拾ってくるから、ミラージュコロイドを頼むノウイ」
「それは良いっすけど、自分達だけでいくんすか？　この船には操舵室以外にも人が居るっすよ。置いてくのは危険っす」

むむ、そうなのか？　僕を襲ったプレイヤーどもはここまでで全員落ちたと思ってたんだけど……確かにまだ中に人が居るのなら、放っておくのは不味いな。ここには奴も居るしな。
僕はそう思いつつ、操舵室よりも後ろで空を眺めてる白い奴に視線を向ける。なんだか空間から浮く位に白い毛と髪がキラキラしてるから、思わず白い奴って呼んじゃったけど、まさに白が際だってるんだよな。
まあ厳密には白じゃなく白銀なんだけど……あいつに僕は言ったからな。自分達のエゴで誰かを犠牲になんかしないってさ。まあ実際犠牲に成っちゃった奴らは既に多数だろうけど、あのプレイヤー共は自分のエゴを走らせた結果でもあるよね。
だからそこはノーカンで。僧兵は一応聖院で元老院側なら敵だ。まあこんな飛空挺勤務の末端はどっちに付いてるとかないだろうから、犠牲には出来ない奴ら。そしてこの飛空挺船員も勿論犠牲になんて出来ない。
既に彼らの職場をボロボロにしちゃった僕が言える事じゃないだろうけどさ、こんな事になったから見捨てて良いって事じゃない。危険な所からはやっぱり離さないとだ。

「確か、お前を襲って来たプレイヤーもまだ下に居るはず……か？
流石にもう起きててもおかしくはないと思うが。いや、奴の得体の知れない攻撃でノックダウンしたから、何かの効果付きなのかも

しれないな。
取りあえず……本当に全員連れていく気か？」
面倒臭そうにそう言う鍛冶屋。まあ確かに手間だけどさ、仕方がないだろ。自分達だけ助かるって言うのも目覚めが悪い。僕はそれなりに繊細なんだよ。
「言っとくけどな、これはゲームだぞ。プレイヤーはまだわかるが、ただのＮＰＣにまで気遣う必要はないと思うけどな」
「お前も今更そんな事を言うか？　もう僕にとってＬＲＯはただのゲームじゃない。実際みんなだってそうじゃないのか？　ここはもう世界だろ。僕達が違う人生を生きてる世界。
それにただのＮＰＣを見捨ててアンダーソンだけ連れてくってのもな……なんか違うだろ。ＬＲＯは何気ないただのＮＰＣにだってちゃんと僕達が知らない設定があるみたいだしさ。
見捨てて良い存在じゃやっぱりないだろ」
だって誰しもが生き生きしてる。その姿を僕達は知ってる。最近は特にそれを感じるし、本当にＮＰＣとプレイヤーの区別ってのが難しい位だ。
何でもない筈のＮＰＣにだってここではちゃんとした設定が見えてくる。それだけ作り込まれた世界だ。それなら家族とかいるかも知れない。
それを考えるととてもＮＰＣだからなんて言えない。そりゃあこれから一生会うこともないかもだけど、僕達だけの都合で左右されて良い存在なんてきっと居ないんだよ。モンスターを除いてね。
「まあ良いじゃないか鍛冶屋君。僕達も随分ＬＲＯの見方が変わった。放っておくなんて出来ないのには賛成だよ」
「そうですね。大変だけど、見捨てる事はしたくないです。私は誰

も見捨てない為にヒーラーをやってるんですから」

そう言って仲良い二人が同意してくれた。空ではまだしつこくバトルシップが僕達を狙ってる。だけどリア・レーゼからの攻撃でバトルシップはまともに攻撃できてない状況。今しかないよな。

「よし、良いよな鍛冶屋？」

「しょうがない。俺一人が反対してもお前達はお人好しだからどうせやるんだろ。俺もミラージュコロイドが使えれば、一人で逃げるんだがな」

「またまた、そんな事言って僕は知ってるぞ。お前もなんだかんだでお人好しだってな」

僕がそう言うと、「お前達と一緒にするな！」と言われた。たく、鍛冶屋は照れ屋なんだからな。一生懸命一匹狼を演じてるんだろう？

「遊んでないでやるんなら急ごうっす！　機内のわかる所は自分とテッケンさんで回るっす。ミライージュコロイドを使って。

その他のプレイヤーとかはスオウ君達で頼むっす」

「了解」

なんかノウイに怒られたけど、そこら辺はしょうがない。鍛冶屋をからかってる場合じゃなかったもんな。僕達は早速それぞれ行動を開始！

「待て貴様等！！」

――しようとしたら突然の制止の声。いや、声と言うか叫び、思わず体がビクッと反応するような、そんな強い声だった。

「なんだよ……自分達だけで逃げるんじゃないぞ」
「人数の問題じゃない。逃げる必要がないって事だ。いや……そもそもお前達はそこを動くな」

そう言って奴がこちらに歩きだした。僕達は警戒して奴の行動に目を見張る。すると突然、操舵室の横で止まったかと思うと、ジャンプして操舵室へと入っていった。

「しまった！　クリエ！」

僕は慌てて駆け出す。だけどその時、艦長の声がして、そして再び奴が甲板に降り立つ。その腕にクリエと、ミセス・アンダーソンを抱えてだ。
やっぱりか……そうするんだろうと思った。

「人質か？　そんな事をする奴だったんだなお前」
「勘違いするなよ。私は救っただけだ。お前達は結局犯罪者だしな。貴様はリア・レーゼにくればどうにかなると思ってるみたいだが、同じ国だぞ。
指名手配犯が許される訳ないだろう。だから救出した。この二人をな。お前達には色々と聞きたい事がある。出るところに出て貰おうか」

そう言ってこれみよがしにクリエをこちらに向ける奴。救出だと？　どうみても脅しに使ってるじゃねーか！　僕達は動けない。でもまだバトルシップはそこに居るんだぞ。危険だろ。

「そこら辺は心配ないさ。言っただろう。この空はリア・レーゼの空域だ。奴らでさえ自由に飛ぶことは出来ない」

そう言うと、奴はリア・レーゼの方へ視線を向ける。するとその街には大きな船が浮いていた。

「貴殿らの行為はリア・レーゼへの侵略行為とみなせる！　これ以上の暴挙は、この街の尊厳の為に排除することになるが……どうするか？」

リア・レーゼの飛空挺から正式な勧告を受けるバトルシップ。すると流石にこれ以上は不味いと思ったのか、素早く引いて行くバトルシップ。なんとか助かった……って雰囲気じゃないな。人質に取られたクリエとミセス・アンダーソン。

そして前から迫る飛空挺。これは歓迎されてるとみても良いのかな？　ある意味そうかもだよね。なんだか苦笑いが漏れてきそうだった。

なんとかで、取りあえず（後書き）

第二百九十一話です。
ようやくリア・レーゼに到着ですね。まあ全然無事とは言えないけど、なんとかで、取りあえずでしょう。あとがきでサブタイ回収って……まあそこら辺は御寛大に読んでくだされると嬉しいです。
さて次回からはリア・レーゼでの冒険だ！　と言いたい所ですけど、次回はちょっと違う人の視点です。誰かはその時のお楽しみと言うことで。
てな訳で、次回は水曜日に上げます。ではでは。

彼女達の今（前書き）

私達の日常はとっても優雅で穏やか……って訳じゃない。案外結構騒がしかったりします。まあ女の子が数人揃えば大体そうなのかって感じ。お喋りに花を咲かせたり、ちょっと精神年齢が幼い子が悪さしたりはどこにでもある光景だと思う。

だけどそんな光景が今の私にはかけがえのない物です。だけど流石にちょっと退屈気味でもある。この場所にいられないのなら、病室と居る時と場所が変わっただけ、そんな時したから二番目の子が悪さの末逃亡。

面白くなってきた！　刺激のある一日の始まりの予感！

彼女達の今

駕籠に入った小さな鳥のさえずりが頭の奥で心地良い目覚ましを鳴らしてる。ピヨピヨピーピーチチチチ、少しずつそんな声に意識を表層へと表して行くと、日差しの温もりや、頬を撫でる風の優しさを感じる事が出来る。

うっすらと目を開けると、真っ白なシーツの上に居るのが自分だけじゃないってのがわかった。私と違う、真っ黒な髪がサラサラってこの白いシーツに流れてる。

今は何でも言うことを聞いてくれるから、着せちゃったとってもセクシーなピンクのベビードールがとってもなんだか背徳的で良い感じ。

うん……だけど、ちょっと私的には嫉妬を覚えちゃう体かも。サクヤって普段は巫女服着てたからあんまり気付かれてなかったけど……普通以上に胸大きいし。これはまさかお兄ちゃんの趣味なのかな？

どうせ私はペッタンコだよ。だけど昔よりはちゃんと成長してると思うんだけどな。私はペンギン柄のパジャマの上から自分の胸をサワサワしてみる。

「Bはあるよね。ううん、寄せて上げれば私だってC位は……」

そんな風な事を口ずさんで居るときにふと気付いた。

「あれ？　私たちっていつベットに入ったっけ？　確かサクヤにウキウキでこれを着せてる所までは覚えてるけど、その後なんだかフッと暗くなったような……」

まさかこの年で認知症？　やっぱり実際は頭しか動かしてないのが悪いのかな？　でも既にリアルでは数年経ってるらしいし、どんな影響が出てもしょうがないのかな。
ちょっと鬱に入るかも。まあそれも既に何回目かもわかんない症状だよね。向こうでは常にそんな状態だったし、その頃に比べれば、今はとっても綺麗に世界を見れてる。そうそれは、きっとここが私の居場所だからだよね。

「うん……そうだよ。きっとそう……」

私は小さくそんな声を出す。隣に寝てるサクヤのサラサラの髪を一掴みして撫で撫でする。指通りがとっても良いサクヤの髪。真っ直ぐな黒髪が綺麗だなって思う。私のは癖毛だし色も抜けてるし、こういう真っ直ぐで日本人らしい髪って憧れちゃうな。

「ちょっと！　ヒ～マ！　返しなさいよ！　それは私達のこれからに、とっても大事な物なのよ！！」
「や～だよ！　シクラばっかりズルいんだ！　僕だって僕だって、もっともっと外に出たいんだもん！！」

なんだか騒がしい声が聞こえる。その方向を見ると、外を駆けてる二人が見える。お花一杯のこの場所の庭を楽しそうに……まあシクラは怒ってるみたいだけど。ヒマワリも一体何をやらかしたのか、あの持ってる本が原因かな？

「ねぇ！　何してるの二人とも？」

私はベットの上からそう呼びかけてみる。するとヒマワリはパァァっとまさに太陽みたいに輝く笑顔を見せてこちらに猛スピードで駆けて来る。

ここは空中庭園『ラフェラスの寝床』中央の城と周りに浮く小島で成り立つ空に浮かぶ隠れ家です。そして今私が居るベットは一番小さくて、城に近い小島にたった一つ置かれた物。ベットの周りは色とりどりの花で飾れててお気に入りの場所です。島と島を繋ぐお花の道。そこをヒマワリが荒々しく駆けてきて一杯花びらを散らしてる。

確かに直ぐに元に戻るんだけど、もうちょっとあの子には女の子らしさを身につけて欲しいかな。

「セツリ様！　セツリ様！」

「はいはい、何してるの？　その本は何？」

ベットに飛び乗って来て、私の後ろに隠れる様にするヒマワリ。その名前同様の活発なこの子は、ヒマワリ色の髪を後ろに束ねたショートのポニーテールで、その束ねるゴムは私があげたヒマワリの装飾が付けられてる奴なのです。

ヒマワリもとっても気に入ってくれて最近は、いつも付けてる状態だね。そして行動的にスパッツとTシャツだけの格好もいつもの事。もっともっとお洒落すればとっても可愛く成るのに、私は常日頃からもったいないと思ってます。

「あのねーあのねー、シクラばっかりズルいんだよ。僕達が眠っちゃってる間に、どっか行ってたッポイの！　僕だって色々と外を見てみたいのに……うう～だから帰ってきたときに持ってたこの本を盗んだのだ！」

なんだか胸を張って犯罪宣言をしちゃうこの子が心配です。なんて純真無垢な顔して言っちゃってるのよ。あ～もう！　なんだか憎めないな！

私はギュウ～～とヒマワリを抱きしめます。その名前通り、太陽

の匂いがする子です、

「わわっ！　セツリ様苦しいよ」

「当然です。苦しくしてるんだもん。まあヒマの気持ちも分かるよ。だって私もずっと同じ場所に居たからね。だけど人の物を取るのはいけない事なんだよ。

外には今度ちゃんと連れてってあげるから、ほらシクラに返そうね」

私はそう言って追いかけて来てたシクラの前にヒマワリを引っ張り出す。シクラは途中から走るのを止めて、優雅に歩いてきてたよ。きっとここが行き止まりだから、ジワジワと追い込もうとか考えてたのかな。シクラは私の前まで来ると、一礼の後にいつもの笑顔を見せてくれる。

「おはようセッチャン。――で、そこのいたずらっ子はどうして欲しいのかな？」

「ひっ！？　返すよ！　返すよ！　これで良いんだろ？」

「ふふ、謝りたいのなら、誠意と態度で示そうか？　ヒ～マ」

盗んだ本の差し出され方が気に入らなかったのか、シクラは教育に移ろうとしてる。というかお仕置き？　一応差し出された本を取ろうとするシクラ。

だけど危機感を感じたヒマワリは、その本をサッと胸元に引き寄せた。きっとこの本を渡しても怒られる事を悟ったんだね。

「ちょっとヒマ。どういうつもりなのかな☆」

☆を散らせながらもシクラが怒ってるのが私にもわかるよ。てか笑顔の裏に般若が見えてるよシクラ。私はヒマワリにこう囁きかけ

る。

「何やってるのヒマ。早く返さないとほら、シクラのお仕置きが増すだけよ」

「だってだって……」

ガタガタと震えてるヒマワリ。一体どれだけ恐れられてるのよ。どんなお仕置きを普段やってるんだろう。シクラって軽い態度の割にはやることがエグいからなぁ。きっと想像を絶するお仕置きをされてるんだろう。

「ほら早く渡しなさいヒマ。あと五秒以内に返さなかったらお仕置き十倍よ☆」

「十っ！？」

吹きかけるヒマワリ。一体どんなお仕置きが十倍に成るんだろう？　良くわからない。だけど相当の事なんだろう事は、ヒマワリの震えで大体わかる。

「はいイ〜チ」

既にシクラの声を聞く度にビクビク体が震え上がっちゃってるんだけど……目に涙をいっぱい溜めて、口をあわあわしちゃってる。流石に可愛そうに成ってきたよ。私はヒマワリをフォローする事に。

「あのねシクラ。ヒマちゃんも悪気があったわけじゃないんだよ。ちょっと……ちょっとだけ魔が差しただけなの。だから許してあげようよ。ね？」

私は両手を併せてシクラにそう頼んでみる。

「せっちゃんがそう言うのなら……だけど反省はして貰いたいかな？　そこはホラ、お姉ちゃんとしての教育だからね☆」

ほっ、良かった。やっぱりシクラは物わかり良いよね。まあ私に対して甘いだけってのもありそうだけど、だけどいいのシクラは一番私と対等に接してくれるから、お互いを分かり会ってるって事だもん。

「ほら、シクラが許してくれるって。良かったねヒマ……ヒマ？」

何故かまだガクブルなヒマワリ。頭が混乱してるのを表現してるのか、さっきから頭のポニーがクルクル回ってるのは何だろう？　てか、聞いてなかった？

「ヒマ！　ヒマ！　もう怯えなくて良いんだよ」

私がそう言っても聞く耳を持ってくれないヒマワリ。胸に抱えた本を握りしめる腕に力を込めると、その腕と脚に模様が浮かび上がってくる。これは……

「ちょっとヒマ！　アンタ何する気――」

シクラがそう言って腕を伸ばしたとき、ヒマワリが叫んで飛び出した。

「僕はまだ死にたくなあああああああい！！」

そんな言葉と共に一足で大きく空に飛び出したヒマワリ。そして

空中を更に蹴って下界へと消えていった。

「あのバカ！」

島の端に寄って下を見下ろすシクラ。私も急いでその隣に行って下をのぞき込む。だけど既にヒマワリの姿は見えなくなってた。

「あ～あ、シクラ普段どんな事をしてるの？　なんでもやりすぎは良くないよ」

私は横に居るシクラそんな忠告をしてあげる。だってあの反応は相当だよ。死にたくないって言ってたし……ちょっと流石に引いちゃうな。

「ちっ……違います！　あの子が言ったような事はしてないからね！　それにしても下に逃げるなんて面倒な事を。あれはとっても大切なのに、私がどれだけ苦労して取ってきたと思ってるのよ。大変だったんだからね」

「まあ一応そう言う事にしておくけど……そう言えばあの本って何だったの？　そんなに大切な物？」

私がそう訪ねると、明らかにシクラはビクッと肩を上げた――かと思うと結構平静にこう言った。

「別にちょっと必要なだけよ」

「だけど苦労したとか言ったよね？　シクラがそんな言葉を使うなんて珍しい気がするけど」

「私は最強だけど、力だけに頼ったりしないもん。だからまあ人並みに頭を使ったってだけ。だけどそっちの方が私的には楽しくもあったりだからいいの」

「ふ～ん」

なんだか怪しいな。私に伝えたくない事でもあるのかな？　シクラは姉妹の中じゃ一番私と対等だからこそ、言わない事も多い気がするのよね。いっつも自分で考えて自分で行動して、いつの間にか私達の為に成ることをやってるような。

適当そうに見えて、実は一番面倒見が良かったり、やっぱり一番最初に目覚めたのが大きいのかな？

「で、どうするの？」

「勿論追いかけてとっちめて――じゃなくて、連れ戻そうかな。あはは」

私のジトーとした目を見て急遽そう言い換えたシクラ。もう本当に姉妹には手が早いんだから。いくら姉妹揃って普通より頑丈だからって、女の子って部分は忘れないで欲しいよね。

「どうせ傷も跡も残らないじゃない」

「そう言うことじゃないの！　傷も跡も残らなくたって、心は痛いんだよ。シクラ達にだって心はあるでしょ？」

「まあ私は最先端の先を行く女だからね☆」

ニッコリと☆をちらつかせるシクラ。シクラだけじゃなく姉妹みんながそうじゃないの？　もう全く、直ぐにおどけてめんどそうな話は流しにかかるんだから。

「ちょっとシクラ！」

「はいはい、心の問題ですよね。よくよく理解しときま～す☆　取り合えず私はヒマを追うから、せっちゃんはここで大人しくしててね」

そう言ってシクラは下を見下ろして、その自身の背中の中空に筆で描いた様な模様の翼を表す。そしてそのままジャンプして下界へと降りようとしてるんだろうけど、私はそこでハッとしてその裾を掴んだ。

てか、シクラはシクラでいつもラフな格好してる。まあヒマワリよりはずっとお洒落さんだけどね。ホットパンツに上は透明な長い布を体に合わせて巻いてるような感じ？　かなり薄くて透明感のある布を端はそのままで、体部分を何十かにしてるんだけど、シクラの肌色が透けてるのがなんだかとっても危なげだ。

一応胸に目をやっても見えてはいないけど、これはかなり大胆なファッションセンス。男の子には悪そうだよ。スオウには絶対に見せられないな。おへそとかモロ出ししてるし。なんて良いくびれを見せつけてるのシクラの奴。

「何？　お腹が減ってるのならユリ姉が用意してると思うから、そっちでお願い」

「違うわよ。えっとね……シクラは反対するだろうけど、私も探しに行く！」

「ダメ。はい、話終了。さっさと放して」

ええええ！？　だよ！　分かってたけどその対応はあんまりだ。速攻拒否って……ちょっとは私のお願いを聞いてくれても良いんじゃないかな？　かな？

「納得できない！」

取り合えず抗議の声を上げることに。

「納得できなくてもダ～メ。そもそもせっちゃんがＬＲＯを変えるまでは外に出たくないって言ったんだよ。忘れたの？　ワガママは

認めません」
「うむむ……それはそうだけど、流石につまらなく成ってきたって言うか……そもそもずっと眠り続けてようやく動ける様になったのに、こんな狭い場所にしか居られないなんてお断りだよ！」

世界はこんなに広いのに！

「それもＬＲＯを完全に私達が掌握すれば解決する問題で～す。せっちゃんはこれ以上、人と関わり逢いたくないから、それまでは外に出ないって決めたんでしょう？
ならその方がきっと良いと思うな☆　大丈夫、そんなに待たせるつもりはないから。全ての憂いを取り去って、ちゃんとせっちゃんの理想の世界を作ってあげる」

そう言ってニッコリ笑って私の手に自身の手を重ねるシクラ。放して欲しいんだろうけど、私は俯きかげんでそれを拒否。
だけど分かってるよ。言ったのは確かに私だし、シクラの言ったことは正しい。私色々と影響受けやすいからそこら辺もきっと心配してる。
まあ後少し、後少しと思って我慢してきた訳だけど、実際退屈なんだもん。みんなが遊んでくれるのは良いけど、やっぱり外で起きる予想外な事とか、見たことない景色とかに憧れが私は強い。
最初はこの場所だって良かったけど、ここにしか居られないと、流石にね……言っちゃ悪いけど飽きてくるよ！　折角ＬＲＯって言うゲーム世界なのに、私はやることないんだもん。
なんだか今の状況じゃここにただ閉じこめられてるだけみたいで、本末転倒気味だと思う。ワガママだけど……退屈はイヤなの！

「そこら辺は勿論シクラ達の事信頼してるよ。だけどお願い！　私もちょっとは外に出たいの。ヒマの事だって心配だし……ねっ。ち

ょっとだけお願いシクラ。
後でなんだって一つだけ言うこと聞いてあげるから」
「何でも一つだけ言うことを！？　それは本当せっちゃん？」

おっ、シクラが食いついてくれた。私はここぞとばかりに攻めきるよ。

「うん！　本当だよ！　シクラの為にどんな事でもしてあげる。一日メイドさんとかになってご主人様って呼んでもいいよ」
「メイッ――ブッ……そうね。まあ少しなら別にいいかな。でもくれぐれも私から離れないでね」

なんだかシクラの鼻から赤い物が垂れてるような。そんな刺激の強い事を言った覚えはないんだけどな。でも良かったよ。シクラの許しも出たし、これで堂々と外に出れる。

「は～い」
「じゃあ早速って、せっちゃんはその格好で下に降りるの？　それは女の子としてどうだろう？」

そんな指摘を受けて自分の格好を見下ろす。ペンギン柄のパジャマのままだ。確かにこの格好じゃお出かけなんて出来る筈もない。女の子として！
髪だってボサボサだし、顔も洗って歯磨きもしないと、お洋服はお出かけ用を用意してしっかり吟味しないと。

「ちょっと待ってて！」

私はそう言うと急いで城の中へと駆ける。久しぶりの外出だから、目一杯のお洒落をしたいところだけど、流石にそこまで時間を掛け

る訳には行かないから、取り合えずシャワーを浴びて、髪をとかして乾かして、お肌のお手入れを済ませて服を着替えて、準備完了。
ここまで二十分位。これでもかなり急いだ方だよ。パジャマから自分が可愛いと思う服にぽぽっとね。今日は赤と白のチェック柄のワンピースに同色のブーツで合わせてみました。長い髪は左側でゴムでまとめて肩から前に流してます。後は最近シクラから貰ったアクセサリーで装飾ね。
金の腕輪みたいなの。手首から腕の関節部分までを飾ってくれるタイプの物です。その模様がとってもきめ細やかで綺麗なんだよ。お気に入りです。
そんな感じで準備は万端。私は元のベットのある浮き島に戻ります。

「お待たせ！」

そう言った私は目の前に光景にちょっと唖然としちゃったよ。シクラといつの間にか起きてるサクヤが揃って朝食取ってるじゃん。隣に置いてあった白い丸形のテーブルにはお菓子がお洒落に積まれてる三段重ねみたいな台があって、ティーセットに朝食のパンにハムエッグって、なんだか羨ましいよ！
思わずお腹が鳴り出しそう。

「案外早かったわね。じゃあ早速行きましょうか？　お姉さまはみんなと一緒にお留守番を頼みます」
「はい……」

サクヤはそんなシクラの言葉にただ無表情で頷くだけ。だけど別にシクラは気にしてなさそうで、上品に口元を拭うと椅子から立ち上がった。

「せっちゃん？」

シクラには悪いけど、私の視線は朝食とお菓子に釘付けだ。

「食べたいの？　だけどそうなると更に時間掛かるよね？　流石にこれ以上ヒマを野放しにしておくのも不安だし、せっちゃんが朝食を取るのなら、私は先に行っちゃうよ☆」

「そんな！　ちょっと位待っててくれても良いじゃない、シクラの意地悪！」

お腹の虫が盛大に鳴り出しそう何だよ。町中で恥ずかしい思いしちゃってもいいの？　笑われちゃうよ。

「大丈夫よ。お腹の音なんて自分が感じる程、大きくないから他人は聞こえない。町の喧噪の中なら尚更ね。それにちょっと位ってもうあれから二十分以上たってるし、ヒマのスペックをフルに考えたら、今頃数百キロ先に行っててもおかしくないわ。

まあ無いだろうけど、あの子は色々と心配じゃない。そのちょっとアホだから」

「うぅ……それはそうだけど……」

アホの所に全面同意してゴメンヒマワリ。だけど私には反論出来る物を持ってないの。アレだよね。ヒマワリと柊は同い年位に見えるけど、ヒイちゃんは年寄りも大人びた感じで知的だから、そっちにもって行かれたのかなって個人的には思うんだ。

だけどその分、ヒマはとっても元気でポジィテブで良いと思うけど。

「言っとくけど、一番年下はヒイちゃんだよ。その上がヒマ。まあ精神上は逆転して見えても仕方ないけどね☆」

「そうなんだ……」

ご愁傷様だよヒマワリ。同い年じゃなくヒマがお姉さんだったんだね。なんだか残念なような……ある意味納得できる様な……そんな感じ。

「所でどうするの？　行くの？　それともご飯食べるの？」

「うにゅにゅにゅ～～！　行きます！　行くよ！　折角お洒落したんだもん。外に行かないと損だよ！」

「はいはい。そう言えばその腕輪ちゃんとしてくれてるのね。良かった☆」

腕輪？　ああこれね。

「勿論。お気に入りだもん」

「それは良かった。私も鼻高々ね。じゃあはい。お手をどうぞお嬢様」

「う……」

なんだかちょっと胸の奥がドキンとしちゃったよ。格好いいと言うか、そのシクラの綺麗さにドキッとね。うう、なんだかシクラといると私が劣等感感じちゃうかも。

「そんな事無いと思うけど？　せっちゃんはとっても可愛いよ☆ほんと食べちゃいたい位に！」

そう言って掴んだ腕を引っ張れた。そしてギュムーと抱きしめられたまま、シクラは島から飛び出す。私たちは一気に重力に従って急降下。もの凄い風が折角セットした髪を煽りまくってるよ。

「きゃわわあああああああ！！」

そんな声を上げながら私はシクラにしがみつく。すると不意に激しかった風が優しくなって「大丈夫だよせっちゃん」と言う声と共に、私は恐る恐る目を開けた。

するとそこには、真っ青な空に流れていく雲。そしてキラキラと日差しを反射する大きな海に――って海だ！

「海だよね！　アレは海だよね！？　行ってみたいなシクラ！」

「目的を忘れないでよ。だけどまあヒマワリを見つけた後にちょっとだけならいいかな？　時期だしね」

「ホント！？」

ダメもとだったんだけど、言ってみる物だね。やる気がもっともっとあがったよ。この世界が私の為にある。それってやっぱり最高だよ！

彼女達の今（後書き）

第二百九十二話です。

今回から少しだけ、セツリ側のお話です。まあこれは長くやる予定はありません。精々四話くらいかな？　てなわけでいつもと違う感じの命改変プログラムにお付き合いください。

次回は金曜日に上げます。ではでは。

ドタバタな日（前書き）

久しぶりの街。久しぶりの外。だから私には新鮮に映る。街の姿も、雑踏の光景も、漂う香ばしい匂いも、やっぱりこれが街って感じ。だけど遊びに来たわけじゃないんだよ。ここにヒマワリが逃げ込んだはず。

私達はあの子を連れ戻しに来たのです。

ドタバタな日

大きく息を吸うと香ばしい臭いがそこかしこから漂ってきてる。朝食を抜いた私のお腹にはなかなか刺激が強い香りが一杯。

女の子なのに思わず涎を垂らしそうです。私はそんなキャラじゃないんだけど……でもやっぱりＬＲＯでも食べないとやっていけないんだよ。

港町っぽいこの場所は、陽気な音楽がかかり、大きな通り一面に出店がビッシリと連なってる状態。何なんだろう？　昔テレビで見た朝市って奴かな？　海の近くだけあって、新鮮な魚が目立つけど、色取り取りの果物や野菜なんかもとっても多い。

だけどやっぱり私の嗅覚を擽るのは、この香ばしい臭いだね。所々のお店は店頭で商品を焼いたり、生物だけじゃない調理品を作ったりしてるのか、鼻だけじゃなく、ジュウジュウと言う耳までも刺激する音が届くんだ。

「うわっはぁ！　スゴいねシクラ！」

私はそう言って、朝市の喧噪に飛び込んだ。ＮＰＣも一杯だけど、プレイヤーも同じくらい居そうな程の人の多さ。私的には普通にゲームとしてＬＲＯをやってる人達が、こんなただの食材とかに興味あるのかなって感じ。だって別に私以外の人達はここで食事してもお腹が膨れる訳じゃ……無いんだっけ？

満腹感は味わえるんだったかな？　でもその為だけにアイテム欄を食材で埋めるのもどうか思うけど。

「ねぇねぇシクラ。ここにプレイヤーが一杯な理由って何？　みんなダイエット目的？」

確か前にスオウからそんな事を聞いた気がする。ＬＲＯで得られる満腹感を利用しての過度なダイエット。とっても危険だって。それなら今直ぐにでも皆さんに注意を促した方が――

「ダイエットって、ここでの食事はただの食事じゃないんだよせっちゃん。まあ向こうでだって実際食事はいろんな役目や付加効果を与えてるんだと思うけど、ただ見えないだけ。

だけどＬＲＯではそれを分かりやすくしてるの。まあようは、食事効果ってのがあるのよ」

「食事効果？　それの為にこんなにプレイヤーが集まるの？」

私とシクラは並んで朝市を徘徊しながら、会話を続けるよ。

「食事効果を侮っちゃダメだよせっちゃん。戦闘を有利に進める為にも、勝利を掴む為にも、食事って物を重視するプレイヤーは多いわ。

後は採掘とか生成とかのいわゆる職人系も重視してるわよ」

ほへ～そうなんだ。私はそんな事考えて食事したことなかったな。どれもこれも大抵私の口に入る物は美味しかったし。重要なのは味だけって正直思ってました。

「別にせっちゃんはそれで良いと思うな☆　だってどうせ戦闘しないし、せっちゃんはお姫様だからね」

そう言ってキラキラ輝く月光色の髪を海風に靡かせるシクラ。その仕草や光景をみてると、実際どっちがお姫様？って感じだよ。どちらかと言うとシクラの方が『姫』って印象強いと思う。

「ん？　どうしたのせっちゃん？　しょうがないから歩きながらでも食べれる物でも買おっか？」
「うん！」

私は元気良くそう返事した。なんだか姫っぽいとかそんなのどうでもよくなった。だって私からじゃ言いだしづらかったんだもん。朝食を犠牲にするのを選択したのは私だし……実際さっさとヒマワリを探すんだろうと思ってたしね。
そしてついでに言うと私は銭無しです。お金と言う物を持ったことがこの方ありません。向こうでも財布なんか持ってなかったし、こっちでも戦闘したことの無い私には、お金が入ってくる事は無かったのです。
そんな私は買って貰うって事しかわからない。だからこのシクラの発言は待ってましたと言わんばかりです。

「ねぇねぇ、アイスも良い？　アイスも良い？」
「アイスはメインを食べ終わってからにした方がいいわ。溶けちゃうじゃない。服汚れちゃうわよ」
「は～い」

確かにそこら辺はシクラの言うとおりだね。後から買った方が楽しみが取っておけるから良いかな。それにダメって言わなかったし、これは買ってくれるって事だよね。
なんだか今日のシクラは優しい。実際私を外に連れ出したくれた事もそうだし、どうしたんだろう？　まあ何はともあれ、この機会を逃すわけには行かない。一杯シクラに甘えるんだ。
シクラ達は無条件で私を好きで居てくれる。だから私も好きだよって示してあげるの。

「はむはむモグモグ」

「どう？　おいしい？」

口に買ったばかりの料理を放る私を見て、シクラが嬉しそうにそんな事を聞いてくる。私は「美味しい」と返してさらに目に付いた食べ物を指さして「ふぁえもー！（あれもー！）」と言う。

「そんなに一杯食べたらアイス入らなく成っちゃうよ。程々にしときなさい」

流石に調子に乗りすぎたか、ストップを掛けられた。だけど流石にちゃんとわかってる。勢いでアレも欲しいと思ったけど、お腹的には私の小さな胃にはこの二つでも結構ギリギリかも。アイスの分の余裕は欲しい所だよね。

まあ女の子はいざと成ったら別腹だけど。

「ねぇねぇ、そう言えば私が食べてるこれにも何か食事効果があるのかな？」

私はなんとはなしにそんな疑問をシクラに問う。だって食事効果って全ての食事あるんだよね？　だったら今私が取ってるこれにも当然何かしらの効果があってもおかしくない。

「もちろんあるわよ。買うときの表示に付加効果が書いてあった筈だけど？　まあだけどそんなファーストフードでどこでも買える料理の付加効果はそんなに期待出来ないかな。

食事の効果はその完成品で決まってる訳じゃないのよ。それぞれの食材で現れやすい効果ってのがあるし、料理人はどんな効果を与えたいかを考えて食材を吟味して料理を作る。

だからそうね……その効果は購買意欲アップの為のテンション割高位じゃない？」

「はめられたって事だね！」

なんてあざとい商売をしてるんだこの町の人達は！　どうりで幾ら久しぶりの町でもテンションがおかしいと思った。

「テンション高いのは最初からだった気がするけど？」

「常になの！　下がらなくなったって事。　所で、シクラは食べないの？」

私はふとそんな事を聞いてみる。だって誰かが食べてたらちょっとは欲しく成っちゃうものだよね。どうせシクラは有り余る位のお金を握ってるんだし、買えないわけ無いよ。

「私は朝食取ったし、それに――」

「それに？」

「――私にはあんまり似合わないじゃない。イカ焼きと丸焼きの魚をパンに挟んだホットドックモドキは」

太陽が負けちゃそうな笑顔でそう言ったシクラ……なんだかちょとみとれてしまったけど、よくよく考えたら失礼だよね？

確かにホットドックモドキの方は魚の顔がパンからはみ出てちょっとグロいけど……味は抜群だよ。この和風ソースが絶妙な爽やかさを与えてくれる。

きっとこれは大根下ろしとかを加えて作ってあると思う。辛みが少ない大根下ろしね。辛いのは苦手だから、私はこっちの方が好き。

「味は否定しないよ。ただ私には合ってないなってだけ。そこいらのギャルって気品じゃないでないでしょ私って☆」

流石はシクラ。凄い自信だね。羨ましい位の心の強さ。私もそん

な事を平気でいえれば……ううん、もっと自分に自信を持てたら良いんだけど……

「そうだね。シクラは漂わせてる物が違うよね。さっきから視線が凄いし。私はこんな物を食べれちゃう位の気品だよ」

ショボーンと肩を落とす私。まあこんな物って言い方悪いけどね。ちゃんと美味しいんだし、そこは保証するけど、この肩を落としてるのは自分を卑下してだよ。

するとそんな私をにいきなり抱きついてくるシクラ。

「ちょっ！？　何々！？」

「何言ってるのかなせっちゃんは。本当にこんなくぁわいい容姿しといてさ。私たちがせっちゃんを大好きだから可愛い言ってる訳じゃないんだよ。

せっちゃんは間違いなく美人。それは私達が保証してあげる☆周りの男共だって、せっちゃんが可愛らしくイカ焼きをぱくついてる様で悶えてのよ」

「ええ～そうかな？」

それはそれで嫌な様な……確かに私もチラチラと視線を感じては居たけど、それはシクラへの視線が流れてるんだろうと思ってた。私にも向いてたのかな？

でもそれでもあんまり自分の容姿とは思えないかも。今日はファッションがんばってるしね。そっちかも知れないよ。

「本当にせっちゃんは……ちょっと謙虚過ぎだよ。まあＬＲＯには偽った美女が多いのも事実だけど、せっちゃんは素でこれなんだから、もっと自信もって良いんだよ」

「そう言ってギュウっと強く抱きしめられる。なんだか周りから「

おお！」みたいな声が聞こえるし、恥ずかしいよシクラ。

「まあようは、せっちゃんは最高って事☆」

「……もう」

私から離れてそう言うシクラ。なんだかこっちの顔が火照っちゃうよ。そんな事思ってくれてるのシクラ達だけだよ。

「うは～うっめぇ！」

私達が百合百合して注目を集めてるなかを華麗にスルーする一つの影。その声はとっても聞き覚えのある声で、その手に持った食べ物の量が尋常じゃない事を私は見逃さなかった。

今のきっと間違いないヒマ――と私が思った瞬間、シクラは大きくその名前を叫んだ。

「ヒマ！　見つけたわよアンタ！」

ザワワと周囲がビックリしてるのがわかる。だけどそんな事全然気にしないシクラは、声だけを聞いて持ってた食べ物全て落としたヒマワリに近づこうとする。

「あ……わ……シク……ラ」

「大人しくしてなさいよヒマ。逃げるとロクな事にならない――って、ちょっと聞きなさいよ！」

逃げた。ヒマワリ速攻で逃げた。もうそう決めてるとしか思えない判断の速さ。本当に怒られるのが嫌なんだね。

「あ～あ、もったいない」

私はヒマワリが落とした大量の食べ物を見つめます。これはこの朝市に出展してるお店をほぼコンプリートしてるんじゃないかと思う量だ。
まあ良く食べる子ではあるけど、凄いね。良く買えたね。あほの子なのに。

「せっちゃん何やってるの？　追うわよ！　あのバカ、私から逃げられるとでも思ってるのかしら？」

そう言ってシクラは私の手を引いて走り出します。だけど私は最後まで残った食べ物が気になるよ。

「あれってどうなるのかな？」
「もう、せっちゃんもそんなにお腹が減ってたの？　大丈夫、あれはただのデータと化すわよ」
「消えてなくなるって事？」
「そう言う事」

まあ人だって戦闘不能に成ると消えてゲートクリスタルまで戻されるんだし、そう言う物だよね。私達は朝市で賑わう人混みをかき分けながらヒマワリを追います。追い……ます？
よくよく見たら既にヒマワリの姿は無いんだけど……

「これって本当にヒマを追ってるの？　てか追えてるの？」
「大丈夫。姉妹の私にはわかるから！　ここに来たのだって偶然じゃないの。分かってたから来たのよ☆」

そう言って余裕を見せるシクラ。姉妹だから分かるか。それは性格とかを良く理解してるから？　それとも実はヒマワリに発信機で

も付けてるとか……シクラならやりそうだよね。
まあとにかく、闇雲に走らされてる訳じゃないのなら、いいかな。もの凄く運動不足の私は既に一杯一杯なんだよ。これで見失うとか既に嫌に成りそう。
心臓バクバクで、肺に空気が足りない。朝市を抜けて、市街に出たくらいの所で限界来た。

「ハァハァハァハァハァハァ」

運動って大変だ。私がしみじみそんな事を思ってると、シクラがそんな私の様子を見て、こう言った。

「せっちゃんは実際そんなシステムを越えれると思うけど。もっと自分を理解して、そしてこのＬＲＯと言うシステムを理解しようか？
そうすればそんなに苦しまなくて済むよきっと。だってこの世界で誰よりも愛されてるのはせっちゃんの筈なんだから☆」

うう……そんな事良いから取り合えず飲み物を。喉がパッサパサで、唾液さえ出ないよ。やっぱりだけど、全然私運動とか向いてない。
当然と言えば当然だけど、ちょっとショックだよ。どこまで言ってもこんな自分なのかなって……

「はい、せっちゃん」

私がまた一人で鬱に成りかけてると、シクラがぴとっと頬に瓶ジュースを当ててくれる。あれれ？　シクラはずっと私の側に居たはずだけど、一体どうやって買ってきたんだろう？
取り合えず受け取るけどね。

「ありがとう――んくっ、んくっ……はぁ、生き返った」
「せっちゃんはまだ自分って言う存在を、悪いイメージのまま固定してるから、スペックが自分が思い描くままなんだよ。
自分が自分の事を一番良く理解してるからこそ、今のせっちゃんはＬＲＯ中で最弱なの」

最弱って……そこら辺はもう少しオブラートに包んでくれても良いんじゃないかな？　傷ついちゃうよ私。普通の子よりも繊細なんだから。

「十分甘く言ってると思うけど。別に強く成って欲しい訳じゃないしね。私達がどんな障害からでもせっちゃんを守るから☆
ただ、世界を変えた後の事を考えると、もう少し体力とかを付けといた方が良いってだけ。冒険したいんでしょ？」
「うん……そう。やってみたい」

そうなんだよね。私は世界を変えて、私だけの世界で大冒険をする予定なのです。確かにそれを考えると、今の私は貧弱過ぎるかなっては思う。

「それならホラ、城で教えたことを少しづつ実践してみようよ。そのために勉強してるんだからね。私達はせっちゃんの為に成らない事はやらないよ☆」
「うん、なんとか頑張ってみる！」

私は瓶の中のジュースを飲み干して元気良くそう言った。そうだよね。シクラ達が私の為に成らない事をしないのも、私を一番に考えてくれてるのも自分が一番知ってるもん。
だからそんなシクラ達にも答えたい気持ちがある。

「よ～し、もっと頑張ってヒマを捕まえてみせるからね」
取り合えずジュースで体力回復したし、もうちょっと頑張れそう。
「じゃあ早速せっちゃんお願い」
「何を？」
いきなり何を丸投げされたのか私わかんないんだけど。
「ヒマの探索。この街からは出れない筈だから、ちょっと実戦ぽくやってみようかなって。まあ予想外だったけど、これを使わない手も無いわ。
せっちゃんの勉強にもなってヒマも追いつめれる。一石二鳥でしょ☆」
本当に良い笑顔でシクラは怖いことを言っちゃうよ。まあ確かに一石二鳥なのは確実だね。ヒマワリには悪いけど、いつまでも逃げ続ける訳にもいかないしね。普通にあの子野宿とかしそうで危険だし。
心配だから早く戻って来て欲しい。勿論ちゃんとシクラには私もフォロー入れるしね。それに私が何か出きるなら、やってみたい事でもあるよ。
「ヒマがこの街から出れないってのは何でなの？」
素朴な疑問を私はぶつけてみる。
「あの子がここに居るって分かった時点で、街を囲む様に結界張っておいたから。だってそうでもしないとヒマのスペックじゃ速攻遠

くに行かれるわ」

まあ確かに、あの子スピードは純粋なそれだけど、一番ではあるもんね。シクラも早いけど、種類が違うって言ってた。シクラは確か空間支配を利用した点移動とかどうとか？　私には難しくて分からなかったよ。

まあでも取り合えず、姉妹の仲で一番早いのはヒマワリなのです。だから逃走を阻む為に結界を張ったって訳だね。

どうりでここに入ってから、随分のんびりしてるなと思った。閉じこめてるから急ぐ必要ないって判断してたんだね。

「それよりも、出来そう？」

「やってみる」

私は胸に手を当てて二・三回深呼吸を繰り返す。こうやって何かを任される事って初めてだから緊張しちゃうな。失敗したらどうしようとか……まあシクラ達が私を嫌いになるなんて考えられない事だけどね。

だけどガッカリはさせたくないなぁ、とは思う。だって期待してくれてるって事だもんね。シクラだって同じ様な事出来る筈で、自分でやれば数秒もかからないだろうに、それでも私へやらせてくれるのは、私の理解や成長をみたいから。頑張ってみよう。私は、こんな私を大好きで居てくれてるシクラ達が大好きだからね。

「てい！」

私はそう言って左腕を振るって自分専用のウインドウを表す。実際この時点で私のウインドウは普通とは違うらしい。スオウ達はそれに気付いてなかったらしいけど、私のウインドウには裏の機能があるのだ。

今現れてるのはなんの変哲もないトップ画面。全身の装備状況と、各種設定へのリンク、そして右上にはログアウトが有るはずの空欄。
私はその空欄を長押しします。するとなんの変哲もなかったトップ画面が真っ白な白紙へと早変わり。私はそこに腕を置く。すると画面に波紋が広がり、私の腕を僅かに吸い込む。ヒンヤリとした感触が気持ちいい。

「集中ねせっちゃん。大丈夫、せっちゃんにはその権限がある。それこそ私達以上の自由が約束されてるわ☆　この世界で、貴女に出来ない事はない……それほどだから、自信を持って」
「うん……」

私の意識がウインドウの奥へ奥へ引っ張られる感覚。だけどそれじゃあダメだってシクラに言われた。私は引っ張られるんじゃなく、引っ張り出す側で居られる筈だって。だから私が行くんじゃなく、そっちが来なさい。
私の求める物を与えないさい！！

真っ白な画面に浮かぶ波紋が大きくなり、ピチャピチャという音が鳴る度に、周りに小窓が現れては消えていく。馴れてないからか、いらない情報が一杯あがってくる。その度に窓が開くんだけど、直ぐに消す。その繰り返し。

「せっちゃん、ＬＲＯの情報は膨大。その中から一つの情報を導き出すのは大変。自分なりのやり方を見つけるしかないわ。
それには集中。大丈夫、せっちゃんならきっと出来るから」

そう言って私の両肩に手を添えて、そっと体を寄せてくれるシクラ。暖かい。安心できる。大量の情報で脳がパンクしそうだったけど、なんだか落ち着けた。

（私が求める物を、私だけが抜き取る。必要なのはこの街のどこかに居るヒマワリの情報。教えなさい、その位置を）

ウインドウの向こうに消えた手で取捨選択する。その中に入ってきた一つの映像。それこそが私の求めてる物だった。

「来た！　ヒマワリの場所、それは……あそこだよ！」

私はウインドウから手を引きだして、指さす。それはこの街で一番高い建物の屋根――っと言うか、十字架の先端。この街で一番高い建物が大きな教会って事だね。

「上出来よせっちゃん。良い子良い子してあげようか？」

「そんな事より早く捕まえないとだよ！」

どう考えても力を使って脱出しようとしてるよ。私の指摘にシクラはちょっと不満気。だけど直ぐに気を取り直してこう言った。

「そうね。幾らアホと言っても結界の弱点くらいは見抜いてそうだし、少し急ごうかな」

そう言ってシクラは私をお姫様だっこする。そしてそのまま跳躍して屋根に上がり、教会目指して一直線。だけどその直後、空にロケットの様な煙が昇った。あれはきっとヒマワリだよ。

グングン昇る煙は、ある一定の高度で結界にぶつかったのか、この街全体がビリビリバリと光に包まれる。結界はヒマワリを出すまいと必死で、ヒマワリは命の危険を感じてるからまた必死に結界にぶつかってるんだろう。大丈夫なのかな？　弱点がどうとか言ってたけど……破られたらヒマワリはあっと言う間に遠くへ言っちゃう

よ。

「ちょ～とおいたが過ぎるわよヒマ！」

そう呟いたシクラが一気に加速――と思ったら、次の瞬間には何故かヒマワリの目の前に現れた私達。その光景に驚いたヒマワリは「げっ！？」とか言った。

「鬼ごっこはおしまい☆」

パチンと指を鳴らすシクラ。するとその瞬間、結界が守るだけじゃなくヒマワリへと襲いだした。その堅かった体をしならせてヒマワリを包み込み拘束する。

ドタバタな日（後書き）

第二百九十三話です。
姉妹の中でもやっぱり最強はシクラかなって感じが見て取れますね。後、セツリの可能性はこれからの障害となるか、役に立つのかはきっと彼女次第です。
取り合えず次回もこんな感じですね。
てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

探し物は宝物？（前書き）

結界を縄に変えてヒマワリを拘束出来た私達は早速尋問……じゃなくてお話に移りました。本を取り返すための交渉と言ったほうがいいのかな？　だけどそこで問題発生。ヒマワリはなんと……その大事な本を無くしてました。

シクラの逆鱗を振りきったヒマワリはご免なさい。ご臨終です、

探し物は宝物？

「むぎゃぎゃあああああああああああ！！」

街全体に張られていた結界がヒマワリへと収束した。彼女はまるで透明な縄で縛られたみたいに――ってなんだかもの凄く恥ずかしい縛られ方されてるような。

亀甲縛りとか言う奴？　そんな感じに縛られたヒマワリは、自由が効かなくなった体のまま上空から地面へと落ちていく。

大きな土煙と衝撃を与えて地面にめり込むヒマワリ。私達はそんなヒマワリの元へと、ゆっくりと降りていきます。

「ねぇねぇシクラ。そう言えば結界の弱点がどうとか言ってたのは何だったの？」

私はお姫様抱っこされた状態でそんな事を聞いてみる。だってヒマワリはそれを分かっててあんな上空に飛んだんでしょ？　まあ意味なかったみたいだけど。

「結界は指定した支点から広がる様に張るから、必然的にその支点から遠い方が強度は落ちるのよ。だからこれだけ大きい場合は、数カ所の地面を支点にして広げて上空で繋げてるから、一番上が繋ぎ目で一番貧弱なの」

「へ～、でも良くヒマがそんな事知ってたね」

アホなのに。

「ヒマにそんな知識があるわけないわ。だけどあの子はそう言うの

を本能で見分けるから」
「本能って……どれだけ野生的なのよあの子」
下に目を向けると、立ち上ってる煙の中でヒマワリが縛られた体をジタバタしてるのが見える。なんだかガウガウ言いながら魔法で編まれた縄を噛みきろうとしてるみたいだけど……その光景は確かに野生児だよ。
到底女の子がやる行為じゃないよね。まああの子的には命が懸かってるんだろうから、そんな事どうでも良いんだろうけど、それにしてもって感じ。
「まあ実際には本能って言うかあの子の特性だけどね☆　あの子はいろんな事を見抜ける子だから。だからこそ、私たち姉妹の中では一番純粋なのかも知れないわ」
「特性って、それがヒマの能力って事？」
「そう取ってくれて良いよ☆」
にっこり笑ったシクラは私を抱えたまま、フワリとヒマワリの元へ降り立った。そして私を地面に立たせてくれると、一歩地面を踏みしめてヒマワリを見下ろす。
「ふぎゃあああああああ！！」
ものスゴい奇声と共に、更に激しく体をくねらせるヒマワリ。だけどその結界で編まれた紐が解ける事は無さそうだ。
「ヒマ、もう諦めなさい。あんたじゃこのシクラちゃんを出し抜ける訳ないじゃない。幾ら弱点を見抜こうと、私にはそれを補う術がある。
弱点だって使い方に寄っては、罠に出来るのよ。良い勉強に成っ

たでしょ？」
「ぬがあああああ！　だって僕はまだ死にたくない！」
そう言ってまだまだ諦める様子がないヒマワリ。流石にシクラも呆れ気味。深い溜息をついて更にこう言った。
「あのね、本当に私がアンタを殺すとか思ってるの？　私たちは姉妹でしょ？」
「シクラならあり得る！」
ドド～～ンと自信満々にそう言われたシクラ。思わずその足がヒマワリの顔面を踏みつけちゃってるよ！
「痛い！　痛いよ！　助けてセツリ様！」
ここで名前を呼ばれた私。まあ確かにフォローしようとは思ってたけど、さっきのはちょっとヒマワリが悪いよ。シクラだって鬼じゃないんだから、姉妹を手に掛けたりしないって。
「セツリ様！　ヘループ！　ヘループ！」
「もう、そこら辺にしてあげようよシクラ。流石にうるさいし、人も集まって来ちゃってるよ」
周りを見ると何事かとちらほらギャラリーが増え始めてる。流石にこの土煙は目立つし、ヒマワリが地面に激突した時の衝撃は誰だって分かるよね。
常にイベントに飢えてるらしいプレイヤー達が、こんな得体の知れない事を見逃す筈がない。
「まああんまり事を大きくしたくないし、そうねちょっと場所を変

えましょう」

そう言ってシクラが腕を一振り。すると再び大量の白煙が周囲に立ちこめた。

「せっちゃん、こっちに」

何も見えない中、捕まれた腕に誘われるがままに私は走る。そしてそのまま建物内へ。どうやら宿屋に避難したみたい。

部屋を一部屋借りて、ドタドタと上がり、縛られたヒマワリを無造作に床に投げ捨てる。その際「むぎゃ！」とか言う哀れな声をヒマワリは出してた。

「さて、ここならプライベートが守られてるから、何しても大丈夫よ。他人の目なんか、気にしなくていい。さて、じゃあヒマが思ってる私のイメージ通りの事をしてあげよっか☆」

そう言ってコツっと足音を鳴らすシクラ。

「な……なんで！　そんな事しないって言ったじゃん！」

「だってヒマがそれを望むのなら致し方ないわ。私は心痛むけど、そう言うイメージでお姉ちゃんを観てたのなら、期待に応えなきゃでしょ？

ほら、私ってお姉ちゃんだし」

にっこり笑ってその月光色の髪をウネウネさせ始めるシクラ。やばい、これは本当に殺されちゃうんじゃないかな？

「ごめんなさいごめんなさい！　シクラはとっても優しいお姉ちゃんだから、そんな事しない！　いつもとっても素敵な僕の憧れです

！」

必死にそう言い始めたヒマワリ。流石になんだか可哀想だね。

「最初からそう言えば良いのよヒマ☆」

「心得ました！」

逃げられないと判断したヒマワリは、シクラのご機嫌取りに移行したみたい。ほんと調子が良い子なんだから……だけどなんだか憎めない可愛らしさがあるんだよね。表情がコロコロ変わったり、ピコピコ動いたり、小動物的可愛らしさがヒマワリにはあるよ。

「最初から心得てなさい。私の絶対性くらいはね。それよりもさっさとアンタが私から盗んだ本を返しなさい。今直ぐに」

「アイアイサー！！　って、この縛ってる変なの解いて貰わないと出せないよシクラ」

そんなヒマワリの訴えを了承したシクラは、縄を解いてあげた。宙空に消えていく縄。これでようやくヒマワリは自由を手に入れた訳だ。

「ほら、縄は解いたんだからさっさと出しなさい。あれはアンタがオモチャにしていい物じゃないのよ」

「は～い、（たく、いつも自分だけフラ～と自由奔放なんてズルいよ。それでいて私達の行動は制限するんだからね。この悪魔！）」

「何か言ったかしらヒマ？」

ブツブツと小さく呟いてたのが聞こえたと思ったのか、ビクビクッと体を震わせたヒマワリ。てか、実際私にも聞こえたからシクラが聞き逃してる筈はないと思うけどね。

だけどシクラはあくまでも聞こえてないフリをしてる。一体何を企んでるんだろう？

「な……何でも無いですお姉さま！　あはは、ちょっと待ってくださいね。今出しますから……」

そう言ってウインドウを表示させて、アイテム欄をスクロールするヒマワリ。

「え～と、え～と……」

「ヒマ？」

「あははは、確かここに……」

「ヒマ……」

なんだか不穏な空気がこの狭い部屋に流れ出してる。ヒマワリは既に涙目だし、シクラの雰囲気はピリピリしてるよ。私はそんな空気を和ませる為に、明るくヒマワリに声をかける。

「もう、そんな冗談いらないよヒマ。パパッと出してササッとこの件は手打ちにしよう――ね！」

「グズ……はい……はい……グズ……」

えええええ！？　どうして大粒の涙をこぼしちゃうの？　私何か不味いことを言ったかな？　涙と鼻水を垂らしながら、ヒマワリは必死にアイテム欄をスクロールし続けてる。

でも既にもう何度下に行っては上へ戻ることを繰り返してるよ。

「ヒマ……あんたもしかて……」

ピクピクと目尻をひくつかせがらシクラが一歩を詰め寄る。だけ

ど次の瞬間ヒマワリは予想外のことを言ったよ。

「シクラ！　本が無くなってるんだけど何でだろう！？」

「私に聞くなあああああ！！」

ドッガアアアアアンっと腕を一振りして宿屋の壁ごとヒマワリを吹き飛ばしたシクラ。再び白煙がこの港町に数カ所立ち上る羽目になった。

てかあの威力は結構本気入ってたよね？　大丈夫かなヒマワリは？

「大丈夫よ。あんな子でも私達と同類。ほら――」

そう言ってシクラは、壁に空いた穴から遠くを指す。するとそこではヒマワリが「僕だってわかんないもん！！」とか叫んでるのが見える。

確かに無事だ。やっぱり姉妹だね。頑丈さは折り紙付きだよ。

「わかんないじゃ済まないわよ！　さっさとこっちに戻ってきなさい！」

「……」

返事がない。何かを迷ってるみたい。まあここで戻ったらまた殴られたりしそうって所だろうけど、ヒマワリが動き出す前に、シクラはしっかりと釘を刺す。

「ヒマ、今度逃げたら殺しちゃうかも知れないわよ☆」

「あはっは～やだなお姉さま……今直ぐ駆けつけます！！」

そう言った瞬間、ヒマワリは高速で戻ってきた。実際この距離を一足だった。どんな跳躍力してるのよこの子は。まあ十字架から一

足でロケットのように飛んでたし、それを考えるとこれくらいは当然なのかな？　でもこの子この力に支点影響されないみたいなんだよね。そこが不思議な所。これだけの勢いなら踏み込んだ建物を木端微塵にしてもおかしくないのに、傷一つ付けずに移動できるんだから凄い。

なんだかこの姉妹は本当に色々と規格外だよね。だけど勢い付けすぎたのかヒマワリは私達を通り過ぎて、宿屋の反対側にも穴をあける始末。宿屋は大きく揺れて、私達の部屋は埃でいっぱいに……ケホケホだよ。

「やっちゃった。シクラが止めてくれれば良いのに！　避けた避けた！」

ぶち壊した壁から出てきながらそんな文句を垂れるヒマワリ。あの勢いを止めろと？　まあ、シクラなら出来るだろうけど……そう言うことじゃないよね？

「うるさいわね。アンタのミサイルみたいな勢いにわざわざなんで私が労力使わないといけないのよ。そんな事より……よ、分かってるわよねヒマ？」

そう言ってガシっとヒマワリの肩……と思いきや頭を無造作に鷲掴みにするシクラ。

「あははは、痛いよシクラ。ほら、僕たち姉妹なんだし仲良く仲良くしようよ」

必死におちゃらけてるヒマワリ。だけどシクラの雰囲気は背中越しに見てもゴゴゴゴなる効果音が聞こえてきそうな感じだよ。

今度こそ、本当に殺されちゃうかもねヒマワリ。

「そうね……仲良くしたいわよね。大丈夫、まだ愛してるわよヒマ。だからさっさとあの本を出しなさい」

まだ愛してるとか……本を出さなかったら愛す自信がなくなるわけだね。シクラの声がすっごく冷たく聞こえた。いつものフワフワとつかみ所のない感じじゃ全くない。実際あれはわざとあんな風にしてるんだろうけど、この素のシクラは見たくなかったかも。

見てるこっちがガクガクと震えそうだよ。てか、さっきからもの凄く強く頭を握りしめてるのか、ヒマワリの頭から何かがオブジェクト化して消えていってるよ。

あれはきっと血だと思うな。ＬＲＯはそれを見せないから流れ出る前に処理してるんだと思う。てか良く我慢してるねヒマワリ。

「え～とね、それは僕もそう思ってるんだよ。本当だよシクラ。僕だってあの本を返したい……返したいんだ！　だけど無いんだもん！！　どうしてだろ！？　ねぇねぇ僕にもわかんないよ！」

必死にそう訴えるヒマワリ。シクラにまたぶっ飛ばされる――とか私は思ったけど、どうやらそんな無駄な労力を二度もする気は無いらしい。

だけどシクラは「チッ」と舌打ちして、とっても不機嫌そうにこういった。

「ウインドウ出しなさい」

「どうぞ……」

お殿様に献上するみたいな言い方のヒマワリ。無造作にそれを受け取ったシクラはさっきのヒマワリ同様の仕草を繰り返す。

やっぱりアイテム欄を確認してるんだろう。

「どうだった？」
「嘘はついてないみたいね」
そういってまたまた無造作にヒマワリのウインドウを投げ捨てるシクラ。
「だから言ったじゃん！　嘘なんて付くわけ無いよ。これ以上シクラの事怒らせないし！　でも……なんでか本無くて……怒らせるって分かったら……逃げるしかなくて……」
そう言って再びポロポロ涙を流し始めるヒマワリ。私はそんなヒマワリを見て胸が痛む。だけどシクラは全然変わらない口調で言葉を発する。
「いいから端的に答えなさいヒマ。アンタそもそも収納したの？　持ち歩いてたんじゃない？　それを食べ物に夢中でどっかに置き忘れてたとか……」
「失礼な！　僕だって幾らなんでもそんなバカじゃ――」
シクラのまさに失礼な言葉に最初は勢い良く涙を振り払って食い掛かろうとしたヒマワリ。だけど途中でその勢いが途切れちゃった。まさかとは思うけど……まさかだよね？
「――バ……カじゃないよ」
「本当に？　言ってみなさい。そのスッカスッカの頭の言い訳を聞いてやっても良いわよ」
「うぬぬぬぬ……」
必死に怒られない言い訳を考えてるんだろうヒマワリ。その顔はみるみる真っ赤っかに……どう見ても深く考える事が苦手そうな子

です。

「ちょっと、ちょ～とだけバカかも知れないけど……実際覚えてないかも……」

「アンタを愛せなくなった。お姉ちゃんは悲しいわ」

死刑宣告が出たみたい。私も悲しいよヒマワリ。こんな短い付き合いになるなんて思ってなかった――って流石にそれは無いよね。流石にちょっと本を盗んで殺されちゃかなわいよ。

「待って待ってシクラ！　もっと筋道を立てて考えれば、ちゃんと思い出すよ。幾らヒマがバカでも！」

「せっちゃんはヒマのバカさを分かってない。それにバカは死ぬまで直らないって言うし、一度殺してみるのも手じゃないかしら☆」

なんて綺麗な笑顔で物騒な事を口走っちゃうんだ。もう全く末恐ろしいよ！

「ダメだよ！　それはダメ！　殺した時点でバカは永久にバカのままだよ！　それが事実だもん」

「まあ確かに。バカのまま殺してもバカかもしれないわね」

なんだか焦点がバカになってる様な……そんな事を思ってると、バカバカ言われすぎたのか、ヒマワリが泣き崩れた。

「ふ……二人してバカバカって……流石の僕でも傷つくんだよ……にぐっ……ぐずっ、うえええええぇぇぇん！」

そんな姿に思わずシクラは鷲掴みにしてた手を離す。流石にここまで本格的に泣かれると困るみた――

「ウザっ」

――恐ろしい声がボソッと聞こえたのは聞き間違いって事に私は自分の中でしておいた。まさか妹を泣かせて置いてウザって……少しも心が痛まないのかな。

私も言い過ぎたかなって思ってたのに、シクラは全く悪いと思ってないっぽい。まさかこれが愛さなくなったって事？　早いよ！幾らなんでも気持ちの切り替え早すぎ。

私は泣き崩れちゃったヒマワリに寄っていき頭を撫で撫でしてあげる。

「ごめんねヒマ。大丈夫、そんなヒマはバカじゃないよ」

「そんなの嘘……だってバカバカって……力強く言ってたもん……」

うう……しっかりと反論されちゃったよ。確かに力強く言っちゃってたけど、あれは勢いが九割で本音は一割程度だったんだよ。

「本当に？」

「本当だよ。それにヒマはそんな所もあわせてヒマなんだよ。十分可愛いから気にしなくてもいいんだよ」

撫で撫で撫で。ヒマワリのその名前通りの色をした髪を優しく撫でる。少しは受け入れてくれて来たのか、その体を私に預ける様にしてくれる。

「じゃあじゃあ……あのね……」

「うん？」

「本の事許してくれる？」

早速それを話題にするなんて……まあヒマワリからしたらそれが原因でこんな事になってるんだから、早く許されたいって気持ちは分かる。
だけどそれは私が判断する事じゃないんだよね。だってそれはシクラの物だもん。それを私が勝手に「良いよ」っては言えないよ。

「シクラ……」

私はシクラへと視線を移します。だってその判断はシクラにしか出来ないからね。するとシクラは溜息混じりこう言います。

「許す」

パアアアと明るくなるヒマワリ。私も思わず「良かったね」と言いそうなったけど、どうやらまだシクラの言葉は続いてた。こんな風に。

「――訳無いじゃない。私はせっちゃん程甘くはないわよ」
「知ってたよ！　だけどそれでも期待しちゃったじゃん！　シクラの鬼！　悪魔！」

ぬか喜びに激怒するヒマワリ。だけどそんな権利、自分にはないと気付いた方がいいよ。実際当然だし。

「あらら、そんな態度で言い訳？　踏みつぶすわよバカ！！」

もの凄い迫力。がっつり睨まれてガクガクブルブルと萎んだヒマワリ。「ごめんなさい」と言う言葉を涙ながらに言うのが精一杯。

「あはは……ねえシクラ。ずっと思ってたんだけど、あの本ってそ

んなに大事な物なの？　えっとそれって、やっぱり私の為なのかな？」

私は泣き崩れてるヒマワリを抱えながらそう聞いてみる。だってシクラがこんなに拘るんなら……やっぱりそうなのかなって思うし。

「そう、あれはせっちゃんと私達の世界を創るために必要な物なの。マスターしか持ってない権限の一部を複製したアイテム。あれがあればマザーに干渉出来る。

それなのにまさか身内に邪魔されるなんて思わなかったわ。ヒマ、あんた自分の存在意義を否定したのよ。私達はせっちゃんの為に居るの。その私達が、せっちゃんの夢と願いをを邪魔してどうするのよ」

「ちゃ……ちゃんと後で返す気だったよ」

ちっちゃくちっちゃくなったヒマワリが、ボソッとそんな事を言う。まあヒマワリも無くすなんて思って無かったんだよね。

「ねえシクラ。それはこれからに絶対必要な物？」

「そうね。マザーが私達を受け入れないのなら必要かな？」

別に無くても良いのなら、「もう良いよ」って言ったんだけど、絶対に必要ならそうは言えないね。

「ごめんセツリ様……僕のせいで」

悲しげに私の胸に顔を埋めるヒマワリ。既に相当堪えてるみたい。流石に私の事には敏感になってくれるみたいです。

「今更よ。そう思うのなら、少しは役に立ちなさい。その軽い脳味

噌を絞って思い出すのよ」
「が……がんばってみる」

声に出しながら「うぬぬぬ～」と呻き出すヒマワリ。だけどそんな声を出してる時点でなんか思い出しそうに無いって言うか……そんな事をしてると、私達の部屋に武器を片手に入ってくる人が。

「何だなんだ！　一体なにがあったんだ！？」

ボロボロになった部屋の参上を目の当たりにして、そんな声を出すその人。更に後ろからかも数人のプレイヤーがこちらを覗き込んでる。
あ～あ、おもいっきり目立ってるよ。

「みなさんお騒がせして済みません。少しヤンチャしちゃって……だけど問題無いのでどうぞお引き取りを」

シクラが今までの雰囲気をコロッと変えて爽やかにそう言う。凄い切り替えの早さだ。だけどこの状況をそれで納得してくれるのかな？　だけどそこはＬＲＯなんだろう、結構簡単にプレイヤーの方々は引き下がってくれた。

「ふう、大事にならなくて良かったね」
「大丈夫よ。ＬＲＯなんだから物騒な事はそれなりにあるし、それよりもせっちゃんの存在に気付かれなかったのが幸いね。
せっちゃんは自分が思ってるよりも有名だから。それにその存在は特殊なんだから、レアアイテム感覚で狙ってる奴らがいてもおかしくないわ」

そうなんだ……それは初耳かも。ちょっと外に出るのが怖くなっ

ちゃうな。でもそう言えば、目覚めたばかりの頃、攫われた事あったっけ？　だけどまあ大丈夫だよね。今はシクラにヒマワリも居るし、大概の事はどうにでもなるはず。

「ねえそうだ！　もう一度朝市にいこうよ。そこでヒマが辿ったルートを辿れば、どこで無くしたか思い出すかもしれないよ」

こんな所でウンウンと頭を悩ませてても思い出すかなんてわかんないんだし、行動を振り返る方が記憶って物を刺激するかもしれないよね。

それにヒマワリは考えるだけじゃ上手く思い出さないだろし。

「そうね。確かにそれの方が早いかも。この子の記憶力なんか宛にならないけど、自分がどう行動したか位は分かるでしょ。そしてそこからはまたせっちゃんにちょっと頼るわ☆」

頼る……なんか言い響き。私は元気に「任せて！」と言った。さあ、再びあの喧噪へ！　だよ。

探し物は宝物？（後書き）

第二百九十四話です。
馬鹿でアホなヒマワリはまあ予想通りな事をしてくれてた……かも知れないですね。だけどどこか憎めなかったら幸いです。取り合えず予定では後一話位の予定だったけど、どうだろう？
納まるかは微妙かも知れないです。その場合はもう一話増えても勘弁してください。
てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

追跡開始（前書き）

私達はヒマが無くした本を探す事に。大切な事だから当然だね。だけどヒマの記憶は曖昧で頼りない。だから私の力――権限の出番です！　頼られるなら頑張る。それは今までにない事だからやってみたいのです。

追跡開始

「さて、じゃあ早速思い出して貰おっか？　ヒマ」

そんな事を言って、私の服の裾を握りしめるヒマワリを睨むシクラ。もうそろそろ普通に接してあげようよって思うけど……シクラはまだ許してないもんね。

てか、あの本が見つからなかったときが怖いよ。きっとその時にはヒマワリの命は……考えないようにしとこう。

さてさて、とりあえず見つからなかった時の事を考えるよりも、見つかることを願う方が有意義だよね。ってな訳で、私たちは再び朝市の開かれてる場所までやってきました。

再びお腹を擽る臭いが漂って来てる。そう言えばさっき私アイス食べてないよ。だけど今の状況じゃ言い出せないよね。はぁ……

「分かってるよ。ちゃんと今思い出してる所なんだ。えっと確か……僕は本を抱えてここに来た。うん臭いに釣られたんだ。だから早速そこのお店の前で焼かれてるイカを凝視してた！」

そう言ってヒマワリはとてとてと歩いてその店の前に。てか私がイカ焼き買った所だし。港町らしい屈強で浅黒い肌の青年風のＮＰＣがニコニコ顔で決まった台詞を言い続けてる。

「ヒマは凝視してただけのなの？　お金あるんでしょ？　買わなかったの？」

確か最初見つけたときは、腕いっぱいに食べ物抱えてたよね？

どうやって手に入れた訳？

「僕たちもお金なんて持ってないよ。シクラがなかなかくれないし。お姉ちゃんたちにはそれなりに渡してるようだけど……僕にはくれた事無い！」

「ヒマだけね。ヒイちゃんにはやってるわよ」

「なんでヒイラギに渡して僕に無し！？　お姉ちゃんだよ！」

立場も忘れて思わずシクラに詰め寄るヒマワリ。だけどその理由は私にも分かるかも。

「だってヒマはアホじゃない。年齢的には下だけど、ヒイちゃんの方がよっぽど賢いでしょ」

「ヒド！　僕だってお金の計算位出来るよ！」

ポニテを振り回して猛然と抗議するヒマワリ。だけどシクラは意に返さずにこう言います。

「計算できても、ヒマには計画性って物が欠如してるじゃない。アンタ足し算と引き算でしか物事を考えられない残念な頭なんだから、潔く飼われてなさいよ」

「フヌア！？」

変な声を出してフラリと私に向かって倒れ込んでくるヒマワリ。もう本当に忙しい子だね。てかこれは、さっきのシクラの言葉がかなり効いたって事かな？

「酷い……酷いよシクラ。ねえセツリ様もそう思うよね！？」

「う～ん私に同意を求められても……それよりもお金が無いのにどうやってあんな大量の食べ物持ってたの？」

私は無駄な話題を流して、本題へ舵を切る。もう寄り道してるのも面倒だからね。それに海に行くためにも、この問題はさっさと解決したい。

「え～とそれは……確か親切な人が声を掛けてくれて、いっぱい食べ物を買ってくれたの」

「親切な人？」

ふ～ん無条件でそんな事をしてくれるなんて、確かに親切な人だね。それともよっぽど可愛そうな子にでも見えたのか？　ヒマワリは純真無垢だから庇護欲をそそられたのかもね。

私もこの子と居るとそんな感じになっちゃうし、まあ分かるかな。だけど私の場合は買ってあげるとかできないけど。

「物好きも居たものね。幾らファーストフードでも、あれだけ買えばそれなりの額でしょうに。てか、アンタの図々しさに驚きね」

確かにあんな腕いっぱいの量を見ず知らずの親切な人に買って貰うとか流石はヒマワリ。シクラの言うとおりその無邪気さはある意味図々しいよ。

「てかヒマ、そんな親切にされたことを忘れてたの？　ちょっとそれはどうかと思うよ。正直アホ言われても反論できないかも」

人として心配だよね。まあ厳密には人って訳でもないけど、同じ様な感情は持ってる筈なのに……恩をあっさり忘れちゃうの？　――って、私もそこら辺はあんまり言えないのかな。

「そんなこと無い！　ちゃんとその人たちの事は覚えてるもん！

僕はそんなアホじゃない！　ただ、なんで本が無くなってるのか分からないだけ！」
「そ……そうなんだ……ごめんヒマ」

顔がくっつきそうな勢いで迫られた。思わず謝っちゃった私。取り合えず私達はヒマが奢って貰ったお店を全部回る事に。どこかに手がかりがあるかもだし、実際置き忘れてるとか、この子の場合考えられる。

だけど一回りしたところで本は無かった。無駄にお腹の虫が活性化されただけだよ。てか……幾ら何でも朝市の出店オールクリアとか、それはもう図々しいとかのレベルじゃないよね。私はこの子の将来が心配です。

「これだけ回って本当になんの見返りもなくその人達は奢ってくれたの？　イヤな顔一つせず？」

どんな聖人君子よその人達。実際信じられなくなったんだけど。だけどヒマワリは「うん」と気持ちの良い返事を返すだけ。

けれどそこで何かを考え込んでたシクラがこんな事を聞いた。

「ヒマ、あんたいつ本をアイテム欄に納めたのよ？　最初ここに来たとき抱えてたって言ったわよね。それから食べ物に夢中になって、その時その人達に奢って貰って朝市巡り。その時点で両手を使わないといけないわ。

途中からプッツリと本の存在が消えてるじゃない」
「あれれ、そうだね？　本はどうしたのヒマ？」

そう言えばそうだった。私達はただヒマワリの行動を復習してる訳じゃない。目的はそっちだよ。だけど最初以外本はいつの間にか退場してた。けれどそれもこれからだよね。ここまで良く覚えてた

んだし（行った店の道順まで）きっとかなり記憶は鮮明になってる筈。

「えっとね！　その人達が持っててくれるって言ってくれてね――」
「「え！？」」

ヒマはとっても軽く言ったけど、私達は二人してそんな声を出したよ。そして自分の記憶の良さに得意気になって少し先を歩いてるヒマワリの肩を私とシクラ、同時にガシっと掴んだ。

「「ヒ～～～～マ～～～～～～！！」」
「あれれ～どうしたのかな二人とも？　なんだかとっても怖いよ。セツリ様まで……なんだかおっかないかも……」

私達の殺気でも察知したのか、微妙に肩が震えだしてるヒマワリ。てか、今の自分の発言で気付きなさいアホ。

「今なんて言った？　持っててくれるって言ったわよね？　預けたの？　ねぇ！？　それからどうしたのよ」

シクラの力が私の十倍位強いのか、ヒマワリの体がそっち側にくの時に曲がってきた。

「え？　え？　ちょっ……肩がイカレちゃいそう。あ……預けたよ。だってそうしないと食べ物持てなかったし――――――――――って、あっそっか、返して貰ってないんだっけ？　アハハハ忘れてた。テヘ☆」

シクラみたいな☆を出したかと思うと、その瞬間ヒマワリの肩がゴキッと凄い音を立てた。そして絶叫と共にその場で悶絶しまくる。

あらら、今のはシクラの逆鱗に触れちゃったな。
たく、そろそろ学習しないと本当に死んじゃうよ。てか、殺されちゃうよ。

「うう……何も肩を本当に砕かなくてもいいじゃん」

地面に突っ伏しながら涙流してこちらを見上げてくるヒマワリ。本当に今日は泣いてばっかりだね。全部自業自得だけど……本当にここまで自らの行いで身を滅ぼしちゃう子も珍しいかも。
やっぱりアホだからかな？

「うるさいわね。良いからその連中を見つけなさい。まさか顔を忘れたなんて言わないわよね？　そんな事を言うアホな子には……もう片方の肩も逝かせるわよ」

そういってコキコキと指を鳴らすシクラ。そのおぞましさに恐怖を感じずには居られないヒマワリは「大丈夫！　まかせて！」と言い、もの凄い勢いでこの街を駆けだした。
あの子のスピードは異常だから、通った場所にはもの凄い土埃が立つ。だから食べ物があるここも土埃が蔓延。そこかしこからケホケホ聞こえる。

「大丈夫かな？」
「大丈夫とかじゃないわ。ヒマには何が何でも見つけて貰う。それがヒマの贖罪よ」
「それはそうだけど、私はあの子一人で大丈夫かなって……だってヒマはアホだよ」

なんだかすっかりバカかアホが定着しつつあるよ。でもバカは一度泣かれてるからね。だからもう一方のほうで。ヒマワリには悪い

けど、それなしでは既に見れないかもしれない領域かも。まあだから一人で走らせて大丈夫かなって事だよ。

「大丈夫でしょ。そもそもあんなにあの子の中で好印象なら忘れてなんか無いはず。それをわかんないなんて言ったらマジで殺す。殺しちゃうから。

それに町中を速攻でくまなく探すのなら、ヒマ一人が効率いいわ」

やばいよ……死ぬ気で見つけないと本当に殺されかねないよ。だけどヒマワリの事だからヘラヘラとしながらこんな風に――

「ごめ～んわかんなかった」

――そうそうそんな風に戻ってきそう……って戻って来ちゃったよ！！

「あっそ……何か言い残す事はあるかしら？」

ヤバい、シクラの周りの空間さえ歪んでる様に見えるかも。てかさっきのヒマワリの言葉で、シクラの何かが切れる音が私には聞こえたよ。

ヒマワリは今の言葉をあんまり深くとらえずに「え～とね～」とか言ってるけど、私は必死に「逃げて逃げて」と念を送るよ。だけど残念な事に、私にはそんな特殊能力はないのだ。

そしてヒマワリがその最後に成ろう言葉を口にする。

「えっへへ～だって良く考えたらその人達カッコいい仮面を被ってたからわかんないだ。あの仮面のままなら速攻で簡単だと思ったんだけど、それらしい人は居なかったよ。

それに幾ら僕でも、宿屋とかの個室には入れないしね」

こりゃまいったね～とか言うノリなヒマワリ。だけどまたまた自分の言った言葉に違和感を覚えようよ！　既にシクラは食い付いてるよ。

「ヒマ！　今アンタ仮面って言った？　その人達は顔を隠してたって事？」

「うん、そだよー。みんな格好良い仮面被ってたな～。僕も欲しかった位だよ」

シクラの質問にキラキラお星様をチラツかせながらそう話すヒマワリ。もう本当にこの子は……

「こんのバ――アホ！　アホ！　アホオオオオオ！！　どう考えても怪しいでしょそれ！　もしかして最初から法の書を狙ってたんじゃない？」

「ええ～だけど、あれがそんな貴重な物で、僕たちがあそこに現れるなんて誰にもわからなかったと思うけど？」

なんと今までで一番まともな事をヒマワリが言った。超ビックリだけど、確かにその通りだよね。あれが貴重な物だと予め知ってそれを狙ってこの街に居たなんて流石にあり得ないと思う。

「うぬぬ、アンタにしては鋭いじゃない。確かに法の書をそもそも私が持ってるなんてスオウしか知らない筈だし、それを狙うなんて不可能ね」

「え？」

今、なんだか聞き逃せない名前が出たような……？

「シクラ……今スオウって言った？　どう言うことなの？　会ったの？」

私の言葉に、明らかに「しまった！」みたいなリアクションを取るシクラ。誤魔化そうとしてもダメだよ。その反応を見る限り、真相を確かめるまで食い下がる覚悟だよ。

「シクラシクラシクラ！　私に隠し事は許しません。どうやってあの本を手に入れたか教えなさい！」

私は私の権限を利用しちゃうよ。シクラ達は、基本私に絶対服従。普段はそんな風にしないけど、私の知らない所でシクラがスオウと接触してたなんて気になるよ。

「それが命令なら私には拒否できないから、正直に話しましょう。まあ、実際スオウには会ったよ☆」

「何で？　どうして？」

私は何故か自分が思ってる以上に動揺してる。なんでこんなに胸の所がズキズキするのかわかんない。なんだかちょっと裏切られた気分？　それもおかしいけど……うう～良くわかんない。

「どうしてと言うなら、勿論せっちゃんの為だよ。言ったよねあの本は私達の世界を造る為に必要な物だって。それが外部のイベントでしか手に入らなかったからちょっと出張したの☆」

「出張って……私が寝てる間？　全然気づかなかったよ」

てか、一声掛けてくれても良いのに。

「一声掛けて、せっちゃんはどうするつもりだったの？　今更せっ

ちゃんから会いに行く事はない筈だと思うけど？」
「うう……」

確かにそうだね。私が彼を拒絶した。選んだのはシクラ達との夢。それなのに、今更スオウに会ってどうするのよって事だよね。
そんなのある意味、シクラ達を裏切るような事だよ。だけどこう……頭で理解してもモヤモヤしちゃう何かがあるの。言い表せないけど、私の知らない所で彼に会って欲しくないって言うか……

「本当はせっちゃんを不快にさせる気なんか無かったから、そこはこれから気をつけます。あ～あ、本当なら気づかれなくて済んだはずなのに……どっかのアホのせいで。気づかなくて当然だよ。だってＬＲＯ事態が一回落ちて、しばらくスタンバイモードみたいな状態だったからね。
そのさきっぽの方で行われたイベントをやってきたの」

私に対してはとても真摯なシクラ。ヒマワリに対してはもう姉妹の契りを破棄しそうな位だね。てか、落ちたって……まさか昨日位の夜の記憶が曖昧なのってそういうことなの？

「ええ。厳密にリアルタイムで言えば、昨日じゃなく一昨日だけどね☆　一日程度、本格稼働をしてなかったの」
「ええ！？　それ本当？　全然気づかなかったよ」

私の記憶ではつい昨日の夜のことが、既に一昨日って……ある意味タイムスリップしたみたいだね。寝てたからもの凄く意味ない感じだけど……てか、なかなか信じれない。
でも今のシクラは私に嘘なんてつけないから、やっぱり全部真実なんだよね。

「だから気づかなくて当然。せっちゃんはまだ、ＬＲＯに縛られてるからね」
「ええ！？　僕も気づかなかったんだけど！」
シクラの言葉にヒマワリが納得いかない体で割り込んできた。気づいてないって、ヒマワリも寝てた状態になってたって事かな？
シクラは大丈夫だったのに？
「それはアンタがアホだからでしょ。寝て食べて遊んでしかしてないヒマには今日も昨日も一昨日も変わらない一日なのよ」
「なっ！　なんだとおお～～～～！！」
頬を膨らませてポニーテールを振り振り回すヒマワリ。幾らヒマワリでも昨日を忘れるなんてあり得ないと思うけど……
「せっちゃん。取り合えずこの話はこの位でいいかな？　早く法の書を奪った奴らを見つけないと。一筋縄で使える物じゃないけど、あの価値に気づかれるのが問題だから」
そういってシクラは話題を脇道から本筋に戻そうとする。うん、まあ確かにそうだよね。まずは本を取り返すことが先決。それはこれからの私達の為だもんね。だけど一つだけ、これだけは教えて。
私は胸の前に持ってきた手を合わせたり離したりしながらゴニョゴニョというよ。
「うん、そうだよね。わかるよ。わかってる。法の書は大切。勿論取り替えないといけない。だけど……ね……シクラ。
スオウは……私の事……気にしてたりしてたかな？」
何言ってるのこの女って思われても仕方ないとわかってます。だ

けど、しょうがないじゃん。気にしちゃうの！

「気にしてたってのがどのレベルなのかは良くわかんないけど、私が感じか限り……そうでもなかったかも☆」

「そ……そうなんだ」

なんだか気持ちが落ち込みだしたかも。ここだけは嘘を付いてほしかったな。自分の権限が思わぬ形で私に牙をむいたよ。

「まああれだよせっちゃん。ほら、スオウって目の前の事しか考えないタイプでしょ？　しかも決まって色々と大変だから、必然的にそうなっちゃう。

だからあんな奴の事は早々に忘れちゃった方がいいよ☆

こっちだけが思っとくのって癪じゃない」

うう……それはシクラなりのフォローなのかな？　まあ言いたい事はわかるよ。確かにスオウはいつだって大変な事に巻き込まれてる。

だから目の前最優先……それはしょうがないって事でしょ？　でもだからってシクラが居て、私の事を尋ねないなんて、確かに癪かも。

「いっぱいいっぱい……スオウには後悔させてやるわ」

私はそんな決意を口に出す。いろんな事を後悔させてやるんだから！

「その意気よせっちゃん。じゃあまっ、取り合えず法の書の奪還を再開しましょう。取り合えず探すべきはその仮面の奴らよ」

そう呟くとシクラは黙り込む。きっとどうやってその仮面の人たちをあぶり出すかを考えてるんだろう。

「ヒマ、ちょっと特徴を……ってあんたのお粗末な記憶力なんか宛にならないわよね」

「なっ！？　失礼な！」

激高するヒマワリを余所に、シクラは私に視線を移して、こう言ってきました。

「ここはせっちゃんに頼んで良いかな？　取り合えずヒマ、最後にその仮面と別れた場所へ案内しなさい」

何をやる気だろうか？　具体的な事を言われないまま、ヒマワリは言われた通りに、最後に仮面の人たちに奢って貰った場所へと到着。

そこはたこ焼き屋を売ってる所でした。隣にはグロくてウネウネした大きいタコが蛸壺から足やら顔を覗かせてます。これは蛸壺ごとタコが買えます的な？　普通なのかな？　私には良くわからない。

「ここでその仮面とは別れたのね？」

「うん、ありがとおーって言ってね」

「どっちに行ったかとか覚えてる？」

「え～と確か……あっちかな？　でも向こうだった気も……」

ヒマワリの指は定まらずにフラフラしてる。まあきっと食べ物に夢中だったんだよね。だから用が済んだ仮面がどっちに行ったかなんて気にしてなかったって所だろう。

純真だし良い子だけど、基本他のプレイヤーに興味ないからね、この姉妹は。例外がスオウだけど、それはきっと私と一番深く関わ

ってるからだろう。

「まあ良いわ、じゃあせっちゃん早速お願い。せっちゃんの権限を利用して、ＮＰＣの視覚情報を覗き見ましょう。それで敵の姿と追跡が出来るわ。

なんたってＬＲＯの街には至る所にＮＰＣが居るんだからね☆」

なるほど、私にして欲しい事ってそういう事。役に立てるのなら私がんばってみます！　さっきも上手く行ったし、これも練習練習だよ。

「わかった。やってみるね」

私は再びウインドウを表示させて同じ手順を踏む。だけど今度はさっきよりも結構簡単だった。だってＮＰＣの名前はわかってるし、それで検索をかけて後はその一体の情報を絞って抽出するだけ。

簡単に別のウインドウに、過去に目の前のたこ焼き屋のＮＰＣの見てた映像が再生される。

「こいつね」

シクラのそんな言葉を向けられたのは、映像の中で暢気に涎垂らしてはしゃいでるヒマワリの後ろにいる仮面姿の人たち二人。

顔全体を覆う感じじゃなく、目の部分を隠す感じの安易な仮面です。だけどデザインは凝っててきらびやか。昔テレビで見たヴェネチアの街のお祭りで売ってる感じのです。

てかどう考えてもその二人周囲から浮いてるじゃん。あれを疑わないのはヒマワリ位だよ。普通は即警戒ものだよ。

声は背の高い男の方は低くて良い声してて、女の人の方は残念な酒やけ声してた。そんな二人がヒマワリにたこ焼きを買ってあげて

……「ありがとー」言って手を振り別れ――って、この二人それぞれ別の方向に姿を消した。
なるほど、あながちヒマワリの記憶も間違って無かったって事だね。でも別方向にいくなんて……赤の他人だったとか？

「まさか、それは無いわ。この時点から万が一を警戒してたとしか思えないわ。こいつら……かなり手慣れるって事よ。
ふふふ、だけど残念。普通のプレイヤー程度なら容易に撒けるのでしょうけど……喧嘩を売る相手を間違えたわね」

なんだかシクラの目が輝いて来た気がするよ。懲らしめる相手が居るって状況が、シクラのテンションを高めてるみたい。

「で、どうしよっか？　どっちを追う？」
「どっちでも良いわ。きっとどこかで合流するだろうしね」

青い空の下、私達は仮面追跡のミッションに移るのでした。

追跡開始（後書き）

第二百九十五話です。
う～ん、やっぱり後一話必要でした。ごめんさない。だけど大丈夫、次できっと終われる筈です。無事解決出来るかは次回で！
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

私に出来る事を精一杯（前書き）

私はＮＰＣの視覚情報を引き出して仮面の人達の行動を追います。仮面の行動の履歴を追って、辿り着いたのは私達が一時的に身を隠した宿！？　どうやらやましい事をした者の行動は不思議と似通ってくるものらしいです。

私達はここで奴等の名前と素顔を確認。それから更に検索をかけて、私は遂に現在の奴等の位置を特定します！

私に出来る事を精一杯

久しぶりの外で、私は久しぶりのプチ冒険中です。ヒマワリから本をさりげなく盗んだ仮面の人たち。その行方を追跡中。

やっぱりこう言うのは、女の子でも胸がワクワクするよね。それに今回は今までと違って、私活躍してます。今日という日はセツリちゃんが一皮剥けた記念すべき日に成る事でしょう。

私が心でそんな決定を密かにしながら、この街に居るＮＰＣの視線を辿り、犯人を追いつめます。私達は取り合えず、女の人の方を追うことにしたのです。

その人の消え去った方向のＮＰＣの視線を覗き見て、その人の行動の追跡。ちょっと警察みたいな事をやってます。

犯人を追いつめるデカみたいな。ふふ、昔から一度はやってみたかったシチュエーションだよ。

「楽しそうねせっちゃん」

「だってだって、私も役に立ててる。必要とされるって初めてで、なんか嬉しいもん！」

私は張り切ってＮＰＣが見た映像を取り出すよ。これが今の私に出来ること。ＬＲＯへ少しは干渉できる私の役立つ能力。

まあ、まだ全然使いこなせてないんだけど……それでも、過去の映像を出す程度の事は慣れて来たかな。

「セツリ様は偉いです！　てか、僕達にとっては絶対に必要だからね。そこら辺、自信を持ってていいんだよ！」

「あんたがそれを言うな！　てか、少しは反省しときなさい」

ヒマワリが元気一杯にそう言ったら、シクラに突っ込まれてるよ。あはは……ヒマワリは本当に直ぐ調子に乗っちゃうんだから。全然学習しないね。私達がやってるのはヒマワリのフォローだって事を忘れちゃダメだよ。

まあある意味、ヒマワリのおかげで私は久しぶりの外の世界へこれてる訳だけどね。そこだけは感謝してるよ。

「シクラはそろそろ僕を許してくれたっていいと思うんだけど……」

「ふざけないで。本が戻るまでは許さないし、戻ったとしても罰は与えるわよ」

「ええ！？　そんなの聞いてないよ！」

罰と聞いて動揺しまくりのヒマワリ。まあヒマワリには悪いけど当然かなとは思う。だってなかなか大事になってるしね。

ここに来るまではヒマワリを見つけて捕まえてそれで解決と思ってた事が、それだけじゃダメになってるもん。予想以上の労力使ってるよヒマ。

「取り合えず今日の晩ご飯は抜きね。大食いのアンタには良い罰でしょ？」

「そんな殺生な！　餓死しちゃうよ！　僕餓死しちゃうよ！」

「うるさいわね。罰なんだから苦しまないと意味ないでしょ。その位やらないとヒマは反省しないだろうし。それに一晩ご飯抜いたからって死ぬ訳ないでしょ。

てか、そもそも私達には食べるなんて行為必要ないし。形式でとってるだけよアレは」

へぇ～そうだったんだ。私に付き合ってって事かな？

「食べることが必要ないなら、なんで朝昼晩ってちゃんと食事してるの？」
「せっちゃんが寂しい思いをしないようにってのもあるけど、姉妹が揃う時間を作るためかな。それに食べなくても大丈夫なのは事実だけど、お腹は減るのよね。
だから一応取るようにはしてるってだけ」

ああそっか、プレイヤーのみんなもお腹は減るって言ってたし、食事を食べて満腹感を得られるんなら、やっぱりその逆もあるんだよね。
そこら辺はシクラたちも同じって訳か。

「一応じゃないよ！　僕は本当に死んじゃうと思う！　その自信がある！　だからその罰の撤回を要求しちゃうかも！」

力強くそう告げるヒマワリ。まあこの子、城の中でも常に食べ物持ち歩いてたし、確かに死ぬ程イヤな罰なんだろうね。効果的だ。

「それこそ丁度良いじゃない。本当に死んだら、墓前にたこ焼きを供えてあげるわよ☆」
「わ～い――って！　全然嬉しくない！　僕たち姉妹だよ！　それでいいのシクラ！？」

ヒマワリは必死に食い下がる。まあ死んだ後にたこ焼き供えられても食べれないもんね。だけどシクラは既にヒマワリの事を姉妹として扱ってないのだ。

「可愛い方の妹が残るのなら良いわね別に☆」

あっさり存在を切られてるヒマワリ。シクラはホントヒイちゃん

の事が好きだよね。向こうはそうでもないのに、良く絡んでるし。
実際、シクラの次に早く目覚めたのがヒイちゃんだからかな？
残りのヒマワリ達が目覚めたのって実際、アルテミナスが大変になる少し前って聞いたし、それまでは二人で色々とやってたらしいから当然と言えば当然かも。
だってみんな姉妹だけど、お互いに会うのは目覚めてからが初めてって言ってたしね。知識だけがある赤ちゃんみたいな感じだってシクラが言ってたよ。目覚めた直後はね。

「うぬぬぬ～～」

うめき声を上げながらプルプルと震え出すヒマワリ。また泣いちゃうのかな？　とか思ってのぞき込むと、ヒマワリに腕をガシッと捕まれた。

「え？　え？」
「セツリ様！　こうなったらあの本を僕が大活躍して取り戻すしか無いよ！　そうしないと帳消しになんて出来ない！　あの仮面の奴らはどこ！？　懲らしめてやる！」

ヒマワリがすっごく近くまで顔を寄せてきてそんな事を叫ぶ。まあ確かに逃げ出して奪われた事を帳消しに出来る位の大活躍が出来ればそれはそれで万々歳だとは思うけど……ついさっきまでの態度は何だったのか。
沢山食べ物奢ってもらって良い人って言ってたのに――手のひら返しだね。まあ向こうは元々が騙す目的だったみたいだし、実際このヒマワリの反応の方が正しいのかな。
だけど実際、あの仮面の人たちもあそこまで買わされるまで付き合わなくても良かったと思うんだよね。最初の方でヒマワリはあの人たちに本を預けてたし、その時点で別れればあんな尋常じゃない

程の出費をしないでも済んだはずなのに、一応ヒマワリの気が済むまで付き合ってる辺りは、もしかして罪悪感から来る罪滅ぼし的な物なのかな～とも思う。
それともただ単に、夢中にさせる度合いは大きい方が良いから、多少の出費を我慢しても、気付かれるのが遅くなるように付き合ったのかな？
シクラの読みではこういう事を日常的にやってるプロらしいし、後者が強いのかな？　そしたらまあ、やっぱりヒマワリのこの反応は正しいかな。

「まあ活躍出来るかはヒマ次第だけど、私も頑張ってみるよ」
「その意気ですセツリ様！」

気合いが入ってきたヒマワリに触発されて私もやる気がもっともっと上がるよ。よーし、次はあのＮＰＣを当たろう。仮面が逃げた方向からすると、あのＮＰＣの視界にも入ってる可能性は高い。
てかいつまで仮面を装着したまま何だろう。そろそろ素顔を拝みたいよ。逆に目立つしね。そう思いながら、私達の追跡は続きます。

そしてたどり着いたのは私達がさっき部屋を取った宿屋。近くのＮＰＣの視界には確かに仮面女がこの宿に入っていく姿が映ってたし、その直ぐ後に仮面男も合流してたから間違いない。

「まさかこことはね。それに時間を見る限り、私達がここを利用する少し前じゃない」
「そうだね。丁度朝市でヒマと遭遇した位かも」
「そんな事よりも早く中へ行こうよ！　そして奴らを見つけてつまみ出すんだ！」

気合いが入りまくったヒマワリは拳を握りしめ力強くそう言って

る。だけど冷静なシクラがそんなヒマワリにストップをかけるよ。

「まあ待ちなさいヒマ。ここがアジトは訳無いわ。それに今もまだここに居るとは思えないじゃない」

「どうして？　だってここに二人して入って行ったよ」

「そうだけど、考えてもみなさい。私達がここで何をやったか。あの時派手にやったせいで私達の部屋にはプレイヤーが来たでしょ？

その時、もしかしたら奴らも居たかも知れない。その時まではね。そして私たちの姿を見てたとしたら？

私とせっちゃんの事は知らなくても、ついさっき自分達がカモにした子の姿はアンタじゃないから忘れないだろう仮面野郎どもは、こう思うでしょうよ。『おいおい同じ宿になんか居れるかよ』ってね」

まあ確かに十分考えられるかも知れないね。それにあんな騒いでてヒマワリが痛めつけられるって所をみたら、私達がその本を取り返しに来たと思ってもおかしくないかも。

そうなると確かに、この宿にまだ居るとは考えられない。だけど……

「でも入って今の時間までで、仮面の二人組が出ていった形跡はないけどなぁ」

「ほらほら、それならまだ奴らはここにいるんだよ！　ふふ、全くバカな奴らだぜ」

なんだか渋めな顔してそんな台詞を吐くヒマワリ。きっと仮面の人たちもヒマワリだけには言われたくないと思うよ。

「何をバカがバカな事言ってるのよ。そんなの簡単。奴らはここであの仮面を外して、素顔で出ていったのよ。ただそれだけ」

「「ああ～」」

なるほど。名推理だね。流石シクラ。どうりで仮面を探しても見つからない筈だよ。

「でも、じゃあどうするの？　仮面の中の素顔を知らないと、これ以上追跡出来ないよ」

「そこら辺は大丈夫よ。奴らがこの宿をちゃんと利用しててくれればね」

どう言うこと？　だけどシクラは自信満々だし、きっと大丈夫なんだろう。

「そう、私が大丈夫と言うときは大丈夫。信じていいよ。取り合えず宿の中に入ろっか。用があるのは中に居るＮＰＣ。そこで奴らの素顔がわかるはず☆」

そう言ったシクラは颯爽と歩を進めて宿屋へと入ってく。私達はそんなシクラに付いてくばかり。う～んやっぱり憧れちゃう何かをシクラは放ってると思う。時々私にはキラキラ見えちゃうもん。

やっぱりシクラは頼もしいよね。

カランカランと言う音がドアに取り付けてあったベルから鳴り、カウンターに居るＮＰＣがやる気ない声で「いらっしゃいませ」と言った。

さっきも来たけど、あんまり繁盛してない店だからか、それともこんな態度だから繁盛してないとか知らないけど、その対応はどうだろうか？　だよ。

まあただのＮＰＣに、仕様以上の物を求めるべきじゃないよね。

「ねぇねぇシクラ。思ったんだけど、私が権限を使わなくても、シクラはＮＰＣに自我を目覚めさせる事が出来るんだよね。
それなら、自我を目覚めさせて教えて貰う事も出来るよね？」

忘れてたけど、シクラにはそんな特殊な能力？　みたいなのがあるんだよね。それによって今のＬＲＯは前とは違う形に少しずつなってるとか。

「まあそうだけど、それだと映像が観れないわ。顔を確認する事が大事でしょ？　それにまだ、全てのＮＰＣに自我を持たせるのは危険。
プレイヤーが大量に居る今の状況じゃ、ＬＲＯのシステムに負荷が大きすぎるもの。それはせっちゃんの存在のリスクになる」

私の存在のリスク？　良くわかんないけど、大量にプレイヤーが溢れてる今の状況で、同じく大量に居るＮＰＣに自我が目覚めるって事は、それだけＬＲＯが処理するデータ量も倍々位に増えるって事なのかな？
実際私は、機械に全然強く無いから、容量とかから良くわかんないけど、余裕がある方が良いってのはわかる。良く昔に、お兄ちゃんが機械には余裕が必要だって言ってたしね。
ようは、今それをしたら流石のＬＲＯでも余裕って物が無くなるかもって事だよね。その影響で私がどうなるかがシクラは心配なんだ。

「そっか……うん。じゃあ私頑張っちゃうよ！」

私を大切に思ってくれる子達に無駄に心配かけたくないし。私でもやれる事があるならやっちゃうさ！

「じゃあ今度は、そのカウンターに居るＮＰＣの視覚情報と、この宿屋の宿泊リストを出して。それであの仮面の中身が分かるわ」
「わかった！」

私はさっそくＮＰＣの名前を確認。そして再びウインドウを出す。左手はウインドウに埋めて、右手でカウンターに置いてある宿泊名簿をタッチ。

黒い宿泊名簿の上に現れた別窓。そこには間取りと部屋番号と宿泊状況が観れる用になってる。なるほど、これで空いてる部屋を選んでお金を精算するシステムなんだね。

宿泊名簿なのに、宿泊名簿って無いけど、ＬＲＯではこういうシステムなんだろう。初めて知ったよ。今までチェックインなんて自分でやったこと無かったもん。

私の経験値が三ぐらいプラスされた気がする。ＬＲＯはレベルとか無いけど。気持ちの問題。私は少しずつ社会性を手に入れて行ってるね。

私はそんな事を思いながら右手をその現れた別窓に添える。そして意識を集中すると、別窓の表示が切り替わり、そこにはここ数時間でこの宿を利用したプレイヤーの一覧が表示される。

「これでいいのかな？」
「流石せっちゃん。上出来だよ☆」

シクラは私の頭を撫で撫でしてくれる。やった、誉められちゃったよ。

「うう……セツリ様ばっかり……」

物欲しそうな目で不満気にそう呟くヒマワリ。そりゃあヒマワリは怒られてばっかりだからね。気持ちは分からなくもないけど……

「誉めて欲しいのなら、それなりの働きをしなさい。てか、褒めるなんて今の所あり得ないけどね。ヒマの評価は今は－２０位は行ってるから、まずはそれを取り戻しなさい」
「－２０って！　幾ら何でもマイナス過ぎだよシクラ！」

自分の評価の悪さに抗議するヒマワリ。まあ確かに基準はわからないけど、－２０は結構酷く感じるね。

「妥当でしょ。それだけの罪を背負ってると知りなさい」
「そんな～」

一蹴されたヒマワリはそこらの椅子にドガッと腰掛ける。あらら、幾らスパッツだからってそんなに足を広げるのはどうかと思うよ。
大きく仰け反ってるから、服がめくれておへそも見えてるし、ここはお城じゃないんだよ。人の目ってのを気にしてほしい。女の子なんだからね。

「ヒマのガサツさなんてどうでも良いわ。それよりもこの名簿に載ってる時間と、視覚情報の映像を照合しよう」
「そうだね。今は細かい事は後回しだね。教育は後からでも出来るし、仮面の人たちを逃がす訳にはいかないもん」

私は別ウインドウにＮＰＣの視覚映像を出します。外でここに入ったのを見たＮＰＣの時間等辺だよね。チェックインしたとしたら。
時間を併せて、画面からカランカランと同じ音が聞こえる。ＮＰＣの視線が動いてドアの方へ。すると丁度怪しい仮面の二人組が入ってきた。何か話してるみたい。

『ちょっとどう言うこと？　なんで街中で合流するのよ？』

『この街から出れなくなってるんだから仕方ないだろ。取り合えずこの街での収穫は十分だ。取り合えず様子見をするぞ』

そんな会話。街から出れない？　それって……

「もしかしてシクラが張った結界に阻まれたのかな？」

「そうかも知れないわね。思わぬ所で役に立ってたって事か。流石私☆」

自画自賛してるシクラ。どう考えてもたまたまで偶然だけどね。それにこの男の方がもう少し遅く外に出ようとしてたら、結界は消えてたかも知れない。

そう思ってると、宿屋の窓から迸る閃光が。

『きゃ！？　ちょっと何よ？　晴れてるのに雷？』

『何か起こってるんじゃないのか？　なんだかイヤな予感がするんだよな。街から出れないってそもそもおかしいだろ』

『何？　あんたビビってる訳？　大丈夫よ。野次馬根性を出して余計な行動をしなければバレやしないわ。例え何が起こってようと、宿屋の一室でひっそりとしてればほとぼりは冷めてるわよ』

『そう願うけどな』

どうやらこの二人は女の方が主導権を握ってる感じなのかな？なんか男の人の方はこき使われてそうだね。そんな話をしながら仮面の二人組はカウンターへ。

私と同じ操作をして部屋を決定。どうやら私達が取った部屋の隣だね。あの時も居たのかな？　そしたら私達かなり間抜けだよね。

簡単な操作と支払いをカードで済ませて部屋へと向かう二人。ここから先は完全なプライベート空間で、ＮＰＣはいないからね。観ることは出来ない。

だけど十分、今のチェックインの時間を照らし合わせれば、彼らの名前も分かるよ。

「これが名前だね」

「ふざけた名前ね。だけど男の方は良い勘してると思うわ。自分達の未来を予知してる。私達に手を出してただ済む訳無いってね」

「怖いよシクラ……」

黒いオーラが見える。まあ私もただで済ますつもりはないけど……シクラとか存在を消しちゃいそうじゃん。私が出来る事とシクラの出来ることは違うから、それを考えるとブルっと体が震えるよ。

「それにしても、どうやらこの二人私達だけから本を盗んだだけじゃないようね。会話から察するにスキルか何かでいろんな人からアイテムをかすめ取ってるみたい」

「そうだね。戦利品とか言ってたもんね。だけどそんなスキルあるの？」

町中で気付かれずにアイテム欄からアイテムをかすめ取るなんて出来るのかな？

「出来ない事はないわよ。だけど確かアイテム欄を参照して盗むのを決めるとかは無理よね。基本ランダムだろうし。ヒマはどう見てもアホそうなのが溢れ出てたから堂々と盗まれたのね」

私達二人は揃ってふてってるヒマワリに視線を向けます。ヒマワリは椅子の背をこちらに向けて、もたれ掛かって「ま～だ？」とか言ってる。

自分のせいだという自覚がこの子にはまだ足りないらしいよ。私達は二人揃ってため息を出して、ウインドウの時間を進める事に。

名前は分かってるから、今度はチェックアウトの時間に合わせれば良いんだよね。
きっとその時には仮面を外してる筈。やっとで素顔を知ることが出来るんだね。そうして画面が一度暗くなって再びＮＰＣの視覚情報が表示されると、なにやら慌ただしい映像が映し出された。

「これって丁度私達が暴れてた時間ね。やっぱり居たのか……不覚だわ。こんな事ならやっぱりさっさと法の書に細工しとくんだった」

盗んだ犯人と交差してた事に後悔を隠しきれないシクラ。まあだけどしょうがないよ。目をギラつかせながらシクラは「こいつらか」とか言ってる。
画面には慌てて駆けてきた二人組の男女がＮＰＣの前を駆けて出ていった。別にチェックアウトとか自動なんだね。だけど大丈夫一時停止出来るから。
仮面を外した二人は……まあ普通でした。普通に周りにとけ込めるよねって感じ。男の人はスレイプルで女の人はそのまま人みたい。
せめてもの特徴は、やけに鞄やバックを提げてる所かな？

「アイテムの収納数を増やすための物ね。あれだけの物を盗んでるって事でしょう。あの中にきっと法の書も……取り合えず顔も分かったし、今度こそ追いつめるわよ！」
「うん！」

顔と名前が分かればこっちの物！　後は一気に広範囲の検索をかけちゃうもんね。少しずつ慣れて来たから、今度もきっと大丈夫。
私が見つけてみせます。こんな所で躓いてられないからね。私は目を瞑り意識をＬＲＯと溶け込ませます。これはまるで限りがない水の中。膨大な情報と精密なシステムで出来上がった海なのです。
押し寄せては返る波の一つ一つに、理解できないコードの数々。

煩わしいからそういう分からないのは押し退けて、一気に自分の命令をこの海に叩きつけてやるんです。
すると浮かび上がってる来る選りすぐられた情報の数々。だけどそれでもまだ完璧じゃない。私が求めるのはたった一つの確実な情報。
彼ら二人の現在の位置情報だよ。沢山の小魚が、私の周りから離れてく。それを食べに大きな魚が来て、更に大きな魚を呼び込む。私のイメージの検索はそんな感じ。
大きな魚は私の餌に釣られてきた情報です。私が振れると私の何倍もある大きな魚は、キラキラと消えて私の中に。うん……これだ。

「見つけた」

目を開いた私はそう呟く。そして二人の居場所を伝えます。

「あの二人は船の上。定期船に乗ってるみたい」
「分かったわ。逃げ場のない場所で好都合よ！　ヒマ！　名誉挽回のチャンスよ！　盗人を追い詰めて、法の書を取り返すわよ！！」
「アイアイサーーー！！」

勢いの良い返事と共に、椅子をひっくり返しながら立ち上がるヒマワリ。今度こそ追い詰めた。船の上なら安全なんて言う考えはこの二人の前には通用しない。

私に出来る事を精一杯（後書き）

第二百九十六話です。
え～とまずはご免なさい。またまた終わりませんでした。あはは……いや～こんな筈じゃなかったんだけど、書いてたら足りなくなりました。だけど今度こそ大丈夫。次回はとうとう盗人どもと邂逅するし、絶対に終われます。
てな訳でそんな次回は、土曜日に上げます。ではでは。

自分勝手の先（前書き）

私は検索を掛けて盗人を発見。奴等は定期船での脱出中。それに追いつくためにヒマの背に乗り町を疾走してます。ヒマのスピードをもってすれば、海の上を走る事だって不可能ではないのです！

そしてようやく追い詰めた盗人ども。そこで私はヒマワリの力を垣間見ます。

自分勝手の先

「だっしゃあああああああああああああ！！」

元気一杯のヒマワリの声が響く。ヒマワリが一歩を踏み込む度に町には激しい砂埃がキノコ雲の用に立ち上ってます。

それだけ感情を高ぶらせてヒマワリは海へと向かって走ってる訳です。真っ青な空にある大きな入道雲が、落ちてきてると錯覚するようなそんな砂埃をまき散らして、ヒマワリはただ夢中で走ってます。

そのスピードたるや街に居るプレイヤーの人とかは既に気づかないレベル。一体何が起こったか分からずに、砂埃で目の前真っ白ってな感じ。

街に何本ものキノコ雲を作ってあっと言う間に見えてきた海。だけど実際、今の私には感動に浸る余裕がありません。何故なら、ヒマワリの背中にしがみついてるので精一杯だから。

「セツリ様！　もちょっとスピード上げちゃうぜ！」

「ええ！？　まだ上げるの？　無理無理！　絶対に振り落とされちゃうよ！」

明るい色のポニーテールを激しく振り回しながら、とんでもない事をさらっと言うヒマワリ。私は断固拒否するよ。てか既に腕痛い。ヒマワリにおんぶされてる格好だけど、そのスピードのせいで全然楽じゃない。やっぱり優雅に空を選ぶんだった。

シクラが速攻で私を担ぐ様にヒマワリに命令したから、素直にこんな形になったけど……絶対的にシクラに運んで貰ってもよかったと思うんだ。

だってだって、シクラが人一人位、運べない訳無いもん。それなのに私をヒマワリに託すなんて……これじゃあヒマワリへの罰じゃなく、完全に私が罰を受けてるみたい。

「ええ？　良く聞こえないよ？　ようし、じゃあ海に突っ込むよ！！」

「ちょっと待ってよおおお！！」

ダメじゃん！　ヒマワリ自身のスピードで周りの音を追い越しちゃってるよ。既に音速だよ！　人が窓もない吹きさらし状態で耐えられる速度じゃないよ！　マッハだよマッハ！

だけどそんな私の思いがノリノリ状態のヒマワリに伝わる訳もなく、彼女は港へ続く坂道から一気に海へ駆け降りる。

そのスピードは既に凶器の域。シクラのやってる空間の点移動なんかと違って、純粋なスピードでの移動のヒマワリは音速を超えてる時点で衝撃波を放ってるみたいなものだよ。一足にパワーを込めすぎるから、踏み出した場所にはキノコ雲さえ立ち上るんだし、シクラが通った後の周りの建物の窓とかは例外無く、バンバン割れてる。

実際それで済んでるのがマシな方だったりして……町は基本壊せない設定の筈だし。一応はシステムで耐えてるのかな？

だけどそんな事を思うのも、そんな惨状が視線に映るのも結局は一瞬。瞬きをした次の瞬間には、私の目に水しぶきが見えました。

それと同時に港に繋がれた船が宙に浮く様も確認できます。それはきっとヒマワリが海を踏んづけた影響。ドッバーーーン！！　と言う水窯をひっくり返した様な音と共に大きな水柱が出来上がるのです。それによって船がヒックリ返ってる。てかヒマワリは普通に海の上を走ってる。

本当にこの姉妹はスペックが普通とは桁違いです。普通は出来ないか躊躇う事を躊躇無くやってのけます。まあだからこそ味方なら

これほど心強いのは居ないよね。
本当に、全く最高な私の友達です。

「うらららららあああああ！！　僕に走れない道などなあああああい！！」

そんな叫びを上げながら、海を疾走するヒマワリ。水柱をボンボン上げながら、盗人が乗ってる船を探します。ゲームでもやっぱり広大な海。ここから一隻の船を見つけるのはそう簡単じゃ無いかも……なぁんてそんな事は無いのです。
盗人が脱出に使った定期船は、この町と別の町を繋ぐ便。ルートは予め決まってる。それなら遭難でもしてない限り、必ずそのルート上を船は進んでる筈なのです！　ルートなんて普通のプレイヤーでも知ってる事。検索を掛ける事をせずに私達は出発したわけです。
それはきっとシクラもヒマワリも知ってるって事だよね。私は信じてるよヒマ。すると次の瞬間、ヒマワリがこう叫んだ。

「居たあああああああ！！」

私はその言葉を聞いて、ヒマワリの肩越しにその船を確認します。確かにあれだ。決して豪華とは言えないこぢんまりとした船。収容人数三十人位の定期船。きっと間違いない。
ヒマワリは今でも十分なのに更にスピードを上げて定期船へ迫ります。下に鯨がいっぱいいて、ヒマワリが通る度に潮を吹き上げてるんじゃないかと言う程の水柱をあげまくって迫るから、定期船からはこちらに気付く人がそれなりに見える。
まあこれだけ分かりやすい目印を上げながら迫ってるんだもん、気付かない訳がないよね。だけど例えあの盗人に気付かれても全然困りはしないのだ。
ここはなんたって海の上。逃げ場所なんてどこにもない。

ヒマワリのスピードと船のスピードは雲泥の差だからあっと言う間に私達は船の後部に迫った。白い波を立てながら普通のスピードで進む船。それに向かって一気にジャンプするヒマワリ。
その衝撃で波が激しく乱れて大きく揺れてる船。無駄に高くジャンプしたヒマワリがそんな船の甲板に強引に着地します。周りがざわざわだか騒然とする雰囲気。だけどそんな周りの視線を気にせずに、ヒマワリはこう言っちゃうのです。

「とうちゃ～～～く！　今の着地は百点満点だったね」

あっけらかんとそう上機嫌に言うヒマワリに周りは呆気に取られてるよ。まあ分かるけど……海の上を走って来た不可解な女の子二人組だもん。
訳が分からないよね。

「さて、じゃあ卸すねセツリ様」
「あ……うん」

甲板に足を付くと、波の揺れでフラツく私。おお、本当に揺れてるよ。正直海の上って初めてです。船に乗ったのも初めてかな。
こうやって普通に立つと、潮を乗せた臭いも風も気持ち良いものだね。船の上から海を見ると飛び込みたくなる不思議な感覚が沸くよ。泳いでみたいな。本当にしょっぱいのかな？
私がそんな事を思ってると、今まで完全に固まってたプレイヤーの方々がようやく目の前の状況を受け入れ出したのか、僅かに「スゲェ」とかが聞こえだした。
ヒマワリは盗人を捜すようにそんなプレイヤーの面々を見てる。

「ねえセツリ様？　ここに居るんだよね？　中の方かな？」

そう言ってヒマワリは船内へ繋がる扉へ目を向けます。だけどその時、一人のプレイヤーが興奮気味にヒマワリへと歩を進めます。

「すげえ……スゲェよ！　今の何だ？　なんで海の上走れちゃってんだ？　どんなスキル？　教えてくれないかな？　頼む！　この通り！！」

そう言ってヒマワリに向かって手を合わせて拝み倒すその人。なんだか思ってたのと反応が違う。もっと恐れられたりする物だと思ってたけど、そんな一人の行動がきっかけで、他のプレイヤーもヒマワリへと集まってく。

「本当にスゴいよ！　どれだけ鍛えればあんな動き出来るようになるの？　それともその装備の賜？　もの凄く軽装で防御力なんて皆無に見えるけど、それらを犠牲にすることであの運動量をもたらしてるとか？」

「自分達にもあの動きの詳細を！」

「俺だって聞きたいことが！」

「こっちだって！」

なんだかもの凄い事に……みんな恐怖よりも好奇心が強いみたい。それはやっぱりここがＬＲＯだからなのかな？　みんなそれなりの経験をしてるんだろうし、リアルでは得ない耐性でも付いちゃってるのかもね。後は私達がこの人達と変わらない姿をしてるのも大きいのかも。

今のがまがまがしいモンスターなら、こんな事には成らないだろうしね。その時はきっと恐怖感が優先される筈です。

だけど私達にはそんなの感じる訳ないか。シクラには感じるかもだけど、いつもの状態のヒマワリは可愛い系の女の子に変わりないもん。

だからこそみなさん気さくに話しかけてる。てか、私には眼中ない感じなのがちょっと腹立つんですけど。そりゃあ私はおぶられてただけですよ。
だけど関係を気にしたりしたって良いじゃん。もしかしたら私にも隠された力が有るかもとか思ってくれる神秘眼を持ったプレイヤーは居ないのか！

私が心の中でそんな悪態付いてると、ドタドタと言う音と共に船内に続いてる筈の扉が開き、また数人のプレイヤーが甲板に姿を現した。

「なっ、何事だ！？」

そんな声を一人が放って、そして直後にワイワイガヤガヤしてたこの現状を見て「え？」と成ってた。面白い顔の変化だったよ。
まあ中に居た人たちには何もわからないだろうね。

「えっと……あのモンスターは？　スゴい音して衝撃も来たから、モンスターかと思ったんだけど……」

哀れなプレイヤーがそんな事を言うと、みんなして「違う違う」と首を振りつつ言う始末。なんでそこで息が合ってるかわかんないよ。

「えっと……じゃあ今の衝撃は一体？」

自分の無知さにごめんなさいして、教えを請うみたいな感じでそんな事を言うその人。他にもわかってない人居るのに、なんだかその人だけ、いたたまれない感じに成ってるよ。
だけど私にはどうすることも出来ないよ。そもそも見ず知らずの

人に話しかけるなんて難易度高い事、引きこもりだった私には無理です。
哀れなその人に、プレイヤーの方々は端的に「今の衝撃はこの子が海の上を走ってきたからなんだ」てな感じで事実を伝えます。
だけどついさっき出てきたばかりの人たちは当然それでは飲み込めない様子。頭に疑問符が浮かんでるのが見えます。
「いやいや、海の上を走れるとか聞いたことないし……そんなの信じれる訳――」
そんな言葉を船内から出てきたプレイヤーの一人が紡いでる時、私には後ずさりして船内に戻ってく一人のプレイヤーの姿が目に留まりました。
それは見間違える筈もない犯人の顔。きっとモミクチャにされてたヒマワリを見つけて、慌てて船内に戻ったんでしょう。
私は急いであの盗人の後を追います。

「セツリ様！？」
「盗人を発見したの！　追いかけるね！」
「待って待って！　一人じゃ危険――」

私はそんなヒマワリの声を背に盗人を追いかけます。だけど船内に続くドアの前には複数のプレイヤーが立ちはだかってます。早くも関門が！　どうしよう、階段を駆け降りる音が聞こえる。
逃げ場はないけど、こういう時の為の対策とか取ってると面倒。ほら、アイテムだけをどこかに飛ばせるとか隠せるとか。
だけどこんな見ず知らずの人になんて言えば良いのか……オロオロしてる私に、目の前の人も困ってる感じ。勇気を振り絞って私！
「ど……退いてください！」

精一杯頑張ってそう言った私。そのままの勢いで扉の前に居た集団を突破して船内へ。下に続く階段。これを降りていったよね。
確かに一人じゃ危険だけど、ヒマワリはプレイヤーのみなさんに捕まってるし、私がいかないと。何故かシクラは姿現さないし……体が震える。だけどこれからの為にあのアイテムは必要で、それは私の為にシクラが苦労して手に入れた物。
それを取り戻すのなら、私だって頑張らないとだよね。決意を決めて私は一歩を踏み出します。階段の下のどこかに居るであろう敵に向かって。

揺れる船内の階段を一気に二・三段飛ばして私は掛け降ります。踏み外しそうに成ったり、バランスを崩し掛けたりしたけど、なんとか転ばずに下まで降りれました。ただの定期船だからどうやら部屋は一つしかないみたい。船内の大部屋に、私が居る甲板とを結ぶ通路。そして甲板の三カ所で成り立ってるんだね。
これはどこにも隠れようもないよね。私は大部屋へと続く扉を開きます。
するとその瞬間、私の頬を掠める何かが――

「え？」

鈍感な私がそんな声を出すのと同時に後ろの方でカッと言う小気味良い音が。今の態勢を維持したまま首だけで振り返ってその場所を見ると、なにやら丸いギザギザした鋭利な物が壁に刺さってる。
あれは手裏剣って言うんじゃないのかな？　かな？　私がそんな事を思ってると、空気を切るようなヒュルルルルと言う音が前方から聞こえてきた。視線を前に戻すと案の上、回転しながら迫る手裏剣が四つ程見えます。

「きゃあ！」

私は頭を抱えながら部屋の斜め前方に飛びます。床にドゲシと叩きつけられると同時に、カッカッカッカと言う音が聞こえました。またまた振り返ると、私が飛んだと同時に閉まりだしてた扉に手裏剣が刺さってる。むむむ～

「ちょっと！　何するんですか！　危ないじゃないですか！」

私はこのいきなりの攻撃にプンすかプンすかだよ。大胆にも文句を言います。すると部屋の一番遠いところに居る二人組は警戒心露わにこう言います。

「危ない？　当然だろ！　こっちは倒そうとしてるのよ！　あんた達、あのアホな子の仲間なんでしょ？　言っとくけど、アイテムは返さないわよ！」

うぬぬ、やっぱりバレてたか。だけど言ってやるもん。私のこの超正論を聞きなさい！

「アイテムを盗むなんて悪いことなんだよ！　盗んだ事に罪悪感を感じてるなら、返してよ。貴方達がヒマから取ったあの本は、とっても大切な物なの！」

心に訴えるようなこの叫び。届いたかな？

「ふん、罪悪感？　そんな物私達にはありはしないわよ！　そもそもスキルでそれが出来るんだから何の問題もないじゃない。てかあのヒマって子は自業自得よ！　あのアホ差を呪いな！」

「ヒマはアホだけど、貴方達がそんな事を言わないで！　あの子は

貴方達よりも言い子なだけよ。何十倍も！！」

スキルでそれが出来るからって、何の苦労もなく他人の苦労をかすめ取る事に味を占めてる貴方達にはヒマの事をアホなんて言ってほしくない。

「良い子なんてなんの特にも成らないわよ。今のうちにずる賢さでも会得してた方がよっぽど人生上手く過ごせるわ。

教えて上げよっか？　ガキのあんたにさ。よく聞きな！　リアルもＬＲＯも素直に生きてる奴程、大バカを見る羽目に成るの。損をしたくなかったら賢く生きる事が大事なのよ」

そう言って今度はクナイを構えるその人。接近戦なんて挑まれたら私、あっと言う間に切り刻まれちゃうよ。武器なんて持ってないし、そもそも戦闘なんて、そんなに経験してない。

どうにかして会話を引き延ばしてシクラかヒマワリが来てくれる事を願わないと……

「じゃあ、貴方達のやってる事が賢く生きる事ですか？」

「そうよ。リアルならまあ犯罪だけど、ここでなら出来るんだから、危険を犯して貴重なアイテムを自分で取りに行く必要なんて全くないのよ。

それでウハウハに成れるんだから賢いでしょ？」

そう言いつつ彼女は何かのスキルを発動したようです。体が緑色に淡く光り、彼女が構えるクナイにもその光が広がる。すると何か水滴の様な物がポタポタと落ちだした。ドスグロい色をしたその水滴は床に落ちると、なんだ沸騰でもしてるかの様にブクブクなってる。それに煙も上げてるし……毒か何かなのかな？　あの水滴に触れるだけでもやばそうです

「誰だって楽をしたいもの。誰にも私達の行いを咎める権利なんて無いわ」
「確かに……その気持ちは分かります。楽をしたいし、つらい事なんてやりたくない。私だってそう！　確かに誰にもとは言わないけど、私には貴方達の行いを咎める事なんて出来ない。
私だってずる賢い女だもの。助けてくれようとした人を見捨てた。苦しいのが辛いのがイヤで……見たくない物をこれ以上見ないために、私は夢の中に居続ける事を選んだの」

私達以外誰もいないこの場所で、私は自分自身の酷さを再確認です。船の揺れと、海を進むための動力の音が僅かばかり響く。

「ふ～ん、可愛い顔してエグい事をやってるじゃない。だけど良いのよそれで。自分の人生は自分だけの物でしょ？　そもそも他人の決めた法律に縛られて、誰かの倫理を押しつけられる方がおかしいと思わない？　ここはＬＲＯ、夢の場所でしょ？
夢の様な思いをさせてくれる場所。それなら全ては私主観で物を見て私基準で行動していいじゃない。誰にも文句は言わせない。だってここはＬＲＯだから。
だから私は貴女の行動をおかしいだなんて思わないわよ。恩を仇で返そうが、イヤな物はイヤで上等じゃない」
「……」

私はちょっと言葉を失いました。だってこの人、なんて言うかその……滅茶苦茶自己中だよ。自分が世界の中心ってな感じ。
普段はそんな事思ってないんだろうけど、ここでだけはそう思っても良いじゃない的な。それでそれを実行してるんだね。
「私はもう……辛いのも苦しいのもイヤ。リアルで送る人生って物

に興味も期待も持てない。だから沢山の心配してくれた人達を捨てた私は、貴女のその自分勝手な理論を否定しない。
だけどこれだけは言ってあげるわ。貴方達のやってるソレ……ズルくは有っても賢くは無いわよ」

そんな言葉を放ったとたん、彼女はクナイを構えて迫ってきた。ちょっと挑発するように言葉を向けたからそれが効いたのかな？

「はっはああ！　言ってくれるわね。だけど良いのよこれで！　こういうスリルと興奮に私は満足出来てるんだからそれでいい！　大切なのはそう言う事よ！！」

そう言うことね。ホント、気持ち良いくらいにサバサバしてる人です。私は何とか避けようと試みるけど、ここで体が動かない事に気付きます。え？　ええ、何？

「私達がただの盗人風情だと思った？　にわかじゃない。やるときはやれるのよ！」

そう言って上段から私に向かって降り卸される毒の付いたクナイ。だけどその時、船の天井部分が大きく崩れます。
薄暗かった船内に太陽の光が射し込む。白い煙が床を這い、そこらじゅうに瓦礫が散乱してる。

「もう、セツリ様が一人で行くから、ちょっと慌てちゃったよ。怪我でもさせたらシクラに怒られるのは僕なんだから――ってなんか背中痛い」
「ヒマ……背中にクナイがブスッて……」

天井をぶち破って来たヒマワリの背中には私に刺さる筈だったク

ナイが有った。おちゃらけて言ってるけど、このタイミング……きっと私を助ける為に来てくれたんだよね。

「ちょっと何よいきなり？　まあだけど、そいつは直ぐに動けなく成るわ。だから今度こそ貴女の番。あの本は諦めて頂戴」

「ふふ……あはははは」

自分の攻撃に自信を持ってる彼女がそう言うと、何故か思わず笑っちゃった私。

「何を笑ってるの？　次はアンタよ？」

「ふふ、いえ……自分の思うとおりに生きる。それはとても立派で、貴女はそんな自分を享受してる所も素敵です。

だけど残念な事が一つだけ……貴女の理屈だと、他に自分勝手に生きてる強大な相手とぶつかったとき、貴女は誰にも救われない。求められない。

それは自分勝手に生きる代償なのかも知れないですね。つまり何が言いたいかと言うと、今まさにそんな強大な自分勝手な子に遭遇してる訳ですよ」

私がそう言うと、ヒマが自分に刺さったクナイをあっけなく引っこ抜いた。

「いったぁ。ねぇこいつらはぶっ飛ばしても良いんだよね？」

「ええ、だけどまず私の体を動かすようにしてくれる？」

「動けないの？　え～っとね、このクナイが怪しい！」

ヒマワリは私の影を縛ってたクナイを一足で吹き飛ばす。なるほど、影縫いとかそんなスキルだね。これで私は自由、やっちゃえヒマ！

「何なのあんた達？　まさかあの毒を食らって平然としてるなんてアンタおかしいんじゃない？」
「僕をお前達と一緒にするなよ。だけどそんな事よりも……良くも騙したなこんちくしょ――！！」

そう言うとヒマの周りの瓦礫が浮いてヒマの腕にくっついてく。そして光と共に姿を変えてガントレットみたいになった。

「アーマドトランス第一段階発動！　さぁお礼参りしたげるぞ！」

激しい爆音と共に、ヒマの姿が消える。そして次の瞬間、盗人Aさんの体が激しく吹き飛んだ。

「がはっ！？」

船内の壁にめり込んだ盗人Aさんの衝撃で船内が大きく揺れる。慌てて盗人Aに駆け寄る盗人Bさん。

「くはははは！　どうだい僕の攻撃は？　ただの人間程度が僕を騙すからこうなるんだよ」

そう言いながら歩を進めるヒマワリ。船内にヒマワリの足の音と、盗人さん達の声が響いてる。

「大丈夫殺さないよ。だってそれはシクラに止められてるしね。だけど僕が受けた分の罰は返す。それが嫌なら、さっさと本を――んっ！」

ヒマワリの言葉が途中で途切れた。どうやら男の方が反撃に出た

ようだ。何個か手裏剣が見える。だけどあんなのじゃヒマワリに対抗出来るなんて思えない。ヒマワリもそう思ってるのか、進む事をやめはしない。

「こんな物で僕を――」

「ふん！　馬鹿正直に貴様を狙いはしないさ！　知ってるか？　獲物を前に舌を良く回す奴は三流だ！」

何故か途中で加速をして、ジグザクに動きヒマワリをよけた手裏剣。それが私へと迫ってきます。これまでの言動で私が弱点ってバレてる。最初から狙いは私！！　ヒマは慌ててこちらを見ます。だけどこれはコンマ数秒の内に私に刺さりそう。

幾らヒマワリが速く動けてもこれは……そう思った時、私の目の前の空間に、不思議な模様が現れました。そして次の瞬間、そこから現われたシクラが全ての手裏剣を髪で撃ち落とします。

「何！？」

「ヒマ、安心していいわよ。セッちゃんは私が守るから。だからさっさと教えてあげなさい。セッちゃんが言ったとおり相手が悪かったって事をね」

「ねぇねぇ、それが出来たらお仕置き考え直してくれる？」

「そうね、考えてあげてもいいわよ☆」

「よっしゃあああああああ！！」

シクラの言葉で気合いが入ったヒマワリ。ヒマの攻撃で崩れた盗人周りの瓦礫も集まって来て、腕全体を覆う防具へとなる。そして拳を勢い良くぶつけてこう言います。

「さあ！　僕の罪の贖罪になって貰おうか人間！！」

「「くっ！？」」

盗人二人はまずはヒマワリ……そう判断したんだろう。ヒマワリと対峙することを選ぶ。二対一だしきっと行けると思った。私もその気持ちは分かるけど、でもそれは大きな間違いと彼等も直ぐに気付きます。

ヒマのスピードで攻撃は圧倒的。見えない攻撃が次々と炸裂して、それと同時に絶え間なく衝撃が船を襲う。砕ける船内の破片や瓦礫は、例外なくヒマワリへと吸収されて更にヒマワリは堅牢な姿へと変貌してく。

「あれが……ヒマの力」

「ええ、あれがヒマのアーマドトランスの能力。あの子は無駄に軽装をしてる訳じゃないのよ。あの能力は何だって自身の力に変えられる。それを体に纏わせる為に普段はあんなに軽装なの。あの子は敵を砕き、周りを壊せば、それらを取り込んで自身を強く強化出来る。それがあの子の力」

凄い……素直にそう思う。ゴクリと唾を飲み込んでると既に盗人二人は滅多打ち状態。ＨＰがグングン減っていく。そしてヒマの体を覆う防具は既に両腕から胸位に来てた。決していかつくはない造り。ヒマの細い腕にしなやかに沿うような形で形作られてる。

一見みすぼらしい様にも見えるけど、威力はただの腕とは段違い。彼らの攻撃も強引に受け止めて跳ね返す程。ヒマはここで一旦距離を取った。多分これで終わりにする気だ。

「これが僕を騙した代償だあああああああああああああああ！！」

床板をはがしながら進むんだヒマ。武器をなんとか構えた二人を関係無しに蹴り飛ばし、壁に激突する前に追い越して両腕捕まえて今度は天井にぶつける。更に砕ける船の内部。それらがどんどんヒマの体を覆ってく。腕から体、そして足を覆い最後の方は顔にまで。

戦隊物のヒーローみたいに成りつつあるヒマは何度も彼らを天井に叩き付け、最後は一緒に外まで突き破った。

太陽の光が差し込む。空高く昇った暇は青い空に向かって女の子らしからぬ雄叫びを上げて勝利を表してました。もっと女の子らしく……と言いたいけど、まあなんとか一件落着かな？

自分勝手の先（後書き）

第二百九十七話です。
この話は取り合えずここまでです。最初書いた時は、ヒマワリの見せ場が、とってもアッサリだったんですけど。なんとしても書きたかったから、上げる前に書き足しました。
うん、相変わらずこの姉妹の能力は反則的ですね！　一体どうやってこの姉妹に挑むのか。てか勝てるのか？　ですね。それは期待に胸を膨らませておいてください。
次回からは再びスオウ視点です。リア・レーゼに到着したスオウ達は一体！？　です。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

牢獄の語り（前書き）

リア・レーゼになんとか付けた僕達は、何故かあっという間に牢屋に収監されてた。武器も取り上げられ、スキルの発動さえ封じられた状況で、出来る事と言ったら、口を動かすことだけだった。

そして最初はこの街の事だったけど、次第に話はシルクちゃんとテッケンさんの事へ。二人の出会いは結構意外な物でした。

牢獄の語り

苦労をしてやっとで僕たちは『リア・レーゼ』にまでたどり着いた。それはとても長かったと感じる事が出来る道のりだ。

いやいや、ホント全く苦労したよ。特にあのバトルシップとかは反則だった。だってまさか飛空挺とバトルシップがああも違うとか思わないじゃん。

技術がなんか別世界の物――みたいな感じだろ。それか時代が数十年は違うみたいな。

まあだけど、そんなのに追いかけられても、何はともあれ僕たちは無事にリア・レーゼへと至る事が出来たんだ。そうそう、取り合えずはこれで一安心……となる予定だったんだけど、何故か今僕たちは鉄格子で区切られた薄暗い部屋へ閉じこめられてるのであった。

「どう言うことっすか！？　これはあああああああ！？　納得いかないっす！」

そんな事を叫びながら隣の隣位で鉄格子相手にガンガンやってるノウイ。僕たちはそれぞれ別々に牢に収容されてるんだ。

「たく、うるさいわねノウイ。少し落ち着いたらどう？　てかその口閉じろ」

「うう……だってだってっすセラ様。納得いかないっすよ。ようやくここまで来たのにこの扱い。あの時の安心感はなんだったんっすか！？　うがあああああ！」

珍しくノウイがセラに意見してる。まあそれだけこの対応には我慢成らないんだろう。僕だって実際はそうだよ。結局クリエとミセ

ス・アンダーソンはリア・レーゼの兵隊達に連れ去られたしな。
こんな所でジッとしてて大丈夫なのかスッゴく不安だ。

「教皇からの密書は見せたんでしょ？」
「当然だろ。ちゃんと見せたさ。それに目も通してた。そしてそのまま持ってったよ」

現場を指揮ってそうなモブリにこっそりと渡したらそのままにされた感じ？　あのモブリはちゃんとこの街の姫御子様の所まであれを持ってってくれたのだろうか？

「あれを見せたのにこの扱いって……取り合えずトップまで通すのが筋でしょう。サン・ジェルクのトップの手紙なんだから、私達を使者と扱いなさいよね」

セラもやっぱり腹立ってるのか、隣の壁をゲシゲシ蹴ってる音が聞こえる。

「くっそ、どうにか出来ないんですかテッケンさん？　やっぱりなんとかして脱出をして直談判に行くとべきじゃないですか？」

物騒だけど、それが確実だよな。もう、じっとしとくのが気が気じゃないんだ。落ち着かないよ。

「みんないきなり牢に入れられたからって早計だよ。これが悪意あって入れられたかどうかはまだわからない。元々僕たちは犯罪者とされてるんだ。サン・ジェルクもリア・レーゼも同じ国。
手配書が回っててもおかしくなんて無い。今は対外上僕たちを捕まえたと言う体を取ってるだけかも知れないよ。それに幾らＬＲＯだからって何でもかんでも暴力はダメだよスオウ君」

「うう……それはそうかも知れないですけど……もしも体裁を取ってるだけなら、一声かけても良いんじゃないですか？
だってここにはサン・ジェルク側の人間なんていないんでしょう。居たとしても、気づかれない様にするのなんて簡単な筈です。そうしてくれれば安心しますよ。
ソレなのになんにもないんじゃ、本当に疑われたりしてるんじゃないかって思うのは当然です」

僕は備え付けのボロいベットに腰を下ろして、床をダンダンと踏みしめながらそう言う。結局、こんなに気が気じゃないのって、僕はまだこの街の人達を信用して良いのかわかってないからだ。
速攻でクリエを連れ去ったのも気に入らないし……まだまだ全然このリア・レーゼと言う町がどんなか見えないから不安が募る。幾ら元老院側じゃないからと言って、初めて来た街だし、どう構えても気楽にとはいけないよな。
ああ、こんな鉄格子で薄暗い部屋に居たらどうやっても思考が落ち込むよ。幾らテッケンさんの話も分かるとはいえ……本当に一声ほしい。

「ふん、本当に疑っては居るだろう。向こうだって俺たちの事は知らないんだ。それに街を背負ってるともなれば慎重にもなるさ。
向こうにだって守りたいものがあるんだからな。今下手に暴れる事は、それこそ自分達でこの街の敵に成りに行くような物だと俺は思うがな。
そもそもこの牢はスキル発動出来ない様に成ってるみたいでもあるが……諦めて大人しくしてろスオウ」
「そこまでしてあるのかよ」

わからなかった。だって武器も取り上げられてるし……僕のスキルは大体、セラ・シルフィング無くちゃ発動出来ないしな。鍛冶屋

の奴隷分とどっしり構えてるな。守りたい物とか、こいつの口から出るなんて予想外。
最初に会ったときから、武器一筋で人間関係とか適当に感じてたけど、僕たちに振り回されて少しは変わったのかな？
てか、武器まで取りあえげてるのに、更にスキル封じまでって……徹底した対策してるな。

「テッケンさんならこの状況でも抜けれますよね？　だけど私もそれはどうかなって思うけど……」
「シルクちゃんまで……クリエとかは連れ去られてるんだよ」
「そうだね。それは心配ですけど、感情に任せて行動するだけじゃ、事態は好転しないものです。私達は今の所ずっと起こる事態を必死に追いかけてる状態です。だけどそれじゃ、私達に有利には成りません。
いつも後手に回るんじゃ勝利という一番前に居ないと手に入らない物が取られちゃいますからね。それを手にするためにも、どこかで追いついて追い越さないといけない。サン・ジェルクと言う大きな街と信仰に対抗するには同等の力を持つリア・レーゼしかありません。
この街まで敵に回したら、それこそ私達には逆転の目はなくなります。もう少し様子を見てましょう。これからの為に、今は我慢の時です」

シルクちゃんの優しくも力強い言葉が、この牢獄の中に伝わった。確かにここまで敵に回したら、僕たちは詰んじゃうだろうな。
サン・ジェルクに対抗するためにも……って言うか、本当は別にサン・ジェルクに対抗しようなんて気は無かった筈なんだけど……向こうがクリエに酷いことをするつもりだから、関わった僕たちとしては放っておけなくなったんだ。
まあ引けなかったってのもあるけどね。忘れかけるけど、自分に

掛けられた呪いの件ともきっと無関係じゃない。そう思ってやってきたんだもんな。
　我慢は確かに必要だとは思う。どこかで反撃しないといけない。そのチャンスはきっとここなんだよな。だからこそシルクちゃんは無闇に、ここの敵に成らない方が良いって言ってるんだし、それはわかるよ。

「シルクちゃんの言葉は尤もだと思う。僕達は今のままじゃきっと何も守れないし、僕だってこのままじゃどうなるかわかんない。だけど拭えない不安には行動しかないじゃないか。
　そうやってずっと来たんだし、それに僕はここを知らない。ここのトップの姫御子様は、信用出来る人なのかな？」

　実際それが一番不安じゃん。プレイヤーらしいけどさ、誰もがアイリみたいな感じじゃないだろ。てか、アイリはアイリで最初会ったときは問題あったしな。まあ向こうは国で、こっちは一つの街って言う違いはあるけどね。どんな奴なのかは知っておきたい。

「う～んそうだね。良い人だと思いますよ。私は数回しか会ったこと無いですけど、ちゃんとしてます。常識も見識も備えてる人です。
　でも何故か私は嫌われてるみたいなんですけど……」

　シルクちゃんを嫌いとかそれだけで僕の好感度は急降下だよ。こんな良い子他に居ないだろうに、どこを嫌うんだ？　見たこともないのにその姫御子様にイライラするな。

「はは、シルクはほら、同じ系統だからだよ。僕が知ってる限り、あの人が認めてる魔法使いはシルク以外居ないと思うけど」
「そうなのかな？　それに私はそんなに大層なものじゃないですよ。私は何か粗相をしたのかなって思ってたましたけど……」

テッケンさんの言葉に相変わらずな謙遜を見せるシルクちゃん。本当に腰が低い子です。実際かなりのものを持ってるだろうに、もっと鼻を高くしても良いよ。まあそれじゃシルクちゃんじゃないんだけど。

でもちょっとは「エッヘン」てな感じに成ってもいいと思う。きっと姫御子様が認めてるってのは本当だと思うな。それだけスゴい筈だもんシルクちゃんは。

「シルク様はもう少し自分の貴重さに気づいても良いと思います。それだけの魔法の技術があるじゃないですか」

「だけどそれはピクのおかげだよ。私だけじゃ、他の人と全然変わらない。その他大勢と一緒です。ピクと出会う前は飛び抜けて凄い事なんか出来なかったし……」

もう、声を聞いてるだけで悶えそうだよ僕は。なんて謙虚！　僕の周りの我が強い女共に聞かせてやりたいな。まあ一人に聞かせてるけど、出来るなら日鞠の奴にもね！

「確かにピクの存在は大きいと思うが、それ以前からテッケンとかは一緒に居たんだろ？　それにここの姫御子にも認められてたのなら、きっとシルクにはそれだけの価値があったんだよ」

うお！　横から鍛冶屋の奴が良いこと言ってるぞ。おいおいどういう風の吹き回しだ？　もしかしてこいつ、シルクちゃんを狙ってるんじゃ……そんなの許さない！　シルクちゃんはみんなのシルクちゃんなんだ！

僕は斜め右前方の牢屋えと埃をまき散らす用に床を蹴る。

「そう……なのかな？　私に何かあるのテッケンさん？　私はただ単に、ヒーラーを見つける手間が省けるからだと思ってました。

やっぱりＬＲＯ内でヒーラーって数が少ないですからね」

ある意味一緒に居る理由がそれって酷くない？　それで納得しての他のシルクちゃんと言いたい。まあ考えて見れば当然かも知れないけど……みんなが主役とか目指すなら、ヒーラーは確かに少なそう。夢でくらいヒーローに成りたいって思う人は多いだろうけど、夢だからこそ誰かの脇役でも良いと思う人は少ないよな。

ヒーラーってどう考えても脇役……とは言わないけど、縁の下の力持ち的な感じだよね。目立つ事は早々ないけどパーティーでは居ないと困る。そんなヒーラーだから縁の下の力持ち。

積極的にヒーラーを目指す……そういう人はきっと少ないんだろう。

「まあ数が少ないってのは確かにそうだよね。シルクちゃんが居たら、簡単にパーティーメンバーを集められるって利点も確かにあったよ」

「ほら、やっぱりそんな所ですよね。私はスオウ君の様に激しい生活も、アギト君の様な大変な事も経験してないし、セラちゃんみたいな誰よりも誇れる力を持ってた訳じゃないです。

ノウイ君だって、貴重なスキルはきっとどこからでも必要とされるだろうし、鍛冶屋くんの武器は言わなくてもきっと多くのプレイヤーに使われてます。

それに比べると、私は実に平々凡々なＬＲＯライフを送ってたと思うんです。そんな私が、誰かから認められるかと、それはやっぱり過大評価ですよ。

今の私の全ては結局、ピクのおかげです」

そんな風に言われたからか、牢獄内にピクの上機嫌な声が木霊する。う～ん、まあ僕には確かにピクの恩恵は大きいと思える訳だけど……ここら辺は付き合いの長いテッケンさんにシルクちゃんの本

当の価値を説いてもらいたいね。さっき既にパーティーメンバーどうとか言ってたのは一部だと信じてます。

「だけどさ、それだけじゃないってのも勿論あるよ。僕がシルクちゃんと良く一緒に居たのはパーティーメンバーを集めやすかっただけじゃない」

「え？」

目の前の牢獄のテッケンさんがなんだかちょっと照れ気味にそう言ってる。そしてその左隣の牢に居るシルクちゃんは鉄格子に寄って隣のテッケンさんを見ようとしてる。だけどテッケンさんはその視線から逃れる様に奥へ。

何々、まさかテッケンさんもシルクちゃんを！？　まさか一緒に居た理由ってそういう事か？　僕がそんな憶測の元、テッケンさんをジトーと見てると、向かいのテッケンさんが何を観念したのか、ちょこんとベットに座り、溜息一つこう言った。

「シルクちゃんは普通だったけど、普通に腕が良くて評判だったよ。だからピクが居なかったときでも沢山の人に認められてた筈さ。

実際シルクちゃんは他のやっつけヒーラーとは手際が違うしね。回復スキルもほしいから、一時的にやってた人達とは一線を隔てる実力だよ。

それに不思議だけど、シルクちゃんの魔法の方が効いてる気がするって話もあったくらいだしね。十分凄いよ」

「えっと……ありがとうございます」

なんだか斜め前方のシルクちゃんも照れて奥に引っ込んじゃったよ。だけど僕が見つめてた理由はそれじゃない。何に一体観念して話始めたの？　僕はもっとテッケンさんの内面を吐露して欲しかった！

まあ、シルクちゃんの回復魔法がほかの人のよりも効く気がするってのは同意するけどね。そう思ってるとセラがさらっとテッケンさんに突っ込む。

「いえいえ、それじゃあテッケンさんの理由に成ってないですよ。貴方は何でシルク様に付きまとってるんですか？」

「付きまとうって……それは表現がおかしいだろセラ」

どう考えてもテッケンさんに失礼だ。彼は別に付きまとってたって訳じゃないだろ。なんで口調は丁寧だったのにそんな事を言うんだよ。ある意味、口汚い言葉で罵られるよりも、丁寧にそして冷静に言われた方がグサッとくることもあるんだぞ。

「うるさいわね。アンタだって気になるでしょ？　二人の関係？」

そう言って鉄格子越しにこちらに怪しげな微笑みを見せるセラ。ホント良い性格してるよこいつ。だけどまあ……興味は僕にもある。シルクちゃんは友情（？）以外の何者でも無さそうだけど、テッケンさんもそうなのだろうか？　二人ともとっても良い人だから、そこら辺で気が合うのはわかるんだけど……実際の所を知りたい。テッケンさんのさっきの反応も気になる所だしね。

「……たく、程々にしとけよ」

僕はそう言ってベットに居るテッケンさんに視線を送る。好奇心は外側に出さない様にしてるけど、どうだろう勘の鋭い彼は気づいてるかな。

「うう、スオウ君まで……別に特別な理由がある訳じゃないよ。強いて言うなら、シルクちゃんは一人では危ないと言うか……誰の事

も取り合えず信じるからね。そこら辺が心配で良く面倒を見てたら、いつの間にか一緒に冒険をするように成ってたと言う、平凡な理由だよ」

へぇ～なんだか想像できるな。まあ誰のことも取り合えず信じそうなのはテッケンさんも同じ感じだけど、お人好し二人で大丈夫だったのかな？

「そう言えば最初にテッケンさんとアギト君に出会ったのも私が騙されてた時でしたね。あの時の私は本当に無知でした」

「騙されてた？」

僕が疑問符を浮かべて聞くとあっさりと衝撃の発言が帰ってきたよ。

「私最初、犯罪者ギルドに所属してたんです」

「「「えええええ！？」」」

ノウイも加わってセラと三人でそんな声を上げた。シルクちゃんが犯罪者集団の一人？　このホンワカ良い子が？　それは想像出来ないな。

「当時私はそう言う悪いことをする人が居るって風の噂で知ってたんですけど、私が居たギルドはそんな悪い人達を取りしまる集団だって言われてました。

そう言ってプレイヤーを襲ってはアイテムを強奪してた訳です。いわゆるＰＫ（プレイヤーキラー）ですね。だけど少し考えれば、おかしいことに気づきそうですよね。

天誅とか言って身ぐるみ全部剥がしてたし、そこまでする必要なんて全然無かった。まあ当時の私は口封じの時の要因でＰＫされた

人の回復役だったから、どうやってもう犯罪をしないと誓わされてたのかは知らなかったんですけど……それじゃあすみません。私も酷い事をしてた一味にも変わりないもん」

そう言って奥で拳を握りしめるシルクちゃん。そんな事が……今すぐにでもそいつ等をぶっ飛ばしたいな。

「それには及ばないよスオウ君。シルクちゃんを騙してた奴らは僕とアギトが潰したからね。奴らは当時手当たり次第にPKやってたから、たまたま通りかかった僕らも標的にされたんだ」

「なるほど、それが出会いなんですね。そこでシルクちゃんはギルドの真実を知った！」

僕はなんだか熱くなってそう言った。だって燃える展開だろ？アギトの奴もおいしいことをやってるじゃないか。その時ってあれだろ、アルテミナスから逃げて傷心の旅やってる頃だろ？

隅に置けない奴だなおい。

「まあ大体スオウ君の言ったとおりです。二人と出会った日もいつも通りギルドの人達は『犯罪者に天誅を！』を合い言葉に出発しました。だけどなかなか連絡が来なくて、見に行ったんです。苦戦してたら、ヒーラー一人じゃ大変だろうと思って」

「たった二人に苦戦する集団って――プフ。まあアギト様達じゃしょうがないわよね」

何故かセラが得意気にそんな風に言ってる。誰もお前を誉めてはないぞ。まだアギトの事は尊敬してるんだな。その尊敬の半分でも僕に回してくれたら、色々と遣りやすくなるのに……

「いや、僕達は苦戦してたよ。なんたって向こうは十人位で、こっ

ちは二人。色々と限界って物はある。まあそれでもしぶとくやり合ってた訳だけどね」

当時を振り返りながらそう言うテッケンさん。まあ確かに幾らアギトとテッケンさんの二人でも無理は状況はあるよな。

十対二って……寧ろ良く粘ってるって感じだったんだろうな。

「そうですね。私が行ったとき、二人はボロボロでした。だけどそれよりも衝撃を受けたのは、今まで信じてた人達がこれまでまで見たことも無い顔で二人をいたぶってた事です。

満身創痍の二人を罵倒して汚い言葉で責め立ててました。それを見たら、どっちが犯罪者なのかわからなくなって、私は『何やってるんですか？』って聞いたんです。

そしたら、一瞬驚いた顔をしたけど、直ぐに私にも加わる様に言ってきました。やっぱり回復が追いついて無かったんです。だけど私は納得できなくて『こんなのおかしいです！　やりすぎです！』って言ったら殴られちゃいました」

マジでそいつを殺そうと僕は誓ったね。テッケンさんとアギトに既に制裁を受けてるとしても関係ない。僕はそいつ等を許せそうも無いよ。

そんな怒りに沸き立つ中、シルクちゃんの話は続きます。

「そして武器を向けられて脅されました。私はその時の恐怖を今でも覚えてます。この世で一番怖いの人です。そう思う程にショックだったんです。

信じてたのに……そう言ったけど笑われましたよ。どうやら、私は都合の良い予備の部品みたいな物だったんです。彼らは私を攻撃する事を躊躇わなかったです。人の良さそうな私は対外的には都合が良かったっみたいです。

だけどその時、二人は私を助けてくれました。敵である筈の私を。この時、どっちに付くのかは決まったんです。私は二人に回復魔法を掛けて、三人でなんとか勝ったんです。それが出会いでしたね」
「はは……そうだね。今思うとなんだか随分懐かしく感じる。そんな何年も経ってないのにさ」

二人が牢屋越しになんだかいい感じ。共通の思い出ってのはいいよね。それが印象深い物なら尚更だよ。

「そうですね。なんだかもう随分遠い日の記憶みたいな感じです。だけどあれから、良く二人は私の面倒を見てくれる様になりました。途中でアギト君とは分かれたけど、テッケンさんとは不思議と一緒でしたね。
私も別れずらかったのかな？　安心って物があったし」
「そ……それは……よかったな。そう言って貰えるとありがたいよ。はは、僕も一緒に居るのが普通だから、理由はやっぱりこれと言ってはないよね」

そう言って二人して壁を隔てて笑いあう。僕とセラは互いに鉄格子に息を吐いちゃったよ。この二人は全く全然、男女のそう言うのはないんだね。実際テッケンさんがモブリじゃなかったら違ったのかな？
モブリって友達にはしやすいフレンドリーな姿だけど、そう言うのには極端に成りにくいと思うんだ。エイルとリルレットを見てても思ったよ。そんな風に見てると、重い扉が開く音が……どうやら待ちに待ったお迎えが来たようだ。

牢獄の語り（後書き）

第二百九十八話です。
今回からようやくリア・レーゼでの話です。だけど全然進んでないですね。シルクちゃんとテッケンさんの出会いをちょちょっと語った感じです。まあだけどこれからなんで、頑張って行きます！
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは～。

サン・ジェルクの影（前書き）

牢から出された僕達は、複雑な道を歩き転移魔方陣へ。そしてそこから世界樹の枝の先の社へと現れる。大きな本殿へと続いてる小さな社だ。風に吹きさらされるその場所。だけどここからＮＰＣ達は何故か動いてくれない。

そうこうしてる内に、強い風が僕達には危なく吹いて来るんだ。

サン・ジェルクの影

牢から出され僕達は手錠までされて薄暗い通路を歩きます。周りにはサン・ジェルクと格好は同じだけど、色違いの服に身を包んだモブリ達。

僧兵……と呼んでも良いのだろうか？　迷う所だな。

「なあ、どこに連れていくんだ？」

僕は近くに居るモブリにそう聞くけど、返事は帰ってこない。まさに「黙って歩け」と言わんばかりの態度だ。

「ちゃんと密書を渡したんだし、私達が願う人の所へ案内してくれるわよ」

「それなら良いんだけどな」

セラは余裕かましてそんな事を言うけど、僕は結構不安だよ。もしかして裁判所とかに送られたらどうするんだよ。組み上げられたシナリオのままに罪人になって送り返されたら悲惨だよ。

これまでの苦労が水の泡だ。そんな事が無いとは言えないよね。だけどまあ、誰も暴れずに従ってるし、ここは信じるしかないのかな？　歩きながらでも万が一の脱走の為のルートを探しておくさ。

キョロキョロとね。だけどさっきからなんだかやけに複雑に移動してる気が……そもそも僕達を閉じ込めてるこの場所がどこかわかんないよな。窓一つもないし……地下とかなのか？　ある意味ダンジョンっぽい牢獄だよ。

まさか脱走を防ぐためにこんな複雑に成ってるのか？　確か入れられる時はそんなに歩いた記憶がないんだけど……今はもうその時

の倍は歩いてる気がする。
「なんかここってこんなに広かったか？　そんな印象無かったんだけど？」
「確かにやけに歩くね。もしかしたら入るときはそうでもないけど、出るときはちゃんとした手順があるんじゃないのか？　ここも歴史の長い街だし、いろんな仕掛けがあっておかしくないよ」
やっぱりそう言う事か。テッケンさんの説明に納得。脱走対策でもあるんだろうな。どうりで僕たちを監視する役目のモブリが一人も居なかった訳だよ。
脱走なんてそもそも出来ないから、そんなの必要無かったって事かよ。
僕が舌打ちしてると、ようやく行き詰まりらしい所へたどり着いた。そこは通路よりも少しだけ広くなった丸形の空間で、床には魔法陣が描かれてる。おお、なんだこれ？
「転移魔法陣ね。外へはこれで出るんだ？　最初に入った場所へは出ないって事かしら？」
「そうみたいだね。と、言うか、僕たちがまず出た扉が最初に僕達が通った扉だと思うんだよ。出る時は、あの扉がこっちに繋がってるって事じゃないのかな？
だから脱出に転移魔法を使う」
「まあそう考える方が妥当ですね」
セラとテッケンさんがなんか二人で語り合ってるよ。用はこれが転送用の魔法陣って事だろ。やっとでこのジメジメで停滞した空気の中から脱出出来る訳だ。薄暗かったし、やっとで外を拝めるとなると、ちょっとテンションが上がるな。
まあ手錠されて連行されてる辺り、テンション上げてる場合でも

無いけどね。取り合えず僕達を全員一緒に魔法陣の中へ押し込むモブリ達。そして床の魔法陣に光が走ったと思ったら、次の瞬間、やけに高い場所へと僕達は現れてた。
なんだか空中に突き出した様なそんな場所だ。てか……これって世界樹の枝の一本の先端部分じゃね？　なんて危ない場所に転送先を設定してるんだよ。
まあちゃんとちっちゃい社みたいな感じになってるし、それなりに十分な広さがある場所だけど……周りの壁がねーよ！　屋根はあるけど、吹きさらし状態。さっきから風が僕を死地へと押し出しそうな強さで吹いてるよ。モブリのみなさんは危なそう。大丈夫なのか？　そう思って周りを確認すると、なんだかみなさん普通です。まるで風を感じてない様な……まさか体が小さい分、上手く風をながしてるとか？
いや……それにしてはさっきからテッケンさんが「アババブブ」と風に必死に耐えてるな。何か対策をしてるって事か？

「ちょ！？　なによここ！！　まさか死刑場って訳じゃないわよね？　どこからでも飛び降りてＯＫとか言わないわよね！？」

もの凄くワサワサと靡いてるスカートを必死に押さえながらそんな風に叫ぶセラ。なるほど、その発想は無かったわ。てか……んな訳ないよね？

「いや、ここはそんな場所じゃない――と、ブババババ――思う！　だって……この場所が続く社は――本殿みたいだし――あばばばば」
「本殿？　てか大丈夫ですかテッケンさん？」
今にもこの強風に飛ばされちゃいそうだよ。僕は周りのモブリに訴えかける。

「おい、お前たちが平然としてるのって何か特殊な事をしてるからだろ？　だったらこの人にも頼む。このままじゃ飛ばされる！」

両手塞がってるんだぞ。今は脚力で耐えてるけど、このままじゃマジで風に飛ばされかねないって。スキルだって封じられてるのに落ちたら責任取れるのか？　てか、マジで死刑場って訳じゃないよな？　テッケンさんは違うって言ってたけど、完全無視で動き出す気配が無いモブリ達を見てると、実際飛ばされるのを待ってるんじゃないかと思える。

「テッケンさん、私が風避けに成り――って、きゃあああ！！」

シルクちゃんはテッケンさんの為にと思い、動き出したのにあの子の華奢な体じゃ誰かの風避けまでするのは無理みたいだ。

「シルク！！」

テッケンさんは必死にシルクちゃんの方を見てる。だけど動けない。風に押されてるシルクちゃんはフラフラとこの空間の端の方へ押されてる。

おいおいやばくないかあれ！？　シルクちゃんに繋がれてるピクが必死に羽をバタ付かせてるけど、ここら辺は気流が乱れてるのか、上手く飛べてない。てかさっきから風の方向が定まってない様な感じもするし、だから一度フラツいたら、態勢を立て直すのが難しくなるって訳か。

僕達も下手に動いたら……でもこのままじゃシルクちゃんが！

流石にやばいかなと思うけど、もうシルクちゃんを助けるにはこれしかないかも知れない！

僕は意を決して床を蹴ってシルクちゃんの方へ走り出す。その瞬

間横風やらがいきなり足を持って行こうとしたけど、何とか踏ん張って僕はシルクちゃんへ飛びつく。

「スオウ君――きゃあああ！？」
「うあああああああああああ！？」

僕達はそんな声を出してその場に倒れ込む。

「イツツ……大丈夫シルクちゃん？　落ちなくてよか――」
「あわわわわわ……」

押し倒して声を掛けると、なんだか真っ赤っかに成ってるシルクちゃん。えっとね……誤解がない様に言っとくと、僕は助ける為に動いたのであって……この状況を作り出したかった訳じゃ――

「何やってるのよこの変態！！　シルク様から離れなさい！　てか、時と場所位考えなさいよ！」
「だから、そう言う事を考えてこんな事をやった訳じゃねーよ！落ちそうで、腕も使えないから、押し倒すしか無かったんだ！　変な誤解してるんじゃない！！」

全く、幾らシルクちゃんを最高に可愛いと僕が思ってるとしても、そんな不純な動機全快で押し倒すかよ。ちゃんと場所も雰囲気も考慮します。

「不純な動機がない？　ならアンタのその手は何よ！？　どどどどどこに触れてると思ってるわけ！？」
「どこってそりゃあ、オッパイだな！」

僕が堂々とそう言うと、下に居るシルクちゃんの顔がボンッと弾

けた。いや、自分でも何言ってるんだろうと思うけど、だってなんか開き直らないと言えなく無い？　実はずっと気づいてたんだよ。押し倒した時から「あっ、これやっべ……」とおもってたんだ。

「何開き直ってんのよ！　殺すわよ！」

僕が必死に導き出した答えに憤慨してるセラ。鬼の形相と言うか女の敵みたいな目で睨まれてるよ。くっ……相変わらず凶暴な奴だ。だけど僕はあくまで開き直って清々しく行くと決めたんだ。それがある意味、シルクちゃんの為かなと。

僕は状態を起こして、柔らかく暖かな感触のそこから腕を上げる。実際ちょっと心残りだけど、茹で上がっちゃったシルクちゃんを見てたらこれ以上置いとく訳にも行かないだろう。

それにこれはあくまで事故だし。欲望を表に出すわけには行かない。

「ごめんシルクちゃん。だけど無事で良かったよ」

僕は爽やかにそう言ってシルクちゃんから退く。まるで何事も無く目的だけを果たしたように、颯爽と。そう気にしてなんか僕はない。だから君も気にしないで戦法だよ。実際僕の勝手な願望だけど、意識して「あわわ、違うんだ～」とか下手な言い訳を始めると大抵、良い方向に収束しない気がするから、僕はこの手法をとります。

きっとこれまでの経験が生きてきたんだと思う。

「あっ……えっと……ありがとうスオウ君。それと……あんまり胸なくてごめんなさい」

茹で上がってたシルクちゃんが、顔も真っ赤にしながらもなんとかそんな言葉を口にしてくれた。ほらね、僕が思ったとおり、気に

しないアピールの方が双方のダメージが少なくて済むんだよ。良かった良かった。
折角落ちずに済んだのに、他のダメージ負ったら損だもんね。
「胸がないって、僕的にはシルクちゃん位がベストな大きさで柔らかさだから問題ないよ！」
調子に乗ってそんな事を言ってしまった。シルクちゃんは再び顔を真っ赤にして、「ありがとうございます」って言ってくれた。
何かを間違った気がするような……爽やかな顔は維持してるけど、自分のプレイボーイみたいな言葉に、顔から火が出そうなのは僕もです。

「くっ……この変態……」

歯を喰い締めてセラがそんな事を言ってる。実際これだけ風が強くなかったら、ブン殴られてたかも知れないな。良かったような……良くないような。てか、セラは僕がちゃんとシルクちゃんを助けたって所を評価しろよな。
胸を触ったのはあくまで事故だっつうの。まあ女の子にとっての衝撃としてはどっちも大きいんだろうけど、胸を触るかも知れないからって命を無くす状況を見逃して良いのか？　って事に成るだろ。
実際そんな事まで考えて体は動かさないんだよ。てか、それを気にして行動が一歩遅れて良いのかと。命と尊厳、どっちを取るんだ。
「女の子の体はね……宝石よりも価値があるのよ」
「命はその上の価値があるだろ。それに悪かった成っては思ってる。早く感触を忘れる様に努力するさ」
善処だけは試みるさ。だけどついつい自分の手を見つめて微妙に

動かしてしまうな。

「アンタ……忘れる気無いでしょ？」

なんか路傍の石を見るような乾いた視線でセラが僕を見てるよ。僕は女の敵かよ。今のは……その……ついだよ。つい。

セラがしつこいから、今のシーンが頭から出て行かなくてつい。フラッシュバックと同時にこう……手を動かしちゃった訳だ。

僕達が言い合いをしてると、一際更に強い風が吹く。木々の葉が大きくガサガサと揺れて、木から離されたそれはピンポイントでテッケンさんの顔へ直撃。

「ブッ！？　――って、あ！」

葉っぱが顔に当たった時、思わず力が抜けたのか、テッケンさんの体が風に持って行かれる。モブリのテッケンさんは小さくて軽い。人のままの僕達さえも、体を持って行かれそう風だ。小さな体のテッケンさんなんて用意に持ち上げてしまいやがった。

「うわうわあああああああああ！！」

「テッケンさ――ぐっ！」

助けに行こうにも風が強すぎる。僕達も自分たちの体を支えるので精一杯。テッケンさんはこの枝の先の社部分からあっと言う間に消えてしまう。そして声までも遠くなった。

「そんな……テッケンさん！　テッケンさん！　テッケンさあああああん！！」

僕の隣で床に必死にへばりつくシルクちゃんがその小さな口を精

一杯広げて名前を叫ぶ。だけど返ってくる反応はなくて……僕達は一気に暗い雰囲気に。
僕達が声を発せないで居ると、少しずつ弱まってきた風の音の中に、僅かに聞こえる声を見つけた。なんだかかなり遠くで叫ぶ声だ。これはもしかしなくても……かなり下の方へ既に落ちちゃってるって事じゃ。
他のみんなにもきっと聞こえてる。だけどどうする事も……みんな俯く以外に何も出来な――あれ？

「ぅぁぁぁ

「くっ……声は聞こえるのに姿が見えないって、それだけ高いのか？　それとも風に流されてるのか？　ぬぐぐぐぐぐ――ぬあ！」

ダメだこれは……外に顔を出しておけるのは十秒位が限界。とてもジックリ上を確認出来ない。下から吹き上げる風に、油断したら体を引きずり込まれそうなんだ。しかも手錠のせいでしっかり固定出来ないし、全てがもどかしい。

このままじゃテッケンさんが地面に叩きつけられるって言うのに……何も出来ないじゃないか！！

「ちょっとアンタ達！　どうにかしなさいよ！　幾ら私たちが罪人だからって、このまま放っておくの！？」

「お願いします！　テッケンさんを助けてください！！」

中の女子二人はまだ魔法陣から動いてないモブリ達に、必死に助けを求めてる。だけどやっぱりＮＰＣは無反応。なんでここまで無視を貫き通すんだ？

ＬＲＯのＮＰＣは普段無駄な位しゃべるだろ。そりゃあ特定の言葉しか言えない奴もいるけど……これは幾ら何でも不自然。どうなってんだ？

「くっ――こっちでも確認出来ないぞ！」

そう言ったのはいつの間にか反対側の柱へへばりついてる鍛冶屋。くそ……一体どこに……そう思ってると、不意に今まで聞こえてたテッケンさんの叫び声が消えた？　風にかき消されたって訳じゃない。

不意にプツリと聞こえなくなった。僕たちはそれぞれ互いの顔を見るよ。まさかとは思うけど……最悪の想像が僕たちの脳裏には浮

かぶ。

「遅かったって事ですか？」

シルクちゃんが震える声でそんな言葉を紡ぐ。僕たちは誰も何もいえないよ。だって……もうそれしか考えられない。いつの間にかここを過ぎてて、そして地面に……この高さで、両腕とスキルを封じられた状態じゃ、幾らテッケンさんでも助かったとは思えない。

「アンタ達……一体どういうつもりなのよ……私たち全員やっぱりここで殺す気なの！？」

そう言ってセラが手近なモブリを掴み上げる。その怒り良く分かる。いつもなら止める所だけど、今ばかりはやっちまえ！　と思った。

だけど流石にこういう事には反応するのか、周りのモブリが詠唱を始めると、僕たちの腕を縛ってる細い光の輪が反応した。

そして何故か全員に襲いかかる高圧電流。この場に一斉に断末魔の叫びがあがった。

「……っ、エグい事しやがる……」

「絶対に殺す……後で絶対に……」

床に倒れて、体から煙を上げながら何とかそんな声を出す僕とセラ。こんな仕掛けまでしてあるなんて……これはもう本当に僕たちを殺す気としか思えない。だってどう考えても話を聞いてくれそうに無いじゃん。

てか、形式上僕たちを捕まえてるだけなんて見方は全く出来なくなった。

「これ……流石におかしくないっすか？」
「確かにね……この街でいきなりここまでされる理由なんて無いわ」
みんなもこの仕打ちには納得いかない様子。当然といえば当然だけどね。でも……それじゃあこいつらは本当に僕たちを殺す気なのか？
「アンタ達、何者よ？　実はサン・ジェルク側の奴何じゃないの？」
「なるほど……確かにそれなら、僕たちを殺そうとする理由も分かるかも」
てか、それ以外納得できない。同じモブリの国だし、仲が悪いからと行って、関係を絶ってる訳じゃないんだろう。それなら、ここにだってサン・ジェルク側の奴がいてしかり。
だけどこのモブリ達は何もいわない。
「何も……喋らないか。さっきから不自然に口を閉ざしてると思ったが……それは俺達に確証を持たせない為か。自分達が例えサン・ジェルク側だとしても、俺達にはそれを確かめる術はない。
それなら口を閉ざして答えを与えない方がいい。もしかしたらリア・レーゼの意志である可能性を残せるからな。それなら、俺達は下手に動けない」
なるほどな。下手に口を開かないのも、下手に自分達から僕達を殺そうとしないのも、その可能性を残して起きたいからか。鍛冶屋の言葉は信憑性がある気がする。
実際リア・レーゼに僕達を殺す理由はまだ無い。それなのにこいつらが僕達をここから突き落とす様な行動に出たら、それはサン・ジェルク側の奴だと言ってる様な物。
だからこそ何もしなくても僕達を殺せそうなこの場所へって事ね。

だけど実際、あの本殿のせいで実は迎えを待ってる状態とも言えるという……こいつらがどっちか決めかねる状況を作り出してる訳だ。
だけどこれまでの行動で、こいつらはどう考えても黒に限りなく近い灰色だ。けど、完全な黒には出来ない。まさに思惑どおりかよ。
もしもこいつらが本当にリア・レーゼ側の奴らで、ただのＮＰＣだからとしての行動しかやってないのに、僕達が反撃でもしてしまうと、それは自分達からこの街を敵に回す事。

「ここまで黒いのに……自分達からじゃ何も出来ないんすか！？」

ノウイが床に突っ伏してる状態で悔しそうにそう言う。悔しいけどそう言う事だ。僕達には何も出来ない。期待できる事があるとすれば、こいつらが本当にリア・レーゼ側で、さっさと迎えが来る。
それならこれ以上の葛藤は無いだろう。だけどその場合、僕達にはテッケンさんを殺された恨みがこの街に向かう事になるけどね。これからが心配な状態だ。
こいつらがサン・ジェルク側なら、異常に気付いたリア・レーゼ側の対応待ち。実際僕達をどこかへ連れていくのは上からの命令の筈だと思う。
だけどそれにこいつらが割り込んでこんな事をしてるんだとしたら、リア・レーゼ側が気付かない訳がないだろう。それならきっと助けか何かがきっと……そのどちらかを待つしかない。

「本当にうざったいわね」

セラの腕がピクピクしてる。こいつらを殴りたくて仕方ない様子。実際僕もそうだけど……まだ出来ない。ここはこいつらが黒であることを願うしかない。そうすれば後でボコれるかも知れないからね。
だけどそんな余裕も無い感じかも。さっきの電撃で僕の体は痺れた状態になってる。運が悪いことにまさかの状態異常だ。

もしかしたら、やっぱり昨日のリアルでの無理が祟ったのかも。幾ら若いからって流石にあれだけ無理して、一日寝たら全快とは行かないか。

ダメージってのは知らない部分に蓄積されて行くものだよな。

「うお……おおおお！」

すると再び一際強い風が！　僕は足をじたばたして床を踏んづけようとするけどうまく行かない。やばい……やけに滑りが良い床だから尻を付いてても流される。

この滑りの良さをさっきは利用したけど、今は大ピンチ！！

「スオウ君、柱に捕まるっすよ！」

「そう……したいのは山々なんだけど……体が麻痺してる」

「麻痺！？　こんな時に何やってるんすか！？」

うるさい。僕だって好きで麻痺状態な訳じゃないよ。足が社の外へ出る。その瞬間、下から吹き上げる風に体が持って行かれ――

「スオウ君！！」

――ガシっと柔らかな感触が僕の手を取る。それはもっとも意外な小さく柔らかな華奢な手。だけど誰よりも暖かな手。

それはシルクちゃんだ。

「テッケンさんの次はスオウ君なんて……私はイヤです！！　今度は絶対に助けて見せます！！」

そう言うシルクちゃんは両手で僕の腕を掴み両足で必死に踏ん張ってる状態。だけど下から吹き上げる風の強さは異常だ。

下に落ちずに上へ飛ばそうとしてるんだからな。

「つっ……あっ……くぅ！！」

「シルク様！！」

辛そうなシルクちゃんの姿を見て、セラが動く。だけどその時だ。一度暴挙に出たセラだからなのか、ＮＰＣが反応した。

僕達に付けられた腕輪が一斉に光る。そして再びあの高圧電流が体を走る。

「「「うあああああああああああああ！！」」」

「「「きゃあああああああああああああ！！」」」

響く断末魔の叫びと共に、僕の体が空へと昇る。今ので僕とシルクちゃんの腕は離れた。ここまでなのか……そう思った。だけどその時、僕の体が不自然に上昇中に止まった。なんだ？

「ふん、私やあのバトルシップからも逃れた貴様達が随分とやられてるじゃないか」

そんな声が剛風の中聞こえた。この声……最近聞いた様な……僕は必死に視線をさまわよせてその声の主を捜す。すると、見つけた。社の屋根の上に、ボロいコートに身を包む怪しい奴がいる。しかもそいつはテッケンさんを肩に乗せてるじゃないか！？

どういう事だ？　これもどうやって僕を捕まえてるのかわかんないし……本当に謎な奴。

「まあいい、それより勝手に死ぬなよ。おまえ達を姫御子様がご所望だ。だからまずはそれを邪魔する奴らを潰そうか」

サン・ジェルクの影（後書き）

第二百九十九話です。
やっとでリア・レーゼに来たのにピンチの連続です。スオウ達はここで前に進めるのか……次ではきっと姫御子様が登場するはず。話も進むはずです。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

姫御子の見えない姿と見えたもの（前書き）

空中で風に吹かれ続ける僕。すると社からモブリが外へ放り出てきた。きっと奴が投げてるんだろう。するといきなり体が引っ張られて社へ。そこで僕達はようやうリア・レーゼで信じれる奴と話せることに。

信じれるって言葉もおかしいけどね。だけど奴と戦って僕達はこいつがリア・レーゼ側とわかってて、その思いの強さもわかってる。だから僕達はこいつを信じて、姫御子様の元へと誘われることに。

姫御子の見えない姿と見えたもの

ドカ・バキ・ドゲシャァ――と言う物騒な音が枝の先端部分の社から聞こえる。するとその音に合わせて、社からモブリが数人外へと投げ出されて、クルクル回りながら上昇していった。

僕もまだ社の外で強風を直に浴びてる状態で、空中に停滞してるから、飛ばされてきたモブリ共とぶつかりそうで危なかったよ。

てか、やっぱりあのモブリ達はサン・ジェルク側の奴らだったって事だよな。何の躊躇いも無く、外に放り投げてたみたいだもんアイツ。

そんな事を思ってると、ようやく体が引っ張られる感覚と共に、僕は社の内部へと無造作に投げられた。

「げは！　ぶっ！？　むべらちゃ！」

「スオウ君！」

床に投げ捨てられた僕の哀れな姿にいち早くシルクちゃんが反応してくれる。僕は情けない姿のまま「ははは」と乾いた笑いを漏らすよ。

すると僕の傍にセラ達もジリジリと集い出す。

「アンタ生きてたんだ。まあそんな事どうでも良いけど、アレはどういう事よ？　いきなり現れて、モブリ共を投げ捨てたわよ。それにテッケンさんも居るし……信じていいの？」

みんなアイツに警戒心を持ってるから、僕の周りに来たわけか。だけど最初の一言目、セラの奴ひどくね。いや、まあこいつが酷いのは今に始まった訳でも無いけど、関係改善を目指してるんだから

もうちょっと気遣えよ。
まあ今はそれよりもアイツが気になるってのは分かるけどね。
「どうやったかはわかんないけど、僕もアイツに助けられた。それにここの姫御子様は僕達を所望してる様だし、大丈夫。アイツは今は敵じゃないよ」
「……確かに、あのモブリ共を倒した訳だし、アイツ等がサン・ジェルク側だったって事よね。逆にこの人は絶対にリア・レーゼ側だと私達は分かってるし……うん、その話信じましょう。
てかテッケンさんが警戒心無く肩に乗ってるしね」
なんだよ。セラの奴は僕の話じゃなくテッケンさんで判断するのかよ。確かに彼がそうしてるのは分かりやすくはあるけど、僕の方が論理的だろ。
「いつも直感で行動してる奴の論理なんて……プッ」
あっ今セラの奴、鼻で笑ったぞ。なんだその失礼さは！　今確信したぞ。こいつとは絶対に親友とかにはなれない。頑張って友達止まりだ！！　てか、その論理はみんなで考えた筈の物じゃなかったか。僕だけの拙い物とは違うだろ。
「はいはい、勿論それもちゃんと考慮してるわよ。この目でこの人がモブリを排除したのは見たしね。だけどだからって直ぐに信用ってやっぱり無理でしょう。
だけどテッケンさんも助けてるし、それにアンタも……それをちゃんと含んでの結論よ。これなら文句無いでしょ？」
「まあ……確かに」
なら最初からそう言えよ。無駄に僕を傷つけて楽しいか？　別に

それがセラだと思ってるけど、もっともっと素直になってくれないと、僕達のようやく絡みだしてる絆は進展出来ないぞ。
てか、いつ切れてもおかしくないんだからな。僕とセラってさ。もっとデリケートに扱えよ。そんな事を思ってると僕の直ぐ傍でポタポタとコボレる透明な滴が木の床を濡らしてる。

「スオウ君、本当に良かったです。テッケンさんも無事だったし、私嬉しいです」
「シルクちゃん……ごめん心配かけて。ありがとう」

ああ～、なんかいいな～って思う。やっぱりシルクちゃんは僕の心をすっごく癒してくれる。トゲトゲしい薔薇がセラなら、シルクちゃんはまん丸フワフワで、道行く人をその姿で癒してくれるタンポポだね。
棘なんて全くなく、フゥ～と息を掛ければその身を空に飛ばして空を彩って、誰もを笑顔にしちゃうそれがシルクちゃんだ。異論は認めん。
それに誰かの為に素直に泣ける……それもやっぱりシルクちゃんらしいと思う。

「シルクちゃん！」

彼女の泣いてる姿にテッケンさんが反応してこちらに来ようとしてる。だけどやっぱり風の影響を受けやすいモブリは下手に動けないみたい。
どうやたテッケンさんはアイツの肩に居ることで、この強風を耐えてるみたいだな。

「仕方ないな」

意外な事に、そんな言葉と共に奴が自分から近づいて来た。テッケンさんの思いを組んでくれたって事か？　敵じゃないと今は分かってる筈だけど、僕達はアイツの風体についつい警戒をしてしまう。だけどそんなの気にしてないように、奴は正面に堂々と立つよ。

「シルクちゃん、みんなゴメン。心配かけてしまったね。だけどあの時、変な気流に巻き込まれてかなり上の方で落ちたり上がったりしてる所をこの人に助けて貰ったんだ。
僕もビックリしたけど、大丈夫。敵じゃないよ」

そんなテッケンさんの言葉に、いち早くノウイがこう返した。

「信じて……良いんすよね？」
「勿論。大丈夫だよ。あの時とは状況が違うだろ？　いきなり襲って来たりしないさ。だろ？」

テッケンさんに振られて、奴は目深に被ったフードの中から声を出す。

「ああ、今はお前達を殺す事はしないさ。もう既にリア・レーゼに入ったわけだし、何よりも我の主が貴様達をご所望だ。
まあ、その後にどういう対応を取るかは主次第だがな」

もしもその主＝姫御子様が僕達に会った後にやっぱり危険と判断されたりしたら、僕達はこいつに襲われる事になるって事か？　全然安心できない。

「大丈夫だよ。だからこそ今は安全さ」

テッケンさんがウインクしながらそう言う。確かに今だけは確実

だろうけど……後が怖いよ後が。てか、ノウイも全然警戒心解いてないじゃん。アレだよね。ノウイは飛空挺で襲われた事もあるし、人一倍警戒してるんだろう。

もしもの時はまた自分が……その位思っててもおかしくない。まあ今はミラージュコロイド使えないだろうけど、ノウイはキョロキョロと脱出ルートの選定でもしてそうな位に視線を動かしてるよ。

「ふん、上等じゃないか。姫御子様のお眼鏡に叶えば良いだけの事だろう。このチャンス、リア・レーゼ側もミスミス逃すとは俺には思えん。

上……とは言わずに対等の関係をずっと望んできた筈だからな。色々と今だからこそ出来ることがありそうじゃないか。

だからこそ無闇に俺達を殺すことも投げ出す事もしないと思うがな」

「そういう物なのか？」

僕はあんまりノーヴィスの事情は知らないから、そこら辺は分からん。まあ鍛冶屋が饒舌に喋るときは自信がある時なんだろうから、なかなか頼もしくはある。

対等か……確か星羅は聖院から派生したから一個下に見られてるんだっけか？　だけど今やその力は優劣なんか付けれない程になってて、対等になることを望んでると。

それを一番嫌ってるのがどこかは何となく想像できる。きっと元老院だろうな。アイツ等自分達の権力が大切なんだろ。それなのに星羅が聖院と同じ位置に来られると、色々ときっと気持ち的にも良くないと思う。

権力分散だしな。てか、今も十分やっかんでるんだっけ？　僕達が連れてきたクリエは、ある意味元老院を解体するために必要になり得る鍵かも知れない。それをどう使うかを僕達諸とも決めるつもりかもな。

僕達に利用価値があると思わせれば、生き残れてこっちの目的の為に逆に利用できるって事もあるかも知れない。

「それを判断するのは我が主。この街の守護者姫御子様だ。あの方の目は絶対。ごまかしはきかん。せいぜい、無礼な行いは慎む事だ」

せいぜい一杯媚びを売って命を助けて貰えと？　こいつはちょっと僕達を見くびってるんじゃないか？　確かに死ぬのも殺されるのもイヤだけど、僕達にだって目的があってここまで来たんだ。

犠牲の上に進んできた。ただ、助けてくださいって縋りに来た訳じゃないんだよ。

「無礼な事かどうかはわかんないけど、僕達にだって伝えたい事はある。その人に聞いてほしい事があるんだ。だからそれだけは言わせて貰うからな」

「好きにするといい。お前の言葉をどう受け取るかは主次第だ。お前はやはり面白いから、主も興味を持つかもしれんしな。

お前のその伝えたい事がつまらない事で無いことを祈っておこう」

つまらない事って……こいつは大体想像出来ると思うんだけど。いや、待てよ。こいつに想像できる範囲の事じゃ、姫御子はつまらないと判断すると言いたいのか？　だけどそんな親切キャラじゃないよな？　どう受け取れば良いんだ？

「さて、ここにいつまでも居るわけにはいかん。主は今は待ってる訳だし、さっさと行くぞ」

そう言うと、再び床の魔法陣が輝き出す。行くって、またこれで転移するのか？　てっきり目の前のデカい社に行くものだと思ってました。

「あそこは一般の巡礼様だ。主の行る場所は更に天に近い場所。普通はこの転移魔法陣ではいけないが、特別に道を繋げる許可を得ているからな。
心してろ。今から行く場所は、このリア・レーゼで最も尊いお方の住まう場所なのだからな」

そんな言葉と共に、光が視界全部を覆ってく。そして次の瞬間、上昇する光と共にこのリア・レーゼのトップの元へと導かれる。

目の前を覆ってた光が徐々に収まり、数回瞬きを繰り返して僕たちは周りを見回す。そして誰もが口をパクパクとさせた。これは余りの驚きに誰もが声を出せなくなったって事だよ。
いやマジで、これは予想外。あれだけ強かった風が無く、静まり帰った場所。上を見ると無数の星々の光が漆黒の中で輝いてる。そして下に目を向けると、眼下に広がるのは広大な大地――なんて表現を有に越えた、半円位までもう見えちゃってる星という概念を理解できる光景だ。
えっと……ここは高度何万メートルでしょうか？　どう見ても宇宙空間か、その一歩手前に居るよ！！　色々と叫びたい言葉が一杯あるんだけど……なんというか……出てこない。
いや、声に成らないって言った方が正しいな。みんなも同じ様で、何も言葉に出来ずただ周りを見つめてる。やばい……なんか感動しそうだ。
だってまさかこんな所で宇宙まで来ちゃうなんて思ってなくて……今、僕たちは人類の夢の場所に居ると思うと、色々と感極まるよね。
眼下に見下ろすこの美しい星も、見上げた空の輝きも……人類が憧れ続けて来たものじゃないか。実際これはリアルじゃないけどさ、

そんなのを超越しちゃう感動があるよ。
むしろＬＲＯの世界だからこそ、こんな綺麗に見えるんじゃね？　的な。てか、この眼下に見える星そのものがＬＲＯなのか？　それともこの宇宙空間全てをいれてＬＲＯなのか……よくわからないな。だけどそんな事さえ、些細な事なんじゃないか、とも思える不思議。

「凄く……綺麗です」

ようやく聞こえた声は、耳に沁み居る様に響くシルクちゃんの声だった。横顔を見ると彼女は眼下に広がる星を瞬きを忘れて見つめてる。
やばいな……僕がもしもシルクちゃんの恋人なら、確実に言いたい台詞がある。
「君の方が綺麗だよ」――って思わず言いたくなってる。そんな台詞アホか！　と思ってたけど、なんだか今のシチュエーションには合いそうな気がするんだ。
だけどダメダメ……幾らみとれる位に綺麗なシルクちゃんが目の前に居るからって、流石にその台詞は許されないだろ。僕達そんな関係じゃないし。
だけどこの光景が、行けるんじゃね？　と僕をおかしなテンションにさせていく。

「……き――」
「確かに綺麗ですね」

僕がおかしなテンションであの台詞を口走り掛けたとき、セラも周りを見てシルクちゃんと同じ様な台詞を言った。そしてそれに反応した、僕と同じテンションの奴が居ました。

「セ……セラ様の方が自分には綺麗に見えるっす！！」

言ったあああああああ！　ノウイがおかしなテンションで口走ったあああああああああああ！！　それに対するセラの反応は――

「何おかしな事口走って……その口、縫い合わせてここからつき落とすわよ！！」

と、顔を真っ赤にして罵声を吐いてた。いや、ノウイからのアプローチにしてはナカナカの反応……とか思ってたけど、耐えられなく成ったのはノウイの方だったみたいだ。

自分の口走った台詞に羞恥心が崩壊。ノウイは「うわ！　うわぁ！　うわあああああああああっす！！」とか叫びながら、魔法陣から出て木で出来た通路を走り出した。そしてある程度離れた所で、つなぎ目にでも足を取られたのか、盛大にこけた。

そしてそのままピクピクしたままうつ伏せ状態に。その姿を見て、僕は本当に下手に今の台詞を言わなくて良かったと思った。

シルクちゃんはもっと悶え苦しむ程の可愛さで反応してくれそうだけど、シルクちゃんが可愛く反応してくれればくれる程、僕は後悔してたと思う。

きっと今のノウイの比じゃ無いよ。自分でここから飛び降りてかも知れない。ノウイはある意味、それをしなかっただけ、良く耐えたのかもな。

「お前達は……何をやってるんだ？」

呆れる様な感じでその言葉を口にする奴。こっちは貴様と違ってこんな場所に来たのは初めてなんだよ。だからテンション上がって自爆したんだ。察しろよ。雰囲気に当てられたって奴だよ。

それ以上追求するな。

「何でもいいが、勝手な行動は慎め。ここは貴様等が思ってるよりも百倍は神聖な場所だ。今から主の元まで案内する。ついてこい」

そう言って奴はこの大きな大きな世界樹の傘の部分に張られた道を歩き出す。

てか、こいつら神聖な世界樹に何を建造してるんだよって思うのは僕だけか？　この星から飛び出す程の巨大な世界樹の麓だけじゃなく、よりにもよって世界樹その物に建物をへばりつかせて建ててるじゃん。

青々とした生い茂るこの場所に、ぐるっと回るような木製の通路に、上を見るとそんな青々とした葉の隙間から、少なくとも四つぐらいの建造物も見えるし、ある意味やりたい放題じゃないか？　とか思うわけだよ。

きっと一番重要な場所は天辺間際に建造されてる、清水の舞台みたいな感じのあの社かな？　沢山の鳥居がその道を造ってる様で、青々としてる中に、赤い鳥居が感覚短く並んでるからその道筋がよく見えてる。

だけど基本なのか、リア・レーゼの社って木の趣をそのまま残してたりはしないんだよね。社は基本赤と白に染められてると言うか……めでたい色って事なのかな？

まあここで幾ら考察したってわかる筈もない事。僕たちは奴の後を付いて歩き出す。

「おい、大丈夫かノウイ。勝手に走り回るなだってよ」

「うう……了解っす」

途中で倒れ伏してたノウイを回収しつつ、更に大人しく奴の背中を追う。

「こんな場所があったなんて、やっぱりＬＲＯにはまだまだ私達が知らない事が一杯ですね」

歩きながら、シルクちゃんがそんな事をポツリという。シルクちゃん達クラスで知らないことがまだまだ一杯なら、僕みたいな奴じゃ全てを把握するなんて無理な気がするよな。ホント、余りにも広いよこの夢の世界は。

「普段ならお前達の様な奴らは足を踏み入れる事も許されない領域だぞここは。サン・ジェルクの連中もここの存在を知ってるのは元老院と教皇だけだ。そして一般人で入ったのは貴様達が初めて。感謝しろ、我らが主の心意気に」

心意気ね。それなら牢になんか入れずに最初からここに連れてきてほしかった。そしたらあんな酷い目に遭わされずに済んだだろ。ワンアクションが無駄なんだよ。

「あれは実際ワザとだ。リア・レーゼ側に潜む過激なサン・ジェルク親派を炙り出す為のな。誰がどこまで互いの組織の為に動くか……それを知って起きたかったんだよ」

「僕たちはその過激な連中を炙り出す餌だったって事かよ！」

まさかいきなりそんな風に利用されるとは思わなかった。

「だが実際あれは必要な事だった。我々の為にも、そしてお前達の為にもだ。お前達はあくまで罪人として扱ってた方がいい訳だが、どこで監視されてるかわからない貴様等をその状態でここまで連れて来るのは危険だろう？

それに奴らを炙り出してからじゃないと、手を組まれたと大々的に思われても困る。それに奴らが行動するのなら、その価値に我ら

が気付いてない時だと言うのも当たりだったしな。
色々と元老院側に都合の悪いことは、こちらにとっては都合が良い。いつだって主は今のシスカ教の現状に悲しんでおられるからな。
それを払拭する起爆材にお前達が成るのなら、賭けてみるのも面白い」

面白いって……こっちは面白いで済まない事情を抱えてるっての。まあこいつ等が先にサン・ジェルクの伏兵を見つけて起きたかった気持ちも分かるし、確かにこれで良かったと思うけど……やっぱり一言あっても良かったと思うんだ。
まあ、信頼が築けてない僕たちが怪しげな言葉だけ受け取って何が出来たとも思えないけどね。

「それって、リア・レーゼは僕達に協力してくれるって事なのか？」

言葉から察すると、それが結構期待できそうなんだけど。

「それは俺から言うことではない。貴様達の事は我らが主がそれを決めると言ってるだろ」

そう言って口を閉ざしてしまった変な奴。う～ん、今一良くわからないよなコイツって。何者なの？　姫御子様の片腕って事は分かるけど、あの時飛空挺で見た姿……あれはどんな種族の物でも無かったぞ。ＬＲＯでの謎は増すばかりだよ。
そうこう思ってる内に、奴は鳥居が上の方へ続く通路へと入る。薄々気付いてはいたけど、やっぱり姫御子様はあの一番上の社に居るんだな――って思ってたら、案外早くわき道に逸れやがった。

「え？　おい、この上じゃないのか？」
「あそこは星の声を聞くための祭壇みたいな物だ。そんな場所に住

める訳がないだろう。それに主の館はここでも万が一に備えてある」
「こんな世界の上空に居ることが既に万が一に備えてそうなのに、その更に万が一に備えてると？」

大層なこったな。

「それくらいは当然だ。あの方の代わりは居ないのだからな」

そう言って大きな背中を見せたまま、木の枝がトンネルみたいに成ってる道を進む。さっきまでは傘の外側部分を歩いてた訳だけど、今度は内側って訳か。
外側に見えてる建物はじゃあなんなんだ？　カモフラージュ？　それともあれはあれで必要な物なのかな？　そんな事を思いながら進んでると、次第に暗い中にボンボリみたいな光が見えてきた。
色とりどりの光が回転しながら僕達を誘う。そしてたどり着いた場所は枝や葉に覆われた建物前。てか入り口しか見えないから、外観を伝える術がないな。まあ取りあえず今伝えられる情報は、何故か古めかしい引き扉の横に変な看板が立てられてるって事だけです。

「なんだこれ？　え～と『アトリエ　ヴィスペリティア』――なんの事だ？」

てか何故にこんば場所にアトリエが？　そう思ってると、後ろの女子二人が、僕の読んだ文字に反応した。

「え？　ヴィスペリティアってマジで？　読み間違えてないでしょうねスオウ！？」
「あのな、読み間違えるも何も、カタカナで書いてあるんだけど……」
「じゃあ……マジで……」

何だなんだ？　良くわからないから説明求む！

「あのですね。前にも言いましたけど、このＬＲＯにもブランドって物が存在してます。腕の良い職人の商品を求めるのはリアルもここも一緒です。

オホン……それでですね、ヴィスペリティアと言うのも、そんなブランド名の一種なんです。でもこれはそこら辺の流行だしの流行追いじゃありません。別格のブランドなんです。

幻とまで言われてます。市場になかなか商品を流通させないし、作る物は全てオーダーメイドのみ。だけどその連絡方法も限られた人しか知らず、手に入れる所か、この目で拝む事すら難しいブランドがこのヴィスペリティア何です！

誰がやってるのか全くの謎でしたけど……まさかこういう事だったのかな？」

なんだか胸のワクワクドキドキを抑えられない様子の二人。

「では行くぞ」

そんな声と共にカララと案外安っぽい音と共に開く扉。この先にリア・レーゼの姫御子で、女子二人が興奮しちゃう程のカリスマが……なんだか僕まで緊張してきた。

姫御子の見えない姿と見えたもの（後書き）

第三百話です！！

とうとう三百話まで来ました！！　てか、もう三百。案外早かったですね。いつの間に～って感じです。百・二百と来てなんかあっという間です。この調子なら千ぐらい余裕だぜ！　って思うけど、実際それは良い事なのか、そうじゃないのか？　もっとまとめて書けよってそろそろ突っ込まれてもおかしくないかもとかビクビクです。

だけどまあ、頑張ります！　命改変プログラムが完結するまでは！　実際まだまだ先ですけどね。言うなればまだ半分にも届いてないという……構想の中ではですけど。章形式で完結させるなら、半分は来てますよ。

見捨てられない様にこれからも頑張って行きます！　楽しめて貰えてれば幸いで……誰もが納得出来る形で完結出来れば嬉しいです。

てな訳で次回は日曜日にあげます。ではでは。

星の声を聞く者（前書き）

僕達は玄関に入る。するとそこには可愛い服を着たモブリ達が腰を低くして待ってくれた。出迎えってやつだね。だけど中は意外と普通。奥が見えない位に続いてる以外はだけど。

女子二人はモブリ達が来てる服に目を奪われたりしてました。色々とドタバタしつつ僕達は中を進む。そして辿り着いた最上部。そこでとうとう僕達は、星詠みの御子に会う事になる。

星の声を聞く者

引き戸を開けて中へ入ると、なんだか甘い香りが鼻を擽ってきた。そして同じ格好同じ姿の小さなモブリ達が、旅館の仲居さんみたいにかしづいた状態で「いらっしゃいませ」と言ってくる。

てか、実際外に建てられてた看板みたいなアトリエって感じでもなければ、かしづきの人たちが居るような旅館って感じでもないんだよね。

玄関だけを見るならば……これは相当に普通っぽい。ちょっとこじんまりとした玄関に、靴箱とかあって、普通に花瓶には花が活けてあったりさ、どうみても普通だよ。ただ違和感を覚えるのは緩やかに曲がってかなり奥の方まで続いてる廊下だろうか。なんだか先が見えないような……玄関にあってないぞ。

僕がそんな感想を抱いてる横で、女子二人がまだはしゃいでる。

「うあ～ここがアトリエ。思ってたよりも普通だけど、奥にはきっと大量の服とかがあるのかしら？　う～～ん見てみたい！」

「セラちゃんセラちゃん。私思ったんだけど、このモブリの人達の衣装ってもしかして……」

セラとシルクちゃんが狭い玄関でテンション高くそんな言葉を交わして、かしづいてるモブリへと視線を向けてる。何かを期待してるかの様なその目。そんな視線を向けられたモブリの一番前の人が顔を上げて、二人の期待に応える様な事を言ってくれたよ。

「お嬢様方はお目が高い。期待通り、この給仕服は姫御子様が私達の為に用意してくれた物です」

「やっぱり！　だってだって、凄く素敵だもの！」

シルクちゃんは喜々としてそう言ってる。そしてセラも「これが……これが……」とか良いながら震える手を伸ばそうとしたり引っ込めたり。

きっと触りたいんだろうね。だけど流石のセラも躊躇ってる。やっぱり幻と言われるブランドらしいからな。そりゃあ女の子にとっては躊躇わざる得ないのかも。僕には良く分からないけど、取りあえず女の子って『ブランド』って物が大好きだもんね。やれやれだよ。

「いいからささっと上がらせて貰おうぜ。ここで悶えても意味ないだろ。奥にはもっと一杯そりゃあるんじゃね？　その幻のブランドの物がさ。なんてたってアトリエなんだからな」

僕がそう言うと、女子二人の視線がこちらに。そして分かってないみたいに言われたよ。

「アンタにはホントガッカリね。目の前に既にそれがあるんなら目が行くに決まってるじゃない。それにね、こういう着なれてからの物の方が味があったりするのよ」

「そうですよスオウ君。一杯ズラーと並んでる様を見るのも良いですけど、こうやってきちんと着用されてる姿ってのも色々と参考になるんですよ。

と、言うか珍しいです」

まあ、幻言うくらいだから、その装備を身につけてる人事態が少ないんだろうね。だから日用的に着こなしてる姿にも興味が沸くと。だけどパッと見位じゃ、何がそのブランドの特徴なのか実際わかんないけど……ブランドロゴが全面に主張してるわけじゃないじゃん。

リアルのどっかのブランドみたいにロゴが模様になってる……と

かでもないし、実際至ってシンプルな仲居服？　色とりどりの着物に、フリルの付いたエプロンを合わせただけって感じにしか見えない僕の目はおかしいのか？

「ふふ、だけど可愛いな～とかは思えますよね？　最初はそう言うところから入っていけば良いと思うんですファッションって。超可愛くないですか？」

目を輝かせながら「どうどう？」と押してくるシルクちゃんも珍しい。

「確かに可愛いとは思うよ」

「そうですよね」

そう言ってホワァ～ンとトロケそうな瞳でため息を付くシルクちゃん。僕は「そこまでなのか！？」って思ったよ。いや、確かに確実に可愛いよ。だって元々愛らしいモブリが愛らしい格好してるんだもん。当然じゃね？　だけどそれを言ったら怒られそうだから、素直に二人に同意しておく。

てか、シルクちゃんやセラで想像しても確かに、なかなかに良いかもね。シルクちゃんは無条件でピンク色がいいな、セラはまあ、赤か紫位で。高飛車ってるからな。ツンデレ仲居をやってくれるなら、見てみたいよね。そんなセラを。

「アンタ、何嫌らしい顔でこっちを見てるわけ？　あ～やだやだ、男はどうせ女の服なんて露出が多ければ何だっていいんだよって感じ何でしょう？

言っとくけど、私達は男に媚びる為に胸元をあけたり、短いスカートを履いてる訳じゃないのよ。勘違いしないでくれる？」

「は？　じゃあ何の為にあんな恥ずかしい格好を女はするわけ？」

おいおい、まさか全く男を意識してないなんて言わせないぞ。夏のこの時期には、目のやり場に困る位の露出の奴がそこら中に居るんだ。あんなの誘ってるとしか思えない。

「単純にその格好が可愛いと思うから。トレンドだったりするからよ。確かに完全に男を意識してないなんて言えないかもだけど、ファッションなんて異性の気を引くか、完璧な自己満足かのどっちかしかないのよ。

だから私達は誰にでも見せたいとか、色目を使ってる訳じゃない。本当にエッチな目で舐め回したいのなら、そう言う目的の娘にしてよねって事」

「それが分かれば苦労なんてしないんだけど……だから女って短いスカートでも中を見られたら怒るわけ？　あんな常時開封の恐れがあるのに、それならズボンか下にスパッツでも履いとけよって思う」

「それじゃあファッションとして納得出来ない物に成るじゃない。バカなのアンタ？」

くっ……バカはどっちだよ。どう考えてもそれって、女側の自分勝手な都合じゃん。それに世の男共は振り回されっぱなしだよ。僕達男からすれば、それだけ短いスカートなんだから、見られるのも許容範囲内なんだろうなって事だ。

それなのに「アンタ達に見せる為じゃないのよ！」って言われても……理不尽じゃね。

「まあでも納得できない気持ちも分かります。だけど女の子はきっと男の子よりも自分の見た目って物に気を使ってるんです。

だからそこを察してくれると嬉しいなって……」

「察するって言っても、見て良い女の子と見たらダメな女の子ってパッと見じゃわかんないしな……」

僕が思わずそう呟くと、なんだか女子二人が僕から一歩後ずさったような。

「何々？　どうしたの？」

「スオウ君は見て良い女の子が良いんですね……」

「ちょっと口を開かないでくれる。この変態……」

どうしてだよ！！　二人の視線が冷たいよ。だって見ていい子を探せって言ったじゃん。てか、セラは別に良いけど、シルクちゃんに変な印象を持たれるのは不味い。てか、イヤだ。

「違うんだよシルクちゃん！　今のはもしもの時、目が行った時に見て良い女の子なら、無駄に不快な思いをさせずにすむな～って言う配慮をだね……」

僕が必死にフォローを入れてると、横からこんな言葉が聞こえてくる。

「もう良いじゃないっすかスオウ君。男なら、ケチケチする女より自分から見せてくれる懐の深い女の方が良いって言っちゃってくださいっすよ。よ！　男の中の男！」

「そうそう、下手な言い訳よりも、自分が変態だと宣言した方がある意味これからのつき合いが楽になるかもだぞ。気軽にスカートめくりとかでセラとスキンシップ計れる様になるかもだぞ」

うおおお

ノウイが言ったような娘は実際僕好みじゃないし。そもそも男の中の男ってバカにしてるとしか思えない。それに鍛冶屋のスキンシップの方法を僕が取ったら確実に殺されます。

「スオウ君……」

「アンタって……まさかそこまでのＨＥＮＴＡＩ……」

「いやいや、僕じゃないからな！　言ってるの僕じゃないし認めない！　くっそ……こうなったら最後の良心テッケンさんに頼るしか……テッケンさんは僕がＨＥＮＴＡＩじゃないって信じてくれますよね！？」

僕達の視線が一斉に小さなモブリへと集まる。すると俯いてたテッケンさんが、顔を上げて満面の笑みでこう言ったよ。

「まあ、スオウ君がＨＥＮＴＡＩかどうかは僕には分からないけど……これだけは確実に言える。全ての男はきっとこう思ってる。薄手の女の子はサイコーだって事さ！」

キランって思わず歯が光って見えた。まさかテッケンさんがそんな事を言うと思ってなかったから、みんなの世界が一瞬止まったよ。てか……全部を持っていったな。どんだけ良い笑顔で真理を言ってんだよこの人は。

まあだけど、否定する要素は無いよな。だってそれが真実だから。

「スオウ君……」

そう言ってテッケンさんがその小さな手を僕に向けてくる。僕は……いや、僕とノウイと鍛冶屋はそんなテッケンさんの行動にあわせてそれぞれ腕をだす。

そして拳をみんなで合わせて、心の中できっと同じ事を呟いた。

「「「異議なし」」」

ってね。

「あの～そろそろ案内させてもらって宜しいですか？　というか、それはなんの儀式で？」

「済みません皆さん。バカな男共は放っておきましょう。危険ですから。シルク様も近づかない方が良いですよ」

「あ……ははは」

シルクちゃんの乾いた笑い声が空しく聞こえてたけど、こればっかりは変えられない事実。そうこれこそが真理なんだよ。もう、何の話してたのか訳が分からない。全ては一時の変なノリがこの状況を作り出しました。

「お前達を主に会わせて良いのか不安に成ってきたな」

「ふん、そんな事言って、本当はお前だって『異議なし』って心の中で言ってたんだろ？」

「ふざけるな。貴様達の話は今一わからん。理解できん」

そう言って奴は靴を脱いで一足先に玄関に上がるよ。なんだか話を振られるのがイヤみたい。いや、それとも流石に待ちくたびれただけ？　だけどこいつも男だし、わからない事はないと思うんだよね。

僕たちはリアルでその光景を想像してた訳だけど、ＬＲＯにだって四季はあるんだし、そこら辺を考えるとわからない訳がないだろ。

「簡単だよ。お前の大好きな姫御子様が露出の多い服を着ている所

を想像すれば良い」

って、良く考えたら姫御子様ってモブリなんだっけ？　それじゃあ意味ないよな。あんなまん丸体形じゃ欲情なんて出来ないよ。別にボン・キュ・ボンであれとは望まないけどさ、人型してないときついよね。

そう思ってたけど、僕の言葉を受けた奴はなにやら止まってる。想像でもしてるのかな？

「主の……ブッ！！」

「！！　お前まさか、モブリでもいけるのか？」

ビックリした！　いきなり奴が鼻を押さえ出すんだもん。幾ら好きだからってモブリでそうなれるか？　スゴいなこいつ。

「これは違う、貴様達の様な浅ましく嫌らしい感情を主に向けるなどありえん！」

力強くそう言う奴。だけど残念な事に説得力が皆無だ。その鼻を押さえてる手は何だよ。鼻血でもドクドクと流してるんじゃね～の？

僕がそんな事を疑いつつ奴に近づくと、奴は顔を見られないように体をくねらせる。

「おうおう、どうしたんだよ？　見せたくないって事は何か不都合があるって事だろ。認めろよ。自分が大切なご主人様相手に欲情するＨＥＮＴＡＩだって事を」

「わ……私は……」

何故か戦闘以外で奴を追い込めてる僕。頭まで抱えだした奴は、

かなりの自己嫌悪に陥ってる様子だ。うん……てか別に味方に成るかもしれない奴を追いつめてどうするって事だよな。しょうがない、からかうのもここら辺にしておくか。

「おい、ちょっとおちつ――」

僕がそう言おうとしたとき、何ともアグレッシブな使用人モブリが長い棒で奴の鳩尾をおもいっきり突いたよ。それはもうエグい程に。

「ぐほっ！？　――くっ、貴様等……何のつもりだ？」

「何、混乱してらっしゃた様なのでちょっとした刺激と共にこちら側への道を開いただけですよ。だけどリルフィン様も、なかなかに男性なのですね」

そう言われてクスクスと笑われる奴もとい『リルフィン』はなんだか口をカチカチと鳴らしてる。恥ずかしがってるのか、それとも怒ってるのか微妙な表現だな。

「くっ……行くぞ！！　貴様達も仕事をしろ！」

全てを誤魔化すように声を荒くして廊下を進み出したリルフィン。きっと居たたまれなくてさっさとこの場を離れたいんだろうな。モブリのみなさんは相変わらずクスクスしてるけど、左右に分かれ腰を下ろして受け入れ態勢万全に頭を下げる。

「どうぞ皆様。奥で我らが姫御子さまがお待ちです」

僕たちも軽く頭を下げつつ、靴を脱いで廊下に上がる。なんだかちょっと違和感あるよな。ＬＲＯでは基本靴を脱ぐなんて事はあん

まりしないもん。宿屋とかだって欧米スタイルだし。まあ、日本人としてはこれはこれで良いけどね。
僕たちはリルフィンの後を急いで追うよ。だけど途中で女子二人が居ないことに気づいた。まさかもう迷子？　とか思ったけど、まだ一本道だ。振り返るとなにやらモブリの人たちと話してる二人の姿が。

「セラ君にシルクちゃん！　何やってるんだい？　早くしないと彼は待ってくれないよ」

テッケンさんが二人にそう声を掛けて、二人は駆け足で僕たちの所まで来る。何やってたんだ？

「後でもっとじっくり見せて貰おうかなって思って、お願いしてたんです。こんな機会ないですからね」

ふ～ん、そんなに良かったのかね？　どうせならシルクちゃんがあの服に身を包んでる姿を見てみたいけどね。きっとすっごく似合うと思う。
そんな淡い願望を抱きつつ僕たちは再びリルフィンの後を追いかける。どうやらこの建物は扉とかなくて、中は全部障子が部屋を区切ってる様だ。
サン・ジェルクもそうだったけどさ、やっぱりこの国『ノーヴィス』は日本を意識して作ってあるよな。そんな事を思いながら進んでると、階段が。そこを上って更に進むとまた階段。僕たちはそんな感じで五回は階段上がった気がする。

「なんだか良く登るな。まさかこの建物、外観が見えなかったら気づかないだけで、城みたいになってたりしてな」
「まさかそんな……ちょっと大きめに作った日本家屋なだけっすよ。

だって入り口しょぼかったじゃないっすか」

しょぼいって……ここの奴が居るのに堂々と言うなよ。だけど大きめって日本家屋を大きくしたのが城だろ。一緒じゃん。まあ大きくしただけって訳じゃないだろけど、それに合わせて見栄えと堅牢さを与えたのが城か。

でも基本僕の中での日本家屋って古い中で言うと長屋とかなんだよね。こんなに上るのは実際城以外ないじゃん。そうこうしてるうちに、更に階段が。そこには今までと違う雰囲気が……と、言うか外にあったみずぼらしい看板と同じ感じの物が立ってる。なになに……

『ここから上は私の部屋。ノータッチミー』

なんだか姫御子様ってバカなんじゃなかろうかという疑いが僕の中で強まってくよ。だってこの字がなんか……バカっぽい。

「リルフィン、ただいまご所望の奴らを連れて参りました！」

階段下から、上へ向かってそう呼びかける。どうやら無断で入っちゃいけないらしい。まあ女の子の部屋だもんな。そこは色々とあるんだろう。僕たちが大人しく返事を待ってると、いささか不機嫌な声が返ってくる。

「あ～なんか遅くて会う気なくなっちゃったかも～。めんどいな～。とりあえずあがっても良いけど、お茶菓子位、持ってきてるんでしょうね？」

「ああ？」

何がお茶菓子だ。ちょっとイラッときたぞ。そんなの持ってこれ

る訳ないってわかってるよな？　まあ待たせたのは悪かったけど、大部分はそっちの予定通り何じゃないのかよ。

「あわわ、どうしましょう。リルフィンさん、お土産屋はどこでしょうか？」

慌てて買いに行く気満々のシルクちゃん。もう、この子は本当に素直過ぎだよ。

「大丈夫だ。主は色々と人をからかうのがお好きな方だからな。本気で言ってはないさ。それよりもこれ以上待たせて本気で不機嫌に成る方が問題だ」

そう言ってリルフィンは階段を上がってく。僕達はその言葉を信じてついてく事に。上に上がると、そこは沢山の色とりどりの布が天井からアーチ状に垂れてて、そんな布のせいか、天井にあるんだろう光源の光がいろんな色でこの部屋全体を照らしてる。

隅っこの方へ目をやると、沢山のタンスと、それに収まらなかった服やアクセサリーが一杯目に付く。思ったけど、これならこの部屋の下にあの玄関先の看板もってこいよ。それが正しいだろ。

どうみてもここがアトリエだろ。そんな感想抱きながら部屋を物色してると、不意にコツンと何かが額に当たった。

「いてっ……何だこれ？　石？」

「ふん、私の部屋を何舐め回す様な目で見ておるのだ。このイヤラシイ鬼畜めが！！　いや、鬼畜共目が！！」

最初は僕だけだったのに、わざわざ言い直して全員入れやがった。てか、いきなり小石ぶつけるわ、その言いぐさだわ、やっぱりバカだろ姫御子って。どこにいやがる。

「誰が鬼畜共だ！　それに舐め回してもいないっての、被害妄想も良いとこだ。やっぱり文字を見たときから思ってたけど、頭弱いんじゃないのかアンタ？」
「んな！？　このリア・レーゼを支える星詠みの巫女に向かってなんと言う言いぐさ！　面白そうな奴だって聞いたけど、とんだ生意気野郎ね！　自分の立場って物がわかってないの？　頭弱いのはどっちよ！
見ただけで分かるわ。アンタバカそうじゃない！　人の事言えるか！」
「あんだってぇえええええ！？　ならアンタの姿も見せて見ろよ！
どっちがバカ面してるかケリつけてやるぞ！！」

なぜだか見えない姫御子と言い合いしてる。だって思ってた通りの様で、思ってたよりもヒドい様な……てか、いきなり石をぶつける奴に無礼もあるか！
どうせふんぞり返って高飛車な奴なんだろ。

「上等じゃない！　どっちかバカ面か言っとくけど、一目瞭然よ！！　私の神々しさにその腐った目を潰してやるわ。ちょっと待ってなさい！！」
「うわああうわあああ！！　主よそれは待ってください！！　冷静に！　一度冷静に！！　貴様も主を焚き付けるな！」
「？　何でそんなに慌ててるんだよ。まさか本当にそいつの神々しさで目がつぶれるとか？　あり得ないぞ」

バカバカしい。けど、その必死ぶりはなんだか意外で案外面白い奴なんだなってわかったよ。リルフィンへの新しい印象だ。
ここ数時間でいろんな面を見せてくれた。

「あ～言ったな。私の神々しさを侮るなよ！！」
「主よ！　だからそれは行けません！！」

そう言って慌ててリルフィンは駆けだした。そして布が床まで垂れてる所に回り込んで行くと、なにやらドタバタとした音が響く。なるほど、あそこに居たのか。

「ちょっとフィンフィンアンタ主に逆らう気？」
「逆らう訳ではありません！　ただ冷静になって欲しいだけです！　アナタはこの街を……そしてその立場を背負ってるんです！」

なんだか苦労してるみたいだな。そんなことを思ってると、いつの間にか騒がしい音は消えていた。そしてリルフィンが再び姿を表す。なんだかローブに一杯引っ張られたような跡が残ってるな。

ギロリ――とまさに鬼気とした表情で僕を睨むリルフィン。確かに迷惑掛けたとは思うけど……だってアイツがね……そもそも何で姿見せないんだよ？　今更隠す事じゃないだろ。シルクちゃんとかテッケンさんとかは見たことあるんだろ？

「ええ、まあそうですね」

なんだか歯切れの悪い言い方。公に口外したらいけない事にでも成ってるのか？　そんな事を思ってると、再びあの女の声が響く。

「ふん、わかったわよ。私は代表だから大人な対応取れちゃうもんね。ふふ、じゃあ早速、本題にでも移ろうか？」

そう言って姫御子の方からパチンと音が鳴った。すると天井に張られてる布がゆっくりと降りてくる。そしてその中には二つの小さな体がくるまってた。

星の声を聞く者（後書き）

第三百一話です。
遂に姫御子登場！！　って思ったけど、実際姿は出てないですね。まあそこにはきっと何か理由があるんでしょう。てか、想像してた人物像と随分違ったらごめんなさい。
まあだけど、最初はこのくらい軽い方が打ち解けやすかったりね……いや、ホントは書いてる内に何故かこんなキャラに。全然神々しくないですね。まあだけど姫御子もこれからだし、いつか格好良い所を見せてくれるのを期待しててください。
てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

共闘成立？（前書き）

とにかく姫御子はバカだった。それに尽きると僕は思う。頭悪いし、自己中だしムカつくし。ついでに最後にここに居ること事態自分の為だと言ってのけるし、本当に何でこいつがバランス崩しに選ばれて、リア・レーゼって言う歴史ある街の御子になってるんだろう？

幾ら考えったてわからないよ。まあ取り合えず、こんな馬バカでもご機嫌を取らないといけないよな。僕とアイツは相性悪いみたいで上手くいくかはわからないけど。

共闘成立？

天井から降りてきた布。そこにはミセス・アンダーソンとクリエが包まれていた。そしてやっぱり二人は未だ、その瞼を堅く閉じてる。

「クリエに、アンダーソン……何かしたのか？」

僕達は二人の包まれてる所まで駆けて、息をしてるか確認。僅かだけどスゥスゥとした吐息が漏れてるのがわかる。一安心だな。

流石にこれだけ眠ってると、不意に死んでるんじゃないか？　って思うことがあるからついついこんな事をしちゃう。

それにまだまだ目的のわからないリア・レーゼの奴らに連れて行かれたっ切りだったしさ。無事かどうか不安だったんだ。

「何かってまぁ、色々と調べさせてもらったわ。だって気になるじゃない。アンダーソンのおばちゃまは友達として、そしてその子は……単純に興味本位でかな？」

なんだかこれまでのガキっぽいキンキンとした声じゃなく、どこかに含みを持たせたような声を出してそう言う姫御子。興味本位って……

「アンタは、面白半分でこの状況を見てるのかよ。クリエは同じモブリだぞ。心配する気持ちは――」

「待ちたまえスオウ君！」

僕が言葉を言いきる前に強引にテッケンさんが僕の言葉を遮って

きた。そして僕に変わって姫御子へと言葉を掛ける。

「姫御子様、自分はテッケンです。彼の無礼な発言と態度はその子を思う余りの事なんです。どうか寛大な心でお許しを。

所で、今調べたと……アナタ様の力なら、何かおわかりに成ったのでは？」

「ん～まぁ、テツがそういうならそこのクソ生意気で印象最悪のバカでも辛うじてここに居ること我慢してあげるわ。

そうね、まあ私って大抵、メッチャスゴいからわからない事ってそうそう無いのよね。何たって星詠みの御子だもの」

うぜっ――と僕は心の中で呟いたよ。流石に口に出さなかったのはこいつがアホだから、直ぐに機嫌を損ねられても面倒だもん。

何かわかったのなら、そこら辺は聞いておきたいしな。

「それで分かったこと言うのは？」

「フィンフィンも来るね。私に色々と求めちゃうね。グイグイと私を求めすぎだよ。幾ら望まれたって私の体はひ・と・つ・だけ！」

「ウゼ……」

今ウゼッって言ったぞ。おい、こちら側じゃなく向こう側の忠誠誓ってそうな奴までウゼって……僕と同じ気持ちを口に出したよ！

まあ今のは本気でウザかったと思う。リルフィン君も大変だね。

「ちょっと今聞き捨て成らない声が聞こえたわよ？　何？　ウザッ言った？　酷い！　私主なのに！　あ～あ、なんだか教えたくなく成っちゃったな。今日はこれで解散でよろしく。さっさと出てけそこのウジ虫共」

そう言うと卸してくれてたクリエとミセス・アンダーソンが再び

布にくるまれて天井目指して上昇を始めた。
「おいおいおいおい！！　待て待て待て待て！！　このまま帰れるか！　ちゃんと説明しろよ！！」
何いきなり機嫌を損ねて終わりにしようとしてるんだ！　許されるかそんなこと！！
「そうです！　教えてください！！」
「シルクちゃん」
僕に続いてシルクちゃんもそう言ってくれる。やっぱりシルクちゃんは最高だ。いつだって僕の天使だね。
「そう……教えてください！　あの布って普通じゃないですよね？　何で出来てるんですか？　気になります！！」
ズゴーーーーだよ！！　てかシルクちゃんにガッカリしたの初めてだ。もしかしてさっきからずっとクリエの側に居てサワサワしてたのはその布に関心があったからかよ。
「も、勿論クリエちゃんもミセス・アンダーソンさんも心配ですよ。だけどあんな肌触りの布初めてなんです。裁縫もやる身としては気になります」
可愛い顔して自分の気持ちを貫こうとするその思いは流石だよ。だけどそれは後で一段落着いた後でお願いしたかった。
てか、いつものシルクちゃんなら勿論そうするんだろうけど、それだけシルクちゃんも興奮してるって事かな？　僕とは違う意味合いでさ。僕は姫御子の言動とかにかなりイライラして興奮してる訳

だけど、シルクちゃんはこの天井に張り巡らされてる特殊な布に興奮を覚えてる訳だ。

「ふふ……そう、まあ答えてあげなくも無いわよ」

どこかで機嫌が戻ったのか、含み笑いと共にそんな事を言う姫御子。てか、姿を見せないの不便なんだけど、さっきから声が聞こえる方向が微妙に変わってる気もするし……そもそも失礼だろ。まあこの姫御子様は、そんな事微塵も感じそうに無いけど。

上に立つ人ほど、他者を立てれる人だと思ってました。まあそれこそ人それぞれって訳だろうけどさ。少しはアイリを見習えよ。

あの人は偉ぶりもしないし、腰も相当低いよ。だけどそんな彼女をエルフの人達は「支えてあげたい！！」って思ってると思うんだ。だから今のアルテミナスは一枚岩みたいな強固さを誇ると思う。

それに比べてここの姫ときたら……

「アンタが私にひれ伏すと言うのならねシルク！！　私のアドバンテージを悉く奪おうとするなんて、私はその無邪気な笑顔には騙されないわよ！！」

「ほえ？」

ダメだこの姫。尊敬できる部分が一個もない。実際今まであった長くＬＲＯやってる人達には流石って思う部分が一つはあったものだけど、コイツには皆無だな。

ＬＲＯで大冒険を繰り広げてたからか、大抵の人は誰かに優しく出来たり、なんだか人間的に大きくなったりしたりする筈なのに、この姫御子ってそう言う要素を感じれない。

よくもまあ姫御子なんてやってるな。バランス崩しも選ぶプレイヤー間違えたんじゃないの？　そう思わざる得ない。てか、コイツが反応したの僕じゃなく、シルクちゃんだし。

どっちが重要だと思ってるんだ！　クリエの事はリア・レーゼにとっても重要な事だろ。自分の感情だけでないがしろにし過ぎ……良いのかよ星詠みの御子として。

「ちょっと、何勝手な言いがかり付けてるのよ！　シルク様がそんな事をするはず無いじゃない。さっきから聞いてれば、そこのバカと同じような低脳さでこの人を虐めるのなら焼き払うわよ！」
「うわあああああああ！　ちょっとセラ様！　それは幾らなんでも暴言っすよ！」

おいおい、フォローに入るのは良いけど、ノウイの奴僕と姫御子が低脳呼ばわりされた事は全然否定しないのな！　そこにもフォローが欲しかった。てか、尊敬とかしてたんじゃないのかセラの奴。
こいつのブランドに女子二人して感心してたじゃないか。手のひら返しだな。まあそれほどに、シルクちゃんが優先って事か。

「あらら、どこのデカ女が無理な格好してるのかと思えば、クス……そんな古くさいメイド服着てたら五歳は老けて見えるわよ」

その瞬間、セラの体が何にも貫かれてない筈なのに、まるで攻撃を受けたかの様に反り返って後ろに倒れた。

「セラ様ぁあああぁぁぁ

死亡フラグなんて立ってなかったよ。

「みんな……」

なんだか掠れた様な声でそう言ってるセラが、チラリとこちらに視線を寄越す。なんだ？　僕にまで加われってか？　まっぴら御免被る。だけどみんなして僕を見てくるから言わなくちゃ行けない雰囲気に。

「……その、確かに古くさいデザインだよな」

その瞬間細長い針が僕の足にサクッと突き刺さる。お得意の暗器か！？　この全身武器庫みたいな女、危なすぎる。

「お前な！」

「言ってみなさいよ。このメイド服のどこが古くさいって？」

くっそ、やっぱり元気じゃねーか。僕を威圧する目はいつものそれと大差ない。てか、いつもより迫力あるぞ。

「く……じゃあ言うけど、まず色が黒と白っていかにも過ぎるし、デザインだって十六世紀かよって感じの物だ。それじゃあリアルと大差ないって言うか……ここはＬＲＯなんだからＬＲＯらしさが欲しいよな。

それに一番の原因はお前の色が強すぎると思うんだ。他の大多数の侍従隊はそれでも良いけど、セラにはちょっと物足りないって言うか。

似合っちゃいるけど……なんだか服が負けてる気がする。お前の雰囲気に」

「……ねぇ、それを聞いて私は怒ればいいの？　照れればいいの？

どっち？」

なんだか困惑してるセラ。なんだその反応、僕が折角よく分からないファッションの素直な感想を述べたのに受け取る側がそんなんじゃ、真面目に答えた事が恥ずかしくなるだろ。

「つまりスオウ君が言いたいのは、メイド服は大好きだけど、このメイド服じゃセラちゃんに萌え萌え出来ないと？」

「あれれ～なんだか今初めてシルクちゃんにイラッと来たぞ～」

何無邪気な顔して誤解を招く様な解釈を垂れ流してくれてるんだよこの子は！　そんな事誰が言った！？　萌え萌え？　セラに？　吐き気がする。その成分はシルクちゃんで補ってるんでセラにそんな期待してません。

「萌え萌えって……アンタ私に何をさせたいわけ？　いっとくけどメイド服はそんな感情を与える為の物じゃないんだからね！」

なんで体を両腕でガードしながら言うの？　まるで今も僕がそんな目でセラのメイド服を見てるみたいじゃないか。そんな事断じて無いからな！

「知らなかったよ。スオウ君がメイド服にそんなに拘りがあったなんて……」

「え？」

「俺は武器にしか興味はないが、お前のメイド服への情熱は変わらない物があるように感じた。突き進め、誰になんと言われようとだ。そしたら必ず、道がある」

「え？」

「スオウ君はズルいっすよ！　興味のない振りをしておいて、土壇

場でそんな情熱を晒すなんて……やっぱりギャップすか！？　それ狙いっすか？」
「ごめん、お前の言ってる事はマジで理解できない」
てか、なんかみんなの僕を見る目が変わってる気がする！！　なんでだよ！　絶対におかしいよ。みんな誤解してるんだよ！　僕はメイド服にそんな情熱持ってないし！　だけど弁解する前に止めと言わんばかりに、カリスマが僕の言葉に同調した。
「スオウだっけ？　アンタの事……ちょっと誤解してたわ。私が言いたいこと、全部言ってくれたわね。その見極める目と、メイド服に対する情熱……装飾を手がける者として尊敬に値するわ」
そんな姫御子の言葉にこの場の雰囲気が変わった。なんだか朗らかになったような……「まさか彼女に認められるなんて」みたいな空気。
いろんないざこざがどうでもよくなって、ようやく互いに素直になれた……そんな雰囲気。だけど僕は心の中でこう叫んでたよ。
（てめぇら、絶対僕を苛めてるだろ！！）
ってさ。
「え～と、私たちって何やってるんだっけ？」
「思い出させてやるから面だせオイ」
僕はおちゃらけた感じでそういう姫御子に額の筋をピクピクさせながらそう言ってやる。だけどどうやら、僕をからかって熱が収ま

ったのか、姫御子は今度はそれなりに冷静だった。
「主よそれは……」
「分かってるって。それよりも気付いたけど、これって流石に失礼じゃないかしら？　てか、全く見えないって私の威厳がちっとも感じられないからイヤね」

そう言うと再び指パッチンする姫御子。すると今度は天井に張られてた布が部屋を分断するように降りてきたよ。そしてその薄い布の向こうに小さな陰が見えた。

「これなら良いでしょう？　ほらほら、時代劇なんかで、えら～い人が顔を見せないようにするアレを参考にしてみたの」

そう言ってシルエットの姫御子が指を立ててエッヘンと胸を張ってる。まあ顔は見えないけど、色々とその動きは分かるな。やっぱり姫御子にふさわしくないバカっぽさを感じる。

「まあ、これなら……主も一通りの気が済んだでしょうし、そろそろ本題へ」
「分かってるわよ。ちゃんと行こうとしてました。ほんとフィンフィンって＊＊にしては口うるさい」

？　今なんて言った？　なんだか聞き取れない部分があったような？　よく分からないけど、取り合えずリルフィンがフィンフィンって混乱するから辞めてほしい。てかただでさえリルフィンって名前、奴に合ってなくね？　とか、思ってたのにフィンフィンって……パンダかよ。
頭の中で檻の向こうで笹を持ってるリルフィンを想像したらなんだか吹き出しそうでした。ちょっと気が晴れたかも。

「なんだ？」
「何でも……いいから本題へ移ろうぜ姫御子様」
いぶかしげな視線を向けて来るリルフィン。僕は必死に笑いを堪えて、姫さんに話を進めて貰うよ。
「ねえ、アンタの口から姫御子様なんて言われるの気持ち悪いからやめてくれない。なんだか尊敬されてる気分にならない」
だろうね。バカにしつつ言ってるもん。てか、またどうでも良いところへ話を持って行きやがって、とことん紆余曲折させる気か？
たく、バカでめんどい女なんて最悪だな。
「じゃあ、なんて呼べば良いんだよ。僕はお前の名前なんて知らないぞ」
「そうね……まっ、スッゴく不本意だけどしょうがない。教えてあげる。その耳クソしか溜まってない様な耳の穴を綺麗にしてよく聞きなさいよね。
私、星詠みの御子の名前を告げてあげる。『ローラン・レーゼ』だから『ローレ』と呼びなさい。それを許したげるわ」
レーゼ？　なんで無駄に意味のない名字なんて付けたがる奴がＬＲＯにはいるかな？　とか思ったけど、もしかしてレーゼってリア・レーゼのレーゼか？
そう言えばアイリもアルテミナスが入ってたな。国や街の代表になると、自動的にそうなるのかな？　そんなことを考えながら、僕は同時になんだかイメージと違うと思ったから、こんな事をポツリと呟いた。
「はぁ、バッカニアとかじゃないのか。普通過ぎてつまらん」

「アンタ、私が女の子だって認めたくない訳？　まさか名前にダメだしされたのは初めてよ。生憎、私はローレ。それが気に入ってるから変更する気はないわ。
まあどうしてもそう呼びたいのなら何だって良いけど」

良いんだ。そこはもっと食いつて来るものだと思ってた。気に入ってるんなら尚更。

「お互いにしか通じない呼び方ってのもある意味特別な感じで良いじゃない。そうやって私を特別視したいんでしょう？　わかるわかる」

なんだか、変な解釈して満足してるぞあのバカ。何が特別視だ。僕の中での評価は著しく低いんだけどな。ほんとなんでこんな奴がバランス崩しを持ってて、リア・レーゼの代表なのかわからない。
今の所、天地がひっくり返ってもきっとわかんないだろうな。

「はいはい、んじゃバッカバッカと特別な呼び名を僕の中で付けたから文句言うなよ」
「ちょ！？　アンタそれバッカニアじゃないじゃない！」
「いや、バッカバッカは繰り返すのが好きそうだったんで、好みに合わせるという配慮をだな――」

だってフィンフィンだってそうだしね。僕は意外と気が利く男なのだぞ。感謝してほしいくらい。だけど僕のそんな気遣いのどこが気に入らないのか、姫御子は声を荒くこう言った。

「いらないわよそんな配慮！　アンタやっぱり私をバカにしたいだけじゃない！　言っとくけど、星詠みの御子になってここまで私に無礼な態度とった奴はアンタが初めてよ！！」

「……それは……照れるな」

そんな息巻いて興奮しながら言われるとこっちまで照れちゃうじゃないか。

「褒めてねーよ！！　立場を考えろやボケ！！　もう一度牢にぶち込むぞオラアア！！」

ヤバいな。彼女の星詠みの御子としての威厳が今まさに崩壊中だ。まったく女の子がボケやらオラやら、上品さに欠けるぞ。ましてや一応姫御子なのに……さっきから布越しに見えてる小さな姿がかなり近寄ってきて、人差し指を立てると共にファッキューファッキューしてる。

流石にこれでもかと言うくらいにからかいすぎたか。こっちもやられたからやり返したくなったんだけど、またご機嫌斜めになってしまったかも知れない。

「たく、特別な呼び方で良いって言ったくせに……」

「ふふはは……アンタには一度私の威光を見せつける必要がありそうね。取り合えずバッカバッカなんて禁止よ！　絶対に禁止！　アンタは『ローレ』と呼ぶ事！　てか、ローレとしか呼ぶな！　ここでのアンタの義務だからな！」

「ローレね……まっ、義務ならしょうがない」

渋々納得しといてやろう。リア・レーゼで何故か義務が追加された僕だった。

「たく、主も貴様も悪ふざけが過ぎます。話が全然前に進まない。少しは真面目に行ってください」

「「だってこいつが」」

二人して同時に互いを指さすと、そんな様子を見て大きくため息を吐くリルフィン。そして僕の首に腕を回して強引に引きずって後方へ。

「おい！　ちょっ……苦しい……」

「貴様、主に協力を仰ぐ気あるのか？　あの方はああ見えて、この街の全権を握ってる。あの方が敵に回ると言うことは貴様たちの終わりだぞ。

もう少し賢く生きろ人間。それと一番大事な事を言っておこう。これ以上主をバカにするのなら貴様の命を散らす。わかったな？」

キラリと光る細い銀色の毛が、僕の喉元に硬質化して突きつけられてる。こいつ本気だ。そう感じました。てか、最初の方なんていらなくて、こいつの本心は後半部分だけじゃん。

我慢ならなかったって事か……まあこれ以上ないって位に無礼だったしな。しょうがないから反省しよう。殺されたくないし。

僕はコクコクと無言で頷くよ。なんとか解放された僕はペタペタと床を踏んで再びローレの前へ。

「ローレ、僕達にはやるべき事がある。わかってると思うけど、クリエの事とかだ。だから協力してほしい！」

僕は綺麗なお辞儀を心を込めてやりました。

「アンタ……またいきなりね。今までの態度から良くその言葉を言える神経がスゴいわ」

なんだか呆れられた？　まあ当然かも知れないけど、それじゃあ困る。

「ローレ、これはリア・レーゼにだって関係があることだ！」
「関係って、アンタ達がイザコザを持ち込んだ様な物だけどね。やっぱり星詠みで観たリア・レーゼに災厄をもたらす存在はきっとアンタ達よ」

う……そういえば飛空挺で相対した時、リルフィンがそんな事を言ってたな。それってやっぱり僕らなのかよ。だけどここに頼る意外なかったんだ。僕達の道はここに示されてた訳だからな。

「まあでも……その先はわからないのよね。このままじゃリア・レーゼには危機が訪れるでしょう。だけどその先にここが滅ぶかどうかはわからない。久しぶりに、私でもわからない。ねぇ、それってワクワクしない？」
「まるで今までは未来の全てが見えてた様な言い方だな」

僕がそんな事を言うと、ローレは至極当然みたいにこう言った。

「見えてたわよ。私には未来が見える。星が観る未来を私は詠める。だから星詠みの御子なの。だけどそれってつまらなくない？　未来はわからないから信じて行けるのにね。
だから今、私はとっても興奮気味。さっきの言い合いとか、テンション高くないと私しないわよ。ぶっちゃけるとリア・レーゼとかＬＲＯとかじゃなく、私は私自身がどうなるのかこの世界での顛末を見届けたいわ。
そのために未だここに居るような物だしね。だから協力はしないわ。利用はする。それで良いでしょう？」

いつのまか用意してたのか知らない、床に直接置くタイプの椅子に腰掛けてローレが告げる。十分だ。ここにいて、自由に動くこと

を許されるなら、それだけで良い。僕は笑みをもらしながらこう返す。

「十分だ」

共闘成立？（後書き）

第三百二話です。
なんだか最近会話を書くのが楽しくて話が進まない状況が続いてるかも。あんまり話数を稼ぐ気もないんだけど、ついつい脱線しちゃうよね。しかもそれがローレなら尚更そんな傾向が強いかも。
まあだけど少しづつは進んでるし、次ではないがしろにされたクリエとかを絡ませます。
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

話の筋を通せ（前書き）

僕達とローレの会話は、もう何と言うか紆余曲折の果てを極めてる。奴が無駄に僕達に爆弾を投下するから、話が横道にそれて、なかなか本題が進まない。今回だっていきなりシルクちゃんが嫌いだとかなんとか……その情報は得てたけど、思い出すのが突然なんだよ。

しかもその理由が聞くまでもないし……だけど最後にはとりあえずこれからの為になる事をローレは提案してくれた。

話の筋を通せ

先を観ることが出来ると言い切ったローレ。それが本当かどうか、僕にはわからない。だけど幾らＬＲＯだからって……ってのはある。

前にちょっと未来が観れるかも知れないアイテムが話題になったけどさ、それも結局ピクだったし……実際未来を観る事なんか出来る物なのかなぁと疑う事が先行するよ。

だけど自分の顛末を知りたいと言ったローレの声は、今までのバカッぽさとかは無くて、寧ろどこか達観してるような感じを受けた。

それにこいつが星詠みの御子と呼ばれてるのは本当だし、その評判だってきっと悪くないんだろう。それはリルフィンみたいな、頭堅そうだけど忠実そうな部下が居ることで何となくわかるよ。

まあだけどそれはＮＰＣ達の評価って気もする。ようは定められた立場とでも言うのかな？　ＮＰＣはその立場になったローレを無条件で指示するようなさ……本当に星詠みで未来が見える事を証明するなら、プレイヤーを相手にしてくれないとね。

疑えば切りがない事……でも今重要なのは、ローレに未来が見える見えないじゃなく、僕達を受け入れてこれからをどうするかって事だ。

まあ、ここまで招いたって事は、僕達を受け入れてくれたと観ても良いはずだよね。散々言い合ったけど、ある意味あれで、打ち解けれたと思うんだ。

「まあ一歩間違えば打ち首決定だったけど……でも既に災厄の元凶たるアンタ達はここに居ちゃうわけだし、色々と手遅れなわけ。

てか、飛空挺でドンパチやってる時には腹決めてたのよ。ああ、面白くなりそうだなって」

「何に対して腹を決めたんだそれ？」

ボケか？　また話を逸らそうとしてるんだな。だけど生憎、流石に僕も話を進めたいから横道には逸れないぞ。天井に掛かってる布が光を受けて僕達の居るところをそのとりどりの色で淡く照らしてる。

それに気づいたけど、なんだか鼻を擽るような不思議な香りもしてる。そんな中、僕達は布越しにローレと向き合い、話をしてるよ。

「まあそこまで言うのなら、いざって言うときはサン・ジェルクと事を構える事も辞さないって事でいいのか？　実際あいつ等、正攻法でクリエを渡さなかったら、きっと実力行使でくるぞ。それだけ元老院はクリエを……いや、あいつが持ってるっていう神の力を欲してる」

「神の力ね……」

そういって再び指を鳴らすと上へ上がってたクリエとミセス・アンダーソンが降りてきた。そこには互いに堅く目を閉じる二人の小さな姿が上等そうな布に包まれてる。

「その小さな子が二人の神の力を宿してるって話よね？」

「ああ、そうらしいな」

僕達は実際、その力がどんな物か、まだ体験してないけどな。ノエインが見せてくれた映像だけ。てか、思ったけどさ――

「ローレはクリエの事知らなかったのか？　まがいなりにもリア・レーゼの代表トップだろ？」

「まがなりって言葉は余計だけど、まあ私はここのトップよ。それは間違いなく絶対ね。そんな私が何の話も聞いたことない……なんて事ある分けないでしょ。

神の力を宿してるって所を知らなかっただけよ。元老院共が幼女を怪しい実験体にしてるって話は前からあったしね」

幼女を怪しい実験体にって……そこだけ抜き出すとどうしようもない犯罪者集団だな元老院。その噂を流すだけで結構なダメージになりそうな言葉だよ。

だけど実際これが間違っちゃいないから元老院は結局犯罪者集団か。幼女を拉致監禁した集団って事をもっと世間にアピールするべきだな。

「そんな事言ったって、もみ消すわよ。そんなの簡単。宗教ってある意味、とっても怖いのよ。その言葉を絶対にしてるんだから、偉い奴らが自分の存在を吐き違えるのも無理ないと思うわ」

そう言って椅子に座って肩をあげて呆れた動作をするローレ。吐き違える……ね。

「じゃあ、ローレはどうなんだよ？　ここでは元老院と変わらないんだろ？　吐き違えたりするのか？」

「そうね。アンタ達もここがどこにあるか観てきたでしょ？　雲の更に上、宇宙と星の狭間とでも言うのかしら、そんな場所。

あの場所から下を見下ろしてたら、そりゃあ吐き違えもするわよ。私は良く一人で見下ろしながら『ゴミ虫共が今日も私を崇めなさい』とか『私は神だ！！』とか叫んでるわよ」

「やってるのかよ」

まあ確かにあの光景を見れる立場に居るって考えるだけでも自然と笑みがこぼれそうだよな。あれはそれだけの光景だった。あんな所から見下ろしてたら確かに吐き違えるかな？　そんな気がしてくる。

地位って奴はあの光景と同じって事なんだろう。最初は感動出来るけど、見続けて馴れちゃうと違う物が出てくる……みたいな。

「だけど私はそれで終わらせてるから。ある意味そんな事を叫んで優越感に浸るだけで私は満足できるから可愛いものよ。

だけど元老院のジジイ共は違うんでしょうね。アイツ等は自分達をより神に近い存在にしたいらしいから」

「神に近い存在？　それの為にクリエを使うのか？」

神に近い存在って言っても漠然とし過ぎてる様な気がするけどな。何を持って神に近づいたとするんだろうか？　普通は信仰の教示を守る事で少しでも神に近づこうするものなんだろうけど……奴らがそんな一般論で満足出来るとは到底思えない。

神に近づく……奴らはそれを、神の力を手に入れることでそうしようとしてるのかも知れない。悪役が考えそうな事と言ったら、僕にはそんな事くらいしか思いつかないな。

だからこそ、クリエに固執してるとも取れるしさ。どうだろうか？

「それの答えを私は持ってないわね。未来を観るのも万能じゃないし、特に今は観たくても観れない状況だしね。本当に神に近づく方法を奴らが知り得てるとしたら、この子をこのままにして置くはずがないわよね。

というか、既にサン・ジェルク側から再三の命令が来てるわ。リア・レーゼに凶悪犯とそれに連れ去られた二名を確保次第送り返せって」

「それで、リア・レーゼの対応はどうするんだよ。僕達を庇ったのはバトルシップの奴らが観てるし、その気になれば乗り込んで来るぞ」

やっぱりバトルシップを逃がさずに撃ち落としておくべきだった

んだよな。そうすればまだリア・レーゼは言い訳出来た筈だ。
僕達を庇った事を見られたって事は、あれが意図的かどうか教えた様な物だ。

「大丈夫よ。取り合えずその凶悪犯とやらはずっと捜索中で通してるし、あの時バトルシップに砲を向けたのだってちゃんと言い訳はあるわ。ねぇフィンフィン」

そう言って話を振られたリルフィンがその怪しいローブに包まれた中の口を動かす。

「ええ、リア・レーゼが砲を向けたのは自分の為……そう言う事になってる。決してお前達を庇った訳では無いということだ」
「なるほどね。色々と考えてるんだな意外と」

バカの筈なのに。

「まあだからしばらくは正攻法で通せるけど、奴らはアンタ達がここに入った事は知ってるんだし、その内何かしら手を打ってくるでしょうね。その先兵をまずは駆除した訳だし……てか、ここのサン・ジェルク側の要人が何度も何度も謁見を求めてきてうざいったら無いわ」

そう言って首を左右に振って、肩を回すローレ。年行ってる人みたいだぞ。実際いくつなのかは知らないけど、そこまで年行ってる訳じゃないだろ。
まあ代表とか確かに肩が懲りそうな事ではあるよな。そんな事を考えてると、可愛らしい声と共に元気な手が挙がった。

「はいはい！　すみませんえっと……ローレ様。今言った先兵って

私たちを案内したモブリですよね？　確か飛んで行っちゃったけどあれで良いんですか？」
「……」
「あれ？　ローレ様？」

シルクちゃんの言葉を完全無視なローレ。あからさまな虐めだな。

「おい、無視するなよ。可愛そうだろ」
「ふん、よくよく考えたら私シルクの事好きじゃないのよね。ちょっと前に油断して会話したのを無かった事にしたいくらい。あのままスルーしてればこんな事言わずに済んだんだけど『誰かの為に～』ってその姿勢がなんだか嘘っぽくて。
嘘っぽいのはまだ良いけど、それをヘラヘラとやるのがムカつくわね」

スゲー言いがかりつける奴も居たものだ。どんだけ偏見もってシルクちゃんを見てるんだよこいつ。まあ、陰で言わずに本人を前に堂々と言えるのはある意味清々しいけど。言われた方はたまったものじゃないね。
実際シルクちゃん凹んでるし。

「ご、ごめんなさい。私は知らずにローレ様を不快な気分にさせちゃってたんですね……」

瞳を赤くして唇を噛みしめる様が可愛すぎるシルクちゃん。くっそ、シルクちゃんは全然悪くないのに、こんな表情をさせるローレは最低だな。

「またそうやって良い子ちゃんぶっちゃって、そこが一番嫌い。こんな理不尽に嫌われてムカつかないわけ？　言い返す位してみなさ

いよ。それともやっぱりいつもと同じように取り巻きの男共に庇って貰う？
良いわよね。アンタを好きになる男は腐る程沸くんだから」

そう言って僕やテッケンさんに「アンタ達の事よ」とか顎で言われた。ヒド！　こいつバカなだけじゃなく性悪でもあったらしい。
本当に救いようがないな。僕達は沸いたのか……虫扱いかよ。

「私は……そんな……」

そう言って俯いてしまったシルクちゃん。なんて可愛そうなんだ。実際シルクちゃん何も悪くないし。ただムカつくからってこれはヒドいぞ。

「お前な、自分の性格が捻り曲がってるからって純真なシルクちゃんに当たるのはやめろよな。見苦しいぞ。てか、そう言う性格が男受けしないんだよ。気付け」
「黙ってろこのシルク信者が！！」

うお！？　なんと言う噛みつき方。やばいよコイツ、狂犬だよ。てか僕達はシルクちゃん派と認識されてるから何言ってもダメみたいだな。

「なら私が出てあげるわ。私、ああ言う自分が一番じゃないと気に入らない女が、この世で二番目に嫌いなの」
「へぇ～、じゃあ一番目は何なんだよ」
「そんなの決まってるでしょう。一番目は私の大切な人達をバカにする奴よ！！　つまりそこのチビグゾモブリは私の大嫌いなワン・ツーね！」

おいおい、セラの奴かなり切れてるぞ。どう考えても僕達とローレは相性悪い。てか、ローレの野郎が色々と爆弾を投下するから、こっちの印象が悪くなる一方だよ。利用はしてやるけど、仲良くはする気が全くないよな。

「ふん、等身が高いだけで偉いとか勘違いしちゃってるアバズレメイド何を言うかと思えば……アンタ達にはそこの女に受けた私の恥辱はわからないわよ！」

そう言ってビシっとシルクちゃんを指さすローレ。一体二人にどんな因縁が？　シルクちゃんはそう言われても心当たりが無いのか、困惑気味です。

てか、アバズレって……随分古い語句を出してきたな。死語だろそれ。まあ言われたセラは怒ってるから効果は高かったみたいだけど……

「アバっ……メイド服が古くさいとかアバズレとか、アンタがリア・レーゼの代表じゃなかったら暗殺する所だわ。というか、せいぜい寝首を掛かれない様に注意した方が良いわよ。

シルク様に何されたのか知らないけど、アンタの性格から考えてそんなの勝手な被害妄想でしょどうせ」

うぁ、確かにそれは大いにあり得る。そんな気がする。流石セラ、なかなか鋭いな。キレてても冷静に相手の事を分析してるぞ。

シルクちゃんが誰かを不快にさせるなんて早々ないんだし、どうせこの可愛らしさに勝手にキレてるだけだろ。そもそもシルクちゃんを嫌い続けてる理由が幼稚だし、きっとくだらない事を根に持ってるんだろうなって思う。

「ふん、アバズレメイドの分際に私が倒せるとでも？　一瞬でその

存在消すわよ。それに何も知らないくせに被害妄想とか勝手に決めつけないでくれる。
ただの被害妄想でも私のプライドはズタズタにされたのよ」

おい、今ローレの奴、被害妄想だって認めたぞ。やっぱりそうかよ。僕達の呆れた様な目が輪郭しか見えないローレに集中する。だけど向こうからは僕達の表情は見えてないのか、意気揚々とその時の自分の屈辱（被害妄想）を語ろうとするローレ。

「あの時の私は――」
「はいはい、やっぱりただの被害妄想お疲れ様っした～。きっと全然気にしなくて良いレベルだからシルクちゃんは普通に振る舞って良いと思うよ」

僕はローレの語りを華麗に遮って落ち込んでるシルクちゃんを元気付けます。どう考えてもこれが正しい対処方だろ。

「こらあああ！！　ここからがシルクを悪者にしていく為に重要な部分でしょうが！　ちゃんと聞け！」
「既にその言葉が浅はかだと気付けよローレ。それに被害妄想だってわかったし、きっと聞いても何の印象の変化はない。これ決定事項な。
それよりもさっさと話戻して、さっきのシルクちゃんの質問にちゃんと答えろよ。ローレみたいな奴でも、一応ここの代表（ブブ）だろ？
（お気の毒なことにさ）」
「なんだか所々に聞こえてはいけない言葉が混じってる気がしたわ」
「気のせいだろ」

僕は爽やかにそう返してやるよ。ホント、自分をバカにする言葉には地獄耳だな。脳の変な部分が反応してるよ。敏感になりすぎだ。

だけど僕らが全員呆れて総スルーを決め込んでたのに、ローレの言葉を待つ心優しい子が一人。

「言ってくださいローレ様。私はどうやってローレ様を傷つけたんですか？　それを知っとかないと私はどこかで、ローレ様と同じ様な痛みを作ってしまうかも知れません」

わざわざモブリと視線の高さを合わせるように腰を下ろしたシルクちゃんがそう言って嘆願してる。ヤバいよこの子。僕達には余りの神々しさに後光が見える。なんて良い子！！　それに比べてここの代表と来たら――

「良い心がけね。ふふ……それじゃあよく聞きなさいよ。自分の否をその胸に刻んで私を敬い敬意を払う……こと……を……」

なんだか言葉が途切れ途切れになってくローレ。どうしたんだ一体？　折角何も悪くない筈のシルクちゃんが聞くと言ってるから、こっちもしょうがなく止めないのに、さっさと言えよそのくだらない被害妄想を。

どうせみんながローレに呆れ返るだけだろ。そしてシルクちゃんの株は上昇だ。どうせそうなるから――とか思ってたら、ローレの奴はまたアッサリとこう言った。

「――やっぱ言わない。なんだかシルクに懇願されて言うなんてちょっと違うって言うか。そもそもこんな雰囲気じゃ言いたくない。それにシルクにはこのまま悶々とさせてた方が良いかもだし」

何という腹黒。ヤバいよコイツ、こんな奴をリア・レーゼは崇めてていいのか？　今すぐに暴動を起こしてギロチンにでも処した方がいいよ絶対に。そのうちきっと「パンがなくても私を崇めるだけ

でいいじゃない」とか訳のわからない事を言いそうだ。
ここまで人として尊敬できない奴、初めてだ。どうせ言いたくなくなったのも、自分の小ささに気づいたからだろ。それかくだらなさを自覚したか……まあ味方も当然出来ないだろうし、取り止めたか。
だってさっきから今ここでの唯一の信者のリルフィンでさえも関係ない振りで通してたもん。

「そんな……私のどこが気に入らないんですか？」
「だから言わないっての！　アンタはずっと私に嫌われてる事に思い悩んで、ここでの肩身の狭さに苦しむといいわ」

そう言って高笑いを始めるローレ。僕は「こいつどうにかしろよ」的な目をリルフィンに向けてみた。すると何故か彼は背を向けて天井を仰いだよ。それがどういう事だったのか、僕にはよくわからなかった。

「もう良いですよシルク様。全然気にする事なんか無いんです。あんなの存在を消してしまいましょう。プレイヤーじゃなくＮＰＣだと思って接しましょう。
それなら仕方ないで済みますよ。あの痛さも多少は仕様だからしょうがないで済みます」

スッゴいばっさりとローレの存在を切り捨ててるセラ。確かにそれは効率的だし、セラなら出来るだろうけど、どう考えてもシルクちゃんには無理だろ。ホント、そう思ってくれれば絶対に楽になるけど、シルクちゃんは臭い物に蓋をしようとはしないもん。
どうやったら受け入れられるか、それともその臭いの元を自分がどうやったら無くしてあげれるか考える子だよ。それは美徳だけど、何だって抱えるのはどうかと思うね。だって今回は別にシルクちゃ

ん自身は悪くないもんな。
勝手に向けられる敵意さえも自分のせいと思うのはよくないよ。体と言うか心がそんなの受け止めてたらキツいだろ。人はイヤな事でも忘れられるから生きていけるんだよ。
抱えすぎたら、壊れてしまう。それが心配だ。

「でも私は……」
「取り合えずその話は終わりにしようよ。今はこれからの事！　ここに居ればきっとその理不尽な評価だってその内覆せるかもだし……焦る事なんてない。
そもそも全ての人に好かれようなんて土台無理な話だしね。シルクちゃんは十分過ぎる人に好きになって貰えてると思うよ」

僕はシルクちゃんの頭に手を置いて優しくポンポンした。うん、スッゴいさらさらした銀髪がキラキラと指の間で輝いてる。何気にしたけど、なんだかドキドキするな。そんな風に思ってると、そのドキドキを見透かされたのか、セラに手を弾かれた。この野郎……僕達がシルクちゃんの頭上でにらみ合ってると、ポツリとこんな言葉が聞こえた。

「だけど私は……誰からも嫌われたくなんて……」

なんだか切実そうなその声に、僕とセラは思わず二人して目をしばらくあわせて見つめあっちゃったよ。僕達は二人ともシルクちゃんの事には真面目なんだ。
だけどそれで何かがわかるわけもない。僕達が何も言わずにいると、布越しのバカが再び口を開いた。

「さて、なんだっけ？　ああそうそう、フィンフィンが捨てたサン・ジェルク側の奴を野放しにして置いて良いのか？　だったかしら。

不本意だけど答えると、あそこは気流が複雑で下に落ちる事も出来ないから大丈夫よ。まだきっと回ってるわね。それに他の奴らには嘘の情報を流してるし、少しは時間稼ぎになるでしょう」

いきなり話に戻ったな。まあありがたいけど……そう言えばあそこは僕の体も持ち上げる風が吹いてたもんな。一人で抜けるには空でも飛べないと無理なんだろう。納得。

「まあサン・ジェルクが大々的に攻めてきたら、その時はその時でまた利用できる物を利用するだけよね。例えばそこのクリエだっけ？　とか」

「お前！」

僕は布にくるまれてるクリエを庇う様に立ち上がる。そんな事、させると思ってるのか。そんな事になったら僕達は敵だ。

「そんな怖い顔しないで欲しいわね。アンタ達にとってはその子が大事なんだろうけど、私はここを守る義務があるの。優先順位の違いよ。

私は神の力になんか興味ないしね。だってこれ以上神々しくなっても困るでしょ？」

何入ってるんだ？　コイツの神々しさなんて僕には一生理解できないと思う。

「まあだけど、そのまま寝かせとくのは利用価値が余りないのも事実なのよね。その子の今の状態じゃ保険として弱いというか……元老院が何を考えてるのか、知りたくはある。

それに興味はないけど、見てはみたいしね。神の力って奴を。だからアンタさっさとその子を起こしなさい」

「それが出来たら苦労しねぇよ！　箱庭から一緒に出た筈なのに、クリエだけ起きないんだよ」

僕は歯を食い締めてそう言うよ。だけどそんな僕の無念さなんてどこ吹く風。ローレはあっさりとこう言った。

「だから連れ帰って来なさいよ。その子はきっと迷ってるんでしょう箱庭から出る際にね。扉は開いてあげる……その子を担いで中腹の社に行きなさい。案内はつけてあげるから」

「連れ戻せるのか？」

僕は少しだけ震える声でそう聞いた。今初めてローレがまともに見える！

「それはアンタ次第。それとその子次第ね」

話の筋を通せ（後書き）

第三百三話です。

ローレ腐ってる。どんどん残念な奴に！　まあまだ表層しか見せてないだけですけどね。これからきっと好きになって貰えると信じてます。多分？　まあ、もしかしたら？

それとようやく無駄話も終わって、次回はいよいよクリエの為に動きます。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

思い出の宇宙（前書き）

僕はクリエと共に中腹の社を目指す。案内人は一人のモブリ。だけど途中からは一人でクリエを抱えて目的地へ。そしてそこでお札を何気に使うと、目の前がクラクラとして意識を無くした。

そして次に目を覚ますと真っ暗な空間だった。何もない何も見えない場所。だけどこの場所はなかなかに大変な場所だった。

思い出の宇宙

たった一つ、僕の足音だけが空しくこの場に響く。一本の大きな木……その枝が周りを包んでて、青々とした葉の一つ一つが、風もないのに何故かザワザワとざわめいてるように感じる。

無数の鳥居が頂上目指して道を示すこの場所……僕はクリエを背負って言われた建物を目指してます。視線の少し先には建物内で丁寧に迎えてくれたモブリの一人が案内人としてその給仕服を揺らして歩いてくれてる。

てかあのモブリ、普通に歩いてる筈なのに足音とかしない。小さいからかな？　とか思ったけど、和服で歩いてるからの方が理由的には大きいかも。

和服で綺麗に歩くには歩幅を小さくした方が良いらしいから体を揺らさずに歩くらしいです。スッスッスって感じだね。

だからこの場に響く足音は僕のだけ。気が付いたら、いつの間にあんな所まで！？　って感じでモブリのその人は進んでるよ。

まあ実際、見事に優雅に歩いてると思う。あの給仕服、袖も長く地面に付きそうな程なのに、それをさせずにグングン進む。ある意味スゴいよ。スゴい技術だよ。

「ねえ、あとどれくらいですか？」

「もう疲れたんですか？　そんな小さな子なんて負担にもなりそうでは無いですけど……余計なお世話ですけど、もう少し鍛えた方が宜しいですよ。

ついでに目的地はあと少し行けば見えます。道が分岐してるのでそこを行けば直ぐです」

むむ……最初の方は完全に余計なお世話だと思います。それに別

に疲れたなんて言ってねーし。クリエなんて重さ感じないほどに軽い……なんて事はないけど、リアルのガキよりはよっぽど軽いし、この位で苦になるわけ無いだろ。
それに実際さっきから「後少し、後少し」言いながらかれこれ２０分は歩いてるような気がするんですけど……だからこう何度も訪ねてる訳じゃん。
いやまあ、僕の辛抱が足りないのかも知れないけど……たく、この木デカ過ぎ。元が規格外だったけどさ、街とか一つまるまる入りそうだよ。
背中に居るクリエの息づかいが小さく感じれる。一刻も早く目覚めさしてやりたい。起きてる時はウルサかったけど、こうやってずっと眠り続けてる様を見るのって、流石に辛くなってきたよ。
全然違うんだけど、ダブって見える時がある……リアルで眠り続けてるセツリとさ。ずっと起きない様が、僕には怖く思えるんだよ。だからそろそろ限界だと思ってたよ。
でも僕には何も出来なくて……そこら辺はリアルでもＬＲＯでも結局は同じだったな。ここでは戦う事が出来る……そう思ってて、戦う事が自分に出来る『救い』だと思ってたけど、実際僕が救えた人が居るのか微妙だと気づいたよ。
でも結局、僕にはここで戦う事しか手段は無いわけだ。幾ら無力だと感じても、それを止めたらＬＲＯに居る意味さえ見失う。
だから僕は誰かに頼って、僕はこの剣を振るい続ける事しか無いんだよな。それさえ無駄と諦めたら、本当に僕に出来る事は、何一つ無くなる。

そんな事を考えながら黙々と上がってると、不意に「こちらです」と言われた。顔を上げてみると、鳥居が二つに分岐してる。一方はまだまだずっと上へ、そしてモブリの居る方は横に逸れてる。中腹って言ってたし、まあこっちだよね。
僕は黙って横道に逸れます。するとあれ？

「案内してくれないの？」
「ここからはその必要がありません。一本道ですから。それにそれぞれの建物には、姫様の許可無しには近づいてはいけないのです。
今回許可されてるのは貴方様と、その子だけ。受け取ったお札は二枚だけでしょう？」

そう言われて僕は無造作にポケットに突っ込んだお札を取り出した。そう言えば貰ってたねこんな物。何の意味があるのかわかんなかったけど、通行証みたいな物なのかな？

「これが無くちゃここから先に行けないの？」
「いいえ、行けますけど意味がないんです。私は一緒に中に入る事が出来ないと言うことです。どうせ外で待つのなら、ここで待つか先で待つのかの違いですから」
「ようは楽をしたいと？」

だってそう言う事にならないか。本当は建物の傍まで行けるのに、面倒だからここで待ちます……みたいな事だよね。

「いえいえ、楽をしたいなんて事じゃないですよ。こういう決まりなんです。一つの道に一つの建物があります。迷うこともなく、ここからの道はその方々の心構えの為の道です。
ですから当人様方でどうぞ――と言う事です」

そう言って着物の袖をピンと広げて、僅かに頭を下げると同時にその方向へ促す感じのモブリ。心構え……なんだかそう聞くと、これから何が起こるのか気になるな。
まあ何が起こるにしても後戻りなんかしないけど。クリエを僕が起こせるのなら、それはとっても嬉しい事だしな。

まあ実際、本当に僕で良いのかは微妙だけどね。ローレは一番親しい、或いは関係が深い人が良いって言ってた。だからミセス・アンダーソンが起きてれば確実にそっちだったと思う。
まあＮＰＣで良いのかは微妙だけど。取り合えずプレイヤーの中では僕って事で満場一致したわけだよ。僕は鳥居が続く道を見つめる。そして一回背中のクリエ位置を正して、いざ出発した。

なんだか話せる相手がいないってだけで、ちょっと周りが不気味に感じる不思議。風がないのに枝や葉がザワザワしてるのがやっぱり気になる。なんだか世界樹に見られてるような……変な感覚だ。
既に幾つ鳥居を潜ったかもわからない。知らない内に違う世界にでも迷い込んでもおかしくない感じだな～とか思ってると、枝と葉に埋もれるように赤い屋根が見えた。
どうやらとうとう着いたらしい。たく、結構歩かされたぜ。建物は思ったよりもデカくない。てかなんだか小さな寺？　みたいな感じかな。でも賽銭箱もなければその上から垂れてる鐘もないし……ある意味ただの蔵と言う感じもしなくはない。
思ってたよりもショボイと感じる僕は何を期待してたんだろうか。まあ取り合えず中に入ってみよう。そう言われてるからな。

「え～と、これってどこから入るんだ？」

段差を上って壁沿いに作られてる通路を回ったけど、扉らしき物がない。木で出来てるし、そこら辺の装飾を握ってスライドしてみたけどどうやらそういう作りでは無いらしい。もちろん全部押しても引いてもみた。だけど外れでした。
何なんだよこの建物は！　正方形で木の柵な感じの壁だから日本らしくスライド式だと思ったのに……おかしいだろ。入れないぞ。
一体どうしたら……そう思いながら僕はローレから貰ったお札を取り出す。

「そう言えばこれが無いとダメとか言ってたよな。もしかしてこれが扉を開く鍵か？」

そう思ってお札を表裏とじっくり見る。でも別に使用方法とか記載されてるわけ無い。てかなんて書いてあるかさえわかんないし……なんだかイライラして来たぞ。

ちゃんとどうやって入るか位教えてろよ！　あのバカ、ホントにテキトーだな。僕は半ばやけくそ気味に、お札をどこも代わり映えのしない壁の一つに押しつけた。

「たく……戻って文句言いに行く……か？」

そんな愚痴をこぼしてると、壁の方からなんだか淡い光――がとっても眩しくなって……

「なんだ？　まさかお札に反応――」

口を動かしてる間にも光は強くなって、いきなりお札が僕の腕から離れた。そして空中を旋回したかと思うと、僕とクリエ、それぞれの頭にキョンシー風に張り付いた。そしてその瞬間だ。一気に視界が歪んで、変な浮遊感と共に、僕は真っ暗な暗闇へと放り出された。

「うげぇぇ……なんだ今の？　酔うかと思った……」

頭がガンガンする。地面に向かって吐く動作をやってるとふと気づいた。

「あれ？　そう言えばこの空間真っ暗なのに、やけに自分の姿はは

っきり見えるな。まるで光ってるみたいな……」

普通は周りが真っ暗なら自分の姿だって確認できない筈。それなのに今の僕は周りからどう考えても浮いてる。辺りは漆黒を称える程に真っ暗で、一筋の光さえも見えないのに……どういうことだこれ？

ＬＲＯだし、ありと考えればこれもありだけど……なんだか変な感じだな。ＬＲＯの中で言うのも変だけど、まるで現地味が無いような……

「ってそうだ！　クリエ？　どこだクリエ！？」

僕は背中に居た筈のクリエが消えてる事に気付いた。こっちの方が重要だな。暗闇の中、ここがどこなのかもわからないけど僕はクリエの名前を叫んでみる。けどどこからも反応はない。

こんな真っ暗な場所で一人じゃ、流石にあの脳天気な子供でも泣くだろ。寝てるけど泣くだろ。一刻も早く見つけてやらないと。

「……だけど、これって下手に動いて大丈夫か？」

僕はこのどこまでも続いてそうな暗闇を見据えてそう呟いた。だって、もしも全く反対に行ったりしたら……そもそも自分の姿は見えるけど、これって先が見えてるのか実際わかんないからな。

自分の姿は見えてても、数メートル先も実は見えてないんじゃないか？　真っ暗だからそこら辺の感覚がわからない。一応手を伸ばして二・三歩進んでも何かにぶつかるとかはないけど……ある意味、自分は見えるけど、自分以外は見えないみたいな状況じゃないかこれ？　一体どうすれば……そんな事を思ってると、何か僅かな振動が感じれるような。

「なんだ？　近づいてきてる？」

僕は警戒を強めて、真っ暗闇に目を凝らす。何が見える訳じゃないけど、警戒せずには居られないだろ。そう思ってると、いきなり暗闇の中、眩しい光が僕の目を襲う。いきなりの強烈な光に目を閉じたその瞬間、僕の横を大きくて長い物が通ったみたいに感じた。

てか、強烈な風に踏ん張るので精一杯。

「ぐっぬぅ……あああああああああああ！！」

ついには踏ん張り効かずに僕の体はその風に巻き込まれて飛ばされる。そして僕は空中に投げ出されて、そこであの風の正体を見た。

「新幹線……か？」

何系とか鉄オタじゃないからわかんないけど、あれはきっとそうだろ。何両も繋げられてる新幹線が暗闇の中、そのライトで前方を照らして滑走してる。ガタンゴトンという特徴的な音が無いからわかんなかったけど、あの長さであの速さ……踏ん張りきれる筈がないと納得です。

てか、あっと言う間に再び暗闇に消えていく新幹線。そもそも何故に新幹線がこんな場所に？　そんな事を思ってると、今度は何かフワフワした物の上に僕は落ちた。

「おお、柔らかくて助かった……って――ええ！？」

マジでびっくりの声が響く。いやいやだってだって、なんか僕が落ちた場所は某有名なアニメ映画の怪物のお腹辺りなんだ。

こいつが肥満体質で助かったけどさ……こうやって見ると、良く映画の中のあの女の子は、自分を飲み込めちゃいそうな口を持って

る化け物の上で無邪気に居れたな。
具体的にこの怪物を説明すると、まん丸ボディに尖った小さな耳、つぶらな瞳と、人を丸呑み出来そうな程の大きな口が特徴的。
こいつは特大サイズだけど、周りを見るとちっちゃい存在もちゃんと居た。いや……その表現はおかしいな。周りを見ると、特大サイズのこの化け物が寝転がってて、その周りを沢山の小さなサイズの奴らがひしめき合って埋めてる……が正しい。

「圧巻の光景……だな」

あの映画のファンなら失神してもおかしくない光景だぜ。なんだかいつの間にか風景まで書き足されてる感じだし……まるで大きな木の幹の中に居るみたいだ。
光が上から差し込んで、緑を照らしてる。

（てか、一体これは何なんだ？）

さっきの新幹線と言い、この〇トロと言い。良くわからないぞ。僕はモフモフの腹の上を進み映画の女の子と同じ位置まで行ってみました。するとやっぱり鼻息の凄さ分かる。
まあ僕は高校生だし、吹き飛ばされるなんて事は無いけどね。取り合えずこの化け物は妖精とかでもあるんだよな？　何か知ってるかもしれないから僕は鼻の頭をペシペシやってみる。

「お～い、ちょっと聞きたい事があるんだけどぉ。起きろよオイ」

反応がない。やっぱり図体がデカいから神経が鈍いのかもしれん。てか下手したら、ズボって手が鼻の穴に侵入しそうだな。
そう考えたら、鼻をペシペシやるのはリスクが高いな。僕は両の頬から三本ずつ伸びてる髭に着目した。その片側を握りしめ、外側

にウラーウラーと引っ張ってみる。
顔の皮膚が引っ張られて、口元が上がる。なかなかにキモい顔になって面白いぞ。てか、ホントに寝てばっかだなこの化け物。マジで全然起きない。

「おい！　いい加減に反応しろ！　この！　せあ！」

僕は髭を引っ張りあげたり捻りまくったりしてみる。するとプチンと一本髭が抜けた。

「あっ……」

まさか本当に抜けるとは……スッゴい頑丈そうだったのに。なんだか一本抜けて間抜けな顔が更に間抜けに……ってここにきてこの化け物その短い手で目を掻き始めたぞ。不味い、起きるんじゃないか？
線みたいに成ってた瞳が僅かに開きだして黒い瞳がこちらを捉えようとしてる。僕は慌てて後ろに髭を隠すよ。するとおもむろにこの化け物、頬の辺りをポリポリと掻きだしやがる。

（やべぇ……やべぇよ）

違和感に気付くかもしれん。僕はヒヤヒヤドキドキだ。もしも気付かれたら食べられるかも……人間くらい丸呑み出来る口の大きさだからな。
そんな事を思ってると、おもむろに鼻をホジホジしだす。そして取り出した黒くて大きな汚物を、何故かピンと僕へ向けて弾く。……ぺちゃってした……ぺちゃって――

「うらあああああああああ！！！」

プッチン来た僕は思わずコイツの髭で鼻を叩いた。ダメージは全然無いようだけど、その髭を見た瞬間にこの化け物は一瞬その小さな瞳を見開いた気がした。ざまぁみろだぜ。
だけどその時、叩いた髭がこの化け物の鼻の穴へニュルンと侵入。そして僕が慌てたせいで鼻の中でグリュングリュンと鼻孔を擽る事に。その結果――

「ブッバァァァァァァァァ！！！！！！」

――唾と共に爆弾みたいな風が僕を襲いました。僕は虚しい叫び共に、再び飛ばされる事に。そして今度はゴン！　と普通に地面に落ちた。

「イッテテ……全く今度から絶対にロードショーでやってもチャンネル変えてやる」

そもそも元から汚そうだと思ってたんだ。僕はあんなデカい奴よりも、小さくて白い方が好みなんだよ。あんな茶色か灰色か分かりづらくて熊と狸でも足したような奴、願い下げだね。

「それにしても……なんだか臭いな。体を洗いたいかも」

クンクンすると、あの野郎の鼻くそと唾が混ざった臭いが……臭いのせいで頭痛までしそうだよ。水を求めて歩き出す僕。だけど再び真っ暗になった空間は、やっぱり何も見えない。
僕が絶望に打ちひしがれてると、なんだか下から泡がボコボコと上がってきた。

（ん？）

僕はこれまでの経験を生かして警戒を強めて下を見る。するとその瞬間、鋭利な突起物をつけた魚が大量に僕の周りを駆け昇っていった。

「なんじゃこりゃあああああごぼぼぼおぼのお！？」

途中から声が声に成らなくなった。何故なら、魚が僕の横を泳いで行ったと認識したら周りがいきなり海中に成ったからです。死ぬ死ぬ！！　僕も取り合えず上を目指すよ。マジでどうなってるんだろうこれ？

流石に体が持たないぞ。そんな事を思ってると、昇って行った魚共が戻ってきた。尖った鼻を持った結構デカい魚だ。なんだっけカジキマグロ？

（なんだっていいけど、あんなのに突き刺さったらひとたまりも無いよな）

僕は回避するために横に逸れる。すると何故か奴らも逸れて来た。

（何でだよ！！）

力の限り心でそう叫んだ。水中で人間が魚に速さで勝てるわけもない。僕は体を小さくしてやり過ごす事に。僕の周りを魚がもの凄い速さで通り過ぎていく。

ヤッバ……魚ってこんなに速く泳いでたんだって思った。だけどその時、僕を通り過ぎて行った魚達が突然分散しだした。

なんだ？　今までは大量の群で一斉に泳いでたのに……なんだかイヤな予感がする。そんな事を思ってると、青い海の先が暗く成ってるような……そして突然分散してる魚を一気に喰いちぎる凶悪な

顔が現れた。

（なんじゃこりゃあああああああああ！！！？？）

だよ。開いた口が塞がらない。蛇のようなフォルムしたそいつは僕の直ぐ側を、その胴体で掠めて魚を荒喰いしてる。やべぇよ、なんだよこれ……全長何メートルあるんだよ。なんだか神話に出てきそうなモンスター来ちゃったよ。てか、見たことある魚が居たから、リアルの海みたいな感じだと思ったら、ＬＲＯ側かよ。

こんな奴が居たら船に乗ってたって危ないよ。海水浴なんて絶対にできないな。そんな事を考えて震えてると、今度はどこからともなく歌声が聞こえてくる。海の中なのにやけに美しく響く声は下の方から？

僕は閉じてた目を開いてその声の方へ目を凝らすと、なんと今度は人魚の楽団が昇ってきてるよ。ウンディーネ？　彼らは楽器の演奏とその美しい歌声で禍々しい化け物を追い払う。人魚凄い……てか、マジで見取れる位の美女揃いでヤバいね。しかも一つ脱がせれば裸みたなその姿がね……なんともいえないよ。

まあ魚部分は残念だけどね。自分的には女の子は脚なんで。でも実際そこら辺もちゃんとお洒落してる。キラキラした宝石や貝を下半身部分に巻いたりしてるし、そんな事をしなくても鱗だけで十分光っても居るよ。

化け物が居なくなって落ち着きを取り戻した海は、よく見ると凄く綺麗だった。

「ぐば！！？」

だけど残念な事に息が続かない事に気付いた。僕は急いで上を目指す。そして勢い良く顔を出すと、そこは大海原でした。空がとっても高く見える。てか岸がどこにも見えないぞ。

「……はぁはぁ、これは死ぬかも知れないな」

冷静にそう自己分析してみた。だってどう考えたって泳げる訳ないよ！！　そもそもどこ！？　だし。まあこれまでを考えると、別に岸を目指す必要もない気がするけど、それってまた酷い目に遭いそうだからな……なんか気が進まないよね。

てか、もしかしてこれって嫌がらせ？　とかそろそろ疑いたく成ってくるよな。ローレならやりそうだし……くっそ、ここでクリエが目を覚ますとか、マジで信じられん。既にクリエどこにもいないし！

そんなグチをコボしてると、不意に大きな影が僕を覆う。なんだ？　と思い顔を上げるとそこには大きく立派な船が航行してた。

なんだかマジでいきなり現れたな。普通こんな船がここまで近づいたら、その前に絶対に気付くだろ。だって波とか出来るだろうし……だけどあたかも最初からここにあったかの様に船は佇んでる。

もしかしてこれはこの船に乗れと言うことだろうか？　僕は取り合えず船の周りに沿って泳ぐことに。どこかに入り口があるかも知れない。

そんなことを思ってると、いきなり服が引っ張られる感覚が！

「来たあああああ！　大物だぞ！」

そんな声と共に船の上の方が騒がしい。そしてグイグイと引っ張られる僕。これってまさか……僕が釣られるのか？

「おい！　僕は魚じゃない！！　引っ張るなこのバカ！！」

僕は必死に上に居る奴らに訴える。だけどどうやら聞こえてないようだ。僕の体の半分以上が既に海から上がってるよ。するとそこ

で僕は気付いた、海からこの船の上部を見つめる一人の人魚に。
だけどそんな事よりも、この自分の状況が大変。僕は力の限り暴れるよ。するとこんな声と共に何かが落ちてきた。
「うぬ！？　凄い引き……引き……だぁあぁぁぁぁぁ！！？？？」
ボッチャ～～～ッン！！　僕は素知らぬ振りして船からソ～と離れるよ。

思い出の宇宙（後書き）

第三百四話です。

上げるのがいつもより遅くなりました。いつもは一時位に上がる様に予約するんでけど、なかなか終わらなくて。まあこの話じゃなく、次の話がですけどね。今回は色々と訳がわからない事がスオウに起こりました。

最後はそのままの勢いで次回に続きます。これが何かは次の次で明かされるかな？　本当は次回でする予定だったけど、なんかこの人魚の話が長くなったからその次で。

てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

マーメイドストーリー（前書き）

僕の目の前には王子様と人魚の恋の物語が繰り広げられてる。訳がわからない真っ暗な空間が切り替わり、今はこれな訳だけど……随分長いな。王子様の為に人間に成りたがる人魚の話なんて、なんかどっかで聞いたことあるよな～って思い、僕は二人の恋の行方を見守ります。

マーメイドストーリー

見上げれば丸く広がる蒼い空、見渡せばどこまでも続く青い海。その二つが溶け合うんじゃないかと思える程の場所で、情景を壊す大きな船が一隻。

そこから落ちてきた誰かが大きな水柱と共に海の中に沈んでいく様が僕には見えたよ。しばらく暴れてたけど、ふいに力尽きたのか、泡をブクブクとたてながら沈んでく。

きっとあの人は蒼い空と大きく聳える白い雲、そしてこの船に集まってるカモメを見つめて沈んで行ってるんだろうな。

最後に見た光景がそうなるんだ。流石に助けた方が良いのかな？

でもあいつ等には僕は魚にでも見えてるらしいし、魚が助けるってのも……そう思ってると、パシャンと綺麗な音を立てて、日差しに煌めく姿が現れる。

それはこの船を見てた人魚？　どうやら彼女はさっき落ちてきた人間を助けたみたいだ。その腕にはナカナカにイケメンな青年が抱えられてる。

そして船の上から必死に叫んでた人達が「王子！」とか言ってたから、やっぱり王子様みたいだね。その人達は小舟を引っ張りだしてきて、滑車か何か使ってそれを下ろそうとしてる。

だけどあれじゃ全然間に合わなかっただろうな。この人魚に感謝すべきだ。そう思いながら見てると、人魚の腕に支えられてる王子様が気付いたよう。

「う……君は……」

王子様はまだ朦朧としてる意識の中でそんな言葉を紡ぎ出す。それに対して、助けた人魚は顔を赤くして何かを言おうと口を開く。

だけど実際は何も声には出さずに優しく微笑むだけだった。
するとようやく小舟が海面に降りた。そして爺と呼ぶにふさわしそうな人が「王子！　王子！」と言いながら、彼女から王子様を受け取って引っ張りあげた。
少し名残惜しそうに、だけどやっぱり安心した様な顔をする人魚。

「さあ貴方も早く！」

そう言って爺はなんと人魚にも手を伸ばす。てか、あの人達は彼女が人魚だと気付いてない様子。まあ僕は水中でその姿を見てるから人魚だと分かるけど、確かに今は上半身しか見えてないもんな。
あれじゃ、正体に気付かなくても無理はないか。上半身はまんま人間だもんね。まあ漏れなく全員美しい事以外を除いては……だけど。
でも美女が何十人と海から顔を出してたら流石に違和感感じるだろうけど、今は飛びきり級の美女一人……運命とか感じちゃいそうだね。
てか、こういう物語なんかあったような？　そんな事を思ってると、手を差し出された人魚は振り返って勢いよく水の中へ。その時彼女の下半身の魚部分が見えた。

「きゃあああああああ！　人魚！？」

誰かがそんな悲鳴を上げるのが聞こえた。その瞬間今まで彼女に向けられてた空気がひっくり返る。「王子を救ってくれた人」そんな見方をされてたのに、人魚だとわかった瞬間、その救ったと言う行為さえ完全に裏目に捉えられる。

「人魚！？　王子がこうなったのも貴様のせいかあ！！」

そんな訳の分からない責任転嫁を当然の様に人魚に向けて、爺は懐から金色に輝く銃を抜く。そして躊躇う事無く水中へ向けて何発も銃声を響かせた。

何発も何発も、汚らわしい存在を許せないみたいに、爺は引き金を引き続ける。なんだかその様子は狂気じみてるな。

よくもまあ、直前の善意を忘れて、憎しみだけを残せる物だ。人間の醜さが垣間見れてるよ。それを止めようとする奴もいないもんな。王子様は再び気を失ってるもようです。

込めてあった銃弾がなくなるまで撃ち続けた爺は、ようやく気が晴れたのか再び小舟を引っ張りあげる様に指示を出す。甲板からの男達の叫びと共に、小舟はゆっくりと浮き上がっていく。

そんな様子を実は人魚は見てました。水面にちゃっかり顔を出して、名残惜しそうに……そして大きく汽笛を鳴らす船にそのまま付いていこうとする始末。

まあ流石に仲間の人魚に止められたけど、銃まで出されたのに、なんて物好きな人魚だろうね。

それから彼女はこの王子様と出会った場所で毎日毎日、歌を歌うようになった。思い人を求めるかのように、その美しい歌声を来る日も来る日も響かせた。

う〜ん、冷静に解説してるけど……実際僕は困惑気味だよ。その実時間を海に居続けてる訳じゃない。瞬きをするとチャッチャと時間が過ぎてる感じ。なんだか今回は、この状況が長い気がするな。

そんな気がしながらも僕は自分からはどうすることも出来ないから、彼女を見守り続けるよ。今日も一日中歌い続けて、蒼かった空が茜色に変わってく。

そんなとき、どこからともなく現れた大きな大きなウミガメ。なんだか島みたいなその亀が人魚にどうして毎日毎日歌い続けてるのかその理由を聞いた。

なにやら海の業界で噂に成ってるらしいよ。すると人魚はこう答

えたよ。

「私の心はあの日、あの人間の方に持っていかれたのです。だから心を取り戻す為に、こうやって歌んい思いを込めるんです。もう一度出会いたいから」

そう言って彼女はあの日船が去った方向を見つめる。もしかしてこの人魚はあの王子様に恋でもしちゃったって事？　今更ながらに気付いたかも。てかやっぱりこんな物語あったよね。

するとそんな話を聞いた亀は、その長らく生きた知識を振りかざしてこんな事を言ったよ。

「そうかえ……そんなにその人間を……美しい人魚さん。あんたは全てを捨ててももう一度その人間に会いたいかえ？」

なんだか似たような話を知ってる僕にはそれが悪魔の囁きに聞こえるぞ。だけど彼女は亀の話に食いつきます。女は恋に生きる生き物だって誰かが言ってた気がするな。そんな様子を見てるとさ。

亀がもたらした情報は、海の王様は何か一つ『美しい物』を捧げると、その代わりに何でも一つ願いを叶えてくれると言うことだった。

人魚は丸一日位悩んで、その王様の宮殿へ向けて出発します。彼女の大冒険の始まり……だけどそこら辺は割愛。大変な事がそれなりにあったけど、何とか王様に謁見できた彼女はこう言いました。

「私は人間になりたい！　王様！　私の声を上げますから、その願いを叶えてください！！」

そして王様の前でその歌声を披露する人魚。それは城の誰もがうっとりするような歌声だった。彼女の歌声を『美しい』と認めた王

様は不思議な瓶にその声を集めた。そして代わりその願いを叶えます。
王様が持つ三又に分かれてる大仰な槍が光を放ったと思ったら、目の前が一瞬真っ白になって場面が変わった。そこは白い砂浜。そこに人魚だった彼女は打ち上げられてた。しかも結構危ない格好でだ。
布一枚しか巻いてないよ。そこら辺はもっと配慮しろよ海の王様。女の子だぞ。そんな事を思ってると、どこからか近づいてくる足音が。僕はその姿を見て、王様も粋な計らいをすると思ったよ。
だってこちらに歩いてきてるのは、彼女が恋に焦がれた王子様ではないか！！　王子様は実際覚えてるのだろうか？　てか、ほぼ裸の美女を見てどういう反応をするのだろうか？　なかなかに気になる所だな。
だけどふと僕は気付く。なんだか王子様も浮かない顔をしてるような……そんな事を思ってる間に、王子はその高そうな靴で砂浜を踏みしめる。そして波際を歩くと案の定、人間に成った彼女を見つけたよ。
王子様はいかにも上流階級らしく、彼女を抱き上げる。そして彼女の顔を見た瞬間、王子様は目を見開いた。

「君は……」

震える声でそんな声を出す王子様。今度こそと思い、口を動かした彼女。だけどそこで声を失った事に改めて気付いたのか、喉をその細い指で押さえて、俯いた。
だけど割り切ったのか、直ぐに顔を上げていつか見せた笑顔で彼女は王子様に微笑み掛ける。

「やっぱり……そうだ。その美しい笑顔……忘れはしない。君はあの時私を助けてくれた……」

どうやら王子様はうろ覚えながらも彼女の事を忘れずに居てくれた様だ。これぞ運命の出会いとか？　いや、出会いはもっと前にあった奴か……ならこれは運命の再会と言った方がいいんだろうな。
王子様は大層嬉しいのか、大仰に肩を震わせて彼女を抱えて涙を流す。

「ずっと……夢見てたんだ。君に再び会えるのを……」

そう言う王子様を見つめる彼女。多分何とか自分も同じ気持ちだった……そう伝えたいんだろう。彼女は王子様の頬に手を当てる。

「もしかして君も、私と同じ気持ちで居てくれたのか？」

これこそ以心伝心……そう言葉を紡ぐ王子様。彼女はコクリと頷いた。なんだか端から見てるのが恥ずかしく成るくらいの雰囲気だ。これはヤバいんじゃないのか？
そう思ってると、見つめ合った二人は次第にその距離を詰めていく。ゆっくりと、見つめ合ったまま、吐息がとろける距離を通り越して唇と唇がぁあああああああ！！
僕は思わず目を背けた。だって……だって……ちょっと自分には刺激が強すぎる。何というか、こんな堂々と他人のキスシーンなんか見るものじゃないよね。向こうは盛り上がってるから良いけど、こっちはすっげぇ居づらいわ。
背中の方でラブラブムードが盛り上がりをみせるなか、僕は意識を逸らす為に、周りに目を向ける。遠くの方に城が見えるな。なんだか中世風の……というかディズニー風の？　よくもまあとんがった城だよね。
そんな風に思ってると、こちらに近づいてくる光が見えた。それは明かりを携えた使用人と爺とお城の兵隊だ。どうやら王子様を探

しに来たみたいだな。

「王子やはりこちらに――って何をなさってるのですか！？」

爺が王子の興奮振りに驚きまくってるよ。まあ無理もないかな。砂浜で何回するんだよって位に唇を合わせてたもん。

盛り上がりすぎだ。まあ当人同士にとってはようやくで百年の恋も一緒だろうから、盛り上がるなって方が無理なのかも。

だって爺の叫びも関係なくチュッチュしてるもん。

「王子！　いい加減してくだされ！　城の者も皆心配してたと言うのに……こんな所で乳くりあってるとは……もう少し自覚をなさい！」

爺はかなり怒ってらっしゃる。だけど一際熱いキスを交わして、二人で目を合わせると、王子様はさっきまでの涙なんてどこ吹く風のイケメンな顔で皆の前に立ち上がる。　そして全員を見渡し、大きく息を吐いて、口を開く。

「爺、皆の者も心配を掛けてすまない。だが、それも今日までだ。あの日……海に落ちたあの日からずっと恋い焦がれてた人に私は巡り会った。

私の心は今、これ以上ないという位に満ち足りてる！！」

どっかの劇場で芝居でもやってるのかと言いたい位に体を使ってそう伝える王子様。だけど全員そこはスルーで、王子の相手を見定めようとしてるよ。

そしてその顔を見たとき、爺が真っ先に動いた。

「こやつ！！　あの時の人魚！？　再び王子を誑かしにやってきた

か化け物め！！」

懐からあの時と同じ銃を取り出す爺。向けられた銃口に怯える彼女。だけど爺が引き金を引く前に、王子の一喝がこの場に響く。

「やめるんだ！　何をする！？　良く見るんだ爺。この人は人間だ！！　この二本の美しい脚が見えないのか！？」

そう言って彼女の下半身部分を指し示す王子様。そんな王子様の指の先に誰もが注目した。そこには細長くしなやかな二本の脚が確かにあった。どう見ても最高の二本の脚だよ。

なんか砂がくっついてるのもエロいね。魚の部分なんてもうどこにもない彼女を、爺は人魚とは言い張れまい。

「ぬぬ？　確かに人魚ではない？　だが王子よ、その者の顔は確かにあの時の人魚そのものですぞ。幾ら年老いたからと言っても、まだまだ記憶力を衰えさせた覚えはありませぬ」

爺も流石に混乱してる様だけど、やっぱり素性がしれないし、爺の癖に記憶力も良いから、疑いの目を向ける事をやめようとしない。

きつい目を向けられて完全に萎縮してる彼女。無理もないよね。初めて上がった地上で、反論する声も無く、どうすることも出来ないもん。

だけどここでも王子様はその王子様振りを見せつけてくれたよ。

「爺が言う人魚と言うのはあの時私を助けてくれた者だろう。もしもそれが彼女だと言うのなら、私は嬉しいさ。人魚とか人間とかじゃない。

あの時何のお礼も出来なかったし、それにやはりあの時に私は惚れたんだよ。この人は同じ顔をした全く別の人なのかも知れない…

…だが、私は寧ろあの時の人魚であって欲しいとも思うんだ。
夢物語だが、これは運命だ……そう思う」

そう言って王子様は砂浜に座ってる彼女に手を差し出した。優しい笑顔を向けられて、その手を取る彼女。まだ人の脚になれてないのか、かなりぎこちない。地面を踏みしめるって感覚がわかってないみたいに、なんだか生まれたての馬や鹿やそこら辺の動物みたいだよ。

だけど何とか王子様の支えで立ち上がる事が出来た彼女。そして王子様は彼女を抱き寄せてとんでもない事を言いました。

「爺、みんな聞いてくれ。私は彼女と結婚する！！」

大きく盛大に、そう宣言した王子様。やばいよ、勢いもそこまで行ったら極まってるよ。幾ら何でもそれは早いだろ。幾ら百年の恋でももう少し育もうとは思わないのか？　王子様盛りすぎ。

「んなななな……王子！　何を行ってるのですか！？　確かにその者は人間みたいですが、素性も全くわからぬ者と結婚など！！」
「素性などどうでも良いことだ。私たちは互いに愛し合ってる。求め合ってる。離れる事など出来ぬよ。そんな思いが一番大事なんだ！
それに私の妻と成れば、それが素性……それでいいではないか」
「良いわけないでしょう！？」

爺がヤバい位に顔を沸騰させてる。まあ確かに良い分けないよね。当人達はそれで良いと思っても、周りは流石にそうはいかない。それに王子様は王子様だしね。

彼が何の変哲もないただの農民程度なら、素性もわからなくて人魚かも知れない女と結婚する事をそこまで反対する人はいないだろうけど、王子様って立場がデカいよ。

背負ってる物も大きいし、何よりも結婚したら彼女がプリンセスに成るんだもんね。簡単に「ええ、そうですね」とはいえないよ。
だけど王子様の意志は固い。彼は彼女を見つめて、改めてプロポーズを申し込んだ。

「僕は貴方の全てを受け入れます！！　いつまでも愛し続ける事を誓います！　だから結婚してください！！」

引いては返ってくる波の音をかき消すみたいに、聞こえたその声。なんかもうここまで来ると、清々しいと思った。なんかやっぱり王子様はカッケェよ。
藍色を帯びてた空が次第に光と共に鮮やかな色へと変わって行く。朝日に照らされて、波がキラキラと輝いてる。そんな風景の中、プロポーズされた彼女は流石に面食らってる。
人間に成って直ぐにこんな事になって、色々と大変だよ。頭がついていけてなくて当然だろうね。だけど真剣な眼差しで見つめる王子様に答える様に、彼女はコクリと頷いた。その瞬間感極まって王子は強く強く彼女を抱きしめる。そして彼女も、王子様の胸に顔を埋めて嬉しそうに微笑んでる。良かった良かった。これで万事ＯＫだね。
みんなが幸せになって良い感じだ。

「王子！　私は認めませんぞおお！！」

プンプンという感情をむき出しにしたように腕を振りながらそう言う爺。だけどそれは既に爺一人だよ。周りの人達はパチパチと拍手をくれてた。
たく、やっぱり耄碌してるんじゃのかこの爺。二人が求め合ってるってのが何でわからないんだよ。王子様も言ってたけど、やっぱり最後は心って部分が大事なんだ。王子様だからって国の為だけに

結婚相手を選ぶとか可哀想じゃないか。
こういう気持ちの繋がりがある方が僕は好きだよ。

二人はお城での生活を始めた。色々と最初は疑いの目とか向けられてたけど、その内そんなのもなくなって、彼女は徐々に人間世界にとけ込んでいった。再び瞬きするごとに場面展開が行われるよ。
流れるフィルムの一場面を切り取って観てるような感覚だね。誰かの幸せを観るってのも悪くない。心がほっこりするよ。
なんてたって王子様マジイケメン。彼女の事を大切にしてるよ。だけどそんな幸せな時間はやっぱり長くは続かない。世界はいつだって動いてるらしい。
最近はいつも空が黒く、不気味な風と雨が打ち続ける日々。そして城内はそんな外の状況と同じように暗い雰囲気だ。
原因は海から現れる敵の存在。おかげで航行出来ずに、周りの国や街と断絶状態で、世界中に海の化け物達が牙を向いてる。
世界はとっても深刻な状況なのだ。そしてある日、世界中の空に自分の姿を映して海の王が現れる。彼は世界を自分の物にすると宣戦布告。同時に世界中に怪物共を陸に送り込んできた。そして始まる開戦。
人も大人しく滅ぼされるのを待ってるわけがない。至る所で戦が起こる状況で、双方の屍が積み重なってくよ。観てるだけで吐きたくなる光景だな。
これを観てるとＬＲＯも随分優しく描写されてるんだなと思う。やっぱり血や内蔵がそのままなのはヤバいな。前のアルテミナス戦でもこんなグロいとは思わなかったもん。
王子様は戦陣を切って軍隊の指揮に翻弄してる。彼女はそんな王子様を傍らで支えてる。だけど実際彼女は微妙な心境だ。だって前は彼女も海の住人。今の敵には、知り合いだっているかも知れない。
そんな中、海で暴れてた大きな亀が打ち倒されたという報告が。大きな亀って言葉に思い当たる節が会った彼女はその亀が打ち上げ

られる場所へ。そこで彼女は亀の口から海の王の事を聞きます。
海の王は沢山の『美しい物』を手に入れた。そしてあの瓶は沢山の『美しいもの』でその力を発揮するアイテムらしい。海の王はその身を代償に願いを叶え、美しい物を集めてたという。
それだけしても、海の王は世界が欲しかったと言うことか？　何の為に？　てか亀も他の怪物達も、その美しい物が貯まった瓶の力で操られてるそうだ。それが瓶の力と言うことか。
海の王は強いんだろうけど、流石に世界を支配するには一人じゃ出来ないって判断だったのかも知れない。

「どうか……これ以上海を……汚さないでくだされ……」

そんな言葉と共に亀は消えていく。腐食して腐敗して、そして海に溶けていった。用はその美しい物が詰まった瓶を壊すかしないかぎり、この戦いは終わらないって事だな。彼女は大切な人が居るお城の方を見つめる。幸せで、大切だから、守りたいと思う。
自分の願いだけを叶えて、世界を終わらせる糧にされた自分の声。それを彼女はきっと罪だと思ってる。彼女はたった一人で荒れ狂う海へと出た。自分の声を取り戻す為に。それで例え王子様と別れる事に成ったとしても、彼女は守りたいときっと考えてる。
王子様の命を、受け入れてくれたあの国を、そして勿論自分が大好きだったこの海を。彼女が居なくなって王子様も直ぐに後を追った。だけど、時既に遅し。彼女の船は海の上でバラバラです。
海の王に支配された怪物達に襲われた後。悲しみにくれる王子様。だけど実は彼女はまだ生きてた。昔なじみの人魚に助けられてた。
どうやら人魚族は反乱してるようだ。人魚の歌も心を惑わす効果がある。だから『美しい物』を集めた瓶の力への耐性でも出来てたのかもね。
仲間に助けられた彼女は人魚達と共に海の宮殿へと向かう。そして王へみんなと挑む。上では王子達が頑張り、海の中では彼女と人

魚達が王の野望を防ぎに動く。
だけど次々と仲間達は沈んでく。それでもたどり着いた王の間。みんなの犠牲の元、隙をついて瓶を奪います。そして思い切ってその瓶を地面に……地面に……震える腕、流れ落ちる涙。
きっと今までの思い出が彼女の頭に浮かんでる。だけどそれらを振り切って彼女は瓶を床に叩きつける。

マーメイドストーリー（後書き）

第三百五話です。

今回はサブタイトル通りに人魚の話。まあ多大にある物語に影響されてるけど、それには理由があるんで、それは追々とわかるでしょう。これからこの世界も大変な事に！　どうなるかは次回へと続きます。

大丈夫、次でこの人魚の話は終わります。人魚と人間の恋の行方は！？

てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

迷い子の帰還（前書き）

瓶を割るとそこからあふれ出てくるのは美しい物の光。それらは持ち主を求めて散っていく。そしてそんな一つが彼女の喉へ。それと同時に彼女は人魚の姿へともだった。

海での自由を手に入れた彼女だけど、瓶を割られた海の王は怒り心頭。その手に持つ三つ又の槍を掲げてその力を見せつける。それはまさに王と名乗るに相応しい物だった。

迷い子の帰還

ガシャアアアアアアアアアン！！　と美しい物を溜めこんだ瓶が割れる音がこの部屋に響く。そして次の瞬間、砕け散った瓶から様々な色の光が溢れ出てきて、持ち主の所へ帰るように散り散りに飛んでいく。

「おお……待ってくれ！　儂の力！！　世界を満たす美しき物の力よおおおおおおおおおおお！！！！」

散っていく光に対して大きく手を伸ばす海の王。だけどその手に美しい物が戻ってくる事は無かった。そして彼女の美しい物も、そんな光の一つとなって帰ってくる。

優しい淡いピンク色したその光は、彼女の喉へと戻っていった。そして僅かに体全体が光ったと思ったら、彼女の脚が元の魚の姿へと戻る。それはまさしく、夢が覚めた瞬間だ。

「あっ……ああ……」

彼女の口から漏れる音は声にも音色にもなっていない物だ。ショックだからならのか、それとも久しぶりに声を出そうとしてるから上手く行かないのかわからないけど、でも……その様子を見るにまともに声を出そうとしてるとも思えない。

だって彼女は自分の姿を見て涙を流してる。人魚に戻った自分の姿をだ。だってもうこれであの場所へ戻る事は出来なくなったんだ。再び彼女と王子様の世界は隔たれた。近くて遠い物へと成った。

「許さん！！　許さんぞ人魚ども！！　この海の王に逆らったこと、

貴様等全員滅ぼして後悔させてやろう！！」

海の王の怒りは最高潮に達した。彼が持つ三つ叉の槍が海の色に輝く。すると海の王を中心に大きな渦が発生した。その渦は人魚達だけじゃなく、この建物全てを巻き込んで大きく成っていく。崩壊していく海の宮殿。そして渦は近くまで来ていた艦隊までも巻き込み始める。

超巨大な渦が足下から突如発生した訳だから、船が避けれる筈も無かった。渦に巻き込まれた艦隊は舵が利かなくなり、互いに衝突しあって海の藻屑へと消えていく。

人々の悲鳴と叫び、そして海自体が怒ってるかのような汐の音が響いてる。それにこれも海の王の力か、厚く覆われた黒い雲からは強烈な雨と雷まで……なんだか世界の終焉を観てるかのようだ。

「死ね！　死ね！　死ねぇえええええええ！！　全てを無に帰すのだ『ブリューナク』よ！！　この汚れきった世界を今一度清浄に！！

地上だけで良いと思ったがそれではダメだ！！　この世界は全てが汚れきっている。だから全てをその力で終わらせろ！！」

渦の中心でそう叫ぶ海の王。もう殆どヤケクソ状態だな。美しき物の瓶が割られた事で、もうどうにでもなれって感じに成ってるぞ。

自らと共に世界を滅ぼそうとしてる。体が引き裂かれそうな渦の中では流石の海の住人達も自由に泳ぐことは出来ない様で、みんな苦しそうにしてる。

流石に王は、王を名乗るだけあって圧倒的。もしかしたらあの王の強さはあの槍のおかげかも知れないけど、今の彼女達にはどうしようもない。そして海の住人達まで自由が効かないこの渦の中、次々と粉々になる船と共に人間が飲まれていっては溺れてる。

当然だ、人は海の中では脆いんだ。地上よりも早く動くことも出

来ないし、呼吸だってまま成らない。彼らは声に成らない声を上げて、その命を散らして行ってる。
そしてそんな儚い命の灯火が今まさに消えて行ってる人間達の中に、彼女は王子様の姿を見つける。そう、この艦隊は彼女を追って出向した王子様達の船だったんだ。
渦に飲まれて何も出来ないまま、深海へと引きずり込まれて行こうとしてる王子様。彼女は全身の力を振り絞り人魚であることを生かし、思い人を目指す。渦の流れに逆らわず、逆に利用する形で一気に王子様の元へ。
渦から出ようとするのは難しいけど、渦の流れを読むことはこの渦が強力な分、彼女たち人魚にとっては容易な事だったみたいだ。だけどその流れが都合良く目的地に繋がってるかと言えばそうじゃない。
彼女は王子様の近くまで行けたけど、あと一歩届かない。このままじゃ王子様は水圧で潰されるか、肺の中の空気を全て押し出されての窒息死……考えるだけで彼女は泣きそうだ。
もう会えないと覚悟した。もう一緒に居れないと分かってる。だけどそれを受け入れたのは、この人が生きて幸せに成って欲しいから……ここで死んでなんか欲しくなんかない筈だ！！
「愚かなる人魚め！　愚かなそこの人間共と無に帰すがいい！！結局何も残らなかったんだ。本望だろう！！」
海の王の声がこの渦の中でも良く聞こえる。絶望を誘うそんな声だ。だけど彼女は諦めない、届くと信じて……助けると誓ってその手を伸ばし続ける。
「無駄だあああああ！！」
そんな海の王の声と共に、更に勢いが増す渦。そのせいで二人の

距離は再び空いた。だけど彼女は再びその体に鞭を打って、渦を猛スピードで泳ぐ。勢いのせいか、脚の鱗が剥がれて血が海に滲んでる。だけどそんなの気にせずに彼女は泳ぐんだ。
例えもう、横にいれなくなても、大切な人を守るために。

「愚か……だったと思われても……良い」

彼女の口から途切れ途切れだけど、小さな声が漏れ聞こえる。ようやく戻った声が、彼女自身と馴染んできたのかも知れない。彼女は必死にその細い腕を伸ばしながら、更に力強くこう言った。

「だけど！！　何も……何も残ってないなんて事は絶対にない！！」

その瞬間彼女の手は王子様に届いた。そして二人はようやく体を重ねる距離に。だけどその時、彼女は感じた。王子様の体は既に冷たく、魂が抜けたかの様に青白いと。
だけど溢れ出しそうな涙を堪えて、彼女は上を見据える。彼を助ける為には水面に出るしかないからだ。彼女は尾ビレを動かして渦の流れに逆らい出す。だけど一人の時でもその場に止まるのが精一杯だったんだ。
人一人……増してや全体重を掛けてくる大の男一人背負ってこの渦に逆らえる筈もない。彼女は力の限り頑張ってるけど、どうしても下へ引きずり込まれていく。

（急がないと……急がないと！）

そんな思いが表情からも分かる。だけどどうやったってこの王の力は絶対。抜け出せそうもない。

「くはははははは！！　さっきの威勢の良さはどうした？　諦めろ

！　既にその人間は死んでいる！　認めるんだな！！　そして直ぐに貴様も送ってやろう。結局貴様達には何も残らない！　どうしようもない！　それが事実だ！！」

爆発音みたいな音が上で響く。一瞬閃光が海の中にまで届いたし、まさか海へ落雷でもしたのか？　まさに世界終焉の時は刻一刻と近づいてるな。

「私の中にはあります！　この人と過ごした時間、暖かな思いで、包み込まれる様な出来事の数々。それに何より、この想い。
この思いはきっと消えない。未来永劫に残り続ける物。だから愚かだと想われても、私は後悔なんてしていない！！」

彼女は力強くそう言い切った。それはきっと強く愚かな乙女の本音って奴だろう。愚直に真っ直ぐに彼女は恋に生きたいんだ。

「人間人間人間人間人間！！　奴らこそ世界の汚物だと言うのに！！　ブリューナクよ愚かな人間もろともあの人魚を貫き殺せ！！」

狂ったように人間を連呼した海の王は、その自身が持つ槍『ブリューナク』に命じてそれを投げ放つ。ブリューナクはリアルではケルト神話に登場する“神々の四大秘宝”とも言われる武器。その意味は『貫くもの』――その話を意識しての武器なら、まさしくその通りの使い方だ。
投げ放たれたブリューナクはまるで自身にジェットエンジンでも積んでるかの如く勢いで、水の抵抗関係なしに飛んで行く。てかなんかブリューナクが通った後の海が割れてる様に見えるのは錯覚か？　錯覚だと思いたい。
てか、あんなの食らったらまず間違いなく終わりだ。二人目指し

て飛んでいったブリューナク。渦の中じゃ彼女はそれを避ける事はきっと出来ない。そしてブリューナクが二人を貫いた――と思った。だけどそこには直前で何かの障壁に阻まれてるブリューナクがある。

「何！？」

王の驚愕の声。だけど分かるよ。僕もあれで終わりだと思ったもん。だけど現にブリューナクは阻まれてる。その時僕は気づく。この怒り狂う海の音の中、微かに心地よい旋律が聞こえることに。僕は周りを見渡す。すると何が彼女たちを守ったのかが分かった。

それは仲間の人魚達だ。人魚の歌声……それが彼女と王子様を守ってる。みんなこの渦に耐えるので必死なはずなのに、それでも仲間の為に、その喉を酷使してくれてる。

「みんな……」

「人魚共め！！　ブリューナクを舐めるな！！！」

王がそう叫ぶと、ブリューナクは方向を修正して、回り込んで彼女を狙う。なんて言うデタラメな動きをする槍だ、そんなの反則だろ。自ら動いて貫こうとするなんて……流石は神々の秘宝なだけあるって事か。

だけど人魚達も自分達の底力を見せる。人魚達の音色は二人を包むように覆ってるんだ。だからどこから来たって防げない筈はなかった。

「舐めるなと行った筈だ！！」

だけどブリューナクの勢いは止まらない。いくら防がれたからって、王の元へ戻ることなく、縦横無尽に二人を貫こうとしてる。

何度も何度も衝突するブリューナク。すると人魚達にはかなりの

負担が……きっとあれだけの障壁を歌い続けるだけでも喉に相当の負担があるんだろう。血を吐き出す人続出だ。
そしてそれに伴って歌の厚みは減っていく。これは破られるのも時間の問題。そう思ってると、突如海に黒い液体がぶち巻かれた。なんだか墨汁でも流し込まれたように、渦は真っ黒になり何も見えなくなる。
するとその時、下の方で海の王の「ぬおおおお！？」なる声が。一体何が起こってるんだ？　そう思ってると、次第に渦の流れが弱くなっていく。そして海はいつもよりはまだ激しいけど、渦巻き状態では無くなった。

「これは……」

困惑してる彼女。だけどその時、真っ黒な海を割って迫るブリューナクが見えた。渦の驚異は無くなったけど、もう一つのこっち方の驚異はまだ健在。
けど、渦が無くなり自由に泳げるように成った彼女は、間一髪でブリューナクを避ける。これ以上みんなの喉に負担を掛けないためにも、彼女は迫りくるブリューナクの驚異をかわしながら海面を目指す。
てか、僕からすれば既にどっちが海面かさえも分からない状況だけどね。だって真っ暗で上も下も分からない。辛うじてブリューナクの後は海が割れるから、そこだけなんだか通常の色に見えるくらい。だけどだからってどっちが海面かなんて判断は出来ないよ。
けどそこら辺はやっぱり人魚なんだろうな。彼女たちは海の住人だからこそ、感覚的に分かるのかも知れない。それとも自身で深度を測れるとか？
まあ僕の視界にはどんな状況だって常に彼女だけは良く見える様に成ってるから、そこら辺は便利だけどね。今更だけど、どうやらここでは僕は背景というか、透明人間というか……存在してないら

しいね。
まあもっと正しく言うと、僕がこの世界の住人じゃないって感じ？　世界に存在できてないから、それを認めれば実は海の中でも余裕で息できてる。多分きっと初めからこういう仕様だったんだろうけど、最初は慌てすぎて気づかなかったよ。てか話が進むにつれて、僕は空気化してるから、周りに影響出ないように成ってるのかも。
この位で僕の状況は取り合えずおいといて、彼女とブリューナクの追い駆けっこは激しさを増してる。というか、人一人を背負ってる時点で実は彼女は不利なんだ。上を目指したい所だろうけど、スピードで上回れてるせいでなかなか上へ行けないのが現状。

「んぬううううあああああああ！！」

そんな中、下から聞こえたそんな声。すると同時に周りの黒かった部分が押し流されて視界が戻ってきた。そしたらなんか僕の目の前にでっかいウネウネしたのが飛んできた。

「うあああああああ！！？」

訳が分からないまま、僕はそんなウネウネした奴の下敷きに。てか、良く見るとこれタコじゃね？　かなりデカいけどタコにしか見えないぞ。まさかさっきの視界不良はタコ墨か？

「よもや、人魚どもだけじゃなく他の者も我に刃向かうとはな……あの瓶が割られたせいで正気に戻ったか。だがそれでも……この海の王が誰か、貴様等は知らぬのか！！」

そう叫んで海の王が拳を握りしめてコチラに一足で泳いでくる。デカい体してやがるのに、かなり速い動きだ。体がデカい分、ヒレもデカいしそのせいか？

だけどそれだけ水の抵抗も大きく成りそうだけど、魔法とか使う奴らに現代科学なんか意味なさないか。目の前に来た海の王は、その力強い拳を振るう。
すると周りの岩が凹みだし、そしてズズンともの凄い圧力が迫ってきた。僕は直感でこの攻撃の影響を受けるのは不味いと思った。
「僕は空気僕は空気……」と必死に唱える。すると僕とタコが倒れてる地面が大きく窪み、タコの柔らかい体がその凹みと同化したよ。
やばいなコレ……明らかに地上とは違う力の伝わり方だ。なんだかまるで、この大量の水が大きな塊にでもなって押し寄せたみたいな……そんな感じだった。僕は空気となって無事だったけど、まともに食らってたらこのタコと同じ末路を辿ってただろうな。

「ふん……王に逆らう奴らは皆――」

海の王が哀れなタコのヒシャゲた姿を、威圧する様な目で見てると、後ろからドデカい口が現れて海の王をパクリと行った。
それはなんだか見覚えのある姿……デッカいウツボみたいなモンスターだ。僕も含めてきっとその場に居た人魚達も「やった！」と思ったに違いない。
そして今度は尖った鼻を持つマグロみたいな魚が大量に群で押し寄せて、上の方でブリューナク相手に逃げ回ってた彼女への救援に。
まあ用は。その尖った鼻を生かして大群で魚達はブリューナクへ突っ込んでる。弾かれてるみたいだけど、その多さで、ブリューナクは動きが鈍くなる。この隙を付いて、一気に彼女は海面を目指す。僕もいつまでもタコの下敷きになってるわけには行かないな。後を追いかけるよ。
するとその時だ。僕が彼女を追ってると、王をその口で噛み砕いたモンスターがなんかビクンビクンなってる事に気づいた。さっきまで蛇みたいに体をクネらせて泳いでたのに、今はその体を真っ直ぐに伸ばしてるぞ。

すっげー嫌な予感がするよ。そして次の瞬間そのデカい口が１８０度を通り越して２７０度くらいまでグァバ！！　と開いた。当然おかしな音が聞こえたよ。具体的には顎が砕け散る音がね。
そしてそこには当然奴が居る。海の王が悠然と立ち尽くしてる。かなり太めの筋肉質のおっさんなんだけど、こうなるとなんか格好良く見える不思議。この威圧感もそれを見せるために一つ買ってるな。
てか完全にあの牙の餌食なったと思ったのに……流石王を名乗るだけある。ブリューナクが無くてもかなり強いぞ。

「王の威厳を忘れた愚かな奴らは、この海に存在する価値などない。一匹残らず根絶やしにしてやろう！　ブリューナクよ戻ってこい！」

そう叫び、掲げた手にブリューナクを戻す海の王。その時、周りにはいくつもの大きな瞳の光があった。まさかこれは、王に立ち向かう為に来てくれた海の怪物達？
爆発音の様な衝撃と共に、海が白い泡で満たされる。てか、流石に危なすぎるから僕は海面へ。そこには王子様を抱えた彼女が必死に、彼を呼び戻そうとしてた。
だけど長く海中にいたせいか、王子様はぐったりとしたまま反応してない様子。

「お願い……目を開けて……死なないで……貴方が死んだら私は……私は……」

彼女の涙が空を映した黒い海に溶けていく。辺りは大荒れで、船の残骸がそこら中に漂ってる。
「今こそ願いを叶えてほしい。本当の願い……私の全てを捧げても良いから、この人を助けてよ……」

辺りにバカデカい化け物共が飛び出てきたりしてる。きっと海の王に打ち倒されて行ってるんだろう。だけどそんな光景には目もくれず、彼女はじっと王子様を見つめて、顔を近づける。「戻ってきて」と願いを込めた口づけだ。まさかそんな……と僕は思ったよ。願いを込めた口づけでどうにかなるのなら、世界に死は無くなるよ。だけどその時、海面に小さな魚達が顔を出して、なにやら歌いだしたぞ。それからも色々な小魚達が群を成してメロディーを奏でていく。

それらは大きな輪となり、二人を中心に輝く音の魔法陣が出来上がってる。

「みんな……」

「海は全てを受け入れる。だけど海は全てを育む場所なんです。だからその人の命も私たちでもう少しだけ育んで貰いましょう。海の力を使って……」

そう言って近づいてきたのはリアルにもいそうな程の一メートル越え位のウミガメだ。どうやらこの亀が小魚達を指揮してるみたい。そしてその合唱に呼応するように、王子様の体が輝き、そして「ガホッゴホ！」と呼吸が戻った。そして自分を抱える彼女に気づく。

「私は……そうか……また君に助けられたんだね。ありがとう」

王子様は優しく彼女にそういった。すると彼女の瞳からはとっても大粒な涙がポロポロとコボレてくる。

「私には……そんな言葉もったいないです。ずっと騙してました。私は人間じゃない……もう一緒には居られません」

泣きながらそう言う彼女をソッと抱き寄せる王子様。

「君の声をようやく聞くことが出来た。とても美しい。想像通りの声だ。それに人魚がなんだって言うんだ。最初にプロポーズしたときに言ったはずだよ。
私はそんなの気にしないと！　君が人魚でも、私の思いは変わらない」

彼女の顔が涙で一杯になった。体の震えが一際大きくなった。だけど自然と二人は見つめあい、そして再び唇を重ねるよ。
二人の息と想いが混ざりあう。二人の心は例え姿が変わっても変わらなかった。
そしてキスが終わると同時に彼女は「ありがとうございます」と伝えた。そしてその時、海面に飛び出てくる怪物が一体。まだまだ海の中では戦いが繰り広げられてるみたいだ。

「私は最高の幸せ者です。貴方の居るこの全ての世界が輝いて見える。だからこそ行きます。海の王を止めて、この世界を守りたい。
信じててください、私たちの勝利を」

そういう彼女の顔は決意に満ちて、更に今までよりも輝いてる様に見えた。そして王子様はそんな彼女を信じて「ああ、信じるよ。帰ったら結婚しよう」と改めてプロポーズした。
だけど彼女はその言葉には応えずに、亀に彼を任せて、再び水中へ。水中では海の怪物達と王の戦いが続いてる。それはもう海底が変わる程の規模だ。
だけどそれでもブリューナクを手にした王は果てしなく強い。人魚には戦う力なんて殆どない。でも、彼女たちは海の歌い手。
だから彼女は歌で海と対話する事にしたんだ。沢山の小魚達と、そして仲間達。みんなの合わさった歌が、この荒れ狂う海に響き出す。するとブリューナクの力が弱まってきた。

「何？　どうしたブリューナク？」
「貴方を王と認めない。そうブリューナクは言ってるんです。海は一人の心が支配する物じゃない。私たちは誰もがこの海に生かされてた筈です。
それを忘れた貴方に、海の王としての資格はない。海の声を聞かなくなった貴方にこの海は悲しんで荒れてるんです。どうしてそれがわからないんですか！？
私達人魚は歌で海と対話します。だからわかる、海の悲しみが。救ってあげてと力をくれます。もうこの海は貴方の物じゃない」

彼女達の歌が光を放ち海へ満たされていく。そしてみるみる内に輝き出す海の中、ブリューナクが彼女の手の中に現れる。海という世界が歌ってた……楽しそうにそして悲しげに。放たれたブリューナクは、海の王を貫いて、この戦いは幕を閉じたのです。

朝日が海面を眩しく照らす時、彼女と王子様は海岸で向かい合ってる。そこは海と陸……それぞれの場所。彼女はもう陸には上がれない。彼女は人魚なのだから。

「どうしても……無理なのだろうか！？」

王子様は波の中に居る彼女にそう問いかける。朝日に照らされた彼女は小さく頷くよ。

「無理です。私は人魚、貴方は人……生きる場所も時間も、私たちでは異なります。だけど覚えていてください。私は貴方が大好きです。その気持ちはこれからもずっと変わりません。
私はこの気持ちを胸にきっと生きていけます」

「私も君が大好きだ！　だからこそ分かれるのは辛すぎる！　君は辛くないのか？」

王子様は海にバシャバシャと足を突っ込んで彼女の元へ行こうとする。だけど腰辺りまで浸かると動きが鈍くなって、いきなり深いとこへ入り、溺れ駆けながら少し後戻り。

「……辛くない……訳がないじゃないですか！」

そう叫んだ彼女の目からは涙がコボレる。それを見て王子様は自分が言った言葉を後悔する。

「本当は別れたくなんかない。ずっと一緒にいたい。でもそれは出来ないんです」

「私たちの生きる世界が違うから……」

王子様の呟きに彼女はコクリと頷く。波の音が引いては寄せてを繰り返し聞こえる。風が潮の香りを届けてる。

「だけど私たちの思いは一緒……それに変わりはない。そうでしょう？　それで良いんです。十分……私は幸せでした。これからはそれぞれの世界で精一杯生きていかないといけない。

私は海で、貴方は陸でそれぞれ頑張りましょう。もうあんな悲劇が起きない世界を作りましょう」

「……そうだな。それが王になる私の役目だ。作ってみせるよ。約束する。だから……さよならか」

「さよならです」

二人は見つめあってた。だけど朝日が王子様の視界を一瞬奪った直後、パシャンという波を弾く音と共に彼女の姿は消えていた。目

の前にはただただ、美しく穏やかな海が広がってる。

パタン――と本を閉じるような音が僕の耳に届く。そしていつの間にか元の真っ暗な空間に戻ってる。何も見えない空間――いや……何かが浮かび上がってる？　それは大仰な椅子に座り本を畳んだ小さな……少女？

「ねぇ、これはハッピーエンドなのかな？　二人は好き同士なのに、一緒に居られない。離れてたら、いつかは忘れてしまうよね？　仕方ない事なのかな？　これで二人は幸せになれるの？　私には何度読んでもわかんない。死んでもいないのに分かれなくちゃいけないんなんて……絶対にダメだよ」

彼女はそう言って、椅子から降りる。何だろう……どこかで見たことがあるような少女なんだけど……てか何でクリエ以外の少女が居るんだよ？

訳が分からん。

「ねぇ、お兄さん。何か答えてよ」

「ん？　あぁ、まあ……僕にも良くわかんないな」

そう言ったら大きくため息を吐かれたよ。

「だよね……お兄さんそういうのわかってなさそうだもん」

なんだか小さな少女に哀れみの顔を向けられてるぞ。どういう事？

「世界が違ったら諦めなくちゃいけないのかな……もう二度と二人は会わないのかな？」

僕は今度は呆れられないように必死に考える。

「会うくらいは良いんじゃないか？　その本の二人だって時々会ってたりする位はしてたかもだぞ。近い世界だし、出来ないことはないだろ」

どうやらさっき観てた物は少女が持ってる本の内容みたいだな。タイトルに『マーメイドストーリー』とあるもん。

「……そうだね。二人とも生きてるもんね。生きてる人同士なら、その気になればいつだってあえるよね。だけど……私の世界はそうはいかないよ」

？？　良くわからない事をいう子供だな。てか、そろそろ聞いて言い？　君は誰だ。

「私？　私はクリエだよ」

「嘘付け！！　あいつはモブリなんだよ！　そんな人間の姿じゃない！」

何言ってるんだこいつ。洒落にもなってないぞ。

「う～ん、まあ厳密に言えば確かに私はクリエじゃないよ。だけどクリエの友達ではあるし、私はクリエでクリエは私でもあるんだよ。今はね……そうして貰ってるの」

「はっ？？」

全く持って意味不明だ。子供の言葉だからじゃ済まされない意味不明度だよ。

「私が何かは色々と約束ごとがあるからいえないの。だからお兄さんが私って言う存在を見つけてくれると嬉しいな。勿論クリエの事も頑張ってくれなきゃ嫌だけど。
ねぇねぇこれだけ答えよ。お兄さんは、大切な人達に言い残した事があったまま死んだら……そのせいで自分が天国にいけなかったら、どうやってもそのことを伝えようと思う？」

更に電波な発言キターとマジで思った。この子かなりやばいよね。だけど本人はかなり真剣なご様子。ただからかってるだけでは無いようだ。
なんなんだろうな一体。病人みたいな服を来て、どっかの国の民族模様みたいなスカーフで括った黒髪ポニーテールが特徴的なこの子……ってそう言えばあのスカーフ見たことあるな。
やっぱり僕はこの子を見たことあると思う。だけどどこか思い出せない。クリエと関係する所？　てか、それよりも僕の答えを待ってるようだし、そっちに答える事に。だけどなんと答えれば……僕は結局こう言いました。

「う～ん、正直に答えると……死んだことないからわからないな。まあだからこそ死んだときに後悔しないように、行動してるつもりだよ」

だからこそ諦めないって事を掲げてるんだ。

「そっか……まあそうだよね。だけど死っていつどこでくるかわかんない物だよ。お兄さんも気をつけてね」
「まだまだ死ぬ気はないし、肝に銘じておくさ」

僕がそう言うと、クスクスとその子は笑った。

「ふふ、クリエが気に入った訳が少しわかったかも。あの子をお願いします。大切な人達が消えちゃって、不安がってるから、迷っちゃったみたいです。
でも今は、迎えに来てくれる人達が居る。それをクリエにちゃんと伝えてくださいね」

そう言いながら歩いてくるその子。だけど途中からノイズが混じったように姿がブレていき、僕の前でその姿はクリエへとなった。
僕はまたしても？？？だよ。

「う……ん、スオウ……クリエのせいで……シスターやアンダーソンが……」

僕の腕の中で震えるクリエ。今はこの子の事を――そう思った。

「大丈夫、お前のせいじゃない……それにちゃんと助けてあげなきゃだろ？　こんな所で立ち止まっててもでいいのかお前は？」

僕は頭をなでながらそう紡ぐ。するとクリエは頭をフリフリ、涙を拭いこう言った。

「いくない！　いくない！　いくない！　助けたいよスオウ！！」
「ああ、じゃあ戻ろう。前に進むために！！」

そう決意した瞬間に、僕たちの額に再び例のお札が姿を現した。
そして光と共に、再び視界が歪む。世界は廻り、僕たちはどこかに引っ張りあげられて行く。

迷い子の帰還（後書き）

第三百六話です。
宣言通りにこの話で何とかクリエを連れ戻せました。まあ本当はいつもの分量じゃ収まらなかったんですけどね。だから今回はちょっと長めです。そして最後になんだか意味深な少女が！
あの子も重要な子です。まあクリエと存在同化してる言ってたから、この話に切り離せない存在なのは明白ですけどね。
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

帰ってきたら（前書き）

僕達は元の場所に戻って来てた。扉の無い社だ。そこで寝てた所を先に起きたらしいクリエに起こされた。だけどどうやらクリエはさっきまでの事を覚えてないらしいのか、何故か僕を偽物だのと言う始末。

全く相変わらず面倒な子供だな。僕達は久々に声を張り合って言いあいするよ。

帰ってきたら

「……ウ。ス……ウ！」
「うん……」

なんだかユサユサされてるような……遠くから聞き覚えのある声が呼んでる様な……

「こらぁ！　起きなさいスオウ！！」
「うお！？　――ってクリエか……」

耳元で大きな声を出しやがって、思わず飛び起きたじゃないか。それになんか頭がガンガンするし気分が最悪。

「だってだってスオウ全然起きないから、クリエに感謝して欲しいくらいだよ」
「あのな……ずっと起きなかったのはお前で、僕に感謝しなきゃいけないのも実際お前……あれ？　お前目覚めてる？　幻覚じゃない？」

僕はクリエの頭に手を置いてグリグリ左右に振ってみる。おお、ちゃんと触れるぞ。いや、まあ担いで来たのは僕なんだから当然と言えば当然か？　でもこうやってちゃんと動く様は実際箱庭以来見てないからさ、もしかして僕の幻覚かと……頭痛いし、あり得るかなと。

「あうーちょー、なにするのスオウ！　クリエはクリエは本物だよ！　幻覚とかじゃないよ！　クリエは世界で一人！　クリエなんだ

から！」
「意味は分からんけど、実体っぽいな」
てか、早速勢いで訳分からん事呟いてるし、確かにクリエだな。なんか随分久しぶりにコイツを感じたって思うな。
「ムゥー！　だからクリエはクリエだよ。スオウこそ本物なのか怪しいよ」
「は？　何言ってるんだ？　お前をここまで運んだのも、目覚めないお前をこうやって元気にしたのも僕だっての。罰当たりなガキだな本当に」
僕は更に腕を大きく回して、クリエをグリングリンしてやる。「アウーアウー」唸る様が面白い。そう思ってると、僕の腕を振り払って怒りだした。
「んもーーーー！！　やっぱり怪しい！　スオウはクリエの奴隷なんだからこんな事しないもん。だからアンタみたいなイジワルはクリエ嫌いです！！
本物のスオウを出しやがれ！！」
「おいおい、女の子が出しやがれとかは止めた方が良いぞ。可愛くない。てか、僕は僕だしな。そもそも誰がいつお前の奴隷になったんだよ。そんなスオウは知らんな」
少なくとも僕が知ってるスオウはそんな約束してないと思う……てか、奴隷とか良く知ってるな。誰だよそんな言葉教えた奴は。
「むむむ……知らないってやっぱり私の知ってるスオウじゃないんだね。本物はどこ？」
「いや、本物は僕だぞクリエ。良いか？　さっきの言葉の意味は僕

はお前の奴隷になった覚えはないから、そんなスオウは存在しないと言ったんだ。分かるか？」
「ほえ？」

クリエは僕の言葉の半分も出来てない顔を向けてるよ。まさにバカっぽい顔だ。そう言えばコイツバカだったな。難しすぎたか。

「もう！　そんな事でクリエの事惑わそうとしても無理だからね！　スオウがスオウなら、スオウの証拠を見せてみてよ！」

スオウスオウとウルサい奴だな。僕がスオウだって何故にわからん。そもそも自分を証明する術なんか……ああ、そうだ。

「ほら、これでどうだ！」
「これは！？」

ズガーンと衝撃を受けた顔をするクリエ。僕が見せたのは腕に広がる呪いの模様だよ。これを受けてるのは、ＬＲＯ広しといえどもきっと僕だけだろうからね。なんか思わぬ所で役に立った……のか？　まあ取り合えずこれで信じてくれるだろう。

「そんなにスオウはその模様広がってなかったよ。偽物だね」

キラーンとして「やったぜ」みたい目を光らせてそう言ったクリエ。いや、お前やっぱりバカだろ、と僕は思ったよ。

「教えてやろうかクリエ？　お前は箱庭から一緒に出たと思ってるだろうけど、周りよく見ろよ。ここは既にサン・ジェルクじゃない。お前はさ、しばらくずっと眠ってたんだ。だから時間もそれなりに経ってる。この模様が広がってるのはそのせいだ」

僕の言葉に目をパチクリと瞬かせるクリエ。必死に今の僕の言葉を頭の中で理解しようとしてるみたいだ。

「えっと……模様が広がるって、スオウはそんなバカな事言わないよ」

「えええええええ！？」

だよ。ビックリだ。まさかクリエにバカって言われる日がくるなんて……

「あれ？　この模様の事言ってなかったっけ？」

「見たことはあるけど、ちゃんとスオウは教えてくれなかったよ。だからさも当然の様にそれを見せつけるバカは、逆にとっても怪しいよね。

それに模様が広がるなんて墓穴も良いところだよ！　クリエの目は誤魔化せなんだからこの偽物！！」

「し、しまったあああああ！！」

バカに論破されちゃったよ。しかも子供に。なんだか僕の心が砕けそうだ。くっそ、バカな子供もなかなか侮れないじゃないか。そっか……ちゃんとこの模様の事話して無かったっけ？

まあよくよく考えれば、「これは呪いで、後少しで僕は死ぬかも知れない」とは子供に言えないよな。クリエは僕を頼ってくれてたし、尚更だ。

うう〜〜ん、だけどこうなったら逆にちゃんと言わないと信じて貰えそうにないよね。完全に僕の事偽物だと思いこんだみたいだし……

「――って、僕は本物だ。今の『しまった』は無しな。無し。お前

の推理に乗ってやっただけだから」
「見苦しいぞ偽物！　この名探偵クリエちゃんの目は誤魔化せないんだから！！」

おいおい、自分で名探偵言っちゃってるよ。ノリノリだな。全く、しばらく眠ってたから忘れてたけど、そう言えば面倒なガキだったなクリエって。

「たく、しょうがないからお前には真実を教えてやるよ。お前には言いたくなかった本当の真実って奴だ。心して聞けよクリエ」
「はいはい、今更何を言ったって無駄だろうけど、名探偵クリエちゃんは寛大な心の持ち主だから聞いてあげるよ。ホラホラ、言ってみ」

ムカってした。なんかムカッってさ。ふふ、名探偵？　これを聞いてもそう言ってられるのか見物だな。この真実はお前には余りにも重く、残酷だ！

「実はこの腕の模様は呪いなんだ。邪神テトラに受けた呪い。この模様が僕の全身を包む時、僕は死ぬらしい。だからお前には言わなかった。言えなかったんだ。
これが……真実だ。すまないな、子供のお前には言えなかったんだ」
「……」

どうやら言葉も出ないらしい。まあ無理もない。ショックだよな。そうで無いといけない事だ。社の周りを囲む枝がザワザワと波打ってるよ。
ほんと、何で風もないのにこの枝は揺れてるんだろうか？　不気味でならないよ。さて、これで信じて貰えただろうし、早速二人で

戻ろう。ふふ、あのローレの奴の悔しがる姿が目に浮かぶ様だぜ。
まあ輪郭しか見てないけどね。僕は手を差し出して、歩き出す事を促す。だけどその時だ。ペシっと僕の手は弾かれた。

「なっ……何故！？」
「何故も何も、その話はどう考えても信じれないよ。クリエもテトラは知ってるけど、実在するなんて聞いたこと無いもん。そもそもとっても古い物語の神様だし。
今の話を信じろって言う方が無理かも」

なんてこった……確かに言われてみれば言葉だけじゃ今の話を信じろと言うのは無理かも知れない。プレイヤーならまだともかく、この世界で生きてるクリエには厳しい。あれ？　もしかして僕ってこのクリエよりバカなんじゃないか？　そんな衝撃の事実に気づいちゃいそうだ。やばい、どうにかして目を逸らさないと立ち直れないぞ。
僕がそう思ってると、更に追い打ちをかける様にこう言ってくるクリエ。

「そもそも神様とか――ププ、痛すぎるよね♪♪」

ズガーーーン！！　だよ。笑われた。自分よりも超ちっちゃい存在に心の底から笑われた！！　僕は膝から崩れ落ちるて頭を垂れるよ。僕のプライドは砕け散った。

「あっははーー、クリエちゃん大勝利♪　さぁ早く本物のスオウをだしなさい！」
「いや……だから僕が本物なんだよ」
「もう、往生際が悪い！　良いから早くスオウを――」
「いやいや、だから僕は正真正銘の……いや、実はもうスオウとは

名乗れないのかも知れないな僕は……バカな子供の筈のクリエに負けたし」

スオウと言う名前に負けてる存在となってしまった訳だ。改名しないともうダメかも知れない。だけどよくよく考えたら自由度の高いＬＲＯだけど、名前はそう簡単に変えれないんだっけ？　どうだったかな？

「――えっと……まさか本当にスオウなの？　私の知ってる？」
「ああ、だから何度もそう言ってるだろ」
「マジで？」
「マジマジ。もう忘れたのかよ。良く見ろ、どう見ても僕の筈だ」

そう言うと、まじまじと見てくるクリエ。なんか臭いとかまでクンクンしてるし、おいおいちょっと恥ずかしいぞ。まあ、もう無駄な張り合いするわけにも行かないし、心が砕けた僕はクリエを受け入れてるけどね。

「スオウの臭いがする！」
「そんなに臭うのか？　それは流石にちょっとショックなんだけど……」

汗臭さとか、ＬＲＯなんだから補正してる筈だと思うけど。だって女の子ってどんなに汚れてたって良い匂いするぞ。それこそ変な臭いをつけられない限り。それか肥だめにでも落ちない限りはな。

「ねえちょっとギュッってしてみて。そうしたらもっと確実に分かるから」
「ん……」

僕は気恥ずかしかったけど、両手を差し出してるクリエを優しく包み込んでやった。すると何を納得したのかわかんないけど、クリエはこう言ったよ。

「うん、スオウだね」

「何をお前を感じたんだ？」

「えへへ～」

ニコニコ顔のクリエが上機嫌になってる。たく臭うんじゃ無かったのだろうか。まあ納得してくれたんなら良いけどね。

「よし、じゃあ戻ろうぜ、みんな待ってるしな」

「みんな？」

「みんなはみんなだよ。シルクちゃんやテッケンさん。セラにノウイに鍛冶屋だよ。お前だって知ってるだろ。もう忘れたとか言うなよ」

僕がみんなの名前を出すと、クリエは横向いて「ああ～」とか呟いてる。本当に覚えてるのかコイツ？　まあ顔を見れば自然と分かるよな。そんなもんだ。

「失礼だねスオウは。クリエちゃんと覚えてるよ。だってお世話になったし、私シルクお姉ちゃん好きだよ」

なんか一番優しくしてくれた人の名前を出した感はあるけど、まあ納得できるかな。シルクちゃんは優しいもん。それにいつもニコニコほわほわしてる感じだから子供にも確かに好かれそうではあるよな。

「まあシルクちゃんは当然だよな。じゃあセラとかはどうなんだよ

？　お姉ちゃんもう一人いたろ？」

僕がそう言うと、何を思い出したのか知らないけど、あからさまに顔を逸らすクリエ。えぇ！？　どうしたんだ一体？

「……おい」

「セラお姉ちゃんは良いんじゃないかなアレで……なんだか私がスオウを振り回してると、敵意をビンビン感じるけど」

なんだそれ。そんな敵意のせいで苦手に思ってるってことかよ。たくセラも子供に何を向けてるんだ。まあだけど、よく考えるとあいつ僕とノウイ以外の外面だけは良いんだよね。

そんなセラがあからさまに敵意なんて向けるかな？

「気のせいじゃないのか？　あいつ普段からギラギラした目してるから、そう感じただけとか？」

「ううん、クリエには分かるもん。女の直感あるもん。あれは絶対に敵意だった。それにいつも私を見下してるし！」

それはお前の身長上仕方ない事なんだけど。寧ろこのＬＲＯでお前を見上げる奴の方が希だよ。てか女の勘って、まだまだガキの癖に何を言ってるのか。

「はいはい、まあしょうがないよ。アイツ僕にも良く敵意向けてくるし、だからこう考えろ。

セラは実は恥ずかしがり屋のツンデレちゃんなのだ。ツンツンしてる部分は本当は本音を隠すための鎧。だから僕たちはその裏を知っとかなきゃいけないって事」

「ツンデレって何？」

おお、なんだか一般人的な疑問が帰ってきた。今時ツンデレも知らんとは、やれやれ公用語だぞ。

「ツンデレってのは普段ツンツンと素っ気ない態度や辛く厳しく当たってても、実は心の底では好き好き大好き言ってる奴の事を言うんだよ。

そんな好き好き大好きが時々デレッて出るときがある。だからツンデレ。分かったか」

「う～ん、じゃあ本当はセラお姉ちゃんはスオウの事好きなの？」

「う……」

僕の体が硬直したよ。確かにツンデレ理論で考えればそういう事になるんだろうけど……だけどリアルにそれが当てはまる人間が早々いるかな～と考えるとそうでもなさそうだよね。

嫌いな奴には嫌いな態度を取るのは当然だし、それでもつき合えるのが大人って感じ？　まあだけど学校生活でも嫌いな奴はいるわけだし、そこは社交性の問題か。

セラのツンデレ説はヒドい扱い受けてた僕が、そう思えば我慢できると思えた時に考えたある意味妄想だしな。実際ここでセラが僕の事を大好きなんだぜ！　とは言えないよ。何かの拍子にこいつが口を滑らせると、マジで殺されかねないし……さてどうしたものか。

「まあ好きって言っても色々あるしな。アイツと僕は今、頑張って友達になるための信頼関係を築いてる途中だから、ツンデレが出やすいんだよ」

自分で言ってて「なんだそれ」って思ったけど、もう押し通すしかない。

「ふ～ん、でも友達ってなろうと思ってなるものじゃないよね。い

つの間にか友達が正解だよスオウ」
「なんかそれ、お前には言われたくない。てか、成長していくと、それだけじゃダメな時があるんだよ。友達を作るにも努力が必要って言うかさ……だから互いに頑張って、今は少しずつだけど改善してるんだぞ」

そうそう、何とか最近は暴言を吐かなくなってきたし、前よりは接しやすくなってると思う。やっぱり我慢を続けるよりも、ぶつかる事って大切だよね。

「ツンツンデレデレか……でも普通、嫌いって分かった時に一緒に行動しないような気がするけど」
「僕たちはやむを得なかったんだよ。色々とその時大変でさ。お互いの利害が一致したし、やらなきゃいけないことも互いにあって、だから僕たちはお互いを利用してたんだな。
その薄い関係改善を今計ってるんだよ」

なんだか順序を間違った感があるな、こうやって話してみるとさ。だからこそ僕達は互いを傷つけあってたのか。

「ねぇねぇ、スオウとセラお姉ちゃんはそれで良いけど、クリエにツンツンするのはじゃあ何でなの？　何もやろうとしてないよ」
「それはアレだろ。きっとアイツはああ言う性格だけど実は可愛い物好きだったりするんだよ。だからちっちゃくてヌイグルミみたいなお前が実は気になってるじゃないか？　ほら、メイド服とか来てる奴だしさ」

完全に僕の勝手なイメージだけどな。だけどクリエは納得してくれたみたいだ。

「そうなんだ。確かに恥ずかし気もなく、メイド服着てるもんね」
にこっと笑ったその顔はとっても無邪気で愛らしい。だけどなんか、一瞬寒気がしたのは何でだろう。この純真無垢な少女の言葉の奥に黒い物を感じたから？
「だけどここでスオウにクリエちゃんから友達を作る上で最も大切な事をアドバイスしてあげる」
「うん？　なんだいきなり？」
なんか話がこうホップしたな。てか、友達いない奴にどんなアドバイスが出来るんだよ。頭の中の妖精さんは希望してないんですけど。
「ふふふ、大切な事は一つだけだよスオウ。信頼関係とかツンデレとかじゃなく、スオウが本気で友達になりたいって思う気持ち！それがあればきっと誰とでも友達になれるの！」
大きく腕を伸ばして元気いっぱいにそういったクリエ。実際何の変哲もない、当たり前の事だけど……そうだなそれが一番大事かもね。僕はクリエの頭を今度は優しく撫で撫でするよ。
「おう、そうだな。大丈夫僕はちゃんと友達になりたいって思ってるよ。アイツ凄いしな。尊敬だってしてるんだぞ。だけどこの事は絶対にセラには言うなよ。
バカにされそうだからな」
「うん！」
なんだか幸せそうなオーラを放って、目を細めてるクリエ。そんなに撫で撫でが気持ちいいのか？　ただ撫でてるだけなんだけどな。

「さて、本当にそろそろ行くぞ。今度こそ手を取ってくれるだろ？」
僕はそういって立ち上がり、クリエに手を差し出すよ。すると今度は迷わずそんな僕の手に、クリエの小さな手が重なる。そしていつもの元気な声で「うん！」と言った。
僕はクリエを今度は前で抱えて社を後に。すると待っててくれたモブリがこちらに気付いて丁寧にお辞儀をしてくれる。
流石出来たメイド……というか仲居かな。

「お疲れさまです。ご無事でなにより……クリエ様もお目覚めになられたんですね」
「ええ、おかげさまで。実際半信半疑だったけど、ローレには感謝してます」

僕がそういうと、仲居さんは誇らしげにこういう。

「当然です。ローレ様は素晴らしい人です。ふざけてる所も多々ありますが、そんな所も含めて私達はあの方を慕ってるんですよ」

本当に嬉しそうにそう言うから、ローレはやっぱりなかなかに凄い奴なんだと改めて思った。やっぱり自分で自分の事を「スゲー」というより、誰かから聞く方が重みがあるよね。
だけどホント……こんなに慕われてるのにあの性格は残念の極みだよね。ふざけてる所も多々？　僕には百パーセントふざけた所しかない奴だと感じたけどね。だからこそあの社の事だってなんだか信じれなかったしな。
まあ結果オーライだったけど。

「ねぇねぇローレって誰？」

僕の腕から興味津々にそんな言葉を紡ぐクリエ。

「ローレってのはここリア・レーゼの姫御子様だよ。とっても偉いんだぞ。立場だけはな」

「立場だけとは心外ですね。とっても立派な方です。クリエ様にはあの方の素晴らしさをとくとくと説いて差し上げますよ」

僕の言葉がちょっと気に入らなかったのか、仲居モブリにそう言われた。あはは……まあ何故か僕にじゃなく、クリエに説くのは意味が良くわからんけど、良いんじゃいかな？

僕は聞きたくない。元来た道を下りながら、僕達がそんな会話をしてると、間に挟まれたクリエが違うところに食いつくよ。

「そんなのヤ～。そんな事よりも今リア・レーゼって言った？　クリエ、サン・ジェルクの外に居るの？」

「まあそうだな。僕達が連れ出した」

「外！？　ホントに！」

クリエは僕の腕の中で暴れ出す。そして腕から飛び出して階段に降り立つと、勢い良く駆けだした。

「おい、ちょっと待て！」

僕はそういいながらクリエを追いかける。

「お二人とも何をしてるんですか？　主は待ってるんですよ」

そう言いながら仲居モブリも渋々僕達の後を追いかけて来た。鳥居が幾重も続く階段を下り、途中でアトリエに続く道も素通りして

世界樹の大きな傘の一番下部分へ。そこでクリエは思わず立ち止まったよ。

「ふぁあ！」

そんな感嘆の声を漏らしてクリエは空中回廊ではしゃぎまくるよ。まあわからなくも無いけどね。実際この光景を目の当たりにしたらテンションおかしくなる。

「凄い凄い！！　お星様がとっても近いよ！！」

そう言ってクルクル回りながら周りの星に手を伸ばすクリエ。まあ届くわけもないけど、だけど地上よりはずっと星に近い場所だよな。願い事が届きそうな距離というか……さ。実際さっきまでは世界樹の枝が邪魔だったからこんなパノラマ風景にはなってなかったもんな。

森を歩いてて夜だから暗いのかな～と思うくらいだったろう。だけど実際の場所を知ると、こうもテンションが変わるんだ。

なんだか心温まる気持ちでそんなクリエを眺めてたけど、アイツハシャギ過ぎて端っこの方に近づきすぎたみたいだ。

突如足を踏み外して僕達の視界からその姿が消えた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

「きゃあああああああああああああああ！！！！」

僕と仲居モブリさんは大絶叫してダッシュする。死んだろ……これは死んだ！！　と思ったら、なんとか間一髪でクリエの手が床を握り締めてるのを発見した。僕は安堵して息を吐く。そしてクリエの手を取るために腕を伸ばすよ。

帰ってきたら（後書き）

第三百七話です。

ようやくクリエ復活です！　だけど久しぶりに書いたから、クリエってこんな感じだったっけ？　ってちょっと不安になりましたね。まあこれで役者も揃ったし、この話も佳境へ向けて動き出さないといけない感じです。

でもここらは折り返し地点程度ですけどね。だけどアルテミナス程長くなる事はないと思います。きっと。

てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

近くて遠い場所（前書き）

落ちかけたクリエを引き上げる僕。本当に本当に……本当に本当に本当に本当に本当に心臓に悪かった！！　何やってんのこいつ？　こっちがショック死するかと思ったわ！

まあなんとか無事だったから良かったけど、はしゃぐクリエの気持ちもわかるしね。そしてここにはクリエが目指す場所に一番近い場所。それにクリエも気付くよ。

近くて遠い場所

「あわわ〜あわ――！！」
「クリエ！」

僕は何とか踏みとどまってたクリエの手を取る。そしてその小さく軽い体を引っ張り上げてその場に尻餅を付いた

「はぁはぁはぁ……このバカ！！　もっと気をつけろ！」
「ふぇっ……ぅぅ……ごめんなさい」

僕が本気で怒鳴ったからか、クリエが涙を溜めて謝った。てか、マジでビックリしたよ。今までで一番の衝撃だったかも知れない。だって……今のは心臓に悪すぎる。まだ心臓がバクバクしてるよ。

「本当に……まぁ良く無事だった」

僕はそう言ってクリエをギュッてした。ただ怒鳴るだけでもなんか……だから、心配したことと、無事なのが嬉しい事、伝えるにはこれが良いかなって。

「うん……ごめんねスオウ。だけどここって……街？」
「ここは世界樹の木の部分なんですよクリエ様。リア・レーゼの街はこの下にあります。きっと下にも行けるのでその時はこの街の素敵な場所を案内して差し上げます。ですけど、一番の丸秘スポットはここな訳ですけどね」
そう言って仲居モブリさんはウインクするよ。まあ確かに下の街にここを越える何かがあるとは思えないよね。一番のスポットに真

っ先にくるって、これ以上の期待が出来ないって意味でダメだよね。
まあ遠目で見ただけだけど、下の街も綺麗そうだったよ。
「下……それってこのおっきな丸いの？」
そう言ってクリエは僕の腕から出ようとしながら首を伸ばすよ。こいつはまた……さっき言ったばっかりじゃん。僕はしょうがないからしっかり抱き抱えたまま下を覗ける用にしてやるよ。
「うほほ――！　さっき落ち掛けた時も見たけど、スッゴい綺麗だね！」
興奮気味にそう言うクリエ。てか、あんまり暴れるな。ヒヤヒヤして心臓に悪い。
「そうですね。ここから世界を見てると、私達の世界がどれだけ美しくて愛おしいか、それを確認できます。クリエ様、ここは世界で最も願いが届きやすい場所なんですよ」
「願いが届きやすい？」
「ええ、ほら下だけじゃなく、上も見てください。満点の星空です。ここは星々に近いので、神様が聞き易いんですよ」
そう言われたから今度は「上上！」とうるさいクリエ。てかさっきハシャいでたのはこの星空に感動してたからだろう？　わかってる癖に良くそんなに興奮できるな。いや、まだ興奮が続いてるって事か？
僕はクリエを抱えたまま、今度は仰向けに寝るよ。立ってみるよりさ、こうやった方が星空って堪能出来るからね。そしたらなんか、僕までちょっと感動。

「おお！　なんか思ってたより凄い」
「いつも見てる星空と違う感じがするよスオウ。なんだか丸くないし、吸い込まれそうって言うか」

確かにクリエがそう言うのもわかる。まさにそんな感じだよ。星々が離れてる闇の部分とか、なんだかマジで飲み込まれそうな感じ。
それに一番はやっぱり丸くないんだよね。それは星の外側に僕達が居るって事なんだろうな。これは新鮮だ。でもだから感じる恐怖が「吸い込まれそう」と感じるのかも。

「そうだ！」

いきなりそう言ったクリエは、突然僕の腕を解いて胸の辺りに立ち上がる。なんだなんだ？

「ねぇ、ここは空なんだよね？　だったら月にも一番近いはずだよね」

あっ……と思った。確かにクリエならそれに関心あるよな。ずっと行きたいと思ってた場所。そこに一番近いのがこの場所なんだ。クリエはそう言って人の上で月を探してる。
せめて降りてくれないかな。なんか屈辱的なんだけど。てか、月らしい物体は見えてないと思う。だって月なんてあったら一発で分かる筈だろ。
距離が遠くの星とは違うんだからな。

「今は星の裏側にあるのでしょう。まだ見えませんね」
「それじゃあ待つ！　クリエは月に行きたいんだもん。これだけ近かったらジャンプすれば届くよね！」
「それは……」

いやいや、流石にそれは無理だろ。仲居モブリも困った顔してるぞ。別に気を使わずにはっきり言ってやれば良いのに。しょうがないから僕が直球でクリエにかましてやるよ。

「行ける訳ないだろ。お前は自分の跳躍力がどれだけあると思ってるんだ？」

「ちょうや……ん？　そんな事よりクリエ知ってるもん。こういう所ではフワフワ跳べてクリエのジャンプ力は三倍増しになるんだよ！」

「お前……それはどこで手にした知識だよ」

なんで限定的に三倍なの？　宇宙空間では三倍増しがデファルトなのか？　どっかから赤い彗星が落ちてくるの？　まあ宇宙空間なら重力の縛りは無くなるだろうけど……今さっき下に落ち掛けたの忘れたのかコイツ。きっとまだこの星の引力下に僕達は居るんだろう。

だからフワフワもきっと跳べないよ。

「そんな！　こんな星に近い場所に居るのに行けないなんて……」

ハシャいでたクリエが僕の胸辺りに腰を下ろす。いや……いい加減マジ退けよ。僕がこの態勢から動けないじゃないか。何故に僕は地面と同化してないと行けないんだよ。

だけど落ち込んでるクリエの姿を見ると、なんだか言えないし……しょうがないから口を動かすことに。

「ここじゃあまだ行けなくても、必ず連れてってやるから安心しろ。どうにかしてやるさ。必ずな」

なんの保証もないけど。けど、実際僕とクリエは既に一蓮托生みたいな感じだと思うんだよね。きっとこの物語のどこかで金魂水を使う時がくるはずだ！　と願ってる。てか、このルートが外れだと、僕が生き残る未来はないし。
やってやるさ。例えその目的地が月でもさ、ＬＲＯなら月までも行けそうな気がする（何となく）。

「本当に？　クリエの願い、スオウは叶えてくれるの？」
「前からそう言ってるだろ。どこまでも付き合ってやるってさ」

僕がそう言うとクリエは胸に頬をすり寄せてくる。なんか機嫌が戻ったみたいだな。僕はクリエを支えて体を起こす。目の前に広がる闇に浮かぶ、星の美しさ。雲が動く様とか、この星が生きてると思わせる物だ。
そして空を見るとどこまでもどこまでも輝く星が見える。本当にこのＬＲＯって奴はどこまで続いてるのかな？　途方も無く思える……けどだからこそ、どんな可能性だってあるんだって信じれるんだ。

「では、そろそろ戻りましょう。みなさんお待ちの筈ですし、食事も用意されてますよ」
「食事！　ご飯減った！！」

おかしい言葉を気にもせずに僕の腕から飛び出たクリエは、急いで鳥居の方へ走る。なんて現金な奴。まあずっと眠ってたから、お腹減ってるのは当然ではあるけどね。

「ほら、二人とも急いでよ！！」

そう言って待ちきれない位にソワソワしてるクリエ。その場でジ

ャンプして僕達を急かすよ。

「たく、アイツは……」

僕はそんな文句を呟きつつも歩き出す。やっぱりなんか安心なんだ。眠ってて大人しかったクリエもある意味良かったけどさ、やっぱりクリエはこうでないとと思う。誰かを無邪気に振り回すのがらしいって言うか。

僕達はそんなクリエと共に、アトリエへと帰還します。

「遅かったわね。ほら、偉大な私に言うことがあるんじゃなくて？」

アトリエに付いて通された部屋は最上階じゃなく、なんだか大きな和室。宴会場みたいな場所な訳だけど、その一番奥のモニターに布越しの姿だけが映ってるローレの第一声がそれだった。

なんかこう……辟易するな。たく、自分で言わなければ、本当に良いのに。自分の評価を下げてる事に気づけよ。

「へいへい……流石の姫御子様のお力のおかげで無事、クリエはこの通り目を覚ましたよ」

僕は感情を込めずにそう言ってやるよ。お望み通りの言葉だろ。

「言い方は気に入らないけど、まあ今は許してやるわ。それよりもこうやってみると、その子にそんな力があるとは思えないけどね」

「それはそうだけど、事実だろ。とにかくこれからどうするかだ」

僕はそう言ってクリエの方を見る。僕がクリエを目覚めさせて連れ帰った今は、みんながその目覚めに沸き立ってる状態。そんなみ

んなに囲まれて、クリエはニコニコ無事の報告中。
そう言えば今更だけど、アイツあの社の中で起こったことは覚えてないみたいだ。寝てたからって事なのか……それともアイツにとっては夢だったからなのか……とにかくあそこで起こった事も一応伝えて、ローレには話して貰う事があるな。あの場所の事。

「まあ、今は少し休みなさいよ。あの子の事もあるしね。楽じゃ無かったでしょ？　連れ戻すの。食事の後にこれからの事は話しましょう」

そう言ってプッツンと画面は無くなったよ。なんかただ早く飯を食いたいだけみたいな感じだったような……まあいいけど。
そう思ってると、どこからか「グルルルッギュル」ってな感じの雄叫びが聞こえた。なんだ一体？

「えへへ、お腹の虫さんがご機嫌斜めみたい」

そう言って照れ笑いしてるのはクリエ。今のが腹の虫とか、お前のその体の中には何が存在してるんだよ。なんかもの凄い音がしてたぞ。

「ふふ、目の前の料理があるのに、私達が構ったせいで我慢させちゃったね。スオウ君、お話が終わったのなら、一緒に食べましょう」

そう言ってシルクちゃんが呼んでくれる。まあまずはこの食事を終わらせないと行けないみたいだし、一息付くためにも堪能するかね。
僕は適当な所に腰を下ろすよ。すると何故か僕の膝の上にさも当然の様にのっかってくるクリエ。

「おい、何でそこに来る？　邪魔なんだけど……」
「ここが一番落ち着くから～」

そう言って目の前の料理に手を伸ばすクリエ。おいおい、可愛い事言ってくれたけど、行動は卑しいぞ。僕は直に手づかみしそうだったクリエの手を取り合えず止めた。

「たく、別に良いけどとりあえず直で取ろうとするなよ。箸使え、箸」
「ええ～、箸って苦手なんだもん」

ブースカ頬を膨らませてそう言うクリエ。たく、ワガママな奴だな。そう思ってると、仲居さんがクリエ用の箸を用意してくれた。なんかチッチャくてキャラ物の奴だ。

「可愛い！」
「それは良かった。お食事は楽しくしないと行けないですからね」

そう言って飲み物を置いて出ていく仲居の人達。なんか至れり尽くせりだね。そう思ってると、他のみんなもそれぞれ思いの場所に、僕の両サイドにはシルクちゃんとテッケンさん。正面にはセラで、その両側に鍛冶屋とノウイ……までは良いけど、何で一番の上座っぽい所にリルフィンが？　てか、僕たちに混じって飯食う気かよコイツ。

「誰――？」
「私の事は気にするな」

クリエの疑問に答える事無く、リルフィンは一人で「いたたぎます」をして箸を動かし出した。客に対する気遣いがないねコイツ。

まあ元は敵として出てきたし、客の対応されてもなんか違うけど……しょうがないからクリエには僕から説明しといてやる。
そこまでコイツの事知らないけど、とりあえずで一応な。

「そいつはリルフィンだよ。ここリア・レーゼの姫御子様の右腕みたいな奴だな。それなりに偉い奴らしいぞ」
「ふ～ん、でもなんか怪しいよ。服汚いし、せめてその黒いローブは脱げばいいのに。なんだかテンション下がっちゃうね」

初めて会った奴に対して、随分な言いようだなクリエの奴。だけどリルフィンは聞いてないのかそれとも耐えてるのか、進む箸を止めることはない。

「良いじゃないですか、ここが彼のお家なんですよ。自分流で食させてあげましょう。それよりもご飯の前にはちゃんと頂きますをしないとダメだよクリエちゃん」

横からシルクちゃんのお姉さんみたいな言葉が入ってくる。うん、やっぱりシルクちゃんが隣だとなんだか安心するね。お世話好きみたいだし、クリエの事何かと構ってくれる。実際僕は鬱陶しく思ってるから、ホント助かる。
クリエもシルクちゃんの言うことは聞くしね。お互い好き合ってるよ。ちゃんと「は～い」と言ってくれたクリエに対して、シルクちゃんはにっこり笑顔でこう言うよ。

「はい、それじゃあ両手を合わせて『頂きます』」
「いただきま～～す！！」

そしてそんなシルクちゃんとクリエに続いて僕たちも頂きますして食事は始まった。結構豪勢な料理だよ。日本を意識してある国だ

からか、なんか和食っぽい。懐石料理って奴かな？　まあＬＲＯだからそこら辺は謎だけど。
味は流石に街の代表も食す物だけあって美味しいよ。だけど実際、ＬＲＯでこういう食事って取らないんだけどね。食事って概念って言うよりも、戦闘に入る前の補助魔法的な感じ？　手軽に口に入れて、心と体を満たすみたいな。
それにＬＲＯでの本格的な食事は推奨されてないしね。満腹中枢を刺激するおかげで、ＬＲＯで食事してリアルでは食べない『疑似満腹ダイエット』なる物が流行ったからね。
そのせいで過度の栄養失調者が続出したんだ。リアルの体に還元されるエネルギーを何も取らずに、頭だけは腹一杯と感じるんだから、確かにダイエットには最適だけど、やりすぎるから問題になるんだよね。
まあだからこそ、ＬＲＯの街にはカフェとか一杯あるけど、食事所って奴はないのだ。まあ居酒屋とかならあるけどね。
祝勝会とか開くために、そういうのはある。それに逆にそれを利用も出来るしね。実際、ＬＲＯなら未成年でもアルコールが飲める。法律上問題ないです。
なんせ妄想と一緒だからね。そこまで法律は規制出来ないのだ。まあだけど、リアルよりはお高めに設定はしてあるよ。
でも大人と同じ条件で子供も稼げるし、どこまで意味あるかは謎だけど。高くすることで、特別な時しか行けなくしてあるってのは有効ではあるかな。まあ僕は行ったこと無いけど……だって色々と僕の場合は後が大変で……そんなのに参加できないんだよね。
確か、アルテミナスの時だってやったって聞いたけど……僕、入院してましたから！！　勝利の美酒の味を知りません。そもそもＬＲＯに来て、こんな感じに食事を取ること事態初めてだな。こんな何も補助効果とか気にせずに、ただ楽しく食事だけをするって……変な感じだ。
これで浴衣姿とかだったら、完全に旅行だよね。冒険とは言えな

いよ。

「スオウ、アレも食べたい！」

「ん？　へいへい」

僕はクリエの指定する物を小皿に取り分けてやる。その間にも目の前の料理を凄い勢いで食べてくクリエ。コイツのこの小さな体のどこに入って行ってるのか疑問だな。

そう思ってると、勢い良く頬張りすぎたのか、僕の膝の上で盛大に噎せるクリエ。

「ゴホッ！？　ケッホックッガッ……」

ヤバいヤバい、かなり苦しそう。そう思ってると、隣からシルクちゃんが素早く水を差しだしてくれる。それを勢い良く掴むと豪快に喉に流し込むクリエ。小さいのに行動だけはパワフルな奴だな。

「んぎゅ……ごく……あぐ……プッハァ！！　死ぬかと思った！！」

「僕は戻されるかと心配になったよ」

「ひど～い！　もっと心配してよスオウ！　クリエはクリエは心外だよ！」

「たく、食事の時までお前の心配なんてしてられるかよ。飯は逃げないんだから、もっと落ち着いて食え」

なんだかさっきから一人争奪戦でもしてるかの様な食いっぷりだったからな。何を慌てる事があるんだよ。

「逃げちゃうよ！　てか取られちゃうよ！　セラお姉ちゃんに！」

「は？　お前なセラがそんな大食漢な訳がないだ――」

クリエの言葉に目の前のセラへ目を移す僕。するとそこにはこちらをジト目で見据えつつ、目にも留まらぬ早さで箸を動かしてるセラが目に入った。
おいおい、なんかずっとモグモグしてるぞ。モグモグしてるのにそれでも口に食事を運ぶから、両頬がハムスターみたいになってるよ。

「ふふ、セラちゃんは可愛いね」

そんな様子を微笑ましく見てるシルクちゃんの感想です。だけど僕にはそうは思えない。てか完全に「何やってるんだ？」状態だよ。可愛いとかじゃないよね。明らかに目が逝っちゃってる、

「おい、セラ……お前どうしたんだ？」

てか、何で僕を睨んでるの？

「別に……睨んでなんかないわよ。私は食事を吟味してるだけ。思い上がらないでよね」
「そんなに気に入ったんだ……ここの料理」

なんか今一信用できない答えだな。だって、全然視線が料理に注がれてねーよ。ずっとこっち見てる。なんだろう……また何かやらかしたっけ？　僕はそんな事を思ってるとセラの言葉に左側のノウイが反応するよ。

「セラ様セラ様！　そこのお団子っぽいの美味しいっすよ！　とってあげましょうすか？　それともそれとも――」

ノウイの奴、頑張ってセラの好感度でも上げようとしてるのか？

まあ殆ど視線も向けて貰えてないけどね。

「――これなんて最高に美味いっすよ！！」

いや、ただ単に楽しんでるだけかも……結構お気楽な奴だったか。てか、セラの両サイドはハッチャケてる感じ。特に右側の鍛冶屋とか、既に顔赤いし。

「酒だぁ～～！　酒もってこ～～～い！！」

まさか本当にこんな事を叫ぶ奴がいるなんて……完全に出来上がってるじゃねーか。酔っぱらった鍛冶屋は酒を片手に、リルフィンへちょっかい出してるよ。

一応客に当たるからかリルフィンも強引に引きはがしたりはしならしい。だけど黙々と食事を続けるだけのリルフィンに鍛冶屋はしつこく酒を勧めてる。

やっぱ酔っぱらいはうざったいな～とか思ってる間に再びノウイを見ると、全然反応してくれないセラのせいで、ノウイまで酒を煽ってた。

けどそれにさえ、微動打にしないセラ。既にそっち側は異空間に思える様相を呈して来てるぞ。

「はい、クリエちゃんあ～ん」
「あ～ん。モグモグ……美味しい！　もう一個！」
「はいはい、可愛いねクリエちゃんは」
「えへへ～シルクお姉ちゃんもとっても可愛いよ！」
「ありがとう。はい、あ～ん」
「あ～～ん」

なんだこれ！？　前方はカオスだけど、こっちの癒し空間度がハ

ンパない！　この二人は僕を萌え殺す気か？　この位置からシルクちゃんの「あ～ん」を聞くと、あたかも僕に言ってくれてる様な錯覚に陥れるな。
僕はこっそりと目を閉じて、シルクちゃんの声を聞きながら料理を口へと運ぶ。するとなんか喉にプスってする痛みと共に、歯にはガリッと言う何とも前衛的な食感が伝わってきてこれはこれでなかなか――な、訳あるかぁ！？

「ゲホっ、ゴホッ！！」

僕は目を開けて口に入った何かを吐き出す。すると何故かそこにはお箸が一本ある。まさか僕が食べたのはこの箸だとでも言うのか？　――って、んな訳ないから！　自分の箸を誤って噛んだとかでも当然ない。
これは明らかに誰かからの攻撃……嫌がらせ。そしてそんなのが今この状況で出来るのは一人しかない。僕は目の前のセラに視線を向ける。するとアイツは、悪びれる事も隠す事もなく、一本になった箸で皿に載ってる食事をブスブスと指してるよ。

「……」

文句言おうと思ったけど、なんかその光景見てたら声が出なくなった。あれ～さっきの箸が刺さったダメージが案外大きいぞ。やっべ……なんかスッゴいセラが怖い。こんなに病んでたっけ？　一体、僕がクリエを目覚めさせてる間に何が？

「テッケンさん、何かセラの様子おかしくないですか？」

僕は一番の常識人で、信頼が置けるテッケンさんに相談することに。やっぱりこの人しか僕には頼る人がいないよ。なんか黙々と食

事してたけどさ、お願いします。助けてください。

「そうかな？　アレじゃないかい。クリエ様が帰ってきて、それにスオウ君が掛かりきりだから寂しいんじゃないのかな？」

またまたテッケンさんまでそんな冗談を！　セラが寂しいとか意味不明だよ。てか、その程度で不機嫌になって貰っても困る。なんだかカオスのこの状況、辟易してくる。楽しい食事？　になってるのかな？

近くて遠い場所（後書き）

第三百八話です。
皆さん忘れてるかもしれないですけど、クリエの目的地は月なのです。まあ安易に月って訳じゃないかも知れないですけど。これからスオウ達は一応そこを目指す事になります。
それしかないしね。それがきっと全てを解決するために必要かな？　とスオウ達は信じてます。
てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

お食事後は本音の時間？（前書き）

腹が膨れて、さあ本題に入れるって所なのに鍛冶屋とノウイは畳の上でグースカ寝る始末。クリエはシルクちゃんと更に仲良くなったようで良いけど、僕とセラは二人で喋ると何故か雰囲気がギスギスした方向に行くんだよね。

そんな中、僕達の所にテッケンさんも加わってきた。そしてそこでテッケンさんの意外な考えを知る事になりました。

お食事後は本音の時間？

はてさて、楽しい食事の時間も終わると、酒を煽ってたバカは眠りに入りやがったよ。おいおいまだまだ寝るには早い。
てか、これからが本番だっての。ようやくクリエも復活したんだし、ここからどうするかがきっと大事だろ。それなのに鍛冶屋とノウイと来たら……

「別にいいでしょ、その二人はいなくても」
「おいおい、さらっとそういう事言うなよな。仲間だろ。仲間外れなんて可愛そうじゃないか」

幾ら鍛冶屋とか時々忘れられる存在だからって、意図的にやったら虐めだぞ。セラは全くひどい奴だな。

「だけど起こしたって面倒なだけじゃない。酔っぱらいって私嫌いなのよね」
「まぁそれはわかるけどな。水でもぶっかけて起こせば酔いも冷めるんじゃね？」
「アンタね……どっちがヒドいか分かったもんじゃないわね今のは」

なんか僕が非難の目をセラから浴びてるぞ。どう言うことだよ。僕はただ酔っぱらいの目の覚まし方をだな……

「ほらほら、ちゃんと口元拭かないとダメだよクリエちゃん」
「んーんー！」

なんだか僕たちの微妙に険悪な雰囲気とは違う癒しのオーラが見

える。優しく口元を拭って上げてるセラはとっても出来たお姉さんみたいだね。
　クリエもお姉ちゃんの前ではなかなか大人しくしてるし、もう任せきりでもいいよねって感じ。

「美味しかった！」
「うん、そうだね。それじゃあちゃんとお礼しないとね」
「うん！！」

　そんな会話の後、クリエは食器を下げてる仲居さん達に向かって「ありがとう」と言ったよ。なんかクリエが普通の良い子に見える。やっぱりシルクちゃんの影響か？

「なんだかアンタと一緒に居るときのクソガキ具合が減ってるわね。やっぱり構う相手で違う影響が出るのかしら？」
「なにが言いたいんだよお前は」

　まあ僕も思ってたけど。このままシルクちゃんに任せればバカでも無くなるんじゃないかと……あの微笑ましい二人の姿を見てると、そうできたら良いよなって思う。
　いっとくけど、自分が面倒だから……とかじゃないよ。純粋にクリエが普通の子供として生きれるのなら、それがいいんじゃないかなって思っただけ。
　まあＬＲＯの住人にそんな事を思うのもおかしいのかもしれないけどさ。

「自分達はこの世界の為に何が出来てるのか……時々僕も考えるよスオウ君」
「テッケンさん？」

なんだか優しくクリエとシルクちゃんを見てたテッケンさんまでもこちらに来て語り出す。

「この世界で僕たちプレイヤーがやってることは本当に良いことばかりなのだろう？　ってね。モンスターを倒し、競うように国を成長させ、ＮＰＣという存在に多大に関わる。

クエストやミッションとして結末が決められてるのかも知れないけど……それで何かを無くしたりするし、取り戻せなかったりしたＮＰＣの姿は胸に来る物があるよ。

画面の前に座ってやってればこれはゲームで、作られた物語と割り切れる物が、ここではそうそう容易じゃない。

ミッションやクエストで関わるＮＰＣは生きてるように振る舞うし、一緒に居る間は情だって移るから……だから決められた結末がちょっと悲しいと納得できなかったりする。

僕たちが関わらなければ……そう思うときとがある」

テッケンさんは一体何を見てそういってるのだろうか。クリエに視線が行ってるけど、その実クリエを見てないような気がする。もっと他の誰か……それとも今まで見てきたそんなＮＰＣを思い出してるのかも知れないな。だけどそこに水を差すようにセラがこう言うよ。

「それはどうでしょう？　その考え方は私は共感出来ないかも知れません。ＮＰＣはいわば時間が止まった存在ですよ。いうなればこの世界という時間そのものが、普通は動いてないと思ってます。

私たちプレイヤーが観測して、関わって、そしてこのＬＲＯって言う世界は動いてるんですよ。私たちが彼らの時を進めて上げる。それは言い換えれば前に進めて上げるって事じゃないですか。

それにここに一回こっきりのクエストなんて早々ないし、誰かが美味くやるその時があるはずですよ。それで良いと思いますけどね。

テッケンさんは何も手を抜いてきたわけじゃないですよね」

そんなセラの言葉に、テッケンさんは「ああ、勿論だ」と力強く答えるよ。流石テッケンさん、ここで変に詰まらないのはそれだけ自分の行動に誇り持ってやってきたって事だよね。

てか、セラが案外まともな事を言ったのにもある意味びっくりだけどね。僕達が関わるまで止まった世界ね。斬新な考え方だけど、分からなくもない。ＮＰＣは待ってるんだよ……僕達プレイヤーが望む、望まないじゃなく、結果って奴をもたらす事を……だ。そういう事だろ？　セラの言ってることは。

「確かにセラくんの言うとおりなのかもしれない。関わった事を後悔してもしょうがないしね。自分が動かした分の時間が無駄じゃ無かったと思えるようにしないといけない。

だけど……」

そこでテッケンさんは唐突に僕を見上げるよ。しかもかなり真剣な表情。しかもそこには目を反らせない力強さって物がある。なんだか珍しいテッケンさんの表情だ。

「君は違うよスオウ君。君が進めるＮＰＣの時間は、このＬＲＯにとって……そして君自身にとってとても重大な事だ。

やり直しなんて出来なくて、そして誰も代わってやることも出来ないことだよ。君は勿論分かってるだろうけど、ちょっとそれを確認しときたかっただけだ。ごめんよ、僕なんかが偉そうに言える事じゃないね。

その立場になってみないと誰も分からない事なんだし、スオウ君はとても良くやってるよ。逃げず、迷わず、そして僕達を気遣って不安な顔なんて見せない。その命の期限は刻一刻と削られてるのに、きっと僕には真似できないだろうな」

そう言って最後には笑顔を見せてくれたテッケンさん。だけどなんか僕の頭には疑問符が浮いてるぞ。なんだろうもしかして今のは、数少ないテッケンさんの嫌み？　最後の部分だけだけどさ、そう聞こえなくも無かったよ。

でもテッケンさんがそんなこと……あり得ないな。そんな事を思ってると、僕を小馬鹿にしてばっかりの奴から横やりが入る。

「テッケンさんは過大評価し過ぎですよこのアホを。どうせ何も考えてないんです。行き当たりバッタリで、何とか出来ると私達に頼ってるだけです。

仲間だから頼る、頼られるって普通だってみんなは言うでしょうけど、私的にはウザいですけどね。自分だけじゃどうしようもない時、力を合わせて乗り越えるってのは良いです。認めましょう。私も先のアルテミナス大戦では、頼りましたしね。

けど……いつだってそれを前提にってのは違うでしょ？　頼られるのは良いです。だけど当てにされることは違います。そこら辺、このアホは分かってないですよ。テッケンさんももう少し厳しく接しないと、スオウに仲間と言うか、便利な人として認識されますよ」

「おいおい、失礼だなお前。僕がいつ、そんな風にテッケンさんをみたよ。頼りにしてるけど、そんな便利な奴って感じで見たことはない！」

心外だぞそれは。セラの奴、実は他の部分の関係を壊して、自分側を築きやすくしてるとか……そんな感じか？　まあ流石にそこまでして、僕と良好な関係を築きたがってるとも思えないんだけど。

「はは、便利な奴か……でも僕は、アテにされるだけでも良いんだよ。それでも必要とされるならね」

「それは、パシリでも奴隷でもって事ですか？　テッケンさんがそ

んな人だとは正直思ってなかったです。真実を告げると、それは必要とされてるんじゃありませんよ。遊ばれてるんです」

セラの奴は相変わらずオブラートに包むって事を知らないな。そこまではっきり言うか？　まあ完全に同意だけど。テッケンさんは今までで良い人で頼りになる人だ。

彼は僕が知ってるプレイヤーの中では一番尊敬出来る人物だと思ってる。それは今も当然そうだけど、彼のその並外れた親切心は今の言葉でちょっと間違ってないか？　と思えてきたな。

大切な美徳だけど……パシリのアテにされてまでその親切心を発揮することはないと思います。まあ僕が言うまでもなく、セラがズッパシと言ったからここはテッケンさんの反応待ち。

床で大の字で寝てる二人のイビキがなんか耳障りだな。そんな雑音を無視して僕はテッケンさんを見るよ。

「ははは、相変わらずセラ君は厳しいな。だけど断る事なんかできないよ」

「なんでそこまで……私には理解できませんね。人間誰しも、自分が一番ですよ結局。誰かに親切にしたら親切が帰ってくるなんて詭弁です」

うおい！！　それはダメだろ。昔の人の良い言葉を全否定したよこいつ。なんとも恐ろしいやつ……先祖の墓にも余裕で唾を吐きそうだな。まあそこまでじゃないだろうけど……恐ろしい奴に変わりはないな。

だけどそんなセラの辛辣な言葉にも耐えてテッケンさんはこう言うよ。

「親切は見返りを期待するものじゃないよセラ君。自分がしてあげたいからやるものだ。それで誰かが喜んでくれるのならそれで良い

んだよ。
心の問題なんだ」
「私には……理解できませんね。確かに見返りまでは計算しませんけど、損得は考えます。私にとって、その相手がどういう人物なのかは重要ですからね。
テッケンさんは卑しいと思うかも知れませんけど、それが普通です。勝手な印象ですけど、テッケンさんがそこまで『他人の為』とか『自分を犠牲にした親切』とかやってると知ると、ちょっと異常と思えます。
なんだかまるで贖罪でもしてるかのようですよ。それかただ単に親切マニアなのか……ですね」

なんだよ親切マニアって。そんなマニアが居るなら、確実にテッケンさんは第一号になれそうだけどもさ！　まあ贖罪とかよりも、まだ平和そうで良いとは思えるか。ある意味親切マニアってテッケンさんに似合ってると思うよ。
でもやっぱり誰にでもってのはどうかと思うけどね。それを聞いてるからセラだって、なんか重い感じの『贖罪』なる言葉を使ったんだろうしな。

「贖罪か……そんなんじゃないんだけどね。どちらかと言うと親切マニアかな？」

モブリの愛らしい笑顔を向けてそう言うテッケンさん。なんか重い理由でもあるのかと想像してた僕は、ちょっと肩の力を抜けたよ。良かった良かった、まあでも考えてみれば現代日本で贖罪の為に親切を繰り返すなんて苦行を行う事は早々ないよね。
だけどそんな僕の安堵とは逆にセラはしかめっ面を崩さずに息を吐きこう呟いた。

「そうですか……なら、なおのこと質が悪いですね」
「？　どういう事だよセラ？　寧ろ逆じゃないか？」

なんかセラの言葉に納得できないぞ。だって大きな物を背負ってなかっただけ良かったと思うべきだろ。まあテッケンさんが完全に本音を言ってるとは限らないけどさ。
幾ら親切の極みみたいな人でもさ、隠しておきたい事の一つくらいはあるものだろう。それは別に良い人悪い人問わずに、人間ならと言う意味で。

「それは――」

セラは僕の投げかけた言葉に答えようとしてくれてた。だけどそこで思わぬ横やりが入ったよ。

「スオウーーー！！　クリエ、下に降りたいな！！」

そう言って足下にしがみついてきたのはクリエだ。あれだけ食って腹は満足出来たから、今度は遊びたいと言うことか。普通はクリエ位の年なら食ったら次は寝る――だと思うけど、よくよく考えたらずっと寝てたから眠たくはないんだな。

「お前な、こっちは色々と重要なそうな話をだな……」
「クリエを仲間外れにするのはイヤ！！　そんなブッツンだよ！ブッツン！」

なんだその新しい表現は。会話を途切れさせといて悪びれない上に、認めませんってか？　凄い図々しさだな。流石はガキだ。そこら辺に気を使うって事がまだ出来ないお年頃って事だろう。

「ちっ」
あからさまに不機嫌そうなそんな音が僕の耳に入った。視線を上げると、セラが冷たい瞳でクリエを見下してるよ。
「おい、お前それは子供に向ける顔じゃないぞ」
僕は小声でそんな忠告をセラにしてやる。なるほどね、クリエがなんか苦手にしてる理由はこれだな。まあセラが子供を好きとは思えないから、自然と顔に出てくるんだろうな。
それでももうちょっと隠そうとしたほうがいいと思うけどね。
「私の笑顔は高いわよ」
「何要求してるんだよお前は！　笑顔はプライスレスだろ！」
ニッコリ笑顔を作るだけの事に何金を要求してるんだよ。てか、子供に払わせる気か？
「アンタは愛想を振りまくるのも労働だって意識がないの？　疲れるのよ。無駄な笑顔は愛想力を一ずつ減らして行くの」
「なんだその愛想力って……」
そんな要素ＬＲＯには無かった筈だけど。聞いたことないわ。
「そりゃあ、男のアンタには縁がないかも知れないけど、女は常に愛想って奴を振りまいてるのよ。特に周りに媚びようとする女はね。
愛想力ってのは自分を可愛く見せる為の行動や仕草に気を使う力の事なの。そうすれば、周りが都合よく動く事もあるし、自分を可愛く見せて得しない事はないから」
「じゃあ、得してろよ。愛想力を使って」

「子供に使ったって効果薄じゃない。私の利益になりそうもないし……それに懐かれても面倒」

やっぱハッキリ言う奴だな～とちょっと感心してしまったよ。たく、どこまでも自分を貫ける奴だなコイツは……でもこのままじゃクリエがセラとは一緒に居たくないとか言い出すかもじゃないか。

元からあんまり懐かれてないし、そこは望み通りなんだろうけど、これからの行動に支障が出るんじゃ困る。興味がないだけならまだしも、嫌いになられると同じグループに居るだけで辛いじゃん。それはお互いに困るだろ。

「少しだけで良いから、普通に接しろよ。お前の方が大人なんだからさ、そこら辺上手く出来るだろ。四六時中構う訳でもないんだし……僕やシルクちゃんでそこら辺は面倒みるし」

「――ふふ、じゃあアンタは四六時中その子の面倒を見るって事ね。まあ良いんじゃない。私は当然お断りだし、好きなだけ幼女の世話でもしてなさいよ」

あれ？　なんかさっきよりも不機嫌になったような？　でも理解はしてくれたのか、見下す瞳をやめて笑顔を作るセラ。作り笑いなんだろうけど、まあ十分です。

「ああそうだ！　ねぇねぇセラちゃん！」

「あん？　――じゃ無くて、なぁに？」

おい、笑顔だったけど最初の一言にお前の本音がつまってただろ。なんだよ「あん？」って、どこの不良だ。まあその後は挽回するように笑顔を作り、視線まで合わせる為に膝を折ったよ。やる気はあるみたいだな。

てか、クリエからセラに話し掛けるなんてそもそも珍しい、一体

何を言う気だ？　そんな事を思ってると、クリエは思ってもない爆弾を直球で言ったよ。

「セラちゃんはツンツンデレデレなの？　だからクリエにツンツンしてるのはデレデレの裏返しなの？」

ブッ！！　――おもっくそ拭いたよ。ちょっちょちょちょ、いきなり何言っちゃってんだコイツは。

「は？　何よ――何かなそれは？」

よく分かってなさそうなセラだけど、一応まだ愛想力を使ってくれてるな。だけど今のツンツンデレデレが何か分かったら、それも期待薄になりそうだ。てか言うなと言ったはずだろ。

「だからね、簡単に言うとセラちゃんはクリエの事を嫌いなのかなって？」

なるほど、そっちを簡単に言うか――と僕は思いました。てか、それを直球でよく言えるなコイツ。この二人ってある意味似てるかも知れない。てか、そんな事を言われたら、セラが困るよな。基本嫌いだろうけど、今は愛想力を使ってるし……さてどう言うんだろう。

まあそもそもセラはクリエの言葉の真意に気づいてないからな～そこが問題だよね。

「嫌いって……そうね……そこまで嫌いじゃ――いいえ、まあどちらかと言えば好きよ」

なんとかもの凄く妥協してくれたくれたセラです。まあ言葉とは

違って、顔は怖いくらいに笑顔を張り付けてる様は流石だよ。
「そうなんだ……クリエはどちらかと言えば嫌いだよ。残念だね」
「はっ……」
あからさまにセラの眉がピクッと上がったのが僕には見えました。ヤバい、やっぱり言っちゃったよ。僕は頭を抱えるしかないな。
「だからねクリエはセラちゃん嫌いだな。だからセラちゃんは嫌ってないから残念」
「へぇ～そうなんだ……私を嫌ってる奴に愛想を撒くのもバカらしいわよね？　いいわ……私の本音言ってあげる」
雰囲気をガラリと変えて立ち上がったセラは指をクリエに向かって突き刺す。そして見下すようにしてこう言った。
「私もアンタなんて大っ嫌いよ！！　私の視界の周りでチョロチョロピーピーとうるさいのよ！！　わかった？　これが私の本音」
「うん！！　そんな風に思ってくれてたなんてクリエ嬉しいよ！！　同じだね私達！」
「……はい？」
セラの迫力満点の言葉にクリエはニコニコしながら返したよ。だからなんだかセラは拍子抜け……というか、クリエの反応のおかしさが分からない様子。
「アンタ自分が何を言われたか理解できてる？　嫌いって言ったのよ。大嫌い」
「うん！　私も嫌いだよ！」

そう良いながらセラのスカートごと足にしがみつくクリエ。これには流石のセラも困惑せざる得ない。嫌いだと言って、嫌いだと言われたのに、何故か逆に懐かれる……まあ当人からしたら訳が分からないよね。当然です。

セラが僕に困った顔を向けてるよ。とっても珍しい事なので、写真を撮っておきたい位。その狼狽えようがある意味可愛らしいじゃないか。

「えへへ〜〜」

「もう……なんなのアンタは……」

スリスリと頬をすり寄らせされて、どうすることも出来ない様子のセラ。どう言うことなのか言ってあげたいけど、それを言うと「ツンツンデレデレ」の正体を告げなくちゃいけないからな……やっぱダメだな。

それになんか新鮮だしなあんなセラ。まあここらで説明しておくと、クリエはセラのツンツンした態度は大好きの裏返しだと思ってる。だからセラの嫌いって言葉を大好きだと受け取りたかったんだ。で、セラはツンツンデレデレが標準で自分の言ってる嫌いを好きとちゃんと理解してくれてると信じて、クリエは言ってた訳です。

だから最初セラに好きって言われたときは嫌いと受け取って、次の嫌いで好きと受け取って自分と一緒――エへへ〜だったって訳。

まあ完全に自己完結だよね。でも下手に気まずくなるよりは良かったんじゃないかな？

「良かった。セラちゃんとも仲良くなったんだね」

「うん！！　大嫌いって言ってもらえた！」

「え？」

微笑ましく声をかけてくれたシルクちゃんまで困惑させるクリエ。

なんだかややこしいな。そんな事を思ってると、部屋に変な音楽が流れ出した。
アップテンポのふざけた曲だな。

「何々？」

クリエがそう言って周りをキョロキョロ。僕達も何が始まるのかとあたりを見るよ。宴会の後には、出し物とか？　あの仲居モブリの人達が芸でも披露しに来たのかと、割とマジで思ったよ。だけどどうやらそうではなくて、再び部屋の奥の方に映像がパパッと現れた。

『さぁさぁ、リア・レーゼの愚民共、今日もありがたい私のお告げを耳の穴をかっぽじって良く聞きなさい』

画面の向こうのローレはどうやら僕達に向けては喋ってない様子。何これ？　リア・レーゼ限定の放送か？

「おい……どうにかしてチャンネル変えたいんだけど良いか？」

僕は思わずリルフィンにそう聴くよ。だってどう考えてもふざけてるだろ。でもそれは拒否られました。どうやらこのお告げはここの住民にとっては大切らしいです。ホント変にローレって持ち上げられてるよな。理解できない。
そんな風に思ってる中、部屋にはローレのお告げ――もとい天気予報と占いが始まった。

お食事後は本音の時間？（後書き）

第三百九話です。
今回も食事終わりでさぁここからだって感じにはなりませんでしたね。まあ行っちゃうとまだ色々と考え中な訳です。でもそろそろ動き出さないとですね。時間は確実に流れてる訳ですし、いつまでもノンビリまったりしてる訳にも行きません。
ここで方向性を決めて、それからクライマックスに繋げないといけないんです！
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

僕達の道標（前書き）

聞こえてきたローレの声。それはリア・レーゼ全域に及ぶ、代表からのお告げみたいな物らしい。さぞかし威厳たっぷりのお言葉を頂戴出来ると思ってた訳だけど、流石はローレ。

僕の想像の斜め上を軽々と越えたよ。確信しました。こいつは人の上に立つべきじゃないと！！

僕達の道標

『え～と、今日の天気はとりあえず後半から天候悪いかな？　雨ドシャドシャかも。世界樹がちょっと興奮してるから、いつもよりも長引く雨になりそうよ。
後、星占いで観た最高の運勢はカスタカスペリオン座です。意外な出会いは雨の中走ることで訪れちゃうぞ。逆に運勢が死んだ方が良いよって人は、アントロルース座のそこの貴方です。
しかも男で鈍感で足の臭いが臭そうな人は死にましょう。それがイヤなら、貴方は雨の中で社に行脚信行をしてください』

なんてヒドい放送。現れた画面から聞こえる声と言葉はとてつもなく不快だな。てか、これを放送してるのか？　ちょっと信じれない事だぞ。誰がこんなふざけた放送をありがたがって聞くんだよ。どう考えても打ち切りだろ。てか、打ち切りにしろ。
こんな適当な放送でローレの奴はもてはやされてるの？　納得いかねー。

「あはは、面白いねコレ！」

そう言ってクリエは画面を指さしてケラケラ笑ってるよ。

「ねぇねぇ行脚なんとかってなに？」
「う～ん、お社に何回も往復してお参りする行為の事じゃないかな？　神様が願いを聞き入れてくれると信じて、何度も何度もお参りするんだよ」
「じゃあ、神様がお願い事をきいてくれなかったら、その人死んじゃうね！」

「えっと……」

シルクちゃんが笑顔のまま固まったぞ。なんて事を無邪気に言うんだクリエの奴。まあ確かに今のローレの言葉だとそうなりそうだけど……そんなの結局占いだろ。

「あほ、そんな可能性が一パーセント位あるってだけだろ。マジで死ぬかよ。てか、シルクちゃんを困らせるな。占いなんてリアルもここも鵜呑みにする必要なんてないんだよ。

どうせ誰も検証しないんだし。そんなの適当に言ってるだけなんだからな」

ほんと、口八丁で金が貰えてるんだから、リアルの占い師は人間ちょれぇ！　とか思ってそうだよね。それっぽいこと言ってれば、勝手に解釈してくれるし、当たらなくても「やっぱり占いか」で済ませてくれる。苦情なんて言わない。

そしてもしもたまたま百万回に一回でも当たったら「占いの通り」って思うんだよね。アホだろ。しかもそんな百万回に一回の良い声だけが集まって、虚構の人気占い師が誕生するわけだ。

当たらなかった事を誰も気にしないんだから、良い声しか集まる筈がないって言う、なんともぼろい商売だ。百万回に一回のイメージが、なぜだかいつの間にか「良く当たる」に変換されるんだよ。

占いなんてそう言うもんだろ。

「そうなのかな〜？」

クリエはまだ占いを信じてたいお年頃らしい。だけど現実なんて、可愛そうだけどそんなもんだよ。だって良く朝のニュースで出てくるラッキーアイテムとかあれそこ意味が分からん。

どうやって導き出してるんだよと言いたい。このローレの占いだ

って、アイツの性格上、コツコツ占うなんて思えないもん。絶対に星を仰ぎ観て「閃いた！」とかで一番と最下位を決めてそうだ。もの凄い偏見だけどね。

「スオウ君、そんな夢も希望もないこと言わないでください。女の子は毎日の占いに一喜一憂する物なんですよ」

「まあそれは知ってるけど……でも大体占いなんて良いことしか受け止めなくない？」

毎朝の日鞠がそうだもん。アイツ自分に都合の良いことしか効かないし。まあアイツは大凶を強制的に大吉にしちゃうような奴だから、そもそも占いなんて話半分も信じちゃいないだろうけどさ、普通に女の子っぽいことはやっておきたいらしい。

「まあ、確かに悪い占いは観なかったことにはしますね。でもでも良い占いだったら朝からハッピーですよ」

「幸せなことですね」

僕はなんかそういうしかないよ。まあ浅い占いなんて、実際その程度で良いと思うよ。今のローレの占いを聞いて実行する人なんて別にいない――それで良い。

「主の占いはこの地の住民にとってはとても重要な物だ。貴様が思ってる程、軽いものじゃない」

僕が占いをバカにしたからか、リルフィンがそんな風に言ってきた。

「ええ～、あれが？　そんな軽くなかったら、もっと重要そうに言えよ。ローレの言い方事態が軽かったぞ。てか、ふざけてた」

あれはどう考えても絶対にな。それにそんなに重いのなら死ぬとかいうなよ。自分の言葉の影響力を正しく理解してるのなら、ダメだろあれは。

「だからちゃんと回避策も話してらっしゃっただろう。心が深い方なんだよ」

「……心が深い？　お前マジで言ってるの？」

雨の中を行脚しろってやつ？　おふざけとしか……いや、嫌がらせとしか思えないんですけど。まさか本当にやっちゃう奴がリア・レーゼには居るのか？

でもそもそもなんか運悪い奴だけ、具体的だった様な……星座だけじゃなかったし。てか、あの星座は何？　なんか聞いたこともない名前してたんだけど。

「無知な奴だな、十二星座も知らないのか？」

「いや、僕が知ってる星座と違うから……」

てかＬＲＯに星座とかあったんだ。そういえば一応誕生日を設定した時に、それらしいのがあったような……でも全然意味なかったし、完全に忘れてた。

「ＬＲＯの星座は何故か分かりにくく改変してありますよね。何か意味があると考えてる人もいますけど、星に関する事って大抵この世界の深い部分と繋がるから、ミッションでもクエストでも早々出てきたりしないんですよね。だからこの世界の星座の事はまだまだ結構謎です。

確か誰が付けたとかもわかってない感じだったと思います」

シルクちゃんが優しくそんな説明をしてくれる。流石頼りになる

子だね。

「星に関することはこの街が全てを握ってる。だからこそ、占いもこの街ではお告げと同じ。それだけの重要性がある。

あの方は決して適当にやってる訳ではない。伝えやすい言葉でフランクに接してるだけだ」

「フランクって……フランク過ぎだろ」

もっと威厳とかさ……そこら辺はいいのか？　まあローレの場合、直ぐにボロが出そうだし、それを考えたら最初からあのキャラのままの方が良くはあるのか。

『ちょっと、私の中継に文句あるっていうの？』

「うお、なんだ？　外に向かって放送してるんじゃないのか？」

いきなり画面内の声がこちらに向かってきたぞ。いいのかそれ？

『大丈夫よ。もう中継は終わってるから。ほんと、毎回待ちわびられてるから大変だわ。まあ頼られるのも私という存在の偉大さ故なんだけど』

うわ、また自分で言ってるよコイツ。本当に転落しないかな……その位置からコロコロと。だってコイツを崇めてるリア・レーゼの人達がなんだか哀れと言うか……可哀想。

『何よその目は？　文句でもあるわけ？』

「別に……それよりも連絡してきたって事は、これからの事の為だろ？　本題にさっさといこうぜ」

散々横道に逸れてきたからな。今回はパッパと行きたい所だ。

『まあ、それはいいけど……なんだかそっちは楽しかったみたいね。憎たらしい』

なんで憎たらしい！？　いちいち棘が大き過ぎないか。そこは羨ましいとかで言いじゃん。幸せそうに寝てる鍛冶屋や、ノウイを見て楽しそうと思ったんだろ？　憎たらしいは無いだろ。

どんだけヒネクレてるんだよ。

「そんなに一人が寂しいんなら、こっちに来れば良かったんだ。そんなに恥ずかしい容姿してるのか？　ＬＲＯで珍しいな」

『バッ！　誰が恥ずかしいか！？　私は誰もが見とれる美しさよ！！　勘違いするな！』

「ええ～、そんな事言われても、この目で見るまではちょっと信じれないな。別に良いじゃんブスでも。ＬＲＯでは逆に個性的だろ？」

恥ずかしい事じゃないよね。個性的で売り出せば良いんだ。自信を持てよローレ。

『だからブスじゃないわよ！　いつかアンタを戦々恐々とさせてやるから覚悟しときなさいよ！！』

「戦々恐々って……お前どんだけ酷いんだ……」

今すでにガクブルしそうだよ。そこまでだったんだ。なんか……ゴメン。そんな悪い気がしてきた。女の子に容姿で突っ込むのは不謹慎だったな。ただでさえ美女や美少女が溢れてるのにね……それは隠れたくなるよな。

『だからそうじゃないわよ！！　ああもういいわ、その時まで私に残念なイメージを持ってると良いわよ。惚れさせてあげるわ』

そう言って鼻息荒くしながらなんとか余裕を見せようとするローレ。はは、ギャグにしてはなかなかだったよ。まあ惚れるなんてあり得ないだろうけどね。
そもそもモブリの姿で恋愛とか望むなよ。そう言うのしたかったら、せめて投身がまともな種族にしろっての。マスコットにはなれるんだけどね。可愛いペットみたい～から抜け出せないよ。

「もう、スオウ君はローレ様を軽んじ過ぎですよ。名誉の為にフォローすると、ローレ様は可愛いです」
『アンタが言うとムカつくからそんなフォローいらないわ』
「……す、すみません」

なんて酷い奴！　シルクちゃんの善意の言葉を投げ捨てやがった。いや、押し返したな。目の前にいたらスパーンと殴ってやるのに……口惜しい。
てか、シルクちゃんも良くコイツをフォローするよね。ちゃんと嫌いとか言われたのにさ。まあそれでも誰かを嫌わないシルクちゃんが素敵なんだけど。ローレも街を代表するプレイヤーで、バランス崩しまで持つのなら、もうちょっと見習えよな。
シルクちゃんの爪の垢でも煎じて飲ませてやりたい。

『あ～気分悪くなったからさっさと出て行きなさいよ。私のアトリエは基本他人の進入を許さないのよ。それにこの場所は私だけのお気に入りでないとダメ。
庶民といつまでも共有なんてできないわ。滞在一時間毎に百万とるわよ』
「ぼったくってんなよ……」

何が滞在一時間で百万だ。まあリアルの方で宇宙旅行をしようと

思えば、まだまだそれ以上に高いから破格と言えば破格だろうけどね。
あの光景は百万の価値はあるだろうとは思う。だけどそこを独り占めしようとする辺り、ローレの器の小ささが図れるよ。
「てか、これからの事を話し合うんじゃ無かったのかよ。どうするつもりだ？　既にリア・レーゼだって無関係じゃないぞ」
僕がそう言うと、ローレは布の向こうで意地らしい笑いを浮かべながら、きっと扇子とおぼしき物を開いて左うちわしだす。
どこの悪徳大名だよコイツは。
『そんなの百も承知。そもそもの原因のアンタが言わないで欲しいわね。私だって別にアンタ達を投げ捨てようなんて思ってないわよ。気分を害したのは本当だけど、下に行く意味だってあるわ』
「意味？」
「何ですかそれは？」
僕とシルクちゃんが期待に応えてちゃんとローレの話に耳を傾けてやる。疑問と興味を投げかけてね。するとローレは面倒そうにこう言うよ。
『それはほら、下にも重要な場所はあるし、その子――クリエだっけの願いのヒントとかあるかも。アンタ達だって、色々と自分の足で調べたいでしょ？
まあ何が分かるとかの保証はないけど、行動を起こすには下が良い。というか、ここは神聖な場所だから、いつまでもアンタ達を残留させて置くわけにもいかないのよ』
お～い、最後の一文で、それまでの言葉が全て建前になったぞ。

結局独り占めしたいだけじゃないか。それにここに来てまだ闇雲にやるってのも……もう三日もないんだっけ？　後二日位？　それなのに、僕はまだまだ全然届いてない様な気がする。
　実際このままで大丈夫なのか不安だよ。このペースで僕もクリエも願いを遂げられるのかな？

「まあここが神聖な場所と言うのは理解できます。だけど私達が自由に街を歩いて大丈夫なんですか？　えと、サン・ジェルクの方には捜索中って言ってるのに、堂々と散策してるの知られたら言い逃れ出来無くないですか？」
『そんなの自分達をアホで通せばどうにでもなるでしょ。向こうは常にこっちを下に見てるんだし、そう言う言い訳は簡単よ。気に入らないけど……だけど更に大きくサン・ジェルクを驚かす為なら、まあ我慢できるかな。
　今からニヤニヤが止まらないわね』

　そう言って自身の頬をプニプニとマッサージしだすローレ。どんな策を巡らせてるのか知らないけど、気が早すぎだろ。上手く行くなんて決まってないぞ。そもそも災厄だったんじゃ無かったっけ？
　それって不幸がこの街に訪れるって事だよね。どうしてニヤけれるのか疑問だよ。

「驚かすっていっとくけど遊びじゃないぞ。いや、まあＬＲＯはゲームだけどさ……普通のプレイヤーの意識まで決めつけれないけど、ええと、だから……」

　僕はなんと言おうか頭で色々考えるよ。このふざけたローレの意識をもうちょっとマシにするにはどうすればいいか。でもなかなか良い言葉は思いつかない。
　僕がしどろもどろしてると、ローレがなんか意外な事を口走る。

『別に私はお遊びでアンタ達を迎えた訳じゃないわよ。それに自分だけが特別だなんて思わない事ね。私だって特別なのよ。下々のプレイヤーよりも、ＬＲＯに浸ってるつもり。それにどうせなら、自分が居る場所がこの世界で最高の方がいいじゃない。
まあ実際は適度で良いんだけどね。私的には。だからこれをお遊びなんて思っちゃ無いわ。寧ろここに賭けてる位。私はね、まがいなりにもこの街の代表って自覚はあるのよスオウ』
「……そうなのか？　それは良いこと……だな」

僕は胸をモヤモヤさせながらもそう答えるよ。自覚あったんだな。まあ実際リア・レーゼの人達はコイツを悪く言わないし、やっぱりちゃんとやることはやってるって事なんだろうな。
僕達に見せないだけで、表はちゃんとやってるって事ね。

『世界が終わる時には、私の力でこの街だけは守ってみせる――その位の気概は持ち合わせてるわ』

なかなかにデッカいことを言うローレ。それだけの覚悟してやってるって事を伝えたいのかな。まあ、想像以上に責任感って奴を持ってるみたいです。
態度や言動にそれが現れてないけどな。

「確かローレの力って……『召還』？」
『ふ～ん、無知そうな顔してる割には知ってるんだ。まあ幾らアンタが無知でも、私の力は有名だもんね。そう、私の力は召還よ。私が本気を出せば、一人で国の一つくらい潰せるわ』

得意気に扇子をフリフリするローレ。まあ確かに召還って強そうだよね。アレだよね？　攻撃するときだけ出てくるとかの一瞬じゃ

なく、呼び出したら倒されるまで居てくれるんだよね？　まあ普通に後者の方だと思うけど。
　ＬＲＯのスペックなら、その位は出来るよね。後は一体こいつが何体位出せるのか――だな。制約とかはあるのだろうか。
　僕がローレの力を推察してると、なんだか食いかかる奴が一人いた。

「バランス崩しの力はどれもその程度はあるわよ。別に特別なんかじゃないわね」
『ああ、そう言えばエルフも持ってたんだっけ？　えっと何？　カーテナだったかな？　あの玩具。バランス崩しにしては貧弱な力よね。
　条件がアルテミナスの地であることなんて、自国でしか使えない武器なんて欠陥品でしょ』

　ローレの小馬鹿にしたような言葉が炸裂する。すると明らかにセラの方からプッツンとか聞こえた様な……

「欠陥品？　言ってくれるわね。そっちなんて戦場で殆ど使われもしなかったくせに。カーテナの評価は実績あっての物ですけど、そっちはほぼ期待という意味での想像でしか無いじゃない。
　実際召還が言うほど凄いとは私には思えないわね」
『あっははは！　やっぱり戦闘大好きの民族が言うことは野蛮ね。実績って、そんなのアンタ達はバランス崩しに頼らないとダメな所まで追いつめられてたからじゃない。
　不名誉な実績のご自慢ご苦労様。それにそもそも私がこの力を手にしたのはあの頃の終盤だし……もう少し早ければこの世界からアルテミナス消えてたわよ』

　何故か画面越しなのにバチバチと火花が散ってるのが見える。二

人ともそれぞれの意地とプライドがぶつかり合ってるよ。無駄にデカイもんなどっちもさ。

「こらこら二人とも、今はどちらの力が優れてるとかじゃないよ。大切なのはそれぞれに必要としてくれる人達が居るって事なんじゃないのかな？

アルテミナスのアイリ様も、リア・レーゼのローレ様も優劣では計り得ない魅力を持ってると僕は考えてます」

二人の火花の間に入って気の利いた言葉を言ったのは当然テッケンさんだ。流石頼りになる存在第一号。ちなみに二号はシルクちゃんです。

『流石テツは良く分かってるわ。低い次元の争いなんて醜いだけよね』

「ほんと、テッケンさんは流石です。低い次元に居ることを気づいてない誰かさんとは違います」

何とかこの場は収まったけど、二人の火はどうやら消えてないなありゃ。てかどうやっても話を進める前に一悶着やらないと気が済まないのなローレの奴は。

「なあローレ。結局僕達は下に行かないとダメなのか？　なんか指針はないのかよ？　ここの他の建物の方が重要そうじゃないか？」

『まあ確かにここは全てが重要な場所よ。だけどその子に関係があるかと言うと微妙よね。まあ何かあるのなら、一応行くだけ行ってみても行いわよ。期待はずれだとは思うけど』

なんだか随分ハッキリとそう言うな。わかんないだろそんなの。期待って意味では大きいんだけどな。これだけ星に近い場所なんて

早々無いだろうし、何かあったっておかしくないじゃん。
神に関係した場所なんだろうし、クリエに反応する伝説の〇〇みたいな物が出てこないとも限らないだろ。
『そんなのが出てくるなら良いけど……でも既に私の武器がそんな感じだし……』
ぬぬ……言われて見れば確かにそうなのか。二度も同じ感じのアイテムは出てこないか？　だけどＬＲＯって何が起こるかわかんないからな。やっぱり重要そうな場所を無視する事は出来ない。
「そもそもお前のその言葉のソースはどこだよ。勘とか言うなよ」
『忘れたの？　私の力は予知でもあるのよ』
「予知は出来ないんじゃ無かったっけ？」
確か今は見えないとかいってただろ。だから面白いとかなんとかふざけたこと抜かしてたじゃん。
『出来ないわよ。だけど私占いの的中率も凄いのよね。星詠みはいろんな応用が効くのよ。占いによると、天は黒で地は白。押し寄せる波は激しく大地を揺らして災厄はこの地に訪れる』
「ダメじゃねソレ？」
どう読んでも悪い結果だよね？　災厄訪れるのかよ。
『まあアンタ達を受け入れるか受け入れないかの分岐だった訳だし、そこは問題ないわ。ただ気になるのは天の黒と地の白よ。で、私は考えたの。天は空だし、それならここかなって。黒って事はなんだか悪い事が起きるのかも。
地は白……それならまだ下に行く方が良いじゃない。白は大抵良

い事よ。まあ悪いことに比べての多少かもしれないけどね』
「だから下へいけって？　お前のその占いってどんなの何だ？」
予知もそうだけど、どんな風にやってんだろ？　気になる。
『予知は声が聞こえて見えるの……未来がね。占いは色々ね。道具を使ったり、星を見るだけだったり、気分の問題。だけど重要なのはそこじゃないから問題ないわ』
「いや、問題ないって言われても……全然わからん」
結局どうやってるのか謎過ぎだ。意図的に伝わらないように言ってるのかこいつ？
『嫌々言わないで従いなさいよ。いっとくけど、私の占いにはちゃんとした実績もあるわよ。だからどうやってるかなんて問題じゃない。
取り合えずアンダーソンはここで面倒見ててあげるから、アンタ達の道はあんた達でみつけなさいよ。そういう物でしょ』
まあ確かに。異論はない。これは僕達の冒険だしな。僕と起きてるみんなは視線を交わして頷きあう。道を見つけないといけない。
ハッピーエンドに繋がる道を。

僕達の道標（後書き）

第三百十話です。
少しづつ動き出してる筈です。もう少しで大きく動ける中って感じなんですよね。だけど次に大きく動き出したら、それはもう止まれない感じがするんで、こっちも慎重になってると言いますか。
取り合えず暖かく見守って頂けると嬉しいです。
てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

可能性は見逃せない（前書き）

僕達は寝入った鍛冶屋とノウイを置いて再びアトリエの外へ。こんな貴重な場所へ来ることなんかそうそうないから、調べれる所は調べておくべきだろう。残りのみんなで目指すはこの場所の完全制覇だ。

てな訳で最初に着いたのは最初の回廊側のちょと出っ張った場所。なんでも神様が祈ってた場所とか。そんな場所にクリエは無神経にズガズガ踏み込む。そんな感じで僕達は進んで行きます。

可能性は見逃せない

僕達は取り合えず下に降りる前に、この場所の建物を回って見ることに。寝てる鍛冶屋とノウイは起こすのが面倒なので、しばらく放っておいて、下に降りる時に強制的に起こすことにしました。

そんな訳で建物を回るのは、僕とシルクちゃんにテッケンさん、セラにクリエの面々です。アトリエを出た僕達の案内人はリルフィンが担当してくれる様だ。取り合えずは近場からって事で、最初の回廊部分にあるらしい場所へ向かってます。

「やっぱり何度見ても息を呑む光景だね。素晴らしい」

テッケンさんの言葉に僕らは頷くよ。確かに何度見てもこの場所から見るＬＲＯという世界は美しい。きっと同じ条件なら、地球だってそうなんだろうけど、実質不可能だし、目に焼き付けておいて損はないよね。

僕達は回廊をグルッと進み、多分反対側ら辺に。するとそこには回廊から飛び出した様な場所がある。屋根がついていて、しめ縄でグルッと囲われてる変な場所だ。なんか違和感あるな。飛び降りる場所とか？

だけどここの回廊、柵とか一切ないし実際飛び降りようと思えばどこからでも出来るんだよね。だからあの一部分だけを囲うのは意味がない様な。そもそもしめ縄だし、神様的な何かなのかな？

「ここは何なの～？」

クリエがしめ縄をグイグイしながらそんな事を聞くよ。興味がある質問だな。

「そこは『祈りの場所』と呼ばれてる所だ。世界を作った神は、ここから祈りを捧げて世界を見守ったと言われてる」
「へぇ～」

僕達はリルフィンの説明を関心しながら聞いた。神様は一体この世界の何を祈ってたんだろう。まあ順当に考えれば、平和とか何だろうけど……神様だしな。

「ねぇねぇ、ここ魔法陣があるよ。発動しないかな？」

そう言うクリエはいつの間にか、この祈りの場所の中へ入ってる。そして床の魔法陣を足でダンダンと踏みしめてる。なんて奴だ。
そう思ってると、何故か僕の胸倉を掴んでくるリルフィンさん。

「おい、貴様が保護者だろう。神聖な場所で何してるアレ。今直ぐやめさせろ」
「ラ……ラジャー」

全く、クリエの無神経さを僕のせいにするなよな。アイツはそう言う奴だっての。取り合えずこっちに戻る様には言うけどね。

「おら、こっちに来いよ。なんだか無断で入ったからリルフィンが怒ってるぞ」
「ええ～、だってだって何か起こるかも知れないから、来たんだよね？　それなら色々とやってみないとわかんないよ。もしかしたらこの魔法陣も色々したら反応するかもだし！」

そう言って今度は手でペチペチし始めたクリエ。まあ言ってる事は案外正しいけど、後ろから感じるプレッシャーが痛いよ。そう思

ってると、シルクちゃんがこの魔法陣を見て鋭い意見を言うよ。
「これって転送魔法陣じゃないですか？　下に戻るためには最初の場所がありますよね？　じゃあこれはどこに繋がってるんでしょう？」
そう言ったシルクちゃんは疑問の眼差しでリルフィンを見る。その大きく純粋な瞳が真っ直ぐにリルフィンを捉えてるよ。
「知らんな。その陣がどこに繋がってるのかは誰も知らん。まあもしかしたら主は知ってるのかもしれんが、聞いたことはない」
ふくれっ面でそう言うリルフィン。たく、随分と役に立たない答えだな。てか、それならこのしめ縄で入るのが規制されてるみたいな理由って、この場所が見守る場所じゃなくて、転送場所だからじゃないか？
もしかしたら神様はもっと違う場所でこの世界を見守ってるとかさ。考えられるよね。
「結局何も起こらないんなら、次に行くぞ次」
「待って待って！　やっぱりここはスオウも入らないとダメだよ。クリエだけじゃわかんない。二人でなら何か起こるかも！」
「そんなバカな」
リルフィンはクリエの言葉を小馬鹿にしてるよ。だけどその可能性もゼロじゃないよな。僕達が揃うことで何かが起こる――かも知れない。
「まぁまぁ、入るだけだしやってみようぜ。もしかしたらあの時に～なんて考えを引きずりたくないし、良いだろ？」

僕の提案にリルフィンは答えない。たく、何でそんなに不機嫌なのか謎だな。やっぱり鍛冶屋に絡まれてたのがイヤだったのか。
でもそれは鍛冶屋の印象下げるだけだよな……僕達にまで向くのはおかしいと思う。まあ何も言わないし、いいよな。僕は締め縄を潜って中へ。まあ勿論、何も起こらない。シ～～～ンって感じになってる。

「やっぱりスオウに期待したクリエがバカだったよ」
「何で僕が期待外れみたいな感じになってるんだよ！！」

納得いかねーー！！　そもそも一応だったろ。一応念の為！　それなのに何も起きない事を僕に擦り付けるなよ。とんでもないガキだな。

「きゃははーー、スオウの役立たずーー！」

そう言ってクリエはしめ縄の向こう側に逃げる。ハシャぎながら小馬鹿にしくさったクソガキを僕も追うように外へ――

【悲しい子……】
「ん？」

――今、何か聞こえたような？　しめ縄に手をかけた時、頭の隅にか細い声が響いたような気がしたけど……どうだろう気のせいか？

「どうしたの？」
「セラ……いや、今何か聞こえたような？　てかなんか言ったかお前？」

僕は目の前に居るセラにそんな質問を投げかける。だけど答えは「言ってない」だそうだ。だろうね。セラの声とは違った感じだよ。他のみんなは走り回ってるクリエに気を取られてるみたいだし……リルフィンは興味なさげだけど、今の声は女の人みたいだったからな。

「やっぱり何かが起きたの？」

セラが僕を見下しながらそう言うよ。しめ縄を潜り終えた僕は、立ち上がり今度は見下されようにして首を振る。

「分かんないな。何か起きたのかも知れないし、何かが起きた程じゃないのかも知れない。今は気のせい位にしか思えないよ」

「まあ、そうね。気のせいである方が楽そうで良いわよね」

そう言ってセラはチョロチョロ走ってたクリエが自身の近くまできた瞬間に、足を引っかけた。そしてドッシャってな感じで転ぶクリエ。僕は「うわっ、えげつな！」って思った。

「ウエェェェン！　転んじゃった！」

そう言って泣いてるクリエにセラは素知らぬ顔で近づきこう言うよ。

「大丈夫？　走り回るからそうなるのよ」

そう言ってクリエを起こして、埃を払い落としてる。おいおい、アイツ自分がやったこと棚に上げてお姉さん面してるぞ。なんて恐ろしい奴。

クリエはクリエで自分で転んだと思ってるのか、セラに感謝して

るし……言っとくけど原因そいつだからな。

「うう〜〜セラちゃんありがとう」

「いえいえ、いいのよ。嫌いな者同士なんだから」

「うん！」

なんかやっぱりこの二人はズレてるよな。まあクリエは純粋に好きに成りかけてるんだろうけど、セラは絶対にそうじゃないもん。

自分で足かけて、その後に良い人ぶるなんて……一体何を考えてるんだか、僕には理解できないよ。

「結局何も成らなかっただろう。次に行くぞ」

クリエも捕まった事を確認すると、リルフィンがぶっきらぼうにそう言って歩き出す。それも結構な早歩き。本当に面倒なんだね。早く終わらせたいって感情が行動に出てるぞ。

まあ僕達も早く事態の進展……というより、好転を期待してるから良いんだけどさ。

「ほら、アンタが運びなさいよね。保護者でしょ」

リルフィンの後に付いて行こうとしたら、無造作にクリエを押しつけられた。セラの奴そのまま自分で運べよ。折角懐きだしたんだからな。クリエだって嬉しがってたのに……子供に耐性をつけておくと、将来役に立つかもしれないだろ。

「何の事よ？」

「だからこの先、いつかお前だってリアルでは子持ちに成るんだろうし。子供の扱いを覚えてて損はないだろ」

僕がそう言うと、セラは何故か歩みを止めたよ。

「なななな、子持ちって……何、アンタ私に子供を産ませたいわけ？　その……私と……アンタの……」

「はぁ！？　何とんでもない想像してんだよ！　そうじゃなくてごく一般的な話としてだよ！　相手が誰とかじゃなく、セラだって女なんだからいつかは子供を産むだろ。その時の為にって事だ」

なんていう想像してくれてるんだ。スッゲー焦ったじゃないか。そんな未来あり得ないから。そもそもリアルで会ったこともないしな。

「……ああそうよね。紛らわしい言い方しないでよ！」

なんだか冷静に成ろうとして成りきれなかったセラが、逆ギレ気味にそう言ってきた。なんて奴だ、迷惑被ったのは僕の方だぞ。

精神的ダメージがデカかったっての。

「二人して子供子供って、クリエはもう生まれてるんだけど！」

なんか腕の中から的外れな事を言ってくるクリエ。まあだけどこのアホな発言のおかげでこの変な話題は流れたよ。

僕たちは後ろの方で沈黙のままリルフィンの後にただついていく。どうやら反対側からも登る用の道があるみたいだな。

再び階段をテクテク登ってると、途中で池みたいなのを見つけた。まあ小池クラスの小さな物だけど、えっと……ここって確か木の上だったよな？　どう言うことだよ。

多分、枝の太さとかここまで来ると尋常じゃないから、その凹み部分にでも水が溜まってるのかな？　まあそもそもこの水はどうやって溜まったんだって謎は残ったままだけど。だってここ、絶対に

雨とか降らないだろ。溜まりようがないと思うんだけど……

「うわあ～！　凄い！　なんか水がキラキラしてるよ。透明って言うかなんか鏡みたい！」

クリエが興奮しながら人の腕の中で叫ぶよ。まあ確かにそれもわかる。確かに見たことない水だな。クリエは僕の腕から飛び降りて、道を外れてその小池みたいな場所へと近づく。そして水面に映る――というか、鏡に映された様な自分の姿を見て、おもむろに池の水を掬って口に運ぼうとしてた。

「うおおおい！　ちょっと待て！！」

僕は慌ててクリエの手を叩いて手のひらに掬ってあった水を落とす。いやいやいや、仰天の行動なんですけど！！　だけどクリエは不満たらたらにこう言うよ。

「何するのスオウ！　折角味見しようと思ってたのに！！」

「お前がバカって事は知ってたけど、まさかここまでとは思わなかったよ。お前よくそんな鏡クラスに姿が映る水を飲む気になるな。体に悪そうとか思えよ！」

だって透明度がハンパない……とかじゃないよ。もう鏡だもん。変な物質でも混じってたらどうするんだ。僕達の体は結局仮初めだから良いけど、一応ＬＲＯに生きてるクリエとかマジで病気になったりしたら困るっての。

「綺麗だったのに。きっと大丈夫だと思うよスオウ。だって【飲んでみて】って言ってるもん」

「またどこぞやのお友達がか？」

「うん！　だから大丈夫！　綺麗な水には栄養一杯だよ！」

う～ん流石にここまで来ると、綺麗を通り越して毒々しく見えるのは僕だけなのか？　まあクリエのお友達が直接そう言ってるんなら、大丈夫なんだろうけどね。

こいつは世界の声を聞くことができるみたいだし……大袈裟に言ったけど、まあ様は植物でも動物でも何でもの声を聞ける？　みたいな。それがクリエの基本的な力らしい。

だからきっとクリエはこの水の声を聞いたんだろう。その水に騙されてる可能性も考えるけど、基本クリエって好かれてるみたいだし、世界って奴にね。だからそれも薄いかなっては思うんだけど……飲む勇気はなかなか持てないよな。

僕はリルフィンに確認とってみることに。てか、最初からそうすればよかったんだよね。でもアイツ興味なさそうだし、道を外れた僕達の方を無言で見つめてるしで声かけ辛いんだよね。

僕達には顔がばれてるのに、何故かフードで顔を隠すしさ、良くわからん奴だよ。

「お～いリルフィン。この水って飲めるのか？」

僕がそう言ってる間に、恐ろしい行動を取る奴がもう一人居た。

「ズズズ……うん、普通の水ね。ちょっとしょっぱいかもだけど、異様に冷たくて美味しいわよ」

「セラ……お前やっぱり恐ろしいな」

いろんな意味で。何なに気に、味見してるんだよ。ビックリだっつーの。

「私たちプレイヤーはお腹を壊す事もないんだし、別に良いでしょ。

てか、回復薬がないときって、薬草をそのまま口に入れる時があるじゃない。それと同じよ」
「んな場面僕はまだ遭遇してないけどな」
まあ確かに緊急時はしそうだけど、調合とか出来ない僕は原料から持ち歩く事はないんだよ。
「やったことないんだ。それを聞くとスオウもなんだか箱入りって感じよね。まあ経験豊富なプレイヤー達に助けられて来たってのが原因でしょうけど。
ホントの緊急時には良くやる事よ。薬草事態はＬＲＯ中に生えてるから、逃げる途中に毟って口に入れるの」
箱入りとか言われたらちょっとムスッと来るけど、話を聞いてると確かに僕は箱入りかも知れないなと思った。だって草を毟って食べるとか……リアルだとホームレスだろ。悲しく成るわ。
「悲しくって……ホントサバイバルって言うか、冒険が足りないわねスオウは。アンタは最初から恵まれてたのね。
まあアギト様が居たし、その人脈でテッケンさんにシルク様まで初期の頃から揃ってたのなら無理もないか」
名前を突然出されて、ちょっと照れた様な二人。まあ良い評価だし、それはわかるけど僕は複雑な気分だな。冒険が足りないって、僕はかなりの冒険してると思ってるんだけど。
「時間的には私達の数十分の一よ。密度を考えれば半分位には成るかもだけど……まあ言う成れば、スオウには自分だけでどこまでやれるかの挑戦が足りないのよ。
だって普通最初は一人。このＬＲＯの世界に降り立ったときは孤

独なのよ。チュートリアルに従って、一人で行動をして一人で初めての戦闘。
当然お金もないし、回復薬とか買える訳ないじゃない。だけど慣れてない戦闘で早々勝てる筈もない。そんな時に、ふと目に留まる雑草があるのよ」
「それが薬草だと？」
「その通り。だって命には変えられないでしょう？　それに少しずつでも溜まってたスキルポイントが減るのはイヤだし、そうなったら草だって食べるしかないのよ」

壮絶だね。まあわからなくもは無いけど。普通は確かにそうなんだろう。だけど僕の境遇と今の話……どっちが良いって言ったらそっちを取るんじゃね？　と思う。
だって命には代えられないって、本当に死ぬ訳じゃないじゃん。こっちはお前達が薬草を貪ってた時から、あり得ないクラスのボス戦やってたんですけど！　やっぱり冒険って意味では僕の方が色々とすっ飛ばしてやってるよな。
サバイバルが足りないのはまあ認めるけど。

「アンタに毟った草を食べる無念さと心から沸き上がる焦燥がわかる？　かなり空しいわよ。涙が出そうに成るくらいね」

そう言いながら拳を握りしめて、僅かに震えてるセラ。こんなセラは珍しいな。トラウマにでも成ってるのかな？　まあプライド高そうな今のコイツからしたら、消し去りたい過去なのかもね。

「シルクちゃん達も最初はそんな感じだったの？」

どうせだから、誰でもそうなのか聞いてみたくなった。みんなしてることなら、黒歴史にしなくて済むだろうしな。

「そうですね。食べた事もあったと思いますけど、いつも通りがかりの人達が回復薬を分けてくれてた気がします。だから私はなんて素晴らしい世界なんだろうって思ったんです。
それに受け取ったアイテムとかは暖かくて、それでいて命も繋げてくれる物。私もこんな風に誰かの役に立ちたいなって思ってヒーラーを目指したんです」

そう言ってニッコリ微笑んだシルクちゃんからは後光が見えるようだ。流石はシルクちゃん。何か持ってるよね。無自覚に男共に貢がせる何かを持ってる！
まあただ放っとけないオーラを放ってるんだと思うけど。ついつい守ってあげたく成っちゃう感じ。

「僕はそうだね。最近でも良くやるよ。だってそこら辺から毟って食べて回復なんて便利だよ。まあＬＲＯでは食べた分だけ腹が満たされるのがネックだよね。
満腹感が襲ってこなかったら、大量に食べれるのに……」
「テッケンさん……まさか今までの戦闘でも？」
「ああ、節約にもなるしね」

涙ぐましい事をやってたんだね。テッケンさんクラスのプレイヤーなら、大量に回復役を買うことくらい出来るだろうに。てか、スキル豊富なんだし魔法系も当然拾得してるんじゃなかろうか？　みたことないけど。ソロの時はスキルを切り替えて使ってるとか？
僕には当分出来そうもないことだね。てか今現在もしてる人も居たし、良かったじゃんなセラ。

「別に私は恥だなんて思ってないわよ。惨めだったってだけ。そしてそんな経験してないアンタにムカつくだけよ」

「なんでそこで矛先が僕に向くんだよ」

マジで何かと突っかかって来るよな。それしかスキンシップの取り方をこいつは知らないのかって位。まあ一番緊張は確かにしないんだけど……でもそれじゃあ僕達の関係は変わらないよ。

「私はねスオウ。今の自分があるのはその時の事もあるからって思ってる。惨めな思いも糧にしてここまできたの。だから恥じる事なんて私には一つもないわ」

「……あっそ」

それは良かったね。そう思ってると、僕達はセラの異変に気づいたよ。

「あれ？　ねえセラちゃん……何か眩しいよ」

「どういう事ですかシルク様？　太陽を直接見るのは止めた方が良いですよ」

「ううん、そうじゃなくてね……」

シルクちゃんの言葉がなかなか要領を得ない。いや……まあわかるよ。これはなんと言って良いのか。けどやっぱり言えることは一つしかないというかだな。クリエが「わわぁーー！！」と目を輝かせてるから口を滑らせる前に、僕が言ってやろう。

「セラ、お前光ってるぞ。なんか体全体が」

「ええ！！？　――ってマジじゃない！！」

僕の言葉に驚愕して自身の体を見回すセラ。てかメッチャ光ってるぞ。何これ？

「その水を直接飲むからだ。それは世界樹が吸い上げてる水が溜まったものだ。世界樹の体を巡り浄化された神聖な水は光輝く。
その一滴一滴がな。それが体内を巡ると、体が発光するんだ」
いやいやいや、体を巡ったって光る物なのか？　それなら人は血の色が滲んでそうな物だけど……何かあるんじゃないの？　実は隠された才能を開花される奇跡の水だからその才能が輝いてる！　とか。
「さあ、そんな話はきかんが、この水はどんな傷や病にも効く妙薬だとは言われてるな。不老不死の原料とも……」
おいおい最後の一言はなんか物騒だぞ。これを巡ってかつては争いが起きててもおかしくないな。
「何ともないのかセラ？」
僕は一応気遣う言葉を投げかける。本心ではクリエが飲まなくて良かったって思ってるよ。
「ゴクゴク――プハァ！　見てみてスオウ！　人間太陽！」
バカなクソガキは面白がってそんな事をやってる。頭を抱えたくなった。折角セラが犠牲に成ったのに意味ないじゃないか。
「お前な、完全に大丈夫って訳じゃないんだぞ。不老不死の原料なんて危ない副作用があったらどうするんだ？」
「大丈夫だよ！　なんだか強く成った気がするもん！」
それはきっと錯覚だろ。光輝いてるから、そう思えるだけだ。

「そんなことないよ。なんだか一杯声が聞こえるよ！」
「一杯って、どんな風にだよ？」
「え～とねえ～とね。なんだかそこら中一杯から！」

うん、全然わからん。大きく両手を広げて一杯を表現してるんだけど……クリエの体じゃ犬小屋くらいしか表現出来ないよ。まあなんか微笑ましいけどね。そんな風に思ってると、リルフィンがとんでもない暴露をした。

「言っておくがさっき貴様達に出した料理はこの水が使ってあるぞ」
「なんだってえええええ！？」

衝撃の事実。だけどよくよく考えたら僕達食事の後に光ったっけ？　覚えがないぞ。二人が眩しく光る現状を、僕達はどうしていいかわからない。

可能性は見逃せない（後書き）

第三百十一話です。

色々とやらないといけない事が多いなって感じですね。てか謎もまだまだいっぱい。最後で全てを消化する為には、切っ掛けとヒントが必要で、その鍵もまた必要。やっとかないといけない事が多いし、退屈にならない工夫も必要ですよね。

なんかこうドン！　バン！　ズオオーン！　という気持ちいい展開運びになれば良いけど、ちょっとまだ無理かも。

てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

ただの水じゃない（前書き）

世界樹から生成される水。それを飲むとなんと体が光るのだ。人間太陽とかクリエは言ってたな。そんな人間太陽は明らかにおかしいけど、リルフィンいわく大丈夫だそうだ。

だけどそんな言葉と裏腹にセラの様子がおかしくなる。だけど苦しんでたり痛い訳では無いようで……それはこの水の力の片鱗が見える前触れだったわけだ。

ただの水じゃない

リルフィンの暴露に動揺したけど、僕達は光ってさえ居なかった。嘘だなコイツ。実は僕達をからからって腹底では笑ってる、そんな奴なんだ。

「貴様な……あの料理に実際使われてはいる。だが、そのままは使わないんだよ。元々薄めるし、それに調味料とか色々な要素が混じりあうだろ。

体まで光るのは原液を直接取った時だけだ」

「ふ～ん」

僕はいぶかしみながら相づちだけは打ってやった。まあそれなら理解できるけどね。確かに料理行程を経たら、別物なのかも。純度百パーセントだからこんな事に成るって事か。

僕も自分の姿を映すその池の水を一掬いしてみる。水面に波が広がっても姿が消えないとか、本当に光りまくりだな。透明度とかのレベルじゃない。

だけどやっぱりここまで光ってると口に含む気には成れないな。そんな事を思ってると、不意にセラが苦しそうにしだした。

「どうした？」

喉を押さえて、目をしばたかせてる。なんだかやばそうだぞ。

「何……これ……なんか……」

「なんか？」

セラは微妙に震えてるような。まさか原液はやっぱり毒なんでは？　強すぎる効能だから使うときは薄めるとかじゃないのか？

「そこまでは私も知らん。だが毒という事は聞かないがな」

冷静に……というか、人事みたいにそう言うリルフィン。だけど現にセラはこうやって苦しんで――

「なんかスッゴい感覚が研ぎすまされる感覚……うっうう……」

「おいセラ！！」

「セラちゃん！！」

「大きな声出さないで！！」

セラの怒声に女の子二人はビクリとする。感覚がどうとか言ってたから、想像以上にうるさく聞こえたのかも知れない。手のひらに掬ってた水を落として、僕はセラへと駆け寄るよ。マジでどうなってるんだ？　ここは取り合えず回復魔法？　毒とか状態異常を解く魔法をシルクちゃんに掛けて貰うしかないか。

でも同じ水を飲んだクリエはこんな事には……はっ！

（そう言えばさっき世界中の声が聞こえるとか言ってたな。あれもこの水の影響？）

僕はそう考えてクリエの方にも声をかける。

「クリエ！　お前は大丈夫なのか？」

だけど反応がない。てか、空を仰いでじっと固まってる？　時折何かを呟いてるのか、「うん、うん」と聞こえるけど、明らかに何かおかしいよ。

「おいリルフィン！　これはどういう事なんだよ！？」

僕はこの水を一番良く知ってるであろうリルフィンに詰め寄るよ。てか、それしか出来ないし。だけどどうやらリルフィンもこんな事は初めてなのか、今まで喋った情報以上の事は知らないらしい。むむむ、役に立たん奴だな全く。

「どの魔法が効くかわからないけど、色々やってみます！　もう少し我慢しててねセラちゃん。ピク！」

シルクちゃんが杖を構えてそう呼ぶと、暗い空から桜色に輝く小竜が現れた。どこに行ったのかと思ってたら、この広い宇宙を飛んでたのか？　まあピクもこんな場所は初めてだろうから、興奮してるのかもしれないな。

ピクも揃った所で魔法詠唱に入るシルクちゃん。だけどその時、シルクちゃんのスカートを引っ張ってクリエがこういうよ。

「大丈夫だよ。別に苦しくて痛いわけじゃないもん。ちょっといつもよりも凄いから怖いだけだよ」

「クリエちゃん？」

光ってるクリエはいつもと同じ……だけど何かちょっと違うような気がした。相変わらずの要領を得ない言葉だけは同じだけどさ、光ってるからか雰囲気がちょっと昇華されてるような……そんなクリエはシルクちゃんの詠唱を止めて、セラへと近づく。

「セラちゃん、怖がることないよ。解放してあげればいいの。その感覚を注げる所へ」

「解放……」

そんな言葉を受け取ったセラ。実際クリエの言葉なんか華麗に無視するかと思ったけど、案外真面目に受け取ってそうだ。本当に、大丈夫なのかな？　僕達は言葉を発さないセラを心配気にみつめる。
するとようやくセラは何かを思いついた様にスカートへ手を伸ばしてこう言った。

「聖典解放！！」

その瞬間僕たちの間をリリースされた聖典が猛スピードで抜けていく。思わず声を漏らして尻餅を付くシルクちゃん。いきなり何しやがるんだ？
そう思ってると次から次へと聖典が空へと昇ってく。おいおい、幾らなんでも出しすぎだろ。頭痛くなるから普段は二・三機程度じゃなかったのかよ。

「痛くないの……」
「は？」
「だから全然痛くならない。寧ろ今までよりも楽に扱える感じ。脳が冴えてる。それがわかるわ。今ならこの数でこんな事も出来るかも」

そう言って目を閉じたセラ。ざっと数えても既に二十機全て出てるんだけど。それでも頭が痛くならないなんて、この水の効果って事か？
そう思って空を飛ぶ聖典をみてると、なんか向こうにも徐々に光が移ってきて、流れ星が流れてるみたいになってた。しかも航空ショーみたいな演出をセラがやってるから、迫力満点で綺麗だ。二十機も操れたら、流石に違うな。
空に光の残滓で星を書いてそこを射ぬいたりしてるよ。後はまっ

すぐ並んでの動きとか、横一列とか、重なりあってクルクル回るとか、どれも一歩間違えば聖典が墜落しそうな動きばかりだ。
こうやって聖典が動いてるのを見るといつも思うんだけど、今日は一際思うことがある。マジでセラの頭はどうなってるんだろう？
ってさ。どう考えてもニュータイプだろ。リアルでアムロ来ちゃったよ。いや、セラは女の子だし、ララァなのか？　まあどっちでもいいことです。
大切なのはリアルニュータイプが目の前に居るって事だよ。僕も出来る物なら、聖典を手に入れてみたいな。ここだけはマジでセラに憧れる。
だってこういうファンネルっぽい武器って、憧れだもん。キィン！！　と何かを感じてみたい。「なんだこのプレイッシャーは！？」とか言ってみたい。

「スゴいスゴい！　セラちゃんすごおおおおい！！」

ハシャギにハシャぐクリエが空の聖典を追いかけて周りをチョロチョロし出す。うざったいけど、確かに凄いなあれは。これもクリエの助言のおかげだな。
そう思ってると、ショーを終えた聖典が各機セラの前に戻ってきた。

「大丈夫なのかいセラ君？」
「ええ、驚くほどに好調です。今まで処理しきれなかった情報が嘘みたいに快適に流れていきます。まるでサブルーチンでも構築されたみたいな？
とにかく頭痛はないですね。もしかしてこれがこの水の効果何じゃないですか？」
テッケンさんの心配する言葉に快適に答えたセラは、自身の変化

を水のおかげというよ。まあ誰もが薄々思ってた事だけど……実際それしか考えられないよな。この水、とんでもなく使えるんじゃないか？

「能力の底上げ？　でもそれじゃあちょっと矛盾するよね。感覚自体を高めてるのかな？　それともその人に有った所をピンポイントで上げてるとかでしょうか？」

う～んそれだともの凄い事になりそうだな。セラの場合は聖典事態じゃなく、セラの感覚を上げての操作性向上。クリエの場合はよくわからないけど、これも感覚的な部分だよな。

この情報を鑑みるとやっぱり感覚部分だよな。肉体強化じゃなく感覚強化？　ある意味斬新ではあるかもしれない。だけどまだ完全に判断は出来ないな。

「もう一人位試さないと何とも言えないよね。感覚が上がってセラにはメリットだけど、僕たちもそれと同等のメリットが有るとは思えないし。

本当に感覚を強化してるのか、それともスキル事態を強化してるのかで価値が大きく変わるよ」

「そうですね。もしも後者なら戦闘で大いに役に立ちそうです」

僕の言葉に同意してくれるシルクちゃん。お手軽なレベルアップアイテムとなるのならとってもありがたい。今の僕達には【力】って奴が必要なんだ。最近力不足を感じさせられたからな。

なんてたって僕達の敵は強大だ。だけどシステムの内側に居る内は、あいつ等に勝てそうに思えないってのも事実なんだよな。

この水で多少能力値が上がっても、それが勝利に繋がるとはやっぱり思えない所がある。まあないよりはマシだろうけど――って、その考えの前に、この水の力を把握するのが大切か。

「とりあえず今度は誰が飲んでみるかですね」

僕とシルクちゃんとテッケンさんは顔を見合わせるよ。まあだけどシルクちゃんにリスクを背負わせる訳にはいかないから、自然と僕かテッケンさんって事になるよね。

「とりあえずアンタが飲みなさいよスオウ。スキル強化なら、スキルを豊富に持ってるテッケンさんよりも、アンタの方が検証しやすいでしょ」

「ぬぐ……」

残念な事に全く言い返せないな。確かに僕のスキルは極小だよ！シルフィングがセラ・シルフィングに変わってもそんな変わってないからな。最近ようやく二桁？　位だっけか？　実は防具とかは、徐々にグレードをアップしてるのだ。まあそれでも初心者の域を出ない装備な訳だけど……まあスキルに関して僕は数じゃなく質で勝負してるんで、全然オーケーだけどね。

「良いのかいスオウ君？」

「良いですよ。悔しいけど、確かにセラの言うとおりですし、僕が適任です」

イクシードを発動させればスキル事態が強化されてるかどうかわかるだろうしね。僕は再び泉の前で膝を折るよ。するとそこで待ったをかける人物が現れる。

「おい貴様等、私はこんな事の為に付き合ってる訳じゃないぞ。早く目的を果たしにいくぞ」

リルフィンはどうやら、今のこの状況がどれだけ重要かわかってないらしいな。全く、もうちょっとよく考えろよな。これはそっちにとっても重要だろ。パワーアップ出来るかも知れないんだからな。

「これだって目的の一部だろ？　僕達は何かが起こるかも知れないからってこの場所を巡ってたんだ。そして今、結構凄い事が起こってる。その筈だけど？」

「私は貴様等の案内しか言いつけられてない」

全く頭の固い奴。もうちょっと柔軟になってほしい物だよね。

「だからこれも案内の一部で良いじゃん。大切な事だからさ、後ちょっとだけ」

「そうだよそうだよ！　これは大切な事だよ！　クリエもそう思う！」

「お願いします」

クリエとシルクちゃんも加勢してくれる。そしてセラが脅しにかかったよ。聖典全ての砲門がリルフィンへと向けられる。

「飛空挺では遅れを取ったけど、今はきっとそうはいかないわよ。あの時の続きやってみる？」

頼む気ゼロの態度です。一応こっちは世話になってる側なんだけどな。セラはどうやら飛空挺で一度負けたの根に持ってるみたいだ。まあこいつの性格上、水に流せる訳もない事は容易に理解できるけどね。

「この程度でまだ私に並べるとでも思ってるのか？　それならなんと愚かしいことか」

そう言うとリルフィンのローブが風に煽られた様に、浮き上がる。その瞬間何かを感じたのか、セラは聖典をリルフィンの近くから離脱させるよ。

だけど数機の聖典は炎と共に消えていく……おいおい何が起こったんだよ。レベルが高すぎてわかんなかったぞ。いや、まあ集中してたら見えたかも知れないけど、こいつらいきなりマジに成り過ぎなんだよ。

「くっ！　だけどまだまだあ！！」

「良い反応だ。だが、まだ拙いな！　手足と同じ感覚で操れる様に成らなければ、私は勝てん！！」

「言ってなさいよ！！」

セラとリルフィンの一瞬の攻防。それはもうなんか一瞬の間に色々とまた起こってた。更に二機撃墜されたらしい聖典。一瞬にしてセラの喉元までどこから出したか知らない白いトゲトゲの武器を突き立ててるリルフィン。

なんかあの武器はアイツの髪の毛の色とそっくりだけど……まさかね。だけど実際、この勝負は引き分けっぽい。セラも聖典をリルフィンの全方向に展開させて既にエネルギー充電完了してる。

ようは互いに止めを指す一歩手前で止まってる状態だ。

「どうかしら？」

そう言ってセラは不敵に微笑んでるよ。一矢報いた感じだね。リルフィンの白い武器は喉元数ミリにそのトゲが迫ってる訳だけど……ちょっと挑発しすぎだろ。

こいつがちょっと動けばプスッと言っちゃうぞ。流石にその一撃で死にはしないだろうけど……どう考えても二人ともやりすぎだ。

僕がそう思ってると、どうやら同じ考えだったテッケンさんが間に入って声を張る。

「そこまでだ二人とも！　僕達はもう敵じゃない。争う必要なんてないんだよ。どうしてもと言うのなら、然るべき手順を踏んで、然るべき場所で決闘を行えばいい。

だけど今はダメだよ。こんな事をするために僕達は行動してる訳じゃない。双方武器を納めるんだ！」

微動打にしない二人の視線がテッケンさんへと向く。そして訪れる沈黙。そんな時、いきなり小池に何かが落ちたような激しい音が響いた。僕達の視線は一気にそちらへ。

「ふえぇえ～、びしょ濡れだよ～」

「お前な……何やってるんだよ」

「落ちた！」

シュピッと右手を挙げてそう宣言するクリエ。全く、なんか空気壊れたな。有る意味良い意味で。

「ふん、確かに反応は良く成っていたが、貴様自身が疎かに成ってる事に変わりはない。最大数の聖典の扱いにもう少し馴れるべきだな。

頭が痛いからと敬遠してててはいつまで経っても変わりはしない」

リルフィンがそう言うと、白いトゲトゲが一杯付いた剣は紐の様な物に解けて行き、ローブの中へと戻っていったよ。ええ～、なんなんですかアレ？　やっぱり髪の毛とか？　リルフィンはもしかして、シクラと同じ系統の攻撃をするのか？　ようは髪の毛を使うと言う感じの。

もしかして飛空挺の時の攻撃は髪の毛を飛ばしてた？　どんだけ丈夫で強力な毛を持ってるんだよと言いたいけど、あり得ないことも無いと思う。

「親切にどうも。頭の隅にでも置いててあげるわ」

一応、心にも無い礼を言うセラ。そしてセラも聖典を解除してその手に戻す。二人ともクリエの行動で気が削がれたみたいで引いてくれた形だな。もしかしてこいつ……それを狙って？　――ってんな訳ないか。

僕は池に落ちてたクリエを抱えて引っ張り上げるよ。

「たく、ほんとびしょ濡れだな。てか、貴重な水の中に落ちるなよ」

「えへへ～、はいスオウ飲んで良いよ」

そう言って脳天気に両手の平で掬った水を差しだしてくるクリエ。まさかこれを飲めと？　お前が落ちた池の水を僕に飲めとそう言うことか？

「大丈夫、クリエ汚くないよ」

「いや、どう考えても汚いだろ。外を歩いてきたんだぞ！　既にこの水は汚水と化してるんだよ」

「あっはは～スオウは大袈裟だな～～そんな訳ないよ～」

あっけらかんと笑いながら僕の言葉をスルーするクリエ。くっ、コイツマジでこの水を僕に飲ませる気か。いや、さっきまでは仕方ないと思ってたよ。だけどもろにクリエ落ちたじゃん。ここが室内ならまだしも、外をおもいっきり歩いてきたし……抵抗感が増したよな。

「何が汚水よ。幾ら何でもそれは酷いわよアンタ。子供が一人落ちた位どうって事無いわよ。きっとクリエの方が綺麗に成ってるんじゃない？」
「お前……いい加減な事を……」

人事だと思いやがって。確かにクリエの光はさっきよりも強くなってるけど、それは表面にもこの水が付いたからだろ。綺麗に成ってるように見えるだけだ。

「たく、どうでも良いから早くしろ。私も暇ではないんだよ」

くっ……とうとうリルフィンまでけしかけて来やがったか。そもそもセラとリルフィンがぶつかった原因は僕がこの水を飲んでその効能の調査をするかしないかだったしな。それなのにリルフィンがわざわざ早くしろと言うことは、その行為を認めてくれたと言うこと……飲まない訳にはいかないじゃないか。

「あの～やっぱり私が飲みましょうか？　私はテッケンさん程スキル豊富じゃありませんし、それに大丈夫ですよ。クリエちゃんが落ちた水なら平気です」

そんな事を笑顔で言ってくれるシルクちゃんはマジ天使。だけどそれはなんかダメな様な気がする。シルクちゃんの優しさにいつまでも甘える訳にはいかないんだ。

「全く、どれだけ甘ちゃんなんだか。どうせここはＬＲＯなんだから泥水飲んだって現実に腹を下す訳じゃないのよ。覚悟決めなさい」
「ち……わかってるっての。飲めば良いんだろ、飲めば。シルクちゃんの気持ちだけありがたく受け取って起きます」

僕はそう言ってクリエが背伸びして差し出してる水を口に含んだ。小さなモブリの中でも更に小さなクリエの手だ。その手のひらに有った水なんてほんの微々たる量。一吸いでなくなった。実際この程度で大丈夫なのか？　と思う量だ。

味は実際、普通の水かな。変に冷たいし、確かにちょっとしょっぱいかもだけど、水だな。さてさて体は光るかな。そう思って見てると、次第に体全体が薄く輝き出すよ。キタキタキターーー！　って感じだな。

「どう？　変な感じする？」

「う～ん、別にそんな感じはしないな。体は楽かも。軽くなった？　気のせいかも知れないなこれは。とりあえずイクシードを発動させるか」

強力になってるかな？　ドキドキだ。僕は両腰に差してあるセラ・シルフィングを抜くよ。そしてその言葉を紡ごうとしたとき、また頭に響く声が聞こえた。

【悲しい……悲しい子。どうかその運命を変えられたら……】

なんだか今一瞬、その人の姿が脳裏に浮かんだ様な気がした。この池に自分を映したその人の姿……それを見たような……

「どうしたの？　さっさとイクシードしなさいよ」

「あ……ああ」

僕は気を取り直してイクシードを宣言。すると風のうねりが刀身を包み込む。これはいつもと同じ。だけど直ぐに僕は異変に気づいたよ。

「なっ！？　っつ……これは！」

風のウネリが制御出来ない位に大きくなる。両腕が震えて、押さえ込むのに僕は必死だ。

「ちょっ……なんかヤバい感じするわよ。大丈夫なの？」

セラの言葉に返す余裕すら無いけど、一言だけ伝えなきゃ不味そうだ。僕は必死にイクシードを押さえつつ叫ぶ。

「ここから逃げろ！！」

その瞬間波打つ様に暴れ出した風のウネリが世界樹の枝葉を毟り折っていく。

「スオウ！」

「クリエちゃん、こっちに！」

シルクちゃんに引かれてクリエもみんなと共にこの場から離れてく。それでいい。だけどこれって……イクシードを制御出来ないなんて……今まで無かった事だ。どうなってるんだよ。

「言うこと聞けよこの野郎！！」

僕はどうにかしてイクシードを制御しようとするけど、どんどん風のウネリは巨大化してる。だから僕自身の体が支点に馴れずウネリに押されて浮くことに。

「ぬあああああああああ！！」

「スオウ君！！」

地面のテッケンさん達が小さく見える位の場所まで体が持ち上がる。

「この野郎！」

僕は必死に腕を動かす。だけどその度にウネリは予想外の動きをみせて世界樹を傷つけていくよ。ヤバいこれは相当ヤバい状況だ。このままじゃいつ、クリエ達の場所を襲うかわからないぞ。

そんな事する訳にはいかない。そう思いつつも僕の体は空中でウネリに弄ばれる様にクルクルしてる。下からはリルフィンの怒った様なお声が聞こえるよ。当然だけど、悪気は全くないんだ。

くっそどうにかしないと。このままウネリが下に向いてる状態だと、世界樹がボロボロに――ってそうか！！

「下が不味いのなら、果てのない空に伸びてやがれ！！」

僕は一気に両腕を頭上へと振り上げる。下に……ウネリが阻まれる傷害があるから変な風に動こうとするんだ。だからそんな傷害が無い場所なら、ウネリはまっすぐに延びる筈。そんな僕の予想通り、ウネリはしなりを効かせて天高く、宇宙を突き進む。僕はホッと一安心。だけどそのとき、ウネリに再び衝撃が走る。ウネリの先を見ると、宇宙空間で何かにぶつかってる様な……僕は押されてようやく地面に足を付く。そして再び踏ん張るよ。進めないウネリはその場で膨らんでいき、そして――何かが砕ける音と共に宇宙の海へ伸び続ける。

ただの水じゃない（後書き）

第三百十二話です。
簡単なレベルアップアイテムの登場！　って訳じゃないですよ、勿論。時間がないしこれで済ませようとかじゃないから。まあこれはキッカケみたいなものです。レベル制ではないけど、みんなのレベルアップは必須ですからね。
その為にみんな色々と考えてる訳です。まあどういう風になるかはわかんないけど、その時の為は遠からずきます。
てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

ピンチの開始（前書き）

砕けっ散った何か。その何かはどうやらこの世界樹……はたまたこのリア・レーゼを守る為の結界だとローレは言った。しかも貼り直さないとリア・レーゼは壊滅するかも知れないらしい。

だけどそれには結界の柱として封印されてた聖獣と呼ばれるモンスターを再び倒す必要があるとか。だから僕達はリア・レーゼが壊滅させられる前に、その聖獣を倒さないといけない。

ピンチの開始

何かが割れた様な音……そして光を反射する透明な欠片が周りに降り注ぐ。

「え？　え？　何を壊した？」

訳が分からないけど、阻むものがなくなったイクシードのウネリは宇宙空間へと伸び伸びと伸びていく。伸びて……あれ？　こんなに今まで伸びたっけ？　色々な疑問が一杯だけど、とりあえず今は腕を上へ向けとかないとな。油断したらまた大惨事に成りかねない。

「キラキラして綺麗だね！　星屑が落ちてきてるみたいだよ！」

そう言って離れた所でハシャいでるクリエ。たく、お気楽な奴はいいな全く。

「今の結界じゃないですか？　世界樹を守る……結界」

シルクちゃんがボソッととんでもない事を口にした気がする。どうにかして耳から追い出したいワードだったな。華麗に無視しとこう。

「張られてるんでしょうか？」

「確か張られてた筈だ。だがまさか今のが……」

遠くでイヤな会話が聞こえてる。世界樹を守る結界とか、どう考えてもヤバいだろ。それを壊すとか極刑じゃね？　僕は内心ヒヤヒ

ヤしてます。すると突如音楽が鳴り響く。

「主からの通信だ」

そう言って通信用のウインドウを表示させるリルフィン。一体何事……なんかイヤな予感がビンビンする。僕の第六感がそう告げてる。

てか全然関係ないけど、今のしっとりとした癒し系サウンドは何なの？　着信を相手毎に変えられる事は知ってたけど、ＮＰＣも出来るんだね。

てか、今の音楽がリルフィンがローレに抱いてるイメージソングなのかな。なかなか納得できない選曲だ。

【ちょっとフィンフィン。アンタ達何してるのよ。私が定期的に補強してる結界消えたわよ】

「すみません主。スオウのバカが、自分のスキルを暴走させまして」

【全く、あのバカは。自分の力も操れないなんて終わってるわね。そこに居るんでしょ？　ちょっと見せなさい。直接言いたい事があるわ】

おいおい、二人して失礼な事をペチャクチャと良く言ってくれるじゃねーか。そう思ってるとリルフィンがウインドウをこちらに向けるよ。横目で見ると、慌てて扇子で顔を隠すローレが見えた。

アイツ今絶対に油断してたよな。惜しかった。もう少しで素顔が拝めたのに。そう思ってると、こっちを見れてるかどうかわかんないローレがため息一つにこう言うよ。

【ちょっとそこのバカ。何してくれるのよ。今アンタが壊した物がどれだけ重要かわかってる？　わかってないわよね。

土下座しても許さないけど一応土下座しなさいよ】

「許さない宣言されてるのに誰がやるか！」

相変わらずふざけた事を全く動じずに抜かすなコイツは。その大胆不敵さにビックリだよ。ある意味大物か……それかやっぱり大概のアホなのかだな。

【ふ～ん相変わらず生意気ね。私に対する敬意って奴が見えないわ】

だろうね。そんなん無いもん。

【取り合えずアンタが壊したんだから謝るのは当然でしょ。人として】

コイツに人としての常識を説かれるなんて屈辱。だけどそれ所じゃないんだよ。この状況見てたらわかるだろ。

【あ～あ、不用意にその水を飲むからそうなるのよ。取り合えず効果が切れてから土下座しないよね】

「まだ言うか。てか、何なんだよこの水は！？」

【フィンフィンから聞いてないの？　それは世界樹が生成する神聖な水よ。光ってる間はその効果が発生してるって事。私は『スーパーモード』と呼んでるわ】

何得意気に中二病を宣言してるんだよ。スーパーモードってネーミングセンスねーな。なんかもっと無いのかよ。まああったとしても言わないけどね。

「じゃあこの水の効果は、自分の能力を引き上げるとかで良いんだよな？　この光が続いてる間は」

【まあ大体はね。だけど能力を引き上げるってのは厳密には違うわ

ね。その水は自分に最も必要な部分の力を上げるだけ。それが感覚なのか能力なのかはその人次第よ】

必要な部分……じゃあセラが感覚だったのは、それが必要な部分だったって事か。確かにそのおかげで聖典の操作は格段に向上したな。てか、いつの間にかクリエもセラも光が消えてるな。

効果は大体三分位？　それなら僕も後少しで……取り合えずそれまではこの態勢で耐えるしかないな。

【だけど……まさか暴走とかちょっと考えられないわね。その水、『浄神水』は言ったとおり必要な部分を強化した状態になるわけだけど、だからって暴走はないわ～。

必要な物が大きすぎるとか？　それに今のアンタは追いつけないのかも】

「そんな事言われても……」

こっちはこれでも急いで成長してきた気で居るんだけどな。幾ら敵が規格外に強くても、こっちの成長は規格外にならないんだから不利すぎるんだよ。するとここで何か変な事をローレの奴は言ったよ。

【まあ後考えられるのは、そもそもの力の前提がおかしいから、暴走してるとかかしら？　その剣って流星とかついてるんでしょ？】

「まあ一応」

シルフィングの時から『流星双剣』ってカテゴリーだった。だけどそれが何だ？　前提ってどこだよ。

【だから私的に見たら、アンタのその力のどこに流星があるのかなって事よ。どう見ても風と雷でしょ？　流星って感じじゃなく無い

？】

「言われてみればそうかも知れないな……でも流星の力の形ってどんなだよ。イメージ的に近そうな風と雷を使ってるんじゃないのか？」

考えた事も無かったけどさ、今更この力を否定されても困るってのの。ずっとこの風のウネリとかに助けられて来たんだしな。今更流星っぽく無いからイヤだ、とかあり得ないから。

【まあ名前が全てを表す訳じゃない。それはわかってるけど、なんだか納得できないのよね。だってアンタのその武器は特別でしょう。ＬＲＯに幾つもあるシルフィングとは違う存在。

それならもっと流星っぽくても良いかなって。特別な何かがあって良いじゃない】

「そんな事言われても……それにお前が知らないだけで、セラ・シルフィングには十分特別な機能が付いてるぞ。イクシード１・２・３なんて破格の大業だぞ」

僕はこのままの状況で何とか得意気に言ってみる。だけどローレの奴は小馬鹿にするようにこう言い返した。

【私の召還だって破格の大業よ。アンタのそのイクシードに負ける事はきっと無いわ】

なんだかポイッと僕の自信が投げ捨てられた感覚。やっぱローレに言われると無条件でカチンとくるな。なんだかいつも通りにおかしな横道に逸れようとしてる感じ。だけどそこでリルフィンがそれを阻止するように言葉をくれる。

「主、結界が消えたとなれば張り直す必要があるのでは？　と、言

うかいつからそんな結界を……」

【フィンフィンはそういえば知らなかったっけ？　まあその役目を担ってないものね。だけど張り直すには骨が折れるわ。世界樹は大きいから……けど確かに張り直さないと街が大変になるのよね】

くっそ、もう少し軽く言ってくれれば僕はこんなに罪悪感に苛まれる事はないのに。いつものノリでそこも行けよな。なんでそこだけ深刻そうなんだよ。

そう思ってると、ウネリの勢いが収まってきた感じ。光も徐々に薄くなっていってる。腕に掛かる負担も軽くなって、サイズがいつものサイズに。

僕はイクシードを解除してようやく解放された。さて、これで話に専念出来るな。

「ふう……で、大変ってどう言うことだ？」

僕は内心ドキドキしてたけど、一応そこを突くよ。どうせ、占いがやりづらくなる～とかだろ。そうであってください。

【そうね、軽くリア・レーゼが壊滅しちゃうかも知れないわ】

「すんませんっしたあああ！！」

僕はすぐさま頭を床に着けました。いやいや、だってそうするしかなくない！？　だって壊滅って……責任とれません。

「あっはははは！　スオウってばおもしろーい」

ケラケラ人の行為を見て笑ってるのは当然クリエです。こいつには僕の必死さが伝わらない様だな。まあガキだし、事態の深刻さってのがわかってないのも無理はない。だけどその笑いは止めろ。イ

ラっとくるから。

「スオウ君……ローレ様、スオウ君を責めないでください。彼が悪いんじゃないんです。ただたまたまこんな事になっただけで……」

ううう、やっぱり優しいねシルクちゃんは。僕の事を真っ先に養護してくれてさ……頭上がらないよ。

【あっはははは！　シルクってばあっまいー。だけど不注意だからってなんでもお咎めなしってのもどうかしら？　それに下の街が無くなった時、自分のせいじゃないって言ってられる？　別にただ責めたりしないわよ。少しでも罪悪感があるのなら、協力しなさいよって事】

なんだか初めてローレがまともに見える。てか、マトモな事を言っている。確かにシルクちゃんの養護は嬉しいけど、一切の責任がない……なんて事は無いしな。協力は勿論するさ。

「何をすれば良いんだ？　ていうか何でリア・レーゼは壊滅するかも知れないんだよ」

流石に極端な気がするけどな。確かに結界が重要って事は分かるけど、そんな直ぐに壊滅なんてしないだろ。

【アンタは無知みたいだから優しい私が直々に教えて上げると――】

なんかムカつく前置きだな。今の僕には突っ込む権利すらないけど、もうちょっと嫌味無く言えないのかコイツは。僕はじっと堪えて続く言葉を待つ。

【――リア・レーゼの周りのモンスターって強力なのよね。大人しいけど、かなりの強さ。そもそもここは最初に選択する街の一つに入ってないから、まあそこら辺はしょうがないのよね。初心者仕様は皆無の場所よ。
アンタも観たでしょ。この街を囲む深い森。あそこってかなりの高ダンジョンな訳。そしてそこのモンスター共は虎視眈々とこの世界樹を取り返そうと狙ってる訳よ】
「取り返す？」

僕はローレの言葉に疑問を浮かべるよ。だって取り替えすってなんかおかしくない？　壊すとか奪うとかならまだ全然分かりやすいんだけど……取り返すって。どういう事だよ。

【そう取り返す。この地のモンスターは私達がこの場所を陣取ってるのが気に食わないのよ。なんてったってここのモンスター達は、世界樹の影響かどうか知らないけど、この樹の守護者気取りだから。
歴史では昔はそれはもうスゴい攻防があったとかどうとか。そこら辺は知らないけど、今でも時々森からモンスター共が一斉に出てくる時もあるくらいよ。
だからそんな奴らがこの気を逃すわけ無いでしょう。それに抑止力も今や復活寸前だしね】
「抑止力ってなんの事なんだ？」

それは結界の事じゃないんだよな。復活とか言ってるもんな。一体何が復活すると言うんだ？

【アンタが壊した結界。あれはこの地のリーダー格だったモンスターを打ち倒して、その力を柱と使って発生させてた物なのよ。
だけど今、その結界は壊された。そうなると、その材料だったモンスター達も当然解放される訳じゃない。そうなると奴らの勢いが

増すな～って事よ。
それに再び結界を張るには、そのモンスターを討ち倒さないといけないわ。四体の聖獣をね】

なんだかローレの口から大層な言葉が漏れた。聖獣って……それはなんだか凄そうだな。

「聖獣？　モンスターなんだよな？」
【そうよ。だけど世界樹の影響を強く受けたのかどうか分からないけど、そんな訳でかなり強いのよね。その四体をいつからかこの地では聖獣と呼ぶようになったのよ。
モンスターだけど、その四体はただのモンスターとは違う――らしいわ】
「らしいわって……見たことないのかよ」

僕は不満を漏らしながらそういった。すると痛いところを突かれたよ。

【だってここには内側から結界を壊すような間抜けは居なかったもの】
「うぐっ……悪かったな間抜けで！　てか、なんだか脆かったんですけど。あれで結界かよ全く」

僕は図々しくも、結界批判をし始める。だってこのまま言われっぱなしなんてムカつくじゃないか！　何か一矢報いたい。てか、全ての責任押しつけられるのはイヤなんで、粗探しだ。

【全く、往生際悪いわね。どーんと『俺に全部任せとけ！』位言えないの？　そもそも結界って物は外からの攻撃に対して強いのよ。だって中を守るための結界なんだもの。当然でしょ】

ふん……随分まともな事を言うじゃないかローレの癖に。普通に何も言えないや。

「つまりは僕達でその聖獣を倒せば、お前が再び結界を張れる……そう言う事だな？」

【ええ、そう言う事よ。だからここを回るのは後にしなさい。こっちが緊急よ】

まあ、しょうがないよな。流石にこれはブーブー文句言えない。原因僕だもんな。それに今ゴタゴタを大きくするわけには行かない。ただでさえゴタゴタしてるのに、これ以上ゴタゴタしたら、色々とヤバそうじゃん。問題は早期解決が一番だよな。

「私達もスオウの尻拭いしなきゃいけないの？」

「セラちゃんそんな事言っちゃダメだよ。スオウ君を一人にさせるなんて出来ないよ。私達が一緒にいないと。仲間なんだから」

面倒そうなセラに対して検診的に僕の事を思ってくれてるシルクちゃん。少しはセラにもその思いやりの一パーセントでも見習ってほしいね。

「シルク様はお優しいですね。だけど実際スオウの安易な行動の結果だし、それなりの対応が必要だと思うんです。親しき仲にも礼儀ありが私のモットーですから」

何得意気に嘘を吐いてるんだよコイツは。絶対にそんなモットー心に宿してないだろ。僕は礼儀を重んじられた事ないんですけど！

確かにセラは僕やノウイ以外の人達にはかなり礼儀正しいけどさ……それをモットーにしてるのなら、僕やノウイにだって同じ様に

礼儀を見せるべきだろ。今しがた親しき仲にも～って言ったんだからな。

「確かに礼儀は必要ですよね。大切な事です」

そう言ってセラの話に納得したシルクちゃんはこちらを見つめる。ぬぬぬ、シルクちゃんにそう言われたら僕は反抗する事なんか出来る訳ない。くっそ、安易な行動か……それならセラだってそうだろ。

真っ先に水飲んだ癖に、コイツに安易な行動と言われるとは……なんか納得行かない。だけど僕一人じゃきっと太刀打ち出来ないだろうしな……早期解決早期解決。僕は頭でそれを唱えるよ。

余計な事に時間を食われたくないけど、こればっかりは僕のせいだし、せいですし！　しょうがないんだ。僕が悪い。はいはいその通りです。

「シルクちゃんもセラもテッケンさんもお願いします！　力を貸してください！」

僕は素直に頭を下げてそう言った。

「はい！　勿論です！」

「当然。僕達は仲間なんだから、協力するよ。それにここは僕達の最後の砦みたいな物だしね。無くなってもらったら困る。それに何より、故郷の国の街だしね」

二人は心良い感じの返答。流石仲間。僕にとっては最も古い友人達だよ。このＬＲＯでね。

「最初からそう言えば良いのよ」

一人だけ明らかに反応が上からなのはセラだ。まあコイツの場合はこれがデフォルトだし、しょうがないから文句も言うまい。そもそも僕が悪いの前提だしな。僕は三人を見て「ありがとうございます！」と言うよ。

すると下の方で服を引っ張られる感覚が……視線を下に向けると、離れてたクリエがいつの間にか足下に居る。

「ねーねークリエはクリエは！」

そんな風に無邪気に何かを求めてるクリエ。もしかしてコイツも付いてくる気か？

「お前には別に何もない。僕達は戦闘しに行くんだから、お前は留守番してろ。それが一番だ。危ないんだからな」

「ええーー！　やだよそんなの！　クリエもクリエも聖獣みたい！　倒したい！」

おいおい、見たいはまだ良いとして、倒したいとか無茶言うな。どう考えてもお前が食べられる側だろうが。

「だめだめ。これは遊びじゃないんだぞ。お前が来たって足手まといにしかならないっての。おいローレ、クリエはここで預かっててくれよ。良いだろ？　お前達にとっても大切な存在なんだろうしさ」

僕は画面の向こうで扇子で顔を隠してるローレにそう嘆願するよ。クリエが重要人物ってのは絶対だから断らないだろう。ここはきっと一番安全だと思うんだ。

幾らリア・レーゼにもサン・ジェルクの回し者が居たとしても、ここには手出し出来ないだろうしな。せめて聖獣を倒し終わるまでは……たのんます。

足にへばりついてブーブー言ってるクリエは無視の方向で。連れていける訳ないからな。

【まあ勿論その子は手札として重要だけど……連れて行けば良いじゃない】

「はぁ！？　本気で言ってるのかローレ？」

なんで悉く僕の意見を却下するかな。僕の事を嫌いだとしても、感情優先で動くなよ。代表だろお前。街の為を思うなら、サン・ジェルクとの対等な交渉とかの為にもクリエは安心安全な場所に置いといた方がいいだろ。

だけどコイツには常識って物が通用しないからな……

【本気も本気。それに言ったじゃない。ここには余所者を余り長く置いとけないって】

「クリエは余所物なのか？　僕達はまあしょうがないけどさ……」

クリエはモブリだろ。同胞じゃないか。余所者ってヒドいぞ。

「クリエはクリエは一緒に行きたいの！」

【ほら、そんなに一緒に行きたがってるのにここで一人お留守番なんて可哀想じゃない。連れて行ってあげなさいよ】

「だけど……安全なんて保証出来ないんだぞ。万が一の事が起こったらどうする？　僕達も、ましてやお前も困るだろ」

輝く小池の光が下から僕達を照らしてる。上の光量は弱いからね。地面にはさっきのイクシードで折られた枝や葉が散らばってる。随分メチャメチャにしたものだ。

【困るわね。利用できなくなるのは困る。けど、一緒に居たいと言

ってるんだから、私はそれで良いと思うけど。行きたい場所にも行かせずに、守るために閉じ込めて置くなんて……それって元老院と同じじゃない？

自分の無力差を私に押しつけないで頂戴。守るんでしょ？　連れていくんでしょ？　願いの場所へ。それなら、最初から最後まで手を離さない様にしなさい。それが責任って物よ】

ローレの言葉はドガンと僕の胸に来た。一切ふざけた口調が無かったのに驚き、正論でさらに心にまで届かせたその言葉に驚いた。

今のはまさに街の代表って感じだったな。それに痛い所突かれたし……元老院と同じか。それは確かにダメだな。僕達はアイツ等を否定してるんだ。同じ事は出来ない。

それに無力差を押しつけるなも当然かも。案外的確な事を言えるじゃないかローレの奴。責任……それを僕はまた軽んじてたのかも知れない。

セツリの時で学んでた筈なんだけどな……伸ばしてた手を取った側は、その手が放されるのを恐れる。だからこそ、今僕とセツリは離ればなれになってるんだろう。それと同じ事を僕はクリエにしようとしてたのかも知れない。

「スオウ！　スオウ！　スオウ！」

ズボンを精一杯引っ張るクリエは人の名前をこれでもかと言う位に叫んでる。僕は上からそんなクリエを見つめるよ。

「危ないかも知れないんだぞ……」

「大丈夫だよきっと！」

「なんでそんな風に言える……」

「スオウもみんなも居てくれるもん！」

僕の言葉に、目をキラキラさせてそう言うクリエが眩しく見えた。僕は足にしがみついてるクリエの頭に自分の手を乗せる。そして撫で撫でしてやるよ。

「そっか」

間違いたくない。もう……手を離しちゃいけない。万が一なんて、起こさなければ良いだけだ。暴論だけど……そう言う事だろ。僕はみんなを見つめるよ。同意を求めるように。

「ローレが置いとくのはダメだと言うならしょうがないわ。ホント信じられない位に器が小さいわね」

「大丈夫ですよスオウ君！　みんなが戦闘してる間は私がずっと側に行ます。任せてください」

「対策はいくつかあるし、ここがダメなら傍に置いとくのが一番だよ」

一人の悪口を除いてはみんな協力的。これで行くしかないか。後の二人はまあ、良いよ。僕はクリエの頭を撫でて結論を告げる。

「じゃあ行くか」

「うん！」

僕達は決めた。危険だけど、そこにクリエと共に行く事を。

ピンチの開始（後書き）

第三百十三話です。
ここからようやく動き出して来ましたね。次回からは激しさを増していく筈です。聖獣との戦闘に、サン・ジェルクの動向。そして勿論クリエの願いに、スオウの呪い。
それらを収束させに向かわないといけないので大変です。だけど頑張ります！
てな訳で、次回は金曜日に上げます。ではでは。

神の姿をうつす物（前書き）

僕達は世界樹の上から再び下へ。そこは予報通りに雨が降りしきってた。そして僕達は本殿へ。びしょ濡れになったけど、ここに来る意味はきっとあったはず。この本殿の奥にはご神体が祭られてる。

そこには意外な事にテトラの姿まで。その時、予想外な事が起こりだす。

神の姿をうつす物

僕達を包む光が収まっていき、吹き付ける風と、辺りに響く雨の音が聞こえてくる。やっぱりこの場所はもの凄く風の勢いが強いな。
油断してると飛ばされるよマジで。僕達はあの宇宙空間みたいな場所から、再びこのＬＲＯの星の中へと降りてきた訳です。
今まで居たのが樹の傘の部分なら、今居る場所は幹で支柱の部分だな。まあここもかなり高いんだけど、今まで居た場所が別格過ぎて、今や「こんなもんだったか」位にしか思えない自分が居るよ。
まあここはここでは地平線が見えるから、世界を中から見る分には良い場所だよ。今は土砂降りのせいであんまり遠くまでは見えないけど……

「うひゃーーー！　雨すごーーーい！」

そんな事を言ってるクリエは真っ先にこの風に飛ばされそうだから、ここに戻る時から既に僕の腕の中だ。でもクリエの言うとおり、なんかこれは雨ってよりスコール！！　って感じ。
ここには屋根あるけど、風が凄いせいで横から全然雨粒が入ってくるという仕様だね。屋根の意味がない位に横からの雨が凄い。
まるでバケツに溜めた水を被らされてるみたいな……その位の量が常時僕達の体を襲うよ。

「うおおおおおお、酔いが醒めるうううう！！」
「自分もっすううううう！！」

だけどどうやらこの雨の襲来は酔っぱらい二人には良い酔い覚めになりそうだった。気持ちよさそうに寝てるのを叩き起こして、半

ば無理矢理連れてきたもんな。
面倒な酔っぱらいの酔いが醒めるのは良いことだよね。僕達にとっては災難以外の何者でもないけど……

「あばばばば――ぺっ！」
「クリエお前！　雨で何ウガイしてるんだよ！」

きったないだろ。

「あぶぶぶぶ、だって水が沢山だからもったいないでしょ？」

既にびしょ濡れなのも関係なくハシャいでるなコイツ。てかもったいないならゴックンすれよ。吐き出すな。まぁそれもお勧めは出来ないけどな。

「みんな大変そうだね」
「ちょ！？　何でテッケンさんは全然濡れてないんですか？」

軽い感じの声が聞こえたと思ったら、テッケンさんが余裕の顔してこちらを哀れんでるよ。てか、テッケンさんが掴まってるリルフィンもなんか全く濡れてなくない？　コイツ絶対何かしてる。

「どうやらリルフィン君が雨避けと風避けの障壁か何かを張ってるみたいだね。おかげで僕もこの通りだよ」
「「「そんな！　ズルい！！」」」

僕達びしょ濡れ組が一斉に声を出して抗議する。だけどそう言えば、ここで僕達を襲ってきたモブリも風の影響を受けてなかった。
それにはこういう理由があったんだな。てか、雨なのはローレの予報でわかってたし、そもそもこの風自体が危険なんだから、僕達

にもその障壁を掛けてくれる優しさがリルフィンには必要だったよな。全く気が利かない奴だ。

「これはこのリア・レーゼに住むものだけに与えられた慈悲なのだ。余所者はその都度一回使いきりの護符を購入しろ。向こうの本殿にも販売してあるぞ。

まあ普通は一階部分で買うわけだがな。買わなかった貴様等が悪い」

「おい……僕達は買わなかったんじゃなく、買えなかったんだよ！！　わかってる癖に言わせんな！！」

だって僕達はその一階部分なんて知らないからな。幽閉されて、いきなりここだよ！　どうやってそんなの買えと？　言えば良かったのか？　ここまで案内される前に「ちょっと護符が欲しいんですけど……」と！？

きっとあのサン・ジェルクの手先共はそれでも買わせてくれなかっただろうし、そもそも幽閉されてた奴らにそんな権限どっち道なかった！

僕の反論に、周りからは「そーだそーだ！」の応援の声。ここはお前が責任もって全員にその護符を渡すべきだ！

ここは直ぐに通り抜ける訳だけど、これからこの雨の中、聖獣とまで呼ばれるモンスターと戦闘しに行かなきゃいけないんだからな。視界が奪われるのは痛いだろどう考えても。

この雨は絶対に目を開けるのも辛いよ。まだここは上からじゃなく、横からバシャバシャ来る感じだから、頭から水を被ってる感じになってない分だけマシだけどさ、下に行けばそうは行かないだろ。

外へ出れば屋根なんてないんだし、この雨が脳天を直撃するのは目に見えてる。

「買えなかったんだから仕方ないと？　なら今買えば良いことだろ。

丁度本殿に用があるしな」
「いや、だからそういう訳じゃ――アブブブブ！？」

クッソ……横殴りの雨に邪魔された。てか、どうやっても掛けてくれる気はないらしいな。な～んかリルフィンってどこか僕達と距離を置いてるよな。
ローレの奴は無闇に近かったけど。まあ物理面で言えばローレの方が顔も知らない分遠いけどさ、心の距離で言うと近づいた気はする。あれだけ言い合いしたからな。
それなのにリルフィンは常に離れた距離で僕達を達観してる感じがあるよ。まあ馴れ合いたくないのかな？　とも思うけど……障壁掛けてくれる位いいと思うんだ。

「しょうがないですよスオウ君。本殿に行くんですし、そこで買いましょう。そんなに高くはないでしょうし」
「うん、そだね――て！？」

僕はここでとんでもない事に気付いてしまった。シルクちゃんも当然びしょ濡れ……その服が体に張り付いてなんかエロい。可愛らしいシルクちゃんが更にエロカワイイ。
やばいな悩殺ものだよコレは。
しかも服が白いから肌も……そしてブラとかもその……透けてるね。まあ輪郭と色が薄く見える程度なんだけど……体のラインが出るってだけで良いじゃん。
シルクちゃんの装備はゆったりフワフワの服だから今までそういうのは見えなかったもん。うん、女の子の濡れた姿とは良いものだ。
まさか、これを見せるためにわざとリルフィンの奴……ってんな訳ないか。

「どうしましたスオウ君？　早くついてかないと、もっと一杯濡れ

ちゃいますよ」
「ああ……うん」

僕はなるべくシルクちゃんを見ないようにしてそう言った。いや、なんかシルクちゃんにはいつもいつもお世話になってるし、そんな下心全快の瞳で見るってのには抵抗がね。そりゃあじっくり見て目に焼き付けときたいけど、それをしたらシルクちゃんの好意を素直に受け取れなくなりそう。

「スオウどうしたの？」
「何でもない……」

クリエの言葉に僕はそう返して大きく息を吐く。てか、先に出ていったリルフィンもシルクちゃん達も既に雨で見づらくなってるな。この転送魔法陣の場所から出るって事は、この雨……いや、スコールを諸に被るってことなんだよな。気が重くなる。まあ今のため息はそれに関してじゃないけど、クリエはどうやらそうだと思ったらしい。

「もうスオウは……雨ぐらいクリエ平気だよ。もっと楽しく考えれば良いんだよ。こんな大雨なかなかないもん、一杯濡れてるし、もっと濡れる事を楽しんだらいいの！」
「楽しめるかコレ……」

音とか聞く限りなんか床に穴でも空けそうなほどにダバダバ鳴らしてるぞ。しかもこの本殿の方へ続く一本道の回廊……何故か手すりもなければ、両サイドに壁もないんですけど。
上でも思ったけどさ、リア・レーゼには安全意識がないのだろうか？　そりゃあ普通は障壁を張るから風とかも問題無いんだろうけど、万が一に備える物だろ普通は。

安全には安全を重ねる……それが万一に備えるって事だ。なのに、リア・レーゼはそこら辺が凄くお粗末。どんなに高くても、落下防止用の壁やロープを設置しないのには、何かポリシーでもあるのだろうか？

僕が不安に思ってると、残ってた最後の一人が隣に立つよ。

「楽しむんじゃなく、アンタはその伸ばした鼻の下を引き締める気持ちで行きなさいよ。修行とかと思って全力でね」

「セラ……てか、別に鼻の下なんか伸ばしてないし」

僕は片手で鼻の下辺りを隠してそう言うよ。てか、セラも濡れてるから妙にエロいな。エルフだから体型はモデル並だし、なんと言ってもメイド服が濡れてる様はなんか背徳的。

するとセラは突如自分の肩を押さえてブルッと震えた。

「今何か、アンタの視線から悪寒を感じたわ。まさか、私でも鼻の下伸ばしてるの？」

ギクリだね。こういう所、女の子って妙に鋭い。まあセラはニュータイプってのもあると思う（個人的希望でね）。

だけどそれを認めると、関係が悪化しそうだしここは誤魔化して――ん？

「スオウって本当は女の子なら誰でも良いとか……そう言うのじゃないの？　だってシルク様ならわかるけど、私でもなんて……嫌ってる相手になんて興味ないでしょ」

どうしたんだセラの奴。いつもなら体を押さえた直後に「見るな変態！」とか言って鉄拳制裁が来てもおかしくないのに、今は妙にしおらしい。

「別にお前の事を嫌ってるなんか言ったか？　そりゃあ理不尽な罵倒中傷や暴力はイヤだけど、最近はそこまで酷くないし、付き合い方も段々分かってきた感じもする。
てか、仲間なんだし嫌いじゃないぞ。関係良好を目指すんだよ」
「だけどそれって私の事が嫌いだから……マトモな関係で落ち着きたいって事じゃないの？」

なんだか雨と風の混じりあう中で、僕達は外へ飛び出すタイミングを逃したのか、この話題を終わらせないと本殿へ行けない感じになってしまったな。
てか、案外深刻そうにセラがしてるのにびっくりだよ。関係良好？　上辺だけ取り繕ってあげるわ……位かと思ってた。

「バカ言わないでよ！　私だって言ったでしょ。その……嫌いだけど嫌いじゃないって。だから一応ちゃんと関係改善は目指してるのよ」
「そっか……それはありがたい。少しづつだけどちゃんと僕達進んでると思うよ。最近はそこまでズガーンって心を砕かれないしな。まあ今まで酷かったから、耐性が付いたってのもあると思うけど」
「そんなに私酷い事してた？」
「自覚無しかよ！？」

おいおい、どれだけデフォルトでSなの。やっぱりセラが今も普通にキツいこと言うのは、コイツの中ではキツい事の中に入ってないんだろうな。凄い事実を知ってしまったよ。

「昔の事より今よ今！　私たちってこのまま頑張ったらどこまで行けるのかな？」
「どこまで？　……う～んかけがえのない仲間の位置までいくんじ

ゃないか？　セラが居ることはキツい事を言われるのも含めて、ＬＲＯじゃ日常化してるし、実際お前が居ると安心するよ」

僕がそう言うと、セラは何故か勢いよく顔を逸らすよ。

「あん……しん――って……それは喜べは良いの？　それとも仲間の部分に悲しめば良いの？」

なんか背中向けてボソボソ言ってる。どうしたのかな？　とか思ってると、腕で抱えてるクリエがこんな事を言った。

「ふふふ、スオウとセラちゃんは二人してスキスキーーだよ！」

「はぁ？　何言ってるんだおま――」

「――ちょっとクリエ！　私は別にスオウの事とか好きなんて感情は！！」

僕の言葉を遮る勢いで言葉を発するセラ。だけどそこでクリエは手を挙げて元気一杯にまたこう言った。

「スキスキーーだよ！　クリエは二人の事スキスキ！！」

「――へ？　アンタの事？」

「うん！　クリエはクリエはスオウもセラちゃんも好き――はっ！？　きき嫌いだよ。セラちゃんは嫌いね」

そう言ってセラに必死にウインクを送るクリエ。嫌い＝好きでないとセラには伝わらないとクリエはまだ思ってるらしい。そしてそんなウインクになんかプルプル体を震わせてるセラ。

「あ……あ……アンタなんか……」

「ん？」

漏れ聞こえる声はギリギリ聞こえる程度。雨と風のコラボレーションの中だと聞き取るのに苦労するよ。そう思ってると、真っ赤な顔を上げて、セラはこの場所から飛び出す。

「アンタなんか大っきらいよ！！」

パシャパシャと雨を踏み付ける音を出しながらセラの背中が遠ざかる。何だったんだセラの奴？

「はぁぁ！　やっぱりセラちゃんはツンデレだね」

なんか目をキラキラさせてセラの背中を見つめてるクリエ。今の大嫌いもコイツは大好きと受け取ってるんだろうけど……きっと今の言葉は本音だぞ。まあ言わなくても良いかな。誰も幸せになれないし。

「さて、僕らも行くか」

「うん！」

僕達は最後にセラの後を追うように転送魔法陣の外へ出る。スコールは痛いくらいに体に当たり、風は僕達をこの通路の外に押し出そうとする。油断したらマジで、足を踏み外すかもしれないから、急ぎながらだけど慎重に歩みを進める。そして何とか本殿前の広い空間へとたどり着く。

「遅いぞ全く……」

広い空間から、更に本殿へと近づいて屋根のある部分まで来るとリルフィンにそう言われたよ。そしてそそくさと中へと入るリルフィン。僕達もそんなリルフィンの背中を追って中へ。

扉とかなくて、なんだか四角く光ってる部分を潜ると中へ行けるみたいな感じで、その光を潜ったよ。するとかなり広い空間が広がってた。神社仏閣の広い場所みたいな。
本殿だけあって流石に広いな。天井高いし。しかも訪問する人が多いからなのか靴箱が学校みたいにズラッと並んでる。
どうやらここも土足厳禁みたいだ。

「へくちっ！」
「クリエ大丈夫かお前？　靴箱よりも、どうにかして全身乾かしたいよな」

だって靴脱いだってこのままじゃ床はビシャビシャになるぞ。

「よし、それなら少し待っててくれ。僕がどうにかしよう！」

そう言ってリルフィンと共に居たおかげで濡れてないテッケンさんが、内部をトコトコ走り出す。そして少し先に見える、売店？みたいな所まで行ったかと思うと直ぐに戻ってきてくれた。

「さあ、これを使えばびしょ濡れの体も服も一瞬で乾くよ」

そう言って差し出されたのはお札だ。中央に魔法陣と、その上から、グニャグニャした字がしたためられてる。なんだかこれ見たことあるような……似たようなのをさ。

「これが風や雨から守ってくれる物ですか？」

確か売ってるっていったし、それならコレかもだろ。そして僕の予想通りテッケンさんは首を縦に振るよ。

「ああ、その通り。この街では魔法をこうやってお札に宿して色々と役に立ててる。こうしとけば、厄介な詠唱とか必要ないんだよ。まあ制約も色々とあるらしいけど、単純な魔法を使うだけとか、詠唱がやたら長いのを一発ストックしとくとか利用方法は色々とあるんだ。

これに封じられてる魔法は周りに影響されない状態維持の魔法だよ。一番のデフォルト状態を維持してくれるからきっとその濡れた体は元通りに成るはずだ」

「なるほど」

別に雨や風を遮ってる訳じゃなく、干渉を受けない様にしてるのね。まあこのびしょ濡れの状態を元に戻してくれるなら何だっていいよ。僕達はテッケンさんの手から一人一枚ずつお札を貰う。

「すみませんテッケンさん。お金は後で払いますね」

「ははは、別にいいよこの位。そんなに高い物じゃないしね。僕だけ濡れてない分のお詫びだよ」

そう言って気前よく支払いを断るテッケンさん。まあ確かに消耗品だし、そんなに高くないのかな？　それならいいけど。

「ありがとうございます。じゃあありがたく使わせて貰います……」

僕はそう言ったけど、実際困った状態に陥ってるよ。これってどうやって使うんだ？　よくよく考えたら知らない。使い方を聞こうにも、なんだか一般常識な感じがして聞きづらいし……こうなったら、横目でみんなの行動を……って既にみんなやり終わってやがる！　一瞬か、一瞬の方法なのか。僕が思案してると、腕の中のクリエが「ねーねークリエにもやらせて」と言ってきた。おお、そう言えば僕は二枚貰って、一枚はクリエ用なんだよな。

クリエは使い方を知ってるみたいだし、助かった。流石は魔法の国の住人。幽閉されててもそこら辺は経験あるんだな。

「ほら」

「よーし、解放！」

ビシっとお札を持った方の腕を伸ばしてそう宣言するクリエ。するとお札に光が走って、クリエに溶けるようにして消えていく。それと同時に、クリエの体に淡い光が灯って、次の瞬間には収まった。

「完全回復！」

「はは、完全回復って別にダメージを負ってた訳じゃないだろ」

だけど使い方は分かったな。実際んな叫ばなくても成るだろう。恥ずかしくない程度で、今の行動を再現だ。

「え～と、腕伸ばして……解放」

控えめに言ったけど、なんか何も起こらない。何でだよ！　おかしいだろ。誰しもがノリノリで解放！　っていうか？　言わないよ。

「もう、もっと元気に言わないと、お札さんもやる気が出ないよ」

腕から飛び出してそんな事を言うクリエ。お札の機嫌なんか知ったこっちゃないぞ。だけど僕だけびしょ濡れな訳にもいかない。ここは思い切って叫ぶしかないか。

「ええ～い、解放！！」

すると今度は認識してくれたのか、お札がクリエの時と同じよう

に消えていく。それに体も一瞬光に包まれて、その一瞬で水気が一気に飛んでった。おお、消耗品とはいえ凄いな。気分さっぱりだよ。
なかなかいい気分に成ってると、横からノウイがこんな事を言ってくるよ。

「ははノリノリッっすね。まあ分かるっす。自分も初めての時はそうしたっす。だけど後から知ったっすけど、このお札って胸に当てて小さく解放と言っても使えるんっすよね」

なんだってーーー！！　どんな恥ずかしい思いしてるんだよ僕は。先に言えよこの野郎。まあよくよく考えたら、僕とクリエ以外から「解放」なんて言葉聞こえてきてなかったけどさ。
うう……途端に恥ずかしく成ってきた。

「何痛い思いしてるんだ。さっさと行くぞ」
「痛い言うなこの野郎」

リルフィンの奴、顔見えないけどあれは笑ってるんじゃないのか？　そんな被害妄想をしてしまう。

僕達は長い廊下をくねくね進み。庭園やら何やらを通り抜けて、でっかい仏壇……と言うのはおかしいか。神壇とでも言って良いものかわかんないけど、取りあえずそんな豪華に神が奉られてる所まできたよ。
金色に光輝く装飾をされた世界樹が中心にある。そしてその両サイドに、彫刻なのか、同じく金色した二人の神の姿。だけど見つめあってたりはしてない。互いに世界樹を間に入れて、背中を向けた……そんな構図。
なんかやっぱりサン・ジェルクとは違うな。向こうではテトラの

影も形も無かったのに、ここには世界樹とそしてシクラと同等の扱い受けてるもん。これは良いのか？　テトラってシスカ教じゃ邪神だろ。
金ぴかでシクラに背中を向けてるとは言え、同じ位置。なんだかコレって……仲違いしたみたいにも見えるよな。それにそれぞれ顔がなんか悲しそうと言うか……

「これって……」
「貴様も一応拝んどいた方がいいかもしれんぞ。聖獣の強さは計りしれんからな」

ぬぬ……僕はそう言うことを聞きたかった訳じゃないんだけど。まあだけど拝んでてはやろう。周り見るとそれなりに拝んでる人居るし。座布団の上で瞑想してる人とかも……熱心な信者なんだろうね。ここに居るのは。だけどこの人達は果たしてこの人達は二人の神と樹……どれを拝んでるんだ？　世界樹？　それとも二人の神のどちらか？

「その右の奴に祈っても意味はないぞ。それは戒めの為の邪神だ」
そんな事を言うリルフィンはどこか奥へ。邪神か。随分な言われようだな。でも戒めって……これはそんな感じには見えないんだけど。

「ふわぁふわぁ！　シクラ神かっこいい！！」
なんだか随分興奮してハシャいでるクリエ。しかも格好良いって……格好良いかこれ？　わからん感性だ。そう思って神壇を見つめてると、突如腕を浸食する呪いが疼きだした。
僕は思わず床に膝を付く。

「なんだ……」
腕を押さえながらそう呟くと、周りから大きな悲鳴が……
「きゃあああああ！　邪神から黒い霧が出だしたわ！！」
「不吉じゃ！　不吉がやってくるのじゃあああ！！」
そう言って数人が騒ぎ出すと一気にその恐怖が周りに伝染。参拝客の人達は一斉に出口から部屋の外へと押し出て行く。その間もテトラの像からは黒い霧が出続けてた。

神の姿をうつす物（後書き）

第三百十四話です。

聖獣戦！　と思いきや、そういきなりはいけなかったです。だけど次では聖獣戦に入れるかな？　この本殿にはちゃんとした来た意味あります。寄り道じゃないです。聖獣戦に入るにはそれなりの手順が必要なのです。

忘れがちだけどこれはゲームですから。

てな訳で、次回は日曜日に上げます。ではでは。

顕現のテトラ（前書き）

黒い霧は集まりだして一つの姿を作る、それはいつか見た神の姿。ここで言うなら邪神テトラのその姿だ。

どうやら自身の像を使って顕現したらしいテトラ。だけどそれは不味い事らしく、リルフィンが戦闘態勢に。どうやらこの場所にテトラが現れた事は許せない事らしい。

だからリルフィンはその身を掛けてテトラを滅しようとする。

顕現のテトラ

淡い橙色の光源に薄暗く照らされるこの場所。金色に輝く世界を支える樹と二人の神の神壇が奉られてるここが今、神聖というか、不気味な感じで静まり返ってしまった。

何故なら、邪神テトラの像から湧き出た黒い影。それに参拝に来てた人達は怯えて一斉に逃げ出したからだ。ドタドタバタバタと、きっとこの場所ではあり得ない位の騒々しさだったろう。開け放たれた、後ろの引き戸は外れてるし、床に散らばった座布団が、彼らの慌て振りを物語ってる。

そしてその後が今な訳だ。参拝客が居なくなって、残ったのは僕達だけ。邪神の像から染み出す様に溢れてる黒い霧もまだ収まってはいない。

「わわ、どうしたのかな？　クリエはとっても面白いと思うのに。楽しいよねこう言うの！」

「クリエちゃん、これはアトラクションじゃないんだよ。起こるはずのない事が起きてるからみんな慌てたの」

クリエの相変わらずな脳天気な言葉に、シルクちゃんがきちんとした説明をしてくれてる。だけどクリエの奴は「あとら～くしょん？」とか変な所でつっかえてるよ。

そんな中、激しく音を立ててどっかに言ってたリルフィンが姿を見せる。

「どうした？　随分騒がしいが何が――――ぬぁ！？　なんだこれは！！」

奥から現れたリルフィンはこの惨状（言うほどでもない）を目にして驚愕してる。騒がしい音に釣られて出てきた割には覚悟って物が足りないな。何かある――とは思っておけよ。
それともこれは想定の範囲外だったと言うことか？

「おい貴様、そんな所で膝を付いてないでどう言うことか説明しろ」

何故に僕に説明を求める？　苦しがってる様に見えないのか？
テッケンさんとかに聞けよ。まあ実際痛い訳じゃなく、なんだか内側がウズウズするというか、モゾモゾするというか、ジンジンするというか……そんな感じなんだよね。
そう疼いてる感じだ。まあ僕もよく分かってないけど、見えることだけ教えてやろう。

「見ての通り、信者が目を覚ましただけだろ」
「殺されたいらしいな」

ポキポキ指を鳴らしながら迫り来るリルフィン。う～ん冗談にしては場が悪かったか。流石にここで言うと不味いよね。
僕はしょうがないから慌てて言い直すよ。

「ちょっと待て待て。今のは無し。周囲に黒い霧みたいなのが出てるだろ。それがそこの邪神の像から出てきたものだから参拝客がパニックに成って逃げ出したんだ」
「まさか……そんな機能は搭載してないぞ」
「だろうね」

そんな機能を搭載してたら、信者から批判続出だろ。神をバカにしてると思われかねないよね。神聖な物にカラクリなんて無粋なだけ。

「だけど実際この有様だ。テトラの像からこの霧が出てきてるだろ」
「誰かのせいで災厄が始まる……その前兆みたいだな」
イヤな事を言う奴だな。僕のせいだとでも言いたいのか？　そんな確証全くないだろ。たく、なんでもかんでも僕と関連付けるなよな。
「だけどスオウ君のその呪いに反応してる様にも見えるっすよ」
うるっせ。ノウイの奴余計な事を言うなよ。まるで僕が疫病神みたいじゃないか。リア・レーゼに来るときも言われてたけど、今の状況じゃ強く否定できないと自分で自覚してるぞ。
聖獣の件もある意味僕のせいだし……そんな事を思ってると、この場にクリエの変な声が響く。
「あうあうあうあうあう……」
「どうしたのクリエちゃん？」
クリエのおかしな声に反応するシルクちゃん。何をアイツは見てるんだ？　すると突然、この場に溢れだした霧がモコモコと蠢きだした。そしてどこからともなく吹いてきた風に霧は一カ所に集まり、なにやらその姿を形作っていく。
「お……前は……」
震える声を出すリルフィン。だけどそれも無理もない事だ。だってその霧が集まって形作った姿は……どう見てもそこの像と同じ、邪神の姿。

「テトラ……」

なんだか随分懐かしく思える姿だな。実際それほど日にちは経ってないんだけど、日々が濃いせいでそんな風に思う。

僕は腕を押さえながら立ち上がる。この腕の疼きは、術者に反応してたって事か？　霧によって淡く形作られたテトラはまるで、水墨画が飛び出してきた様な感じ。

ユラユラと揺らめいて、吹けば簡単に消えそうな危うさがある。随分とお些末な感じで姿を現した物だ。僕の声に反応したのかどうか知らないけど、霧となって姿を現したテトラの瞳がゆっくりと開いて僕を捉える。

【よう、どうだ調子は？　もう期限は迫ってる。遊んでる暇はないぞ】

「遊んでねぇよ。僕は真剣にやってる。てか……一体どうやって出てきてるんだよ」

こいつが変な登場をするものだから、沢山の人が怖がったじゃないか。もっと普通に登場出来ないのか？

【そう言うな。今の俺はこちらに顕現する事はしたくないんだよ。ここには丁度良い寄代があったからこういう形で出てきたんだ】

よりしろ……それがあの像って事ね。まあ確かにこの気を逃したら、僕に次ぎ会うのはそれこそ暗黒大陸にもう一度行く位しかないだろう。

だって邪神とされてるテトラの像なんて、そうそう有る訳ないもんね。シクラ教では明らかな敵らしいし、実際ここに飾られてるのって奇跡に近いことだよ。

だから多少強引にでも出てきたと。僕の進捗具合が気になって？

「――で、出てきたんなら何か有るんだろうな？　てか、そもそも

お前が与えた情報無さすぎるんだよ。金魂水使わせたいのなら、何かヒント出せ！」

僕は神に向かってあり得ない態度してます。まあだけど、テトラは邪神だし問題ないよね。

【ヒントか。出してやろうにも、ルートが決まってる訳じゃない。どんな道筋を辿って目的地に着くかはお前次第。お前がこの世界の本当の神に愛されてるのなら……道はそこへきっと収束するさ。

それにお前だって、俺が金魂水で何をしたいのか、少しはわかってるだろう？】

そう言ってその長い黒髪を揺らすテトラ。みんなはなんか初めて見る神と言う存在に言葉を出せないで居る様だ。よってこの場には僕とテトラだけの声が響く事に。

「何をしたいか……ね。神様が考える様な事は僕には想像出来ないけど、予想するにもう一人の神に関係あるんじゃないのか？

お前とシクラ……二人の神の問題とかさ」

僕がそう言うと、テトラは不意にシクラの像の方を向いた。そして物思いにふける顔で【良い線はいってる】とだけ言ったよ。

まあ実際、こいつと一番関係深そうなのってもう一人の神であるシクラ位だと思うから、誰でもきっと当てれると思う。

まあ実際、シスカ教の教えを受けてるＮＰＣとかなら、こいつの現れた目的を世界滅亡とか考えてもおかしくないんだろうけど、初めに会ったときからそう言うイメージが僕にはなかったんだよな。

こいつも何かを願ってた。それが世界滅亡とか世界征服とかとは違うと思うんだ。だってあの時のこいつは無理矢理で強引だったけど、それだけしてでも――という気持ちが感じれたよ。

それを僕は悪人のそれとは違うと感じたんだと思う。だからこそこうやって話せるんだしな。こいつを真の邪神とか思ってたら、流石の僕でもこんな風に会話できない。
みんなと同じようになっちゃうよ。するとその時、意を決したように口を開く者が一人。

「邪神テトラ……まさかこんな所に現れるとは、随分図太い神経だな。流石だ。だが飛んで火に居る夏の虫と言わざる得ない」

そう言ってリルフィンは自身が纏ってたローブを勢い良く脱ぎ捨てた。現れるはその特異な姿。白銀の髪に同じ白銀の毛で覆われた上半身。そして蒼碧の瞳がテトラを真っ直ぐに見つめてる。すると次の瞬間突然に、テトラの煙の体に数カ所穴が空く。リルフィンお得意の攻撃が炸裂したようだ。

「おいリルフィン！　ちょっと待て！」

僕は慌ててそう叫ぶ。だけどリルフィンは止まる気がないようだ。

「うるさい！　貴様も邪神の手下だったとはな。どうりで災厄をもたらす者な訳だ。私は主とこの街に不利益になる輩を許しておく気はない！」

そう言って奴の白銀の髪の毛がザワザワと逆立ちしだした。おいおい、また敵認識されちゃったじゃないか。

「少し落ち着けよ。僕がここに居ることはお前の主が認めてる事だ！　それに僕達はこれから聖獣を倒さないといけないんだぞ！　戦力が減って良いのかよ！？」

【聖獣？】

僕の必死の言葉に、何故かテトラがちょっと反応したけど、そこを気にしてる場合じゃない。これでだめならマジで戦闘する羽目になるぞ。止まれよリルフィン。

「ちっ……貴様の命は聖獣を倒すまでは保留にしといてやる。だが、そこの邪神は別だ。そいつはこの世界に闇をもたらす存在。ここで滅っすれば世界は救われる」

なんとか僕の方の問題は保留になったけど、依然としてテトラのことは倒す気満々なリルフィンだ。だけどそんな言葉を聞いて高笑いしだすテトラ。

穴が空いてる癖に……神の余裕と言う奴か？

【くっくはっはっはっはは！　貴様その姿、五種族ではないな。世界の外れ者が、世界を語るとは甚だおかしい。貴様も俺と同じだ。ここにはいない方が良い存在だろ？】

空いていた穴が煙が再び集まると同時に消えていく。どうやら実体じゃないこの虚像にダメージを与える事は出来ないみたいだな。てか、五種族じゃないって……いや、確かにリルフィンの姿は異質だけど……じゃあ何だって言うんだ？

それに居ない方が良い存在って……自覚してたんだな。

「笑わせるな邪神が。貴様と私は同じじゃない。お前は世界の誰からも必要とされないが、私は違う！　私には必要としてくれる主が居る！！

実際世界がどうだろうと、私は主さえ居ればいいんだ。あの方がこの世界を、この街を好いている。だからそれを脅かす輩は私が排除する。それだけの事」

そう言うと今度はお尻の所から、尻尾まで現れた。マジで何なのこいつ？　獣人か？　てか、そこまでローレの事を思ってたんだな。意外だよ。そしてそんな思いを熱く語ったリルフィンは、尻尾を掴むとその尻尾がズポッと着脱した。

ええええええええ！！？？　だよ。　僕達みんなその様子に驚愕。するとその尻尾部分が、セラとの対決で見せた剣へと変わりゆく。

まあ実際、剣と言って良いのかは微妙だけどね。どっちかって言うと、あれは棍棒なのかな？　斬れそうに無いし、寧ろあの沢山のトゲで叩いて串刺しにするのが正しい使用方か。

【ふん、契約でしか絆を確かめられない分際が、よくもまあ吠えるな。いや、実際犬だから当然か。大層な武器を取りだしたようだが、この俺を叩いても効果はないぞ】

懇切丁寧に嫌みと共にそう告げるテトラ。だけどそれをわかってないリルフィンじゃないと思うけど。それより犬とは……それはリルフィンの立場とかを言い表してるんだよなきっと。確かに犬……なのか？

「効果なんて期待していない。ただ貴様を排除するために使うだけだ。ここは主の統治する街。邪神に好き勝手やらせるわけにはいかん！！」

そう言ってリルフィンはその武器をテトラに向かって突き立てる。先端も鋭利なトゲが出てるから、それでぶっさそうと言う魂胆か。いや、実際には刺さらないとわかってるだろうから、さっさと追い出すための威嚇。

だけどテトラはその攻撃が届く前に、突如自身の姿を霧へと戻し

た。黒い霧は床に蔓延して個体を無くす。どこを攻撃して良いのかわからないリルフィン。僕達もキョロキョロと辺りを見回すよ。

【邪神邪神とさっきからうるさい奴だ。自分との格の違いがわからん訳でも無いだろうに……そんなに今の主が大事か？　その感情……行き過ぎだ。

だが、なかなか持って面白い】

そんな声が辺りに響くと思ったら、黒い霧の上に魔法陣が複数現れては消えていく。しかもなんだかいつも見るシルクちゃんとかプレイヤーや普通のＮＰＣ、それにモンスターが使う時に出る魔法陣とは何か異色だ。

まず色も黒いし、ただの円じゃなくまがまがしい感じにその円を飛び出して文字が這うように広がってる。

「なんだか不味い感じがします」

「同意見だな。リルフィン武器を納めろ！」

なんかどう考えても不味そう。不吉な感じはシルクちゃんだけじゃなく、みんな感じてた。だけどリルフィンは意地でもテトラを追い出したいのか、足下の霧に向けて武器を降り続けてる。

なんかその姿はいつものリルフィンっぽくない。飛空挺で戦った時、こいつは冷静に燃え上がるタイプだった気がしたけど、今は誰よりも周りが見えてない状態だ。

なんだかまるで、ここに居る誰よりもテトラと言う存在に怯えてるかの様……そう思ってると、クリエが何かを感じたのこう叫ぶ。

「来るよ！　気をつけて！！」

その瞬間、大量の霧がリルフィンの足下から一斉に吹きあがった。

そしてその勢いは凄まじく、手元から武器を払い落として天井までリルフィンを持ち上げた。
吹き上がった霧は天井で拡散すると、再び一カ所に集まりその姿を形作る。黒い漆黒の髪が大きく揺らめいてテトラがその存在を表した。

「きっさま……」
【お前に貴様呼ばわりされる謂われはないな。様をつけろ。それが正しい立場だろ】
「だれが邪神などに……ぐぅ！」

どうなってるのか分かりづらいけど、リルフィンがピンチなのは十分に伝わってくる。アイツの神懸かり的な強さは僕も良く知ってる。そりゃあリルフィンも強いけど……テトラは神の名を体現する程に強い。どうあがいたってアイツは一人で倒せる次元には居ない。
まさに神なんだ。その称号は伊達じゃない。

【いつからこんな風になったか知らないが、これでは良くない。それをお前は知ってるはずだ。その存在を正しく見つめれる様にしてやるよ】

そう言うとテトラの腕に幾重にも重なった魔法陣が現れる。あれは不味い！　僕は直感でそう感じたよ。かなう筈もない……だけどこのまま放って置くことなんか出来ない！

「ノウイ！！」
「分かったっす！！」

僕の意志を足りない言葉だけでも受け取ったノウイはその場に鏡を出現させる。ノウイの唯一の必殺スキル『ミラージュコロイド』

どんな距離だってこれを使えば一瞬だ。そりゃあ限界距離は有るけど、ここの床から天井までは余裕。僕はすぐさま飛び込んだ。
そして次に現れるはテトラの側に出現した鏡からだ。僕は現れたと同時に、リルフィンに向かって伸ばされてた腕を叩き斬る。

「その辺にしとけよテトラ！」
【ふっ……】

イヤな笑いを漏らしたテトラ。その顔はまだ諦めてない感じ。そして何かリルフィンの様子がおかしいことに気づいた。二人の視線が真っ正面からぶつかってる。そして何故かリルフィンは瞼を見開き瞬き一つしない。
まだ何かやってる。僕は重力に従って落ちる前に、体を回転させてリルフィンを掴んでる腕も斬った。するとその瞬間、リルフィンの体も僕と同じように床目指して落ちることに。

「おい！　大丈夫かおい！」

僕は落ちながらリルフィンに声を掛けるけど反応がない。やっぱり何かされてたらしい。このままじゃ受け身もまともに取れないぞ。この空間は結構天井高いから、流石になにも出来ずに床に激突は不味いと思う。
実際僕も気が気じゃないけどさ、今はリルフィンの奴の方が心配だよ。そう思ってると床と僕たちの間に大きな魔法陣が現れた。そこに落ちると魔法陣事態がゴムみたいに伸びて勢いを吸収してくれる。
そして殆ど勢いがなくなったら、ブチンと切れて、伸びた所から床に落としてくれた。

「うぎゃ！」「くっ……」

イテテ、正気でも普通に着地ミスった。

「大丈夫ですか？」

「ははは何とか……助かったよ。ありがとうシルクちゃん」

「いえ、そんな……でも無茶しすぎです」

やっぱりあの魔法はシルクちゃんだよね。流石頼りになる子です。フォロー態勢万全だね。僕の突然の無茶もシルクちゃんが居てこそだよ。

「っつ――私は一体……」

「おお、正気に戻ったかリルフィン」

どうやら今の着地の時に頭を打ったのが良かったらしい。怪我の功名とはこの事だね。

「まさか貴様が私を？」

リルフィンの視線は僕が出してる剣へ向かって、そんな推測を出した。理解が早いね。僕は肯定したよ。

「どうして貴様が危険を冒してまで私を助けた？　そこまでする必要性があったか？」

おいおい折角助けてやったんだから素直に喜ぶか礼でも言えよ。まあリルフィンはこう言いそうだったけどさ……別にそこまでおかしい事かな？　と思うんだけど。

「必要性とかじゃない、知り合いがやられてるのに黙ってられるか。

僕たちはもう知らない仲じゃないんだぞ」

僕が真剣にそう言うと、なんだかポカ～ンとしてるリルフィン。なに？　そんなに意外な返答だったか？　普通だろ。なんだか余りのリルフィンの反応にこちらが恥ずかしくなってきてると、不意にリルフィンが視線を落とす。

「バカな奴だな全く。私は貴様を助ける事なんてきっと無いぞ。優先順位が貴様等は低いからな」

あらら、なんて奴だ。ハッキリ言うな全く。まあ別に良いんだけど。元々リルフィンにそんな事期待してないしな。

「別にそれでも良いよ。助けられたい訳じゃないし、お前を助けたのも僕の勝手だ。それでいい」

僕は軽くそう言ってやるよ。そして問題の奴が居る上方に視線を向ける。

「それよりも問題はアイツだろ。まだ倒したいのか？」

「くっ……」

僕がテトラを見つめながらそう言うと、悔しげな声が聞こえたよ。自分では勝てないと理解したらしい。まあ実際、神なんかとまともにやり合おうなんて考えない方が良い。

アイツはそれこそ天災みたいな物だよ。ぶつからなくて良いのなら通り過ぎるのを待った方が良い。別にどこかに被害を与える訳でもないしな。

だけど既に僕まで手を出したし……どうなるか分からない。怒ってたら不味いけど……

【良い動きだったじゃないか。この俺から仲間を助けるとは大した物だ。初めにぶつかった時から思ったが、俺を神と知りまたぶつかるとはやっぱりお前にして良かったみたいだ。
まあそもそもぶつかる気も無かった訳だが、そこの身の程知らずが来るから、少しお灸を据えだけ。十分だろ】

どうやらテトラはこれ以上やり合う気はないみたいだな。良かった良かった。テトラは空中から降りてくる間、僕の腕に視線を集中させてた。きっと呪いの進捗状況でも確かめてるんだろう。
そして降りてきた所で、僕これを聞いたよ。

「じゃあ何で現れたんだよ？」
【言っただろ、丁度よりしろが会ったから状況を知りたくて顕現したんだ。お前が私の願いを叶えられるか、見極めたくてな】
「それって、最初にした事じゃないのかよ。てかダメそうだと思ったらどうなるんだ？」

もしかしてダメだと分かったら、呪いを解いて解放してくれるとか？　マジお願いします。淡い期待に胸を膨らませる僕。

【最初はただ何となく……だ。マザーもあのイレギュラーな連中もお前を気にしてたからな。だが期待外れなら、ここで終わらせる気だった。
お前を殺して金魂水を奪い返してな】
「おいおい、なんで殺すんだよ。そんな事しなくても返すぞ」

僕の期待は砕けたよ。物騒な事は良いから貰っていってくださいと言いたい。

【安心しろ、お前にはまだ期待してる。契約は続行だ。お前の願いと私の願い。それが掛かってる事を忘れるなよ】

なんか知らないが認められてるし……結局僕の命は後僅かかよ。そう思ってるとテトラの姿が段々と薄れていく。

【ああ、そうそう言い忘れたが聖獣を相手にするのは気をつけろ。お前たちではきついと思うぞ。あれはただのモンスターじゃない。使命を勝手に持った世界樹の傀儡だ】

傀儡？　そんな不吉な言葉を残してテトラの姿は消え去った。

顕現のテトラ（後書き）

第三百十五話です。

またまたごめんなさい。聖獣じゃなくテトラと戦闘しちゃいました。まあ軽い戦闘だけど、流石は神。圧倒的です。そして色々と意味深な事を言って消えていく。次にはきっと聖獣戦に入れるはずです。

てな訳で、次回は火曜日に上げます。ではでは。

雨の音が沁みる（前書き）

テトラは消えた。言いたい事を言うだけ言って、そして再び霧となり消えていった。最後に不安にさせる言葉を残してだ。何が聖獣には気をつけろだ。そんなのわかってる。

強力な敵だって事だろ。聖獣って言われる程だし油断なんかしないっての。初めから全力で打ち倒す！　その気概で臨むさ！　――ってここまで聖獣戦への意気込みで盛り上げたけど、まだまだその聖獣を拝む事は出来なさそうです。

雨の音が沁みる

黒い霧がなくなって、緊張感も解けてきたけど……なんだかとっても複雑な気分。なんでテトラの奴は最後にんな事を言ったんだ？　どっち道これは避けられない戦いなんだ。なんと言われようと、この行動は止められない。

「ねぇスオウ……今のは本物のテトラなの？」

シルクちゃんに抱きついてるクリエがそんな事を聞いてくる。まあ実体じゃないけど、あれは本物。僕に呪いを掛けた張本人なのは間違い無いだろ。

信じられない気持ちも分かるけどね。このＬＲＯの住人とっては邪神と言っても神だからな。その神が目の前に現れるなんて実際思ってないだろうし。あれ？　そう言えばアイツ、完全にクリエの事スルーしてたな。

自分の力を持ってるらしいクリエをスルーとか、意図的か？　それともマジで気付いてなかった？　でも神が気付かないなんて無いだろうし……やっぱり関わりたくなかったのか？

どうせならクリエの力の事とか聞くべきだったな。自分の用件だけ済ませてさっさと消えやがって、結局ヒントも何も無いじゃないか。

「スオウ！」

「んあっああ、悪い悪い考えごとしてた。今のがテトラで間違いないと思うぞ」

「そっか……」

なんだかクリエは考えてる様子。この子供がこんな風に頭を使うなんて珍しい。こっちは何かを感じてたのかも知れないな。
そうなると、やっぱりテトラの奴が何も気付かなかったなんて訳ないだろうな。やっぱり意図的にクリエの事をアイツは無視してた……でもなんで？　何か不味い事でもあるのだろうか？
てかそもそもなんでクリエにそんな力が宿ってるのかとか、考えなくちゃいけない部分ってかなり多いよな。今まで僕達もそういう設定――で納得してたけど、クリエの願いを叶える為にはそういう適当な感じじゃダメなのかも知れない。
そう思ってると、突然床をぶち抜く様な激しい音がこの場に響いた。

「くっそ！　くそ……くそ……くそおおおおおお！！　邪神が！！　次こそは必ず倒す！！」

みんなしてその音の方を向くと、本当に悔しそうにリルフィンが床をぶち抜いてた。テトラに全く歯が立たなかった自分が情けなくて堪らないらしい。
その姿はなかなか痛々しいものがある。だけど気にするな……とも言い辛いよな。そもそも僕らはそんなの言える立場に無いし。寧ろテトラはシスカ教からしたら最大の敵だ。
その最大の敵に全く歯が立たなくて、それでも気にするな……なんて言えるわけ無い。プライドとか、使命とか、そんないろんな胸の中の物が安易な言葉をかけると砕けたり、逆上したりするかも知れない。

「あれがテトラ……アンタ本当に神に会ってたのね」
「今まで信じてなかったのかよ」

ショックなんですけど。

「信じようとしてたわよ。その呪いは本物だし、アンタなら神と出会ってもおかしくないかな～って思ってた。だけど今確信したってだけよ。あれがこの世界の神の一人なんだって。
ねえ、テトラが言ってた願いって何？　金魂水を使わせる事自体が願いじゃないわよね？　その先にきっと彼の願いはあるはずよ」

金魂水を使った先……か。それはきっとシスカと関連してるとは思う。でも邪神と女神だしな……そこがネックだ。そもそもどんな場面で金魂水が必要になるかすら僕達は分かってないんだ。
まあ今は、このクリエとのイベントを進めていけばそんな場面があるんじゃ無かろうか……と期待してる訳だけど。
実際どっかで反応とかしてくれないと、見逃す可能性とかあるよね。どうせなら過去の使用方とか分かれば、使う場面も分かると思うんだけど……

「金魂水の使い方か……確かに調べる必要はありそうだね」
「その後に何が起こるかも知りたいですね。それこそ彼が望んでる物に繋がる筈です。個人的には今の彼が、邪神って言うのはちょっと信じれなかったです。
確かに不気味だし、ちょっと怖かったけど……彼は別に攻撃的でも無かったですし、もしかしたらとっても素敵な願い事があるのかも」

そんな風にシルクちゃんがニコリと笑って言った。まあ僕もただの悪い悪党とはアイツの事思えない。邪神だし悪党の格が全然違うんだろうけど、アイツから邪悪を感じる事が僕にはないんだよな。
それに僕達はテトラよりもまがまがしい邪悪を知ってる。それこそ邪悪の塊とも言える存在。ガイエンの中から現れたらしいあの黒い存在。アギトが対峙したアイツこそ邪神クラスに邪悪を表してた

筈だ。
だからかな、テトラの邪悪は薄いのだ。無理してる風にも見えるかも。だからこそ神壇の姿が意味深に思えると言うか……世界樹を挟んで背中を向けあう二人の神。これって何を表してる？

「何を言っている。貴様等余所者はあの邪神の所行を知らないだけだ。アイツはそれこそ悪魔で魔王。この世界を幾度も終わらせようとした元凶だ。
奴が顕現した年には必ず大きな戦が起きる。世界を分かつ大きな戦が。今この時代にも奴は現れた。そうなれば世界が大きく巻き込まれる戦いが起きると言うことだ。
奴が引き起こす。そうやって幾百、幾千、幾万の命を消してきたのがアイツだ。あの性格に騙されるな。奴が邪神なのは歴史が証明しているし、それを名乗ったのもアイツだ。
魔物を生み出した存在。それがあの邪神テトラだ！」

そう言ってリルフィンは立ち上がった。そしてツカツカと出口へと向かい出す。

「おい、どこいくんだよ？」
「報告だ。邪神がここにまで現れたのを無視することは出来ない。結界が消えてた事も関係無いとは言えないが、やはりこの像を残しておくのは問題だ。それを主に進言する」
「いや、まあ重要な事だけど聖獣戦はどうするんだよ？」

そっちも重要だぞ。報告なんて通信かメールで済ませろよ。そりゃあそんなに遠くないけどさ……いって戻ってくるのを待っとく時間がもったいないだろ。
そもそも、テトラが出てきたせいで予想外に時間を使ってるんだ。聖獣を一刻も早く倒さないとこのリア・レーゼ事態が危ないんだろ。

テトラの事は至急ってわけじゃない。アイツが動き出してる訳じゃないんだからな。それならどちらを優先するか分かるだろ。

「だがしかし、奴の事はこの国だけの問題ではない。ひいては世界中に拡散しかねない問題だ。一刻も早く何らかの策を取らないと……」

「だからって今の時点で何が出来る？　今僕達に出来るのは頭を抱えて悩む事じゃない。目の前の危機を体を張って遠ざける事だ。取りあえずテトラの出現の事だけ伝えれば十分だろう」

「聖獣の問題は貴様のせいなんだがな」

うるっせぇ！　それを言うなよな。僕だって悪いと思ってます。だけど一概に僕のせいと言ってほしくないと言うか……僕だけのせいは納得できない。

そんな不満を持ってると、なんだかドアの方からドタドタと騒がしい音が近づいてくる。そして現れたのは杖とお札を携えた本殿の僧兵と巫女の面々。

「邪神成敗じゃあああ！！」

一番真っ先に入ってきた一番年食ってそうなモブリが一番元気にそう叫ぶ。後ろの方々はどこか物怖じ気なのがみて分かる。まあ邪神の像で異常が起こったとか報告されたのだろう。だから気が気じゃないってのが見えるな。

寧ろ元気一杯な老人モブリの方が異常だね。年だから一花咲かせる為には死なんて恐れてないのかも。

だけど残念、既に異常は収まってしまってる。

「ぬぬぬ……リルフィン様、おかしな報告を受けたのですが、これはその……既に解決済みですかな？」

老人モブリが辺りを見回してそんな質問を投げかける。リルフィンは無愛想に頷いたよ。

「やや！　流石リルフィン様！　若者共が渋ってて遅れてる間に問題解決とは素晴らしいですな。かーはっははは！」

なんだかもの凄くうるさいモブリだな。体は小さいのに、声のデカサは大型スピーカー並にあるぞ。その体にどんな拡声器を積んでるんだよ。

てかやっぱり若いモブリ達は渋ってたんだ。今は問題が既に解決してると聞いてみなさんホッと胸を撫で下ろしてる。するとそんな若者共を見て爺さんモブリが一喝する。

「何を安心しとるか！　リルフィン様のお手を煩わせたことを恥ずかしいと思わんか！！　それでも歴史あるこの本殿の勤務に就いている身か貴様等は！

この場所の守りを我らはローレ様から預かっているのだ！　あの方の期待に少しでも応えようと言う気概を見せろ！！」

爺さんモブリの説教に、若いモブリ達は直立不動でそれを聞いている。やれやれ、言ってる事は正しいけど、毎回こんな大音量で怒られてたら辟易するな。同情するよ。

だけど確かにもう少しの気概は必要だとも思う。誰もが不吉の象徴にしてる邪神の像の問題ってのもあるだろうけど、この人達はエキスパートの筈。

その人達が不安を持って脅えながらここに来るのは不味いだろ。もうちょっと自信を持って欲しいよね。

「さてさて、一体何があったのでしょう？　報告では邪神の像から

黒い霧やらが出てきたとか」

おお、これは丁度良い。僕はそう思ったから、リルフィンにこう言った。

「おい、このモブリ達を伝令に行かせればそれで済む事だろ。僕達は聖獣戦へ」

僕がそういうと、明らかに「ちっ」とか舌打ちした。えええ！？どうして舌打ちされなきゃいけないんだよ。そんなにローレの所へ戻りたかったのか？　いくら主従関係と言っても、こいつかなりローレの事好きだよな。

そこら辺テトラも指摘してたし……実は何かと理由を付けてローレの所に戻る口実を探してるんじゃないか？

「仕方ない。さっさと聖獣を倒して主への報告。それが一番かもしれん」

なんだかブツブツとそう呟いて、リルフィンはモブリ達へと今の出来事を話すよ。すると明らかに若いモブリ達の顔が蒼白に……

「まさか……そんな……嘘ですよね？　あの邪神がここに顕現したなんて……」

「お……遅れて来てよかったぁ」

「貴様等なんという事を！！　もっとしっかりしろと言ったばかりじゃろが！！」

情けない声を上げる若者達に渇を入れてる爺さんモブリ。だけど明らかに彼も同様してるのがわかるよ。目はしばたいてるし微妙に歯がカチカチ鳴ってる。

それだけの恐怖の対象って事かな。テトラはさ。

「だってだって、邪神ですよ……実際相対する自信が無いです」

一人がそう言うと他の人達もうんうんと頷いてる。そんな様子を見て、爺さんモブリは胆を絡ませてこう言うよ。

「かぁぁぁぁ！　なんと情けない。邪神など恐れる事など我らにはない！　何故なら女神様が我らを守ってくれるからじゃ！　それを忘れるでない！」

爺さんモブリの熱演。素晴らしい精神論。だけど、信仰なんて精神が全てだし、それで奮い立つものなのかな～とか思ったけど、どうやらそうでもないらしい。

「だけど……女神様が自分たちを守ってくれる訳じゃ……それにグラ爺様も震えてるじゃないですか」

グラ爺様は痛いところを突かれたな。

「これは武者震いだったんじゃ！　女神様の加護を貴様等はなんと安っぽくみてる！？　今儂等がこうやって生きてられるのも元を辿れば女神様のおかげじゃぞ！」

まあＮＰＣにとってはそうなんだろうね。僕達プレイヤーからしたら君達が存在するのは作り手のおかげだ。てか、加護ってそこから続いてる事を言ってたのかよ。

それじゃあ当たり前すぎて、不慮の事故には対処出来ないじゃん。だから若いモブリ達はテトラと相対しなくて安堵してるわけね。

世界中のみんなに掛かってそうなそんな加護じゃ、邪神からは守

ってくれないもんね。命に危機が迫ると、加護が一時的に強まるとかなら、まだ安心なんだろうけど、実際そんな事はあり得ない。
僕達が生きれてる事が神様のおかげ……そしてその時が来たらちゃんと死ぬ。それをみんな知ってる。当たり前だもんな。もしも女神さまが守ってくれるのなら、そもそも死なない様に不死にでもしてくれてたら良かったんだ。
だけどそんな事はない。女神さまは命に残量を設けてる。だからこそ生きる事を楽しめて、死ぬ事を恐怖できる。世界の常識だよ。女神さまはご種族だけを贔屓してたりしないのだ。

「貴様等やることが無くなったのなら、信者を安心させにいけ。それと、この事を主に報告しろ」

足下でギャーギャー騒ぐモブリ達を見下ろして、そんな指示をだすリルフィン。おお、結局聖獣倒しを優先してくれるんだな。よかったよかった。モブリ達はリルフィンの言葉に早速動き出す。若い奴らは部屋を出て行く。どこかに集めてる参拝客の所へ行って言い訳とかをするんだろう。
どうやらやっぱり偉そうなグラ爺様がローレの所へ報告しに行く役目らしいな。まあ当然か。

「さて、それでは儂も行きます。リルフィン様もお気を付けて」

そう言ってスキップしながらこの場を後にするグラ爺様。なんて元気な年寄りだよ。てか、今し方大変な事が起こったのに何故にご機嫌なんだ？　そんなにローレの所に行きたかったのか？
そうそう立ち入れない場所だろうからテンションも上がると言うわけかな。でも偉いんだよなあの人？　そんな事を思って見送ってると、リルフィンが僕らに対して口を開く。

「聖獣退治……貴様等は気が引けてないだろうな？」
「何で僕達がそうなるんだよ？」
質問に質問で返す僕。だってそんな考えがどっから沸いた？
「邪神の奴が言ってただろ。その言葉に怖じ気付いた奴はいないかと思ってな。モブリ達が脅えてるのをみて、そうであってもおかしくないと思ったんだ。で、どうなんだ？」
リルフィンの青い瞳が僕達を見回す。ふん、見くびるなよ。
「僕達が今更あんな言葉だけでビビると思うなよ。こっちだって相当な修羅場潜ってるんだ」
「そうよ、私達を舐めないでよね。寧ろアンタが逃げ出さないでいいの？　って感じよ。逃げたかったんでしょ？」
僕の言葉に続いてセラがまたもヒドイ事を言ってる。逃げたかったって、さっきのリルフィン自身がローレに報告に行くか行かないかの事を言ってるのか？
まあ確かに、ひねくれてみればそう考えられない事もないね。流石セラ。
「私が逃げる？　ふざけた事を抜かすな。主がここにいる限り、私は命に代えてもここを守る。逃げるなんて選択肢はない。
まあしかし、自身の主を捨てるようなメイドには分からぬ事かもな」
売り言葉に買い言葉とはこの事だな。この二人、口を開く度に互いを罵り有ってないか？　今のリルフィンの言葉に明らかに目つきが鋭く成ったよセラの奴。

自分の事でも我慢できないけど、アイリの事に成るともっと我慢できない奴だからな。

「主を捨てる？　私がアイリ様を捨てたって言うの？　今日から寝込みは気を付けた方は良いわよ。ポックリと気づいたら三途の川を渡ってるかも知れないから」

おいおい、セラの奴リルフィンを暗殺でもする気かよ。確かに暗器使いだし、暗殺は得意そうだけど……でも実際ＬＲＯで暗殺は成立しそうにないよな。

まず一撃必殺ってのがそうそう成立しないもん。だから寝込みを襲っても一撃入れた後は普通のバトルに突入だ。それとも何かやりようでも有るのだろうか？

初心者をようやく脱したと勝手に思ってる僕には分からないな。

「ふん、貴様に私は殺せんよ。そもそも主の側を離れるメイドに負ける気がしない」

「側にいるだけで安心なんて安易な奴ね。本当の絆って奴はどこに居たって変わらないものよ。それに家の大将は四六時中守って上げなきゃいけない程に弱くないの。

私達は互いに信頼しあってるからこそ、こうやって別行動が出来る。アイリ様は私を信頼してスオウの助けになる事を容認してくださったの」

助け？　の所で頭を抱えちゃだめだよな。一瞬冗談か？　とも思ったけど、そんな感じではなかった。だけどセラも随分と言うように成ったね。アイリにはそれこそベッタリしてただろ。ものスゴく心配もしてたし、常に気を配ってた印象があるぞ。

けどそれもあの戦いで色々とあって変わったって事だろう。アイリは自分で歩けるように成ったし、そんなアイリに安心してセラは

アルテミナスを離れたんだ。
アイリとリルフィンは互いに眉根を寄せてにらみ合ってる。その間にはバチバチと火花を散らす互いの視線光線があるな。
たくしょうがないなこいつらは。

「いい加減にしとけよ二人とも。喧嘩なんてやってる場合じゃないだろ。セラもリルフィンも。さっさと聖獣を倒してローレの所に戻りたいんじゃんなかったのかよ」

僕のそんな仲裁の言葉に目つきそのままでこちらを見る二人。なんかさっきまでそこでぶつかり合ってた視線光線がこっちに向かって来てる気がするな。痛くないけど……その目をやめろ。

「ふん、貴様に言われるまでもない」

そう言ってリルフィンは背中を向ける。なんとかここで収まったみたいだな。セラもプイっと首を逸らしてなんとかそれを受け入れた様だ。

「なぁ、そもそもどうしてここに来たんだよ？　お札はついでだろ？」

僕は背中を向けたリルフィンにそう聞く。確かまずここに来たのは意味があったはずなんだよ。テトラのせいで色々とウヤムヤに成ったけど、そろそろ聞いて良い頃合いだよね。
するとしばらく沈黙を貫いて、ようやく口を開くリルフィン。

「それは必要な物があるからだ。主の話によると、封印の祠がリア・レーゼの外側に五つあるらしい。封印から目覚めた聖獣はその祠から出ようとしてる。

だがそれを許す訳には行かない我々は、その祠の空間に突入して聖獣を倒す。しかしそれには特殊な札が必要なんだ。鍵となる札がな」

随分説明口調な喋りだな。まあ説明してくれてるんだから当然だけど……

「で、その特殊な札は手に入ったのかよ」

その為にここに来た時さっさと奥の方に行ったんだろ？　てか、なんでそんな特殊な札をここのトップが、持ってないんだよ。自分で管理しとけっての。それなら直で行けたのに。

「いいや、交渉はしたがどうやら私でも無理らしい。それほどに重要な物と言うことだろう」

それで諦めかけてる時に、こちら側が騒がしくなってたから飛び出してきたと……少し肩を落としてるリルフィンには悪いけど、君にはガッカリだよ。

「じゃあどうするんだ？　お前が無理ならローレに頼もうぜ。それで万事解決だろ」

権力って奴を使うんだ。それとアイツが口を酸っぱくする程にこだわってる威光とかな。それがあるなら速攻でくれるだろ。

だけど何故か僕の提案に乗り気じゃないリルフィン。てかそんな事なら、さっきのグラ爺様に頼めばよかったんだよ。それでローレに指示を出して貰えただろ。

「しかし……これ以上主の手を煩わせるのも……」

「なに言ってるんだよ。それじゃあどうするって言うんだ。ローレに頼むしか無いだろ」

目的を忘れるなよな。聖獣を倒さなかったら、結局ローレの手を煩わせる事になるんだ。大量のモンスターにこのリア・レーゼを攻めさせるか、僕たちが頑張って数体の聖獣退治だけで済ませるか……どっちが良いと思ってるんだ？　僕なら後者だと思う。

「しかし……それは出来ない……」

「出来ないって……」

「ダメだ。それはダメなんだよ。何故か理由は分からないが、それはダメな様な感じがする」

おいおい、どうしたんだリルフィンの奴？　いきなり言葉の内容がおかしく成ってるぞ。マジでやる気あるのかコイツ？

「まあまあ、直接言えば済むことだよ。幸い直ぐに行けるしね」

そんなテッケンさんの言葉でグッと自分を押さえて僕たちは例の転送魔法陣へ。今回は雨も風の影響も受けないから楽だぜ。

だけどここでも幾ら頼んでもリルフィンが転送してくれない。嫌がらせか！

「こうなったら連絡だ！」

「番号知らないですよ」

「じゃあメールで！」

「アドレスも分からないですね」

鋭くシルクちゃんに突っ込まれた。僕はリルフィンを見るけど、やっぱり通信はしてくれない。てかどこからでも通信できるのなら、

わざわざ行こうとする必要なんてないよね。でも上の方ではリルフィンにローレから通信来てたぞ。
向こうからの一方通信？　でもそんな訳……そんな事を思ってる間もリルフィンは自分の思いと言葉の整合性が取れない事に混乱してる。何なんだ一体？　ちょっとおかしいぞ。

「こうなったらあの部屋の奥に僕達も行ってみよう。何か出来るかも知れないよ」
「そうですね」

テッケンさんの提案で僕達は再び本殿の中へと戻る事にした。

雨の音が沁みる（後書き）

第三百十六話です。
う～んなかなか聖獣戦まで行けませんね。まあすっ飛ばしてもいいのかも知れないけど、ここまで書いたら書くしかない心内です。聖獣戦に行くには色々と手順がね……そこら辺がリルフィンのおかしな言動なのです。
ここがゲームだから逃れない物があるというか……そいう訳で、聖獣戦までもうちょっとお待ちを。
次回は木曜日に上げます。ではでは。

戦いの前の試練（前書き）

大仰なサブタイトルだけど、今回はかなりくだらないかも知れない。まさか神聖な本殿にあんな変態が住み着いていようとは……僕達はみんなそいつに振り回されることになる。

そう稀代の変態仙人モブリにだ！！

戦いの前の試練

土砂降りの外から再び本殿の中へ。行ったりきたり、何という時間の無駄。それもこれもリルフィンが急に協力的じゃ無くなったのが原因だな。

何を意固地に成ってるのか知らないけど、リア・レーゼの事を考えろよな。本殿の廊下を進みながら、僕は横目で後ろに居るリルフィンをみる。

再びいつものローブに身を包んだリルフィンは何を考えてるのか既にわかんない。表情見えないし……僕は小さく溜息を付くよ。

「はぁ〜」

「スオウ君」

「何ですかテッケンさん？」

そっと足下に寄ってきたテッケンさん。何か秘密の話事でもあるのか、声もひっそりしてるよ。だけどこの身長差は聞きづらい。でもいくら可愛くても男を抱き抱える趣味は僕にはないからな。

だからと言って肩に乗せるのは僕にはなかなかきついんだよね。そんなスペースないし。ああ言うのはデカいエルフとかがやるものだ。まあ、クリエくらいだったら良いんだけど、テッケンさんはきついよね。てな訳で、このまま喋ることに。

「いや……リルフィン君の様子、おかしいと思わないかい？」

「おかしいですね。一体全体どうしたのやら。こんな分からず屋とは思いませんでしたよ」

僕はテッケンさんの言葉に全面的に同意だよ。だって絶対になん

かおかしいし。リルフィンだって自分の行動がどこかおかしいことに気づいてる。だけどそれを変えられない不思議。

「まるで何か別の意志が働いてるかの様な感じ……がしないかい？　リルフィン君はそれに動かされてる」

「別の意志？　なんですかそれ？　なんか物騒ですよ」

それはとっても心配なんですけど。大丈夫なのかアイツは？　いきなり襲ってきたりしないよな。僕は再び後ろのリルフィンをチラリとみるよ。別に発狂しそうって訳じゃないな。多分。

確かに別の何かもっと大きな意思が邪魔してる……とも思えなくないけど……それならそれがなんだって話になるよね。やっぱ神とかかな？　だけどテトラの奴がそれをやってるとはちょっと考えにくい。

「物騒とは違うと思うよ。それに神と言っても、この世界に依存してる神は僕たちからみたら本物じゃないよ。僕達プレイヤーにとっての神はもっとこの世界の根幹を支配する者だ」

根幹を支配する？　確かにテトラとかはこの世界では神だけど、プレイヤーの僕達からしたら神と言う設定――でしかない訳だよね。そういう存在として作られた者。このＬＲＯがゲームなんだから、実際僕達が神と呼ぶ者が居るとするならそれは――

「システム？　マザーって呼ばれてる奴ですか？」

確か最近そんな言葉を聞くようになったぞ。テトラからも聞いたし、それになによりシクラの奴が随分とこだわってた。ＬＲＯを支配するにはそのマザーを乗っ取るのが必要だとかなんとか。

まあ人に絞るのなら当夜さんとかになりそうだけど、あの人生き

てるのかさえ怪しいしな。僕は何度か夢の中の夢であってる訳だけど、どうなんだろうか？
リアルのあの人はまだ生きてるし、それなら精神もこの世界のどこかにある……筈なのかな？　そう願っときたい。

「そうだね。システムにＮＰＣは逆らえない。マザーがどういう存在なのかはまだまだ謎だけど、このＬＲＯのシステムの根幹を支えてるのは明白だ。
僕が思うにリルフィン君が行動と考えが一致しないのはシステムに関係あるんじゃないかと思うんだ」
「システムに関係あるって……どういう事ですか？」

なんだか良くわかんなくなってきたよ。ようはリルフィンが思ってることはシステムによって行動に移せなくなってたと？　無意識下で？

「ほら、良く普通のゲームではあるじゃないか。行動が決まってたりする事が。今のリルフィン君の行動もそれに該当するものじゃないかと思うんだ。
今それをしてしまうと、進行上良くないとか……その為の処置」

なるほどね。確かにそれを先にやられると困る事ってのはありそうだね。でもここはＬＲＯだよ。普通のゲームと比べられる次元にないような。

「それはスオウ君がまともなクエストやミッションをやったことがないからそう思うんだよ。意外と普通の作りをそこら辺はしてるよ。
ちゃんとした手順と言う物がＬＲＯにだって存在する」
「へぇ～そんなんですか。案外普通なんですね。でもそれじゃあ、今それがリルフィンに適用されてるって事は、僕達がしようとして

る事がクエストやミッションの類って事ですか？」

そんな報告ウインドウには現れてないけど……だけどテッケンさんはある程度確信があるのか、力強く頷くよ。

「そうだね。その可能性は非常に高いよ。だってこれはリア・レーゼにとって大問題だ。国を上げてのミッションになってたとしてもおかしくない」

「確かに大問題ですけど、その出現条件があの場所に行って、あるかどうかもわからなかった結界を壊す――なんて厳し過ぎじゃないですか？

下手したら絶対に誰にも気付かれずに終わりますよ」

だって完全にたまたまで偶然だよ。それに結界言うくらいだし、実際中途半端な攻撃じゃ壊れなかったと思うんだ。それこそイクシード＋浄神水のおかげ……おかげって言うのも今の状況じゃおかしいけどさ……取り合えずこんなの見つけさせる気ないだろって事だ。

「ははは、ＬＲＯにそういうのが沢山あるよ。特にレア中のレアなアイテムが手には入る物とか、そもそもミッションやクエストに成らずに進行してたりするしね。

バランス崩しなんかはプレイヤーが見つけると言うよりも、選ばれる感じだしね。スオウ君のセラ・シルフィングだってそうじゃないか。

見つけさせるシステムがＬＲＯはとってもずさんだよ。そこら辺をリアルに忠実なのかいい加減なのか、どっちと取るかはプレイヤー次第だけど、貴重なクエストやミッション、アイテムにはそれなりの難易度が必要と僕は思う。

でないと貴重性とかが薄らいでしまうよ。持ってるだけで、体験しただけで自慢できる様な物が必要なんだ。それこそ行き当たりバ

ッタリの冒険感があっていいじゃないか」

テッケンさんは寛大だね。まっ、でも貴重性は大事だね。運の要素がＬＲＯはとっても強いって事ね。元々僕が始めたその日にセツリを見つけたのも運だしね。

あの日に僕がこの世界に来てなかったら、今の状況はなかったのだろうか？　ずっとセツリは眠ったまま？　そう思ったけど、だけどそれは自分を特別に感じたい自己中心的な考え方だな。

きっと僕が見つけなくても他の誰かが見つけてたんだと思う。時間の問題でたまたま僕とアギトが見つけた……それがきっと真実だよね。

「僕的には行き当たりバッタリ過ぎですけどね。たまには決められたルートを通ってみたい気もしますよ。攻略サイトでもみながら……それもゲームの醍醐味じゃないですか。

何が楽しくて命を晒したまま危険に行き当たらないといけないんだって感じです」

実際気が休まらないっての。僕がそういうと、テッケンさんはなんか口を押さえてブルブル震えてるよ。えっ何？　もしかして僕笑われてる？　テッケンさんはそんな人じゃない思ってた！

「ち……違うよ。笑ってなんかないさ」

「嘘です！　だって涙目に成ってるじゃないですか！」

僕がテッケンさんに抗議の声を上げてると、既に本殿の奥の方の神壇の所まで来てた。思わず大きな声を上げてた僕を中に居る本殿勤務のモブリの人達に睨まれたよ。

まるで「静かに」って言われてるみたいでした。僕は思わず口を紡ぐよ。てかまだ参拝客を戻してないんだ。ここら辺細かいね。

普通のゲームなら、部屋から出て戻ればいつも通りになってそうだけど、ＬＲＯではそんな事ないんだね。散らばってる座布団とかリルフィンが空けた穴を一生懸命直してる。

「さて、この奥に行けば何か起こる――筈だね」

そういってテッケンさんは前にリルフィンが出てきた方をみる。何か……ってそれがミッションかクエストなんだろう。ＮＰＣでも居るのかな？　でもそれが起きなかったらどうすれば？　って感じでもある。

まあその時は、祠があるとか言ってたし、今度はそこに行くしかないよな。必要な物ないけどさ。

僕達はモブリの人達を脇目に神壇の裏側へ回るよ。すると神壇の裏に地下へ続いてそうな階段があった。いかにも怪しいな。

僕達は木の音を響かせながら下へと降りる。すると更に奥に扉が見える。なんだかお札が張られて厳重に封印されてそうな扉。

その前に一人のモブリの姿もあるな。さっきのグラ爺様よりも歳食ってそうなモブリだ。髪も眉毛も髭も真っ白で、髭と眉毛の毛は繋がりそうだぞ。絶対に視界悪いよあれ。

そもそもこんな薄暗い所であの人は何してるだろうか？　門番？　にしては頼りなさげなんだけど……知らない間にポックリと逝っちゃっててもおかしくない。

「あの……」

僕は恐る恐る声を掛けてみる。だけど何も反応が返ってこない。僕はもう一度今度は「すみません！」とちょっと大きな声で言ってみた。

だけど扉の前にいるこの仙人みたいなモブリは微動打にしないよ。耳が遠いせいで聞こえないのか？　それとも単に僕じゃダメなのか？　だけどもう一度挑戦する価値はあるはずだ。大きく空気を吸っ

て、お腹から声を出すことを意識して――

「あのおおおお！　すみませんんん！！　聞こえてますかあああああ！？」

「……んにゃ？　婆さん、儂ももうすぐそちらに行くよ。はっは、手招きせんでももうすぐじゃ」

「うあああああ！　逝っちゃだめだ！　もう少し生きなきゃ僕らが困る！」

僕は幻覚を見てそうなモブリの仙人をガクガク揺さぶるよ。危ない、この人マジでお迎えが近いぞ。せめて今の問題を解決するまでは持ってもらわないと……そう思って正気に戻す為にブンブンとやってたけど途中で待ったが掛かった。

「止めなさい。それ以上やると正気に戻る前に、魂がポックリ抜けちゃうわよ」

「うお！？　危うく殺人犯に成るところだった」

危ない危ない。ここでまで指名手配されちゃかなわないよ。僕はフラフラになってる仙人モブリを解放した。

「ぬぬ……スマン婆さん。儂はまた逝き逃したようじゃ」

そう言って弱そうな肩を落とす仙人モブリ。あれ～なんかガックリされちゃったぞ。マジで死に場所を求めてるなこのモブリ。

「あの～ちょっといいですか？」

今度は僕に変わってセラが声を掛ける。するとなんか露骨に態度が豹変するよ。

「ぬおっほ！　おお、若い娘さんやないけ。この爺を慰めにきてくれたんけ？　ならな、ならな爺……」

おい、今までの無視は何だったんだと言いたい。急にモジモジして、キモいぞこの仙人モブリ。だけど反応が返ってきた事で、何故か僕に対してしたり顔なセラ。

ちょっと悔しいけど、その気持ちは次の仙人モブリの言葉で消し飛んだ。そしてしたり顔だったセラの表情も一瞬で変わったよ。

「……おっぱい触りたいんじゃ！　――ぐぶっぼお！？」

頭から扉にめり込む爺。もう完全にギャグだな。お疲れさまっしたーーー。ちっ、どんな重要キャラかと思ったらただのスケベ爺かよ。

女に声を掛けられるのを待ってたと言うわけか。

「はぁはぁ……なんなのこの爺！？」

荒い息を吐いて扉にめり込んだ爺を指さすセラ。なんなのと言われても……僕達には応える事なんて出来ないよ。いや、そう言えば一人居たな。随分大人しくなってるから忘れてたけど、リルフィンはしっかりとここに居る。

でもアイツ、まだなんか悩んでる。自分のおかしな言動で周りが見えなくなってるのが続いてるよ。

「きゃはははは！　凄い凄いおもしろ～い！」

そんな事を言ってゲラゲラ笑ってるのはクリエだ。子供はホント脳天気だな。ここで鍵とやらを手に入れないといけないんだぞ。

まあ聖獣戦はクリエの事には全然関係ないのかも知れないけど、リア・レーゼが大変な事に成るんだからな。僕がため息一つ付いてると、テッケンさんが扉にめり込んでる仙人の元へ。

さっきからピクリとも動いてないけど……もしかして死んでるんじゃないかアレ？

「死んでる……」

やっぱり……ってえええええ！？　僕達は一斉にセラの周りから後ずさるよ。凄い勢いで。

「ちょっちょっと待ってよ！　冗談……冗談ですよねテッケンさん？」

ハブられたセラが間違いを要求してるぞ。だけどテッケンさんの答えは変わらない。

「残念だけど……」

「そんな……私のせい？」

僕達はみんなして頷いた。決定的だろ。きっと外傷も残ってるぞ。言い逃れは出来ないな。

「ごめんなさいセラちゃん。みんなら戦闘不能から回復させて上げられるけど、ＮＰＣは無理なの。ごめんね……罪を消して上げられなくて」

「しょうがないさ、誰にでも間違いはある。だが……まあ今回は少々言い逃れは出来ないな。普段から良く手が出る奴だったから、勢いで殴ったんだろうが、勢いだけで人を殺すのはやりすぎだ」

「セラ様！　自分は……自分はいつまでもセラ様の味方っす！！

逃げましょう！　二人で遠い所に！　ずっと一緒にいますから！！」

おい、どさくさに紛れて愛の告白をしてる奴が居るぞ。てかシルクちゃんも鍛冶屋も諦めムードだね。だけどセラは認めたくないのか、必死に否定してる。

「いや違う！　これは事故ですよ事故。それかただ単に寿命が来ただけです。ほら、いつでもお迎えが来そうだったし、扉にめり込んだ時に丁度……」

自分で言ってて流石に無理か～と思えて来たのか、段々と声が小さく成っていくセラ。するとそこにトコトコとクリエが歩いて行き、目の前で止まると、グッと親指を立ててこう言った。

「クリエはね、セラちゃんならいつかやると思ってた！」

もの凄いお茶目な決め顔してそう言ったクリエの頭を思わずパカーンと殴るセラ。やれやれ、鍛冶屋も言ってたけど、その手の早さが原因なんだから少しは自重しろよな。全く学んでない。

「うわあああん！　セラちゃんが殴った！」

涙を流しながら僕の足にしがみついてくるクリエ。お前も殴られる様な事を言ってたけどな。だけどそれでも感情に任せてこんな小さな子を殴るのはいただけないな。

僕は足下のクリエを抱き抱えてこう言った。

「セラ、いくら何でも殴らなくて良いだろ。子供の調子に乗った発言にいちいち感情をぶつけてるなよ。もっと大人になれ。だからこんな事に」

「あんたに言われたくない。ふん、何よみんなして私を悪者みたいに……」

あれ？　なんだかかなり凹んでる？　少し涙目で僅かに体も震えてる様な。みんなしてセラ一人を責めすぎたか。ちょっと言い過ぎたかな～と反省。

「セラ……」
「いいわよもう！」
「え？」

反省ついでに謝ろうと思ったんだけど、それよりも早く立ち直るセラは、どうやら解決策を自分で提示するようだ。
それはまず、スカートを上げて太股にある鏃を四本取り出します。
それは聖典の待機状態の姿だから勿論ここから聖典を解放させる――

「――って、ちょっと待てええええ！！　お前、聖典を取り出して何する気だよ！？」
「収束砲で証拠隠滅と問題解決をちょこっとね」
「ちょこっとね――じゃねぇよ！！　それは大問題だろ！」

何軽いノリで自分の罪を流そうとしてるんだこいつ。やっぱ恐ろしいわ。セラ怖い。

「スオウ……あんたはわかってない。考えてもみなさいよ。あの人はきっと幸せに逝けたわ。私はその望みを叶えたの。
それにここで私が犯罪者になって誰が得するのよ。それにこの砲撃で扉も壊して鍵とやらを手に入れれば一石二鳥でしょ」
「おい、罪状増えてるぞ」

僕は冷静にそう突っ込んでやった。だけどそこら辺はスルーらしい。そしてセラは遠くを見てこういって締めた。

「そもそも、大儀の為には多少の犠牲は付き物よ。私達が聖獣を倒して街を守ればきっとそのモブリも満足よ」

「もの凄い自己完結だな。てか、大儀の為に犠牲を出す事を仕方ないとか言う奴は、どんなゲームでもマンガでも小説でも、打ち倒される悪役だぞ」

ようは今まさにセラはダークサイドに落ちたと……そう言う事ね。まあセラには似合ってるかもね。そういう一面持ってたし。落ちるべくして落ちたって感じ。

「セラちゃん、戻ってきて！　いけないことしたら怒られるのは当然だよ。確かに怒られるのはイヤだけど、そうしないとオアイコにならないんだよ。

だからね……強く生きていこう！！」

「クリエ……」

おお、なんだか初めてクリエの言葉がセラに効いてる感じだ。まあこいつにしてはマトモな事を言ってたもんな。だけど実際、クリエの言い方じゃ、人殺しにつりあわないけどね。子供のイタズラ事じゃないんだぞ。

謝ったって怒られたってオアイコには決してならない罪って物がある。クリエの言葉で少しだけ迷いを見せるセラ。するとその時どこからともなくセラの胸に飛び込む小さな姿が！！

「むほっほ〜〜〜い！！　出来る女系のナイスなお胸じゃあああああ！」

「んぎっ！？」

「「「――って、えええええ！？」」」

唐突な出来事に声を上げる事が出来ないセラ。だけど僕達は思わず声を出したよ。だって……だって、そんなおかしな台詞と共にセラの胸に飛び込んだのはどうみても今し方死んだはずの仙人モブリだ。驚くなって方が無理だろ。

「むひょほほほほほほおおおおお！！」

「ちょ……止め……んっ」

もの凄い高速で腕を動かしてセラの胸を揉みしだく仙人モブリ。そのテク……まさに仙人クラス。なんか羨ましいぞ。

「やめ……やめ……止めろ変態！！！」

その瞬間展開された聖典の光線が仙人様に炸裂した。真っ黒焦げになって床に落ちる仙人モブリ。息をしてない、どうやらただの屍の様だ。

「何なの一体？」

皺が出来た服を整えてるセラが、息を荒くしてそう言う。でも確かに何なんだろう？　テッケンさんが嘘を付くはずも無いし……

「むひょほおおおおおおおおお！　こっちの子もめんこいのおおおおおお！！」

「へっ？　――きゃあああああああああ！！」

振り返るとそこにはシルクちゃんの胸に顔を埋めてる仙人……いや、犯罪者がいる！！　ぶっ殺す！！　僕は迷わず武器を抜いて、

犯罪者を成敗した。

「お……おおおお……我が生涯に一変の悔い……やっぱ有りかも……最後は巨乳を希望しとくのじゃ……」

「ふん、そんな希望が叶うか。変態が」

僕は鞘に納めながらそう呟く。すると後ろからポンっと肩に手をおかれた。振り返るとそこにはニヤニヤしてるセラの顔がある。

「ふふ、これで同罪ね」

「……しまったあああああああ！！」

僕は頭を抱えて嘆くよ。ついなんだ……シルクちゃんが変態に襲われてたから……別にセラなら良かったんだけど、シルクちゃんはダメじゃん。許せないじゃん。

「おいこら、それはどういう意味だオイコラ」

ふん、ポキポキ骨を鳴らしたって無視してやるもん。だけど僕はここで気づいたよ。そもそもこいつ既に三回も復活してる……それなら……

「むっひょほおおおお！！　今度は儂のナニで二人を気持ちよくさせてやるじょおおおおおお！！」

やっぱり！　またしても復活しやがった――って、なんか奴の一部分が体に不釣り合いな位に膨らんでる様な……

「スオウ！　あの人バナナを隠し持ってるよ！　それも超大きい奴！！」

「ああ……そうみたいだな」

真実は告げまい。てかもしかしたらその可能性だって……無いか。でもクリエには後十年位は早いから、その解釈で良いよ。変態の局部の膨らみを見た女子二人は絶叫と共に逃げ出してる。

シルクちゃんはわかるけど、セラも案外純情だな。まあ取り合えず……もう一回殺すか。

戦いの前の試練（後書き）

第三百十七話です。
なんか今回も聖獣まで行けなかったけど、本篇は大変な様です。
てか、変態のせいで文字数が嵩んだ結果こうなったと言ってもいいです。恨むならこの変態をお願いします。
えっと、取りあえずこの変態の正体は次の話で分かるでしょう。
聖獣戦にいけるかは実際微妙です。
てな訳で、次回は土曜日に上げます。ではでは。

変態の執念の果て（前書き）

僕はセラ・シルフィングを変態へと振り下ろす。これで何回この変態は死んだんだろう。だけどまたあっさりと復活して女子へと迫る。取り押さえる事も出来たけど、変態は変態の行動の果てに再び死ぬ。

もう面倒になってきた。だけどそんな中、何回も蘇るなかで、次第にこの変態の事がわかってきた。

変態の執念の果て

ズシャ――――と言う生々しい音が響き、腕に肉と骨を裂く感触が伝わる。仙人モブリはセラ・シルフィングの下でピクピクしてます。

「たく……全く何なんだこのモブリは？」
「はぁはぁ……今までのどんな敵より厄介ね」
「セラちゃん……」

ギュッとセラの腕を掴むシルクちゃんは余りの恐怖に震えてるよ。なんて可哀想。だけど涙目でプルプルしてる様はやっぱり可愛いな。

「大丈夫ですよシルク様。今度来たら容赦なく聖典で迎え打ちます」

そう言うと、さっき仙人モブリをぶっ殺した時の聖典がセラの周りにフラフラと飛んでくる。なんかまだ意識をちゃんと集中出来てないみたいだな。

追いかけられてる時なんか、無造作に聖典床に転がってたし、シルクちゃんの手前強がってるけど、セラはセラであの変態を怖がってる。

そんな事を思ってると、クリエがいち早く気づいてこう言った。

「あっ！　また来たよ！」

僕達の視線は一斉に変態へ。またピンピンしながら女子へと向かってる。なんて懲りない奴だ。だけどこの位置なら丁度立ちはだかる事が出来る。

既に女子二人は変態の姿を見るだけで震えてるから、ここは男が出るべきだよな。てか、よくこの短時間でここまでの恐怖を与えた物だ。
二人ともこの変態なんかよりもよっぽど見た目も大きさも桁違いの奴らを相手にしてきただろうに……それでもやっぱり変態は怖いんだね。

「止まれ変態！！」
「儂の生き甲斐は誰にも止められはしないのじゃ～！！」

更に加速して突っ込んでくる変態。あのヨボヨボの体のどこにあんな力が？　エロパワーとはなんとも恐ろしい物だ。またぶっ殺そうか？　とか考えてたら、いきなり横からノウイが変態モブリに飛びつく。

「やめるっす！！　これ以上セラ様に嫌らしい事をするのは自分が許さないっす！！」

そんな言葉と共に、横にゴロゴロと転がって行き壁に二人してぶつかる。すると、その時の衝撃で拘束が弱まった隙に変態はノウイの腕から逃れて、再び女子を目指して走り出した。

「ウッヒョッヒョーー！！　儂のこの溢れ出すリビドーは誰にも止められはしなーーーーーい！！」

前方に突き出した手をワシャワシャといやらしく動かす変態。既に胸を揉む態勢は整ってるとでも言いたいのか？
なんて図々しい……僕だって出来ればシルクちゃんの胸を……っていやいやいやいや、何を考えてるんだ僕は。頭を振って邪念を追い払い、僕は対策を考える。

実際さっきノウイがやったように取り押さえるのが一番だよな。どうせ殺しても復活するんだし、それにそもそもコイツに僕達用がある筈だしさ。殺す事には何の意味も無い。
そうなるとここは武器を閉まって取り押さえるのが最前か。そう思ってると、今度は僕と変態の間に、鎖！　そしてその鎖は変態を囲む様にこの通路に展開された。

「殺しても無駄なら、大人しくさせるだけだ」

そんな台詞と共に、周りに展開した鎖が一斉に変態へと巻き付いていく。そしてあっと言う間に、変態は拘束された。これは凄い。どうあがいたって逃れられないだろう。

「鍛冶屋、お前凄いな。こんなスキルも持ってたんだな」

僕がそう言うと鍛冶屋は首をフリフリする。

「これはスキルじゃない。このアイテムの機能だ。対象を一時的に拘束出来る。まあ実際はトラップアイテムなんだが、役に立ったな」

そう言って鍛冶屋は筒みたいな物を見せびらかす。空洞になってるし、この中にあの鎖が入ってたって事か。アイテムとして持ち運び易そうにされてるな。

「ほっ……これで安心出来ます」
「甘くない？　八つ裂きにしても足りないくらいよ。毒を飲ませて死ぬまで苦しみが続く様にしましょう」

おいおい、えげつなさ過ぎだろそれ。

「殺しても意味はないんだよセラ君」

テッケンさんも苦笑いを漏らしながらそんな風に言ってくれる。

「だから死ぬか死なないかの所を泳がせるんです。女の敵にはふさわしい処罰でしょ」

当たり前みたいに言ってるけど、ふさわしくはないだろ。どう考えても重いよ。死ぬか死なないかを泳がせるとか、世に言う死よりも辛い苦しみを与えようって事じゃん。

罪人の方から「もう殺してくださせぇ！」とか懇願しちゃうクラスの刑だぞ。

「ふん、そもそも罪は罪なんだから重い罰を与えればいいのよ。辺に甘やかして罪に見合った罰を……とかやってるから犯罪者がのさばるのよ。

何したって死刑にすれば万事解決。犯罪をしようなんて奴はいなくなるでしょ」

「毎日生きるのが怖くて仕方ねぇよそれじゃあ」

せめて三段階位は設けておいてほしい。万引きとかの軽犯罪なら禁固刑で、命を脅かスピード違反とかイジメとかは終身刑で、残りの重犯罪は全て死刑でいいよ。それならまあ納得してやる。

僕は法を犯す気はないから、実際この位厳しくていいよ。

「うぬぬぬ……貴様等儂の生き甲斐を……このリビドーを解放させんと言うのか！？　なんと殺生な奴らじゃ！！」

おいおい、目に掛かってる白い眉毛が濡れてるぞ。まさか泣いてるのかこの爺さん。どれだけセラ達を襲いたかったんだよ。

「年寄りには優しくせんかい！！　世間の常識じゃろが！」

するとその時、地面に転がってる変態の目の前に黄色い光が炸裂したよ。地面に窪みが出来て煙が上がってる。変態の鼻先数センチ……良いテクニック持ってるなセラの奴。

「うるさい、変態が常識を語るんじゃないわよ」

もの凄く冷たい目でセラの奴見下してる。だけどその冷たさの中に果てしなく深い怒りが見て取れるよ。声のトーンも低くしちゃって……怖い。怖すぎるよセラ。

脅すことに手慣れすぎだろコイツ。なんだか僕の腹までキュ～と成ったよ。

「……ず……ずみませんじゃ」

蒼白になった変態がようやく謝罪の言葉を口にした。だけどセラの視線が柔らかくなることはない。本当に死なないギリギリの程度まで痛めつける手段でも考えてそうだな。

「セラちゃん……もう良いんじゃないかな？」

シルクちゃんがそんな提案をする。だけどセラはその言葉を受け入れない。

「良いんですか？　シルク様はそれで……この変態反省してないですよ。ただで胸を揉まれたこと、この程度で許せますか？」

そう言われて、シルクちゃんは胸を隠すように腕で覆って俯く。

顔も若干赤く見えるな。思い出してしまったんだろう。あの時のことを。シルクちゃんはソッと後ろに身を引いた。

「まっちょくれ娘っこ！　この哀れな爺を見捨てないでくれ！」

変態モブリの哀れな声がこの場所に響く。だけど残念、変態の味方なんていないのだ。

「面白かったけど、あんな事したらダメだよ！！」

ついにはクリエにまで説教を食らう変態。

「むっふふ……お嬢ちゃんも後十年……いや八年位したら」

「――ひっ！？」

何か悪寒を感じたらしいクリエは、僕の所に駆けて戻ってきた。これはもうダメだな。救いようのない変態だ。まさかクリエにまで変態の目を向けるとは……情状酌量の余地はない。

「さて、満場一致で判決は下ったわね。半殺しにしてあげる！」

そんなセラの言葉の後に、この神聖な場所であろう本殿で断末魔の悲鳴が響きわたる。今日という日はきっとこの本殿にとっても色々と特別な日に成ったに違いない。

一通り半殺しにしおわった後、この通路には虫の息の老人が倒れてた。それはまさに陸に水揚げされた魚みたいな状態。

「ふん、今日はこの位にしといてあげるわ」

そう言ってハンカチで手を拭き拭きするセラ。なんか一仕事終えた感じになってるな。セラは自分の手を拭いたハンカチをポイッと捨てる。
汚い物を拭いたからもういらない、そんな感じだ。するとそのハンカチは地面で虫の息のモブリの頭へと落ちた。

「そんなに女に飢えてるのなら、それでも食っときなさい。アンタにはそれで十分よ」

うお、流石セラ。他人を踏みつける術を熟知してらっしゃる。本物の女さえ、変態には勿体無いとは。てかそのハンカチって変態の汚れを変態に返しただけだよな。
だけどどうやら僕達は変態をまだまだ甘く見ていたようだ。

「女の子の使用済みハンカチ……ハンカチ……ハンカチ……食べるじゃ！」

譫言の様にそう言うと、顔を器用に動かしてハンカチの先を口元まで持っていき、その端から加えてムシャムシャと口へと入れていく。

「「「……」」」

僕達全員ドン引きしてた。余りの出来事に思考回路停止中。自分のハンカチをマジで食べられたセラは回路がショートしたのか、一回ボンっと頭が弾けて、目をクルクルさせて倒れ出す。
近くに居た僕が支えたけど、これはダメだ。完全に壊れてる。「食べた……たべた……」とブツブツ言ってる。なんか久々にＬＲＯの過剰な感情表現を見た気がする。

顔が真っ赤に成るとか、湯気が出るとかは既に見慣れた訳だけど、頭が弾けるのは初めてだったからな。新鮮だったけど……そんな気持ちじゃ実際いられないよ。

やっべぇよ……あの変態……マジモンのキチガイだ。

「んぐっ！？　ぐー！　んぐー！　うううう～～～う……」

僕たちがドン引きしてる間にもムシャムシャと女の子の使用済みハンカチを食べてた変態は、いきなり変な声をだして苦しみ出す。

もしかしてこの変態……いや、まさかとは思うけど……飲み込もうとした？　はは……そんなバカな事あるわけ無いか。

僕たちは何も言わずとも、互いにそんな思いを共有してた。互いの顔を見合わせたりしてさ。だけどどうやら、変態の執念は僕達のそんな不安を軽々と突破するらしい事がわかったよ。

だって変態はしばらくピクピクした後、遂には動かなくなった。変態の死体の口からは、ハンカチが少しだけ見えてたよ。

流石変態……なんて間抜けな死に方。てか、何回死ぬんだよコイツ。そろそろもう付き合うのが億劫に成ってきたぞ。どうにかして本題に入りたい。

だけどセラはこの通り「うーうー」唸って気を失ってるし、シルクちゃんも変態の復活に備えてガクブルだし……案外こっちのダメージは大きいぞ。

戦闘能力事態は皆無っぽい変態に、ここまで追いつめられるとは……やっぱＬＲＯ。一筋縄ではいかないな。

「一回出ようか？　態勢を整え直した方が良いような気がしないかい？」

「……そうですね。それも一つの手だとは思います」

テッケンさんのそんな言葉に僕はそう返す。確かになんかもう訳

が分からなく成ってきてるし、一回態勢を整え直すのは大賛成。
けど問題は、今の状況じゃここから出るのも一苦労だと言うことだ。シルクちゃんは怯えてるし、セラは気絶してる。リルフィンはさっきから変わってないし、クリエは落ち付きなく動いてる。なかなかにカオスな状況です。
それに気付いたけど、何故かノウイまで落ち込んでるしな。一体こいつはどうしたんだ？

「ハンカチ……セラ様が手を拭いたハンカチ……自分だって……自分だって……」

なんかそんな風な事を通路の端っこでボソボソ言ってる。よくわからないけど、ノウイがこんな状態じゃミラージュコロイドが利用出来ない。
実際そんな距離がある訳じゃないけど、ミラージュコロイドなら鏡に次々にぶち込んで行けば、勝手にここから離脱出来るから便利だったのにな。

「あっ、おじいちゃんが消えたよ」

現状を把握してると、クリエのそんな声が聞こえた。消えたって事はもう直ぐまた復活してくるのか。そう思ってるとあることに気付いたよ。
この通路の先の封印された扉。その扉に無数に貼られてるお札が僅かに光ってる。いや、厳密に言うと、そのお札の文字部分が所々選ばれて光ってる様な……何か意味があるのかなアレは？
そう思ってると、れいによって変態の声がこの薄暗い通路に響く。

「むひゃひゃひゃひゃー！！　今度はその黒タイツを希望するんじゃあああああ！！」

どうやら変態はこの通路内のランダムな場所から復活出来る様だ。そしてまたしても変態的な事を言って迫ってくる。
今度は後方、出口側からだよ。よりにも寄って出口の方からって……逃がす気がないな。てかこの変態、さっきハンカチ食って死んだくせに、今度は黒タイツを所望するなんて本物だな！
わかってたけど、もう呆れすぎて何もいえない。それよりもコイツをもう一度捕らえるのがどう考えても厄介だな。僕はチラリと鍛冶屋をみるよ。

「残念だが、もう今のアイテムはないんだ。シルクがまともなら拘束魔法を期待できるんだが……」

鍛冶屋の言葉が濁る。シルクちゃんは再び自由の変態が現れた事で怯えてるから期待できないもんな。こうなったらシルクちゃんの安心の為にも僕達で取り押さえるしか……と思ったら、僕もセラを支えてるから動けないんだった。

「スオウ君はセラ君を頼むよ。変態は僕達が止めよう！」
「たく、しょうがないが偶にはセラに協力してやろう」

んん？　どうしてセラに協力なのかわからないけど、テッケンさんと鍛冶屋は二人して変態に対峙する。

「今度はさっきみたいにはいかんぞおおおお！！」

そう言って仙人変態モブリは眉毛に隠れてる瞳に熱を宿してる。奴の変態としての執念は本物――老いぼれた筈のその瞳にもこの時ばかりは光が宿る！！

「むっひゃあああああああ！！」

変な雄叫びをあげて迫りくる変態に対して、二人は生け捕る為に素手で向かってく。だけどそこは熟練な二人。武器がなくてもスキルを使って変態を取り押さえにかかる。

テッケンさんは三人に分裂して変態に迫り、鍛冶屋は身体能力を高めてるのか、いつもよりも機敏に動き出す。

これなら並外れた変態だけど体は老人のソレである奴を取り押さえられるだろう。だけど――

「ふっひゃひゃ！　儂を舐めるでないわあああああ！！」

そんな言葉と共に、変態はまるでさっきのテトラみたいに煙の様に消えた。そして三人のテッケンさんの背後に現れるじゃないか！

「なに！？」

どうやら奴はただの変態では無いらしい。だけどまだ、終わってない。テッケンさんの背後には鍛冶屋が控えてるんだ！

「貰った！！」

「ふふん、男に抱かれる趣味はないわ！！」

そう言って、仙人変態は老人らしからぬ動きを見せる。伸ばされた鍛冶屋の腕を逆に利用して、トンタンっと体を上手く使って鍛冶屋の腕を走り抜ける。

「ぬあ！？」

変態の執念おそるべし。立ちはだかる二人をかわしてこちらに迫

ってくる。目当てはセラが履いてる黒タイツか。流石にそれは犯罪だぞ。
だけど変態にそんな分別は存在しない。実際セラはどうでもいいや……とか言ってたけど、流石に変態に良いようにさせる訳にはいかないよ。

「くっ……」

武器を抜かないでどこまでやれるかわかんないけどやるしかない。集中してしっかり見れば、今の僕なら反応できる筈。目は人一倍良いと自負してるんだ。
だからしっかり見てかわされない様にする。取り合えずもたれ掛かってるセラは床に寝かせて、その前に立ちはだかるんだ。

「無駄じゃ無駄じゃあああ！！　儂のこのリビドーは誰にも止められはっつちゃぁう――ががががが！？」
「ええ！？」

リビドーが溢れ過ぎたのか、突如足がもつれた様になって床を顔面で滑る変態。こんな神聖な場所で変態行為を行い続けた事への天からの報いかもしれないな。
滑りきった変態は、丁度封印の扉の前で止まった。また死んだか？　とか思ってると、辛うじてピクピクしてるのがわかる。すると唖然としてる僕達の中で、一つの人影が通路の中央を進んで変態へと近づいていく。
それはローブにその身を包んだリルフィンだ。アイツ、いつの間に復活したんだ？　さっきまでずっと自分の言動に悩んでたのに、どこかで吹っ切れたのかな？

「おい、大丈夫なのか？」

僕は変態に近づくリルフィンに声をかける。だけど奴は無視してなんの反応も返さない。心配してやってるのになんて失礼な奴だ。

「いつつ……こりゃリルフィン！　きさま儂の楽しみを奪う気か！！」

復活した変態がリルフィンに向かって抗議の声を出してる。するとリルフィンは容赦なく仙人変態モブリを踏みつけるよ。

「むみょ！　むみょ！　貴様やめれええええ！」

ゲジゲジと踏みつけられる変態は足の下でジタバタしながらそういってる。

「なら、鍵を渡せ。五つの祠の鍵。今度は言い負かせられたりはしないぞ。この変態が」

言い負かせられてたのかリルフィンの奴。こんな変態に負けたとか屈辱だな。全くなにやってるんだか……だよ。

「ふん、貴様の命令など聞きたくもない！　儂にお願い事を出来るのはめんこい女だけじゃ！　ローレに出向いて来いと言え！」

「貴様の様な危ない変態に主を近づけさせるわけないだろ。墓守だからと言って調子に乗るなよ。貴様などこの通路でしか存在を保てない輩だろ」

墓守？　リルフィンのそんな言葉が引っかかった。墓守って、あの扉の向こうは墓地なのか？　なんか想像と違ったな。てか、やっぱりこの変態をそんな役目に就かせてるのはどう考えても過ちだろ。

誰もが気付いてそうな過ちを心で指摘してると、踏まれ続けてる変態が「ククククク」とムカつく声を漏らす。踏まれたままの癖に……

「儂は別に墓守をやるためにこうやって存在してる訳ではない。儂は永遠にめんこい娘っ子を愛でたいからこうやっって存在してるのじゃ！！」

「はぁ……」

思わずため息を漏らすリルフィン。残念だけど、今初めてリルフィンに共感するよ。残念過ぎる存在だなこいつ。なんでこんな奴が墓守になって、永遠に存在できる様になってるの？　何かの間違いだろ絶対。

「なんじゃそのため息は！　儂は偉いんじゃぞ！　凄いんじゃぞ！　自分だけのハーレムを作りたくて頑張ったんじゃ！」

「これ以上、リア・レーゼの恥を晒すな変態。いつまでもここに存在してないで、もう成仏してくれ」

そういいながら足でグリグリと踏みつけるリルフィン。ハーレムを作りたくて……こいつを見るとその執念は本物だとわかるけど……実際どのくらい偉いんだこの変態？　どこまで上り詰めたのか気になるよな。

「ふっふ、何を隠そう聖院から分離して星羅を築いたのはこの儂じゃ！！」

「「「「えっ……えええええええええええ！！！？？？」」」」

僕だけじゃなくみんな一斉にそんな声を上げたよ。だって……え？　それってなんか半端無くない？　だけど僕達の驚きはまだ終わりはしなかった。リルフィンがしょうがないという風にこんな言葉

を付け足した。

「それだけじゃない、この変態がその時の教皇だ。こいつは自分でテトラ教を二分したんだ。しかもトップがその座を捨てて」

「「「「えええええええぇぇぇぇぇ！！！！」」」」

衝撃の事実過ぎるんだけど！！　どんだけ女の子好きなんだよこの変態。普通そこまでいけるか？　てか、そんな邪な気持ちの奴の下に居た人達が可哀想だよ。

「だって～、聖院の体制じゃハーレムは無理っぽかったし、偉くなり過ぎるとしがらみが強くてイヤになったんじゃもん」

おい、何可愛らしく頬を膨らませてとんでもない事言ってんだこの変態。やっぱり全てのシスカ教の人々に土下座して謝れや。一体どんな間違いが起きたらこんな変態が教皇になれるんだよ。

「だが、星羅がここまで潰されずに存在できたのはこの変態の人徳があったから……とも不本意ながらいえる。まあしかし、今の星羅には主が居るから貴様は既に存在価値すらないがな。

主は貴様以来の召還士だ」

ちょっと自慢気だな。なんか色々と衝撃的過ぎて、会話についてけないよ。

変態の執念の果て（後書き）

第三百十八話です。
変態の衝撃の事実発覚。変態の執念とは恐ろしい！　そんな回でした。いや、実際変態にこんなに時間を割く予定はなかったんだけど、変態が無双過ぎて……でも変態の正体も大体分かったし、次回はちょっとまともになって話も進むかな？
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

これで満足！！（前書き）

変態の衝撃的な事実を実際受け入れられない僕達。だって変態は出会った時から変態なんだもん。急にそんな事を言われてもね……正直この変態の行いが許されるわけじゃない。

それにこの後にはリア・レーゼの事どうでもよさそうな態度でセラ達にしか興味示さないし。だから僕達はこの変態が興味ある女の子達を使っての鍵調達に動き出す。

これで満足！！

目の前の変態が星羅を作ったとか、しかもその時の教皇でもあるとか……なんか安易に信じられない衝撃的事実が満載でついていけないよ。

この薄暗く狭い通路内でしか存在を保てないとかもどういう事？

だし、そもそも一番その変態が教皇まで上り詰めたことに驚愕だよ。

まずそこまでの軌跡を教えろ――と言いたいけど、話長くなりそうだし、よくよく考えたらどうでも良いことだな。

重要なのはこの変態がこんな存在になってまで存在し続けてる意味じゃ無かろうか。流石に可愛い女の子目的ってのは嘘だろ。

何か重要な事があるからこんな所でその存在を保ち続けてるんだろ？　勝手な希望だけど、そうであってほしいよ。

だってそうでないと、この変態はマジでただの変態。まあ実際、女の子為にそれだけの事をしそうではあるんだけどね。

今までの行動を見る限り、マジでいつまでも可愛い女の子を愛でたいだけかも知れない。こいつの執念は本当に凄いもん。尊敬できない方向で凄い。きっとこいつが教皇だったのはサン・ジェルクにとって黒歴史として抹消されてるんじゃないだろうか。どう考えても恥だもん。

僕がそんな考えをしながら、封印された扉の前の二人を見てると、「必要ない」とか言われた変態が、自信満々にこう言うよ。

「むはは、必要ないとは大きく出たなじゃ。儂はまだまだ必要じゃぞ。お前の大事なローレにとってな。儂以来の召還士とお前は言ったが、まだまだこの偉大なる儂には及ぶべくもないのがあの子の現

状じゃ。
それは何故かわかるかお主？　あの子は儂の懇切丁寧、手取り足取りで伝授する召還士としての極意を拒否したからじゃ！！
ローレが全てを受け継いでくれれば、儂は消えるかもしれんが、今のままじゃそれは無いわ。じゃから儂を疎ましく思うのなら、早くまたローレをここにうえっひひひ」
「そもそも貴様のセクハラが酷すぎたから主は……誰が二度と貴様なんぞに頼るか！　我らはそれを誓ってる」

踏まれたままの癖に変態はエロい笑いを漏らして、それに腹を立ててるリルフィンが更に強く変態を踏みつける。
なんか床がミシミシいってるぞ。てか案外ローレの奴も苦労してたんだな。

「まあ誓うのは自由じゃが、本当にそれで良いんじゃろうか？　お前にとってもローレにとっても。そしてこの儂にとっても……儂はイヤじゃぞ。ローレともっと修行を通してキャッキャウフフとしたいんじゃ。
『お師匠様……好き』とか言わせたいんじゃ！！」

そんな発言の直後、床がベコっと砕かれてその中にめり込む変態。おいおい遂にやっちまったよ。
「ふざけるな。そんな夢、今捨てろ。貴様は主に試練を与える存在だけで良いんだ。それ以上でも以下でもありはしない。ふん、やはり主は二度とここに来ることはない。我らだけでも十分だからな」

そう言いながら足を穴から退けるリルフィン。後ろから覗き込むと、砕かれた床に無理矢理押し込まれた変態の姿が。どうやらまだ死んではない様だけど、動けなくなってるみたいだな。これは丁度良い。

「おいこら！　リルフィン貴様、ちょっと儂を引っこ抜け！　なんか動けんぞ！」
「ふん、良い様じゃないか。良く似合ってるぞ。まあだが私も鬼ではない。貴様が要求した物を出すのならそこから引っこ抜いてやらんでもない」

おお、話が変な方向に行ってるな～とか思ってたけど、リルフィンはどうやら目的を忘れてなんか無かったらしい。なるほど、これなら交渉を有利に進められそうだよな。
それに変態は穴にハマってるから安心だしな。僕はこの事実を怯えてたシルクちゃんと、気を失ってるセラにも教えてやる。セラはガクガク揺さぶったら起きてくれたよ。

「安心なんですね？」
「嘘だったら承知しないわよ」
「大丈夫だって二人とも。リルフィンが上手くやってくれたから」

疑う二人を穴にハマってる変態の元までつれていく。そしてその姿を見せると「プフッ」と二人とも笑いが漏れた。それだけ見事にハマってるからね。穴にすっぽりとジャストフィットして赤ちゃんみたいになってるよ。
全然可愛くなくて憎たらしいだけの姿だけどね。

「おーおー、めんこい娘っ子達は儂を助けてくれるじゃろ？」

そう言って短い手をブラブラさせる変態。その姿は赤ちゃんが母親に抱っこをせがむ姿その物だけど、この変態がやると殴りたくなる不思議。てか、髭と白髪で覆われた顔面年輩のこいつがやってもね……介護だよ。

そしてそんな願いを、この二人が叶えてくれるとどうして思える？　シルクちゃんは立ち上がり背を向けて、セラは冷たい目を向けてこう言うよ。

「助ける？　例えこの世界が滅びる寸前でも、アンタは私が殺してあげるわ」

凄い執念だな。ここにも凄く深く執念深い奴が居た。後少しで世界が滅びて、コイツも死ぬのがわかってても、自分の手で殺さないと気が済まないか……まあセラなら納得の行動だな。

「そんな熱い瞳で見つめられると……儂、逝ってしまいそうじゃ」

完全に汚物を見るような軽蔑的な視線なんだけど……凄い補正が変態の目にはかかってるようだ。

「逝っていいから、その前に鍵を渡せ」

割り込んでそんな言葉を上からかけるリルフィン。するとあからさまにイヤ～な顔になる変態。

「貴様の顔など求めてないわ。さっさと去れ」

完璧にリルフィンの額に怒りマークが浮かぶのが僕には見えた。だけどリルフィンは無闇やたらに手を出したりはしないらしい。そこら辺はセラよりも大人だね。

たく、それにしても男と女に対する差が激しすぎるよこの変態。神様は「平等に愛せよ」とか言ってるんじゃないのか？

これで良く教皇までいけたな。その時はまだ、この性格を隠したのかも知れないな。偉くなってハーレムを作るために。だけど実際、

偉くは成れたけどハーレムは作れなかったから聖院を見限って自分のハーレムの為に星羅を作ったとかかな？
星羅はだとしたら、その事実は未来永劫封印した方が良いよ。割とマジで信者が離れて行きそうじゃん。そんな感じで星羅を哀れんでると、ふと思いついたぞ。
これだけ男と女で態度が違うんだ、もしかして女子がちょっとお願いすれば簡単に鍵とやらをくれるんではないか？

「おいセラ、ここはお前の出番だ。お前が要求すればコロッと出すんじゃないか」
「女好きだからって事ね。確かにあり得るわね」
僕たちはこそこそと耳打ちをして、行動に移るよ。

「こら変態。リルフィンじゃなく、私に渡しなさい。その鍵とやらを」
セラの奴、もっと下手で行くかと思ったけど、全然そんな事無かったな。コイツに下手で行くのがよっぽどの屈辱なんだろう。
だからあえて上から目線。さて、幾ら大好きな女からの言葉でもこれはどうなんだろうか？

「うんふふうふふふ、お主も鍵を求めよるのかのう。うふふふうふふふふふふふ……」
何だろう、今すぐブン殴りたい衝動に狩られそうだ。腕が自然と握り拳を作っちゃうぜ。セラも実際殴りたくて仕方ないだろうけど、グッと我慢して言葉を続ける。
「どうなのよ。アンタが大好きな女の子が頼んでるのよ。そのキモ

い笑いをやめてさっさと渡しなさい」
「そうじゃな～そうじゃな～、儂はめんこいお主は大好きじゃから渡しても構わんが、ただと言う訳にはいかぬな～」

ちっ、やっぱり足下見てきやがったよあの変態。どうせ変態的要求をするんだろう。見え見えなんだよ。事によってはセラの堪忍袋の緒が切れて舜殺するかも知れない。
そうなったらまたコイツを捕獲するのは面倒過ぎる。どうにか上手く交渉しないと。

「ちょっと待て！　これは本当に重要な事なんだよ。その鍵がないと聖獣の場所まで行けないんだ。そうなったらリア・レーゼ事態がピンチなんだぞ。
それでもいいのかよ？」
「男の言葉は信用には値しないな」

僕の必死に言葉はあっさりと捨てられた。マジでブン殴りたい。

（この変態が……）

僕は拳に力を込めて、歯を噛みしめる。コイツが重要な奴じゃなかったらサンドバックにしてやるのに。

「しょうがないわね、私が肯定してあげる。今のスオウの言葉は全部本当よ。リア・レーゼを守ってた結界は無くなってる。
聖獣ももうすぐ復活するわ。それを私達は止めたいのよ。だからこんな所で変態の相手してる場合じゃないの。わかったなら鍵とやらをさっさと、後一秒で出しなさい」
「ぬぬ～実はその話はリルフィンから既に聞いてしってるぞよ」

死ね！！　マジで死ね！！　僕は心の底から思った。てか考えてみれば当然だ。最初にリルフィンが一人で行った時に事情は話してる筈だもん。それなのに女の子と会話したいが為にあんな態度をとり続けてるんだろ。

ようは女の子を同伴させとかないとここら辺は進めないって事か？　まあ女子ならなんの問題も無い……訳ないか。女子はこの変態のセクハラに耐えないといけないという試練がある。

僕達男はそもそも無視されるという試練だな。

「だがしかしじゃ、儂の要求は変わりはしないぞ。鍵ば欲しくば、儂の言うことを聞いてもらおうかの」

そう言って地面にハマった変態は嫌らしい笑みを浮かべてる。こいつはこんな状態でもマジ変態。リア・レーゼの危機を理解してるのなら、さっさと鍵を渡すものだろ。

それでもこの星羅の街の支配者だった奴か？　自分が作り上げた場所だろ？　愛着とか無いのかよ。

「ふふふ、勘違いして貰っては困るんじゃが。この街事態は古くからあるんじゃよ。世界樹もあるし丁度良いと思って儂が星羅の拠点にしただけじゃ。

やっぱりサン・ジェルクに対抗する威厳を手にするには世界樹という象徴は都合が良かったんじゃよ」

うお、変態の癖にそう言う所は頭が回るのな。まあただハーレム作りたいんじゃ！　で作った街ではないんだな。それはちょっと安心かも。

「そんな事よりもどうするんじゃ？　鍵欲しいんじゃろ？　それならばこの儂と熱い夜を――」

「どっせい！！」
「――ぶぎゃっ！！」
僕はセラが強力な攻撃をする前に、殴り飛ばしてやった。また数ミリ位は埋まったかもね。だってこいつ何要求しようとした？　熱い夜って……その……エッチィ事だろ？　幾らセラでもさせられるかそんな事！！

「なんでアンタが手を出すのよスオウ。私が殺そうと思ってたのに」
「それをさせない為に手を出したんだ。お前じゃマジでまた殺しかねないし。それだけの事をこの変態言ったしな。
だけど考えてもみろよセラ。こんな変態がまた自由になって良いのかよ？」
「う……それは……」

僕の言葉に明らかにイヤそうな顔をするセラ。シルクちゃんなんてもの凄い勢いで首を振ってるよ。「絶対ダメダメ」と言ってるみたいだ。

「しょうがないわね。許してあげる」
「そりゃあどうも。おい変態。アンタ今リア・レーゼの事をそんな事って言ったよな？　本当にアンタにとってこの街はその程度なのかよ？」

僕は顔面のパーツが中央に寄った変態に話しかける。だってそんな思い入れが無いわけないだろ。苦労とか一杯乗り越えてきたんじゃないのか？　だけど僕のそんな思いは一瞬で蹴り飛ばされたよ。
「ふん、今の儂の楽しみはめんこい若い娘っ子とイチャイチャすることじゃ！　それ以外はハッキリ言ってどうでもよい！！」

僕達の目が白くなってる事に変態は気付いてない。マジでこいつ最低だよ。リルフィンは星羅の恥に呆れる様にため息を漏らしてる。
そりゃあため息も漏らしたくなるよね。リルフィンに同情しちゃう。

「アンタまがいなりにも教皇にまでなっといて良くそんな事がいえるわね。全ての信者に土下座しなさいよ」
「イヤじゃイヤじゃ、儂はもう十分すぎる位がんばったから、後はいつか消えるその時まで儂は可愛い子とキャッキャウフフとやるんじゃい！」

これは幾ら言ってもダメだな。そう思った。コイツは過去をというか、生きてる時の事は全て捨てたんだろう。しがらみを全部とっぱってここで自由奔放に墓守をやってる。そんな感じ。
星羅を作っても結局生きてる時は自由なんてなかったんだろうか？　まあそこまで配慮する気にもなれないけど。コイツの傍若無人度は目に余るもん。同情の余地なんてない。

「きゃっきゃウフフをやれれば鍵はくれるんだな？」
「当然じゃろ」
「ちょっとスオウ！　アンタ私に……その……コイツと……その……」

セラが真っ赤になって変態を指さし声を荒げようとしてできない。どうやらその単語は口にできない様だ。やっぱり案外セラは純情だよ。てかそんな訳ないだろ。

「落ち着けよセラ。キャッキャウフフと言ってもそれは流石にダメだ。幾らお前でもそんなの可哀想過ぎる。だからもっとランク落とせよ変態。手を繋ぐ位で妥協してろ」

僕はもっとも何気にできる事を提案してやった。これならセラだって我慢できるだろうしね。だけど何故か地面に埋まった変態は死後硬直したみたいに微動打にしない感じになってる。えっ何？

「貴様はアホかあああああああああああ！？　小学生か？　貴様は小学生なのか！？　そんなんで儂が妥協できる筈無かろうもん！　そんなの絶対にイヤじゃイヤじゃ！　せめてベロチューじゃなきゃ爺はいやじゃあああ！」

「ベロッ……」

それって……大人のキスの事か？　唇を触れ合わせるだけじゃなく舌と舌をイヤらしく絡ませあうとか言うＡＶでみるようなアレだよな？

僕はチラリとセラをみる。すると既に爆発寸前みたいに、目玉がグルグル回ってる。セラはホント実はまっさらなんだな。

てか、こんな状態のセラにベロチューをお願い出来る訳ない。きっと泣くぞ。絶対にファーストキスをとっておくタイプだもん。キスも涙も女の武器にしてそうなセラだけど、実はそんな事全然無かった。

普通の一人の女の子。僕達と同じ年頃の……みたいに見える。実際はどうか知らないけど。

「ダメだダメだ。キスなんて重いじゃんか！　お前の乾ききった唇とあわせると、生気が吸われそうだろ。せめて間接キスにしろ！　瓶はここにあるから！」

僕はアイテム欄から空の瓶を取り出した。これで間接キス出来るだろ。ふっふ凄いアイディア。小学生は越えたな。

「アホカアアアアアアアアア！！！　儂のこの溢れ出すリビドーは間接キス程度じゃ満足出来ないんじゃあああ！　それに言っとくがな、さっきとあんまりレベル変わっとらんからな！！
間接キスなど、まだまだ小学生じゃ！　甘酸っぱさも良いが、儂が求めてるのは濃厚なＬＯＶＥなのじゃ！！」

何が濃厚なＬＯＶＥだよ。変態の癖に高望みしてるんじゃない。実際さっきのハンカチでいっぱいいっぱいだっての。

「ふん、同じ男とはおもえんヘタレじゃな。男とは常に女の尻を追いかける存在よ」
「なんだその全然格好良くない名言。一生使いたくねぇよ」

全ての男を変態基準にするんじゃない。そりゃあ誰しも多少変態だろうけど、貴様は度し難い変態なんだよ。それにコイツにヘタレ言われると超腹立つな。

「しょうがないから儂がそのめんこい子もやれるのを提案してやろう。キス系もそれ以上も無理となると、後儂のリビドーを満たせる行為は難しいぞ」
「もうあれじゃね？　美少女にボコられればいいんじゃね？　変態らしくて素敵だぞ」

僕はやけくそ気味にそんな事を言ってみる。だってこれならセラもノリノリで出来るだろし、良いと思うんだ。
「あんた偶には冴えたこと言えるじゃない」

ほら、セラもいい感じでノリノリだぞ。

「儂へのメリットが一つも無いじゃろうが！」

「いやいや、美少女が汗だくに成りながら自分だけを見て殴ったり蹴ったり罵ったりしてくれるんだぞ。変態には最高だろ？」

僕がそう言うと変態はセラを見て何か考えてるみたい。もしかしたらその場面を想像してるのかも知れないな。そしてポツリと「いいかも」と言い出した。

よし、このまま押せば万事解決するんじゃないか？　僕達は示し合わせたように動き出すよ。

「だけどやっぱりこの年で痛いのわちょっときついんじゃ無かろうかな～」

「そんな事無いっす！　逆に刺激になって普段の体のきしみとかがなくなるっすよ！」

ノウイの奴、それは痛みで上塗りされてるだけだよね。まあ良いけど。変態をその気にさせるのが目的だからな。

「う～んじゃがな～」

「何を迷う必要がある？　お前の大好きな女と激しい行為が出来ることに代わりはないだろう」

「おおそうじゃな！」

鍛冶屋の奴のなげっぱな言葉にも簡単に乗ってくる変態。やっぱアホだなコイツ。この調子だ。

「だけど何かが足りない気がするんじゃ？　こう儂のリビドーを刺激する何かが」

「ふっ……何かとは意外な言葉ですね。気づいてくださいよ。その何かは既にあります。セラ君の足に何が装備されてるのか……貴方はおわかりに成るでしょう？」

「脚……あれは！　黒タイツ！　パンティストッキングじゃな！
あの脚で蹴られたり踏みつけられたすると思うと胸熱じゃな！！
よっしゃあああああ！！！　バチコオオオオオイ！！！」

アホは完全に乗せられました。まあテッケンさんのストッキング発言は意外だったけど、人の趣味はそれぞれだし、深く追求はしないよ。

それにセラの細長い脚にあの黒タイツは映えるしね。ロングスカートに普段は隠れててあまり見えないのも良いのかも。

「本当に痛めつけて良いのよね？」
「おう！　その黒タイツで儂を蹴ったり踏んだりしてくださいじゃ！！　間接技を決める為に胸を密着させたりも大歓迎です！！」

もうこの変態は自分が何を言ってるのか理解出来てないと思う。セラは指の骨をポキパキ鳴らして変態の前に立つ。

「それじゃあ遠慮無く」

その後、この通路には断末魔の叫びが五分ぐらい響き続けた。だけど変態の執念はすさまじくその叫びの中でも、不気味な笑いが漏れ聞こえてた。

「はぁはぁ……もう十分かしら？　それともまだやってほしい？」

膝に手をおいて荒く息を吐いてるセラが、床にボッロボロの格好で倒れてる変態に声をかける。まだ生きてるけど、完全に虫の息状態。さてなんと言うのだろうか？

「もう勘弁して欲しいのじゃ……」

流石の変態もギブアップ宣言。これで僕達はようやく例の鍵を貰う事が出来る訳だ。良かった良かった。

「それじゃあさっさと鍵を渡しなさい。これ以上アンタにつきあってる暇はないのよ」

確かにテトラに変態にとかなり時間が掛かっちゃったよ。今まさに聖獣が祠から出ようとしてるのに不味いっての。

「うう……なんか儂、騙された様な気がするのじゃ」

今更気づいたか。だけど約束は約束だ。こっちはただ変態の望みを叶えただけだからな。十分満足だろ。

「満足は満足じゃが……なんか納得できん」

「おい、今更無しとかはダメだぞ。こっちはお前の変態行為に付き合ったんだからな。感謝して鍵渡せ」

「付き合ったのは私だけどね。鍵渡さないと、聖典で入り口壊して誰もここに来れなくするわよ」

セラはとんでもない事を平気で言うね。入り口壊すとかダメだろ。ここへの入り口の場所の上にはあの神壇があるんだぞ。

入り口壊した衝撃で、上の神壇まで崩れたらどうするんだ。責任なんて取れないよアレは。まっ、ただの脅しだし、口は噤んどくけど。

「むむむ……予想外のやり方じゃが、まあ良いか。誰もここに来れなくなるとかそんなの地獄じゃしな。儂は定期的にきてくれる巫女

さん達を楽しみにしてるんじゃ。
じゃからここは妥協して聖獣討伐の指令をお主等には与えるのじゃ。鍵はそれぞれの祠に対応したお札を渡してやる。これは特殊ミッションならぬ、特務ミッションじゃ。くれぐれも油断せぬ事じゃな」

そして僕達はようやく目的の物を手に入れる事が出来た。これでいよいよ聖獣戦へと入れる訳だ。

これで満足！！（後書き）

第三百十九話です。

今回は大変でした。実際、ここにアップしたのは書き直した奴なのです。ポメラの調子が悪くて……というか、エネループが充電してた筈なのに出来て無かったりで電源が落ちてたら書いてたデータが吹っ飛んでしまって……書き直したのがこれです。

最初に書いてた方はもっと熱く、スオウとセラの関係がちょっと改善する要素もあって良かったんですけど、消えたからこっちに落ち着きました。実際最初のままだと今回で鍵は手に入らなかったですしね。

でもなかなか良い感じ書けてたから結構ショックでした。特にスオウとセラのちょっといい感じの所が惜しくて堪らない。

まあ変態の話からどうやって？　とお思いかも知れませんが、途中で真面目に移ったんです最初書いてた方は。でもこれはこれでアリなんで良いですけど。良いシーン後半に取っておくのもいいですしね。

おかげで変態の出番がこれで終わらなくなったとも考えられるし……

てな訳で次回は水曜日に上げます。ではでは。

曇天が空を塞ぐ（前書き）

遂に手に入れた祠の鍵。それはここではお馴染みのお札でした。用も無くなったこの場所を去ろうとする僕達に、最後までしつこく声をかける変態モブリ。最後はちょっとだけマトモな事を言ったけど、それでこれまでのセクハラが帳消しにはならない。

僕達は変態に乱された気持ちを再び高めて遂に聖獣戦へと挑む。だけどそこで僕達が知ったのは……聖獣と言う強大な力を持つモンスターだ。

曇天が空を塞ぐ

僕達はようやく祠の鍵である五つのお札を手に入れる事が出来た。なんかもの凄く疲れた感じがする。まさかここでこんなに時間を取るとは思って無かったんだ。

だけどまあ、結果オーライ。鍵はなんだかんだで手に入ったし、ここからが本番だぜ。変態との戦いなんて前哨戦だ。まあ随分振り回されたけど、ここからだ。

「娘っ子達。またきておくれ！　絶対絶対また来ておくれじゃ！」

「誰が来るか！！」

どうせ変態な事しかされないもんな。セラが完全拒絶するのも当然だよ。だけど変態はめげずにシルクちゃんにも声をかけるよ。

「優しい方の娘っ子は来てくれるじゃろ？　儂と良いことしようじゃ！　きっと気持ちよくしてやるぞ」

「え？　え？　気持ちいいって……そんな……私だってそんな事されるなら無理です！」

シルクちゃんはそう言って駆け足で出口へいち早く逃げていく。全くこれ以上シルクちゃんにセクハラするなよな。シルクちゃんはやっぱり純情なんだぞ。

「変態さんダメだよ！　シルクちゃんを泣かせたらダメ！　クリエ許さないよ！」

「むひょひょ、ならお嬢ちゃんが爺の相手をしておくれ。大丈夫、儂が手取り足取りいろんな事を教えて――ばぎゃ！？」

僕は変態の後頭部をおもくそブッ叩く。おいおい、子供に何言ってるんだこの変態。お巡りさんに引き渡した方が絶対にいいよ。

「何するんじゃ！？」

「何するんじゃ！？　じゃねーよ。お前何を子供にいってんだ？許されると思うなよ」

僕は指の骨をゴキバキ鳴らしながら脅しをかける。だってクリエに手を出そうとか、変態エロ爺じゃすまないからな。

「あはははは、スオウに怒られてる～。変態さんなんだかエッチだもんね。お姉ちゃん達にはわかるけど、クリエはまだまだ子供だよ。

それにクリエはスオウが居るから変態さんはいらなんだもん」

そう言ってクリエは勢いよく僕の足に飛びついてくる。てか、クリエの中ではコイツの名前変態で固まってるな。まあ実際そうだし、全然問題は無いけどクリエの奴は変態を正しく理解してその言葉を使ってるのだろうか？

ただ僕達が「変態変態」と呼んでたから、名前としてただ変態と呼んでるのか……

「スオウスオウ！」

僕の名前を呼びながら頬をすり寄せるクリエ。こういう時はなんだかやけにクリエが愛らしく見えるな。まあ小さいし。変態は別に変態さんと呼ばせといていいか。

「ふふふ、クリエちゃんと言ったかな。女の子とはその時その時で

輝いてれば年齢なんて関係ないのじゃよ。年をとったからと言って枯れ果てては意味がないのじゃ。
女の子の輝きは年齢でも経験でも無いのじゃよ。今この時を楽しんで生きてるか……その点では君も十分魅力的じゃ！　勿論めんこい娘っ子二人も最高じゃ！」

自分の変な理論を熱く語る変態。それで一体どうなるとコイツは思ってるんだ？　実際クリエはよくわかってないみたいだよ。顎に指を一本添えて「う～んとね」としてる。僕もそうだしな。実際良くわからん。
まあ楽しんでる生きてる子が輝くのは実際当たり前だし。何となくで生きてる奴はそんなキラキラ出来ないよ。それにＬＲＯは夢を見る場所。輝きを取り戻す場所みたいなものだしな。輝きを忘れた大人がもう一度輝いたりしてるはずだよ。
社会を知らない僕とか子供は、きっと自分に何が出来たり、どこまでやれたりするのか……そしてリアルでは味わえない刺激を求めて輝くのだ。
てなわけで、ＬＲＯに居る人たちはきっとみんな輝いてると思うよ。

「う～んクリエも輝いてるのかな？」
「輝いておる！　儂の目には狂いはない！！」

力強くそう言い切った変態はクリエに向かって親指を立てる。そんな変態の様を見て、クリエは弾ける様な笑顔と共に嬉しそうにこう言うよ。

「うん！！」

なんか良い話っぽく締めようとしてると感じるのは僕だけか？

変態の癖に……

「ちょっとさっさと行くわよ。こんな変態と同じ空気なんて一秒でも長く吸いたくないわ」

セラがそう言ってメイド服のスカートを翻して階段を上がってく。するとそんなセラの声に反応してクリエがセラの後を嬉しそうに追っていくよ。

「セラちゃんセラちゃん、クリエ輝いてるって！！」

「はいはい良かったわね」

階段を上がってるセラに後ろから特攻をかましたクリエ。だけどそれを別段気にした風もなく、流しながら上がってくセラ。

相変わらず感情の差が激しいな。クリエは一人で盛り上がってるのわかってない。まあクリエはあの態度がツンデレだと思ってるから全然気にしてないのだ。

さて僕も行くかな。そう思って歩き出すと、後ろから変態の声が。

「のう若人よ。あの小さな子をよろしく頼むのじゃ。あの子はきっと大変じゃろうて……」

「アンタ……クリエの境遇わかってるのか？」

初対面の筈だろ。クリエはサン・ジェルクから出たこと無い筈だ。それこそ僕達と出会うまではさ。だからこの変態がクリエの事情を知ってるはずがない……筈なんだけど。

「お主儂を誰だと思っておるのじゃ。あの子の事は儂も勿論聞いとるよ。寧ろあの子が発見されて一番最初に連れてこられたのがここじゃしな。

まああの子は覚えてないじゃろうが……そのとき、儂はあの子に宿る力を感じたよ。どうやらあの時懸念してた事が、起こりだしてる様じゃな。
サン・ジェルク側では無いお主等があの子をここに連れてきてそう思った。きっとあの元老院共は昔から何一つかわっとらんのじゃろうな。
やれやれ、警告はしておいたんじゃがな」

おいおい、なんか変態が深刻そうな話を降ってきたぞ。女の子達も上に行ったから、興奮できる物がなくなって思考が落ち着いたのかも知れないな。
てか、そう言えばコイツずっと昔からこの場所にいるんだよな。しかも昔の教皇な訳だし、確かに真っ先に頼るには値する――のかな？

「アンタはクリエが神の力を宿してるって知って、奴らになんてアドバイスしたんだよ。警告って？」
「それはほれ、大切に育てないと大変な事になるぞよ――とな」

アバウトだな。てか、それはアドバイスとは言えないぞ。そんなの誰もがわかってる筈だったろ。きっとそんな言葉誰も求めてなかったと思う。

「アンタにちょっとでも期待した僕がバカだった。結局アンタにもクリエの存在はわかんないのか？　どうして神の力をあんな子がその身に宿してるのか？　しかもその力が二人の神の力である事とかさ」

重要なのはそこだろ。大切に育てろとかじゃなくて、原因とかだよ。昔の奴の知恵を貸して欲しいんだ。何か機密めいた物は持って

ないのかよ。

「二人の神の力……まあ確かにそれはなかなかに難しく謎な問題じゃな。あの子には親もいないし、発見された日以前の記憶もないようじゃしな。

もしかしたら本物の神の化身がモブリの姿を借りて降りてきてるかもしれんぞ」

「そうだとしたら、二人の神の力を持ってるのはおかしいだろ」

どっちかの神だとしたら、持ってる力はそのどっちか一方の力の筈だろ。

「それならばこの世界は実際、シスカ神とテトラ神の両方の力が織り合わさって出来てるから、あの子は実は世界の化身という見方も出来るかもしれんな」

「アンタ……真面目に考えてるのか？」

なんかさっきから冗談にしか聞こえないんだけど。そもそも神とかいう言葉を頻繁に出してる辺りが既に冗談っぽい訳だけど……そこは実際しょうがない。

けど変態の奴はなんか面白がって言ってるもん。実際コイツの本気具合が僕にはわからない。

「いや～実際儂にもあの子の事はわからんわ！　それにほれ、あの子の事は今を生きてるお主達に任せると決めておるんでな。真面目になど考えてはおらん。

ただ大事に育てろと言ったのは、あの子も将来が楽しみじゃからじゃ！」

「この変態が……」

なんかすっげぇ時間を無駄にした感じがする。結局真面目になんか最初から話してなかったのかよ。

「かっははは、いつまでもこの世を去った者に頼ってどうするのじゃ。世界とは続く限り受け継がれて行く物じゃ。だから今を救うのは今を生きる物でなくてはならん。

そうせんと、お主達は胸を張って次の世代に世界を引き渡せぬじゃろ？　大丈夫じゃよ。お主等があの子を大切に思い。ちゃんと見て聞いて、起こる出来事を乗り越えていければ、その意味はきっといずれ知れる筈じゃ。

だから倒れるで無いぞ少年。お主の輝きは他の物とは少し違うように見えるでな」

最後の言葉は良くわかんなかったけど、なんだか多少だけど背中を押される言葉だった。いつものノリで喋ってた癖に、言葉は今まで一番マトモだったよ。

僕たちは知らず知らずにこの世界の今を託されてる訳ね。このＬＲＯという世界に居る誰もがみんな。それはきっとリアルも同じ。

出口の方からクリエが僕がついてきてない事に気づいて戻ってくる。階段をテトテトと降りきる所で足を引っかけて転ぶ。僕はそんなクリエを見て笑いを堪えながら近づくよ。

「大丈夫か？」

「むむー！　スオウのせいなんだから！　抱っこ！！」

クリエは僕に向かって両手を伸ばす。僕は「はいはい」と良いながらクリエを抱えた。そして仙人変態モブリへと向き直ってこう言った。

「倒れたりしないさ。だからここで見てろ。受け継がれてきたこの

世界で、今度は僕たちが何を成せるのか」
「どう言うこと？」
クリエが僕の腕の中でそんな事を聞いてくる。どういう事なのか自分にもわからん。だけど、今はあの変態にこう言いたくなったんだ。
「そうじゃな、まずは聖獣をお主等が倒せるかが問題じゃな」
なんか冗談めかしてそう言われた。なんかやたらコイツもテトラも聖獣を持ち上げるよな。そんなに強敵なのか？
「大丈夫だよ！　スオウ達ならチャチャっとやっつけれるもん！！」
抱えられてるクリエが両手を振り回して息まいてる。おいおい戦わない奴が言ってくれるな。まあ弱気に成ってられないか……
「その通り、そんなもんチャチャッと倒して見せるさ」
僕もついにはそう宣言して、この場所から出る。するとみんなが呆れた様な顔して待ってたよ。
「アンタ良くもあんな事言えたわね。聖獣がどれだけ強いかもわかってないのに、全く……」
「本当にいつも自信だけはある奴だな。根拠はないが」
「ははは、だけど弱気よりは良いさ。何だって自信は大切だ」
「でもっすねテッケンさん、自信と調子に乗る事は違うっすよ。スオウ君はもっと自分の命がやばいって事を自覚するべきっす」
「大丈夫ですよノウイ君。スオウ君は絶対に私とピクが死なせません！！　それはこのパーティーのヒーラーである私の使命です！！」

セラも鍛冶屋もテッケンさんもノウイもシルクちゃんも、みんなそれぞれの形で心配はしてくれてるんだよね。

「クリエもスオウの事を心配してるからね。えへへ～」

「抜かせ、お前に心配されるほど落ちぶれちゃ無いっての」

僕は抱えてるクリエの頭を軽くコツンとしてやるよ。でも叩かれたのにクリエの奴はまだ笑ってる。やけに嬉しそうにさ。

「不気味な奴だな全く」

「だってクリエは嬉しいもん。こんなスオウと一緒に居れる事、みんなと一緒に居れること、いっぱいいっぱい楽しいから嬉しい！楽しくてお腹が一杯だよ。きっと大丈夫って思える。みんなが居ればきっと大丈夫だよ！！」

クリエの言葉がこの場に響く。僕たちはそれぞれの顔を見回した。みんななんかクリエの言葉を微笑ましく受け取ってるよ。

実際、確かにこのメンバーなら何だって出来る気はするよ。後アギトが居たら完璧だったな。みんな頼りになる。何百万人と居るプレイヤーの中で、このメンバーに出会えて集まってる、その事が僕の一番の幸運なのかも知れない。そりゃあ強い人達はまだまだ幾らだって居るんだろうけど、僕はこのメンバーで良かったと、そう思えるよ。

なんだかメンバー全員で変な沈黙が訪れてる。すると部外者って言うのも失礼だけど、一番付き合い短く仲間とも言えるのか微妙なリルフィンが割ってはいる。

「何やってる貴様等、ここからが本番だぞ。気を緩めてる暇など無い。それは聖獣を打ち倒した後にしろ」

そう言ってリルフィンはローブを翻して表側へ。神壇を回り、この部屋の出口の方へと向かう。僕達も気を引き締めてその後を追うよ。神壇の前へ出るとき、僕はそこに奉られてるテトラの像を流し見る。

この像へと顕現したテトラ。実はまだこれを通して見てたりするんじゃ無かろうか？　そう思って僕は口だけ動かしてこう言った。

『最後まで期待して見てろよテトラ』

僕達は進む、目指すべき戦場へ向かって、自分達の可能性を信じて。

【封印の祠二】

足の甲まで浸かる薄い緑の水で辺り一面を覆われた空間。空は丸く下の水と同じ色で染まってる。そんな中に聖獣と呼ばれてるそのモンスターは居る。

それは石膏の様な体をした人型のモンスターだ。女性の体に鎧と盾を装備し、顔には額から刺が一本飛び出した仮面を被ってる。

だけど一番の特徴はそこじゃない。一番の特徴はその髪だ。そのモンスターの体で一番動くのがその髪……さっきから蛇みたいにウジャウジャと蠢いてる。――というか、明らかに奴の髪は蛇だった。

そしてその蛇が信じられない位に強力な攻撃をかましてくる。

蛇の瞳が光り放たれる閃光。視界を極端に奪われつつも僕達はこの攻撃を絶対にかわさないといけない……出ないと……

「ぐっ……」

避け損ねた。体が急に重くなって一歩も動けない――というか、もう一歩も踏み出せない状態だ。僕はバランスを崩してその場に倒れる。

緑の水が勢い良く弾けた。動かない足を見ると、聖獣と同じ色になってカチンコチンだ。つまりは石膏の様にされてる。

あの蛇の攻撃は放った光に触れた全てを石化させる。そんな蛇が髪の毛の様に蠢いてそれぞれからそんな攻撃をしてくるんだ。

僕達は近づくことさえ出来ずに、既にテッケンさんと鍛冶屋をやられてる。

部分石化だから僕はまだ戦闘不能と見なされてないけど、全身を覆う完全石化は戦闘不能と同じ。ヒーラーに回復して貰うしか手だてはない。

それか自身で戦闘不能を認めて、戦線を離脱するか――その場合はこういう特殊な戦場の場合は外に弾かれる。この戦闘が決着するまでは中に戻る事は出来ない。

だからこそ、テッケンさんも鍛冶屋もまだ石化した状態のままここに居るけど……実際、回復を行う暇なんて無い。

「スオウ君！！」

パシャパシャと水を弾いてシルクちゃんがこちらに向かってくる。そして素早くピクを呼んでストック魔法を発動仕掛けたときに再び閃光が僕達の視界を奪う。

バシャン！！　と何かが水に落ちる様な音が響いて、飛沫が顔に掛かる。目を開くとそこには石化したピクの姿があった。

「はっ！　シルクちゃ――」

視線をそちらに向けたとき、その姿もグラリとバランスを崩して

水へと倒れる。さっきよりも大量の水しぶきが僕へと掛かる。
だけど僕は瞬きすらしなかった。水が目に入ってもその姿から目を離す事が出来ない。

「な……んだよこれ……なんだよこれ……なんだよこれ！！」

僕は歯を喰い締めてセラ・シルフィグに力を込める。セラ・シルフィングは僕の意志を理解してその刀身に青い雷撃を放ち出す。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

僕は水に腰をつけたまま片方のセラ・シルフィングを振り抜いた。水面を青い雷撃が走る。そして聖獣へと炸裂した。白い煙が上がり聖獣の姿が見えなくなる。
だけど直ぐにその攻撃が無駄だとわかる。いや、僕はわかってた。だけど一矢報いる事をしない訳にはいかないじゃないか！

「くそったれ……」

聖獣はその手に持った盾で僕の雷撃を防いでる。そして次の瞬間、僕の放った筈の攻撃がその盾から放たれるんだ。

「ぐあああああああああ！！」

体中がビリビリする。石化の攻撃と攻撃を吸収して返す盾……こんなの……僕は水面に視界の半分を浸してそんな弱気に捕らわれようとしてる。
すると聖獣が盾を横に退けてこちらを見据えてるのが分かる。これは次の一撃で僕も石化されちゃうな。動く事も出来ないし……実際石化の場合は自分自身どうなるんだろう？

今までは斬られたり貫かれたりして体にダメージが残っていったけど、実際石化ってピンとこない。別に痛い訳じゃないしな。
ショック死するって事は無さそうな……って何を僕はもう諦めモードなんだよ。ついさっきまでの威勢はどこにいったんだ。
まだ僕はやられてない。なら、可能性がゼロって訳じゃ無い！！
閃光が視界を奪う。だけど僕は関係無しに、反対側で帯電してた雷撃を放った。だけどどうやら視界が奪われてたせいで振り抜きがおかしかったのか、直ぐ目の前で水柱があがってしまった。
だけどどうやらおかげで光は僕まで届かなかったらしい。怪我の功名と行う奴か……何とか命は繋げれた。だけどピンチは変わらない。水柱の向こうの聖獣は一ミリもステータス減ってないしな。

「ん？」

そう思ってると、こちらに向いてる蛇の一体がボロっと頭から崩れて落ちた。どういう事だ？　僕何かやったっけ？　そう思ってると、他の蛇どもがこちらを向くのが見えた。ヤバい、怒ってらっしゃるぞ。僕は逃げようとするけど、足も動かないし、水も邪魔くさい。
無数の瞳が光を集めてる。二度も偶然は続かない。そして視界を奪う光が弾ける。

「ぬあ！？」

目を閉じて次ぎ開けたら、何故か空中に居る僕。一体何がどうしたって言うんだ？　ピンチに陥って僕の中に眠ってた潜在的な能力が目覚めたとでも言うのか？

「何呆けてるっすか！？　しっかりしてくださいっすスオウ君！！」
「ノウイか……何だ……」

「何故にガックリ！？　助けたんすよこっちは！」

はは、悪い悪い。ついね。自分の隠された飛行能力が遂に目覚めたと思ったから、なんか普通にノウイに助けられてた事に拍子抜けしただけだよ。

「――とっ」

下で再び光る聖獣を確認して、ミラージュコロイドで一瞬に」して今度は地面へ。これは凄いな。流石避けるだけは一級品だぜ。

「凄いなノウイは。助かったよ」

「いやいや何、自分にはこれしか出来ないっすからね。既にミラージュコロイドは展開してるから、自分が守って――」

その瞬間どこから来たか分からない光がノウイを襲った。石化したノウイは、地面に倒れる。一体どうして？　そう思ってて僕は気付いた。まさか……ミラージュコロイドの鏡が聖獣の光を反射して？　なんて事だよ。

最大の武器で墓穴を掘ったなノウイ。てかどんどん味方がやられていく。あと残ってるのはセラとリルフィンだけだ。

二人とも僕より善戦してるけど、やっぱりあの盾に全てを防がれてる。

「ああもう！！」

鬱陶しくなったセラは大量の聖典を投入して、物量で押し切ろうとする。全方向からの一斉射撃。これなら行けるかも知れない。あの盾にだって限界はあるし、全包囲を覆える物でもなく、盾を使ってる間は攻撃出来ない。

この間に二人は僕の元に近づいてくる。そして僕の前に立つとこう言った。

「スオウ……あんたは今の内に離脱しなさい。この状況で奴を倒すのは不可能だから、せめてアンタは生きてここから出て！！」

「セラ……」

セラの言葉に僕は衝撃を受ける。なんでお前がそんな事を……いや、そんなの決まってる。僕達はいがみ合ってても仲間だから。

「それが良いな。貴様はここで死ぬべきじゃない」

「何いってるの？　アンタもさっさと行きなさいよ！」

「私もか！？」

驚愕してるリルフィンをセラがおもいっきりひっぱたく。小気味良い音がこの空間に響いたけど、実際聖典の激しい攻撃の渦の中にその音は消えた。

「当たり前でしょ。アンタの命もこの世界に生きてる限り有限よ。それにそこの役立たずは一人じゃ出口までも行けないわよ。だからお願い、アンタが連れてってやって。

私がそのための時間を稼ぐ」

「お前……」

「……やれるのか？」

僕とリルフィンはセラの背中にそれぞれ声をかける。

「そんなのわかんないわ。だけど他に誰が居るのよ。テッケンさんもノウイ鍛冶屋もシルク様も……みんなみんなやられてる。

そのみんなの思いはね、アンタを今ここで殺させない事だと私は

思ってる。だから、この私が体を張ろうって言ってやってるの。
大丈夫……これは貸しにしといてやるわ」

その瞬間、聖典の今までの攻撃が反転した様に跳ね返って来た。上から下へ降り注いでた攻撃が下から上へ、眩しい程に炸裂する。
聖典が次々に落ちていく。だけどセラはもう片側に残してた聖典を展開させて、振り返らずにこういう。

「行きなさい……早く！！」
「済まない……」

リルフィンが僕を抱えて走り出す。遠ざかる背中を見ながら僕はずっと叫んでた。だけど結局セラは一度も振り返らずに、たった一人で聖獣へと向かっていく。
残った聖典はたったの三機……それでも彼女に迷いは見えない。僕は歯を噛みしめて叫ぶのをやめた。
生き残るんだ。命を繋げれば、次がある。情けなくて仕方ないけど……今の僕にはセラの心意気に縋るしか出来なかった。

曇天が空を塞ぐ（後書き）

第三百二十話です。
ようやくです。ようやく聖獣戦！！　だけどなんとボッロボロ。圧倒的な聖獣の力にパーティー全滅。いきなりこんな急展開で驚きですね。しかもこのクラスが後五体って、自分で書いててどうするんだ？　って感じです。
色々と消化しないといけない事も満載だし、急展開はこれだけじゃないかもですね。
とにかく次回は金曜日に上げます。ではでは。

打ちつける雨（前書き）

僕達は逃げた。セラの犠牲のおかげで、祠から脱出出来たんだ。だけどそれを素直になんて喜べない。確かに命を繋げる為にはこうするしかなかった、だけど自分の情けなさは拭えない。

でもそれでも、まだ終わった訳じゃないんだよな。セラが繋げてくれた今から先に、もう一度のチャンスはがあるんだから。落ち込むのはまだ早い。

打ちつける雨

土砂降りの雨、街の光が少し先にうっすらと見えるような場所。森と街の中間に当たる位置で、僕とリルフィンはうなだれてた。

顔を上げる気になれない。この雨がそれをさせない。この雨が今の僕達の心情を完璧に表してるみたいだから、余計に痛く冷たく感じるよ。

僕達は甘く見てたんだ。アルテミナスでの戦いを乗り切って、大抵の事は何とか出来ると思いこんでたのかも知れない。

だけどそれは違った。僕達は特別な存在なんかじゃなく、やっぱりプレイヤーの一人でしか無かったんだよ。分かってたのに、過信してた。

聖獣はそれをまざまざと思い知らせてくれたよ。最初の一撃でテッケンさんと鍛冶屋がやられた時点で勝負は決まってたのかも知れない。

いや、そもそもワンパーティーで挑んで勝てるクラスの敵じゃないのかも。

目の前に小さな足が見える。そして感じる視線。そう言えばクリエを外で待たせてたんだっけ……はは、大口を叩いてたのにこの様って……なんと言おう。

クリエを不安にさせたくないけど……もう既にそれは無理だよな。それにお喋りなコイツが黙ってるんだ。何かをきっと察してる。

そしてその何かが悪いことなんだって……僕たちの様子を見れば一目瞭然だ。すると僕の目の前にお札が無言で差し出された。

それは本殿で買った雨風避けのお札だ。僕とリルフィンがずっと濡れっぱなしなのを気にしてくれてる様だな。

僕はちらりとクリエを見た。するとそこには不安げに眉根を下げて様子を伺ってる顔が見えた。このお札のおかげで、クリエは全然

濡れてないから見やすいよ。不安そうな顔してるんだけど、なんだかこの暗さの中だと雨を受けてないクリエが暖かく見えるんだ。そう……暖かく。

（これを取ったら、もう一度始めよう。俯くのをやめて、コイツを安心させてやるんだ）

そんな思いを胸に宿す。まだ色々と痛いけど、コイツにこんな顔をさせといて良い訳ない。まだ僕は生きてるんだしな。

僕はゆっくりと手を伸ばしてそのお札を取った。そして数回深呼吸をして、胸に当てて「解放」を唱えた。弾け飛ぶ水気、それと共に何かがちょっと吹っ切れた様な感じも……強引に感じといた。

次の言葉は明るい奴でいこうと決めてるから、強引にでも吹っ切れた感じを出すんだ。僕は顔をクリエの頭に手を置いて、目一杯の笑顔で「サンキューな」と言う。

本当はもっと冗談とかで笑いでも起こしたかった所だけど、今の僕には無理して笑ってるのをそうじゃない風に見せるのが精一杯だったよ。

「スオウ……」

だけど僕がそうすると、クリエはプルプル震えて、下唇を必死に噛んで顔が次第に赤くなっていく。クリエは僕達の絶望感とかを感じ取って実はずっと怖がってたのかも知れない。

それでも僕達の為の我慢してた。だけど僕の行為でその感情のうねりが溢れだして来ちゃいそうだ。

「うん、心配させてごめんな。だけど、僕は大丈夫だからさ。僕は……」

なんかそう言う度に心がズキっと痛むな。クリエは喜んで泣きながら抱きついて来てくれてるけど、僕は実際落ち込みたい気持ちです。

まあ吹っ切るけどね。ここで落ち込んでる訳にはいかない。みんなを犠牲にして逃げ帰ったとか……そんなのは次で帳消しにすればいいんだ。

「余り気にするな。命には優先順位があるものだ。私は主の為ならこの命など差し出す。貴様の仲間も同じだということだろう」

後ろからリルフィンのそんな言葉がかけられる。だけどそれは納得できない言葉だな。

「優先順位？　そんなの有るわけ無い。僕はローレ程偉くもなければ人徳も無いしな。それなのに優先順位が高いわけ無いだろ。みんなは仲間だから……仲間をただ守ろうとしてくれただけだ。それに僕が一番リスクって奴を背負ってるしな。けど誰もが僕を真っ先に助けてくれる訳じゃない。あのみんなだから、僕を逃がしてくれたんだ」

「まあ確かに、貴様を救おうと思うのはあの数人しかいないだろうな。主と比べるべくも無かったか」

そう言ってリルフィンは雨の中、一人で街の方へ歩きだした。

「おいどこ行くんだ？」

言っとくけど戦いはこれからだぞ。一度負けただけで、これで終わりなんて訳ない。それなのにリルフィンの奴、逃げるのか？

「聖獣に勝つために必要な場所へ……だ。まさか今のままでアレに

挑み続けて勝てるとか思ってる訳はないだろう。貴様たちはせめてあの聖獣の分析でもしてろ」

そう言ってリルフィンの奴は雨の向こうに消えていく。

「ぐず……えぐ……スオウ……また行くの？」

僕の胸の中で泣いてるクリエがそんな事を聞いてくる。僕は頷いてこう言うよ。

「ああ、まだ倒せてないからな」

流石にボロ負けしたとは言えなかった。無駄に不安にさせたくもないしな。だけどクリエは十分不安にはなってるみたいだな。

「ダメだよ。今度こそスオウ死んじゃうかも知れないよ！　そんなのクリエはヤダ！！」

「だけどこのままじゃこの街も、そしてクリエの望みもどうにも出来なくなっちゃうんだ。それじゃあ困るだろ？」

「うう……」

もの凄く力一杯腕に力を込めてるクリエ。まあそもそも僕のせいだし、これで終わらせる訳にはいかんのだよ。聖獣が解放されてリア・レーゼが壊滅したら、それは大元を辿れば僕のせい……とかにされるじゃん。

だからこのまま無理だとは言えない。それにここは僕達の最後の砦なのだ。無くなって貰っちゃ困るのは本当。

「じゃあ死なないって約束して！　もうクリエは……誰にも居なくなって欲しくない……」

「クリエ……」

もしかしてずっとシスターが消えたのとか、アンダーソンが目覚めない事とか、気にしてたのかな。アンダーソンとはまた会えるとは思うけど、クリエを育ててくれたシスターとはもう会えないんだもんな。

気にしない訳ない。というか、忘れられるほど時間も経ってないしな。ずっと寝てたクリエにとっては、箱庭からの脱出なんてついさっきの事のような物だ。

今度は僕がこいつの中では居なくなる筆頭なのかな？　まあ確かに、そうなる要素は一杯持ってるけどね。だけど僕は居なくならないよ。

僕はクリエの力一杯握ってる腕を取ってこう言うよ。

「居なくならないよ。言ったろ、お前の望みを一緒に叶えてやるってさ。だから絶対に居なくなったりしない。ちゃんと戻ってきてやる。どんな所からだってな」

「ホント？」

「ああ……」

ついさっきやられかけてて何言ってるんだって自分でも思うけど、こういう約束ごとは力をくれるものだ。土壇場でも最後まで諦めないで入れるためのエネルギーにきっとなる。

だから僕はどんなにそれが難しいとわかっていても、この言葉を否定しない。

「んっ」

差し出されるのは小さな小指。それは指切りのサインだな。僕はクリエの小さな小さな指に自分の小指を絡ませれる。守れないかも

知れない約束なんて、するものじゃないのかも知れないけど、覚悟は力だしな。
僕達は二人で定番のフレーズを口にして、指を放す。なんか前にも同じような約束したような気がしないでもないな。
最初のはクリエの望みを叶える約束だったっけ？　今度のは絶対に死なない約束な。

「ほら、約束もしたし笑えクリエ。おらおら～」

僕はクリエの頬を両側から押さえてムニムニしてやる。おお、マシュマロみたいな頬してるなコイツ。

「エッヘッヘ……ってこんな風にされたら無理だよ！」

切れられた。ムニムニし過ぎたか。あまりの気持ちよさに遂ね。

「ムニムニされすぎてジンジンしちゃうよ。てか、他のみんなはどうしたの？」

クリエは頬を自分でサワサワしながら、そんな疑問をぶつけてくる。そう言えばみんな遅いな。僕達が無事に離脱出来たんだし、みんなも出てきて良さそうな物だけど。
そう思ってると、丁度一人が出てきた。

「くっそ……なんだあの化け物は……何も出来なかったぞ」
「はは、不運だったよな鍛冶屋は」

後テッケンさんも。出てきた鍛冶屋もお札を使って雨を避けて、こちらに視線を寄越す。

「全くだ。だが意外だな。お前はもう少し凹んでるかと思ったぞ」
「まあ実際はそうだけど、それを見せちゃダメだろ」

僕はそう言ってクリエをみるよ。察してくれた鍛冶屋は「なるほどな」と呟いた。てか鍛冶屋が出てきたから次々とみんな出てくると思ったんだけど……なんか次がこない。

「他のみんなはどうしてるんだ？　何で戻ってこないんだよ？」
「中ではまだセラが戦ってるからな。パーティーが全員やられれば強制退場させられるが、一人でも残ってれば、やられても選ぶ権利が俺たちにはある」

死亡を認めての退場か、仲間からの回復を信じて待つか――ね。だけど後者は既にあり得ない訳だけど……それでもみんな残ってるってどう言うことだ？

「情報の為だ。死んでもその状況は見てられる。だからそれ等を次に繋げる為にまだ戻らないんだろう」
「なるほどな。みんな真面目でありがたいよ全く。で、その理論から言うと、鍛冶屋はなんで真っ先に出てきたんだ？　不真面目だから？」

みんなは聖獣を分析してるのに、鍛冶屋が一人だけ真っ先に出てきた理由なんてそのくらいしか……僕がそんな事を言うと、鍛冶屋は遺憾の意を示した。

「お前な……俺はお前を心配して早めに出てきたんだ。誰も出てこないと心配すると思ってな。それを不真面目とは、がっかりだ」
「はは、そうだったんだ。だって鍛冶屋がそんな気を使える奴とは思わなくて。まあでもそうだね。確かに不安になってたしありがた

かったよ」
「ふん、今更礼など……どうせ俺の友は武器だけだ」
あれ？　なんか拗ねられたぞ。鍛冶屋ってこんなキャラだったっけ？　いつの間にか人間くさくなってるな。前はホント武器の事しか考えてない奴だったから、その言葉をまんま受け取れた筈だけど、今のは明らかに拗ねてるよな。
「所でリルフィンの奴はどこ行ったんだ？　アイツも一緒に脱出しただろ？」
キョロキョロと周りを見回しながらそう言う鍛冶屋。ああ～アイツね。
「なんかこれからの為の準備をするって街に戻ったよ」
「んな……あの野郎、まだこれからだってのに……実はローレに慰めに貰いに行っただけじゃないのか？」
おいおい……僕もそれは考えたけど、色々と分析してそれは却下したぞ。
「それはどうだろうな？　リルフィンってローレに頼られたいみたいだし、ノコノコ逃げ帰るとかないと思う。だから今度上へ上がるのは勝利の報告の時だろ。
勝つための準備って言ったんだから、何かあるんだろ？　秘策的な事が」
実はちょっと期待してるんだ。だってあの聖獣は……ちょっと所じゃない反則具合だったしな。でも今回は別にアンフィリティクエストの理不尽じゃなく、普通にＬＲＯをやってても出会うかも知れ

ない理不尽なんだよね？　それなら必ず攻略法はあるはず……だよな。
それこそリルフィンが勝つためにする何かが鍵かも知れない。国宝級の武器を持ってきてくれるとか、ヤバい魔法が封じられたお札を持ってきてくれるとか、色々と考えられるよね。

「秘策と言っても戦闘に直接影響するような事をＮＰＣがやるとは思えないけどな。ストーリー上で必要な時は有り得るが、それでも倒せない敵が倒せるようになる程度だ。
結局倒せるかどうかはプレイヤー次第。まあそれが当然で当たり前だけどな」

ふむ……鍛冶屋の言うことはもっともではあるな。ＮＰＣが戦闘を決めるような事はしないか……そう言えば思ったけど、リルフィンってなんかマンガに有り得る展開で来てるような。
最初は敵として出てきて、その時はムッチャ強かった。だけどなんか和解してからはその強さが薄らいだと言うか……別に強さが変わってる訳はないんだろけど、あの圧倒感がないよね。
これが世に言う、強いのは敵のうち……って奴か。

「能力が落ちたわけじゃないし、んな訳あるかよ。マンガはバランス考えてああなってるんだろ。ドンドン敵が強くならないと盛り上がらないしな」
「でもそれってゲームも同じじゃん」

ＲＰＧは普通そうだろ。最後には神や魔王や宇宙的な何かを倒すのが通例です。次元の狭間の存在とかね。

「普通のＲＰＧは進む道順とか、大体最初等辺は決まってるだろ。そこら辺でバランス取って効率よくレベルが上がる用になってるん

だよ。
だけどＬＲＯは違う。まあ殆どのネットゲームは始める場所だって選べたりするし、一人でするゲームとは敵の配置は違うだろ。
街の側にだって時々強力な敵が出たりするし……そもそもＭＭＯＲＰＧでストーリー展開とかあって無いようなもんだ。
特にＬＲＯは自分達で自分達だけの冒険というストーリーが出来上がるしな。用意された物じゃない方でスゴいボリュームになるんだ」

まあそれはわかるよ。鍛冶屋の奴は何か感慨深く言ってるけど、やっぱり僕達と出会う前にも色々と冒険やってたのかな？
てかやってないと、貴重なアイテムも材料も手には入ったりしないよな。

「まあだが、ＬＲＯは普通に用意されてるミッション系のボリュームも相当だがな。何がストーリーに繋がるかわからんし……突如倒さないといけなくなる敵が破格の強さだったり……ホント飽きさせてくれない世界だ」

なんかいつの間にか鍛冶屋がしみじみとこの世界を語って終わってるな。確かそんな事を言ってた訳じゃないと思うんだけど……確かそう、リルフィンの奴が仲間敵ポジションに着いた途端に弱くなったな～的な話だった筈だ。
そしてそれはストーリーに関係してる？　あれ？　結局してないんだっけ？

「ＬＲＯの場合はしてない。アイツも弱くはなってない。ただ戦闘には相性もあるし、それこそ圧倒的な力の差ってのはあるだろ。
それを埋めるために俺達は人数を増やしたりするんだろ。ストーリーの関係上でアイツが弱体化なんてありえん。強いて弱くなった

と感じるのは、俺達がアイツの事を知ったからじゃないか？
最初は何も知らずにぶつかった訳で、謎と威圧感がスゴかったとかな」
「なるほどね。確かにそれは有り得そう。僕達はアイツの意外な一面を知って、最初に感じた恐怖感とかが薄らいでる訳だ」
それでその恐怖感は新たな強敵に向くから、相対的にリルフィンがなんか弱くなったと思うわけね。そんな訳ないのに。てか二人きりに成ると良く喋るな鍛冶屋って。
「別に……普段は俺の他に喋る奴が居るだけだ。だから饒舌に喋る必要なんてない。それにお前達は一歩引いて見とく方が面白いしな」
そう言って鍛冶屋は珍しく笑った。何が一歩引いてだよ。十分中心に居るだろ。実は僕達の会話を冷静に分析してたのかコイツは？
なんかいつも気難しそうにしてると思ったけど、聞き耳立ててたのね。もっと中に入ってこいよな。だから時たま忘れちゃうんだ（いろんな意味で）。
「何が面白いだよ。もうちょっと仲良くしようとは思わないのか？」
「仲間や友だからと言って俺はズカズカ踏み入ったりはしない。適正距離ってのがあるんだよ。それにお前達とはかなり歩み寄ってる方だ。
俺がここまで付き合うなんて、実際早々ないしな」
ずっと武器の事だけ考えときたいんだっけ？　それもどうかと思うけど……てか僕達についてきてるのってぶっちゃけコレだろ？
セラ・シルフィング。
「そうだな。セラ・シルフィングには大いに興味をそそられる。こ

んな進化は初めてな訳だし、どうなるかを見届けるのが制作者の勤めで、鍛冶屋の未来の為に必要な事だ」
「大袈裟じゃね？」

鍛冶屋の未来って……実際シルフィングからセラ・シルフィングへ成るのって鍛冶屋関係ないし。何もやってないぞ。
だけど鍛冶屋はそんな僕の言葉を否定するよ。

「大袈裟ではない！　これまで……というか今もＬＲＯでは武器はスキルを会得するまで使い、会得したら次の武器のスキルを求めて換装する。それが普通で強く成るためには必要な事だった。
だが！　その常識を変えようとしてるのが貴様だ！　そしてその武器『セラ・シルフィング』なんだ！　この意味が分かるか！？重要なんだよ……これはＬＲＯというゲームの楽しみ方に新たな選択肢を加える程にな」

なんかもの凄く近くまで迫られて熱弁されてる。流石に近いぞオイ。目の前に鍛冶屋の顔が一杯だ。

「おお、スマン。だが、そう言うことだ。今更ついて来るなと言われても、俺はお前にだけは付きまとうぞ」
「やめろよ変な事言うの。その発言は誤解を生むぞ。それに今更ついてくるななんて僕から言うわけないしな。これでも普通に頼りにしてるんだぞ」

色々と貴重なスキルとか持ってるしな。それに武器のメンテだって大切だし、旅をするなら一人は鍛冶屋みたいなのも必要だ。
いつだってベストな状態の武器で戦えるってのは案外心強いものだよ。

視界が極端に狭まる程の豪雨のなか、二人だからこその話に気を取られてた。すると雨の音の中から、別の声が聞こえたよ。

「こっちが大変な思いしてたっての、随分と緩い会話で談笑してる奴らが居るわね」

「――おわ！？　セラ！！」

ビックリした……いきなり雨の中からヌワっと現れるなよな。そう思ってると、他のみんなも祠の周りから次々と姿を現すよ。

「全員戻ってたのか？」

「ああ、ついさっきだけどね。セラ君が石化されて強制退場だよ」

「ならさっさと出てこい」

「いや、二人が楽しそうにしてたから邪魔するのもどうかと思ったんだ。だけどセラ君は我慢できなかったみたいだね」

鍛冶屋とテッケンさんの会話で現状を把握した。つまりはしばらくニヤニヤしながらみんな聞き耳立ててたって事じゃないか。せめて最後の言葉だけでも取り消させろ。恥ずかしいから。

ああ言うのは一対一だから言えるものなんだよ。みんなの前では全員対象の言葉で言うのだ。

「スオウ」

「なんだよセラ？　言っとくけど今の会話は談笑じゃなく、これからの為にこう気持ちをだな……」

別に何もやましいことやってないのに何故かセラに言い訳をしだす僕。

「何よ、そんなに脅える事ないじゃない。別に談笑してた事なんか

私的にはどうでも良いの。ただ、ちょっとだけムカつくだけよ。
人が体張って逃がしたのに、気付かれもしないんだもの」
「お疲れ様っした！！　本当に感謝してるっす！！」
「スオウ君、自分の言葉が移ってるすよ」

おお……思わず舎弟風に喋ったら何故かノウイの口調に。

「ちょっと待つっす！　それはどういう事っすか！？」
「感謝も別にいらないわね。ただ忘れるなって事よ。言ったでしょ？　貸しにしとくって」
「はいはい貸しね。忘れないっての。でも本当に感謝はしてるんだぞ。ありがとうなセラ」
「クリエもクリエもありがとう！！」
「なんでアンタが感謝の言葉を述べるのよ？」

クリエの意味不明な言葉にしかめっ面でそう返すセラ。するとセラは元気にこう言うよ。

「だってだって、セラちゃんのおかげでスオウが戻ってきてくれたもん。だからありがとう！！」

素直でまっすぐな瞳でそう言われて、一瞬惚けた様に止まるセラ。だけど直ぐにしかめっ面を戻し横を向いて憎まれ口を叩く。

「ふ……ふん、そんなの当然でしょ。ここで死なれても困るし、まあ私は全然そんな事ないんだけど、進行上困るから仕方なくね。
別に進んで助けた訳じゃないわよ。たまたま残ってるのが悪運強いそいつしか居なかったから、私がおいしい所を持っていっただけよ」

まさかそういう裏があったとは！？　まあ恥ずかしがって思わず言ってる事なんだろうけど、マジでツンデレっぽいぞセラ。激しい雨の降る中、今の僕達はまだそれほど悲観してる状況じゃないな。みんな結構普通だし、そこが僕の救いにもなるよ。

「あの～自分は無視っすか？」

悲しいノウイは雨の中小さく手を上げて自分の存在をアピールしてた。

打ちつける雨（後書き）

第三百二十一話です。
聖獣戦後です。今回は何故か鍛冶屋との絡みが多かったですね。実際初期メンバーなのに、鍛冶屋ってなかなか絡んで無かったですからね。今回の話では意識的に出番を増やしてるのです。
アルテミナス編ではいつの間にか退場してたので……まさにうっかり忘れてたから、そんな不憫の思いをさせない為に、密かに鍛冶屋推しなのです。だから皆さんも鍛冶屋を忘れないで！！
てな訳で次回は日曜日に上げます。ではでは。

君と鏡（前書き）

僕達はみんなで聖獣を倒す方法を考える。諦める事は出来ないから、あの反則的な聖獣をどうにかして倒す方法を見つけるしかないんだ。一番の情報を持ってるのは一番長く戦ったセラ。

そしてそれを見てた人達。だけどなかなか突破口なんて見つけられない。だけど一つだけ、いけそうな案が出てきたんだ。

「さて、これからどうする？」

リルフィンが帰ってくるまで待った方が良いんだよな。僕はみんなの意見を求めるよ。

「そうね、次で勝てると思うなら今直ぐにでも飛び込んでも良いわよ」

「言っとくけどな……僕には勝算なんか一欠けらもない！！」

「そんな堂々と宣言されても……」

セラの呆れた様な声。だってだってあんなの反則だろ！！　こっちは何も出来ずに逃げたんだ。考察の暇さえ無かったっての。

まあ今度は攻撃のパターンはわかってるし、やりようはあるだろうけど……でもそれでも勝利まで持っていけるかは微妙だよな。

あのメドゥーサみたいな聖獣の攻撃。あの光に当てられたら終わりだ。ＨＰが幾ら残ってようが、全身石化は戦闘不能と同じ。

部分石化だって相当厄介……しかも攻撃を跳ね返す盾持ちだぞ。どうしろと言うんだ？

「反則、あれは反則だ」

「あれで反則なら、シクラとかの外側の奴らはどうなるのよ。反則のオンパレードじゃない」

まあ確かに。セラの言うことはごもっともだな。

「だけどアイツ等は元からＬＲＯに居ない奴らだし（サクヤは別と

して）そこら辺はしょうがないと思ってる。けど、聖獣は違うじゃん。
ゲームバランスはどうなってるんだ！？」
僕は声高々に叫ぶ。人数を増やせば勝てるって事じゃないよなアレは？　どうすれば良いんだよ。
「ゲームバランスなんて初期時にしか無いわよＬＲＯは。慣れてスキルも仲間も増えてくれれば、一人一人の力なんて数値化出来ない。それにアンタも頼ってる感情がある。
火事場のバカ力とか、ＬＲＯは思いを汲み取ってくれる時があるしね。そんな世界でバランスなんてとってられないわよ。
それにピンチは理不尽な物。それを乗り越える冒険が、真の冒険でしょ。でもだからこそ、私達はこの世界にのめり込む。
その理不尽を覆せる瞬間がこの世界にはあるからよ」
「覆す瞬間ね」
セラがなんか格好良い事言ってる。まあ確かにそんな瞬間は確かにある。セラの言葉に他のみんなもうんうん首を縦に振ってるしね。
「流石セラ様！　その通りっすよね！」
「アンタは覆した瞬間なんてないでしょ？　黙ってなさい」
「はいっす……」
全面的にセラを支持してくれてるノウイをあっさりと両断するセラ。おいおい、別にその位いいじゃん。もう少し優しくしてあげろよな。
そりゃあノウイは逃げる事と避ける事しか出来ないけど、それでかなり助けられてるよ僕達。そこら辺は認めてあげようよ。
激しく降る雨の中、数メートルもしたら見えなくなる視界。そん

な雨のカーテンの向こうに、突き放されたノウイはフラリと消えていく。
そしてそんなノウイを気にもとめずに、セラはこっちを再び見る。
「私はねスオウ……まだ全く諦めてないわよ。アンタはどうなのよ？　その命惜しくなったらのなら後は私達に任せない。
誰も責めたりはしないわよ」

なんか挑発する様な言葉だな。気遣ってるのかもしれないけど、心の内から「腰抜け」と聞こえた。凄い被害妄想だけど、セラならあり得るだろ。
これは反論せずには居られない。

「何が命が惜しくなったら……だと！？　僕はいつだって命は惜しいぞ！　だけど逃げたりはしないんだよ！」
「なんか拳を握りしめてまで言う事じゃないわね」
「スオウ格好悪い～～」

なんかセラだけじゃなくクリエにまで否定されたぞ。いやいや、命を懸ける事と、命を惜しむ事は反対の様で実は同じなんだぞ。
僕はその境地に達してるんだ。命は惜しい……それは人として当然だ。だって死にたくなんか無いしな。だけど救いたい、助けたい奴が居る。そのためにはこの命を危険に晒してでも前へ進まないといけない。
ここの味噌は危険に晒して――って所だよ。別に命を無くす事を明言されてない。このまま進めば確実にお前は死ぬ……とか言われたら、流石に自分でもどうするかわかんないんだけど、今の状況なら絶望だけが待ってる訳じゃないから、僕は自分を信じて、仲間を信じて、この命を晒して冒険出来るんだ。
死にかけたりは何度もしたけど、実際まだ僕は生きてるしね。そ

れにここまで来たら今更引けるわけもないってのが真実。
脱落所を逃してる。セツリの事も、クリエの事も、放っとける訳がないんだよ。

「クリエの為に命を使い果たすんだね。クリエは罪づくりだね！！」
「どこでそんな言葉覚えたんだお前は？　それに命を使い果たすなんて言ってねーよ。僕を殺したいのか？」

使い果たさない為に頑張ってるんだ。僕は死ぬ気はないからな。

「えへへ、クリエが可愛すぎてごめんなさい」

意味が分からない。僕の言葉に返す返答じゃないよな。それにクリエは可愛いと言うより、愛くるしいだよ。赤ちゃん並みの大きさだからな。

「おいおい、お前等は何の話をしてるんだ？　スオウの戦う理由なんてもうMって事で良いだろ。これ以上話す事があるか？」
「オイ待て鍛冶屋。Mって何だよ。話す事ありまくりだろ！」

そんな性癖で片づけられたくない！！　誰がM気質の為に命を晒して血液を飛び出させてると思ってるんだ？　んな訳ねーだろ！！

「まあ確かにスオウはMよね」

セラの奴、何故そこに便乗する？　新手の嫌がらせか。僕はキツい視線をセラに送り続けてやる。

「それで決定っすね。早く聖獣対策にいきましょうセラ様」
「ええ、Mはきっと無視してても満足出来るでしょうからね」

このＳ野郎！！　僕の視線をわかってる癖に、余裕でシカトを決め込むあたり、やっぱりＳだよセラは。僕と同じポジションだと思ってたノウイはさっさとセラに付いてるし……何でこんなに僕の戦う理由がＭだからで纏まりそうなんだ？

僕は涙を堪えて頼りになる二人をみるよ。それは勿論、テッケンさんとシルクちゃんだ。二人は僕の事をそんな性癖で命を晒してる変態なんて目で見てないはずだよ。

「あはは、セラちゃんは相変わらずだね～。そんな態度だとその内後悔しちゃうと思うんだけど……大丈夫わかってますよ。

スオウ君がそんな変態じゃないって事」

「勿論僕だってね。それにセラ君も冗談で言ってるんだよ。スオウ君はわざわざ付き合ってくれるから冗談を言うのが楽しんだよきっと」

流石はシルクちゃんにテッケンさん。貴重な僕の味方だね。だけどテッケンさんの言葉はちょっと恥ずかしいよ。別に優しさで付き合ってる訳じゃ……アイツは冗談でもこっちは本気だからな。

「シルク様もテッケンさんも、リルフィンが戻るまで、対策を練りましょう。私は同じ相手に二度も三度も負けたくないんです」

「そうだね。早く聖獣を封印しないと、実際スオウ君の命の時間が危ないもんね」

ニコニコ笑いながらそう言ってシルクちゃんはセラの方へ顔を向ける。するとセラは一瞬大げさに反応したかと思ったら、シルクちゃんに大声でこう言うよ。

「ななな何言ってるんですかシルク様！　私の言葉聞いてましたか

？　私は同じ相手に二度も負けるのがイヤなだけです」
「そ……そうだね……」
もの凄い迫力に気圧されるシルクちゃん。そんなにあの理不尽な負け方が気に入らなかったんだな。
「理不尽か、だけどあれからセラ君は一人でかなり善戦してたよ」
「え？　そうなんですか？」
そう言えば直ぐには出てこなかったもんな。その間は生き続けてたって事だ。ようはたった一人でその時間を戦い抜いていたって事か。
「私はただでは死なないわよ。アンタには出来ない事が私達には出来るのよ。一回切りの戦闘じゃないのなら、私達は次に繋げる行動が出来る。まあ、多少のリスクはあるけど、そこら辺はしょうがないわ」
そう言いながらセラはウインドウを表す。何かアイテムの確認でもしてるみたいだな。さっきの戦闘で使った分を確認してるのか？
僕は使う暇も無かったんだけど……
「――で、善戦したセラは何かを掴んだのか？　あの聖獣を倒せそうな何かを？」
「それを今から考えるんでしょ。私だけに押しつけないでくれる」
おい……言ってることおかしくないか。素直に実は何も掴めませんでしたと言えよ。てか、それじゃあどうやって善戦したんだよ？
「逃げて避けて時々攻撃、これしか出来なかったわよ！」

「……」

まあ一人でやれれば善戦じゃないかな？　恥じる事じゃないよね。精一杯セラはやったと思うよ。

「てか、それだけで終わった訳じゃないだろ。お前なりの分析を聞かせろよ」

それが重要なんだ。別に倒せるなんて誰も思ってなかったんだからな。セラの功績は一秒でも長く、あのモンスターと戦えた事。それが他のみんなへも情報をもたらした筈だ。

「そうね。私が一番が長く戦った訳だし、聖典を使って複数戦の想定もある程度は出来た。結論から言うと、あの聖獣に死角は無い。どこから攻撃しようが、あの盾が攻撃を吸収する。

攻撃にも防御にも死角がないってどういう事よ」

セラはふてくされながらそう言った。まあその気持ちはよくわかる。

「結局誰も一撃も入れれ無かったんすね。どう考えても最強クラスのモンスターっすよ。これが後五体って……どうするんすか？」

ノウイの言葉に返す言葉を誰も持ち合わせてないよ。どうするって……それをみんなで相談してるんだ。絶望的な事の再確認なんかいらない。何かアイディア出せ。

「アイディアっていってもっすね……自分も直ぐにやられたっすからね……」

「そう言えばそうだったな。アレって、ミラージュコロイドの鏡を

伝って光がお前まで届いたって事だよな？」
「そうっすね。きっとそうだと思うっす」
僕を助けてくれた時に運悪く反射して来ちゃったんだよね。ノウイはその一撃で完全石化しちゃって戦線離脱になったんだ。
「なるほど……」
僕達がそんな会話をしてると、テッケンさんが不意にそんな言葉を漏らす。成る程……とは一体何が？
「いや、あの光は反射が出来るって事だと思ってね。ミラージュコロイドがそれだけ反射に適した鏡だったからかも知れないけど、それは重要な事かも知れない。
だって反射出来ると言うことは、その鏡事態は石化しなかった筈だよ。そこら辺はどうなんだいスオウ君？」
僕はテッケンさんに振られて、急いであの時の事を思い出してみる。どうだっただろうか？　実際ノウイばっかり見てたから、鏡にまで気を向けなかったんだよな。
だけど確か……一番側の僕達が出てきた鏡、それは――
「そうですね。多分石化はしてませんでした。術者であるノウイが石化したから、ミラージュコロイド事態が消えていったって感じでしたから」
「うん、やはりそれは重要な情報だよ。ミラージュコロイドを使えば、あの攻撃を跳ね返せるかも知れない！」
おお！！　確かにそれは凄い事だ。この場だけじゃなく、雰囲気まで湿ってた僕達の周りに、乾いた風が吹いた気がするよ。今回の

戦闘の鍵はノウイが握ってると言うわけか。

「頼むぜノウイ。お前が頼りだ」

「ええ！？　ちょっと待つっすよ。実際あの光を跳ね返したからって、倒せる物っすか？　そこら辺は自分の攻撃は無効に出来たりするんじゃないっすか？」

大役を担うのが気が気じゃないのか、ノウイはなんか言い出したぞ。まあだけど重要な部分ではあるよな。自分の攻撃が自分に返ってきたら無効とする……確かにあってもおかしくはない。

現にパーティーの仲間からの攻撃でプレイヤーはＨＰを削られる事はないしな。だけど自分達の攻撃が跳ね返されればダメージを受けるんだよな。

それを考えると、敵側にもそれは適応されてる筈だとは思えるけど……ノウイは確証が欲しいわけだよね。自分が役に立てるかどうかのさ。

「そもそも攻撃を吸収する盾もあるっすし……そんな単純にやれるとも……」

「いや、待てよ」

僕はここで重大な事を思い出した。そう言えばあの時、確か聖獣の頭の蛇を僕は一匹倒さなかったか？　そうだよ、確かアレは……

「やれる……いけるよきっと！　僕がミスって水面を大きく弾けさせたとき、きっとその水に光が反射して聖獣へと戻ったんだ。

その後で、聖獣の頭の蛇は一匹だけだったけど、確かに落ちたんだよ。崩れ落ちたんだ！　それはつまり自分の攻撃が跳ね返って来て、頭の蛇が石化したって事じゃないのか？」

「ええ、それはきっとそうですよスオウ君！！」

僕の興奮気味な言葉に、シルクちゃんも賛同してくれる。他のみんなはどうだろうか？　この見解が間違ってるなら、教えてくれ。

「確かに、その話通りなら聖獣は自身の攻撃を反射する事は出来ないと言うことになる。それならば、奴が無闇やたらに出すあの石化の光を利用するのは有効な手段だよ」

「確証って程じゃない……だけど試す価値はあるわね」

テッケンさんもセラも前向きな言葉。これは行けるはずだ。というか、攻略手段は今の所これしか無いもんな。これに賭けるしか無いのが現状。

「というわけで、頼むぜノウイ」

「頼むぜノウイ！！」

僕の後に、僕を真似してクリエがそんな風に声を出す。だけどノウイはそんな期待がイヤなのか、頭を振ってこんな事を言い出した。

「ちょっと待ってっす！　確かにミラージュコロイドで聖獣の光は反射出来るかも知れないし、それであの聖獣を倒せるかもしれないっす。

だけど、それはリスク高く無いっすか？　聖獣の頭の蛇は三十匹位ウネウネしてたっす。その蛇、一匹一匹が石化の光を出してるっす。

それに対して自分が展開出来る鏡の数は十二・三が限界っす。どう考えても足りないっすよ！！」

「うう……確かに」

数の問題か……ノウイの奴、マトモな事を言うじゃないか。確か

にそれは重要だな。半分以上も向こうが勝ってるんじゃ、強引に押しつぶされるかも知れない。

「それにそもそも聖獣の蛇は自由にその視点を変えられっるっす。そして光は一瞬……それを把握して跳ね返すなんて、せいぜい自分に来るとわかってる時しか無理っすよ」

言われてみれば確かにそうだな。しかもあの光自体のせいで視界も奪われるしな。それを考えると、かなり難しいかも知れない。

ミラージュコロイドの鏡は背景に溶ける、二メートル越えの大きな鏡だけど、一枚板なのは当然だ。完璧に跳ね返せる物じゃない。それこそノウイの腕にかかる部分が大きく、そもそも数が足りてない。

これは痛い事だな。

「鑑の数を増やすこととか出来ないのか？」

せめて蛇の数と同じに出来れば……だけどノウイの答えは「ＮＯ」だ。

「それは無理っす。てか、自分でもいつの間にかこの数になったかわかんないっす。それに幾ら数が増えても大前提として無理っすよ」

「どう言うことだ？」

さっきから無理とか無理とか無理とか……ミラージュコロイドはノウイしか持ってない特殊なスキルだろ？　もっと自身持てよな。

「ミラージュコロイドは基本一度展開したら据え置きっす。だからこそ敵にバレにくくするために背景に溶け込む仕様なんすよ。簡単に移動できるのは、自分が始めに飛び込む用の鏡っす。

後のも操作はある程度出来るっすけど、それはセラ様の聖典には及ばないっす。どこにだって任意の位置に出せるっすけど、それを自由に動かせる訳じゃないって事を覚えてて欲しいっすよ」

そう言ってノウイはその豆みたいな目を糸みたいに細めた。その表情は苦笑い……か？　ミラージュコロイドが聖典程、自由効かなくてゴメン的な？

確かにこれはちょっと所じゃない痛さかも知れない。僕達が頼ろうとしてたミラージュコロイド……でも自由自在に出来るものじゃないのなら……命を預けるには頼りないかも知れないな。

「ゴメンっす。本当に……ゴメンっす。自分はいつもこうなんす。肝心な所では何も出来ないっす」

ノウイは笑い話にしようとしてるのか、必死に笑おうとしてるけどさ、実際笑えないよ。ノウイだって本当は役に立ちたい……そう思ってくれてるのはわかってる。

それにこれまでは何度もその力に助けて貰った訳だし、何も出来ないなんて、そんな訳ないよ。

「だけど！　ミラージュコロイドがもっと強力なら！　もっともっと自由に扱えて鏡の数も増やせたら……聖獣を倒せたかも知れないっす……これだけが今唯一の希望だったのに……」

ノウイは打ち震えてるよ。よっぽど悔しいだろうね。差して乗り気になってなかったのは、結局こうなるってノウイはわかってたからか。

安易な希望を持たせたくないし、自分にはその期待に応える事も出来ないんだと言う苦悩がノウイを苦しめてる。

「顔を上げなさいノウイ」

僕達がどう声をかけて良いのかわからない中、力強くそう言ったのは納得のセラだった。俯いてたノウイはそれだけで顔を上げるよ。

「セラ様……」

「別にアンタが悔しがる事なんか別に無いわよ。ミラージュコロイドはその仕事をちゃんとやっててくれてるわ。まあ改良の余地があるのは良いけど、別に無理をする必要はないわよ」

何故かノウイに優しく接してるセラが気持ち悪く見える。だけどノウイは普段聞けないセラの言葉に、感動すら感じてるようで、なんか涙を流しそうな雰囲気。

実はずっと認められたかったんだよなノウイはセラにさ。だけど実はもうとっくにセラはノウイの事を認めてたのだ。うんうん、結局なんの解決にもなってないけど、良かったんじゃないかな？

そう思ってたんだけど、ただでは持ち上げないのがセラという女だった。

「そもそも、戦闘関連ではアンタには期待してないわ。バックアップに専念しときなさい」

「……はいっす」

ノウイ瞳から一粒の涙がコボレた。結局期待してないとかズバリと言うあたり、セラは流石だよ。持ち上げといて落とすんだね。その方がダメージ大きいと本能でわかってるんだな。

まあ本人は別に、落とした気なんかないんだろうけど、ノウイは今の言葉で崩れかけてるよ。まあ無理もないね、セラに言われちゃね。偵察とかでは勿論認められてるんだろうけど、もっと他の事で役に立ちたいってノウイは普段から思ってそうだもん。

幾ら手厳しく当たられたって、ノウイはセラにべったりだもん。でもだからこそ、重要な時に力になれなくて、仕方ないと言われるのが悔しいんだろうね。

「カガミ……足りない……わかった！！」

いきなりこの場にクリエの元気な声が響く。一体何がわかって言うんだ？

「あのねあのね、カガミが足りないんだったら買えば良いんだよ！街にだってきっとカガミ売ってあるよ。それをいっぱい買って、敵を囲むの！　そしたら勝手に死んじゃうよ！！」

名案を思いついた感じでそんな事を提案するクリエ。まあ子供の思いつきレベルだな。悪くはないけど、それじゃあ鏡を積んでる間に僕たちはやられるよ。

「いいと、思ったんだけどな～」

「まあ確かに……クリエの言った事が一瞬で出来ればそれが一番なんだけどな……いかんせん手段がない」

一瞬で鏡を展開できるのはミラージュコロイド位だったわけだけど……それも今や欠点が見えて実用的じゃない。それにあの聖獣を囲むのは今の鏡の数じゃ全然たりないしな。

土砂降りの雨の中、再び僕たちは行き詰まる。やっとで見つけた希望だったけど、あと一歩足りなかった。でも足がかりには成るはず……別の方法がきっとある。ダダダダダダダダダダダダと地面を打つ雨の音が永遠にでも続きそうな程に響いてる。

地面には吸い切れなくなった雨が低い所へと流れてる……その流れをただジッと見つめて考える。何か……何か鏡の代わりに成るも

のがあるはずだ。そしてその流れの中に僕は一つの可能性を見つける。

君と鏡（後書き）

第三百二十二話です。

少しづつ勝てそう……と、思えてきた？　訳じゃないですね。でもどうにかは出来る感じはしてきたかも。あれだけ破格の存在でも対応する手段はある。それがゲームと言う物です。

聖獣はシクラ達とは違うんですからね。まあだからって強い事に変わりはないですけど。油断をするとポックリ逝きます。次くらいでは再戦かな？　どうなるか、お楽しみに！！

てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

みんなで寄れば文殊の知恵（前書き）

僕達は聖獣対策を話し合う。その中で弱点を探し、攻略方法を探すんだ。そして見つけた一点の可能性。僕達はそれに懸ける事にする。そんな時、丁度良く戻ってきたリルフィン。沢山の僧兵を引き連れてる。

さあて、メンバーも揃ったし、僕達は再び聖獣へ再戦しに行くよ。

みんなで寄れば文殊の知恵

空を見上げると、分厚い雲から激しい雨が絶え間無く落ちてきてる。きっとこのお札の効果がなかったら、目を開けとくのも難しい位の雨の量と勢い。

許容量を超えた雨は地面にも受け入れられなくて、地面の凹みに溜まり、低い所へ流れている。空から絶え間無く打ちつける雨は地面の水を激しく叩き、地面がなんか白く見える様な状態にまで成ってる。

まるで寝て起きたら、世界が水に沈んでそう……そんなメルヘンな想像をしてしまうよ。

「――で、何に気づいたのよ。何かに気づいたんでしょうアンタ？」

僕が夢のある想像で少しの心の余裕？　的な物を持ってたのを敏感に察知したらしいセラがそんな言葉をかけてくる。

たく、溜めておいたのに先走るなよな。だけど勿体ぶってる訳にもいかないか。僕達は……と言うか、僕には時間がないんだし、聖獣は出来るだけ早くに倒しておきたい。

「まあな、ミラージュコロイドの代わりに成りそうな物。それに思い当たる節がある」

「ほんとっすか！？」

僕の言葉にノウイが食いついてきた。自分が役に立てなかったから、攻略方が別に見つかる事に期待してるようだな。ふっふ、その期待にこの僕が答えてやろう。

「ああ勿論本当だ。言ったろ？　僕はあの頭の蛇の一匹を落としてる。ミラージュコロイドに代わりをさせる事なんか無い。奴の攻撃を跳ね返せる物はあのステージに元からある！！」

僕は拳を握りしめて力強くそう言い切る。そして僕のその言葉で、みんな気付いた様だったよ。

「つまりはあのステージにあった水を利用しようと……そう言う事だね」

「確かに一度跳ね返させてるのなら、出来なくは無いでしょうけど……問題はタイミングじゃないでしょうか？　ミスをするともれなく石化。状況はさっきの二の舞に成るような気がします」

テッケンさんとシルクちゃんが早くも的確な意見をくれる。まあ確かにリスクはあるよ。てか、リスクがない戦闘なんてあり得ない。戦闘で勝つと言うことは、そのリスクさえ乗り越えるって事だろ。やってみる価値はあるはずだ。

「アンタがやってみても良いと思ってるなら、それで戦術を練りましょう。だけど良く考えなさい。私たちだっていつでもアンタを守り庇い切れる訳じゃない。

一回目は何とか脱出出来たけど、次もそう出来るとは限らないのよ。もしもさっきと同じ状況になったとしたら……そしてもしもその時、外に逃げることが出来なかったら、アンタ一人でも聖獣を倒さないと終わりよ」

セラの深い色の瞳が僕を捕らえてる。メイド服に身を包み、上品な雰囲気を立ち姿だけでなら醸し出してるこのメイドは、僕とノウイとかだけにはその上品さを与えてくれない。

だけどそれは、対等なんじゃないかなって最近思うように成って

きたよ。身を包むその衣装通りの対応をする人は羨まれてたりして確かに良いとも思うけど、ありのままのメイドじゃないセラが向けられる僕達も良いものだよ。

時たま対応と待遇の悪さに辟易するけど……もしかしたら対等じゃなく下に見られてる結果こんな扱いなのかも？

やばいな考えない様にそこはしとこう。今は聖獣……聖獣だ。メイド服姿のセラに、一度はご奉仕して貰いたいな～とかあり得ない願望を望んでる場合じゃない。

まあいつかは……この関係を改善して、その内にセラに自分を認めさせる！　それも密かな夢だったりする今日この頃、僕はアッサリとこう言うよ。

僕を心配してくれてるセラに、簡単にそしてはっきりとね。

「大丈夫……次で必ず決める。みんなとなら、やれる。このメンバーだから、僕には不安なんて無い」

僕はみんなを見てそう紡ぐ。最初はちょっと浅はかに飛び込みすぎたけどさ、今度は違う。やられても絶望的でも、その状況の中でみんなが掴んだ持ち帰れた筈の物があるんだ。

だからこそ、さっきの二の舞はしないといえる。ここにいるみんなはさ、同じ失敗を二度も犯す人たちじゃない。みんな優秀なんだ。

「……バカ何じゃないのアンタ。私達がいればどんな敵にも勝てる保証なんて無いわよ。私達だってまだまだこの世界には知らないことが沢山ある。

私達よりも強い人たちだって沢山いるわ。このメンバーだから……そう思って行ってさっき惨敗したんでしょ。安易に言うな！」

怒られた。普通はそこはちょっとした感動と共に、まとまるべきじゃなかろうか？　セラのせいでそんな雰囲気どこへやらだよ。何

してくれてるんだこの性悪メイド。

「あははは、スオウ怒れてる〜！」

クリエが僕を指さしてケラケラ笑ってるよ。お前な、実際笑い事じゃないから。早く聖獣倒さないとここも大変な事になるからな。

「安易に言ってるわけじゃない。ちゃんと今は攻略方だって見つけたじゃないか。最初とは違う。奴の攻撃手段だってわかってる。

最初から警戒してれば、いきなり石化されるリスクは減るだろ。さっきとは違う戦闘がきっと出来ると僕は思ってる」

「確かに最初よりも情報も多いし、敵の手の内もある程度は見えてる。だけど今の情報だけで攻略方なんていえないわ。まだ水を鏡代わりに使えるって気付いただけじゃない。戦術というのなら、もっとしっかり詰めなさいよ。

見切り発車で首を絞めるのはアンタなのよ。何度でもやり直しが出来る私達とは違う。アンタの命は有限でしょ」

なんだかんだ言ってセラは僕の事を気遣ってくれてる――って事だろうか。僕の為に確実性をセラは求めるてる？　いや、それはちょっと期待しすぎだよな。

僕とセラはまだまだそんな関係じゃない。そこまで仲良く成った気しないもん。ただ単に知り合いが死ぬのは見たくない。というか、誰だって人が死ぬのは見たくはない物だろう。

「確かに僕の命はここでも有限だけど、だからって怖じ気付いてる訳には行かない。慎重はきすさ。だからこそみんなで得た情報を有効に使う術を考えようって言ってんだろ。

何も今直ぐ飛び込む訳じゃない。そりゃあ急いでるけど、僕だって死ぬ気はないからな。勝てなきゃ意味がないし、このメンバーな

ら、次こそは行けると……そう思ってるってことだ」
「それなら……そうとさっさと言いなさいよ！」

やっぱり何故か怒られた。なんだよなんだよ。ちょっとした言葉のズレだろ。僕にだけ責任を押しつけるなよな。そっちだって勘違いしてた癖に……セラには僕が命を粗末にしてる様に見えるらしいけど、僕は全然そんな気ない。だって誰だって死ぬのはイヤじゃん。そんなのは僕だって当然そうだ。

まだ高校生だぞ、死ぬなんて考えたくもないっての。だけど逃げることもしたくない年頃なんだよ。反抗期みたいなものだからさ。

人生や世界、運命……そんな壮大な物に反抗してみたいじゃないか。ゲームの中でも死ぬことが出来る。それこそ壮大に輝いて散る事が出来るかも知れない。

ゲームやマンガの主人公みたいにさ。だけどそんな死ぬことが出来る様になった世界だからこそ、死にたくないって思える。他のプレイヤーのみんなはＬＲＯでの死はちょっとしたリスク程度の物だから、勝つ見込みがないとわかれば、武器を下ろすのかも知れない。

でもそれは次があるとわかってるから出来る事だ。僕にはいつ、その次が無くなるかわからない。そんな恐怖心は常に心にあるんだよ。戦闘中、いつも「死んでたまるか！」と思ってやってる。

僕が一番好きな物語は、ハッピーエンドだから。周りの誰もが傷や痛みを伴っても最後には笑える……そんな物語の為には僕自身死ぬことを許す事は出来ないんだよ。

僕達は土砂降りの雨の中、聖獣を倒す術を話し合う。どういう戦術で行くか、ここからは具体的な内容だったよ。本当なら、僕達も街にでも戻って……でも良かったんだと思うけど、誰もそれを提案するする人はいなかった。

みんなも早く聖獣を倒すべきと思ってるのは同じだからだろう。そして大体決まってきた所で、どっかに行ってたリルフィンが戻っ

てきたよ。一杯の僧兵を引き連れて。

「待たせたな」

「何？　その僧兵の人達も戦ってくれるのか？」

「勿論だ。やはり強力なモンスターに挑むのなら物量で勝負をかけないとな。気が気ではなかったが、今更そんな事を言ってる場合でも無かろう。

事情を話したら、皆快く協力してくれると言ってくれた」

僕達は、小さなモブリの軍団をみる。みなさん礼儀正しく頭を下げてる。「宜しくお願いします」的な感じだな。まあありがたいけど、今僕達が話し合って組んだ戦術にはぶっちゃけ、この僧兵さんたちは必要ない。

けど……必要ないからって本当にいらないかは実際わかんないんだよね。僕達は結局、あの聖獣の表層しか見てなんじゃないかと思ってるんだ。

だって戦ったのたったの五分程度だしな。あのクラスのモンスターは経験豊富なみんなの意見では、ＨＰが減っていくと一気に能力を向上させたり、やっかいな攻撃をしてきたりって事があるらしい。

攻撃と防御のワンパターンしか無い――なんて事は実際考えられないのだ。肝に銘じておかなくちゃ成らない。「まだ何かある……」その覚悟を持ってなくちゃ足下すくわれかねない。

てか、まあ既に一回足下すくわれてるからな。二度もそんな事あっちゃただの僕らは間抜けだよ。

「戦力も整ったし、行こうかみんな！」

モブリの国だから、テッケンさんが代表してそんな声を出す。みんな気合い十分。リベンジに燃える心意気は最高潮だ。そう思ってると、リルフィンが連れてきた人達が何か装備を付け足した。

「えっと……それは？」
「サングラスだ。聖獣の光線対策に良いと思ってな。お前達の分も用意してやった。ありがたく思えよ」

そう言ってサングラスを装着した小さなモブリ達が僕達の前に来て、サングラスを差し出してくれる。どういうチョイスなのかわかんないけど、それぞれ形も大きさも違う。
似合うとかで決め手なさそう。完全に目に付いたのを買ってきました的な感じだな。

「意味あるのかこれ？」

僕は一応受け取って疑問の言葉を投げかける。だってねぇ……「ぶっ！？」

「ちょっと何よ。人の顔見て笑わないでくれる」

思わず吹き出してしまった。だってセラの奴、何の躊躇いもなく付けてるんだもん。しかもハリウッドスターばりのデカいサングラスを。
顔の半分隠れてるじゃん。

「しょうがないでしょ。私のはこれだったのよ。アンタのなんて鋭利な直角三角形じゃない！　さっさと付けて私を笑わせないよ」

自分が笑われたからってとんでもない事を言ってくる奴だな。てかマジ必要なの？　つけたくないんだけど……直角三角形ってのもあるけど、だから必要性を……

「必要性ならある、奴の最初の光は実際フェイクだ。最初の強烈な光に紛らせて石化の攻撃を仕掛けてる。だからこのサングラスで最初の光をガードするんだ。
石化したくなかったら付けておけ」

そう言うリルフィンもローブに隠れてる顔からサングラスだけが見えてる。くっそ……こいつも笑えるな。何で真面目な事を言ってるのに、お前は真ん丸サングラスなんだよ。
だけどフェイクね。そうだったっけ？　確かに光と石化は数瞬ズレてたかも知れない。だけどどっちも光はなってるし、気付かなかった。リルフィンも何もしてなかった訳じゃないのか。

「うう……」

だけどこのサングラスは……せめて普通のを買って来いよ。

「我慢しましょうスオウ君。きっと役に立ちますよコレ」

そう言ってシルクちゃんもサングラスを装着。シルクちゃんのは正三角形だね。一体どこで買ってきたんだよ。
ここは諦めるしかないか。みんなが付けるならなんとやらってね。
僕は直角三角形のサングラスをかける。世界にフィルターが掛かって見えるな。当然だけど。なんか新鮮、メガネとか掛けた事無い僕にはちょっと煩わしい感じがするけどね。

「良く似合ってるわよスオウ」

プルプルと震えながらそんな嫌みを言ってくるセラ。ふんお互い様だ。

「ねーねークリエも見て見て！！」

そう言ってくるクリエを見ると、何故かこいつのサングラスは星形してた。

「いや、お前には必要ないだろ」

「スオウが心配だからクリエも行く！！」

「ダメ」

僕はクリエの顔からサングラスを取ってそう言うよ。全く、連れてける訳ないだろ。

「どうして？　クリエだって何か出来る事あるかも！　大丈夫、このサングラスで石になる攻撃は避けるから！」

「サングラスしてたって確実に避けられる訳じゃないぞ。しかも聖獣は狙って撃ってるだけじゃない。常にいろんな方向にも光線は放ってる。それを全部ちゃんと避けれるのか？　お前には無理。今回もお留守番しとけ」

実際、守る余裕があるとは思えないんだよな。どこを向くかわからないあの頭の蛇ども。あの数には早々対応なんて出来ない。それぞれが個別で判断するかないんだ。

それが出来ないクリエは連れていける訳がない。

「むむ〜〜、クリエはクリエは心配だよ……」

クリエはしょんぼりと肩を落とす。さっき僕達は負けてるからな。だからこそ不安が増大してるんだよな。だけどここはもう一度信じて貰うしかない。僕はクリエの頭に手を置くよ。

「大丈夫。今度こそ絶対に勝って帰る。だからもう一度待っててくれ」
「絶対……絶対だよ！！」
「おう！」

そう言って僕達は再び鍵を使い封印の祠の中へ。負けられない……次なんて無い。ここの聖獣はこれで絶対に倒す。それが絶対だ！！

目の前で輝く強烈な光。だけど今度の僕達はそれに惑わされる事はない。足下に溜まってる薄緑色の水を蹴って数瞬遅れて繰り出される石化の光を避ける。
悔しいけど、このサングラスはかなり役に立ってるよ。光で視界が遮られなくなって、聖獣の動きがよく見える。確かに最初の強烈な光の方はフェイクだったらしい。光にあわせて、一斉に蛇が動いてその瞳から石化の光線を出してる。
僕達はまだ一度も攻撃出来てない。だけど、まだそれでいいんだ。今この場に居るのは僕達だけ。リルフィンと僧兵の人達には入り口付近で待機して貰ってる。
僕達は僕達の考えた戦術を実行する。そのためだ。実際このサングラスで成功の確率は上がったかも……やりやすく成ったのは間違いない。

「どうだノウイ？」
「やれるっすよ！　みんなの位置はちゃんと把握してるっす！」

よし、そろそろ頃合いだろう。いつまでも避け続けられる物でもないし、善は急げとも言う。僕達、ノウイを覗いた四人はそれぞれ、聖獣の四方に行くことが出来た。
奴に死角はない……だけどそれが僕達にチャンスをくれる。石化

の攻撃を避けながら、僕達はそれぞれの一撃の為に準備をしてる。
僕はセラ・シルフィングに電撃を帯電させ、セラはご自慢の可変式武器を弓の形に組み上げてる。鍛冶屋はその大鎚を構えて、テッケンさんは三人くらいに増えてるよ。
だけど四方に散って、距離も位置も実際まだバラバラで、息付く暇もない。完全に手も足も出てない状況だけど、僕達はある瞬間を狙ってる。
サングラスをしてるからよくわかるけど、最初のフェイクの後に来る石化の攻撃のタイミングは、蛇ごとにバラバラだ。
僕達はそれを限りなく同じにしたい。その方が僕達がやろうとしてる事にとっては、都合が良いから。だけど実際そこら辺はあの頭の蛇のさじ加減なんだよね。
まともに狙わないで攻撃してる奴もいるし……実際そんなのの方が避けるのが難しかったりするんだよね。自分を狙ってる攻撃を避けた場所とかにそのなんとなくが来たりするのが一番怖い。
まあ今の所は誰も石化の被害に遭ってないけど、いつかそれが起きる可能性はゼロにはならない。どうにかして一瞬アクションを起こした方が良いのかも知れない。
その意見はあったけど、どうせ防がれて反射される攻撃なんて……って思って拒否してた。でもこれじゃいつまで経ってもこの状況は変わりそうにない。
あの蛇に狙いを付けさせてやることも大事だしな。僕は三人になってるテッケンさんへと視線を送る。一体どれを見れば良いのかわからんな。とりあえず全員に視線を送っとくよ。
するとテッケンさんもこの状況をどうにか変えたいと思っててくれたのか、すぐさまコクリと頷いてくれた。良し、なら早速――――僕は上空へ向けて雷撃を放つ。青白い光が天井にぶつかり消えていく。
だけど別に攻撃目的じゃないから良いんだ。これは合図。みんなで一斉攻撃のその合図だ！！

聖獣の視線もお誂え向きに上方へ向いてる。上手く僕の攻撃に反応してくれた。

「食らえええ！！」

僕は一気にもう片方の剣から雷撃を放つ。青白い光がスパークしながら今度はちゃんと聖獣の方へと進む。だけどそれだけじゃない。シルクちゃんはピクが用意してた炎を放ち、鍛冶屋はあの大鎚のスキルなのか、叩いた地面から沢山の刺を出した。

そしてセラは弓矢を放ち、テッケンさんは実際どうするのかと思いきや、三人居る内の一体がなんとその腕から巨大な氷柱を放った。流石テッケンさん。何でも出来るな。てか、あの分列したのは幻影とかじゃないのか。

そんなわけで、僕たちの攻撃が四方から聖獣へ向かって行く。上を向いてる奴に避ける暇はない。というか、元から避ける気なんかないんだろう。

水が弾けて、激しい音と、爆風が聖獣を中心に巻き起こった。

「やった……っつ！！」

訳が無かった。煙の中心核が僅かに光るのが見えた。その瞬間に、辺りを包んでた煙を吹き飛ばして同じ攻撃が僕たちへと襲い来る。

だけど僕たちはそれを避けようとはしない。それぞれが自分達の攻撃を自力で受け止める。シルクちゃんは障壁を張り、セラはドデカい手裏剣に変えた武器で受け止める。鍛冶屋は足下から出てきた刺を大鎚で砕き、テッケンさんは攻撃を出した方と違うテッケンさんが今度は障壁を出して防いでた。

そして僕は真っ正面からセラ・シルフィングで受け止める。僕はみんなの用に出来る事多くないし、このくらいしかないんだ。だけ

ど……自分自身の攻撃に負ける気はない！！

「うおらああ！！」

僕は二対の剣で雷撃を斬って捨てる。みんなも上手くいなしたみたいだな。そしてその時、上の方から、ノウイの声が響く。

「みんな来るっすよ！！」

そんなノウイの声と共に、活動開始の合図みたいに閃光が辺りに放たれる。だけどその時、僕たちは冷静に次の行動に移ってた。ノウイの言葉と共に、僕たちの側にはミラージュコロイドの鏡が現れる。僕たちはその閃光と同時にそれに飛び込んだんだ。

だけどそれは逃げる為じゃない。僕達が狙ってたタイミングがまさにこの時。聖獣は僕達の位置を完璧に把握してただろう。

そして僕達の一斉攻撃の後から、休止してた石化攻撃。それを初めに撃つとなれば、そのタイミングは自然と同じに成るはずだ。そして狙いだって、当然僕達それぞれに完璧あわせてるだろう。

条件は全て整った。後はこの一瞬の――刹那の間合いの勇気の勝負！！

だから僕達が現れたのは聖獣から距離を取った場所じゃない。僕達はそれぞれの鏡に対応させてた鏡から、聖獣の近くの二メートル位の高さの位置に現れる。

バラバラだった聖獣との距離も、鏡は全部同じ感覚を空けてあるから僕達は同じ位の距離で聖獣を囲む形に成ってる。

そして瞬きする暇もなく僕達はそれぞれの落ちるべき足下へと向かって攻撃を繰り出す。叫び唸り、それぞれのありったけの力を込めて、僕達は地面を覆ってる薄緑色の水を大きく弾き上げるんだ。

そうそれは、さながら聖獣を囲む大きな鏡の様に。光は水の中で反射して、逃げ場を求めて上方へと立ち上った。

みんなで寄れば文殊の知恵（後書き）

第三百二十三話です。
再び戦闘開始。スオウ達の戦術は上手くいくのかどうかは次へ持ち越しです。実際僧兵何もしてないじゃん！　とか言われそうだけど、きっと活躍の時はありますよ。多分ね。
聖獣はまだ四体もいる事ですしね。だけどこの感じで戦っていくのかは……正直微妙かも？
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

沈まない敵（前書き）

僕達の一世一代の策が炸裂した。大方の予定通りに進めれたはずで、成功と言っていい状態。だけどまだ倒したわけじゃない。ここからが、本当の戦い。僕達は聖獣のＨＰを削りきる！！

沈まない敵

立ち上った水は大きくせり上がり、聖獣を囲む。聖獣の放った石化の光、それは水に反射して行ききっと自信に戻った筈だ。
取り合えずいえることは、天井へ向かって伸びる一本の大きな光の柱。これがきっとその証だって事。
大きく立ち昇った水は、一瞬の内にはその姿を再び地面へと落としてく。大きな音と大量の水しぶき。それらが僕達に掛かるよ。

「みなさん！！」
「ノウイ……どうだ？　やったか？」

ノウイは僕達の位置を正確に知るために、ミラージュコロイドを使って空中にいたんだ。だからこそみんなの正確な位置に鏡を出現させて、そして全員の出現する鏡の位置も完璧だったと言うわけだ。
そんなノウイはどこまで見てた？　気になる。

「やったかどうかはわかんないっすけど、みんなの現状がこの作戦の成功を物語ってるっすよ！！」

力強く拳を握りそう告げるノウイ。確かに僕達は全員無事だ。そして水の壁の中から上がったあの光……それらを考えると上手く行った気はする。だけどその姿を確認するまでは安心なんて出来ないよな。
僕達は聖獣を探す。細かな水滴がなんだか空中に僅かに漂って、周りが白く成ってるような気がする。まるで霧が発生してるかの様なさ。
そんな中、聖獣が居るはずの位置を僕達は見つめるんだ。

「何の音？」

セラが耳に手を当てて何かの音を聞いてる。僕達も耳を澄ますと確かに何かポチャボチャと言う音が聞こえた。そしてそんな音に混じって何かが呻くような声も僅かだけど聞こえる。

ポチャ……ボチャチャ――と次第にその音の感覚は早くなって行く。白い霧で覆われた向こうで、僕の想像ではきっと聖獣がハゲに成ってるはず。

これは蛇が石化して落ちて行ってる音だと僕は思う。そして白く立ちこめてた霧は次第に足下の水面に溶けるように消えていく。それと同時にようやく聖獣が足下から姿を現し出す。

だけどその足下がわかるだけで僕達の行動が成功したのかはわかった。だってその足下には、蛇の残骸らしき物が水から顔を出してる。

「これは……」

「ええ、成功と言えるわよね」

「はい！」

テッケンさんにセラ、シルクちゃんもその足下を見て確信したようだ。足下から下半身、そして胴も見えて、最後にはきっと見窄らしくなった顔だろう。

すると丁度最後の蛇が崩れ落ちる所だった。ポチャンという音が空しく響く。広がる波紋は僕達の所まで届くけど、それは何の驚異もないただの振動だ。

僕達はそれぞれ再び戦闘態勢に入る。一気に畳みかける為だ。奴の驚異の攻撃の術は絶った。それなら今度はこっちが攻める番だろ。

「反撃開始だ！！」

僕達は恥ずかしいサングラスを放り捨てて、一斉に四方から聖獣に迫る。水面をバシャバシャと蹴り、動かなく成った聖獣を目指して走るんだ。遠距離攻撃が出来る面々も今回は走る。
何故なら奴はまだ盾を持ってるからだ。遠距離攻撃は何をやってもあの盾に弾かれる。だけどそれは遠距離だからってのが僕達の見解。
だからこそ今度は近距離戦で行くことにしてるんだ。今まではあの蛇の石化の攻撃で近付けなかった。だから必然的に遠くから攻撃するしかなくて、本当に上手くやってたんだと思う。
だけどその一角が崩れた今、近距離戦を阻む手段は聖獣にはもうない。あの石化の攻撃がプレイヤーを近づかせない意味も担ってたとしたら、この攻撃は普通に通る筈だ！！
僕とセラと鍛冶屋とテッケンさん、それぞれが一斉にその武器を振りかぶる。

「「「うおおおおおおおおおおおおお！！」」」

大きな音と共に再び水柱が立ち上る。その衝撃に周りからは「やったっす！」とかの声が聞こえる。だけど僕達はわかってた。手応えが無かったことに。

「まだだ！！」

僕がそう叫んだ瞬間、水柱の中から石膏の腕が出て来た。そして一気に全身と共に、僕の上に落ちてくる。

「ぐはっ！？」

この野郎、きっと攻撃が当たる直前にジャンプしてかわしてたんだ。そして立ち上った水を利用して、死角から攻めに転じた……そ

ういうことだろう。
僕を押し倒した聖獣が顔を間近に近付ける。仮面で隠されたその顔で唯一生気を持って光る物が僕には見えた。それは瞳……淡い光がその目の部分には幾つも光ってる。

「あ……ああ……あああああああ

ってる所だ。効いてるみたいで、その動きは少しカクカクしてるように見える。
しかもようやく、ＨＰが崩れてるしな。
「ていやあああああああ！！」
「はあああああ！！」

立ち上がり際を狙って、テッケンさん×３とセラがそれぞれの方向から聖獣へ攻撃を仕掛ける。これには思わず聖獣も下がらざる得ない。
だけど二人とも素早く聖獣を追いかけるよ。セラは今度は近接用の武器に組み替えてるな。両側に刃が付いてる、長刀の豪華版みたいな武器だ。
テッケンさん達はそれぞれが違う武器を装備してる。一人はナイフで、もう一人は小刀、そしてナックル？　ただでさえリーチが短いのに、なんでそれを選択するの？　って武器だなナックルって。
だけど計四人からの攻撃に聖獣はタジタジだ。さっきから避けきれずにＨＰは削られ続けてる。行ける……これは行けるぞ！！

「鍛冶屋！」
「ああ、俺たちも行くぞ！！」

僕達二人も水を弾いてテッケンさん達に加わる。入れ替わり立ち替わりで攻め続ける僕ら。最強の攻撃手段を無くした聖獣にこの僕達を止めることは出来ない。
攻撃が当たると次第に聖獣の体の石膏に傷が付くように成ってきた。弾け飛ぶのは踏み込んだ時の水だけじゃない。奴の体の破片が僕達の攻撃の有効度を物語ってる。
テッケンさん三人が様々な方向から攻撃して、セラがその黄金の武器で奴の体を切り刻む。そして更に僕が雷撃を纏わせたセラ・シ

ルフィングでその体に傷を付けてその傷跡が光を持っていく。
その最後に鍛冶屋が破壊力抜群の大鎚で聖獣をブン殴るんだ！！
そして聖獣が吹き飛んでる最中にさっき仕込んでたスキルを僕は発動する。
僕が付けた奴の体の傷。そこから発生する雷撃。切り刻めば切り刻むほどにその威力を増すスキル。雷撃の光が聖獣の体を包み込み辺り一面に青白い光が行き渡る。そしてそのまま水面へと落ちる聖獣。

「やった……か？」

今度こそ勝利の雄叫びを上げても良いんだろうか？　僕は周りのみんなにも確認するよ。

「まだ勝利宣言には早いよスオウ君。黒こげに成ってるとは言え、奴はまだそこに存在してる。ＨＰも僅かだが残ってる」
「じゃあ、これで終わりにしましょう」

その僅かを削り切れば完全勝利って事だろう。実際石化の攻撃を防いでも他に何かあるだろうと思ってたけど、拍子抜けだったな。
警戒し過ぎたのかも知れない。あの盾と石化のコンボがこの聖獣の最強手段だったって事だろうな。僕は聖獣に近づいて行き、セラ・シルフィングを掲げる。これを振り卸して終わり。
僕達の勝利だ。所々から煙を上げてる聖獣を見下ろして僕は一回息を吸って吐き、そしてセラ・シルフィングを振り卸した。だけどその剣の勢いは途中で止められた。奴の素手によってだ。

「なっ！？　コイツまだこんな力が……」
「ああ……ああああああ・ああああ・ああ・あ・ああああああああ・あ・ああああ……ああ・ああ・あ……あ・あ」

僕は聖獣の腕から剣を引き抜こうとしてるけど、いかんせんピクリとも動かない。そう思ってると、いきなり僕の視界がぶれた。どうやら奴が強引に僕ごと剣を引っ張ってるみたいだ。
そして軽々と、僕ごと放り投げられた。

「ぬあああああああ！？」

水面を弾けさせて数回バウンドする。何とか態勢を整えて、顔を上げると、水が目に入ってボヤケる視界の先で聖獣の体から激しい閃光が炸裂する。

「しまっ――」

閃光がボヤケてた視界までをも奪い去る。手でのガードなんて意味をなさない。サングラスを投げ捨てた事を本気で後悔した。
何も見えない中、音だけは聞こえてる。だから状況判断はそれに頼るしかない状況だ。聞こえてくるのはみんなの叫び。それと激しく響く水の音。どういう訳か、今僕には雨が降ってるよ。
僅かに目を開けると、真っ白な視界に僅かな色の違いを確認出来る程度しかまだ見えない。これじゃあまだまだ視界に頼る事は出来なさそうだ。
素直に音に頼った方がいいのかも知れないけど、普段から見る事に馴れてるから、音だけじゃ実際不安しか募らない。
だから見えなくても、必死に目を凝らそうと僕はしてる。するとその時、近くからジャポジャポという音が聞こえた。
足音？　だけどやっぱり誰か確認出来ない。味方か？　だけど嫌な感じしか感じれない。足音はこちらに向かって速まってる。

「くっそ！」

僕は自分の直感を信じて、セラ・シルフィングを振りかぶる。その瞬間、セラ・シルフィングに伝わった感触はまるで石でも叩いたかの様な感触。やっぱりコイツは……そう思ってると、いきなり頭を殴打されて、続けざまに横っ腹に内蔵が飛び出るかと思うくらいの、強烈な衝撃が走る。

そしてその衝撃の勢いのまま再び水面を転がることに成った。雨が降ってるかの様な音が周囲に響く。口の中に血の味が広がっていく。

視界の片方もただ見えないだけじゃなく、何となく黒ずんでる様になってしまった。きっとさっきの攻撃で血が流れてるんだろう。

そんな状況把握をやってると、どこかから水面が爆発するような音が聞こえた。こっちに向かってきてるとか正直わかんないけど、嫌な予感がした僕は、セラ・シルフィングを取り合えず振るう。

だけどその行為も空しく、衝撃は背中側から来た。

「ぐわあああああああああああああ！！」

背中の肩胛骨辺りを抉ったその衝撃で、僕はまた水面にダイブする事に。顔から行ったから、一気に水が口へと進入して呼吸困難へと陥る羽目に……体に走る激痛もヤバかったけど、それよりも水を排出したい僕は、急いで水から体を上げる。

「がはっ！　ごほっほ――っがっが」

空気を求めて僕は必死に水を追い出す。僅かに瞳を空けると、四つん這いに成ってる自分の姿が水面に僅かだけど確認できた。

視界は戻ってきてる。いつまでも調子に乗ってるんじゃ――っづ！！

「がぼばあああああああ！！」

唐突に顔が水へ落とされた。突然の事で訳が分からないけど、取り合えず頭がもの凄く痛いのはわかる。現在進行形で踏みつけられてるしな。

起きあがろうにも、聖獣のハンパない力には対抗の術がない。寧ろ何故か地面にめり込んでいきそうな勢いだ。これはヤバい……こんな浅い水場で窒息死なんて冗談じゃないぞ。

だけど力を入れれば入れる程に、苦しくなる一方だ。何とか歯を喰い締めて空気がこれ以上漏れていくのを耐えていたけど、ある一定のラインまで行くと、そこに空気がないとわかってても、口を開けてしまう。

苦しくて苦しくて……息を吐き出してしまう。白い泡が目の前に広がる。淡い緑色に光ってる水面が段々と黒く沈んでいく様な感覚に襲われる……これはヤバい。

手の先から……足の先から底冷えするような冷たさが這い上がって来てる。

僕はこれを知ってる……これはいつか感じた『死』と言う感覚だ。

（ダメだ……こんなのダメだ。クリエに信じて待ってろって言った……だから……こんなのは……ダメ……なん……）

視界に映ってた光が小さく……小さく……そのとき、意識の向こう側で、小さな音が聞こえてた。ピシピシと言う変な音。するとその音は一気にはじける様に大きく強くなって、気付くと僕は水責めの刑から解放されてた。

「――――――――がはっは……あれ？」

もう一度瞳を開ける事が出来た僕はそんな声を出す。だってあの

まま意識は無くなったと思ったんだ。だけど今僕は、どうやらまだ生きてるらしい。それに地面に溢れてた水と一緒に僕と聖獣は空中に浮いてる。
これは一体……そう思って顔に手を当てると、そこで僕は気付いたよ。視界が戻ってる。ようやくまともに見える様になってくれたらしい。

「風？　竜巻？」

なんだか灰色の風が渦巻いてる様に見える。その中に僕と聖獣は囲われてる。この竜巻が水と一緒に僕を持ち上げてくれたのか。でも一体誰の魔法だ？
順当に考えるとシルクちゃんだけど――一人で考察してると、無様に浮き上がってる聖獣がその盾を上に突き出す。すると竜巻の回転が次第にその盾へと集まり出すじゃないか。

「アイツ、この竜巻も吸収する気か」

竜巻はみるみると盾へと消えていき、僕は勢いそのままに水と共に地面に落ちる。無様に落ちた僕と違い、聖獣はその頑丈そうな足で、地面を踏みしめて着地した――と同時に、盾をある方向に向けて吸収した竜巻を解放する。

「「「うあああああああああ！？」」」

響く僧兵達の悲鳴。彼らも小さいから良く飛んでる。てか、彼らが助けてくれたのか。流石に僕たちのやられ様を見て、リルフィンが我慢できなくなったんだろう。で、そのリルフィンはどこに？
と思ってると、上からトゲいっぱいの武器を携えたリルフィンが盾を構えてる聖獣の腕を力一杯に叩く。その瞬間聖獣の腕が微妙に

上へ反動でズレて、竜巻の軌道も逸れた。
更にリルフィンの奴は、僅かに力が弱まったこの時を見逃さずに、聖獣の腕を叩いた武器をそのままスライドさせて、手から盾を弾いたんだ。

「これで貴様を守る物は何もない！！」

そう言ったリルフィンは素早く聖獣から距離を取って、準備させておいたのだろう僧兵達の別部隊に合図を送る。

「今だ！！　やれ！！」

その合図を皮切りに、聖獣の足下へ現れる魔法陣。これは実際僕もその範囲に入ってそうな……そう思ってると、いきなり襟首を捕まれて引っ張られる。
すると一瞬の内に聖獣から数メートル離れた位置に僕は居た。

「大丈夫っすかスオウ君？」
「ノウイ……これは？」
「リルフィンさんの大策っすよ。彼はこれで決めるみたいっす。ああ、そう言えばこれも回収しときましたっすよ」

そう言ってリルフィンはセラ・シルフィングを僕に渡してくれる。そうか、意識が一瞬途切れた時に手から放れてたみたいだ。
流石ノウイ、良い仕事をしてくれる。散々自分は何も出来ないって気にしてるけど、やっぱりそんな事は全然ないよ。感謝してもしきれない位に、実は影で僕たちをいっぱいいっぱい助けてくれてるんだ。

「サンキューノウイ。で、実際倒せるの……」

不意に視線を聖獣の方へ戻してみると、その様子にビックリだ。魔法陣はなんだか凄いことになってるぞ。地面に現れた物と、そこからもう一つ分離して空中に魔法陣が出てる。
そしてその間で赤黒い光線か雷撃みたいな物がスパークを繰り返してる。

「なんだか凄いな」
「あれは合唱魔法です。特定人数で使うことが出来る強力な魔法の一種なんですよ。こう言うのを見ると、流石魔法の国だと思いますね」

僕の体に回復魔法をかけながら、シルクちゃんがそんな説明をしてくれる。合唱魔法……そんなのもあるんだね。まさに切り札と言った魔法って事か。魔法陣の間の光が徐々に強くなっていく。
中の聖獣の苦しみの叫びがこの空間に響いてる。どうやら合唱魔法の特徴は詠唱が終わって発動するんじゃなく。発動中も全員で詠唱を続けなくてはいけないみたいだ。
僧兵の魔法担当の人たちは淡い光を称えながら、必死に詠唱を続けてる。空間全体が揺れる様な振動も響いてきて、その光が空間を埋め尽くす程に輝き出す。声にさえならない叫び。僅かに見える魔法陣内部では聖獣が必死に蠢いてるのがわかる。
だけど流石に今の聖獣にこの魔法からの脱出手段はない。石化の蛇も失い。自身を守る縦も既にその手にない。これで本当に終われるかも知れない。
そう思ってると、魔法陣の範囲から腕が一本飛び出て来た。なんとかして脱出しようとしてる。あれだけのエネルギーの中を動けるってだけで信じられないけど、奴は聖獣。そんなあり得ない事をやれる奴なんだ。

「おいリルフィン！！」
僕は不安に刈られてそんな声を出す。だけどリルフィンは落ち着き払ってこう言うよ。
「心配するな。これで終わりだ！！」
その言葉の直後、一瞬凝縮するようにエネルギーが収まって、それに伴ってこの空間全体が暗くなった様に感じた。だけどその一瞬は本当に刹那。凝縮されたエネルギーは今まで放出してた数倍の規模で爆発を起こす。
空間全体が揺れると言うか崩れる様な衝撃。鼓膜を一気に通り抜けた感じの音が脳を激しく揺さぶった。一気に弾け飛んだ水は僕たちに届く前に蒸発して消えていく。
これは凄い……凄いけど……自分達まで吹き飛ばされそうな勢いだ。何とかみんな耐えたけど、爆風だけで死ぬかと思ったわ！！
「どうだ？」
爆炎の向こうに視線を凝らす。だけど、その様子を伺い知る事はまだ出来ない。魔法を放った僧兵の皆さんは流石にゼイゼイ息を切らしてるな。
流石にあれだけの魔法を使うのは疲れるらしい。
「疲れると言うか……あれだけ長い詠唱が大変なんです。間違う訳にはいかないし、息を吸って吐くタイミングも難しいです。乱す事は出来ないですから」
「凄いシビアな魔法なんだね」

まあだからこそのこの威力。条件が厳しい程に強力になるのは世界の常だよな。薄緑色の水が、蒸発して無くなった場所へと流れて行って、焼けただれた地面を冷やしてる。
その音なのかジュジュジュジュ～と熱したフライパンに水を落とした時の様な音が聞こえるよ。するとそこに変な音が混じってるのに気付いた。
なんだかバシャンボションと重たい物が水に落ちてるような……そんな音だ。僕たち全員に緊張の糸が張りつめる。そんなバカなって思う。今の聖獣にアレを防ぎきれるなんて思えない。
だけど元から石膏の様な体の奴だった。元々の頑丈さで耐え抜いたのかも知れない。そう思ってると周りからもボチャボチャと言う音が聞こえて来て、天井から水滴が降ってくる。
上を見上げると、天井部分の空間が壊れかけてるみたいだ。その隙間から雨が入り込んでる。
壊れかけの空間。そこに気を取られてると、ジャボンと言う一際大きな音が前方から聞こえた。視線を向けるとそこには満身創痍の聖獣の姿がある。

「まさか……耐えたと言うのかアレに！？」

リルフィンの驚愕の声。だけど確かにまだ、ヒビが入った仮面の下の瞳は強く輝いてる。

沈まない敵（後書き）

第三百二十四話です。
なんともしぶとい奴でしたね。やっただろ！　と何度も思ったのに、やられてない聖獣。流石聖獣と言ったところです。次回で倒せるのかどうか……はその時まで口を閉じておきます。
てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

終わらない戦い（前書き）

聖獣を追い詰めた僕達。だけどここからがしぶとい聖獣は遂には外へまで出てしまう。僕達もそれを追いかけて外へ行く。だけどそこでクリエを人質に取った聖獣は森を目指して進みだす。

終わらない戦い

不気味に輝くその瞳。まだ奴は生きている。僕達は再び武器を構える。

「まだ終わらないか……」

「だけどもうボロボロだ。畳み掛けようじゃないか！！」

テッケンさんが真っ先に走り出し、それに僕達も続く。だけどそんな僕達を追い越して迫るのは、セラの巨大な手裏剣だった。巨大な手裏剣はボロボロの聖獣の胸を斬り裂いて回転しながら戻っていく。

聖獣は今の攻撃で仰向けに倒れる。だけどまだＨＰは残ってるし、僕達は止めを刺すまでは止まらない。どんなに残酷でもこいつをこのままにはしておけない。

すると壊れた機械仕掛けの人形みたいな音を出しながら聖獣がひび割れた天井へ向けてその腕を伸ばし出した。それは「外へ出たい」事への現れか。

でも……それを許すわけには行かないんだ！！　ようやく追い詰めたんだ。ここで逃がす訳にはいかない……そんな事出来るわけがない！！　僕達は止めを刺すために聖獣へと向かって走り出す。

「あわわ～、クリエのせいじゃない……クリエのせいじゃないよね？」

どこからか聞こえてきたそんな言葉。僕は思わずその足を止める。

「クリエ？」

でもアイツはここに連れて来てない。まさか壊れ掛けの空間だから外のクリエの声が聞こえてるって事か？　あり得なくはないよな。雨だってこの空間に進入してるし、外の音が入ってきてもおかしくはない。

するとその時だ。テッケンさんと鍛冶屋が同時にその武器を降り卸した時、いきなり聖獣は気が狂った様な叫びを上げる。

その声は今までのうめき声じゃない。意志を持って叫んでるって感じの声。声だけでビリビリと空気が震えてる。まだ何かあるのか？

そう思ったけど、二人は攻撃の手を止める事はしてない。どの道これで終わり。そう思った。幾ら激しい声を出したってそれは所詮声なんだ。攻撃効果はない。確かに一瞬ビックリしたけど、それだけだ。

けど、どうやら聖獣はそれだけじゃなかったみたいだ。二人の攻撃が自身に降り卸される前に、今度は例の強烈な閃光を放つ。視界が光に包まれて何も見えなくなる。

「くっ、またか！」

「往生際が悪い。だが、そこに居る事に変わりはない筈だ！！」

そんなテッケンさんの言葉の後に、大きな音がこの場に弾ける。どうやら視界を奪われても二人とも関係なしに攻撃したみたいだな。ナイス判断だ！！

慣れのせいか今度はなかなかに視界の回復が早い。既にボンヤリとだけど見える。これなら粉々になった聖獣の確認位は出来るだろう。

「テッケンはどうだった？」

「そうだね……堅い感触はあまりなかったかもしれない」

攻撃をした二人がそんな言葉を交わしてる。まさか……あの状態で避けたのか？　僕達は攻撃の跡地に目を凝らす。う～んバラバラに成った……様に見えなくも……そう思ってるとサングラスをまだつけてるリルフィンから声が上がる。

「外してる！！　奴は向こうだ！！」

僕達はリルフィンの指さす方へ視線を向ける。すると確かに何かが動いてるのがわかる。空間の端っこ、そこで何とか立とうとしてるのか？　一体何がアイツをそこまでさせるんだ？　と、言うかあの状態で何がしたいのかよくわからない。

既に僕達を倒すのは不可能な筈。それなのにああまでしぶとく生きようとするなんて……システムに沿ったモンスターなら潔く倒されてろよ。

「たく、情けないわね！！」

そう言ってセラが再びその手裏剣をブン投げる。なんか今度は炎を的って火車みたいになってるぞ。セラも決めに掛かったな。

実際誰が決めても良いし、そろそろマジで終わりにしたい。だから僕達もセラの攻撃に、この思いを乗せるよ。

「「「いっけえええええええええ！！」」」

炎を的った手裏剣が聖獣へと迫る。すると再び聖獣は閃光を放った。同じ手を何度も何度も、既にそれしかもう出来ない事を自分で言ってる様な物だ。

それに既に攻撃はこっちの手から離れてるんだぞ。幾ら僕達の目を潰したって、手裏剣は止まりはしない！！　直後、当たった事を

知らせるかどうかはわかんないけど、爆発が起きた。そんな爆炎の中、手裏剣が炎を無くしてセラの元へと戻ってくる。

「今度こそやったのか？」

「当然、奴はこれで粉々よ」

得意気に胸を反らすセラ。確かに避けれたとは思えない。奴は立つので精一杯な状態だった筈だからな。けれどその時、パシャパシャと激しく音を立ててリルフィンが走ってる。そしてローブを脱ぎ去って、その白銀の髪を逆立てて、態勢を低くしてまるで狼の様に一声「がぁ！！」と叫ぶ。

するとその音の大きさが凄まじく、水が変な振動の仕方をしたよ。僕達も思わず耳を塞いだ。

「ちょっと、一体何なのよ！！」

セラが耳を押さえた状態で抗議の声を上げる。無理もない、僕もそう思ってた。するとリルフィンは勢い込んでこう言うよ。

「奴はまだ生きてる。あそこだ！！」

そう言って再び例の爆音の様な叫びを上げる。何だこいつ？　まるで音の大砲でも撃ってるかの様な叫び声だぞ。　獣か何かか？　そう思いながらも僕達の視線はリルフィンがその音を向ける方へ。すると空中に確かに聖獣の姿がある。全身にはヒビが入り、動く度にその亀裂が広がって行ってるにも関わらずに、アイツはまだ動いてた。

ここまで来ると天晴れだな。けど何で空中に？　セラの攻撃の爆風でも利用したのか？　でもそれにしても無謀だろ。今の聖獣の状態じゃ、着地の瞬間に粉々に成りそうな物だ。それこそあんな高く

上がったら……高く？
リルフィンの攻撃に当てられて空中でクルクル回ったり弾かれたりしてる聖獣。だけどそもそも何であんな高くに上がる必要があったんだ？
そもそも何で逃げるのか分かんないし……
「くっ……しぶとい！！」
そう言って音の砲撃を連発するリルフィン。聖獣の腹の一部分がそれによって欠けたりしてる。みんなそれを見て、やれると思ってる様だし、僕だってそう思う。みんなには苦し紛れに逃げてる様に見えるだろう。
だけど……何か目的があるように僕は感じるよ。でないと、あんなボロボロになっても諦めないなんて事はない。何かその魂に刻んだ物があるから、あのモンスターは無様でもみっともなくてもその場所を目指してる……だけどついにはその仮面までもリルフィンの攻撃で剥がれ落ちる。だけどその時僕は気付いた。奴がどこを見据えてるのか……リルフィンの攻撃に翻弄されながら、どんどん上昇してる聖獣。その顔はどんな衝撃を受けてもその場所を見据えてる。
まさか……アイツ！！
「ダメだ！！　攻撃をやめろリルフィン！！」
だけどその時、放たれた音の砲撃に聖獣が今までにない対応を見せた。音の砲撃を掴んで、そして弾けるタイミングを見計らってその衝撃を利用しての最大跳躍。その勢いで両足が砕け散ったけど、聖獣はそんなの気にしちゃいない。
そして聖獣は天井に開いた亀裂から、外へ出ていった。
「なっ！」

「アイツはきっとこれを狙ってたんだ。戦闘で空間がボロボロに成って、自分が出やすく成るようにさ。まああそこまで追い込まれるのは予想外だったろうけど、あの状態でもアイツは上手く僕達を利用したんだ」
「くっそ……私はなんて事を……奴がここから出たがってる事は分かってた筈なのに……」

そう言って歯を喰い締めるリルフィン。だけどそんな場合じゃないぞ。

「悔しがってる場合じゃない！　僕達も奴を追いかけて外に出るぞ！　まだ間に合う。奴には既に足がないんだからな！！」

出られたからってあの状態じゃ素早く動く事も出来ない。だからまだ間に合う筈だ。
僕達は急いで出口へ向かい、再び鍵を使って外へと戻る。土砂降りの雨が打ちつける中に戻ってきた僕達が見たのはそれは最悪の光景だった。

「スオウ……」

打ちつける雨の中でそんなか弱い声が聞こえた。それは間違いなくクリエの声だ。アイツ……どこに？　封印の祠から戻るとお札の効果はなくなってるから厄介だな。
また掛け直すのが面倒で僕はそのままクリエを探す。すると雨が不自然に避けてる場所を見つけた。それと一緒に引きずった様な後……イヤな予感が直感でしたよ。
僕がその後を辿って光の方へ進むと、聖獣に抱えられたクリエの姿があった。足がないから、聖獣は片手でクリエを確保したまま、

もう片方の腕で地面を掴んで体を引きずりながら進んでた。これはその跡だったと言うわけだ。
僕を見つけたクリエは、泣きながら何度も何度も僕の名前を呼ぶ。
「スオウ！　スオウ！　スオウ！！」
僕はセラ・シルフィングを構えて叫ぶ。
「止まれ！！　そいつを放して貰おうか」
僕の言葉を受けて、聖獣は引きずるのを止めて止まった。こいつの足じゃ逃げられない事は明白。本当に、もうそろそろ諦めろよな。
こんな事したって、なんの意味もない筈だ。自身の体から破片をコボしながらこちらを振り返る聖獣。仮面が無くなったその顔に僕は思わずギョッとした。
「なっ……」
それ以上何も言葉が出ない。だって仮面に隠れてた部分は明らかに他の箇所とは違うんだ。体も顔の半分も石膏の様な白く堅い素材だから仮面が無くなってもそうだと思ってた。
だけど実際は仮面に隠れてた部分は顔がない。内部が暗くなって仄かに蛍の光の様な光がその内部で煌めいてる。それに外側に黒い残滓みたいな物が染み出てた。
そして更に驚く事が起こる。
「う……ゴク……な……」
「しゃべっ！」
まあ確かに人型してるから喋ってもそこまで違和感ないけど、だ

けど今までは変なうめき声と叫び声しか上げなかった奴が喋ったんだ。そりゃあ驚くよ。

「スオウ君！　――きゃあ！」

追いついてきたシルクちゃんがそんな声を上げて聖獣の顔なしの姿に驚く。他のみんなも大体同じ反応だよ。

「スオウ……」

聖獣の腕に絡めとられてるクリエが苦しそうな声を上げる。あの野郎、暗に絞め殺す的な警告をしてるのか？　これじゃあ迂闊に動けないな。

打ちつける雨が体の熱を奪っていく。頭の天辺から足のつま先まで既にビシャビシャ。まあ雨に打ちつけられる前からそうだった訳だけど、こうずっと水に当てられ続けると底冷えしてくる。

だけど熱が冷める事は良いことだ。冷静な判断ってのが出来るからな。クリエが人質に取られて、実際は激高したい所だけど、それじゃ何も解決なんてしないんだ。

それよりも僕だけじゃない出来ない事をしよう。僕には頼りに成る仲間が居てくれるんだからな。

「大丈夫だクリエ。必ず助けてやる。だから安心しろ」

「……うん」

クリエは小さく頷いてくれる。クリエは僕を信じてくれてるんだ。

「人質とは随分汚らしい奴ね。消し炭にしてやろうかしら」

セラが冗談か本気か分からん事を言ってる。だけどそれもアリか

なって思うよ。そう、奴は消し炭にしないと気が済まない。

「セラ、消し炭にするなら聖典を回り込ませろ。出来るだろ？」

「――当然。てか、私に命令しないでくれる。お願いしなさい」

「お前な……そんな事してたら気づかれるだろ。これも貸しにしとけよ」

一応聖獣だって警戒してるだろ。だから慎重を期してるんだ。しかも一刻も早くクリエを助けたいから、貸しでも何でもしといてやるさ。

そう思ってると、セラはちょっと意外な事を言ったよ。

「貸しね。ふん、いらないわよそんなの。別にお願いなんて冗談だし……私はそんな小さくないの。やってやるわ、何の見返りもなくたってね」

そう言ってセラはこっそりと聖典を一機放つ。それは僕達の後ろを迂回して、雨の中へと消えていった。思わぬ所でこの雨が役に立ったな。

これだけの雨なら、かなり近づかないと見えないし、気付かれない。ついでに聖典は足音とか無いしね。こっちは聖典が準備に入るまで、慎重に睨み合いをしてるしかないかな。

そう思ってると聖獣は少しずつ再び進み始める。僕達が手を出せないと知り、行動を再開したみたいだな。僕達は見失わない様に、一定の距離を開けたままジリジリと追いかける。

下手な行動は取れない……でも大丈夫、今の聖獣の移動スピードは赤ちゃんのハイハイ位だ。焦ることはない。どうやら森を目指してるみたいだけど、まだまだ森も遠いしな。

すると聖獣は森へ向かって変な声を出し始めた。今までのうめき声や叫び声、はたまた人の言葉を真似た物でもなく、どちらかと言

うと、綺麗な分類の声だ。

「何？」

「森へ向かって何かを伝えようとしてるみたいですね」

「何かって何を？」

「それは……ちょっと分かりませんけど……」

セラとシルクちゃんと僕は、そんな会話をしてこの声を警戒するよ。綺麗だけど……なんか不気味だ。遠くの森は輪郭しか見えない。別段変わった様子も無く、実際この雨だからその声が届いてるかも微妙そう。

けどモンスターは五種族と違って野生的だからな。僕たちよりも十倍位の嗅覚や聴覚があってもおかしくない。野生ってその位普通だろ。

それに何をやってても、こいつが彼処までたどり着く事はない。それは決定事項だ。ここまで追いつめて、逃がすなんて事は出来ないしな。

土砂降りの雨の中を、聖獣はみすぼらしく這いずって進む。音を途切れさせずに必死に森を目指してく。

「スオウ、今から奴の腕を狙うわ。タイミングを逃さずにアンタが救出しなさい」

「良し、分かった。頼む」

「それなら僕達は、スオウ君がクリエ様を救出した時を見計らって一斉に聖獣を攻撃しよう。それで終わりだ」

「そうですね。よろしくお願いします」

段取りは決まった。僕はセラ・シルフィングを握る腕に力を込める。そして一回髪をかきあげて、滴る水を振り払う。

まあ雨は降り続けてるから意味はないけど、一回水を振り払って、

気持ちを引き締めたかった。

「行くわよ」

セラのその言葉の瞬間、雨のカーテンをくり貫いて金色の光が聖獣のボロボロの腕を直撃する。流石セラ、ナイスコントロールだな。

聖獣の声が綺麗な声から叫びに変わり、聖獣の腕がその攻撃で崩れた。その瞬間に解放されるクリエ。僕はそんなクリエをダイブしてキャッチするよ。

「クリエ！！」

「スオウ！！　スオウ！！　スオウ！！」

何度も何度も僕の名前を連呼して首に抱きついてくる。怖かったんだな。それが伝わってくるよ。僕はちらりと聖獣の方を見る。するとそのくり貫かれた様な顔面の中の光と目が開ったような気がしたよ。

だけどそれも一瞬。僕は握ってたセラ・シルフィングを凪いでベチャベチャに成った地面の泥を巻き上げて聖獣から離れる。

視界を奪って僕達が離れたタイミングでテッケンさん達が一斉に聖獣へと襲いかかる。これで本当に終わりだな。人質を失って、聖獣一機の攻撃でさえも耐えきれないその体じゃ、絶対にこの一斉攻撃を耐えきれる筈がない。

「「「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」」」

テッケンさんに鍛冶屋、そこにリルフィンも加わっての一斉攻撃。だけどその攻撃は地面から出てきた大きな蔦みたいな物に阻まれる。

「何！？」

更に蔦は周囲から次々と出てくる。聖獣の力？　だけどこんな事が出来るなら、体を引きずる意味なんて無かった筈だ。攻撃が阻まれた三人は別の蔦によって弾かれる。

「みんな！　――つっ！？」

弾かれたテッケンさん達の安否を心配してた僕達にも蔦は迫って来た。クリエを抱えた僕は蔦の連続攻撃から、クリエを抱えて素早く逃げる。これじゃあ近づくことが出来ないな。

「ちょ！？　なんなのよコレ？」

さっきまで優位な位置に立ってた筈なのに、いきなりの蔦の襲来にパニックに陥ってるよ。みんなそれぞれに自分の身を守りながら反撃してるけど、次々に出てくる蔦に苦戦してる。

「スオウ……」

「大丈夫だ。こんな蔦にやられる奴はいないさ」

僕はクリエを安心させる為にそう言いながら、襲い来る蔦を切り伏せていく。この蔦、数は多いけど強い訳じゃない。太くてそれなりに頑丈だけど、セラ・シルフィングなら一発で切れる。

「スオウ君、聖獣が！！」

そんな声がどこかから聞こえて、僕は聖獣の方へ目を向ける。すると蔦に巻かれて聖獣が立ち上がってる……と言うか、持ち上げられてる。

地上から三メートル位高い位置からこっちを見てるような……も

しかしたらあのまま蔦を利用して森の中に消えようとしてるのかもしれないな。
それは不味い。折角あそこまで追い込んだんだ。ここで逃がす事なんかしちゃダメだ。僕はセラ・シルフィングに雷撃を帯電させる。そして襲い来る蔦を切ると同時に、青白い雷をスパークさせる。
すると雨で濡れてるのも相まって、全ての蔦にその雷撃が流れた。青白い雷撃の光が蔦を包むと、地面から地鳴りの様な音が響きだす。
そして聖獣が掲げられてる真下から、本体が姿を現す。それはなんと貝みたいなモンスターだった。植物系かと思ったら貝かよ。
その貝の開いた口から沢山の蔦がニョキニョキと延びてるんだ。だけど土の中に居るだけあって、なんか苔とか付いてて綺麗じゃない。貝殻からはなんか草とかも生えてるよ。
しかもかなりデカいモンスターだ。有に四・五メートルはあるデカさ。口を開いた状態がって事ね。体の大きさは更にデカい。こんなのが居て気付かないとは……元からその場に居たんだろうか？
もしかして聖獣が呼んだとか？　だけどこいつは移動できそうには見えないな。罠を張って獲物が通るのをジッと待つタイプのモンスターじゃなかろうか。
聖獣の奴の運が良かったって事か……だけどその運もこれまでだ。本体が出てきたのなら、その本体を潰すだけ。

「よくやったわスオウ！！」

そう叫んでいち早く動いたのはセラだ。展開してた聖典で真っ先に本体の貝を攻撃しだした。勿論貝の堅い部分じゃなく、大きく口を開いてる部分を攻撃してる。
だけど効いてるのかはデカすぎてわかりにくいな。蔦も口いっぱいにあるし……流石に密集してる所は防御力高いだろうしな。
けどやりようはさっき見つけた。僕は手近な蔦を切りつけてそこからまた雷撃を全体に浴びせてやる。すると大きく貝がガンガン揺

れる。これは分かりやすい反応だ。しかも地味だろうけど、聖獣だってこの攻撃は届いてる筈。
地味に死んでくれる事を僕は期待してるよ。僕は次々に蔦を切り電撃を貝にぶち込んでいく。そんな僕を見てシルクちゃんや僧兵の人達も雷系の魔法で攻撃しだす。
どんどん削られて行くＨＰ。するとその時、空から雨じゃない何かが降ってきた。

「うおう！？」
「きゃあ！？」

所々から悲鳴が上がる。地面が揺れる程の衝撃を伝えて落ちてきたのはなんと木だ。デッカい森の木が、まるまる一本引き抜かれた感じで降ってきた。

「おいおい、今度はなんだ？」

森の方を見ると、なんだか森全体がザワザワと動いてる様に見えなくもない。すると今度は木が次々と落ちてくるよ。

「なっ――ちょ――これは」
「明らかに僕達を攻撃してるよ。別のモンスターの襲来だ！」

テッケンさんの言葉にみんな気を引き締める。マジで次から次へと……そう思ってると、雨の中から突然、人の形を模した木の人形みたいな奴が剣を振り回して襲ってきた。
僕はセラ・シルフィングで受け止めて、凪払う。けどこいつらは一匹二匹じゃない。次々と現れてる。そしてその時、更なる予兆を告げる光が四本、曇天の空に突き上がる。

終わらない戦い（後書き）

第三百二十五話です。
まだまだ終わらない聖獣戦。最後にはなんだか不吉な光も上がって、良い事がないですね。一体スオウ達は聖獣を倒せるのか？　リア・レーゼはどうなるか？　次回へ続きます。
てな訳で次回は月曜日に上げます。ではでは。

引き裂かれる事（前書き）

空に昇る四本の柱。それはリルフィンが言うには聖獣の封印が解けたかも知れない光らしい。なんてこった。どう考えても早過ぎる。僕達はどうにかあの一体だけでも……そう思って動くけど、なかなか上手くいかない。

そうこうしてる内に、とうとう奴等が揃う事に……

引き裂かれる事

豪雨の中、曇天へと立ち上る四つの光。それを見たリルフィンが何か不味そうにこう言うよ。

「そんな……まさかあの位置は……」

「なんだ？　どう言うことだよリルフィン？」

僕はウッドール共を切り伏せながらリルフィンに説明を求める。ああ、ウッドールってのは木の人形みたいなお粗末な体をしたモンスターです。こいつらが次から次へと森からこちら側に出てきてるんだ。

幾ら倒しても切りがない。

「あの位置は、残りの祠の位置だ。つまり、私達が壊しかけてそこを利用して出てきた奴とは違い、残りの祠は聖獣の力で破られたかもしれないと言うことだ！！」

「「「なっ！？」」」

僕達はリルフィンのその言葉に衝撃を隠せない。まさかもう聖獣達はその祠の封印から外に出たって言うのかよ。早すぎるだろ。こんなに早いんじゃ幾ら頑張ったって、五体全部を倒しきるのなんて不可能だったんじゃないか？

豪雨を受けながら、そんな考えの中、歯を食いしばって剣を振る。

「スオウ……なんだか怖い」

クリエが僕の首にぶら下がって震えてるよ。てか流石にこの態勢

はクリエも僕もやりづらいな。

「クリエ、肩車の態勢になれ。髪の毛掴んでていいから。そっちの方が楽だろ」

そういって僕はクリエの体を押し上げるよ。クリエは頷いて僕の背中側に回る。そしてしっかり固定した所で、両側の剣を振りかぶり、雷を周りに放つ。それによりウッドール共を一斉に蹴散らすんだ。

「どうだクリエ？　こっちの方が楽だろ？」

「うん……だけどなんだかね。クリエはクリエは……胸がザワザワするよ」

ざわざわね……奇遇だな。それは僕もしてる。遠くで光ってる光の柱は消えていく。あれが本当にリルフィンの言うとおりに聖獣が解放された光だったとしたら……考えたくない事がある。

だけど考えない訳にも行かないんだよな。

「リルフィン、マジで聖獣が解放された光なんだろうな？」

僕のそんな疑いの声に、リルフィンは懐をまさぐってある物を取り出した。

「これを見ろ。それぞれの祠に対応した鍵だ。その鍵であった札の文字が消えている。これはもうこの札自体に鍵としての効力が無くなった事を意味してる。

どうしてか……それは頭が悪い貴様でも察せよう」

最後の一言は余計だったけど、確かに僕にもわかる。根拠も無く

言った訳じゃないって事か。って事は益々、この戦闘事態がやばくなったって事だろう。

「スオウ……確か聖獣さんは五体居るって言ってたよね？　それでみんなが外に出てきた訳だから、きっとここに来ちゃうと思うよ！　だって誰だって友達を傷つけられたら怒っちゃうよ」

クリエが僕の頭にしがみつきながらそんな事を言う。確かにね……その可能性を僕だって考えてたさ。そして他のみんなだって……

「どうするんすか？　ここは一端引いた方がよくないっすか？　聖獣がもしもこの場に揃ったら、それこそやばいっすよ！！」

ノウイはウッドールから逃げながらそんな提案をしてくる。確かにそれも手だよな。聖獣一体もまだ倒せてない僕達が、同時に四体＋αの相手なんてして無事に済むとは思えない。

だからノウイの意見はちゃんと受け止めるべき提案。実際僧兵の人達もなんかウンウン唸ってるしな。

「確かにヤバいわね。いつも逃げ腰なアンタらしい意見だわ。まあ否定なんてしないし、尤もだとも思う。けどねノウイ。私はタダで逃げるなんて真っ平ゴメンよ！！

一体だけでもその首は貰っていくわ！！」

流石セラ。いつだって前を向いてるぜ。セラはウッドールをケチらしながら武器を組み替えてる。そして再び大きな手裏剣にしたら、体ごと回りだして勢い良く手裏剣を放つ。するとなんと、手裏剣が空中で四つくらいに分裂してるように見えるよ。

四つに分裂した手裏剣はガードに来てる蔦とそれぞれがぶつかる。分裂した一つ一つを犠牲にして、本体が進んでるって訳だ。

これは行けるかも知れない。僕達が追いつめた聖獣はもうボロボロ。後一回攻撃がクリーンヒットすれば、もしかしたら……そんな期待を込めて僕達はその行く末を見守る。

「行けええええええ！！」

僕の肩にのっかってるクリエが拳を突き出してそう叫ぶ。だけど手裏剣は下から伸びてきた蔦によって進路を微妙にズラされた。この貝も考えたな。自分の蔦じゃ守りきれないと判断したから、軌道をズラす方向にシフトしたのか。

確かにああ言う攻撃は僅かでも軌道がズレれば直撃は難しくなる。ホーミング機能でも付いてれば別だけど、あの手裏剣がそこまで高性能だったことはない。そして案の上、手裏剣は聖獣の横を掠めて行くに止まった。

「ああ～」

と残念そうなため息を漏らすクリエ。だけどどうやらセラはそれも想定済みだったみたいだ。僕には見える。雨の中、金色の光が四つほど輝いてるのがさ。

「甘いわね。手裏剣の攻撃は全てがこれの準備の為の囮よ。さあ！聖典の光に落ちなさい！！」

その言葉と共に聖典四機から放たれる光。囲む様に配されたその位置からの攻撃を聖獣はよける事なんか出来ないだろう。

セラの奴、あの手裏剣に全てを託したかの様に見せておいて、最初から聖典を仕込んでいたなんてやるな。手を使わずに操れる聖典だから出来ることで、セラの聖典を操る適正と技量があってこその作戦。

聖典の放った攻撃に既に蔦は間に合わない。これは行ける。今度こそこの場に居る誰もが確信したよ。でもその時だ。空から何かが降ってきて、聖典の光を吸収しだす。
それと同時に、どこからともなく聞こえる悲鳴と足音。そしてそれは僕の側をも突風の様に駆け抜ける。

「ぬぐあ！？　――なんだ？」

地面に膝を付いて顔を上げると、貝の近くにそいつ等は集まってた。そしてその中の一人が丁度落ちて来た盾をその手に取る。その時僕は気付いたよ。

「あの盾……まさか……」

そう思ってると、案の定盾からはさっきの聖典の攻撃がはじき出されて、聖典を直撃した。赤い炎と共に墜落する聖典。その爆発音が聞こえてる中、僕たちはその現れた奴らから目を離せずにいた。

「やっぱりあの盾は聖獣が持ってたのと同じ……それを持っててしかもなんだか奴ら聖獣と同じ色をしてる。それってつまり……」

ここまで来たらもう連想ゲームみたいだな。誰も口にしないけど、きっとみんな誰もがそう思ってる筈だ。この目の前に現れた四体は……多分残りの聖獣なんだろう。
僕達は警戒心マックスで奴らを見据える。聖獣と同じ石膏みたいな体。だけどその体つきとかはバラバラだな。しかも中には武器を持った奴も見える。
一体あの武器にはどんな恐ろしい機能があるんだろうか。考えたくもないな。そう思ってると、シルクちゃんがこんな事を言ってくる。

「あれ？　スオウ君、クリエちゃんはどこですか？」
「何言ってるんだよシルクちゃん。クリエならここに……」
僕はそう言ってクリエが居るはずの頭の後ろ等辺に手を伸ばす。だけどそこに感触はない。スカッと手は通り抜けるだけ。よく考えたらさっきからクリエの体重を感じないな。
「居ませんよクリエちゃん……そこに居たはずなのに、居なくなったって……それじゃあどこに……」
僕とシルクちゃんは辺りを見回す。だけどクリエの姿は見えない。くっそ、雨がうざったいな。
僕とシルクちゃんがクリエを探してると、なんだかモンスター共が攻撃を止めて森の方へと動き出す。そんな奴らを見てノウイが緊張が解けた様にこう言うよ。
「よかったっすね。どうやら自分達は見逃して貰えそうっす」
「アンタね……」
ノウイの言葉にセラが目くじらを立ててる。だけどセラも動こうとはしない。それはセラだってわかってるからだ。今奴らと一戦を交えても勝てる見込みが殆どないって事を。
そして奴らも僕達なんて眼中に無いと言う感じで振り返りもしない。僕達が襲え無い事を向こうもわかってる。だけど今はそんな事よりクリエなんだ。
あいつ一体どこに？
「一体いつ居なくなったとかわからないんですか？」
「それは……」

一体いつ？　ついさっきまでは確かに肩車してた筈だ。攻撃だって受けてな……いや、待てよ。そう言えば思い当たる節があるぞ。ついさっきまで確かにクリエはここにいた。でも今はいない。その間に思い当たる節があるとすれば一つしかないじゃないか。

それはあの聖獣共がここに現れた時の事だ。僕はあの時、奴らの勢いに膝を付いた。そしてその後にシルクちゃんに指摘されたんだ。

「待ってください……それってつまり……」

シルクちゃんは僕の言葉を聞いてピンと来たようだ。ああ、それってつまり、クリエは聖獣に連れてかれてるんじゃないかって事だ！！

だって周りを見渡しもどこにも居ないなんておかしい。もしも落ちただけなら、クリエは足下に居るはずだ。僕の側を離れるなんて事はしない。

だけどクリエは僕の側には居ない。それならもうそれしか考えられ無いじゃないか。僕はその場でセラ・シルフィングを掲げた。

そして帯電してる雷撃を空に向かって打ち放つ。落ちるはずの雷が空に昇り、放電のスパークの音と青白い光が周囲に広がった。

「スオウ君なにを……」

シルクちゃんのそんな声が聞こえた。何を？　そんなの決まってるよ。僕は確かめたいんだ。だからこっちをイヤでも見てしまう様にしてやっただけ。

響いた雷撃の音に案の定モンスター共は立ち止まる。そしてこちらを振り返るんだ。てか、あのデカい貝も動けるには動けるらしいな。

そして聖獣四体もこちらを見る。だけどその中の一体がこちらを

向かない。元が雨のせいで良く見えないんだけど、十分だったよ。だって小さな足がジタバタしてるのは辛うじて見えたんだ。
僕はその瞬間に動き出してた。強く地面を蹴って一気にモンスター共へ迫る。後ろから色々と声が聞こえたけど、聞く耳なんか持たなかった。

「クリエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

目の前のウザいウッドール共を雷撃で凪払い、聖獣までの道を作る。僕は一気に接近戦に持ち込む為に開いた道を抜ける。奴らは全員が攻撃吸収の盾を持ってるから、近づいての攻撃、それが一番良いはずって判断だ。
けど振り返ってない奴の所まで行くには無傷の聖獣三体を抜けないと行けない。

（上等だ……）

僕は腹を決めて向かってくるガタイのいい魚人みたいな聖獣のご自慢の筋肉とぶつかりあう。筋肉モリモリのからだ。尻からは魚の尾が生えてて、耳は僕達のとは違い、薄いヒレみたいになってる。
人魚族の男バージョンに似てるけど、こいつはどっちかって言うとやっぱりモンスターより。だって顔は魚っぽいもん。プレイヤーが分身とする人魚族の男の顔はちゃんとした人ベースだ。
だからこいつは似てるようで似てない。というか……もしかして聖獣って五種族を模したモンスターじゃないのだろうか？　てか魚顔のくせにコイツも仮面を付けてる所にイラッとくるな。
そう思ってると、魚聖獣の口がグアパっと開き、降っている雨を口の周りに集めだした。僕はイヤな予感がしたから、一端距離を取るために、後ろへ飛ぶよ。
するとその瞬間、超高圧に圧縮されたビームみたいな攻撃が僕の

居た場所を盛大に抉る。しかも地面を抉りながら方向修正して来やがるじゃないか。
だけど僕はその攻撃を交わして一気に魚聖獣の懐へ。後ろの方でなんか被害が出た様な声が僅かに聞こえたけど、今は無事を祈って攻撃を決める。
重量級の聖獣だ。僕は一回転――二回転――そして三回転とセラ・シルフィングで切りつけて強引に退かす。

「次！　――っ」

魚野郎を退かした瞬間に前を見ると三枚の刃がズレて展開してる、刀っぽい武器が僕の左肩から体を切り裂く。だけどそんな僕は影の様にズレて消え去っていく。
忘れて貰っちゃ困るけど、僕には一回だけ物理攻撃を絶対回避出来るスキルがあるのだ。いつだって念の為にそれを発動してる。
だからそのスキルを使って目の前の、今度はスレイプル模してるんだろう聖獣を切りつける。

「くっそ、相変わらず堅い！！」

だけど僕は反撃の隙を与えない程高速でその体に僅かだけど傷を残して行く。二刀流の手数の多さを最大限に活かす。
なんだか爬虫類っぽい感じの鱗がスレイプルの模様に見えなくもない聖獣だ。そしてやっぱりコイツも仮面をしてるよ。ヴェネツアの派手な奴じゃなくて、どっちかって言うとシャアがつけてそうな目元を隠す奴。
いや、それはシャアと言うかクワトロさんだっけ？　まあどっちでも良いことか！　僕の攻撃が相当ウザかったのか、そのスレイプル型の聖獣は驚いた事に自分の片腕を武器へと変形させて反撃してきた。鋭利な長刀が僕の胸元を切る。

胸元には防具をしてた筈だけど、いかんせん僕の防具程度じゃこの強さの敵が使う武器の攻撃を防げないみたいだ。バター並にすっぱりと切れて、血が勢いよく飛び出た。
そして切られた防具は地面へと落ちる。一応アルテミナスで新調したものだったのに……これじゃあ買い直しだ。ＬＲＯは武器も防具も耐久性って奴がある。武器だって折れるし、防具は攻撃を受ける度にその耐久性が減っていく。
だけどどっちもちゃんと戦闘後にメンテをすればその耐久性も戻る訳だけど……防具は戦闘中にブッ壊されたらそれまでだ。
武器は直す事も出来るけど、防具は基本買い換えらしい。――って、感傷に浸ってる暇はない。血が出てるって言っても皮一枚程度だ。気にする程度じゃない。それよりも問題なのは、奴の刃物に変わってた腕が今度は砲撃しようとしてるって事だろ。
穴が開いた腕に光が見える。

「くっ！？」

僕は急いでその場から転がって離れる。するとその瞬間に大きな水柱……と言うか泥柱的な物があがった。ベチャバシャベチャと周りに大量の泥をまき散らし、自身にもそれは掛かってる。だけどそんな事聖獣は気にしない。奴は再び僕にその腕を向けてくる。今度は外さないようにか、四つん這いになってる僕の顔の数センチ上から狙ってやがる。流石に近すぎだろう。
絶対に砲撃の影響を受ける。だけどそんなダメージは頑丈な聖獣には関係ないか。集まり出す光。そして再び砲撃が放たれるその時、僕はその腕にセラ・シルフィングを突っ込んだ。
その瞬間、砲撃に向かう筈のエネルギーが聖獣の腕の中で暴発する。僕と聖獣はその爆発の渦に飲まれる。

「ぐはっ……」

爆炎の中から僕は吹き飛ばされて地面を転がる。体が所々焦げてるけど、見た目ほどダメージを受けてない。やっぱり爆発のメインは聖獣の腕の中で起こったからだろう。
僕が態勢を立て直してると、爆炎の中から聖獣が姿を現す。その片腕はさっきの爆発で砲芯が花びらみたいに広がっちゃってる。
あれではもう砲撃は出来ないだろう。スレイプル型のコイツはかなり人っぽい方だけど、やっぱり良く見ると人とはちょっとかけ離れてるな。頭に変な突起物あるし、鼻もなんか平べったい。それに大きく裂けた口には細かな牙が一杯だ。
だけどコイツは無理に人型になってる感じじゃない。さっきの魚は無理ありすぎたからそう思うのかも知れないな。
そんな無理のない聖獣は仮面の中の瞳？　を光らせてこちらに武器を向けた――と思ったらその武器を壊れた腕に突き刺した。

「はっ？」

僕はそんな声を出してしまうよ。だって気が狂ったとしか思えない所行だもん。だけどその突き刺さった武器は、次第に聖獣と同じ石膏の様な色をしていき、そしてなんと元の腕に戻ったよ。
なんと言う事だ。武器を使って再生しやがったよ。確かにスレイプルらしくはあるけど……武器を無くしてどうするんだ。
コイツも腕に付けてる盾を武器に使うのだろうか？　そう思ってると、今度は前のめりになる聖獣。するとその背中がボコボコと蠢きだし、一気に上空へ何かを放つ。

「なに――――――がっ！？」

上を見た瞬間にすれ違いざまにザクッと地面に刺さった物。それはどうみても剣です。ってことはつまりだよ……雨と共に大量の武

器が僕の周りに落ちてくるって事じゃ……

「うわっわっわわ！！」

僕は慌てて武器を避ける。アイツが武器をその体の回復に使えたのもこういう事か。奴が生み出した武器だからこそ、体の一部に戻ることも出来る。

空から降ってくる武器を僕が必死に避けてると、聖獣がその突き刺さってる武器の一つを持ってこちらに迫る。再び僕と聖獣は激突する。拮抗し攻めぎあってると、ウサギみたいな垂れ耳を持った別の聖獣が加勢してくる。

その小ささから直ぐにわかる。あのウサギっぽい奴はきっとモブリを模してる……って事はメインの攻撃は魔法。

「やらせるか！！」

魔法なんて打たれると厄介だ。僕はスレイプルの方の攻撃をいなして奴の後ろに抜ける。だけどそれを早々許す訳がないよな。

けどここで僕は今までの攻撃の成果を使うよ。聖獣の体に刻まれたこのセラ・シルフィングから受けた傷。

それはこのスキルのための物だ！！　その瞬間奴の傷から解放された雷撃が溢れ出す。それによって一時的に動きが止まるスレイプル型の聖獣。

「そこを退けえええええ！！」

僕はそのままモブリを模したウサ聖獣へと突っ込む。詠唱の暇なんて与えない。それが魔法の最大の弱点だからな。

僕は一気にウサ聖獣を斬り裂く。もの凄くアッサリと決まった。だけど斬った瞬間におかしいとも感じたよ。だって石膏の体の感触

すら無かった。
本当は斬るというよりも、体小さいから殴り飛ばす感じていこうと思ってたんだ。そして進路を確保する。まあだけどどっちでもいいや。これで道は出来たんだ。
僕は最後の聖獣へ向かう。今は一体一体を倒す事なんか考えてない。クリエを助ける。それが最優先事項だ。そう思ってると、どこかから指をパチンと鳴らす音が聞こえた。それと同時に僕の足下の地面が異様にぬめる――というかこれは沼みたいになってるような？　何だこれ？　するとなんだか僕の周りが暗くなっていってしまう。そしてその暗い空間にさっき斬った筈のウサ聖獣の姿が。何故かシルクハットまで被って周りをクルクル回ってやがる。
それになんだかどんどん増えていくような。そして次々とパッチンパッチンと指を鳴らす音が聞こえると同時に、暗闇の中から見覚えのある顔ぶれが出てくる。

「お前たち……なんで……」

それはシクラや柊や、今まで倒したモンスターの数々。てかやっぱりこれにもシクラ達が関わってるって事か？　僕がそう思ってると、現れた奴らが僕を一斉に襲ってくる。移動できない中、これはズルい。
そんな中、ウサ聖獣はジェスチャーで笑いを表現してた。それを見てちょっとわかった。これはきっと本人じゃない。そもそもあのお喋りなシクラが何も言わずに襲ってくるなんてないし、シクラや柊の攻撃にしては生温い。
それに今まで倒した敵ばかりが出てくる所を見ると、きっと僕の記憶か何かからこの連中を見せてるんだろう。つまりはこれも魔法だ。変な空間に閉じこめられたのかも知れない。
なら……僕はセラ・シルフィングに雷撃を帯電させる。そしてそれを放ちその衝撃で空間ごと破壊する！　そうしようとしたら両腕

をシクラと柊に押さえられた。
そして目の前に何か大きな者が現れる。それは最初に僕が退治したボス級のモンスター。悪魔の姿だ。僕は必死に二人を引き剥がそうとするけど、二人とも嬉しそうに僕に抱きついてるよ。こんな顔いらない。こんな奴らじゃないし。
そう思ってると悪魔の奴の巨大な拳が僕に迫る。だけどその時、暗い空間に亀裂が入って声が聞こえた。
「「スオウ！」」「「スオウ君！」」
それは僕が最も頼りにしてる仲間達の声。

引き裂かれる事（後書き）

第三百二十六話です。

クリエはどうなってしまうのか！？　それは次回に続くとして、これからどうなっていくのかが大変ですね。まだ一体も聖獣倒せてないし……問題はこれだけでもない。

おいおい、タイムリミットまで間に合わないんじゃないか？　位の勢いですね。取り合えず次回は水曜日に上げます。ではでは。

雨は続く（前書き）

連れ去られてるクリエを助けるために僕は一人で突っ込んだ。だけどたった一人で聖獣に向かうのは無理がある。そんな事考えないようにしてたけど、やっぱり無理はあったんだ。

だけどそんな時、みんなが来てくれる。頼りに成る仲間を加えて、僕達は勝利の基準を変えて奴らに挑む。それはクリエを助け出すって事を最優先にしてって事だ。

雨は続く

砕け散る空間と、消えていく柊にシクラ、そして悪魔を含めたモンスターどもの姿。雨の打ち付ける音が戻り、その感触も感じれる。僕の周りには頼もしいみんなの背中が見える。

「みんな……どうして？」

僕がそんな的外れな声を出すと、僕の名前を呼んでくれたみんなの中のセラがこういうよ。

「どうして？　そんなのアンタがいつものようにバカばっかりやるからに決まってるでしょ。一人で行かないでよ。私達を……仲間をなんだと思ってるのよ！！」

セラの言葉の後に、みんなが僕を見る。その暖かな視線は、雨で冷えた体に染み渡るよ。

（そうだ……セラの言うとおりだ。みんなはこうやって僕にいつだって付き合ってくれるのに……僕はまだわかってなかった）

僕は顔を俯かせて、こみ上げてきそうな何かを隠す。するとその時、再び指を鳴らす音がリズミカルに聞こえる。僕はすぐさまあのモブリ型の聖獣の攻撃の合図だとみんなに伝えるよ。

「この音、あの小さな奴の詠唱短縮の手段だと思います。きっとまた魔法が……」

かけられた事に気づきも出来なかった魔法だ。僕は十分な警戒を促す。すると周りに打ち付けてる雨がどんどんゆっくりに成ってるような。

まさか目が良く成りすぎてこんな風に見えてる……とかじゃないと思うし、ならこれはやっぱりウサ聖獣の魔法効果。ゆっくりと空中でスローモーションの様になってた雨がついには制止する。

それはまるでカメラでこの瞬間を切り取ったみたいな世界だ。

「雨が止まったっす……」

ノウイがこの異常な光景を見てそう発する。

「これは……迂闊に動かない方が良いのかしら？」

「いや、寧ろこの状態が攻撃の前段階だとしたら、今の内に動くのが正解かも知れないよ」

セラとテッケンさんがそれぞれどうするべき話してる。確かに迷う所だよ。雨は土砂降りだったから、少しでも動けば触れる位の所で止まってる。動くべきか動かないべきか……

「スオウ君はどう思う？」

ここで僕に振るんだ。経験豊富な二人の見解を期待してたんだけど、どうやらどっちを選ぶのが正解かなんて、経験でもわかるものでもない。

だからここの判断は僕に委ねてくれるって事だろう。

「そうですね……」

僕はこの停止した雨を無視してクリエを抱える背の高い聖獣をみ

る。そして決めたよ。

「僕は動きます。臆病風に吹かれた時の自分を後悔なんかしたくない。何が起こるのかなんかわからないですけど、今僕は一人じゃない……だからきっと大丈夫ですよ」

「――よし、なら行こうじゃないか！！」

僕の言葉に納得してくれたみんな。僕たちは一斉に動く。実際一番怖かったのは最初に雨粒に触れる時。爆弾にでも変化してたらどうしようかと思いながらヒヤヒヤしてたけど、そんな心配は実際なかった。

僕たちは普通に雨粒を弾いて進むことが出来たよ。僕とセラと鍛冶屋とテッケンさんはクリエを取り戻す為に、最後の聖獣の元へと向かう。

ウサギな感じの聖獣はなかなか姿を現さないからこの際無視だよ。いちいち探してなんかいられない。シルクちゃんとピクは後方支援。いざという時の要員として待機するのがノウイだ。

僕達四人は止まった雨の粒を弾けさせながら前へと進む。不思議な感覚だ。雨が空中で止まって、そして目の前の聖獣も動かないから時間が止まってるのかの様な錯覚に陥る。

だけどそうじゃないってのは確実。それに実際時間を止めるのなら、なんで雨と仲間を止めて、敵である僕達が自由に動ける仕様なんだって事になる。

そんなの絶対におかしいからな。普通逆だろ。でもそれならこの雨を停止させた意図が謎だな。一体なんの為にこんな事を？

まあわからない事に頭を使ってる場合でもないな。僕達は今から最後の聖獣とのバトルに突入するんだ。余裕ぶって微動打にしないけど、せいぜいそうやってるんだな。

僕達はそれぞれの武器にスキルをまとわせる。それぞれ纏ったス

キルの特色が現れる色の光が武器から輝く。そんな光が線を帯びて一体の聖獣へと向かってるんだ。
そしていざ攻撃――そんな時に、再び聞こえたパチンと指を鳴らす音。だけど僕達は今更それを気にする余裕なんてなかった。
でもその時、後ろに行るシルクちゃんんとノウイ――よりも更に後ろで動けなくなってたリルフィンが何かに気づいたのか、声をあらげてこう叫ぶ。

「今直ぐその場から離れろ！！」

僕達は視界の端でそんな事を叫ぶリルフィンを確認したけど、その意味は分からなかった。何をそんなに慌てる事があるかわからない。相変わらず目の前の聖獣は微動打にしないし、ここで攻撃を中止したらクリーンヒットが決まりそうなこの状況を不意にする事になる。
それは余りにもおし……ん？
一瞬目を離した隙に、聖獣の背中から石膏の羽が現れた。そしてそのコウモリっぽい羽を羽ばたかせて、聖獣は一気に僕達の間合いから離れてく。

「くっそ――――ん、何だ？」
悔しい言葉を噛みしめる前に僕の視界には何かが映る。というか映るべき空がなんかおかしく見えるような。羽を出して羽ばたいた聖獣の姿を追って視線が上に向いたから気付いた。
気付いた……けどこれはなんだ？

「ちょっ――これって――」

セラは一瞬でこの空から大量に迫る物の正体を理解したらしい。だけどそれを聞く前に、僕達の声は叫びに変わり、周囲はその何か

に埋め尽くされる。
体を潰しかねない信じられない位の水圧が僕達を襲ってそして、何故か今は上も下もわからない無重力の渦の中で僕の意識は薄らいでた。

（なんだこれ……水？　いつのまに海に……）

そう思うほどに大量な水の中に僕はいるようだ。朦朧とする意識の中で、僕は必死に手を伸ばす。上も下もわからないけど、ただただ離したくない手を探すように。

（クリエ……クリエ……クリ……エ）

この水の流れが僕とクリエを離してる様な気がする。いや、実際離してるんだろう。このままた僕は、離してしまうのだろうか。セツリと同じように……クリエも。

（そんなの……）

僕は水中で水の流れに逆らう。歯を喰い締めると力を入れすぎて空気が漏れていく。だけどそれでも、この思いは変わらない。
僕は両のセラ・シルフィングに力を込める。そしてこの思いを吐き出した！！

（絶対に認めるかあああああああああああ！！）

二つの風のうねりが僕の周りの水を押し退ける。荒い息を吐き、僕はその羽根を広げて空を舞ってる聖獣を見据える。
そしてフラフラのまま一歩を踏み出して、左側のうねりを聖獣へと向けた。再び降りしきる雨を貫いて迫るうねり。だけどそのうね

りは奴らが持つ盾に寄って阻まれる。イクシードのうねりもその盾へと吸収されていくんだ。
だけどそれ位はこの朦朧とした頭でもわかる。わかってた事だ。だからこそ、僕は残りの力をありったけ込めて右側のウネリを振り抜いた。

「イクシードを舐めるなあああああ！！」

盾は左側のイクシードを防いでる。だからこそこの攻撃を防ぐ事は出来ない。イクシードのウネリが聖獣へと直撃する。その瞬間、奴は腕に抱えてたクリエを落として、空を突き抜けて行く。
空から地上に真っ逆さまに落ち出すクリエ。僕は攻撃を途中で切り上げて、フラフラの足を前へ前へと無理矢理動かす。
流石にここまで来ると両腕のセラ・シルフィングが重い。

「ハァハァ――ッッ」
次第に足で力強く地面を蹴り、更に早く走る為にセラ・シルフィングをその手から離す。ゴメンよ、セラ・シルフィング。だけどクリエの為だ……だからこそ理解してほしい。
鞘に戻す時間さえ惜しかった。僕はクリエが落ちてくるその場所に先に居なきゃいけないんだ。そしてちゃんと受け止める。それは僕の役目のはずだから。

「クリエエエエエエエエ！！」

僕はぬかるんだ地面を蹴ってダイビングヘッドよろしく、おもいっきりジャンプする。きっと受け止められる、僕はそう信じてる。だけどその時、クリエは僕の腕に落ちてくる少し上で何故かピタリと止まったんだ。

「ぬなっ！？」

そんな声を出しても、空中で止まったクリエが僕の腕に落ちてくる事はない。僕はクリエの下を通り過ぎて、ぬかるむ地面へとまさにダイビングヘッドした。

ビッシャビシャになる体。泥で全身覆われた感じ。まあだけどこの雨で、気にせずとも洗い流してくれるだろう。それよりも空中で止まったクリエだ。

口に入った泥を吐き出しながら僕はクリエを見る。良く見るとクリエの体には細い糸の様な物が絡まってるのがわかる。

あれがクリエを中空に釣り上げてるのか。それならあの糸を切れば――ってセラ・シルフィングがない！　そうだ、途中で投げ捨てたんだった。

僕は急いでセラ・シルフィングを取りに戻ろうとするけど、そこで再び上へと上がってくクリエに気付く。どうやら聖獣がその糸を手繰り寄せてるみたいだ。

このままにしておくとまたクリエが聖獣の手の中へと行ってしまう。僕は地面の上に放置されたセラ・シルフィングとクリエを見る。確実なのはセラ・シルフィングを拾ってクリエを助ける事だろうけど、そんな時間的猶予はない。

僕は上昇していくクリエに飛びつくよ。

「行かせるか！　絶対にお前の事は守ってやる！　それは……絶対なんだ！！」

僕がクリエに抱きついた事で、一瞬ガクンと下がった糸。だけどそれでも地面につくほどじゃない。それに再びその糸は僕ごとクリエを持っていこうとしてる。

細い癖になんて頑丈な糸だ。僕はウインドウを表示させて、アイテム欄の中から、ナイフを取り出す。何の変哲もない……ただ敵を

倒した時にたまたま手に入ったナイフ。念の為に売らなくてよかったよ。
僕はそのナイフでクリエを縛ってるその糸を切ろうとする。だけど糸は想像以上に頑丈だ。やっぱりただの糸なんかじゃない。そう思ってると、再びあの音が聞こえた。
パチンパチンと指を成らす音。すると水の固まりが僕の体を目指してぶつかって来るじゃないか。しかも水だからって思ってるととんでもない威力でビックリだ。
体に当たる度に激しく弾けて、体の内側にまで衝撃を伝える――そんな感じ。

「ぐっ――づあ！――がっは！？」

四方八方から次々と迫るそんな攻撃。どうやら僕を落としたいらしいけど……そうは行くか！！　僕は攻撃を受けながらも必死にクリエの体にしがみつく。

（離してたまるか……）

そんな思いで僕はただただ攻撃に耐える。ＨＰがどんどん減っていくけど、それでも自分から離す事なんか出来ない……してたまるかよ。
そうやって必死にしがみついてると、ピタリと衝撃が止む。耐えきったって事か？　そう思ってると後ろの方から羽根の音とそれに伴う風が感じられる。視線を後ろに向けると、そこには最後の一体の聖獣の姿があった。
尖った長い耳と長身の体……こいつはエルフを模した聖獣か。て、事は僕達が最初に追いつめた奴が人型だった訳だ。メドゥーサみたいな奴だったから、良くわかんなかった。
こいつは一体どんな力を持ってるやつなんだ？　エルフもあんま

り予想出来ない。特徴っていったら、さっき行った所位で人よりも体が大きくてスタイルがいい位しか思いつかない。
その分、ウンディーネやスレイプル、モブリは分かりやすい。魚に武器を生み出す体質に、魔法徳化のウサギの様な体型。
でもこいつはみる限りおかしな――と言うかモンスター的な外見が余り見つからない。普通にそこら辺のエルフと混じっても、もしも体の色が同じなら見分けなんかつかないかもしれない。
それほどモンスターっぽくないんだ。特徴は背中の羽根と腰の後ろ側に幅を取って差してる長刀くらいな物。まあ後は忘れてはいけない仮面。
聖獣は何もいわずにその腰にある刀へと腕を伸ばす。どうやら邪魔な僕を切り捨てようって腹らしいな。くっそ……なんでクリエなんだよ。

（ん？　待てよ……）

自分の中で言った一言……僕は今まで考えて無かったことに気付いた。そうだ、なんでクリエにこうもこいつら拘ってるんだ？
最初のあのメドゥーサ野郎は逃げるために利用出来るクリエを人質に取った。そう思ってた。だけどもしかしてその時から違ったのかもしれない。
だって今は奴らの方が何倍も有利だ。今の僕達の戦力じゃあ、どう考えたってこいつらと相対するのは厳しい。それなのに、わざわざ人質を取る必要なんてないじゃないか。
でも奴らはこうやってクリエを狙ってる。そう……聖獣はクリエにこだわってる。これはきっと紛れもない事実だ。いままで巻き込まれただけと思ってたクリエだったけど、そうじゃない。
明らかに聖獣の狙いはこいつへと化してる。
僕は力が抜けそうな腕に必死に力をかき集めて落ちないようにしつつ、聖獣へとその疑問をぶつける。

「貴様等はなんでクリエを狙う？　こいつはお前たちにとってなんなんだ？」

答えなんか期待しちゃ居なかった。だって聖獣だしな。喋った奴も居たけど、それはかなりお粗末な言葉だった。だけどそれでも知りたいじゃないか。聞かずにはいられない。

自分を頼ってくれる奴を狙う不届き者共の理由。知っておいて損なんてないだろう。まあ教えてくれたらで、こいつが喋れたらだけど……雨のカーテンが僕達の間に降り注いでる。音の激しさは時間が経つごとに増して言ってるような気さえする。

そんな中、僕の言葉を理解するの為の間なのかどうかわかんないけど、変なにらみ合いの時間が続く。答える気があるのか？　そんな期待が少し募る。

だけどその時だ。下から僕とクリエを包む光が昇ってきたのは。

「なんだ？」

そんな声を出し下を見てみると、残りの聖獣が勢ぞろいして、複雑な魔法陣を地面に描いてる。おいおい、何をやろうとしてるんだこいつらは……

聖獣があわさって作る魔法陣から不気味な紫色した光があふれてる。そして周囲ではビキバキとその力の影響か変な音が聞こえてる。

僕の頭に警報が鳴り響く。どう考えても不味いことが起きる。てかそれしか考えられない。僕は羽根付き聖獣から視線を逸らしてクリエを解放するために、糸を切る作業に戻る。

「くっそ……切れろ！　切れろよ！！」

幾ら引いても押してもクリエに絡まってる糸は切れそうにない。

と言うか、傷一つ付きやしない。本当でたらめな強度だな。
それかやっぱりナイフがショボ過ぎるかのどっちかだな。後者ならこれを気にもっと良いのに変えると心に決めたよ。
だけど問題は今この瞬間なんだよな。今、この糸を切れないとクリエを救う事は出来ない。すると今までおとなしく眠ってたクリエに異変が……

「うぅ……あぁあああ……」
「クリエ？　おい、どうした！？」

突如苦しみ出すクリエ。するとその時、僕の左腕にも異変が。

「づっ！」

テトラに受けた呪いの痣が色濃く浮き出て来る。そしてざわざわと体を浸食する感触がわかる。まさかクリエもこれと同じような事が？
そう思って苦しんでるクリエをみると、その全身には背中にあった筈の二人の神の模様が行き渡って来てた。

「これは……」

ざわざわする呪いを必死に押さえつけながらそんな事を呟く。そして気付いたら、何かよくわからない……理解できない言葉がこの光の内部で紡がれてる。
それは聖獣の声？　こいつら本当に一体なにをする気なんだ？
次第に激しさを増していくクリエの声。僕は何も出来ない自分の無力さが悔しい。こんなに苦しんでるのに、僕はしがみついてる事しか出来ないんだ。
全身に広がった二つの模様。それは次第にクリエの臍あたりから

空中へと流れ出す。どんどんどんどんその二つの模様が流れ出し空中で球体を作り出してる。
　するとその模様が流れ出すのと連動するように、クリエの叫びは大きくなり、一定のラインを超えた辺りから、声を出す力もなくなったのか、不自然に力が抜けた様に体がぐったりとした。
　それはもの凄く不安に成る姿。だってまだ模様は流れ出てるのに、さっきまでの叫びが嘘の様に静かで、それに顔色も蒼白に成っていく様に見える。
　僕は一か八かその模様が溢れだしてる箇所を押さえ込む事に。だけどそれは容易じゃなかった。この模様はもしかしたら神の力その物を表してるのかもしれない。だからその流れを妨げようとした僕の手にはもの凄い力の奔流が押し寄せる。

「ダメだ！　戻れよ！！　いや、出ていっても良いけど、クリエの命ごとは止めろ！！」

　この力が無くなればクリエは普通にきっとなれる。誰にも狙われることも、利用されることもなく、同じ年代の子と一緒に学び笑えるだろう。
　時には泣くこともあるだろうけど、きっとずっと楽しい毎日に成るはずだ。だからこんな力はいらない。幾らでも持っていっていいさ。
　だけど……こいつの先まで奪うことは容認なんて出来ない！！
だから僕は必死にその流れを止めにかかる。呪いが浸食した腕を強引にクリエの臍の線にするんだ。
　溢れ出す力の奔流に押し戻されそうになったり、その力で指の爪の間から血が流れ出たりしてる。
　けど、もう痛さなんて実際良くわからない領域に達してる。それにそんなの気にしてられるか。このままじゃクリエが……こんなに近くに居るのに、それを黙って見てるだけなんか出来るわけがない

んだ。
「うおおおおおおおおおおおおお、そんなに力がほしいのなら、この腕の呪いもくれてやる！！　同じ神の力なんだから、満足だろ！？　だからこいつの命の分は持っていくんじゃねえええええ！！」
溢れ出す模様を僕は押さえる。だけど指の隙間から溢れ出すのを止められない。だけど僕は願うよ。
「行くな！　行くな行くな行くな行くな行くな行くな行くな行くな行くな！！」
するとその時だ。クリエの白い方の模様が反応した。空中に飛び出したその片方の模様は僕の腕を直接通り抜け再びクリエの中へと入ってく。だけど黒い方の模様。僕の腕にある方と同じ模様はドンドン出ていく。そして空中には真っ黒な模様の球体が出来あがった。
すると羽根付きの聖獣が鞘から抜いてない刀で僕を殴り飛ばす。かなり強烈な一撃。一瞬の内に、クリエに巻き付いていた糸が引き伸ばされて切れた。解放された訳だけど、僕はそれを知る間もなく地面を転がる羽目に。僕は眠ったクリエを守って地面にぶつかる。背中に伝わる衝撃に空気が強制排出された。
だけど……なんとか離さずにすんだ。僕はそれに満足してクリエを抱きしめる。良かった……のかはまだわからない。だけど両方の力が吸い取られていた時よりも顔色は良いし、何よりも息をしてる。
クリエはまだ生きててくれてるんだとわかる。だからいいんだ。するとその時僕は気付いた。お札の力で雨に濡れない筈のクリエ。その瞳から涙が一滴流れてる事に。
「スオウ君！」
「テッケンさん……」

何とかあの水流から復活してみんながこちらに駆け寄ってくる。
「クリエちゃんはどうなりましたか？」
「この通り、なんとか取り戻したよ」
僕は腕に抱えるクリエをシルクちゃんへとみせる。するとホッと安心した息を吐くシルクちゃんは、隣に膝をついてクリエの頭を撫で撫でするよ。
「良かった……」
「まだですよシルク様。アレはどういう事か説明しなさい」
セラの奴が僕達の優しい空気を壊して状況説明を求めてくる。全く……その通りまだ終わっちゃないな。気を緩めるには早かった。
僕は空にある球体を見つめ口を開く。
「アレはクリエの中にあった神の力……だと思う。それを奴らが特殊な魔法で抜き出したんだ」
「なっ！？　じゃあ奴らはその力を手にしてますます強く成ると言うことか？」
「そこまではわからないけど、不味いことは確かだよな」
鍛冶屋の奴の言葉に僕はそう答える。そしてそんな時、強大な神の力を抜き取った聖獣達は、その力を一斉に取り込み始めた。球体からそれぞれの聖獣に向かう模様を奴等は食べだす。紫の妖しい光の中と外で、その力はきっと離されて行ってるんだと思う。

雨は続く（後書き）

第三百二十七話です。
クリエをなんとか取り戻したスオウ達。だけど聖獣達はクリエに宿ってた力を得たのです。クリエはどうなってしまうのか。そして聖獣は更に強くなってしまうのか？　これからが大変になってきましたね。聖獣とのバトルはどうなるのか、第一次聖獣戦はもう少しで終わりそうです。
てな訳で次回は金曜日に上げます。ではでは。

死にたがりの戦場（前書き）

黒い球体は神の力。それを五体の聖獣が取り込みだした。すると奴等の体に異変が起き出す。僕達はそんな様子を見ながらこれからどうするかを判断したよ。結論は戦力的撤退。

だけどそこでリルフィンだけがそれに反対した。

死にたがりの戦場

黒い模様が寄り集まった球体。それはクリエから引き離された神の力の一端。奴ら聖獣が狙ってたのはどうやらその力……って事らしい。

奴らはクリエから抜き出したその力を互いに分配して取り込み出す。寄り集まって球体を成してた力が五体の聖獣へと流れてくんだ。

「ど……どうなっちゃうんすか？　止めた方がよくないっすか！？」

狼狽えながらそんなことを口走ってるノウイ。確かに止めたくはあるけど……一体全体どうやって止めるんだ。直接攻撃しかないんだぞ。奴らにダメージを与える術はさ。

みんなシルクちゃんのストック魔法で回復してる様だけど、聖獣へと流れる力の奔流は凄まじい。クリエの体を離れたそれは巨大なただの力。それらが周りに影響を与えながら、聖獣へと流れてるんだ。

流石に近づく事さえ難しそう。あの力の威力を僕は知ってる。腕は既にボロボロしてるしな。それが今や聖獣共のせいで周りに広がってる状態。

近づくだけできっとダメージを受けるだろう。

「それじゃあどうしろって……そもそもそんな神の力なんて物を取り込めたりするものなの？」

「凄まじいエネルギーだからね。もしかしたら聖獣の体が耐えきれないなんて事を期待しても良いのかも知れない。現に奴らの体にはヒビが入りだしてる」

セラの言葉に、テッケンさんが状況を良く見てそう答える。ヒビか……確かにテッケンさんの言うとおり、奴らの石膏の様な体は力を取り込んでいくごとに負担を強いられてるのかヒビや亀裂が目立ってる。

元々ボロボロのメドゥーサの奴なんかいつ崩壊してもおかしくない……ない？

「あれ？　おい、僕達が追い込んだ聖獣……立ってないか？　確か脚が無くなった筈だよな？」

紫に光る魔法陣の中、僕は自分の目が信じれないけど、見えるままを伝えるよ。どうか見間違いであってほしい。みんなの意見――と言うか感想を求める。

「確かに自分にも立って見えるっす。と言うかっすね――自分には例の頭の蛇も蠢いてる様に見えるっすけど……気のせいっすよねセラ様？」

「私に振らないでくれる……まあだけど……気のせいだとは思うけど、私にもそう見えるわね。きっと気のせいだけど」

この二人、必死に自分に気のせいだと思わせてるな。見えてる物を受け止め切れてない。まあ僕も実際そうだけど……と言うか、受け止めたくない。

「ふんっ、ノウイはまだしもセラまでその有様とは情けないな。俺は更なる発見をしてるぞ。奴の蛇も脚も、色があるように見える。まあ気のせいだろうがな！」

鍛冶屋の奴、得意気に鼻を鳴らして何を言うのかと思えば一緒じゃねーか！　気のせいとみんな自分に言い聞かせてるだけだ。

「もう、皆さん現実から目を背けてる場合じゃないですよ！」

珍しくみんなに一喝の声を上げるのはシルクちゃんだ。いつもホンワカ可愛らしい雰囲気と、いつでも一生懸命な姿が周りに勇気と癒しをもたらす存在な彼女の強い声。

それは現実逃避に必死になってた僕達の心に染みる。たく、何をやってるんだろうな僕達は……ＬＲＯで言うのも何だけど、現実から目を逸らしたって、僕達の都合の良い妄想に切り替わる訳じゃないんだ。

意味がないって事くらい、わかってた筈なのに……恥ずかしいぜ。僕達は自分の態度を恥じて、視線を交わした。そしてシルクちゃんに向かってこう言うよ。

「ごめん。そうだね……目を背ける訳にはいかないん――」

「もう皆さんったら、何を言ってるんですか？　あの聖獣は元からああだったじゃないですか」

「「「……」」」

ニッコリ百パーセントの可愛い笑顔でそう言いきるシルクちゃん。指まで立てちゃってなんて可愛らしい……僕は優しくシルクちゃんの肩を叩く事にしました。

シルクちゃん、君が一番思い切った事を言ってビックリだよ。そんな思いを視線で交わした。伝わったかどうかはわかんないけど、見つめあう時間はドキドキしました。

そんな事を言ってると、本気で渇を入れてくれる人がまだ一人残ってた。

「シルクちゃんまで全く……明らかに僕達が追いつめた聖獣は回復してる。きっとクリエ様から抜き取った力を取り込んでる影響だろ

う。
それに……それだけじゃないってのも確かだよ。そして言っとくけど、これは気のせいじゃない！！」
ズバーーーンと僕達の妄想はテッケンさんの言葉に寄って打ち砕かれた。うう……そんな現実知りたくなかった。世の中には知らなくても良いこともあるって、どっかの誰かが言ってたよ。
「これはそう言う次元の話じゃないよ。確かに知らなくても良いことも世の中にいっぱいあるけど、僕達には目を背けちゃいけない事もいっぱいある。
これもその一つだよ。君はクリエを助けて、その望みを叶えてやりたいんだろう？　それならこれも目を逸らしちゃいけない事だ。勿論僕達だって……」
テッケンさんの言葉はどこまでも正しいな。正しすぎて自分の矮小さが身に染みるよ。目を背けちゃいけない事……それはわかってるんだけど……今までの苦労が目の前ので泡と帰すのは正直ショックがデカいよな。
だけどそれが事実……受け入れるしか正直ない。僕は腕に乗ってる小さな重みを噛みしめる。そして雨が滴う頭をおもいっきり地面にぶつけてやった。
だけどなんか全然様にならなかったよ。おもいっきり地面と衝突した筈だけど、今までの雨でぬかるんだ地面は、ベチャッと情けない音を立てただけでそこまで痛くも無かったもん。
「ちょっと何やってるのよアンタ？　泥飛んできたじゃない」
「……」
なんか顔も上げ辛い雰囲気。本当なら痛そうな音と共に、みんな

の衝撃の声を受けながら「よし！」とか格好良く決めれた筈なのに……ベチャっじゃなんか違う。

「スオウ君？　大丈夫ですか？」

シルクちゃんの優しい声が痛い。だって驚愕じゃなく、普通に心配するトーンの声だもん。マジで顔が上げられない。

（どうすれば？）

そう思ってると、状況が見えないままこんな声だけが聞こえてくるよ。

「ぬあ！？　他の聖獣の体も崩れていって――ってアレ？　なんか外側の白い部分が剥がれてる？　そんな感じっすかね」

「そうね。石膏部分が剥がれ落ちてる？　もしかして完全体に成りつつあるとか？」

おいおい何だよ完全体って？　この目で確かめたいじゃないか。

『私は後、二回の変身を残してる』

的な事を言われて絶望感を味わうそんな感じか？　やばい、みたいのか見たくないのかわからなく成ってきた。取り合えず泥の感触が気持ち悪いし、この態勢もきついから顔を上げたいです。

みんなどうやら聖獣の方を見てるっぽいし、今なら何事も無かったのか様にして顔を上げられそうだ。まあ一応こんな事を口ずさみながら、僕は顔を上げる。

「ふう、頭も冷えたし、聖獣がなんだって？　いや、この顔につい

た泥なんて気にしないでいいよ。　どうせ雨が洗い流してくれるんだし……」
「完全体か……確かにそうなのかも知れない。彼らは神の力を取り込む事でその姿を完全に取り戻してる……そう考える事も出来るね」
「でも……完全体なんて……今までも十分すぎる程に強かったのに、更に強く成っちゃうんですか？　そんなの一体どうすれば」

そこでみんな考え込んで、辺りには聖獣共が力を取り込む音が激しく響く。なんか誰もこっちをマジで気にしてない。僕の言葉なんて完全スルーだった。
僕は静かに片手で額の泥をぬぐい去った。そして息を数回吐いては吸って、何食わぬ顔で会話に参加する事に。

「それでも倒す！！　それしかない。この国を、そしてクリエを助ける？　には多分。実際神の力なんかこいつにはいらないと思うけど、あの力が無くなりかけた時、クリエは死んだみたいになりかけてた。
だからきっとクリエには必要なんだと思うんだ。それに聖獣はどのみち、野放しになんか出来ないだろ」
「そうですけど……ってスオウ君、いつの間に？」
「何をいってるんですかシルクちゃん。僕は最初からここで奴らの動向を見てたよ」

アレはもう自分の中では無かったことにしたんだ。

「シルク様、今はソイツの奇怪な行動なんてどうでも良いんです。問題は今から私たちがどう行動するか――です。確認するけど、クリエは生きてるんでしょうね？」
「それは大丈夫です。私も確認しましたから」

シルクちゃんの言葉なら、簡単に信用するセラ。問題なく「じゃあ次は……」と言い出すよ。いや、良いけどね。変に指摘すると、さっきの痛い行動をネチネチ言われそうだしな。

てか……マジで聖獣どもの体が変わっていってる。石膏だった体は今や生命を宿した肉体――と思えるような物に成っていってるんだ。

石膏時は真っ白だったけど、それが剥がれ出して、元の本来の奴らの色が現れてる。そこが命を感じる理由なのかも知れない。

「今度こそ逃げた方が良いかも知れないわね。クリエだって取り返したんだし、ここは一時撤退が賢明だと思うんだけどどうなのよ？」

セラの言葉を僕達はしばし考える。確かにそれが賢明な判断って奴だろう。神の力を得ての更なるパワーアップを果たしてる聖獣にこのまま挑むのは流石にもう、勇気とか勇敢とかの言葉は間違いだろうと思う。

それは無謀とか、愚作とか死にたがりの部類に入りそうな事の様に感じる。どんどん聖獣共に取り込まれて行って、小さくなっていく黒い模様で出来た球体。

アレが無くなった時、奴らはその力を完全に取り込んで石膏部分も無くなり、再び動き出すだろう。その時の行動は実際わからない。

一回見逃してくれたし、そのまま森へと帰るのか？　それともその力を使って僕達に襲いかかるのか……実際後者だったら……それを考えると今の内に逃げる方が良いよな。

「私は……スオウ君は反対するかも知れないですけど、一端引いた方が良いと思います。もうこの状況は私たちが目指してた状況とはかけ離れちゃってます。

聖獣は外へ出て、そして神の力を得て完全体に……一回戻ってローレ様に報告と判断を仰ぎましょう。悔しいですけど、既に私達だ

けの手でどうにか出来る状況じゃないです」
「くっ……」

確かにシルクちゃんの言う通りだな。反論の余地はない。僕達が頑張ればどうにか出来る――そんな状況は既に通り過ぎてしまってる。

僕達がなんとか出来たのは、聖獣が祠に封じられてるまで……あそこでなんとしても倒しておかないと、封印は出来なかったんだ。

僕はクリエを抱く腕に力を込めて、そして立ち上がる。今優先すべき事は何なのか……見失なっちゃいけない。僕達はまだ諦めてなんかない。だけどここは退こう。ここで負けを認めても、その次を繋ぐために。

「スオウ……」
「分かってる。一端リア・レーゼに退こう」
「うん、そうだね」
「了解っす！」
「お前にしては賢明な判断だ」

僕の言葉にみんなが同意してくれる。まっ、当然だろうけどね。僕だって引き際位わかるよ。僕達は聖獣を見据えたまま数歩後ずさり、そして一気に振り返ってリア・レーゼ目指して走り出す。

すると直ぐに後方に居たリルフィンと僧兵の皆さんの所まで来た。

「どうした？　と言うか、どうなってる？」

リルフィンの奴はいまいち状況を理解してないらしい。こんな安全圏で高見の見物をしてるから……まあそれはいいや。取り合えず僕は素早くこう言った。

「状況は後で説明してやる。今は戦略的撤退だ！」
「戦略的撤退――っておい！」
僕達はリルフィン達を追い越して行く。そんな僕達に釣られてリルフィン達も走り出す。
「貴様、それはただの逃げ口上だろ！　敵に背を向けて逃げ出すとは情けなくないのか！？」
リルフィンは後ろから熱いお言葉をくれるよ。だけどリルフィンの前で敵に背を向けたのはこれが二回目の筈だけど……なんでそんなに目くじら立てるんだよ。
「あの時は、まだ貴様等にはやる気が見えたからな。だが今は本気で逃げてるだろう！」
ぬぬ、よく分かるじゃないか。
「我らが退いたら聖獣は野放しだぞ！　それではリア・レーゼが危険に晒される。ここで我らがアレを倒さないといけないんだ！！」
「そんなの分かってる。だけどアイツ等はクリエの神の力までも取り入れた。もう封印から解放された直後で弱ってるとかはない。しかも元は一体一体倒す予定だったろ。それを五体同時に相手出来るって言えるのかよ？　もう、ローレが言ってた状況じゃない。更に悪くなったんだ。だから一端退いて態勢を本格的に立て直す。ローレにだってありのままに話して、リア・レーゼのプレイヤー側の兵隊を出して貰うしかない。僕達だけの手じゃ、もう負えないんだよ！」
言ってて情けなくなるな。だけどまさにその通りだからな。結局

状況説明までしちゃってるし……五体揃った時点で何もしなかったリルフィン達の方がそこら辺はよく分かってると思ったんだけどな。

「くっ……確かに五体の聖獣を同時に相手にするのは大変だ。それに貴様が言う神の力を手にしたのなら尚更……だが、それでは主の望みが……」

望み？　僕たちに下った特殊ミッションのことか？　別にそこまで拘っても無さそうだったけどな。それにここで終わるんじゃない。その期待をまだ続かせる為に僕たちは一時撤退してる訳だよ。

「リルフィン君。命あっての物だねですよ。何もローレ様は貴方が死んでまでそれを成し遂げて欲しい訳じゃないでしょう」

「だが……このまま負け帰ると言う事は、主の手を煩わせると言うことだ。それでは私の存在意義がない……我は主の露払い。同胞を差し置いて我が常時この世界に存在してるのは、主に迫る危機を払うためだ！」

そう言うとリルフィンは振り返って立ち上る紫の光へと向いた。

「あのバカ！」

ローレの事を考えると、おかしな判断する奴だな。言ってる事も良くわかんなかったし……そう思って僕も後ろへ振り返るとその時、紫の光が収まり、別の閃光が輝いた。雷でも光ったのかと思う程の閃光。それには見覚えがある。そう思ったとき、ドシャンバシャンと激しい音が聞こえた。視線を音の方に向けると、そこには石と化した僧兵の姿が……

「「「う……うあああああ！！」」」

同僚の石姿を見て、動揺した残りの僧兵が一斉にスピードを上げてリア・レーゼへと向かう。アイツ等兵隊として質低いな。仲間を見捨てて行くか普通？　だけど……確かにこの姿をみると腹の底からゾクッとした重い物がのしかかるんだよな。

「これって……」

「ああ、どうやら今度は見逃してくれる気はないみたいだな」

シルクちゃんの震える声に、僕は雨の先を見据える。激しい雨で数メートル先しか見えないけど、変なプレッシャーを感じる気がする。

「シルクちゃん、その僧兵を回復させて。急いで僕達もリア・レーゼまで退こう」

「は……はい！　ピク！」

僕の言葉を受けてシルクちゃんがストック魔法で一気に僧兵の石化を解く。どうやらあの攻撃に備えてストック魔法も状態回復を増やしてたみたいだな。流石シルクちゃん。

「私達は一体……」

状況が理解出来てないまま復活を果たした僧兵の皆さん。僕は急いでリア・レーゼへ向かう事を勧める。

「僕達も、ほら行くぞリルフィン！」

「ダメだ！　ここで倒さないといけない。それが私に与えられた使命だ！」

「おい、あんまり意固地になるなよな！　僕達だけじゃアイツ等に

は勝てない！　それくらい分かるだろ！」

せめて後十数人はプレイヤーが欲しい。それでようやくどうにか出来る感じだろ。一体に付き、一人二人じゃ苦しいなんて物じゃない。

「ふん、我の見込み違いだったようだな。現状だけを見て逃げ腰とは、そこらの奴と変わらん」

「それはこっちの台詞だ。もっと冷静沈着な奴かと思ってたら、案外頑固で周りが見えないんだな！」

今のリルフィンはどう見ても意地に成ってるだけだろ。聖獣の強さはこいつだって十分に理解してるのに、ローレの望みだからって変な使命感背負い込みやがって……

「いいから逃げるぞ！　このままぶつかってもやられるだけだ！　それを見逃せるか！」

「放せ余所者が！　貴様等に頼った我らが間違いだったんだ。リア・レーゼも主も、我が守ってみせる！！　このまま下がれば、聖獣共は街を襲うんだぞ！　それとも街に戻れば安全だと何故思う？

今リア・レーゼは誰かのせいで結界が無い状況なんだぞ！　パワーアップしたのなら、有無を言わさずに侵略しにきてもおかしくはないだろ！」

「うっ……」

それを出すなんて反則だろ。でも確かにローレの言うことも一理あるかもしれない。僕達は勝手に街までは襲ってこないと思い込んでたけど、実際そうなのかはわかんない。

確かに今のリア・レーゼには結界は無くなってるし、襲おうと思えば出来るんだよな。

「だけど結界が無くなったからって、そんな簡単に襲える物でもない筈だろ？」

僕はリルフィンだけじゃなく他のみんなを見るよ。

「そうだね、結界が無くなったからってそんな簡単に攻め込まれたりはしないはずだよ。だって結界なんて張ってる方が珍しいしね。

それでも早々、モンスターが押し寄せる事はない。確かに確実に無い……とは言えないのが本音だけど、向こうだってそれなりの覚悟を持たないといけない事を知ってるんだよ」

テッケンさんのその言葉は納得出来るものだった。だけど安心出来るかは別だな。無い訳じゃないって事みたいだし。

「確かに普通のモンスター共は足踏みをするだろう。だが奴等は違う。聖獣を頂点にして集うモンスターがこの周りの森には何百と居る。

しかも普通の街とこの場所は立地が違う。この地のモンスターは強力だ。それだけで奴等が躊躇わずに襲い来る理由にはなる。

更にリーダー共が復活してパワーアップしたと成れば尚更活気づくだろう。奴等が一声かければあの森から次々とモンスターがリア・レーゼを攻め出す事に成るんだ。

わかるか？　奴等に街事態を恐れる必要性なんてないんだよ」

「「「……」」」

まさかそこまでとは。確かについさっきまでの聖獣とはもう違うもんな。益々街事態を恐れる事なんかなくて、完全体に成ったことで、早くその力を試したいとも思ってるかも知れない。

さっきの攻撃だって、白いままだったらしなかっただろうと思え

る。奴等は復活して、逃がす気は無い……そう言いたいのかも知れないな。
僕達は喉を鳴らして唾を飲み込むよ。重い空気が立ちこめる。誰も何も言わない。どうするのか……どうしたら良いのか分からなくなったんだ。
だってここで僕達が逃げたら、本当にリア・レーゼ事態に攻撃が向くかも知れない。そうなったら逃げる意味なんて……いや、逃げる場所なんて無いじゃないか！

「分かったか？　今の我らに逃げる事など許されない！！」
「許されないからって……勝てる訳じゃないっすよ！！」

リルフィンの言葉にノウイが精一杯そういうよ。

「確かに勝てる訳じゃない。そのくらい我も分かってる。だがな、勝てない戦いはしなくても良いのか？　それは違う！　少しでも奴等の侵攻を阻む事には意味がある。先に戻った僧兵達はこの事を伝えてくれる。そしたら避難が始まるだろう。増援も期待出来る。
それまで我らはこの命を賭して戦う意味が生まれる！！　そういう物だ」
「それは……そうかも知れないっすけど……」

つまづく言葉を出しながら、ノウイは僕を見る。ノウイだけじゃない、みんなが僕を見てる。確かにその必要性は分かる。だけどそのリスクが僕だけ余りに高いことをみんな分かってる。だってこれからやる戦いは、『死』を前提とした戦いだ。

死にたがりの戦場（後書き）

第三百二十八話です。
スオウに突きつけられたのは生きる為の戦いじゃなく、誰かの為に死ぬ事を認めた戦いです。兵隊はそれが普通なのかもだし、実際スオウがいつもやってる事はそこまで変わりはないのかも知れません。
誰かの未来の為にここで命を投げ出す戦いと、救いたい人を救う為の戦いはやっぱり微妙に違うと思います。それを考えると、兵隊って凄いですね。まあでもこの選択の答えは次回にスオウが出します。
てな訳で。次回は日曜日に上げます。ではでは。

殺し続けたくないから（前書き）

死ぬまで逃げられない戦場があった。勝ち目がないと分かってても、僕達は撤退を許されないらしい。僕達の後ろにはリア・レーゼが……その街に生きる人達がいるからだ。

パワーアップを果たした聖獣は直接襲い掛かってくるってのがリルフィンの見解。だから僕達が逃げると、奴等はリア・レーゼを襲う事になるらしい。確かにその可能性はある。

だって聖獣には逃げる理由なんてないんだ。そして僕達には逃げれない理由が出来た。だけど仲間達は僕の命を心配してくれる。そして現れるはミラージュコロイドの鏡。

僕はどうしたらいいんだ？　守るのか、逃げるのか……それはとっても難しい選択だ。

殺し続けたくないから

死ぬことが前提の戦い。確かに普通のプレイヤーならそれをやれない訳じゃない。リスクはあるけど、助かるＮＰＣが増えるのなら……そう思う人も居るだろう。

だけどここにはそのリスクが時間で埋められない物だったり、絶対に取り返せない物だったりの奴が居るんだよ。だからこそみんな僕を見てる。

「貴様はどんな覚悟をもって敵を殺めてたんだ。戦いに身を投じる以上、死は誰もが覚悟をしておくべき事だ。我は主の為なら死ねる。その、覚悟がある！！」

リルフィンは俯く僕にそう言うよ。死ぬ覚悟が貴様には出来てないのか？　と問いただされてる。リルフィンはＮＰＣだから思い的には一番僕に近いんだろう。

ＮＰＣは基本、ミッションや役目が終われば、その時の記憶や出来事なんか忘れる様になってる。だから死んだことさえ忘れて元の場所に戻ってるなんてざらだ。

まあそうしないと、同じクエを違う人が出来なくなる……とか出るからな。重要なＮＰＣほど死んで居なくなるって事は無いよな。

でもリルフィンは普通のＮＰＣとは違うような気はする。だけどＮＰＣだからその魂が完全消滅なんて事はやっぱりないと思うんだ。

まあリルフィンは自分の命だって有限だって勿論思ってるだろうけど……

「スオウ君、君はクリエ様を連れて街まで戻るんだ」

僕が俯いてると、下から僕を見上げてテッケンさんがそういうよ。それは確かに願ってもない事。

「そうっすよ。スオウ君は街まで戻ってくださいっす。ミラージュコロイドで送るっす！」

「……」

「そうね、別にアンタなんて居ても居なくても一緒なんだし、それならせめてクリエだけを守る事を考えなさい。ここは仕方ないから、貸しにしといてやるわ。

クリエを守りきれなかったら利子百倍で一生私の奴隷にするから、アンタはさっさと行きなさい」

「……セラ」

「ふん、仕方ない。俺にしてもここで終わらせたくはないからな。ここは俺たちに任せろ」

「……鍛冶屋」

「スオウ君は行ってください。スオウ君の分まで私達が頑張ります。しょうがない？　仕方ない？　ううん、それじゃあちょっと恩着せがましいですね。

え～と、取り合えず良いんです。自分だけが逃げてるなんて思わないでください。スオウ君がその命を懸けるのは、もっと別の場所で、貴方にしか出来ないその時まで、とっておいて欲しいんです。ねっ、ピク」

そんなシルクちゃんの声に、肩に乗る桜色の小竜は「ピピク～」と泣くよ。

「……シルクちゃん……みんな」

全員の言葉が胸に染みる。僕は本当に良い仲間に恵まれたらしい。みんな自分のリスクなんか度外視して、僕を生かそうとしてくれて

る。
本当にありがたい事だ。
「何を言ってる貴様等。今は一人でも戦力が減るのは痛いんだ。素晴らしい精神だが、助けを求めに来た場所がピンチに成ると逃げるのか？
そんな奴に何が成せる！！」
リルフィンはその白い毛や髪を逆立てて激しくそういう。確かにリルフィンにはそう映るのか……な？
「違うんですよリルフィンさん。スオウ君の命は一個しかなくて……だから……」
シルクちゃんが必死にフォローする様にそう言ってくれる。だけどプレイヤーとＮＰＣじゃそこら辺の考えが違う。この世界で息づく彼らには僕達の事情なんて知る由も無いことだ。
「命が一個なのは当然だ。そしてそれをどう使うかも勝手だ。だが、自分の都合だけでしか動けない奴が、誰かを救えるとは我には思えん。
今ここで貴様が戦場から背を向けると言うことは、リア・レーゼを見捨てるのと同じだ。この街に住む、何百と言う命を見捨てるのと同じだ！！」
「そ……それは言い過ぎです！！」
シルクちゃんが珍しく真っ向から立ち向かってくれる。だけど確かにそうなのかも知れない。僕は今、自分の都合でこの街を見捨てようとしてるのかも知れない。本当の命と、仮想の世界の命。天秤に掛けるのは間違いなのかも知れない。

けど……この世界は息づいてる。僕はそれを知ってる。

「スオウ君早く行ってっす。リルフィンさんの言うことは今は気にしない方が良いっす。今度ばかりは仕方ないっすよ。

言っちゃ悪いっすけど、ＮＰＣの命と君の命は比べられないっす」

そう言ってノウイはミラージュコロイドを発動させる。僕の側には透明な鏡が現れた。これに入れば一瞬で街まで戻る事が出来る。この場から逃れる事が出来る。みんなを残して……この街を見捨てて？

「スオウ君、早くっす！！」

ノウイの急かす声。僕が救いたい物……目的……約束。僕は抱えるクリエを見つめる。お前は自分の都合だけで逃げた僕を許してくれるだろうか？

沢山の自分と変わらないＮＰＣを犠牲にしたと知ったら、やっぱりリルフィンと同じように怒るだろうか……それとも理解なんか出来ないか？

けど……それでもきっと気持ちよくは無いんだろうっては思う。確かに何か違う。今、ここで逃げるのは何かが違うのかも知れない。

自分の都合……確かにその通りだ。リルフィンの言うことは何も間違っちゃいないよ。

ここで死ぬ気はない……だけど、自分だけが逃げ延びる事はきっと違う。

僕はノウイにクリエを渡す。そんな僕の行動にクリエを押しつけ

られたノウイは目を丸くしてる。まあ、いつも丸いんだけど、そのまん丸ゴマみたいな目を必死に見開いてる感じ。

「どういう事っすかこれは？　何のつもりっすか？」

「スオウ君……まさか……」

ノウイの言葉に続いてシルクちゃんも僕の意図を察して不安気な声を出す。すると今度は横からセラも詰め寄ってきたよ。

「ちょっと、本気なの！？　私は認めないわ。アンタは何を言われようとここから離れるべきよ！　ノウイ！　こいつを強引にでも良いからミラージュコロイドの中に押し込めなさい！」

「了解っす！」

セラはそう言うと一度後ろを向いて、素早く回転して僕の腹に蹴りを決める。

「ぐふっ！？」

何しやがるんだこいつ？　そう思ってると、セラは華麗に着地を決めながらこう言うよ。

「ノウイがどうやってアンタを押し込めるって言うのよ。今のはノウイへの合図と同時に、アンタの意識をノウイ側に逸らす為の作戦よ」

「セラっ――お前っ――」

バランス崩して後ずさる僕の後ろにはノウイが出現させたミラージュコロイドの鏡が待ち受けてる。まさかこんな見え見えの手に引っかかるとは。

仲間をおもいっきり躊躇いもなく攻撃できるセラだから出来る事だな。でもまさか、ここまでするなんて……僕は鏡に倒れる様になりながらも周りを見る。
みんな誰もこの行為を止めようとはしない。みんな僕がここから離れる事を望んでる……そう言う事だろう。まあリルフィンは別だろうけど、奴はテッケンさんや、鍛冶屋に阻まれてる。

「さっさとこの場から消えなさい。アンタが居た方が私達は気が気じゃなくなって戦闘に集中できないわ。それに、アンタはわかってない。
優しくて誠実で、どんな者の立場も分かろうとするアンタは立派よ。だけどそれがアンタの判断をおかしくしてる」

倒れていく中で、セラのそんな言葉が頭に響く。雨を避けるお札の光に包まれて、最後にちょっと眉を寄せるセラ。
雨の音に呑まれてしまいそうな程の声の筈だけど、なぜだか僕には聞こえる。だけどお札を使ってない僕にはその姿は雨に霞んで行ってた。

「アンタはね、自分の命にも価値を見いだしなさい。言ったでしょ……アンタはクリエの為だろうけど、私達はアンタを死なせない為に動いてるって」

自分の命の価値……僕はそれをないがしろにしてるつもりは無かったんだけどな。ただ天秤にかけた時、僕の命は案外簡単に振れるってだけだ。だってその天秤の片側にはいろんな物が次から次へと落ちてくるからさ、守りたい物と無くしたくない物で、なんかわかんなくなる。
命は無くしたく無いってちゃんと思ってる。でも目の前でどうにか成りそうな物があるのなら、どうにかしたいって気持ちが働くじ

ゃん。
それに無くしたくないって気持ちは受け身だけど、守りたいって気持ちは行動に移さないと何も生まれない事なんだよ。そして動かなかったら、そこには最悪とかが訪れる事が分かる。
それが分かってるからこそ、動かざる得ない。命を投げ出したくなんかないよ。そんなつもり毛頭無い。だけど無くしたくないって事をどうやって行動に移すんだ？
ずっとビクビクと命の心配をして過ごさないといけないのか？そんな段階もうずっと前に……というか、この状態に成ったときからやってない。
無くしたくないなんて思って気をつけてても、どうにも出来ない予期せぬ事態ってのがあるかもだもん。それなら、ビクビクして過ごすなんておかしな事だろ。
そもそもそれなら、二度とＬＲＯに入らない様にするよ。でも僕はここに居る。何度も何度も死に掛けて……けど僕はまだ……それはさ、後悔しないほうを自分なりに選んできたからだ。

例え危険が付きまとったって、誰かを見捨てるよりは助ける方を選びたかったからだ。
でも……それも付き合うセラ達にしてみればヒヤヒヤ物だったんだな。もしも死んだら……それを考えてたのは当人の僕だけじゃなかった。みんなが僕の事を考えてくれてる。
だけど今回ばかりはって事で、この対応。僕だって最初は逃げることも正しいって思ってたよ。こんな所で死ぬわけには行かない。僕にはやることがある。
けど……リルフィンの言葉は正しかったよ。僕達を攻撃してきた聖獣。奴等がリア・レーゼに向かえばどうなるのか……それはもう惨劇としか言いようがない事だ。
それを少しでも引き延ばす事……それに意味なんて無いわけ無い。その為には戦力は割けない。だけどこの戦闘に参加する事は勝てる

見込みが無い敵へ、逃げることも許されずに、最後のＨＰまで戦い続ける事を義務づけられる様な物。

でもそれでも……僕はそう思ったんだよ。プレイヤーが一人でも減るかどうかしたら、それだけ足止めの時間を稼げない。

ノウイとかの戦闘要員以外なら、関係無いだろうけど、僕はまがいなりにも戦闘要員だ。

「くっ！」

僕は鏡に入る前にセラ・シルフィングを地面に突き刺してそれを支えに踏みとどまる。

「ちょっ！　私が言ったこと、理解できなかったの？　ここは私達に任せなさい。ちゃんと足止めしてみせる。だからアンタはここから離れるの！　そうしなきゃ行けないのよ！」

セラは踏みとどまった僕を見て、再び詰め寄ってくる。当然だな。向こうからしてみればどうして、そこまでやるのか理解できないし、自分達の思いをどうして分かってくれないのか……そんな感じだろう。

「アンタはどうしてそう死に急ぐのよ！　アンタは自分が守る側に居ると思ってるんでしょうけど、私達もアンタを守ってる。だから……言うこと聞きなさい！」

そう言ってセラが僕にその手を伸ばす。今度は腕を使って突き飛ばす気かな。僕は向かってくるその手を取るよ。

「ごめん、セラ……それにみんなも」

そう言った瞬間、乾いた音と、衝撃で視線がブレた。なんか頬がジンジンするな。どうやらセラから平手打ちを食らったようだ。

「セラちゃん……スオウ君、どうしてですか？　そこまで私達は信用出来ないですか？」

「そんな事無いですよ。みんなの事を頼りにしてここまで来たんです。僕を守ってくれようとしてるって事も分かります」

「それならなんでですか？　私達に君を守らせてください」

シルクちゃんの言葉はとってもありがたい。心に染みる。だからこそ心苦しくもあるよ。僕はみんなの優しい気持ちを拒絶してるんだからね。

僕はジンジンする頬を感じながら、シルクちゃんを見てセラを見る。するととっても意外な事に直面した。出そうとしてた言葉が出てこなくなった。

だってセラの奴……眉根を寄せてすっごく厳しい顔をして……そしてなんとその赤くなった瞳を濡らしてる。それはどう見ても泣く一歩手前の子供みたいな顔だ。

（いや……えっ……ええ！？）

僕は自分の瞳に映る光景が信じられない。だってセラだよ。あのセラが涙を流しそうな顔してるなんて目の前に居ても信じられない。

「セラ……」

「これは……雨だから！！」

そう言って必死に涙が流れるのを我慢してるセラ。なんか初めて？　セラがちょっと可愛いと思えた瞬間だ。セラがこんな意味ない

言い訳するのも珍しいしな。
お札で雨入ってないのに……墓穴だぞ。セラは溢れ出しそうな涙を手で拭い、確認するようにこう言うよ。
「アンタは……どうしても死にたいの？　セツリの事も、クリエの事も……諦めてこんな所で終わらせるのね」
涙で濡れた瞳。赤く火照った頬。それでも必死に眉をつり上げるセラ。ちゃんと言わないと納得してなんかくれないよな。
元々セラは頑固だし。それにみんなも案外そうだしな。
「終わらせる気なんか無い。だけどさ、リルフィンが言ったように、僕だけ逃げるのもなんか違うかなって思ったんだ」
「それの何が悪いのよ。ゲームの存在でしかないこの街はいくらでも作り直せるのよ。命を懸ける価値なんて無い。セツリとは違うし、呪いを解くためのクリエとも違うのよ」
価値がない……か。確かにＮＰＣもこの世界も仮想だ。作り直しは幾らだって効くだろう。全てを失敗しても、世界はきっと今日と明日でも変わりはしないと思う。
それこそゲームとして、沢山のプレイヤーがやることに成るような事なら……きっとその筈だ。
「確かに誰もが本当に死ぬ訳じゃない。それは分かってるよ。実際僕もＮＰＣはしょうがないって思ってた。だけどリルフィンの言葉でそれも違うのかな～って思った。
確かに彼らはＬＲＯ事態がなくならない限り、本当に死ぬなんて事はなく、この世界で生きて行けるんだろう。だけどさ、それは死なないって事なのかな？
僕たちがやらなきゃ、犠牲となる人達は居るんだ。本当の意味で

死んでなくても、彼らにとっては死ぬ事と変わりはない。
それにLROのNPCはそれを感じる事が出来る奴等も一杯いるよ。だってこの世界の住人はここに生き、生活して人生を送ってるんだから。
だからさ、僕たちは僕たちの都合だけで、その人達を殺して良いのか？　見捨てて良いのか……そこはきっとやっぱり人それぞれなんだろうけど……僕は死んでほしくないって思った。
いいや、違うな。僕は自分達の失敗を彼らに擦り付けたく無いんだ。死なないから何度だって殺しても良い訳じゃない。死ぬ痛みを何度でも味わわせたくない。
だってさ……痛いし、怖いんだぜあれ」

僕は自分の思いを、考えをセラを見て言った。なんでそれを選択したのか、やっぱり理解はされないのかも知れない。セラもみんなもやっぱりLROはゲーム。その思いはきっとある。
だってそれだけ長く、そしてその前提でやってきた筈だ。駆け出した時……躓いて前提をどっかに落とした僕とは違う。
僕はリアルでも、LROでも生きてる感じがする。どっちでだって死ねるし、だからどっちでも僕はスオウと言う人間として存在してる。
そんな僕だから、ただのNPCまでをも見捨てられないんだろうって思うんだ。だから理解されないのは当然だな。
またセラに叩かれるかも知れない。でもそれも覚悟の上だ。

「バカ……じゃないのアンタ」

小さなそんな声が耳に届く。掴んだセラの腕が震えてる。やっぱり殴りたいのだろうか？　僕は震えてるその手をもっと力強く握る。
「バカなんだと思う。でも……僕にはそんなバカな選択しか出来な

いんだ。ひねくれて育ったからさ……こんなバカに付き合うのがイヤに成ったら、これっきりで良いよ。
死ぬ気なんて無いけど、ここを生き残る可能性はきっと今までで一番低い。
だけどここまでは付き合ってほしいんだ。あの街を……そしてやっぱりクリエを守るためにも」

僕はセラの間近で誠心誠意の心を込めて、そう紡ぐ。やっぱり最後まで僕は自分のワガママを言ってるなって思ったよ。結局一人じゃ何も出来ない情けない奴。
仲間に助けてもらわないと、聖獣を足止めする自信も無い。だけどそんなワガママもこれまでかも知れないと、ちょっとは心の中で覚悟を――――――その瞬間ゴチンと顎に走る衝撃。僕はくらっと来て、地面に膝を付く。

「つっ……」

全然ビンタよりもダメージでかいぞ。何をしやがったこいつ。

「本当にアンタって身勝手ね。私なんかよりもよっぽど周りを引っかき回す。そしてその上、勝手に退場しようとしてるの？
ふざけるんじゃないわよ。どうせ無茶をやるのはいつもと変わらないんだから、せめて妙な自信だけは持っときなさいよ。
端から諦めてる奴なんて、どんなに優秀で最高な、アンタにはもったいない位の仲間が居ても、どうにも出来なくなっちゃうでしょ」
「……ん？」

頭が揺れてるせいで思考が追いつかない。だけど何か今の言葉は僕が思ってたのとはちょっと違ったような。少なくとも嫌気がさして――って感じではなかった。

まあ見上げるセラはなんか不遜な態度に戻ってる訳だけど、いつも通りと思えばいつも通りだ。

「もう……セラちゃんはなんだかんだ言ってスオウの事を放っとけないんだよね」

「なっ！？　そんなんじゃないですよシルク様。私はただ、みんなの声を代弁してですね……」

シルクちゃんの言葉に、不遜な態度を示す顔面の仮面が剥がれてしまってるセラ。てか……みんなって……僕は膝を付いたままみんなに視線を送るよ。

「スオウ君、私達はどこまでも貴方に付き合いますよ。そして私はヒーラーとして宣言した筈です。……絶対に貴方を死なせたりはしません。それは私のヒーラとしての意地ですよ」

そう言ってシルクちゃんはニッコリ笑顔をくれる。天使だな。でも実際、それで良いの？　って感じ。まあ自分であれだけ能書き垂れといてって感じだけど、思っちゃう。

「貴様は勝手に突っ走るだろう。俺達はそれに振り回されるだけ。なかば諦めてるからな。だが、それも悪くはない……と最近は思ってる。

まあ貴様が死なければ後味も悪くはないしな。だから俺達は結局貴様を助ける事をやめたりしないって事だ」

「スオウ君……実際僕は反対だよ。幾ら君がＮＰＣに同情しても、彼らは結局復活出来る。何も覚えてなくて、その時の痛みなんて知らずにだ。

だけど君は違う。君の家族が、友人が……そして僕達が幾ら祈っても後悔しても、ここで死んだら、戻ってこないんだ。

だけどそれを言っても君はやめたりはしないんだろう。それを僕達は分かってる。なら僕達は君を死なせない様にするしかないじゃないか」
「すみません……」

テッケンさんも鍛冶屋も本当にね。

「あの～結局、スオウ君はここに残るんすか？　絶対に死ぬっすよ」
「イヤな事を言う奴だな……良いからお前はさっさとクリエを安全な場所まで運んでろ」
「なんか自分だけ扱いが違うくないっすか？」

そんな事を言ってると、どこからかへんな合唱が聞こえてくる。実際それが何かの歌に聞こえるから僕らは驚くよ。

「これは……聖獣か？」

リルフィンが雨の向こうに目を凝らしながらそう言う。確かにってか、それ以外に考えられない訳だけど……実際信じれない。だって……これはちゃんと歌に聞こえるぞ。言葉を奴らは得たのか？
それにリルフィンは気づいてないだろうけど、僕達は顔を見合わせる。

「この歌……」
「いや、まさか……そんな」
「だけど奴等はクリエの力を取り込んだ。その時に一緒に付いてきたと考えれば……」

雨に響く歌。それはクリエが紡いでた、寂しげな調らべの歌なんだ。

殺し続けたくないから（後書き）

第三百二十九話です。

スオウの選択はどうだったでしょうか？　覚えてなくても、殺し続ける事をしたくない。彼等はその瞬間を味わいつづける事になるんだろうから。だけど実際はこのミッションはかなり特殊ですからね。

一回ミスった程度でやり直しが効くものでもきっと無いです。そもそもこのミッションにやり直しがあるのか……最終的な失敗はリア・レーゼが無くなりそうだし。まあだけど、一般的なミッションやクエストは勿論、何回もと言うか、いろんな人が出来るようになってます。

てな訳で次回は火曜日に上げます。ではでは。

覚悟の戦い（前書き）

この場に響く歌、そしてそれが止むと同時に再び戦いの火蓋は切られた。何の為の歌だったのかは結局わからなかったけど、次第に雑魚じゃないワンランク上の敵どもが参戦しだす。

僕達は徐々に追い詰められていくよ。

覚悟の戦い

歌が聞こえる。土砂降りの雨の向こうに聞きなれない声と、聞き覚えのある旋律……それはきっと聖獣達の進化の証。そして奪われた力が幼いクリエの物だという証だろう。

奴等が合唱してる歌。それはクリエが時々歌ってた歌だ。どうして奴等がここでその歌をこれみよがしに歌ってるのかはわかんないけど、それだけで今までの聖獣とは違うと分かる。

まともな言葉も持たなかった聖獣がコミュ力を手に入れたって事だからな。僕達にも認識できる術での……って事だけど、実際言葉発する前には奴等は奴等なりの対話の手段を持ってたはず。

僕達にも理解できる様に成ったのは、実際メリットかも知れない。

「クリエの歌……ノウイ、急いで行ってくれ。クリエを頼む」

「ええ？　言っとくっすけど、自分はまだスオウ君が残るのは賛成してないっすよ。だって死ぬ確率めっちゃ高いっす。

わかってるっすか？」

「分かってるっての」

僕はそう言いながらノウイの肩に手をおくよ。何されるか理解できてないノウイ。僕は力を込めてノウイを引き寄せると、自身の後ろにある鏡へとノウイを投げる。

「ちょっ……うわっわ！？」

「お前の言葉もありがた～～く、受け取っておくさ。絶対に生き延びる。だから戻るまでクリエを頼む。お前が側に居れば、安心できる。だってお前の逃げ足は、僕の意識じゃ世界最速だ」

「なんかそれって、嬉しくないっすううううう！！」

そんな叫びと共に、自身が表した鏡へと入ったノウイ。これで一瞬の内に二人はリア・レーゼの街へと戻ったんだろう。これで心おきなく戦えるな。

「ようやくか……待ちくたびれたな。まだ辞世の句を読む暇くらいあるぞ」

「縁起でも無いこと言う奴だな。逃げることは許されず。死ぬまで戦い続けないと行けないのかもしれないけど、僕は諦めてここに残ったんじゃない。希望が全く残ってない訳じゃない。

僕は増援を信じて戦い続けるんだよ」

そう、リア・レーゼから援軍をローレが出してくれれば、どうにか出来る……かも知れない。死ななくても済むかも知れない。

そんな可能性が一パーセントも無い訳じゃないんだ。てか、この状況で希望を抱くにはそれしかない。

雨が地面を打ちつける音に混じり聞こえてくるその合唱。だけど奴等事態の姿は実際、全然見えないな。石化の光以降何もしてこないし……もしかしたら、あの石化の光は攻撃じゃなかったのかも知れない。

体が復活してフレッシュな気持ちになった聖獣が、伸びをする感覚で放った光。それがたまたま撤退してた僧兵に当たっただけ……とも考えれるよ。

もの凄く都合良く考えればだけど……

「奴等、歌なんか歌っちゃってるし、本当に来るのか？　まだそっと森に帰る可能性も無い訳じゃないよな」

「本当にそんな可能性があるなら、我も祈りたいな」

僕の言葉にリルフィンの奴がそんな返しをする。なんだかまるで

その可能性は皆無みたいな言い方だな。僕はもの凄く期待してるんだけど。

だって、奴等のスペックを考えれば、僕達がうだうだやってる間に襲うことも出来た筈だぞ。だけどそれをしなかったって事は……いや、それどころか歌なんて歌いだしてるし、期待はある意味大きいんだけど。

「お前にはこの歌が何の意味もなく紡がれてるとでも思えるのか？」

「意味ね……確かに合唱してる時点でおかしいけど……お前にはこの合唱の意味がわかるのか？」

リルフィンはこの合唱に意味があると言う。まあ何の意味もなく歌ってる……とは思えない気持ちも分かる。だけどもしかしたら、せっかく得た言葉って奴を聖獣なりに堪能してるのかもしれないじゃん。

「流石にそれは無理があると思うよ」

シルクちゃんにダメだしされちゃったよ。セラにならまだしもシルクちゃんに言われると、反論の余地もない。そういえばさっきからシルクちゃんはピクと共に何かやってる。何をやってるんだろう？

「これですか？　ストック魔法の整理と更新です。何個かは使っちゃったので補充しないと。それにどんな魔法をストックしとくかも重要です。スオウ君を死なせない為には」

「色々とご迷惑をおかけします……」

本当に全く……そろそろ「勝手にやってろ」と愛想尽かされてもおかしくないと思ってます。だけどまだみんな許してくれた。優しいよねみんな。

シルクちゃんは幾つか魔法を詠唱する。だけどそれは発動しなくてピクへと吸い込まれていく。ああやってストックしてるんだね。

「――で、奴等は何をやってるって言うのよリルフィン。わかるんなら教えなさい」

セラがそんな風にリルフィンへ奴等の行動の真意を求める。確かにそれは知りたい所だな。聖獣共はあの歌に一体何を込めてるのか。

「そろそろ貴様達にも見えると思うぞ。奴等は既に動き出してる」

リルフィンがそう言うと、地面に激しく落ちてた雨が、再びスローモーションの様に流れが遅くなる。それと同時に歌声がピタリと止んだ。するとその時、足下の地面が揺らぎだし、所々から泥が盛り上がり出す。

「これは……」

「来るぞ！」

リルフィンの言葉の瞬間、大量のツタが地面を抉って飛び出してくる。やっぱりこれか……二度目だから何となく想像付いた。だけどこいつ等も森へ帰ってなかったか？　それにツタの量がなんかとんでもない。

雨が落ちてないから今は良く見える訳だけど、なんだか見える範囲一面にウネウネとしたツタが生えてるぞ。これを一体のあの貝だけで出来るとは流石に思えないな。

そんな分析してると、近くのツタ共が早速僕達を襲い出す。だけどこの程度の攻撃は、幾ら増えようがって感じだ。

元々がそんなに強くなんてない。確かに数が多いのは厄介だけどこいつらには効率的にダメージを与える方法がある。僕はセラ・シ

ルフィングに雷撃を纏わせて、切りつけると同時に、雷撃を解放する。こうすることによって奴等はその本体にまでダメージを受けるんだ。
雷撃を受けたツタは煙を上げて、ぐったりした感じになる。すると遠くに本体らしき物が地面から顔を出したのが見えた。だけどそれで確信した。やっぱり今は一体だけじゃない。雷撃が伝ったツタも今出てるのの半分もなかったし……少なくともあと数体は地面に埋まってる筈だ。
そう思ってると、いきなり後ろから別のモンスターに首を噛まれる事に。

「つっ――こいつどこから!?」

肩と首の付け根辺りをガブリと行かれてる。狼みたいなモンスターだから、牙がやばい。振り解こうにも勢い良く食い込んでるみたいだ。

「ジッとしときなさい!!」

そんな声と共にセラがその武器でモンスターを一刀両断する。なんとか助かった。でも本当にどこから。視界は良好……とまでは行かないけど、土砂降りじゃないだけで、かなりマシになってるから気づかないなんてあり得ないと思うんだけど……

「油断しない。幾らこいつらが雑魚だからって、いつどこから聖獣が手を下すとも限らないのよ」
「わかってるよ。そもそも既にこの雨が止まってる時点で聖獣は動いてるしな」

そうなんだよな。これはあのモブリ型の奴の魔法の一種。上を見

ると、既に止めた分の雨が空に貯まってる。なんだか海と地面が逆転した様な光景だ。それか空中に浮いてるプールを見上げてるみたいな？

とりあえずあれだけの水を落とされたらやばい。だけどだからってあれの止め方もわからない。モブリ型の聖獣は早々姿現さないしな。

そう思って上を見てるととんでもない事に僕は気付いた。

「おい……あの空のプールからモンスター共が流れてきてるぞ」

死角からどうやっていきなり現れたのかと思ったけど、そう言う事か。空中から現れるモンスター共は千差万別。聖獣はあの森のモンスターの頂点にいるってのはマジみたいだな。ウッドール共も性懲りも無く再び現れてるし。

「次から次へと現れるぞ！」

「ここから後ろには絶対に行かせるな！　死守するんだ！！」

鍛冶屋とリルフィンの声が響く。この数を僕達数人で足止めしろってか……無謀だけどやるしかないんだよな。そもそも無謀なのはわかってた事。それでも僕はみんなの心配を余所に残ったんだ。

なら文句なんて言ってられないだろう。

僕達はそれぞれ連携してモンスター共に向かう。最初は順調だった。幾ら多くても雑魚は雑魚。修羅場を潜ってきた僕達と相対するのはやっぱりどこか役不足。

けど、そんな雑魚の中に少し違う奴が混じりだしてた。

ウッドールの別タイプみたいな奴等に、岩だらけのサイみたいな奴。それと二メートルくらいある。クチバシがデカい鳥。ダチョウみたいな体してて、素早くて攻撃も強力。しかも一番厄介なのは、そのダチョウみたいな奴の声だ。

どうやら補助魔法を打ち消す効果があるみたいで、掛け直してもらってもその度に直ぐに解除されてしまう。
補助魔法があるかないかは地味に効く。それに長期戦が予想される今の状況では、補助ってスゴい重要だ。心の支え部分で。
だけどこれは素直に諦めるしかないっぽい。補助を掛けて貰う位なら、回復に回って貰った方がよくなってきてる。敵の質も次第に上がってる。
数に任せただけの攻撃じゃない……ちゃんと重い奴を貰う回数は徐々に増えて行ってた。

「くっ……この数は流石にきつい。それに敵も厄介なのが増えてきてるしな」
「確かにね。しかも不気味な事に聖獣が姿を表さない。それが気になる所……だね！！」

鍛冶屋とテッケンさんも流石にキツくなってきたのか、徐々に後ろに下がり初めてる。てかこのモンスター共、まずは目の前の敵を倒すのを義務づけられてるのか、先に進もうとしないな。
ありがたいのか、そうじゃないのかちょっとわかんないけど、僕達の立場からしたらラッキーと思った方がいいんだよね。
どんどん追い込まれる程にそう思わないといけないのは残酷だな。

「大丈夫スオウ？　大口叩いといて既にへばりましたとかやめてよね」
「うるさい。こんなのまだまだ全然余裕だっての。寧ろ歯ごたえがこんなもんで残念に思ってた所だな。聖獣の奴等、僕達に恐れをなして逃げたか？」
「ふん、いたたまれないわねその強がり、詭弁は。息切らしてる奴が何余裕ぶっこいてるのよ。言っとくけど、アンタにじゃなく、私に恐れおののいて聖獣は逃げ出してるんだから」

おお、まさに強がりで言った言葉にセラの奴が乗ってきた。意外だな。だけどまあ、この状況……冗談でも言いから強がってないとやってられないんだよね。

そんな事を背中合わせで言い合ってると、地面がモゴモゴと蠢き出す。またツタか？　と思ってたけど、出てきたのはツタなんかよりもよっぽど強そうなモンスターでした。

「うおおおおおおおおおおおお、なんじゃこりゃあああああ！！？」

僕は思わずそんな叫びをあげるよ。だって出てきたのはツタなんかよりもよっぽど凶悪そうなモンスターだ。蛇みたいな体してるんだけど、鱗がなんか凶悪だし、太さもツタの何倍もある。しかもデカ！　全長何十メートルあるんだこいつ。どうみてもボスクラスです。

「ちょっと……どれだけのクラスの敵が現れるのよ。鬱陶しいわね。ダンジョンの奥で構えてないと稀少性が失われるわよ」

「言ってる場合か！！」

それは思うけど、こいつらは聖獣の命令を受けてるんだろ。でもまさかこんな奴等も動かせるとは……いや、もしかしたらこのクラスのモンスターでもあの森では普通に居るとか？

「ふざけるな！」

おお、いきなりリルフィンの奴が横からこのモンスターに攻撃を加えた。例の白いトゲトゲした武器で、こちらに向いてた顔を側面から分殴った形だな。周りを巻き込んで倒れるモンスター。デカい

からその衝撃も凄まじい。

「おお、リルフィンやるじゃん」

「このクラスはあの森にも数体しかいない。それだけ稀少性の高い奴だ。それだけにこの程度の攻撃では……」

そう言ってると、地面の泥が壁の様に立ち上って迫ってくる。どうやら奴の尻尾が地面の表面をなぞりながら迫ってるみたいだな。

てか、仲間の筈の他のモンスターも吹き飛ばしてるぞ。可哀想なモンスター共は空中に投げ出されてるよ。

「くっ！」

リルフィンは腕を伸ばして見えない攻撃を繰り出してるみたいだ。だけどその攻撃は尻尾に至る前に、泥の壁に阻まれてる。まさか泥があんな役目をするとは……そしてそのまま僕までも巻き込んで奴の攻撃は炸裂した。

今まで哀れと蔑んでたモンスターと同じ状況に陥ってしまったよ。尻尾に弾かれて空中に打ち上げられた僕とリルフィン。下を見ると、大きく口を開いた本体が見える。僕達を丸飲みしたいらしいな。

けど、それは安易な選択だ。僕達はまだやられた訳じゃない！！

「リルフィン！　咥内めがけてさっきの攻撃を頼む！！」

「我に命令するな！！　それが出来るのは主のみ！！」

そんな事を言いながら、ちゃんと攻撃してくれるリルフィン。全く誰かに仕える奴等ってなんでこんなにツンデレなのだろうか？

セラもそうだしこいつも……

「クシャアアアアアアアアアアアアアア！！！」

リルフィンの攻撃でその長い舌が弾け飛ぶと同時にそんな断末魔の叫びが上がる。だけどまだだ！　ＨＰは減ったけど倒すまではまだまだ全然至ってない。
今度は僕がセラ・シルフィングを使って咥内に飛び込むよ。それと同時にこのモンスターの体内から攻撃をする。外側は堅い鱗に覆われてるみたいだけど、中はどんな生物でも鍛える事なんか出来ないからな。
攻撃が通る通る！！　ＨＰが見る見る減ってくぜ。このまま一気に倒す！！　そう思ってると、なんだか地響きのような音が体内に響く。

「何だ？」

そう呟くと同時に、口の方から声が聞こえた。

「やばいぞ、こいつのお得意の攻撃が来る。今直ぐ脱出するぞ！」

むむむ、良いところだったのにな……だけどリルフィンの慌て様を見る限り、なんかやばそうだしここは素直に言うことを聞いとくか。僕は出口を目指して走り出す。
すると後ろから何かの液体が同時に迫ってきてる事に気付いた。なんか黒く毒々しい液体だ。

「急げ！　それに触れたらおしまいだぞ！！」

なんだって！？　僕はスピードアップして喉の部分を駆けあがー――あがっ！？　――うおおおおおお、なんか急に傾斜がキツく……このモンスターが液体の発射態勢でも整えてるのか、頭を持ち上げたせいでかなりヤバい事になった。

「くっ……急げスオウ！」
「そんな事言ったって……」
ほぼ直角なんだけど！？　幾らなんでもこれは無理が有りすぎるだろ。体内にへばりつくので精一杯。だけどそれもどこまで持つか……なんかヌメヌメした液体が体内を膜の様に覆いだしてる。このままじゃマジで下の毒々しい液体の中へ落ちそうだ。
今はなんか上へ昇ってこなくなったけど、下ではその液体を大量生成してるように見える。これを一気に外へ放出する気か？　確かにヤバそうだ。
「うおおお！？」
いきなり左右に揺さぶるモンスター。すると上方からんな声が。そして暗くなってしまった。僕はリルフィンの名前を呼ぶけど反応がない。どうやら振り落とされたみたいだな。
取りあえず上を目指すしかない。間に合うかわかんないけど、一歩一歩進むしかないんだ。ここじゃあ他の誰かのサポートも期待できないし、何とか外に出ないと。
だけど上手く上れない。と、言うかこのヌメヌメした液体が致命的に邪魔だ。手を離そうとするとそれだけでヤバいとわかる。
（どうする……）
そう考えてると、ゴゴゴゴとイヤな音が響く。そして蛇の体がグニャングニャンと動き出した。
「うおっうおっ――んぎっ！？」

手を空かせる為にセラ・シルフィングを口でくわえてたけど、限界でした。グニャングニャン蠢く体内のせいで、僕は体内の肉から弾かれる。そして目指すは真っ逆様に毒々しい液体。
絶対にこれは死ぬだろ。しかもタイミング悪く、向こうからも迫ってきてる！！　僕は意を決して口にくわえてたセラ・シルフィングを両手に戻す。そしてグニャングニャンしてる肉を渾身の力で斜めに傷を入れる。そしてそこに体を滑り込ませた。
僕の考えが正しいのなら、この体内を包む液体はきっと……その瞬間毒々しい物が上昇する音とその量のせいか、一気に真っ暗になった。僕は外のみんなの無事を祈るしかできない。
そしてそれは外のみんなもきっと同じだろう。うう……だけどなんか背中が焼けるように熱い。本当に僕は耐えられるのだろうか。わかんない……わかんないけど、自分を信じるしか今はない。

（勢いが収まった？）

しばらくすると辺りが静かになった事に気付く。そして自分の体の生存も確認だ。ＨＰが微妙に減ってるのは背中側の痛みのせいだろう。一体どうなったんだろうか？　僕は慎重に一歩を踏み出す。すると僅かにジュワーと靴が溶ける感覚が……ヤバいなこれ。
だけど僕が無事だって事は自分の予想は当たってたと言うことだ。やっぱりあの体内を覆ってたヌメヌメしたのはこの強力な酸から体内を守る為の物だったんだろう。それを僕も利用したのだ。
僕はさっきよりも傾斜が緩くなった体内を上がる。どうやら僕も僅かだけどダメージを受けた様に、あの液体でも完全に体内を守る事は出来ないみたいだな。口や喉の辺りが爛れてる。
牙の隙間から僅かに見える光。どうにかしてこいつの口を開かせないといけないな。丁度弱ってるし、これで決めれないかな？　僕は頭が近そうな部分目指して剣を突き立てる。

今の攻撃のせいで肉自体が爛れてるからか、速攻で骨にぶち当たる。だけど肉の抵抗が少なかった分、余力をこっちに回せる。僕は勢いを付けて、一気にセラ・シルフィングを押し込むよ。

そして刺さった感触を確かめて、僕は雷撃を放つ。その瞬間、大きく口が開き、喉の奥から鼓膜を破る様な声が響く。大きく反り上がり、激しく体全体を揺らしてる。ここで外に出るのは簡単だけど、それだけどこれだけ効いてる攻撃を投げる事になってしまう。

外からは効率よくダメージ与えられないし、ここはＨＰが無くなるまで粘ってやる！！　グワングワンと揺さぶられても雷撃を与え続けて、しばらくすると一気に地面へと倒れた。どうやらＨＰが無くなった様だな。

案外耐久力無かったな。やっぱり体内からの攻撃が効果的だったのかもしれない。僕は半開きになってる口から外へと出る。するとそこには信じられない光景が広がってた。

おかしな臭いが充満してて、溶けた泥からは煙があがり、モンスターの苦しむ声が響いてる。地面も変に凸凹してるし、この蛇の毒々しい攻撃は恐ろしいほどのこの場を浸食してた。

「セラ！　シルクちゃん！　鍛冶屋、テッケンさん……リルフィン！！」

僕は地面に倒れてるみんなの元へ。何とかＨＰは残ってるけど、みんな瀕死状態じゃないか。シルクちゃんの傍ではピクもがっくりとうなだれてる。

「よかった……スオウ君無事だったんですね。なんとかストック魔法を使いきって守ったんですけど、どうやら今の攻撃は浸食型だったみたいです。ＨＰじゃない別の所にダメージを残す……リカバリーをもっと用意しておくべきでした」

良くわかんないけど、この惨状はあの蛇の攻撃が特殊だったからってことだろう。くそ……どうすれば……幸いにもモンスターも殆ど動けない状態だから良かったな。そう思ってると、聞こえるパチンと指を鳴らす音。

すると空中に溜まってた水が一気に下へと流れてくる。大量の水が再び僕達を津波の様に襲う。僕達は更にリア・レーゼへと近い場所へと流される。そして再び響く雨の音。だけど何故か今までと違う感じがする。

そう思ってると、空が光ってる？　いや違う、何かの光が空を染めてる。僕は後ろを振り返る。するとその光の正体を知った。雨の向こうで、世界樹が輝く光を放ってる。そしてそんな光に誘われる様に森の方から響く大量の叫び。聖獣……そして引き連れるモンスターはこれまでの比じゃない数と禍々しさを誇っている。

覚悟の戦い（後書き）

第三百三十話です。
色々とスオウのわからない事で現場は進んで行きます。時間は止まらないから、理解する前に状況だけが進んでく……そんな事もあり得るでしょう。しかも今度は雑魚じゃない奴等を引き連れた聖獣。
もう絶望物ですね。どうなるのかは次回へ続く！
てな訳で次回は木曜日に上げます。ではでは。

天秤じゃ示せない（前書き）

みんなはもう動けない。そして聖獣も今までとは違う精鋭を引き連れてとうとう現れた。みんな言うよ「もういい」と。

状況は変わった。僕だけじゃ足止めの意味なんてほとんどない。だけどどうしてだろう。みんなの言葉……全てちゃんと理解してる筈なのに、何故か僕は立ち向かう。それしか選択肢がないみたいにだ。

天秤じゃ示せない

輝く世界樹……それに伴って染まる空。だけど再び落ちだした雨が妙な不吉さを演出してる気がする。そして遂にその変わった姿を現した聖獣。色を取り戻し、堅くなくなった体を優雅に揺らして大量のモンスターの先頭を歩いてる。

「な……んだよアレ……」

僕は震える声でそう紡ぐ。だって注目すべきは聖獣だけじゃない。その周りに居るモンスターもなんかこれまでの奴らとは別格に見える。

大量のウッドールは今まで僕たちとそれほど変わらない背丈で、ヒョロヒョロしながら襲いかかってきてた。だけど今、聖獣の周りに居るウッドールは明らかに強そうだ。普通サイズのメドゥーサ聖獣と比べても明らかにデカいし、二メートル位は有りそう。

しかもヒョロヒョロなんか微塵もしてなくて、その体は鎧に身を包んだ姿へとなってる。しかも西洋風の鎧じゃなく、日本風の兜とかを被ってるんだ。

歩く度にその重低音が響きそうな程……変わりすぎだろ！

「くっ……あれが本命と言うことか……」

倒れ伏してるリルフィンが苦しそうにそう言うよ。本命か、確かにその通りなんだろうな。今まで送り出されて来てた奴らと明らかに姿も雰囲気も違うもん。

言うなれば奴らが聖獣が自信を持って送り出せる一軍なんだ。僕たちがさっきまで戦ってたのは、多分三軍位の位置の奴らだろう。

そんなオーラしか今見ると無いもん。

「だけど……どうやってあれだけのモンスターを集めたのよ。聖獣の声はどこに……居ても聞こえるわけ？　それともあの森のモンスター共は聖獣の存在を感知できるとか？　でもそれなら、呼ぶ必要がそもそも無いわね。だって勝手に集まってくるのなら……そうでしょう」

「だけど……あの集まり具合……雑魚はさっさと捨て駒にして、強力なのを揃えるまでの時間稼ぎとしか思えません」

元から聖獣は最初のモンスター共には何一つ期待なんかしてなかったってことか。シルクちゃんの言うとおり、どう考えても捨て駒だ。

だからこそ躊躇いも無く、みんなと共にあの蛇は毒をばらまいたんだろう。仲間……イヤ、捨て駒しかこの場には居なかったから心置き無くやったんだ。

爛れた地面に、腐臭の様なイヤな臭いが混じってる。辛うじて生きてるモンスター共からそんな臭いはしてるよ。折角まちに待った筈の聖獣だったのにな……ヒドい扱いするものだ。

だけどこいつらにまで同情する程、僕もお人好しじゃない。それにしても今は、死に掛けの雑魚なんかどうでも良いんだ。問題は数倍……いや、数十倍のプレッシャーを感じる本家本元の【聖獣軍団】だ。

ウッドールもサイズ倍増してるけど、他の奴らも明らかにワンランクツーランク上のモンスターと化してる。蛇はまあ……元からそのランクの奴だったから姿形は変わってない。

だけど貝の奴もトゲトゲを付けて強そうになってるし、狼みたいな奴も、既におかしなサイズになってる。どう見ても、前に居るウッドールの強化版……乗せられるよ。くちばしがデカい鳥は、その赤みがかってた色を黒に変えて、凶悪性を増したように見える。そ

の他にも色々と、既存の奴らのパワーアップ版から、始めてみる奴らまで多種多様……そのどいつもが、強そうだ。
そういえば言ってたよな……この森は強力なモンスターが一杯いるってさ。リア・レーゼは始まりの街の一つじゃない。だからこそ、周りに居るモンスターも標準よりも強力になってる……とか。
聖獣以外、イマイチそんな実感無かったけど、今僕はそれを痛感してる。マジでなんだよあの軍団。なんか僕の目が恐怖か何かでおかしく成ってるのか、行進してくる聖獣共の後ろの森まで迫ってきてる感じがしちゃう。んな訳ないのにな。
仮面を被った聖獣共。そしてそれに付き従うモンスター。知性なんて欠片もなさそうなモンスターをどうやって聖獣は操ってるんだろう？
奴らは獣人って訳じゃない。本当に野生なんだ。

「いや……違うよスオウ君。この森に生まれるモンスターはただの野生じゃない。この森に生まれるモンスターは聖獣の下に一つ……その理を植え付けられてるんだ」
「なんで……そんな事？」

理解できないよ。一体どこの誰がそんな意識？　いや、無意識を植え付けてるんだ？　一体なんの為に？　聖獣にとって都合がいい……だけじゃないんだよな？　聖獣のどいつかの能力……とも考えられない事はないかもしれないな。

「全く……ゾロゾロと地響きまで響かせて……うるさいったらないな。ゆっくりと寝ることもできん……まあ奴らの歌が続いてたとしても、子守歌には成らなかった……だろうがな」

皮肉なのかどうなのか、鍛冶屋の奴が苦しげにでもなんとか「クックック」とか笑いながらそんなことを言うよ。気持ち悪い奴。だ

けど絶望という状況の中、鍛冶屋の言った言葉で気づいた事もあった。

「歌……そうか！　クリエの歌をアイツ等が歌ってたのは、言葉を会得したアピールなんかじゃなくて、アイツ等を呼ぶためだったんじゃないのか？

別に自分達の復活を示せればなんでも良くて、都合良くそれを示せる手段が歌だと思った……とかじゃないのかな？」

そう、ただ単に自分達の頭にあった歌が効率的だったという事なんだ。聖獣に感性が有るとも思えないし、意味はあったけど、奴らの歌は伝達手段みたいな物でしかなかった。きっとそう言う事だ。

あの歌を歌った事に意味が有ったんじゃない。あの歌で自分達の存在を森中に知らせる事に意味があったんだ。そしてそれは効率良く届いた。だからこそ、あんな強力そうなモンスター共があっと言う間に集まったんだろう。

「確かに、そもそも強力になれば……なるほど……モンスターは孤立していくもの。だけどこの場所と、そして聖獣と言うこの地の最上位種が居れば……違う。

この地のモンスターは、何の因果か……世界樹を取り戻そうと一つになろうとしてたのよね……それがこんな連携と協力を生んでる。きっと……ずっと前から、いつかこの日の為の準備をしてたんじゃないかしら……」

セラが途切れ途切れにそんな言葉を紡いでる。みんなＨＰが微妙に減り続けてる。回復も出来ないし、みんなはただ、死を待つしかできない状態だ。

そんな中で、なんでセラはちょっとでも奴らを認める様な事を言うんだ？　わけわかんねーよ。

「別に……認めてる訳じゃない……訳じゃないけど……もしもそうだとしたら、自分達の負けって事よ。本当に……もうこれはどうしようもないわ」
「セラ……お前がそんな事を言うなよ！　全然似合わないぞ！！」

そんなのセラじゃない！　こいつはいつだって不遜で傲慢で手が早くて、良く絡んでくるみたいな感じじゃないといけない。
負けを認めるなんてそんなの絶対にやらないだろ。負けを認める事も成長とか……そんなタマじゃない。負けた相手を後ろから暗殺してその事実を消してしまう……それがセラの筈だ。

「あんたね……私だっていっぱい負けて来てるわよ。いつでも勝てる……なんて無い。だけど……アンタは負けられない。もう……いいでしょうリルフィン。
アンタから言いなさい。アンタのせいでこのバカはまだこんな所に居るんだから……」

どういう事だ？　なんかセラが僕に優しくしてないか？　いや、ついさっきも僕の事を思って泣いてくれた。でも今回は毒を吐かないから、いやそんな余裕もないから、なんかいつもよりも、こう……想われてる気がする。
なんだか今と言う状況を受け入れられつつある僕は、大量に迫るモンスター共を直視出来る精神状態になったかもしれない。
だけど、セラはリルフィンに何を言わせたいのだろうか？　僕は余裕を持って迫って来る聖獣軍団を一瞥して、リルフィンへと視線を向ける。
するとリルフィンは、なけ無しの力で俯きから仰向きへと体位を変える。リア・レーゼ側が明るく、森側が暗い。世界樹の光が、まるで二つの世界を表してるようだ。

僕たちが居る女神シスカの加護の光の世界と、邪神テトラが作りし闇の世界。それが拮抗しだしてるかの様な……まあ僕たちは世界樹の光ほど、輝いてはいないけどね。
僕達は言うなれば、燃え尽きる寸前の蝋燭みたいな物だろう。僕達はそもそもここで燃え尽きるのを覚悟したはずだ。最後に一際輝いてって感じでさ。まあ僕は実際、燃え尽きる前に増援を期待してた訳だけど……それはもう意味がないのかもしれない。

「ぐはぁ……はぁ……」

たったそれだけの動きで激しく息を切らしつつ、リルフィンはその言葉をくれる。

「確かに……もう……どうにもならんか。今日は月も出てないからな。意地はここまでにしよう。行けスオウ。援軍は間に合わなかった。
こうなったら外に出てはダメだ。リア・レーゼを拠点に奴らを叩くしかあるまい。だが先に行った奴らは変わったこの状況を知らない。伝えなければ……我らを助けようとして無駄な犠牲者が増えてしまう。
リア・レーゼ事態が戦場になるのは避けたかったが……我らだけで足止めはもう無理だ。それなら、切り替えねばならん。もう、ここで出来る事は何もない……それなら……最後の頼みだ。貴様は生きて、この事をローレ様に伝えろ。結局……無駄な事に付き合わせてしまっただけになったな……済まなかった」

リルフィンが曇天の空を仰ぎ見ながら、軽く目を閉じる。この空の向こうに居るであろう、ローレの顔でも思い浮かべてるのだろうか？　死ぬ覚悟。それを決めてる。
リルフィンの野郎……何勝手な事を言って屋やがる。それがセラ

が言わせたかった事なのか？

「さっさといきなさい……これでもう、心残りなんて無く撤退出来るでしょう？　誰も反対しない。いいえ、寧ろ早く……一刻も早くこの場から逃げるのよ」

「また……僕だけ逃げろってかよセラ？　それは断った筈だ」

僕は想わずそんな事を口ずさんでた。だけど実際、セラやみんながそう言うしかない事を僕はわかってる。それにここに残って戦う……それのメリットはきっともう一ミリも無い。だって僕が一人で突っ込んで何が出来る？　イクシード3を使えば少しは持つかも知れないけど、だけど勝てるなんて思えない。

だってイクシード3は確かに強力だけど、諸刃の剣。それにそれだけで戦闘が決まるほど、単純なものじゃない。

聖獣だけじゃない軍団……動けない仲間達。結果は火を見るよりも明らかだろ。

「何……バカな意地を張ってるのよ。もう守れないって言ってるの。それにここでアンタが出来ることは……もう無いのよ。

頭を切り替えなさい。今ここで無駄死にしてどうするのよ。今こそ、戦略的撤退の時でしょ」

戦略的撤退……ていの良い逃げ口上だろそんなのは。ちゃんと知ってるんだぞ。

「スオウ君……行ってください。私達の気にしないで良いんですよ。私達はこんな状況でも笑顔でいえます。リア・レーゼのゲートクリスタルで会いましょう――と。

だから行ってください。一度否定されたその行為……だけど、私はそうは思いません。逃げる事が悪い事じゃない。

私からみたら、どんな状況でも命を粗末に扱う事の方が悪く格好悪い事です。ゲームだから……その思いで命を軽く見る人がここには居ます。

そんな人には私だって……回復してあげませんって言いたく成ります。スオウ君……逃げる事も勇気です。私達は、君に生きてほしいって願ってます」

シルクちゃんがその可愛い顔に泥を付けたまま、顔だけをこちらに向けてそう言うよ。激しく打ちつける雨が痛い。本当にさ……痛いんだ。僕はセラ・シルフィングの柄を力を込めて握る。歯もおもいっきり噛みしめる。わかってるんだ。みんなの想い、ちゃんとわかってる。

だけどその想いに甘えるれば甘えるほど……大切な筈のみんなを犠牲にしてる気がする。本当はさ、みんなにだってやりたい事とかあるんじゃないのか？

それなのにこんな危険な事に付き合わせて、毎回毎回とんでもリスクを実は背負ってる。僕と一緒に居て、スキル値があがってるのか謎だよ。何か返せれば良いけど、僕には何もないしさ。

「みんなの想い……ありがたいよ。本当にみんなには感謝してもしたりない。逃げることも勇気……無謀な戦いが自殺行為だってわかってる。

それをやって意味があるときもあったけど、今はそうじゃない……それもわかってる」

「じゃあ……」

僕は立ち上がる。そして無言で歩を進める。だけどそれはリア・レーゼの方にじゃない。聖獣共の方へ……みんなを庇う様に前へ。

「な……にを？　なんで……逃げないのよ」

「スオウ君……わかったって……言ってくれたじゃないですか」
「そうだ！　考え直せ……そんな事しても意味なんてない」
「スオウ君、君の気持ちは分かる……だけどここは僕達の思いを受け取ってくれ……死に急ぐ事をしちゃダメだ」

みんなの声が僕を止めようとしてくれてる。当然だな。みんなはやられたって復活出来る。ゲームだからな。だけど僕は、どうなるかわかんない。死ぬのか……入院か……実際そろそろヤバいってのが感覚的にもわかってる。
だからこそ、みんなは僕を守ってくれてる。付き合ってくれてる。最悪の結果が訪れる事を、みんな怖がってる。まあそれは僕も同じだけど……

「ごめんみんな。だけどなんかさ、メリットとか先の事とか、いちいち考えて行動するのも面倒に成ってきたよ。僕はみんなに守られて……支えられてここまできた。
それを誰よりもわかってるのは僕だよ。てか、そうじゃなきゃいけない」

僕は空を仰ぐ。曇天の色……激しい雨が顔に打ちつける。ちょっとキメようかなと思ったけど、この雨じゃ無理だな。息できなくなる。
今更お札を使うのもなんだし、このまま最後まで突っ走ろうと思う。気持ちを切り替えて最後まで台詞を発しよう。

「でも……なんかさ、なんかこう……イヤなんだ。ただみんなの優しさに甘える自分も……いつまで経っても命って奴に怯える事も……そして何より、奴等のあの余裕の行軍の様が嫌みったらしく見えてイヤだ」
「意味が分からない理由だよ！　特に最後のは！　頭を冷やすんだ

スオウ君！！」

小さな体を引きずりながら、必死に僕に声を掛けるテッケンさん。まあ実際、僕も最後の理由はよくわからない。でも気持ちそのままに言っただけだよ。

「頭は冷えてますよテッケンさん。だってほら、アイツ等のあの行進、既に勝ったような雰囲気じゃないですか？　僕達なんて、そこらに居る蟻みたいな感じで、全然気にしてない感じがここからでも伝わってきます。

『さっさと逃げろゴミ。どのみち街事踏みつぶすがな』っていう声が聞こえてくる気さえする。どうせ何も出来ないし、してこないだろうからって、たかを括ったあの態度。ひっくり返してやりたいでしょう？」

「アンタね……完全に考えがおかしく成ってるわよ。何を思われようとアンタ一人じゃ天と地がひっくり返っても勝てないのよ。その事実は分かるでしょう。

なら逃げるのよスオウ！！」

立てない体を必死に上半身だけ上げて、そう紡ぐセラ。ほんと何やってるんだろうな僕は……全てを投げ出そうとしてるのだろうか？

なんだか自分でも自分の行動がイマイチ良くわかってない。みんなの言葉、思い……全部ちゃんと伝わってるし、自分でも理解できてるんだ。僕だけじゃ、聖獣達には勝てない。

ここで命を投げ出す事が誰の為にもよくない事だってわかってる。でも……どうしてだろう？　逃げ出せない自分が居るんだ。

みんなが目の前で死を受け入れてる事がイヤなのかな？　みんなは僕とは違うんだから、それが当然で当たり前なのに何を今更だろう。

やっぱり口にしたとおり、あの聖獣達が気に食わないってのが正

解か？　でもそれで命をマジで投げ出すなら、シルクちゃんには愛想を尽かされそうだ。激しい雨に打ちつけられ過ぎて、考えるのが億劫に成ってるのかも……ほんとここで逃げなきゃ明日はきっと無いのに……僕は何をやってるんだろうか？

「スオウ君……ダメです。ムカついても、バカにされても、今じゃなくても反撃は出来ます。みんなでリア・レーゼで迎い討ちましょう。それが……最善なんです！」

「わかってる……それもちゃんとわかってるんだよシルクちゃん。でも……どうやら時間切れだ」

僕の数メートル先に迫った聖獣とその配下のモンスターども。まるで壁みたいな感じだな、近くに来ると更にわかる。デカいモンスター共も惜しげもなく居るから、プレッシャー感がハンパない。

だけどやっぱり……一番まがまがしい雰囲気を醸し出してるのはおかしな仮面を付けてる聖獣共だな。まあ僕達はアレが聖獣とわかってるから……かも知れないけど。

普通に知らない人たちは、デカい方に恐怖を抱くのかも。

「退いて貰おうか。それとも我らとやり合うか？」

「しゃべっ――」

ってそう言えば歌ってたな。でも余りにも普通に喋る物だからビックリだよ。

「何を驚く事がある？　我らは変わった。神の力を取り込んでその存在を完成させたのだ。見るがいい、世界樹が祝福してくれてるだろう？」

「祝福だと？」

この世界樹の輝きが聖獣を祝福してる物だと言いたいのか？　流暢に喋れる様になったからって好き放題に言ってくれるな。そんなに言葉を得たことが嬉しいのか？

「その通り祝福だ。お前達には、あの世界樹の光の意味など分かるまい。ちっちゃくてよわよわな貴様等などは、地を這う虫だ。
それが世界樹を我が物顔で独り占めしてる……許されない事だ。だから世界樹は我らを祝福して待ってるのだ。自分を解放してくれる我らを」

背が高いエルフベースの聖獣が饒舌に喋りやがる。だけどなんかちょっとイメージと合わない部分があるような気がするな。
語句が貧弱と言うか……もしかしてクリエから頂いた言葉だから語句もアイツ並なのか？　勉強する猶予をやるから一度森まで引いてくれないかな。

「それはそれは、迷惑掛けてるみたいだな。だけどお前等にだって世界樹の声が聞こえる訳じゃないんだろ？　てか、どうして貴様達は世界樹を狙う。お前達はモンスターだろ。言うなら悪。世界樹はこの世界を支える光だって聞いてるぞ」

丁度言葉も話せる様になってることだし、そこら辺を確認するのも良いかなと思う。時間稼ぎにもなるしね。すると僕の言葉を聞いて聖獣どもは、一斉に笑いだしやがったよ。
そして笑い終えるとこう言われた。

「傲慢だな人間！！　お前達は自分達を正義だと、我らを悪だと決めつける。だがそれはお前達の勝手なこじつけだ。
何が正義を証明する？　何が悪と決めつける？　お前達は私達を殺すことを躊躇ったりしない。それは正義なのか？」

「それは……お前達がこっちを襲うからだろ」
「なら言おう、我らからしたら今は貴様等から襲う方が多い。昔とは違うのに、変わらずに貴様等はみつける度に、多数で襲い来る……それが貴様達の正義か？」

むむ……そんな事一ゲームのモンスターが言うなよな。前提が崩れるだろうが。

「まあ正義も悪も我らにはどうでも良いことだ。ただ我らは自分達の思いを通す。使命を果たす。退かぬなら、ここで死ぬが良い、人間よ」

そう紡いで手を掲げる聖獣。すると周りのモンスター共が一斉にいきり立った。

「逃げてスオウ君！！」
「逃げなさいスオウ！！」

女の子二人の叫び。でももう遅い。僕はセラ・シルフィングに力を込める。そして僕はたった一人で、聖獣達へと向かう。でもその時、僕達の間をキラキラする風が吹き抜ける。そしてくり貫かれた雲から現れたのは輝く鳥だ。それは敵か味方か、まだわからない……だけどその姿はこの場の誰もの視線を奪う程に美しい。

天秤じゃ示せない（後書き）

第三百三十一話です。

今回はスオウが暴走してますね。自分の思い、みんなの思い。メリットやデメリットとか度外視の行動。どう考えても愚かな選択。でもわかってるのにそれをやってしまう彼の心はどうなってるのでしょうか？

本当にここで終わるのかどうか、それは次回でわかるでしょう。

てな訳で次回は土曜日に上げます。ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6039j/

命改変プログラム

2011年10月13日01時54分発行